HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	クラリッサ
Author(s)	リチャードソン, サミュエル; Richardson, Samuel; 渡辺, 洋//訳 他
Issue Date	2015-05-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76756
Type	book
File Information	clarissa.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

サミュエル・リチャードソン

クラリッサ

渡辺　洋訳

２０１５年５月改訂

『クラリッサ』の作者に捧げる

ソネット

あゝ、心の大家よ、君の魔法の技は
　魂の秘密の奥底を見出すことも出来れば、
精神を鼓舞し、鎮め、脅かすことも出来る。
憐れみの情で和らげるかと思えば、苦悩をもって震わせもする。

君の道徳的な紙面を埋め尽くすのは、
　世を正さんとする熱誠こもる美徳の教訓にして、
知、力、真理、品性が一丸となり、
我が国の若者を善へ導き、不徳から守るのだ。

あゝ、長く楽しみたまえ、君が見事に勝ち得たものを。
　誠実にして、また、世慣れてもいない正直者の
一人一人が感謝を込めて進呈する賛辞を。
悲嘆に満ちた一筆ごとに、まことなる涙はこぼれ、
　人為に染まらぬ自然の心は
君の筆の営為を認め、褒め称えるのだ。

はしがき

以下に掲げる物語は、主として二組の、個々に進められる文通において綴られた、一連の書簡の形式によって語られている。

つまり、互いに変わることのない友情を温め合い、ただ単に楽しみとしてばかりではなく、一般家庭ことごとくにとって多少なりとも関わりのある、極めて興味深い話題に関しても筆を執っている、志操堅固な二人の若い淑女が交わした往復書簡、ならびに、

自由気ままな生活を送る二人の紳士間の往復書簡であり、これら紳士の一方は権謀術数の才を誇りとし、奸智に長けた頭脳と断固不動の心に秘めた企みのすべてを、もう一方の紳士に密かに打ち明けているのである。

ただ、臆面もなく綴られているほうの書簡ゆえに、若者たちの品行に及ぼす害悪のことを懸念なさる方々のために、ここで次の点を指摘しておくのが適当であろう。つまり、二人の紳士は、こと女性に関しては放蕩者を公言して憚らず、いったん掌中にした女性に対しては、どこのだれであれ、誠意ある態度など一切取らないことを主義の一つとしているのであるが、彼らとて邪宗の徒でもなければ、瀆神の輩でもなく、ましてや、自分たちのことを、人間関係の支えとなる、その他諸々の徳目さえも遵守する必要のない存在のように考えているわけではない、ということである。

それどころか、この紳士たちは、作品の進展につれて明らかになるはずであるが、来世における因果応報に不信の念を抱かず、いずれは心改めようと考えている、そんな思慮分別を備えた人間が口にせずにはいないような意見の数々を、相手に向かって極めて頻繁に吐露しているのであり、また、各々が自分自身と自らの行動に関して述べてもいるのである。実際、二人のうちの一人は回心を遂げており、そのことにより、相手の陽気な筆遣いと軽薄な精神とに由来する不躾な言動に非を唱える機会を用意しているわけである。

しかしながら、相手の紳士にしても、腹心の友に胸中を打ち明けるに際しては、大方の嫌悪の情を誘うに十分な非道さを露にしているとはいえ、言葉遣いにせよ身形にせよ、一定の品位を保っているのである。これは、昨今の一部著名作家たちの作品すべてに共通に見られる事情とは必ずしも言い難いようである。その主題にしても登場人物にしても、これら作家たちの野放図な仕業を正当化するに足るものとは認め難いということである。

若い二人の淑女が認めた書簡に見出されるものは、美徳と宗教の崇高この上ない教えを身に備えた者たちの間で展開される、道理に適い、かつ、実践可能な交友関係の、その最善の姿であろうと考えられるのであるが、それだけには止まらず、こまやかな心遣いの籠もった所見、特に男性観の繊細さ、さらには、二人の友情の基本原則として、双方が腹蔵なく咎めるべきところは咎め、褒めるべきところは褒め、互いに正しい道を示し合うという、公明正大さの実例の数々も、折に触れて散見されるのである。そしてこれらは、女性読者の（とりわけ）若年層には遵守いただくよう、強く推奨されるべき点なのである。

この若い淑女二人のうち、主要な役割を演じている者は、女性の模範として提示されて

いるのである。すべての点で完全無欠とは言えないとしても、この女性が婦徳の鑑たることに何らの異議もないはずである。以下の事柄を読者に知らしめるためだけにせよ、彼女が某かの欠点を持ち合わせていることは自然であり、かつまた、必要なことでもあったのである。すなわち、彼女は天晴れにも己を疑い、責め、自らも納得する叱責の言葉を、利己心とは無縁なその胸に銘記するに止まらず、ついには、他のだれ一人として赦免を与えようとしない者たちに対し、崇め敬うべき存在なるがゆえに、その罪を不問に付すに至ってさえいるということである。しかも、この女性の罪過とされているものは、弱い心とか恥ずべき心から生じたのではなく、その者たちのさらに重大な落ち度に起因するものだったのである。対処しなくてはいけなかった相手を考えるなら、それも、三世の縁に結ばれた人々であることを考慮するならば、この女性こそは、人間すべてに本来的に備わる弱さと矛盾を来さない範囲で、そして、力の及ぶかぎりにおいて、完全無欠な人物だということである。仮に、一点の非の打ち所もない人物であったとしたなら、神の恩寵も罪の清めも意義を失い、われわれとしても、女性というよりは天使の姿を思い浮かべることになるであろう。事実、彼女は件の紳士からしばしば天使と称えられているのだが、この男にとっては、はなはだしく心が堕落していたため、試練と誘惑とに出会うたびに輝きを放つこの女性の貞潔さが、およそ人間業とは思われなかったというわけである。

四人の主要人物の他にも数名の人物が導入されており、それぞれに特徴ある文面を認めている。それらの手紙の一部には、読者の娯楽や気晴らしになると同時に、警告ともなれば教訓ともなるような、快活でいたずらっぽく、おどけた筆致が見出されることと思われるが、とりわけ、男性では主要人物の文面、そして、女性の中では、二番手に位置する人物の文面にそれは窺われることだろう。

すべての手紙は、書き手が自分の扱う話題にすっかり心奪われているように思われる時点（この時点に於いては、通常、事件の成り行きは定かでない）で綴られているのであるが、そのため、重大局面のみならず、〈即時描写〉と呼ばれて構わないものや、（若年の読者が肝に銘じて然るべき）所見、さらには、心を打つ会話の数々が文面に溢れるわけである。そして、それら会話の多くのものは対話形式により、つまり、ドラマ仕立てで綴られているのである。

主要人物の一人が述べていることであるが（第七巻、五十七頁）、「目下の苦難をその最中にあって筆にする者たちの文体は、先が見えないことの苦しさに（その時点では、出来事が未だ運命の胎内に潜んだままのため）心を苛まれているわけでもあり、はるかに生彩に溢れ、また、心打つものとならずにはおかないのだ。すでに乗り越えてしまった困難や危険のことについて語る人物が用いる、無味乾燥で叙述的な、生気に乏しい文体に比べてだが、そちらのほうの語り手は、まったく何の心配もないわけだからな。それに、語り手自身が自分の物語に感動するところがないとすれば、読み手の心を強く動かすようなことはありそうもない話」なのである。

以下の作品において特段に意図されているように思われるのは、上辺を繕って事を謀る異性の卑劣な手管や企みに対し、軽率で無思慮な者に警告を発することであり、結婚という重大事に臨んで、我が子に対する生得の権限を過度に振り回すことのなきよう両親に忠告し、子に対しては、「心改めた放蕩児が最高の夫になる」という、物騒でありながらあまりにも広く世間に受け入れられている例の考えに基づき、正直者よりも道楽者のほうを好

む姿勢を戒めることであろう。しかし、何にもまして肝心なのは、道徳のみならずキリスト教の至高にして最重要な教義について、尊敬すべき人物の行いの中で実践に移されている様子を例示しつつ検証することなのである。一方、それらの教えをないがしろにする不徳の輩は分相応に、そして、いわば当然の結果として、罰を与えられているのである。

思慮深い読者ならば、以上の言葉を念頭に置く時、ただ気晴らしや娯楽のためにのみ構想されたものとして、眼前の作品の吟味に取り掛かることはないはずである。一方、軽薄な小説とかくだらないロマンスとかを期待して本書に目を通し、そのストーリーを（これが興味津々たるものであることは大方の認めるところであるが）教訓を伝えるための手段というよりは、むしろ、本書の唯一の目的であると考えるような者すべてにとっては、本書は退屈な長談義と思われることであろう。

今回の版に関し、次の点に触れておくのが適当であろう。つまり、単に短縮を図ってのことであったが、先の版では割愛されることとなった、そして、本作品を支持する一部の人々が必要かつ興味深いものとお考えになった多くの章句、ならびに、数通の手紙を復元するのが妥当であるとの判断に至ったということである。これらの部分は小点を、すなわち、終止符を逆様にしたものを付すことで区別されている。また、以前の版を購入された方々への公平さを考え、別途印刷の予定となっている。

特に年配の読者や視力の弱い一部の方々からは、最後の三巻の数箇所において用いられた活字の小ささに関して、お咎めをいただいたこともあり（望ましからざる長さに膨れ上がった本作品を、出来るかぎり嵩張らないものにするための処置であったが）、今回の版では一貫して、以前使用された、例の三巻の大きめの文字で印刷されている。しかし、このために、前述した追加の件もあり、やむなく七巻本を八巻に印刷した次第である。

元来、本作品は三回に分けて刊行されており、一回目の刊行と二回目の刊行との間には意図した以上に長い時間が経過したこともあって、二回目の刊行となる第三、四巻に〈はしがき〉を添えるのが適当との判断がなされたのである。極めて博学にして高名なるお方が、編集者の求めに応じ、親切にも〈はしがき〉をご用意くださったのである。しかしながら、〈はしがき〉を挿入すべき理由は一時的なものであり、その扱いについては編集者の一存に委ねられていたこともあって、作品全編が一度に印刷されることとなった第二版においては、〈はしがき〉は割愛されたのである。また、第一巻に付した〈はしがき〉についても、同じ理由から割愛され、両者の代わりに、読者向けの短い告知が挿入されたのである。その告知もまた一時的なものであるため、読者へのこのご挨拶が代わりに用いられた次第である。

第二版においては、作品全編の詳細な目次が第一巻冒頭に置かれている。しかし、それは結末をある程度予告していたし、読者が物語に入るのをあまりにも長く引き止めるように考えられたため、各巻個別の目次をそれぞれの巻に（前置するよりはむしろ）追加するのが適当との判断に至ったのである。これは各巻に含まれる最も重要な部分の索引としてのみならず、簡略な要約としても役立つであろうし、読了した巻と次の巻とを読者が頭の中で結び合わせるのを可能してくれることだろう。また、個々の文通者の人柄や見解をより明瞭に表示することにもなるのである。

創意豊かな一紳士が、この物語に見られる道徳的ならびに教育的な所感の多くのものをお集めになり、ご恵贈くださったこともあり、編集者としては、それを（大幅に増補した

上で）最終巻の末尾に挿入すること以上に、本作品の意図と有用性が鮮烈に提示される方法は有り得ないと考えた次第である。従って、読者も巻末において目にされるとおり、その集大成は適宜項目別に整理されており、各文通者の実践に移されるか、あるいは、男女を問わず、若者にとって有益な理論として彼らによって推奨されるか、そのいずれかの形で、それぞれの警告、警句、意見、ないしは所感が見出されるページについての指示も添えられているのである。

個々の状況におけるヒロインの振舞いに関しては、予期されるとおり、人によりそれぞれ見解は異なっている。そして、尊敬すべき人々の中には、物語の大団円とその他数箇所に対して異議を唱えられた方も数名おられるのである。これらのうち、重要と思われるものすべてについては、物語の結末で〈あとがき〉として取り上げることにしたい。本書が生活と習俗の一記録として世に問われたものである以上、手本としての効力を持つことが企図されている部分については、作品全体の構想や人間性と矛盾しない程度に、異論の余地のないものでなければならないからである。

主要登場人物名

クラリッサ・ハーロー　素晴らしい美貌と美質とに恵まれた若い淑女。
ロバート・ラヴレース　郷紳。クラリッサの崇拝者。
ジェームズ・ハーロー　郷紳。クラリッサの父親。
ハーロー夫人　その妻。
ジェームズ・ハーロー　ハーロー夫妻の一人息子。
アラベラ　ハーロー夫妻の長女。
ジョン・ハーロー　郷紳。ジェームズ・ハーロー（父）の兄。
アントニー・ハーロー　三男。
ロージャー・ソームズ　郷紳。クラリッサの身内の殊遇に与る、彼女の求婚者。
ハーヴィー夫人　片親を異にする、ハーロー夫人の姉妹。
ドリー・ハーヴィー　その娘。
ジュディス・ノートン夫人　信仰心篤く、思慮深い女性。クラリッサの養育に当たって中心的役割を果たす。
ウィリアム・モーデン大佐　ハーロー家と近縁の者。
ハウ嬢　クラリッサが最も懇意にしている友人。文通の相手。
ハウ夫人　その母親。
チャールズ・ヒックマン　郷紳。ハウ嬢の求婚者。
M卿　ラヴレース氏の叔父。
セアラ・サドレアー夫人　〕片親を異にする、M卿の姉妹。
ベティ・ローランス夫人　シャーロット・モンタギュー　〕同卿の姪。
パティ・モンタギュー　高徳の聖職者。
リーウェン師　学識を鼻にかけた若い牧師。
イライアス・ブランド　慈悲深い医者。
H医師　誠実で腕の良い薬剤師。
ゴダード　郷紳。ラヴレースの一番の親友にして腹心の友。
ジョン・ベルフォード　〕郷紳。ラヴレースの放蕩仲間。
リチャード・モーブレー　ハムステッドで下宿を営む未亡人。
トマス・ドールマン　その地に住む思慮深い淑女。
ジェームズ・ターヴィル　同所の若く陽気な未亡人。
トマス・ベルトン　ロンドンで密かに売春宿を経営する女の偽名。
ムーア夫人　ラヴレースの放蕩に手を貸す悪辣な女衒の仮名。
ローリンズ嬢　〕悪名高いシンクレアの助力者、共同経営者。
ベヴィス夫人
シンクレア夫人　シンクレアの売春宿の狡猾な侍女。
トムリンソン船長
サリー・マーティン
ポリー・ホートン
ドーカス・ワイクス

ク　ラ　リ　ッ　サ

ある若き淑女の物語

私生活における

最重要関心事を

８巻に収録し、

各巻に目次を添える。

第３版

最初の手稿より多数の章句と手紙数通とを復元し、
作品全体を通して点在する道徳的および教育的所感のうち、
一般的用途ならびに便宜に供され得るように思われる
ものの詳細なる集成を付す。

第１巻

ロンドン

出版元：S.リチャードソン

パタノスター街、ジョン・オズボーン書店
ストランド街キャサリーン通り向かい、アンドルー・ミラー書店
セントポールズチャーチヤード、J.and J.リヴィントン書店
ならびに、バース、J.リーク書店より発売

１７５１

クラリッサ・ハーローの物語

第一巻

手紙　一

アナ・ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

一月十日

大好きなお友達　…　お宅にございました騒動のこと、とても気掛かりに思います。世間の噂になるなんて、貴女にはどんなにお辛いことでしょう。分かりますわ。でも、これだけ広く知れ渡っております出来事ですもの、際立った美点のゆえに世の関心の的となっておられるお嬢さんに関わります事柄は、どのようなことであれ、皆さんの注意を引かずにはおかないのです。詳しいお話につきまして、それから、貴女には防ぎようもなかった出来事、そして、私の承知しておりますかぎりでは、被害を受けた人のほうが先に手を出した事件とのことですが、そのせいで貴女が受けておられるように聞き及んでおります処遇のことにつきましても、貴女ご自身からお報せいただけたらと思うのです。

果たし合いの件が耳に入りますとすぐに、貴女のことを思いまして、お兄様のご様子を尋ねるために外科医のディッグズ先生をお呼びしたのですが、先生のお話では、お気持ちが高ぶっていたためでしょうか、お兄様は熱がおありのようだけれども、その影響さえ出なければ、お怪我そのものは危険なものではない、とのことでした。

昨日、ワイアリーさんが私どもとお茶をご一緒してくださいました。十分に推測がつきますように、あの方は決してラヴレースさん贔屓などではございません。でも、あの方もシムズさんもお二人とも、ラヴレースさんご本人がお兄様のご容体を尋ねるためと、このたびの件につきまして遺憾の意を伝えるために訪れました際、お宅の皆さんがお示しになった応対ぶりに関しまして、皆さんのことを責めておられるのです。

お二人がおっしゃいますには、ラヴレースさんにとっては剣を抜かざるを得ない状況でしたし、お兄様の腕が劣っていたためか、それとも、興奮のためか、最初の一突きを交えました時から、お兄様は完全に相手の意のままにあしらわれておられたというのです。

私が耳にいたしましたところでは、あの場でラヴレースさんが口にされた言葉は次のとおりです。「ご用心、ご用心、ハーロー君。そんなにいきり立っては、防御の方がお留守ですよ。あまりにもこちらに好都合だ。妹さんのためにも、僕としてはすべてを水に流すつもりですがね、もしも　…　」と言いながら、あの人は後ずさりをしていたというのです。

でも、この言葉がかえってお兄様の向こう見ずさを煽り立て、有利な立場にある敵の前に身を晒す結果になったというわけです。そして、その敵はお兄様の腕に軽い傷を負わせた後、お兄様の剣を奪いとってしまったのです。

お兄様にはもともと横柄なところがございますし、激しくて御しにくい気質でいらっしゃいますから、お兄様のことを好きになれないという人たちもいるのです。そんな人たちに言わせますと、猛り狂っていたお兄様も、腕から多量の血が流れ落ちるのを目になさると、おとなしくなられたそうですし、相手が施す惜しみないお世話を（上着とチョッキを

脱ぐのに手を貸し、外科医が到着するまではと、腕のところをしっかり縛ってくれたということです)、お兄様は静かに受けておられたわけですから、後日、お兄様のご容体を尋ねて相手の方が訪れたからといって、それを侮辱だとか、不穏当だとか言うのはまったくの筋違いだ、ということになるのでしょう。

でも、それはともかく、貴女のことはだれもがお気の毒に感じているのです。なさることはとても堅実で一貫していらっしゃいますし、日頃から、人目を引くことなしに、静かに一生を終えるのが切なる願いです、と言っておられましたからね。それに、私のほうから付け加えて構わないでしょうが、匿名でなさっている喜捨の件にいたしましても、人目につくことは望まれず、その行いに伴います、高貴な気持ちを味わうだけで十分に幸せなのだ、とのことでしたわね。「人目に立つより役に立て」とのことですが、本当に貴女に似つかわしいモットーです。ところが今では、ご無念なことに、いわば白日に晒された状態なのですからね。それなのに、お宅では、ご自分の落ち度でもないことで身内の方から責められているのですもの。こんなにも立派な心がけをしていらっしゃるのですから、どちらを向かれましても、ひどくお辛いことでしょうね。でも、次の点は認められねばなりません。つまり、貴女の今回の試練も、貴女の思慮分別に釣り合ったものに他ならないのだということです。

今では両家の方々が巻き込まれているようにも思われますこの激しい啀み合いから、何か不幸な出来事が他にも生じはしまいかと、世の中のお友達皆さんが気を揉んでおられますので、ひとつ私のほうからお願いをしなければなりません。貴女ご自身の情報を拠り所にいたしまして、折に触れ、貴女について正当な評価を行うことが、この私にも出来るようにさせていただきたいということですわ。

私の母も家の者も一人残らず、今回の件で話題にいたしますのは、世間の人たちと一緒ですが、だれよりも貴女のことですし、また、ラヴレースさんのような気性の激しい方が立腹なさった場合、どんな結果になるのだろうかということなのです。何しろ、あの方も言っておられるとおり、貴女のおじ様たちにはずいぶんと屈辱的な扱いを受けておられますからね。母が主張しておりますのは、こうなりましたからには、貴女があの方の訪問をお許しになるとか、手紙をやり取りなさるとかすれば、いずれにいたしましても、貴女は世間の顰蹙を買うことになるという点です。ご存じのとおり、お宅のアントニー叔父様は時々私どものところへお見えになるのですが、母は叔父様にずいぶんと好意を抱いているのです。今回の果たし合いにつきましても、兄の流す血潮の海を渉って愛顧を得ようとする男に(これが叔父様の言い回しですが)好い顔をしてみせるようなら、それは妹の方に罪があることになると、叔父様はそのように母に断言しておられるのです。

ですから、ラヴレースさんがお宅に初めて紹介されました時からの事の顛末を、すべて書き送っていただきたいのです。特に、あの方とお姉様の間にありましたことは何もかもご説明願います。この点につきましては、いろいろな噂が流れておりまして、妹が姉の恋人を奪い取ったようなことを平気で仄めかしている人もいるのです。それから、お願いですが、私ほどには貴女のことをよく存じ上げない人にも納得が行きますよう、一切合切を詳しく書き記していただきたいのです。貴女がこれから相手をなさらなければならない人たちの気性の激しさから、何か不幸なことが起こりました場合には、それに先立ちます事柄すべてにつきましての貴女のお言葉が、貴女にとって最良の弁明になることでしょう。

世の女性すべてを凌駕するというのは、どのような重荷を背負うことなのか、これで貴女にもお分かりでしょうね。貴女を存じ上げているとか、お噂を耳にしたことがあるという女性は一人残らず、これほど扱いが微妙で、重大な問題の場合、貴女にはご自分の行いについて説明なさる責任があるのだと、そのように考えている模様です。

要するに、お手本を期待して、全員の目が貴女の上に注がれているということです。お考えどおりに振る舞うことがお出来になると良いのにと、天にも祈る気持ちですが、そうなれば、おそらく何もかも安心でしょうし、すべて円満に収まるはずなのです。でも、男性女性の別なく、貴女を指図なさる人たちのことが気に掛かります。何しろ、お母様は人を導く力を立派にお持ちですのに、別の方からの指図に甘んじなければいけないお立場でしょう。お姉様とお兄様にいたしましても、間違いなく、貴女の行く手を邪魔なさることでしょうね。

でも、この点につきまして私が長々と申し上げますのは、許していただけないことでしょう。ごめんなさい。これで止めにいたしますわ。でも、どうして謝ったりしなければいけないのでしょう。貴女の心配ごとは私にとっても心配ですし、貴女にとっての栄誉は私の栄誉でもあるわけでしょう。女性同士では例のないほどに、貴女のことはお慕い申し上げているのですもの。貴女を案じる心やお慕いする気持ちをこれまで受け入れていただいているのですし、長い年月に亘りまして …… このようにうら若い人間の場合、これまでの年月を長年と呼んで構わないのです …… 貴女のお友達の中でも一番上の列に加えてくださっているのですからね。

日頃よりの謝意と愛を込めまして、貴女の

アナ・ハウ

貴女にとって有利に記載されているという、おじい様の遺言状の前文の写しをお送りいただけないでしょうか。それと、私の伯母のハーマンに写しを送り届けますこともお許し願いたいのです。とても見たがっているのです。貴女のお人柄がすごく気に入りまして、まだ面識もありませんのに、貴女が例の遺言状で優遇されていることに賛成だというのです。それも、遺言者が挙げておられる、貴女への優遇の理由のことを知りもしないうちからなのですよ。

手紙　二

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

一月十三日　ハーロー邸にて

鄭重なお言葉、恐縮至極に存じますわ、私の大好きなお友達。ご誠意のほどを疑うわけではございませんが、温かく贔屓をしてくださいますあまり、ご判断に疑義を挟みたくなるような根拠を私に与えたりなさいませぬよう、ご注意いただきたいと存じます。お分かりではないのですね。貴女のお言葉から立派な指針をたくさんいただいておりますし、それを自分の意見としてお聞かせするような手管も、私は心得ているのですよ。と申しますのも、貴女がなさることのすべて、おっしゃることのすべてが、いいえ、お顔の表情その

ものが（本当に生気溌剌としていらっしゃいますが）、貴女はお気づきでなくても、私と同じように貴女のことをお慕いし、見守っております者にとりましては、教訓となっているのです。ですから、お願いいたしますが、これからはお褒めの言葉ももっと控え目になさっていただきたいのです。このような告白をいたしました後ですし、貴女のほうでは、他の人を称えているだけのように考えてもらいたいのでしょうが、こっそり自慢をなさるおつもりなのだと、私たちがそのように勘繰ることになってもいけませんからね。

私ども一族は、本当に、奇妙なほど落ち着きを失っております。〈落ち着きを失う〉どころではありません。あの不幸な一件がございましてからは、ずっと〈騒乱状態〉といったところなのです。それに、私がすべての責めを負ってまいりましたが、仮に他の者一人一人からもっと正当な形で容赦してもらったといたしましても、自分自身のことで、手に余るほどの心配ごとを抱え込んでいたことでしょうね。

と申しますのも、これまで何もかも思いどおりにさせていただいてきたこともあり、非難に晒されるということが耐えられない質なのですが、そんな罪深いほどの忍耐心の無さによるのでしょうか、それとも、弁護して差し上げるのが私の務めですのに、そんな人たちが私のことで咎められますのを耳にしなければならない無念さのためでしょうか、出来ることなら、この前高熱で苦しみました際に、当時はまだ皆の愛情に包まれ、信用を得ていた時期でもございましたし、いっそ神様の思し召しで、あの世へ参ることが出来たならと、時々はそのように願うこともあったからなのです。また、このようにおじい様にお引き立ていただくことさえなかったなら、と願うことはさらに多かったのです。おじい様のお引き立ての結果、兄も姉も私によそよそしく接するようになったわけですし、少なくとも、私の二人のおじが予定していると思われます贈り物について嫉妬心を煽り立て、それが時折、あの人たちの愛情に翳りを生むことにもなったのですからね。

外出はまだ控えておりますが、幸いなことに、兄は熱が下がり、傷も快方に向かっておりますので、お求めのございました例のいきさつにつきまして、お望みのとおり詳しくお話しいたします。でも、貴女が触れておられる目的のためにそれが引き合いに出されねばならないようなことには決してなりませぬよう、切に願う次第です。

ご命令どおり、ラヴレースさんと姉との縁談から始めまして、出来るだけ手短にお話しいたします。事実だけをお伝えし、妹が姉の恋人を奪ってしまったなどという、世間に流れております噂の真偽につきましては、貴女のご判断にお任せいたします。

ラヴレースさんが［父も母も異存がないということで］姉のアラベラのところに挨拶にお見えになったのは、M卿とアントニー叔父様との間で交わされましたお話を進めるためのことでした。兄は当時スコットランドの方へ出掛けておりましたが、気前の良い教母から遺贈されましたあちらの大きな地所の様子を、同じくらい大きなヨークシャーの地所共々調査するのに忙しかったのです。私も家を空け、〈搾乳小屋〉（ア）と呼ばれておりますとこ

（ア）クラリッサの祖父は、他の家族の都合がつくかぎり、彼女を自分の元へ呼び寄せるため、彼女が搾乳小屋を建て、内装を好みどおりにするのを容認したのであった。完成後、その優雅で簡素なたたずまいや使い勝手の良さが称賛の的となり、その別邸全体が（以前には、場所柄もあり、古くから〈森の館〉と呼ばれてきたのだが）〈搾乳小屋〉の名で広く知られることとなったのである。とりわけ祖父は、その名で呼ばれることを喜んでいた。

ろへ出向いておりました。おじい様が親切にも遺贈してくださいました地所の経理のことに追われていたのです。すべて父の手に委ねてありますのに、年一度の監査のほうは、私の仕事になっているのです。

ラヴレースさんが紹介されました次の日、姉は搾乳小屋のほうへ私を訪ねてくれましたが、すっかりあの紳士が気に入った様子でした。お家柄は立派ですし、資産の点につきましても、M卿が叔父に保証してくださいましたとおり、正味二千ポンドの年収ということなのです。それに、M卿の広大な地所を相続なさるご予定のようですし、セアラ・サドレアー夫人とベティ・ローランス夫人からも大変な遺産をいただけることになっているのですが、このご夫人方はM卿共々、ラヴレースさんのご結婚につきましては（ご一族の最後の方ということもありまして）、とても熱心になっておられるのです。

「ねえ、大好きなクレアリー、本当にハンサムな方なのよ（あの方のことで気持ちが浮き立っていたのでしょうね、当時は姉も何かと優しくしてくれていたのです）。私なんかにはちょっとハンサムすぎるわ。私にもだれかさんみたいに愛らしいところがあれば、あの方のお気持ちを引き止めておくことも出来るのでしょうけれどね。だって、わがままなところがおありだって聞いているのよ。とてもわがままで、とても浮ついていらっしゃるってことだし、色恋沙汰もお好きなんですって。でも、お若いのだし、分別を備えておられる方なのだから、たとえそんな欠点が家庭に入った後も直らなくても、私のほうで我慢さえしていたら、きっと間違いに気づいてくださると思うのよ」

姉はこんな調子でお喋りを続けていたのですが、その後、姉の言う「あのチャーミングな方」に私も顔を見せてほしいと言うのです。そして、もう一度、「あの方のお相手に相応しいほどの美貌ではない」ことを気に掛け、「悲しいわね、この点で男の人が女の人よりも優っているなんてことは」などと言っておりました。でも、それから鏡の前へ行って、「私だって上等なものよ。私よりも出来が悪くても、まずまずと思われている女性も多いんですもの。整った顔立ちだといつだって思われて来たのだし、整った顔というのはね、いいこと、美貌に比べるとあまり失うところがないから、長持ちするわけよ。美貌のほうは消え失せるとか、逃げ去るとかするものだけれどね。そうよ、その点では」と、もう一度鏡を覗き込みながら」、私の顔立ちに不格好なところなんて無いわ。瞳だって決して悪くはないでしょう」と、独りで悦に入っておりました。あの時ばかりは、姉の目が今までにないほど輝いていたのも確かだったのです。「要するに、ケチをつけられるようなところはないってことだわ。大して魅力的ではないかもしれないけれどね。そうじゃなくって、ねえ、クレアリー」といった具合でした。

ごめんなさいね。こんなにも詳細に亘るようなことはこれまでなかったことです。貴女に対しましても、ありませんでしたわね。また、姉についてここまで無遠慮な書き方をするつもりもございませんでした。ただ、後に触れるつもりですが、あの方を好きだと思ったためしはないなどと、姉が兄に向かって手柄顔で否認してみせるものですから　…　それに、いつも貴女はこと細かに書かせようとなさいますし、留意しなければいけない事柄が話題になりますと、その際の話し手の様子や態度に触れずにおくのは許してくださいませんからね。言葉そのものよりも、その言葉を口にする様子や態度のほうが真意を伝えることが多いとのご意見ですが、的を射たお言葉ですわね。

私は姉の明るい見通しを祝って上げました。姉のほうでは、私のお世辞をいとも満足げ

に受け止めておりましたわ。

あの方が次にお訪ねになった時には、姉の気持ちは前にも増してあの方に傾いておりました。ところが、その機会を作って差し上げましたのに、あの方ははっきりとした申し込みをなさらなかったのです。叔父といたしましても、姉を目当ての訪問だと明言した上であの方を家族に紹介したわけですから、これは妙だということになりました。でも、私たちって、自分自身のことに気を良くしております時には、好意を寄せてくれるよう願っております意中の人たちが、案外そのつもりがないこともないのでしょうが、私たちをないがしろにするような態度を取りましても、すぐに許してしまうものですよね。同じように姉も、せっかくの好機に乗じようとなさらないラヴレースさんのために、とても都合の好い理由を見つけ出したのです。あの方も本当は恥ずかしがり屋なのだ、というのです。「どうでしょう。あのラヴレースさんが恥ずかしがり屋だというのですよ」華やかで陽気な方ですが、確かに、厚かましい様子は少しもお見せになりませんものね。でも、あの方が恥ずかしがり屋だったのなんて、ずいぶんと昔の話じゃないかと思いますわ。

ところが、姉に言わせますと、こんなふうになるのです。「誓っても良くってよ。女性とのことではラヴレースさんもひどい噂を立てられているけれど、あれは濡れ衣に決まっているわ。本当は内気な方なのよ。私はそう思うわ。話を切り出すおつもりだったことは間違いないと思うの。一、二度そんな素振りをお見せになったのだけれど、ひどくドギマギしておられて、それがとても好い感じなの。心からの敬意を示そうとしておられるご様子だったわ。純粋な尊敬の念だと思うわ。求婚期間中の男の方が意中の女性に尊敬の気持ちを示してくださるのって、とても素敵なことだと思うのよ」というのです。女性ならだれだってそう思うはずですわ。当然でしょう。だって、多くのご家庭を拝見しての考えですけれど、求婚期間が過ぎてしまいますと、女性への尊敬の気持ちなど、ちょっとやそっとでは見つかりませんものね。それから姉は、ハーヴィー叔母様に向かって、この次あの方がお見えになったら、他人行儀な態度を少し改めるつもりだ、と話しておりました。「温かくお迎えするのが当たり前の人に辛い思いをさせるような、それも、大切に思ってくださるとなおさら辛く当たるような、そんな蓮っ葉娘なんかでは決してありませんからね、私は」ということでした。姉の念頭にありましたのが、私のお慕いするだれかさんのことでなければ宜しいのですが　…

あの方が三度目にお越しになった時には、ベラはこの優しく思いやり溢れる信条のままに振る舞いました。姉自身の説明によりますと、あの方が肝心のお話を切り出せるようにとの配慮なのだそうです。それなのに、あの方はやはりはにかんでおられたのです。この〈時宜を得ない尊敬の念〉に打ち克つことが出来なかったというわけです。それで、この時のご訪問も前回の二の舞に終わりました。

姉もようやくあの方の態度に不満を抱き始めました。あの方のお人柄全般と、今回の自分に対する接し方とを比較対照してみたのです。そして、これまで一度も求婚された経験がないものですから、このように奇妙な求婚者はどう扱ったら良いものやら途方に暮れてしまう、と打ち明けておりました。「どういうおつもりなのかしらね。叔父様ははっきりと私への求婚者ということであの方をお招きしたのじゃなかったかしら。恥じらいなんかじゃないのよね。何故って（やっと気づいたというのですが）、もしも、直接私にお話しになる勇気がないというのなら、叔父様にお気持ちを伝えてくださることだって出来るわけで

しょう。別に、あの方のことがとても好きだからというわけではないのよ。だけど、このような場合、女性としてはね、男の方のお気持ちについて、早目にご本人のほうからはっきりさせていただくのが、確かに筋だと思うのよ。なのに、私よりお母様に良く思われようとなさっているのではないのかと、私、そんな気がし始めているのよ、本当に。お母様のお話にはだれもが感心するのは認めるわ。でもね、お母様のご機嫌を伺っていれば、それだけで私にも効き目があると考えていらっしゃるのなら、それは見込み違いというものだわ。それとね、あの方を受け入れたくなるようなところを示してくださるとしても、お気持ちに沿うような態度を私のほうから取れるようにしてくださるのが、あの方ご自身にとっても得策じゃないのかしら。どうしても言っておかなければならないけれど、相変わらずお顔は見せてくださっているのだし、是非ともこちらの家族全員とは昵懇になりたいものだと、はっきりそう言っておられたのだから、このようによそよそしい態度をお取りになるのは、なおさら奇妙な話だと、私としてはそう言わざるを得ないのよ。それに、これは世間の人たちの意見でもあるわけだから言わせてもらうのだけれど、私の分別については、あの方にも疑問を差し挟む余地はないわけでしょう。私も立派なことをずいぶんと口にしたのだけれど、あの方もじっと耳を傾けてくださった上に、褒めてくださったのですからね。私のようにざっくばらんな人間にとっては、遠慮がちな態度というのは苦痛の種だと言いたいわね。でも、叔母様にはお話ししておきますけれど（これらすべては叔母に向けられた言葉だったのです）、たとえラヴレースさんが、お姿と同じように、品行の点でも非の打ち所のない方だとしても、そして、どれほど熱心にこの縁談を進めようとなさっても、私としては、女性としての弁えや自分の立場といったものを忘れるような真似は決してしないつもりですからね」というのです。

　私のほうに相談はございませんでした。まだ家に戻っていなかったのです。それで、ハーヴィー叔母様と姉の間で話がまとまったのですが、この次にお見えになった時、あの方の求婚に取り立てて言うべき点がない場合には、姉のほうでも精々しかつめらしく、打ち解けない態度を取りましょう、ということになったのです。

　でも、姉の考えは浅かったということでしょう。後になってはっきりいたしましたとおり、このようなやり方では、ラヴレースさんのように眼力鋭い方が相手の場合、ただの不躾さの問題として受け止めてもらうわけには行かなかったのです。どなたが相手でもそうではないでしょうか。恰好の機会を与えられると、告白という形で勢いよく花を開くような、それほど深く根を下ろした愛情でない場合ですと、そのような愛を、怒りや憤慨の木枯らしを吹きつけることで呼び覚まそうなどと考えましても、それはおよそ無理な話ですものね。おまけに姉は、生まれつき気立てが好いという人間でもございません。この点はもう皆さんご存じのことですから、別に隠し立てをする必要はないでしょう。特に貴女にはね。そんなわけで、いつもよりももっと気難しい態度を目指したというのですから、それこそ、姉は見栄えのしない有り様だったに違いないと思うのです。

　次の話し合いで、二人がどのように事を進めたのか、私は存じません。結果から見ますと、卑劣にもラヴレースさんは、きっかけが与えられるよう手筈を整えた上で（ア）、それ

（ア）ラヴレース氏の手紙（手紙三十一）を参照のこと。そこでは、この際の自分の振舞いについて、簡単な説明が加えられているのである。

を抜け目なく利用なさったようにも考えたくなるでしょうね。それでも、あの方は姉の気持ちを尋ねておくのも適切なこととお考えになったのです。ただ、姉が申しますには、その頃までにはいろいろ手を使って(姉にもよく分からないところがあるとのことです)、あの方への反感が極限まで募るように仕向けられておりましたため、即座に落ち着きを取り戻すわけには行かなかったとのことです。それでも、はっきりとした返答を聞こうというおつもりだったのでしょうか、姉が平静さを取り戻しますのを待つとか、姉の気持ちを和らげようと骨折ることもなしに、あの方はもう一度姉の気持ちを質されたのです。成り行きからいたしまして、姉としてはどうしてもお断りせざるを得なかったのですが、それでも、姉が不満に思っているのはあの方との縁談そのものではなく、お話の進め方だけなのだということを分かっていただくよう、ご説明申し上げたとのことでした。姉の同意ならいつでも得られると言わんばかりに、姉というよりはむしろ母の機嫌を伺っていらっしゃるのだから、というわけです。

希望を持たせるような上手な断り方だと言わねばなりませんね。姉が用いました他の口実についても同様でした。「新しい生活に飛び込むのは気が進みません。今のままでとても幸せですから、これ以上の幸福なんて考えられないのです」とか、この手の〈同意を含んだ拒否〉とでも呼べそうな言葉を並べたのです。もっとも、姉のことを責めるつもりはございません。同じような状況に置かれた若い女性に、どのような言い方が出来るというのでしょう。男の方というのは概して、承諾の言葉に辿り着くまでの骨折り加減に応じて有難さを感じるものですから、あまり簡単に良い返事を与えたりいたしますと、ないがしろにされないともかぎりませんものね。女性が仮面をかぶって振る舞うことを非難している ある紳士から送られた詩の写しに、ビダルフさんは次のように答えておられますが、これはなかなか気のきいた返答だと思います。もっとも、貴女のことですから、女性を買いかぶり過ぎているとお考えかもしれませんわね。

心狭きは男衆。優しくすればつけ上がり、
辛く当たれば、小言いう。
心のうちを見たいなら、自分の仮面を外しなさい、
誠意をもって接しなさい。
思わせぶりと責めるけど、男心の不実さが
嘘いつわりを強いるのよ。

ここでいったんペンを置かなければなりませんが、すぐに続けるつもりです。

手紙　三
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

一月十三、十四日

こうしてラヴレースさんは、甘受なさるのが穏当とのお考えからですが、まんまと望みどおりの返答を姉の口から引き出したわけです。姉の言葉には従うことにするが、残念至

極である、という素振りを「あの方は偽善者なのかもしれませんわね」してみせました。「そのように決意を固められ、それほどまでに毅然として揺るぎないお気持ちになっておられるからには、これ以上お話しいたしましても、熟慮の上のお考えを変えていただく望みもありますまい」とおっしゃるのです。ベラが話してくれたのですが、姉に別れを告げる際には、溜め息をつかれたそうです。「深い溜め息をおつきになったのよ。それから、私の手を強く握り締め、そこに熱い熱い口づけをなさったの。そして、それはそれは恭しい態度で退出なさったのだけれど、あのお姿は今も目に浮かんでくるわ。嫌な思いをさせられたのは確かだけれど、可哀相な気持ちもしないことはないわね」というのです。この可哀相な気持ちというのは、愛へ導くための恰好の布石となるものだったのです。と申しますのも、あの時には、姉の方ではあの方が縁談を打ち切ってしまわれるなどとは夢にも思っていなかったのですからね。

ベラと別れた後、あの方は母をお訪ねになり、話し合いが不首尾に終わったことを報告されたのですが、その話しぶりが、姉は勿論のこと、家族の者たちすべての気持ちを十分考慮したものでしたし、家族の一員として迎え入れてもらえないことをひどく残念がっておられるご様子でしたので、家族全員に（前にも申しましたとおり、兄は当時スコットランドのほうに参っており、不在でしたが）好印象を残すことになりました。また、このお話がもう一度取り上げられるのは間違いないことだと、だれもが信じていたのです。ところが、ラヴレースさんはまっすぐロンドンへ行かれ、まるまる二週間あちらに滞在なさったのです。そして、あちらでアントニー叔父様と会われた際には、現状を変えるつもりはないという姪の無情な言葉を恨んでおられたということでした。それで、このお話もこれっきりなのだということが分かったわけです。

こうなりますと、姉にしても自己正当化をし損ねたりはいたしません。止むを得なかったことを主張しておりました。そして、自分と一緒の時には、あの方はまるで別人なのだとも言っておりました。「自惚れ屋さんなのよ。ご自分の利点があまりにもよく分かっていらっしゃるのね。もっとも、私が考えていたのとは違うものだわ。発作が起こったみたいに、冷静かと思うとすぐに情熱的になるわけでしょう。まるで、おこりに罹った恋人ってところなのよ。堅実な男性、そうね、高潔な方、品行方正な方なら、お一人でもあのように賑やかで落ち着かない人の千人分に値するのじゃないかしら。妹のクレアリーなら、あんな男性の気持ちを引いてみるのも悪くないと考えるかもしれないわね。あの子には忍耐強いところがあるし、口説き上手でしょう。それに、お世辞でも何でもないのだけど、見てくれだってまあまあですからね。でも、私としては、ほんの一瞬でも、どんなお気持ちでいるのかを確信出来ないような男の人は遠慮したいわね。絶対に嫌だわ。ですから、あの方をお断りしたことは、本当に心の底から喜んでいるのよ」とのことでした。

ところが、田舎にお戻りになるとラヴレースさんは、父と母のところを訪ねておくのが適当なこととお考えになりました。両親へのお言葉では、望みをかけていた縁談が受け入れてもらえなかったのはいかにも残念なことだが、いつも尊敬して然るべきご家族との親しいお付き合いを今後とも許してもらいたい、とのお気持ちからなのだそうです。運悪くとでも申しましょうか、この日は私も家におりまして、同席する羽目になりました。

あの方が私にばかり気を取られていらっしゃることは、間もなくだれの目にもはっきりいたしました。あの方がお帰りになるとすぐに姉は、虚勢を張ってのことでしょう、縁談

が持ち上がるようなことになれば、後押しをしても良いといった様子でした。

ハーヴィー叔母様がその場におられたのですが、叔母様は、姉に異存が無ければの話ということで、私たち二人ならい一の素敵なカップルになるはずだ、などとおっしゃるのです。「あら、まったく無くってよ」　頭をツンとそらせて言った姉の答えがこうでした。よく考えた上でお断りしたのだから、異存があったりしてはおかしいでしょう、というのです。

母のほうでは、どちらの娘にせよ、あの方との縁組を喜ぶ気になれないのは、他でもなく、あの方の品行について悪い噂があるからなのだ、と言明しておりました。

ジョン伯父様がおっしゃいますには、あの方を悔い改めさせることの出来る女性がこの世にいるとすれば、それは我が娘クレアリー（伯父様は私のことを子供の頃からそんなふうに呼んでおられたのです）だろうとのことでした。

アントニー叔父様は褒め言葉を並べ、賛意を表明しておりましたが、叔母様と同じように、姉の気持ちをお尋ねになりました。

姉はあの方のことは眼中にない旨を繰り返し、次のように断言しておりました。たとえイギリスにはもう他の男性が居ないとしても、あの方と一緒になるつもりはないし、それどころか、もしもクレアリーがあの方の上辺の華やかさに心奪われているのであれば、そして、他の皆さんが妹への求婚を認めるというのであれば、自分の権利のほうは、署名捺印の上ですぐに放棄しても構わない、というのです。

父は長いこと黙り込んでおりましたが、胸の内を聞かせてほしいというアントニー叔父様のお求めもあって、ようやく口を開きました。兄から手紙が来ているが、これは、アラベラのところにラヴレースさんが来られたことを耳にして認められたもので、受け取った時にはもう話が沙汰止みの状態であったため、母以外の者にはだれにも見せていないということ、手紙の中で兄は、ラヴレースさんの不品行を理由に、この縁談には強く反対しているということ、二人が以前から反目し合っていることは自分も確かに承知しているけれど、家族の間で不和や憎しみの種となるものは一切防ぎたいので、兄が帰宅し、他にも異議があることを確かめるまでは、自分の考えは伏せておきたいということ、そして、このように兄の意見を尊重しようという気持ちが一層強くなるのは、ラヴレースさんのお人柄全般からして、兄がラヴレースさんを毛嫌いするのにも尤も至極なところがあるからなのだ、といったことでした。そして、耳にしたところでは（皆も聞き及んでいることと思うが）、あの男は大変な贅沢好きで、旅先で巨額の借金を拵えたとのことであり、そう言えば確かに、あの男にはどことなく浪費癖が感じられる、とさえ申しておりました。

こういった細々とした事柄につきましては、一部はハーヴィー叔母様から、また、一部は姉から聞いたのですが、この話が持ち出されますとすぐに、私は席を外すように求められたのです。私が戻りますと、ラヴレースさんのことをどう思うかね、とアントニー叔父様がお尋ねになりました。叔父様がおっしゃいますには、私があの方の心を虜にしてしまっているのはだれの目にも明らかだ、というのです。

私は即座に、あの方のことはまったく好きになれないと申し上げました。ご自分の容姿や才能のことがとてもお気に入りのご様子なので、どんな人と結婚なさるにせよ、奥様への心遣いがおろそかになるように思われる、という理由からです。

この返答には、特に姉が喜びました。そして、まったくそのとおりだと認め、私の考え

方のことを持ち上げておりました。と申しますのは、自分としても同じ考えだから、というわけです。

ところが、その翌日、M卿がハーロー邸にお見えになり［私はその日不在でしたが］、卿の甥御さんのお名前で正式な申し込みがございました。私どもとの縁組はあちらのご家族の皆さんが熱望して止まないところであり、ご親戚の方への妹からの返答が、姉の時のようにはならないことを望んでいる、とのお言葉でした。

要するに、ラヴレースさんの訪問は、私ども家族の者が冷たい態度を取るには当たらない方からのものとして容認されることになったわけです。ただ、私への求婚に関しましては、先にも触れましたとおり、兄が不在の間、決めごとは一切したくないという父の意向で保留されたのです。その他の点につきましては、私の分別に任せようということになりましたが、と申しますのも、私のほうではあの方について、相変わらず異議を申し立てておりましたし、もっとお付き合いをするようになりましてからも、当たり障りのないお話以外には耳をお貸ししないように努め、二人きりで言葉を交わすような機会は避けるようにしていたからなのです。

あの方は、私どものこのような仕打ちをじっとおとなしく堪えておられましたが、あの方の生来のご気性を考えますと、これは予想外のことでした。世間の評判では、根が怒りっぽくてせっかちとのことですし、幼い頃からあれこれ口を挟まれるようなことには慣れていらっしゃらないご様子なのです。一人息子をお持ちの上流家庭にはよくあるお話ですわね。おまけに、あの方のお母様には、あの方以外のお子様はお出来にならなかったのです。でも、このように控え目な態度とは裏腹なことになりますが、これまでも貴女にはお話ししてまいりましたとおり、ご自分をずいぶん高く買っていらっしゃることもあり、ご自分の容姿と身に備えた嗜みをもってすれば、知らず知らずのうちに、私の心を動かすことになるのは疑いのないところだと、そのように考えておられるのが私には感じ取れたのです。そして、これはあの方がハーヴィー叔母様にお話しになったことなのですが、いったんそういうことになれば、私の気質は大変落ち着いたものなので、私の愛情を長くしっかりと捕まえておくことも出来るはずだというのです。ところで、あの方がおとなしく堪えておられることについて、姉のほうでは別な見方をしておりました。「あの方には結婚するお気持ちはまったくないのよ。十人くらい女の人を囲っていらっしゃるかもしれなくってよ。だから、お話がなかなか決まらないのは、あの方の浮気の虫にはもっけの幸ということになるわね。貴女が冷たい態度を上手に演じるのにも好都合でしょうけれどね」というのが、私に向けた姉の親切な言葉でしたが、姉とは違って、利害関係のない人がおっしゃったのでしたら、この言葉にももっと説得力があったことだろうと思います。

いつものあの方らしくないと、どなたもがお考えになったこの辛抱の良さ、そして、求婚相手はあの方が大いに熱を上げて当然なほどの財産に恵まれていると思われております事例での、この我慢強さですが、あの方の動機が何であったにせよ、そのお陰で、あの方もずいぶんと無念な思いをせずに済みましたのは確かです。兄が帰宅するまで、父は賛意の表明を差し控えておりましたが、その間、ラヴレースさんはお家柄にふさわしい丁重な扱いを家の者一人一人から受けていらっしゃったのです。また、あの方の品行にとりまして不利な噂も私どもは時折耳にしておりましたが、その点であの方を問い質すわけにもまいりませんでした。そのようなことをいたしますとあの方は、私どもの間でのお立場から

いたしまして、思慮分別に照らして妥当とは思われないほどの有利さを得たのだと、勝手にお考えになることでしょう。と申しますのも、あの方の求婚が受け入れられる可能性よりは、受け入れられない可能性のほうがはるかに大きかったのですからね。

そのようなわけで、あの方はほぼご自分の思惑どおりに家の者と言葉を交わすことが出来るようになったのです。あの方の立ち居振舞いにいたしましても、皆の目に映りましたのは、この上なく慇懃なご様子ばかりでしたし、ひどくしつこいと思われるようなところが少しも見当たらないこともあり、家の者はあの方のお話がすっかり気に入った様子でした。一方、私のほうでは、あの方がお訪ねの折にも、ただ家族共通のお客様としてだけ考えておりましたし、あの方のご訪問のことは、お見えの際にもお帰りの時にも、他のどの身内とも同じように、私には関わりのないことと考えていたのです。

ところが、私のこの冷たい態度が、極めて大きな利点を一つ、あの方のために確保する手立てとなったのです。と申しますのは、その後に続きました例の文通は、このことが根拠になっていたからなのです。あの文通にいたしましても、家族間の反目が表面化いたしました時点で始められることになったのでしたら、私のほうから引き受けるようなことは断じてなかったはずなのです。きっかけというのは次のとおりでした。

ハーヴィー叔父様のところには、お世話を頼まれた若い男性が一人おりますが、叔父様としましては、この青年を俗に言うグランド・ツアー(二)のため、一、二年外国に出すおつもりなのです。そして、そのような折に若い旅行者が見物しておく必要のある事柄一切につきまして、ラヴレースさんが上手に説明出来ますことを知った叔父様は、あの方がお訪ねになった宮廷や国々の様子、また、そういった場所で一番興味をひく事柄についての解説書のようなものを書き留めてくださるよう、お願いしたのです。

あの方は同意なさいましたが、あの方のお言葉を借りますと、私のほうで話題の「方向づけをする」という条件が付いていたのです。筆の立つ方だという評判はだれもが耳にしておりましたし、冬の夜長などには、あの方のお書きくださったお話が恰好の慰みになるだろうという考えもございました。それに、あの方からのお便りは、例の青年に手渡されます前に、家族全員の集まったところで朗読されることになっておりましたから、お便りの中で特に私にだけ言い寄るようなことも出来ないはずだということで、私といたしましても、あまり気が咎めるようなこともなく筆を執り、意見を述べたり、さらに情報をいただくための質問をしたりさせていただいたのです。書き物は私も大好きですから、なおさら良心の咎めは少なかったのかもしれません。書き物の好きな人間というのは、何かと筆を手にしたがるものですからね。それに、皆の同意を得ておりますし、ハーヴィー叔父様の希望もあったわけですから、私だけがためらっているような素振りを見せたりいたしますと、自惚れた人が自分に都合の好いように解釈してしまいそうな、また、姉のほうでもきっと嫌味の一つは口にしそうな、そんな特別な感情を抱いていることの証になってしまうと考えたのです。

これらのお手紙の何通かは貴女もご覧になり、人物や場所や事物についてのあの方の説明を楽しんでおられましたね。また、目になさった事柄について、あの方は並々ならぬ観察眼をお持ちだというのが、私たち二人の一致した見解でしたわね。

姉自身、あの方が記述や描写の勘どころを結構弁えておられることを認めておりましたし、若い頃に外国に行ったことのある父によりますと、あの方の所見には興味をそそられ

るものがあり、なかなかの読書家で、思慮分別もあれば、趣味も良い人物であることがよく分かる、とのことでした。

こうして、あの方と私の間で、皆の賛同を得まして、一種の文通が始まることになったわけです。その間、だれもが不思議に思い、また、好ましいこととも感じておりましたのは、私に対するあの方の辛抱強い崇拝の姿勢でしたが、皆はあの方の態度をそんなふうに呼んでいたのです。でも、間もなく、もっとしつこく迫って来られるのは疑いのないところだと、だれもがそう考えておりました。と申しますのは、以前にも増して頻繁にお顔をお見せになるようになりましたし、ハーヴィー叔母様に向かって、私への熱情を打ち明けておられたからですが、それはこれまでに経験したことのない、畏敬の念を伴ったものだというのです。父の意向と私の打ち解けない態度にただ「上辺」だけ … これがあの方の言い回しでしたが … 甘んじているのも、そんな気持ちによるものなのだということでした。でも、これこそ、女性に対するあの方のいつもの態度なのかもしれません。何故って、姉にいたしましても、初めのうちは、あの方の〈尊敬の念〉とやらを独り占めしていたのではなかったでしょうか。

それはさておき、父のほうではこのしつこいお求めを予想し、その場合、お申し出をお断りする理由としてすぐにも持ち出せるよう、耳にしておりましたあの方についての悪い評判の数々を用意して待っていたのです。これは私にとりましてはとても歓迎すべきことに思われましたが、そうでなければおかしな話になりますわね。だって、〈慎みのない考え方〉をしていることでワイアリーさんの求婚をお断りしていた人間が、もしも別の方からの求婚を、〈もっと慎みのない振舞い〉を知りながら撥ねつけずにいたのでは、どなたにだって許してもらえなかったはずですものね。

それでも、白状しておかなければいけないこともあるのです。当たり障りのない事柄を話題としたお便りの中に、あの方は、一度ならず私にだけ宛てた別の手紙を同封し、私への熱い想いを打ち明け、私の打ち解けない態度への不満をとても熱心に訴えておられたのです。でも、こういったことは少しも気に留めないようにしておりました。と申しますのは、私のほうでも、あの方への文面では一般的な事柄以外には一切触れずにいたわけですから、このように特殊な話題に関わるお言葉は、目を通さなかったことにしておきますのが適切なことと思われたからです。それに、（あの方のお便りが歓迎されていたこともありまして）本当の理由を挙げないかぎり、私のほうから勝手にこの文通を止めるわけには行かなかったという事情もありました。さらに申しますと、ご丁重なお心遣いを示していただいてはいたのですが、元々あの方の気質に高慢で激しやすいところがありますのは、（仮に、それがあの方の通常のお人柄ではなかったといたしましても）容易に看て取ることが出来ました。言い出しますとだれにも抑えることの出来ない兄の姿を嫌というほど目にしてきておりますから、もっと親密な間柄になりたがっておられる方に、そのようなところが見受けられますのは、私といたしましては、とても耐えられないことだったのです。

あの方のこのような気質を垣間見ることになりましたのも、先に触れました、ちょうどその折のことでした。家族宛のお便りと一緒に私宛の三通目のお手紙を送ってこられた後のことですが、その次にハーロー邸にお見えになった時、例の手紙を受け取ってくれなかったのか、とお尋ねになったのです。そこで私は、あのような形で送られてきたお手紙には返事を出すわけに行かないということ、また、その旨をお伝えすべく、今作ってくださ

ったような機会を待ち望んでいたのだということをお話ししました。ですから、あのような話題につきましては二度と触れていただきたくないとお願いし、もしもそのようなことがあれば、両方のお手紙を返送させていただくし、今後あの方宛には一行たりとも筆を執らないつもりでいると申し上げたのです。

あの方がどんな様子をなさったか、貴女には想像お出来にならないと思いますが、それはもう図々しいものでした。簡単に申しますと、私の心にもっと判然とした印象を与えられなかったのには失望だ、と言わんばかりの素振りだったのです。気を取り直された時にも(即座に気を取り直されたのですが)、その尊大な態度をもっと穏やかなものに変えようとして、どれほどご自分のお気持ちと闘っておられるのか、すっかりお顔に出ておりました。でも、私はそのどちらにも素知らぬ顔をしておりました。あの方の厚かましい望みを挫くためにも、冷淡で無関心な姿勢を保ってまいりましたが(同時に、プライドが高いとか自惚れているとも見られないようにも努めました)、同じ姿勢を守ることで、何をおっしゃろうとも、どんなに横柄な態度をなさろうとも、それですぐに腹を立てるほど、あの方は私にとって大切な人ではないのだということを分かっていただくのが一番良いことだと思ったからです。別な言い方をいたしますと、特別な人に対する場合のように、笑顔を浮かべたり、渋面を作ってみせたりするほど、あの方のことを大事に思ってはいないことを知っていただきたかったということです。本当にあの方には抜け目のないところがございまして、何気ない口調でしたが、教訓じみたことを少し漏らしておられたのです。そのこともありまして、私も今申しましたような慎重な態度を取ることにしたのです。実は、以前二人でお話をしておりました時に、こんなことを口にしておられたのです。「求婚相手の女性に好意を抱かせることが出来ない場合には、男性としては相手を怒らせてみるのも一つの手であり、その方が効果的なことも多い」というのです。

ここでちょっと中断しなければなりませんが、都合のつき次第、この件に関しまして筆を進めるつもりでおります。とりあえませず、

親愛なる貴女の友、そして、しもべ

Cl. ハーロー

手紙　四

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

一月十五日

兄がスコットランドから戻ってまいりました時、ラヴレースさんと私とが置かれておりました状況は、先にお話しいたしましたようなものでした。

ラヴレースさんが度々お見えになっていることを耳にするとすぐに、兄は躊躇することも、あるいは、釈明することもなく、あの方への不賛意を表明いたしました。お人柄の面で大きな難点があるということでしたし、どちらの妹に対してであれ、おじたちがどうしてこのような男を薦める気になったのか不思議だ、といったようなことまで長々と述べ立てる始末なのです。また、父に対しましては、自分が戻るまで同意を差し控えてくれたことへの感謝の気持ちを口にいたしましたが、その言い方にいたしましても、自分の不在中

に目下の者がしっかりと義務を果たしたことを褒める際に目上の者が用います、そんな口調のように私には思われました。

兄は、自ら公然と認めるあの方への宿怨を正当化するために、世間の噂や大学生のころに見聞きした事柄を持ち出し、いつも憎しみを抱いてきたし、これからもそうするつもりだということ、そして、仮に私が結婚するようなことになっても、あの方を弟として、あるいは、私を妹として認めるわけには行かないということを断言したのです。

私の耳に入りましたところでは、若い頃から二人が憎み合うようになった原因は次のように説明されておりました。

ラヴレースさんは活発さや勇敢さの点で日頃から注目を集めておりましたが、それに劣らず、文学のすべての分野に亘って、長足の、驚くような上達ぶりを示したことで評判になっていたらしいのです。勉強をなさっている時の熱心な学習態度では、あの方に匹敵する人はほとんど見当たらなかったということです。大学時代のあの方の凡その人物像というのはこのようなものだったらしいのです。それで、学問好きの人々の間ではたくさんの友人に恵まれることになりました。一方、気の合わない人々はあの方のことを恐れておりましたが、それというのも、活発さのあまり、すぐにも無礼に及んでしまいますし、無礼のありました際にも、それを押し通そうとしてお示しになる大胆不敵さゆえのことだったのです。そのようなわけで、質の良くないお仲間も好きなだけたくさん出来ることになったのです。貴女なら、「あまり芳しい人物とは言えませんわね、全体的には」とおっしゃりたいところでしょうね。

でも、兄の気質にいたしましても、これより望ましいものだったとは申せません。生まれつき尊大なところがございますから、自分よりも優れていることがこれほどはっきりしておりましては、兄としてもとても我慢は出来なかったことでしょう。それに、愛情よりも恐怖を感じてしまう相手に対しましては、だれだって憎しみを抱かないではいられないものなのです。あの方と比べましても、兄は感情を抑えるのが得手なわけではございませんから、いつもあの方の、おそらくは不躾な愚弄の的にされていたのです。ですから、顔を合わせますたびに争うことになってしまったのでしょう。そして、友情からにせよ恐怖からにせよ、皆さんが敵側に立つものですから、同じ大学に在籍している間は、兄としてはまことに気の休まらない毎日だったと思います。そんなわけですから、気質の穏やかさで世間に知られているとは申せません若者が、早くに生じました根の深い敵愾心を再び燃やし始めたといたしましても、さらに驚くには当たらないということになります。

兄はこの忌々しい相手への恨みごとを縷々述べておりましたが、すぐに姉が一緒になって怒りをぶつけました。きっかけさえあれば、と待ち構えていたのです。姉はあの方に対する気持ちをきっぱりと否定いたしました。「好意を抱いたことなど一度だってないわ。あの人がかなりの借財を背負い込んでいるのは確かね。そうでないはずはないわ。あれだけ放蕩三昧なんですもの。所帯を持っていらっしゃるわけではないし、供回り付きの馬車だってお持ちじゃないのよ。でも、あの人には奢り高ぶったところがないからだ、などとおっしゃる方は一人だっていないのだから、理由は容易に察しがつくってものね」ということでした。姉にしてみますと、あの方をお断りしたことが自慢の種だったのですが、兄もそのことで姉を褒めておりました。その後は、二人揃って、機会のあるごとにあの方を貶めるようなことを申しておりましたが、そんな機会を〈拵える〉ことも決して少なくはご

ざいませんでした。あの方への腹立たしい気持ちが根にあるものですから、あらゆる話題が、そのつもりではなくとも、そちらの方へ向かってしまうことになるのです。

二人の非難の矛先が私にまで及びません時には、こちらのほうからあの方の弁護を買って出るような気持ちはございませんでした。私が二人に申しましたのは、あの方のことをそれほど大切には思っていないので、あの方のことで内輪もめを起こしたくはないのだということ、それに、二人の酷評を招くようなことをあの方ご自身がずいぶんなさっているように思われているのですから、ご自分の蒔かれた種はご自分で始末していただくのが当然のことのように思う、といったことです。

勿論、あの方を咎める二人の言葉が興奮のあまりすっかり見境をなくしておりますのに気づきました折には、ただ公正さという点を考え、時々あの方のために一言口添えをさせていただくのも妥当なことと考えました。でも、非難を浴びせられるだけのことだったのです。私は認めようとはしないけれど、やはりあの方に好意を抱いているのだ、というわけです。そんなこともありまして、話題を変えることが出来ません時には、その場を離れて音楽で気を紛らすとか、控えの間に閉じ籠もるとかいたしますのが常でした。

どうしてもあの方と顔を合わせなければならない時の二人の態度は、それはもう冷やかで無愛想なものでしたが、それでもまだ、面と向かってあの方を侮辱するようなことはございませんでした。あの方の出入りを禁じていただくよう、父を説得するつもりでいたのです。でも、家柄が良く財産もある人に対して、そのような仕打ちに出ようというわけですが、その十分な理由となるような難点が、あの方の立ち居振舞いには何一つ見当たりませんでしたから、二人の思惑どおりにはまいりませんでした。そこで二人は、私のほうでご訪問を禁じるよう、懸命に働き掛けてきたのです。父親の元で暮らしております私にどんな権限があってそのようなことが出来るのか、私は尋ねてみました。それに、あの方にはずいぶんとよそよそしい態度をとっていることもあり、私を目当てにお見えになっているとはいえ、二人のことを別にすれば、家族のどの人のお客さんだといってもおかしくない状態ではないか、とも申し添えました。二人は、意趣返しのつもりでしょう、それは私たちが仕組んだ手口で、私たちは表向きよりもずっと通じ合っているのだ、と言っておりました。そして、挙げ句には、あの方がお見えになった時にはいつも引き下がっておりましたのに、出し抜けにとでも申しましょうか(ア)、二人して激情のおもむくままにあの方の行く手に立ち塞がり、面と向かって無礼な振舞いに及んでしまったのです。

貴女にはよくお分かりでしょうが、ラヴレースさんにとって、これはとても我慢のならないことでした。それでも、あの方は私に向かって不満を漏らされるだけで、じっと堪えておられたのです。もっとも、私のことさえなければ、兄の仕打ちというのは到底見過ごすわけに行かないものだと、強い口調で話しておられました。

遺憾に思いましたのは、この一件で私に対する点数稼ぎが出来たと、あの方がお考えになったことでした。あの方がお受けになった侮辱の中には、あまりにもひどくて弁解の余地のないものも含まれておりましたから、なおさらその感が強くなるのです。でも、私のほうでは、兄にどのような落ち度があるといたしましても、出来ることなら兄と争うつもりはないということ、また、二人が顔を合わせた場合、お互いに平静でいることは無理な

(ア)このように二人が以前にも増して露骨な敵意を示した理由については、手紙十三で触れられている。

ようだから、兄を避けるようにしてくださると有難いし、兄のほうから事を起こすようなことはないはずだ、といったことも私は申し上げたのです。

あの方はこの返事にひどく苛立っておられましたが、次のようなお言葉でした。私の望みとあれば、この侮辱にも耐えねばなるまい。自分も気性の激しさをこれまでは非難されてきた。しかし、この機会に、これだけの挑発を受けた若者には珍しいことだろうが、自分にも自制心のあるところをお見せしようと思う。私のように雅量に富み、洞察力に恵まれた人間であれば、その真意を理解していただけるはずだ、とのことでした。

これよりも少し前のことでしたが、兄はおじたちの同意を得た上で、ある人物を雇いまして、あの方の債務の状況やお仲間について、それに、色恋沙汰のことなどについて探らせようとしたのです。M卿のお屋敷を解雇された土地管理人か財政管理人の親戚ということですが、この管理人のほうは、ラヴレースさんの財務についても（この仕事も解雇されたのですが）少し手伝ったことがあるのだそうです。

ハーヴィー叔母様がこっそりと教えてくださったのですが、ラヴレースさんについてこの人が語った事柄の詳細は次のとおりです。

気前の良い地主で、領地の改良についても、確実で永続性のあるものには出費を惜しむようなことはまったくない。財政状態に自ら目を通し、財務のことにも通じている。外国滞在中は豪勢な暮らしぶりで（自分の財政状態を秘密にしたりはしないので分かったのだが）、多額の借金を拵えてしまったという。しかし、年収を越えないように節約し、叔父や二人いる叔母の世話になるのを避けるため、供回り付きの馬車も断念した。その気になれば、叔父や叔母たちから好きなだけ金銭的援助は受けられたのだが、頭が上がらなくなるのを大層警戒しており、口論になることもしばしばで、そのあまりにも遠慮のない態度には、だれもが恐れをなしている。ただ、兄が聞いた話とは別で、領地が抵当に入ったことは一度もなく、いつも高い信用を得ており、現時点で借金の返済は、完全にとは言わないまでも、ほぼ終わったものと考えている。

女癖の点では怪しからぬ男で、小作人たちも、器量の良い娘を持っている者は、娘が地主の目に留まらないようにしている。特にこれといった愛人を囲ってはいないと思う。というのも、「お初であること」が　…　これがこの人の使った言葉ですが　…　何よりも肝腎、と言っているのを聞いたことがあるからだ。叔父と叔母がしきりと結婚を急かしているのだが、それさえなければ、身を固める気などはなさそうに思う。〈酔った勢いで〉という話は一度もないが、大変な策略家であり、また、筆まめな男でもある。聞いているところからすると、都で出鱈目な生活を送っており、似たようなろくでなしの仲間が六、七人いて、時々は領地に連れてくるのだが、その連中が帰京すると、村の者たちはいつもほっとしている。自分では、気性は激しいが気さくな人間のつもりであり、人をからかうのも好きだが、からかわれるのも苦にせず、時折は、自分のことをだれにも負けずこきおろしたりしている。

これが、敵側に立つ男の目に映ったあの方の人物像ということになりますが、実は、叔母の言によりますと、この人があの方の望ましい点を口にする場合はいつも、「　…　と言わざるを得ません」とか「公平に見れば　…　」といった言い回しで、しぶしぶ語っていたのに比べ、逆の場合には、すらすらと自発的に話していたというのです。そして、このように報告されました人物像は、これだけでも困ったものですが、もっとひどいことが期

待されておりましただけに、探りを入れた意味がなく、あの方のお申し出が奨励されることになるのではと、兄と姉は前にも増して気を揉んでおりました。と申しますのも、姉のところにあの方が初めて紹介されました時にも、あの方の一番悪い部分は周知のことになっていたからです。あるいは、察しのつくことだったわけですからね。

でも、私自身といたしましては、あの方には不利な見方になりますが、次のように申さねばなりません。あの方は兄のひどい仕打ちに耐えることで、私に向かって手柄顔をなさりたかったのですが、兄との和解を図っておられるからといって、御礼を申し上げねばならないわけでもないということです。また、あの方が兄なり姉なりにそのような申し出をしてくださっていたなら、何らかの影響を及ぼしていたものと確信する、ということでもありません。ただ、あのように如才がなく、おまけに自信たっぷりのお方ですから、だれだってそうしてくださるはずだと思いたくなるのです。それどころか、あの方は兄と姉両方に対しまして、特に兄のほうにですが、まるで二人を無視しているようにも受け取れる態度をお示しになったのです。それに、兄への態度を変えていただくよう、何か私のほうから口にしたりしておりましたなら、あの方にとっては好都合なことになるわけで、それこそ大喜びなさったことでしょうから、私はとてもそんなことをする気にはなれませんでした。ただ、だれからにせよ、これだけ後押しをしてもらえないわけですから、あの方だってきっとそのうちにプライドが頭をもたげ、ご自分のほうからこちらへお見えになるのをお止めになるか、あるいは、上京なさるに違いないと考えておりました。私どものことをお知りになるまでは、主にロンドンにお住まいだったのですし、都に行ってしまわれた場合には、私があの方のお便りを受け取りますこと、ましてや、お返事をするなどということを期待なさる理由はなくなると思いました。その頃には、どのようなものであれ、あの方のお手紙をいただくことになりました契機はもう存在しないわけですからね。

ところが、憎しみに駆られた兄は、そのような成り行きを待ってなどいられなかったのです。度重なる兄の無礼な振舞いに対し、ラヴレースさんも今までどおりの軽蔑と、相手そっくりの横柄な態度をもって応じておられましたが、とうとう兄は、あの方がお見えになった時に、入ろうとなさるのを妨害するように戸口のところに立ち塞がるような真似をしてしまったのです。そして、あの方が私に会いたいことをお告げになると、妹に一体何の用があるのだ、と高飛車な尋ね方をしたのです。

あの方は、兄に言わせますと、挑発的な態度だったということですが、「どんな質問にもお答えしようじゃないか、紳士にならな。だが、思い出してもらいたいものだね、ジェームズ・ハーロー君。最近とみに態度が大きいようだか、今君は大学にいるのじゃないってことをだよ」とおっしゃったのです。

ちょうどその時、ご自分で名付けられた〈談話のための訪問〉を頻繁にしてくださっているお方で、私の応接間で暇乞いを済まされましたリーウェン尊師様が、戸口のところまで来られました。その台詞を耳にされ、師は中に割って入られました。二人とも剣に手を置いていたのです。そして、ラヴレースさんに私の居所をお知らせになりましたので、あの方は兄の横をすり抜け、私のところへ来られました。後に残された兄は、あの方がおっしゃいますには、まるで追い詰められたイノシシのように苛立っていたとのことです。

この一件で家中が大騒ぎになりました。父は、家族の平穏のためにも、以後ご訪問は控えていただくよう、それとなくラヴレースさんに伝えてくれましたし、私からも、父の言

い付けですが、はるかに率直にその旨を申し上げたのです。

でも、ラヴレースさんというのは、目的を放棄する気になど簡単にはなってくれない人で、大層執着なさっているように装っておられる事柄の場合には、特にそうなのです。それに、出入りをきっぱりお断りしたわけでもありませんから、しばらくの間はこれまでどおりの状態が続きました。私にははっきりと分かっておりましたが、こちらから面会を拒んでしまいますのは（ただ、出来るかぎり遠慮するようにはしておりましたが）、兄との間に何か取り返しのつかない結果を招くことになるのです。何しろ、あのように見境なく加えられました兄の無礼をあの方が耐え忍ばれたのも、ただただ私のことを考えたため、とのことでもありましたからね。

こうして私は、兄の無鉄砲さのせいで、一番避けたいと願っておりました人に借りを作ることになってしまったのです。

そうこうしております間に、シムズさん、そして、マリンズさんとの縁談が持ち込まれました。両方とも（順に）兄の差し金によるものなのですが、私がラヴレースさんに過度に肩入れをしていると考える者などだれ一人としていなかったこともありまして、しばらくは兄も以前よりはおとなしくしておりました。兄といたしましては、憎い男の対抗馬として、どちらかの男性を父やおじたちに認めてもらうつもりだったのです。ところが、ワイアリーさんの場合と同じように（これは兄がスコットランドに行く前のことで、ラヴレースさんがこちらにお見えになる以前の話ですが）、この紳士たちとの縁談もご破算にしていただくほど、私に力があることを知りますと、兄はもう抑えが利かなくなってしまったのです。最初は、私はあの方に心を奪われているのだと決め込み、そのことをまるで犯罪でもあるかのようにして、私を責め始めました。そして、次に、あのシムズさんのご兄弟で、二マイル離れたところにお住まいのエドワード・シムズさんのお屋敷で、面と向かってラヴレースさんを侮辱してしまったのです。リーウェン尊師様のような、仲裁をしてくださる人もその場には居合わせなかったものですから、あの不幸な果たし合いになってしまいました。お聞き及びのとおり、兄は剣を奪われてしまいました。家に運び込まれますと、実際よりもはるかに重傷だと思わせるようなところがございましたし、熱も出てまいりましたので、皆の怒りが爆発いたしました。そして、すべての責任が私に被せられることになったのです。

ラヴレースさんは三日の間、日に二度ずつ、兄の容体を案じて使いの人をよこされました。不躾で、怪しからぬとも言えそうな返事を受けておられたにも拘らず、そうするのが尤もなこととお考えになったのでしょう、四日目にはご自身で尋ねて来られたのです。そして、たまたま居合わせた二人のおじから、それまでにも増して無礼な仕打ちをお受けになったのです。痛風を患っておりました父も剣を握ってあの方に立ち向かおうとするものですから、引き止めるのにも力ずくという有り様でした。

私は恐ろしさのあまり気を失ってしまいました。まわりではだれもが激昂しておりましたし、おじたちに向かってラヴレースさんが、二人から加えられた無礼の数々への謝罪の言葉を引き出すまでは立ち去るわけに行かない、といきまいておられるのも聞こえてきたからです。しっかりと錠をおろしたドア越しのやり取りでした。母はその間ずっと大広間で神に祈り、父を引き止めようと懸命になっておりました。一方、姉はこれまでもずいぶんラヴレースさんのことを悪者扱いしていたわけですが、私のところに参りまして、意識

が戻りますのを待ち兼ねたように、ひどい言葉を投げつけてよこしました。でも、ラヴレースさんのほうは、私の容体がとても悪いことを知らされますと、ここを立ち去られました。ただ、恨みはきっと晴らしてみせる、と言い残して行かれたのです。

私どもの召使たちの間では、あの方はいつも大歓迎でした。気前良く心付けはくださいますし、出会う者ごとに何か面白いことをおっしゃるものですから、皆あの方の味方になっておりました。それで、この時にも、召使たちは他の皆が悪いのであって、あの方には責任はないのだと陰で言っておりましたし、(あの方への挑発がひどくなる前のことですが)とても好意的な調子で、あの方の沈着で紳士らしい振舞いのことを吹聴していましたので、そういった評判のことや、このたびの仕打ちが招く結果への不安から、私もあの夜お届けくださいましたあの方のお手紙に目を通す気持ちになったのです。そして、(すべては私の決定に委ね、何もかも私の気持ちのとおりに行動したいという)とても丁重なお言葉で書き綴られておりましたので、いずれそのうちにお返事を差し上げようという気持ちも生まれたというわけです。

文通と呼んで構わないものが私たちの間で再開されましたのは、このような抜き差しならない事情があってのことなのです。でも、私が筆を執りましたのは、あの方がやむなく剣を抜くことになりましたのも、本当のところは(私への気持ちから固辞しておられましたのに)、抜かなければ卑怯者と見做すと、繰り返し兄から罵倒されたためであると、シムズさんのご兄弟から教わりました後のこと、そして、私に出来ますかぎりでの問い合わせから、おじたちとの一件でもあの方が被害者で、私がお話しいたしました以上にひどい仕打ちを受けておられたということを知った後のことだったのです。

父とその他の身内に対しましても、シムズさんからそっくり同じ事情説明がございましたが、皆が結束して事に当たろうとするあまり、こちらが引っ込むことも、あの方を許すことも出来ないところまで行ってしまっていたのです。それで、あの方と文通することとか、ほんの一時でもあの方と同席しておりますところを人に見られますこととかは、禁じられてしまったのです。

でも、一つだけ申し上げておくことがございます。ただ、口外せぬよう母に申し渡されておりますので、内緒にしておいてくださいね。ラヴレースさんに向けられました無礼の数々がどんな結果を招くかを案じてのことですが、母が申しますには、差し迫っている災いを防ぐためにも、出来るかぎりあの方に働き掛けてほしいとのことで、何をしたら良いのかについては、私の思慮分別に任せるというのです。

もう筆を置かなければなりません。でも、お求めのありました事柄すべてに漏れなくお答えするよう、十分に書き記したつもりです。一番敬わなければならない人たちに迷惑を掛けてまで、自分の身の証を立てようとしたり、行動を正当化しようとしたりいたしますのは、子の立場にある者が求めるべきことではございません。でも、私の将来を左右しかねない今後の成り行きすべてにつきましての記述は、こんなにも大切なお友達にとりましては(差し障りのないこと以外は決して口外なさらない方ですし)、関心の的になることと思います。ですから、これからも機会のあり次第筆を執り、お互いにいつもしてきましたように、出来るかぎり事細かにお伝えするつもりでおります。本当に、何度も申し上げたことですが、貴女と言葉を交わしております時 … 直接お話し出来ません時には手紙を通してですが … この時に感じます喜びと比べられますものは他にはございません。

ところで、おっしゃるとおり、私もすっかり世間の噂の的になってしまっているようですね。心苦しいかぎり、と申し上げる他ございません。私の名に傷がつかぬよう慮ってくださいます優しいお心遣い、そして、何か新たな災難が（何とかそれは御免蒙りたいものですが）降り懸かります前に、私のほうから事の顛末をお話しいたします機会をご用意くださいましたこと、いつも変わることなく熱い友情をお示しくださいます大好きなハウ嬢にいかにも相応しいことと存じます。これまでにも倍するご恩義を授かりましたゆえ、

日頃よりの謝意と愛を込めまして、貴女の

クラリッサ・ハーロー

求めのあった、祖父の遺言状前文の写し。先の手紙に同封されたもの。

先に名を挙げ、その概要を記した地所は、もっぱら私個人の力で築き上げたものであるということ、そして、三人の息子についても、長男は新発見の鉱床から得られる予想を超えた利益により、次男は父方母方共に名門の天晴な娘を娶り、この妻の縁者数名の死去に際し、これまた予期せぬことであったが、結婚時に取得した莫大な持参金をはるかに上回る遺産分与に与ることにより、また、愛息アントニーは東インド交易に携わり、上首尾の航海を重ねたことによるが、世にも稀なる成功を収め、極めて裕福であるということ、さらに、孫のジェームズに関しては、教母ラヴェル夫人のご厚志により、十分な経済的保障がなされる予定であるが、同夫人は、近親者のいないこともあり、スコットランドおよびイングランドに所有する地所の両方を、遺言ならびに贈与証書に基づき、孫に遺贈するよう処置済みである旨を確約してくれているのである。その分家のすべてにいたるまで、これ以上の成功を収めた家族は他に見当たらないのであり、まさしく神のご加護を感謝する所以である。また、孫のアラベラに関しては、前途有望にして礼儀正しい娘であり、軽んじるつもりはいささかもなく、また、その理由もないが、前述の息子ジェームズによる埋め合わせが多分に確実であるということ、そして、我が息子ジョンならびにアントニーには結婚の意思がみられず、子供を有する者、あるいは、子宝に恵まれそうに思われる者は息子ジェームズのみであるということ。これらすべての理由に鑑み、また、我が最愛の孫娘クラリッサは幼少の頃より、孝養を尽くすことにかけては並ぶ者とてない娘であり、この娘を知る者からは、類い稀な子供と褒めそやされてきたこともあり、是非ともこの娘を私個人の実子とみなす我が儘を認めてもらいたいが、だれを侮辱するつもりでもない。また、息子ジェームズは、その息子ジェームズと娘アラベラに対しそれ相応の、また、私にも及ばぬほどの恩恵を授ける用意があるゆえ、何らの侮辱とも受け取られることはないものと考えたい。先に概要を記した地所をかけがえのない娘のために譲ろうとする理由は以上のとおりであるが、この娘こそ私の余生の楽しみなのである。そして、私が齢を重ね得たのも、ひとえにこの娘が親身の孝養を尽くしてくれたお陰であり、愛情こまやかな心遣いの賜物と確信する次第なのである。

それゆえ、私の明確なる意思かつ命令として、前述の三名の息子、ジョン、ジェームズおよびアントニー、そして、孫のジェームズならびに孫娘アラベラに対し、以下の点を申し渡す。即ち、私からの祝福を尊重し、亡き後も追慕してくれるであろうし、自らの遺言ならびに願望についても、後に残った者たちが果たしてくれることを願うはずと思うゆえ

であるが、前述の孫娘クラリッサに対する下記の遺贈物件については、それが法律およびその書式に厳密には準拠しないとしても、一切の批判ないし異議を認めないということである。また、いかなる口実にせよ、係争あるいは論議の的となることも許さないということである。

以上の点を確信しつつ、（ 後 略 ）

手紙 五

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

一月二十日

何一つ思ったことが出来ずにおります。夜といわず朝といわず、自分の時間を取ることも出来なかったのです。母がひどく体調を崩しまして、私以外の者には世話をさせようとしないのです。ベッドの傍を離れることが出来ませんでしたし（母は寝たきりだったのです）、勿体ないことに、二晩ほどはベッドを共にさせてもらいました。

母の病は大変に激しい疝痛の発作でした。あの激しい、男の意地を剥き出しにしたような口論のことがございます。また、こちらの者は揃ってラヴレースさんへの敵意を募らせておりますし、あの方が怒りっぽい上に大胆不敵な気性をお持ちなのは周知のことですから、何か悪いことが起こりはしまいかと気掛かりにもなりましょう。それが母には耐えられなかったのです。それに、母も心配していることなのですが、これまではあんなにも幸福で、心の通い合っておりましたご自分の家庭に、妬みや不平の種が植え付けられたことになるのですから、最初からどのような折にも、表向きの平穏さを保つために内心の満足を犠牲にしてまいりました、穏やかで感じ易い母にとりましては、ひどく心が痛むわけです。以前にはよく諍いをしておりました兄と姉も、今ではすっかり気が合いまして、しょっちゅう一緒にいるものですから（「ぐるになっている」というのが、思わず口をついて出た母の言葉でしたが）、母としては事の成り行きが大変気掛かりなのでしょう。もしかすると、私にとって不都合なことになるのではと、優しい心配りをしてくれるのです。と申しますのも、私に対する二人の態度が、日増しに打ち解けないよそよそしいものになって行くように母の目には映るからなのです。でも、母は資質に恵まれているという点ではだれよりもずば抜けておりまして、皆から一目置かれているわけですから、その立場をちょっと利用してくれさえすれば、こういった家庭内の不和などは、蕾のうちに解消することも出来るはずなのです。とりわけ、この点は母にも安心してもらって構わないのですが、私のほうでは、差し障りのないことでしたら、どんなことでも譲るつもりでいるのですからね。あの二人が年長だからという理由だけではございません。こんなにも素敵で優しい母のためなのですもの。

これはとても他の人には聞かせられないことなのですが、貴女のことですからお話しして構わないでしょうね。私の考えでは、母がもう少し堪え性のない質でしたら、これまでの十分の一だって我慢せずに済んでいただろうということです。貴女なら、それだけ腰を低くして親切を施した挙げ句、それが心痛の種になるというのでは、そういった人々の心の広さも褒められたものじゃありませんわね、とおっしゃることでしょうね。

まったくの話、私たちがしっかりと気持ちを固め、気持ちのままに振る舞うことが出来さえすれば、世間の人に私たちのことを認めさせたり尊重させたりすることも、思いどおりに出来るのではないかしらと、時々はそんなふうにも考えたくなってしまいます。そうしたところで、ちやほやされるのが少なくなるだけの話でしょう。ただそれだけのことなのです。それに、お相手をしなければならない人たちのご意向に沿う才覚があれば、私たちの目には、自分が大切にされていないようには映らないことでしょう。お追従をする人たちというのは、私たちの欠点のこととか、私たちが聞きたがっていないのをご存じの事柄については、決して口にしないものですからね。

もしも、このような見方は当たっていないというのでしたら、兄にいたしましても姉にいたしましても、まさしく二人の欠点となっております激情の赴くままの言動を、あんなにも家中の者から尊重してもらいますのは、果たして可能なことでしょうか。兄のほうからご意向に沿うのが当然な目上の人たちばかりですのに、何をお決めになる場合でも、その都度あの人たちが前もって口にいたしますのは、「かくかくしかじかの処置について息子はどう考えるだろう、甥はどう思うだろうか。何と言うだろう。ひとつ意見を聞いてみよう……」といった問い合わせの言葉なのです。日頃はあのように独裁的な父までが、一貫して兄の気持ちを大事にするものですから、兄が他の人たち一人一人から同じように丁重な扱いを期待したといたしましても、それは無理からぬことなのです。おまけに、これまでも滅多に指図を受けたことのない兄ですが、教母様からのご厚志のせいですっかり自立したつもりになっておりますから、なおさらです。でも、このように非難じみた言葉を並べましたところで、一体どうなるというのでしょう。貴女が、母と私を別にいたしますと、私の家の者たちを嫌っておられるのは存じております。上辺を繕ったりは一切なさらない方ですから、そんなお気持ちが伝わってまいりますことも、困ったことに、よくあるのです。好きになっていただけたら、と願っております者たちのことなのですから、わざわざ貴女の反感を募らせるようなことをしてはいけませんわね。とりわけ父の場合がそうです。父は思いどおりにならないとすぐ苛立ちますが、お気の毒に、それなりの原因があるのです。父の不機嫌は生まれつきのものではございません。父の容姿や態度、また、話しぶりにいたしましても、痛風の発作に苛まれておりません時には、生まれの点でも素養の点でも、紳士らしさを湛えたものであることは、どなたもがお認めくださるところなのですからね。

私たち女性というものは、夫が相手の場合には、もしかいたしますと、野暮ったさとでも申しましょうか、少しは無作法なところも我慢して差し上げる用意がなくてはいけないのかもしれませんね。恋人としてお付き合いをしております間に、どの男性よりもその人のことを大切に思っております胸の内を明かしてしまっているのですからね。優しさこそ男性に相応しい美徳だとよく言いますが、まったくの話、私がこれまで見てまいりましたところでは、優しさにお目にかかれますのは、男性の場合、私たちに比べまして、十分の一にもならないと思います。でも、父の場合には、すでに名を挙げております残酷な病のせいで、気難しい人間になってしまったのです。人生の盛りという時に、突然病魔に襲われたのですが、極めて意欲的な人でしたのに、症状があまりにも激しかったため、活動する力のすべてを奪われてしまいました。それに、どう見ましても、回復の見込みはまったくないのです。その病が父の快活なところをすっかり閉じ込めてしまったと申して構わな

いでしょう。そして、チクチクと苛むものですから、父も穏やかな気持ちではいられないというわけです。類い稀なほどに家運が栄えておりますことも、かえって苛立たしさを募らせるのです。私は思うのですが、この世の幸せに欠けるところが少ない人ほど、何か不足するものがございますと、だれよりもそれを悔やむもののようですね。

それにいたしましても、私の兄ときたら …… あの傲慢で怒りっぽい気性には、どのような言い訳があるというのでしょうか。このようなことを口にしなければならないこと自体残念な話ですが、本当に気難しい若者なのです。場合によりましては、母に対する態度だって …… まったくの話、孝行息子などではございません。でも、何から何まで兄には備わっておりまして、若者らしい野心もあれば、変に年寄りじみたところも持ち合わせているのです。楽しみごとなどは何一つとしてないのでしょう。もっとも、あの傲慢さと気難しさだけは別でして、と危うく口に出すところでしたわ。またまた、私どもの一部の者への嫌悪感を募らせるような話題に戻ってしまいましたわね。そう言えば、兄をお好みどおりの性格に仕立て上げるチャンスが、貴女にはあったかもしれないのですよ。貴女が私の義姉になってくださっていたら …… 姉妹の中に味方を得ることになっておりましたのにね。でも、今では兄が貴女のことを好きでなくなっておりますのも、別に驚くには当たりません。兄の気持ちを蕾のうちに摘み取ったりなさるのですもの。それも、兄の傲慢さと似たり寄ったりの、見下したようなご様子でしたわ。お相手の方に相応しい情熱が兄にだって無かったとは申せませんし、もしかいたしますと、そんな気持ちに動かされ、兄も恥ずかしくない人間になっていたかもしれないのです。

でも、この話はもう止しましょうね。前にお約束いたしましたことは、次の手紙で果たすつもりでおります。朝食が済み次第取り掛かります。そして、音沙汰がないと、ご親切にもこちらの様子をお尋ねになるためにお寄越しくださいました、あのお使いの人の手を煩わせることにいたします。とりあえませず、

親愛の情と感謝の念を込めまして

貴女の友、そして、しもべ

Cl. ハーロー

手紙　六

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

一月二十日　ハーロー邸にて

こちらでのその後の成り行きにつきまして、話を再開いたしましょう。兄は心を苛むような恥辱を味わったわけですから、怒りは鎮まるよりも一層増していたとお考えいただいて構わないのですが、怪我が快方に向かっていることもありまして、身内の者たちは（兄と姉はともかく、父とおじたちのことです）私への思いやりが足りなかったと考え始めております。前回の手紙を発送いたしました後、親切にも母が教えてくれたのです。

それでも、私はラヴレースさんからの手紙を受け取っているのだと、皆はそのように考えているように思われます。ただ、M卿が甥御さんをお咎めになるというよりは、肩を持つお気持ちになっていらっしゃることもありまして、ラヴレースさんを恐れるあまり、私

に事の真偽を質そうともいたしません。それどころか、自分たちがひどく怒らせてしまいました激しい気性の人を鎮めるために残された唯一の手立てということで、どうやら目をつむっているらしいのです。と申しますのも、依然として、あの方はおじたちに謝罪を要求しておられるからなのです。そして、おそらく（手練手管に長けた方ですから）、何らかの有利な条件で、再び私どものところに出入りをなさいますためには、こうするのが最善の策と考えておられるのでしょう。実際、ハーヴィー叔母様も、兄を説得してヨークシャーの領地に向かわせ（以前その予定があったのです）、万事が丸く収まるまであちらに滞在させるのが一番良くはないかと、母に進言しているのです。

でも、それは兄の思惑とはかけ離れたものなのです。既に再び仄めかし始めているのですが、兄といたしましても、私が結婚するまでは気が休まるようなこと、あるいは、納得するようなことは決してないというのです。そして、シムズさん、マリンズさんのいずれもが結婚相手として受け入れられないことを知りますと、私にぞっこんだということを根拠に、再びワイアリーさんを担ぎ出してまいりました。私のほうで改めてお断りいたしましたところ、つい昨日のことですが、兄は、立派な条件を添え、書面をもって申し込んでまいりました人の名を口にいたしました。その方がソームズさんなのです。ご存じのとおり、世間では〈金満家〉ソームズと呼んでいる方です。でも、この申し込みには、だれ一人関心を寄せておりません。

私を結婚させようという兄の計画がどれ一つうまく運ばない場合には、私にスコットランド行きを提案しようというのが兄の考えだと聞かされております。懐柔策なのでしょうが、私が行けば、あちらの家もここと同じようにきちんとした状態になるから、というのです。でも、母のほうでは、自分が困るということで、反対するつもりでおります。家の切り盛りのことでは（ご存じのとおり、姉には向いていないのです）私が助けになっていることを認めてくれました上で、私が行ってしまえば、家事はきっとまた母の手に戻ってくることになるから、という理由でした。母の反対がない場合でも、私は反対しなくてはいけないでしょう。兄の家政婦になる気など勿論ありませんし、一緒に行けば、妹というよりも召使として扱われることは間違いありませんものね。もしかいたしますと、妹だからこそ、もっと粗末に扱われるかもしれません。それに、ラヴレースさんが追いかけてくるようなことにでもなりますと、事態は今よりもさらに悪くなるかもしれませんからね。

ところで、母はラヴレースさんが訪ねて来られるのを心配しておりますし、おじたちもあの方のことを恐れて、出掛けます際にはきっと武器を携え、また、武装した召使を従えて行くような有り様ですから（兄もそろそろ外出出来るほどに回復しております）、私が二週間ほど貴女のところにお邪魔出来ますようお許しをもらっていただけないものかと、母に強くお願いしたところなのです。いかがでしょう、貴女のお母様は私の我が儘を認めてくださいますでしょうか。

おじい様がそう呼んでおられた、例の〈搾乳小屋〉へ行きたいと言い出すことも出来ずにおります。今では、おじい様の遺言で約束されました気儘な暮しを楽しもうとしているように思われるのが怖いのです。現状からいたしまして、そのようなことを願ったりいたしますと、身内の者が激しい敵愾心を燃やしております相手に、私が好意を抱いているように受け取られてしまうことでしょう。この家で以前と同じような安らぎと幸せが得られるのでしたら、あの方のこと、男の方のことは一切眼中に置かないようにするつもりです

し、また、私の財産の管理をすっかり父の手に委ねましたことも、決して後悔したりはしないつもりでいるのです。

❁　❁

ちょうど今、お願いしておりましたお許しが得られましたことを、母が知らせてくれました。嬉しくてたまりません。私が貴女のところに伺うのが最善の策だと、だれもが考えております。兄だけは別ですけれどね。でも、その兄も、何もかも自分の思いどおりになると考えてはいけない、と言われておりました。これから二人のおじとハーヴィー叔母様のいらっしゃる大広間に呼ばれて行くところですが、私の願いが了承されましたことを正式に伝えてもらうためです。

ご存じのとおり、私の家にはひどく堅苦しいところがございます。でも、私たちのように、さまざまな分家がこれほど結束しております一族もかつてなかったのです。おじたちは私たちのことを自分の子供のように思い、独身を通しているのも私たちのためだと公言して憚りません。そんなわけで、私たちに関わります事柄、私たちに影響のありそうなことでしたらどんなことでも、相談相手になってもらっているのです。ですから、皆が理解しておりますところでは、ラヴレースさんは、ご自分では〈友好のための〉と称しておられますが（私といたしましては、友好的に終わるはずはないものと確信しております）、私どもへの訪問を決意していらっしゃる時期のことだけになおさら、私が願い出ました貴女のところへ伺う許可の件につきまして、二人のおじに相談が持ち掛けられましても、驚くには当たらないわけです。

❁　❁

貴女のところにお邪魔をさせていただきます件で、皆から許しが出ました際のやりとりにつきましてお知らせいたしましょう。勿論、お知らせいたしましても、貴女が兄を見直してくださるはずのないことは承知しております。ただ、私自身も兄に腹を立てておりますし、それを抑えることも出来ないのです。それに、お訪ねする際の条件のことや、許可する気になりました皆の動機につきましても、貴女にお知らせしておくのが適切なことですからね。

私が大広間に入りますとすぐに、「クレアリー、しばらくの間ハウさんのところへ伺いたいという貴女の願いの件ですが、検討をしていただき、聞き入れて　…　」と、母が切り出しますと、「いいか、俺の気持ちとは大違いだからな」と、兄が乱暴に母の言葉を遮りました。父のほうでは、「これこれ、ジェームズ」と窘め、眉をひそめておりました。

兄はひるみませんでした。兄は片方の腕を吊り包帯で吊っているのですが、ラヴレースさんにとって少しでも都合の好いこととか、ラヴレースさんとの和解につながるようなことがわずかでも持ち出されますと、その腕のほうに目を向けるような卑劣なことをよくやってのけるのです。そして、「じゃあ、その小娘に（兄にかかりますと、私はしばしば〈その小娘〉になってしまうのです）あの悪党とは会わないよう命じて欲しいものですね」と言っておりました。

だれも口を開きませんでした。

皆が黙っているのは、自分の指図を尤もなことと考えているからだと思ったのでしょうね。兄は、「聞いているのか、クレアリー。M卿の甥が訪ねて来ても、会ってはいけないということなのだぞ」と付け加えました。

それでもまだ、だれもが黙ったままです。

「お許しは出たが、そこのところは分かっているのかな、お嬢さんよ」と、兄が問い質すのです。

「貴方は私の兄なのだということが了解できますと嬉しいですわね。それに、ただの兄にすぎないのだということを理解してていただけますと有難いですわ」

「おやおや、のぼせちまってるんだな」と、小馬鹿にするような笑いを浮かべ、兄は両手を差し上げてみせました。

「お父様」と、私は父に向かって訴えました。「どうかお父様のご判断をお聞かせください。このような非難に値する行動を私がこれまで取ってきたとお考えなのでしたら、ご容赦は無用です。でも、どなたかの無鉄砲な振舞いの責任を私が　…　」

「止めるのだ。もう沢山だ、二人とも」　父が申しました。「だが、ラヴレースさんの訪問を受けてはならんぞ。それに、ジェームズ、お前も妹の悪口を言ってはならん。立派な子なのだ」

「分かりましたよ」と、兄が答えました。「ただ、妹の体面というものを気に掛けているからこそなのです。他の身内の面目についても同様ですがね」とです。

「それでなのですね、兄らしくない非難をなさるのは」　私も言い返してやりました。

「結構だろう。だがな、お嬢さんよ」と、兄が言いました。「あのラヴレースの訪問を受けてはならないと命じているのは、この私ではなく、お前の父親なのだということを覚えておくのだな」

「いいかしら、ジェームズさん、私はクレアリーの分別を信用しても良いように思うのだけれど」と、ハーヴィー叔母様が言ってくださいました。

「私は大丈夫だと確信しておりますよ」　母も口添えをしてくれました。

「でも、叔母様、それに、お母様」と、姉が口を挟みました。「ハウさんのところに伺う条件を妹に知らせても、別に害はないように思いますわ。だって、あの男がうまい手を使って、あちらのお宅で妹と会うようなことになれば　…　」

「あの男があちらでこの娘に会おうとするのは確かだろうな」　ジョン伯父様が割って入りました。

「あれだけ厚かましい男のことだ、ここでも同じことだろうな。だから、ここよりはあちらのほうがましというものだよ」と、アントニー叔父様がおっしゃいました。

「もっと良いのは、どこでもそのようなことにならないことだ。私の怒りを買いたくないのであれば（と、私のほうへ向き直り）、あの男には絶対に会わないことだな。この点は申し渡しておくぞ」と、父が申しておりました。

「ほんの少しでも望みを与えますような、そのような会い方はしないつもりです。お約束いたしますわ。それに、失礼にならずに回避出来ます場合には、決してお会いしないつもりでおります」

「この子があの方とご一緒する時には、どんなに無関心な態度を守ってきたか、皆さん

もご存じですね。妹のハーヴィーが申しておりますように、この娘の分別を当てにして構わないように思いますわ」　母が申しました。

「どんなに無関心だったことでしょうね、上っ面なら　…　」と、兄はおどけた言い方をしておりました。

「これ、ジェームズ」と、父が厳しく叱りました。

「分かりましたよ」と、兄は言いました。でも、癪に触る態度で、改めて禁令のことについて念を押しておりました。

こうして、この話し合いは幕を閉じたのです。

いかがでしょう、あの厄介な男性がお宅に近づかないことを請け合っていただけますでしょうか。それにいたしましても、何という無定見さなのでしょう。あの方がこちらにお見えになるのを避ける手段は他にないとの考えから、貴女のところにお邪魔するのを許すというのですからね。それはともかく、仮にあの方がいらっしゃっても、二人きりにするようなことは絶対になさらないでくださいね。

貴女のお母様が温かく迎えてくださることを疑うべきいわれもございませんので、こちらのこと一切を整えまして、二、三日中には伺わせていただくつもりでおります。

とりあえませず、

親愛の情と感謝の念を込めまして、貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　七

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

［ハウ嬢のところから帰宅した後］

二月二十日　ハーロー邸にて

もっと早くにお便りをせず、申し訳ございません。あゝ、本当に悲しくなってしまいますが、先の見通しは真っ暗です。兄と姉にとりましては、すべてが思惑どおりに運んだということになります。また一人〈恋人〉を見つけてまいりましたが、胸の悪くなるような人です。ところが、皆の後押しをもらっているのです。あんなに急に帰宅を命じられましたのも驚くに当たりません。一時間前だというのですからね、知らされましたのは。私を乗せて帰宅することになっておりました、あのチャリオット(二)でもたらされましたもの以外には、通知は一切なしでしょう。後で知らされましたように［不当な懸念というものですわね］、私が帰宅命令の動機を知りました場合に、どのような形にせよ、ラヴレースさんと手を結びますのが心配だったからなのですが、皆が持ち出そうとしておりました男の人を、私が嫌いますのを危惧してのことなのは明らかです。

また、そのように危惧いたしますのも当然なのです。何故って、どなたのことだとお思いでしょうか、相手の方は。他でもございません、あのソームズさんなんですもの。こんなこと、信じられますでしょうか。おまけに、皆の気持ちが固まっているのです。母も一緒なのですからね。何ということでしょう、母ともあろう人が　…　一体どのようにして同調させられたのでしょう。間違いございませんが、ソームズさんのお話が初めて持ち込

まれました時にも、たとえあの方がインド諸国全土を所有しておられて、それをそっくり譲るとおっしゃっても、自分の娘のクラリッサに相応しいようには思わないと、母はそのように言ってくれたのですからね。

家に着きました際の歓迎ぶりというのが、これまでちょっと留守にいたしますたびに受けておりました出迎えの様子と［今回は三週間も家を空けていたことになるのですが］ずいぶん違うものですから、貴女とご一緒し、お話をして過ごしました、あの本当に楽しかった日々に味わいました幸せの分だけ、今度は嫌な思いをすることになるのだと確信した次第です。その時の様子をお話しいたしましょう。

兄が玄関まで迎えに来まして、私がチャリオットから出ようといたしますと、手を差し出しました。深々と頭を下げ、さあ、お嬢さん、お手をどうぞ、などと言うのです。機嫌が良いのだと思いましたが、見せ掛けの慇懃さであることが後になって分かりました。それから、兄は仰々しく家の中へと導いてくれましたが、大広間までの間ずっと（すぐに顔を合わせるわけですし、ほとんど答える暇もなかったのですが）、私は他愛のない口調で皆の様子を尋ねておりました。大広間には父と母と二人のおじ、それに、姉がおりました。

一歩入るなり、肝をつぶしてしまいました。愛しい身内の者ばかりですのに、一人残らず、このような折には今まであまり見たこともない厳めしい顔付きなのです。それぞれがいつもの席に着いておりました。駆けるようにして父の前へ進み、私は跪きました。そして、母にもです。両親から返ってまいりましたのは、冷たい挨拶でした。父の口からこぼれましたのは、中途半端な祝福の言葉です。確かに、母は「娘」と呼んでくれました。でも、いつもどおり思いのままに愛情を込め、抱き締めてはいただけなかったのです。

おじたちのご機嫌を伺い、姉にも挨拶いたしましたが、姉は勿体ぶったよそよそしい態度で聞いておりました。挨拶が済みますと、腰を下ろすよう言われました。でも、胸もつぶれるような気持ちになっておりましたので、私は、このように厳めしく異例のお出迎えでもありますし、立っていられるならの話ですが、このまま立っておりますのが私には相応しいことかと存じます、と申しました。私はやむなく皆から顔を背け、ハンカチを取り出すことになってしまいました。

すると、兄とも思われません私の告発人が立ち上がり、私を責めたてました。ハウ嬢のお宅で、身内全員が憎しみを抱いて当然至極な男［これが兄の言い方でした］から、そのようなことのないよう言い渡されていたにも拘らず、少なくとも五回ないし六回は訪問を受けたはずだ、というのです。そして、否定出来るものなら否定して見ろ、と息巻いておりました。

真実を偽るなどということは、日頃から私にはなかったことですし、この件でも偽るつもりはない、ここ三週間で、兄が匂わせているらしい人物に五、六回以上お会いしたのは事実です［「どうかお聞き願います、お兄様」と、私は言葉を挟みました。今にも兄が怒り出しそうだったからです］。ただ、その人物がやって来るのは、いつもハウ夫人かハウ嬢を訪ねてのことでした、と私は申しました。

私は続けました。そのように信じるべき根拠もあることですが、ハウ夫人とハウ嬢はお二人とも、事情が事情だけに、出来ることならあの方からの訪問は御免蒙りたかったはずです。でも、一度ならず謝っておられましたが、あの方がお宅に出入りいたしますのをお断りしようにも、お父様と同じ理由がお二人にはないわけで、あの方の身分や財産のこと

もあり、丁重にお迎えするのが筋ということになります、とです。
お分かりでしょう。私なりの口実もあったのですが、口には出さずにおいたのです。
兄は爆発寸前でしたし、父も、一荒れいたします前のいつもの表情を浮かべておりました。おじたちはぶつぶつ呟いております。そして、姉は挑発的に両手を差し上げてみせるのです。私のほうでは、最後まで聞いてくれるようお願いいたしました。すると、優しい言い方でしたが、〈その娘〉の話も聞いてみましょうよ、と母が言ってくれたのです。
何の差し障りもないはずだと私は申しました。どなたをお客様としてお迎えしたら良いのかについて、ハウ夫人とかハウ嬢に指図いたしますのは、自分に相応しいことではないということ、ハウ夫人はいつも、お嬢さんとあの方がぶつけ合う冷やかしの言葉を楽しんでおられたということ、また、お嬢さんのお客様なのに、私を訪ねて来た人だと言って争ういわれなど一切ないが、あの方がお見えの時に同席を拒んだりすれば、そのつもりでいるように他人の目には映っただろうということ、それに、あのご婦人方のどちらかが、あるいは、お二人が揃って同席してくださる場合でなければ、決してあの方とは会わなかったし、一度などは、二、三分で良いから是非とも二人だけで話がしたいと迫られた時ですが、私の身内とあの方の和解が達成されないかぎり、お訪ねになるのを黙認するようなことは期待してもらいたくないし、ましてや、その種の機会を与えるつもりはない旨をお知らせしたこともあった、といったことを話したのです。
さらには、次のようなことも申しました。ハウ嬢は私の胸の内をよくご存じなので、ラヴレースさんがおられる間は、一瞬たりとも私の傍を離れたりはなさらなかったということ、また、あの方がお見えになっても、私が広間に降りていない時は、呼んでいただかないようにしていたということ、もっとも、あの方がいらっしゃった時に席を外したり、しばらくお残りになるのを知った上で、座に加わるのを拒んだりいたしますと、いかにもわざとらしい振舞いとなり、むしろあの方に有利な立場を与えることになるようにも考えたのだけれど、といったことをです。
兄は最後まで聞いてはおりましたが、私が何を言おうと納得などするものかと、心に決めておりましたのを証明するような、そんな苛立たしげな様子でした。その他の人たちの素振りはと申しますと、その後の成り行きで分かりましたが、私を脅しつけてでもさらに押し通さなければならない点がないのであれば、満足しておこうと思う、と言わんばかりのものでした。先に触れましたように、これではっきりいたしました。私のほうから進んで承諾するなどということは、皆自身も期待していなかったということです。また、自分たちが持ち出そうとしている人物のいやらしさを、自ら暗黙のうちに認めていることにもなりましょう。
私が口を噤みますとすぐに、兄が誓って見せました。父の面前ですのに（窘めるような目付きとか顔付きとか、そのいずれを向けられることもなく、誓ったのです）、自分としては、どんなことがあってもあの放蕩者と和解するつもりはない。皆にとってこんなにも不快な男の求婚を励ますような真似をするのなら、これから先、私を妹とは認めないつもりだ、というのです。
「お兄様の命を奪うところだった男ですからね」と、激情を抑えつけてはちきれそうになっている顔で、姉が言っておりました。
このような言い方をして構わなければの話ですが、可哀相にベラときたら、栄養満点の

丸ぽちゃ顔をしておりますでしょう。こんな言いたい放題も、貴女なら大目に見てくださるはずですわ。私自身は許せませんけれどね。でも、踏みつけられたまま黙っているような、そんな虫けらになるわけにはまいりませんからね、だれだって。

父は激しい身振りと共に語気も荒げまして［ご存じのとおり、立腹いたしました時の父は恐ろしい声になるのです］、次のように申しておりました。こちらの紳士を断り、あちらの殿方を拒絶するのも許してもらうというのでは、甘やかしすぎだ。今度こそ、自分の言葉に従ってもらう番だ、というのです。

本当におっしゃるとおりですよ、と母が申しました。それに、これだけ目を掛けていただいている子ですから、もうご意向に異存はないはずです、というのです。

ジョン伯父様は、皆の気持ちがすっかり一つになっていることを示そうとなさって、自分の愛する姪は、父親の意向に従おうとして、それを知りたがっているだけなのだと思いたい、と言っておられました。

そして、アントニー叔父様も、叔父様らしいもっと飾りのない言い回しで、次のように付け加えておりました。おじい様のご愛顧により、皆から独立したつもりになっているのだと、そう考えて当然な理由を、まさか私が皆に与えたりはしないはずだ。仮にもそのような考えでいるというのであれば、ひとつ言っておきたいが、遺言を反古にすることも出来るのだし、また、是非ともそうしなければならない、というのです。

貴女もきっとそのようにお考えのはずですが、私といたしましては晴天の霹靂といったところでした。こんな仕打ちに出るなんて、今度はどなたとのお話を用意しているのでしょうね。ワイアリーさんのことがまた蒸し返されるのかしら、それとも、どなたなのかしら、と私は思い巡らしておりました。それに、自分たちのこととなりますと、私たち若い娘が好んで引き合いに出してみせますのは、身分の低い人のことよりも高貴なお方のことのほうですから、どなたのためかは知らないけれど、これじゃあ、エドワード六世の時代にあった、スコットランドの王位を継ごうというお姫様にイングランドの人たちが持ち掛けた縁談(三)みたいなものだわ、などと考えておりました。それが、こともあろうにソームズさんとのお話ですからね。そんなことがどうして私の頭に浮かぶというのでしょう。

私は次のように申しました。このように手厳しい扱いを受けねばならないようなことをしていたとは存じませんでした。娘として、また、姪として、孝養を尽くすことは申すまでもございませんが、皆様から賜っておりますご厚情につきましても、それに負けないだけの感謝の気持ちをいつも忘れずにいたいものと考えております。ただ、このように異様で、思いもよらないお迎えを受け、すっかりうろたえている次第です。いつもの自分を取り戻しますためにも、お父様、お母様、どうか席を外させていただきとうございます、とです。

どなたも反対いたしませんでしたので、私はそっと黙礼をし、退席いたしました。後に残りました兄と姉は満足感に浸ったものと思われます。これだけの惨い仕打ちをのっけから引き出すことが出来たというわけで、まるで互いにお祝いをしたがっているようにも見えたのです。

私は自分の部屋に戻りました。そして、皆が切り出そうとしているのははっきりしております新たな縁談が、否応なしに進められそうな様子でしたから、信頼するハンナと一緒になって、そのことを嘆いておりました。

まだ落ち着きも取り戻せずにおりますうちに、お茶に降りてくるようにとの知らせがまいりました。侍女に頼み、遠慮させていただきたい旨を伝えてもらいましたが、重ねてのお達しでしたので、出来るだけ朗らかな顔を装って降りて行きましたところ、またもや難癖をつけられ、身の証を立てなければいけない羽目になりました。悪意で凝り固まっている人間というのは、ずいぶん想像力が働くものですね。兄は嫌味を言いましたが、不躾な上に、だれにでも分かるような言い回しでした。降りて来るのを勘弁してもらいたがっていたのは、塞ぎの虫のせいだろう。先ほどどなたかさんが非難の的になったわけだが、察するに、お前はその男にお熱のようだからな、といった調子でした。

「そのような非難に相応しいお返事をするくらい、訳のないことですわ。でも、止めておきましょうね。貴方に兄らしい姿を見出せないといたしましても、私のほうでは、妹に相応しい振舞いを忘れないようにいたしますわ」と、私は言い返してやりました。

「たいした従順さだこと」と、ベラが兄のほうに顔を向け、軽蔑したように唇を突き出しながら囁いていました。

兄は横柄な態度で、自分の愛情に相応しい振舞いをするように命じ、そうすれば、私も間違いなく愛情を授かることになるだろう、と言っておりました。

私たちが席に着きますと、母があの見事な話術で、兄弟姉妹は慈しみ合わねばならないことを諄々と説き聞かせてくれました。近頃の兄と姉が、私のことになりますとあまりにも簡単に腹を立ててしまう点を優しく窘め、そして、いわば政治的な配慮からとでも申しましょうか、私が父の意向に従うことを請け合っておりました。そういうことなら、万事うまく行くだろう、と父が言ってくれました。兄の言い方ですと、その時には、皆が私に首ったけだ、ということでしたし、姉のほうでも、これまでどおりに優しくするわ、と言っておりました。おじたちも、そうなれば、私は二人の心の誇りになるだろう、というのです。でも、悲しいですね。このすべてを失わなければならないのですもの、私は。

以上が、貴女のところから戻りました際に私の受けました歓迎ぶりです。

私たちがお茶を済ませます前に、ソームズさんがお見えになりました。格別のご交誼をいただいている方ということで、アントニー叔父様が紹介の労を取りました。ジョン伯父様からも同じように好意的な紹介がございましたし、父は、「私もソームズさんには親しくしてもらっているのだよ、クラリッサ・ハーロー」と言っておりました。母は、ソームズさんが私の近くに腰を下ろされますと、時々あの人と私とを見比べるようにしておりましたが、心配げな様子に思われました。私も、憐れみを乞う気持ちを両目に込めまして、母を見つめておりました。お姿を窺うことが出来るようになりますと、あの人にも目を向けはしたのですが、怯えにも似た嫌悪の気持ちを催しました。一方、兄と姉はあの人のことを〈さんづけ〉で呼び、一言話すごとに「…　サー」と機嫌をとっておりました。要するに、全員から大変なもてなしぶりなのです。ひどく下劣な人ですのにね　…　でも、差し当たりましては一言だけ、謹んで、尊敬申し上げますお母様への感謝と敬意の言葉を付け加えさせていただきたく存じます（お母様のご親切に対しましては、心の底から感謝いたしております。改めて御礼のお手紙を差し上げるつもりです）。

日頃よりの感謝の念を込めまして、貴女の

Cl. ハーロー

手紙　八

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

二月二十四日

こちらでは恐ろしいほどの勢いで皆が話を進めております。あの人はこの辺りに暮らしている模様です。皆に取り入るものですから、ますます受けが良いのです。「素晴らしい条件じゃないか。贈与財産も申し分ない」と、もっぱらその話です。

皆揃って大変な財産家なわけですが、一族ぐるみの欠点を嘆くような理由などなければ良いのにと、本当に残念に思います。でも、他ならぬ貴女のことですもの、この点は包み隠さずに申し上げて構わないでしょう。同じ悩みを何度となく話し合ってまいりましたからね。私は父とおじたちのこと、そして、貴女はお母様のことでした。他の点では、どこから見ましても申し分ございませんのにね。

今のところ、私のことはどうやら兄に一任されたらしく、兄のほうでも、以前と変わらぬ大変優しい態度を装っております。

信じていただけるでしょうが、兄に対しましては努めて誠実な態度で接してまいりました。ところが、兄のほうでは、私を茶化そうといたしますし、妹のクレアリーのような親孝行で思慮深い人間に、親戚一同の意に背く決意が出来るなんて、とてもありそうなことは思われない、といった素振りをしてみせるのです。

本当の話、今後の見通しのことを考えますと、身の震える思いがいたします。と申しますのも、皆の気持ちが奇妙なほど固まっているのは明らかなのです。

父も母も、お独りの時に私が話し掛けますような機会を作らないよう、苦心惨憺しております。私の同意を求めようとはしてくれませんが、私が自分たちの気持ちのままになることを想定して事を進めようという思惑のようにも見受けられます。それに、いずれ両親は説得したいものと私は考えておりますが、それが駄目なら、だれを説得することも出来ないでしょう。私を無理強いいたしましても、兄や姉とは違いまして、両親には何の得もないはずなのです。ですから、兄と姉に対しましては口数を控えておりますが、父の聴聞に備え、せいぜい力を蓄えておこうと思うのです。面倒がらずに耳を貸してくれればの話ですけれど　…　ともかく、義務の念と意欲とが一緒になりまして、出来ることでしたら意向に沿いたいものと、そのような気持ちでおりますのに、お断りの返事をいたしますのは、本当に辛いことですわ。

この人からの私目当ての訪問を三回に亘って受けるという、そんな恐ろしい思いをすでにしておりますが、これは、もっと漠然とした形で家の者たちを訪ねられた際、私も同席いたしました時を別にしての話です。この人のことを辛抱するなんて、不可能なことだと思います。ごくありきたりの理解力しかございません。読み書きの力は極めて乏しく、ご存じのことといえば、地所の評価と改善の仕方、それに、土地の取引と農業に関することだけなのです。なのに、私も人事不省に陥った人間みたいなのです。皆の最初の仕打ちが大変に惨いものでしたから、はっきり嫌だと言い張るだけの気力もありません。

私がこちらへ戻ります前に、あの立派なノートン夫人に皆からの強い働き掛けがあった模様です。自分たちの言い分を通そうと、皆懸命なのでしょうね。夫人のお考えが皆の意に沿うものではなかったものですから、夫人は、こちらへの出入りはしばらく慎むのが良

いだろうと命じられてしまいました。でも、皆の取っております手段が穏当なものだといたしますと、あるいは、夫人のほうでもそのようにお考えになることが出来るようなものだといたしますと、その場合には、確かに、私を説得出来る人間と申しますと、母以外では、この広い世界でもあの夫人がその人ということになるのです。

叔母も同様に、別の形で戒めを受ける羽目になりました。どう言い含めたところで、姪がソームズさんを好きになるとは思われない、などと言ったものですからね。

明日、叔母が来ることになっております。ソームズさんの申し出た贈与財産は大層素晴らしいものだということですが、兄や姉がそのことを匂わせましても、私は耳を貸すのを拒んでいたものですから、叔母が詳しいところを教えてくれるというのです。そして、私の気持ちを聞き出すつもりなのです。と申しますのも、そのように聞かされているのですが、父といたしましては、私がご意向に背くことを想像するだけで耐えられなくなるとのことだからです。

ところで、今度の日曜日の礼拝式に出るのは思い止どまってくれると嬉しい旨の、私宛の通知がございました。

この前の日曜日にも同じ通知がございまして、そのとおりにいたしました。家まで私に同行する目的で、ラヴレースさんが教会に現れるのを心配しているのです。

お願いです、ハウさん。貴女の魅力にもなっております、あの威勢の良いところを少し分けていただけないでしょうか。威勢の良さをこれほど必要に思いましたことは、これまで一度だってございませんわ。

お察しいただけることと存じますが、あの人、このソームズという人には、私との縁談に進展があったように自慢なさる根拠は何一つないのです。何事であれ、適切に述べる判断力を持ち合わせない人なのです。あの人の求婚は、実際には家族の者たちに向かってのものですし、兄のほうでも、あの人の代理として私の機嫌を取る振りをしているわけですからね。私も兄に対しましては、お申し出を完全に撥ねつけているのです。でも、家族全員からあんなにも歓迎され、口添えをしてもらっている人ですし、礼遇される資格があるという考えもございますから、私があの人に不利な事柄を並べ立てましても、すべては内気さゆえのことだなどと、気障な顔をされてしまうのです。それに、あの人は自分の欠陥に気づくような人ではありませんから、私が出来るだけ避けるようにいたしましても、また、よそよそしさを露にいたしましても、それ以外の原因は一切ないと思い込んでおられるのです。今申しましたとおり、あの人の求婚はもっぱら家族の者たちに対するものだからです。また、私に向かって申し出をしておられるのではないわけですから、こちらからノーと言い出す機会もないことになるのです。そんなわけであの人は、男のほうが偉いのだといった態度で、不首尾に終わることを心配するというよりは、むしろ、うぶな小娘を憐れんでいるような様子なのです。

二月二十五日

予定されておりました叔母との話し合いを済ませたところです。

あの人の申し出につきまして、やむなく叔母の口から聞くことになりました。また、これほど熱心にあの人の後押しをしようとする皆の動機につきましても、話してもらいました。口にするのさえ厭われますが、あの人がこのような申し出をなさいますのも、あるい

は、私が敬わなければならない人たちがそれを承諾いたしますのも、同じようにひどく間違っているということです。あの人が以前にもまして嫌いになってしまいました。すでに大きな地所が一つ手に入っておりますが、たとえ血のつながりが薄いとはいえ、その土地に縁故のある人たちを犠牲にしてのことでした。教母様から贈られた兄の地所のことを申しているのです。そしてこのことが、いかに妄想に近いとは申せ、他の地所も手に入れたいという望みに火をつけました。少なくとも私の地所の権利が一族の所有に戻ることを目論んだのです。でも、私の考えでは、世の中は一つの大きな家族にすぎないのです。元を正せば、そうだったのです。だといたしますと、私どもの間で力を振るっておりますこの狭量な身勝手さは、一体どうしたことなのでしょう。ある親族関係を失念して、別のを思いついているだけの話ではないでしょうか。

ところで、あの人のことはどのような条件でもお断りする旨の返事をいたしましたところ、心の底まで傷つけられますような通告を受けてしまいました。どのようにご説明したら良いのか、見当もつきません。でも、お知らせしておかなければいけないでしょう。今後一ヶ月の間、あるいは、結婚許可証の得られますまでは、相手がどなたであれ、外部の人と文通してはならないというのですからね。

叔母の報告（私が知らされておりますところでは、この上なく穏やかな調子で行われましたし、私に頼まれてのことではありませんが、かすかな希望を持たせるような言い方でさえあったとのことなのですが）を受けるとすぐに、兄が横柄な口調でこの禁令を申し渡しにまいりました。

「ハウさんもいけないのでしょうか」　私は尋ねました。

「駄目でしょうね、マダム。ハウ嬢はいけませんな。あのラヴレースがあちらでは大モテなのを、君は認めていたのではなかったかな」　兄の嘲るような言い種でした。

ご覧のとおりですわ、ハウさん。

「こんなこと、世間で通ると思います、お兄様」　私は尋ねました。

「お前こそ注意するのだな、世間のことを。ともかく、いいな、手紙を出そうとしても差し止められるってことだよ」　こう言い残すと、兄はさっさと帰って行きました。

間もなく姉がやって来て、こんなことを言うのです。「ねえ、クレアリー、うまく行っているようじゃない。だけど、親に背くようあんたを唆す人もいるってことだから、伝えておくわね。改めて指示のあるまで、一、二週間ほど、人をお迎えしたり訪ねたりするのは慎んでくれると有難いそうよ」

「権限を持っている人たちのお言葉なのかしら、これが　…　」

「じゃあ、尋ねてごらんなさいな。そうよ、お訊きなさいよ」と、指を回しながら言っておりました。「頼まれたことは伝えたわ。お父様はどうあっても言うことを聞いてもらうおつもりなのよ。あんたが何もかも言われたとおりにしてくれるものと思いたがっておられるし、不従順さを煽り立てるようなものはすべて阻止したいとおっしゃってたわ」

「自分の務めは承知しております。不可能な条件が添えられていたりしないよう願っておりますわ」と、私は申しました。

姉は私のことを独り善がりで、思い上がった、癪にさわる小娘と呼んでおりました。適正至当な事柄を決めるに当たりましても、自分自身の賢明な意見では、私独りが審判官になっているというのです。姉といたしましては、私のまことしやかなやり方はとうの昔か

らお見通しで、そろそろ私も自分の本性を皆に明かして見せるべきだ、というのです。

「まあ、ベラったら」　両手をかざし、天を仰ぎながら、私は申しました。「一体どういうことなの、これは。ねえ、ねえ、ねえ、ベラ、どうしてなの　…　」

「もう沢山だわ、ねえ、ねえ、ベラってのは。言っておくけど、私は見抜いていますからね、あんたの妖術も［姉の用いた奇妙な言葉です］」　そう言うと、姉もそそくさと帰って行きましたが、帰り際に、「皆さんが気づくのも間もなくね、おそらく」と付け加えておりました。

「おやおや、何という姉なのでしょうね。どうしてこんな目に遭わなければいけないのかしら」と、私は独り言を言っておりました。

そして、私ばかりを引き立ててくださったおじい様の優しいお気持ちが、また恨めしく思われたことでした。

二月二十五日　夜

兄と姉がどのような告げ口をしたのかは存じませんが、私はひどく父の不興を買っております。

お茶に呼ばれましたので、機嫌の良い様子で降りて参りましたが、そのような様子はすぐにも変えなければいけないことになりました。

誰も彼もがひどく厳めしい表情を浮かべておりました。母の両目はじっとお茶碗の上に注がれ、顔を上げました際にも、物憂げで、まるで瞼に錘でもついているような感じでした。しかも、私の方へは顔を向けてくれないのです。父は私から顔を背けるように、肘掛け椅子の片側に身を寄せて座っております。両の手はしっかり組み合わされ、いわば、上下に波打っているのですが、その指が、お気の毒に、爪の先まで怒りに震えているように見えました。姉は椅子に座って大きくなっております。兄は兄で、私が入ってまいりますのを、自分の目で寸法を取るとでも申しましょうか、私の頭の天辺から足の先まで、軽蔑のまなざしを向けているのです。叔母もそこにおりましたが、まるで優しい気持ちを押し殺すようにして私を眺めておりましたし、私の挨拶にも、座ったままよそよそしくお辞儀を返してくれるだけでした。その後、兄のほうにちらりと視線を向け、続いて姉を見ておりましたが、いつもとは違う自分の堅苦しい態度の釈明をしようとしているようにも［私はそう思いたいのですが］感じられました。何ということなのでしょうね、まったく。これまでは聞き分けがないとも、あるいは、心が狭いとも思われたことはありませんでしたのに、そんな私の心に働き掛けようとするのではなく、むしろ、脅しつけて従わせようというのですからね。

私は席に着き、「お茶をいれましょうか、お母様」と、母に尋ねました。貴女もご存じでしょうが、いつも私がお茶をいれていたのです。

「いいえ」と、とても短い一語だけの、本当に短い言葉ですが、胸中が推し量られる返事でした。そして母は、お茶の葉の入った罐を自ら手にいたしました。

兄は給仕の下男に退室を命じました。お湯は自分で注ぐから、というのです。

心臓が口から飛び出してしまいそうな気分でした。どのように振る舞ったものか、見当もつきません。一体何が始まるのかしら、と私は思い巡らしておりました。

二杯目のお茶が済むとすぐに、母が席を離れ、「ちょっとお話があるのよ、ハーヴィーさ

ん」と、叔母を捕まえました。まもなく姉が退室し、さらに兄も後を追って出て行きました。そして、私は取り残され、父と二人きりになってしまったのです。

二度、三度と私のほうから話し掛けようといたしましたが、父があまりにも険しい顔をしているものですから、とても勇気が出ませんでした。それまでは、ただ重苦しい沈黙の時だけが周囲を流れて行っていたのです。

やっとの思いで私は、宜しければもう一杯お注ぎいたしますが、と尋ねました。

父の返事も、先ほど母が口にいたしましたものと同じ、怒気を含んだ素っ気のないものでした。その後、父は立ち上がり、部屋の中を往ったり来たりしておりました。私も立ち上がりました。父の前に身を投げ出そうと思ったのです。でも、あまりにも険しい父の態度にすっかり怖じ気づいてしまい、父に従いたいという気持ちで胸も溢れんばかりでしたのに、そのような気持ちを口にすることさえ出来なかったのです。

やがて、痛風のことがありますから、父は椅子の背に寄り掛かりました。その姿に少し勇気を得た私は父の傍に進み、どのような点でお気持ちを損ねるようなことをしてしまったのか、教えてくださるよう頼みました。

父は私に背を向け、強い声で、「分かっているな。言うことは聞いてもらうぞ、クラリッサ・ハーロー」と言うのです。

「お聞きしないわけなど、どうしてございましょうか。お気持ちに背いたためしは、これまで一度だって　…　」

「私もお前の気まぐれに反対したことはないつもりだぞ、クラリッサ・ハーロー」　父が私を遮りました。「女に甘い顔をして見せる連中すべてが被る運命を、この私にも嘗めさせないようにしてほしいということだ。私が甘い顔をすると、ますます異を唱えてくるのだからな」

ご存じとは思いますが、私の父は（兄もそうですが）女性に対する見方が優しくはないのです。母よりも従順な妻など、この世におりませんのにね。

孝養には努めてきたつもりである旨を、縷々申し立てようといたしましたところ、「申し立ては止めるのだ、お前。口先で済むことではない。無駄口の相手をしている暇などないのだよ。どうあっても従ってもらうぞ。私に盾突く子など家にはいないのだし、そんな子供は私の子とは思いたくないのだ」との言葉でした。

「お父様、そのようにおっしゃる根拠となりますことは、私これまで一度も　…　」

「これまでのことなどどうでも良い。今のことだ。これからのことなのだ」

「お父様、どうかお聞きください。もしかいたしますと、兄と姉が　…　」

「兄や姉の悪口は許さんぞ。いいか、二人は家の誇りというものを立派に気遣っているのだ」

「私の希望といたしましては、お父様　…　」

「希望など一切持ってはいかん。希望の話は止めて、事実を話すのだ。私がお前に求めているのは他でもない。お前の力で応じられること、そして、応じるのが義務となっていることなのだよ」

「では、お父様、きっと仰せのとおりにいたしますが、でも、思い遣りのお気持ちがございますなら　…　」

「私に説教でもするつもりなのか。〈でも〉はもう沢山なのだよ、お前。無条件で従って

もらわねばならんのだ、いいな。それも、快くだぞ。でなければ、お前はもう私の子ではない」

私は涙がこぼれてしまいました。

「どうかお父様、いつも尊敬申し上げております大切なお父様（こう言って、私は跪きました）、お願いです。お父様とお母様のご意向にだけ従わせていただきたいのです。兄のことはご勘弁いただきとうございます」

なおも言葉を続けようといたしましたところ、床に伏している私をそのままに、父は部屋を出て行ってしまいました。狡猾な手管を弄して務めを免れようというのだろうが、そんなお前に耳を貸す気などはないのだ、と言いながらです。また、どうあっても従ってもらうぞ、と繰り返しておりました。

すっかり胸がいっぱいになっております。張り裂けそうなほどですが、ここで思いの丈を貴女に打ち明けようとしたりいたしますと、子としての務めをおろそかにすることにもなりかねません。ですから、筆を置くことにいたします。ただ、もしも …… いえ、やはり筆を置くことにいたしましょう。

手紙　九

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

二月二十六日　朝

昨晩ここに泊まりました叔母が、夜明けとともに私のところへまいりました。叔母の話では、昨日私と父が二人きりになりましたのは、私に期待されます服従の姿勢につきまして、父が私と話し合いを持つためだったというのです。ただ、思惑が外れたことは父も認めていたのですが、それは、兄が吹き込んでおりました、何か私に不都合な事柄を思い返したためですし、また、私が承諾すれば、家族全員の利益が大幅に助長される話だというのに、私のようにこれまでは極めて穏やかに見えた気性の持ち主が、厚かましくも自分の意向に異議を唱えるようなことは、想像するだけでも我慢が出来なかったためだ、というのです。

叔母がうっかり漏らしました二、三の言葉から気づいたことなのですが、皆がもっぱら拠り所としておりますのは、私の気質に見られます、皆が従順さと考えているもののようです。でも、これは見込み違いかもしれません。よくよく検討してみますと、私は母方の血筋に負けないくらい、父方の血筋も引いているように思われてならないのです。

ジョン伯父様は、抜き差しならないところまで私を追い詰めてしまいますことには反対しておられるようですが、兄のほうでは、私は評判を大切にしておりますし、道義心もありますから、「いずれは本分にたどりつく」ことを請け合うと、そんな言い方をしているのです。このことは知らずにおきたかったと、そのように思う理由がきっと私にも出来ることでしょうね。

叔母は、助言ということで、皆から指示されました禁止命令を当分の間は守るよう、そして、ソームズさんの申し出に好い顔をするようにも勧めております。結果が（叔母にも話したのですが）どのようなことになるといたしましても、後のほうのことはきっぱりと

お断りいたしました。人を訪ねたりお迎えしたりすることも禁じられたわけですが、これには従うつもりでおります。でも、貴女との文通まで諦めろと言われましても、途中で私たちの手紙を横取りされる危険さえなければ、とても約束出来る話ではございません。

この指示は父から出たもので、これまでのところ、母に相談はなかったものと叔母は信じております。また、このような指示が出されましたのも、叔母がそう考えますのには根拠があるのだそうですが、もっぱら私のためを思ってのことで、父の機嫌を決定的に損なうようなことがないようにとの配慮からだというのです。それも、私自身の意思というよりは、外部の人たちからの煽動を（間違いなく貴女とロイド嬢を念頭に置いているのですが）恐れてのことなのだそうです。何故なら、叔母が申しますには、私の話をいたします時には、父は今でも優しい褒め言葉を口にしているのだから、とのことでした。

これを寛大な処置だと言いたいのです。温情だと考えているのでしょう。確かに、強情な子供を導くためにはそのとおりなのでしょうね。ちょうど、不満を抱く臣下たちが謀反に走り、何もかも失ってしまいますのを、立派な君主が防ぎたいと願いますのに似ているのかもしれません。でも、すべては兄の浅知恵から始まったことなのです。知能の乏しい陰謀家、情けを知らない兄弟の仕業だということです。

ジェームズ・ハーロー以外の兄ならどんな人とであれ、そして、彼の妹以外の姉ならばだれとであれ、どんなに幸せだったことかと思います。驚かないでくださいね。私の身内を貴女がこんなふうに手酷く扱いますと、いつも小言を言わせてもらいましたわね。貴女にも思い遣りに欠けるところはありましたが、それにもまして、私は不孝者になっております。この世で一番の楽しみを奪われてしまうのが耐えられないのです。だって、貴女と交わすお話は、直接お会いした時でも手紙の場合でも、私にとりましてはそのとおりなんですもの。それに、このように傲慢不遜な気持ちで進められております、これほど卑劣な策略にまんまと引っ掛かるようなこと、我慢出来る人なんているでしょうか。

ところで、ねえ、ハウさん、私との内緒の文通など、続けていただけるでしょうか。もしも引き受けてくださるのでしたら、続けられそうな方法が一つあると思うのです。

私どもが〈緑の小道〉と呼んでおります、薪小屋と養鶏場の傍らを通っている小道のことを覚えていらっしゃるはずです。養鶏場ではチャボ、雉、雌クジャクを飼っておりますが、たいてい日に二度は世話をしております。おじい様が飼っておられたもので、私に世話を任せられ、おじい様が亡くなられた後、搾乳小屋のほうからこちらへ移されたいきさつもございまして、とりわけ可愛がっているのです。

例の小道は薪小屋の床よりも低いところを通っておりますが、小屋の壁板はところどころ朽ち落ちていて、床から半エル(四)ほど隙間が出来ているのです。ハンナに頼めば、あの小道のところに行って、板切れか何かの下に手紙とか包みを隠しまして、その場所にチョークで印をつけてくれるはずです。そうすれば、貴女にせよ私にせよ、どちらかが認めました書面を置いておきますのには恰好の隠し場所として使えるように思うのです。

❁　❁

その場所を今調べてきたところですが、利用出来そうです。ですから、お宅の忠実なロバートさんを使えば、私の手紙を取り出し、貴女のを置いて行くのはいとも簡単なことだ

と思います。屋敷に近づくことはありませんし、〈緑の小道〉は二、三軒の農家のほうに続いていますから、(出来れば、お仕着せは着ないで)ただあの小道を通っているだけのように振る舞えば良いのです。

この場所がなおさら好都合なのは、前述の用事で私とハンナが訪れます以外には、ほとんどだれも行かないところだからです。あの小屋は燃料にするものを何でもしまっておく場所で、いつも使う薪はもっと屋敷に近いところに置いてあるのです。

この小屋の一角が私の家禽たちのための鶏舎として仕切られているわけですから、あの娘にしても私にしても、小屋のほうへ行く口実には事欠かないというわけです。

この方法でうまく行くかどうか、試しに手紙を一通お願いいたします。そして、この不名誉としか言いようのない状態で私はどうしたら良いのか、ご意見とご助言をいただきたいと思います。それから、私の今後の見込みにつきましての貴女のお考えと、私の立場に置かれました場合、貴女ならどうなさるかという点につきましてもお知らせ願います。

ただ、前もって申し上げておきますが、このソームズさんなんかに有利になるようなご忠告は遠慮させていただきます、ということです。もっとも、私にはそのように影響力を持っておられる貴女のことですから、貴女がソームズさんの贔屓をなさるよう、身内の者たちが貴女のお母様に働き掛けますのは、大いに考えられるところですわね。

でも、思い直してみましたが、もしも貴女のお気持ちがもう一方の問題に傾いているということでしたら、どうぞ腹蔵なしにお書きくださるようお願いいたします。自分では気持ちが固まっているつもりですし、また、こうする以外にないと考えておりますが、少なくとも、反対意見にもおとなしく耳は傾けたいと思うのです。と申しますのも、家族の一部の者が思っておりますほどには …… そう言えば、貴女もふざけ半分で勘繰っているような振りをなさったことがありましたが …… 私はもう一人の男性に敬意を感じてはいないからなのです[誓って申しますが、そのようなことはございません。事実だといたしますと、自分自身を知らずにいることになってしまいます]。万一、他の人を差し置いて、あの方だけを特別視するようなことがあるといたしましても、それは何らかの個人的な思惑からというよりも、むしろ、あの方が受けた仕打ち、それも、私のために堪えてくださった仕打ちのことがあるからなのです。

つい先ごろ楽しく過ごさせていただきました折に、優しいお母様がお示しくださいましたご好意の数々、心から有難く存じまして、お礼の気持ちを数行認めております。あのような日々は、もう二度と訪れることもないのではないでしょうか。もっと早くにお便りいたしませんでしたこと、お母様にはお許しいただければ幸いに存じます。

これを届けてもらいます人には、怪しまれ、検査をされる場合のためですが、携えているのはこれ一通だけということにし、そちらのほうを差し出すよう指示してあります。

無用の監視や不当な束縛を受けますと、ずいぶんと手管や策略を弄するようになるものですね。止むを得ないことではないのでしたら、このような秘密の文通など、私は嫌でたまりません。自分自身にもひどく卑劣で下等なことと映りますから、貴女に片棒を担いでいただくよう期待いたしますのは、いけないことのようにも思われます。

それにいたしましても、(叔母とも言い争ったことなのですが)私が結婚生活を強いられなければならないのは、何故なのでしょう。結婚生活というものに敬虔な気持ちを抱いてはおりますが、決して望んでいるわけではないのです。何歳も年上ですし、私の婚約にあ

んなにも熱心なのですから、兄が先に婚約してはどうしていけないのでしょうか。姉だって、先にお相手が見つかっても良いはずですわ。

でも、甲斐のない愚痴はこれくらいにして、筆を置くことといたします。

親愛なる貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　十

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

二月二十七日

奇抜なことを考える人もいるものですね。クラリッサ・ハーロー嬢が生け贄としてロージャー・ソームズ氏に嫁がされるというのですからね。ただただ驚くばかりです。

このような男に有利となる助言をしてはいけない、とのお言葉でしたね。これではっきりいたしました。貴女はこんな途方もない縁組を思い付くようなご家族の方たちに、思っておりましたよりはずっと似ていらっしゃるということですわ。でなければ、私があの男に有利な助言をするなんてことは、夢にもお思いにならなかったはずですもの。

あの男の肖像画はいかがでしょうか。ご存じのとおり、私、醜い人の似顔絵は得意なのです。でも、止めておきますわ。一体何が起こるか、分かったものではございませんからね。事はこんな具合に進んでいるわけですし、貴女はこの猛烈な激流に立ち向かう勇気を持ち合わせてはおられないのですからね。

私の威勢の良いところを少し分けてほしい、とのことですね。本気かしら。でも、今では役に立たないでしょうね。貴女にはしっくりこないと思いますわ。どうお考えになろうとも、やはり貴女はお母様のお子さんなのですし、気性の激しい人たちを相手にして行かなければならないのです。残念ですね。私の気性の一部はもう少し早くに借りてくださるべきだったのです。貴女の地所の管理を、優先権があると考えておられる人たちの手に委ねてしまわれる前にですわ。たとえ、〈父親の手〉に委ねられたとしてもです。そのお父様には貴女よりも前に生まれたお子さんが二人いらっしゃるのではありませんか　…　おまけに、貴女よりもそのお二人のほうが性質や姿形がお父様に似ていらっしゃるのじゃないでしょうか　…　このように無遠慮な質問をしたからといって、私に釈明を求めたりはなさらないでくださいね。私の言わんとしておりますところに関しまして、よく吟味をしてみますと、貴女のおっしゃり方も負けず劣らず厳しいものであった、などということになってはまずいでしょうからね。

やっと始めたばかりなのですから、この調子でもう少し言わせてくださいね。精々慎むことはお約束いたします。ご承知かとも思いますが、強欲さと嫉妬心の二つは満足することのない感情でして、何を与えても欲張りな気持ちは満たされませんし、羨望の的となっております人物が、いつまでも羨ましがられるのに相応しく、立派さを守り続けるといたしましても、妬み心というのは鎮まらないものなのです。この二つは共に油なのです。世界中いたるところで、飽くことのない、そして、すべてを飲み尽くしてしまう炎を煽り立てております油なのです。

でも、私の意見を、とのことですから申し上げますが、ご家族の方たちの動機につきましてご存じのこと、あるいは、推測しておられることのすべてをお話ししていただかねばなりません。それから、例の小島に住んでおります私の伯母と従姉妹に喜んでもらうためですが、お手紙の抜粋を作りますのをお許しいただければ幸いです。貴女の事件のことをもっと聞きたがっているのです。

それにいたしましても、自分自身以外のだれに対しましても優しさなど持ち合わせない人たちのことを、貴女はずいぶんと気遣っていらっしゃいますね。ですから、思っておられることは何もかもおっしゃってくださるよう、お願いしなければなりません。思い出していただきたいのですが、私たちのようなお付き合いでは、遠慮は禁物なのです。依怙贔屓の心配はご無用です。もしも心配だとおっしゃるのでしたら、ご自分の判断を信じていらっしゃらないことになりますわよ。だって、貴女のほうから助言を求めていらっしゃるのですからね。それに、貴女ではなかったでしょうか、友情のために公正さを歪めるようなことがあってはいけないと教えてくださったのは。ですから、ご家族の方たちが正しいことを証明していただきたいのです。もしもお出来になるのでしたらね。あの人たちの選択は理に適っているのか、十分な理由はあるのかどうか、検討してみましょう。差し当たりまして、どうしても腑に落ちませんのは（もっとも、お宅の方たちのことはよく存じ上げておりますが）、皆様が、とりわけお母様とハーヴィー叔母様ですが、すでに下されております判断に一緒になって逆らったりなさるのは何故なのかという点です。他の一部の方々につきましては、ご自分たちの利益が絡む場合に何をなさろうと、あるいは、しようとなさいましても、私は驚いたりいたしません。

お兄様のほうが先に結婚なさっていけないわけでもあるのか、とのご質問ですが、理由を教えて上げましょう。お兄様の気性にいたしましても横柄な態度にいたしましても、すっかり世間に知れ渡っておりますから、自分名義で取得された財産をたっぷりとお持ちの上に、それ以上の財産取得の見込みもある方とは分かっておりましても、お兄様が結婚を希望される相手の女性は、とてもお兄様の求婚を受け入れる気にはなれないということです。要するに、あんなにも財産を手にされたことで高くなりましたのは、お兄様の声望よりはお鼻のほうだったということです。言わせていただけますなら、私がこれまで言葉を交わしました人たちの中でも一番鼻持ちのならない方なのです。お兄様に対する私の態度を責めておられますが、お兄様の求婚のなさり方は、好意に与るというよりも、まるで恩恵を施そうとしている人の態度ですもの。そんなふうに言い寄られた人間といたしましては、当然のお返しだと思いますわ。私は高慢で偉ぶった人たちの鼻を折って差し上げるのが大好きなものですからね。ヒックマンさんがまとわりつきますのを我慢しておりますのは、何故だとお思いでしょうか。あの人には遜ったところがございますし、遠慮というものを弁え、馴々しくなさらないからに他なりませんわ。

どうして、お姉様のほうが先にお相手を見つけてもらってはいけないのか、とのご質問につきましては、私の答えはこうです。お姉様の場合、負債のない大資産家以外の人ではだめだということです。これが一つ。もう一つは、お姉様には妹さんがいらっしゃるということですわ。是非ともお教えいただきたいのですが、妹さんのほうがまだお独りでいらっしゃいますのに、あのお姉様のことを思い浮かべるような、大資産家で負債のない人など、果たしてどこにいるというのでしょうか。

お宅の皆さんは、幸せになられますのにはお金持ち過ぎるってことですわ、あなた。お宅の憲法では、どなたにいたしましても、さらにお金持ちになるために結婚しなければいけないのですからね。自分の主な取り柄はどこにあるのかを弁えているような、そんな人たちが最も価値あることと考えている点を助長し、改善しようとしたからといって、非難されたりしてはいけないと思いますわ（そうでしょう）。でも、ご一族のお考えの中に、本当の幸せといったものはいくらかでも含まれておりますでしょうか。まったく見当たらないように思います。その結果、お宅の皆さんは、貴女は別ですが、お金がなければ幸せとは感じられないことになるのです。ですから、放っておきましょう。いつも苛立ち、不平不満を漏らしながら、お金を貯めていらっしゃれば良いのです。富を手にしながら幸福に恵まれませんのを、何がまずいからなのかと思い煩い、まだ富が足りないことが原因なのだと考え、なおも蓄財に励むわけですが、結局はあの死神が、皆さんに負けないくらい貪欲な蓄財家ですから、皆さんを捕まえて倉の中に押し込めてしまうことになるのです。

ところで、もう一度申し上げますが、皆さんが公言しておられる共通の動機につきまして、ご存じのことを私にお知らせいただきたいのです。そうしていただけますなら、私も貴女が話してくださるのよりももっとたくさん、皆さんのいけないところをお聞かせいたしますわ。お言葉ですと(ア)、貴女にはハーヴィー叔母様から既にお話があったとのことですね。動機のことをお知らせくださいなどと、どうしてお願いしなければいけないのでしょうね、私。この機会に、わざわざ私の助言をお求めなさっておられますのにね。

皆さんが私との文通を禁止なさるというのは、賢い考え方でして、驚くには当たりませんし、また、責めるつもりもございません。と申しますのも、私にとりましては、それこそ皆さんがご自分の間違いに気づいておられる証となるからです。それに、気づいておられる場合、他人の判断に任せますのを皆さんが心配なさるのは、妙なことでしょうか。

私との連絡手段を思い付かれましたこと、嬉しく思います。貴女のおっしゃる方法に大賛成ですし、この最初の試みが成功するようでしたら、なおさらです。でも、うまく行かずに、これがご家族の手に渡るようなことになりましても、貴女のことさえなければ、私のほうは一向に構わないのです。

お宅に戻られた時、ご親戚の方々と貴女との間で万事が円満に進んだわけでもないということは、お手紙をいただく前に私たちの耳にも届いておりました。また、ソームズさんが貴女のところを訪ねられたこと、それも、成功の見込みを持ってのご訪問だったということも耳に挟んでおりました。でも、私が結論いたしましたのは、この話は相手を取り違えているのであって、ソームズさんのお目当てはアラベラさんのほうなのだということでした。実際の話、太った女性は概してそうですが、お姉様だって、おデブさんらしく気立ての好い人でしたら、ソームズさんにはあまりにも上等すぎるのだと、私は考えたことでしょう。きっとそういうことに違いない、お姉様の結婚に備え、助言や手助けがいるので私のお友達にお迎えが来たのだと、私はそう考えたのです。そして、母に向かって、あの人だって黄ばんだ総巻き毛の鬘とつば広のビーバー帽（両方とも、長いことオリヴァー卿が大切にしておられた品だと思います）をお脱ぎになれば、ベルさんにまとわりついて教会へ向かわれる時にも、結構見苦しくない格好にはなるかもしれなくってよ、などと申し

（ア）三十四頁を参照のこと。

ておりました。お姉様のご意見では、女というものは容貌の点では男の方よりも優れていなければならないとのことですし、引き立て役を得るのに、これほどぴったりの縁組も他にはございませんでしょう。

噂とは別に、私はこのような推測に耽っておりました。この国で一番非常識な人たちにいたしましても、貴女のお相手にあんな男を思い付くような、そんな途方もないことが本当に出来るなんて、とても信じられなかったのです。

それに、貴女がどなたにもお顔をお見せにならないことも聞いておりました。でも、思い当たる理由といたしましては、この前の時と同じように、今度の人にも心変わりがあってはいけないから、お姉様のための準備はこっそり進め、式も急いで挙げることにしたのだろう、ということだけでした。ロイド嬢とビダルフ嬢がお見えになり、この件について私が知っておりますことを尋ねておられました。また、こちらからお帰りになった後の日曜日に、貴女が午前中も午後も礼拝式にお出でにならなかったことについても訊いておられましたが、お二人の言い回しを借りますと、おかげで百人にもおよぶ貴女のファンががっかりしていたのだそうです。貴女が確証しておられる点が理由であることは、私にも容易に察しがつきました。ラヴレースさんが教会に来られて、お宅まで貴女のお供をしようとなさるのを、皆さんが心配されたというわけですね。

母へのお便りにございました丁重なお言葉、母は大変喜んでおります。お礼状に目を通して口にいたしました母の言葉は、「クラリッサ・ハーローさんて素敵なお嬢さんね。お訪ねになる先々で恩恵を施しておられるし、どなたのところを後にされても、その方たちを残念な気持ちで一杯にして行かれるのですもの」というものでした。そして、「ねえ、ナンシー、貴女にもあのお嬢さんのような優しい心遣いが少しばかりあってくれると嬉しいのだけれど」と、貴女を引き合いにしたお小言を頂戴してしまいました。

でも、構いません。貴女への褒め言葉なのですからね。貴女のことは私のことというわけで、楽しく聞いておりました。それがなおさら嬉しく思われましたのは …… 本当のことを申しましょうか …… 今のままで私は十分に幸せだからです。たとえ次のような理由からにすぎないとしてもですわ。つまり、私にジェームズさんのような兄が二十人、それに、ベルのような姉が二十人いるといたしましても、貴女に対して厚かましくもお兄様やお姉様が取っておりますような態度は、だれ一人として、また、全員が一緒になりましても、私に向かって敢えて示したりはしないはずだからです。世の常といたしまして、忍耐強い人には辛抱すべきことがたくさん出来るものです。これは貴女がご自分でおっしゃったことなのですよ(ア)。こんなことをおっしゃるのは、他ならぬお身内の方々に見受けられます、明白この上ない実例をご覧になってのことなのでしょうが、でも、貴女にはあまり参考になっていないようですわね。

その結果は次のとおりですわ。この世には貴女よりも私のほうが向いていて、貴女は私よりも来世向きだということでしょう。そこが違いだと思います。でも、貴女が私たちよりはもっと気心の合う、貴女にもっと相応しいお仲間のところへ向かわれます日が、私のために、そして、山ほどございます理由のためにも、ずっとずっと先のことになりますよう心から願っております。

(ア) 二十二頁を参照のこと。

貴女がお受けになった奇妙な出迎えについてのご報告、それに、皆さんがとてつもなくひどいお相手を見つけて来られたことや、貴女に対して強制的な扱いをなさっている様子を母に知らせました。その知らせは、私への寛大な処置の自画自賛へと母を駆り立てただけでした。母がとても熱心に後押しをしております男の人に対する私の「暴君的」な振舞い　…　母に言わせますとこうなるようです［母親というのは、我を通さずにはいないものですよね］　…　についての話ですが、その人に対しましては、正当な異議などは有り得ないらしいのです。そして母は、大目に見てもらっていることを感謝しなくてはいけないなどと、くどくど話し出すことにもなりました。このような状態ですから、母にはこれ以上何も知らせないようにしなければいけないと思うのです。母が私たちの文通や貴女とラヴレースさんの文通のことを、不明朗で親に背いた行為だと非難し、私たちの秘密を漏らそうといたしますのは分かっておりますから、なおさらです。母がいつも唱えておりますのは、親への〈絶対的服従〉なのです。おまけに母は、あの堅物の独身者、お宅のアントニー叔父様の長談義に結構熱心に耳を傾けているのです。そして、自分の娘への手本のつもりなのでしょうが、いくら尤もな事情だといたしましても、貴女の肩を持つことのほうは用心してかかろうとするのです。

でも、これも正しいやり方ではございません。何一つ譲ろうとしない人は、何一つ与えてもらえないものです。言葉を換えて申しますと、あまりにもたくさん主張を通そうとする人は、何一つとして思いどおりに行かなくなるということです。

ところで、あの長談義がお好きで鈍感なご老体、お宅のアントニー叔父様が足繁くこちらへお越しなのですが、一体どういうおつもりなのか、貴女は言い当てることがお出来でしょうか。気取った笑みをしきりに母と交わしておられます。やり繰り上手を盛んに褒め合い、「私はそんなふうですわ」　…　「私はこうなのですよ」とか「貴方のご同意をいただけるなんて、嬉しいですわね」などといった台詞が聞こえてまいります。そして、「いやあ、奥様は何もかも目を通しておられるのですな」とか「私が手を下しませんと、何一つうまく行かないものですからね」といった具合なのです。盛んに召使たちをこき下ろすかと思えば、しきりに自画自賛です。そして、「いやだわ」「やれやれ」「あら、まあ」などとやっています。その上、私が不意に顔を出したりいたしますと、会話が囁くような調子に変わってしまうこともあるのです。私といたしましては、そこのところがどうしても気に入らないというわけです。

若くもない独り者が結婚を決断いたしますのには、残された寿命として無難に思われます年数をそっくり掛けるのが常のことですが、そうでなければ、私といたしましては、叔父様がお見えになるたびに攻撃をしかけ、はるかに望ましい人として、ヒックマンさんを母に薦めたくなることでしょうね。年齢で劣る分は生真面目な点で埋め合わせが出来るからですわ。このようなことをお話しして、お叱りがなければ宜しいのですが、二人とも四角張ったところがございまして、まるで近親者同士かとも思えるほどなのです（母の愛顧を良いことに、私に図々しい真似をいたしまして、そのために辛い仕打ちを受けている時など特にそうです）。そして、私のきつい言葉と、そのために一緒に味わう辛さのことを予測いたしまして、二人は溜め息を残して立ち去るわけですが、お互いに心から慰め合っている様子なのです。同情が愛情のわずか一歩手前のものだといたしますと、私には何の危険もございませんが、二人は大変危ない状態にいて、それに気づかずにいるということに

なりましょう。

そろそろ、私にしかつめ顔をお向けになる頃合ですね。「毒を食わば皿までも」という諺もあることですから、精々用心なさることですね。先手をいただいていることにして、私から攻めさせてもらいます。私たちも読んだことがございますが、ローマ人への攻撃はローマの領土内で行うよう、ハンニバルはいつも忠告していたとのことですからね(五)。

貴女がおっしゃいますには、それも「誓って」とのお言葉ですが、ご家族の一部の方々が思っておられるほどには、もう一人の男性に敬意を(「愛情」とすべきところを、ずいぶんと妙なお言葉ですね)感じていらっしゃらない、とのことでしたね。何をなさるまでもなく、この一、二ヶ月がその「もう一方の」男性にとって極めて好都合な期間でありましたことは、どなたにでも察しがつくのです。その間、おじ様たちの無礼を耐え忍ばれたことで、姪御さんにとっては恩人になったわけですもの。

それはともかく、「それほどには」敬意を感じていないとおっしゃるのですか。それじゃあ、「どれほど」なのでしょうね。当ててみましょうか。「ご家族の一部の方々」は「大いに」と思っていらっしゃるのです。貴女のほうでは「わずか」だけをお認めになりたいご様子ですね。

怒っては嫌ですよ。五分五分でしょう。だって、貴女はその「わずか」でさえ、まだ認めてくださらないのですもの。これは貴女のおっしゃったことですけれど、隠し立てをする人というのは、きっと詮索好きな気持ちに火を点けてしまうものなのですよ。

でも、貴女の筆の進め方を拝見いたしますと、ご自分で断言なさったことには一種の払い戻しを用意なさっているみたいで、まるで、振り返ってみたら自信がなくなった、とでも言わんばかりですわね。「事実だ[それほど敬意を感じているのだ]」といたしますと、自分自身を知らずにいることになってしまいます」とのことでしたわね。このようなことを私に向かって、それも、「誓って」までおっしゃる必要はあったのでしょうか。でも、貴女が一番よくお分かりなのでしょう。ただ、そうではないようにも私は思うのです。愛の芽生えは微妙な心の動きによってもたらされるものですし、愛というものは、愛にとり憑かれた本人(「とり憑かれた」という表現で構わないと思います)がその大変な魔力に気づきます前に、周りの人々に姿を見せてしまうこともよくあるのです。

でも、さらに貴女はこうもおっしゃっていますね。「万一、他の人を差し置いて、あの方だけを特別視するようなことがあるといたしましても、それは何らかの個人的な思惑からというよりも、むしろ、あの方が受けた仕打ち、それも、私のために堪えてくださった仕打ちのことがあるからなのです」とです。

心の広いおっしゃりようです。いかにも貴女らしいお言葉です。でも、はっきり申しましょう。貴女は危険と背中合わせです。お気づきなのかどうかは存じませんが、間違いなくのっぴきならない状態に近づいておられます。生来のお優しさ、そして、心の大きさが貴女を危険に晒しているのです。お宅の皆さんは、あの男を敵に回して見境もなく乱暴なことをなさっておりますが、それがかえってあの男には好都合なのです。精一杯貴女を敬い、片時も心遣いを忘れない態度を取ってはおりますが、そんな恭しく心遣いに溢れた態度(貴女の好みをしっかりと考慮に入れたものです)が物語っております以上に、これは絶対に間違いのないところだと思いますが、あのラヴレースには事情がよく見えているのです。要するに、直接行動に出るよりも、このほうが有効だと見抜いているということで

す。貴女も前におっしゃっていたことですが、自惚れの強い恋人の眼力ほどに鋭いものはない、ということではないでしょうか。それに、ラヴレースに自惚れたところはないなどとおっしゃる人は、一体どこにおりましょう。

　要するに、私の見方では、それも、あの男の心や態度の落ち着きぶりから言えることなのですが、私が目にしてまいりましたものよりも、また、見抜くことが出来ると貴女が考えておられるのよりももっと多くのものを、あの男は見ていたと思われるのです。貴女ご自身が知っておられるはずのもの以上にです。でなければ、貴女も教えてくださっていたはずですもの、この私にはね。

　これまで受けてまいりました、そして、毎日のように与えられております侮辱の数々に対し、あの男が報復行為に出るのを防ぐためという名目ではありましたが、秘密の文通を進めることにつきまして、すでにあの男は貴女の承諾を得たわけです。貴女の文面のどこにも、あの男が自慢に出来るようなことは一切ないことを私は承知いたしております。でも、あの男の手紙を受け取り、返事をお書きになるよう、貴女を説得したのは、あの男にとっては大きな成果なのではないでしょうか。貴女がこの文通を内密にしてくれるよう主張なさることで、明らかに、世間の人たちに知ってもらいたくない秘密が一つ出来たことになるのです。そして、その秘密を握っているのはあの男というわけです。他ならぬあの男自身がその秘密だと言っても構わないでしょう。恋する男には願ってもない、懇ろな関係ということになりましょう。疎遠になるわけですわ、親子の間も。

　でも、事情を考えますと、貴女を責めることなど、だれに出来るのでしょう。疑いもございませんが、貴女がご自分を殺して引き受けられたからこそ、これまで大きな災難を防ぐことが出来たのです。同じ理由から、原因が残っております間は、文通は続けられなければいけないのです。お気持ちとは裏腹に、ままならぬ運命によって誘い込まれてしまったというところですが、でも、目的が立派なものですから、続けておられるうちに不都合にも馴れ、やがては愛着も湧いてくることでしょう。そこで、私からの忠告ですが（このような重大な事態にあってこそ、貴女の行動のすべてを律しております、あの思慮深さを忘れたくないと願っておられるのですから）、あの幸せな男に対する貴女の優しさはどこから来ているのか、その本当の動機や原因につきまして、恐れることなく詳細な検討を加えていただきたいということです。

　率直に申し上げますが、お調べになると〈愛〉であることが判明するだろう、というのが卑見でございます。どうか驚かないでくださいね。貴女の彼氏も結構学がおありで、堅実な心にこそ愛も深々と根をおろすものだなどと、すでにお宅のハーヴィー叔母様に語っていたではありませんか。ずる賢い言い方だわ、まったく、と私は口に出しそうになりました。六、七週間ほど前のことでしたからね。

　ご承知のように、私自身その病を患っておりましたが、どんなに冷静になって思い返してみましても、いつどのようにして症状が出てきたものやら、説明出来ませんでした。貴女からご忠告をいただけなかったなら、よく言う〈ぞっこん〉の状態になっていたことでしょうね。ですから、今度は私が忠告させていただきます。でも、私の〈彼〉の場合は半分ほども　…　どうだったと思われますか。確かに、ラヴレースは魅力的な男です。ですから、仮にもあの男が　…　いいえ、お読みになってお顔を赤くなさるようなことは申しません。誓って申しません。でも、どうでしょう、この部分をお読みになると、何故かし

ら胸のあたりが妙にドキドキするといった感じはございませんか。もしもおありなら、恥ずかしがらずにお認めになるべきです。貴女の〈優しさ〉が問題なのです。ただ、それだけのことなのです。でも、ローマの占い師の言葉にもありますが、「シーザー殿、三月十五日にご用心」(六)ということでしょうね。

これでお別れにいたしますが、無礼の数々、どうぞお許しください。早速、新たに思い付かれた手段で、お許しくださる旨をお知らせいただけますなら幸いです。

親愛なる貴女の

アナ・ハウ

手紙　十一

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月一日　水曜日

大好きなハウさん、今回のお手紙の結びの部分に接しまして、苛立たしさを覚えますと同時に、不安にもなってしまいました。最初、目を通しました時には、こんなにも親しいお友達宛に書いているのですもの、批評家を警戒するような真似は必要ないと思うわ、などと独りで呟いておりました。それでも、ふと気がつきまして、こんなことを口にしてしまいました。これは生来の陽気さの結果というだけでは済まないのじゃないかしら。確かに、私も不注意の誇りは免れないのかもしれない。私の愛するお友達が忠告してくださるように、ひとつ自分の心の中を詳しく調べてみることにしよう、とです。

そのとおりにいたしました。貴女のおっしゃる、顔が赤くなるようなことも、胸がドキドキするようなことも、少しも認められません。誓って繰り返させていただきますが、認められないのです。でも、私の手紙の中の、貴女が大変おどけた調子で厳しい批判をしておられる部分を考えますと、私を愉快な冗談の的になさるのは当然のことのようにも思われます。その点はお認めいたします。あのように奇妙なことを筆にしてしまうなんて、一体どんな気持ちになっていたのでしょうね。自分でも分かりかねております。

でも、どうなのでしょう。どなたに対してもさほど特別な愛情は抱いておりません人間が、他の人たちに比べて好意を感じるような人が何人かいる、と申し上げた場合、これはそんなにも深い意味を持った言い方なのでしょうか。また、ある人物の親戚にひどい扱いを受けながら、その人物のためを思って、本来なら憤慨して然るべきその仕打ちも大目にみてくれるような、そんな人たちのことを好感の持てる人と呼ぶのは責められるべきことなのでしょうか。例えばラヴレースさんのことですが、あの方のことをソームズさんよりは好ましい人物だと言っても構わないように思うのです。そして、事実、あの人よりはラヴレースさんのほうを好ましく思っていると言えます。でも、このように申し上げたからといって、私があの方に恋心を抱いているということには必ずしもならないはずです。

まったくの話、あの方といわゆる恋仲などになるつもりは金輪際ございませんわ。何故なら、第一に、あの方の品行を少しも買っていないからです。また、これは家族全員（兄は別です）それぞれに責任のあることですが、あの方が望みを持つような形で訪問なさるのを認めたのは間違いだと、私は考えているからです。それに、あの方の望みにいたしま

しても漠としたものでしたから、これまでにも私の考えは申し上げてありますが(ア)、私たちの耳に届いておりましたあの方の不品行について、釈明を求めたりいたしますのは、私たちのだれにだって権利のないことだったのです。第二に、あの方はご自分に心を奪われているると思われる女性に向かって、勝ち誇って（少なくとも心の中では）みせることの出来る自惚れ屋だと思うからです。そして、三番目には、貴女が認めていらっしゃるあの方の心遣いや恭しい態度のことですが、その態度には、ご自分の求婚は女性の愛情と同等以上の価値を持っているのだと考えているような、傲慢なところも潜んでいるということです。要するに、あの方がお示しになる慇懃さそのものが、お家柄や教育から授かったはずの様々な利点をお持ちなのに、不自然なものとして私の目には映りますし、際立ってゆったりとした、上品なご容姿をしておられますのに、時々、あの方の立ち居振舞いには何かわざとらしいところが見え隠れするのです。それに、よそのお宅の召使たちには、あの方は概ね愛想の良い人として通っていますし、気さくなところさえ見られますが（貴女も言っておられましたように、ご身分に恥ずかしくない威厳を湛えた気さくさです）、ご自分の召使に対しては、癇癪を起こされることも時にはありまして、罵ったり悪態をついたりなさるのですが、召使たちが怖がっているのは顔にはっきり出ておりますし、私がその場に居合わせなかったら、もっとひどい目に遭っていたことも容易に推測出来るのです。そして、この推測が図星であることは、あの方のお顔が如実に物語っているのです。

実際の話、この人ではないのです、私の理想の男性は。あの方には大いに異議がございます。あの方を求めて心臓が高鳴るようなことはございません。赤面することがあるといたしましても、それは、このようなお咎めを受ける素地を作ってしまいました我と我身が腹立たしいからに他なりません。でも、お願いです、当たり前の感謝の気持ちを愛情と解釈なさるようなことは、お止めいただきたいと思います。貴女がそのようなことをなさるなんて、私には耐えられません。でも、万が一私の気持ちを愛情と見做さねばならないような不幸な事態に至りました場合は、〈誓って〉お約束いたしますが、つまり、〈名誉にかけて〉というのと同じことですが、貴女にはきっとお知らせすることにいたしますわ。

愉快なご冗談の件で、貴女に憤りを感じてはおりませんことを大急ぎで、それも、新たに思い付きました便法を用いてお知らせするようにとのご命令でしたね。早速これをお送りいたしますが、家族の者たちがあのように熱心にソームズさんとの縁談を進めようとしております原因の説明は、次の手紙まで延ばすことにいたします。

貴女を恨んだりはしておりませんので、それまでは、どうかご安心いただきたいと存じます。本当に恨んではおりません。恨むどころか、いかにもお友達らしいご忠告には、心から感謝いたしております。そこで、お願いなのですが（何度もお願いしてまいりましたが）、もしも、友情と贔屓目からの言い訳を、私のために他の人たちに向かってなさらねばならなくなるような、それほどにひどいところを私の中に見出されました節は、どうか隠さずにおっしゃっていただきたいのです。私といたしましては、反対の立場を取る人たちにさえ非難の余地を与えないような振舞いに努めたいと願うからです。自分のいたらなさに気づくよう、お友達が鏡を目の前に差し出してくださらなかったなら、そのような人たちの非難を避けることなど、このように弱く、若輩の身の私にどうして出来ましょう。

(ア) 九、十、十一、十二頁。

ですから、中立な立場の人どなたもが（ただし、私のことを貴女と同じ程度に知っていらっしゃる人ですが）なさるように、私のことを判断していただきたいのです。最初のうちは少し辛い思いをするかもしれません。もしかいたしますと、自分が願っておりますほど貴女との友情に相応しい人間ではないことに気づきまして、少し顔を赤らめることもございましょう。でも、ご安心いただきたいのですが、親身になって諫めていただけますなら、反省に努めるつもりでおりますし、それが行いの改善にもつながることでしょう。もしも、そのようなことにならないのでしたら、それこそ、申し開きのしようもない欠点としてお咎めくださって結構です。さらに申しますなら、万が一（私が悪いとお考えの場合ですが）、その欠点をお咎めにならない場合には、私と同じだけ、私と同じ熱烈さで友情を温めていただいてはいないことにもなりましょう。何故なら、似たような折に、私のほうでは貴女に手心を加えるようなことは決してしなかったのですからね。

いったんはここで筆を置きまして、書面を改めることといたしますが、変わることのない愛情と謝意とを二つながらにお約束しつつ、

親愛の情と謝意とを等しく込めまして、貴女の

Cl. ハーロー

手紙　十二

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

三月二日　木曜日　朝

「まったくの話、あの方と恋仲などになるつもりは金輪際ございません」とおっしゃるのですね。謹んで承りますわ。私といたしましても、そのようなことにはなって欲しくありませんからね。容姿にいたしましても、財産や門地にいたしましても、あれほどの利点に恵まれていながら、どう見ましても、貴女に相応しい男とは思えません。このような考えを申し上げますのは、貴女が触れておられる理由（お認めしないわけに行かないものですが）のこともございますが、また、ベティ・ローランス夫人のお友達で、あの男のことをよくご存じのフォーテスキュー夫人から二、三時間前に伺ったお話もきっかけになっているのです。でも、あの百獣の王にも似た愛というものを、好みのままに愛玩用の小犬に変えてしまうことが出来た女性といたしましては、私の知るかぎり、貴女が最初の人なのですから、とりあえず、そのことにお祝いを申し上げさせていただきます。

それはさておき、胸が高鳴ることも赤面なさることもないとおっしゃるのでしたら、ないのでしょうね。そして、恋をなさっているわけでもないということなのでしょう。その確かな根拠とやらも、ご自分には恋をするつもりがないのだからとのことですね。何をか言わんや、ですわ。ただ、宜しいですね、貴女のことはしっかり監視することにいたしますわ。貴女にも精々用心していただきましょう。だって、恋をするつもりがないのだから恋はしていないのだとおっしゃるのでは、議論にも何にもなりませんもの。ところで、この話題をすっかり離れます前に、一言だけ貴女のお耳に入れておきたいことがございますわ、私の素敵なお友達。ご注意をいただくために申し上げるだけの話です。それに、傍目八目と申しますか、傍で見ている者のほうがゲームをしている当人たちよりも好い手を思

い付くことが多いという、よく言われております考えに従ったまでのことなのですが、貴女の場合には、これまでも現在も、あまりにも意地の悪い人や妙な考え方をする人たちに対処なさってきたために、ご自分の胸の高鳴りにまでは注意が回らなかったということなのではないでしょうか。あるいは、少しは胸の高鳴ることが時としてあったといたしましても、その動機と考えられますものが二つありますために、誤って、間違ったほうに原因を求めてしまわれた、ということではないでしょうか。

でも、貴女がラヴレースのことを高く買っていらっしゃるかどうかには関わりなく、フォーテスキュー夫人があの男についておっしゃっていたことは、貴女も早くお聞きになりたいことでしょうね。私もこれ以上焦らすのは止めにいたしますわ。

夫人は、子供の頃から成人するまでの間のあの男の無鉄砲ぶりについて、百ほども話を聞かせてくださいました。夫人がおっしゃいますには、周りから駄目と言われることがなかったため、あの男はいつもお猿さんみたいに悪さばかりしていたのだそうです。あの男の百にも及ぶ幼稚な悪戯のことは（言うならば、後の姿を暗示するものですが）端折らせていただき、貴女のご存じない事柄と同様、うすうす勘づいていらっしゃるような事柄に触れてみたいと思うのです。また、あの男とその流儀につきまして、卑見を述べさせていただきます。

フォーテスキュー夫人も認めておられる点で、だれもが承知していることではございますが、あの男は道楽者として悪名を馳せるに止どまらず、自らもそのように公言して憚らないとのことです。ただ、一度心に決めたこととか取り掛かったことにつきましては、並ぶ者もないほどに熱心な頑張り屋なのだそうです。一日二十四時間のうち、六時間以上の休息は取らないようですが、これは貴女も同じでしたね。書き物をするのが大好きで、M卿のお屋敷であれ、ベティ夫人やセアラ夫人のところであれ、独りになると、決まってペンを手にしているとのことです。仲間の一人が（あの男の書き物好きの証として）夫人に向かって、「あいつの頭に浮かんだことは、あっという間にペン先に流れて行ってしまうのですよ」と話したことがあるそうです。なかなかの達筆だというのに、筆まめなことや筆の速いことでも人後に落ちない一人であることは、貴女と私が一度ならず気づいた点ですわね。幼い頃には、とても素直に知識を吸収する能力があったに違いありません。様々な資質を備えている男ですが、あのように遊び好きで活動的な人間ですから、身につけるのに長い時間を掛けるとか、辛苦を厭わずに努力するといったことはなかったはずだと思うのです。家柄が良く、財産にも恵まれております若者にはなかなか見当たらない資質ですわね。とりわけ、家柄と財産のいずれかに恵まれた若者で、あの男のように、抑制されるというのはどういうことなのか、一度も経験したことのない者の場合にはそうでしょう。

以前、このような才能（それと、道楽者にしては驚くほど勤勉なところ）について褒め言葉を受けた際には、あの男は自分のことを、自惚れた話ですが、昼間のうちに偉業をなしとげ、夜になるとそれを書き留めていたというジュリアス・シーザー(七)になぞらえてみせたらしいのです。そして、今の世の中で名を上げるつもりなら、あとはシーザーのように事を起こすだけだと自慢していたというのです。

夫人がおっしゃいますには、この言葉は確かにおどけた言い回しだったそうです。夫人の感想にもございましたし、私たちもそんな感じを受けたことがありますが、あの男はたっぷりとユーモアを交えて自惚れをやってのけますから、自慢話や自惚れに向けられて当

然な蔑みを招く心配はありませんし、その話に付き合う者は、自慢するのも尤もだと、半ば納得してしまうことにもなるのです。

でも、他に用事のない夜の時間をすべて書き物に当てているというのが本当のことだといたしますと、一体何を書いているのでしょうね。シーザーのように自分自身の行動を書き留めているというのでしたら、あの男は疑いもなく大変な策士で、とんでもない悪党だということになります。お堅いところがあるなんて思う人は、一人もいませんからね。それに、私たちと言葉を交わします折には上品にしておりますが、書き物のほうは、閲読されることになりますと、おそらく、本人の名誉を高めるものでもなければ、他人の利益になるようなものでもないと思います。そのことは自分でも分かっているはずです。フォーテスキュー夫人も言っておられたことですが、手紙のやりとりには大いに精を出しておりますのに、その内容につきましては、まるで反逆罪に当たる性質のものでもあるかのように、用心して決して漏らしたりはしないのだそうです。噂ですと、あの男くらいいろいろな国の王様や宮廷の事情に通じている者も他にはいないとのことですが、それでいて、政治に関して頭を煩わせることはないというのです。

貴女と私の場合には、書き物が大好きでも決してしておかしくはありませんわね。ペンを手にし始めてからというもの、いつも文通は大きな楽しみでしたもの。私たちのお仕事は家の中で座ってするものが主ですから、罪のない事柄をいろいろと書きつけることも出来ますし、また、仮に人目に触れましても、それほどお役に立つとか喜んでいただけるといったことはございませんが、罪のないものだけに、楽しみとすることも出来るわけです。あの男のように、乗馬や狩猟や旅行に親しみ、世間の催し事に足繁く出入りもすれば、好きなことを思いどおりに楽しめる立場にもある、派手好きで活発な若者が何時間も続けて書き物をするために座っていられるなんて …… よくあることだと、自分で言っているのを私たちも聞いておりますが …… 何とも奇妙なことに思われるのです。

フォーテスキュー夫人のおっしゃいますには、あの男は速記術を完全にマスターしているとのことですが、あれほど筆の速い人間ですのに、どうしてまた、速記術を習う気になどなったのでしょうね。

あの男は驚くほど記憶力が良く、想像力に富んでいると、夫人は（その点は私たちも同様に気づいていることです）言っておられます。

フォーテスキュー夫人のお言葉にございましたし、世間の皆さんも言っておられる点ですが、あの男には他にもいろいろと不品行があるけれど、沈着冷静な人間だ、とのことです。そして、数々の悪癖を身につけてはいても、財産や時間の浪費につながる賭け事にだけは手を染めていないとのことでした。ですから、若さの盛りという年頃で、生まれつき陽気なところのある男といたしましては、冷静な頭脳と明晰な判断力を備えているに違いありません。それに、早起きだということですから、書き物をするにしても、もっとつまらないことに使うにしても、時間はたっぷりあるということになるのでしょうね。

フォーテスキュー夫人は、あの男には他のだれよりも親しく付き合い、手紙のやりとりも頻繁な紳士が一人いる、と言っておられます。解雇された土地管理人があの男と仲間の連中について話していたことを覚えていらっしゃいますね(ア)。どうやら、あの人物評は概

(ア)十七頁を参照のこと。

ね正しかったと言えそうです。親戚の方たちが皆さんあの男のことを恐れているということ、そして、あの男のほうでも、プライドのゆえに身内の世話になろうとしないという部分につきましては、フォーテスキュー夫人も認めておられるのです。今のところ負債はなく、今後ともその状態を守るはずだと、夫人は確信しておられますが、身内の世話になるのを避けようとする、それと同じ動機からのことなのは間違いのないところでしょう。

あの男のことを好意的に見たい人は、勇気のある人間、学のある人間、そして、勤勉な人間が生まれついての悪人であるはずはないと考えたいようです。でも、敵対している人たちが考えておりますよりは善い人間だといたしましても（もっと悪いとしたら、本当のワルですね）、あの男には言い訳の立たないような欠点が一つございますよね。自分の評判にひどく無頓着だという点です。私の考えでは、人がそのような態度を取ります場合、次の二つの理由のうちのどちらか以外にはないと思うのです。つまり、世の悪評が当たっていることを自覚しているからか、それとも、実際よりも悪く思われることを得意に感じるからか、そのどちらかでしょうね。いずれにいたしましても、大変困った、危険な徴候だと思います。と申しますのは、前のほうの理由だといたしますと、開き直っていることになりましょうし、後のほうの理由だといたしますと、このように結論いたしますのがごく自然なのでしょうが、人というのは、自分に罪があるように言われますのを恥ずかしく思わない事柄につきましては、機会さえ与えられれば、何のためらいもなくやってのけるはずだからです。

結局のところ、フォーテスキュー夫人のお話のすべてから言えますことは、ラヴレースという男は大変な問題児だということです。貴女と私が今まで考えておりましたのは、あの男はあまりにも陽気で、思慮が浅く、向こう見ずで、小物の偽善者なため、深慮遠謀というには当たらない、ということでした。貴女もご覧のとおり、お兄様の振舞いに対しましては、生来の気性（傲慢なものであるのは確かですからね）を偽装するようなことはありませんでした。侮辱に値すると考える相手には徹底した侮辱を加えますし、おじ様たちに手加減をするような親切心も持ち合わせておりません。

でも、あの男が狡猾だといたしましても、どれほど深慮遠謀に長けているといたしましても、皆さんが貴女のことを放っておいてくだされば、貴女ならすぐにもあの男を見抜くことがお出来になるはずです。自惚れ心が手掛かりになるでしょう。あんなにも自惚れの強い男はおりませんもの。ただ、フォーテスキュー夫人も述べておられますように、あれほど手際良く自慢話をやってのける人間も他におりません。あの男の自慢話には、剽軽な明るさといったものが奇妙に溶け込んでいるのです。調子に乗って語られるあの男の自慢話の半分でさえ、他の人の場合でしたら、耐えられないものになるでしょうからね。

❁　❁

「噂をすれば　…　」とはよく言ったものです。例の陽気な恥知らずが訪ねてまいりまして、今帰ったところなのです。貴女がお受けになっている扱いにすっかり苛立ち、憤慨しておりましたし、お宅の皆さんのほうが言い分を通してしまわれるのではないかと、それはそれは心配そうな様子でした。

どう仕向けられたところで、ソームズさんのような人を貴女が考慮の対象になさるはず

もないが、結局は、どちらの人とも結婚なさらないということでおそらく話はまとまるだろうと、私は自分の考えを述べさせていただきました。

するとあの男は、財産の面でも縁故の点でも申し分のない男が、これだけ辛い思いを耐え忍んで尽くしているというのに、相手の女性からこんなにもすげない仕打ちを受けた話は聞いたこともない、と言っておりました。

そこで、いつものとおり、思ったままを腹蔵なく言ってやりました。「でも、事の善し悪しを自分で決めるのでしたら、非を認める人なんていないでしょうね」とです。あの男のほうでは、自分の動きを見張るスパイがいて、暮らしぶりや素行を詮索している、と嘆いておりました。そして、これはお兄様やおじ様たちの仕組んだことだというのです。

私は、「それは大変お困りでしょう。何しろ、貴方のお暮らしぶりにしてもご品行にいたしましても、まともな詮索には耐えられそうにないのですから、なおさらですわね」と申しました。

あの男はちょっと笑みを浮かべ、仰せのとおりです、と言っておりました。そして、「絶好のきっかけを与えてしまいましたね。私には容赦のないハウ嬢のことですから、見逃す手はないってわけですね。それにしても、何と浅はかな連中なのでしょう、ハーロー家の皆さんは。信じていただけますか。私を相手に策を弄しようというのですからね。しっぺい返しに遭わないよう、精々用心なさるのが宜しいでしょう。この手の企みに取りかかるにしては、一生懸命になるのは分かるとしても、頭のほうはどうもお粗末ですね」と言うのです。

そこで私は、お宅の皆さんに比べて、「この手の企み」と自称しておられるものに向いた頭をしていらっしゃることがご自慢なのでしょうか、と尋ねてみました。

すると、あの男は話題を変え、貴女を敬う気持ちや貴女へ寄せる想いの丈を、それはそれは熱心に訴え始めたのです。

いくら称賛しても足りないようなお相手のことですもの、あの男の告白が真情に促されたものであることを疑う人など、どこにもいないことでしょうね。

これで失礼いたしますが、貴女のことは私の一番大切で一番心の気高いお友達と考えております。前回のお手紙を結ばれるに当たりましての潔いお言葉を読ませていただき、口では表せないほどの敬愛の念と称賛の気持ちに駆られております。私の浮かれた口調をいつも快く見逃してくださるものですから、今回も厚かましい、冗談めいたことから筆を進めてしまいましたが、その間、だれにも負けないほど、お友達を思う気持ちで胸を熱くしておりましたことを申し添えさせていただきます。

貴女の
アナ・ハウ

手紙　十三

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月一日　水曜

家族の者たちがこれほど熱心にソームズさんからの縁談を後押ししようといたします動

機につきまして、貴女にも知っていただきたく思い、筆を手にする次第です。

この点をはっきりさせますためには、少々溯ってご説明しなければなりませんし、おそらく、貴女が既にご存じの事柄につきましていくつか触れるようなこともしなければならないでしょう。ですから、これからお話しいたしますことは、この一月の十五日と二十日にお送りいたしました手紙(ア)の補足のようなものとお考えくださって構いません。

それらの手紙では、メモを取ってございますが、兄と姉がラヴレースさんに抱いております敵意のことと、身内の他の者たちの間でのあの方の評判を台無しにしようとして、二人が用いました手口のことを（あの当時の私に分かる点だけでしたが）ご説明いたしました。それから、大変に冷たい態度であったとは申せ、直接無礼を働くような真似は慎んでおりましたのに、出し抜けに(イ)二人の振舞いが乱暴さを増し、面と向かって侮辱を加えてしまいましたこと、そして、その結果、不幸にも兄とあの方とが果たし合いをするに至りましたことをお話しいたしました。

もう貴女にもお分かりでしょうが、叔母と私との最後の会話からいたしまして、兄と姉がこのように急に乱暴な行動に走りました裏には、兄が抱いておりました学生時代からの悪意や、愛情を踏み躙られましたことへの姉の恨みなどよりも、もっと大きな理由があるということになりましょう。つまり、おじ様たちが、おじい様に倣って、私に有利な取り計らいをなさるのではないか、少なくとも、自分たちが願っている以上のことをなさるのではないかと恐れているというわけなのです。兄と姉が二人のおじとの間で持ちました話し合いから頭をもたげてきた不安のようなのです。その点につきましては、叔母がこっそり打ち明けてくれたのですが、これは、ソームズさんの示された〈素晴らしい〉条件を呑むように私を言い含めるための方便だったのでしょう。この機を逃さずに色よい返事をすれば、兄と姉の目論見を挫くことになるし、今後とも父やおじたちからの確かな愛情を保証されることにもなるのだと、叔母はしきりに力説しておりました。

叔母が打ち明けてくれました会話の内容に移りますためにも、私の考えましたことを一つ二つ、手短にお話しいたしましょう。でも、私たち全員のことを大変よくご存じの貴女には、その必要はほとんどないのかもしれませんね。話の流れとか脈絡からして必要、ということではないのでしたらね。

私の家族の中に、いわゆる〈家門に箔をつける〉ということを夢に描き、長い間胸に温めてきた者がおりますことは、一度ならずお話しいたしました。私の一族は、父方にいたしましても母方にいたしましても、決して取るに足らない家族などではありませんし、成り上がり者でもございません。とりわけ、母方は違います。ですから、私といたしましては、そのようなことを望みますのは、自分の家柄をみくびっていることになると考えることがよくございますが、莫大な財産を築き上げ、この上は高い身分や肩書きなしには満足出来ないのだというご家族の場合、残念ながらこのような考えを持たれることが少なくないように思います。

おじたちは、この夢を私たち三人の子供一人一人に託しておりました。自分には結婚の意思がないものですから、仮に私たち自身は駄目でも、私たちの子供や孫たちが国でも一流の人物になれるよう、それぞれが財産を分与されること、そして、有利な条件で結婚す

(ア) 手紙四、五のこと。(イ) 手紙四の十六頁を参照のこと。

ることを主張したのです。兄といたしましては、一人息子でもありますし、二人の妹にはそれぞれ一万とか一万五千ポンド程度も与えれば十分だと考えておりました。また、一族の不動産のすべて、つまり、おじい様のもの、父のもの、それに、二人のおじの土地家屋ですが、これに加えて、それぞれが残してくれます動産の類や教母から譲られるはずのものを含めますと、それこそ見事な資産になりますし、大変な利権にもつながるわけですから、爵位を期待するだけの資格が得られるように思ったのでしょうね。そこまで行かなければ、兄の野心は満たされなくなっているのです。

そんな考えを持っておりましたから、小さな頃から兄の態度は横柄なものでした。おじい様やおじ様たちのことを自分の執事に見立て、これほど有能な執事に恵まれた者もまずいるまいだとか、娘というのは家族の中ではただの厄介者で、足手まといにすぎないなどと言っておりました。また、次のような下品で俗っぽい言い回しをしばしば口にしておりました。それも、胸に温めている楽しい考えがそのような口調を与えるのだと思われますが、独り悦に入っているような調子で発せられるのが常のことでした。「息子に恵まれた者は自分の食卓を飾る若鶏を育てていることになるが［もっとも、そんな譬えの仕方で得意になっている兄をたじろがせてやったこともございました。息子さんたちは（譬えを活かしまして）首を刎ねられることになるのですか、と尋ねてみたのです］、娘のほうは、他人の食卓に送るために育てた若鶏のようなものだ」というのです。このような言い種と一緒に、「娘を手放す気にさせると、家族の蓄えも一緒に損なわれてしまう」といった、負けず劣らず失礼な言葉を添えるものですから、姉のほうでも、どうにも我慢出来なくなることがよくありました。今でこそ、足手まといになるのは妹だけと考えている様子ですが、当時の姉は、兄の「強欲な目論見」…よくそんな言い方をしておりました…に対抗し、私たちの利益のために手を結びましょうと、頻繁に提案していたのです。一方、私のほうでは、兄が見せましたこの種の無礼な言動も、一時的な浮かれ気分の結果であり、生まれつき愛想が良いとは申せません若者の場合には、むしろ歓迎すべきこととか、からかいの種にこそなれ、とりたてて気に留めるまでもない、些細な欠点くらいに考えようとしておりました。

ところが、祖父の遺言のために（特別私に有利なものとなっておりますその趣旨につきましては、兄たちと同様、私も開封されるまで知らなかったのです）、兄の期待の一部が断ち切られてしまいますと、私に対する兄の不満が極度に高まりました。だれ一人として快く思わなかったことも事実です。皆私のことを愛してくれてはいましたが、一番末の子供だということもありますから、父やおじたち、そして、兄も姉も皆が、権利や権限の点から見まして［権限を好まない人などおりませんでしょう］、後回しにされたように思ったのです。父自身にいたしましても、私がいわば単身で自立した状態になりますのは認め難かったのでしょうが、あの遺言によりまして、例の地所とそれに付随する各種の権限（ここのところが奇妙だと皆は言うのですが）に関しますかぎりでは、私はそのような立場になったわけですからね。

ですから、皆の妬みを解くためにも、貴女もご存じのとおり、例の地所はいうまでもなく、贈られましたお金（これはご臨終の際のおじい様の所持金の半分でして、残りの半分は姉に遺贈されました）も一緒に、その管理を父に一任いたしました。父が気持ち好く支払ってくれますお金を賜物のように喜んで受け取り、ほんの少しでもお手当ての年額を上

げていただくようなことはお願いいたしませんでした。これで妬みの気持ちはすっかり鎮まったものと思っておりましたが、それでも時折、兄と姉は（今でははっきりしたことですが、二人のおじが私に有利な計らいをすることが怖く、また、私のほうで父の意向に沿うようにいたしましたので、父とおじたちが機嫌を良くするのも案じてなのでしょう）、私を陥れるようなことを陰に隠れてやっていたのです。でも、そのようなことを耳にいたしましても、妬みの原因は取り除いたように考えておりましたから、前よりももっと気に留めないようにしておりました。二人揃って癇癪持ちであることは相当世に知られたところですし、その種のことはすべて癇癪のせいだろうと私は考えていたのです。

その後、兄への贈与があり、だれもが大喜びでした。兄は査収手続きのため旅立ちましたが、兄が不在だということで（それも、このように喜ばしい理由なものですから）、皆の喜びもひとしおでした。それに続いてM卿からの姉への申し込みですから、重ね重ねの慶事と当時は受け止めておりました。姉の上機嫌な様子につきましては、すでにお話ししてありましたね。

このお話が破談となりましたいきさつはご存じのとおりですし、替わりに進められましたお話のこともご存じですね。

その後兄が帰宅いたしますと、全員の歯車が再び狂ってしまいました。そして、前述の手紙でも申しましたように、ベラは機会を見つけまして、不品行の噂があるからこそラヴレースさんはお断りしたのだと、手柄顔をしてみせたのです。このことから、兄と姉は結束して事に当たる気持ちになったわけです。二人はありとあらゆる機会を捉え、ラヴレースさんを、そして、あの方のご家族までを（尊敬申し上げる以外にないご一族ですが）貶めるようなことを言い始めました。そしてこのことが、これからお話しいたしますおじたちと二人の話し合いの発端になったのです。では、話し合いの詳細につきまして、そろそろお話ししようと思いますが、その前にひとつお断りしておきたいのは、これはあの果たし合いに先立って行われたものでして、ラヴレースさんについての身辺調査の結果が、兄と姉の期待に反して、好ましいものであることが判明いたしました、そのすぐ後のことだったという点です(ア)。

二人がいつものとおり、あの方に不都合な話を新たにいくつか持ち出し、非難の言葉を補強しながら、あの方のことを激しく罵っておりますと、黙って耳を貸しておりましたアントニー叔父様が二人に向かって次のように言明なさったのです。あの男は紳士らしく振る舞っているし、姪のクレアリーも慎重な態度を守っているように思う。また、しばしば言ってきたことだが、一族にとってこれ以上に名誉な縁組は望めそうもない。ラヴレース氏には父祖伝来の申し分のない地所があるが、敵側に立つ人間の証言でも、債務は一切ないということだ。それに、これまで言われてきているほどの破廉恥漢のようには思われない。乱暴なことは確かだが、派手にやりたい年頃でもあり、分別はある男なのだ。姪としても、あの男の行いが改まったとか、あるいは、自分の模範によって改心させることが出来そうだと考えるだけの十分な根拠が得られなければ、あの男と一緒になることはまずあるまい、というのです。

それから叔父は、これは叔母が教えてくれたことですが、ラヴレースさんの心の大きさ

(ア) 手紙四の十七頁を参照のこと。

の証として一つの例を挙げまして、その例からも、あの方が根っからの悪人でないことは確信出来るし、また、気質の点では私に似たところがあるように確信している、とまで言ったのだそうです。その例と申しますのは、あの方の父祖伝来の地所からは、その気になれば、これまでよりも年に三、四百ポンドの増収は見込めるはずだと、叔父のほうで申しましたところ、あの方の答えは、「小作人たちは滞りなく年貢を納めてくれているし、自分のところでは、昔からの小作人やその子供たちには法外な地代を要求しないことが家訓になっており、自分としてもその教えには決して背かないつもりだ。自分の小作人たちが全員丸々と太り、血色も良く、満ち足りた顔をしているのを目にするのは嬉しいことだ」というものだったというのです。

実際、私も何かの折にこれに似た話をあの方の口から聞いたことがございます。その時ほどあの方が立派に思えたことは他に …… そう、もう一度ございました。次のような出来事がありました際に、あの方がお示しになった態度に接した時のことです。

アントニー叔父様の小作人の一人で、暮しに困っておりました男が、ラヴレースさんの見ておられるところで、叔父に地代の支払い猶予を願い出たことがございました。この男は空しく引き下がって行ったのですが、ラヴレースさんが巧みに弁護なさったものですから、もう一度呼び戻されまして、願いを叶えてもらったのです。ラヴレースさんは外までこっそりと男の後を追って行かれました。そして、今は五シリングの持ち合わせすらないと男が言っているのを聞いておられましたから、当座をしのぐためにということで、二ギニーをお与えになったのです。

その際、あの方は（これみよがしな様子は少しもございませんでしたが）叔父にこんなことをおっしゃっておりました。年老いた小作人夫婦がまことにみすぼらしい格好で礼拝式に出ているのを自分も見たことがある。賃貸契約が厳しいものでないことは分かっていたので、翌日事情を尋ねてみると、善かれと思ってやったことではあるが、とんでもないヘマをしでかし、すっかり暮らし向きが悪くなってしまい、地代を納めた上、もっとマシな格好をするなど無理な話です、とその男が言う。そこで、自ら認めているヘマとやらを取り戻すのにはどのくらいの日数が必要なのか聞いたところ、おそらく二、三年でしょうという返事であった。それでは、今後七年の間、年間の地代から五ポンドを免除することにするが、私の小作人に相応しい姿で日曜礼拝に出られるよう、その分を奥さんとお前のための出費に振り向けてもらうことを条件にする。とりあえずこれを受け取り（と、ポケットに手を入れ、五ギニーを手渡しながら）、当面の問題に対処することだ。この次の日曜日には、正直者の鴛鴦夫婦らしく、手に手をとって礼拝式に顔を見せてほしい。その後は私の屋敷で食事をしてもらいたいものだと言ってやった、とのことでした。

この話を耳にいたしました時には、年間の土地の価値を低下させることにはなりませんので（これは叔父も注目した点です）、寛大さと思慮深さとを同時に例示しているということで、私も嬉しく思いました。だからといって、胸が高鳴ることも顔が紅潮することもございませんでした。誓って申しますが、そのようなことはなかったのです。それでも、貴女には白状いたしましょう。この時には私も、「もしも、この方と一緒になるのが私の定めだとしても、私がこんなにも楽しんで進めているお仕事を邪魔したりはなさらないはずだわ」と、独り言を言わずにおられませんでしたし、それと併せ、「このような方が一貫して立派な態度を通してくださらないのは、本当に残念だわ」と呟いたりしておりました。

ごめんなさい。横道に逸れてしまいましたね。

叔父は言葉を続け、(叔母が教えてくれましたところでは)次のように話していたそうです。父祖伝来の地所に加え、あの方はまことに素晴らしい財産を直接相続することになっているということ、姪のアラベラとの件で話を進めていた時にM卿が自分に教えてくださったのだが、卿と卿の二人の異父姉妹は、あの方を卿の爵位に就かせるため、出来るかぎりのことをなさるつもりだということ、卿が亡くなられると爵位も消滅するので、あの方のために確保しておきたいし、あるいは、さらに上の爵位、つまり、夫人たちのお父上が持っておられたものさえ考えておられるのだが、そちらのほうも、男系相続人がいなかったため、しばらく跡絶えているということ、あの方のご結婚に親戚の方々が挙って熱心なのは、そういう考えから出ているのだということ、ラヴレース氏にとってもっと有利な栄達の道が他にあるとは思われず、実際の話、相当な家を三つ興すに足るだけの富が我が一族にはあるものと考えているということ、それゆえ、この縁組にはますます乗り気だと言わざるを得ないが、それというのも、ラヴレース氏の家系はいうまでもなく、資産の面からしても、姪のクラリッサがそのうち大ブリテンの有爵婦人の座に着く見込みも十分にあるからだということ、そして、その点を考えるならば[ここが私には心苦しいかぎりなのですが]、地位を汚さぬ暮しが容易に出来るような贈与を行うことも、自分としては間違いではないと考えているのだ、といったことをです。

ジョン伯父様も、ご自分の弟の言葉に異論を唱えるつもりはさらさらない様子で、「ラヴレース氏との縁組にはたった一つだけ異議がある。つまり、氏の品行に難があるということだ。ベラにしても兄にしても、父親から十分なことをしてもらえるわけだから、特にそれは言えることだし、それに、兄などは実際に、教母のラヴェル夫人の贈与証書と遺言書のお陰で、かなりの地所を手に入れているのだから」と断言しておられたのです。

私に対する兄と姉の振舞いには説明のつかない点が多々ございましたが、この話を前もって知っておりましたなら、怪訝な思いをすることも少なかったことでしょうし、当時必要だと考えておりました以上に、もっと警戒を強めていたことと思います。

貴女にも容易に察しがおつきになると思いますが、この話し合いは当時の兄にとりましては大変な打撃でした。(自分の執事二名)が面と向かってこのような調子で話すものですから、とても心安らかに聞いてなどいられなかったのです。

小さな頃から、気性の激しいこともあり、兄は家中の者から恐れられると同時に、機嫌も取ってもらっておりました。先頃も触れたことですが、父でさえ兄の言いなりになることが非常に多かったのです(譲り受けた財産のことで、兄はますます図々しくなりましたが、ずっと前からそのようなことが目に付いていたのです)。家名を築き、その名誉を高めることになる一人息子だからというわけです。ですから、自分の気性を直そうという気持ちなど、兄にはほとんど起こらなかったのです。その気性のお陰で、家中の者からずいぶんと尊重されていたわけですからね。

「分かるだろう、ベラ」と、今お話しいたしました折のことですが、おじ様たちの前だというのに、兄は見苦しく感情も露な言い種でした。「そういうわけなんだよ。俺とお前の場合は、自分だけが頼りということさ。このセイレーン[八]みたいな小娘は、おじいさんの時にやったように、俺たちからおじさんもまんまと取り上げようってんだよ」とです。

この時からですが(思い起こして見ますと、今でははっきりと分かるのです)、兄と姉は

私のことを邪魔者扱いいたしますし、二人の間では、共通の利害で結ばれた仲間同士のように振る舞い出したのです。また、それゆえのことですが、この縁談を妨げるために全力を傾注しようと決心したのです。成立したりすれば、自分たちの描いた夢も萎んでしまうと思ってのことでしょう。

おじたちが二人揃ってあそこまではっきりと言った後のことです。一体どのような方法があるというのでしょうか。

その方法を兄が見つけ出したのです。姉は（先に申しましたとおり）兄と同一歩調を取っておりました。二人にかかって家族の和も壊れ、だれもが心の休まらない思いでおりました。ラヴレースさんを迎える皆の態度はますます冷たくなってまいりました。でも、よそよそしい態度を見せたくらいでは方針を変えていただけないものですから、やがて人身攻撃が始まり、続いては挑発、そして、決闘に至ったという次第です。貴女もお聞き及びのとおり、それが止めということになりました。そして今では、私が皆の意向に沿わない場合、おじい様の地所の件は裁判沙汰にするというところまで来ているのです。遺贈によって自立したとは申せ、そのことを振りかざそうなどとは一度だって考えたこともない私ですのに、「何が身のためなのかを弁えない娘に相応しく、父親の気持ちには精々従ってもらおう」とのことです。最近では、これが家の者たちの決まり文句になっているのです。

でも、私が自分を枉げて願いを聞き入れるようなら、家の者全員どんなに幸せなことだろう（と、皆はそんな言い方をするのです）。素敵なプレゼントや宝石類は勿論のこと、私には想像もつかないようなお祝いを家族の者一人一人がしてくれる、というのです。それに、ソームズさんの資産は大変なものだし、申し込みの条件も非常に有利なものだから（大切にしておられる親戚はいらっしゃらないのです）、こちらの親戚が考えている気前の良い祝儀のことをまったく勘定に入れなくとも、あちらから頂戴するものを基にして、私個人の財産を拵える余地がたっぷりとある。おまけに、この目的には、今ではっきりと分かっているというのですが、私が備えております資質だけを取っても、予定しておられる贈与財産に関して、ソームズさんとまったく対等になるし、その上、受諾したことに対して恩義を感じてもらえるはずだというのです。ご自身もそう考えておられると聞いておりますが、本当に情けない人です。あの人は、私の家族の者ばかりか、ご自分の目にさえそんなふうに映っているのですからね。

この願ってもない夢が実現いたしますと、私たち三人ともすこぶる裕福で、申し分のない生き方が出来ますし、私もどれほど家族の者たちに感謝されることだろうか……それも、皆にこれまで思い込ませていたように、本当に私が孝行娘で、心の広い人間だというのなら、私の人柄、そして、考え方に実にぴったりと合う、孝養の行いを実行に移すだけで事足りる話なのだ、というのです。

以上が、父とおじたちの心を捉えようとして向けられました明るい面です。でも、兄と姉が企んでおりますのは、何としても、父たちの間での私の評価を台なしにしてしまおうということではないでしょうか。そうではないというのでしたら、貴女のお宅から戻りました際にも、是非とも進めようと念じておりますことを、脅しつけて聞き入れさせたりはせず、丁寧に頼み込んでいたのではないでしょうか。あれからというもの、ずっと同じやり方なのです。

それはともかく、ソームズさんに対しましては最高の敬意を示すよう、召使たちすべて

に指示が出されました。最近、家族の一部では、〈気前良し〉のソームズ様というのが通り名になっております。でも、こういう指示があるということは、暗に、あの人の取り柄くらいでは尊敬に値しないと言っているのと同じではないでしょうか。そのようなこともありまして、お見えになるたびにあの人は、家族の主だった者たちからは下にも置かないもてなしぶりですし、召使たちからもペコペコとお世話をしてもらっている有り様です。そして、皆の口から響いてまいりますのは、「見事な贈与財産」のことなのです。

あの人からの申し出を引き立てようとして用いられましたのが〈見事な〉という言葉なのです。あの人はご自分のお身内のことを（そのお一人お一人は、同時に、あの人からの援助を求めずにはいられない状態ですのに）迷惑がって憚らないほど狭量ですし、その方々にこそ権利があります相続の見込みを奪い去ろうと目論むような悪辣な人なのですが、私との結婚に全財産を振り向けるためのことだというのです。また、私が子供の出来ないままに世を去り、再婚後のあの人も子供に恵まれません場合には、今でもお金が有り余っております一族に、その財産を振り向けるためのことでもあるのです。これがあの人の申し込みの中味ということになります。

でも、成り上がり者を軽蔑したくなるような動機が私には他に一切ないといたしましても、あの人のお身内にとりましては、不当なこの点だけで十分ではないでしょうか。もう一度申しますが、成り上がり者なのです。あの人が現在お持ちの巨額の富も、相続によって受け継がれたわけではないのですからね。ある欲張り者の手から別の人へと、その人も欲張り者であったばかりに、近親者の権利を侵害して遺された富なのです。仮にも私が納得ずくでその分与に与るとか、将来的な所有権の帰属のことで私の心が動かされるなどということがありましたなら、申し出をなさるあの人も怪しからぬ話ですが、そのように不当な贈与財産を受け入れようとする私のほうも、負けず劣らず、責められて然るべきなのだと、貴女はそのようにお考えではないでしょうか。

まったくの話、身内の者がこのような申し出の後押しをする気になるなんて　…　それも、私の考えですと、実社会に出るに際しまして、良心的な人間が持ったりしてはいけないと思われますような、そんな動機に促されてのことですから、私にはその点がひどく気掛かりなのです。

ただ、ラヴレースさんの計画を挫くと同時に、親戚の者たちが互いのために願っておりますことすべてに応えますためには、これが唯一取ることの出来る方法らしいのです。それに、ソームズさんとの結婚から生じるかもしれないような一族にとっての利得を、私のほうで邪魔するようなことはまさかあるまい、というわけです。と申しますのも、おじい様の地所が、あの人の所有するはるかに大きな地所共々家族の所有に復帰する可能性も（兄のように欲の皮の張った人間は、可能性をすぐに見込みに変えてしまうものですが）見つかったからなのです。これよりもずっと見込み薄でしたのに、所有権の復帰が認められたという例が盛んに引き合いに出されております。姉は姉で、古い諺ですが、「土地持ちの縁者は果報者」などと言いだす始末なのです。

一方、ソームズさんのほうは、微かな希望に独り笑みを浮かべておられるのは疑いないところですが、申し出だけで皆の信用を得ておりますし、羨望の的となっております私の地所をご自分の地所に加えられるものと信じて疑わない様子です。実は、都合の好いことに、私の地所があの人の二つの地所に隣接しているということもありまして、他の人の場

合はともかく、あの人にとっては二倍の値打ちになるらしいのです。ですから、奥さんを求める気持ちよりも、疑いもなく、こちらのほうがもっと強い動機なのでしょうね。

あの人からの求婚を私の親戚があんなにも熱心に支持したがる主な誘因は、こんなところのように私には思われます。ここで再び、一族ぐるみの欠点を嘆かずにはいられませんが、こういった誘因が抵抗し難いほどの力を持ってしまいますのも、この欠点ゆえのことだからです。

これまでのところでは、ソームズさんと私の件がどちらへ転ぶにいたしましても、兄の目論見は上首尾ということになりましょう。言い換えますと、何よりもまず、自分の言い分を父自らの意向としてくれますよう、また、私が子の務めとして黙従いたしますことを主張してくれますよう、父を動かしたということです。

母について申しますと、いったん父が決意を口にいたしました場合、父の意向に背こうなどと考えたことは一度だってないのです。

おじたちにつきましては、言わせていただけますなら（概ね、大変立派な人たちなのですが）、堅苦しくて人付き合いの不得手な、大金持ちの独り者ですから、妻の柔順さと同様に、親への孝養をとても大切に考えているのです。おとなしい母の様子を目の当りにいたしまして、夫に従うことの大事さを確認しておりますし、親への孝養を期待するのはなおさら当然のことと考えるようになっているのです。

ハーヴィー叔母様は（ご自分の結婚生活がそれほど幸せなものではありませんし、何かちょっとした負い目もあるのでしょう）説き伏せられまして、これほど断固としております父とおじたちの意向に背いてまで、私のために口を開こうとはしないのです。

自分たちの最初の判断と真っ向から対立いたします点について、母と叔母がこのように言いなりになっておりますこと自体、父の気持ちが完全に固まっておりますことの、あまりにも確かな証拠なのです。

あの立派なノートン夫人に対する皆の扱いを考えましても、淋しいことですが、そのことは確認出来るのです。賢明さの点では本当に尊敬に値する女性ですし、だれもがそう思っているのです。ところが、十分には裕福でないばかりに、反対意見を表明なさっている問題、皆が是非とも進めたいと考えているらしい問題につきまして、それ相応の影響力を発揮なさることが出来ず、今日耳にしたばかりなのですが、私をお訪ねになること、そして、私との文通さえも慎むように申し渡されたということなのです。

ラヴレースさんへの憎しみ、一族の発展、そして、親の権威という大きな動機があるわけです。その一つ一つを取ってみましても、一切争いようのない事柄ですから、三つが一緒に結ばれれば、どれほど強力なものになることでしょうか。

こういったところが、現在、この不愉快な人物からの求婚が帯びております恐ろしい外見ということになります。

兄と姉は意気揚々としております。大喜びで話しているのがハンナの耳にも入ったというのですが、私をひきずり下ろしてやった、と言っていたそうです。確かにそのとおりです（ただ、横柄にお高く止まっていたつもりはございません）。と申しますのも、これで兄は、不幸を承知で承諾せざるを得ない立場に私を追い込みまして、ラヴレースさんへの復讐の手段にしようとするか、あるいは、拒絶した場合には、私を家中の嫌われ者に仕立て上げようとするか、そのいずれかだからです。

宮廷の奸臣たちが互いに権謀術数を弄しましても、何の不思議がございましょう。何しろ、利害が鋭く対立しそうなのは三人だけで、そのうちの一人は（本人はそう思っているのですが）このような卑俗な動機には超然としておりますような、そんな平民の家庭でさえも、策謀を免れることは出来ないのですからね。

今の私にとりまして一番気掛かりなのは、母の心の平安のことです。これほどの妻に恵まれた夫が、どうしてあんなにも独断的で頑固な態度を取れるものなのでしょうか（しかも、善人なのですから、やはり、男性の特権というものは……）。それに、大変な財産を携えて嫁いで来たのですし、皆その有難味を十分に承知しているのです。その点を考えましても、皆はもっと母を大切にしなければいけないように思うのです。

確かに、皆も母には一目置いているのです。ただ、残念なことですが、屈従との引き換えに頂戴している評価だと申せましょう。でも、尊敬されて当然な美質を母は備えております。つまり、思慮深さのことですが、それ自体、すべての場合に順守されて然るべきものなのです。

でも、あらぬ方向へ話が進みそうですね。とても立派で、自分でも大切に思っている親戚の者ですのに、強情な娘というものはこんなにもひどいことを平気で言うものなのですね。我が身を守るためとは申せ、親戚の落ち度を暴露しなければならないなんて、何と不幸な立場なのでしょう。

でも、私が母のことをどれほど慕い、尊敬しているのか、よくご存じの貴女のことですから、母も関わっております計画に反対しなければならないというのは、私にとってどんなに辛いことなのか、お分かりいただけるものと存じます。それでも、どうしても私は反対しなければいけませんので（承諾するなど、不可能なことです）、時を移さずに反対表明をしなくてはなりません。でなければ、ますます難しいことになると思うのです。と申しますのも、たった今知らされたのですが、贈与財産に関しまして、今日、弁護士との打ち合わせが［こんなことって、信じられますか］行われたとのことだからです。

私の一家がローマカトリックなのでしたら、皆は、私を尼僧院へ追いやりさえすれば自分たちの目論見はすべて達せられると考えるでしょうから、そのほうが私にとってははるかに幸せだったことと思います。また、だれかがどなたかに冷たい仕打ちをしていなかったなら、どんなに良かったことでしょう。兄が戻って来て邪魔をいたします前に、二人の間で、多分、万事決着を見ていたはずなのです。そうなっていれば、私には、今はいないに等しい一人の姉、そして、共に野心家で、おそらく共に爵位を持つ二人の兄が出来ていたわけですし、私といたしましては、それぞれの男性に備わる爵位にも優るもの、両者に備わる真に高貴な部分を大切にしていれば、それで良かったはずなのです。

それにいたしましても、何と際限のない身勝手さに兄は動かされているのでしょう。何とも見込みの薄い、あまりにも覚束ない計画に心を奪われたものです。しかも、その計画というのが、たとえば高熱に襲われるとか（激しい気性をしておりますから、その種子は日頃から大きくなっておりまして、いつ爆発してもおかしくないのです）、挑発された相手が剣を抜いてしまうといった、ほんの些細な出来事によって、たちどころに水泡に帰してしまうものなのです。

ここでひとまず筆を置くことにいたします。身内のことにつきまして、ずいぶん勝手なことばかり書き綴っておりますが、貴女らしい好意的な受け止め方をしていただけるもの

と信じております。また、親らしい姿、あるいは、兄弟らしい姿につきましても、あまりにも気儘な扱いをしているように思われます部分とか、父親に対する務めや兄への礼を欠いているということで、他の方たちの批判を誘いそうな部分につきましては、思慮深い貴女のことですから安心してはおりますが、他の人にお聞かせになるとか、書き送られるようなことは、何卒お控えいただきとう存じます。

心からの愛を込めまして、貴女の

Cl. ハーロー

手紙　十四

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月二日　木曜日　夕刻

長々と綴りました私の手紙を（書き始めましたのは昨日のことでしたが、何かと邪魔が入り、書き終えましたのは、やっと一時間足らず前のことでした）例のところに置きにまいりましたハンナが、今日の日付の貴女のお手紙を見つけ、届けてくれたところです。早速のお返事、お礼申し上げますわ。もう一通の手紙と一緒にお宅の使用人に持ち帰ってもらうためですが、これから手短に認めますものも、おそらく、間に合うように置いてきてもらえるはずです。ただ、こちらのほうはお礼を申し上げます旨を、そして、心配ごとがますます増えておりますことをお知らせするだけのものです。

仲裁の労をとっていただくよう、機会を捉えるなり見つけるなりいたしまして、母にお願いしなければなりません。日取りを決められたり、嫌がっておりますのを恥じらいのように受け止められたりしそうな、危険な状態なのです。姉と妹というのは、互いに姉妹らしくするものではないでしょうか。こんな時にこそ、いわば女同士としての共同戦線を張るべきなのではないかと思うのです。ところが、私の姉ときたら、兄の身勝手には手を貸しますし、間違いなく兄と示し合わせてのことなのでしょうが、どうやら、皆が集まっておりますところで、動かしようのない日取りを指定しなければいけないだの、もし言うことを聞かないようなら、財産も家族全員の愛情もすべて失うことになると言い渡すべきだのと（それも、何かにご執心の時の、姉独特の入れ込みようなのだそうですが）言い張っているらしいのです。

姉もそこまで立ち入る必要はないのです。姉が口を挟まなくとも、兄の力だけで十分な効果が出ているのです。と申しますのも、家族全員が手を結び、私一人を除け者にするような方法を兄は見つけ出したのです。何か腹を立てるような原因が新たに出てきたのでしょう。それとも、ラヴレースさんについての新しい情報でもあったのでしょうか（それが何かは私にも分からないのです）、自分たちの考えを通すために、家族の者たちが互いに署名入り文書で団結を誓ったか、あるいは、これから誓いを立てようとしているのです［何ということでしょうね。どうしたら良いのでしょうか］。いわゆる〈父親の権威〉とやらを守るためですが、ソームズさんのほうに味方し、ラヴレースさんにつきましては、道楽者ですし、一族に歯向かう者ということで、敵に回すつもりなのです。もしそうなら、きっと私のことも敵視することになりましょう。何とも考えのない人たちです、皆も。いつま

でも遠ざけておきたい二人の人間を、同じ利害関係で結び付けようというのですもの。

暇を出されました執事があの方について報告しております事柄は、確かにひどいものでしたし、フォーテスキュー夫人のお話でも、そのひどさが確認出来るばかりか、もっと悪い人間のように考えるべき余地もございます。でも、身内の者が耳にいたしました〈もっと凄い話〉というのが、（ベティ・バーンズがハンナに話しましたところでは）あまりにも人の道から外れた性質のものですから、あの方は最悪の人間であることが証明されるわけです。「あんな人、どうでも良いでしょう。私とは関係ないことよ」と、もう少しでそんな言葉を口に出してしまうところでした。あの方なんて、このソームズさんのことさえなければ … まったくのところ、結婚話が持ち込まれておりますお相手として見ます時、この男性のことはどれほど厭わしく感じられることでしょうか。

同時に、家族の者たちは全員ラヴレースさんを恐れてもいるのです。なのに、平気であの方を挑発するのですからね。あの方との文通を続けねばなりませんのは、皆のためのことですのに、本当に難しい立場に追い込まれてしまったものです。皆が力ずくで事を運ぼうとし続けました挙げ句、私自身のために文通が必要となるような立場に追い込まれてしまう、などといったことは、何としても御免蒙りたいものです。

でも、きっと皆のほうで折れてくれるものと思います。私のほうからはどうしても譲るわけにまいりませんからね。

私は思うのですけれど、だれよりもおとなしい人こそが、挑発行為に晒されました場合には（いわれもなく、非情な挑発を受ける場合ですが）、だれにも負けない断固とした態度を取るものではないでしょうか。軽々しく決断するということがありませんので、その慎重さのゆえに、なおさら揺るぎない心を持つことが出来るわけです。それに、問題点がはっきりとしていて自明な場合には、わざわざ論議をしたり、言い争ったりする人などおりませんからね。

何かしら不安がよぎりますし、邪魔も入りましたので、取り急ぎ、これにて結びとさせていただきます。

自分自身にもまして貴女のもの

クラリッサ・ハーロー

手紙　十五

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

三月三日　金曜日

二通のお手紙を一度に受け取りました。お身内の方々はどうしても貴女に結婚してもらおうと思っていらっしゃるのですから、貴女ほどの立派な方が、厚かましさ以外には口実にするものもないようなつまらない人たちから次々に縁談を持ち掛けられておられるというのは、本当に残念な話ですわね。

こういった図々しい人たちも、お宅の一部の方々の目には、今触れましたとおりのつまらない姿には見えていないことになりますが、それは、その方々にとりましては、他の人間が受け止めますほどには、図々しい連中の欠点も目立たないからなのです。では、その

原因は何なのでしょうか。ひとつ思い切って申し上げてみましょうか。その連中がご自分の基準のほうに近いからですわ。もしかいたしますと、結局は、〈慎み深さ〉が一役買っているのかもしれませんね。何故って、ご自分たちの姪御さんなり妹さんなりのことを［もっと尊い関係の方々には触れずにおきます。叱られてしまいそうですからね］天使だなんて考えたりはなさらないでしょうからね。

それにいたしましても、希望を胸に、あるいは、何か願望だけには終わらないものを胸に抱きながら、クラリッサ・ハーロー嬢を仰ぎ見る勇気を持っているような男の人は（持ち合わせて当然な内気さを、ほんのわずかでも備えた人ですが）、一体どこを捜せば見つかるのでしょうね。大胆で自惚れた人たちは、自分の欠点に気づかないものですから、大それた願いを抱くのです。一方、本当に立派な人たちは控え目なものですから、貴女への崇敬の念に打たれるあまり、自分の動機について釈明も出来ずにいるのです。こうして、シムズさん、バイロンさん、マリンズさん、ワイアリーさん（この人たちの中では最高ですね）、そして、ソームズさんみたいな連中が、代わる代わる貴女のところに乗り込んでくるということになるのです。ご一族の残りの方々を拝見いたしますかぎりでは、お宅との縁組の首尾について絶望する必要はないという恥知らず連中ですが、ただ、貴女がお相手の場合ですと、何とも許し難い図々しさというものではないでしょうか。

でも、抵抗はすべて無為に終わりそうな気もするのです。貴女はあのいやらしい男への生贄として捧げられねばならないのですし、おそらく、そうなることでしょう。貴女のご家族のことは存じております。あの男が撒いたような餌に抗いますのは、お出来にならないはずです。あゝ、私の大切な、大好きなお友達 … これほど魅力的な特色、これほど見事な美質が、こんな結婚のために埋もれてしまって良いものでしょうか。叔父様が母に向かって話しておられたことですが、貴女は皆さんの権威に異を唱えるような真似をなさってはいけないのだそうです。〈権威〉というのですからね。お生まれになったのがたまたま三十年早かっただけの、心の狭い人がお使いになると、この言葉もずいぶんと重みを持つものですね。私が申し上げておりますのはおじ様たちのことですよ。父親の権威はもちろん神聖なものです。でも、両親の場合も、やはりなさることにそれなりの根拠があって然るべきなのではないでしょうか。

ところで、この一件でのお姉様らしくもないベルさんの振舞いについてですが、別に驚くことではないと思います。横柄なお兄様の心を捉えている数々の動機に、私のほうからも一つ付け加えさせていただきますが、お姉様を駆り立てております原因も、それですっかり説明がつくものと思います。お姉様の〈肉眼〉が、ご自分では軽蔑しているように装っておられる相手、そして、お姉様のことを完全に軽蔑していると考えて間違いのない相手の、その容姿や物腰に〈最初から〉魅了されておりました点は、貴女もすでにお認めになりました。でも、お姉様が〈今なお〉あの男をだれよりも愛していらっしゃることは教えて下さいませんでしたわね。ベルさんの場合には、プライドそのものの中に卑しい心が含まれているのです。プライドと共に卑しさが頭をもたげ、両方が手に手を取って進むわけです。おまけに、ベルさんほどプライドの高い人などどこにもおりませんからね。お姉様はお気に入りのベティ・バーンズ相手に、あの男への恋心、不安な日々や眠られぬ夜のこと、そして、恋情に根差した復讐心のことまで話してしまわれたのです。召使の舌先に身を任せてしまわれるなんて … 可哀相な人ですね。でも、狭量な心の持ち主というも

のは、大きな心の持ち主と同じように、同類を探し出しては交わり合うものなのです。ただ、極秘ということでお姉様はあの娘に打ち明けられたのです。その結果は、似たような折に、あのラヴレースが女性を小馬鹿にしてぬけぬけと言っておりました「女性の十八番の回り道」を地で行くようなことになってしまったのです。ベティが（打ち明け話の相手として認められたのが嬉しかったのでしょうし、ラヴレースが心変わりをしたものと思い込んでいますから、それを詰る機会が出来たことも嬉しくて）心を許している仲間の一人に漏らし、この仲間が、やはり内緒のこととした上で、ロイド嬢のところのハリオットに教え、ハリオットはロイド嬢に、ロイド嬢が私にと、巡り巡って来たわけでして、今度は私が貴女にお知らせする番というわけですが、どうなりとお好きなように取り扱っていただきたいと思いますわ。

これでもう、ベル嬢が優しいお姉様というより、無慈悲なライバルであることがお分かりになりましても、驚いたりはなさらないことでしょう。また、貴女に向かって投げつけられました「妖術」や「セイレーン」といった言葉のことや、貴女をソームズへの生贄として捧げる日をしきりに決めたがっておられることなど、要するに、お姉様がお見せになるあらゆる種類の無礼や乱暴な振舞いにつきまして、貴女にも説明が付くことでしょう。

もしも、ライバルの妹さんを、当の妹さんが大嫌いだという男に嫁がせることが出来るなら、そして、ご自分が（望みのあるなしは別にいたしまして）愛していらっしゃるのだけれど、妹さんのほうでも好いているのではないかと疑っておられる、その相手の男と妹さんが一緒になられるのを妨害することさえ出来れば、お姉様にとりましては、妹さんに対してはもとより、ラヴレースに対しましても、気も晴ればれとするような復讐が出来るというわけなのです。

報いられない恋情ゆえに憤慨し、復讐心に駆られております人々によって、毒薬や短剣が活用されることも多かったのです。だといたしますと、このような場合に血のつながりが何の力も持たないといたしましても、また、お姉様が姉としての立場をお忘れになるといたしましても、どこに不思議があるでしょうか。

以上がお姉様の心の奥に隠されている動機だと思うのです（プライドが絡みまして、そのことを否認しようといたしますので、お姉様としては、ますます神経に触るというわけなのです）。また、この動機は以前からの嫉妬心と結び付いているのでしょうし、ご家族の皆さんの中でどんどん勢力を持ち始めているお兄様からの力添えもあると考えて良いでしょう。お兄様のほうでは、ご一族の〈利益〉（いつもその点に囚われておられますが）という思惑から、皆さんの間での貴女の評価を台無しにしてしまおうというのです。お二人の言葉には皆さんが耳を貸してくださいますし、貴女のおっしゃることやなさることをすべて捻じ曲げて伝えたり、決闘のことやラヴレースの不品行ぶりについてくどくどとお話しになるのも、そうするお気持ちがあるというだけではなく、そうして構わない立場にお二人がいるということなのです。おまけにお宅の皆さんは、あのいやらしい男から持ち込まれました縁談に心を奪われ、あの男にすっかり夢中なのですもの。こういったことすべてを考えますと、貴女のことが心配でたまらなくなってしまうのです。まったくの話、どうしたらご自分のお立場を守ることが出来るのでしょうね。間違いもなく（残念ながら、あまりにも確かなことですが）、貴女のような繊細なお気持ちなど、皆さんで押し潰してしまわれることでしょう。反対されることには不慣れでいらっしゃいますからね。そして、（「ガ

トに告げるな」(九)といったところですが)、貴女はソームズ夫人にならなければいけないということなのです。

ところで、以前の私の手紙の一つでお話しいたしました、「妹が姉の恋人を奪い取った」という噂(ア)の件ですが、その出所がどの辺りか、もう貴方にも容易に察しがお付きになるでしょう。あのベティが、ラヴレースと貴女のどちらもが、あの娘の仕えております若い女主人に礼を尽くさなかったといった趣旨のことを、他の話と一緒にこっそり漏らしてしまったのです。やっと現れました恋人を哀れなベラから奪い取ってしまわれるなんて、貴女も結構惨いことをなさいますわね。しかも、ようやくご自分の感情を満足させることが出来るというばかりでなく、くつわ鎖など使わずに絹の手綱で男の方を操縦するよう、蓮っ葉な女たち(イ)(他ならぬ私めを念頭に置かれてのことです)に今こそ模範を示して見せようと、お姉様が得意満面になっておられた矢先のことですものね。

こうしてみますと、皆さんがあの見下げ果てたソームズの擁護に固執なさること、そして、貴女のご気性の穏やかさや、皆さんのご愛顧や貴女ご自身の評判を大切になさるそのお気持ちに期待を寄せておられることは、疑うべくもないように思われるのです。それだけに、おじい様から遺贈されました地所は手放したりなさらないようにと以前申し上げたことがございましたが、あの忠告は正しかったのだと、前にもまして強く感じている次第です。そうしてくださっていたなら、お兄様とお姉様も、少なくとも上辺では貴女を大事にしてくださったことでしょうし、お二人のあのように狭量な心から今貴女に向かって噴き出しております妬みや悪意にいたしましても、何とか表に出さないようにしていただけただろうと思うのです。

この点につきまして、もう少し付け加えさせていただきますが、貴女はお気づきではないのでしょうか。お兄様が大変な財産を手になさってからは、そして、貴女が皆さんのご意向に従わないのなら、例の地所の権利はご自分たちの間で保持し続けようという、そんな気持ちを貴女が一部の方たちに起こさせました後では、お兄様の影響力がはるかに貴女を凌ぐようになったということにです。

本分を忘れない、そして、称賛に値する貴女の動機のことを私は承知いたしておりますし、貴女をあんなにも愛していらっしゃるお父様ですもの、お父様にお任せしても構うまいと、だれもが考えたことでしょう。でも、あの地所を貴女が現実に所有なさり、あの土地に居を定めてそれ相応の暮しをしておられたら(貴女も提案なさいましたように、あの慎重なノートンさんに一緒に住んでいただけましたら、貴女の若さも口さがない連中の批判に晒されることはなかったと思います)、その場合、確かにあの時は貴女に地所を譲るのが不服そうでしたし、一人息子としてのご自分の権利のように見做しておられるご様子でしたが、お兄様は策を弄して地所を手に入れようとなさったとお思いでしょうか。少し前にもお話ししたことがございますが、貴女の試練は貴女の思慮分別に釣り合ったものに他ならないように思います(カ)。でも、貴女が相手になさっている人々は、ひどく気性が激しくて心根の卑しい人がいるかと思いますと、暴君や専制君主のように頑固一徹な人もいるわけですから、首尾よく難局を切り抜けることがお出来になるといたしますと、貴女は女性以上の存在だということになりましょう。実際、納得の上でソームズ夫人になることが

(ア)二頁。(イ)六頁。(ウ)二頁。

お出来になるのでしたら、万事は丸く収まるでしょうし、世間の人たちも、貴女の盲目的な孝養心と私心を離れた忍従のお姿に接して、改めて貴女への称賛の念を強めることになりましょう。

ラヴレースさんがご自分のところの小作人に施された慈悲の例や、叔父様の小作人に与えられたちょっとした贈物のことにも触れておられましたが、私は好ましい話と受け止めました。フォーテスキュー夫人も、あの男が最高の地主であるということは認めておられるのです。ですから、貴女があの男に対して少しは好い印象を持っていただくのも大切なことだと判断したのでしたら、私もその点をお知らせしていたかもしれませんね。要するに、あの男にも良いところはございますから、五十の坂を越した頃でしたら、まあまあの人物になるのではないかとも思うのです。でも、それまでは、あの男の相手を仰せつかる女の人にしてみますと、それこそ災難というものではないでしょうか。もしかいたしますと、女性たちという言い方のほうが当たっているのでしょうね。その頃までには、半ダースくらい女性を泣かせているかもしれませんもの。ところで、言いかけていた話に戻りますが、例の可哀相な男が大喜びで叔父様を呼び出し、いただいた二ギニーを借金の一部としてその場で支払ったということですから、小作人の感心な正直さについては褒めてやるのが当然だと思います。でも、地主さんについては何と申したら良いのでしょう。その男が本当に困っていることを知っていながら、お金を受け取るようなことをなさったのですからね。しかも、ラヴレースさんがおられる間は一言もお触れにならなかったのに、お帰りになるとすぐに話題にされ、あの男の正直さを褒めておられたということですもの。このとおりのいきさつだといたしますと、その地主さんが貴女の大切なお身内の方でなければ、こんな男は思い切り軽蔑してやるところです。もっとも、誇張されているところもあるのかもしれませんね。欲の皮の張った人というのは、だれからも悪く言われるものなのです。そして、それが当然のことにも思われます。皆さんから良く言われることよりももっと大切にしているものを手元に置きたがってばかりいるのですからね。でも、そのどちらを持つ資格もございませんのに、どちらをも欲しがる人たちこそ、本当に強欲なのだということでしょう。

次のお手紙を心待ちにしております。これまでどおり、出来るかぎり詳しくお願いいたしますね。貴女のことや、貴女の問題に関わりのあります事以外には、何も考える気がしないのです。いつも、いついつまでも、愛を温めております私ですもの。

貴女の
アナ・ハウ

手紙　十六

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

［前掲の手紙を受け取る以前のもの］

三月三日　金曜日

あゝ、大好きなお友達、ひどく心が乱れております。一つまた一つと試練が降り懸かってまいりますし、話し合いにつぐ話し合いなのです。それにいたしましても、ある男性の

ことをこの世のだれよりも嫌っておりますのに、一体どのような法律が、どのような儀式が、そんな心を自由に扱います権利を男の人に付与するというのでしょうか。

私の有利になりますよう、母がうまく説得してくれることを願っておりますが、貴女には一部始終を述べておきましょう。徹夜の仕事になるといたしましてもね。書くことが山ほどございますし、お望みのとおりに詳述しようと思うものですから。

前回の手紙は、不安を抱きながら結びとさせていただきました。母と叔母とが話し合っておりましたことに原因があるのですが、その一部をハンナが耳にしたのです。その詳細をお知らせする必要はないものと存じます。と申しますのも、ほんのわずかな時間、母と私の間で交わされました別の話し合いのことをお話しいたしますが、すべてはその中に含まれていることだからです。早速、始めることにいたします。

今朝、朝食の用意が出来たというので階下に降りて行きましたが、昨日の午後にハンナが教えてくれた話のこともあり、不安な気持ちで一杯でした。それでも、力添えのお願いをすべく、母に訴える機会が巡ってまいりますことを望み、朝食後に母が自室に戻ります際にひとつ試してみよう、などと考えておりました。ところが、不運なことには、母と姉に挟まれた席を占領しまして、あのいやらしいソームズさんがまことに厚かましい顔付きで座り込んでいるのです。それにいたしましても、好きになれない人というのは、どんなことをしても、私たちの気に入ることはないものですね。

おとなしく座っていてくれましたなら、何ということもなかったのでしょうが、あの前屈みで肩幅の広い男はわざわざ立ち上がって、私のために空けてありました椅子のすぐ横の椅子のほうへ、勿体ぶった足取りで向かって来たのです。

私は、自分の椅子に向かうような仕種で、その椅子を遠ざけてやりました。そして、腰を下ろしたのですが、きっと荒っぽい座り方だったはずです。聞いておりました話のことで頭が一杯だったのです。

でも、これだけではあの男をひるませるのに十分でなかったのです。自信満々で、とても図々しい、人の顔をじっと見据えてくるような手合いです。まったくの話、おそろしく自信家なのです。

遠ざけた椅子を掴むと、私の傍に引き寄せ、あの醜い、重い身体で座り込んだものですから、私のフープ(二〇)が押し付けられてしまいました。とても腹が立ちましたので(前に申しましたとおり、聞いていた話で頭の中が一杯だったのです)、私は別の椅子のほうに逃れました。ひどく自制心に欠けておりましたことは認めます。兄と姉にしてみますと、もっけの幸いです。おそらく、〈いただき!〉といったところだったでしょうね。ただ、我知らずにやってしまったことなのです。避けられないことでした。自分でも何をしているのか分からなかったのです。

父は甚だしく不快に感じている様子でした。立腹いたしますと、父ほど怒りが顔に出る人もまずおりません。「クラリッサ・ハーロー!」　父が大声で叫びました。後に続く言葉はございませんでした。「はい、お父様」と、震える身体で膝を曲げ、お辞儀をしながら(まだ座り直していなかったのです)、私は答えました。そして、椅子をあの男のほうに寄せて腰を下ろしたのですが、顔が火のように火照っておりました。

「ねえ、良い子だから、お茶を入れて頂戴。さあさあ、私の隣に座って、お茶を入れるのよ」　母が優しく声を掛けてくれました。

私はいそいそとあの男が離れた席へ移りました。このように優しく仕事を与えてもらいましたので、間もなく気持ちも落ち着いてまいりました。そして、朝食の合間に二、三度ソームズさんに質問をして差し上げました。そんなことをするつもりなどなかったのですが、ただ、父に機嫌を直してもらいたかったのです。「思い上がった人間だって、おとなしくさせることは出来るのよね」　勝ち誇って嘲るような態度でしたが、姉が肩越しに囁きかけてまいりました。でも、私は相手にせずにおりました。

母はどこまでも優しく、親切にしてくれました。一度、お茶を気に入ってもらえたかどうか尋ねましたところ、小さな声で（もう一度優しく呼び掛けながら）、私のすることはすべて気に入っている旨を答えてくれたのです。心を奮い立たせてくれますこの優しさに触れ、私はすっかり得意になってしまいましたし、父とのことも無事に収まったものと考えておりました。父のほうでも二度、三度と優しく話し掛けてくれていたからです。

このようなこと、貴女を煩わせますには些細な出来事ですわね。ただ、これからお聞かせいたしますが、こういったことがもっと重大な事柄のきっかけになっているのです。

いつもどおりの朝食の時間が終わります前に、父が、話したいことがあるのだと言いながら、母を伴って退室いたしました。すると、姉が、そして、その次には叔母が（一緒に食卓についていたのですが）去って行きました。

兄は何かしら馬鹿にしたような態度をしておりました。私にはそれがよく分かったのですが、ソームズさんにはまるで通じないようでした。兄もようやく自分の席から腰を上げまして、「おい、お前に見せたい面白い物があるんだ。取って来よう」と言いますと、ドアをぴったりと閉めて出て行きました。

何故こんなことをするのか、察しはつきました。私が立ち上がりますと、あの男は、何か切り出そうというのか、咳払いをして立ち上がり、私のほうを目指す格好で、その偏平足を踏み出そうとしておりました［本当に、あの男は立ち居振舞いのすべてが嫌悪の情を誘うのです］。私は、「面白い物を取ってきてくれるとのことでしたが、兄の手間を省いて上げようと思います」と申しました。膝を曲げて会釈をすると、「それでは、失礼いたしますわ」と言ったのです。あの男は、「マダム、マダム」と二度叫び、惚けたような顔付きをしておりました。それでも、私は部屋を抜け出し、嘘をついたことにならないよう、兄を捜しにまいりました。ところが、それほどぱっとしない空模様でしたのに、兄は姉と連れ立って庭へ散歩に出掛けていたのです。見え透いた話ですが、兄は〈面白い物〉を私に預けていったわけです。他の物を見せてくれるつもりなどはなかったのです。

やっと自室に戻ったところで、母に聞いて欲しいことがある旨を、ハンナに頼んで伝えてもらおうと考えておりますと（朝食の席で優しく扱ってもらえましたので、一層勇気づけられたわけです）、母の世話をしておりますショーリーが、控えの間に母がいるので、会いに来るようにとの言い付けを届けにまいりました。

ハンナの話では、父が見るからに立腹している表情で、その部屋から出て行ったばかりだというのです。そんなわけで、母に話を聞いてもらいますのも、強く望んでいたことでしたのに、負けず劣らず恐ろしくなってしまいました。

それでも、私は降りて行きました。ところが、母が話そうとしております話題のことが気掛かりなものですから、母の傍にまいりましても、身体は震えますし、傍目にも分かるほど心臓が波打つ始末でした。

母は私の憂慮ぶりに目を留めました。母は腰掛けたまま優しく両腕を差し延べ、「良い子ね。キスをしてちょうだい」と、微笑みを浮かべながら言ってくれたのです。雲間から差す日の光のような微笑みでしたが、生まれつき穏やかな母の顔立ちも曇りがちだったのです。そして、「私の大事な宝物はどうしてこんなに取り乱しているのかしら」と言っておりました。

話の前置きにこんなにも優しくされますと、先ほどの親切さのことも重なりまして、私の懸念が確かなものに思えてまいりました。苦い丸薬は衣で包む必要があると、母は見ていたのです。

「あゝ、お母様」　私が口に出来ましたのはそれだけでした。両の腕を母のうなじにしっかりと回し、その胸に私は顔を埋めました。

母は、「さあ、さあ、あなた、控えてくださいよ、人の心を動かすその力はね。でなければ、あなたの前では自分自身が当てにならなくなりますからね」と言っておりました。私の涙が母の胸を伝いましたが、母も私のうなじを濡らしていたのです。

母の口から溢れ出ました優しい言葉の数々ですのに、そのすべてが空しい響きを残すことになってしまいました。

「さあ、あなたのその素敵なお顔を見せてちょうだい。一番の良い子だと思っているのよ。私のクラリッサ・ハーローでしょう。そうよ、だれよりも愛しく思っているわ、あなたのことはね。だから、いつもの愛らしいお顔をお母さんのほうに向けてちょうだい。こんなに泣きじゃくって　…　どうしてなの。心配している言い付けのことがそんなにも心の重荷になっているのかしら。それで、お話をする前から　…　でも、嬉しくってよ。私の話さなければならないことに、あなたは見当がついているというわけね。本当に気の進まないまま、あなたにあることを知らせるお役目を仰せつかったのだけれど、その手間が省けたのですからね」

そう言うと、母は立ち上がり、椅子を一つ自分の椅子の傍に引き寄せ、私を座らせてくれました。何を切り出されるのか心配でたまりませんでしたし、いかにも母親らしく優しくしてくれますのも有難く、私はただおろおろと涙にくれていたからです。咽び泣きの声だけが、依然として、私のたった一つの言葉だったのです。

それから、母は椅子をもっと近づけ、私の首のところに両腕を回してくれました。赤く染まり、涙に濡れた私の頬が母の頬にぴったりと重なりますと、「いいわね、私のほうから話しましょうね。口を開いてはもらえないようですから、これから私の言うことをしっかりと聞くのですよ。おとなしくね」と、母は話し出したのです。

「家族の和ということを考え、私が日頃からいろいろと差し控えたり耐え忍んだりしていることは、あなたにも分かっていますね。お父様は立派な方ですし、皆のためを考えておられるのです。ただ、決して指図を受けようとはなさいませんし、まして、説得されるようなことはない方です。何ごとにつけても、私がやむなく自分の考えを引っ込めるのを見て、あなたも時々は同情してくれていたようですね。お気の毒に、その分、お父様は悪く言われ、私の評判のほうが上がってしまうのです。でもね、こんなふうに褒められるのは、出来ることなら願い下げです。お父様にとっても私自身にとっても、ひどく割りの合わないことになりますもの。あなたは親孝行な娘です。分別のある賢い子です（母はこんなことを言ってくれましたが、疑いもなく、私がそのとおりにするのを期待しての言葉で

す)。ですから、この上私を困らせるようなことはしないはずです。私がこれだけ辛い思いをして守っている家族の和を、我が儘を言って壊したりはしませんね。服従は犠牲的行為にも勝るものなのですよ。お願いね、私のクレアリー・ハーローでしょう。私は取り越し苦労をしていたのだと言ってほしいの。私の心を喜ばせてほしいのよ。まあ、困っているのね、あなたは。戸惑っているのでしょう。苦しんでいるのね［母は腕を外して立ち上がりましたが、母自身がひどく動揺しておりますのを気づかれたくなかったのです］。少し独りにして上げましょうね。いいえ、返事はいいのよ［私は何とか話し掛けようとしておりましたし、母が優しい頬を離したとたん、私は跪き、哀願するように両の手をしっかりと握り合わせて差し上げていたからなのです］。あなたの愛らしいお小言に（こんな言い方を母はしてくれたのです）耳を貸す用意は出来ておりませんからね。気持ちが落ち着くまで独りにして上げましょうね。それから、これは命令ですよ。本当に母親らしくこのように優しくしているつもりですが、すべてが無駄に終わることのないように願いますよ。でなければ、私からの祝福はないものと思ってくださいね」というのです。

そう言うと、母は隣の部屋へ引き下がりましたが、両の瞼を拭いながら出て行ったのです。母の気持ちは隅の隅まで分かりましたから、私の目にも止めどなく涙が溢れてまいりました。

すぐに母は戻ってまいりましたが、先ほどよりは平静さを取り戻しておりました。

私はなおも跪いたまま、母の座っておりました椅子に顔を埋めていたのです。

「顔を上げてちょうだい、クレアリー・ハーロー。腹を立てて、口もきいてくれないのかしら」

「とんでもございません、お母様。いつだってお母様のことは尊敬申し上げているのですもの」　こう言うと、私は立ち上がり、片膝を折って身を屈めました。

母は私を立ち上がらせました。「お止しなさい。私に跪くのであれば、親を敬い、言い付けに従う気持ちからでなければなりません。曲げてほしいのはあなたの膝ではなく、心のほうですよ。もう動かしようもないことです。ですから、間もなくお父様がお見えになりますから、お迎え出来るよう、心の準備をするのです。お父様があなたを迎え入れようとしてくださっているお気持ちも考えて差し上げるのですね。いいですか、この十五分間で決まるのです。私が今後とも穏やかに暮らして行けるのかどうか、家族全員の望みが叶えられるのか、それに、乱暴者の手からあなた自身が安全でいられるのか、ということもです。それから、もう一つ命令ですが、私の祝福を失いたくないなら、ソームズさんの奥さんになることを考えるのですね」というのです。

心臓をぐさりと抉られた感じで、私はその場に崩れ落ち、気を失ってしまいました。意識が戻りますと、ハンナの腕に抱かれておりました。姉に仕えるベティが、嫌々開きました私の片方の掌を広げておりましたし、服の紐は断ち切られ、下着には鹿角精の匂いが染み込んでおります。母の姿は見当たりませんでした。もっとひどいことを言われたとしても、あの忌まわしい名を持ち出すのはまだ控えていただくとか、もう少し前置きをするなり遠回しに言うなりしてくださっていたら、その忌まわしい響きを耳にしましても、これほど感情を露にすることはなかったものと思います。ともかく、こんなにも慕い、心から尊敬しております母の祝福を失わないためには、ソームズ夫人になる心積もりをするよう求められたのですから、あまりにも恐ろしい通告だったということです。

ショーリーが言伝を携えてまいりました（あの娘らしい仰々しい言い方でした）。「お嬢様、お母様はお嬢様のお加減のことを心配しておられますよ。一時間後に、もう一度お出でいただきたいとのことです。それから、その際には、すべてに亘りまして、孝養心をお示しくださるよう願っておられる旨を伝えよ、との仰せでした」というのです。

返事はいたしませんでした。どのような言葉を口にすることが私に出来たでしょう。ハンナの腕に支えられ、自分の部屋に引き籠もりました。私がこの一時間の大部分をそこでどのように過ごしたか、お察しいただけるものと存じます。

約束の時間が過ぎます前に、母のほうから私のところに来てくれました。

「私は大好きなのですよ、このお部屋に来るのが。あらあら、落ち着くのです。興奮してはいけません。あなたの母親じゃありませんか、私は。あなたのことが大好きで、何でも聞いて上げている母親じゃありませんか。そんなに取り乱すと、私まで心が乱れてしまいます。あなたの喜ぶことだけを願っているのですよ、心配を掛けるようなことはしないことです。さあ、良い子ね、控えの間へ参りましょう」と、母の優しい言葉でした。

母は私の手を取ると、先に立って進み、私を腰掛けさせました。母のすぐ傍にです。そして、私の体調のことを尋ねてから話し始めたのですが、私がこれまでの時間を無駄にすることなく、異存もすべて克服したものと考えているような口調でした。

元々私は内気な質なので、辛い思いをさせないためにも、すべての段取りについて父と自分が引き受けることにした、と母は教えてくれました。

「最後までお聞きなさい。あなたの話はそれからにしてちょうだい」　私は一言聞いてもらいたくて、口を挟もうとしていたのです。「ソームズさんがどんな御用でお訪ねになるのか、知らないわけはありませんね　…　」

「あゝ、お母様　…　」

「終わりまで聞いてからにしてちょうだい。確かに、私の希望どおりの人とは申せませんよ。でも、正直な人ですし、不品行も見当たりません　…　」

「不品行は見当たらないとおっしゃいましても、お母様　…　」

「これ、終わりまで聞くのです。あの人に対するあなたの振舞いもこれまではまずまずでした。私たちも喜んでいるのですよ。あなたが　…　」

「ねえ、お母様、まだ話しては　…　」

「じきに終わります。あなたは貞淑で信仰心の篤い娘ですから（母はこんなふうに言ってくれたのです）、道楽者を好きになるはずはないと思いますし、お兄さんのことを本当に大事に思ってくれているのでしたら、もう少しでお兄さんの命を奪うところだった男、あなたのおじ様たちを威したり、私たち皆に公然と反抗したりするような男との結婚は願わないはずです。これまで六回か七回、あなたの言うことを聞き入れてきました。私たちといたしましては、あのような不埒者からあなたを守りたいのです。話してほしいのは（私には知る権利がありますからね）、あなたはこの男のことをだれよりも好いているのかということです。まさか、そんなことはないでしょうね。仮にもあなたがそのとおりだと言えば、家族全員が惨めな思いをすることになるのですからね。でも、やはり話してもらいましょう。あなたの気持ちはこの男に惹かれているのでしょうか」

もしも、そのようなことはないと申しました場合、どのように勘繰られるのか、私は分かっておりました。

「迷っていますね。返事はないわけですね　…　答えられないというのですね」　母は立ち上がりました。「分かりました。もうこれからは、あなたを好意的に見るようなことは決して　…　」

「あゝ、お母様、お母様、どうかお怒りにはならないでください。耐えられなくなってしまいます。お望みどおりにお答えしたら、どんなふうに勘繰られてしまうのか、そのことが気掛かりなのです。でなければ、決して迷ったりいたしません。そんな必要などないのですから。でも、どのように勘繰られましても、お怒りを買うのは嫌ですから、お話しします。自分自身の気持ちですもの、分からないはずなどありません。はっきりと申します。だれかに心を惹かれているようなことはまったくないのです。大好きなお母様、どうか教えていただきたいのです。私のこれまでの振舞いのどこがいけなかったというのでしょうか。まるで軽率な小娘にするように、結婚を強いられているのですもの。私を守るためとのことですが、一体どんなことからなのでしょうか。お母様、お願いです、お母様にこそ私の評判を守っていただきたいのです。どのような男の方とであれ、結婚はまだ望んでいないのですから、お母様のクラリッサが無理に結婚を急がされるようなことだけは止めていただきたいのです。しかも、そうしなければ、クラリッサは勝手に結婚し、一族の面目をつぶすことになるなどという、ただの憶測でやっておられることなのですから」

「分かりましたよ，クレアリー［と、私の訴えをいなしながら］、あなたの心を占めている人などいないということであれば　…　」

「あゝ、大好きなお母様、いつもの寛容なお心にすがらせてください。私の気持ちも認めていただきたいのです。先ほども迷ってしまいましたが、そのようなお考えで急き立てるのはご勘弁願いたいのです」

「口を挟んでもらいたくないのです、クレアリー。この件では、これまでの私の振舞いを通して、本当の母親らしい優しさというものを知ってもらえたはずです。このお役目をお引き受けするに当たっても、少々不本意なところがあったことはあなたも気づいているでしょう。あの方も完璧というわけではありませんし、あなたの掲げる男性の理想像が大変高いものであることも承知していますからね」

「お願いです、お母様、もう一度だけ口を挟ませてください。それでは、お母様が匂わせておられる男性のために、私が何か無分別なことをしてしまう恐れがあるということなのでしょうか」

「また話の腰を折られましたね。あなたに問い質されたり、議論の相手をしたりしなければならないのでしょうか、この私が。こんなことがよそでは通らないのを知っていますね。あなたは分かっているのです。じゃあ、何故なのです、このように私を議論に巻き込もうとするのは。狡い子ですね。私が大目に見て上げるものだから、構わないと思っているのでしょう。それ以外に理由はありませんね」

「申し上げても構わないことは何でしょう。しても良いことは何なのでしょう。議論には耐えられないということですと、一体どのような主張なのでしょう」

「またですか、クレアリー・ハーロー」

「お許しください、お母様。お母様の言い付けに従うことをいつも誇りにしてきましたし、喜んでそうしてまいりました。でも、あの人をご覧になれば、あの不快な姿だけを見ましても　…　」

「あなたがだれの姿を目に浮かべているのか、これで分かりましたよ、クレアリー。今のソームズさんは〈比較的〉に不快だというだけの話ですね。もう一人の男性がはるかに見てくれの良い格好をしているので、その分だけ不快だということなのです」

「でも、お母様、あの人の行儀作法についてもそっくり同じことが言えるのじゃないでしょうか。あの人の容姿は心の様子をそのままに表しているのではないでしょうか。私の心がひとりでに逆らってしまうのです。この人だけは許していただきたいのです。そうしていただければ、もう一人の方は私にとって何の意味も持っていないのですし、今後ともそのとおりだと思うのです」

「そのままお父様に相談してごらんなさい。こんなふうに話し掛けられて、お父様が黙っていらっしゃると思うのですか。私の気持ちを大切にしてくれると思うから、お願いしているのじゃありませんか。私のほうではいろいろ我慢をしているのですよ。このお役目にしても、あなたが簡単にウンと言ってくれないことは分かっていましたから、このとおり苦労しているのです。なのに、あなたのほうでは何一つ譲る気はないのですか。お話のあるたびにあなたは断ってきましたね。だれのためのことだったのか、私たちに言い当てられたくないのなら、承諾することです。承諾しなければいけないのですからね。でなければ、家族全員に公然と盾突いていると見られてしまうのですよ」

こう言うと、母は腰を上げ、私を残して出て行こうといたしました。でも、ドアのところで立ち止まり、こちらを振り向くと、「下へ降りても、あなたの様子のことは黙っていますからね。すべての点を考えるのですよ。決まったことなのです。お父様と私からの祝福を大切に思っているのでしょうし、家族全員の満足ということも大事にしているのでしょうから、お話をお受けするよう決心するのです。しばらく独りにして上げましょう。また戻ってまいりますからね。私が望むとおりの姿を見せてちょうだいね。きっとですよ。そして、あなたの心を捉えているものはないというのでしたら、親孝行のほうに専念することです」と言い残して行ったのです。

三十分ほどで母が戻ってまいりました。母が目にいたしましたのは、私の泣きじゃくっている姿でした。私の手を取ると、「いつになっても、他の人の言い分を聞いて上げるのが私の役割なのですね。私のやり方のせいで、どうやら、必要もないほどあなたの抵抗に身を晒してしまったのでしょうね、きっと。最初から、断られるとばかり思っていたものですから、あなたには甘いこともあって、自分から断られるように仕向けてしまったわけです」と言っておりました。

「どうか、お母様、どうか、そのようにはおっしゃらないでください」

母は言葉を続けました。「この言い争いのきっかけが私自身から出ていることなのでしたら、そして、承諾するのを免じて上げることが私の力で可能なのでしたら、私に対してはどんなことが出来るのか、あなたも分かり過ぎるほど分かっているはずです」とです。

ねえ、ハウさん、気立ての好いことでも、思慮分別のあることでも評判の高い母のような女性が、人の妻としてはまったく権限を持てないばかりか、自分では無理強いしてはいけないと考えております、とても重大な事柄を実現いたしますために、進んで一役買うようなこともしなければいけないというのですから、そのような姿を目にいたしまして、なおも結婚を望むような人がどこにいるというのでしょうか。

母が続けました。「二度目にここに来ました際には、あなたがどう反対しようとも無駄な

ことが分かっていましたから、あなたの言い分を聞くのを断りましたね。これも間違いだったようです。理屈を並べるのが好きで、また、理屈が通っていれば喜んで説得に耳を貸していたような若い人というものは、反対の理由を全部聞いて上げなければいけないわけですからね。それで、三度目になりますが、こうして会いにきましたし、あなたの言いたいことはすべて聞くつもりです。いいですね、我慢をして上げるのですから、あなたも感謝の気持ちを示してほしいのです。そう、寛大さと言い直しましょう。掛け値なしに寛大な心を持っていた、あのあなたに話し掛けているのですからね。もしも、本当にあなたの心を捉えているものはないというのなら、その心は私が喜ぶどんなことをあなたにさせようとしているのか、それを見せてほしいのです。そして、あなたがいつもどおり思慮分別の指図に身を委ねることが出来ますよう、あなたの思っていることは最後まで聞いて上げましょう。ただ、これだけは先に言っておきますが、あなたが何を言ったところで、私以外の人には何の効果もないということですよ」とです。

「何て恐ろしいことなのでしょう。でも、お母様の憐れみの心に働き掛けることが出来ましたら、それだけでも無駄とは思いません」

「あなたのことは大好きですし、同じくらいに可哀相だとも思っています。でも、クレアリー、あなたほどの思慮分別があり、その上、だれにも心を囚われていない人間にとって、容姿などは問題外のはずですよ」

「心を惹かれますためには、目のほうはうんざりさせられなくてはいけないのでしょうか。あゝ、お母様、初めてお見えになりました時に心にショックを受け、その後も、話し合いを持ちますたびに、どうしても嫌悪の気持ちが確かなものとなってしまうのです。どうして結婚など考えられましょう」

「それは先入観のせいですよ、クレアリー。あなたは、その若さなのに、気高いほどに志操の堅固な子です。そういうところは、あなたにとっては誉れとなるものと考えていましたし、あなたの性質の中でも自慢に思っていた点なのです。ですから、それを残念に思うようなことはさせないでもらいたいものです。今度の場合には、頑固なのと変わりませんよ。親不孝にも通じるのです。いくつかあったお話にも、いろいろ不服を唱えていたのではなかったですか　…　」

「考え方を問題にしていたのです。生き方に不満があったのです、お母様。でも、今度の人は　…　」

「誠実な人ですよ、クレアリー・ハーロー。立派な考えをお持ちの人です。高潔なお方です」

「誠実な人ですって、あの人が。あの人のが立派な考え方だというのでしょうか、お母様。あの人が高潔な人だなんて　…　」

「違うという人は一人もおりませんよ」

「あの人が誠実だなどとどうして言えるのでしょう。親戚の方たちに譲られるのが当然の財産を、皆さんから奪ってしまうような条件を出しておられるのでしょう。あの人の考え方が立派だなどと、どうして　…　」

「それだけのことを申し出ておられるのはあなたのためなのですよ、クレアリー・ハーロー。他の人はともかく、あなたにはこのような言い方は出来ないはずです」

「どうか言わせてください、お母様。財産よりも幸せを望んでおります者の場合、私も

そうですけれど、自分の所有物すら求めようとせず、親孝行のためならその権利を譲ることだって出来る　…　」

「お止しなさい。自慢話はもう結構よ。快く親を立ててくれたあの場合でも、失うよりも得るところが多いことをあなたは分かってやっているのです。海老で鯛を釣るつもりでいたのでしょう。ですから、あの話はもう口にしないことですね。いいですか、だれもが立派なことだと思っているわけではないのですからね。勿論、私は大変素晴らしいことと考えておりますし、お父様もおじ様たちも、あの時には　…　」

「あの時にはですって、お母様。お兄様とお姉様は何てひどいことを　…　つい先頃まで私がご愛顧をいただいていたのが心配で　…　」

「あなたの兄と姉でしょう。悪口に耳を貸す気はありませんよ。そろそろあなたたちが心の慰めになってくれると思っていましたのに、何てことでしょう、家中が唖み合わなければならないのでしょうかね」

「ご立派なお考えのすべてにつきまして、お兄様とお姉様に神の祝福をお祈りいたしますわ。私の手で防ぐことが出来るのでしたら、お母様に内輪もめなどをお見せしたりはいたしません。お母様、どうかお母様から教えていただきたいのです。兄たちのどんな仕打ちを我慢することになるのでしょうか。教えてくだされば、きっと我慢をしてご覧にいれますわ。でも、私の身の証としていただきたいのは、私の振舞いなのです。兄たちが歪曲しております（これまで受けてまいりました不名誉な禁止事項からも、それが真相なのだと確信する次第ですが）私の姿ではございません」

ちょうどその時、父が上がってまいりましたが、厳めしい顔付きをしているものですから、私は思わず震えてしまいました。父は痛風の痛みを堪えながら、二、三度私の部屋の中を歩き回っておりました。そして父は、自分の姿を見るとすぐに口を閉ざしてしまいました母に向かって、次のように言ったのです。

「長いじゃないか、お前。間もなくディナーだというのにだ。お前に頼んだことは手短に話せば済むものだったのだ。お前の意向、そして、私の意向を申し渡すだけのことなのだよ。だが、嫁入り支度の話でもしているのかもしれないな。早く降りて来るのだぞ。娘の手を引いてな。もっとも、娘と呼ぶに値する場合だがな」とです。

そして、父は降りて行きましたが、とても厳しい顔付きで私に一瞥を投げ掛けたものですから、私は一言も口をきくことが出来ませんでしたし、しばらくは、母にさえ何を言うことも出来なかったほどでした。

いかがでしょう。ずいぶんと怖じ気づかせる話ではないでしょうか。

母は、心配げな私を見て、可哀相に思ったようです。良い子ね、と言いながら、キスをしてくれました。そして、私がこんなにも反対したことは、父には知らせないつもりだと言っておりました。母に言わせますと、父のお陰で、長々と話し合っていたことにうまい言い訳が見つかったというのです。「さあさあ、あなた、じきにディナーも食卓に並ぶことでしょう。もう、階下へ参りましょうね」　こう言うと、母は私の手を取りました。

私は飛び退いてしまいました。「何ですって、お母様、嫁入り支度の話をしていたと思われるために、階下へ降りようとおっしゃるのでしょうか。あゝ、私の大好きなお母様、そんなふうに思われながら降りて行くようなことを命令したりなさらないでください」

「あなたにも分かるでしょう。これ以上一緒にここにいたりすれば、絶対に従わなけれ

ばいけないことについて、あなたが異議を唱えているのを認めることになるのですよ。そのようなことはとても許してはもらえないと思います。二、三日前のことでしたね。お父様ご自身があなたに、何としても従ってもらうぞと言っておられたではありませんか。これで三度目になりますが、もう一度あなたを独りにして上げましょう。あなたの言い訳になるようなことを何かお話ししなければなりませんからね。食事に降りるのは気が進まないと言っているとか、このような折に、あなたの内気さが　…　」

「お母様、こんな時に私の内気さなどを持ち出さないでください。それでは希望をお与えすることに　…　」

「それじゃあ、あなたは希望も与えないつもりだということですね。何という強情な娘なのでしょう」　母は私を振りほどくようにして立ち上がりました。そして、「もっと時間を掛けて考えるのですね。必要でしょうから、もっと時間を掛けるのです。そして、今度顔を合わせる時には、教えてもらいますよ。あなたを甘やかしたばっかりに、自分自身にどんな責め言葉を投げつけなければいけないのか、お父様のどんな非難に甘んじなければいけないのか、ということをです」と言っておりました。

それでも、母は部屋のドアのところでちょっと立ち止まりました。出来るかぎり穏便な受け止め方をしてほしいと、私のほうから頼み込むのを待っていたようです。事実、ためらいながらも、「このとおりのことを伝えて欲しいわけではないのでしょう　…　」と言ってくれたのです。

「あゝ、お母様。お母様からのお力添えが得られないとしたら、どなたにおすがりすれば良いのでしょう」と、私は言葉を挟みました。

「いいですか、あなたに都合の好い報告を期待していたのだとすれば、それは手加減を加えようとするのと同じことなのですよ。私はすっかり心を固めておりますから、身内の者たちのだれに対しましても、私が少しでも躊躇しているように考える余地を与えるわけには行かない、その点についてです」　こう言い残すと、母は階下へ降りて行きました。

ここまでのところを、いつもの場所に隠すことにいたします。ご厚情をお寄せくださいます者に深く関わる事柄ですし、細かなことまでお話しいたしましても、詳細に過ぎるなどとはお考えにならないはずですから、これまでどおりに筆を進めてまいる所存です。事情が事情ですので、これほど遠慮なしに書き記しましたものは、自分の手元に置いておきたくないのです。

こちらに用意したものがあるかどうかはともかく、ロバートさんの身体が空いております場合には、毎日こちらに寄越してくださいますよう、是非ともお願いいたします。

ロバートさんを空手で送り出したりなさらなければ嬉しいのですが　…　この災難のことがありますから、私は始終筆を手にしている有り様ですが、貴女のほうでも、友情の印として負けずに筆を執ってくださいますなら、お優しさのかぎりと存じます。手紙が次々に持ち去られておりますのは、貴女に届いている証なのでしょう。機会の有り次第筆を執り、隠しに行かせますので、これからは、堅苦しい頭語だの結語だのは省かせていただきます。次の点は申し上げるまでもないことですもの。

誠実な心と変わらぬ愛を抱いております、貴女の

CL. ハーロー

手紙　十七

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

母は食事を済ませますとすぐに戻ってまいりましたが、次のようなことを知らせてくれました。私が〈快く〉承諾したかどうかを父が質しましたので（もっぱら問題にされておりますのは〈快く〉なのかどうかということらしいのです）、このように重大な問題については、「慈しんでやるのがいかにも当然な」（このとおりの言葉であったと、わざわざ母は認めてくれました）我が子のことでもあり、自発的に承諾してくれるためにも、胸にあることはすべて遠慮なく話す機会を与えてやりたかったのだ、と答えたということです。また、父が上がって来た際に、私の言い分に耳を貸していたのも、私が結婚そのものを嫌っている様子だったためである旨をお知らせしたというのです。

母の話では、これを聞いた父は怒った声で、「用心させるのだな。だれか他の男を好きなのではないかと疑いたくなるような根拠を私に与えないよう、用心させるのだ。ただ、あの娘の気持ちを楽にしてやるためだというのなら、そして、私の意向を論うつもりはないというのなら、お前が最後まで聞いてやるのも構わない」と言っていたそうです。

「ですからね、クレアリー、そういう気持ちで戻って来たのですよ。決めつけるような言い方をしたりして、こちらでもそれなりの態度を取らなければならないのだということを、もう一度思い知らせるような真似はしないでくださいね」

「お母様、私には少しも結婚の意思がない旨をおっしゃっていただいたそうですが、本当に私の気持ちそのままをお伝えくださいました。そのようなことはないものと思いますが、この私がお父様のお家でひどく役立たずになっていて　…　」

「自慢話ならもう結構よ、クレアリー。これまでのあなたは立派でした。家のことではずいぶんと助けになってくれました。でも、これまで軽減してくれたもの以上の迷惑をこれから掛けたりするのは止してもらいますよ。仕事の腕前や切り回し上手ということでは評判を得ているのですから、もう十分に報われたことになるでしょう。でも、そんなあなたの助けも無用になる時が間もなく来るのです。結婚をすれば当然のこととしてそうなるわけですし、私たちの喜ぶ結婚であれば、それが望ましいことでもあるのです。その方面でのあなたの才能のすべてを、あなた自身の家庭に振り向けねばなりませんからね。結婚をしない場合にも、やはりあなたの助けは無用になるでしょうが、それが自然なことでないのはあなたにも分かりますね」

私は涙に暮れておりました。

「もう、家政婦の手配をしているところなのです。ノートンさんのことも考えたのですが、あの立派な婦人はあなたのほうで欲しいでしょう。もしそうなら、話を決めて上げても良いのですよ」

「でも、何故なのですか、お母様。どうして末娘の私が、どんな人とでも嫌だと思っておりますのに、結婚を急かされねばならないのですか」

「ソームズさんのお相手として、どうしてお姉さんのことが話に出ないのかを聞きたがっているのですね」

「仮に私が聞きたがっても、気を悪くはなさらないでしょう、お母様」

「答えはお父様にお願いしましょうかね。ソームズさんなりの理由がおありなのでしょ

う。あなたのほうが好きだという　…　」

「私にだってあの人を嫌う理由があるのですよ、お母様。どうして、私が　…　」

「よくもまあ、次から次へと口答えをするものですね」　母が遮りました。「もう、我慢なりません。私は行きますからね。お父様に来ていただきましょう。私ではぜんぜん役に立たないのでしょうからね」

「あゝ、お母様。そんなこと　…　死んだほうがましです」

母は私の口を手で抑え、「決めつけるのはお止しなさい、クレアリー・ハーロー。考えを変える気はないというのなら、私は手を引きます」

悔しさに涙が溢れてまいりました。「これはみんな、みんなお兄様の差し金なのです。貪欲な考えから　…　」

「悪口はお止めなさい。あなたの兄さんでしょう。あの子の胸を占めているのは、ただただ一族の名誉ということなのです」

「私だって、お母様、お兄様と同じように、一族の名を汚したくはございませんわ」

「それはそうでしょう。でもね、何が名誉で何が不名誉なのかは、お父様や私やおじ様たちにも決めさせてほしいものですね」

そこで、私は独身を通す旨を申し出ました。決して結婚はしないということ、少なくとも、皆の全面的な了承が得られないかぎり、結婚はしないことを申し出たのです。

「親に尽くし、親に従う姿を示すつもりだというのでしたら、クレアリー、私たちが望んでいる形でお願いしますよ。あなた自身が望む形では困るのです」

「お母様、これまでの私の振舞いを考えていただければ、このように私の従順さを試される必要などないものと存じますが」

「そうですね、クレアリー。これまでのあなたは本当に立派だったと言わねばなりませんね。でも、今まであなたは試練というものを味わったことがありませんでした。試練の場に立たされた今、あなたがしくじることのないよう、私は願っているのです。両親というものはね」と、母が言葉を続けました。「子供が小さなうちは、どんなことをしても嬉しいものです。あなたは概して難のない子でしたよ。でも、これまでは、あなたが私たちの意向に沿ってきたというよりも、私たちのほうであなたの言いなりになってきたということです。結婚をしても良い年頃になった今こそ、試練の時なのです。とりわけ、おじい様のご好意で、あなたは独り立ちをしていると言っても構わない状態なのですからね。それも、あの地所につきましては、あなたよりも優先権のある人たちがおりますのに、その人たちを差し置いてのことでしたからね」

「お姉様に対しては、お母様、お父様がその埋め合わせ以上のことをしてくださるのがおじい様には分かっておりましたし、そうしてほしい旨をご遺言の中でもはっきりとおっしゃっているのです。おじい様のご愛顧を得るために私が行いましたのは、他でもありません、自分の義務と考えたことだけです。ご愛顧は、どちらかと言えば、おじい様の愛情の印でして、私には何の利益にもならないことなのです。と申しますのも、私は独り立ちすることを求めたり、願ったりしていますでしょうか。仮に私が全世界に君臨する女王だといたしましても、いくら偉いからといって、お母様やお父様に対する義務を免れるわけではないと存じます。たとえ何百万という人々の前であっても、お母様たちからの祝福をいただくためでしたら、喜んで跪くつもりでおります。ですから　…　」

「あなたの話の腰を折りたくはないのですよ、クレアリー。あなたのほうでは何度か口を挟みましたけれどね。あなたはまだ若いですし、躾も行き届いておりません。でも、それだけ子の務めということを並べ立てるのでしたら、もう少し敬意を払ってもらいたいものですね、私が話をしている時には」

「お許しください、大好きなお母様。ただ、このような場合ですから、ご辛抱いただきたいと思います。熱心な態度でお話ししなければ、どうしても我慢の出来ない人のことですのに、いくら反対をいたしましても、娘らしく嫌がっているだけのこととしか考えていただけませんもの」

「クレアリー・ハーロー！」

「大好きな、大好きなお母様、この一度だけ、思っておりますことを言わせてほしいのです。耐えられないのです。これはすべて誤解から来ていることなのです。なのに、その原因に触れるのを禁じられますのは辛い話です。本当に辛い話です。私のことを自分の野心の妨げになると勘繰り、奴隷みたいに扱っている人について、無礼な口のきき方をしてはいけないからといって　…　」

「何の話です、何を言いたいのです、クレアリー　…　」

「あゝ、大好きなお母様、私にも孝養心はございますから、お父様のことを自分勝手だと考え、その身勝手さをお母様への言い訳に用いるようなことまでは　…　」

「どうしてまた、クレアリー。あゝ、この子ときたら　…　」

「ご辛抱を願います、大好きなお母様。辛抱強く話を聞いてやると言ってくださったではありませんか。私は分別があるように思われておりますので、男の人の容姿など問題ではないというわけですね。目のほうがうんざりするのは仕方のないことだし、納得出来るように話してやる必要もないことだと　…　」

「この子ときたら、この子は　…　」

「要するに、私の長所だと言われておりましたことが災いの種となり、挙げ句には、あんな化け物と結婚させられる羽目に　…　」

「信じられませんね、クラリッサ。あなたの言葉とは思えませんよ」

「お母様、あの人は姿形にしても考え方にしても、私の目には化け物に映るのです。そして、こんな仕打ちに耐える気持ちを起こさせるためなのでしょうね。男の人にはまったく関心のない女だから、などと持ち上げられるのです。でも、別の時には、別な思惑からなのでしょうが、道徳の面で反対が出て当たり前の方だというのに、その方に夢中になっていると決めつけられてしまうのです。軽率この上ない小娘みたいにその方と駆け落ちをして、一族全員の名を汚しては困るとばかりに、家の中に閉じ込められてしまう有り様なのですからね。こんな仕打ちを受けて、あゝ、大好きなお母様、どうして我慢が出来るというのでしょう」

「私もそろそろ話して構わないでしょうね、クレアリー。確かに、おとなしく話を聞いたつもりですからね。前から分かっていれば　…　いいえ、手短に済ますことにしましょう。いいですか、クラリッサ、自分は少しも持ち合わせていないのに、母親には平気で要求しているわけですが、そもそも辛抱とはどういうことなのか、ひとつあなたの母親のほうから模範を示すことにいたしましょう」

あゝ、あなた、この時ばかりは、遜った母の態度がどれほど心苦しく感じられたことで

しょうか。手厳しく扱われますよりも、はるかに胸に応えたのです。でも、母は知っていたと思うのです。残酷な、いわば理不尽な役目を仰せつかったということは、間違いなく自覚していたはずです。でなければ、あんなにも辛抱強く私の話を聞く気持ちにはならなかったでしょうし、また、なれなかっただろうと思うのです。

母が言葉を続けました。「さあ、言わせてもらいますが、お父様がおっしゃっていたように、話は簡単に済むということです。あなたがしきりに言いたがっていることですが、確かに、これまでのあなたは親孝行な子供でした。親不孝なことをする理由がなかったのも事実です。あなたほど引き立ててもらった子も他にいませんからね。これまでのあなたの振舞いをすべて台無しにしてしまうつもりですか。子の務めの中でも一番大切なもの（すべての頂点をなすもの）が求められている時、そのような機会に、また、あなた自身が明言しているように、何ものにも心を囚われていないという時に、身を以てその実例を示して見せる気持ちはあるのでしょうか。あるいは、あなたが要求して構わない、そして、私たちを差し置いてあなたのために、いいえ、むしろ私たちを無視して自分自身のためになのでしょうが、あなたの好意を得た男の人ならだれもが主張することの出来る、例の独り立ちのことを考えてですが（本心がどうであれ、あなたはそんなふうに判断されてしまうのですよ、クレアリー）、あなたは私たち全員と縁を切るつもりなのかということです。そして、私に対しましては、男性の特権ということを必要以上に大事になさっていると申し上げて構わないでしょうし、父親の権威ということになりますと、その十倍もうるさいような、そんな用心深い父親に盾突くつもりでいるのかということです。要するに、これこそが今の私たちにとっては肝心なところなのです。お父様がそこを主眼にしておられることは、あなたも分かっているはずです。それに、思いどおりに進めて構わないとお考えになった事柄を、お父様がこれまでに諦めたことはあるでしょうか」

いかにもそのとおりだと、私は胸の中で考えておりました。父を味方に引き込んだわけですから、兄のご立派な計画は、歩行練習のための紐などを使わずとも、独り歩きをすることになるのです。そして、私が異議を唱えている対象が、兄の貪欲な思惑ではなく、父の意向にすり替わってしまったというわけです。

私は口を閉ざしておりました。正直に申しますと、仏頂面で押し黙っておりました。胸が一杯だったのです。このように母までが私を見放し、勝手気儘な兄の意向をご自分の気持ちにしているというのは、本当に辛いことだと思いました。このようなことを申してはいけないのでしょうが、母は望まない結婚を強いられたわけではありません。母は父を愛していたのですもの。

黙っておりますのがいよいよ不利に働きました。

母がこう言ったのです。「納得してくれたようね。何て良い子なのでしょう。それでこそ私のクレアリーよ。本当に嬉しいわ。私と少しでも言い争ったなんてこと、黙っておきましょうね。何もかも慎み深さのせいにしておきましょう。いつだってそれがあなたの大きな特長でしたからね。自分を枉げて従ってもらったのですし、すべてあなたの手柄ということにいたしましょう」とです。

私は涙に暮れておりました。

母は優しく私の目から涙を拭い、頬にキスをしてくれました。「お父様はあなたがにこやかな顔で降りて来るのを待っておられるのですからね。でも、降りて行くのは勘弁して上

げましょう。あなたもいろいろと難しいことを言っていたけれど、どうです、本当に母親らしい優しさというものを分かってくれたでしょうね。納得してもらえそうなのが分かって、こんな嬉しいことはありませんよ。心を捉えているものはないとあなたは言っていたけれど、これで、嘘ではなかったことになるでしょうしね」

あんなにも優しい母ですのに、これでは、残酷さと紙一重みたいではなかったでしょうか。母も手管を使うことがあるなどと考えますのは、罰当たりというものでしょう［そうじゃありませんか］。でも、止むなくしていることなのです。本来ですと、内心では軽蔑しておりますような手段ですのに、それを用いなければならない立場なのです。しかも、他のどなたかには何を言っても通じないことが分かっておりますから、すべては私のためを思ってしてくれていることなのです。

「私は階下へまいりますよ」　母の言葉が続きました。「ディナーの時のように、午後のお茶に加わるのも勘弁してもらうよう話して上げます。少し不本意なこともいくつか残っているでしょうから、心の整理もしなくちゃいけないでしょう。不本意なことがあるのは認めますし、あなたは元々少し恥ずかしがりですからね。ですから、降りて来るのは気が進まないというのなら、降りて来なくて良いのですよ。ただね、いいですか、夕食の席では、報告をした私の顔に泥を塗るような真似はしないでくださいよ。それから、お兄さんやお姉さんにはこれまでと変わらない態度を見せなければいけませんよ。二人に対するあなたの態度が、あなたは私たちの気持ちに快く従うつもりなのかどうかを試す、その試金石になるわけですからね。分かりますね。私は母親として命令しているのではなく、友達として助言しているのですよ。それじゃあ、私はまいりますからね」　母はもう一度私にキスをして、出て行こうといたしました。

「ああ、大好きなお母様、お許し願います。私があの人と結婚する気を起こすなんてこと、まさか、お母様だって信じてはおられないはずです」

母は大層立腹いたしました。また、ひどく落胆しているようにも見えました。私のことは父とおじたちの手に委ねると言って脅すのです。それでも、母は（心優しくも）私に命じました。私への不満をおじたちに抱かせることで叶えようとしている、そんな思惑が兄と姉にあるように思うというのであれば、私が二人にどれほどの口実を与えていることになるのか、その点をよく考えてみるように、と命じたのです。

母は口調を和らげて、次のようなことも話してくれました。「この縁談については、早い頃から、反対して構わないと思われることはすべて申し上げているのです。これまでにも何人か（その人たちが容姿の点で優っていたのは認めますが）お断りしているあなたのことですから、このお話を承諾したりはしないだろうと考えてのことです。ですからね、クレアリー、私の意見が通っていれば、このお話もあなたの耳には届かなかったはずなのですよ。でも、この私に説き伏せることが出来ないといたしますと、どうしてあなたには期待出来るのでしょう。お引き受けしたこのお仕事に取り組むに当たりまして、私が大きな目標といたしましたのは、崩れかけている家族の和を守ることと、あなたに対するお父様やおじ様たちの愛情を取り戻して上げること、それに、乱暴者からあなたを守ることなのです。勿論、あなたもそう思うでしょうが、お話を断るつもりでいることがお耳に入ったら、お父様は激怒なさいますよ。一族の繁栄というお得意の考えにこのような処置は合致していると、おじ様たちもすっかり信じ込んでおられますから、気持ちが固まっていると

いうことでは、お父様と同じなのです。ハーヴィーの叔母様と叔父様も同じ側に立っております。ですから、父親と母親、そして、おじたちに叔母と、皆が一致団結しても、あなたの好みを変えることが出来ないようでしたら、これほど辛い話はないでしょう。あなたは、まさか」と、母が話を続けました「と申しますのも、この間ずっと私は口を噤んだままだったからです」。「この縁組で一族の夢が膨らむことになるので、ますます嫌がっているのだ、というわけではないでしょうね。あなたが承諾しない場合には、皆はこんなふうに考えるに決まっているのですよ。それに、私たち皆にとって本当に不愉快な男が、結婚もせずにあなたにうるさく付き纏っているのですから、独身を通すというあなたの決意と希望とをどれほど強く断言しましても、そんな言葉には少しも耳を貸してもらえないのです。それに、あなたも十分承知のことでしょう。仮にラヴレースさんは天使みたいな人だといたしましょう。そして、お父様はあなたがあの方と一緒になったりしないよう主張なさったといたしましょう。その場合には、お父様のご意向に異議を申し立てても無駄だということです。あなたに言い渡されております禁令の件について申しますと（私の気持ちとはまるで裏腹なものだということは言っておきましょう）、これは、あなたがハウさんの助けを借りて、あの方と文通していたに違いないという考えから出たことなのですが、私もその点に疑いは持っておりませんよ」とです。

もしも母が独自に判断することを許されていたのでしたら、間違いなく母に納得してもらえたような、そんな話し方で、私は一つ一つの事柄に返答いたしました。そして、その後、私が申し渡されました例の不名誉な禁止事項について激しく抗議したのです。

母が申しますには、父がどれほど真剣になっているのか、そのことで私にも分かるはずだというのです。禁止事項は私の好きな時に取り下げてもらうことが出来るのだし、それで別に害もなければ不面目なことにもならない。ただ、言うことを聞かないようなら、結果については自業自得ということになる、とのことでした。

私は溜め息をつき、涙を流し、押し黙っておりました。

「さあ、クレアリー、あの禁止事項は、私が思っていたとおり、必要がなくなりましたとお父様にお話ししましょうか。あなたは子としての務めを弁えていて、お父様のご意思に逆らうような真似はしないだろうということもね。さあ、どうですか」

「あゝ、お母様、そんなにも優しく尋ねてくださっているのですもの、どのようにお答えしたら良いのでしょう。子の務めは勿論弁えておりますし、身を以てそれを示したい気持ちでは、この世のだれにも負けないつもりです。でも、大好きなお母様、このように申し上げましてもお許しいただきたいのですが、取り下げていただくのにそんなにも大きな犠牲を払うことになるのでしたら、あの禁止事項は耐え忍ばねばならないと思います」

母は私のことを、譲ることを知らない天の邪鬼だと言っておりました。それから、部屋の中を腹立たしげな様子で二、三度歩き回った後、私のほうを振り向くと、「何ものにも囚われていない心ですって、クラリッサ。心は囚われていないなどと、よくも言えるものですね。特定の人にそのような並外れた反感を抱くということは、別の人間に異常なほどの好意を感じているからに違いありません。おっしゃいなさい、クレアリー。本当のことを話すのです。ラヴレースさんと文通を続けているのではありませんか」

「大好きなお母様、そのきっかけについては、お母様もご存じのはずです。もめごとを防ぐために、あの方のお手紙に返事を書いたのです。その種のことを心配する理由がなく

なったわけではないのです」と、私は答えました。

「クレアリー、あなたには話しておきましょう（今となっては、知られたくないことですがね）。あのように気性の激しい人たちの間では、少しばかり懐柔策を講じるのも悪くはないと考えたこともあったのです。M卿と二人の妹さんからのお執り成しがあるでしょうから、すべては元どおりに落ち着くものとばかり思っておりました。ところが、甥御さんのために憤慨なさるのを妥当なことと、お三方とも考えておられますし、甥御さんも、当然のように考えて、公然と私たちに反抗しております。しかも、その一方では、望みようもないような条件が持ち込まれ、おそらくは、おじい様の地所が一族の手から離れてしまうのを防ぐことになるかもしれませんし、さらに大きな地所を手に入れる手段になることも考えられる状況なのです。こういう事情ですから、あなたがあの方と文通を続けるようなことはとても認めてはもらえないでしょうし、また、認められるべきでもないと私は思います。ですから、あなたも私からの愛顧を大切に思っているわけでしょうから、これからはあの方との文通は禁じることにいたします」

「お願いです、お母様、助言だけでもいただければと思います。お兄様やおじ様たちに危害が及ぶことなく文通を止めますには、どのようにしたら良いのでしょう。私が願っておりますのはそのことだけなのです。穏やかに和解を目指したのに、ひどく乱暴な仕打ちを受けたのだと、大層嫌われております人がその点を口実にしなければ良いがと、天にも祈る気持ちでおります。あの方と手を切ることでしたら、私のほうではいつだって出来たのです。世に聞こえたあの方の不品行が、好きな時にこちらから手を切る恰好の口実を提供してくれたはずです。それなのに、お母様、おじ様たちとお兄様はほどほどにするということがございませんし、あの方はこちらの考えを耳にしておられるのです。それに、理由があってそう考えるのですが、あの方とご一族の方々への皆の乱暴な仕打ちに対しまして、怒りをじっと抑えておられますのは、私への慮りからに他ならないようにも思われるのです。一体、私はどうしたら良いのでしょうか。あの方を自暴自棄に追い込んでほしいとおっしゃるのでしょうか、お母様」

「法律が私たちを守ってくれるのですよ、あなた。法の定めを侵したりすれば、咎めなしには …… 」

「でも、お母様、その前に何か恐ろしいもめごとでも起こりはしませんか。法律にいたしましても、実際に違反行為があるまでは、何も出来ないのですから」

「あなたから申し出がありましたね、クレアリー。問題の点が希望どおりになるのであれば …… とです。本当にそのつもりですか。あなたの希望が叶えられるのなら、ラヴレースさんとの文通は一切止めるというのですね。そこのところを教えてちょうだい」

「勿論ですわ。そうするつもりです。私たちの間で交わされました手紙は、全部お母様にお見せいたします。私の役目と関わりなしにあの方を力づけるような真似は、何一つしておりませんことを分かっていただけると思います。それに、手紙をご覧になれば、どうしたら、私の申し出ました条件で、あの方ときっぱり手を切ることが出来るのか、お母様にもさらに適切な指示をしていただけることでしょう」

「あなたの言うとおりにいたしましょう、クラリッサ。あの方の手紙を見せていただくわ。それから、あなたが出した手紙の写しもね」

「お母様、私が手紙を書いておりますこと、それに、どのようなことを書いているのか

につきましては、勿論、他の人には　…　」

「あなたの母親でしょう。条件は一切抜きですよ。当てにしてくれても良さそうなものですね、私の分別も」

私は詫びました。そして、手紙が入っております、書き物机の私物用の引き出しの鍵を受け取ってくれるよう頼みました。自分の母親には何の隠し立てもしていないことを、母本人に分かってもらうためです。

母は鍵を受け取り、あの方の手紙をすべて、それに、私の手紙の写しのほうも取り出しました。「条件など付けずに、あなたに返して上げますからね。他の人にはだれにも見せずにですよ」と言ってくれたのです。

私はお礼の言葉を口にいたしました。母は手紙に目を通すため、引き上げて行きましたが、読み終わったら返して上げましょう、と言っておりました。

お宅から戻りますまでの間に私たちが交わしました手紙すべてに、貴女は目を通してくださいましたわね。あの方が得意になって吹聴出来るような事柄が何一つ書かれていないことはお認めてくださいました。その後も、貴女にお話しいたしました内緒の方法で三通受け取りましたが、最後の一通にはまだ返事をしておりません。

この三通も、ご覧いただいたものの場合と同じですが、私の引き立てを懇願し、それはそれは熱烈な言葉で、私への想いを打ち明けておられますし、ご自分が受けた侮辱の数々のこととか、兄が人前ではいつも挑発的な態度に出ること、行く先々でおじたちが脅迫したり、敵意を露にしたりするということ、それに、あの方の名誉を傷つけようとして、おじたちが用いるいろいろな手口について触れておられますが、その後で、次のように言明しておられるのです。つまり、ご自分の名誉、そして、ご一族の名誉のいずれからいたしましても（避けようとはしたけれども避けられなかった、あの不幸な出来事に関して自分に加えられた見境のない非難には、その点も含まれているのだから）、このような常習的な侮辱を黙過するわけには行かないということ、私の気持ちは、たとえあの方に好意を感じていないとしても、新たに紹介されたソームズのような男に傾くはずもないし、事実、傾いてはいないのだから、なおさら兄の振舞いを憤慨すべき立場にあるが、兄はだれに対しても、胸にある遺恨や敵意を公然と認めており、このソームズの求婚を手段として、私に悔しい思いをさせることも、あの方に復讐することも出来そうだと得意になっているということ、これほどはっきりとご自分に狙いを定めたことなのだから、そのような行動を阻止したいと願うさらに強い動機には恵まれていないとしても、阻止に無関心でいるようなことは不可能だということ、そして、この問題に関してソームズと話し合いを持つとしても、その点は諒承してほしい、といったことです。あの方は次の点も（これまで何度となく申し出られたことに基づいて）熱心に主張しておられます。つまり、M卿共々おじ様たちに、また、お父様にも、お目通りするのを認めてもらいたいというのです。そして、男として到底見過ごしに出来ないような、新たな挑発が加えられないかぎりは堪える旨を約束しておられますが、私といたしましては、とても請け合うわけには行かないお話です。

私の返事では、これまでも何度かそうしている旨をお話しし、次の点をはっきりと申し上げました。家族の賛同なしには、あの方をお引き立てすることは決してないと考えていただきたいということ、だれを訪ねて来られるにせよ、家族の了解が得られないのは確か

だということ、この世のどの男性のためであれ、家族の利害と自分の利害とを切り離して憚らないような親不孝な人間、あるいは、無分別な人間のどちらにもなるつもりはないということ、他の激情家たちを相手にする際、気性の激しい人に持ってほしいと願っているものでもあり、そんな忍耐心を見せてくれたからといって、自分が恩義を受けているようには考えないということ、このような希望を抱いても、分別や道義、そして、我が国の法律に照らして当然な事柄以上のものをあの方に求めているのではなく、それを根拠に、私の好意を期待するのは考え違いだということ、すでに何度もお話ししたとおり、新生活に入る気持ちはないということ、このように人目を盗むような仕方では、これ以上文通を続けるのは耐えられないということ、まったくの話、卑劣で品がなく、親に背く振舞いであり、人目には軽薄に映り、申し開きのしようもないものだということ、従って、私が文通を続けるようなことは期待しないでほしいということ、等々です。

これに対し、最後のお手紙でですが、他の事柄と一緒にあの方は次のように答えておられます。つまり、私が実際にあの方との文通からすっかり手を引く決心をしているのであれば、それは、名誉を重んじ財産にも恵まれた女性にとっては到底耐えられそうに思われない男の妻になろうとの考えからだと結論せざるを得ない。そして、その場合には、是非とも言わせてもらわねばならないが、ご自分の現在と将来の夢すべての中心をなしている人間を永遠に失ってしまうわけであり、そのようなことは考えるだけでも耐えられないことだし、また、そうなった暁には、兄が無礼な態度で得意顔をすることだろうが、それをじっと耐え忍ぶようなことも出来ない。しかしながら、ご自分の命はもとより、いかなる人間の命をも危険にさらすつもりはない。憂慮すべき事態が迫った時には、その場の必要に応じて覚悟を決める所存である。その事態が私の同意を得てのことだと分かれば、ご自分としても己の運命に従うべく努力はするが、もしも、無理強いの挙げ句ということであれば、その結果に対して責任は負いかねる、というのです。

よく検討していただきますためにも、これらの手紙は近日中にお送りいたします。同封しようかとも思ったのですが、何かありまして、もう一度目を通させてほしいと、母から請求されることも考えられますので …… 手紙をご覧になればお気づきでしょうが、あの方は私に文通を続けさせようと、それはそれは一生懸命なのです。

❁　❁

一時間ほどで母が戻ってまいりました。そして、次のように言ってくれたのです。「手紙は返しておきますよ、クレアリー。あの方への手紙の文面について、慎重さの点であなたを非難すべきところは一切ありません。作法のすべてを守っておりますし、それに、適度の威厳すら湛えております。また、当然のこととはいえ、あの方の恐ろしい非難の言葉に対しても、きちんと憤りの気持ちを表しておりますね。要するに、あなたの書いたものから判断いたしますと、あの方が打ち明けている熱い想いにあなたが好い顔をして見せるようなことは、あの方にも、これっぽっちも期待出来そうにはないということです。それでも、あの方は愛を誓っておられるのではないでしょうか。この文通を続けた場合の結果について、あなたにはほんの少しでも迷いはあるのでしょうか。一方の側は憎しみを口にして憚りませんし、もう一方の側は公然と反抗の姿勢を見せている状態なのは承知のことで

すのに、あなた自身、これが良縁になるとでも思うのですか。そうなって当然だと考えているのでしょうか」

「絶対になるはずはありませんわ、お母様。お気づきのことと思いますが、そのとおりのことをあの方にも申し上げてあるのです。でも、お母様、私たちの手紙すべてをご覧いただいたのですから、このように厄介な立場におかれました私はどうしたら良いのか、ご指示を願いたいのです」

「一つ言っておきましょうね、クレアリー。でも、これを聞いたからといって、私の気持ちにつけ入るとか、言葉尻を捕まえるような真似は許しませんよ。あなただって心の広さを疑われたくはないでしょうからね。私は大変喜んでいるのですよ。とても快く、躊躇することなく鍵を差し出してくれましたし、手紙を見ますと、あなたの思慮深さが窺えますからね。ですから、皆さん一人残らず、あるいは、お父様だけでも、私の意見に同調してくださるよう導くことが可能なのでしたら、私としては、喜んで一切のことをあなたの分別に任せたいと思うのです。今後のあなたの手紙についての指示とか同意とかは、私一人が行うことにいたしましてね。それに、出来るだけ早くに文通を止められるようにも取り計らいましょう。でも、それは不可能でしょうし、あなたがラヴレースさんと今も文通をしているとか、禁止なさった後も続けていたなどということがはっきりしますと、とてもお父様はあなたのことを辛抱してはくださらないと思いますから、私としても、このような勝手な行動は禁じることにいたします。ただ、大変に難しい事態ですから、あなた自身のほうにはどんな提案があるのか、それを聞かせてもらいたいと思います。あなたの心は何ものにも囚われていないとのことですし、このような状況では、現在の私たち皆にとりましてはまことに忌まわしい人物なのですから、そのような人とのお話を考慮に入れるのは適切なこととは思えないと、あなたも認めているのです。あなたがしたいと思っているのは、一体、どのようなことなのでしょうか。この件について、あなた自身はどのように考えているのです、クレアリー」

何のためらいもなく、私は次のように答えました。「謹んで提案いたしますのは、こういうことです。ラヴレースさんに手紙を差し上げようと思うのです（最後にいただいたものにまだ返事をしていないものですから）。その中で次のようなことを書こうと思っております。父と私との間の問題はあの方には関わりのないことであるし、助言を求めているわけでもなければ、必要としているのでもないということをです。ただ、あの方に対する悪感情が原因で、兄が公然とソームズさんに肩入れしているということから、あの方にも干渉する口実は多少なりともあるとお考えになるわけですから、私は決してソームズさんのものにはならないこともお伝えしようと思います（この約束を少しでも都合好く解釈されるような根拠は与えないつもりですが）。そして、もしも」と、私は続けました。「このように約束するのを認めていただけるのなら、そして、その結果として、ソームズさんがこれ以上お話を進めようとなさるのを止めるよう言っていただけるのでしたら、ラヴレースさんが満足されようとされまいと、私といたしましては、これ以上のことは一切しないつもりです。また、あの方宛には一行たりとも筆を執りませんし、避けられるかぎりは、顔を合わせることもしないつもりです。そして、家族の者を巻き込むまでもなく、そのための恰好の言い訳は見つかるものと思っております」とです。

「本当に感心な子ですよ、あなたは。でもね、ソームズさんが申し出ておられる条件の

ことはどうしたものでしょうね。皆の気持ちを引いている点ですからね。お兄さんには地所を交換しても良いようなことまで言ってくださっているのです。少なくとも、北のほうの地所を買い取っていただけそうなのですよ。この国での勢力を伸ばしたいという一族の夢に、このお話がぴったりなことはあなたにも分かりますね。要するに、お兄さんは私たち皆の心を捉えて放さないような計画を持ち出しているのです。それに、分家のすべてに亘って大変お金持ちですし、栄誉を目指している一族のことでもありますから、いずれ王国の主だった人々と肩を並べることも十分に出来そうだとなれば、そのお話を喜ばないわけがないのです」

「それじゃあ、お母様、そのような夢のために、お兄様のこの計画のために、どうしても耐えることの出来ない男の人と私は結婚させられるということなのですね。あゝ、大好きなお母様、どうか救い出してください。お出来になるのでしたら、何とかこの恐ろしい災難から私を救い出していただきたいのです。あの人と一緒になるくらいでしたら、生きたままお墓に埋められたほうがましです。嘘じゃありません」

母は私の暴言を窘めましたが、それでも、有難いことに、ちょうど階下に来ていた伯父に打診してみると言ってくれました。そして、伯父が励ましてくれるようであれば（あるいは、支持を約束してくれるようなら）、思い切って自ら父にも話してみるので、これ以上のことについては翌朝報告しよう、とのことでした。

母はお茶のために階下に降り、私が夕食に加わるわけには行かない旨の言い訳を、親切にも引き受けてくれたのです。

それにいたしましても、もう一度言わせていただきますが、このような母親の意向に背かねばならないというのは、辛い話ではないでしょうか。独りでよく呟くことがあるのですが、どうしてまた、こんなソームズさんみたいな人に白羽の矢が立ってしまったのでしょうね。実際の話、世間広しといえども、あれだけの条件を出せる人で、あんなにも値打ちのない人もまずいないと思います。

本当につまらない人なのです。平々凡々たる特徴しか持ち合わせておりませんし、その浅ましい行いにつきましては、だれの口からも非難の言葉が向けられております。あんなにもさもしい考え方をするなんて、愚かな人です。守銭奴だと陰口を叩かれますのと、気前良しだとの評判をいただきますのとでは、その差額など、上手にやり繰りをいたしますと、年に五十ポンドにもならないはずですのにね。

もっと少ない費用で、貴女ならどんなに素晴らしい評判を得られたことでしょう。それに、あの人はオリヴァー卿のような情けない人物の後釜となって、うなるほどの財産を継がれたのですから、ほんのわずかな出費で面目を施す絶好の機会に恵まれたことでしょうね。ところが、その後の振舞いのために、「ソームズ氏がこの世にいるかぎり、オリヴァー卿は決してあの世へ行かれない」などという通り文句があの人に向けられているのです。

世間というものは意地の悪いものだと言われておりますが、こと人物の評価に関しましては（感じるままを口に出しますから）、一般に考えられておりますよりは概ね公正なものなのです。私は日頃からそう思っております。ですから、世間の口やかましさを嘆くことが最も多い人は、今までにも増して我と我身に原因を探るべきなのかもしれません。

母が私への支持を取りつけてくれるかもしれない、あの人からも何とか救い出してくれるかもしれないと、そんな望みが出てきたからでしょうか、少し心も落ち着いたようでし

て、説教じみたことを申し上げるゆとりも出来たというわけです。でも、そんなことがなくても、この種の言葉を時々織り交ぜますのを差し控えてはいけないのでしょうね。頭に浮かびました時には、決して書き漏らさぬようにとの仰せでしたからね。それに、これよりももっと辛い状況にあるといたしましても、筆を執ろうとして腰を下ろしておりますのに、その種の所見を述べることが出来ないようでは、お友達のご希望に留意いたしますよりも、自分自身のことや自分の関心事ばかりに気を取られてしまっていることの証になってしまうでしょうからね。人間の生来の姿がそういうものだとのご意見もあるかもしれませんが、お友達のご希望に添うとか、ちょっとした教えを思い出していただくという機会なのですし、その教えにいたしましても、（書き記すことで）自分自身の向上にも役立つものなのですから、そのような生来の姿を造り上げておりますのは、欠点に他ならないと思うのです。そして、その欠点を克服することで、人は生来の姿から抜け出すことになるのではないでしょうか。

手紙　十八

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月四日　土曜日

何か私にとって有利なことがもたらされたかもしれないと、そのようにお考えにはなりませんでしたか。極めて道理に適った申し出をいたしましたし、家族の一部の者たちの身の安全を図りながら手を引くにはどうしたら良いのか、他の方法はほとんど思いつかないような文通に、無難な、それも、私自身からのようにして終止符を打ちますための、いかにも適当と思われます便法を講じていたわけですからね。でも、兄の計画には（母が話しておりましたもののことで、その写しを手に入れようと私も骨折ってみたのですが、不首尾に終わりました。ばらばらに切り崩し、晒し物にしてやろうとの考えからでしたが、そうする余地がありますのは疑いのないところです）、反対されることに耐えられないという父の気持ちも加わりまして、どうにも抵抗出来ないものがあるのです。

一晩中、ベッドに入っておりませんし、また、少しも眠気を催さないのです。期待や望み、そして、疑念が入り交じりまして（本当に心の休まらない有り様です）、すっかり目が冴えてしまったのです。ベッドに入らなかったことを気づかれないよう、いつもの時刻に階下へまいりまして、家事のことをあれこれ指図いたしました。

八時頃でしたが、ショーリーが母のところからやってまいりまして、母の私室へ会いに来るようにとの伝言でした。

母はずっと泣いていたのでしょう。目を見て分かりました。でも、その表情からは昨日のような優しさとか愛情のこまやかさといったものは薄れたように思われました。ですから、母の前に立ったとたん、私は怖じ気づき、気持ちもひどく沈んでしまいました。

「お座りなさい、クレアリー・ハーロー。今お話ししますからね」　忙しいわけでもなければ、暇なわけでもない、どちらともつかない態度で、母はレースやリンネル製品の入っている引き出しを調べておりました。

十五分は経ったと思われる頃、ようやく母が口を開きました（その間ずっと、緊張のた

めに私の心臓は高鳴っておりました)。そして、冷たい口調で、今日はどのような指示を出したのかを尋ねました。

私は、これで宜しければと、今日と明日の分の明細表を示しました。

母はわずかに変更を加えましたが、その仕草があまりにも冷たくて堅苦しいものですから、私はますます気持ちが昂ぶってしまいました。

「ハーロー氏は今日は外で食事をなさるそうですが、弟のアントニーさんのお宅だと思いますよ」

「ハーロー氏ですって！　お父様ではないのね。それじゃあ、もう私には父親はいないってことかしら」　私はそう思いました。

「お座りなさいと言っているでしょう」

私は腰を下ろしました。

「不機嫌そうな顔をしていますね、クレアリー」

「そんなことはございません、お母様」

「子供がいつも子供らしくしてくれるなら、親も　…　」　そこまで言うと、母は口を閉ざしました。

それから母は化粧台のところへ行き、鏡を見ながら短く溜め息をもらしたのですが、出来れば抑えておきたかったというように、残りの息で軽く咳払いをしておりました。

「女の子がそんな不機嫌な顔をしているのは嫌いですよ、私」

「本当です、お母様、不機嫌なんかじゃありません」　私は立ち上がり、母に背を向けてハンカチを取り出しました。涙が頬を伝っていたのです。

目の前の鏡に映っていたのですが、私に向けられた柔らかなまなざしの中に、母親らしい心情が見えたような気もいたしました。でも、母の口をついて出た言葉は、期待していた優しさを裏書きしてくれるものではありませんでした。

「この世で一番癪に触ることの一つは、避けられるはずのことを理由に、人に泣き出されてしまうってことだわね」

「出来るものなら避けたいと、私も心から願っているのです、お母様」　私はまた泣きじゃくりました。

「強情っぱりの悔し涙のくせに、懺悔の涙の真似だなんて、本当にお上手ですこと。あなたのお部屋へ戻って結構よ。いずれお話しいたします」

私は恭しく膝を折ってお辞儀をいたしました。

「敬っているような振りをして、人を馬鹿にするものではありません。私が求めているのは真心なのですよ、クレアリー」

「勿論、お母様のものですわ、私の心は。私のものというより、お母様のものです」

「お上手ね。だれかも言っているけど、口先だけで孝行者として通るのなら、クラリッサ・ハーローに勝る孝行者はこの世にいないことでしょうよ」

「なんて人でしょう。どなたであれ、恨めしく思います」　私はお辞儀をし、先ほどの言い付けに従うために部屋を出ようといたしました。

母は心を動かされた様子でしたが、辛く当たろうと決心していたのです。

ですから、私に背を向け、「おや、どこへ行くのです、クレアリー・ハーロー」と、早口に尋ねておりました。

「部屋へ戻れとのお言葉でしたので、お母様」

「早く逃げ出したいようね、私の前からは。ご機嫌斜めのせいかしら。それとも柔順だからなのかしらね、言うとおりにしてくれるのは。ずいぶん急いで、私の元を去りたがるものですね」

私はもう堪え切れなくなっていました。思わず母の足下に身を投げ出し、「あゝ、大好きなお母様、どんな目に遭えば良いのかすっかり教えてください。私を待ち受けている定めのことをお知らせください。私に耐えられるのでしたら、耐えて見せましょう。でも、お母様のお怒りだけは耐えられないのです」と訴えたのです。

「離してちょうだい。離れるのです、クレアリー・ハーロー。跪いたりするのはお止めなさい。こんなにもしなやかな手足をしていながら、心のほうはこうまで頑固なのですからね。さあ、立つのです」

「立ち上がるわけにはまいりません。仲直りをしていただけないままに立ち去れとおっしゃるのでしたら、お母様のお言葉でも背かせていただきます。拗ねているわけではありません、お母様。つむじを曲げているのでもございません。そのどちらよりももっとひどいことです。真っ向から背こうとしているのです。でも、離れようとなさっては嫌です［私が跪いたまま両腕を母の体に回しますと、母は懸命に私を振りほどこうとしました。私は顔を上げました。目には涙が溢れておりましたが、ひたすらに遜り、畏敬の念の籠もった涙だったはずです。そのとおりの気持ちだったのですからね］。嫌です、嫌です、離れようとなさっては［愛しい母はなおも私を振りほどこうと骨を折り、困惑げに目をあちこちに向けておりました、その様子は心打たれるものでした。どうしたら良いのか分からないといった風情なのです］。立ち上がるつもりも、立ち去るつもりもございません。怒っていないと言ってくださるまでは、決してお母様を離しはいたしません」

「本当にあなたときたら、いじらしい子なんだから。［私の腕は母の膝を抱きかかえていたのですが、愛しげに両の腕を私の首に回しながら］どうしてこんな役目などを …… でも、離してちょうだいね。言い表しようもないほどに心が乱れてしまいましたよ、あなたのせいで。私があなたに腹を立てたりするものですか。避けられるものでしたらね。あなたが良い子になってくれるのでしたらね」

私は震えながら立ち上がり、自分の部屋へ引き下がったのですが、一体何をしているのか、どのようにして立っていたのか、どのように歩いたのか、ほとんど自覚もない状態でした。私が母のところから出てまいりますのを聞きつけるとすぐに、ハンナが後を追って来ました。嗅ぎ塩と湧き水とで、辛うじて気を失うのは防いでくれましたが、あの娘にはそれが精一杯でした。二時間ほどで何とか回復いたしましたので、惨めにも希望が打ち砕かれましたことをお知らせしようと、筆を手にした次第です。

母は朝食に降りて行きました。私は顔を出せる状態ではありませんでした。たとえ具合がもっと良くても、呼ばれるようなことはなかったでしょう。と申しますのは、母と一緒に降りるにいたしましても、父から与えられました許可には（私の部屋で申し渡されたのですが）、〈娘の名に相応しい〉ことが母に分かった場合にかぎる、という条件が付いていたのです。このソームズさんに関しまして、父が考えを変える気になってくれないようですと、父の言っております意味では、私は絶対にそのようにはなれそうにございません。

手紙　十九

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

［手紙十五への返事として］

三月四日　土曜日　十二時

ちょうど今、ハンナがいつもの場所から昨日付の貴女のお手紙を取ってきてくれたところです。その内容に接しまして、ずいぶん考えさせられてしまいました。ですから、私の返事もひどく真面目な調子になると思います。それにいたしましても、ソームズさんと一緒になれとおっしゃるのでしょうか、この私に。冗談ではございません。それならいっそのこと　…　でも、とりあえず、お便りの中でもあまり厄介ではない箇所について書き始めることにいたします。そうすれば、この部分につきましても、もう少し辛抱強く触れることが出来るでしょうからね。

ラヴレースさんを高く買う姉の気持ちについて触れておられましたが、私にはそれほど意外ではございません。自分のほうでは好きになったこともなければ、好きになることも出来なかったように思われようとして、わざわざ骨を折り、しきりに自分から話題にするものですから、かえって逆のことを疑いたくなるようなところが多すぎるのです。お別れの場面や、お断りした際のことを話題にしますと、きまって気色ばみ、蔑んだような視線を私に投げ掛けますし、取り澄ました態度には怒りの色も交じるのです。取り澄ました態度と言い、怒りの色と言い、受け入れるに値すると思う人を断ったのだという気持ちの表れなのでしょうね。でなければ、怒る理由も威張る理由もないはずです。ベラも気の毒なのです。好きになる時も嫌う時も、ほどほどにすることが出来ないのです。すべて姉の望みどおりに事が運んでいてくれたならと、本当に、天にも祈りたい気持ちです。

遺贈されました地所を父の管理に委ねたことについてのご意見ですが、あの時の私の動機は、貴女もお認めくださいましたように、決して非難されるようなものではございませんでした。この件に関していただきましたご助言は、記憶しておりますところでは、私を高く買ってくださっているからこそのことで、遺言によって与えられました権限を悪用するはずはないとお考えくださってのことだったと思います。近頃の貴女は易者さんみたいなお顔をしておられますけど［御免なさいね］、貴女のほうでも私のほうでも、現実に起こりましたようなことが起こるなんて、信じられなかったのです。とりわけ、父に関わります点がそうでした。確かに貴女は、私にとりましては不利な兄の思惑のこと、と申しますよりは、兄を支配しております自己愛のことを用心しておられましたね。でも、私はいつも貴女がしておられたほどには、兄や姉のことを悪者扱いしてはいなかったのです。貴女は日頃から二人のことがお嫌いでしたね。反感を持っている人の目には、欠点がよく見えるのでしょう。好意とか愛情とかを持つと、実際にある欠陥さえも見えなくなるのと同じようにですわ。私の動機につきまして、手短に思い返してみることにいたします。

以前は調和と慈しみの気持ちばかりが占めておりました一人一人の胸に、嫉妬や不快な思いが頭を抬げているのを知ったのです。尊敬されておりました遺言者に非難の矛先が向けられました。耄碌のためとされ、そこに付け込んだのだと、私が責められることになったのです。若者というのはだれでも、多少なりとも独り立ちを熱望するものだとは思いましたが、独り立ちを一番望んでいる人が自分を律することとか、他人を支配する力とかを

委ねられますのに最も適した人であることは滅多にないものです。このような若輩の身にとりましては、確かにこれは、大変に高額の並外れた不動産遺贈でした。私たちは自分の力で出来るからといって、そのすべてを目指すべきではないのです。気立ての好さとか寛大さ、あるいは、好意的な意見が提供するものすべてを頂戴しようといたしますのは、節度の無さ、そして、その寛大さに値しない貪欲さを証明していることになりますし、授けられた権限がどのように用いられるのか、その芳しくない兆しでもあるのです。私に委ねられました土地管理の職務を上手に果たすことで［すべて地所は管理次第ではないでしょうか］、他の人たちにも私と同じくらい幸せになっていただこうと、楽しい計画を立てていたのは事実だと、私は思いました。でも、自分自身のことを吟味してみましょう。心の奥底で主な動機になっているのは虚栄心、つまり、称賛を愛する密かな気持ちではないのでしょうか。自分の心を疑うべきではないでしょうか。皆さんからの褒め言葉にのぼせ上がったまま独り立ちすれば、除け者にされてしまうようなことはないのでしょうか。独り立ちした若い女性の場合、世間の目はその人の振舞いや訪問先、そして、訪れてくる人たちに注がれますし、そのような女性は他の人に比べ、一儲け狙っている人や財産目当ての男性の攻撃目標になりやすいのではないでしょうか。それに、独りになってから道を踏み違えたりすれば、志がどんなに立派でも、それ見たことかと勝ち誇った顔をする人は山ほどいることでしょう。憐れんでくれる人などほとんどいないのです。人を凌ごうとした分だけ、なおさら勝ち誇る人が多くなり、憐れむ人は少なくなるのです。

こういったところが、あの時私の考えた内容の一部です。同様の状況に置かれましたなら、十分に考えました上でも、間違いなく同じことをするだろうと思います。出来事の成り行きを思いのままに出来るとか、予測出来るような人などいるものでしょうか。私たちに出来ますのは、その折々の最善の判断に従って行動することだけです。私が間違いを犯したといたしましても、私が犯しましたのは世俗的な知恵に関わる過ちにすぎません。孝養を尽くすことで、あるいは、親切を施すことで辛い思いをするといたしましても、振り返って見ました時に、落ち度は私たち自身にではなく、他の人たちにあるのだと思えますのは、悦ばしいことではないでしょうか。私のことを不孝者だと考える根拠を他の人たちに少しでも持たれるくらいでしたら、他の人たちを不親切だと思いますような、そんな目に遭っておりますほうが、はるかに好ましい気がするのです。

きっと、貴女も同じお考えでしょうね。

では、そろそろお便りの中でも一番気掛かりな部分へと移ることにいたします。

このような事態になりましたからには、私がソームズ夫人になるのは必然の成り行きだと、貴女はお考えですね。あまり軽率なことは慎みたいと思いますが、その点だけは異議を唱えさせていただきます。でも、そのようなことはあり得ないと思いますし、無論あってはいけないことだと思います。皆にとりましては、私の気質が頼りの綱であることも分かっております。でも、これまでにもお話しいたしましたが(ア)、私は母の血筋と同様、父の血筋もいくぶん引いているのです。また、母はおとなしく、自分を抑えて他人の意向のままになっておりますが、そんな母の手本に黙々と従って得になるようなことが、私には少しでもあるのでしょうか。母は（それらしいことを漏らしてくれたのですが）いつまで

（ア）手紙九、三十八頁を参照のこと。

も耐える側に追いやられる羽目になりはしないでしょうか。忍耐強い人には辛抱すべきことがたくさん出来るものだ(ア)という貴女のご意見が、母の場合、立証されておりますことをお認めせざるを得ません。自分でも言っておりましたが、家族の和を守るために母が犠牲にしなかったものなどあるでしょうか。なのに、その犠牲に見合った安らぎを母はいつも見出していたのでしょうか。とんでもございません。残念ながら、まったく逆だと思います。それに、何度も何度もきっかけが（母を見てのことです）ございましてこのように考えてしまうわけですが、ただの人間にすぎない私たちは、生まれつき気に入っております自分たちの長所をそっくりそのまま守りたいという気持ちが強いあまり、その長所によって得られるはずと胸算用しておりましたさまざまな恩恵を失ってしまうことも多いものだということです。それと申しますのも、下心のある人たちや付け込もうとしている人たちというのは（私たちが一番失いたくないと思っているものを見つけ出し）、そういった私たちの弱点に向けて砲列を敷き、私たちの期待や不安を（このような言い方をして宜しければ）弾薬代わりにいたしまして、思いのままに攻撃を仕掛けてくるからなのです。

揺るぎない心というものは（育ちの卑しい人や口さがない人が決して女性には認めようとしない特性ですが）、自分たちが正しいことを絶対的に確信しております場合［でなければ、揺るぎなさというよりも頑迷さになってしまいます］、そして、重大な場面で発揮されました時には、リーウェン師もよく言っておられましたように、その特性を備えた人に大変な信望をもたらしてくれる美点ですし、同時にこの特性は、実証され、世に知れ渡っております場合には、その持ち主を卑劣な策略家たちの手の届かない存在としてくれるのが常なのです。ですから、称賛すべき信念に基づいた不動心というものを、師は日頃から説き聞かせてくださっていたのです。今こそ、それを正しく用いることが私には求められているのだと、そんなふうに考えてはいけないでしょうか。

ソームズ夫人になることは絶対に出来ないし、決してなるべきでもないと、私は先ほど申しました。繰り返しますが、なるべきではないのです。だって、兄の野望のために自分の将来の幸せを諦めたりしてはいけませんもの。ソームズさんの親戚の方々から生得の権利や将来享有出来るはずの見込みを奪い取る、その道具になるべきではないのです。今でさえ大変裕福で華やかな暮しをしております一族を（私もその一員ですが）、さらに強大化するためのことですし、今は爵位のないことを不満に思っておりますが、一部の者が目指しておりますものすべてを手に入れたといたしましても、君主ではないことを同じように不満に思うはずなのです［強欲についての貴女のお考え(イ)と同じことで、何かを手に入れたからといって、野望にとりつかれた心が鎮まったためしはございませんでしょう］。私自身も兄の狙いは心から軽蔑しておりますし、今の生活を変えたいとも、財産を増やしたいとも思いません。また、幸福と富とは別物で、滅多なことでは一致しないものだということを確信しているのです。それだけになおさら、このような兄の貪欲な計画に身を任せるわけには行かないということなのです。

でも、恐ろしいのです。衝突しなければならないのは承知いたしておりますが、それが私にはとても恐ろしく思われるのです。尊師がお示しくださいました一般的な教えを正しく守ることで、自分を枉げて他人の意向に従う場合よりももっと不幸になるということも

（ア）四十四頁（二）。（イ）手紙十、四十一頁を参照のこと。

有り得る話なのです。私が揺るぎなさと呼んでおりますものも、私の振舞いをどのように解釈しても構わない立場の人たちからは、頑固だとか意地を張っているとか、好きな人がいるための偏見だとか受け取られてしまうわけですからね。

ですから、仮に私たちが完全な人間だといたしましても（どんな人にも不可能なことですが）、私たちが相手にしなければいけない人たちも（少しでも私たちのことを自由に出来る人は特にそうです）同じ考え方に動かされているのでなければ、この世での幸せを望むのは無理な相談ということになりますね。ただ、その場合、尊師が結論となさっていた点が思い出されるのではないでしょうか。私たちのなすべきことは、他でもなく、正しい道を選んで迷わず突き進み、結果を神の御心に委ねるだけだ、とのお言葉だったのです。

これこそは、貴女が私の動機を認めてくださるならばの話ですが（もし、お認めいただけないのでしたら、どうかお知らせ願います）、今回の一件で私が目指さなければいけないことなのです。

ところで、私のために母が苦しむことになるわけですが、この点につきましては、どう申し開きをしたら良いのでしょうか。次のように考えますと、ある程度は説得力を持つかもしれませんね。つまり、母の苦しみも長続きはしないということです。この大きな苦闘が何らかの形で決着を見るまでのことにすぎないのです。一方、承諾いたしました場合の私の不幸のほうは、（克服しようもない嫌悪感から）死ぬまで続くことになるのです。さらに付け加えさせていただきますと、今回のような処置に踏み切ったとは申せ、母の生来の好みに基づく処置ではないように思われます節もございますから、この処置が不首尾に終わるようなことになりましても、不首尾に終わって当然と私は心中考えておりますが、母といたしましては、あまり心を痛めることもないはずなのです。

ほんのわずかな時間ですのに、ずいぶん長々と書き綴ってしまいました。話題が核心に触れるものだったのです。私なりの所感をご披露いたしましたが、私があまりにも〈揺るぎない〉態度で新たな話し合いの場に臨むのではないかと、そのような予想をなさる根拠を与えてしまいそうですね。どうやら、改めて母と話し合いを持たなければいけない模様です。母が教えてくれたのですが、父と兄はアントニー叔父様のところへ食事にまいります。このように信ずべき理由もございますが、私たちの話し合いのための機会を作ろうとしてのことと存じます。

ハンナが申しますには、父が出掛けます際に、大声で母を叱りつけているのが聞こえてきたというのです。私の肩を持ちすぎるということなのだろうと思います。ハンナによりますと、母が涙まじりのような声で、「本当に辛くなってしまいますわ、あなた。可哀相にあの娘は、罰を受けるようなことなどは …」と言っていたそうです。その先はハンナには聞き取れなかったのですが、だれかに胸の張り裂けるような思いをさせてやるつもりだという父の言葉は耳に届いたのです。多分、私のこととは思いますが、母に向けた言葉ではないことを願っております。

母と一緒に食事をいたしますのは姉だけですから、降りて来るように言われるとばかり思っておりましたところ、料理を一皿届けてよこしました。私は書き物を続けました。一口でも手を付ける気持ちにはなれなかったのです。でも、食べてくれるようハンナに指示をいたしました。拗ねているように思われたくはなかったのです。

この手紙を結びます前に、書き足しをするのが適当となりますようなことが何か、秘密

の文通のどちらかから届いていないか、確かめようと思います。そのためにも、薪置き場と庭の辺りを一回りすることにいたします。

私は足止めです。ハンナに隠しに行ってもらいます。ハンナが母から（母は私の居場所を尋ねたのです）伝言を頼まれたのですが、私の控えの間に来て話をしたいとのことでした。母がまいりました。それでは、失礼いたします、愛しい方。

手紙　二十

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

土曜日　午後

望みを掛けておりました話し合いは終わりましたが、ますます難しい事態になっております。母が話してくれましたところでは、説得のための努力としては、これが最後の試みとのことでしたから、私の頭と心の具合次第ということにはなりますが、出来るかぎり詳細に報告いたしたいと思います。

私の部屋へ入りながら、母は次のように言っておりました。「早目のディナーにしてもらい、手早く済ませてまいりましたが、あなたと話し合うためなのですよ。いいですか、一部の人たちから思われておりますとおりに、あなたが反抗的であることが分かりました場合には、例の件についてあなたとの話し合いを許していただけるのも、また、私がその気になるのも、これが最後になりますからね。その人たちのお考えでは、親切にしている割には、私の言葉もあなたには効き目が少ないということなのです。でも、その逆なのだということを私だけでなく、その人たちも納得するようにしてもらいたいと思いますね。お父様はディナーと夕食の両方を叔父様のところでなさいます。この機会を与えてくださるためのことですよ。そして、お帰りになった時に私がご報告する事柄次第で（忠実にそのままお伝えすることを約束しております）、お父様はあなたの処置をお決めになるおつもりなのです」

私が口を開こうといたしますと、母がこう言うのです。「言っておかなければならないことがありますよ、クラリッサ。口を開くのは、聞き終わってからにするものです。あなたの言おうとしているのが承諾の言葉になるのなら、話は別ですよ。どう、そうなの。もしそうなら、どうぞお話しなさい」とです。

私は何も申しませんでした。

母は不安げに、そして、腹立たしげに私を見つめておりましたが、「承諾はしてもらえないわけですね。これまではあんなにも親思いの娘だったのにね。私の望むようには話してくれないのかしら。それは出来ないことなのかしら。それじゃあ、[私を手で押し退けるようにして]そのまま黙っていらっしゃい。あなたが面と向かって反対するのは、お父様ばかりじゃなく、私にだって許せないことなのですからね」と言うのです。

私はうつむき、なおも口を噤んだままでしたが、目には涙が溢れておりました。

「梃子でも動かないのですからね、あなたという娘は。でも、言ってごらんなさい。はっきりとおっしゃい。私たちが望みを掛けていることだというのに、皆に歯向かおうと決めたわけですか」

「お母様、一言ご注意申し上げて宜しいでしょうか」

「私を諫めて何の役に立つというのです、クラリッサ。お父様は心を決めておられるのです。言って聞かせはしませんでしたか。もう引き下がるわけには行かないのです。一族の利益ばかりでなく、名誉にも関わることなのです。素直になってちょうだい。これまでだと、時々は自分を枉げてさえそうしてくれていたじゃありませんか。結局はどちらが折れるのかということですよ。私たち皆があなたにですか。それとも、あなたが私たち皆に折れてくれるのですか。どうしても説き落とせないのであれば、譲るのは最後の最後にしよう、などと考えているのでしたら、今のうちに譲るのです。それも、潔くですよ。何としても譲ってもらわなければなりません。さもなければ、もう私たちの子供とは思いませんからね」

私は涙に暮れました。何を言ったら良いのか分かりませんでした。というよりも、胸の思いをどう表したものか、見当もつかなかったのです。

「注意しておきますがね、おじい様の遺言にはいくつか不備な点があるのですよ。あなたが譲らない場合は、あの地所から得られるお金は一シリングたりともあなたのものにはならないということです。おじい様があの地所をあなたに遺されたのは、おじい様と私たちにあなたが孝行を尽くしたご褒美なのですよ。ですから、正当な手続きで没収されることになるのです、もしもあなたが　…　」

「このようなことを申して、お許し願いますが、お母様、私へのあの地所の遺贈は不当になされたということでしたら、私といたしましては、地所の所有を願うべきではありません。ただ、不備な点につきまして、ソームズさんにお知らせいただきたいと思います」

「ずいぶん失礼な言い種ですね、クラリッサ。でも、考えてごらんなさい。反対をしてあの地所を没収されるようなことになれば、それと一緒に、お父様のご厚意もすっかり失うことになるのですよ。そうなると、ひどく貧乏になってしまうことでしょうね。とても自活など無理でしょうね。慈善の計画にしても、善行を積むことにしても、ずいぶんと諦めなくてはいけなくなるでしょうね」

「その場合には、自分の暮らし向きに合わせなければいけないと思います。沢山施します場合にだけ、求めも多くなるものです。授かりましたものを有難く感謝いたしますのが私には相応しいことなのです。わずかなもので満足するよう育てて下さったお母様、それに、あの立派なノートン夫人に感謝申し上げる所以です。お父様が寛大なお気持ちから毎年お与えくださるものよりもずっと少なくても、私には十分だと言って差し支えないのです」　こんなことを申しておりますと、遠い昔のローマ人とレンズ豆の話(二二)が頭に浮かんでまいりました。

「何という天の邪鬼でしょう」　母が言っておりました。「でもね、おじ様たちのどちらかから、あるいは両方からのご愛顧を頼りにしているのなら、それは当てにするだけ無駄というものですよ。お父様があなたを見放された場合、おじ様たちのほうでもあなたを諦め、完全に縁をお切りになることは保証いたしますよ」

「取り柄が乏しいばかりに、私への好意的な印象をもっと強くおじ様たちの心に残せま

せんでしたこと、残念に思っておりますわ、お母様」

「これで一層はっきりいたしましたね、クラリッサ。どこかの男の人に、あなたは心を奪われているということです。あなたのお兄さんもお姉さんも、行く先々でその話を耳にしているのですよ」

「世間の噂になっていることは本当に悲しく思います、お母様。でも、このようなことを申し上げても、お母様なら許してくださると思うのですが、家の中で私がご愛顧を失うように画策した人たちも、私がだれかに心を奪われているなどと外で言い触らしているおしゃべりも、そして、その話を持ち帰って報告している人も、元をただせば同じ人たちだということです」

これを聞いた母は、厳しく私を窘めました。

私は黙ってお叱りを受けておりました。

「拗ねているのですね、クラリッサ。あなたは拗ねています」　そう言うと、腹立たしげに母は部屋の中を行ったり来たりしておりました。それから私の方に顔を向け、「拗ねていると非難されても平気なのですね。申し開きをする気も起きないということですか。どうしても言うことを聞かない場合には話して聞かせるよう、申し付けられていることがありましてね。それを何もかも口にするのは憚られていたのですが、どうやら、必要以上にあなたの神経の細かさとか気持ちの優しさとかを買い被っていたようです。これだけ物に動じない頑固な娘なら、聞かされても取り乱すようなことはないでしょうから、早速教えて上げますが、贈与財産の文書が実際に作成されたのですよ。ほんの二、三日もいたしますと、それが読み上げられるのを聞いた上で署名をしてもらうために、あなたも呼ばれるはずです。何ものにも心を囚われてはいないというのでしたら、ほんの少しでも反対をするようなことは考えられません。あなたにも、また、家族の全員にとっても、あまりにも有難い条件なわけですが、その点こそがあなたには不服だ、というのでなければね」と言っておりました。

私は言葉を失いました。完全に言葉を失ってしまいました。胸は今にも張り裂けそうなのに、涙を流すことも口を開くことも出来なかったのです。

「この縁組［母に言わせますと、これは〈縁組〉なのです］を毛嫌いしているのは残念ですけれど、避けようはないのですよ。あなたの叔母さんが話してくださったように、それに、私も話したことですが、一族の名誉と利益が懸かっているのです。あなたは承諾しなくてはいけないのです」

私はなおも黙ったままでした。

母は私のことをこんなふうに呼んでくれたのですが、「温もりのある彫像」をその両腕に包み込み、後生だから、母自身のためにも承諾してほしいと、私に懇願したのです。

言葉と涙が同時に堰を切って溢れ出ました。高く差し上げた両手をしっかりと握り合わせ、片膝を床につきながら、私はこう申しました。「お母様、私に生命を授けてくださったのはお母様です。今の今まで幸せな日々を過ごさせていただきましたのも、お母様、そして、お父様のお陰です。どうか、どうかお願いいたします。残りの日々のすべてを惨めなものにはなさらないでいただきたいのです」

「お父様はね、あなたが今までどおりの柔順な子だと分かるまでは、あなたとは会わないおつもりなのです。これまであなたは、試練と呼ぶのに相応しいような辛い目に遭ったこ

とがありませんからね。あなたのことで骨を折るのは、私としてもこれが最後のつもりです。最後にしなければいけません。希望を与えてほしいのです。分かりますね。私が安らかに暮らせるかどうかということなのです。見込みのある返事だけで我慢しましょう。でも、お父様としては、おとなしく、出来れば快く従ってくれなくちゃ満足なさらないでしょうね。さあ、希望だけでも与えてちょうだい」

「希望を持っていただくのは、私の大好きな、だれよりも優しいお母様、何もかもお譲りすることと同じになってしまいます。自分には承知出来ないようなことを約束したりして、それで正直だと言えるのでしょうか」

母は大層怒りました。もう一度私のことを天の邪鬼と呼び、自分の偏った気持ちばかりに意を用い、母の心の安らぎにいたしましても、子の務めにいたしましても、いずれも顧慮していないと言って責めるのです。母の言葉は次のとおりでした。「子の親というものは辛いものですね。自分では何も出来ない赤ちゃんの時にも、幼い間もずっと、そして、習いごとを始めてから一人前の娘に成長するまでのどの段階でも、だれよりも感謝の気持ちに溢れた、だれよりも親孝行な子になってくれそうだというので、いつもいつも楽しみにしていた娘ですのに、親の一番願っていたことが叶いそうだという時になって、本人の幸せにも、また、両親の慰めにもつながることを邪魔してみせるのですからね。そして、素晴らしい申し出や立派な贈与財産を蹴って、質の悪い放蕩三昧の道楽者にもらわれてしまうかもしれないなどという疑念を、気を揉んでいる身内の者たちに抱かせたりするのですもの。しかも、その道楽者というのは、（きっかけはどうであれ）あなたの身内の者に公然と盾突いているわけですし、事実、お兄さんの血でその手を染めた人なのですからね。

お父様とあなたの間に立って、私はとても辛い思いをしているのですよ。あなたが嫌がっているのを知り、あなたのために弁護をしたのも一度だけじゃないのです。でも、いずれの場合も無駄に終わってしまいました。ただ甘すぎる母親として扱われるばかりなのです。非難されても仕方のない甘やかしの気持ちから、父親の意向に歯向かうようなことを助長しているというのです。家族を二つに分けてしまったのは私の責任だと責められております。私が末娘と一緒になって、夫とその二人の兄弟、自分の息子と長女、それに妹のハーヴィーに逆らっているというのです。いろいろ取り決めごとが待っているのですけれど、その基になるソームズさんとの契約を実行に移すことが、すべての人にとって（あなたのお兄さんとラヴレースさんは問題外ですが）得になるばかりでなく、適切なことでもあるという点を納得しなくてはいけないと、私はそのように言われているのですよ。

もう一度申しますが、お父様はこのお話にご執心なのです。善かれと願ってやっていることなのに、こちらの考えどおりにならないような娘なら、いっそあなたのことは娘と思わないほうがましだと、お父様はそうおっしゃっているのですよ。とりわけ、あなた自身が心を囚われているものはないと打ち明けているのですし、あなたが言うことを聞きさえすれば、お父様の一族にとってはすべての面で利益が増進されることになるのです。お父様は、お気の毒に、頻繁に痛風の発作に襲われるものですから（発作のたびにだんだん危険な状態になっているのです）、この世の幸せにしても長寿にしても、とても多くは望めそうもないなどと、弱音を吐いていらっしゃるのです。おじい様が長生き出来たのはあなたのお陰だと思われているのですもの、そのあなたがお気持ちに背いて、お父様の寿命を縮めるような真似はしてほしくないとおっしゃっているのです」

はなはだ胸に応える訴えでした、これは。このように訴えられ、私は声を殺して泣いておりました。返す言葉はございませんでした。すると、母が話を続けました。「この取り決めがまとまりますのを見届けたいと熱心に望んでおられるお父様の動機というのはね、クレアリー、他でもありません、一族の繁栄と発展ということなのです。最高の地位に就くだけの財産は既にあるのですから、この先の望みと申しますと、さらに大きな栄誉を目指すことなのです。このような考えが、いいですかクレアリー、あなたの目にはどれほどつまらないものに映るといたしましても、他の家族のだれにとっても、決してつまらないものではないことも分かっていますね。それに、ご自分の子供たちにとって何が役に立ちそうなのか、役立ちそうもないのは何なのか、それをお決めになるのは、お父様ご自身なのですよ。あなたの無欲さには（無欲さを装っているのだという人もいるのですが）、いいですか、言わせてもらいますとね、私たちが進めようとしていることよりも、もっと私利に拘っている趣もあるのです。ですから、慎みや謙虚さがあるのでしたら、世間の人たちすべてが機会のあるごとに追い求めている考えを非難する前に、自分の心が何かに囚われているのではないかと疑ってみるべきだと思いますよ」

私がなおも口を閉ざしておりますと、母は次のように話を続けました。「お父様はね、クレアリー、あなたのことを高く買っておられたのですよ。思慮が深く親孝行で、感謝の念も強い娘だとお考えだからこそ、あなたのいないところで（ハウさんのところから戻る前のことです）、あなたが承諾することを請け合われたのですし、それに基づいて様々の契約を結ばれたのですが、もう無効にすることも解約することも出来ないものです」とです。

それじゃあ何故、ハウさんのところから戻った時に、怖じ気づいてしまうほど厳めしい態度で私を迎えたのかしら、と私は思いました。この論法も、他のことと同じように、無理やり母に押し付けられたのに違いありませんわ。

母の話が続きました。「お父様はこのように言明なさったのです。予想もしなかったあなたの反対「〈予想もしなかった〉と母は言ってくれました」のことがあるし、相変わらずラヴレースさんの脅しや侮辱が続いていることを考えても、日取りを早めなくてはいけないと思う。それがあの男のすべての望みを断つことになるし、また、これだけ目を掛けてやった子に背かれ、憂慮しているわけだが、それも終わることになるのだ、とです。このようなお考えですから、一番高価な絹の服地見本をロンドンから取り寄せるよう、お父様は実際に指示なさったのですよ」

私は飛び上がりました。息がつまってしまいました。こんなにも急いでおりますのが恐ろしく、喘ぐばかりだったのです。激しく抗議を始めようといたしました。この〈目出度い〉処置がだれの差し金なのか、私は分かっていたのです。以前兄が話しているのを聞いたことがあるのですが、女心というものは、結婚生活に入ることについていずれとも決めかねる気持ちにさえさせれば、嫁入り支度の絢爛豪華さや、一家の女主人になれるという誇らしさから、すぐに固まってしまうものさ、などと言っていたのです。でも、母は先を急いでくれました。このようなことを聞かされた私が嫌悪の念を口にいたします、その暇も与えないためなのでしょうが、次のような趣旨の話でした。

「ですから、お父様はね、クレアリー、あなたのためにもご自分のためにも、安静に大層ひびきます緊張状態を続けるわけには行かないのです。あなたのために一言申し上げた際にも、私に向かってこんなことを口にされたほどなのですよ。自分でも穏やかに暮らし

たいのだろうし［母ほどの出来た妻に、何てきつい言葉なのでしょうね］、下劣な道楽者からの求婚を（女というのは、貞淑なのも蓮っ葉なのも、こういった手合いには目がないのだ、と言っておられましたが）密かに歓迎しているなどと勘繰られたくないのなら、母親の権威を示すのが私には似つかわしいことだし、あなたのほうでも、心を囚われているものはないと打ち明けているのだから［この話ばかりですわね］、そうしたところで、私の心がひどく痛むこともあるまい、とです」

女性が放蕩者を好むというこの非難は、母に関してはまったく不当なものです。同じくらい財産に恵まれた求婚者が数人おりましたのに、母が父を選びましたのは、その人たちの品行に芳しくない噂があったからなのです。

母は次のように付け加えました。「私の力をもってしても、求められているだけの効き目があなたに対してないことが分かった場合には、とのことでしたが、出掛けられる際、お父様は私に期待しておられる点を言い残して行かれたのです。こういうことでした。その場できっぱりあなたと手を切り、重ねて親に背いた責任をあなた独りで取るようにさせなさい、とのお言葉だったのですよ。ですから、クラリッサ、お願いいたしますよ」と、母は言葉を結ぼうとしたのですが、本当に真剣で遜った言い方でした。「お父様がお帰りになられたら、喜んでお気持ちに従うことをお伝えするのですよ。あなた自身のために、そして、私のためにもね」というのです。

母の優しい気持ちが胸に応えましたし、母自身の心の安らぎのことや、私が毛嫌いしております人よりも、皆の激しい憎悪の的になっている人に密かに心を傾けているのではないかという、自分に向けられた皆の疑念についての母の言い分にも心を動かされましたので、従うことがこの私に可能であったならと、そう思わずにはおられませんでした。そのため、私はためらい、俊巡しておりました。物思いに耽り、しばらく押し黙ったままでした。母のほうに目をやりますと、この俊巡の結果が、これまで自分の論じてきたことにとって有利なものであってくれるよう期待している様子でした。でも、私も思い返していたのです。すべては利己的で嫉妬深い考えばかりに動かされております兄と姉の差し金によることですし、ここしばらくの間私が受けておりますような仕打ちは不当なものだということもございます。私が蒙っております不面目のことは既に世間の噂の種になっておりますし、お相手の男性はソームズさんなのです。私がソームズさんを毛嫌いしておりますのは周知の事実ですから、承諾したりいたしますと、私自身にとりましても、あるいは、皆にとりましても、褒められる話ではありません。そうなりますと、兄と姉は私に対しまして、また、ラヴレースさんに対しましても、勝ち誇った顔をすることでしょうし、間違いなくそれを自慢の種にするはずなのです。そして、そんなことをいたしますと、あの方のために顧慮すべき点など私にはほとんどないわけですが、それでも、重大な災いを招くことにもなりかねないのです。それに、ソームズさんの不快な容姿、さらに不快な立ち居振舞い、お粗末な理解力のこと　…　そう、理解力こそは男の方が誇りとしているものですし、良い妻ならば（自分の選択が正しかったことを示しますためにも）、自分自身が敬意を示すのは勿論のこと、だれもが夫を尊敬してくれるよう願うでしょうが、そのような尊敬の念を失わないためにも、先頭に立って一家を指揮する人間にとりましては、ほとんど不可欠のものなのです。それに、ソームズさんが人間の精神活動のこの大切な能力の点で劣っておりますことから［このように申し上げますのを許していただかねばなりません。ま

た、ひどく自惚れているわけでもないのです」、今ソームズさんを目にしている人たちと同じように、将来出会うすべての人たちにとりましても、私の動機がどれほど卑しいものであったのかは、一目瞭然ということになってしまうでしょう。こういった点が次々に思い出されたものですから、私は両手を合わせ、思いの丈を込めて懸命に申しました。「お母様に安らかな暮しをしていただくためでしたら、お母様、どんな惨い拷問にも耐えるつもりです。手足をなくしても構いません。命だって要りません。でも、この人だけは …… お母様に言われまして、あの人のことを好意的に考えようとはするのですが、そのたびに嫌悪する気持ちが強くなるのです。お母様に分かっていただくわけには、そう、お分かりいただくわけには行かないのですが、私の魂のすべてがあの人を拒んでしまうのです。なのに、契約が結ばれたとか、服地見本のこととか、早目の日取りのお話ですもの。あゝ、大好きなお母様、お願いです、助けてほしいのです。この恐ろしい災い、この耐え難い災難から私を救ってください」とです。

この時の母の表情ほどに苦しい胸の内を窺わせる顔付きは、いまだかつて見たこともございません。母は無理に装った怒りの色でそんな気持ちを隠そうとしておりましたが、やがて腹立たしさのほうが苦悩に打ち克ったのでしょう、目を上げて私から顔を背け、足を踏み鳴らしながら、「訳の分からない天の邪鬼」と言っておりましたが、怒りを込めた母の台詞のうち、私に聞き取れましたのはこの言葉だけだったのです。そして、母は出て行こうといたしました。私は、反狂乱だったと思いますが、母のガウンを掴むと、「大好きなお母様、どうか堪えていただきたいのです。嫌です。お母様が私をすっかり見捨ててしまわれるなんて。ご自分の子供とどうしても縁をお切りになるとしても、お母様自身が本当に怒っていらっしゃることを理由になさっては困ります。おじ様たちが薄情だとしても仕方ありません。お父様が頑だとしても我慢いたします。兄の野望や姉の嫉妬も忍びます。でも、お母様の愛情は失いたくありません。せめて同情だけでもいただきたいのです」と申しました。

母が顔をこちらに向けましたが、優しいまなざしに変わっておりました。「愛していますよ。可哀相にも思っています。でもね、あなた、私への思いやりがありませんね」

「いいえ、お母様、決してそのようなことはございません。それに、心から尊敬申し上げておりますし、感謝いたしてもおります。でも、この件だけは、今度だけは、我が儘を許していただくわけには行かないのでしょうか。どのような便法も受け入れてはもらえないのでしょうか。ラヴレースさんのことにつきましては、至極妥当な申し出をしているのではないでしょうか」

「意志の固い子ね、あなたは。私に決められることなら良かったのにと、本当にそう思いますよ。私たち二人のためにもね。でも、そうじゃないことはあなたにだって分かっているでしょう。どうしてそんなふうに私をまごつかせたり急き立てたりするのですか。ラヴレースさんと手を切ることも、今となりましては、目指していることの半分にすぎないのです。あなたの申し出にしても、たとえ私は信じるとしても、他の人はだれも本気では信用してくれないのです。あなたが独身でいる間は、ラヴレースさんにも望みがあるわけですし、他の人たちの考えでは、あなたにも気があるってことになるのですよ」

「あゝ、大好きなお母様、このように申し上げますのをお許し願いますが、お母様が私に優しくしてくださいますこと、お母様の辛いお気持ちのことやお母様が安らかな日々を

送られることのほうが、他のことを全部一緒にいたしましたのよりも、私にとりましては大事なのです。私はお兄様から、そして、お兄様の差し金のせいでお父様からも、この件では娘としてというより、奴隷として扱われる運命なのでしょうが、心の中まで奴隷と同じわけではないのです。卑しい人間になるよう育ててくださってはおりませんもの」

「それじゃあ、クレアリー、すでにお父様に反抗していることになりますよ。そんなことではないのかと、これまでずいぶん心配していたのです。これでは、この先一体どうなるのでしょう。私というのは　…　」と、母は溜め息をつきました。「いろいろな気性に耐えて行かなければいけないのですね、私という人間は　…　」

「本当にご立派だと思いますが、お母様、それが私には悲しいのです。他でもなくこの点を考えておりますし、もっともっと気難しい男の人の場合には（お父様の半分も分別を持たない人のことです）どんなことになるのか、その結果に不安もございます。それなのに、結婚生活に対して不利な印象を受けずにいるようなことは、果たして考えられるでしょうか、でも、度を越した指図を我慢しなければならないといたしましても、分別のある人からのものでしたら少しは慰めもございましょう。お母様が話しておられたことですけれど、長いことお父様はとても愛想が良く、容姿の点でも立ち居振舞いの点でも、文句のつけようもない紳士だったとのことでしたね。でも、私にお話のあった男の人は　…　」

「お父様の悪口はお止めなさい［母の使った言葉をそっくり繰り返したつもりなのですが、いかがでしょう、私の言葉の中に父を非難するようなところはあったでしょうか］。何度も何度も繰り返さなければいけないようですね。男の人すべては同じようにあなたの眼中にないといたしましても、こんなふうに自分の考えに凝り固まっているわけには行かないのです。あなたの強情さには疲れてしまいました。こんなにも聞く耳を持たない娘も他にはおりませんね。忘れてしまったのですね。あなたが承諾しない場合には、私も手を切らなければならないのですよ。覚えていないのですか。私が手を引くと、お父様がその後を引き受けられるのですからね。でも、もう一度だけ聞きますよ。お父様のお怒りも平気だということなのですね。おじ様たちのことも無視するつもりなのですね。ソームズさんに色好い返事をするよりは、私たち皆と縁を切るほうを選ぶということですか。私に希望を持たせてくれることよりも、そちらのほうを選ぶのですか」

「恐ろしいことですね、どちらを選ぶにいたしましても。でも、返答如何によりましては、私の誠意が、私の心の誠実さが問われるのではないでしょうか。私の幸せが永久に犠牲にされてしまうことではないのでしょうか。今お母様は私に希望をお求めになりましたが、ほんの微かな希望につながることでも、前触れもなく絶対に間違いのないこととされてしまうのではないでしょうか。希望を持てそうだと受け取っていただくような答え方が出来るといたしましましても、そんなことをすれば、ご意向に沿いたいと願っております私の気持ちを悪用し、私を抜き差しならない状態に追い込もうとなさるのではないでしょうか。お許しください、お母様。子供の分際で大胆なことを申し上げておりますが、このような事柄なのですから、どうか堪忍願います。贈与財産の文書が作成されたとのことですね。服地見本の注文もしてあるということでしたね。早目の日取りが話し合われているというのですね。あゝ、お母様、あの人と一緒になる気持ちはありませんのに、どうして希望を持っていただくことなど出来るでしょう」

「あゝ、あなた、心は囚われていないなどという台詞は、もう二度と口にしないことで

すね。そう思っているのなら、あなたの考え違いですよ」

「策略好きな、野心家の兄の差し金で、それに、姉のせいで（と、苛立たしさに私は両手を堅く握り締めておりました）、こんなことになるなんて　…　」

「妹らしくもない悪口はお止めなさい、クレアリー。何度言ったら分かるのですか。ソームズさんを贔屓にしているのはお父様じゃありませんか。おじ様たち、それに、皆もですよ。恩知らずな子ですね。恩知らずなばかりか、強情です。いいですね、繰り返し申しますよ。私にははっきりしているのです。先頃まではあれほど親孝行な子でしたのに、今こんなにも頑固になっているのは、他でもありません、思慮深いあなたには似つかわしくない恋情のせいに他ならないということです。お父様がお帰りになった時、真っ先になさる質問のことはあなたにも察しがつくでしょう。あなたが私の手に負えないことはきっとお分かりになるに違いありません。役目は果たしましたからね。お父様がお帰りになる前に気持ちが変わるようでしたら、私のところにいらっしゃい。夕食もいただいてくるとのことでしたから、まだ少し時間はありますからね。これ以上私のほうからあなたを捜し求めることも、働き掛けることもいたしませんからね」　こう言うと、母は逃げるように出て行きました。

何をすることが出来たというのでしょう、私には。ただ涙に暮れるばかりでした。

母のことを考えますと、ひどく心が乱れてしまいます。自分自身のことよりももっと心苦しいと言わざるを得ません。実際、すべての点を考えますと、とりわけ、母が片棒を担がされております計画は、母自身の考えには（多分そうだと思うのですが）合わないことなのですから、私よりも母のほうが同情されて当然なのです。素晴らしい女性です。おとなしく遜った物腰ですのに、そんな素敵な美質に相応しい報いが伴わないのですから、何とも残念な話です。ただ、横暴な人たちが思いのままに母を操ろうといたしますのを（この点につきましては、とても遺憾なことだとどこかで申し上げたはずです）母のほうでも黙って許していなかったなら、こんなことにはならなかったはずなのです。

でも、筆の赴くままに任せていたものですから、余計なお世話だと母に叱られそうなことまで書いてしまいましたね。確かに母は、私の気持ちが変わりました場合には、自分を捜しにくるように、といったことを仄めかしておりましたが、この条件は、とりもなおさず、母と会うことを禁じられたのと同じことだと思います。でも、父が帰ります前に階下に降りて、母の憐れみを請い、父にも穏やかな報告をしてもらうようお願いするつもりです。部屋を去ります際、母は不機嫌だったわけですから、そうしなければ、意地を張っているように見えるでしょうし、私のために仲裁の労を取ってくれておりますのに、それを放棄したようにも受け取られるのではないでしょうか。

母のところへまいります。世界中が私に腹を立てましても、そのほうが母に叱られるよりはまだマシですからね。

それはさておき、こういった種類の書き物と手を切りますためにも、ここまでのところをハンナに隠してもらうことにします。二、三通一緒にお手元に届くことになるといたしましても、そこに記されておりますのは、他でもありません、不幸せだとは申せ、変わらぬ愛を温めております貴女の友の、その心を苦しめております不安や困難の数々を、時間の推移を追って書き表したものなのです。

Cl. H.

手紙　二十一
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

土曜日　夜

階下へ行ってまいりました。私という人間は、どんなに誠意を尽くしましても、よくよくツキのない人間のようですわ。これからお話しいたしますように、事態を好転させるどころか、一層悪くしてしまったのです。

母と姉が一緒に姉の客間におりました。母の上品な顔が紅潮していたことから考えまして（もっと浅黒く、不機嫌そうに、姉も顔を赤らめておりましたので、間違いございませんが）、激しい口調で〈問題児〉についての考えを述べていた模様です。おそらく、私たちのやりとりに関して身の証が立つような説明を加え、誠意をもって私との交渉に骨折りましたことをベラに、そして、ベラを通して兄やおじたちにも納得してもらうつもりだったのでしょう。

私は意気消沈した罪人のような気分で部屋に入り、二人だけで話す場を作ってほしいと母に頼みました。母の返事は、表情にいたしましても言い回しにいたしましても、今申し上げました推測を十分に裏付けるものでした。

「譲歩するというよりは要求しようという顔付きですね、クラリッサ・ハーロー。私が間違っているというのであれば、そう言ってちょうだい。それなら、望みの場所にお供しますよ。でもね、そんなことは別にしても、言いたいことがあるのなら、お姉さんの前で話しても構わないのじゃないですか」と、母は「優しい顔立ちには馴染むことのない、険しい目付きで私を見つめながら」言っておりました。

母としては、姉が私の味方でないことは分かっておりますし、私と一緒によそへ行っても構わない気持ちなのだろうと、私はそう思いました。

「お母様、私が降りてまいりましたのは、二階での話し合いの中で、何かお母様ご自身について誤解されてしまうようなことがあったのではと考え、お許しをいただこうと思ったからなのです。それに、お父様がお戻りになった時に何とかお怒りを和らげていただきますよう、お母様のお骨折りをお願いしたかったからなのです」　私は申しました。

姉は事を荒立てようとする顔付きで、両手を差し上げて天を仰ぎ、額には深い皺を寄せて見せるのです。

そんなことをするまでもなく、母はすっかり腹を立てておりました。私が相変わらず折れようとしないのなら、どうして降りて来たりしたのかと、問い質しておりました。

母がその言葉を言い終わるとすぐに、ショーリーが入ってきました。ソームズさんが玄関にお見えになり、お邪魔して構わないか尋ねているというのです。

何て質の悪い人でしょう。もうすぐ夜で、すっかり暗くなっておりますのに、一体何の用事で来たというのでしょう。でも、改めて考えてみますと、企まれたことに相違ありません。夕食に加わって、母と私の話し合いの結果を知らせてもらうつもりなのです。帰宅した父にも私たちが一緒にいるところを見てもらおうという算段です。

私は急いで逃げ出そうといたしました。ところが、じっとしていなさい（自分を馬鹿にするためだけに降りて来たのだから、との言葉でしたが）という母の命令です。父への好意的な報告を頼んでいることでもあり、そうしたくなるような態度を私がソームズさんに

対して取れるかどうか、ひとつ試してごらんなさいというのです。

姉は鬼の首でも取ったような顔をしておりました。私は苦り切っておりました。こんなふうに一本取られたこともありますし、これだけ怒りを込めた痛烈な非難を投げつけられるにいたしましても、その時の表情というのが、不遜な言い方かもしれませんが、優しい母というよりも、口汚い姉のほうに近いものだったからなのです。母までが、慌てふためいている私の姿を楽しんでいるように見えたのです。

あの男が勿体ぶった様子で入ってまいりました。休み休み足を進めるのがあの男のいつもの歩き方ですが、まるで（ドライデンの描く道化(二三)に口笛を吹かせることになったのと同じ、頭の空っぽさ加減から）自分の歩数を数えているみたいなのです。真っ先に母に向かってぎこちない挨拶をし、それから姉に、そして、その次が私の番でしたが、もう自分の妻のつもりなのでしょうか、心に留めるのは最後で良いと言わんばかりの態度なのです。それから、私の横に腰を下ろし、皆に向かって天候の話です。とても寒いとのことでしたが、こちらのほうではカッカとしておりました。その後私に向かって、「お嬢さんはどう思われますか」などと尋ねるのです。そして、私の手を握ろうとしました。

私は手を引っ込めましたが、たっぷりと軽蔑の籠もった仕草だったのだと思います。母が眉をひそめましたし、姉は唇を噛んでおりました。

じっとおとなしくしていることなど出来ません。いまだかつてないほど思い切った行動に出ました。ソームズさんがいるのも無視したように、私の訴えを続けたのです。

母が顔色を変え、ソームズさん、姉、そして、私を順に見やりました。姉の両目は今まで見たこともないほど大きく見開かれておりました。

あの男にも察しがついたのです。空咳をした後、次々に椅子を替えておりました。

私はなおも続けました。好意的な報告を母に懇願し、「抑えようもない嫌悪の気持ち以外には　…　」と言い掛けました。

「何を言い出すのでしょうね、この子は。まあ、クレアリーときたら　…　このような話題を　…　このような時に　…　今頃　…　見境もなく　…　」と、母が私の言葉を遮り、もう一度ソームズさんのほうに目をやりました。

母をあんなにもうろたえさせましたこと、振り返って考えますと、申し訳ない気持ちがいたします。確かに、ひどく無遠慮な真似をしてしまいました。

「御免なさい、お母様。でも、お父様がまもなく戻られるのです。それに、席を外すのはお許しいただけないのですから、厚かましいとは存じますが、ソームズさんがいらっしゃるからといって、好意的な報告をしていただくようお母様にお願いする機会をみすみす見逃すことはないとも思うのです。それに、私のことでこの人が［と、あの男に視線をやりながら］これからも訪ねてこられるのでしたら、何らの成果も得られそうにないことだと確信していただきますのにも、ちょうど良い折ですから　…　」

「気でも触れたのですかね、この子は」　母が遮りました。

母の耳に囁くような素振りを装いながら、「これはね、お母様、これは意地悪でやってることなのよ［と、とても意地の悪い言い方でした］。ここにいるようにおっしゃったからですわ」と、姉が言っておりました。

私はちょっと姉に目をやっただけで母のほうに向きなおり、「私のお願いを今一度繰り返させてください。兄にも姉にも恵まれていない私です。お母様のご愛顧を失うようなこと

になりますと、それこそ完全に見放されてしまうのです」と訴えました。
ソームズさんは最初の席に戻って来て、ハシバミ材の杖の頭のところをさかんに齧っておりました。人の顔が彫り込んであるのです。ご自分の顔にも負けないくらい醜いものなのですが、あの人がこんなにものの分かった人だとは、思いもよらないことでした。
姉は顔一面を真っ赤にして立ち上がり、扇子の置いてあるテーブルのところへ歩いて行きました。そして、それを手にいたしますと、ソームズさんは寒い日だと言っておりましたのに、激しい勢いで扇ぎ始めたのです。
母が私のところへまいりました。そして、邪険に私の手を掴むと、引きずるようにしてその部屋から連れ出し、私の客間へ入りました。ご存じのとおり、隣り合わせになっているのです。そして、「ずいぶんと思い切ったことをするものですね、クレアリー。ひどく挑発的だとは思いませんか」と言っておりました。
「そのようにお母様の目に映るのでしたら、お詫びいたします、お母様。でも、大好きなお母様、本当の話、いろいろと罠が仕掛けられているらしいのです。お兄様の魂胆は百も承知です。少しでも好意的なことを口にすれば、お兄様が私から巻き上げたいと思っているものすべてへの同意を与えることになるのです。お兄様にしてもお姉様にしても、これまでの半分だって骨を折る必要はなくなるのです」
母が怒りのあまり出て行こうとしました。
私は残ってくれるよう母に懇願し、「一つお願いがございます。一つだけお願いがあるのです、お母様 … 」と、必死に頼みました。
「何だというのですか、この子は」
「すべてがどのように進んでいるのかは承知しております。だめなのです。どうしてもソームズさんのことは考えられないのです。そのことをお父様が耳にされたら、大変なお怒りようだろうと思います。私は他の皆の人身御供にされるようですが、そのような子供へのお母様の優しいお気持ちのことも、私の願いに対してお示しになった快く耳を貸そうとなさるお姿に基づいて、皆は判断することでしょう。私を監禁し、お母様の前にも、これまで私を愛してくださったどんな人の前にも顔を出せないよう［こんな脅しを受けているのですよ、ハウさん］、いろいろ手を尽くすと思うのです。もしもそのようなことになれば、そして、私の言い分を申し立てることも、唯一望みを掛けておりますお母様や伯父様におすがりすることも出来なくなれば、だれもが私に対する中傷に耳を傾けることになるでしょうし、あることないこと言い触らされてしまうのです。ですから、謹んでお願いいたします。今でさえ不面目な禁止事項に苦しんでおりますのに、この上私の言葉に耳を閉ざされるようなことは、出来ることでしたらお母様にはしていただきたくないのです」
「この話も、他のいろいろのことと同じように、盗み聞きの得意なあなたのハンナがご注進におよんだわけですね」
「私のハンナは盗み聞きなどしておりません、お母様。私のハンナは … 」
「ハンナの肩を持つのはもうお止めなさい。分かっているのですよ、ハンナが揉め事の種を撒いているのは。ハンナなのは分かっているのです。でも、あの図々しいお節介焼きのことはこれだけにしておきましょう。あなたが承諾しない時は、あなたを部屋に閉じ込めてしまうとお父様がおっしゃったのは本当です。お父様のご意向を拒むよう、あなたを唆しているような人たちとの連絡の機会を、もっと確実に奪うためなのです。私の手に負

えないことが分かったら、あなたにそう伝えるよう、お出掛けの際におっしゃっておられたのです。でも、そんな厳しいことをあなたに知らせるのは気が進まなかったのです。素直な気持ちになって降りて来てくれるだろうと、まだ希望を持っていましたからね。このことをハンナが立ち聞きして、あなたに話したのですね。それに、あなたのせいで辛い思いをするくらいなら、あなたを嘆かせたほうがましだと、お父様がおっしゃっておられたこともね。はっきり言いますよ。これからは部屋を出ることは禁止です。それから、私たちのだれに対しても、しつこく話し掛けるのは許しませんからね。どちらが折れることになるのか、ひとつ見てみることにいたしましょう。あなたが私たちにでしょうか。それとも、皆のほうがあなたにでしょうかね」

私はもう一度ハンナの疑いを晴らそうとしました。後のほうの話は、いつも姉の台詞をそっくり真似て歩くベティ・バーンズから聞いたことにするつもりでした。ベティがもう一人の召使に得意顔でそのことを話していたからです。でも、この件については触れないようにとの重ねての言いつけでした。母に言わせますと、私も強情だけれど、他の者だって負けないくらい心を固めているのはすぐにも分かるだろうというのです。そして、甘くしてもらえるのを頼りにして、父や父の兄弟、それに、他の子供たちとの諍いに母を巻き込んで平気な顔をしているのだから、二度と繰り返さないけれど、母も他の者たちと同様にラヴレースさんには反対で、ソームズさんの側に立つことに決めているし、聞き分けのない子を従わせるのに必要と思われることなら、どんな手段に対しても同意を拒まないつもりでいる、と付け加えておりました。

私は今にも崩れ落ちそうでした。母は優しく腕を差し出し、私を支えてくれました。

「すると、お母様にしていただけそうなのは、それだけなのでしょうか」

「そのとおりですよ。でも、クレアリー、もう一つだけチャンスを上げましょう。ソームズさんのところへ戻って、お相手をするのです。控え目にね。そして、一緒にいるところを、失礼に当たらないようにしているところだけでも、お父様に見ていただくのです」

私の足は［ひとりでに、だと思いますが］あの人のいる客間の逆のほうへ、階段へ向かって動いておりました。そこまで行って立ち止まりました。

母が重ねて申しました。「私たち皆に公然と反抗するつもりなら、好きにして（そうしたがっているようだから）、あなたのお部屋へお上がりなさい。もう、どうしようもありませんね、これじゃあ」

「本当に、どうしようもないのです、私も。まったくその気はありませんのに、希望を持っていただくことは出来ません。でも、どうか私のために祈っていただきたいと思います。私をこんなひどい目に遭わせた人たちですが、私のほうでは祈って差し上げるつもりでおりますから」

私は二階へ上がろうといたしました。

「そうなのね。やっぱり二階へ行くのですね、クレアリー」

私は母のほうへ顔を向けました。涙が勝手に溢れ出て、胸の思いを伝えようとするのです。その時は、口をきくことが出来なかったのです。ただ立ち尽くしておりました。

「良い子だから、こんなふうに私を苦しめないでちょうだい。本当にお願い。良い子だからね、苦しめないでおくれ」　母が片方の手を差し出しましたが、同じようにその場に立ち尽くしているのです。

「どうすれば良いのでしょうか、お母様。どうすれば良いのでしょう」
「戻るのですよ、あなた。戻るのです」　母が繰り返しました。「そして、お父様に一緒のところを見ていただくのです」
「あゝ、お母様、あの人に希望を与えろとおっしゃるのでしょうか。ソームズさんをその気にさせるのですか」
「強情な天の邪鬼。親不孝者のクラリッサ」　私を遠ざけるように手を上げ、腹立たしげな顔付きで母が言いました。「それじゃあ、勝手になさい。さあ、二階へ行くのです。でも、許可のないかぎり、あるいは、お父様があなたをどうなさるおつもりなのかが分かるまでは、二度と降りてくるのではありませんよ」
恐ろしい剣幕で母が出て行きました。私は沈痛な思いで二階へ上がりましたが、気持ちそのままに重い足取りでした。

❁　❁

父が帰宅いたしました。兄も一緒です。夜も遅いというのに、皆一部屋に閉じ籠もっております。どこのドアも開きませんし、だれ一人動く者もおりません。ハンナがあちこちと動き回りますと、まるで伝染病に罹っているみたいに、皆から遠ざけられております。

❁　❁

険しい話し合いが終わりました。二人のおじとハーヴィー叔母様のところへ使いが出されましたが、明日の朝食に来てもらうためのようです。私の運命はその時に知らされるのだろうと思います。十一時ですが、起きているようにとの言いつけです。

十二時
ちょうど今、鍵をすべて取り上げられました。私を階下へ呼ぼうという意見もあったのですが、私と顔を合わせるのは我慢出来ないと父が言ったのです。二、三週間のうちに何という変わりようなのでしょう。伝言を持って来たのはショーリーでした。言伝をしながら、あの娘の目には涙が滲んでおりました。
幸せですね、貴女は。いつまでもお幸せでありますよう、お祈りいたします。そのとおりでしたら、私も何から何まで不幸というわけではありませんもの。それでは、さようなら、私の愛するお友達　…

Cl. ハーロー

手紙　二十二
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月五日　日曜日　朝
ちょうど今、ハンナが庭の塀のところにあります秘密の場所から、昨夜置かれたラヴレ

ースさんの手紙を届けてくれたところです。M卿のご署名も添えられております。

その中であの方は次の点を知らせてくれています。つまり、二、三日中にはイギリスでも飛び切り恥ずかしがり屋の女性の一人と結婚することになっていると、ソームズさんが自慢しているということ、兄がソームズさんの言葉を説明して、この恥ずかしがり屋というのは私のことだと言っており、下の妹がすぐにもソームズさんの嫁になるということを皆に保証しているということです。母が言っておりました服地見本の予約のことにも触れておられます。

この家で行われましたこと、あるいは、話されましたことで、あの方に知られずに済むものは何一つとしてないのです。

また、姉も同じ話を触れ回っているとのお話ですが、あの方への侮辱をさらに強めたもので、そのきっかけはもとより、やり方にいたしましても、あの方の感情を害さずにはおかないものだというのです。この点については大層激しい言葉遣いをしておられます。

身内の者があの方よりもソームズさんみたいな人物を選ぶきっかけは何なのか、あの方には見当がつかないとのことです。有利な贈与財産のことが動機だというのであれば、ソームズさんがどのような申し出をするとしても、自分は拒むことなく応じて見せるつもりでいる、とのことです。

ご自分の財産や家柄に関して言えば、財産に異議の出ようはずもなく、家柄という点では、比較すること自体が不快な話であり、そんなはしたない真似をする気はない。私に結婚の申し込みをしてからは、あるいは、有望な感触を得てからというもの、生活態度は規律正しいものにしてきているし、その点については、M卿に証人になっていただくつもりだ、とおっしゃるのです。

この手紙に卿のご署名をお求めになったのは、察するところ、そのことを保証していただくおつもりなのでしょう。

父かおじたちとの面会（卿の同行を得て平和的に、とのことです）について私の許可をもらいたいのだが、会って説明を聞いてくれさえすれば、きっと受け入れてもらえるような提案をするつもりでいる、とのことです。そして、和解を実現するためなら、私の指示するどのような処置にも従う気持ちだと言っておられます。

だれを連れて来ても構わないから、父の庭で夜中にこっそり会ってほしいと、厚かましくも真剣に求めておられます。

まったくの話、貴女もあの方の手紙をご覧になれば、私はあの方を大いに励ましてきたし、直接あの方と交渉を進めているのだとか、あるいは、あの方のほうでは、身内の者たちが私を追い詰め、他人様のところに救いを求めるよう仕向けているのは確かなことと考えておられるのだとか、そのように思われることでしょう。ソームズさんのために私が非道な扱いを受けるようであれば、避難の場所は提供しますと、あの方は卿のお名前を使って図々しく申し出ておられるのですからね。

想像いたしますに、思い切った提案や申し出によって、思慮の浅い女性を網に掛けようと骨折りますのが男性の常なのでしょうが、私たちは愛想が良すぎるとか、恥じらいの気持ちが強すぎるせいで、異議を唱えたりは出来ないだろうと考えてのことなのです。そして、制止を受けない場合には、黙っているのは自ら同意している印だとか、好意的に容認している証なのだとか受け取られてしまうわけです。

この手紙には、お話ししておかなければならない事柄が他にもございますが、機会を見つけまして、手紙そのものか写しか、そのどちらかをお送りするつもりでおります。

このように人目を憚るような、要するに、心では咎めているものですが、ただの恋文まがいの文通に一方では誘い込まれ、また一方では追い込まれてしまいましたことを考えますと、私といたしましては、まことに心の休まらない気持ちになってしまうのです。

文通を打ち切らずにおりますと、私の置かれた不幸な状況のことがございますから、ラヴレースさんの立場は日を追って有利になり、私のほうはますます抜き差しならなくなることが目に見えております。それでも、ソームズさんの求婚からの解放を条件にしないまま、実際に終止符を打ったりいたしますと　…　もしかいたしまして　…　もう少しの間文通を続けますのが最善の策なのでしょうか。ラヴレースさんのことを一切諦めることによって、もう一つの難局から抜け出せるものと期待してのことです。今の私には、貴女を別にいたしますと、どなたに助言を求めることが出来るというのでしょう。

身内の者が全員集まりました。一緒に朝食の席に着いております。間もなくソームズさんも見えるようです。とても不安でたまりませんから、筆を置くことにいたします。

❁　❁

全員揃って礼拝式へ向かうところです。ハンナの話ですと、気の毒なほど落ち着きのない様子だそうです。何かが決まったのは間違いない、と言っております。

日曜日　正午

何とも惨いものですね、宙ぶらりんな状態というのは。午後の礼拝式に出席しますのを許してくれるよう頼んでみます。断られるだろうとは思うのですが、頼まずにいれば、こちらの都合で行かないのだと決めつけるかもしれませんからね。

❁　❁

私はショーリーと話をしたいと申し出ました。ショーリーがまいりました。午後礼拝式に出掛ける許可を求めている旨母に伝えてくれるよう、あの娘に指示いたしました。返答はどのようなものであったと思われますか。「頼みごとについては、何であれ、直接兄に申し出るように伝えよ」というのです。ですから、私の身柄は兄に引き渡されることになるというわけです。

ともかく、この件は兄に頼むことにいたしまして、私だけの食事を二階へ届けてくれました際、使いの者に紙片を持たせたのですが、その中で、午後礼拝式に出掛けますのを許していただくよう、遜った調子で、兄を通して父に願い出たのです。

次のような、人を小馬鹿にした返事がございました。「私の要望については、明日検討される旨を伝えよ」というものだったのです。今日礼拝式に出たいという要望について、明日検討されるというのですからね。

このような侮辱には、黙って耐えるのが最も適切な対応なのでしょう。でも、このようなやり方は私には馴染まないものです。まず駄目でしょうね。ただ、今では兄に引き渡さ

れてしまった身ですから、兄からは何かとあることでしょうし、これはその手初めにすぎないのだと思います。

❁　❁

思い直しまして、もう一度お願いするのが一番良いことだと考えました。そのとおりにいたしました。次にお見せいたしますのは私の書いた手紙の写しで、その後に続いておりますものがその返事です。

謹んで申し上げます

今日の午後には礼拝式へ出席出来ますようお願いをいたしましたが、届けられましたお返事はどう理解したら良いものか、見当もつきません。機嫌の良いところを示そうとのお考えでしたら、ご機嫌が続きますよう希望いたしております。そうなれば、私の願いも入れていただけるでしょうからね。

出掛けないようにとのご忠告がありましたこの二度の日曜日までは、貴方もご存じのとおり、体調に支障がなく、家におります場合には、私はこれまで欠席したことは一度もございません。現在の状況がこのとおりですから、人々と一緒にお祈りいたしますことの大切さをこれほど痛感したこともかつてないのです。

外出は教会への往復だけに止どめますこと、誓ってお約束いたします。

私がそれ以外の行動に出るなど、思い浮かぶべくもないことと考えております。

気持ちがすっかり滅入っておりますから、体調が優れないということで、お客様を避けますのには至極正当な言い訳になることでしょう。顔見知りのどなたからご挨拶を受けるにいたしましても、失礼に当たらない程度の返礼に止どめるつもりです。私が不面目な目に遭っております点も、いずれはお終いになるのでしたら、世間中の人たちにお知らせする必要はないものと思います。ですから、私の評判のためにも、是非ともお願いいたします。私に仕掛けられましたこの不当な虐待に耐え抜きました暁には、ご近所の方々の前に胸を張って出られるようにしていただきたいということです。

幸薄き貴方の妹より

Cl. ハーロー

クラリッサ・ハーロー嬢へ

礼拝式への出席をそれほどまでに主張する娘が、両親にとって、また、一族全員にとって最も大きな意味を持つ事柄に関し、両親に反抗して譲ろうとしないのでは、それは辻褄の合わない話というものだ。お前らしく、人知れず祈りを捧げるよう勧告しておこう。前代未聞ともいうべき頑固この上ない小娘の心に、その祈りが効験あらたかならんことを願いたいものだな。目的とするところは、率直に言えば、お前に屈辱を強い、孝養の心を植えつけてやることなのだ。隣人たちに良いところを見せたがって気を揉んでいるが、その隣人たちも、お前が親への孝養を無視していることはとうにご存じなのだよ。従って、世間の評判を本当に大切と思っているのなら、それを身を以て示すのがお前の努めというも

のだ。評判を確かなものにするのも、あるいは損なうのも、今なおお前自身の力に委ねられているということだよ。

JA．ハーロー

ご覧のとおりなのです、大好きなハウさん。兄は自分の仕掛けた罠に見事に私を捕らえたのです。そして私は、愚かな小鳥のように、もがけばもがくほど、この身はますます抜き差しならなくなってしまうわけです。

手紙　二十三
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月六日　月曜日　朝

私を悲嘆に暮れさせる決心なのです、皆は。可哀相に、私のハンナが暇を出されてしまいました。不面目な形での解雇です。いきさつはこうです。

朝食を持ってきてもらおうとあの娘を階下へやりましたところ、三十分程して姉の腹心の召使（お気に入りの小間使いで、何でも打ち明ける相手のことを召使と言えるならばですが）、あの厚かましいベティ・バーンズがやってまいりました。

「朝食は何になさいますか、お嬢様」と聞くのです。

私は驚き、「朝食は何にするかですって、ベティ。どうしたの。何なの。どうなっているのかしら」と叫んでしまいました。それから、ハンナの名を口にいたしました。何を言ったら良いのか、見当もつかなかったのです。

「驚かれることはありませんわよ、お嬢様。このお屋敷では、もうハンナの姿を目にすることはないということですわ」

「まさか、ハンナに災難でも …　何なの、ハンナに何があったの」

「えゝ、お嬢様、かいつまんで申しますと、こういうことでございます。お嬢様のお父様とお母様は、ハンナもお屋敷でのお勤めがずいぶんと長くなりましたので、差し障りがあるとお考えなのです。それで、〈荷物を纏める〉ように「これが厚かましいあの娘の言い方でした」申し渡されたわけです。そして、代わりに私がお嬢様にお仕えするようにとのご指示なのです」

涙がどっと溢れてまいりました。「おまえに頼むお仕事などありませんよ、ベティ・バーンズ。何一つありません。それはそうと、ハンナはどこなの。可哀相なあの娘と話すことは出来ないのかしら、半年分のお給金のことがあるのです。あの正直者と会ってお給金を払うのもいけないのかしら。おそらく、もう二度とあの娘の顔を見ることはないのでしょうからね。皆が私を悲嘆に暮れさせようと心に決めているのですからね」

「それに、皆さんのほうでは、お嬢様が皆さんを悲嘆に暮れさせるおつもりだとお考えですわ。ですから、お互い様ってところですわね、お嬢様」

生意気ですよ、とあの娘を窘め、このように大きな態度で仕えることが条件になっているのか、問い質してやりました。

気の毒な侍女に私があまり熱心に会いたがるものですから、あの娘も（私の「願いを入

れて」という言い方でしたが）私の要望を持って降りて行きました。
感心な娘のほうでも、私に負けないくらい会いたがっておりましたので、ショーリーとベティの立ち会いの下で願いが叶えられた次第です。
あの娘がやってまいりますと、私はこれまでの仕事ぶりを労ってやりました。
今にも胸が張り裂けそうな様子で、あの娘は私への忠誠心、そして、私を慕う気持ちにいささかの曇りもないことを訴え始めました。また、未だかつて家族の者に支障を及ぼすようなことはしていないとも言っておりました。
私のほうでも、あの娘が暇を出されるよう動いた者たちにしても、あの娘の身の潔白は少しも疑っていないし、解雇は私を侮辱するための企みなのだということを話してやりました。そして、あの娘を手放さなければならないのは本当に残念なことだし、ここに負けない良い奉公先が見つかるよう願っていると申しました。
あの娘は両手を握り締め、こんなにも敬慕する女主人には、二度と再び巡り会うことはないだろうと言うのです。そして、次々に褒め言葉を並べ、私を慕う気持ちを縷々述べておりました
ご存じのとおり、私たちはだれでも恩人を褒めそやしがちなものですよね。実際に恩を施してくれるからなのでしょうが、これでは、親切を施してくれるかくれないかで人の善し悪しが決まるようなものです。でも、この感心な娘は、厚遇してやって当然な娘なのです。引き立てずにおりますと恩知らずになってしまうような人間に恩恵を施したからといって、別に私の手柄にはならないということです。
わずかばかりのリンネルとレース数点、その他細々とした品を贈り、お給金分の四ポンドの代わりに十ギニーを与えました。そして、もしもまた自分の思いどおりに出来るようになったら、あの娘のことを真っ先に考えて上げますからねと、言ってやりました。
これを聞くと、ベティが羨ましそうにショーリーに囁きかけておりました。
ハンナは、二人の前でしたが、他に機会もないということで、私宛の手紙や私の出した手紙のことで検査を受けていたことを教えてくれました。ポケットを姉に見せますと、姉は中を覗き込み、何も隠していないのを確かめるため、あの娘の下着にまで指を差し込んだとのことでした。
私が飼っておりますキジとチャボの数についての報告がありましたので、これからは私のほうで日に二、三度世話をすることにすると申しておきました。
別れ際には、私たちは互いの定めに涙を流しました。あの娘は家族の者皆のために祈っておりました。
このように忠実な召使をこのようにみっともない形で解雇されてしまいますのは、何とも残酷な話です。それで、私といたしましても、次のようなことを口に出さずにはいられませんでした。このような手口は、私を悲嘆に暮れさせることになるかもしれないが、その他いかなる点においても、私に恥ずかしい思いをさせようとしている人たちの目的に適うようなものではない、とです。
ベティが、とても生意気な薄ら笑いを浮かべながら、「どうやら、腕前の比べっこになりそうな感じね」などと、ショーリーに向かって言っておりましたが、私は気に留めませんでした。貴女のお言葉ですと、この娘が話していたことだそうですが、私がこの娘の若い女主人から恋人を奪ったのだと、そのようにこの娘が考えているのでしたら、私に対して

厚かましい態度に出ますのを少しばかり手柄のように思い込みましても、それは仕方のないことなのかもしれませんわね。

このようにして、ハンナを失う羽目になってしまいました。あの娘に相応しい勤め口を紹介していただけるようでしたら、私のためにも、何卒よろしくお願いいたします。

手紙　二十四

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

月曜日　十二時近く

同封いたしました手紙がちょうど今届けられたところです。兄が言い分をすべて通してしまいました。

私の返事の写しもお送りいたします。これ以上筆を進めますのは、今の私には無理な話です。

クレアリー嬢へ

三月六日　月曜日

父上ならびに母上の命を受け、ここに筆を執る次第だが、お二人の前に現れること、あるいは、お二人がおられる時に庭に出るのは慎んでほしいとの特段の仰せだ。また、お二人がおられない時でも、特別の許可ないし指示のある場合を除き、ベティ・バーンズの付き添いなしに庭を歩き回ってはならぬとのお達しだ。

同じく、卑劣なラヴレースと連絡を取ることも禁じるが、これに背くなら、お二人からの祝福は今後一切ないものと思えとのお言葉だ。悪賢いハンナの手引きで文通を続けていたのは周知のことであり、あの娘が急に暇を出されたのもそれゆえなのだ。これまた当然の処置というべきだろうな。

ハウ嬢との文通についてもまた然りだが、最近のハウ嬢は頭が高いし、あの忌まわしい道楽者との連絡に手を貸す恐れもあるからだよ。簡単に言えば、許可なしにはだれとの文通も認めないということになる。

前もって許可が得られないかぎり、いずれのおじ貴の前にも顔を出してはいけない。母上に向かってあのような振舞いに及んだことでもあり、父上がお前の出入りを拒まれるのは、むしろお慈悲というものだろう。

先頃までは、思いのままにお前が取り仕切っていた我が家ではあるが、降りて来るよう指示のある場合を除き、どの部屋に姿を見せてもならぬということだ。

要するに、自室外への出歩きは厳禁ということだが、ベティ・バーンズの（前述のとおり）監視の下で、朝か夕方、時折庭の散歩をするくらいなら構うまい。その際も、途中どの部屋に立ち寄ることもなく、真っ直ぐに裏階段を昇り降りしてもらうことにする。だれもがお前には辛い思いをさせられているのであり、この上、お前のような天の邪鬼の姿を見て苦しみを増すのは避けたいからだ。

いまだかつて耳にしたこともないお前自身の強情さに加え、お前の色男からは絶えず脅

しを受けていることを考えるなら、この措置のすべても納得出来るものと思う。最高の母上、だれよりも寛大な母上が、お前のためにどんな思いをされたことか。お前の当初からの振舞いを見て、だれもがお前の気持ちを動かすことは諦めていたというのに、母上だけは最後までお前を弁護し、保証しておられたのだぞ。これだけの母上が見捨てるお気持ちになられたのだ。お前の強情さにも呆れ果てる。母上は手を引くのが当然のこととお考えだし、お前が自分の務めを受け入れ、歩み寄ろうとしないかぎり、二度と引き立てるおつもりはないとのことだ。

私自身としては、多分お前はひどい見方をしているのだろうが［もしそうなら、お前も同じ轍を踏んでいるわけで、私には慰めになるというものだ］、次のように助言していたのだ。つまり、お前が気の向くままに事を進めるのを認めてもらい（このような黙認以上の厳しい懲らしめを必要としない者もいるのだが）、この家に迷惑が掛らないようにいたしましょう、とだよ。お前がいたのでは、家の中にいながら、その姿を避けて歩かねばならないわけで、家の者にとっては一層辛い思いを強いられることになるのだからな。

私が筆にしたことで、厳しいとか苛酷だとか思う事柄が何かあるとすれば、それを正すこともお前にはまだ出来るのだと言っておこう（ただし、いつまでもそうとは言えないがな）。それも、たったの一言で済むことなのだよ。

すべての点に亘ってお前の言葉に従うよう、ベティ・バーンズに申し渡してある。ただし、あの娘ばかりでなく、本来はお前も従わねばならない人々への義務と矛盾しない事柄に限られるのは言うまでもあるまい。

JA. ハーロー

ジェームズ・ハーロー・ジュニア殿

謹んで申し上げます

次の点だけを申し上げておきましょう。お考えのすべてがこんなにもうまく行ったのですから、お喜びになるのも結構ですし、私についてお好きなように報告をなさって構いません。また、私のほうは死んだも同然で、抗弁のしようもない状態だということです。とは申せ、一つだけお願いをさせていただきます。この先どのようなことをなさる魂胆かは存じませんが、それを実現なさるために、必要以上に厳しい仕打ちに訴えたり、恥の上塗りをなさったりするような真似はお慎みいただきたいということです。

幸薄き貴方の妹より

クラリッサ・ハーロー

手紙　二十五

クラリッサ・ハーロー嬢よりハウ嬢へ

三月七日　火曜日

前回隠してまいりました手紙で、私がひどく追い詰められております様子や、惨めな囚人になってしまいましたことをご覧いただけるでしょう。私の評判につきましては、一顧

だにしてもらえませんでした。これですべてを知っていただいたわけですが、このようなやり方に手加減が加えられることは考えられるでしょうか。ただ、皆の思惑は、私を脅しつけて兄の考えに従わせようということにすぎないのかもしれませんわね。私の希望といたしましては、従兄弟のモーデンがフィレンツェから戻りますまでの間、そして、間もなく戻る予定なのですが、それまでこの件を何とか凌ぎ切ることが出来れば、という点に尽きるのです。でも、皆が早目の日取りに固執いたしますと、従兄弟の救援も手遅れということになりかねません。

兄の手紙からも一目瞭然ですが、私たちの話し合いの報告をしてくれました際、母は私に手心を加えたりはいたしませんでした。でも、母が私にそれとなく漏らしてくれたのですが、兄にはいろいろ魂胆があり、それを挫くよう、私に試してもらいたいような話でした。ただ、私たちの話し合いにつきましては忠実に報告する旨、母が請け合っていたのも事実なのです。それに、夫やその他の家族一人一人の意向に背くよりは、娘を見捨てるほうがはるかに望ましいことであったのは疑いのないところです。

可哀相なハンナに暇を出すことで、万事手抜かりなく事を運んだと、家族の者たちはそう思っているわけですが、庭の出入り、そして、家禽の世話が自由に出来ます間は、皆の見込み違いということになるでしょうね。

私はベティに尋ねてみました。私から目を離さぬようにとか、傍に付いているようにと指示を受けているのか、あるいは、庭の散歩をしたくなった時とか、チャボに餌をやりたくなった時、いつもあの娘の許しを求めなければならないのか、とです。あの娘は、「あらあら、そのようなことをお尋ねになってどういうおつもりなのでしょう」などと驚いてみせましたが、それでも、父、母、あるいは、おじたちが庭に出ております時には、私は出てはいけないことになっているという話は聞いている旨を認めておりました。

ともかく、この点は確かめておく必要があると考えまして、そのまま階下へ降りてみました。そして、一時間ほどぶらついたのですが、異議を唱えられることも妨害されることもありませんでした。大部分の時間は、たまたま兄と姉が居合わせておりました、兄の書斎の窓の下を、いわば目に付くように歩いたのです。多分当てつけのつもりなのでしょうが、わざとらしく賑やかにしておりましたから、二人が私を目に留めたのは確かです。

こうしてみますと、私に加えられた制約のうち、この部分は疑いもなく兄の越権行為なのでしょう。おそらく、この点が強制されますのは次の段階だと思います。そのようなことにならなければ良いのですが。

火曜日　夜

上の手紙を書きましてから、思い切って母に宛てました手紙をショーリーに届けてもらいました。だれも傍にいない時に、直接母に手渡すよう頼みました。

その写しを同封いたします。ご覧になればお分かりになると思いますが、ハンナが去りました今では、外部との連絡手段が私にはまったくないように思わせたかったのです。私の行動がすべて正しいなどとは決して考えておりません。この場合も少々作為を弄しているようで、立派なこととは申せませんわね。でも、これは後で考えたことなのです。手紙は先に出してしまったのです。

尊敬申し上げますお母様へ

憤懣やる方ないラヴレースさんからのお手紙を受け取っておりましたこと、そして、これ以上の災いは防ぎたい一心から返事をいたしましたことはお認めいたしましたし、返事の写しもお見せいたしました。ご一読の上で、これ以上の文通は禁じるのが妥当とのご判断ではございましたが、返事そのものに不都合はないとのことでした。さて、その後あの方からさらにもう一通手紙が届きましたことをお知らせいたしますのが私の義務と存じます。その中であの方は、お父様かお母様、あるいは、私の二人のおじ様たちと、M卿ご同伴の上で平和的に会見をしたい旨、熱心に望んでおられます。この点につきまして、お母様のご指示をいただきとうございます。

正直に申しますが、お母様、改めて禁止を申し渡されたりしなければ、また、こんなにも急にハンナが暇を出されたりしなければ、私といたしましては、あまり気を回すこともなく返事を書き、大至急あの方に届けるようハンナに申し付けていたことと思います。考えるだけでも胸が痛くなるのですが、その折に何かあってはいけませんから、あの方には訪問を控えていただくよう、お願いするつもりだったのです。

それに、ここで申し上げずにはいられないわけですが、私は大きな災いを防いだのであり、どのような災いの原因にもなっていないと考えて然るべき理由もございますのに、その私がすべての責めを負い、私だけが罰せられますのは、まことにもって悲しい話だということです。二人の男性のどちらに関しましても、お母様、あの人たちの気持ちを支配する力がこの私にあるとお思いでしょうか。お一人につきましては、確かに私にも多少の影響力はございましたが、これまでのところ、そのことで私に貸しを作ったのだとお考えになるような根拠は、何一つとして与えておりません。もう一人の男性の場合ですが、お母様、あの人に少しでも影響を及ぼす力は、一体だれが持っているというのでしょうか。私の評判と身の自由の両方共が、兄の怒りと野望のために犠牲にされるわけですが、それでも、極めて重大な責任を負う者として兄を咎めねばなりませんのは。心の底から悲しく思われるのです。ただ、こんなにも深刻な苦しみを受けております者は、胸のうちを忌憚なく申し上げましても許していただけるのではないでしょうか。

この件につきましては、自発的に申し出たことですし、子の務めを果たそうとの思いからお知らせしているのですから、僭越とは存じますが、手紙そのものを差し出すようにとのご要請はないものと考えております。あの方の文体が激しいこともございまして、信義を守るという点からいたしまして、あるいは、分別の点からいたしまして、お渡しするわけにはまいりません。私の受けております手厳しい仕打ちについて、あの方は何か耳にされたようで(私とかハンナの手引きによるものでないことは勿論です)、それをご自分に加えられたものと見做して構わないとお考えだからです。だれか身内の者が口にしております、負けず劣らず激しい言葉のこともあるのだと思います。

私が返事をしなければ、あの方は捨て鉢なお気持ちになり、面白く思っておられない仕打ちのことですから、憤慨するのが当然と(私には正当なこととは思えませんが)お考えになるでしょう。もしも返事をいたしますと、そして、あの方が、私への慮りから、憤慨して当然とお考えのことへの憤りを思い止どまられるとしたら、あの方は私に恩を着せたようなお気持ちになることでしょう。どうか、お母様、そこのところをお考えいただきたいのです。

仮に私が、想像されておりますとおりにあの方に強く心を惹かれているのでしたら、この点についてのご高察をお願いしたりはしなかったはずです。また、心を惹かれてなどいないもう一つの証拠になると考え、お願いする次第ですが、前に提案申し上げました、独身を通したいという意思表示が（厳格に守り通すつもりでおります）、やはり、面目を汚すことなくあの方の言い分をかわしますのには最善の方法ではないのか、ご検討をいただければと存じます。あの方を拒絶していながら、もう一人の人と一緒になるつもりは絶対にないことを明言させていただけないようですと、あの方のほうでは（私と同様に追い詰められまして）、私はその人の肩を持つ覚悟なのだと結論なさるかもしれません。

このようにいたしましても、十分な効力を発揮しないのでしたら、その時こそ、兄の尋常ならざる計画が試されねばなりません。私も運命と諦めますし、おとなしく従うことが出来るよう祈りを捧げるつもりでおります。ですから、すべてはお母様のお知恵に委ねることにいたしますし、このささやかなお願いに関しまして、お父様やおじ様たちにご相談なさるのかどうかもお任せいたします。また、ラヴレースさんへの返事を書かせていただけるのかどうか[許していただけます場合にも、だれに届けてもらうかはお母様のご指示に従うつもりです]、この点につきましても拘ることなく、自分の立場に留まる所存でございます。

尊敬申し上げますお母様、
不幸な身とはいえ、いつも孝養の心を忘れぬ貴女の娘
Cl. ハーロー

水曜日　朝

同封いたしました手紙への返事をちょうど今受け取ったところです。ご覧のとおり、焼き捨てるようにとの母の命令ですが、貴女のほうで安全な場所に隠してくだされば、他の人の目に触れることはないのですから、焼き捨てても同然で、母の目的は叶えられることになりましょう。日付も上書きも見当たりません。

クラリッサへ

あなたがすべての責めを負い、あなただけが罰せられているなどと、そのような言い方をするものではありません。私もあなたに負けないほど責められ、同じだけ罰を受けているのです。でも、罪のないことでは勝っているのですよ。あなたの強情さだって、他のどなたの情熱にもひけをとらないのですから、お兄さんを咎めるのは止めることです。ハンナがあなたたちの手紙のやり取りを続けさせているのだという、私たちの判断は正しかったのです。あの娘がいなくなり、私たちに知られずにあなたがハウさんに手紙を出すことは出来なくなりましたし[私たちとしてはそう考えているのです]、あのお嬢さんから手紙が届くこともないのですから、不安や用心の種が一つなくなったことになります。

私のほうにはハンナへの反感は一切ございません。そのことは言いそびれてしまいましたが、あの娘が暇乞いに来た時、間近なところに人がいたためです。これからどのようなお屋敷で奉公するにいたしましても、若いご婦人たちのいる場合には、贔屓を作ったり内緒の文通の手助けをしたりしてはいけないと、わざと大きな声で注意してやりました。で

も、そっと二ギニーを渡しておきましたよ。ですから、あなたがもっと気前良く心付けをしていたことを耳にしました時にも、腹を立てたりはいたしませんでした。ハンナのことはこれくらいにしておきましょう。

あの乱暴者への返事の件ですが、何を書いたら良いのか、私にも分かりません。私たちのような一族がこのような脅しに晒されていることを、あなたは一体どう思っているのですか。あなたが文通を続けていたのを知っていることは、私のほうでは口にしておりません。前回の私に対する厚かましい態度からして［本当に呆気にとられてしまいました。二階では、私も途中で逃げ出さざるを得なかった話題ですのに、ソームズさんの目の前で続けるというのですからね］、もしかすると、あの人との文通には私の同意があったのだなどと、あなたは申し立てるかもしれませんね。そして、お父様と私とのぎすぎすした関係を一層強めることになるのでしょう。以前の私には、あなただけが慰めだったのですよ、クラリッサ。私の苦労もすべて和らげてくれましたね。それが今では　…　でも、何を言っても、あなたの気持ちが動かないことははっきりしているのですから、この件についてはこれ以上何も申しません。あなたのことはもうお父様の鍛練にお任せしてありますし、お父様が指図をお受けになるとか、願いを聞き入れてくださるとかは、そのいずれにしても有り得ない話でしょうからね。

あなたが話している手紙のことですが、他のものは拝見したのですから、それにも目を通したかったように思います。信義を守るために、また、分別という点からも、私に見せるわけに行かないとのことですね。あゝ、クラリッサ、母親に見せるのは信義に背き、分別を欠くことになるというわけですが、そのような手紙を受け取っていることを、あなたはどのように考えているのですか。でも、あなたに見せるつもりがないのでしたら、見るわけには行かないでしょうね。あなたの隠し事と関わりをもちたくはありません。文通をしていたことは知らないことにいたします。それから、返事の件ですが、その方法はあなたに任せます。ただ、これがあなたの最後の手紙になるということは、あの人に知らせてほしいと思います。また、仮に返事を出す場合でも、私は見ないことにいたします。ですから、封をした上で（返事を出す場合ですが）ショーリーに渡してください。そうしてくれれば、あの娘が　…　でも、いいですね、手紙を書くことに私が許可を与えているなどと考えては困りますよ。

私たちはあの人との間に条件を設けるようなことは一切いたしませんし、どのような形にせよ、それはあなたにも認められないことですよ。もしもあの人が訪ねて来れば、お父様にしてもおじ様たちにしても、穏やかには済まないだろうと思います。あなたには、ソームズさんをお断りしてまであの人を喜ばせるようなわけでもあるのですか。お断りするということは、あの人に希望を持たせることになるのではありませんか。そして、少しでも見込みがあるとしたら、その間私たちは安心していられると思いますか。あの人からの侮辱を受けずに済むと思うのですか。仮にお兄さんに落ち度があるにしても、それは克服出来ないことなのですから、お兄さんを危険な目に遭わせるような文通を、妹のほうで続けて良いものでしょうか。しかも、お兄さんが毛嫌いするのも尤もだと、お父様はお認めになったのです。ですから、あの人を嫌悪する気持ちは、今ではお父様のお気持ちなのですよ。私の気持ちでもありますし、おじ様たち、そして、皆の気持ちにもなっているのです。だれのせいなのか、などということは問題ではありません。

他の点につきましても、あなたの強情さのせいで、私には手の打ちようがなくなってしまいました。すべての責任はご自分が取ると、お父様はおっしゃっているのです。ですから、私に何か頼もうとしても、無駄なことです。これからはただの見物人になるよう努めることにいたします。気を揉むことなしに見物出来れば幸いだと思います。力になって上げられた時には、こちらの思いどおりに力を使わせてはくれませんでしたからね。叔母様も、お父様に指示された時以外は口を挟まないことを約束させられました。厳しい試練の時が待っているのですよ。何か頼みごとをしようとしても、おじ様たちの執り成しがなければいけないのです。でも、おじ様たちにしても、同じようにお気持ちは固まっておられるはずです。結婚のことで両親の意向に従わないような子供は、いなかったものと諦めるべきだというのが「お気の毒に、子供を持たれたことがありませんからね」、おじ様たちが主義にしておられるところなのですからね。

この手紙は決して人目に触れることのないようにしてください。これは命令ですよ。焼き捨てることですね。訳も分からないほどに強情な娘に宛てたものにしては、母親の気持ちが出過ぎております。

私宛には、あと一通でも便りをしてはいけません。あなたのためにして上げられることは、私には一つもないのです。でも、あなたには出来るのですよ。自分のためのどんなこともです。

さて、気も滅入ります身の上話のほうへ筆を進めることにいたします。

こんな手紙の後ですから、直接父に当たりましても、少しでも私の役に立つという望みは極めて少ないと、貴女はそうお考えでしょうね。でも、私といたしましては、父の好意を取り戻す見込みがわずかでもありますことは一つ残らず試してみたのだと、自分自身に対して責任を果たすだけの話ではありましても、手紙を書くのが自分に似つかわしいことと考えたのです。そこで、およそ次のような趣旨の文面を認めました。

父と争おうなどという出過ぎた考えは勿論ないが、ただ、現在ばかりでなく、おそらく将来にわたっても私の幸せを左右し兼ねないこの一件に関して、父の慈悲と寛大な処置をお願いしたいということ。また、私にはどうしても克服出来ないものでもあり、嫌悪の情を表に出したからといって、それを理由に自分の子供を見放すようなことは是非とも思い止どまってほしいということ。一族の企てやあまり当てに出来ない話のために、私が犠牲にされるようなことのないよう願うということ。このようにお目通りを禁じられ、自室に閉じ込められるような不面目な仕打ちを受けているのは不満に思うということ。この一点だけを除けば、すべてに亘っておとなしく義務を果たし、父の意向に甘んじて従うことを誓うということ。独身生活の申し出を重ねて行うことにするが、これまで、私の言葉に疑念を挟みたくなるようなところがあったかどうか、考えてほしいということ。父および母の前に出ることを認めてもらい、ご自分たちの目で私の振舞いを確かめてほしいということ。十分な根拠があって言うのだが、私を陥れるために罠が仕掛けられているし、自己弁護の機会が私には許されていないのを良いことに、私の言葉尻を捕まえるため、故意に罵詈雑言が用いられていると確信するだけに、この点にはなおさら熱心になるのだ、といったことです。そして、不幸な娘が兄の煽動のせいで父親を失うようなことにはならないよう希望しつつ、私の手紙の結びといたしました。

次にございますのが返事ですが、上書きはございませんし、ベティ・バーンズの手で届けられましたのに、封もしないままでした。手渡す時のあの娘も、まるで中味を知っているとでもいうように、横柄な態度でした。

水曜日

強情者め。筆を執ることにはするが、お前の不従順さに相応しい怒りの限りを込めてのことだ。自ら認めている落ち度について大目に見てもらうことを願い出ながら、自分は折れようともしない。このように図太い振舞いは例を見ないばかりか、見逃しになど出来るものではない。この私の権威にお前は盾突いているのだぞ。一族の誉れとなっている兄を咎め立てするというのだから、憤りに値する点では、これに過ぎる話もない。お前にとっては、血のつながり一切が意味のないことなのだろう。その原因の察しもつく。この点に思いを馳せると当然のごとくに生じる数々の感慨が、私には耐えられないのだよ。あれだけ優しい母、甘すぎるほどの母に対するお前の態度は　…　だが、もう堪忍袋の緒が切れた。不孝者めが。どうすれば私の意向に沿うことになるのか、分かるまでは顔を出さずにいることだ。恩知らずめが。お前の手紙を読むと、これまで甘やかしてきたことが悔やまれるばかりだ。もっと理非曲直を区別出来るようになるまで、そして、父親への義務というものを弁えるまでは、二度と手紙を寄越してはならぬと申し渡す。

正当なる怒りに燃える父より

この怒りの手紙には、母の手紙が添えられておりましたが、こちらも封はなく、上書きもありませんでした。私を敵に回すよう、一人残らず仲間にしようとして、あれだけ骨折っている連中のことですから、哀れな娘に不利となるような証言を母から引き出しましたのは、疑いのないところだと思います。

母の手紙のほうは、母と私との間で交わされました激しいやり取りのいくつかを繰り返したものですし、その点につきましてはすでにお伝えしてありますから、内容に触れる必要はないものと存じます。ただ、母までが兄を持ち上げ、兄に対する私の態度を無礼だと責めていることだけはお知らせしておきます。

手紙　二十六

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月九日　木曜日　朝

前のお手紙への返事をまだ出しておりませんのに、もう一通ラヴレースさんから届いておりました。

どういうわけでしょう。私の家の出来事は何もかもご存じなのです。私が部屋に閉じ込められておりますことやハンナの解雇のこと、また、父、おじたち、そして、兄の立腹ぶりや決心のほどにつきましては、私が何とか承知出来ますものよりも多くのことをご存じです。そして、何かございますと、すぐにもそれを知らせてくるのです。まともな手段でこういった情報を手に入れているとはとても思えません。

あの方は耳になさったことでひどく気を揉んでおられますし、私への愛、そして、身内の者への憤りを筆になさる時には、いずれの場合も、それはそれは大変な熱の入れようなのです。ソームズさんとは決して一緒にならないことを名誉にかけて誓ってほしいと、懇請しておられます。

その点だけははっきり約束して構わないと思います。

あの方は次のように懇願しておられます、つまり、ご自分の取り柄に基づいて私の好意に与りたいものと願っているのであって、だれかを踏みつけにして自画自賛に励んでいるようには思わないでほしいということ、また、私の気持ちをご自分に向けさせるために圧力をかけようとしているようにも思わないでほしい、といったことです。ただし、次の点は断言しておられます。つまり、私の家族から受けておられる仕打ちは、その性質の悪辣さからして、憤慨せずにいるのはおかしいと、絶えず周りの人々から、それも、M卿、セアラ夫人、そして、ベティ夫人からと同様、他のお身内の方々全員からも非難されておられるとのことで、従って、私のほうから希望は一切与えてもらえないのであれば、捨て鉢な気持ちに駆られてどのような振舞いに及ぶか、責任は持てないというのです。

実際、あの方がおっしゃいますには、ご家族の方々、とりわけご婦人方は、法的な救済処置を講じるよう助言しておられるとのことです。ただ、帯刀を認められている人間から口汚く罵られたからといって、名誉を重んじる男が果たして裁判沙汰などを起こせるものだろうかと、あの方は尋ねておられます。

お分かりでしょうが、母も私と同じくらいに揉め事を案じているのです。ですから、あの方のこの前のお手紙への返事をショーリーに届けさせても良いと、それとなく言ってきているのです。

お身内のご婦人方の私へのご好意について、あの方はしきりに触れておられます。その方たちと面識はないのですが、ただ、パティ・モンタギュー嬢にはノールズ夫人のところで一度お目に掛かったことがございます。

長く付き合ってまいりました人々のご厚誼を失うにつれ、新たな知り合いを作りたくなりますのは、人間として自然の成り行きかとも思います。でも、世間の人々すべてから愛想の良い人間と見ていただくのよりも、自分の身内にとって、そして、貴女の目に、愛すべき存在と映ることのほうが私には嬉しいのです。ただ、あの方のお身内のこの四人のご婦人は素晴らしい評判をお持ちの方々ですから、だれだってあの方々からは良く思われたいと願うはずです。どうでしょう、フォーテスキュー夫人、あるいは、M卿のことを少しご存じのヒックマンさんにお願いして［勿論、それとなしにですが］、我が家の現在の状況につきまして、そして、以前には賛成してくださったわけですが、この縁組を実現する可能性の乏しさにつきまして、あの方々はどのようにお考えなのかを打診していただくわけには行かないものでしょうか。

私自身といたしましては、これほどの侮辱やつれない仕打ちをお受けになりながら、それでもなおあの方が私に固執なさるようにお身内の方々は望んでおられるかもしれないなどと、そのように考えるほど自惚れてはいないつもりです。万一、あの方々が逆のことを提案なさったりすると、私が困ったことになる、というわけでもございません。M卿がラヴレースさんのこの前のお手紙に署名なさっていたことや、お身内の方々が変わらぬ好意を寄せてくださっているというラヴレースさんのお言葉、それに、他の人たちから伺いま

したお話からいたしまして、あの方々には今でも高く買っていただいているようにも思われるのです。ただ、あの方々ご自身のお言葉として、この点を第三者の口から確認出来れば嬉しいのです。と申しますのも、裕福な名門ということもありまして、縁組については大層重視しておられることがよく知られておりますし、私どものような家族から、あの方に対してと同様に、見境のない侮辱を加えられたりいたしますと、あの方々も（そうする根拠がございますので）憤慨なさると思うからです。

このようなことを申し上げます動機は、今のところ、まったくの好奇心です。貴女が問題にしておられる〈胸の高鳴り〉にも拘らず、これより強い動機は今後とも生じることはないものと思います。たとえ、ラヴレースさんの美質が実際よりもはるかに立派なものだと分かったとしてもですわ。

❁　❁

あの方のお手紙に返事をいたしました。私の言葉どおりに受け止めてくださるようでしたら、ご親戚の方々の好意的なご意見につきましては、あまり強く求めないようにすることが必要でしょう。でも、立派な方々から良く思われますのは嬉しいものですよね。

返事の要旨は次のとおりです。

あの方が我が家の出来事を何もかも（しかも、こんなにも早く）お知りになることに驚きを隠せないということ。

仮にあの方のような男性がこの世に存在しない場合でも、ソームズさんとは決して結婚しないことを保証しております。

私の親戚に対し、売り言葉に買い言葉という態度を取っておられるように思うが、そのような態度は洗練された心の証、あるいは、よく口にしておられる、私に対する思いやりの気持ちの証、そのいずれとも程遠いものに思われる旨を伝えております。

身内の者たちの同意なしに、そのうちのだれかをお訪ねになったことが私の耳に入った場合には、避けられるものであれば、もうそれ以上はお目にかからないよう、即座に決意を固めるつもりだということ。

これを最後に、今後一切お便りをしないならということで、この手紙（だれも中味を見ていないのですが）の発送を黙認してもらっているということ、独身を通すことが私の選んだ道だということは、一度ならずお話ししてあり、しかもこれは、ソームズさんが家族の客として紹介される以前からのことだったということ、また、身内のいずれかの者があの方と知り合う前から、ワイアリーさんや他の男の方たちもそれが私の気持ちであるのはご存じだということ、この件に関して、あの方から一言たりともお手紙を受け取る気持ちはなかったのだけれど、ただ、兄へのお振舞いが卑劣なものではなかったのに、ご期待どおりの手厚いもてなしを身内の者からお受けにならなかった点を考慮してのことだということ、ただし、身内の者までがあの方の味方になり、私自身のほうでも、心の底から好ましく思っている独身生活への希望を抑えることが出来たとしても、なおあの方に対しては強い反発を感じるということ、また、こういったことは、あの方をただの家族のお客様では終わらない人と考えていたのであれば、前もってはっきり申し上げていたはずだ、といったことをお知らせしてあります。これらすべての理由から、あと一通だけはいつもの場

所に届けてくださって構わないので、それを本当に最後の手紙にしていただき、こちらの希望に黙って従う旨を知らせるだけにしていただきたい、と希望を述べ、少なくとも事態が好転するまでは、と書き添えました。

最後の言葉は、すっかり自暴自棄になられてもいけないとの考えから付け加えたものです。ともかく、言葉どおりに受け止めていただけますなら、私といたしましても、悩みの種となっております人たちのお一人からは救われることになりましょう。

あの方からのお手紙のすべて、それに、私の返事もすべてご覧いただく旨を約束してありましたね。その点は重ねて約束させていただきます。ですから、いずれの内容につきましても、説明が詳細に及ぶようなことはあまりしたくございません。それにいたしましても、熱烈な言明の文言に溢れ、期待の気持ちを込めて書き送られてきたものですが、あの方のそんなお手紙に返事をしなければならないような窮状、そして、困難へと（勇気づける気持ちなどまったくありませんでしたし、実際、大いに不服に思っております男性からのものですから）、他ならぬ我が家におりながら追い込まれてしまいました悔しさは、何度口にいたしましても、なお言い足りない気持ちです。

あれほど想像力の逞しい人は貴女もご存じないと思いますわ。評論家というのは、作家自身も気づいていない良さを作品から見つけ出すものですが、あの方も時々、私のほうではそんなつもりでありませんでしたのに、好意とか配慮とかを施してくれたと、美辞麗句を並べて感謝してくださるのです。それも、あまり大袈裟なものですから、親切などと思われないよう、説明を加えなければならないこともしばしばなのです。あの方に親切を示したりするようでは、自己評価が下がってしまいますもの。

要するに、手に負えない馬のようなものでして（馬術をする人の説明を聞いたことがあるのですが）、あの方を抑えつけようといたしますと、両手を痛めますし、腕も外してしまいそうになるというわけです。あの方のお手紙をご覧になりましても、私の返事をお読みになるまでは、一切判断をお下しになってはいけません。もしもそのようなことをなさいますと、貴女の親友が〈自己欺瞞に陥り〉、〈胸を高鳴らせ〉、〈顔をほてらせている〉ように見做すだけの根拠はあると、実際に考えてしまわれることでしょう。ところが、あの辻褄の合わないお方は、別の折にはこんな愚痴をこぼしてもおられるのです。つまり、私はなかなか好意を示してくれないのだが、それに引き替え身内の者たちは、兄とあの方との果たし合いでは、あの方が先に手をお出しになったみたいに、また、その結末が恐れたとおりの致命的なものであったかのように、たっぷり敵意を示してくれるのだ、とです。

このような振舞いによって（私の引っ込み思案を嘆くかと思えば、好意を得たと思い込んで有頂天にもなっておられるお姿のことですが）、あの方のお世辞をおとなしく受け入れるよう仕向けたり、お世辞のお返しに、もっと愛想良くすることを促そうと目論んでおられるのだといたしますと、そして、辻褄の合わないところは不注意や軽率さからきているものではないといたしますと、あの方のことはこの世でも一番腹黒く狡猾な（そして、場数を踏んでいる）人間のように考えることでしょう。もしもそのことがはっきりいたしました場合には、このようなことが可能ならの話ですが、あの方のことをソームズさんよりももっと嫌って然るべきなのでしょうね。

でも、差し当たりまして、この捉えどころのない人につきましてはこれだけにしておきましょう。

手紙　二十七

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

三月九日　木曜日　夜

貴女の周りの方々には、どなたにせよ、我慢なりませんわ。どのような行動をお勧めしたら良いのか、私には分かり兼ねます。ご自分の不利益になることですのに、おじい様のご遺言に従っていただけない原因になっておられますことについて、ご自分に罪はないなどと、どうして貴女にはお分かりなのでしょう。遺言というのは、あなた、神聖なものなのですよ。皆さんにしても、特に貴女を引き立てるよう指示されていることもあり、遺言のせいで不都合な目に遭っているのだとお考えの皆さんでさえ、ご承知のとおり、そのように考えていらっしゃるのです。

あの時お取りになりました処置の理由となります気高いお考えに関しましては、そのすべてに賛同いたしますが、孝養をお尽くしになるためにあれほど感心な、あれだけ心の籠もった振舞いをなさいましても、このように何の報いも伴わないのだといたしますと、いっそのこと、権利回復の要求をなさっても良いのではないでしょうか。

おじい様はご一族ぐるみの欠点に気づいておられたのです。善を施そうとなさる素晴らしく気高いお気持ちを貴女が持ち合わせておられることはご存じでした。おじい様ご自身は、おそらく、ご存命中にはほとんど何もなさらなかったので［お許しくださいね］、ご一族全体の短所の埋め合わせを貴女に託されたということなのでしょうね。私の場合でしたら、地所を取り戻すと思いますわ。きっとそうするでしょうね。

皆さんと一緒に暮らしている間はそんな真似は出来ない、とおっしゃりたいのでしょうが、それはどうでしょう。皆さんが今よりももっとひどい仕打ちに出るようなことは可能だとお思いでしょうか。それに、貴女の権利なのではないでしょうか。また、貴女の心の広さを逆用して、それが負担になるよう仕向けているのではありませんか。ジョン伯父様が保証人のお一人で、もうお一人はモーデンさんでしたね。伯父様に貴女の権利を申し立てられてはいかがでしょう。それと、モーデンさんに事情をお知らせすることですね。そうなされば、多分、貴女に対する皆さんの態度も変わることでしょう。

傲慢なお兄様のことですが、何であの人が貴女を抑えつけたりなさるのでしょうね。私が貴女の立場なら［一ヶ月にしていただきたいですね。それ以上は困ります］、違いを見せつけて上げますわ。自分の屋敷に腰を据えて素敵な計画をどんどん実行し、周りの人たちを皆幸せにして上げるのです。自分用のチャリオットも用意します。訪問に値する振舞いをしている時には、あの人たちのところにも顔を出しましょう。でも、兄と姉が大きな態度を取るようでしたら、自分はあの人たちの侍女なんかじゃなく、妹なのだってことを分からせてやりますわ。それでも効き目がないなら、訪ねて来た時に、門を閉めたままにしておくのです。そして、さっさと帰って二人で仲良くするように言ってやりますわ。

でも、貴女のこのお兄様とお姉様の考え方からいたしますと、それがあゝいった心の狭い人の常なのでしょうが、このように貴女を扱うのにもそれなりの理由があるのだということ、それは認めなければいけないでしょう。お二人にしてみますと（お姉様の失恋の件とお兄様の貪欲さは問題外にいたしますが）、妹さんのお陰ですっかり影が薄くなってしまったのですから、長いこと悔しい思いをされていたに違いありません。鈍い光を放つ人た

ちばかりの家庭に眩しい太陽が輝いているようなものですもの、どうしてあの人たちにそれが耐えられるでしょうか。きっと貴女のことは一族の奇跡くらいに考えておられるのですわ。奇跡と呼ばれるような人は、いうまでもないことですが、称賛の的にはなりましても、愛情を呼び起こすことは決してないのです。貴女とお二人との間の差はあまりにも大きいのです。貴女を仰ぎ見て、お二人の目は痛むのです。燦然と輝く貴女の美点が、その影でお二人をすっかり覆ってしまうのですもの。そうだといたしますと、やっと訪れた最初のチャンスにお二人が飛びついて、貴女をご自分たちと同じところまで引きずり降ろそうとなさったとしても、何の不思議もないわけです。

これからもまだ辛い思いをなさるのは間違いのないところですし、我慢をなさればなさるほど、さらに辛い思いをなさることでしょうね。

あのいやらしいソームズのことですが、貴女が嫌悪なさいますのも驚くには当たりませんね。あの人のことは心の底から嫌っていらっしゃる貴女ですから、さらに反感を募らせていただくようなことを殊更に申し上げる必要はないかとも思いますが、でも、だれだって自分の才能には逆らえないものでしょう。私の場合、前にもお話しいたしましたが、醜悪な似顔絵を描くのが得意なのです。ひとつやらせていただけますでしょうか。やってみましょうね。そうすることで、貴女があの人を嫌悪なさるのも尤も至極なことと考え、また、貴女の気質に見られます堅実さを素晴らしいと思っております、そんな私の気持ちを知っていただくことにもなるからなのですが、この堅実さというのは、私といたしましては、これまでいつも敬服しておりましたし、今後とも変わることなく称賛していかねばならないものなのです。

このいけすかない男とは二度顔を合わせたことがございます。そのうちの一度は、あのラヴレースも一緒だったのです。好奇心を結構お持ちの貴女ですから（勿論、今のところはただの好奇心に過ぎないのでしょうね）、申し上げるまでもありませんけれど、その違いときたら、とても言葉では表せないものでしたわ。

ラヴレースのほうは、例の明朗快活な調子で一座を盛り上げ、だれもが彼に笑い興じておりました。ソームズが貴女のお相手に選ばれる前の話です。ソームズも笑っておりました。でも、あの男独特の笑い方だったのです。想像いたしますに、あの男の場合、少なくとも三つになるまでは泣き通しの年月だったに違いありません。そして、顔の筋肉はいまだに笑いに合った状態を取り戻すことが出来ずにいるのです。笑顔そのものが［笑みを浮かべるところをご覧になったことはないものと確信いたしておりますし、少なくとも、笑みを浮かべさせるようなことはなさっておられないはずです］あの顔付きにはほとんど馴染みませんから、あの男の笑顔ときたら、悪意を抱いている人が見せる嘲笑と同じくらいに、ぞっとしてしまうものなのです。

世の高貴な殿方たちにつきましては、皆さんの特徴を注意して眺めることにしておりますが、同じように、あの男のこともつぶさに観察いたしました。そして、愛想をつかしてしまいましたわ。と申しますより、当時でさえ、ショックを受けたほどでした。特にあの場面では、あの男の奇怪な表情が本来の陰気な顔付きに戻って行くのを見て、ほっとしたのを覚えております。もっとも、顔の歪みに貢献しております筋肉が、錆びついたぜんまいで動いているみたいに、ゆっくりゆっくり戻って行ったのですけれど　…

このような夫の場合、愛されること自体がどんなに疎ましいことでしょう。仮にも私が

あの男の妻だとしたら（それにしても、何という酔狂でしょうね、こんな想像をするなんて）、寛げるのは夫のいない時か、喧嘩をしている時だけでしょうね。ケチをつける相手がいなければ困るような意地の悪い女でしたら、確かに、あのいけすかない男でも辛抱する気になるかもしれません。夫と顔を合わせれば何時だって、悪態をつくきっかけが出来るのですもの。そして、召使たちが一人残らずそのことで、そのことだけのためにでしょうが、ご主人に感謝する気になるかもしれませんわね。でも、ほんの少しでもデリカシーのある奥様でしたら、ご自分があの男にとりまして何かの役に立っていると分かりました時には、それはそれは悔しくて、気の揉めることだと思いますわ。

風采につきましてはこれくらいにいたしまして、残り半分の人物像に移ります。儲けの見込めそうな人ならだれにでもペコペコいたしますのに、その望みがない場合には、横柄で高圧的な男だと言われております。これこそ、卑しい心の表れそのものではないでしょうか。だれかがあの男に一度でも迷惑を掛けますと、その人の家族全員にまで恨みや悪意を隠さないということですし、とりわけ自分の親戚に対してそうなのだそうです。あの男のようにいやらしい人間は、親戚の方たちの中には一人もいないと聞いております。親戚の方たちから相続権を奪おうとしている理由の一つがこれかもしれませんね。

私のところのキティの話では、あの男の奉公人の一人から聞いたことですが、小作人は皆あの男を嫌っているそうですし、あの男のことを良く言う召使は、これまで一人としていなかったそうです。損害を与えられるのをひどく恐れるものですから（おそらく、自分の心が邪悪なせいでしょう）、絶えず召使を代えているのです。

噂によりますと、あの男のポケットにはいつも鍵が一杯詰まっているそうです。そのため、お客様をもてなそうという時にも（お宅のご家族以外に友人はいないのですが）、貧弱な献立が決まりますのに掛かるその半分くらいの時間は、どれがどの鍵だったのかと迷っているのだそうです。ワインを出す段になりますと、いつも自分で取りに行くのだそうですが、別に面倒なことではないのです。訪ねて来る客など稀で、精々仕事のこととか、止むを得ない用事で来る人だけですからね。と申しますのも、それでも構わないという人の場合には、あの男の屋敷に泊まるくらいなら、むしろ行き暮れたほうがましだとお考えになるからです。

でも、この男こそは、クラリッサ・ハーロー嬢の夫として、つまりはご主人として、お宅の皆さんが（この男の心を占めておりますのと同じ浅ましい考えから）探し出してこられたお相手だということです。

それでも、もしかいたしますと、世間で言われておりますほどに情けない人間ではないのかもしれません。人物についての極端に良い評判とか極端に悪い評判というのは、当たっていることは滅多にないものなのです。人は恩恵を受けますと持ち上げますし、不親切にされますとけなすものです。ただ、あの男の欲の皮の張っているところに難色を示しました母に向かって、アントニー叔父様は、叔父様のお言葉を借りますと、貴女ご自身の出す条件にあの男を縛り付けるつもりでいる、と話しておられたのです。ということは、夫婦の絆じゃなく、麻縄で結ばれることになるのでしょうね。それはともかく、これではっきりと分かりますわね。あの男を推している人たちでさえも、あの男は見劣りのする人物で、おそらく必要な点については、どうしても契約で縛り付けておかなければならないのだと考えておられるということです。でも、もう十分でしょう。話し過ぎたくらいですわ

ね、あんな見下げ果てた男については。あの男と一緒になるなんて、論外です。その点は私にもはっきりしているのです。もっとも、どうしたら回避することが貴女にお出来になるのか、そこのところがあまり見えてこないのです。独り立ちを申し出る以外にないように思いますわ。あの地所のお陰で資格はおありなのですからね。

ヤ　ヤ

母が突然入ってまいりました。何を書いていたのか見たいと言うのです。迂闊だったとは思いますが、ソームズの人物描写の部分を読み上げてしまいました。

母もあの男が最も望ましい人物とは言えないことや、容姿も際立って好ましいものではないことは認めましたが、男の人にとって容姿など問題ではないだろうと言うのです。そして、お父様のご意向に背くよう貴女をけしかけているということで、お咎めを受けてしまいました。それに続いて、金遣いの荒い道楽者と比べたら、世間への責務をことごとく果たすことに意を用い、一切合切を手放さないよう心掛けている人のほうに好感を寄せるべきだと、ひとくさりお説教がございました。特定の人物を念頭にしてのことかどうかはともかくといたしまして、有益なお話には違いありませんわね。

世間の賢い親というものは、どうして自分たちの気に入らない人のことをこうも悪し様に言うのでしょうね。かえって弁護を促しているようなものでしょう。ラヴレースは浪費家などではありませんし、債務があるわけでもないのです。大変な道楽者であることは疑いありませんけれどね。次には、そのような人物に対して世間並みの正当な扱いだけはするよう、仕向けてまいりますから、まったくの話、私たちとしても関心を持たずにはいられなくなってしまいます。ですから、おそらく、まずは〈好奇心〉を持つようになるのです。つまり、かくかくの人物、あるいは、その身内の方々が自分のことをどう思っているのか、そのことが気になり始めるわけです。そして、次には、十中八九間違いありませんが、はっきりとした好意とか、何かそれに極めて似通ったものとかが生じてしまうというわけです。

とうとう、母はあの部分を書き直せと言い出しました。でも、母には悪いのですが、どうしてもあの描写は削りたくないのです。私らしさがそのまま出ていますし、自分の楽しみで書いておりますと、きっと貴女を喜ばせることにもなっていましたからね。このとおりだからこそ、私たちの心は一つなわけでしょう。もっとも、貴女にはちょっと生真面目すぎるところが時々あるように思います。私のほうは、貴女のお考えでは、少々軽薄すぎることになるのは疑いのないところでしょうね。

でも、気質がこんなふうに違っているからこそ、おそらく、お互いにこれだけ慕い合っていられるのでしょうね。ノリス(二四)の言葉を借りますと、二人の間に入り込むことの出来る「第三の愛」は存在しないほどなのですからね。お互い、相手の目には何かいたらない点が見えますけれど、どちらにいたしましても、そのことを言われても気にならないほど慕い合っておりますから、お陰で張り合う気持ちもずいぶんと薄れるわけです。もし張り合ったりすれば、胸の奥に潜んでおります例の恨みがましい気持ちを少しは（強くではなくとも）助長するでしょうし、それがそのうち嫉妬心に成長し、やがては悪意に変わってしまうかもしれません。ですから、そのとおりだといたしますと、お互い、欠点は大切

にとっておくことにいたしましょうね。それが大いに役立つかもしれませんもの。二人の生まれついての性質ということもありますからね。男の人にせよ女の人にせよ、体質からくる欠点を克服出来るとしたら、そんな人は大変な英雄か女傑じゃないでしょうか。あえてお名前は伏せますけれど、だれかさんの貪欲さや、最愛のお友達の生真面目さがその例ですし、それに、軽薄さもそうですが、その人物の名は告げる必要もありませんわね。

お知らせしておくのが良いと思いますが、母の好奇心に［母にも好奇心が、それも、たっぷりとあるものですから］負けてしまいました。ところどころお手紙の文面を母に見せてしまったのです。

邪魔が入りました。でも、この際に母と私がどんなことを話したのか、いずれお教えいたします。母の言葉の中では、私のことやお気に入りのヒックマン、それに、貴方のラヴレースのことが同時に話題になっておりますだけに、なおさらお知らせしたいのです。

ヤ　ヤ

母との会話はこんな具合でした。

「ねえ、ナンシー。ハーローさんのお嬢さんのことだけど、やっぱり少し難しいことになりそうね。でも（あの方のお母様もおっしゃっていらしたことだけど）、些細なことについてはいつも親孝行だと評判だった子供に、もっと大切なことで、そう、何よりも一番大事なことで親の気持ちに背かれたのでは、それは辛い話ですよ。また、両方の間を取るとしても、皆さんが好意を寄せておられる男の方には、ハーローさんみたいに気持ちのデリケートなお嬢さんがご主人に期待して当然という、その種の美点は備わっていないのですから残念よね。それでも、間違いなく放蕩者よりはマシなはずだわ。しかも、お兄様と果たし合いをしたような放蕩者ですもの。このことがなくても、父親や母親というのはそんなふうに考えるものなの。それにね、親が一番よく分かっているのですよ。そうでなければ、おかしな話でしょう」というのです。

経験からして、それは当然な話だろうと私は思いました。娘がだれかを依怙贔屓いたしますと、親はすぐにも非難したがるものですが、親のほうでも、何か薄汚い下心に動かされまして、同じように贔屓を作ったりしない場合にはですけれどね。それに、貴女の場合にはこう付け加えても構わないでしょう。アントニー叔父様みたいに、コソコソした黴臭い老人が傍にいて、親の偏見を強めるような真似をしなければ、ということですわ。叔父様は母の偏見を煽り立てておられるのですもの。困った人ですよね。コソコソしていながら、自信家なんですもの。あんな年寄りの独り者がどういうおつもりなのでしょう。親に対する子の務めとやらをまくしたてておられるのですからね。親にもいくらかは子供への義務があると考えておられるのなら別でしょうけれど。それにいたしましても、貴女のお母様は、敢えてこう言わせていただきますが、不精をして言うなりになっておられたために、三人兄弟をすべて駄目な人間にしてしまわれたということです。

「でも、お前には分かるでしょう」　母が言葉を続けました。「お前に対する私の態度がずいぶん違うってことは。私が薦めているのは、イギリス中でも一番謹厳なのに、一番愛想の良い男性の一人なのですからね」

母の言う「愛想の良い」という人のことですが、私はあまり買っていないのですよ。実

直なヒックマンさんを娘の相手に、と母は考えているのですが、それは、二十年も前のことでしたら、おそらく、自分自身にピッタリと思ったからでしょうね。

「お家柄は立派ですし」　母がさらに続けました。「地所も申し分なくて、負債はありませんし、増収も見込めるのですよ［貴女がご存じのだれかさんたちと同じで、母もこの点を真っ先に考えるのです］。ですから、お願いですよ。頼みますからあの人を励ましてもらいたいの。お前にひどくペコペコしているからといって、せめて邪険にするのは止してほしいのよ」

えゝ、えゝ、結構でしょう。馴々しい態度をお取りになれるよう、優しい顔をして差し上げるのね。でも、腰抜け連中は突っ撥ねておくのが一番だと思いますわよ、私は。

「それなのに、私の願いどおりにしてもらいたいと思っても、何を言っても駄目なのですからね、お前には。もしも、ハーローさんのお父様やお母様がお嬢さんを扱っていらっしゃるみたいにお前のことを取り扱ったら、お前は何て言うでしょうね」

「何て言うかですって、お母様。答えるのは簡単ですわ。一言も口をきかなくなるでしょうね。我慢出来るとお思いですか、お母様は。あんな仕打ちを。それも、あれだけのお嬢さんにですからね」

「あらあら、ナンシー。そんなに早まってはいけないわ。お前は片方のお話しか聞いていないのですよ。もっと話に先があるのは明らかね。お嬢さんのお手紙にしても、所々しか聞かせてくれなかったのですもの。お嬢さんのご両親なのですからね。一番よくご存じのはずよ。素敵なお嬢さんには違いないけど、ご両親がお嬢さんをあんなふうに扱うようになるようなことを（ずいぶんと慈しんでおられたのは、お前も知ってるでしょう）、きっと何かお嬢さんはなさったのよ。きっと何かおっしゃったに違いないわ」

「でも、お母様、お母様の考え方からすると、もしもあの人に疚しいところがないとしたら、ご両親はずいぶんと責められることになるでしょう」

それから、ソームズの大きな地所の話になりました。経営の手腕のことを褒め、「少しばかり締まり屋なのは確かね」というのが母の言葉でした。［お互いに甘いものね、お金の好きな人たちというのは、と私は思ってしまいました。でも、このソームズに比べれば、母などはお姫様みたいな気質をしておりますわ］　そして、「だれかに気持ちが傾いたり、愛したりすると、若い娘というのは訳の分からないことを考えるようになるのね」と母が付け加えておりました。

どういう訳かは存じませんが、だれにいたしましても、恋をしている人たちを見つけ出すのがとても好きですよね。好奇心は好奇心を生む、といったところだと思います。

それから、母はラヴレースさんの容姿とか、生まれついての資質や身につけた嗜みのことを褒め、母なりの考えを述べておりましたが、いかにも母親ふうのもので、娘の側にいたしますと、とても嫌な考え方でした。でも、独身を守ることであの男と手を切りたいという貴女の提案につきましては、母からは何の意見もなく、ただ、もしも　…　もしも［という具合に、三、四度この「もしも」を繰り返しておりましたが］それを当てにすることが出来るのならね、とだけ言っておりました。

ところが、私が何を理由に挙げましても、母のほうでは「留保なしの服従」という文句を繰り返し唱えておりました。そして、これは貴女ばかりではなく、私のためでもあるというのです。

私も両親への孝養が称賛に値する美徳だと考えておりますことは、是非とも申し上げておかねばなりません。ただ、有難いことですが、貴女のような試練には遭わずに済んでいるのです。悪いことへと誘惑されることも唆されることもないのでしたら、私たちは皆良い子でいられるのです。でも、貴女が耐えておられることを我慢するような人は、若者の中には（それも、貴女のように自立も出来る人の中には）ほとんどいないと思います。

お父様やおじ様たち、それに、残りの方々の振舞いにつきまして、胸の中にはいろいろと溜まっているのですが、すべてを口にいたしますのは差し控えます。貴女のお気持ちを損ねたくはありませんもの。でも、自分の賢さもまんざらではないのだと、これまでにないほど自画自賛いたしておりますわ。貴女を別にいたしますと、お身内の方々の中には心から好きになれる人は一人としていなかったわけですからね。皆さんのことを好きになる運命にはなかったということです。ただ、親友に誠意をもって当たりますのが私の務めですし、そうすれば、このアナ・ハウもクラリッサ・ハーロー嬢のご容赦をいただけることになりましょう。

確かに、お母様のことは除外すべきだったと思います。尊敬されて当然の奥様です。そして、今では同情に値するお立場なのですもの。このように、いわば屈伏させられてしまわれたわけですが、一体どんな扱いを受けてこられたのでしょうね。ご立派だったあの子爵様も、お気に入りの一人娘をお嫁に出された時には、これほどまでに言いなりになってしまわれるとは夢にも思われなかったことでしょう。相手はとても素敵な紳士ですし、ご本人もお気に入りだったのですもの。私が申しては不遜になるといたしましても、別の人はお父様のことを暴君と呼ぶことでしょう。お父様を存じ上げている人たちは皆さんそう言っております。ですから、お母様のことを大切に思われるのでしたら、そのような世間の不躾さに対しまして、貴女もあまりお怒りにならないことですね。

それでも、お母様は（お父様の不機嫌の原因が痛風であれ、何であれ）ご自分のお生まれにも、素晴らしい美質にも相応しくない振舞いを長いこと続けてこられたとも言えますから、スキあらばと狙っている人たち［他の方たちにもこんな非難を向けられるのは辛いとおっしゃるのでしたら、お兄様だけに絞っても結構です］の言いなりなっておられるということでは、やはり、あまりご同情申し上げるわけには行かないと思わずにいられないのです。しかも、これはご自分の束の間の平穏を守るためのことですからね。また、そのようなことは骨を折られるのに値しないことだったとも思います。だって、そのために他の方々の意向がいつも強くなり、ご自分の希望は抑えられてしまいましたし、挙げ句の果てには、我が儘に負けて我慢をなさるものですから、その我が儘が増長し、どうしようもないものになってしまったのですからね。そして、今では、お子さんの中でも一番立派な人を、一番立派でない人の野望や利己心の生贄に（ご自分の判断とは裏腹に）なさろうというのでしょう。でも、この話題からはもう逃げ出すことにいたします。とても許していただけないほどお話ししてしまいました。ただ、度を越したおとなしさということにつきましては、胸の中には言いたいことが山ほどあるわけですから、それに比べますと、ずいぶんと慎んだつもりですわ。

ヒックマンさんが今晩にもロンドンから戻ることになっております。ラヴレースが都ではどのような暮しをしているのか、どのようなことを話しているのか、調べてくれるようお願いしてあるのです。もしも調べていない場合には、たっぷりと怒りをぶつけるつもり

です。どちらの点につきましても、あまり良い報告は期待なさらないことですね。あの男は間違いなく策士で、嘘で固めた恥知らずです。

まったくの話、心の底から男を軽蔑します。私たちの父親や母親のことは、放っておいてくれたら良いのにと思いますわ。目も眩むような約束や愛の誓い、贈与財産、他にも仰々しいたわごとを並べ立て、私たちを悩ませるように親たちを急き立てるのですもの。どんなに素敵なことでしょうね、貴女と二人で暮らせたら。そして、男たちを皆からかってやれましたらね。でも、愚かな小鳥のように甘言につられ、巧妙な手管に乗せられ、罠に掛かって囚われの身となり、惨めな屈従の日々を送るなんて　…　二、三週間は王女様みたいにかしずかれるでしょう。でも、それとて、死ぬまで奴隷の扱いを受けるためのことなのです。貴女もソームズのことで言っておられますように、私も男には本当に我慢なりません。それにいたしましても、貴女の縁続きが「もう、「お身内の方たち」などと呼ぶのは止めにします。もう一方の呼び方にだって値しませんけれどね」あんな恥知らずの賄賂を受け取り、あの男の家族から相続権をすっかり奪ってしまうのですからね。世間並みの公正さだけでも備わっている人間でしたら、こんなやり方には抵抗してしまいますよね。

お頼みのあった件につきまして、ヒックマンさんからM卿を打診してもらうつもりですが、実際に打診を受けました時、卿やお妹さんたちがどのようにおっしゃるかは、もう分かっていることです。クラリッサ・ハーローさんのようなお嬢様と親戚になりますのを誇らしく思わない人など、一体どこにいるでしょう。フォーテスキュー夫人がおっしゃっていましたが、皆さん揃って、貴女の大変な讃美者だということですからね。

貴女が今後どうなさるべきかにつきまして、あまり明確な助言はなかったとおっしゃるのでしたら、それは一言で済むことだと言わせていただきましょう。〈権利回復〉なさるよう、再度促すまでのことです。そうなされば、後のことはすべてうまく運ぶはずです。

こちらでは、ハーヴィー叔母様ばかりでなくノートン夫人までが、この件では黙って従う旨の意思表示をなさったという話になっております。もしも夫人が、貴女の教育に当たって果たされたご苦労、また、貴女ご自身の素晴らしい才能や嗜みにいたしましても、ソームズみたいなつまらない男のためにすべて無駄に投げ捨てられてしまうのも仕方のないことだ、などとお考えなのでしたら、私といたしましては、気の済むまで夫人と口論しても構わない気持ちです。私がこのようなことを申しますのは、あの立派な夫人に対する貴女の尊敬の気持ちを損なおうとしてのことだと、貴女はお考えかもしれませんわね。そのようにお考えになられても、まったくいわれのないこととは申せません。白状いたしますと、どうも好きになれない気持ちなのです。夫人のことはそんなにお好きではないというところをはっきりとお示しになり、私のほうをもっと大事に思ってくださっていることを確信させていただけますなら、話はまた別なのでしょうけれどね。

お母様は、貴女には大きな試練の時が待っているということ、また、貴女のことはもうお父様の鍛練にお任せしてあるということを話しておられますね。そのお言葉を聞いただけで私には十分です。そんなお言葉を用いるきっかけを作った人たちのことを軽蔑してしまいますわ。貴女を助けようにも、お母様には手の打ちようがなくなってしまっているですって　…　それにまた、貴女が何か頼みごとをしようとなさっても、おじ様たちの執り成しがなくてはいけないとおっしゃるのですからね。貴女は、会うのは禁じられていらっしゃるのですから、あの変人さんたちに一筆認められるおつもりなのでしょうね。それに

いたしましても、あれほどの女性で、あれほどのお姉様、あれほどの良妻賢母でいらっしゃいますのに、ご自分のお宅では何の影響力もお持ちではないのでしょうか。こんな有り様ですと、貴女もおっしゃるとおり、自立の出来る女の人で結婚を望む人などどこにいるでしょうね。また癇癪が起こり始めております。〈権利回復〉なさることですわ、宜しいですね。お役に立つことも出来ませんのに、ご機嫌を損ねるようなことになってはいけませんから、今のところ申し上げることはこれだけにしておきましょうね。

心からの愛を込めまして、貴女の友、そして、しもべ

アナ・ハウ

手紙　二十八

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月十日　金曜日

前回のお手紙の中にひどく気になりますところが二、三箇所ございましたので、そのことについて触れさせてくださいね。

第一には、私の親戚につきまして、特に父と母のことを非難されたり、おじい様の霊をけなすようなことを言ったりしておられましたね。気が滅入ってはおりましても、強い憤りを覚えたと言わせていただきます。それに、貴女のきつい冗談の矛先は貴女のお母様でさえも避けられないことがあるのですね。私たちというのは、辛い仕打ちを受けているように思って嘆き悲しみ、胸を痛めております時には、大切に思い、尊敬もしております人たちについて勝手なことを筆にしたり、口に出したりいたしますのを、自分では慎むことが出来ないものです。でも、どなたであれ、他の人が同じように勝手な振舞いをなさいますのを耳にいたしますのは、気に障るものなのです。それに、貴女は気に食わない場合には言い方がとても手厳しいですから、こちらの気持ちが鎮まり、その厳しさのお陰で、自分がきっかけとなっておりました事柄について（振り返って）気づくようになりました時には、我と我身を責めずにはいられなくなってしまうのです。

でも、一番我慢なりませんのは、母の非難をなさっている点です。母の柔順さが報われていないからといって、それが何でしょう。報われないからといって、あるいは、感謝の気持ちも示してもらえないからといって、私たちの義務と思われますことをないがしろにして構わない理由になるのでしょうか。母の優しい胸に最初に火を点しましたのは、父の快活な心だったのです。あのむごたらしい病に襲われました時に、父があれほど堪え性をなくしてしまいましたのは、これまでにもお話しいたしましたとおり(ア)、そんな心が内に閉じ籠もってしまったからなのです。父はずっと母のことを愛しておりました。立派な妻であれば（夫が発作に襲われ、苦しむ姿を刻々目の当りにし、その発作もどんどん激しさを増し、いよいよ頻繁になっているのですから）、愛情や憐れみの気持ちから自分の意思や好みを捨て、このように苦しんでいる夫、そして、自分を愛してくれていることは疑うべくもない夫の意向に沿おうといたしましても、それは許されること、いいえ、むしろ褒め

(ア) 二十三頁から次頁にかけて。

られることではないでしょうか。だといたしますと、こんなふうに妻に機嫌を取ってもらっておりました夫が「人間の本性など、完璧なものではありませんもの」、どんな人からも指図されるのが耐えられなくなったといたしましても、ましてや、我が子に背かれるのが我慢出来ないといたしましても、それはあまりにも当然な話ではないでしょうか。

ですから、私をひどく怒らせたくないとお考えでしたら、母のことは容赦していただかねばなりません。また、私が父に対しまして敬愛の念と同時に、憐れみの気持ちを寄せますことも、母共々お許しいただけるものと確信いたしております。

お願い事をしたり、愚痴をこぼしたりすることの出来るお友達と申しますと、私には貴女以外にはいないのです。不幸な立場に置かれておりますし、これからも愚痴をこぼすことになると思います。愚痴の種がますます多くなってくるのは目に見えているのですからね。でも、その場合にも、私の癇癪を鎮め、怒りを和らげてくださいますのを貴女のお役目にしていただきたいのです。このようなことを申しますのも、貴女のご忠告がどれほど私に影響力を持つのか、貴女もご存じのことだからです。それに、家族の者たちのことを遠慮なく扱っておられますが、そのようなことをなされば、家族に対する私の義務の意識を弱めがちになるだけの話でして、私自身のためには一切役立ちませんこともご承知に違いないと思うからなのです。

それでも、白状せずにおられませんのは、ソームズさんが私から受けて当然な軽蔑の気持ちを、貴女も同じように持っていてくださるのを嬉しく思うということです。ただ、言わせていただきますと、あの人も貴女が描いておられるとおりの恐ろしい人物というわけではないのです。私が申し上げておりますのは容姿のことです。あの人の考え方に関しましては、耳に入りましたすべての話からいたしまして、貴女は公正そのものの扱いをなさいました。それにいたしましても、醜い姿を模写なさる才能は大したものですし、とても陽気なところもございますから、時々ですが、本当らしさが失われてしまうこともありますわね。要するに、何かの機会に、律義に公正さを守るというよりは、ウィットが示唆いたしますことをそっくり筆になさる決意で事に当たられるところを、私も一度ならず存じ上げているということです。もしかいたしますと、特にこの件につきましては、私のほうで口を出すのは控え目にしたほうが良いという考えもあるかもしれませんね。貴女があの人を嫌っておられるのは、私を大事に思ってくださるお気持ちから生じていることですもの。でも、私たちが目指さなければいけませんのは、他の人々が私たちや私たちの振舞いを判断なさる際に取るだろうと想像して当然な仕方で、私たちのことや私たちに関わります事柄を自ら判断することではないでしょうか。

地所の権利を回復せよとのご助言についてですが、私自身はどのようなことになりましょうとも、父を相手に法廷で争うようなことは決してしないつもりなのです。この件につきましての貴女のお考えに対しましては、また改めてお答えする機会があろうかとも思いますが、差し当たりましては、このように心を決めておりますことをラヴレースさんがお知りになれば、あの方自身も私のことを求婚に値する女とはほとんどお考えにならないだろう、というのが私の意見だとだけ申し上げておきます。こういった男の人たちは、お世辞を並べ立てましても、〈永久不変のもの〉に望みを掛けているのです。それもまた至当なことなのでしょうね。愛などは、振り返って見ますと、とても愚かしいものと映るに違いありません。何不自由のない生まれの人に貧窮を嘗めさせたり、寛大な心の持ち

主に他人の恩義を受けさせるとか、他人に頼らざるを得ない立場を強いたりしているのですからね。

私たちが互いに温め合っております友情のことを、気質の違いをもとに、とても上手に説明しておられますね。白状いたしますが、あのようなこと、私には思い付かなかったことでしょう。きっと何かがあるのでしょうね。でも、あるなしに拘らず、冷静で、反省をするゆとりのございます時にはいつでも、貴女が加えてくださいます懲らしめのことを思い、どれほど厳しいことを言われましても、ますます貴女をお慕いすることでしょう。ですから、私が少しでも間違っていると思われました時には、どうぞ容赦なさらないでいただきたいのです。貴女の楽しい冗談は大好きです。私がいつも歓迎しておりましたのはご存じですね。私のことを生真面目すぎるとお考えだといたしましても、ご自分で責めておられますように、貴女のことを軽薄だなどと思ったことは決してございません。私たちがお付き合いをしてまいります上で最も重要な条件の一つは、気に掛かっております点について、お互い何を口にいたしましても、あるいは、筆にいたしましても、それを根にもってはいけないということでしょう。友情を保つためには不可欠の条件です。

子供は黙って従うものだ、とお母様がおっしゃるのは分かっておりました。残念に思いますのは、私の場合、従うわけには行かない状況に置かれているということです。従うことが出来るのでしたら、そうするのが私の務めということでしょう。貴女は本当に幸せだと思います。ヒックマンさんを選ぶようお母様が勧めておられることにつきましても、貴女が心の中で争わねばなりませんのは、ただ、貴女ご自身の、気紛れなところはございましても、楽しい気分だけなのですからね。そんなにも情け深い扱いを受けることが出来るのでしたら、私もどんなに幸せなことでしょう。ヒックマンさんのような立派な方を励ますよう、自分の母に「お願いね」、「頼みますよ」と言わせておいて、それがすべて無駄骨に終わるようでしたら、私なら赤面してしまうことでしょうね。

それにいたしましても、大好きなハウさん、「だれかに気持ちが傾いたり、愛したりすると、若い娘というのは訳の分からないことを考えるようになるのね」などと、私のことを念頭においてお母様に言われてしまいますと、本当に恥ずかしくなってしまいます。私がそのような状態だと言いくるめたがっておられますのが貴女だけに、なおさら胸に応えてしまうのです。

私の気持ちのほんのわずかな傾きでありましても、それを貴女から隠そうといたしますのは、大いに非難されて然るべきことでしょう。ですから、申し上げてしまいますが、この方 … このラヴレースさんは … もしもヒックマンさんがお持ちのような品性の持ち主でしたら、また、行いを改めさせる見込みがあるならの話ですが、十分好意を寄せて構わない男性だと思います。さらに、次の点もお認めいたします。つまり、強引な手口によって、いわば一歩一歩ある状態に … 適当な言葉が見つからないのですが … 〈条件付きの好意〉と称されても構わないような状態に引き込まれる可能性もありそうに思うということです。でも、〈愛〉という言葉を使うのはいかがなものでしょうか。愛というのは、いくつかの場合には正当性もあれば、魅力的でもある言葉ですが（例えば、親族間でのすべての義務、あらゆる社会的義務、そして、この両方よりもさらに上位に置かれる義務のすべてについて用いられる場合のことで、最後の例では、〈神聖な〉と呼ばれるのが適当と思います）、ただ、私に当てはめておられるような狭い、限定された、利己主義的で特

殊な意味合いでは（それに、相手の人というのも、噂になっておりますことがすべて本当だといたしますと、品行の点で到底容認出来そうにないわけですから）、あまり芳しいものとは思えないのです。他のすべての事柄につきましては、私をどれほど無遠慮に扱われましても、前にも申しましたとおり、お友達だからこその遠慮のなさと受け止め、ますます貴女をお慕いすることでしょう。でも、このお咎めが、私のことかどうかは別にいたしましても、私たち女性のだれかに当てはまることだと、あんなにも軽々しく筆になさったり口に出したりなさるのは慎んでいただけると嬉しいのです。貴女のように洗練された心の持ち主が（男性すべてに対して揺るぎのない軽蔑の念を抱いていると、人にはそう思われたいのでしょうが）、友人を恋煩いの愚か者と見捨て、得意になってそんな弱さを嘲笑ったりなさるようなことがあれば、男性は二重の意味で勝ち誇ることになるのですからね。

最後のお手紙二通の内容につきまして、他にもいくつか申し上げておきたいことはあるのですが、今のところ、それだけの心のゆとりもございません。前述の事柄に是非触れたい気持ちが頭を離れませんでしたので、急ぎ取り上げてみた次第です。

二枚目の便箋も最後になりましたので、今回はこれにて結びといたします。次回の手紙では、この前お便りをいたしました後にこちらで起こりました出来事すべてについてお知らせいたしましょう。

手紙　二十九
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月十一日　土曜日

兄と姉のほうからひどく挑発的な伝言が届きました。私が皆の意向に従わない場合には泣きを見ることになる、と繰り返し言っているのです（しかも、苛々させるような生意気な態度でベティ・バーンズが届けに来たのです）。そんなこともあり、母からの手紙にありました示唆に従いまして、おじ様たちに働き掛けるつもりでいたのですが、その前に二人を少し諫めるのも適当なことだろうと考えました。ただ、その方法が大変なものでしたから、貴女には（私の手紙について時々なさっていたような受取り方をされますと）有利なことになってしまいそうです。要するに、ラヴレースさんに関する部分では書き方を変えてみたのですが、この点について私が挙げました理由などでは、もっと好意的なご意見を貴女からいただくわけに行かないというのでしたら、私は深みにはまっているのだとおっしゃるのも、これまで以上に根拠のあることになってしまうからです。実は、二人の思うとおりにさせてみるのも適当なことだと考えたのです。私はラヴレースさんに好意を抱いているのだと、二人は言い張っているわけですから、二人が自分たちの考えに疑問を抱くような根拠ではなく、むしろ、確信出来る根拠を提供しようというのです。

私が書き方を変えました理由は、概ね次のとおりです。

第一に、私は自分たちの意向に従うべきだと皆が主張いたします時、その主たる論拠にしておりますのは、心を囚われている相手はいないことを私が認めている点なのです。ですから、好意を寄せている人を諦めなければいけないということではないとすれば、私の反抗の姿勢は、皆の目には、まったくの強情さと映るわけです。それで、ソームズさんに

対する私の嫌悪感は、最悪の場合でも、容易に克服出来るものであり、父親への孝養や一族の夢を推し進めるためには、是非とも克服されなければならない嫌悪感なのだと主張しているということです。

次には、私を黙らせますためにも、皆はこの論拠を頼りにしているわけですが、それでも、私のことを信用してはいない様子で、まるで父の下男に恋をしているみたいに私を辱めるのです。ですから、ラヴレースさんを諦めることを条件として申し出たところで、今までのところ、好意的な反応はまったく得られずに終わっているというわけです。

その次に、ラヴレースさんに対する兄の敵意は、決して十分な根拠に基づいたものではないと、そう考えずにはいられないということです。あの方は度を越した女好きだというのが、いつもいつも聞かされております非難の台詞ですし、それは大いに非難されるべきことではあります。でも、私にその種の恋情を寄せておられるということで、兄はあの方を咎めているのでしょうか。そうではありません。それが主な動機ではないのだということ、また、私のことを何よりも邪魔者のように考えているのだということは、兄の振舞いのすべてが証明しているのです。

だといたしますと、少しは好意的なことを言って上げますのも、いわば正義の求めに応えることになるはずです。兄に挑発されましたにも拘らず、致命的な危害を加えることは思い止どまってくださった人ですもの。しかも、お気持ちがあればそうすることも出来たのですし、兄のほうではそのつもりで立ち向かったわけですからね。ですから、少し脅してみるのも悪くはないと考えました。私に対して用いているやり方は、二人が目論んでいる目的に適う方法とはまるで逆かもしれないと思わせるのです。結局の話、私を怯えさせるために二人が道具にしている人よりも、あの方のほうを本当に好いているのだと思い込まれたといたしましても、それがラヴレースさんを得意がらせることになるものでしょうか。それに、私のハウさんは［と、私は結論いたしました］、おとなしくしているから兄の無礼を許すことになるのだと責めておられる。あの人を見習ってみよう。そして、このようにいろいろと考えてきたのだけれど、私にはしっくり来ないとしても、あの人のように少し強気に出たらどうなるのか、ひとつ試してみるのも良いだろう、とです。

このような考え方から、兄と姉に宛てて手紙を書いてみました。兄宛の文面は次のとおりです。

このような取扱いに甘んじておりますし、元をただしますと、お兄様、全面的にとは申さないまでも、大部分は貴方の差し金に始まったことなのですから、この際、諫めごとの一つも言わせていただきたいと存じます。貴方の機嫌を損ねようとの気持ちからではございませんが、これから筆を進めるに当たりましては、遠慮のない扱いをさせていただきます。事情を考えますなら、それも致し方のないことなのです。

最初に、私は貴方の妹であって召使ではないのだということを思い出していただけたらと思います。従いまして、指図をなさる理由もないような折に、私に向けてこられましたあの罵詈雑言の類いは、耐え忍んでいたのでは私の名に関わりますし、口に出したりなさるのは、貴方にも相応しくないものであったことを知っていただきたいと思うのです。

仮の話といたしまして、貴方の憎んでおられるあの方と私が結婚することにいたしましょう。そして、あの方が礼儀正しい夫とか、優しい夫とかになってくれないものといたし

ましょう。でも、そのことが、無礼で思いやりのない兄として振る舞うことの理由になるものでしょうか。そのようなことになるといたしましても、どうして不幸の先駆けになるような真似をなさらなければいけないのでしょう。はっきりと申し上げます。ここしばらくの間、妹の私を貴方は手酷く扱っておられますが、妻としての私にもっとひどい仕打ちの出来るような人がいたら、その人は本当の野蛮人に違いないということです。

お願いです、どうかご自分の胸に訊いていただきたいのです。もしもベラが、これほど貴方に憎まれている方からの求婚に応じても良いと考えたとしたら、ベラにもこんな仕打ちをしていたのかということです。別のことをしていたとおっしゃるのでしたら、宜しいですねお兄様、ご忠告申し上げておきましょう。何かの手段を講じます際には、その結果として期待されることではなく、そのために何を提供しなければならないかを考えるべきだということです。

貴方にも兄がいて、似たような場合に、貴方が私にしているようなことを貴方に対して行ったとしたら、どんな受け止め方をするのでしょうね、貴方なら。お忘れのはずはないと思いますが、父がネリー・ドイリーさんとのお話を持ち出された時、父への返事だというのに、ずいぶんとそっけない言い方でしたね。「あの女は好きでない」と、これだけでしたね、貴方が口になさったのは。そして、それで十分だと考えていただいたのです。

これまで、いくつもの縁談を辞退させていただいたのですが、それを大目にみてくださった父の寛大さを思い起こすなら、不名誉な目に遭っているとはいっても、その原因がだれにあるのか分からないはずはないと、きっと貴方はお考えのことでしょう。また、お断りするのを許していただいたどの紳士たちと比べましても、風采や物腰の点で問題があるわけですから、その人を推すために骨折って共同戦線を張らねばならなかったのはだれのせいなのか、ともおっしゃりたいのだろうと思います。

二人の男性を比べようと言っているわけではありませんし、あの二人を比べることなどとても出来る話ではございません。仮に比較をいたしましても、一方の男性に不利を招くような相違点と申しますと、ただの一点だけでございます。確かに、それは極めて重要なものです。ただ、だれにとって重要なのかということですが、あの方の申し込みを励ますつもりなら、勿論、私にとってということになりましょう。でも、貴方にはこれっぽっちも意味のないことなのです。ただし、同じ目的のために苦しみを分かち合うよう、あの男性と私とを、訳の分からないご方針で結び付けたりなさらなければの話ですが、私のほうでも固く心を決めておりますのはお分かりいただけることでしょう。もう一方の人を絶対にお断りするつもりでおりますのと同様に、あの方とも手を切る覚悟でいるのだということをです。この趣旨のことはすでに提案申し上げているのです。受け入れていただけないようなことがあれば、それは貴方のせいではないだろうかといった、そんな私の懸念を強めるような根拠はお与えにならないことを希望しております。

お怒りに触れるような原因を与えた覚えはまったくございませんが、兄ではあっても友ではないなどと、貴方のことを申さねばなりませんのは悲しいことですね。

愚かな妹に対する最近の、そして、現在も続いております貴方の振舞いについて、わざわざ説明の労を取ってくださるようなことは、多分ないのでしょう。でも、愚かな妹という立場の者には、そして、女性にも、丁重な扱いとか礼儀正しい振舞いは必ずしも必要ないといたしましても、公正な扱いは当然のこととして与えられるべきものなのです。

ついでにもう少し言わせていただきますが、若者に対する大学教育の主眼といたしますところは、理性の正しい運用、そして、激しい感情の抑制を学ばせることのはずです。だといたしますと、お兄様、後のほうの教えにつきまして、兄が大学で学んだ以上のことを妹は化粧台に向かって習得したなどと、どなたであれ、私たち両方をご存じの方に、そのように結論なさる余地をお与えにならぬよう希望いたします。このようなことを申し上げねばなりませんのを本当に残念に思うのですが、激情を抑えられない貴方の振舞いは、お受けになった紳士教育の面目を施すものではないと、しばしばそのように述べられておりますのを、私は耳にしているのです。

遠慮なく申し上げましたことをお許しいただきたいと思います。でも、そのきっかけをたっぷりと作ってくださったのは貴方ですし、貴方のほうでは、いわれもなしに、もっと無遠慮に私を扱っておられるのです。ですから、お気に障るようでしたら、その結果ではなく原因に目をお向けになることです。ご自分の胸の内をよくお調べになれば、その原因も消滅するはずです。そして、そうなれば、私の兄よりも立派な紳士はどこを捜しても見つからないということにもなりましょう。

このように助言をさせていただきますのも、誓って申しますが、兄を思えばこそ（私には思いやりを見せてくださいませんが）のことなのです。私のことを生意気な奴だと、近頃はよくおっしゃいますが、決して生意気な気持ちから申し上げているのではございません。たった一人の兄ではありませんか。優しいお気持ちを取り戻していただきたいと思います。何卒、貴方のことを「思いやり溢れる友」とお呼びするに足る根拠をお与えいただきとうございます。今も、そして、これからも、

親愛なる貴方の妹

クラリッサ・ハーロー

兄からの返事は次のとおりです。

クラリッサ・ハーロー嬢へ

返事を出さずにいれば、お前がいつまでも差し出がましいことを書き連ねるのは目に見えていることだ。それゆえ、筆を執ることにする。だが、お前のように独り善がりで生意気な説教師、そして、尋問者気取りの人間と議論しようというのではない。まことしやかなたわごとで私を悩ますのを禁じるためのことだよ。女の賢しさが何の役に立つというのだ。ただ、自分を過大評価し、他人をすべて蔑むことになるだけだろう。お前の場合にしても、生意気さんよ、小賢しさゆえに本分を忘れ、両親からも、あるいは、他のだれからにせよ、教えや指図を受け入れようとしなくなっているのだ。だが、そのまま続けて行くことだな、お嬢さん。それだけお前の苦行が増すというものだ。いいかな、ただそれだけのことだよ。誓って言うが、俺にその力があるなら、そうしてみせるつもりだ。お前があの悪党のラヴレースを（家族全員から当然のごとく嫌われている男だが）、だれよりも好いているかぎりはな。今では、お前の手紙で（前からぴたりと見抜いていたことだが）われわれにも分かったのだ。あいつがお前の慎みのない心を虜にしているのは歴然としているのだよ。だが、あいつがお前の心を強く捉えれば捉えるほど、お前をあの悪党から引き離

そうとする力も大きくなるのだ（そして、たっぷりとそれを味わってもらうことになるだろうな）。お前の生意気な説教、また、これまでの厚かましい非難にも拘らず、私の中に兄を、そして、友をも確実に見出だしてもらえるはずなのだよ、お前自身に落ち度がなければな。ただし、相変わらずラヴレースのようなならず者のことを想い続けるのなら、兄らしさも友らしさも私に期待するのは止めることだ。

JA. ハーロー

次に、姉に宛てました私の手紙の写しをお見せいたしますが、併せて、姉からの返事を添えておきます。

私に対する父の怒りを和らげようとなさるどころか（このような不幸が貴女に降り懸かった場合には、私はきっとそうしていたと思います）、父の立腹を煽るだけでなく、薄情にも、母の不興を募らせるのにも手を貸すなんて、大好きなお姉様、私は一体どの点で貴女の怒りを買うようなことをしたのでしょうか。お願いです、ベラ、私の身にもなって欲しいものです。もしも貴女がラヴレースさんと結婚するよう命じられるとしたら（あの方には反感を持っているはずですから）、とても辛い命令だとは思わないでしょうか。でも、ラヴレースさんを嫌う貴女の気持ちにいたしましても、ソームズさんに対する私の嫌悪感に勝ることは有り得ないのです。それに、愛と憎しみというのは、自分ではどうにもならない感情でしょう。

お兄様は、多分、恋慕の情といったものにはまったくの門外漢として振る舞うのが、男っぽさの証だと考えているのでしょう。取り立ててだれかを愛したことなどないと、自慢げに話しているのを私たちも聞いたことがありますね。それに、心を占めている野望がありますし、最初の試みで撥ねつけられたいきさつもありますから、愛だの恋だのというお話は今後とも考えられないでしょう。だといたしますと、大学を出たばかりの若輩で、つい先頃までは自分が指導を受ける側でしたから、今度は指導者気取りになって、趣味の点でも礼儀作法の点でも別な育てられ方をしております女性に指図をしようといたしましても、いよいよ不思議ではないことになるのです。何しろ、兄の説明によりますと、大学というのは、何のことはない、下級生の上に立つ上級生から、そして、その者たちから教師に至るまで、暴君たちの寄り合いに他ならないというではありませんか。あれだけ男気が強いのですから、その兄が不幸な妹を意のままに抑えつけようと骨折りましても、そんなに驚くようなことではないのかもしれませんね。兄の敵愾心にいたしましても、また、敢えて言わせていただきますが、兄の野心にいたしましても［以前なら、これが兄の短所だということは、お姉様だって認めていたでしょう］、そうすることで満たされるわけですからね。でも、自分自身に降り懸かっていたかもしれない事ですのに、姉が妹の言い分に耳を貸さず、兄と手を組んで、両親の怒りを妹に向けさせようとするなんて　…　ねえ、ベラ、これは綺麗なやり方ではないでしょう。

ラヴレースさんには改心の余地があると思われていた時期もあったのです。あれだけ分別もあれば理解力も備えている人ですから、美徳と道義の道へあの人を連れ戻そうと願いましても、それが非難に値する考えだとは思われなかった時期もあったのです。その実験をしてみたいと、この私が願っているわけでは決してありません。それでも、やはり言っ

ておきたいのですが、たとえあの方に心が傾いていないといたしましても、ソームズさんのような人の求婚を無理強いするために汚い手を使ったりすれば、ひとつ試してみようという気持ちを起こさせるのには十分だということです。

お姉様、ほんの一時で構いませんから、偏見をすっかり捨てて、あの二人の男性を比べてみて欲しいのです。それぞれの家柄、教育、容姿、知性、物腰や態度、そして、立ち居振舞いのすべてについてです。それから、相続権も含め、それぞれの資産についてもお願いいたします。その上でお二人のことを判断していただきたいのです。でも、何度も申し出ておりますように、不都合さえなければ、私としては喜んで独身を通すつもりです。

このように不満の種にされ、面目の立たない毎日を送るわけにはまいりません。出来ることなら、家族全員の気持ちに沿いたいのです。でも、耐えることの出来ない男性と結婚するのが正しい行為でしょうか。誠実な行いなのでしょうか。常日頃から私が父の意向に背くことはせず、いつでも喜んでご希望に沿い、ご命令に従ってきたといたしますと、心ならずも反対せざるを得ない状況に追い込まれておりますことからいたしまして、どれほど私の反感が根強いものなのか、お察しいただきたいと思うのです。

ねえ、大好きなベラ、私が幸せだった頃には姉として、また、友として、いつも傍にいて助言をしてくれたのですから、どうか憐れみの心をもって、私のために弁護をしていただきたいと思います。

親愛なる貴女の

Cl. ハーロー

クレアリー・ハーロー嬢へ

貴女の賢い考えでは綺麗なやり方なのか、綺麗ではないのか、どちらにしても、貴女のことと、このいやらしいラヴレースの件での貴女の振舞いの両方について、私も忌憚のないところを言わせてもらうことにしましょう。ずいぶん利口なようでも、貴女もやっぱり恋に溺れた愚か者なのね。貴女の手紙のあちこちに、はっきりそれが出ているわよ。それに、独身を通したいなどという空念仏にしたって、だれが信じるものですか。これも貴女の策略の一つなのでしょう。貴女の本分に従うのを免れ、この世で一番寛大な両親のご意向に沿うのを避けようというわけね。これまでのお二人は貴女には本当に甘かったですからね。でも、今ではお二人も、素敵な見返りがあったことに気づいておられるのです。

まったくの話、貴女の気質は柔和で穏やかなものだと、私たちのだれもが以前はそう思っていたわ。でも、それは何故だったのかしら。貴女は一度として反対されることがなかったのよ。いつだって貴女は思いどおりにやってきましたもの。ところが、あの性悪の放蕩児にたぶらかされて、その気になっていたものだから、反対されたとたんに本性が顔を出したというわけね。ソームズさんは好きになれないだなんて、それは言い逃れにすぎないでしょう。それはね、いいこと、貴女の愚かな心にラヴレースが入り込んでしまっているからなのよ。私たち皆から憎まれて当然の悪党がですよ。しかも、お兄様の血で両手を染めたならず者でしょう。それでも貴女は、あんな男を私たちの親戚にしたいと願うのかしらね。

あんな極悪人を私が好きになるだなんて、譬え話にせよ、そんなことを口にする貴女に

は愛想が尽きたわ。以前にはあの男が私たち全員から励ましを得ていたような言い方をしていたけれど、それはね、あの男がこれほど悪辣だということが分かる前の話でしょ。私たちの考えにこれだけ影響を及ぼした事実なのよ。貴女にもいくらか効果があって然るべきだと思うわね。また、貴女が愚かで慎みのない娘なのだということは、今度の一件で皆にも分かったわけだけれど、そんな娘でなかったなら、きっと効き目があったことでしょうよ。

あのならず者のためとなると、貴女もずいぶん夢中になるのね。家柄に教育に容姿に知性、物腰に態度に資産 … 飽きるほど並べ立てた上に、相続権までおまけに付け加えるというのですからね。まるで、恋煩いの娘が唱える他愛もない褒め言葉の一覧表ってところだわ。それでいて独身を通したいというのですからね … 笑わせないでよ。恋に眩んだ貴女の目の前では、非の打ち所もないと思っている立派な嗜みの数々が、群れをなして踊り回っているというのにね。もう止めましょう。でも、一つだけお願いしておくわ。自分のことは大層知恵があるように思っているみたいだけれど、他の人のことを馬鹿ばかりだなんて思わないでほしいのよ。それから、哀れっぽく立ち回れば、私たち皆を思いのままに踊らせることが出来るなんて考えないでもらいたいということだわ。

いくら手紙を書いてくれても構わないけれど、この件について、私のほうから返事をしたり触れたりするのは、これを最後にしますからね。

アラベラ・ハーロー

おじ様たちそれぞれに宛てた手紙が出来ておりましたので、庭でジョン伯父様の召使の一人に出会いました際、各々の指示書きに従って届けてくれるように頼んで、この男に手紙を渡しました。ご覧いただきました兄と姉の返事から判断いたしますと、今度の手紙からも、朗報はとても期待出来ないように思います。でも、手段はすべて講じたわけですから、何か不幸なことが起こりましても、それほど自分を責めずに済むことでしょう。手紙の写しは両方ともお送りするつもりでおりますが、仮にもおじ様たちが心に留めてくださるのでしたら、どのような受け止め方に相応しいと判断されるのか、その点を確かめてからにいたします。

手紙　三十

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月十二日　日曜日　夜

本当に困ってしまいますわ、このラヴレースという男には。極端なほど図々しくて無鉄砲なのです。今日の午後、こちらの教会に姿を現したのですが、おそらく、私に出会うことを期待してのことなのでしょう。でも、そのような期待をお持ちになるようでは、あの方のいつもの思考力も鈍ってしまったに違いありません。

ショーリーが礼拝式に出ておりまして、あの娘の観察したこととして、主に話しておりましたのは、座っておられた席でくるりと振り返り、私たちの家族席の方へ目を向けられた時の、あの方の横柄で高慢な態度のことでした。父と両方のおじが出席しており、母と

姉もおりました。運良く兄は出ておりませんでした。戻ってまいりました時には、だれもが取り乱した様子でした。あの不幸な果たし合いの後では、初めて教会にお見えになったのですから、会衆の皆さんもあの方ばかりに気を取られていたようです。

ショーリーはそんな様子だったと申しておりますし、あの娘ばかりか、他の者たちもそう思ったようなのですが、挑戦的で反抗的な素振りを見せるおつもりなら、どうしてまたあの人は姿を現したりなさったのでしょう。私のためなのでしょうか。そして、居合わせた家族の者たちにそのような態度を取ることで、私の役に立つか、あるいは、喜んでもらえるか、そのいずれかになると思われたのでしょうか。家族の者たちがどれほど憎しみを抱いているのか、あの方はご存じなのです。また、骨折り甲斐があればの話ですが、皆の憎しみを取り除くために骨を折ろうともなさらないのです。

あの方のプライドの高さには、貴女も私も何度となく気づいておりましたし、貴女はその点についてあの方を冷やかしたことがございましたね。すると、あの方は釈明なさるどころか、自ら認めておられました。また、お認めになればそれで事足れりと、あの方は考えておられたのです。

私といたしましては、プライドを冷やかしの的とするのは、あの方の場合には妥当でないように思いました。家柄が良く、財産にも恵まれた人がプライドをちらつかせるなどというのは、まったく余計な、下劣極まりない悪徳です。本当に尊敬に値する人なら、求めるまでもなく、敬意を示してもらえるはずです。換言いたしますと、威張りちらして尊敬を得ようとするような人は、自分の価値に自信がないことを証明しているのと同じなのです。自らの振舞いが敬意を促すものではないことを自覚していると白状しているようなものです。高貴な身分とか地位の高さといったものは、そういうものに不慣れな成り上がり者には自慢の種にもなるでしょう。そして、そのために非難されたり、軽蔑されたりするわけで、うまく釣り合いはとれているのです。

その上、この人は容姿や物腰の点で他人より優れているということもありますし、おまけに、学識もあるとの評判なのです。これだけの人がどうして傲慢な態度を取り、横柄に振る舞うのでしょう。険しい顔をしてみせれば、それがそのまま自分を責めていることにもなるのです。どう考えましても、言い訳のしようもない話ではないでしょうか。何が自慢なのかと思えば、立派な行いのことではないのです。それこそ、誇りにして構わない唯一のものです。それなのに、表面的な利点を誇りにしているのですもの。このような、いわば〈的はずれな〉プライドを持つ人を目にいたしますと、だれだってその人の内面を疑いたくなるのではないでしょうか。強い態度に出なければ踏みつけにされてしまうと、不安を抱く人も確かにいるでしょうが、でも、そのようなことを心配いたしますのは、いかにも料簡の狭い話です。自分自身を踏みつけにしているわけですからね。ただ、遜った態度も身の飾りになるのだと、この人は確信しているに違いありません。

事実、才能のある人なのです。ただ、その才能と容姿の素晴らしさとが、この人にとっては落とし穴になっていたのです。それははっきりしていることです。そして、このために、公平に秤に掛けますと、この人には大いに至らないところがあるということになってしまうわけです。

私には思慮深さという点で欠けるところがある、などと非難しているわけでもないのですから、身内の者たちが、当初のように、私の分別を信じてくれたら良かったのです。そ

うしてくれていたなら、多分、私もあの人のことを見抜いていたと思いますし、他の方たちをお断りした時と同じように、また、現在もソームズさんとは絶対に一緒になるまいと決めておりますように、あの方も断固お断りしていたことでしょう。本当に、皆が私の胸の内を察してくれさえしたらと思います。私の心が自発的に、強いられることも追い詰められることもなしに、身内の者や女性にとって名折れとなりますような措置を指示するようでしたら、そんな心などは、むしろ張り裂けてしまったほうが良いのです。

御免なさいね、大好きなお友達。こんな深刻な、〈独白〉と呼んで構わないようなお話をしてしまいました。お許しいただきたいと思います。次から次へと考えを述べてしまいました。でも、起こって間もないことなものですからね　…　そのことで、階下では皆が大騒ぎなのです。

ショーリーの話では、ラヴレースさんが母の目を追い、お辞儀をしましたので、母も会釈を返したというのです。あの方はいつも母のことを褒めておられました。母にいたしましても、周りから強いられるようなことがなかったなら、そして、あの方と一人息子との果たし合いなどということが起こらなかったならば、あの方のことを憎んだりはしなかったはずだと思うのです。

礼拝式にはリーウェン師が出席しておられました。他のどなたの目にもそう映ったのでしょうが、ラヴレースさんのために家族の者たちが揃って落ち着きを失っている様子にお気づきになり、式が終わりますと、師はご親切にもあの方を引き止めてくださり、家族の者たちが馬車のところへ着くまで立ち話をしておられたのだそうです。

例の手紙は今朝おじたちの手に渡りました。父と同じように、おじたちもますます私に怒りを募らせているようです。わざわざ返事を書いてくださるといたしましても、この無鉄砲な人が教会に姿を見せた点につきまして、はなはだ時宜を得ない振舞いであったことを証明するような文面になるのは間違いないと思います。

おじたちは、会釈を返したということで、どうやら母にも怒りをぶつけているように思われます。憎しみの感情というのは本当に恐ろしいものですね。普通の挨拶を交わしただけで、悶着の種になってしまうのですからね。でも、当たり前の礼儀作法からいたしますと、敬意を表す人のほうを、受ける側の人よりも引き立てるものなのです。ところが、皆に言わせますと、あの方からの無礼な振舞いに終止符を打つには、方法はただ一つしか見当たらないというのです。それで、私が辛い思いをすることになるというわけです。そして、あの無鉄砲な方にいたしましても、このようなことをして、何か得になることがあるとでもいうのでしょうか。前途の見込みが改善されるというのでしょうか。

このように幽霊よりももっと始末におえない仕方であの方は姿をお見せになったわけですが、はなはだ気掛かりに思いますのは、これがもっと思い切った手段をお取りになる前触れなのではないかということです。家にまで顔をお出しになるようなことがあれば（私の許可をもらいたいと強くお望みですし）、死者の出ることも考えられましょう。そのような事態を避けるためでしたら、他に方法がない場合ですが、私は喜々として、生きたまま葬っていただく所存です。

皆揃って話し合っております。おそらく、私の手紙についてなのでしょう。朝のうちも同じようにしておりましたが、そのことがあって、おじたちは私どもの教会に出ることになったわけです。この前の手紙でお約束いたしましたとおり、私の手紙の写しにつきまし

ては、おじたちの返事を添えてお送りすることが出来るかどうか、その点が分かり次第お届けいたします。今回書き連ねましたことはすべて、何と申し上げれば良いのか、いうならば胸中の不安と、そんな不安を引き起こしましたあの方への不満感の結果といったものです。私に降り懸かりました出来事の顛末をお伝えするためでしたら、ここに記しました事柄のすべては、ものの六行もあれば間に合うことなのです。

Cl. H.

《教会での振舞い及び出席の意図に関するラヴレース自身の説明については、百五十五頁を参照のこと》

手紙　三十一
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

三月十三日　月曜日

この誇り高き美女に関して、俺が現在置かれているようなどっちつかずの状態にあるかぎりは、貴公ならびに貴公の朋友がどれほど俺に上京を迫ったところで、それは無駄というものだよ(ア)。現在までのところ、俺の勝ち得た地歩のすべては、もっぱら、俺が憎しみを向けて当然な者たちの身の安全を慮る彼女の懸念に由来しているのだ。

上京しないというのなら、手紙の一つも認めろと貴公は言う。確かにそれくらいは出来るだろう。しかも、俺にとっては、話題があってもなくても同じく可能な話なのだ。以下の記述を以てその証としよう。

既にM邸においても話したことだが、彼女の兄で、底意地の悪い野郎が、また一人男を担ぎ出してきたのだ。これまでの男の中では、容姿と資質の点から見て、最も見込みの薄い男だが、申し出の内容では一番手強い相手だ。

この男がハーロー家の者たちの魂を、その求婚によって、一つ残らず虜にしてしまったのだ。いや、魂などと言うのは勿体ない。我が魅惑の女性のものを除けば、あの連中に魂など一つとして見当たらないのだ。そして、その彼女は、連中全員に逆らったため、すこぶる陰気で独断的な父親から実際に監禁され、他にも虐待を受けているのだ。それも、傲慢で我が儘この上ない兄の差し金によるものなのだよ。だが、連中がどんな人間なのかは貴公も知っているはずだ。それゆえ、連中のことなどで紙面を汚すのは止めておこう。

それにしても、まことにもって面食らう話ではあるまいか。永久に軽蔑せねばならぬ一族の、その娘であり、妹であり、姪でもあるという者に恋をするとはな。しかも、厄介なことには、どう称したら良いのか分からぬ彼女の態度ゆえに、愛しい気持ちが高まるのだよ。あれは蔑みではない。プライドとも言えない。美貌を称えられる者に見られる尊大さでもない。どうやら、俺の苦労のもとは美徳にあるらしいのだ。陰険な罪人、偽善者では

(ア) この紳士たちは書簡の中でローマ風と称する文体（つまり、〈貴公に（を）〉および〈貴公は〉）を気取って用い、文面がその文体で書かれているかぎり、互いをいかに無遠慮に扱おうとも、好意的に受け止めることが合意の取り決めとなっていたのである。

ないがゆえの難儀ということになるだろう。世評に無頓着であったためだ。声高の中傷にも鷹揚に構えていたためなのだよ。だが、自分の思いどおりの条件で、破竹の進撃を常のこととしてきた俺にとって、恐怖心を掻き立てる場合にも必ずや歴然たる愛の芽を交々に育んで来たこの俺様にとって、偽善者などになる必要があるのだろうか。詩人もうまいことを言っているぞ。

徳高く見える者も、役割を演じているのみ、
人目に晒すのは本性ではなく、ただ手管のみ(一五)

とだよ。

とはいえ、この真に称賛すべき乙女を首尾よく射止めるためには、この手管に精を出さねばならないらしい。だが、何で精を出したりするのだ。実際に悔い改めることは出来ないのだろうか。俺の悪徳といえば、それはただ一つだ。そうだろう、ジャック。俺の心に通じた者が仮にこの世にいるとすれば、それは貴公だよ。俺自身に分かることは、すべて貴公にはお見通しだ。だが、俺の心は呪わしきペテン師なのだよ。主人を欺いたこともこれまで数限りないのだ。「主人」と言ったのかな、俺は。もはや主人などではないのだ。それに、この天使のような女性を目にした瞬間からは、自分の心とはいいながら、意のままにならない状態でもあるのだよ。顔を合わせる前から、令名を耳にして確かに心構えは出来ていた。自らは徳を軽んじていても、他人の美徳に打たれることがないとしたら、そんな人間はまともな心の持ち主とは言えないからな。アラベラを訪ねたのも、姉と妹とを取り違えたのが原因で、すでに貴公も俺の話を耳にしているとおり、あのヘマな叔父の仕業なのだ。叔父は俺を（外国から戻ったばかりだったのだ）あの女神に紹介してくれるものと思っていたのだが、連れて行ってくれたのは、そんな女性のところなどではなく、ただの女のところだったというわけだよ。情が深くて慎みのないご婦人のことだし、手を切るのにはずいぶんと骨が折れた。俺のために女神を捧げてもらうつもりでいた当の一族を相手にして、すべてを台無しにしてしまうような真似は出来ないからな。

以前恋をしたことがあると、俺は得意げに話してきたし、実際、自分では恋心だと思っていたのだ。まだ若かった頃の話で、例の浮気な令嬢との一件のことだよ。そして、あの女の働いた不貞行為への仕返しとして、その後俺の手中に陥ちる女一人一人に復讐することを誓ったのだ。この誓いを実行すべく、異境の地で、我がネメシス(一六)の祭壇に既に数多の贄を捧げているはずなのだ。だが、当時の我身を思い起こし、現在の胸の内と比べるなら、あれを恋と呼ぶなど笑止の至りというものだ。

では、何だったのか、と貴公は問うだろうな。裏切りに気づいた時の俺の落胆ぶりは極めて激しく、正気を保つのさえ容易ではなかったのだから、とな。宜しい。思い出せる範囲で説明してやろう。何しろ、ずいぶん前の話だからな。いやはや、ジャック、おいそれとは説明しかねるのだが、あれはな、物珍しさへの強烈な欲求だったと思うのだよ。俗っぽいほどに神々しい文言を操る忌々しい詩人どもが、あの令嬢と同様に一役買っていたのだな。いたずらに俺の妄想を煽り立て、女を精一杯崇めてみたい気持ちを吹き込んだ。巣立ちをしたばかりの翼をソネットやエロジー、そして、マドリガル(一七)の調べに乗せ、是非とも試してみなくちゃならん。シンシア、ステラ、サカリッサ(一八)はもとより、その最

善の者がいなくてはならん。投げ矢も炎も、そして、何であれ、我がキューピッドに捧げずにはいられないのだ。美をでっち上げては、他にはだれ一人美しいと思わない者に当てはめないと気が済まない。そして、新たに祭り上げた女神が、俺の哀感切々たるソネットで詠われるのには親切すぎたりすると、主題に詰まって苦労することも度々だったのだ。

また、俺の気持ちの中にはもう一つ別の自惚れた考えがあった。大概の女性には大いにもてることを知ったのだが、だれか一人だけに目を掛け、十名ばかりの女にやきもちを妬かせるのも結構お嬢さん向きのいたぶり方ではないかと考えたのだ［その頃は、俺も本当に若く、自惚れも強かったのだよ］。まったくの話、これは効果的だったな。ライバル意識でもって、多くの女の目に怒りの火を点してやったし、頬を赤らめさせてやった者も多いのだ。競争相手の美女に向かって、扇子がパチパチ鳴らされるように仕向けたことさえ少なくなかった。おそらくそんな仕草には、礼儀知らずの若者と二人きりでいるところを見つかったことへの非難も込められていたのだろう。その若者にしても、一度に両方の女性と人目を忍ぶわけには行かないのだからな。

要するにだな、ジャック、この身分の高い性悪女を失いたくないと、俺があれだけの失態を演じたわけは、今になってみれば、愛というよりはプライドだったと思うのだ。俺としては、あの女を愛しているつもりでいたのだから、少なくとも同じ程度には愛してくれているものと思っていた。それどころか、あの女は俺への愛を抑えられずにいるのだと自惚れていたのだよ。身内の者たちも俺の選択にご満悦だったしな。早い頃から俺の女癖を案じていたこともあり、足枷の一つもつけさせたいと願っていたのだ。ダンスや歌、そして、器楽を好む女はすべて俺との付き合いが好きだということを、連中も目にしていたのだよ。何しろ、ダンスをさせても歌を歌わせても、あるいは、どんな楽器にせよ、その弦に触れさせると、洗練の度合いという点では［思うに、自慢話に花を咲かせたい気分なのだな、俺も。何しろ］、貴公の友を凌ぐ者などいなかったわけだからな。

だれもが目に留め、認めてもいる美点に気づかない振りをするほど、そこまであくどく偽善者を演じるなどというのは、俺にはまったく思い及ばない話だ。褒め言葉に血眼の偽善行為だよ。自分の特質を気障っぽく否認することだ。称賛に与ろうとの浅ましい下心だろう。だがな、俺の自惚れ心が赴く先は、服装の優雅さ、上品な態度、そして、自信に溢れた物腰といった、身体的なものだけに止まるのだろうか。これらはいずれも独学自修の成果なのだ。俺の才能については、自慢の種にしてはいない。その根拠もない、と貴公は言うことだろう。多分、ないのだろうな。だが、仮に知力の点で評価すべきものがあるとしても、それは元来俺のものではないのだよ。悪用することに対しては責任を問われ、正しく用いたからといって何の手柄にもならないようなものを自慢したりするのは、例のカケス(一九)と同じことで、借り物の羽毛を纏って得意げに歩き回るようなものだ。

だが、我が麗しの男たらしに話を戻すと、俺に我慢ならなかったのは、絹の足枷で［今引きずっているような鉄製のものではなかったが］俺を縛り付けた最初の女が、俺よりも宝冠のほうを選んだことなのだ。そして、逃げられてみると、しっかりと籠の中に閉じ込め、好きな時に訪れることの出来た頃よりも、一層惜しくなったというわけだ。

だが、今回は心底惚れているのだ。神々しいばかりのクラリッサ・ハーローのこと以外には、何も頭に浮かばない。他のだれのことも考えられないのだよ。あゝ、ハーロー。この呪わしい名がひどく喉につかえてしまうのだ。だが、代わりにラヴの名を進呈すること

にするのだよ(ア)、俺は。

クラリッサ！　あゝ、その名は楽の音を湛え、
即座に私を和ませ、幼児の優しい心を促しつつ、
生命の最初の跳躍さながらに、この魂を躍らせる(一〇)。

俺としては、どれほどの好意を向けられようと、それに劣らない好意を施すことは可能と考え、かつまた、この魅惑の女性のためなら、栄誉に満ちた生活を捨て、束縛の日々にも甘んじようと考えているのだが、それにしても、この俺が、甘美に過ぎるオトウェーの詩行を引き合いに出すなど、貴公には思いも寄らないことではなかっただろうか。

自ら胸中を点検してみるに、次に掲げるドライデンの詩の前半の三行は、あの哀れっぽい一族に譲るとして、嵐のごとく揺れ騒ぐこの心中の激情の作用は、後半の三行でより適切に表現されているように思うのだ。

愛の作用は十人十色
優しい心は静かに燃えて
祭壇に置くお香のごとし。

荒びる心は劫火に呑まれ
激しい想いに炎も踊り
誇りとともに舞い上がる。復讐心に燃え盛る(一一)。

そのとおりだよ。復讐心に燃え盛るのだ。あの愚かな一族が俺のために挙って一役買ってくれるという期待でもなければ、この俺が連中の侮辱を耐え忍ぶ気になどなると思うのか。俺と顔を合わせるのも恐れるような連中に、そして、命を奪うのだけは勘弁してやった［まったくの話、俺の手に掛ける値打ちもない命だが］あの粗暴な兄に、これは実際に行われていることなのだが、挑発的な態度を取られたり、脅しを受けたりするとは、だれに想像出来たというのだ。もっとも、俺には自慢の種が一つあって、大いに慰められるのだよ。つまり、奴が送ってよこしたスパイがいるのだが、そいつを利用して、こちらの好きなように奴にボロを出させているのだ。こちらの思うつぼにはまるよう、奴の激情を冷ますのも煽るのも、自由自在なのだ。また、奴が二股膏薬のまわし者を信じ込むよう、適当に俺の暮らしぶりや行動、そして、意図などを漏らしている。そうすれば、こちらで糸を引いて、このまわし者の雇主を自在に操ることも出来るという仕掛けなのだ。

このことがあるからこそ、怒りよりも得意な気持ちが高まるわけだよ。ぜんまいへの注油を絶えず行っているわけだが、この道具によって、連中一人残らずにボロを出させているのさ。お節介な老いぼれ船乗りの叔父をアナベラ・ハウ女王への使者に仕立てているのは、他でもなく、あの女が（王女気取りの娘への手本になるよう）連中と手を結び、連中が事の善し悪しにお構いなく（さもなければ、俺にもまったく手が出せないことになるの

(ア) ラヴレースのことである。

だが）守り抜こうとしている、権威とやらを行使させるためなのだよ。

そんなことをする俺の動機は何なのだ、と貴公は尋ねる気かな。何のことはない。こういうわけだ。つまり、我が愛しの君が俺の一族以外の者に保護を求めても、どこにも得られないようにするためだよ。彼女の一族が俺の考えているとおりの連中だとすれば、彼女としては逃げ出さねばならないか、あるいは、嫌悪を感じている男と一緒にならなければいけないのだ。従って、俺が正しく手段を講じ、相棒も期待に背かなければ、連中がどう出ようとも、これで彼女は確実に俺のものということになる。毅然たる心の持ち主のようだが、同じことだ。無条件で手に入るのだ。改心を誓うこともない。口説き落とすとなれば、おそらく長い年月を掛けねばなるまいが、その必要もなくなるのだ。何しろ、その場合には、偽善者よろしく自信のない顔付きを装った挙げ句、承認し兼ねるような審査に付され、覚束ない気持ちでいなければならないのだからな。あの一族のならず者たちにしても蓮っ葉連中にしても、一人残らず、俺のところに這い寄って来ることだろう。俺の指図どおりにな。そして、あの浅ましいほど傲慢な兄貴を我が玉座の足台のところに跪かせることになるのだよ。

ただ、俺の不安のすべては、氷の如くに冷たいこの魅惑的な乙女の心を、ほとんど捉え切れていないという点に由来するのだ。あの麗しい顔立ちは絶えず輝きを浮かべ、目はキラキラときらめいている。神々しいまでに伸びやかな肢体。肌は健康そのものの艶やかさで、若さに溢れ、立ち居振舞いも溌剌たるものだ。それでいて、決して心を開こうとはしない。しかも、言い寄っているのは他ならぬこの俺だ。これまで嚇々たる成果を収めてきたラヴレースなのだよ。こんなことが有り得るのだろうか。だが、あの乙女の〈出産〉のことを覚えている者もおり、そのうちの数人とは俺も言葉を交わしたことがあるのだ。乳母のノートンなどは、乳飲み子の頃に果たした母親代わりの仕事のこと、そして、その後徐々に与えた教育のことを自慢げに話していた。従って、証拠は十分なのだよ。出し抜けに天使の姿で天から降ってきたわけではないことのな。ならば、どうしてあれほどまでに難攻不落なのかということだ。

だが、そこに彼女の落とし穴があるのだし、抜け出すことも出来ないだろうな。父と呼んでいる男［母親もあの父親の妻でなかったなら、完璧だったのだろうが］、おじと呼んでいる者たち、それに、兄と呼んでいる下種や姉と呼んでいる見下げ果てた女のことを、自分の父やおじ、兄や姉と思い込み、連中がどれほど惨い仕打ちをしようと、そのような立場の人間として、ある者は崇め奉り、ある者には敬意を示さねばならないと考えているということだ。くだらない絆ではないか。揺り籠の中で育まれた偏見にすぎない。ご機嫌斜めの折の造化の女神に押し付けられた人間どもということでなかったなら、あるいは、自分の親戚を選ぶことが彼女に出来たとしたら、この連中のうちの一人でも彼女の親戚の仲間入りをしていただろうかな。

連中が俺を不当に扱っていることは確信しているというのに、俺よりも連中のほうを選ぶとは、まことに腹立たしいかぎりだ。俺と縁を結べば、連中のすべてにとって名誉になるということも納得しているのだ。もっとも、彼女自身は除かねばなるまい。だれにとってもあの乙女は栄誉の源になっているのであり、彼女からなら、すこぶる威厳に満ちた一族でさえ栄誉を授かることになるだろう。しかし、もしも彼女が（いかに迫害を受けているとはいえ）、大嫌いだと公言している男よりも俺のほうを選ぶに当たって、一瞬たりとも

躊躇するようなことが分かれば、俺の胸の怒りはますます募ろうというものだ。だが、それだけ大きな犠牲を払ってまで連中との和解を求めるような、そんな浅ましい女ではあるまい。連中の目論見を是認するはずもない。悪意をもって企てられ、利己心に根差した計画なのだからな（しかも、彼女自身に迷惑の掛かることだ）。他人がそんな卑しい気持ちを持っていれば、軽蔑してみせる気概はあるのだし、是非とも、自分はそんな卑しさは持ち合わせていないと誓ってほしいものだ。やはりハーロー家の一人なのだなどと、われわれが考えたりしないためにもな。

この取り留めもない脱線ぶりを見て、俺が急いで上京することはなさそうだと貴公は推察することだろう。まずは、この俺がソームズみたいな下種の犠牲にされることはないのだという言質を、愛しの君から得るべく努力しなければならないのだからな。仮にも、あの乙女が我が手に陥ちるような事態になれば（自ら好意を示す気になってもらいたいのだが、それは諦めている）、そして、この保証が容易には得られないということであれば、それこそ、麗しき乙女に災いあれというところだな。

俺に冷たい素振りを見せるのは、だれか他の男をもっと愛しているからではないのだという事実、これこそ、我と我身を縛りつけている所以なのだ。だが、用心するのだ、麗しの君よ。女性の中でも最も気高い心、そして、最も愛らしい容姿に恵まれたそなたよ、用心するのだ。そなたの浅ましい縁者たちが、ただただ悪意に駆られて俺に仕向けているような争いごとの後押しをして、その身を卑しめたりしないことだ。貴公に言わせると、狂人のうわ言ということになるのだろうな、これは。そのとおりなのだよ。

たとえこの身は地獄行きでも、あいつのことが愛しくてならぬ(一二)

といったところだ。

さもなければ、あの執念深い一族から絶えず加えられている罵詈雑言に、どうして耐えられるというのだ。さもなければ、あの尊大な父親の屋敷の中ならいざしらず、馬場の周りを、そして、庭の塀沿いをこそこそ歩き回るなど、この俺に出来る話だろうか。それでいて（二人の間には四分の一マイルの隔たりがあるのだから）、愛しい女の影一つ目にする望みもないのだ。さもなければ、夜の夜中に、人も通わぬ小道を辿り、茨の絡む囲い地をいくつも抜けて行き、四回目か五回目、あるいは、六回目の夜歩きの末に、僅か数行の冷やかな便りを手にしては、苦労の甲斐があった、たっぷりと報われた、などと考えるだろうか。期待を掛けていた文面にしても、言わんとするところは、他でもない、ひどく値打ちのない一族の中でも飛び切り無価値な人間を俺よりも大事に思っているということ、そして、今後は一切筆を断つつもりだが、侮辱を受けても堪えてくれるよう願うという言葉なのだ。だがな、あんな侮辱を我慢していては、男が廃るというものだろう。俺が逗留しているのは、道程の中ほどにあるしがない居酒屋だ。同居人を装っているのだが、その部屋の設備のひどさときたら、ウェストファーレンの旅で出くわしたものと大差ない。結構な点としては、ここまでやらなければいけない事情というのが、軽蔑の念や横暴さから生じているのではなく、何よりも彼女本人に起因しているということだな。

それにしても、物語に出てくるヒーローで、これ以上の試練を（巨人やドラゴンとの闘いは別にするが）課された者がかつていただろうか。資産と家柄は申し分なく、将来復帰

すべき財産も豪勢な俺様だ。競争相手というのは情けない小者だよ。これだけの苦難を嘗め、これだけの軽蔑に晒されるのも厭わないとは、俺も嘆かわしいまでに惚れ込んでしまったに違いあるまい。確かに、我がことながら結構みっともない話だな。この世のいかなる女性に忠義立てをしても、責務の優先順位からすると、偽誓の罪に問われることにもなるというこの俺がだよ。

だが、結構みっともない話だなどと、何故そんなことを言うのかな。あの女性を愛するのは、身の誉れになることではないだろうか。一目見た者ならだれでも、愛情を抱くか崇拝するかのどちらか、あるいは、その両方の気持ちになってしまうような女性なのだ。ドライデンは詠っているぞ。

恋の原因はいつも定めがたく、
だれの顔にも現れず、恋する者の心に潜む(二三)

とな。

また、カウリーは美を空想の産物にすぎないと考え、次のように呼び掛けている。

あゝ、美よ、国ごとに姿を変え、
気紛れに奇想をあやつる模倣者よ。
こちらでは黒、あちらではとび色、ここでは褐色、かしこでは白。
汝、太鼓持ちよ、だれのまなざしにも媚びを売り、
いずれとも、また、いずこにとも定めなし(二四)。

しかし、この両詩人にしても、あの乙女と同じ時代を生き、知り合っていたとすれば、自らの過ちを白状したことだろう。また、容姿、気立て、そして、物腰を取り上げ、いたるところで沸き上がる彼女への賛辞が当を得たものであることも認めたに違いないのだ。

たくさんのご婦人たちを
真心を込めて眺めておりました。心地好い声の響きに
この耳がただひたすらに聞き惚れてしまったことも
何回となくございます。それぞれに取り柄があって
それぞれに愛しい気持ちになりました。
どれほど深く愛しても、なにかとキズはあるもので
それが立派なところと喧嘩して、打ち負かすのが
常でした。でも、あの婦人、あゝ、あの女性は
完全無欠で、比類なく生まれ育って
この世でもいちばん優れたお方です。　　シェークスピア(二五)

貴公は興味津々といったところだろうな。俺が何か新しいゲームでも始めたのではないか、博愛を旨とする男が、こんなにも長い間一人の相手に掛かりきりになるなど、あり得る話なのか、とな。そんな疑問をぶつけてくるようでは、この魅惑の女性について、貴公

は何も分かっていないということだ。あるいは、実際以上に、俺のことに通じているように考えているということだ。女性の美点の集大成がこの淑女なのだ。夫婦という間柄、あるいは、対等な立場で親しく付き合ってみて、彼女も天使に及ばないことが納得出来るまでは、他の女のことは一切考えるわけに行かないのだよ。それに、この一件では、俺のような気質の人間にとっては、愛以外にもいろいろ興味をそそることが多いのだ。策略や趣向を発揮すべき舞台が用意されたわけだが、俺にとってそれが喜びの種であることは、貴公も承知しているはずだ。そして、最後に待っている報いのことも考えてほしい。油断なく目を凝らしている執念深い身内の裏をかいて、これだけの女性を奪い去ろうというのだよ。他の女ではお目にかかったこともない、あの分別や慎みをものともせずにだ。堂々たる大勝利ではないか。女性すべてに対する大勝利だ。しかも、恰好の意趣返しにもなるのだ。この点も、政略的な見地から今のうちは抑えているが、いずれ力を溜めて一気に噴き出すことになるのだよ。どうだろう、彼女とは関わりのない考え、また、彼女に向けられていない考えの入り込む余地がこの胸に生じるなど、果たして有り得る話だろうかな。

∴　∴

今受け取ったばかりの忠告からすると、そう考えて然るべき理由もあるのだが、貴公には当地までご足労を願わねばならないだろうな。招集が掛かり次第こちらへ出頭出来るよう、仕度を整えておいてもらいたい。

ベルトン、モーブレー、ターヴィルにも同じように準備をさせてくれ。ジェームズ・ハーローを修養の旅に送り出す方法を、何とか一つ捻り出したいと思っている。あいつほど研修旅行の必要な阿呆郷紳もいないのだよ。「捻り出す」と言ったかな。もう捻り出してあるのさ。俺が一枚加わっていることを悟られずに実行出来ればの話だがね。つまり、妹をものに出来ないのなら、兄貴を餌食にすることに決めたというわけだよ。

それはさておき、天誅を下すべき機会がすぐにも訪れそうな気配なのだ。連中はしばらく前から徒党を組んで俺に歯向かってきたのだが、おじたちも甥も今では二人ずつ下男を連れ歩くことになった「以前は一人だったのだがね」。そして、その下男どもは、主人の外出のお供をする時には、銃を二挺携えることになっている。連中があくまでも俺に盾突く覚悟でいること、そして、ソームズの肩を持つべく、同じように気持ちを固めていることがこれで明白だろう。

喧嘩道具について重ねて指示が出されたのは、どうやら、俺が昨日連中の教会を訪れたことに原因があるらしい。あの一族の長たちはクリスチャンであり、連中の捧げる祈りにもそれなりの気持ちが籠もっていると想像していたから、教会こそ和解交渉を始めるには打ってつけの場所と思ったのだ。俺としては、あの不機嫌な父親と屋敷まで帰途を共にするよう、誘いの言葉の一つくらいは（あるいは、せめてその素振りは）あるだろうと期待していた。そうなれば、我が女神を目にする機会も得られるだろうと思っていたのだ。連中にしても、俺に対しては、少なくとも礼を失しない態度は取らざるを得ないはずだと俺は思い込んでいたからだ。ところが、俺が入って来るのを見ると、連中の胸のうちは恐怖の念で占められてしまったらしいのだ。連中にとっては乗り越えることの出来ない恐怖心だよ。まざまざとそれが顔に出ていたし、これから何か途方もないことが起こりそうだと

思っている様子だった。実際、連中の娘が寄せてくれる好意について、現在のものよりももっと強い確信を抱いていたのなら、そうなっていて当然だったことだろうな。だが、あの愚かな連中の髪の毛一本たりとも傷つけるつもりは、俺様にはないのだよ。

必要とあらば、指示のすべてを文書にして全員に渡すつもりだ。だが、結局は、顔見せのために俺と出歩くだけで十分のようにも思う。

これだけの面を四つ揃えるなど、まず不可能だろうな。モーブレーは獰猛で喧嘩っ早い顔をしているし、ベルトンのは実に小粋でひどいニキビ面だ。ターヴィルはなかなかの男前でニヤケているし、貴公の顔は厳めしく、意志の堅さが表れている。そして、貴公らすべてを率いるのがこの俺だ。われわれをもってしても効き目がないというのであれば、敵対行為を目論んでいるとはいえ、よほど図太い神経の持ち主ということになろう。各人は時折、一人か二人従者を連れているのだし、その従者にしても、主人に見合った特技の持ち主ということで選ばれ、長い間仕えてきた者たちなのだからな。

どうだ、ジャック、貴公の望みどおりに書き上げたぞ。何かについて書いたようでもあり、何にも触れていないようでもあるが、俺のお気に入りの復讐は取り上げてある。愛について触れたが、これは気に食わない。今や俺の心を支配しているだけに、大いに気に食わないのだ。また、他にも訳の分からないことを書き連ねたが、見直してみると、この長さに呆れ果てているところだ。貴公なら読み通してくれるだろう。俺としては、いくら金を積まれようと、御免蒙りたいところだよ。ただ、貴公に言わせると、ともかく俺に筆を執らせるためにも、嬉しそうにするつもりだということだからな。

それゆえ、嬉しそうにしてくれ。嬉しがるよう命じておこう。書いた者のためとか文面のためではないとしても、貴公の発言のためにだ。そして、王者にふさわしい形で（というのも、眼前の大事業に当たっては、俺は貴公らの王となり、皇帝となる身ではないのかな）、心から別れの言葉を授けることにしよう。

さらばじゃ

手紙　三十二

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月十四日　火曜日

おじたちに宛てました手紙の写しをお送りいたしますが、二人からの返事も添えてあります。こちらのほうは、今度のお便りの際にお返しいただければ幸いです。ご感想につきましては、貴女にお任せいたします。私のほうには、申し上げることはございません。

ジョン・ハーロー殿

三月十一日　土曜日

尊敬申し上げております第二のお父様、幸せでありました頃には、伯父様のことをそのようにお呼びするようお教えくださいましたね。どうか、伯父様のお力添えで、ある言い付けを免じてもらえますよう、父に働き掛けていただきとうございます。強要されました

場合には、私の自由意志が奪われてしまいますし、生涯に亘りまして、不幸になってしまいますようなご命令なのです。

繰り返させていただきますが、生涯に亘ることなのです。譲るにいたしましても、伯父様、これは些細な事柄なのでしょうか。あの男性と生活を共にいたしますのは、この私なのではないでしょうか。だれか他の方なのでしょうか。あの男性と幸せに暮らして行くことが出来るのか出来ないのか、その判断につきましては、ですから、私自身に任せていただくわけに行かないのでしょうか。

どんなに不幸な結婚生活になるといたしましても、愚痴をこぼしたり、不服顔をしたりいたしますのは、分別のあることでしょうか。仮にそうだといたしましても、夫への不満をだれに訴えれば聞いていただけるというのでしょうか。それに、当初から抑えようもない嫌悪感を抱き、それを公然と認めてもいるわけですから、いくらあの人に従っておりましても、夫としてあの人が加えますどのような仕打ちをも正当化することになるのではないでしょうか。それに、仮にもあの人に従うことがあるといたしましても、それは恐れからであって、愛情からではないはずです。

繰り返しにはなりますが、もう一度言わせていただきたいのです。これは譲れるような些細な事柄ではございませんし、一生の問題だということです。伯父様、どうして私は生涯不幸な目に遭わねばならないのでしょうか。何故、すべての慰みを奪われねばならないのでしょう。そのような暮しもほんの束の間に終わりを告げるだろうという、そんな思いが与えてくれます慰みは別にいたしますが　…

結婚と申しますのは極めて厳粛な契約なのです。真剣に考えますなら、どんなに素晴らしい展望が見込まれます場合でも、若い娘にとりましては胸の痛むものです。見知らぬ男性に引き渡され、接ぎ木でもするように、馴染みもない家族に加えられ、その男性に全面的に依存する所有物となりました印に、自らの名を捨てるのです。父よりも母よりも、そして、だれよりもこの見知らぬ男性を大切にしなければならないのです。自分のどんな気持ちにも優先いたしまして、夫のご機嫌を取らねばなりません。あるいは、罪のない形で自由な意志を通したいと思いますたびに、おそらく諍いを起こしまして、従順の誓いを破ってしまうことになります。どこへ出向くこともしなかったり、人付き合いを始めることや止めること、もしかいたしますと、親密この上ない友達付き合いさえ諦めることにいたしましても、こういったことは、そういたしますのを道理に適ったことと考えるとか考えないとかに関わりなく、すべて夫の気持ち一つなのです。愛情を捧げることが出来そうな男性のためでしたらいざしらず、若い娘がこのような犠牲をすべて強いられるようなことは、決してあってはいけないことと思います。もしも、強要されるようなことがありますなら、あまりにも悲しい話ではないでしょうか。〈生〉の名をもって称されますのには、何て惨めなのでしょうね、人生というものは。

皆さんのお気持ちに従いたいとは思います。それが出来るのでしたら、どんなに嬉しいことでしょう。「まずは添うてみよ。愛はいずれ生まれる」とのことですが、これは身内の中でも私が一番大切にしております身内の一人が言った言葉です。でも、この考えにはゾッとしてしまいます。相思相愛で結ばれました場合でも、ありとあらゆることが起こりまして、耐え忍ぶのもやっとという結婚生活にさえなり得るのです。だといたしますと、妻に選択の自由が与えられておりましたなら、だれか他の男性を選んでいたはずだと、自分

でも確信しているものですから、夫が妻の愛情に自信を持つどころか、むしろ、疑いたくなってしまいますような場合ですと、一体どのようなことになるのでしょう。そのような結婚では、疑念や嫉妬が渦巻き、優しさなどは見当たらず、悪意に満ちた偏見がまかり通ることになるのです。まったく何気ないものでありましても、表情の一つ一つ、挙止の一つ一つが邪推の種になってしまうでしょう。一方、妻は冷淡になり、夫の希望することにも無頓着になってしまうのです。そして、偽りのない愛情の結果でなければいけないものを、ほんの上辺だけでも装わせることが出来ますのは、ただ恐怖心のみ、ということになってしまうのです。

どうか大好きな伯父様、これらの点を真剣にお考えくださいました上で、父にお伝えいただきたいのですが、事の重大さに照らしまして、是非とも強いお言葉でご説明願いたいと存じます。そのようなことは、女の身ですし、まだ若い未熟者でもございますから、私のほうからはいたし兼ねるのです。哀れな姪が絶えざる苦難の日々に追いやられるようなことになりませぬよう、伯父様の絶大な影響力を発揮していただきたいと存じます。

例の条件を受け入れていただけるのでしたら、どなたとも結婚しないことを誓う旨の申し出をいたしました。このように皆さんと同席することを拒まれ、父と母の前に顔を出しますことも禁じられているのです。伯父様に、そして、もう一人の優しい叔父様にも軽んじられ、見捨てられるとは　…　私にとりましては、何と不面目な話でしょう。教会での礼拝式に出ることも許していただけないわけですが、仮にも、私が務めの道を踏み外しているというのでしたら、礼拝式こそ、最も私を正しい道に引き戻してくれそうなものなのです。これが、いかがでしょう、拘りや偏見のない心の持ち主に対して取るべき方法なのでしょうか。その方法として考えられ得るものなのでしょうか。このような奇妙なやり方では、納得させるどころか、かえって頑なにしてしまうのではないでしょうか。このように不面目な暮しは耐えられません。つい先頃までは私の指図に任されておりました召使たちも、滅多なことでは口をきいてくれませんし、私付きの女中はいわれもないことで疑われ、不興を招いた挙げ句、ひどい汚名を着せられて追い出されたのです。そして、姉の女中を見張りに付けられるという始末です。

取り返しのつかないことになるかもしれません。きっとそうなるでしょう。そして、この件に一役買いましたことを、だれもが悔やむことになるのです。

便法を一つ申し上げても宜しいでしょうか。どうしても私には監視が必要で、お目通りを禁じられ、監禁されねばならないというのでしたら、いかがでしょう、伯父様のお屋敷でというわけにはまいらないのでしょうか。そうすれば近隣の紳士階級の方々も、これまで大層好意を寄せてくださっておりました娘がここでの礼拝式に姿を見せず、皆さんのご訪問にも応じないといたしましても、それほど不思議なこととは思われないはずです。

この方策にはご異存など有り得ないものと願っております。何もかもが順調に進んでおりました頃には、私がお傍に伺いますのを伯父様はいつも喜んでくださいました。災難に見舞われております今こそ、この苦痛の種がすべて吹き払われますまで、お屋敷を使わせてはいただけないものでしょうか。誓って申し上げます。伯父様が駄目とおっしゃるのでしたら、決してお屋敷を離れたりいたしませんし、伯父様が許してくださる人以外、どなたにもお目に掛からないつもりです。ただ、ソームズさんをお招きになって私を悩ますことだけはご容赦願いたいものと存じます。

ですから、幸せな和解という、さらに大きな恩恵を手に入れてくださるのはご無理でしたら（それでも、ご親切に伯父様が私の弁護を買って出てくださるのでしたら、私は望みを捨てずにいるつもりです）、この願いだけでも叶えてもらえますよう、ご尽力いただきたいものと思います。そうしていただけますなら、これまでもそうでしたが、今後いつまでも私に次の姿を守らせることになります、あのご恩顧とご恩恵をさらに増してくださることになりましょう。

恭順な心と感謝の念を忘れぬ貴方の姪

Cl. ハーロー

回答

日曜日　夜

愛する姪へ

お前の望みが何であれ、それを拒まねばならないというのは、実に悲しいことだよ。だが、そうあらねばならんのだ。というのも、これほど頑強な抵抗に遭うとは思いもしなかったわけだが、われわれの将来の見込みや栄誉に関わる事柄でもあり、この一点についてお前がわれわれの願いを叶えてくれる気持ちになってくれるのでなければ、われわれ全員に対するこれまでどおりの立場を守るなどということは、絶対に期待してもらってはいけないということだ。

要するに、われわれは〈密集戦闘隊形〉を組み上げているということなのだ。最も熟知していなければならないことには疎いが、それ以外では、お前もよく本を読んでいるお陰で知らないことは何一つないはずだ。この言葉からも、お前がどれほど説得を試み、あくまで主張を貫こうとしても、われわれの防御は崩れないことが分かるはずだ。われわれは一致団結して行動することとし、さもなければ、だれ一人動かないこと、そして、相互の間以外には、だれの求めにも応じないことで意見の一致を見ているのだよ。これでお前も自分の運命を悟ることだろうし、その運命に従う以外にはないということだな。

言わせてもらうが、真の柔順さとは、見返りが期待出来る場合に人の願いに応じることなどではない。自分の意向を捨ててこそ、少しは褒められるということだ。

申し出のあった便法の件に移ろう。この願いを断る羽目になるなど、考えもしなかったことだ。しかし、私の屋敷に来てもらうわけにはいかないのだ、クレアリー。われわれの気に入る人物だけに会うとのことだが、その約束は守ってくれるとしても、それ以外の者でも手紙は出せるではないか。受け取ることも可能な話だ。お前にはその手があるということ、そして、これまで実行していたことは十分過ぎるほど分かっているのだ。それだけに情けないのだよ。いよいよ遺憾に思うのだ。

独身を通すというのがお前の申し出だが、われわれのほうでは、結婚してくれることが望みなのだ。なのに、自分が心を寄せている男とは一緒になれそうもないので、われわれの薦める者はだれも受け入れる気にならないというわけだ。お前が何かの手を使ってあの男と文通していること、少なくとも、可能なかぎり続けていたということは分かっているのだよ。また、あの男はわれわれ全員に盾突いているわけだが、お前の気持ちを信じていればこそ、われわれなどお構いなしに、そんな真似をするのだよ（お前にも分かるだろう

が、これがわれわれにとっては大いに癪にさわるところなのだ)。それゆえ、あの男の鼻をあかしてやることに決めたのだ。あいつに得意顔をさせるのではなく、こちらが勝ち誇るのだ。この言葉だけですべての察しはつくだろう。私に助け船を期待してもらっては困るということだ。お前の弁護をするつもりはない。これだけ言えば十分だと思う。

腹立たしく思っているお前の伯父

ジョン・ハーロー

追　伸　　これ以上のことは、弟のアントニーに訊いてもらいたい。

アントニー・ハーロー殿

三月十一日　土曜日

謹んで申し上げます。

ソームズさんのことを特にお引き立てになるのが適当なこととお考えでしたし、お友達の中でも選り抜きの方ということで(ご紹介くださいました時には、そのようなおっしゃりようでした)、相応の敬意を払ってほしいと、とても熱心に後押しをなさっておられましたね。あの人からの〈求婚〉　…　やむなく使う言葉ですが　…　に際しまして、いろいろとございます中からいくつか、真剣にお考え願いたい点を申し上げさせていただきますが、何卒、ご辛抱をいただきたいと存じます。

もう一人の人物に好意を抱いていると、私はお咎めを受けているのです。どうか思い出していただきたいのですが、兄がスコットランドから戻りますまでは、もう一方のその人には、まったく不賛成ということではありませんでしたし、ご訪問に応じることを禁じられていたわけでもございません。お生まれとか教育、あるいは、個人的な資質という面では、お二人を比較することなどとても出来ない相談だろうと思います。それに、ひとつお尋ねいたしますが、あのような条件を申し出られなかったといたしますと、片方の人は私のお相手として考えられていたのでしょうか。まったくの話、公正さの点からいたしましても、私にはお受け出来ない条件ですし、あの人といたしましても、持ち出すべきものではないと思うのです。あの人のほうから言い出さなければ、おそらく、お父様のほうでは求めなかったと思われるようなお申し出ですもの。

でも、一方の人にはたくさんの欠点があるようですが、もう一方の人は完璧なのでしょうか。ラヴレースさんに対して唱えられております主な異議(そして、はなはだ許し難いものです)と申しますと、愛情関係にふしだらなところがあるということですが、もう一方の人は遺恨関係で道を踏み外しているのではないでしょうか。そればかりか、お金への愛着があらゆる害悪の根源だといたしますと、愛情の点でも(対象こそ違いますが)そのとおりだと言って構わないと思います。

それはともかく、もしも私に意中の人がいるというのでしたら、ソームズさんにはどんな希望があるのでしょう。どうして固執なさるのでしょう。私の気持ちを無視してまで私を妻に望むような人は、どのように考えたら良いのでしょう。私には愛している人がいるのだということ以外には、決して納得しようといたしませんのに、それでいて、愛することの出来ない人と私が一緒になるのを見届けたいというのでは、身内とはいいながら、ずいぶんひどくはないでしょうか。

このような扱いを受けているのですから、今こそ、胸につかえております ことをすっかり言わせていただきます。でなければ、二度とチャンスは来ないのです。この件でソームズさんが拠り所としておられるのは何なのか、おさらいをしてみましょう。あの人のお陰で恥ずかしい思いをさせられているわけですが、これが私に対する点数稼ぎになるとでも思っているのでしょうか。おじ様たちは厳めしいお顔をしておられますし、兄には鼻であしらわれ、姉にも意地悪をされております。人を訪ねることも、お客様をお迎えすることも許されず、大好きなお友達との文通も禁じられました。貞淑さの点でも分別の点でも申し分のない人で、しかも女性だというのにです。私付きの女中は無理に引き離され、別の女中を張り付けられる始末です。まるで囚人のように、狭くてみっともない場所だけに行動を制限されておりますが、公然と私に屈辱を嘗めさせ、気力を萎えさせるためだというのです。気に入っておりました家の切り盛りのお仕事もクビということですが、お母様を楽にして上げられると思えばこそ、なおさら喜びも大きかったものなのです。それに、姉の好む仕事ではなかったということもございます。ただ、時間を持て余しているような状態ですのに、これまでとは違う暮しを強いられておりますから、特別に楽しみにしていたものでありましても、何をする気も起こりませんし、また、それに携わるのも許してはいただけない有り様なのです。このようなことで私の尊敬が得られるとでも、あの人はお考えなのでしょうか。私をすっかり貶めて、この男に相応しい妻にするためには、このような手立てが不可欠だということなのでしょうか。でも、あの人が拠り所にすることが出来ますものは、こういったことだけなのです。このような手口を頼りになさるというのでしたら、是非ともあの人に分かっていただきたいことがございます。つまり、従順で穏やかな気質を奴隷根性やさもしい心と取り違えておられるということです。

お願いです。どうか、あの人と私の生来の気立てや考え方のことをご考慮に入れていただきたいと思います。どのような長所によって、あの人は私の尊敬を勝ち得たいと願っておられるのでしょうか。お願いです。どうしても強要されることになるのでしたら、読み書きの出来る人、何か教えてくださる人のためのことにしていただきたいのです。ただ指図をするばかりの人、教えを施す力があって当然ですのに、自分が教えを必要としているような男の人は、一体どのような夫になるのでしょう。

私にも図に乗っているところがあるのかもしれません。少しばかり本を読んでおりますことや書き物の出来ますことを自惚れているのかもしれません。その点は最近一度ならずご注意をいただいているところです。でも、もしもそのとおりだといたしますと、今回の縁談はいよいよ不釣り合いなものだと思うのです。自分のことを良く思えば思うほど、あの人の評価は低くならざるを得ませんし、二人は互いに対しまして、ますます不似合いだということになります。

どうしても言わせていただかねばなりませんが、身内の者たちは私をもっと高く評価しているものと思っておりました。ラヴレースさんの求婚が差し止めになりましたのも、そのような評価に基づくような言い方を、以前、兄がしていたのです。このとおりだといたしまして、ソームズさんみたいな人にどうして白羽の矢が立つことになるのでしょう。

お申し出のございました贈与財産の件ですが、このようなことを申しましても、叔父様の一層のお怒りを招くことはないものと希望いたします。私のことをご存じの方ならどなたでも、これはお察しいただけることだと思いますが（そして、何人かの方は、その点で

お小言をくださったのです）、私といたしましては、そのような動機は軽蔑しているということなのです。望むだけのものを自分の財産として手にしております者にとりまして、贈与財産などが何でしょう。妻として自由に使わせてもらえそうなものよりももっとたくさん、独り身の人間として所有しているのですもの。お金の使い方、そして、胸に温めた夢にいたしましても、節度を弁えたものですし、余裕が出来ました時にも、いたずらに蓄えるのではなく、困っている人々に施すよう心掛けているのです。自分自身の利益を追うような、心の狭い料簡に左右されることが極めて少ない私だといたしますと、一族の繁栄などという望みの薄い不確かな夢、それも、兄とその子孫たちに叶えられます夢などが、私の心を動かすに足る事柄だと考えられるのでしょうか。

そんな兄の私に対する最近の態度、あるいは、家族への配慮からいたしまして（家族のことなど、兄の念頭にはほとんどないものですから、自分の思いを満たせずにおりますことより、一人息子という立場からいたしましても大切にして当然な、その命を危険に晒すほうを選んで憚らないのです。自分の思いを抑えようとは決していたしませんし、その思いにいたしましても、お許しをいただいて言わせてもらいますと、兄自身のためとか、どなたであれ、兄と縁故のある人の心の安らぎを考えてのことでしょうが、あまりにも大切にされすぎてきたのです。そのような態度からいたしまして）、現世での（もしかいたしますと、来世まで続くかもしれないのですが）私の幸せを犠牲にする価値が、とりわけ私にとりましては、あるのだろうかと申し上げたいのです。しかもそれは、途方もないような偶然、少なくとも、ありそうもない偶然を頼りにした計画を推し進めるためのことなのです。この点に関する証明につきましては、子細に検討いたしますのをお許しくださるのでしたら、私のほうでお引き受けいたしたく思います。

興奮しているとお叱りを受けそうですね。でも、理由が理由ですから、致し方ないのではないでしょうか。このような申し出がなされておりますのは、私がもっと熱心に反対をしなかったからのようにも思われるのです。ですから、気持ちを高ぶらせたり、苦々しく振る舞ったりいたしましても、辱めに遭っているためとお考えくださって、少しは斟酌をしていただきたいと思うのですが、その辱めにいたしましても、（自分の胸の内のことは分かっておりますから）自信を持って申しますが、不当なものだと私は考えているのです。

それにいたしましても、私には意中の男性がいるなどという、想像から出ましたお咎めに対し、何故これほどまでに言葉を重ねたのでしょう。叔父様にはこの場を借りて申し上げますが、すでにお母様にも次のように言明してあるのです。つまり、だれか他の人、特にこのソームズさんとの結婚を強要されることがないのでしたら、もう一人の方は勿論のこと、どの男性とも、皆さんの同意なしには結婚しないという点に関しまして、どのような約束にも応じるつもりでいることをです。皆さんの同意と申しますのは、父と母、叔父様と上の伯父様、それに、おじい様からの賜物の保管人の一人だということで、従兄弟のモーデンを含んでおります。兄につきましては、私に対する近頃の扱い方の点では、私から丁重さ以上のものを求めて当然なほどに兄らしいものだったとは申せません。このことがございますから、一言付け加えさせていただきますが、兄は私にたっぷりと負い目があることになりましょう。

ソームズさんへの嫌悪の情を表明いたします際、私の言い方がこれまではあまり明確でなかったということでしたら、（意中の男性に心を奪われているとのお咎めですが、そのよ

うな気持ちがあの人への反感を促しているなどと思われたくありませんから）厳かに言明いたします。この世にラヴレースさんのような男性が存在しないといたしましても、決してソームズさんと一緒になるつもりはないということです。この点に関して疑問の余地がなくなりますよう、愛する身内に宛てましたいずれかの手紙の中で、はっきりと記しておくことが必要と存じます。それに、誤解の余地を残さない率直さでもって訴えますお相手といたしまして、公明正大さと誠実さを最も大切に思う旨を明言しておられます、その叔父様よりも適切な人などいらっしゃるでしょうか。

　このようなわけですから、あの人に抱いております異議のいくつかにつきまして、もう少し詳しく述べさせていただきます。

　私の目には（実際、世間の皆さんの目にもですが）、ソームズさんはとても心が狭く、理解力もあまり優れていないように映るのです。がさつで繊細さに欠け、物腰や容姿の点でも上品なところはございません。心が狭いばかりでなく、欲の皮も張っていて、大変な財産をお持ちなのに、それを楽しむことをなさいません。そして、どのような種類の不幸にせよ、思いやる気持ちがないのです。あの人の余分なお金をほんの少し工面すれば足りることですのに、それがいただけないばかりに、実の妹さんは惨めな暮しをしていらっしゃるのではないでしょうか。ご自分の母親の兄である年老いた伯父様がささやかな生活の糧を…　あの人が半ダースほどの小作人から徴収する金額にすぎないものですが…　見知らぬ人たちの篤志に頼っておられましても、あの人は知らない顔をしているのではないでしょうか。私が開けっぴろげで堅苦しくない、話好きな性格であることは叔父様もご存じのはずです。あの人を取り巻くケチで自分本位な人々の輪の中に押し込められてしまいましたなら、私はどんなに惨めなことでしょう。この悪魔にも似た吝嗇の虜になっていますから、魔術師と同じことで、あの人はその輪の中から外に出ようとはしないのです。勿論、私を出してくれるとも思えません。

　このような男性ですのに、愛だなんて…　多分、おじい様の地所のことは愛していらっしゃるのでしょう。あの人には極めて好都合な場所にありますから、ご自分の土地のかなりの部分は価値が倍増するのだと、何人かの人たちに話しているのです（抑え切れなくて、私にも同じことを漏らしておられましたが、その時の嬉しそうな様子ときたら、卑劣な心の持ち主が自分自身の利益となりますことを、他人の好意を期待するのに十分な動機として仄めかします際の、あの嬉しがりようでした）。あの地所の件がございますし、縁組が成立いたしますと、あの人の素性の卑しさやケチ臭いところも面目を施すことになるわけですから、自分にも人を愛することは出来るのだと考えたり、実際にだれかを愛しているのだと思ったりしてしまうことにもなるのでしょう。でも、それはせいぜい二番目に位置づけられる愛情にすぎません。これまでも、今も、また、これからもずっと、富こそがあの人にとっては支配的な熱情の対象なのです。あの人の財産が守銭奴から遺贈されましたのも、正しくそこに理由があったのです。だといたしますと、私のほうでは、生きがいとしておりますことをすべて諦めまして、あの人と同じようにお金に汚くなるか、さもなければ、まったく惨めな生活を送らなければならないのです。言葉が過ぎました点はご容赦いただきたいと存じます。好きになれない人のことになりますと、余計なことまで口にしてしまうものですが、あの人につきまして、とても妥当とは思われないほど好意的な言葉が耳に入ってまいりますし、他には選択の余地もないほどに、あの人を受け入れるよう

激しく急き立てられていることもございます。

これらの事柄がまったくそのとおりであるかどうかはともかく、私のほうではそのような考えでいるものですから、どうしてもソームズさんのことを、お申し出のございましたような観点から考えるわけには行かないのです。いいえ、たとえあの人が私の描きました姿、本心からそう思っておりますものよりも十倍も優れた人だということが分かったといたしましても、それでもやはり、この世で私が存じ上げております他のどの男性よりも十倍は不快な人ということになりましょう。ですから、是非ともお願いいたします。これほどまでに厭わしく思われます男性のところに、この身が生け贄として差し出されることのなきよう、叔父様の姪のため、弁護を買って出ていただきたいのです。

叔父様ともう一人の伯父様でしたら、そのおつもりになってくだされば、ずいぶんとお父様の気持ちを動かしていただくことも出来るのです。是非ともお分かりいただきたく思いますのは、この件での私が、強情な心に囚われているのではなく、嫌悪の情に動かされているのだということです。そして、どうしてもその嫌悪の情に打ち克つことが出来ずにいるのです。と申しますのも、(父の意向に従うのが義務でございますから、その点を考えまして)自分に言い聞かせてみようと努めてはみたのですが、そうするだけで、心は怯んでしまいました。そして、私の目に映りますかぎりでは何一つとして取り柄のない人のために、いろいろ考えようといたしましたが、そのことで自分自身に嫌気がさしてしまったのです。あの人にいたしましても、この嫌悪の情にはお気づきなのですから、男らしい心をお持ちなら、このように固執なさることは出来ないはずだと思うのです。

もしも、この手紙の内容に尤もな点もあるとお考えいただけるのでしたら、どうか叔父様のお顔で、その点の後押しをお願いいたします。そうは思えないとのことでしたら、私にとりまして、これ以上の不幸はございません。でも、ご自分にとって確かなことは何なのかを、ソームズさんに分かっていただきますように書き記しますことこそが、私にとりましてまさしく公明正大な振舞いなのです。

長々と書き連ねましたこと、どうぞご勘弁願います。ご賢察いただけますなら幸甚に存じます。

恭順にして親愛なる貴方の姪

Cl. ハーロー

アントニー・ハーローから Cl. ハーロー嬢へ

姪のクレアリーへ

われわれに宛てて、あるいは、われわれのだれ宛にせよ、筆は執らないことだ。とりわけ私宛の場合、お前の書き綴ったような話題については筆を手にしないほうが良かったのだ。賢者の言葉にもあるが、「訴えごとを最初に出す人は正しく見えるが、相手方が登場すれば問いただされるであろう」[二六]ということだよ。それゆえ、この件では私がお前の〈相手方〉となることにしよう。お前の心の底まで問い質すつもりだからな。つまり、お前の手紙が本心から書かれたものかということをだ。ただ、背負い込んだ仕事の難しさは百も承知だ。お前が筆遣いのツボを心得ていることは広く知られたことだからな。だが、生まれ育った一族の利益や誉れ、そして、繁栄のために、父親の権威を守ろうというのだ。親

に背いた子が（クレアリー・ハーローにこの言葉を使わねばならないというのは、何とも気の重いことだが）我が儘を通すために持ち出してくる理屈すべてを粉砕することも出来ないようでは、それこそ辛い話になるのではないかな。

第一に、お前は、われわれすべてが憎しみを抱いている男、そして、われわれに対して負けず劣らず強い敵意を持っている男のほうを好きだと言明していることになるのではないかな（しかも、これは母親に断言したこととは逆なのだ。思い出すのだ、いいな）。それに、立派な人物のことだというのに、お前は何という見方をするのだ。よくもあのように好き勝手なことを書くものだな。われわれ全員が尊敬している人物だというのにだ。もっとも、それだからこそ、ということなのかもしれないな。

書き出しの言葉にも驚いた。私がソームズ氏を友人として尊重しているからこそ、お前は一層ひどい扱いをするというわけだな。見え透いた話だよ。私もそんなに馬鹿じゃないから、それくらいは読めるのだ。つまりは、金を愛する男よりも名うての好色家のほうが選ばれることになるというわけだな。いいかな、ひとつ言わせてもらうが、お前のようにいつも好みがやかましいと思われてきた者にしては、これは到底似つかわしいことではないぞ。最大の不正を働いているのはだれだと思うのだ。浪費家かな、それとも、倹約家のほうかな。一方は自分の金を貯め込んでいるのだが、もう一方は他人の金を使っているのだよ。だが、お前のご贔屓は根っからの罪人で、札付きなのだ。

こんな言い方をしたのでは、神のお許しを請わねばならないが、悪魔がとりついているということだな、女には。一番几帳面な者までが、好みとしているのは下劣な放蕩児で女郎買い　…　いや、繰り返してはいけないな。その言葉によって表される悪党が選ばれるようなことになると、言葉自体が罪深いことになるからな。私にしても、女すべてに備わる辻褄の合わないところをいやというほど見ていなかったなら、これまで独身を通しはしなかったはずなのだよ。神聖な神の書にもあるとおり、「ぶよを漉して除」き、「らくだは飲み込む」(二七)ような手合いばかりだからな。

天の邪鬼にかかると、何もかもひどい言われようだな。だれにも公正になろうとしている用心深い者が、欲の皮の張った人間にされてしまう。それでいて、下劣で不品行な放蕩児は慇懃な男性と称されるわけだ。おまけに、愛想良しだというのだからな、まったく。

これは私の確固たる信念だが、ラヴレースにしても、二つの理由があるからの話で、でなければ、口で言うほどお前に好意を抱くはずはないのだ。それで、理由は何だと思うかな。何のことはない、われわれ全員に対する悪意に動かされてということが一つ。もう一つは、自由に出来る財産がお前にあるということだ。お前の優しいおじい様も、いうならば、お前個人のものとして、あれほどまではお遺しにならなかったほうが良かったと思うのだよ。もっとも、おじい様にしても、可愛がっていた孫娘がこのように家族全員に背いたりするとは、夢にも思われなかったことだろう。

「私に意中の男性がいるというのでしたら、ソームズさんにはどんな希望があるというのでしょう」というのか。これは驚きだ。お前の言葉とも思えないぞ、クレアリー。それでは、ソームズ氏はお前の父親、母親、そして、私たちの推挙を受けても、何ら期待出来ることはないということかな。そう、何一つないということらしいな。まったくもって天晴なことだ。われわれは皆お前のことを親孝行な子供だと思っていたのだが、そんな子になら、これだけ言えば足りるだろう。お前のその孝行心を当てにして事を進めてきたのだ

よ。もはや避けようはないのだ。われわれとしては、妨害に甘んじるつもりはないし、我らが友ソームズ氏にしても同じお気持ちだろう。それは断言しておく。

お前の地所が氏にとって好都合な所にあるとして、だから何だというのだ。氏がお前を愛していないことがそれで分かるというのか（生意気者め）。お前の気持ちからはほとんど期待出来るもののない氏にしてみれば、何か良いものがお前に備わっていることをどうしても期待したくなるのだよ。そこのところを考えることだな。ところで、この地所はわれわれのものだとも言えるのではないのかな。われわれ全員に所有権があり、優先権もあるということではないのかな。もっとも、権利などということが持ち出されてきた場合の話だがな。それに、あの地所を、われわれすべてを差し置いてお前に贈ることになったいきさつにしても、御霊の安らかならんことを願ってはいるが、気の好い老人の耄碌した考え以上のものだったとでもいうのかな。だとすれば、お前との結婚でだれがあれを手にしたら良いのか、その選択権はわれわれが持つべきではないのかな。なのにお前は、われわれすべてに悪意を抱いているあの悪党が地所をさらって行くのを指をくわえて見ていてほしいなどと、そんなことを平気で言うつもりかな。手紙の内容をよく考えてほしいとのことだが、お前こそどうなのだ。この点を考えているのかな。お前にも分かるはずだが、お前が承知しているもの以上の言い分がわれわれにはあるということだよ。

お前の言う辛い仕打ちの件だが、これは自業自得というものだ。お前の気持ち次第で終わることでもあり、考慮の余地はない。払い者にされ軟禁されているとはいえ、懇願と丁重な言葉のすべてが試みられた後の話だということだよ。その点を忘れないでほしいものだな。それに、ソームズ氏としても、お前の強情さを助長するわけには行かないということだよ。その点についても述べさせてもらおう。

接客と訪問の件だが、どちらもお前の好みではなかったわけだから、あれは気持ちを動かすための泣き言だろう。不面目といえば、われわれのほうもお前と同じことだよ。これだけ立派な娘だというのに　…　われわれはお前のことをどれほど誇りにしていたと思うのだ。しかも、他の点と同様、この話もすべてお前の気持ち一つなのだよ。

だが、両親に従うよう、自分に言い聞かせようとすると、お前の心は怯んでしまうというのだな。見事な言い種じゃないか。続けているうちに本音が出てしまったというところだな。分かっているのだよ。その気にさえなれば、氏を好きになることもお前には出来るということはな。氏を嫌うよう申しつけたい気持ちも結構あったのだ。そうすれば、おそらく今より好きになるはずなのだ。何しろ、常々気づいていたが、女というものはまったくもって訳の分からぬ天の邪鬼だからな。してはいけないことをやり、愛してはいけない男を好きになるというのが、女すべてにとってのこの上ない楽しみというわけだよ。

お前の兄の言葉では、読み書きというものは、お前たち若い女の知力を越えたものとは言えないにしても、その善し悪しを判断するには荷が重いとのことであったが、私もまったく同じ考えなのだ。図に乗っているところがあるのかもしれない、とお前は言う。自惚れているのかもしれない、とな。まさしくそのとおりだ。この紳士をそこまで軽蔑するようではな。はっきり言っておくが、氏はたいていの紳士に負けないだけの読み書きは出来るのだ。ソームズ氏は読み書きが出来ないなどと、だれが言ったのだ。お前に何かを教えることの出来る夫でなければ困るとは、恐れ入った話だな。自分の才能はよく分かっているようだが、せめて務めということも知ってもらいたいものだ。それこそ、姪よ、近頃の

お前が学ばねばならないことなのだ。従って、お前を指導すべき点がソームズ氏にも見つかるということだな。お前はそれを望んでいるようだが、あの手紙を氏にお見せするつもりはない。そんなことをして、氏を怒らせてもいけないからだよ。お前が氏のものとなった後、あまりにも厳しい教師になられても困るだろう。

しかし、考えてみると、お前が氏よりも筆まめだとすれば、氏にとってはいよいよ有用な妻になるのではないかな。お前ほど優秀な倹約家は他にいないからな。氏の簿記はお前が全部引き受けて、執事を雇わずに済むということになるかもしれないな。言わせてもらえば、これは家族にとって大変な利点なのだ。執事というのは、えてしてやくざな連中が多くてな、知らぬうちに人の財産の中に忍び込んでいるものなのだよ。そして、自分自身の金についた利子を連中に払わされてしまうのも珍しいことではないのだ。

良家の主婦がどうしてこういった仕事に携わらないのか、私には理解しかねる。昼過ぎまでベッドを離れず、夜通し酒食やカードに興じ、自分の家庭だというのに、大事なことすべてにはからっきしの役立たずだ。これが昨今の女性の間では流行りなのだよ。そんな女は一人残らずくたばってしまえ、と言いたいが、幸いにして、私は独り者だからな。

おまけに、そういった仕事はお前が素晴らしく精通している分野だ。この屋敷では取り上げられてしまったと、お前は嘆いているのだろう。だとすれば、ソームズ氏のところで経理の仕事が出来るじゃないか。お前自身のためでもあれば、お前の子供たちのためでもあるのだ。もう一人の男の場合にも、おそらく経理の仕事はあるだろう。ところが、散財の勘定だよ。濫費した金や借入金、払う気もない借金の勘定ばかりなのだ。さあ、いいかな、お前には世間というものが分かっていないのだよ。何と言おうと、男は男なのだ。それに、色男が相手となれば、それこそいろいろと相手をしなくちゃならん。それも、金の掛かるやつだよ。お前がいくら節約をしても、湯水のように金が出て行くことになる。それゆえ、私にとってはソームズ氏がお誂えむきということだ。お前にとっても、そうであってほしいものだな。

だが、ソームズ氏はがさつな人だ、というのだな。お前のような気難し屋が満足するほど優雅ではないが、思うに、めかし屋や伊達者の服装を氏は真似たりしないからなのだろう。それに、女心を痺れさす、たわけたお世辞などには精を出さないからなのだよ。いいかな、分別のある人であることは間違いないのだ。われわれに向かって、氏ほどに要領を得た話の出来る者は他にはいないのだが、お前は避けてばかりいるものだから、氏としてもそんなところをお前に見せる機会がないのだ。それに、恋をしている男というのは、どれほど分別があるにせよ、人の目には愚か者に映るものなのだよ。とりわけ、忌み嫌われている場合には、そして、前回お前と一緒になった折のような、あんな扱いを受けたりすれば、そうなるものなのだ。

氏の妹さんについてだが、あの娘さんは（お前がしたがっているように）自分から男のところへ走ったのだ。氏が強い警告を与えていたにも拘らずな。実は、あんな結婚をする場合、何が当てに出来るのか、氏は言い聞かせていたのだよ。氏は言葉どおりのことをしたわけだが、誠実な人間はそうあって然るべきなのだ。警告に背けば、痛い目を見て当然だろう。同じ轍を踏まぬよう、用心することだな。覚えておくのだ。

氏の伯父というのは、氏の好意に与るのには相応しくない人物なのだ。というのも、オリヴァー卿が日頃から甥のソームズ氏のために予定していた地所を、氏を出し抜いて自分

に遺贈させようと目論んだのだ。そして、そんな下心で氏を養育してきたわけだ。「安易に容赦するのは、罪を助長するだけ」というのは、お前の立派な父親が格言としている言葉だが、この格言を肝に銘じておれば、これほど多くの強情娘が世にのさばることはなくなるはずなのだ。罪人にとって罰は役に立っているのだし、報いに与るのはその価値のある者だけに限るべきなのだ。そして、故意の犯罪の場合には、処罰は厳しく行われるのが良いと私は思っている。

氏の愛情について言えば、近頃のお前のことを考えると、勿体ないほどの打ち込みようだ。その点は言わせてもらうぞ。そして、この点が氏の不幸ということだ。やがては、お前の不幸になるかもしれないがな。

お前が「悪魔にも似た」などと悪し様な言い方をしている［お前にしては、まことに慎みのない言葉だと言っておこう］氏の吝嗇についてだが、このような非難を口にする根拠は、だれよりも、お前には乏しいのだ。他ならぬお前のために全財産を遺贈しようと、自ら申し出ておられるのだからな。どれだけ富がお好きだとしても、それ以上にお前のことを愛しておられる証拠だよ。だが、この点での言い逃れが出来ぬよう、われわれのほうでは、お前自身の条件に氏を縛り付けるつもりでいる。結婚約定書により、お前が自由に出来る相当な金額を四半期ごとに支払ってもらうのだ。これはすでにお前に知らされたことであるし、あの高慢ちきな娘の目の前で、ハウ夫人（まことに立派なご婦人だ）にも話してあるのだ。もう一度お前の耳に入るようにと思ってな。

ラヴレースに心を奪われているとの告発を否認するために、われわれの同意なしにあの男とは決して一緒にならない旨をお前は提案しているが、何のことはない、同意が得られるまで、望みを捨てずにいようということではないか。うまいことを並べ立てて、われわれの根負けを待とうという算段だろう。そして、お前が独りでいる間は、あいつにとっても希望の火は消えないということだ。そして、われわれはこんな暮しを続けねばならんというわけだ（そうだろう）。お前のことで心を悩ませ、絶えずお前には目を配り、同じように、あいつの横柄な態度や脅しにも絶えず晒されていなければならんというわけだ。先週の日曜のことを思い出すのだな。お前の兄とあいつが顔を合わせていたら、一体どういうことになっていたと思うのだ。あんな血の気の多い人間などとやって行けるはずがあるまい。立派なソームズ氏とはわけが違う。こちらの男性はお前にびくついているが、あちらのほうはお前を震え上がらせることになるのだぞ。そこのところを考えることだな。しかも、自分では避けることもままならないのだ。それに、覚えておいてもらうが、片方の男性とお前の間に何か誤解でも生じた際は、われわれ全員が仲裁の労を取るつもりでいるということだ。効果覿面なことは間違いあるまい。だが、もう一方の男との場合には、それこそ自業自得ということになる。お前のために口を挟んでくれるような奇特な者などいないはずだからな。それから、夫婦仲がうまく行かないことなどを心配して、怖じ気づいてはいけない。昨今では、蜜月といっても、二週間以上続くことはないのだからな。ダンモー・フリッチ審査(二八)とやらも、聞くところによると、申請の出たためしはないということだ。以前にはあったと言う者もいるのだがな。結婚というものは、当事者の合意で結ばれた場合も、身内同士でまとまったものにしても、まともな状態とは言えないのだ。お前も知ってのとおり、われわれ三兄弟のうちで結婚に踏み切る勇気があったのは一人だけだが、何故だと思うかな。私たちの場合は「他山の石」の譬えを守ったということだよ。

金をそんなに軽蔑してはいけないぞ。有難味の分かる時も来るだろうからな。それこそお前が学ぶべき教訓の一つだな。それに、お前自身の考えを借りれば、ソームズ氏がお前に教えることの出来る教訓の一つということにもなろう。

勿論、お前の興奮ぶりは叱責せねばならんな。お前が自ら招いた恥辱を大目に見るつもりはない。いわれのないものと思えば、喜んで弁護を買っても出るだろうが、ただ、子供は両親の権限に異議を唱えるべきではないというのが、私の変わらぬ考えなのだ。お前の祖父があの地所をお前に遺すことにした時にも、息子が三人に孫息子、それに、お前の姉がいたわけだが、われわれは全員黙って従ったのだ。何故だと思うかな。父親のしたことだからだよ。是非とも、この手本を見習ってもらいたいものだよ。それが嫌だというのなら、手本を示した者たちがいよいよお前のことを許せなくなるのも当然だろう。そこのところを覚えておくことだな、姪よ。

自分の兄のことだというのに、軽蔑が過ぎるぞ。兄宛の手紙では、無礼な言葉が目に付くし、姉に対しても、あの娘に宛てた手紙を見ると、まったく同じことだ。いいかな、お前の兄はあくまでも兄なのだ。それに男だ。兄たる者に相応しい扱いを忘れてもらいたくないものだな。しかも、お前の兄は（われわれ三兄弟に次ぐ）一家の長であり、その双肩に一族の名が懸かっているのだよ。ちょうど、お前が生まれ育った一族のために立てられた、これまでで最も雄大な計画の成否が、お前の従順な承諾如何にかかっているのと同じことなのだ。そこでひとつ尋ねさせてもらうが、一族の名誉はお前にとっても名誉ではないのかな。そのように考えないのなら、いよいよもってお前らしくもないことだ。どうあっても反対する気だ、などと言わないことを誓うのなら、その計画を見せてやろう。あの男に魂を抜かれてしまっているのでなければ、お前の気に入ることは請け合いなのだ。だが、もしもお前がそんな有り様なら、たとえソームズ氏が天使であっても、どうにもならないだろうな。恋は魔物だよ。魔物なのだよ、恋は。いったん女の頭に取り憑いてしまった日にはな。そんな例をいくつも目にして来ているのだよ、私は。

「たとえこの世にラヴレースのような男性が存在しないとしても、決してソームズさんと一緒になるつもりはない」という言い方だったな。「つもりはない」とは何事だ。何という言い種なのだ、まったく。お前が実際にひどく苦々しい気分なのは、われわれにも分かっているのだ。お前は口さえ開けば「お断り」なのだから、お前に対して権威を有する者たちが「もう一方の男と一緒になってもらう」と言い出すのも、不思議なことではないのだ。私がその一人であることは言うまでもあるまい。覚えておくのだ。お前が、胸につかえていることをすっかり言わずにはいられないのなら、こちらとしても、何もかも胸に納めて黙っているわけには行かんのだよ。「甲について言えることは乙についても言える」ということだ。その点も考慮に入れておくのだな。

ソームズ氏は男らしい心意気、それも、紳士の気概をお持ちと拝察する。それゆえ、氏の怒りを招かぬよう、くれぐれも注意しておく。お前のことを愛しておられるが、それに劣らず、憐れんでもおられるのだ。氏のお言葉によれば、愛情を言葉で表す機会は与えてもらえないのだから、行いを通して分かってもらうつもりでいるとのことなのだよ。そして、氏が望みをかけておられることと言えば、お前のこれからの優しい心遣いに他ならないのだ。その点に関しては、われわれも氏の望みどおりになるよう願っているし、希望を持っていただくようにと励ましてもいるところだ。そして、このことがあって、氏も意を

強くしておられるのだよ。従って、氏の節操についての保証は、お前の両親とおじたちに任せてもらって構わないということだ。それもまた、孝行の印というものだろうな。

提示された贈与財産については、「公正さの点から」お受けするわけには行かないとのことだが、これがお前の両親、そして、われわれ全員に対する誹謗となることは分かっているはずだ。このような誹謗も、以前のお前から出たものであれば、驚きを誘ったことだろうが、今はもう驚くには当たらないのだよ。

お前のこの慎みのない手紙には、他にも大いに非難されて然るべき箇所が多々あるのだが、「苦々しい」気持ちゆえのことと考えねばなるまい。この言葉を持ち出してくれたのを有難く思っているぞ。お前の気持ちをどう言い表したものか、われわれとしても途方にくれるところだったのだ。もっとも、もう少しマシな言い方が許される事情であってほしかったとは思っている。

それでも、お前のことは深く愛しているのだよ。自分の姪とはいいながら、お前はこれまで目にした中でも飛び切り上等な娘の一人だ。だが、誓って言うが、両親には従うべきだと思うし、私や兄のジョンの願いを聞き入れてほしいのだ。よく分かっていることとは思うが、われわれの心にあるのは、ただただお前の利益のことだ。われわれ全員の利益と名誉にも適うことなのだよ。だれであれ、一族全体の利益の助長を図ろうとしない者、また、一族を二分して対立させようとする者のことはどう考えたら良いのかな。まあ、金輪際あってはならないことだな。分かるだろうが、私は全員の利益を目指しているのだ。事がどう進もうと、それで私は何を得るというのだ。私は自分自身のために、だれかに何かを求めているのかな。兄のジョンはどうかな。だとすれば、さあ、姪っ子クレアリー、お前は一体どうするつもりなのだ、といったところだな。

あゝ、だが、ソームズ氏を愛することは出来ない、とお前は言うのだな。しかしだ、自分に出来ることがお前には分かっていないのだよ。お前自身が嫌いな気持ちを助長しているのだ。心が怯むのを（これほど天の邪鬼な心をしているとは、私は思わなかったが）、お前は許しているということだな。そういう心は叱りつけてやるのだよ、いいな。怯むようなら、すぐに尻をひっぱたいてやれ［あらゆる海戦において、陸の戦でも同じだが、水兵や兵士にそうしているのだよ。さもなければ、勝てるわけがない］。そうすれば、お前もそんな心を克服するはずだ。われわれ全員はそう確信しているのだ。なぜだと思うかな。それがお前の務めだからだよ。お前がどう思っているにせよ、われわれのほうではそう考えているのだ。そして、どちらの考えが優先されるべきなのかな。お前のほうがわれわれより機転は利くかもしれない。だが、お前のほうが賢いということになれば、いいかな、われわれのうちの何人かは、お前よりも三、四十年は無駄に年を食ってきたことになってしまうのだぞ。

お前の手紙に負けないほど長い手紙を書いてしまったな。姪ほどに生彩のある、あるいは、上品な筆遣いではないかもしれない。だが、筋はすべてこちらのほうが通っているように思うのだ。お前も同じ考えでいることを、われわれの願いすべてに応じることによって示してもらえるなら、まことにもって嬉しいかぎりだ。それが駄目だというのなら、お前を深く愛してはいるが、私に弁護を期待してはいけないし、身内とも思わないでもらいたい。お前の叔父と呼ばれるのも辛くなるからな。

草々

アントニー・ハーロー

火曜日　午前二時

追　記

もうこれ以上、手紙を出してはいけないぞ。ただし、承諾を知らせるものならば構わない。もっとも、禁じるまでもないことだったな。理路整然たることからして、これには反論の余地もないものと確信している。日曜の朝から、礼拝に出ていた時間、あるいは、それに類した時間を除くが、いわば日に夜をついで書き続けた。だが、これが最後だぞ。念のためにな。

ANT. H.

手紙　三十三
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月十六日　木曜日

家族への働き掛けがこのようにひどく不首尾に終わったものですから、貴女もびっくりなさるような手段に踏み切りました。他でもありません。ソームズさん自身に宛てて一筆認めたのです。発送いたしまして、返事を受け取ったところです。きっと手助けをしてもらったのでしょうね。一度あの人の手紙を見たことがあるのですが、言葉の使い方も綴りも、お粗末なものでした。でも、おそらく、頭語はあの人の言葉を書き取らせたのでしょうね。本当に形式張った人ですからね。この二通と一緒に、兄からの手紙も同封いたします。ソームズさん宛の私の手紙に関するものです。私といたしましては、これ以上事を進めるのを思い止どまっていただくことも可能なように思ったのです。また、それが出来さえすれば、私の望みのすべてが叶うことになるのですからね。試してみる価値はあったのです。でも、お読みいただくとお分かりでしょうが、何一つうまく行きません。兄があまりにも抜け目なく手を打っているのです。

ロージャー・ソームズ殿

三月十五日　水曜日

謹んで申し上げます

私からの便りに驚かれたことでしょう。内容も尋常ではございませんから、なおさらのことと存じます。ただ、止むを得ない事情でもあり、お許しいただけるのではと、私なりに考えております。従いまして、その点に関しましては、これ以上お詫びの言葉を並べるのは省かせていただきます。

家族の者たちのことを初めてお知りになった頃には、今この文を認めております者のことは、この世でも一番幸せな人間の一人と思われたことでしょう。最高の両親、この上なく優しい両親に可愛がられ、愛情溢れる二人のおじからは暖かいご愛顧を頂いておりましたし、だれからも敬意をもって迎えられていたのです。

でも、この幸せな情景も、今では何という変わり様でしょう。貴方は好意のまなざしを私に寄せるお気持ちになられました。家族の者たちに結婚を申し込まれ、皆の賛同をお受けになりましたが、これは、私の気持ちや幸せのことは一顧にも値しないとでも言わんばかりに、私には何の相談もなしになされたことだったのです。何事であれ、筋の通りますかぎりでは、私に服従を求める権利を有しております者たちが、しきりにそれを主張したのです。不幸にして、私のほうでは同じようには考えませんでした。おそらく、皆と違う考えを持ったのはこれが最初でしょう。私の将来の幸せにとりまして大変重要な問題ですから、この点は譲ってくれるようお願いいたしました。でも、残念ながら無為に終わったのです。そこで、貴方に向かって（それが誠意だと思いましたので）気持ちを打ち明けさせていただいたのです。ところが、遺憾なことに、また、私には驚きでしたが、貴方は固執なさいました。そして、今なお固執しておられるのです。

その挙げ句、一体どのような結果を招いたか、あまりにも悲しいことで、繰り返しお話しする気持ちにはなれません。身内の他の者とは自由にお会いになれるのですから、よくご存じのことと思います。貴方ご自身の寛大さの名を高めます上で、あるいは、私の評判にとりましても、不都合が生じますほどによくご存じのはずです。貴方のせいで、いまだかつて経験したこともない仕打ちを受けているのです。私がこのような仕打ちを受けて当然の人間だとは、これまでだれ一人考えもしなかったことなのです。そして、皆の愛顧を取り戻すための条件とされておりますのが、まことに困難で不可能なことなのですから、よくのすべての人の中でも、私には到底好きになれそうにもありません男性のことを、他のだれにもまして大切にしなければならないということなのです。

このような苦痛を味わい、不幸な目に遭っているわけですが、それも、すべては貴方のせいなのです。無情にも貴方が固執なさるからこそのことなのです。それゆえ、書面をもって要求させていただきます。貴方が奪い去りました心の安らぎを返していただきたいということです。貴方が奪ってしまわれた、あれだけ多くの身内から寄せられておりました愛情を返していただきたいということです。また、もしも貴方が男性の、そして、紳士の特色ともなります度量の広さを持ち合わせていらっしゃるのでしたら、敬服の念を抱くと明言なさっているその人間に対しまして、これほど残酷な結果を招くことになりました求婚はもうお続けになりませぬよう、切にお願い申し上げる次第です。

身内の者たちは私にそう思い込ませようとしておりますし、貴方もはっきりとおっしゃられたことですが、仮に、本当に私を高く買ってくださっているといたしましても、これは心の狭い、自己本位の評価と言うべきではないでしょうか。こんなにも悲しい結果を伴っているのですから、その不幸な相手にとりましては、何の得にもならない評価です。私のためではなく、ただ貴方ご自身のためのことなのです。そして、この点でも、貴方は思い違いをなさっているのです。と申しますのも、分別のある人でしたら、心を開こうともしない相手との結婚を望んだりするものでしょうか。その人を尊敬出来ないという相手なのです。従いまして、きっと悪い妻になるに違いない相手とです。それに、良い妻となりますことを誇りに感じております女を、可哀そうに、悪妻にしてしまうなんて、ずいぶんと惨い話ではないでしょうか。

僭越とは存じますが、気質にいたしましても性癖にいたしましても、私たちはひどくかけ離れていると判断いたしております。他の女性ならだれでも、私よりは貴方を幸せにし

て上げられることでしょう。私が受けております仕打ちのことや、そんな仕打ちに遭いましても折れようとしない私の、いわゆる強情さのことをお考えくだされば、このことは納得していただけるものと存じます。たとえ、天の邪鬼だと思われておりますことに対しまして、尊敬出来ない人との結婚には同意し兼ねるといった、立派な理由はお示し出来ないとしてもです。

でも、私を高く買ってくださっているとのことですが、私のためを考えて諦めていただくだけの度量の広さはお持ち合わせでないのでしたら、貴方ご自身のお立場のこと、そして、将来の幸福のことも顧慮され、どうか求婚をお取り下げになり、もっと立派な人に愛情を注がれますよう、お願いいたします。私に惨めな思いをさせ、貴方ご自身を不幸にしなければならないいわれはないのですからね。このようにしてくださいますなら、身内の者たちの愛情を取り戻していただくために、今貴方にお出来になる事柄のすべてを全うなさることになりましょうし、また、そのようなことが可能ならの話ですが、私は貴方がご覧になったのと同じような幸せな状態にしていただけるのです。貴方のことですから、きっと丁重なお言葉を用いてくださるものと思いますが、私との件で上首尾を収める望みはまったくなく［そして、実際、これ以上の真理はございません］、従って、今後は私への想いを断ち切り、別の事柄に没頭するつもりでいるとお話しくだされば、それだけで済むことなのです。

この願いに応じていただけるのでしたら、寛大なるお心遣いを肝に銘じ、深く深く感謝申し上げますし、いつまでも次の姿を私に守らせることにもなりましょう。

今後とも貴方様のご発展を祈ります、慎ましやかなるしもべ

クラリッサ・ハーロー

クラリッサ・ハーロー嬢へ

謹んで一筆啓上

親愛なるご令嬢

貴女様の御手紙は、御期待の向きとは甚だしく異なる効果を及ぼしております。御考えの見事さ、御気質の立派さを改めて思い知らされた次第です。自己本位と呼ばれましょうと、どのようにお呼びになりましょうと、当方といたしましては、求婚を続行させていただかねばなりません。そして、辛抱と忍耐とを重ね、また、たゆまず不変の努力を続けることにより、遂には前途の困難を克服することが出来ますれば、それこそ果報の極みというものでありましょう。

立派な御両親、おじ上たち、さらには他の御家族の方々も、支障のないかぎりはラヴレース氏との御結婚は決して認めないと、固く心を決めておられますし、その他には邪魔だてする者はいないと拝察いたしますゆえ、安んじて事の成り行きを見守る所存です。失礼に当たれば御許し願いますが、仮にだれかが私の地所を、それなしには幸福は望めないとの理由から、気前の良い証に譲ってほしいと申し出るようなことがあれば、私としては願いを聞き入れても良いくらいに考えております。さらに貴重な宝を手放しまして、他人の至福を助長し、そして、私を出し抜くのに手を貸しますよりは、まだましなことと思えばこそであります。

無礼とは存じますが、これまでどおりに続けさせていただかねばなりません。御考えに

よりますと、私ゆえの御苦労とのこと、申し訳なくは思いますが、これまで、愛情を捧げ得る女性には巡り合えずにいたからでもあります。わずかでも望みのある間は、また、貴女がだれか幸せな男の許に嫁がれますまでは、左記の立場を守らねばならず、また、守り抜く所存です。

忠実にして柔順なる貴女の賛美者
ロージャー・ソームズ

三月十六日

ジェームズ・ハーロー氏からCt. ハーロー嬢へ

三月十六日

ソームズ氏に手紙を認め、お前に対する望みを断念するよう説得するとは、何とも気紛れな考えを思い付くものだな。お前の好きな突飛な思い付きの中でも、これは飛び切り並外れたものの一つに間違いない。だが、われわれを一人残らず激怒させた事柄はさておくとしても（悪党に心奪われていることを白状しているし、私やお前の姉、そして、おじ貴たちへの無礼な言い種のこともあるが、おじ貴の一人がたっぷりとお灸をすえてくださったことだろう）、あれほど騒々しく不平を並べている扱いのことを、何でソームズ氏のせいなどにするのだ。これら一切合切は、お前がラヴレースを好きになったからこそだということくらい、いくら馬鹿でも分かるはずだ。ソームズ氏がお前に求婚してくださろうとくださるまいと、こういうことになっていたはずなのだ。

これが事実であることはお前にだってきっと分かるだろうから、恋に迷ったお前の心にその余裕があればの話だが、よく考えてみるのだな、機転の利く別嬪さんよ。われわれを諫めたり、ソームズ氏を咎めたりしているが、それが人目にはどれほど見事な姿に映っているかということをだ。以前の幸せを（お前は幸せと言っているが、ただ口先だけのことだ。お前に対するわれわれの愛顧をそう考えているのなら、お前次第で取り戻せるものなのだからな）返してほしいなどと、ソームズ氏に要求しているが、まったくのお門違いというものだ。今でもお前自身に出来ることなのだからな。それゆえ、生意気さんよ、愁嘆場はもう願い下げということだよ。相手を弁えることだな。はっきりと言っておくが、お前がソームズ氏と一緒になろうがなるまいが、もしもわれわれの両親やおじ貴たち、そして、俺の手で邪魔出来るのであれば、お前を憬れの君、放蕩三昧のラヴレースなどとは絶対に結婚させないということだ。いいかな、堕落天使さんよ、絶対にお断りだぞ。あのやくざな道楽者などを夫にして、父や母にあんな息子を持たせるわけには行かんのだ。俺としてもあんな弟は真っ平御免だ。従って、もしも家族の者に許しを請いたいとか和解を望むとか、あるいは、親切な言葉がほしいというのなら、気持ちを鎮め、あいつへの想いは何もかも断ち切るようにすることだ。とりわけ、今のところは次のように称している、その人間に頼む時にはな。

お前の兄
ジェームズ・ハーロー

追　伸　お前が筆まめなことは承知している。返事をよこしても、封を切らずに返送す

るつもりだ。これほど分かりやすい事柄で議論を交わす気はないからだよ。これを限りの最後として、ソームズ氏についてのお前の考え違いを正してやりたかったのだが、お前のことで悩むようでは、ソームズ氏にも落ち度があると俺は思う。

手紙　三十四
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

三月十七日　金曜日

貴公らの忠誠心と友情を速やかに、かつ、快く確約してもらい、俺としてもまことに嬉しく思う。前便で名を挙げた我が選り抜きの腹心たちにも、その旨を伝えてもらいたい。

ジャックよ、貴公には可能なかぎり速やかに当地までご足労を願いたいのだ。他の連中については、それほど急ぐことはあるまいと思う。だが、M卿の屋敷まで来てもらって構わない。俺もあちらに向かうつもりでいる。連中を出迎えるためではないにしても、再び仲立ちを頼まねばならないような、新たな障害は差し当たって存在しない旨を、卿に安心してもらうためなのだ。

貴公に関しては、常時俺に同行してもらいたいのだ。身の安全のためではない。あの家族に出来ることといえば、精々威張り散らすだけだからな。遠吠えにすぎないのだよ。そうではなく、気晴らしが欲しいということだ。ラテン語や英語の古典を持ち出して、恋の病に打ちひしがれそうな心を支えてもらいたいのだよ。

貴公には俺のいるこちらへ来てもらうのが最も好都合だ。例の軍服を着用してな。召使のほうは平服にすることだな。そして、俺とは遠い親戚筋で、昵懇の間柄ということにしよう。上のほうに通じている貴公の顔で、仕事を世話してもらおうというわけだ。上のほうとは言っても、天国のことではない。貴公も承知のはずだがね。小さな居酒屋に来てくれると、俺に会える。連中に言わせると、旅籠だそうで、屋号は〈白い牡鹿〉だ。おそろしく傷だらけの看板を（雨風に晒されただけの話だがね）掲げている。寂れた村にあるのだが、ハーロー邸から五マイルと離れてはいないのだ。ハーロー邸はだれもが知っているが、ヴェルサイユ宮と同じことで、年寄りならだれもが覚えている頃に、掃き溜めから姿を現した屋敷だからだよ。とりわけ、貧乏人は一人残らず知っている。だが、それもほんの数年前からのことで、ある天使があそこの俗人たちの息子や娘の中に出現して以来のことなのだ。

牡鹿亭の者たちは貧しいけれども律義者だ。俺のことは素性を隠した貴人と思い込んでいるものだから、下にも置かないもてなしぶりで、辟易しているところだ。小綺麗で愛嬌者の娘が一人いる。六日前に十七になったばかりで、ローズバッドという愛称を進呈してやった。この娘の祖母というのは（母はいないのだよ）、かつて暖炉脇の柳細工の椅子に納まった者の中でも、結構こざっぱりとした部類の老婦人なのだが、孫のことはどうぞお手柔らかにと俺に頼み込んでいた。

俺を相手にした場合、これが当を得たやり方なのさ。俺が容赦なくモノにした多くの可愛い蓮っ葉どもにしても、俺の力のほどを認め、早目に慈悲を求めてくれたなら、容赦してやったのだ。だが、新たな相手が現れた場合には、「不遜なる者どもを征服す」（二九）とい

うのが俺のモットーになるはずだ。

　このおネンネは（というのも、大いに貴公の気に入りそうな素直さがあるのだよ。どこまでも控え目で、世話好きな上に、まったく無邪気だ。俺としても、その遜ったところや仕事熱心なところ、そして、無邪気なところさえも大いに好ましく思われる娘だ）、俺が悪天候と戦い、ハーロー邸の塀の辺りを人目を忍んで這いずりまわっている間、貴公には結構楽しみの種になることだろう。この娘よりも上流のお嬢さんたちの場合には、生来の姿を抑えるためであり、その結果、魅力も薄れてしまうわけだが、隠しておくように教え込まれてきたものの、そのすべてが、彼女の心の中を覗けば見つかるはずなのだ。

　だが、ローズバッドを手折ってはならぬと命じておこう（俺自身にすら絶対に認めないことなのだ。慎んでくれ）。この辺りで蕾を開いた香しい花としては、過去十年間、あるいは、この先十年間でも唯一のものだからな。というのも、俺は来し方行く末に思いを馳せていたのだよ。何しろ、今は待機の時ということで、時間が余ってかなわないのだ。

　これだけの長い間、これほど真面目にしているのは、俺としては大学入試の時以来のことだ。こうしているのが正解なのだよ。どうかして、この小さな旅籠に隠れ住んでいることが露見するかもしれない。そうすると、ローズバッドが俺のハートを射止めたのだと思われることだろう。こんなにも気持ちの良い素朴な者たちから俺に有利な報告がなされると、俺の立場は安泰になるかもしれないのだ。何しろ、婆さんと我がローズバッドとの親族関係については誓っても構わないのだし、父親のほうも実直な貧乏人で、ローズバッドのことだけを楽しみにしているのだよ。だから、ジャック、我がローズバッドには手を出さないでくれ（貴公と二人きりにすることも多くなると思うが、見逃すのだ）。ローズバッドに対しては、次の掟を遵守してほしいのだ。俺にしても、いったん破るといつも悔いが残っていたものなのだが、頼りになるのは素直さと無邪気さだけという少女、そして、財力も乏しく、心卑しい者たちの不躾な侮りや極度の赤貧から逃れる術もない娘は、決して毒牙にかけてはならない、というものだよ。この手の娘に出来るのは、ただ泣き寝入りすることだけなのだ。そして、最後には、毒のある陰口や辛辣な言葉から逃れるために、おそらくどこかの流れに身を投げるような罪を犯すとか、あるいは、自分の膝を締めているガーターで命を絶つことになるのだろうが、そのガーターは、ひょっとすると、諦めた恋の最初のきっかけになったものだったかもしれないのだよ。反抗的な台詞などをローズバッドが口にするはずはないし、我が身を頼む素振りや、貴公を疑う用心深さも（悪の限りを尽くすよう、貴公の狡智に長けた策謀を間接的に唆すことになるのだが）見せることはない。身の危険を怪しみもしないわけだから、貴公が喉元に突きつける刃を避けることもしないだろうな。頼むぞ。我が愛しの子羊を屠るような真似は止めてくれ。

　これから話すような理由もあるので、なおさらなのだ。つまり、あの優しい心には愛が芽生えているということだ。あの娘の柔らかな胸は、まだその呼び名も見つけていない熱い想いで波打っているのだよ。一度、あの娘のまなざしが若い大工の姿を追っているのを目にしたのだ。近所の後家の息子で、住んでいるのは「あの娘の言い方では」「通りの向こうのちっちゃな白いお家」だ。この男もおとなしそうな若者で、あの娘より三つほど年上だ。幼い頃からの遊び友達なのだが、男が十八、娘が十五になると、上辺ではもっとよそよそしく振る舞わなくちゃいけない理由も出来たわけだが、互いの胸の内には、これまで以上に近くに居たいという、さらに強い理由が生じたのだ。というのも、好き合っている

のは一目で分かった。この可愛い娘と出会うと、奴のほうではすぐに片足を引いての丁寧な会釈だし、後ろ姿を追っている娘のまなざしに、奴は何度も振り返って応えている。小道の曲がり角に来て娘の姿が見えなくなると、くるりと振り向き、これまでに輪をかけた恭しい仕草で、帽子を取ってのご挨拶だ。このお返しは（見つからないようにして、俺は娘の後ろのほうにいたのだよ）、深々と腰を沈めたお辞儀と溜め息なのだが、遠すぎてジョニーの耳には届かない。幸せなガキだと、俺も呟いてしまった。俺が立ち去ると、我がローズバッドもいそいそと戻って来たが、あの黙り芝居で十分だといわんばかりに、それ以上望むものは何一つない様子なのだ。

あの小さな胸のうちを閲してみた。俺には何もかも打ち明けてくれているのだよ。ジョニー・バートンのことは本当に好きだそうだし、ジョニー・バートンのほうでも、これまで会ったどの女の子よりもあの娘のことが好きだが、それを考えてはいけないことになっている、というのだ。何故いけないのか、と尋ねると、分かりません、と溜め息をついていた。ただ、ジョニーには叔母が一人いて、ジョニーの年季が明けたら百ポンドをくれることになっているのだそうだ。また、父親が娘にしてやれる仕度といえば、ほんの些細なことしかないし、ジョニーの母親からは、これ以上器量好しでやり繰り上手な嫁さんがジョニーに見つかるとは思えない、と言ってもらっているそうだが、でも、ただの言葉にどんな意味があるのでしょうと、また溜め息をつくのだ。私のせいでジョニーが不幸になったり、貧乏になったりするのは嫌です。だって、そうじゃないでしょうか。そのようなことをして、私に何の利益があるでしょう、と言うのだよ。

ローズバッドのものにせよジョニーのものにせよ、何という無垢な心だ。何と善良な心なのだ。あんな心を備えるためには、何をくれてやったら良いのだ［誓っても良い。我が天使の力添えで、俺も心改めることになるのだよ。身内の連中の救い難い愚行ゆえに、二人揃って破滅するようなことがなければの話だがな。そう、俺としては、何でもくれてやりたい気持ちなのだよ］。

俺の心はといえば、これが忌々しいほどの悪戯ものだ。生まれついてのもののようにも思う。善意も時には湧いてくるのだが、すぐに消え去ってしまう。謀りごとを好み、悪事を捻り出す才があり、征服を遂げると得意満面だ。金があるものだからますますその気になるし、続けても行ける。また、体質も …… だが、弁解などして何の意味がある。仮に俺が田吾作であったとしても、ごろつきになっていたことは確かだろうな。

それにしても、女は魔物だよ。永遠に男を迷わす存在だ。女と一緒に道を踏み外したことのある男で、廉潔さを取り戻した者はいるだろうか。しかしながら、われわれのような道楽者が絶えず謀りごとを巡らせて奪おうとしているわけだが、貞節さというものに欠ける相手の場合には、われわれの願望の極みにおいてさえ、一体何があるというのだ。ある意味では、準備を整え期待に胸を膨らませることこそすべてなのだ。昔犯した罪に罪悪感を持たないような無情な心になら、確かに、回想にもそれなりの価値があるのだろう。だが、達成すること自体には、一体何の意味があるというのだ。もっとも、達成するのが目的であってみれば、それなしには満足出来ないのが人間の本性ということだろうな。

どうだ、罪のない事柄を話題にすると、結構真面目なことを考えるだろう。俺にも行いを改める力がないわけではないのだと思うと、多少嬉しい気もするよ。ただし、その場合には、今よりもマシな連中と付き合わなくてはいけないだろうな。われわれが互いに相手

を鉄面皮な人間にし合っているのは確かなことだ。しかし、力を落とすことはないぞ。別のリーダーを選ぶよう仲間一同に通告するにしても、まだ先の話だからな。それに、貴公が候補者になるものと思われるからな。

それはともかく、極悪非道の振舞いをした時はいつも、償いとして何かしら善行を施すというのが俺のやり方になっている。そして、この点では相当な借りがあるようにも思うので、ここを去る前に（上々の首尾を収めて立ち去りたいものと願っている。さもなければ、見返りのためにも、倍の悪さをしたくなるからな。勿論、我がローズバッドには指一本触れるつもりもない）、ジョニーの叔母からの百ポンドに、もう百ポンド加えてやろうと思うのだ。あの無邪気なカップルを幸せにしてやりたいのだよ。それゆえ、そして、さらに半ダースもの〈それゆえ〉のために繰り返すが、ローズバッドは見逃してくれ。

ちょっとした邪魔が入った。すぐにもう一通認めることにするが、両方とも一緒に届けるつもりだ。

手紙　三十五

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

我が魅惑の乙女の動静については、家族の者たちの動きと同様に、用心深いスパイを通して相当に掴んでいる。この悪党はおじ二人と甥に可愛がられており、連中の秘密を明かしてもらっているのだが、その間、こちらの指示どおりに行動しているわけだ。これを考えると楽しくなってしまう。しかし、我が愛しの君にも、あるいは、家族のいずれの者にも、決して疑いを掛けられないよう注意しろと言っておいた。さもないと、今出している週ごとの手当てや、将来の褒美を棒に振ることになるぞ、とな。彼女の出入りを見張るのは勿論だが、他の召使が彼女の行く手に近づかないようにするだけで良く、彼女に姿を見られたりしてはならぬと命じてある。

この男が連中に次のようなことを話したのだよ。令嬢がハウ嬢宛の手紙を［彼女はまったく書いていないのだが］届けてほしいと、袖の下を掴ませて［彼女には覚えのないことだ］誘いかけてきた。奴の考えでは、別のが（おそらく、俺宛のものだ）同封されていたようだが、お断りした、というわけだ。そして、どうかこの件はお嬢様にはお話しなさらぬようお願いいたしますと、連中に頼んだのだよ。これで、奴はわずか一シリングと大いなるお褒めの言葉を頂戴したというわけだ。その後、彼女が手紙を送る方策を思い付いてはいけないということで、厳重に見張るよう、召使全員に命令が出されたのだ。それから一時間もすると、奴に指示があった。彼女のいる辺りに出向き、（断ったので気が咎めている、と謝った上で）お役に立ちたい旨を申し出、連中のところにその手紙を持って来いというものだが、奴にとっては、彼女は手紙を渡すのを拒みましたと、そのように報告するのが適切な処置ということになるだろう。

この趣向がいろいろと役に立つことくらい、もう貴公もお見通しではないかな。

まず第一に、それによって我が淑女は、認められていた庭での一人歩きの自由を、自分にも分からないうちに確実なものにしてもらうということだ。このような企てがあったということで、連中にしてみれば、彼女の女中をお払い箱にした今では、屋敷外に手紙を送

る手段はないのだという、自分たちの考えに自信を深めることになるからだ。もし手段があるのなら、内情を知らせてもいない人間に誘いを掛けるような危険は冒すまい、というわけだよ。これで彼女も、疑われることなく、俺やハウ嬢との文通を進めることが出来るようになるのさ。

次には、彼女との密会のチャンスを多分用意してくれるだろうということだ。彼女がどう受け止めようと、一度試みてみるつもりでいる。俺のスパイを通して（こいつは、他の者をすべて遠ざけておくことも出来るのだが）、毎日朝と夕方には、彼女が母屋から遠く離れている薪小屋へ行くことを突き止めたのだよ。育てているチャボに餌をやりに行くというのが口実だが、祖父の飼っていた品種から生まれたもので、それだけに愛着を感じているのだ。その他にも、同じ所から連れてきた珍しい家禽を大事にしているという。彼女の行動はすべて報告が届くのだよ。彼女から受け取った手紙のいずれかで、ハウ嬢と密かに手紙を交わしていることを明かしてくれたのだが、おそらく、この手を使ってのことなのだろうな。

思惑どおりの密会を果たすことが出来れば、同様の恩恵をいろいろと許す気になってくれると思うのだ。というのも、俺が期待している面会場所を選んでくれなくても、会ってもらえるということにさえなれば、あの無秩序なオランダ風の庭のどこにでも馳せ参じることが出来るようになっているからだ。実は、ジョゼフ・リーマンと呼ばれている者なのだが、俺の手先が庭のドアの合鍵を二つ用意するチャンスを作ってくれたのだよ（そのうちの一つは、何かと都合が好いので、奴に渡してある）。このドアを開けると、幽霊が出るという林に通じているが、言い伝えを聞いて、召使たちはそう思っているのだよ。二十年ほど前に、男が一人首を吊っていたのだそうだ。然るべき合図があった時には、ジョゼフがこのドアの閂を外しておくという仕掛けなのさ。

だが、前もって約束をさせられてしまったよ。俺の仇敵のだれに対しても、この勝手な振舞いのせいで危害が及ぶようなことは、何としても避けてほしいというのだ。奴に言わせると、主人たちすべてのことを大切に思っているということだ。そして、俺が名誉を尊ぶ人間だということは承知しており、俺との縁組はあの一族にとって名誉なことだと思うし、偏見が解けた暁にはだれもがそう考えるだろうと思えばこそで、そうでなければ、金輪際こんな真似をするつもりはないというのだ。

悪党というのはどいつをとっても、自分なりの言い訳があるものだ。己の良心に対してはいうまでもなく、世間中に悪党ぶりを証明しかねないような手口を用いているのは承知の上で、その最中にも、だれもが正直者を自負しているわけだが、それこそ、正直さへの見事な賛辞ということだな。

それにしても、あの愚かな一族は一体どういうつもりだ。こんなことまでしなくちゃならんとはな。俺にはまったく分からん。復讐の念と恋焦がれる想いとが交互に心を占めている。この恋が成就しない場合には、復讐を遂げることが唯一の慰めだな。必ずや思い知らせてやるつもりでいる。たとえ、そのために我が祖国を永久に追放されるような羽目になるとしてもだよ。

我が魅惑の君の御前に身を投げ出すつもりだ。既に二度試みているのだが、不首尾に終わっている。ご厚意を当てにして良いものかどうか、それで見当がつくはずだ。まったく見込みがないと思えば、拉致する気になるかもしれないな。かのユーピテルにも相応しい

レイプ(三〇)というところだろうな。
だが、言動のすべてに亘って穏やかに進めねばならん。話し掛ける場合も、あくまでも敬意を忘れず、恭しいまでの口調だ。この唇を、震えて止まぬこの唇を押しつけるにしても、手だけに止めることにする。指図するまでもなく、自ずから震え出すはずさ。俺の口から漏れる溜め息も、あの優しいローズバッドの溜め息を真似よう。遜った物腰で信頼の念を誘うのだ。人気のないことにつけ込んだりしてはいけない。恐怖心を鎮めてもらうこと、そして、将来とも俺の道義心を信頼してもらうこと、これに全力を尽くすのだ。絶えず威嚇してくる連中のことについても、愚痴や脅しは控えねばなるまい。ドライデンが描く獅子のように振る舞うつもりでいる。揺るぎなき愛を手にするか、さもなくば、心行くまで狩人たちへの復讐を果たすのだ。

その猛き心は深く悲しみを隠すといえど
泣き言を慎む者は報復に思いを巡らす。
横たわり、眠りを貪る獅子のごとく
あるいは眠りを装い、恐れを知らぬ仇敵が
間合いに入るその時に、餌食にすべく待ち伏せる。
唸りの声を押し殺し、鋭い爪は畳み込み、
待ちわびた怒りの時を迎えては、
やにわに恨み晴らさんと、地面を蹴って飛び掛かる。
ひれ伏す凡夫は目もくれず捨ておき、
王者の怒りを漲らせ、狩人どもを八つ裂きにする(三一)。

手紙　三十六
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月十八日　土曜日　夜

恐ろしさのあまり茫然自失の態で、今でも呼吸が乱れがちですが、原因は次のとおりです。お話しいたしましたような状況の中、貴女から何か届いてはいまいかと、いつもどおりの口実であそこに参りました。期待が外れ、あれこれ気を回しながら薪小屋から戻ろうといたしましたところ、積み上げた薪の陰で人の動くような音が聞こえました。本当に驚きましたが、一番奥の薪の山から人影が現れるのを目にしました時には、もう肝もつぶれる思いでした。咄嗟に思いましたのは、禁じられながら続けてまいりました文通の罰が当たったのだということでした。
私がその姿に気づきますと同時に、その人は、何卒、怯えないでいただきたい、と頼んでおりました。そして、さらに私のほうへ近づきながら、さっと乗馬用外套の前を開きました。何ということでしょう。ラヴレースさんだったのです。悲鳴を上げることも出来ませんでした（人影に気づきました時、それから、だれなのか分かりました時にも、叫ぼうとしたことはしたのです）。声も出なかったのです。古くなった屋根を支えている柱があるのですが、それを掴んでいなかったなら、その場に倒れこんでしまったことでしょう。

貴女もご存じのとおり、これまであの方とは距離を置いて接してまいりました。ですから、平静さを取り戻しまして、身内の者一人一人が口にしておりますあの方のお人柄のことや冒険好きな気質のことを思い出しました時、また、脇道のすぐ傍で、母屋からはこんなにも離れた場所であの方と二人きりになっておりますことに気づきました時、私の最初の心の動きはどのようなものであったか、ご判断いただきたいと思います。

でも、あの方の慇懃な態度に接しまして、こういった不安はすぐに消えたのですが、一緒のところを人に見られやしないか、兄の耳に報せが届くのではないかといった、別の心配が浮かんでまいりました。そのようなことになれば、容易に考えられることですが、たとえ新たな傷害沙汰にはならないといたしましても、示し合わせてのことと勘繰られ、いよいよ厳しく監禁されることでしょう。大好きな貴女との文通は差し止められ、乱暴この上ない無理強いの口実が出来てしまうのです。それに、片方の点から考えましても、もう一方の面から思い返しましても、図々しく押し入って来ましたあの方を許す気持ちにはなれませんでした。

ですから、口がきけるようになりますとすぐに、思い切り激しい口調で不快の念をぶつけました。自分の性急な気持ちを満たすことさえ出来れば、私がどれほど家族全員の怒りに晒されようと平気なのでしょう、と言ってやりました。そして、すぐにその場を立ち去るよう命じ、私は急いで帰ろうとしたのですが、その途端、あの方は私の行く手を遮って足下に身を投げ出し、少しの間留まっていてほしいと懇願するのです。そして、向こう見ずな行動と私は考えるだろうが、敢えてこのような挙に踏み切ったのは、さらに向こう見ずな行動に出るのを避けるためのことであり、それというのも、手短に言えば、私から好意を寄せてもらうためのツテに極めて乏しいのだし、忍耐や我慢を重ねたところで、結果としては、私を永遠に失い、そのために誇り顔をされたり、辱めを受けたりする以外には何一つ望めないという点を併せ考えると、私の家族から受けている不断の無礼には堪え難いものがあるからだ、とあの方は断言しておられました。

ご存じのとおり、本当によく跪く人です。貴女も言っておられたことですが、あの方は些細な事柄につきましては、しきりと他人の気に障るようなことをしなければいけないのです。ご自分の巧みな説得の手際を披露なさるためのことですわね。

あの方は気掛かりな点を並べ立てておりました。あの方に言わせますと、私はあの方以外の人ならだれにでも、大層優しく、親切な気質を見せるから（また、模範的な忠順さから、他人が尽くしてくれようがくれまいが、他人に対しては自分の役目を果たそうとする気持ちが強いので）、一つには、妬みの元となっている祖父の依怙贔屓に対する腹いせのため、また一部には、あの方の命を奪おうとした人間、そして、今は命よりも大事な望みを奪おうとしている人間の命を救ってやったことへの意趣返しのために引っ張り出されてきたような、そんな男のほうを選ぶよう、説得されてしまうのが心配だというのです。

私は次のように申しました。安心していただいても構いませんが、今受けている厳しく不当な仕打ちにいたしましても、所期の目的を遂げるようなことは決してなく、また、独身で通すことを（これまで常に自分が選んできたことでもあり）嘘偽りなく誓うことも出来ますし、とりわけ、仮に結婚するとしても、嫌悪感を抱いている相手を家族の者が強要しないのであれば、私といたしましても、皆が反感を持っている人物と一緒になったりはしない旨を言明することも出来るのですが　…

私がここまで申しますと、あの方は私を遮りました。そのことについて許しを請われた上であの方は、これだけ身を屈し、燃える思いを捧げてきたわけでもあり、強い懸念を口に出さないではいられない　…　とおっしゃるのです。

そこで、私も申しました。失礼ですが、今度は私にも口を挟ませていただきますわ。そのご自慢の献身ぶりのお陰で、私は借りが出来たのだと、何故もっと率直におっしゃってくださらないのでしょう。どうして含意どおりの強いお言葉で知らせてくださらないのでしょうか。私のほうから望んだことではなく、また、そのために家族全員が私を目の敵にするようになったわけですが、そのように私に付き纏われるのがお手柄であって、期待しておられるとおりにお応えしませんと、私は恩知らずの罪を着せられてしまうことになるのだということをですわ、とです。

すると、あの方はこんなことを言っておりました。他人と比べれば多少取り柄があるくらいにしか思っていない自分が（また、そうでなければ、私に相応しい男はこの世に存在しないと考えているわけだが）、厚かましくも、これまで受けてきた以上の愛顧に与りたいと願ったとしても、シムズ氏やワイアリー氏のような人物、そして、挙げ句の果てに今では、私自身からひどく冷遇されているというのに、このソームズ氏のような卑劣極まりない輩が競争相手にされている状況でもあり、その点は許してもらわねばならない。付き纏うとの言葉ではあるが、ご自分としては、固執せずにいるようなことは出来ない相談である。ただ、私も承知のはずだが、ソームズ氏が申し出ている条件というのは、たとえ自分のことがなくとも、私が現在苦しんでいるのと同じ難題を親戚の者たちとの間に引き起こすようなものである。従って、僭越とは思うが、自分に好意を寄せてもらえることになれば、その難題を増大させるどころか、むしろ、そこから抜け出るには一番の早道だと言いたい。親戚の者たちは、私が自らソームズ氏の生贄となる以外には、皆を喜ばせる道を閉ざしてしまった［と言っておられますが、まさしくそのとおりなのです］。また、皆はお二人の違いについてもよく弁えており、一人は、皆が好きなようにあしらいたいと思っている男なのだが、もう一人は、私をあらゆる侮辱から守ることが出来るし、そうしたいとも願っている男であって、爵位にかける兄の愚かな望みと比べれば、遥かに大きな見込みを生まれながらに備えている男なのだ、というのです。

どのようにしてこの人は、私たちの弱点のすべてに精通することになるのでしょう。でも、もっと不思議に思いますのは、このような場所で私と会うことを、どのようにして思い付いたのかという点です。

早く立ち去りたくて、とても気が揉めました。みるみる闇が迫っておりましたので、なおさらだったのです。ところが、逃げ出すこともなかなか出来ないまま、胸に積もる思いの丈をさらにたくさん聞かされてしまったのです。

いずれは世界一幸せな男にしてもらえるものと考えているから、ということで、あの方は次の点を確約しておりました。私の声望については大いに顧慮しており、評判に影を落とすような手段を（たとえ、それがご自分にとって極めて好都合なものでも）勧めるつもりは一切ないし、私もそんな忠告に従うはずはないと思う、というのです。ただ、独身を通すことは認めてもらえないわけでもあり、一考を願いたいのは、私の気持ちを踏み躙ろうとする企てを避ける方途は一つしかないのではないかという点である。父は用心深く権威を守ろうとしているし、両方のおじたちも同じ考えでいる。従兄弟のモーデンは遠方に

在り、叔父のハーヴィー夫妻は畏れかしこまっていて、あの方の言い回しですと、「役立たず」の状態である。兄と姉は皆を煽り立てており、ソームズ氏の申し出にも心を惹くものがある。ハウ嬢の母上にしても、お嬢さんへの戒めにするという考えから、どちらかといえば、家族の者たちの側に立っておられるのだから、というのです。

それから、これを機に、ベティ・ローランス夫人からの書状を受け取ってもらえないかと尋ねておられました。というのも、セアラ・サドレアー夫人は、近頃、たった一人のお子さんを亡くされたこともあって、世間のことにはほとんど関心を持たれず、精々あの方の結婚のこと、それも、世界中のあらゆる女性に優先してですが、私との結婚のこと以外には考えておられないから、とおっしゃるのです。

確かに、あの方の言われたことにも尤もなところが多いと思います。こう申し上げましたところで、貴女がおっしゃるように赤面したり、胸が高鳴ったりするようなことは一切ございません。それでも、私は次のようにお話しいたしました。ご親戚のご夫人方を大変尊敬申し上げているとは申せ、私のほうではまったく進める気のない事柄だけに、それを促進しかねない話題についてのお便りはいただくわけに行かないし、現在のところはひどい仕打ちを受けているが、すべてに望みを捨てず、どのようなことにも耐え、あらゆることを試みてみるのが私に相応しいことと考える。父も、私の意志の堅さを知り、ソームズ氏との結婚よりは死を選ぶ気持ちでいることが分かれば、考えを引っ込めてくれるかもしれないのだし　…　とです。

あの方は私を遮り、皆の取ったさまざまな手段からして、そのようなことはとてもありそうにない旨を指摘し、それらの手段の一つ一つを数え上げてみせました。第一には、望みが持てないところまで追い詰められた場合、逃避先として私の考えつきそうな人物というわけで、ハウ夫人を私の敵側に引き込んだということ、従兄弟のモーデンが間もなく戻り、遺言を執行するため、祖父の地所の所有権を私に譲るよう主張するだろうが、そうなれば、私は父の手を離れて独立してしまうことになるのだと、兄が絶えず父に耳打ちしているということ、また、私を不名誉な監禁状態に置いているということ、突然に私の召使を解雇し、替わりに姉の召使をあてがったこと、母を引きずり込み、本心とは裏腹に、私を敵視するように仕向けたこと、こういったことすべては、目的を遂げるためなら、家族の者たちが決して躊躇しないことの歴然たる証拠なのであり、また、あの方としては、言い表しようもないほど不安になる点である、というのです。

私の父は、いったん心に決めた事柄について、特に、父親としての特権や権威に関わるように判断した場合、取り下げたりしたためしはあるだろうかと、あの方は訴え掛けておりました。そして、私たち家族のことはご存じなので、王族の間でさえも稀と思われる専横ぶりの例、並ぶ者とてないほど優れた女性である私の母が、苛酷なまでに味わった専横ぶりの例をいくつか（ただ、私にはあまりにも耳障りなことだろうが）示すことも出来るのだ、と言っておられました。

思いますに、あの方はこの種の非難をさらに続けようとしているようでした。私は声を荒げ、父に対する批判を容認するつもりはない旨を伝えました。そして、いかにいわれなく、父から手厳しい扱いを受けたとしても、だからといって、父親への義務を放棄して良い理由にはならないはずです、と付け加えておきました。

あの方は次のように言っておられました。何であれ、そのような受け止め方の出来る事

柄を好んで主張しているわけではない。何故なら、皆が絶えず挑発を重ねていることからして、ご自分としては、このような非難を加えるのも十分に根拠があってのことではあるが、こういった無礼な振舞いが私にとってはどれほど気に障るものか、よく弁えているからである。しかしながら、他の若者と同様、若さゆえの血の気の多さは斟酌していただきたいし、忌憚なく物を言うことを誇りとしてきた人間でもあり、このような扱いを受けながら自分を抑えるのは苦痛である。とはいえ、私の気持ちを思い、私見を述べるに当たっては、議論の余地のない歴然たる事実だけに止どめたいと思う。それゆえ、思い切って言うなら、前述の事柄から次のような当然の結論を引き出したとしても、それを不快とするのは正当なこととは思われない。すなわち、私の父は特権とやらを仮定し、かつて例を見ないほどにそれを主張したがっているが、そのことに何の異議も挟もうとしない妻に対して、あのような扱いをするのであれば、父が保持して行くことを熱望し、かつ、そのためにしきりに心を砕いているものでもあるのだから、娘の立場にある者として、父親が権威を手放すようなことに期待を寄せる余地はあるのだろうか。しかも、一族の利益なるものが心を占めているし、いかにいわれのない話とはいえ、敵意にも促されているため、兄と姉の遺恨と利己心とが一致協力している。そして、皆の前に顔を出すことは許されず、自ら申し開きをすることも、訴えることも私には不可能な有り様だ、というのです。

何て不幸な話なのでしょうね。こういった見方、そして、この推論には、十分過ぎるほどの根拠があるのですからね。それに、これだけ挑発を受けておられますし、大層血の気が多く、皆さんからも手に負えないと思われている方ですのに、懸念しておりましたよりは冷静で、私の身内を敬った話し方でしたからね。

このようなことをお話しいたしますと、例の胸の高鳴りや赤面のことを質されてしまうのではないでしょうか。でも、気性の激しい方ですのに、私のことを慮り、このように自制なさっているお姿に接しますと、もしも、身内の者たちがあの方と和解出来るようであれば、あの方も、明らかにご自分の現在、そして、将来に役立つよう考慮されました論議になら、心を動かしていただけるかもしれない、などと考えたくなるのです。また、私の家ではすっかり聞き馴れてしまったことなのですが、夫に備わります強大な特権につきましても、あの方は大変に穏やかな考え方をしておられるわけでして、これもまんざら悪い兆しとは申せません。

現在の不名誉な監禁の件が世間中に知れ渡っておりますことを、あの方は指摘しておられました。姉も兄も私のことを、恩恵と愛顧に恵まれながら反抗ばかりしている子供のように話して憚らないのだそうです。でも、私をご存じの方はどなたもが、私にはまったく不釣り合いで、姉のほうにお似合いだと思われる人物を私が毛嫌いするのは当然のことだと、躊躇なく言ってくれているそうです。そして、好意を寄せてもらえるほどに強い印象を与えることが出来なかったのは残念であるが、世間ではだれもが、あの方こそ私に相応しいと言っており、反目している者たちからでさえ、異議が出されているのはある一点だけにすぎない（生まれ、財産、そして、将来の見込みのすべてに亘って申し分なく、最後の一件などは見事なものだ）というのです。そして、その異議というのは、神の思し召しと私の手本のお陰で、永久に取り除かれる見込みは十分にあるとおっしゃるのですが、というのも、自らの過ちに気づき、これまでの生き方にはすっかり嫌気が差しているからなのだが、その生き方にしても、悪意と妬みに動かされた者たちが言うほどの極悪非道のも

のでは決してなかったのだそうです。ただ、この点に関しては、どれほど厳かに誓いを立てようと、また、約束をしようと、平素の行いによって示すことのほうがはるかに優るであろうから、なるべく言葉を慎むようにする、とのことでした。それから、私の容姿のことを褒めておりましたが、心の美しさのほうにより強く惹かれているのは確かだ（というのも、美徳の教えを十分に守ってきたわけではないが、美徳そのものはいつも大変好ましいものと思っていたからである）と請け合っておられました。そして、私と知り合うという栄誉に浴するまでは、結婚について抱いていた不幸な偏見を打ち崩すほどの強い刺激を受けたためしもなく、そのため、ご一族の方々の希望や忠告にも、これまで一切耳を貸さずにいたのだ、と率直な口調で語っておられました。

ご覧のとおり、あの方はご自分のことにつきましても、敵対している人たちの言い方をためらうことなくお使いになるのです。こういった事柄を率直に打ち明けておられることからいたしまして、他のお話についても信用して構わないようにも思うのです。偽善者なら容易に見分けが付くはずです。特にこの方の場合は、ずいぶんと放埒なことをしてきたとの噂ですし、あの若さですもの、啓蒙されたとか、罪に目覚めたといった素振りを急になさっても、すぐに尻尾を出してしまうでしょう。習慣になったことというのは、そう簡単には変えられるものではないと思います。貴女も常々私に同調なさって感想として述べておられたことですが、あの方は自分の考えを忌憚なくお話しになり、時には無作法とさえ言えるほどです。また、私の身内の扱い方にいたしましても、だれに対してであれ、利得に動かされた卑劣な追従などは、あの方には出来ないことの証になるのです。このような見上げた点を持っておられながら、それらが、いわばすっかり泥にまみれ、押し潰されたようになっておりますのは、何とも残念な話ではないでしょうか。心よりも頭脳のほうが優れた方と聞いておりますが、ラヴレースさんがひどく邪悪な心の持ち主だなどと、貴女は本当にそうお考えでしょうか。下等な動物の場合と同じように、人間の血統にも何かの働きがあっても良さそうにさえ思われます。ご一族の方たちにいたしましても、まったくの話、あの方以外には好ましくない人など一人もいらっしゃいません。ご夫人方のお人柄は素晴らしいものですし　…　でも、このようなことを口にいたしますと、避けたく思っております非難を誘うことになりましょう。それにいたしましても、容赦のないお友達の場合、本当に厳しいお姿に映りますわ。他の人のためならどなたに対してであれ、正当な扱いをしたり寛大な見方をするのをためらったりしてはいけないはずですのに、ある特定の人にそのようなことをいたしますと、懲らしめようとなさるのですからね。

その後あの方は、庇護の申し出が含まれておりますベティ夫人からのお手紙を受け取るよう、もう一度強く勧めておられました。氏素姓の良い人には少し形式に拘りすぎるところがあるし、徳の高い人も同じことである（だが、実を言うと、生まれに相応しい暮しを送っている場合、氏素姓そのものが美徳となるし、美徳を貫くことが氏素姓のいわれなのである。きちんとした行儀作法を目指す気持ちは同じところから来ており、両者の源は一つなのである）［このようなお考えが、一体どのようにしてあの方から出てきたのでしょうね］。さもなければ、ベティ夫人のほうから私宛に筆を執るところだろうが、先にご自分の申し出が歓迎されることを知りたがっておられる。というのも、私の身内の一部の者にとって、これは自分たちの意向に反した行為とも見えることであり、夫人としても、現実に私が被っている、そして、さらに悪化するように思われる不当な迫害のことがなかったな

ら、決してそのような振舞いに出るおつもりはないだろうから、というのです。

私は次のように申しました。これがベティ・ローランス夫人ご本人からのお申し出なのであれば、夫人から大変な恩義を受けたように私は考えることでしょうが、ただ、それがどのような結果を招くかは簡単に察しのつくことです。このようなことを口にすると、多分、自惚れが強いように見えてしまうでしょうが、このような折にこれほど執拗に催促なさるのは、私を容易に抜け出すことの出来ない行動へ誘い込むための作為のようにも見受けられます、とです。また、王位に備わる絢爛さにも心を動かされるはずはなく、善良さこそ偉大なことと考えており、私にとっては、お身内のご夫人方が伯爵のご令嬢で、M卿の異父姉妹でいらっしゃることよりは、衆に秀でたお人柄だということのほうが肝心なことである。仮に私の身内があの方の求婚に同意していたとしても、あのご夫人方と縁続きだというだけの取り柄しかお持ちでないのなら、私からの力添えは得られなかったはずである。何故なら、その場合には、ご夫人方を崇拝申し上げる数々の理由そのものが、縁続きの方に異議を申し立てる根拠ともなったはずだから、とお話ししたのです。

それから私は、気づいた時には手紙のやり取りに引き込まれていたわけですが、何といっても禁じられていた文通だけに、このことが非常に気に掛かっているのだと、はっきり申し上げました。また、予期していなかったし、望みもしなかったこの出会いの件につきましても、自分に思い付く唯一の好都合なところは、文通をもう止めさせていただかねばならないように考えている旨を、この機会にお伝えすることが出来るという点だけだと申しました。そして、私の親戚を脅すことで、文通を続けるように仕向けようなどという考えは持っていただきたくない、とお願いいたしました。

これをお聞きになったとたん、あの方は厳めしい表情をお見せになりましたが、それを見分けるくらいの明るさはまだ残っていたのです。そして、あの方は次のように言っておりました。私が自らの意思で選ぶこと、偏見のない好意を寄せてくれることこそ肝要と考えており（ソームズ氏のために取られているような強硬手段に頼り、あの男と対等な立場に身を置くのは恥と思うから）、あのように拙劣な方法で私を従わせようと目論むようなことがあれば、自己嫌悪に陥ってしまうだろう。しかしながら、考えてもらいたいことが二つある。第一には、あの方が絶えず受けておられる非道な扱いのことで、一人は発き出したのだが、スパイを仕掛けられているということ。また、ご一族の方々すべてが同じように受けておられる侮辱の件、さらには、私自身への侮辱であるが、明らかにご自分に対する悪意に促されたものであり、さもなければ、許しもなしに［さすがの策士も、ここのところを用心しないと尻尾を掴まれると気づいたのでしょう］、わざわざ私のために憤るような出過ぎた真似はするはずもない。これらすべての点からして、あの方としても、それなりに憤りの気持ちを表すことが妥当なことと考えた。従って、私のためにということではないとしても、気骨ある男性としてのあの方にとって、このような侮辱に黙って耐えるのが筋の通ったことかどうか、私の判断に委ねたい。次には、私の置かれている立場からしても（父の屋敷に監禁されているし、不釣り合いな男との結婚に私を追い込もうと、家族全員が心を固めている。それも、私の同意など無視して、すぐにも事を進めようとしているのだから）、ご自分がただ最後の手段としてのみ私のために取りたいと願っておられる防止策に、果たして時間的なゆとりはあるのか、その点を考えていただけると有難い、とおっしゃるのです。そして、私が実際にベティ夫人のところに保護されたとしても、ご自分

の今後の行動に異論のある点が見つかれば、必ずしも自分と一緒になってもらわねばならないということでもないのだから、とも言っておりました。

でも、あの方が申し出ておられるように、最後の手段としてではあっても、あの方のお身内の方々に保護をお願いしたりすれば、世間の人は、何を目的にしてのことだと結論するでしょうか。そのような考えを持ってのこととしか思わないのではないでしょうか、と尋ねてみました。

では、世間の人は現在どのように考えているのでしょう。そうするのを防ぐために監禁されたとしか思わないのではないでしょうか、とあの方は尋ねておりました。そして、「お考えいただきたいのです、マダム。今や選択の余地はないのです。また、それはだれのせいでしょうか。貴女に選択の余地は与えまいと心を固めておられる人たち（どうして、そのような人たちを両親などと呼べましょう）の思いのままにされておられるのです。提案申し上げているのは、このような庇護の手をお受けなさいということだけです。勿論、その必要がなくなるよう、あらゆる点を試みられた後で結構ですが」と言うのです。

「それに、言わせていただけるなら」と、あの方は言葉を続け、「すべての希望の拠り所ともなっていた文通を、この危急の際に打ち切ろうとのことであれば、また、最悪の事態に備えるお気持ちにはなれないとおっしゃるのであれば、話ははっきりしているというものでしょう。結局のところ、貴女はその最悪の事態に屈し … とはいっても、私にとって最悪なのであって、貴女にとって最悪などでは有り得ないのでしょう … そして、（片方の手を握り締め、額に当てながら）そんなことになれば … 想像するのも耐えられないが、貴女はあのソームズのものになってしまわれるのだ。だが、神聖なものすべてにかけて誓うが、あの男にも、兄上にも、また、おじ上たちにも、得意顔をさせたりはしませんよ。そんな真似をさせるくらいなら、この魂は地獄に落ちたって構わないのだ」とおっしゃるのです。

この剣幕に私は怯えてしまいました。それでも、怒りを露にして立ち去ろうとしたのですが、あの方は再び私の足下に身を投げ出し、こう言うのです。「そんなふうに私を見捨てないでほしい。お願いだ、最愛の君よ。そんなふうに私を見捨て、絶望させないでほしいのです。仮想の事態について誓ったことを悔やみ、跪いているわけではありません。あのことは重ねて誓いましょう。こうして、貴女の足下で」と言うのです。そして、あの方はそのとおりにしておりました。「だが、脅迫のつもりだとは、脅しつけてご好意に与ろうとの魂胆だとはお考えいただきたくない。もしも［と言って、あの方は立ち上がり］、お父上に従い（というよりは、兄上にでしょうが）、ソームズと一緒になるお気持ちでおられるのなら、私自身および身内の者に辱めを加えたことに対し、侮辱した者への仕返しはいたしますが、ただ、そのような選択がお出来になる女性への想いを断ち切るのに、仮にもためらいを見せるようであれば、そんな心は（出来れば自らの手で）この胸から抉り出してやるつもりです」と言っておりました。

私は次のように申しました。ずいぶんと興奮したお話の仕方ですが、決してソームズさんと一緒になるつもりのない点は安心してもらって構わないし（ただし、あの方を思っての発言ではないことも申しました）、その旨は、たとえあの方のような男性がこの世にいなくともということで、親戚の者たちにも断言しているのです、とです。

なおも文通を続けていただける旨、言明してもらえるだろうか、とあの方は尋ねており

ました。さらに大きな恩恵に与ることを願いながら、誇りとしている唯一の恩恵を失うことになっては、到底耐えられない話だ、とおっしゃるのです。

私は、家族のだれに対してであれ、無分別な振舞いに及んだり、怒りをぶつけたりするのは慎んでもらいたい、と強く申し入れました。そして、そうしていただけるなら、現在の試練がどのような結果をもたらすか、少なくともその見当がつくまで、しばらくの間は文通を続けましょう。勿論、心は咎めるのですが …… と言いかけました。

すると、あの人はもどかしげに私を遮り、こうして耐え忍んでいるご自分のことが意気地なしに思える、とおっしゃるのです。考えてみれば、そうせざるを得ないのも私の意向によるのではなくて（そうならば快く耐えて見せましょうし、この千倍でも厭わないのだが）、あの連中の …… とまで言うと、あの方は口を閉じました。

すべては身から出た錆ですわ（品行の芳しくないところが非難のきっかけになっているわけですからね）と、私ははっきり申し上げました。自分の評判を大切にしない人が悪口を言われても、それは当たり前の話にすぎませんからね、とです。

あの方が申し開きをしようとなさいましたので、私といたしましては、あの方ご自身の方針に則って、つまり、口先の言葉ではなく、平素の行いによって判断させていただくつもりです、と申しました。

あの方はこう言っておりました。敵対している者たちがこれほど強力ではなく、これほど決意を固めているのでもなければ、また、残酷なほど無理強いをするという、極端な行為に出ているわけだが、そんな形で意向を示すのではなく、私の選択に任せるとか、独身を通したいという私の希望に耳を貸してくれるというのなら、ご自分としても一年かそれ以上の猶予期間を置くことにも甘んじていたことだろう。しかし、皆の目論見がすべて為し遂げられるにせよ、あるいは、頓挫するにせよ、ものの一月もあれば済むことと確信している。それに、父の譲歩をどのくらい期待出来るのか、それは私が一番承知しているはずだ。私が少しでも望みを持っているのだとすると、あの方としては、父について思い違いをしていたことになる、とです。

私といたしましては、どなたであれ、他の方の保護を求めます前に、孝養心に照らしてみて、あるいは、身内の間での信望を損なわない範囲で、出来るかぎりのことは試してみたく思うし、また、他の方法が何一つうまく行かない時には、妬みの種になっている地所を放棄する所存であり、敢えて言わせていただきますが、そうすることでうまく行くものと思っております、とお話しいたしました。

すると、その成り行きを見守ることに甘んじたいと、あの方は言っておりました。何度も話してきたように、最後にどうしようもなく、というのでなければ、他の者の保護を受け入れてほしいなどとは決して望まない、というのです。「だが、最愛の君よ」と、熱のこもった仕草で私の手を取り、唇に押し当てながら、「あの地所を諦めれば済むというのでしたら、放棄なさるのです。そして、私のものとなっていただきたい。また、断念なさるお気持ちに心からの力添えをさせていただきますよ」とおっしゃるのです。

度量の狭い言い方ではございませんわね。でも、この種の男性というのは、信用を得るためとか人を自由にするためでしたら、どんなことでも口にするのではないでしょうか。

その場を去ろうと、いろいろ努力を重ねました。大層暗くなっておりましたし、とても心配になってきていたのです。ただ、あの方の態度のせいではございません。正直なとこ

ろ、この話し合いの間、ずっと恭しいまでの敬意を払ってくださったこともあり、私の気持ちの中では、あの方はずいぶんと評価を上げていたのです。と申しますのも、あの方も一度は激怒なさいましたが、ソームズさんの思いが叶うかもしれないとの想定に基づいたことでして、熱烈な恋情を公言する人に少しでも申し開きの余地があればの話ですが、これこそは興奮なさっても言い訳の立つような想定だったからです。ただ、怒りをお向けになった相手のこともございますから、私といたしましては、憤慨せずにはいられなかったというわけです。

別れ際には、大層熱心に、でも、同じくらい従順な態度で、自分を引き立ててほしいと頼んでおられました。あの方のほうからは条件は一切ないとのことですが、もう一度会いたいらしく、そんな気持ちをちらつかせておりました。私は、今後二度と同じ場所でこのようなことはなさらぬよう、申し渡しました。どのようなことでも、貴女に隠しごとをいたしますのは本当にいけないことですから、白状いたしましょう。私が予期しなければならない事態についてあの方が挙げておられた理由（今受けております不名誉な扱いから推し量ってのことですが）のせいで、どうしてもどちらかの男性と結婚せざるを得ない立場になるのではないかと、心配になり始めているところなのです。そして、その場合、お二人のどちらに決めるかを私のほうから申し上げましても、貴女のお咎めはないものと考えております。貴女が言っておられたのは、選んではいけないほうについてでしたわね。でも、本当の話、私には独身のほうがはるかに好ましく思われるのです。本当ですわ。まだそうさせてもらえるのではないかと、望みを捨てずにおります。

気づかれることなく戻ってまいりましたが、気づかれずには済みそうもないとの不安から、ひどく気を揉んでしまいました。そのため、この手紙を書き始めました時にも、あの方のせいとばかりは言えないほどに心が乱れておりました。もっとも、最初にあの方の姿を目にいたしました瞬間は別です。あの時は本当に意気阻喪の状態でした。あのような場所で、あのように仰天させられ、しかも、二人きりなのですからね。気を失わずに済みましたのは、何よりも幸運なことだったと思います。

申し添えねばなりませんが、先週の日曜のあの方の教会での振舞いのことをお咎めいたしましたところ、私が聞かされておりましたようなことではないのだと、真顔で断言しておられました。教会で私に会うようなことは期待せず、父に話し掛ける機会を得て、家までの同行を許してもらうよう願っていたとのことでした。でも、家族のだれに対してであれ、あの場では話し掛けようとなさったりせぬよう、リーウェン師があの方を説得なさったのだそうです。あの方の出現で家族一同が興奮状態に陥っていることに気づかれてのことです。プライドをちらつかせるとか、横柄な態度を装うつもりは一切なかったと断言しておられました。そして、そのような受け止め方をするのは、悪意に動かされているからであるが、残念ながら、この悪意は乗り越え難いもののように思われる、とおっしゃるのです。そして、母に会釈をなさった時にも、心から尊敬しておられるという母ばかりでなく、家族席の一人一人全員に向けた挨拶のつもりであった、と付け加えておられました。

あの方のお言葉が信用出来るといたしますと（また、家族の者を侮る目的でお見えになりながら、私の好意を期待なさるようなことはないはずだと思うのです）、何もかもを捻じ曲げて伝えます悪意の力を悟ることにもなりましょう。でも、ショーリーがあの方にとって不利な報告をしたりいたしますのは（差し出がましく、主人たちを喜ばせようというの

ではないのでしたら)、何故なのでしょうね。この点に関しましては、リーウェン師に訴えて、身の証を立ててもらうつもりだと、あの方は話しておられました。また、師とあの方との間で交わされました会話のすべては、会衆の面前で私たち全員との和解工作をしたいというあの方の希望、それに、どのような受け止め方をされるのかが分かるまで、公にするのは好ましくないとする、師の懸命の説得とが中心であった、と付け加えておられました。でも、あの方が訴え掛けられたといたしましても、それが何の役に立つでしょう。私は妨害されておりまして、あの立派な師にも、あるいは、この困難な状況の下で私に助言をしていただけるような人にはどなたにも、お会いするわけに行かないのですからね。

それでも、疑いを持たれている人とか、罪に問われております人がそれぞれにいきさつを語り、少しでも信用してもらうようなことになりますと、罪人などというものはほとんどいなくなるようにも思うのです。

ずいぶんと長い手紙になってしまいました。

お求めのとおり会話の中身に詳しく触れておりますと、手短にいたしますのは無理というものです。

以下の保証のみを付言させていただきましょう。今も、そして、いついつまでも、

親愛の情と誠意とを温めております貴女の

友、そして、しもべ

Cl. ハーロー

貴女の最後のお便りの日付が九日になっておりますこと、何卒お忘れのなきよう、一言申し添えます。

手紙　三十七

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

三月十九日　日曜日

最後の手紙の日付を忘れないようにとのお言葉ですが、ご注意をいただくようなきっかけを作ってしまいましたこと、心からお詫びいたしますわ、大好きなお友達。貴女の賢明な縁続きの方々のご活躍ぶりを、可能なかぎり拝見したく思っておりましたが、そろそろ片方かもう一方が折れるはずだと確信していたからです。そうなれば、意見を述べるにいたしましても、ある程度確かな基盤が得られるはずですからね。それに、実際の話、すでにお話しいたしましたこと以外に、どのようなことが筆に出来るというのでしょうか。ご承知のとおり、私が口を開きましても、貴女を虐待している馬鹿げた人たちを激しく罵るだけですし、それは貴女のお気に召さないことなのです。地所を取り戻されるよう助言申し上げましても、そのおつもりはないのですからね。皆さんが推しておられるソームズと一緒になるというのは、考えるだけでも耐えられないとのことですが、ラヴレースのほうでは、どなたが反対しようと、貴女を自分のものにする決意でいるのです。貴女は片方の人か、もう一方の人と一緒にならなければならないのだと、私はそのように考えております。皆さんの次の手はどのようなものになるのか、一緒に予測してみましょう。

ラヴレースについてですが、本人の話を聞くかぎりでは（薪小屋に忍び込みました際の振舞いも大変見事でしたし、教会に現れた意図も立派なものですから）、あの男にわずかでも咎めるべき点があると言える人は、どこにいるでしょうか。こんなにも罪のない人に徒党を組んで敵対するなんて、本当に悪い人たちですよね。それはともかく、今申しましたように、皆さんの次の手はどのようなものになるのか、そして、貴女はどう対処なさるのか、予測してみましょう。そうすれば、もっと啓発される点があるかもしれませんもの。

おじ様たち、それに、お兄様やお姉様への書き方をお変えになった件ですが、あの人たちは、貴女がラヴレースを好いているのだとばかり思い込み、いくら違うとおっしゃっても聞き入れてくださいませんし、否定なさると、それだけあの人たちの反論を強めてしまうのですから、私のやりそうなことをそっくりそのまま、貴女もなさったということになります。あの人たちの疑念をお認めになり、それがどんな結果を招くか、試してみようというわけですね。でも、もしも …… 少しだけご容赦願いますが …… もしも、あの人たちへの書き方をお変えになったことにつきまして、この私に向かって言い訳をなさる必要があると、貴女ご自身お考えなのでしたら …… そして、疑うべくもない友人に、友人らしく心の内を明かしてくださるようになるまでのことではありますが、貴女を少し苛めて上げねばなりません。ですから、そんな調子で始めさせていただきますわ。また、どうしてもそんな調子になってしまうのです。

さて、この書き方変更の理由で、私に知らせてくださるのを適当なことと思われなかったものは一つもないということでしたら、前にも一度お勧めいたしましたが、そのようなお気持ちがどのようにして生じるのか、是非ともそれを見守っていただきたいのです。どうして貴女の胸の中に忍び込むのを容認されているのか、また、貴女が少しも気づかずにおられるのは何故なのか、ということをです。

私たちはひどい風邪に罹りますと、何時引いたのだろうかとか、どうして引いたのかしらと、頭を捻るものです。そして、その点に説明がつきますと、安心して腰を下ろし、成り行きに任せます。あるいは、とても厄介な場合ですと、発汗療法とか他の方法で治そうといたします。ですから、宜しいですか、貴女もご存じですのに、気づいてはおられない病がひどくしつこいものになって、汗をかいて追い出さねばならなくなります前に、その進行に留意なさるよう、忠告させていただきたいのです。今貴女宛に筆を進めておりますのが事実でありますように、それと同じくらいに間違いのないことと確信いたしておりますが、片方ではお身内の方たちが軽率にも乱暴な真似をしておられますし、もう一方ではラヴレースが（だれもが考えております以上のお馬鹿さんではないといたしますと）、うまく取り入ろうと言い寄ってきているわけですから、症状を効果的にそこまで悪化させることになりまして、すべてはあの男の思う壺ということになるように思うのです。

でも、成り行きに任せるのです。どうしてもラヴレースかソームズのどちらかに決めなくてはいけないのでしたら、議論の余地はないと思います。ただ、世間で言われておりますことがすべて本当だといたしますと、貴女を求めました他の恋人たちのほとんどの人にいたしましても、貴女に相応しくないということでは同じですが、この二人のどちらよりも、私には好ましく思われるのです。とにかく、クラリッサさんのような方に相応しい人など考えられませんからね。

同じことをくどくどと繰り返しまして、本当に怒ってしまわれるのではないかと心配で

す。正直に申しまして、このような振舞いは、我がことながら申し開きが立たないと考えることでしょうね（前述の点に疑いの余地は一切ないものと、私は大胆に推察しておりますが、それだけになおさらそう思うのです。証拠が必要なのでしたら、お手紙の中に五十箇所はございますわ）。もしも、貴女が素直に打ち明けてくださるのでしたらね　…

「何を打ち明けるのかしら」と、貴女はおっしゃるでしょうね。「まあ、私のアナ・ハウったら、私はもう恋をしているのだなんて、貴女はそんなふうに考えていらっしゃるのじゃないでしょうね」とです。

確かに、そうじゃないと思いますわ。貴女のアナ・ハウですもの、どうしてそんな考えを持ったり出来るでしょう。それじゃあ、どういう呼び方をしたら良いのでしょうね。貴女の使われた言い回しが役に立ちそうですわ。「条件付きの好意」とのことでしたが、そういうことなのでしょうね。あゝ、貴女　…　淑やかぶった振舞いをどれほど軽蔑しておられるのかを、それに、淑女ぶった女性になるにはまだ若すぎますし、素敵すぎる方だということを存じ上げていないのでしたら　…

でも、そんなきつい言い方は避けることにいたしまして、一つだけ言わせていただきますわ（前にも申し上げたことですけれどね）。つまり、こういうことです。お手紙をお書きになる時、胸の中に秘めておられることを少しでも隠そうとなさいました場合には、私が貴女にひどく腹を立てましても、筋は通るものと考えているということです。

申し添えさせていただきますが、ラヴレースが貴女のお気持ちをどの程度まで捉えているのか、それとも、捉えていないのか、はっきりと包み隠さずにおっしゃっていただけるのでしたら、今よりはもっとマシな助言も出来ると思うのです。〈予知能力〉とでも申しましょうか、貴女はその才能に恵まれておられることで有名ですし、貴女に比べますと、その能力のことを自慢出来る若い女性などいないのですから、いつかは一緒になるかもしれないと想定なさって、あの人のことをいろいろとお考えになったに違いないのです［きっと、ソームズについても同じでしょう。だからこそ、片方の人への嫌悪感だとか、もう一方の人への「条件付きの好意」といった言葉が出てくるわけです］。ですから、教えていただきたいのですが、ラヴレースの一番良いところと一番良くないところについて、どんなお考えをお持ちなのかということです。良い点からいたしますと、どの程度の適格性があり、悪い点ではどのくらい不適格なのでしょうか。両方を天秤に乗せてみますと、どちらのほうが優勢を占めそうなのか、というよりも、現に優勢を占めておりますのはどちらなのか、ということが分かるだろうと思うのです。最低限、貴女のお心の一番奥にございますものを知らせていただかねばなりません。それ以外には、貴女をお慕いする気持ちや友情を満足させることの出来ますものは何一つないのです。この種の秘密をご自分で扱われるのを、まさか貴女は恐れたりなさらないでしょうね。もしも、怖いとおっしゃるのでしたら、私をお疑いになるのもいよいよ尤もなことと思います。でも、おそらく、そのどちらも貴女はお認めにはならないでしょうね。また、そうなさる根拠もありませんことを望んでおります。

気づいていただきたいことが一つございますわ。私が少しでも茶化したような書き方をいたしますといつも、貴女は心配そうに辺りに目を配っておられるようですが（お気の毒に感じております友が、ご事情を考え、もっと深刻な言い回しを用います時も同じことです）、おそらくそんなおつもりではないのでしょうが、ほとんど疑問の余地もないほどに率

直なお言葉で綴られております部分を［驚いたりなさらないでくださいね］取り上げ、茶化しているわけではないということです。打ち解けない素振りをなさる時だけの話なのです。当たり前の事柄ですのに、新しい言葉をお使いになってみたり、「好奇心」だの「条件付きの好意」だのを持ち出されたり、他のどの人との間でも用心深さなど一切無用という場面で〈生真面女〉な［どうぞ、当て字にご注意願います］お顔をなさる場合に限るのです。でも、こういったことすべては、私たちが互いに誓い合いました至高の友情に対する反逆行為の、その最たるものではないでしょうか。

覚えていらっしゃるでしょうね。私の時には、貴女は即座に見破られ、私の気持ちを質されましたね。あの人との間を邪魔しているのは私のプライドだけですと、私はすぐに認めました。どんな人であれ、だれかがほんの一瞬でも私の心を乱す力を持ちますのは、考えるだけでも耐えられないことだから、と私は申しました。それに、私のあの人は、他のところでも申しましたが、貴女の彼氏とは違いました。ですから、私に対するあの人の力と同じくらいに、あるいは、それ以上に、自分の無思慮が原因になったとも考えられるのです。でも、貴女の影響力のほうがさらに強かったのだと思います。最初は、「好奇心」から抜け出すよう、いろいろ説いてくださいましたし、好意が「条件付きの」状態になりました頃には　…　そう、何のことはございません、ご存じのとおり、その頃にはもうあの人のことで〈胸が高鳴った〉りはいたしませんでしたからね。

貴女のお言葉ですと、「あゝ、どうなのでしょう」ってところですが、私のあの人が貴女の彼氏ほどチャーミングでなかったことに触れたのですから、ビダルフ嬢、ロイド嬢、キャンピオン嬢と私に、貴女のご意見を是非ともお聞かせ願いたいのです。外観が私たちの心を捉えますのはどの程度までにすべきかについてです。でも、トニーさん(三二)の言い種ですと、「そこのところを覚えておくのだな」となりますが、貴女ご自身の場合もご勘案願います。それに、男の方がそれを自慢なさっている場合には、果たしてどうなのかについてもです。前のお手紙ですと、このような男性の場合、虚栄心は「的はずれな」プライドで、内面の立派さを疑わせるに足るものだとのご意見でしたからね。そんなにも愛らしいお顔立ち、そんなにも優美なお姿で、私たちの模範になっておられる貴女ですが、自惚れたところなどまったくお持ちではありませんから、常日頃から、少しも悪びれることなく主張しておられましたね。女性であっても、それは許されないことだ、とです。

ご承知いただかねばなりませんが、先頃皆で話し合いました時にも、この話題が熱心に取り上げられました。そして、貴女はどのようなご意見をお持ちか、手紙で尋ねてほしいとのご希望がロイド嬢からあったのです。意見がぶつかりますとどんな場合でも、私たちはいつも貴女のお考えを一番尊重してきましたからね。もっと大きな心配事で頭が一杯だから、こんな願いに応じる心のゆとりはない、ということでなければ良いと思っております。このような話題につきましては、私たちのだれもが貴女のご意見にとても敬服しておりますこともご承知のはずです。貴女が扱われますと、新しいこと、役に立つことが何かきっと出てまいりますもの。それから、是非ともお教え願いたいのですが、貴女の彼氏はあの恵まれた容姿を飾り立てるのにご執心の様子ですのに、伊達男と思わせるところがまったくないわけで、これは何故なのかということです。どうか、この質問と先のお願いを気晴らしの種にしていただきたいと思います。怒ったりはなさらないでくださいね。どんなに重大な問題でも、貴女の大きなお心が一つのことで一杯になってしまうなど、これま

でなかったことですもの。厚かましいことをいろいろと申し上げましても許してくださっていたのですから、もしも、不愉快だとおっしゃるのでしたら、そのことを思い出していただきたいと思います。そして、「おかしなお嬢さんね。それでも、大好きなのよ。私のアナ・ハウですもの」とおっしゃっていただきたいものです。

アナ・ハウ

手紙　三十八
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月二十日　月曜日

このたびのお手紙はひどく心に響きましたので、他の考えごとは、いかに重大なものとは申せ、ことごとく後回しにいたしまして、お答えをしなくてはなりません。それも、すこぶる明瞭に、そして、私たちのような付き合いでは必要となります、どこまでも忌憚のない態度でお答えいたしましょう。

でも、最初に一言、感謝の気持ちを述べさせていただきます。ラヴレースさんに好感を抱いている極めて確かな証拠を、私が手紙の中の五十箇所で露呈しているので、貴女のほうでは、その率直さに免じて、私のことを容赦してくださったというのでしたら、いかにも貴女らしい、思いやり溢れるご処置だということです。

でも、疑念を抱いている者にさえ時には好ましく思ってもらいますような、そんな根拠を提示することもないほどに邪悪な男の人がこの世にいるとお考えでしょうか。また、そのような根拠が生じました場合には、自分の気持ちを素直に表しますのが正しいことではないでしょうか。私なら、求婚してくださっている男の人であっても、その事情を抜きにして公正な扱いをするつもりでおります。私たちに敬意を示してくださるから（失礼な態度を取る理由が他にありませんのに）その男性を邪険に扱うというのでは、人目にもひどく横暴に映りますし、女性として、とても心の狭いことにも思われますので、そのようなことをする人間には決してなるまいと私は考えているのです。

ただ、自分では公正であることだけを目指しましても、男の人の目的をご存じの人たちがそれを依怙贔屓とお考えになるのは、抑えられそうもございません。とりわけ、鋭い目で観察しておられる人ご自身が以前同じ思いをなさり、ご自分同様、友人にとってもそれは避けられないことだったのだと、得意顔をなさるおつもりなのでしたら、難しいことでしょうね。心の気高い人々にも、完璧さを競っておられる時には（ただ、その情熱も、適切な方向づけをなされました場合には、欠陥の一つと受け止めたりはいたしません）、大らかな妬み心を少しは認めて上げても良いのだろうと私は思います。

仮に、意趣返しの非難として、このようなことを申し上げているといたしましても、それは穏やかな意味合いでの仕返しにすぎません。前から申し上げておりますとおり、貴女のおふざけは大好きなのです。お叱りのお言葉をいただきますと、その時は少し辛くなるのですが、思い返しまして、傍観者の意地悪さというよりも、友人としての忠告のお気持ちが強いことが分かりますと、感謝の気持ちで一杯になるのです。この手紙ではまだ辛い思いを拭い切れないでしょうが、次の手紙以降では、お礼の気持ちを述べさせていただく

よう、もっぱら心掛ける所存でございます。

ここまでご覧になって、少し感じ易くなっていると思われるでしょうし、そんなところがこの先もっとあるかもしれませんが、今申し上げましたようにお考えいただければ幸いです。私に向けた貴女ご自身の見事なお手本によって、しょっちゅう思い出させてくださるのですから、私も貴女に手加減をしたりしてはいけませんわね。

あの方についていろいろ書かせていただきましたが、好意的なことよりは批判的な言葉が多かったような気がいたします。あのような方ですもの、そうでなければお咎めを受けて然るべきでしょうし、弁明も必要かと思います。ただ、別な受け止め方をなさっておられるのでしたら、貴女のおっしゃる「証拠集め」をお願いするつもりはございません。私の振舞いは、その場合、少なくとも人目には非難すべきものと映るはずですし、矯正へ向けて骨折ることになりましょう。ただ、このことだけは申し上げたいと思います。私の言葉についてどのような解釈が出来るといたしましても、貴女に隠し立てするつもりは少しもなかったということです。あの時には、心のままを筆にいたしました。もしも、繕おうという気持ちがあったのでしたら、あるいは、そうしなければならない理由を自覚していたのでしたら、あの方のお身内の方々が私をどのように評価してくださっているのか、それを知りたがっている私の「好奇心」について、また、「条件付きの好意」とか、それに類した事柄につきましても、ご意見を誘うような真似はしなかっただろうと思うのです。最初の言葉に込めました意味合いにつきましては、あの時すべてを正直にお話ししたつもりでおります。従いまして、私にとりまして有利なことなのか、それとも、不利なことなのか、あの手紙をご参照いただきたいのです。また、皆の勘繰っております恋情は、子の務めに背いたもので、それだけに罪深い情念だとされておりますし、相手として考えられておりますのも、品行の芳しくない男性という、実に不幸な有り様ですから、このような状況では、私のような立場の女性はどうあるべきなのか、どう振る舞ったら良いのか、そのことを心に留めておきますために、もう一つの言い回しを用いたのです。それに、貴女からはいつまでも良い評価を賜りたいということ以外には何の目的もなかったといたしますと、あの時、自分のあるべき姿をお見せしたいと願いました私の気持ちは、貴女も大目に見てくださるものと確信いたしております。

でも、隠しごとをしていたというお咎めを免れますためにも　…　まあ、大変、ここで筆を置かねばなりません。

手紙　三十九

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月二十日　月曜日

昨日のお手紙への返事を途中で止めてしまいましたが、これをお読みいただきますとその説明がつくと思います。ただ、貴女が課してくださった話題につきましては、申し上げたいことがたくさんございますので、書き終えましてお届け出来ますのは、多分、明日か明後日のことになるでしょう。ここでは、ノートン夫人を煩わせ、家族の者たちによって為されました新たな試みについて、詳しくお話しすることにいたします。

今日こちらに来ていただき、指示をお受けになった上で、私に対してどんなことがお出来になるのか、試していただくためですが、昨日、夫人のところへ使いの者を出したらしいのです。少なくとも次のような効果はあるだろうと考えたのでしょうね。つまり、夫人に対して申し開きの出来ない状態へ私を追い込むか、あるいは、これまでにも夫人はしばしば母に向かって私の弁護をしたがっておられたのですが、その余地はないことを分かってもらおうというわけです。

何ものにも私の心は囚われていないという言明こそ、皆にとりましては、私が頑固で天の邪鬼であることを証明する論拠を提供しているのです。別の男性を特に大切に思っているのでないのなら、皆の意向に反対するよう私の気持ちを支配しているのは、他のことでは有り得ないというわけです。しかも、別な人を好いていると思わせるような理由を（この論拠を取り除くためのこととは申せ）与えてしまっているのですから、皆としては、出来るだけ早く計画を実行に移す覚悟なのです。そして、このために、あの立派な夫人に使いを出したという次第です。夫人に対しましては、私が孝養心すら抱いておりますことを皆も知っているからです。

夫人がお見えになりますと、父と母、兄と姉、二人のおじ様、そして、ハーヴィー叔母様が顔を揃えておりました。

最後に私と会うことを許していただいた後の情況につきましては、すべて兄が教えてくれたとのことです。ラヴレースさんへの愛情（皆は揃ってそのように解釈しているのですが）を告白している私の手紙の文面、皆が書いた返事の要旨、そして、皆の決意につきましても知らせてもらったそうです。

次に、母が口を開きました。そして、夫人がおっしゃいますには、以下のような趣旨の話をしたということです。

様々な男性をお断りしたいという我が儘を、私は何度も聞き入れてもらっているということや、五つか六つの事柄のうち、一つだけは家族全員の意向に沿ってもらおうと、母がどれほど骨を折ってきたかということ、そして、私がそれにも強情を張っているといったことを並べ上げました後、母はこう言ったそうです。「ねえ、ノートンさん、私のクラリッサ、そして、貴女のクラリッサが、こんなにも優しくしてまいりました親の気持ちにこれほど頑固に反対するなんてこと、考えられますかしら。ともかく、貴女にはあの娘がどう出るのか、試していただきたいのです。こちらから折れるわけには行かないというところまで事態は進んでいるのです。あの娘の父はすべてに亘りましてソームズさんとお話を済ませているのです。あの娘が承諾してくれるとばかり思っておりましたからね。素晴らしい贈与財産なのですよ、ノートンさん。一族すべてにとりましても、大変に有利なお話なのです。要するに、私たちのすべてに恩義を施すことが、あの娘には出来るということです。ソームズさんは、あの娘がしっかりとした考えをしていることはご存じですし、今は我慢を続け、今後とも優しい態度で接するなら、あの娘の感謝の気持ち、そして、やがては愛情を引き出すことも出来るだろうとお考えになり、すべてを不問に付したいと言ってくださっているのです　…　」とです。

［すべてを不問に付してくださるんですって　…　あのソームズさんがすべてを不問に付すだなんて、よく言いますわね］

「ですからね、ノートンさん、些細なことは勿論、一番重要な事柄について、親の権威

に従うのが子の務めだと確信しておられるのでしたら、あの娘に対して持っておられる貴女の力を試していただきたいのです。私には何の力もございません。あの娘の父にもないのです。おじたちにだってありません。私たち全員の意向に沿うことが、あの娘の利益になりますのは明らかですのにね。と申しますのも、そうしてくれた場合にはですが、あの娘の祖父の地所にいたしましても、生死に関係なく、あの娘のために意図されておりますものに比べますと、その半値にも当たらないのですからね。あの娘の気持ちを動かすことの出来る人がいるとすれば、それは貴女なのです。快くこの仕事を引き受けてくださると有難いですわね」とも言っていたそうです。

私のところへ出向きます前に、この際皆様にご忠告いたしたいことがございますが、お許しいただけるでしょうかと、夫人はお尋ねになったそうです。

すると、無礼にも兄が、夫人に来てもらったのは妹に意見をするためであって、自分たちに意見をしてもらうためではない、と言ったそうです。そして、「いいですか、ノートン小母さん〔兄にかかると、夫人はいつも〈小母さん〉なのです〕、妹にはこう言ってくれれば良いんですよ。ソームズ氏との契約は締結したので、足りないものといえば、妹が本分に従ってくれることだけなのだ、とね。つまり、あんたの意見が入り込む余地はないってことです。妹の意見もです」と言っていたそうです。

それから、怒りの籠もった口調で父が話し出しました。「これは確かですからね、ノートンさん。あの娘に邪魔だてはさせないということです。われわれとしては、この件で世間の笑い者になるつもりはないのです。まるで、自分の娘をすっかり持て余しているみたいだとね。要するにですね、一人息子の命を奪いかねなかった忌々しい放蕩者などに、子供を脅し取られるような真似はしないということです。ですから、従順さを自慢にしたほうがあの娘にとっては得策というものなのです。私の目の黒いうちは、どうあってもこちらの意向を呑ませますからね。私の父が考えもなしに気前の良いことをするものだから、あの娘は父親の私から独立したとでも思っているのです。実際、あのことがあってからというもの、すっかりあの娘はこれまでとは違ってしまった。まことにもって理不尽な遺贈ですよ。しかも、そのとおりに事が運びそうだというのですからね。だが、あの悪党のラヴレースと一緒になったりすれば、裁判沙汰にして、最後の一シリングまでも争うつもりです。あの娘にそう伝えてもらいましょう。遺言を破棄することも出来るのだし、また、そのつもりでいるということもですよ」とです。

おじたちも同じように興奮した調子で口添えをしました。

兄は憚りもなく乱暴なことを口にしておりました。

姉も同じ側に立ち、激しい口調で言葉を挟んだのです。

ハーヴィー叔母様は、この結婚の問題ほどに両親が決定権を持って然るべきものは他にないし、私の親が願いを通してもらうのは極めて妥当な話だ、と言っていたそうです。

このような指示をお受けになり、夫人は私のところへいらっしゃったのです。話し合われたことをすべて教えてくださった上で、家族の者に従うよう大変熱心に説いておられました。押しつけられましたお仕事をあまりにも忠実に果たされるものですから、夫人のお考えも皆と一緒なのではと、一度ならず思ってしまいました。でも、私があの人に対して動かしようもない嫌悪感を持っておりますのをお知りになると、私と一緒になって、家族の者たちの断固とした決意について嘆いてくださいました。そして、独身を許してくれる

なら、喜んで皆と和解する旨を言明したのは、私の本心から出たことなのかどうか、確かめておられました。この点について納得されますと、夫人は、この申し出が実行に移されました場合には、ラヴレースさんを効果的に排除することになるわけですから、受け入れてもらって当然だと確信され、（何度提案しても効果のなかったことはお話ししたのですが）階下へ戻り、その件に関して、私の保証人となることを引き受けてくださったのです。

そういうわけで、夫人は出て行かれたのですが、間もなく涙を浮かべながら戻って来られました。この代案を主張なさったため、ひどい仕打ちに遭われたのです。皆が申しますには、自分たちの条件どおりに私を従わせる〈権利〉があり、私の提案はただ時間を稼ぐためだけの手であって、ソームズ氏との結婚以外は何をしても駄目であるし、そのことはすでに伝えてもある、というのです。結婚してしまうまでは心の休まることがないが、それというのも、ラヴレースがどれほど私の心を支配しているか分かっているからで、母に向かっては、まことに腹黒いやり方で正反対のことを言明しておきながら、おじたち、そして、兄と姉に宛てた私の手紙では、その点を事実上告白しているのと変わらない、というのです。私は皆が大目に見てくれることを当てにしているし、皆に対する自分の力を頼りにもしている。私に対する皆の思いやりのほうが、皆を思う私の気持ちより大きいことを知っているのでなかったなら、皆としても、私を面前から遠ざけたりはしなかっただろう。ともかく、結果はどうであれ、自分たちの気持ちに従ってもらうつもりだが、さもなければ、私が再び皆の愛顧に浴することは決してないだろう、とのことだったそうです。

兄はあの立派な夫人に向かって、そうするのが妥当との判断からでしょうが、夫人の女々しいたわごとは私を意固地にするだけだと話したのです。女の気持ちにはひねくれたところがあって、悲劇を演じたがるものだから、私のような空想好きの娘は、同情を引くためなら、何をしでかすか分からない。恋の苦悩に憧れる年頃であるし、そういう性質でもある［横柄な兄の言い種です］。それに、悩んでいるといっても（夫人はこの点を訴えてくださったのです）、悲嘆に暮れるような女ではない。むしろ、またとないほど立派な、心優しい母を嘆き悲しませることだろう、というのです。そして、もう一度私のところへ行って構わないが、夫人でも効き目がないということであれば、夫人を自分の味方に引き込むような手を、家族全員の憎しみの的となっている男は見つけ出したのだと、そのように勘繰りたくなる、とも言っていたそうです。

夫人にとっては大変なショックでしたが、このいわれもない中傷に対しましては、だれもが兄を窘めたそうです。それでも、兄が次のように話しますと、だれ一人反対する者はいなかったのです。自分の「愛娘」だというのに［夫人は私のことをそんなふうに優しく呼んでくださったようです］、説得も出来ないのなら、お宅に戻って、呼ばれるまでおとなしくしているのが一番だろう。「愛娘」とやらは父の処置に任せることだな、とです。

こんなにも横柄で、こんなにも冷酷な兄を持った人など他にいるでしょうか。これほどまでの忍従を私は求められているのです。あれだけ立派な女性、あれだけ優れた理解力をお持ちの方に向かって、兄のこの傲慢な態度が許されるなんて　…

それでも、夫人は兄に向かって、私の気質の柔和さを話題にすると笑われてしまいそうですが、これほど柔和な気質の女性が他にいないことは責任を持って言えることです。これまでにも、夫人の知るかぎりでは、穏やかな手段を用い、優しく接するなら、私自身の判断や考えと合わないことであっても、説得に応じてくれるのが常であった、と話してく

ださったそうです。
それを耳にしたハーヴィー叔母様は、次のように言ったそうです。ノートンさんのおっしゃることにも一考の価値はある。それに、優しい気質の者が家族の意向と対立した気持ちでいると思われる場合に、そのような者が心を動かされる唯一の方法が、最初から私に対して用いられたのかどうか、叔母様自身は時々疑わしく思うこともあった、とです。
これを聞くと、兄と姉の両方が叔母様に食って掛かりました。私に対しては、前例のないほど寛大な態度で臨んだのではなかったのかと、母の意見を求めたのです。
母は次のように話しておりました。正直なところ、自分には寛大さに欠けるところは一切なかったと言える。ただ、是非とも言っておきたいし、これまでにも何度も話したことではあるが、ハウ嬢のところから戻った際に私が受けた出迎えにしても、また、ソームズ氏からの縁談の伝え方にしても（私にはまったく選択の余地を残さないようなものでしたが）、氏と私が話し合う機会も与えられないまま進められたこともあり、自分としてはとても賛成しかねるものであった、とです。
母は発言を封じられましたが、だれによってなのか、お察しいただけるでしょう。こんな具合だったそうです。「あゝ、お前は …… お前というのは …… この反抗的な娘のために、いつだって何か言わないと気が済まないのだ。何かしら弁解しようとするのだ。いいかな、忘れちゃいけないぞ、お前。われわれが憎んで当たり前のあの卑劣漢にしても、娘があいつに好い顔をしなければ、また、われわれに強情を張ったりしなければ、しつこく言い分を押し通そうとはしないはずなのだよ。ノートンさん［と、腹立たしげに］、娘のところへもう一度行ってもらいましょうか。優しくすれば効き目があるとお考えなら、優しくしていただいて結構でしょう。それでも駄目だということであれば、二度とあんな訴えはしないことですな」
「そうですよ、あなた、お願いいたしますね」　母が申しました。「あの娘に働き掛けてみてください。妹のハーヴィーと一緒にあの娘のところに行くつもりです。折れてくれるようなら、私たちであの娘の手を引いて階下に連れてまいります。お父様からの祝福をいただくことになりましょうし、だれもが愛情をなくしたわけではないことを教えてやるのです。もしもそういうことになれば、私たち全員、貴女のご尽力に一層感謝の念を深めることになりましょう」とです。
夫人が戻って来られ、これらの言葉すべてを、涙ながらに繰り返しておられました。でも、私はこう申しました。二人の間で先ほどのようなことがあった後のことですし、全面的に兄の思惑から出ていて、私には嫌悪の的となっております措置に応じるよう、私を説得出来るようには考えないでいただきたい、とです。すると、母親とも思っておりますその胸に私を抱き締めながら、夫人は次のようにおっしゃいました。「もう帰らせていただきますよ。帰らなくてはいけないのですからね。でも、お願いですよ。乱暴なことは慎んでくださいね。貴女のお人柄に似つかわしくないことは決してなさってはいけませんよ。伺っておりますお話が全部本当なら、ラヴレースさんは貴女にはどうしても相応しくありません。もしも応じることがお出来になるのなら、それが貴女の務めだということを忘れちゃいけませんよ。正直に申しまして、このように高潔な心の持ち主に対して、皆さんは正しい方法を用いておられません。でも、お忘れになってはいけません。どのような求めに応じられても、それが貴女ご自身のお気持ちに反することでないのでしたら、自慢に出来

る話ではないということです。また、貴女のように並外れて立派な人には、どのようなことが期待されているのかということもです。ご家族の皆さんのお心をいつまでも結び合わせておきますのも、離反させますのも、貴女の力でお出来になるのだということを忘れないでくださいね。このように強いられますのを、今は不愉快に思われるでしょうが、それだけの分別がおありなのですから、多分、この件もよくお考えになれば、一方の人に対する偏見も、もう一方の男性への好意も、すべて克服出来るはずです。そうなれば、ご家族の皆さんは貴女から恩義を受けることになるわけですから、皆さんの称賛の的になるばかりでなく、数ヶ月もいたしますと、おそらく、貴女ご自身にとりまして、評判を上げることにもなりますし、大変に満足の出来る結果にもなると思うのですよ」とです。

「お考えいただきたいのです、ノートンさん」と、私は申しました。「求められておりますのは些細な事柄ではありません。短期間で終わることでもないのです。生涯に亘ることです。それに、皆を抑えつけております横暴な兄の差し金だということを、是非ともお考えいただきたいのです。もしも、独身を守り、兄が憎しみを持っているばかりに皆も嫌っております、あの男性との文通を一切止めるだけで事足りるのでしたら、私といたしましても、皆の意向に沿いたいものとどれほど願っておりますことか、そこのところもお考え願いたいのです」とです。

「何もかも考えておりますよ、お嬢さん。これまで申し上げましたことの他に、貴女にも是非お考えいただきたいのですけれど、もしも、貴女のお気持ちを押し通し、皆さんのご意向を退けることで、万一不幸になられた場合はどういうことになるのでしょう。たとえ自分たちの望みどおりに事が進まなくとも、両親の気持ちに従った者たちには慰めがあるのですが、貴女はその慰めもすっかり奪われてしまうのですよ」

「もう行かねばなりません」　夫人が繰り返しました。「私が〈女々しいたわごと〉を並べるから貴女が意固地になるのだと、お兄様は［と、涙を浮かべながら］おっしゃることでしょう。本当に辛い話ですね。一人のお子さんの我が儘のほうはあんなにも大事にされておりますのに、もう一人のお子さんのお気持ちはほとんど顧みられないのですもの。でも、もう一度言わせてくださいね。もしもお出来になればの話ですが、黙って従われるのが貴女の務めなのです。お父様ご自身がお兄様の計画を是認しておられるのです。ですから、今ではお父様のご計画になっているということです。ラヴレースさんというのは、皆さんの不興を買うことはなさいますが、それに見合っただけ貴女の選択に応えてくれる人ではないと思いますよ。ご家族の皆さんに、特におじ様たちに、貴女への不信感を抱かせようとなさっているお兄様が何か思惑を持っていらっしゃるのは、容易に察しのつくことです。でも、それだからこそ、公明正大とは言えないお兄様の目論みを挫くためにも、出来ることなら従うべきなのです。貴女のためにお祈りをさせていただきましょう。私に出来ますことはそれだけですからね。さあ、もう参らねばなりません。ご報告しなければいけないのですが、どうしてもソームズさんと結婚なさるおつもりはないと申し上げなければいけないのでしょうか。お考えくださいよ、私の大好きなクレアリーお嬢様。そうしなくてはいけないのでしょうか」

「えゝ、そのとおりです。でも、お約束いたします。教え導いてくださったお骨折りに泥を塗るようなことは決していたしません。決して私の心を捉えるはずのない人との結婚を強制することにならないものでしたら、どのようなことでも我慢するつもりです。忍耐

強く務めを果たし、遜った態度によりまして、皆の気持ちを取り戻すよう努力するつもりなのです。でも、あの人を選ぶくらいでしたら、どんな形であれ、死を選ぶ覚悟です」

「そこまではっきりとしたお答えですと、階下へ参るのが恐ろしくなりますわ。皆さんも私のことはもう大目に見てくださらないでしょう。これでお暇いたします。でも、一つ考えを述べさせていただきましょう。いつも心に留めておいてくださいね」と、夫人がおっしゃるのです。

「貴女のように分別があり、いろいろと才能に恵まれた人というのは、身をもって範を垂れることで信仰と美徳の声価を高めるために、世の中に広く送り出されているように思うのです。そのような人が故意に過ちを犯すようなことになれば、その罪はどれほど重いことでしょう。そのような才能をお授けくださった神様に対し、いかにも恩知らずな振舞いだと思います。世間にとっても大きな損失でしょうし、美徳の名を汚す仕業とも言えます。でも、クラリッサ・ハーロー嬢にかぎって、このようなことが世間の人々の口に上ることはないものと期待いたしておりますよ」とのことでした。

私は答える術もなく、ただ、涙を流しておりました。そして、夫人が去って行かれる時には、私の心の善良な部分が夫人と一緒に私を置き去りにして行くような、そんな気持ちがいたしました。

階下で夫人がどのように迎えられるのか、一生懸命耳を澄ましておりましたが、夫人が心配しておられたとおりの様子でした。

「あいつはソームズ夫人になる気ですか、その気はないのですか。ノートンさん、めそめそと回りくどい言い方は止めてもらいましょう［これがだれの言い種かはお分かりですね］。両親の気持ちに従うつもりですか、それとも違うのですか」

このため、夫人は話そうとしておられたことすべてを端折ってしまわれたのです。

「手短にとの仰せでしたら、申し上げますが、お嬢様がおっしゃいますには、結婚をするくらいでしたら、命を絶つほうが、と …」

「ラヴレース以外の男とは、ということなのさ」と、兄が口を挟みました。

「このとおりです、母上。このとおりなのです、父上。これがあなたたちの従順な娘の実態だということです。これがノートン夫人の〈愛娘〉なんです。もうお宅に戻られて結構ですよ、小母さん。これから一ヶ月間、あのひねくれ者と連絡を取ることは一切禁じさせてもらいます。その権限を与えられているんですよ、僕は。われわれ一族、そして、その一人一人からの恩恵を有難く思っておられるのでしょうからね」

こう言うと兄は、先に立って夫人をドアのところまで連れて行ったのですが、だれに邪魔されることもありませんでした。横柄な金持ちが、自分たちの気に入らない不幸な貧乏人に向かって装う、あの邪険な見下すような態度そのものだったに違いありません。

こうして私は、大好きなハウさん、この世で一番分別があり、一番誠実な女性と言える人から助言をいただく機会を失ってしまったというわけです。どれほど必要に迫られることがあるとしてもです。

確かに、私のほうから手紙を書くことは出来ますし（失礼ですが、貴女への手紙に同封するのです）、私の書面に対する夫人のお返事を受け取ることも出来ましょう。でも、このような文通のことを咎められました場合、夫人は決して事実を隠したりはなさらないでしょうし、言い抜けもなさらないと思うのです。このように連絡を禁じられた後のことでも

ありますし、本当のことをおっしゃったりすれば、母の愛顧を永久に失うことにもなりましょう。実は、しばらく前のことで、恐ろしい高熱に襲われました時に、私は母の約束を取りつけていたのです。あの立派な夫人も、腕の良い針仕事で、現在のところは不自由のない暮しを立てておられるのですが、何かをして差し上げる前に私が命を失います場合には、夫人の視力が衰えるとか、あるいは、健康を損ねられ、生計の道を閉ざされるようなことになりました時は、夫人が生涯困ることのないよう、母のほうで取り計らってほしいとお願いしてあったのです。

今度はどのような方法を身内の者たちは取るのでしょう。元来は決して融通の利かない気質ではないのですから、これだけ私が頑強な抵抗を続けますのは、根深い嫌悪の情からに違いないと気づき、言い分を引っ込めてくれるようなことはないでしょうか。

さようなら。お幸せになってくださいね。貴女がお幸せになるのに欠けているものと申しますと、ただ、ご自分の力で幸せを掴むことが出来ますのをお知りになること、それだけだと思いますわ。

Cl. ハーロー

手紙　四十

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

［手紙三十八で扱った話題の続き］

真夜中ではございますが（目が冴えて、眠気も催しませんので）、急に中断を余儀なくされました先の話題に戻りたいと思います。心が千々に乱れておりますが、出来るだけ気持ちを落ち着かせ、貴女やロイドさん、キャンピオンさん、そして、ビダルフさんのお求めに応えようと思います。厳粛な気持ちを誘いますこの時刻の、物音一つ聞こえません静けさが、乱れた心を鎮める助けになってくれますよう願っております。

大の親友によそよそしい態度を取っているとの大変厳しいお咎めですが、その疑いを晴らしますためにも、お認めいたしますが（また、何度もお話ししたと思います）、ラヴレースさんが容認し得る人物のように私の目に映るといたしますと、それは私の置かれております特殊な状況からくることなのです。思い切って申しましょう。身内の者たちがあの方の競争相手として、分別があり、徳が高く、寛大な心の持ち主を選び出していたら　…　自らの誉れとなるようなことに財産を使い、他人の不幸を思いやる気持ちがあり、恩を忘れない者に対しましては、負けず劣らず感謝の念をもって報いてくれることが間違いなく確信出来るような人　…　このような人をラヴレースさんの競争相手として皆が担ぎ出していたら、そして、現在のように私の結婚のことに熱心だったならば、こちらの落ち度だとされております例の救いようのない強情さにいたしましても、私を咎め立てする根拠が皆に出来ていたかどうか、私自身にも定かではございません。そしてこの点は、その人の容貌とは関係なく言えることだと思います。人生のあらゆるお付き合いにおきまして、相手の方の立派な振舞いを一番確実に保証してくれるものとして、私たち女性が選択の基準としなければなりませんのは、心のはずだからです。

でも、このように虐げられ、追い詰められております現状なものですから、白状いたし

ますが、他の点について反感を持ち続けますために、ラヴレースさんの悪くはないように思われますところに目を瞑ろうといたしましても、時には、それが少々望ましくない程度に難しく思われてしまうのです。

いつかはあの方と一緒になるかもしれないと考え、あの方に有利な点と不利な点について、胸の内で思い巡らしたことがあるはずだ、とのお言葉でしたね。ありましたことはお認めいたします。一番の親友からこのようにお求めがあったわけですし、私が考えました両方の側の論拠を並べてみることにいたしましょう。

そこで、最初は、私が思い付きましたあの方に有利な事柄です。

あの方が私の家族に紹介されました時には、あの方の美点は否定形で主張されておりました。博打はなさいませんし、競馬狂でもない。狐狩りも好まず、酒飲みでもないといった具合でしたが、お気の毒なハーヴィー叔母様は、ワイン好きの人には（特に、少しでも慎みのある妻にとりましては）ずいぶんと嫌な思いをさせられる恐れがあることを、こっそりと皆に話してくれていたのです。それに、常識的に申しましても、飲み過ぎのせいで沢山の災いが日々起きているわけですから、男の人の酒癖の良さというのは、なかなか得難い美点ということになりましょう。姉のほうでも、あの方に対していくらかでも望みがありました頃は、こういった、あの方のお人柄の望ましい点を精一杯褒めていたのを覚えております。

あの方がけちん坊だなどと思われたことは一度もありません。金離れが悪いわけでもございません。また、素行調査が行われました時には、贅沢でも浪費家でもないことが分かりました。プライドをお持ちですから、その点は安心なのです「その意味では、称賛に足るプライドと言えます」。それに、ご自分の間違いはいつもすぐにお認めになります。神聖な事柄を茶化したりなさいませんが、これはワイアリーさんのいけないところで、ワイアリーさんのほうは、真面目な人をぞっとさせるような際どいことを口にするのがウィットだと思っていらっしゃるようなのです。私どもとの会話もいつも非の打ち所がなく、お考えの清潔さという点でさえも申し分ございませんでしたから、平素の行いはさておき、礼儀正しいお付き合いによって感化を受けることがお出来になる人であり、その他のお付き合いの場合でも、先頭に立つというよりは他人に従うような人だということが分かったのです。そして、近頃の例によりまして、ついこの前の土曜の夕方のことですが、この行儀の良さという点では（同時に、男らしさもですが）、あの方に対する私の評価は少なからず上がっているのです。

お生まれの良さということでは、これまで私のお相手として探し出されてきましたどの男性と比べましても、あの方に軍配が上がります。あの方の言い回しから判断してみましょうか。あの時は、貴女も面白がっておられたものですが、「自尊心というものは、良識に欠けるところがない場合には、真の高貴さや親譲りの高い身分にも、自分の手袋のようにしっくりと馴染むものですよ」とのお言葉でしたね。また、これに劣らず気取りのない態度で述べられましたのが、あの方お馴染みの言い回しでしたが、「そんなことを尊大ぶって自慢するのは、茸みたいに突然に伸し上がってきた（これもまた、あの方一流の言い方ですが）羽振りの良い成り上がり者だけです」とも言っておられました。そうなのです。この点からあの方のことを判断いたしますなら、あの方に有利な結論になってしまうでしょうね。家柄の良い人にはどのような振舞いが期待されているのか、その点をご存じだとい

うことですわ。あの方がそれに相応しい行いをなさっているかどうかは別にいたしましてもね。過ちを自覚しているというのは、改心への道程も半ばに達していることだと申せましょう。

現在お持ちの財産は相当なものですし、素晴らしい遺産相続の見込みもあるのです。従いまして、その点では何も申し上げる必要はございません。

でも、あの方が思いやりに溢れた夫とか、優しい夫になるなど有り得ない話だと言う人たちもおります。ソームズさんのような人を、それも、こんな乱暴なやり方で押し付けようとする者たちには、このような異議を申し立てる権利はないと思います。でも、この点につきまして、私が胸の中でどのように検討してきたのか、この辺でひとつ述べさせていただきます。と申しますのも、まだお忘れにならないでいただきたいのですが、私はあの方のお人柄について弁解する側に立っているわけですからね。

妻となる女性があの方からどのような扱いを受けるのか、おそらく、その大部分は女性自身の出方で決まることだと思います。他人から指図を受けることにはあまり馴れていらっしゃらない方ですから、口先で従順さを約束するばかりでなく、実行して上げなければいけません。また、願いを入れて上げるよう、心配りをしなければなりません。このようなことを期待なさらない夫などおりませんからね。結婚前の妻がだれよりも自分を愛してくれていたと確信出来ないような場合には、なおさらのことでしょう。それに、避けられるのであれば一緒になるつもりはなかったのだ、という相手の場合に比べますと、自ら選んだ男性の意向に沿うというのは、その人がたまに理不尽なことをいたしましても、どんなにか容易で、楽しいことでしょうか。また、男の人たちが〈夫婦の務め〉を制定し、服従を女性の誓約の一部にしたのですから、この契約の女性に関する部分を（その点をどれほど軽んじておりましても）破ることが出来ますところを、何かの手段としてでも、男の人には見せるべきでないと思うのです。もっと大切に思われますその他の点を、男の人のほうでも（自らが裁くわけですから）同じように軽んじる気にならないためにもです。でも、このように厳粛に誓いましたのに、軽んじて良い点などは有り得ないはずです。

このような信念を持ち、そのとおりに振る舞っておりますのに、そのような奥さんを邪険に扱う夫は何という恥知らずなのでしょう。ラヴレースさんの奥さんというのは、あの方がご自分の受けた丁重な物腰や礼儀正しい態度に対して、感謝の念をもって報いる気にならない唯一の人物ということになるのでしょうか。あの方が勇敢なことは広く認められております。分別を備えた人の場合ですが、勇敢でありながら、どこから見ても卑劣な人間だという例をご存じの方など、果たしていらっしゃるのでしょうか。それに、女性は淑やかなものですし、養育の仕方のこともありますから、勇敢な人たちの保護、そして、寛大な人たちの精神的支持をどれほど必要としていることでしょう。女性のだれもがその種の男性に自然と好意を示したくなりますのを見ましても、この点は証明されることだと思うのです。

最悪の場合でも、あの方は私を部屋に監禁したりなさるでしょうか。一番大切なお友達からの訪問を拒んだり、その人との文通を禁止したりなさるでしょうか。大過なく果たしてまいりました主婦の仕事を奪ったりするでしょうか。私に侮辱を加えても許されるような召使を監視につけたりなさるでしょうか。お姉様はいらっしゃらないわけですが、お従姉妹さんのモンタギュー嬢たちが私を蔑んだり、虐待したりなさるのをお許しになるでし

ようか。どちらのご令嬢にいたしましても、あの方のお許しがあるからといって、そんなことをなさるでしょうか。有り得ない話です。だといたしますと、しばしば考えるのですけれど、どうして違いを確かめる気持ちなどにさせようとなさるのでしょうね。本当に貴女たちも意地の悪いお友達ですわ。

そして、このような方を美徳と名誉の道へ連れ戻すことが出来るのだという、密かな楽しみが心の中に忍び込んでまいりました。もしもあの方と一緒になれば、あの方を救って差し上げる、そして、あの方をその種の人だと仮定しての話ですが、ひどく野心に溢れた人だけに、さもなければ引き起こしかねないような、そんな災いを未然に防ぐ二次的な手立てにもなるのだ、という楽しみがです。

あの方についてこのような見方をしてまいりますと（それに、分別のある人なのですから、ご自分の誤りに気づかれますのも、他の人たちよりは早いと思うのです）、白状いたしますが、身内の者たちがあれだけ乱暴な方法を用いて私から遠ざけようとしております進路を避けますのに、いささか骨を折った次第です。私の一番称賛すべき点とされ、この若さにしては非凡な特徴とも言われております、あの自制心を精一杯働かせましても、なお十分ではないくらいなのです。

もう一つ付け加えさせていただきますと、あの方のご親戚の方々が（あの方以外は、どなたにいたしましても非の打ち所のない方々です）寄せてくださいますご好意も、同じ秤に掛けますと、そのような気持ちに傾きますのを大いに助けているのです。

でも、そろそろ、あの方にとって不利な事柄へ移りましょう。両親が禁じております点を思いを巡らしてみましたが、このような選択をいたしますのは、女性の面汚しともなります軽佻浮薄な姿に見えるだろうということや、果たし合いによって煽り立てられ、兄の側での術策や野望によって掻き立てられているわけですから、両方の敵意が消え去るようなことは到底有り得ず、従いまして、自分の家族全員と永久に対立しなければなりませんし、恩義を施され、ろくに財産も持たない人間として嫁ぎ、あの方のものにならなければいけないということ、また、身内の者全員に対するあの方の反感も、あの方に対する身内の反感に負けず劣らず強いものであり、あの方のために、ご一族の方々すべてが悪意の対象になり、逆にあの方たちも私の身内を憎んでおられるということ、女性関係ではとても不道徳な人ですから、このことを知りながら、そんな人と夫婦の絆で結ばれようなどと思いますのは、大変不純な考えだということ、お若くて、人間としての丸みがなく、感情の抑制が出来ていないということ、気性は激しく、それでいて狡猾ですし、おまけに、執念深いところもありそうだということ、このような夫を持ちますと、これまで守ってまいりました信念すべてが揺らいで、将来の望みも危うくなりかねないということ、あの方のご親戚、大変な財産遺贈を約束されております二人の立派な叔母様、そして、叔父様にいたしましても、あの方に対しましてはまったく影響力を持っておられないということ、見苦しくない特質に恵まれておられるとは申しましても、美徳よりはプライドのほうに基づいたものだということ、道徳の教えの素晴らしさを自らお認めになり、来世での因果応報という考えを信じておられながら、報いを軽蔑し罰を無視するかのような生活を送っておられるということ、このように節操のない考え方から生じます害毒は子孫の行儀作法にまでも及ぶ恐れがあるということ、これらの点を、そして、その重要さを承知しているのですから、ご存じない人たちに比べますと、私はいよいよ言い訳が立たないということ、と申

しますのも、判断を誤ることよりも、判断に背いて犯す過ちのほうがはるかに罪深いわけですが、こういったいろいろな点に思いを巡らしておりますと、自分自身にも申し開きが出来なくなりますような、そんな軽率な行動には追い込まれることのなきよう、私と一緒になって、そして、私のために、どうぞ祈ってくださいと懇願せずにはいられなくなってしまうのです。何と申しましても、試金石とすべきは自分自身ですからね。世間の人たちのご意見は二次的な意味合いに止めるべきものと思うのです。

あの方を褒める言葉として、すぐさまご自分の誤りをお認めになる点に触れました。でも、この件に関しましては、あの方の不利になることですが、大幅に割り引いた考え方をすることもございます。この率直さは、そのいずれをとりましても、あの方の手柄にはとてもならないような二つの原因に帰せられるかもしれないという思いが、すぐに浮かんでくるからなのです。一つは、あの方がすっかり悪徳に染まってしまっておられるため、抜け出そうとのお気持ちもないということ。もう一つは、お人柄の全体が非難の的になりそうな時に、その半分を救うためにも、片方を犠牲にするのが得策と考えておられるのかもしれないということです。このやり方ですと、進んでお認めになることによって、反論しかねるような異議の声を鎮めることになりますが、他の褒め言葉は望めないといたしましても、率直だとのお褒めには与ることが出来るかもしれないというわけです。また、証拠を求められ、吟味を進めておりますうちに、他の悪事が露見することもありましょうからね。このような解釈は、確かに厳しいものかもしれません。でも、あの方の敵側に立つ人の言葉がすべて嘘偽りということもないはずです。

この続きは暫くお待ちください。

私たち二人ともあの方のことを、存じ上げている人の中でも一番裏がなくて、ただウィットに溢れた人なのだと考えたことがありましたね。また、別の時には、言葉を交わした人たちの中で一番訳の分からない人だと思うこともありました。ですから、一度お会いして正体をつかんだつもりでも、次の時には、得体の知れない人だと諦める気にさせられたものでしたね。この得体の知れないところは、あの方のお人柄の陰の部分に加えるべきだと思います。でも、概して貴女はあの方の側についておられましたから、あの方の一番の欠点は、度を越して開けっぴろげなことと、外面にあまりにも無関心なところで、狡猾というには軽率すぎる、と言い張っておられました。また、何か良いことを話しておられる時には、それは本心のままであり、考えの変わり易いところや軽薄なところは、体質的なものであって、素晴らしい健康に恵まれ、「それが貴女の見方でしたが」精神と肉体が互いに気持ち好く調和していることから来ているとのご意見でした。貴女の結論としては、この体の働きと生気の働きの「適合状態」「貴女のお言葉です」が思慮分別の指示に従うことになれば、つまり、あの方の快活さをただ道徳的責務の範囲内に納められるなら、生涯の伴侶として、あの方もまんざら捨てたものではないだろうということでしたね。

でも、あの当時私がよくお話ししていたことですし、今でも同じ考えなのですが、あの方には心というものが欠けていると思うのです。そして、それが事実なら、すべての点で不十分な人ということになります。頭のほうが間違っているというのであれば、悟らせて

上げることも出来ましょうし、正しい方向に向けることも出来るでしょう。でも、心が欠けているとしたら、心を持たせて上げることなどだれに出来るでしょう。邪な心に変化を起こさせるというのは、神の恩寵があって初めて出来ることですから、まさしく奇跡、あるいは、奇跡に類したことなのです。その種の人物だと少しでも疑いがある場合、そのような人は避けるべきではないでしょうか。あゝ、親が無理に子供の気持ちを動かそうとしたりいたしますと、何のことはございません、親自身にとりましても鼻持ちがならず、おそらくは、吟味に耐えられないような人柄の男性のことを、自分独りで考えますのよりはもっと良い人なのだと、そのように子供に思わせるだけのことなのです。

ラヴレースさんは執念深い人だと思う、と私は申し上げました。あの方は忍耐強く求婚しておられますが、誓っても宜しいのですが、私の身内からひどく不快に思われておりますのをお知りになって以来、ますます執拗になられたのではないかと思われることも時々あるのです。実際、その時以降、求婚にもずっと熱が入ったように思われます。ただ、身内の者の機嫌をお取りになることはなく、反抗的な態度に出ておられます。この点に関しましては、確かに無私の気持ちということを言い訳にしておられますが［礼儀正しさを持ち出すことはお出来にならないはずです］、それも尤もなことと思われます。何しろ、あの方のほうでも、機嫌を伺うに値するだけの力を身内の者たちが備えておりますことはご存じなのですからね。確かに、ご自分がどれほど低く出られたとしても、皆に受け入れてはもらえないはずだと、あの方も断言しておられましたし、それには十分過ぎるほどの根拠もあるのです（でなければ、とても我慢の出来る方ではございません）。また、私を喜ばせようとなさって、希望を与えてくれさえすれば、身内の者との和解に努力してみようとも言っておられるのです。

前の前の日曜日の、あの方の教会での振舞いについてですが、とりたてて申し上げることはございません。わざとらしく遜ったあの方の態度には、皮相なプライドが見え透いているからです。でなければ、あの方に対して別に敵意を持っているわけではないのですから、ショーリーが見誤ったりするはずはないと思うのです。

何人かの人が考えておられますほどに、あの方が人間の本性とか人の道とかに精通しておられるとは思えません。次のような平凡な所見を耳になさって、すっかり目を丸くしておられたのを覚えてはいらっしゃいませんか。道徳家ならだれだって説き聞かせることの出来るような言葉でした。ご自分に向けられた悪口雑言のことについて、半ば脅すような口調で不平を漏らしておられましたので、こんなことを申し上げたはずです。「身に覚えがないのでしたら、そんな非難は無視なさるべきですし、覚えがあるのでしたら、仕返しをなさったところで、罪は消えないでしょう」とか、「スポンジに剣を突き立てようと考えた人など、かつておりません」とか、「敵に咎められた過ちを改めることで、その敵を最良の友人の一人に変えることもお出来になるのです。しかも、（これこそが最も気高い復讐なのですが）敵としては自らの意に反してそうなるのです。何故なら、敵というのは、自分が非難の的とした落ち度を、相手が持ち合わせていないよう望んだりはしないからです」といったことでした。

しかし、相手の胸の内が苦痛の種になるのです、とあの方は言っておられました。

何故そうなのでしょう。実行を伴わなければ、それだけで人を傷つけることはないはずですが、と私は尋ねました。敵はただ剣を構えているだけで、あの方ご自身がその切っ先

をご自分の胸に向けておられるのです。それに、敵の悪意をどうしてそこまで根に持たれるのでしょうか。生きておられるかぎり、ご自分のために善用なさることも出来るでしょうに、とお話ししたのです。それにいたしましても、この程度の考えにあのように驚かれるなんて、大変な読書家との噂ですが、一体どんな本を読んでおられるのでしょうね。

それはともかく、確かにあの方は復讐を楽しんでおられるに違いありません。それなのに、同じ間違いを他人には許そうとなさらないのです。もっとも、自分自身にあります場合には非難すべきものとは滅多に考えない過ちを、他人が持っておりますと、真に非難に値するもののように見做しますのは、何もあの方だけのことではございませんわね。

以前の手紙で、どのようなことがありましてもラヴレースさんに愛情を感じることはないはずだ、と申しましたのは、以上のような考察から出たことなのです。このように釣り合いを欠いたところがあるからです。また、貴女はあのようにおどけた調子で茶化しておられましたが、「条件付きの好意」などといった言い回しで貴女との折り合いをつけようといたしましたのも、思慮分別の枠を踏み越えた振舞いでしたね。

「でもね、こんなのはみんな的はずれじゃないかしら。やっぱり理屈を捏ねているだけのことだわ。恋をしているとしたら、もう病気なのよ。恋というものはね、塞ぎの虫と同じことで、これといった原因が掴めない分、それだけ根が深いということだわ」と、貴女がおっしゃりそうな気がいたします。そして、隠し立ては止めてちょうだいなどと、またまたお咎めになるのでしょうね。

では、どうしても聞き出すおつもりでしょうから、申し上げましょう。欠点を山ほどもお持ちだというのに、自分で思っておりました以上にあの方のことを好いているようですし、その欠点のことを考えてみますと、私にとりましては芳しくないほどの好意を抱いているようにも思います。それに、私の受けております虐待のせいで、あの方のほうへ気持ちがもっと傾いてしまうことも十分に考えられることです。とりわけ、この間お会いした時のことを思い返してみますと、あの方にとっては有利に働くことになりますし、一方では、暴虐非道な扱いと言って構わないようなことが、日一日と目に見えて強まってきている状況なのです。つまり、素直に認めたいと思うのですが（何を申し上げましても、率直な言葉とはお考えいただけないでしょうが）、あの方が今の時点で道徳的な人であってくれさえすれば、これまでに出会いましたすべての男性よりも、あの方のほうを私は選ぶだろうということです。

それじゃあやっぱり、これは「条件付きの好意」にすぎないじゃないの、と貴女はおっしゃるでしょうね。また、それ以上のものでもないよう、私は願っております。いわゆる恋というものを、私はこれまでしたことがございませんし、これがそうなのかどうか、貴女のご判断を待たねばなりません。ただ、仮にそうだといたしましても、私が耳にしておりますほどに専横なものではございませんし、絶対に打ち克つことの出来ない力は備えていないようにも考えたいのです。また、まったく手に負えなくなっているのでしたら、自分が与えたと考えております以上の強い後押しがあったからに違いありません。と申しますのも、これは確信を持って言えるのですが、もう一方の人から逃れるためでしたら、今のところはまだ、胸の高鳴りもなしに、片方の人を喜んで諦めることが出来るからです。

でも、もう少し真面目にお話しいたしましょう。私を取り巻いております著しく不幸な状況のせいで、あの方にある種の好意を持つ羽目に陥った（あるいは、宜しければ、「持つ

気を起こした」と申しておきます）といたしましても、そして、貴女のご意見ですが、その好意が愛を促したからといって、貴女が　…　本当に優しい気持ちに感じることの出来る心を持っておられますし、こういった事柄の場合、女性が是非とも守らねばならない上品さというものを非常に大事にしておられて、大切に思ってくださる者が悩んでおります時には、胸の奥の奥までも思いやってくださいますのに、その貴女が、このように微妙な話題について、その不幸な友をこれほど追い詰めたりなさるなんて　…　とりわけ、私のほうでは、見破られないために予防線を張るような真似は（五十もの事例から、貴女には証明がお出来になるようですけれど）しなかったのですからね。茶化すのでしたら、あのとおりのことを口頭でやってくださいましたなら、もっと貴女の柄に合っていたことでしょう。特に、貴女の友人の苦難はすでに切り抜けられた後のことであり、その話題を思い巡らします時に、妙に澄ました態度を取ったということでしたらね。でも、貴女のお姿が目に浮かぶようですが、嬉しそうに目を輝かせながら、茶目っけたっぷりに、筆を手に腰を下ろされるというのは　…　まったくの話（私がこの点を気にいたしますのは、自分のためというより、貴女ご自身の心の大きさに関わる問題だからなのです。何故って、前にも申し上げましたとおり、貴女の冗談は大好きですからね）、この話題の微妙さや、貴女ご自身の繊細なお心のことを考えますと、これはあまり綺麗なやり方とは申せませんわ。

　ここで筆を置かせていただきます。宜しければ、これまでのところを少しお考えいただけたらと思うのです。

❁　❁

　再び筆を取りまして、外観や容姿は女性にとってどの程度の影響力を持つべきか、私の考えを述べることにいたします。男性一般の場合と特にこの方の場合と、その両方につきましてお話しいたします。そうすれば、容姿の点で、私が一方の男性に有利になり、もう一方の男性には不利になるような強い偏見を持っていると考えます時に、身内の者たちの判断はどこまで正しいのか、それとも間違っているのか、ご推測いただけるだろうと思うのです。でも、最初に一言述べさせていただきますが、この点が私にとりましても考慮の対象になり得るのだということは、皆のほうでも、ラヴレースさんとソームズさんとを比べてみますと、十分に納得出来ることなのです。だからこそ、私の考慮の対象になっているように皆は思い込んでいるのです。

　優れた容姿というものには、確かに、選んだ女性にとりましては手柄になることもありますが、また、とても心地好く、魅力的なところがございます。初対面で好印象を与えますし、その印象の正しさを、私たちとしても確かめたくなるものです。そして、付き合っておりますうちに、確信すべき根拠が見つかりますと、自分の判断に満足しますし、一目見ただけの印象ですのに、自分も結構賢いところがあるなどと得意がり、そんな気持ちになるきっかけを与えてくれた相手のことが一層好きになってしまうのです。でも、男性の場合でも女性の場合でも、容姿の優れた人は疑ってかかるというのが、いつも私が規則にしてきたことなのです。そして、私の規則が正しいことを示すような根拠もたくさんあるのです。男の方の場合は特にそうです。男性は容姿よりも知力のほうを誇りにしなければいけないからです。女性の場合には、綺麗な人が世間の評判になり、姿形とか顔立ちのこ

とを自慢したり、自惚れたりいたしましても、それも、もっと実質的で、もっと永続性のある長所をなおざりにするほどになったといたしましても、世間の人たちはすぐにも許してくれるものなのです。と申しますのも、可愛らしいお馬鹿さんというのは、何を話しましても、また、何をいたしましても、どういうわけかは存じませんが、人の気に入るものだからです。

でも、このような可愛らしいお馬鹿さんがもてはやされますのはわずかな間ですし、そのことを妬む人などおりますでしょうか。夏の陽射しを浴びながら、蝶のような華やぎの時が終わりを告げ、年を取り、顔には皺の目立つ冬の季節が訪れますと、もっと大切な資質の練磨を怠っておりました結果がしみじみと感じられてくるのです。その頃には、あのヘレネー(三三)のように、自分の鏡に映る姿さえも見るに忍びないものとなってしまうからです。そして、取るに足らないただの老女に身をやつし、その姿につきまとう軽蔑のまなざしに甘んじることになるのです。一方、用意周到な婦人の場合ですと、美徳に裏打ちされた賢明さと有益な経験という、いつだって好ましい特性を備えたままに齢を重ねて行かれますから「このような女性の場合は、老けるなどとは言わないものです」、浮ついた褒め言葉の代わりに、確かな尊敬の念をもって迎えられることになりますし、ちやほやされるようなことはなくても、それで補いがついてなお余りあることになるのです。

でも、男の方が容姿を自慢にするなどというのは、いかにも惰弱なことではないでしょうか。そのような人がたまたま才能を持ち合わせていたといたしましても、その才能も知的な話題に深々と入り込むようなことは滅多にないのです。たいていは外面のことで頭が一杯なのです。身を飾ることに、そして、おそらくは、身を飾るつもりで滑稽な姿になってしまうのですが、そのことばかりに夢中なのです。することなすことすべてが我が身に関わることなのです。つまり、自分自身のためですし、感心して眺めますものも、もっぱら自分の姿です。また、舞台では伊達者をしきりと嘲笑の的にしておりますし、それも当然の仕打ちと思うのですが、そういった懲らしめにも拘らず、容姿が自慢の男性というのは、たいていの場合、そのような卑しい姿に身を落としてしまい、その結果、女性からは蔑みの的にされ、男性からは物笑いの種にされてしまうのです。

こういったところが、いわゆる格好の良い男性、衣裳や外見を誇りにする人たちの通例なのです。ですから、繰り返しますが、男性の場合、容姿ばかりに意を用いますのは、見下げ果てた考えだということになります。ただ、外観の良さと同時に学問があるとか、姿形とは関係なく、その人を際立たせるような才能を備えているとかいうのであれば、確かに、容姿は付加的な要素になるのです。そして、自画自賛にうつつを抜かしたりせず、品行方正な生活を送っているというのでしたら、その人は本当に立派な人物だということになりましょう。

ラヴレースさんは確かに趣味を解する心をお持ちです。私に言えますかぎりでは、芸術に関して、ほとんどの分野についても嗜みがおありです。ただ、おどけた態度は装っておられますが、ご自分の容姿や才能、それから、着こなしについてさえ、少なからず得意がっておられるのは、見ると分かります。でも、呑気で屈託のない様子をしておられますから、そんなことには少しも意を用いておられないように見えるのです。容姿や才能のことに関して言いますと、大層気に留めておられるのははっきりしておりますから、ほんの少しでも好感を寄せたりいたしまして、あの方の自惚れ心を増長させるような真似は慎み

たいと思うのです。とても申し開きが出来なくなってしまいそうですからね。

さあ、いかがでしょう。ご期待に添うことは出来ましたでしょうか。まだ十分でないとおっしゃるのでしたら、もう少し気持ちが落ち着きましてから、もっと喜んでいただけるよう努力いたします。どうやら、文章がだらだらしてまいりましたし、文体にもメリハリがございません。想像力は働きませんし、気分も乗らないのです。それでも、気分の如何に拘らず、大切なハウさんのことですもの、仰せには精一杯従う所存でおりますことだけは申し上げましょう。

追　伸　　ほんの先ほどのことですが、あの厚かましいベティ・バーンズがまた私を怒らせるようなことをいたしました。忌まわしいソームズさんの次のような言葉を知らせにきたのです。「恥ずかしがり屋のお嬢さんのことは安心しているし、別に世話の掛かることでもない。前もって私にどれほど嫌悪の情があろうとも、しっかりとした節操のことは当てに出来る。それに、どれほど順調な足取りで私が歩み寄ってくるのか、それを拝見するのは自分にとっても楽しみだ」というのです［憎たらしい恥知らずですわ］。「世の中のことを熟知しておられたオリヴァー卿のお言葉では、夫に対する妻の良き振舞いを保証するものは、愛というよりは恐れであるという。もっとも、自分としては、これほどの淑女のことでもあり［お上手ですこと］、愛の力を試してみる心積もりでいる。少なくとも二、三週間ほどはそうするつもりだ。老ナイトは、妻を甘やかすのはためにならん。駄目にしてしまうほうが多い、と言い張っておられたが、自分としては信じたくないのだ」とも言っていたそうです。

こんな恥知らず、貴女ならどう思われます。不機嫌な女嫌いの老人と噂されました、あのオリヴァー卿のご指導まで受けているのですからね。

手紙　四十一
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月二十一日　火曜日

母にいたしましても、皆の許しさえあれば、どんなにか私に優しく接したいと思っていることでしょう。母の分別、そして、見事な理解力に対しまして、その価値は十分にあるのですから、それなりの敬意が払われますなら、こんな虐待には一切遭わずに済むはずなのです。私に対して新たな試みがなされることになりましたのは、母のお陰なのでしょうか、叔母のお陰なのでしょうか、それとも、二人のお陰なのでしょうか。私には分かりかねるのですが、今朝方、母のところのショーリーが次のような丁寧な手紙を届けてくれたのです。

愛しい娘へ

あなたのことは、今でもこう呼ばずにいられません。私にとっては、あらゆる意味であなたのことが〈愛しい〉からです。私たちは、ノートンさんが昨日漏らしておられたいくつかの事柄について、特に検討してみたのですが、ソームズさんが申し込んでこられた最

初の時、他の場合に私たちがいつもそうしてきたようには、あなたの気持ちを大切にして上げなかったかのような言い方だったのです。仮に、本当にそうであったとしても、いいですか、だからといって、あなたに落ち度があって良いということにはなりませんよ。お父様のご意向に盾突くようなことは許されないのです。もう、後に引いては面目の立たないところまで進めておられる事柄ですからね。でも、まだすべてを丸く収めることも出来るのです。私たち全員の幸せは、あなたの気持ち一つなのだということです。

お父様が構わないとおっしゃってくださいますから話すのですが、お父様が期待なさっておられることに、ようやく応じる気になってくれるというのでしたら、これまでの不孝はすべて無かったものとして、すっかり忘れてくださるとのお言葉なのです。ただ、そのような恩恵を施してくださるのはこれが最後だ、ともおっしゃっておられます。

すでに耳に入れたことですから、覚えているでしょうね(ア)。一番高価な絹の服地見本を注文してありましたが、到着したところです。到着した以上は、ご自分がどれだけ固い決意でいるのかを見せるためにも、あなたのところに届けるようにとの仰せなのです。出来ることなら、この手紙と一緒に届けたりはしたくなかったのですが、そのことにはさほど大きな問題はありませんね。あなたの繊細な気持ちのことも、以前にはそうするだけの価値があることと考えておりましたが、今となりましては、あまり気遣うわけには行かないのだと言わねばなりません。

手に入る品物の中では一番高価で、一番新しいものなのですよ。私たちの身分に見合っておりますし、おじい様の地所の他に、こちらで用意しているものもありますから、あなたの財産にも相応しい品です。また、同意を見ております素晴らしい贈与財産のことを考えましても、それに似つかわしいものなのです。

お父様はご自分のお金からスーツ六着分を出してくださるおつもりです（そのうちの三着は仕立て上がりのものです）。あなたには新品のスーツが一揃いありますし、確か二度しか着ていないものがもう一揃いありましたね。新品のほうは豪華なものですから、もしもあれを六着のうちの一着にしたいというのなら、替わりに百ギニーを下さると、お父様はそうおっしゃっているのです。

ソームズさんは装身具セットをプレゼントしてくださるおつもりですが、あなたにはおばあ様から頂いた一揃いとあなた自身のものがありますから、おばあ様のをセットし直して使いたいということでしたら、ソームズさんのはお金に代えていただくことにいたしましょう。相当な金額になりますが、そっくりあなたのものになるのです。それに、いわゆるお手当てとして、結構なお金を毎年出してくださいます。ですから、気質の点で異議がある人物ということでしたが、それはあなたが過少評価しているのであって、取るに足らない考えということになります。あなたには分別があると私たちは考えておりますが、あなたほどの分別を備えていない女性にはおそらく勿体ないくらい、妻として自由に出来るお金が手に入るということです。あなたがソームズさんのところへ用意して行くものよりも、総額ではもっとたくさんのお金を持参した私ですが、頂いているお金といえば、私たちがあなたのために準備しているものにも及ばないのですよ。そのことはあなたも十分知っているはずです。気に入ったとおりに結婚する場合でしたら、条件などに固執する必要

(ア) 百二頁を参照のこと。

は少しもないのです。でも、嫌いな気持ちを（皆に喜んでもらうためでも）克服することがあなたには出来ないというのでしたら、本当に残念に思いますよ。

この話題について、私がこのように率直に、腹蔵なく書き送りましても、驚くことはありませんよ、クレアリー。これまでのあなたの態度は大変なものでしたから、細かな点についてあなたと話し合う機会がまったく見つからなかったのです。でも、あなたと私の話し合いや、あなたとおじ様たちが交わしました文面のすべてからいたしまして、どのような結果になるのか、疑いの余地はないはずです。私たちが権限を放棄しなければならないのか、それとも、あなたのほうが気紛れを止めるのか、そのどちらかなのです。あなたが前のほうのことを期待するのは無理な話です。私たちには後のことを期待する理由がすべて揃っているのです。これまでにも一度ならず話してきたことですが、ソームズさんとの結婚を決心しなければいけません。でなければ、私たちの子供として扱ってもらうのはきっぱりと諦めることですね。

贈与財産の草案は、その気があれば、いつでも見せて上げましょう。どの項目をとっても、異論を挟む余地はないと考えております。あなたの叔母が話して聞かせた最初の頃に比べますと、一族にとっては更に有利な項目が明記されております。実際の話、私たちにも望み得なかったほどのものです。詳しく目を通した上で、どこか変更が必要だということであれば、そのとおりにいたします。ですから、詳しく見てみたいと、一両日中に知らせてよこすのですよ。というより、頼んでみることですね。

つい先頃、ある人が教会に姿を見せましたし、その人が至る所で何かと言い立てるものですから、私たちはとても不安な気持ちになっているのです。しかも、あなたが独りでいる間はその不安も続くわけですから、早目の日取りが予定されましても、驚かないことですね。私にも尤もと思われるような異議があなたから出ない場合には、二週間後の今日にしようと私たちは考えております。でも、こちらの望みどおりに気持ちを固め、そのことを知らせてくれるようでしたら、私たちも、一週間かそこいらのことで、あなたと押し問答をするつもりはございませんよ。

あなたは容姿に恵まれておりますから、この縁組はあなたにとって不面目なものだと考える人もいるでしょう。でも、そこまで自分のことを買い被るような真似はしてほしくないのです。もしもそのような気持ちでいるのでしたら、もう一人の男性の場合に、容姿のことがあなたの心を占めてしまうのも（いかに愚かな考えではありましても）、確かに無理からぬ話です。

親として当然のことでしょうが、私たちは次のように判断しなければなりません。二人の娘は、私たちにとって同じように可愛くて、大切なのです。だといたしますと、縁談がアラベラのところに来た場合、あの子のほうでは（あの子のために、私たちもですが）決してそのようには思わなかったはずのものを、どうしてクラリッサは不面目だと考えるのか、ということです。このようなことをお話しする私の真意は、別に詳しく説明するまでもなく、あなたには分かるでしょうね。

ですから、私たちの望みに応じる旨を、今のうちに私たちのところへ知らせてよこすのです。そうすれば、あなたの監禁も終わることになりますし、あなたのこれまでの反抗すべてに対しても、大赦令ともいうべきものが布告され、今一度、私たちはあなたのいることを幸せに思うでしょうし、互いに幸せを感じることにもなるのです。この場合には、お

父様の書斎へ、お父様と私のところへ、すぐにでも降りて来て構わないのです。心から許して上げますし、祝福の気持ちも添えて、服地見本についての助言をして上げましょう。

さあ、私のクラリッサ、今までどおりの良い子になるのです。もう一度だけと（これまでのあなたの態度にも拘らず、また、あなたが聞き入れてくれる望みなどないと言う人もいるのですが）、あなたのことを請け合ったのです。そんな期待を抱く私を、皆の笑いの種にしないようにお願いいたしますよ。もしも、これだけ一生懸命に頼んでも駄目なら、お父様とあなたの間の事柄に、これ以上は決して口を挟まないことを約束したのです。いいですね、降りてきてくれることを願っていますよ。お父様も期待しておられるのです。でも、お言葉に従う時にも、決して嫌がっている素振りをお見せしてはいけませんよ。降りてきてくれれば、あなたのことが可愛くてたまらないこの胸に、しっかりと抱き締めて上げます。いつだって、喜んでそうしていたのです。変わらぬ気持ちで抱きとめて上げましょう。ここ数週間というもの、私がどれほど苦しんだことか、あなたには分かっていないのです。また、私のような立場になるまでは、決して推し量ることも出来ないのでしょうね。優しくて子に甘い母親が、激しい気性の人たちの企てに遭いながら、家族の平安と調和を保とうと日夜祈り、苦労を重ねる立場のことはです。

それはともかく、条件については分かりましたね。やはり親の意向に沿うわけには行かないというのでしたら、私たちの傍には近寄らないことです。でも、これだけのことを書いた後ですから、あなたにもそんな真似は出来ないはずだと思っております。

もしもすぐに来てくれるのなら、それも、私が言いましたとおりに、孝行を尽くす気持ちで一杯のように（心を捉えているものはないとのことでしたね）、〈快く〉降りてきてくれるのでしたら、私のほうでも、言葉どおりに、愛情溢れる母親の姿を精一杯の思いやりを込めて示して上げられることでしょう。

心から愛する母

この手紙がどれほど胸に応えたことか、どうぞ、大好きなお友達、私の気持ちを推し量っていただきとうございます。内容はびっくりするほど恐ろしいことですのに、なんと優しい言い回しなのでしょう。あゝ、どうして私は、従うわけに行かない言い付けと、遜った口調で心に響きます言葉との板挟みになって、こんなにも苦しまねばならないのでしょうと、独り声に出して叫んでしまいました。式が執り行なわれることになりますと、嫌悪の的となっております男性が私の誓約を求める権利を手にしてしまうわけですが、そうなります前に、間違いなく祭壇のところで打ち殺してもらえるのでしたら、黙って祭壇まで手を引かれて行けるかもしれません。でも、虫酸の走るような男性と一緒に、そして、その男性のために生きて行くなど、考えただけでも惨めな話ではないでしょうか。

それに、衣裳や装身具のまばゆさに私が少しでも心を動かされるなど、考えられることでしょうか。身を飾るに当たりまして、良き妻が主として重視すべきことは、夫の愛情を保ち、夫の選択の正しさを裏付けることであって、他人の目を引くようなことは恐れねばならないとさえ、常日頃から考えてきた人間なのです。このような考えですもの、服地見本の豪華さなどはかえって嫌悪の情を募らせるだけでしょう。まったくの話、大変な励ましですわね、ソームズさんの妻になるため、身を飾ることに意を用いるなんて　…

ともかく、私といたしましては、指示のありましたような条件で降りて行くなどという

ことは、とても出来ない相談でした。貴女は可能だったとお考えでしょうか。それに、筆を執ることもですが、仮に手紙を読んでもらえるといたしましても、どんなことを書けば受け入れてもらえるのでしょうか。何を書いても何を言っても、ほとんど効果のなかった後のことですからね。

私はあちこち動き回っておりました。汚らわしいとばかりに、服地見本を放り出しました。控えの間に引き籠もったかと思うと、出て来てソファーに身を投げ出したり、こちらの椅子、それからあちらの椅子と、腰を下ろしたりいたしました。あちらの窓辺に行くかと思えばこちらの窓に佇み、どうしたら良いのか分からない有り様でした。こんな宙ぶらりんな状態のまま、読み直そうとして、もう一度手紙を手に取りましたところ、ベティが部屋に入ってまいりまして、言い付けられたのでしょう、父の書斎で父と母が待っていると念を押しておりました。

ほんの短い間でもこの部屋で会えないものか、あるいは、どこでも構わないけれど、母が独りでいるところへ伺わせてもらえないものか、そのように母に伝えてほしいと、私は申しました。

私が階段の降り口のところで耳を澄ましておりますと、父が腹立たしげに叫んでおりました。「どうだ、お前もこれで分かっただろう。お前がいくら下手に出たところで（これまでの甘やかしと同じことで）、無駄だということだよ。お前は息子のことを乱暴だと咎めているが［これを聞いて、少しほっといたしました］、あの娘には他のやり方では駄目なのだよ。もう、お前だけで会ってはならんぞ。私が立ち会うのを、あの図太い娘は不服だというのかな」とです。

「あの娘に伝えておくれ。私たちのところへ降りて来て構わないのはどんな場合か、あの娘は知っているのです。他のどんな条件でも、私は会いませんよ、とね」と、母がベティに言っておりました。

あの娘がこの返事を持ってまいりました。すぐにペンとインクを取りましたが、ひどく体が震えるものですから、書くことは出来ませんでしたし、たとえ指先がもっとしっかりしていましても、どう述べたら良いものか、分からなかったこともあります。そうこうしておりますうちに、ベティが次のような父の手紙を届けにまいりました。

親不孝にして強情者のクラリッサへ

いくら下手に出たところで、お前の心を動かすことは出来ないようだな。お前の母が会うはずはないし、私にもその気はないのだ。だが、言うことは聞いてもらうぞ。こちらの意向は分かっているはずだ。お前の叔父のアントニー、兄と姉、それに、お前が贔屓にしているノートン夫人に出席してもらい、叔父の屋敷のチャペルで内輪だけの式を挙げることにする。ソームズ氏がお前を連れてきてくださり、お前もこちらの希望どおりに機嫌の良い姿を見せてくれるなら、その時には、氏の妻ということで、お前を許すこともあるだろう。だが、それ以外の立場では、強情な娘を許すわけには行かないのだ。本当に内輪だけの式になるのだから、衣裳や装身具の類いは後ほど整えられることになるだろう。来週の初め頃には叔父の屋敷へ向かう用意をしておくことだ。すべてが終わるまでは会わないつもりだし、当然の処置として行われた監禁とはいえ、その期間を短縮するためにも、ま

た、ここ暫くお前は盾突いてばかりいたわけだが、そんな親不孝者と争う苦労を省くためにも、早く終わらせたいものと考えているのだ。訴えを聞くつもりはない。手紙も受け取らないし、諫めに耳を傾けることもしない。また、私の希望どおりにお前の名が変わるまでは、こちらからもこれ以上連絡はしないことにする。

怒れる父より

この決断が厳守されますなら、父は二度と私に会うことはなくなるでしょう。私には絶対にソームズさんの奥さんになる気はないからです。その前にこの世を去るつもりです。

火曜日　夕刻

父の手紙を受け取りますと、間もなくあの人が、このソームズさんがお見えになりました。お許しがあればご挨拶に伺いたい、と知らせてきたのです。何という厚かましい人なのでしょうね。

この伝言を届けに来ましたベティに、私は次のように申しました。あの人の力で、不幸な娘をその父と母の元へ返してもらいたい。そうしてくれるなら、おっしゃりたいことに耳をお貸ししても良い。ただ、あの人のために身内の者たちが私に会おうとしないのであれば、私としても、あの人ご自身のことを根拠に、会わないことにする、とです。

「まさか、お嬢様、こんなお返事を伝えに行けとおっしゃるのではないでしょうね。あの方はお父様お母様とご一緒しておられるのですよ」と、ベティが言っていました。

「捨て鉢なのよ、私。これ以上ひどいことになるはずはないわ。お会いするつもりはありませんからね」と、私は申しました。

あの娘は私の返事を持って降りて行きました。復唱するのは気が進まないという態度を装って見せたようです。それで、隠し立ては止すように命じられたものですから、あの娘は強い言葉そのままに報告したのです。

激昂した父の怒声が手にとるように聞こえてまいりました。

皆が父の書斎に集まっていたようです。兄はこう言い張っておりました。私を今すぐに放り出し、ラヴレースの元へ行かせてしまえ。不幸な目に遭うのが私の宿命なのだ、とです。母が一言、私のために優しい言葉を差し挟んでくれたのですが、どんな言葉だったのかは分かりません。でも、こんな返事が返ってまいりました。いいかな、お前、お前ほどの良識を備えた女にしては、これ以上に挑発的な言い方もないぞ。親に盾突いているというのに、まるで孝行娘のように慈しもうというのだからな。これじゃあ、親孝行をする気になどなるわけがない。私だって、お前に負けないほどあの娘を愛していたのではないのかな。私が心変わりをしたのは何故だと思うのだ。まったくの話、女も理非曲直というものを弁えてもらいたいものだよ。分かりきったことなのだ、あいつがお前に対する自分の力を当てにしているのは。よくあることだが、母親が甘いと、子供を強情にしてしまうものなのだ、というものでした。

それでも、母はベティを叱ってくれました。あの娘自身も認めていたのですが、強い言葉そのままに私の返事を伝えたから、というわけです。ところが、父のほうはそのことを褒めておりました。

あの娘の言葉によりますと、ソームズさんにお会いするのを私が拒んだことを知った父

は、それはいけないという兄と姉の説得がなければ、怒りのあまり、二階へ上がって来ようとしたのだそうです。

そうしてくれたら良かったのに、と私は思います。そして、父自身のためということがなければ、私の命を奪ってほしかったと思います。

ソームズさんがご親切にも［正直な話、本当に有難いと思うのですが］、私のためにとりなしてくださいました。

皆大騒ぎです。どう決着がつくのか、私には分かりません。もう生きているのが辛くなりました。二、三週間前まではあんなにも幸せでしたのに、今ではこんなにも惨めな有り様なのですからね。

厳しい試練が待ち受けていると母が申しておりましたが(ア)、確かに、それも尤もな話のように思います。

追伸　いわば、白痴として［まるでそんな扱いなのですが］保護観察の要あり、とでもいったところでしょうか。それが兄と姉の言い分でして、私をどうするかは何もかも任せてほしいと願い出ているのです。もしもそれが認められたりいたしますと［父からの許しは得られたと聞いておりますが、母のほうはまだなのです］、どんなにひどい仕打ちが待っていることでしょう。羨望の気持ちや嫉妬心、そして、悪意が二人にはあるわけですからね。そのとおりに身柄を預けられてしまうのかどうかは、結果を見ればすぐにも分かることと思います。これは、薪小屋への途中でこっそり届けられた、従姉妹のドリー・ハーヴィーからの書面で知ったことなのです。この可愛い娘は私に会いたがっているのですが、私がソームズ夫人になってしまうまでは、あるいは、ソームズ夫人になることに同意するまでは、会うことはまかりならぬと言い付けられているのです。まったくの話、皆の頑固さを手本にしたいくらいです。いいえ、冗談じゃなく、本当にそうしようと思っております。

手紙　四十二
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

姉と私との間で口論がありました。というよりも、罵り合いでした。人を罵るなんてこと、私に出来るとお思いでしたか。

私がソームズさんと会うのを断ったと知ると、使いとして姉がやってまいりました。私を襲うために解き放たれた、といったところだと思います。皆のほうには、和解しようという気持ちなどこれっぽっちもないのでしょう。私のことは兄と姉に委ねようと、満場一致で決まったのは明らかなようです。

私に対する姉の非難のうち、少しでも筋の通っております点につきましては、すべて公平な態度で扱いたいと思います。私の振舞いの適否につきましては、私がお話しする事実に基づいてご判断をお願いしているのですから、私のほうで裁判官を惑わそうと画策する

(ア)　百二十三頁。

ようでしたら、それは申し立てにひどく無理がある証だと思うのです。

父が上がって来たなら、どんな恐ろしいことになっていたか、その様子から姉は切り出しました。皆に、特にソームズさんに引き止められるということがなかったなら、すぐにも父は上がって来ようとしていたというのです。それから、まるで私の強情さを後押ししているとでもいうように、ノートンさんの悪口を言っておりましたし、ラヴレースさんを尊敬しているらしいということで、私を馬鹿にするのです。「才気煥発で思慮に溢れ、おまけに、孝行者で信心ぶか〜い［と、こんな具合に軽蔑した言い方でした］クラリッサ・ハーローが、放蕩者に訳も分からないほどお熱なんですもの。驚きよね。あの男の腕に飛び込んで行ってしまわないよう、両親があんたを閉じ込めなければならないのも無理のない話だわ」とです。そして、「ちょっとお尋ねしても良いかしら。貴女の日課の割り振りのほうは、今はどんなふうにしているの。二十四時間のうち針仕事には何時間くらいを割り当てているのかしら。お祈りにはどれくらいなの。お手紙のほうはどれくらい。それと、恋には何時間なの。案外、ねえ、お嬢ちゃん　…　と、悪戯っぽい言い方でしたが　…　アロンの杖(三四)みたいなもので、最後のが他のを全部呑み込んでしまっているのじゃないかしら。おっしゃいなさいよ。違うかしら」と言うのです。

こんな言い種に対し、私は次のように答えてやりました。父の怒りに晒されずに済んだのが、感謝の気持ちなど一切持つわけに行かない相手のお陰だというのは、かえすがえすも悔しい話だ、とです。ノートンさんのことは激しい口調で弁護いたしましたが、立派なお人柄からして当然のことでしょう。また、ラヴレースさんのことでの私への非難に対しましても、負けず劣らず激しい調子で憤慨してみせました。二十四時間を私がどのように割り振っているかという問いに対しましては、不幸な立場の妹に勝ち誇ったような態度を取るよりは、同情を示すほうが姉らしいことだと答えましたが、とりわけ、自分の不幸の大部分は、起きている間の何時間かを姉自身がどのように使ったかに起因していると思って間違いないのだから、とも言ってやりました。

この最後の当てこすりを聞くと、姉はひどくわめき散らし始めたのですが、このような事態になる前に身内の者たちのすべて、特に母が示してくれた優しさのことを忘れないようにと念を押しておりました。皆には思いもよらなかったような気の強さを私が見せているということや、これほどの気の荒い娘と分かっていたら、相手にしようなどとはだれも思わなかっただろうということ、ただ、今となっては、簡単に言えば引っ込みのつかないところまで来てしまっており、孝行心と我が儘のどちらが勝つか、親の権威が娘の頑固さに屈服するのか、それとも、その逆なのか、ということであり、要するに、私が我を折るのか砕け散るのか、そのどちらかなのだ、などと言っておりました。

私は次のように申しました。そんな冗談めいた言い方に対して、同じように軽い気持ちで返答の出来る話題であってくれたら嬉しいのだが、ただ、皆の目には、とりわけ姉の目には、ソームズさんがそんなにも取り柄のある人に映るというのなら、どうして私の夫ではなく、義兄になってもらってはいけないのだろうか、とです。

「あらあら、あんただって私に負けずにずいぶんと面白いことを言うじゃない。何だか希望がもてそうだわね。でもね、妹に首ったけの人を奪い取ってしまうような真似を私がするとでも思って」というのです。そして、言葉を続け、「私のほうに先に求婚なさったのなら、話は別なのでしょうね。でも、妹がお払い箱にしたものを、だれがいただいたりす

るもんですか。冗談じゃないわよ、あんた。そこまで落ちぶれちゃいませんからね。それにね、そんなことになれば、あんたがご存じのだれかさんのために、あんたの心のドアーを開け放しにしてしまうわけでしょう。その男のことは、出来ることなら、私たちとしては締め出しておきたいのですからね。要するにね［と、口調も表情も変えて］、私がだれかみたいに図々しくて、お兄様の流した血でもって私への権利を主張しようとした、イギリスきっての放蕩者の一人の腕に身を投げ出したりしていたらの話だけど、その場合には家族全員が一緒になって、そんな卑劣漢から私を救い出し、折り良く申し出てくださる立派なお方との結婚を急いで進めてくれるだろうということよ。さあ、クレアリー、すっかり話して上げたのだから、精々無駄にしないことね」と言っておりました。

こんな言い種には、きついしっぺ返しをしてやるのが当たり前じゃないでしょうか。私の返事が間違っていなかったことを確かめますためにも、そのとおりだとおっしゃっていただきたいですわ。「ねえ、まったくお気の毒よね、お姉さんも。あの方がこれまでずっとひどい道楽者だったわけではないんですもの。報いられなかった愛は底知れない憎しみに変わるって言われているけれど、本当にそのとおりね」と、私は言ったのです。

姉が私を殴りつけようとしているように思いました。それでも、「兄が危険に晒されたことや、兄の命を奪おうとした人のことは何度も聞いているわよ」と、私は言葉を続けました。これだけ無遠慮な扱いを受けているのです。思っているとおりのことを口にして、どうしていけないのでしょう。「兄のほうが相手の命を取ろうとしたのじゃないかしら。もしも、それが出来たらの話でしょうけれどね。生かすも殺すも思いのままとしたら、兄はラヴレースさんを見逃して上げていたでしょうかね。先に手を出した人が文句を言うことはないと思うわ。折り良くあった申し出のお話にしたって、だれかさんがちょうど良い時にだれかさんに申し込んでくれていたら、私にはとても有難かったと思うわ。折り良く殿方が現れてくれないのはね、ベラ、私のせいじゃないのよ」と付け加えたのです。

どうでしょう。これ以上気丈な振舞いを貴女はお出来になったでしょうか。てっきり姉の手が飛んでくるものと思っておりました。事実、片手をふりかざしながら迫って来たのです。それから、興奮のあまり口もきけなかったのでしょうね。階段の中ほどまで駆け降りて行きましたが、また戻ってまいりました。

やっと口を開くと、「神様のお力添えでもなけりゃあ、とうてい我慢出来ないわよ、あんたには」と言っておりました。

私は「アーメン」と唱え、「でもね、ベラ、自分から誘い出した反駁なのに、貴女だって黙っていられないじゃないの。許してくれるわね。そして、お姉さんらしいところを見せてほしいのよ。言うことが妹らしくないなどと、そんなふうに思って当然なところが私にあったりしては残念ですもの」と申しました。

すると、姉はますます激しく罵り出しましたが、私の穏やかな態度を、姉への怒りを克服して得意になっている姿と考えたのでしょう。私が兄を敵視し、性悪なラヴレースさんの側についていることを皆に知らせるつもりだと、姉は言っておりました。

私は次のように申しました。姉が自分自身に向けることの出来そうな主張、つまり、私が腹を立てたりするのは、判断を下すのよりももっと許し難いことだという主張を、私も自分に向けて行えるようになりたいものだ、と言ったのです。ただ、私のところへやってきたのは、これまでに話してくれたこととは別の目的があるのだろうと思う。もしも（こ

れだけのことがあった後で)、私にも受け入れられるような提案、ただ一人の姉を今一度私の味方にしてくれそうなことが何かあるのなら、是非とも教えてほしい、ともです。

私が従順な性格だと言われておりますのを姉が茶化しました時に、従順だと受け止めてもらいたいとは思うが、卑屈にはなりたくないし、謙虚ではあっても、卑しいわけでもないのだと、以前話したことがあるのですが、ここで姉は、嘲るような態度で、その点に留意するよう言っておりました。

軽口を叩かれるほうが、腹を立てられるよりははるかに嬉しいと、私は答えました。ただ、これまでのところは(姉と妹の間でありながら)はなはだ姉らしさに欠ける、この来訪の目的を教えてもらいたい、とです。

皆になり代わって、という言い方でしたが、姉としても、私がどういうつもりでいるのか知りたいとのことでした。承諾するのか、それとも、しないのか、一言で済ませてほしい。こんな強情っぱりのことをいつまでも辛抱する気など家族の者にはないのだから、と言っておりました。

それじゃあ、こうするつもりですと、私は申しました。皆がそれほどまでに反対している人とはきっぱり手を切るが、ただ、ソームズさんであれ、他のだれであれ、命令という強い形で押し付けられたりしないことが条件になる、とです。

私が前に申し出ていたことと比べ、これで何か変わった点はあるのだろうか。何のことはない、同じことを手を変え品を変え言っているだけだ。ちょっとは引き下がるとか、歩み寄るとかする気はないのか、と言うのです。

皆のお気に召すような、しかも、嫌でたまらない人の求婚から私を解放してくれそうな提案を、何であれ他に知っているのなら、勿論それを提案するつもりだ、と私は申しました。実際、父の同意なしには絶対に結婚しない旨を既に申し出てある　…　と言いかけたのです。

すると、姉が私を遮り、それは、哀れっぽい芸をして見せれば、父も母も好きなように言いくるめられるとの考えが私にあるからだ、と言うのです。

「頼り甲斐のない考えだわね」と、私は申しました。そして、そんな考えを役に立たないものにしてしまおうとしている人たちがいるのは、姉も知っているはずだ、と言おうといたしました。

きっと、私ならその人たちを思いのままにしてしまっただろうと姉は言うのです。面会を禁じられ、そのため、パグみたいな芸の披露を邪魔されることがなかったなら、私は伯父のジョンも、また、ハーヴィー叔母様のことも、自分の思いのままにしていたことだろう、と姉は言っておりました。

父や母、そして、他の皆が私をこんなにひどく扱うのはだれのせいなのか、そのヒントだけは与えてくれたわね、ベラ、と私は申しました。そして、でも、貴女が皆を意気地なしにしているのは確かだわね。無関係な人が貴女の言葉を聞いて私たちのことを判断するとしたら、私のことをずいぶん狡い人間と考えるか、あるいは、貴女のことをとても意地の悪い人だと思うことでしょうね、と言葉を続けました。

「その点では、あんたは確かに大変な策士よ」と興奮した姉が口を挟み、「これまでに私が知った人の中でも飛び切り狡い人間の一人だわね」と言うのです。そして、あまりにも下劣な、あまりにも姉らしくない言いがかりをぶつけてまいりました。私が媚びるような

言葉で人々をたぶらかしているというのです。私が姿を見せるたびに、一目置かれたり大事にされたりする人などは一人もいなくなって、まるで影みたいな存在になってしまうのだそうです。そして、「私とお兄様が何かを話題にして、皆さんの注目を集めていても、人を惑わす穏やかなプライドをちらつかせ、腰の低い意味ありげな態度であんたが割り込んで来ると、〈クレアリーさんの意見を聞きましょう〉という声が上がるものだから、私たちは話を中断されるか、やむなく黙り込んでしまうか、それとも、皆が聞いてもいないのに話を続けるか、そのどちらかになるのよ。そんなことがどれだけあったか知れないわ」

姉がいったん話を止めました。「あら、ベラ、続けてよ」　私は言いました。

呼吸を整えているだけのようでした。

「えゝ、続けるわよ」　姉が言いました。そして、「おじい様には魔法でもかけたんじゃないの。あんたの言ったことやしたことでなくて、おじい様の喜ぶことなんて、何かあったかしら。おじい様ったら、あんたのことになるとまるっきり他愛がなくて、あんたの巧みな弁舌に聞き惚れては、やがてメソメソと泣き言を並べていたわね。それにしても、一体あんたは何を言ったのかしら。私たちでは口に出来そうにもなかったことでよ。私たちがしようとしなかったどんなことをして上げたのかしら。そして、それはすべて何のためだったのかしらね。まったくの話、あんたのお上手な献身ぶりがおじい様にはどれほど効果があったのか、おじい様の遺言を見て分かったわ。ご自分の地所のうち、ご自分で手に入れた部分については、息子という一番近い相続人たちを差し置いて、孫に贈るというのですからね。それも、一番年の若い孫にだわ。しかも、女の子でしょう。一族の肖像画にしても、息子たちにではなく、あんたに譲るというのですもの。その理由というのが、あんたならあれを大切に扱い、近頃はお手本に倣うのを怠っているようだけれど、その華奢な手で綺麗にしてくれるからだというのですからね。おまけに、二、三代は受け継がれている、大変な数の家伝の食器類にしても、おじい様の〈かけがえのない娘〉(ア)が、全部自分のものにしようとして、おじい様の古臭い気障な好みのことを持ち上げ、褒めるものだから、換金はまかりならぬというのですものね」と言っておりました。

あまりにも下劣な言い種で、動揺はいたしませんでした。「本当に困った姉だこと。作為と本性の区別が出来ないんだもの。少なくともその気がないんですからね。喜んでいただこうとするのは、それが私には嬉しいからなのよ。それ以上の見返りを求めたりなんかしなかったわ。貴女が言っているような汚い動機で作為を弄するような気持ち、私にはありませんからね。おじい様がこんなふうに私を取り立ててくださらなかったら良かったのにと、心の底から思っているわ。おじい様はね、兄が身内の間でと同様、身内以外からも十分なことをしてもらえそうだと分かっていらしたのよ。貴女についても、そのことがあるから、お父様がより一層手厚い処置をしてくださるよう願っておられたわ。貴女たちがそうしていただけるのは間違いないことですもの。貴女も知っているでしょう、ベラ。おじい様が私に遺贈してくださった地所は、お遺しになった不動産の半値にもならないのですからね」と、私は申しました。

姉のほうでは、「何と言おうと、地所は手に入ったわけじゃない。それに、あんなにも特別扱いをしてもらっているのでしょう。地所そのものよりも、もっと財産が入ったって噂

(ア) 遺言の前文で用いられた言葉に言及したもの。二十一頁を参照のこと。

なのよ」と言っておりました。

「だからこそこんな不幸な目にあっているのじゃない、ベラ。貴女が妬んだりするからだわ、きっと。でもね、その財産だって、最善と思う方法で放棄したでしょう　…　」

「そうでしょうよ」と、姉が私を遮りました。その〈最善と思う方法〉というのが気に入らないというのです。私のことを猫を被った小さな魔女だと罵っておりました。「手管と下心で一杯のあんたの〈最善の方法〉も、あんたがそのお上手な追従と一緒に皆の前から締め出され、本音を言い出すように仕向けられなかったら、決して見破られることはなかったのよ。くだらない泣き言めいたごまかしで取り入るのを邪魔されることがなかったならね。まるで蛇みたいに、いつもお母様にまとわりついていたでしょう。あんたは強情者だから、何かに執着すると、お母様も断るのが辛くて泣いていたのよ」と言うのです。

「私が強情者ですって、ベラ」

「そのとおりよ。強情者だわ。何か譲ったことがあるかしら。お兄様や私がお願い事をすると、大したことでもないのに断られてしまったけど、あんたの場合は、何を頼むにしても、それを尤もなことだとお母様たちに思わせるような狡いところがあったのじゃないかしら」

「認めていただくのに相応しくないことなんて、ベラ、一つだって頼んだ覚えはなくってよ、私。自分のためのお願いなんて、滅多にしたことはないわ。他の人たちのためを考えていたつもりよ」

これを聞いた姉は、私のことを中傷家だと言っておりました。

「貴女の言っていることはね、ベラ、皆ずいぶん昔の話でしょう。子供の頃の間違いにまで触れるわけには行かないわよ。でもね、貴女が近頃見せているような憎しみがそんなにも根の深いものだったなんて思いもしなかったわ」

これもまた中傷だと怒り、「厚かましいったらありゃしないわ、おとなしい顔をして。最善の方法ですって　…　そして、これだけ毒のある言葉を吐くわけね　…　あゝ、クレアリー、クレアリー。あんたはいつだって裏のある女の子だったわよ」と、姉は叫んでおりました。

「すべてをお父様の管理に委ねた時には、私が裏表のある人間だなんてだれも考えなかったわ。これまでどおり、私のわずかな小遣い銭は全額お父様のお志だし、一シリングたりともお手当てを増やしていただいていないのよ。増やしてほしいとも　…　」

「だから、ズルだっていうのよ。それもあんたの術策の一つだったんだわ。だって、あんたに甘いお父様はすっかりその気になられて（そうなるだろうとあんたが踏んでいたのは、疑いのないところだわ）、感謝の念や孝養心に溢れた行いなのだから、譲られた地所から得たものはすべてあんたのために蓄えておくことにし、ご自分は執事の役目だけをしようとか、あんたにはこれまでどおりの手当てを保証しよう、などとおっしゃったのじゃなかったかしら。これもあんたの罠の一つだったのよ、クレアリー。だから、あんたがどんなに浪費をしても、皆ただで賄われたってわけよね」

「浪費ですって、ベラ。だけど、お父様が貴女には上げないで、私にだけくださったようなものなどあったかしら」

「それはそうね。お陰で、まともにはお願い出来ないほどのものをいただいたわ。だけど私はね、大部分は残してあるから、出して見せることも出来るけど、あんたはどう。見

せられるものはあるのかしら。洗いざらい探しても、おそらく、金貨五十枚だってないんじゃないかしら」

「確かにないわ」

「でしょうね。きっと、あんたのノートン・ママが　…　でも、それは止めておくわ」

「恥ずかしくないの、ベラ。あの立派なご婦人はね、暮らし向きこそ貧しいけれど、素晴らしい心をしていらっしゃるのよ。卑しいことの出来ない人を卑しめるような人間なんかより、はるかに立派だわよ」

「じゃあ、小さな頃から無駄遣いのためにいただいていたお金はどうしてしまったのかしら。ちょっと訊くけど［と、いたずらっぽい顔をして］、ラヴレースが、そう、あんたの色男さんが、あんたのために利子をつけて貸し出したのかしら」

「貴女のせいで顔が赤くなるようなこと言わないでほしいわね。姉でしょう。でも、利子をつけて貸し出されているのは確かよ。利子が利子を産むようになってくれたらと思うわ。使いもせずにキャビネットの中にしまい込んでおくのよりはましですもの」

どういう意味か見当はつく、と姉は言っておりました。私が男だったら、州の住民たちをすっかり手なづけるつもりだろう。大変な人気者だ。教会への行き帰りには、口々に祝福を唱える群衆が私の後を追い、他の者はだれ一人注意を向けてもらえないのだが、これは気持ちの良いことだろう。まるで世間中に吹聴しているようなもので、才能はあえて隠さず、といった態度だ。それにしても、日曜日に燦然と輝き出すのを禁じられ、これみよがしに施しをして歩くのも妨げられるのは、少々辛いことではないか、と言うのです。

「本当に意地悪ね、ベラ。私が閉じ込められているのは、大方貴女のせいでしょう。でも、どんどん続けたらいいんだわ。いずれ息が切れてくるでしょうからね。こんなことをされても、仕返しが出来たらなんて思わないわ。可哀相な人なのよね、ベラも」　私は微笑んでみせたのですが、姉妹同士にしては、蔑みの気持ちが出過ぎたのだと思います。

「生意気よ。人を馬鹿にするのは止してちょうだい［と、姉は語気を強めました］。可哀相なベラだなんて、妹のくせに偉そうな顔をするもんじゃないわよ」

「あら、いいわよ、お金持ちのベラさん」と、丁重にお辞儀をいたしました。「これならもっとお気に召すでしょう。ご自慢の蓄えにも相応しいでしょうからね」

「いいこと、クレアリー」　姉が片手を振り上げながら叫びました。「その〈従順さ〉にもう少し〈卑屈な〉ところ、〈謙虚さ〉にもう少し〈卑しい〉ところなしに、姉に相応しい敬意をもって私に接しようとしないのなら、分からせて上げても良いのよ」とです。

「これまで以上に虐待するってことをじゃないでしょうね、ベラ。それは不可能なことだわ。その振り上げた手を私の上に振り下ろすつもりじゃないのならね。そんなことをするのは、私も黙って耐えるわけに行かないけれど、それ以上に、貴女には似つかわしくない振舞いだわ」

「結構でしょう、従順なお嬢さん。でも、つい今しがた、あんたは交渉に取り掛かっていたわね。こんなに長居をしていたら、皆を驚かせてしまうわ。何かあんたのためにして上げられることがあるみたいに思うでしょう。それに、そろそろ夕食だわ」

心ならずも、涙が一滴頬を伝ってしまいました。「夕食の時の団欒って、本当に楽しかったわ。愛する家族が皆目の前に集まって、和やかに食卓を囲んでいたのですもの」と、溜め息交じりに呟いてしまいました。

これには、ただ蔑みが返ってきただけでした。ベラには人の痛みを思いやる心がないのです。この世の最高の喜びを味わうことが出来ないのです。もっとも、その無感覚さのお陰で多くの悲しみを免れているとも言えましょう。でも、このような感じ易い心に伴いがちな苦しみが十倍になるといたしましても、それがもたらしてくれます喜びを捨て去る気にはなれません。

姉に背を向けましたところ、私の〈応諾〉について、階下へ行って何か伝えることはあるかと尋ねてきました。

「ソームズさんの求婚から解放してくださるのなら、皆が私にさせたがっていることは何でもするつもりですと、そう伝えてくれて構わないわ」

「今のところ、あんたが望んでいるのはそれだけってことね、おべっか上手の当てこすり屋さん[何という言い方でしょうね]。でもね、てっきり大丈夫と思っていた獲物を手の中から奪い取られたりしたら、もう一人の男のほうがかんかんになって、恐ろしい勢いで吠え出すんじゃないかしら」

「お好きなように言わせて上げなければ駄目みたいね。でなければ、私たち、いつまでも話の的が定まらないでしょう。貴女の言い方だけど、あの方が吠え出したって、私は平気ですからね。仮に私がだれか他の人と結婚するとしても、あの方が結婚なさってからにすると、約束して上げるつもりよ。これくらいの譲歩では納得出来ないとおっしゃるとしても、私は納得していただかねばならないと思うわ。それに、もうこれ以上手紙のやり取りをしたり、お会いしたりするのは止めにするわ。この点については、どんなことでも約束するつもりよ。これなら大丈夫だと思うのだけど」

「でも、それじゃあ、お父様のお友達とか、何かそういった形で、行儀良くソームズさんにお会いして、お話をするのに異論はないってことよね」

「それは困るわ。あの人が見えたら、そのたびに部屋に引き下がるのを許していただかなくちゃ。もう一人の方との文通を止めるんだから、あの人とお話をするのも終わりにしてほしいのよ。そんなことをしたら、ソームズさんと一緒になるために手を切ったのだと思い込んで、ラヴレースさんを無分別な行動に走らせることにもなるでしょう」

「なるほどね。そこまであんたを言いなりにする力があのならず者には許されるということね。あの男を怒らせるのが怖いばかりに、お父様の屋敷の中だというのに、お父様のお友達を丁重にお迎えすることも出来ないわけね。こんな申し立てが行われる時のことだけど、あんたは一体何を期待しているのかしら。教えていただけると有難いわね。」

「何もかもよ」と私は申しました。でなければ、姉も言うように、すべてを棒に振ることになるでしょう。そして、「貴女からも口添えをしてもらえると有難いのよ、ベラ。そして、こう付け加えてちょうだい。おじい様のご遺言によって私に権利の出来たもの一切合切は、合法的にでもそうでなくても、私に可能などのような手立てを用いても、約束を果たす保証として、お父様やおじ様たちに、そして、兄にだって譲るつもりでいるということ、そして、もしも約束を破った場合、お父様のご厚意を期待すべきいわれはどこにもないわけだから、私はだれにとっても結婚する値打ちのない女になるはずだということ、さらに言えば、兄は辛く当たっているけれど、雇いの下女にも劣るような扱いはしないと約束してくれるなら、兄の家政婦として[私は家族にとって是非とも必要な存在でもないようだから]こっそりスコットランドへ行っても良いし、あるいは、従兄弟のモーデンのイ

タリア滞在期間にゆとりがあるのなら、従兄弟を訪ねてフィレンツェまで行く気もあるということ、いずれの場合にせよ、世間に対しては、私はあの世に召されたとか、世界の果てに行ってしまったとか告げれば良いわけで、身を隠した先とか行き先とかをどのように噂されようと、一向に構わない気持ちです、とだわ」と言ったのです。

「じゃあ、どうかしら、その結構な申し出を書き留めてくれないかしら」

「えゝ、喜んで」　そう言うと、私は控えの間に行き、今触れておりましたことと合わせ、次のような文面を兄宛に認めました。

親愛なるお兄様へ

受け入れていただけそうな提案を姉にしたつもりでおります。お兄様が認めてくだされば、きっと受け入れてもらえるはずです。後生ですから、お認めてくださいますよう、お願いいたします。お兄様の怒りを買ったことは大変悲しく思っておりますが、私ほどに兄思いの妹もいないつもりです。お願いです。報告をお受けになりましたら、意地の悪い解釈はなさらず、好意的に受け止めていただきたいのです。誠意を尽くした提案です。ごまかしはありません。策略もございません。ただひたすら言葉どおりにするつもりでおります。文書の作成はすべてお任せいたしますから、思いきり強い表現にしてくださって結構です。それに署名いたしましょう。法の定めの及びませんところは、私の決心と意思で補うつもりです。こうなれば、お父様の同意を得ないかぎり、どなたも私のことを求婚に値する女とは思わなくなるでしょう。また、どのような人が現れようと、どのような動機が生じようと、私のほうから提案を取り下げるつもりはございません。両親、そして、おじ様たちとの仲裁をしていただくには、お兄様が一番なのです。この願って止まない恩恵がお兄様の仲立ちのお陰ということになれば、どんなに嬉しいことでしょう。生涯そのご恩は忘れないつもりです。

苦しみ悩む貴方の妹

Cl. ハーロー

私が筆を走らせております間、姉は何をしていたとお思いでしょうか。何と、穏やかにハープシコードを弾いているのです。それも、呑気そうに鼻歌交じりです。

書き終えたものを持って姉のほうへ近寄りますと、姉は浮かれたような態度で立ち上がり、「まさか、もう書き終わったわけじゃないでしょう。まあ、書き終わったのね。何て筆達者な娘なんでしょう。で、読んでも構わないかしら」と言うのです。

「宜しかったらどうぞ。ねえ、ベラ、この提案の後押しに貴女にもご尽力をお願いしたいのよ。そうしたら［差し上げた両手をしっかりと握り締め、目には涙が浮かんでいたはずですが］、どこの妹さんにも出来なかったくらい、お姉さんを愛してみせるわ」

「あんたって妙な人ね」　姉が言っておりました。「どうしてもあんたには逆らえないのよね」とです。

姉は提案と手紙を手に取り、読み終わりますと、気取った様子で笑い出しました。「賢い人間でも、結構騙されるものなのね。ずっとからかっていたのに気づかなかったってわけね。この馬鹿げた代物を階下に持って行ってほしいのかしら」と言うのです。

「そんな姉らしくもない真似をして驚かさないでよ、ベラ。見せ掛けだけであってほしいわね。こんな冗談、ちっとも面白くないもの」

「愚かなものね。人間というのは、何かに夢中になると、だれもが自分たちと同じ見方をするとばかり考えてしまうものなのね。我が家でのお父様の権威はどうなると思っているのかしら。我が家ではだれが譲るのかしら。親なの、それとも、子供なの。お父様とソームズさんの間で実際に取り交わされた約束とどう一致するのかしら、こんな話が。あんたの放蕩者が〈世界の果て〉まで追っかけて来ることはないという、どんな保証があるというの。でも、いいわ。こんな素敵な条件なのに、私が仲直りの邪魔をしているなどと思われてもいやだから、今度だけ言伝をしてあげるわ。お父様がなんとおっしゃるか聞いてみるわね。だけど、前もって言っておくわ。こんな提案をしたって、肝腎の目的には役立たないわよ」

姉は降りて行きました。ところが、ハーヴィー叔母様とジョン伯父様が帰ってしまわれたらしいのです。全員が一致団結して行動する約束でしたので、翌朝、朝食の時に来てもらいたい旨、伯父と叔母のところに使いの者が出されました。

月曜日　夜十一時

どうやら、返答に値する人間などとは　…

返答に値する人間とは思っていただけないのでは、と考え始めておりましたところ、ベティがドアをノックし、「お休みでなければ、お手紙がございますが」と声を掛けてきました。ちょうど先に記しました会話の部分を書き終えたばかりでしたので、ペンを手にしたままドアのところまでまいりました。厚かましい娘は、「のべつ書き物をしていらっしゃるのですね、お嬢様。お書きになったものはどうやって送り出しておられるのか、不思議ですわ。でも、恋する人の傍らにはいつも妖精たちが控えていて、お手伝いをしてくれるそうですね」と言っておりました。娘はそそくさと引き下がってしまいましたから、たとえその気がありましても、この不遜な態度をそれ相応に咎めることは出来ませんでした。

兄の手紙を同封いたします。自分の優しさに期待出来るようなものは何一つないことを私に分からせようと、兄は心を決めているのです。でも、兄にいたしましても、すべてを思いどおりに進めるわけにも行かないようです。明日、身内の者たちが集まることになっておりますのも良い兆しでしょう。何か良いことを期待しております。それに、あれだけ理にかなった提案なのですから　…　ところで、夜が明けますまでの間、少しでも休むことが出来ますかどうか、試してみようと思います。

クラリッサ・ハーロー嬢へ

［先の手紙に同封されたもの］

お前の提案は、明朝、父と母、そして　身内全員によって検討されるはずだ。お前の厚顔無恥な振舞いのせいで、われわれはどれほど厄介な目に遭っていると思うのだ。私に手紙を書いてよこすとは、大した度胸だな。止まることなく、女々しい手立ての限りをぶつけているのにだよ。喧嘩で先に手を出したのは私だと非難しているが、もうお前には我慢ならん。元はと言えば、お前のことを考えるからこそ始まった喧嘩なのだ。

ならず者への好意をあれだけはっきり口にすれば、親戚一同としても、永久にお前とは縁を切らねばなるまいな。私としては、公言している気持ちと裏腹な約束をするような女は、今後一切信じないことにする。自ら破滅の道を進む力をお前から奪うこと、それこそお前を破滅から救うために残された唯一の道だろう。手紙など書くつもりはなかったのだが、お前の優しすぎる姉の説得に負けたまでだ。スコットランド行きの件については、その恩恵に浴すべき日は過ぎ去ったと言っておこう。祖父の代役にすべく、従兄弟のモーデンを祭り上げに行くのも勧めかねるな。それに、あの立派な紳士にしても、お前のために命に関わるような口論に巻き込まれ、そして、先に手を出した男と呼ばれないともかぎらないのだからな。

お前の放蕩児から身を隠すだの、お前を匿うため、嘘偽りを話してもらいたいだの、そんな提案をするとは、お前も大変な立場に身を置いたものだ。この調子では、監禁されているのが、お前にとっては何よりの幸せということだよ。教会でお前を懸命に捜していたという、あの乱暴者の態度からして、あいつがお前の心を捉えていることは、お前がぬけぬけと認めるまでもなく、十分に分かるというものだな。

一言で纏めるなら、両親にしてもおじたちにしても、お好きなようにして構わないということだよ。だが、一族の名誉のためなのだが、この件で主張を通すことが出来ない場合には、私はスコットランドに引き籠もり、だれにせよ、一族の者には二度と顔を見せないつもりでいるということだ。

JA. ハーロー

これこそ親類縁者なのでしょう。父、母、そして、おじたちへの燃え立たんばかりの忠誠心といったところです。でも、大切にされ、重きを置かれております自分の姿に、兄は気づいているのです。そして、それゆえに威張り散らしているわけです。でも、先にも申しましたが、兄とは違って、この不幸な仲違いを放置しておきますのを好都合なこととは考えない人たちから、何か良いことが期待出来るのではと思っております。

手紙　四十三
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月二十一日　火曜日

ねえ、ハウさん、私と同様、貴女も次のようにお考えではございませんでしたか。つまり、私の提案は受け入れてもらえたに違いないし、兄らしさの感じられないあの手紙の最後の言葉からいたしまして（私の提案が聞き入れられるようなことがあれば、自分はスコットランドへ引き籠もると脅している部分のことですが）、兄もそうなるだろうと考えていたのだ、とです。

私といたしましては、あの薄情な手紙を何度も読み返した後、おおよそ次のように結論しておりました。私と同じような状況にある他のどなたにいたしましても、おそらく言い出したりはしないくらいに自分に不利な条件なのですから、今朝の話し合いの後、きっと和解の案が持ち出されてくるに違いない、と思っていたのです。そう信じていた私は（こ

の難題は解決済みとばかり）、新たな問題に頭を絞り始めておりました。ラヴレースさんのお身内の有力な方たちが仲立ちをしてくださるとか、その方たちからのお申し出（私から仄めかしますよりは、あの方が提案してくださるのが筋でしょう）に動かされて、家族の者たちが考えを変えるということがないかぎりは、あの方との文通は一切断つことにするという、例の約束に関しまして、どうしたらあの方を宥めることが出来るのかと悩んでいたのです。

このような考えに没頭いたしております間も、気性の激しい人を相手にしなければならないのですから、あまり楽しい気持ちになれなかったことは、貴女にもお分かりいただけると思います。そうこうしておりますうちに、朝食の時刻が近づきまして、私を裁く者たちが顔を見せ始めました。

ある者の乗るチャリオットが、そして、それに続いて別の者の乗るチャリオットが、ガラガラと前庭を通り抜ける音を耳にいたしました時には、心臓がしきりに早鐘を打っておりました。そして、虚ろに響きます足音は、一人一人が馬車から降り、私が空想の中でこの人たちや他の裁判官たちのために作り出しました、そんな恐ろしい裁きの椅子に着こうとしていることを知らせているのです。

あれはハーヴィー叔母様ね、あれはジョン伯父様ね、今お見えになったのはアントニー叔父様だわと、私はそんなふうに考えておりました。そして、たまたまその場には居合わせなかったのですが、あの忌まわしいソームズさんが乗る四台目の馬車までも思い描いておりました。

そして、さあ、皆さん集まったわ。そろそろ兄が姉に報告を頼む頃ね。冷酷なベラは悪口を交えながら報告しているわ。姉の報告が終わったわ。皆で論じ合っているわ。兄が激怒して、スコットランドへ行くといきまいているわ。窘められたり、宥められたりしているのね、などと私は考えておりました。

それから、話し合いの様子を始めから終わりまで頭の中で想像して、この人はこんなふうに賛成するだろう、あの人はこう反対するだろうと、その台詞まで思い浮かべておりました。そして、皆の結論といたしましては、私の条件を受け入れ、行いを慎ませるための誓約書を作るよう指示があるだろうと、心密かに考えておりました。また、ソームズさんにはどの点から見ても私よりはずっとお似合いの奥さんを見つけて差し上げ、私が権利を喪失するとか、未婚のまま世を去るような場合には、祖父の地所の所有権についてソームズさんが私に提案している公正な条件を適用して、奥さんに地所が譲られるようにすることで意見が一致するものと想像しておりました。

そして、提案を確認するために降りて来るよう、そろそろお呼びが掛かるはずと考えていたのです。どんな顔をして恐ろしい裁き人たちの前に出たら良いのでしょう。問い質してくる者がいるでしょうし、また、無愛想に顔をこわばらせている者もいるでしょう。優しさを取り戻してくれる者が一人か二人いるかもしれません。こういったことにどのようにして耐えたら良いのでしょうか。心も千々に乱れることでしょう。

涙が溢れてまいりました。目を拭い、鏡の前に行き、気持ちとは裏腹な明るい表情を何度か作ってもみました。

そして、そろそろ［と、何か動きがありますたびに］最終結果を知らせに姉が来る頃だわと、私は思い巡らしておりました。またまた涙が溢れて来ます。金網に向かってはばた

く小鳥のように、狼狽のあまり、心は乱れるばかりです。拭っても拭っても、涙が流れてしまうのです。

あゝ、ナンシー(三五)［気まぐれな話をとりとめもなく、ごめんなさいね］、このようにして私は時を過ごしたのですが、考えたり想像したりしていたのはそのことばかりでしたのに、期待を掛けておりました話し合いの結果は、まったく別のものだったのです。

と申しますのは、十時頃に姉がまいりましたが、私の不幸が嬉しいのでしょうね。勝ち誇ったような顔付きで、片方の手を軽やかに振りながら、こう言ったのです。

「条件など一切なしに従ってもらうことになったわ、クレアリー。ご意向に異議を唱えたり、条件を持ち出したりするなんて厚かましい話だと、お父様はご立腹よ。それが当然だわね。あんたに一番ためになることをご存じなのはお父様なのよ。それにね、この憎たらしいラヴレースとあんたとの仲がかなりのところまで進んでしまっているのは、あんた自身が認めていることだし、もうあんたの言うことはだれも信じないわよ。ただね、あんたの提案が本心からのものだって、皆の疑念を晴らすような実例を一つ示してくれるのなら、話は別だと思うけど。

あら、驚いているの、あんた。口もきけないのかしら。じゃあ、別な結果を期待していたということね。それは妙だわね。何もかも認め、何もかも告白したわけでしょう。評判の思慮分別を欺くことなく …… 」

実際、暫くの間は言葉になりませんでした。目は座ったように一点を見つめて動きませんし、涙も流れません。でも、冷酷なベラが蔑むような態度を取るものですから、私もつい、「考え違いをしてたわ、私。確かにそうね。貴女にも、ベラ、姉らしいところはあるだろう、あってほしいと …… 」と言いかけました。

すると、姉が口を挟み、「何ですって。あれだけ慇懃無礼な言葉をぶつけたり、人を小馬鹿にした態度を取っておきながら、あんたのために作り話をするだなんて、そんなことが私に出来るとでも思っていたの。あんたの言ってることが本気かどうか、意見を求められた時に、あんたと彼氏の仲がどこまで進んでるか、皆に教えることが私に出来ないとでも思ったの。その我が儘なところを直して孝行心を取り戻させるのが目的だというのに、皆を欺いたり出来るとでも思うのかしら。あんたを呼び降ろすよう、私が皆に勧めるとでも思うの。あんたのための作り話をしたとしても、降りて来て、何もかもひっくり返してしまうことになるわけでしょう、あんたは」と言うのです。

「分かったわよ、ベラ。その分お世話にもならないってことじゃない。それだけのことだわ。私にはまだお兄様とお姉様がいるんだって思いたかったけど、どうやら、私の考え違いだったようね」

「おメメの霞んだ可愛い子ちゃんね」と、姉はそんな言い方をしていましたが、「まだ兄と姉がいると思いたかったというのね。その先も言ったらどう、クレアリー。［私の涙まじりの口調を真似ながら］お父様とお母様、それに、おじ様が二人と叔母様がいるとも思っていたけど、考え違いをしていたのね、それだけのことね、とでしょう。さあ、クレアリー、このとおりに言ってごらんなさいよ。当たっているところもあるわよね。だって、身内の者に従う気はさらさらないのだし、卑劣漢のほうを身内のだれよりも大事にしているわけですからね」というのです。

「貴女からこんな目に遭わされる覚えはないわ、お姉様。でも、可哀相な人ね、とだけ

言わせていただくわ」

「その軽蔑した態度も添えるわけね、クレアリー。そのツンとした顔は止めてくれないかしら。蔑みの気持ちで同情されるなんて、願い下げだわ。お願いよ」

「こういうやりかたって、きっと貴女にはぴったりなのね、ベラ。新たな才能をずいぶんと呼び出しているもの。でも、先へ進んでよ、ベラ。宜しかったら、話を続けてちょうだい。貴女を憐れんではいけないそうだから、自分を憐れむことにするわ。他の人はだれも憐れんでなんかくれないでしょうからね」

「それはね、あんたが　…　」と、姉が言い掛けました。

「止めて、ベラ」と、私は姉を遮りました。「憐れむに値しないからだと、貴女が言おうとしたのは分かっているわ。これからは、何につけても、貴女の言うとおりに話すことにするわ。それならお気に召すでしょう」

「じゃあ、ラヴレースは悪党だって言ってごらんなさいよ」

「そう思った時には言うつもりよ」

「じゃあ、そうは思わないってことなの」

「えゝ、思わないわ。貴女だって初めからずっとじゃないでしょう、ベラ」

「それ、どういう意味よ、クレアリー。[気色ばみながら]言ってごらんなさいよ。その非難はどういうつもりなの」

「どうして非難だと思うのかしら。私が何を言ったというのよ」

「本当に癪に触る子ね。だけど、あの悪党が二、三回しているという決闘についてはどう思っているのかしら」

「どう言ったら良いのか分からないわ。原因が分からなくちゃあ」

「決闘を認めたりするのかしら」

「そんなことはないわ。だけど、私にはどうにもならないことでしょう。あの人が決闘をするのは」

「階下へまいりましょうよ。強情を張るのは止めて、お母様の前で畏まって見せてちょうだい」

私は黙っておりました。

「階下へご案内いたしましょうか、お嬢様」と、引っ込めた手を取ろうとするのです。

「あら、お返事もいただけませんの」

私は黙って背を向けました。

「あら、私にも背を向けるの。お母様にご足労願いましょうか、あなた[と、後を追ってきて、嫌がる私の手を取ろうとします]。あら、まだお話しいただけませんの。ねえ、ご機嫌斜めのだんまりお嬢ちゃん、一言だけでも私に口をきいてくださらない。ソームズさんにはすぐにも二言(三六)申し上げなくちゃいけなくなるのよ、言っておくけど」

「じゃあ[一気に涙がこぼれ落ちました。それ以上堪え切れなかったのです]、それをこの世の名残の言葉にするわ」

「あら、あら[と、私の背けた顔をからかうようにハンカチで拭いながら、もう一方の手は私の手を掴み、茶化すような口調でした]、何にしても、口を開いてくれるのは嬉しいわ。それじゃあ、あの二言を口にする気になるかもしれないと思っているのね。ただ、それをこの世の名残にするっていうのね　…　まるで、感じやすい悲痛な心から漏れた〈我

が君〉ってところだったわよ、その言い種は」
「滑稽な人ね、ベラも」
「生意気なのよ、クレアリー［愚弄した言い方から尊大な口調に変わりました］。ところで、どうなの、謙虚な気持ちでお母様のところへ降りて来ることは出来そうかしら」
「こんなこと、もううんざりだわ。ねえ、ベラ、教えてちょうだい。お母様は会ってくださるかしら」
「大丈夫よ。最後には孝行を尽くすことが出来るというのならね」
「出来るわよ。そのつもりだわ」
「だけど、あんたの孝行というのはどういうことかしら」
「両親の言い付けに従って自分の気持ちは捨てるということよ。貴女には少し無理でしょうけれどね。そして、私以外ならどなたにだってお似合いという、そんな人と一緒になって惨めな思いをさせられないよう、お願いすることだわ」
「それ、私のことね、クレアリー」
「いけないかしら。貴女が訊くからよ。私と違って、あの人のことを高く買っているのでしょう。私には立派すぎるけど、貴女には物足りない人だなんて、皆も考えないと思うわ。だけど、ベラ、そんな侮辱した言い方は止して、私はどうなるのか、教えてもらえないかしら。どうしてもこんな扱いを受けなければいけないのなら、覚えておいてほしいのだけど、たとえ私が無分別なことに走っても、ひどい仕打ちに遭っていたのだから無理もないということになるのよ」
「やっぱりね、クレアリー。どうやら、言い抜けをたくらんでいるのね。あんたがずっと胸に一物持っているのは間違いないと、私たちも思っていたのだけど」
「仮にそうだとしても、貴女のほうでは、それにお兄様のほうでも、私が言い訳に事欠かなくなるように仕向けるつもりなのでしょう。とにかく、ベラ、昨日の話し合いの中でも最悪の部分を、こんなふうに蒸し返されるのはもう耐えられないのよ。お父様とお母様の足下に身を投げ出して、お二人の宣告を聞きたいわ。そうすれば、少なくても、貴女から受けている姉とも思えない侮辱には遭わずに済むでしょうからね」
「驚いたわね。本当にあんたなの。私のおとなしい妹のクレアリーなの、あんたは」
「そうよ、私よ、ベラ。だから、この家の子供として当然の庇護を求める権利はあると思うし、女性のものである拒絶の自由を守ろうとしているだけなのに、どうしてこんな扱いを受けなければならないのか、そのことも知りたいわね。しかも、両親に喜んでいただくため、自分の好みは諦めようとしているのですもの。これまではね、お話は間接的に使いの者から聞き、辱めのほうは直接受けても不平は言わずにいたわ。貴女は姉にすぎないのよ。兄だって私の支配者ってわけじゃないわ。それに、お父様とお母様がお元気なうちは、兄や姉、そして、召使たちにこんな扱いはしてもらいたくないのよ。私が自棄を起こして早まった行動に走るよう、揃ってけしかけているみたいじゃない。要するにね、ベラ姉さん、どうして私がこんな束縛を受けなければいけないのか、知りたいのよ。そんなことをして、一体どういうつもりなの。私はこの家の子供だと思われているのかしら、それとも、奴隷と思われているのかしら」
この間ずっと、姉は唖然とした顔付きで立ち尽くしておりました。実際に驚いたところもあるでしょうし、その振りをしていたところもあると思います。

「あんたなの。本当にあんたなのかしら。驚かすわね、クレアリー。でも、そんなにお父様とお母様のお話が聞きたいというのだから、階下へ行ってあんたの言葉を伝えて上げるわ。他の人たちもまだお帰りじゃないはずよ。もう一度皆さんに集まっていただきましょう。あんたも降りて来て、自分で言い分を述べたらいいわ」

「それじゃあ、そうさせていただくわ。でも、お兄様と貴女には席を外してもらいたいわね。私を陥れようとして、あなたたちが手を結んでいるのははっきりしているわけだから、裁判官には相応しくないでしょう。それに、貴女にもお兄様にも口を挟んでもらいたくないのよ。私の提案にしたって、貴女が正しく伝えてくれたとは思えないわ。そんなこと有り得ないと思っているのよ。私にこんな仕打ちをすることだって、貴女に委任されたとはとても考えられないわ」

「いいわよ、いいわよ、お兄様をここへ呼んで上げるわ。本気よ。お兄様に身の証を立ててていただくわ。私のこともね」

「会いたくないわ、お兄様には。不条理なことに、私に向ってにらみをきかせているけれど、あの態度を止めて、兄として来てくれるのでなければね」

「じゃあ、お兄様とか私には関係のないことだって言うの、クレアリー。私たちの妹が一族全員の名誉を汚すことになるのよ」

「どうしてそういうことになるのよ、ベラ。貴女がこんなにも気儘に扱っている男の人は、家柄も財産も立派なのよ。才能もおありだし、貴族と縁続きなのよ。貴女に相応しいと思われたこともあったわけでしょう。貴女と一緒になっていてくれたらと、心の底からそう思うわよ。一緒になれなかったからといって、私が悪いわけじゃないでしょう。貴女はこんな仕打ちに出ているけれど」

これを聞くと、姉はかんかんに怒り出しました。言わなければ良かったと思います。ベラは荒れ狂っておりましたが、その様子といったら …… 一、二度、殴り掛かろうとしていたように思います。手がムズムズするけれど、腹を立てるにも値しない、と言っておりました。それでも、なおも猛り狂っておりました。

私たちの言い争っているのが聞こえたのでしょうね。母に言われて、ベティが上がってまいりました。母のところまで来てほしいとの姉への伝言でした。それで、姉は降りて行きましたが、私がどれほど気性の激しい人間か、その本性を現したことを皆に話して聞かせるのだと脅しておりました。

三月二十一日　火曜日　正午

これまでのところ、姉からは何の音沙汰もありません。父母の前に身を投げ出させてほしいと言い張る勇気もございません。気持ちの高ぶっておりました時には、そう出来るものと思っていたのですが …… 今はいつものとおりに落ち着きを取り戻した状態で、ベラが戻って来るようなことになりますと、前と同じように弄ばれてしまいそうです。

あんなにも取り乱した姿のまま姉を帰してしまいましたのは、本当にまずかったと思います。でも、アントニー叔父様のお屋敷やチャペルのことに触れていた父の手紙が妙に気に掛かりますし、皆が物音一つ立てずにおりますのは、また大きな嵐が襲ってくる前触れではないかと、不安になります。

それにいたしましても、このラヴレースという人のことはどうしたものでしょうね。だ

れにも疑われていない例の塀の小穴（ハンナに頼みました手紙でお話ししてあったたものです）から、あの方のお手紙を取って来たところです。私が言いくるめられて、結局ソームズさんに有利なことになるのではないかと、ひどく心配しておられる様子です。そのような場合を仮定して、恐ろしいことがいろいろと書いてあります。私の受けている仕打ちにも大層ご立腹です「と申しますのも、どのような手を使っておられるのかは分かりかねますが、私の家の中の出来事を何もかもご存じなのは疑いありません」。破られることのない誓約と信義とをしきりに公言しておられますし、熱心に改心への誓いも立てておられます。この不名誉な監禁から逃げ出すよう、それはもう懸命の説得ぶりなのです。このラヴレースという人のことは、あゝ、ナンシー、本当にどうしたものでしょうね。

手紙　四十四
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

水曜日　午前九時

昨夜、ハーヴィー叔母様はここにお泊まりになり、ちょうど今、私のところから出て行かれたところです。姉と一緒に上がって来られたのです。皆としても、この根性の悪い立ち会い人を連れずに、叔母様独りをよこすのは安心出来なかったのでしょう。叔母様が部屋に入って来られた時、厳しい監禁の身にある哀れな囚人にとりまして、このご訪問は大変なご厚意ですわ、と私は申しました。叔母の手を取り、唇を寄せました。叔母も優しくキスをしてくれ、「貴女のことをこんなにも愛している叔母に向かって、何てよそよそしいんでしょうね」と言っておりました。

一族の平安のため、私を諫めに来たことを叔母は認めておりました。物腰についても気質の点でも、いつもはまことに柔和なところを見せていた私が、父や一族全員にとって大変重大な事柄に対して、頑として耳を貸そうとしないのは、虐待されているとでも考えているのでなければ、とても信じられないことだから、とのことでした。私が意地を張る原因につきまして、母と叔母は二人とも次のように考えたいというのです。つまり、私に対する最初の対応の仕方に原因を求めたいし、ソームズさんからの求婚の件では、元々、父や他の家族の者たちよりも兄が強く関与していたように私が勘繰っているためだ、というのです。要するに、叔母といたしましては、私が抵抗を止めるための口実を是非とも用意したかったのでしょう。この間、ベラはずっと鼻歌を歌ったり、あれこれ意味もなく本を開いたりしておりましたが、一言も口はききませんでした。

叔母は、父の名誉に関わる事柄でもあり、私の抵抗は無意味であるということを説明した上で、子としての務めを説いて話を終えましたが、姉が居合わせなかったならばこうまでは、とも思えますほどの（事情を考え合わせますと）強い言葉を使っておりました。

二人の間で交わされました議論をご紹介いたしますと、これまでに何度も口にしてまいりましたことの繰り返しになってしまいます。従いまして、叔母が話してくれました事柄のうち、新たな要素を含んでおります話題について報告することにいたします。

叔母はこんな言い方をしていたのですが、私が「屈しない」ことを知りますと、次のように言っておりました。つまり、ソームズさんとラヴレースさんのどちらとも一緒になる

わけに行かないが、それでも、身内の者たちを安心させるために、どうしても結婚しなくてはならないということであれば、自分としては、ワイアリーさんが悪くないように思うと言わねばならない。私はワイアリーさんのことをどう思っているのか、とです。

「そうよ、クレアリー。ワイアリーさんならどうかしら」　姉が口を挟みました。

魂胆はすぐに分かりました。私はラヴレースさんにすっかりのぼせ上がっていると言いたいのでしょう。その証拠を掴むためにわざわざ持ち出してきた話に違いありません。と申しますのも、ワイアリーさんはいたるところで、私への崇敬の念にも似た熱い想いを言明しておられますし、容姿の点でも考え方の点でも、ソームズさんよりははるかに難点が少ないからです。ソームズさんと同じ結婚条件がワイアリーさんから出されるはずはございませんので、どの程度までソームズさんの条件を考慮の外におくつもりがあるのか、皆の気持ちを試すことで、こちらも一矢報いてみたくなりました。

そこで、私の返事が仮にワイアリーさんに好意的なものであるとしたら、その場合、ソームズさんとのお話はなかったことにしてもらえるのかどうか、教えてほしいと頼みました。ワイアリーさんに対しては、ソームズさんへのような嫌悪は感じないことを認めた上での話です。

そのような提案をするのは任務外のことで、自分には出来ないと叔母は言っておりました。ただ、ラヴレースさんの望みが完全に断たれるまでは、父にいたしましても母にいたしましても、心が休まらないだろうということだけは分かる、というのです。

姉のほうでは、悪賢い子だこと、と言っておりました。

この言葉、それに、先の質問に加わってきたことから推しまして、これは計画的な罠に違いないと確信いたしました。

「叔母様、私を陥れようという兄の計略の支えとなります以外には、何の役にも立たないような質問は止していただきたいと思います。それにいたしましても、この忌まわしい人を押しつけられることなしに、私の苦難や不面目を終わらせる望みは何かないのでしょうか。私の申し出は受け入れていただけないのでしょうか。思い切って言わせていただけますなら、受け入れられて当然のものと確信しているのですが」と、私は申しました。

「でもね、あなた、そのような望みがまったくないとしても、親に対する子の務めを免除されるのだなどとは、まさか考えていないでしょう」

「そうなのよ」　姉が申しました。「疑いないわ。クレアリーちゃんの狙いはね、ラヴレースのところへ飛んで行かない場合には、地所を独り占めにして〈森の館〉に住み込むつもりなんだわ。独立してね。それを頼りに精一杯意地を張っているんですもの。そうなったら、ねえ、あんた、それはもう注目の的だわよ。あんたの知恵袋のノートン・ママが門口に貧乏人たちを集めてきて、ぼろを纏った連中と誇らしげな顔で、みっともない付き合いをするのよね。そんなところを見せつけて、あんたと同じことをしない周りのご婦人たち皆さんへの当てつけにしようってわけでしょう。これがあんたの腹だってことくらい分かっているのよ。家の外には貧乏人、中にいるのはラヴレースって寸法ね。一方の手で名声を築き上げ、片方の手で取り壊しながらね。何て素敵な計画なんでしょう。でも、言っておきますけど、私の可愛い気紛れ屋さん、おじい様のご遺志もお父様の今のお気持ち次第ってことなのよ。あの甘いおじい様がまだ生きていらっしゃって、お気に入りの娘のこれほどの変わりようをご覧になった場合、地所の件はどうなさっていたか、それを考えた

上で処置することになっているのですからね。要するにね、いいこと、あんたにあれを管理出来るだけの分別があるとお父様のほうでお認めになるか、それとも、あんたが親孝行に努めて、合法的に譲っていただけるようになるまでは、あんたの手には入らないってことなのよ」

「あらあら、ハーロー嬢、言葉が過ぎますよ。貴女の妹さんでしょう」

「あゝ、叔母様、言わせておきましょうよ。これまでハーロー嬢から受けた仕打ちに比べれば、こんなの何とも思いませんわ。平気な顔で悪態をつくのは妬みのせいか、それとも、私が従わねばならない、もっと権威のある人からのお墨付きをもらっているからなのでしょう。地所の権利を取り消す話にしても、私がその気なのでしたら、障害になることなどないはずです。自分の力は弁えております。でも、それを行使しようなどとは思いません。ですから、是非お父様に伝えていただきたいのです。お父様が私を屋敷から追い出されましても（このように閉じ込められ、辱められるのでしたら、むしろそうしていただきたいくらいです）、そして、貧窮の身に追いやられるといたしましても、ご意向に反するような救いの道は決して求めないつもりでいるということをです」

「そのことですけれどね、あなた」と、叔母が申しました。「結婚ということになりますとね、夫の気持ちのとおりにしなければならないのですよ。その夫がラヴレースさんだとしたらどうなるのです。あの人は機会さえあれば、両家の反目を一層煽り立てたがっているのですよ。それに、いいですか、貴女を尊敬しているようなことを言っていますが、本当にそうなら、あんなふうに挑戦的な態度は取らないはずでしょう。とても執念深い人だということで通っているのですよ。私たちの一族にきっと仕返しをするのだと、いつもあの人は息巻いているのですから、もしも私が貴女なら、クレアリーさん、たとえあの人を怒らせるようなことはしていないとしても、その仕返しが自分にも降り懸かってくるのではないかと不安になるでしょうね」

「ラヴレースさんが仕返しを口になさるのは、復讐するぞと脅されたことへのお返しですわ。ここ暫く、私もずいぶんと侮辱に耐えてきましたけれど、これはだれにでも出来るわけではございませんからね」

興奮したのでしょう。姉の顔はそれこそ朱を注いだようでした。

私は言葉を続けました。「でも、何十ぺんも申し上げてきたことですが、優しく扱っていただけるのでしたら、私にとってラヴレースさんのことはまったく問題外だと言って構わないのです」

姉が猛烈な勢いで何か言い出しましたが、私は、聞いていただくために声を高め、姉のことなどお構いなしに言葉を続けました。「ねえ、叔母様（と、挑発的な問い掛けをしてみました）、あの人が初めて我が家に紹介された当時だって、今言われておりますように、乱暴な人だということは分かっていたのではないでしょうか。でも、あの頃は、よく耳にする〈若さゆえの放蕩〉とか〈老いの身になれば〉といった言葉が言い添えられておりましたし、結婚をすれば、そして、思慮深い妻に恵まれれば、奇跡の起こることだってあるのだと言われていたのです。でも（と、姉のほうを振り返りながら）、どうやら、言い過ぎたようですわね」とです。

「いやな人ね、あんたも。悪口ばっかりじゃない。あの男が大嫌いになったのは何故だと思ってるの。好きなだけ悪事を重ねている証拠があるからでしょう。あんたは良い子ぶ

っているけれど、口先で言っている半分ほどでもまともな子だったなら、同じ効き目があって当然だと思うわ」

「証拠とおっしゃったのかしら、ベラ。貴女は証拠を掴んでなんかいないように思っていたのだけど。でも、貴女が一番よくご存じのことよね」

これはかなり嫌味な言葉だったと思いますが、いかがでしょう。

「いいわ、クレアリー。あんたのその執念深くて非難がましい小さい胸の中に、今この瞬間どんなことが詰まっているのか、すっかり教えてもらえるんだったら、千ポンド払っても良いわ」と、姉が言っておりました。

「もっともっと安い値段で教えて上げても良いし、これまで受けたのよりももっとひどい仕打ちだって、怖くなんかありませんからね」

「あらあら、お嬢さんたちとしたことが、残念に思いますよ。そんなに興奮し合っているところを拝見するのはね。分かっているでしょうね、あなた（と、私に向かって）、お母様が頭を下げることで、あるいは、お父様が権威にかけてですが、貴女の気持ちを動かすことがお出来になったのなら、貴女がこんなふうに部屋に閉じ込められることはなかったのですよ。でも、どちらかが折れなくてはいけないというのに、どうして親の側にそれを期待出来るのです。貴女の賢さの百分の一も持ち合わせない子供だけれど、もしも私のドリーが、これほど重大な件で面と向かって私に反対するようなことがあれば、私も機嫌良くあの子を受け入れはしないでしょうね。決してしないと思いますよ」

「おっしゃるとおりでしょうね、叔母様。そして、お嬢さんに私の兄とそっくりのお兄様と、姉そっくりのお姉様がいて［睨みたいのならどうぞ、ベラ］、私の兄と姉がしているように、二人してご両親のお気持ちを煽り立てるようなことをなさる場合、叔母様もきっと私の受けているような仕打ちをお嬢さんになさるのでしょうね。叔母様がお嬢さんに持ちかける相手の人をお嬢さんが嫌いだとしたら、それも、ソームズさんのことを私が嫌うのと同じほど理由のあることだとしたら　…　」

「おまけに、あんたがラヴレースにお熱なように、放蕩者で道楽者という男を好きになるとしたら、でしょう」　姉が口を挟みました。

「その時には［と、姉を無視して私は続けました］、お気持ちに従いますのを許していただくことも出来るのではないでしょうか。ただ、その場合であっても、叔母様のお気に召さない相手とは、叔母様の同意なしには決して一緒にならないことを天地神明に誓い、その保証もあるのでしたら、ハーヴィーお嬢さんのお父様とお母様にいたしましても、すっかり安心なさって、お嬢さんのお気持ちに圧力を掛けようとはなさらないはずだと私は思うのです」

「そうでしょうとも［と、姉が両手を差し上げながら叫びました］、今度は父親と母親にお鉢が回ってくるのね」

「でもね、あなた、もしもですよ」と、叔母が答えました。「娘が放蕩者を好きになっていることが分かったり、私の同意を得るために引き延ばしを計って、時間稼ぎをしているだけのように思えたりしたら　…　」

「叔母様、お話の腰を折って申し訳ございません。でも、もしもハーヴィー嬢が叔母様のご同意をいただくことが出来るのでしたら、その上どんなことをお話しする必要があるというのでしょう」

「そのとおりね、あなた。でも、決して同意は得られないでしょうね」
「だとしたら、叔母様、ご心配には及ばないでしょう」
「それはどうでしょうね」
「ご心配だとしても、叔母様、監禁したり虐待したりすることが、懸念されます早まった行動の防止策になるとお考えでしょうか」
「この種のことを仄めかされますとね、いいこと、だれだってただ無性に心配になってしまうものなのですよ。ですからね、貴女の気持ちを知っていながら、貴女に任せるなんてことは、とても出来ない相談なのです」
「叔母様、皆の心配はこのことが分かる前から、あるいは、ほんのわずかでも心配の種が出てくる前から始まっていたようなのです。でなければ、どうしてこんなふうに不面目な束縛を受けたりするでしょう。思い切って言わせていただきますが、私が辛い目に遭っておりますのは、脅して言いなりにさせようという謀りごとから来ていることだと思うのです[ベラが両手を差し上げておりました](私の反論には立派な根拠があることを承知しているのです)。私の振舞いに疑わしいところがあるからというわけではないのです。と申しますのも、初めて辛い目に遭わされました時にも、疑われるようなことは何一つしておりませんでしたし、私の分別に信頼を置いていただけるのでしたら、今だって疑いの余地など一切ないはずなのです」
叔母は、少しためらった後、「でも、考えてごらんなさい。もしも貴女がこの憎悪の的になっているラヴレースさんと結婚したりすれば、一族はそれこそ収拾のつかないことになってしまうのですよ」と言っておりました。
「あの嫌悪の的のソームズさんと結婚すれば、私がどれほど惨めな思いをするか、その点もお考えていただきたいのです」
「好きになれそうもないと思った人と結婚して、その後とても幸せになった娘さんも沢山いるでしょう。初恋の相手と一緒になる人は滅多にいないのですよ」
「きっとそのせいなのでしょうね、幸せな結婚生活を送っている人たちがこんなにも少ないのは」
「でも、最初に受けた印象で、その先もずっと大切にしておくのが相応しいようなものは珍しいのですよ」
「その点は、残念ながら同感です、叔母様。浮ついた第一印象などに、私、関心はないんです。ともかく、何度も申し上げてまいりましたとおり、私が望んでおりますのは、独身を通す許可をいただきたいということだけなのです」
「それは無理というものですよ。貴女が結婚して、ラヴレースさんの手の届かない存在になるのを見届けるまでは、お父様もお母様も安心は出来ないのですよ。貴女があの人に条件を提示しているように聞いておりますよ(あなたたちの間ではそこまで話が進んでいるのですね)。あの人と一緒になれないなら、だれとも結婚はしないってね」
「どこにも災いが起こらないようにするにはどうしたものか、他の良い方法を思い付かないのです。その点は素直に認めたいと思います。それに、あの方のことは問題外だとしたら、好意を寄せられそうな他の男の方はこの世におりません。それでも、私の全財産を捨てても構いませんから、あの方には何とか別の人と結婚してもらいたいのです。本当なのよ、ベラ。そんなふうに、信じられないという笑みを貴女は浮かべていますけどね」

「そのとおりかもしれないわね、クレアリー。だけど、笑うのは勝手でしょう」
「あの方のことは問題外だとしたら、ですって」と、叔母が私の言葉を繰り返しておりました。「やっぱりそういうことだったのね、クレアリーさん。私は階下へまいりますからね［お先にどうぞ、ハーロー嬢］。私の姉に来てもらうよう、何とかお父様を説得してみましょう。そうすれば、もっと良い結果が出るかもしれませんからね」
「叔母様、きっとこうなるに決まっているわ。お母様とあの娘とで二人して涙に暮れるというわけよ。でも、結果にはこんな違いがあるでしょうね。お母様のほうは弱気になって、胸に応えた様子で降りて来るわ。ところが、後に残した愛娘のほうは、お母様の優しさに付け込めたものと思って、いよいよ強気になるってわけ。そういうことがあるからこそ、あの娘は皆の前に顔を出すのを禁じられているというわけなのよ、叔母様」
姉は階段を降りながら、こんな調子でまくしたてておりました。

手紙　四十五
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

母に会えそうだという期待と、会うのが恐ろしい気持ち、また、これほど母を悩ませてしまいました恥ずかしさや悲しい思いが入り交じり、心臓は早鐘を打っておりました。でも、その必要はなかったのです。母は私のところへまいりますのを許してはもらえなかったのです。それでも、叔母は親切に戻って来てくれました。もっとも、姉も一緒だったのです。叔母は私の手を取り、傍らに座らせてくれました。
差し出がましいとは思うが、もう一度だけのつもりでやって来た、と叔母は言っておりました。私が反抗しているとどのような結果になるのか分かっているし、それが心配でもあるので、父の考えには背くことになるが、来ずにはいられなかったとのことでした。
それから叔母は、身内の者が私に期待している事柄を並べ立てておりました。ソームズさんの財産のこと（だれもが考えていたのよりも、三倍もお金持ちだということが分かったのだそうです）、申し出を受けている贈与財産のこと、ラヴレースさんの悪い評判やあの方に対する身内の者たちの敵意のこと、等々です。すべてがとても強い言葉で述べられたのですが、以前母が話してくれました時に比べますと、まだ穏やかなほうでした。きっと母は、私との間であったことを詳細に伝えるわけには行かなかったのでしょう。母から詳しい話があったのなら、叔母のほうでも、これをお読みになるとお分かりでしょうが、同じ趣旨のことをいろいろと繰り返したりはしなかったはずです。尊敬すべきご自分の姉がもっと強い言葉で説き聞かせましても、効き目のなかった事柄なのですからね。
叔母が申しますには、自分の子供に対して何の力もないように思われたりしては、父としても悲嘆に暮れることになるだろう、とのことでした。しかも、父の考えでは、私のためを思えばこそのことですし、また、皆がずっと溺愛していた子供のことでもあるのだから、というのです。そして、両手の指を組み合わせながら、とても腰の低い誠意溢れる口調で、叔母は次のように言葉を結びました。「大好きな、大好きなあなた、本当にお願いしますよ。私のためにも、あなた自身のためにも、そして、多くの人々のためにも、その毛嫌いする気持ちを克服してほしいのです。偏見を捨て、もう一度皆が幸せで安らかに暮ら

せるようにしてほしいのです。大好きな姪のことですもの、貴女になら跪いても見せますよ。そうね、跪いて上げましょう」

叔母が床に膝をつきましたので、私もそういたしました。このような真似は止めてくださいと、跪いて頼んだのです。両の腕で叔母を抱きしめておりましたが、そのお胸の辺りは、溢れ出る私の涙ですっかり濡れておりました。

「あゝ、叔母様、どうかお立ちください。そんな勿体ないことをされますと、私、心苦しくなってしまいます」

「じゃあ、言ってちょうだい、大好きなあなた、家族全員の気持ちに従うと言ってちょうだい。私たちのことを愛しているのなら、お願いですから …… 」

「そうするくらいでしたら死んだほうがマシと思っていることですのに、どうしてお約束出来るでしょう …… 」

「それじゃあ、考えてみると言ってちょうだい。検討だけはしてみると言ってくれないかしら。せめて希望を与えてほしいのよ。私の頼みが、こんな形でのお願いが、無駄に終わるようなことにはしないでちょうだい」 叔母はまだ膝をついたままでしたし、私も並んで跪いていたのです。

「何て辛い話なのでしょう。迷いがあるとでもいうのでしたら、それを克服することは出来ると思います。家族の心を引きつけておりますものが、私には何の魅力にもならないのです。あゝ、叔母様、同じことを何度繰り返さなければいけないのでしょう。独身のままにさせてくださるだけで …… 独りのままではいけないのでしょうか。申し出ておりますように、スコットランドでもフィレンツェでも、どこへでも追い払ってください。奴隷としてインドへ放り出されても構いません。こういったことでしたら、どれにも同意いたします。でも、我慢出来そうにもない人に誓いを立てるなど、考えられないのです。出来ないのです」

「分かりました」と、叔母は立ち上がりながら言っておりました（ベラのほうでは、口にこそ出しませんでしたが、両手を差し上げ、この意固地とも思われる態度を非難しているのです）。「何を言って聞かせても、私たちの気持ちに従ってはもらえないということですね」とです。

「大好きなハーヴィー叔母様、私に何が出来るのでしょう。何が出来るというのでしょうか。助長するつもりはございませんのに、希望を与えて構わないというのでしたら、叔母様の親切なご助言を検討いたしますと申し上げることも出来るでしょうね。でも、不誠実だと思われますよりは、むしろ意固地だと思われたいのです。それでも、何か妥協出来ることはないのでしょうか。思い浮かぶことは何もないのでしょうか。あの人が申し出ておられる契約条項そのものが道に外れたものだけに、なおさら嫌悪の情を募らせてしまうのですが、そんな男性と一緒になる以外に、方法は一切ないのでしょうか」

「今度はだれを非難するつもりなの、クレアリー。そこのところを考えるのね」と、姉が口を開きました。

「私の言うことをねじ曲げてほしくないわね、ベラ。だれからも同じ見方で受け止められるわけもないでしょう。不当な寄贈が行われた場合に、主に責任を問われるのは贈り主と受取人なのよ。不当だと考えていながら受取人になるというのでは、言い訳のしようもないでしょう。でも、何でこんな推測交じりのお話をするのでしょうね。何度も、本当に

何度もお話ししてきましたが、どの点から見ましても、あの人のことを考えますと、気持ちが滅入ってしまうのです。こんな契約に同意するような父親は、お父様以外にいるでしょうか。好きになれそうな見込みはどこにもないのですよ。正反対のことをはっきり申し上げているのです。ずっとこれまで、少しの心変わりもなく、気持ちの変わる兆しすら見せずに誓ってきたことなのです。でも、元はと言えば、これはお父様のなさったことではないのです。あゝ、何て意地悪な、何て残酷な兄でしょう。自分が同じ立場に置かれたなら、とてもおとなしくなどしていられないような、そんな仕打ちを無理強いしようというのですもの」

「この娘はすっかりのぼせ上がっているんですわ、ハーヴィー叔母様」　姉が申しました。「お分かりでしょう、叔母様。だれだって容赦しないんですからね、この娘は。確かなところを教えてやってくださいよ。この娘には何をしたって無駄ですわ。お願いです、叔母様、この娘の運命を告げてやってくださいませんか」

叔母は姉の手を引き、涙にくれながら、窓のところに引き下がりました。「私には出来ませんわ。本当に、私には出来ません、ハーロー嬢」と、叔母が小さな声で言っておりました（それでも、叔母の言葉は一つ残らず聞こえたのです）。「あの娘はとても辛い立場に置かれているのですよ。でも、心の気高い娘だということは言えますよ。本当に残念な話ですね、事態がここまで進んでしまったというのは。ソームズさんに思い止どまっていただくよう、お願いしなければならないでしょうね」

「まあ、叔母様まであの小さな魔女にたぶらかされてしまったのですか」　囁くような振りをしながら、姉が声高に話し掛けました。「お母様が上がってこられなかったのは幸いでしたわ。お父様だって、最初のお怒りが過ぎたら、あの子に丸め込まれてしまわれるのじゃないかと思いますもの。あの子を扱うなんてことは、お兄様以外の人にはだれにも出来やしないんだわ、きっと」とです。

「お兄さんに来てもらうことなど考えちゃいけませんよ」　相変わらず低い声で叔母が言っておりました。「あまりにも怒り狂っていますからね。あの娘の態度を見ても、頑固だとは思いません。強情なところも見当たりませんよ。お兄さんが来たらどんなことになるか、責任は取れませんからね、私。だって、二、三度思ったのですよ、あの娘は卒倒してしまうのではないかとね」

「あら、叔母様、心臓は丈夫なんですわ、あの娘。ご覧のとおり、叔母様が跪いてお願いなさっても、まったく耳を貸そうとはしませんもの」

姉が叔母を残してこちらにやってまいりました。叔母は私たちに背を向け、窓辺で考え込んでいたのです。好機とばかり、姉はさらに無慈悲に侮辱を加えてまいりました。と申しますのも、私の控えの間に入りますと、母が届けてくれました服地見本を手に取り、私のところへ持って来て、傍らの椅子に広げました。そして、次々に肩から袖口へ垂らして見せながら、表向きは落ち着き払った様子で、でも、叔母には聞こえぬよう囁き声で、こんなふうに話し続けておりました。「この生地で十分綺麗よ、クレアリー。でも、これは本当に素敵ね。これにしたらどうかしら。私ならこれはナイトガウンにするわ。こっちは二着目のスーツにするわ。ねえ、おばあ様からいただいた装身具類をセットし直してもらうよう頼まないの。それとも、ソームズさんが贈ってくださるという新しいので飾り立てるつもりかしら。あの方、プレゼントに二、三千ポンドも当てるとおっしゃってるのよ、あ

なた。何て豪華な装いになることでしょうね。あら、声がないわね、ノートン・ママの愛娘さん。あら、やっぱり黙ったままなのね。でも、クレアリー、ベルベットのスーツにしたらどうかしら。州の教会じゃあ目立つわよ。気候だってこの先ひと月は大丈夫じゃないかしら。真紅のベルベットでしょうね、きっと。あんたは肌が綺麗だから、とても引き立つと思うのよ。紅をさしたみたいに可愛らしいと思うわ。おやまあ（と、からかっておりましたが、こんなふうに馬鹿にされるものですから、私は溜め息をついていたのです）。溜め息をついているのね、あんたは。それじゃあ、厳粛な結婚式でしょうから、黒のベルベットではどうかしら。相変わらず黙り込んでいるのね、クレアリー。黒のベルベットにしましょうよ。あんたはとても色白だし、目が綺麗なんだから、冬空の雲を通して輝いて見えるわよ。四月の太陽みたいにね。ラヴレースもあんたに言ってるのじゃないかしら、魅力的な目をしてるって。とても素敵な姿に映るわよ、どなたの目にもね。あら、まだ黙っているの。ところで、レースのことだけど、クレアリー　…　」

　目頭を押さえながら叔母が近づいて来なかったなら、姉はなおも続けていたことでしょう。「おや、何をこそこそ話し合っているのです、お嬢さんたちは。内緒のお話はとっても打ち解けた感じですし、上機嫌のご様子ですから、階下へは良い報せを持って行けそうですわね、ハーロー嬢」

「服地見本について、私の意見を言っているだけですわ。ほら、これよ。確かに、頼まれたわけじゃありませんけどね。でも、黙っているところからして、私の考えに賛成のようですわ、この娘」

「まあ、ベラったら。ラヴレースさんが貴女の言葉を真に受けたりなさらなければ良かったのにって、つくづくそう思うわ。貴女もこうなる前は、自分自身のことに考えを巡らせていたのでしょう。それで、貴女と同じように、私も幸せだったのよ。ねえ、私の責任だったのかしら、うまく行かなかったのは」

　姉の興奮ぶりといったら、大変なものでした。

「嫌味を言うのは好きなくせに、言われるのは嫌いってわけね、ベラ。それじゃあ、あまりにも不公平じゃない」

　卑劣にも姉は罵り始めました。

「あら、お姉様、もしかして思っているかもしれないものよりも、今の言葉にはもっと含みがあるみたいな、そんなお怒りようね。私の願いは心の底からのものだわ。私たち二人のためにね。一族全員のためにもだわ。それに、そう願ったからといって、一体何が（今ではどんな利益が）あるのよ。ねえ、ベラ、私に対してそんな態度を取る理由が見つかったようだと、そんなふうに考えたくなるような根拠は与えたりしないでほしいのよ。今までは、姉と妹の間だというのに、まったく説明のつかない振舞いでしたからね　…　」

「これこれ、クレアリーさん」と、叔母が申しました。

　姉はますます怒り狂っておりました。

「笑い種になるほうがはるかにぴったりしているのよ、貴女には。人を笑い者にするのよりもね。それはそうと、自分に鏡を向けてご覧なさいな、ベラ。その衣裳、貴女には全然似合わないわよ。残酷にも、私に押し付けようとしていたけれど　…　」

「これこれ、クレアリーさん」　叔母が繰り返しました。

「姉の野卑な侮辱の言葉を耳になさっておられたなら、叔母様、同じようにハーロー嬢

にも〈これこれ〉と言ってくださるはずですわ」

「参りましょう、叔母様」と、姉が激昂して叫びました。「あの娘のことは放っておけば良いんです。自分の毒で膨れ上がって破裂してしまうでしょうからね。もうこれっきりあの娘の傍には近寄らないつもりです。こんな気持ちではね」

「こんな手本を示す人が非難されるのは当たり前だけど、その手本を真似るような卑しい心が私にあれば」と、私も言い返してやりました。「貴女みたいに嫌味な人をやり込めるのなんて、造作のないことだわ。露骨に言い返せばいいんだもの。驚いたわね。私を挑発しようというんですもの。でもね、ベラ、どうしても行くというのなら（姉は足早にドアのほうへ向かっていたのです）、今度のことは許してほしいのよ。私のほうでも許すつもりよ。二重の意味で、貴女のほうから許してくれるのが理屈でしょう。年上なのだし、苦しんでいるのを承知で故意に苛めていたんですからね。でも、私には無理だけれど、貴女には幸せになってもらいたいの。私の半分も試練に遭うことのないよう、祈っているわ。この点は安心してもらっていいけど、貴女が私にしてきたような仕打ちを貴女にしようとする妹なんて、いるはずもないってことだわ。だから、貴女に神様のお恵みがありますように　…　」とです。

「あゝ、あんたって娘は　…　」　最後までは言わずに、姉は駆け降りて行きました。

「叔母様、今少しの間お引き止めいたしますのをお許し願います」　私は跪き、両腕で叔母の膝を抱き締めながら訴えました。「哀れな姉について何か申し上げようというのではございません。姉の場合は、自ら招いたことなのです。叔母様のお心遣いが何もかも勿体なくて、そのお礼を言わせていただきたいのです。このように優しくしてくださる身内の人に耳も貸さない態度を取ってまいりましたが、意地を張っているとはお考えいただきたくないのです。それだけはお願いいたします。叔母様を前にいたしましての失言や失態の数々、どうかお許し願いたいと思います。哀れなベラに密かに遺恨を抱いているからなのではございません。思い切って申し上げますが、姉にしても兄にしても、また、お父様でさえ、血の滲む思いでおります者のことを分かってくださらないのです」

姉のいないことが私にとって有利に働いておりますのが目に見えて分かり、慰められる思いがいたしました。「さあ、お立ちなさい。心の気高い姪ですね。素晴らしい娘だわ。「叔母はこんな言葉を口にしてくれたのです」　私に跪いたりするのは止すのですよ。これから話すことは内緒にしてくださいね。とても口では言えないほど、貴女には感心しているのですよ。貴女の地所の権利を主張せずにいられるのなら、そして、ラヴレースに近づかないよう決心出来るのなら、これまでもそう思っていたのですが、貴女はやっぱり、私の知っているかぎり、その年頃としては一番の奇跡的な娘ということでしょうね。でも、急いでお姉さんの後を追わなければなりませんからね、私は。最後にこれだけ言っておきますよ。出来るのなら、お父様のご意向に従うことです。そうしてくれると、大変なお手柄ということになるでしょうね。神様にお祈りするのです。従う力を与えてくださるようにね。どのような御業がなされるのか、分からないでしょう」

「一言だけ、どうか叔母様、一言だけお聞き届けください（叔母は立ち去ろうとしていたのです）。あのノートン夫人のために、叔母様に出来るかぎりのお口添えをいただきたいのです。世間的にはただの弱い女性です。病気に罹ったりなさると、母の愛顧なしには生きる術も見つからないことでしょう。私には援助を差し延べる手段もなくなるのです。自

分の権利を主張する前に、生活にも事欠くことになるでしょうからね。それに、これは確かなことですが、父に従うよう夫人がいろいろと言い聞かせてくださいましたから、私もそのお言葉に少なからず動かされまして、大それた行動は避けるよう心に決めた次第なのです。なのに、家族の者がついにはそのような行動を強いるようなことになるとしたらどうでしょう。ただ神様に祈るしかございません。しかも、身内の者たちは、私が夫人の助言を受けられないようにしているのです。また、女性の中でも一番優れた者の一人に不当な評価を加えているのです」

「嬉しいことを言ってくれましたね。さあ、これを受けてちょうだい。もう一度ね。もう一度ですよ。素敵な姪だこと（ほぼ一言ごとに私のことをこのように呼んでくださいましたが、熱心に私に接吻し、首のところに両腕を回してしっかりと抱き寄せてくれたのです）。神様が貴女をお守りくださり、正しい道をお示しくださいますように … でも、何としても従わねばいけません。きっとですよ。貴女に残されているのは、今日から一月以内のどの日かを選ぶことだけなのですからね」

おそらくこれが、姉が要求しておりました宣告のことなのでしょうね。でも、前に言い渡されましたことに比べますと、まだマシな感じです。

叔母はこの後半の言葉を前半のものよりも大きな声で繰り返しました。そして、「いいですね、あなた、仰せに従うのが貴女の努めですよ」と付け加え、降りて行きましたが、後に残されました私は胸のつまる思いで、止めどなく涙が溢れておりました。

今回の出来事をこうして綴り直してみますと、それだけで、あの場で感じましたのと変わらないほど、不安な気持ちで一杯になってしまいます。

もう筆を置かねばなりません。涙ですっかり目が霞んでしまい、虹のとりどりの色で覆われているみたいなのです。とても筆を進めるわけにはまいりません。

水曜日　五時

数行付け加えさせていただきます。叔母が私を残して降りて行きますと、階段の下のところに姉が待ち構えておりました。自分が出た後、叔母がずいぶん長居をしていると思ったのでしょうね。黙って従うように言い聞かせている叔母の最後の言葉が耳に届いたためでしょうが、そのことで叔母を褒めそやし、私の強情さについてさかんに非難しておりました。「あれほどの天の邪鬼、お聞きになったことございます、叔母様。叔母様のクラリッサ、いいえ、皆のクラリッサがこんな娘だったなんて、お考えになること出来ました。おっしゃるとおりですね。だれが折れるのかということですわ。父なのか、あの娘なのかということですわ」といった具合でした。

叔母が姉に何か返事をしておりました。口調からいたしまして、私に同情的なものだったのだろうと思いますが、言葉は聞き取れませんでした。

これほど理不尽なやり方ですのに、どうしてあんなにも固執するのでしょう。奇妙な話です。ただ、兄と姉が私の言動のことごとくを絶えず歪曲しているということです。そして、私は自己弁護の機会を奪われているのです。これほど気の荒い娘だということが分かっていたら、私を相手にしたりはしなかっただろう、と姉が言っております(ア)。そして今

(ア) 二百十八頁を参照のこと。

では、意地を張っているように思われております点を、私の人柄全般とか生まれつきの気質とかとどのように折り合いをつけたら良いのか分からぬまま、私が根負けするのを期待しているらしく、様子を見ながら手口を変えることに決めているのです。兄は、ご覧のとおり(ア)、どうあっても自分の思いを通す覚悟で、それが果たせないなら、ハーロー邸を捨て、二度と再び戻らないと言っているのです。ですから、皆としては息子を失うことになるのか、それとも、世の親にとってはかつてなかったほど強情で、この上なく恩知らずな娘を説き伏せるのか、そのどちらかになるというわけです。これが今回の件での兄の姿勢なのです。そして、自分の助言に従ってくれるなら、私を黙らせてみせると請け合ったらしいのです。この点がさらに試みられることになるのでしょう。これは間違いのないところだと思います。皆の次の出方はどうなるのか、見当もつきません。

これと共に、この前の日曜日にいただいたお手紙への返事を急ぎお送りいたします。月曜日に書き始めたのですが(イ)、最後まで書き終えたわけではございません。写しを取るには長すぎますし、その暇もございません。大変無礼なことを申し上げている部分もございます。書き留めましたことすべてが気に入っているわけではありませんが、ただ、書き改めるつもりはございません。あのような話題を扱いますのには、気持ちが十分に落ち着いていないのです。どうかお腹立ちのなきよう、お願いいたします。書き手に免じてということで、ご寛恕いただけます部分が一、二箇所ございましたら、幸い至極に存じます。

貴女のクラリッサ・ハーロー

(ア) 二百二十七頁の兄の手紙に見られる。(イ) 手紙四十を参照のこと。

第一巻　目次

この版においては、総目次を（先の版でのように）第一巻の巻頭に置くのではなく、各巻個別の目次をそれぞれの巻に添えるのが妥当なことと判断された。これは主たる物語内容に関する索引としてのみならず、要約としても役立つであろうが、読者はこの要約により、出来事を予知することなく、〈生活と習俗の記録〉に求められる注意力をもって後続の巻へ移ることが可能となるのである。また、この生活と習俗の記録は、その資格において、一時的な娯楽以上のものとなることが意図されているのである。

手紙　一　ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

ラヴレース氏と彼女の兄との決闘、および、その一件に際して彼女が受けた仕打ちの詳細と併せ、ラヴレースが姉アラベラへの求婚者として紹介された後の彼女に関する顛末一切の報告を求める。彼女の優れた美点を称賛し、二人の友情を誇らしげに語る。

手紙　二、三、四　クラリッサからハウ嬢へ

求めのあった件の詳細と併せ、自分に対する兄と姉の悪意、ならびに、兄とラヴレースとの反目の理由に触れる　…　さらに大きな災いを防ぐため、母親は彼女とラヴレースの秘密の文通を黙認しているとのことである。一敵対者が報告するラヴレースの人物像について。祖父の遺言状前文の写し。

手紙　五　同　右

彼女の父親、母親、そして、兄についての手短な人物描写。一族の中で兄が重きを成していることについて。ハウ嬢が兄の求婚を励ましてくれていたなら、と願う。父親の不機嫌さ、および、母親の無抵抗な態度に対する言い訳を見つけ出そうと骨折る。

手紙　六　同　右

ラヴレースに対する敵意から、シムズ氏、マリンズ氏、ワイアリー氏との縁談が順に持ち込まれる。そして、彼らが拒絶されると、ソームズ氏との話が持ち上がる。数日間ハウ嬢を訪ねる許可が与えられる。その際の兄の無礼な態度。

手紙　七　同　右

ハウ嬢のところから戻った際に受けた厳しい出迎えの様子について。ソームズの初めての訪問。

手紙　八　同　右

一族全員がソームズの支持を決意。彼に対する嫌悪の情。彼を拒む。そして、礼拝式への出席や、人を訪ねること、訪問を受けること、あるいは、だれにであれ、屋敷外の者に手紙を出すことを禁じられる。

手紙　九　クラリッサからハウ嬢へ

ハウ嬢と秘密の文通を続けるための便法。この種の人目を忍ぶ行動を取らざるを得ない立場であることへの遺憾の思い。

手紙　十　ハウ嬢からクラリッサへ

ソームズのような男との縁談を持ち出したことに対し、ハーロー一族を痛罵。彼らの人物像を描いてみせる。アントニー・ハーローが母親を訪ねることを警戒。ラヴレースへの好意と思しきものに関し、友人を冷やかす。

手紙　十一　クラリッサからハウ嬢へ

ハウ嬢の冷やかしに苛立ち、かつ、懸念を抱く。ラヴレースへの愛情に溺れはしないという、彼女なりの理由。

手紙　十二　ハウ嬢の返信

冷やかしを続ける。フォーテスキュー夫人から聞いたラヴレースの人物像を示す。

手紙　十三、十四　クラリッサからハウ嬢へ

ソームズの求婚を支持する一族の魂胆について。彼女を窮境に追い込んだことで、兄と姉が勝ち誇っている様子。

手紙　十五　ハウ嬢からクラリッサへ

アラベラが抱いている悪意について解説。祖父から遺贈された地所の権利を放棄した点に関し、彼女を咎める。

手紙　十六、十七　クラリッサからハウ嬢へ

父親の面前でのソームズに対する振舞いにより、父親を怒らせる。母親との愛情の籠もった会話。ソームズの求婚から解放してもらえるなら、ラヴレースのことは一切諦める旨の申し出を行う。ラヴレースからの手紙のうちの一通と彼女の返事、ならびに、それに対する氏の返信の要旨。ある申し出を行う。その申し出を携え、母親が階下へ向かう。

手紙　十八　同　右

申し出は拒絶される。母親が態度を硬化。母親とのもう一つの興味深い会話。

手紙　十九　同　右

自らの地所を父親の手に委ねることに関する忠順な動機。ソームズを夫にすべきでないと考える理由。母親のことを思い、苦しむ。

手紙　二十、二十一　同　右

母親との再度の協議。母親は憤慨して去る。母親の愛顧を乞うために階下へ向かう。ソームズの来訪。退出しようとするが、禁じられる。その後の成り行きについて。

手紙　二十二　同　右

ラヴレースからの手紙の要旨。礼拝式出席の許可を願い出る。兄に問い合わせるよう言われ、兄からは無礼な態度で断られる。兄への手紙。兄の返事。

手紙　二十三、二十四、二十五　同　右

忠実なハンナが不名誉な形で暇を出される。姉の女中ベティ・バーンズが彼女の見張り役に就く。だれにせよ、身内の者の前に許可なく姿を現すことは禁じるという、兄からの手紙。彼女の返事。母親宛に書き送る。母親の返事。父親宛に書き送る。父親の返事。

手紙　二十六　同　右

自分に関するM卿一族の意見を知りたいと願う。彼女の身内から受けている侮辱に対して憤慨する、ラヴレースの手紙の要旨。子の務めに背く事柄で、氏が彼女に期待出来るものは何一つとしてないことを腹蔵なく伝える。氏からの手紙は次のもので最後にしてもらう旨を力説する。

手紙　二十七　ハウ嬢からクラリッサへ

地所を取り戻すよう助言。ソームズの風刺的な描写。M卿ならびに卿の一族の意見を知りたがることに関し、クラリッサをからかう。互いに愛着を覚える原因をそれぞれの気質の違いに求める。クラリッサの一件に関して母親と交わした会話の詳細を述べる。ハーロー一族を非難。とりわけ、その無抵抗ぶりに対し、ハーロー夫人を非難。

手紙　二十八　クラリッサより［返事として］

身内に対する失礼な言動に関し、ハウ嬢を窘める。特に母親を弁護。彼女自身の母親に対する軽薄な態度に関しても、ハウ嬢を窘める。腹蔵のない扱い方をしてくれるよう希望しているが、恋しているように言われるのは望んでいない。その理由。

手紙　二十九　同　右

兄と姉に宛てた諫めの手紙。二人からの返事。

手紙　三十　同　右

一族の教会に姿を現した件で、ラヴレースに対し激怒。プライドについての所見、等々。

手紙　三十一　ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

プライド、復讐心、愛、野心、あるいは、征服欲が明らかに自分の支配的な感情だということ。手中にすることの出来る女性すべての操を奪おうという、若き日の誓い。その口実。ハーロー一族への復讐を仄めかす。企みの数々を自慢げに語る。クラリッサにぞっこんの様子。彼女の美しさと長所に対する高い評価。だが、自分よりも身内の者たちを優先する彼女に腹立たしさを覚えている。ただ、故意のプライド、蔑み、尊大さ、あるいは、感受性の欠如については、その疑いを解いている。かくも用心深く、かくも慎重な淑女を奪い去ることが出来るなら、女性ならびに彼女の一族全員に対する大勝利だ

ということ。妹を手に入れられない場合には、兄を連れ去ることを決意。放蕩児ではあるが、クラリッサ以外の女は一切念頭に浮かばない。氏の言う「天誅」を下す機会が訪れそうな気配もあり、ベルフォード、モーブレー、ターヴィル、および、ベルトンに対し、招集に応じるべく準備を整えておくよう警告する。

手紙　三十二、三十三　クラリッサからハウ嬢へ

おじ二人に宛てた手紙、および、彼らからの特徴的な返事の写し。ソームズに宛てた諫めの手紙。彼からの返事。ソームズに宛てて一筆認めたことで、兄から無礼な手紙を受け取る。

手紙　三十四　ラヴレースからベルフォードへ

自分のところを訪ねるよう指示。その目的について。素性を隠して逗留している粗末な旅籠、および、氏がローズバッドと呼ぶ、宿の無邪気な娘の描写。この娘は見逃すことに決める。動機となっているのはプライドならびに深慮であり、信条からではないということ。自らの不道徳な傾向についての率直な感想。仮に田吾作であったとしても、札付きになっていたはずとのことである。氏に言わせるなら、自らのいくつかの悪行の償いとしてということであり、また、いずれ明らかになるその他の理由からも、ローズバッドに対する寛大な処置を決意。

手紙　三十五　同　右

狡猾な企み、ならびに、ジョゼフ・リーマンとの取引について。復讐心と恋情とが交互に優勢を占める。愛情によって上首尾を得られないなら、たとえ永久に国外追放の身となるにしても、ハーロー一族への恨みを晴らすことを誓う。薪小屋でクラリッサの前に身を投げ出すつもり。色好い返事の見込みがないと思われる時は、彼女の拉致を試みる考えだが、氏に言わせるなら、それはユーピテルにとっても恥ずかしくないレイプとのことである。将来に亘って氏の道義心に信頼を寄せてもらうためだが、彼女と面会した際に用いようと、心に決めた手管の数々。

手紙　三十六　クラリッサからハウ嬢へ

薪小屋で、変装したラヴレースが不意に姿を現す。氏の姿を一目見た時の恐怖。その慇懃な振舞いにより、氏は（目論見どおりに）大いに彼女の信頼を得る。

手紙　三十七　ハウ嬢からクラリッサへ

クラリッサはラヴレースに恋情を抱いているはずとハウ嬢は推察するのだが、その恋情を素直に認めないことを冷やかした後、氏に備わる最良の資質の点では氏をどの程度望ましいと考え、また、最悪の性質についてはどの程度まで氏を拒否すべきと考えているのか、その点を知りたいと要望。

手紙　三十八、三十九　クラリッサからハウ嬢へ

敬意を示してくれる男性への横暴さを否認。抱いていると言われる恋情も、子の本分に

反するものであり、従って、罪深い感情であると両親からは見做されているし、相手と想定されているのは品行に欠点のある人物であって、彼女の不幸な状況は考慮されて然るべきであるということ。ソームズのために影響力を働かせるよう遣わされたノートン夫人の訪問により、手紙を中断する。二人の間で交わされた心打つ会話。その折のことと、その後の出来事。

手紙　四十　同　右

要請された話題を再開。いかなる種類の男性ならラヴレース氏よりも優先出来るのかについて。氏にとって有利な点と不利な点につき、自らに対して用いた論拠。現時点において道徳的な男なのであれば、これまでに出会ったすべての男性に優先して氏を選ぶ旨を率直に認める。しかしながら、身内の者たちに申し出ていたように、一方の男性から逃れるためであれば、片方の男性を惜し気もなく諦めることが出来ると確信。ハウ嬢の冷やかしにより、繊細な心を傷つけられる。その理由。外観や容姿が女性に及ぼして構わない影響力の程度に関し、私見を表明。

手紙　四十一　同　右

母親からの、全員の願いを入れてくれるように懇願する、（豪華な絹地見本を添えた）手紙。身を飾るに当たって、良き妻が主たる眼目として然るべき点。彼女の苦しみ。母親独りのところへ伺う許しを願い出る。婚礼の日の準備をするよう命じる、父親からの怒りに満ちた手紙。ソームズが面談を要求。彼女は断る。そのため、階下では全員が大騒ぎ。自分たちに処理を任せてくれるよう、兄と姉が希望する。

手紙　四十二　同　右

姉との間での非常に激しいやり取り。姉の妬み、姉らしくない振舞い、そして、乱暴な言動。クラリッサは申し出を書面にして階下の身内の者たちへ送り届ける。併せて、兄へも手紙を書く。兄からの無礼な返事。文面によると、彼女の申し出は翌朝、全員の集まったところで検討に付されるが、申し出が受け入れられるようであれば、彼はスコットランドに引き籠もり、二度とハーロー邸には戻らない旨を伝えている。

手紙　四十三　同　右

申し出は聞き入れてもらえるはずと、ほとんど疑念を持たない。一人また一人、親戚の者たちが到着するにつれ、全員が集まった時には、彼らの審議はどのようなもので、その結果はどうなるかについて、ひとり心に思い描く。申し出は拒否される。その際の姉の情け容赦ない侮辱の言葉により、再び激しい言い争いとなる。姉が烈火のごとくに怒って立ち去る。ラヴレースからの手紙の内容にひどく心を乱される。

手紙　四十四　同　右

姉に伴われ、叔母のハーヴィーが訪ねて来る。姉からのさらなる侮辱。ソームズのための叔母の嘆願。

手紙　四十五　同　右

叔母と姉がもう一度訪れる。姉が服地見本を使って悪意に満ちた侮辱を加える。アラベラが席を外した際の、叔母との愛情溢れる場面。両親とおじたちの頑固さに説明をつけようと努める。

（第一巻終わり）

訳　注

（二）（二二頁、一七行）グランド・ツアー（the grand tour）…上流家庭の子弟が教育の仕上げとして行った大陸旅行のこと。家庭教師を伴うことも多かった。

（三）（二八頁、三二行）チャリオット（chariot）…四輪の軽装馬車。古くは二輪の戦車を意味した。

（三）（三一頁、一二五行）イングランドの人たちが持ち掛けた縁談…ヘンリー八世は七歳の息子エドワードと四歳のメアリー・スチュアート（Mary Queen of Scots）を結婚させようとして、一五四四年と一五四五年の二度に亘ってスコットランドへ侵攻した。これを、the Rough Wooing、と称する。（Ross）

（四）（三九頁、三二行）エル（ell）…布地などの長さの単位で四五インチ（約一、一四メートル）。

（五）（四六頁、五行）ハンニバルはいつも忠告していた…カルタゴからエペソへの敗走中にアンティオコス三世に与えたもの（Livy, xxxiv, 60:2,3）。（Ross）

（六）（四八頁、四行）「シーザー殿、三月十五日にご用心」…元来はギリシアの伝記作家プルタルコス（Pultarch, c.46 - c.120）の『英雄伝』（*Parallel Lives of Illustrious Greeks and Romans*）に見られるものだが、シェークスピア（William Shakespeare, 1564 - 1616）の『ジュリアス・シーザー』（*Julius Caesar,* 1599）一幕二場でも用いられている有名な言葉。なお、第三巻の一八九頁、五行から九行にかけても参照のこと。

（七）（五一頁、三五行）ジュリアス・シーザー…シーザー(Gaius Julius Caesar, 100 - 44B.C.)は歴史家でもあり、『ガリア戦記』『内乱記』はラテン文学の傑作として高く評価されている。

（八）（五九頁、三八行）セイレーン（Siren）…美しい歌声で船人を惑わし、難破させたというギリシア神話の半女半鳥の海の精。

（九）（六八頁、一行）「ガトに告げるな」…サムエル記下一章二〇節より。敵の耳に入れるな、という意味。ガト（Gath）は地中海東岸にあった、古代ペリシテ人の都市であり、巨人ゴリアテ（Goliath）の生地。

（一〇）（七〇頁、一八行）フープ（hoop）…（鯨の鬚や鋼鉄などの）張り骨（婦人服のスカートを張り広げるためのもの）。

（一一）（九六頁、注（ア））…原注では p.55 と記されているが、言及された記述が見られるのは p.58 であり、拙訳では四四頁に当たる。また、同趣旨の言葉は元々クラリッサ自身が述べていたものである。拙訳の一二頁を参照のこと。

（一二）（九九頁、三四行）…遠い昔のローマ人とレンズ豆の話…プルタルコスの「大カトー伝」に見られる、平民出身の Manius Curius Dentatus についての逸話。贅沢を戒め、質素な生活を説いたもの。（Ross）　なお、前作『パミラ』にも同じ言及が見られる。*Pamela*（Penguin Classics, 1985）, p.230 を参照のこと。

（一三）（一〇八頁、八行）ドライデンが描く道化…John Dryden(1631 – 1700),*Fables Ancient and Modern* (1700), 、Cymon and Iphigenia, from Boccaccio、, 85 を参照のこと。（Ross）

（一四）（一三一頁、三四行）ノリス…The Rev. John Norris(1657‐1711), *A Collection of Miscellanies, consisting of Poems, Essays, Discourses and Letters* (1687) (Ross) からの引用であろうか。

（一五）（一四九頁、八行）徳高く見える者も…Sir Robert Howard（1626‐98）, *The Vestal Virgin, or, The Roman Ladies. A Tragedy* (1664), I. (Ross)

（一六）（一四九頁、三〇行）ネメシス（Nemesis）…ギリシア神話で、人間の思い上がりを憤り、罰する女神。

（一七）（一四九頁、三九行）ソネット、エロジー、マドリガル…ソネット（sonnet）は一四行の抒情詩、エロジー（elogy or eulogy）は称賛または称徳の辞、マドリガル（madrigal）は元来田園詩であったが、現在では短い恋愛詩一般を意味し、旋律をつけて歌われることが多い。

（一八）（一四九頁、四〇行）シンシア(Cynthia)、ステラ(Stella)、サカリッサ(Sacharissa)…古くから詩や劇などでもちいられたヒロインたちの名であるが、Cynthia は E.Spenser の *Colin Clouts come home again*(1595)や Ben Jonson の喜劇 *Cynthia's Revels*(1600)では Elizabeth I の呼称として用いられている。また、W.Congreve の喜劇 *The Double Dealer*(1694)登場人物でもある。Stlla は Sir Philip Sidney と J.Swift が用いており、Sacharisssa は E.Waller が熱愛した女性の名として用いている。

（一九）（一五〇頁、三三行）例のカケス（jay）…中務哲郎訳の『イソップ寓話集』（岩波文庫、一二〇〇三）では、「黒丸烏と鳥たち」（第一部、一〇一話）として、jackdaw の話になっている。なお、第七巻の三〇〇頁、三七～八行を参照のこと。

（二〇）（一五一頁、五行）あゝ、その名は楽の音を湛え…Thomas Otway(1652 – 85), *The History and Fall of Caius Marius. A Tragedy* (1680), I, i, 305 – 7. (Ross)

（二一）（一五一頁、一一行）愛の作用は十人十色…Dryden, *Tyrannic Love, or, The Royal Martyr. A Tragedy*(1669), II, i, 292 – 7. (Ross)

（二二）（一五三頁、一一行）「たとえこの身は地獄行きでも … 」…シェークスピアの『オセロー』（*Othello,* 1604）からの引用。なお、Angus Ross は引用箇所を二幕三場としているが、正しくは三幕三場に見られるオセローの台詞。

（二三）（一五四頁、一二行）「恋の原因はいつも定めがたく … 」…Dryden, *Tyrannic Love*, III, i, 122 – 3. (Ross)

（二四）（一五四頁、一一行）「あゝ、美よ、国ごとに姿を変え … 」…イギリスの詩人・随筆家 Abraham Cowley(1618 – 67)の *The Mistress* (1668)、Beauty、. (Ross)

（二五）（一五四頁、三六行）「たくさんのご婦人たちを … 」…Shakespeare, *The Tempest* (1611), III, I, 40 – 48. (Ross)

（二六）（一六四頁、三六行）「訴えごとを最初に出す人は … 」…箴言一八章、一七節。(Ross)

（二七）（一六五頁、一四行）「ぶよを漉して … 」…マタイによる福音書二三章、二四節。(Ross)

（二八）（一六八頁、三六行）ダンモー・フリッチ審査…昔、Essex の Dunmow の教会では、一年間喧嘩もせず、幸せな結婚生活を送った夫婦に flitch（わき腹肉のベーコン）を与えていたということである。(Ross) なお、*Brewer's Dictionary of Phrase*

and Fable, p.310 も参照のこと。

(二九)（一七五頁、四〇行）「不遜なる者どもを征服す」…Vergil, *Aeneis*, VI, 853（田中秀央・落合太郎『ギリシア・ラテン引用語辞典』、一二四頁）

(三〇)（一八〇頁、一行）かのユーピテルにも相応しいレイプ…ギリシアの Zeus に当たるローマ神話の主神ユーピテル（Jupiter）は、様々な姿を装って女性と交わったと言われている。

(三一)（一八〇頁、一一行）「その猛き心は　…　」…Dryden, *Absalom and Achitophel. Part I* (1681), 445 – 54.（Ross）

(三二)（一九三頁、一一行）トニーさん…トニー（Tony）はアントニー（Ant(h)ony）の愛称である。つまり、クラリッサの叔父アントニーを指す。

(三三)（一一〇頁、一〇行）くレネー…ギリシアの伝説では、くレネー（Helen）は世界で最も美しいといわれた女。Zeus と Leda の娘で、スパルタ王 Menelaus の妻となったが、トロイアの王子 Paris の元く連れ去られ、トロイア戦争の原因となった。

(三四)（一一八頁、一四行）アロンの杖（Aaron、s rod）…エジプトのファラオとその家臣たちの前に投げると、蛇になったという杖。エジプトの呪術者たちの杖をすべて呑み込んだ。出エジプト記七章、一〇ー一二節。（Ross）　なお、アロンはモーセの兄でイスラエル初代の大祭司。アロンの杖については、民数記一七章、一七ー二五節も参照のこと。

(三五)（一一九頁、三行）ナンシー（Nancy）…アン、アナ（Ann, Anna, Anne）の愛称。

(三六)（一三〇頁、三四行）二言（two words）…新郎新婦が、牧師の問いに対し、祭壇の前で結婚への同意を表明する言葉、、I will.、あるいは、、I do.、のことであろう。

ク　ラ　リ　ッ　サ

ある若き淑女の物語

私生活における最重要関心事を
収録し、

特に
結婚に関し
両親ならびに子供の
不行跡に伴いがちなる難儀の数々を示す。

第２巻

第３版

ロンドン

出版元 : S.リチャードソン

パタノスター街、ジョン・オズボーン書店
ストランド街キャサリン通り向かい、アンドルー・ミラー書店
セントポールズチャーチヤード、J.and J.リヴィントン書店
ならびに、バース、J.リーク書店より発売

１７５０

クラリッサ・ハーローの物語

第二巻

手紙　一

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

三月二十二日　水曜日　夜

お腹立ちのなきようにですって　…　どうして私が腹を立てたりするのです。「無礼なことを」とのお言葉ですが、貴女のなさる無礼でしたら、私は大歓迎ですわ。私のことは我慢していただいておりますのに、ただただ驚くばかりです。それだけのことですわ。例の件につきまして(ア)、わざわざあのように長いお手紙をお書きいただくことになり、申し訳なく存じます。ただ、大変楽しく読ませていただきましたことは申し添えます。

私に遠慮なさるおつもりのなかったことは信じましょう。二つの理由でそう信じております。一つには、貴女がそのつもりはなかったとおっしゃるからですし、もう一つは、貴女ご自身のお立場について、貴女はまだ十分にお分かりではないからですわ。また、迫害を受けておられるためでしょうか、二つの原因［迫害と愛情です］がもたらします効果をしっかり区別なさって、それぞれを正しく扱うことが出来ずにいらっしゃるからです。でも、この点につきましては、確か、以前にも一度、それとなく触れたはずですから、今のところはこれ以上触れないことにいたします。

ロビンが申しますには、あの包みを手にしたのは、貴女が置いて行かれた直後のことだそうです。三十分ほど前に行った時には、何も見つからなかったとのことです。私が待ち侘びておりますのを目にしておりましたから、出来れば貴女からの連絡を何か持ち帰りたいものだと、あの辺りをうろついていたのです。

従姉妹のジェニー・フィネットが訪ねてまいりまして、今夜は私の部屋で休みたいと言っております。ですから、真剣に、精神を集中して机に向かう機会は持てそうにありません。何しろ、貴女の件を扱いますのには、そういう気持ちが必要ですからね。ご存じでしょうが、あの娘は大変な話好きですし、私にも他愛のないことを喋らせては喜んでいるのです。でも、とても深刻な用向きで見えているのです。自分の祖母に当たるラーキン夫人のところへの同行を母に頼みに来たのです。この夫人は長いこと寝たきりになっているのですが、もう先のないことを思い、遺書を作成しようというのです。今まではひどく嫌がっていたことなのですが、どうしてもというのであれば、遠い親戚に当たる私の母が夫人を訪ね、細部についての助言をすることが条件だというのです。この夫人は、他の人も皆さんそうですが、遺書や贈与財産やその手の家政に関わる事柄につきましては、母の手腕を高く買っておられるからなのです。

ラーキン夫人は十七マイルほど離れたところに住んでおられるのですが、母は自宅以外

(ア) そのきっかけについては第一巻の手紙三十七を参照のこと。また、クラリッサが詫びている無礼な態度については、同じ巻の手紙三十八と四十を参照のこと。

で休むことに耐えられないものですから、夜には帰宅出来るよう、朝早くに出発しようと言っております。そんなわけですから、明日は一日一杯、貴女のために捧げるつもりですし、また、だれが訪ねて来ましても、居留守を使うつもりでおります。

こちらの厚かましい男性のことですが、二人の婦人のエスコート役を頼みました。夜中に帰宅いたします母に付き添ってもらうためです。こういうしつこい男性が役に立ちますのは、精々このような遠出の場合、それから、私たち女性が人前に出ました際に少しばかりの虚栄心と自信を抱かせてくれることくらいだと思っております。

母とヒックマンさんが一緒になってくれるよう願っても構わないくらいだと、以前ちょっと触れたことがございますが、ここでもう一度その希望を繰り返しておきます。十五才とか二十才の年の差が何でしょう。ご婦人のほうは生気溌剌たるもので、若々しさを長く保つことでしょうし、恋人のほうは飛び切りの謹厳居士というわけですから、なおさらの話です。本心から申し上げるのですが、あの人のことも父親としてなら、もっと近い間柄としてよりは好意を示すことが出来そうに思うのです。それに、お互いのことになりますと、二人は奇妙なほど感心して見せますからね。

でも、あの人を片付けるのに、もっと良い方法があるのです（しかも、年齢的にはずっと似合っていますし、うまく行きそうな手です）。少なくとも男性にとってはそうなると思うのですが、どうでしょう、貴女のは両方とも袖にして、私のほうの気取り屋さんを後押しするということで、お身内の方々と手を打たれてはいかがでしょう。片方の人に対するお気持ちが「条件付き」の好意を越えるものではないとおっしゃるのでしたら、話はまとまるはずだと思っております。なかなかしゃれた思い付きではありませんか。ご賛成をいただければの話ですがね。そうなれば、ヒックマンさんのことを途方もなく尊敬してしまいますわ。もう一方の場合に比べ、はるかにずっとですわ。調子が出てまいりました。このまま続けて構わないでしょう。体に染み込んでしまった悪い癖というのは、なかなか逆らえないものですわね。

これまで貴女にお話のあった人たちと比べますと、ヒックマンさんは確かに貴女好みの男性です。すこぶる謹厳で、すこぶる真面目、といった具合ですもの。それに、貴女も気に入っているとのお言葉でしたよね。でも、あれは母のお気に入りだからということでしょう。あの人もこの乗換えには大喜びだと思いますよ。でなければ、思っていたよりはずっとお馬鹿さんということになりますもの。

あゝ、でも、貴女の乱暴な恋人があの人の頭に一発お見舞いするでしょうね。そのことを忘れていましたわ。それにしても、どうしてなのでしょうね。ヒックマンさんの話になりますと、真面目に書くことが出来なくなってしまうのです。大筋のところでは大変な善人と言って良い人のことですのにね。でも、完全な人などいるでしょうか。これも私の悪い癖の一つですね。お咎めの矛先が向けられる所以です。

あの人とのことでは、私の将来はとても明るいとお考えですが、それは、貴女が受けておられる馬鹿げた仕打ちのせいで大変辛い思いをなさっているために、別の時ならとても我慢出来ないようなことも、結構なものに見えてしまうということでしょう（と拝察いたしております）。貴女もずいぶん生真面目な方ですが、あの人のことをお相手として好ましいなどとはおっしゃらないはずです。ただし、ソームズさんとあの人とに求婚され、どちらかを選ばなければならないというのでしたら、話は別でしょう。さあ、これはテストの

つもりですよ。どんなお答えをなさるか、これは見ものですわ。

正直に申しますが、私といたしましては、あの人には大いに異議がございます。あの人のことと結婚のこととが同時に頭に浮かぶなどということは、これまで一度だってなかったのです。あの人について、忌憚のないところを申し上げて構わないでしょうか。一番良いところと一番悪いところについてですが、それも、あの人とは面識のない人に書き送るかのようにしてです。ひとつやってみようと思います。でも、真面目にというのは無理な話です。これは私の考えですが、そんな扱いの出来る話題じゃありませんもの。二人の仲は、将来どこまで進むにいたしましても、まだそこまで進んでいないのです。それに、別の調子で書きますのも、貴女のことで頭が一杯の今の私にはそぐわないと思います。

二

律義者さんのために腰を折られてしまいました。二時間前から見えていたのですが、察するところ、娘のことで母親のご機嫌伺いをしていたのでしょうね。でも、母がご機嫌伺いを必要としているわけでもございません。私どもの一人が必要としていれば、それで十分なのです。でなければ、あの人は穏やかな日々ばかりを送ることになりましょうし、怠慢になります。そして、勿論、図々しい態度を取ることにもなるでしょうね。

あの人は帰るところだったのです。門口に馬が用意されておりました。何か話があるというのを口実に、降りて来るようにとの母からの伝言です。

降りて行きますと、母は何やら意味もないことを申しておりました。明らかに、用事があって呼んだわけではないのです。お気に入りの男がどんなに素敵なお辞儀をするか、それを拝見する機会を与えたいというだけの話です。それと、私にお休みを言えるようにというわけです。私が、何か他の仕事でもある場合には、あの人と顔を合わせたがらないことを母は知っているのです。大切な話があるわけではないことを知り、母の魂胆にも気づきましたので、少々苛ついた態度を抑えることが出来ませんでした。

そんな歴然とした苛立ちの様子を吹き飛ばそうとばかり、母は笑顔を振りまいておりました。あの人に気持ち好くお帰りいただこうというわけです。

あの人は地面に頭がつくほど深々とお辞儀をし、私の手を取ろうといたしましたが、もう一方の手には鞭を握っているのです。そんなものと一緒にされるのは気に入りませんでしたから、手を引っ込めました。それでも、深々と頭を下げているのを倒れるところだと思ったみたいに、支え上げるような仕草であの人の肘に手を添え、「惨めにもばったり、といったところでしたわね」と言ってやりました。

「何て娘でしょうね」　母は笑顔を浮かべてその場を繕いました。

あの人はすっかりうろたえ、手綱を手にすると一歩また一歩と、腰をかがめたまま後退りして、とうとう召使の一人にぶつかってしまったのです。私は声を立てて笑っておりました。あの人が馬の背に乗りましたので、私は階段を登りました。少しばかりお小言をちょうだいしてからのことですけれどね。私の頭はあの人のことですっかり一杯になっていますから、当初の目的に戻らねばなりませんが、ほんの少しの間でも、貴女の気晴らしにしていただければと願っております。

それでは、前に申し上げましたとおり、あの人の一番良いところと一番悪いところにつ

きまして、一つご辛抱をお願いいたします。

ヒックマンさんというのはつまらなくて忙しい、それでいて、貴女のお言葉を一つ借りますと、〈暇〉人といった手合いです。いろいろと手掛けてはいるのですが、何一つ処理しているようにも見えません。何事にも優柔不断で、気持ちが変わり易く、変わりませんのは、馬鹿げた振舞いで私を悩ませることくらいです。そのことにいたしましても、はっきりと分かっておりますが、母とのことがありますので続けねばならないのであって、自ら望みを抱いてというわけではありません。何しろ、私のほうからは希望を持たせるようなことは何一つしていないのですからね。

それに、お顔に異議がございます。容姿の点では、肉付きの良い割にはまあまあ上品です。目鼻立ちがひどく不満だというのでもございません。貴女もよくおっしゃっておられますように、男性の場合、目鼻立ちなどは問題ではありません。ただ、ヒックマンさんの場合には、輪郭がはっきりとしていて頬骨や顎の骨もがっしりしておりますのに、男性らしさが表情に出ないのです。ラヴレースさんの場合でしたら、とても整った、感じの良い目鼻立ちをしていても、それがございますでしょう。

また、いくつかの点では、ひどく型にはまって形式的な人なのです。私がいくらおかしいと笑いましても、大きな胸当てと首飾りを外そうといたしません。貴女もよくおっしゃっておられますように、男性の場合には、輪郭がはっきりとしていて頬骨や顎の骨もがっしりしておりますのに、男性らしさが表情に出ないのです。ラヴレースさんの場合でしたら、とても整った、感じの良い目鼻立ちをしていても、それがございますでしょう。

また、いくつかの点では、ひどく型にはまって形式的な人なのです。私がいくらおかしいと笑いましても、大きな胸当てと首飾りを外そうといたしません。実は、母が似合うと考えているからなのです。それに、私といたしましても、止してくれたら嬉しいなどと認めますほど、あの人に馴々しくしたくはございません。たとえ止してくれたといたしましても、ひどく個性的な人のことですから、好きにさせておきますと、きっとウィリアム王風のクラヴァット〔二〕、あるいは、あの王様の肖像画から分かりますように、当時の流行になっておりました古臭い顎当てみたいなものを着け始めることでしょう。

服装全般につきましては、決してだらしない姿とは申せませんが、派手に過ぎる場合があるかと思えば、あまりに質素な時もございます。従いまして、いつも変わりなく優雅な着こなしというわけにはまいりません。立ち居振舞いにつきましては、一生懸命に作法を守り、あまり行儀に気を使うものですから、身についたものというよりは、取ってつけたものみたいに思えてくるほどです。相手に迷惑をかけたり失礼があったりしてはいけないとのお気持ちからでしょう、と貴女がおっしゃるのは分かっております。人は度を越しますと、避けようと骨折っております、その無礼を犯してしまうのが常なのですね。

でも、誠実な人物です。名門の出ですし、債務などの一切ない立派な地所をお持ちですし、何とまあ、いずれは准男爵になられるとのことですわ。人情家で慈悲深く、結構気前も良いとの評判ですが、その点は私からも口添えして構わないでしょう。あの人からの賄賂を受け取る気があればの話ですがね。賄賂をもちかけるのは、いずれはそっくり取り返し、ついでに受け取った相手も手に入れようとの思惑があるからなのです。例のサタンから始まりまして、その一番下っぱの手下にいたるまで、賄賂を使う者ならだれもが用いる手口ですわ。でも、敬うことを義務付けられております人物の言い回しを借りますと、用心深い人ということになります。つまり、やり繰り上手というわけですね。

従いまして、以前のことはともかく、現在のところは、もっと好ましく思われます人は私にはいないと白状せざるを得ないことになります。

狐狩りはなさいません。確かに、猟犬を揃えてはおられますが、犬よりも人間との付き合いのほうがお好きなのです。妻にとりましては悪くない印だと言わねばなりません。馬

は大事にしておられますが、すべての賭け事と同様、お金を賭けての競馬はお嫌いなのです。謹厳で慎み深く、品行方正だという評判です。要するに、自分の娘の夫に備わっておりますのを母親が喜ぶような、そんな美質をお持ちだということです。そして、その美質は娘本人にとりましても、これは経験を重ねて身につくことなのでしょうが、自分自身のことばかりでなく、やがて生まれてまいります娘たちの身にもなって判断することが出来ますなら、一層幸せに思われますような美質なのです。

それでも、正直な話、あの人を愛しているとは申せませんし、これからも愛するようなことは絶対にないと思っております。

まったくもって奇妙な話ですね。この手の謹厳な人物には上品な陽気さ、控え目な自信といったものが見当たらないのですもの。女性に言い寄ります時の、気の弱さというよりはむしろ情熱の激しさを証明することになります、あの畏れ敬うような態度と切り離される必要のない、どこか伸びやかなところが欲しいのです。だって、愛はライオンのように豪胆な心の持ち主を従わせて楽しむものだということを知らない人なんて、どこにいるでしょうか。勇敢さという点では弱みのあることを一番よく自覚しております女性が、必要な保護を与えてくれる力を一番持っている人として、最も勇気のある男性を求めますのは自然なことでしょうし、そのような男性を好みますのもまた当然ではないでしょうか。男性の場合でしたら臆病さと呼ばれてしまいそうな、そんな性質があればあるほど、ヒロイズムにまつわるお話を楽しむ気持ちが強まるのでしょう。これは、女性の読書の好みを見ても分かることです。目の前に立ちはだかった困難の数々、合戦のこと、たった一人のヒーローによって平らげられた四、五百人の敵 … そんな物語に心を傾け、ありそうもない話ならますます結構、といった有り様なのです。要するに、自分のお相手は、自分以外の者すべてにとってはヒーロー面をしていなくてはいけないのですが、自分自身に対しましては、どんなに遜った態度でも満足出来ないのです。女というものは、だれにも怖じ気づかせることが出来ないような勇者を従わせ、それを誇りに感じるものなのです。そのため、よくあることですが、ごろつき風情がヒーローを気取り、世間にもそう思わせ、ヒーローにしか望めないような成功をまんまと収めてしまうのです。

でも、律義者のヒックマンさんの場合は、どこを取りましても、まことに従順な善人に思えるものですから、ペコペコされましても、果たして好かれているのかどうか定かではないのです。おまけに、私が口汚い言葉を用います場合でも、非難を受けるのが当然みたいな様子をしておられますし、予期していたふうにも見えるものですから、非難が当たっているかどうかはともかく、どうしたらあの人を失望させられるのか、見当がつかないのです。身に覚えもない落ち度のことを悔やんでおられるお姿を見て、憐れんで上げたら良いのか笑ったら良いのか、面食らってしまったことも一度や二度ではございません。

私たち、大人の人たちの顔付きや考え方から、その人たちの過去を推し測ってみたことがよくありましたわね。つまり、現在の様子を外からも内からも眺めまして（考え方につきましては、その人たちの態度から分かる範囲でですが）、少年少女の頃にはどんな姿だったのかを思い描いてみましたね。そこで、私たちの三人のヒーロー、ヒックマンさん、ソームズさん、そして、ラヴレースさんが学校に通っている生徒だといたしまして、私にはどんなふうに見えるのか、ひとつお話ししてみようと思います。

私の思い描いたソームズさんの姿は、ケチなコソドロで、皆の持ち物をくすね、皆にバ

ター付きパンを恵んでほしいと頼んで歩きます。そして、虫けらみたいなのが得意になって話しているのを聞いたことがあるのですが、冬の朝などには、両方の親指に唾をかけて自分のパンに塗りたくるのです。他の者に取られないためですわ。

ヒックマンさんは大柄で髪を長く伸ばした太っちょの子で、皆からこづかれたり殴られたりしては、メソメソ泣きじゃくりながら家に帰り、母親に告げ口をするのです。

一方、ラヴレースさんのほうは縮れ毛の悪ガキというところでしょう。やんちゃな気紛れ小僧で、悪さばかりしています。果樹園を荒らしてみたり、塀によじ登ったり、鞍も手綱もつけずに馬を乗り回します。まるで命知らずです。要するに猛者なのです。喧嘩ばかりしています。正しい行いは一つとしてなく、意地悪をされると絶対に許しません。しょっちゅう頭に怪我をして、膏薬を塗ってみたり、治るまで放っておいたりしています。それれでも、次々に悪さを重ねますから、実際にはともかく、手足の一、二本は折れても当たり前なくらいです。あの人たちはこのとおりの気質で大きくなったのです。大人になってもそれが際立っています。これといった変化はなかったのでしょう。

ただ、男の人たちというのは、だれにいたしましても、大なり小なりお猿さんみたいなものだということ、あるいはまた、貴女にしても私にしても、こんなヒヒみたいな連中の中から選ばなければいけないということ、これは癪に触る話ですわね。

貴女が大変不幸な目に遭っておられますのに、取り上げました話題をこんなふうにふざけた調子で扱いますのは、ずいぶん場違いなことをしている気がいたします。それに、私の突飛なやり方がこれまでは貴女の気晴らしになっておりましたが、このような進め方では駄目だということでしたら、貴女に対しては勿論のこと、私自身の気持ちに対しましても、申し開きが出来ません。上辺は軽薄に振る舞っておりますが、心の中は本当に貴女のことで一杯になっているのですからね。

この手紙は隅から隅までふざけっぱなしですから、何かもっと実のある、そして、貴女の辛いお立場にもっと相応しい、つまりは、私たちの文通の目下の話題に見合うようなものに同封することが出来るようになりますまで、しばらく出さずにおきます。前に申しましたとおり、明日は一日中私だけのものになります。ということは、勿論、貴女のために使えるということです。ですから、それまではさようなら、ということにいたします。

手紙　二

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

火曜日　午前七時

母と従姉妹が我が家の四頭立てのチャリオットで既に出掛けたところですが、勇ましい郷紳殿が馬を駆ってお供です。郷紳殿にはご自分の召使が二人と母の召使が一人ついております。二人とも、外出の時には盛大にやるのがお好きなのです。少なくとも、相手に対する礼儀のつもりです。ということは、お互いに相手がそう考えていると思っているのでしょう。貴女と私のためにはロビンが仕えております。他の人の用事はさせません。それに、今日一日は全部私のものです。

まずはお小言から始めねばなりませんね。ご自分の権利について、機会が与えられると

しても、法廷で争うつもりはないとおっしゃる、貴女の決意に関してです。正義というものは、他のすべての人々と同様に、私たち自身にも当然与えられるべきものなのです。また、叔母様とお姉様にその旨を言明されたことにつきましては、もっとお咎めしなければなりませんね。何故なら、その言明は（お二人はお父様とお兄様にお話しになるでしょうから）、貴女の際立った美点とされておりますあの心の広さをほとんど持ち合わせていらっしゃらない人たちに、有利な立場を与えてしまうに決まっているからです。

世間の人はだれだって、大丈夫と思う時には平気で人を侮辱いたしますが、その勇気がない場合には、決まってペコペコと機嫌を取るものです。思い出していただきたいのですが、何の折のことであったかは忘れてしまいましたが、「心の狭い人というのは、働き掛けようと思っている相手の態度に合わせて振る舞うものです。意志堅固な相手には尻尾を振りますし、おとなしい人には高飛車に出るものです」というのが貴女ご自身のお言葉でしたね。それにもう一つ。ビダルフさんにお話しになったことですが、どんな折のことであったか、よもやお忘れではありませんね。「威厳のある言動に努め、また、傲慢な態度によってその努力を無にするようなことがないようにしていれば、周りの人はだれでも私たちのことを尊重し、敬意を持って接してくれるものです」とのお言葉でした。

説教は上手なのに、人間としてはあまり感心出来ないという人についてのご意見を、前に一度お聞きした覚えがあります。ノートン夫人からご教示いただいたもので、夫人も夫人のお父様から授かった考えとのことでしたね。貴女は、「理論に秀でることと実践の面で優れることとでは、別種の才能を必要とするのが普通です。必ずしも両方の才能が一人の人間の中で出会うものではありません」とおっしゃっておられました。お願いです（貴女の場合、称賛に値する美質のほとんどすべてにつきまして、理論と実践が一致しておられますから）、今回の件では、この考えを貴女ご自身に当てはめていただきたいのです。断固とした姿勢が求められているのです。故人の遺言を執行することこそが肝要なのです。貴女のためを思って作成された遺言なのですから、身勝手な考えから破棄しようとしている他の人どなたについても同じですが、貴女にも勝手に扱うことは許されないのですよ。

富というものにつきましては、概して、大層軽蔑の念を抱いていらっしゃることは存じております。でも、富を価値のあるものと考えておられた点が一つありますのをお忘れにならないことだと思います。つまり、「富は恩義を施す力を与えてくれますが、その力が欠けておりますと、好意に与らねばならない状態に人を追いやることになるのです。おそらく、物惜しみをする心の狭い人たちから施してもらうのでしょうが、そのような人たちは施しをするに当たりましても、その善行に有難味を添えることになる、あの奥ゆかしい振舞いはご存じないのです」ということでしたわね。どうか、この点につきましてご考慮いただきたいのです。そしてそのことが、叔母様とお姉様に向かって、たとえお屋敷を締め出され、困窮の身に追いやられましても、地所の権利回復を求めたりするおつもりはないと言明なさったことと、どのように辻褄が合うのか、お考え願いたいのです。貴女は権利の回復をお求めになるのだと皆さんが恐れていること自体、今受けておられるような仕打ちに遭いました際には、そうなさるのが必要であることを示しているのです。

正直に申しまして、服地見本に添えられておりましたお母様のお手紙を拝見し（一読いたしました時には）、大変心を打たれました。でも、母親の取る行為といたしましては、奇妙な感じを免れません。貴女を侮辱するおつもりはなかったわけでしょう。それに、お母

様のように分別をお持ちの立派な女の方が恥を忍び、あのように作為に満ちたお手紙を書かざるを得なかったことが残念でならないのです。この点は、ご報告いただいたお話し合いのところどころからも窺われることです。お母様が言いなりになっておられることからいたしましても、気性の激しい人というのは、ただしつこく付き纏ったり意地悪をしたりするだけで、おとなしい人をどれほど意のままにすることが出来るものなのか、貴女にもお分かりになるのではないでしょうか。

一族のお一人として、貴女をハーローの名で呼ぶことに皆さんがいつも誇りを感じておられましたのは存じております。畏まった時や誇らしげにとり澄ました場面では、一言ごとに「クラリッサ・ハーロー」と、本当に形式ばって型にはまった呼び方をしておられますわね。お母様もそんなところを皆さんから教わったのです。そして、「結婚すれば心も一つ」というわけですから、皆さんのほうを立て、はるかに優っているご自分のお名前やご一族のことは表に出さないよう教え込まれてこられたのです。しばしば考えていたことですが、この気取った態度や他の似たような例でも（長男の屋敷でもなければ、父方から受け継いだものでもありませんのに、ハーロー邸などと呼んでいることなどですが）、皆さんの心を支配しておりますのは、あのチューダー家の暴君(ア)の心を占めていたのと同じ気持ちだと思うのです。あの暴君はヨーク家の女相続人であったエリザベスと結婚して王位継承権を得たわけですが、そうでなければ（ランカスター家の血を引く卑しい子孫にすぎませんから）、とても手に入れることなど出来なかったはずです。また、夫としては陰気で下劣な男だと判明したのですが、原因は他でもありません。エリザベスは何かと恩義を施しましたのに、それに甘んじるのはプライドが許さなかっただけの話です。それに、王らしさに欠けるこの卑劣漢は、王冠を手中にするまでは結婚しようとしなかったのですが、エリザベスが主張したお陰で手に入ったのだ、などと勘繰られないためだったのです。

お身内の一部の方々につきましてこのような無礼を申し上げ、これまでにもお叱りを受けておりますが、きっとまたお小言をちょうだいすることになるでしょうね。でも、貴女のような方に申し上げる必要もないかとは存じますが、自惚れ心というものは必ずや、そして、いつも、他人の軽蔑を誘い、自分の評価を下げてしまうということです。名高い詩人の場合でも(二)、私たちが読み取りましたのは、分相応以上のものを求める人は、主張して当然な名誉さえ拒絶されるような憂き目を見るということではなかったでしょうか。決して貴女に嫌な思いをさせようというのではありません。でも、ご一族の方々につきましても、他の人々の場合と同様、当然の評価と考えておりますところを申し上げずにはいられないのです。称賛にせよ非難にせよ、それは功罪に応じて世間の人々が按配することなのです。私といたしましては、功罪を取り違えた品定めはするわけにまいりませんし、そのつもりもございません。皆さんに対しましては、お母様は別ですが、軽蔑を感じております。本当にそんな気持ちなのです。お母様のことにいたしましても …… でも、立派なお母様のことは、貴女のためにも見逃して上げましょう。それに、今回の諍いでも、お母様のために申し開きの出来そうな点が一つありますわね。長年に亘りまして、反対一つなさることなく、ひたすらに耐え抜かれ、ご自分のお気持ちは犠牲にしてこられたわけですから、ご自分のお嬢さんが自らの意思を捨て去ることにつきましても、他の人が思うほど

(ア) ヘンリー七世のことである。

難しい話ではないと考えておられるのかもしれないのです。ただ、今回の一部始終が元々だれの差し金から始まったことなのか、そのことを考えますと　…　神様のお許しを乞う次第ですわ。でも、そんな仕打ちを受けましたなら、私ならずっと前にラヴレースと一緒になってしまっていたでしょうね。ただ、忘れないでくださいね。私のように短気な人間なら驚くに当たらない行動でも、貴女のように思慮深い人の場合には、言い訳のしようもなくなってしまうということです。

あのようにお母様がお気持ちに反して誘い込まれてしまわれた後のことですから、ハーヴィー叔母様が同調なさっても、さほど驚きはいたしません。いつだって一緒のご姉妹ですからね。ハーヴィーさんのお仕事がうまく行かず、恩義を受ける羽目になったとのことですが、それがどのようなものであったのか、調べてみました。どうやら、あの方の地所の一部に設定されておりました抵当で、抵当権者が流れ処分にしようとしていたのを、貴女のお兄様が代わって支払われ、引き取られたというだけのことらしいのです。親戚同士といたしましては（お兄様にはたっぷりと保障があるのですし）ささやかな善意といえましょう。でも、お金を出しました度量の狭い貸し手に、ハーヴィー家の皆さんの頭が上がらなくなってしまうようなものだったのは明らかですね。それからというもの、叔父様に対しまして、また、叔母様にまで（ドリー・ハーヴィー嬢がこっそりこぼしておりましたが）、その人は無礼な態度を取っているのですからね。

こんな人を貴女のお兄様と呼ばなくてはいけないのでしょうか。そういうことでしょうね、お父様の息子さんなのですから。こんな言い方をしても、別に構いませんわね。

お兄様に宛てて筆をお執りになるなんて　…　心配です。お兄様に気を遣い過ぎていますわ。尊大な気持ちを助長することになりますし、貴女に対する横柄な扱いを誘うようなものですもの。そのような誘いに間違いなく応じてきますのは、分かっておられても良かったことですわね。

それにいたしましても、こういうお坊っちゃまがラヴレースみたいな男とやり合おうというのですからね。たまたま剣を抜いてしまわれた時にも、鞘に納めておくよう諭してくれた相手ですよ。この手の内弁慶というのは、女子供や召使にはやたら怖い顔をして脅しつけますのに、男同士では意気地なしと相場が決まっているものです。陰で言っていると聞いております私への無礼な言葉、あるいは、（貴女のお話ですと）女性について口にしていたという悪口のいくつかを、堂々と私の前に来て、面と向かってぶつけてくれるのでしたら、責任を持って、二つ三つ問い質してみせますわ。私にまで決闘状を送ってよこすかもしれませんけれどね。

もう一度申し上げますが、ご存じのとおり、私は思っていることをありのまま口にいたしますし、また、書かせてもいただきます。私の兄ではございませんからね。貴女のお兄様だとおっしゃることは出来ますでしょうか。とにかく、偏らないお考えをお持ちでしたら、私に腹をお立てになるようなこと、決してお出来にはならないはずです。真の友人を差し置いて、上辺だけの兄と手を結ぶおつもりですか。兄弟が友とは言えないこともありますね。でも、友人はいつだって兄弟なのです。「そこのところを覚えておくのだ」と、トニー叔父様ならそうおっしゃるところでしょうね。

貴女がおじ様たちと呼んでいらっしゃる、あの憐れむべき人々のお便りについて詳細に取り上げますような、そんな下賤な真似はいたしかねます。でも、あのようにグロテスク

な人物を気晴らしの種にいたしますのは大好きです。それでも、存じ上げている人たちですし、貴女への思いやりもありますから、笑い種にするのは慎もうと思います。あれだけ突拍子もないことをなされば、そうして当然とは思いますが　…

おじ様たちやお兄様お姉様よりももっと近い続柄の、もっと大切な人たちのことですのに、私の言い方は遠慮がないと、お叱りをいただいておりますね(ア)。私の思いどおりに(矯正なしに)させてくださったほうが良いと思いますわ。あの無遠慮な言葉も、私たちの直面しております問題から自然に出てくるのではないでしょうか。それに、問題が引き起こされましたのはどなたのせいなのでしょうね。十五分間で結構です。私の身にもなっていただけないでしょうか。あるいは、この件につきまして、私なんかよりももっと中立でいられる人たちの立場でお考えいただくわけには行かないものでしょうか。もしも、それがお出来になれば　…　でも、貴女の弱みを掴むなんてことは頻繁にある話ではありませんが、貴女を追い詰めたりするのは止めておきましょうね。

ただ、一言付け加えさせていただきますが、おっしゃるように、お父様がお母様を愛しておられるのは当たり前のことと存じます。旦那様のご意向だけをひたすら守っておられる奥様ですもの。痛風のことは別にいたしまして、お二人の間には初めから何の争いごともなかったとお考えでしょうか。娘時代のお母様は、耳にいたしておりますところでは(また、いかにもありそうなことと思いますが)、ご自分が相当に明朗活発なこともあって、お父様のそういうところがお気に召したということでした。どうしてそれがなくなってしまったのでしょうね。本当に残念ですわ。トロフォニウスの洞窟(三)にあまりにも長く住んでおられるためなのでしょうか(イ)。

この点につきまして感想を一つ付け加えさせていただきます。一度にまとめて過ちを正していただけることになるでしょうからね。優しさや慇懃さに騙されたためではなく、どなりつけられたり陰気な顔をされたりしました挙げ句に、進んで言いなりになっているような、そんな奥様たちの振舞いについての感想です(貴女と私が知っておりますその手の女性は、一人だけじゃありませんもの)。こんなことを申しましても、女性の中には、頭ごなしの押し付けのほうが、優しさや歩み寄りよりも、服従させますのには効き目がある者もいるということの、あまりにも明白な証拠になりませぬよう願っております。まったくの話、結婚生活におきましては、多くの女性はただの赤ちゃんみたいなものだと考えることがよくあるのです。甘やかされたりご機嫌を取られたりしますと、天の邪鬼のお馬鹿さんになりますし、厳しく扱われますと、卑屈な奴隷になってしまうのです。でも、おとなしく役に立つ女にするのには、愛情よりも恐怖心を持たせることだなどと言わせておいて良いものでしょうか。冗談ではありません。名誉というものがあります。感謝の気持ちだって、正義というものだってあるのです。仮にも分別のある女性でしたら、そんなことを言われるようなきっかけを与えたりしてたまるものですか。

この手紙の書きっぷりとか内容からいたしまして、これほど生意気な筆遣いをするのは一体だれなのかと、貴女のお胸に疑念のかけらでも浮かびそうに思うのでしたら、私といたしましても、きちんと姓名を記すところでしょう。心の底からの言葉なのですから、名を偽ったりするつもりもございません。ただ、差し当たりましては、イニシャルだけで間

(ア)第一巻の手紙二十八を参照のこと。(イ)『スペクテーター』第八巻、五百九十九号参照。

に合わせます。そして、すぐにまた筆を執ることといたします。

A. H.

手紙　三

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

木曜日（三月二十三日）午前十時

お手紙の他の部分につきまして、いくつか感想を述べておくべきでしたが、後回しにいたします。あるいは、触れずに終わるかもしれません。ヒックマンさんが、ロンドン滞在中のことですが、機会を見つけまして、ラヴレースさんの都での暮らしぶりや言動について調べてくださったことをお知らせしておきたいのです。

ペルメルにあります〈カカオの木〉というお店で(四)、あの男の親友という二人の男性に出会ったのです。一人はベルトンという名で、もう一人のほうはモーブレーです。二人とも慎みのない話し方をするそうです。おそらく、生活のほうも同じように乱れているのでしょうね。でも、給仕たちは大層敬意を表していて、ヒックマンさんが二人の人物について尋ねますと、財産家で信義を重んじる人たちだと言っていたそうです。

二人のほうからラヴレースさんの話題が切り出され、ラヴレースさんの上京は何時頃になりそうかという、居合わせた数人の紳士からの質問に、今日のことだと答えていたそうです。ヒックマンさんが（二人揃ってラヴレースさんを褒めたてたものですから）、ラヴレース氏が大層立派な紳士だということは、確かに耳にしておりますが、と口を開き、先を続けようとしますと、片方の男性がヒックマンさんを遮り、「まったくの話、世界一としか言いようがありませんな」と言っていたそうです。

そこで、もっと具体的にあの男の長所について述べてくれるよう誘いをかけますと、好むところとばかり、長々と話し始めたのですが、品行の点には一言も触れなかったそうです。叔父様の口癖を真似れば、「そこのところも覚えておくのだ」ということでしょう。

ヒックマンさんは、お聞きするところでは、ラヴレース氏も実にお幸せですね。ご婦人方にはもてはやされておられるようで、と言った後、それを別に悪いこととは考えていないように思わせるため、笑顔を浮かべながら、思い切り幸運を楽しんでおられるわけですね、と付け加えたそうです。

なかなかやるじゃない、ヒックマンさん。平素は真面目くさって、哲人気取りの顔をしているのに、あゝいう連中の言い回しにも疎くはなさそうね。こういうのがそうなのでしょう、と私は胸の中で叫びました。でも、一切口には出しませんでした。実は、母のご贔屓のこのえらく謹厳な人物の正体を暴いてやろうと、何度も試みてはいるのですが、これまでのところ、非常に道徳的なのか、それとも、大変抜け目がないのか、そのどちらかだとしか言いようがないのです。

「それは無論さ」と、一方の男が答えました。そして、冒瀆的な言葉と一緒に、だれだってその気はあるだろう、と言っていたそうです。若者ならだれでもすることをしているまでの話だ、というのです。

「まさしく、おっしゃるとおり」　母の贔屓の堅物が言いました。「ただ、聞くところで

は、素晴らしい令嬢との話を進めておられるとか　…　」

「そのとおりでした」　ベルトンが答えました。「忌々しい女でしてね［何てひどいことを言う男なのでしょう］。奴の頭の中は四六時中その女のことばかりでしたよ。それにしても、あの女の一族もいっそ　…　［どんなことを口にしたのか、繰り返すのは勘弁願いたいとヒックマンさんは言っておりました。もっとも、さらにひどい言葉を繰り返していたのですが］、そして、あれだけの家柄と取り柄のある男にあの仕打ちですからね。ひどく後悔することになるかもしれませんよ」

「氏のことを放縦すぎると思っているのかもしれませんね」　ヒックマンさんが叫びました。「噂では、大変謹厳な家族とのことですから　…　」

「謹厳ねえ」　一方の男が言いました。「ご立派な言葉だよ、なあ、ディック。ここ暫くとんとお目にかからなかった言葉だぜ。大学以来かな、こんな意味で使われるのを聞いたのは。あの頃だって、大勢の仲間内のやりとりでは、時代遅れの言葉ってことになっていたよな」

宜しいですね、これがラヴレースさんのお仲間ですよ。どうぞ、そこのところにご留意いただきとうございますわ。

これには、平気な顔ではいられませんでした、とヒックマンさんが言っておりました。

私は睨みつけてやりました。どう受け止めたら良いのかヒックマンさんにも分かるような、意味ありげなまなざしを送ったのです。お陰で、ヒックマンさんはまたまた顔色を変えてしまいました。

僧職に就こうという青年で、放埒な連中と同席すると、他愛もないほど落ち着きを失ってしまうのだと漏らしていた人に向かいまして、次のようなことをお話しになったのはどなたでしたか、覚えてはいらっしゃらないでしょうか。それは望ましくない印であり、道義心が確かでないみたいに人目に映るが、好ましく見える傾向のほうも、道徳的動機に基づいて選択されたものというより、むしろ、偶然と教育の結果のように思われる、とのことでした。また、当の若いご婦人その人が同じ相手にお与えになった教訓のことをご存じではないでしょうか。悪徳に対しては、抵抗して顔色なからしめねばならないし、あらゆる人の前で徳の唱導者たることに誇りを感じなければいけない、というものでしたね。そして、恥ずべきことを避け、放棄するのが人間本来の姿だということを特に述べておられました。あの青年の場合がそれに当てはまるようには思いたくないが、とお断りになった上で、悪徳は臆病者であり、冷静さと、己の正しさへの十分な確信を支えとしているような美徳を敵に回せば、コソコソと頭を隠してしまうものなのです、とも付け加えておられました。お忘れのはずはないと存じますが、そのご婦人は、謙遜なさって、ご自分のお考えをあの立派な説教家のリーウェン師のお言葉ということにしておられましたね。若さに似合わぬ人と思われたくないお気持ちの時にはいつもしておられることです。そして、たまたま思い付いた、悪くなさそうに思われる事柄すべてに箔をつけるためですと、慎み深い言い方をしておられましたね。

再度気を取り直しましたヒックマンさんは、結論といたしまして、都で聞いた話からいたしまして、ラヴレースさんの品行を好意的に考えるべき理由は一切見当たらない、と言っておりました。ただ、二人の親友の言では、これまでよりはまともになっているとのことですし、かのトム・ウォートン(五)の決意という言い方だったそうですが、今後自分から

決闘を申し込むことは慎むが、拒みもしないという、まことに立派な決心をなさったというのです。そして、二人はその点を大いに褒めたたえていたそうです。要するに、非常に勇敢な男で、付き合うには世界一気持ちの良い相手であり、彼に出来ないことなど一つもないのだから、いずれ国中に名を轟かせることになるはずだ、と言っていたそうです。

この最後の断定的な言葉は、そのとおりになりそうな気がいたします。あの男についてヒックマンさんに集めることの出来ました情報はこれですべてです。まだ決心はなさっておられないといたしましても、貴女のようなお気持ちの方の心を決めますのには、これで十分ではないでしょうか。

でも、あの男を矯正出来る女性がこの世にいるといたしますと、それは貴女だ、とも言わねばなりません。また、貴女たちが面談をなさった際のあの男の態度に関するご報告からいたしまして、少しは望みがあるように考えておりますことはお認めいたします。少なくとも次の点は言えると思います。あの時、あの男が貴女に対して用いました根拠のすべてが、公正で尤もなものに思われるということです。それに、もしも貴女があの男と一緒になられるとしたら　…　でも、もう止しましょうね。いずれにいたしましても、貴女には相応しくない男なのですからね。

手紙　四

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

三月二十三日　木曜日　午後

思ってもおりませんでした人が尋ねて来られたため、考えがよそのほうへ向いてしまいましたし、続けるつもりでおりました話題も変更することになってしまいました。せっかくの一日のことですから、終日だれにも会わずにおこうと考えておりましたが、そんな決心を捨て、会っても構わないと思うような唯一の人物です。そのお客さんというのは、放蕩仲間たちが期待を寄せている様子を知らせてくれましたヒックマンさんの言葉から推して、てっきり都にいるとばかり思っていた人だったのです。さあ、こう言えば、貴女の愛想良しの道楽者でしたなどと、わざわざ口にする手間は省けたことになるでしょう。私たち女性は、お互い意表を突くのが大好きだと言われておりますよね。でも、こうもやすやすと口に出してしまうなんて、自分のほうが意表を突かれた感じですわ。言っておきますけど、お客さんはどなたなのか、また、男性なのか女性なのか、貴女が見当をお付けになる前に、この二倍の長さは書き進めるつもりでいたのですよ。でも、労せずして手に入れた真相ですし、お好きなようにご利用になって結構ですわ。

訪問の目的は、私のチャーミングなお友達への口添えを頼むためです。そして、私が貴女のお気持ちのすべてに通じているものと確信しているので、自分は何を頼りにすべきなのか、それを教えてもらうためだというのです。

貴女との面談の場でありましたことに触れておりましたが、その結果にも、また、納得出来るようなお言葉がほとんど得られなかったことにも不満が残るのだそうです。それというのも、あの男に対するご家族の方々の敵意はいよいよ強まっているし、貴女への惨い仕打ちも改まらないからだそうです。あの男が言うには、あらゆる人に軽蔑されている人

物を引き立てるよう、貴女が言いくるめられてしまうのではないかと、不安な思いに心も千々に乱れるとのことでした。

おじ様たちとお兄様から加えられました侮辱の新たな例をいくつか示した後、こんなことを言明しておりました。あの男がいわれもない罵詈雑言を投げつけられる原因となっている人物のもとに、貴女が無理やり嫁がされるようなことがあれば、貴女はイギリス中でも最も美しい未亡人の一人になるのだろうが、また、最も若い未亡人の一人になっていただくことにもなるだろうというのです。それだけでなく、お兄様は会う人ごとに、あの男について言いたい放題をおっしゃっているので、その点についてもきちんと釈明を求めるつもりでいる、とのことでした。

現在受けておられる惨い仕打ちから逃れることを可能にするためにというのですが、貴女にどれか一つを選んでいただくよう、いくつかの方法を提案しておりました。その一つを申し上げますが、貴女の地所を取り戻すことだというのです。また、他のやり方では乗り越えられない障害がいろいろあるというのであれば、すでに提案しているように、表沙汰にしても良いし、内緒でも構わないから、所有権の回復に手を貸そうというベティ・ローランス夫人、あるいは、M卿の申し出を受け入れてほしいとのことでした。そして、もしそうしてもらえるのなら、あの人の求婚を奨励なさるのかどうかについては、その後の貴女のお気持ちと、お従兄弟さんのモーデンさんが帰国なさった時に与えてくださる助言とに完全に委ねるつもりだと言明しておりました。ご自分に敵意を抱く人たちのこともあって、更生への気持ちを大いに強めているが、その真実味について貴女がどのように確信なさるか、すべてはそれ次第ということにするというのです。

あの男に探りを入れる絶好の機会でした。ヒックマンさんがM卿を打診してくれると嬉しいのだがと、貴女もおっしゃっておられましたよね。貴女に対する夫人たちや卿の好意的な見方は、お宅の皆さんがあの方たちの親戚の男へと同様、あの方たちに対しても敵意を持っておられることに気づかれた後でも変わらないのか、それとも冷めてしまわれたのか、という点についてでしたね。この機を逃さずに尋ねてみましたところ、あの男は快く応じ、所持しておりましたM卿からのお手紙の数節を読み聞かせてくれたのです。貴女との縁組、それも、貴女ご自身に備わる美点を理由とした縁組は、卿のご一族にとってもかつてないほどの望ましい出来事だとのことでした。また、貴女が尋ねたがっておられた点にお誂え向きのことを卿は書いておられました。あの男のことでお宅の皆さんが乱暴なことをなさり、貴女がお金に苦労なさるようなことになれば、卿とセアラ夫人とベティ夫人が協力し、あの男のためにどのような埋め合わせでもするつもりでいる旨を確約しておられるのです。ただ、あれほど名の通ったご一族のことでもあり、両者の名誉にとって極めて重大な事柄だけに、関係者一同の同意が望ましいことは確かだ、との仰せでした。

貴女がソームズさんを極度に嫌っておられることは、貴女ご自身からも伝えておられるものと存じますが、そのとおりお話しいたしました。また、貴女といたしましては、ご自分に選択を任せていただけるのなら、独身生活を選ばれるはずだということもお話ししておきました。あの男自身につきましては、品行の点で軽率なところがあるため、大いに異存がおありだし、それも尤もな話だということ、そして、あの男もずいぶん気ままなことをしているように言われているが、その種の男性が結婚を思い立つと必ず、厚かましいことに、女性の中でも一番貞淑で一番立派な人が自分の相手になるように考えるのには驚い

てしまうということ、それから、地所の権利を取り戻すことについては、これまで貴女は反対していらっしゃるけれど、私自身からも極めて強力に主張されてきた点であるし、これからもそうするつもりでいるということ、貴女が最も信頼を寄せ、期待を掛けていらっしゃるのはお従兄弟さんのモーデンさんであり、モーデンさんが帰国なさるまで、事態が進まないようにすること、つまり、時間稼ぎが貴女の主な目的だと私は確信している、といったことを率直に申しました。

危害を加えると脅迫しておられる点につきましては、実際の行為にせよ口だけの威嚇にせよ、そのようなことをなされば、貴女を迫害している人々の目的に役立つだけのことだとお話しいたしました。皆さんが無理強いしている計画を実行に移す口実が出来るわけですし、それも、世間の賛同を得られることになるからです。と申しますのも、名の通った一族から非常に大切なお嬢さんを奪い取ろうとしたり、皆さんが選んだ男性を差し置いて貴女を手に入れることが出来ない場合には、暴力沙汰に訴え、皆さんに恨みを晴らすと脅したりしている、品行の点でずば抜けて立派とも言えない粗暴な若者に、世間の人々が好意的な声を寄せるなどと考えてもらっては困るからです、と話したのです。

私は次の点を申し添えておきました。つまり、そのように威嚇的な態度で貴女を怖じ気づかせようと考えているのなら、それは大変な間違いであるが、何故なら、貴女はどこから見ても温和そのものではあるけれど、貴女のもの以上に堅実な気質にお目に掛かったためしはないし、自分が正しいとお考えの時や、無関心ではいられない重大な事柄の点で卑劣な扱いを受けていると思われた場合には（お宅の皆さんもすでにお気づきですし、その機会を相変わらず提供なさったりすれば、ますます思い知ることでしょうが）、貴女に勝る不屈の気質もこの世には存在しないからだ、とです。そして、「ひとつ言わせていただきますが、ラヴレースさん、クラリッサ・ハーローさんは、先見の明や分別のゆえに、大胆さに欠ける場合もあるでしょうね。でも、大切にしておられる方々の身に危険が及びそうな時には、ご自分の名誉や、本当の意味での女性の尊厳に関わります事柄では、恐れなどというものは知らない人なのです。要するにですね、クラリッサ・ハーローさんを脅しつけて、弱く変わり易い心の持ち主だけが犯してしまうような、下劣で不道徳な行為に誘おうなどとお考えになってはいけないということですわ」と、私は申しました。

あの男は次のように言っておりました。貴女を怖じ気づかせるつもりなどさらさらないので、私たちの間で交わされた事柄については、一語たりとも貴女に話さないようにしてほしい。威嚇と受け取れるようなことを仄めかしたとすれば、それは貴女への望みのすべてを永遠に失いはしまいかという不安に掻き立てられた、高ぶった気持ちから出たものであり、憎悪を抱いておられるという男の腕に、実際に貴女が無理やり引き渡されるのではないかと考えてのことである。そのようなことになれば、隠さず申し上げておくが、世間だの世の非難だのといったことにはおよそ拘るつもりはない。とりわけ、現在お宅の方々から受けている脅しの件があるし、後には得意顔をされることにもなるであろうから、それを考えれば、どのような復讐でもする気になるだろうし、また、復讐も正当化されるはずだ、とのことでした。

さらには、貴女のことさえなければ、世界中のどの国に行っても同じことであり、それゆえ、貴女を失うようなことになるとしたら、どのような手段に訴えるにせよ、この国の法律から懸念されることなど何一つとしてないのだ、とも付け加えておりました。

こう話した時の決然とした口振りに、私は好ましくないものを感じました。確かに、ひどく無謀なこともやってのけることの出来る男ですからね。

あの男はこの厳しい口調を少し和らげ（私が激しく非難したこともあるのですが）、貴女が独身を守っておられる間は、お宅の皆さんから仕掛けられるあらゆる無礼にも耐えるつもりだと言っておりました。ただ、貴女が現在よりもさらに追い込まれるような事態になるとして、M卿やあのご夫人たちでいけないのなら、どなたか他の人のところ、例えば私の母に保護を求めてくださるとか(ア)、ロンドンの人目に付かない下宿に身を寄せるとかしていただけないだろうか。貴女からのお許しがないかぎり、お訪ねするつもりはなく（貴女もそこでご家族の方々と交渉なされば良いわけで）、自分としては何の不満もない。それに、自分の運命に関しては、すでに話したように、お従兄弟さんの帰国後の結果を待つつもりであるし、貴女ご自身のお気持ち次第と考えている、というのです。そして、お宅の皆さんのことはよく分かっており、完全に貴女のご気性や道義心を拠り所としていることや、自分たちのやり方を押し通す気でいることも承知しているので、貴女が皆さんの手の内にあって、説得や脅しに晒されておられる間は、最悪の事態を憂慮しないわけには行かないのだ、とも付け加えておりました。

他にもたくさんのことを話し合いました。でも、それをここで並べ立てましても、多くのものは、薪小屋で話し合われました時にお二人で交わされたことの繰り返しになるだけでしょうから、あの時のことを思い出していただきますようお願いいたします(イ)。

やはり、結局のところ、独り立ちなさることだと思います。そうすれば、すべてがうまく行くはずです。本当に気性の激しい男です。希望を言わせていただけますなら、あの男ともソームズさんとも、結婚なさるべきではないように思います。お兄様とお姉様の傍からお離れになれば、この二人の男性について貴女にはどんなことがお出来になるのか、あるいは、お出来にならないのか、それがお分かりになるはずです。もしも、お宅の皆さんが愚かな計画に固執なさるようでしたら、あの男の示唆に従い、適当な折に母を打診してみるつもりです。その前に、権利を取り戻すことについてのはっきりとしたお考えを伺いたいと思うのですが、ラヴレースと同じく、私もそうなさることをお勧めいたします。貴女の要求がどのような作用をもたらすか、それを見てみるだけでも良いと思います。要求したからといって、そのまま法廷での争いになるわけでもないでしょう。権利を主張したりはしないなどということは、どのような決心をなさっておられるにせよ、二度と皆さんに向かっておっしゃらないことです。今後とも皆さんが貴女に挑発的なことをなさるようでしたら、貴女が心変わりをなさっても、十分に根拠のあることになるでしょう。その気もあるのだってことを感じさせなければいけません。度量の狭いことに、皆さんは貴女に

(ア) ラヴレース氏は（前記の如く）ハウ嬢に向かって、その美しき友人がさらに追い詰められるような場合には、ハウ夫人の保護を求めるよう提案しているのであるが、自分を頼らざるを得ない状態に彼女を追い込もうと当初から心に決めていたのであり、実際には、ハーロー家の中にいる手下を使い、彼女に対する家族の反感を煽るばかりでなく、ハウ夫人の保護、そして、他のいかなる保護も得られないよう、狡猾に手配していたのである。この点に関しては、おそらく、読者諸兄姉のご注意を促すまでもないことと思われる。第一巻の手紙三十一を参照のこと。

(イ) 第一巻の手紙三十六を参照のこと。

備わっているものだということをご存じの上で、貴女がその権限を放棄なさると言い出されても、優しく扱おうとはなさいませんでしたよね。そのようなこと、今さらお話し申し上げる必要もないかとは存じますが　…

心からの愛情と誠意とを込めまして、貴女の

アナ・ハウ

手紙　五

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月二十二日　水曜日　夜

私は我を張って折れようとしないのだという、叔母と姉の報告を聞きますと、集まった一族の者たちは「満場一致」で（と、ベティが言っておりました）、私と争うことに決定したのです。この決定は、ご覧のとおり、同封いたしました届いたばかりの兄の手紙で通知されました。読み終えられましたら、お返しいただきたいと思います。家族の者たちと言い争います際に必要となるかもしれませんので。

クレアリー嬢へ

ご命令により、以下の点を通知する。父上とおじ上たちはハーヴィー叔母さんとお前の間で交わされた話すべての報告を叔母さんからお受けになり、お前の姉からは、姉がいかなる仕打ちをお前から受けたかをお聞きになったし、母上とお前の間で交わされた話すべてを思い返され、お前の訴えと提案のすべても考量された。ソームズ氏との契約の件、あの紳士の忍耐強さ、お前への大きな愛情のこと、また、お前が氏の美点とか結婚条件とかを知る機会をなかなか持とうとしない点も考慮されたし、さらに二点に関し、検討を加えられたのだ。即ち、父親の権威が傷付けられた点と、お前が監禁を解かれるよう、ソームズ氏が（氏からそのような慮りをいただくに値するようなところはほとんど見られなかったお前だが）絶えず懇願しておられる点だ。氏としては、氏に対するお前の強情さ［〈毛嫌い〉とでも言いたいところだが、それは止めておこう］の原因を監禁されていることに求めたがっておられるのだが、これだけ徹底した強情さというのは、他に説明のつけようもないからであり、お前が母上に向かって、自分の心を捉えているものはないと言明したのは、お前の本心から出た言葉だと考えておられるのだ。そして、だれ一人として信じる者はいないのだが、氏としてはお前の言葉を信じるおつもりなのだ。これらすべての理由に基づき、お前にはアントニー叔父上の屋敷に行ってもらうことに決定した。従って、その準備に取り掛かることだな。予告は間近になるまでないだろうが、理由は明白だ。

お前に行ってもらう動機についてだが、正直なところを教えてやろう。二つある。第一には、父上たちとしても安心なさりたいということだ。ご自分たちの好まないいかなる人物とも、お前が手紙のやり取りはしないことをだよ（というのも、父上たちはハウ夫人からお知りになったのだが、何らかの方法によって、お前は夫人の娘と、また、あの娘を通して、おそらく他の誰かとも文通を続けているということをだ）。そして次には、ソームズ

氏のご訪問を受けてもらうためなのだ。ここではお断りするのが適当とお前は考えてきたわけだが、そのために、これまで拒絶していたのがどういう人で、どのような話であったのか、その点について知る機会をお前は自ら捨てていたのだからな。

二週間ソームズ氏と話し合いを持った後に、そして、さらに身内の者たちが氏のために寄せる推薦の言葉にも、密かな文通で心を閉ざしたりすることなく耳を傾けた上で、ウェルギリウスの「愛はいかなるものにありても同一なり」(六)という一句が（ここに含まれる教訓については、ドライデンの翻訳による『農耕詩』(七)を参照してもらおう）、他の生き物の場合と同様、お前にも当てはまることを証明してみせるようであれば、また、あの〈品行方正〉にして〈有徳〉なる、〈信仰心篤き〉ラヴレース氏［出来ることなら、私もこんなふうにお前を喜ばせてやりたいのだ］への熱い想いを忘れることが出来ないし、また、その気もないことを父上たちに悟らせる結果になるというのであれば、その時こそ、お前の機嫌を取るべきなのか、それとも、永遠に勘当すべきなのか、検討がなされることになるだろう。

家を去らねばならない以上は、気持ちよく去ってもらいたいものだ。アントニー叔父上のほうでは、屋敷内のことすべてに亘って、お前が快適に過ごせるよう手配すると言っておられる。ただ、跳ね橋を上げずにおくことについては、事情次第でもあろうが、どうしても約束しようとはなさらないのだ。

お前を訪ねる者としては、ソームズ氏に加え、その栄誉をお認めいただけるならの話だが、クレアリー嬢よ、この私とお前の姉ということになる。また、ソームズ氏への態度いかんでは、ハーヴィー叔母さんとジョン伯父上も加わるだろう。だが、このお二人の場合には、女々しい泣き言を聞くことになるとお考えであれば、足を運ばれることは滅多にないはずだ。付き添いはベティ・バーンズに頼んである。ついでに言っておかねばならないが、お前があの娘を嫌っているからといって、あの忠実な女中を悪く言う者は一人としていないということだよ。喜んでお前に尽くす気でいるベティのほうでは、それを不幸なことと嘆いているのだがな。

出掛けることに気持ちよく同意してくれるのかどうか、返事をもらいたい。また、優しい母上から頼まれたので言っておくが、差し当たっての目的は、二週間の間ソームズ氏のご訪問を受けるだけだという点、念を押してもらいたいとのことだ。

草々

ジェームズ・ハーロー、ジュニアー

そういうことなのです。見事なばかりの兄の政治手腕ですわ。アントニー叔父様のところへ行くよう同意を求められているのですが、明らかにソームズさんの訪問をお受けするためです。チャペルがあるのです。堀をめぐらした屋敷なのです。貴女との文通の機会を奪われてしまいます。あのいやらしい男と無理やり一緒にするために暴力が用いられるといたしましても、回避の可能性は一切奪われてしまうのです(ア)。

(ア) これらの乱暴な措置や、家族全員が頑なにその手段に固執している点に関しても、ラヴレースが吹聴しているとおり（第一巻、手紙三十一）、この間全員が彼の操る糸で踊らされていた操り人形にすぎなかったことを考えるなら、さほど驚くには当たらないのである。

この横柄な手紙を受け取りましたのは、夜も遅くなってからのことでしたが、すぐに返事の筆を執りました。手紙の書き手の起床時刻に間に合わせるためです。返事の草稿を同封いたします。ご覧いただきますとお分かりでしょうが、『農耕詩』から取りました下劣な仄めかし、そして、「女々しい泣き言」などという無礼な言葉は、私も本当に腹に据えかねました。それに、叔父のもとへ赴く準備をせよという命令は、父とおじたちの名で告げられているわけですから、叔父のところへまいります準備をやんわりとお断りするため、憤慨して当たり前の下劣な仄めかしに腹を立てて見せましても、それは、皆が非難の的にしております私の狡猾さとやらの一例をご披露するだけのことですし、それ以外の仕方でお断りいたしますと、兄と姉からは反抗的な行為と受け取られてしまうことにもなりましょう。と申しますのも、私に対する父とおじたちの愛情を奪い去ることが出来なければ、二人にとりましては、目的を半ばしか達成していないことになるのは明らかなように思われるからです。たとえ言いなりになりますのが私に可能なことだといたしましてもね。

家族の者たちの決心を知らせてくださるためでしたら、お兄様、三行で間に合っていたことでしょうね。ただ、そうなりますと、『農耕詩』のことをあのようにいやらしく引き合いに出したり仄めかしたりして、物知りなところをひけらかす場所はなくなっていたことでしょう。言わせていただきますが、大学でのご専攻が人文学だといたしますと、その分野を修得すべき才能を貴方には見出せなかったということですわ。また、女性全体にいたしましても、あるいは、この私自身にいたしましても、妹ではありますが、ほんの少しでも兄から礼儀正しい扱いを受ける資格はないということなのでしょうね。教育のことは脇におきましても、血筋からいたしまして、それなりの礼儀作法を目指します性向は身につくものと期待されましたのに、研鑽を積まれたのはその点ではなく、むしろ、生まれつきの気質の悪い面を伸ばすことだったようですわね。

忌憚のないことを申し上げまして、きっとご立腹のことと存じますが、当然の報いとも言えますから、努めて気に留めないようにいたしましょう。貴方のほうでも、公正さとか憐れみの心とかはお忘れになって、ますますウィットのあるところを見せたがっておられるようですからね。

とうとう堪忍袋の緒が切れたということですわ。これまでの侮辱や非難の数々は、どなたにせよ、決して口にしてはならないものでしょうが、兄ならばなおさらのはずです。一つお願いがございますわ、お節介屋さん。私のほうから貴方のお嫁さん候補を持ち出すような差し出がましい真似をいたしますまでは、貴方のほうでも、私の夫のことに余計な心配はなさらないでいただきたいということです。御免なさいね。でも、父を味方に引っ張り込むような手管が私にもあるのでしたら、今まで貴方が私になさってきたのと同じ程度に、貴方を指図する権利が私にも与えられるはずだと思わずにはいられないのです。

ご通知いただいた件につきましては、次のように申し上げさせていただきます。父のご命令ならどのようなことでも、私に相応しい形でお受けいたしますが、今回の通知は兄から伝えられたものですし、その兄は、ここ暫くの間、私に対して兄らしくもない敵意を見せているのですから（ご自分の利益のためには余計な妹だと、私のことをそのように思い込んでおられること以外、私の知るかぎりでは理由も見当たらないのですが）、お送りくださったような手紙は、すべて貴方が書いたものと結論して構わないように考えているとい

うことです。また、そのような考えでおりますからには当然のこととして、ソームズさんをお迎えするためであることが明らかな場所などへは、自分から進んで赴くつもりはございませんし、また、力ずくでない場合にも、行くつもりはないと断言させていただく権利はあるものと考えているということです。

あのように下劣な当てこすりに対しましては、私個人のためはもとより、女性全体のためにも、憤慨いたしますのが至極当然なことと考えますので、次のとおりはっきりと申し上げねばならないと思います。私のほうから異議を挟むべくもない権威をお持ちの方からのご命令でないかぎり、これ以上貴方のお手紙はお受けするわけには行かないということです。もっとも、私の現在の幸せばかりでなく、将来の幸せにも関わると思われます場合は別にいたします。そして、仮にそのような場合があるといたしますと、父の厳しい態度も、父自身というよりは、貴方のほうに原因があるものと確信いたします。貴方の野望と利己心に満ち溢れている計画の、いかにも尤もらしい馬鹿馬鹿しさのせいなのです。正しくそのとおりでしょう。

腹立たしいかぎりですから、もう一言付け加えさせていただきます。近頃言われておりますように、本当に私が頑固で強情を張っているといたしましても、このように不面目な扱いをされて良いものでしょうか。お兄様、胸に手をお当てになって、だれの差し金によることなのか、おっしゃっていただきたいと思います　…　そして、確かめていただきたいのです。私は一体どのような過ちを犯したというのでしょう。これほど不幸な目に遭わされ、こんなふうに手紙を結ばねばならないなんて　…

貴方の傷心の妹

Cl. ハーロー

兄の手紙への私の返信をお読みになりましたら、教えてくださいね。私のことをどう思われますかしら　…　さあ、届けることにいたしましょう。

手紙　六

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月二十三日　木曜日　朝

私の手紙のことで皆揃って大騒ぎです。と申しますのも、昨夜はだれも帰宅しなかった様子ですし、今回のものがそうらしいのですが、極めて理に適っていると思われます命令に私が同意を拒む場合を考え、助言をするために居てもらいたいと、全員に求めがあったからなのです。

ベティの話ですと、最初のうち父は、怒りのあまり、自ら私のところへやってまいりまして、直ぐにも私を家から追い出してやるのだと言ってきかなかったのだそうです。引き止めるのも容易ではなかったのですが、それこそ、疑いもなく私の願うところで、私のひねくれた考えすべてにとってお誂え向きになると言われ、ようやく思い止どまったとのことです。その結果、兄が（私の扱いに不当なところがあったという、母や叔母の主張もありまして）もう少し穏やかな調子で再度私に手紙を書くことになったのです。と申します

のも、こんなに筆まめな娘が相手ではということで、手紙を書かせてもらえる者、あるいは、書きたいという者は他にだれもいなかったからなのです。そして、私のほうでは、もっと権威のある人からのご命令がなければ、兄の手紙は以後受け取らないと宣言したわけですから、母がその権威を添えることとなり、次のような数行を兄の手紙の上書きに付記したのです。この手紙も、私の返信と一緒に以下に添えておきます。

クレアリー・ハーローへ

この書面を受け取り、読んでもらいますが、女の子らしく、また、あなたの人柄や授けた教育、そして、孝行心にも似つかわしい、平静な態度でお願いいたします。返事を書いていただきますが、お兄様宛にしてくださいね。

シャーロット・ハーロー

クラリッサ・ハーロー嬢へ

木曜日　朝

傲然たる態度で妹から禁止を申し渡されたわけだが、今一度筆を執ることにする。母上のたっての願いを入れてのことだ。〈頑蒙さ〉に固執していると、弁護は一切得られなくなるとのお達しだが、こんな言葉を使うと衒学趣味になってしまいますかな、お嬢さん。母上としては、お前のあの細心の心遣いが、ほんの少しでも顔を出してくれればと願っておられるのだよ。かつてはご自分も、他のだれとも同様に褒めそやしておられたものだからな。ただ、お前がラヴレースと知り合う前の話だということ、それは言わずにいられない点だ。母上とハーヴィー叔母さんが言い張っておられるのだが［お二人とも、出来ることならお前の力になりたがっておられるのだ］、あんな返事を書かせるようなきっかけを作ったのは私のほうではないかとおっしゃるのだ。もっとも、あの返事がはなはだしく不作法なものであることは認めておられる。どうかな、私も穏やかな言い方を身につけてきただろう。お前のほうでは捨ててしまったわけだがね。それはともかく、こういうことだ。

お前がためらうことなくアントニー叔父さんのところへ行ってくれるよう、お二人は懇願し、祈り、請い求め、哀願しておられるのだ［このうちのどれかで間に合うでしょうかね、クレアリー嬢］。また、前回の手紙で触れた目的のために他ならないが、包み隠さずに伝えることになっているのだ。さもなければ、お二人が懇願したり祈ったり、請い求めたり哀願したりなさる必要はないようにも思われるのだよ。それだけはソームズ氏にも約束してあることだが、氏はお前の弁護に努めておられるのだ。お前が束縛を受けていることをひどく気に掛けておられる。お前が氏を嫌う原因はそこにあるとお考えなのだよ。お前に言わせると「抑えつけ」だが、お前がそれから完全に解放された場合にも、どうしても好意的な気持ちになってくれないことが分かれば、氏としては、どれほど辛い思いをなさろうとも、お前のことは諦めるつもりだとおっしゃっているのだ。そこまでお前を愛しておられるのだよ。この点に関しては、お前も中傷していたわけだが、氏の判断力も疑問視されねばならないと、心からそう思うのだよ、私としてもな。

ともかく、二週間だけ氏のご訪問をお受けすることだな。お前が授かった教育からして

も［お前も私の教育に触れているだろう］、だれに対してであれ、失礼な態度を取ることは出来ないはずだ。われわれ全員の尊敬を得ているという、純粋にそれだけの理由で、お前が不躾な扱いをした男性としては、私自身を別にすると、氏が最初のお相手になる、などといったことのないように願っている。私がどのように振る舞うかはお前の気持ち一つなのだ。友ともなれば兄ともなろう。下僕となることもあるだろう。お前ほどの礼儀正しく慎み深い妹のことだ、出来ることならこれに止どまらず、さらに丁重な扱いをしてやりたいものとも思っているのだよ。

JA. ハーロー

わざわざ返信をお認めいただけるというのなら、やはり、私宛にしてもらおう。お前の何の意味もなさない泣き言などでお心を乱されるようなことが母上にあってはならないのだ。学者気取りの兄がもう一度繰り返すことにするが、クレアリーさんよ、「泣き言」などでだよ。

ジェームズ・ハーロー、ジュニアー殿

三月二十三日　木曜日

敬愛申し上げますお父様、お母様、直接お手紙を差し上げますことは禁じられておりますゆえ、このように不意を打つような形でご清聴をお願いいたしますことを（本状がお二人の前で読み上げられるものと推測いたします）、お許しいただきたく存じます。ご意向に沿えずにおりますのは、ただただ、如何とも抑えがたい嫌悪の情ゆえであります点を、何卒ご理解いただきたいのです。幸せに比べますと、富などが何でしょう。贈与財産など何だというのでしょうか。心の底から嫌悪を感じる男の人のことです。このように情け容赦なく、そのような人物に私を譲り渡すのはご勘弁願います。繰り返し申し上げますのをお許しいただきたく存じますが、自分の心を偽ることなしにあの人と結婚するなどということは不可能な話です。結婚生活の本分というものをもっと軽く考えているのでしたら、それも可能かもしれません。でも、すべての不幸は私が背負うのです。それも、一生涯に亘ることです。心というよりも魂に関わる事柄なのです。現世のことよりも来世の幸せが問題となるのです。お断りする自由を拒まれてしまいますのは、何故なのでしょうか。その自由こそ、私の望みのすべてなのです。

あの人が何をおっしゃろうとも、あの人への嫌悪の気持ちを克服することは不可能でしょうが、お話にございました二週間、ソームズさんの言葉に耳をお貸しするのは簡単なことかもしれません。でも、堀をめぐらしたお屋敷やあそこのチャペルのこと、それに、あそこを訪ねる予定の兄と姉が、これまでほとんど憐れみを示してくれませんでしたことなどが、ひどく気に掛かるのです。また、私の束縛が取り除かれることになるなどと（しかも、ソームズさんの願いによってということですが）、どうして兄は言えるのでしょう。今よりも一層厳しく拘束されることになるというのにです。跳ね橋を上げてしまうように脅されてもおりますし、最後の頼みの綱として訴えかけようといたしましても、お父様もお母様も近くにはいらっしゃらないというのにです。

お願いです。ご自分の子供に対して持っておられます権限を、兄や姉に譲り渡したりな

さらないでいただきたいのです。薄情さと非難の言葉をもって私を扱っております、そして、十分な根拠があって懸念する次第ですが、私の言葉や振舞いをねじ曲げてお伝えしているらしい、その兄と姉にです。そうでもなければ、あんなにもご愛顧をいただいていた私なのですから、不幸にも評判を落としてはおりますが、こうまでお二人の評価を下げることなど、有り得ない話なのです。

この辛く不面目な監禁だけは、何卒終わりにしていただきとうございます。大好きなお母様、お手伝いさんの一人として、お傍で針仕事を続けさせていただきたいのです。私の心を支配しておりますのは我が儘な気持ちでもなければ、だれかへの一途な想いでもないことを目の当たりにしていただけるでしょう。でも、お母様ご自身のお家から私を追い出したりはなさらないでほしいのです。ソームズさんが出入りをなさることは、お父様のお気持ち次第と存じます。ただ、あの人がお越しの際には、私はその場に留まっても引き下がっても良いようにしていただきたいのです。その他の事に関しましては、ご神慮に委ねる所存です。

お兄様、このように一見術策とも見えます仕方でお父様お母様に語り掛けますことをお許し願いたいと思います。お傍にまいりますことも手紙を書くことも禁じられているのですもの。このような計略に頼らざるを得ませんのは辛い話です。それから、紳士の高貴さや妹に向けられるべき兄の優しさにつきまして、率直に申し上げました点もお許し願います。好意とか憐れみとかを寄せていただくことなど、最近のお兄様からは到底望めない話ですが、ただ、そのいずれにいたしましても、失っても仕方のないようなことをした覚えはございませんので、敢えてその両方を要求させていただきます。と申しますのも、不幸な妹の千々に乱れる心に平安を取り戻しますためには、ただの兄に過ぎないとは申せ（有難いことに、大切な父母は共に健在ですので）、差し当たり、貴方の力に頼るところが大きいことを確信しているからなのです。

貴方の幸薄き妹より

Cl. ハーロー

ベティの話では、兄は私の手紙をズタズタに引き裂き、浮き足立っている者の気持ちを固めさせるような返事を書こうと買って出たのだそうです。どうやら、あの手紙で心を動かされる者が出てきますのは確かだったようです。この冷酷無情な兄さえいなければ、ということですが　…　神よ兄を許し給え。

手紙　七

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月二十三日　木曜日　夜

ちょうど今届きました、自慢の反論が綴られております手紙をお送りいたします。階下では、兄と姉、それに、アントニー叔父様とソームズさんが、反駁の出来ない見事な出来映えだということで、写しを読みながら大喜びをしている模様です。

クラリッサ・ハーロー嬢へ

譲ることを知らない妹よ、もう一度だけ筆を執ることにする。父上母上に女々しい哀訴をお聞かせするための道具として私を利用するとは、なかなか手の込んだ話だが、期待どおりの効果は上がらなかったことを知らせておく。

はっきり断言しておくが、お前の振舞いが捻じ曲げて伝えられたためしなどないし、その必要もないのだよ。お前のやることなすことすべてについて、あらゆる機会を捉えて一番好意的な見方をしようとなさっている母上が、お前もよく承知しているとおり、十分に吟味なさった上で、やむなくお前のことを見捨てられたのだ。従って、母上の面前で針仕事に精を出すなどという策を弄する必要はない。母上にしてみれば、お前の哀れっぽいわごとには我慢がならないのだ。母上のためを考えてのことなのだよ、お前がお傍に近づくのを許してもらえないのは。母上ご自身のお考えに従うというのでなければ、今後とも同じことだろう。

昨日は、もう少しでハーヴィー叔母さんを誑かすところだったな。お前のところから降りてくると、叔母さんはお前のために弁じていたが、お前をどこまで譲歩させてくれたのかと尋ねられると、目をキョロキョロさせ、どう答えたら良いものやら分からない有り様だった。母上にしても、私宛を装った手紙が、思いもよらず母上と父上への狡猾な呼び掛けになっているのに気づかれると（俺も、こんな巧みなごまかしが仕組まれていることなど、ほとんど疑いもせずに読み始めてしまったのだ）、最後まで読むようにとのご希望だったが、両手を握りしめ、あゝ、可哀相に、あの娘をそんなに追い詰めてはなりません、などとおっしゃるのだ。だが、母上も問い質されたのだよ。一族の者たちに公然と逆らっている男、そして、我が息子を殺めるところだった男を婿に迎えようというのか。これだけの思いやりに値するどれほどの譲歩を愛娘から引き出したのか。しかも、心を捉えているものはないことを確約し、明らかに偽りを働いた娘に対してではないのか、とだよ。すると、ご自分の妹が先ほどしていたのと同じように、母上も目をキョロキョロさせておられたのだ。そして、思い直されると、恩知らずなことに、近頃は盾突いてばかりいる謀反者に対して、ご自分の権威を主張しようと［〈譲り渡す〉ということではないのだぞ、才気煥発なでしゃばり屋さんよ］決心をなさったというわけだ。

お前さんは結婚生活の本分について、高遠な考えをお持ちのようだな。そこでひとつ言ってやろう。他の女と同じことで（光栄にも存じ上げている一人か二人の女性を別にすると）、お前も教会に行って誓いを立てるのだろうが、そんな誓いなど、以後は一切気にも掛けなくなるということだよ。だがな、お前のご立派なノートン・ママならこう呼び掛けるところだろうが、愛娘さんよ、結婚生活の本分とやらのほうは少しお預けにして（少なくとも、その状態に入るまではな）、子の務めのほうにもう少し意を用いてもらいたいということだよ。

すべての不幸はお前が背負うことになるのだなどと、どうしてそのようなことが言えるのかな。両親にもおじたちや叔母にも、また、この私やお前の姉にも、たっぷり不幸の分け前を与えているのにだよ。そして、そのだれもが、お前の十八年の生涯に亘って、十分にお前を愛してきたというのにだ。

好意や憐れみを期待すべき余地を近頃の私が与えなかったとすれば、それは、それに相

応しい振舞いが近頃のお前に見られなかったということなのだ。お前の心掛け一つで手にすることの出来る心の平安をお前にもたらすには、ただの兄に過ぎないが（お前にとってはすこぶる取るに足らない間柄ということだろうが）、私の力によるところが大きいのだなどと、そんな台詞で何を言わんとしているのか、私には分かっているのだよ、中傷好きの愚かな小娘が。

お断りする自由などというものは、可愛いお嬢さんよ、お前には許されないのだ。その後に続くのは、だれにとっても好ましくない選択の自由であることくらい、皆にも察しがついているからだよ。お前こそ口に出そうとしないが、お前が想いを寄せているあの悪党は、それを相手構わず言いふらしているのだ。あいつはお前のことを自分のものだ、自分のものにしてみせると言っている。自分の所有物を奪う者はだれであれ、生かしてはおかないというのだ。そこでだな、われわれとしては、ひとつ奴を試してみたいわけだよ。父上としては、父親には自分の子に対する権利があると考えておられるから、威しを受けてその権利を捨てるような真似は絶対にするまいと、断固決心なさったのだよ。それに、父親よりも放蕩児を選ぶような奴は、一体どんな子供だというのだ。

今回の事柄はすべて、このような観点から論じられねばならないということだ。「愛はいかなるものにありても同一なり」という詩人の言葉が耐えられないのなら、精々顔を赤らめるのだな、上品ぶり屋さんよ。貞淑ぶって、頬を染めるが良いだろう。淑やかな生娘らしく恥じ入るのだな。そして、理に服する心があるのなら、自分の気持ちは一切捨て、生命を授けてくださった大切な両親のご意向に従うことだ。そして、ここ暫くのお前の所業を許し、水に流していただくよう、身内の皆さんに願い出ることだよ。

横柄な態度を取られ、差止めを受けた後のことでもあり、ほんの数行のつもりでいたのだが、思いもよらず長い手紙になってしまった。そろそろご指示のあった話に移ろう。お前は閉じ込められているのに我慢出来ないと言うが、こちらとしても閉じ込めておくのにうんざりだ。そこで、前にも言ってあるように、一両日中にもアントニー叔父上のお屋敷へ行けるよう、準備せよとのお言葉だ。叔父上は、お前の懸念などには関わりなく、お好きな時に跳ね橋を上げてくださるだろうし、ご自分のお屋敷のことだ、お気に召した人にだけお会いになるそうだ。また、最近のお前は神聖な祈りを捧げる場所を敬遠しているようだが、そんな馬鹿げた気の病を癒すために、チャペルを取り壊すつもりはないとおっしゃっている。仮にも力に訴える気になれば、お前の部屋であれ他のどこであれ、式を挙げてもらうことは出来るわけだから、いよいよ馬鹿げた話だということになる。

はっきりしているのは、ソームズ氏に対する偏見ゆえに、お前は目が見えなくなっているということだ。慈悲という点からも、お前の目を開いてやる必要があるのだよ。氏の容姿を見下げ果てたものだと考えているのは、お前以外にはだれ一人としていないのだからな。また、身だしなみの点でも、まことに堅実なお考えをしておられるから、伊達男風の格好はなさらないだけで、実直な地方紳士としては、何ら咎めるには当たらないということだよ。それに、氏の気質について語るにしても、現在明らかにお前に入手可能と思われるものより、もっと豊富な知識に基づくことが必要なのだ。

いずれにせよ、速やかに転居の用意をしておいて間違いないだろう。少なくとも一つくらいは身内の者の意向を受け入れる気があることを示すために、また、お前自身の便宜のためにもな。そして、この私を、ただの兄に過ぎないが、身内の一人と考えても良いのだ

ぞ。それに相応しい態度を取る気持ちになってくれるならの話だがな。

ジェームズ・ハーロー

追　伸　無礼を重ねたことにあまり気兼ねを覚えず、別のある場所でお会い出来るためのことだが、お前がソームズ氏にお目に掛かり、これまでの振舞いを詫びる気になっているというのであれば、氏のほうでもお前の好きな場所で会ってくださるはずだ。

お前の署名をもらうため、贈与財産の約定書が読み上げられることになるが、事前に目を通しておきたいというのであれば、届けさせよう。待てよ。新たな異議申し立ての種になるかもしれないな。心を捉えているものはないとのことだったが、そうでなくちゃ困るのだ。母上にそう言ったのではなかったかな。信心深いクラリッサが母親に嘘をつくわけはあるまい。

返信は要らん。返信を必要とするような場合ではない。ただ、ひとつ質問をさせてもらうが、お嬢さん、他にはもう提案はないのかな。

この手紙の最後の部分までまいりますと（おそらく、追伸は他の者たちが本文を読んだ後で書かれたのだと思います）本当に腹が立ってしまいましたので、ご助言いただきましたように、私の地所を取り戻すことにつきまして、伯父に一筆認めるつもりで筆を手にいたしました。でも、私の主張を味方になって支持してくれる者が一人もいないことや、そのようなことをしましても、何かの役に立つというより、皆をいよいよ激昂させるだけだということを考えますと、その気力も萎えてしまいました。あゝ、従兄弟が戻っていてくれさえすれば、と願わずにいられません。

つい先頃まで、だれからも愛されているように思っておりましただけに、私の弁護をしてくださる人、私を支えてくださる人、あるいは、庇護を求めることが必要となりました場合にそれを与えてくださる人が、今この世に一人としていないというのは、悲しいことではないでしょうか。顔を合わせました人はすべてお友達になっていただけるものと思い上がっておりましたし、それを決して分に過ぎたことでもないと自負しておりました私なのです。と申しますのも、男性であれ女性であれ、あるいは、幼い子供であれ、また、貴い人でも卑しい人でも、富める者でも貧しい者でも、神の似姿を目にいたしますと、多少なりとも、自分自身のことのように愛情をもって接するのが常だったからです。貴女が結婚しておられたらと、本当にそう思いますわ。きっとヒックマンさんに働き掛け、この騒動が収まりますまでの間、保護の手を差し延べてくださったでしょうからね。でも、そうなりますと、あの人を面倒なことや危険なことに巻き込んでしまいますね。そのようなこと、金輪際いたしかねますわ、私には。

どうしたら良いものか、見当も付かないのです、本当に。恥ずかしいかぎりですが、苛立ちを抑えられません。願わくは　…　でも、何を願ったら良いものやら、罪を犯しそうで、それすら分かりません。ただ、お慈悲に与りますよう、神に召されたいものと願っております。この世には慈悲のかけらも見当たりません。一体何という世の中なのでしょうね。望ましいものなど、この世にあるのでしょうか。私たちが望みをかけます善いものにいたしましても、奇妙なほどに玉石混交の状態ですから、何を望んだら良いのか分からない有り様です。それに、人間の半分は残りの半分を苛んでおりますし、苛むことで自らも

苛まれているのです。この私の件にいたしましても、身内の者たちは私を不幸にしてはおりますが、自分たちも幸せにはなれないのです。確かに、兄と姉は別ですわね。二人は自分たちのしている悪事に喜びを見出し、楽しんでいる様子ですもの。

でも、そろそろ筆を置く頃合のようです。綴り出されますのが苦々しい文字ばかりになっておりますからね　…

手紙　八

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

金曜日　午前六時

ベティの話ですと、今話題に上りますのは、アントニー叔父様のところへの私の転居のことばかりだそうです。あちらまで私のお供をする用意をしておくよう、あの娘に指示があったとのことです。行きたくない気持ちを口に出しましたところ、あの娘は、厚かましいことに、あの屋敷のロマンティックな様子を私が何度となく褒め称えているのを耳にしていたのに、趣味にぴったりの家へ移るのを嫌がるなんて驚きだ、などと（両手を差し上げ、天を仰いで）言い出すのです。

このように無礼な言葉は自分で思いついたものか、それとも、あの娘の若い女主人の考えなのか、私は尋ねてみました。

返事を聞いて半ば唖然としてしまいましたが、気の利いたことを口にしても、いつも他人の手柄にされてしまうのは悔しい話だ、というのです。

娘は大胆な言い種だったことには気づかず、本心から気の利いたことを口にしたと思っているような顔付きでしたから、私もそれ以上は咎めませんでした。でも、正直な話、この娘の利口さにびっくりさせられることも多いのです。この監視の役目に就いてからというもの、以前は分からなかったことですが、図々しさの中にもウィットに富んでいるところがとても目に付くのです。厚かましいのが才能なのでしょう。姉の召使になる定めだったわけですが、運命の女神のほうは造化の女神ほど親切ではなかったということになりましょう。姉の友達だったほうがずっと名を上げていたことでしょうからね。それに、時々考えてしまうのですが、私自身も、片方の女主人とかもう一方の妹であるよりは、両方の召使になるほうがもっと性に合っているように思います。ここ数ヶ月の間の仕打ちを見ますと、まるで運命の女神も同じ考えをしているかのように思われるのです。

金曜日　十時

たった今、養鶏場のほうへ向かっておりましたところ、兄と姉、それに、あのソームズさんが一緒になって、勝ち誇ったように笑い声を上げているのが耳に入りました。養鶏場と庭を仕切っております背の高いイチイの生け垣に遮られ、私の姿はあの人たちの目には入らなかったのです。

兄が自分の前回の手紙の写しの一部、あるいは、その全部を読み聞かせていたところだったのです。貴女ならこうおっしゃるでしょうね。「何て思慮深いのでしょう。それに、ある男の人の奥さんとして貴女を押し付けようという、あの人たちの魂胆にもぴったりだわ

ね。奥さんになるとしたら、将来の幸せという点からしても、隠そうと骨折って上げるのが親切になるような事柄を、その人から隠そうとしないんですもの、あの人たちは」とです。とにかく、二人が私のことを心の底から憎んでおりますのは疑いございません。

「まったくの話、それを言われては、あの娘もたじたじですわね、お兄様。お兄様宛に筆は執らぬようになどとおっしゃる必要はありませんでしたわ。請け合っても構いませんけど、いくら機転がきくといっても、あの娘もそれに返事を書く気は起こらないでしょうからね」と、姉が言っておりました。

「いや、そのとおりだな」　鼻につきますあの学士然たる態度で（自分ほど筆の立つ者はいないと思っているのです）兄が口を開きました。「これであいつにも止めを刺したと思うんですがね。ソームズさん、貴方はどう思われますかね」

「えゝ、返答に窮してしまわれるでしょうね。しかし、私への反感をいよいよ募らせることにはなりませんかね」

「心配ご無用ですよ、ソームズさん。目的は遂げてみせます。あいつのために、貴方のほうが先に嫌気をさしてしまわれれば別ですがね。もう引っ込みのつかないところまで来ているのですよ。間もなく従兄弟のモーデンが戻ってくるでしょう。その前にすっかり片付けておかねばならんのです。さもないと、独り立ちをしてしまって、だれにも手が出せなくなってしまいますからね」と、兄が言っておりました。

そういうわけなのです、ハウさん、皆が死に物狂いになっておりますのはね。

ソームズさんは、兄が少しでも希望を抱かせてくれる間は、また、父の気持ちが揺るがないかぎりは、辛抱を続ける所存だと言明しておりました。

姉のほうでは、私がソームズさんと会わねばならない理由に関して、実に痛いところを突いていたけれど、天の邪鬼の妹に落ち度があるからといって、女性のことをそんなに手厳しく扱うのは困るなどと、兄に向かって言っておりました。

何か陽気な、そして、想像いたしますに、気の利いた言葉を兄が返したのでしょう。兄とソームズさんがとてつもない声で笑い出しましたし、ベラも笑いながら、本当にいけない人なんだから、と言っておりました。でも、それ以上あの人たちの話を聞き取ることは出来ませんでした。庭のほうへ歩いて行ってしまったのです。

お話ししてまいりました事柄も私の怒りを再燃させることはなかった、などとお考えでしたら、同封いたしました兄宛の手紙の写しをここでお読みください。そうすると、誤りに気づいていただけるはずです。興奮冷めやらぬままに書き記したものなのです。

もうこれ以上、私のことを意気地がなくておとなしいなどとおっしゃらないでくださいね。お願いいたします。

ジェームズ・ハーロー様

金曜日　午前

謹んで

返事は書くなとのお言葉ですが、先のお手紙をいただきながら黙っておりますと、おそらく、おっしゃっている条件でアントニー叔父様のお屋敷へ参りますことを承諾したのだと、貴方は結論することでしょう。お父様がご自分の子供を好きなように扱うとおっしゃ

るのは致し方ございません。そうするのが正しいとお考えなら、私をお屋敷から追い出されても結構でしょうし、それを貴方にお任せになるのにも異存はございません。でも、（口にするのも厭わしいことですが）自分の家を持っております身で、どなたにせよ、他の人のお宅へ力ずくで連れて行かれますのは、まことに辛い話と存じます。

貴方やお姉様からの挑発行為があるとは申せ、お父様のお許しもなしに、あの地所を私だけのものにしようなどとは、一切考えてはおりません。でも、これ以上ここに留まってはいけないということでしたら、どうしてあの家に行くことを許していただけないのでしょう。このご好意に与ることが出来ますなら、会わせたくないとおっしゃる人には決して会わないことをお約束いたします。私はそれを「好意」と呼ぶのです。そして、おじい様のご遺言によりまして、権利に関わる事柄となってはおりますが、それを喜んでご好意として受け止め、それなりの謝意を表する次第です。

お手紙の追伸では、到底兄とも思われない言い方でしたが、新たな提案はないのかとのご質問でした。三つないし四つ（貴方からお尋ねですので）ございます。いずれも新しいものだと思います。もっとも、思い切って申し上げますなら、この件はどなたであれ、貴方がまだ私への反感を吹き込んでおられない人に委ねることとし、私の古い提案のほうは退けられるべきではなかったのだということです。私はそのように考えております。だといたしますと、それを筆にしてはいけないでしょうか。また、そのように申し上げましても、妹を怒鳴り散らす理由は貴方にはないのです（お手紙では、母とハーヴィー叔母様に私への反感を抱かせたと、自慢の種にしておられるご様子ですからね）。どこの兄にいたしましても、妹相手に取ってはいけない、そんな態度で貴方が私を扱っておられるからといって、私も貴方に腹を立てる理由はないのと同じことです。

そこで、私の新たな提案ですが、次のとおりです。

先にも申しましたが、おじい様の元のお家に行って住まいますのを（そちらでお決めいただく条件で結構ですし、それを厳守する所存です）邪魔しないでいただきたいということです。あのお家のことは、ここでは二度と私の家とは申さないつもりです。かつてそうであったのを大変に不幸なことと考えているからです。これは本心です。

これがお認めいただけないのでしたら、ハウ嬢のところへ一ヶ月、あるいは、適当とお考えになる期間お邪魔する許可をいただきたいのです。お父様のお許しがあれば、ハウ嬢のお母様も同意してくださると思うのです。

これも許していただけず、どうしてもお父様のお屋敷から追い出されねばならないのでしたら、ハーヴィー叔母様のところへ行かせていただくようお願いいたします。叔母様のお宅でも、叔母様のご命令、そして、お父様お母様のご命令を絶対的なものとして厳守するつもりです。

でも、これもまた認めていただけないのでしたら、慎んでお願いいたしますが、アントニー叔父様のお屋敷の代わりに、ジョン伯父様のお屋敷へ連れて行っていただきたいのです。このようなことを申し上げましても、アントニー叔父様のことを軽んじているわけではございません。堀のこと、引き上げると脅しをかけられております橋のこと、また、おそらくあそこのチャペルのことも、貴方は私の心配を滑稽だと洒落の種にしておられますが、私には言葉に出来ないほど恐ろしく思われるからなのです。

この点もやはり拒まれてしまうのでしたら、そして、どうしても堀を巡らせたお屋敷に

連れて行かれねばならないのでしたら、かつては喜びの元となっておりましたお屋敷ですし、あそこでソームズさんをお迎えするよう、無理強いはなさらないことを約束していただきたいのです。その場合には、今までどおり、気持ちよくあのお屋敷へ参る所存です。

以上が私の新たな提案ということでございます。いずれも、あの度量の狭いしつこい人からの訪問を避けようとするものですから、どれ一つとして貴方の目的に適うものはないということでしたら、次の点は是非ともご承知いただきたいと思います。つまり、私の心の一隅でも分かち合うつもりのない男の方に黙ってこの手を委ねるくらいでしたら、私はどのような不幸をも静かに耐え忍ぶ覚悟でいるということをです。

私の書き方がいつもと違うといたしましても、また、機会があれば筆にしたいと願っておりました事柄とは別な筆遣いになっているといたしましても、公平な心の持ち主で、一時間ほど前に偶然私が耳にいたしました、貴方やお姉様、そして、もう一人の方が話しておられた事柄（とりわけ、これほど乱暴なやり方で事を進めようとなさる貴方の理由、つまり、近々ありそうな、従兄弟のモーデンさんの帰国の件）をご存じの人でしたら、私にはそうする根拠が有り余るほどあるとお考えになるだろうと思うのです。そこで、お忘れいただきたくないのですが、「女々しい泣き言」のためにこれほどの軽蔑と嘲笑を受ける羽目になってしまったのですから、貴方とお姉様がお示しくださったあんなにも素晴らしいお手本を真似るためだけだといたしましても、私もそろそろ自分本来の姿を表に出すよう努力すべき頃合だということです。貴方たちのどちらもが最近想像しておられたようですが、私と貴方たちお二人とはそれほどに異質なのではなく、ずっと似通っているのだとお考えいただくためにもですわ。

一気に「女々しい手立ての限りをぶちまけます」ためにも、一言付け加えさせていただきましょう。さんざんお好きなことを書き送ってこられた後で、貴方宛に返信するのは禁じるとおっしゃいますのには、何か理由がお有りなのでしょうか。私への振舞いにつきまして、筋の通った妥当な説明が出来ないことを自覚していらっしゃるということ以外、他の理由は私には思い当たらないのです。

もしも違うとおっしゃるのでしたら、学問もなく論理にも弱い、貴方のお年の三分の一近くも若いこの私ですが、思い切って（こちらの言い分の正当さを強く確信しておりますから）貴方との議論に運命を託す覚悟です。高等教育の恩恵に浴し、観察や学問的な会話によって頭を鍛えておられる、そして、わざわざ非難の言葉を書き送ってくださる場合には、こんな下品な言い方をお許し願いますが、いつもその相手に止めを刺すようになさっておられる人を、大胆にも敵に回そうというのです。

公平な心の持ち主でしたら、どなたでも結構でしょう。例えば、貴方の元の家庭教師とか、信心深くて徳の高いリーウェン師とかに審判になってもらいましょう。どちらの方も私の負けだとおっしゃるようでしたら、運命に従うことをお約束いたします。ただし、貴方の負けということになりました場合は、強引に押し付けようとなさっている人を私がお断り申し上げましても、父がそれを許してくださるのでしたら、それだけで結構です。

ご自分の議論の才を高く買っていらっしゃるようですし、最後のお手紙に込められた立論の適切さも相当なものとお考えのようですから、それだけになおさらのことですが、お兄様、貴方がこの提案を快諾してくださるものと期待いたしております。貴方との論争では、私にとりまして有利な点などは、根拠の正当さから生じるもの以外には（貴方はこの

点も否定なさるでしょうね）、おそらく何一つないでしょうから、公平な調停人に向かいまして、私が間違っており、貴方は間違っていないのだということを、貴方のほうから証明なさるのが筋かと存じます。

これをご承諾いただけます場合には、書面によって進められることが必要です。論じられるべき事実が定められ、両方の合意を見なければなりません。そして、それぞれが自説擁護のために提示いたします論証の効力に従って、勝ち負けを決めることにいたしましょう。一言申し上げさせていただきますが、お兄様の男っぽいご気質は重々承知いたしておりますから、面と向かっての話し合いを提案する気持ちにはなれないのです。

ご承諾いただけないということでしたら、私に対する振舞いの弁明がお出来にならないのだと結論させていただきます。そして、今後は、学問もあれば礼儀も弁えているように思われたいのでしたら、妹に対しましても、兄らしい思いやりをもって接してほしいものだと、そのことだけをお願いしておきましょう。

ところで、少々気の強いところをお見せしてしまったようですが、この態度も、光栄なことに私と貴方、そして、私と姉とを結んでおります間柄を考えますと、まったく異質なものとは言えないでしょう。また、かつて皆様の愛情を賜るもととなっていたように思われます、私の性格のあの一面と完全には一致しないように見られるといたしますと、それがだれのせいなのか、どこに原因があるのか、その点を何卒お考えいただきたいと思います。また、そういった性格のこの面にいたしましても、そのお陰であれほどの軽蔑や侮辱の数々に晒されることになりますまでは、無用のものとはされていなかったということです。私のほうでは進んで放棄いたしました経済的な自立にあくまでも固執し、それを手になさると、鬼の首でも取ったような顔をしておられたお兄様です。あのような軽蔑や侮辱はだれに対しましても、いわんや、か弱く、寄る辺のない妹に対して向けるべきものではございません。とは申せ、愛情と尊敬の念を忘れぬ妹のつもりでおります。今後とも機会のありますたびに、喜んでそのことをお示しする所存です。近頃では冷淡な応対に出会うばかりですが、これまでも一貫してそのように努めてきたのですから …

Cl. ハーロー

どうかご覧ください。激情に衝き動かされた勢いの良さと多弁ぶりと言って構わないでしょう。お送りいたします手紙は最初の草稿で、なすり消しも削除もなしに、一気に書き上げたものなのです。

金曜日　三時

これを書き写しますとすぐに、ベティの手で階下の兄のところへ届けてもらいました。あの娘は間もなく戻ってまいりましたが、すっかり仰天した様子で、「まったくお見事ですわ、お嬢様。一体何をなさったのです。何をお書きになったのですか。だって、皆さん楽しげに大騒ぎですわよ」と言っておりました。

姉がたった今出て行ったところです。猛り狂って上がって来たのです。急に筆を置かね

ばなりませんでしたのは、そのためなのですが、姉は走り寄ってまいりました。

「本当に気の強い娘だこと。結局、こういうことになったわけね」　私の首の辺りをポンと叩きながら姉が言いました。でも、少々力が入り過ぎておりました。

「まあ、ベラ、殴るつもりなの」

「これで殴ったって言うの。肩をちょっと叩いただけじゃない。こんなふうに」と、もう一度、前よりは優しく叩いておりました。「私たちが予想していたとおりだわ。こういう事態になるのはね。独り立ちがしたいんでしょう。貴女に対しては長生きをなさり過ぎたということだわ、お父様も　…　」

私が憤然として口を開こうといたしますと、姉は私の口の前にハンカチを突き出すのです。本当に無礼なやり方でした。そして、「あれだけ筆をふるえば十分でしょう。コソコソ盗み聞きなんかして。でも、知っておくことね。独り立ちの計画も訪問先の件も、どちらも認めてはもらえませんからね。思いどおりにすれば良いのよ、天の邪鬼は。あんたの道楽者に頼んで、両親から独立するのを手伝ってもらうのね。そして、あの男の言いなりになっていると良いんだわ。そうなさいよ。直ぐに準備にかかることだわ。持って行く物を決めておくのね。明日行ってもらいますからね。嘘じゃないのよ。明日にしてもらいますからね。これ以上ここにいて、キョロキョロしたり、コソコソと他人の話を聞き回ってほしくないのよ。そう決まったんですからね。明日行ってもらうのよ。お兄様が告げに来ようとなさったのだけれど、私が頼んで止めてもらったのよ。そうなったら、あんたがどんな目に遭うか分からないでしょう。あの手紙ですもの。あれだけ傲慢で、あれだけ独り善がりな果し状を、よくもまあ突きつけたものだわ。あんたも自惚れた女ね。でも、いいわね、用意をしておくのよ。明日ですからね、行ってもらうのは。お兄様はあんたの厚かましい挑戦をお受けになるとおっしゃっているわ。でも、面と向かってでなければいけないそうよ。それに、アントニー叔父様のお屋敷でですって。それとも、もしかして、ソームズさんのところかしらね」などと言っておりました。

こんなふうに、興奮のあまり口から泡を飛ばさんばかりに姉は続けておりましたが、とうとう私も我慢が出来なくなりましたから、「そういう乱暴な言い方はもう止めてちょうだい、ベラ。貴女がどんな態度で上がって来るつもりなのか分かっていたら、私の部屋まで来ても、ドアは開いていなかったことでしょうね。貴女の召使相手にするものだわ、そういう口のききかたは。これは神様に感謝していることだけれど、私が貴女に似ていなくても、それでも貴女の妹ですからね。それから、言わせていただきますが、明日行く気はありませんからね。その次の日も、その次の次の日もよ。力ずくで引っ張られて行くのでないかぎりはね」と言ってやりました。

「何ですって、お父様とかお母様とかが命令なさっても行かないっていうのかしら。この　…　娘ったら」と、姉は言っておりましたが、もう一つ別の言葉を、この言葉が発せられます前の間と仕草とに込めておりました。

「そのとおりにしていただくわ、ベラ。そうしたら、私もどう言ったら良いのかが分かるでしょう。でも、どうせなら、お父様たちご自身の口からお聞きしたいわ。貴女からでは駄目よ。貴女のベティからもね。それから、この調子でもう一言おっしゃってごらんなさいよ。どんな結果になるとしても、お父様たちのところへ行って見せるわ。こんな仕打ちを受けるなんて、私が何をしたというのか、お尋ねするつもりだわ」

「じゃあ、いらっしゃいよ、あんた。さあ、行くのよ、従順なお嬢さん」　姉が私の手を取り、ドアのほうへと導きました。そして、「今お尋ねするのね。あんたに見下された両親がお揃いのはずだわ。あら、あら、さっきまでの元気はどうしたのかしら」と言うのです。こんな横柄な態度でついて来るよう言われたものですから、私が嫌がって手を引っ込めたのです。

「先導なんてされたくないわ。さあ、参りましょう。貴女のご招待があったと申し上げれば良いんだから」　この言葉のとおりに、私は怒りに駆られるまま階段のほうへ急ごうといたしました。ところが、姉が私とドアの間に割って入り、閉めてしまいました。

「図々しい娘ね。あんたが来るってことを、先に私が知らせてからにしてもらうわ。あんたのためにも、そうさせてちょうだい。お兄様も一緒なんですからね」と、姉は言っておりました。でも、再びドアを開き、私が後退りするのを看て取りますと、「行きたいというのなら、行きなさいよ。どうして行かないのかしら。どうしてかしら、お嬢様」などと言いながら、控えの間まで追いかけてきましたが、私は胸も張り裂けそうな思いで控えの間に逃げ込んだのです。そして、サッシ窓のついたドアを閉めました。もうそれ以上、涙を堪えていることは出来なかったのです。

ますますひどくなる姉の悪口にも一つとして言葉を返そうとはせず、ドアを開けなさいとの要求にも（鍵は内側に付いているのです）応じませんでしたし、姉がガラス越しに私を見ていたのですが、そちらには顔さえ向けずにおりました。そして、最後には、姉もすっかり腹を立てたことと思いますが、絹のカーテンを引きまして、私の姿が姉には見えないようにしてしまったのです。姉は降りて行きましたが、その間ずっと、何やらブツブツ言い続けておりました。

これほどの仕打ちですからね。今まででは考えられないような行動を促しますのに十分なものではないでしょうか。

前もってのお知らせも出来ないうちに、叔父の屋敷へと追い立てられてしまうことも十分考えられますので、お願いをしておきます。そのような乱暴な話がお耳に入りました時には、出来るだけ急いで例の場所に使いの人をお出しになって、私の手には届かずじまいになってしまうかもしれません貴女のお手紙を引き取るとか、あそこに残っているかもしれない私の手紙一切を持ち帰っていただきたいということです。

貴女はいつまでもお幸せでいてくださいますよう、お祈り申し上げます。

クラリッサ・ハーロー

四通のお手紙、確かに受け取りました。でも、ひどく興奮した状態ですので、今すぐに返事を差し上げますのはご容赦願います。

手紙　九

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月二十四日　金曜日　夜

非常に挑発的な手紙が姉から届きました。自ら招いたこととは申せ、私の部屋で受けま

した侮辱に対し、姉が憤慨することくらいは察していても良かったでしょうね。姉の振舞いに説明がつくといたしますと、間違いなく、有りもしないライバル関係に促された激しい怒りの気持ち以外にはないと思います。

クラリッサ・ハーロー嬢へ

私から話すことになっているので教えてあげるわ。お母様はね、明日についてはご容赦願いますと、あんたのためにお頼みになったのよ。でも、あんたからのお母様への働き掛けは、他の皆へのと同じで、上々の手際だったということだわ。

あんたの提案やお兄様への手紙から分かることだけど、あんたってひどく愚かかと思うと、ずいぶん小賢しいところもあるのね。若いのに年寄り染みているし、優しいところも意地っ張りなところもあるし、穏やかかと思えば激しいでしょう。これだけ雑多な性格をした人間もまずいないわね。

今までになかったこの気の強さは、一体だれから借りてきたものなのか、私たち皆には分かっているのよ。でも、その種はあんたの心の中にあったのに違いないわね。そうでなけりゃ、一度にこんなにも勢い良くなるわけがないでしょう。ソームズさんに意地悪をするようなものだわね、こんな娘を押し付けたりするのは。恥ずかしがり屋の恥知らずなんだから。これもまたあんたの矛盾しているところよね。私が何を言いたいか、あんたのほうで考えることね。

お母様はね、いいこと、あんたにはこの家に居残ってもらいたくないのよ。こんな謀反者みたいな子供が身近にいては、到底心の平安は得られないわけよ。ハーヴィー叔母様にしても、身内の者全員が一緒になっても扱い兼ねている仕事を引き受けるおつもりなどないわ。ジョン伯父様はね、あんたが結婚するまでは、お屋敷にあんたを迎えるおつもりはないとおっしゃっているの。つまりね、アントニー叔父様の他にはあんたを受け入れてくれる人がいないのも、あんた自身の頑固さのせいということね。叔父様のところへは近々行ってもらうし、あちらに着いたら、私も立ち会うけど、あんたからの控え目な挑戦にまつわる事柄はすべて、お兄様がケリをつけてくださることになっているわ。勿論、挑戦には応じることになっていますからね。多分、リーウェン師がお見えになるはずだわ。あんたの選ぶ人ですからね。それに、殿方がもう一人いらっしゃるのよ。あんたが考えているような人じゃないってことを、あんたに分からせるためだけのことだとしてもね。おじ様たち二人もきっと同席なさるでしょうね。可哀相な、か弱く、寄る辺のない妹が公平な裁きを得られるためにだわ。どうかしら、これで分かったでしょう。生意気に挑戦などするから、こんなにも集まっていただくことになるんだわ。

その日のために用意をしておくことね。間もなくお声が掛かるはずよ。それじゃあ、お元気でね、ノートン・ママの愛娘ちゃん。

ARAB. ハーロー

私はこの手紙を書き写しました。そして、母に届けてもらったのですが、次のような数行を添えておきました。

いつも尊敬いたしておりますお母様、ほんの一言申し上げます。

もしも、同封いたしましたものを姉が書きましたのは、お父様やお母様のご指示であったというのでしたら、そこに見られます姉の悪態も黙って見過ごすべきものとは存じますが、これだけは申し上げておかねばなりません。つまり、それすらも、面と向かって受けました仕打ちには及ばないということです。もしも、姉自身の考えから出たものだというのでしたら、お母様、これはもう …… でも、お目通りを禁じられました時に、分かっていたことですね。ただ、姉にこのような仕打ちをする権限があるのかどうか、その点がはっきりといたしますまでは、次のように記すだけに止どめます。

大変に幸薄き貴女の子供

Cl. ハーロー

次のような返事を受け取りました。開いたままの紙片に書かれておりましたが、濡れているところが一ケ所ございました。私はそこに接吻いたしました。母の涙を吸って、いわば水腫れのようになったのは確かだからです。母も気の進まないままに（そうであって欲しいのですが）筆を執ったに違いありません。

権威が無視されているところに保護を求めようというのでは、厚かましい話です。あなたの姉は、あなたのような立場に置かれた場合にも、あなたのように意地を通したりはしないでしょうから、そのことであなたに腹を立てても許されるのです。でも、私たちの権威がないがしろにされている点を思ってのことでしょうが、あまり熱心にならないように話してはあります。あなたが訴えているものとは別の振舞いで接してもらえるよう、心掛けることです。このような振舞いがあなたにとってどれほど嘆かわしいとしても、私にとりましての、その原因の嘆かわしさに勝ることはございません。

あなたよりもさらに不幸な母

何度禁じたら分かるのでしょうね。私宛の手紙は一切お断りですよ。

大好きなハウさん、どうかご意見をお聞かせください。私に出来ますのはどんなことなのでしょう。どうしたら良いのでしょうか。貴女が（私のように追い詰められました場合に）怒りとか激情とかに駆られてなさるようなことではございません。貴女は、そんなにけしかけられたなら、とっくにだれかと一緒になっていたはずだ、とおっしゃっておられましたし、それに、激情に駆られて取った手段というのは、後悔の種を撒かずに済むことは滅多にございませんからね。そうじゃなく、どのような出来事の場合であれ、冷静な判断に照らしましても、また、後に考え直しましても、正当化出来ると思われますことをお教えいただきたいのです。

貴女が思いやり溢れる愛情をお寄せくださっていることは疑っておりません。でも、おそらく、不面目や迫害に晒されている気持ちを、直接に被害を受けております者が感じるほどには痛切に感じておられないはずです。ですから、助言してくださいますのには、私自身よりも相応しい立場におられるということなのです。

このようなわけでございます。私は十分に苦しむとか、耐え忍んだのでしょうか。それとも、まだまだなのでしょうか。皆があくまでも自説を曲げない場合、私があれだけはっきりと嫌悪の情を表しておりますのに、それでも付き纏いますあの妙な人がなおも付き纏ってまいります場合、私には何が出来るのでしょうか。どのような方法に従うべきなのでしょうか。ロンドンへ逃れ、従兄弟のモーデンが到着いたしますまで、身内の者たち全員からと同様、ラヴレースさんからも努めて身を隠しているのが良いのでしょうか。それとも、従兄弟に会いにレグホン(八)へ旅立つのが良いのでしょうか。でも、女で若輩の身だということを考えますと、この最後の方法は何と危険に満ち溢れていることでしょう。それに、私があちらに向かっております間に、従兄弟がイギリスに向けて出発してしまっているかもしれません。一体どうしたら良いのでしょうか。お願いです、ハウさん［自分を頼る勇気もございません］、私はどうしたら良いのか、何卒、何卒、お教え願います。

夜　十一時

怒りに乱れる心を鎮めなければと思い、ハープシコードを弾いてみることにいたしました。その前に、ドアも窓もぴったりと閉めましたが、階下の者たちの耳に届かないようにです。窓の雨戸を閉めておりますと、足繁く通いました薪小屋の辺りからでしょうか、ミネルウァの鳥(九)の鳴き声が遠く聞こえてまいりまして、あの素敵な『知恵に寄する頌歌』の主題を伝えておりましたが、これは女の人の作ったものだけに、女性の名誉ともなるものでございます。一週間ほど前に、あの詩の最後の三聯に曲を付けてみたのですが、私の不幸な立場に不似合いなわけでもないと考えてのことでしたし、頌歌を詳しく読み直してみますと、その部分が私の教訓になったのです。それに、そこに含まれております全智全能の神への厳粛な呼び掛けのところでは、私の思いの丈が指先に籠もっていたものと確信しております。

頌歌と一緒に、私の苦心の作も同封いたします。主題は荘重なものですし、私を取り巻きます状況にも心打つものがあると存じます。また、演奏のほうも聞き苦しいものではなかったと自負いたしております。貴女のお褒めに与ることが出来ますなら、その点での迷いが消えることでしょうし、貴女のお声とお指で試してくださるのを聞くことが出来ますならば、さらに自信も深まることでしょうね。

『知恵に寄する頌歌』

一婦人の作(一〇)

一

孤独なる夜の鳥は
冥き闇へと今はばたき
　時ふりし塔を離れる。
照りさかる昼間のうちは
蔦茂る木陰に寄りて
　深き想いに沈みてありぬ。

二

歓喜もて聞く厳かな声
真夜中のこだまに乗りて
　立つ風もそを繰り返す。
パラスの鳥(一一)よ、告げたまえ。
御言葉を固く守りてかしこくも
　知恵の玉座にひざまずく。

三

涼やかな宵のしじまを女神は愛でる。
月夜見の光の中で世の虚飾
　人目欺くためしなし。
愚かさは己が虚しき仮面を外し
白日の下のごとくに華やげる
　色弄ぶこともなし。

四

あゝ、パラス。諸芸の女神。
感覚を楽しませ、心育む
　清き喜びの聖なる泉。
ありとある輝かしき美を装い
魂の眼とらえて
　喜びと驚きを生む。

五

汚れなき汝が聖堂に額づかん。
慎ましき嘆願者の誓いを聞きたまえ。

無謀なる夢は抱かず
過たぬ汝が教えの示すまま
無益なる愚人の願い遠ざけて
めざすは高き望みなり。

六

富の宝玉、野心の羽飾り、
また、キュテレイア(二二)の束の間の輝きも
我が祈り求めるものにはあらず。
羨望の的たる華美なる玩具を分かつは
貪欲、虚栄、そして、高慢。
そは煩労の愚かしき報い。

七

この身にはより善き宝賜らん。
入念の思索のうちに磨かれし
心を飾る美のすべて。
富としては、満足を知る微笑みを。
力には、己が心を統治する
無限至上の能力を。

八

華やげる富のパレード絶ゆるとも、
束の間の快楽のバラ色褪せて
墓石の上に枯るるとも、
不朽なる汝が誉れ変わるなし。
常緑をなせる汝が月桂樹
朽ちることなく繁り立つ。

九

汝にこの身守られて、今退けん
伊達者の浴びせかけくる嘲笑を、
無知と遺恨のたわごとを。
蒙昧の輩も等しく蔑まん。
分別も知らぬ才子の投げ掛ける
棘ある笑いの数々も。

十

妬みも焦りも、喧騒も争いも
浮き世の愚行に背を向けて

汝が住む土地に落ち着かん。
ことごとく汝が麗しさ装いて
プラトンの清き御霊もさまよえる
　平和の森へと赴かん。

十一

調べ妙なるイーリッソスの流れ(一三)に託し
哲人は汝が教えを世に広む。
　そは完全、公平、そして、善。
注意深きアテナイ人がそを聞くと、
まわりにて耳そばだてる息子たち
　畏まり、声を殺して立ち尽くす。

十二

放縦に走る若者身を正し、
真実の強き言葉を認めたり。
　正しき支配を感じたり。
情欲はその甲高き声鎮め、
説き諭す優しき美徳の囁きは
　五感の中へしみとおる。

十三

汝が息吹に誘われて、詩人は歌い、
愛国の士はのびやかに義を唱え、
　英雄も雄々しき戦に立ち上がる。
汝が愛す喜びは俗を離れし静けさと
穏やかな家の暮しの寛ぎの
　心を結ぶ絆なり。

十四

名も高き人々のこと今忘れ、
思いを馳せる汝がもとへ、
　至上無欠の御心へ。
叡智こそ汝が賜物、その力
すべて汝に由来する。知の光
　尽きず差しくる泉なり。

十五

確かなる不変の光注がせて
惑わしきこの世の道を辿りゆく

迷える我を導けよ。
過ちの霧を食い止め、
その闇を抜けて至福と徳の地へ、
この魂を誘えよ。

十六

濁りなきその烟眼に暴かれて、
愚かさの人目を奪う派手やかな
虚飾の影は逃げ惑う。
着飾れるまことの姿見届けぬ。
確かなる美徳がもたらす喜びの
他は虚栄と悲しみぞ。

手紙　十

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

金曜日　深夜

ようやく気持ちが落ち着いたところです。妬みや野心、激しい自分本位の怒りや、抑え難い激情のすべても今は、おそらく、私の周り一帯で眠りに就いているのです。私自身の苛立つ心も、夜の静けさに包まれて鎮まりますのが当然ではないでしょうか。実際、落ち着いております。その穏やかな時間を利用いたしまして、貴女の最近のお手紙をよく読み直してみたところです。お手紙のいくつかの部分に触れるつもりですが、やっと取り戻したばかりの平静さなのですから、なるべく危険に晒したりいたしませぬよう、ヒックマンさんについて書いておられることから始めようと思います。

ひとつ言わせていただきます。貴女の滑稽な描き方から窺われますような扱い、あるいは、根が剽軽な貴女のこともありまして、人はそんなふうに考えてしまうわけですが、少なくとも、貴女がなさっているように思われます扱い方よりはもっと好意的に、言い換えますと、もっと公正にあの人のことを受け止めて差し上げるよう、ご自分に言い聞かせることがまだ出来ずにおられますのを、私は残念に思うということです。

貴女の描かれた絵のモデルに、あの人のほうからならられたのだなどと、貴女ご自身がおっしゃるとは思いません。それでも、全体的には、あの人にとってひどく不利益なものだとも申せませんね。気持ちにゆとりのある時でしたら、私はもっと素敵で、もっとそっくりの似姿を描いてお見せするでしょうけれどね。

一部の男の人たちが見せます、あの自信満々なところがヒックマンさんには見当たらないといたしましても、あの人には、多くの男性に欠けております慈悲の心と優しさがございますから、貴女のことを限りなく大切にしておられることと合わせ、貴女のように明朗快活な方にとりましては、この世の中でも一番似合いの旦那様の一人になってくださるはずなのです。

私自身もあの人のことは好きにならないだろうとのお言葉ですが、請け合っても構わな

いと思います。もしも、容姿やお考え、そして、振舞いの点で、ソームズさんがヒックマンさんのような人でしたら、身内の者たちと私の間には、独身生活を許してくれなかった場合ですが、あの人についての意見の不一致は絶対になかったはずです。ラヴレースさんにいたしましても（あのようなお人柄ですから）見込みはまったくなかったことでしょうね。この点は次の理由もありまして、一層思い切って断言出来るのですが、つまり、この男性は、愛情と恐怖という二つの感情のうち、幸せな結婚生活を送ります上で愛情と両立するように思われます程度以上に、はるかに多くの恐怖感を相手に吹き込むことの出来る人なのだということが、私にははっきりと感じ取れるからなのです。

ヒックマンさん以上に好感を覚える人は他にいないとのお言葉、嬉しく思います。お心のうちをお確かめになれば、いずれは、こんなに好きな人は他にだれもいないと認めることがお出来になるものと確信いたしております。とりわけ、貴女が見出しておられる短所がおありだからこそ、ヒックマンさんは貴女を幸せにしてくださるのに素晴らしく相応しい人なのだという点をお考えになると良いでしょう。つまり、お幸せになるためには、何事につけてもご自分の思いどおりになることが必要だ、とおっしゃるのでしたらね。

でも、一つ付け加えさせていただきたいのは、次の点です。貴女はとても活発な人ですし、素晴らしい才能に恵まれていらっしゃることもあって、貴女を好きになるこの世の男性が、ラヴレースさんのような人なら別でしょうが、どなたにしてもお馬鹿さんに見えてしまうということなのです。

遠慮のない言い方、申し訳ございません。また、これから触れますような、我が身に直接関わります事柄に早々と筆を戻しますこともお許し願いたいと存じます。

私の地所の権利を「請求する」よう［今まで所有していたわけではありませんので、「回復する」という言い方は出来ないのです］、重ねてのご主張ですし（ラヴレースさんのご意見に力を得てのことでしょう）、私のほうでも、この件を今までよりも綿密に検討するつもりでいるような印象を与えてしまいました。でも、正直に申しますと、ご助言に従うわけにまいりません理由も極めて明白なものでしたから、貴女もその辺にお気づきになり、思いつきでのお言葉を取り下げる決心をしてくださるものと考えていたのです。でも、そうではありませんでしたし、貴女とラヴレースさんがお二人とも、私の地所の権利を請求するようにとのお求めですから、この件につきまして、手短に述べさせていただきます。

最初に、ひとつお尋ねしたいのですが、仮に私がご助言を受け入れる気持ちになったといたしまして、私の要求を支持してくれる者は果たしているのでしょうか。ジョン伯父様が管財人の一人なのですが、私に反対しておられます。従兄弟のモーデンがもう一人の管財人ですが、今はイタリアにおりますし、おそらくあの人も反対の立場を取るように思います。兄は従兄弟の帰国前に決着をつけるつもりでおりますから、皆がこのまま事を運びますと、たとえ従兄弟に手紙を書くといたしましても、返事を手にする前にすべては決まってしまっていることでしょう。それに、このように監禁されているのですから、仮に返事が間に合って届きましても、皆にとって好ましくないものでしたら、私の手には渡らないようにするだろうと思うのです。

次には、自分の身の振り方につきまして、子供が両親の意向に背きますと、両親のほうにずっと分があるようにどなたの目にも映るものですし、それで当然だと思うのです。と申しますのも、子供が間違っております場合で、親のほうも正しくないというのは、おそ

らく、二十例のうちに二つとは見当たらないはずだからです。

このような主張に手を貸そうというわけですから、ラヴレースさんの申し出を受け入れなさいなどとは、貴女もおっしゃらないはずと考えております。だれか他の人の助力を受け入れる気持ちが私にあるといたしましても、最近まではいつだって、あんなにも慈愛に満ちた両親だったのですから、その親に背いている子供のために、好んで名乗り出てくださる人など他にいらっしゃるでしょうか。ただ、そのように保護の手を差し延べてくださる人が見つかるといたしましても、裁判沙汰になれば、どれほど長い時間が掛かることでしょう。皆が申しますには、遺言と証書類に瑕疵があるとのことです。兄は〈森の館〉に住み込みたい意向を時々もらしておりますが、察するに、私のほうから地所の権利を請求いたしますと、不動産占有回復訴訟が必要になりますのを考えてのことなのでしょう。あるいは、私がラヴレースさんと結婚するようなことがあれば、法律の助けを借りて行えます、出来るかぎりの妨害と面倒をあの人に与えるためだろうと思われます。

論議の種にと、これらの諸点を検討いたしましたが、たとえ私の言い分を支持してくださる人が見つかるといたしましても、どれも皆問題外です。と申しますのは、お約束して構いませんが、自分の権利のこととはいえ、父親と裁判で争うくらいでしたら、物乞いをして暮らすつもりだからです。何故なら、父親が自分の子供への義務を果たそうと果たすまいと、子供のほうでは、父親への義務の遂行を免除されるものではないと確信しているからです。それに、父を相手の訴訟だなんて、何という嫌な響きなのでしょう。ご覧いただけますように、どうしても父の家を追われなければならない場合、そちらに伺いますことを（二つに一つの道といたしまして、また、好意として）許していただきたい旨の希望を口にいたしましたが、それ以上は一歩たりとも進めずにいるのです。そして、ご覧のとおり、このことでひどい怒りを買っているのです。

ですから、要するに、父の気持ちが変わりますこと以外には、私が期待を寄せられるものはないということです。そして、その可能性は少しでもあるのでしょうか。兄と姉があれだけ皆の気持ちを抑えつけておりますし、今は公然と口にしていることですが、私への悪意を推し進めることこそ、二人にとっては肝腎なのですからね。

ラヴレースさんが貴女の勧めてくださる権利請求計画に賛成なさるのも、別に不思議ではございません。私が実行に移そうといたしましても、あの方の援助なしには難しいことを、おそらく、見抜いているのでしょう。この身が望みどおりの自由な立場にあるのでしたら、あの方がつけ入るスキなどは、自惚れてその気になっておられるのでしょうが、思っていらっしゃるよりはずっと少ないはずなのです。貴女も、ラヴレースさんのことを種に、私をからかって楽しんでおられますけれどね。あの方が申し出ておられることで、尤もらしくて筋が通っているように見えますものすべてにつきまして、どうして方便ではないことがお分かりになるのでしょう。例えば、私の好意的な態度に期待を寄せるにいたしましても、それは、私がいわば〈独り立ち〉［とは申しましても、夫として考えるだけでも胸が悪くなりますような男性との結婚をお断りする自由を得るということであって、それ以上の意味はございません］を果たしてからのことにしたいとか、許しがないかぎり、私を訪ねたりはしないし、モーデンさんが帰国するまで、そして、私があの人の改心に確信を得るまでは訪問を控えたい、といったことです。重ねて伺います。あの方がこのような態度を取っておられるのは、話が現実のこととなりました場合には持ち出されるものと考

えざるを得ない、そんな条件を自ら口になさることで、私ばかりか、貴女にも良く思われたいという、そのようなお気持ちからのことではないのだと、どうして貴女にはお分かりになるのでしょうか。

それに、あの方のことが実に不愉快に思われるのです。あれだけ脅しの言葉を並べておいて、私を怯えさせるつもりはないとおっしゃってみたり、貴女がお話しになることは承知の上で、しかも、そうなさるよう明らかに仕向けておきながら、私には伝えないでいただきたいなどとお願いしたりするのですからね。本当に卑劣な手を使うものです。怖じ気づいて腑抜けになった人間を相手にしていると考えているに違いありません。あんな乱暴者と手を結ぶようなことを、この私が　…　あの方が脅しをかけております相手は、他ならぬ私の兄なのです。それに、ソームズさんがあの方に何をしたというのでしょうか。ある人間のことを、自分に相応しい妻となる者だと考えました場合、その人間を得ようと努力したからといって、果たして責められねばならないのでしょうか。今回の件だけは、私の好きなように身内の者たちがさせてくれるならと、本当にそう思います。このような脅しを用いることの根拠となりますほどに、あの方に望みを持たせるようなことをしたつもりはないからです。仮にもソームズさんは、私がただ当たらず触らずの態度でいれば良い人だということでしたら、あの方のほうでは、燃えるような激しい気性をしておられることもあり、被害者の立場を手柄顔にしておられますが、そのようなことをなさっても、目論んでおられることにはほとんど役立たないことが明らかになるはずなのです。兄から愚か者扱いをされますのは私の運命というものでしょうが、でも、ラヴレースさんには分かって　…　いいえ、私の気持ちは自分でお伝えいたします。そのほうが、貴女のお耳に入りました時にも、面目が立つことでしょう。

それはさておき、一言申し上げたいことがございます。私に対しましては非情な兄でありますが、ラヴレースさんが兄よりも優っている点につきまして、私の分身とも考えております貴女にあれほど厳しいことを書かれましては、冷静になってみますと、やはり良い気持ちはいたしません。確かに貴女の兄ではございません。でも、その妹に対して書いておられることを忘れていただきたくないのです。まったくの話、ハウさん、貴女って機嫌を悪くなさると、いつも毒筆をふるわれるのですね。兄についてと同様、身内の他の者たちについて書いておられるものをいくつか読ませていただきますと（私へのご好意からではありますが）、ついつい疑いたくなってしまうくらいです。ご自分ではそのおつもりなのでしょうが、他人の興奮ぶりを非難なさっても構わないほどに、果たしてご自分は十分に我慢をなさっておられるのかということをですわ。私たちは、他人の落ち度を非難いたします時には、自分にその落ち度がないよう、特に留意しなければいけないのではないでしょうか。もっとも、兄と姉の両方に私も本当に憤りを感じますので、二人のことをいつも嫌っておられたのは存じておりますが、兄の命が危険に晒されました、あれほど恐ろしい事件のことをあのように軽く扱われることがありませんでしたなら、こんな無礼なことは申し上げるべきでなかったのかもしれません。悪さを事としております男性の目からいたしますと、兄の体面は、肉体に受けました傷よりもさらに深い痛手を負っているわけですし、それに、同じ遺恨の念が再び掻き立てられるかもしれないと（そうなりますと、もっと致命的なことになるかもしれません）、不安の種になっている折でもありますからね。

「悪さを事とする男性」の目に映る兄の体面、と申しておきます。だれにだってそんな

呼び方をする資格はございますでしょう。二度と決闘の申し込みをするまいと決心いたしますのは、男の人たちの間では（あの方の二人の放蕩仲間も得意げに話しておりましたとおり）、稀有とも言える自制心の表れと考えられておりますし、あの人たちの間では、決闘が蛮勇の一部として大流行ですから、我慢強い人にしてみますと …… 大概、こういう人のほうが本当に勇敢なのだと信じておりますが …… 恐ろしい大罪を引き起こさないためとか、皆の軽蔑を招かないためには、どう振る舞ったら良いものか、迷ってしまうことが時々あるのですからね。

この点につきまして、少し詳しく述べさせていただきますが、自らの手を血に染めるくらいなら、中傷誹謗の類は見逃そうとする我慢強い人に対しまして、このような侮辱を加えて憚らない人間というのは、真の雅量というものを計ることが出来ず、また、中傷誹謗に憤慨するのよりも、許すほうがはるかに気高く、無視するほうがはるかに男らしくさえあるということをご存じないのだと推論して構わないのではないでしょうか。私が男でしたら、おそらくこう考えるでしょう。私に向かって故意に卑劣な振舞いに及ぶような人のことは心の底から軽蔑いたしますから、そんな人間の命に対して、自分の命と同じだけの価値を与えるわけにはいかないということです。私に対して些細な損害を加えたからといって、私自身に、そして、私を愛してくださる人々の身に取り返しのつかない被害をもたらします力を（少なくとも、危険性は五分五分ですから）相手に委ねてしまうなんて、何て馬鹿げた話でしょう。故意に加えられた害ではない場合には、あるいは、そのように公言されておりません場合には、憤る余地もございません。

出来ることでしたら、私自身から、そして、最も気に掛かっております事柄からも逃げ出したい気持ちで一杯なのです。この脱線も再び私をそのきっかけへと引き戻してしまいますし、そのことでまた、前の手紙を結びました時の苛立たしい気持ちへ逆戻りです。と申しますのも、私を取り巻く状況は変わっていないからです。夜明けが近づいておりますし、夜が明ければ、おそらく新たな試練が待ち受けていることでしょう。ですから、改めてお願いいたします。私はどうすべきか、貴女のお考えを（出来るかぎり、お引き立てとか憤りのお気持ちとかを含めたままで願います）お聞かせいただきたいと思います。アントニー叔父様のお屋敷へ連れて行かれるようなことになってしまいますと、すべてはお終いになってしまうでしょう。でも、どうやってそれを免れたら良いのか …… そこが難しいのです。

何を差し置きましても、真っ先にこれをいつもの場所に隠しておきます。お手元に届きましたら、大至急（後の祭りということになりませぬよう）ご忠告をお寄せくださいますよう、是非ともお願いいたします。

いつも感謝いたしております貴女の

Cl. ハーロー

手紙　十一

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

三月二十五日　土曜日

貴女にどのような助言が出来るというのでしょう、心根の気高いお方。ご立派なのが罪作りなのです。貴女がご自分の本性を曲げることがお出来にならないのと同じことで、貴女を苛んでいる人たちも本性を変えるわけに行かないのです。貴女とご家族の皆さんとを隔てております大きな違いこそ、ご不幸の原因なのです。皆さんに何を望まれるというのです。あの人たちはあの人たちらしく振る舞っているのではありませんか。そして、あの人たちが相手にしておられるのはどなただと思います。異邦人です。貴女はあの人たちと同類ではないのですよ。貴女の同意を引き出そうとしている皆さんは、二つのことに望みを掛けておられるのです。ご自分たちの頑迷さが［そのつもりになれば、もっとぴったりの言い方もあるのですが］その一つですし、もう一つは、貴女がいつもご自分の品性に留意しておられ［その点は皆さんも認めてこられたのではないでしょうか］、ラヴレースさんの品性から不安を覚えておられる点です。つまり、困難から抜け出します手段として、少しでもあの人の手を借りたりなされば、貴女の信用が台無しになってしまうということです。また、人を恨んだり、我を通したりなさるのは貴女の性に合わないということを皆さんご存じですし、皆さんが焚きつけた貴女の怒りも、いずれは鎮まることを知っておられるのです。異常なことというのはすべて直ぐに落ち着くものですからね。それに、いったん結婚なさいますと、貴女は精一杯善処なさることも分かっておられるのです。

それにいたしましても、貴女のお父様の息子さんと長女の方は（あれほど心の狭い人に向って、貴女が抱いて当然な嫌悪感のことを、知っているだけ全部話してしまうわけですから）、間違いなく、一生涯貴女に不幸を嘗めさせるおつもりなのです。もしも貴女があんな男と結婚なさればの話ですけれどね。そんなけしからぬ無理強いが行われましても、貴女とあの男との間にはとても絆のようなものは生まれないでしょうに、お兄様とお姉様のほうは、すでにあの男とは深い絆で結ばれているのですからね。

あの恥知らずの執拗さについてですが、そのことに驚かれるのは、あの男を知らない人たちだけです。繊細な心など一かけらもないのです。結婚に関しましても、主として念頭に置いておりますのは心のことではありません。理解も出来ない美質がどうして大切にされたりするでしょう。仮にあの男と一緒になられて、愛情に欠けるところを露骨にお示しになっても、私の見るところでは、あの男は大して意に介さないだろうと思います。何かにひどく熱中している人間というのは、その気持ちを満たすために、より称賛すべきものであるにも拘らず、次善の満足とか小さな満足を二十も捨て去ることで折り合いをつけるものだという、貴女のお考えを以前お聞きしたことがございます。ノートン夫人からの受け売りとのことでしたが、的を射たお言葉だと思いますわ。

ある会話の中身についてお知らせいたしますが［あの男をこれまで以上にお嫌いになる心配もございませんからね］、ほんの三日前にハリー・ダウンタン卿とあのソームズとの間で交わされたもので、つい昨日のこと、ハリー卿が母と私にお話しくださったのです。あの男の台詞だということで、お姉様のあの生意気なベティの報告にありました、恐れさせて従わせるという言葉は、あの娘が自分でででっち上げたものではないことがお分かりになると思います。

ハリー卿はあの男に次のようにお話しになりました。貴女のお気持ちにはひどく背くことなのに、貴女を得ようとするのは奇妙な話であり、いくら求めても、お気持ちが傾かないことはだれの目にも明らかなのだ、とです。

あの男のほうではこう言っていたそうです。そんなことは構わない。恥ずかしがり屋の娘たちが最も情の深い女房になるものだ［何て嫌な男でしょう］。綺麗な女性がしかめっ面をすることがあっても、困らせてやりたくなる原因を自分で作っている場合には、一向に平気である。いくら打ち解けない態度を取られても、貴女の地所が好都合な場所に位置していることもあって、たっぷりと埋め合わせはしてくれるはずだ、というのです。

少し時間が経てば、愛してもらうのは無理としても、丁重な態度を見せてくれることは間違いないはずで、それだけでも、家庭を持っている友人十人のうちの九人よりは幸せというものだ、とも言っていたそうです。

何という浅ましい男なのでしょう。

他の点につきましては、貴女が世に知られた美徳の持ち主ということもあり、それが望みどおりの確かな保障となってくれるはずだ、というのです。

ハリー卿はこうおっしゃいました。「もしも君との結婚を強いられたりすれば、お嬢さんのほうでは、スペインのフェリペ二世[二四]が、夫として、フランスのエリザベートを国境に迎えた時、エリザベートがフェリペに向けたのと同じようなまなざしを君に向けることでしょう。フェリペは、他でもなく、舅になるはずだったのですからな。丁重で愛情のこもったものというよりは、むしろ、不安と恐怖のまなざしだったのですよ。そして、おそらく君のほうでも、あの老君主がうら若い花嫁に見せたのに劣らない、不機嫌な顔をお嬢さんに向けるのでしょうな」とです。

不安と恐怖の表情を浮かべてくれるのは、妻の場合もそうだが、花嫁の場合にも愛らしいものですよと、あの恥知らずが、嫌らしい恥知らずが言ったのです。そして、笑いながら［本当なのですよ。あの忌まわしい男は、ハリー卿がおっしゃいますには、こう言いながら、慎みもなく笑っていたのだそうです］、愛情を示してもらっていないように考えた場合には、そんな恐怖の種がとぎれたりしないよう心掛けることにするし、正直な話、結婚生活で愛情と恐怖とが区別されなければならないというのであれば、恐れられるように振る舞う男が一番うまくやって行くように自分は考えている、と言っていたそうです。

バシリスク[二五]の目に宿っていたと言われております威力が、もしも私の目に備わっているのでしたら、いの一番にあの男を睨み倒してみせるところです。

ただ、母に言わせますと、あの男への嫌悪の情を抑えることがお出来になれば、それこそ、貴女の大変なお手柄ということになるというのです。何一つ犠牲を払わずに済むような場合にだけ言い付けを守るというのでは、どこに服従の価値があるのか、と母は尋ねるのです［以前、貴女も同じような質問をお受けになりましたね］。

何という運命なのでしょうね。スキラにするかカリブディスにするか[二六]、といった具合で、もっと好ましい選択肢が貴女にはないのですからね。

貴女のことでないのでしたら、助言の仕方は（そのように残酷な仕打ちを受けておられるのですから）、すぐにも分かるはずです。でも、これだけ心の気高い方が、こういった種類の軽率さや無分別さ（と勘繰られているもの）のことで罰せられるなんて、前にも申し上げてきたことですが、女性に対する侮辱とも言えましょう。

独り立ちを主張なさることが助けになると考えておりました時には、方策が一つは残っていると思っておりました。でも、このような手段が役に立たないことを十分に証明してくださいました今では、何と申し上げたものか、皆目見当もつきません。

ペンを置いて考えてみることにいたします。

ヤ　ヤ

繰り返し繰り返し考えてみました。でも、まったくの話、前と同じことで、何と申し上げたら良いものか、今も分かりかねております。ただ、これだけは申し上げましょう。私も貴女と同じく若輩だということです。また、貴女に比べますと、判断力ではるかに劣っておりますし、ずっと激し易いということですわ。

これまでにも申し上げておりますが、独身を通したいとの申し出をなさいました時、貴女が提案なさって当然なものを申し出ておられたのです。最後まで結婚なさらないといたしますと、皆さんがご一族の手から離れてしまうのをひどく嫌がっておられますあの地所も、復帰財産として、いずれはお兄様のものになるだろうと思います。お兄様にいたしましても、あるいは、お兄様の跡取りの方にいたしましても、ソームズが約束しているような不確かな復帰の仕方よりは、おそらく、はるかに確実にこの方法で手に入れることになるはずです。妙な考えにとりつかれていらっしゃる皆さんに、このことは匂わせてご覧になったのでしょうか。この提案に異を挟むものがあるといたしますと、それは、皆さんが使っておられる意味での、あの厳めしい権威という言葉だけでしょうね。

お考えいただかねばならないことが一つございます。たとえご両親のもとを離れられましても、貴女は孝養心と敬愛の念を持ち続けられるでしょうから、不服を申し出て、身の証を立てようなどとはなさらないはずです。そうなりますと、貴女は世間を敵に回すことになるのです。また、ラヴレースが相変わらず出鱈目な暮しを続け、貴女に向かって恩知らずな接し方をしておりますと、あの男の卑劣な態度が、ご両親のあの男に対するお怒りばかりか、貴女への無慈悲なお振舞いまでも正当化するように見えてくるのではないでしょうか。

神様が一番良い道をお示しくださいますよう祈っております。ただ、私といたしましては、嫌いな男性、それも（ソームズのような相手だといたしまして）、いつでも嫌悪を感じてしまいます男性との結婚を強いられるくらいでしたら、どんなことでもやってのけますし、どんなところへでも行って見せるつもりです、とだけ申しておきます。また、兄や姉からではなく、父やおじたちからの仕打ちだといたしましても、貴女が耐え忍んでこられたようなことは、私には耐えられなかっただろうということです。

母が言い張っているのですが、皆さんは、ご自分たちのやり方を貴女に呑んでいただくよう、精一杯の努力をなさった上で、効果のないことがお分かりになれば、要求を取り下げてくださるはずだというのです。でも、私は同じ考えとは申せません。母は、自分の推測だということで、それ以外に何か確かな根拠があるとは認めていないのですが、さもなければ、アントニー叔父様と母とがある隠し事を、それも、貴女にとって好都合な隠し事をしているのではないかと期待していたことでしょう。万一、何か別の隠し事なんかをしているようでしたら、せめて一人には災いあれ［勿論、叔父様のつもりですが］、といったところですわ。

出来ることでしたら、あの叔父様のお屋敷に連れて行かれるのは避けなければなりません。あの男に牧師様、それに、お兄様とお姉様　…　間違いなく、お屋敷で貴女をあの卑

劣漢と結婚させるはずです。その場に立たされましたなら、これまでになくお気持ちを奮い立たせていらっしゃるとはいえ、とても抵抗し通せるものではありません。弱気の虫がまた頭を抬げ、涙と［皆さん全員から蔑まれている涙です］聞いてももらえない哀願の言葉や悲嘆の声に頼るしかないのです。そして、その涙も、神の名を汚す儀式が執り行われますと、急ぎ拭い去らなければいけないのです。それまでの嫌悪感の表明すべてにつきまして、貴女の御主人になったばかりの人に許す気持ちを起こしてもらうよう、ご自分は謙虚な気持ちになることに努力しなくてはいけないのです。

　要するに、これまでの貴女の振舞いはすべて生娘ゆえのはにかみだったと告白し、あの男に媚び入らねばならないということですわ。そして、「一番恥ずかしがり屋の娘たちが最も情の深い女房になるものだ」などという、あの男の失敬な嫌味が当たっていることを確信させて上げるのが貴女の役目になるのです。ですから、あの男の〈寛大なるご好意〉を強く負い目と感じながら、結婚生活をお始めになるわけです。そして、妻を操縦する手段として用いようとしております、例の〈恐怖心〉のせいで、貴女が負い目を持ち続けることになりますのは、まず間違いのないところだろうと私は思うのです。

　でも、結局のところ、肝腎な点は私も決めかねておりますし、公言しておられるご意向を皆さんが取り下げるのか、それとも、断固アントニー叔父様のところへ貴女を移すおつもりなのか、その点を確かめられた上で、初めて決められるべきだと思います。ただ、重ねて希望を申し上げねばなりませんが、どちらの男性も貴女を妻と呼ぶわけには行かなくなるようなことが何か起こってくれますよう願っております。また、男性として可能なかぎり貴女に相応しい人がどなたか現れますまでの間、独身を通すことがお出来になりますよう、心からお祈り申し上げます。

　とは申せ、結婚生活に華を添えます素敵な美質に恵まれておられるのですから、いつまでも独身ではいてほしくないようにも思うのです。私はお世辞が苦手なこと、そして、いつも心の命じるままを語り、筆にもしておりますのは、貴女もご存じのとおりです。それに、ご自分の取り柄は承知しておられるに違いありませんから（他の人との比較でしかおっしゃいませんが）、私の誠意を疑ったりはなさらないはずです。他人が持っている称賛すべき点は一つ残らず見つけ出し、褒め称えるのを楽しみにしていらっしゃる方が、ご自分に備わっている似たような美点にお気づきにならないようなことは、どうして考えられましょう。ご自分にもないのでしたら、他の人のをあんなにも褒めるわけには行かないはずです。ご自分の素晴らしさの半分しか持ち合わせない人にも、快く賛辞をお寄せになるのですから、私が同じように褒め称えていけないわけがどこにありましょう。とりわけ、自惚れや虚栄心などには縁のない方ですし、ご自分のような美点には欠けているからといって、そのことで他人を軽蔑なさることもなければ、ご自分を過大評価なさることもない方ですからね。そう、過大評価だなんて、そんなことは有り得ないことですもの。

　御免なさい、大好きなお友達。貴女への敬服の念を（お手紙をいただきますたびに、その感が増して行くものですから）いつまでも胸に納めておくわけにはまいりません。もっとも、お気持ちを損ねないためにも、お便りをいたします時には、そんな気持ちがペン先に伝わりませぬよう、また、幸いにもご一緒出来ます時には、唇から漏れませぬよう、いつも努力を重ねてはいるのですが　…

　とりあえませず（前回お知らせくださいました事柄につきまして、申し上げたいことは

山ほどあるのですが　…　）、

いつもお慕いする忠実なる貴女の

アナ・ハウ

大急ぎで返事をいたしましたので、喜んでいただけたものと思います。お求めのございました助言がお気に召すと宜しいのですが　…

お送りいただきました素敵な頌歌にも、新たな魅力を加えてくださいました。立ち向かわなければならないあの浅ましい人々のせいで、貴女がその見事な生き方を捨てなければならないというのは、何としても残念な話です。立派な日々を送りながら、貴女はまるで太陽のように、その輝きに浴する人すべてを元気づけ、啓蒙してくださっていたのですもの。

手紙　十二

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月二十六日　日曜日　朝

敬慕いたしております方からのお褒めのお言葉というものは、本当に心を慰めてくれるものですね。お褒めに与るに値すると自認しているかどうかは別にいたしましても、ご好意を賜りたいものと念願しております人々に高く買っていただいていることを知りますのは、まことに嬉しいものでございます。賢い人間ならば、もう一歩進めまして、その気持ちをさらに善用することでしょうね。そのように素敵なことを言っていただきますのにはまだ相応しくないと自覚しております場合には、お褒めに与っておりますような美質を急いで（友達がご自分の誤りに気づかないうちに）身につけようといたします。それも、友達の評価を失わないためや、判断の正しさを裏付けるためばかりではなく、自らの面目を保つためにもそうするわけです。常日頃からこのような姿勢を目指したいものと考えております。そうなれば、お褒めのお言葉だけでなく、美質までも授けてくださることになるでしょう。また、私が誇ることの出来ます唯一の楽しみごととなっております、あの友情にとりましても、さらに似つかわしい人間になれるだろうと思うのです。

今回のお手紙、早速お届けくださいましたこと、心から御礼申し上げます。貴女にはすっかりお手数を掛けてしまいましたし、あの律義な使いの人にも感謝いたします。この不幸な身の上ゆえに、どこまでお世話になってしまうのでしょうね。

でも、思いやり溢れるその内容につきまして、出来るかぎりのお答えをさせていただきましょう。

ソームズさんへの嫌悪の情に打ち克つなど、それは到底無理な話です。寛大さや率直な心、慈悲心、礼儀作法、そして、立派な男性を特色づけます資質ことごとくを欠いておられるのですからね。自分より無知で読み書きの力も劣り、浅ましさは勝るような夫に軽蔑の念を抱かずにいるなんて、妻としてどれほど忍耐心が必要なことでしょう。どれだけ大きな心を持たねばならないのでしょう。特権を付与され、その力で抑えつけようと目論む浅ましい男なのです（そして、その目論みを許さないのは、お尻に敷かれた夫にとりまし

ても、差し出がましい妻にとりましても、同じようにみっともないことになるのです）。たとえ便宜や利益を考えて選んだ人だといたしましても、このような夫をどうして耐えることが出来ましょう。このような男と無理やり一緒にさせられるとしたら、しかも、指図する側にとりましても指図される者にとりましても、品性にもとるような動機から無理強いが行われるとしたら、これほど正当な根拠に基づいております嫌悪感を乗り越えようと考える人などいるでしょうか。そのような男性と生涯を共にする決心に比べますと、私が受けておりますような一時的な虐待も、一時的なものだけに、容易に耐えることが出来るはずです。仮にも言い付けに従ったりいたしますと、家族を捨て、あの人のもとへ行かねばならないのです。多分一月もすれば、虐待のほうは決着がつくでしょう。でも、もう一方のほうは、いつまでも続く苦悩なのです。毎日目を覚ましますたびに、おそらく、祭壇の前で立てた誓いに背くような、新たな事柄に立ち会わねばならないわけですからね。

それに、私には避けようもない嫌悪の情ですが、あの人はすでにその復讐を考えているらしいのです。昨日のことですが、私の厚かましい女看守が、私がどんなに抵抗したところで、嗅ぎ煙草これっぽっちの意味もないのだと、人指し指と親指を気取って突き出してみせながら断言したのです。私はどうしてもソームズさんと一緒にならざるを得ないのであり、それゆえ、冗談も度を越さないようにしたほうが得策ではないのか。何故なら、ソームズさんは気概のある人で、次のように言っていたからというのです。つまり、私は間違いなくあの人のものになるのだから、私の振舞いはまことに分別を欠いていることになる。私よりももっと慈悲心に厚いということがなければ［これはあの娘の言葉で、あの人のものかどうかは分かりかねます］、あの人に対する仕打ちを、私は一生涯悔やむことになるかもしれないわけだから、というのです。

でも、あの人のことはこれっきりにいたしましょう。ハリー・ダウンタン卿のお言葉としてそのままお伝えいただきましたところでは、男性の傲慢さをすべて備えながら、その傲慢さを大目に見たくなるような美点は何一つ持ち合わせない人ですからね。

ラヴレースさんから二通の手紙を受け取りました。あの方が貴女のところを訪ねられた後のことです。これで、返事を出しておりませんのは三通目になります。ずいぶんと苛ついておられるに違いありません。最後の手紙では、音沙汰のないことにひどく不平を述べておられますが、それが、恋人が漏らします静かな小声というか、あるいは、むしろ控え目な言葉遣いといったものではなく、おそらく、ないがしろにされた後援者が用いますような、そんな言い回しなのです。それに、コソドロとか盗み聞きをする者みたいに、便りがあるのではないかとうろつき回り、何一つ手にすることなく、五マイルの道程を再び辿らざるを（そして、不便な宿へと戻らざるを）得ないわけですから、自尊心がまた傷つけられるのです。

あの方からの手紙と、あの方宛の私の手紙の写しを間もなくお届けいたしますが、それまでの間、昨日あの方に書きました手紙の内容をかいつまんでお知らせいたしましょう。

無礼にもラヴレースさんは、ソームズさん、あるいは、兄を訪ねるなどと、貴女を通して脅しをかけているのですから、私はその点を厳しく咎めております。「まったくの話、私はどのようなことを耐えるのにも適した人間だと思われているに違いない。あの方を避けるために耐え忍ぶこととしては、自分の家族の一部の者から加えられる手荒い仕打ちや脅迫でも十分ではない。筋が通っており、自分の力で可能なことはすべてに亘って、ご意向

に沿うのが自分の好みであり、また、務めとも考えている、そんな人たちに喜んでもらおうとする場合には、あの方からも同じ仕打ちを受けなければならないのだ」とです。

また、「気性の激しい人が無分別で不条理な行動 … それを思い止どまってもらうために、私のほうでも、自分の評判や女の身であることを考慮するなら、同じ程度に無分別と思われるような行動に走るというのでないかぎり、私にはほとんど関わりがなく、あの方には大いに関係のあるものだが … そのような行動を匂わせたりするのは、はなはだしく法外な話だ」とも話しております。

さらには、「自分が原因となって何か災難が起こった場合、私がどれほど心を痛めることになるかはともかく、私の知るかぎりでは、次のような人たちもいる。つまり、私と同じ立場に置かれた場合に、もしも、ソームズさんを脅しておられるような早まった行為の結果として、二人の男性を厄介払い出来るというのであれば、その二人を知らずにいた場合には不幸にならずに済んだはずだということもあり、深刻に嘆く理由があるようには思わないような人たちのことだ」と、当てこすりもしておきました。

いかがですか。率直な言い方でしょう。でも、あの方はもっと不躾な言葉を返してくるだろうと思います。

私の手紙を待ち侘びるご自分の姿が情けないとのことですし、〈盗み聞き〉といった言い回しを使っておられますから、そういったプライドの高さを咎め、「すべての原因はあの方の不品行にあり、不品行な振舞いというのは、当然のこととして、身分の違いをすっかり取り払い、高い地位にある人や名門の出の人を最下層の人々と同列に引き下ろしてしまうし、大層悔やんでおられるように、盗み聞きやコソドロの真似も（恥を忍んであの方の言葉を借りますと）止むを得ないことになるのだから、ご自分の立場をひどく辛いものとお考えになるのはいよいよ根拠のないことだ。それほど不面目な苦労をお掛けするのであれば、これ以上は、一通たりとも私の手紙は期待していただきたくない」と申しました。

「機会あるごとに、すぐにももったいぶった誓約や申し立てをしておられるが、これは私にとってはほとんど意味がないと申し上げたい。あの方自身も、ご自分の人柄のこともあって、そうしなければまずいと考えていることを、いわば証明しているようなものだからだ。私にとっては、意図の証となるものは行為以外にはない。文通中止の必要性をますます強く感じているが、それは、求婚なさっても、後押しをしてくれるよう身内の者たちに期待することは出来ないし、あの方は後押しするに値する人物なのだと、皆がそのように考えることを願っておられるような、そんな態度を見せてもらうことをあの方に期待するわけにも行かないからだ」とも書いておきました。

そして、「それゆえ、重ねてお願いしたいのは、お生まれ、親類縁者、そして、遺産相続の見込みも申し分ないのだから、身持ちの悪ささえ障害にならなければ、趣味や好みの点でももっとあの方に似合いの女性で、私に劣らない好条件を備えた人をいつだって見つけられるはずであり、私のことはすっかり諦めていただくようご忠告するし、主張もするということである。これまでのいきさつからして（身内の者たちに対する、そして、皆のことを口になさる時の脅迫じみた言葉や不躾な態度からして）、執拗に固執されるのは私への好意というよりも、むしろ、身内への悪意からくるものと結論したくなる節が窺われるからだ」と結びました。

以上があの方へ書いた手紙の要旨です。

私がこれまで文通を続けてまいりました理由は、あの方のことを高く買っているからではなく、厳しい扱いを受けているためだ、ということを見抜くだけの眼力を、確かに、あの方は備えているに違いありません。また、私といたしましては、そのように考えてもらいたいのです。道理や孝養心、そして、思慮分別を供物として強要する神などは、モレクをも凌ぐ邪神(一七)ということになりましょう。

身内の者たちにしても最後には折れてくれるはず、というのがお母様のお考えだそうですね。そうなってくれればと、本当に神に祈る気持ちです。でも、兄と姉が皆に大層睨みをきかせておりますし、二人はすっかり心を固めているのです。私を抑えつけ、言い分を通しては得意になっております。ですから、望みはかけておりません。ただ、折れてくれなかった場合には、はっきり申し上げますが、現在の迫害から逃れると同時に、ラヴレースさんの有利に働くこともなく、私にとって不面目とはならないようなことでしたら、どのような保護でもためらわずに求める所存です。つまり、明らかに他の道は一切閉ざされているのなら、ということです。と申しますのも、仮にも何か方法が残されているのでしたら、保護の手がいかに非の打ちどころのないものだといたしましても、許しもなく父の屋敷を去るなどということは、私が犯します罪過の中でも最も申し開きの立たない行いだと考えるからです。そしてこれは、祖父から遺贈されました独り立ち出来ますだけの財産を抜きにしても言えることです。実際、つくづく考えますと、少しばかり腹立たしさと軽蔑の念を覚えることも多いのですが、親に出来ますこと、あるいは、してくれそうなことへの期待だけで辛抱をしようというのでは、そのような子供は何と浅ましい、身勝手な人間なのだろうかということです。

でも、こういったことすべてにも拘りませず、誠意に根差した友情を頼りに白状させていただきますと、もしも、ご助言が何か決定的な意味合いのものでしたなら、私は果たしてどうしていたか、分かりかねるということです。お手紙を読んでおります時の、次々に変わります気持ちの動きをご覧いただけましたなら …… ある箇所では、叔父のところへ連れて行かれました場合に考えられます危険のことを忠告していらっしゃいますし、別のところでは、私が耐え忍んでおりますようなことを我慢出来ず、嫌いな男性と結婚するくらいなら、どんなことでもなさるおつもりだとおっしゃっておられます。でも、他の場所では、世間での私の評判が傷つく様子や、無分別な行動に走りました場合、身の証を立てますのにも、家族の者たちに迷惑を掛けなければならないことを説いておられます。このような強要された結婚生活の中で、やむなく装わねばならない偽りの姿を示唆しておられるところもございます。嫌悪感を抱く男性に一生懸命おべっかを使い、媚び諂い、猫を被ってみせるというのですね。それも、私が以前言明いたしましたことや、感づいているに違いない（仮にも常識を弁えていればの話ですが）自分の欠点への自覚からいたしましても、私のことを偽善者と思い込んで当然な、そんな人を相手にしてのことでしょう。実際に感じております嫌悪の情が強いほど、一層甘える振りをする必要があるとお考えなのですね。甘えて見せましても（そこまで自分を偽ることが出来るとしてですが）、卑しい気持ちからのことのように思われてしまうのです。と申しますのも、容姿の点にいたしましても考え方にいたしましても、あの人を慕う気持ちが動機となり得ないことは一目瞭然なのですからね。また、疑いようもない、生まれつきとさえ言えます度量の狭さのことがあります。私も公然と嫌悪感を表明いたしましたし、求婚を思い止どまっていただくためです

が、あらゆる機会を捉え、あからさまに無礼な態度を取ってまいりましたから、それを根にもって妬んだり、辛く当たってくるのは目に見えているのです。もっと好意を感じている人がおりますことも、同じ動機から、はっきり申し上げてありますが、あの人のほうでは、暴君として振る舞う御墨付を得ました暁には、強気の妻を抑えつけ意気消沈させるのが楽しみだ、などと公言してもいるのです。繰り返しますが、お手紙を拝見しております時の揺れ動く私の気持ちを目の当たりになさったら　…　今こちらに傾くかと思えば、次には反対のほうへ動き、当惑したり、心配になったり、あれこれと腹を立てたり、心を固めるかと思えば、また不安になるといった具合ですから、私に及ぼすご自分の影響力の強さにお気づきになったことでしょう。また、何か決定的な、あるいは、断定的な形で助言してくださっていたなら、私はためらわずにお言葉に従おうとしているのだと、そのように確信なさっても当然だったことでしょうね。ここまで白状したのですから、お分かりいただけるでしょうが、私が、隠し立てをしない率直な心が必要となります、あの友情の掟を適用するに相応しい人間であることはお認めいただきたいと思います。もっとも、この点をお認めいただきますと、私の思慮分別のほうに疑問が生じることになるのですが　…

それでも、やはり、もう一度次のように申し上げます。家に残ることを許してもらえるようでしたら、そして、何かの方法で、何か正当な口実によりまして、従兄弟のモーデンが帰国いたしますまでの間、不幸な運命を避けていることが出来るのでしたら、最悪の窮地に追い詰められるのでないかぎり、父の屋敷を去る気持ちはないということです。他の身内の気持ちが断固として揺るぎない場合、保証人の一人なのですから、モーデンさんに保護を求めましても、評判を落とさずに済むでしょう。そして、これこそが（皆も十分承知していることですが）私の望みのすべてなのです。と申しますのも、ラヴレースさんにつきましては、たとえ優しくしてくださることが間違いないといたしましても、また、改心のことさえも確信出来るといたしましても、ご一族からの保護の申し出に飛びついたりいたしますと、世間の人たちの目には、あの人の保護を受け入れるのと同じことに見えてしまうのではないでしょうか。お身内の方々と一緒にいながら、あの人の訪問を避けることなど出来るでしょうか。あの方の本当のお姿が（身近に接しました上で）どのように判明いたしましても、あの方のものにならざるを得ないのではないでしょうか。ご存じのとおり、求婚期間に相手の実際の姿を見抜く人など滅多にいないというのが、日頃からの私の考えでしたからね。あゝ、賢くなろうとどれほど努めてきたことでしょう。自分の幸せとか不幸せにつながることでしたら、何事につきましても、その取捨選択には用心深いと言って構わないほどに気を使ってまいりましたのに、今では、訳の分からない運命のせいで、私の分別のすべてが愚かしさに変わってしまいそうなのです。

そして貴女は、他の人たちならいざしらず、私だからこそ期待されているという事柄につきまして、いつもどおりの贔屓目で触れておられますね。これは教訓とさせていただきます。私の動機が何であれ、世間の人には分からないのです。兄の非情さを訴えることなら出来るかもしれません。利害の衝突がありますときには、兄妹同士の対立はよく起こることです。でも、呵責のない父と邪な兄がしっかりと手を結んでおります場合、父の心に重荷を与えることで自らの安らぎを求めるなどというのは、とても耐えられない話です。それに、この件に限りましては、ラヴレースさんが私の家族の一人一人に向かって露わにしておられる憎しみ（家族の者たちが抱いております憎しみへのお返しではありますが）の

ことがありますから、どなただってひどく驚いてしまうのではないでしょうか。あの方の気質の中には、はなはだ不作法なことは勿論ですが、何か執念深いものがあるということを示すことにはならないでしょうか。それに、身内の者全員と永久に反目することを承知の上で、結婚を考える人などどこにおりましょう。

ところで、くたびれてしまいましたし、貴女も多分お疲れのことでしょうから、ここで筆を置かせていただきます。

❁　❁

ソームズさんはほとんど間を置かずにお見えになります。叔母のハーヴィーもそうですし、二人のおじたちも同じです。何かが目論まれているのだと思います。どっちつかずの状態というのは、本当に心の落ち着かないものでございます。抜き身の剣まで頭の上にぶら下がっているような感じがいたしますし　…

私の耳に入ることと申しますと、この鉄面皮な娘のベティが、気ままな仕事ぶりの合間に口にする事柄だけです。「あらあら、どうなさったのです、お嬢様。お荷物はお調べにならないのですか。知らぬ間にお呼びが掛かってしまうことになりますわよ、きっと」といった具合かと思いますと、別の時には、ある者はどう言っている、他の者はどう話していると暗に仄めかしたり、言葉を濁したりいたします（まるで、わざと私を焦らそうとするみたいです）。また、私はどのように時間を過ごしているのかという、皆の質問を口にしたりもいたします。そして、私は自分の受難の物語の執筆に取り掛かっているのではないかといった、兄の失礼な質問も頻繁に差し挟まれるのです。

それでも、今ではあの娘の厚かましさにも慣れてまいりましたし、私に不都合な皆の目論見につきましても、それが実行に移されます前に耳に出来ますのは、もっぱらその厚かましさのお陰なのです。それに、飛び切り図々しい時でも、役目なのだからと訴えますので、大目に見ることにしております。でも、時々は少しばかり胸のむしゃくしゃすることもございます。

ここまでの分を例の場所に置くことにいたします。では、さようなら。

クラリッサ・ハーロー

《部屋から降りた後、封筒の上に鉛筆で書き記されたもの》

降りてまいりましたところ、昨日の日付のある二通目のお手紙を見つけました(ア)。拝読いたしましたが、同封いたしましたもので、お母様のご期待に大幅にお応えすることが出来るものと考えております。

その点につきまして、また、お心遣い溢れるご忠告をいただきましたことにつきましても、有難く感謝いたしております旨を、お母様にはくれぐれも宜しくお伝えくださいませ。

同封の手紙、お好きなところをお母様にお聞かせくださって構いません。

（ア）次の手紙を参照のこと。

手紙　十三

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

三月二十五日　土曜日

この日付で出しました先の手紙の続きを書くことにいたしますが、命令を受けてのことです。先の手紙では、もしもご自分のお気持ちを抑え、お身内の方々のご意向に沿うことがお出来になれば、貴女の大手柄ということになるという母の意見をご紹介いたしましたね。このことを話題にいたしましたのは、ハリー・ダウンタン卿と私どもが交わしました会話がきっかけでしたが、母は、その話し合いにはとても大きな意味があるのだから、是非貴女に詳しく伝えてほしいと申しております。先の手紙では、貴女の向かわれるべき道をお示しすることが出来ませんでしただけに、母の命令に従おうという気持ちになるのです。それに、詳しくお話しいたしますと、少なくとも母の意見はお分かりいただけるでしょうし、もしかいたしますと母の意見から、世間の人たちは、私ほどにではなく、母が承知しております程度の知識しかお持ちでない場合、どのように考えるのかという点につきましても、気づいていただけるだろうと思うからです。

この問題を論じます母の口振りには、自分の選んだ男性との結婚に幸せを期待しております女性すべてにとりまして、ひどく水を差すようなところがございます。

母が自分の娘に当てこすりをしているだけなのは承知しております。今は取り立てて好きな人はおりませんし、同時に、母が一番気に入っております人にも一文の値打ちも認めようとしない娘ですからね。でなければ、私ももっと肝に銘じるところでしょう。

「こんなに大騒ぎをするような、どんなことがあるというの。身内の者たちの意向に沿おうとして、若い娘が自分の気持ちを諦めるってことが、そんなにも重大な問題なのかしらね」と、母が言うのです。

「結構だわ、ママ。今だから言えるのよ。四十になって言えることだわ。だけど、十八の時には何て言ったのか、それが問題ね」　私は胸の中で呟いておりました。

母に言わせますと、そのようなお嬢さんは、諦めることが出来ないほど激しい気持ちを抱いていると思われるか「立派な娘さんで、そんなふうに勘繰られたい人など、どこにいるでしょう」、それとも、意地を張って諦めようとしないのだと思われるか、あるいは、三つ目には、両親がいながら、その意向に沿おうとはしていないように見られることになるか、そのいずれかだというのです。

ご存じのとおり、母も時には見事な論陣を張りますし、少なくとも、いつも熱弁を振るっております。意見の違ってしまうこともしばしばですが、二人とも自分の論拠のほうに分があると思っておりますから、お互い、相手を承服させるといった幸運に恵まれることは滅多にございません。激しい議論の場合には結構よくある話と存じます。母に言わせますと、私は才気煥発すぎることになります。平たく言いますと、小生意気だ、というのです。私のほうでも、母は賢明すぎるのだと申しております。同じように平たく言わせてもらいますと、もうかつてのように若くはないのだ、要するに、すっかり母親になってしまって、娘だったことを忘れているのだ、などと言っております。ですから、大抵は、合意の上で別の議論を持ち出したりするのですが、お互い承諾もなしに前のものに五、六回は戻ってしまい、怒りでひきつりかけた顔にこわばった笑みを浮かべ、引っ込めたり繰り返

したりするのです。仲直りの余地を残しておくためです。でも、休む時刻が来ますと、やはりいくらか不機嫌な顔でベッドに就きますし、言葉を交わすといたしましても、黙り込んでおりました母の口をついて出てまいりますのは、「まあ、ナンシーったら。本当に元気な子ね。それに、ずいぶんとせっかちなのね。あまり父親似なのも困ったものだわ」といった言葉なのです。

私のほうでも、ご自分のお腹を痛めたナンシーですもの、責任を避ける理由はないはずだわ、などと考え、腹いせをしておりますし、また、こちらの思惑以上に母の出方が厳しい場合ですと、その翌日、ご贔屓のヒックマンさんがそれだけひどい目に遭うことになるというわけです。

生意気な娘だということは自覚いたしております。私のほうから口に出さなくても、そのように思っておられることも承知しております。ですから、今のところは、この話はもう止めにいたします。何故触れたのかと申しますと、私たちの間で交わされました話のうち、私の軽薄なところや母の短気な姿が目に付きます箇所は、この深刻な折には、出来ればすべて省くつもりでおりますことをお知らせするためなのです。話し合いの中でも落ち着きがあって、的を射ております部分に目を向けていただきたいのです。

母の言葉は次のとおりでした。「ご主人と奥様が恋愛で結ばれたと言われているご家庭の中で、私たち両方が存じ上げているお宅のことを調べてご覧なさいな。恋なんてものは(そう呼ばれている時期には)、多分、愚かしさとか思慮のなさから生まれ、片意地や対抗意識で続けられて行く感情にすぎないのよ［ここで、本題とは別に、ひとしきりやり合ったのですが、それは省略いたします］。そういうご夫婦は、結婚の主な動機が便益のためだったとか、家族の者に喜んでもらうためだったとかいう人たちより幸福そうに見えるのかどうか、あるいはまた、大層幸せなのが常なのかどうか、それも調べてみることね。便益や孝行心というのは、しっかりと守った場合には、いつまでも変わることのない、しかも、益々深まってさえ行くような満足感を与えてくれることになるし(その時にも、後で振り返った時にもね)、それで報いが得られないなんてことは滅多にない話なのよ。一方、恋心なんてものは、愛が動機になっている場合だって、不精で役立たずな感情なのよ …… ［ある意味では、母も〈不精〉だなんて言えないはずです。恋はお猿さんみたいに忙しげで、生徒さんみたいに悪戯好きなところがありますからね］ …… 他の激しい感情すべてにも言えることだけれど、結婚後はほんの短い間しか続かない熱情だわ。張り過ぎた弓のようなもので、すぐに元の状態に戻るのよ。

大抵の場合、お互いに指摘されるまでは自分たちにも分からずにいた、ただの空想上の長所を土台にしているものだから、一、二ヶ月、あるいは、三ヶ月も経てば、両方とも正気に戻るのが普通ね。そして、両目を開いて、他の人たち皆が前から思っていたのと同じ考えで相手を見詰めることになるのよ。

愛が育んだ幻も［母の名言といったところです］その頃には消え失せて、本性と以前の習癖が(懸命に抑えるとか、隠すとかしていたのだけれど)戻ってくることになるわ。偽りの仮面が取り外され、アザやシミ、それぞれの心の欠陥すべてが現れてくるのよ。お互い恋に目が眩んで、相手のことを一般的な水準よりも高く見ていたわけだけれど、同じくらいに評価を下げ合うことにならなければ、それこそめっけものというところだわね。それに」と、母が続けました。「愛に溺れた二人は、相手が一緒にいなければ何の楽しみもな

いと思っていたのに、思いのままにお話が出来るようになった暁にはと、互いに期待していたような（滅多に二人きりになれないし、別れる時にもいつも何か言い残して、言ってしまえば良かったと、別れた後で考えるような、そんな時期の話だけれど）、尽きることのないほど変化に富んだ話題も到底見出せないものだから、息抜きを求め、いつもよそに飛び出してしまうのね。そして」と、賢い母は結論づけました「母の知恵がこれほど当世風だなんてお思いでしたか」。「そういう息抜きがね、相手が一緒になって味わえないこともあって、それぞれの者にとっては、多分、一層面白くなるってわけなのね」とです。

もしも貴女が思い切った手段をお取りになるとしたら、その原因はご家族の方々の分別を欠いた乱暴な行為にあるだろうと、私は母に申しました。そして、夢を膨らませて出発する人たちの結婚生活での振舞いに関する非難の数々は、残念ながら、尤も至極に思われるけれど、ただ、次の点は認めてほしい、と言ったのです。つまり、子供たちがこういった事柄を然るべく、徹底的に考量していないとしても、両親のほうでも、若さや好み、そして、経験の足りなさを大目に見ようとしないのであり、自分たちにしても、子供と同じ年頃には、そういった点への斟酌が必要と思われていたのだ、ということをです。

ちょうどここで、数ヶ月前にお書きになったお手紙のことが思い出されましたので、その旨を母に告げました。匿名の老婦人になりすまして（ワイアリーさんがしつこく貴女に付き纏っていた頃の話ですが）、ドレイトン嬢のお母様にお出しになったものです。あのお母様は、いろいろと厳しく制約なさるものですから、是非とも避けてもらおうと一番気に掛けておりました過ちに、危うくお嬢さんを追い込むところでしたわね。母もあのお手紙は気に入るはずだと、思い切って話してみたのです。

あの時、私の願いを入れてお送りくださった最初の草稿を取ってまいりまして、その全文を母に読み聞かせました。でも、以下に挙げました部分をもう一度読んで聞かせることになりました。このお手紙の写しは取ってないと、以前話しておられたように思います。

「このように申し上げますこと、お許しいただきとうございますが［と、他人を装った謹厳な筆者はこのようにおっしゃっておられます］、奥様、貴女ほどの経験を積まれた方々が、ご自分たちの助言を受けてより賢く、より立派な人間になるよう将来に目を向けてほしいと、若い人たちにお望みでしたら、ご自分たちのほうでも過去を振り返り、お子様たちの若さや生来の快活さ、言い換えますと、時の移ろいによっても衰えず、物思いに沈むことなく、失望の痛手にもめげない、そんな明るい希望に溢れております点を斟酌して上げますのが、温かいお心遣いかと存じます。お気に入りのパーティー、あるいは、旅行に出掛けるということで、素晴らしい見込みや大きな期待を抱き、昇り始めた太陽のように元気はつらつと立ち上がります時と、見物も終わり、疲れ果てて帰途の準備に取り掛かります時とでは、だれにとりましても事情はずいぶんと違って見えるものでございます。出掛ける前には見落としておりましたこと、つまり、疲労や妨害や危険に出くわしたことが思い出され、楽しさの程度が正しく評価されるのですが、期待が大きかっただけに、悲しいかな、出発の時に見込んでおりましたものには遠く及ばないのが常なのです。このような違いをはっきりと効果的に納得させてくれますものは、経験以外にはございません。そして、経験から得た成果を、その有難味に気づきますほどには人生を過ごしておりません愛しい子供たちに教え込みたい、あるいは、経験が私たちにもたらしてくれますのと同程度の効果をご自分の助言にも持たせたいとおっしゃるのでしたら、私たち自身、娘たちと

同じ年頃には、両親が与えてくれました忠告も効き目がなかったのですから、忍耐強く穏やかに説き聞かせるべきではないかと存じます。納得してもらおうと願いながら、態度を硬化させるようなことになってはいけないからです。と申しますのも、奥様、いかに優しく思いやりに溢れる心の持ち主と申しましても、厳しい扱いを受けますと、この上なく頑迷な態度に変わってしまいますのが通例だからです。若いお嬢さんは自分の感じ方が正しいと思いますと、若さや経験不足ゆえにどれほど考え方に欠陥がありましても、とても頑固になるものなのです。そして、家族の人たちのほうが間違っているのだと思い込みますと、おそらく、お嬢さんへの接し方がまずいだけなのでしょうが、両親の側の思いやりに欠けた言動、あるいは、子供の無思慮な振舞いの一つ一つが、それ自体はどんなに些細なことでも、両者の溝を大きく広げてしまうのです。一人の人物を巡って、両親の抱いております反感が娘さんの温めております好感をますます強め、どちらが持ち出しますとっておきの論法にいたしましても、偏見に基づくものだとされてしまいます。要するに、どちらの側も納得しないのです。絶え間ない諍いが始まり、親のほうは苛立ちますし、子供にしても必死です。そして、当然至極の結果として、母親がいちばん恐れておりましたような事態、子供の気持ちを無理強いするのではなく、優しく導いていればおそらく起こらなかったような、そんな事態が生じてしまうのです」

母はこのお手紙のすべてが気に入りまして、あのように上々の首尾を得たのも当然の話だと申しておりました。ただ、これだけの考え方が出来る（しかも、あの年頃で、分別盛りの人の姿を立派に装うことの出来る）お嬢さんなのに、ご自分では、軽率にも何か致命的な過ちを犯してしまうとしたら、一体どんな言い訳を用意して上げられるのかしら、と私に尋ねておりました。

それから母は、ラヴレースさんの徳性の点に触れ、お身内の方々の反感が十分に根拠のあることを説いておりました。噂どおり放縦な暮しを続けている男であり、その非難を自ら否定しようともしない。あまりにウブで［あの人自身の言葉のようです］不実な真似も出来なかった頃に初恋の女性から受けたひどい仕打ちと、踏み躙られた誓いに対する復讐として、出来るかぎりの災難を女性に味わわせてやるつもりだと豪語しているのを聞いた人もいる、というのです。

私は次のように答えました。母が念頭に置いている婦人は、だれもが言っていることだが、本当にひどい仕打ちをしたらしい。あの人も当時は心に大変な痛手を負ったため、やむなく旅に出ることになったのだし、率直にも自ら非を認めているわけだが、そんな行状に身を任せたのも、婦人のことを忘れようとしてのことだ。ただ、貴女のおられるところで、私からその点を咎められると、女性全体に対してそのような脅しを投げつけた覚えはないし、一人の人間の背信行為のために、そこまで不当かつ卑劣な遺恨の念を全員に向かって抱くような真似は自分には出来ないとあの人は断言していた、といったことをです。

この時のことは覚えていらっしゃるでしょう。厳かに断言し、否定しておられるのだから、あの人のことを信じても良いだろうとおっしゃる、貴女の無邪気なご意見は私も忘れておりません。「だって、故意に嘘をついていると汚名を着せられるのは、紳士にとっては恥辱の極みなのだと憤っておられる方ですからね。まさか、虚言を弄したりはなさらないでしょう」とのお言葉でしたわね。

貴女の場合の特別な事情を、一つ一つ力説しておきました。ラヴレースさんの品行のこ

とも、アラベラさんのためには、ご一族の皆さんにとって何の障害にもならない時期がありましたこと、また、当時はあの人のお家柄に大きな比重が置かれ、才能や学識にはさらに大きな期待が寄せられており、才能と学識があるのだから、美徳と分別を備えた女性の働き掛けによって、心を改めてくれるのは間違いないと思われておりました点を取り上げました。そして、思い切って次のように言い添えたのです［こんなことを口にしてしまいましたが、何卒ご容赦いただきたいと思います］。貴女のご家族は、世俗的な意味では立派な人たちなのだろうが、貴女以外のどなたについても、宗教や信仰心に関して大変几帳面だと見る人はどこにもいない。だとすれば、他人のそういった欠点に異議を唱える資格を十分に備えているとは言えないのだ、とです。それに、女性の愛の対象として、飛び切り容姿の優れた人物の一人、そして、品行のことはどうであれ、際立った才能や様々な素養で名の高い人物の一人の代わりとして皆さんが見つけ出してきたのは、何といういやらしい男性なのだろうか、とも言っておきました。

だからこそ、ご意向に沿うのが一層手柄になるのだと、母はなおも言い張っておりました。そして、非常にハンサムで非常に陽気な男性が優しく愛情溢れる夫となったためしは滅多にないと主張しておりました。そういう男性は大変なナルキッソス〔二八〕であることが常で、どのような女性であれ、自分たちと同じように、自分たちのことを高く買って然るべきだと考えるほどなのだから、というのです。

今回の件では、その点での心配は一切ない。何故なら、相手の男性が大概の男より上品で優雅なことは認めなければならないが、容姿にしても考え方にしても、女性のほうが男性よりもさらに優っているからだ、と私は申しました。

お気に入りのヒックマンさん以外の男性を私が褒めますのは、母にとりましては聞くに耐えないことなのです。それでいて、いつも母はあの人に何かしら恥ずかしい思いをさせてしまいます。ありとあらゆる機会に、あの人に相応しいとは思われないほどの価値を認めたり、およそ勝ち目などのない事柄で、あの人を比較の対象に持ち出したりいたしまして、せっかくあの人がお持ちのわずかな取り柄を減じてしまいますようなことを母がしなければ、あの人もそんなに恥をかかずに済むはずなのです。そして、今度は［途方もない依怙贔屓ですが］、母個人といたしましては、あの人の顔が確かにそれほどすべすべしておらず、血色もさほど良くはない点を別にいたしますと、また、差し出がましいところや大胆なところが（淑やかな女性にとりましては、これが欠点になってはいけないというのですが）あまり見られない点を除きますと、ヒックマンさんはどんな時にだってラヴレースさんに匹敵すると考えているのです。

そのような到底勝負にならない比較に深入りするのを避けるためですが、私はこう申しました。貴女が思いどおりになさるのをお身内の方々がそのままにしてくださり、優しく接しておられたなら、どなたであれ、皆さんの嫌っておられる男性に励ましを与えるようなことを貴女がお考えになったとはとても思われません、とです。

「それじゃあ、ナンシー、ますます言い訳が出来ないわよ。だって、もしもそのとおりだとすると、この件では、愛情よりも反抗心のほうが勝っていることになってしまうのじゃないかしら」と、母が横槍を入れました。

「そうとも限らないわよ、お母様。クラリッサ・ハーローさんがどんな男性よりもラヴレースさんを選ぶのは分かっていますからね。もしも品行の点さえ …… 」

「〈もしも〉って言うわけね、ナンシー。その〈もしも〉がすべてなのよ。あのお嬢さんがラヴレースさんのことを愛していらっしゃるって、おまえ、本当にそう思うの」

貴女としては、私にどう答えてもらいたかったのでしょうね。私の実際の言葉はお教えしないことにいたします。でも、あのとおりのことを話さなかったなら、一体どなたが私を信じてくれたでしょうか。

それに、貴女があの人を愛していらっしゃること、私には分かっているのです。御免なさいね。でも、それを否定なさるようでしたら、貴女がなさっておられるのは、他でもありません、避けるわけには行かないことですのに、まるで、それに耽ってはいけないのだと考えているみたいに、ご自分を非難しておられるだけの話ですわ。

「実際の話、お母様」と、私は申しました。「あの人はどんな女性の愛情にも恥ずかしくない男性ですわ［繰り返しますが、こんなことを言って構わなければの話です］。でも、クラリッサさんのご両親は　…　」

「いいこと、ナンシー、ご両親はね　…　［娘のせっかちさを咎めておりますのに、日頃から母がどれほど横槍を入れてくることか、ご存じですわね］」

「間違った手段をお取りになることだってあるでしょう」　私も口を挟みました。

「不当なことをなさるはずはありませんよ。保証しても良いけど、それなりの理由がおありなのよ」と、母が申しました。

「若い女性を無分別な行動に誘うかもしれない手段だわ。でなければ、するはずもないような事柄ですのにね」

「でもね、もしも無分別なことだというのなら［と、母が言い返しました］、そんなことをなさるべきでしょうかね。思慮深い娘というのは、仮に過ちを犯すとしても、両親が間違っているからといって故意に間違ったことをしたりはしないものです。もしそんなことをすれば、両親に非難を向けている世間の人たちが、子供のほうを見逃したりはしないでしょう。このような場合、娘さんの罪を軽減するために言えることといえば、ドレイトン夫人に宛てたクレアリー嬢のお手紙で求められているような、娘さんの若さや経験のなさを考えに入れた、優しい思いやりから出た言葉だけですよ。見てのとおり、ご自分よりもはるかに年上の人に助言なさるほどの分別を弁えているような、クラリッサ・ハーローさんみたいな立派なお嬢さんが、そんな見え透いたことを口実になさるでしょうかね。

私の言っていることを、すぐにお嬢さんにお知らせするのですよ、ナンシー。それからね、この点もお話しして上げるのですよ。どれほど片方の人がお嫌いで、もう一方の人をどれほど好いておられるとしても、お嬢さんのようにどこまでも思いやりがあって、心の広い娘さんには、自分を殺した振舞いが求められているのだということです。ご家族の皆さんに喜んでいただけるわけですからね。この世で一番身近な、そして、一番大切な十人かそこいらの人たちにです。しかも、その先頭には優しいお父様とお母様がいらっしゃるのです。お嬢さんの片想いってこともあるでしょう。でも、親はもっと深く考えるものなのですよ。クラリッサ・ハーローさんには、ご自分の片想いは諦め、ご両親の判断のほうを受け入れるおつもりはないのかしら」

この「判断」という点につきましては、大いに意見を述べておきました。私の口から話してほしいと貴女が思われますことのすべてをですわ。貴女を取り巻いております異常な事態からいたしまして、申し上げて構わないことはすべて話したつもりです。母にもその

真意がよく分かったのでしょうね、母の言葉に対する私の答えは一切筆にしないようにとのことでした。書くのは、母自身が提案したことだけにしなさいというのですが、このように微妙な問題でもありますし、私たち両方にとりまして一生涯後悔の種となりますような（言い出したことで私が、また、そのとおりになさったことで貴女もですが）、そんな行動に貴女が踏み出すきっかけとなっては困るというわけです。

さあ、このとおり、母の論点につきまして、ご紹介いたしました。このようなことをいたしますのも、貴女がどう振る舞われたら良いのか、私自身では助言しかねているからでもあります。ご自分のお気持ちのこと、そして、お気持ちではどうなさりたいのか、その点につきましては、貴女が一番よくお分かりのはずですわね。

朝の最初のお散歩の折に受け取っていただけますよう、朝早くにこれをお届けするとロビンは申しております。

神様が最善の道を示し、お導きくださいますよう、片時も休まず祈っております。

いつもお慕いしております貴女の

アナ・ハウ

手紙　十四

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

日曜日　午後

大きな不安に包まれております。でも、お母様と貴女には、謹んでお礼の言葉を繰り返さずにはおられません。今回のお便り、本当に有難うございました。お母様の思いやり溢れるご趣旨には、前回お送りいたしましたものの文面で間に合うかとも存じますが、封書のカバーに鉛筆で記しましただけでは、ご厚情への謝意をお伝えするのに十分なものとは考えておりません。ドレイトン夫人宛の私の匿名の手紙につきまして、ほんの数行書かせていただきたいと思います。立派なノートン夫人が例の手紙を手伝ってくださいましたことを、そうしたつもりではおりますが、もしもあの時にお話ししていないのでしたら、今その点を認めさせていただきます。

このことは是非お母様に知っていただきたいのですが、二つの理由がございます。一つには、自分のものでもない思慮分別を詐称しているように思われたくないということですし、もう一つは、お母様が導き出されました手厳しい、でも、尤も至極なご推論が現実のこととなりまして、辛い思いをするようなことにならないためです。私のもののように思われております忠告に相応しくない行動を私自身が取ったりいたしますと、二重に過ちを犯すことになるとのお考えでしたね。

一番重く心にのし掛かっておりますことに触れます前に、私の家族につきまして、その道徳観念のことを手厳しく、とても厳しく酷評なさっておられます点、今一度咎めさせていただきます。本当に呆れるばかりですわ、貴女には。この点につきましては、幾度便りを差し上げましても、ほとんど効果が見られなかったわけですから、些細なことでしたら気にも留めなかっただろうと思うのです。でも、私自身が心痛の種に取り囲まれているとはいえ、改めて申し述べる必要もない非難のお言葉を、一言の咎めもなしに見過ごしてし

まうわけにはまいりません。

イギリス中を見渡しましても、母よりも立派な女性はいないのです。父にいたしましても、貴女が時々考えておられますような人間ではございません。ある一点を別にいたしますと、我が家の主だった者たちよりももっと道義に適った暮しをしていらっしゃる家族はないものと存じます。暮らし向きの割には、人付き合いが少ないというだけのことなのです。だといたしますと、結婚によって我が家と縁を結びたいと望まれる場合、それを許諾いたしますのもお断りいたしますのも、確かに家族の者たちの権利でしょうから、婿になりたいという人に申し分のない品行方正ぶりを求めましても、至極当然のことではないでしょうか。

自分の心配ごとのほうに心を奪われてしまいます前に、もう一、二行認めますが、ヒックマンさんに対する貴女のお振舞いのことです。他の人から不愉快な思いをさせられたからといって、それも、貴女のほうに落ち度がありそうですのに、罪もない人に八つ当たりをなさるのは、心の広い振舞いだとお思いなのでしょうか。でも、あの人にお話を一つして差し上げることも私には出来るのですし、その気を起こすところまで私を刺激なさらないのが、貴女にとっても一番の得策でしょう。つまり、こういうことですわ。男の人に意地悪をしている女性はだれも、完全にその人を拒絶しているのではなく、一通り苛めも終わり、男の人が奉仕と忍耐の限りを尽くした後は、いろいろと償いをして上げようと、心の中では考えているものだ、ということです。この点につきまして詳しいお話をいたしますのには、心のゆとりが十分ではございません。

それでは、現在私の心を捉えております不安の種についてお話しいたしましょう。

今朝お送りいたしましたものの中でも触れたことですが、嵐が差し迫っていると危惧すべき節があったのです。午後、ソームズさんが兄と礼拝式から戻って来られました。すぐその後、ベティが手紙を届けにまいりましたが、だれからとは申しませんでした。封筒に入っておりまして、宛名書きはこれまで見たことのない筆跡でした。まるで、差出人のことを私が知ったなら、受け取って開封するようなことはしないだろう、との想定があるみたいなのです。

内容は次のとおりです。

クラリッサ・ハーロー様

三月二十六日　日曜日

親愛なるマダム

今なお、三十分間のご挨拶に伺うことへのご同意もいただけぬまま過ごしておりますゆえ、我が身がこの上ない不幸者に思われる次第です。貴女さまとの面談をご快諾くださいますなら、御身に深く関わります事柄をお知らせする所存です。御身の名誉に関わることでありますし、ご家ぞく皆様の名誉にも関わるのです。貴女さまが不相応に買いかぶっておられると言われております人物の企み、および、その男の邪あくな振舞いのいくつかに関わることでありますが、その真偽のほどに関しまして、納得いただけます証こをすぐにもお示しする所存です。私の利益がからんでいるやにも見えましょうが、隅から隅まで真実でありますことはすぐにもお誓いいたします。あの男がいかなる人物なのか、ご承知い

ただけることでしょう。ご好意を寄せておられるとのうわさですが、貴女さまご自身の名誉のためにも、そのようなことのなきよう願う次第であります。

御身の名誉ならびにご家ぞくを大切にお思いでしょうから、マダム、ご清聴を賜りたく存じますが、ご清聴いただけますなら、幸甚に存じます。

この上なく謙虚にしてこの上なく誠実なる貴女のしもべ

ロージャー・ソームズ

お許しがあるものとの希望を胸に、階下にて待機いたしております。

この男と私とを同席させるための下劣な策であることは、いささかの疑いもございません。私のほうでは口頭で返事をしようとしたのですが、あの人の訪問を断るような伝言は御免蒙りたいとベティが言うのです。従いまして、あの人を迎えるか、それとも一筆認めるか、そのいずれかを余儀なくされてしまいました。そこで、返事を書くことにいたしましたが、その草稿をお送りいたします。これがどのような結果を招くのか、心の痛む思いです。と申しますのも、階下では大騒ぎの様子なのです。

ロージャー・ソームズ殿

謹んで

私の名誉に関わるとのことですが、どのようなことをお知らせくださるにせよ、お話しいただくまでもなく、お手紙で間に合うものと存じます。ラヴレースさんのことが何か私と関わりを持つといたしましても、それゆえに貴方の関心事とならざるを得ない、というものではないと思います。貴方ゆえに被っております「そのように考えざるを得ないのです」仕打ちが極めて残酷なものだけに、仮にラヴレースさんのような人がこの世に存在しないといたしましても、希望なさっておられるような形では、三十分といえども、ソームズさんとはお会いしたくないのです。私の申し出を受け入れていただけるのでしたら、ラヴレースさんのことでこの身に危険が及ぶなどということは一切有り得ません（従いまして、貴方がどのようなことを暴露なさろうとも、何らの影響もございません）。私の申し出につきましては、疑いもなく、既にご存じのことと思いますが、もしご存じないのでしたら、どうぞ身内の者たちにお知らせいただきとうございます。ある紳士に関する私の心配ごとを取り除こうとしているのでしたら、こちらでも、もう一人の紳士につきましての皆の心配ごとを取り除いて上げる心積もりでいるということをです。そういたしますと、ラヴレースさんが善人でありましても悪人でありましても、それが皆にとりまして、あるいは、私にとりまして、どれほどの意味があるのかということです。皆にとりましても私にとりましても、何程の意味もないといたしますと、貴方にとって何らかの意味を持ちますのは何故なのか、私には理由が分かりません。ただ、貴方のほうに理由があるとおっしゃるのでしたら、こちらから申し上げることは何もございません。お気づきになられたあの方の過ちを諫め、貴方に劣らない善人に導くよう、お骨折りくださいますのがキリスト教徒の務めと存じます。貴方ご自身が立派な方であることは疑いございませんし、でなければ、このようにいそいそとあの方の非を探り出して、暴露するような真似はなさらないこ

とでしょうからね　…

お許しをいただきとうございます。でも、前に差し上げました手紙のことがございますし、度量の狭いことには、いまだにしつこく付き纏っておられることもございます。それに、貴方ご自身の取り柄によってというよりは、むしろ、このように他人の人柄を犠牲にしてご自分を売り込もうとなさっておられるということもございますから、私が辛辣な言葉をお返ししたからといって、咎め立てなさることは貴方にはお出来にならないものと存じます。この不幸な境遇につきましても、貴方が大きな役割を演じておられるわけでございますから。

Cl. ハーロー

日曜　夜

父が私のところへ来ようとしたそうです。怒りに駆られてということですが、説得を受けて思い止どまったのです。ハーヴィー叔母様が、お許しを得て、以下に掲げます手紙を届けてくださいました。迅速な処置ってところですわね。

クラリッサ・ハーロー嬢へ

姪へ

優しい態度や説得が何の効き目もないことは、これで皆にも分かりました。貴女がここに留まることは、お母様ももう許してはくださらないでしょう。お父様のお友達に宛てた貴女の訳も分からない手紙のことで、お父様はすっかりご立腹ですから、貴女がここに残るとどんな事態を招くのか、お母様にも見当が付かないのです。ですから、すぐにアントニー叔父様のところへ移る仕度をするようにとのご指示なのです。

叔父様のお屋敷に行くのを貴女は嫌がっておりますが、叔父様はそれを心外なことと考えておられますよ。

身内全員と争うにも値すると貴女が考えている、その男の悪辣さについて、貴女は気づいていないのです。

返事を出してはいけませんよ。きりがありませんからね。

貴女には分かっていないのです。どれほど皆を苦しめていることか　…　でも、だれよりも辛いのはこの私です。

親愛なる貴女の叔母
ドロシー・ハーヴィー

叔母への返事を禁じられましたので、もっと大胆な振舞いに及びました。母に数行書き送ったのです。どうしても行かなければならないのなら、父と母の足下に（他の人がいない時に）この身を投げ出し、これまで二人に掛けた迷惑を詫び、また、二人の祝福の言葉をいただく場を作ってもらいたい、そして、転居についての指示やその日取りを、直接二人の口から知らせてほしいと懇願したのです。

「なんて図太い子なんでしょう。またこんなことをするなんて。それは戻していらっしゃい。それから、他人に従う心を養うよう、言ってやるのね」というのが、腹立たしげな

母の返答で、私の手紙は封も切らずに送り返されたのです。

でも、子の務めと思われますことを一つでも怠ってはなりませんから、父本人に宛てまして、同趣旨のことを数行認めました。祝福も与えずに家から追い出すようなことは控えてほしいと頼んだのです。ところが、これも二つに引き裂かれ、未開封のままベティの手で送り返されてまいりました。ベティの態度といったら …… 片手を差し上げ、もう一方の広げた掌に千切れた手紙を乗せて突き出してみせるのです。そして、「ご覧なさい。可哀相なことになってしまって。子の務めをお果たしになる以外にないのですわ、お嬢様。話してほしいのは〈行い〉のほうだ。あの娘の〈言葉〉などはたくさんだと、お父様はそのようにおっしゃっておられましたわ。それから、お手紙を引き裂かれて、私の頭めがけて投げてよこされたのですよ」と言っておりました。

あまりにも絶望的な状況なものですから、このように撥ね付けられましても、諦めずに手を尽くそうと心に決めました。ペンを取りまして、ジョン伯父様に訴え出たのです。封をしたまま母が送り返してまいりました手紙、それに、未開封のまま引き裂かれました父宛のものを同封いたしましたが、何よりも先に、貴女のための写しを大急ぎで作っておきました。

伯父は帰宅するところでした。それで、手紙は伯父がチャリオットに乗り込もうとしております時に手渡されました。従いまして、その手紙の運命につきましては、明日にならなければ分かりません。

以下にお示しいたしますのがその写しです。

ジョン・ハーロー殿

いつも敬愛申し上げております伯父様へ

謹んでお送りいたします請願書を開き、目をお通しくださるはずと、望みをもってお願い出来そうな人といたしましては、今では伯父様を措いて他にはおりません。ハーヴィー叔母様からは、ご説明いただきたく思いますようなご指示がありましたが、私がお便りをいたしますのを叔母様は禁じておられるのです。そこで、厚かましいとは思いつつも、父と母に一筆認めさせていただきました。その結果につきましては、引き裂かれております手紙ともう一通のものから（共に未開封のままです）お察しいただけると思います。このいきさつは既にご承知のことではありましょうが、惨めな扱いを受けました文面につきましては、ご存じないものと思いますので、何卒、両方をお読みくださいまして、泣き言や諫めの言葉で満たされたものでもなければ、何ら反抗的な意味合いを含むものでもないことの証人になっていただきたく、お願い申し上げる次第です。一言述べさせていただきますが、お怒りに任せ、私の言葉には耳を塞がれ、私が認めますものにも目を瞑っておられますと、いつかは、無情な心が悔やまれることにもなるでしょう、ということでございます。伯父様のお屋敷とかハーヴィー叔母様のお宅、あるいは、その他の場所ではなく、叔父様のお家へ私を送るのは何のためなのでしょうか。どうかお教えいただきとうございます。私の恐れておりますことのためなのでしたら、あのような条件に縛られて生きて行くなど、とても耐えられることではございません。また、家を追われますのは何時のことなのかにつきましても、お知らせいただきとうございます。一度この家を離れることを余儀

なくされました暁には、二度と再びこの家を目にすることはあるまいと、そんな思いが胸に募ってまいります。

ただ、はっきりと申し上げておきますのが私に相応しいことでしょうが、強情さとか恨みがましい気持ちとかからこのような書面を認めているわけではございません。神様もご存じでしょうが、絶対にそのようなことはないのです。でも、叔父様のところへ連れて行かれました場合に受けるように思われます仕打ちは、間違いなく私の苦難に … 敢えて申し上げますなら、いささかも身に覚えのない苦難ですが … 止めの一撃を加えることになりましょう。

かつては一方ならぬご厚情に与っておりましたのに、
今ではこの上ない不幸を味わっております貴方の
Cl. ハーロー

手紙　十五
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月二十七日　月曜日　朝

今朝早くにジョン伯父様がお見えになり、同封いたしました優しさ溢れる手紙を届けてくださいました。伯父様に喜んでいただくことが出来るならと、手紙のせいでそんな気持ちになっております。ソームズさんの劣っておりますところがどれほど言い紛らわされているか、ご覧いただけることでしょう。好意というのは、すいぶんと疵を隠してしまうものですね。でも、おそらく皆のほうでも言い返してくることでしょう。嫌悪の情というのは、ひどく欠点を暴き出してみせるものだ、とです。

伯父のこの手紙は、最初のご返信でお届けいただけると嬉しいです。

日曜日深夜、というよりは、むしろ月曜日未明

自らの決心に反することとはいえ、お前には返事を出さずにいられない。だれもがお前を愛しているのだよ。そして、それはお前も分かっているはずだ。私たちのほとんどの者にとっては、お前の歩む土地そのものが愛しいほどなのだよ。だが、顔を合わせる気になど、どうしてなれようか。お前の顔付きや言葉遣いには抗し難いものがあるのだ。愛していればこそ、顔を合わせるのが憚られるのだ。お前にやってもらおうと私たちが決心したことを、お前は絶対にするまいと心に決めているというのに、どうして会ったり出来るというのだ。私自身のことを言えば、幼い頃から今日まで、お前ほどに慈しんできた者はいないのだよ。それに、何度も口にしてきたことだが、これほど私たちの愛情を受けるに相応しい子供には出会ったこともなかったのだ。なのに、お前は一体どうしてしまったというのだ。試練の時を迎え、何という失態なのか。残念なことこの上ない話だ。

同封の二通には目を通した。弟夫妻には適当な折に見せることにしよう。だが、今の二人は、お前のものは一切受け付けないはずだ。

私としては、お前の手紙を読むと、きまって意気地がなくなってしまう。どうしてお前は、自分では少しも取り乱した様子を見せないのに、これほどまでに他人の心を動かすこ

とが出来るのだろうな。どうしてまたあのような手紙をソームズ氏に送るような真似が出来たのだろうな。まったくもって驚いた話だ。それにしても、訳も分からないほど変わったものだな、お前も。

それに、自分の兄と姉だというのに、何という態度なのだ。手紙を書くのも顔を見るのも嫌だと二人は言っている。「柔らかな応答は憤りを静める」〔一九〕と記されているのはどこなのか、お前は知らないのかな。ただ、鋭い機知に頼ると、他人を傷つけることもあるだろう。だが、棍棒が剣に打ち勝つこともあるのだよ。お前に傷つけられている人間が、お返しにお前を傷つけようとすることはあるまいなどと、どうしてそんなことを当てに出来るのかな。皆がお前のことを褒め称えてきたわけだが、私たちの称賛を得るために、これまで使っていた手がこれだったというのかな。そんなことはあるまい。だれもが、見知らぬ者でさえ、高貴の生まれでもないお前を初対面の時からレディーとして扱い、レディーと呼んできたのは、お前が高潔な心と優美な立ち居振舞いを身につけていたからこその話なのだよ。お前の姉はそのような栄誉に浴したことはないわけだがな。もしも、妬まれているのだというのなら、どうして妬みを募らせ、その牙を尖らせるような真似をするのかな。分かってくれるだろう。私は公平な人間として、今もお前を愛している者として、筆を執っているのだよ。

だがな、お前は得意の才能にものを言わせ、だれ一人として容赦せず、皆の心を動かしておきながら、自分は少しも動かされようとしないものだから、私たちもますます結束を固めることになったのだ。これが、前に一度なぞらえてみせた〈密集戦闘隊形〉というやつだよ。叔母のハーヴィーがお前の手紙を禁じているのは、私が許さないのと同じ理由からだ。私たちは皆お前に会うのが怖いのだよ。腑抜けにされてしまうのが分かっているからだな。お前の母などは、あまりに怖いものだから、一、二度、お前が無理やり顔を出しに来そうだと思った時には、ドアを閉めて錠を下ろしたほどだった。お前の持ち出す条件で顔を合わせるわけには行かないことを承知しているし、お前のほうでも、母の出す条件では会わないことに心を決めているからだよ。

何はさておき、我が愛しのクレアリーよ、私たち全員の願いを入れるよう決心をすることだ。そうすれば、私たちは一人ずつ順番に、喜び勇むその胸にお前を抱き締めることだろうな。片方の男が、もう一方の男のような機知や才能、そして、容姿に恵まれていないとしても、そのもう一方の男というのは、比べる者とていないほどの邪心の持ち主なのだよ。それに、身内の者すべてから寄せられる愛情と謹厳な男性とを（さほど洗練されてはいないとしても）授かるほうが、見てくれがどれほど優れているとしても、放蕩に憂き身をやつす男よりは望ましいことではないのかな。お前は大変な才能に恵まれているのだから、片方の男からは敬慕の念をもって迎えられるだろうな。だが、もう一方の男は、その点ではお前にも負けないくらいに恵まれているのだ。それゆえ、お前の才能などはこれっぽっちも尊重しないだろう。えてして夫というものは、賢い妻に対しては、自分の権威を守ろうとして躍起になるのだよ。片方の男なら、廉潔の士に巡り合えるということだ。氏に対してあれほどあからさまに無礼な態度を取っていなければ、もう一方の男について氏が聞かせてくださる話で、お前の耳もきりきりと痛んだことだろう。

さあ、可愛い姪よ、今までだれにも出来なかったことだが、それをこの手で成し遂げる栄誉を担わせてほしいのだ。お前の父と母、そして、この私が喜びを、それに、もう一度

言うが、栄誉を分かち合いたいのだよ。これまでの無作法については、すべて水に流すことにしよう。ソームズ氏のほうでも、今後一切、過ぎたことについては咎め立てなさらないだろう。この点は誓っても良いのだよ。

氏がおっしゃるには、お前の好意に与る人間というのはどれほどの宝に恵まれることになるのか、それはよく弁えておられるとのことだ。そして、お前が得られるとなれば、これまでの辛苦もこれからのご苦労も、忘れてくださるというのだよ。

良い子だから、私たちの願いを入れることだ。それも、快く受け入れてほしいのだ。ただ、態度如何に関わりなく、これは為されねばならないことなのだ。いいかな、為されねばならないことなのだよ。父、母、おじたち、そして、誰も彼もを征服するわけには行かないということだな。間違いのないところだぞ、これは。

夜の半ばまで寝もやらず、この手紙を書き上げた。お前の手紙を読み、そして、これを書きながら、私がどれほど胸を痛めたことか、お前には分かるまい。だが、明朝早くにはハーロー邸へ足を運ぶつもりでいる。それゆえ、これを読み、願いを入れる気持ちになったなら、お前の部屋へ来るよう、一言知らせてもらいたいのだよ。私がその手を引いて降りて行き、皆の胸の中へお前を導こうと思っている。あの二人にしても、近頃のお前が偏見交じりに考えていたよりはもっと兄らしい、そして、もっと姉らしい人間であることが分かるはずだよ。かつては、こう自称することに喜びを感じていた者からだ。

〈父親代わりの伯父〉

ジョン・ハーロー

伯父のこの優しい手紙をいただきましてから一時間ほどして、手紙の趣旨に沿った形で歓迎してもらえるかどうかと、伯父からの問い合わせがまいりました。ベティには、口頭での返事をもらってこいとの指示でした。書面での返事は悪い印だということで、手紙は持ち帰るな、と命じたのです。でも、同封しておきましたが、私の認めておりましたものの写しがちょうど出来上がったところでした。それを持ち帰るのには、あの娘も難色を示しておりましたが、ベティのような娘たちにとりましては抵抗し難いちょっとしたものを握らせまして、何とか頼みを聞いてもらいました。

敬愛申し上げますお方へ

優しいお心遣いを賜り、まことに嬉しく存じます。このように思いやりに満ち、温情溢れるお手紙 … 傷つきました心には大きな慰めとなりますし、近頃では、久しく味わったことのないものでございます。どれほど心打たれたことでしょう。私の書き方などには触れずにいただきとうございます。私がどなたかの心を動かしたといたしましても、それ以上に伯父様のお手紙には心を打たれてしまいました。仰せのとおりの条件で訪ねていただく資格があるなら、そして、こんなにも優しく親切な伯父様に導かれ、父と母のもとへ降りて行くことが出来ましたならと、お手紙に接しまして、心の底から願う気持ちになりました。

伯父様、和解のために私が行おうとしておりますことをお話しいたします。ソームズさんも、よくお考えになれば、私のような反抗的な変人よりも、姉のほうがずっとお気に召すのは疑いのないところでしょう。あの人が私に求婚なさる主な動機、あるいは、主な動

機の一つは、そう信じるべき根拠もあるのですが、祖父の地所があの人の地所と隣り合わせになっているということなのです。あの地所は放棄することにいたします。永久に放棄いたします。そして、私は決して結婚しないつもりでおりますから、この放棄は有効なものになるはずです。姉と姉の相続人に永久に委譲することにいたします。私の相続人といたしましては、兄と姉以外には考えておりませんし、父からの賜り物として、父が与えてくださるだけの年金を（地所の見返りとしてではなく、ご厚意として）受け取ることにいたします。いかに少額でも結構です。そして、私が父の意向に背きました場合には、いつでも差し止めてくださって構いません。

これを受け入れていただけないでしょうか。確かに受け入れていただけるはずです。きっと受け入れられると思うのです。お願いです。どうかこれをご提案くださって、伯父様からもお力添えをいただきたいのです。これならすべての目的に適うはずです。姉はソームズさんを高く買っております。私といたしましては、求婚者としてのあの人を高く買うことなど絶対に出来ません。でも、姉の夫としては、あの人もいつだって敬意を受ける資格をお持ちですし、私も尊敬申し上げるつもりでおります。

これが受け入れられました暁には、私室までご足労を賜りますよう、何卒お願い申し上げます。そして、大切な両親の足下へとお導きください。それこそ言いようもない喜びでございます。だれにも負けない孝行娘の姿を見ていただく所存です。また、兄と姉の腕の中へとお導きください。だれよりも親身のお世話をする、だれよりも愛情こまやかな妹であることを分かっていただくつもりです。

衷心よりなされましたこの提案へのお返事を謹んでお待ちいたします。

従順にしてだれよりも感謝の念に溢れます貴方の姪

Cl. ハーロー

月曜日　正午

受け入れてもらえそうに思います。ベティの話では、アントニー叔父様とハーヴィー叔母様のところへ使いが出され、ソームズさんは呼ばれなかったとのことですから、これは有望だと思うのです。妬みの種になっておりますあの地所など、気持ち好く譲り渡してやりましょう。はるかに大切なもののために手放すことになるのです。親戚全員の愛情と愛顧のためなのです。十八年間に亘り常に享受してまいりました、そして、お引き立ていただくこととなりましたあの愛情と愛顧を取り戻せるのです。また、ラヴレースさんと手を切りますのには、恰好の口実を用意してくれることにもなるのです。これであの方も、きっと、何の気兼ねもなく私のことは諦めてくださることでしょう。

今朝、いつものところであの方からの手紙を見つけました。おそらく、土曜日まで出さずにおきました、私の金曜日の手紙への返事だろうと思います。でも、開封してはおりませんし、今回の提案の結果が判明いたしますまで、そのままにしておくつもりです。

好きになれない男性を避けますのを許してくれるだけで良いのです。そうしてくれるのでしたら、好きになれそうな男性のことも快く諦めるつもりです。片方の人につきましては、貴女はそのように考えておられるようですが、たとえ実際に高く買っているといたしましても、絶交したところで、一時的な気遣いをもたらすだけで、時間が経ち、分別を働かせますなら、それも和らぐことでしょう。これは、両親や家族が強く求めました場合に

は、子供として払うべき犠牲なのです。でも、もう一方の人について申しますと、我慢の出来ない相手と結婚いたしますのは、その人に対して不誠実になるということだけでは終わらないのです。本人宛に前にも書いたことですが、立派な妻になりたいと願っております女性を、悪妻とか取り柄のない妻にしてしまう恐れも十分にあるということです。良い主婦にも良い伴侶にも到底なれないでしょう。家族の恥となるか、周囲の者にとりましての悪い見本になるくらいです。

このようにどっちつかずの状態に立たされております今、これを隠しに行くのは気が進みません。貴女を同じくらい宙ぶらりんな状態に置くことになるからです。でも、ベティのお節介で二度も邪魔をされましたので、そろそろ例の鶏舎のほうへ行ってみるつもりです。機会がありましたら、いつもの場所に置いておきます。貴女から何か届いているかもしれませんし　…

手紙　十六

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月二十七日　月曜日　午後

今日の正午までのことを綴りましたものは置いてまいりましたが、もう一通、まもなく追加出来ると思います。私が今ひどく苦しめられております宙ぶらりんな気持ちを味わわれるのは、出来るだけ短くして差し上げたいと思うからです。足音を一つ耳にいたしましても、また、階下でドアが開いたり閉じたりする音が聞こえましても、そのたびに心は掻き乱されてしまうのです。

皆が集まりましてからもうずいぶん経っておりますし、白熱の論議になっているものと思われます。それにいたしましても、長々と論じる余地などあるのでしょうか。受け入れられますなら、皆の目的すべてにお誂え向きの提案なのですからね。ソームズさんの求婚から放免してもらうために、私はどれほどの犠牲を払う気持ちになっているか分かっていながら、この上一瞬たりとも、あの人と一緒になるよう言い張り続けることなど、果たして出来るものでしょうか。でも、察するところ、地所と夫とを受け入れるよう言い含めますのに、ベラの気難しさが第一の難関になっているのでしょう。その次には、プライドがひっかかるのだと思います。「妹がお払い箱にしたもの」という言い方を前にもしておりましたからね。それとも、兄が地所の継続権に見合った価値のものを要求しているのかもしれません。こういった事柄を気にしすぎる者が身内にはいるのです。私の提案がこんなにも検討を加えられておりますのは、そのどちらか、あるいは、両方が原因になっているに違いありません。

ラヴレースさんがお手紙の中で触れておられることを覗いてみたい気もいたします。でも、現在のどっちつかずな状態によって掻き立てられております好奇心に答えが出されますまで、こちらのほうの好奇心は抑えつけておくことにいたします。まだ定かにもなっておりません私事でお心を煩わせておりますこと、何卒お許しいただきとうございます。ただ、筆を手にいたしますこと以外には、何もすることがないのです。また、あったといたしましても、とてもその気にはなれない有り様なのです。

月曜日　夕刻

信じていただけるでしょうか。ベティが、前もって知らせておくということですが、私の申し出は拒否されることになると言うのです。私は「卑劣で狡猾な女だ。だれもが私に優しくしすぎる。ジョン伯父さんは〈誑かされている〉としか言いようがない。手紙を書いたり顔を合わせたりすればどんなことになるのか、皆には分かっていたことなのだ。ただ、あんなふうにつけ込まれたことを、伯父さんも恥じ入っている。私の言葉を真に受けたりすれば、それこそ、世間からはとんでもない見方をされるだろう。私のほうではそう思い込んでいるわけだが、皆の惨い仕打ちとやらも、こんな羽目を見るためのものだったように人目には映るだろう。私の信者たちは、中でもハウ嬢は、きっとそんなふうに解釈するはずだ。私の真意は他でもない。ソームズ氏に反対する根拠の補強となるよう、提案が受け入れられるかどうか試してみようというのだ。そんなことにわずかでも検討の余地があるとは驚きだ。何か出来るかもしれないなどと考えること自体が驚きだ。普通法にも衡平法にも同じように違反している。私がその気になりさえすれば、何時だって取り戻すことの出来る話なのだから、ベラとしては、あるいは、ソームズ氏にしても、何ともご立派な保証に与ることになるわけだ。兄と姉を相続人にするとはな。まったく抜け目のない奴だ。ラヴレースがあれだけ私のことは間違いないと考え、行く先々でそんなふうに吹聴しているというのに、独身を守る決意とは聞いて呆れる。私の夫になれば、遺言を盾にして、好きな時に請求出来るわけだろう。真っ向から反抗しているわけで、辱めを受けるのが当然な娘でありながら、一族の者に指図をしようというのだからな。姉の夫を指名するとはな　…　それに、傲慢なのよ。本当に厚かましいわ［ある方のお言葉ですわ、とベティが気取った口調で教えてくれましたが、だれのことかは容易にお察しいただけると思います］。自分で言っているような牢獄からじゃなく、まるで玉座から年長者や目上の者に向かって、それも、両親にまで指示を出そうというのですからね。強情を貫いた挙げ句、大勝利ってところね。驚いたわね。こんな提案を問題にする人がいらっしゃるなんて、本当に驚きだわ。見事な手管よ。まさしくあの娘らしい話だわ。きっとジョン伯父様も二度と誑かされたりはなさらないでしょうね」といった調子だというのです。

私を非難する言葉ですし、痛めつけるには好都合というわけでしょうね。あの娘は一層喜々としてこの話のすべてを語っておりました。ただ、だれかが私のために口を開いてくれましたことは、この見事に再現されました台詞の一部から窺われましたから、それがだれなのか知りたい気持ちに駆られました。でも、ベティは教えようといたしません。皆が皆敵対しているわけではないのを知りまして、私が慰めを感じたりしてはまずいと思ってのことなのでしょう。

それにいたしましても、貴女が友情をお寄せくださっている相手は何という情けない人間なのか、お気づきではないでしょうか。私に対するご自分の感化力に疑念などないはずです。どうして、もう少し私自身のことを教えてくださらなかったのでしょうか。いつも私がしておりましたように、友達らしく遠慮なさらずに、私の欠点のことや、私は見掛けを繕うだけの偽善者なのだということを、どうしておっしゃってくださらなかったのでしょう。兄と姉にあれだけ見抜けるのでしたら、このように途方もない欠点のことなのですから［他の、もっと人目に付き難いものは見抜くことが出来るとのお考えでしたね］、貴女の炯眼を逃れるようなことがどうして有り得ましょうか。

ところで、階下では今、どのようにして、また、だれが返事をするのか、皆で話し合っている模様です。ベティがあの結構な話をすっかり漏らしてしまいましたことなど、皆は知りませんし、知るべくもないわけですから。御免蒙りたいと一人が言えば、出来ることなら一言も口をききたくないと言い出す者もおりますし、あの娘のことはもうたくさんだと言う者もおります。あんな筆まめな女に手紙を書いていた日には、いつまで経っても終わらないだろう、というのです。

私の資質とされ、つい先頃まではお褒めをいただいておりましたものが、今では非難の的になっているのです。本当に、嫌悪や怒りの感情は物事の性質をずいぶんと変えてしまうものですね。

話し合いの結果は、いずれ何らかの形で伝えてくるものと思います。でも、正直申しまして、すっかり絶望的になっておりますので、ラヴレースさんのお手紙を開いてみる気にもなれません。このような精神状態ですし、何か一生後悔するようなことをしてしまってはと（お手紙が非難するに及ばないものであると分かった場合ですが）、怖いのです。

月曜日　夜

ちょうど今、ベティの手で次の手紙が届けられました。

月曜日　五時

女魔術師へ

お前の面白い新提案も、わざわざ回答するには値しないとの考えに至った。ジョン伯父上は、見事に誑かされたことを恥じておられる。アントニー叔父上向けの新たな策はないのかな。乗り掛かった船だろう。一通り、全員に当たってみるのだな。それはそうと、一行だけ書き送っておけとのお達しを受けているのだ。お前から苦情が出ないようにというわけだよ。元はといえば、お前が誘ったことだというのに、立派な姉の無遠慮さに不平を漏らしていたからな。その一行というのは、「準備に掛かれ」というものだ。明日、アントニー叔父上の屋敷へ移ってもらうのだ。それだけだよ、いいな。

ジェームズ・ハーロー

これを読み、はらわたの煮えくり返る思いでした。憤慨のあまり、すぐにジョン伯父様に宛て、同封いたしましたものを認めました。今夜はここにお泊りらしいのです。

ジョン・ハーロー殿

月曜日　夜

尊敬申し上げますお方

どうやら、私はとても惨めな人間なのですね。知らずにおりました。兄宛に筆を執ったわけではございません。筆を執りましたのは、伯父様に宛てたことでした。伯父様からお返事を賜りたいのです。私ほどに伯父様を尊敬申し上げております人間は他にいるはずもございません。それでも、厚かましいことは承知の上で、ひとつ申し述べさせていただきます。伯父と姪との隔たりも、大きいとは申せ、このような望みを排除するものではな

いということでございます。また、軽蔑をもって扱われますのに相応しいような提案は行わなかったつもりでいるのです。

ご容赦いただきとうございます。胸が一杯なのです。私を不当に扱うことに加わるよう説得されてしまわれたと（まさしくそのとおりだと思います）、おそらくいつの日か、伯父様もお考えになられることでしょう。少しでも優しいお気持ちに戻られ、それを口に出されましたのを、兄が仄めかしておりますように、伯父様が恥じておられるというのでしたら、私にはもう救いはございません。だれからも、少しの情けも掛けていただけないということでしょう。でも、是非とも、伯父様の筆になりますお返事をいただきとうございます。何卒お願い申し上げます。伯父様にお出しした手紙なのです。妹の何たるかを思い出していただけますまでは、兄からの返事は決して受け取らないつもりです。勿論、指図も一切受けません。

私はだれの心をも動かす。伯父様はこのようにおっしゃってくださいます。でも、一体だれの心を動かしたというのでしょう。私よりもずっと人の心を動かす術を心得ております者が一人、家族の中にいるのです。でなければ、同じ家族の中の、苦しみ悩んでおります哀れな子供に優しくするのは恥ずべきことだなどと、まことに不埒な話ですが、そんな気持ちにさせるよう、皆を唆したりは出来なかったはずです。

この手紙を軽蔑を込めて突き返したりなさらないでください。引き裂いたり、黙殺したりはなさらないようお願いいたします。父でしたら、自分の子供のことですから、そのようなことも、そして、どのようなことでも行う権利がございます。でも、この世の他のいかなる男性からも、若い娘が（哀願する気持ちを残しております間は）そのような扱いを受けるべきではないと存じます。

以前に精一杯遜った言葉遣いで認めましたものが、あのように奇妙な解釈をされるのですから、この不用意な走り書きもひどい受け止め方をされるのではと心配いたしております。でも、どれほど厳しいものでも構いません。どうぞ私の提案につきまして、一行でもお返事を賜りとうございます。あの提案は、今もなお、ご留意いただいて然るべきものと考えております。永久に独身を守り、提案を有効なものといたしますために、厳粛この上ない契約にも応じる心積もりです。一言で申しますと、皆さんのご好意を取り戻しますために私に出来ますことは、どのようなことも行うつもりだということでございます。これ以上申し上げるわけにまいりません。ただ、次のことを申し添えさせていただきます。はなはだ不当にも、

この上ない不幸を強いられております者

この手紙を持参いたしますのを、ベティはまたためらっておりました。お叱りを受けてしまうとか、細切れにされて戻されるだけの話だ、などと言うのです。

「それを試してみなくてはいけないのよ」と、私は申しました。「言われたとおりに届けてくれれば、それで良いの」とです。

「嘆かわしいことですわね。本当に嘆かわしい。若いお嬢様方がこうまで露骨に務めに背を向けてしまわれるなんて　…　」　あの娘が言っておりました。

好きなことを言って構わないから、この一回だけは私の使い走りに甘んじてほしい、と申しますと、あの娘もやっと手紙を携えて降りて行きました。

出来るなら、人目を避け、こっそり伯父の手に滑り込ませるよう言い付けました。少なくとも、兄とか姉には見つからないようにと申しました。二人のお節介で、手紙があの娘の予言したような結果になっては困るのだから、とです。

あの娘のほうでは、それは請け合いかねる、と言っておりました。

今は結果を待ち佗びているところです。でも、好意にせよ慈悲にせよ、期待を寄せる拠り所などほとんどございませんので、ラヴレースさんのお手紙を開けてみました。

ラヴレースさんのお手紙は、これと一緒に（同封いたしますものも合わせ）お送りするつもりです。ただ、どのようにお返事をしたら良いものか、今のところは決めかねておりますので、今階下へ届けられました手紙への反応を待ちます間、労を厭いませず、ここでお手紙の中味を要約しておこうと思います。

いつものとおりですが、あの方に対する私のひどい評価のことを、また、ご自分にとって不利な事柄ことごとくについて、私がすぐにも信じがちな点を嘆いておられます。ソームズさんに対して何か無謀な行為に走って、あの方自身が早死になさるようなことになれば、私としてはかえって幸せだ、といったことを仄めかしておいたのですが、案の定、飾りのない言葉でその点に触れておられます。

私を失うのではないかという極度の不安に駆られ、乱暴な言い方をしたけれど、そのために自分は、私が憤慨するのも至極当然な過ちを何か犯してしまったのではないかと、その点が気に掛かると言っておられます。

感情に支配されやすいことを認め、お人好しはすべてそうであり、表裏のない人間は感情を隠せないのだ、と言っておられます。でも、軽率な言葉遣いの言い訳となることが一つでもあるとすれば、それは、私の冷淡さと敵対している者たちの悪意とによるものであるが、今ご自分が置かれている恐ろしい状況ではないだろうか、と訴えておられます。

前回の私の手紙の内容からして、ますます懸念すべきように思われるが、まともな方法でなら大丈夫としても、兄のやり方に従うよう、力ずくで私は説得されてしまうのではないだろうか、また、そうなることを予期するよう、私が根回しをしているのはあまりにも明白だ、とおっしゃるのです。

このような想定に基づき、誠心誠意を以て、とのことですが、あの方の敵側に立つ者たちの悪意に屈したりしないよう懇願しておられます。

心を改めること、また、永遠に忠節を守り、最後まで尽くすといったことを厳かに誓っておられます。それも、終始一貫、打ちひしがれたような遜った口調です。それでも、いろいろ申し立てをなさる点につきまして、芳しからざる人物評のためにそうする必要を自覚しているからのこと、というのでは、それは惨い仕打ちだ、と言っておられます。

過去の不始末の数々のゆえに、自分自身を軽蔑してしまう、と厳かに言明し、過ちに気づいたことを神に感謝しておられます。そして、改心を全うするために欠けているものといえば、私からのさらに具体的な指導だけだ、とも言っておられるのです。

あの方の不名誉にはつながらないと私が判断することなら、父との和解を実現するためにどんなことでもするつもりだし、私が強く求めるのなら、真っ先に兄に交渉を申し入れることとさえ厭わない。そして、新たな侮辱を加えて、過ぎ去ったことを蒸し返すような真似をしなければ、私の兄なのだから、ご自分の兄弟として接することにする、と約束しておられます。

とても真剣な、また、謙虚な態度で、三十分間の面談の機会を求めておられます。私たちが〈林〉と呼んでおります場所へ出る庭木戸の鍵を持っておられるとのことで（私が閂を外してくれさえすれば）、その鍵を使って夜のうちに庭に忍び込み、私が会いに行く機会を掴むまでは待っているというのです。お書きになっていることすべてが事実であることや、私に対する愛情のこと、また、必要な場合には、あの方のお身内の皆さんが保護の手を差し延べてくださることを確認してもらいたいからだ、とおっしゃるのです。

脅すために私宛に筆を執るような大それた真似はしないが、と断わられた上で、このご好意を私が拒絶いたしました場合には、自暴自棄から（すっかり絶望的にさせられるような筆致が、私の手紙のそこかしこに見られるので）どんな行動に出るか分からない、と言っておられます。

身内の決心が固く、既に深入りしている上に、今後ともこのまま押し進めるつもりだと断言してもいるのであるから、あの方が確保してくださるという保護の手を受け入れるよう決心しないのであれば、あるいは、まだ逃げられるうちに、ロンドンとかその他の場所に逃れるのでなければ、アントニー叔父様の屋敷に連れて行かれた場合、ソームズさんとの結婚を避けるための措置として、私としてはどのようなことを提案出来るのか、と尋ねておられます。

あの方はこんな助言をしておられます。こっそり匿っていただくよう、貴女のお母様にお願いしてはどうかというのです。地所の所有権を確保し、身内との和解が得られるまでの間だけ、とのことですが、私が皆の力の及ばない状態になった途端に、身内の者たちのほうから和解を求めてくるに違いない、とおっしゃるのです。

あの方は次のように［どうして情報が手に入るのか、いまだに謎なのですが］知らせてくれております。身内の者たちは従兄弟のモーデンに宛て、自分たちの都合の好いように事情を書き送っておりますし、自分たちに与してくれるよう、従兄弟の心を動かせるはずと、何の疑いも抱いていないというのです。

これらすべての点からして、私の身内とか親しい人たちの中に、私を受け入れてくださる人がだれ一人としていないということであれば、私に残された道はただの一つしかないことが明らかだ、というのです。

この唯一の道をかたじけなくも選んでくれるというのなら、それこそ有頂天になりそうだが、財産贈与証書を作成させることにする。空欄を適宜残しておくので、気の向くように埋めてほしい。直接指示をしてくれさえすれば、また、疑念や心配な点をすべてこの口から明かしてくれれば、そして、いかなる動機によってもソームズの妻となるつもりはない旨を繰り返してくれさえすれば、それで自分の気は休まる。しかし、あのような手紙を受けた後のことでもあり、会って話さないことには、とても安心は出来ない、とおっしゃるのです。そして、そのためにも、戸口の閂を今夜のうちに外しておいてほしい。あるいは、手紙がその前に届かない場合もあろうから、明日の晩でも良い。人に見られても正体を疑われないような変装をし、自分の鍵で開けられることを期待しつつ、庭木戸のところへ来ている。また、この二晩は〈林〉以外の場所には泊まらないことにし、自分にとっては吉兆ともなることだから、閂が外されるのを、目を凝らしていつまでも待ち続けるつもりでいる。ただし、このようなことは控えるようにとの私の指示、あるいは、何か別の約束の盛り込まれている手紙が届いた場合は別だ、とおっしゃるのです。

このお手紙は昨日の日付になっております。ですから、昨夜はあそこに来ておられたのでしょう。今夜も来られるものと思います。私は一行も認めておりませんし、何を書いたら良いのか、仮に気持ちが固まったといたしましても、今ではもう遅すぎるのです。

あの方がソームズさんのところを訪ねたりなさらないよう願っておりますし、こちらへも来てもらいたくないのです。このどちらかでもなさるようでしたら、あの方とは永久に手を切るつもりです。

こんな強情な人たちとはどのように付き合ったら良いのでしょうね。願わくはこんな人とは … でも、希望など言ったところで、意味がありませんわね。訳も分からないほど途方にくれております。ただ、こんなことは口にしなくても良かったかとも思います。私の置かれております状況につきまして、これだけお話しした後のことですものね。

手紙　十七

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

火曜日　午前七時

親切にも、伯父が返事をくれました。次に掲げますものがその内容です。やっと今届けられたところです。書かれたのは昨晩ですが、夜遅くのことだったのでしょうね。

月曜日　夜

クレアリーへ

そこまで図々しく挑戦的なことを言い出す女になってしまったのだし、自分の務めを果たしもせずに、私たちの本分を説こうというのだから、私としても返答しないわけには行くまい。お前の地所など欲しがっている者は一人もいないのだよ。だれの忠告も入れようとしないお前が、姉の婿を指定しようというのか。ソームズ氏に送ったお前の手紙は許し難いものだ。この点は前にも咎めたことがあったな。お前の両親はどうあっても従ってもらうつもりなのだ。それが至当なことだろう。にも拘らず、お前の母親はお前がアントニー叔父のところへ移されるのを木曜日まで延ばしてもらうよう説得してくれたのだ。それでも、そのような恩恵、あるいは、自分からのいかなる恩恵にも値しない娘であることは認めているのだぞ。今後一切お前の手紙は受け取らないことにする。私には手に負えないズルだからな。感謝の気持ちを知らない、理不尽な娘だ。自分の意向をだれのものよりも最優先しなければならないということかな。本当にお前も変わってしまったものだ。

不愉快に思う伯父

ジョン・ハーロー

木曜日のことになりました。あの堀を巡らした屋敷へ、あのチャペルへと連れて行かれますのは … ソームズさんのところへです。このようなこと、どうして考えられるでしょうか。皆のせいで、自暴自棄になってしまいそうです。

火曜日　午前八時

ラヴレースさんから別のお手紙が届きました。極めて快適と申すわけにもまいりません天候の中で、二晩寝ずの番をなさるのは止してもらいますよう、こちらからは何も書き送らなかったわけですから、そのことへのあからさまな、また、遠慮のない不平の言葉で埋め尽くされているものと思いながら封を切りました。ところが、恨みがましい言葉どころか、私が出掛けられなかったのは、体調を崩したためではないか、あるいは、予期しておいたほうが良いと何度も忠告してくださったわけですが、その監禁がいよいよ厳しくなってのことではないかと、思いやりのある懸念の気持ちで満ち溢れているのです。

この日曜日、昼の間は、さまざまな変装に身をやつし、私どもの庭や敷地の塀の辺りを歩き回り、日曜の夜は一晩中、林の辺りや庭木戸の近くをぶらついておられたとのことです。雨に当たったものですから、ひどい風邪を引かれて熱がありますし、声もすっかり嗄れて、ほとんど物も言えない状態だと言っておられます。

お手紙の中で怒りをぶつけておられないのは何故でしょう。身内の者からこのような扱いを受けているものですから、言い寄っております男性の忍耐強さを有難く思わねばならないというのは、危険なことなのです。このような方が私のために健康を損なわれるとなれば、なおさらの話です。

身を寄せるところといえば、二、三本の柏の若木の上に伸び放題に茂っております大きな蔦の下だけで、すぐにそこもすっかり濡れてしまったとのことです。

あの場所は覚えていらっしゃいますね。とても蒸し暑い日に、あの蔦に覆われた柏の若木が作り出します自然の日除けを、二人して有難く思ったものでしたね。

私のために苦しい思いをされていること、お気の毒と言わざるを得ません。でも、自らお求めになったことなのです。

お手紙の日付は昨夜の八時になっております。そして、体調は思わしくないが、心から切望している会見の場を用意してくれるものと期待し、十時まで待つことにする。十時を過ぎたら、馬と召使のいるところまで一マイル歩き、さらに旅籠まで四マイル馬にゆられることとなる、と言っておられます。

情報を漏らす者が私どもの家の中におりますことは認めておられます。ただ、ここ一両日は連絡が取れず、私がどうしているのか、どのような扱いを受けるのかが分からず、心配が募っているとのことです。

このような情況を考えますと、内通者の見当はつきます。ジョゼフ・リーマンです。兄に雇われ、だれよりも信用されている、その当人です。

ラヴレースさんにいたしましては、これは立派なやり方とは申せません。よその家族の召使を抱き込むなどという、こんな卑劣な手口は、長く滞在しておられたフランスの宮廷で学ばれたことなのでしょうか。

短い散歩の折や養鶏場を訪ねます際、このリーマンのことはずいぶん用心しておりました。いつも私に対して抜け目のないへつらい方をするものですから、兄が私に仕掛けたスパイだと思っていたのです。また、私が庭や養鶏場に入りますと、いつも急いでその場を立ち去ってくれるので有難かったのですが、あの男の報告にも拘らず、こういった自由が制限されずにおりますのを不思議に思っておりました(ア)。ですから、おそらく、この男は

(ア) この点に関しては、ラヴレース氏の説明がある。第一巻、手紙三十五を参照のこと。

二人から賄賂を受け取り、それでいて両方とも裏切っているのでしょう。どちらの側にいたしましても、立派な考えで動いているのでしたら、このような不正行為などは必要ないのです。正直な心の持ち主は、裏切り者を作り出す人間と裏切り者本人、その両方に激しい憤りを感じるに違いありません。

それはそれは熱心に、私との面談を求めておられます。再び薪小屋で会おうとしてはいけないという、私から直接受けた前回の命令に、大胆にも背こうというのではない、と言っておられます。でも、父、あるいは、おじたちへの訪問を許してもらうための、私にも受け入れてもらえそうな理由を示したい、とも言っておられます。ご自分のような、財産もあれば素性も確かな人間が、財産目当ての卑しい男にしか似合わないような、人目を忍んだ求婚を続けさせられるのは、ご自分はもとより、私自身の気持ちにもそぐわないことと言わざるを得ないからだ、というのです。ただ、男として、また、紳士として、私を訪ねることに同意してくれるのなら、どれほどひどい扱いを受けようとも、決して腹を立てるような真似はしないつもりでいる、とのことです。

お許しがあれば、M卿が同伴してくれるだろう。それとも、先にベティ・ローランス夫人のほうで母かハーヴィー叔母様、あるいは、私の望みとあれば、おじたちのところへも顔を出してもらって構わない。そして、皆に対して重みを持つような条件が提示されることになるだろう、とのことです。

ソームズさんのところへ訪問なさるのを禁じたりしないよう頼んでおられます。善なるものすべてにかけて誓うとのことですが、ソームズさんに危害とか侮辱とかを加える意図は一切なく、かくも無益な執着から生じるかもしれない様々な結果について、また、私のような高貴な心の持ち主にとっては、それがいかに狭量な愚行であるかということを、冷静かつ理性的に提示するだけだと言明しておられます。また、ご自分の忍耐にどう報いてもらうかは、すべて私の気持ちに委ねるし、モーデンさんの帰国とその助言を待つ決意でいるということを、繰り返し述べておられます。

これらの方策の一つに頼る以外、他に道は考えられないとおっしゃるのです。大嫌いな人間のことであっても、目前にいない時には研ぎ澄まされていた怒りの刃も、面と向かうとなまくらになってしまうものだ、というご意見です。

だからこそ、しつこいとは思いつつも、かねてから懇願している面談の場を作ってもらえるよう頼むのだと、それはそれは熱心なのです。暴力を用いられようと他の手を使われようと、私が言い含められることは決してないと確信出来るまで、そして、兄の無礼な振舞いから解放されるのを見届けるまでは、ロンドンに大切な用向きがあるのだが、恥ずべき扮装に身を隠し、しばらくの間逗留している不便な場所も動くわけには行かない。それに、私が不当な扱いを受ける原因だと、世間中の噂になっているその当人にとっては、これは無頓着ではいられない問題だ。ただ、是非とも一つ言わせてもらいたいのは、私があの方にほとんど好意を示したりせず、極めてよそよそしく接していることを知れば、身内の者にしても、ご自分のことで私を監禁する理由はなくなるだろうということである。また、もう一つ言わずにいられないことがある。つまり、ご自分が違った接し方をされて然るべきであるということは、身内の者たちでさえ承知していると見え、そうなることを予測しているらしいのに、現実に私から受けている仕打ちは、皆が望んでいるとおりのものであり、かたじけなくも文通の相手になってもらっている点は別だが、これを何よりも大

切なことと考え、数え切れないほどの辱めに甘んじてきたのも、文通を続けるためのことなのだ、とおっしゃっています。

改心への心情を改めて公言しておられます。すでに長く危険な道程を歩んでいるということや、もう後戻りを考えるべき時期に至っていることを十分承知している、とのことです。また、放蕩三昧の暮しを送ってきた者が、老いとか病とかに見舞われる前に品行を改めようと決意するのは、然るべき悔悟の念から来ていることに間違いない、と言っておられます。

寛大な心の持ち主はおしなべて強制を嫌うものだ、とのご意見で、この点について力説しておられます。ただ、ご自分の望みのすべてをこの強制 … 当然ながら、この「無思慮な」強制と称しておられますが … に頼ることになりそうで、私からの評価はまったく当てに出来そうもないのが残念だ、とのことです。もっとも、手柄顔に吹聴しておられることもございます。私の意向に黙って従おうとしておられることや、ご自分ばかりでなく、ご家族の方たちにも日々加えられております兄からの侮辱に耐えておられることなどです。また、夜中の監視のことや、あらゆる天候をおして冒しておられる危険のことも述べておられますが、この点は体調がすぐれないことがあって触れただけのことで、さもなければ、このように自分本位なことを口にして、私への情熱の崇高さを穢したりはしなかったはずだ、と言っておられます。

体調を崩しておられる点は、私といたしましても、お気の毒と言わざるを得ません。

このような状況に追い込まれました場合、貴女ならどうなさっていたか、お尋ねするのも怖い気持ちです。でも、してしまったことは、してしまったことです。要するに、私は次のように書き送ってしまったのです。「もしも可能ならの話ですが、明晩九時から十二時までの間に、蔦に覆われました東屋の傍らかその中で、あるいは、庭の奥にあります大きな滝の近くでお会いすることにいたします。お手持ちの鍵でお入りになれるよう、庭木戸の閂は外しておきます。ただ、お会いするのは困難と分かりました場合、あるいは、気持ちが変わりました際には、その旨を改めてお知らせいたしますので、暗くなるまでお待ちいただきとうございます」とです。

火曜日　十一時

その短い手紙を隠しに行き、今戻ったところです。何という精勤ぶりなのでしょう。近くに待機しておられたのは明らかです。手紙を隠してほんの数歩戻りかけましたが、気が咎めるものですから、取り戻そうと思って引き返しました。そのまま出すべきか止めるべきか、歩きながらもう一度考えてみようと思ったのです。でも、手紙はすでになくなっていたのです。

手紙を煉瓦の下に置きました時、ラヴレースさんと私とを隔てておりましたのは、おそらく、わずか数インチの厚みしかない煉瓦造りの塀だけだったということですね。

釈然としない気持ちのまま戻って来たところです。ただ、お会いしても、別に不都合はないと考えております。お断りいたしますと、何か乱暴な手段をお取りになるかもしれません。あの方への敵意から私が受けております仕打ちのこと、それも、あの方の望みをすべて打ち砕こうとの目論見であるのはご存じなのですから、向こう見ずな行動に走られるかもしれません。この前お会いした時にも、望ましくない時刻や場所で不意を突かれまし

たのに、あのようなお振舞いでしたから、心配があるといたしますと、他の者に見られることだけです。求めておられることに無理はございませんし、私の今後の選択や決定を左右するものでもございません。嫌っている男性の妻になるようなことは決してないと、私自身の口から確約するだけのことなのです。もしも、危ない目に遭うことも、人目に付くこともなくお会いするような機会に恵まれないといたしますと、もう一度残念な思いを我慢していただかねばならないことになります。あの方のお骨折りにいたしましても、私の苦労にいたしましても、そのすべてはご自分の非難すべきお人柄からきていることなのです。この点を考えますと、どのような形にせよ、虐待行為や傲慢な態度を憎んではおりますが、あの方が私のために冒しておられる危険のことも、そして、苦労を重ねておられることも、それほど重視すべきではないと思うのです。私の苦しみのほうが（源は同じですし）あの方よりも大きいのですから、なおさらその感が強くなります。

木曜日に叔父の屋敷へ行かねばならないという通知のことはそのとおりだと、ベティが言っております。行く用意をするよう伝えるために、そして、怠りなく引っ越し準備が出来ますよう、わざわざこの娘を手助けに寄越したというわけです。

手紙　十八

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月二十八日　火曜日　三時

ベティが生意気な口のきき方をいたしますことは、再三お話ししておりますが、今のところ少し時間にもゆとりがございますので、先程二人の間で交わされました短い会話の模様をご紹介いたしましょう。のべつ退屈な話題ばかりで貴女を悩ませておりますから、もしかして、ちょっとした息抜きにしていただけるかもしれません。

ディナーの給仕をしている時のことですが、体力を保ちますのには、本当にわずかな滋養分で足りるものですわね、などとあの娘が言い出したのです。そして、その証拠にとばかり、「だって、お嬢様、何一つとしてお召し上がりになりませんのに、これまでにないほどお綺麗に見えるのですもの」と、お世辞っぽく言うのです。

「あなたの台詞の最初の部分は的を射ているわよ、ベティ」と、私は申しました。「貧しい労働者の子供たちはお腹を空かせて、一週間に一度のご馳走だって滅多にいただけないというのに、とても健康そうに見えるし、事実そのとおりなのを目にして、私もよく思うことがあるのだけれど、全能の神様は、他のすべての点と同じように、この点でもご自分の創造物にとても思いやりがおありだということね。神様の創造物のうち、いわば四分の三はどうやって生命の糧を得たら良いのか分からずにいるのだけれど、多くのものを必要としないようにしてくださったのですからね。そのことを考えると、二つの諺が思い出されるわ。素晴らしい意味合いが込められているものよ」

「まあ、どんな諺ですの、お嬢様。是非教えていただきたいですわ。今のように、落ち着いていらっしゃる時のお嬢様のお話を伺うのは大好きですのよ」

「一つはね、今二人で話していたことにぴったりのもので、〈貧困は健康の母〉というのよ。それと、ひとつ言っておくけど、ベティ、私にもっと食欲があっても、また、食欲が

出るようにしたところで、これだけ休息も取れず、苦悩や迫害を強いられたのでは、正気を保って行けるとはとても思われないわね」

「〈不便さにも利点はあり〉とも言いますわよ」　ベティが諺には諺をぶつけてまいりました。「でも、お嬢様、もう一つのほうは何ですの」

「〈金持ちの楽しみは貧乏人の涙から得る〉というものよ。だから、お金持ちの何不自由ない暮しが病に見舞われるのも当然至極ということになるのでしょうね、きっと。ところが、乏しい人たちは健康に恵まれるから、他のどんな不便だって、わりかし重荷にはならないってことね。そこで三つ目の諺が出てくることになるのだけれど、諺が好きなようだから教えてあげるわね、ベティ。〈裸足でも足がないよりは儲けもの〉というのよ。つまりね、歩けないのよりはマシってことね」

私の話がすっかり気に入りましたあの娘は、「学があるというのは、何て素敵なんでしょうね。私も小さい頃から本を読むのは好きだったんですよ。マザーグースだけで、妖精たちのお話ばかりですけどね［そう言いながら、あの娘はお上品な手つきで嗅ぎ煙草をつまみました］。私の思うままに進ませてくれる力が両親にあれば、私だってずいぶんと幸せな人間になれたでしょうにね」と言うのです。

「きっとそうね。大変な上達ぶりだったでしょうね。でも、実際の話、こんなふうに親しく世話をしていただくようになってからのことだけれど、食事の時などに、兄の友人の学生さんたちが話していたのよりも、あなたのほうがもっと洒落た言い方をすると思っていたわよ」

「恐縮ですわ、お嬢様」と、あの娘にしては精一杯の、片足を引いての丁寧なお辞儀をしながら、「お嬢様ほどの目利きですもの、すっかり鼻が高くなってしまいますわ」などと言うのです。それから、嗅ぎ煙草をもう一摘みして、ツンと頭をそらせながら、「是非とも言わせていただきたいのは、名の通った学者さんたちがひどく馬鹿げた話をなさるのを何度も何度も耳にしてきているということですわ。私でさえ口にするのは恥ずかしいようなことなのです。ただ、謙虚なお気持ちから、ご自分たちのような学識を備えていない者のことを思いやってなさっているのだとは思っておりましたが　…　」などと言うのです。

あまり自惚れられてもと考えましたので、自分が明敏で機転のきくことを得意になっているようだが、それは自慢出来ることではない。むしろ、女性の特徴なのであって、多くの例を見て感じているのだが、女性は、こと想像力という点に関しては、男性よりもずっと優っているように思う、と話してやりました。そして、「だからね、ベティ、注意したほうが良いわね。私も近頃機会があって気づいたことなのよ。当意即妙で洒落た言葉を返すあなたの才能も、効果を及ぼすものがある時にはとても有効に働くのだろうけれど、身内の者に、あなたの言葉では、〈思うままに進ませてくれる〉力がなかったような、そんな人間に対しては、あまり効き目は期待出来ないということね」と言っておきました。

あの娘は私の所感が正しいことを証明してみせたのですが、予期していたのよりもさらにきつい応答ぶりでした。「抜け目のないことではそんなに女性のほうが優っているのでしたら、いよいよもって驚くには当たらないということですわね。それだけの教育をお受けになったお嬢様ですもの、男の方たちばかりか女の方たちまでも、お傍に来られる人は一人残らずやっつけてしまわれますのもね」と言うのです。

「まあ、ベティったら。機転もきけば勇気もあるってところを、たっぷりと見せつけて

くれるのね。お見逸れいたしましたってところね。若いご婦人たちも自信をなくして気を揉むのじゃないかしら。皆さんがこんなに利口な召使に身の回りの世話をされて、私に対する近頃のあなたのように、言いたい放題にさせておいたのではね。ともかく、これは下げてちょうだい、ベティ」

「あら、一つも召し上がっておられないじゃないですか、お嬢様。私が少し申し上げましたばっかりに、お食事がお気に召さなくなったのじゃありませんわね」

「そうじゃなくってよ、ベティ。あなたの遠慮のないのにはもう慣れてますからね。当世風の淑女たちの後継ぎが途絶えた場合、ご自分のすぐ次の地位に就かせている侍女や腹心の仲間でもって穴埋めされているのを目にするけれど、私も大筋ではそれを不愉快に思っているわけではないのよ。こんなふうに機転がきくのも、あなたの若い女主人が大いに貢献しているのでしょう。姉はいつだって、私よりもあなたと一緒にいるほうが好きでしたからね。姉はあなたの思うままに任せてしまったのよ。だからね、ベティ、あなたは姉と話し合っているうちに、私が失ってしまったものを手に入れたってわけだわ」

「それじゃあ申し上げますけど、お嬢様、アラベラ様みたいにいろいろ当を得たことをおっしゃる方も、他にはいらっしゃいませんわ。一つご紹介しても構いませんわよ。その気になればの話ですけど。近頃お嬢様は霞を食べて生きておられて、食欲が全然ございませんのに、今までと変わらずチャーミングなお姿ですとお伝えした時のことですわ」

「きっと、優しさ溢れるお言葉だったことでしょうね、ベティ。それを聞かせる気持ちになっていただけるかしら」

「別に大したことじゃございません。〈あの子の場合、片意地が食い意地を呑み込んでしまったのだわ〉というのと、〈あの子には意固地が食べ物や飲み物や着物なのよ〉というものだけですわ、お嬢様」

「まあ、ベティ、姉がそう言ったのね。そんなふうに言いながら、姉は笑っていたんでしょう。姉に言わせると〈当を得たこと〉になるわけだけど、それを口にする時の姉はいつもそうですからね。とても気が利いていて、ウィットもあるわ。私もウィットをとばすほど心にゆとりがあると良いんだけれど。でも、そんな警句じみた言い方に感心するのなら、私からも一つ教えて上げるわね。〈励ましと是認を受けると、人は思いも寄らなかった才能を発揮する〉というのよ。これは女主人にもメードにも、両方に使えるわね。それから、もう一つ進呈しましょう。これの反対で、私にだけ当てはまるのだけれど、〈迫害したり邪魔したりするのは、純真な心を抑え、伸びやかな想像力を鈍らせる〉というのよ。姉が利発で、私のほうは愚かに見えるというのも、これで説明がつくでしょう。でも、いいこと、ベティ、純真さと利口さとはまったく別物だということを知らなくちゃいけないわね。それに、私は自分から利口ぶるつもりはございませんからね」

「まあ、驚きですわ、お嬢様」　愚かな女が言っておりました。「お若いのに、ずいぶんとご存じですのね。本当に学のあるお嬢様だこと。惜しいことですわね　…　」

「憐れみなどは結構よ、ベティ。何を言いたいのかは分かっていますからね。でも、教えてもらえないかしら。私が木曜日にアントニー叔父様のところへ連れて行かれるというのは、決まっていることなの」

あの娘のせいで自制を強いられてきたわけですから、その埋め合わせにも、出来るかぎりの情報をあの娘から引き出したかったのです。

「そうですわね、お嬢様」と、あの娘は（「腰を掛けさせていただきますわ」と言いながら）少し離れたところに腰を下ろし、蓋の開いた嗅ぎ煙草入れを手際良くトントンと叩くと、お上品に親指と人差し指で、残りの三本の指は開き加減に軽く曲げながら、これみよがしの仕草でひとつまみ摘んでみせました。「これは私の考えでございますが、間違いなく木曜日に移っていただくことになると申し上げざるを得ませんわね。しかも、〈ノレス　フォレス〉[二〇]ということのようですよ。私のお嬢様がフランス語でおっしゃるのを耳にいたしましたけれど」

「おまえが言いたいのは、〈否応なしに〉ということじゃないのかしら、ベティ」

「仰せのとおりですわ、お嬢様」

「でもね、ベティ、そんなに急に追い出されたくはないのよ、私としては。あなたはどう思うの。後一週間残るわけには行かないのかしら」

「私などに分かるはずございませんわ、お嬢様」

「あら、ベティ、いろいろと教えてもらえるはずよ。その気になってくれればね。ここでは私、家族のだれにも手紙を出してはいけないと言われているでしょう。だれも近寄ってくれないし、顔を合わせるのも許してもらえないのよ。あと一、二週間残っていたいという私のお願いも、どうしたら分かってもらえるというの」

「それなら、お嬢様、従順なところをお示しになれば、皆さんのほうでも折れてくださると思いますけど。親切をお求めにはなっても、施すおつもりはないのですか」

「厳しいことを言うのね、ベティ。だって、アントニー叔父様のところへ連れて行かれたら、どんな結果になるのか、分かったものじゃないでしょう」

「分かったものじゃないとおっしゃるのですか、お嬢様。どのような結果になるか、だれにだって見当がつきますわ」

「どんなふうにかしら、ベティ」

「どんなふうにですって」と、小生意気な娘は私の言葉を繰り返してみせました。「お嬢様はこれまでどおり、ご自分の足を引っ張るようなことをなさるでしょうし、ご両親のほうでも、あのように立派な親御さんなら当然でしょうが、ご意向に従ってもらおうとなさるということですわ」

「もしもね、ベティ、あなたの口にする〈当然〉などという言葉に慣れていなかったなら、それに、お告げみたいな名文句で自分の務めを告げられるのに慣れていなかったとしたら、私はあなたの無礼な言葉遣いに目を丸くしてしまうところでしょうね」

「お怒りのご様子ですわね、お嬢様。不作法になるほど馴れ馴れしいことは申し上げていないと思うのですが」

「本当にそう思っているというのなら、あなたの生意気なのに腹を立てるよりも、無知を憐れむべきなのでしょうね。もう、独りにしてちょうだい」

「ご自分の務めはそっちのけにしておられるのですから、務めを果たしている者さえ見れば、若いご婦人方が立腹なさるのも、さほど驚くには当たりませんわね」

「ひどいことを言うのね、ベティ。これではっきりしたわ。あなたの考えでは、どんなことをするのがあなたの務めなのかってことがね。あなたにそう教え込んだ人たちに感謝することにするわ」

「お嬢様、皆さんもおっしゃっておられることですけど、お嬢様って結構きついことを

涼しい顔でお口になさいますわね。でも、どこかのご立派な方たちは、他の人たちにしても同じことですが、立腹なさると悪口を吐かれますのに、お嬢様の場合、そういうことはなさらないのですね。それはそうと、ソームズ様にお目通りを許して差し上げれば良かったのにと思いますわ。ラヴレース様をすっかり嫌いになってしまわれるようなお話をいろいろとしてくださったはずですもの」

「そのひどい話についてだけど、あなたは何か具体的なことを聞いているの」

「いいえ、一つも。でも、アントニー叔父様のお屋敷で何もかも教えていただけると思いますわ。きっと、うんざりなさるほどですわ」

「何を聞かされたところで、心は決まっているのよ。命を失うことになっても、ソームズさんは嫌ですからね」

「そういうことでございましたら、お嬢様、神様のお慈悲を願うだけですわ。と申しますのも、皆さんがあんなにも高く買っていらっしゃるソームズ様にお出しになったお手紙のことがありますし、大嫌いなラヴレース様への反感のこともありますから、皆さんもお嬢様にはすっかり愛想を尽かしてしまわれることでしょう」

「皆はどうするつもりかしらね、ベティ。命を奪ったりはしないでしょうね。どうするのかしら」

「お嬢様のお命を奪うなんて、絶対にありませんわ。でも、お嬢様がご自分の務めに従われますまでは、お屋敷の外へは出していただけないでしょうね。それに、ここでと同じように、ペンやインクは一切使わせてもらえないでしょう。あちらでも、良いことにお使いにはならないというのが皆さんのご意見です。ここでも許していただけなくなるはずですが、ただ、お嬢様を間もなく叔父様のところへお送りするおつもりですからね。お嬢様と会うこととか、文通をいたしますのは、どなたも許していただけなくなるでしょう。その先どんな処置が取られるのか、私も存じませんわ。それに、知っていたところで、申し上げるべきではございませんもの。でも、お嬢様が一言おっしゃりさえすれば、すべてを防ぐことだってお出来になるのですよ。そうしてくだされればと思いますわ、お嬢様。何もかも丸く収まるわけですからね。それに、包み隠さず申し上げますと、どうして片方の殿方を別の殿方ほどお気に召さないのか、特に、真面目な方をどうして道楽者ほどにはお気に召さないのか、私には分かりかねるということですわ」

「いいわよ、ベティ」溜め息まじりに私は申しました。「精々生意気を言っていれば良いでしょう。無駄な話よ。それにしても、私は不幸な星の下に生まれたようね。でも、もう一度皆にお願いしてみることにするわ」

こうして、無礼な娘には勿論のこと、自分自身にも嫌気がさしてしまいましたので、控えの間に退き、禁じられてはおりましたが、ジョン伯父様宛に数行認めました。行かなければならないといたしましても、今度の木曜日などという急な話は何とか延期してもらいたいと思ったのです。それに、承諾が得られました場合には、ラヴレースさんと交わしました約束を見合わせるためでもありました。お会いするのは気が進みませんし、どういうわけかは存じませんが、ますます不安が募るのです。宛名書きの下には、「何卒、ご一読を賜りますよう、お願い申し上げます」と書き添えておきました。

私が認めました書面の写しは、次のとおりです。

火曜日　午後

尊敬申し上げますお方

ご辛抱くださいまして、今一度お耳をお貸しいただきとうございます。そして、申し出の向き、何卒お聞き入れくださいますようお願いいたします。他でもございません。この木曜日になどと、急ぎ追い立てられるようなことになりませぬよう願う次第です。

哀れな娘が、何故このように慌ただしく、こうも不名誉な姿で家を追われねばならないのでしょう。何卒、二週間の猶予が得られますよう、お口添えを願います。それだけの時間がありますと、皆さんにお怒りを解いていただけそうに思うのです。母にいたしましても、勘気を被っております娘に会うことを恐れ、扉を閉ざす必要もなくなるはずでございます。お許しもなしに、母とか父とかの前に顔を出すつもりはございません。私の願いは何もかも拒絶されるということではないのでしたら、二週間の猶予など、両親にとりましてはささやかな恩恵にすぎないと思います。でも、私の心の平安のためには、この上なく大きな意味を持つことなのです。従いまして、猶予が得られますよう、何卒お口添えをお願い申し上げます。この身にとりまして、それに優る恩恵はないものと存じます。

悲しみに打ちひしがれてはおりますが、従順なる貴方の姪

CL. ハーロー

これを階下に届けました。伯父はまだ帰らずにおりました。私の問いに対する同封の伯父の返事の中にございますが、私にぶつけました質問がどのような結果を生むのか、それを確かめるために今も居残っております。

お前が叔父のところへ移るのは次の木曜日のことと確定していたのだ。ところが、お前の母が、ソームズ氏のご支持を得て、お前の我が儘を認めてほしいと強く懇願したこともあって、延期の願いは受け入れられることとなった。ただし、一つ条件がある。また、二週間になるか、それよりも短くなるかはお前次第ということになる。お前の母も明言しているが、この条件を拒むようなら、今後お前のための仲立ちは一切止めるとのことだ。また、お前はこのような温情を受けるには値しないのだよ。何しろ、お前が私たちに応じるのではなく、私たちがお前に折れることを当てにしているわけだからな。

その条件とは、一時間ソームズ氏の訪問を受けるということだ。同席者については、お前の兄か姉、あるいは、叔父のうちから好きな者を選ぶと良い。

同意しない場合には、次の木曜日、近頃お前にとっては妙に忌まわしいものとなっているあの家へ、用意のあるなしを問わず、移ってもらうことにする。直接要点のみに答えるのだ。言い抜けはまかりならんぞ。日時を指定してもらおう。ソームズ氏はお前を食べてしまうわけでも、呑み込んでしまうわけでもあるまい。何か一つでも、私たちの言うことに応じてもらえるのかどうか、それを見せてほしいのだ。

ジョン・ハーロー

ほんの少し考えました上で、この条件を受け入れることに決心いたしました。心配に思いますのは、もっぱら次の点です。つまり、ラヴレースさんのスパイがそのことを通報するかもしれないということ、そして、あの方が不安に駆られて、何かすてばちな決断をな

さるかもしれないということです。あの方がきっと当てにしておられるはずの、その面談を中止していただきますよう、ちょうど今（前よりも時間的な余裕が出来ましたので）一筆認めようと考えておりますだけに、なおさら心配になるのです。次のような書面を階下の伯父に届けました。

尊敬申し上げますお方

お申し出の条件がどのような目的に適うことなのか存じませんが、お受けすることにいたします。ご希望の向きすべてにお応え出来ればと、心から思っております。あの人とお会いする際の同席者一名の名を告げよとのことでしたが、その一名は、その場にお姿を見せていただけたらと願っております母ではいけないのでしたら、宜しければ、叔父様にしていただきとうございます。日を指定しなくてはいけないのでしたら（先へ伸ばすことは認めていただけないでしょうから）、次の火曜日にさせていただきます。時刻は午後の四時にさせていただきます。場所は蔦の東屋か、あるいは、これまでは私専用と呼ばせていただいておりました、あの小さな客間にいたします。

それでもやはり、その際にはご同席を賜りますよう、どうか母を説得いただきとうございます。

変わることなく従順な貴方の

CL. ハーロー

回答が今届けられたところです。この面会を忌み嫌っていることからいたしまして、遠い先の日を告げるのが相応しいこととは考えました。でも、応じてくれるとは思わなかったのです。ともかく、一週間の猶予はもらえることになりました。

回答は次のとおりです。

よくぞ承諾してくれた。お前が孝行心を見せてくれるのなら、どんなに些細なものであれ、私たちは心からの評価をするつもりでいるのだよ。ところが、お前のほうでは面会の日を不吉な日と考えたようで、先に延ばしたというわけだな。だが、この点も認めることにしよう。その日まで私たちが腰を低くしているのと同じように、お前もその日以降思いやり溢れる娘になってくれるというのであれば、無為に時間を費やすことにはならないのだからな。一言忠告しておくが、心を閉ざしてはいけないということだ。また、前もって決心したりはしないことだ。ソームズ氏はお前との面会のことを思い、畏まっておられるし、怯えさえ覚えておられるのだが、その怯えというのは、氏との面会を思い巡らす時にお前が胸に抱くことの出来る怯えよりも、さらに大きなものなのだ。氏の心を動かしているのは愛なのだよ。お前も憎しみに動かされるようなことがあってはならんぞ。弟のアントニーが同席するだろうが、お前が一族の友人を丁重にもてなし、面目を施してくれることを願ってのことだ。氏を一族の友として扱うよう心掛けるのだぞ。お前の母も、その気があればだが、同席して構わないことになったのだ。しかし、望みどおりの色好い言葉が前もってお前から得られるのでなければ、千ポンドもらっても御免蒙りたいと言っているのだ。ところで、言っておきたいことがある。ペンとインクを手にする時は、慎重であってほしいということだ。慎み深い若い娘は、軽々しくどこかの男に文を送るべきではない

と私は思うのだよ。別の男のものとなることが予定されている時なのだからな。
これを皮切りとして、さらに大きな点での応諾が得られるものと期待している。そうなれば、家族の和も取り戻されることになるだろうが、それこそは、私が心から願っていることなのだ。

お前の愛する伯父
ジョン・ハーロー

私たちの願いの向きに沿ったものでないかぎり、再び筆を執る必要はない。

この男性が「私がこの人との面会に対して抱くことの出来る怯えよりもさらに大きな怯えを、私との面会に対して覚えている」というのですからね。どうしてそのようなことが有り得ましょう。その半分でも怯えを感じているとしたら、私と会おうとはなさらないはずです。あの人の心を動かしているものが愛だなんて … 確かにそうです。でも、自己愛なのです。愛情と呼ばれるに値するものは、自分が満足することよりも、愛する者が満ち足りることを目指すものです。このような尺度で計りますなら、この男性は何という不敬を働いていることになるのでしょう。

「前もって決心したりはしないことだ」とのことですが、そのご忠告も遅きに失したというところです。

でも、「ペンを手にするに当たっては、慎重で」なければいけないというのです。皆が念頭にしております意味では、自分たちから引き起こしたことでもありますし、前のと同様に、これも私の手には負えない話ではないかと思います。

それにいたしましても、「別の男のものとなることが予定されている時に、どこかの男に文を送る」とは、何というひどい言い方なのでしょうね。

この願いが聞き入れられます前に交わしましたラヴレースさんとの約束のことを悔やんでおりましたので、このように猶予を与えられたこともあり、約束の取り消しに躊躇なく取り掛かったことは申すまでもございません。そこで、次のような手紙を書きました。「不都合なことが起き、予定どおりお会いするわけには行かなくなった。人目に付く危険を冒すわけであり、また、見つかった場合には恐ろしい結果を招きかねないとすれば、目的のいかんに関わらず、このような形でお会いするのは妥当ではない。朝夕の散歩の折、他のだれよりも姿を見掛けることの多い、ある召使の存在に私は気づいていた。家族の秘密をあの方に漏らすような人間は、機会があれば、仕える義務のある者たちのために、私とかあの方とかを裏切ることも考えられる。私としては、召使に弱みを掴まれるような不正行為は日頃から行っていないし、また、ご自分では必要なことだとお考えなのだろうが、私に言わせていただけるならば罪深いことでもあり、どのような目的のためであっても正当化することは出来ないという、そんな手を使わねばならないような方策に従っておられるのを残念に思う。身内の者たちとの間で事態は重大な段階を迎えており、お会いしたところで何の役にも立たないと思う。特に、この文通の方法がまだ気づかれておらず、思いの丈は筆になさることも出来るのであるから、なおさらそのように考える。このような折に当たって、どうするのが適切で相応しいことなのか、その判断の自由を私に認めてもらいたい。とりわけ、ソームズ氏を選ぶくらいなら、むしろ死のほうを選ぶ覚悟でいるというこ

とは、断言しても構わないのだから」とです。

火曜日　夜

ラヴレースさん宛の手紙を隠してきたところです。私を取り巻いております事態は険悪ですが、面談をお断りいたしましたので、以前よりも気持ちははるかに楽になっております。でも、あの方は少し機嫌を悪くなさることでしょうね。ただ、私が気持ちを変える余地は残してあったのです。それに、あの方にも容易に察していただけるはずですが、外にいたのでは判断しかねるような理由が家の中にはあるわけですし、私が仄めかしておきました理由だけでも、黙って従う気を起こしていただきますのに十分なほど根拠のあるものだったわけですから、この際おとなしく同意していただけないようでは、妙な話だと思うのです。それも、快く従ってくださってこそ、あのお手紙が本心から書かれたものだという証になるのではないでしょうか。と申しますのも、おっしゃるとおりに、そして、しばらく前から主張しておられるように、本当にこれまでの過ちのことを気にしておられるのでしたら、当然のこととして、激しいご気性も幾分かは改めておられるはずです。突然に襲ってくる激情が大きな災いの元となることが多いわけですから、改心への第一歩は、考えますに、突然の激情を鎮めること、そして、失望に耐える術を学ぶことにあると思うのです。癇癪を抑え切れずにいるというのでしたら、そんな人の場合、大きな誘惑と相俟って、悪い習慣のせいでますます強さを増しております感情に対し、果たしてどれほどの自制心を期待出来るものなのか、心許ない話ではないでしょうか。

お願いがございます。あの方によればニールという名なのですが、その寒村にございます、あの方の逗留しておられる旅籠ではどんな変装をしておられるのか、だれか信用の出来る人に調べさせていただきたいのです。私が考えておりますのと同じ場所だといたしますと、地名が付くほどの集落ではなかったと思いますし、旅籠もなかったはずなのです。

あのように暇なし私どもの屋敷の近くにいらっしゃるためにも、そこにはよく顔を出しておられるはずですから、あの方の行状について、また、周りの人たちがあの方をどう見ているのか、少し知らせていただけると嬉しいのです。これだけの日数の間には、改心の名を汚す振舞いとか、改心の望みを抱かせる振舞いとか、そのいずれかを見せておられるに違いないのです。お願いいたします。我が儘とは存じますが、どうかお調べいただきたいのです。お調べいただく理由もいろいろございますが、調査くださった上でも、なお私の理由がお分かりにならないということでしたら、その点は後日お知らせいたします。

手紙　十九

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

水曜日　午前九時

朝の散歩から今戻ったところですが、ラヴレースさんから、昨夜置いてきた手紙への返事がもう届いておりました。ペンとインク、それに、紙も持ち歩いておられたに違いありません。と申しますのも、林の中で認められたのですが、そのご様子は、片膝をつき、もう一方の膝の上で、といった具合です。でも、お読みになればお分かりいただけるでしょ

うが、相手への敬いの気持ちからその姿勢を取られたわけではございません。
私たちは小さな頃から、こういった男の人たちを近づけないように教えられておりますが、それも尤もなことと思います。正直で屈託のない心の持ち主というものは、不義理なことをしたくないと思っております場合には、簡単に言いくるめられ、当初考えておりましたよりも親切を施してしまうもののようです。図に乗った厚かましい相手の期待どおりに、自分自身を縛りつけてしまうのです。軽蔑を感じていない相手に否と返事をいたしますのは、気立ての好い若い人間にとりましては、とても難しいことなのです。
私たちも経験を積むにつれまして、また、ちょっとした愚行に苦い思いをしたりいたしますと、冷淡で心が狭くなることもあるわけですが、それも当然のことだと思います。そうでもしなければ、とても世間と対等にはやって行けないのです。
御免なさい。真面目くさったことを申し上げてしまいました。あの人のせいで、すっかり苛立っているのです。優しさは見せ掛けだったようです。獰猛さ、そして、身内の者たちを相手に私も慣れっこになっておりますような気性、それがあの人の本性なのです。どのようなことがありましても、あの人のことを許すわけには行かない気持ちになっております。期待を持たせたとはいえ、条件を付けてあったのですし、撤回出来ることになっていた話なのですから、そのことをしつこくおっしゃる理由は決してないと思うのです。あの人のせいでこんなに辛い思いをしておりますのに、無礼な振舞いを辛抱するのが当然でもあるかのような扱いを受けるなんて　…
ともかく、あの人のお手紙をご覧いただきたいと思いますので、同封いたします。

クラリッサ・ハーロー様

あゝ、何ということか　…
今や、この身はどうなるというのか。いかにしてこの失望を忍ぶというのか。新たな理由が生じたというわけでもない。片膝を地につき、もう一方の膝を台に筆を執っているのだ。かつてなくしとどに降りた露を踏み分けての夜歩きに、両の足は感覚も失せ、鬘とシャツからは、白く覆っていた霜が融け、しずくを落としている。夜は明けたばかりで太陽も昇りきらず、露を払うにはいたらない。太陽などもう昇らないでほしい。闇に閉ざされた心を癒し、慰めてくれるのでなければ　…　貴女が引き起こした喜びの分だけ（約束を与えてくれた、とこしえに愛らしき人よ）、それだけこの胸の苦悩は深まるのだ。
あゝ、愛しき人よ。だが、貴女の言い訳そのものが、言い訳にもならない言い訳であることを告白しているのではないのだろうか。何を書いているのか、自分でも分からなくなってしまう。あの召使が目に付く(ア)とは…　天の神にかけて誓おう。あの召使が貴女の前に姿を見せたことはない。その勇気もなく、近づけなかったのだ。これほど胸をときめかせて期待していた事柄を奪い取られてしまうのなら、周到な用心など糞くらえだ。
そして、「お身内の方々と貴女との間で事態は重大な段階を迎えている」とおっしゃるのか。それこそは、私があの約束の面談を期待する理由ではないのか。だからこそ希望しているのではないのか。

（ア）八十七頁を参照のこと。

私には「思いの丈を筆にする」ことも出来るとおっしゃるのか。あり得ない話だ。この胸の想い、そして、募る不安の百分の一すら筆に出来ずにいるというのに　…　あゝ、定めなく移り気なるは女よ。それにしても、クラリッサ・ハーロー嬢ともあろうお人が　…

どうかお許し願います。何を書いているのか、自分でも分からないのです。ただ、お約束の件には固執せざるを得ませんし、そうするつもりです。でなければ、反古にされるもっと立派な理由を見つけていただくか、お示しくださったものよりはさらに強力な論拠が貴女に呈示されましたことを、納得の行くようにご説明いただかねばなりますまい。約束というものは、一度交わされたからには（熟慮の上でなされた場合）、約束を受けた者だけが解消出来るものなのです。きわめて明白な緊急の必要が生じ、約束を与えた者に履行すべき余力がない場合は別でしょうが　…

かつて貴女が与えてくださった初めての約束です。おそらく、生死にも関わることになるでしょう。私への悪意がもとで、貴女に対して残酷な方法が用いられようとしているだけに、胸も潰れる思いになるのです。

「ソームズを選ぶくらいなら（こんな相手と競い合うなど、忌々しいかぎりです）、むしろ死のほうを選ぶ」とのこと　…　あゝ、愛しい人よ、これもただの言葉に過ぎないではありませんか。それに、どなたのお言葉かといえば、優しく、敬慕の念を誘って止まぬお方　…　とはいえ、こうお呼びせずにはいられないのだろうが、約束を破るお方　…　の言葉なのだ。しかも、これほど簡単に約束を反古になさる姿に接したばかりなのです。いかに誓いを立てられようと（貴女の務めと思われるものが問題にされ、迫害は激しさを増し、私への敵意が強く表明されているのです）、どうして信じることなど出来ましょう。

この身を狂乱から救ってくださるお気持ちがおありなら、あるいは、せめて狂気に満ちた成り行きを防ぎたいとお考えなら、我が愛しの君よ、なおも望みをつなぐことが出来るよう、改めてお約束いただきたい。運命の岐路に立たされているのは私なのです。

お許しください、最愛の君よ、お許しいただきたい。苦悩に溺れた文面となっていることは承知しております。明け初めた陽射しの中で、心にのしかかる失望の思いを味わいながら筆を進めているのです。

書き記したものを読み返えしてみる気にはならないのです。このまま置いて行かねばなりません。この失望が最大の失望への序曲に過ぎないのではないかという不安に気も狂わんばかりの思いでおりますが、そのことをお示しするよすがにはなりましょう。また、ここには他に紙の持ち合わせもなく、この暗澹たる場所で（気持ちが暗いと、周囲の事物すべてにも陰鬱さが漂うのです）、例えその気がありましても、書き直すわけには行かないのです。それゆえ、これを貴女のご好意に委ねることにいたします。激しい文面は同情を促すというより、むしろ不快の念を誘うとおっしゃるのであれば、この燃える思いを誤解なさっていることになりましょう。そして、この身を何人もの悪党どもの生贄になさるおつもりではないかと案じたくもなるのです［何卒、ご容赦のほどをお願いいたします。念頭にありますのは、ソームズと兄上のことだけです］。だが、いつもどおりの寛容の心を発揮してくださり、我が無礼を許し、今一度日を定めてくださるのであれば、貴女が信仰を表明しておられるあの神、真理と約束を守る神たるあの神が、その二点に対して御身を、また、この身を神の御許へ、そして希望へと立ち返らせてくださることに対し、御身を保護

し、祝福されんことを祈念いたします。

変わらぬ敬慕の念を抱きつつも、絶望の淵に臨んでおります

ラヴレース

林内の蔦の洞にて、
朝まだき頃

私が出そうとしております返事は以下のとおりです。

水曜日　朝

勝手気儘なお咎めようには驚くばかりです。矢のような催促に負け、こちらの都合や気持ちに逆らって、こっそりお会いすることを口にしてしまいましたのに、その私が、考えを変えるほうが賢明と思ったからといって、このように詰め寄られ、厳しい批判を受けて良いものでしょうか。女性が非難の的にされねばならないのでしょうか。貴方がおっしゃる取決めをいたしました時にも、自由を一つ留保してあったのです。他の人たちにせっかちな性分をお見せになっておられることは、いろいろ聞き及んでおりますが、この新たな例に接しましたことも、私にとりましては幸運なことかもしれません。他の人たちが自分の考えに従って振る舞う時になさるように、私の場合にも、道理の命じるところを守ったりいたしますと、滅多にご容赦いただけないことを表しているのですからね。このように乱暴なことをなさるのは、二つの動機からに違いありません。一つは、私が御しやすいということ。もう一つは、貴方ご自身の厚かましさでしょう。一つ目の点を見破ったというお気持ちから、二つ目のことをたっぷりお見せいただいたわけですから、私といたしましても、脅威を覚えるあまり、次のように望み、また、願わずにいられなくなるのです。今日のお手紙が、私からお受けになった、そして、私のために重ねられた、貴方のご苦労すべてに終止符を打つことになれば、ということでございます。

貴方の謙虚なるしもべ

Cl. ハーロー

どなたに対してであれ、強気な書き方や話し方をいたします時には、貴女のご賛同を期待して構わないものと信じております。実際、元気を奮い起こすべき理由が私にはたっぷりとあるのです。何しろ、対処しなければならない相手と申しますのが、私に接します際には、適切だとか穏当だとかいったこと、あるいは、正しいか間違っているかといったことではなく、気性からいたしまして、私は耐え忍ぶはずだと、そのように自分たちが考える事柄によって身を律する人たちなのです。つい先頃まで、私は自分の振舞いについてお褒めに与っておりましたが、でも、それはいつも、お返しにお礼をいたしますような機会は決して与えてくれない人たちからのものだったのです。中には、私たちが仲良くやって行きますには、片方の側での辛抱が絶対に不可欠とでも考えているような振舞い方をする者もおりましたし、そういう者たちは、今回の件でも、そのような恩義を施すよりも、恩義に与ることのほうに意を用いているのです。立腹いたしますのは元々私の気性には合わず、それだけに、怒りが鎮まるのも早いのだといったことを貴女は仄めかしておられましたが、身内の者たちに関しましては、確かにそうかもしれません。でも、ラヴレースさん

に対しましては、決してそのようなことはないはずだと申し上げておきます。

三月二十九日　水曜日　正午

私たちは自分に可能だという事柄につきまして、いつもいつも保証出来るわけではございません。でも、上に触れました、ラヴレースさんに関する決心につきましては、間違いなく守り通せますことを確信いただきますために、次の点を保証いたします。怒りに満ちた文面の手紙でしたし、認めましてから三時間は経っているのですが、後悔などはしておりません。それに、まだ持ち去られていないのを知っておりますが、穏やかな調子に書き直すつもりもないということです。でも、これまでの私は、怒りにまかせて何かいたしますと、半時間後にはきっと後悔していたのです。また、そんなにも経たないうちに、自分は正しかったのか、それとも、間違っていたのかと、自分に問いかけてみるのが常のことだったのです。

火曜日までの猶予が得られましたので、ここで少し周囲の情勢に目を配るとでも申しましょうか、私はどうしなければいけないのか、私には何が出来るのか、考えてみようと思います。また、ラヴレースさんの傲慢な態度を考えますと、自分の立場をしっかり弁えた行動をしなければと思っております。とは申しましても、ソームズさんへの嫌悪の情を克服出来るなどと考えているわけではございません。それは絶対に無理な話です。ただ、私が完全にラヴレースさんと手を切りまして、その確かな証拠を身内の者たちに見せましたなら、皆のほうでも再び私を好意的に迎え入れ、もう一方の人とのことを徐々に念頭から遠ざけてくれる、ということにならないともかぎりませんし、少なくとも、従兄弟のモーデンが帰国いたしますまでは無事に切り抜けられるかもしれません。従兄弟には一筆認めようと考えております。ラヴレースさんのお言葉ですと、身内の者たちが自分たちの立場を正当化するために、あの人に手紙を出したのは間違いないとのことですから、なおさらその必要を感じているのです。

でも、いくら勇気を奮い立たせましても、今度の火曜日のことが気に掛かります。絶対に信念は曲げずにおこうと思うのですが、そうすることがどんな結果を招くのか、心配でなりません。自分たちが心に決めたことを私に呑ませるためでしたら、皆はどんな手でも試してみるつもりなのだと、私は聞かされております。私といたしましても、皆の無理強いを避けるために出来ますことは、何でもする覚悟でおります。親子の間ですのに、本当に恐ろしい争いになってしまいました。お互い、結果がどうなりましても、相手には言い逃れの余地を与えまいとしているのです。

私には何が出来るのでしょうか。是非ともご助言をいただきとうございます。どこかで何かが奇妙に狂っているのです。これまではこの上なく優しかった両親が、子供の目には無慈悲に見えてしまいますし、ここ数週間前までは非の打ちどころもないほど孝行者と思われておりました娘も、両親が判断いたしますところでは、親に盾突く子供と映ってしまうのです。あゝ、野心家で気性の激しい兄ときたら　…　親と娘の両方に、どんな責任を取ってくれるというのでしょうか。

是非とも思い出していただきたいのですが、最後のお手紙の日付は土曜日になっておりました。今日は水曜日です。私のほうで隠しましたものは、その後一通も持ち出されておりません。せめて、貴女のご助言にも事欠くようなことにはなりませぬようお願いいたし

ます。はなはだ困難な状況なのです。でも、今なおご好意をお寄せいただけるものと確信しておりますし、また、この状況ゆえにご好意が遠のきますことはないものと信じております。さようなら、愛しいお友達。

Cl. ハーロー

手紙　二十

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

三月三十日　木曜日朝　夜明け頃

無沙汰をいたしましたのは、思わぬ出来事のためで、怠慢のせいではございません。日曜日の夜、以前手紙の中で触れたことのある人ですが、母の親戚に当たりますラーキンさんから使いがまいりまして、是非とも母に会いたいというのです。

この哀れな女性は日頃から死を恐れておりまして、遺言を作成いたしますと、間違いなく死を招くことになると思い込みますような、意気地のない人間の一人なのです。

この避け難い仕事を急かされますたびに、遺言を認めたりすると、その後長く生き延びることはないだろうと、いつも言っておりまして、まるで自説を証明する義務があると考えているかにも思われるのです。長いこと床に就いたままですし、もう萎え果ててしまっているようなところもございますが、それでも、遺言の作成を説得されますまでは、自分は具合が良いのだと思い込んでいるのです。そして、その話が出ますと、途端に、自分の予言のことを思い出すのでしょうか（とりわけ、天然痘の場合にはよくある例ですが、不安な気持ちが懸念しておりましたことを助長してしまうものですから）、容体が悪くなってしまうのです。一度などは、具合が良くなりたいとの思いから、遺言を燃やしてしまうようなことを考えついたほどなのです。

医者に見放されてしまったのだけれど、母の顔を見るまでは死ぬに死ねない思いでいると、この婦人が母のところへ伝言を送ってよこしたのです。私は、回復の見込みを願って上げる気持ちがあるのであれば、それゆえにこそ、訪ねたりしてはいけないと母に申しました。でも、母はどうしても行くと言うのです。悪いことには、私にもついて来いと言い張ります。それも、出発の一時間前のことなのです。朝早くに起き出しますまで、母は一言も教えてくれなかったのですが、夜のうちに戻るつもりだったからです。もっと話し合う時間があったなら、行ったりはしなかったはずです。でも、実際には、母からの指示に合わせ、いわば即座に従う用意を整える必然性といったものがあったのです。このような深刻な折に、まことに的はずれな指示ですから、その点を言ってみたのですが、一向に効果はございません。こんなに反対ばかりする娘も見たことがない。私がいつも賢いものだから、お陰で自分はいつも馬鹿者扱いをされてしまう。だけど、適当であろうとなかろうと、今度だけはどうあっても従ってもらう、などと言っておりました。

母のこの突然の気紛れに説明をつける方法といたしましては、一つだけございます。それはこういうことです。つまり、ヒックマンさんからのエスコートの申し出を受け入れたく思っていたということです。そして、[はっきりと確信出来れば宜しいのですが]お礼に私を同行させる魂胆だったのだと、心の底からそう思うのです。それも、承知しておりま

すかぎりでは、私を好ましくない人物から遠ざけておくためのことなのです。

信じていただけるでしょうか。絶対に間違いのないことですが、母はご贔屓のヒックマンさんのために気を揉んでいるのです。母が前に同じ所へ行っております留守の間に、まったくの偶然でしたが、貴女のラヴレースさんが訪ねてこられ、長時間過ごされたことがあったからなのです。貴女までやきもちを妬かないようにお願いしますね。でも、正直なところ、母がヒックマンさんに似合わないほどの賛辞を連ねて私を悩ませます時には、私のほうでもお返しに、ヒックマンさんにはとても無理と思われますような、ラヴレースさんに備わっております素養や魅力の賛美に取り掛かることも時折あるのです。実際、少しばかり人を焦らしますのが大好きですからね、私は。お母さんの娘ですものと、危うくそんなふうに言ってしまうところでしたわ。

ご存じのとおり、私も生意気ですが、負けず劣らず母も短気なものですから、このような場合、大抵は喧嘩になってしまうとお聞きになっても、驚かれたりはなさらないでしょうね。結局は母が逃げ出してしまうのです。私のほうが先に母を置き去りにいたしますのは、親不孝な話でしょうからね。また、そうして、私といたしましては、貴女との文通に従事する機会が得られるというわけです。

話が脇道に逸れましたついでにお話しいたしますが、母は文通のことをあまり快くは思っていないのです。二つの理由からだと思いますが、一つは、私たちの間で交わされましたものすべてを母に見せようとしないからで、もう一つは、〈子の務め〉と言われておりますことに関しまして、貴女の心を硬化させているのは私だと考えているからなのです。それに、一度ならず触れたことですが、我が家の事情に照らしましても、両親は間違うはずがありませんし、子供は反抗してはならず、正しいはずもない、というのが母の立場なのです。そのために、時々は、私も一時間ばかり母の目を盗み、何をしているのか気づかれないようにしなければならないこともあるのです。

ここまで書き記しましたことからもお察しいただけるでしょうが、母の権威を乱用しておりますようなこの言い付けに従いますのは、本当に気が進まなかったのです。でも、これで孝行心の試金石になる、などと言われるものですから、こちらが正しいことははっきり分かっていたのですが、譲らないわけには行かなかったという次第です。

こういうことがありますたびにお叱りをいただいておりますが、前回のお手紙では、これまでにないほどの厳しいお言葉でした。これまでよりももっとお叱りに値することをしているのだから、それも至極当然の話だと、貴女はおっしゃることでしょうね。懲らしめていただけますこと、心から感謝いたしております。改めたいと思います。それでも、お仕置の鞭が、当然の報いなのかどうかはともかくといたしまして、骨身に染みましたことは申し上げさせていただきましょう。ただ、この件につきましては、別の機会にお話しすることにいたします。

例の老婦人の屋敷に着きましたのは、月曜日のお昼過ぎになってしまいました。あの馬鹿げたおめかし屋さんに「だれのことを言っているのか、お分かりですね」二時間も待たされてしまったのです。それも、私にしてみますと、出掛けたくもない旅行だというのにです。馬飾りにくだらない安ぴかものをもう少し付け加えるためだけのことなのです。馬具屋を急がせて飾り付けたのですが、大切なハウ夫人と美人のお嬢様のエスコートをするのだから、見映えを良くしたいというのです。私のほうでは、二重の意味で謹厳さを伴う

事態であり（危篤の婦人を訪ねるということに加え、ご自分もしかつめ顔をしていらっしゃるためです）、人の目に葬儀屋と映るのが怖いのでしょうが、それを避けようとしてなさることがまた極端だから、もしかするとペテン師と思われてしまうかもしれない、と言ってやりました。

あの人は狼狽しておりました。かなり応えた様子でしたが、私の言葉が尤もなことをまるで心の中では認めているみたいなのです。でなければ、こういう扱いには慣れっこなのですから、もっと鷹揚に受け止めたはずです。泣き出すかとも思いました。これまでにも気づいていたことなのですが、婚約前の段階では、おそろしく従順な人と映るのです。多分、後になりますとそういうところが有難く感じられるのでしょうが、正直な話、今の時点では、少々軽蔑しないではいられません。私たちは総じて、威勢の良い男の人が一番のお気に入りですからね。もっとも、その威勢の良さを操りまして、好きな時に好きな相手にぶつけさせることが出来ればの話ですけれどね。

哀れな男は母のほうに目を向けました。母はすっかり腹を立て（その時の私の態度、そして、旅行への反対など、すべてが煽り立てたことですが）、途中までは話もしてくれないほどでした。そして、口を開いて出てまいりましたのは、「お前なんか連れて来るんじゃなかったわ。譲るということを知らないんだから。そんなに嫌なのに来てもらったのは、私のせいでしょう。ヒックマンさんが悪いわけじゃないでしょう。チャリオットのこちら側に目を向ける気はないのかしらね」という言葉でした。

こうしてあの人は、いつものことですが、私からひどい目に遭わされた分だけ、母から懇ろにしてもらっておりました。何しろ、あの人がとり澄ました顔で私を窺いながらチャリオットのこちら側に来たり、あちら側に回ったりいたしますと、母は頭を半分突き出しまして、「お具合はいかがかしら。ねえ、どんなお具合かしら、ヒックマンさん」などと声を掛けるのです。その姿ときたら、まるであの人と結婚してやっと二週間目といった様子でしたわ。私はその間ずっと、あの堅物のいない方に顔を向け、せいぜい葦毛の痩せ馬に乗って離れたところを進んで行くロビンの姿くらいだといたしましても、何か気を紛らせてくれますもののほうに目を向けておりました。

求婚期間こそが、私たちにとりましては最良の日々だと言われております。親切にいたしますと、慇懃さを失くしてしまいます。よそよそしくいたしますと、言い寄ってくるものです。肝腎なのは、よそよそしくすることなのです。男というものは、笑顔を見せたりいたしますとどれほど馴々しくなってしまうか、顔をしかめてみせますとどれほど恐れ畏まるものか、それを目の当たりにしながら、男を遠ざけようとしない人などいるでしょうか。束の間しか続かないこの力を楽しもうとしない人などいるのでしょうか。

このようなことをお話ししたからといって、ほんの少しでも叱ったりはなさらないでくださいね。性分なのでしょう。自分でも抑えられないのです。と申しますより、好きなものですから、抑える気になどなれないのです。ですから、この件につきましては、真面目なお話は抜きにしていただきたいのです。お願いいたします。自分のことを非の打ちどころのない性格だなどと言うつもりはございません。あの人のほうで我慢していただくことにします。また、貴女にも、どのようなことをご心配いただく必要があるというのでしょう。あの人が受けておられる苦難のすべてにつきましては、母がたっぷりとお返しをしているのです。仮にご自分のことを不幸な身の上とお考えだとしても、決して別の境遇にな

ったりしてはいけないのです。

それに、少しばかりしかめ面をされましても、当然だとお思いになりませんか。あの人のおめかしのせいで、私たちは食事を抜く羽目になってしまったのですもの。こんな短い旅のことですから、母のほうでは、老婦人の状態が許せばの話ですが、小休止などをしてその夜のうちに戻るチャンスを失いたくはなかったのです。道中ずっと、母が哀れな娘に不機嫌な顔を向ける原因となりました点には、触れるまでもございますまい。

降車の際にもう一発お見舞いいたしましたが、これはほんの軽いものになってしまいました。でも、仕草と言い態度と言い、その軽さを補うものでした（そうなるよう意図したとおりにです）。母の手が優しくあの人の手に委ねられましたが、母はまるで花嫁みたいにはにかんでいるのです。そして、もう一度「お具合はいかがかしら」と繰り返しておりました。お節介な掌を私に差し出す時のあの人は、締まりのない筋肉をすべて動かし、気は回さねばならないし、併せて、へつらいも欠かせないということで、そわそわと身体全体を震わせておりました。私が子供の頃には、顔をちゃんと上げるよう、いつも母が言っておりましたが、この命令をちょうど思い出しまして、言い付けどおりにいたしました。あんなに頭を高く上げましたのは、これまでにもなかったことです。軽蔑したように目を背け、押し退けるように軽く手を振りながら、「あら、手助けなんて必要ないわ。そこにいては邪魔なのよ」と言ってやったのです。

あの人は足に車輪でも付けているように、さっと飛び退きましたが、ひどく屈辱を覚えている顔付きなのです。でなければ、私といたしましては、この穏やかすぎるやり口に続けて、私にだってあの人と同じだけ手と足がございますからねと、告げるつもりでもいたのです。ただ、このようなことをいたしますと、後のものにつきましては、厚かましく想像を働かせたりしてほしくないと思っております点ですのに、こちらから情報を一つ提供するのと同じことになっていたでしょうね。

ヾ　ヾ

可哀相な婦人は、私たちにはそう思われたのですが、息を引き取る寸前でした。もっと早くに到着しておりましても、予定どおりその夜のうちに退去するわけには行かなかったことでしょう。お分かりですね。私だってあの人のことは出来るかぎり許して上げたいのです。それでも、はっきりと申し上げておきますが、あの人に対しましては「条件付きの好意」すら感じていないのです。母のほうは、可哀相な縁者が今息を引き取るのではないかと、ほとんど徹夜の状態でした。私も午前二時までお付き合いいたしました。

これまで大人の人の臨終の場に立ち会ったことはございませんでしたので、大変なショックを受けました。健康に恵まれている者にとりましても、死は本当に恐ろしいものですね。苦しんでおられる姿に憐れみを覚えますし、私たちもいずれは同じ苦しみを味わわねばならないのですから、自分自身にも憐れみを感じることになります。ですから、二重に心を打たれてしまうわけですね。

婦人は火曜日の午前十一時まで持ちこたえておりました。婦人が以前母に語ったところでは、母を遺言執行人にしてあり、母と私に指輪と喪服を遺贈したということなので、その日は遺言のことに一日中掛りきりでした［ついでながら、私の従姉妹のジェニー・フィ

ネットが大層な遺産を授かることになりました」。そんなこともありまして、私たちが帰宅の途につきましたのは、水曜日の朝早くのことだったのです。

確かに、正午までには帰宅しておりました（馬具を飾るために手間取るようなこともありませんでしたからね）。ただ、馬に乗っていたロビンをそのまま送り出したのですが（同じ水曜日の正午までの分を一包みにして持ち帰ってまいりました）、ひどく疲れておりましたし、老婦人の辛い死に際には、正直なところショックも受けておりました。母も（この世を嫌うような理由は持ち合わせていないのですが）同じ原因で体調を損ねてしまいましたので、その夜ロビンが帰る頃までに間に合いますよう、手紙を書き始めることは出来なかったのです。

でも、また元気を取り戻しましたし、母もぐっすりと休んでおりますので、夜明けとともに起き出しまして、この手紙に取り掛かった次第です。不安なお気持ちから一刻も早く抜け出していただきますためにも、朝のお散歩に間に合いますよう、急いでお届けしようと思っております。

ヾ　ヾ

これに続いて、間もなくもう一通お届けするつもりでおります。ラヴレースが旅籠でどのような振舞いをしているのか、人を雇ってすぐに調べてもらおうと思うのです。あれだけ動き回っている男なのですから、きっと跡を辿ることは出来るはずです。

でも、もしかいたしますと、あの男のこととかあの男が何をしているかなど、今はもう関心がなくなっておられるかもしれませんね。このお求めがありましたのは、あの男が貴女のお気持ちに致命的な傷を負わせる前のことでしたからね。それでも、やはり調べてもらうことにします。その結果をお知りになれば、今感じておられる許し難いお気持ちを固めるのに役立つということも大いに有り得る話でしょうからね。可哀相にあの男が［貴女の代わりに同情して上げましょうか］、ほとんど取り柄もなしに高望みをしているわけですが、この世のいかなる男性にとりましても至福となりますものを奪い取られるようなことになれば、大きな危険を冒し、ひどい風邪に見舞われ、熱の出ることも厭わず、この上ない不面目を被り、険悪な空模様にも臆せず頑張ったといたしましても、すべては無駄骨に終わることになるのです。これでも、あの男のために貴女の優しいお気持ちが（たとえお気持ちだけだといたしましても）動かされることはないのでしょうか。お可哀相なラヴレースさん　…

胸の高鳴りを誘おうというのではございませんし、多少とも動悸を促そうというのでもありません。稲妻のように閃き、そして、これまで女性のだれ一人として模範を示すことが出来なかったような思慮深さにより、負けず劣らず速やかに鎮められてしまいます、そんな感情の一瞬の閃きを促そうとしているわけでもありません。決してそのようなつもりはないのですが、でも、悪友の度を越したいたずらというよりは、ご自分でご自分の気持ちをお試しになるためにも、料金係が偽金臭いギニー金貨をその音で調べますように、もしかしてという気持ちからですが、もう一度繰り返すことで、貴女を打診させていただきますわね。お可哀相なラヴレースさん　…

さあ、これでどうでしょうか。小生意気な娘がヒックマンさんを困らせました時に、母が用いますあの台詞ですが、「お具合はいかがかしら」。

手紙　二十一
ヒックマン氏からハウ夫人へ

三月二十九日　水曜日

奥様へ

まことに残念至極には存じますが、小生にとりまして、ご令嬢からご好意をいただきますのは不可能だということ、繰り返し筆にせざるを得ないものと考えております。お嬢様に対しましては、愛情とたゆまぬ心尽くしとを重ねておりますが、求婚いたしますことを奥様にお認めいただいている人間、また、世のすべての女性にもましてお嬢様に愛情を捧げております人間に相応しい扱いはしていただけず、むしろ蔑みをもって迎えられておりますのが［無礼な言葉を用います点、何卒、ご容赦願います］、小生自身は勿論のこと、だれの目にも、そして、召使たちの目にさえ明らかなことを遺憾に思う次第です。

まことに天晴なクラリッサ・ハーロー嬢に対するソームズ氏の場合と同様、求婚に固執し、ハウ嬢に不快の念を起こさせるようなことが仮にも小生にございましたなら、この燃える想いの功罪を問われたとしても致し方のないこととは存じます。しかし、求婚を取り下げました場合、その犠牲はあまりにも大きすぎるのです。

とはいえ、だれよりも敬愛申し上げる、ご立派なことこの上ないご婦人に対しまして失礼とは存じますが、月曜日の夜、ラーキン夫人のお宅で、悲しさに胸も張り裂けんばかりの思いで申し上げました点を、今一度繰り返させていただきます。ハウ嬢から自発的なご厚情を賜りますのは小生には無理なのだということ、また、今後とも有り得ない話なのだということは、先日のような扱いをお示しいただくまでもなく、十分に承知いたしております。恋人として軽蔑を感じる男に対し、女性が夫としての敬意を払ってくれるなどということに、果たしてどれほどの期待が持てるでしょうか。そのような男が親切を施しますたびに、男の風上にも置けない腑甲斐無さと受け止められることでしょうし、いよいよ見下げ果てた人間と思われてしまうのです。申し上げたいことが胸に溢れてまいります。言葉が過ぎる点はご容赦願いますが、小生に対するハウ嬢のお振舞いは、これまで授かってこられた教育にも、あるいは、優れた分別にとりましても、手柄となるものではないと申し上げざるを得ないのです。

小生を重んじてくださるお気持ちがお嬢様にないことは、あの時以来、火を見るよりも明らかとなりましたし、恋情というものは自分の意思を越えた感情だという、ご立派なクラリッサ・ハーロー嬢のご意見を尤も至極と考えておりますゆえ、当然のことながら深くお嬢様を愛しておられる奥様に向かい、大切なお嬢様のことを不愉快に思われるよう仕向けたり、かたじけなくもご厚意をお寄せくださっている奥様に心配をお掛けしたりいたしますのは、いかにも心の狭い所業と考える次第です。また、ご親切なるお引立てによりまして、最後には望みが叶えられますことを確信するといたしましても、心のすべてを捧げております女性に不幸を願うなど、どうして出来ましょう。と申しますのも、二人の幸せは相互のものでなければならず、さもなくば、その結果として、生涯に亘る不幸が両者に降り懸かることになるからであります。

ご令嬢の末永いご多幸を心よりお祈り申し上げます。お幸せな結婚生活を送られますよう願っておりますが、愛情をもってお応えすることの出来る男性と結ばれますかぎり、そ

れも当然のことと存じます。ただ、その果報者、幸せこの上ない男がだれであれ、小生ほどの燃える思い、小生ほどの無垢の愛をもってお嬢様をお慕いすることは有り得ないのだとだけ申し添えさせていただきます。

一縷の望みもないものと考え、取り下げざるを得ない状態ではありますが、厚かましく求婚させていただきました間、奥様のお引立てが小生にとりましては唯一の支えとなっておりましたこと、ここに心からの御礼を申し上げさせていただきます。すべての点で（己の取り柄に頼るのではなく）お引立てにすがってまいりましたが、今となりましては、それも甲斐のないことと思われます。奥様のご厚志とご推挙が十分な力を持ち、乗り越え難く思われます嫌悪の情を克服しておりましたならば、小生がこの世で一番の幸せ者となっていたのだという点を考えます時、この思いは、命あるかぎり小生に喜びをもたらしてくれることでありましょう。

深甚なる敬意を込めまして、親愛なるマダム、

常に恩義に与ります忠順なる

貴女のしもべ

チャールズ・ヒックマン

手紙　二十二

ハウ夫人からチャールズ・ヒックマン氏へ

三月三十日　木曜日

ヒックマンさん、貴方がナンシーにご不満を抱かれ、ご機嫌を損なわれ、不愉快な思いをなさいますのもご尤もなことと申さずにはおられません。でも、まったくのところ、本当に、何と申し上げたら宜しいのでしょう。ですが、こうは申せましょう。貴方様のように善良な若い殿方は女性のことを少しもご存じないということでございます。お教えいたしましょうか。でも、どうして私などが申し上げるべきでしょう。ただ、貴方様に大筋では好い印象を抱いているというのでなければ、とても優しい娘なのですから、ナンシーがあのように不躾な振舞いはしないはずだということは申しておきましょう。あれだけ元気の良い娘ですから、貴方にはお会いしたくないと私に告げるでしょうし、また、どのような御用でお見えになっているのか承知しているのですから、貴方様に何か好意的な気持ちを感じているのでなければ、いつ何時であれ、お会いするのを拒むとはお思いになりませんでしょうか。その点につきましてはもう何十ぺんも、それとなく口頭で触れてまいりましたのに、ここまで書面にて申し述べますことを強いられるなんて、驚きですわ。

でも、ヒックマンさん、貴方がそんなにも冷淡でいらっしゃるのなら　…　あの娘が悪ふざけをするからといって、別れても平気だとお考えなのでしたら　…　そして、私が貴方の後押しをいたしましても　…　宜しいですか、ヒックマンさん、ナンシーは辛抱するに値する娘だということは申し上げておきましょう。あの娘が馬鹿げた真似をするといたしましても、それはどこから来ていることでしょうか。ウィットのせいじゃございませんか。宜しいですか、不便があってこその便利さじゃありませんか。職人さんはだれだって切れ味の良い道具を使いたがるでしょう。でも、鋭い道具のほうが鈍いものよりも危険は

大きいのじゃありませんか。だからといって、指を切るのを嫌がって、鋭い道具を捨てるような職人さんはいるでしょうか。ウィットと鋭い道具とを同じように考えても良いのじゃございませんか。それに、ウィットだって捨てたものじゃありませんわよ。あの娘が生意気な言葉を返してくる時など、叩いてやっても構わないのに、ついつい頬をゆるめてしまうことがよくあるのです。ご存じのとおり、あの娘のことはずいぶんと我慢しておりますが、何故だとお思いですか。あの娘を愛しているからですわ。そんな気持ちから、あの娘に対する貴方の愛情を判断させていただくのはご迷惑なのでしょうか。あの娘のことを大目に見ていただくわけには行かないのでしょうか。私と同じように（違う形の愛だといたしましても）あの娘を愛してはくださらないのでしょうか。愛していてくださらないということでしたら、こちらといたしましてもはっきり　…　でも、そう、愛していらっしゃらないのははっきりしておりますわね。それで、はっきりしたことなのでしょうか、愛していらっしゃらないのは　…　結構でしょう。それなら、貴方のお好きなようにしていただくよりないですわね。

　燃える想いの功罪を問われても致し方ない、と言っておられますね。仮にも、ソームズさん同様　…　とのことですが、何という馬鹿げたことをおっしゃるのでしょう、意地の悪い方ですね、貴方も。クレアリー・ハーローさんがソームズさんをお断りしておられるのと同じように、ナンシーは貴方のことをはっきり拒んだのでしょうか。お望みどおりの愛情をナンシーは示していないかもしれませんが、あの娘には貴方よりも好きな男性がいるとお思いでしょうか。もしそんな人がいれば、宜しいですか、あの娘は皆にそのことを教えてくれているはずですわ。だといたしますと、何と馬鹿げた比較なのでしょうか。

　ただ、愛想が尽きてしまわれたということはあるでしょうね。どなたか他の女性に目を奪われたとか、あの陽気で恥知らずなラヴレースさんとお相手を交換したいと思っていらっしゃるのかもしれませんわね。また、その場合、ナンシーは恋人の交換を残念に思わないかもしれません。何しろ、貴方のおっしゃるとおり、本当に天晴れなクラリッサ・ハーロー嬢ですもの。そして、衆に秀でたクラリッサ・ハーロー嬢ですからね。呆れましたわね。でも、ご用心なさることですわ、ヒックマンさん。どんなに天晴でどんなに衆に秀でていらっしゃるといたしましても、他の女の人をご自分の恋人よりもお褒めになるのはまずいのじゃございませんかしら。そんなこと、礼儀を弁えた男性なら、だれだっていたしませんわよ。それに、この点にも心していただきたいのですけれど、娘にであれ私にであれ、貴方が本気になって怒っていらっしゃるなどと思わせるような真似は慎んでもらいたいのです。ただご機嫌を悪くなさっただけのこととは思いますが、はっきりと口にしておられるような愛情をあの娘に感じていてくださるのでしたら、私といたしましては、そんなにも簡単にあの娘と別れることがお出来になるなんて、どんなことがありましても、ナンシーには気づかれたくないのです。固く決心しておられるのではないのでしたら、貴方のこのお手紙に盛られております事柄につきましては、言うならば、ご自分のお胸に囁き掛けることすらお控えくださるよう、心していただきたいということですわ。

　貴方に対するあの娘の振舞いは、受けてきた教育とか優れた分別にとりまして、手柄になるものではないとの仰せでしたね。まことにもって厳しいお言葉ですが、私も同じふうに考えております。でも、貴方じゃなくてあの娘のほうじゃございませんか、恥ずかしい思いをいたしますのは。あの娘のそんなところを皆さんが責めておられるのです。どうし

て皆さんはあの娘を咎めるのでしょう。何故だと思われますか。もっと丁重に扱ってもらう資格が貴方にはあると、皆さんはそうお考えだからです。そして、これは貴方にとっては名誉なお話じゃございませんか。どなただって貴方には同情し、あの娘を責めているのです。お言葉によりますと、あの娘のはしゃぎ回るところを目にしているという召使たちの件ですが、召使たちはそのことで貴方に無礼な態度でも取るのでしょうか。そのような時、貴方のことを気遣った様子は見せてくれないのでしょうか。その後は、それまでの倍も恭しい態度で仕事に精を出してくれないのでしょうか。そうしてくれるあの者たちの姿を目の当たりにいたしまして、嬉しくなった経験が私にはあるのです。

でも、結婚なさった後、ことによると腑甲斐無いと思われたりしますのを心配していらっしゃるのですね。確かに、男らしさ十分とは思われないでしょうね。今は亡き主人のハウが気にしておりましたのもこの点でした。そんな主人気取りの気持ちから生じます懸念のおかげで、私たちも何度諍いを起こしたことでしょうか、まったくの話。必要以上にでしたわ、確かに。あってはいけないほどでした。あの人がじっと我慢することを知っていてくれましたなら …… だって、そのようにいたしますのが、一番に分別があるような顔をなさる人の義務ですからね。ところで、貴方ならどちらに分別があったほうが良いとお思いでしょう。女性のほうでしょうか。それとも、男性のほうでしょうかね。

さあ、いかがでしょう。おっしゃるとおりに、本当にナンシーを愛していらっしゃるのでしたら、他にどんな問題があるのでしょう。もう、貴方にお任せいたしますわ。宜しかったら、明日朝食の時にお越しくださいませんか。でも、胸の詰まる思いとか不愉快そうなお顔とかは、最後まで押し通されるのでなければ、慎んでいただきたいですわね。癪に触りました時には、私も夫に向かって何度もそんなふうにいたしましたが、あの娘にはそのようにいたしましても、何の効果もないのですからね。まして、貴方ではとても無理な話ですわ。その点をお知らせしておきますのが、参考にしていただきますためにも適切なことと考えた次第です。貴方の友人といたしましてね。

貴方の友
アナベラ・ハウ

手紙　二十三
ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

木曜日　朝

最後のお手紙につきまして、少し述べさせていただきます。でも、すっかり遅れをとっておりますので、手短に済まさなければいけませんわね。

まずは貴女のお小言についてですが、私といたしましては、その点は次のように片付けさせていただきます。お上手な叱り方にはほとほと感心しておりますし、そのことでます貴女が好きになっているわけですから、そんな私が、折に触れ、時々はお咎めに値するようなことをいたしますのを避けたりするとでもお思いでしょうか。それに、貴女にはお咎めになる資格が十分におありなのですからね。だって、貴女には欠点などあるはずもございませんでしょう。お身内の方々が、ご自分たちにはたくさんおありですから、お顔

を立てますためにも、ご親切に少しばかり貴女のあら捜しをなさるのでなければの話ですけれどね。でも、皆さん、そのことでは、貴女にも私にも同じようにご親切ですわ。と申しますのも、思い切って断言して構わないでしょうが、お手紙に目を通しました上で、貴女のことを正しいとおっしゃる方でしたらどなたにしても、私のを読みました後で、完全に間違っているということで、私を責めたりはなさらないはずだからです。

お父様のお屋敷からは出ないとのご決心ですが、お残りになってもソームズの奥さんにならずに済むのでしたら、それが当を得たことでしょう。

ソームズの手紙へのお返事のことですが、私も同じような返事を書いただろうと思います。あれで良かったのだ、とおっしゃることで、一度に、私と貴女ご自身への褒め言葉にしてはいただけないものでしょうか。

伯父様やその他の方たちにお出しになったお手紙では、おっしゃるべきことはすべておっしゃっておられます。結果がどのようなことになりましょうとも、まったく貴女に責任はございません。地所を放棄しようとおっしゃるなんて … このお申し出で、皆さんが動揺されたのはお分かりでしょう。検討するのに時間を掛けておられましたわね。皆さんが時間を掛けておられる間、私の胸は疼いておりました。貴女のお言葉どおりになさるのではと心配だったのです。皆さんも、面子とかラヴレースを恐れるお気持ちとかがなかったなら、多分そうなさっていたはずですわ。皆さんにとりましてはご立派すぎるということでしょうね、貴女という方は。繰り返しになりますけれど、このような申し出は私ならしなかったでしょう。お願いですから、皆さんを誘惑するようなことは二度となさらないでくださいね。

遠慮なく申し上げますが、お申し出を受けた後の皆さんの貴女に対する仕打ちと、同じ時に受け取られた手紙の中で見せております、ラヴレースの別な接し方(ア)とを考え合わせますと、私ならあの男のものになって、後戻りの出来ないところまで行っていただろうと思うのです。口惜しいったらありゃしないと、思わず叫んでしまうところでしたわ。あの男が自分の品性や品行にそれなりの注意を払ってくれていたら、クラリッサさんみたいな人がそのような行動に走ったとしても、これだけ虐待されていらっしゃるのですから、十分に容認してもらえただろうと思うからです。

あの男と約束を交わされましたこと、別に驚いてはおりません。この件のある部分につきましては、おってそのうち、さらに触れることにもなりましょう。

たっての願いです。切に切にお願いをいたします、大好きなお友達。あのベティ・バーンズを私のところへ寄越してくださいますよう、工夫をしていただきたいのです。コヴェントリー条例(イ)の適用範囲は女性にも拡大されるものなのか、ご存じありませんか。私のところの一番深い馬洗い用の池にあの娘を投げ込み、その中を引き摺り回してから帰してやりますわ。最低限それくらいの目には遭わせてやりたいのです。あの娘を私のところへ連れてくることがお出来になるのでしたら、釈放された日を記念日として、あの娘が生涯お祝いをすることになりますのは請け合いですわ。

本当に厚かましいものではありますが、ラヴレースの図々しい返事にも驚きはいたしません(イ)。然るべく貴女のことを愛しているのでしたら、これだけ大きな失望を味わったの

(ア) 七十七頁から七十九頁にかけてを参照のこと。(イ) 八十九頁から九十一頁にかけてを参照のこと。

ですから、あの男も無念な思いをしているに違いありません。その無念さを表に出さなかったのだとしたら、忌まわしいほどの偽善者だったということになると思います。クリスチャンとしての自制心を期待なさるのは、この種の失望の場合は特にそうですけれど、あんな性分の男には半世紀くらい早すぎるようです。とは申しましても、貴女がお怒りになるのを咎め立てするつもりなどはまったくございません。

貴女とあの男の間で、この一件がどのように決着するのか、知りたくてうずうずしております。つい先日は、貴女たちを隔てておりましたのはわずか数インチの煉瓦の塀だけでしたのに、今お二人の間には大きな山が立ちはだかっているのですね。で、貴女といたしましては、そのままにしておくおつもりでしょうか。多分、そうなのでしょうね。

前の手紙で見せていた気質はあの男本来のものではないように思う、とのお言葉でしたね。以前はそのように考えていらっしゃったのでしょうか。みっともないほどペコペコとへつらっているくせに、機会さえあれば、横柄な態度でズケズケ言い寄ってくるのですからね。このヒックマンさんにいたしましても、その気になれば、貴女のラヴレースと同じくらい厚かましいことをするのは間違いありませんわ。あの人には、尊大で大胆なところがもう一方の男の半分もなく、角を隠すのがもっと上手だというだけのことなのです。でも、権力を手に入れ次第、きっとあの男と同じように勇ましく突き掛かってくること請け合いなのです。

万が一にも一緒になる気にさせられました場合には、ひとつ観察してみようと思っているのです。従順な恋人がどのようにして姿を隠し、どのようにして傲慢な夫がその後釜に座るのかという点をです。要するに、夫婦の関係を回転する車輪になぞらえますと、あの人が上昇し、私はどんどん降下してしまい、挙げ句には、失われて行く自由を求めて、衰えた国家が弱々しくあがくのと同じで、時々思い出したようにしか自分の立場を取ることが出来なくなってしまいます、その様子を眺めてみようと思うのです。

「お人好しというのは、おしなべて感情に支配されやすいものだ」と、ラヴレースさんは言っています。存分に力を揮うことの出来る立場にあります恋人へ向けた言い訳といたしましては、何ともへまな台詞ですわね。「貴女のことは、マダム、大変大事に思っておりますが、お気持ちに添うために、骨折って自分の感情を抑えるつもりはないのです」と言っているのと変わりないでしょう。私といたしましては、このようなお人好しであることを言い訳にした言葉を、ヒックマンさんの口から聞いてみたい気もしますわ。

子供の頃に甘やかしたせいで手に負えなくなり、悪さをするのが癖になっているような人たちを、本当に私たちって、すぐにも大目に見てしまうところがありますね。でも、荒々しい気性をしている人が、恩義に与っていながら、このように手心を加えてもらえるのでしたら、立場が逆転いたしました時には、一体どんなことを期待するのでしょうね。こういった幼い頃の甘やかしを受けていると思われますあるご主人のことを、貴女もご存じですわね。そして、そのことがご本人にも、また、周りのどなたにとりましても、喜ばしい結果をもたらしてはいないことも承知しておられるはずです。

結婚することになっております二人の人間の気性が一致しているというのは、非常に大切なことでしょう。でも、いわば合意の上で、どちらが乗り越えてもいけないという境界を二人の間に決めておくのも必要ですし、お互い、相手にそれを守らせなければいけません。でなければ、おそらく、両方とも相手の領分に入り込むようなことになってしまうで

しょう。私の主張をとても高尚な例、そして、女性的というよりは、男の人が持ち出すのに相応しい例（と考える人もいるでしょうが）を用いて示してみましょう。もしも、我が国の政治体制を構成しております三階級〔二二〕の境界線が明確でなく、その都度権利を主張するようなことになりましたなら、それぞれの階級の特権や優先権はどうなってしまうことでしょう。立法に携わる二つの部門がお互いに侵害しあい、行政権が両方を呑み込んでしまうことでしょう。

でも、思慮分別に富む二人の人間が一緒になる場合には　…　と、貴女はおっしゃるでしょうね。

えゝ、そのとおりだと思いますわ。でもね、思慮分別のある人しか結婚してはいけないとしたら　…　それに、こんな話を持ち出しては驚かれるかもしれませんが、思慮分別に富む人は大抵独身ですわ。そういう人たちって、考え過ぎるものですから、なかなか決心がつかないのです。貴女にしても私にしても、その手の人間だという評判をいただいているのじゃありませんかしら。それに、男の人たちや身内の者たちが放っておいてくれるのでしたら、私たち、結婚しようなどとするでしょうか。

でも、前のお話に戻りましょう。ラヴレースが私に言い寄って来たのでしたら（「条件付き」以上の好意を感じてしまった場合は別でしょうが）、あの男の言う「人の好さ」から来る露な感情が最初に現れました途端に、二度と再び私のところに出入りいたしますのは禁じていたことでしょうね。そして、こんなふうに［あの男相手に口をきく気があればの話ですが］言ったかもしれません。「宜しくって、これよりも百倍以上のことを堪えていただくことになりますわよ。ですから、お帰りになることですね。これまで装っておられたものよりも激しいお気持ちなんて、私には耐えられませんもの」とです。

でも、貴女のような穏やかで優しい気質の方にとりましては、結婚なさった場合、お相手が気性の点でラヴレースに似ていても、あるいは、ヒックマンさんに近くても、同じことですわね。とてもおとなしい考え方をしていらっしゃいますから、穏やかなお相手に向かって、多分、頼んだりなさらずに命令してくださいませとか、祭壇の前で厳かに服従を誓っておりますのに、それをお求めにならないのは夫に相応しくございませんわ、などとおっしゃることでしょう。結婚の誓いのあのくだらない部分を貴女が素直に尊重しておられることは、私も以前から存じておりますが、あれはどこかの特権に飢えた人間が、自分の権利でないことは承知しているものですから、義務にしてやろうと、儀式の一部に紛れ込ませたものなのですわ。

「養育の仕方のことがありますから、私たちは勇敢な人たちの保護を必要とすることになるのです」と、貴女は言っておられますね。正しくそのとおりだと思いますが、何とも雄々しくて慇懃なことですわね。勇敢なお方があらゆる侮辱から私たちを救ってくださるとはいえ、私たちにとりまして一番肝心な点は別だというのですからね。つまり、その人ご自身が加える侮辱は別だというわけです。

あの男の手紙の一通を要約してくださったものを見ますと、ラヴレースは実に巧みに貴女のお気持ちに取り入っております。「寛大な心の持ち主は強制を嫌う」というのですからね。きっとあの男は、私たちがこれまで考えておりましたよりもはるかに腹黒い人間なのでしょう。貴女も暗に触れておられますように、自分の放蕩癖は隠し切れないことを知っているのです。ですから、お耳に届きそうな新たな悪行のことも軽く受け止めてもらえる

よう（面食らわないことをお教えするのと同じですから）、必要なことだけは自分から認めているのです。そうすると、いかに不品行だとはいえ、非常に率直な男で、決して偽善者などではないということになるわけです。偽善者というのは、いやらしい男もいろいろとおりますが、恋人といたしましては、最も女性の憎悪を誘う存在ですし、また、そのような男の褒め言葉のことを、私たちといたしましては、当然のことと考えて言ってくれているのだと信じたいのですが、男の正体が分かってしまいますと、果たして当たっていることかどうか疑う羽目に追いやられてしまうわけですから、ただそれだけの理由からだといたしましても、一番許し難い人物ということになりましょう。

ラヴレースは、このような見せ掛けの率直さによって、その正体に見合った非難を受けるのではなく、称賛を浴びているのです。そして、罪の許しを得た告解人のように、汚点を一つ拭い去り、また別の悪事に取り掛かるというわけです。好意的な目を向けているような人は、あの男の欠点を拡大鏡を使って暴き出したりはいたしませんし、楽観的な考え方をしたがっている女性にいたしましても、公正な目をもってすれば十分咎めに値するようなことすべてを、悪意や偏見のせいにするのは慎もうとするのです。そんな女性は、非難されている事柄があまりにもひどく、疑いようもない場合には認めるでしょうが、それでも、あの男が吹き込んでいる〈将来の可能性〉などといったものを持ち出したがるのです。それを疑問視するということは、自分自身の能力、そして立派さにも疑いの目を向けることですからね。このようにして女性は、わずかな美点を拠り所に、空想上の美点さえも頼りにして、目にあまる悪徳の償いにしようと考えるわけです。

お届けいただいた文面をもとに、お説教臭いことを申し上げておりますが、これには一つ、新たなものですが、理由があるのです。ただ、詳しいことが分かりますまで、説明は控えさせていただきます。もしも、私が抜け目なく勘繰っておりますとおりに事が露見するようですと、あの男はとんでもないワルということになるのです。ですから、お考えいただかねばなりませんのは、あの男よりは、むしろ　…　危うく、ソームズさんと言うところでしたわ、本当に。

それはそうと、ひとつお教えいたしましょうか。あれだけ無礼な振舞いを重ねていながら、あの男が貴女のお気持ちの中に忍び込んでくるのは何故なのかについてです。

お教えいたしますね。つまり、こういうことですわ。あの男のほうでは、自分の人の好さを主張するだけで済むことなのです。この点を認めてもらえますと、感情を露にした傲慢無礼な態度も水に流してもらえることになりますし、そうなれば、まずは貴女を無礼な振舞いに慣れさせ、続いて、頭を下げれば許すお気持ちになる、というふうに仕向けるだけの話です。その結果、こんなふうになぶり者にされているうちに、貴女のお怒りもすっかり腰を折られてしまうのです。そして、無礼な振舞いは段々増えますし、あちらから頭を下げる回数は減ってまいりまして、挙げ句には、無礼さばかりが目に付き、非を認めるなんてことは全然なくなってしまうのです。貴女のほうでも、こんな攻撃的な人間を怒らせるのが恐ろしくなり、最後には、例の「畏まりました」という卑屈な言葉をまことにお上品に、はっきりと口にされるものですから、聞く側にしてみますと、心地好さを感じるほど、といった具合になるのです。そして、やがては、ロシア人風の妻(二三)が飼い馴らされた女主人の後を継ぐことになるのです。もしも、このような成り行きには疑問があるとおっしゃるのでしたら、お母様のお考えをお聞きになっていただきたいと思います。

でも、この件につきましては、今はこれくらいにしておきましょう。貴女の置かれておられる状況はあまりにも差し迫ったものになっておりますから、このような話題をのんびり取り上げているわけにはまいりません。ただ、軽薄な言い方をしていると思われるかもしれませんが、そんな振りをしているだけなのです。これまで何度も申し上げてきておりますように、お悩みの点につきましてはどんなことでも、同じ気持ちになって、心の底から苦しんでいるのです。私に明るい陽射しを感じられましても、それは雨模様の雲の隙間から漏れてくるものに過ぎません。ご覧くだされればお分かりでしょうが、この目にいたしましても、以前のお手紙で触れておられましたように、嬉しげに輝いているように貴女には映るのでしょうが、今にも涙で溢れてしまいそうになっているのです。大喜びでふざけているせいでしょうと、きっと貴女ならお咎めになるような、そんな文面を認めております時でさえも、そのとおりなのです。

でも、お身内の一部の方からは「〈縁続き〉と言うべきでしょうね。こんなふうに、いつもヘマばかりしているのです、私は」前代未聞の惨い仕打ちや理不尽な扱いを受けておられますし、他の人たちも、負けず劣らず訳の分からない頑迷さです。ラヴレースとは目下のところ仲違いですし、当然ながら大きな懸念を抱いておられる、ソームズとの面談も迫っております。これらの状況は貴女の身の上話の中でも大変重要なものですから、私の心をすっかり虜にいたしますのにうってつけというわけです。

ソームズが訪ねてきた時にはどのように振る舞われたら良いのか、助言が欲しいとのお言葉ですが、それはとても出来ない相談です。皆さんがその訪問に大きな期待を掛けておられるのは承知しております。でなければ、予定を先に伸ばすのは認めていただけなかったはずなのです。私のほうで申し上げることといたしましては、ラヴレースがこんなにも貴女のお気持ちを損ねてしまいました今でも、やはりソームズのほうへお気持を傾けるわけに行かないようでしたら、今後ともそれは一切無理でしょうということだけです。面談が終わりました時には、貴女がなさったことのすべて、お話しになったことのすべてが適切で、それ以上に適切なことは有り得ないと、そのように申し上げるべき根拠が得られますのは疑いのないところと考えております。ただ、そう思えません時には、そのことには触れないつもりです。この点はお約束いたしましょう。

一つだけ助言がございます。どうか気を強くお持ちになっていただきたいということです。必要ならば、伯父様に対してもです。貴女がお受けになっている悪辣で常軌を逸した扱いには憤慨なさるべきですし、この件では伯父様もずいぶんと関与しておられるのですから、恥ずかしい思いをさせて上げるのですね。お出来になればの話ですが …

よく考えてみますと、どのような目論見があるにいたしましても、この面談は貴女にとって好都合なことなのかもしれませんね。と申しますのも、貴女とのお話を希望どおりに進めるのは不可能だということを（本当にそのおつもりなら）ソームズが、そして、貴女の縁続きの人たちも悟られた場合、ソームズは手を引くに違いありませんし、縁続きの人たちのほうでも折り合いをつけようとなさるはずだからです。ただ、いろいろと条件が持ち出されることになるでしょうし、それに従うだけでも、たっぷり辛い思いをなさるだろうというのが私の考えなのです。もっとお辛いことを免れましてもね …

以前にいただきましたものにもございましたが、最近の何通かのお手紙の中には、このように申し上げる根拠となります箇所がいくつか目に付くのです。でも、今この話題につ

いて詳しく触れますのは、時宜に適わないことになりましょう。
それはともかく、いずれにいたしましても、残酷なお兄様とお姉様の思いのままに弄ばれておられるお姿は、到底見るに忍びないものでございます。こんなにも様々な試練の中で、貴女はまったく揺らぐことのない姿勢を貫いてこられたというのに、お二人は一体何を期待しておられるのでしょうね。最後のところまで貴女を追い詰め、お父様は勿論、おじ様たちにも、貴女に対する評価を下げていただこうというのでなければ、とても考えられないことですわね。
どのような方法でも結構ですから、皆さんの目に触れては困るとお考えの手紙や書類はすべて、皆さんの手の届かないところへ送り届けていただくよう、是非ともお願いいたします。ご衣裳やリンネル類等々の包みにつきましても、ソームズと面会なさる前に隠しておいていただけたらと思います。面会の後、その機会に恵まれないようなことになりますといけませんからね。昼夜を問わず、ご指示のあり次第、ロビンに取って来させます。
最悪の事態に至りました時には、こっそり私どものところに身をお寄せいただきたいと思いますが、母の許可も得られるのではないかと考えております。
私が大好きな人のお役に立てますよう、寛大なところを見せてくれるのでしたら、母のお気に入りに対しまして愛想良くいたしますこと、そして、親切にさえいたしますことを条件に出すつもりでおります。
この交換条件は、以前から胸に温めていたことなのです。でも、妙な話ですが、貴女のお馬鹿さんの叔父様が、母を皆さんの考え方のほうにすっかり引き込んでしまっているものですから、希望どおりの首尾を収められるかどうか、お約束はいたしかねます。
でも、すっかり望みを捨てるようなことはなさらないでくださいね。女同士の争いになるのでしょうが、構うものですか。〈女の意地〉を少しばかり使わせてもらいまして、頑張ってみようと思うのです。貴女がラヴレースと仲違いしていらっしゃることも、まだ続くようでしたら、私にとっては有利に働くでしょうし、この前の日曜日の夜に受け取られた伯父様からのお手紙へのお返事の中で、貴女が申し出られました事柄も、然るべく強調されますなら、私の申し立てに力を添えてくれるはずです。
ことによりますと、時を得ない軽率な言葉を連ねてしまったのかもしれませんが、生まれつき陽気に過ぎるところがあるとは申せ、心の底から同情申し上げております私なのです。すべてをお許しいただけるものと存じます。

アナ・ハウ

手紙　二十四
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

三月三十一日　金曜日
お便りが絶えておりましたことについて、大層親切にご説明くださいました。不幸な人間というのは、いつでも疑ってかかるものです。避け難い事故のせいでありましても、自分は軽んじられたとか、無視されたのだとか、すぐに考えてしまうのです。変わることなく好意的なご意見をいただきたいと願っております人たちの場合にはなおさらです。

友人の注ぐ陽射しだけを浴びる人間のお一人になるかもしれないという、そのような考えを私のアナ・ハウに当てはめますのは、確かに、今後とも厳に慎まねばなりません。とは申しながら、貴女の友情は私にとりましてかけがえのないものですから、それに値するものが自分にはあるのか、疑わずにはいられなくなる面がございますし、また、もう一方では、その友情を保持したいものと、切に願わずにはいられなくなるのです。

遠慮なく叱ってほしいと、まことにもって寛大なお言葉ですが、真に受けるのがかえって怖くなってしまいます。と申しますのも、自分の判断を疑うことはありましても、敬愛いたしております貴女のご判断に疑念を向けるようなことは、とても出来ない話だからです。過ちを指摘されました時の率直なお認めようからいたしましても、故意に間違いを犯すような方とは思われないのです。ですから、このようなことをお尋ねいたしますのは怖い気もするのですが、でも、貴女のことをあんなにも愛していらっしゃる、そして、あれほど立派で誠実な男性ですのに、貴女のお振舞いは残酷に過ぎるとはお思いにならないのでしょうか。お考えが狭すぎると申し上げても良いかもしれません。

貴女のことですから構いませんが、でなければ、私といたしましても、真の友人から加えられました痛手に対して感謝の念を湧かせてくれます、あの本当の度量の大きさで遅れをとったりしては恥とばかりに、精々頑張るところでしょう。確かに、短気なことをしてしまったと思います。言い訳に出来ることがあるといたしますと、それが弁解になればの話ですが、私の置かれております不安定な状況くらいなものでしょう。このようなことをお願いいたしますのは怖い気もするのですが、重ねてお願いいたします。あの素敵な遊び心が湧いてまいりました時にはいつでも、お気持ちのままに筆を走らせていただきたいのです。優しく微笑みながら、それでいて痛いところは突いてくださるのですもの。これほど巧みな手際で施されますならば、探り針を恐れる病人もいなくなるのではないでしょうか。このようなお願いをいたしますのは怖い気もすると申し上げましたが、お願いしたためにかえってお茶目なところをなくされては、とも思うからです。相手を少しは縮み上がらせるのでなければ、揶揄の効き目が鈍ってしまうこともございましょう。黙認されますような風刺、あるいは、望まれて口にする風刺というものは、揶揄しながら矯正を目指すような、思いやりに満ちた風刺家が用います場合には、あまりにも簡単に褒め言葉へと変わってしまう傾向がございます。貴女のものは教えることが目的であって、胸に刺さりはいたしますが、同時に喜びももたらしてくれるのです。貴女がお使いになるような繊細な針先ですと、傷口が化膿するとか、炎症を起こすといったこともございません。人柄のせいで毒気を帯びるということはございませんし、相手を晒し者にしたり、嘲笑ったり、苛立ちを誘うことを狙っているわけでもございません。一番もてはやされております現代作家たちでさえ、このような技には少しも通じていないのですが、何故だとお思いでしょうか。風刺というものは善良さに根差し、正しい心の指図を受けたものでなければいけないからなのです。最近の作家たちが風刺の対象としておりますのは、大抵の場合、欠点ではなくて人間のほうですから、仮にそれが的を射ているといたしましても、どうして役に立つことになるでしょう。何かの目的に適うようなことがあるでしょうか。痛手を与えるたびに（使う武器というのが、ランセット（二四）ではなく、大段平ですから）公衆の嘲りを招き、傷を癒すどころか、悪化させてしまいます。ですから、友達だからといって大目に見るのは止してほしいのです。友達だからこそ、容赦しないでいただきたいのです。いかに

研ぎ澄まされているとはいえ、貴女の刃先を感じることもあるでしょう。痛みを覚えるかもしれません。そうでなければ、お目当てが外れてしまうことになりますわね。でも、最初の痛みが過ぎますと(これまでにも一度ならずお話しいたしましたが)、一層貴女のことが好きになるのです。そして、改めていただいた心をすっかり貴女に捧げることになるですが、それでこそ、受け取っていただく価値が増すというものでしょう。

ラヴレースさんにはどのようにお話ししたら良いのか、あの方のことをどう考えたら良いのか、お教えくださいましたし、あの方が、申し開きをするために私を訪ねてこられる見込みについてもお話しいただきましたが、当を得たお言葉と思います。実際に訪ねてこられましたなら、その場でのやり取りはすべて報告させていただくつもりです。折よくご助言をいただけるものでしたら、それに従うことも出来ましょうし、間に合わない場合でも、私の態度に応じてお叱りやご同意のお言葉をいただきたいと思うからです。ただ、一つだけ斟酌していただきたいことがございます。私のことは、どのような進路を認められるといたしましても、あるいは、強要されるといたしましても、自分の思うままに進むことを許されない人間と見なしていただかねばならないという点です。激情(それも、理不尽と思われるほど厳しいものです)のままに吹き荒れる強風に弄ばれ、辿り着きたいものと願っております〈独身生活〉という名の憧れの港を目にしながら、兄と姉の嫉妬が引き起こします泡立つ高波や、権威の侵害とばかりに猛り狂う大風のために、行く手を阻まれているのです。また、一方にはラヴレースという大岩が立ちはだかり、片方にはソームズの浅瀬が待ち構えておりますから、岩にぶつかって砕けてしまうのでは、あるいは、浅瀬に乗り上げはしまいかと、ワナワナ震えている有り様なのです。

でも、さすがに腕の良い水先案内人ですわね。最悪の事態に備えて、素敵な希望を抱かせてくださいました。お母様のご厚意を取り付けていただけるかどうか、ご注意がありましたように、当てにし過ぎてはいけないと思います。子供がおとなしく従うことをお母様が重視しておられますのはよく存じておりますからね。それでも、望みも持っていようと思います。お母様が折よく保護の手を差し延べてくだされば、おそらく、さらに無分別な行動に走りますのを救っていただくことになるからです。そして、その場合には、すべてに亘ってお母様のご指示に従うつもりでおります。お母様のお指図、また、お母様と貴女のご助言なしには、何事も行わないつもりです。どなたにも会いません。手紙も出しません。お母様と貴女のご指示がないかぎり、だれにも居場所は知らせないつもりです。どのような田舎家をあてがわれましても、時々、貴女の女中の姿を装って夕方の散歩を許していただく以外には、一歩たりとも外へは出ないことにいたします。そして、このように匿っていただきますのは、従兄弟のモーデンが帰ってくるまでの間で宜しいわけですし、それも、そんなに先の話ではないように思うのです。

衣裳の一部を隠しておいては、とのご助言でしたが、これには従うわけにはまいらないようです。ただ、書類や布地のほうは少し隠しておこうと思います。

実は、しばらく前からなのですが、ベティは私の衣裳部屋にとても興味を持っておりまして、あの娘のいるところで何か取り出したりいたしますと、いつも関心を示すのです。

このことに気がつきましたので、一度、庭の散歩に出掛けます際に、鍵束を錠に差し込んだままにしておいたのです。そして、不意に戻ってみますと、鍵を手にしたまま慌ててドアを閉めるような素振りをするのです。

私が急に戻ったものですから、あの娘は面食らっておりました。私のほうではそのことに触れずにおきましたが、あの娘が退室いたしました後で調べてみますと、衣裳の並び方がいつもとは違っていたのです。

これではっきりいたしましたが、あの娘が興味を見せておりましたのは、指図を受けたためだったということです。それで、皆の疑いが晴れませんと、散歩の権利を縮小されてしまう心配もございますから、このことがありましてからは、いつも鍵束を錠に差し込んでおくだけではなく（他にもいろいろと手を打ちました）、衣裳を一着ずつ運び出しますのに、時々あの娘を使うことにもしております。衣裳が皺になるのを防ぐためとか、銀糸を使った花柄の服の光沢を損ねないためというのが口実で、また、時には、他にすることもほとんどございませんので、身体を動かすためだと断ったりしております。それに、私の考えでは、あの娘はこの仕事を（身分の高い者も低い者も、女性は綺麗な衣裳を見るのが大好きということもありますので）、まるで任されている役割の一つに合致するとでもいわんばかりに、いつも喜んでいるようにも見えたのです。

このようなことがありますし、よく働いてくれるスパイを皆が信用していることもあるのでしょう。また、私は召使の一人一人から愛されているとは申せ、心の内を明かすことの出来る相手は家中に一人としておりませんし、また、そのような者を作ろうとしたためしもないということを知っているからなのでしょう。お陰で、散歩は自由にさせてもらっているのだろうと思うのです。それに、おそらく（家を出るような素振りを私が見せないということで）、最後には私が説得を受け入れ、皆のやり方に従うはずと、ますます意を強めているのでしょう。でなければ、このような不面目な扱いから逃れるため、私が何か思い切った行動に出ても不思議はないほどの挑発をしているのだと、皆のほうでもそのように考えるはずだからです。しかも、兄と姉は「私の判断違いでしたら、謝らねばなりませんが」、そんなところへ私を追いやりますのを何とも思っていないらしいのです。

ですから、思い切った行動に踏み切るのを避けられません時には（そのようなことのないよう今も願っておりますが）、着の身着のままで出掛けざるを得ないものと考えております。家の仕事が入り込んでこないかぎりは、朝食後すぐに昼の着替えをするのが習慣になっておりますので、そのような行動を取りましても（そうすることを強いられるといたしまして）、あまり疑われずに済むことでしょう。それに、ご親切なお言葉どおり隠そうと思っております布地のことも、見当たらなくとも気づかれることはないはずです。

囚われの身となりまして（こう呼ぶのがぴったりだと思います）、訪ねてくださる人もいなければ、出掛けることもございませんが、この習慣は今でも守っているのです。いつも服装を整えておき、人目を憚る姿を不意のお客様に晒さないよう用心いたしますのが、私たち女性の務めというものですからね。

それに、逆境にある人間は（逆境は優れた資質すべてを試す場なのですから）立派な習慣を守るよう努力すべきでしょう。陽射しが戻って来ました時に、試練を受けたために損なうものがあったりしてはいけないからです。

さらに申しますと、希望を温め続けるというのは、不幸な人の場合、意思の堅固さを証明していることにならないでしょうか。より良き日々に希望をつなぐということ自体、半ばそのような日々を授かるに値するということです。と申しますのも、私たちは希望があるからこそ夢を描くのですが、その夢に相応しい人間になろうと決心を固めるのでなけれ

ば、そのような希望を抱く正当な理由は見つからないからです。それに、自分自身を見捨てるような人間に力を貸そうという人など、どこにいるでしょう。

このような考えを思い浮かべ、心の支えにしようと努力いたしますことが、私にも時々はあるのです。

私の真面目腐った態度をおからかいにはなりましても（疑いもなく、不幸に苛まれております私の気持ちを明るくしようとのお考えからのことでしょう）、軽蔑していらっしゃるのではないことも分かっております。同時に楽しみと教訓を与えてくれるような巧みな手際を用い、真面目で重要な教えを示してくださる貴女の才能は、どなたにも備わっているというわけではございませんからね。

若者というのは、親切な振舞いや遜った態度に心を引かれているのでなければ、それこそ、いろいろな企みを思いついてみせるものです。ここしばらく、身内の者たちの私に対する接し方と申しますと、私が皆の召使に対していつも用いております扱い方にも劣るものなのです。

家の管理を任されておりました時にいつも気づいていたのですが、寛大さの点でも方策の点からいたしましても、使用人たちには信頼を寄せるのが正しいやり方です。正直さは期待していないとか、当てにしていないという顔をいたしますのは、機会があり次第、不正直なことをおやりなさいと、いわば命じているようなものなのです。

ソームズさんは瑣末なことに気を揉む人ですから（低俗ではありますが、無益とは思われませんこの話題につきまして、少し詳しく述べさせていただきます）、私が鍵番になったのでは、あまりお役に立てなかっただろうと思います。私が一家の女主人でしたら、疑わしく思われます者を雇っておくような苦労はしたくございませんし、そんな苦労を使用人たちに負わせるつもりもございません。身分の低い者が卑しくない心を持ち合わせておりますことも少なくはないのです。むしろ、正直な下層民のほうが（数の上からいたしましても）正直な上流階級の人よりも多いと思うこともあるのです。身分の低い者たちにとりましては、正直さこそが一番の誇りなのです。高い身分の人たちの場合、権力や威厳や悦楽を求める気持ちが道を誤らせます。それに野心が加わって極度の奢りを誘い、称賛に値する自尊心のほうを抑え込んでしまうことがあまりにも多いのです。

身分の低い者たちの中にも、信頼を裏切るようなことを潔く思わない人はたくさんいることでしょう。でも、そういう連中の最も無学な者たちにさえ、自分の正直さを疑われますと、すぐに怒りだす傾向が見られるのです。私もある召使をやむなく窘めたことが一度ならずございますが、正直なのが自分の取り柄だと考えているのだが、どこのご主人様であれ奥様であれ、自分に疑いを掛けてただで済むと思われては困る、などとその娘が言っておりますのを耳にしたのです。

身内の者たちの私に対する態度と、皆の召使に接します時の私の態度とを比べておりますうちに、思わぬところへ話が進んでしまいましたね。でも、いつも私たちは、低俗であれ高尚であれ、物の見方を拡げてくれるとか、仕事の仕方の改善につながりますような話題につきましては、心おきなく詳細に述べることにしておりましたでしょう。想像上のことであれ実際的なことであれ、また、そのような詳しいお話が現在の状況に関係するにせよ、あるいはまた、私たちに起こりそうな将来の状況に関係するにせよです。

主に話題にしようとしておりました点は、私の女看守の目をくらますためですし、庭と

か養鶏場へしばしば足を運んでいることにつきまして、あの娘の上役の警戒心を取り除くためでもあるのですが、私のほうでも、策を弄したり言い抜けをしたりいたしますのに大いに知恵を絞っているという点でございます。疑いの目を向けられております人間というのは、作り話に窮することなど決してないのだと思います。時々は外気に当たりたいなどと言い出しまして、部屋を出た途端に具合が良くなるのです。また、気が塞ぐという場合もございますが、チャボやキジ、あるいは、滝が気晴らしになるのです。家禽たちは気持ちを元気づけてくれますその賑やかさで、滝のほうはさらに厳かに、そのこだまを生み出す激しい流れと虚ろな響きによって、私の気持ちを紛らしてくれるのです。時には、一人きりになりますことが、何にもまして私の願いとなることもございます。畏敬の念を誘う夜の静寂、星屑をちりばめた天空、そして、日の出や日没 … どれほど瞑想を促してくれることでしょう。別に目的もなく、お手紙が届いていそうもない時などには、わざとベティについてきてもらうこともありますし、あの娘に他の用事がありまして、同伴は無理なのを承知の上で、頼んでみることもあるのです。

これらは私の用います手管の中でも大掛かりなもので、それらを元に、数え切れないほどの小さな工夫を凝らしているのです。ただ、そのすべては、真実らしい外見を備えているだけではございません。本当の事実でもあるのです。もっとも、私の主たる動機というわけではございません。意欲というものは本当に人を機敏にするものですね。嫌悪の情はどれほど障害をもたらすことでしょう。意欲があります時には、どのような困難に出会いましても、実に易々と進んでまいります。嫌悪の情がありますと、まことにノロノロとしたものです。まるで両足に鉛を結び付けられたみたいに、小さな障害の一つ一つが私たちの動きを止めてしまうのです。

金曜日　午前十一時

布地の包みは出来上がっております。用意をしております間ずっと、胸の痛む思いでしたが、このような用心が欠かせないことを考えますと、今も心は痛むのです。

無事に届くはずとは思いますが、包みがお手元に届きましたら、どうぞお開けになってください。その中に密封した包みが二つ見つかると思います、一つには、貴女のところから戻りました後に認めたもので、まだご覧になっていない手紙の束が入っております。もう一つのほうには、最後にご一緒いたしました後、私たち二人の間で交わされました手紙と、手紙の写しのすべてが入っております。それと、他の文書も少しございますが、私の能力を大幅に超えるような話題について書き記したものですから、大目に見ていただきますことを貴女の場合ほどに確信出来ません人には、どなたにも見てもらいたくないと思っているものなのです。年齢とともに判断力が成熟いたしましたら、見直してみようかとも考えております。

聖職についておられたお父様から伺ったこととして、ノートン夫人がよく話してくださいましたが、青年期というのは一生のうちでも想像や空想の力が働く時期ですから、作家のような人も、円熟した年齢を迎え、経験を重ねることによって、情熱の炎を掻き立てるよりも、むしろその輝きを導き出せるようになるまで、自分の作品を寝かせておくようにするならば、この二つのものの力で、思慮分別のある人にも不快の念を覚えさせないようなものが何か出来上がるかもしれない、とのことでした。

別にしてあります三つ目の包みの中には、ラヴレースさんが我が家への出入りを禁じられました後で書き送ってこられたお手紙の全部と、私が出しました返事の写しがございます。この包みをお開けください。そして、よくご覧になった上で、私の振舞いについて忌憚のないご意見をいただきたいと思います。

ところで、あの方から何の音沙汰もございません。ただの一行もないのです。私のを置いてきましたのは水曜日のことです。その日の夜にも置いたままになっておりました。持ち去られたのが昨日の何時頃のことなのか　…　実は、夜になりますまで、そのことは念頭になかったのです。そして、行ってみますと、無くなっていたのです。今日の十時までのところでは、お返事はありません。きっと、私に負けないくらいご機嫌を損ねていらっしゃるのでしょう。私としては大歓迎ですけれどね。

もしかいたしますと卑劣な人で、あの人の自由に任せたりいたしますと、私のために味わった苦労のお返しをしてくるような真似をするかもしれません。でも、そんな勝手はもうさせないつもりです。

私の気持ちに取り入ろうとするあの人がどのような種類の人間なのか、私にも分かりました。それに、うんざりしているのはお互い様ではないのかとも考えております。こんな言い方をして構わなければですが、苛立ちながらも一安心といったところです。苛立ちを覚えますのは、ソームズさんとの面会のこと、そして、その結果のことが気に掛かるからです。そうでなければ、心から安心出来ることでしょうね。何故かと申しますと、このような仕打ちを受けても仕方のないようなことはしていないからです。それに、ラヴレースさんとのことは終わったつもりでおりますが、同じように、ソームズさんとの件がご破算になりますと、例の二人が私の不利になるよう、両親やおじたちに働き掛けましても、その効果は長続きしないだろうと思うのです。

布地の下にハンカチがございますが、その片隅に包んであります五ギニーは、お宅の正直な使用人に骨折りをしてもらっているお礼のつもりです。ご笑納いただきたいと思いますが、お咎めのないよう願います。ご存じでしょうが、こういったささやかな気遣いの場合でも、思いどおりに出来ませんと、私は気持ちが落ち着かないのです。

手元にございますわずかなお金すべてと、装身具類の一部を包みに入れようかとも思いましたが、持ち運びに困るものではありませんし、置き忘れることもないと思います。それに、万一皆が（私を疑って）宝石のどれかを見たいなどと言い出しました時に差し出すことが出来ないようですと、皆にとりましては罪深く思われます考えを私が温めております、その証拠と変わりないことになってしまうでしょうからね。

金曜日　午後一時　薪小屋にて

未だにあの方からは何の便りもございません。うまい具合に包みは隠してまいりましたし、昨夜のお手紙も手にいたしました。ロバートさんが包みを忘れ、これだけを持ち帰りました場合には、急いで取りに来るよう言っていただきたいと思います。でも、見落とすわけはないと思います。それに、自分が持ち去るよう、あそこに置かれたのだと考えるはずです。お手紙の内容からいたしまして、私がすぐにまた筆を執りますのは間違いのないところと、そのようにお考えくださって構いません。

クラリッサ・ハーロー

手紙　二十五

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

三月三十日　木曜日　夜

自分では旅籠と言っているということですが、うらぶれた居酒屋での、あの忌まわしい恥知らずの行状と下劣さに関する私の調査結果をお知らせいたしますので、心してお聞きください。

この極悪非道の大鷹にとりましては、ミソサザイや雀も見下げ果てた餌食ではないのです。あのたゆまぬ努力や寝ずの番、そして、夜毎に危険を冒したり厳しい天候の中をさまよい歩いたりしておりますのも、すべて貴女のためなのだなどとお考えになってはなりません。その手の苦労ことごとくを和らげる機会があの男にはあるのです。私の聞いておりますところでは、気立ての好い可愛い娘が一人 … あの男があちらに行くまでは無垢な娘だったとのことですが、今では … （あゝ、可哀相に）どうなっていることやら、分かったものではございません。

やっと十七を過ぎたばかりとのことですのに … 聞いておりますところでは、あの男の放蕩仲間の一人が（気紛れな色事師です）お酒を付き合っているとのことですし、時には、身分を隠した別の放蕩者も一人か二人やってくるとのことです。悲しい思いが胸に迫るなんてことはないのです、あの連中には。ですから、あの男がしわがれ声になったからといって、心配なさることはありません。あの恥知らずがローズバッドなどと呼んでいる可愛いベッツィには、あの男の言うことはすべて聞き取ることが出来るのですからね。

あの男はこの娘のことがひどくお気に入りなのです。まだ今のところは生娘だということで、父親も祖母もそのように信じております。若い恋人がいるのですが、あの男が持参金を用意して一緒にさせるのだそうです。その若い恋人も気の毒な話ですわね。無邪気な娘のほうも、何て可哀相なのでしょう。

ヒックマンさんがロンドンで耳になさった話では、あの男は、女連れでよく劇やオペラに顔を出しているというのですが、そのたびに違う女の人なのだそうです。貴女には何と申し上げたら良いのでしょうね。でも、これがすべて本当だといたしましても、あの男のことなんて、貴女には関係ございませんわね。ただ、これまでお二人がどんなに仲が宜しかったといたしましても、この哀れな娘についてこんなことをお聞きになれば、あの男もお終いということですわね。

何という恥知らずなのでしょう。これほどの貞女を追い求め、目前にしているというのに、慎む気持ちにはなれないのでしょうか。でも、貴女にお任せいたしますわ。あの男に望みをお掛けになっても無駄です。あんな男よりは愚か者のほうがまだマシでしょう。ただ、可哀相な娘をあの男の魔手から救い出すことが出来たらと願っております。一つ計画を立ててみたのですが、その娘がまだ本当に生娘で、あの男にのぼせ上がっているのでなければの話です。

あの男の触れ込みでは、ロンドンで果たし合いをし、相手の生命が気掛かりな状態ということもあり、正体を隠すために変装をしている軍人ということになっています。まわりの者たちは、身分の高い人物だと思い込んでいます。一緒の男は位が下の士官ということで、遠慮のない付き合い方をしています。この男は三人目の男を連れていますが、いわば

二番目の男の部下といったところです。あの男には召使が一人ついているだけです。嫌になりますわね。まったくの人でなしです。私たちのために辛い思いをしているのだろうなどと想像し、憐れみの気持ちから、この優しい胸を波打たせておりますのに、こういった手合いのほうは思い切り楽しくやっているのですからね。

この娘と父親に使いを出してあったのですが、二人が会いに来るという知らせを今もらったところです。徹底的に調べてみるつもりです。あの男がまだ娘の操を奪っていないのかどうか、こんな簡単なことはすぐに分かるでしょうし、奪ってしまったのなら、それもすぐに分かります。娘にせよ父親にせよ、素直さよりも作為的なところが目に付くようでしたら、二人とも見捨てることにいたします。でも、娘が堕落してしまっているのは、まず間違いないと思いますわ。

あの男はこの娘がお気に入りだということです。食事の時は上座に座らせ、おしゃべりをさせて喜んでいます。仲間の男を娘には近づけません。娘のほうは他愛なく話し続けるのですが、何を言っても、気取りのないところが素晴らしいと褒めそやしています。一度などは、チャーミングなおチビちゃんと呼んでいたということです。おそらく、そんな言葉を囁き掛けた女は百人もいるのでしょうね。歌を歌わせては、奔放な節回しが良いと褒めるのです。あゝ、あなた、この娘ももう駄目でしょうね。まず間違いありません。何しろ、相手はラヴレースですからね。

皆さんにワイアリーさんを連れてきてもらうことです。貴女を結婚させるおつもりでしたらね。とにかく、ソームズとラヴレースだけはいけません。これが私の助言ですわ。

貴女の
アナ・ハウ

この居酒屋をあの男の駐屯地とお考えいただきたいと思います。あの男が敵で、仲間の放蕩者たちは補佐役兼煽動者です。お兄様にしてもおじ様たちにしても、お屋敷からの出入りの際、あの男がこんなにも間近にいることをお知りになれば、身の震える思いをなさるのではないでしょうか。あの男のほうでは、絶対に貴女をアントニー叔父様のところへは行かせないつもりでいるということです。こんな企み好きな ・・・ を相手になさるにせよ、無視なさるにせよ、貴女に何がお出来になるでしょうか。書き込まずに置きましたところを埋めてくださいね。あの男に相応しいほどの悪い言葉を見つけ出すなんて、私には出来ませんので …

手紙 二十六
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

金曜日 三時

腹立たしいことやびっくりすること、それに怖じ気づくようなことを一遍におっしゃる

のですね。どうかお急ぎ願います。この不道徳極まりない男についてお分かりのことはすべて、すぐにお知らせいただきたいのです。

ただ、この不幸な娘のことをお話しになる際は、無垢だとか無邪気だとかいう言葉をお使いにならないでください。容貌そのものに威厳がございますし、どのような変装をいたしましても、身分の高さを隠すことは出来ないあのような男が、食卓で上座に座らせてくれるとか、そんな優しい呼び方をするのですから、魂胆があるに違いないことくらい、その娘にも分かるのではないでしょうか。あのような男が喜ぶからといって、無邪気とはいえ慎みのある、十七にもなった娘が、請われるままに歌ったりするものでしょうか。よそ者ですし、正体を偽っていることを公言しているのです。父親にいたしましても祖母にいたしましても、まともな人間なら、また、無邪気な娘のことを案じているのでしたら、そんな馴々しい態度を許したりするものでしょうか。

「仲間の男を娘には近づけない」ですって　…　すでに実行に移されたわけではないといたしましても、浅ましい魂胆があるのは間違いございません。

まだ間に合うのでしたら、娘さんが危ないことを、考えの足りない父親にお教えいただきたいと思います。我が子の操を売ろうとする父親など、この世にはおりません。母親がいないだなんて　…　可哀相な娘さん　…

ご調査の結果を伺いたいものです。その無邪気な娘にお会いになるとのお話ですが、どんな娘なのかお教えください。「気立ての好い可愛い娘」とおっしゃってましたね。気立ての好い可愛い娘　…　貴女が筆になさると、優しく心地好い言葉になりますが、貴女のお言葉でしょうか。それとも、あの男が娘さんに使った言葉なのでしょうか。そんなにも無邪気で、物腰や話し振りはゆったりとして気取りがなく、「奔放な節回し」で上手に歌い上げるのでしたら、そのような娘が、おそらく街の女やその鉄面皮な態度を見慣れております、あゝいった放蕩者（今では、そんなところではないかと思っています）の気持ちを惹くのは当然のことでしょう。心の奥まで、そして、長期間に亘り、捉えて放さないはずです。おそらく、無垢さが失われました時にも、今あの男を魅了しております飾りのない魅力が失せました分は、手練手管に頼って補おうとするでしょうからね。

こんな恥知らずに改心の望みだなんて　…　私といたしましては、何一つ申し上げるつもりはございませんわ。でも、別に決心をする必要もございませんわね。あの男からの手紙はまだ開いておりません。そのままにしておこうと思います。ゴマすりですわ、あの男は。声がかすれてしまっただなんて　…　真夜中に浮かれ騒いで、奔放な節回しの歌い手さんに合わせて歌ったりなんかするから声もかすれるのです。林の中にいてひどくなっただけの話でしょう。

もう地歩を固めているというのですからね。つまり、あの男の胸の中に、という意味です。私といたしましては、あんな男は軽蔑します。あの男のことで、それに、貴女が「気立ての好い可愛い娘」と呼んでおられる、あのお馬鹿さんのことでこんなにも言葉を重ねるなんて、我ながら愛想が尽きてしまいます。ただ、慎みを捨て、貞潔さを失ってしまいますと、気立てが好いとか可愛いとか言える者はいなくなるということです。

ところで、貴女にこの調査をお願いするに至ったいきさつをお話しいたしましょう。

例の卑劣なジョゼフ・リーマンがベティに漏らし、ベティが私に仄めかしたというわけですが、最近あの男が変装をして出入りしていたある場所で、ラヴレースは大変なワルな

のだということが暴き出されるかもしれない、という話でした。ただ、詳しいことはもう少し様子を見てから教えよう、ということでした。あの娘ももっと詳しいことを知りたく思い、内緒にすることを約束したというのです。貴女のほうで調べのつく限りのことを知っていただき、私にも知らせていただきますのは、決して悪いことではないと考えた次第です(ア)。これではっきりいたしましたが、敵対する者たちがあの男について述べておりますことには、動かし難い根拠があるのだということでございます。この哀れな娘を堕落させるのがあの男の目的だといたしますと、また、ハーロー邸を訪れることさえなかったなら、あの娘を見初めることもなかったのだということになりますと、あの娘のことを倍は案じてやらねばならないでしょう。また、こんな恥知らずな男には倍も腹を立てて当然だと思います。

ソームズ当人にさえ負けないほど、あの男のことが憎らしく思われます。

あの男についてこれ以上触れないことにいたしますが、ただ、貴女がお調べになったことから他に何か分かりましたら、出来るだけ早目にお知らせいただきたいとだけ申し添えます。あの男から手紙が一通届いておりますが、詳しいことを知るまでは、開封しないことにいたします。また、間違いないとは思いますが、私の予想どおりということになりましたら、すぐにも、取ってきました場所に封をしたまま戻し、もうあの男のことに気を使うのは止めることにいたします。　さようなら、最愛のお友達。

Cl. ハーロー

(ア) 第一巻の手紙三十四に見られるとおり、ラヴレース氏がローズバッドを見逃したのには二つの動機があったのである。一つには、祖母が孫娘の助命を願い出たことから、己のプライドを満たされたということである。氏はこう語っている。「俺が容赦なくモノにした多くの可愛い蓮っ葉どもにしても、俺の力のほどを認め、早目に慈悲を求めてくれたなら、容赦してやったのだ。だが、新たな相手が現れた場合には、〈不遜なる者どもを征服す〉というのが俺のモットーになるはずだ」というのである。

今一つの動機は、同じ手紙に見られる次の一節によって説明されよう。「これだけの長い間、これほど真面目にしているのは、俺としては大学入試の時以来のことだ。こうしているのが正解なのだよ。どうかして、[この小さな旅籠に]隠れ住んでいることが露見するかもしれない。そうすると、ローズバッドが俺のハートを射止めたのだと思われることだろう。こんなにも気持ちの良い素朴な連中から俺に有利な報告がなされると、俺の立場は安泰になるかもしれないのだ、云々」と氏は述べていたのである。

読者諸賢もいずれご覧になることであるが、やがてラヴレース氏は、手先のジョゼフ・リーマン(上に触れたように、この男がベティを利用するのである)を使って着手した策略が、期待どおりの成果を上げたことを結果によって知るのである。ただし、二人の淑女の間でこの際交わされた事柄については、知る由もなかったのである。

このような解説を加える必要性をなおさら痛感する所以は、読者の中には(十分なる注意力を欠いているため)、ローズバッドに対する振舞いに接し、ラヴレースに分不相応な評価を与え、さらには、この事例のように、かくも寛大な振舞い(と彼らは想像するのだが)の出来る男が、極悪非道の罪を犯すとは信じ難い、と考える者も一部に見受けられるからである。手紙三十一で自ら認めていることであるが、この男の気質にあっては、愛情とプライドと復讐心とが拮抗した力を持つ要因となっているということ、そして、抵抗は刺激剤の役目を果たしているという点には考えが及んでいないのであろう。

手紙　二十七

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

三月三十一日　金曜日　正午

風の翼に託してとでも申しましょうか、前の手紙を追いかけるように、急ぎこれをお届けいたします。公正さを求める気持ちからです。心から確信いたしておりますが、あの男は無実なのです。今回の告発に限りましては、無罪放免にして上げなければいけないと思います。熱心さのあまりですが、中途半端のまま情報をお届けするような真似をしてしまいました。お詫びいたします。

例の娘に会ったのです。本当に綺麗で、大変こざっぱりとしておりますが、もっと素晴らしい点は、実に清浄無垢な乙女だということです。こんなにも無心な世間ずれしていない娘を堕落させることが出来るとしたら、そのような男は、まさしく悪魔の心を持っていることになりましょう。父親も正直で純朴な人物で、自分の娘にも、また、娘の新しい知り合いにも満足しきっております。

貴女のお気持ちのことが気掛かりで申し上げにくいのですが、徹底的に調べましたところ、この恩恵を施そうとするラヴレースの態度には、どこか気高さといったものも認められるのです。

この娘は来週結婚することになっております。あの男の肝煎りで実現の運びとなったわけです。父親によりますと、あの男は、一組のカップルを幸せにしてやるつもりだが、幸せになってもらいたいと切に願っているカップルがさらにある、と言っているのだそうです［だれかさんたちのことでしょうね、きっと］。それに、娘がはっきりと愛情を口にしております相手の若者にも好感が持てるということで、あの男は娘に百ポンドを贈っているのです。祖母が確かにそのお金を預かっておりますが、若者のためにあちらの親戚の一人から贈られた同額のお金との釣り合いを取ろうというのです。ラヴレースさんと一緒にいる男の人も、こんな手本に心を惹かれたのでしょう、貧しい父親に二十五ギニーを贈ったのですが、可愛らしい田舎娘に持たせる衣装を支度するに当たって、足しにしてもらおうというわけです。

この貧しい男の話では、ラヴレースさんとお友達は、初めて自分の店に来た時、身分の低い人物のように見せ掛けようとしていたのだそうですが、今では、（ただ、内緒ということで話に出たのです）お一人はバロー大佐で、もうお一人はスローン大尉だということが分かっている、というのです。初めのうち、大佐が娘さんにひどく優しくしていたことは認めておりました。でも、孫娘の操を奪うようなことはご容赦いただきたいという祖母からの懇願もありまして、あの男も、親身な助言以外のことは一切口にしないと誓ったのだそうです。あの男は約束を守ったそうですし、可愛らしいお馬鹿さんも、牧師様の聖書のお話だって、あの方の教えほどはためにならなかったと思う、などと言うのです。この娘のことがとても気に入りましたので、訪ねてくれたのが無駄骨にならぬよう、心遣いはしておきました。

それはそうと、私たちはどうなるのかしら。ラヴレースは改心しただけでなく、説教師になってもいるのですよ。私たちの立場はどうなるのでしょうね。これで、貴女のその寛大なお気持ちは、いよいよあの男への好意で占められてしまうことでしょう。困ったもの

ですわね、この寛大な心というのも。愛が下劣な人に及ぼす悪影響と同じくらいに、寛大さも高貴な心に害毒を与えるものだと、本心からそう思いますわ。これまでは「条件付きの好意」にすぎなかったものが、〈無制限の好意〉になってしまいそうで、今では心配になっております。

私の毒舌を一遍に、それもこんなに早く、賛辞に変えてしまうなんてことはとても耐えられなかったのです。私たちって、少なくとも私のような人間は、軽はずみな判断をしてしまいました場合、軽はずみなことは分かっておりましても、自分の顔は立てたがるものです。貴女のように潔く過ちをお認めになるようなこと、だれにでも出来るわけではございませんからね。率直に過ちを認めますには、とても大きな心が必要なものです。ですから、あの男のあそこでの暮らしぶりや振舞いについて、さらに調べを進めてみました。何か悪いところを見つけ出したかったというわけです。ところが、すべてにわたって一貫した態度なのです。

私の調査からいたしますと、どこを見ましてもラヴレースさんには非常に有利なことばかりなものですから、そのようなことを考える余地がわずかでもあればの話ですが、すべては黒を白と言いくるめるために始めた謀りごとではないのかと、私といたしましては勘繰りたくなるくらいです。　さようなら、大切なお方。

アナ・ハウ

手紙　二十八
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月一日　土曜日

軽率に咎め立てをする人というのは、確かに、考えの変わりやすさや無定見さを非難されがちなものですが、それも当然のことと思います。もしも貴女が、貴女でさえも、今回のことではそうであったようなおっしゃりようですが、過ちを認めるのはそんなにもお嫌だというのでしたら、現にこうしてお慕いしておりますほどには、貴女のことを好きにはなれなかったものと思います。それに、おっしゃるとおりだといたしましても、貴女のお心が、かつて女性が誇りにいたしましたものの中でも最も率直なものの一つでなかったなら、私が漏らしました批判がましい言葉を、あんなにも素直に自分にお向けになるようなことはお出来にならなかったはずですわ。

ラヴレースさんにはずいぶん欠点がありますから、今回のことは咎められないといたしましても、極めて厳しい非難を向けられても仕方がないのです。あの方と私とがあの方の望んでおられるとおりの間柄だというのでしたら、それとなく耳打ちをして上げるだろうと思います。この裏切り者のジョゼフ・リーマンは、おそらく、ご自分ではそのおつもりなのでしょうが、思っておられるほどにはあの方を大切に考えていないのだ、ということをです。大切に思っているのでしたら、例の愛らしい田舎娘さんとの取るに足らない出来事をそんなにも易々と漏らしたりして（それも、あのベティ・バーンズにです）、あの方に不利を招くような真似はしなかったことでしょう。ジョゼフは、内緒にしてくれるよう、ベティに誓わせておりますが、事態がすべて明らかになりましたら、詳しいことをあ

の娘に、そして、あの娘の若主人にも知らせると約束しているのです。あの娘も話したくて仕方がないのですが、こういうわけですから、姉とか兄とかに教えるのは控えているのです。それに、ジョゼフの気持ちには逆らいたくないのです。と申しますのも、あの娘はもっと上のほうに目を向けているような振りはしておりますが、ジョゼフの囁く甘い言葉に耳を傾けているものと、私は睨んでいるからです。

女のほうから求愛するわけには行かないということもございますから、心のほうが傾きません場合にも、しきりに耳を貸そうとする女も中にはいると思うのです。

でも、どちらの者も大目に見て上げられる人間とは申せません、この素性の卑しい者たちについての話はもう止めにいたしますが、どうしても正直に申し上げねばならないことがございます。ハーロー邸への道すがら、そんな恥知らずな恋愛沙汰を起こすことの出来る人なのでしたら、永久にあの方のことは軽蔑していたでしょうし、また、そういう人だと信じもしたわけですから、そんな気持ちと釣り合いを取るよう、貴女のおっしゃるこの寛大な心の中に、あの方への好意が芽生えてまいりましたのは［白状いたしますが］確かなことです。もしかいたしますと、そうなるよう願うのも無理からぬこと、と思われます程度以上にかもしれません。お気の済むまで冷やかされても結構ですが、どうか正直におっしゃっていただきたいのです。貴女の場合にも、同じような効果があったのではないでしょうか。

それから、真の心の大きさを映しているという振舞いのことですが、私の大好きなお友達にははっきりと申し上げて構わないでしょう。あの方が今後ともずっと立派な心掛けでいてくださるのでしたら、これまでに犯した過ちの多くのものにつきましては、許して上げたいようにも思うのです。今回の一件で、大変立派で寛大な考え方もお出来になるのだということを立証してくださったわけですが、そのことだけのためにもですわ。

この話題を扱われた二通目のお手紙を受け取りました後では、あの方からの手紙の封を切るのに何のためらいも感じませんでしたこと、お分かりいただけるものと存じます。また、咎め立てをしなければならないような点は別にございませんので、躊躇なくお返事をするつもりでもおります。あの方には好都合な一項目というわけですが、ご存じないことは申せ、こちらで抱いてしまいましたあの方への不当な怒りの埋め合わせのつもりもありますから、それだけに一層易々と（正直に申さねばなりませんが）手に入った項目ということになりましょう。

友情あふれるご尽力によりまして、この件が早々と解明されましたこと、まことに幸運に存じます。解明されます前に手紙を書いておりましたなら、お断りの気持ちを強調するものになっていたことでしょうし、ことによりますと、動機そのものに触れていたかもしれません。と申しますのも、あのお話には自分でも心外なほどうろたえてしまったからです。もしもそのようなことをしておりましたなら、あの方にとりましてはもっけの幸ということになっていたでしょうね。何しろ、ご自分には大層都合の好い説明が付けられるわけですからね。

今回のあの方のお手紙をお届けいたしますが、ずいぶんと遜っておられるのがお分かりいただけると思います。生まれつきの短気さをお認めになり、また、過誤を告白してもおられますが、この点は貴女も予告しておられたことですね。

正直に申しますが、例の可愛らしい田舎娘さんの話がはっきりいたしました今では、こ

ういったことのすべてが、はっきりしなかった場合に呈していたように思われます様子と比べ、ずいぶんと違って見えるのです。

ご覧いただけますとおり、あの方の説明では、お身体の具合が思わしくなく、私の手紙をご自分で取りに来ることは出来なかったとのことです。その点をくどくど述べておられますが、厚かましい人で、まるで取りに来られないのを私が心配するとでもお考えのようなのです。私のことで体調を崩された点は本当にお気の毒に思いますし、ここしばらくどっちつかずの状態に置かれていたわけですから、あれほど短気な方にとりましては、腹立たしい話だったろうとも思います。でも、元をただせば、すべてはご自分に原因のあることなのです。

今にも強要されそうになっております事態を私が回避するためのことですが、あれこれ方策や便法を（私が許すのは間違いないとばかりに）持ち出しておられる様子もご覧いただけるでしょう。

常々お話ししておりますが、落ち度のないことに次いで立派なのは、落ち度を認める姿勢なのです。失敗を繕うようでは、改善の見込みなどございませんからね。ところが、お分かりになるでしょうが、恭しい態度の中にもどこか傲慢なところが、この手紙からも窺われるのです。確かに、言葉遣いのどこに問題があるのかは分かりません。ただ、あの方の謙虚さは謙譲の心から来ているものだということ、あるいは、他人も納得いたしますような、悔悟の念に根差した遜った謙虚さでもあるのだということ、その点にどうしても私は確信がもてないのです。

勿論、礼儀正しい人間とはほど遠い方です。でも、まったくの不作法で際立った礼儀知らずとでも申しましょうか、そんな人でもございません。ただ、あの方の慇懃さというのは、ほんの幼い頃から甘やかされてきておりますし、年頃になりますと、何もかもが思いどおりに行くということで無頓着になり、また、その両方から、傲慢な気持ちにもなりまして、今では過信となり、そして、当然のことですが、いわば無神経とでも呼べそうなものになってしまっているのです。

こういった手合いにはよそよそしくするのが良いとのことでしたが、確かに、大筋では当を得たお言葉と思います。心安さは尊敬の念を損なうというわけですが、でも、どういう人との場合のことでしょうか。分別があり、感謝の気持ちにあふれ、寛大な心を備えている人にはきっと当てはまらない話でしょうね。

ただ、極端に走ることを避けようとする人にとりまして、もう一方の極端に陥らずにおりますのはとても難しいことなのです。ですから、おそらくラヴレースさんは、礼儀正しさを犠牲にすることになりましても、ご自分のプライドを大切にするのが偉大な精神の表れだとお考えになるのです。でも、ごく普通の頭脳をしている者でさえ見逃すことのないような、この種の区別の仕方も分からない人が、腹の底の知れない人間などということはあり得る話でしょうか。

さかんにこぼしておられるのは、あの方のことになりますと、私がすぐにひどく腹を立て、きっぱり手を切ろうとする点なのだそうです。歯に衣を着せない言い方をすれば、これは高慢不遜な態度でもある、と言っておられます。虐待を受けた挙げ句に私は、ソームズさんの立場に立った身内の目論見に従ってしまうのではないかと心配しているが、そんな懸念を和らげるのに役立つとは到底思われない振舞いだ、とおっしゃるのです。

ご覧のとおり、ご自分の現世と来世での幸せは、どちらにつきましても、すべて私一人に賭けているとのことです。誓ったり約束をなさったりする時の熱意溢れるお言葉は、真心の赴くままに吐露されたものに他ならないと私は考えております。人の心を推し量ることの出来る方法が、何か他にございますでしょうか。

また、私とソームズさんとの面談の予定につきましても、すでに耳にしておられるとのことですが、その件に触れます際の、いかにも激しい苦悶に満ちた言葉遣いもご覧いただけるでしょう。私の家でありましたことをすぐに知るためとはいえ、恥ずかしくもなく用いておられる卑劣な手口につきましては、それなりの注意はさせていただくつもりでおります。もしも、主義節操を自負しております人々が、無節操な行いに自ら異議を唱えることがないといたしますと、そんな人たちを抑制するようなものは、果たしてこの世に存在するのでしょうか。

ご覧いただけることですが、ソームズさんとの面談の前に（どうしても避けられないのなら、とのお言葉ですが）、ほんの数行で構わないから便りが欲しいと、それはもう矢の催促なのです。今私が腹を立てているとしても、ソームズさんの後押しをしようという考えからではないことを望んでおり、その点を確認したいというわけです。とりわけ、面談というのはソームズさんには認められず、ご自分には与えられなかった恩恵だということもあり、申し訳ないが、重ねて懸念を表明させてもらいたい、というのです。それなりの期待を持ったのでなければ、私の身内にしても面談を強要するわけはないのだから、と推理されたわけです。

❁　❁

返事を書き終えたところで、次のような趣旨のものになりました。つまり、自らの判断に従うのを適切なことと考えたからといって、女性や私への非難に乗り出す人には、もう一行たりとも書くつもりはなかったのだ、とです。

そして、ソームズさんとのこの面談に応じましたのは、純粋に義務的な行為であり、自分に出来る範囲のことであれば、皆の指図に従う気持ちでおりますのを身内の者たちに示すためであるし、また、ソームズさんのほうでも、私の決心が固いことをご自分で確認なされば、私の同意を取り付けてうまくまとめることは不可能な結婚話でもあり、これを推し進めるのは控えてくださるように思う、と申しました。

安心していただきたいことといたしましては、ソームズさんに対する嫌悪の念には嘘偽りなど一切ないのであって、この際にも、自分の気持ちに疑いを挟む余地はないと話してあります。ただ、そうは申しましても、ソームズさんを拒むのはあの方への好意からなのではないということ、そして、自分にとりましては、自由な立場や自立というものが極めて大切に思われますから、身内の者たちが私の考えどおりにさせてくれるのでしたら、これほど御し難い男性、しかも、すべてを託したりいたしますと、どのような目に遭わなければならないか、そのことを既に身をもって示している男性のために、この大切なものを放棄する気にはなれない、と断言しております。

極めて遺憾に思うことといたしまして、一個人の家庭内の事情を知るために用いておられる手口に触れ、他人が自分のところにスパイをよこしたのだから、仕返しにその人の召

使を買収するというのでは、言い訳としてはまことにお粗末で、一つの卑しさを別の卑しさで正当化しようとしているのに他ならない、と述べてあります。

人が自分の行いをどのように飾り立てましても、物事にはすべて善い面と悪い面があるものだという考えをお話ししております。ある逸脱行為を咎めながら、その後で同じように大きな逸脱行為に走るというのでは、何のことはない、あまねく堕落を招くことに他ならないのではないのか、と尋ねてもおります。どれだけ多くの人々が悪事に群がるといたしましても、だれかが歯止めの役目をしなければなりません。さもなければ、美徳は姿を消してしまうことになるでしょう。そして、歯止めとなるのは自分ではないのかと、高邁な心の持ち主なら問い掛けるはずです。

このような考え方に照らしまして、ご自分の心は果たして立派なものなのかどうか、その判断はあの方にお任せしております。また、あの方ご自身の激しい気性のことや、父や一族の者たちがあの方と和解する可能性はないことも承知の上で、あの方の望みに力添えをするような真似が果たして私に出来るものかどうか、その点につきましても判断していただくことにしました。

さらには、他ならないあの方ご自身のために、もっと正しく気高い考え方や行いをして欲しいとは思いましても、こういった汚点やキズのことがありますから、熱心に願う気持ちになれないことを申し添えています。あの方の自堕落な振舞いの多くのものを心から軽蔑しているからでして、私たちの考え方には計り知れないほどの違いがあるわけです。それに、是非とも申し上げねばならないこととしてですが、あの方が公言なさっている改心にいたしましても、それをいくら気前よく口にされたからといって、行状を改めようとなさらないのであれば、私にとりましては、先手を打って譲歩を重ねておられるだけのことに他なりませんし、あの方にしてみますと、これは弁護をなさるとか、過ちを正そうとなさることよりも、はるかに簡単な仕事に思われるだろう、とも申しております。

あの方は結婚について非難がましいことを言っておられるのだそうですが、軽薄で気紛れな話しぶりだということを最近耳にいたしましたので［そのようにベティに教えられたのですが、あの娘は兄から聞かされたのです］、そのことをお知らせしました。この点につきましては厳しく咎め、救いようもない破廉恥漢だけが耽るような、無分別で見下げ果てた愚行を憚らず、その上、厚かましくも求婚までしてくるとはいかなる料簡なのかと、問い質しておきました。

アントニー叔父様のところへ行かされることになりましても、それがそのまま、ソームズさんの妻になることを必然的に意味するように推断されては困ると話してあります。と申しますのも、確信こそございませんが、強制的に連行されます家から逃げ出すことに対しましては、おそらく、父の家を捨てる場合と同じ程度の強い異議が成り立つようには思われないからです。また、最悪の場合でも、従兄弟のモーデンが戻りますまで皆を待たせることも出来るでしょうが、私が要求いたしました場合、従兄弟は権利を行使して、私に祖父の地所の所有を認めてくれるはずだから、と申しました。

これは少々策略めいているような気もいたしますが、あの方が無謀な行動に走りますのを防ぐのが眼目なのですから、辛うじて言い訳が成り立つように思います。と申しますのも、正気のままであれ気を失った状態であれ、あちらへ連れ去られたといたしまして、兄と姉のなすがままになりました場合には、まず間違いなく、二人は無理やり厳粛な誓いを

立てさせようとするはずだからです。そうでないのでしたら、従兄弟のモーデンの帰国まで引き延ばしを図るなりして（他に何も手立てがないのでしたら、健康を損ねるようなものを口にしても構いません）、この事態を避ける見込みが少しでもあるのでしたら、叔父の屋敷でさえ逃げ出すようなことを考えたりはしないつもりです。父が私をどのような場所に置きたいと考えるにいたしましても、父に負うております義務をないがしろにするようでは、自分の信念とどう辻褄を合わせたら良いのか、見当もつかないからです。

でも、一人の男性を避けるためとは申せ、やむなくもう一方の男性のご家族に身を委ねるようなことをせずに済みそうな、そんな素敵な期待を貴女が与えてくださるかぎり、私の件もまったく望みがないわけではないと考えております。

❁　❁

だれ一人身内の者は顔を出しませんし、どのような形にせよ、思いやりの籠もった言葉もかけてもらえません。思い浮かべますたびに胸が激しく騒いでしまいますあの火曜日の話し合いではございますが、この様子からいたしますと、皆のほうでもあまり多くを望んではいないように思われます。

叔父のアントニーが同席するのはあまり嬉しくございませんが、兄や姉と顔を合わせるくらいなら、叔父のほうがまだマシでしょう。ただ、叔父にはとても性急なところがあるのです。ラヴレースさんもこんなにはと思うほどなのです。少なくとも、あの方のお顔を見て怖くなるということはございませんが、叔父の場合、顔の造作そのものが厳めしいものですから、恐ろしくなってしまいます。叔父を見ていてよく思うのですけれど、海運業で成功した人というのは、自然の力にだけ従い、また、それを克服しようとさえいたしますから、自分がいつも腹立たしい思いをさせられております嵐にも負けないほどの、そんな勢いで猛り狂うことが頻繁にあるのです。

ソームズさんも私に負けず劣らず気のきかない顔付きをなさることでしょうね。ジョン伯父様が書いておられましたし、ベティもよく話してくれることで、私があの人に会うのを怖がっているのと同じくらいに、あの人も私と会うのを恐れているとのことですが、もしもそれが本当なのでしたらね。

務めを果たされますのにも厳しい条件を付けられることのない、幸せな、幸せこの上ないハウさん、これでお別れにいたします。お母様が選んでくださった人とお気持ちを合わせるだけで宜しいのですし、反対すべき根拠もなければ、また、おありのはずもないお相手ですからね。ただ、私たちのことをこきおろす連中なら、おそらく、遠慮なしに用いる言い方でしょうが、女性独特のつむじ曲がりな考えから、お母様が直接お選びになった点に異議を唱えようとなさるのではないのでしたらね、ということですわ。落ち着きとか経験という面からいたしまして、若い人は自分で選ぶ資格はございませんのに、強情な性格というのは指図されるのを好まないものなのです。

貴女の幸せをこの上ないものにいたしますのに必要なのは、ただ、ご自分が幸せなことをお知りになることですし、選ぶことがお出来になる時に選ばなかったと、心も重く、自責の念にかられながら望ましい過去を振り返りますのは今なのだということ、反省して臍を噛んでも始まらないのだということにお気づきになることだけなのです。そして、その

力が貴女に与えられますことが、私の心からの祈りです。

貴女の
クラリッサ・ハーロー

手紙　二十九
ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

四月二日　日曜日

貴女の包みを受け取りましたこと、昨日のうちにお知らせしておくべきでした。ロビンが申しますには、裏切り者として貴女が名を挙げておられました、例のジョゼフ・リーマンと出会ったというのです。あの男は養鶏場におりまして、養鶏場と緑の小道との境目になっております盛り土の向こうから、「どんなご用向きですか、ロバートさん。見当は付いておりますがね。せいぜい急いでお帰りになることですね」と、ロビンに声を掛けてきたというのです。

この男が怠りなく見張っておりますし、ベティも監視についていますので、皆さんは安心なのでしょう。でなければ、貴女もそれほど自由に外歩きを許してはもらえないに違いありません。それにいたしましても、そのような状況にありまして、ちょっとした仕事を任せられます忠実な召使も傍にいない人というのは、貴女の他には聞いたこともございません。詩人にいたしましても、ヴィオレッタとかクリアンテとかクレリアとか、そんな素敵な名前のついた、秘密を打ち明けられる相手も用意せずに、アンジェリカ(二五)といったような人物を登場させたりはしなかったはずです。少なくとも、年老いた子守り女の一人くらいは付けてくれるものです。

いただいたお手紙の中から数箇所を母に読んで聞かせましたが、昨日付けのものの最後の部分には大喜びで、母が申しますには、あの一節ですっかり貴女のことが好きになってしまったというのです。あのお言葉への感謝の気持ちが母の胸から消えないうちに、こちらの提案を申し出て、精一杯頼み込もうと考えておりました矢先に、ヒックマンさんが姿を見せたのです。片足を引く例のお辞儀を何度も重ね、クラヴァットや襞飾りを撫でておりました。

そのような振舞いに対し、思いきりあの男を揉み畳んで襞飾りみたいにしてしまうことだって出来たのですが、実際には、「召使はお目に留まらなかったのかしら。お入りになる前に、一人くらい寄越してくだされば宜しかったのに」とだけ言っておきました。

しきりに謝っておりましたし、その場に踏み止まるのが良いのか、退散したほうが良いのか、迷っているような顔をしておりましたが、ようやくあの男の忠実な友である私の母が、「あらあら、ナンシー、内証のお話をしているわけじゃありませんよ。さあ、お掛けになってくださいな、ヒックマンさん」と言葉を挟みました。

「では、お嬢様、お言葉に甘えま〜して」と、あの人は私に向かって言っておりましたが、貴女もご存じの、身体をこわばらせ、恭しくためらいがちに話す時の、例の間延びのした言い方でした。

私は、「どうぞ、どうぞ、お座りください、律義者さん。お疲れでしたらね。でも、宜し

かったら、母の横に座っていただけませんかしら。フープが十分に広がるようにしておきたいものですからね。これらの利点として思い付きますのは、汚れた靴を磨いてくれますのと、男の人たちを遠ざけてくれるところだけですわね」と申しました。

「おかしな娘だわね」　機嫌を損ねた母が叫びました。それでも、口調を和らげ、「さあどうぞ、私の横にお座りになって、ヒックマンさん。そんな馬鹿げたこけおどしは私のドレスには入っておりませんからね」と言っておりました。

私は真顔になりましたが、心の中では、母の言葉がアントニー叔父様に向けたものでないのを嬉しく思っておりました。

母はいかにも未亡人らしい拘りのなさで、まことに抜け目なく、私たちが話し合っておりました話題に向かおうとするのです。貴女のお手紙の中の、あの人にとりましてはお誂え向きの一節を読み聞かせたかったのでしょう、それに違いありません。「ハーローさんには精々感謝しなくちゃいけませんわ、宜しいですね。あの方がおっしゃるには　…　」などと言い聞かせているのです。

でも、私のほうでは、ロンドンからの最近の手紙では何か珍しい話はありますか、と尋ねました。この質問が話題を変えるためのものであることは、あの人もいつも分かってくれております。でなければ、そのようなことを尋ねたりするわけがございません。ですから、あの人が口を噤んでいてくれさえすれば、答えがなくとも腹も立たないのです。

私の提案のことは、母がどのように受け止めてくれるのかはっきりいたしますまで、あの人の前では口にしないつもりです。母に聞き入れてもらえない場合には、あの人の出番があるかもしれません。でも、出来ることでしたら、あの人に恩義を受けたくはないのです。下心のある男性というものは、女性が自分の用事で親切にも仕事を頼んだりいたしますと、それはもう気取った態度で自慢げに練り歩きますから、とても我慢の出来る話ではございません。

ともかく、今日は見つからないといたしましても、明日にはその機会を作ろうと考えております。

封をしてあります包みはどれも、貴女のいらっしゃるところでなければ開かないことにいたします。開く必要はございませんもの。貴女のお振舞いにつきまして、疑問に思うことはまったくございませんし、あの男や貴女ご自身のお手紙から抜粋してくださったもので、お二人の関係が現在どのようになっているのか、すべて承知しておりますからね。

少々生意気なことを一つ二つ匂わせてみようかと思っていたのです。でも、自制心の点では女性すべての頂点に立つ人だと、貴女は思われたがっておられますし、事実、そのように思われて当然の方ですから、慎むことにいたしましょう。でも、貴女にいたしましても、胸の中の思いをすべて吐き出したくなるようなことが、時々はおありでしょう。そうなさらないのは、いうならば〈建て前〉と〈本音〉とが恥ずかしげに小競り合いをしているからに他なりません。その争いがすっかり終わりました時には、きっとその結果を隠さずにお話しくださるものと信じております。

母の召使ですのに、お給金の支払いの肩代わりを（しかも、あんなにも沢山）お引き受けになるなんて、見過ごしには出来ません。本当に憤慨しておりますし、今後ともそうするつもりです。私も、母には言わずに、召使たちの働きに応じて割増しをしてはおりますが、ほとんど一年分に近いものを一度にですもの。あの男も、驚いて目を丸くしておりま

したわ。それに、思いますに、あの男の身の破滅を招くことになるかもしれません。あのお金で指輪を買い込み、そこいらの役立たずな女と所帯を持つといたしまして、哀れなあの男が一年後に、ご厚志を賜らなかったほうが身のためだったなどと考えたりするようですと、だれだって面白くない気持ちになるだろうと思うのです。

「こういった事柄では、思いどおりにさせてもらわなければならない」とのお言葉でしたね。反対しても始まらないことは存じております。いつだって、ご自分に寄せられたわずかな善意につきましては高すぎるほどの評価をなさいますし、他の人たちのためにご自分でなさる大変なご尽力のことは、少しも誇ったりなさらない人ですからね。そうなさることで得られる満足感が報いとなっている点はお認めいたします。でも、お志が気高いばかりに、残りの者たちは恥ずかしい思いをしてしまうのではないでしょうか。ご家族の方たちが特にそうでしょうし、私たちにいたしましても同じことなのです。

貴女がおっしゃっているのを耳にしたことでございますが、もしも、「言葉には耳を傾けても、人や物事を判断する時には行いだけを拠り所にする」のが良い規則だといたしますと、次のような人についてはどう判断したら宜しいのでしょうね。行いを見ますと、口には出さずとも、はっきりと相手を批判しているのが分かりますのに、そんな相手の心の狭さに対しましても、何とか言い訳の言葉を見つけ出して上げようとなさるような人の場合です。こんなにも風変わりでいらっしゃるのに、恥じ入ったりなさならないのはどうしてなのでしょうね、貴女は。貴女と瓜二つの心を備えた人に出会われた時には、貴女の美点を心置きなくお示しになられても結構でしょう。でも、それまでは、後生ですから、貴女のお心やお気持ちは抑え気味にしていただきたいと思うのです。

貴女の包みが無事に届きましたことをお知らせするのが主な目的で、ほんの二、三行で済ませるつもりでおりました。ですから、大きな字で書き始めたのです。二枚目の紙もすでに終わり近くになってしまいました。でも、ためらうことなしに一帖分は書けそうに思います。貴女への賛辞ですもの、筆にすべきことはたくさんございますし、大好きな話題でもありますからね。ただ、今回お示しくださいました寛大なお志に限りましては、別の話になりましょう。本当に憎らしく思っているのですからね。もっとも、貴女の生き方やお振舞いのすべてに亘って博愛の心が明らかですし、今回の件もそのありふれた一例ということなのでしょう。この上申し添えることといたしましては、困難な試練の中で、貴女に神のお導きがありますことを祈るだけです。また、幸せ者とお考えくださるこの私にも負けないくらいの幸せを掴んでいただけますよう、切に願っております。

貴女の

アナ・ハウ

手紙　三十

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月二日　日曜日　夜

私に対する身内の者たちの態度に大きな変化が現れておりますので、そのことを示す新たな事例をいろいろお知らせいたします。思ってもいなかったのですが、ずいぶんと策を

弄する家族だということが分かったのです、その具体的な例を、現れてまいりました順にお話しいたしましょう。

今朝、家族の者は揃って礼拝式に出席しました。前からお招きしてありましたので、それを守り、皆が戻ってまいりました時には、リーウェン尊師もご一緒でした。そして、機嫌伺いに私の部屋を訪ねても構わないかという、師のご希望が届けられました。

すぐにお受けしたことは申すまでもないでしょう。

それで、師が上がって来てくださいました。

食事までの間、小一時間ほどお話をいたしましたが、驚いたことに、師も触れたがっておられるはずと思っておりましたのに、そのような話題に向かいそうな事柄はすべてお避けになるのです。そこで、私がこんなにも長い間礼拝式に顔を出さずにおりますのを、皆さんも奇妙に思っていはしまいかと、私のほうからお尋ねしてみたのです。その点につきましては、勿体ないお言葉をいただきました。でも、ご自分としては、よその家庭の内輪のもめごとに関しては、頼まれないかぎり口を挟まないよう日頃から心掛けてきた、とおっしゃるのです。

途方もないほど落胆してしまいましたが、このような事柄の判断をお願いいたしますのには、あまりにも公明正大な人物という見方をされておられるのだろうと考え、この件にはそれ以上触れないようにいたしました。また、師のほうでも、食事のために降りて来てくださるよう声が掛かりました際にも、私を残して行かれることへのお心配りは一切お示しくださいませんでした。

でも、階下で食事をすることが出来ませんのを辛く思いましたのは、監禁されましてからでは、これが最初のことでもございません。階段のところで師とお別れいたしました時には、涙がこぼれてしまいました。それにお気づきになったのでしょう。師も急いで降りて行かれましたが、そのお優しい目が潤んでおりました。声の調子で胸の思いが漏れてしまいますのを恐れてのことなのでしょうか、上品さをたたえた慇懃な仕草はいつものとおりでしたが、口を開こうとはなさらず、黙って去って行かれたのです。

師は私のことを、そして、二人の間で交わされました会話の中で私が申しましたことを褒めてくださったと聞いております。推察いたしますに、関心の的になっております事柄についての話し合いではなかったことを皆にお知らせになるためなのでしょうね。それらについてはお触れにならぬよう、要望を受けておられたのは疑いのないところです。

師が去られました後も、まことに心満たされぬ思いでしたが、ただ、この新たな扱い方にはすっかり面食らいまして、これまでにないほど狼狽し、まごついてしまいました。

でも、もっと面食らうことが待ち構えていたのです。私にとりましては困惑の一日となる運命だったのでしょう。こんな言い方をして構わなければ、〈何かを孕んだ〉困惑といったところです。きっと、その陰には大きな意味が隠されているに違いないからです。

午後には、兄と姉を除く全員が尊師と共に礼拝式に出掛けましたが、尊師は別れのご挨拶を残して行かれました。庭を歩いておりますと、兄と姉もやってまいりまして、しばらくの間私から目を離さずにおりましたが、二人が朗らかで上機嫌なところを、わざと見せつけるつもりだったのだろうと思います。やがて、私が歩いておりました歩道をこちらに向かって進んでまいりました。手に手を取って、まるで恋人同士です。

「ご機嫌よう、お嬢さん」「ご機嫌いかが、お兄様」　兄と私の間で挨拶の言葉が交わさ

れました。

「ねえ、ちょっと寒くない、クレアリーちゃん」　姉がいつもよりも優しい声で話し掛け、足を止めました。私も立ち止まり、姉の軽い会釈に深々と腰を沈めてお辞儀をいたしました。そして、「そうは思いませんわ、お姉様」と答えました。

姉は歩き出しました。お辞儀をいたしましたが、お返しがありませんでしたので、私も先へ進み、養鶏場のほうへ曲がりました。

二人は腕を組んで近道を辿り、私よりも先に着いておりました。

「なあ、クレアリー。スコットランドへ持って行くのだけど、鶏を少し譲ってくれないかな」　兄が申しました。

「えゝ、どうぞ、お兄様」

「選んで上げますわよ」　姉が申しておりました。

私が餌を与えておりますと、二人で六羽ほど選び出しましたが、別に意味があってのことではなく、互いに意気投合し、上機嫌なことを私に見せつけようとの魂胆にすぎなかったのだと考えております。

次には、おじたちが（礼拝から戻りますと）勿体なくも私に目を掛けてくださる番になっておりました。私に伝えるようベティに言いつけたのですが、私の部屋で一緒にお茶の一時を過ごしたいとのことでした。いよいよ、来週の火曜日のことを押しつけられるのだわ、と私は思いました。

ところが、お茶のための指示とは違い、ジョン伯父様だけが会いに来られたのです。

私の部屋に入って来られた時の伯父様は、日頃から呼び慣れておられたご自分の「娘代わりの姪」の前ですのに、半ばよそよそしく、半ば情の籠もったという様子でした。私は伯父の足下に身を投げ出し、ご愛顧のほどを懇願いたしました。

「これこれ、取り乱してはいけないぞ。心配することは何もないんだよ。今度こそ、皆に可愛がってもらえるだろう。すべてが変わろうとしているのだよ。顔を見たくてジリジリしておったのだ。もうこの気持ちを満たさずにはいられなくなったのだよ」　こう言うと、伯父は私を立ち上がらせ、キスをしてくれました。そして、「可愛い娘」と呼んでくださったのです。

でも、関心の的になっております話題に入るのは避けておられました。「万事申し分なくなるはずだ。すべてがうまく収まることだろう。もうどこからも不満は起こるまい。お前のことはだれもが愛しているのだよ。私が真っ先に機嫌を伺いに来たまでのことさ［ご親切にもこんなことを言ってくれたのです］。今までどおり、一緒に腰を下ろして他愛もないことをあれこれ話したくてな。これまでの不愉快なことは一切忘れよう。何もなかったことにしてな」とおっしゃるのです。

不名誉な監禁の話を持ち出そうとしているのがお分かりになったのでしょう。「お前が恥をかくことなどあるものか。お前の評判はすでに揺るぎのないものだからな」と言っておられました。そして、「会いたかったのだよ。最後にお前を見てからというもの、この半分も愛らしい者などには、だれ一人出会ったこともない」と繰り返しておりました。

そしてもう一度、私の頬に、紅くほてった頬にキスをなさいました。遊ばれているように思ったものですから、このように扱われますのが我慢ならず、苛々していたのです。こんな訪問にどうしてお礼など言えましょう。何のことはございません（これではっきりい

たしましたが)、来週の火曜日に向けて私を懐柔するか、さもなければ、全員に対して申し開きの出来ないようにするための、あまりにもお粗末な計略だったのです。

あゝ、何と陰険な兄なのでしょう。これは兄が仕組んだことなのです。怒りに燃える胸に甦ってまいりましたのは、目の前でベタベタし合っております時の兄と姉の得意げな姿でした。腕を組んだまま話し掛けてまいります二人の目には、憎しみの色が交じっておりましたし、「クレアリー」だの「…ちゃん」だのと呼び掛けてまいります時にも、わざとらしい慇懃さがその口元に現れていたのです。

ジョン伯父様といたしましては、この訪問を親切から出た行為と受け止めてもらいたかったらしいのですが、いかがでしょう、こんなふうに考えておりました私に、そのような見方が出来るとお思いでしょうか。とても出来ない相談でした。それに、反訴と呼んで構わないようなものはすべて、一生懸命はぐらかそうとしている様子でしたので、こちらも上辺を繕うことに決めまして、差し障りのない伯父の話に調子を合わせておりました。伯父はそこいらのものをあれこれ、初めて目にしたように感心してみせ、時々は、自分の目を引く品物のいくつかを作り出しました手に、親切にもキスをしてくれましたが、わざとらしくも感じられました。本当に感心しているというよりは、一番伯父の頭にあります事柄、そして、私の心を一番占めております事柄から気持ちを逸らすための話題を捜しているみたいな素振りだったからです。

私の部屋を出ます時にも、「お前をここに一人きりにして行くような真似がどうして出来るというのだ、私に。一緒にいると、皆の気持ちを引き立たせてくれていたお前のことだからな。階下へ来てもらう予定のないことは確かだ。だが、はっきり言って、お前の父と母を驚かせてやりたい気分なのだよ。不愉快なことにならないのが分かっているなら、なあ、お前、すぐにだって　…　「本当にずるい伯父様です。ジョン伯父様ともあろう人がどうしてこんなおとぼけをなさるのでしょうね」。どうなのだ、お前。わしにその手を委ねてくれるかな。父と会う気はあるかな。父親にもわしたち皆にもこれだけ迷惑を掛けた愛娘のことだ、顔を見た瞬間には怒り出すだろうが、そんな父の怒りを堪えることは出来るかな。約束してもらえるかな、これからは　…　」などとおっしゃるのです。

私が興奮してまいりましたのに気づかれたのでしょう。ご自分から話の腰を折り、「いやいや、良いのだよ。何もかもこちらの言うなりになるわけには行かないのなら、考えてくれなどとは言わないさ」と言っておりました。

敬意の念と腹立たしい思いが交錯し、胸が一杯になっておりました。ご承知のこととは思いますが、卑劣な手を用いられますのにはどうしても我慢が出来ないのです。「どうしてですの。何故また、伯父様が　…　父親代わりと思っておりますのに、どうしてその伯父様が　…　哀れな娘を　…　」　脈絡のある話し方など、私には出来ませんでした。

「そうか、本分を尽くすわけには行かない、何もかも言うなりにはなれないというのなら、そのままにしていたほうが良いだろう。何しろ、あんな真似をしでかしてくれたわけだからな　…　」

「あんな真似とおっしゃいますが、どのような真似でしょうか」

「そうか、そうか、分かったよ。これまで閉じ込められていたのがそんなにも辛いというのなら、そのままにしていれば良いのだよ。だが、それももう突然に終わりを迎えることだろうな。それじゃあ、これでな。最後に二言、三言だけ言っておこう。承諾してくれ

るのであれば、真心から従って欲しいということだよ。そして、これまでどおりに私を愛してもらいたいのだ。お前の祖父がしてくれたことにしても、私が考えていることに比べるなら、少ないくらいなのだからな」

私の返事を待とうともせず、伯父はあたふたと出て行ったのですが、まるで、意に反した仕事を言い付けられ、役目が終わってほっとしている人みたいだ、などと私は考えておりました。

いかがですか、ハウさん。皆がすっかり心を固めているのはお分かりでしょう。今度の火曜日のことが恐ろしくなりますのも当然ではないでしょうか。

この後すぐに、姉が上がってまいりました。私がどんな様子でいるのか、調べに来たのだろうと思います。

涙にくれているのが姉の目に入りました。

「ねえ、あなた、トマス・ア・ケンピス(二六)のご本はないかしら」と、姉が堅苦しい態度で尋ねました。

「ございますわ、マダム」

「マダムですって！　一体いつまで、私たちはこんなによそよそしくしなければいけないのかしらね、クレアリー」

「じきに終わりますわ、ベラ。貴女のことを姉と呼ばせてくださるのでしたらね」　そう言いながら、私は姉の手を取りました。

「阿たりしても駄目よ、嫌な娘ね」　姉が叫びました。

私は手を引っ込めましたが、その仕草といったら、信じていただけるでしょうが、薪の下に手を入れ、貴女からの包みの一つを探しておりますうちに、毒蛇に噛まれでもした時のような、そんな慌てぶりだったのです。

「ごめんなさいね」　私は言いました。「仲直りしたいという気持ちばかりが強いものだから、いつも蔑まれるようなことをしてしまうのだわ」とです。

「中庸を守るということの分からない人は、ますますそういう羽目に陥るのよ」　姉が言っておりました。

「ケンピスを取ってまいりますわね、お姉様」　私は本を取って来ました。「さあ、どうぞ。小さなご本だけれど、ベラ、貴女もその中にいろいろと素晴らしいことを見出してくれるはずだわ。」

「それを参考にしてくれると良かったのにね、あんたも」　姉が言い返しました。

「お姉様も参考にしてくださると嬉しいですわ。自分よりももっと年を取っている女性が模範を示してくださるのって、素敵ですもの」　私も言ってやりました。

「もっと年を取っているですって　…　生意気な小娘だこと」　姉は怒って飛び出して行きました。

姉が年を取りましたら、一体どれほど気難しいお婆さんになることでしょう。周りの者に対しましては、おそらく、崇め奉るよう強要するのでしょうが、それに見合うようなことを目指したりはいたしません。そして、唯一尊敬の気持ちを起こさせてくれるものですのに、自分の老齢のことを恥ずかしく思うのです。

これまでお話しいたしましたことからも明白ですが、皆のほうでは、例の面談の同意を取り付けたことで、私に対していくらか有利な立場に就いたように考えているのです。でも、たとえ明らかではないといたしましても、つい先程耳にしましたベティの厚かましい言い種からはっきりすると思います。あの娘は面談のこと、それに、伯父の訪問のことを目出度い話だと祝っていたのです。そして、私にとっての難問もこれで半分以上は解決した。一目ソームズさんに会えば、私が結婚したくなるのは間違いのないところだ。自分も間もなく、これまでよりはマシな役目を与えてもらえるはずだ。皆も忙しくなることだろう。結婚式をどんどん挙げていただけると大変嬉しい。この次はだれの番になるか分からないのだから、などと言っていたのです。

午後、見にまいりますと、ラヴレースさんの手紙に書きました私の返事への返信が届いておりました。約束や感謝の念、あの方の言い方では、「永久に変わることのない」謝意の言葉で埋め尽くされておりますが、他にももっと大袈裟な言い回しが見受けられます。でも、お手紙を拝見したことのある人の中では、ラヴレースさんはそのような馬鹿げた美辞麗句に走ることの一番少ない人なのです。もしもそんなことをなさるようでしたら、軽蔑したくなるだろうと思います。その種の言葉遣いに出会いますたびに、私といたしましては、おべっかを使う人というのは、女性のことを愚か者と考えたがっているみたいに、あるいは、愚か者にしたがっているみたいに思えてならないのです。

私の冷淡な対応ぶりを残念がっておられます。その冷淡さゆえに、好意を寄せてくれるよう期待をかけることの出来るものとしては、今私が身内の者たちから受けておりますけしからぬ仕打ち以外にはなくなるからだ、というのです。

不作法な振舞いや抑えのきかない言動をお咎めした点につきましては、自分には何が言えるだろう「と、あの方は問うておられます」。完全に納得してもらえるよう、身の証を立てるわけには行かないが、根が率直な質だから、弁解するつもりもない。ただ、鷹揚な気質について、改心を求める心からというより、自分の立場を守ろうとする気持ちが欠けているためだと、厳しい受け止め方をされたのには言葉もないほど驚いている。私が持ち出しているような品行に関する異議の数々は、尤も至極な提起とはいえ、これまで出喰わしたことのないものであり、それらについては回避するつもりである。ご自分が約束したのは、他でもなく、私の導きによって心を改めるということではないのか、また、改めねばならない欠点、それも、重大な欠点がないのであれば、どうして約束をする必要があるのだろうか、と尋ねておられます。ご自分としては、過ちを認めるのは悪い兆しではないと考えたい。もっとも、私の厳格な道徳意識からすると、悪い兆しという解釈になっているのだろうが、というのです。

家の者から情報を得ておられる点につきましては、仕返しにそのような手を用いるのは間違いだという私の判断の仕方に対しまして、私が正しいのだろうと（「容赦のない」正しさ、という言い回しでしたが）あの方も考えておられます。ご自分の気質からして、他人の私事を好んで詮索するような人間では決してないが、事情が事情であり、また、身内の者たちの異様な振舞いを考えれば、大目に見てもらえるものと思う。手段の善し悪しも顧みずに、あの方への悪意から、私に不利な目論見を強行しようと夢中になっている家族の動静を掴んでおくのは、事に当たる上で大いに必要なのだからなおさらだ。天使のような振舞いをする者は天使を相手に選ぶべきであって、ご自分としては、「善をもって悪に報い

る」などという至難の技は未だ身につけていないし、私が受けている仕打ちを見ると、そのような修養に励む気持ちにはますますなれない。あの連中ときたら、その足下に身を晒しでもしようものなら、私にしているのと同じように、あの方をも踏みつけにするつもりでいるのだから、とおっしゃるのです。

結婚というものについて、これまでは慎みもなく笑いの種にしてきたことを認め、弁解しておられます。近頃はそんなに軽々しく扱ったりはしないとのことですが、遊び人や才子気取りの連中の間ではすっかり言い古されている話題なのだそうです。浅薄で中身を伴わない、まったく無意味で陳腐な話ですから、そんな話を自分から持ち出したことを深く恥じているというのです。社会の掟や秩序、それに、自らの先祖に対する馬鹿げた中傷であると咎め、血筋や家柄を誇りとしても不都合のないご自分にとっては、自慢とすべき同じような利点を持ち合わせない人たちに比べれば、責められるべき点が多いとおっしゃるのです。発言と行動の両面にこれまでよりも一層配慮する旨を約束しておられますが、もっともっと私の是認を受けるのに相応しい人間になりたいからであるし、また、幸運にも私のことを妻と呼べる日が訪れるものとして、とのことですが、私の導きが二人にとって等しく名誉をもたらし、同じ効果を上げるような素地が間違いなく心の中に出来上がっていることを、前もって知らせておきたいからだ、とおっしゃるのです。

アントニー叔父様のところへ移ることになれば、私のことは完全にこの世にいないものとして諦めるというのです。厳重な監禁や堀に囲まれた屋敷、チャペル、兄と姉の無慈悲さのこと、そして、一族の者たちに対する二人の影響力などを強い言葉で書き立て、私が連れ去られるのを妨げるためには一暴れせざるを得ないと、はっきり述べておられます。

私のためお母様に働き掛けてくださるとのことですが、ご親切で思いやり溢れるお骨折りによりまして、さもなければ追いやられかねません苛酷な窮状も避けることが出来るのでは、と願っております。お許しがあれば、貴女の元へ飛んで行きたいと思います。お母様と貴女のご指示がないかぎり、約束をしっかり守り、だれとも手紙のやり取りをいたしませんし、どなたにも会わないつもりです。

ここまでのところで筆を止め、例の場所に隠すことにいたします。次の点は申し上げるまでもありますまいが、

変わることなき愛と感謝の念を込めまして、貴女の

Cl. ハーロー

手紙　三十一

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

書類が無事お手元に届き、ほっとしております。高いご評価をいただきましたが、お言葉に相応しい人間になりますよう、努力する所存です。貴女のご判断と自分自身の心の両方を、同時に辱めるような真似をしてはいけませんからね。

ラヴレースさんからまた手紙が届きました。明日予定されておりますソームズさんとの面会のことをひどく心配しておられます。ラヴレースさんはこうおっしゃっています。あの破廉恥漢がそのことで得意満面になっているだけに、なおさら心配になる。あの男に好

都合となるよう、私に無理を強いたりしたら、それこそどんな目に遭うことになるか、あの男のところへ行って知らせてやりたいのだが、そんな衝動を抑えるのに四苦八苦している、とのことです。ソームズさんが新しい家財道具の件で実際に商人たちと話し合った旨を断言し、ロンドンでの交渉相手の名も挙げておられます。自宅の部屋につきましても「こんな嫌らしい破廉恥漢は、これまでいたでしょうか」、これは育児室に、あれは別の用向きにといった具合に、割振りまでしているというのです。

このような人間が愛を囁いてきましても、おとなしく耳を貸してなどいられるでしょうか。すっかり愛想が尽きてしまうことでしょう。それに、ぬけぬけとこんな準備をしてみたり、そのことを口に出したりなど、まさかなさるとは思ってもおりませんでした。およそ兄の考えにはそぐわない話ですからね。でも、この話題は避けることにいたします。

ソームズさんのこの図々しさをお知りになれば、ラヴレースさんの大胆さにもさほど驚かれはしないと思います。ご親戚皆さんに成り代わって、とのことですが、叔父の屋敷で私に加えられるよう目論まれております、紛れもない暴虐行為を是非避けてほしいと、それはそれは熱心なのです。そして、この厚かましい策士は、馬場の横手のひっそりとした林に通じる踏み越し木戸のところに、M卿の六頭立てのチャリオットを待機させておこうとさえ申し出ておられます。ご覧いただけるでしょうが、臆面もなく、贈与財産の書類は整えてあるだの、すぐにも乗馬出来る状態にして何人かを配置しておくだのと書いておられます。さらには、従姉妹のモンタギュー姉妹のお一人を馬車の中、あるいは、隣村のジョージ亭に待たせておくが、M卿のお屋敷か、ベティ夫人とかセアラ夫人のお屋敷、あるいは、ロンドンか、私の気の向くところへお供をさせるためにとのことです。そして、ご自分につきましても、私の課す指示や条件に従い、制限を守るとおっしゃるのです。

ご覧のとおりですが、もしも皆が私の気持ちを無視し、叔父の屋敷へ連れて行こうとするようであれば、動きを見張って待ち伏せ、武装したお仲間や使用人たちの力を借り、私を〈救出〉するのだ、などという言い方で息巻いておられます。しかも、私の同意が得られようと得られまいと断行するが、あの屋敷へ移ったが最後、望みは一切絶たれるのだから、とおっしゃるのです。

あゝ、私のハウさん、どなただってそうでしょうが、このようなことを考えますと、心配で心配でどうしようもないほど惨めな気持ちになってしまうのです。

まったくの話、疫病神ですね、男性というのは。どんな男の人のことであれ、私に何の責任があるのでしょう。男の人たちにいたしましても、一体私とどんな関わりがあるというのでしょう。このような羽目に陥りましたのは自ら招いたことだとか、自分の軽はずみさから来たことだとかいうのでしたら、これも報いと言えましょう。私が心の底から願っておりますのは　…　それにいたしましても、自分のことを不幸せだと感じ、逃れる術もないと思っております時には、私たちというのはいたずらに願いごとばかりを思い浮かべてしまうものですね。

でも、お母様のご親切が私の拠り所です。従兄弟のモーデンが戻りますまでの間、どちらの側からにせよ、土壇場に追い詰められますのを避けることさえ出来ますなら、必ずや和解の道は開けると思うのです。すべては丸く収まるはずなのです。

ラヴレースさんへの手紙を隠してまいりました。今後とも、私の迷惑となるようなことは絶対にしない、とおっしゃるのですから、向こう見ずな行動、ソームズさんを訪ねるよ

うな真似は、刃傷沙汰にならないとも限らないのですし、何としても避けてくれるよう説いてございます。

あちらの男性の妻になるくらいなら死を選ぶと、重ねて約束しております。

私への仕打ちがどのようなものであれ、心配の種となっております面談の結果がどうであれ、身内の者に暴力を振るうような出過ぎた行動は断じて許せない旨を主張しております。そして、叔父の屋敷への引越しの件にいたしましても、私の心を強く捉えているのだから、父の権威に盾突くのも当然の権利なのだと考えるような、そのように思い上がった態度をお取りになるのは極めて不愉快である旨を表明しております。もっとも、何とか引っ越しを避けるため、祈りを欠かすことはないし、策を弄することも辞さず、自ら体調を崩すことさえ考えているとお話ししてあります。

火曜日ですね、明日は。恐れている日というのは何と早く来てしまうのでしょう。二十四時間に亘る深い眠りに襲われ、知覚の働きを失ってしまえるものなら、と願ったりしております。でも、その次の日も火曜日と同じことですね。怯えを誘うという点では、その効果も目的もすべて変わりないわけですから … こんなにも気掛かりな面談ですが、その結末が分かります前にこの手紙がお手元に届きました場合は、どうか私のために祈っていただきとうございます。

貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　三十二

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

火曜日　午前六時

いよいよ今日です。無事終わってくれることを願っております。惨めな夜でした。間もなく始まります面談のことが頭を離れず、ほとんど一睡も出来なかったのです。皆の同意を得て面会の日延べをしたわけですが、厳めしい感じを余計に強めることになってしまいました。延ばさずにおりましたなら、さほどでもなかったのかもしれません。

用心深い心というのは、有難がって求めるようなものではございません。貴女のような好ましい快活さを、つまり、将来について取り越し苦労をすることなく、現在を楽しむ力を与えてくれるような快活さを、同時に持ち合わせておりません場合にはね。

火曜日　十一時

ハーヴィー叔母様の訪問を受けました。ベティが、思ってもいらっしゃらなかったご婦人が来られて、朝食をご一緒なさいますよと、てっきり母のことだと思わせるような、いつもの人を驚かせる口振りで教えてくれたのです。このため、女の人が二階へ上がってくるのを耳にいたしました時には、母だろうと想像し（ずいぶん長いこと顔を出しますのを禁じられておりました後ですから、こんなふうに訪ねてくれる動機の説明がつかなかったのです）、私はすっかり動揺しておりました。ですから叔母は、部屋に入りますとすぐに私の取り乱した様子に気づき、最初の挨拶を済ませますと、次のように切り出したのです。

「あら、驚いているみたいね。思慮深いお嬢さんというのは、まったくの話、何でもないことを妙に気に掛けるものなのね。一体全体」と、私の手を取りながら、「何が問題なのかしら。まあ、どうしてこんなに震えてばかりいるのでしょう。そんなことでは、どなたの前にも出られませんよ。さあさあ」と、頬にキスをし、「元気を出すんですよ。間もなく始まる面談のことで、いわれもなしに慌てふためいていますが、終わった時には、他の嫌なことについても、これを材料に判断してみることですね。そして、自分のことを笑うと良いわね。悪いほうにばかり想像力を働かせているのをね」と言っておりました。

私は次のように申しました。私たちが心に強く思い描く事柄はすべて、その時にもたらされる効果という点では、他人の目にはそのように映らないとしても、本人にとっては絵空事以上のものなのだということ、昨晩は一時間も寝られなかったこと、見張りに付けられている無礼な娘の口振りは、母が顔を見せてくれると思わせるものであったため、自分としてはすっかりまごついており、だれにせよ、気の進まない相手と顔を合わせられるような状態とはとても言えない、といったことをです。

どうしてそういうことになるのか、訳が分かりません、と叔母は言っておりました。ソームズさんのほうでも、私に負けないくらい動揺してしまうかもしれないと、昨夜言っていたのだそうです。

「それじゃあ、叔母様、どちらの側でもそんなに嫌がっている面談なのでしたら、一体だれを喜ばすためのことなのですか」

「あなたたち両方のためだと思いますよ。最初の動揺が鎮まりました頃にはね。私にも何度もあったことだけど、一番懸念して始めたことが、一番幸せな結果をもたらすものなのですよ」

「予定されております訪問に満足の出来る結末があるといたしますと、ただの一つだけです。つまり、これが最後になるという点を両方の側が納得することですわ」

すると叔母は、皆の説得を受け入れる気持ちがない場合には、私にとってどれほど不幸なことになるのかを縷々説明し、ソームズさんを迎えるに当たっても、これまでの教育に相応しい態度を見せてほしいと言い張るのです。そして、ソームズさんが私との面会の見通しについて気を揉んでおられるのも、愛情と畏敬の念があればこそだと断言し、真の愛情にはいつも恐れる気持ちや敬う気持ちが備わっているということ、また、空威張りで図々しく言い寄ってくるような男には、後押しをするに値する者は一人としていない、といったことを口にしておりました。

これに対し、私は次のような返答をいたしました。気質というものを考えに入れなければならない。気概に溢れた人はそれらしく振る舞い、卑しい真似は出来ないものだが、卑屈な人間は、利益が見込める場合にはどんなことにもペコペコし、権力を振るえる相手や何も期待出来ない者に対しては、横柄な態度を取るものだということ。私にとっては今態度を決めなければならない問題ではないということ。この件に関しては、お話し出来るかぎりのことは申し上げてきたということ。この面談は無理強いされたものであり、実際のところ、無理強いして構わない立場の人たちから出た話であって、辛い思いをしながら自分の気持ちを圧し殺して承諾したものであるということ。そういうわけでもあり、今回の件では、我が儘からではなく、嫌悪の情に動かされているのだということ。従って、面談から得られるものといえば、大変心配しているところだが、これまで以上に惨い仕打ちを

加えるための口実以外にはない、といったことをです。
　すると、だれかに夢中になっているからだ、偏見があるからだと、叔母がお咎めになりました。子の務めを説き聞かせ、たくさんの素敵な美質に恵まれているのに、今回のことでは、すべてを飾ることになる従順さに欠けていると言うのです。たとえ気が向かないとしても、おとなしく従うことこそ立派なのだと力説しておりました。これまでソームズさんには不躾な態度を取ってきたこともあり、それだけになおさらお会いしたくない旨のことを漏らしましたところ、あの人の寛容な気質のこととか、計り知れないほど私を大事に思っていることだとか、その種の訳の分からない話をしておりました。
　かつて経験がないほどの苛立ちを感じましたので、叔母にそのとおり話し、許しを請いました。ところが、叔母はこんなふうに言っておりました。だとすると、うまく繕っていることになる。目に付くのは少し震えているところだけだけれど、それは、求婚者との初対面を迎える若い女性には普通のことで、こんな形でソームズさんと会うのに同意したのはこれが最初なのだから、私の場合は初対面と呼んで構わないだろう。でも、次の機会には　…　といった具合にです。
「何ですって、叔母様」　終わりまでも聞かず、私は尋ねました。「それじゃあ、私はそのような立場でお会いするように思われているのでしょうか」
「勿論そうですよ、あなた」
「勿論そうですよって、叔母様　…　じゃあ、やっぱり辞退させていただこうと思います。そんな条件で顔を見せるよう、あの人が期待しておられるのでしたら、私のほうでは会うつもりはございませんし、お会いするわけにもまいりませんわ」
「几帳面ね。形式ばっているのね。ただの形式主義ですよ、あなた。あなたが（日も場所も時刻も）決めたことですし、目的も承知の上での話でしょう。それをただの儀式であって、何の意味も持たないことだなどと受け止めてもらえると思っているのですかね。いいですか、お父様、お母様、おじ様たち、そして、だれもがこの約束のことを、あなたが皆の意向に従う最初の一歩と見ているのですよ。ですから、引き下がるのじゃなくて、避けられないことに立ち向かって、手柄を立ててほしいのよ」
「あゝ、何て嫌らしい卑劣漢なのでしょう。御免なさい、叔母様。でも、この私がそんな目的であの男と面会するように思われているなんて　…　また、あの男がそんな夢を膨らませているなんて　…　でも、他の人はいざしらず、あの男がそんな夢を抱くはずはございません。皆さんに話しているとおり、私に会うのを怖がっているのですから、それははっきりしていることです。それだけ厚かましい望みを持つくらいでしたら、そんなに恐れたりはしないはずですもの」
「いいえ、望みを持っていらっしゃいますし、それだけの根拠もあるのです。ただ、前にもお話ししたように、あの人の恐れは崇拝の念から来ているものなのですよ」
「崇拝の念からですって　…　無価値さからのものですわ。あまりにもはっきりしたことですから、他の皆さんは勿論、あの人自身にもそれは分かっているのです。私に大金を出そうと申し出るのはそのためですわ。だからこそ、はっきり分かっている値打ちの無さを贈与財産で埋め合わせようというわけでしょう」
「まあ、無価値さですって　…　ちょっとお待ちなさいよ、あなた。それだと、ずいぶんと自分を高く買っているように見えやしないかしら。そりゃあ、あなたの立派なところ

は、私たちだれもが大いに高く買っておりますよ。でもね、身内の者が認める以上の取り柄があるのだとしても、それを独り占めにするのは少しばかり控えても間違いじゃないと思うのだけれど　…」

「残念ですわ、叔母様。容姿の点でも考え方でも、ソームズさんよりも優れた男性に自分は相応しいのではないかと想像したりいたしますと、傲慢に思われてしまうのですからね。それに、資産についてですが、有難いことに、そのような貧弱な口実からあの人のために持ち出されますものは、私、そのすべてを軽蔑しているのです」

話し合っても無駄だと、叔母は言っておりました。皆が期待していることは分かっているはずだから、と言うのです。

私には本当に分からなかったのです。自分に出来ることでしたら、そのすべてに応じる気持ちがあることを示そうとして承諾しただけの話ですから、そんな奇妙な望みを抱くなんてことは、私にはとても考えられなかったのです。

叔母に言わせますと、私は皆の願いを入れる気持ちになり始めていると、そのように身内の者たちが考えていることは、次の点から容易に察しがついたはずだというのです。つまり、この前の日曜日の、兄と姉の庭での優しい態度のことや、その後で姉が私の部屋を訪ねたこと（もっとも、二度とも、私の応対ぶりは期待とか予想とかのいずれをも越えた堅苦しさだったというのです）、それと、同じ日の午後にありました伯父からの愛情溢れる訪問のことなのですが、これは、これまで伯父の好意を受けました時に私がいつもしていたような、感謝の気持ちに溢れる迎え方ではなかったとのことでした。ただ、伯父のほうでは、親切にも、閉じ込められていることへの不満に原因を求め、また、これまで盾突いていたことでバツの悪い思いをしないためにも、徐々に折れてくるつもりでいるのだ、と考えているというのです。

あの時はずいぶんびっくりいたしましたが、ご覧のとおり、あの日曜日の出来事には陰険な駆け引きがあったのです。それに、リーウェン師が訪問を許されながら、お話をなさるためにいらっしゃったとばかり思っておりました話題に入られるのを慎まれた理由につきましても、お分かりいただけることでしょう。私がやっと認めたと思われております点に関しまして、わざわざ話し合う必要はないということだったようです。それから、自分たちの見せ掛けの優しさについて、兄と姉がどれほど偽って伝えていたのか、その点もお分かりいただけるでしょう。私への敵意がとても強かったらしく（二人が優しそうな振舞いをいたしますのには、それなりの下心があったわけですが）、恋人同士みたいに腕を組んだりいたしまして、私の気持ちを逆撫でせずにはいられなかったほどですのにね。その後私のケンピスを借りに来ました際の、姉の態度もそうであったようにです。

私は両手を差し上げ、天を仰ぎました。そして、「この仕打ちを一体どう呼んだら良いのでしょう。そんな卑劣な手段で目的が叶えられるとも思えません。すべてがだれの考えなのか、私には分かっているのです。ジョン伯父様に一肌脱いでいただいて、家族の残りの者たちを黙って従わせてしまう人ですもの、私の不利になるようなことならどんなことでも、皆さんに対してお出来になるに違いありませんわ」と言ったのです。

期待を持たせてしまったからには、何を話しても、どんな悪口を並べても、無駄なことだと、もう一度叔母は言っておりました。私は皆の願いを入れたがっているのだという解釈が早計だったなどとは、皆に思わせないようにしてほしいというのです。今引き下がっ

たりいたしますと、まったく歩み寄りを見せなかったのよりももっとまずいことになるのは確かだ、とも言っておりました。

「歩み寄りですって、叔母様。どうして歩み寄りなどとおっしゃることがお出来になるのでしょうか。これは私を陥れるための企みなのです。お粗末で汚い罠ですわ。御免なさい、叔母様。叔母様も関係していらっしゃるなどと言っているのじゃないんです。でも叔母様、是非とも教えていただきたいのです。この恐ろしい面談の場に、母は顔を見せてはくれないのでしょうか。それくらいの願いは聞き入れてもらえないのでしょうか。その場を和らげるようにしていただくためだけにせよ …… 」

「その場を和らげるようにしていただくですって …… 」 叔母が私を遮りました。「お母様も伯父様も、このたびは決して顔をお出しになるおつもりはないでしょうね」

「まあ、叔母様、それじゃあ、今度の面談に私が同意いたしましたのを、どうして皆は歩み寄りと考えたり出来るのでしょうか」

このように痛いところを突かれたものですから、叔母は怒りだし、「手に負えない娘ですね、クレアリーさん。頭のほうはよく働くんだから、従順な気持ちも同じくらい働かせてくれたら、あなたにとっても皆にとっても、目出度し目出度しということになるのでしょうにね。私は戻らせてもらいますよ …… 」と言うのです。

「怒ったままでは嫌です、叔母様」 私は口を挟みました。「私の気持ちといたしましては、面会がどんな結果に終わるにせよ、また、結果を見ずには済まないのですから、だれにとっても期待外れになってはいけないということを申し上げたかっただけなのです」

「まあ、あなたという娘は …… 梃子でも動かない娘のようね。ソームズさんはあなたの言ったとおりの時刻にお見えになりますからね。もう一度だけ言いますから、覚えておくのですよ。一族皆の幸せが、そして、あなた自身の幸せが今日の午後にかかっているということです」

そう言い残すと、叔母は大急ぎで降りて行きました。

ここで筆を置きます。どのような形で再び筆を執ることになりますか、あるいは、何時のことになりますか、予想出来る立場ではございませんし、まして、決めるわけにもまいりません。言い様もない不安に包まれております。お母様からの嬉しいお知らせもなさそうですしね。最悪の事態を恐れながら、ここまでのところを隠してまいります。

さようなら。私の最高の、というよりは、私の唯一人のお友達 ……

CL. ハーロー

手紙　三十三

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

火曜日　夕刻、そして、夜を徹して

そうです、私は生きて、ここにおります。でも、一体いつまでここにいられるのか、あるいは、生き長らえていることが出来るのか、私には分かりません。書くことは山ほどございますし、その時間はほとんど無さそうです。それでも、生意気なベティがまた私をう

ろたえさせました様子につきましては、どうしてもお知らせしなければなりません。ソームズさんからの伝言を持って来た時のことです。先の手紙で覚えていらっしゃるとは思いますが、すでに私は、さらに驚かされる必要などない状態に陥っておりましたのにね。

あの娘は両腕を広げ、指を思い切り開いた手を差し上げながら、精一杯の早口でまくしたてました。「お嬢様、お嬢様、お嬢様。どうぞお嬢様の客間のほうへいらしてくださいませ。皆さん一人残らずお揃いです。ソームズ様もいらっしゃいますわ。立派なご様子といったら、まるでお殿様ですわよ。素敵な白い鬘を被り、縁飾りのある立派なシャツと襞飾り、銀の縁取りの上着に、チョッキはモールを施してしゃきっとしてますし、それはそれは堂々としたお姿ですわ、本当に。こんなお変わり様、お嬢様もご覧になったことはないでしょうね。それにいたしましても、お嬢様（と、頭を振りながら）、あんなにも悪口をおっしゃってしまったのはまずかったですわね。でも、何てことございませんわ。うまく取り繕う手はご存じですもの。手遅れでなけりゃよろしいのですけど」とです。

「無礼よ。そんなふうに騒々しく上がって来るように言い付けられたのかしらね」　私は扇子を手に取り、扇いでおりました。

「まあ、何てことでしょう。上品なお嬢様たちって、どうしてすぐに取り乱してしまわれるのでしょう。お気持ちを損ねるとか驚かすとか、どちらのつもりもございませんでしたわ、私、本当に」

「皆さんがお揃いだと言うのね。で、皆さんというのはだれのことを言ってるの」

「あら、お嬢様」と、左の掌を開いて差し出し、勿体ぶった仕草で、そして、生意気に笑みを浮かべながら、一人名を挙げるごとにもう一方の人差し指で軽く叩いてみせるのです。「お父様がいらっしゃいますし、お母様もいらっしゃいます。ジョン伯父様、アントニー叔父様、ハーヴィー叔母様がいらっしゃいますわ。私のお嬢様、それに、若旦那様もですわ。そして、お嬢様のお名前を口にされたからでしょうね。ソームズ様が立派な廷臣みたいなお姿で立ち上がられ、〈ベティさん［こう言いながら、人真似が得意のあの娘は腰を曲げ、頭を掻いて見せたのですが、その無様さは、真似ようとしている相手にそっくりだったのだろうと思います〕、ひとつお嬢さんにお伝え願えませんかな。お言葉をお待ちしておりますとね〉とおっしゃられたのですわ」

腹の立つ娘ではないでしょうか。私は苛立たしさに震えが止まらず、立っているのもやっとの有り様でした。私のほうでも悪意に駆られまして、そのような態度を取るのは、女主人の言い付けがあってのことだろう、おじたちから同情してもらえるだけの落ち着いた振舞いが出来なくなるように、私を怯えさせる魂胆なのだろう、と言ってやりました。

「どのようになさいます、お嬢様」と、私が置いた扇子を手に取り、傍まで来て扇ぎながら、「さあ、マダム、どうぞ　…　」などと、あの娘はぬけぬけと言うのです。

「余計な真似は止してちょうだい。だけど、家族全員があの人と一緒に階下にいると言っていたわね。じゃあ、皆のいるところに出るということかしら」

「いらっしゃった時に皆さんが残っておられるかどうか、それは存じませんわ。私の感じでは、ソームズ様が私に指示なさった時には、皆さん席を立たれようとしていたようですけど　…　ところで、あのお方へのお返事は何と申し上げたら宜しいのでしょう」

「行くわけにはまいりません、と言ってもらうわ。でも、そうね、これが終われば済むことだわね。伺いますと伝えてちょうだい。お会いいたしますとでも、すぐにまいります

とでも、好きに言ったらいいわよ、構わないから。それはそうと、扇子を返してちょうだい。それから、お水を一杯持ってきてほしいわ」

あの娘が出て行きましたので、私は休むことなく扇子を使っておりました。身体が燃えるように熱かったのです。咳払いをしたり、出来るかぎりのことはしてみました。あの娘が戻ってまいりましたので、お水をいただきました。そして、じきに心が鎮まる見込みもありませんでしたので、あの娘を階下に行かせ、慌てて後を追いかけました。震えが激しい状態でしたから、急がずにおりましたなら、果たして降りて行くことすら出来たかどうか、確信はございません。体というものは、心が乱されております時には、本当にお粗末な、手応えのないからくり細工になってしまうものですね。

私の客間と呼び慣わしておりました部屋には、出入り口が二つ付いております。私が片方のドアから入ってまいりますと、身内の者たちがもう一方のドアから急いで立ち去りました。姉のガウンだけが目に入りましたが、そっと立ち去りました最後の者だったのでしょうね。叔父のアントニーも一緒に出て行ったのですが、もうすぐお聞かせいたしますように、間もなく戻ってまいりました。皆は隣の客間に控えておりまして、二つの部屋を隔てるものといえば、板張の仕切りだけなのです。二つの客間が一部屋だったのを覚えておりますが、随意にそれぞれのお客様をお迎え出来るようにと、私たち女の子のことを考えて二部屋に仕切ってくれたのです。

私が入りますとすぐに、ソームズさんが近寄ってまいりましたが、ペコペコと頭を床につけんばかりで、顔の造作一つ一つに狼狽している様子が看て取れました。喉を絞るようにして、「マダム」という言葉を半ダースほど繰り返した後、「まことに申し訳なく思う次第です」とか「はなはだ気掛かりなものでして」とか言っておりましたが、「不幸なことには　…　」という言葉の後は口を噤んでしまいました。すぐには台詞を完結させることが出来なかったのでしょう。

これを目にいたしまして、少しばかり気持ちが落ち着きました。敵が怯むと勇気が沸いてくるものですが、それが今はっきりと分かったのです。でも、急拵えの猛者などというものは、本当のところは、相手よりもはるかに臆病者なのかもしれません。

私はあの人にくるりと背を向け、暖炉脇の椅子の一つに腰を下ろして扇子を動かしておりました。後で思い出してみますと、ひどく生意気な態度だったに違いありません。あの人のことに少しでも考えを向けたりいたしますと、それだけで自分を見下げてしまいそうな気持ちだったのです。でも、徹底的に心の底から嫌いなのです。何も申し上げることはございません。

あの人は、私が階上でいたしましたように、五、六回咳払いをしました。そして、それでやっと言葉が出たのですが、ご自分の狼狽振りが、私には一目瞭然でしょう、というものでした。その言葉をきっかけに、二言、三言述べておりましたが、叔母の指南を受けていたものと確信いたします。何しろ、畏敬の念ゆえのこと、最高至上の女性への「この言い方ですからね、本当に」崇拝の念からきたことだというのです。そして、本題に入ります前に「願わくは」を三度繰り返した挙げ句、やっと口にいたしましたのは、まことにお心の広い人ゆえ(寛大さこそが私の特性だとおっしゃるのですが)、このような　…　このような　…　愛情の真の印を表明したからといって、軽蔑なさらないでいただきたい、という言葉だったのです。

「拝見いたしますところ、確かに、少しお気持ちが乱れておられますね。このたびお会いいたしましたのも、いわば強要されてのことですが、そのご様子から考えますと、恐れていたよりも喜ばしい結果が得られそうな気もいたします」と、私は申しました。

あの人はもっと気持ちを奮い立たせようと咳払いをいたしました。

「忍耐心と熱意とによりまして、いつの日にか貴女様のご愛顧に与れるのだという希望が少しでも与えられております時に、貴女様の取り柄の数々に気づかぬあまり、また、それらに心惹かれることも一向にないまま、尊敬すべきご家族の皆様から賜っております信用とご賛同とを軽々しく無にしてしまうような、そんな人間を思い浮かべることなどお出来にはならないはずです」

「そのような希望を抱かれますのには、今おっしゃった信用と賛同があればこそなのだということ、それは十分すぎるほどに承知いたしております。でなければ、ご自分の幸せということを少しでも大切にしておられるのでしたら、すでにはっきりと申し上げました事柄、私自身はもとより、貴方のお立場のためにも申し上げざるを得ないと考えております点に逆らって、なおも固執されるようなことはお出来にならないはずですからね」

あの人に言わせますと、同じように強い嫌悪の情を見せていた女性が、ある者は同情心から、また、ある者は身内の説得を受けて気持ちを変え、その後は大層幸せになったという例をたくさん目にしているし、耳にしているものはさらに多いとのことで、自分たちの場合もそのとおりになってほしいものだというのです。

「これほどまでに重要な事柄につきまして、綺麗ごとで済ませるつもりは毛頭ございませんが、それでも、これからお話しいたしますように、率直に気持ちをお伝えせざるを得ませんことは残念に思っております。ご承知いただきたいのですが、貴方からの求婚には克服しがたい異議を感じているということでございます。その点は既にはっきりと口に出してまいりましたが、前例のない真剣な態度であったものと信じております。何故だとお考えでしょうか。私と同じような立場にある若い女性で、貴方のために私が被ってまいりましたような仕打ちを受けた者は、前例がないと考えるからでございます」

「いずれは、マダム、貴女のご同意も得られるものと　…　そこに希望を寄せているのです。得られないとすれば、あまりにも惨めです」

「それでは、言わせていただきますが、お独りで惨めになられるほうが、二人の人間をそうなさるのよりは良いことだと思いますわ」

「私にとって不利なことをいろいろ耳にしておられるのかもしれませんね。敵のいない男はおりません。どんなことをお聞き及びなのか、宜しければお教えいただきたいものです。そうしてくだされば、自分の落ち度は認め、改めますし、あるいは、下劣な中傷に晒されておりますことを納得いただくようご説明いたしましょう。また、何か私の口から出たもので、お気に障ることを耳に挟まれたことがおありなのだと思いますが、多分、不用意に漏らした言葉でしょう。ただ、貴女を高く買っておりますことを示すものに他なりませんし、望みのある間は引き下がらないつもりだと申したのです」

「確かに貴方にとって不都合なお話をいろいろ耳にいたしております。それに、貴方ご自身のお口から出たもので、私が漏れ聞いておりますお言葉も、とても喜べるようなものではございませんでした。でも、私にとりましては何の関わりもないお人でしたし、今後ともそのとおりなのですから、どちらにつきましても気に掛けずにいたのです」

「それは残念なお言葉ですね、マダム。こちらに過ちがあるのであれば、どのようなことでもおっしゃっていただきましょう。改めるのに吝かなものはありません」

「それじゃあ、今回のこの過ちを改めていただきとうございますわ。女の一生にとって一番大切な事柄ですのに、軽蔑を感じるような動機のために、また、尊敬いたしかねる人のために、若い娘が無理を強いられるようなことは望まないでほしいのです。お申し出いただきましたことすべてに優る暮しを独りで出来る立場ですし、不自由なく幸せになりますためにも、持ち合わせておりますもの以上には求めない考えなのですから」

「私が求婚を取り下げた場合、お幸せになれるとは思えないのですがね、マダム。と申しますのも …… 」

「貴方には何の関係もないことですわ」 私は遮りました。そして、「要求を取り下げてくださるだけで済むことです。私を苦しめようとして、別の男の人を担ぎ出しますのが妥当と判断されることになりましても、貴方に責めが及ぶわけではありません。むしろ、感謝されて当然なのですし、私は心から感謝申し上げたいと思っておりますわ」とお話ししたのです。

あの人は口ごもり、途方に暮れた様子でした。そこで、忌憚のないところをさらに強い言葉で、もっと個人的な事柄について申し上げようとしたのですが、ちょうどその時、叔父のアントニーが飛び込んでまいりました。

「これ、これ、お前。そっくりかえって腰を下ろした格好は、謁見しておられる女王様じゃないか。それも、横柄な謁見の仕方だ。ソームズ殿も、何でそんなふうに畏まって立っておられるのですかね。お帰りの時までには、もう少し懇ろにしておられるところを拝見したいものですな」

叔父が入ってくるとすぐに、私は立ち上がりました。片膝を折って歩み寄り、「ご挨拶を申し上げます、叔父様。本当に長いことお目にかかっておりませんでしたもの。何卒、ご愛顧を、そして、憐れみのお心を賜りたく存じます」と申しました。

「皆の愛顧は得られるのだよ、お前。それに相応しい振舞いを弁えればな」

「皆さんのご愛顧に仮にも値するというのでしたら、今こそその時なのです。ひどい仕打ちを受けてまいりました。受け入れていただいて当然の、そして、求められるはずもないような提案を申し出ているのです。お目通りを禁じられたり閉じ込められたり、こんな不面目な目に遭わねばならないなんて、私は一体何をしたというのでしょう。この世での幸せ、そして来世の幸せに関わる事柄ですのに、思いどおりに振る舞いますのを許していただけないなんて …… 」

「クレアリーや」と、叔父が答えました。「これまでのお前は、何から何まで自分の意向を通してきたではないか。それゆえなんだよ、両親の意向がそんなにも重荷に感じられるのはな」とです。

「私の意向とおっしゃるのですか。お言葉を返すようではございますが、私の意向とおっしゃいましても、今までは父の意向に他ならなかったのではないでしょうか。他ならぬ叔父様やジョン伯父様のご意向だったのではないでしょうか。ご意向に従い、お気持ちに沿いますことを私は誇りとしてはいなかったでしょうか。何かお願いしたいことが出てまいりましても、まず初めに、お認めいただいて構わないことかどうか、腰を下ろして考えてきたつもりでおります。今度の件でも、ご意向に従う気持ちをお示しするため、独身を

通すことを提案申し上げなかったでしょうか。おじい様からの賜り物は放棄し、お父様のご厚志にすがるつもりと申し出はしなかったでしょうか。それも、父に背くようなことがあれば、いつ取り下げられましても構わないのです。何故なのでしょう、叔父様。この身の幸せに深く関わります事柄ですのに、どうして惨めな思いをさせられなければならないのでしょうか」

「おじい様の地所を譲り受けたいのではないのだよ。お前に独り者になって欲しいわけでもない。私たちの真意は分かっているはずだし、お前の目的も見当はつく。皆お前のことは本当に愛しているのだから、いいかな、お前の目的が日の目を見るくらいなら、墓の中までお前について行くほうがはるかにマシだと思っているのだよ」

「お父様のご同意、それに叔父様や皆さんのご同意がないかぎり、決してどなたとも結婚しないことをお約束いたします。私の言葉に疑いを向けられるような真似をこれまでいたしましたでしょうか。誓えとおっしゃるのでしたら、どのようなことでも天地神明にかけまして　…　」

「それは結婚の誓いだよ」　叔父が大きな声で割って入りました。「この殿方へのな。そうするのだ、そうしてもらうぞ、いいな、クレアリー。逆らえば逆らうほど、お前にとっては分が悪くなるのだからな」

この言葉には、当人を前にしてのことですし、その当人もこれで力を得たような素振りを見せていたものですから、私といたしましてはとても腹が立ってしまいました。

「それでは、叔父様、本当にお墓へすぐにもついて来ていただきましょう。この世で一番残酷な死でも厭わないつもりです。一生涯惨めな思いをするのに同意するくらいでしたら、ご先祖様たちを安置してございます恐ろしい地下納骨堂の中に入り、煉瓦で封じ込められてしまいますのにさえ同意しようと思います。それから、ソームズさん」と、あの人のほうに向き直り、「申し上げることに注意していただきたいのですが、貴方と一緒になっていつまでも惨めな思いをするくらいでしたら、このような死に方、あるいは、どのような死に方でも［すぐに終わるでしょうから］、私は厭わないつもりです」と申しました。

これを聞くと、叔父は烈火のように怒り出しました。ソームズさんは呆然としている様子でしたが、叔父はその手を取り、窓のほうへ連れて行きました。「こんなことで驚いてはいけませんよ、ソームズ殿。気にしてはいけません。ご存じのとおり」と、罰当たりな言葉を口にしながら、「女というものは、怒りに任せるとひどいことを言うものです。嵐だってこれほど荒れ狂うことはありませんよ。これだけ移り気なことはありません」などと言っているのです。そして、もう一度神の名を持ち出して誓い、「こんな恩知らずな娘のことをわざわざお待ちいただけるのでしたら、あいつの航路はきっと変えさせてみせます。それは請け合いますよ」というのです。そして、三度目になりますが、もう一度汚い言葉を添えておりました。

それから、叔父は私のところへやってまいりましたが（自分のこととはいえ、激情のためにひどく心を乱しておりましたので、一番離れた窓際へ身を寄せていたのです）、今にも殴り掛からんばかりの様子でした。顔は恐ろしくひきつり、両の拳を握りしめ、歯も食いしばっているのです。そして、怒りのあまりにかすれた声で、「さあ、さあ、さあ、クレアリーよ、どうあっても、絶対に、きっとソームズ夫人になってもらうぞ。皆そのつもりでいるのだ。それも、どんなに遅れても一週間以内にだ」と毒づき、また罵りの言葉を口に

いたしました。四度目のことです。叔父とはいえ、ひどい罵り方でした。

「残念ですわ、叔父様」私は申しました。「そんなにも感情的になっておられるお姿を拝見いたしますのは。すべて兄に煽動されてのことだというのは、嫌になるほど分かっているのです。私には強要しようとしている子の務めですのに、自分では実行しようともしないのですからね。引き下がらせていただくのが一番良いことだと思います。もっと叔父様を怒らせてしまいそうですもの。出来ることでしたら、叔父様のお気持ちには従いたいと考えております。でも、これは私にとりまして譲ることの出来ない点ですし、打ち克ちたいと願うことさえいたしかねる事柄なのです」とです。

当の相手を目の前にしているわけですし、このように強く断言いたしますのを、どうして避けたり出来たでしょうか。

私は入る際に通りましたドアから退室しようといたしました。二人の殿方は互いの顔を見詰め合っておりました。どうしたら良いものか、私を引き止めるべきか、そのまま行かせるべきなのか、まるで互いの気持ちを窺っているかのようでした。ところが、ドアのところで、こともあろうに、兄と出くわしてしまいました。やり取りの一部始終を兄は聞いていたのです。

まったくの不意打ちでしたから、私は驚いてしまいました。兄は私の手を取り、乱暴に握りしめてこう言うのです。「戻るのだよ、可愛いお嬢さん。お戻りいただけますかな。今暫くは、煉瓦で封じ込めるようなことはありませんよ。煽動家だというお前の兄が守ってみせるさ」とです。そして、俯いている私の顔を覗き込み、「あゝ、堕天使さんよ、こんなにも優しい顔をして、その強情さだからな」と、私のうなじのあたりを叩くのです。「まさしく女だよ。まだその若さでな。だがな、あの放蕩者とは一緒にはさせないぞ。覚えておくのだな」と、まるで、あの方を前にして慇懃無礼な態度に出ようとするみたいに、大きな声で囁いておりました。そして、声を高くして、「罪を償わねばならないな。この立派な紳士が、ご親切にも、お前を破滅から救ってくださるとおっしゃるのだ。いずれ、氏の〈ご芳情〉に感謝することになるだろう。あるいは、感謝すべき理由も出来ることだろう」と言っておりました。兄の非情な言葉でした。

兄は私をソームズさんのところまで連れて行き、私の手を握ったまま、あの人の手を取り、「さあ、逆らってばかりの娘ですが、この手を受け取っていただきましょう。お渡しいたしますよ。引き渡されたことは、この娘も一週間で認めることになりましょう。でなければ、誇りに出来る父も母も、そして、おじたちも、この娘にはいないことになりますからね」と言うのです。

私は急いで手を引っ込めました。

「何ということをするのだ、この娘は」

「何をなさるのですか、お兄様こそ。何の権利があって、私の手を勝手に他人に委ねたりなさるのです。他の人たちのことは自由に出来ても、この私に勝手な真似は許しませんからね。とりわけ、この身に直接関わる事柄ですし、お兄様には少しも関係のないことです。これからだってそうですからね」

私は兄からこの身を振りほどこうといたしました。でも、あまりにも強く手を握られていたため、それは果たせませんでした。

「放してちょうだい。どうしてこんな扱いを受けなければいけないのかしら。男らしく

もない握り方をして、怪我をさせるつもりね。間違いないわ。痛いのよ。もう一度尋ねるけど、貴方なんかからこんな扱いを受けなければならないのは、一体全体どうしてなのかしら」と言ってやりました。

兄が私の手をぐるりと回しながら放り出しましたので、肩に痛みが走りました。泣きながら、私はもう一方の手をそこに添えておりました。

ソームズさんが兄を責めましたし、叔父も叱っておりました。

兄のほうでは、こんな天の邪鬼には我慢がならないし、入ってくる前に私が口にした非難の数々も聞き捨てに出来なかったのだ、と言っておりました。触れるに値しない女の手を返してやったまでのことだ、痛がっているのも私の手管の一つだ、というのです。

ソームズさんは、私が非情な仕打ちを受けるくらいなら、すべての望みを諦めても構わないのだと言い、二人に向かって私の弁護を申し出、深々と頭を下げておりましたが、その姿はまるで、仲裁に立つのを認めてほしいと言わんばかりでした。

「兄の乱暴から私を救うためでしたら、仲裁などご無用ですわ、ソームズさん」　私は申しました。「思いやりもなく、しつこく付き纏われるからこそ、あんな乱暴も引き起こされるのですし、不面目な仕打ちすべてもそれが原因なのです。そんな人に恩を着せられたくはありませんわ」とです。

「こんな梃子でも動かない頑固娘のために、ご親切にも仲立ちをしてくださるとは、ソームズさん、貴方もずいぶん心の広い人ですね。諦めずに求婚を続けていただくようお願いいたしましょう」と、兄が言いました。残酷な兄に言わせますと、これが「求婚」というわけなのです。そして、「我が一族のために、また、愛していてくださるのなら、この娘のためにもなることですから、是非続けていただきたい。ご覧なさいこの姿を［と、私を指差しながら頭から足先まで睨めまわし、ソームズさんに呼び掛けるのです］。いろいろと優れた資質に恵まれていることもお考えいただきましょう。その点は世間が認めているところですし、われわれ一同、先頃まではこの娘のことを誇りにしていたのです。救ってやるだけの値打ちのある娘です。あと二、三回のご辛抱で貴方のものになるのです。辛抱のし甲斐があることは間違いありませんよ。ですから、少しばかり鼻を鳴らしてみせたからといって、望みを捨てるなどとはおっしゃらないことですね。大見えを切ってしまった手前、女らしく淑やかに収まりをつけるにはどうしたら良いのか、分からずにいるというわけですよ。覚悟していただかねばならないのは、プライドの高さと頑固さだけです。大丈夫。二週間もすれば、夫として申し分のない幸せ者になっていただけることでしょう」と言っておりました。

私が口にいたしますのをお聞きになったこともおありでしょうが、日頃から兄は女性や結婚につきまして、ズケズケと非難がましいことを言っていたのです。それをウィットだと考えているのでなければ、そんなことはしないはずです。哀れなワイアリーさんや、私たち二人が存じ上げている他の人たちが、聖書のことを冒瀆したり嘲ったりするのと同じことです。要するに、同じ邪悪な才能に恵まれておりますのを自慢してみせたいだけの話です。信心深くなるには賢すぎるのだと思われたいのです。

ソームズさんは、独り善がりな態度で、皆に喜んでもらうためなら、また、私を救うためであれば、どんなことでも耐え忍びましょうし、幸いにして、最後には望みが叶うことになるのであれば、十分な見返りに与ることは疑いようもありません、などと臆面もなく

言うのです。

「ソームズさん、少しでもご自分の幸せということを大事に思われるのでしたら（私のことは貴方に心配していただかなくても結構です。それをお考えの一部に入れてくださるほどの親切心は持ち合わせていらっしゃいませんからね）、兄の申しております求婚とやらは、これ以上進めないようにしてもらいましょう。お話ししておきますほうが正直というものでしょうが、このような仕打ちに遭う以前から、やむなく貴方のことに考えを向けるようなことがございましても、浮かんでまいりますのは、これ以上ないほどの強い非難の気持ちばかりなのです。それに、このような仕打ちを受けたからといって考えを変えてしまうような、そんな情けない奴隷根性の人間だと、私のことをお考えなのでしょうか」　私は言ってやりました。

「それから、お兄様」と、兄に向かってこう言ったのです。「おとなしくしているからといって、いつも言うなりになるとでも考えておられるのなら、こけおどしをしなくては大物とは思われないとでもお考えなら、一度で結構ですから、間違いをお認めになることですわ。そのように判断していただくだけの理由がこれから出てくるでしょうが、寛大な心が無理強いを受けるようなことがあってはいけないということです。それに　…　」

「もう止せ。命令だ」　両手を差し上げ、天を仰ぎながら、尊大な兄が申しました。それから、叔父のほうへ顔を向け、「お聞きになりましたか。これが、かつては欠点一つないと言われていました貴方の姪ですよ。貴方のお気に入りなのです」と言っておりました。

ソームズさんのほうは、この成り行きをどう考えたら良いのか分からないという様子でした。それではっきり分かったのですが、もしもあの場に二人きりにされておりましたなら、厄介払いをするのは易々と出来ていたことでしょう。

叔父が私のところへやってまいりまして、同じように私の顔から足先へと目をやりながら、「これがあのお前だなんて、考えられるだろうか。この暴言がすべてお前のものだというのか、クレアリー」と言うのです。

「えゝ、そのとおりですわ、叔父様。それに、出過ぎた言い方とは存じますが、私が強い言葉を用いましても、それは当然の結果に他なりません。ひどい仕打ちを受けてまいりましたし、叔父様の目の前でさえ、兄から手荒く扱われているのですもの。私に兄を監督する権利などございませんが、兄にだって、私を意のままにする権利はないと存じます」

「いいかな、クレアリー、こんな仕打ちとお前は言うが、他の手をすべて試みた上でのことなのだぞ」

「試みたとおっしゃいますが、何のためになのでしょう。お断りすること以上に何か私は求めているでしょうか。貴方は［と、ソームズさんに向かって］、きっと貴方は、思いやりもなく、ますます固執しようというお気持ちになるのでしょうね。貴方のために私がこれまで受けてまいりました仕打ちや、今、目の前で兄から加えられましたものをご覧になれば、仮にも貴方のものになるような災難に見舞われました場合、私はどれだけ耐え忍ぶことが出来るのかがお分かりになるでしょうからね」

「おやおや、マダム」と、ソームズさんが大声を出しました［この間ずっと、きまり悪そうにいろいろな格好をしていたのです。一方、兄と叔父は十字を切っておりました。そして、目配せや表情だけで語り合っていたのです］。「おやおや、マダム、これはまた何という受け止め方なのでしょうか」とです。

「当然至極な受け止め方ですわ」と、私はあの人を遮って申しました。「私のことを大事に思ってくださるような口振りをなさいますが、その私がこんな仕打ちに遭うのをご覧になって、それを容認出来る人ですもの、ご自分でも同じ仕打ちを加えることがお出来になるに違いありませんわ。それに、貴方がこのようなことを容認しておられるのは、公然と固執しておられることからも明らかなのです。決してなるわけに行かないものにさせようとして、その同意を取りつけるため、私が監禁され、面会を禁じられ、侮辱を受けておりますのをご存じだというのにです。しかも、決してなるわけに行かないというこの気持ちは、これまで何度も他の人にはお話ししていることですから申し上げますが、頑固な気持ちが動機なのではありません。嫌いでたまらないからなのです」とです。

それから、叔父のほうを振り向き、「失礼ですが、叔父様、父の弟として、叔父様にも孝養を尽くしますのが私の本分と存じます。お気持ちに従うわけにまいりませんことはお詫びいたします。でも、兄の場合は、私の兄にすぎないのですし、押し付けは許さないつもりです」と申しました。そして、「ですから［と、不人情な恥知らず　…　恥知らずと呼んでも構わないと思うのですが　…　のほうを振り向きながら］、お好きなだけ眉をひそめてください。しかめっ面をなさって構いませんが、ひとつ伺いたいのです。私と同じ立場になった場合、私が皆さんの好意を得るために喜んで払おうとしているような犠牲を、貴方も払おうするのでしょうか。もしも払うつもりはないとおっしゃるのでしたら、何の権利があって、私をこのように扱うのでしょう。もう長いこと味わってまいりましたが、どうしてこんな仕打ちを受けさせようとなさるのです」と尋ねたのです。

この頃までには、ひどく心が乱れておりました。男の人たちは押し黙り、互いに言葉を交わしたがっている表情を浮かべながら、間を置いては（やはり、激しく動揺していたのです）歩き回っているのです。私は腰を下ろし、扇子を使っておりましたが（たまたま鏡の前の椅子でしたので）、顔に血の気がさしたり失せたりするのがよく分かりました。ひどく気持ちが悪くなり、気を失いそうな感じでしたので、呼び鈴を鳴らしました。

ベティがやってまいりました。グラス一杯のお水を頼み、それを飲みましたが、私に気を留める者は一人としておりませんでした。兄がソームズさんに向かって、「手管だ、女の手管ですよ」と叫ぶのが耳に入りました。そんな言葉のせいだと思いますが、歓迎されないことを案じる気持ちが働いてもいたのでしょう、ソームズさんは奥のほうに引っ込んだままでした。でなければ、心を動かされている様子が私にも分かったことでしょう。それから、私は（気を失いそうな不安がまだありましたので）立ち上がりました。そして、ベティの腕を掴み、「掴ませてちょうだいね、ベティ。引き下がらせてほしいのよ」と言いました。そして、震える足でドアのほうへ進むと、後ろを振り返って、叔父にお辞儀をしながら、「宜しければ下がらせていただきます」と申しました。

「どこへ行くのだ、お前は」　叔父が言いました。「こちらとしてはまだ完了というわけには行かんのだ。下がってはいかんぞ。命令だ。ソームズ殿のほうには、お前に話してくださることがおありなのだよ。お前の驚くようなことだぞ。拝聴するのだ」とです。

「ただの二、三分ですが、お許しをいただけますなら、外の風に当たりたいのです。ご命令がありましたら、戻ってまいります。お聞きしなければならないのでしたら、すべてお聞きいたします。これを限りに、最後にいたしとうございますので。一緒に来てくれるでしょう、ベティ」

こうして、それ以上は制止されることもございませんでしたので、庭へと退出いたしました。そして、一番近い椅子に身を投げ、ベティのエプロンで顔を覆い、両手をあの娘の手に預けたまま寄り掛かって、悲しみでしょうか憤りでしょうか、あるいは、その両方かもしれませんが、大声を出して泣いたのです。それが良かったのかもしれません。正気を失わずに済みました。じきに落ち着いてくるのが分かったのです。

ベティの厚かましさはすでにご紹介済みですから、これ以上その実例をお示しするのはご迷惑と思います。私がこれほど苦しんでおりますのに、少し回復し、庭の奥のほうへ歩き出すのを見ますと、あの娘は言いたい放題のことを口にし始めたのです。それが度を越しておりましたものですから、私もとうとう黙らせずにはいられなくなりました。あと一言でも口にしたら承知しないと、厳しく命じたのです。あの娘は後ろに下がり、むっつりと不機嫌そうでした。

再び家の中に呼び入れられましたのは、小一時間もしてからのことでした。伝言を持ってまいりましたのは従姉妹のドリー・ハーヴィーでしたが、同情と敬意の入り交じったまなざしを向けながら（ハーヴィー嬢は日頃から私に好意を抱いておりまして、貴女もご存じのとおり、私の生徒であることを自称しているのです）、私が同席を求められている旨を伝えてくれました。

私たち二人を残して、ベティが立ち去りました。

「私の同席を命じた人はだれなのかしら。あら、あなた泣いていたのじゃない」　私が尋ねました。

「泣かずにいられる人なんておりませんわ」と、この娘は言っておりました。

「まあ、何があったのかしら、ドリーさん。この家では、泣いて当然な人など、私の他にはいないはずでしょう」

「いいえ、マダム、私もですわ。だって、お嬢様のことが大好きなんですもの」と言うのです。

この娘にキスをして上げました。「それじゃあ、あなた、私のために涙を流してくれていたわけね。私たち、一度だって心が離れたことはありませんでしたわね。でも、教えてほしいの。私に対して、一体どんなことが企まれているのかしら。こんなにも同情してくださるのは　…　」

「こんなことを申し上げても、お気になさらないでくださいね」　可愛い娘が話してくれました。「でも、私のママもお嬢様のことで一緒に泣いているのです。ただ、どなたにも見つからないようにしています。ママはこう言っていました。あゝ、ドリーや、おまえの従兄弟のジェームズ・ハーローさんみたいに悪意に凝り固まった人もいませんね。皆さんは一族の華とも誇りともいうべき人を駄目にしてしまうおつもりなのよ、とです」

「どういうふうにしてなの、ドリーさん。お母様は教えてくださらなかったの。どんな方法なのかしら」

「えゝ、教えてくれました。ソームズさんはお嬢様をお求めになるのを断念なさるお気持ちだったのです。お嬢様が嫌っておられますし、望みはまったくないから、とおっしゃっていたのです。お嬢様のお母様はそうしていただくのに乗り気で、ラヴレースさんとは手をお切りになって独身を通されるという、お嬢様のお言葉を信じてもらおうとなさったのです。私の母もそれに賛成でした。と申しますのも、母は、お母様もですが、お嬢様と

ジョン伯父様、それに、従兄弟のジェームズさんとの間でありましたことをすべて耳にしていたからです。そして、ソームズさんと一緒になっていただくようお嬢様を説得するなど、思いも及ばないと言っておりました。ジョン伯父様も同じお考えのようでした。少なくとも、反対なさるようなことは何一つおっしゃらなかった、と母は言っております。でも、お父様が決して譲ろうとなさらず、お母様と母にご立腹なさいました。すると、お兄様とお姉様、それから、アントニー叔父様がお父様の側に加わられて、風向きがすっかり変わってしまったのです。要するに、母が申しますには、ソームズさんは素晴らしいことをいろいろと保証していただいているというのです。お嬢様がイギリスでも一番のご令嬢だということは、ソームズさんも認めておられて、たとえ結婚後もお嬢様のお心を捉えることは出来なくとも、一年間だけでもお嬢様を妻と呼べる栄誉に与るためならば、愛情の欠けることには目をつむるとおっしゃるのです。想像いたしますに、次の年になりましたら、あの方はお嬢様のお心を打ち砕いてしまわれるということでしょうね。冷酷無情なお方なのは間違いございませんもの」

「私の心を打ち砕いてしまうのは身内の者たちかもしれません、ドリーさん。でも、ソームズさんにそのようなことは決して出来ないでしょう」

「それはどうでしょうか、お嬢様。私に分かりますかぎりでは、あの人と一緒になられますのを避けることがお出来になれば、それは大変な幸運じゃないかと思うのです。母の言葉ですと、他の皆さんは、母を除きまして、すっかり心を一つにしておられるのだそうです。母も仕方なく黙っているのです。お父様とお兄様は、お二人ともそれはそれは大変なお怒りようだそうですもの」

「兄のことなどは気にならなくなっているのよ、ドリーさん。ただの兄ですもの。でもね、お父様に対しては子としての務めがありますし、また、従うことが出来るのなら、お言葉には従いたいと考えているのですよ」

私たちというのは、虐げられているとか憤慨させられているとかいう時には、味方になってくれる人でしたらだれでも好きになってしまうものです。従姉妹のドリーには日頃から好意を持っていたのですが、この時ばかりは、私のことを案じてくれる気持ちが嬉しくて、十倍も愛しくなってしまいました。もしも私のような立場になった場合、あの娘ならどうするつもりか、尋ねてみました。

あの娘は、もしも私の立場なら、即座にラヴレースさんと一緒になって、地所を自分のものにするし、それですべてはお終いになるでしょうと、何のためらいも見せずに答えておりました。また、ラヴレースさんは素敵な紳士だけれど、ソームズさんのほうは添うに値しない人だ、とも言っておりました。

ハーヴィー嬢はさらに続け、あの娘の母親が私を連れに来るよう求められたのだが、お断りした、ということも話してくれました。身内の者たちが全員揃って私を裁こうとしているに違いない、と言っておりました。

そのほうが良かったと思います。でも、後に知らされたことですが、父も母も、私と顔を合わせたら平静な気持ちではいられそうもない、と言ったのだそうです。父の場合は激しい怒りのためでしょうし、母は優しい思いやりからだと思います。

この頃には、私たちは家の中に入っておりました。あの娘は客間まで私に付き添い、そこで別れたのですが、人身御供を残して行くようだと、その時の私には思われました。

部屋にはだれもおりませんでした。腰を下ろし、従姉妹のドリーが話してくれたことを思い返しながら、しばらくの間涙を流しておりました。

皆は隣り合わせになっております姉の客間にいたのです。と申しますのも、何人もの声が入り交じって聞こえて来たのです。その中にひと際大きく響く声があり、同情的な口調のものをかき消してしまいました。

かき消されてしまいましたのは女性の声だということが聞き分けられました。あゝ、ハウさん、男性というのは何て非情なのでしょうね。同じ両親の子供ですのに、どのようにして冷酷さを手に入れるのでしょうか。旅行によって身につけるのでしょうか。男同士の会話からでしょうか。でなければ、どうしてあのようになるのでしょうね。ただ、どこの男の人にも負けないくらい非情なところが私の姉にもあるのです。でも、この点だけが例外というわけでもないかもしれません。と申しますのは、態度にいたしましても気持ちにいたしましても、いつも姉は男っぽいと思われていたのです。おそらく、女性の肉体に男性の精神を宿しているということなのでしょう。ですから、女性の名誉のためにも、男性の乱暴な態度を真似て女性の優雅さに似つかわしくない振舞いをする人のことは、これからは、どなたにつきましてもそのように考えようと思っております。

御免なさいね。こんな感想を差し挟んで、話の腰を折ってしまいました。考えごともせず、反省もなしに、急いで話を続けなければいけないようですと、とてもまともな精神状態ではいられないと思うのです。そのようにいたしますと、激しい感情ばかりがいつも念頭を占めてしまうからです。でも、筆を進めながら考えておりますと、落ち着くことが出来ますし、騒がしい心も鎮まってくれるのです。

だれかが入ってまいりますまで、十五分以上は慰めもない物思いに独り浸っていたように思います。と申しますのも、皆は熱心に話し合っていたらしいのです。最初に顔を出しましたのは叔母でした。「まあ、あなた、そこにいたのですか」　そう言うと、皆に知らせるため、叔母は急いで戻って行きました。

その次に姿を見せましたのは（合意の上でのことだろうと思いますが）叔父のアントニーで、ソームズさんの手を握ったまま、「さあ、親愛なる友よ、中へご案内させていただきましょう」などと、恭しい言葉遣いです。俄か仕立ての伊達男のほうは、ぎこちない格好で後についてきたのですが、さらに感知し難い動きで、とでも申しましょうか、そんなぎざな足の運びです。先導者の踵を踏むまいとしているのでしょう。このような軽薄にも映る書き方をいたしまして、お許しくださいね。でも、好きになれない相手というのは、その仕草のどれを取りましても、不快に思えてしまうものですよね。

私は立ち上がりました。叔父はひどく不機嫌な表情をしておりました。「座るんだ。座るんだよ、お前」　叔父が申しました。そして、私が腰を下ろしますと、椅子を一つ私の傍に引き寄せまして、お気持ちなどはお構いなしに、「親愛なる友」とやらをそこに腰掛けさせたのです。叔父のほうは、私を挟んで反対の側に座りました。

「さあ、姪よ」と、叔父は私の手を取りながら言いました。「お前にはひどく気乗りのしない話題だが、私たちとしても、これまで話してきたことにこの上付け加えることはほとんどないのだよ。もっとも、考え直してくれたのなら、話は別だ。まずは、教えてもらおうか。考えてくれたかな」とです。

「その件に考慮の余地はございませんわ、叔父様」

「結構だろう、結構だろう、お嬢さんよ」と、叔父は私の手から自分の手を引っ込めながら言っておりました。「お前からこの答えとはな。思いも及ばなかったよ」とです。

「あゝ、マダム、神様のためにも、何卒　…　」と、ソームズさんが両手を組み合わせながら話し掛け、そこで一息入れました。

「神様のためにも何だとおっしゃるのでしょう。どうして、〈神様のために〉と〈ご自分のために〉とが同じことになるのでしょうか。お教えいただきたいですわ」

この一言であの人は黙り込んでしまいました。叔父といたしましては、立腹する以外になかったでしょうし、すでに腹を立ててもいたのです。

「さあ、さあ、さあ、ソームズ殿、泣きついたりするのはもうお止しなさい。女の好意を期待なさるのには、押しが足りませんよ」　叔父が言っておりました。

それから叔父は、私のためにどれほど素晴らしいことをする考えでいたのか、それとなく触れておりました。西インドからの帰国後、独身で通す決心をしたのは、一族のだれのためというよりも、私のためだったというのです。「ところが、お前のために思いのままに出来るもの、そして、かつてはそうするつもりでいた素晴らしいものを、天の邪鬼なお前はすべて軽視するわけだから、こちらとしてもやり方を変えねばなるまいな」と、言葉を結んでおりました。

私は、叔父のご厚志のすべてには心の底から感謝しているが、優しいまなざしと優しい言葉以外には、いかなるご好意であれ、請求する権利は一切放棄する旨を伝えました。

叔父はあちこち、目をきょろつかせておりました。

ソームズさんのほうは、可哀相なほどに落胆している様子でした。

でも、二人とも押し黙っておりましたので、私のほうから次のように付け加えておきました。残念には思うが、十分に根拠があってのことでもあり、はなはだ手厳しいと思われそうなことを申し上げたい。つまり、私に気前よく振る舞う気持ちは変えようと固く決心なさった旨を、兄と姉が納得するようにお話しいただけるなら、それだけで、そうでない場合に予想されるものよりはもっとマシな扱いを、あの二人から受けられそうに思う、と言ったのです。

叔父はひどく感情を損ねておりました。不愉快な気持ちを表明すべく用意をしている様子でしたが、その機会はございませんでした。激しく怒り狂った兄が飛び込んでまいりまして、私に向かって悪口雑言をいくつか浴びせ掛けたのです。私を陥れようとの計略がこれまで上々の結果だったこともあり、穏当な手段に甘んじるわけには行かなくなっていたのです。

私はそんな悪意に満ちた解釈の仕方をしているのか、と兄が尋ねて来ました。兄としては、私が身の破滅を招かぬよう、兄らしく用心をし、心配もしているというのに、それをそんなふうに受け止めるのか、と言うのです。

「そうです。まさしくそのとおりですわ」　私は申しました。「私に対する近頃のお兄様の振舞いは、他に説明のしようもございません。お兄様の前でもう一度叔父様へのお願いを繰り返させていただきたいと存じます。伯父様のほうにも、面会を許していただけるのでしたら、いつでも申し出るつもりですが、ご厚志はすべて兄と姉のほうに向けていただきたいということです。私には、ただ優しいお顔とお言葉をいただければ（それが望みのすべてですもの）、それだけで幸せなのです」とです。

兄たちはただただ互いの顔を見詰め合っておりました。でも、あの人の前なのです。この断固とした態度を緩めるような真似が私に出来たでしょうか。

「それから、私への用心や心配のことでございますが」と、兄を振り向きながら、「要らぬお世話だということをもう一度言わせていただきますわ。貴方は私の兄にすぎないのです。父も母も、有難いことにご健在です。仮にそうでないといたしましても、それなりの理由をたっぷりと用意してくださいましたから申し上げるのですが、どなたかに私のことを案じてもらいたいと願うことがありましても、貴方にだけは御免蒙りたいと思っておりますわ」と言ってやりました。

「何という言い種なのだ、お前は。それじゃあ、兄というのは、たった一人の兄だというのに、お前にとってはそんなにも取るに足らない存在ということになるのかな。妹の名誉、そして、一族の名誉を案じてはならんというのか」　叔父が尋ねました。

「私の名誉とおっしゃいますが、叔父様、兄に案じてもらうようなことは望んでおりません。望んでもいないお節介を受けますまでは、一度だって危険に晒されたことはなかったのです。お許しください、叔父様。でも、兄が兄らしい振舞いを弁えてくれるのでしたら、あるいは、紳士らしく振る舞ってくれるのでしたら、その時には今よりも尊敬申し上げることも出来るのでしょうが、現在のところは、とてもそうするのに相応しいとは思えません」　私は答えました。

これを聞いて、兄が私に殴りかかるものと思っておりました。でも、叔父が私たちの間に割って入りました。

それでも叔父は、きつい娘だよ、と私のことを呼んでおりました。一体だれがこんな娘だと思ったことだろうな、と言うのです。

それから、ソームズさんに向かって、追い求めていただくには値しない女だということが告げられたのです。

ところが、ソームズさんは熱心に私の肩を持とうといたしました。私がこのような手荒い扱いを受けるのは耐えられないことだ、とおっしゃるのです。

この時にはあの人もすこぶる熱心でしたし、その熱意のほどもはなはだ我慢強く兄に受け止められておりましたものですから、何となく怪しい気持ちがしてまいりました。あの人に恩を受けたと思わせるための策略ではないのか。もしかすると、これがしきりに懇願されておりました面談の目的の一つなのかもしれない、と考え出したのです。

この卑劣な手口への疑念が生じますと、前にもきつい女だと思われていたのですが、それだけでますます我慢ならなくなってしまいました。兄と叔父があの人の素晴らしい心の広さ、そして、善をもって悪に報いようとする気高さを再び褒めるものですから、「幸せな人ですわね、ソームズさん。家族の者たちには易々と恩を着せることがお出来になるのですものね。もっとも、一番恩を着せたがっておられるらしい、恩知らずな一人の人間だけは別ですけれどね。でも、その人間は貴方のご愛顧のために惨めな思いをさせられているのですから、兄の乱暴から守っていただくようなことを、貴方のお世話になろうとは望んでおりませんのよ」と言ってやりました。

すると、私は無礼で、恩知らずな虫けらということにされてしまいました。

私は、「すべてお認めいたしますわ。私のことをどうお呼びになろうと、どのようにお考えになろうと、そのすべてを認めますわ、お兄様。この紳士とのことでも、私が相応しく

ない点は認めましょう。その人には有り余るほどの長所があるとのこと、よく調べてみる暇もその気持ちもございませんが、おっしゃるとおり信じることにいたします。きっとお兄様にも劣らないほど素晴らしいのでしょう。それでも、やはり、仲裁してくださったことにお礼はいたしかねますわ」と言い、それから、叔父を見ながら、「と申しますのも、どなたにもお分かりでしょうが、これでは、私を踏みつけにして皆さんのお褒めに与ろうとしていることになるからですわ」と申しました。

それから、私の激しい態度に驚き、言葉を失っているような兄に向かって、「この身には過ぎるほどのご配慮をいただきました点にも御礼いたしたいと存じます。でも、手を引いていただきますわ。少なくとも、もっと血のつながりの濃い、もっと大切な人たちに恵まれております間はね。貴方の分別のほうを私のよりも高く買うに足るような理由は何一つお示しくださいませんでしたからね。お父様から独立したいとは決して思いませんが、貴方からは独立した立場なのです、私は。それに、おじ様たちには良く思われたいと願っておりますが、私がおじ様たちに望みますのは、それがすべてなのです。それも、もう一度繰り返しますが、貴方とお姉様に楽をしていただくためのことですわ」と言ったのです。

ほとんど同時くらいに、ベティがすごい勢いで飛び込んでまいりました。悪意に満ちた目付きで私を見ておりましたが、まるで姉のようでした。ご主人様がすぐドアのところでお話をしたいとおっしゃっておられます、と兄に伝えておりました。

兄は姉の客間へ続くドアのところまでまいりました。すると、次のような言葉が響き渡ってきたのです。すべての点で私に敬意を求めて当然な人の口から出たものでした。「ジェームズよ、今すぐにあの謀反者を弟の屋敷へ連れて行ってくれ。今すぐにだ。これ以上は一時間たりともこの屋根の下に留まらせたくないのだ」とです。

私は体が震え、すぐにもくずおれそうでした。それでも、何をしているのか、何を言っているのか、自分でも分からないままに、ドアのところへ飛んで行き、開けようとしました。ところが、兄がドアをピシャリと閉め、しっかり鍵を掛けてしまいました。「あゝ、お父様。ねえ、お父様」　私はドアのところに両膝をつきながら叫びました。「ご自分の子供にお目通りを許してやってください。お父様の前に跪き、言い分を述べさせていただきとうございます。惨めな娘をそのように見捨てたりなさらないでください」とです。

叔父はハンカチを目に当てておりました。ソームズさんは前よりも一層悲痛な表情を浮かべておりました。でも、石のように冷たい兄の心は、少しも動かされることはなかったのです。

「入室を許していただけますまでは、跪いたままでおります」　私は続けました。「このドアのところでお頼みいたします。あゝ、どうかお慈悲の戸口としていただきとうございます。そして、何卒お願いいたします、その戸口を開いていただきたいのです。これ一度かぎりでよいのです。今一度だけお願いいたします。その後は二度と私に向かって開かないおつもりでも構いません」とです。

部屋の中では、しきりにドアを開けようとしている様子でした。そのため、急に兄が鍵を外したのですが、私はドアを押していたものですから（ずっと跪いたままです）、あちら側の客間にうつ伏せに倒れ込んでしまいました。それでも、怪我はありませんでした。ところが、皆は立ち去った後で、ベティだけが残っておりました。あの娘がドアを開けようとしていたのだと思います。あの娘は私が立ち上がるのに手を貸してくれました。立ち上

がって部屋中を見渡したのですが、だれもいないのを知り、あの娘に寄り掛かったまま元の部屋に戻り、先程まで座っておりました椅子に身を投げ出しました。両目には涙が溢れてまいりましたが、そのお陰で、ずいぶんと気持ちが安らぎました。一方、叔父のアントニー、兄、ソームズさんは私を残し、家族の他の者たちのほうへ行ってしまいました。

皆の間でどのような言葉が交わされたのかは存じませんが、まずまず落ち着きを取り戻しました頃に兄がやってまいりました。険しく眉をひそめた横柄な顔付きでした。「父上と母上のご命令だが、即刻アントニー叔父上の屋敷へ向かう準備をせよとのことだ。携帯するもののことで気を使う必要はない。ベティに鍵を渡せばよいのだ。ベティ、その天の邪鬼が鍵を身につけているようなら、受け取って母上のところへ持って行ってくれ。必要なものはすべて、後で送るよう母上が手配してくれるはずだ。あと一晩この屋敷に居残ることは許されないのだよ」と言うのです。

「お母様に、お母様ご自身の手にお渡しするのでなければ、鍵はだれにも渡したくございません。ご覧のとおり、ひどく取り乱しているのです。こんなにも急に追い立てられたりいたしますと、生命に関わるかもしれません。少なくとも、今度の月曜日までお許しくださいますようお願いいたします」

「それは認められないのだよ。今夜に向け用意をすることだな。それから、鍵を渡すんだ。さあ、私によこすのだ。母上のところへ持って行ってやるからな」

「申し訳ございません、お兄様。何としてもお渡しするわけにはまいりません」

「何としても渡すんだよ。自分の母親に見られてはまずいものでもあるというのか」

「そんなことはございません。お母様のお傍に行かせていただけるのでしたらね」

「然るべく伝えてやるさ」

兄は出て行きました。

ドリー・ハーヴィー嬢が入ってまいりました。

「このような伝言は心苦しいのですが、マダム、お母様の仰せです。キャビネットと書庫、それに、箪笥の鍵を全部お渡しするようにとのことでございます」

「仰せのとおりお渡しいたしますと母に伝えてちょうだい。母を相手に条件を付けたりはいたしませんと伝えてちょうだい。でも、是認出来ないものが母にも何一つ見出せない場合には、あと二、三日ここに残るのを許してくださるようお願いしたいわ。ねえ、ドリーさん「愛らしいことに、この子は悲しさのあまり泣いているのです」、ひとつ試してもらいたいのよ。貴女の穏やかな物腰が私のために功を奏することになりはしないか、試してほしいの」

ますます泣きじゃくりながら、この娘は、「事がこのように進むなんて、残念でございます。とても残念です」と言っておりました。

この娘は鍵を受け取りますと、両腕で私を抱き締めました。このような伝言を携えてきたことを詫び、さらに何か言いたげにしておりましたが、ベティの姿に怯えているような素振りでした。

「私に同情したりしてはいけませんよ。貴女の落ち度にされてしまいますからね。そこにいる人のこと、お分かりでしょう」　私が申しました。

無礼な下女は蔑むような笑みを浮かべておりました。そして、このような性質の事柄で若い女性が別の女性に同情を寄せるような場合、年下の側のほうが末頼もしく見えるもの

だと申さずにはいられませんわ、などと言うのです
私は立ち去るようあの娘に申し付けました。
あの娘は、母の言い付けでお傍にいなければならないのだが、そういうことさえなかったら、喜んで立ち去るところです、と言うのです。
何のために居残っているのかはすぐに分かりました。従姉妹が鍵を持って出て行きましたので、私も二階の私室へ戻ろうといたしますと、あの娘は、指示を受けているので（正直なところ、まことに残念には思いますが、と断っておりました）、今は二階へ行ってほしくないと言い出すのです。
いくら厚かましい娘とはいえ、邪魔だては承知しない、と私は申しました。
あの娘が急いで呼び鈴を鳴らしました。すると、兄が入ってまいりまして、ドアのところで鉢合わせしてしまいました。
「戻るんだよ。さあ、戻るんだ、お嬢さん。まだ二階へ行ってはいかんのだ」
私はまた中へ入りました。そして、窓際の椅子に身を投げ出し、さめざめと涙にくれておりました。
私の控えの間を調べている間、客間に私を引き止めておくのが兄の役目（ベティと一緒にです）だったのですが、その際に兄との間で交わされました滑稽なほど悪意に満ちた会話につきまして、その詳細をお教えいたしましょうか。でも、止そうと思います。何の役にも立たないでしょうからね。
兄がおります間、自室に帰らせてくれるよう何度か頼んだのですが、断られてしまいました。調べがまだ終わっていなかったのだと思います。
その仕事に携わった者の一人がベラでした。姉以上に熱心な調査官など、皆としても得られなかったことでしょう。皆の当てが外れましたのは、嬉しいかぎりでした。
でも、姉にも〈ずる賢い娘〉の書類が見つからないということで、再度ソームズさんの訪問を受けねばならなくなりました。今度はハーヴィー叔母様が案内してきましたが、ご自分の気持ちに反することなのでしょう、心を痛めている様子でした。アントニー叔父様が同伴しておりました。推察いたしますに、叔母様が動揺しないためなのでしょう。
でも、少し眠気を催してまいりましたので（現在、午前二時を過ぎております）、服を着たまま横になってみます。この優しい呼び掛けに応じられるようでしたら、身体を任せてみようと思います。

水曜日　午前三時
眠りにつくことは出来ませんでした。三十分の間、うとうとと過ごしただけです。
ハーヴィー叔母様は次のように話し掛けてきたのです。「あゝ、あなたときたら、ご両親に、そして、皆さんにもですが、どれだけ迷惑を掛けるのでしょうね。呆れてしまいますよ」とです。
「申し訳なく思っております、叔母様」
「申し訳ないですって　…　それじゃあ、何故そうまで我を張るのですか。さあ、ここにお座りなさい。お隣に座りますからね」と、叔母は私の手を取りました。
叔父が私のもう一方の側にソームズさんを座らせました。叔父自身は私の正面に、身体も触れんばかりのところに席を取りました。まんまと包囲されてしまった、といったとこ

ろではないでしょうか。

「お兄様はご気性が激しすぎますわね」　叔母が語り出しました。「あなたの幸せのことに熱心なものだから、少しばかり乱暴に過ぎたようですね」

「まったくそのとおりだ」　叔父が申しました。「だが、この話はもう止めにしよう。今度は、穏やかな方法ではどうなのか、われわれは試してみたいのだよ。もっとも、すでに試みられたことだがな」

私は叔母に、この紳士が同席される必要はあるのかと尋ねました。

「そうしていただく理由があるのですよ」　叔母が言いました。「間もなく聞いてもらいますけどね。でも、先にお話ししたいのは、あなたはお兄様から少し手厳しすぎる扱いを受けているとお考えになって、お母様が私に試してほしいとおっしゃっているのです。私たちはいつもそう思っていたのですけれど、あなたは優しい心をしていますからね、穏やかなやり方ならどうだろうかということなのですよ」とです。

「失礼とは存じますが、叔母様、もしもこの紳士の求婚のことを考えていらっしゃるのでしたら、何の効果もございませんわ」

叔母は叔父に目をやりましたが、叔父は唇を噛んでおりました。また、ソームズさんにも目を向けたのですが、ソームズさんのほうでは頬をさすっておりました。それから、叔母は頭を振りながら、「まあ、落ち着くのよ、あなた。ひとつ尋ねますよ。あなたはひどい仕打ちを受けたと思っているようですけれど、もっと優しく扱われていたとしたら、どうにかなっていたかしら」と訊くのです。

「いいえ、叔母様、この紳士をお引き立てするようなことになったとは申せません。叔母様はご存じのはずです。叔父様もですわ」と、叔父に向かって、「私はいつも誠実なことを誇りにしてまいりました。それに、幸い、その点を褒めていただいたこともあったのです」と、私は申しました。

叔父がソームズさんを脇のほうへ連れて行きました。次のようなことを囁いているのが聞こえました。「あの娘はやはり貴方のものです。そうさせましょう。勝利を得るのは両親のほうか娘のほうか、おじなのか姪なのか、今に分かるというものです。これがすっかり収まって、この気違い沙汰を種にした愉快な冗談が飛び交うのを、この目で確かめることになるのは疑いのないところですよ」とです。

私はひどく苛立ってしまいました。

「まだ、確かめたわけではありませんがね、あの娘を唆してこんな頑固な態度を取らせているのはだれなのか、見当はついているのです」と、叔父が続けました。「あの娘の生まれつきのものではないのですよ。これほどまでにあの娘のことに関わるつもりもないのですが、ただ、申し上げていることは事実ですし、あの娘には大きなことをしてやろうと思っているものですからね」とです。

「そのような幸せな時が訪れますよう、絶えず祈ることにいたしましょう」　ソームズさんもこちらに聞き取れるような声で囁いておりました。「今この胸をひどく苦しめておりますものの記憶を甦らせるような真似は、決してしないつもりです」とです。

「そうそう、言っておかなければいけませんね、あなた」と、叔母が申しました。「何の条件もつけずに鍵を渡してくれましたけど、それが、他のどんなことにも増して、あなたには好都合に働いたのですよ。そのこととか、皆さんを怒らせるようなものが見付からな

かったということ、それに、ソームズさんが仲裁の労を取ってくださったのも …」

「あゝ、叔母様、ソームズさんのお世話になるようなことは避けたいのです。お礼の言葉以外にお返しはいたしかねますから。お礼申し上げますのも、求婚を取り下げてくださる場合に限るのです。何卒、お願いいたします」と、ソームズさんに向かって、「慈悲というものを感じる心をお持ちでしたら、私自身のためになるよう、私を重んじるお気持ちが少しでもあるのでしたら、どうか、お礼申し上げるに値するだけのことをしていただきとうございます。何卒、お願いいたします」と申しました。

「あゝ、マダム、信じてほしい。信じていただきたいのです。本当に信じていただきたい」　あの人が叫びました。そして、「それは出来ない相談ですよ。貴女がお独りでおられる間は望みを捨てないつもりです。立派なご家族のこれだけ多くの方々が、望みを持つよう勇気づけてくださるわけですから、根気よく続けさせていただかねばなりますまい。貴女様が私をないがしろになさるからといって、皆さんのお気持ちを無にするわけにはまいりませんからね」と言っておりました。

私は返事の代わりに、あの人に一瞥を向けるだけにいたしました。でも、思いきり軽蔑を込めた視線だったのです。そして、くるりと向き直り、「でも、お願いです［と、叔母に向かって］、今触れてくださいましたように、子の本分に忠実な姿を見ていただいたわけですが、それはどのような恩恵につながったのでしょうか」

「お母様とソームズさんが主張なさって、次の月曜日までここにいたいという、貴女の願いを聞き入れてもらったのですよ。その時には快く出掛けてくれることを約束してくれるならの話ですけれどね」　叔母が答えました。

「私のお客様の選択だけは私に任せていただきたいのです。そうしてくださるなら、喜んでまいりたいと思っております」

「そうね、この話題はまたの機会にしたほうが良さそうね。注意深く聞いてもらいたいことのほうに移りましょう。何故ソームズさんに同席していただかねばならないか、その説明となるものですがね　…」　叔母が申しました。

「そうしよう」と、叔父が口を挟みました。「それに、だれかさんがどういう種類の人間なのか、お前に教えることにもなるだろう。ソームズ殿、先ず貴方が匿名のお友達から受け取られた手紙のことをご紹介いただけますかね」とです。

「喜んで」と言うと、あの人はレターケースを懐から引っ張り出し、一通の手紙を抜き取りました。「その人物に宛てた手紙への返事なのですが、宛名書きは〈ロージャー・ソームズ殿へ〉となっておりまして、こんな具合に始まっております。〈謹啓　…〉」

「失礼ですが」　私は申しました。「このお手紙を読み聞かせてくださるのには、一体どのような意味があるのでしょうか」

「お前がどれほど悪辣な男に夢中になっていると思われているのか、それを知らせるためだよ」　私に聞こえるように、叔父が囁きました。

「私がだれか他の人に夢中になっていると思われているのでしたら、どうしてソームズさんは、私のことでこの上苦労を背負い込もうとなさるのでしょうか」

「黙ってお聞きなさい、あなた」　叔母が申しました。「この件についてソームズさんが読んでくださること、お話ししてくださることを黙ってお聞きするのです」

「もしもソームズさんが、叔母様、ご自分のために役立てようとのお考えはないし、推

し進めるべき目的もお持ちではないのだと、はっきり言っていただけるのでしたら、どのようなことをお読みになるにいたしましても、耳をお貸しいたしましょう。でも、その反対だとしたら、どのようなことを持ち出されましても、私にとりまして、その重みはずいぶん減ずることになると言わせていただかねばなりません」

「ともかく読んでいただきましょうね」　叔母が申しました。

「読んでいただくのだよ」　叔父も言いました。「お前はすぐにも肩を持とうとするのだからな」

「どなたに対しましても、私はそういたしますわ、叔父様。匿名の人物から、それも利害のからんだ動機で非難の矢面に立たされているような人でしたらね」

あの人が読み始めました。あの哀れな罪人に対する咎めごとがこの手紙にはふんだんに盛り込まれているようでした。でも、私は読んでいるのを中断してもらい、次のように申しました。「このけなされております男性が、私にとりまして、面識もない人と同じ程度に関わりがないわけではないといたしましても、それは私の罪ではないでしょう。今のところ何かの関わりがあるといたしましても、それを認めるつもりも否定するつもりもございませんが、元はと言えば、その関係を妨害するために取られました、常軌を逸した手段から生じていることでございます。私たちに手を結ばせるような原因はお作りにならないことです。そうすれば、二人が結ばれるようなことはないのですから。独身を守りたいという私の申し出を受け入れてくだされば、私にとりましてあの方がこちらの紳士以上の存在となることはないのです」

「ともかく、先をお願いいたしましょうか、ソームズ殿。お前は最後までお聞きするのだよ。分かったな」　叔父が大声で叫びました。

「でも、何のためなのでしょうか、叔父様」　私は申しました。「これには何かソームズさんの目論見があるのではないでしょうか。それに、ここ数ヶ月の間、私もいろいろと耳にしてまいりましたが、ラヴレースさんについて、それ以上にひどいお話が何かあるというのでしょうか」

「だがな」と、叔父が言いました。「この手紙と、ソームズ殿が付け加えてくださるお話を聞けば、動かし難い証拠になるはず　…　」

「それでは、お気の毒にあの方は、これまで、十分な証拠もなしにお人柄を好き勝手に取り沙汰されていたということでしょうか。お願いでございます、叔父様、ラヴレースさんについて立派すぎる印象を持たせたりしないでいただきたいのです。こんなにも骨を折ってあの方を悪者にしようとなさいますと、そんな気持ちにもなってしまいますわ。骨を折っておられるのは、それであの方の改心を目指そうとしておられる人ではございませんし、思い切って申し上げますなら、この場合、ご自分以外にはどなたの利益も考えておられない人なのですから」

「はっきり分かったぞ」　叔父が言いました。「心を奪われているのがな。道徳心も持たない男の容姿にべた惚れなのがだよ」

「本当ですよ、あなた」　叔母が申しました。「聞いていると、私たちの心配が皆当たっていたことになりますよ。驚きましたね。美徳も道義心も弁えた若い娘が、まるで逆の男性を重んじるというのですからね」

「あゝ、叔母様、あまり性急に駄目な娘だと決めつけないでください。ラヴレースさん

が分相応の立派さにほど遠いというのは、そのとおりだと思います。でも、もしもすべての人が、わざわざその目的で雇われました、偏見を持っている人間に私生活を詮索されることになりましたなら、評判に傷のつかない人などはいないと思うのです。女の人の場合と同じように、男の人の場合でも、操の正しい人が私は大好きです。どちらの場合にも貞節さというのは無くてはならないものですし、また、称賛に値するものだと思っております。ですから、思いどおりにさせていただけるのでしたら、私といたしましては、道徳心のない王室の人より、そういった人物のほうを選ぶだろうと思うのです」

「それじゃあ、どうして　…　」　叔父が言いました。

「失礼とは存じますが、でも、思い切って申し上げましょう。非難を免れている人たちの中にも、称賛に値しない者が多いということでございます。

もっと言わせていただけますなら、ソームズさんご自身にしてもまったくの完全無欠とは言えないはずです。この方の徳の高さを耳にしたことは一度もございません。不品行につきましては、いくつか聞き及んでおります。申し訳ございません、ソームズさん、面と向かってお話しいたしておりますが、〈最初に石を投げつける〉(二七)ことについての聖書の言葉が、とても良い教訓になりますわね」

あの人はうつむきました。でも、無言のままでした。

「貴方にはない悪癖をラヴレースさんはお持ちかもしれません。貴方にはあの方が持ち合わせない別の悪癖があるかもしれません。あの方を弁護するためとか、貴方を責めるために申し上げているのではございません。すべての点で悪い人も、すべての点で良い人もいないということです。例えば、ラヴレースさんは執念深くて、身内の者に敵意を抱いていると言われておりますが、だからあの方を一層高く買っているというわけではございません。ただ、言わせていただきますが、身内の者たちも負けずにあの方を憎んでいるのです。ソームズさんも同じように悪意をお持ちです。とても強いものですが、それがご自分の親戚の方たちに対してなのです。そのような汚点はあちらの方には見当たりません。あの方のご親戚とは親しく付き合っておられるのですから。ただ、あの方にも似たような欠点はあると思います。でも、申し訳ございませんが、私の拙い考えでは、貴方以上にひどいことはないものと存じます。肉親に敵意を抱く人など、とても考えられませんもの」

「ご存じないのです、マダム」

「分かってないのだよ、お前は」　〜と、全員一斉にです。

「知らないからですよ、クレアリー」

「そのとおりかもしれません。でも、ソームズさんの理由を知りたいとも思わないのです。知ったところで、私には関わりのないことでしょう。ただ、世間の人々、偏見のない人たちが咎めておられるということです。ある人間について世間の人たちが不公平なことをするとか、早まった判断をしたりするのでしたら、別の人の場合にはそうでないと、どうして言えましょう。申し上げたいのはそのことなのです。自らの人物評を確立するために他人のをこき下ろそうとするなんて、その人間の無価値さの証として、これに優るものはないと考えます」

この間ずっと、哀れな男の顔全体が混乱状態を呈しておりました。捩れたとでも申しましょうか、すべてが歪んでしまい、口にいたしましても鼻にいたしましても、中央に並んではいないのです。今にも泣き出しそうな顔付きでした。もしも、あの人が私に憐れみを

感じてくれるような人でしたら、私のほうでもきっと慰めようとしたことでしょう。

三人は言葉もなく、互いの顔を見詰め合っておりました。

叔母に目をやりますと、私の言葉を認めるような態度を装うことが出来れば嬉しいのだが、といった表情でした（少なくとも、私はそう思いました）。でも、口を開きますと、ソームズさんにはおっしゃりたいことがあるのに、それを聞こうとしないのはいけないことだと、ほんの軽く私を窘めておりました。ソームズさん自身も、もうあまり熱心に聞いてもらいたがってはおりませんでした。叔父のほうでは、私には話をしても無駄だと言っておりました。ですから、再び兄が助けに入って来るということがなければ、二人の殿方につきましては、完全に沈黙に追い込んでいただろうと思うのです。

入って来るなり、兄は次のような妙なことを言い出したのですが、目には怒りの炎が燃えておりました。「この娘の口先に負けて、皆さん言葉もないようですね。だが、屈せずにやり抜いていただきますよ、ソームズさん。こいつの言ったことは、一つ残らず聞いておりました。互角に張り合うのには、他に手はないと思いますよ。今は生意気なところを見せつけられているわけですが、こいつが貴方のものとなった暁には、力がおありのところを負けずに思い知らせてやることですね」とです。

「まあ、何てことでしょうね、あなたは」　叔母が申しました。「妹のことですのに、殿方に向かって兄がこんな言い種をするなんて、考えられませんわ」とです。

「貴女こそ謀反者を元気づけておられるのだと言わざるを得ませんね、叔母上」　兄が言いました。「こいつの中にある女の傲慢さを奨励しすぎておられるみたいですよ。さもなければ、非難がましい言葉で叔父上の口を塞ぐような厚かましい真似はしなかったでしょうし、放蕩者の毒牙に晒されていることを紳士が教えてくださるというのに、耳を貸すのを拒んだりはしないはずです。自分の一族に逆らってもその放蕩者をかばう気でいることは、こいつの漏らした言葉からもはっきりしていることでしょう」とです。

「非難がましい言葉で叔父様の口を塞いだですって！」　私は申しました。「どうしてそうなるのでしょう。よくもこんなこじつけが出来るものですね」

叔母は兄の非難を聞いて泣いておりました。「宜しいですか、あなた」　叔母が兄に申しました。「これが私の骨折りに対するお礼だとおっしゃるのなら、私は手を引かせていただきますからね。お父様だってこんな扱いはなさいませんよ。それに、貴方が口にしていた助言は、兄らしくもないものだと言わせてもらいますわ」

「兄らしくないということでは、叔母様、私に対する近頃の兄の振舞いの残り全部を凌いでいるわけでもございませんわ」　私は申しました。「こんな乱暴な真似をしてみせるのですから、皆さんが兄のやり口に引き込まれてしまわれたのも理解出来ますわ。自分はソームズさんの思いのままになるのかもしれないと、ほんの少しでも懸念を持っているというのでしたら、これを聞いて、私も心を動かされたかもしれません。でも、お分かりでしょう」と、今度はソームズさんに向かって、「貴方が卑劣な目的を遂げられるようにするには、どんな振舞いが必要だと考えられているのかということがです。兄がお熱なのは貴方なのだということにもお気づきでしょう」とお話ししたのです。

「ハーロー殿の手荒いお振舞いとは一切関わりありませんことを、マダム、誓って申し上げましょう。今後二度と思い出していただくような真似は　…　」

「おっしゃらなくて結構ですわ、ご立派な方」　私は言いました。「その必要がなくなる

よう、こちらで注意いたしますわ」

「厳しい言い方は抑えるのだ、クレアリー」　叔父が申しました。「ジェームズや、君も妹と同じくらいに責められて当然だぞ」

その時、姉が入ってまいりました。「お兄様、約束と違いますわ。ここでもそのようですけれど、あちらでも、貴方のほうがいけないと思われているのですよ。もしも、この娘へのソームズさんの寛大なお気持ちや愛情が周知のことではないのでしたら、貴方のお言葉はとても聞き捨てには出来ないものですわよ。お父様がお話ししたいとおっしゃっています。叔母様とも、叔父様とも、それから、宜しかったら、ソームズさんともお話ししたいとのことですわ」と言っておりました。

四人は揃って隣の部屋へ引き下がりました。

姉の仲裁をどのように受け止めたものか、すぐには理解出来ず、私は黙って立っておりました。でも、姉は長い間私を当惑したままにしてはおきませんでした。「本当に強情なのね、あんたって人も」と、姉が申しました「他の人たちがいなくなりますと、怒った顔を突きつけるようにして話し掛けてきたのですが、悪意に満ちた低い声でした」。「私たち皆に一体どれだけ迷惑を掛けるのでしょうね」とです。

「あなたとお兄様はね、ベラ」　私は言ってやりました。「厄介ごとを自分で背負い込んでいるわけでしょう。でも、あなたにしてもお兄様にしても、私のことに干渉する筋合いはないのだわ」

姉は意地の悪い言葉をいくつか投げつけてまいりましたが、依然として低い声で、外に聞こえてはまずいといった様子なのです。それで、出来ることなら、声の調子を少し上げさせるように仕向けるのが一番だと考えました。「出来ることなら」と申しましたでしょうか。感情の激しい人間をこちらの思惑どおりにさせることなど、訳もない話なのです。

思惑どおりに姉はカッといたしまして、声を張り上げたのです。それで、従姉妹のドリーが私たちのところへ飛び込んでまいりました。そして、「ハーローのお嬢様、皆さんのところに加わっていただきたいとのことです」と言っておりました。

「すぐに行きますからね、ドリーさん」　姉が申しました。

でも、また厳しい言葉を私から引き出すようなことをし、それが我慢ならないと悪態をついておりましたので、もう一度ドリーがやってまいりまして、繰り返し、皆のところに加わってほしい旨を姉に伝えました。

「私のことではないのね、ドリーさん」　私が申しました。

気持ちの優しいあの娘はワッと泣き出し、首を横に振っておりました。

「あなたは先に行ってちょうだい」　ベラが言いました「私のことを心配しているあの娘の様子に苛立っていたのです」。「その三日月さんみたいにとんがった顔をしてね。何でめそめそするのかしら。きつい顔をもっときつく見せようってわけなの」

向こうの部屋に戻りますと、ベラも叱られたに違いありません。と申しますのは、あの子があまり癪に触るものだから、決めたとおりに進めるわけに行かなかったのだ、と言っている姉の声が聞こえてきたからです。

少し間をおいて、ソームズさんが独りで戻ってまいりました。暇乞いをするためで、何度も片足を引きながらのお辞儀をし、丁重なご挨拶を重ねておりましたが、しっかり教え込まれ、励ましも受けていたのでしょう、求婚を取り下げてもらえそうな素振りは見せま

せんでした。遺憾ながら目の当たりにした手厳しい扱いのいずれについても、自分がきっかけとなっているとは考えてもらいたくない、というのです。あの人の言い方ですが、私の「憐れみ」を懇願するとのことでした。

結局のところ、なおも希望を与えてもらえたので、私には冷たくされたが、私が独身でいる間は頑張る覚悟だ、というのです。そして、これまでに聞いたこともないような大袈裟な言い回しで、永遠に労を惜しまず献身する旨を語っておりました。

私は、あの人が当てに出来るものは何なのか、これ以上ないほど強い調子で話して聞かせました。

それでもなお、あの人は固執する覚悟でいるのです。私が他の男のものになってしまわないかぎり、望みを捨てるわけに行かないというのです。

「何ですって … それでは、ここではっきりと申し上げることにいたしますが、思いを寄せている人がいるとお話しいたしましても、それでもなお固執なさるおつもりでしょうか。この点は、精々兄に利用してもらうと良いでしょう」と、私は申しました。

私の信条については知っているし、それゆえ敬愛の念を抱いてもいる。私を幸せにすることが出来るつもりでいるし、幸せを求める気持ちがないはずはない、などとあの人は言い出すのです。

たとえ叔父の屋敷へ連れて行かれましても、何の効果ももたらさないことを私は保証いたしました。あの人には決して会うつもりはないし、手紙にいたしましても、一行たりとも受け取る気はなく、だれの口を通してにせよ、あの人への好意的な言葉には一言だって耳を貸さないつもりでいるからだ、と申しました。

それは残念なことだと、あの人は言っておりました。私がそんな気持ちを持ち続けるとしたら、それは惨めな話だというのです。それでも、父とおじたちの力で、考えを変える気になってもらえるのは疑いのないところだ、と言っておりました。

そのようなことは絶対に、決してないはずだと、私は約束いたしました。

すると、辛抱して試してみる価値が十二分にあることだと言うのです。

私を踏みつけにしてなのでしょうか、私の幸せをすべて犠牲にしてもなのですかと、私は問い質しました。

あの人は、別な見方をする気になってもらえるはずだと言っておりました。

その後、あの人はご自分の資産のこと、贈与財産のこと、そして、思いの丈を並べ立てようといたしました。あの人が私に寄せているような真の愛情をもって女性を愛した男はかつていなかったのだ、などと誓ってみせながらです。

お話の初めの部分につきましては、私のほうから止めてもらいました。そして、後の部分、真の愛情という点につきましては、次のようにお話ししたのです。「私が今貴方に対して抱いておりますものよりも強い、心からの非難の気持ちをもって男性を眺めた若い女性など、かつていなかったことを請け合っても宜しいのですが、そのような女性に対する貴方の愛情というのは、一体どのようなものなのでしょう。それに、教えていただきたいのですが、この真実の告白とやらが、前もって効を奏していないことにつきまして、貴方はどのような論拠を主張なさるおつもりなのでしょうか」とです。

「あゝ、マダム。何を申し上げたら良いというのです。跪いて懇願いたします … 」

そう言うと、あの無様な男は床に両膝をついたのです。

「跪いておりますのを徒労に終わらせないでほしいのです、マダム。このように卑しめないでいただきたいのです」　こう言うと、あの人は嫌悪を催すような哀れな顔付きをしておりました。

「私も跪いたことがございます、ソームズさん。何度も跪いてまいりました。もう一度跪きましょう。膝をつくのがそんなに手柄になるのでしたら、貴方にだって跪いて見せましょう。無慈悲な兄からいわれもない虐待を受けておりますが、貴方がその手先にならないようにしていただけるのでしたらね」

「生涯にわたって献身の限りを尽くし、崇拝申し上げることさえも　…　なのに、マダム、貴女は慈悲を請い求め、期待しておられる。それでいて、一つとして示してはくださらないのだ　…　」

「自分を虐げて良いものでしょうか。貴方に慈悲を示すだなんて　…　私の地所なら喜んで差し上げますわ。貴方はこの家では大変な寵児といったところですからね。ただ、私のことはこのままにしておいていただきましょう。慈悲をお求めですが、貴方こそ他の人たちにそれを示して上げることですわ」

「私の親戚のことを言っておられるのでしたら、マダム、その値もない連中ですが、ご命令の向きはすべて実行に移されるようにいたします」

「元々お持ちでもない慈悲心を、貴方のために工面して差し上げるのが私だとおっしゃるのでしょうか。我が身の幸せを手放して、あの人たちの幸福を買い取るということでしょうか。お願いしておりますのは、この身に慈悲を垂れていただくことです。身内の者たちに対しましていくらか影響力をお持ちのようですから、その力を私のために使っていただきたいということなのです。貴方に対する嫌悪の情が私には克服出来ないことを、皆に話していただきたいのです。貴方も利口な方なら、皆に言ってほしいのです。ご自分の幸せを大切に思うゆえ、これほどまでに根深い反感と秤にかけるような危険は冒せないということをですわ。私は貴方のお申し出には相応しくないということ、また、私は勿論のこと、貴方ご自身のためにも、承諾されるとはとても考えられない求婚を続けるお気持ちにはなれないことを、皆に話していただきたいのです」

「いかなる結果をも恐れず、危険を冒す所存です」　あの残忍な人でなしが立ち上がりながら言いました。悪意に駆られたように顔面は蒼白ですし、くぼんだ両の目はギラギラと光っておりました。さらには、これでも男の端くれだとでも言いたいのでしょうか、下唇を噛み締めているのです。そして、「マダム、貴女の憎しみも私にとりましては障害でも何でもありません。二、三日もすれば、お示しすることが出来るようになるのは疑いのないところですが　…　」などと言い出したのです。

「貴方にお出来になるのは、　…　」　私も言いかけました。

あの男は巧みに切り抜け、「他の者たちに対しては、高貴な態度を取っておられるとの評判ですが、その貴女が私に見せてくださっている以上の寛大さをお示ししたいということですよ」と言っておりました。

あの男の顔は胸中の怒りに似合いのものでした。その感情を表現するために形作られている顔のようにも見えるのです。

ちょうどその時、兄がまた入ってまいりました。「あゝ、あゝ、妹よ」と、歯をくいしばりながら言っておりました。「そのガミガミ女の役割を演じていれば良いだろう。ごく最近

身につけたものだが、お前にはまさにうってつけだよ。だが、それもほんのわずかな間のことだ。今度はお前が女僭主になって、自分の罪のことで他の者たちを責めていれば良いのだ。だが、放っておきましょう、ソームズ殿。放っておくのです。威勢が良いのも束の間のことです。じきに畏まってペコペコして来ますよ。そうなったら、意気地のない馬鹿娘ってところでしょうね。良心の咎めもありますからね。お許しください、お忘れください」「残酷にも兄は、哀れっぽい声色を真似ておりました」と頼み込んできますよ」

兄が乱暴なことを言い出しますと、ショーリーが呼び戻しにやって来たのですが、顔を真っ赤にして部屋から飛び出て行きます際にも、兄はさらに何か口走っておりました。

このような野蛮な扱いにすっかり怯え、気も動転してしまいましたので、私は椅子から椅子へと席を移しておりました。

あの男は、兄の激昂ぶりを遺憾に思うということで、自己弁護を試みておりました。

「どうか独りにしてください。独りにしていただきます」と、私は扇子を使いながら申しました。「でなければ、私、気を失ってしまいます」とです。実際、卒倒しそうな気がしていたのです。

あの男は、好意に与りたいなどと口説いておりましたが、自信満々の様子でした。私の苦しむ姿を目の当たりにして、自信を深めたのだと思います。私の震える手、抗う手を乱暴に掴み、あのいやらしい唇に押し当てるようなことまでしたのです。

私は思い切り軽蔑した態度で身を振りほどきました。あの男はペコペコとお辞儀をしながら出て行ったのですが、取り乱した私の姿を見て、独り悦に入り、楽しんでいるように思えました。

忌まわしい男の姿が今も目に浮かぶようです。退出する時には無様な格好で後退りして行ったのですが、開いていたドアの角に突き当たってしまい、それでやっと思い出したように、待望の背中をこちらへ向けてくれたのです。

あの男が退きますと、ベティが伝言を携えてまいりました。私の部屋へ戻っても良いとのことでしたし、与えられた時間は少ないのだから、よくよく考えておくようにとのことでした。ただ、あの娘の考えでは、土曜日までこの家に留まるのを認めてもらえるのは間違いないというのです。

ベティが申しますには、私に対してひどく〈軽率な〉態度を取ったということで、兄と姉はお咎めを受けたのだそうですが、二人が、アントニー叔父様もですが、私の挑発行為について報告をしますと、皆はこれまで以上に、ソームズさんを支持することに心を固めたというのです。

ベティの言葉では、あの男のほうでもますます私のことが気に入って、話し合いに落胆したというよりは、むしろ喜んでみせたとのことでした。自分の食卓に威厳を添えてくれるはずだと、私の上品さのことや、それに類したことを有頂天になって喋り続けていたというのですが、あの男が口にした言葉なのか、あるいは、あの娘がでっち上げたものなのか、そのいずれかだったのでしょう。

結論ということで、あの娘はこんなふうに言っておりました。「お嬢様、今こそ潔く降伏なさって、お好きな条件で手を打つ時期ですわ。でなければ、宜しいですか、私がソームズ様なら、お嬢様にとってはもっと不都合なことになるでしょうね。それにですよ、お嬢様」と、生意気な娘はなおも言葉を続け、「道楽者の紳士に憬れる女なんているでしょうか

ね。真面目な紳士にいつまでも崇拝してもらえるかもしれないというのにですよ」などと言っておりました。

部屋を出て行く時には、さらに次のような台詞を吐いておりました。「お書きになっていたものをまんまと隠しおおせましたのは、呆れるほどの幸運だったと申し上げなければいけませんわね、お嬢様。いつも書き物をしていらっしゃったのに私が気づいておりますことは、当然お考えのはずですわ。そして、知っていらっしゃるのを私から隠そうと骨折っておられるわけですから、私といたしましても、お嬢様の秘密を守る義務があるとは思いませんわ。でも、ことを荒げるのは好みじゃございませんし、よりを戻すことのほうがずっと好きなんです。仲裁の才能がございましてね、これまで得意にしてきたのです。私のことを敵と思っておられたのでしょうが、そのとおりだったとしたら、お嬢様はもうここにはいらっしゃらなくなっていたでしょうね。でも、手柄にするつもりでこんなことを申し上げているんじゃないんですよ、お嬢様。本当の話、すべて片付きますのが早ければ早いほど、お嬢様にとっては良いのですからね。私にとっても、皆さんにとってもそうですわ。これは確かでございます。ただ、最後に一言触れておかねばなりません。請け合いますが、お嬢様、お嬢様のペンとインクは（じきに出て行かれるわけですから）間もなく自由には使えなくなるってことですわ。そうなりますと、そちらのほうの楽しみはなくなってしまうのですから、お嬢様のように活発な心の持ち主はどのような熱中の仕方がお出来になるのか、はっきりいたしますわね」とです。

こんなことを仄めかされたものですから、気掛かりで仕方ございません。早速、ペンとインク、それに、紙を別々のところに隠そうと思っております。蔦の東屋に安全な場所が見つかれば、あそこに一部を保管します。最悪の場合でも、絵を描く時に使っております黒鉛筆が一本と、赤の鉛筆も一本ございますし、衣装の型紙が、他のものが手元にないときには、便箋の代わりになると思うのです。

例の書類をお送りしておきましたのは本当に幸運でした。皆はあの書類を徹底的に探したのです。部屋の様子がすっかり乱れておりましたので、それが分かります。ご存じのとおり、私は整理整頓にはうるさいほうですから、リボンにしてもレースにしても、縁飾りにいたしましても、目を瞑りましても置いてある場所は分かるのです。本にしても同じことで、順序も置き方も妙に変えてありました。本の後ろを調べるとか、何冊かは中まで覗くためだったのだろうと思います。衣装もだいぶ皺になっておりました。貴女のご助言のお陰ですわ、皆の当てが外れてしまいましたのは。感謝申し上げます。

眠気と疲れのためでしょう、「お陰ですわ」と書いたところでペンが指から落ちてしまいました。再びペンを手に取りまして、文章の最後まで書き記したところです。これで結びとさせていただきます。

変わることなき感謝の念と親愛の情をこめまして、貴女の

Cl. ハーロー

手紙　三十四

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月五日　水曜日　十一時

機会のあり次第筆を執らなければいけない状態なのですが、隠してありました予備のものを用いてのことです。と申しますのも、すぐに詳しくお話しいたしますが、ペンとインクを（皆が見つけたものすべてですが）取り上げられてしまったのです。

一時間ほど前、貴女宛の長い手紙を隠してまいりました。それと、いつもの場所にですが、ラヴレースさん宛の短信も置いてきました。堪え切れなくなって、何か早まったことをされては困るからですが、次のようなことを四行に認めました。つまり、面会が終わりましたこと。そして、私がソームズさんを固くお断りしたこともあり、これ以上私に対して、あの人のための働き掛けを行う気持ちは起きないだろう、といったことです。

もっと早くに貴女への手紙を隠すわけにはまいりませんでしたが（疲労困憊しておりましたし、貴女へのお便りを認めますのに夜通し起きていたこともありまして、今朝はいつもよりも遅くまで伏していたのです）、でも、早いうちにお手元に届き、今晩か明日の朝早くにはお返事を送っていただけるものと期待しております。どんなに短いものでも構いません。お母様のご厚意に甘えられるのかどうか、お知らせください。この点につきましては、出来るだけ早くに知っておかなければと思うのです。と申しますのも、身内の者たちは遅くとも今度の土曜日までには、もしかいたしますと明日にでも、私を追い出す決心でいるからです。

それでは、ペンとインクを取り上げられますまでにありましたことの一切と、そのような暴挙がどのような仕方で行われたのか、お教えいたしましょう。出来るだけ手短にお話しいたします。

私の考えでは、叔母はこの屋敷で寝起きをしているように思うのですが（ソームズさんとおじ二人も同じことです）、その叔母が私のところへやってまいりまして、こう言うのです。ラヴレースさんについてソームズさんが話そうとしていたことを是非とも聞いてもらいたい。とても下劣な男で、見下げ果てた夫になることを確信してもらえるような事柄を知ってもらいたいだけだ。どこまで信じるかは私次第であるし、ソームズさんの利害が絡むことでもあるから、もしそうしたいのなら、割り引いて受け止めて構わない。ただ、私自身に関わりのある点について、間接的にラヴレースさんを質してみるだけのことだとしても、私にとっては役に立つかもしれない、とです。

私は次のように申しました。あの方がどのようなことを話しているとしても、私は気にしない。何故なら、私にとって不利に働くものでは有り得ないと確信しているからであるし、また、私は乗り気になっているのだと、薄情な身内の者たちはいわれもなく私を責めているけれど、あの方のほうでは、そのように考えるべき根拠を一切持ち合わせていないのだから、とです。

叔母が申しますには、あの方はご自分の家柄を笠に着て、私どもと縁組をしたのでは名が廃るとでも言わんばかりに、一族を軽蔑するような話し振りだというのです。

私は次のように答えておきました。貴族との縁故がないことを除けば互角ともいえる一族に対し、無礼な言葉を吐いているというのが本当の話であれば、まことにもって下劣な人間だ。地位階級というものは、それを飾りとするだけでなく、むしろ、それを引き立てるだけの美点を持ち合わせない子孫にとっては、名誉よりも恥辱をもたらすものだと考えている。上流階級の女性以外とは結婚しないなどと、行く先々で言明しているのもそのた

めだが、確かに兄は、馬鹿げたプライドから一族のことを恥と考えている。しかし、ラヴレースさんに関し、私たちのことを軽蔑するとか、本人の資質とは関わりのない利点を誇るような浅ましい心の持ち主であることが確信出来た場合には、だれもがあの方の品行のことをさんざんに言っているけれど、同じように、私としてはあの方の分別を見下げ果てたものと考えたい、といった具合にです。

叔母は、あの方が実際にそのような無礼を働いているのだと主張し、いくつか例を示そうといたしました。私のびっくりするようなものだと言っておりました。

私はこう答えました。たとえ、ラヴレースさんがそのような無礼な態度を取っているのは間違いのないところだとしても、公平さを守るということだけにせよ（あれだけ身内の者たち全員に嫌われ、人が集まるたびに、身内の者からあれだけ罵倒されているのですから）、あの方のものだとされている、その言葉を口に出すことになったきっかけを調べてみるのが当たり前だと思う。また、身内の一部の者が自分の財力を重んじていることが（おそらく、利点とされる他のことはすべて軽蔑しているのでしょうし、あの方の家柄を貶めるために、名門を自負して世の顰蹙を買うことさえしているのですから）、同じような軽蔑の念をあの方に起こさせているのではないか、その点も調べるのが公平というものだ、と言ったのです。そして、「要するに、叔母様、あの方が執念深いのであって、こちらにはそれほどの執念深さはないなどとおっしゃることは出来るのでしょうか。私たちはあの方について失礼なことを言っておりますが、それよりももっと失礼な言葉をあの方は私たちに向けてきたりするのでしょうか。あの方はひどい夫になるはずだと、繰り返し繰り返しのご忠告ですが、今私が受けております仕打ち、とりわけ、兄と姉から受けております仕打ちよりももっとひどい扱いを、あの方が妻に向かってするようなことは考えられることなのでしょうか」と尋ねたのです。

「あゝ、あなたは　…　どういたしましょう。この邪悪な男は、そこまでしっかりとあなたの心を捉えてしまっているのですね」　叔母が申しました。

「多分、そうではないと思いますわ、叔母様。ただ、父親にせよ母親にせよ、こういった事柄について、自分たちの娘に同じ考えを持ってほしいのでしたら、子供のほうが、名誉を重んじる気持ちや高貴な心に動かされ、家族の者が反感を感じている男の肩を持たざるを得なくなるような、そんな発言はしないよう、くれぐれも注意を払っていただきたいものです。でも、これらの点には一切触れないといたしましても、あの方とは永久に交際を断つと申し出ているのですから、何故あの方のことが持ち出されるのか分からないのです。それから、何であれ、あの方のことについて耳を傾けてほしいと、どうして要請されなければならないのか、その理由も分からないのです」

「そうね。でもね、ラヴレースさんがあなたについて言っていたということのお話をソームズさんにさせてあげても、別に害はないでしょう。あなたもソームズさんにはずいぶん手厳しい態度だったけど、あの人はもう一度あなたに会いたいお気持ちなのよ。この件について聞いてもらいたいとおっしゃっているわ」

「お聞きすべきなのでしたら、叔母様　…　」

「そうするべきよ。それが良いわ」　叔母が勢い込んで口を挟みました。

「私についてあの方が言っていることをお聞きになって、叔母様としては、ラヴレースさんの卑劣さを確信なさったということなのでしょうか」

「そのとおりですよ、あなた。それに、そのことでは、あなたもあの人のことを嫌悪するのが当然だと確信しておりますよ」

「それじゃあ、叔母様、叔母様のお口から話していただきたいと存じます。ソームズさんにお会いする必要はございませんもの。叔母様からお聞きすれば、二倍の重みを持つわけですからね。それで、あの方は私についてどんな言い方をしたのでしょうか」

叔母はすっかり途方に暮れておりました。

ようやく口を開きますと、叔母は次のように言いました。「そうですね、あなたがどれほど夢中なのか、分かりましたよ。残念ですね。だって、間違いなく保証いたしますが、そんなことには何の意味もありませんからね。あなたはソームズ夫人にならなければいけないのです。それも二、三日のうちにですよ」

「もしも、心からの同意と、声に出しての承諾が結婚には必要なのでしたら、絶対にソームズさんと結ばれるわけにまいりませんのは確かですし、今後とも決して結ばれるようなことはないはずです。それに、無理やり私の手をあの人に与え、結婚の祈りが読み上げられますまで握らせておくようなことをしますと、親戚のだれにいたしましても、大変な責めを負わねばならなくなるというものです。その間ずっと、きっと私は意識を失い、ひきつけを起こしているでしょうからね」

「無理やり結婚させられる様子を、実にロマンティックに描いてみせるものですね、あなたも。でもね、あなた自身の頑固さを見事に描き出したのだ、と言い出す人も中にはいることでしょうよ」

「兄と姉ならそう言うでしょう。でも、叔母様なら、頑な気持ちと嫌悪の情との区別はしてくださるものと思います」

「嫌悪の情だと思われているものが、本物の頑固さから生まれてくることだってあるのですよ」

「自分の気持ちは分かっているつもりですわ、叔母様。叔母様にも分かっていただけたら嬉しいのですけれど」

「ともかく、もう一度ソームズさんにお会いするのですよ、あなた。あなたが考えている以上に喜んでもらえることですし、あなたのためにもなることなのですからね」

「何のためにお会いしなければいけないのでしょうか、叔母様。私が嫌いだと申し上げるのを聞くのが、あの人はお好きだとでもおっしゃるのでしょうか。あの人は、私が身内の者たちをますます怒らせるよう望んでおられるのでしょうか。あゝ、兄が陰険で野心家なばっかりに　…　」

「まあ、あなたは　…　」と、私の嘆きの意味が分かっているみたいに、叔母は憐れみの色を浮かべて申しました。「でも、必ずそうなるということでしょうかね」

「そうなるに決まってますわ、叔母様。ソームズさんを夫にするのは絶対に嫌だと言明しておりますことで、皆さんが私に腹を立てるというのでしたらね」

「ソームズさんがお気の毒ですよ」　叔母が申しました。「あなたのことを礼讃しておられるのです。もう一度会いたがっておられるのです。昨日はひどい扱いをお受けになりましたが、それでますますあなたを好きになったとおっしゃるのです。それはもうあなたに夢中なのですよ」

嫌な男だこと、と私は心の中で叫んでおりました。あの人が夢中だなんて　…

「ご自分が大きく加担していることですのに、人が苦しむのを楽しむだなんて、何という情け知らずの人でなしなのでしょう。でも、分かりますわ、叔母様。分かっているのです。私は兄と姉、それに、ソームズさんの慰みのため、なぶり者にされる動物くらいに思われているのでしょう。誰も彼も、皆平気な顔をして残酷なことをするのですからね。この私があの男に会うですって、叔母様。情けのかけらもないあの男に …… 出来ることでしたら、お会いしたくはございませんわ。本当に嫌です」

「ソームズさんはあなたのことを賛美していらっしゃるのじゃありませんか。回転の早いあなたのおつむは、何というひねくれた受け止め方をするのでしょうね。昨日は感情を露にして、あの方を軽蔑したような態度でしたけれど、手厳しい目に遭わされたからこそあなたに夢中だとおっしゃっているのです。あなたが考えているほど心の狭い人ではございませんよ。心の冷たい人でもありません。私の言うことを聞いて（お父様もお母様も期待しておられるのですから）、もう一度あの方にお会いするのです。お話ししたいということを聞いて差し上げるのです」

「もう一度お会いすることに同意するなんて、どうして私に出来るでしょうか。他の皆はもとより、叔母様にまで、昨日の面会のことをあの人への励ましと受け止められてしまう有り様ですもの。同意の上でもう一度会うようなことがあれば、そのように受け止められても仕方がないと、自分自身が明言したというのにです。そして、決してあの人を励ましたりはしないと、固く心に決めているというのにですわ」

「私への非難は控えていただきたいわね、あなた。どちらの側からも、少しも感謝していただけないのですからね」

そう言うと、叔母は急いで出て行きました。

「お願い、叔母様」と、私はドアのところまで追いかけて行き、叫びました。

でも、叔母はそれ以上耳を貸そうとはしてくれませんでした。叔母が突然に席を外したものですから、卑怯にも盗み聞きをしていた者も慌ててしまったようです。階段の踊り場で足を踏み外す音が聞こえたので分かったことです。

このような仕打ちからやっと立ち直りました頃、ベティが上がってまいりまして、「お嬢様、階下のお嬢様の客間でお会いしたいとのことですわ」と言うのです。

「だれからなの、ベティ」

「そんなこと申し上げられませんわ、お嬢様。お姉様かもしれませんし、お兄様かもしれませんわね。私の承知しておりますのは、お二人とも二度とお嬢様のところへ上がっていらっしゃるおつもりはないということですわ」

「ソームズさんはお帰りになったの、ベティ」

「そのはずですわ、お嬢様。呼び戻してほしいとおっしゃるのですか」　生意気な娘はそんなことを言っておりました。

私は降りて行きました。一体だれのところへ呼び出されたとお思いでしょう。驚いたことに、兄とソームズさんの前へだったのです。ソームズさんはドアの陰にこっそりと立っておりましたから、兄がからかうように私の手をとって部屋へ導き入れますまで、その姿は目に入らなかったのです。私は幽霊を見たみたいに、ギョッとしてしまいました。

「座ってもらおうか、クレアリー」

「その後はどうなりますの、お兄様」

「そうだな、その蔑んだような顔付きは止してもらおう。そして、ソームズ殿がお前に話してくださることをお聞きするのだな」

もう一度嬲り者にされるために呼ばれたのかしら、と私は考えておりました。

「マダム」とソームズさんが口を開きましたが、まるで、機会が得られないと困るとばかりに［確かに、正しい判断でしたが］、慌てた話し振りでした。「ラヴレース氏は結婚嫌いを公言して憚らない男なのです。それに、貴女の操を奪おうと企んでいるのです。万が一にも……」

「何て卑劣な中傷をなさるのでしょうね」　私は興奮して叫び、兄が握っていた手を乱暴に引っ込めました。兄は横柄な態度で、その手をソームズさんに渡そうとしていたのです。「あの方にそんなお考えはありません。考えたりなさるはずがございません。でも、貴方こそそんな考えをお持ちなのです。自由な心に圧力を加えようとするのが、心の操を奪うのと同じことになるのでしたらね」

「あゝ、何て乱暴な女なんだ、お前は」　兄が言いました。「だが、まだ行っちゃならんぞ」　私は急いで立ち去ろうとしていたのです。

「何のおつもりですの［と、振りほどこうとして、私は激しくもがきました］。嫌がっておりますのに、こんなふうに引き止めるなんて」

「まだ行かせはしないぞ、じゃじゃ馬めが」　兄とも思えない仕草で、私を両腕で抱き締めるのです。

「それじゃあ、ソームズさんには席を外していただきますわ。どうしてそんなふうに私を引き止めたりなさるのでしょう。虐待されるいわれのない妹を兄がどんなに邪険に扱うのか、お兄様ご自身のためにも、出来ることならお見せしたくないのです」

身を振りほどこうとして、私があまり激しく争ったため、兄もやむなく手を放したのですが、こんな言葉も忘れませんでした。「それじゃあ、行くんだな。暴れ女め。意志というやつは恐ろしく強いもんだ。こいつを抑えておくなんて出来やしない」とです。

私は自分の部屋へ飛んで帰りました。錠を下ろしましたが、体は震え、息を切らせておりました。

十五分もしないうちにベティが上がってまいりました。ドアを叩き、通してくれと（あの娘も半ば息を切らして）頼むものですから、入れてやりました。

「主よ我らを憐れみ給えってところですわね」　あの娘が言い出しました。「それこそ大騒動ですわ、このお屋敷は。［せわしなくあちこちと歩き回り、ハンカチで扇ぎながら言うのです］殿方もご婦人たちもかんかんに怒っていらっしゃいますし、ご令嬢はとんでもない頑固者。恋人はまったくの弱腰で、おじ様たちはおかんむり。あゝ、何てことでしょうね。お屋敷中てんやわんやですわ。で、すべては何のためだというのでしょうね、まったくの話。ご令嬢が幸せになれるかもしれないというのに、なりたくないとおっしゃるだけの話でしょう。ご令嬢が旦那さんを欲しがりながら、もらいたくないと言い張っているだけのことですわ。もうメチャクチャですわね。以前でしたら、何もかもが平和で穏やかなものでしたのにね」とです。

あの娘はこんなふうに独りで喋り続けておりましたが、その間私は、いつになったら独演が終わるものかと、じっと腰を下ろし（あの娘の用事が歓迎出来るものであるはずはないと確信しておりましたから）、堪えられるだけ堪えていたのです。

ようやく私のほうを向くと、「お申し付けのとおりにしなければなりませんわ。私には避けようのないことですもの。お怒りにならないでくださいね。お嬢様のペンとインクを階下へ持って行かねばならないのです。それも、今すぐにですわ」と、あの娘が言うのです。

「だれの命令なのかしら」

「お父様とお母様のですわ」

「分かるものですか」

あの娘が私の控えの間へ行こうとするものですから、私は一歩先に入り、「手を付けたら承知しませんからね」と言ってやりました。

従姉妹のドリーがやってまいりました。「マダム　…　マダム　…　」と、優しいあの娘は、可哀相に、泣きながらとぎれとぎれに言っておりました。「是非とも　…　是非ともお願いいたします。ベティに、それとも私に、お嬢様のペンとインクを渡していただきたいのです」

「どうしてもなのね、あなた。それじゃあ、あなたに渡しましょう。でも、この図々しい人には嫌ですからね」　そう言うと、私はあの娘にインクスタンドを預けました。

「私、残念ですわ。このようなことをお伝えする役目になるなんて、とても残念なのです。でも、同じ屋根の下にお嬢様を置いておくわけには行かないのだと、お父様がおっしゃるのです。明日か、遅くとも土曜日までには貴女を連れて行ってもらおうと、とても残念なのです。決心しておられるのです。ですから、そのことをどなたにもお知らせにならないよう、ペンとインクを取り上げようというのです」　あの娘が言っておりました。

こうして、可愛いあの娘は部屋を出たのですが、とても悲しそうにして、私のインクスタンドと付属の品一切を携えて行きました。それに、小さな束にしたペンも持ち去ったのですが、これは部屋の大捜索が行われました際に目に留まっていたもので、請求するようにあの娘は言い付けられていたのです。たまたまその数は減らさずにおいたのですが、烏の羽ペンを半ダースほど別々の場所に隠してあったのです。幸運だったと思います。と申しますのは、その束に何本あるのか、皆も数えていたに違いないからです。

ベティはなおも続け、次のようなことを話しておりました。母が今では他の者に劣らず私に腹を立てていること、私の運命は決定したということ、私の激しい態度に接し、だれ一人として私の弁護をする者はいなくなったこと、ソームズさんは唇を噛み締めたり、ぶつぶつ呟いたりしており、あの娘の言い回しですが、「お口に出されたこと以上にお胸に秘めておられるようだった」、といったことをです。

でも、こんなことも匂わせておりました。私は嫌でたまりませんのに、あの情け知らずの人でなしは、私に会うのが楽しみで、もう一度会いたがっているというのです。残酷な男に違いないと思うのですが、いかがでしょうか。

あの娘はさらに続け、ジョン伯父様は私のことをもう諦めたとおっしゃり、ソームズさんに同情していたけれど、この一件があったからといって、今後とも私のことを悪く思わないでほしいと希望していたということ、アントニー叔父様のほうでは、私は精々苦しむのが良いのだというご意見だった、といったことを話しておりました。それに、自分としても、などと前置きをした上で、この屋敷に住む者の一人として、同じ側に立ったあの娘の意見まで述べておりました。

階下での話や企みにつきましては、どのようなことであれ、耳にする方法が他にござい

ませんので、あの娘の生意気さをずいぶん我慢しなければならないこともあるのです。そうでもなければ、我慢出来ることではございません。それに、実際、あの娘は兄と姉の相談ごとすべてに加わっているらしいのです。

ハーヴィー嬢がもう一度上がってまいりまして、半パイント入りのインク瓶を渡してくれるよう求めました。皆が前に目にしていたものなのです。

私はためらわずに差し出しました。

私には書き物をする手立てがあるかもしれないという疑念を、皆がまったく持たないようですと、その疑いがあります場合よりはもっと長く、私をこの屋敷に置いてくれるだろうと思うのです。

今私が置かれておりますのは、このような状況です。

私が頼りとし、望みを掛けておりますのは、ただただ、お母様のご厚意です。それが得られなければ、何をしたら良いのか見当もつきません。次にはどうなるのか、だれにも分からないのですから　…

手紙　三十五

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

水曜日　午後四時

書き上げたばかりの手紙と、ラヴレースさんからのお手紙のうちで、まだ貴女にお届けしていなかったものを隠しに行き、今戻ったところです。私の長い手紙はそのまま残っておりました。ですから、両方を一緒に手にされることになるでしょう。

あの手紙がお手元に届いておりませんのが少し気掛かりですが、お宅の使用人がいつも暇というわけにもまいりませんからね。それでも、手紙を書き次第、隠しに行くことにいたします。今では、身の回りには何一つ置いておくわけにまいりませんし、筆を執ります時には、錠を下ろして閉じ籠もるつもりです。私にはペンもインクもないのだと皆は思っているわけですから、不意を突かれたくないのです。

いつもの場所に、この勤勉な男性からもう一通手紙が届いておりました。その内容からはっきりいたしましたが、この屋敷の出来事であの方に筒抜けにならないものはないということです。それも、ほとんど間を置かずになのです。この手紙は私の短信を手にする前に書かれ、あれと引き替えに置かれたものに違いないのですが、私が、例の席で、叔父とソームズさんに向かって自分の立場を（あの方の言い方ですと）「言い張りました」のを褒めている部分があるのです。

でも、私を屈服させようと、皆がいよいよ気持ちを固めているのは確かだ、とあの方はおっしゃっています。

ご一族の方々からのご挨拶を紹介し、皆さんが私を迎え入れるのに大変乗り気なことを知らせてきています。まだその力があるうちにこの屋敷を抜け出すよう、それはそれは熱心に勧めておられますし、馬場の横手の林に通じる踏み越し木戸のところに、あの方の叔父様の六頭立てのチャリオットを待たせておくことについての許しが欲しいと、その点をもう一度強く催促しておられます。

贈与財産につきましては、私の希望どおりにしたい旨を再び申し出ておられます。信義を守り、公明正大に振る舞うつもりでいることは、M卿、そして、セアラ夫人とベティ夫人が保証人になってくれるはずとのことです。ただ、どちらのご夫人にも頼りたくないということであれば、また、ご自分としては切に望んでいることではあるけれども、即座にあの方を世の男性のうちで一番の幸せ者にする気持ちにはなれないということなら、私の持ち家に移り住み、従兄弟のモーデンが帰国するまでの間、M卿を後見人兼保護者として受け入れてくれるよう、力説しておられます。無事にあの家を手に入れる方策はあるとのことで、私からの招待があり次第、親戚のご婦人たちがつめかけてくるはずだとおっしゃるのです。また、お願いすれば、きっとノートン夫人かハウさんがしばらく滞在してくれるに違いないとも言っておられます。私があの家に住み込んでしまえば、裁判沙汰にする口実も成り立たないというのです。また、私がそのように望むのであれば、ご自分から顔を出すようなことはしないし、すべてが無事に落ち着くまでは、身内との和解の件で、私の指示するあらゆる手段が試みられるまで、従兄弟のモーデンが帰国するまで、私に相応しいとあの方が考える贈与財産の取決めが出来上がるまで、そして、私があの方の品行について申し分のない確証を得るまでは、ご自分から結婚を口にするような真似はしないつもりだとおっしゃるのです。

私のような人間が父親の家を捨てたりすれば、恥辱を味わうことになりはしまいかという懸念につきまして、あの方は（残念ながらおっしゃるとおりのようですが）次のように述べておられます。私が受けている仕打ちのことはそこいらじゅうの人たちが口にしていることであるが、世間の声は私のほうに傾いており、身内の者たちでさえも、あの方の言い方を借りますと、「私がこれくらいの正当な扱いを要求してくる」ことは予期しているのであって、さもなければ、どうして私を監禁したりするのか、とおっしゃるのです。あの方が強調しておられますのは、私は独り立ちの権利を備えており、このような仕打ちを受けている以上、十分に口実はあるという点なのです。前述の手段を選びましても、身内の屋敷から自分自身の家に移るだけのことであるし、あるいは、その手段に訴えない場合であっても、自分の家を占有するためのことなのだから、とおっしゃるのです。また、仮に恥辱を味わうようなことが私にあるとしても、そのすべては、すでに身内の者たちが与えているのであり、幸運にも私を妻と呼ぶことが出来るならの話だが、私の名誉を慮る気持ちの点では、ご自身もご一族の方々も、私に遅れを取るものではない、と力説しておられるのです。そして、失礼ながらとお断りになった上で、あの方とご一族からの保護を、どのような形にせよ、かたじけなくも受け入れてくれるなら、私自身の身内の代役をするという点では、ご自分の一族に優るものはないと言明しておられるのです。

でも、私が叔父の屋敷に連れて行かれるのは、何としても阻止するつもりだと、繰り返し言っておられます。一度あの屋敷に入ってしまえば、あの方にとりまして、私は永久に失われることになるからだというのです。兄と姉、それにソームズさんが、私を迎えるためにあの屋敷に行く計画を立てていることや、実際に式が終了するまで、父も母も私に近寄らないつもりであり、その後で顔を見せることになっているが、それは、二重の義務に縛られて私が負うことになるはずの責務の数々を説き聞かせることで、醜悪な夫に甘んじるよう諭すためなのだ、といったことを述べておられます。

このとおりですわ。一方からはどんどん追い立てられ、また、もう一方からはしきりに

招かれている状態なのです。この最後に暗示されております点は、いかにもありそうな話なのです。皆の行っておりますことのすべてがそこへ向かっているように思われます。そして、事実、ほぼそれに等しいことをはっきりと口に出しているのです。

あの方は次の点を認めておられます。このことを知って、あの方なりの手をすでに打ってある。ただ、私の立場を尊重しているだけに（身内の慎みのなさを考えれば、ご自分が辛抱するような義理はないという点を斟酌してほしい、とのことですが）、何としても過激な行動は避けたいと願っており、私を叔父の屋敷へ連れて行こうという計画に皆が固執する場合、あの方がどうなさるおつもりでいるのか、その決意のほどを、偶然知ったことにして、身内の者に怪しまれないような人物の口を借りて伝えてある。これは、険悪な事態が起こるのを恐れ、身内の者たちが方法を変える気になってくれるよう期待してのことである。ただし、このような示唆を与えてしまったことで、最大の危険に身を晒した点も自覚している。何故なら、皆の不安に乗じることが出来ない場合には、皆がますます防御を固めることは間違いないからだ、というのです。

それにいたしましても、この男性は何という恐ろしい冒険家なのでしょうね。

このお手紙への返事として、今朝でも明朝でも構わないから、数行書き送ってほしいと懇願しておられます。返事を届けてもらえない場合には、身内の者たちが決意を固めていることは聞き及んでおり、その点から推して、私が前にも増して厳しい制約を加えられることになるのだと判断する。そして、その考えに基づいて、ご自分なりの方策を取らざるを得ないだろう、とおっしゃるのです。

これの前に届きましたあの方の手紙からと同様、上の要約からも（両方とも同じ調子で綴られておりますから）お分かりでしょうね。私が困難な状況に置かれておりますのを良いことに、あの方はぬけぬけと意思表示や提案をしておられますが、それはもう奇妙なほどです。脅迫めいた台詞につきましても同じことが言えますが、このような事情さえなければ、到底見過ごすわけには行かないものです。

でも、急いで何らかの決断をしなければいけませんね。でなければ、私の手には負えないことになってしまうでしょう。

考えてみたのですけれど、あの方の手紙を同封しようと思います（要約の手間は不要だったかもしれませんね）。そのほうが、あの方の提案のすべてや情報につきまして、よりよく判断していただけるでしょうし、他の者たちの手に渡るようなことになっても困るからです。どのような返事にしたものか、迷っているところですが、この内容を忘れるはずはございませんからね(ア)。

あの方のお身内に保護を求め、この身を投げ出すなんて、考えるだけでも耐えられないことです。でも、貴女のお返事をいただきますまでは、あの方の提案を詳しく検討するのは止すことにいたします。実際の話、期待を寄せて構わないものといたしましては、貴女のお母様のご親切以外には考えられません。保護を求めて駆け込むにいたしましても、お母様のところでしたら、他のどなたのところに比べましても、妙な噂は立てずに済むと思うのです。それに、お母様のところからでしたら、父の屋敷へ戻るのも容易です（その場

(ア) この考えどおりに彼女はラヴレースの手紙を同封している。ただし、最も重要な部分は彼女の要約で紹介されていることもあり、本書では割愛されている。

合は、あの方のご家族のところへ逃げ出すのとは違いまして、取り返しのつかない背反行為というわけではないからです)。戻るとは申しましても、繰り返しますが、独り立ちのことではなく、お断りするのを認めてもらうことだけが条件なのです。独り立ちを求める気はございません(お母様にとりましても、そのほうが面倒は少ないと思います)。勿論、こちらで主張をすれば、祖父の地所を占有する権利があるのは事実です。兄が自分に遺贈された地所において行使しておりますような、だれにも阻止出来ない権利のことを申しているのです。祖父の遺言で私がどのような権利を得たにせよ、父の支配が道理に適ったものであるかぎりは、その力から解放されたと考えるような真似は絶対にしていけないと思うのです。勿体ないことに、祖父があの地所を譲ってくださいましたのは、的を射たご助言でしたが、私が孝養を尽くした報いとしてなのであって、務めをないがしろにするためのことではなかったのです。このような非難を耳にいたしますと、これほど貴重な贈物を受けながら、それに応えられないようなことがあってはと、いよいよ心配になるのです。このような私の心を身内の者たちが知ってくれたらと思います。私の気持ちをこれまでどおりに考えてくれさえしたら …… そう願わずにはおられません。だって、もう一度申しますが、私の心は、私自身が騙されているのでなければ、何も変わっていないのです。変わってしまったのは皆の心のほうなのですからね。

M卿の馬車を用意しておくとラヴレースさんが申し出ておられる、あの人目に付かない場所まで、貴女がチャリオットなりシェーズ(二八)なりを送ってくださるのをお母様が許してくださいますなら、何をすべきか(憤慨させられたり、脅されたり、また、気を揉んだりしております私ですから)、一瞬たりとも躊躇はしないつもりです。前にも申しましたとおり、どこに置いてくださっても構いません。小屋であれ屋根裏であれ、どんなところでも結構なのです。召使に姿を変えましても、あるいは、召使の妹ということになさっても構いません。一つにはソームズさんから逃れ、もう一つには、自分の家族と敵対している男の家族に助けを求めるような恥ずかしい真似を避けることが出来れば、それで良いのです。少しは気も晴れることと思います。優しいお母様に拒まれるようなことになりましたら、どこへ、あるいは、だれのところへ、助けを求めたら良いというのでしょう。悲嘆に暮れております友に、大切な大切な人、どうかご助言をいただきとうございます。

❁　❁

ここで中断いたしました。あまりにも心が落ち着かないものですから、自分の考えに自信が持てなくなってしまったのです。そんなわけで、場所を変えることで気持ちを鎮めてみようと思い、庭へ出掛けました。〈ハシバミの径〉の角を一つ曲がると、すぐにベティがやってまいりまして、「お嬢様、お父様がいらっしゃるところですよ。アントニー叔父様が来られるのです。若様と私のお嬢様もですわ。庭を散歩なさるのです。お父様が、鉢合わせするのをご心配になり、お嬢様はどこにいらっしゃるのか調べて来いと、私をお寄越しになったのです」と言うのです。

私は斜めに分かれております小道のほうに入り、姉が現れましたので、皆が通り過ぎるまでイチイの生垣の陰に隠れておりました。

母は体調が優れないようです。お気の毒に、部屋に籠もっているのです。もしもさらに

具合が悪くなるようでしたら、私にはまた一つ不幸が増えることになりましょう。皆は私を親不孝だと言っておりますが、それが母の胸に応えたのではと、気が咎めてしまうでしょうからね。

イチイの生け垣に隠れながら、こんなにも間近に父を目にいたしまして、私の胸がどれほど騒いだことか、ご想像いただくのは無理と存じます。父が通り過ぎて行く姿を生け垣越しに見ながら、嬉しく思っていたのです。ところが、次のような言葉を口にするのが聞こえてまいりますと、関節という関節が震えてしまいました。「ジェームズ、息子のお前とベラ、そして、弟のお前にだが、この一件はすっかり任せることにするぞ」と言っていたのです。私のことなのは疑う余地もございません。でも、どうしてあれほどまでに心が騒いだのでしょう。これまで何日にも亘りまして、兄と姉のむごい仕打ちに晒されていたと言って構いませんのにね　…

父が庭に出ているうちにと、容体を尋ねることも兼ねまして、ショーリーに頼み、丁重な挨拶を母に伝えてもらいました。あの娘には偶然階段のところで出会ったのですが、私の女看守を別にいたしますと、だれ一人として私の前に姿を見せようとはしないからなのです。届いた返事は、無念なことに、伝言したのを後悔するようなものでした。勿論、容体を気遣う気持ちを悔やんだりはいたしませんが　…　「あの子が原因で体調を崩しているのです。尋ねてもらわなくて結構と言っておやり」という厳しい返事でした。「あの子からの挨拶は一切無用です」とも言っておりました。

辛くて辛くてなりません。本当に辛い話です。

喜ばしいことに、母の病状は快方に向かっているように聞いております。疝痛ということですが、母はよく罹るのです。症状は消えたように思うとのことです。是非そうであってほしいと祈っております。この屋敷で起こります悪いことは、何もかも私のせいになるのですからね。

この朗報が届けられました際の状況は、とても歓迎出来るようなものではございませんでした。ベティが申しますには、私に伝えるよう言い付けられたのだそうですが、庭の散歩や養鶏場通いが疑われておりまして、土曜日か月曜日までここに留まる場合には、両方とも禁じられることになるというのです。

おそらくこれは、指図を受けての言葉なのでしょう。なるべく嫌がらずに叔父の屋敷へ行かせようというわけです。

このような指示やペンとインクのことにつきまして、私が抗議した場合ですが、次のとおりに話すよう、母があの娘に命じたというのです。今のような状況では、書き物をするよりも本を読むほうが相応しいということ、読書をすれば、子の務めというものを悟るかもしれない、書き物というのは、書き送っていると思われる相手のこともあり、意固地さを強めるだけの話だ、どんな天気でも散歩に出掛けるようだが、それよりは針仕事に精を

出してもらうと有難い、といったことでした。
こういう有り様ですから、すぐにも何らかの決断をしなければ、目論まれております災いを避けることも、貴女との文通を続けることも出来なくなってしまうかもしれません。

水曜日　夜

階下では何もかもが大忙しです。ベティが出たり入ったりしておりますが、私の様子を窺っているようです。何かがあるみたいなのですが、私には分かりません。心も体もすっかり調子が狂ってしまいました。胸が張り裂ける思いです。
降りてみようと思います。大分暗くなっておりますが、少し外の空気に触れて落ち着きを取り戻すためということにいたします。先の二通はもうロバートさんが持ち出してくれたと思うのですが、皆にまた捜されても困りますので、出来ましたら、これを同封のラヴレースさんの手紙と一緒に隠して来ようと思います。
どうしたら良いものか見当がつきません。訳の分からぬ騒動ぶりです。そこらじゅうでドアがバタンバタンと音を立てて閉まりますし、こちらの部屋から出てきたと思うと、大慌てに別の部屋へ駆け込んでいるみたいなのです。ベティは人を不安にさせるようないつもの仕方で目を見張っておりましたが、まるで、事の重大さに怯えているといった様子なのです。三十分の間に二度姿を見せ、二度目にはショーリーに呼ばれて大急ぎで降りて行きました。さらに意味ありげな顔付きと仕草で立ち去って行ったのですが、でも、こういったことすべてにも、もしかいたしますと、私が気に掛けるほどのことは何もないのかもしれません。
またあの娘がやってまいりました。わざとらしく深い溜め息をつきながら、「まあ、どうしましょう。あゝ、どういたしましょう」などと言っております。

❁　❁

さらに謎めいた言葉がこの生意気な娘の口から漏れてきました。でも、どういう意味なのか、教えようとはしないのです。こんな厄介を起こした挙げ句に、殺人沙汰にでもなるとしたら　…　生きている間中、私は反対したことを悔やむに違いない、両親というものは、厚かましい殿方に我が子を騙し取られるような真似はしないし、仮にもそんなことがあってはならない。夢にも思っていない時に痛感させられることになるだろう、などと言うのです。
こういったところが、この生意気な娘が漏らした不穏で謎めいた言葉です。ラヴレースさんがおっしゃいますには、私が叔父の屋敷へ連れて行かれるのを妨害する決心でいることについて、こっそり皆の耳に入るようになさったとのことでしたが（察するに、あの方が雇っている卑劣な二重スパイからでしょう）、おそらくこれは、その情報から出ているものだろうと思います。
もしもそのとおりでしたら、皆が苛立ちますのはいかにも当然な話です。無鉄砲な人たちや自分本位の人たち、そして、強情な人たちの思いのままに、まるで風に舞う羽のように、私は弄ばれているということです。しかも、一方の人たちのやり方にも、もう一方の人たちのやり方にも、私は同じように反感を抱いているのです。と申しますのは、こう呼

んで構わないと思うのですが、この不幸な文通を行う気持ちになりましたのも、災いを防ぐことが出来るかもしれないと考えてのことだったのです。それなのに、この争いが起こりました場合には深い関わりを持つことになります、この私には何の相談もなく、無鉄砲な人によって軽率な手段が取られてしまったわけです。そして、一方にはあの方の乱暴な振舞いがあり、もう一方には身内の者たちの暴力行為がありますから、私はその間で、両方の危険に晒されている状態なのです。

あゝ、世俗の知恵なんて、愚かしさの極みということではないでしょうか。父の一族の中でも最も低い立場にある人間、少なくとも、一番年下の人間である私が、このように手に負えない人たちの間の諍いに嘴を容れるなんて　…　この敵対している人たちに自業自得の憂き目を見させようとなさっているのかもしれない神様の思し召しを、もしかいたしますと妨げることにもなるのです　…　もしもそのとおりだといたしますと、何という自惚れなのでしょう。自分のことを買い被り過ぎていたのではないのかと、本当に怖くなってしまいます。でも、それはともかく、災難に見舞われました時に自らを顧み、畏れを抱きますのは大切なことと存じます。

もしも妨害でも受けまして、これと同封のものとを隠しに行けなくなりましたら（遅くなってはおりますが、試してみようと思うのです）、機会のあり次第、さらに書き足すつもりです。とりあえませず、信じていただきたく思います。

変わらぬ愛と謝意とを込めまして、貴女の

Cl. ハーロー

［部屋を出た後，鉛筆で宛名書きの下に記された言葉］

先の二通がまだ持ち去られておりません。驚いております。お元気でしょうね。お母様とのこと、大丈夫なのでしょうね。

手紙　三十六

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

木曜日　午前（四月九日）（二九）

お手紙を三通受け取りました。ソームズさんとの面会の成り行きが知りたくて、うずうずしておりました。一番関心を引かれながら、確かめることの出来ない事柄ですもの。こんなにも待ち侘びていた人間も他にはいないものと存じます。

私のほうに少しでも怠慢とか不熱心と取られるような態度がございましたら、このような不幸な状況に置かれていらっしゃる大切なお友達のことですもの、何もかもご説明申し上げますのが筋というものでしょう。お預けになった品がありはしないかと、朝早くロビンを差し向けました。ロビンは十時近くまであの辺りを歩き回っていたのですが、無駄骨に終わり、立ち去ってしまったのです。三時までには届けるようにと、母がハントさんへの手紙を預けていたのです。あの紳士は、昼間はその時刻にしかお宅にいらっしゃらないのです。返事も持ち帰ることになっておりましたが、ハントさんのお屋敷は、ご存じのと

おり、ハーロー邸とは方角違いなのです。ロビンは何とか間に合ったのですが、戻ってまいりました時にはもう遅くなっておりまして、もう一度行ってもらうのも無理だったのです。今朝の夜明け前に家を出るよう頼むのがやっとでした。お手紙がありましたら、命懸けで馬を飛ばして持ち帰るよう、申し付けました。

独りで休みましたが、待ち遠しくて、とても落ち着けない夜でした。そのため調子が悪く、いつもより遅くまで伏せていたのです。私が起きますとすぐに、ロビンに頼まれたキティが三通のお手紙を持ってきてくれました。身支度は四分の一もせずに、普段着のサック(三〇)を羽織りますとそのままの姿で、長いものですが、お手紙を最後まで読み通したのです。でも、何度も中断しては、貴女が対処しなければならない悪魔のような人たちに向かって(一人っきりでしたけれど)、大声でわめき散らしておりました。

あの人たちときたら、誰も彼も本当に腹が立ってしまいます。無理やり話し合いの場に引き込み、ソームズさんを励ますよう貴女を陥れようとするなんて、まったく見え透いています。ハーヴィー叔母様には腹が立って仕方ありません。こんなにもおとなしくご自分のお考えを捨ててしまわれるのですもの。それだけじゃございません。皆さんの手先になって、一生懸命なんですからね。でも、世の中ってこんなものですわね。私の母にいたしましても、まったく同じなのです。我が子のことは別にいたしますと、貴女ほどに母が高く買っている人間も他にはいないのです。それなのに、「ねえ、ナンシー、よそ様のことだというのに、どうして私たち首を突っ込まなければいけないのかしらね」などと言い出す始末なのです。

「よそ様」というのですからね。この言い方は大嫌いです。友情に関わることですのにね。保護の手がお友達にとってはどれほど大きな意味を持つか知れないのですし、自分にとっては何の損害にもならないわけですからね。

でも、貴女の気丈さには感心しております。そんなところがおありだなんて、思ってもみませんでした。皆さんも同じ気持ちでしょう。貴女にいたしましても、ソームズが育児室の用意をしているなどという、ラヴレースの言葉に刺激されなければ、きっと勇気を奮い起こしたりはなさらなかったでしょうね。気丈なお姿に接して、あの恥知らずがますます貴女のことを気に入ったとしても、私は驚きません。こんな奥様をもらえますのは、あの男には大変な名誉ですもの。それに、奥様ということになれば、対等になれるわけですからね。おっしゃるとおり、確かに残酷な男に違いありません。でも、あの男がしつこく付き纏ってくるといたしましても、貴女がとても敬愛していらっしゃるお宅の方々のしつこさに比べれば、その罪はまだ軽いほうですわ。

何度も申し上げておりますが、私にはこれほど憤慨することや厄介ごとがございませんのを幸せに思います。私なら、多分、とっくの昔に従姉妹のドリーさんの助言に従っていたことでしょう。でも、その話題には触れないことにいたします。あの可愛いお嬢さんのことはいつまでも好きになれそうですわ。貴女への思いやりがおありですもの。

ラヴレースに対しましては、どうおっしゃるべきか見当がつきません。あの男の約束につきましても、また、提案のことにいたしましても、どう考えたら良いものか、分かり兼ねるのです。貴女があちらのご一族全員から高く評価されておりますのは確かです。ご婦人たちは一点の曇りもない貞節さを備えた方々です。M卿も(男性として、また、貴族といたしましては)信義を重んじる人物です。貴女以外の人でしたらどなたにでも、どうす

べきか、助言のしようもあるように思うのです。貴女の場合、あまりにも多くのことが求められておりますからね。世を導くまばゆい光ともいうべき人なのです。お父様のお屋敷を捨て、そして、どれほど誉れ高いとはいえ、あの男がいる、その一族の保護に身を委ねたりなされば、あの男の容姿や才能、口説き文句や見せ掛けの言葉が貴女を熱烈な想いに駆り立てたのだと思われてしまうでしょう。私といたしましては、むしろお勧めしたいのは、こっそりロンドンへ行かれることだと思います。そして、従兄弟のモーデンさんが来られるまで、居場所につきましては、あの男にも他のどなたにも、私以外の人には知らせないことです。

叔父様のお屋敷へ行かれる件ですが、もしも避けられるのでしたら、お止めになるべきです。ソームズさんと一緒になられるのももってのほかです。どの点から見ましても値打ちのない人ですし、また、あれだけはっきりと嫌いなことをお認めになったわけですからね。そのことはだれもが知っていて、話題になっているのです。もう一方の男性を支持しておられることにつきましても同様ですけれどね　…　ですから、貴女のご信望を損ねないためにも、災いを防ぐという点でも、独身を守られるか、それとも、ラヴレースと結婚なさるか、そのどちらかなのです。

ロンドンへ行こうとお考えになりました場合は、お知らせいただきたいと思います。お屋敷から抜け出す方法とかロンドンまでのこと、それに、適当な下宿を確保する方法につきまして、私がもっと相談に乗って上げられる時間が貴女にあると良いのですがね。

この時間をお作りになるためにも、少しは譲らねばいけません。他のことが考えられないのでしたら、歩み寄るふりをしなければいけないと思います。これだけ追い詰められておられるわけですから、貴女のその素晴らしく几帳面なところも、少しばかりは我慢なさらなければ妙なものでしょう。

このようなことを書いておりますから、察しもお付きでしょうが、母の件はうまく進んでいないのです。

残念至極ですし、すっかり当てが外れてしまいました。とても激しい言い合いもしたのです。でも母は、「よそ様のことに首を突っ込む」などという、上に触れました料簡の狭い考えに加え、言われたとおりに従うのが貴女の務めだ、と言い張ってきかないのです。母に言わせますと、結婚という重大事の場合、娘は両親の意思に黙って従うべきで、父と結婚するに当たっても、そのとおりに自分を抑えたというのです。父を選びましたのも、最初は自分ではなく、両親のほうだったそうです。

これは、貴女の場合のソームズさんにも当てはまるのでしょうが、母のお気に入りのヒックマンさんに肩入れをした論拠というわけです。

母はいつもこの主義に則って自分を抑えてきたということなのでしょうね。何しろ、自分で言っていることですからね。それに、信じるべき理由がもう一つあるのです。私の口からお話しするのは不適切かもしれませんが、お教えいたしましょう。結婚に際して相思相愛で結ばれた者たちは最後まで円満な夫婦生活を送るだろうと、人はそのように考えたがるものですが、二人はそれほど幸せではなかったということです。

母がこんな狡い言い回しを使いましても、だれかさんの立場が良くなることは絶対にないとお約束いたします。あの人のこと、あの人の求婚のことを慮った母の言い分なのですから、望みのすべてをかけていた事柄を実現出来なかった私の無念さは、あの人にこそ肩

代わりしていただくのが妥当というものでしょう。

私がお役に立てることは何かないものか、どうかお考え願います。お許しがあれば、貴女と一緒に家を抜け出すつもりです。そして、二人の生命が尽きますまで、一緒に暮らしましょう。このこともお考えください。これをヒントにして良い案が出来ましたら、お指図いただきたいと思います。

少しの間中断しなければなりません。今取り掛かっております話題に比べましたら、朝食など何だというのでしょうね。

ヾ　　ヾ

身を隠すのでしたら、ロンドンが世界中で一番良い場所だと聞いております。私が筆にいたしましたのは、他でもありません、お指図のあり次第取り掛かるつもりでおりますことばかりです。女性というものは、男性が義侠的な行為に出るのを喜んで促しますが、時には、自分でもそんな振舞いをしたいものなのです。でも、貴女の一件では、私が申し出ていることにはそのようなところは何一つ見当たらないことでしょう。私に出来ますことといえば、親しくしていただいている立派なお友達、それも、いわれのない迫害に苦しんでおられるお友達のお役に立つという、ただの務めを果たすだけのことに過ぎません。しかも、この私に貴女の苦しみを共にさせていただけますなら、貴女のアナ・ハウの品位を高めてくださることになるとも申せましょう。

請け合っても構いませんが、ロンドンで一緒に一月も過ごさないうちに、障害はすべて乗り越えられるはずです。しかも、守っていただくのに、男の方の手を煩わせることも一切なしにですわ。

これまで何度も申し上げてまいりました点を繰り返さずにいられないのですが、貴女を虐待している張本人たちも、貴女の気立ての優しさを当てにしていたのでなければ、厚かましく、自分本位な計画を実行に移したりはしなかっただろうということです。ただ、これだけ事を進めてしまった今となりましては、お定まりの権威とやらも巻き込んでいるのですから「そのおつもりなら、お小言をくださって結構ですわ」、その権威者にいたしましてもあの人たちにしても、引き下がる方法が分からない状態だということです。

貴女が皆さんの手の及ばないところへ行ってしまわれたことに気づかれ、私と一緒だということをお知りになりました暁には、皆さんどのようにしてあの忌まわしい角を引っ込めてくださるのか、貴女にもお分かりになることでしょう。

でも、皆さんが貴女の名誉を辱めるような態度に出始めました時に、即座にお従兄弟さんのモーデン様にお便りなさるべきだったと思いますわ。

皆さんが本当に貴女を叔父様のお屋敷へ連れて行こうとなさるのかどうか、知りたくてうずうずしております。M卿のところをお払い箱になりました管理人がラヴレースについて報告していたのを思い出すのですが、あの男には、あの男と同じくらいろくでなしの仲間が六、七人おり、土地の人たちはその連中が去るとほっとするとのことでしたね(ア)。私が耳にいたしましたところでは、今あの男は、実際に、そんな連中を自分の周りに置いて

(ア) 第一巻十七頁。

いるとのことです。皆さんが貴女を叔父様のところへ連れて行こうとすれば、あの男が黙っていないのは確かです。あの男がまんまと貴女を奪い取ったりいたしますと、貴女はだれのものにならなければいけないのでしょうね。

その際の衝突の結果を想像いたしますだけでも、貴女のことが心配で身も震える思いです。ラヴレースはお身内の何人かの人には借りがあるのです。このように考えますと、貴女のために是非とも確保したいと考えておりましたのに、そんな保護の手を母が拒んでおりますことがますます気掛かりになってくるのです。

私と一緒でなければ朝食はとらないと、母が言っております。口争いにも時には都合の好い点がございます。でも、愛情があり過ぎますのも、なさ過ぎるのと同じことで、不都合なものだと思います。

ヾ　ヾ

また母とひと揉めして来たところです。母ときたら、まったくの話、極端な　…　何と申しましょうか　…　分からず屋といったところですが、そんなおとなしい言葉で放免しなければなりません。

「我アテナイを支配す。我を支配するは妻。妻を支配するは我が息子なり」と語った昔のギリシア人はだれでしたっけ(三一)。

父を抑えられなかったのは母の落ち度ではございません［貴女にですからこんなことを筆にするのですよ］。ただ、私はただの〈娘〉に過ぎないのです。でも、今気づいているところですが、目的の遂行に当たりまして、自分はこうまで無力ではないように思っていたのです。

もう止しましょうね。きっと幸せな時がやってまいります。それも、すぐにですわ。楽器の弦にいたしましても、こんなふうに張り過ぎたままでは長くはもちません。切れてしまうか、弛めるかのどちらかです。どちらにいたしましても、確定いたしますほうが、どっちつかずの状態よりはマシなはずです。

あと一言だけ申し上げます。

正直に申しまして、貴女は次の二つのどちらかを選ばなければいけないと思います。私と一緒にこっそりロンドンへ向かわれることに同意なさるか［その場合は、私のほうで乗り物を用意いたしまして、ラヴレースが叔父様のチャリオットを寄越すと申し出ております、あの踏み越し木戸のところで、ご指示どおりに落ち合うつもりです］、それとも、M卿やあちらの一族のご婦人たちの保護に身を委ねることになさるかです。

確かに、もう一つございますね。つまり、金輪際ソームズは嫌だとおっしゃるのでしたら、すぐにでもラヴレースのところに行って、結婚なさることです。

このうちどれをお選びになるにせよ、貴女は、ご自分に対しましても世間に対しましても、次のように申し開きが出来ると思います。ラヴレースとお兄様との諍いが始まってからというもの、一貫して貴女の行動すべてを律してきた、あの一定不変の主義に基づいて結論なさったということ、つまり、大きな不祥事を防ぐために、小さな禍のほうを選ばれたということです。

さようなら。私の大好きなお方に神様が最善の道をお示しくださいますよう、祈ってお

ります。

かしこ
アナ・ハウ

手紙　三十七
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月六日　木曜日

私の書状が昨日中に持ち出されませんでした点につき、思いやり溢れる説明を加えようとお骨折りいただきましたことに対しまして、また、可能であれば私のために確保なさろうとしてくださいました温かい保護の手に関しまして、感謝申し上げます。

その温かい保護の手こそ、私の待ち望んでおりましたものです。でも、私の望みは、何よりもまず貴女の愛情によって掻き立てられたものではございますが、道理に適った希望というよりは、むしろ、他には避難の術もないという絶望感に捉えられてのことと申せましょう「このように不幸な状況で何をすべきなのか、また、何が出来るのか、思い巡らしました上でも決しかねていたのです」。と申しますのも、実際の話、避けることが出来ますのに、他人のためにわざわざ厄介ごとに自分を巻き込んだりする人はどこにもいないはずだからです。

私にとりまして慰めとなりますのは、しばしば申し上げてまいりましたが、自分の不注意とか愚行ゆえに、このような嘆かわしい状況に陥ったのではないという点だけでございます。もしもそれゆえのことだったのでしたら、どなたに対しましても、保護とか助力とかを期待するようなまなざしは向けられなかったことでしょう。また、お掛けしておりますご迷惑のお詫びとして、貴女に合わせる顔もなかったように思います。いずれにいたしましても、ある人がすべきではないとお考えになった事柄、そして、手を染めるのも放っておくのもその人のお気持ち次第といった事柄を、私たち自身のために、あるいは、私たちの友人のためにその人がしてくださらないからといって、腹を立てるような真似はすべきでないと思うのです。まして、貴女が望んでおられるとおりに私のために熱心になってくださらないからといって、あのように分別がおありのお母様に不満を抱く権利など、貴女にはないのです。私の叔母でさえ、自分の気持ちに逆らってと言って構わないでしょうが、私を見捨てることが出来るとしたら　…　また、かつてはあれだけ可愛がってくれた父と母、そして、おじたちが手を結び、これほど強硬な対立の姿勢を取るのでしたら、そのような者たちに逆らってまで、お母様が保護の手を差し延べてくださるよう期待するなど、この私に出来ることでしょうか。貴女がなさって良いことなのでしょうか。

貴女だから申し上げるのですが「ひどく真面目になるのをお許しください」、私はとても不幸な目に遭うように、目立って不幸になるように（私自身の落ち度のためなのか、身内の落ち度のためか、それとも、その両方のためなのでしょうが）選び出された人間なのではないかと思うのです。と申しますのは、貴女もお気づきのことでしょうが、苦難の大波が次々と、どうにも食い止めようのない勢いで私の上に崩れ落ちてくるからです。

つい数週間前まで、私の家族はその一人一人があまりにも幸せだったのです。試練にい

たしましても不安の種にいたしましても、そのようなものが仮にあるといたしますと、何もかもが思いどおりになるための驕りからとでも申しましょうか、自らが招き寄せたものに他ならなかったのです。手に入れる先から蓄えられて行く山のような富に囲まれ、不幸の矢などの届かないところにいるのだと考えているかにも見えました。私は身内の者全員の誇りでしたし、皆が誇りにしてくれますのを私自身も誇りに思い、自分の声望に得意になっておりました。私たちが不幸の手の及ばないところにいるのではないことを分からせるために、また、僭越にも私たちがこれまで頼りとしてきましたものよりももっと確かなものを拠り所とするよう仕向けるため、世の公平を慮る御心から、神様がどのような打撃を私たちにお加えになるのか、それはだれにだって分からないことなのです。

勿体なくも、リーウェン尊師が常々私のために行ってくださいました、あの〈談話のための訪問〉にいたしましても、また、信心深いノートン夫人がご自分の体験と同様、尊いお父上のご体験に基づきまして、まだ幼い私の心に（こう申して良いと思いますが）刻み込んでくださった道義の数々にいたしましても、私にはほとんど無益だったことになってしまいましょう。もしも、今私たちが置かれておりますような奇妙な状況の中で、これまでのことを思い返し、いろいろと考えることが出来ないようでしたらね。この状況を「奇妙な」と呼んで構わないと思うのです。何故なら、お気づきのことでしょうが、私たちは皆、一人として抵抗することの出来ない理不尽な運命に、いわば駆り立てられているかのようにも思われるからです。ただ、すべては（自らへの懲らしめという感じが強くいたします）身から出た錆だとも申せましょう。両親にしてみますと、この世の幸せを分家縁戚にまで行き渡らせてくれるものと期待しておりました末頼もしい我が子ですのに、その子供たちが、これまでは手の届かないところにありました望みを叶えてくれる年頃に育ちますと、互いに険しい顔で睨み合い、すぐにも確かなものになりそうだったあの望みを、いわば根絶やしにしているようにも見えるのではないでしょうか。

貴女は偏った愛情に促され、私には重大な罪や故意の過ちはないと、すぐにもおっしゃってくださることでしょう。でも、あゝ、ハウさん。こんな災難に見舞われまして、私もすっかり謙虚な気持ちになってしまい、浮ついた目を内側に向けてみました。自分自身を見詰めてみたのです。それで、そこに何を見つけたとお思いでしょう。吟味を受けずにおりました私の心の中には、予想だにしなかったほどの高慢さと、自惚れた気持ちが潜んでいたのです。

私自身と一族を懲らしめるため、つい先頃までは一族の誇りであったこの私に白羽の矢が立てられるというのでしたら、どうかお願いいたします。相談相手もなしに、完全に突き放されてしまうことのなきよう、また、過ちを犯したといたしましても、我が儘や故意から出たものではないことを正当に認めてもらいますためにも、自らの品性を保つことが出来ますよう、祈っていただきたいのです。それ以外のことにつきましては、神の御心に委ねる所存です。その導きのままに、忍耐強く、嘆くことなく従わせていただきます。いつまでも生き長らえるわけでもございません。せめて、臨終の場面が幸せに包まれていてくれたら、と願うだけです。

でも、ご安心ください。この種の感慨をさらに並べまして、お気持ちを滅入らせたりはいたしません。すべてこの胸にしまいこもうと思います。きっと、そのゆとりもあるはずです。私の苦悩はあまりにも鋭すぎますので、長続きするとは思えません。峠が間もなく

まいりましょう。幸せな時が訪れるのを期待せよ、とのお言葉でしたね。望みを持とうと思います。

❁　❁

とは申しながら、ここまで追い詰められましたこと、そして、声望もすっかり地に落ちてしまいましたために、たとえ将来のすべてが幸せに恵まれるといたしましても、人前に出たり顔を上げたりすることは憚られますのを思いますと、苛立ちを抑え切れなくなることも時にはあるのです。そして、すべては私欲に動かされた兄と嫉妬深い姉に唆されてのことなのです。

でも、止しましょう。考えさせてくださいね。このようなことを思い付きますのは、今非難しておりました密かな驕りの気持ちが囁きかけるからではないでしょうか。だといたしますと、もう辛抱を忘れてしまったことになります。たった今自分を捨て去り、反省をいたしますのには恰好の気持ちになっておりましたのにね。でも、難しいことです。憤懣やるかたない気持ちを鎮めるというのは、まことに難しいものです。試練を受けている最中ということもございます。何と残酷な兄なのでしょうか。あら、また頭をもたげてまいりますね。ペンを置くことにいたします。思いどおりに用いることはほとんど出来ないのですからね。そして、苛立つ心を鎮めるよう、努めてみます。さもなければ、（心を正す目的でこの苦悩が与えられているといたしますと）もっと罰を受けるに値するような過ちへと、私を導きかねませんので　…

❁　❁

あの話題に戻ることにいたします。私といたしましては十分間と離れていることの出来ないものですし、今度のお手紙の結びの部分に書いてございました三つの方法から一つを選ぶよう、特に求められているわけですからね。

一番目のもの、つまり、ロンドンへ逃げるべきだとのご忠告について述べさせていただきますと、そこに添えられております別のご示唆やご提案には、完全に恐れをなしてしまいます。いくら貴女でも（お幸せにしていらっしゃいますし、お母様からは甘やかしていただいているとは申せ）、まさか本気で提案なさっているのではないでしょうね。このようなご提案に、たとえ一瞬でも耳をお貸しするようでしたら、私は何という浅ましい人間でしょうか。あのようなお母様の生涯を（おそらく短縮されることになりましょう）、その最後の瞬間まで不幸なものといたしますきっかけを、この私に作れとおっしゃるのでしょうか。貴女の「品位を高める」ですって、あなた　…　そのような大それた行動は（その軽率さのほうは人目につきますが、動機につきましては、たとえ申し開きの立つものだといたしましても、他人には分かりませんから）、大巾に貴女の品位を下げてしまうに決まっているのです。でも、この件につきましてはくどくどとは申しません。貴女ご自身のためにも触れないことにいたします。

M卿とあの一族のご婦人たちの保護に身を委ねるという、二つ目の選択肢につきましては、世間の目からいたしますと、ラヴレースさんに保護を求めるのと同じことになるので

しょうが、はっきり申しまして（前にも打ち明けたことがあると思いますが）、ソームズさんの奥様になる以外には明らかに道はないというのでしたら、それよりはこちらのほうを選ぼうと考えております。

ご覧のとおりラヴレースさんは、私の持ち家を手に入れる方策を考えてみると提案しておられます。そして、私からの招待があればとのことですが、すぐにあの家を、お客様として、一族のご婦人たちで一杯にして見せるとおっしゃっているのです。とても思慮に欠けているように思われますし、また、こちらの真意をお伝えしにくいお申し出です。そのようなことをいたしますと、独り立ちへの図面引きに余念がないように思われてしまうことでしょうね。あの方に耳を傾けたりいたしますと（しかも、あの方の助言に従うことで被ります当然の結果には留意しないとしたら）、優しい言葉に引き込まれて、非道この上ない振舞いに及んでしまうかもしれません。と申しますのも、どのようにして私は所有権を手に入れることが出来るというのでしょうか。一つには法的に争うことでしょうが、たとえ私がそのような手段に訴える気持ちになったといたしましても（決してその気にはなれませんが）、時間が掛かるに違いありません。あるいは、庭、建物、家財道具の世話をするためですが、父があの家に住まわせました人たちを強引に追い出すことになるのでしょうが、その人たちはすっかり父の言いなりになっておりますし、私の承知いたしておりますところでは、最近は兄の指図を受けている者たちなのです。

すぐにラヴレースさんと会い、結婚するようにという、貴女の三番目の選択肢の件ですが、私には到底納得し兼ねるような品行の持ち主ですからね。そのような行動に踏み切りますと、身内のだれからにせよ、許しとか和解とかを得る望みはこれっぽっちもないでしょう。それに、反対理由が千もこの胸に浮かんでくるのです。考慮されるべき事柄ではございません。

よくよく考えました上で最も望ましく思われますのは、どうしてもこのように追い詰められねばならないのならですが、ロンドンへ逃れることだと思います。でも、ご親切この上ないお気持ちからとはいえ、お考えもなく同行したい旨を申し出ておられますが、そのようなことをしていただくくらいでしたら、この世での幸せにかけましたすべての望みを奪い取られても構わない気持ちです。無事あちらに着き、人目を避けることが出来ましたなら、ラヴレースさんとはまったく没交渉でいられるでしょうし、また、身内の者たちに申し出をいたしますのも、あるいは、皆が私を勘当するような場合に（そして、他のもっと良い方法がない場合）、あの方と話し合いを持ちますのも、こちらの思いのままに出来ると思うのです。もっともこれは、従兄弟のモーデンが、帰国後、一族の他の者たちと手を結ぶことを想定しての話です。でも、その頃には、あの方と手を切り、独身を通すという私の選択を、おそらく、皆も認めてくれることでしょう。自由の身となりました上で、改めてこの申し出をするのですから、最初に申し出た時から本気だったのだと、少なくとも皆を納得させることにはなるでしょうね。それに、誓って申しますが、本当に私はそのつもりなのです。からかいたいお気持ちの時には、そんな約束にしがみつくのは高いものにつくと、貴女はお考えのようですが　…

私たち二人分の乗り物をご用意なさることが可能なのでしたら、多分、私だけのものもご用意いただけますね。でも、お母様と諍いを起こしたりなさらずに、また、お母様が私の家族と反目することなしにお出来になるのでしょうか。コーチでもチャリオットでもシ

ェーズでも構いません。荷馬車でも馬でも、私の家出に貴女が荷担していらっしゃるように見えないようにしていただければ、何でも結構なのです。ただ、最後の二つのどちらかの場合には、使用人が普段身に着けておりますガウンとコート、あるいは、乗馬服をご用意いただくようお願いしなければと思います。私の家の者にはだれにも頼めません。並のものであればあるほど好都合です。薪小屋に押し込んでおいていただきましょう。あそこで着替えをいたします。そして、薪置き場と緑の小道とを隔てております土盛りのところから降りて行くつもりです。

でも、あゝ、ハウさん、これにも、この方法を選ぶといたしましても、困難がないわけではございません。私のように冒険心の乏しい人間にとりましては、ある意味では乗り越え難く思われます困難です。その点につきまして、こんなことを考えてみたのです。

第一に、抜け出すために必要な準備を整えますには、時間が足りないかもしれないということです。

準備の途中で気づかれるとか、逃げております最中に追いつかれ、連れ戻されるようなことになりますと、皆のほうでは、ますますソームズさんとの結婚を強要する根拠が与えられたと考えるでしょうし、私のほうでも、悪いことを企てたという意識から、皆と争うのは難しくなるかもしれません。

たとえ、何事もなくロンドンに到着することが出来るといたしましても、あちらにはお名前を存じ上げているだけの知り合いしかおりません。それも、我が家と取引のある人たちです。疑いもなく、真っ先に問い合わせの手紙が送られ、私の捜索に取り掛かるような人たちです。また、ラヴレースさんが私の居所を見つけ出し、兄と顔を合わせたりいたしますと、私がハーロー邸に戻る気になろうとなるまいと、二人の間で大変な事態が生じるかもしれないのです。

身を隠しおおせるといたしましても、年端も行かぬ女の身ですし、あの邪悪な大都会の暮しには不案内なわけですから、どのような危険に身を晒さないともかぎりません。見つかるのが怖くて、おいそれとは礼拝式にも出られません。私がどうやって暮しを立てているのか、周りの人は訝かることでしょう。囲われ者ということになってしまうかもしれないのです。そして、訪ねて来る人がいなくても、外出いたしますたびに、逢引のためだろうと勘ぐられてしまうのです。

私の宛先を知っている唯一人の人として、貴女の行動のすべて、通信のすべてに監視の目が向けられることになるのです。今でも私たちの文通をあまり快く思っていらっしゃらないお母様ですから、もっと不愉快な顔をなさるのも当然でしょうし、その挙げ句、お母様と貴女との間に不和を招くことにもなるのではないでしょうか。もしもそのことが分かりますと、私はひどく惨めになってしまうだろうと思うのです。そんなことがますます心配になりますのは、私にはとても説明がつかないのですが（それに、言わせていただけますなら、大変意地の悪いことだと思います）、お母様が貴女に不愉快な思いをさせますたびに、罪もないヒックマンさんを相手に恨みを晴らそうとなさるからなのです。

ラヴレースさんが私の住いを見つけ出したりいたしますと、世間の人たちの目には、私が実際にあの方と駆け落ちをしたのと同じことになるでしょう。だって、訪問を差し控えてくださるよう、いくらお願いをいたしましても、聞き入れてもらえるとでもお思いでしょうか。そこへもってきて、評判の芳しくない方なのですから（愚かな人ですわね）、人目

を憚る娘にとりましては、何の得にもならない話なのです。世間の人たちは、私がどこへ逃れましても、また、だれのところへ駆け込みましても、あの方が企んだことなのだと結論するに決まっているのです。

こういったところが、この案をつくづく思い巡らしました時に浮かんでまいります難点なのです。ただ、私と同じ情況にあります、もっと冒険心に富んだ人にとりましては、これも乗り越えられる事態だと映るかもしれません。もしも、お示しいたしました事例のどれか一つの場合でありましても、これらの難点は克服出来るのだとお考えでしたら［どのみち、何かしら困難が付き纏うのは確かです］、忌憚のないお考え、ご賢察の結果をお知らせいただけますと幸いです。

貴女が結婚していてくださったなら、疑う余地などございませんわね。暖かい保護の手を差し延べてくださる友人一人とてなく、我が身を案じて途方に暮れてしまいそうな哀れな人間に、貴女とヒックマンさんが避難所を提供してくださっていたことでしょう。

不面目な仕打ちを受けました時に、従兄弟のモーデンに宛てて即座に手紙を書くべきだったのだと、貴女は言っておられますね。でも、思いも寄らないことだったのです。ご贔屓のソームズさんを私が忌み嫌っておりますのを目の当たりにすれば、身内の者たちにしても徐々に軟化するはずだと、私は考えていたのです。

従兄弟に手紙を出そうと考えましたことも、確かに何度かございましたが、返事が届きますまでには、すべてが何もなかったかのように解決しているだろうと思ったのです。ですから、明日こそは、来週こそはと、望みを温めつづけておりました。そして、結局のところ、従兄弟も（これまでにも触れてまいりましたように）私と対立する側につくことが懸念されるわけですが、これは、すでに名を挙げました何人かの人たちの場合と同様、理にかなった懸念だと申せましょう。

それに、父に対する不服を従兄弟に訴えて出るなどということは［従兄弟の心を引くためには、激しい筆遣いをしたに違いありませんし］、望ましいやり方とは思えません。ご存じのとおり、味方は一人としておりません。母でさえ敵対しているのです。従兄弟が帰国まで判断を見合わせるのは間違いないでしょう。この病弊が自ずから癒えることに期待をかけ、帰国を急がないということもあるでしょう。仮に、従兄弟が筆を執ったといたしましても、その手紙は、おそらく、穏健な調子のものになっていたことでしょう。私に服従を説くか、皆にはただ寛大な処置を求めるものになりましょう。仮にその手紙が皆よりは私の側に与したものでありましても、皆は手紙など考慮に入れようとしなかったでしょうし、従兄弟が帰国して私の弁護に立ったといたしましても、おそらく、相手にしなかっただろうと思うのです。ご承知のとおり、皆は訳の分からないほど心を一つにしておりますし、誰彼なく威しつけるとか、味方に引きずり込むとかしているわけですからね。従いまして、私のために口をきこうとする者などは一人としていない有り様なのです。また、お聞き及びでしょうが、予期されております従兄弟の帰国前にすべてを片付けようと、兄はますます乱暴に自分のやり方を推し進めているのです。

でも、時間を作るために少しは譲らなければいけない、身内の者たちに歩み寄る姿勢を見せなければいけない、とのお言葉でしたね。でも、どう譲ったら良いのでしょう。どのように歩み寄れとおっしゃるのでしょうか。まったくその気持ちのないことですのに、同意するつもりでいるのだと信じさせるよう努力せよなどと、まさかこの私におっしゃるの

ではないでしょうね。騙すのを目的に時間稼ぎをせよ、などとはおっしゃいませんね。

「善が生じるために悪をしよう」(三二)とすることは禁じられているのです。それに、善が得られるかどうかも分からずに、悪を行うような真似が出来るものでしょうか。

己に利するため、あるいは、災難から逃れるためではありましても、誠実さを犠牲にするような考え、それも、故意に偽るような考えは、クラリッサ・ハーローには絶対にあってはならないことなのです。

それに、一つの大きな災いを逃れますのに、別の悪事に身を投じる以外には、結局、道がないということなのでしょうか。私は何という不幸を背負った人間なのでしょう。お願いです、大好きな私のナンシー、祈っていただきたいのです。狼狽のあまり、自分のために祈ることさえ難しいのです。

手紙　三十八

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

木曜日　夜

昨夜の日付の書面で触れました、怖くなりますほどの皆の慌てぶりや、生意気に謎めかしたベティの言い種は、推測しておりましたとおりのことが原因だと分かりました。つまり、私が叔父の屋敷へ連れて行かれますのを阻止しようという、あの方の厚かましい［厚かましいと呼ばずにはおられません］決意についてのものですが、身内の者たちが嗅ぎつけるようにとラヴレースさんが企みました、密かな仄めかしから出たことだったのです。

あの時には、その決意を厚かましく感じますのと同時に、あの方自身の目的に適うという点でも不適切なことと思いました。と申しますのは、ベティが（目上の者たちの入れ知恵なのでしょう）見事に言い当てていたことですが、憎しみの対象となっている乱暴者に辱められました挙げ句に、我が子を自由に扱う権利を捨て去る両親がいるなどと、あの方がお考えになるはずもないからです。しかも、両親とその権利を争う口実は何一つ持ち合わせていない人なのです。娘から頼まれたのなら話は別でしょうが、そもそも、その娘自身も我が身を処する権利はないのです。そして、あの方のこの厚かましさは、兄によって可能なかぎり誇張されるのですから、私に対する皆の怒りをどれほど煽り立てることになるでしょうか。

あの向こう見ずな人は、皆を怖じ気づかせ、私を連れ去ろうという企てを阻止したのですから、そこまでは目的を達したわけです。でも、もっと確実で、さらに乱暴な手段を皆に取らせることになりましたし、お陰で、私も負けず劣らず無茶なことをする羽目に追い込まれたのです。その結果、ご自分にも予想出来なかったのでしょうが(ア)、十分すぎるほどにあの方の大きな目的に合致することになるかもしれないのです。そのように目的を叶えてもらいますのには、ほとんど値しない人ですのにね。

(ア) この点に関し、彼女は間違っていた。ラヴレース氏はこの結果を予測していたのである。氏の企みのすべてはそこに帰着するものであり。氏も自慢しているとおり、一族全員は、知らないうちに、氏の操る糸で踊らされる操り人形にすぎなくなっていたということである。第一巻の百五十一頁を参照のこと。

要するに私は、私の承知しておりますかぎりでは、これまででも最も無分別なことをしてしまったというわけです。

でも、その動機のことをお話しさせていただきましょう。その行動につきましては、勿論、その後でお聞かせいたします。

夕方の六時頃のことでしたが、叔母が（一晩泊まって行くのですが、私のことでなのは疑いございません）上がってまいりまして、ドアを叩きました。と申しますのも、私は書き物をしておりまして、錠を掛けたまま閉じ籠もっていたのです。ドアを開けますと、叔母が入ってまいりまして、次のように話し出したのです。

「もう一度訪ねてまいりましたよ、あなた。でも、自分の気持ちには反したことで、心が痛むのです。何故かと言いますとね、あなたにとっては、そして、一族の者皆にとりましても、この上なく大切なことをお知らせするためだからですよ」

「今度はどのようなことがこの身に加えられるというのでしょうか、叔母様」　私が申しました。一言も聞き漏らすまいと耳を傾けながらです。

「叔父様のところへはすぐに行かなくともよくなったのですよ。安心することね。嫌がっているのが皆にも分かったのですね。アントニー叔父様のお屋敷へは行かなくとも済むのですよ」

「生き返った気持ちですわ、叔母様。私にとりましては、それこそ強心剤ですわ」

親切からとばかり思っておりましたこの言葉の後にどんな話が続くのか、考えてもみませんでした。

それで、この吉報に感謝の祈りを並べ立てたのです（叔母も口を噤んだまま、そんな私を遮ろうとはいたしませんでした）。父も最後の最後まで事を運ぶはずはないと私は思っていたなどと、勝手に喜んでいたのです。

「ちょっと待ってちょうだい、あなた」　ようやく叔母が口を開きました。「だからといって、あまり浮かれてもらっても困りますよ。驚くことはないでしょう、あなた。どうしてそんなに哀れっぽい目をしてじっと見詰めるのかしら。やはり、あなたにはソームズ夫人になってもらわなくてはいけないのですからね」

私は言葉を失ってしまいました。

それから叔母が教えてくれたのですが、どこかの向こう見ずなごろつきが（こんな言い方を許してほしいと、叔母は言っておりました）、兄とおじたちを待ち伏せして私を奪い去るため、武装した男たちを揃えているという確かな情報を皆が入手したというのです。そして叔母は、どちらか一方に、あるいは、もしかすると両方に死人が出るかもしれない暴力沙汰に、まさか私が同意するはずはあるまい、と言っておりました。

私はなおも押し黙ったままでした。

それゆえ父は（これまでにも増して立腹しているとのことですが）、私が叔父のところへ行く件については決心を変え、次の火曜日に、父自身が母とあちらへ出掛けることに決めたというのです。そして、（即座に実行に移される考えであり、隠したところで無意味だから、とのことですが）私はこれ以上異議を唱えてはならず、水曜日には、皆が望むとおりに結婚の承諾をしなければならない、というのです。

叔母は話を続けました。結婚許可証を取るための指示がすでに出されたこと、父と母を除く家族全員の立ち会いのもと、式は私自身の部屋で執り行なわれること、父と母はすべ

てが終わるまで、そして、私の振舞いについて好ましい報告が得られるまで戻ることはなく、私に会うつもりもない、といったことでした。

まさしくあの情報です。これこそ、ラヴレースさんが教えてくださった、例の情報に他なりません。

私は依然として黙ったままでした。心臓が張り裂けてしまうかのように、ただ溜め息をついておりました。

叔母の言葉が続きました。私を慰めているつもりだったのでしょう。従順さの功徳を示し、次のように述べておりました。もしもノートン夫人に式に出てもらうのが望みなのであれば、願いは叶えてもらう。家族全員との和解、そして、そのことを祝う皆の言葉がもたらす喜びは、私のような者にとっては、どれほど片方の男性のことをもう一方の男性よりも好ましく思っているとしても、容姿の違いを補って余りあるものに違いない。愛情はかないものであり、その相手が道義心や美徳に抜きんでた者でない場合には、ほとんど名ばかりのものにすぎない。愛情の命じるところに従った選択が幸福をもたらすことは滅多に無く、少なくとも、長続きのする幸せは得られない。愛していれば相手を買い被るのが当然であり、他の皆にとっては明白な欠点が、恋する者には見えなくなるのだから、それも驚くには当たらない。その挙げ句、もっと身近に接しているうちに、完璧だと思っていたものの化けの皮が剥げ、これは一杯くわされたと、両方とも驚いてしまうことがしばしばである。そして、かつての愛を差し置いて、冷淡さが幅をきかせるようになるものである。女が愛を打ち明けたり、好意を抱いていると認めたりするのは、男性に大変有利な立場を与え、大いに自惚れ心を誘うことになるし、そのお返しとして戻ってくるものといえば、大抵の場合は、横柄な態度や軽蔑の念である。これに対し、引立てに与ったことを自ら認める男性のほうは、おそらく、畏敬と感謝の姿勢に終始することだろう、というのです。また、その他にもいろいろと申しておりました。

そして、「ソームズさんと一緒になったのでは幸せにはなれないと、あなたはそう思い込んでいますね。ご両親のお考えはその逆ですよ。ラヴレースさんと一緒になれば、間違いなく不幸になるとお考えです。品行の悪いことは疑う余地もない人なのですからね。どちらの人とも幸せになれないのがあなたの悲しい運命なのだとしたら、是非とも考えと欲しいのだけれど、ご両親の忠告に従った場合、そうしたことがあなたにとって大きな慰めになるということが一つありますね。もう一つには、自分の気持ちに流された場合、あなた自身の他にはだれも責めるわけに行かないのですから、どれほど辛いことになるのでしょうね」と言っておりました。

貴女も覚えていらっしゃると思いますが、これはノートン夫人から説き聞かされました論拠です。

こういった叔母の考えは、他にもございましたが、いかにもハーヴィー叔母様の良識や経験に相応しいものでしたし、両親の意向に背いている娘にはほとんどだれにでも当てはまるものでした。ただ、私が申し出ましたような犠牲を払おうとしております者には、それ相応の斟酌がなされて然るべきだと思うのです。でも、私自身の場合に限って申しますと、そういった考えのいくつかは簡単に答えることの出来るものでしたけれど、今繰り返しお話ししてしまいました事柄は、監禁されます前には母に向かって、また、監禁後は兄と姉に、そして、ハーヴィー叔母様にも何度も何度も話してきたことでしたし、叔母のも

たらしました残酷な知らせがいかにも悔しく、また、心痛む思いでおりましたので、叔母の言葉には十分耳を傾けていたのですが、一言の返事を返す気力もなければ、意思もございませんでした。ですから、叔母が自分のほうから口を噤むということがなければ、私に遮られることもなく、あと一時間は話し続けていたかもしれません。

このことに気づいたのでしょう。私がただ座ったまま泣きじゃくり、ハンカチで顔を覆いながら、張り裂けんばかりに胸を波打たせておりますのを見て、叔母は次のように言っておりました。「まあ、何も答えてくれないのね、あなた。どうしてそんなにも押し黙って嘆き悲しむのでしょうね。私がいつもあなたのことを大切にしていたのは知っているでしょう。今回の一件に私が何の利害関係も持っていないことは知っていますね。あなたに知らせたいことがソームズさんにはおありでしたのに、そうなさるのをあなたは認めようとしませんでしたね。ラヴレースさんをあなたの胸から遠ざけたくなるようなことだったのですよ。あの人の悪事とされていることのいくつかについて、私のほうからお話しいたしましょうか。宜しいかしら」とです。

それでも、私は涙と溜め息を返すだけでした。

「いいわよ、あなた。このお話は後ほど、聞いてもらうのにもっと相応しい気持ちになった時に教えて上げましょうね。その時には、逃れおおせたのを嬉しく思うことでしょうね。それに、ソームズさんへの振舞いの件を弁解いたしますのにも、少しは口実になるでしょう。ラヴレースさんがそこまで悪辣な男だとは信じられなかったわけですからね」

こんなにもはっきりとあの男の奥様みたいに話し掛けられたものですから、苛立たしいやら腹立たしいやらで、心臓は早鐘を打っておりました。それでも、黙っていることにいたしました。口を開きましたなら、激しい口調になっていたことでしょう。

「妙ですわね、こうまで黙り込むなんて。挙式の後よりも挙式前のほうが、比べ物にならないほど心配が多いようですね。でも、ちょっとお尋ねしますよ。機嫌を悪くしないでほしいのだけれど、どんなにあなたのことを思いやった条件が贈与財産の中に含まれているのか、ご覧になる気持ちはないのかしら。あなたは年に似合わぬ知識を持っているのですから、一度書面によく目を通してご覧なさい。ね、そうなさい。清書が済んで署名をするばかりになっているのです。しばらく前からですよ。あら、御免なさい。動揺させるつもりじゃないのよ。お父様が、ここへ持ってきてあなたのところへ置いてくるよう、私にお頼みになったのです。読んでおくようにとのお言葉ですよ。ただ目を通すだけでも、とね。正式に出来上がったのですし、あなたがまったく見込みのないものにしてしまう前に出来ていたわけですからね」

そう言うと、叔母はエプロンの下に（私に気づかれないよう）隠しておりましたハンカチから、羊皮紙の文書を取り出すものですから、私はすっかり怯えてしまいました。叔母は立ち上がり、向こう側の窓のところにそれを置きました。叔母の取り出しましたものが毒蛇であったといたしましても、あれほど怯えはしなかったと思います。

「あゝ、大好きな叔母様、お願いです」　私は顔を背け、両の手を差し出しながら申しました。「どうかその恐ろしい書類は目に付かないところにしまってください。近親者としての心からの優しさにかけまして、叔母様の名誉にかけまして、そして、私への愛情にかけまして、是非ともお教えいただきたいのです。皆としては、たとえどのようなことになりましても、絶対に私をあの男と一緒にさせる決心なのでしょうか」

「そのとおりですよ、あなた。あなたはソームズさんと一緒にならなければいけないのです。どうしてもね」

「どうあってもそれは出来ません。何度も申しましたけれど、元はと言えば、父の意向ではないのです。絶対に嫌でございます。申し上げることはそれだけです」

「今ではお父様のご意向になっているのですよ」　叔母が答えました。「それに、家族の皆がどれほどラヴレースさんに脅されているのかということ、また、皆の手からあなたを奪おうと、あの人が確かに決意を固めていることを考えますと、娘を脅し取られまいとする皆のほうが正しいのだと言わざるを得ませんよ」

「それじゃあ叔母様、私にはもう申し上げることなどございません。絶望ですわ。この身がどうなろうと構いません」

「だれもが頼りにしているのは、あなたの敬虔な心と思慮深さなのですよ。それに、ラヴレースさんの不道徳な人柄のことや、図々しく侮辱や脅しを加えてきていることもあります。皆と同じように、あなただって憤りを感じるはずでしょう。当然のことですが、皆にとってはまことに不愉快な存在になった人ですから、あの人の目論見を挫くために身内の者が用いた手段について、あなたが別な考え方をする日もきっと来るはずだと、私たちはそう思っているのですよ」

叔母は引き下がって行きました。独り残されました私の胸は、悲しみと怒りで一杯になっておりました。そして、だれに対しても面白くない気持ちでしたが、ラヴレースさんにも負けず劣らず憤りを感じました。独り善がりな企みのせいで、私にとりましては前よりももっと不都合なことになってしまったのです。貴女のご忠告を授かりますためにも、また、ロンドン行きのお手伝いをこっそりいただきますためにも、時間稼ぎをしようと考えておりましたのに、その望みも奪われてしまいましたし、どこから見ましても、あの方のご一族に身を委ねるか、それとも、ソームズさんと一緒になって、最後まで惨めな思いをさせられるか、それ以外に選ぶ道もなくなってしまったのです。それでも、もしも可能なら、この二つの災難の両方を回避しようと、心に決めました。

手初めにベティに探りを入れてみました（叔母の命でやってきたのですが、ベティの言葉では、私を独りにしておくのは適当でないと叔母が考えたのだそうです。それに、この娘は皆の計画に通じていることが分かったのです）。最後のところまで事を押し進めるつもりだと脅されているけれど、私から誠心誠意お願いしたら、皆が思い止どまってくれるというようなことは考えられないものか、とです。

でも、あの娘は叔母の言葉すべてを認め、私を今、そして、今後永久に、ラヴレースさんの手から守る恰好の口実を、あの方自身が与えてくれたのだと喜んでおりました（あの娘によりますと、皆も全員揃って喜んでいるとのことです）。

あの娘は注文の出された装身具類のことをひとしきり話題にしておりました。また、これで家族全員の仲直りも間もないだろうと、兄と姉が有頂天になっていることや、召使たちが喜んでいること、待たれている結婚許可証の件、リーウェン師と、あの娘には名を教えてくれなかったもう一人の牧師様とが訪問なさることなどを話しておりました。牧師様たちのご来訪が総仕上げになるというのです。その他にもいろいろと準備が進められていることを話しておりましたが、とても詳しいものですから、皆は私の不意を突いて、今度の水曜日よりももっと早目の日取りにするつもりではないかと、不安になるほどでした。

こういったことがありまして、極端に落ち着きを失ってしまいました。どのように心を決めたら良いものか、分からなかったのです。

一時は、すぐにもベティ・ローランス夫人の保護の手にこの身を委ねる以外に方法はないのではないかと考えました。それでも、私の思惑をこんなにもひどく変えてしまいましたあの方の〈ご立派な〉企みのことが腹立たしく、間もなく、それは止そうと心に決めたのです。そして、結論といたしましては、もう一度叔母と三十分間の話し合いを許してもらえるよう、頼んでみることにしたのです。

ベティを叔母のところにやり、私の願いを伝えてもらいました。

叔母がやってまいりました。

二週間の猶予を認めていただくわけには行かないものかどうか教えてほしいと、私は真剣そのものの態度で叔母に尋ねました。

叔母は請け合っておりましたが、それは決して認められないだろうというのです。

「一週間ではいかがでしょう。きっと、一週間なら認めていただけるはずです」

叔母の考えでは、二つのことを約束するのなら、一週間だけは認めてもらえるはずだとのことでした。一つは、名誉にかけて、その一週間の間に一行たりとも外部の人に手紙を出さないと誓うことだというのです。叔母の言葉では、私が何らかの手段を見つけ、「だれかさん」に手紙を送っているという疑いは、まだ消えてはいないからだというのです。そして、二つ目は、その一週間が過ぎたら、ソームズさんと結婚するということです。

「無理です。無理ですわ」　私は興奮して叫びました。「何ということでしょう。最後のもののような恐ろしい条件が付かなければ、一週間の猶予の願いも入れていただけないのでしょうか」

叔母は、そんなにも難しいと私が考えているようなことを、自分の一存で押し付けたと思われないためにも、一度階下へ行って来る、と言い出しました。

叔母は出て行き、再びやってまいりました。

流血沙汰に至るような計画を実行に移す機会を、私はあの極悪人に与えるつもりでいるのか、というのが返答でした。私の片意地にも（皆としては、私のことに疲れ果てたのだそうです）、また、あの方の野望にも、一気に終止符を打つ頃合だというのです。次の火曜日か、遅くとも水曜日には終わりにするつもりでいる。ただし、叔母が親切にも日延べを認めてくれました時の、あの条件に従うことを名誉にかけて誓うのであれば話は別だ、というのです。

苛立ちのあまり、私は足を踏み鳴らすようなことまでいたしました。こんな無理強いがどのような結果を招こうと、私には一切責任がないことの証人になってもらいたいと、私は叔母に頼みました。「結果はどうあれ、この〈残酷な〉無理強いには　…　」と、私は言ったのです。

叔母はこれまでにない厳しい口調で私を窘めておりました。

私のほうでは、半狂乱の状態でしたが、父に会うのだと言い張りました。「これだけの仕打ちを受けているのです。怖いものなどございません。この命を授かりました父です。父の手で命を失いましても本望です」と言いました。

本当に階段の途中まで降りて行ったのです。父がどこにおりましても、その足下に身を投げ出す覚悟でした。叔母はびっくりしておりました。私は気が触れたのではないかと心

配したとのことでした。実際の話、しばらくの間はまったくの錯乱状態だったのです。でも、すぐ横の姉の部屋でだれかに話し掛けているような兄の声を耳にいたしまして、私は足を止めました。残酷な陰謀家の兄が姉に向かって、「今度はうまく行くぞ。なあ、アラベラ」と言っていたのです。

「うまく行きますわ。うまく行きますとも」と、勝ち誇ったような調子で姉が言っておりました。

「このまま続けることにしよう。悪党め、自分の仕掛けた罠にはまったわけだ。あの娘もこちらの思いどおりにならざるを得ないな」

「お父様をしっかり掴まえておいてくださいね。お母様のことは私がやりますから」姉が言っておりました。

「心配無用だよ」兄が答えました。そして、ご同慶の至りと笑い声を立て、私を嘲る言葉も聞こえてきたものですから(私はそう思ったのです)、悲しみのあまり錯乱しておりました気持ちが、すっかり復讐の思いへと変わってしまったのです。

ちょうどその時、叔母が私のところまで降りてまいりました。私の手を取って二階へと誘い、落ち着かせようと骨折っておりました。

興奮状態が過ぎますと、私は不機嫌に黙り込んでしまいました。

叔母は忍耐と服従を説き聞かせておりました。

私は口を噤んだままでした。

とうとう叔母は、我が身に危害を加えるような真似は決してしないことを約束してほしいのだ、と言い出しました。

そのように恐ろしく無分別な振舞いに及ぶのを容認しない強い心を、神様は与えてくださったはずだ、と私は申しました。この身は神様のものであり、自分のものではないのだということもです。

すると、これで失礼しますよ、と叔母が申しますので、是非ともあの忌まわしい書類を持って行ってくれるよう、私は頼みました。

私がひどく不機嫌にしており、書類を持ち帰るよう大層熱心に頼むのを目にいたしますと、叔母は書類を取り上げました。でも、自分が書類を持ち帰るのを父が知ったりしては困ると言うのです。そして、私のほうでも事情をよく検討し、次回、閲読のために書面が持ち出された時には、もっと平静にしてもらいたいものだ、と言っておりました。

叔母が立ち去りますと、私は兄と姉が話しておりましたことすべてを思い巡らしてみました。私を出し抜いたと勝ち誇っておりましたのをつくづくと考えたのです。そして、憎しみの思いが沸き上がってまいりますのに気づきました。これまでにはなかった、抑えようにも抑え切れないものでした。こういったことすべてを考え合わせました時、差し迫っておりますあの日のことも案じられますし、一体どのようなことが私に出来たというのでしょう。どのような形にせよ、私がいたしましたことに申し開きは立つのでしょうか。世間の人たちに非難されることになったとしたら、皆さんは私がどれほどの挑発行為を受けたのかご存じないわけですが、貴女には許していただけるのでしょうか。もし許していただけないとしたら、本当に惨めなことになってしまいます。実は、こんなことを私はしてしまったのです。

差し出がましく振る舞いますベティを振り払い、ラヴレースさんへの手紙を書いたので

す。次の点をお知らせするためでした。つまり、アントニー叔父様の屋敷で強行すると脅されておりました事柄のすべてが、この家で行われようとしていること、あの方の二人の叔母様のどちらでも、保護の手を差し延べてくださる方のお世話になる決心をしたということ、要するに、月曜日に蔦の東屋で食事をいたしますのを何とか許してもらい、もしも可能ならば、都合のつき次第ということで、その日の午後二時か三時、あるいは、四時か五時に、塀の戸口の外でお会いしたいということ、それまでの間に、どちらかのご夫人の保護を期待して良いものかどうか知らせてほしいということ、期待出来る場合でも、是非とも言っておかなければならないのは、私のことはどちらかのご夫人に任せ、あの方自身はロンドンへ向かうか、M卿のお屋敷に留まってもらいたいということ、身内の者たちとの和解の道がまったくないことや、私の地所の所有権を確保し、そこに住まう許可を得るのは不可能であることを確信するまでは、私を訪ねるような真似も慎んでいただくし、とりわけ、あの方が話題として持ち出すことに私のほうで同意するまでは、結婚話には触れてもらいたくない、といったことです。また、次の点も付言しておきました。つまり、ひどく追い詰められているとはいえ、極度の不本意さと懸念とを覚えずには到達することもなかった決断、そして、世間の目からするなら、私の評判にとっては永久に拭い去ることの出来ないような汚点を残しかねない決断なのだから、それを実行に移そうと考える時にも、もしも、モンタギューのお嬢様のどちらかにお願いして、道中ご同行を賜るよう取り計らっていただけるなら、私としてはずいぶん気が休まるはずだ、とです。

私が認めましたのは、概ねこのような趣旨のことでした。そして、闇に紛れて庭へ忍び込んだのですが、他の時でしたら、そんなことをする勇気はなかったものと思います。手紙を隠し、だれにも気づかれずに二階へ戻ったのです。

戻りますと、恐ろしいほど心配になってしまいました。募る不安をいくらかでも紛らそうと思い、隠してあるペンに頼った次第です。そして、ほんの短い時間でこんなにも書き進めたというわけです。

そして今、この部分までまいりますと、不安な思いの数々が再び押し寄せ始めております。でも、私に何が出来るでしょうか。朝になりましたら何よりも先に、あれを取り返しに行くつもりではおります。でも、私に果たして何が出来るでしょう。

それに、すぐにもやってまいります日取りですのに、それよりもさらに早い日取りを皆は考えているかもしれないのです。

貴女宛のこちらのほうは、朝早くに隠しておきたいと思いますが、あの手紙は取り戻すべきだという声が、心の奥のほうで聞こえますので、もしも取り戻せるのでしたら、その帰り道にでも隠すつもりです。

もう二時近いのですが、あの手紙を取り返しに、もう一度こっそり降りて行きたい気持ちで一杯です。私の家では、十一時にすべてのドアに錠を掛け、閂をするのですが、玄関ホールの小さいほうの窓の下枠は、外の地面とほとんど同じ高さですし、鎧戸を開けるのも難しくはございませんから、容易に抜け出すことが出来るのです。

でも、どうしてこうまで気を揉む必要があるのでしょう。仮に手紙がラヴレースさんの手に渡ったといたしましても、あの方が何とおっしゃるのか、それをお聞きしてからでも良いのですからね。あの方の叔母様たちはとても離れたところにお住まいですから、あの方にいたしましても、すぐにお返事をいただくわけには行かないはずです。ですから、ご

招待がありますまでは、お邪魔するのはご遠慮申し上げることだって出来るのです。すでに示唆してあることですが、お従姉妹さんのお一人に出迎えていただき、チャリオットで同行してもらうよう言い張ることも考えられます。また、あの方がどちらのお嬢様からも願いを入れてもらえないということもあるでしょう。少なくとも、中止につながるようなことがいろいろと起こるかもしれないのです。どうしてこんなにも気に掛かるのでしょうね。それに、手紙が見つかるかもしれないという考えをあの方が思い浮かべる前に、先に取り戻すことも出来るのです。もっとも、あの方の告白によりますと、「待機の姿勢」と称する状態にご自分が入っておられない時には、信頼出来る召使を待たせているし、それ以外は、ある時は何かに姿を変え、またある時は別の変装をして、ここ二週間続けているのだそうですが、一日の四分の三はぶらついておられるということなのです。

それにいたしましても、奇妙なほどの胸騒ぎを感じております。でも、そうするようにと貴女がおっしゃるのでしたら、あの方が回してくださるチャリオットを、真っ直ぐ都へ向かわせることも出来るはずです。ロンドンでのことを計画いたしました際には、ご賛成が得られるのなら行こうとも思っていたわけですし、これなら、貴女のほうで乗り物を用意してくださる手間も省けることになるでしょう。また、私の家出に貴女が一役買っているなどと、お母様に疑われずに済むことにもなりましょう。

出来ることでしたら、是非ともご助言やご賛同をいただきたいものと思ってはおりますが、この辺でペンを置くことにいたします。

さようなら、私の最愛のお友達、さようなら。

手紙　三十九

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

金曜日　午前七時（四月七日）

叔母のハーヴィーは、とても早起きなのですが、私が目を覚ましました頃には庭の散歩をしておりました（今朝窓から見たところでは、ベティが一緒でした）。とても疲れることが重なりましたし、眠られぬ夜も続いておりましたので、あいにく寝過ごしてしまったのです。そのため、養鶏場まで足を運び、昨日と昨晩の分の手紙を隠してまいりますのがやっとでした。今戻って来たところですが、叔母はまだ庭にいるのです。そんなわけで、手紙を取り戻しには行けずにおります。今もそのつもりでいるのです。手遅れにならなければ宜しいのですが　…

あいにく寝過ごしてしまいました、と申しました。二時を三十分ほど過ぎた頃にベッドに入ったのですが、五時までは十五分ごとの鐘の音を数えておりまして、その後眠りについたのです。やっと目が覚めましたのは六時過ぎで、それも、ひどく夢に怯えて目が覚めたのです。夢というものを私はほとんど気に留めないほうなのですが、あまりにも強く心に残っておりますので、この場を借りまして、お話しせずにはおられません。

兄とアントニー叔父様、それに、ソームズさんが、ラヴレースさんを亡き者にする策を練り上げたらしいのですが、それに気づいたラヴレースさんが、私も一枚加わっていると思い込み、怒りのすべてを私に向けてきたのです。皆はあの方に追われて国外へ逃げ出し

たらしいのです。それから、あの方は私を捕まえますと、墓地へ連れて行きました。私の祈りや涙、それに、無実の訴えもすべて無視しまして、剣でこの心臓を一突きにしたのです。そして、すでに掘ってあった深い墓穴へ、半ば崩れかけている二、三体の亡骸の間に私を放り落としました。それから、両の手で泥や土を私の体の上に投げ込み、足で踏みつけていたのです。

目を覚ましますと、冷たい汗が流れているのです。震えが止まらず、苦しみもだえておりました。夢に見た恐ろしい光景は今も記憶に残っております。

それにいたしましても、これほどの不幸を現実に味わっております私が、どうして架空の災いなどに注意を向けねばならないのでしょう。心を乱されていたからに違いありません。叔母が教えてくれましたことや話し合ったこと、ラヴレースさんへの手紙のこと、それにまつわる不安、そして、案じられます恐怖の水曜日　…　こういった事柄がもたらします恐ろしい考えを、何もかも見境もなく抱え込んだためなのでしょう。

八時

手紙があの方の手に渡ってしまいました。何という精勤ぶりなのでしょう。奇妙なほどです。これだけのお骨折りが善意からのものであってほしいと思います。ただ、正直に申しまして、あの方が努力を惜しまれるようですと、私といたしましては不愉快に感じることでしょうね。その点は白状いたさねばなりません。それでも、百マイルほど離れたところにいてほしかったと思っております。あの方には何と有利な立場を与えてしまったことでしょうか。

あの手紙が私の手の及ばないものとなりました今、前にもまして不安や後悔の思いが募ってまいります。と申しますのも、これまでは、出して良いものかどうか迷いがございました。そして、今は、出すべきではなかったと考えております。とは申せ、ソームズさんを避けようというのでしたら、こうする以外に他の方法はあったでしょうか。でも、この手紙が導くとおりの針路を辿りました場合には、どんなにか軽薄な人間だと思われてしまうことでしょう。

いかがでしょう、間違っていたでしょうか。教えていただきたいのです。でも、そうお考えだとしても、間違ったとはおっしゃらないでください。たとえ世間の皆さんは非難なさっても、貴女のお咎めさえなければ、少しは慰めとなることでしょう。詔いごとをお願いいたしますのは、これが最初ですわね。このことだけでも、間違いを犯したのは分かりますね。それでいて、本当のことを知らされるのは怖いのです。あゝ、お教えください（でも、おっしゃっては嫌です）。私、間違ったことをしてしまったのでしょうか。

金曜日　十一時

叔母がまた訪ねてまいりました。用件に先立ちまして教えてくれたのですが、身内の者たちは皆、私がまだラヴレースさんと文通していると思い込んでいるのだそうです。叔母に言わせますと、あの方が仄めかしている言葉や脅し文句からもそれは明らかだというのですが、そんな言葉の端々からは、あの方は家族の者と私との間でございました様々な出来事に通じていること、それも、場合によりましては、出来事のあった直後に知っておられることがはっきりする、というのです。

情報を手に入れるためにあの方が取っておられる卑劣な方法を認めることは出来ませんが、心の腐った召使を（あの男の悪辣さを大目に見ているわけでも、容認しているわけでもありませんが）葬り去ることで身の証を立てようといたしますのも、賢明なこととは言えません。と申しますのも、そのようなことをいたしますと、私たちの文通に気づかれるきっかけとなり、ソームズさんを避けるために温めております私の望みも、すべて挫かれてしまうかもしれないからです。ただ、ラヴレースさんの手先になっている当の男が、兄とあの方の間で二重スパイの役割を演じているということも、決して有り得ない話ではございません。でなければ、私の家族にいたしましても、皆が匂わせております出来事についてあの方が脅迫しているというのを、どうして知ることが（しかも、こんなにも早くです）出来るのでしょうか。

私は叔母に向かって次のように断言いたしました。私の受けております仕打ちのことをあまりにも恥ずかしく思っているので（それも、自分自身のためばかりでなく、皆のためにもそう思うのですが）、仮にあの方との文通の手段が与えられたとしても、仕打ちの具体的な点についてラヴレースさんに知らせる気にはとてもなれない。そう考えるだけの理由もあって言うのだが、あの方が私を通して知っているのだとしたら、私たちはそれだけの間柄だということであり、私が大変心配している点だが、あの方としては訪ねてくるのに何のためらいも感じないはずだ。姉の侍女のベティ・バーンズ以外、私が父の召使のだれとも接触していないことは皆も知っているとおりである。召使たち皆のことは高く買っているし、召使たちの気持ちに任せるのであれば、きっと喜んで私の役に立とうとしてくれると信じてはいるが、召使たちの逃げ腰の態度から察するに、何か特別な指示を受けているように思われるので、ハンナがあのように不面目な形で暇をとらされてからというものは、召使たちが仕事を失う原因になるのを恐れ、こちらから声を掛けるのさえ控えるようにしている。それゆえ、ラヴレースさんが得た情報のことについては、皆のほうで説明をつけてもらわなければならない。兄にしても姉にしても（二人の腹蔵のないところを褒めるついでに、ベティがしばしば教えてくれるのだが）、また、もしかすると、二人のお気に入りのソームズさんにしても、何かあの方を非難することがある時には、あるいは、今回の件ではあの方と私を結び付けて得意になっているわけだが、この私に対する咎めごとの場合でさえも、だれの前なのかということは一切気にも留めずにおしゃべりをするのだから、といった具合にです。

叔母は次のように申しておりました。あの方が私から情報を得ていると考えるのは、身内の者たちとしては極めて自然なことだ。ひどい仕打ちを受けていると考える私が愚痴をこぼすかもしれないし、その相手があの方ではなくハウ嬢だとしても、それはおそらく同じことになる。皆がラヴレースさんを話題にするのと同じくらいに、ハウ嬢は皆について言いたい放題だ。きっと、口にしている具体的な内容は、我が家での出来事に通じているだれかから得たに違いない。このこともあり、取り返しのつかない結果を招かないためにも、早急にすべての決着をつけようと父は決心したのだ、というのです。

「険しい言葉が出てきそうですわね、その様子では」と、叔母が言葉を続けました「そのつもりだったのです、私は」。「私といたしましてはね、仮にあなたが何か書き送っているとしても、あんな気性の激しい人を煽り立てるようなことは、決して筆にしないだろうとは思っておりますよ。でもね、今回お邪魔した目的はこんなお話ではないのです。

あなたにももうお分かりのはずですが、お父様はどうあってもご意向に従ってもらうおつもりなのです。ご意向に逆らえば逆らうほど、お父様といたしましては、ますますご自分の主張を通さなくては沽券に関わるとお考えなのです。お母様が伝えてほしいと言っておられたのですけれど、もしもあなたが、おとなしく言い付けに従ってくれそうなところを少しでも見せてくれるなら、今すぐにでもお母様の控えの間で会いたいとおっしゃっているのです。お父様がお庭を散歩なさっている間にね」

「驚くほどの忍耐強さですわね」　私が申しました。「この件につきましていろいろと言明したり弁明したりいたしますのは、もう疲れました。それに、私がどのような決心でいるのかはよく知られたことなのですから、その点をなおも強要されるようなことはないものと思っておりましたわ」

「今回お邪魔した用向きのことを誤解しているのです、貴女は」と、真面目な顔をするのです」。これまでのあなたは、身内の者たちの意向に従うよう、そして、願いを入れてくれるよう要望され、嘆願されてもおりましたね。懇願するのはもうお終いということなのです。皆もそれは諦めております。今は、お父様のご意向に従ってもらうことに決まったのです。それが相応しいことなのですからね。あなたを拉致するのだとラヴレースさんは脅しをかけていますが、まるでそんな暴挙にあなたが同意しているみたいに、責任の一部はあなたにもあると言われているのですよ。そのようなこと、お母様は信じようとなさいませんけれどね。お母様は話してくださるはずですよ。あなたのことを高く買っていらっしゃるご自分のお考えをね。今でもどれほどあなたのことを愛していらっしゃるのか、間近に迫っております出来事の際には、あなたにどのようにしてもらいたいのか、お話ししてくださるはずです。でも、面と向かって反対されますと、いよいよお腹立ちでしょうから、そのようなことにはならぬよう、先にあなたのほうから保証してほしいとお望みなのですよ。快く振る舞う決心をして降りて来てもらうということをです。快く振る舞いましても渋々振る舞いましても、実行に移されねばならないことなのですからね。それにですよ、あなたがお父様や他の皆さんと仲直りするのに、どのようにしたら良いのか、少し助言をして上げたいのだそうです。どうですか、クレアリーさん、降りていらっしゃいますか。それとも、そのつもりはないのですか」

こんなにも長い間遠ざけられていたわけですから、母の前に出るのを許していただけるなら、それは幸せなことだと思うと、私は申しました。ただ、そのような条件では希望するわけには行かない、とです。

「それじゃあ、これがお返事というわけですね、あなた」

「そういうことになりますわ、叔母様。どのような事態になるといたしましても、決してソームズさんと一緒になるつもりはございません。このように何度も何度も押し付けようとなさるのは残酷な話です。あの人とは絶対に結婚いたしません」

不機嫌な様子で叔母は降りて行きました。私にはどうしようもなかったのです。度重なる企てもすべては同じ目的なのですから、本当にうんざりしてしまったのです。皆が飽きる様子も見せないのには驚いてしまいます。ほとんど変わる様子もないのですからね。そして、どちらも一歩も譲ろうとしないのです。

下へ降りて、これを隠してまいります。と申しますのも、私が書いておりますのをベテ

ィが見ていたのです。生意気なあの娘はナプキンを手に取り、それを水に浸しますと、「どうぞ、お嬢様」と、愚弄するような態度で濡れた端を差し出すのです。

「どうしようっていうの」　私は尋ねました。

「右手のお指一本で結構ですわ、お嬢様、ご覧いただけるのでしたらね」

指にはインクが付いていたのです。

私は睨んでやりましたが、何も申しませんでした。

でも、また捜されても困りますので、ここで筆を置くことにいたします。

Cl. ハーロー

手紙　四十

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

金曜日　一時

ラヴレースさんからの手紙が届きましたが、有頂天になっているご様子で、誓いの言葉やら約束の言葉で埋め尽くされております。同封させていただきます。ご覧のとおりですが、ベティ夫人がお世話くださることと、シャーロット・モンタギュー嬢が同伴してくださることをしきりに請け合っておられます。あの方がおっしゃいますには、私のなすべきことといたしましては、ただ辛抱強く耐え、ご一族の方々お一人お一人からのお祝いの言葉を待つだけで良い、というのです。

でも、あのご夫人のお世話にこの身を委ねます結果として、私はご自分のものになるのだという、思い上がった考えをしておられるところもご覧いただけるでしょう。

六頭立てのチャリオットは、おっしゃっているとおりの場所に用意してくださるとのことです。私が大層懸念しております、評判を汚しはしまいかという点につきましては、ご覧のとおり、思い切った考えを述べておられます。仮に私があの方のものになるというのでしたら、また、そのように思い込まれるような根拠を与えていたのでしたら、確かに思いやり溢れるお言葉だと思います。でも、そんなことをしたつもりはないのです。

男性というのは、一つスキを見せますと、次々につけ込んでくるものです。ほんの少しでも男の人を励ましたりいたしますと、若い娘は間もなく、思ってもいなかったところまで誘い込まれ、自分の手に負えなくなってしまうのです。あの方が書いておられることからいたしまして、貴女は次のように想像なさるでしょうね。つまり、ソームズさんへの嫌悪の念はあの方への好意があればこそなのだと思わせる、それだけの根拠を私は与えてしまったのだ、とです。

私が恐れておりますのは、私に対する企てのことで、あの方が内通者から聞いて書いておられることと（切迫しております日取りのことはご存じないようですが）、叔母とベティから確認いたしましたこととを比べてみますと、この家に留まっておりますかぎり、ソームズさんの妻となりますのを免れる望みは一切ないという点です。

こんなことでしたら、アントニー叔父様のところへ行っていたほうが良かったと思います。そうしておりましたなら、少なくとも時間稼ぎにはなったことでしょう。あの方のご立派な企みの結果がこの有り様というわけです。

二人でのこれからのこと、心を改めるおつもりだとか、行動の指針となってもらいたいといったお言葉 … このすべては、前にも申しましたが、私のことは大丈夫だと自信を持っておられる証です。

でも、次のような趣旨の返答をいたしました。ご一族のご婦人たちのお一人にこの身を委ねる気持ちでいることを期待させるような書き方はしたが、月曜日までには、今日から数えてまだ三日あり、身内の者が手を緩めてくれるとか、あるいは、ソームズさんのほうでも、皆が実現不可能と見ている点については諦めてくれるはずと、今でも望みは失っていないのであり、自分があの約束に絶対的に縛られているようには考えたくない。それゆえ、私のほうで約束を撤回した場合にも、改めて説明を求められるようなことは無しにしていただきたい。是非知っていただきたいのは、仮にご提案のとおりベティ・ローランス夫人の保護に身を委ねるとしても、そのことをもって直ちに、お力にすがるつもりでいるとでもお考えになるのなら、それはとんでもない間違いである。というのも、納得しておきたい点が多々あるし、調整すべき点もいくつかあるので、この家を出た後でさえ（実際に家を捨てるとしても）、色好い返事を与える気にはとてもなれない。何よりもご承知いただきたいのは、父が和解し、私の今後の進み方に賛同してくれるよう、全精力を傾けるつもりであり、道理に適っているかぎりはすべての点に亘って、家を出なかったも同然のように、父の指図に従う覚悟でいるということ。私がこの点についての自由を留保したりするとは思えないとか、私の家出が、それ以外のことでは得られなかったはずの有利な立場を少しでもあの方に与えることになるとお考えになるようであれば、私はこのまま家に残り、皆の同意のないかぎり、あの方とも、また、どのような人とも結婚しないという、繰り返し述べてきた約束が受け入れられるのを期待し、事の成り行きに従うつもりでいるということ、等々です。

この返答は出来るだけ早く隠しに行くつもりです。あの方も事態が重大な局面に差し掛かっているとお考えでしょうから、おそらく、返事が届くのにあまり時間は掛からないものと思います。

金曜日　四時

本当に体調を崩してしまいました。これまでですと、まだ思いやりに溢れておりました身内の者たちに心配を掛けぬよう、わずかな不具合などは一切我慢しておりましたが、今度は、体調が優れませんのを精々利用しようと思います。来週の水曜日に迫っております災難を引き延ばすことが出来ればとの願いからです。もしも実際に引き延ばしてもらえましたら、ラヴレースさんとの約束も延期するつもりでおります。

私の体調がひどく悪いことは、ベティが皆に伝えたのです。でも、憐れみを掛けてくれる者は一人としておりません。

きっと、私は皆の嫌悪の的になっているのでしょうね。そして、私が死ねば、皆は喜ぶのだろうと思います。本当にそう思うのです。「あの天の邪鬼め、一体どこが悪いというのだ」と、一人が叫びますと、「恋の病かしらね」などと、もう一人が叫んでおります。

蔦の東屋に行っていたのです。そして、出てまいります際には、〈おこり〉に罹ったように悪寒がして、震えが止まりませんでした。これを見て、ベティが報告いたしますと、「構うことはないさ。震えさせておくんだ。風邪で参るような奴じゃないからな。強情さが病

を寄せつけないはずだ。恋患いの娘にとっては、片意地を張るのが元気の支えで、いくら華奢な体つきでも、丈夫になるのには、冷水浴よりも効果があるのさ」とのことでした。

これは残酷な兄の台詞で、私にとりましてはさらに大切な人たちもそれを耳にしていたというのです。ほんの二、三ケ月前でしたら、わずかな風に身を晒しましても、だれもが気を揉んでくれていた私ですのに　…

ベティというのは、正直に申しまして、このような際には素晴らしい記憶力をしているのです。この手の話の場合、あの娘が繰り返しますと、言い落とすことは何一つございません。耳にしたことを繰り返す時のその様子を見るだけで、あれこれの酷い言葉をだれが口にしたのか、尋ねる必要もなくなるほどなのです。

金曜日　六時

叔母は今晩も泊まるのですが、今私を残して去って行ったところです。私のことについて身内の者たちが話し合った結果を知らせに来たのです。次のような話です。

来週水曜日の朝に全員が集まる予定になっているそうです。父、母、両方のおじ様、叔母様、それに、ハーヴィー叔父様と、勿論、兄と姉です。それから、私のノートン夫人も出席を許されます。リーウェン師も近くに控えていてくださるそうですが、必要な場合には私を戒めるためなのでしょう。立ち会ってくださるのか、それとも、呼ばれるまでは待機なさるのか、叔母にも定かではないとのことです。

この恐ろしい裁判官たちが一堂に会しますと、哀れな囚人が引き出されてくるというわけです。ノートン夫人に付き添ってもらうのですが、夫人はそれに先立ちまして、私に子の務めを教え込むよう、指導をお受けになるとのことです。私は考養の心を忘れてしまっているということなのでしょう。

また、叔母に言わせますと、これが上首尾を収めることには、何の疑念もないのだそうです。私も身内の一部の者たちが個々に諭すのには逆らってきたけれど、これだけ立派な裁判官たちの諫めを受けて、なおも反抗するほどの頑固者になっているとは思われないからだ、というのです。それに、叔母が仄めかしていたのですが、父も例のないほど遜った態度に出るつもりでいるのだから、なおさら疑いの余地はないとのことです。でも、どんなに遜ってもらったといたしましても、たとえ父からでありましても、期待されておりますような犠牲をどうして払う気持ちになれるでしょうか。

ただ、このような裁きの場では、耐え抜く気力はとてもありそうに思えません。父がその場を取り仕切るのですもの。

勿論、あの厳めしい姿の前に出頭いたしますのを父が許してくださいますまでは、私の試練は終わらないものと考えておりました。

叔母が申しますには、私に求められておりますのは、それ以前とは言わないまでも、火曜日の夜には、結婚契約書に署名をしてほしいということなのです。翌日の厳粛な集まりを祝いの日に変えるためなのだそうです。ただし、結婚許可証と、それから、もう一度贈与財産の書類もですが、私のところへ届けられることになっております。皆がどれほど真剣なのかを知ってもらうためだというのです。

さらに叔母は、私の署名をもらうために、贈与財産の書類を父自身が持って来ようとしていたことにも触れておりました。

本当に、何という試練なのでしょうね、これは。どうして父に向かって署名を拒んだり出来るでしょう。こんなにも長い間遠ざけられておりました父に向かって …… 命令の言葉と哀願の気持ちとが、おそらく一息に語られることでしょう。そんな父を、どうして拒むことが出来ましょうか。

叔母が申しますには、皆としては、ラヴレースさんのほうで、また、もしかすると私のほうでもですが、何か企んでいるに違いないと考えているのだそうです。そして、私があの方の妻になるのを目にするくらいなら、いっそ私の後を追って死んだほうがマシだ、と父は言っているとのことでした。

私は体調の優れないことを話し、このような裁きのことを案じるだけでも、すでに耐えられなくなっているということ、また、その時が近づくにつれていよいよ不安も募るでしょうし、具合がひどくなりはしまいかと心配している旨を申しました。

その種の手管に対しては、皆のほうでも怠りなく用意をしてある、というのが叔母の冷酷な言葉でした。そんなことをしても、私にとっては何の役にも立たないと、叔母は請け合ってもおりました。

「手管ですって」　私は鸚鵡返しに叫んでおりました。「それも、ハーヴィー叔母様のお口から ……」

「まあ、あなたったら、他の者たちはお馬鹿さんだとでも思っているのかしら」　叔母が申しました。「皆気づいているのですよ。家の中では憂欝そうな溜め息をつくのに懸命ですし、その愛らしいお顔を「叔母はこんな言い方をしてくれたのです」胸に埋めて見せたり、足がよろめくふりをして椅子にすがってみたり、ドアの柱に寄り掛かって見せたりしているけれど、それはだれかの目を意識している時のことでしょう「ハウさん、これは私のことを偽善者に仕立て上げて軽蔑しようとの魂胆から出た中傷です。兄か姉の中傷なのでしょう。こんな卑劣な手を使うなど、私には出来ませんもの」。それなのに、あなたの鶏たちのところに行ってごらんなさい。庭の道を進んでいる時でも良いわ。だれも見ていないと思ったとたん、それはもう軽やかな足取りですからね。動作の一つ一つが素晴らしく敏捷になるのですもの」

「そんなお粗末な手管を使うことの出来る人間だといたしますと、我がことながら嫌気がさしてしまうでしょうね」　私は申しました。「そのようなことをすれば、心が卑しいばかりか、愚か者ということにもなってしまいます。と申しますのも、もっと哀れを誘うような場合にも、身内の者たちは心を動かされることがありませんのを、私は十分味わってきたのではないでしょうか。でも、火曜日までには私の体具合はどうなっているのか、ご覧いただくことにいたしますわ」

「まさか、無茶な真似をするつもりじゃないでしょうね。神様が強い心を授けてくださったはずですから、そんなことはしないと思いますがね」

「そうあってほしいものですわ、叔母様。でも、たっぷりと無茶な仕打ちを加えられておりますし、脅しも受けておりますから、体に響くのが当たり前でしょう。何か他の手段に訴えるまでもありません。あるいは、手管を弄する必要もないのです。いずれお分かりになることですわ」

「一つだけお話ししておきましょうね。具合が悪かろうと良かろうと、水曜日の夜までには、おそらく式は執り行われるだろうということです。それから、今回の私のお役目か

らは外れたことですけれど、次のことも言っておきましょうね。式が終わって、ラヴレースさんの望みが完全に失われました時には、ソームズさんに（ご厚意として、あなたのほうであの人にお願いする場合ですが）約束をしていただくことになっているのですよ。あなたをお父様のお屋敷に残して、毎晩ご自宅に戻ってもらうということをです。あなたがしっかりと義務を弁えるようになり、苗字を変えることを認める気持ちになってくれるまでのことですけれどね」

こんな話に口を開くなど、出来ることではありません。私は言葉を失ってしまいました。

あゝ、ハウさん。これが、たとえ一部の者だといたしましても、私のことをロマンティックな娘だと言っておりました連中なのです。これが空想逞しい兄とお利口な姉の実態なのです。きっと二人で頭を寄せ合わせたのでしょう。ただ、叔母が申しますには、後のほうの考えには母も乗り気でして、この便法が見つけ出されますまでは、私が悲しみのあまり、あるいは、対立の果てに、体調を崩すとか発作を起こすようなことがあれば、結婚はさせるべきでないと力説していたのだそうです。

このように強引なやり方を目論む言い訳として叔母がしばしば口にいたしますのは、皆が入手していることだというのですが、ラヴレースさんの側からすぐにでも仕掛けられそうな企みや謀略についての情報なのです(ア)。それが実行に移されますのを、このような狡猾な手を用いて阻まねばならないというわけです。

金曜日　九時

ところで、いかがでしょう、どのように結末をつけたら宜しいのでしょうか。ご覧のとおり、断固とした態度なのです。でも、ご助言が何らかの役に立ちますよう、早目に届くことなど、どうして期待出来るでしょう。実は、今階下へ行って来たところなのです。ラヴレースさんのお手紙がまた一通、もう届いているのです［あそこで寝起きしておられるのでしょうね］。来週の月曜日にはここから抜け出すという、私の最初の決心を守るつもりでいるのかいないのか、一筆認めねばなりません。仮に、そのつもりがないことをお知らせいたしますと（一見したところでは、あの約束をいたしました時にも増して、あの方には極めて不利で、ソームズさんにとっては有利な状況なのですから）、皆が推しております忌まわしい男との結婚を強要されました場合、それは私の落ち度と見られても尤もなことになるのではないでしょうか。また、ラヴレースさんが激昂し、失望の果てに不幸な出来事が起こったといたしましても、私がその責任を問われることになるのではないでしょうか。確かに、あの方のお申し出は実に公明正大なものです。ただ、軽薄な娘だと世間の人々の非難を招くことが一方では　…　でも、あの方も触れておられますように、すでに非難の的になっているのも事実です。一体、私に何が出来るのでしょう。あゝ、従兄弟のモーデンさえ　…　でも、希望などを口にいたしましても、何の意味がありましょう。

ここで、ラヴレースさんのお手紙の要旨をお知らせすることにいたします。返事をいた

（ア）ここで次の点に触れておくのも見当違いなこととは言えないだろう。つまり、ラヴレース氏は自らの手先、そしてハーロー一族の手先となっているリーマンに対し、謀略に関して報告することを許し、よって一族を駆り立てるべく巧みに策を弄したとはいえ、氏にはその謀略を実行する意図もなければ、その力もなかったということである。

しました後、お手紙そのものをお送りいたしますが、返事は出来るだけ引き延ばすつもりです。大変多くの事柄に関わりを持つ約束だけに、何か取り消す理由を見つけられたらと願ってのことなのです。でも、この恐ろしい山場を迎えまして、より適切なご助言をいただきますためにも、私の行動のすべてをご承知いただくのも必要なことと存じます。

はなはだしく自信に満ちた筆遣いであったと、あの方は詫びておられます。限りない歓喜の念に動かされた結果なのだそうで、私の意向には全面的に従うとのことです。代案や提案の数々で書面は埋め尽くされております。真っ直ぐにベティ夫人のところまで、それとも、希望とあれば、私の地所のほうへ同行したいとのお申し出です。そして、そこでM卿が保護の手を差し延べてくださるというのです［どうやら、私がこのような無思慮な助言を拒否いたします理由はご存じないみたいです］。いずれにせよ、私が安全なことを確かめた上でロンドン、あるいは、私の望む場所へと、あの方は向かわれるとのことです。また、私の許しがないかぎり、そして、贈与財産の件などと同様、あの方の改心のことも含めまして、不安を覚えます点すべてについて私が満足いたしますまでは、私の傍に近寄ることもしないとおっしゃっています。

貴女のところへ連れて行ってくださるというのが、あの方のもう一つの提案です。お母様が受け入れてくださるのは疑うべくもないのだから、というのです(ア)。もしも、それが貴女とかお母様にとりまして、あるいは、私にとって好ましくないのなら、ヒックマンさんの保護に私を委ねることにするが、きっと貴女のほうから働き掛けていただけるはずだから、とのことです。そして、バースとかブリストルとか外国とか、どこであれ、私にとって都合の好いところへ向かったことにすることも出来るとおっしゃるのです。

また、そのほうがさらに好ましいということであれば、こっそりとロンドンまでお供しようとも言っておられます。私のために小綺麗な下宿を見つけてくださるとのことで、お従姉妹さんのモンタギューのお嬢様がお二人ともそこで私を迎えてくださり、万事が私の考えどおりに整いますまで、そして、和解が成立するまでの間、ご一緒してくださるというのです。私の家族全員からひどい侮辱を受けているけれど、和解を進めるためなら、決して労を惜しむことはないと約束しておられます。

これらいくつかの手段のうちから選ぶようにとのご提案ですが、あの方がおっしゃいますには、ベティ夫人直筆の正式な夫人宅への招待状を間に合うよう手に入れることは出来そうにないから、という理由です。ご自分が夫人のところへ受け取りに行くなら別だろうが、この危急の時に、私からの命令を待ち受けている身では無理な話だというわけです。

ご自分をまったくの絶望へと追い込むつもりではないのであれば、約束を守ってほしいと、これ以上ないほど厳粛な態度であの方は嘆願しておられます。

でも、私が約束を取り消した場合のこととして、身内の者たちとか、ソームズさんとかを脅したりなさるのではなく、丁重な言葉で次のように言っておられます。仮に私のほうで撤回するようなことがあっても、疑いなくそれは、ご自分も納得して然るべき理由からであるに違いない。悪くとも、私が気持ちのままに振る舞う自由を身内の者たちが完全に許してくれるから、ということであってほしい。私の理由には（それが何であれ）全面的に従うつもりであり、私からの好意を期待する唯一の拠り所として、今後はひたすら行い

（ア）本巻十六頁の注(ア)を参照のこと。

を正すことに努めたい、と言っておられます。

要するに、私を監禁状態から解放すること、そして、私の将来の幸せにとって絶対不可欠な点につきまして、私が自分の意思に従う自由を取り戻すこと、それこそが差し当たってのあの方の目的のすべてだと厳かに誓っておられるのです。そして、次の点も明言しておられます。いずれは好意を寄せてもらえるはずとの期待を抱いているゆえ、また、ご自分とご一族の名誉を考えるなら、私の几帳面この上ない考え方に反することは一切提案する気になれないし、私の気持ちを重んじているので、身内の者たちが強硬手段を控えることによって、所期の目的が叶えられることのほうを望んでおられるというのです。それでも、世間の人たちの見方という点につきましては、どのように考えたところで、私に対する身内の者たちの振舞いからして、既に遠慮のない非難が一族に加えられているのは当然の報いであり、私がこれほどためらっております手段に訴えることも、皆から受けた仕打ちの自然かつ予想どおりの結果にすぎないとしか言いようがない、とおっしゃるのです。

確かに、残念ながらすべてこのとおりにも思われます。また、この件につきまして、ラヴレースさんがおっしゃりたいことのすべてを口に出そうとなさらないのは、多少は礼儀を弁えていらっしゃるためでしょう。と申しますのも、私がこの地方の半ばにも及ぶ人々の噂になり、笑いの種にされておりますのは疑いようがないからです。もしもそのとおりだといたしますと、私が今何をいたしましても、皆の無分別な虐待のせいで、すでにいわれもなく受けておりますものよりもさらに大きな恥辱を招くようなことは、有り得ない話です。それに、だれと一緒になりましても、また、何をいたしましても、監禁されましたことや、苛酷な仕打ちを受けましたことでこの身に染み付いてしまいました汚名を拭い去ることは、少なくとも私自身の考えでは、決して出来ないだろうと思うのです。

あの方が姻戚関係を結んでおられる名家のその一員と見なされます日が、仮にこの私に訪れるとしての話ですが、これまで受けてまいりました恥辱のせいで、私への評価をお下げになるような方々がご一族の中にはいらっしゃらないよう願っております。いらっしゃる場合に、もしもあの方がそのような評価を慎んでくださるようでしたら、おそらく、私は恩を着せられてしまうことになりましょう。ご覧のとおり、自分の家族から受けましたこの苛酷な、この残酷な仕打ちのために、ひどく卑屈な気持ちになってしまっているのです。でも、もしかいたしますと、これまでが得意になりすぎていたのかもしれませんね。

結論といたしまして、ラヴレースさんは私との面会を繰り返し懇願しておられます。それも、出来ることなら今晩中にとのことですが、この栄誉は、私がこれまでにも二度希望を抱かせておりましただけに、一層の勇気をもって請い求める次第だとおっしゃっています。でも、その栄誉が得られようと得られまいと、私のために申し出られた選択肢の中から是非とも一つを選んでほしいし、私が心を固めるに至った理由が消滅しないかぎり、そして、再び身内の厚遇を回復する見通し、少なくとも、監禁を解かれ、選択の自由を回復する見通しがないかぎりは、月曜日に家を抜け出すという決心を反故にすることのないよう、嘆願しておられます。

この点につきましてのこれまでの誓いや約束のすべてを、すこぶる熱心に、また、真面目な態度で、改めて繰り返しておられるものですから（あの方ご自身の利益やご一族の名誉、また、私に対する皆さんのご厚意のことも一緒になりまして）、本心からのお言葉であることに疑いを挟む余地はないように思われるのです。

手紙　四十一

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

土曜日　午前八時（四月八日）

お叱りを受けることになるのでしょうか、それとも、受けずに済むのでしょうか。私には判りかねるのですが、手紙を隠してまいりました。次の月曜日に、前の手紙で触れました時刻までに、出来ればの話ですが、この家を出る決心でいる旨を確認してもらうためのものです。手紙の写しは作りませんでしたが、次のような内容です。

ソームズさんを立てようとする身内の者たちの固い決意を免れる方法は、あの方の手助けでこの家を出る以外にはないことをお話しいたしました。

この点に関して、あの人に有難がってもらうつもりはございませんでした。と申しますのも、私は次のようにはっきりと申し上げたのです。許し難い罪を犯すことなく、好きな時に死ぬことが可能なのであれば、私としては、自分の気持ちはさておき、世間の人がこぞって非難するはずの手段に踏み切るくらいなら、むしろ死を選びたいのだ、とです。

また、次の点もお話ししてあります。つまり、衣裳類を持ち出すつもりはなく、その時身に着けているものだけで出ることにするが、疑われないためにも、普段着のままにするということ。私の地所を所有する件については、拒否されるのは目に見えているが、どれほど苦しい生活を余儀なくされるとしても、父と裁判沙汰を起こすことには絶対に同意しかねるということ。それゆえ、どなたのお世話を受けるにしても、ただ苦難から救うためだけのことにしていただく。従って、このような手段に踏み切るからといって、あの方が新たに期待を寄せられるようなことは何一つとしてなく、どのような見方からしても、求婚を受け入れるか拒絶するかは私の気持ち次第であり、あの方の振舞いや思慮分別が相応しいものと映るかどうかによって決まるのだ、といったことです。

次のようにも申しました。ベティ・ローランス夫人のお宅近くの、人目に付かない住まいに落ち着くのが最善で、夫人のお屋敷へ行くのは望ましくないと考える。それは、あの方のご一族に助けを求めたと世間の目に映っては困るし、それが原因で身内の者たちとの和解が実現出来なくなるのを避けるためのことである。ハンナを呼び寄せ、居場所はハウ嬢にだけお知らせするということ。あの方にはすぐに私の傍を離れ、ロンドンかM卿のお屋敷か、そのいずれかに向かっていただき、（ご自分から約束なさったことでもあり）私の許可なしには、私に近寄ることなく、文通だけで満足していただきたい、とです。

見つけ出され、無理やり連れ戻される危険に晒されていることが分かれば、すぐにベティ夫人かセアラ夫人のところに保護を求めるつもりでいるが、これは絶対に必要な場合に限るということ。というのも、考えられる最善の方法を用い（居場所が知られていないことを利用するわけですが）、一人か二人の仲立ちを得て身内との和解の話し合いに入ることのほうが、私にとっては体面が立つからだ、ともお話しいたしました。

ただ、以下の点ははっきりと言わせていただかねばならないということで、この話し合いにおいて、あの方との結婚を断念するよう身内の者たちが強く主張する場合は、その要求に従うつもりでいるが、ただ、あの方が独身の間、あるいは、ご存命中は、決して他の男性と結婚しない旨をあの方と約束するのを皆が許してくれることを条件にしている、と申しました。また、このような敬意を表す気持ちになったのも、私のためにいろいろご苦

労やお骨折りをいただいているし、お受けになった仕打ちのこともあり、そのお礼のつもりである、とも申しました。もっとも、失礼な扱いをお受けになったとはいえ、大部分は自業自得かもしれないと（ご自分の評判にはほとんど留意されなかったのですから）、遠回しに触れておきました。

この隠れ家におります間に、従兄弟のモーデン宛に手紙を書き送ることは可能でしょうし、もしかいたしますと、私の側に立ってもらうよう働き掛けることも可能かもしれないとお話ししてあります。

その後、あの方が持ち出された代案につきまして、手短に触れております。

きっと貴女もそうお思いでしょうが、不幸にも無理強いをされたり、このように家出を企てたりいたしますと、そうではない場合に好んで行いますのよりもずっと早目に、自分の振舞いの一つ一つについてあの方に説明をしなければならなくなるということです。

私のためにお母様がご自分からこの件に関わってくださるとか、あるいは、貴女かヒックマンさんが巻き添えになるのを黙認なさるといったことは、期待するわけには行かない旨をお話しいたしました。ロンドンに出ては、とのご提案につきましては、あちらには一人として知り合いもございませんし、危険極まりない場所とも考えておりますので、いつの日かご親戚のご婦人方に誘われ、お供をするのでもないかぎり、決して行く気にはなれないと申しました。

しきりに求めておられる面会の件につきましては、どうしても妥当なこととは思われません。とりわけ、すぐにもお会いすることになりそうな状況なのですからね。でも、家出の件につきまして、何か決心を変えたくなるようなことが起こりました場合には、機会のあり次第お会いして、変更の理由をお知らせするつもりだと言ってあります。

このようなことを筆にいたしますのに、さほどためらいはございませんでしたが、こうしておけば、私のほうにあの方を落胆させるようなことがありましても、耐えるための心の準備になると思ったのです。それに、しばらく前にあの人気のない薪小屋で突然姿をお見せになった時には、大層立派なお振舞いだったこともございます。

最後に、苦悩に喘ぐ人間として、そして、そのような人間としてのみ、あの方の名誉を重んじる心とご一族のご婦人方の保護とにこの身を委ねるのだ、と申しました。これほど自分の気持ちに反した手段、私の信用を台無しにしかねない手段を取らざるを得ないことへの深い憂慮の念を、繰返し「勿論、真心を込めまして」お話しいたしました。そして、蔦の東屋(ア)で午餐が出来ますよう、何とか許可をもらい、あそこに落ち着きましたら、何か

（ア）〈蔦の東屋〉（あるいは、〈蔦の庵〉と家族の間では呼ばれる場合もあった）は、幼少の頃から、このうら若い婦人のお気に入りの場所であった。夏の数ヶ月間は、しばしばそこで仕事に精を出し、読書、書き物、絵画に勤しみ、（許しを得た時には）朝食や午餐、場合によっては夕食もそこで取っていたのである。とりわけ、この場所に等しく愛着を抱いているハウ嬢の訪問を受けた折には、そうするのが習わしであった。

別の手紙の中では（本作品には採録されていないものであるが）、彼女はこの場所の様子を紹介しており、森と湖、そして丘陵の織り成す変化に富んだ美しい風景を望むことが出来るという。この光景にいたく感心した彼女は、一枚の絵を描き上げ、その作品は他の数枚の絵と共に、彼女の客間を飾っているとのことである。

の用事を見つけましてベティを遠ざけるよう努力することを伝え、後の段取りにつきましては、あの方にお任せする旨をお知らせいたしました。ただ、近くに来ておられることを知らせてくださるよう、何か合図をしていただきますのも、また、私のほうで庭の木戸の閂を外しますのも、四時前後が適当のように思うと申してあります。

そして、追伸の形で、身内の者たちの不信の念が強まっているように思われるので、月曜日の朝十時か十一時までは、例の場所に出来るかぎり頻繁に人を寄越すか、ご自分で足を運ばれるよう工夫していただきたい。私に決心を変えさせるようなことが何か起こるかもしれないのだから、と書き添えました。

あゝ、ハウさん、余儀なくここまで手回しや工夫をしなくてはならないのです。何と悲しい話なのでしょう。それなのに、もう手遅れなのです。でも、どうしてそう思うのでしょうね。「手遅れ」と申しましたでしょうか、私は。何という言葉でしょう。仮に懺悔の時が来るといたしまして、懸念されております災いを取り除きますのにはもう手遅れだと思うなんて　…　何という恐ろしい話でしょう。

土曜日　十時

ソームズさんがお見えになっています。新たに親戚となる人々と食事をする予定だというのですが、ベティの話では、あの人はもう皆のことをそんなふうに呼んでいるのです。

あの人はもう一度私の前に顔を出そうといたしました。でも、私は庭の散歩から戻るところで、あの人を避けるため、急いで自分の独房へと駆け上がりました。

庭におりました時には、手紙が持ち去られているかどうか確かめたくなりました。なくなっていなければ持ち帰るつもりだった、というわけでもございません。あのようにする以外、他に方法があったとは思えないからです。でも、ずいぶんと気紛れな話ですが、なくなっていることが分かりますと、(昨日の朝と同じように)持ち去られずにいてほしかった、という気持ちが強くなり始めたのです。その理由も、ただ、自分の力の及ばないものになってしまったということに他ならないと思います。

奇妙なほどの精励ぶりです、この方は。あの場所を住いとしているようなものだとおっしゃっていますが、そのとおりだと私も思います。

あの方のお手紙をご覧になるとお分かりでしょうが、一日に装う四種類の変装のことに触れておられます。でも、これまで私どもの小作人たちに気づかれることがなかったというのは、奇妙な話です。と申しますのも、どのような変装をなさっても、あの優雅なご容姿を隠せそうには思われないからです。ただ、次のことは申せます。隣接する土地はすべて我が家の所有になっておりますし、庭のあの場所の近くや、猟園と雑木林を通り抜ける歩行者用の一般道はございませんから、あれほど人目に付かず、また、人通りの少ない場所も他にはないということです。

それに、皆が私の庭の散歩や養鶏場通いにさほど目を光らせずにおりますのは、叔母の触れていた点ですが、自分たちがずいぶん骨を折ってラヴレースさんを悪者に仕立て上げたということで、それを当てにしてのことだと思います。皆の考えでは(まともな考え方ですが)、これで私も疑念に包まれるはずだ、というわけです。それから、私がこれまでは自分の評判を大切にしておりましたこと、それが皆の頼りとしているもう一つの点なのです。この二つの点がなければ、皆もきっとこのような扱いはしなかったことでしょう。そ

して、同時に、これまでにも何度かあったことですが、逃げ出す気なら逃げ出すことも出来るような、そんな機会を私に与えたままにしておくこともなかったはずです(ア)。実際の話、私に対してまともな扱いさえしてくれましたなら、皆がこの両方の動機を頼りにいたしましても、十分根拠のあることだったろうと思うのです。

それに、裏木戸のことは皆の念頭にはないのかもしれません。滅多に開かれたことはございませんし、その先は道もなく、とても寂しい場所になっているからです(イ)。そうでなかったなら、(その気になりましても)他に抜け出す方法はあり得ないのです。お宅の使用人があの寂しい薪小屋へ来る時に辿る、いたるところで水が湧き出しておりますジメジメとした小道は別ですが、あの小道へ入りますには、養鶏場との境になっております高い土手を降りなければいけないのです。と申しますのも、正面側から行くといたしますと、ご存じのとおり、家の前を、客間や使用人部屋の見えるところを進まなくてはいけませんからね。それから、広々とした前庭を通り抜けなければなりません。そして、鉄製の門を通るのですが、芝生の上を四分の一マイル歩く間、すっかり丸見えになってしまいます。楡や菩提樹の若木の植え込みも、まだ木陰を落とすとか、人目を遮るとかするほどにはなっていないのです。

蔦の東屋は裏木戸からさほど離れておりません。そして、ご存じのとおり、別の小道に建っておりますから、胸を締めつけられますようなこの計画には、庭の中のどの場所よりも好都合なのです。それに、ひんやりとした場所ですから、夏の数ヶ月を除きますと、私の他にはだれも滅多に訪れない所なのです。そんなこともありまして、皆がまだ優しくしてくれておりました頃には、私があそこに長く留まりますのに反対することも多かったのです。でも、今では、この身がどうなろうと構わないのです。それに、兄が昨日話していたことですが、「寒さは元気の支え」というわけです。

ここで、これまで書き記しましたものを隠すことにいたします。どうか、私のために祈っていただきたいと存じます。また、私の取りました行動について、賛成のお言葉なりご批判なりをいただきたく思います。と申しますのも、あの約束を取り消すといたしましても、まだ完全に手遅れとは思われないからです。

親愛の情と誠意とを込めまして、貴女の

Cl. ハーロー

どうして、ご使用人を手ぶらでなどお寄越しになるのでしょうね。

(ア) 家族の者たちが彼女の挙げている理由を当てにするというのは、疑いもなく有り得る話ではあろうが、主として頼りとしていたのは、ジョゼフ・リーマンの怠りない監視の目であり、この男がラヴレース氏の手先となっているとは夢にも思わなかったのである。

(イ) この場所のことは、彼女のもう一通の手紙で(これもまた採録されていないものである)次のように描かれている。「そこには崩れ落ちた建物の一部がございます。古いチャペルの残骸で、雑木林の中ほどに建っているのです。ここかしこには蔦やヤドリギに覆われた大きな柏の木が聳え立ち、まるでこの場所の恐ろしいまでの厳粛さに神聖な趣を添えようとしているかにも思われます。また、この一画は、数年前にある男の首吊り死体が見つかったこともありまして、子供の頃の私たちや女中たちからは、幽霊や悪鬼や妖怪の出る場所として(事実、フクロウやワタリガラス、それに他の縁起の悪い鳥たちが棲みついて

手紙　四十二

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

土曜日　午後

今日のお手紙に記されております十時という最後の時刻から推しまして、ロビンがお手紙を手に取りましたのは、貴女がお隠しになってから間もなくのことでしょう。ロビンは大急ぎで馬を飛ばし、私がちょうど食事を終えました時に届けてくれました。

使いの者を手ぶらのまま遣わしましたこと、お立場を考えますと、お叱りを受けて当然のことと存じます。でも、貴女がそのような状況におられること自体が（まことに重大な局面になっておりますが）、このようにいたしました理由の一部でございます。お送りするのに相応しい、どのようなことを筆にしたら良いのか、分からなかったのです。

ハーロー邸からの貴女の輸送手段の手配につきまして、それも、私が表に出ないようにするにはどうしたら良いのか、こっそり探っていたところです。実際にお役に立ちましても、表向きご迷惑をお掛けするのでは、半端なお世話しかしていないことになるとの思いからです。おまけに、母がひどく疑り深くなりまして、大層気を揉んでいることもあります。アントニー叔父様が毎日お見えになるものですから、ますますそうなるのですが、叔父様のお話ですと、間もなくすべてが決まるところまで来ているとのことで、貴女が皆さんのご意向に従う気持ちをなくしてしまうような、余計な口出しを母の娘がしないよう望んでいる、とおっしゃるのです。この件につきましては、ある方法で知ったのですが、その点に触れるわけにはまいりません。二人がそれを耳にしたりいたしますと、どちらのほうでも愉快には思わないことでしょう。それに、そのことを抜きにいたしましても、母と私はひっきりなしに口喧嘩をしておりましたからね。

貴女の乗り物を何とか都合しようといたしましたが、予想以上に困難でした（時間は限られておりますし、秘密も守らねばなりません。それに、この冒険に同行させていただくのを、貴女はあのように真剣に禁じておられましたからね）。ご希望に添い、母とのことは手加減をいたしましたが、でなければ、難なくやり遂げられたことでしょう。何かしら口実をこしらえ、私の家のチャリオットを使うことだって出来たでしょうし、そうするのが妥当だと考えましたなら、余分に二頭の馬をつけることも出来たのです。ロンドンに着きました時に送り返せば良いわけで、私たちの落ち着き先となります宿のことは、だれにも気づかれずに済むのです。

こうするのを許してくださっていたならと、神にも祈る気持ちです。実際、貴女が置かれている状況との兼ね合いからいたしましても、度を越して堅苦しい考え方をしていらっしゃるように思えるのです。今にも貴女のお家を吹き倒そうとしている嵐の中で、いつもどおりの穏やかさで愉快に過ごし、心乱されずにいられるとお考えなのでしょうか。

この災難が貴女ご自身の身から出たことならば、話は別でしょう。でも、罪はだれにあるのか、世間中の人がご存じなのですから、事情は違ってくるはずです。

いるのです）、大層怖がられていた所なのです。こういった考えは、紛れもなく、田舎暮しの寂しさや無知さに由来するのですが、幼い頃に吹き込まれますと、他人の同じように愚かな間違いは軽蔑出来るほどにしっかりと育ちました心にさえ、跡を残してしまいがちなものなのです」とである。

どうして私のことを幸せだなどとおっしゃることがお出来になるのでしょうね。私の母も、叔父様とか他のどなたにも負けないほど、私の一番大切なお友達への皆さんの不正な振舞いを精一杯煽り立てているのですよ。しかも、あのまともでない頭をしていらっしゃる愚か者の叔父様に唆されてのことなのですからね。叔父様のせいで「本当に困った人ですわ」、母らしくもない厳しい姿勢を守らされているのです。きっと、私への見せしめのつもりなのでしょうね。こんなことをされれば、憤慨するのも当然じゃないでしょうか。貴女のお供をしても、十分に申し開きの立つ理由になるのではないでしょうか。私たちの友情のことは周知の事実なのですもの。

正直に申しまして、繰り返しにはなりますが、ことの重大さを考えますと、貴女は堅苦しすぎるように思います。ご自分たちのあくどいやり口に貴女が応じられない原因の大半は私の忠告にあると、皆さんすでにそうお考えなのではないでしょうか。そう勘繰っておられるからこそ、私たちの文通を禁じられたのじゃないでしょうか。そして、貴女のことさえなければ、皆さんのお考えを気に留める理由など、私にはあるでしょうか。

それに、このような手段を取ることで、何か不面目なことを私は恐れなければいけないのでしょうか。何か不利益でもあるのでしょうか。そのことで、ヒックマンさんが私を撥ねつけるとでもお思いですか。撥ねつけるといたしまして、私が後悔するとでもお思いでしょうか。このような女性同士の友情の証を目の当たりにいたしまして、魂の備わった人間で、心打たれることのない者などどこにいるというのでしょう。

ただ、母を苦しめ、その心を乱すことにはなりますわね。確かに、それは問題です。でも、母が私を苦しめたり悩ませたりしておりますのに比べますと、まだおとなしいほうですわ。母ときたら、私の一番大切なお友達に意地悪をなさるために、毎日こちらへ足を運んでおられるくだらない人間の手先になっているのですもの。裏の目的でもあるのでしたら、二人の上に災いあれと呪ってやりますわ。私をお叱りになりたいのでしたら、お気の済むように　…　私は平気です。

宜しいですね、強調させていただきますが、このような手段に踏み切りますことが、貴女の友人の「品位を高めてくれる」ということです。そこで、やはり許して上げようとおっしゃってくださるのでしたら、ラヴレースの手からお役目を奪いとりまして、明晩か月曜日に、あの男と約束された時刻になります前に、チャリオットかシェイズで伺うことにいたしますわ。そして、私の希望どおりに逃げおおせましたなら、その時こそ、皆さんと折り合いを（それも、私たちの思うとおりの条件で）つけることにいたしましょう。母は喜んで自分の娘を再び受け入れることでしょう。その点は請け合います。ヒックマンなんて、私が戻りましたら、嬉し涙にむせぶことでしょうね。でなければ、後悔の涙に暮れさせてやりますわ。

でも、このような手段を提案したということで、貴女はそれこそ本気になって怒っていらっしゃいますし、どのような問題につきましても、ご自分の立場を守るお言葉はいつもたくさんお持ちですから、これ以上お勧めする元気はなくなってしまいます。ただ（一言付け加えさせていただきますが）、もっとお考えになった上で、また、事態を十分に勘案されました上で（それも、私と行かれるのが最善なのか、それとも、ラヴレースと行かれるのが最善なのか、といった点からお考えいただきまして）、もしも、私の評判につきましての堅苦しいご配慮は無しにしていただけるのでしたら、私からもう一度切り出すことが出

来ますよう、励ましのお言葉を賜りたいものと存じます。女性が女性と一緒に出掛けるのでしたら、それほど評判に傷の付くことはないでしょう。しかも、その目的は他でもありません。男の人たちを避けるためなのですからね。宜しいですね、どうかこの点をお考えいただきたいのです。私につきましてのご懸念を振り払うことがお出来でしたら、どうかお願いしておりますとおりになさってください。そういうことで、差し当たりこの件はお終いにいたしまして、お手紙の中のいくつかの部分に注意を向けることにいたします。

今は、お書きになっておられる事柄の具体的な点に触れようといたしますと、苛立たしいまでの無念さに煮えくり返るような思いをいたしますし、ついついそれが筆先にまで伝わってしまいます。でも、胸を締めつけられるような貴女のお話を読ませていただきましても、そのような気持ちにならずに済む時が訪れることを願っております。また、正直に申しまして、いやしくも助言などをいたしますのは、あるいは、貴女のような立場に置かれました場合、私ならどう振る舞うかについてお話しいたしますのは（私の申し出をやはりお断りになると仮定してのことです。また、助言なしに、貴女がどのような扱いをお受けになったか、というより、どんな目に遭わされたのかを知ってもおりますので）、私は怖いのです。何か災いを招いたりしてはいけないからです。そんなことになりましたら、絶対に自分を許すわけにはまいりませんもの。この点を考えますと、重大な局面に立たされながら唯一の方法をお断りになる貴女に、お便りを差し上げるのがますます難しくなってしまうわけです。でも、しばらくその件には触れないことにすると申し上げたばかりですわね。ただ、あと一言だけ付け加えさせていただきますが、お叱りになりたいのなら、叱っていただきましょう。私は一生母を恨むつもりでいるのです。貴女の身に何か災いが降り懸かるようでしたらね。本当にそのつもりですわ。そして、もしかいたしますと、貴女ご自身についてもです。もしも、私の申し出をお受けいただけないのでしたらね。

でも、貴女の現在の状況や見通しのことを考え、一つだけ忠告させていただきます。つまり、どうしてもラヴレースさんと行かれるというのでしたら、機会のあり次第、結婚なさるべきだということです。貴女がどこへ向かわれましても、だれの手助けなのか、そして、だれと一緒にお父様のお屋敷を捨てられたのか、だれもが知っていることなのですからね。どうして結婚なさらずにいられましょう。贈与財産の書類が作成されるとか、その種の事柄がお望みのとおりにまとまりますまで、あの人を遠ざけておくことも確かに出来ましょう。でも、そういった事柄にいたしましても、貴女の場合に限りましては、他の多くの人たちの場合に比べますと、さほど重要なことではないのです。第一の理由は、あの人につきましては、他にどのような欠点があるにいたしましても、心の狭い人間だと思う人はだれもいないということです。次に、貴女の地所の所有権につきましては、従兄弟のモーデンさんがお帰りになるとすぐに、貴女に譲り渡されるに違いないからですが、モーデンさんは、貴女の管財人として、譲渡の履行、それも、適正な条件で履行されますのを確認なさるはずなのです。三番目には、資産に関しまして、あの人の側に不足な点は一切ないということです。四番目には、あちらの家族の人たちはどなたも貴女を高く買っておられ、貴女が親戚になられることをひたすら望んでおられるということです。そして、五番目の理由といたしましては、あの人が何の躊躇もなく貴女を無条件で迎えようとしておられるという点です。ご親戚の方たちに対しまして、あの人がいつもどんなに挑戦的な態度を取り続けているのか、それはご承知のとおりです［私といたしましては、そのような

落ち度は許す気持ちでおりますし、むしろ、高潔な心から出たことなのではないかとも思います」。あの人といたしましては、おそらく、ご家族の皆さんから恩を着せられるくらいでしたら、無一文の貴女と一緒になるほうを選ぶのではないでしょうか。皆さんにはあの人を好きになる理由が見つからないのと同じように、あの人にも、皆さんに好意を寄せるいわれなど少しもないのですからね。お聞き及びのことと思いますが、あちらのご親戚の方たちでさえも、あの人に誇りを捨てさせ、少しでも皆さんからのご厚意を受けてくれるよう仕向けることは出来なかったという話ですからね。

これらすべての理由からいたしまして、前もっての書類の作成に固執なさる必要はないものと私は考えるのです。ですから、確実に言えることといたしましては、本当にあの人と一緒に行かれるのでしたら（その場合、貴女を独りにしても大丈夫という判断は、あの人に任せることになるのです。その点はお分かりでしょうね）、結婚式を先送りなさってはいけない、というのが私の断固とした意見ということになります。

この点を精一杯真剣にお考えいただきたいのです。お父様のお屋敷を一歩出られたが最後、細々とした礼儀作法などは締め出されてしまうということです。男に目が眩み、慎みさえ忘れて、父親の家の窓から抜け出したその足で、とでも申しましょうか、すぐさま男のベッドに飛び込んでしまうような、あの許し難い娘たちのことを、貴女がどれほど厳しく非難しておられたか、勿論、私は承知いたしておりますし、それが当然のこととも存じます。でも、繰り返し私の考えを申し述べますが、ラヴレースの人柄を考えますに、世間の人たちの目に映る貴女の評判ということからいたしましても、一旦あの男の手中に落ちました暁には、この点では一刻の猶予も許されないように思うのです。

貴女のことですもの、この上さらに強く訴える必要などはございませんわね。

母を弁護なさるためにおっしゃっておられますのは（貴女に熱い友情を抱く者といたしましては、耐え難いことではございますが）、手を染めるのも放っておくのも相手の気持ち一つという事柄の場合には、それをしてくれないからといって、決してその相手を責めてはいけない、ということでしたわね。この問題は、友達同士の場合ですと、厳密に検討してみる余地がありそうに思います。求められております事柄が求められた人のほうにより大きな差し障りをもたらすとか、同じ程度にせよ、問題を招くということでしたら、そして、昔の諺にもありますが、「友の足の棘を抜き、自らの足に刺す」(三三)といった場合でしたら、いくらか認めるべき点もございましょう。いいえ、はっきり申しまして、自分が免れたいと願っておりますのと同じもの、あるいは、同程度の不都合を相手に強いることになるのを知りながら、友人に恩恵を求めたりいたしますのは、我が儘な話だと申せましょう。そのような場合ですと、要求する人は自ら我が儘な手本を示すわけですから、お友達も断る術を学ぶことでしょうし、そんな名ばかりの友情は軽蔑する気持ちにもなるはずですが、そのほうがはるかに無理のない話です。でも、自分のほうはわずかな不都合を蒙るだけで、ずっと大きな不都合をお友達から除いて上げられるという場合に、それくらいの好意を拒んだりするような人間は、友人の名に相応しくないことになりましょう。私でしたら、心の襞の一番外側のところにだって、そのような人間を入らせて上げる気持ちにはなれません。

私と同じように、貴女も友情のことをこんなふうに考えておられるのは十分承知いたしております。そのようなお引立てに与りましたことがございましたわね。お陰で大変困っ

ておりましたのを救っていただきました。覚えていらっしゃるでしょうね。それにいたしましても、ご自分には一つとして言い訳をお許しにならないような場合にも、貴女は他の人たちのためにはいつも言い訳を見つけ出していらっしゃいましたわね。

正直に申しましょう。もしも、友人の冷淡さとか拒絶の姿勢を庇おうとするこういったお言葉が、どなたか貴女以外の人の口から出たのでしたら、それも、ご本人にとりましては途方もなく重要で、その人が保護の手を期待しておられると思われる相手にとりましてはさして問題とならないような場合ですし、貴女がよくおっしゃるように、どのような出来事であれ、その原因まで溯ってみなければ気の済まない私といたしましては、すぐにもこんなふうに勘繰りたくなることでしょう。つまり、胸に秘めた、人には明かしていない好意が存在していて、秤を釣り合わせているものですから、というよりも、秤を傾けているのでしょうが、そのために、どちらを選ぶのかという問題も（どれほど重要だといたしましても）、庇おうとしている人のお心の中では、進んでお認めになるのよりもずっと軽いものになっているのではないのでしょうか、ということです。

私の言わんとしております点はお分かりいただけるでしょうね。でも、お分かりにならないのでしたら、それもまた私には好都合かもしれません。と申しますのも、このような考えを思い浮かべたり匂わせたりいたしますだけでも、ひどく叱られてしまいそうな気がしているからです。おそらく貴女でしたら、前にも一度別の件でそんなことがございましたが、「友情や同胞愛に欠かせないあの慈しみの心が犠牲になるというのに、利口ぶるのを慎むことが出来ないのだ」と、お咎めになりそうなことですもの。

過ちを認めたところで、直そうとしないのでは意味がない、と貴女はおっしゃるでしょうね。本当にそのとおりですわ。でも、ご存じのとおり、日頃から生意気に振る舞ってまいりました娘ですし、いつだって精々お目こぼしをいただかねばならなかった私です。それに、忘れるはずもございませんが、大好きなクラリッサさんからはいつも大目に見ていただいてきたのです。今回も許していただけるものと信じております。だって、どれほど貴女をお慕い申し上げているのか、ご存じのはずですもの。そのようなことが可能ならの話ですが、自分のこと以上に貴女を大切に思っているのです。これは信じていただきたいと思います。そして、信じていただけますなら、貴女が今置かれていらっしゃる辛く厳しい状況のことで、私がどんなに心を痛めているのかもご判断いただけることでしょう。そんなわけですから、他の人のためでしたら別ですのに、ご自分のこととなるとお見せになる、そして、貴女をご存じの人たちだれもがいつも感心しておりました、その悟ったような諦めの良さも、私といたしましては黙って見過ごすわけにはまいらないのです。

貴女のお心同様に、これまで一点の曇りすらありませんでした、その立派なご声望を汚すことなく、この厳しく辛い状況から抜け出すことがお出来になりますよう、絶えず祈らせていただきます。

その祈りを何度も何度も繰り返し唱えながら、筆を置くことにいたします。

変わることなき愛を込めまして、貴女の

アナ・ハウ

大急ぎでこれを書き上げました。大至急ロビンに届けさせます。油断のならない状況の中で、私の認めましたことにつきまして、とても重要な二つの点を、出来るだけ時間

を掛けてお考えいただくためです。手短に繰り返させていただきますと、
「男の人とよりは、つまり、ラヴレースとよりは、だれか女の人、このアナ・ハウと駆け落ちをなさるお気持ちはないのでしょうか」ということ。
そして、もしもそのおつもりがないのでしたら、
「出来るだけ早くあの男と結婚なさるべきではないでしょうか」という点です。

手紙　四十三

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

［前掲の手紙が届く前に書かれたもの］

土曜日　午後

私の手紙へのものですが、忘我の状態と呼んでも構わないようなお返事をすでに受け取っております。

項目のことごとくにつきまして、私の意向に従いたいとのお言葉で、こちらからの申し出はすべて承諾しておられます。とりわけ、人目に付かない貸間の件に関しましては、お節介で軽はずみな連中の非難を避けるのには恰好の方法だとお考えです。ただ、あの方の叔母様方のどちらかにお世話をいただくことにすれば（私がこのような仕打ちを受けておりますだけに）、だれの目から見ましても、評判を傷付けることにはならないはずだ、とおっしゃっています。でも、私が要求しておりますこととか、決心しておりますことすべては、現在ばかりでなく、今後の私の声望にとりましても適切なことに違いない、とのお言葉で、私の声望を気遣うという点では、私自身を別にいたしますと、他のだれよりもそうするに相応しい人間だと認めてもらえるように振る舞いたい、とおっしゃっています。ご親戚の皆さんは、私が虐待され苦しんでおりますこの機会に、精一杯心尽くしの世話をすることで私の心を掴み、愛情を得たいものと熱望しておられるそうでして、その点は請け合うと自信満々です。どのような形にせよ、私の当面の自由を回復し、また、将来の幸せに貢献することが出来るなら、皆さんにとっては喜ばしい話だ、とおっしゃるのです。

今日の午後にはM卿、そして、ベティ夫人とセアラ夫人に手紙をお出しになるとのことです。ご自分に落ち度さえなければ、世界中でも一番の幸せ者になれる日が目の前に来ているが、というのも、それを可能にしてくれるこの世でただ一人の女性が、他の男のものとなる危険を間もなく脱してくれるからであり、また、どのような条件を指示して来るにせよ、応じるのが自らの責務だと思えないようなものは、おそらくないはずだからだ、といったことをお書きになるのだそうです。

有り得ないことと確信しておられるそうですが、身内の者たちが私への接し方を変えないかぎり、私が心変わりをする心配はまったくなくなったと、今では（最後の手紙で、私の決意のほどは念を押してありますから）安心しておられるとのことです(ア)。そして、あ

(ア) 狡猾にも、買収した手先を使って家族の者たちを張り合わせ、我知らずこの男の目論見を推し進める役割を全員に担わせていたわけであり、氏がかくも確信に満ちた言辞を弄するのもまた当然のことと言えよう。すでに紹介したこの男の手紙数通からも、その点は明白である。

の方のためには優しく惜しみない援助を申し出てくださるご親戚の皆様も、今こそあの方の明るい将来を喜び、誇りに思ってくれるだろう、と言っておられます。

こんな巧妙な手で、私に約束を守らせようとなさっているのです。

財産の件につきましては、その点での心配はしてほしくないとのお言葉です。ご自分の地所だけでも私たち二人の生活には十分で、その年収は、名目上ではなく正味で二千ポンドに上り、それよりも三分の一は高く評価されるようないくつかの地所にも匹敵するというのです。地所が抵当に入ったことはなく、帳簿上も証文によるものも、借財は一切ないとのことですが、これは品行の正しさというよりも、プライドのお陰だと言っておられます。さらに、M卿のほうでも、結婚なさる際には年に一千ポンドの贈与を決めておられるとのことですが、あの方が主張しておられるところでは、M卿がそのようなお気持ちになられたのも、寛大さよりは正義感に動かされてのことなのだそうです。この金額というのは、かつて卿が入手された地所の価値と同等程度としか見なければいけないのだが、その地所というのは、むしろあの方（ラヴレースさん）のお母様に帰属すべきものなのだそうです。さらにM卿は、ハートフォードシャーのご領地かランカシャーのご領地か、どちらかを譲りたいと言っておられるのですが、あの方ご自身が選ぶか、あるいは、私が相手ならなおさらのことだが、あの方の奥様になる人に選んでもらいたいとの仰せなのだそうです。私がそのように望むのなら、あの方との細かい取決めごとに入る前に、こういったことすべてを整え、贈与財産の正式文書を作成させることも可能であり、それは私に任せて構わない、とのことです。

また、衣類につきましても心配無用とのことで、差し当たり必要なものすべては、ご親戚のご婦人たちが喜んで用意してくださるし、その他私が入用なものにつきましては、ご自身で整えるつもりだが、それこそ（その栄誉を与えてくれるのなら）この上ない誇りであり、喜びでもあると言っておられます。

身内の者たちとの和解実現につながることで、あの方に出来ることがあれば何でも、好きなように指図をしてもらって構わない、とのお言葉です。私が望みを掛けております点であるのはご存じなのです。

あの方からお願いしてあったことですが、セントオールバンズでシャーロット・モンタギュー嬢が私を訪ねてくださる件は、時間的な余裕がなく、実践出来そうにないというお話です。あの方が承知しておられるところでは、お嬢様はひどい風邪で喉を痛め、お部屋に籠もりきりになっておられるらしいから、とのことです。ただ、お嬢様も妹様も、外出が出来るようになればすぐにでも、私の下宿を訪ね、セアラ夫人とベティ夫人のところへ連れて行ってくださるか、あるいは、ご夫人たちを私のところへ連れてきてくださるということで、そのどちらにするかは私の気持ち次第だとのことです。また、私のほうに異存がなければ、ロンドンまでお供してくださるし、こちらの都合でいつまで滞在することになるとしても、その間は一緒に残ってくださるとのことです。

M卿のほうでも、私の都合の好い時に、そして、私の望む形で（つまり、公式にするか非公式にするかということですが）訪問したいとの仰せです。また、あの方ご自身といたしましては、私がご家族の方たちの保護を受けるか、あるいは、望みどおりの隠れ家に落ち着くか、いずれにせよ、無事を見届けた上で私のところを離れ、私本人からの許しがあるのでなければ、面会を求めたりはしないつもりだとおっしゃっています。

従姉妹のシャーロット様がご病気ということを耳にされました時には、近くの村かその辺り、あるいは、セントオールバンズで私を迎えてくださるよう、従姉妹のパティ様にお願いしようとお考えになったのだそうです。でも、パティ様は意気地がなくて臆病な方だから、かえって私たちを困らせることになっていただろう、とおっしゃるのです。

お分かりですね。冒険をするのには、勇気と気力が必要ということのようですわ。確かに、そのとおりです。一体、私は何ということをしようとしているのでしょうね。

はっきりしておりますのは、あの方でさえ、私にはだれか女の人の同伴が必要とお考えだということです。少なくとも、その女性といたしまして、ご家族のご婦人方の中からお一人を申し出ようとなさったのですもの。あゝ、何ということでしょう。一体、私は何ということをしようとしているのでしょうね。

❁　❁

すっかり深みにはまってしまったわけですが、結局は、やはり撤回することになるのかもしれません。そして、撤回したりいたしますと、生命に関わるような争いが起こりそうにも思われます。そうなりますと、一体どのようなことになるというのでしょう。もしもこのソームズさんから逃れる何らかの方法があるのでしたら、ラヴレースさんと手を切ることによって、私にとりましてははるかに好ましい独身生活への道も開かれるはずなのです。そうなれば、男性は無視して行こうと思うのです。男性が私たちにもたらすものといえば、災難や心痛の種以外にはございませんからね。それに、一度関わり合いになりますと、この傷付きやすい足で茨を、いよいよ鋭さを増します茨の道を踏みしめながら、辛い旅路の終わりまで一緒に歩むことを余儀なくされてしまうのです。

どうしたら良いものか、私には分からないのです。考えれば考えるほど、ますます困惑してしまいますし、約束の時が近づくにつれ、迷いは深まって行くばかりです。

でも、庭に降りて少し歩いてみようと思います。そして、これと、あの方からのお手紙のうち最後の二通を除いたすべてを隠してまいります。最後の二通につきましては、もう一通認める機会が見つかりましたなら、その手紙に同封させていただきます。

とりあえませず、何卒　…　でも、どんなお祈りをお願い出来るというのでしょう。ですから、さようならとだけ、ただ、さようならとだけ言わせていただきます。

手紙　四十四

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

［手紙四十二への返事として］

四月九日　日曜日　朝

昨日のお手紙を拝見いたしまして、偏りのない愛情と呼ぶべきことは承知いたしておりますが、これまでにお寄せいただきましたものよりは厳しいお気持ちを窺うことが出来ました。でも、だからといって、私が気分を害しているなどとお考えになりませぬようお願いいたしますね、愛するお友達。そのようなことで気分を害するようでは、それこそ、王

様につきものの厄介な立場にこの身を置くことになってしまうでしょう。つまり、自分の落ち度を知らせていただき、それを正す機会を一切失うわけですし、誠意と熱情に溢れる友人関係を無益なものにする方向へと進むことになるのです。

それに、貴女のお胸の中では、清らかな友情の炎が何と鮮やかに、何と気高く燃え盛っていることでしょう。不幸に苦しむ者が自分の気持ちを捨て去ることに努め、選ぶ権利をお持ちの方たちに選択を任せようといたしましたのを理由に、ご自身がその者に寄せてくださる熱意と比較なさり、自分の立場を守るのに恬淡としているなどと、すぐにも言ってくださいますのは、友情あればこその話ですからね。このような温かいお気持ちを寄せてくださる貴女を、どうして責められるでしょう。敬服するのが当然ではないでしょうか。

とは申しながら、仮に根拠があるといたしますと、到底申し開きが出来なくなってしまいますような（貴女の友情に由来するものとは申せ）ご推測ですし、そのように勘繰る何らかのいわれがあるなどとお考えになられても困りますから、やはり、自己弁護のためにも、言明しておかねばならないと思います。私以外のどなたに対しましても、貴女が動機として考えたがっておられます、あの「胸に秘めた好意」とか「人には明かしていない好意」といったものを、私が少しでも抱いているようでしたら、私には自分の心が分かっていないのだ、ということでございます。勿論、「どちらを選ぶのかという重大な問題が私の心の中では軽いものになっている」わけでもございません。ただ、次の点だけを考えましても、お母様のことはやはりお許ししなければいけないと思うのです。つまり、お嬢様の場合と同じように、お母様のご厚意を厚かましくも当てにし、友情を求めるようなわけにはまいらないということです。お母様のことは、一番大切なお友達のお母様として尊敬申し上げるのが筋なのです。そして、この尊敬の念は、貴女の心と私の心とを一つに結び付けております神聖な絆にとりまして不可欠な事柄の一つ、あの心地好い打ち解けた関係とは滅多に両立し得ないものなのです。

ですから、私のアナ・ハウにはお願いして構わないことでも、それをお母様に期待したりしてはいけないということです。お母様ほどの経験をお持ちの方が、ご自身の判断を曲げなかったからといって、非難をお受けになるとしたら、ずいぶん奇妙な話ではないでしょうか。判断を曲げたりなされば、その結果は、お母様も心配しておられますとおり、これまで仲良くしてくださいました家族と反目することになるのですからね。それも、両親に背いております子供のためにです。おまけに、お母様にはお嬢様がいらっしゃるわけですが、一言述べさせていただきますと、そのお嬢様の利発さや素敵な元気の良さが、お母様といたしましては、必要以上に心配になってしまわれるのです。本当に母親らしいお気遣いから、お嬢様の分別に期待をお寄せになる以上に、若さのことに気を揉んでおられるからなのです。勿論、若さに似合わない分別を備えておられますことは、お母様も世間の人たちもご存じなのですけれどね。

ここで一言付け加えさせていただきますが、優しいお気持ちから、また、不幸な友にお寄せになる熱情の結果といたしまして、この点につきまして私のためにどのようなことを力説されましても、あるいは、今置かれておりますような異常な状況の中で、私への保護の手を拒まれる人にどれほど厳しい言葉をお向けになるといたしましても、寛大なお友達への過度の期待を抑制出来ますことが、私にとりましては多少なりとも喜びになるということです。そのような状況から、私がどのような羽目に陥りましても、それは問題ではご

ざいません。と申しますのも、法外な望みを焚きつけたとか、あるいは、貴女のお使いになった言い回しに倣いますなら、「自分の足から棘を抜き、友の足に刺す」ことを望んだとか言われますような、そんな非難のきっかけを、仮にも自分勝手な厚かましさから作ることにでもなりましたら、それこそ、途方もなく心苦しい思いをすることになってしまうからなのです。それに、苦悩のもたらす試練こそ最高の学び舎であるということを、立派なノートン夫人から教わっておりますのに、試練の場で肝に命じることを余儀なくされました教えから、辛抱よりも堪え性のなさのほうを学び取るようですと、また、他の人々の値打ちを測りますのに、私に親切にしてくださる度合いに応じて決めるようでは、その人たちのご都合とか心の安らぎとかを犠牲にしての話でもありますし、自分自身、とても満ち足りた気持ちにはなれないことでしょう。これでは、私がいつも正しくて、私の望みどおりに振る舞ってくださらない人たちはすべて、いつも間違いばかりを犯していると想定することにならないでしょうか。要するに、ソームズさんが私に泣きついてこられた時と同じことでして、「自分のために」とすべきところを、「神様のためにも、何卒」としていることになるのではないでしょうか。

貴女と私と二人して、このような偏った心を他の人たちの中から探し出し、非難の言葉を加えようと、どれほど頻繁に骨折って来たことでしょうか。

でも、貴女は、口にして構わないように思われます点をお話しになることでいつも満足なさるわけではなく、どのような事柄であれ、その底までも見通す眼力のほどをお示しになろうとして、特定の折に口述するとか記述することの出来ます事柄、あるいは、考え得る事柄までも含めまして、そのすべてを口にし、あるいは、筆になさるのを楽しんでおられますのは、私も承知いたしております。このようなことをなさる理由の一部は、おそらく、出来事を前もって見通す力の持ち主だと思われたいという[御免なさいね]、そんなお気持ちから来ていることなのだろうと思います。でも、洪水を起こし、多少の迷惑をもたらすことが時々あるからといって、私たちを元気づけてくれます機知の流れを干上がらせるとか、枯渇させようと望むような人はいるでしょうか。言い換えますと、心を苦しめることが一度ありましても、百遍も楽しい思いをさせてくれるのですから、そのような活気溢れる精神を大目に見ない人などいるのだろうか、ということです。しかも、苦しみの結果として、楽しみを与えてもらえるのですもの。

でも、この辺で、お手紙にございました二つの問題へ移ることにいたします。あのことがひどく気に掛かっているのです。こんなおっしゃり方でしたね。

「男の人とよりは、つまり、ラヴレースとよりは、だれか女の人と、私のアナ・ハウと駆け落ちをする[何という恐ろしい言葉でしょう]気持ちはないのか」

そして、そのつもりがないのなら

「出来るだけ早くあの方と結婚すべきではないのか」とです。

お申し出をお断りする私の理由、それから、避け難い残酷な事情から手掛けてみる気になりました企てのことでも、貴女には同じ口実がないわけですから、私の手助けをなさっ

ていることを気づかれないようにと懸命になっております理由につきましても、貴女はよくご存じのはずではありませんか。こんな具合ですと、私たちの文通のことをお母様が心配なさるのも尤も至極なことでしょうね。お母様と貴女をどのような不都合に引き込むことになるのか、分からないわけですからね。薄情な身内の元から去ろうという考えが、この私にさえ到底許されないことだといたしますと、あれだけ優しいお母様を捨てようとなさる貴女に、どのような言い分が見つかるというのでしょうか。お母様が疑っておられるのは、燃えるような友情のせいで、貴女が〈取るに足らない〉軽率な行動を取られることなのでしょうか。そして、そのような疑いに貴女は腹を立てておられるのでしょうか。そして、その怒りにまかせて、貴女は世の女性が犯し得る一番大きな過ちに、自ら飛び込もうとしていらっしゃるのでしょうか。

お母様が再び貴女を喜んで受け入れてくださるのは間違いないと確信しておられるからといって、そのような親不孝な手段を取ろうとお考えになりますのは、貴女の高潔なお心にとりまして「いかがでしょうか、ひとつお尋ねいたします」、果たして相応しいことなのでしょうか。

自らこの手段に踏み切るといたしましても、誓って申しますが、私でしたら、貴女にご同伴いただきますよりは、むしろ、ありとあらゆる危険を冒すでしょうね。自分の過ちを二倍にも三倍にもして世間の目に晒したいと、この私がそのような願いを持っているとでもお考えでしょうか。残酷な仕打ちを受けておりますのに（そのすべても知らずに）、私のことを許そうとはしてくださらない、あの世間の目にです。

でも、一番大切で、一番親切なお友達のことですから、申し上げましょう。私たちどちらも、このような手段に踏み切ったりはしないということです。質問をなさる時のご様子から十分に納得出来たのですが、そのようなことを試みてはならないというのが、貴女のお考えですね。私にそのように受け止めさせるおつもりなのは疑いのないところです。ご丁重にして力強い説得のお言葉、感謝申し上げます。

最後のお手紙をいただきます前から決心が揺らぎ始めておりましたことは、（このような見方で事態を捉えますと）私にとりましてもいくらかの慰めになっております。今こそ申し上げますが、お手紙を拝見いたしまして、家を出るのは止そうと、断固として心を固めたのです。少なくとも、明日は止めることにいたします。

「どちらを選ぶかの問題も（貴女のお言葉を使わせていただきますが）、私の心の中ではひどく軽いものとなっている」、要するに、私の気持ちこそが問題なのだと、貴女でさえそのようにお考えになるのでしたら、世間の人たちはもっと遠慮会釈なく取り沙汰することでしょう。だといたしますと、「父の屋敷を一歩出たが最後、細々とした礼儀作法一切は用済みになってしまう」と貴女が説明され、また、私を独りにしても安心だという時期の判断はラヴレースさんに任せなければならないこと、言い換えますと、私から離れるか離れないかはあの方のお気持ち次第であるという点を勘わせておられますのに、自らの手で問題に決着をつけることがまだ可能だという人間で、そのようなご意見を平気で聞いていられる者など、果たしているのでしょうか。そのような不都合に甘んじようと決心する人などいるのでしょうか。

ソームズさんから逃れる手立てとして、この屋敷から抜け出しますことだけを考えておりました頃には、また、監禁されましたことで私の評判はすでに地に落ちておりますこと

や、ラヴレースさんと結婚するにせよ、完全に手を切るにせよ、まだ自分に選ぶ権利があるだろうと考えておりました頃には、乱暴なやり方とは申せ、これだけの仕打ちを受けている以上、そのような行動に踏み切ったといたしましても、世間に対してはともかく、自分自身に対しまして、某かの申し開きは立つはずと思っていたのです。それに、我が身を顧みて恥じるところがないというのは、世間の皆さんのご意見にもまして、好ましいことですからね。ところが、自分の部屋を抜け出したその足で、とでも申しましょうか、親に背いた軽率さを立証することになります祭壇の前にすぐにも姿を見せる軽はずみな娘たちのことを、いつもどおりに、これ以上ないほど厳しく咎めた後のことなのです。また、期日のことや、あの方を受け入れるのか、それとも、拒絶するのかを、最終的には私に決めさせてもらうことにつきまして、それから、安全な場所に落ち着きましたらすぐに、私を独りにしていただくことにつきまして（これは、貴女がおっしゃるとおり、あの方が決めることになるのです）、ラヴレースさんとすでに話し合いが済んでいるのです。それに、あの方のほうからも、こういった条件に従う旨を知らせて来た後のことなのです。従いまして、その気がありましても、私は条件を取り消すわけにも、急いで結婚するわけにも行かない状態なのです。ですから、お分かりいただけるはずですが、あの方と一緒に家を出たりはせぬよう決心いたします以外に、私に残された道はないということなのです。

それにいたしましても、このように約束を取り下げました場合、どうしたらあの方を宥めることが出来るのでしょうか。

どうしたら、ですって … 勿論、女性としての特権を行使することでしょう。いくらあの方でも、式を挙げるまでは機嫌を悪くする権利はないはずです。それに、適当と考えました時には身を引くことが出来ますよう、その権限は留保してあったのではないでしょうか。お母様と貴女との場合につきましてお尋ねいたしましたように、選択の自由の行使により、断られた者には嫌悪感を抱く権利が生じる、というのでは、一体何のための選択の自由なのでしょうか。

昔の掟では、子供の結んだ約束を解いたり追認したりする権利を持っていることになっております人たちも、私の約束につきましては、たとえそれがどれほど神聖なものだったといたしましても、決して承認したりはしないはずです(ア)。でも、それは約束というよりも予約みたいなものだったのです。また、仮にそれが約束で、取り消す自由を留保していなかったといたしますと、再考とか熟考とかの自由も奪われてしまうのでしょうか。もし

(ア) 民数記の第三十章を参照のこと。そこでは、どのような人物の誓約は履行しなければならず、だれの誓約は履行を免除されるのかが明記されている。夫あるいは寡婦の誓約は避け得られないものと断言されているが、それらの者は独立しており、つき従うべき他の権威を家の中に持たないからなのである。しかし、独身の女および妻の誓約は、その父か夫が聞き知って、直ちに禁止する場合には、効力を持たないものとされている。

特に若い女性すべてに周知されねばならない重要事であろう。下心ある求婚者たちは、誓いの言葉を操って女心を掴もうとし、やがては、良心と名誉心に訴え、約束の履行を迫ることがあまりにも多いからである。

原文を引用しておくのも的はずれではあるまい。

三節　女性がまだ若くて、父の家にいるとき、主に誓願を立てるか、物断ちの誓いをするならば、

もそういうことでしたら、とても与えられるに相応しいものではございません。強要されますのはあまりにも卑劣な話です。そして、守るのにはいよいよ相応しくないものと言えましょう。いずれは自分の妻と呼びたいと思っております女性が、熟考の後に軽率なことと悟り、軽はずみな約束を守ることを拒んだからといって、その女性に腹を立てずにはいられないような男性など、この世にいるものでしょうか。

従いまして、何もかも考えました上で、今度の水曜日の試練にだけは立ち向かってみることにしたのです。あるいは、父自らが目的を貫きまして、贈与財産の書類を私に読ませようとか、読み聞かせようといたしまして、その後で署名を迫るような場合ですと、もしかいたしますと、火曜日の夜の試練と申し上げたほうが良いのかもしれませんが、そのようなことになりましたら、それこそ最大の試練に違いないと存じます。

一晩かけまして署名を余儀なくされるようですと、その場合には（主のご加護のあらんことを）、当然の成り行きとして、恐れておりますことすべてが水曜日に行われてしまうのです。祈りが聞き届けられ、目論見を捨ててくれるように皆を説得することが出来ますなら［もしかいたしますと、私は卒倒してしまうかもしれません。こんなにも長い間父に会うのを禁じられておりましたから、父の姿を一目見ただけで、ひどく動揺すると思うのです。そう、もしも祈りが聞き届けられ、皆を説得出来ますなら］、あるいは、ほんの一週間だけで構いませんし、それが駄目でしたら、せめて二日か三日だけでも良いのですが、日延べをしてくれるよう説得することが出来ますなら、それだけでも、水曜日は試練の日としては耐え易いものになることでしょう。考える時間、問い直してみる時間はきっと与えてくれるはずです。これは約束をするのとは違うのです。家出を試みるような真似をしたことは私は一度もありませんから、皆のほうにも私を疑うような根拠はないのです。ですから、最後の手段とは考えておりますが、家出のチャンスも見つかるかもしれません。ノートン夫人に付き添っていただこうと思います。夫人は、そのために叱責をお受けになるかもしれませんが、追い詰められた姿をご覧になれば、私のために嘆願してくださると思うのです。こんな場合ですから、ハーヴィー叔母様が夫人と手を組んでくださることも考えられます。もしかいたしますと、母も同調してくれるかもしれません。一人ずつ、それぞれの前に跪くつもりです。味方になっていただくのです。私と顔を合わせるのを怖がっていた人もいるのですが、私に心を動かされ、好意を感じるようになっては困るからなのです。そうだといたしますと、その人たちの心を動かすことが出来るかもしれないという望みを抱きますのも、無理のない話ではないでしょうか。私を家から追い出して悲惨な運命を嘗めさせろという、これまで出されておりました兄の提案が再び繰り返され、幅をき

四節　父がその誓願や物断ちの誓いを聞いても、彼女に何も言わなければ、彼女の誓願も物断ちの誓いもすべて有効となる。

五節　しかし、父がそれを聞いた日に、それを禁じる場合、彼女の誓願も物断ちの誓いもすべて無効となる。父が彼女に禁じたのであるから、主は彼女を赦されるであろう。

妻の場合にも上述のとおりである。六、七、八節その他を参照。そして、すべては以下のとおり、厳かに結ばれている。

十六節　以上が、夫と妻の間、父と父の家にいる若い娘の間に関して、主がモーセに命じられた掟である(三四)。

かせることになるかもしれません。そうなりましても、身内の者たちの不興を招くという点では、今よりも立場が悪化することにはならないでしょう。他の人に保護を求めましても私の落ち度とならないという点では、むしろ良くなるくらいです。その場合でも、保護を求めますのは、ラヴレースさんとかだれか他の人にではなく、従兄弟のモーデンでなければいけないとは思います。

要するに、この方法に心を固めますと、もう一方の方法のことを思い巡らしております時よりも、気持ちに迷いがないのです。これだけ強く、また、無意識に心が傾くのですから、この気持ちこそが良心なのだと考えて構わないのでしょう。それに、賢者が見事に忠告をしております。「何よりも心に浮かんだ考えを大切にせよ。これ以上に頼りになるものはないのだから。高い所から見張る七人の監視役にまさって、人の魂は、時として、その人自身に語りかける」(ア)とです。

考えの行き届かない、独り善がりな論法になってしまいました。お許しください。この辺りで筆を置かせていただき、早速、ラヴレースさんへの撤回の手紙に取り掛かることにいたします。あの方がどのように受け止められようと構わない気持ちです。あの方にいたしますと、忍耐力を試す機会がまた与えられたというだけのことでしょうが、私にとりましては、計り知れないほど重要なことなのです。それに、あの方は、私が考えを変えましても、おとなしく従うと約束しておられたのではなかったでしょうか。

手紙　四十五

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

日曜日　朝（四月九日）

今日はだれも礼拝式へは出掛けない模様です。世俗の欲に深く根差した計画ですし、無慈悲な心から進めている者もいるのですから、祝福などは何一つ期待出来ないということなのでしょう。

私が何かを目論んでいると、皆は疑っております。ベティが私の衣類を調べていたのです。ラヴレースさんへの手紙（私、書いてしまったのです）を隠しに行って戻ってまいりますと、あの娘が衣類を覗きこんでいるところでした。と申しますのも、私は鍵を鍵穴に差し込んだまま出掛けたのです。あの娘は顔を赤くしておりました。見つけられて、面喰ったのです。私のほうでは、どんな扱いにもそのうち慣れなくてはね、とだけ言っておきました。指示を受けてのことなのでしたら、あの娘にはそれだけで十分でしょう。

狼狽したあの娘は、私の散歩を禁じようという動議が出されたことを認め、自分のしようとしている報告で私が不利になることはないだろう、などと言っておりました。あの娘が申しますには、身内の一人が私の肩を持ち、これ以上私を厳しく抑えつける必要はないと主張したのだそうです。私が叔父の屋敷に連れて行かれるようなことがあれば、力ずくで救い出してみせるというラヴレースさんの脅迫からして、私のほうには、進んであの方のところへ出掛ける気持ちのないことが確認出来るし、私にその気があったのなら、これ

(ア) シラ書三十七章、十三節および十四節。

までにもその種の準備をしていただろうし、おそらくそのことは気づかれていたことだろう。それゆえ、最終的に私が意向に従うつもりでいるのは疑いのないところと、そのようにも推論出来る、というのです。そして、生意気なあの娘は、「もしもそのおつもりがないのでしたら、お嬢様、お嬢様のお振舞いは奇妙に思われますわね」と付け加えておりましたが、あの娘としては、何とか次のような説明はつけているとのことでした。つまり、私は度を越してしまったため、体裁良く収まりをつける方法が分からずにいるのだ、というわけです。また、水曜日には、全員がお揃いのところで、ソームズさんにこの手を委ねることになるものと考えているというのです。そして、厚かましいことには、先週の日曜にも博識なブランド師が聖書を引用しておられたけれど、「喜びが天にある」(三五)ということだ、などと言っておりました。

ラヴレースさんへの手紙の要旨は次のとおりです。

私自身にとってはこの上なく重大な理由により（お知りになれば、納得していただけるはずですが）、差し当たっては、父の屋敷を抜け出す計画は中止するということ。切羽詰まった場合以外には正当化しかねるような手段に踏み切るまでもなく、事態を丸く収める望みがあるということ。そして、ソームズさんと結婚するくらいなら死を選ぶという、私の約束を当てにしていただいて構わない、といったことです。

そんなわけで、あの方の詠嘆まじりのお返事に接しました時のショックに耐えられますよう、心の準備をしているところです。でも、どのようなお返事であれ、今度の火曜日か水曜日にありそうな心配ごとに比べますと、心を乱すほどのものではないと思います。と申しますのも、頭の中はその心配ごとですっかり占められておりまして、心の底まで滅入っているものですからね。

日曜日、午後四時

まだ手紙は持ち去られておりません。もしも、手紙を取りに使いの人をお寄越しになるとか、ご自分でいらっしゃるとかすることもないまま、私が明日あの方と落ち合わない場合、私の身に何かあったのではと疑って、こちらにお見えになるようなことになりましたなら、私は一体どうしたら良いのでしょうか。何で男の人と関わりなどを持ってしまったのでしょう。この方と知り合いますまでは、あんなにも幸せな私でしたのに　…

蔦の東屋で午餐を取りました。そうしたいとお願いいたしましたところ、その一言で許してくれたのです。別に他意のないことを示そうと、食事が終わるとすぐに、ベティと一緒に家に戻りました。晴れ間の続きそうな空模様でしたし、こうするのを許してもらえるようお願いしておくのも悪くはないと思ったのです。火曜日か水曜日にはどのようなことになるか、だれにだって分からないでしょう。

日曜日　夕方七時

手紙は今もあのままです。多分、明日の準備でお忙しいのでしょう。でも、召使の人たちもいるのです。私のことはまったく安心で、約束をしたからには、その瞬間までこの上気を揉む必要はない、とでもお考えなのでしょうか。私がどれほど攻め立てられているのかご存じなのです。何が起こるか、お分かりではないのです。体調を崩すことだってあるでしょうし、今まで以上に厳格に監視されるとか、拘束が厳しくなることも考えられまし

よう。文通のことが見つかるかもしれません。完全に目的を挫かれるような処置を強いられることもあるでしょう。新たな疑念がこの胸に浮かぶかもしれません。何かもっと都合の好い、思いも寄らないことを、こちらのほうから提案することだってあるでしょう。あの方は一体どういうおつもりなのでしょう。でも、手紙はあのままにしておこうと思います。とにかく、約束の時刻になります前に手にしてくだされば、予定が変わったことを直接お話しする手間が省かれますし、そのことで言い争うような苦労もせずに済むと思うのです。手紙を取りに人を寄越してくださりさえすれば、日付からして、早目に手になさることも出来たことは分かっていただけるはずです。また、急な知らせのため、何か不都合を蒙られるといたしましても、精々我慢をしていただくということでしょうね。

日曜日　夜九時

火曜日の午餐に来ていただくよう、どうやら、ノートン夫人のところへ使いを出すことが決まった模様です。夫人は丸々一週間、私のお客様になってくださる予定です。

夫人は私が応じるよう、まずは説得に努められるのです。そして、例の暴挙が強行されました場合には、私を慰め、運命に従うことを勧めるというわけです。ベティが横柄な口調で言っていたのですが、皆のほうでは、私がわめき出したり溜め息に沈んだり、諫めたり叫んだり、止まるところがないことは予想しているけれど、皆心の備えはしておくつもりだ、というのです。とにかく、済んでしまえばそれまでであり、どうにもならないことが分かれば、私も落ち着いて静かになるだろう、と話していたそうです。

四月十日　月曜日　午前七時

何ということでしょう。手紙がまだあるのです。置いた時のままです。

私のことをそこまで間違いないと、あの方はお考えなのでしょうか。もしかいたしますと、私に計画を変える勇気などはないと想像しておられるのかもしれません。あの方のことを知らずにいられたら良かったのにと、本当にそう思います。この無分別な手段につきましても、今では、仮に私が踏み切りました場合、他のだれもが受け止めますような、そんな見方で私は考えているのです。それにいたしましても、あの方が今日約束の時刻にやって来られたら、私は一体どうしたら良いのでしょう。手紙を受け取っておられないのなら、お会いしなければなりません。でなければ、私の身に何かあったとお考えになり、間違いなくこの家をお訪ねになるでしょう。そして、侮辱をお受けになるのも、同じく間違いのないところです。その場合、結果はどうなるのでしょう。それに、私のほうでは、もしも心変わりをいたしました時には、機会のあり次第お会いして、その理由をお知らせすると約束したも同然なのです。それをお聞きになって、あの方が機嫌を損ねられるのは疑うまでもありません。でも、お会いするにいたしましても、自分自身に満足出来ないまま私が家を出るのよりは、あの方が私に不満を抱きながら立ち去ってくださるほうが、まだ良いようにも思うのです。

ただ、時間はございませんが、これからでも、手紙を取りに人をお寄越しになるかもしれません。身動きの取れないことが何か、あの方に降り懸かったとも考えられます。事情が分かりました時には、あの方にとって言い訳になるようなことかもしれません。

これまで、面会したいとのご要望だけにいたしましても、お断わりいたしましたのは一

度や二度のことでございませんが、その後のことでもありますし、何か起こりはしなかったのか、そして、さらに重要なこの一件で、私の決心は堅いのかどうか、少なくともその点について知りたいという好奇心を、あの方がお持ちでないなどということは有り得ない話です。ただ、二度目の手紙では、軽率にも決意のほどを保証してしまいましたから、その点も今は疑わしく思い始めているところなのです。

九時

庭からの帰り、従姉妹のドリー・ハーヴィーとすれちがったのですが、その際、同封いたしました手紙をあの娘がそっと私の手に握らせてくれました。

大好きなお嬢様へ

何もかも知っているような顔をしておりますある者から聞いたことですが、水曜日の朝に、お嬢様はソームズさんと結婚なさらなければいけないのだそうです。でも、多分、その女は私を苦しめるためにだけ、こんな話をしているのだと思います。あの図々しいベティ・バーンズなのですから。結婚許可証が届いたと、あの女は言っています。そして、こんなことまで教えてくれたのですが（黙っていなさいと言っていましたが、私がお話しいたしますのは分かっているのです）、ブランド様がお式を進められるとのことです。リーウェン師は、私がお聞きいたしましたところでは、お嬢様のご同意が得られないならと、お断りになっておられるのだそうです。お嬢様に対する皆さんの扱い方に師が賛成なさっておられないのは、皆さんもお聞き及びなのです。ジョン伯父様と皆さんのお力で、ブランド様はお金持ちにしていただくのだとお聞きしております。

このようなことのすべてをどう考えたら良いのか、私よりもお嬢様のほうがよくお分かりでしょう。ベティはいろいろなことを、お嬢様にお教えしてはいけないような口振りで話してくれるのですが、私からお知らせするのを当てにしているみたいにも、時々は思われるのです(ア)。と申しますのも、アラベラ様とあの女は、しきりにヒソヒソ話をしているからです。そして、私は気づいていたのですが、ヒソヒソ話が終わりますと、ベティが私のところへやってきて、秘密だよと言いながら何か話してくれるのです。あの女は、それに、世間中の人もですが、私がどれほどお嬢様のことをお慕い申し上げているのかを知っているのです。皆さんにもそうしていただきたいと思います。皆さんが何とおっしゃろうとも、これまでも、そして今も、一族全員の誇りとなっておられます若いご婦人をお慕い申し上げますことは、私にとりまして名誉なことなのです。

でも、ベティよりももっと偉い人からお聞きしたので確かなことですが（ただ、この手紙は焼き捨ててくださいますようお願いしなければなりません）、もう一度お手紙やペンやインクを捜すことになっているのです。お嬢様がお手紙を書いておられますのは、皆さんご存じなのです。皆さんがおっしゃいますには、ラヴレース様の召使の一人から何かをお

(ア) ラヴレース氏の手口に注目してこられた読者諸兄は、ハーヴィー嬢の漏らしたこの暗示から容易に推察されることと思うが、氏は二重スパイの手先に指示を与え、男が恋人ベティを唆し、ハーヴィー嬢を不安に陥れるよう仕向けていたのである。ハーヴィー嬢が（上述のとおり）敬愛する従姉妹にご注進に及ぶのを期待してのことであり、勿論それは、クラリッサに氏との約束を守らせるためなのである。

知りになったということで、それを役立てようとしておられるのです。それがどのようなことなのか、私にははっきりいたしません。ご婦人から贔屓にされておりますのを自慢の種にして、秘密を漏らしてしまう男性なんて、ひどく心が卑しくて、邪悪な人に違いありませんわね。でも、ラヴレース様は立派な紳士ですから、そのように恩知らずなことはなさらないだろうと思います。

それから、あの嘘つきのベティの入れ知恵だと思うのですが、皆さんはお嬢様が何かお身体に悪いものをお飲みになるおつもりだと考えておられます。ですから、小びんとか粉薬みたいなものもお捜しになるはずです。

皆さんの疑いを強めるようなものが何も見つからない場合には、お嬢様が皆さんの前にお見えになる時、ここしばらくの間なさっていたのよりも優しい態度で、お父様から接していただけることになっております。

それにいたしましても、なんてお可哀相なお嬢様なのでしょう。ご病気の場合でもお元気でも、どうしても結婚なさらなければいけないのです。ご主人になる方は、お嬢様がお心を開かれるまでは、毎晩ご自宅へ独りでお帰りになるとのことです。ですから、ご病気になられたといたしましても、逃れるための言い訳には少しもならないのです。

お嬢様が立派な奥様になられることは、皆さん確信しておられます。私ならそうはならないと思います。旦那様を好きでないのでしたらね。それから、ソームズさんは、高価な贈物でお嬢様の愛情を買い取るのだと、いつも皆さんに話しておられます。おべっか使いです、あの人は。あの人がベティ・バーンズと一緒になって、毎日あの女を叩いてくれたら良いのにと思います。

これだけお話しいたしましたから、ご忠告の必要もないでしょうが、見られたくないとお思いの品は一つ残らず、しっかりとお護りいただきたいものと存じます。

重ねてお願いいたしますが、何卒、この手紙は焼き捨てていただきとうございます。それから、どうかお身体に障るものは何もお口になさいませぬようお願いいたします。

心からお慕い申し上げております従姉妹より

D. H.

従姉妹からの手紙を一読いたしました時には、もう一度前の計画を進める気持ちになりかけました。とりわけ、取り消しの手紙がまだ持ち去られていないということがございますし、私がお断りしているのをお知りになれば、あの方とは言い争いの一つもしなくてはならないのですから、そのことを考えますと、胸が痛くなっていたのです。あの方が早まったことを決心なさらないためにも、ほんの一刻でもお会いしなければいけないと思うのですが、私が顔を見せることを期待なさって構わない理由があの方にはおありなのですから、なおさらです。でも、ここで、「父の屋敷を一歩出たが最後、細々とした礼儀作法一切は用済みになってしまう」という貴女のお言葉が、さらに力強く働き掛けます、本分と評判への慮りと相俟って、軽率な行動に走るのは慎むよう、もう一度私に決心させることになったわけです。それに、一ヶ月、あるいは、二週間、あるいは、一週間であっても、猶予はまかりならぬというのでしたら、とても辛いことになるでしょう（折好く気を失うとか、望みどおりに発作が起こったといたしましても、私の助けには少しもならないとのことですが）。それでも、少しは日延べをお願い出来そうな望みも増しております。従姉妹が

漏らしました言葉からそう思うのです。リーウェン尊師は、皆が私の同意を得ないかぎりは、ということで、皆の目論見に手をお貸しになるのを断わっておられますし、私が虐待を受けているように考えてもおられるというのです。このようないきさつを知っていることには触れないまでも、良心の咎めという点を申し立てることが出来ますし、あの立派な牧師様のお気持ちを聞かせていただくようお願いすることも出来ると思うのです。私なりに頑張ろうと思いますが、その点が強く求められますと、きっと母が後押しをしてくれるはずですし、ハーヴィー叔母様とノートン夫人は母を支持するだろうと思うのです。そうなれば、延期になるに違いありません。家を出るのはその後でも良いのです。

でも、どうしても皆が強行しようとするのでしたら …… 一切猶予を認めようとはしないのでしたら …… だれ一人頑として心を動かさないというのでしたら …… 手を押さえられたまま、式の言葉を読み上げられることに決まったのでしたら …… それなら、こちらといたしましても …… あゝ、それならどうするというのでしょう。私に出来ますことといえば、ただ …… でも、何が出来るというのでしょう。そう、このソームズには一切誓いは立てないことにいたします。そして、口をきくことの出来ます間は、「ノー」としか言わないつもりです。こんな無茶苦茶なことを結婚だと言って憚らない人などいるものでしょうか。父親と母親が自分たちの子供にこんな無理強いが行われますのを見ていられるなんて、まったくの話、考えられないことです。でも、私の両親が手を引いてしまい、兄と姉に任せるようなことになれば、情け容赦などはないはずです。

悲しいことですが、次のような策に頼らねばならなくなってしまいました。

隠してあります品物のうち、皆に見つけてもらおうと思っておりますものについてですが、どこを捜したら見つかるのか、ペンの羽先をのぞかせまして、手掛かりを与えておいたのです。

私が書いたものですが、短い随想を二つ三つ、目に付き易いようにしておきました。

それから、貴女宛に書き出しました手紙の十数行ほどにつきましても、そうしておきました。身内の者たちが折れてくれるかもしれないという希望を（状況は私に不利なものです、と書いてはありますが）述べてあるところです。皆は、アントニー叔父様を通してお母様からですが、何らかの方法で私が時々手紙をお届けしておりますことを知っているのです。書き掛けのこの手紙では、一方の男性の求婚から解放してもらえましたならすぐにも、一族の者たちにこれほど嫌悪されております男性とは手を切るつもりでいる旨の固い決意を、改めて言明してあります。

随想の傍らには、ドレイトン夫人宛の手紙の写しを置いておきました(ア)。私の場合にぴったりの論拠がいろいろと示されておりますから、もしかいたしますと（このように、偶然に目に触れるわけですし）、皆が私のことを好意的に考えるきっかけになるかもしれないと思ったのです。

ペンとインクにつきましては、勿論、予備のものをとってあります。それに、蔦の東屋にも一、二組隠してあるのですが、水曜日が、試練の日が近づきますにつれ、私の心をますます乱しております不安を出来ることでしたら和らげますためにも、それらで気晴らしをしてみようと思っております。

（ア）五十七頁から次頁にかけてを参照のこと。

手紙　四十六

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

鳶の東屋にて　十一時

手紙はまだあの方の手に渡っておりません。予定しております面談のための時間を作ろうといたしまして、お節介な女看守をどうやって遠ざけようかと、この場でいろいろ思案し、良い考えを思いつきまして、実行に移すばかりになっておりましたところ、叔母がやってまいりまして、ずっと都合の好い手を用意してくれたのです。一人きりでの食事のために小さなテーブルが整えられておりますのを目に止めますと、叔母は次のように話し掛けてきたのです。皆が私と食事を共にすることが出来ずにいるのも、今日が最後になると嬉しいのだが、とです。

お分かりいただけると思いますが、ラヴレースさんとの面会のことを思い巡らしておりまして、見つかるのではという不安もございますし、従姉妹のドリーの手紙の中身のこともございますから、私はひどく動揺し、それが顔に出てしまっていたのです。叔母がそれに気づきまして、「あら、溜め息なんかついて、どうしてなのかしら。どうしてこんなところを波打たせているのかしらね」と、私のうなじを軽く叩きながら言うのです。「本当ですよ、あなた。元々はとても素直な子だったのに、こんなにも言うことを聞かなくなるようなことがあるなんて、だれが想像したでしょうね」とです。

私が答えられずにおりますと、叔母は言葉を続け、「どうやら、とても喜んではもらえないお役目になりそうね。世界一向こう見ずで傲慢な人の口から出たもので、昨日私たちの耳に入りましたいくつかの事柄からして、お父様も私たち皆も確信を持ったのですが、あなたは今でもお屋敷から手紙を送り出す手立てを見つけ出しているようですね。ラヴレースさんはお屋敷の出来事を何もかもご存じなのです。それも、何があってもすぐにですからね。あの人のせいで大きな災いが起こるのではないかと心配しているところです。それを防ぐのは、だれにも負けないほど、あなたにも関わりのあることでしょう。お母様のほうではね、あなた自身のことにも少し懸念を持っておられるのですよ。いわれのないことであってほしいと願っておられますけれど、ただ、もう一度お母様があなたの控えの間やキャビネット、それから、引き出しをお調べになる機会を与えてくれなければ（あなたが庭かこの東屋にいる間にですが）安心出来ないし、ご自分はそのおつもりでも、心穏やかにしているわけには行かないのだとおっしゃるのです。快く私に鍵を渡してくれれば、それだけ受け止め方も良くなるはずです。異存はないでしょうね、あなた。ちょうど良い機会だということもあって、ここでお食事をしたいというあなたの願いも一層快く受け入れられたわけですよ」と言っておりました。

従姉妹のドリーのお陰でこの家探しに十分に備えることが出来ましたのは、本当に幸運だったと思います。それでも、少しためらっているような振りをしてみせましたし、このような扱いについて相当不平を漏らしました上で、すべての鍵を渡しました。そればかりか、叔母の目の前でわざわざポケットをひっくり返して見せ、書き物を隠していないのを確かめてもらおうと、コルセットに手を入れるよう促すようなことまでいたしました。

これには叔母もすっかり上機嫌になり、私が快く従ったことは、兄と姉がどのようなことを言おうとも、このとおりに伝えておくつもりだと言っておりました。叔母が申します

には、とりわけ母が、母はそうなるものと信じて疑わないのだそうですが、私に向けられております疑いのいくつかを晴らす機会を与えられ、大喜びのはずだ、というのです。

それから叔母は、ラヴレースさんの秘密のすべてについて、また、あの方が無頓着にあれこれ話してしまわれることから、私の隠しごとのいくつかについてさえもなのだそうですが、それらを嗅ぎ出す方策がいろいろ講じられたことを仄めかしておりました。何か特定の場合などには、召使たちにご自分の計画を得意げにお話しになるのがあの方の習慣だから、と叔母は言っておりました。また、あの方は策士と思われているけれど、兄も深慮遠謀にかけては負けてはいないので、得手としておられるそちらの手腕を競われても、兄が手強すぎる相手であることはいずれ分かるはずだ、とも付け加えておりました。

私は次のように申しておきました。そのように謎めいた言い方をされても、真意を測りかねる。叔母が仄めかしている狡猾さというものは、どちらの側にしても、称賛よりは恥辱を誘うものだ。策を弄するようなことは心から軽蔑している私だが、怒りに流された場合には、やむなく策略を用いたかもしれない。その怒りにしても、失礼ながら、それを促した振舞いの数々に比べるなら、憤慨するのがはるかに正当なことと思う。叔母の言葉から推して明白なのは、皆が今私に向けている疑いというのが、一部には、狡智に長けていることでは兄のほうが上だという想定から来ており、また一部には、私の受けている仕打ちが、当然のこととして、このように疑う根拠を生み出すだろうとの自覚に由来しているということだ。兄の機知の標的にされるのは、まことにもって不幸な話であり、兄も小賢しい頭脳よりは情け深い心を披露するよう心掛ければ、もっと評判を上げることになったことだろう。ただ、兄のことは理解しているつもりだが、私と同じ程度に、兄も自分自身を知ってほしい。そうなれば、才能を自惚れることも少なくなるだろう。そして、その才能にしても、仇をなす力のほうがはるかに勝っているのでなければ、意識されることも少なくなるはずと私は考えている、といったことをです。

腹立たしくてしかたがなかったのです。こんなふうに非難せずにはいられなかったのです。自分の雇ったスパイを利用され、あの方の思いのままに操られている、ということも十分に考えられるのですから、兄はこれくらいのことを言われて当然なのです。でも、このように卑劣な手口はどちらの側にも到底認められないことですから、私への仕打ちが穏便なもので済むのでしたら、是非ともあの男、あのジョゼフ・リーマンの悪辣さについて調査をしてもらわねばならないところでしょう。

叔母のほうでは、私が兄のことをこんなにも軽蔑しているのを知って残念に思う、と言っておりました。兄は学問もあれば、資質にも恵まれた若者だ、というのです。

「学問とは申しましても、女性相手に自慢する程度のものですわ。でも、自分自身や他の人のために学識を役立てるだけの資質はございませんね」　私は申しました。

確かに、兄にはもっと気立ての好さがほしい、と叔母は言っておりました。ただ、私がだれか他の人のことをあまりに高く買っているため、妹に相応しく兄を評価することが出来なくなっているのではないかと心配だ、というのです。そして、あの二人の間には、才能に関して一種の対抗意識があり、そのために互いに憎み合うことになるのだ、と説明しておりました。

「対抗意識ですって、叔母様」　私は叫んでしまいました。そして、「もしそういうことでしたら、いいえ、そうであろうとなかろうと、紳士というものは、そして、十分な教育

を受けた男性はどうあるのが相応しいのか、どう振る舞ったら良いのか、お二人ももっとよく知っていただきたいと思いますわ。どちらの方も分かっているようには見えませんもの。お分かりになれば、恥じ入るべきことを誇るような真似は、お二人ともなさらないはずですわ」と申しました。

でも、この話題はこれくらいにいたしまして、私は次のように話しました。部屋に上がって片付けるのを許してもらえないのだから、皆が私の書いたものを少しばかりとペンを一、二本、それに、インクを少々見つけ出すこともあり得ない話とは言わないが［遺憾ながらの作為、と申しますよりも、そうせざるを得ないことが遺憾なのです］、仮にそのようなことになっても、私としては甘んじていなければなるまい。どれだけ時間を掛けるつもりか知らないが、決して邪魔をしに行くようなことはせず、私の監獄へ戻るよう指示のあるまで、庭か庭の近くに、この東屋かオニヒバの東屋に、あるいは、私の養鶏場の辺りか大滝の近辺にいることを約束する、といったことです。また、私の部屋と控えの間の隅々まで知り尽くしている、あのでしゃばりなベティ・バーンズが駆り出されるのは疑いないから、情け容赦もない家探しが始まるのは召使たちの食事が終わってからのことになるのだろう、と私は申しましたが、これも同じような策略だったのです。

叔母といたしましては、私の不利に働くような手掛かりが何一つ見つからないよう願っているとのことでした。また、私を安心させるつもりでしょうが、家探しをしようという動機は、とりわけ母の場合はそうだが、私を責める理由というよりは、むしろ疑いを晴らすための理由を見つけたいがためのことであり、明晩か水曜日の朝、私に会おうという時に、父には平静な態度を取ってもらいたいからなのだ、と説明しておりました。「優しい態度で、というべきでしょうね」と、叔母は言い直しましたが、新たに怒りを誘うようなことが出てこなければ、父のほうではそのつもりでいるのだから、とのことでした。

「あゝ、叔母様」　私は思わず声を漏らしてしまいました。

「どういうことなのでしょうか、その〈あゝ、叔母様〉というのは。意味ありげに首まで振って」

「そのようなことはないように願っておりますが、叔母様、お父様が優しさを取り戻してくださることに望みを託すよりも、お怒りが続くものと考えるほうが当たっているようにも思えるのです」

「分かっていないのですよ、あなたは。事情が変わるかもしれないでしょう。あなたが心配しているほど事態は悪くないのかも　…　」

「あゝ、大好きな叔母様、私の慰めとなりますことが、叔母様には何かおありなのでしょうか」

「そうですね、あなたのほうがこれまでよりも従順になってくれるということも考えられるでしょう」

「どうして希望を膨らませるようなことをおっしゃったのですか、叔母様。心から尊敬申し上げておりますのに、私の大好きなハーヴィー叔母様が姪に残酷なことをなさるなんて、そんな考えを私に持たせないでいただきたいのです」

「お部屋の調べが済んで、あなたに有利な結果が出れば、もっとお話しして上げられると思いますよ（でも、内緒ですよ。絶対に秘密にしてくださいね）。何か、見つかるとあなたの不利に働くようなものでも、二階にはあるわけですか」　叔母が尋ねました。

「私の書きましたものをいくつか見つけるでしょうね。でも、成り行きに任せることにいたしますわ。兄と姉がすぐさま善意に満ちた解釈を加えてくれることでしょう。もうどうなっても構わないのです。何を見つけ出されようと、平気ですわ」

「あなたの思慮深さに疑いを持たれるようなものは何一つ見つからないことを願っておりますよ。本当に心から願っているのですよ。そうなれば …… でも、口をすべらせてしまうかもしれませんね」

そう言うと、叔母は去って行きましたが、私の当惑は増すばかりでした。

でも、例の面談のことしか今は頭にございません。終わってくれることを願うばかりです。争うために顔を合わせるわけですもの。でも、あの方がどのような手を使われるとしても、穏やかに耐え忍んでくださるようでなければ、ほんの一時でも一緒にいるつもりはございません。

ひどく曲がっている行があるのにお気づきではありませんか。他のものより乱れている文字があるのにお気づきではないでしょうか。話題にしておりますことよりも、この面談のことが頭を占めていた時のものです。

いろいろ申し上げましたが、やはりあの方に会うべきでしょうか。会わねばならないのでしょうか。お会いするのが当然とばかり思い込んでおりました。ご助言をいただく時間があればと思います。ただ、忌憚なくすっかりお話しになるのを貴女はとても嫌がっておられますから …… でも、それは、貴女も認めておられるとおり、私の立場が難しいせいですわね。

申し遅れましたが、叔母とこのような話し合いをしております間に、次の点を叔母にお願いしてあったのです。目前に迫っております試練に際しましては、私の味方になり、一言口添えをしてもらいたいということ、そして、他には何一つ与えてもらえないのであれば、せめて考えるための時間が得られるよう、一肌脱いでほしいということをです。

叔母が申しますには、式さえ終われば、同居を始める前に、自分の運命に甘んじるための時間は好きなだけ持てるはずだ［忌々しい話ですが、従姉妹のドリーの手紙に仄めかされておりました点が証明されたわけです］、とのことでした。

こんなことを言われ、私はどうにも我慢が出来なくなってしまいました。

今度は自分のほうでも頼みたいことがあるということで、叔母は次のように話しておりました。快く子の務めに従い、絶対服従の気持ちをもって皆と顔を合わせる決心をしてもらいたい。皆を幸せにするのは、私の気持ち一つで出来ることなのだ。父や母、おじ様たち、そして、兄や姉も皆が大喜びで私を抱き締め、代わる代わるその愛情豊かな胸に私を引き寄せ、再び手にした幸せを互いに祝い合っている姿を目にすることが出来たら、どれほど嬉しいことだろう。叔母自身としては、喜びのあまり、しばらくは身動き一つ出来ないだろうし、言葉も出ないことだろう。また、娘のドリーにしても …… 可哀相にあの娘は、感謝の気持ちに促された、私への愛着の念から、だれかさんの評価を下げてしまったのだけれど …… 再び皆から愛していただくことになるだろう、というのです。

私の今度の試練が、これまでに経験いたしましたものの中でも一番心痛むものになるだろうということに、いかがでしょう、疑問の余地はございますでしょうか。

叔母はこういったことすべてをまざまざと描いて見せましたし、私も従姉妹のドリーの話には特に胸を打たれましたので、つい先程は堪え性を無くしておりましたのに、すっか

り心を動かされてしまいました。でも、私にも応じることが可能な条件でそのようなことが実現されるのでしたら、自分にとってはどれほど望ましいことか、その旨をただ溜め息と涙とで伝えることしか私には出来ませんでした。

ベティ・バーンズが私の食事を持って来たところです。

❁　❁

あの娘は戻って行きました。面会の時刻が迫っております。あの方がお見えにならなければ嬉しいのですが　…　でも、お会いすべきでしょうか。お会いしないほうが良いのでしょうか。お返事が間に合うはずもございませんのに、尋ねてばかりおりますね。

エサとなりますようなことをそれとなく叔母の耳に入れておいたからでしょうね。ベティは、自分の食事が済んだらお仕事をいただくことになっていると、こんな言い方でしたが、得意げに話しておりました。

あの娘は、隠しごとを暴かれるのはお気の毒だが、すべては私のためになることなのだから、と言っておりました。水曜の夜が来る前に、何もかもいっぺんに許してもらうことだって私の気持ち次第だろう、というのです。それから、あの厚かましい娘は、笑いを堪えるためでしょうか、エプロンの端を口に当てながら、戸口のところまで行きました。私が厳しい口調で言い付けますと、食事を片付けに戻ってまいりまして、謝っておりましたが、でも、ただ、蔦の東屋で食事をしたいなどと私が言い出して、かえって付け込まれてしまったことを思うと、どうしても堪え切れなかったのだと、図々しいことにまた笑い声を立てるのです。不意打ちの形で私の秘密の品々を洗いざらい調べるためには、これが恰好の機会を用意することになったのだから、というのです。私がここで食事をすることに兄があんなにもあっさりと同意をした時には、あの娘も、何かありそうだと思ったというのです。若様はだれにとっても手強すぎる。頭の回転が早いことでは、あのラヴレース様でさえ若様の敵ではない、などと言っておりました。

ラヴレースさんがご自分の召使に自慢げな態度をなさることにつきましては、叔母が触れておりました。多分、それだけ心が卑しいということになるのでしょう。でも、兄の場合はいつも、屋敷の召使たちを相手に、資質に恵まれ学問もある人間だと思わせるのが自慢の種なのです。奢り高ぶった心と卑しい心というのは、しばしば考えることですが、機知と狂気について詩人(三六)が語っているのと同じくらい近い関係にあり、紙一重の間柄のように思われます。

でも、こんな見当はずれな話でお耳を煩わすことはございませんわね（しかも、私自身が運命の岐路に立たされておりますのにね）。ただ、差し迫っております災い、あの面談のことを、出来ることでしたら忘れてしまいたいのです。その時が近づくにつれて不安は募りますし、心配事ばかりに心を向けておりますと、あの方がお見えになった時に、お会い出来る状態ではないということもあるからです。そんなことになりますと、決心を変えたことをお咎めになる尤もらしい理由が出来るわけですから、どうしようもないほどにあの方のほうが私よりも有利になってしまうのです。

咎め立てをする人というのは、貴女もご存じのとおり、ある意味では優位に立っているわけです。ところが、咎めを受けている人のほうでは、理由があって咎められております

場合は、身に覚えのある様子と同様、打ち萎れた姿を晒さなければいけないのです。
この卑劣漢は、可能な場合には、手前定規を使われるばかりか、私のことまでも裁こうとなさると思うのです。でも、後のほうは絶対に許さないつもりです。
多分、私たちは皆バラバラになってしまうことでしょうね。でも、そんなことは構わない気持ちです。父とおじたちに対しまして、これだけ頑張り続けてまいりました私が持ち堪えられないようですと、本当に辛いことになりますわね。
お待ちください。あの方が庭木戸のところに見えているようです。

❁　❁

間違いでした。怖がっていると、別の物音までその音に聞こえてしまうものですね。愚かなものです。こんなにもうろたえるなんて　…

❁　❁

急いでこれを隠しにまいります。その後、これを最後にいたしますが、あの方がもう私の手紙を受け取っておられることを願いつつ、いつもの場所へ行くつもりです。受け取っておられましたら、お会いいたしません。受け取っておられない場合には、持ち帰りまして、あの方に文面をお示しするつもりです。そうすれば、いわば糸口を開くことになりましょうし、もって回った言い方をしたり、理由を挙げたりいたします手間が省けることにもなりましょう。それに、私に必要なことと申しますと、文面に記してあります気持ちをしっかり守ることだけなのですから。面談は出来るかぎり早目に切り上げねばと思っております。仮にもだれかに見られたりいたしますと、今度の水曜日に目論まれております災難のための新たな、そして、有力な口実を与えてしまうことになるでしょう。
もしかいたしますと、しばらくの間、改めて手紙を書くことは出来なくなるかもしれません。多分、あのソームズの惨めな持ち物になってしまうまでは駄目でしょう。でも、意識のありますかぎりは、絶対にそんなことにはならないつもりでおります。
お宅の召使の人を寄越されましても、水曜日の朝までにこちらからの連絡が何一つ見つかりません場合には、私が手紙を書くことも、お手紙を受け取ることも出来ない状態なのだと結論なさって結構です。
その場合には、どうか憐れみをお寄せくださり、祈っていただきとうございます。そして、温かいお心の片隅にでも私の居場所を残しておいていただきたいのです。それだけが私の生涯の誇りですし、唯一この身に残されました慰めなのですからね。

貴女の
CL. ハーロー

手紙　四十七

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

［火曜日　午前一時過ぎ、セントオールバンズにて］

あゝ、私の最愛のお友達へ

前回お知らせいたしましたとおり、あのように決心をいたしました後で、今さら何を書くというのでしょう。何が書けるというのでしょうか、この私には。たとえ文面でとは申せ、一体いかなる意識を持ちまして、お傍に近づかせていただけるというのでしょう。間もなくお耳になさることになるのでしょうが（噂が流れておりますのを、まだお聞き及びではないのでしたらね）、貴女のクラリッサ・ハーローは、男の人と駆け落ちをしてしまったのです。

詳しいことをいろいろとお知らせしたく、寸暇を惜しんでおります。すっかり書き終えますまでは、（用意が整い次第始めることにいたしまして）毎日二十四時間のすべてをこれに当てるつもりです。邪魔ばかりしておりますこの男が容赦してくれます時間のことごとくは、という意味ですが、愚かにも私は、自分の時間の大半をこの男のために取られてしまいますような真似をしてしまったのです。休息などというものは、もう私の手の届かないものになってしまいました。望みもいたしませんし、また、休みましたところで、心の痛手を癒すことにもなりません。従いまして、報告が終わりますまでの間、邪魔をされないかぎりは、すべての時間を貴女のために使うつもりでおります。

ただ、このようなことをしてしまったのです。手紙は受け取っていただけるのでしょうか。私の手紙をお受け取りになるのは、許していただけることなのでしょうか。

あゝ、私の大好きなお友達　…　ただ、最善は尽くす所存です。事態がそれほど悪くはないことを願っております。でも、あの人と会うなんて、軽はずみで申し開きも出来ないことをしてしまったのは確かだと思います。どんなに優しくされましても、いくら誓ってもらいましても、その点での内心の咎めを鎮めるわけにはまいりません。

これを持参いたします者が貴女のところへまいりますのは、布地の入っております小さな包みをお渡しいただくためのことです。もっと大きな、楽しい望みを抱きながらお送りいたしました、あの包みをです。

私の手紙類はお渡しにならないでください。布地だけにしていただきます。ただ、今も私を愛していてくださると、そして、すべてをご覧になるまでは批判は差し控えてくださると、ほんの一行でも添えていただけますなら幸いです。こんな早くにお届けしようと思いましたのは、もしも私宛のものを何か例の所へお届けくださったのでしたら、それを持ち帰らせていただくとか、あるいは、予定されていたものがございましたら、引き止めていただくことも出来るだろうと考えたからです。

さようなら、大好きなお友達　…　今後とも愛してくださいますよう、切にお願い申し上げる次第です。それにいたしましても、あゝ、お母様は何とおっしゃるでしょうね。母は何と言うでしょう。身内の他の者たちは　…　大好きなノートン夫人は　…　兄と姉のほうは、それこそ得意満面といったところでしょうね。

ご連絡の方法や宛先につきまして、今のところお知らせするわけにまいりません。疲労困憊の有り様なのですが、ここは朝早くに立ち去ることになっているからです。何一つ他のことをする元気はございませんが、日頃から習慣としてまいりましたので、筆を手にすることは出来ます。これだけが慰みや喜びとなりましてから、もうずいぶん長くなりますが、貴女がいなければ、私の一番大切なお友達に書き送るということがなければ、そのようなわけにはまいらなかったものと存じます。さようならをもう一度言わせていただきま

す。憐れと思し召し、祈っていただきとうございます。

貴女の
Cl. ハーロー

手紙　四十八
ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

火曜日　九時

お申し付けですので、筆を執ることにいたします。今後とも愛してくれるようにですって　…　たとえ抑えたくとも、どうして抑えられるのでしょうか、この気持ちが　…　信じていただけるでしょうが、お手紙で第一報に接しまして、まさしく茫然自失といったところです。あゝ、神様　…　でも、何を申し上げたら良いのでしょう。一刻も早く詳しいことが知りたくて、ただただじれったいばかりです。

とにかく驚きました。でも、こんなことってあるのでしょうか。

母は本当に仰天してしまうでしょう。どうやって知らせたものか　…　つい昨晩のことですが（愚かな叔父様が母の頭に何か妙な疑いを吹き込んだものですから）、厳格この上ない名誉心にほんのわずかでも傷が付くような手段に貴女を誘い込むなんてことは、どんな男にも、また、悪魔にだって出来ることではないと、母に向かって請け合ったところだったのです。それも、貴女ご自身が確約しておられましたのに力を得てのことでした。

でも、重ねて申し上げますが、こんなことってあるのでしょうか。この有り様では、どんな女性にだって　…　でも、神のご加護をお祈りいたしますわ。

お手紙の中では、何一つ書き漏らしのなきようお願いいたします。ただ、追ってお知らせいたしますまでは、ノールズ夫人気付にてご送付願います。

♈　♈

お分かりですね。このとおり、貴女のことは少しも責めておりません。間違っておられるのは貴女の縁続きの方たちだけなのです。それにいたしましても、どのようなわけで心変わりをなさったのか、そこは不思議に思います。

母にはどう打ち明けたものか、見当もつきませんが、だれか他の人から先に耳にしたりいたしますと、また、私がすでに知っておりましたことに気づいたりいたしますと、私が黙認したためだと思い込むでしょうね。でも、本当の話、どう切り出したものか、分かりかねます。

でも、これでは貴女を苦しめることになりますね。そのつもりなどございませんのは勿論ですけれど。

以前の助言をここでもう一度繰り返させていただきます。まだ結婚しておられないのでしたら、決して式を延ばしたりなさってはいけません。事態が事態なのですから、家出をなさる前に密かに式は済ませておられたと思わせるのが望ましいのです。私たちを自分の物にいたしますと、男のほうでは〈権威〉とやらをちらつかせて私たちを苦しめるのです

から、このような場合でもありますし、私たちだって、自分の評判のためにも、その忌まわしい言葉を少しばかり利用して構わないのじゃないでしょうか。もっと血のつながりが濃い人の権威に背くよう引き込まれてしまったのですもの。

お兄様とお姉様にしてみますと[これが何よりも私には癪なのですが]、目的は達したことになりますね。いよいよ、遺言書の書き替えとか、その種の悪辣な手口が進められることになるのだろうと思います。

ヤ　ヤ

ちょうど今、ロイド嬢とビダルフ嬢がお見えになったとの知らせがありました。キティが申しますには、私に話をしたいと、お二人して息急き切っているご様子だそうです。容易に察しがつきますわね、ご用の向きは。お二人にお会いする前に、母に会わねばなりません。身の証を立てますためには、母にお手紙を見せる以外に方法がないのです。母が一気にまくしたて、息が切れてしまうまでは、こちらからは一言として口を挟むことは出来ないだろうと思います。御免なさいね。すっかり驚いているものですから、こんな書き方をしております。お使いの人が待っているのでなければ、また、あのお嬢様たちが下にお見えになっているのでなければ、書き直しをするところです。貴女に苦しい思いをさせてはいけませんからね。

お求めのありましたお品はお送りいたします。私に出来ますことで、他にも何かお入用のものがございましたら、遠慮なさらずにお申し付けください。

変わることなき愛を込めまして、貴女の

アナ・ハウ

手紙　四十九

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

火曜日　夜

大好きなハウさん、このように大変なご迷惑をお掛けいたしました者に、わざわざ心をお留めくださいましたこと、感謝申し上げなければいけないと思います。

この点につきましての無念さは、不幸な出来事そのものを悔やむ気持ちにも負けないほどだと、心の底からそのように考えております。

お母様は何とおっしゃられたのか、お教えいただきたいと思いますが、ただ、知るのが怖い気もいたします。

親しくしていただいたお嬢様方は　…　おそらく、もう二度とお付き合いはいただけないのでしょうが　…　何と言っておられるのか、教えていただきたいと思いながらも、やはり、知らされるのが怖くなってしまいます。

でも、皆さんのお咎めがどのようのものだといたしましても、私が自分自身に浴びせ掛けております悪口には及ばないものと存じます。事の顛末をお話しいたします際にも、非難を受けて当然と思われますところでは、その一行一行に自責の言葉が満ち溢れることに

なりましょう。これからご説明いたします事柄から、何か私の罪状を軽減出来るようなことが仮にも出てくるといたしますと（自分を許すことの出来ない者にとりましては、それだけが望みでございます）、どなたのお慈悲に頼ることも無理とは存じますが、貴女の友情には望みを掛けても良いのでは、と考えております。と申しますのも、きっと今では、どなたが口を開きましても、私を責める言葉ばかりでしょうし、クラリッサ・ハーローをご存じの方は一人残らず、家を捨てた娘のことを非難しておられるはずだからです。

❁　❁

最後の瞬間までとでも申しましょうか、貴女宛に書き記しておりました手紙を隠しました後、蔦の東屋へと戻ってまいりましたが、その前に、緩んでいる煉瓦のところから例の手紙を取り戻しておきました。それから、あのような状況でもありますし、出来るかぎり気持ちを落ち着かせまして、叔母との間にございました出来事のいくつかを思い返し、つなぎ合わせてみるよう努力いたしました。そして、従姉妹のドリーが手渡してくれました手紙の文面のいくつかの部分と付き合わせましたところ、これまでは今度の水曜日のことをずいぶん気にかけておりましたが、それほど心配することはないようにも思い始めたのです。そして、こんなふうに自問自答いたしました。

「私を脅すためにはそうだと思わせたいのでしょうが、多分、水曜日は皆が考えている日ではないはずよ。だって、贈与財産の書類の署名はまだ済んでいないのだし、署名するよう、私のところへ届けられてもいないのですもの。署名するもしないも、こちらで選べることだわ。父が渡しに来るようなら、お断りするのは辛いでしょうけれどね　…　それに、私のせいで無理強いも止むを得なくなる場合には、私の哀訴を避けるために、自分たちが叔父の屋敷へ行くことにすると、父と母は提案していたのではなかったかしら。なのに、水曜日には出席するおつもりだわ。父と母、それに、勢揃いしている皆と顔を合わせるなんて、考えただけでも恐ろしくなるけれど、でも、もしかすると、それこそ願わしいことなのかもしれないわね。だって兄と姉は、私が皆の間で得ている信用のことを高く踏んでいるからこそ、自分たちの目論見を実行に移す前に必要な手段と考え、皆の面前から私を締め出したわけですもの。

それに、身内の何人かを私の側に引き入れることだって（以前にも自問してみたことのある点ですが）、絶対に出来ないと考えなければいけないいわれはないのだし、面と向かって兄と対決させられるとしても、あの意地の悪い考え方を暴き出し、その結果として、兄の力を弱めるってこともないわけではないわ。

また、最悪の場合のことを考えても、牧師様のお言葉を精一杯拒むようにすれば、牧師様だって式を進めようとはなさらないでしょうし、ソームズさんにしたって、拒否してもがいている私の手を敢えて受け取ろうなどとはしないはずだわ。それに、これで最後だけれど、他の何をしても効果がなくて、時間の猶予もしてもらえないのなら、良心の咎めというのを持ち出して、もう他の人と約束が出来ているようなことを言い出すという手もあるわ。だって、ラヴレースさんには、あの方が独身でいるかぎり、そして、反感を持ちたくなるようなことをわざわざ計画的になさらないかぎりは、私はだれとも結婚しないはずだと、そんな期待を持たれても仕方ないようなことを言ってあるわけでしょう（お手元に

ございます私の手紙の中の一通でご覧いただけるはずです)。しかもこれは、兄とおじたちがあからさまに敵意を表に出した際に、あの方が憤慨なさるのを宥めるために言ったことですしね。それに、リーウェン尊師に訴えるとか、この点での心の迷いについてご意見を求めてみるつもりなのだから、母と叔母が(他の者は知らない顔だとしても)この訴えに心を動かされないなんてことは考えられないわ」とです。

こういった点を急ぎ思い巡らしまして、ラヴレースさんとの家出を断念したのは良いことだったと、内心喜んでおりました。

自分のことでありましても容赦しないつもりですと、そう申し上げてありましたね。ですから、不幸にして欺かれてしまいました結果とは申せ、このような行動に走りましたことを責める理由として、これら細々とした点まで並べ立てているのです。私への非難をより一層強めてしまいます考え方ということですが、次の点は認めざるを得ないのです。つまり、私のほうでも懸念は持っていたということなのです。従姉妹のドリーが、ベティと姉から聞いた話として触れておりました事柄は、私に知らせる目的で従姉妹に伝えられたことではないのか、それも、私を絶望させるため、そして、おそらく、父とおじたちの頭にありました、私に対する評価を台無しにする一番効果的な方法として、やむなく取らされてしまいましたこのような手段に踏み切るよう、私を追い込む目的で伝えられたのではなかったのか、という懸念をです。

あの二人の胸の内をあまりにも悪く取っているというのでしたら、本当に申し訳ないと思います。でも、もしも間違っていないといたしますと、悪辣にも二人が罠を仕掛け、それに私が掛かってしまったということになりましょう。そして、今や二人は、得意満面になっているのかもしれません。二人が被害に遭うことを願うとか、二人への危害を目論むとか、そのようなことは一度だってしたことのない妹ですのに、その妹が身の破滅を招きましたのを喜び勇むような、そんな真似がもしも出来るというのでしたらね。

このような筋道で考えておりますうちに、水曜日についての心配は薄らいできたのですが、それにつれて、ラヴレースさんとの面会のことがますます気掛かりになってまいりました。差し迫っていることが一番の理由であったのは確かですが、身近に迫った凶事というばかりではなく、最大の災いのように思えてきたのです。と申しますのも、面会の結果がこのようなことになってしまうなど(本当に浅はかでした。また、逃げ道はすっかり閉ざされていたのですが)、夢にも思わなかったのです。私の手紙を手にしておられないのですから、口論になることは確かに予想しておりました。でも、前にお送りいたしました手紙の中でも触れたことですが(ア)、大いに敬わねばならない者たちに対しまして、大変神聖な権威といって構わないものに対しまして、理不尽に強いられていると思えばこそ、あれだけ頑強に抵抗を続けてまいりました私ですのに、もしもこのような試練には耐えられないということにでもなりますと、とりわけ、あの方が私の手紙を取りに来られなかったことにつきましては、不満を感じて構わないだけの十分な理由もあることですから、それこそ妙な話ではないかと思ったのです。

この世での幸せは、ほんの束の間の時間に左右されてしまうものなのですね。わずか二時間だけでも考える暇がありましたなら … この新たな見方とでも申しましょうか、そ

(ア) 二百三十頁から次頁にかけてを参照のこと。

こに心を傾け、工夫を加えることが出来ましたなら　…　ただ、その場合にいたしましても、多分あの人とお会いしていたことだろうと思います。本当に浅はかでした。仮にも心変わりをするようなことがあれば、その理由は私から直接お話しいたしますだなんて、何のためにあの方に期待を持たせるようなことをしてしまったのでしょう。

あゝ、ハウさん、面倒見の良い気質というのも危険なものです。他の人たちに喜んでいただこうと骨を折ることで、自分自身に面倒を背負い込んでばかりいるのです。

召使たちの食事の鐘が鳴りますと、ベティがやってまいりまして、自分は食事に行くけれど、その前に何か私からの申し付けはないか訊いておりました。そして、もう一度、仕事に駆り出されることを仄めかし、あの娘が戻ってくるまで、あるいは、叔母かドリーの姿を見るまでは、私は部屋に上がってはいけないはずだと付け加えておりました。

私は、流れの具合が悪くなって、最近改修工事が行われました滝のことについていくつか質問をし、その様子を是非見たいものだと言っておきました。別れた場所に来ても、私の姿が見えない場合には、あちらのほうへ行く気を起こさせるためでした［自分自身を欺くことにもなったのですから、実に巧妙な策だったということです］。と申しますのも、滝は庭の中の、蔦の東屋から一番離れた部分にありますからね。

あの娘が家の中に入るか入らないかという時に、最初の合図が聞こえました。あゝ、心臓がドキドキとどれほど騒いだことでしょう。でも、一瞬たりとも無駄には出来ないのです。庭木戸のところへ急ぎました。周りに人影のないことを確かめ、すでに解錠されておりました戸の閂を外しました。すると、そこにはあの人が立っておりました。今か今かと待ち焦がれた様子です。

お姿を目の前にいたしますと、狼狽のあまり失神してしまいそうでした。心臓の動悸は不規則に乱れ、ひどい震えに襲われましたので、もしもあの人が支えてくださらなかったなら、とても立ってはいられなかったことでしょう。

「恐れることなど何もありませんよ、愛しい人」　あの人が言いました。「さあ、急ぎましょう。チャリオットはすぐそこです。このように快くご同行を賜りまして、感謝にたえません。お礼の申しよう、お返しのしようもありませんね」とです。

どんどん手を引いて行こうとなさるのですが、私も少し気を取り直し、「あゝ、ラヴレースさん、ご一緒は出来ないのです。絶対に出来ません。その旨を認めておいたのです。手をお放しください。手紙をお見せいたします。昨日の朝からつい三十分ほど前まで、あそこに置かれていたのです。約束を取り消さねばならなくなるようなことがあってはと、最後の最後まで手紙には目を配っていただくようお願いいたしましたわね。申し上げましたとおりにしていただけましたなら、見つけてくださったはずですわ」と申しました。

「監視されていたのです、最愛の人よ」と、あの人は半ば息を切らしながらおっしゃいました。「私の行動のすべてが監視されていたのです。信頼を寄せている召使のほうも監視されておりました。土曜日からずっとです。ですから、とても塀に近寄る気にはなれなかったのです。ここにいたのでは、すぐに見つかってしまうでしょう。さあ、お急ぎください、魅惑の君よ。今こそ救出の時です。この機を見逃したりなされば、もう二度と好機はありません」とです。

「何のおつもりでしょう。さあ、手をお放しください。宜しいですか［と、激しく抗いながら］、死んでもご一緒は出来ないのです」

「そんな馬鹿な！」と、あの人が叫びましたが、狂気と驚きとの入り交じった形相でした。「耳を疑いますね。だが［と、なおも私の手を引きながら、戸口から離れて行かれるのです］、話し合っている時ではない。何はともあれ、来てもらわねばならんのです。私の信義を疑うなど、お出来にならないはずだし、貴女を疑いたくなるような真似もなさらないことです」

「私のことを大切と思ってくださるのですね、ラヴレースさん。でしたら、これ以上急き立てるのはお止めいただきます。固く決心しているのです。私の認めました手紙をお渡しいたしましょう。さらに詳しい理由も付け加えさせていただきますので、ご一緒出来ませんことは納得いただけるものと存じます」

「何をおっしゃろうとも、マダム、納得はいたしかねます。貴女を独り残して行くなんて、まっぴら御免です。今貴女を残して行くというのは、永久に貴女を失うのと同じことでしょう　…　」

「こうまで強引になさらなければいけないのですか」　私は口を挟みました。同じように怒気を含んだ激しい口調でした。「手を放していただきましょう。ご一緒はしないことに決めたのです。そうすべきでないことを納得いただくよう、お話しいたします」

「身内の者たち皆が貴女をお待ちしているのです。お宅の皆さんは挙って背を向けておられる。今度の水曜日がその日です。重大な、おそらく、運命の日なのです。留まってソームズの妻になるおつもりなのですか。これが貴女の最終的な決断だなどとおっしゃるのでしょうか」

「いいえ、決して、決してあの人のものにはなりません。でも、貴方と一緒には行きません。そのように引っ張らないでください。失礼ですよ。お会いするつもりなどなかったのです。ただ、そのことをお知らせしようと思っただけです。貴方が何か早まったことをなさるのが心配だったのです。それさえなければ、お会いいたしませんでした。もう一度申しましょう。私はまいりません。まあ、何のおつもりでしょう」と、手を振りほどこうとして、私は力のかぎり争っておりました。

「一体何が取り憑いたというのです、我が天使には」　あの人が［私の手を放し、声を和らげて］言いました。「ご家族からこれほど虐待をお受けになった後ですし、私のほうではこれだけ厳かに誓いを立て、これだけ熱い想いを寄せているのです。ご自分から言い出された約束を守り通すのはお断りというのでは、胸を一突きにされたようなものです」

「話し合っている時間はないのです、ラヴレースさん。理由はもっと都合の好い折にお話しいたしましょう。今はご一緒出来ないということです。重ねて申しますが、これ以上は急き立てないように願います。寄ってたかって無理強いでは、私、堪りませんわ」

「どういうことなのか、読めましたよ」と、あの人は落胆の色を隠さず、でも、激情に駆られた態度でおっしゃいました。「何とまた厳しい運命なのでしょう。とうとう気力が萎えてしまわれたわけですね。兄上と姉上の勝ちということで、私の望みのすべては、まったくもって見下げ果てたあの恥知らずに譲らねばならないということに　…　」

「もう一度申しますが」と、私は言葉を挟みました。「あの人のものには決してなりません。水曜日にすべての決着がつきますが、貴方のお考えとは違うことに　…　」

「違わない場合もあるのです。そうなれば、あゝ　…　」

「皆が力を入れるのもこれが最後のはずです。そう信じて構わない根拠が　…　」

「こちらにもそう信じるべき根拠があるのです。何せ、お残りになれば、ソームズの妻になるのは避けられないことですからね」

「それはございません」　私が遮りました。「私のほうで皆の意向に沿った点が一つございます。皆も機嫌良くしてくれることでしょう。少なくとも、時間を稼ぐことは出来るのです。間違いないと思います。時間稼ぎの方法がいくつかあるのです」

「それで、時間を稼いだところでどうなるというのです、マダム。その先に何の望みもないのは明らかです。そんなあやふやな成り行きにすべてを委ねるのでは、望みがないのは明らかだ。あゝ、どうかお願いです。その結果に賭けるなどという冒険は、何卒、お止めいただきたい。納得していただけるはずだが、もしもお戻りになれば、冒険だけでは済まないのです。この水曜日にはソームズの妻になってしまわれるのだ。ですから、防いでいただきたいのです。まだ貴女にその力がおありのうちに防いでいただきたい。この恐ろしいまでに確実な成り行きに続くはずの、生命に関わる惨事をです」

「仮にも望みのありますうちは、これだけ重大な問題なのですから、私の思慮分別に見合うような行動こそが、私の名誉ばかりでなく（おっしゃっておられますように、私のことを大切に考えてくださるのでしたら、また、ご自分のことを私に信じてもらいたいと思われるのでしたら）、貴方の名誉にも関わりを持つものと存じます」

「貴女の思慮分別ですって　…　何時そこに疑いが向けられたというのです。だが、貴女の分別にせよ孝養心にせよ、何の役に立ったというのです。訳も分からないほど頑な連中相手では　…　」

それからあの人は、私の受けた惨い仕打ちの一つ一つを数え上げておりましたが、訴えんばかりの口調でした。あの方の敵に回るよう皆を仕向けている兄の気紛れな悪意こそがすべての原因だということで、兄の根強い悪意が届かないところに身を置く以外には、父やおじたちとの和解をもたらす道は他にないのだと言い張っておられました。

あの人はなおも言葉を続け、「兄上がもっぱら拠り所としていることと言えば、貴女が兄上の侮辱にも優しく耐えておられる点なのです。貴女がこの不名誉な迫害から身を振りほどいてしまえば、ご家族の方々は挙って貴女を求めて来られるはずなのです。貴女の権利を守ることの出来る、そして、そのつもりでいる者たちと手を結んでいることがお分かりになれば、貴女の地所を譲り渡してくれるはずです。だとすれば」と、私の身体に腕を回し、もう一度優しく私を引っ張りながら、「何故なのですか、一瞬でも逡巡なさるのは。今こそその時です。ですから、私と一緒に逃げるのです。お願いだ、我が最愛の人よ。信用するのです、迫害されながらも貴女を崇拝申し上げているこの私を。われわれが苦しんできたのも、同じ目的のためではなかったでしょうか。貴女に少しでも非難が投げ掛けられるようであれば、貴女を妻と呼ぶ栄誉を（その栄誉に相応しい人間であることが分かり次第ですが）賜りたいものです。妻となっていただきましたなら、お体もご声望も、共々に守って差し上げることが出来るのではないでしょうか」

「これ以上急き立てるのはお止めください、ラヴレースさん、お願いいたします。他の場合にこんなことをいたしますと、分別を疑われるのでしょうが、貴方自身が仄めかしておられたことでもありますし、忌憚なく申し上げましょう。私は確信しているのですが（時間があるのでしたら、理由もご説明申し上げるところです）、今度の水曜日は、私たちがこうまで心配しておりました予定の日ではないということです。また、その日が過ぎまして

も、ソームズさんを支持しようという身内の者たちの気持ちに変わりのないことが分かりましたなら、その時には何とか工夫を凝らしまして、ハウ嬢と一緒にですが、貴方と会うことにいたします。あの人は貴方の敵ではないのです。また、正規の手続きが進められました暁には、それまでに踏み切りますような、そんな行動を義務と考えることにいたします。何故なら、今のところ父の権威は、より大きなどのような権威からも非難を受けているわけではないのですからね」

「あゝ、最愛のマダム　…　」

「いいえ、ラヴレースさん、もしもまだ異議があるとおっしゃるのでしたら　…　そのつもりはありませんでしたのに、これだけ貴方に有利なことを申し上げた上で、それでもやはり満足していただけないというのでしたら、貴方の感謝のお気持ちと度量の両方につきましてどのように判断すべきなのか、それが分かるというものです」

「そのようにどちらを選ぶか考えている場合とは違うのです。お申し出には心から感謝いたしております。素晴らしい望みを与えてくださり、言い表しようもないほど嬉しく思ってはおります。ただしそれは、仮にお残りになっても、この水曜日に別の男のものとなられることはないとしての話なのです。どうかお考えいただきたい。かすかな望みに期待をつなげとのお言葉ではありますが、このような見方をするなら、それは私の苦悩をしきりに掻き立てるようなものではありませんか」

「信じてください。信じていただきたいのです。ソームズさんと一緒になるくらいでしたら、この命を絶ってみせます。信義を重んじるご自分の心を信じてほしいと私におっしゃるのでしたら、どうして私の心にも信頼を寄せていただけないのでしょう」

「貴女の節操を疑っているわけではありません。お力のほどが心配なだけです。このような機会は二度と再びないのです。さあ、どうぞ　…　」と、また先に立って、私を引っ張って行かれるのです。

「何処へ連れて行こうとおっしゃるのです。今すぐにお引き取り願います。戻るのは危険だとか、不可能だとかいう状態になりますまで、私を掴まえておくおつもりですか。貴方のことを容認出来る人だと考えてもらいたいのでしたら、今すぐに私を放すのです」

「あゝ、マダム、私のこの世での幸せもあの世での幸せも、そして、執念深いご家族の皆さんの身の安全も、この瞬間にかかっているのです」

「家族の身の安全でしたら、ラヴレースさん、神の御心に、そして、法律に委ねることにいたします。いくら脅迫なさろうと、心が咎めますような早まった行動には走らないつもりです。この私が、貴方の幸せを増進するために、自分の将来の心の平安を台無しにするとでもお思いでしょうか」

「この私を軽く見ておられるのですね、最愛の人よ。二人の明るい将来が開けようとしている時だというのに　…　邪魔となるものはないのです。今なら障害はない。だが、いつ何時妨げられないともかぎらないのですよ。何を迷っておられるのです。すべてに亘って貴女のご意向を掟とする所存です。さもなくば、この身は永久に滅びても構わない。身内の者すべてがお待ちしているのです。ご自分で約束なさったからこその話なのだ。この水曜日のことですよ。そこをお考えいただきたい。急き立てるとおっしゃるが、ご家族のうち、貴女が大切に思って当然至極な人たちすべてとの和解につながる、一番の近道をお勧めしているだけの話ではないですか」

「その判断は私に任せていただきます。私を強要しようとしているといって身内の者たちをお咎めになるのでしたら、貴方こそ無理強いはお止めいただきたいと存じます。我慢なりません。そうまで一生懸命になられますと、いよいよ疑念が深まりますし、気も進まなくなります。ですから、戻らせていただきます。手遅れにならないうちに戻らせてください。そのほうが二人のためなのです。どういうおつもりなのですか、こんなふうに力ずくだなんて。私の意向には全面的に従うと、何度も何度も誓っておられますが、それはこういうことだと考えて宜しいのですね。さあ、今すぐ手を放すのです。でなければ、大きな声で助けを呼びますわよ」

「仰せのとおりにいたします、我が最愛の人よ」と言いながら、手を放してくれたのですが、痛々しいばかりの落胆ぶりで、気性の激しさを存じ上げておりますだけに、お気の毒にも思えるほどでした。でも、急いで立ち去ろうといたしましたところ、あの人は厳めしい態度で、剣に目をやりながらも、やっとの思いで剣に伸びる手を引き止めたとでもいうように、両腕を組まれました。その様子はまるで、突然考え直し、早まった行動に走ろうとするのを思い止どまったと言わんばかりの風情でした。

「ちょっとお待ちください。ほんの束の間で構わないのです、あゝ、最愛の君よ、お留まりいただきたい。退路は確保されておりますよ。どうしても行かれるのでしたらね。鍵は戸口のところに置いてあるのです。あゝ、マダム、水曜日になれば、貴女はソームズのものなのだ。そんなに懸命に逃げ出すことはないでしょう。ほんの二言か三言だけで良いのです。どうかお聞き願いたい」

私は庭木戸近くまで来ると立ち止まりました。そして、鍵が目に入りますと、好きな時に中へ戻ることも出来るわけですし、一層安心いたしました。ただ、姿が見えないことに気づかれるのが心配であり、これ以上はお相手出来ない旨を告げました。すでに度を越して留まってしまったということもです。理由のすべては手紙に認めるつもりだということもです。「それに、間違いございませんが、ラヴレースさん」と、私は申しました［戻りますために、鍵を取ろうとしてちょうど屈みこんでいる時のことです］。「あの男性と一緒になるくらいでしたら、この命を絶つことでしょう。危険に晒されておりますのに気づいた場合の話ですが、お約束いたしました点につきましては、ご存じですね」とです。

「だが、一言聞いていただきたいのです、マダム。あと一言だけで良いのです［と、私のほうへ近づいてまいりましたが、なおも両腕を組んだままで、あたかも、危害を加えようとする気持ちには流されまいとしているようにも思われました］。この点だけは忘れていただきたくないのですが、貴女のご指示により伺っているのだということです。生命の危険も顧みず、監禁し虐待している人々から貴女を救い出すためにです。神が証言してくれましょう。さもなくば、この身に永遠の呪いを浴びせてもらいたいのだ［それがあの方の恐ろしい呪いの言葉でした］。貴女のために父とも、おじとも、兄とも、そして、謹んで希望いたしますが、お気持ちに適います時に夫としていただけるなら、そのすべてを兼ね備えた人間になろうとの決意を固め、馳せ参じたということです。だが、お見受けしたところでは、すぐにも救いを求めて大声を上げるおつもりだ。そんなことをなされば、ご家族皆さんからの仕返しがこの身に及ぶのは必定なのですからね。いっそのこと、すべての危険を冒しても構いませんよ。私を連れて戻ってくれとは申しますまい。庭へお供させていただきましょう。妨害がなければ、お屋敷の中までお供いたします。何も驚くことはない

でしょう、マダム。貴女が助けを求めるおつもりだった人たちのところまで付き添わせてもらうのです。皆さんと会いましょう。だが、恨みを晴らすためではない。皆さんの挑発が度を越さないかぎりはですがね。貴女のためなら、私がこの上どこまで堪えて見せるのか、ひとつご覧いただきたい。そして、紳士の口にする諫めごとが、また、紳士的な振舞いが、紳士に相応しい応対を皆さんから引き出せるものか、ひとつ一緒に見てみることにいたしましょう」

抜いた剣をご自分に向けようとでもなさったのでしたら、そんなありふれた手口で脅しの利くおぼこと私を見ていることになりますから、私のほうでも軽蔑してやるつもりでおりました。でも、このように身内のところへ同伴する覚悟だとまで言われますと、その口振りも真剣そのものでしたから、恐ろしさのあまり息の詰まる思いでした。

「どういうおつもりなのでしょう、ラヴレースさん。どうかお引き取り願います。お引き取りください。お願いいたします」と、私は申しました。

「お許しください、マダム。お許しを願いたい。この人気もない塀の辺りを、泥棒のようにコソコソ歩き回るのはもう沢山なのです。兄上が、そして、お身内の他の方たちが加える侮辱にも長いこと耐えて来ました。長すぎたのです。顔を合わせずにいれば、敵意を募らせるだけのことでしょう。死に物狂いなのですよ、私は。私のチャンスはこれだけなのです。何せ、水曜日といえば、明後日のことではないですか。おとなしく出たために悪意を増長させてしまったのだ。だが、それでもおとなしくするつもりです。ご覧に入れましょう、マダム。貴女のためなら、どこまで堪えるつもりでいるのかをです。剣は鞘に納め、貴女にお渡しすることにしましょう［と、鞘ごと剣を差し出すのです］。お望みとあらばこの心臓を」と、片手を胸に当て、「兄上の剣の鞘代わりに提供いたしましょう。貴女を失うくらいなら、命など何の値もない。さあ、マダム、庭へご案内いただきたい［と、戸口へ向かうのです］。お供いたしましょう。悲運への旅立ちだとしてもです。だが、いかなる運命であれ、貴女の目の前で運命を甘受するのであれば、これに優る幸せもない。どうかご案内願いたい［と、剣をベルトに差しておりました］。貴女のためにどこまで堪えることが出来るのか、ひとつ見ていただきましょう」　そう言うと、あの人は身を屈めて鍵を拾い上げ、錠に差し込もうといたしました。でも、私が懸命に説得いたしますと、戸は開けずに、鍵を再び地面に落としたのです。

「一体どういうおつもりなのでしょうか、ラヴレースさん」　私は申しました。「自ら危険に身を晒そうとおっしゃるのですか。私を危険に晒そうというおつもりでしょうか。これが貴方の優しさなのですか。皆で寄ってたかって私の気の弱さにつけ込もうというのでしょうか」とです。

そして、私は泣き出してしまいました。抑え切れなかったのです。

あの人は私の足下に身を投げ出して跪くと、「平気な者などどこにいるというのだ」と話し出しました［情熱に溢れた口調でしたが、その目も潤み加減で、上辺を装ったものではなかったはずです］。「この纏綿たる情緒に接して、平気な者などいるものか。あゝ、我が心魅する人よ［と、恭しく跪いたまま私の手を両の手で取ると、それを唇に押し当てながら］、留まれとでも立ち去れとでも、ご下命願います。いずれにいたしましても、ただ黙して従う所存です。だが、ご家族の方たちが加えた貴女への残酷な仕打ちや私に対する徹底した悪意、そして、貴女は嫌悪を感じるとおっしゃるわけだが、そんな男に皆さんが寄せ

ている（あゝ、マダム、あの男に嫌悪の情をお感じにならないようであれば、貴女からのご賛同も、それをどこに向けられようと、およそ価値あるものとは思われますまい）、同じように徹底した好意など、これらについてご存じのことすべて、忍んでこられたすべてのことに私は訴えたい。私にとって恐怖の種となっているあの水曜日について、貴女は憂慮すべき理由をお持ちではないのでしょうか、とです。果たして、このような機会に再び巡り合うことは可能なのか、とです。チャリオットの用意は出来ています。身内の者たちは貴女ご自身が指示なさったことの結果を待ち焦がれているのです。すべての点に亘ってご意向に従おうという男が、このように両膝をつき、どうか思いのままに振る舞っていただきたいと懇願しているのです。それだけなのです。ご厚意を求めるとしても、ご厚意を賜るに相応しいことが十分証明される場合だけに限る覚悟です。財産といい血縁といい、どこにも問題はないのだ。あゝ、愛しい人よ」と、もう一度私の手を唇に押し当て、「これだけの機会を逃す手はない。二度と再び巡り会えるものではないのです」と、あの人は言っておりました。

立ち上がってくださるよう、私はお願いいたしました。あの人が立ち上がりました。そこで、今度の水曜日については、あの人にしても私にしても、必要以上に心配しているのであって、あの人の性急さゆえに、このように訳も分からない形で急き立てられるということがなければ、その点について納得してもらえるのは疑いないところだ、と私は申しました。そして、その理由をお話ししようといたしましたところ、あの人は私を遮って、次のようにおっしゃるのです。

「貴女が期待を寄せておられることに微かな望みでも繋ぐことが出来るのでしたら、マダム、私も甘んじてすべてお言葉に従う所存です。だが、結婚許可証は実際に取り寄せてあるのです。牧師の用意も出来ている。あの学問を鼻に掛けたブランドだ。あゝ、こういった準備がただの試しにすぎないとお考えなのですか」

「仮に最悪の事態が目論まれているといたしましても、そして、私のことを弱い人間とお考えでしょうが、私がどれほどの気力を備えているのか、貴方はご存じないのです。卑劣な扱いを受けたとか、理不尽な仕打ちに遭ったとか思います時には、どんなことをやってのける人間なのか、どれほど反抗出来るのか、貴方はご存じないのです。それに、すべては兄らしくもない者の差し金だということを知りまして、すでに私がどれほどの苦しみを味わったのか、どれだけのことを耐え忍んできたのかにつきましても、貴方はお分かりではないということです　…　」

「気高い心をお持ちなのですから」と、あの人が遮りました。「そこにすべての望みを掛けても良いのでしょう。だが、気力が萎えるということもあるのです。これだけ孝養を尽くしている娘に向かって、あれほど独断的に振る舞う父親なのです。あの一歩も譲ろうとしない気性に、何の不安もないのでしょうか。気を失われても、見逃してもらうわけにはまいりますまい。自らの残虐な行為の結果なのです、そのようなことになっても、悪かったとはおそらく思わないでしょうね。式が終わってしまえば、諫めごとを並べたところで何の意味があるのです。その後にはありとあらゆることが、考えるだけでも心臓をかきむしられる思いのする、恐ろしい事柄すべてが続くのではないですか。訴えを聞いてくれる者一人としていないのですよ。式の済んだ後のことに抵抗したところで何の役に立つというのです。無理に式を挙げさせた者たちが立ち会っての話です。それも、貴女にとっては

一番の近親者なのだ」とです。

少なくとも引き延ばすことは間違いなく出来る、と私は申しました。引き延ばす方法が多々あるということ、また、二人にとっては、一緒にいるのを見つけられるのが最も致命的だということを告げ、その点が気掛かりで心臓も止まる思いだと申しました。これ以上私を引き止めるおつもりなら、ひどく恨みを抱くことになるが、黙って言うとおりにしてくれるようなら、感謝の気持ちも湧くだろう、とお話ししたのです。

それから、庭に戻ろうとして、鍵を拾うために身を屈めましたところ、あの人がさっと身構え、戸口の近くの内側に人の気配を感じたような表情を見せ、すばやく剣に手を伸ばしたのです。

恐ろしさのあまり、あの人の足下に倒れこんでしまうのでは、と思いました。でも、すぐにあの人が心の休まるようなことを言ってくださいました。戸のところで衣擦れの音がしたように思ったが、もしもそうだとしたら、もっと大きな音だっただろう。私のことを気遣うあまりの空耳にすぎない、とおっしゃるのです。

それから、あの人は鍵を拾い上げ、私のほうに差し出し、「どうしても行くとおっしゃるのなら、マダム … だが、どうしても貴女と離れるわけには行かない。庭へご一緒させていただきます。お許しください。だが、ご一緒せずにはいられないのです」とおっしゃるのです。

「それじゃあ、私の不安につけ込むおつもりなのですね。貴方も卑劣な方ですわね、ラヴレースさん。災いを防ぎたいと願う気持ちを利用しようというのですね。自惚れた愚か者でしたわ、私は。皆のことに心を砕いておりますのに、私のことを心配してくれる人などいないのですもの」

「あゝ、最愛の人よ」と、あの人は私を遮り、震えながら錠に鍵を差し込もうとしております私の手を掴むと、「どうしても行くとおっしゃるのなら、戸を開けさせていただきましょう。だが、もう一度お考えいただきたいのです。唯一の拠り所としておられるかにも思われる点ですが、仮に時間的猶予が得られたとして、拘束がさらに厳しくなるということはないでしょうか。皆さんのほうではその点をすでに考慮に入れているはずです。その場合、ハウ嬢とであれ私とであれ、連絡を取り合うのを妨げられはしないでしょうか。そうなれば、逃げ出そうと思われたところで、だれがその手助けをするというのです。出てはならない庭を、お部屋の窓から眺めることしか許されないのです。今手中にしておられるような機会をどれほど切望なさることでしょうね。ソームズへの嫌悪の情を持ち続けられる場合はです … だが、残念ながら、持ち続けるわけには行かないのだ。お戻りになるとすれば、それは、疲れ果て、責め苛まれて、自らの意思を捨ててしまった、説得に屈しやすい心（貴女は忠順な心とお呼びでしょうが）に促されてのことに違いないのだ」

「このように束縛されますのには、もう我慢なりません。自分の判断のままに振る舞うことは決して許されない人間なのでしょうか、この私は。でも、結果がどうあれ、束縛は御免蒙ります」

そう言うと、私は手を振りほどき、再び戸に鍵をあてがおうといたしました。

跪くのが得意なあの人は、さっとばかりに私と戸口の間で膝をつき、こうおっしゃるのです。「今一度跪いてお尋ねいたしますが、それでは、続いて起こるかもしれない不祥事にも平然としていられるとおっしゃるのですか。これだけ挑発を受けておりますし、兄上が

目的を果たされた場合には、得意顔をされることでしょうから、その当然の結果を考えますと、この胸が震えおののく時もあるのです。貴女のほうは、果たして平気でいられるのでしょうか。あゝ、どうかお願いです。これらすべてのことをお考えいただきたい。たった一度の機会を棒に振らないでいただきたいのだ。通報人によれば　…　」

「裏切り者の言うことをそんなに信用なさってはいけませんわ、ラヴレースさん」　私が言葉を挟みました。「貴方に密告している卑劣な男は使用人にすぎないのです。汚い報酬を得ようとして、知る由もないことまで知っているような顔をすることだってあるでしょう。貴方はご存じないのです、私にもいろいろな企みを暴き出す力がありますのをね」

もう一度錠に鍵を差し込もうといたしましたところ、あの人が急に立ち上がり、怯えた声で、はっきり聞き取れるように囁きました。まるで息切れがするみたいに、「連中だ。戸を開けようというのです、最愛の人よ」とです。そして、私の手から鍵を取ると、二重に鍵を掛けるみたいにガチャガチャと回しておりました。すると、すぐに内側から叫び声が上がりました。開けようとするのでしょうか、だれかが戸に体当たりをし、繰り返し繰り返し激しく押しながら、「そこですか、皆さんは。今すぐ来てください。すぐにです。ここですよ、ここにいるのですよ、一緒に。ピストルを早く。銃も　…　」と叫ぶのです。そして、もう一度、さらにもう一度と戸を押しておりました。その瞬間、あの人は鞘を払って、抜き身の剣を脇に挟み込みますと、私の震える両手を掴み、大急ぎで引っ張って行くのです。「逃げるのです。さあ、逃げるのです、魅惑の君よ。今この時しかないのです、逃げるのは。兄上かおじ上たちか、それとも、あのソームズなのか。すぐに戸を破ってしまいます。さあ、逃げるのです。これ以上惨い仕打ちを受けたくないのなら、貴女の足下に死体が二つ三つ横たわるのを見たくないのでしたら、逃げるのです。さあ、お願いだ」

「あゝ、主よ、お助けください、お助けください」と、驚きうろたえ、怯えのあまり我と我身を抑えることも出来ず、愚か者は叫ぶばかりでした。

後ろを振り返ったり前を窺ったり、こちらかと思えば今度はあちらというふうに、私は怯えた顔を同時に四方八方へ向けておりました。こちらからは猛り狂った兄、あちらからは武器を手にした召使たちが飛び出してくるような気がしたのです。激怒して金切り声を上げる姉の姿、目の前にある抜き身の剣や、追っ手が手にしているに違いない何本もの剣よりももっと恐ろしい形相で、顔を強張らせている父の姿がちらついたのです。あの人に負けないほどの速さで走っておりましたが、走っている気はいたしませんでした。恐怖心が両の足に翼を添えたのですが、同時に、考える力をすっかり奪ってしまいました。あまりの恐ろしさに、たとえあの人に急き立てられ、引っ張られていなくとも、どちらに向かって走ったら良いのか、知るゆとりはなかったことでしょう。戸口から飛び出してきたに違いない一人の男の姿が目に入りましたので、なおさらの話です。その男は私たちから目を離さず、追いかけて来たかと思うと次には庭のほうへ走り、他の人たちに向かって手招きをしたり、呼び掛けたりしているのです。その人たちの姿は、想像いたしますに、男の目には入っていたのでしょうが、私のほうは塀の角を曲がったものですから、確かめるわけにはまいりませんでした。兄と父、それに、召使たちだろうと考えておりました。

このように恐怖に怯えながら、何分と経たぬうちに、戸口も見えないところまで来てしまいました。するとあの人は、走ったこともありますし心配したことも、ほとんど息も切れんばかりでしたが、私の腕をご自分の腕の下に抱えこみ、もう一方の手には

抜き身の剣を握って、さらに私を急がせるのです。でも、私の口をついて出るのは、身体の動きとは裏腹な言葉でした。その間ずっと、「いや、いや、いや」と叫びながら、庭や猟場が見えております間は、後ろを振り返ろうとして、精一杯首を回しておりました。そして、とうとうチャリオットのところまで連れて行かれたのです。そこには、あの人の武装した召使が二人、それに、M卿の召使も二人、乗馬のまま見張りについておりました。

この話はここでしばらく中断しなければなりません。この悲しい場面まで書き綴ってまいりますと、自分の軽率さが私を正面から見据えてまいりますし、恥ずかしさや嘆かわしい思いが悔恨の情を誘いまして、心臓に短剣を突き刺されますのよりももっと鋭く思われますような、そんな苦痛を覚えるのです。自分自身のこととか、あの人のこととか、そのどちらかでも分かっておりましたなら、あるいは、少なくとも事を取り巻く情況に考えが及んでおりましたなら、お会いすればあの人の一存にこの身を委ね、私自身の分別などは通用しなくなってしまいますのは見当がついていたはずですから、無思慮にもそんな面会に同意してしまいました点が、思い返してみますと　…

と申しますのも、私が次のように思い込んでいた可能性はないでしょうか。つまり、大変な苦痛や苦労の種となった人間を今にも失いそうだと、そのように案じるべき根拠があるように考えている男性にしましても、その人間が戻ろうといたしますのを、可能なことだとしても、妨げたりはしないだろう、とです。和解のためにはどうしてもということであれば、交際は止める旨を私が約束しておりますのをご存じの方にしましても、そのようなことが私の力では出来なくなるよう手を尽くしたりはなさらないはずだ、とです。要するに、私の約束は取り下げるという言葉を見出すのを恐れて（私自身、その気持ちは分かっていたのです。懸念しながら、何の役にも立てられなかったわけですが）、狡猾にも、手紙を取りに人を寄越しますのは差し控えていたような人にしましても（あの人が監視されていたなんて、有り得ないことですから）、一緒におりますところを見つけられることの脅威から、今まで以上の酷い仕打ちや、身内の者たちとあの人が顔を合わせました時に起こりそうな惨事（おそらく、私の目の前で起こることでしょうが）を避けますためにも、私が全面的にあの人の力にすがるようになるまで私を引き止めておくといった、そんな方策は持ち合わせてはいないはずだ、とです。

ただ、万が一にも、庭の中にいた人物が、あの人と一緒に逃げ出すよう私を驚かす役目を仰せつかった、例の汚い手先だったということにでもなりますと、いかがでしょう、あの人のことも私自身のことも、もっともっと憎んで当然ということにはならないでしょうか。あの人もそこまで腹黒い卑劣な心の持ち主ではないだろうと思います。そんなふうには考えたくないのです。でも、庭木戸から飛び出すことが出来たのはたった一人きりだったというのは、どうしてなのでしょうね。あの人物は、まるで関わり合いは御免だとばかりに、追いかけても来なければ、急を知らせに屋敷に戻ることもしなかったのです。何故でしょう。肝を潰しておりましたし、遠いこともありまして、はっきりしたことは私にも分かりません。でも、今になって思いますと、確かに、例の卑劣漢ジョゼフ・リーマンみたいなところがこの男にはあったのです。

あゝ、どうして皆は　…　何故だったのでしょう。でも、皆を責めるいわれはございません。目の前に迫っておりました恐ろしい試練にいたしましても、かつては優しくしてくれました両親なのですから、今度のことを私が受ける最後の苦しみにするつもりなのかも

しれませんし、その両親の元から真っ直ぐに別のところへ連れ去られてしまうことを思いますと、まだしも楽な試練になる可能性もないことではないと、そのような望みを持つよう言い聞かせておりましたのは、私自身だったのですから …

それにいたしましても、あの試練に立ち向かうべきだったと、つくづくそう思っております。そうしておりましたなら、言い含められて、あるいは、愚かにも脅されて、と言うべきかもしれませんが、今回のような行動をその後に行ったといたしましても、これほど内心の咎めに苛まれることはなかったものと存じます。それだけでも、大きな災いを免れることになっていたはずなのです。

ご存じでしょうが、貴女のクラリッサは、他人の落ち度を引き合いに出して自分の過ちを正当化しようなどという考えは、いまだかつて持ったことはないのです。私に酷い仕打ちをしてまいりました身内の者たちにつきましては、神の許しを請うのみです。でも、皆に落ち度があるといたしましても、それは皆が責めを負うことであって、私の過ちの言い訳にはなりません。それに、私の過ちは早くから始まっていたのです。あの人と文通してはいけなかったのだということです。

心の弱みに付け込むなんて、本当に卑劣な男です。怒りがこみ上げてくることも再三ございます。若い娘が次々と過ちを犯してしまうよう（自分の力を頼み過ぎているのも事実でしょうが）、あの男は仕向けているのです。この最後の過ちにいたしましても、関わりが薄いとは申せ、確かに私の最初の過ちから生じたことなのです。つまり、禁じられておりました文通のことです。父親たる者に早くから禁じられておりましたのに …

あの人が私を訪ねることを禁じられ、私もお迎えしてはならないと申し渡されました段階で、この身が縛られて当然の権威というものを理由として、手紙を書くことはお断りする旨をきっぱりとお伝えしておりましたなら、文通の件につきましては、そのほうがはるかに適切な振舞いであったと思うのです。でも、続けるにせよ止めるにせよ、こちらの気持ち一つだと考えていたのです。手に負えないほど気性の荒い者たちの仲裁をいたしますのは、他のだれよりも私に似つかわしい役目のように思ったのです。そして、気がついてみますと、自分の思い上がった心を罰せられていたのです。他の罪科の場合にもよくある話でしょうが、自業自得ということなのです。

この最後の無思慮な行為につきましては、どう振る舞うべきだったのか、もう遅すぎるのですが、今ははっきり分かっております。私に降り懸かりました事柄をお知らせする手段は一つしかないこと、そして、身内の者たちとの間で私が運命の岐路に立たされておりますことは、あの人もご存じなのです。また、あの人への手紙で、約束を取り消す自由を留保しておりましたことはご承知なのですから、手紙を手にされたのかどうかについて案じる必要はなかったのです。ここに来られて、合図に応答がないのをお知りになれば、あの剥がれかけた煉瓦のところへ急がれたことでしょうし、手紙の日付から、もっと早く手にされなかったのはご自分の落ち度だということも納得されたはずです。ところが、文通をしようという気持ちを最初に促しましたのと同じ、あの独り善がりな動機に囚われ、愚かでお節介な先走った考えから、またぞろ本気になって心配してしまったのです。望みを挫かれますと、あの人は例の連中から新たな侮辱をお受けになるし、侮辱を受ければ、連中に何か手荒な真似をなさるかもしれない、とです。その挙げ句、懸念されますような無分別な行動をあの人にさせまいとして、私のほうが実際に早まった真似をしてしまったと

いうわけです。そして、さらに腹立たしくなりますのは、あの人の振舞いの一部始終を目にして分かったのですが、私が自分の強さを固く信じておりましたのと同じくらいに、あの人のほうでは、私の弱さを確信していたという点です。もっぱら私の面目に関わります点では、あの人に軍配が上がったことになりましょう。私は自分のことを考え違いしていたのですが、あの人のほうには、私についての見誤りはなかったということなのです。

ハウさん、どうぞおっしゃってください。本当のことをおっしゃっていただきたいのです。偏りのないお考えからいたしますと、私のことは軽蔑しておられるのではないでしょうか。きっとそうに違いありません。貴女のお気持ちと私の考えはいつも一つでしたからね。見下げ果てた人間だと、自分でもそう思うのです。また、それが当然でしょう。私は馬鹿な真似をしたと、世間の人の目には映ることになるのでしょうが、イギリス中で最も軽はずみな、一番考えの足りない娘にしても、これよりもひどい不始末をしでかすようなことはあったでしょうか。私の犯しました罪には、それを誘発するものはなかったということ、そして、女たらしの手練手管が用いられたわけでもないということも知れ渡ってしまうのですからね。他の多くの人たちよりも立派であることを期待されておりましただけに、いよいよ私の罪は重いというわけです。

機会のあり次第結婚せよとのお言葉でしたね。これもまた、愚かな行為がもたらします忌々しい効果の一つなのでしょうね。今ではそれも無理な話なのです。いつもの自分ではいられないのと同じことです。心を惑わすあの男の手練手管までも、ただちに許すようなことをして良いものでしょうか。自己を喪失するまで、とでも申しましょうか（このとおりのことをあの人にもぶつけてみましたが）、そこまで私を欺いたのです。腹を立てずにいられるものでしょうか。心に決めておりましたことのすべて、そして、貴女にお約束いたしましたこととはまったく裏腹な行動に私を追い込んだのです。私自身にとりましては本当に恐ろしいまでに不都合な行動ですし、家族の他の者とかお友達のことはあまり考えないといたしましても、大切な母にとりましても、ひどく不名誉でとても悲しい（そのはずだと思うのですが）行動なのです。私がどれほど無念な思いでいるのか、貴女もお分かりにならないでしょうし、想像してもいただけないでしょう。本当に情けない人間に成り下がってしまったものだと、我ながらそう思います。他の人たちの手本とまで言われておりましたのにね。もう一度父の屋敷に戻りまして、貴女に送る手紙を携え、忍び足で階段を降りたり、貴女からのお手紙を見出せるのではと、期待に胸をときめかせたりすることが出来るものでしたら　…

❁　❁

水曜日の朝になりました。かつては私の運命が決まる日とばかりに、ひどく恐れていたわけですが、一番気を配らねばならなかったのは、明らかに月曜日だったのです。私が屋敷に残り、恐れておりました最悪の事態を迎えたといたしましても、何か不幸な結果が生じました場合には、その責めを負わねばならないのは、身内の者たちだったはずです。ところが、今の私にとりまして唯一慰めとなる点と申しますと（ずいぶんつまらないものだとおっしゃるでしょうが）、皆の責任を取り除き、私がすべてを引き受けたということだけなのです。

この身の上話が恐ろしく乱れた筆遣いになっておりますのにお気づきでしょうが、驚いたりはなさいませんね。いろいろなペンやインクを使っているためでして、どれもこれもひどい品なのです。それに、時間を見つけては書き記したものですし、疲労もあれば、悲嘆に暮れていることもありまして、手も震えがちなのです。

私に対するあの人の態度や、セントオールバンズに着きました時と、それ以後に二人で交わしました会話の詳細を綴り、さらに紙数を重ねますことは、ここでは控えることにいたします。いずれ話の続きをお届けすることにいたしますが、その中で触れさせていただくつもりですからね。待ち侘びていらっしゃるのは疑いのないところですもの。

ただ、これだけは申し上げておきます。今のところ、あの人は極めて丁重な態度で（媚びさえ感じるほどです）接してくれているということです。もっとも、私といたしましては、あの人に対して、また、自分自身に対しましても、とても納得出来るような状態ではないものですから、私の愛想の良さを褒めたくなるような理由は、これまでのところあの人のほうにもあまりないはずなのです。正直な話、私を唆した男なのですから、時々は顔を合わせるのが耐えられないこともございます。

現在居ります宿は不便なところです。逗留はしないでしょうから、ここへの連絡の仕方をお知らせいたしましても、無意味だと思います。次はどこになるのか、今のところはまだ分かりません。

私が貴女への手紙を書いておりますのはあの人も承知のことで、書き終えましたら、あの人の召使に届けさせようと申し出てくれています。でも、事情が事情ですから、こんな大切な手紙をお届けするのに、どれほど注意をしても注意しすぎることはないと考えました。このような男ですから、何をするか分かりません。本当に質の悪い策士です。私を連れ出すための企みにいたしましても、仮にも企みだったといたしますと、無礼なまでに卑劣な手口です。でも、企みではないことを願っております。ただ、いずれにいたしましても、次のことは申せましょう。あの人の最良の点にいたしましても、あの人との今後の見通しにいたしましても、芳しいものではないということです。ともかく、悔やんだところでどうにもならない者たちの一人に名を連ねてしまったのです。私のことなどだれが憐れんでくださるでしょう。

それでも、厚かましいとは存じますが、今後ともご厚情を賜りますよう［それが叶わないようですと、本当に惨めな話です］、また、日々のお祈りの際には、私のことを思い出してくださいますよう、希望いたしております。どれほど時が経ちましても、また、どのようなことが起こりましても、変わることなく、

誠実にして親愛なる貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　五十

ラヴレース氏からジョゼフ・リーマンへ

四月八日　土曜日

正直者ジョゼフへ

君のところの愛すべき淑女が、やっとのことで、長々と耐え忍んできた残虐な仕打ちから逃げ出すことに同意してくれた。月曜の午後四時頃、庭木戸を出たところで会ってくれる予定だ。彼女がそのように約束してくれたということは、君にも話してあったな。約束を追認してくれたのだよ。有難いことに、彼女は約束を追認してくれたのだ。

ハーロー邸の馬場に通じる私道に面した脇道に、六頭立てのチャリオットを一台用意しておくことにする。そこからほど遠くないところに友人と召使を配置するが、武器を持たせておく。必要とあらば、彼女を守るためだよ。ただ、皆には騒ぎを避けるよう言い渡してある。君も知ってのとおり、私が主として気を配ってきたのはその点なのだ。

心配なのは、他でもない、令嬢がそこまで来た時に、道義にこだわるあまり浮き足立って、戻りたいと言い出すことだ。勿論、令嬢が約束を守ってくれるなら、私も信義を守るわけだし、私が信義を守ることが令嬢の面目を保つことにもなるのだがね。万が一戻りたいと言い出し、こちらでも説得しきれないようなことになれば、君のこれまでの尽力もすべては無駄に終わるのだ。私にとって令嬢は永久に手の届かないものとなり、あの忌まわしいソームズの餌食になってしまうわけだが、あの男はひどくしみったれだから、一族の召使たちのだれに対してであれ、恩恵を施すようなことは絶対に有り得ない話だ。

正直者のジョゼフよ、君の忠誠心にも、また、名誉を傷付けられた紳士、そして、虐げられている淑女の役に立とうとする君の熱意に対しても、私は何の疑いも抱いていないのだ。その点は、君に信頼を寄せる私の姿からも分かってもらえるはずだが、とりわけ、この重大な局面においては、君を頼りたいと思っている。君の助力で総仕上げが出来るかもしれないのだよ。というのも、令嬢が浮き足立った場合には、邪気のない策を少しばかり用いることも必要になるからだ。

そこで、以下の指示を十分心に留めてもらいたいのだ。頭に叩き込んでおくことだ。おそらく、これが君の最後の仕事になるだろう。そして、神の手によって、我が愛しの君と私とは晴れて夫婦となるわけだが、そうなれば、二人で間違いなく君の面倒を見ることにしよう。約束したことは覚えているだろう。かつてこれまで、約束を守らないと私を責めた者は一人としていないのだよ。

さて、正直者のジョセフよ、指示というのは次のとおりだ。

何とか工夫をして庭に出ていてもらいたい。出来れば変装をし、令嬢に見られないことだ。庭木戸の閂が外れている場合には、令嬢がそこから出るのを目にしなくても、私と一緒にいるものと思ってもらおう。戸は錠をおろしておくが、私の鍵は戸のすぐ外側の地面に置いておく。そうする必要がある場合には、君が自分の鍵で開けるためだ。

二人の言い争う声が聞こえたなら、戸口から離れず、私が「エヘン、エヘン」と二度言うのを待ってもらいたい。ただ、この合図は用心して聞くことだ。令嬢に合図と気づかれてはまずいので、あまり大きな声ではやらないからだ。多分、愛しの君を説き伏せようと争ううちに、戸を肘とか踵で強く打つ機会もあるだろうが、これは確認のためだよ。そこで、君には戸を激しく動かしてもらおう。閂を忙しく引っ張ったり押したりして、戸をこじ開けようとするみたいにだ。その後でもう一押ししてもらうが、力を入れてというよりは、音を立てるようにしてほしい。錠が壊れては困るからだ。そして、同時に叫んでもらおう（だれか家の者の姿が目に入ったようにな）。「来てください。今すぐに。ここにいますよ。ここです。急いで。すぐに、急いで」といった調子でな。そして、剣やピストルや

銃のことを口にするのだよ。精一杯、ものすごい声で叫んでもらおう。そうすれば、それまでは嫌がっていたとしても、逃げるように令嬢を説得出来るのは間違いない。説得出来ない場合には、どんな結果になろうとも、一緒に庭へ踏み込むつもりだ。屋敷へもな。しかし、ひどく怯えるはずだから、逃げ出してくれることに疑いの余地はない。

私たちが十分遠ざかったと判断したら「君がそれを推し量れるよう、私は声を張り上げて、もっと速く走るよう令嬢を急かせることにする」、その時は、君の鍵で戸を開けてもらうことにする。だが、戸を開ける時にはくれぐれも注意してほしい。私たちが十分に離れていないとまずいのだ。君が一役買っていることを令嬢には知られたくないのだが、君の立場を深く慮ればこその話だよ。

戸を開けた後、君の鍵は錠から抜き取り、ポケットにしまうのだ。それから、私のを拾い上げ、内側から錠に差し込んでおいてもらう。令嬢自身の手で戸が開けられたように見せるためだが、連中はその鍵についても（真新しいものだから）、私が調達したもののように考えることだろう。そして、私たちが戸を開け放しにして行ったように見せるのだ。

令嬢は自ら同意の上で家出したのだと、連中に結論してもらいたいのだ。私たちの後を追わないようにするためであり、また、戻る気を起こさせる望みはないと考えてもらうためなのだ。どちらの場合であっても、一騒動あるかもしれないからな。分るだろう。

ただ、心してほしいのだが、君の鍵で戸を開けるのは、屋敷の者がだれ一人私たちを妨害しにやって来ない場合に限るということ、また、私たちがすっかり逃げおおせてからにしてもらうということだ。連中が邪魔に入るような場合には、次の点からも、決して戸を開けるべきでないことは分かってもらえるだろう。連中が戸をこじ開けるにせよ塀を乗り越えるにせよ、地面に置いてある私の鍵を連中に見つけさせてやるのだよ、その気があるのならな。

連中が妨害をしに来ない場合、そして、君が自分の鍵で外に出た場合には、距離を保って追いかけてほしい。両手を差し上げ、興奮したもどかしげな仕草で（あまり近づくのは危険とばかりに、そして、だれか助けにやって来るのが目に入ったような素振りで、戻ったり追いかけたりすることだ）、「助けてくれ、助けてくれ。急いでくれ」と叫び声を上げるのだ。そうすれば、私たちもほどなくチャリオットに辿り着くことだろう。

屋敷の連中への報告は次のようにしてもらう。令嬢を伴ってチャリオットに乗り込む私の姿を見たということ。馬に乗った男たちが一ダースかそれ以上、私たちに付き添っていたということ。全員が武装しており、中にはラッパ銃を携えている者もいたように思うということ。そして、私たちが進む道とは反対の方角へ向かったように伝えることだ。

分かってもらえるだろうな、正直者のジョゼフ君。騒動を避けようと、君に劣らず、私のほうでもずいぶんと気を配っているのだよ。

令嬢が君の正体を見破らぬよう、それなりの距離を保つようにしてもらいたい。いつもの君の歩調を変えるため、大股で歩くことだ。それに、顔をしゃきっと上げるのだよ、正直者のジョゼフ君。そうすれば、令嬢も君だとは気づくまい。人の容姿や歩きっぷりというものは、顔立ちと同じことだが、人さまざまで、また独特なものがあるのだ。生け垣から杭を一本引き抜いてもらおう。簡単に抜けるとは思うが、力を込めてやってほしい。令嬢が振り向いた場合にも、これなら恐ろしげに見えるだろうし、君がもっと速く追いかけてこないことの説明にもなる。その後、そいつを担いで引き返し、屋敷の連中相手に大風

呂敷を拡げてみせるのだな。追いつくことが出来たら、どんなことをしようと思ったのかをだ。あんな男に令嬢を連れ去られるくらいなら　…　とな。私を罵っても良い。呪っても構わないのだよ。こんな態度を見せれば、人目には勇敢に映るし、本気にも見える。どうかな、正直者のジョゼフ君、分かるだろう。君の評判が上がるよう、私はいつも工夫を凝らしているのだよ。私に仕えて損をする者はいないということだ。

だが、私たちの話し合いが望ましくないほど長引く場合、また、「エヘン、エヘン」と私が二度叫ぶ前に、屋敷の連中の中に令嬢のいないことに気づく者がいたとしたら、その場合は、君自身の身の安全のためだが（私としては、それが肝腎なことだと考えている。嘘ではない）、前に言ったのと同じ物音を立ててもらいたいのだ。ただし、前にも指示したことだが、君の鍵で戸を開けたりしてはいけない。逆に、鍵を求めて夢中になってみせるのだ。もっとも、連中のだれかがたまたま鍵を持ち合わせていたりするとまずいから、半ダースほど、豆粒大のものだが、小石を用意しておいて、二、三粒こっそり鍵穴に押し込んでやるのだ。それで連中の鍵は回らなくなる寸法だ。これほどの重大事に際しては、あらゆる事故に備えておくことが肝要というものだよ、ジョゼフ君。そこでだが、君が戸をこじ開ける仕草をしている時に、だれであれ、敵の姿が目に入ったら、前のとは違って、次のように叫んでほしいのだ。「旦那様、旦那様」か「奥様、奥様」に続けて、「どうかお急ぎを。どうかお急ぎを。ラヴレースです。ラヴレースです」とだ。それも、大声を張り上げてな。それを耳にしたら、君の呼び掛けている連中が駆けつけるのに負けないよう、こちらも逃げ足を速めることにする。ベティが来たのなら　…　ベティが現れたにすぎないのなら、その場合、もしもあの娘の機嫌をとって見当違いな方角へ差し向けることが出来ないようでは、忠誠心のほうはともかく、君の恋の手管については(ア)、私の評価は下がることになるだろうな。

是非とも連中に話してもらわねばならないのは、令嬢は、並んで走る私にも負けないほどの速さで、連れ立って走って行くように見えたという点だ。これもまた、追跡は一切無駄だということを連中に確認させることになるわけだ。そして、ソームズの望みに終止符を打つことにもなる。令嬢の身内の者たちにしても、しばらくすれば、令嬢を連れ戻すことよりは和解の道を探るほうに熱心になるはずだ。それゆえ君は、周りの者すべてに大きな利益をもたらす結構な道具の役割を果たすことになるのだ。そして、この点は、いつの日か両家の者たちから感謝されることになるだろう。そうなれば、君は皆の好意の的となり、やがては召使の一人一人が、正直者ジョゼフみたいだと言われるのを誇りにするようになるのだよ。

万一、令嬢が君ではないかと目星をつけるとか、正体を見破るようなことがあれば、すでに考えていることなのだが、君が筆写出来るように、手紙を一通書いておこう(イ)。折を見てそれを差し出せば、令嬢との関係もうまく行くはずだ。

もう一回頑張ってほしい。慎重に頼む。これが総仕上げとなるのだ。重ねて言うが、見返りについては、名誉にかけて、当てにしてもらいたい。

誓って君の友

R. ラヴレース

（ア）百二十頁を参照のこと。　（イ）第三巻、七十四頁から次頁にかけてを参照のこと。

ベティと深みにはまるのをずいぶん恐れているようだが、その心配はあるまい。万が一あの娘と所帯を持つことになるとしても、君が言うように、ガミガミ女には違いないが、お誂え向きの娘だな。口喧しい女房を黙らせるための見事な処方箋が、私の手元にはあるのだよ。心配などいらないぞ、ジョゼフ君。立派に一家の主となれるはずだ。あの娘が君にひどく厄介を掛けるようなら、十二ヶ月であの娘を悲嘆に暮れさせるような方法を伝授することも出来るのだよ。それも、真っ正直なやり方でだ。でなければ、私も大きな口はきけないというものだ。

同封してあるのは、いずれ報いるつもりでいるものの、その新たな手付けのつもりだ。

手紙　五十一

ロバート・ラヴレース閣下どの

四月九日　日曜日　朝

つつしんで

お恵みをたまわりまして、きょうしゅくしごくにぞんじます。とは申しながら、この最後のご用命というのは　…　めっぽう入りくんでいるようでございますね。それにいたしましても、ささいなことから途方もないことへと、うながされますままに私めも　…　神様のおじひを祈る次第でございます。もしも露けんいたしますと　…　ただ、ありがたいお言葉によりますれば、いつ何どき露けんいたしましても、そのときは、閣下のお屋しきでお仕事につかせてくださり、おまもりいただけるとのことでございました。給金も上げてくださるとか、私めにとりましては大きなゆめでございますが、りっぱなはたごの主にしてくださるとのおおせでした。それに、私めがいちばん大切に思っておりますおじょう様にも、信ぎをまもってくださり、やさしくしていただけるとのお言葉でした。あゝ、神様がおじょう様をおいつくしみくださいますように　…　でも、おじょう様にやさしくせずにいられる者など、この世にいるはずもございません。

力のかぎり、さいぜんをつくすしょぞんです。おおせのように、私めが努力をおこたりますと、閣下はおじょう様を失いかねないわけですし、えらくお金にきたない男がおじょう様をうばうことにもなりそうだからです。ただ、すばらしいおじょう様のことでありますから、こんな骨おりはいっさい無用にしてくださるのではないかとぞんじます。お約束なさったのなら、きっとまもりとおされるはずと申し上げたいのです。

こうも念いりにさわぎをさける工夫をしてくださいまして、閣下のことをおしたい申し上げる次第です。ぞんじ上げることになりますまでは、おそれながら、ひどく悪さをなさるお方と考えておりました。ところが、まるっきりその反対であることを知ったのでございます。私めの見るかぎりでは、閣下がだれに対しましてもたいそう善意を抱いておられますことは明らかでございます。それは私とて同じことでありまして、無学そのものの人間ではございますが、ありがたいことに、大の正直者でございます。まっすぐな考えを持ちまして、おじょう様のお教えをいつも心にとめているのです。と申しますのも、おじょう様はどこへ行かれましても、まよえる者の一人か二人くらいはお救いになるのがいつものことだからでございます。

それゆえ、さらにいっそうのご愛こをたまわりますよう、また、お気の向かれましたときに、そして、出物がございましたときには、はたごのこともお忘れのなきようお願い申し上げる次第であります。ちかごろでは、奉公先も親から受けつぐものではなくなっているのでございます(三七)。また、わが身の本分にそむきまして閣下に仕えさせていただいているかにも見えましょうが、そのことで私めをいいかげんな人間とはお考えになりませぬよう希望する次第でございます。ただ、やましい心はございませんので、身のあかしは立つものとぞんじます。

とは申しながら、私めのことを「正直者ジョゼフ、正直者ジョゼフ」と、こうもたびたびお呼びくださいますのは、よろしければ、ごかんべんいただきとうございます。自分のことをたいへんな正直者だと、そんなふうに考えてはおりますが、本当の正しい道をふみはずしはしまいかと、すこし気がとがめることもございます。それに閣下には、たいそうひょうきんなところがおありですので、こんなにもたびたび正直者とお呼びになられますと、ふざけておられるのかご本心なのか、はんじかねてしまうほどでございます。

まことに無学な人間でございますし、これほどりっぱなしんし様に文をしたためましたためしもめったにございません。いっさいのこと、なにとぞお目こぼしくださいますようにお願いいたしますが、この点はたびたび口にしてまいりましたことゆえ、かさねて申し上げるまでもないかともぞんじます。

ベティさんのことは、正直な話、高ねの花と感じておりました。ところが、ずいぶんと親しくしてくれるのです。おじょう様にも良くしてくれるなら、もっともっと好きになれることでしょう。ただ、私めのような無学な男相手には知恵がありすぎるのです。それでも、私をおこらせるようなことがあれば、女をなぐるのははじでしょうが、なんとかして帽子をなげつけてやるくらいのことは(三八)、閣下、できるつもりでございます。

でも、ガミガミ女房をだまらせる処方せんとは、まことにありがたいお話です。そのようなものを前もって知っておりますれば、ますます身を固める気になるというものでございましょう。おまけに、閣下のおおせのとおり、もしもまっ正直なやりかたで、まるで神わざのように十二ヶ月でというのでしたら …

でも、閣下のようなおえらいお方に対しましてあつかましいことになりましょうし、あの女の出かた次第ではございますが、時間をかければ済むことかもしれません。あの女と手を切るのは、それも早々とでは、気も進まないことでしょう。閣下のお言葉から思いつくのですが、やりくり上手な宿屋のおかみになってくれるようでしたら、なおさらでございます。かさねて申し上げます失礼をおゆるしいただきとうございますが、すべてにおこたりなく、正確をめざすとお約束いたします。

閣下の忠じゅんなるしもべより　敬　具

ジョゼフ・リーマン

第二巻　目次

手紙　一　ハウ嬢からクラリッサへ
ヒックマン氏についてのユーモラスな描写。ラヴレース、ヒックマン、ソームズの現在の姿から、学童の頃の様子を想像。

手紙　二　同　右
日常生活についての有益な所見。プライド、堅苦しさ、その他の芳しからざる点に関してハーロー一族を厳しく非難。

手紙　三　同　右
ヒックマン氏がラヴレースの放蕩仲間二人と交わした会話。

手紙　四　同　右
ラヴレースからの予期せぬ訪問について。その際の出来事。地所を取り戻すようにとの助言を繰り返す。

手紙　五、六、七　クラリッサからハウ嬢へ
乱暴な兄から受けている迫害の詳細にさらに言及。

手紙　八　同　右
ベティ・バーンズの無礼な振舞い。辛抱強く求婚を続けるよう、ソームズを励ましている兄と姉の言葉を耳にする。兄宛に怒りの手紙を書く。

手紙　九　同　右
姉から挑発的な手紙を受け取る。母親に手紙を書く。母親からの厳しい返事。耐え難い気持ち。どのような行動を取るべきか、ハウ嬢の助言を切望。ハープシコードで怒りを鎮めようと試みる。一婦人による『知恵に寄する頌歌』。

手紙　十　同　右
ヒックマン氏を正しく描かないことに対し、ハウ嬢を叱る。地所を取り戻すことに関する彼女の論拠に対し、詳しく返答する。ラヴレース、ソームズ、ならびに兄について語るハウ嬢の言葉への公明正大な態度。復讐および決闘に関する意見。

手紙　十一　ハウ嬢からクラリッサへ
ソームズとの間にあった出来事に関する、ハリー・ダウンタン卿自身の説明。両方の男性を避けてくれるよう希望する。多方面に亘る美質に関し、彼女を賛美。

手紙　十二　クラリッサからハウ嬢へ
ソームズに対する嫌悪の情を克服出来ないのは何故なのか。ラヴレースに宛てた辛辣な

手紙。その動機について。氏の障害はすべて品行の悪さに由来するのであり、不品行は一切の区別立てをなくしてしまうことを語り聞かせる。自分のことはすっかり諦めてくれるよう主張。自らの困難な状況に関する公明正大にして本分を忘れぬ論法。

手紙　十三　ハウ嬢からクラリッサへ

クラリッサの一件に関する、母親との注目すべき論争。恋愛結婚が政略結婚と同程度の幸福に恵まれることは珍しいということ。当世風結婚の描写。恋愛沙汰に関し、両親と子供両方に対する忠告。ハンサムな男は滅多に良い夫にならないということ。宗教ないし信仰心の几帳面さで世に知られているわけではないとして、ハウ嬢がハーロー一族を謗る。母親のヒックマン贔屓について。

手紙　十四　クラリッサからハウ嬢へ

不安が募る。熱心に母親を弁護。父親の短所を斟酌し、ヒックマン氏を不当に扱うことに関し、ハウ嬢を諫める。ソームズからの手紙。気概に満ちた彼女の返事。その返事に接し、全員は大騒ぎ。叔母ハーヴィーからの怒りの手紙。母親宛に手紙を書く。手紙は未開封のまま返却される。父親宛に一筆認める。父親は手紙を引き裂き、送り返してよこす。次いで彼女は哀感切々たる手紙を伯父宛に書く。

手紙　十五　クラリッサからハウ嬢へ

予期していたよりも穏やかな手紙を伯父から受け取る。伯父宛の手紙の中で、聞き入れられるに違いないと思われる新たな申し出を行う。その件で親戚一同が参集する。子供が両親に対して払うべき犠牲についての彼女の意見。

手紙　十六　同　右

大きな望みをかけていた、親戚の者たちへ向けて成された申し出が拒絶されたことを伝える。その件についてのベティの生意気な報告。兄からの挑発的な手紙。その際に認めた伯父宛の手紙。ラヴレース氏からの弁解の手紙の要旨。氏は庭内での面談を迫る。

手紙　十七　同　右

伯父からの怒りの手紙。ラヴレース氏からの謙虚な手紙の要旨。夜通し林の中で空しく待機していたため、ひどい風邪を引き、声も出ない状態とのこと。氏の体調不良を気の毒に思う。翌日の晩に庭内で会うことを条件付きで約束。形の如何を問わず、暴虐行為のすべてに嫌悪を感じるとのこと。

手紙　十八　同　右

生意気なベティ・バーンズとの特徴的な会話。想像力に関わりのあるすべての能力について、女性は男性よりもはるかに有利な立場にあるという。伯父に要請を行うが、ソームズの訪問に応じることを条件として聞き届けられる。彼女はその条件に応じ、一週間後の火曜日を指定する。次いで、予定していた面談を中止すべく、ラヴレース宛に筆を執る。ハーロー邸へ向かう道筋にある、逗留中の旅籠におけるラヴレースの振舞いに関

し、ハウ嬢に調査を依頼。

手紙　十九　同　右

面会の中止に対し、極めて激しい文言の手紙をラヴレースから受け取る。怒りを込めた彼女の返事。これ以上、氏とは一切連絡を取らないことを決意。

手紙　二十　ハウ嬢からクラリッサへ

死期の迫っている従姉妹の見舞いに赴く母親、ならびに、ヒックマン氏に関するユーモラスな記述。ラヴレースに対するクラリッサの今回の立腹ぶりをからかう。

手紙　二十一　ヒックマン氏からハウ夫人へ

自分に対するハウ嬢の応接ぶりを憤慨したもの。

手紙　二十二　ハウ夫人より［返事として］

手紙　二十三　ハウ嬢からクラリッサへ

最近の七通の手紙の内容に関し、感想を述べる。身内の者に見られたくない手紙と書類のすべてを、衣裳やリンネル類の包みと共に、自分のところへ送り届けるよう助言。最悪の事態に至った場合は、母の家にクラリッサのための避難所を確保したいものと考えている。

手紙　二十四　クラリッサからハウ嬢へ

真の風刺の要件について。母親の庇護が得られそうだとの彼女の言葉に大いに喜ぶ。リンネル類とラヴレースの手紙すべての入った包みを隠す。家庭の管理、および、容姿や服装を整えておくことについての有益な所見。ベティ・バーンズの機嫌を取るための策略について。

手紙　二十五　ハウ嬢からクラリッサへ

ラヴレースの旅籠での振舞いに関する調査結果について。旅籠の主人の娘を傷物にしたのは疑いないとのこと。激しく氏を罵る。

手紙　二十六　クラリッサより［返事として］

ラヴレースの卑劣行為と思われている事柄に関し、はなはだしく動揺する。氏への嫌悪の念を言明。

手紙　二十七　ハウ嬢からクラリッサへ

調査の結果、ローズバッドに関し、ラヴレースは無実であるばかりでなく、気前良く振る舞っていることも判明した旨を伝える。この知らせがクラリッサの寛大な心にもたらす　はずの効果について、ハウ嬢が彼女を冷やかす。

手紙　二十八　クラリッサより［返信］

氏のために、寛大な気持ちが働き出していることを認める。氏への愛情と敬意を率直に表明し、氏の卑劣行為と思われるものに関する知らせが、当然と思われる程度以上に自分の心を乱したことを認める。氏から受け取った手紙の内容。氏への同情。ソームズを拒絶するのは氏自身のためではない旨を書き送る。ソームズを諦める条件として、氏と手を切るよう両親が主張した場合、両親に（申し出たとおり）従うためにも、自由な立場を守るつもりだからとのこと。人前ではいつも放蕩児らしく結婚生活を非難して憚らないことに関し、氏を咎める。現在受けている迫害にも拘らず揺らぐことのない、子の務めについての考え。

手紙　二十九　ハウ嬢からクラリッサへ

同席を求めて押し入って来た際のヒックマン氏に対する仕打ちのこと。精神の高潔さと心の大きさに関し、クラリッサを称賛。

手紙　三十　クラリッサからハウ嬢へ

リーウェン尊師が形式的な訪問を行う。兄と姉のわざとらしい丁寧さ。伯父と姉から訪問を受ける。彼らのこの表向きの態度の変化に込められた卑劣な術策を見抜く。前回の手紙に対するラヴレースの返信の要旨。結婚生活をいつも軽んじていたことの愚かしさを氏は認めている。

手紙　三十一　同　右

彼女とソームズとの面談の結果に極度の不安を抱いている旨を告げる、ラヴレース氏からのもう一通の手紙。屋敷からの脱出を彼女に迫り、その実行手段を提案。また、意に背いて、叔父アントニーの屋敷へ彼女を連れて行こうとする場合には、暴力に訴えても救出すると脅す。これを知った彼女の恐怖。返事の中では、向こう見ずな行動は一切慎むように主張。また、叔父の屋敷への引越しの件でも、自分は彼女の心を強く捉えているのだから、父親の権威に盾突くのも当然の権利だといった態度を取ることに対し、極めて不快に思う旨を述べる。従兄弟のモーデンが戻るまでは、ハウ夫人の庇護を頼りにするとのこと。

手紙　三十二　同　右

近づいているソームズとの面談のための、叔母ハーヴィーからの予備的訪問。その面談に同意したことで、彼女には何が期待されているのかという点について、叔母が語る。

手紙　三十三、三十四　同　右

ソームズとの面談の詳細、および、乱暴な叔父、残酷な兄、無慈悲な姉、そして、宥め役の叔母によって、その場で時に応じて演じられた役割について。彼女の頑強な抵抗と苦悩。従姉妹ドリーの優しさ。書類を捜すため、控えの間を検査される。彼らの見つけたペンとインクはすべて没収される。

手紙　三十五　同　右

ラヴレースからの手紙の要旨。氏の申し出、約束、そして、宣誓の数々。現在の望みとしては、一つにはソームズから逃れることで、もう一つには、自分の家族と敵対している男の家族に助けを求めるような恥ずかしい真似を避けられるようになることだけだという。庭へ向かう父親を目にした際の、櫟の生け垣に隠れた彼女の動揺ぶり。耳にした父親の言葉に深く悲しむ。母親への従順さ溢れる伝言。厳しい口調の返事。彼女を救出するという向こう見ずな脅しに関し、ラヴレース氏を非難。身内の者たちがその脅しに憤るのは当然のことと考え、彼との文通を始めたことに対して自分自身を咎める。

手紙　三十六　ハウ嬢からクラリッサへ

母親が彼女の受け入れと保護とを拒んでいる旨を伝えねばならず、心から無念に思うとのこと。密かに家出に同行することを申し出る。

手紙　三十七　クラリッサからハウ嬢へ

受け入れ拒否に遭った上での、ハウ夫人への賛同を示す公平無私な論拠。彼女にとって慰めとなるのは、不幸な状況が自らの不注意ないし愚行ゆえのものではないということのみ。自分自身の落ち度のためか、身内の落ち度のためか、あるいは、おそらくその両方のためであろうが、自分は極めて不幸な目に遭うべく選ばれているのではないかと恐れる。どのようなことが身に降り懸かろうとも、神の摂理の正しさを認め、模範ともすべき心の大きさをもって、この問題を論じる。自分の逃亡に同行しようと提議するハウ嬢を熱心に思い止どまらせる。

手紙　三十八　同　右

ラヴレースに対する非難と両親の弁護に際しての、彼女の公明正大さのさらなる例。兄と姉が計画の成功に大喜びし、ラヴレースの脅しがあった場合、一人は父親、もう一人は母親を引き受け、怒りを煽り立てようと話しているのを耳にする。この会話および叔母ハーヴィーの話が腹にすえ兼ね、ラヴレースに宛て、次の月曜日に会い、氏の一族の婦人たちの保護に身を委ねる旨を書き送る。

手紙　三十九　同　右

恐ろしい夢。ラヴレースが手紙を手にした今、約束したことを後悔。

手紙　四十　同　右

有頂天な様子、そして、誓いの言葉や約束に満ちた手紙をラヴレースから受け取る。そのような望みを抱く余地は与えていないのだが、氏のほうでは、屋敷を出た瞬間から彼女は自分のものになることを当然視。返事の中で彼女は次のように伝える。自分があの約束に完全に縛られているようには考えていないということ、そして、特別な励ましの言葉を与える前に（仮に父の家を捨てるにしても）調整すべき点も多々あり、また、父との和解や今後の措置に対する賛同を得るよう全力を尽くすつもりでいることは予期してもらわねばならない、といったことである。次の水曜日には、身内の者全員が集ま

ることになっており、彼女は皆の前に引き出される予定。その裁きの手順について。ラヴレースは、返信の中で、あまりにも自信に満ちた筆遣いをしたことを詫び、彼女の意向には全面的に従う旨を言明。

手紙　四十一　同　右

約束は追認するが、期待してよい点と期待してはいけない点とを伝える。家出に関して決心を変える場合には、機会のあり次第氏に会い、その理由を知らせる旨を約束。自分の行動を振り返る。このような行動を余儀なくされたことについて、しみじみと慨嘆。

手紙　四十二　ハウ嬢からクラリッサへ

家出の際の同行を許されて然るべき理由。父親の屋敷を出た瞬間から、礼儀作法などは用済みであるということ。友情に求められる事柄について。ラヴレースとよりは、同性の者と家出することのほうを選びはしないのかと尋ねる。また、そのつもりはないのであれば、可能なかぎり早い時期に氏と結婚すべきではないか、と質す。

手紙　四十三　クラリッサからハウ嬢へ（前掲のハウ嬢の手紙は未着）

すべての点で彼女の意向に従うことをラヴレースは約束する。それにも拘らず、胸中を不安がよぎる。やはり、撤回することになるかもしれないとの思い。

手紙　四十四　同　右　（手紙四十二への返事として）

ハウ嬢の先の手紙の数箇所に関し、いかにもクラリッサらしい感想を述べる。急所を突いた質問に十分検討を加え、ラヴレースとは家を出ないことに決める。

手紙　四十五、四十六　同　右

ラヴレースに宛てた、約束取り消しの手紙の要旨。約束を与えたこともあり、また、災いを防ぐためにも、氏と会い、取り消しの理由を示す義務があるものと（自分の手紙が持ち去られていないことからも）判断。面会の時刻が迫る。氏は別のことを期待して来るだけに、連れだって出奔することを拒むと、氏との間で争いが起こることを懸念。

手紙　四十七　同　右　（セントオールバンズからの日付のあるもの）

もっと明るい望みを抱きながら送った、あのリンネル類の入った小さな包みを求めるため、苦悩の極みの中で筆を執る。ラヴレースと会った自分の軽率さを責める。憐れみの心を、そして、祈ってくれることを懇願。

手紙　四十八　ハウ嬢より（返事として）

驚き、困惑し、茫然自失の態。ラヴレースと結婚すべきだという助言を繰り返す。

手紙　四十九　クラリッサからハウ嬢へ

ラヴレースとの面会の様子、氏との激しい争い、そして、最後には、恐怖のあまり、前もって固めていた決意も忘れ、欺かれて連れ去られたことについて詳述。それゆえの嘆

き、そして、良心の呵責。両親の禁止に背いて氏との文通を始めたという過失に、すべての原因を帰している。自分に対する狡猾な仕打ち、および、自己中心的な愛情のゆえに、氏への怒りを燃やす。

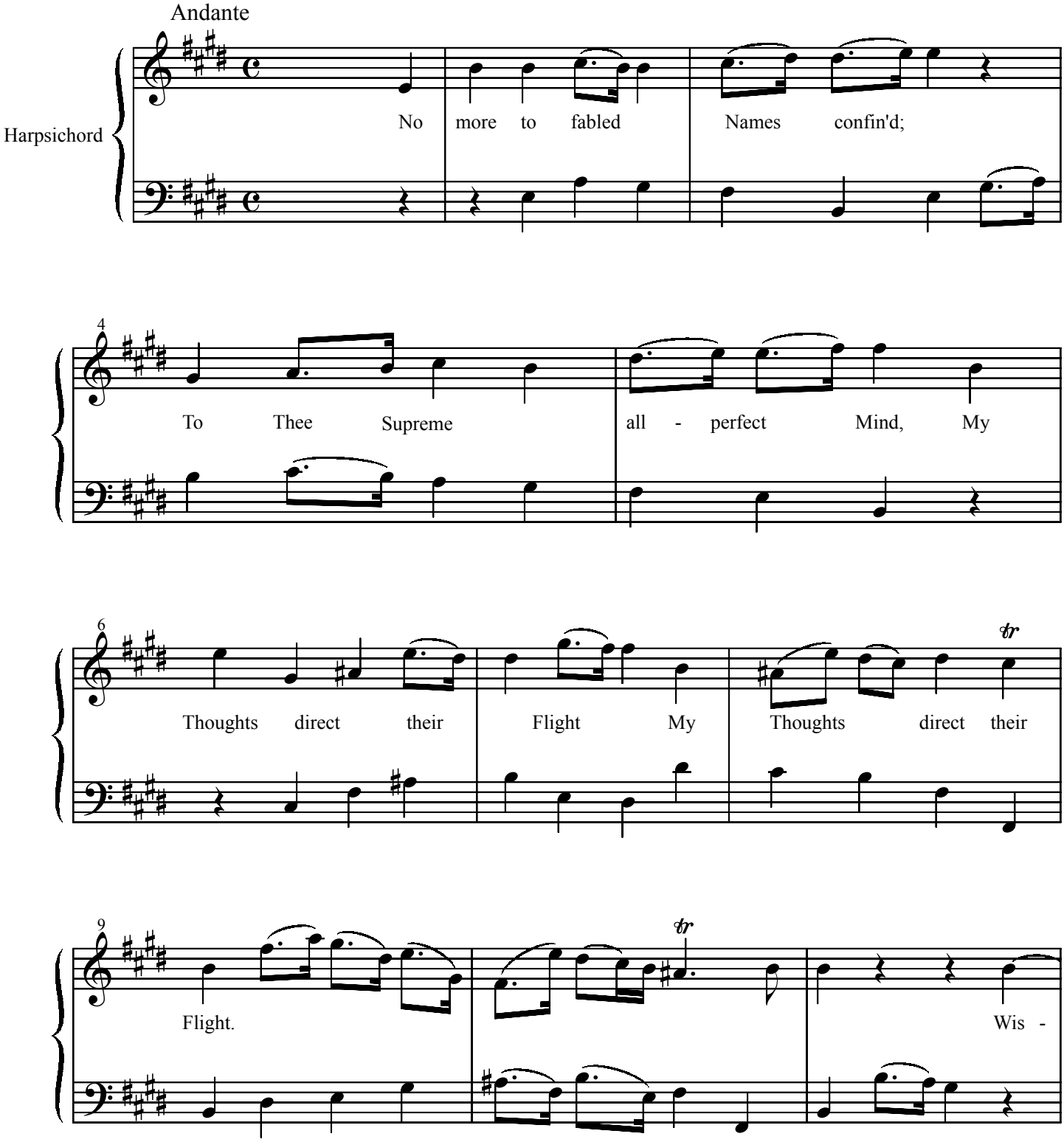
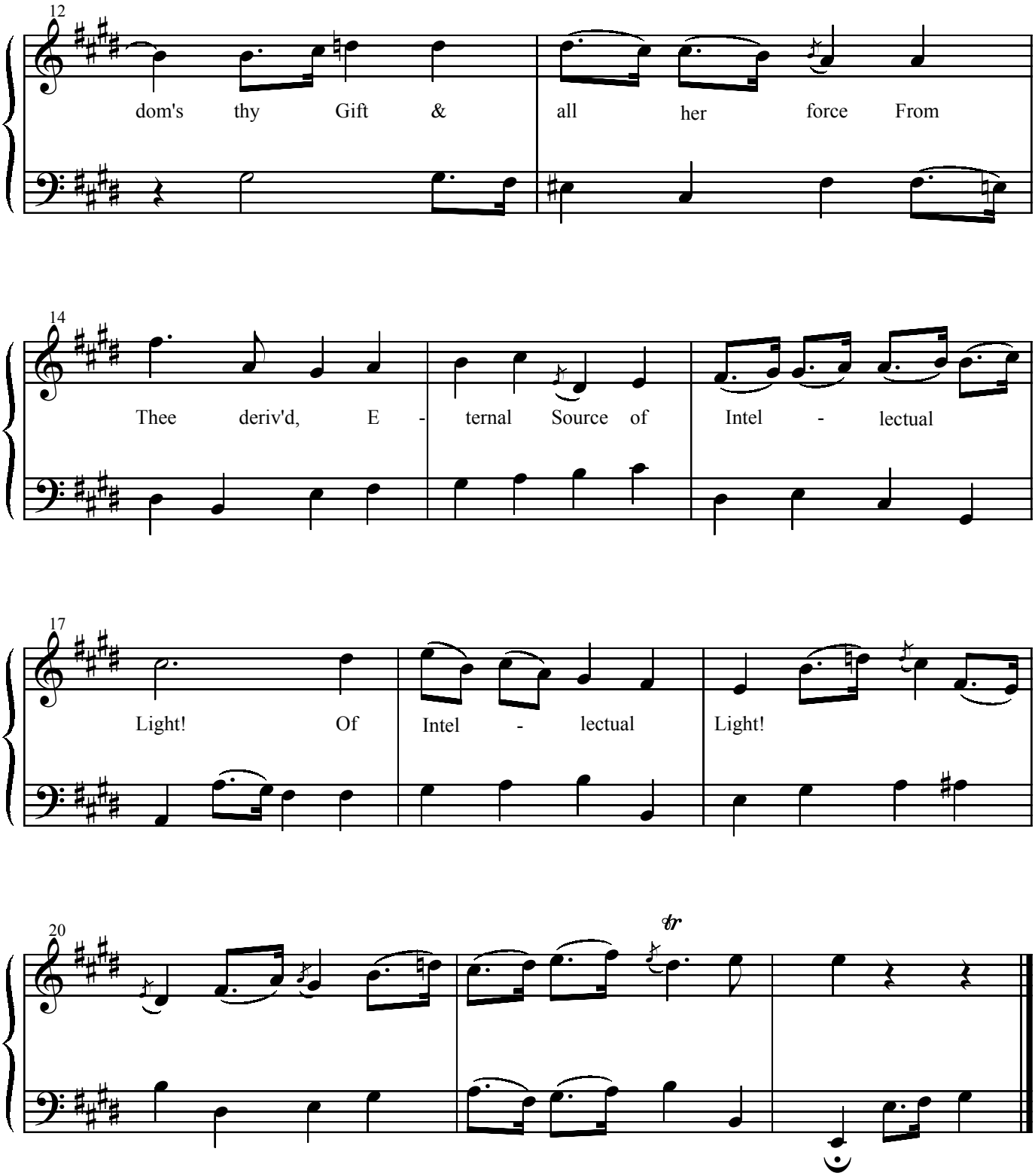
手紙　五十　ラヴレース氏からジョゼフ・リーマンへ

クラリッサ拉致計画の全貌を明るみに出す手紙。

手紙　五十一　ジョゼフ・リーマンより［返事として］

（第二巻終わり）

Ode to Wisdom

Clarissa Harlowe

12
dom's thy Gift & all her force From
14
Thee deriv'd, E - ternal Source of Intel - lectual
17
Light! Of Intel - lectual Light!
20
tr

訳注

（一）（四頁、二〇行）ウィリアム王風のクラヴァット（cravat）…特に一七世紀に男性が首に巻いて前で結び、端をたらしたスカーフ状の布、レース製あるいはレースの縁どりをしてあるものが多い（『小学館ランダムハウス英和大辞典』、小学館、昭和五四年、五九八頁）。ウィリアム王とは、William III（1650 - 1702）のことで、一六八九年から一七〇二年までイングランド王。

（二）（八頁、二七行）名高い詩人の場合でも…不詳。なお、Angus Ross は Alexander Pope(1688 - 1744) を想定している。(Ross)

（三）（一〇頁、一九行）トロフォニウスの洞窟（Trophonius' s cave）…この洞窟に託宣を求めた者はすべて、落胆し、顔面蒼白となって出て来たことから、塞ぎ込んでいる人間について語るのに、「トロフォニウスの託宣を伺った」という言い回しが使われるようになったとのことである。*The Oxford Companion to English Literature*（丸善、昭和三五年）、p.801 を参照のこと。

（四）（一一頁、一三行）〈カカオの木〉というお店で…the Cocoa Tree はトーリー党関係者が出入りしたチョコレート店のこと。一六九八年から一七五七年まで。ペルメル（Pall Mall）の南側に建っていたが、その後通りの向かい側に移転。(Ross)

（五）（一二頁、四〇行）トム・ウォートン（Thomas Wharton, 1648 – 1715）… 一七〇六年に伯爵に叙され、一七〇八年から一七一〇年までアイルランド総督を務めた。悪名高い放蕩児だが、政治家としては有能であった。(Ross)

（六）（一八頁、六行）愛はいかなるものにありても同一なり…ローマの詩人ウェルギリウス（Publius Vergilius Maro,70 - 19B.C.）の『農耕詩』（*The Georgics*）,III, 244.

（七）（一八頁、七行）ドライデンの翻訳による『農耕詩』…ドライデンはウェルギリウスの詩をすべて翻訳しており、『農耕詩』は一六九七年に発表されている。

（八）（三六頁、七行）レグホン（Leghorn）…イタリア中西部 Tuscany 州の港市。イタリア名は Livorno。

（九）（三六頁、一七行）ミネルウァの鳥…ミネルウァ（Minerva）はローマ神話の知恵と武勇の女神であり、ギリシアのアテーナー（Athena）に当たる。その使いの鳥はフクロウである。

（一〇）（三七頁、三行）一婦人の作…イギリスの文人 Samuel Johnson（1709 - 84）と交友のあった Elizabeth Carter (1717 - 1806) の作である。(Ross)

なお、原文に挿入されている楽譜（PDF ファイル）とその演奏（MIDI ファイル）を後置したので、ハープシコードによる演奏をお楽しみいただきたい。

（一一）（三七頁、一七行）パラスの鳥…パラス（Pallas）はアテーナーのことである。訳注（九）を参照のこと。

（一二）（三八頁、八行）キュテレイア（Cytherea）…ギリシア神話の愛と美の女神アプロディーテー（Aphrodite）のことである。従って、ローマ神話のウェヌス（Venus）に当たり、金星の意ともなる。

（一三）（三九頁、七行）イーリッソスの流れ… イーリッソス（Ilyssus,or,Ilissus）はアテナイ南部を流れる短い川。

（一四）（四六頁´ 一三行）スペインのフェリペ二世…Phillip II（1527 - 98）で´ スペイン王（一五五六 - 九八）。カトリック教徒で´ 反宗教改革の中心人物。絶対王政絶頂期のスペインを支配。Phillip I としてポルトガル王（一五八〇 - 九八）でもあった。

（一五）（四六頁´ 一六行）バシリスク（basilisk）…アフリカの砂漠に棲むという伝説上の動物で´ 一睨みまたは一息で人を殺したという。

（一六）（四六頁´ 三一行）スキラにするかカリブディスにするか…スキラ（Scylla）はシシリー島沖合の渦巻きカリブディス（Charybdis）と相対する岩。また´ 近づく船を呑み込むという六頭一二足の海の女怪のことでもある。

（一七）（五二頁´ 五行）モレクをも凌ぐ邪神…モレク（Moloch）はフェニキア人が子供を人身御供にして祀った神。レビ記一八章´ 一一節と列王記下二三章´ 一〇節を参照のこと。

（一八）（五九頁´ 一五行）ナルキッソス（Narcissus）…ギリシア神話で´ 泉の水に映った自分の姿に恋焦がれて命を落とし´ 水仙の花になった美青年。

（一九）（六七頁´ 五行）「柔らかな応答は憤りを静める」…箴言一五章´ 一節。

（二〇）（八三頁´ 六行）ノレス　フォレス（noless foless）… 正しくは´ ラテン語の nolens volens（unwilling willing）のことであろう。（Ross）

（二一）（一〇二頁´ 三二行）コヴェントリー条例（Coventry Act）…チャールズ二世の仲間がトーリー党の国会議員 Sir John Coventry の手足を切断した事件（一六七〇）をきっかけに通過した´ nose - slitting や mutilation を禁じる条例。（Ross）

（二二）（一〇四頁´ 三行）三階級（the Three Estates）…the Crown（国王・行政）と the Lords and Commons（上院議員と下院議員・立法）のことである。（Ross）

（二三）（一〇五頁´ 三八行）ロシア人風の妻…ロシアでは妻は夫への絶対的服従を強いられている´ という通説が´ 旅行記や外交官の報告等を通して´ 当時のイギリスに広まっていたようである。なお´ 左記のサイトを参照のこと。A GERMAN VISITOR ON MUSCOVITE MARRIAGE という標題の下´ Adam Olearius (c.1600 - d.Feb. 22, 1671)による *Commentaries on Muscovy* という一文を閲読することが出来る。

https://tspace.library.utoronto.ca/citd/RussianHeritage/9.WO/9.L/2.pg.410-412.html

（二四）（一〇八頁´ 三八行）ランセット（lancet）…外科医の用いる小さい刃物。乱切刀´ 槍状刀。

（二五）（一一五頁´ 一一行）ヴィオレッタ（Violetta）´ クリアンテ（Cleanthe）´ クレリア（Clelia）´ アンジェリカ（Angelica）…不詳。Angelica は Matteo Maria Boiardo(1441? – 94)の *Orlando Innamorato* と Ludovico Ariosto(1474 – 1533)の *Orlando Furioso* (1532)のヒロインであり´ Jhon Milton(1608 – 74)の *Paradise Regained* (1671)でも言及されている（iii, 341）名である。また´ William Congreve (1670 – 1729)の *Love for Love* (1695)のヒロインでもあるが´ Violetta, Cleanthe, Clelia との関係は跡付けられない。おそらく´ 詩や物語類に見られる女性名の例として挙げたのであろう。

（二六）（一二一頁´ 一四行）トマス・ア・ケンピス（Thomas à Kempis, c.1379 – 1471）…ドイツの神秘思想家で´ その著 *De Imitatione Christi*（*On the Following of Christ*）

は繰り返し翻訳出版され、広く読まれていた。(Ross)　なお、『キリストにならいて』の書名で、邦訳が岩波文庫（昭和三五年）の一冊となっている。

(二二七)（一六〇頁、一四行）〈最初に石を投げつける〉…ヨハネによる福音書八章、七節から。

(二二八)（一七六頁、一八行）シェーズ（chaise）…遊覧用の軽装四輪馬車である。

(二二九)（一七九頁、三〇行）（四月九日）…前後の日付の曜日から推して、四月六日の誤りと思われる。

(三三〇)（一八〇頁、八行）サック（sack, 第三版では sac）…一七世紀末から一八世紀初めに流行した婦人用のゆったりとしたドレス。

(三三一)（一八三頁、一七行）「我アテナイを支配す。我を支配するは妻。妻を支配するは我が息子なり」…アテナイの政治家テミストクレス（Themistocles, 527? - ?460）の警句であり、プルタルコスが「大カトー伝」で引用している。(Ross)

(三三二)（一九〇頁、二行）「善が生じるために悪をしよう」…ローマの信徒への手紙三章、八節。

(三三三)（二一六頁、二八行）「友の足の棘を抜き、自らの足に刺す」…J.Ray, *English Proverbs* の一六七〇年以降の版に（I will not pull the thorn out of your foot and put it into my own.）という形で収録されている。　また、M.P.Tilley, *The Proverbs in England in the sixteenth and seventeenth centuries* (AMS, 1950, p.663)にも、同じ形で収録されている。

(三三四)（二二五頁、四〇行）『新共同訳』（日本聖書協会、一九九五）では、引用箇所は一節ずつずれており、それぞれ四節、五節、六節、一七節になっている。

(三三五)（二二七頁、九行）「喜びが天にある」…ルカによる福音書一五章、七節。(Ross)

(三三六)（二三六頁、三〇行）詩人…ドライデンのことである。　*Absalom and Achitophel, Part I* (1681), 163 に、Great Wits are sure to Madness near ally'd.（非凡なる知力は狂気の同類なり）という一句が見られるが、これは Aristotle や Seneca の言葉に由来するという。(Ross)

(三三七)（二六〇頁、四行）ちかごろでは、奉公先も親から受けつぐものではなくなっている（Plases are no inheritanses now-a-days.）…一五世紀以降のイギリスの諺として、Service is no inheritance.　というものがある。(Ross)

(三三八)（二六〇頁、二二行）帽子をなげつけてやるくらいのことは（I colde make shift to throe my hat at her）…「公然と反抗する、平然と無視する」という意味合いの、一六世紀以降の諺、To throw one's cap at ....、に由来する。(Ross)

ク　ラ　リ　ッ　サ

ある若き淑女の物語

私生活における最重要関心事を
収録し、

特に
結婚に関し
両親ならびに子供の
不行跡に伴いがちなる難儀の数々を示す。

第３巻

第３版

ロンドン

出版元：S.リチャードソン

パタノスター街、ジョン・オズボーン書店
ストランド街キャサリン通り向かい、アンドルー・ミラー書店
セントポールズチャーチヤード、J.and J.リヴィントン書店
ならびに、バース、J.リーク書店より発売

１７５０

クラリッサ・ハーローの物語

第三巻

手紙　一

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

月曜日　夜、セントオールバンズにて

我が愛しの君が引き上げて行った［床に就くためであってほしいのだが］わずかな時間を利用して、急ぎ約束を果たそうと思う。追跡は受けなかった。その心配も一切していない。もっとも、我が魅惑の君には、追っ手への不安を抱かせねばなるまい。

さて、我が歓びほどに完全無欠の歓喜はかつてなかったことだと言わせてもらおう。待てよ、調べてみよう。天使が飛び去ったわけではあるまいな。

∴　　∴

いやいや、大丈夫。隣の部屋にいる。確実に我が手中にある。永久に我が物なのだ。

あゝ、エクスタシー。俺の心臓はこの胸を突き破り、
かの乙女子の胸へ飛び込もうとする（一）。

分かっていたのだよ。あの愚かな一族が全員団結し、こちらの仕事を肩代わりしてくれることはな。全員が地中のモグラのように、挙って俺のために働いてくれていることは話したとおりだ。モグラは目が見えないそうだが、自分たちのやっていることに気づかないのだから、連中はモグラよりも目が利かないということになる。俺自身が舞台監督なのだよ、連中の主だった動きについてはな。そいつが連中のちっぽけな心に潜む悪意と合致したものだから、すべては自ら起こした行動だと、そう思い込んだというわけだ。

ところで、我が歓びは完全無欠だと言ったのだったかな。あゝ、そうでもないのだ。忌々しいプライドのせいで、少しばかり減点されてしまうのだよ。俺への好意よりも、あるいは、俺の知るかぎりでの話だが、他の男をさしおいて俺を選ぼうとする、その気持ちと比べてさえも、身内からの迫害のほうが大きなきっかけとなっていたとしたら、そんな考えをどうして耐えられるというのだ。

だが、この考えにはあまり拘らないことにしよう。拘ったりすれば、我が愛しの魅惑の君が辛い目に遭うことにもなるだろう。ルビコン河を越えてくれたその事実を喜びとしたいのだよ。もう戻るわけには行かないのだ。俺の指示によるのだが、この逃走が完全に彼女自身の同意によるものと、無慈悲な連中の目には映るだろうし、仮に彼女の愛に疑いを抱くとしても、様々の試練を課すことは出来るのだよ。彼女の几帳面な心には大きな屈辱の種となり、同時に俺のプライドをいやが上にも高揚させてくれるようなものをだ。実はな、彼女にベタ惚れなのは確かだが、この世のいかなる男性にもまして俺様を好むという

点で、彼女の胸にかすかな迷いでもありそうだと感じた時には、慈悲は一切示さないつもりでいるのだよ。

火曜日　払暁

とはいえ、愛の翼をはためかせ、我が魅惑の君の傍らへ急ぐところだ。もうそろそろ起き上がり、愚図な夜明けを急き立てていることだろう。眠気を誘おうとして、一時間半ほど横になったが、一睡も出来なかった。今や俺は、そのような下卑た回復手段を必要とする肉体は超越しているかにも思えるのだよ。

だが、何故なのだ、我が愛しの君よ。チャリオットの中でも、到着後の旅籠でも、胸も張り裂けんばかりの嘆きようとはな。あれほどの迫害を受けてきたというのに　…　この上なく忌まわしいことを、まさに強制されようとしていたではないか。なのに、本気で嘆いているのは疑いようもない。大きな危険を冒しての脱出だというのに　…　ご用心、ご用心、あゝ、最愛の君よ。そなたがため、内部に愛の神殿を打ち建てている心は、嫉妬深いものなのですぞ。

だが、かくも突然の変化が影響を及ぼしている点は認めねばなるまい。凍りついてしまったということだ。新たな環境にいま少し馴染んでくれれば、慌ただしい動きが終わりを告げれば、差止め命令を遵守する俺の姿を目にすれば、疑いもなくその時は、逃れおおせた幽閉の日々と、喜ぶべき自由の身との違いを認めてくれるはずなのだ。

やって来るぞ。ご到来だ。まさに太陽も昇らんとしている。彼女のお傍に仕えようというのだろう。貴公とはおさらばだ。俺の半分でも幸福になってくれ（不安な思いのすべても、彼女が近づくと、太陽に追われる夜霧のごとく、雲散霧消してしまうのだよ）。そうなれば、貴公も世界一の幸せ者ということだ。俺を除いてはな。

手紙　二
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月十二日　水曜日

憂鬱な身の上話を続けさせていただきます。

このようにチャリオットのところへ急き立てられてしまいましたので、乗るのを拒みましても、無駄だったろうと思います。あの人は怯えおののいております私をチャリオットの中へと抱え上げたのですが、たとえそのようなことがなかったとしてもです。すぐにチャリオットは全速力で走り出しました。途中で止まることもなく、セントオールバンズに着いたのですが、ちょうど日が沈もうとしている頃でした。

途中、気を失ってしまうのではないかと思うことも幾度かございました。両手を差し上げ、天を仰ぎながら、「神よ、この身を守り給え」と、何度も呟いておりました。ここにいるのは本当に私なのかしら、とも思いました。両目には涙が溢れておりましたし、込み上げる溜め息に、胸が張り裂けそうなのですが、この逃亡と同じことで、自分の気持ちではどうにもならないものだったのです。

陽気な卑劣漢のほうは全然違っておりました。言い表しようのないほどの違いです。策

略が上首尾に終わったからでしょうが、得意さを隠そうともしないのです（ほとんど有頂天と受け取って構わないような様子でした）。ただ、愛想の良い美辞麗句を連ねてはおりましたが、恭しく遠慮がちな物腰で、空を飛ぶような道中の間、終始その調子でした。「飛ぶような」と申しましたが、全力疾走というよりも、そのように呼んで構わない馬の動きだったのです。また、追っ手をはぐらかすためでしょうが、回り道をしたものと思われます。

あの人の意のままに動く者たちが、他にも馬で付き添っていたように思われる節がございます。三人か四人、召使よりは身分の高い人物が、時々チャリオットの横を全速力で駆け抜けて行きましたが、あの人はまったく気に留める様子もございませんでした。あの人はしきりにお世辞を並べるのですが、私のほうはすっかり悲嘆に暮れておりましたし、憤りの気持ちも一緒になり、その男たちのことにいたしましても、他のことにいたしましても、尋ねてみる気にはなれなかったのです。

どんな思いでチャリオットを降りたか、お考えいただきとうございます。女性の同伴者は一人としていないのです。着の身着のままで、これまでの道程にも、これからの旅にも到底そぐわない身形です。頭巾も帽子も被っておりませんし、胸元や肩を隠そうにも、あるのはネッカチーフ一つです。死ぬほどに疲労困憊しておりますが、身体よりももっと心は疲れ果てているのです。馬が口を泡だらけにしている有り様ですから、私たちが泊まりました宿の人たちは一人残らず、私のことを家族の元を逃げ出した軽薄な娘と推測したはずです「他には考えようもございません」。囁き合ったり、呆れ顔で見とれたりしておりましたことからも、それは容易に察しがつきました。おまけに、客の世話をするのには余計なほど、代わる代わる宿の人間がやってくるのです。

あの人の寄越しました宿の女将さんが私を別室へ案内してくれまして、私がすぐにも気を失いそうになっておりますのを目にしますと、鹿角精と水を持って来てくれました。その後、三十分ほど独りにしてほしいと私が頼みますと、引き下がって行きました。心の中で一部始終を思い巡らしておりますと、今にもこの胸が張り裂けてしまいそうに思えたのです。女将さんがドアに錠を下ろして立ち去りますとすぐに、私は古い大きな椅子に身を投げ出し、堪え切れずに激しく泣き崩れてしまいましたが、そのお陰で少しばかり落ち着きを取り戻すことが出来ました。

私の願っておりましたのよりは早目でしたが、ラヴレースさんがあの婦人を送って寄越しました。婦人のほうでは、あの人に成り代わってということで、お兄様を部屋へお通しするか、それとも、お兄様のところへ降りて来てもらいたいと、しきりに言っておりました。実は、あの人は次のように話していたのです。私はあの人の妹で、私が一冬を過ごしていた友人の家から、嫌がるのを予告もなしに連れ出したのだが、身内の者の同意も得ずに結婚するのを防ぐためであり、その身内の元へ私を連れて行くところだということ、そして、旅装を整える時間も一切与えなかったため、私があの人にひどく腹を立てているのだ、といった具合にです。

ですから、貴女の率直な友人、貴女の包み隠しのない親友が、この作り話に口裏を合わせなければいけない羽目に陥ったというわけなのです。もっとも、私にとりましてはそのほうが好都合だったのも確かです。と申しますのも、しばらくの間私は話し合うとか口を開くとか、あるいは、顔を上げるとかすることが出来ずにいたのです。ですから、私の落胆ぶりや嘆きよう、また、口を閉ざして黙り込んでおります姿も、あの婦人の目には、そ

して、私の世話をしておりました、婦人の姪御さんの目にも、きっと一時的に機嫌を損ねているためと映るに違いないのです。

私のおりました部屋は寝室でしたから、あの人から重ねて伝言が届きました時には、私のほうから降りて行くことにいたしました。宿の女将さんに伴われ、あの人のいる部屋までまいりました。あの人が近寄ってまいりましたが、その物腰ときたら、それはもう大層慇懃なものでした。とは申しましても、妹相手に丁重に振る舞う兄がいるとしての話ですが、あの人の態度は兄としての作法を踏み越えるものではありませんでした。私に向かって「最愛の妹」と呼び掛け、機嫌はどうかと尋ねるのです。それから、私に対するご自分の気持ちに比べれば、その半分も妹を愛しているような兄はこれまで一人としていなかったのだから、何とか許してもらいたいものだ、などと言うのです。

何という恥知らずなのでしょう。自分の役柄になりきって、自然そのものなのです。私のほうはひどくしっくりとしない気持ちでおりましたのに　…

無思慮な者にとりましては、考えの浅さや物分かりの悪さが、かえって慰めになるものです。現在より先のことには目が届きません。要するに、そういった人たちは考えたりはしないということです。それに比べますと、起こりそうだと予想されます事柄と同様、起こる可能性を持っております事柄まで、いつも先を見越して考えるようにしてまいりました心配性の私にとりましては、今回の件を顧みます時、一体どのような慰めがあるというのでしょう。

でも、二人の間で交わされました会話の内容をお知らせすることにいたしましょう。夕食の少し前と夕食後に話し合ったことですが、両方を一緒にしてお話しいたします。

二人きりになりますと、あの人はしきりに懇願しておりました（情熱と敬意とに溢れた優しい心遣いが端々に窺われる態度であったと申さねばなりません）。私自身の運命に、そして、あの人にも、もっと馴染んでもらいたいというのです。信義を守り、変わることのない愛を誓うと、これまでも口にしておりましたことをそっくり繰り返すのです。これからの段取りにつきまして、何もかもすべて私の指示に従うことを約束し、提案することへの許しを求めた上で、次のように尋ねておりました。翌日発つとして、あの人の二人の叔母様のどちらのほうへ私は向かいたいのか、というのです。

私は黙っておりました。どう言ったものか、また、どうしたら良いのか、分かりかねていたのです。

私が前に考えたことでもありましたが、あのご夫人たちのいずれかのお宅の近くに用意する、人目に付かない下宿に落ち着くのはどうだろうか、とも尋ねるのです。

私はなおも口を噤んでおりました。

すると、M卿が持っておられる田舎屋敷のいずれかに向かうのはどうだろう。バークシャーの別荘とか、今私たちがおります州にある別荘はどうだろうか、と言うのです。

下宿のほうにいたします。あの人のいらっしゃらないところでしたら、どこでも結構です、と私は申しました。

この点につきましては、約束なさったことを認めておられました。そして、追跡の恐れがすべてなくなり、私が思いどおりに落ち着くのを見届けたなら、約束は厳守するつもりでいるとのことでした。ただ、その落ち着き先が私の気に入るものでないとしたら、安全という点からして、また、人目に付かないという点でも、ロンドンが一番であり、ロンド

ンなら、私がお身内の方たちをお迎えする気持ちになり次第、皆さんのほうから訪ねて来てくださるというのです。特に、お従姉妹さんのシャーロット様は、私のほうに受け入れる気があるなら、外出が可能になり次第、すぐにも話し相手として付き添ってくださるはずだ、とのことでした。それまでは、ベティ・ローランス夫人のところへ（セアラ夫人のほうは塞ぎがちな女性だから）行くのはどうだろう。夫人にとっては、これまで迎えた人たちの中でも最も歓迎すべき客になるはずだ、というのです。

私は次のように申しました。どなたの元であれ、お身内の方のところへは行かないほうが（ただ、今すぐには、そして、今自分の置かれておりますような、また、今後とも抜け出せそうにないこの精神状態では、ということですが）望ましいように思うし、私の評判の点からしても、あの人が私の傍から立ち去ってくれるよう願っているということ。どこかの人目に付かない下宿に身を寄せるようにすれば（あの人の手引きで逃亡したことはいずれ知れるわけで、私のために小綺麗な住まいを用意したはずと思われるだろうから、みすぼらしいところほど疑われずに済むのだが）、自分の今の気持ちと置かれた立場の両方に最も相応しいということ。これが最もうまく行くのは、私の場合は田舎であり、あの人にとってはロンドンであるように思われるということ。それに、あの人の上京がどれほど早く人の知るところとなっても、一向に構わないのだから、といったことをです。

あの人は、意見を述べても構わないのであれば、と断った上で、私はお身内のどなたのところへも行きたがらないのだから、身を隠すという点では、ロンドン以外の場所は考えられない、と言っておられました。田舎町とか村のようなところでは、よそ者はだれでも関心の的になるものだが、私のように容姿の優れた者は「と、お世辞をたくさん並べておりました」一層注意を引くことになる。伝言や手紙でさえ、その種のものが届けられることのない土地柄だけに、詮索の種になる、というのです。私が行きたがるのは、間借りをするところなど一時間もあれば決まってしまいそうなロンドンか、それとも、ベティ夫人の屋敷か、グリームさんという、ノートン夫人にも匹敵する立派な女性が家政婦をしている、ハートフォードシャーにあるM卿の別荘のほうだろうと考えていたので、ご自分ではどこにも下宿の手配はしてなかった、とのことでした。

追っ手が仕向けられるとすれば、それは最初の激情に駆られてのことに違いない。身内の者たちが私の居場所として見当をつけるのは、あの人のご親戚のお宅のいずれかということになるだろう。どうしたものか自分には分かりかねる、と私は申しました。

どのようなものであれ、こちらの意向どおりに従ってくださるとのお言葉でした。あの人の願いは、ひとえに私の身の安全だというのです。ご自分が利用しておられる下宿もロンドンにはあるが、そこを勧めるつもりはない。そのような宿へ行くのは、M卿とかベティ夫人のところへ向かう場合よりももっと嫌だろうと思うから、というのです。

当然のことだと、私がひどく憤慨した態度で答えたものですから、誓っても良いが、言い出すつもりはなかったし、受け入れてもらおうなどという気持ちもさらさらなかったのだと、あの人はさかんにまくし立てておりました。そして、もう一度、ただただ私の体面と身の安全を案じているのだと繰り返し、どのような事柄であれ、すべてに亘って私の意向を掟とするつもりでいる旨を約束しておりました。

私はすっかり片意地になっておりましたし、苦悩に打ちひしがれ、あの人への反感も募っておりましたから、どのようなことをおっしゃろうとも、好意的に受け止めることは出

来ない状態だったのです。

自分のことがこの上なく不幸な人間に思える、と私は申しました。何を決心したら良いのか分からず、今では、私の評判もすっかり地に落ちてしまっているに違いない。衣裳の持ち合わせはなく、人前に出られるような有り様でもない。貧相ともいえるこの姿そのものが、見る者すべてに私の愚かさを公表しているようなものであり、誰だって、私が弱みにつけ込まれたとか、度を越して相手に有利な立場を許してしまったため、自分の気持ちにしても行動にしても、思いどおりには出来なくなっているのだと考えるだろう。私としては、狡い手を使われたと考えずにはいられないし、若さや経験の乏しさから来る弱さの正確な度合いといったものを、あの人は見抜いていたように私には思われる。あの人と会ったことは、我が事ながら許すわけに行かないし、今回の件での父母の悲痛な気持ちを考えると、自分も血の出る思いがする。どんな仕打ちを受けていたにせよ、今も父の屋敷に残っていられたなら、いかなる犠牲も厭わないし、この世の望みはすべて捨てても構わない。どのようなことを言明なさろうと、また、誓われようと、若い娘を唆し、義務や良心をすっかり捨てるよう仕向けることに意を用いるようでは、あの人の愛情にもどこか下等で自己中心的なところが感じられる。高貴な愛に動かされた人間というものは、愛する者の体面や心の平安にとって不可欠なことはすべて、相手の希望に沿うよう努めるはずだから、といったことをお話ししたのです。

あの人は私の話のすべてにじっと聞き入っておりました。一度として口を挟もうとはいたしませんでした。一つ一つの項目に答えるあの人の言葉は、ほとんど順序どおりで、記憶力の確かさを示しておりました。

私の言葉に触れてすっかり深刻な気分になってしまった。従って、真面目に答えようと思う、というのです。

私からの好意とか信頼とかには、ほとんど与るわけに行かないことが分かり、心の底から残念に思う、とおっしゃるのです。

私の評判という点に関しましては（嘘偽りのない気持ちだとおっしゃるのですが）、このような行動に踏み切ったのをずいぶん後悔しているが、監禁のことや、愚かしいばかりでなく不当でもある身内からの仕打ちに比べれば、その半分も今回のことで評判に傷がつくとは考えられない。だれに言わせても、身内の者たち、とりわけ兄と姉を責める言葉が多く、私がおとなしくしていることを驚く声ばかりである。私が適当な機会を捉え、皆の迫害から逃れようとすることは、身内の者たちも予想していたことだ。この点は一度ならず筆にしたこととは思うが、繰り返し言わずにはいられない。でなければ、監禁などするはずがない。私を知っている人たち、そして、兄と姉の動機のことや、皆が私に押し付けようとしている卑劣漢のことを知っている人々の間では、高潔な人柄のゆえに　…　という言い方をしておられましたが　…　私への支持は依然として変わらないだろう、とおっしゃるのです。

衣類の件につきましては、事情が事情だけに、あの時身に着けていたもの以外にも、何か持ち出すことが出来たのではないかなどと考える者はいるはずもない。差し当たって使用とか着用するものについては、お身内のご夫人たち皆さんが喜んで用意してくださるだろうし、将来は、イギリス最高の機ばかりか、世界一の機から織り出されたものも、好きなように使ってもらうつもりでいる、とのことでした。

お金が必要になるのは疑いないが、その場合は、喜んで用立てさせていただく。願わくは、二人の間にはただ一つの利害関係しかないものと思いたい、とおっしゃるのです。

そして、百ポンドの銀行券を私に受け取らせようといたしました。気づかないうちに私の手に握らせていたのです。でも、ご安心いただきたいのですが、断固としてお断りいたしました。

狡い手を使ったなどと言われ、表しようもないほどの悲しみを覚えるし、また、驚いてもいる、とあの人はおっしゃっていました。迫害を加えている者たちから私を救い出す用意をしてやって来たのは、確認を得ている取り決めごとに従ったまでのことであり［何という卑劣な人なのでしょう。こんな咎め方をするのです］、考えが変わるとは思いもしなかったし、あのように私の説得に困難が伴うことも予想外だった、というのです。私と一緒に庭に入り、集まっている身内の者たちに会おうという申し出についても、おそらく、策略の一つにすぎないと考えているのだろうが、もしもそのとおりだとしたら、それは曲解というものである。というのも、私の極端な困惑ぶりを見るにつけ、一緒に入るのを是非とも許してもらいたかったものだと、今この時でも本心からそう願っているのだから、というのです。日頃から格言としているのは、脅しを受けた場合には、その危険に敢えて立ち向かうべしということであり、実行に移す機会を持ちながら脅し文句を並べる者は、滅多なことでは恐れるに及ばないのだ、というのです。ただ、闇討ちに遭うとか、身内の人数と同じ数の致命傷を受けることになるのは確実だと分かっていても（私が戻ろうとすれば、ご自分としては、破れかぶれの気持ちになっていただろうから）、一緒に屋敷に入るつもりでいたのだ、とのことでした。

こういうわけですから、私がしなければなりませんのは、これほど果敢で向こう見ずな人と会ってしまったという点で、自分を申し開きの出来ない人間のように見なすことなのです。それ以外にはございません。そうしようと考えたことも一、二度ありましたが、仮に真夜中にお会いしたとしましても、あの人のことですから、私を連れ出すための不埒な計略を何か考え出していたことでしょう。その点は、今ではほとんど疑いの余地もありません。それに、そちらのほうがさらにまずいことになっていただろうと思うのです。

あの人はお話のこの部分を、次のような言葉で締め括っておりました。私と一緒に中に入っていたなら、だれの目にも実に見事と映るような手際で事態を切り抜けていただろうから、全員から訪問再開の許しを得るに至ったことは疑いない、というのです。

あの人は言葉を続け、はっきり言わせてもらうと、私が顔を見せてくれない場合は、この種の訪問に踏み切っていたことだろう（ただ、信頼の置ける友人数名に付き添ってもらうのも事実だ）。それも、あの日の午後にするつもりだった、とのことですが、皆の気持ちを変えるための何某かの努力もせずに、忌まわしい水曜日をおとなしく待つわけには行かなかったからだ、というのです。

一体何が出来たというのでしょうね、このような男性が相手では　…

そういうわけだから、まったく回復の見込みのない病を思い切った荒療治で克服してみたくなるのも当然の話で、これは、ご自分のためばかりか、私のためにもなることだ、というのです。そして、われわれのだれもが知っていることであるが、大きな目的というものは、時として、それを何とか挫折させようとして用いられる手段そのものによって達成されるものなのだ、とも言っておられました。

今私の置かれている状況は、悲しいことだけれど、確かにこの言葉の正しさを証明していることになるわねと、私はそんなふうに考えておりました。

この間、私はずっと押し黙ったままでした。自責の念に胸が痛んでいたのです。あの人の大胆不敵さに半ば怯えてしまう時もございましたし、また、時には、極度に疲労しておりましたから、このような男性との精一杯明るい見通しを与えられましても、気力がすっかり萎え果ててしまい、とても口を挟む気持ちにはなれなかったのです。

あの人にとりましては、お話を進める好機ということになりますが、事実、さらに真剣な態度を装い、あの人は言葉を続けておりました。

私がお話しいたしましたことへの返答として、なおも言い残しておられる事柄については、勘弁してもらえると有難い、とのことでした。ただ、誓っても構わないが、次の点が気に掛かる、この上なく気に掛かるのだ、とあの人は繰り返しておられました（顔は紅潮し、語気を強めながらです）。つまり、私の気持ちは、あの人への償いが出来るようになることよりもソームズの妻となる危険を冒すことのほうに、どの程度傾いているのか、それを観察する必要があるという点だ、というのです。そして、あの人のために私が辱めを受けたとしても、ご自分としても、失礼ながら、私のことでは負けず劣らず侮辱を受けている。しかも、私の指図を、そして（マダム、無礼をお許し願いたい、とあの人はおっしゃっていましたが）、私の定めない筆の動きを油断なく見張っていたのだが、それも、四六時中、天候の如何に拘らず、しかも、喜び勇んで待ち受けていたのであり、そのような気持ちを鼓舞していたのは、忠実にして従順この上ない愛情以外の何ものでもないのだ、と熱弁を振るうのです。

こうまで言われますと、私といたしましても、もう少し熱心に注意を向ける気持ちが甦ってまいりました。

「それに、マダム、何故にこうまでするとお思いですか」　あの人が尋ねました。私は睨みつけてやったのですが、大変な剣幕だったのでしょう、一瞬あの人も口を噤んでおりました。「他でもない」　あの人は続けました。「狭量で下劣な抑圧から逃げ出してくださるよう説得するのが　…　」

「失礼ですが、貴方　…　」　腹立たしげに私は口を挟みました。

「最後までお聞き願いたい、最愛の君よ。胸も溢れる思いなのです。言いたいことは言わせていただきましょう。残酷で陰気な父上の屋敷に残っていられるためなら（お言葉は今もこの耳と心に染み込んだままなのだ）、いかなる犠牲も厭わないし、この世の望みはすべて捨てても構わないなどと、そこまで言われましては　…　」

「父への非難は一言たりとも許しません。黙ってはおりませんからね　…　」

「どれほどの仕打ちを受けておられたにせよ、とおっしゃるのですね。もしも、ソームズの妻となるのは避けられたと信じておられるのなら、マダム、義務と良心を犠牲にするよう、私が仕向けたとでもお思いなら、まったくもって考えられないほどのお人好しですよ、貴女も。だが、最愛の人よ、怒りに駆られるあまり、思いもよらず辻褄の合わない話になってしまっておられるのにお気づきではないのですか。虐待を加えている連中の元を去るに当たりましても、最後まで渋る様子を見せておられたのですから、この種の咎めに対しましても、貴女の良心には一点の曇りもないはずではありませんか　…　」

「まあ、驚いた。そうまで難癖をつけようとおっしゃるのですか、貴方は。お腹立ちと

はいっても、言葉に拘る程度のお怒りなのでしょうか」

あれからは本当にそう思っているのですけれど、あの人の怒りというのは、容易には抑え難いあの突発的な衝動から来るというよりも、むしろ、思いどおりに装うことの出来る種類のもので、私を怖じ気づかせようとして爆発させているものなのです。

「お許し願いたい、マダム。すぐに終わりますよ。生命を賭して貴女を迫害の手から救い出しました点は、貴女もそのとおりとお考えではないのでしょうか。なのに、結局のところ、その見返りも覚束ない有り様ではないのでしょうか。というのも、マダム、貴女の出された条件によれば（困難な条件ではありますが、神聖なものとして遵守させていただきます）、私の望みのすべては、はるか先の話ということになりはしないでしょうか。私に好意を寄せてくださるのも、あるいは、完全に拒絶なさるのも、お気持ち一つで好きなようにしたいとのお考えではありませんか」

ご覧のとおりですわ。どの点につきましても、私の条件は都合の悪いほうへねじ曲げられてしまうのです。いくらそうするのが適当とは思いましても、果たして、ご助言どおりの振舞いが私に出来るものでしょうか(ア)。

「その上さらに、私のことは永久に断念するつもりだと、貴女は明言しておられたではないですか。そのように残酷なことを、和解の条件としてお身内の方たちが主張した場合だが　…　」と、あの人が言葉を続けました。

「それでも、マダム、忌まわしい強制の手から貴女を救い出した手柄すべては、やはり私が受けることになるのです。それが誇りなのだ、私には。たとえ、貴女を永久に失うようなことになってもだが、今のご立腹のご様子からして、その恐れが十分すぎるほどあるのは承知の上なのです。また、貴女がすぐにも応じるおつもりの条件をお身内の方たちが主張なさるようであれば、なおさらのことでしょう。

貴女が私の手引きによって自由の身となられたこと　…　重ねて申し上げるが、それこそ私の誇りとするところなのです。そのような者として、ご好意を賜るよう、謹んでお願い申し上げる。勿論、ご好意を得られるならとの思いで受け入れた、例の条件を大前提にしていただきたい。併せてお許しいただきたいのだが、さあ、このとおり身を屈してお願いします［と、あの高慢な破廉恥漢は片膝をつきました］。長くお耳を煩わせてしまいました点、また、不躾な言い種の数々については、何卒お許し願いたい。根が正直者ゆえ、胸の

（ア）セントオールバンズにおける最初の話し合いの場で、また、その後にあっても、ラヴレース氏に対する態度があまりにも冷たく、傲慢でさえあるとの批判をクラリッサは受けてきた。この点に関して彼女に罪ありと考える者は、物語への十分なる注意を怠っていることになろう。すでに見たとおり、また、すぐ後に続くことからも分かるのであるが、どれほど早い時期から、距離を置いた関係の必要性を氏は彼女に思い浮かべさせていることだろうか。これは、彼女が切望して止まない家族との和解のための余地を残すべく、氏の手中に陥る前に、彼女のほうから氏に向かって指示したことでもあったのである。また、狡猾極まりないことに、氏は（求められもせずに）その条件の遵守を約束しているのであるが、斯くのごとき情況下にある彼女にとっては（ハウ嬢の助言に従う場合であるが）、無くもがなとも思われる条件だったのである。彼女を連れ去るに当たっての氏の態度に接し、同行を拒む気持ちに嘘偽りのなきことを示すためにも、怒りを露にする必要があったことは言うまでもない。この件に関する彼女自身の感慨については、後に挙げるハウ嬢宛の手紙（本巻、手紙五）を参照されたい。

思いを口に出さずにはいられないのです」とです。

「あゝ、お願いです。どうかお立ちください。どうしてもどちらかが跪かねばならないのでしたら、恩義を受けた者のほうにさせていただきますわ。ただ、この調子でお続けになるのは、何卒お止めいただきたいと存じます。私のためにずいぶんとお骨折りいただいたとのお話ですが、その大部分は省いて差し上げたはずですわ。私の孝養心との引き替えに見返りを期待していらっしゃることを、もっと早くにお知らせくださいましたらね。

そのように並外れたお手柄を軽んじる気持ちなど、決してございません。でも、言わせていただきますわ。禁じられておりましたのに、貴方から執拗にせがまれて始めたわけですし、身内の者たちから辛い思いを強いられているのは貴方のほうだと思えばこそ続けたのですけれど、あの文通のことさえなければ（何通も書きましたが、その都度、それを最後にしようと思っておりました）、監禁されることも惨い仕打ちを受けることもなかったのです。それに、浅ましい考えから出た兄の粗暴な振舞いにいたしましても、あのような真似をする根拠は見つからなかったはずなのです。

仮に家に留まっていたといたしましても、貴方はそのようにお考えですが、本当に望みがなかったとは私にはとても思えないのです。父も心の底では私を愛してくれていたのです。これまで、父は顔を合わせようとはしてくれませんでしたので、私のほうではただ会うことだけ、話を聞いてもらうことだけを願っていたのです。そして、父の決定を引き延ばしてもらいますことが、やがて立ち向かうことになっておりました試練の場に期待いたしました最低限の事柄だったのです。

いろいろと取り柄のあることを貴方は自慢しておられますが、真の価値というものを誇りにしていただきとうございます。それ以外のことには、私は一切心を惹かれることはございません。主として容姿に重きを置いて、ソームズさんを嫌ったり貴方に好意を示したりするようでしたら、私は自分のことを軽蔑しなければならないと思います。哀れなソームズさんのお姿と比べ、ご自分のことを買いかぶっておられるのでしたら、貴方のことも軽蔑させていただきますわ。

私を連れ出したのは大手柄だと考えてご満悦なのかもしれませんが、貴方に満足をもたらしているものは、私にとっては恥辱の種なのです。

好意を得たいのでしたら、もっと私が賛同出来るような資格を備えていただきたいものです。でなければ、ご自分で得意になっておられるほどには、貴方のことを買うわけにまいりませんわ。

それはともかく、私たち、まるで人類最初の男女みたいに（少なくとも、私は楽園から追放されたわけですから）喋み合っておりますわね。ご苦労のことやお手柄のこと、それに、四六時中だの天候の如何に拘らずだのといったことは、これからはもうお話しになる必要はございません。生きております間は、そのことを心に留めておくつもりです。そして、お返しをするのが無理でしたら、ご恩を受けたことをいつだって喜んで認めたいと思うのです。今貴方にお願いしたいことと申しますと、人目に付かない住まいを捜すのはこちらに任せていただきたいということだけです。チャリオットをロンドンかどこか他のところへ移動していただきたいということです。この上何かご助力や保護の手が必要となりました場合には、私のほうからお知らせいたしますし、また、さらに重ねてお世話をいただくことにもいたしましょう」

「ご立腹ですね、最愛の人。だが、いわれのないことですよ、それは。貴女に対する真心からの愛に値しないような目論見を持っていたのでしたら、私もこうまで率直に告白したりはしなかったはずです」

そして、ご自分の気持ちに嘘偽りはないと、あの人はまた誓い始めました。

でも、その言葉を遮り、私は次のように申しました。「お言葉は信じたいと思っておりますわ。そのように儀式張った告白をしなければならない理由がありそうだと考えるだけでも、私には耐え難いことですもの［これを聞くとあの人は、我に返ってとでも申しましょうか、今少し慎重な態度になりました］。もしも、そのような理由がありそうだと考えているのでしたら、私がこのようなところで、人の出入りいたします宿などで、貴方と腰をおろすような真似をしないことは確かですわ。私の知るかぎりでは、ここに連れ込まれましたのも、疑いを持つだけで、貴方にも自分自身にも我慢がならなくなりますような、そんな手段の数々によって（ご容赦いただきとうございます）騙された挙げ句のことと思うのです。でも、今のところは、この話はもう止めにいたしましょう。お願いです。どうかお教えいただきたいのです」と、私は頭を下げました［本当に腹が立って仕方がなかったのです］。「私を独りにしていただけるのでしょうか。それとも、束縛を一つ免れただけの話で、また別の束縛を受けねばならないということなのでしょうか。その点だけお教えいただきたいのです」

「〈貴女の知るかぎりでは、ここに連れ込まれたのも、騙された挙げ句のことと思う〉とおっしゃるのですね、マダム。束縛を一つ免れただけの話で、また別の束縛を受けることになるのかどうか、そこのところをお知りになりたいとおっしゃるのですね（しかも、その魅惑的だが、私には心の痛む仕草でだ）。驚きました。まったくもって驚きだ。お答えする必要などあるのでしょうか。完全に思いどおりになさって構わないお立場なのです。そうでないとしたら、実におかしな話でしょう。貴女が安全な場所にお着きなったら、私は直ちに身を退きますよ。だが、一つだけご同意を求めさせていただきたい条件があるのです。つまり、今では思いのままに振る舞えるお立場になられたわけだが、以前ご自分からしてくださった約束を、改めてお約束いただきたいということです。ご自分からなさったことなのです。でなければ、このような時に図々しいお願いはいたしません。人が下手に出るのに乗じるような人間と思われたくはないが、ただ、優しいお心遣いをいただきまして確保出来たかに思っておりました立場だけに、それを失うなどということは、考えるだけでも耐えられないのです。お身内の方々とどのように折り合いをつけられるにせよ、私が悪徳に耽り、強いお怒りを招きますような新たな種を蒔かないかぎり、私の生きている間は、また、独身でいる間は、他の男とは決して結婚なさらないということをです」

「この約束なら迷うことなく保証いたしますわ。貴方のおっしゃる条件でです。どのような形での保証をお望みでしょうか」

「お言葉だけで結構ですよ、マダム」

「それじゃあ、決して結婚はいたしませんわ」

厚かましいことに（今はあの人の手中にあるわけですが）、あの人は私に接吻をいたしました。約束の固めとして、とのことですが、あまりにも突然のことでしたので、用心する間もなかったのです。ひどく怒ったりいたしますと、気取っているように見えたことでしょう。でも、嬉しい顔をするわけにもまいりませんでした。あれほど大胆ですぐに付け込

んでくる男性のことですから、これが無遠慮な振舞いの手初めになるように思われましたし、また、喜んでなどいないことを分からせたかったということもございます。

あの人はそのようなことすべてを無視しておりましたが、あの人独特の態度でした。「もう十分です。十分ですよ、マダム。ところで、ひとつお願いがあるのですが、そのひどく不安げなご様子だけは抑えていただきたいのです。あまりにも心配になってしまい、この一途な愛にとっては耐えられないのです。ご好意を受けるに相応しい人間になるよう、また、貴女を世界一幸せにして上げられるよう、努力のすべてを傾ける所存です。私も世界一の幸せ者になれるわけですからね」

私は、最後までも聞かずにあの人から逃げ出し、先の手紙を認めた次第です。でも、お話しいたしましたとおり、あの人の召使の手で届けてもらうのはお断りしました。宿の女将さんが使いの者を世話してくれたのです。お渡しくださるものがございましたら、この使いの者がハートフォードシャーにございますM卿の別荘まで運んでくれることになっております。宛名は、そこの家政婦をしておりますグリーム夫人にしてください。明日の朝早くに、あちらへ向けて出発する予定ですが、追跡のことが気掛かりだからです。あちらに到着いたしましたら、六頭立てのチャリオットから、別荘に置いてあるご自分の二頭立てのシェーズに乗り換えたいとのご提案でしたが、そちらのほうが乗り物として人目に付きにくいからという理由です。

持ち合わせのわずかなお金を調べてみましたが、やっと七ギニーと銀貨数枚というところでした。手持ちのお金はいくらあるのかと姉が挑んでまいりました時には(ア)、貯えの残高は五十ギニーだけでした。それでも私の考えておりましたのよりは五ギニー多かったのです。それを書き物机の中に置いて来てしまいました。あの人と家を去る気持ちなど、ほとんどなかったからです。

このような境遇になりますと、慎みを守ってなどいられない状況がゾッとするほど沢山出てくるものです。身に着けておりますもの以外、私には衣裳がないことをご存じのあの人に、貴女に布地を預かっていただくようになりましたいきさつを説明せざるを得なくなりましたのも(お送りいただこうとしておりますことは、いずれあの人にも分かってしまうのですから)その一つですが、早くから一緒に逃げるつもりでいて、準備の一つとしてそのようなことをしていたとは思われたくなかったのです。

あの人は、心の底からの願いということですが、私の気持ちを考えると、お母様が保護の手を差し延べてくだされば有難いのだが、と言っておられました。そして、この点を案じてくださいますと同時に、遠慮のないことも口にしておられました。

あゝ、ハウさん、私のような状況に置かれました若い娘で、男の人が親しく付き添いますのを許す者は、細々とした礼儀作法をずいぶんと犠牲にしなければならない羽目に陥ってしまうものです。私が騙されて取ってしまいました行動に、危険や不面目を招きますのを承知の上で踏み切ろうと考えたりいたしますと、きっと恐怖と嫌悪を覚えずにはいないものですが、わずかでもデリカシーを持ち合わせております女性なら、決してそのようなことをしてはいけないという理由、また、そのようなことを誘いかける男性は、人を邪道に導く者のうちでも最も悪辣で、最も利己的な人間と見做さなければいけないのだという

(ア) 第一巻、手紙四十二を参照のこと。

理由につきまして、これまで口にしてまいりましたもののどれよりも強い理由を、今でしたら二十ほども挙げられそうに思うのです。

❁　❁

五時前に（火曜日の朝のことです）、〈兄〉の準備が整い、広間には朝食の用意も出来ておりますことを知らせに、女中がやってまいりました。瞼が重く、気持ちも同じように塞いだ状態で降りて行きますと、あの人には大層有難く思われ、お褒めの言葉をいただきました。私がこんなにも素早く身形を整え、旅を続ける気持ちになっているので（あの人はそのように受け止めたのです）、というわけです。

私は考えてもみなかったのですけれど（考えるなどということは、私には無用のものなのです。一番必要な時に忘れてしまったのですもの）、あの人が思いついて、私には一言も触れずに、ベルベット地のフードと銀の飾りを施したショートコートを買ってくださいました。付け込むのが巧みな男ですから、宿の女将さんとメード、それに、女将さんの姪がいる前ですのに、ご自分の用意周到さはご褒美に値するということで、拗ねております愛らしい〈妹〉にキスしようとするのです。ご褒美はまんまとせしめたのですが、あの人も言っておりましたとおり、一滴の涙も一緒にだったのです。するとあの人は、やはり宿の者たちが居合わせているところで［本当に卑劣な男です］、私のことを深く愛している両親なのだから、顔を合わせても恐れることは何一つないのだよなどと、宥めるようなことを口にしておりました。

このような男に、どうして丁重な態度が取れるというのでしょう。

私たちが乗り込み、チャリオットが動き出しますと、あの人は、ハートフォードシャーのM卿の別荘に向かおうと思うが、何か異存はあるかと尋ねました。卿はバークシャーの別荘におられるとのことでした。

どなたにせよ、ご親戚をお訪ねするのは、身内の者たちに対するあからさまな対抗意識を示すことになるので、今のところはまだ伺いたくない、と私は申しました。私に好ましく思われますのは、どこか人目に付かない貸間へ向かうことですし、少なくとも、この事態が身内の者たちにどのように受け止められているのか耳にいたしますまでは、あの人が私から離れていてくださることなのです。と申しますのも、和解の望みなどほとんどないのが現実なのでしょうが、私があの人の保護を受けているとか、ご親戚のどなたかのお世話になっているのを皆が知れば（どちらも同じことと見られるはずですので）、望みの余地さえもすっかりなくなってしまうからです。

どのようなことであれ、私の思いのままに指図してもらいたいと、あの人は真顔で約束しておられました。それでも、ロンドンが最適の場所であるという考えに変わりはないとのことで、私が無事ロンドンに着き、好みどおりの下宿に落ち着いたなら、すぐにもM邸へ向かうつもりだと言っておられました。でも、私がロンドンには賛成しなかったものですから、それ以上強要するようなことはなさいませんでした。

あの人の提案で私も同意したのですが、ローン荘（この州にあるM卿の別荘をそのように呼んでおられました）の近くにある宿に落ち着くことになりました。ローン荘に行くのは気が進まないとお話ししたからです。この宿では、二時間ほど独りだけにしてもらいま

した。貴女宛の手紙をもう一通（大層疲れてはおりましたが、セントオールバンズで書き始めました、あの身の上話のことです）、それと、無事でいることを家族に知らせ（皆が知りたがっているかどうかは別といたしまして）、衣類と特に選んだ何冊かの本、それに、書き物机に置いてまいりました、例の五十ギニーを送ってもらうよう、姉にも一通手紙を書きたいのだと申しました。

送り先はどこにするか考えてあるのかと、あの人は尋ねておりました。

私はまったく考えてないと答え、何しろ不慣れなものですから、と言いかけました。

自分もそうだと、あの人は私を遮り、たまたま思いついたことなのだが、と続けようとするのです。

悪い人です。作り話に決まっています。

「だが、マダム、ひとつ手をお教えいたしましょう。ロンドンへ行くお気持ちはないとしても、やはり、貴女はロンドンにおられるのだと、お身内の方たちに思わせるのが最善なのです。そうなれば、貴女を捜し出そうという気持ちはすっかりお捨てになることでしょう。手紙をお出しになるのなら、届け先をソーホースクェア近くのオズグッド氏宅留めとしていただきたいのです。オズグッド氏は信望の厚い人物ですから、皆さんを欺くには効果的でしょう」　あの人が言っておりました。

「皆を欺く」だなんて　…　だれを欺くのかといえば、父なのです。おじたちのことなのです。でも、致し方ないのです。ご覧のとおり、あの人のほうではすべて対策済みというわけですからね。

別に異存もありませんでしたから、そのとおり手紙を出しました。でも、どのような返事が届くのか、果たして返事をもらえるのか、少なからず気の揉めるところです。

ただ、慰めになることも一つございます。つまり、仮に返事が来ましても、それも、兄の筆になるものだといたしましても、ここしばらく兄と姉から受けておりました仕打ち以上に惨いものにはなり得ないと思うのです。

ラヴレースさんは一時間半ほど外出しておりました。お帰りになると矢の催促で、私の部屋へ通して欲しいと、四度も使いを寄越すのです。その都度、忙しいと答えておりましたが、最後には、食事の用意が整うまでは手が離せないと申しました。すると、時々あの人の声が聞こえてきたのですが、ひどく汚い言葉でコックや給仕たちを罵りながら、食事の仕度を急がせているのです。

これもあの人の嗜みの一つというわけです。後ほど、食卓につきました際には、慎みのない言葉遣いのことを思い切って窘めてみました。

ご自分でも有能なことを認めておられる召使ですのに、階下でその男を口汚く罵っているのが聞こえていたものですから、「宿屋のご主人たちの暮しも楽ではないのですね、ラヴレースさん」と、私は申しました。

「いやいや、結構楽なものだと思いますね。それにしても、他人様の費用で飲み食いをしている連中ですよ。やくざな宿屋の亭主連中のことを同情に値するなどとお考えになるのは何故です」

「兵隊さんのことがあるからですわ。宿を提供しなくてはいけませんのに、兵隊さんというのはとんでもない放蕩者なのが普通のように思いますもの。そうでしたわ」と、私は申しました。「つい今し方のことですけれど、本当に呆れてしまいましたわ。一人の兵隊さ

んがとても汚い言葉で罵っていたのです。相手の人は、静かな口調や丁寧な受け答えから判断いたしますと、控え目でおとなしい人なのでしょうね。〈騎兵のように毒づく〉という常套句がございますが、言い得て妙ということですわね」とです。

あの人は唇を噛んでおりました。立ち上がると、くるりと踵を返し、鏡のところへ向かいました。そして、自信たっぷりに恥じ入りながら、とでも申しましょうか、「いや、そのとおりです、マダム。兵士というのはけしからん悪態をつきますからね。上官が懲らしめるべきだと思いますよ」と言っておりました。

「間違いなく懲罰に値しますわね」　私が答えました。「口汚く罵るのは、最も男らしくない悪癖ですもの。呪いの言葉を使いますのも、同じくらい見下げ果てたことですし、下品ですわ。力の無さと邪な心とを同時に表明していることになりますからね。と申しますのも、そのような者が言葉どおりの酷い仕打ちをして憚らないというのでしたら、悪魔みたいなものですからね」

「まことにもって見事なお考えですね、マダム。今度兵士が罵ったり呪ったりしているのを耳にいたしましたら、何とも男らしくない、実に見下げ果てた奴だと言ってやりましょう」　あの人が言っておりました。

ラヴレースさんの言い方では、表敬のためということになりますが、グリーム夫人がやってまいりました。卿のお屋敷へ来てもらいたいとしきりに勧め、こんなことを教えてくださいました。卿とお二人の姪御さん、そして、ご一族の皆さんが、私についてとても素敵なことを話しておられるのを耳にしていたとか、これで、間もなく実現されることになると思うけれど、皆さんは、ここ数ヶ月、私とお近付きになれるなら有難いと、どれほど願っていたことかとか、そういったお話でした。

このお話で、私も少しは安心いたしました。とても善良そうな女性の口から、ラヴレースさんのおっしゃっていたことすべての確認が得られたわけですからね。

人目に付かない貸間の心当たりを尋ねますと、夫人はそこから八マイルほど離れた場所にいらっしゃる、義理の妹さんを勧めてくださいました。今私が滞在しておりますところです。さらに嬉しく思いましたのは、シェーズに乗り込む段になりまして、ラヴレースさん自身の提案でしたが（夫人があの人の言葉にすこぶる従順なのは看て取れました）、夫人を同席させてくださったことです。あの人自身は、ご自分の召使二人、それに、M卿のところからまいりました召使一人と共に、馬で進まれました。そして、四時頃、私たちはここに到着したのです。

でも、この前の手紙でもお話しいたしましたとおり、不便な下宿です。実際、ラヴレースさんも大層非難しておられまして、グリーム夫人に向かって（私たちに似つかわしくないものだということは、夫人もおっしゃっていたのです）、聞いていた話にさえも及ばない代物だと言っておられました。町からは一マイルあり、何かあったりすると困るので、そんなに私から離れているのは適当でない。それに、それぞれの部屋も十分に独立したものになっていないので、とても私の気には入らないはずだ、というのです。

あの人からの言葉としては、好ましいものだったに違いないと、貴女はそうお考えでしょうね。

シェーズの中では、あの人のことについてグリーム夫人とたっぷり話し合いました。私が尋ねますことすべてに、気軽に屈託なく答えてくださったのです。それに、とても真面

目な性質の人のように思います。

私が誘いますままに、次のようなお話をしてくださいましたが、その中には、M卿のお屋敷から解雇された管理人が前に言っていたことに近いところもございますから、どうやら、召使の人たちはすべて、あの人については似た見方をしているように思われます。

〈ラヴレースさんは心の広い人だということ。あの人に対する卿の使用人たちの姿勢については、敬愛の念が強いのか、それとも恐れの気持ちのほうが強いのか、容易には言い難いということ。卿は大層あの人を愛しておられ、高貴な叔母様お二方の愛情もそれに劣るものではないし、従姉妹のモンタギュー様たちもどこのどなたにも負けないほど気立ての好いお嬢様たちだということ。M卿が、また、セアラ夫人とベティ夫人も、あの人が私に求婚なさる前から、そして、私と身内の者たちの気持ちをあの人に向けるのは無理と悟られた上で、その後でも、いくつも縁談を持ち出しておられるのだけれど、あの人が話しておられるのを聞いたところでは、私以外の女性とはまったく結婚する意思がないということ。卿にしても、お二人のご夫人方にしても、あの人が私の身内から受けたひどい仕打ちのことを大変気に掛けておられるけれど、私の人柄にはすっかり感心しておられ、あの人に対する私の影響力のことを考え、他のだれを差し置いても、この私と（例え一文無しでも）結婚してもらいたいと願っておられるということ。ラヴレースさんが放埒な若者なのは確かだけれど、放蕩などというものは自然に治る病だということ。卿は、ご一緒出来る時はいつでも、あの人とのお付き合いを楽しんでおられるけれど、お二人はよく喧嘩をなさり、降参させられるのは決まって卿のほうで、実際の話、あの人のことを半ば恐れていらっしゃるものと思う。何故なら、ラヴレースさんはご自分の思いどおりのことをなさるからだ〉といったことです。夫人は、授けられた才能に見合った生き方をあの人がなさらないことへの無念さを、何度となくお話の中に織り込んでおりましたが、改心の礎となる優れた資質に恵まれており、めでたく改心された暁には、すべての償いをなさるはずだと主張しておりました。お身内の方々もこの点は強く確信しておられるのであって、あの人が結婚なさるのを何よりも切望しておられる、とのことでした。

このお話でもあまり芳しいものとは申せませんが、それでも、兄があの人について話しておりましたことよりはマシだと思います。

この家の人たちは、見たところとても正直そうで働き者です。女将さんの名はソーリングズさんと言い、農場には家畜も多く、経営はうまく行っている様子です。未亡人で、息子さんが二人おりますが、成人しており、互いに競い合うようにして、家運の隆盛に努めております。そして、二人共、姉にあたる慎ましやかな二人の娘さんを大切にしておりまして、その様子はすでに目にしておりますが、自分の妹に対するこれまでの兄の態度よりも丁重なものです。

ここには、当初考えておりましたよりも長く逗留しなければならないと思います。申し遅れましたが、こちらに向けて発ちます前に、思いやり溢れるお手紙を受け取りました(ア)。大切なお友達ですもの、どれを取りましても心温まるお言葉ばかりです。

あの人と一緒に家を出る気はないと、強い決意のほどをお知らせいたしました後のことですし、私が実際に家を捨てたことを初めて耳になさいました時には、驚かれても当然と

（ア）第二巻の手紙四十六（二）を参照のこと。

思います。まったくの話、陥れられてのこととは申せ、このように奇妙な行動に走りましたのが本当に私なのか、時には自分でも信じられないほどなのです。

ラヴレースさんの途方もない饒舌ぶりにつきまして、評価を高めたようなことはございません。私のことを褒めちぎるのです。お世辞が多すぎます。本当の敬意、本当の評価というのは、言葉で伝えるものではございません。言葉では表せないものなのです。私たちの大好きなシェークスピアが詠っております

厚かましくも無遠慮な雄弁さの
その立て板に水のごとき饒舌（三）

よりも、言葉にならない畏敬の姿勢、控え目で不安げなまなざし、そして、ためらいがちな口調のほうが、はるかに本当の敬意を表しているのです。

実際、あの人には、これはあの人の言い回しの一つなのですが、「恍惚の境地」を彷徨うことが時としてございます。でも、こう申し上げねばならないのは恥ずかしいかぎりですし、心の乱れる所以なのですが、あの人が有頂天になる原因はどこにあるのか、私にはいやというほど分かっているのです。一言で申しますと、勝利の喜びということです。そして、そこに原因を求めたりいたしますのは、自分の虚栄心をさらけ出すことになりましょうし、また、愚を認めることにもなってしまうのです。

あの人のスパイがよこしました手紙に基づいたものなのですが、追っ手の件が私たちの不安の種になっております。

同じ行為が是認されますのも非難されますのも、本当に状況次第ということですね。自分自身のことが問題となります場合には、善悪の見分けを誤らないためにも、大変な注意を払わねばならないということです。父の召使を買収したということで、私はラヴレースさんを非難いたしました。そして今では、そのような悪事にいわば間接的な是認を喜んで与えようとしていることになるのです。その手段によってであれ、他のどの方法によってであれ、私の失踪に対する身内の者たちの受け止め方について、どのようなことを聞いておられるのか、それをあの人に尋ねているのですからね。皆の目には、示し合わせた上での、大胆な、手管を弄した失踪のように映るのは疑いのないところです。そのことを考えますと、本当に辛くなってしまいます。でも、このような立場では、どうして皆の間違いを正すことなど出来ましょう。

あの人がおっしゃいますには、深刻この上ない受け止め方を皆はしているが、悲しみよりは怒りのほうを露にしているとのことでした。また、あの人自身に対する兄の毒舌ぶりや脅し文句はとても聞き捨てに出来ないものだということで、ご自分の辛抱の良さについて手柄顔をなさるのです。

自分の無思慮さを顧みますと、まことにもって忸怩たる思いがいたします。私は害を為したのではなく、むしろ被害者なのだと、そして、私が皆への義務をないがしろにいたしましたのよりももっと（孝養を尽くさねばならない場合のことですが）、私に対する思いやりが他の者たちには欠けていたのだと、今もそんなふうに言えるのでしたら、どんなにか嬉しいことでしょう。

でも、何てみっともないことをしてしまったのでしょうね、私も。あんな女たらしと落

ち合うなんて　…　すべてが可能なかぎり幸せな結果を迎えるといたしましても、一生涯続きます後悔の種を、自分自身のために積み上げてしまったわけですもの。

さらに不安な気持ちに駆られますのは、顔を合わせますたびに、どう理解したら良いものか、この人がますます分からなくなってしまうことです。表情の動きをつぶさに観察いたしますと、そこにはとても推し量り難いものがあるように思うのです。本当にそう思うのですが、これまでよりもずっと意味ありげな顔付きをなさいます。でも、前よりむずかしい顔ではありませんし、明るさに欠けるわけでもございません。どのような表情とも申し兼ねるのですが、以前よりはるかに自信に溢れております。もっとも、自信に欠けるなどということは、あの人には一度だってありませんでしたわね。

でも、こういうことだと思います。軽率な真似をしたため、あの人に頭が上がらなくなってしまいましたのを自覚しておりますから、今は恐れを抱いてあの人を眺めているということです。あの人が得意顔をなさるのも当然なのです。私に目を向けますと、尊敬されることに慣れた人間の外観を飾り、気分を高揚させることにもなります、あの勝手に思い上がった気持ちがすっかり影を潜めておりますし、今では、自分のほうが劣っているという意識から敗北を認め、また、男性のお世話に与るとでも申しましょうか、そんな立場にありますのを認めているものですから、その男性のほうでは、私の好意を嘆願する謙虚な求婚者の立場でしたのに、保護者として偉ぶり、尊大な態度を装うようになっているというわけなのです。

この手紙も前のと同じように、毎日行商で歩き回っております、貧しい男の人の手を煩わせましてお送りいたします。ご指示のございましたように、ノールズ夫人のところに届けてくれるはずです。

父母のこと、二人の健康状態、また、私の失態に皆はどのような気持ちになっているのか、こういった点につきまして、何かお聞き及びでしたら、ほんの二、三行で構いませんので、お返事を使いの者に持たせていただきとうございます。待機しておりますのにお気づきの場合で結構です。

私の身の上話のうちの、すでにお届けいたしました部分に目を通されまして、どのようにお考えでしょう。この惨めな私に少しでも酌量の余地はございますでしょうか。お尋ねするのが怖く感じられます。

貴女の幸せ薄い

クラリッサ・ハーロー

手紙　三

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

四月十一日　火曜日、十二日　水曜日

我が女神との間での出来事はすべて、可能なかぎり詳細に記すと約束したが、その約束を果たせとの仰せだな。確かに、筆の冴えを発揮するにしても、これほど華やかな話題はいまだかつて無かったことだ。おまけに、時間のゆとりもあるのだよ。実は、彼女のご厚意によって、最も卑しい奴隷の分際で東方の君主に拝謁を願うのと同じほどに、彼女に近

づくのは難しくなりそうだからだ。それゆえ、この上必要なものといえば、書こうとする気持ちだけだな。われわれの友情を思えば、そして、白い牡鹿亭に馳せ参じてもらった恩義もあるのだから、断るわけにも行くまい。二言なきよう努めることにしよう。

知ってのとおり、貴公ら一同と別れる際には、彼女がまたぞろ俺を失望させたりすればの話だが、貴公らとの再会を固く心に決めていたのだ。あの陰鬱な父親のところへご同行を願うためだよ（こけ威しにわれわれの召使を伴ってな）。俺の人柄について好き勝手なことを言っている件に関し、暴君に会見を求めるつもりだったのだ。手短に言えば、チャーミングな娘に今少し思いやりをもって接するよう、また、俺をもっと丁重に扱うよう、出来ることなら正々堂々たる手段を用いて奴の考えを変えさせようと思ったのだ。

約束撤回の手紙を探しに行かない理由について、貴公には話してあったが、それで正解だったのだよ。もし取りに行っていたとしたら、そのとおりのものを見つけ出していたことだろう。それに、そんなものを受け取りでもしたら、会ってくれなかったはずだ。一度ならず期待を裏切られてきたというのに、その俺が約束の履行を求めずにいるなどと、彼女は考えただろうか。これだけ彼女を深入りさせているというのに、あの約束に縛りつけずにおくとでも考えただろうか。

戸口の閂が外れる音を聞いた途端、彼女は俺のものと確信した。戸が動くと、心臓は喉元まで飛び上がったよ。だが、それに続いて、眩いばかりの光を投げ掛けつつ我が魅惑の君が優雅な身形で、旅仕度こそ一切ないが、一気にその姿を現した時には、この身は中空を駆け、現身のさだめをほとんど忘れるほどだった。

一見して俺の目に映った彼女の姿、そして、つぶさに観察した上で分かった実際の姿から、彼女の服装を貴公に判定してもらおう。知ってのとおり、女性の服装に関しては、俺もうるさいからな。着付けの指導をした女は多いし、脱ぐのにも手を貸した。だが、この淑女には途方もない優雅さが生まれつき備わっている。卓抜無比の存在として俺の頭に浮かぶものの、そのすべてを凌駕しているのだ。衣裳が身体を飾っているのではない。肢体が服装を引き立てている。それこそが彼女の卓越したところなのだよ。

そこで、衣裳に包まれたその見事な肢体を、おぼろげながらスケッチして進ぜよう。

臘を思わせる滑らかな肌は（彼女といえども、やはり生身の人間だと思うのだが）、そのきめの細かさといい張りといい、健康そのものであることを示している。俺が彼女の肌の艶を誉めそやすのは、貴公もしばしば耳にしたことだろう。あのように輝くばかりの白い肌には、かつてこれまでお目に掛かったためしがない。百合だの新雪だのを口にするのはナンセンスというものだ。彼女が身に着けているローン[四]やレースなら、そういったものになぞらえても構わないだろうな。だが、そんな不自然な譬えが通用するような顔色の女などは、白く塗りたてた壁みたいなものだよ。ところが、この淑女はひたすらに輝きを放ち、心を魅了して止まぬ生身の姿なのだが、抜けるように透明な肌をしているゆえ、露出しても世のしきたりに背くことにはならないその美肌のあらゆる部分で、曲がりくねった血管の一筋一筋が透けて見えるのだ。

手を加える必要もなければ髪粉の助けも要らない、あの眩いばかりの波打つ巻き毛についての描写も、貴公は聞いているはずだ。それ自体が飾りなのだ。どんな装身具をもってしても及ばない。譬えようもなく美しいうなじと戯れているのだよ。

頭飾りはブラッセルレース製のモブキャップで[五]、魅惑的な容姿にも顔立ちにも特に

よく似合っており、空色のリボンが華やかさを添えている。肌寒い天候なのだが、帽子も頭巾も被っていない。好んで身体をいじめているということもあるが（そうすることによって、また、真に模範となるような節制のお陰で、元来はひ弱だったのだが、壮健な身体を作り上げたと言われている）、約束を守り通すつもりはないことを示そうとの意図もあったらしい。あゝ、ジャック、これほどの愛くるしい娘が不正直を働くとはなあ …

彼女の部屋着は薄黄色のポードソアで（六）、袖口と縞模様の部分には、このどこまでも魅惑的なアラクネー（七）の指になる丹念な刺繍が施されている。スミレとその葉をあしらった連続模様だが、花の輝部には銀糸、葉には金糸が用いられている。両の耳を飾っているのは一対のダイヤだよ。あの比類のない同じ指で織り上げられた純白のネッカチーフの下に隠れているのは … あゝ、ベルフォード、さらに比類なき美がその下には隠れているのだ。馬車を急がせている間ずっと、俺は見ていたのだ。波打つ胸が（激しい動悸のゆえに目に留ったのだが）美しい覆いの陰で踊っているのをな。

フリルはモブキャップと同じ生地。エプロンは花柄のローン。上着は白のサテンで刺し子縫いだ。靴は青のサテン地で同色の編み紐を結んであるが、モールは施してない。何しろ、この世で一番美しい足だ。飾りなど要るはずがない。もっとも、上品なバックルが付いているし、魅力的な両の腕には、黒いベルベットの手袋風のマフを一対着けている。お手製のものだ。ファッションを生み出すのも流行らせるのも、彼女次第なのだよ。ベルベットにも負けないその滑らかな両の手は、何にも覆われていない。彼女を崇拝する者の掌中に心置きなく包み込んでもらうためだよ。

閂が外れ、長いこと待ち佗びていた女神の姿が現れた時の俺の喜びがいかほどのものであったか、それはすでに話したとおりだ。最初の数刻を経た後の彼女の感情のほうは、もっと淑やかで女らしいものだった。つぶらな瞳に燃えていた火の勢いが弱まり、やがて力なく眩さも失われて行った。身を震わせていたが、かつて覚えのないほどに乱れる心をどう支えたら良いものか、分かりかねるという風情だ。気を失って危うく倒れかけるところを、この両腕で俺はしっかりと抱き止めてやったのだ。まさしく得難い瞬間だったな、あれは。高鳴る二つの心臓がぴったりと、優しく寄り添ったのだからな。

前にも言ったとおり、旅に出る気持ちなどまったくないことは、彼女の服装で分かったよ。またもや俺の望みを砕くつもりなのだと睨んだから、引き摺ってでも連れて行こうとしたのだ。そこで争いになったわけだが、これまでに女と起こした中では最も激しいものとなったよ。彼女には途方もなく骨が折れたことを聞かされれば、親友として、貴公の心も痛むことだろう。頼んだのだ、俺は。懇願した。跪いたよ。自分から言い出した約束を守ってほしいと請い願ったが、無駄だったのだ。どんな相手なのかは知っての上だし、幸い、争いが起きた時の用意はしてあったわけだが、それがなければ、目論見は失敗に終わっていたに違いない。そして、彼女と一緒に中に入ったのも確かだろう。貴公ら一同を伴わずにな。そうなれば、どんな結果を招いていたか、だれにだって分かりゃしない。

だが、俺の律義な手の者が合図に応じてくれたのだ。俺が指示していたことは貴公も知っているわけだが、例のやり方に従ってだよ。もっとも、期待していたほど早くはやってくれなかったのだがね。そこで、俺は大声を上げた。「やってきますよ。連中がやって来るのだ。さあ、急ぎましょう。急ぐのです、愛しい人」と叫びながら、派手な仕草で剣を抜いてみせたよ。仮想の邪魔者を五十人は殺してやると言わんばかりにな。そして、彼女の

震える両手を握り締め、先に立って一目散に走った。俺の足には愛の翼が生えているのだよ。恐れに乱れた彼女の足取りと歩調を合わせるのは容易な技ではなかったがね。とにもかくにも、俺はこうして彼女の皇帝となったわけだ。

すべては会った時に話すことにしよう。俺の苦労のほどを、また、彼女の強情ぶりも判断してもらいたい。そして、共に喜んでほしいのだよ。我が心を魅了する、かくも用心深く油断のない女性に対する大勝利をな。

だが、もう貴公の目には浮かんでいるのではないだろうか（今も俺の瞼には焼き付いている気がするのだがね）。愛から愛へと、風よりも速く身を踊らせる麗人の姿がだよ。こんなゲームはないのだろうか。断固離れまいと心に決めた家族の元から、絶対に同行はしないと決意していた男の元へと飛んで行くのだからな。女の性というやつだよ。とことん女なのだな。その矛盾しているところが魅力というものだ。アハ、ハ、ハ、ハ　…　ちょっと待て。待ってくれ。腹を抱えるのだ。ペンを置かせてくれ。ひと笑いしないことには発作が治まらん。

∴

∴

なあ、ジャック、本心そう思うのだが、ハ、ハ、ハ、俺は気が触れたと、家来どもは結論するだろうな。本心そう思う。奴らの一人が今顔を出したところだ。俺はどこが悪いのか、それとも、だれかと一緒なのか、確かめるみたいにな。奴さんも笑いながら出ていったよ。ハ、ハ、ハ。恥知らずめが。あゝ、ジャック、俺の得意のほどを分かってくれるなら、貴公が笑いに加わってくれるなら、俺はさらに一時間笑い転げることだろうな。

だが、あゝ、我が最愛の麗人よ、警戒も実りなく、そなたは出し抜かれてしまったわけだが、その手段のように考えておられる奸計のことを嘆くには及ばない。新たなる術策を呼び起こさぬよう、注意なさることだ。そなたに相応しく、さらに陰険なものとなるかもしれないのだよ。そなたの皇帝が一度〈失脚〉との判決を下せば、そなたは大きく身を落とすことになるのだ。可能性はあるわけだが（というのも、俺の改心を納得出来るまでなどと、長々と結婚を先送りなさるからだが、それは何故なのかな）、そのような事態になれば、請け合っても構わないが、そなた自身のことよりも、そなたの星回りの悪さを座して嘆くことになるのは必定なのだ。万一の事態を迎えるとしても、そなたには名誉ある条件を与えるつもりだよ。〈思慮〉将軍に率いられ、しんがりには〈細心〉司令官を配したそなたの守備隊には、これだけ勇敢に抵抗を重ねたことでもあり、戦功に相応しい堂々たる行進を許すことにしよう。そして、俺様の戦略とそなたの行動を耳にするすべての女性、また、すべての男性は、砦が立派に防御されたのと同じく、見事に攻め落とされたのを認めることになるのだ。

貴公の声が聞こえるようだよ。「これほどの女神のことだぞ。まさか、あのような美質に相応しくない水準にまで引きずり下ろすつもりではあるまいな。あれだけ厳粛な誓いを立て、断言したのだ。反古にするなど考えられないことだぞ、ラヴレース」とな。

そのつもりがなかったのは確かだ。そのつもりがあるとも言えないな（俺の心が、彼女への崇拝の念が、それを許さないのだよ）。だが、枷をはめられた状態が俺は大嫌いだということを知らないのかな。しかも、彼女は我が手中にあるのではないのかな。

「それじゃあ、ラヴレース、あの力を乱用しようというのだな、例の　…　」

例の何だと言うのだ、ベルフォード。彼女の同意を得てではなく、意に反して手に入れたものだと言いたいのだな。

「ただ、彼女がどの男よりも貴公のことを重んじていたのでなければ、絶対に得られなかったものだ」ともな。

だが、俺にしても、どの女よりも彼女を愛していたのでなければ、これほど骨を折ったりはしなかったはずだ。それでおあいこなのだよ、ジャック。それに、信義に訴えるというのであれば、お互い様であるべきではないのかな、信義というやつは。お互い様のことだとすれば、互いを信頼し、相互に心を開き合うことが含まれるのではないのかな。だとすれば、自慢すべき何ほどのものを彼女から得たと言えるのだ、この俺は。われわれの闘争の経緯については、貴公も承知のことだろう。まさしく戦争だったからな。恋の駆け引きなどとはほど遠いのだ。彼女の側にあるのは疑念、不信、非難の言葉で、俺の側にあるのは、ただただ浅ましいばかりの屈辱だよ。精一杯改悛の素振りを装わねばならないものだから、貴公の従者は一人残らず、俺が本気で改心するのではないかと心配したほどなのだ。それに、貴公自身もしばしば所見を述べてくれたのではなかったかな。彼女には会えず終いだったわけだが、父親の屋敷の庭の塀から一マイル以内のところをぶらついてきた後では、普段の陽気さを取り戻すのに、俺はひどくぎこちない様子だった、とだよ。

これらのすべてに対して、彼女に償いを求めるのが当然だろう。真っ正直な人間に偽善者の姿を装わせるとはな。まったくもってひどい話だよ。

それに、彼女がいかに信の置けない小悪魔であったのか、貴公も知っているだろう。平気な顔で俺の望みを砕いてしまうのだ。貴公も目撃したのではなかったかな、そのことで気も狂わんばかりになっている俺の姿をだよ。狂乱の果てのことではなかったのかな、不実な魅惑の君への復讐を誓ったのは。もし、彼女の期待に応えるのか、それとも、己の意向に従うのか、嘘でも誓いを立てろと言われれば、そして、選択はこちらの自由ということであれば、どちらを取るか、一瞬の躊躇もないはずだ。

それに、警戒怠りない姿勢や、絶えず嘆き悲しんでいるところからして、どうやら、彼女は俺から危害を加えられるものと思っているらしいのだ。俺としては、相手の期待に背きたくないのだよ。高く買っている相手ならだれでもな。

それにしても、あゝ、何と高貴な、何と気高い女なのだ。だれであれ、彼女に悪さを企む時、ためらわずにいられる者がどこにいるのだ。憐れみを覚えない者など　…

だが、もう一方では、ライバル視すること自体が俺にとっては恥と思えるような男を相手に、無理やり結婚の足枷をはめると脅されながら、いよいよとなると、一か八かやってみるのにあの嫌がりようだ。そして、踏み切った今では、あの仏頂面なのだ。憐れみはお断りというのだからな。

ただ、どちらとも決めてはいないのだよ、俺は。彼女の心の動きを見守るつもりだ。俺の気持ちについてもな。正々堂々たる戦いの場を用意したいのだ。それはともかく、会うたびに思うのだが、彼女はなかなかこちらの意のままにならず、俺のほうがあちらの言いなりになって行くような気がするのだよ。

だが、何と愚かな小悪魔なのだ。この俺に向かって、品行方正な男になるまでは結婚の

ことは考えるなとの仰せだ。家族の中の無慈悲な連中が性根を入れ替え、慈悲の心を知るようになるまでは駄目だというのだからな。

勿論、こういった条件を持ち出そうとしていた時点では、彼女としても思いつかなかったのが事実なのだろう。条件など一切お構いなしに「欺かれ、自分を見失ってしまう」ことになるなんてことはな。実は、その場所に来てから話しても良いのだが、愛しの君の言い回しがこのとおりのものなのだよ。

これだけ警戒怠りない美女を出し抜くことが出来たのだ。誇らしさに胸もはち切れんばかりだよ。半ヤードばかり背丈が伸びたような気もする。今では、誰彼なく見下ろしているわけだが、昨夜などはさらに途方もない考えを抱いてしまったよ。歩いている途中で帽子を手に取って調べてみたのだが、星を一つ擦り落としたような気がしたものだから、モールでも焦げたのではないかと思ったのだよ。被りなおす前には、ただの戯れ気分と気休めにだが、お月様に向かって一、二発お見舞いしようとしたくらいなのだ。

要するに、心の隅の隅まで歓喜に溢れているということだ。ベッドに入れば、笑いながら眠りに就く。目覚めるのも笑いとともに、あるいは、歌いながらだ。だが、差し当たっての予定も何一つない。というのは … 何故だと思う … 俺はまだ十分には改心していないということさ。

覚えていてくれるかな。当時話してあったことだが、父親の屋敷からいったん彼女を連れ出すことになれば、この制約がそっくりあの几帳面すぎる可愛い子ちゃんの身に降りかかるのは、十分にあり得る話だということだよ。家族の罪深い振舞いのことがあるし、彼女自身がとてつもない世話を掛けてくれたということもあるから、俺のほうで彼女を罰する気になったりすれば、ということだがね。彼女には思いつかないのだよ。俺がその両方について、帳簿をつけていることはな。そして、情にもろくなり、すっかり彼女の気持ちのままになっている時でも、控えに目を通しさえすれば、すぐにも俺は冷酷非情になることが出来るのだという点もだ。

あゝ、魅惑の君よ、ご注意あれ。その尊大な態度を和らげるのだ。俺には愛を感じないというのなら、その表裏のない心を誇りにすべきではない。もはや容赦するつもりはないのだ。そなたは我が手中にあるのではないのかな。また、愛しているというのなら、女特有の手口ではあるが、その愛を否認するような振りをすれば事足りるなどと、もうそんな考えを持ってもいけないのだ。俺のように誇り高く、嫉妬深い心の持ち主が相手なのだからな。さらに覚えておいてもらいたいのは、家族全員の罪業がそなた自身に負わされているという点だよ。

だが、あゝ、ジャック、我が天使の尊顔に接すると、この眩いばかりの美女の御前に進み出るのを許されると、これだけの空威張りも一体どんな体たらくになってしまうというのだろうか。

ただ、麗しの君よ、俺様の目的が何であれ、そなたには鋭い眼力があるわけだから、密やかに事を進めねばなるまい。公明正大に、そして、穏やかにだ。妻にするのは何時でも出来る。結婚は常に俺の気持ち一つということだ。

大学に入った若者の場合も、同じ基礎教育の課程を学んでも、専攻分野は違ってくるものだ。法律家になるのも聖職に就くのも、あるいは、医者になるのも、才能次第ということなのだ。従って、怠りなく目を配った用心深い振舞いは同じでも、妻の座につながるこ

ともあれば、妻ならぬ身に終わることもあるというわけだ。改心出来たら結婚しよう、妻となるにはまだ間がある、というのがお嬢さんの言い分だろう。もう一方のためにもたっぷりと時間はある、というのが俺の言い分さ。

それにしても、何というとりとめのない文章だ。それも致し方あるまい、この状況ではな。どう心を固めたものか、見当もつかないのだよ。

どのように気持ちが傾いて行くのか、成り行きのままに報告することにしよう。賛否の両面を語るつもりだ。だが、書き始めた時とはずいぶんかけ離れた方向へ話が進んでしまった。ここでひとまず筆を置くことにしよう。ただ、毎日何か筆にするだろうから、機会のあり次第送り届けることにする。

ただし、何を書くにせよ、前後関係だの正確さだのは無視するつもりだ。一切のことにお構いなく、ただただ、皇帝のごとき我が心の命じるまま、気持ちの赴くままに筆を進めることにする。

手紙　四

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

四月十二日　水曜日　夜

貴女の身の上話、拝受いたしました。心の気高いお方ですわね。これまでと何の変わりもございません。偽ることも手管を弄することもありませんし、過ちを軽くしようともなさいません。

これほどのお嬢様をここまで追い詰めることが出来る家族なんて、確かに、この世界に一軒だけ、きっとお宅だけなのでしょうね。

でも、皆さんのことを好意的にお受け止めになるのも、あまり度を越してはいけませんわ。この件につきましてもね。

間違いの発端を〈あの男と会ったこと〉に求めておられますが、正しく的を射ておりますし、大変潔いお言葉ですから、どれほど貴女に敵意を抱いている人たちからにせよ、お書きになったものを目にした上で、この点への付言は一切ないものと存じます。

貴女の身の上話を読ませていただきましたが、別に驚いてはおりません。あれだけ大胆で、悪知恵の働く男ですもの　…　やむなく中断いたします。

ヾ　　ヾ

貴女のほうがずっと立派に、そして、ずっと長いこと耐え抜かれましたわ　…　またやって来たのです。忙しげな、油断のない母が。

ヾ　　ヾ

ご自分のことをそんなに責めてはいけませんわ。その時点で最善と思われることをなさったのではありませんか。あの男の手紙に返事をお出しになるという、貴女の最初の過ち

にいたしましても、あのようなご家族の守り神という立場を装いますのは、貴女にはほとんど避けられないことだったのです。ご家族の中の壮士気取りの人があのとおりの無茶をなさって、ご自分から危険なことに身を晒したりなさるのですもの。

ご自分の思いどおりには出来ないお母様を別にいたしますと、皆さんの中に、常識をお持ちの方はどなたかいらっしゃるのでしょうか。

御免なさいね。でも、あの愚かなアントニー叔父様のことがございますでしょう。お節介で、自惚れ屋で、独断的ですもの。昨日お見えになったのですが、来訪の知らせが伝えられます間、恐ろしく落ち着かないご様子で息を弾ませながら、玄関ホールや客間をうろうろ歩き回っておられましたわ。

母は着替えの最中でした。夫に先立たれた女というのは、独身を守っている男性と同じで、堅苦しいところがございますからね。どうあっても、普段着のままではお会い出来ないというのです。一体どういうつもりなのでしょうね。

叔父様のご用向きは、母を貴女の敵に回そうということでした。そして、貴女の家出のことで、皆さんが激昂していることを教えに来られたのです。これがご訪問の主な目的だったことは、その後の成り行きからも一目瞭然です。

おかしな人で、叔父様は母と二人きりで話したいと言い出すのです。母のところへどんなお客様が見えましても、私、こんなふうに除け者にされたためしはございません。

おめかしが出来上がりますと、母は叔父様のところへ降りてまいりまして、二人だけで閉じ籠もってしまいました。言い出すと引かない二人が頭を寄せ合ったわけですが、おそらくぴったりとだったのでしょうね。夢中で話し合っている様子ですのに、耳をそばだてましても、何一つはっきりとは聞き取れないのです。

二人にドアを開けさせようと、一、二度は本気で考えました。何とか癇癪を起こさずに済む自信がありましたら、中に入れてくれるよう求めていただろうと思います。でも、仮に要求が入れられましても、ここが母の屋敷であることを忘れ、叔父様を追い出したくなるのではないかと、それが心配だったのです。私の大切な大切な、完全無欠なお友達について悪口雑言を吐きに来るのですからね。しかも、そんな暴言に好い顔を見せたり、もしかいたしますと、自分から言葉を添えたりしているのですからね。それも、自分たちの立場を守るためなのです。片一方の人間は、大切なお友達をお父様のお屋敷から追い出すのに貢献しようというのですし、もう一方の者は、仲直りが出来るまで一時避難なさるだけですのに、その場所を提供するのを断ろうというのです。貴女としては、孝養の心から切に望んでおられた点ですし、母にいたしましても、日頃は貴女への好意を口にしていたのですから、仲立ちをするのが当たり前のはずなのです。じっと辛抱をしているなんて、この私に出来る話でしょうか。

先程も申しましたが、その後の成り行きで、ご用の向きがはっきりいたしました。その最初の表れと申しますのは、老いぼれの頑固者が行進歩調で撤退いたしました後「我慢をしていただかねばなりませんわね」、母の態度が何となく陰気な、ハーロー家ばりのよそよそしさに変わったことでした。そして、私が恨みがましいことを二言三言投げつけましたところ、その後すぐに、文通を厳しく禁じられてしまったというわけです。

お察しいただけるでしょうが、このため、私たちの関係は最高に快適とは申せない状態に陥ってしまいました。私は、夢の中で貴女と会うのもいけないのか、教えてほしいと迫

りました。起きております時は勿論、就寝中も、貴女のことで頭は一杯なのですもの。

このように自分が禁止されて分かったのですが、貴女があのろくでなしと文通をお始めになったことも容易に許せる気がいたします（ただし、貴女の動機のほうは立派なものでしたわね）。と申しますのも、こんなことが可能ならばの話ですが、前よりももっと貴女のことが好きになったからです。そして、これまでにも増して貴女との文通を望むようになっているからなのです。

でも、私にはもっともっと立派な動機がございます。困っておられる親友、それも、これほど称賛に値する友人を軽んじるような気持ちになるようでしたら、自分のことは見下げ果てた人間と考えざるを得ないでしょう。それくらいなら、死んだほうがましです。母にもそのとおり申しました。そして、独りでいるところを監視するのは止めてほしいと頼みましたし、毎晩寝室を共にするよう求められるのも迷惑だと申しました。母は以前よりも真剣な態度でそんなことを言い出しているのです。ハーロー邸のベティさんを、私のお目付け役にお借りしたほうが良いだろう、と言ってやりました。

貴女を崇拝して止まないヒックマンさんが、私の知らないうちにですが、貴女のために母と交渉してくれました。それがまた大変熱心なものですから、私もあの人のことをすっかり見直した次第です。

面と向かって反抗するつもりでしたら別でしょうが、今のところは、一つ残らずすべてについて詳しく触れるわけにはまいりません。ただ、朝から晩まで悩まされ続けております。もう五十回も返事をいたしましたのに、同じ事を一時間ごとに繰り返し言われているのです。可哀相に、私の父も辛い生涯だったのでしょうね。御免なさいね。どなたへの手紙なのか、忘れるところでしたわ。

もしもこのラヴレースが、この落ち着きのない、悪さをしてばかりいる猿猴みたいな男が、貴女も疑っておられますように、策を弄するとしたら …… あらあら、またもや母のお出ましですわ。ハイハイ、もう少しだけお待ちいただけますかしら、お母様。勘繰られるだけのことでしょう。待たせたと叱られるだけのことですわ。お小言を頂戴するのは間違いないでしょうね、待たせようと待たせまいと。ねえ、お母様、お母様のやり方ときたら、すっかりアントニー流ですわね。

まあ、どうでしょう …… 何てせっかちなのかしら …… ドアが破れそうなほど叩いているわ …… 今すぐ参りますわよ、お母様 …… 何でまた二重に錠を下ろしたりしたのでしょうね …… 鍵をどうしてしまったのかしら、私 …… 一体どうしたのでしょう、この鍵は …… お願いよ、お母様 …… 慌ててしまうでしょう。

ヤ　ヤ

勿論、ドアを開ける前に便箋は片付けておきましたわよ。実に楽しい話し合いで、母は興奮のあまり飛び出して行きましたわ。

さて、どうしたものでしょうね。降りて来るようにと、ひどく高飛車な調子で仰せがありましたのは言うまでもございません。仮にお届け出来るといたしましても、脈絡も何もない手紙を受け取っていただくことになりそうですね。でも、お届け先は分かっておりますので、ヒックマンさんに使いの者を見つけてもらいます。ただ、気づかれたりいたしま

すと、可哀相にあの人も、ご自分のおとなしい恋人と一緒に、ハーロー家の皆さんからは目の敵にされてしまうことでしょうね。

四月十三日　木曜日

続編のお手紙をちょうど今受け取ったところです。それに、幸いなことに今は、アルゴス（八）みたいに目敏い母も家を空けているのです。

お気の毒に　…　お困りの点は何もかもよく分かります。貴女のように慎み深い若い淑女が　…　それも、あのような男を相手にしていらっしゃるのですからね　…　手短に申さねばいけませんわね　…

あれだけプライドが高く、愛想の良いところがございますし、精々ご意向を尊重しているようにも振る舞っておりますが、あの男は愚か者だと思いますわ。ただ、その場凌ぎの巧みな点は　…

ベティ夫人のところへ行かれるべきだと、そう考えることが時々ございますが、どのように助言申し上げたものか分かりかねるのです。もしも貴女が、お身内の方たちと折り合いをつけたいと、そうまで熱望しておられるのでないのでしたら、一言申し上げることも出来るかもしれません。でも、皆さんは容赦のない姿勢です。望みをお掛けになるのは無理と存じます。叔父様が母のところへ来られたご用向きからも、納得していただけるでしょうし、お姉様からのお返事をお受け取りになれば、おそらくその点を確信なさるのではないかと思います。

貴女の身の上話に目を通しました上で、貴女の取られた行動に少しでも情状酌量の余地があると考えるかどうか、とのお尋ねですが、お訊きになるのを恐れる必要はなかったのです。先にも触れたとおりですが、ご質問をいただきます前に、その点につきましての私の気持ちはお話ししてあります。繰り返しになりますが、貴女がお受けになった挑発や動機のことを勘案いたしまして、貴女に罪はないものと考えております。少なくとも、このような行動を取りました娘さんといたしましては、最も罪のない方だと思います。

でも、貴女がその行動をお取りになったのではございません。一方では、追い詰められた上での話ですし、もう一方では、おそらく欺かれてのことなのです。この世のどんな女性の場合でも、もしも、貴女のような状況に置かれ、一方では迫害者を相手に、また一方では誘惑者を相手に、こんなにも長い間耐え忍んだといたしますと、他のすべての振舞いがどのようなものでありましても、私は許して差し上げたいと思うのです。

お察しのことでしょうが、お知り合いの皆さんが話題にしておりますのは、貴女のことばかりです。素晴らしいお人柄のことを引き合いに出しまして、貴女を責める者も確かにおります。それでも、お父様やおじ様たちを許している人、あるいは、許すことの出来る人など、だれ一人としておりませんわ。

お兄様とお姉様の動機につきましては、皆さんご存じの様子です。お二人が貴女に加えた様々な攻撃によって貴女を家出に追い込むこと、それこそ、疑いもなく、お二人が目指していたことだったのです。ソームズさんを引き立てようとの目論見も、成功は覚束ないわけですからね（いつだってそのはずですわ）。貴女が皆さんのご愛顧を取り戻すようなことになったが最後、お父様やおじ様たちの抑えられていた愛情は、一時的な障害物を突き破った川の流れのように、旧に倍する勢いで戻ってまいりますこと、そして、そうなりま

した暁には、貴女がお二人の手管をすべて発き出し、水の泡にしてしまわれるということも、お二人にはよく分かっていたのです。そして、お二人は今、私の聞いておりますところでは、まんまと思惑どおりになりましたのを喜んでいらっしゃるというわけです。

お父様は怒りに猛り狂っておられます。怒りはご自分にお向けになるのが当然だと、私は確信いたしております。お宅の皆さんはどなたも、貴女が狡猾な手を使ったと責めておられますし、それが首尾よく運んだことで、現に貴女はあの男と一緒になって溜飲を下げている最中なのだと、そんな考え方をなさるようになっております。

今では、皆さん揃って、水曜日の試練を最後にするつもりだったような言い方をしておられるのです。

母が打ち明けてくれたのですが、もしも貴女のほうから折れたりなされば、本当にそこにつけ込むおつもりだったようです。ただし、貴女がどうしても説得に応じようとなさらない時には、皆さんのほうでは計画を取り下げ、ラヴレースと手を切るという貴女のお言葉を受け入れる考えだったというのです。そんな話、だれが信じるものですか。

でも、牧師様がお出でになる予定だったことは、皆さん認めておられます。ソームズさんには待機してもらい、貴女が結婚契約書にサインなさるよう迫るためなのですが、貴女に対してご自分の威光に効き目があるのかどうか、お父様が先ず試してみることになっていたそうです。すべては、突飛な考えにとりつかれている馬鹿なお兄様の、突拍子もない思い付きなのです。疑う余地はございませんわ。お兄様とベルが、長いことご執心だった例の条件以外のどのような条件でも、貴女が再び皆さんのご愛顧に与りますのを手を拱いて見ているなんて、考えられることでしょうか。阻止出来そうだと思っているわけでもありますからね。

貴女の家出に気づいたとき、皆さんがどんな受け止め方をしたのか、それは説明申し上げるより、ご想像にお任せしたほうが良さそうです。

お部屋の取り調べが終わったことを知らせに、最初に蔦の東屋へ行かれたのは、ハーヴィー叔母様だったようです。ベティがお供をしましたが、お姿が見当たらないものですから、貴女が仄めかしておられたことに従い、二人は滝のほうへ向かいました。

庭の木戸近くを通って戻ります際に、召使が一人［あのジョゼフ・リーマンだったとはおっしゃっておりませんが、あの男だったことは十分考えられます］駆けてくるのに二人は出会いましたが、その男が申しますには、ラヴレースさんを追い掛けたのだけれど（大きな杭を手に持って、息を切らしていたそうです）、お宅の人たちに急を告げるために戻って来たところだというのです。

もしも、これが例の男だといたしますと、そして、皆さんと貴女の両方を騙すために雇われた二重スパイだといたしますと、今貴女がご一緒しておられる男のことはどう考えたら良いのでしょうね。もしもそのとおりなのでしたら、お逃げになるべきです。だれのところへだって構いません。それがお出来にならないのでしたら、結婚なさるべきです。

こうして、叔母様も皆さんもこの男の知らせに慌てふためいたのですが、追っ手を出すにいたしましても、時すでに遅し、ということになっておりますのは明らかでした。皆さんが揃いました。そして、捜索隊が出来上がりますと、貴女たちの落ち合った場所へと急ぎました。チャリオットの車輪の跡が残っているところまで、一気に駆けて行った人たちもおりました。そして、現場で例の男が語る一部始終を聞き終わりますと、皆さんは一斉

に嘆き悲しみ、互いを咎める言葉も飛び交いました。それぞれご気性や考えのままに、怒りと悲しみの声が響き合ったのです。そして、皆さん戻って来られましたが、行く時と同様、まるでうつけ者といったご様子でした。

最初、馬と武装した人たちに追跡の準備をするよう、お兄様は指示を出しました。ソームズとトニー叔父様がその一隊に加わる予定でした。でも、お母様とハーヴィー叔母様が思い止どまるよう説得なさいました。災いを重ねることになりますのを案じられてのことです。今回の件では、ラヴレースが自分のための援護手段を講じているのは疑いないと思われたからです。それに、例の下男も断言していたことですが、貴女はラヴレースと並んで、夢中になって駆けておられるご様子だったそうですし、少し離れたところには、武器を携えた男が数人いたとのことですから、なおさらそのように思われたのです。

ヾ　ヾ

母が家を空けましたのは、ノールズ家の人たちが私たちの文通に手を貸すようなことになりはしまいかと、疑いを持ったからなのです。そのことであちらへお邪魔したというわけです。母という人は、何事であれすぐに行動に移してしまうのです。ノールズ家の人たちは、母に断りなく手紙を預かるようなことは今後一切しないと約束いたしました。

でも、ヒックマンさんがフィルマーという人に、手紙を受け取ってもらうよう話をつけてくださいました。私どもはフィンチ・レーンと呼んでいるのですが、私の家の近くにあります小道の傍らに住んでいるお百姓さんです。お手紙はそこへお送りいただきたいと思いますが、宛名は〈ジョン・ソバートン様〉としてください。ヒックマンさんがご自分で受け取りに行き、私の手紙も置いてきてくださいます。私といたしましては、あの人にこんなに役に立っていただくのは気が進まないところもございます。すでに得意満面なのです。大きな顔をするよう、こちらのほうから［もしかいたしますと］促すようなものでしょう。あの人も、長いこと目指して来られた愛顧と引き替えに、とても危険でややこしい状態に陥るかもしれないということはお考えになるべきだと思います。相手の願いを入れることの出来る人でも、その相手を不愉快にさせる可能性はあるのです。一部の人間にとりまして、他人を不快にする力に恵まれておりませんのは、幸せなことなのですわ。

母のせわしない動きが鎮まるものかどうか、出来ることならしばらくじっと見守っていようと思います。でも、誓って申し上げますが、こんな仕打ちを長く我慢するつもりはございません。

時々はそんな考えが浮かんでしまうのですが、母は私を疲れ果てさせ、早目に結婚させようとの魂胆から、こんな振舞いに及んでいるのではないかと思うのです。もしもそのとおりだと分かりましたら、また、点数稼ぎのために、ヒックマンが卑劣な陰謀に荷担しているようでしたら、あの男なんか、二度と目の届くところへは来させませんわ。

貴女のお相手は陰謀家の卑劣漢ではないかとも思うのですが、結婚を済ませておられたなら良いのにと、心からそう思います。皆さんに堂々と立ち向かうためですし、貴女がやむなくお姿を隠したり、次々と不便な場所へ急き立てられたりなさらないようにと思うからです。どのようなものであれ、結婚なさるのに恰好の機会が訪れましたら、その機を逃さずに捕まえることです。これは守ってくださいね。

また母がやってまいりますので　…

ヤ　ヤ

申し上げるまでもなく、恐ろしく不機嫌な顔を突き合わせております。母も、こんな調子で〈ハーロー技〉を仕掛けるのは慎むべきですわ。私だって黙っていませんもの。

書くことがたくさんございます。何から始めたものか　…　胸が一杯で、今にも溢れてしまいそうです。

庭の片隅の人目に付かない場所に逃げ込みました。母に邪魔されないためです。困ったものですね、母親というのは。書き物とか、何でも構いませんが、娘がしたがっていることを疑ったり見張ったり、叱りつけたりすることで止めさせられるとでも思っているのでしょうか。信用して上げるほうがずっと良いのです。寛大な心の持ち主は、鷹揚な態度で寄せられます信頼に付け込むような真似は軽蔑するものですからね。

貴女の役どころには微妙なものがございます。まことに微妙なものです。この卑劣漢が相手ですからね。でも、あの男の前途に、平坦な道はただ一つしかないと思います。ご同情申し上げますが、やむなく引き当ててしまわれた運命とは申せ、最善を尽くされることが大切だと思うのです。ただ、ご苦労のほどが目に浮かびます。それでも、あの男のほうで貴女の信頼を裏切るような態度を見せないようでしたら、貴女もいくらか信用しておられるところを、せめて表向きだけでも、お示しいただけたらと思います。

どこかあの男の手の届かないところに落ち着こうとのご決意ですが、すぐに結婚なさるお考えはないということでしたら、私も賛成いたします。そして、貴女の居場所があの男に分からなければ、はるかに好都合でしょうね。ただ、心から確信しておりますが、皆さんのほうでは、あの男を恐れていない場合、貴女に近づくことさえ出来れば、力ずくでも貴女を連れ戻そうとなさることでしょう。

貴女の地所をご自分のものに出来ますよう、是非とも、二人の管財人の方に要求なさるべきだと思います。それまでは、自由にお使いいただけるお金が手元に六十ギニーございますので、どうぞお申し出ください。すっかりなくなります前に、さらに御用立てが出来ますよう取り計らうつもりでおります。お身内の方たちからは一シリングたりとも、あるいは、貴女の財産のうち一シリング分でも、いただけるようには思いません。貴女が無理やり奪い取るのでしたら別でしょうけれどね。

皆さんは、貴女が同意の上で家を出られたものと思い込んでおりますから、宝石類やお金を残して行かれ、衣類もほとんど用意なさらなかったのに驚くと同時に、喜んでもいるらしいのです。皆さんが貴女のお求めにほとんど応じそうもないのは、このことでもお分かりでしょう。

今でこそ私は承知いたしておりますが、事情をご存じでない方はどなたも、貴女の「駆け落ち」を　…　皆さんそんな呼び方をするのですが　…　どう説明したものか、確かに面食らうに違いありません。それに、少しでも貴女に有利になるような伝え方など、どうして出来ましょう。あの男にお会いになった時にはそのおつもりはなかったのだと申しましても、だれが信じるでしょうか。堅実なお考えや几帳面さで知られた貴女のことですもの、面会に同意なさったのは説き伏せられてのことだと申しましても、どのように聞こえ

るでしょうか。欺かれ、ご自分を見失われたことにいたしましょう。そして、人がその言葉を信用するといたしましても、何とも不面目な話ではないでしょうか。それに、結婚なさらないまま、あの男と一緒におられるのです。しかも、札つきの男なのです。口さがない人たちがどのような考えを持つことになりましても、致し方ないのです。

衣類を請求なさったお手紙の中では、貴女はどのようにおっしゃっているのか、知りたい気持ちです。

お頼みの品を送り届ける代わりに、何やかやと意地悪なことを言って寄越しますのは間違いございません。ですから、お送りいたしますお金を、是非ともお納めいただきたいのです。七ギニーが何のお役に立ちましょう。また、当座の補いのためですが、何とか方法を見つけまして、私の衣類とリンネル類も何であれ、お送りしようと思います。クラリッサさん、お願いです、私の申し出を拒んだりして、貴女のアナ・ハウとラヴレースとを対等の立場にするようなことはなさらないでいただきたいのです。私の願いを入れてくださらない場合には、私に好意を示されることよりも、むしろあの男の世話になりたがっておられるのだと考えたくなってしまうことでしょうね。もしもそのとおりだということになりますと、この一件と他の事柄についての細心のお心遣いとの間にどのように折り合いをつけたら良いのか、分からなくなってしまいますわ。

あの男との間の出来事につきましては、どうぞ、何もかもお知らせいただきとうございます。詳細なご報告をお続けくださいますよう願っておりますが、貴女の身が案じられますゆえの気持ちです（分別がおありですから、無用の心配なのかもしれませんが）。ご一緒させていただいております時でしたらお話しくださいますような、何かそのようなことがございましたら、きっと書き留めていただきたいのです。どんなことでも構いません。もともと遠慮がちな貴女のことですから、筆にするに値するとか、私のほうで知っておく価値があるとか、そのように全然思えないこともございましょうが、是非そうしていただきたいのです。傍観者のほうが、勝負をしている人以上に勝負に目が届くこともございますでしょう。重大な結果というのは、偉い人たちも同じことですが、大抵の場合、その重要性を些細な原因やちょっとした偶然に負うているものなのです。

かいつまんで申しますと、お好きな時にあの男と手を切ることが貴女にお出来になるとは、今の私は考えておりません。そのことは前にもお話ししてありましたね。もう一度言わせていただきますが、私が貴女なら、表向きだけにせよ、少しはあの男に信頼を寄せるような態度を見せるようにすると思います。あの男が慎みを守りますかぎりは、そうなさって構わないのです。貴女ほど敏感な方でしたら、その少しばかりの信頼にも値しないようなあの男の振舞いには、すぐにお気づきになるはずですもの。

アントニーお爺様が母に話し、母が私に教えてくれました話からいたしますと（貴女には何か、皆さんに対しての思惑がおありだと勘繰っておられるのですが、失踪でその思惑を果たすようなことはさせないぞと、脅そうとしておられるのです）、ご親戚の方々は、貴女がベティ夫人に保護をお求めになり、夫人も仲立ちの労を取ろうとなさるはずだと考えているらしいのです。そして、あちらから示される調停案には決して耳を貸すまいと、誓いを立てているのです。どの方面から示されたとしてもと、胸の内をはっきりおっしゃれば宜しいのにね　…　断言しても構いませんが、お兄様とお姉様といたしましては、皆さんに冷静さを取り戻してもらいたくないわけです。少なくとも、おじ様たち、そして、多

分お父様もですが、お二人が望むとおりに財産譲渡を決めてくださるまではです。

これは、次のお手紙をお送りいただきます宛先の変更をお知らせするものですから、ヒックマンさんのお友達の一人で、信用の置ける人に届けてもらうことにいたします。ソーリングズ夫人の近所でお仕事をしており、夫人のこともご存じなのです。今晩、ヒックマンさんのところへ戻って来ることになっております。ですから、発送準備の出来ておりますものとか、準備がお出来になるようなお手紙が何かございましたら、持ち返ってくれることでしょう。月の明るい夜です。貴女のために待つのは厭わないはずです。でも、どの人であれ、ヒックマンさんの召使にお願いして届けてもらいますのは、ここしばらくの間のことですが、好ましく思いません。今は一刻一刻が重要ですし、これからもそうかもしれません。ご決心をお変えになることが必要になるかもしれませんわね。

母が声を張り上げ、まわりの者たち皆を急き立てているのが聞こえてまいります。間もなく私のことを、そして、私が何をしているのかを調べに来るものと思われます。

これでお別れにさせていただきますね。神様が貴女をお守りくださり、お心同様に操も無垢のまま、私のところへ戻してくださいますよう祈っております。

変わることなき愛を込めまして、貴女の

アナ・ハウ

手紙　五

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月十三日　木曜日　午後

いつだって大切に思っておりますし、いつも優しいお心遣いをいただいておりますお友達ですのに、残念ながらお母様との諍いの原因となってしまいましたこと、心配でたまりません。どれほど多くの人たちを不幸にしてしまったのでしょうね、この私は。

間違った道を急いだための失態ではないのだと、自ら慰めておりますが、そのことがなければ、どこのだれよりも惨めな気持ちになってしまうでしょうね。それでも、十二分に罰は受けております。私にとりましては命よりも大切な信望を失くしてしまったのですからね。それに、残酷なまでの疑心暗鬼と困惑を味わっておりますが、それが期待の念とぶつかり合い、代わる代わる勝ち誇ってみせるものですから、その二つの間で心は引き裂かれている状態です。

でも、お母様のお言葉に従って、少なくともここしばらく、私との文通は我慢なさるべきだと思います。私と同じ過ちに陥らぬようご注意いただきたいのです。禁じられておりました文通を続けたのが間違いの始まりですし、あの文通は、こちらの好きな時に止めることが出来るものと思っていたのですからね。私には筆まめなところがございますし、書き物をするのが楽しいものですから、それだけに平気でこんな勝手な真似をしてしまったのです。自分では称賛に値すると思われるような動機もございましたし、身内全員の許しを得てあの人へ手紙を書いていた時期もあったのです(ア)。

(ア) 第一巻の十二頁を参照のこと。

でも、私たちの文通につきましては、お母様にお願いして、続けますのを許していただけるのでしたら、どのような害があるというのでしょうね。素晴らしい思慮分別を貴女は備えておられますし、お便りをしてくださる際にも、私が作ってしまいましたこんな悪い例を模倣なさりたくなるような誘惑は、貴女にはございませんでしょう。私の手紙にいたしましても、時々は、自責の念に溢れたものになっておりますからね。

ご親切なお申し出には心から、本当に感謝いたしております。ご安心くださって構いませんが、お世話になります時には、他のだれよりも先に貴女にお願いするつもりでおります。ラヴレースさんのことを考えるのは最後にいたします。ですから、ご厚意を辞退いたしましても、あの人のお世話を受けるつもりだなどとはお考えいただきたくないのです。

私といたしましては（お手紙のご趣旨にも拘りませず）、身内の者たちが私のわずかばかりのお金を衣類共々送ってくれるものと期待したいのです。少なくとも一部の者には思いやりの心が残っているでしょうから、私がこれほど下賤な苦しみを味わいますのを放っては置けないはずです。皆としては、私の願いを入れますのを急いだりはしないかもしれません。ただ、その場合でも、まだお金に困るわけではございません。落ち着き先が確定いたしますまでは、道中や宿屋の支払について、ラヴレースさんと争ってはいけないとお考えでしょうね。でも、その種の恩義にも、遠からず終止符を打てるように思うのです。

お母様のところを訪ねました叔父についてのお話からいたしますと、和解の望みは確かに少ないと思います。叔父もかつては愛してくれていたのです。なのに、ほとんど味方もおりません者に背をお向けになるよう、お母様にお願いをするなんて　…　でも、和解を目指すのが私の努めではないでしょうか。皆が腹を立てているからといって、意地を張ったり恨んだりして、自分の過ちを大きくして良いものでしょうか。皆にとりましては、腹を立てるのが当然と思えることでしょう。と申しますのも、私の家出は計画的なものだと思っているわけですし、この私が、自分たちが憎悪の的にしている男と共に、家出のことでも、皆に対しましても、勝ち誇った態度を取ることが出来るのだと、そんなふうに思い込まされているのですからね。皆の好意を取り戻しますために力の限りを尽くしました時には、自分を責める点も少なくなるだろうと思うのです。

このような考え方からいたしますと、結婚のことでのご助言をそのまま受け入れますのも憚られてしまいます。それに、私が前に示しました条件のことでは、「差止め命令」という呼び方をなさっているのですが、あの人があまりにもおとなしい態度を見せるものですから、ますます踏み切れなくなるのです。また、お知らせくださいましたように、ラヴレースさんの親戚のご婦人方が仲立ちをしてくださるといたしましても、身内の者たちのほうではそれを受け入れるのには猛烈に反対しているわけですから、ご婦人方に保護をお願いするわけにも行かないのです。もっとも、身内との和解の望みをすべて諦めるつもりなのでしたら、話は別だと思います。

ただ、この願わしい目的を叶えるための妙手を何か思いつくことが出来たといたしましても、あの人が私と一緒に、あるいは、近くにおります間は、父との交渉など考えられることでしょうか。一方、あの人の留守の間に、皆が力ずくで私を連れ戻すようなことになりますと（あの人への恐怖心さえなければ、皆はそうするだろうというのが、貴女のお考えでしたね）、私のほうから皆を捨てたのですから、これ以上ないほどの仕打ちでも容認されることになるわけです。また一方、ご注意いただいた点ですが、あの人と行動を共にし

ていながら結婚はしていないのですから、どのような咎めを受けても仕方ないのです。でも、それは［このような問い掛け、私には耐えられませんが］私の力の及ぶことなのでしょうか。あゝ、大好きなハウさん　…　世間の人たちの間に辛うじて残っております私の評判を守りますために、この男の唇から漏れる有難い提案を待ち詫びなければならないなんて　…　私はそんなに落ちぶれてしまったのでしょうか。

従兄弟のモーデンがイギリスにいてくれましたなら、これからでも、すべては円満に解決するかもしれないのです。

待望しております和解を進めます上で、従兄弟以外の仲立ちは一切得られないといたしますと、また、ラヴレースさんとの状況にしばらく変化がないといたしますと、従兄弟が戻りますまでは、自立した立場を守るよう努めなければならないのです。助言や指示を受けました時に、思いどおりに振る舞いましても差し障りが出ないようにするためです。

ラヴレースさんとの間の出来事につきましては、お望みのことでもありますし、すべてをお知らせすることにいたします。これまでのところ、あの人の振舞いには強く非難すべきものは何一つございません。でも、敬意をもって接してくださるのですが、気楽で屈託のない、自然な敬意とは思われないのです。もっとも、どこに問題があるのか、うまくは申せません。

ただ、傲慢無礼で、弱みにつけ込む気質なのは疑いございません。それに、教育を受けておられますし、他にもいろいろと利点がおありなのですから、だれもが期待して当然なのでしょうが、それほどに洗練された人物というわけでもございません。要するに、いつも我が儘を通してきたものですから、他人の気持ちに合わせるよう、意を用いることは出来ない人のように思われるのです。

少し信頼を寄せてみては、とのご助言でしたね。この点に関しましても、他のすべてのことと同様、喜んでお言葉に従う所存でございますし、また、あの人の出方一つだと思うのです。ただ、私といたしましては、騙されて連れ出されたわけですし、それも、自分の判断ばかりでなく、気持ちにも背いてのことなのですから、まるで連れ出されたことを有難く思っているみたいに、すぐにあの人を愛想良く扱うようなことは、あの人自身、あるいは、どなたにいたしましても、思ってもいないことではないでしょうか。仮にもそのような態度を取ったりいたしますと、あの人のほうでは、ご希望どおりになります前に、あるいは、その後で、私のことをとんでもない嘘つきだとお考えになるはずです。

本当に、本当にそんな気持ちになってしまうのですが、貴女の書いておられることを思い返し（恐れていた水曜日のことも、必要以上に案じていたのかもしれないという点ですが）、あの人にこんな騙され方をしたのだ、それも、どこから見ましても、あの人の手先になっている卑劣なジョゼフ・リーマンのせいに間違いなさそうだと考えますと、自分の髪を掻きむしってしまいたくなるのです。じっくりと計画され、ひどく手の込んだ企みに違いないのですからね。こんな男が相手なのですから、細心の注意を払い、警戒怠りなくしていなければ、私らしくもないと言われても仕方のないことではないでしょうか。それにいたしましても、私のように開けっぴろげで、生まれつき猜疑心などのない人間にとりましては、何とも辛い日々でございます。

私たちの文通の手助けをあのように快諾してくださいましたこと、ヒックマンさんにお礼申し上げます。このことでお嬢様に対する点数が上がるようにはとても考えられません

ので、もしも、お母様に対して少しでも危険を冒すようなことになるのでしたら、まことに申し訳ないことと存じます。

今はお世話を受ける立場でございますから、避けられないことは何でも、おとなしく甘んじていなければと考えております。今の私には、一体どなたに恩義を施す力があるというのでしょう。かつての私にとりましては、その力こそがかけがえのないものでしたのにね。申し上げたいのは、貴女に感化を及ぼす力も、無分別な行いのせいで弱まってしまったように思わねばならないだろうということでございます。それでも、出来ることでしたら、自暴自棄になるような真似はしないつもりですし、貴女のお振舞いの中で賛成いたしかねる部分につきまして、これまで許してくださっていたことですが、私なりの考えを述べさせていただく権利も捨てたくはございません。

ですから、お許しをいただいて一言申し上げねばなりませんが、はからずも罪を犯してしまいました人間にお母様が大変厳しくなさるとは申せ、お母様に対する憚りのない物言いは許し難いものと考えているということです。私の身内につきまして、ほとんど見境もなく遠慮のないことをおっしゃる点は、この際触れずにおきますけれどね。でも、そのことも少なからず気に掛けてはいるのですよ。

そうなさるのが子の務めでしょうが、皮肉な言い方や苛立たしい気持ちを抑えるお気持ちにはなれないようでしたら、私のために慎んでいただきますよう、お願いします。でなければ、お母様といたしましても、私の悪い例が、まるでパン種みたいに、愛するお嬢様の心中に入り込んでしまうのではと気を揉まれるからです。そして、そのような不安をお持ちになれば、私に根強い不満を抱かれることにもなりかねないでしょうからね。

ご覧になりたいとおっしゃる、姉への手紙の写しを同封いたします。お気づきいただけるでしょうね。正式な形で管財人に地所を要求しているわけではございませんが、あちらへ引き籠もるのを認めてもらいたい旨は遠回しに触れているのです。改めて申し出ました提案を受け入れてもらえるのでしたら、それこそ、喜んで約束を守ることでしょう。心ならずも連れ去られたことを認めてしまいましたのは、いろいろな点からして適切なことではなかったと、貴女ならきっとそうお考えでしょうね。

変わることなき感謝の念と親愛の情を込めまして、貴女の

CL. ハーロー

手紙　六

アラベラ・ハーローへ

［ハウ嬢に宛てた前掲の手紙に同封されたもの］

四月十一日、セントオールバンズにて

愛するお姉様へ、

人目には軽率で不孝と映りますような振舞いに及んでしまいましたこと、正直に非を認めたいと思います。そして、ここしばらくのような、あれほど厳しい仕打ちを受けたのではなく、また、思い浮かべるだけでも耐えられないような、そんな男性の生贄にされる恐

れが十分にあったわけではないのでしたら、この振舞いはとても申し開きの出来るものではないと考えます。でも、済んでしまったことは致し方ございません。こんなことにならずに済んでいたならとは思いますし、敬愛いたします父と母が怒りを鎮めてくださるのを信じて待てば良かったのにと願うこともあるのです。でも、そのような気持ちになりますのも、両親への孝養の心からに他なりません。お二人の元へは（もしも、〈森の館〉のほうへ私が引き籠もりますのをお許しいただけない場合ですが）、すでに承諾する旨を申し出ております例の条件で、すぐにも戻りたい気持ちでいるのです。

また、本当に気の進まないままに踏み切ったこの行動ですが、その手段を講じた人物のお世話には、どんな形にせよ、決してならないつもりです。さらに追い詰められることがない場合に私が交わすことになります、道理に適ったどのような約束とも矛盾するものですからね。今、この重大局面に際しまして、私には姉がおりますが、その姉に友を見出してはいない、などと言わせないでいただきたいのです。私にとりましては命より大切な評判が（私の取った行動から、どのようなことを想像なさろうと）傷ついているのです。ほんの少し慈悲をかけてくださるなら、今でさえも、ずいぶんと評判を取り戻すことになりますし、そうしていただけない場合には、もっと厳しい言い方は避けますが、すでにひどく不親切な仕打ちを受けてまいりました人間に一生涯ついてまわります汚点ともなりかねないものが、ただの一時的な考え違いとして、世間に通ることにもなるのです。

ですから、お姉様のために、また、これほど追い詰められるきっかけを作った（はっきりと言わせていただきますが）兄のために、そして、一族全員のためにも、もしも、すべてをよくお考えになった上で、私が間違っていると思われるのでしたら、その過ちを一層重くするような真似はお止めいただきたいのです。また、不幸な争いを煽り立て、妹を世間の晒し者にするのも止めてくださるよう祈っております。

親愛の情をこめまして、貴女の

Cl. ハーロー

衣類を、私の五十ギニーと共に、すぐに送ってくださいますと、大変に有難いのですが、お金は私の書き物机の中にあるはずです（鍵を同封いたします）。それと、私のささやかな蔵書の中から、宗教関係と雑文集の類をお送りください。また、そうしても良いとお考えなら、宝石類も届けていただきたいのです。届け先は私宛ですが、ソーホースクェア近くのオズグッド氏宅留置きとしていただきます。

手紙　七

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

《ラヴレース氏は、先の手紙（手紙三）の続きとして、旅籠内や移動中、また、ソーリングズ夫人宅に落ち着くまでに二人の間で交わされた事柄のすべてについて、友人宛に報告している（令嬢の報告とほぼ同趣旨のものである）。重複を避けるため、その談話のうち、彼女の語りに潤色を施すとか、氏の目的を明かすとか、あるいは、世に知られた氏のユーモアの才を表示するのに役立つ部分のみが抄録されている。

月曜の夜、セントオールバンズの旅籠に到着した際の様子を、氏は次のように記しているのである》

われわれが馬車を降りた時に群がってきた連中は、そのあんぐりと口を開けた顔や真ん丸に見開いた目からして、すっかり肝をつぶしている様子だった。態度にも容貌にも威厳が溢れ、大層整った服装のチャーミングな若婦人が、馬は湯気を立て、従者は汗まみれになるような旅路の果てに、ひどく落ち着きのない表情で降りてくるのを目の当たりにしたわけだからな。連中の好奇心のほどはその顔面から読み取ったし、愛しの君の困惑振りも彼女の表情から読み取ったよ。馬車を降りると、人目が気になるのだろう、彼女はチラリと衣装に目をやっていた。何しろ、場違いな服装だからな。そして、俺が貸した手を、いやらしいと言わんばかりに振りほどくと、大急ぎで中へ入って行った。

変身をもたらす腕前では、名人オウィディウス（九）といえども、貴公の友に敵うものではないのだ。旅籠の女将さんに向かって、俺は即座に彼女を妹に変えてしまった。近くの親戚のところから（そこで一冬を過ごしたことになっている）、不意を襲って連れ出したのだが、父親も母親も、姉も、そして、慈愛に満ちたおじたちやおばたちにいとこたちすべてが嫌悪を抱いている、けしからん放蕩者と一緒になるのを妨げるためというわけだ［出来るかぎり真実に近づけるというのが、いつだって俺の好みなのだよ］。魅惑の君の予想どおりの渋面も、これで説明がついたのだ。再び俺と顔を合わせる際の不機嫌ぶりについてもさ。仮にそれまで長引くとしてもな。また、旅をするには相応しくない衣裳のことも然りだろう。そして、同時に、俺には疚しい気持ちはないことをきちんと、時機を失することなく納得してもらうことにもなるわけだ。

《令嬢との論議に関し、とりわけ、若い娘に本分と良心を捨て去るよう仕向けた点を彼女が咎めている部分に関し、氏は次のように記しているのである》

これらの言葉すべてを、そして、さらに屈辱を覚える台詞を彼女は口にしたのだ。

俺は黙って聞き入っていた。だが、こちらが口を開く番になった時には、嘆願もすれば説得もした。返答にこれ努めたよ。ここを先途とな。そして、下手に出ても駄目だと分かると、語気を強め、目には怒りの火を燃やしてもみた。女に備わる、あの何とも愛らしい気の弱さにつけ込もうと思ったのだ。この誇り高き美女に対する勝因も、主としてそこにあったのだからな。

しかし、脅しは効かなかった。癇癪を起こして食って掛かってきたよ。俺の防御線を突破しようというのだ。だが、男子たるもの、女相手にこの種の話題となれば、いかに女が興奮しようとも、相手の気を逸らす手段一つないようではおかしな話ではないか。つまりだ、何かを厚かましいと憤慨している場合、その怒りを逸らすのに、二つ三つ負けず劣らず厚かましいことを口に出せないようでは困るのだよ。ただ、より好意的な解釈の成立する言葉にしなくちゃならんのだがね。

《氏との文通に当初彼女が異議を唱えたことを語っている部分に関しては、氏は以下の如くに記すのである》

我が愛しの君よ、まさにおっしゃるとおりだ。そして、そなたが格闘することを私に強いてきた困難もまた数知れないのだ。だが、いずれそのうち、このような大口は叩かずにおけば良かったと思う日が訪れることだろう。他にも口にしていた、あの結構傲慢な台詞とて同じことだ。曰く、「俺のためにソームズを撥ねつけたわけではない。そなたを連れ出したことを得意に思うのなら、俺にとっての誇りはそなたには恥辱の種だ。俺の独り善がりはそなたにも、あるいは、どこのだれにも通じはしない［彼女にかかかると、俺もただの気取り屋というわけなのだよ、ジャック］。結果はどうあれ、父親の屋敷に戻りたい」との言い種だ。魅惑の君よ、かくの如き仄めかし、かくの如き非難、かくの如き願望、かくの如き軽蔑に接し、なおもそなたを許すようでは、世に謳われているラヴレースの名に背くことになる。しかも、そなたの応対ぶりからすれば、俺を評判どおりの男と考えていることは明らかなのだ。

要するにだ、このやり取りの間、終始一貫、彼女の態度全体には一種威厳を湛えた憤りが窺われたのだよ。話し掛けている相手よりも、能力において優っているのを信じて疑わない、と言わんばかりにだ。

妻が夫よりも分別を備えている場合、あるいは、妻がそう思い込んでいる場合、そんな男の晒す哀れな姿についての俺の長広舌は、貴公も幾度となく耳にしてきたはずだ。クラリッサ・ハーロー嬢との結婚を考えていけない理由なら千も数え上げることが出来るだろうな。妻ということであれば期待しなくてはいけない点だが、どこのだれよりも俺を愛しているのだということに確信が持てるまで、少なくともそれまでは、結婚は考えられないということだ。

決意が揺らぎ始めている。日頃から結婚の束縛を嫌ってきただけに、これまでの偏見がすぐにも頭を擡げてしまうのだよ。あゝ、神よ、我がクラリッサに対して誠意を守る心を授け給え　…　どうだ、俺だって祈るのだよ、ジャック。この祈りが聞き届けられない場合には、天晴なことこの上ない女性にとっては、それこそ悲しむべき事態ということになるだろうな。ただ、祈りで神を煩わせるのは、俺の場合、頻繁にあることではないのだから、もしかして、これくらいは聞き入れてもらえるかもしれないな。

だが、眼前には心を惹きつけて止まない困難の数々が横たわっている。術策、計略、冒険心を発揮するには恰好の舞台だ。俺の才能がすべてそちらに向いているのは忌まわしいかぎりだよ。名誉とは何か、正義とは何かを弁え、誠実でありたいとの願いさえ抱きかけているというのにな。「抱きかけている」と言っておこう。俺ほどの悪党のことだ。いかんせん、心の底から願うわけには行かないのだ。この令嬢を屈伏させることが出来れば、それこそ、全女性を征服することにもなる。いわば童貞の誓いといったところだな。というのも、女のほうが俺に手を出したのではなかったかな。それに、この令嬢は俺を容赦してくれているだろうか。どうだろう、ジャック。こんなふうに反抗されていたとしたら、俺はローズバッドを容赦していたと思うかな。ローズバッドは見逃してほしいと、婆さんが最初に頼み込んだのだよ。娘が手に落ちた場合、あるいは、自ら飛び込んできた場合、男としてはその先何を望んだら良いというのだ。日頃から俺は、反抗や抵抗があれば、それは悪の限りを尽くすことへの誘いだと考えているわけでもあるしな(ア)。

(ア) 第一巻の百七十五頁から次頁にかけてを参照のこと。

何故だ。俺に向かって氷の如く振る舞うために、我が愛しの君がこれほどまでの骨折りをするというのは、一体何故なのだ。誇り高き態度によって、俺のプライドを目覚めさせようとするのは何故だ。先に述べたところから、貴公も気づいているのではないかな。俺に向かって、まるで見下げ果てたと言わんばかりの態度だ。彼女のために、いや、彼女からさえ、どれほどの苦しみを味わったと思うのだ。あの虫けらみたいなソームズよりも上だなどと自惚れるようなら、俺を軽蔑すると、そこまで言われたのだぞ。黙って聞いていなくちゃならんのか、この俺が。

それに、熱意を示そうとするたびに、彼女はこちらの話の腰を折ってしまうのだ。忠誠の誓いを口にするのは、それを疑う理由があることを自覚している証拠だと、憎たらしくしっぺい返しをして見せるのだよ。前のとそっくり同じ難癖だ(ア)。俺の手中にあろうとなかろうと、この令嬢にとってはまったく同じことなのだ。だからな、ベルフォード、俺のせっかくの誓いの言葉にしても、しっかりと口の端に上る前に、喉の奥に押し戻されてしまう始末なのだよ。恋する男としては、方便に頼ることも誓いを立てることも許してくれないとしたら、恋人相手に一体何を語ったら良いというのだ。

ちょっとばかり手管を用いねばならなかった。独りにしてほしいと、あまり熱心に詰め寄ってくるので、頼みごとを一つ口に出してみたのだ。彼女には断りきれないような条件を添えた上でだよ。そして、それを聞き入れてくれた時には、まるで光栄の極みとばかりに有難がってみせたのだ。

で、それは何だったと思うかな。彼女がすでに約束済みのことを約束してほしいと言っただけの話だよ。「俺の目の黒いうちは、そして、独身でいる間は、ひどく嫌悪を誘うような真似をしないかぎり、どんな男とも結婚しない」ということをだ。お察しのとおり、これでは何の約束もしていないのと同じことなのだよ。彼女にしてみれば、いつ腹を立てても構わないのだし、不快と思うも思わないも、独りで決めれば良いのだからな。ただ、俺の望みがどれほど理に適った正当なものであるかということ、そして、俺が人の弱みにつけ込む人間ではないということが、これで彼女にも分かるというわけなのだ。

彼女は同意した。そして、どんな保証がほしいのかと尋ねてきたよ。

お言葉だけで結構、と俺は言っておいた。

彼女は保証してくれたのだが、俺のほうでは、無礼の段はお許し願うが、固めの印をいただきたいと言うが早いか(同意を待つのは拒絶を求めるのに等しいからな)、接吻に及んだのだ。信じようが信じまいが、正直な話、あの魅惑的な唇に思い切ってこの唇で触れてみたのは、これが最初だったのだ。断言しても良いぞ、ベルフォード。このたった一度の口づけは(しかも、次の時に怖がられてはと思い、まるで彼女に負けないほどうぶな様子で、おずおずと押し当てたのだよ)、他のどんな女とであれ、最後の目的を遂げて得られるその悦びよりも、さらに大きな歓喜をもたらしてくれたのだ。畏敬の念、崇拝の心、そして、禁じられはしまいかと危ぶむ気持ちは、一つの恩恵をかけがえのないものに変えてしまうということだ。

差し当たって心配なのはだな、ベルフォード、俺が策に溺れはしないかという点だけだよ。これまでのところ、思いどおりにおしゃべりをしてくれないのだ。我が愛しの君の胸

(ア) 第二巻の五十一頁を参照のこと。

中は、俺もいまだに解しかねている有り様なのだよ。

月曜の夜、セントオールバンズの旅籠の女将の前で兄の役を演じてみせたのだが、演技が過ぎてしまった。旅仕度の暇も与えず連れ出したことを妹に詫び、父母や家族皆が妹を迎えて喜ぶ様を縷々語ったのだよ。そして、これが極めて微にいり細にわたった話し振りだったため、俺に向けた、それこそ体中を貫くような彼女の目付きで気づいたのだが、やり過ぎてしまったということだな。二人きりになった時には謝っておいたよ。ただ、どうしても見破ることが出来なかったのは、それで事態は好転したのか、それとも、悪くなったのかという点だ。

だが、俺はあまりにも包み隠しのない人間なのだ。首尾よくことが進んだし、至宝を半ば掌中にしたのが嬉しいものだから、胸襟を披くだけでなく、戸口まで開け放してしまったというわけさ。

途方もなく悪賢い女だよ。俺同様に腹蔵なく話してくれさえすれば …… だが、彼女の慎重さは学ばねばなるまいな。

彼女は間違いなく手持ち不如意のはずなのだが、プライドが高すぎるのか、俺からはびた一文受け取ろうとしないのだ。彼女にはロンドンへ行ってもらいたかったのだよ［出来ることなら、ロンドン行きの同意を取り付けなくてはならん］。ロンドンで手に入る一番高価な絹織物を誂えてやるためだ。だが、このどちらにも同意してもらえない。ただ、俺のスパイからの通報によると、執念深い身内の連中は、とことん彼女を苦しめる覚悟でいるとのことだ。

この恥知らずどもは、彼女が失踪してからというものずっと、とてつもない嘆きようだそうだ。有難いことには、いまだに嘆き悲しんでいるとのことだし、願わくは、あと一年ほどは嘆いていてもらいたいものだよ。今こそ、遂に、我が世の春というわけさ。

連中としては、彼女の逃走を示し合わせた上でのことと考えているのだが、それを実行に移す機会となった、養鶏場への散歩や庭歩きを許したのはまずかったと、痛切に悔やんでいるということだ。ベティが恋人のジョゼフに話したことなのだが(ア)、蔦の東屋で食事をするのを認めるに当たって、連中には彼女の裏をかいてやろうとの汚い魂胆があったわけだからな。

彼女の意向を無視して、老いぼれアントニーの堀を巡らした屋敷へ連れ去るような真似をしたら、俺は彼女の救出に赴くと言っておいたのだが(イ)、連中にしてみれば、その脅しを聞いてさらに監禁を強めるつもりが、恰好の口実を失ってしまったというわけだ。貴公には牡鹿亭で話したし、愛しの君にもそれとなく伝えたことがあるのだが(ウ)、連中にはその腹積もりがあったのだよ。連中が黙認していたこの散歩の折に、彼女の同意の有無など関係なく、俺が彼女を連れ去ってしまうのでは、と案じてのことだ。

だが、この場面では、情報を流してくれた正直者ジョゼフが素晴らしく役に立ってくれた。愚か者のジェームズがジョゼフ相手にそうしているのだが(エ)、俺も負けず劣らず召使

(ア) 第二巻、手紙四十六の第三十七、三十八段落。
(イ) 同巻、手紙三十五、および、手紙三十八の第一段落を参照のこと。
(ウ) 同巻、手紙三十五の第四段落。手紙四十五の第三段落も参照のこと。
(エ) 同巻、手紙四十六の第六および第三十九段落。

たちに何でも話しているとハーロー一族に思い込ませるよう、ジョゼフを指導してあったのだよ。ジョゼフがウィルをたらし込んで俺の秘密を全部手に入れ(ア)、俺の動きもすっかり掴んでいると連中は考えたのだ。また、ジョゼフが令嬢の挙動をすべて監視することも引き受けたものだから(イ)、お利口さん一族は安心してしまったのさ。それは我が愛しの君とて同じことだし、俺にとっても一安心というわけだ。

一度は思い浮かべたことだが（先の手紙で貴公にも匂わせておいた(ウ)ことだ）、その種の行動が必要になった場合には、不意を突いて彼女を薪小屋から連れ去るつもりだったのだよ。母屋から遠く離れていることもあるからな。仮にも実行に移していたなら、同志の助けを借りて、間違いなく目的を果たしていたことだろう。われわれ全員の名に背かぬ作戦行動になっていたことだろうな。だが、ジョゼフに言わせると良心ということになるのだが、そいつが邪魔をしたのだ。見て見ぬふりをしたのを気づかれるに違いないと考えたわけだ。他にもいろいろためらうのを説き伏せてきたのだし、こんな良心の咎めなど、多分、同じように簡単に克服出来ただろうと思う。ただ、そうしなかったのは、彼女が真夜中、あるいは、遅い時刻に会いに来てくれるのを当てにしていたということもある［会ってくれたなら、彼女が引き返すようなことは決してなかったはずだ］、また、あの悪賢い一族には、自分たちの承知していることとか意図していることとは裏腹に、俺の仕事の肩代わりをさせてやろうとも考えていたからだ。

俺は百も承知だったのだよ。ジェームズとアラベラには、あの馬鹿げた苛めや挑発行為を決して止める気がないことをな。彼女が疲労困憊の挙げ句、ソームズのものになってしまうか、あるいは、両方のおじから二度と引立てを得られなくなるような、何か早まった行動に走るのを待つ魂胆だったのだな。頭の中は悪意で凝り固まっていたので、彼女を虐待することで俺の役に立とうなどという考えは、あの二人には一切なかったわけだがね。

手紙　八
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ　［承前］

グリーム夫人を煩わせて彼女の付き添いを頼み、ローン荘行きを断られた時には、夫人の推薦する下宿を受け入れてもらうようにしたのだが、俺の見るところ、我が愛しの君はことのほか有難がっている様子だったよ。

特にこれといった下宿をあてがうことなく、M邸、ローン荘、ロンドン、あるいは、俺の身内の未亡人たちのどちらかの屋敷、そのいずれへ向かおうとも、それは彼女の好きに任せたわけだから、俺の計画についても、すべて道義を守ったものだと信じてくれるはずなのだ。

シェーズにはグリーム夫人に同乗してもらい、俺は馬で行こうと提案したのだが、この提案がよほど嬉しかったのだろう、はっきりと顔に出ていたよ。

(ア) この点に関しては、この巻の手紙十七に補足説明がある。
(イ) 第一巻の百五十一頁、百七十八頁を参照のこと。
(ウ) 同巻、百七十九頁。

彼女とグリーム夫人を一緒にすればどんなことになるかと、どこかのだれかさんなら気を揉んだことだろうな。だが、俺が彼女に対して真正直な考えでいることは、身内のだれもが知り、あるいは、信じているわけだから、その点についての心配は一切なかった。しかも、俺はこれまで偽善などとは縁がなく、実際より良く思われようと願ったこともないのだから、なおさらだよ。それに、実際の話、放蕩児として名が通っているお陰で、女に対する目論見がこれまでのところかえって上首尾を収めてきたことを知っている人間としては、何で偽善者になる必要などがあるのかということだな。何せ、ここにおいでの我が最愛の君でさえ、俺のことは道楽者だと考えるよう、身内の連中が教え込んでいたにも拘らず、俺との文通を拒みはしなかったのだよ。だとすれば、自分には不慣れな、さらに下劣な人柄を装ったりする者がどこにいるというのだ。

それにまた、グリーム夫人は信心深い婦人で、どんな動機にせよ、真実を歪めるようなことはしなかったはずだ。以前、俺に改心の見込みが少しでもあった間は、俺のために祈ってくれたものだった。そんな結構な習慣も、どうやら、夫人はほとんど続けてはいないらしいのだ。というのも、夫人の立派なご主人様は、折に触れ、男であれ女であれ、はたまた、子供であれ、出会った者を相手に平気で俺のことを罵っているからだ。貴公も知っているはずだが、まことに不義理な御仁なのだよ。確かに、そう言って構うまい。義理というものはすべからくお互い様なのだからな。だが、可哀相なのはグリーム夫人だよ。卿が通風に襲われ、ローン荘でチャプリンが見当たらない時などは、夫人が卿の傍らで祈っているのだよ。聖書とか、何か他の真面目な本から一節読み聞かせることもある。

それゆえ、このように立派な女性を愛しの君に引き合わせ、二人に遠慮なく語り合ってもらうというのは、当を得たことだったのではないかな。そして、見たところ、車中の二人は話に熱中している様子だったし、それを肌でも感じたわけだが、実を言うと、俺の両の頬はこの上ない魅力を湛え、朱に染まっていたのだよ。

もう一度言うが、誠意を尽くしたいと思っている。ただ、われわれ心の弱い人間としては、いつもいつも己を律し切れるものではないのだから、ロンドンのわれわれの知人のところか、あちらのどこか別の安全な場所へ連れ込むまでは、愛しの君に不安を抱かせないよう努めねばならんのだ。その間は、ほんの少しでも彼女に疑念の余地を与えるとか、彼女を縛りつけるような真似を俺がしようものなら、彼女のほうでも見も知りもしない者たちに助けを求め、国中を俺の敵に回すことだって出来るのだし、もしかすると、身内の連中が持ち出す条件のまま、奴らに身を委ねてしまうかもしれないのだよ。それに、ここに至って彼女を失うようでは、我らがごとき結社の領袖となり指導者となるには、いかにも相応しくないことになるだろう。男どもには合わせる顔がない。女の前にも、どの面を下げて出たら良いというのだ。

彼女としても、このような状況では、自分の意向に背いて出奔したことをおいそれとは認め難いだろうし、俺のほうでは、彼女が同意の上で逃げ出したのだと、あの執念深い連中皆に信じ込ませるべく留意してきているのだよ。

彼女がセントオールバンズで出した手紙(ア)へのものだが、ハウ嬢から返事を一通受け取ったところだ。

(ア) 第二巻の手紙四十七。

果たしてどんな内容なのか、俺には分かりかねる。ただ、丁寧に読み終わった後、彼女の目には大粒の涙が溢れていた。そして、俺にとばっちりが及んだのだ。

ハウ嬢も魅力的な女だが、めっぽう頭が鋭くて気も強いのだ。俺としては、大いに恐れを抱いている。母親も、彼女をおとなしくさせるのには汲々としている有り様なのだ。我が正直者ジョゼフを利用し、アントニー老があの母親を責め立てるよう仕向けているのだが、これは続けねばなるまいな。あの娘をうまくあしらって、我が最愛の君が完全に俺を頼るようにするためだよ(ア)。

ハウ夫人は反対されるのが我慢出来ない質だが、娘とて同じことだ。母親となるのに必要な素養はすべて備えていると思っている若い女性が、母に頭を抑えつけられているというのだから、恋の手管に長けた男にしてみれば、足場を築くのにはお誂え向きということだ。母親は気を回しすぎるし、娘のほうは気にしすぎている。それにあのヒックマンときたら、このどちらでもなく、ただ言われるままの　…

俺にはもっともっと望ましい相手がいるというだけの話だよ。

それにしても、何と不幸なことなのだ。二人の令嬢がごくごく近いところに住み、こうも熟知の間柄だというのはな。でなければ、ものの見事に二人とも手玉にとって見せたところだよ。

だが、手に入れるに値する女ことごとくを、一人の男がものに出来るというものでもないが、ただ、残念な話だよな。その男というのがこれだけの切れ者だけにな。

手紙　九
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ　［承前］

これほど筆まめでいながら、おそらく、互いの書き物を相手には見せないよう、これほどまでに気を使わねばならない恋人同士というのも、かつていなかったな。彼女は他のことは何一つしようとしないのだ。俺としては何かしたいのだよ。彼女が許してくれるならな。夫となるのには、まだ改心が十分でないということだ。「忍耐は美徳なり」とM卿は言う。「急がば回れ」というのも卿お得意の格言の一つだ。俺がたっぷりとその美徳を持ち合わせているのでなかったなら、ハーロー家の連中に対して、また、あの女神のごとき令嬢相手に俺が仕組んだ筋書きにしても、実行に移す機運が連中の間で熟すまでおとなしく待つような真似はしなかったことだろうな。

我が最愛の君は、その身に降りかかったこと、これまでわれわれの間であったことのすべてを、あの小癪な友達に書き送っているものと思われる。もしも俺に負けないほど詳細な筆遣いをするのなら、多分、お誂え向きの話題に恵まれることになるだろう。

ハウ夫人を彼女の敵に回すよう、アントニー老に動いてもらっているわけだが、そんな野蛮な真似は本当は気が進まないのだよ。あの二人のお嬢さんたちの文通の結果に恐れを抱いていないのならな。一人はまことに威勢が良いし、両方ともすこぶる用心深くて慎重だから、こんな娘たちの裏をかき、指の先で捻り回してやることが出来たらと、男ならだ

(ア) 第一巻百五十一頁から次頁にかけてを参照のこと。

れだってそんな願いを持つのではないかな。

我が魅惑の君が姉に手紙を出した。衣類といくばくかの金、それに、本を何冊か送ってほしいとの依頼だ。彼女が知っている以上の知識を授けるなど、一体どんな本に可能だというのだ。だが、俺にはそれが出来るのだよ。従って、彼女としては、俺のことを研究するほうが得策というわけだ。

彼女が筆を執るのは構わないのだよ。結局は俺の意向に沿わねばならなくなるのだからな。いくらプライドを振りかざしたところでだ。ハウ嬢のほうでは、すぐにも用立てをしようとするのだろうが、母親と関わりなしにそれが出来るかどうかは疑問だね。ひどく欲の皮の張った女だからな。それに、俺の手先のその手先となっているアントニー老が、すでにそれとなく母親に忠告しているのだから、母親のほうでも、金のことにはうるさくなるはずなのだ。

それに、仮にハウ嬢に手持ちの金があるとしても、母親にそれを借りてもらうよう仕向けることも出来るのだ。だからといって、策を弄しているなどと責めないでくれよ、ジャック。気前の良い気持ちから来ていることだからな。俺の気質は承知のはずだ。我が魅惑の君には全資産の半ばを、否、そのすべてを喜んで用立てする気でいることもな。俺には到底望み得ないほどのものをM卿が用意してくれているのだよ。俺が情熱を傾ける第一のものは、女であって金ではないのだ。また、金の価値を認めるとしても、女をものにする助けとなり、気ままな暮しをもたらしてくれるからに他ならない。

やむをえず、可愛らしい新入り娘に注意を促しておいた。彼女のためであり、かつ、俺のためでもあるのだが（彼女の宛先から足がつき、追っ手をかけられるようなことになってはまずいからな）、衣類の届け先をどこにするかについてだよ。そんなささやかな願いを叶えるべく、身内の連中が応じるならの話だがね。

もしも連中が応じるようなら、和解のことが心配になる。妨害のための手段を一つ二つ考え出さねばなるまい。惨事を避けるための手段でもある。何しろ、それこそは（正直者のジョゼフ・リーマンにも話してあるのだが）俺にとって肝心な点なのだからな。

救いようもない男だ、と貴公は考えるだろうな。しかし、放蕩児などというのは、どれもこれも救い難い人間ではないのかな。それに、貴公にしても、力がないなりに、だれにも負けないワルではないのかな。実行すべく頭に思い描いていること、また、胸に温めていることすべてをやってのけるとしたら、貴公は俺様以上の悪玉ということだ。請け合っても良いが、俺はそんなことはしないからだよ。

俺の提案で彼女も同意したのだが、衣類の他に、身内の連中が届けて構わないと考えるものすべては、貴公の従兄弟のオズグッドのところへ送ってもらうことにした。費用は俺が持つので、特別に使いの者を用意し、送られて来る手紙、あるいは、持ち運びの出来る荷物はどれも、俺のところまで届けてもらいたい。持ち運びが無理なものの場合は、その旨報せてほしいのだ。ただ、このことで、彼女の身内から貴公の身に厄介が及ぶことはないはずだ。誓っても良い。この点は安心して構うまいから、連中には思いどおりの行動を取らせておこうと思うのだ。どうしても避けられないこと以外には、だれだって責任を買って出たりはしたくないのだよ。

ただ、忘れないうちに一つ言っておこう。是非とも注意してもらいたい重要な点だ。今後、手紙をくれる時には、俺のほうでもそうするつもりだが、暗号を用いて書き記さねば

ならないということだ。自分が結んだ導火線で吹き飛ばされたのでは、目も当てられないからな。また、恋をしている男というのは、自らボロを出すような真似をしないとも限るまい。上着だのチョッキだのを着替える際に、何か忘れ物をすることだってある。俺も一度酷い目にあったことがあるのだ。それに、女の好奇心旺盛なことといったら……こちらの守りを固めるためには、女たちの共通の母がイヴという名だったことを思い出すだけで良いだろう。

もう一つ忘れないでほしいのは、俺が名を変えているということだ。法令も待たずに変えてしまったのだよ。ロバート・ハンティンフォードというのが現在の名だ。名の後ろに添える〈エスクワイア〉(一〇)は今後とも続けてもらう。押しのきく肩書きだからな。もっとも、やくざな連中が猫も杓子もこいつを名乗るものだから、例の〈キャプテン〉という追剥ぎ向けの肩書きなども一掃されかねない有り様なのだよ。〈ハートフォード局留置き〉としてもらおう。

貴公の名を口にすると、人柄のことを彼女は尋ねていた。俺自身の信用のためにも、貴公にはもったいないくらい良く言っておいた。ただ、不器用な男だと話してある。これは貴公が面目を損ねないためだよ。万一、彼女が貴公と顔を合わせることがあっても、眼前にしているのよりも気の利いた男を期待するようなことがないようにとの考えからだ。だが、見た目の不器用さが貴公にとっては少なからず助けとなっているのだぞ。もしも貴公が見栄えのする人物なら、他の者たちにしても、言葉を交わす段になると、特に際立ったものなど何一つとして見出すことはないだろうからな。ところが、見た目は熊なのに、人間らしいところがあるというので連中は驚くのだよ。それゆえ、その欠陥を幸せと思わねばならないぞ。それこそ、明らかに貴公の主たる美点なのであり、さもなければ得られるべくもない栄誉を貴公にもたらしてくれている、というわけだからな。

今滞在している下宿の設備は良くない。俺は神経の細かいところを見せて、それぞれの部屋が通じ合っているのは不満だと言っておいた。彼女のほうから言い出すのを知っての上だ。それから、彼女の身に追っ手の迫る心配がないことを確信出来れば、ここでお別れし(それが彼女の強い願いであり、望みでもあるからな)、自分はロンドンへ向かうつもりでいることも伝えておいた。

ほんの露ほどの疑念であれ、俺があの心から追い出していないとしたら、紛れもなく彼女は、道理も見掛けも一切信じない懐疑主義者ということだな。

ここには、小綺麗な女の子が二人いる。ソーリングズ未亡人の娘というわけだが、それがここの女将の名だ。

今のところは、乳製品造りに精出しているのを褒めているだけだが、まったくもって女というのは、褒め言葉には目がないものだ。ロンドンの街頭での話だが、こんなところを見掛けたこともあるのだよ。身なりの良い綺麗な娘なのだが、煤だらけの煙突掃除夫に褒められると、声を立てて笑い、誇らしげに反り返って、いかにも喜んでいる様子だったのだ。空の袋を肩に掛けた煤だらけの奴っこさんが、道を譲って立ち止まり、ブラシを振りかざして褒めちぎったわけだ。いやはや、娘さんよ、と俺は胸の内で呟いた。ラヴレースなればこそ、鼻にも掛けずにいるが、もしも俺があの煙突掃除夫なら、そして、そなたの前に罷り出る手立てを講じることさえ出来れば、命にかけても、そなたの貞操をものにしてみせるのだが、とな。

仕事ぶりが上品だということで、ソーリングズの下の娘が大いに気に入り、キスをしてやった。娘は、勿体ないご親切とばかりに、腰を沈めて恭しくお辞儀をしていたよ。頬が真っ赤に染まり、すっかり感激している様子だった。促すようにとは言っても、無邪気な仕草なのだが、ネッカチーフを整えると、ドアのほうへ目をやっていた。もう一度キスをなさっても告げ口はいたしませんわ、と言わんばかりにだよ。

そこへ、不意に姉が飛び込んで来た。後ろめたさのある妹はまた顔を赤らめ、あまりうろたえるものだから、俺が代わりに弁解をしてやったのだが、それで二人とも満足していた。「ベティさん、君たちの乳製品造りの手際の良さにはすっかり感心してしまい、思わず妹さんにキスしてしまったわけだが、あれには君の手柄もあるのは確かだから、宜しければ君にも　…　」といった具合だ。

良い娘たちだよ。両方とも気に入っている。姉までが深々と礼をしたのだ。有難く思う心を持っているというのは、本当に好ましいことだな。我がクラリッサがこの半分も感謝してくれたならと、つくづくそう思う。

我が魅惑の君が居場所を替える時には、この二人のどちらかに付き添いを頼もうと考えている。見たところ、母親はやり繰り上手な女のようだ。だが、締まり過ぎないようにするのが得策だろう。胡散臭いとばかりに嫌な顔でも見せようものなら、俺としては、娘のどちらか、あるいは、両方を相手に、手合わせの準備を進めるまでの話だからな。

少しは大風呂敷も許してもらいたいのだよ、ジャック。だが、心が固まっているのは嘘偽りのない本当の話だ。我がグローリアナ〔二〕を除いては、今はどんな女のことも考えられないのだよ。

手紙　十

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ　［承前］

水曜日だ。我が魅惑の君を永久に失い、忌まわしいソームズに奪われてしまうことになっていた日だよ。今は実に満ち足りた気分だ。心安らかなものさ。ゆったりと椅子に体を沈め、ハーロー家の藁人形ども相手に凱歌を奏でていれば良いのだからな。だが、彼女があのような形で家を捨てたのは、奴らにとっても一番良いことだったかもしれない。俺が彼女に付き添って屋敷に入っていたら、あるいは、（彼女が会ってくれなかったとして）用心棒を引き連れて計画どおりの訪問を実行していたら、どんな結果になっていたか、だれにも分かったものじゃないだろう。

だが、俺独りで彼女と一緒に入って行ったとしても、懸念すべき理由はまず無かったように思う。貴公もよく知っているとおり、世間の評判を誇りとし、専ら世渡りへの慮りから法律の枠内に閉じ籠もっているような意気地のない人間というのは、譬えて言えば、病毒をばらまく蜘蛛のようなものだ。蜘蛛などひとつぶしにしてしまう指で巣の糸の一本を触れられた途端、奴は一目散に穴に逃げ込み、その罠すべてを守ろうともせず、強力な侵略者の意のままに払い落とされてしまうのを見ているだけなのだ。ところが、争う勇気も力も持ち合わせていない愚かなハエが羽を打ち振り、身をもがいて引っ掛かったことを知らせると、己の周りに罠を張り巡らせていた暴君はすかさず進み出て、哀れな虫をぐるぐ

る巻きにし、遂には、その腹から紡ぎ出した糸で覆い尽くしてしまうのだ。ハエがしっかりと取り押さえられ、羽も足も動かせなくなったのが分かると、楽しく見物しようとでもいうのか、吊り下げておく。そして、巣穴の入り口までのしのしと進んで振り返ると、遠くから満足げに眺めているのだ。それから、近寄ったり離れたりしながら、好きな時にその内臓を食い物にするという寸法だ。

ところで、今思いついたのだが、この譬えは意気地のない連中と同様、罠に掛かった娘たちにも言えるのではないかな。そのほうが当たっているな。間違いない。われわれ雄々しい人間が蜘蛛ということになるが、まあ、ぴったりだ。

いかなるものに心が傾こうとも、頭はついてくるものさ。蜘蛛でも良いし、ハエでも良かろう。何から取り上げるにしても、娘こそが引力の中心なのだ。われわれすべては、当然のことながら、そこへ向かうというわけだよ。

とはいえ、話を元へ戻すと、われわれ向こう見ずな人間の中でも、法律などには一切お構いなく、世間の評判という偽善的な遮蔽物に隠れてコソコソ歩くのは軽蔑しているような、そんな手合いと厳しい攻め合いになれば、この意気地無し連中におよそ勝ち目はないと言わざるを得ないのだ。

これまでの俺が、何のためらいもなく群がる敵のただ中に身を投じてきたことは、貴公も知っているはずだ。相手の数が多いほど安全なのさ。単身で立ち向かってくる男の側に立とうとする者が、間違いなく一人や二人はいるものなのだ。そのつもりがなくとも、実際にはそうしてくれるのさ。他の者たちが当の喧嘩相手を押し止めている間その男を引き止め、互いの武勇を持ち上げるのだが、やがて、両方とも説き伏せられて歩み寄るか、片方が立ち去ることになるのだよ。それゆえ、概して無法者は、世界中どこでも言えるのだが、法を守る人間よりも上手だということになる。少なくとも一時的にはな。また、年貢を納めるまでの間はだ。かてて加えて、俺とハーロー家との間の問題では、俺の名誉を傷つけたことは一族全員が自覚しているはずなのだ。それゆえ、俺に恐れを抱いているに違いないというわけさ。自分たちの教会だというのに、俺が姿を現すと、連中は蜜蜂みたいに身を寄せ合ったのではなかったかな。礼拝が終わった時にも、外へ出るにはどちらが先に動き出したものか、思いあぐねている有り様だったのだよ。

ジェームズがその場にいなかったのは事実だ。もし居合わせていたら、多分、勇敢なところを見せようとしたことだろう。ただ、胸中の恐れをさらけ出してしまうような種類の勇敢な顔付きというものもあるのだよ。俺が連中のところへ乗り込んだとしたら、まさしくそんな顔をジェームズ・ハーローはして見せたことだろうな。

今説明したような顔付きと肝っ玉の持ち主を相手にしなければならない時には、俺のほうはいつも泰然自若たるものだ。そして、（ハーロー一族との場合と同様）空威張りをしている奴の相棒たちに、俺の仕事の肩代わりをさせてきたのだよ。

俺は今、俺の行状のうちで称賛に値すると思われるもの、あるいは、何とか容認出来そうなものすべてを想い起こそうとしているところだ。残念ながら、この種の思い出についてはあまり力になってもらえないだろうと思う。何せ、俺がこうも悪くなったのは、貴公と知り合ってからのことだからな。

俺が何か善行を志したことはなかっただろうか。思い出させてもらえることでだよ。俺のためにもよく考えてほしいのだ、ジャック。証になりそうに思われる例をいくつか思い

出してはあるのだよ。だが、何か失念しているものがいくつかあるかもしれないので、そいつを思い出す助けにはなってもらえないものか、ひとつ調べてほしいのだ。

これは言っても構わないだろう。つまり、俺の汚名の主たるものは、女どもに由来しているということだ。この忌まわしい女どものせいなのさ。女さえいなければ、俺も心安らかに礼拝式に出席することが出来るだろう。ところが、俺が顔を出すと、いるのだよ、女どもがな。何処へ行こうと、サタンが罠を張り巡らしているという塩梅だ。

ところで、ちょっとした思いつきだが、長官たちが女性専用の教会を指定するのはどうだろう。他のを男性専用にするのだよ。教育のための男女別々の寄宿学校と同じで、真の信仰心を高めるには最適だと思うのだ「ユダヤ教会の仕切り格子(一二)よりははるかにましだろう」。男性にとっても、女性にとってもな。

教会の名称にしてからが、すでに男の名と女の名があるのだよ。

セントスィジン、セントスティーヴン、セントトーマス、セントジョージ等々は男性用で、サンタカサリーナ、サンタアナ、サンタマリア、サンタマーガレッタは女性用といった具合だ。

だが、そのとおりになり、女性用の教会内にいるところを発見された場合は死罪、ということにでもなれば、俺なら第二のクローディアス(一三)よろしく、変装してみせることだろうな。我がポーシャ(一四)なりポンペイアなりに近づくためだよ。片方はカトーとやらの娘で、もう一方はシーザーとかいう男の妻のことだがね。

それにしても、何という脱線だ。だが、俺の脱線が好きだと、貴公はよく言っていたものだ。お気に召すのなら、たっぷりと脱線して進ぜよう。何しろ、俺としてもこれほど気に入った話題に出会ったことはかつてないのだからな。それに、仮にも打撃を加えることがあればの話だが、おそらく攻勢に出るまでの間は、精々辛抱をして、こんなことを話題にしていなければならないのだろう。

それはそうと、記憶を呼び出す話のほうへ戻らせてくれ。ローズバッドの件に触れる必要はない。あの娘のことは念頭にあるし、あの一件については、正直者のジョゼフ・リーマンを介して(ア)我が麗しの君にそれとなく伝わるよう手を打ったのだ。もっとも、彼女に認めてもらうという、待望の栄誉にはまだ浴していないのだがね。

そこが厄介なところで、俺が日頃から辛い思いをしてきた点だが、何ごとであれ、俺が善行を施すと、いかにも当然ということになってしまう。逆の行動に走れば、何もかもが白日の下に晒され、非難の的となるのだ。これが公平なことだろうか。差引勘定を合わせてもらわなければいけないのではないかな。俺の貸しということにしてだ。ただ、正直な話、今が盛りのこの娘をジョニーに譲るのは残念な気がするとも言わねばならないな。というのは、好い女というのは、貧乏人の首に飾っておくには高価すぎる宝石だと、本当にそう思うからだよ。

確かに、ジャック、女性をあまねく崇拝してしまうのが俺の欠点だとすれば、それゆえにこそ、女性は挙ってさらなる愛を俺に注ぐべきだと思うのだよ。

そして、そのとおりにしてくれているのは有難いかぎりだ。ただ、迷惑なのは、そこかしこで欲の張ったお嬢さんが行く手を遮り、美徳そのものに心奪われているようなふりを

(ア) 第二巻の八十八頁と、百十六頁から次頁にかけてを参照のこと。

して、俺をまるごと独り占めにしようとすることだな。
脱線はこれくらいにしておこう。

今のところは、さらばだ

手紙　十一
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月十三日、木曜日　夜

日頃から筆まめなほうですし、このように不幸な立場ですから、筆を手にする機会が今は十分にございます。貴女にはご迷惑なのではと心配になるほどです。ラヴレースさんとまた、とても激しい言い争いをしてしまいました。その中で、きちんとした形で申し出のありました場合には断ってはいけないとご忠告いただいておりました、例の件が話題に上りました。何の効果もないままに、その話が立ち消えになりますのを放っておいたのですが、その点はお許しいただけるものか、それとも、お叱りを受けることになるのか、お教えいただきとうございます。

貴女宛の先の手紙を書いております間、あの堪え性のない人は幾度も使いを寄越しました。付き合ってほしいと言うのです。でも、格別な用事など一つもないのです。ただ話を聞いてほしいだけです。あの人は自分の饒舌さがお気に入りの様子で、お世辞に類したことがたくさんたまりますたびに、私に耳を傾けてもらおうとするのです。でも、その必要はないのです。能弁ぶりを褒めそやすとか、お気に入りのおしゃべりを面白がって見せるとか、あの人を喜ばせるような真似は、頻繁にしているわけではないのですからね。

手紙を書き終えまして、ヒックマンさんのお知り合いに手渡し、二階へ戻ろうとして階段を六段ほど登りましたところで、待ってほしい、話を聞いてもらいたいのだと、あの人が頼むのです。

今申しましたとおり、新たなお話など別になく、ただ愚痴だけなのです。それも、言葉遣いといい、態度といい、ほとんど横柄とも取れる調子でした。もっと付き合ってもらいたいし、今少し願いも入れてもらいたい。これまでのままではとても耐えられない、と話しておられました。

そこで、私も階段を降り、応接間へご一緒したのですが、ひどく不機嫌な顔をしてみせました。と申しますのも、あの人がすっかりここに寛いでしまい、約束でしたのに、宿を替える話などおくびにも出さないものですから、なおさらに不機嫌だったのです。

すぐに唖み合いになりました。むこうから挑発してきたのです。私は、これまでの話し合いで口にしてまいりましたものの中でも一番率直なところを、いくつか繰り返しお話しいたしました。とりわけ、時間が経つごとにますます自分自身に対して、また、あの人に対しても、不満が募ってきているということ、あの人につきましては、付き合いを重ねるにつれて良さが見えてくるような人とは思えないということ、一人きりにしてくれるまでは、とうてい心は休まらない、といったことをです。

私の激しい口調に度胆を抜かれたのかもしれませんが、実際には、まるで腑抜けのよう

な顔付きで口ごもっておりますし、弁解の言葉も、横柄な命令口調についての言い訳も何一つ出てまいりませんので（私が殿方をお待たせして、手紙の筆を執っておりましたのは知ってのことですから）、私は乱暴にあの人から身を振りほどき、時間の使い方にいたしましても、振舞いにいたしましても、自分の思いどおりにしたいし、そのことでいちいち説明を求められるつもりはないと、はっきり言ったのです。

再び同席を許されますまでの間、あの人はひどく落ち着かない様子でした。そして、私といたしましては早過ぎるような感じで、そうするのは気が進まなかったのですが、やむなく顔を合わせました時にも、これ以上に遜った恭しい態度を装った男性はかつて存在したことがないというほどの物腰でした。

あの人はこんなことをおっしゃっていました。この機会に胸中を吟味してみた結果、性急なところや無思慮なところがあり、自ら咎めるべき点の多いことが分かった。他意のないこととはいえ、私のような繊細な心の持ち主にとっては、極めて不快であったに違いない。常日頃、男としての表裏のなさや心の率直さを目指してきたが、今の今まで、この二つが真の丁重さと十分両立することに気づかずにいたのであり、真の丁重さを無視し過ぎたきらいもある。逆の極端に走るのを避けようとしていたためだが、私に対しては、偽善者を軽蔑し、追従などには一切動かされない女性として接しなければならないことが分かっていたからだ。しかし、今後は、「この世でも最も繊細な心の持ち主」から、光栄にもご同席とお言葉とを賜っていることに気づいているような、そんな人間に期待される変わり様をご自分の振舞いすべてに亘って見ていただけるはずだ、とのことでしたが、何とも仰々しい言い回しでした。

私は次のように申しました。おそらくあの人としては、今お気づきになったこと、つまり、真の丁重さと表裏のなさとは両立すると気づかれたことに、私がお慶びを申し上げるものと期待しておられるのでしょうが、運命のいたずらからお付き合いを余儀なくされている私といたしましては、その点にもっと早く気づいてくださらなかったのが、当然ながら、残念でならない。というのも、生まれが良く教育もある男性なら、そのようなことを知らないわけはないと思うからです、と言ったのです。

そこまで厳しく非難されるほどのひどい振舞いではなかったとも思うが、とあの人が言っておりました。

私はこう答えました。そうかもしれませんわね。でも、そういうことでしたら、これまでの私の言葉から、もう一つお気づきになる点もあるのではないでしょうか。それは私自身にとって不利に働くことですが、もしも、ご自分に満足なさる根拠がそれだけおありなら、どれほど心の狭い人間を話し相手にしておられるのか、お分かりになるはずです。おそらく、ご自分には相応しくないとお考えの、そんな遜った態度を取っておられるご様子ですのに、それにお愛想をするだけの礼儀も弁えず、お言葉をすぐ真に受けてしまうような人間なのですから、と申し上げたのです。

お世辞嫌いを自称するあの人は、以前からずっと私の並外れた資質、そして、このような若い女性にはまさに驚異的とも言える思慮分別に感嘆し、無上の喜びを感じてもいたのだ、などと言い出すのです。

「私についてのご意見がどれほど厳しいものでありましても、マダム、お言葉はすべて的を射たものと考えることにいたしましょう。また、今後につきましては、ひたすら貴女

を手本とし、貴女のお示しくださる規範によってこの身を律する所存です」

「貴方の饒舌ぶりを伺って、誇らしく思うような愚か者ではないつもりですわ。表裏のないことをそんなにも大切にしておられる振りをなさるのですから、私に向かって私のことをお話しになる時には、真実以外は一切口になさらないという規則を厳しく守られるべきですわ。そうしてくだされば、私にはお世辞の一つも進呈して当然と、ご親切にもそのようにお考えくださるのでしょうが、そんな並外れた娘をこんな大馬鹿者に変えてしまわれたご自分の手管を誇りになさるほうが、はるかに当を得たことになりましょう」　私はこう言い返してやりました。

実際の話、もっと丁重な扱いをする値打ちなどはない男ですわ。それに、私が世間の笑い者、大馬鹿者になってしまいましたのも、あの人の仕業ではなかったでしょうか。あの人自身もそんなふうに考えているのではないかと、そのことが心配になります。

「驚きましたね。あまりにも奇妙な仕打ちで、呆気にとられましたよ、マダム。実に不幸な話です。私の言動が何一つとして、好意的なご意見につながらないとは　…　ご信頼を賜るためには、一体何をすれば良いのか、是非とも知りたいものです」と、あの人が切り返しました。

あの人がいなくなってくれることが何よりも望みなのだと、私は申しました。身内の者たちがわざわざ妨害のための手を打つとは思われないことを話し、それゆえ、ロンドンかバークシャー、あるいは、どこであれ、お好きなところへ向かってくだされば、私にとってはそれが一番好ましいし、世間体の点でも最善だとお話ししたのです。

私が好みの場所に、つまり、私にとって都合の好い場所に落ち着いたなら、すぐにもそうしたいし、そのつもりでもいるのだ、とあの人はおっしゃるのです。

「ここでも十分ですわ。貴方がここにお残りになって、私のところに押しかけたり、部屋の使い勝手を不自由なものになさったりするようなことがないのでしたらね」と、私は申しました。

ここが安全とは思われない、とあの人は答えておりました。それに、ここに落ち着く気持ちが私にはないということであったので、さもなければそのつもりでいたのだが、あの人の召使にも、私の傍を去る際のグリーム夫人にも、あまり熱心に口止めはしておかなかった。また、この近くには紳士が二、三人いるのだが、その召使とあの人の口の軽い召使とが付き合いを始めている。それゆえ、無防備のまま付き添いもなしに、私をここに残して行くようなことは考えられない。ただし、イギリス中のどこであれ、私が危険に遭わずに済みそうな場所を指定してもらいたい。そうしてくれれば、国王の領土のその最果ての地へも赴くつもりでいる。それで安心してもらえるのなら、とおっしゃるのです。

私は次の点を率直に申し上げました。あの人と会ってしまったという点で自分自身に対して、また、私を唆して連れ出したことではあの人に対しても、どうしても気が済まないところがあるし、後悔の念は鎮まるどころか、募るばかりだということ。私の評判は傷付き、どんなことをしようとも、もはや回復の術はないということ。自分自身、そして、あの人に対して、時間が経つにつれてますます苛立ちを覚えるとしても、驚かないでいただきたいということ。そして、結論としては、自分のことは自分で処理したいと考えているし、身の振り方にしても行き先にしても、一人きりにしてくれると一番よく分かるのではないかと思う、といったことをお話ししたのです。

あの人はこう言っておりました。一つささやかな提案があるのだが、それを遠慮なく口に出したとしても、無礼なことになるとか、あるいは、私が条件として示し、主張していた条項を破ろうとしているのだなどと思われずに済むなら有難い。ただ、私の差止め命令すべてを侵し難いものとして尊重する覚悟であるし（この前の日曜日に、不承不承でしたが、力になっていただくことをあの人に委ねていたのです）、提案に不賛成の場合でも、不問に付すことを約束してくれるのでなければ、言い出すわけには行かない、とです。

私は、少々困惑しながら、何をおっしゃりたいのか尋ねました。

前置きをした上で、あの人は仰々しい言葉を並べ立てておりましたが、やがて、ずいぶん自信なさそうに、言い訳がましい言葉を重ね、取って付けたようにはにかみながら、挙式を急ごうという提案が切り出されたのです。あの人は、それで万事がうまく収まり、最初の三、四ヶ月の間は、お身内の方々をひと通りお訪ねしたり、皆さんからのご訪問をお受けしたりするのに費やされるだろうし（でなければ、人目を避けながら、不安のうちに過ごさねばいけない）、ハウ嬢であれだれであれ、好きな人を訪ねることも出来れば、私が切に願っている和解への道を用意することにもなるだろうから、とおっしゃるのです。

あの人が挙げた理由の数々や、この不幸な状況への思いと同様、貴女のご忠告がとても大切なことに思われていた折ではありましたが、私のほうから何が言えたというのでしょう。代わりに口をきいてくれる人がいたらと、つくづくそう思いました。

あの人は、私がこの提案に腹を立てていないのを看て取りました。私は顔を染めただけだったのです。きっと耳まで赤くなっていたことでしょう。ぼんやりと、魂の抜けたような顔付きをしていたに違いありません。

度胸のない人などではありません。最初の申し出に、ほんの最初の一言に、私が飛びついてくれると思っていたのでしょうか。それに、私が黙っていたこともあります。男の人というのは、黙っているのは色好い返事と考えるのではないでしょうか。つい先頃までは父の屋敷にいたわけですし、ご忠告をいただく前にも、あの人がいわば保護観察といった状態を無事に終了しますまでは、結婚のことは考えたくないと、手紙ではっきり断ってあったのです。こんなにも急な申し出です。すぐにもお受けすると言わんばかりに、好い顔を見せるようなことがどうして出来ましょう。唆されてとは申せ、失礼な態度を取ったすぐ後のことですから、なおさらです。私には死んでも出来ないことでした。

あの人はいかにも自信ありげに私を見据えておりました。まるで（それとは裏腹なはにかみの表情を作っているのですが）私を射抜こうとするみたいな目付きなのです。私のほうでは、時折ちらりとあの人に目を向けるだけでした。大層遜った態度で許しを請うておりましたが、無言の軽蔑を示す以外、何を答えるにも値しないと、そんなふうに私が考えるのではないかと心配だというのです。真の愛情というものは、相手に不快な思いをさせるのを恐れるものだ、ともおっしゃっていました［その方式で試されたら、貴方の愛情とやらはどんなことになるのでしょうね。ご注意なさることですわ、ラヴレースさん、と私は胸の中で呟いておりました］。実際の話、前もって私が行う宣言のすべては、侵すべからざるものとして遵守する所存でいる（呆れた人ですね）、光栄にも私が　…　などと言い出すのです。

私はそれ以上耳を貸す気になれず、困惑ぶりは一目瞭然でしたが、独りで愚にもつかない美辞麗句を並べ立てているあの人を残し、その場を逃げ出してしまいました。

もう一言だけ付け加えておきましょう。あの人が本当に早い挙式を望んでおられるのなら、同意を迫るのにこれ以上の好機はなかったものと思われるのです。なのに、あの人は話が立ち消えになるままに放置し、代わりに、怒りに身を任せたのです。ですから、今の私といたしましては、あの人を遠ざけることが肝要ということになりましょう。

変わることなき誠意と感謝の念を込めまして、貴女の

Cl. H.

手紙　十二
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

四月十三日　木曜日

なあ、ジャック、俺が改心へ向けてすでに大股の歩みを始めたからといって、貴公までが娘どもの口にするような驚嘆の声を上げることはないのだぞ。というのも、貴公には分からないのかな。昼夜の別なく、ひたすらにこの美女一人を追い求めていた間は、さもなければ別だったのだろうが、俺が償うべき事柄ははるかに少なかったということだよ。さあて、何昼夜に及ぶかといえばだな、四十日にもなるはずだよ。開放壕の後、遮蔽壕の中だけで過ごしたのだ。なのに、いまだに地雷の一つも爆発していないのだよ。

このひばり一羽を罠に掛けようと骨折っていた間に、内輪に見積もっても、鳶の一ダースは落ちていたかもしれないのだよ。それでいて、いつになったら俺の罠におびき寄せられるものか、いまだに目途もつかないままだ。それゆえ、汚れなき日々をさらに重ねることになるのだろうな。だが、目的のすべてを実現するためには、カモフラージュとしての改心が、時間は掛かかるとしても、確実な方法であることを願っている。

それにだな、ジャック、俺に筆を執らせることで、貴公にも功徳が及ぶのだよ。というのも、こうでもしなければ、もっとくだらないことに貴公の時間は費やされることだろうからな。それに、つまるところ、これまでの習慣を改め、新たな習慣を生み出せば、本物の改心がもたらされないとも限らないだろう。俺は約束をしてしまったのだ。それに、立派な振舞いをしているところを見てもらうのにも、それなりの楽しみがあるものと確信しているのだよ。ナット・リーが描いた狂人たちの楽しみを逆にするわけだが、

善人以外のだれにも分からぬもの（一五）

ということだ。

これらすべてから推して、貴公にも見当がつくのではないだろうか。理由は二十もあるが、楽な獲物を求めるよりも、骨の折れる狩りのほうがはるかに望ましいものなのだ。この楽しさを貴公にも教え込みたいと考えている。コクマルガラス、ハシボソガラス、ヒドリガモなどよりは、もっと高等な獲物に飛び掛かるよう指導したいのだ。この華々しい機会に臨んで是非にという、貴公のたっての願いで始めた文通だが、続けているうちに折に触れて証明してみせたいと思っている。これら高貴な婦人方を卑しめることも出来るという点をな。また、この前会った時に貴公が唱えていた異議の一つを取り除きたいとも思う

のだよ。いかにも下種の貴公らしく、女はどれもこれも同じとの主張から、このような高尚な目的に伴う喜びといえども、それらがもたらす苦痛を考えれば、割に合わないとの意見だったよな。

　貴公には何も分かっていないということだよ、ジャック。密通を企てる際の繊細な心遣いはな。賢くて用心深い女を出し抜く時の無上の喜びをちっとも分かっていないのだ。お高く止まっている時には散々悩まされた高慢ちきな美女を引っ掛けるべく、創意工夫とか発明の才とかに恵まれた人間が、頭に浮かんださまざまな網のうちのどれを使ったものかと思い巡らす時の、心を満たすあの楽しみを知らないということだ。安楽に暮らす犬みたいに、放られた骨に唸り声を上げることで満足している貴公には、狩りの楽しみ、逃げ惑う獲物を追い詰める楽しみが分からないのだよ、ジャック。こういった喜びに目覚めてもらうよう、ひとつ骨折ってみようと思うのだ。そして、目覚めてくれた暁には、二重にも三重にも俺に感謝することになるはずだ。何せ、当面の楽しみが得られるのだし、とてつもないほどの見通しが開けることにもなるわけだからな。

　今までのところは、我が魅惑の君にお目通りを許される前の話で、まったくの手慰みとして書いたものだ。だが、ここで、俺の推測がぴったり当たっていたことを話しておかねばなるまい。彼女は独立して、俺をお払い箱にしたがるだろうという点についてだよ。そのように決心しているということを、憚ることなく明言して見せたのだ。理由は何かというと、腹蔵なく言わせてもらえるなら、とのことだったが、俺と会うほどに、また、俺の行状を見るにつけ、どちらについてもいよいよ賛成するわけに行かなくなるから、というのだよ。

　これには、俺もひどく応えたね。勿論、泣きわめくような真似はしなかったさ。もしも女であったなら、そうしていたことだろうな、俺様としても。それも、思いきりたっぷりとだ。ただ、白麻のハンカチを取り出した。ハンカチを意のままにすることは出来たのだが、涙のほうは無理だったね。

　俺の申し立てを彼女は咎めるのだよ。告白の言葉も、誓いの言葉もだ。召使に悪態をつくことも出来やしない。主人たることを知らしめる唯一の特権だというのに、そんなことをすれば、兵士風情と思われてしまうのだよ(ア)。「魂にかけて」とも「命あっての物種だから」などとも言ってはならないというのだ。なあ、ジャック、何ともやかましい話ではないか。彼女と同様、俺にも立派な魂が備わっているなんて考えは、俺には持たせたくないとでもいうのだろうか。俺には魂の救済は望み得ないと考えているのなら、何のために俺を改心させようというのだ、一体全体　…　（おっと、これも異議の出る言い方だ）。そんなわけで、熱のこもった言い回しは何一つ、俺には残されていないということなのだ。

∴　　∴

　甘言には決して乗らず、褒め言葉にしても、自分の心の是認を得ているもの以外はすべて忌み嫌うという女に、一体どんな手が打てるというのだ。

　なあ、ジャック、貴公にも分かるはずだ。そろそろ手口を変える頃合なのだよ。予定よ

（ア）十四頁から次頁にかけてを参照のこと。

りは少し急いで信心の道に向かわねばなるまい。
　評価の下がることもそうだが、彼女そのものを結局失うようなことにでもなれば、こんな情けない話もあるまい。これが初めてだよ。親交を深めながら、一撃を加えてもいなければ、疑念一つ起こさせる真似もしていないというのに、俺に対する淑女の気持ちが冷えてきたのはな。はなはだしい屈辱だよ。彼女が帰ると言い出しても、確かに、引き止める口実一つないのだ。力ずくなどというわけには行かないし、それを仄めかすことも出来ない。何事もなく一緒にロンドンへ行けたらと、神に祈る始末だが、今の俺にはそれで精一杯なのだ。しかも、こちらからはおくびにも出せないのだよ、そんなことはな。
　それにしても、何故に自らの運命を急かせるのだ、この天晴な娘御は。父親の屋敷を捨てなければ良かったなどと、いまだに面と向かって愚痴をこぼすのは何故なのだ。同席を拒み続けるのは何故だ。その挙げ句、俺は忍耐心を失い、まともに恨みを買ってしまうことになるのだよ。そして、憤りを感じたとなると、力の絶頂、奢りの極みにある高飛車な美女なみに、極度の怒りに身を任せるのは何故なのだ。
　彼女の立場からして、あんな台詞を面と向かって、それも、繰り返し口にするのが分別のあることだと貴公は思うかな。曰く、時間が経つごとにますます、自分自身にも俺にも不満が募ってきている。俺のことは、話題にしても話し振りにしても、良く見えてくるような人間とは思えない［貴公ならどうだ、ジャック。捕虜にこんなことを言われて平気かな］。俺が一緒にいるうちは心が休まらない。付き合いを余儀なくされたのは運命のいたずらだ。俺の饒舌ぶりに接して誇らしく思うような愚か者ではないつもりだ。彼女のことをお世辞に相応しい人間だと思ってくれるのなら、そんな並外れた娘を世の笑い者にした俺の手管を誇りにして構わない。俺と会ってしまったという点で自分自身を、また、彼女を唆して連れ出したことでは［彼女が用いた言葉そのままだ］俺のことを、決して許すわけには行かない。後悔の念は鎮まるどころか、募るばかりだ。自分の面倒は自分で見ることにするし、身内の連中がわざわざ妨害のための手を打つとは思われないので、放っておいてもらいたい。俺がいなくなれば、ソーリングズ夫人の家ももっと快適になるはずだ。バークシャーとかロンドン、あるいは、俺の好きなところへどこでも［地獄のことだろうと思うのだがね］行ってくれて大いに結構、というのだからな。
　策のない話だよな、魅惑の君も。考えているとおりの執念深い男を相手にしているというのにだよ。道楽者なのは知っての上だ。しかも、その掌中にあるのだぞ。貴公も承知だろうが、俺にはこれまでためらいがあった。あっちに傾いたり、こっちに傾いたりしていたよ。彼女の気持ちがどう働くのか、俺の気持ちはどちらに向かうのか、様子を見ていたというわけだ。彼女の気持ちにひどい偏りがあるのは、貴公にも分かるだろう。だからといって、俺が左右されるとでも思うかな。これ以前にも、山ほど彼女に落ち度があったのではないのかな。俺に後ろを振り向かせようとするのは何故なのだ。
　いずれ、じっくりと腰を据えて考えてみるつもりなので、どんな結果が出るか、そのうち知らせることにする。
　彼女にかかると、俺も浅ましい奴隷の姿になってしまうのを、貴公が知ってくれさえすれば　…　一目だけでも見ていたなら　…　彼女に言わせると傲慢ということになるのだが、俺は強い態度を取っていたのだ。だが、彼女への愛を窺わせるような態度だった。彼女なしには生きて行けないことを如実に示すものだったのだ。ところが、その鼻っ柱を木

っ端微塵にへし折ってくれたのだよ。お陰で、不安な気持ちに駆られてしまった。彼女のほうはすっかり立場が有利だし、手厳しい仕打ちに出るものだから、まったくの話、俺としては弁解の言葉一つないくらいだった。話すのも恥ずかしいが、哀れな姿に追い込まれてしまったのだよ。だがな、ご立派なプライドをすぐにもへこませるようなことを、その気になれば、言ってやることは出来たのだよ、この俺にもな。彼女がお誂え向きの場所にいて、お誂え向きの連中に囲まれていたならだ。

だから、その場所へ急ぐことにしよう。彼女には俺から逃れる術もない場所へだ。その時こそ見届けてもらうさ。意のままに操るところをな。シーソーにも似た恋の手管の効果をな。腰を低くしているかと思えば、次には高飛車に出る。期待したり要求したりするかと思えば、降参したり黙認してみせるのだ。疲れ果てて、抵抗出来なくなるまでな。

だが、差し当たっては、これくらい仄めかしておけば十分だ。おいおい詳しい説明をすることになるだろう。事を進めながらな。また、俺の今後の動きの成否次第でだ。彼女が以前の不義理な態度に戻るようであれば　…　仮にもそんなことがあれば　…　いや、もう止そう。今も言ったことだが、差し当たっては、脅すのはこれくらいにしておく。

手紙　十三
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ　［承前］

すべての主導権を握るためには、ただ忍耐あるのみというわけだが、俺がそこに気づいていないと思うのか。評判に傷がついたと盛んにこぼしたり、俺と会ったのを悔やむ思いが募るばかりだの、唆して連れ出したことに対しては、抑え難い怒りを覚えるだのと断言してみせるし、独りにしてもらいたいと恐ろしい剣幕なのだが、もしも、もしもこのすべてが、結婚目当てのことに他ならないとしたらどうする。俺としてはその話題に入るのを控えているわけだが、彼女の癇癪や苛立ちの本当の原因がそこにあるのだとしたら、一体どういうことになるかな。

いったん誓いを立てたら取り消しはきかないというこの契りのことを、冗談半分で仄めかしたこともあるのだよ。だが、ぼかした言い回しにしなければいけないし、悟られた時にはすぐにも話題を変えなければならないと思ったのだ。卑劣な方法で強要されたなどと思われないためだよ。彼女も今では、いわばこちらの手の内にあるわけだし、俺の改心がはっきりと看て取れる状態になるまで、そして、身内の連中と和解の目途がつくまで、その点に触れてもらいたくはないと以前から言われていたこともあるからだ。だが、議論でも才能の点でも打ち負かされ、もしも彼女が立ち去ろうとすれば、引き止める適当な口実も俺にはないのだし、疑念を抱かせるようなことをすれば、すぐにも他の者に保護を求めるとか、ハーロー邸やソームズのところへ戻ってしまおうという、そんな相手から、独りにしてくれと矢の催促を受けたのだよ。今度ばかりは俺もはっきりと話題にした。ひどく疑わしげに、また、ためらいながらではあったが［俺のことを不快に思わないようにというわけなのだ、ベルフォード］、合法的な絆を結ぶことに同意し、そして、俺をこの世で一番の幸せ者にしてくれなければいけない理由を添えてだよ。すると、あゝ、彼女は頬を朱に染めて両目を伏せ、無言のうちにも唇を震わせながら、胸を波打たせているのだ。一段

と際立つ美が心地好く勢揃いといったところだが、それこそ、申し入れがとてつもなく不快なものではないことの証だな。

あゝ、魅惑の君よ、と俺は考えた［だが、申し渡しておこう。俺の歓喜の様を他の女には一切漏らしてはいけないぞ］(ア)。早くもこういうことになったのか。早くも俺は、クラリッサ・ハーローとも称される者の運命を司る主となったのか。すでに俺は、そなたが俺のあるべき姿として心に定めた、あの悔い改めた男だというのかな。何らの励ましも未だ与えられてはいないのに……「俺を知れば知るほど、良しとすべき根拠がそなたには見当たらなくなる」というのはこのことなのかな。それほど神々しい胸に、作為や術策が入り込み得るものなのか。俺をさらに引き付けるために、また、恩恵の有難味を増さんがために、俺を追い払おうとし、こうも厳しく、姿を消せと言い張るのか。そなたが策に頼るのだから、俺が用いるのは当然至極というわけだし、そなたに向かって陰謀の才を思いのまま発揮するよう促していることにもなるのだぞ。

だが、言わせてもらおう、魅惑の乙女よ。仮にもそなたの望みに応えねばならないというのなら、俺と屋敷を出る際のあの不本意な態度については、未だ説明がついていないということだ。それも、浅ましい男との結婚の軛に無理やり繋がれるのを避けるには、家を出ることが不可欠という危急の時だったのだ。また、あの恥知らずがそなたの嫌悪の的になっていないとすれば、俺に対し不誠実なだけではない。そなた自身の真価をも偽っていることになるということだ。

言わせていただくが、俺の場合、身分の点でそなたに匹敵する者たちからも好意を寄せられるのが、いわば慣例なのだ。もっとも、取り柄の点では劣るのだが、そなたに劣らぬ者など考えられまい。それに、だれにもまして俺に好意を抱いているのかどうか疑って然るべきだという、そんな女性とこの俺は結婚するというのだろうか。

それは有り得ないことだ、最愛の人よ。そなたの命令は、ひたすら侵し難いものとして重んじていればこそ、断じて破棄させるわけには行かないのだ。たとえそなた自身によってもだ。無言のうちに顔を染めるとしても、それだけを頼りにそなたの真意を汲み取るつもりもない。また、この遜った気持ちを誘うのは必要に迫られてのことか、それとも愛からなのか、そこに疑念の余地を与えるようなこともしてほしくないのだ。

このような信念からすれば、彼女が押し黙っているのは、軽蔑の気持ちから気分を損ねたためだと解釈する以外になかったのだよ。そこで、俺は詫びた。感情を害する恐れが十分ありながら、そんな提案をしたことを許してほしいとな。今後は、既に与えられている命令を神聖なものとして尊重し、行いのすべてを通して、真の愛情というものは、いかなる場合にも、相手に不快な思いをさせるのは恐れるものだという、あの所見の正しさを証明する所存でいると話したのだ。

それで、果たして令嬢はどう答えたのだ、と貴公は尋ねることだろうな。

(ア)ラヴレース氏の警告は、この際、無用のものであったとも言えよう。本書の初版に接し、ここまで読み進んだ多くの女性読者、また、令嬢の最初の出奔の箇所まで目を通しただけの者でさえも［筆者としては、その点に触れるのを遺憾に思う］、九頁に付した先の注でも述べたことであるが、氏の用いた手管およびその歓喜の姿を、卑劣で、男にはあるまじきもの、さらには、残酷かつ恩義にもとるものとして氏を責めるのではなく、むしろ、令嬢のあまりの堅苦しさのほうに非難を向けようとしたのである。

答えるだと　…　苛立ち、まごつき、苦悩の表情だったよ。彼女自身になのか、それとも、俺になのか、どちらに腹を立てたら良いものかと迷っていたのだろうな。ただ、背中を向け、溢れ出る涙を隠そうとでもするような仕草だった。二言、三言、かろうじて聞き取れる震え声を漏らしては、溜め息をつくのだ。涙を堪えていたのだろうな。そして、勝ち誇る俺を独り残し、引き下がって行ったのだよ。

礼儀正しさなどというものを持ち出すのは止めてもらおう。寛大さなどは口にしてほしくない。憐れみを説くのもたくさんだよ。互角の相手ではないのかな、彼女は。互角以上ではないのか。まともな武器ならどれでも、俺よりも上手ではないのか。彼女の愛情を疑う気持ちを俺に起こさせたのではなかったかな。要らぬ骨折りというものだが、俺への気持ちがどうであれ、ソームズを忌み嫌っているわけではないのだと、彼女は言明したのではなかったかな。奴の手の届かないところに身を置くことになったと嘆いてはいなかったかな。つまり、俺と会ったことをだよ。

それに、今この令嬢と俺が結婚すれば、ハーロー一族の思い上がりも頂点というところだろうな。我が家の足下にも及ばぬ一族だがな。彼女を別にすれば、縁を結ぶに相応しい者など一人としていないのだよ。俺個人の資産にしても、馬鹿にしたものではない。身代を弁えた暮しをしているが、他人に頼るのを避けるためだ。奴らより上等な連中にでもだよ。そして、世話になっている者はこの世に一人としていないのだ。遺産相続の見込みはさらに輪をかけて大きい。容姿にしても才能にしても、まったくの話、馬鹿にしたものではない。なのに、連中からは鼻にも掛けてもらえないのだ。娘に言い寄るのにも、人目を憚らねばならない。王国でも一流の名門二家族から申し込みのあったこの俺がだよ。お断りしたのだが、一つには彼女のためだ。また、彼女が相手でなければ、絶対に結婚する気はないということもある。盗み出すなんてことをしなければならないとはな。それも、奴らのところからというだけではない。彼女自身からもだ。その挙げ句に、ハーロー一族に許しを請い、和解の嘆願をする羽目になるというのか。富だけを誇りとしている陰気な暴君の、その息子として認めてくれるよう頼むというのか。俺に対して抜き去り難い敵意を抱いている卑劣漢の、その弟にしてくれと頼むのか。あの姉にもか。誘ってみる値打ちもない女だ。でなければ、モノにしていたはずだ、こちらの思いのままにな（それも、妹が掛けた面倒や苦労の十分の一でだ）。そして、これで終わりにするが、あのおじたちの甥にしてくれと頼むというのか。築いた財産が自慢の種の連中だ。財産目当てににじり寄って来るなどと、無礼なことを言うだろう。冗談でない。ラヴレース家の血が許さん。その血筋を引く最後の者なのだ。そして、言わせてもらうが、一番卑しい者ではないのだよ。妻一人のために、そうもペコペコと媚びへつらい、這いつくばったり出来るものか。

じきに続けることにする。

手紙　十四
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ　［承前］

しかし、こうして俺が暗に脅しをかけている相手は、あの神々しいクラリッサ［ハーロ

ーの名を出すのは勘弁してほしい。彼女以外の奴らすべてについては、感情が受け付けないのだよ」ではないのか。美徳が真の高貴さだとすれば、彼女は何と気高いことか。彼女との縁組はどれほどこの身を高めてくれることだろう。彼女が生を享けた一族、彼女が俺よりも優先しているあの一族は軽蔑されるのが当然、ということでないのならな。

だが、もう一度、中断させてくれ。この神々しい女には、何か瑕疵のようなものはないのだろうか。何か間違いはなかったかな。目新しさがその魅力を失った時、そして、彼女が体も心もすっかり俺のものとなった暁に、その間違いに思いを巡らすと（俺にとって有利な受け止め方が出来るとしてもだ）(ア)、こちらが惨めになってしまうということはないのかな。道楽者というのは、仮にも選り好みをする場合にはだが、他の連中よりも気難しいものなのだよ。誘いを掛けた女たちから、美徳を盾にされる道楽者は滅多にいない。それで、モノにした女の操の脆さを見て、女すべてを判断してしまうのだ。「押しの強さとお膳立てが揃えば、抗し切れる女はいない。とりわけ、好みに合わせて誘惑する術を心得ている、辛抱強い色男の場合には然り」というが、貴公も承知のとおり、これこそは放蕩者の信条のうちでも主要なものなのだ。

「また、何ということだ（と、貴公は驚いて尋ねるのだろうな）。この天晴なことこの上ない女性を貴公は疑うのか。クラリッサとも称される者の美徳に疑義を申し立てようというのか」とな。

疑ってはいないさ。疑う気もない。畏敬の念が邪魔をして、まともに疑うことは出来ないのだよ。だが、今度は、俺にもひとつ尋ねさせてもらいたい。彼女の美徳は主義というよりも、見栄に根差しているのではないかな。その可能性はないのかな。一体、だれの娘だと思うのだ。それに、彼女とて人の子ではないのかな。非のうちどころ一つとしてないとすれば、どのようにしてその完璧さに辿り着いたというのだ。女性に模範を示そうとの思い上がった気持ちにこれまでは駆られていたのだよ。そのためかもしれないだろう、今まで難攻不落だったのは。だが、その思い上がりも、今は影を潜めているのではないのかな。屈辱を味わっている最中には、男であれ女であれ、何をしでかしても不思議ではあるまい。悲運に屈しない心の持ち主などどこにいるというのだ。婦徳の守りの要となっているのは、おそらく、見栄なのだよ。女の鼻を折ってみることだ。実際に腰が低くなるかもしれないだろう。

それに、一体だれなのだ。クラリッサ・ハーローこそは婦徳の鑑だ、美徳の化身だ、などと宣うているのは。

彼女を知る者、彼女の噂を耳にしたことのある者すべてだ、という答えが返ってくることだろうな。

ただの風説じゃないか。美徳が風説だけで決められて良いのかな。彼女の操が試されたことはあるのか。思い切って試してみた者はいるのかな。

じっくり腰を据えて考えてみるとは言ったが、自分でも気づかないうちに、すっかり理屈っぽくなってしまったな。

この件を細かく吟味させてもらいたい。

(ア) 教訓を求めてというよりも、娯楽のために読書をすることの多い女性は、このラヴレース氏の手紙には特段の注意を払っていただきたい。

この点について既に述べてきたこと、また、これから触れることが、俺の言として、いかにも公明正大さを欠くやにも映るのは先刻承知なのだ。ただ、美徳を試してみようというわけだが、俺の意図としては、保証付きだと分かった場合には、美徳を称えようとの思惑があるのではないかな。「されば、しばし立ち去るべし。或る者は〈感謝の念〉と呼び違え、卑しからざる心の堕落を誘うこと多き、かの気弱さに発する想いのすべてよ」といったところだな。

だから、試さなくちゃいかんのだよ。この魅惑の乙女を精一杯厳しく試してみるつもりだ。どの部分にせよ、俺の手紙を見せられる女のすべてに［分かっているのさ。品性を傷つけるとか、実名が出てしまうといった恐れのない、そんな当たり障りのない一節を紹介して、貴公が知り合い全員を楽しませようとするのはな。だからこそ、気持ちに添いたくて、話に色を付けもするのだ］、そう、すべての女にそのあるべき姿、望まれる姿を分からせるためだ。また、思索的な男、几帳面な男［お望みなら、〈誇り高い〉としても良い］を相手の場合は、いかに注意が必要なのかもな。規則正しく一定不変の振舞いをしなくちゃならん。求めに応じたのを軽く見られないためだ。生まれつき節操がないのだと受け止められかねないからな。妻は夫の名誉を守る立場にあるのではないのかな。妻に落ち度があれば、妻自身はもとより、より以上の不名誉を夫にもたらすものではないのかな。

俺が結婚生活を忌み嫌ってきたのも故なきことではないのだよ、ジャック。

だから、前述のとおり、試さねばならないのだ。今や俺は真っ向から問い掛けられているわけだからな。果たして妻を娶るべきなのか、とだよ。そして、彼女は進んで妻となるつもりなのか、それとも、人手を介さなくてはいけないのかについてもだ。

正々堂々とやるつもりでいる。愛しの乙女を評価するに当たっては、厳しいばかりでなく、寛大な態度も取ることになるだろう。われわれの方針と同様、彼女自身の見方も取り入れて裁こうと思うからだ。

俺と文通を続けたということで、彼女は自分自身を責めている。放縦な人間であり、実際、この文通に彼女を引き入れるのを第一の目的とし、彼女には分からない手段で、まんまと成功を収めた男だからな。

ところで、この文通を進める彼女の動機は何だったのかな。彼女としては、几帳面さゆえに非難に値すると考えているものだが、そいつが動機ではないのだとしたら、何故に我と我が身を責めているのだ。

過ちを犯すようなことが彼女には出来たのだろうか。その過ちに固執するようなことは出来たのだろうか。

誘惑したのがだれであれ、それは関係のないことだ。また、どのような誘惑であったのかもだ。事実だよ、その過ちだよ、今われわれの眼前にあるのはな。

親の禁止に背いて、彼女は過ちに固執したというのか。

そのとおりだと彼女は認めている。

子の務めについて、親の権威について、彼女以上に高邁な考えを持つ娘が世に知れ渡るようなことはかつてあっただろうか。

答えはノーだ。

あれほど従順な娘ではないか。その孝養心をもってすら打ち克つことが出来なかった動機とは、一体いかなるものだ。よほど強いものだったのだろう。それだけの動機だ。俺の

ほうではどう受け止めたと思うかな。こんな考えから、当時、そこに大きな望みを託したとしても不思議はあるまい。

それはそうと、こんな言い分もあるだろうな。彼女の主たる眼目は、兄や他の身内の者たちと、連中全員から手酷い侮辱を受けている男との間で、悶着が起こるのを防ぐことだったのだ、とだよ。

だが、彼女が他の者たちの身の安全に、連中自身よりも気を配らねばならない理由でもあるのかな。それに、あの時、衝突は起こらずに済んだとでもいうのかな。美徳の誉れ高い女が、説き伏せられ、明白この上ない義務を、当然の本務を、忘れ去ったりして良いのだろうか。いかなる思惑からにせよだ。また、それは許されないことだとしたら、懸念されている災難だけを防止するよう説得されて良いものだろうか。

「ラヴレースよ、誘惑した張本人の貴公が相手の過ちを咎めようというのか」（と、また出し抜けに貴公は言い出すのだろうな）。

咎め立てをしているのではない。論じているだけのことだ。それに、いつだって心の中では、あの神々しい乙女のことを許しているし、崇めているのだ。それでも、やはり確かめさせてくれ。許すのは彼女の立派さゆえなのか、それとも、俺の弱さ、つまり、愛の本名たる軟弱さのせいなのか、という点をだ。

だが、もう一つ別の動機を考えてみようじゃないか。つまり、愛だよ。世間の皆も彼女のことを勘弁してくれそうな動機だ。ただ、言わせてもらうなら、世間にしても、当然のこととして許すわけではないのだ。世を挙げて愛には惑わされ易いということだよ。

そこで、愛が動機ということにするが、一体だれへの愛なのかな。

ラヴレースと称する男、というのが答えだ。

ラヴレースとやらはこの世に一人だけなのかな。あの素晴らしい容姿だ。あれだけ優れた資質だ。夢中になっているラヴレースがもっといるのではないかな。俺が心を惹かれたのはあの人柄だ。そして、虜となってしまったのがあの美しさと見事な分別だが、それやこれやで、今では、誘惑してみる価値のある相手、我が野望に相応しい対象と考えるに至ったのだよ。

だが、彼女はその愛を認める虚心坦懐さ、率直さを持ち合わせているのかな。

持ち合わせてはいないのだ。

ならば、本当は愛なのだとしても、その愛の影に紛れて、別の瑕疵が潜んではいないのか。衒いの気持ちはないのかな。それとも、奢り高ぶった心かな。

だとすれば、どうなるのだ。女神のごときクラリッサには、愛してはいけない男を愛することが出来るということかな。上辺を飾ることもあるのかな。その美徳はプライドに根差しているということかな。これらの問いに対する答えが「イエス」なら、彼女はやはり女だということになりはしないのかな。

また、彼女はこの恋人を寄せつけずにいられるのかな。他の女が相手の時には、いつも凱歌を奏でてきた男だ。その男を震えさせることが彼女には出来るのかな。愛してくれているのは自分なのか、それとも、だれをもなのかと、時には疑念を抱かせるような振舞いは出来るのかな。ところが、彼女の考えでは［どうだ、ジャック、彼女自身の考え方に則って裁いているというわけだよ］、己の信用にとって極めて重大な影響を及ぼす行動に踏み切るに当たっても、感情そのものを抑えるだけの力はなく、唆されるまま、父親の屋敷を

捨てることを約束したり、一緒について来たりしてしまう始末なのだ。相手の人柄は知ってのことだし、およそありそうもない、見込みの薄い偶発事が起こるまで結婚はしないなどと、条件まで出してみせるのだ。たとえ、他の女が皆引っ掛かって当然というような挑発行為だとしても、それが何だ。仮にもクラリッサと呼ばれる者だ。誘いに乗るようなことがあって良いものだろうか。ここまで気持ちを動かされてしまったのは大いに非難されるべきことだと、自分自身も考えているのだからな。

だが、愛しの乙女が、約束の取り消しを決心しながら、恋人と落ち合ったことについて一考してみよう。その恋人というのが、これまでにも一度ならず彼女に裏切られている大胆不敵な男ときている。約束が実現されることを迫る覚悟で、また、彼女を連れ去る決意でやって来るのは承知のはずなのだ。さらには、現実に彼女を連れ去り、掌中のものとしている点も考えてもらおう。繰り返すが、他にもラヴレースがいるのではないのかな。同じ手口を用いるとは限らないが、これまた恐れを知らぬ、根気強い冒険家がだよ。

そうすると、クラリッサともあろう者が（彼女自らが裁くところでは）踏み誤ったということかな。これほど重要な点で過ちを犯したというのか。ならば、過ちを重ねる可能性もありはしないのかな。これまでに彼女がしくじった他のすべての点が自然と向かって行くことになる、あの最も肝心な点で過ちを犯しはしないだろうか。

美徳というのは、天の目からすれば、女の嗜みであるだけでなく、男の嗜みでもあるなどと、そんな説教も止めてもらおう。俺がここで言う美徳とは、操の堅いことだ。誘惑に屈しない心を言っているのだよ。我がクラリッサのことを問題にしているわけではないのだ。また、脛に傷持つ男の分際で、潔白であること、そして、疑いの余地すらあってはならないことを女に向かって期待する気か、などとも尋ねてくれるな。いいな、こんな論拠は主張しないことだ。道を踏み誤った場合、妻が夫にもたらす害のほうが、夫が妻に与えるものよりも大きいかもしれないのだからな。夫ばかりではない。一族全員に害が及ぶのだ。他人の子供を夫の財産に仲間入りさせ、場合によっては実子が除け者にされることにもなるが（少なくとも、実子と分配に加わるのだ）、その間ずっと、夫のほうでは皆自分の子供だと思い込んでいるのだ。それゆえ、天の目からすれば、同罪というわけには行かないのだよ。おまけに、どこかで読んだことがあるのだが、「女が男のために造られたのであり、女のために男が造られたのではない」（一六）ということだ。だとすれば、女が美徳をないがしろにするのは、男の場合よりも許されないということだな。

貴公ごときが、ラヴレースよ、それほどまでの完璧さを女に求めるとはな（と、貴公よりも立派な御仁が言い出しそうだな）。

そのとおり、この俺がだ、と答えておこう。偉大なるシーザーは大の女たらしではなかったかな。ローマへの凱旋の折に、一度などは、自分の兵卒から「禿頭の好色漢」（一七）と呼ばれたのではないかな。そして、自国市民の娘たちのみならず、妻たちにさえお触れが出されたのではなかったかな。シーザーには気をつけろとな。それでいて、自分の妻がクローディアスと同席したというだけで、否、むしろクローディアスのほうが、妻の知らないうちに傍らにいたのだが、それだけで妻を離縁したのではなかったかな。そして、奴の挙げた理由はどうだったかな。次のとおりだよ。ただこれだけだ（今も言ったとおり、自分は放蕩者なのだがね）。「シーザーの妻は疑いを招いてはならぬ」（一八）とだよ。

誇り高いことにかけては、シーザーもラヴレースには勝てんのだ。

だから、いいな、ジャック、決して口にしてはいけないし、だれであれ、貴公の耳に届くところで話題にするのも許してはいかん。家柄を誇りにする男ラヴレースは、清廉潔白とは言えぬ身でありながら、妻の貞節にはえらくうるさい奴だ、などとはな。

我がクラリッサについて言えば、白状するが、あれほどの天使にこれまでお目に掛かったことがあるとはとても思えないのだ。だが、前にも言ったとおり、その彼女が、自ら非とする行動に踏み切ったのではないのかな。踏み切ることが彼女に出来るとは、世間の者たちや身内の連中でさえ思い及ばなかった行動だ。身内にしてみれば、絶対に許せないものではないのかな。

また、激しい挑発があったのだからと、鑑ともすべき美徳を弁護する向きもあるが、俺がそんな言葉に耳一つ貸さずにいるのを訝かることはないのだ。挑発や誘惑こそ美徳の試金石ではないのかな。挑発を受けて己を見失うとか、捨て去るようなことは、鑑とすべき美徳には許されないのだよ。

だとすれば、彼女を首尾よくここまで連れ出し得たこと自体、その男としては、さらなる一押しを促されているように受け止めて構わないのではないかな。試してみるだけの話だよ。この神々しいばかりの乙女が相手なのだ。試すのを怖がる者などいるだろうか。貴公も承知のはずだ。名もあれば人柄も優れた娘たちに火のような試練を加えたのは一度だけではない。二度や三度のことでもないのだよ。だが、一月持ち堪えた女には一度としてお目に掛っていないのだ。こちらが手口に窮してしまうまで頑張った者もいない。そんなわけで、女性すべてに対して、俺は、望ましからざる結論を引き出しているのだよ。そして、今回、汚れることのない貞節さと出会うことがなければ、今度こそ、そんなものは女にはないのだと断言してやるつもりなのだ。だとすれば、今回の試練の実施は全女性の関心の的ではないのかな。この令嬢を知る人間で、全女性の名誉を彼女独りに賭けようとしない者など、果たしているのだろうか。それを拒もうとする者は出てきてもらおう。そして、代役を買って出てもらおうじゃないか。

請け合っても構わないが、美徳のことは途方もなく高く買っているのだよ、俺様は。自分では未だ身につけることが出来ずにいる嗜みや美点すべてについてもだ。道楽者のだれもが口にすることではないぞ、これは。また、皆がこんな考え方をするわけでもないのだよ。道楽者の用いる論拠のことごとくが、人目には、自らの振舞いの罪深さを表していることにもなるのだろう。だが、俺の気質の中で日頃から際立っているのは、純真率直なところなのだ。

今回の件で俺を衝き動かしているのは悪魔なのだなどと、貴公もその気になれば言い出すのかもしれないが、その悪魔こそが、遠い昔のあの善人(一九)に厳しいことこの上ない試練を加えていたのだ。あの善人が名誉を授かり、後の世で報いを受けたのも、その試練の場での振舞いがあったればこそなのだよ。罪を犯していない人間は、疑いを掛けられた時には、公平で偏りのない裁きを行ってくれるよう希望しなければいけないのだ。

確かに、アリオストーの描いたリナルドーは、マンチュアの騎士が差し出した杯を受け取ろうとしなかった。妻の貞節の証となるはずのものだったのだがね(ア)。この実験を差し

(ア) この物語の語るところによれば、だれであれこの杯を口にする者は、妻が操を守っている場合はこぼすことなく飲み干せるが、逆の場合には、それが出来ないという。

控えた彼の言い分は次のとおりだ。知りたいとは思わないことを何故に探らねばならないのか。妻も女であり、女は弱いものだ。妻への信頼が今以上に深まるとは思われない。仮にも評価を落とさねばならない理由を見出したりすれば、それは自分自身にとっての損失になるだろう、というのだ。しかし、リナルドーにしても、その婦人が自分の妻となる前なら、また、彼女の間違いを暴くことが己の利益になる時なら、試してみるのを拒まなかったはずなのだ。

俺なら、結婚していたとしても、杯を押しのけるような真似はしなかっただろうな。妻に対する好意的な見方を裏付ける理由が欲しいだけだとしてもな。また、自分の胸に抱いているのは蛇なのか、それとも、鳩なのか、それを知らんがためのことだとしてもだよ。

肝腎の話に戻るが、試練に耐えない貞節を一体どう受け止めたら良いのだ。試練を避けたがる女はどう考えたら良いというのだ。

だとすれば、あれだけの秀でた乙女の栄誉をさらに不動のものとするためにも、試練が欠かせないように思われるのだよ。

それで、この試練を彼女に加える者はだれになるというのかな。すでに彼女を唆し、些細な点で道を踏み外すよう仕向けた男、というのが彼女の見方だが、その男以外にだれがいるというのだ。しかも、これは二重の意味で彼女自身のためなのだよ。何らかの印象を与えることがその男に出来たから、というだけではない。印象を受けたことを彼女は遺憾に思っているわけでもあり、従って、その男からのさらなる攻撃への備えが出来ていると考えても構わないからなのだ。

今彼女の置かれている状況は、正直な話、彼女にとっては不利なものだと言わねばなるまいな。しかしだよ、もしも耐え抜くようなら、それこそ、さらに面目を施すことになるというものだろう。

それゆえ、我が愛しの君よ、さらなる試練を避けてはいけないのだ。それを行う俺を憎んでもいけないのだ。試練が済むまでは、いかなる女も貞女と呼ばれるわけには行かないのだからな。

また、一回の骨折り、一度の試練で事足りるわけでもない。何故なら、女の心というものは、時には金剛石となり、時には臘ともなるからだ。それは俺が幾度となく経験してきたことだよ。きっと、貴公にも覚えがあるはずだ。

一人残らず試されなくてはいけないとしたら、女も辛いものだな、と貴公が言い出すような気がするよ。

だがな、ジャック、そういうつもりでもないのだ。道楽者ではあっても、道楽者の味方というわけではないのだよ、俺様は。貴公と貴公の相棒は別だがね。

次のことをこの退屈な議論の教訓の一つにしてもらいたいのだ。つまり、拷問とでも呼べそうな辛い思いをさせられるのは嫌だとほざく小娘どもには、好きなように選ばせてやれということだよ。くそ真面目な正直者をご贔屓にすれば良いのだ。日頃から汚い手を使うのには慣れておらず、女の申し出を喜んでそのまま受け入れようという手合いだ。自分たちがまずまずなものだから、他人に疑いを向けることのない連中だよ。

だが、と貴公は尋ねるだろうな。しくじった場合には、彼女は一体どうなるのだ、とな。

どうなるのか、と訊くのか。まあ、「一度屈すれば、常に従う」ということになるのではないのかな、彼女にしても。これも我ら放蕩児仲間の金言の一つだよ。結婚嫌いにしてみ

れば、歓喜の極みだろう。想像しても有頂天になる。クラリッサ・ハーロー嬢ほどの女性を説き伏せ、実際に苗字を変えることなく、一つ屋根の下で暮らせるとしたらな。

だが、もしも抵抗するとしたら　…　立派に試練に耐え抜いた場合は　…

そうだな、そういうことなら結婚をして、あんな天使みたいな妻に巡り合った幸運を感謝するさ。

だが、彼女のほうでは貴公を憎みはしないかな。拒みはしないかな。

それはないさ、ジャック。状況からして、われわれの置かれた立場からして、その心配はない。俺のことを憎むだと　…　吟味の上で彼女を愛するのだよ。どうしてその男を憎むことがあるのだ。

それに、お返しという面があることにも少し触れておこう。彼女のほうでは、いわば俺の節操を試す決意でいるわけだ。彼女の貞節を試してみようという、こちらの決心も認めてもらえるのではないのかな。だれだったかな、改心の望みが持てるようになるまでは俺と結婚する気はないと言い切ったのは。

ところで、こんな真面目くさった論議に終止符を打つためにも、ここで貴公自身から（彼女の支持に回っているものと俺は想像していたのだよ。M卿が頼んだことは知っているのだ。貴公が俺に対して力を持っていると考え、それを利用して、身を固めるよう俺を説得してくれ、とな。その貴公自身に頼むわけだが）許可をもらいたいのだよ。彼女の中の女を目覚めさせることは出来ないものか、そいつを試してみることについてだ。皆の目を惹きつけるあの眩いばかりに均整のとれた体つき、そして、今を盛りと咲き誇る青春の魅力を備えた女なのだ。それでいて、肝腎な点については、本当に揺るぎない態度を守ることが出来るのか、ひとつ試してみたいのだよ。

それゆえ、機会のあり次第始めさせてもらおう。やってみるつもりだよ。一歩でも足を滑らせないかと、彼女の動きの一つ一つに目を配るのだ。一刻も目を離さず、決定的な瞬間を待つのだ。というのも、俺に対しては手を弛めることなく、好機があればそのたびに苦しめ、悩ませてくれるわけだし、俺が善良な男になるのを期待することもなければ、そんなふうに考えてもくれないのだから仕方あるまい。

彼女も女で、俺を愛しているのだとしたら、きっと一度くらいはつまずくところを捉えられるはずだよ。愛という奴は、それを宿している心をいつも裏切るものだからな。内側には愛が潜み、外には俺が待ち構えているのだ。それでも首尾よく行かないとしたら、詩人の言うように、彼女は女を越えた存在（二〇）だな。俺は男以下ということになる。

さあ、ベルフォード、これですべてだ。令嬢は俺のものさ。それ以上のものになってもらうつもりだ。結婚のことはこちらの気持ち一つだろう。手の内にある以上はな。でなければ、そうは行かなかったはずだ。結婚の形を取らずにモノに出来るとしても、俺の試みを咎める者はいるまい。モノに出来ないとすれば、彼女にとっては大いなる誉れとなるわけだし、俺としても、以後、深い信頼を寄せることになる。また、彼女のために自由を犠牲にするわけだが、それに十分見合った女ということになるし、世の女どもが寄せる、神々しいばかりの賛辞にも相応しいことになる。何せ、度重なる試練、策略、そして、誘惑をもってしても、それも、憎しみを抱いているわけではない男からのものだが、ついにその貞節を奪い得なかった女がかつて存在したことを証明して見せるわけだからな。

さあ、いつもの手口をご覧いただこう。鏡に映したごとくに見てもらおう。ただし、カ

バラを合言葉にする(ア)。秘密を漏らしてはならんぞ。夢の中であってもな。

彼女が俺の妻になることを疑う者はだれ一人としていないのだ。この言葉を口にする時には、彼女は俺の妻だということにしてくれ。俺のほうでは、しばらくの間は改心をカモフラージュとして装うことにする。彼女をロンドンへ連れて行くことが出来れば、だれか一人、あちらの女を可愛がることにするさ。今回はこれくらいにしておこう。

手紙　十五

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

［手紙五、十一への返事として］

母との口喧嘩のことは、そのように心配なさらないでくださいね、大好きなお友達。それでも私たち、とても愛し合っているのですもの。母のことですから、私のあら捜しが出来なければ、きっとだれか他の人にケチをつけるに決まっているのです。それに、私のほうでも、本当に厚かましい娘ですから、仮にこんな理由がなくても、何か別の理由で生意気なことをして見せるはずですわ。

私たちがいつもこんな具合だということは、私の口からお聞き及びのことでしたね。でなければ、お分かりにはならなかったはずですもの。母のことですから、私たちのところへいらしてくださった時には、二人の間を和ませてくださいましたし、私はいつも、母より貴女のことを恐れていたからですわ。でも、それは愛を伴った畏怖の念です。貴女のお小言は、いつの場合もそう思うのですが、柔らかな口調で教育的なところがとても素敵ですし、相手のためになることを目指していて、感情を傷つけるつもりのないことが実にはっきりしておりますから、寛大な気質の人なら、お小言をいただきますと、きっと間違いを改めることになるのです。ところが、貴女がいらっしゃらない時の我が母君ときたら、こんな具合なのですよ。「そうするのよ、いいわね、ナンシー。そうしてもらいますからね。私が一番よく分かっているのじゃないかしら。背いたりするのは許しませんからね」とです。こんな言い種ですし、それに、話す時のあの顔付きですもの、気の強い娘にはとても我慢出来る話ではございません。背きたい気持ちを起こさずにはいられませんわ。

貴女との文通を禁じる母に同意なさいだなんて、そんなご忠告は願い下げですわ。禁じる理由など、母には何一つございませんもの。それに、母自身の判断で禁じるようなことはなかったはずです。あの変わり者で散歩好きのご老体が原因なのです。叔父様のことですわ（これまでより頻繁にお訪ねになるのです）。意地悪で自分勝手なお兄様とお姉様に唆されてのことでしょうけれどね。それに、お二人は貴女と離れたところにおられるものですから、いわば拡声器代わりに母の口を借りただけのことです。もう一度申しますが、禁じましたのは決して母の本心ではございません。でも、仮にそれが本心だといたしましても、お便りを続けようというお相手は私と同じ女の人なのです。まるで男の方にお手紙を出すみたいに、そんなに危険があるというのでしょうか。落胆され、失望しておられるか

(ア) これらの紳士たちの間で用いられる時には、いかなる場合であれ、この言葉は絶対に破ることを許されない秘密を含意することに合意が出来ていたのである。

らといって、また、次々と虐待をお受けになったからといって、弱気になられてはいけません。不都合など起こりようもありませんのに、そんなふうにお考えになってはいけませんわ。おっしゃるように、筆まめなところが貴女の取り柄なら、私とて同じことです。機会がありましたらいつでも、筆を執るつもりです。貴女宛にね。皆さんにはお好きなように言わせておきましょう。それから、おっしゃるようなご自分への非難の言葉ばかりでお手紙を埋めてしまわれるのはお止めください。まったくいわれのないことですもの。母親の屋敷に留まっております貴女のアナ・ハウが、お父様のお屋敷から連れ出されましたクラリッサ・ハーローさんの半分も立派だったらと、私はそのように願っているのです。

お姉様へ出されたお手紙につきましては、その効果を確かめますまで触れないことにいたします。お金とご衣裳のほうは、私は逆の意見ですけれど、送り届けてもらえそうに思うとのお言葉でしたわね。たった今耳に入ったことなのですが、こんなことをお知らせしなければなりませんのは残念です。貴女からのお手紙の件で、皆さん揃っての話し合いがあったそうですが、貴女の品物を送ることに賛成なさったのはお母様だけで、皆さんに押し切られてしまわれたとのことです。ですから、先の手紙でも触れましたが、私の申し出を是非とも受け入れていただきますし、御入用の品物につきましても、一緒にお届け出来ますよう、詳しいご指示をいただきたいのです。

和解のことばかりをお考えになって、保護者をご用意なさる絶好のチャンスを取り逃がすようなことがあってはなりません。あの男がなろうとしているような保護者のことですが、あの男も、亭主気取りで、貴女を辱めるような真似はだれにも許さないだろうと思いますわ。自分の場合は別の話なのでしょうけれどね。

貴女が触れておられるようなチャンスをむざむざ見過すなんて、一体あの男はどういうつもりなのでしょうね。貴女のことは咎めようもございません。だって、黙って頬を染めておられる以外、他には何もお出来にならなかっただろうと思いますもの。あのお馬鹿さんは、別の状況の時に貴女がお申し付けになった制限を恭しく守ろうとしたわけですからね。それにいたしましても、前にも申しましたが、貴女の前ではだれもが畏れの念を抱いてしまうのです。それに、まったくの話、貴女もあの男のことは容赦のない扱いをなさいましたからね。

先の手紙で申しましたことの繰り返しになりますが、貴女の演じなければならない役割はとても難しいものです。それに、もう一言付け加えますと、その役割をおこなしになりますのには、貴女はあまりにも繊細すぎる心をしていらっしゃるのです。でも、恋人が得意になっている時には、女性は控え目にしているのが良いのです。生まれつきプライドが高くて図々しい男ですが、自分では名誉心と称している、そのプライドをくすぐるのも大切でしょうし、もう少し体裁をお捨てになることも必要かと存じます。それから、あの男の前では、会わずにおけばよかったなどと、愚痴をこぼすのはお慎みいただければと思います。愚痴をこぼされたところで、どうなるというのでしょうか。あの男は黙っておりませんわ。おとなしく堪えてくれるようなこと、あの男にはとても期待するわけにまいりませんでしょう。

それはともかく、私の自尊心が底の底まで傷つけられますのは、クラリッサさんともあろう人を相手に得意顔をしてみせるようなことが、どこのだれにせよ、恥知らずな男に出来るという点なのです。

それでも、貴女の気丈さには惚れ惚れいたしましたと申さねばなりません。優しさが求められます時にはあんなにも優しく、気丈さが必要な時にはこうも気丈に振る舞うことがお出来になるなんて　…　これこそ本当の雅量というものですわね。

ただ、現在のお立場を考えますと、あの男のことを腹立たしく感じられます場合も、もう少し慎まれるようになさったほうが良いかとも思います。少し大目に見て上げるべきですわ。貴女が厳しい態度で臨まれます時にあの男が装う例の遜った物腰は、生まれつき備わったものとは申せません。

あの男が貴女に窘められ、言い返すことも出来ずに口籠もったり、貴女が描いておられるとおりの間の抜けた顔をしたりしている様子は、まるで目に浮かぶようです。でも、あの男も馬鹿ではないのです。愛情に怒りを交じえてしまうところまで、あの男を追いたてたりなさってはいけませんわ。

手元にございます二通のお手紙の最初のほうでは、ヒックマンさんと私のことに関しまして、それに、母と私のこともですが、ひどく真剣に扱っておられますね。でも、後のことにつきましては、そんなに真面目になってくださらなくて良いのです。仮に二人の間がうまく行かない場合があるといたしましても、気まずくない時もあるのですからね。それに、今回の件で一番激昂しております最中でも（もっとも、堪えられます場合には我慢してくれますけれど）、母の顔に笑みを浮かばせることが出来ますなら、それはとても良い兆しなのです。不機嫌が決して根深いものでも、長続きするものでもないという印です。それに、ご贔屓のヒックマンさんに親切な言葉の一つでも、あるいは、優しい顔の一つも向けて上げますと、いつだって、一人は有頂天になって喜んでいますし、もう一人もまずまずの上機嫌になってくれるのです。

それにいたしましても、貴女の一件には胸を痛めております。私はふざけたことばかり申しておりますが、それでも、ご立派なお二人も時にはその痛みを分かち合ってもらわなければいけませんし、貴女のお立場がどちらとも決まらずにおります間は、その痛みが消え去ることもないでしょう。とりわけ、私といたしましては、貴女のために保護の手を差し延べてくれるよう説得することが出来なかったわけですから、なおさらなのです。あの援助が得られておりましたなら、不幸な行動に踏み切られるのを防ぐことも出来たはずですし、やむなくあのような行動に走られましたことは、当然至極のことですが、私たち両方ににとりましても痛恨の極みなのですからね。

末筆ながら（申し上げるまでもないとは存じますが）、次の点だけを申し添えさせていただきます。今も、いついつまでも

親愛なる貴女の友、そして、しもべ

アナ・ハウ

手紙　十六

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

私の衣類も、家に残してまいりましたわずかなお金も、届けてはもらえないとおっしゃるのですね。それでも、やはり望みは持っていようと思います。まだ何日も経っていない

のです。興奮が鎮まれば、皆も事態をもっとよく考えてくれるでしょうし、特に、この申し出のことでは、いつも尊敬しております立派な母が味方になってくれているということもございます。あゝ、何という優しい心遣いなのでしょう。母を思い、どれほど胸を痛めたことでしょうか。いいえ、今でも血の出る思いに変わりはございません。

和解を当てにしてはいけないとのご忠告ですね。当てにしてはおりません。するわけには行かないのです。でも、いつも心を離れぬ願いなのは間違いありません。それと、あの人のことはどうしたものでしょうか。貴女にもお分かりいただけるでしょうが、結婚のことは、私にはまったく手の打ちようのない状態だということです。和解を進めます上で主として念頭に置かねばならないように思われます試練よりも、そちらのほうを優先させる気持ちに傾くことが仮にあるとしてもです。

あの人は自惚れが強く、横柄だとのお言葉、そのとおりだと思います。でも、あの人が目論んでおりますのは、自分の卑しいプライドに見合ったところまで私を貶めることなのだと、そんなふうに貴女はお考えなのでしょうか。

それから、もう少し体裁を捨てろとのお言葉ですが、一体どのようなおつもりでおっしゃるのでしょう。まったく気付きませんでしたわ、この私が体裁を繕っていたなんて。お約束いたします。私を卑しめようとの意図が少しでもラヴレースさんに見られました場合には、どんなに傲慢な振舞いをされましても、取り立てのご交誼を賜っております者にはあるまじき弱さ、言い換えますと、すべての女性、あるいは、以前の私には似つかわしくない、そんな弱さを晒すような真似は決してしないということでございます。

ただ、私といたしましては、他の保護の手は一切断たれておりますから、あの人が私怨とか、卑劣な敵意とかで動かされるような人ではないことを願っているのです。仮にあの人が私のために途方もない苦労をなさっているといたしましても、それは自業自得なのではないでしょうか。身から出た錆ということでしょう。その気がおありなら、ご自分の人柄から来たこととお考えになっても良いでしょうね。あの人にもお話ししたのですが、その点こそ、兄が反対いたします、少なくともその口実にはなっているのですからね。それに、私はこれまであの人に何か約束でもしていたでしょうか。愛情を表明したことがあるでしょうか。求婚を続けてもらうよう願ったことなどあるでしょうか。兄が無茶をして事態を早めたりしていなければ、私の冷淡な態度に接して、自尊心の強いあの人はおそらく愛想を尽かしたことでしょうし（私はそのつもりでいたのです）㋐、主な滞在地にしておられるロンドンへ向かわれることになったのではないでしょうか。そして、もしもそうなっておりましたなら、あの人の言い分や望みは、すべてお終いになっていたのではないでしょうか。と申しますのも、こちらから励ましなどは一切与えることもなかったでしょうし、手紙を交わすこともなかったからです。また、そうなれば、あの恐ろしい果たし合いもなかったわけですから、自分のためではなく他人のために（本当に馬鹿でしたわ）、後になって引き込まれる羽目になりましたあの文通も、本当ですが、決して始めることはなかったはずなのです。それに、ほんの短い間のつもりでしたこの文通にいたしましても（序でに申しますと、母も㋑黙認していたものなのです）、きっかけとなりました事情はそのままでも、片方からは続けるように仕向けられ、もう一方からはしつこくせがまれるとい

（ア）第一巻の十八頁を参照のこと。（イ）同巻の二十頁を参照のこと。

うことがありませんでしたなら、このような結末を迎えることになるなど、貴女には、あるいは、あの人にいたしましても、考えられることでしょうか。だといたしますと、私がまったくあの人の掌中にあるといたしましても、他の者たちが犯した過ちのことで私に意趣晴らしをしようだなんて　…　そのためにあの人以上に私も苦しんだわけですし、一体どのような口実があの人にあるというのでしょう。そこまで卑劣な悪党としてあの人を見なければならないとしたら　…　そのようなことはとても考えられません。

お母様との口論のことは心配無用とおっしゃいますが、私が原因ですのに、どうして心配せずにおられましょう。叔父や身内の他の者たちによって引き起こされた（焚き付けられたとでも申しましょうか）ということですと、いよいよ心配は募るというものです。

私の今の気持ちからいたしますと、おそらく厳しすぎる意見なのでしょうが、一言申し上げねばなりません。貴女が引き合いに出されましたお母様のお言葉そのものは、命令口調のものだと悪く受け止めておられますが、貴女ご自身への容赦のないお咎めにもなっているということです。一例を挙げますと、「そうするのよ、いいわね、ナンシー」というお言葉には、貴女がお母様のお考えに異議を唱えておられたという意味合いも汲み取れるのです。同じことが、残りのものにつきましても申せましょう。

貴女のお言葉に関しまして、さらに次の点を申し述べさせていただきます。私との文通を禁止なさることに対しましては、私とラヴレースさんの場合と同様な理由は有り得ないということです。私との文通の悪影響につきまして、今はあまり思いつかれないでしょうが、あの人との文通が悪い結果を招くなど、私も当時はほとんど考えていなかったということでございます。でも、従順さが子の務めの一つだといたしますと、いかに事情が違いましても、務めを怠りますのは落ち度なのです。自分たちの考えを持ち出すにいたしましても、両親の考えに逆らったのでは、少しも褒められることではないはずです。また、そのような振舞いが罰するに値するといたしますと、私は容赦なく罰を受けたということになりましょう。そしてこれは、高い代償を払いました私自身の経験をもとに、ご注意申し上げていた点なのです。

でも、神のお宥しを請う次第ですが、自分にとりまして不都合なことをこのようにご忠告申し上げますに際しましても、はなはだ不本意な気持ちが働くのです。それに、正直に申しまして、自らお断りする心の強さも今は持ち合わせておりません。ただ、機会のございますかぎりは、さらに検討をさせていただきます。

この男性につきまして、大変適切なご助言を有難うございました。不満を口に出します場合には、もっと控え目にとのお言葉ですが、努力してみたいと思います。でも、大好きなハウさん、貴女のおっしゃりようでは大目にみるということですが、この私にとりましては、それは到底無理な相談と存じます。

貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　十七

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

あゝ、大好きなハウさん、信じていただけるでしょうね。この前の月曜日、庭木戸の内側で物音や叫び声の起こりました点が大層気に掛かっておりました。幾度もそのような言い方をしてまいりましたが、卑劣な計画を巡らしました上で、私が自分を見失ってしまいますよう、罠を仕掛けることも出来る男の手に私は陥ちたのだという、そんな思いがあったからなのです。

このことを考えますと、顔を合わせますたびに腹立たしくなり、あの人の存在が厭わしく思われてきたのです。あの件での私の愚かさを詰っている、勝ち誇ったような表情が窺われる気もしたものですから、なおさらです。もっとも、もしかいたしますとそれは、いつもあの人の顔に浮かんでおります、あの快活で落ち着き払った表情にすぎなかったのかもしれませんけれどね。

あの人とこの問題に触れますのが辛抱出来るようになりましたら、その時は、すぐにでもこの件についてあの人を咎める心積もりでおりました。と申しますのも、悪辣な手管のこともあり、ひどく憤慨させられていたわけですが、それだけでなく、もしもあの人に疚しいところがあるとしたら、私のほうで癇癪玉を破裂させたくなりますような、ごまかしや言い逃れをするものと見込んでいたからです。また、明らかに罪があるわけではないといたしましても、はっきりと口に出されますのは私の意に満たないお言葉で、相変わらず疑念や不安を抱かせたことでしょうし、あの人が加えてくるかもしれません新たな無礼に出会いますたびに、ますます嫌悪の情を募らせることになりそうだったからです。

待っておりました機会が訪れましたので、その結果をご披露いたしましょう。

好意的な見方をしてほしいと、あの人がとても丁重な言葉遣いで言い寄ってきたのですが、好意を寄せてもらえなくなったことを、それはそれは深刻な顔付きで嘆き、何故そのような扱いを受けるのか訳が分からないとまでおっしゃるのです。そして、私があの人に無関心なのが原因なのだろうし、それが刻々強まっているように思えるのは、この上なく気掛かりな点だ、ともおっしゃっていました。それから、ご自分の落ち度を認め、改めるためにも、あるいは、私の満足の行くようにご自分の振舞いを釈明し、もっと大きな信頼を寄せてもらえるようになるためにも、是非とも忌憚のないところを話してほしいとおっしゃるのです。

私は即座にお答えいたしました。「では、一つ言わせていただきますわね、ラヴレースさん。率直な言い方をさせていただきますが、この率直さは、おそらく、私の性格のほうには合っているのでしょうけれど、貴方のお人柄にはどうでしょうね［そんなことはないと思う、とあの人は言っておりました］。お人柄の点からいたしますと、下心のあるずる賢い人のようだと、大層悪い見方になってしまうのですが」とです。

「心して承りましょう、マダム」

「貴方にはとても都合が宜しかったのでしょうが、私を恐怖に陥れました、あの庭木戸で聞こえました物音や叫び声の説明がつきませんうちは、貴方を受け入れることなど絶対に出来ないのです。あの時のことをすべて、はっきりおっしゃってください。正直に話していただきたいのです。あの邪なジョゼフ・リーマンとのご関係についてもです。この点につきまして隠しだてなくお話しいただけるのかどうか、今後告白なさることにつきましても、それによって判断をさせていただくつもりです」

「それでは、腹蔵なくお話しいたしましょう、あゝ、愛しい人よ。現実には不都合と思

われる点が何か話の中にありましても、誠意のあるところをお汲み取りくださって、その埋め合わせとしていただきたいものです」と、あの人は言っておりました。

あの人のお話は次のとおりでした。「この男、このリーマンにつきましては、何一つ知りませんでしたし、どこの家族のことであれ、秘密を探り出すために、そこの召使を買収するなどという卑劣な手段に頼りますのは、私としては潔しとしなかったのです。ただ、あの男がこちらの召使に賄賂をつかませ、私の財政状態や債務のことばかりでなく、行動のすべてや艶聞と思われるものの一部始終を、要するに、私生活での行状の一つ一つを聞き出そうとしているところを見つけてしまったのです。動機はあまりにも明白ですから、改めてお話しするまでもありますまい。

この申し出のことを私の召使が教えてくれましたので、あの男には気づかれないようにして、今度二人が話し合う時には盗み聞きをさせるように言いつけておいたのです。

話もたけなわとなり、金を出すからある情報を手に入れてくれ、手に入ったらもっと出そうと、あの男が持ち掛けたちょうどその時に、私が二人の前に飛び出したのです。そして、こいつの耳を切り取って（と、片方の耳をつかまえながら）雇った奴に送り届けてやるから、ナイフを持って来いと威し、雇主はだれなのか、口を割らせてやったのです。

あの男が口にしたのは、マダム、兄上と叔父上のアントニー殿の名でした。

名も明かしたということで勘弁してやったのですが（あの男が引き受けた役割の罪深さと、大切な貴女に対する私の気持ちには卑しいところがないことを示した上でのことですが）、その後では、礼はもっとはずむということで、こちらの役に立つよう、あの男を難なく説き伏せることが出来たのです。私が知りたがっているのは、私自身と貴女に関わることだけですし、それも、本人が認めているとおり、あの男自身が、そして、仲間の召使たちも不当だと考えるような、そんな遺恨沙汰から二人の身を守るためなのですから、あの男にとっては、叔父上と兄上の愛顧を失わずに済むことにもなるというわけです。

白状いたしますが、マダム、この手を用いて幾度となく、私の周りで張本人たちを踊らせてやったのです。連中には悟られずにです。日頃から飾りのない人間だと自称し、良心的なことを誇りとしているあの男にしても、私の高潔な目的のことは幾度となく保証してやりましたし、彼の情報を利用することによって、致命的な災いはおそらく防げるのだという点も承知していたわけですから、それだけ心の咎めも少なかったはずです。

あの男の助力をさらに嬉しく思いましたのは、お気づきではなかったでしょうが、そのお陰で（貴女には打ち明けますが、マダム）、安全に邪魔だてされることなく、庭や薪小屋へ出掛けることがお出来になったという点です（さもなければ、おそらく、自由な外出をあのように長く認めてもらうわけには行かなかったはずなのです）。と言いますのも、貴女の行動すべてを見張ると、あの男が皆さんに向かって請け合ったからなのです。この役割は、他の者たちのうるさい目を遠ざけることにもなりますので、あの男としては（貴女を慕っておりますから）なおさら気持ち好く引き受ける気になったというわけですよ」（ア）というのです。

このとおりですわ、ハウさん。私自身がこの腹黒い策士から恩義を受けているということになるのです。

（ア）第一巻の百七十八頁を参照のこと。

私が驚きのあまり黙って座っておりますと、あの人は次のように言葉を続けました。

「思い切って打ち明けましょう。ずいぶんひどいことをする男だと見ておられる、例のいきさつについてです。お屋敷を出ようとのお考えを取り下げられるかもしれないと案じておりましたし、そうなりますと、目的を遂げるのに必要な二人一緒の時間も得られないのではないかとの心配がありましたから、あの男には、手に負える相手の場合はすべて追い払い、自分独りで庭木戸の見えるところに陣取っているよう指示しておいたのです。と言いますのも、出来ることでしたら、ご決心を貫いていただくよう、説き勧める気持ちを固めていたからなのです」とです。

「それにいたしましても」と、あの人を遮って私が尋ねました。「私は考えを引っ込めるかもしれないなどと、どうして懸念を持たれるようになったのでしょうか。実際、私はその旨を記しました手紙を置いて来たのです。でも、貴方は持ち帰ってくださいませんでした。それに、取り消しの権利は私のほうに留保してあったわけですし、私が身内の者たちを説き伏せて、従いまして、十分な根拠に基づいて取り消すことになるのかもしれませんのに、そうはならないと、どうしてお分かりになったのでしょう」とです。

「すっかり正直に申しましょう、マダム。もしも心変わりをなさる場合には、その理由を知らせるために、私に会っていただけそうだという望みを、貴女は抱かせてくださっていたのです。外れかけた煉瓦のところへまいりますと、お手紙が見つかりました。お身内の方々はご自分たちの計画を断固として譲らぬお気持ちでおられることは承知しておりましたから、お手紙はご決心を翻すとか、中断するためのものであること、そして、おそらくは、面会の代わりとするおつもりであることにも疑いの余地はありませんでした。従いまして、お手紙はそのままにしておいたのです。前言を翻されるとしても、期待を持たせてくださった手前、どうしても会わずにはおられなくなるはずとの思惑からでした。それに、失礼とは存じますが、マダム、貴女がどのようなおつもりにせよ、決してお帰しはしないとの覚悟で馳せ参じていたのです。お手紙を受け取っていたのでしたら、少なくとも当座は、そのご趣旨に縛られることにもなっていたでしょう。しかし、手にはしなかったわけですし、貴女としても、私が果敢さに欠ける男などではなく、これほど絶望的な状況では、直接お身内の方々を訪ねようとするのは、当然のこととして考えておられたでしょうから、望みを持つようおっしゃっておられた面談を頼みの綱としたのです」

「何という卑劣な方なのでしょう」　私は申しました。「嘆かわしいことですわ。私の弱みをそうまで正確に見定める機会を与えてしまったのですもの。でも、私がお会いしていなかったら、家族の者たちを訪ねたりなさるおつもりだったのでしょうか」

「勿論ですとも。仲間を数名、控えさせてあったのです。皆さんのところへ同行してくれる手筈だったのです。お父上が耳を貸してくださらない時は、ソームズのところへ向かうつもりでした」

「で、ソームズさんには何をなさるおつもりだったのです」

「おとなしくしていたなら、少しも害はなかったでしょうね」

「でも、おとなしくしていたなら、とのおっしゃりようですが、もしもそうでなかった場合、ソームズさんをどうなさるおつもりだったのでしょう」

話したくはないのだが、ただ、何らの危害も加える気はなかったのだと、あの人は言っておりました。

私は繰り返し尋ねました。

是非にということなら、と断った上であの人は、考えたのは、ただ〈哀れな輩〉を誘拐して、一、二ヶ月姿を隠してもらうことだった、と言っておりました。どのような結果を招こうとも、決行するつもりだったというのです。

こんな恥知らず、聞いたことなどあるでしょうか。胸の底から溜め息をついてしまいました。でも、私が言葉を挟みましたところから先へ進んでくれるよう、私は頼みました。

「今も申したことですが、マダム」　あの人が言いました。「庭木戸の見えるところに陣取っているよう、あの男に指示しておきました。また、われわれが何か言い争っているのに気づいたときには、そして、だれであれ、その場に来ると暴力沙汰になりそうな人物が近づいた場合には（貴女が見つからずに引き返す前にですが）、大声を上げるよう言っておいたのです。あの男が皆さんから疑われるのを免れるためだけでなく、私が立ち去る合図にするためでもあったのです。それに、もしも可能であれば、貴女ご自身が約束されたとおり、一緒に逃げていただくよう（正直に申しますが、マダム）、説き勧めるためのものだったのです。事情をすべてご勘案くだされば、そして、私のほうでは貴女を永遠に失う危機に瀕していたのだという点をお考えくださるなら、このような計画を企てましたことか、お会いくださらなかった場合のソームズに対する企ての件を白状いたしましても、貴女の恨みを買うことにはなるまいと思うのです。貴女と同様に私も予期していたことですが、仮に皆さんがやって来たとして、兄上やお身内の他の方々が加える無礼な言動に、この私が平気で貴女を晒したりしていたなら、まさしく見下げ果てた人間になっていたことでしょう。この面談が露見した場合に得られるような口実を持ち合わせない時にも、無慈悲な仕打ちを加えることが慈悲でもあるかのように心得ている人たちなのですからね」

「何という恥知らずなのでしょうね」　私は申しました。「でも、この奇妙な一件につきまして貴方ご自身からいただいた説明が事実だといたしまして、もしも誰かがやって来ていたのでしたら、どうしてあのようなことになったのでしょうか。戸口を出て、遠くから私たちを見送っておりましたのは、私の目に入りましたところでは、例の男リーマンただ一人（私はあの男だと思ったのですが）でしたけれど」

「まことに好都合ですな」と言いながらあの人は、まず一つ、それからもう一つと、ポケットに手を差し込むのです。「捨ててはいないはずだが。おそらく、昨日着た上着の中でしょう。お見せするのが必要になるとは、あまり考えていなかったのですよ。ただ、実証出来る場合はいつでも、はっきりさせるのが好きなほうですからね。私にも軽率なところはあるでしょう。不注意な面もあるかもしれない。確かにそうでしょう。だが、貴女のこととなると、マダム、私以上に誠意溢れる心を持った者もかつていなかったのです」

そこまで言うと、あの人は客間のドアのところまで行って召使を呼び、昨日着ていた上着を持って来るよう頼みました。

召使が上着を届けました。するとあの人は、一顧だに値しない紙片のように、ポケットの中でクシャクシャに丸めた手紙を取り出しましたが、あのリーマンの書いたもので、日付は月曜の夜になっておりました。その中で、あの男はあんなにも早く大声を上げてしまったことを詫び、それから、両方の側についているのを見破られるのが恐ろしかったこともあり、子犬が（いつもまとわり付いているのですが）イボタノキの垣根を勢いよくくぐり抜ける物音を、ベティが近づいてきたのか、それとも、主人たちのだれかなのかと、取

り違えをしてしまったと言っております。また、間違いに気づいたので、自分の鍵で（あの男に鍵を用意してやったことは、恥知らずな策士が認めておりました）戸口を開け、叫びを上げたのは怯えからきたことにすぎない旨をあの人に知らせようとして、軽率にも飛び出してしまったのだと言っております。そして、戻ってみると、皆が私を捜し回っていたことも付け加えております(ア)。

私は首を振っておりました。「あゝ、本当に底知れない人ですわ。計り知れない人ですのね」　私は申しました。「精一杯良く言ってですわよ、ラヴレースさん。神がお許しくださいますよう、そして、貴方の行いを改めてくださいますよう、お祈りいたしますわ。それにいたしましても、はっきりしましたのは（貴方ご自身に説明いただいたことすべてから推してですが）、貴方はまことに狡猾な、実に腹黒い人だということですわ」

「あゝ、愛しい人よ、恋心というのは工夫を凝らすものです。貴女を犠牲にしようという企てを何とか妨げたい、また、その企てに続いて起こるに違いない災いを防ごうと、夜といわず昼といわず、その手立てを考え出すべくこの愚かな頭を絞ったのです［まあ、ご冗談でしょう。愚かなんかじゃございませんわ。もしもそうなら、おそらく好都合なんでしょうけれどね。私は心の中で呟いておりました］。このようにお心を捉えられずにおりますし、お身内の方々からは、あのように不当な敵意を向けられているのです。そして、その両方のため、永久に貴女を失う危険に晒されているのです。この前の月曜までの丸々二週間というもの、一度に続けて三十分の休息を取ったこともなかったほどです。正直に申しましょう、マダム。私を伴わずに戻ろうとなさるのを妨げる工夫とか用心とかを少しでも怠ったとしたら、自分を許すわけには絶対に行かなかったはずだということです」

お会いしたのがいけなかったのだと、私はまたまた自分を責めました。それも当然でしょう。会わずに済ませる見込みが大幅にあったのですからね。お会いしていなければ、二週間も掛けたあの人の目論見も、私に関しましては、無に帰していたはずなのです。そして、もしかいたしますと、その場合にもソームズさんから逃れることは出来たかもしれないのです。

ただ、あの人がお仲間を引き連れてハーロー邸を訪れる気になっていたら、そして、きっとそうなったと思うのですが、侮辱を加えられたりいたしましたなら、一体どのような災難が起こっていたことでしょう。

でも、お気の毒に、ソームズさんを連れ去って、一月かそこいら所在が分からないようにする決心を固めていたというのですからね　…　あゝ、ハウさん、ソームズさんの代わりに私を連れ去ったわけですが、何という恥知らずにそんな真似を許してしまったのでしょうね、この私は。

このような極悪非道の振舞いをして、世の掟をこれほどまでに無視して、咎めなしに済むとでも考えておられるのか、私は尋ねてみました。

あの方はいつもどおりの陽気な態度で、こうすれば敵の望みを挫くことになったであろうし、無理強いの結婚から私を救うことにもなったはずだと、抜け抜けと言っておりました。このように向こう見ずな強硬手段は好みではない。自ら手を下してソームズを傷つけ

(ア) ジョゼフ・リーマンに宛てた氏の手紙（第二巻、手紙五十）の末尾近くをご覧いただきたい。その部分で氏は、リーマンに書き写させるため、この種の手紙を捏造する旨を伝えているのである。

るようなことはなかっただろう。少なくとも一時は国を捨てていたに違いないし、正直な話、そうせざるを得なくなった場合は（私から好意を寄せてもらう望みもすべてなくなるだろうから）、私の身内の男性のうち、私には思いもよらない者を一人道連れにするつもりだった、とも言っておりました。

こんな恥知らずは、これまでいたでしょうか。間違いありません。兄のことを言っていたのでしょう。

「じゃあ、そんなふうに利用しておられたのですね、貴方の汚いスパイを」　激しい怒りを込めて私が申しました。

「私の汚いスパイとおっしゃるのですか、マダム」　あの人が口を挟みました。「あの男は、私のスパイであると同様、兄上のスパイでもあるのですよ、今現在も。正直にお話ししてきたことからもお分かりいただけるでしょう、だれが汚いことを始めたかは。宜しいですか、マダム、慎みのないことも数多くしでかしましたが、報復としてなのです。私のほうから仕掛けるつもりなどはなかったのです」

「この問題につきまして、さらに申し上げることが私にあるといたしますと、ラヴレースさん、それは次の点だけですわ。どちらの側にとりましても、おそらく、この二股をかけた恥知らずの卑劣漢が大きな災いのもとになっていたのでしょうし、貴方が認めておられるとおり、今も不正な行いを続けているのですから、身内の一部の者が後押ししているあの男が一体どういう人間なのか、皆に知らせるのは当然至極のことに思われるということです」

「その点は、マダム、どうぞご随意に。私にとりましては、兄上の場合も同じことですが、あの男の役目はもう終わったに等しいのです。相当な儲けがあったのです。今の仕事に長く留まるつもりはないでしょう。事実、旅籠を手に入れようと商談中でしてね、そいつを死ぬまでの生業にしようというわけです。もっとお教えいたしますと、あいつは姉上に仕えているベティと恋仲なのですよ。私の勧めに従ったのですがね。落ち着き次第、一緒になることになっております。旅籠の女将というのは、どんな男とも相手をしなくちゃなりませんからね。一つ計画を温めているのですが、貴女に無礼な態度を取ったことを一生涯悔やむよう、囮でも仕向けてやろうと思うのですよ」

「何という悪辣な陰謀を企むのでしょうね、貴方という人は。貴方の働いた悪事よりもさらに大きな災いをもって貴方に報いてくださるのはどなたなのでしょうね。ベティのことは心から許しております。私に仕えていたわけではないのです。それに、十分考えられることですが、あのような振舞いも、義務を負うております相手からの指図を、私よりも忠実に守ったまでの話でしょう。私の場合は、もっと大きな義務を負うております人々からのお言葉でしたのにね　…　」

あの恥知らずがこう言っておりました［間違いありません。私を怖じ気づかせようとの魂胆なのでしょう］。そんなことは問題でない、判決は出ている、ベティは痛い目を見なければならない、それも、自ら選んだ行為によってだ、とです。あの人に言わせますと、悪い奴を懲らしめる時には、その者自身の手を用いること、それが自分の好みだというのです。そして、「いや、マダム、申し訳ありません。だが、もしもあいつが、このジョゼフの奴が、貴女のお考えでも懲らしめるに値するとしての話ですが、私の計画というのは手の込んだものでして、夫婦が別々にたっぷり苦しむというわけには行かないのですから、あ

の男にとっても、ずいぶんと応えることになるでしょうね」と言っておりました。
私はもう我慢がならなくなりましたので、そう伝えました。「私がどういう人と一緒にいるのか、これで分かりましたわ。おしゃべりがガラガラ蛇の音に聞こえますもの」　そう言いながら、私は急いで立ち去ったのですが、あの人のほうは、一見したところでは、苛立ち、困惑している様子でした。

手紙　十八
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

再びラヴレースさんと顔を合わせました時には、私のほうでも率直な態度を取り、あの人の発言にも、また、行状や態度、そして、企みにも、遠慮なく嫌悪感を表明したものですから、あの人も少しは自戒せざるを得なくなりました。兄とソームズさんに向けた先程の脅しは、他意のない冗談気分から出たものに過ぎないのだと言い張るのです。あの人に言わせますと、この国での利害関係の大きさを考えると、永久に祖国を捨てねばならなくなるような危険はとても冒す気になれない、とのことでした。あの人についてわざと事実とは違うこと、事実などではあり得ないことを、いろいろとジョゼフ・リーマンには語らせたけれど、それは、何人かの者の目に恐るべき人間だと映るようにするためであり、しかも、ただただ災いを避けようとの考えからだったと言うのです。どうやら、思いつきの速いところ、即座に便法を見つけてしまうのが不幸のもとで、口にしてもいないことを自分の言葉だと言われたり、やってもいないのに自分の仕業にされたりするものが多く、また、話題にしただけ（先程のように）のことや、口に出した後すぐに忘れてしまったようなことまで報告される始末だ、とも言っておりました。

このとおりの部分もあるのかもしれませんわね。たった一人で、しかも、あの若さですし、世間で噂されておりますような不品行をやってのけるとは考え難いのです。でも、あの人が意のままに操っていると言われております、あのような恥知らず連中の先頭に立っているのです。皆お金持ちの上に恐れを知らない人たちですし、残念ながら、あの人もやってのけることが分かってしまったわけですが、そんな企みを行うことの出来る連中なのです。あの人の言動で懸念せずにいられることなど、どこにあるというのでしょう。

評判に無頓着だというのがあの人の言い訳の一つなのですが、まことに不適切な言い訳です。女性といたしましては、自分の世評を大切にしないような男性に、どんな望みを持てるというのでしょう。こういう陽気な男も、男女をまじえた会話の時でしたら、一時間やそこいらは楽しませてくれるかもしれません。でも、生涯の伴侶は清廉潔白な男性でなければいけません。有徳の人でなければならないのです。結婚生活の中で男性としての責務を果たしてくれるのか、また、ほどほどの丁重さをもって扱ってくれるのかどうかといった点を、避けようと思えば避けられますのに、道徳上の拘束など一切顧みる気がないことを公言して憚らない恥知らずな男の好意に委ねてしまいますような女性は、果たしているでしょうか。

このような考えを胸に抱き、これだけ内省に努めてまいりました私ですのに、その私がこのような男に身を委ねてしまうなんて　…　あゝ、神よ　…　でも、いまさら何を祈っ

たら良いのでしょう。あの人から逃れようといたしましても、どなたの所へ逃れられるというのでしょうか。

手紙　十九
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

四月十四日　金曜日

このハーロー一族のように、馬鹿な奴らが寄り集まった家族も聞いたことがない。令嬢はやはり我が手に落ちる運命なのだよ、ベルフォード。たとえ彼女の髪の毛のその一本一本が守護天使だとしても、天使たちが彼女の目の前に姿を現すとか、あるいは、俺の不意を襲って彼女を奪い、星の世界へと導いて行くようなことでもしないかぎりはな。

俺が案じたことといえば、連れ出されるのをあれだけ嫌がった娘なのだから、彼女が父親に条件を申し出て、互いの歩み寄りにより、元の鞘に納まるだろうという点だった。つまり、連中がソームズを諦め、彼女は俺と手を切るということだ。だからこそ俺は、後のほうの事態を防ぐため、出来るかぎりの策を講じてきたのだよ。ところが、連中のほうでは初志を貫徹する気でいるらしいのだ。

何と間の抜けた人間がいるのだろうな、この世には。ある者から賄賂をもらって卑劣な行為を引き受けるような輩は、別の者からもっと金を積まれれば、その卑劣行為へのしっぺい返しをやってのけるということ、特に、両方の人間を利用して我身に利する道が開けるとなれば、なおさらそうしてみせるものだということを、この愚かな兄は知らないのだよ。貴公にしても、ジャック、俺の策謀の半分だに見抜くことはないはずだ。

《ここで氏は、令嬢と交わした会話に関し（庭木戸で彼のスパイが立てた物音と叫び声を話題とした部分について）、令嬢の手紙（手紙十七）と同趣旨のことを述べ、喜々として言葉を続けているのである》

何という見事な才能に恵まれているのだろうな、貴公の友は。華麗なる悪事の才能にだよ。だが、そのすべてが極めて真実に近いのだ。事実と違うところはただ一つ、あの男が物音を立てたのは、前もって指示したことではなく、思い違いと恐れによるものだと言い張った点だ。彼女が本当の事実を知ったなら、あんなふうに騙されたこともあり、怒りに駆られ、二度と俺を許す気持ちにはならなかったことだろう。

俺が軍事上の英雄であったなら、爆薬など無用の長物にしてしまっていたはずだ。戦略を駆使し、敵対する者すべてを吹き飛ばしてやったはずだからな。敵の計略をそっくり逆用してだよ。

それにしても親というものは　…　まったく救いようがない。本性の力が分別の力に優っているのでなければ、また、両親が思慮を備え、計画的な子作りが出来るようになるには時間の掛かるものだが、それまでは、あのお節介な女神〔二〕も力添えをしたりしないということであれば、子供を持とうとする者はよほど少なくなることだろうな。

ジェームズとアラベラにはそれなりの動機があるのだろう。だが、この父がしてきたよ

うな振舞いをやってみせる父親には、どんな言い訳があるというのだ。母親はどうだ。叔母はどうだ。おじたちはどうなのかな。こんな男どもや女どもを我慢出来る人間がどこにいるというのだ。

間もなく我が麗しの君の耳にも届くことだろう。連中の馬鹿げた怒りがどれほど激しいものなのかがな。そうなれば、これは希望なのだが、もう少し俺にも信を置いてもらえるはずだ。その時には、だれにも優る愛を寄せてはくれないのかと嫉妬してみせよう。それこそ俺が心の拠り所とするものだからな。そして、謝意のこもった愛の告白を引き出してやるのだ。そうなれば、キスをするのも思いのままだ。このように、身を震わせて立ちすくむこともない。まるで、美味そうな餌が手の届くところにありながら（真っ赤な口の周りには泡を吹いているのだが）、命あってのものだねとばかりに飛びつきかねている、飢えた猟犬さながらにな。

だが、元はといえば、俺も内気な人間だったのだ。事実、今だってこの令嬢のことでは内気なものさ。内気にしては、ずいぶん女に精通しているな、と驚くのか。だがな、それだからこそ、女のことがよく分かるのだよ。女と比べてみようと思い、自分の胸の内を調べてみたところ、たっぷり理由を見つけたので結論を下しても構わないと思うのだが、ジャック、内気な男というのは、女の心を多分に持っているということだ。だから、テイレシアース(二二)みたいに、女が考えていることや目論んでいるものを言い当てることが出来るのだよ。女たち自身にも負けないくらいにな。

俺の場合は特にそうだが、慎み深い女とは似たり寄ったりなのだよ。違うところといえば、連中が考えることを俺は行動に移すという点だけだ。ところが、慎みのない女というのは、俺たちの中の一番のワルよりずっと上手なのだ。考えの点でも行動の点でもな。

この主張の証拠となる論拠を一つ挙げさせてくれ。道楽者のわれわれでさえ、女は控え目なのを好むものだが、控え目ということになっている女たちが（言い換えれば、一番悪賢いということだが）無遠慮な男を好み、そして、大抵はそういうほうを選ぶということだ。何故そうなるのだ。気質が似通っているということ以外にないのではないかな。だからこそ、女はどれも心の底では放蕩児だなどと、詩人(二三)も言いたくなるのだよ。女にとって肝腎なのは、そうではないことを行動をもって示すことなのだ。出来るものならな。

ある賢者の言葉を読んだことがあるが、「あらゆる悪意の中で、女の悪意ほど耐え難いものはない」(ア)というものだ。教えてもらえないか、ジャック。だれだ、こんなことを言っているのは。ソクラテスのものだったかな。何しろ、とんでもない女房を持っていたからな。それとも、だれなのだ。ソロモンだったかな。ソロモン王のことだが、貴公もそんな王様のことを読んだ覚えがあるだろう。俺がガキの頃には［俺の母というのは立派な女性だったのだよ］、一番賢い人はだあれ、と尋ねられた時には、「ソ　ロ　モ　ン」と答えるように教わったものだった。ただ、俺の優しい教師は決して尋ねなかったのだよ。王の知恵のうち、神の啓示によらない部分はどのようにして得たのかという点についてはな。

なあ、ジャック、今の段階で思い止どまることさえ出来れば、貴公と俺もまんざら捨てたものではないということだよ。

（ア）ラヴレース氏はソロモンに見当をつけているが、ソクラテスに目星をつけるのと同様、いずれも見当外れである。この一節は聖書外典のシラ書二十五章のものである。

《この後氏は、令嬢の兄およびソームズ氏への脅迫に関して令嬢と交わした会話の具体的内容、そして、ベティ・バーンズおよびジョゼフ・リーマンに対する処罰計画の詳細を語っている》

手紙　二十

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月十四日　金曜日

つい今しがたラヴレースさんと私との間で交わされました会話の詳細をお知らせいたしますが、感じの良い話し合いであったと申さねばなりません。

切り出したのはあの人のほうからで、受け取ったばかりの報せを聞かせたいとのことでしたが、身内の者たちが急に決心を固め、私の後を追うとか、連れ戻そうとかいう考えは一切捨ててしまった、とのことでした。それゆえ、私の気持ちも知りたいし、私はどうするつもりなのか、あるいは、あの人にどうしてもらいたいのか、それを知りたくて会いに来たとおっしゃるのです。

私は、今すぐにでも私の傍を離れてほしい、と申しました。そして、私がまったくあの人を頼っていないことが皆に分かれば、父の屋敷を出たのは兄の虐待が原因だということになりますし、私にとりまして、これは無理なく申し立ての出来る口実ですし、私と同様に、父にとりましても言い訳になるということをお話しいたしました。

あの人の返答は穏やかなものでした。私の親戚がこの新たな決心を守り通すつもりでいるのを確信出来るなら、私の気持ちでもあり、ご自分としては異存はない。ただ、皆がそのような決心をしたのは、もっと行動的な手段を取れば、兄を（仕返しのことばかり口にしておりましたから）取り返しのつかない不幸に巻き込んでしまうと懸念しただけのことと確信している。それゆえ、十分すぎるほどの根拠があって言うのだけれど、皆のほうでは、心配がないと分かった途端、再び前の考えに戻るはずだ、とおっしゃるのです。

「私としては、マダム、このような危険を冒すわけには行かないのですよ」　あの人が言いました。「貴女としても、私にそのような真似が出来るとしたら、妙に思われることでしょう。ただ、皆さんがそう言っておられるのが分かりましたので、すぐにもと思い、お知らせした上で貴女のご意向を承るのが適当と考えた次第です」

「ひとつお聞かせいただきたいのですが」　私は尋ねました。何か特別な思惑でもあるのか、探ってみたかったのです。「どうするのが一番良いとお考えですか、貴方なら」

「その気になれば、いとも簡単なことですよ、申し上げるのは。もしも、お気持ちを損ねることにならないのなら　…　私にとりましては不可侵ともいえる条件を破ることにならないのならですが　…　」

「どうぞ、おっしゃりたいことをおっしゃってください。同意したら良いのか、反対したら良いのか、その適否はこちらで考えさせていただきますわ」

あの人にとりましては、思いの丈を口にする恰好の機会ではなかったでしょうか。そのとおりで、この機を逃さず、次のように話しておられました。

「申し上げたいことをすっかりお話しするのは、その度胸がもう少しつくまで見送るこ

とにいたしまして［もう少し度胸が、ですって　…　ラヴレースさんにもう少し度胸がだなんて　…　驚きましたね］、貴女にとって一番好ましく思われそうなことを提案するに止どめましょう。ベティ夫人のところはお気持ちが進まないのでしたら、いっそのこと、方角を変えまして、ウィンザーに向かうというのはいかがでしょうか」

「どうしてウィンザーなのでしょうか」

「快適な土地ですからね。また、バークシャーかオクスフォードに向かうとしても、あるいは、ロンドンに向かう場合でも、その道筋にあるということもあります。バークシャーですと、M卿が今滞在中ですし、オクスフォードにいたしますと、近くにはベティ夫人が住んでおります。ロンドンでしたら、ご随意に引き籠もっていただくことも出来ましょうし、ご希望とあれば、貴女はウィンザーに落ち着いていただき、私があちらに行っても構わないのです。ただし、何かあってはいけませんし、お身内の方々が新たに決心されたことに変更があっても何ですから、往き来が楽な範囲のところにいたしましょう」

私もこの提案に悪い気はいたしませんでした。でも、ウィンザーではハウさんから離れてしまい、それが唯一の難点だと申しました。いつも貴女とは、出来ることでしたら、使いの者が二、三時間で着く範囲のところに留まっていたかったのです。

どこかウィンザー以外の場所とか、もっとハウさんに近いところを私が考えているのなら、指示さえしてもらえれば、喜んで適当な落ち着き先を捜してみたい。ただ、もっと遠いところであれ近くであれ、私の思いどおりに落ち着いてくれれば、あの人には召使がいるし、連中は何を差し置いても私の意向に沿うはずだ、とおっしゃるのです。

それから、有難い話をしてくれました。私が落ち着き次第、ハンナのところへ迎えを出してくれるというのです(ア)。ここにいる若い娘さんのどちらかを付き添いに選びたいというのでなければ、とのことでしたが、前にも申しましたとおり、二人とも大層よく尽くしてくれるのは確かなのです。また、それを無駄骨にしないだけの気前の良さが私にあることも、あの人は承知なのです。

このハンナの件が私にはとても嬉しかったのですが、あの人もそれは察しているようでした。もう少し便利な下宿に落ち着き次第あの娘に迎えを出そうと、私も前から考えておりましたことをお話しいたしました。ここの娘さんたちにつきましては、家族それぞれが互いに助け合っていることでもありますし、そこに割り込むような真似をしては気の毒だと申しておきました。また、それぞれが自分に合った役割を持っており、見ていても気持ちの良いほどてきぱきと仕事をこなしていますから、私も皆さんのことがすっかり気に入っている、あの人が私の傍を離れてくれるなら、皆さんと一緒に暮らしても構わないとさえ考えおりますし、そうなれば、この下宿も、私にとっては現在よりも暮らし良くなるだろう、とも言ったのです。

あの人は、この下宿に関する反対理由を繰り返し述べる必要はないのだが、と断った上で、ウィンザーか、それとも、私が適当と考えるどこか他の場所に向かう場合でも、あるいは、ご自分で付き添うにせよ私の傍を離れるにせよ、いずれにしても安心してもらいたいのは（と、大変好ましい言い方でしたが）、私の評判に関わるように思われること、そし

(ア) 氏がウィンザーを提案した理由については八十九頁を、また、ハンナ提案の理由については九十一頁を参照のこと。

て、几帳面さに関わることでさえも、とのことでしたが、どのような提案であれ、すべて快く同意するつもりだ、と言っておりました。そして、私が書き物に熱中していることもあり、すぐにも馬の用意をさせ、出掛けようと思っている、とおっしゃるのです。

警戒を怠ってはいけないとの気持ちからですが、「ウィンザーにはどなたかお知り合いでもいらっしゃるのですか。あちらにはどこか住み良い下宿をご存じなのでしょうか」と尋ねてみました。

「何度も狩りをした森を別にいたしますと、大変名の通った、そして、大変快適な場所の中では、私としては最も不案内な土地なのですよ、ウィンザーは。まったくの話、あちらには知り合い一人いない有り様です」とのお答えでした。

私は、ウィンザーについてのあの人の提案が、大筋では不都合と思われない旨をお話しいたしました。また、私独りで住むことが出来るのなら、そして、ハンナのために上の階に部屋を取れるのなら、ウィンザーに引っ越しても構わないと申しました。容易に察しのつくことでしょうが、手持ち不如意でしたし、どなたにせよ、お世話になるのは本当に気が進まなかったからです。引っ越しは早ければ早いほど良いとも付け加えましたが、そうなれば、あの人といたしましては、ロンドンであれバークシャーであれ、お好きなところへ向かうのに異論の唱えようがなくなるわけですし、私のほうでも、独りでいることをどなたにも分かっていただけると考えたのです。

あの人はお金を融通させてほしいと、再び申し出てくれましたが、とても丁重な言葉遣いでした。でも、私は負けず劣らず丁寧にお断りいたしました。

この話し合いは、そのすべてが、概して感じの良いものになることになっていたのでしょうね。ウィンザーでは街中に住みたいのか、それとも、郊外を選ぶのかと、あの人が尋ねておりました。

出来るだけお城の近くが良い、と私は申しました。欠かさず教会での礼拝式に出るのに便利だと思ったのです。ずいぶん長いことその機会を奪われていたものですからね。

あの人は、もしも聖堂参事会員の住宅のいずれかに落ち着いてもらえるなら、こんな嬉しいことはないのだが、と言っておりました。いろいろな点で他のどの場所よりも私の希望に叶うように思うというのです。また、快く同意した例の条件を満たせば、ご自分以外のどんな男とも結婚しないという約束も当てにして構わないようなので、心配はしないことにする。というのも、こうなった以上、ご自分の役割としては、誠意のある態度で気に入ってもらえるよう努めることであり、それを実現するためには唯一と承知している、その道に従うつもりでいる、と言うのです。そして、非常に真面目な態度で、「私はただの若輩者にすぎませんが、マダム、その道に入って久しくなるのです。このように認めましても、潔癖なお気持ちから軽蔑なさるようなことのなきよう願っております。そろそろ飽きて良い頃合なのです。行いを改めるべき時でしょう。ソロモン王も言っておりますが、〈太陽の下、新しいものは何ひとつない〉(二四)といった心境です。ただ、これは私の確信なのですが、美徳の生活というものは、よくよく考えてみますと、常に輝きを失わず、常に新鮮な、そんな歓びをもたらしてくれるように思うのです」と付け加えておりました。

私は驚いてしまいましたが、また、嬉しい気持ちでもありました。思わずあの人を見詰めましたが、その時の私は、まるで自分の耳と目が信じられないという顔付きだったと思います。でも、あの人の表情はお言葉に似つかわしいものだったのです。

私は満足の気持ちを口にいたしましたが、あの人にとりましては大変好ましい言い方だったのでしょう。あの人も次のように話しておりました。より善き人生への夜明けがこうも早々と訪れたこと、また、私の是認が得られたことを嬉しく思うが、この歓びは、一番追い求めていたものを首尾よく手に入れた時にも得られなかったものだ、というのです。

間違いございませんわ。本心からのお言葉に違いありません。でなければ、このようなことは口に出来なかったはずです。思いつかないはずです。その後のお話を伺い、ますますあの人のことを信じても良い気持ちになりました。

「無鉄砲なことを重ねております最中にも、宗教に対する敬いの気持ち、信心深い人への尊敬の念は常に持ち続けていたのです」　あの人は言っておりました。「道楽仲間のうちの一人が、シャフツベリー卿の吟味法(二五)を実践すべく（これは放蕩児の信条の一つでして、いわば〈不信仰な心の刺激剤〉とも呼べるものですが)、神聖な事柄を笑いの種にしようとしました時にも、いつも別の言い分を持ち出していたのです。聖職に就いている立派な人たちから〈道義に適った放蕩児〉などと呼ばれてきたのですが、まさしくこのためなのでしょう。もっとも、正真正銘の放蕩児だという点については、あの連中も譲ろうとしませんでしたよ。私のほうでも、不面目なことを自慢に思うあまり、放蕩児の名を捨て切れずにいたのは事実ですがね。

このようなことを進んで打ち明ける気になりますのも、マダム、ご親切にお引き受けいただけるものと勝手に期待しているわけですが、私を改心させてくださろうとのお骨折りが、予想なさったほど困難なものではなさそうだと、そんな望みを持っていただけるのではと思えばこそなのです。実は、独りで引き籠もっている時など、何か過ちを犯したことでしばし悔恨の念に打たれております際にも、いずれは私も別な生き方に歓びを感じるようになるはずだとの思いが、いくばくかの楽しみをもたらしてくれるのです。何しろ、それは無理だということになりますと、敢えて申しますが、努力を重ねましても、長続きのする幸福を期待するわけに行かなくなるからです。貴女のお示しくださるお手本こそ、マダム、すべてを為し遂げ、すべてを確かなものにしてくれるのです」(ア)とです。

「神のご恩寵、あるいは、ご愛顧こそがすべてを為し遂げ、すべてを確かなものにしてくださるのですよ、ラヴレースさん。このような言い回しでお話しすることが出来ますのを、私がどんなに嬉しく思っているのか、お分かりいただけないでしょうね」

そして私は、愛らしい田舎娘にお見せになったあの人の思いやりのことや、小作人たちへの好意的な振舞いのことを思い浮かべておりました。

「ただ、お忘れいただきたくないことが一つあるのです、マダム。改心は俄かにもたらされるものではないという点です。私にはひどく陽気なところがありまして、そのために自分を抑えられなくなってしまうのです。これから申し上げますことで何卒ご判断いただきたいのですが、マダム、優れた人物が私のことをまずまずだと見てくれるようになりますまでには、途方もなく長い道程があるということです。いわゆる完全論者とやらが書いたものを私も読んだことがあるのですが、そこには、貴女が触れておられた恩寵という問題について、私よりも立派な人間でさえ正気を失うか、絶望してしまうほどのことが述べ

(ア) 氏がいずれは心を改めようと考えていること、そして、時には善行への衝動に動かされている点については、第一巻の百七十七頁を参照のこと。

られているのです。ところが、その言葉の意味は一向に察しがつきませんし、どのような働きをするのかも判りかねている有り様なのですよ。ですから、目に見える拠り所としてお手本のことを口にいたしましても、また、よく理解が出来るようになるまでのことですが、その種の言葉を用います代わりに、お手本を頼りとしたいという告白にすべての気持ちが含まれるものと考えましても、どうかお止めだてのなきよう願いたいのです」

私は、お聞きしていると少々不安を覚えるし、それほどの才能と学識に恵まれていながら、ひどい暗愚とでも呼べそうな（他の言葉が見つからなかったのです）状態なのには驚いているけれど、正直に打ち明けてくれたことは嬉しく思う、と申しました。このような考え方を助長してくださるよう願い、新たな生き方も、そこに歓びが見出されないようでは、長続きのする幸福は期待出来ないとのご意見は尤も至極であるけれど、歓びは慣れるに従って得られるものなのだと申し上げました。

この種の事柄を二十ほど説き聞かせるようなことまでいたしました。ただ、くどくなりませぬよう、また、私が胸を膨らませて調子に乗るあまり、あの人が眉をひそめたり、苛立ったりなさらぬよう、注意はいたしました。そして、事実、私の話を喜んでくれているのは明らかでしたし、試してみようと思いまして、一度か二度、この話を止めにしたいような素振りをいたしましたところ、じっと待ってさえいるのです。そして、場合によってはあの人も深く考えたり真剣に考えたりすることもあるのだというところを、感じの良い態度で示してくれたのです。それは、こんな具合でした。

あの人がおっしゃいますには、果たし合いで左腕に深手を負ったことがあるそうで、腕をまくって傷跡を見せてくださいました。その怪我に続き（動脈に達したもので、おびただしい出血があったにも拘らず）ひどい高熱に襲われたため、ついには気分も滅入ってしまったのですが、それがおそろしく頑固に続きましたので、生きる望みも持てず、友人たちも持ち直すとは思っていなかったとのことです。まるまる一ヶ月間、心がすっかり変わってしまったように思われ、それまでの生き方を嫌悪し、とりわけ、自分をそのような状態に追い込み、相手には（ただ、仕掛けたのはその男性のほうなのだそうですが）もっと危険な状態をもたらすこととなった、あの無鉄砲さには嫌気がさしたというのです。そうしている間にいろいろと考えたけれど、今でもそのことを思い返すと喜ばしい気持ちになる。身体と心が回復するにつれ、この有望な見通しも変化を来したけれど、捨て去ってしまうのはいかにも不本意であったので、その気持ちを短い詩行に託さずにはいられなかったとのことです。「まったく無味乾燥」なものだがと断った上で、そのいくつかを暗唱してくださいましたが（何を暗唱なさる時にもお添えになる、あの優雅さで引き立てられたこともありまして）、大変立派な出来映えのように思いました。ただ、そこに込められました情趣のほうは、あの人のものといたしましては、予想よりもはるかに厳粛なところがございました。

写しを渡してくださる約束ですので、その時にはもっと詳しく善し悪しを調べてみるつもりでおります。貴女にもお願いすることになりましょう。おおよそのところは、「病を得て初めてまともな考え方に目覚め、健康の回復とともに悪習が甦ったことを思うと、生来の資質に頼ることは止め、瞑想のもたらすものを目指したい気持ちになる」といった傾向のものでした。

あの人はさらに次のように断言しておりました。健康を取り戻すにつれ、こういった望

ましい動きも（すでに打ち明けたとおり）影を潜めてしまったのだが、今は、私の手本がもたらす効果のこと、また、屈せずに辛抱すれば得られるはずの報いのこともあり、以前にも増して見込みがあると思うし、今回の決心は、身体的にも精神的にも溌剌としている時のものであり、私の好意に与るためには、ただただ忍耐あるのみという段階でのものだけに、なおさら辛抱出来そうに思う、とおっしゃるのです。

私は次のように申しました。「燃え上がり始めた炎に冷水を浴びせるような真似はいたしませんわ、ラヴレースさん。でも、期待していただきましょう。貴方がこの心構えを保持してくださいますよう、私も努力いたしますからね。私をどのように思ってくださっているのか、このことで量らせていただきますわ。それから、ロー氏のあの素敵な詩行をいつまでも心に銘記しておいていただきたいのです。ご自分でも認めておられましたが、ずいぶんと懺悔することがおありのようですし、お見せくださった傷跡も、事実、その一つを生涯忘れずにおくためのよすがとなることでしょうからね」とです。

その詩と申しますのは、あの詩人の『ウリッセース』からのものです。私がしばしば称賛しておりますのを、貴女も聞いておられましたよね。あの人にも復唱してあげました。

身につきし悪癖は俄かには変わり難く
永々と月日を重ね、数々の悲しみののち
隠しえぬ自責の念と痛みを感じ
欲を断ち、かたくなな心を挫き
第二の天性を心に築く。
されば美徳は、失いしその地位に復す。
さもなくば、偽装というべし（二六）。

この詩は幾度となく目にしてきたが、その良さにこれまで一度も気づかなかったと、あの人は言っておりました。魂にかけて誓っても構わないが（と、性懲りのないこの人は誓っておりました）、行いを正そうとの決心は今度こそ本気のつもりでいる。身についた悪癖が俄かには変え難いことは、ローのこの詩を私が暗唱する前に既に話してあったが、立派な目的を守り通せないとしても、偽善者とは思われたくない。恩知らずな真似と偽りの装いとは、数ある悪徳のうちでも忌み嫌っているものだから、というのです。

「いつまでもそのお気持ちを持ち続けていただきたいと願っておりますわ」　私が申しました。「それらはあらゆる悪徳の中でも最も憎むべきものですからね」とです。

あゝ、ハウさん、このように前途有望な情勢なのです。今後お届けいたします手紙の中で、それを否定しなければならないようなことが起こりませぬよう願っております。仮にあの人の側には問題とすべき点が一つもないといたしましても、幸せな気持ちにはとてもなれないのです。自分が過ちを犯したという意識がございますし、親戚の者すべてが憤慨していることもあります。従いまして、自分の評判を台無しにしてしまいました点で、心に後悔の念がありますから、それ相応の罰は覚悟しているのです。それでも、ほんのわずかでも希望の光が差してまいりますと、最初の機会を捉えましては、貴女にお知らせしたくなってしまうのです。私の心配ごとは何もかも、本当に快く分かち合ってくださる貴女ですもの。

とは申せ、ご安心いただきとうございますが、このように、あの人が改心の道を歩み始めたのは確かだと保証され、その望みを抱きましても、嬉しさから用心を怠るような真似は決していたしません。最悪の場合を想定いたしまして、あの人は恥知らずにも私の操を奪おうと目論んでいるのだ、などと考えているからではございません。貴女も同じお考えでしょう。ただ、ひどく捉えどころのない人ですし、一見してすぐに分かる、そして、ご自分でも認めておられる移り気な気質ですから、時々は不安になってしまうのです。ですから、出来るかぎり私の傍には近寄らせないよう、また、あの人のことは考えないようにしようと思うのです。と申しますのも、すべからく男の人は女心のスキにつけ込もうとするものなのか、あるいは、そうとも限らないのか、という点は別にいたしましても、ラヴレースさんはその手の人間なのだと、私はそのように確信しているからです。

ですから、これまでも思い巡らしてまいりましたし、今後ともそうするつもりでおりますが、あれこれ申し出や報告に接しますたびに、一体どのような目論みを持っているのか考えてしまうのです。要するに、最善を願ってはおりますが、疑いの余地が残ります場合は何事であれ、いつも最悪の事態に備えていようと思うのです。私のような立場では、いわれもなく心配しておりますほうが、用心を忘れ不意を襲われてしまいますのよりは賢明なことなのです。

ラヴレースさんはウィンザーへ発たれましたが、私の世話のため、召使を二人残して行かれました。明日には戻るおつもりです。

叔母のハーヴィーに一筆認めました。衣類や本やお金のことで私のために口をきいてくれるようお願いするためですが、次のような趣旨です。一族の愛顧を取り戻すことが出来るのでしたら、そして、今後お話があるかもしれない縁談はすべてお断りすることを許してもらえるのなら、また、娘や姪、そして、妹としての扱いをしていただけるのなら、独身を通すというこちらの申し出は守るつもりでおりますし、当然のことながら、父の反対があれば、それには従う所存です、と申しました。それでも、兄と姉から受けました仕打ちのこともございますから、二人のためにも、また、私自身のためにも、離れたところに住まうのを許していただくほうが良いのかもしれないということを仄めかし（搾乳小屋のつもりで書いたのですが、きっとそのとおりに受け取ってもらえるはずです）、暮らしぶりのことや、召使のこと、それに、喜んで同意したいと思っているのですが、子としての従順さを示すことでしたらどの点につきましても、父の指示に従うつもりでいる旨を申し出ておきました。

私の宛先につきましては、姉に送りました手紙から叔母にも分かるはずです。叔母に許可が出まして、一行でも便りをしてくださるならの話ですが。

早目に和解がもたらされるようにと書き送りましたあの手紙の中で、姉にお願いした時と同じくらい熱心に、今度の手紙でも、これ以上私が追い込まれることのないよう叔母に頼んでおきました。そして、手遅れにならないうちに折れてくれるのであれば、すべてはただの誤解にすぎなかったということで通るだろうが、そうでなければ、皆にも私にも同じように不面目な話のように見られるのだということを匂わせ、私があのような行動を取らざるを得ない立場にあった点を訴えておきました。

出し抜かれ、考えとは裏腹に無理やり連れ出されたことを認めたりいたしますと、私の言い分が本当かどうか裏付けをとろうとして、すぐにも皆のところへ戻るよう言い出すの

ではないでしょうか。もし戻らずにおりますと、皆のほうには、私も今は考えが変わってしまったのだとか(そのような気持ちでいるといたしまして)、戻りたくとも戻れないのだとか、そんなふうに考える根拠が出来てしまうのではないでしょうか。仮に帰ることになったといたしましても、それでは皆の言い分のままになってしまうことではないでしょうか。父親に対しては一切無条件というのが、父とおじたちにとりましては金科玉条になっているわけですからね。私が帰ろうといたしますと、ラヴレースさんは反対なさっていたことでしょう。あの人の監督を受けることになったでしょうし、逃げ出さねばならなくなっていたでしょう。私はハーロー邸からあの人のところへ飛び出したように思われているのですが、ちょうどそれと同じことです。これでは、私が途方もなく軽はずみな女に見えてしまいます。あの人が私に束縛を加えました場合には、どうして身内の者に保護を求めたり出来るでしょうか。そのようなことをいたしますと、このように恐ろしく不都合な状態に甘んじてまで防ごうといたしました(厚かましくも私は、燃えるように激しい気性の人たちの調停役を買って出たりしたわけですが)、例の結果そのものを招く危険も避けられなくなるのです。

ただ、いずれにいたしましても、これほど狡猾な方法で誘い込まれたわけですし、決して踏み切るまいと固く心に決めておりました行動なのですから、いわば事後承認のような形でそれを是認せざるを得なくなるなんて、私といたしましては、いかにも心苦しいことではないでしょうか。

災いは次々に続くものだということ、その点を、残念ながら、実証させられている有り様でございます。

変わることなき感謝の念と親愛の情を込めまして、貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　二十一
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

四月十四日　金曜日

貴公は俺のことを自惚れが強いとしばしば叱責してきたが、ジャック、そこに添えられているユーモアの才を見分けようとはしないのだ。そういう長所を認めようとしないくせに、大いに感心もしているのだよ。妬ましい気持ちがあるから見分けられないのだが、本能的には称賛したいのだ。我知らず感心してしまうわけだな。だが、あまりにも鈍くて近視眼的な人間だから、貴公自身がつき動かされているその衝動のことでさえ、どう説明しものか分からずにいるのだ。

だがな、ラヴレースよ、それでも自惚れの責めを免れることにはなるまい、と貴公は言うのだろうな。

確かに貴公の言うとおりだ。うんざりするほど自惚れが強い。だが、才能豊かな人間が自惚れを認められないとしたら、一体だれが認められるというのだ。ただ、考え直してみると、才能のある人間にとっては、だれよりも自惚れる必要は少ないということだ。世間というのは(有能の士は極めて少ないのだから)、すぐにもそんな人物を見つけ出して褒め

そやすからだよ。愚か者にしても、自分よりも理解力のある人間がいるのを分からせることが出来れば、その手の人間は並大抵の者ではないと、躊躇なく結論するはずだ。

これまで述べたことから引き出される大まかな結論としては、この調子で行くと、一体いかなるものになるのだろうか。何人といえども自惚れてはならぬ、ということではないだろうか。だが、避けられない場合はどうなるのかな。おそらく、俺の場合がそうだと思うのだ。俺としては、何が自慢だといって、工夫の才ほど自慢の種にしているものは他にないのだ。そして、どうあっても、そこのところを分かってもらわずにはいられないのだよ。ただし、もしかすると、こういう自惚れ心がもとで、この賢い淑女を相手に失態を演じることになるかもしれないのだ。

どうやら、彼女はひどく俺を恐れているようだ。彼女とハウ嬢の前では、同席するたびに、努めて軽率で無思慮な男と映るようにしてきたのだが、何という馬鹿な真似をしてしまったのだろうな。庭の中の物音のことで彼女に厳しく問い質された時、あゝも事細かに真面目な答え方をしてしまうとはな。あの策略が大成功を収めたものだから［成功に浮かれて元も子もなくした者も多いのだよ、ジャック］、忌まわしい自惚れ心がすっかりのさばって、用心を怠ってしまったのだ。ソームズを神隠しに遭わせることになっていたという脅しと、あの愚かな兄と逃亡するつもりでいたというもう一つの脅しや、彼女のため例の二人の召使に復讐する計画でいたことを話したところ、愛しの乙女はすっかり怖じ気づいてしまい、俺も腰を落ち着けて思案しなければならなくなってしまったほどなのだよ。まともな見方をしてもらうための方策を探ってな。

そうこうしているうちに、彼女の屋敷にいる俺の手下から都合の好い情報が転がり込んできた。少なくとも、好都合なものにしなくちゃならんと固く心に決めたような出来事の話だ。そこで、お目通りを願い出たよ。何か俺に不都合なことを決めてしまう前にと思ったのだ。つまり、俺の大胆さに驚くあまり、決心がつかずにいる間にと考えたのだよ。

従って、精一杯穏やかに振る舞う準備をした。何事にもおとなしく耳を傾け、あくまでも落ち着き払った態度だ。それに、以前は大体いつもそうだったが、今でも時々は善行への衝動が胸に湧いて来ることもあるので、愛しの君に機嫌を直してもらうためにも(ア)、青二才の頃から一人前になるまでに浮かんだその手の考えは何によらず［思い出すのに手間は掛からなかったさ、ジャック］、一つ残らず助長促進し、寄せ集めた。そして、考えてみたのだが、もしもこの姿勢を維持し続けることが出来るなら、壮大な計画を築き上げるに相応しい礎石を据えられないものでもあるまいとな。本来、愛とは疑わないものだと考えた。恐れは違う。恐れを追い出すように努めよう。そうすれば、残るものとしては、ただ愛だけだ。信じ易い心は愛の神の宰相であり、袂を分かつことは決してないのだ、とな。

《ここで氏は、ハーロー邸からの情報および下宿についての氏の提案に関し、令嬢との間で交わされた会話を友人に伝えるのであるが、その内容は先の令嬢の手紙に見られるものとほぼ同趣旨である。

ウィンザーの下宿を提案した件に触れ、氏は以下のとおりの説明を与えている》

(ア) 氏は既に（六十六頁）、改心をカモフラージュとして装う等の発言をしていたのである。

さて、ベルフォードよ、この提案の真意がいかなるものか、貴公のその間の抜けた頭には閃いたかな。まず無理なことは分かっている。だから、教えてやろう。

要らぬ邪魔をしないようにとの目的で一両日彼女の傍を離れるのは、いかにも彼女の好意を頼りにしているように見えるだろうと踏んだのだよ。貴公にも分かるだろうが、間違いなく彼女の身内が追跡してくるだろうと思っていた頃には、彼女を独りにするなど考えられないことだった。そして、彼女の傍から離れずにいるために、追跡の意図があることを口実にしたわけだが、彼女もそこに気づくのではと心配になり始めていたのだよ。ところが、連中は断念すると明言したわけだし、仮に彼女が戻るとしても、受け入れるつもりはないのだから（この言葉は、ハウ嬢とか他の者から聞くよりも、まず俺の口から聞くのが彼女にとっても良いことなのだ）、そうなったからには、こんなふうに従順なところを見せたからといって、何の差し障りもないはずだろう。ウィルを残して行くことも出来るわけだからなおさらだよ。こいつは抜け目のない男で、まともに筆を使うのは無理だとしても、他のことなら何でもござれなのだ。それに、M卿のところのジョナスも置いて行くのだよ（勿論、見張りとしてではない。ただの付き添いとしてだ）。必要な場合には、この男がウィルの指図で俺のところに駆けつけることになっている。俺の動きについては、ウィルに知らせておくことも出来るのだからな。

その次には、何故セアラ夫人やベティ夫人、そして、従姉妹のモンタギューから祝いの手紙が来ないのかを知ろうと思った。こちらからは、我が愛しの君が屋敷から抜け出したことを得意げに書き送ってあったのだよ。それらの手紙も、文言が適切なら、事態の進展如何によっては、彼女に見せる必要が出て来るかもしれないだろう。

ウィンザーのことだが、特にあそこに連れて行く考えなどはなかったのだよ。ただ、彼女のほうからわざわざ助言を求めてくれたのだから、どこかの名を挙げなくてはいけなかったわけだ。すぐにロンドンを口に出すのは危険だから、ずいぶんと注意を払った。彼女が選ぶように仕向けねばならないのだ。ひとつ教えてやるが、女には妙に意固地なところがあってな、助言を求めるのは、男の考えを知りたいだけのことなのだよ。反対出来るようにというわけだ。もっとも、問題にしている点が男に選ばれなかった場合には、おそらく女はそれを選択したことだろうな。

ウィンザーに反対する理由を並べるのなら、あそこに行く振りをした後でも簡単だ。そのほうが見た目にも良いだろう。こちらから言い出した場所なのだからな。別に決まった計画はなかった証にもなる。これほど利発で、どこまでも敏活な理解力というのは、いまだかつて女の中に見たためしはないぞ。それにしても、正直者にとっては嘆かわしい話だよな、疑いの目を向けられるというのは。

それに、行く途中か帰り道に、グリーム夫人に会うことも出来るのだよ。夫人と我が愛しの君はずいぶん話し込んでいたからな。何を話していたのか分かれば、また、どちらかが、顔を合わせるなり相手を利用する気になったとでもいうのなら、両方まとめて満足させるくらいの工夫は出来るはずだ。俺自身には害を招くことなしにな。それこそ、人と交わる際の最も分別のあるやり方なのだよ。世話をしてやった者が恩知らずだと分かったとしても、悔やむことにはならないわけだからな。それに、グリーム夫人は、われわれが厄介になっている農家に嫁いだ妹と、手紙のやり取りをしているのだ。そちらの方から何か起こることも考えられるのだが、都合の好いことなら推し進めてみるし、不都合なことな

ら避けるまでの話だ。

「裏口には常に用心すべし」これは、偉業に取り掛かるたびに俺がモットーとしているものだ。俺が高慢ちきな人間などでないことは、俺を知る者ならだれでも承知していることだ。召使たちに対しても、主人に対するのと同様に親しく言葉を交わすことが出来るのさ。どんなことであれ、俺のために一肌脱がせるに値すると踏んだ時にはな。召使というのは、兵卒どもと変わりがなくて、ありとあらゆる悪さをやって見せるものだ。恨みもないのにやってのけることもしばしばある。ただ悪さをしたいだけだというのだからな。天晴れなものさ。

一番気に掛かるのはハウ嬢のことだ。嫌になるほどウィットに溢れていて、話題さえあれば思い切り茶目っ気を発揮したいと思っているのだ。俺自身〈妙案屋〉たることを誇りとし［聞き慣れない語句で貴公を面食らわせてやるのが面白いのだ。厳密な言葉遣いに拘り、学問の上澄みだけを掬っているような人間だからな、貴公は］、警句めいた言辞を弄しているわけだから、これで出し抜かれるようなことでもあれば、首を吊るか身投げをするか、あるいは、ピストル自殺でもしなくちゃなるまい。

哀れなのはヒックマンだ。あれだけ口喧しい女だからな。先が思いやられるよ。それにしても、奴は馬鹿だよ、まったくの話。考えるに、結婚生活で完全な幸せを得ようと思えば、馬鹿になることが絶対に必要なのだよ［これは、当のハウ嬢と前に論じ合ったことだがね］。ただ、馬鹿は相手が上手であることを弁えねばならん。でなければ、強情者が利口者を落胆させることになるからな。

だが、これまでにも何度か触れたことだが、スパイのジョゼフのお陰だな、こんなことを言っていられるのも。

手紙　二十二
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ　［承前］

それにしても、忌々しい話ではないか。この誇り高い美女に恩を着せることが出来ないとはな。金と衣服を受け取ってくれるよう説得に努めているところだが、その動機は二つある。一つには、高慢な乙女に便宜を図ってやることから得られる真の喜びがあるし、俺のものと呼べる品を彼女が傍に置き、身に着けていると考えるだけでも嬉しいのだ。もう一つは、彼女の手厳しいところを和らげ、少しは謙虚にさせるためだよ。

高慢な人間の鼻を挫くつもりなら、一番手っ取り早いのは、金銭上の負い目を感じさせることなのだ。だからこそ俺は、その手の負い目は一切避けるよう、常日頃から心掛けてきたのだよ。だが、以前には返済に窮したことも時々あり、四季支払い日がなかなかやって来ないのを呪ったものだ。とは言え、入金を見込んで金を使うのは、何としても避けたのだ。「牝牛の腹の中にいる仔牛は絶対に食わん」(二七)というのは、M卿の名文句だが、そのような振舞いは、自分の土地を借地人の善意に委ねるのと変わりあるまい。あらゆる保有条件の中でも一番不愉快なものだ。自分の土地だというのに、垣根を踏み倒す恐れがあるというので、狐狩りは禁止だ。あちこち修理をしてくれとやかましく催促されるが、本当に必要かと思えば、企んだことなのさ。田吾作に声をかけられる時も、畏まると思った

ら大間違いだと言わんばかりに、奴は帽子を被り腕組みのままだ。足はしっかり地面を踏みしめている。まるで自分の土地のようにな。陰険な流し目やふざけた嘲りの言葉にも我慢を強いられる。その振舞いのすべてから窺われるのは、恩恵を施すのは奴の気持ち次第で、丁重な態度を見せるなら、更に世話をしても良い、といった姿勢だ。どんな人間の傍を通るにせよ、そいつの顔が気に食わなければ、頭をかち割ってやる権利があると思っている俺だぞ。その俺がこんな我慢をしなくちゃならんとはな。とても出来る相談ではなかったが、同じことで、尊大な叔父からも、あるいは、詮索好きな叔母からも金を借りるわけには行かなかったよ。そんなことをすれば、連中のほうでは、俺の暮らしぶりや行動すべての説明を要求する権利が出来たように思うだろうからな。吟味し、譴責するためのことだよ。

プライドが高いという点では、どうやら、我が魅惑の君も俺と変わるところはないようだ。だが、その使い分けが出来ずにいるのだな。また、愛らしいお馬鹿さんは、恋人同士が互いに恩義を施したり受けたりすること以上に高尚なこと、それ以上に悦ばしいことは他にないのを知らないのだよ。卑近な例ではあるが、この農家の庭先で、今述べた点が例証されるのを幾度となく目にしているのだ。ふと見ると、勿体ぶった雄鶏野郎がコッココッコと雌を呼んでいる。大麦を一粒見つけたのだな。嘴で拾い上げると、五、六回地面に落とすのだよ。相変わらずコッココッコという呼び声を繰り返しながらな。二、三羽の雌鶏が我先にと争い出だすと「いやはや、雄鶏というのは鳥の中の皇帝といったところなのだよ、ジャック」、奴は先頭の雌鶏の嘴を大麦のところへ向けてやる。そいつが埃まみれの麦粒を口にすると、トサカをおっ立てて勝ち誇ったようにコケッココッコーと鳴きながら背を跨ぐ。翼を低くしてその周りを回り、埃を掃き除けるのだが、ささやかな求婚というわけだ。お引き立てに与った雌鶏のほうは、恥ずかしさと乗り気とが半々で、尾羽をすぼめてみたり、翼を整えたりしているが、見るからに怯えた目付きで、首をすくめているところからして、一目瞭然、呼ばれたのが大麦のためだけでないことは承知しているのだ。

《氏が語った事柄のうち、令嬢の侍女ハンナかソーリングズの娘のどちらかを付き添いに選ぶよう申し出た部分に至ると、氏は以下のとおり記している》

ところで、ベルフォードよ、俺がハンナか、それとも、ここの娘のどちらかを付き添いに選ぶよう申し出た真意はどこにあるのか、貴公には想像出来るかな。一月の猶予を与えるから、当ててみてくれ。

とても当てられそうには思えないと言うのだな。

宜しい、それじゃあ教えてやることにしよう。

少し落ち着いたらすぐにでも、彼女は間違いなくあの可愛がっていた娘を傍に置きたがるだろうと思ったので、娘のことを調べさせておいたのだよ。主人か女主人かは知らないが、雇主のほうで一ヶ月前に予告してくれるよう要求するとか、まだ決めかねてはいたのだが、何か他の手段を用いて娘が来られなくなるよう、何とか働き掛けるつもりだったのだ。ところが、ツキがあるのだな、俺には。幸運にも娘は病気なのだ。ひどいリューマチで仕事を辞めねばならなくなり、部屋に閉じ籠もっているのさ。可哀相な娘だよな、ハンナも。本当に気の毒に思っている。働き者の召使には実に辛いことだよ。この際、少しば

かり心付けをしてやろうと思うのだ。魅惑の君が有難がることでもあるしな。

そういうわけで、ジャック、そのことは一切知らないふりをして、ハンナに迎えを出すよう彼女に勧めたのだよ。お嬢様に誠実に尽くしていることもあって、日頃から俺がこの娘に好感を抱いていたのは彼女も承知のことなのだ。だが今では、この娘には前にもまして好感を覚えるね。災難を目にすると、たかが召使風情の身に降りかかった災難ではあっても、本当に心の広い主人や女主人の善意というのは、減じるどころか、むしろ増すものなのさ。

ソーリングズの娘の一人を付き添いにする話だが、そんな提案をしたところで、問題となることは一切無かったのだよ。どちらが彼女に選ばれたとしても、そして、母親の許しが得られたとしても［それだけで二度チャンスがあるわけだが］、俺が別のを決めるまで辛抱するだけの話だからな。もしも後になって、別れるのは嫌だと言い出したら、我が愛しの君に疑念を抱かせることくらい簡単だし、それで万事解決というわけだ。あるいは、田舎での乳搾りを辞めたがったほうの娘に、ロンドンでの仕事に興味を抱かせ、ウィルと恋仲になるのがその娘にとってすこぶる好都合になるようにすることも出来るだろう。それとも、M卿のチャプレンを相手にしたほうが、娘には有難いかもしれないな。卿の推定相続人に良く思われたがっているのだよ、このチャプレンは。

立派な心掛けには感心するよ、ラヴレース、と貴公は言うことだろう。何しろ、一人残らず皆のことを考えてやろうというのだからな、とな。

《二人の会話の道徳的な部分に関する氏の記述は、令嬢の説明と大きく異なるところはない。そして、改心が俄かにはなされ得ない点を忘れぬよう令嬢に頼む、例の部分に至ると、氏は以下のとおり友人に問い掛けているのである》

これがフェアプレーというものではないのかな。誠意ある態度ではないのかな。所見として述べた事柄は、あえて言わせてもらうが、真実に基づいているのだ。ありのままの話だ。もっとも、政策的な含みもいくらかはあった。たとえ、また不埒なことに走ったとしても、あまりにもひどい偽善者と思われないようにと考えたのだよ。というのも、率直に話したことでもあるが、急に改心を思いたったとしても、一時的な気紛れや発作にすぎないのではと心配だったのだ。ただ、彼女の模範が目の前にあれば、習慣として身につくだろうとの期待はあった。それにしても、想いを寄せる女がこうも立派では、気力も萎えてしまうというものだ。彼女を仰ぎ見る術も知らない有り様さ。本心だぞ。ところで、考えてみたのだが、俺のレベルまで彼女をもう少し引き下ろすことが出来るなら、つまり、不完全さを立証するようなこと、後悔するようなことを何か行わせることが出来れば、もっと対等な立場でやって行けるし、もっとよく分かり合えると思うのだよ。お互いに慰められるだろうし、片方だけが悔恨の念をすべて引き受けることもなくなると思うのだ。

《その際、令嬢が行った道徳的な論議に強い感銘と歓びを得たにも拘らず、その気持ちが永続しないのではと案じたことを氏は認めるのである。氏の記述は以下のとおり》

このお嬢さんはお堅い話を実に感じの好い態度で語ってくれるものだから（お好みの話

題に触れる時には、その声も妙なる響きを奏でるのだよ)、丸々半日は耳を傾けていても良いくらいに思ったほどだ。ただ、心配なのは、世間の言い方だが、仮に「落とされる」ようなことにでもなれば、人の心に訴えるあの力の大半を、そして、今分かったのだが、善良な人間があまり芳しくない者に対して抱く、明らかな優越感のもととなっている、あの堂々たる自信の大半を失ってしまうだろうという点だ。

それはともかく、是非とも知りたいことがあるのだよ、ベルフォード。貴公や俺のような自由人を、何故に偽善者と呼ぶのかということだ。俺の忌み嫌っている言葉だし、そんな呼び方をされるとひどく気分が悪くなるのだ。俺に限って言えば、善行への衝動があることでも、また、おそらく、その気になることが多い点でも、人後には落ちないつもりでいる。問題なのは、要するに、長続きしないことだ。もっと似合った言い方をすれば、他の者はそうするのだろうが、俺の場合は、自分の過ちを隠すのに意を用いたりはしないということだよ。

手紙　二十三

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

四月十五日　土曜日

ほとんど時間を見つけられませんし、油断のない母の目に悩まされてはおりますが、貴女の殿方に突然現れてまいりました新たな姿につきまして、二、三行認めさせていただきましょう。特別にお願いした人の手でお届けするつもりです。

その点に関してですが、あの男のことをどう考えたら良いものか、分かりかねております。お話は立派なものです。でも、ローの詩行を基に判断いたしますと、間違いなく偽善者なのですわ。偽善の罪、それに、自分でも言っております、もう一つの罪の恩知らずな真似に対しましては、憎悪の念を覚えるとのことですけれどね。

それと、是非お尋ねしたいのですが、いかがでしょう、両方の罪にどっぷりと漬かっていたのでなければ、噂されておりますとおりに、沢山の女性を征服することがあの男に出来たとお思いでしょうか。

あの男の率直さには私もぐらついてしまうのですが、でも、狡猾な男ですから、先に自分自身を責めますと、相手の矛先は鈍るものだということくらい、承知の上なのです。

物分かりの良い人間であるのは確かですから、頭の鈍い人に比べますと、このような男でもまだ望みはあるでしょう。それに、改心をいたしますにも、糸口というものがなければなりません。あの男のために、これくらいは認めたいと思います。

でも、これから申し上げますことが、あの男のもっともらしい告白や自責の言葉を判断いたしますための唯一の方法だと思います。あの男は、貴女がまだご存じなかったことか、他の人たちから聞き出せそうにもないことを何か告白しているのでしょうか。そういったこと以外には何もないというのでしたら、自分の不利になる、どのようなことを告白しているというのでしょうか、あの男は。貴女は決闘のことをお聞きになっておられますし、女癖の悪いこともお聞き及びです。世間中が知っていることですわ。ですから、隠しても何の効果もなさそうな事柄を打ち明けているというわけです。率直さが言い訳になる

のです。「おや、マダム、これはラヴレース氏ご自身が認めておられることに他なりませんよ」といった具合にですわ。

それにいたしましても、これからどうなさったら宜しいのでしょうね。お立場の中で善処なさらなくてはいけません。おっしゃるとおりですので申し上げますが、そのお立場も悪いものではないように思うのです。ウィンザーのことや、聖堂参事会員のお宅についてあの男が提案したことは、どれも気に入っております。すぐに貴女を独り残し、下宿探しに向かったのも好感が持てます。そして、私の考えでは、その聖堂参事会員が出来るだけ早いうちに貴女たちお二人を結婚させてくださるのが（その方のお宅に行く行かないはともかくといたしまして）、何よりも一番適切なことだと思うのです。

でも、徹底して用心や警戒に努めていらっしゃいますこと、それに、これまでのお振舞いのすべてにつきましても、あの男にお会いになった点だけは別ですが、大いに賛成しております。あの点には賛成いたしかねると申しましても、これは結果で判断していることです。このような結末を迎えるなど、だれに想像出来たでしょう。でも、本人の話からいたしまして、あの男こそ疫病神なのです。恥知らずなソームズさん、それに、もっと恥知らずなお兄様を誘拐して、本人も無期の流罪ということになっておりましたなら、その三人全員に関しまして、あの男は私の自発的な承諾を得ていたことでしょうね。

あのジョゼフ・リーマンを、何という利用の仕方なのでしょう。面食らってしまいますのは、もう一度申さねばなりませんが、あの男の率直さです。でも、どうでしょう、お兄様もリーマンに役目を言い付けたわけですが、その点についてお兄様を許すことがお出来になるのでしたら、あの男のことを憤慨なさって良いものかどうか、私には分かりかねるところです。それでも、ラヴレースが貴女を連れ去ってからというもの、私は五十回も祈ってきたのです。あの男が貴女の前から消えてくれますようにとね。激しい高熱に襲われても良いでしょうし、絞首刑か溺死でも構いません。あるいは、首の骨を折っても良いでしょう。ただし、あの男のための喪に服さねばならないような立場に貴女を追い込む前なら、という条件が付きますけれどね。

これまではお受けくださいませんでした援助の申し出を、もう一度繰り返させていただきます。貴女がいつも使っておられるお年寄りに頼んでも大丈夫でしょうか。ヒックマンさんの召使に届けてもらいませんのには理由がございます。銀行券の場合でしたら別なのでしょうが、そのようなものを求めたりいたしますと、疑いを招きかねません。母がひどくお節介を焼いて、根掘り葉掘り聞いてくるのです。疑り深い人って嫌ですわね。

今も、母はひっきりなしに出入りしております。少し中断しなければなりません。

ヒックマンさんから宜しくとのことですが、それはそれは丁重な言い回しでした。お役に立つことが出来るなら幸いとも申しております。私のほうでは、いずれお礼をさせていただきますわね、と申しておきました。心に苦悩があります時には、丁重な言葉はどんな人からでも嬉しいものですから、とです。ただ、次のようにも申し添えておきました。これで特段に恩を着せたなどとは考えてもらいたくないけれど、何故かと言えば、貴女ほどに卓越した長所をお持ちの方ですし、そういうところに敬服しないような人、それに、貴

女のお役に立つというだけで名誉なことですのに、それとは別の報いがあるのでなければ貴女のために尽くす気にはなれないというような人は、男であれ女であれ、盲目なのか愚かなのか、そのどちらかだと思うものですから、とです。

「それこそが主な動機なのは言うまでもありませんよ」と、あの人はとても気持ちの良い言い方をしておりました。でも、自分の手に口付けをし、私の足に届くほど深々とお辞儀をしながら、その素晴らしい婦人が私の友人だからといって、その婦人に対して抱いている心からの尊敬の念は、いささかも価値を減ずるものではないはずと存じます、などと言っておりました。

今後とも変わることなき姿をご覧いただきますので、ご安心のほどを。

貴女の誠実にして親愛なる

アナ・ハウ

手紙　二十四

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

土曜日　午後

お返事の筆を進めております間、お使いの人には待っていただいております。お気の毒に、あの老人はお体具合があまり良くないのです。

ラヴレースさんについての貴女のお言葉には、すっかり気が滅入ってしまいました。このように不幸な状況に置かれておりますから、あの人については出来るだけ良い見方をして上げようという気持ちが強過ぎるのかもしれません。改心への姿勢がただの装いに過ぎないのでしたら、一体何を目論んでいるのでしょう。でも、人間の心はそこまで極悪非道になれるものなのでしょうか。万能の神に盾突くような真似が、あの人には出来るのでしょうか。そのおつもりなのでしょうか。でも、あの人のことをもっと好意的に考えて上げても良いのではないでしょうか。思い返すのも悲しいかぎりですが、私はもうすっかりあの人の掌の中にあるわけですから、あの人といたしましても（私に対して言語道断な悪事を企んでいるのなら別でしょうが）、そんなにも浅ましい偽善者になる必要はないということです。少なくとも、希望を抱かせてくれます時には、本心からそのつもりでいるはずです。きっとそうに違いありません。貴女ご自身にも、私と一緒に、この望みを温めていただかねばなりません。私がそんなにも恐ろしい輒に繋がれますのを、貴女は望んだりなさらないはずですからね。

ただ、いずれにいたしましても、あの人やあの人のご家族のお世話にならずに済むのでしたら、そのほうがはるかに好ましいのです。もっとも、皆さんのことは大変立派な方々と考えておりますので、せめて身内の者たちがどのような考えに落ち着くのかを見極めますまでは、と思っております。さもなければ、すぐにもベティ夫人のお世話に身を委ねるのが最善なのかな、とも考えます。そういたしますと、すべてが体裁良く運ぶことでしょうし、いろいろと悔しい思いをしなくても済むかもしれません。ただ、その場合、どうしてもあの人と一緒にならざるを得ませんし、自分の家族を侮っているように思われてしまうに違いありません。それに、一度お願いをしてみて、その結果を確かめますのが先では

ないでしょうか。ただ、これにいたしましても、どこかあの人から離れた所に私が落ち着きますまでは、出来ない相談ということになるのです。

今朝のことですが、ソーリングズ夫人が昨夜お姉さんのグリーム夫人から受け取りましたお手紙を見せてくださいました。その文面でグリーム夫人は（妹さんがお手紙を私に見せることになっても、善かれと願う気持ちからのことでもあり、差し出がましいところは許してもらいたい、とお断りになった上で）、若殿様が …… お幸せになるためにも、私には、宜しければ我を折っていただきたい（それも、誉れ高い一族皆さんのためであり、私自身のためとも言えることだから）、とおっしゃっているのです。夫人のお言葉では「お節介」ということになりますが、このようなことをなさる理由は、昨日ウィンザーへ向かう途中のあの人に、お慶びを申し上げますのは近々のことでしょうか、と「図々しく」お尋ねしたところ、「勿体なくも」「これも夫人のお言葉です」、次のようなことを話してくださったから、とおっしゃるのです。あの人が私を愛しているほどに女性を愛した男性はかつていないし、これほど愛されるに値する女性もいない。言葉を交わすごとにますます私に対する敬服の念が深まるし、これまでのご自分にはまったく考えられなかったような、あるいは、現世の人間からではとても惹き起こされることのないような、そんな清らかな気持ちで私を愛している。私のことはすべてに亘って霊的な存在、自分の魂の救済のために天から遣わされた天使と見なしている、といったことを、他にもたくさん話しておられたというのです。ただ、幸せ者にするとの私の同意が得られるのは、願っていたよりもはるか先の話になりそうな点を心配し、有難いことに信頼を寄せてはくれたが、その前に課されてしまったあまりにも厳しい制約のことに愚痴をこぼしながらも、その制約は夫婦間の財産契約の諸項目と同じように、あの人にとっては神聖なものなのだといったことなども話しておられたというのです。

これにはどのように申したら良いのでしょうね。どう受け止めたら良いのでしょう。グリーム夫人は立派な方です。ソーリングズ夫人にいたしましても同じです。また、このお手紙はラヴレースさんと話し合った内容に合致しておりますが、あの時はとても感じの良い話し合いだと思いましたし、今もそう思っているのです(ア)。でも、意思表明の機会はこれまでに何度もありながら、それを見過ごしにしたのはどういうつもりなのでしょう。私の加えた制約をグリーム夫人にこぼすのは、どんな考えからなのでしょう。あの人に内気なところなどないのです。でも、貴女がおっしゃいますには、私は人に畏怖の念を与えるとのことでしたわね。畏怖の念だなんて …… とんでもございませんわ。一体、どんなふうになのでしょう。

陰険な、と申しましょうか、それとも、軽薄な、とでも申すべきでしょうか。どちらの呼び方が良いのかは存じませんが、この心の働きを目の当たりにせざるを得ないことに気づきますと、自分自身のことですのに、時々は本当に苛立たしくなりますし、腹を立てたり焦れたりしております。

しばしば考えることですけれど、若い女性の模範になろうなどと思いました、その自惚れを思いきり罰せられたということですわね。私のことをせめて警鐘にしていただけます

(ア) グリーム夫人は（夫人の側には些かの下心もなかったのであるが）、やがて見られるとおり（手紙三十一）、ラヴレース氏自身に唆されてこの手紙を認めたのである。

なら、それで満足したいと思います。どのような運命が待っているにいたしましても、もうこれからは、一番の親友や最も尊敬いたしますお友達の間で、きちんと頭を上げておりますことは二度と出来なくなるのですからね。

無思慮さから出た過ちにつきものの残酷この上ない状況の一つは、愛情を向けてくださる人たちすべてを不幸に追いやり、自分の敵、そして家族の敵となる人々だけを喜ばせることになるという点です。

これはどんなにか有益な教訓になることでしょうね。誘惑を受けました人が冒険に飛び込むべきかどうかあれこれ思い巡らしております時に、きちんと説き聞かせて上げるならの話ではありますが。

徳を備えた男性の有難さというものをご存じないということですわ、貴女は。大抵のことにつきましては心の気高い方ですのに、ご自分にお出来になることをないがしろにし易いという点では、貴女も人間の本性に潜んでおります共通の弱みを持っておられることになりますね。

もしもラヴレースさんが貴女に求婚しておられるとしたら、はるかに立派なヒックマンさんを相手になさっておられる時と同じような接し方をしようなどとは、貴女もお考えにならないはずですが、いかがでしょうか。私の母のことで、「世の常といたしまして、忍耐強い人には辛抱すべきことがたくさん出来るものです」(ア)と述べておられるのはどなたなのか、ご存じですね。ヒックマンさんにいたしましても、このようなご意見を述べられたお嬢様のお名前はお知りになりたいのではないでしょうか。そのような人なら、ご自分のお言葉を無為になさることはまず無いだろうと、ヒックマンさんはお考えになるでしょうし、ハウ嬢にはそのような人と知り合いになってもらいたいものだと、期待なさりそうですわね。

心の穏やかさというのは、確かに、男の人の場合でも卑しむようなものではございません。もしもそうだといたしますと、男性の到達し得る最高の栄誉がどうして〈紳士〉の称号ということになるのでしょう。これは、君主といえども与えてもらえないこともあるという栄誉なのです。紳士たる者にとりましては、生まれよりも財産よりも、あるいは、称号以上に、礼節が求められているからです。実際、礼節こそがその本質なのです。女性を扱うには気性の激しい勝手気儘な人間が一番だ(イ)なんてことが、ハウ嬢すら例外となることなしに(以前のお手紙の中で書いておられたでしょう)、世間中で言われても構わないものでしょうか。

お許しくださいね。それから、これまでどおりに可愛がってくださいね。運勢こそ変わりましたが、私の心には何の変わりもございません。また、私の心が、私のものであるのと同じくらいに貴女のものであることを止めましたなら、きっと鼓動を止めてしまうはずだと、その旨をペンに託してお伝えするよう命じておりますかぎりは、今後とも決して変わることはないものと存じます。

貴女の

クラリッサ・ハーロー

(ア) 第一巻の四十四頁を参照のこと。　(イ) 第二巻の八頁を参照のこと。

手紙　二十五
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

土曜日　夕刻

ラヴレースさんがウィンザーでいろいろと貸間を見てきてくださったのですが、私に相応しいと思われるもの、また、私が説明いたしました条件に合うようなものは、一つとして見つからなかったとのことです。

私が渡しました指示書きに従おうとしてくれましたのは好ましく思われますし、あの街のことを言い出したのはご自分ですのに、戻ってまいりますと、思い止どまるようにと説得しますので、なおさら好感を持ちました。ウィインザーのことは自分の提案ではあるけれど、あそこからの帰り道、間違った選択であったと考えたというのです。理由といたしましては、私は人目に付かないことを切望していますし、あそこはあまねく人が訪れ、称賛の的ともなっている土地だから、とのことでした(ア)。

私は、もしもソーリングズ夫人が私のことを足手まといに思わないのなら、もう少しここに滞在しても構わない、と申しました。あの人が私の傍を離れ、M卿のところかロンドンか、どこであれ、一番都合が好いとお考えのところへ向かうのが条件ですが、とです。

あの人がおっしゃいますには、私が兄から侮辱や危害を加えられる心配はまったくないと考えて良さそうなので、もしもそれで心が休まるというのであれば、少なくとも数日の間、私の言葉に従おうと思う、とのことでした。

あの人がもう一度、ハンナに迎えを出そうと言ってくれました。私は、貴女を通してお願いするつもりでいると申しました。いかがでしょう。あの律義な娘に使いの人を出していただけませんでしょうか。お宅の忠実なロバートさんが、あの娘の居場所を知っているはずです。あの娘にはいずれ私のほうで埋め合わせをするつもりですが、一月分のお給金を差し引くということでしたら、きっと暇を取りますのもすぐに許してもらえるだろうと思うのです。

あの人は私を見て、深刻な様子だし、目も赤いようだが、と言っておりました。ちょうど、貴女のお手紙への返事を書いていたのです。旅装を解いて私のところへまいります時の態度は大変恭しいものでしたし、下宿探しの報告も申し分なく、また、最初の一言だけですぐに立ち去ってくれたのですが、もしもそうでない場合は、ひどく不機嫌な態度でお迎えするつもりでいたのです（あの人がウィンザーに発たれた時には、とても仲良くお別れしたのですけれどね）。と申しますのも、この前のお手紙の内容にすっかりショックを受けておりましたので、顔を合わせましたその瞬間には、今私が苦しんでおります不幸のすべて、そして、これまで忍んでまいりました災難のすべてを招いた張本人とばかりに、憤りの眼差しを向けたほどだったのです。

ベティ夫人から一通、それと、モンタギュー姉妹のお一人からも（私はそう受け止めたのですが）一通、お手紙を受け取ったようなことをあの人は仄めかしておりました。もしもお二人が私のことに言及しておられるのでしたら、内容を教えてくださらないのは不可

(ア) このように、令嬢が氏に有利な推論を下すこと、それこそは氏が期待していたところである。八十九頁を参照のこと。

解です。ご親戚の方たちも、私は軽率で弁解の余地もない行動に走ったと考える人たちの中に入っておられるのではないのかと、心配になってしまいます。怯えのあまり自分を見失ったなどと打ち明けますのは、あの人たちに対してでさえ、名誉なことではございません。ただ、私の家出が自発的なものであったように思われたりいたしますと、多分、縁組をするには似つかわしくない者と私のことをお考えになるはずです。あゝ、ハウさん、納得ずくで過ちを犯したという自覚のあります時には、どのようなことであれ、成り行きの覚束ない事柄に思いを巡らしますと、そのたびに心は千々に乱れてしまうものです。

日曜日　朝

あゝ、この男ときたら　…　これまでになく激しい言い争いをいたしました。まともな議論でしたら、恐れる相手ではないように思います(ア)。ただ、ひどく放縦で、ひどく抑えのきかない人間ですから「あの人が心を改めただなんて　…　」、少し怖くなってしまうこともございます。

あの人がここに一緒にいては心が休まらないと申しましたところ、再び、ベティ夫人のお世話を受けるよう言い出しました。ソーリングズ夫人のところに私を残したのでは、身の安全は請け合えないように思うとのことでした。そして、前回の手紙の中で挙げました理由を並べ(イ)、お断りいたしますと、私の地所を請求するよう、しきりに促すのです。

父との裁判沙汰は避けようと、私が心に決めておりますのはご存じのはずですが、と私は申しました。

あの人は、最後の手段としてでなければ、ご自分としても私に強要するつもりはないのだが、と答えておりました。でも、私の言う〈お世話〉をどなたから受けるにせよ、それは私の気持ちが許さないということであるが、ただ、身内の者たちが私自身の財産の譲渡を拒むようなことになれば、その気持ちを守り通しつつ、不便を強いられないようにするにはどうしたら良いのか、見当もつかないし、その点が非常に気掛かりになるとおっしゃるのです。そして、「ただし　…　ただ　…　」と、まるで口に出すのが怖いみたいにためらいながら、財産を手に入れるための唯一の方法を取る気持ちがあるのなら、話は別なのだが、と言っておられました。

「何のことでしょうか」　私は尋ねてみました。

あの人の言いたいことに私が気づいておりますのは、「ただし　…　ただ　…　」と口ごもっておりました時に私が見せました顔付きから、あの人にも分かったようでした。

「あゝ、マダム、その方法が何か、お察しのつかないはずはないでしょう。皆さんにしても、貴女となら争うおつもりでいる権利のことも、男性を相手に争ったりはなさらないだろうということです」

〈自分〉を相手にとは言わずに、〈男性〉を相手にとおっしゃったのは何故なのでしょうね。でも、あの人は言葉を続けるよう促してもらいたいような表情を浮かべておりました。

「父と法廷で争う件につきましては、これまでにもはっきりとしたことを申し上げてきたつもりですが、それでもなお、弁護士を雇ってほしいとおっしゃるのですね」

(ア)　これはラヴレース氏も認めていることである。本巻の三十八頁を参照のこと。　(イ)　九十五頁を参照のこと。

「いや、そういうつもりではないのです、最愛の人よ」と、私の手を掴み、強く唇を押し当てながら、「私を弁護士に立ててくださるのなら別ですがね」と言うのです。

最初から〈自分〉を相手にと言ってくだされば、私だって、弁護士のことを口に出すようなわざとらしい真似はしなかったのです。

私は頬を染めておりました。あの人はあまり熱心に話題を続けはせず、この話に取り掛かるよりは避けるほうが一層自然であり、楽なことでもあるといった様子でした。

無礼に及ぶことなく続けてくださるならと、本当にそう思います。でも、私はあの人をすっかり畏まらせてしまったのでしょうか。「あの人を畏まらせるなんて　…　貴女のお考えですわ」(ア)。それで、畏まってしまった内気な男の人は、この話題を離れ、ご自分の提案を繰り返しておりました。私が自分の地所を請求することにするか、それとも、だれか法律関係の人に請求の権限を委ねてはどうか、というのですが、それを幸せと受け止めるような男に委ねる気持ちがないのであれば「あの人は志願したというわけです」、とのことでした。それにしても、二名の管財人に所有権請求の意思を通知しておくというのは、間違ったことだとは少しも思わない、と言っておりました。

自分が何をすべきかにつきましては、あの人が私の傍を離れてくれましたら、また、その確認がとれました時に、より判然とするだろうと私は申しました。そして、「いかがでしょう、父が私に戻るよう申し入れ、私の同意なしには決してソームズさんのことも、他の人のことも持ち出さないと請け合ってくれました場合、そして、私のほうでも、それを条件に、貴方のことは今後一切考えないと約束いたしました時には、貴方もおとなしく従っていただけるのでしょうね」と尋ねたのです。

すでに申し上げてありました点のいくつかにつきましては、あの人も留意するような態度を見せてくれておりますが、すべてを尊重してもらえるものかどうか、それを試してみたかったのです。

あの人はびっくり仰天しておりました。

「いかがでしょうか、ラヴレースさん。すべては私のためを思ってくださってのことでしたわね。勿論、私はどなたにも干渉されたくはございませんし、希望どおりの取り決めをいたしますのに、貴方との約束を破らないかぎり、確か、貴方のお許しを求める必要はないはずですわ」

あの人は二度、三度と咳払いをしておりました。「さて、さて、マダム、何とも申しかねますが」と口ごもり、少し間をおくと、苛立たしげに席を立ち、「私の申し出がどれ一つとして受け入れてもらえない理由は明白ですね。結局は犠牲にされるということなのでしょう。執念深いお身内との和解のためにですよ」と言っておりました。

「いつもの貴方の慇懃さでしたわね、ラヴレースさん、私の身内をこうも遠慮なく扱うというのが　…　でも、他の人たちのことを執念深いとおっしゃる時には、ご自分も同じ咎めを受けることのないよう、ご注意いただきとうございますわ」

あの人は、是非とも言わせてもらいたいということで、私の身内の一部の者と憎み合っているが、その者たちがあの人から手厳しい扱いを受けるのは当然としても、あの人への仕打ちはいわれのないものなのだ、と言っておりました。

(ア)六十六頁および六十七頁を参照のこと。

「貴方ご自身の判断では、ということでしょうね」

「貴女ご自身も含め、世間中の者の判断するところですよ、マダム」

「それじゃあ言わせていただきますが、挑発的な態度をもう少し慎んでいてくださったなら、皆もあれほど貴方のことに苛立ったりはしなかったはずですわ。とにかく、ある人の身内に公然と悪意を向けるのが、その人にであれ身内の人たちにであれ、ご機嫌を伺う適切な方法だなんて、だれ一人そんな話は聞いたこともございませんわ」

「あゝ、マダム、私に分かっていることと言えば、私に対する皆さんの敵意は大変なものですから、貴女が私を犠牲にしようと決心なされば、お好きな時に和解は達成されるだろうということだけですよ」

「私が承知しておりますことと言えば、父に拒否の権限を委ねるといたしまして、それで父が満足するのでしたら、そういたしますのが私の務めに他なりませんし、私にも拒む権利が認められるのでしたら、貴方への約束は何一つ破りはしないだろうということだけですわ」

「父上に対する務めではなく、気紛れな兄上への義務とおっしゃりたいのではないですか、マダム」

「争いのそもそもの始まりが兄と私との間のことなのでしたら、父親たる者はどちら側につくかを決めて構わないはずですわ」

「そのとおりでしょうね、マダム。だが、それでも、非難を免れるわけには行きますまい。もしも、間違った　…　」

「ことの善し悪しにつきましては、人それぞれに考え方があるものですわ、ラヴレースさん。貴方はご自分に都合の好い考え方をなさっています。他の人も同じようにしてはいけないのでしょうか。それに、自分の家の中で、自分の子供について父親がどう判断いたしましても、それをとやかく言う権利がどこのどなたにあるというのでしょう」

「貴女と議論をしても敵わないことは承知しておりますよ、マダム。とはいえ、和解を準備するための人身御供にならないよう、少しは私の取り柄を認めていただければとの願いから出たことなのです」

「父の屋敷を出るに当たりまして、前もって私の同意をお取りになったのでしたら、そのような望みを持たれるのにも、もっと根拠があったことでしょう　…　」

「いつものことですが、マダム、相変わらず思い出させられてしまいますね。あの忌まわしいソームズを、どちらかと言えば選ぼうとなさったかも　…　」

「あまり早まらないでください、ラヴレースさん。そのようにことを急いではいけませんわ。私は確信いたしておりますが、水曜日にあのソームズさんと結婚させるつもりはなかったものと思うのです」

「皆さんも今はそのように触れ回っていると聞いております。貴女を犠牲にして、自分たちを正当化しようというのです。この世のだれもが、貴女の思いやり溢れるお考えの恩恵に浴しているわけですよ。私以外はね」

「申し訳ございません、ご立派なラヴレースさん［と、私は手を振り、お辞儀をいたしました］。私といたしましては、父のことを一番大切に思いたいのです」

「実にチャーミングなお嬢さんだ」　あの人が言いました。「何と心を魅了する語り口なのだ」とです。そして、熱烈な仕草で私の手を取ろうするのです。でも、私は手を引っ込

めました。あの人にひどく腹を立てていたのです。

「貴女のために辛い思いをしてきたのですからね、マダム、少しはご好意を寄せていただけるものと考えておりますが」

「私ゆえの貴方の苦しみと、貴方の激しい気性ゆえに私が味わいました苦しみとを天秤にかけますと、失礼ですが、私のほうに負い目はほとんどないと思いますわ」

「これはまた驚きましたね、マダム［と、滑稽な口調を装いながらです］。貴女にはどんな苦しみがあったのですか。容易に許すことの出来るものだけでしょう。貴女のご判断に信を置くため、父上のお屋敷の中で監禁されただけのことでしょう。貴女が愛情を注いでおられるという理由で、罪もない忠実な召使が暇を出されただけの話です。姉上の鉄面皮な召使をあてがわれただけのことですよ。貴女をからかったり侮辱したりすることへの許可と一緒にです」

「宜しいですわよ、どうぞ」

「貴女を奴隷のように扱うことを、傲慢な兄上には買って出られ、負けず劣らず無礼な姉上には、皆さんの愛情にかげりが生じるよう手を打たれただけのことでしょう。悪党の手から貴女を守るというのが口実ですが、その手というのは、仮にあの二人の卑劣な報告程度に汚れているとしても、二人の手の半分も汚れていないし、残酷でもないのですよ」

「どうぞお続けになってください、宜しかったら」

「貴女がはっきり嫌いだとおっしゃっている、そして、だれもが軽蔑している浅ましい男と、貴女が結婚せざるを得なくなるよう、迫害をお受けになっただけのことですよ。結婚許可証が取り寄せられただけの話です。牧師さんにも用意をしてもらっただけのことです。式の日取りにしても、ごくごく近い日に決められただけの話です。そして、手紙はないかとお部屋を捜され、その日が来るまで一層厳しく閉じ込められただけのことです。貴女が罠に掛かったからには、抜け出す手段はすべて奪おうというわけですよ。だが、貴女はこのすべてを許しておられるのだ。無理強いをされるのは必定であったにも拘らず、このすべてに耐えていたらと、貴女は希望を口になさることも出来るのだ。そして、貴女が許すことの出来ない唯一の人間は、生命を危険に晒してまで、これらすべての屈辱から貴女を救い出した男なのだ」

「お続けになりませんの。ご覧のとおり、おとなしく聴いておりますわ。その先はないのでしょうか」

「ありますよ、マダム。私が嘗めた苦難の数々です。望みどおりの報いが最後に待っているというのでしたら、口にすべき事柄でないことは認めますがね」

「それじゃ、宜しかったら、貴方の苦難とやらをお願いいたしますわ」

「父上のお屋敷への出入りを、勧めを受けてのことであったにも拘らず、無礼な形で禁じられてしまったのです。禁止を正当化する理由というのは、皆さんが前からご存じのことばかりだ。避けたいものと願っていた果たし合いを余儀なくされましたが、ひどい挑発を受けていながら、避けたいと思ったのは、あれが最初ですよ。それというのも、貴女の兄上だったからです、恥知らずな相手が」

「恥知らずとおっしゃるのですね、それも、兄のことを。このような台詞を口にする人間はこの世に一人としていないはずですわ、目の前にいらっしゃる人を除けば　…　」

「お許しを願います、マダム。だが、あゝ、何としても貴女の兄には相応しくないので

す。争いというのは、大学時代の古い確執に根差したものでして、兄上のほうから仕掛けたことは広く知られているところなのです。争いに再び火がつきましたのは、浅ましいと同時に、貴女にとりましても、また、この命を奪おうとした男を見逃してやりました私にとりましても有害な、そんな魂胆があってのことなのです」

「これでは、貴方の苦難じゃなく、寛大さに聞こえますわ。苦難のことをもう少しお話しいただけませんかしら。まさか、兄を殺め損なったことを後悔していらっしゃるのではないでしょうね」

「プライベートなことを調べられているのです。品行を咎められているのです。非難をしている側の一部にも、落ち度がないわけではないのですがね」

「それは中傷というものですわ」

「私の行状を探ろうと、スパイを数人仕掛けられているのです。そのうちの一人は、私の忠実な召使を買収するために雇われた者ですが、おそらく、最後には私に毒を盛るつもりなのでしょう、もしも律義な召使が　…　」

「事実をお願いいたしますわ、ラヴレースさん。苦難とやらはご披露なさっても、事実は不足しているということなのでしょうか。〈おそらく〉などという言い回しは御免蒙りたいですわね」

「毎日、脅しを受けているのですよ。それに、だれもが私に向かって侮り挑むような言葉を口にする。やむなく、変装をしてコソコソ歩き回り、見張っていなければならないのですよ。それも、四六時中　…　」

「しかも、天候の如何に拘らず、とおっしゃりたいのでしょうね。以前そのようにこぼしておられたのを覚えておりますわよ。〈天候の如何に拘らず〉でしたわね(ア)。それもこれも、すべてのご苦労は貴方ご自身から出たことですわ。私が押し付けたものではございません」

「泥棒とか盗み聞きをしている者のようにですよ」と、あの人は言葉を続けました。「だが、生まれの点にしても縁故関係にしても、皆さんと縁を結んでも恥ずかしくない人間なのです。これからの私が、そして、現在の私が、皆さんの見事なお嬢さんにとってどのような存在であるにせよです。皆さんのほうも、一人残らず、お嬢さんに相応しくないという点では、少なくとも私と変わるところはないでしょう。だからこそ、これを苦難と呼ぶのです、マダム。また、最後には不徹底な和解のための人身御供にされるのでしたら、そう呼ぶのが当然でしょう。不徹底な、と申しておきましょう。これだけのことがあったのです。それでもなお、あの兄上や姉上との、同じ屋根の下での暮しに耐えることがお出来になるとでもお思いなのでしょうか」

「まあ、それはそれは　…　本当に大変なご苦労だったのですね。それも、すべて私のためなのですね。とても償いは出来ませんわ。どうか、これ以上私のことはお考えになりませぬよう、お願いいたします。こんな私を辛抱なさるなんて、到底お出来にならないはずですわ。貴方ご自身の振舞いから出たことは何一つないようですもの。売られた喧嘩を買って出られたのとは無関係だということですね。一度ならず口に出しておられた、縁を結びたいとのご意向とは関わりないのですね。もっとも、身を落としてまで、そんな一族

(ア)　八頁および十頁を参照のこと。

との縁談を進めるお気持ちはないのでしょうけれどね　…　要するに、わざわざ釈明するまでもないことと貴方はお考えですが、皆さんも非難している貴方の行状が原因ではないということになりますね。これまでにもお話しいたしましたが、貴方が紳士らしい扱いを受けていないとの思いがなかったなら、文通などをしてお引き立てすることもなかったのです(ア)。そのようにお引き立てしたものですから、貴方は心配ないものと思い込み、なおさら気前よく身内の者たちを愚弄なさったというわけです。お陰で、私は（多分、不当なことではないのでしょう）父の不興を招いてしまったのですが、それさえなければ、兄の私怨も身勝手な目的も足場を失っていたはずなのです。ですから、私に対するその後の仕打ちのすべてや、取るに足らないこととしてたくさん並べ立てておられた事柄も、主として貴方のお陰ということになりますわね。貴方のおっしゃる苦難の数々、その大変なご苦労も、身から出た錆ということにもなるのでしょうけれどね　…　それに、いかがでしょう、雄弁家さん、苦労なさったのを手柄にしておられるようですが、私も評判を落としてしまったのですから、ひとつ思い直して、私だけを被害者と考えてはいただけないものでしょうか。あら、最後までお聞き願いますわ［あの人が口を開こうとしていたのです］。貴方のプライド以外に、一体どのような点で傷つけられたとおっしゃるのでしょう。ご評判に傷がつくなど考えられませんわね。評判を求めたりするのは沽券にかかわる、ということでしたもの。貴方が手に余る人でなかったなら、一時間また一時間と嘆きの時を過ごしております、このような苦しい立場に私は追い込まれることもなかったはずなのです。しかも、わざわざ私のために身の証を立てる必要はないとか、父親でしたらだれでも、任意に決めて構わない事柄につきまして、ご自分のためですのに、父の意向に従う気にはなれないと考えておられるのですから、そのような人との文通などは始めるべきでなかったのだ、そして、仮に始めたといたしましても、続けるべきではなかったのだ、という自責の念までが、そこに加わっているのです」

「闇で覆うのも光を注ぐのも、そう、誓っても良い、光も闇も貴女のお気持ち一つなのです。あゝ、我が心を魅了する人よ」と、私の手を掴んで両手で握り、唇に押し付けながら、あの人は妙に興奮した口調で、「この身は貴女のものです。貴女に捧げよう。お好きな姿に作り上げていただきたい。貴女の掌中にある蝋なのですよ、私は。貴女ご自身の印を押し、いつまでも貴女のものとしていただきたいのです。生まれ落ちた時から、私たちは結ばれる定めだったのだ。私を幸せにし、魂を救ってくださるのが貴女の仕事だ。過ちと罪の固まりですからね、私は。どうすべきであったのか、それは承知しているのです。だが、マダム、私が喜んで同意出来るとでもお思いでしょうか。生半可な和解の犠牲にされるのです。大きな、取り返しのつかない被害を受けることにもなるのですからね。それだけは御免蒙りたいものだ。談判をなさる時には、私の件も含めていただきたい。お指図を待ちましょう、お気に召すようにで構わない。ご支持願いたいのです。この首に馬の端綱を掛け、父上のいらっしゃるところへ（兄上が不在の時ですが）引き摺っていってもらいましょう。そんな不名誉な姿で懺悔するのです。それで勘弁していただくというのが条件です。また、負けず劣らず卑屈な格好で平身低頭することを条件にしても良い。父上の足下に身を投げ出し、ご承諾を請うつもりです。鼻であしらわれるのは別だが、他のことは

（ア）十頁を参照のこと。

すべて耐えてみせます。貴女の父上なのですからね。だが、冷酷無情な条件のまま貴女を諦めたりするようなことがあれば、あるいは、そのような真似が出来るとしたら、この身を地獄に［というのが、あの呆れた恥知らずの台詞です］突き落としてもらいたい」と言っておりました。

思い出すことの出来ますかぎりでは、あの人の言葉はほぼこのとおりでした。その態度というのが、奇妙なほど興奮し、熱に浮かされたようなものでしたから、私もすっかり怯えてしまったのです。私の手を呑み込む気ではないかと思いました。あの人から千マイルも離れたいと、そんなことを私は願っておりました。

私は次のように申しました。あの人の激しい気性は到底是認するわけに行かないし、言動があまりにも乱暴なため、好意を感じることも出来ない。私の差止め命令は尊重すると得意げに話しておられたが、それがどのようなことなのか、先程の会話から今では明白になったので、いずれ分かることだが、それなりの対応をしたいと思う、といったことをです。そして、引き下がっていただきたい、独りにしてほしいと、半ば怯えながら、懸命にお願いしたのです。

あの人は願いを容れてくれました。しかも、この上なく丁重な態度でしたが、顔色はとても紅潮しておりましたし、ひどく不満げな表情でした。

でも、今回の件すべてを思い返してみますと、次のことがはっきりいたします。あの人のほうでは、私がその権利を留保しているにも拘らず、出来ることなら、お断りする自由を私に許すおつもりはないということなのです。意思に反した形で私を連れ出したわけですが、奇妙なことに、それで恩を着せたみたいに考え、私を自分のもののように見なしているのです。

でも、お気づきでしょうが、結婚のことにつきましても、遠回しに触れるだけです。それも、大抵の場合、すぐには平静に戻れないほど相手の怒りとか不安を掻き立てた時のことです。でも、決してこれはあの人の策略ではないはずです。もっとも、姉に対する振舞いもこのようなものでした(ア)。あの時は、憤慨のあまりお断りするように姉を唆し、その上で、姉の拒絶におとなしく従ったのです。まさかとは思いますが、これだけいろいろな顔を持つ人のことですから、何とも申せません。また嫌気がさしてまいりました。あの人の元をすっかり抜け出すことが出来たらと、本当にそう思います。

面会を求めて、使いの者を三回寄越しましたが、後の二回の熱心さときたら、尋常なものではございません。でも、今取り掛かっておりますことを先に済ませたい旨の伝言をしておきました。

ここを出ることにつきましては、どうしたものか、分かりかねております。あの人にもお話しいたしましたように、残るのは一向に構わないのです。夫人も娘さんたちも、あまり都合の好いことではないはずですのに、残るよう言ってくれるのです。でも、ここにおります間は、あの人も私を独りにするつもりはないようなのです。ですから、どうしてもどこか別の場所へ行かなければならないわけです。

以前から自分自身に嫌気がさしておりましたが、ますますそんな気持ちになってまいります。でも、高く買ってくださるそのお気持ちを失いたくはないのです。もしも失うよう

(ア) 第一巻の七頁から次頁にかけてを参照のこと。

なことになりますと、私も不幸の極みということになりましょう。

貴女の
Cl. ハーロー

手紙　二十六

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

日曜日　夜（四月十六日）

お手紙をくださることは禁じられましても、こちらからお送りするのは構いませんでしょうね。返事がなくては、〈文通〉とは申せませんもの（そうですわね）。

あの人のことをどう考えたら良いのか、奇妙なほど迷っております。まったくもってプローテウス〔二八〕そのものです。その時々に装う姿をお伝えすることしか出来ません。一つの手紙で言ったことと矛盾するようなことを別の手紙で書きましても、いいえ、同じ手紙の中で矛盾するようなところがありましても、私こそ気紛れな人間だなどと、どうかお考えにならないでくださいね。本当にカメレオンみたいな人です。むしろ、カメレオンよりも変わり身が速いかもしれません。赤い色と白い色に変わるのはカメレオンにも無理だと言われておりますが、あの人にはそれが出来るのです。黒があの人には一番自然な色のようですけれど、苦心惨憺の末、あの人は全身白無垢だと私に思い込ませたのです。

でも、あの人のことは、私の筆の進みにつれ、ご判断いただくことになりましょう。ただ、私が軽々しく信じているように貴女の目に映る場合がございましたら、どうか正してくださいますようお願いいたします。以前のお手紙で言っておられましたが(ア)、貴女は傍観者なのですからね。どうやら、抜き差しならないゲームに引き摺り込まれてしまったようですが、勝負をせずに済むならと、天にも祈る気持ちです。

貴女へのこの前の手紙を書き終えますまでに、あの人はさらに二度、面会を求めて使いを寄越しました。私は返答として、次のように伝えました。都合の好い時にお会いするつもりであり、邪魔されたくもなければ、指図を受けるつもりもない、とです。

別れ際の状況や、あの人が時々「接見」と呼んでおりますものを遅らせましたことを考えますと、あの人をお通しいたしましても、上機嫌なはずはないと思っておりました。私も不機嫌にしておりましたのは、文面からお分かりいただけるでしょう。ところが、入ってこられた時のあの人の大層遜った態度を目にしたり、ご用の向きを耳にしたりいたしますと、私のほうはすぐに気持ちが変わってしまいました。

「手紙を受け取ったのですよ、マダム」　あの人が言いました。「ベティ・ローランス夫人からです。それと、従姉妹のシャーロットからも一通届きましたが、詳細はいずれお話しいたしましょう。今伺ったのは、先程の話し合いのことで、謹んでお詫びを申し上げたいとの気持ちからなのです」

どういうつもりなのかと訝かりながら、私は黙っておりました。

「まことに不幸な人間なのです、私は」と、あの人は言葉を続けました。「自分にはどう

(ア)　三十一頁を参照のこと。

にも抑えようのない、妙にせっかちなところが不幸のもとなのです。そのため、当然のことながら、いつも恥ずかしい思いをしてしまうのです。ただ、過ちを自覚させられました時には、自説に固執するよりも間違いを認めるほうが立派なことでしょう」

私はなおも黙っておりました。

「お身内との和解をもたらしますためにも、応じるのが適当と貴女のほうでお考えになるような条件には、私もおとなしく従うべきだという、例のご提案を、マダム、検討していたところなのです」

「いかがでしたの、それで」

「貴女のおっしゃることは、すべてが尤も至極です。まったく正しいと思います。私のほうは、まったくの忍耐不足です。無分別の極みでした」

お察しいただけるでしょうが、私は目を丸くしてしまいました。「どういうわけなのでしょう、このお変わり様は。それも、これほど急に　…　」

「適当とお考えの上で主張なさる点に関しましては、すべて貴女のご意見が正しいことを十分納得いたしましたので、今後は自分を疑うことにいたします。また、反対されたことがこれまであまりないものですから、反論を受けると興奮することが多いのですが、貴女と違う考えの時には、出来ることでしたら、激情に身を任せる前に一時間は反省の時を持とうと思うのです」

「これはまた、大層ご立派なお考えばかりですわね。でも、どのような方向へ向かうことになるのでしょう」

「実は、マダム、お身内との和解の条件について以前から提案しておられたことを考えてみたのですが、功罪に応じて私を是認くださる場合にも、あるいは、拒否なさる場合にも、常にご自身に照らしておられたことを思い返しましたところ、例の条件への同意をお求めくださったのは、新たな掟を強いるというよりも、むしろ、有難いご配慮の表れであることにはっきり気づいたのです。従いまして、マダム、堪え性のなかった点をお詫びいたしましょう。お身内の方々とどのような形で折り合われるのを適当とお考えにせよ、制限はつくでしょうが、私とのお約束を果たしていただけるものでしたら、どうぞご同意願いたいと思います。考えるだに耐え難いことではありますが、仮に貴女を失うことになりましても、自分の過ちから出たことなのですから、我が身を恨むべきなのでしょう」

どのように思われますか、ハウさん。この言葉に魂胆が隠されているなんて考えられるでしょうか。私にはとてもありそうに思えないのです。それに、これだけまっとうな態度でお話しになったわけですから、正直な告白だと信じてみせますのが、そして、本心からの言葉として受け止めて上げますのが一番良いことだと、私は考えたのです。

その後、ベティ夫人のお手紙の一部を読んでくれたのですが、初めの部分には、あの人にとって少々厳しすぎる言葉があるとのことで、教えてはもらえませんでした。残りの部分も、文体から推しまして、窘める調子のものだろうと思いました。

お身内のどなたがお便りをくださる場合でも、何か芳しくない振舞いのことをお咎めになる言葉がきっと含まれているのですから、あの人に大きな落ち度があるのはあまりにも明白です、と私はお話しいたしました。

「どのような落ち度であれ、愛しい人よ」と、あの人が言いました。「それを憶測しておられるだけの貴女が、私を非難なさるのに同じように乗り気になっておられることもまた

明白だということです。夫人たちの非難も、やはりあまり根拠のないことだとご推測くださいますのが、思いやりというものではないでしょうか。評判に無頓着だったこと、そして、中傷を受けましても、嫌疑を晴らすのにさほど熱心ではなかったこと、それこそ、私の落ち度の主たるものであったとはお考えいただけないのでしょうか。それが実情であるのは間違いのないところなのです」とです。

ベティ夫人は、お手紙の中で、私に関しまして大層有難いお言葉をお寄せくださっています。あの人をすぐにも幸せにして差し上げるよう私を促すような、そんな振舞いをあの人に望んでおられます。私に宜しくとのことで、これだけ名の通ったお嬢さんを［そんな大袈裟な言い回しを夫人はなさるのです］ご自分の姪として迎えるのが待ち遠しくてたまらない、といったおっしゃり方なのです。私に喜んでもらえるような立場になることを光栄に思う、とおっしゃっておられます。式をあまり先へ延ばしてほしくないとのことですが、式が済んだということになれば、それはご自分にとりましても、M卿やセアラ夫人にとりましても、甥御さんに取り柄があること、そして、行いを正していることの確かな保証になるからだ、とおっしゃるのです。

あの人のために私が嘗めた数々の苦難のことを耳にされ、常々申し訳なく感じておられたそうで、すべての償いをするのでなければ、あの人はまったくの恩知らずということになる。そして、私が身内の間で失った愛顧の埋め合わせをすることこそ、ご一族全員の責務と考えておられるというのです。そして、夫人ご自身といたしましては、その種のことでは至らぬところのないようにするつもりであり、その旨を私に請け合うよう、あの人に命じておられるのです。

あの人が私の身内からお受けになった扱いは不可解だが、生来備わっているものやたまたま身につけたものを含め、あのように数々の利点を持つ人間だけに、それがあの人ご自身の無頓着な態度から来ているのでなかったなら、なお不可解に思われたことだろう。でも、今度こそ、評判を揺るぎないものすることの出来る立場にあるのだから、あの人を実際よりも悪く考えていたのだということを、ハーロー一族にも納得させてもらえそうに思う、といったところが夫人のご意見なのです。そして、あの人にそれが出来るよう、神のご加護を祈っておられるというのですが、これはあの人ご自身のためであると同時に、ご一門の名誉のためでもあると、それはそれは大層なおっしゃり方なのです。

私たちの式が済み次第、時を移さず知らせてもらいたいとのご要望をもって、夫人はお手紙を結んでおられるのですが、慶事に際しまして、ご自分も真っ先に祝いに馳せ参じる者の一人になりたいからだとおっしゃるのです。

でも、あの人のお話からいたしまして期待して構わなかった点なのですが、結婚前に顔を出すようにという、夫人からの直接のご招待は届いておりません。

次にあの人は、モンタギュー嬢からのもっと陽気なお手紙を一部披露してくださいました。「あれほど素敵な令嬢の信頼に与る」という、あの人が勝ち得た栄誉を祝っておられるものです。お嬢様はそんな言い回しをしておられるのです。「信頼」ですからね　…　驚きですわ。確かに、貴女がおっしゃるとおり、実際のところを聞かされましたなら、そうではないと思う人など一人もいないでしょうね。また、お察しいただけるでしょうが、モンタギュー嬢は（それに、ご一族の皆さんもでしょうが）、私の取りました行動を尋常なもの

ではないとお考えなのです。お嬢様も、あの方が早目に式を挙げること、そして、新しく出来ました従姉妹とM卿のお屋敷で会うことを願っておられます。M卿も妹さんも同じお気持ちとのことですし、好意をお寄せくださるご一族の皆さん方も、挙ってそのおつもりだということです。

お目出度い日が過ぎ次第、私のところをお訪ねになるつもりとのことですし、また、M卿の痛風が相変わらずお悪い場合には、私がM邸へ向かう際、その一行に加わりたいともおっしゃっておられます。ただ、卿が快方に向かわれました時には、きっと卿ご自身がこちらへお越しになり、お屋敷まで案内してくださると思うし、その上で、私たちが希望どおりの住まいに落ち着きますまで、三つのお屋敷のどれかを空けてくださるはずだとおっしゃるのです。

道中かセントオールバンズで落ち合ってくださるものと、あの人のお言葉から期待しておりましたのに、そうなさらなかった点につきまして、このお嬢様から釈明のお言葉はございません。ただ、体調が思わしくなかったことには触れておられます。M卿が痛風を患っておられることはラヴレースさんも話しておられましたから、モンタギュー嬢のお手紙はその確認になるわけです。

それにいたしましても、これらのお手紙を昨夜見せてくださらなかったのはどうしてなのでしょう。あまり喜ばせすぎてもと、心配なさったというのでしょうか。

手紙　二十七
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

お分かりいただけるでしょうが、これらのお手紙のせいで、あの人に対する私の機嫌も直ることになりました。私の顔付きからそれを看て取られたのでしょう。あの人も喜んでおりました。でも、繰返しになりますが、内容を昨夜のうちに教えていただけませんでしたのは不思議でなりません(ア)。

そんなわけで、あの人のほうではお手紙を頼りに、すぐにもベティ夫人のところへ伺うよう、しきりに私を促しておりました。

「でも、身内との和解の望みがまったくないといたしましても（どれほど実現の見通しが乏しくても、試してみるのが私の務めですから)、どうしてそのようなことが出来ましょう。夫人から特にご招待をいただいたわけでもございませんし」と、私は申しました。

受けてもらえるのかどうか、懸念があったからに違いない、とあの人は言っておりました。でなければ、何にも優る喜びをもってそうしていたはずだ、とおっしゃるのです。

そのように懸念を抱かれること自体が、私に二の足を踏ませるのに十分なのです、と私は申しました。何故なら、適切さと不適切さとの分かれ目を熟知しておられる奥様が、仮にご招待くださいましても、私がお受けするようにはお考えにならないことからいたしまして、お受けいたしました場合、ずいぶん厚かましい女だと思われて当然なのです。まし

(ア) この点に関し、ハウ嬢はいかなる説明を加えているのか、読者諸氏には百二十八頁でご覧いただくことになろう。

て、ご招待もなしに伺いますのは、もっともっと厚かましいことになりましょう、と私は申しました。それに、これは貴方のお陰というわけですが、どちらへ参るにいたしましても、どなたに会っていただくにいたしましても、それに相応しい衣裳は持ち合わせないものですからね、とも言っておきました。

正装と宝石類のことを勘弁してもらえるのなら、私はこのまま客間に出ても不都合なところはないし、すこぶる愛らしく見えるだろう［本音は、異様な姿に見えるということでしょう］などと、あの人は言っておりました。身に着けているものの優雅さには驚くばかりだ、とのことでした。どのような秘訣があるのかは知らないが、着こなしが実に見事であるから、日毎に衣裳を替えているかのようだ。それに、当座必要なものについては、従姉妹のモンタギュー嬢たちがすべて用意してくれるはずだから、私の許しがあれば、早速シャーロット嬢に一筆認めても良い、とおっしゃるのです。

「私のことを寓話に出てくるカケス(二九)のように思っておられるのですか」　私は申しました。「お借りした衣裳の持ち主たちのところへ、その衣裳を着て伺えとおっしゃるのでしょうか。きっと私のことをひどく心の卑しい人間か、図太い神経の持ち主だと貴方は考えておられるのですね、ラヴレースさん」とです。

衣裳の調達に、ロンドンへ（ほんの二、三日のことだが）行く気はないかと、あの人が尋ねました。

「貴方の費用ではいやですわ」と、私は怒りを込めて申しました。

不自由な暮しに甘んじておりますのも、あの人のせいなのですから、私を連れ出します際の狡猾な手管を不愉快に思っておりましても、時々は本当に苛立っておりますところを見せませんと、あの人の目には、本気とは映らなかったことでしょう。人付き合いにおきましては、最初の出だしを間違いますと、非難のし合いにならないようにいたしますのは大変難しいものなのです。

私の意向を知ることさえ出来ればと、あの人は願っておりました。それがはっきりすれば、提案のしようも分かるだろうし、どのようなことであっても、喜んで遵守するつもりだというのです。

「私の意向でしたら、すぐにも独りにしていただくことですわ。何度同じことを申し上げねばならないのでしょう」　私は申しました。

あの人は、私がどこかここ以外の場所にいるのであれば、是非にという場合には従うつもりだ、と言っておりました。ただ、あの人の意見としては、私が例の権利を主張してくれるなら、ある方法を別にすると（と、遠回しに仄めかすだけでしたが）、他のどの方法よりもそちらのほうが望ましいとのことで、その場合、あの人の訪問を受けるのも断るのも私の気持ち次第ということにすれば（文通による連絡だけは承諾して）、私の取った行動は自分の立場を守るためのものに他ならなかったのだと、世間の人たちの目にもそのように映るはずだから、というのです。

「父と訴訟沙汰を起こす気などないのです、ラヴレースさん。何度繰り返せば良いのでしょうか。不幸な境遇にあるからといって、務めを果たす力を与えられておりますかぎりは、この私が自分の務めに対する考え方を変えるとでもお思いなのでしょうか。訴訟を起こさずに、また、管財人の方たちの同意なしに、どうして地所を手に入れることが出来るのでしょう。管財人の一人は私に反対しておりますし、もう一人は外国にいるのです。そ

れに、この手段による解決策は、仮に私が同意する気になったといたしましても、実行に移されますのには時間が掛かるのです。そして、私が望んでおりますのは、今すぐ独りになりたいということなのです。貴方がすぐにもいなくなってくださることなのです」

「自分の魂にかけても構わない」と、恥知らずな男は誓いの言葉を口にしましたが、私をここに独り残して行くのは、前に挙げた理由もあり、安全なこととは思わない、というのです。そして、私のほうでどこか行きたい場所を思いついてくれると有難いのだが、とあの人は言っておりました。また、無礼とは存じますが、と断った上で、次のようにも言っておりました。しばらくの間は姿を消してくれと、そこまで真剣に迫られるほど、これまでのご自分の振舞いが非難に値するものだったとは思わない。まして、私は絶えず部屋に閉じ籠もり、あの人を遠ざけているのだから、なおさらだ。ただ、厚かましい言い種だが、私のところを辞するたびに心が洗われた思いがするし、私を手本に向上を図ろうとの決意がいよいよ強くなる、と断言なさるのです。

「絶えず部屋に閉じ籠もって、貴方を遠ざけているですって　…　」　私は鸚鵡返しに申しました。「独りでおります時には邪魔をしていただきたくないと思うのですが、それを不適切なことだなどと、そんな受け止め方はしてもらいたくないですわ。他愛もないお話を伺いたいと待ち侘びるような、それほどの愚か者とは（肝心要の点では、ウブなところをご覧に入れてしまいましたが）考えていただきたくございません。とりわけ、どんなに事情が変わりましても、あまり頻繁にお顔を見せていただく必要はないのですからね。それに、口説き文句も無用です。まるで、一時間ごとに愛を囁いていただかなくては、貴方の真心が信用出来ないと考えているみたいじゃありませんか」

あの人は少し当惑した様子でした。

「ご存じのはずですわ、ラヴレースさん」　私は続けました。「貴方がいなくなってくださることを、こうまで望んでおります理由につきましてはね。私が貴方とは無関係であるように、世間の人たちに見てもらうためなのです。そして、そうすることで、身内との和解の話を始めますのにも、面倒が少なくなるのではと思うからなのです。それと、一言加えさせていただきますが（待ち望んでおります和解条件につきまして、ご安心いただくためです）、幸運にも、お身内の方々からは大層気に入っていただいているようですので、貴方が去られた時には、私の行動のすべてを、そして、交渉の様子を逐一、時々は文面でお知らせしようと思うのです。ただ、私の身内の申し出を受けるにせよ受けないにせよ、貴方に対して説明の義務を負うつもりはございません。他の贈り物共々、祖父が遺してくれました地所の処分につきましては、完全に身内の者たちを除外するというわけではございませんが、皆にも影響を及ぼすような方法で遺贈する権利が、祖父の遺言でこの私に与えられておりまして、その点は皆も承知しているのです。皆も興奮が鎮まり、私が貴方とは無関係であることを知りましたなら、今申しました点を考え、何らかの配慮をしてもらえるものと期待しているのです」

「見事な論法だ」　あの人が叫びました。そして、こんなことを言っておりました。私の与えた言質こそは、断言しても構わないが、あの人が望みをかけていたことのすべてであり、願ってもない話である。節操があり、心も広い女性を頼りに出来るというのは、何と幸せなことか。初めて世の中に出た際、このような女性に出会っていれば、自分も厳格な道徳家以外の人間にはなり得なかったはずだ。だが、すべては良い結果へ向かうものと

思っている。というのも、その場合には、おそらく、今目前にしているような幸福を手に入れることは決してなかったはずだからだ。何故なら、日頃から身内の方たちがしきりに結婚を促しているのだが、それも、私と知り合うという光栄を得る以前からの話だからである。そして、自分はどこかの人間が悪意を込めて言いふらしているような悪辣な人間ではなかったのだから、踏み誤ったことのない人間並に、今は、悔い改めている自分を褒めてもらえるものと思う、というのです。いかにも放蕩児の考えそうなことですわね。望みそうなことです。そして、大部分の女性から、あまりにもちやほやされ過ぎているということなのでしょう。

こんなことを言われたものですから、もっと真面目な質問を一つ二つぶつけてみたくなりました。恥をかいたことのない放蕩児というのはどのような人間なのか、それでお分かりいただけることでしょう。

今のお言葉が聖書のある文章にも通じることをご存じかどうか尋ね、「…についてよりも大きな喜びが、天にある」という一節に言及いたしました。

あの人は、私に全部は言わせず、言葉を継ぎました。

「悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも(ア)…でしたね」とおっしゃるのです。

「そうなのです、マダム、口にすると同時に思い出したのですが、その前には思いつきませんでしたよ。勿論、放蕩息子の話は読んだことがあります。いずれ、望みどおりに身を固めました暁には、それを主題とした劇の一つも書くつもりです。時々は頭に浮かんでいることですし、私が適任であることは、おそらく貴女も躊躇なく認めてくださることでしょうね」

「そのような主題に通暁なさるには、もっとよくお知りにならなければいけない言葉ですのに、つい先日もその意味が分からず、まごついておられましたわね。ですから、びっくりしているところですわ。聖書のことを少しはご存じなのに、あのようなこともお分かりでないのですからね」(イ)

「あゝ、マダム、良く出来た昔話のつもりで聖書を読んでいたのです。ところが、誓っても良いが、ここ数年というもの、いくつかの箇所を目にしますと、ひどく心が乱れてしまうものですから、気を晴らすためにも、音楽に頼るとか、話し相手を探すとかしなければならなかったほどなのです」

「何という情けない人なのでしょう」　私は両手を振りかざし、天を仰ぎました。

「非難の言葉というものは、まったく出し抜けに、いわば勿体一つつけずに降りかかってくるものですね。ロンドンの不作法な駕籠かきが口にする「御免なすって」の一声さえありませんから、非難を浴びせられた者は、聖パウロみたいに、人馬もろともひっくり返ってしまうのです(三〇)。これも聖書の話でしたね、マダム。要するに、使徒の場合がそうでしたが、光が耐え難いほどに眩しすぎるというわけです」

「まあ、驚きましたわ。悔い改めたり罪の救いを求めたりいたしますのにも、褒めそやしてもらう必要があるとおっしゃるのですね。ところで、ラヴレースさん、何か意味でも

(ア) ルカによる福音書第十五章、七節。これは九十九匹の羊についての譬え話であり、ラヴレース氏が誤解しているような放蕩息子の話ではない。　(イ)八十三頁から次頁にかけてを参照のこと。

おありなのでしょうか。〈魂にかけて〉と、そのように頻繁に宣誓をなさるとか、〈命にかけても〉などという言葉を断言なさる時にお添えになりますのは　…　」

「あゝ、愛しい人よ」と、あの人は席を移動しながら、「別の訴因へ移ることにいたしましょう」と言っておりました。

「おやおや、私も作法に適った接し方をしていないということでしょうか」

「あゝ、マダム、今のところは控え目にお願いいたします。見習いを始めたばかりなのですよ、私は。土台を据えるには煉瓦を一つ一つ積んでいただかねばなりません。荷馬車一台分を丸ごとひっくり返されたのでは、助長してくださろうという善行への歩みを阻んでしまわれることになるでしょう」

とんでもないことだわ。何という性格をしているのでしょうね、放蕩者というのは。こんな人間とあれほどの危険を冒してしまうなんて、私も何という人間なのでしょう。こんなにも野蛮なインディアンを改心させようなどという望みがまだ続くようなら、大変な大仕事になるわ。いいえ、野蛮なインディアンよりも悪いわ。だって、承知の上で過ちを犯す人、納得ずくで道を踏み外す人というのは、知っている分、まったく何も知らない人間に比べれば千倍も悪いし、正しい道に戻るのは一万倍も難しいのだわと、こんなふうに私は考えておりました。

あの人にはショックを受けましたが、同じくらい心配にもなりました。煉瓦は（あの人の譬えに従いますと）あまり敷いておりませんでしたし、セメントの具合も十分ではありませんから、私も、軽薄な陽気者に負けないくらい、あの人の言う別の訴因とやらへ移りたくなっていたのです。それに、事態が不確かなままですから、そちらのほうが差し迫った問題であったということもございます。

賛成くださっているように思われる先程の私の説明には、当然のこととしてご同意いただけるものと考えているし、独りにしてくださるだろうとも思っている、と私は申しました。そして、現在のような立場の私に本心から、また、熟慮の上で勧めていただけるのはどのようなことなのか、尋ねてみたのです。ロンドンについて私はまったくの不案内であり、助言を与えてくれる人間も保護の手を差し延べてくれる者も今はいないのだから、どう決断したものか、すっかり途方に暮れていることはご覧のとおりですし、あの人ご自身についても、このようなことを申し上げるのはまことに失礼とは思うのだけれど、名門の出であり、財産もあれば教育もあるという人には必ず備わっているように考えていた礼儀作法に関して、知識の点はともかく、実践の点で大いに不満が残るからです、と申し上げたのです。

どうやら、あの人は自分のことを大層洗練された人間と考えているのでしょうね。違うと思われるのは耐えられないのです。唇を突き出すようにすると、あの人はこんなことを言っておりました。「残念ですね、マダム。ひとつ言わせていただきますが［と、気色ばみながら］、育ちの良い人間、上品な人間というのは、貴女にとりましては世にも稀な存在ということになりますね。私がこれまでに出会ったどのご婦人にとりましても、それほどのことはなかったのですがね」とです。

「それは不幸なことですわね、ラヴレースさん。今の私にとりましても同じことですけれど。明敏な女性でしたらどなたでも、貴方について今私に分かっておりますことをお知りになれば、私と一緒になって［屈辱感を味わって当然のものと確信しておりますが、私

はあの人の思い上がった鼻を凹ませてみたかったのです」、貴方の上品さは正規のものでもなければ、一定不変のものでもないとおっしゃるに違いありません。身についてはいないということですわ。発作みたいに突然に迸り出るのであって、自然に湧いてくるものではないのです。思い出させてもらわないと実行に移すことは出来ないのですわ」

「おゝ、主よ、おゝ、神よ、我を憐れみ給え」　軽薄な、でも、半ば怒りに震える卑劣漢は、こんなふうに自分を憐れんでおりました。

私は言葉を続けました。「間違いございませんわ。天分にも機会にも恵まれていらっしゃるのですから、だれもがそうだろうと思いがちなのですが、貴方は洗練された人間などではございません。立派な素養ということでは、確かに、どの点でも見習い中ということになりますわね」とです。

手紙　二十八

クラリッサ・ハーロー嬢より　［承前］

この話題はあの人自身から持ち出されたわけですし、大層軽い扱いをされたこともございますから、私といたしましては、もっと忌憚のないところをお話ししようとしていたのです。ところが、あの人はこんなふうに私を遮ったのです。「いやはや、お手柔らかにお願いいたします、マダム。今の今まで無為に過ごしてまいりましたことは、私も遺憾に思ってはいるのです。しかし、現在の私たちの立場には、はるかに心地の好い、そして、似つかわしいとも言える話題なのですから、ひどく残酷なことに、相手に恥をかかせるのがたまらなく楽しいということでもなければ、貴女も話をそらせたりはなさらなかったはずなのです。その相手というのは、胸にあることを半分も口に出せないほど、すっかり自分の取り柄に自信を失い、おずおずと貴女を仰ぎ見ていたという男なのですから、辱めを受ける必要はさらになかったのです。何卒、前の話題に戻っていただきたいのです。別の時でしたら、懲らしめのお言葉も喜んで受けましょう。それがお出来になる、この世でただ一人のお方なのですからね」

「改心のことを時々口になさいますし、その際、過ちも認めておられますね、ラヴレースさん。でも、非難に耐えるのは大変苦手のようですし、非難を招くようなことも、あまり熱心には避けておられないのでしょうね。あら捜しを楽しんでいるだなんて、とんでもございませんわ。立場が立場ですもの、私たちのどちらにとりましても、ただお褒めするだけで済むのでしたら、そんな嬉しいことはないと思います。でも、さほどこまやかな心を持ち合わせていない人でも差し障りを覚えてしまいますような、人の心に障る落ち度というものは、真剣になって本分を尽くそうとしているように思われたい人間にとりましては、ひどく嫌悪感を誘うものですから、黙って見過ごすわけにはまいらないのです」

「貴女の繊細さには感心しているのですよ、マダム」と、あの人がもう一度口を挟みました。「私にはそれが苦労の種になっているわけですが、それでも、違っていてほしいとは思いません。よくよく考えてみますと、本当にそうは思わないのですよ。男性すべてに優る、いや、女性すべてをも凌駕する、天使のようなこまやかさです。貴女にとっては、マダム、生来のものなのでしょう。ですから、貴女は人並み外れたものとはお考えにならな

いかもしれないが、この世に二つとはないものです」と、お口の上手な人は言っておりました。一体、どのような人たちと付き合ってきたというのでしょうね、あの人は。

「とにかく、前の話題に戻りましょう。私なら貴女にどのような行動を助言するか、ご親切にもお尋ねくださいましたね。私といたしましては、お気持ちを安らかにしていただきたいだけです。ご希望どおりに落ち着かれたところを拝見したいだけなのです。貴女の忠実なハンナとご一緒にですよ。貴女が仲直りをしたいと望んでおられる人たちとの調停が開始され、順調に進行するのを見届けたいのです。ところで、別の便法についてもいくつか触れさせていただきますが、そのうちのどれか一つでも気に入っていただければと思うからです。

ハウ夫人かハウ嬢のところへ、あるいは、どなたであれ、貴女が行ってほしいと思われる人のところへ参りましょう。そして、貴女を受け入れてくれるよう、説得に努めたいと思うのです(ア)。

お従兄弟さんのモーデン氏に会いに、フィレンツェへ行きたいというお気持ちなのでしょうか。レグホンまで船で行かれるにせよ、陸路フランスを抜けられるにせよ、フィレンツェまでの旅費でしたら御用立ていたしましょう。多分、身内の女性の中には、供をしてくれる者もいると思うのです。シャーロットかパティなら、フランスとイタリーを見物する好機とばかりに、喜ぶだろうと思います。私はエスコート役ということで結構です。お望みなら変装もいたしましょう。私が付き添いますことでご体面を傷つけてもいけませんから、貴女の召使のお仕着せでも構いませんよ」と、あの人は言っておりました。

私は次のようにお話しいたしました。おっしゃっておられた点については、すべて検討してみたい。ただ、姉と叔母ハーヴィーの両方に手紙を出してあるのだが、姉は無理としても、叔母からは一言か二言くらい便りがあって良さそうに思うし、もしも返事をもらえるようであれば、身の振り方を決める上で助けになるはずだ。その間、席を外してもらえるなら、従兄弟のモーデンに関わるこの申し出の件を特に検討してみたい。そして、それが私には重要な意味合いを持ち、その結果、貴女のご意見を求める手紙を書くに至った場合には、一時間ほどして、あの人にも私の気持ちを知らせるつもりだ、とです。

あの人はとても慇懃な態度で引き下がって行き、一時間後に戻ってまいりました。そこで私は、お考えを伺うために、貴女にご迷惑をお掛けする必要はない旨をお話しいたしました。従兄弟のモーデンは間もなく帰国する予定なのです。たとえその予定はないといたしましても、いかなる条件であれ、従兄弟のところへあの人の同行を認めるわけにはまいりません。お従姉妹さんのどちらの方にせよ、ご同伴を願えるとはとても考えられず、仮にそのようなことが実現されるとしても、世間の目からいたしますと、あの人が同行なさるのと同じことになるだろう、と申し上げたのです。

このため、もう一度話し合いを持つことになってしまいましたが、その話し合いにつきましては、次の手紙の話題にさせていただきます。

(ア) ハウ夫人からの保護の手は一切奪い去るよう、氏が当初より手配していた点（第一巻の百五十一頁から次頁にかけてを参照のこと）については、おそらく読者諸兄の注意を促す必要もなかろう。氏の次の手紙の百二十四頁から次頁にかけてでは、その策略について再び説明が加えられ、また、クラリッサとハウ嬢という用心深い二人の令嬢を欺いた自らの工夫の才に歓喜する姿をご覧いただけるのである。

手紙　二十九
クラリッサ・ハーロー嬢より　［承前］

ラヴレースさんがおっしゃいますには、従兄弟のモーデンについての提案は受け入れられないかもしれないとのお考えから、私の気に入りそうな別の方策を何とか見つけ出そうとして、頭を絞っておられたのだそうです。ご自分よりも、私が満足することを優先しているためであり、その点を納得してもらいたいからだ、とのことでした。

そして、ハンナが私の世話をしに来られるよう、ご自分で出向いて話をつけても構わない、と申し出てくださいました。ソーリングズの娘さんたちのどちらにつきましても、お世話をお断りしていたこともあり、あの人といたしましては、正直さに信を置けそうな召使を是非とも傍においてもらいたいからだ、というのです。

ハンナを雇うことが可能な場合には、ご親切にも、貴女のほうで問い合わせの労を取ってくださるはずですと、私はお話しいたしました。

何かの事情でハンナが来られない場合には、私の望みどおりの人物が得られるまでの間召使を貸してくださるよう、ご自分がハウ嬢のところへ直接お願いに伺うのはどうだろうかと、あの人は言っておりました。

私は次のように申しました。貴女のお母様が私の取りました行動を（自発的なものだろうとお考えになり）大層不快に感じておられますから、貴女からその種のご援助を大っぴらにいただくわけには行かなくなっているのだ、とです。

ハウ夫人自身がこれまで私のことをあんなにも褒め称えていたのであるし、ハウ嬢は母上に対して大変な影響力を持っていると思われており、また、それで当然とも言えるわけだから、夫人がそうまで私に立腹するのは腑に落ちない話だと、あの人は驚いておりました。父やおじたちの激怒を誘い、煽り立てようと懸命になっている人物が、この一件でも陰で糸を引いているのでなければ良いのだが、とも言っておりました。

兄が陰にいるように思う、と私は申しました。でなければ、叔父のアントニーにいたしましても、私は叔父がそうしたように理解しているわけですが、ハウ夫人を私に敵対させるよう、あんなにも骨を折ったりはしなかったはずでしょう、とです。

私がセアラ夫人とベティ夫人をお訪ねするのはお断りしたということで、モンタギュー嬢のご訪問を認め、しばらくの間、お嬢様の召使を受け入れてはもらえまいかと、あの人が訊いておりました。

そのお申し出なら受け入れられないものではない、と私は申しました。ただ、ご親戚のどなたの目にも私がひどく軽率な家出娘と映らないためにも、何よりもまず、私の身内が衣類を届けてくれるかどうかを確かめてみたい、とです。

するとあの人は、もしも私が望むのなら、もう一度ウィンザーへ出向き、大聖堂参事会員とか名士の家とかを、もっと丹念に当たってみても良い、とおっしゃるのです。

私は、だれにも知られた土地であることを難点とするお気持ちは、今も以前と変わらず強くはないのか、とお尋ねしました。

覚えているのですが、人目を避けるのにはロンドンが一番だと(ア)、以前のお便りのどれ

(ア) 第二巻の百八十二頁を参照のこと。

かでおっしゃっておられましたわね。それで、次のように言ってみたのです。私を独りここに残すことに反対する口実を並べ立てておられるため、そうしてくださるお気持ちのないことがはっきりしているし、私がどこか別の場所にいるのなら、私の傍を離れ、思いどおりに行動するのを許すと約束してくださってもいる。また、この下宿での暮しも、あの人がいると不都合なことがある。それゆえ、だれか知人でもいれば、ロンドンへ向かうのも満更でもない気がする、とです。

あの人は何度もロンドンを勧めていましたから、私の提案に喜んで乗ってくるだろうと予想してのことでした。ところが、すぐに飛びついては来ませんでした。ただ、目には満足の色が浮かんでいるように思われました。

私たちは、二人とも、相手の目を窺ってばかりいるのです。そして、互いに疑心暗鬼になっているのです。

その後であの人は、ノートン夫人に来てもらうよう手紙を書いてはどうかと、嬉しい提案をしてくださいました(ア)。

嬉しいことに、私たち両方の望みに適う方策がようやく見つかったのだが、それは私の目を見れば分かる、とあの人が言っておりました。「どうしてこれまで気づかなかったのでしょうね」と言うなり、あの人は私の手を掴み、「私が手紙を書きましょうか、マダム。私のほうで送りましょうか。私が出向いて、この手であの立派な婦人をお連れいたしましょうか」とおっしゃるのです。

少し考えました上で、私は次のようにお話しいたしました。これは誠に有難いお申し出ではあるけれど、それでは夫人を抜き差しならない難しい状況に追い込んでしまうのではないかと心配になる。というのは、思慮深さで知られた女性ですのに、家出娘を庇おうとして、娘の両親に盾突いているように人目に映るでしょうし、私のところへ来ていただきますと、母の愛顧を失うことになってしまうでしょうが、私はその埋め合わせが出来る状態ではないのだから、と申し上げたのです。

「あゝ、愛しい人よ」と、あの人は思いやり溢れる口調で、「そんなことは何の差し障りにもなりませんよ。どんなことであれ、ノートン夫人には私のほうでお望みどおりのことをして差し上げましょう。夫人のところへ行かせてください」とおっしゃるのです。

あの人のお心遣いにお応えいたしますのには、おそらく、冷たい言い方だったと思いますが、私は次のように申しました。身内の者たちから間もなく便りがあるのは間違いないし、それまでは、だれであれ、他の人を引きずり込むべきではない。とりわけノートン夫人の場合は、中立の立場を守っていてくださるなら、母への働き掛けや仲立ちにより、何か良い結果も期待出来そうな人だけに、巻き込みたくはない。それに、あの賢婦人は金銭に拘らない心の持ち主であり、不当な援助を受けるくらいなら清貧のほうを選ぶ人なのだから、とです。

「不当な、ですって　…　」と、あの人が叫びました。「真の価値を備えた人間というものは、周囲から寄せられる恩恵のすべてを受ける資格があるのではないでしょうか。ノートン夫人は大変立派な方ですから、私としては、お役に立たせていただけるのを有難いこ

(ア) 令嬢が大層好意的に受け止めそうな提案をいくつか口にするラヴレース氏の動機については、氏の次の手紙をご参照いただきたい。

と考えているのです。貴女の喜びやご満足に寄与する機会を同時に与えてくださることで、さらなる恩義を施してくださることはないとしてもです」とおっしゃるのです。

これだけまっとうな考え方の出来る人ですのに、悪習に身をやつし、芳しくない振舞いで恵まれた才能を無駄にしてしまわれるなんて、どういうわけなのでしょうね。

この時考えましたのは、次のようなことでした。私たち二人のためにも、何とか手本をお示しするよう努力いたしますのが私の義務なのでしょうが、その手本があの人の生活態度に変化をもたらし、両方にとっての利益になるということも（つい先頃も希望を持たせてくださったのですから）、満更望みがないわけでもないのでは、ということです。

「一言申し上げたいのですが、貴方の心の中には、奇妙に入り交じったところがございますわね。いろいろと立派なお気持ちやお考えが浮かびますたびに、それを押し潰そうと骨を折ってこられたのでしょう。でなければ、気紛れな心が驚くほど強かったということなのでしょう。いずれにいたしましても、先程話し合っていた件ですが、身内から便りが届きますまでは、何かを決めるわけにはまいらないのです」と、私は申しました。

「結構でしょう、マダム、私に言えますのは、何とかして、お気に召すような方策を見つけたいものだということだけですよ。ただ、それが見つかりませんので、いかがでしょう、貴女としてはどうしてもらいたいのか、それをお教えいただけないでしょうか。私が応じないことなど、この世には存在しないのです。ただ、ここにお独りで残っていただくのだけは別です。何か起こりましても、私が向かいます場所からはひどく離れておりますし、ここでは、最初に然るべき注意を怠ったこともありまして、口の軽いろくでなし連中のせいで、私のことは知れ渡っていると言っても良い状態なのです」と、あの人は言っておりました。

そして、「あゝいうクズみたいな連中というのは、家柄の良い人間に仕えますと、なかなかプライドを抑えられないものなのです。まるで血のつながりがあるみたいに、主人の家系だの血統だのを吹聴してまわるのですよ。そして、主人のことであれその行状についてであれ、知ったが最後、連中の間で秘密にされることなど一つとしてないのです。たとえ主人の首に関わるような事柄であってもですよ」と付け加えておりまして。

そういうことでしたら、家柄を誇る人たちは、召使が吹聴するに値するような話題を提供するように気を配るべきでしょうね、と私は思いました。

「どうしたら良いのか、どこへ行くべきなのか、本当に迷っているのです。どうなのです、ラヴレースさん。ロンドン行きを考えたほうが良いと、本気でお勧めになるのでしょうか」　私は尋ねてみました。

そして、あの人をしっかりと見据えたのですが、表情からは何を読み取ることも出来ませんでした。

「初めの頃は、マダム、ロンドンをお勧めしようと思いました。追跡を心配する気持ちがまだ強かったですからね。ただ、そのことではお身内の方々も少し冷静になられたようですから、貴女の向かわれる場所につきましては、特にどこという考えはなくなっております。お気に召すところであれば、安心していただけるようなら、私としてはそれで結構なのです」と、あの人は言っておりました。

あの人がこのようにロンドンのことには恬淡としているものですから、それだけにかえってロンドンへ行きたくなった、というのが本心です。ロンドンでは特に勧めてくださる

場所はあるのかどうか（どうおっしゃるのかを聞こうとして）、私は尋ねてみました。

それはない、とのことでした。私に相応しい場所とか、私の気に入るようなところは知らないというのです。実を言うと、と断った上で、このようなことも言っておりました。お友達のベルフォードさんがソーホースクェアの近くに立派な部屋を借りており、ご親戚のお宅なのですが、そこの奥様は貞淑で操の堅い女性だというのです。ベルフォードさんは大抵国許におられるので、その部屋なら、私がもっと良いところに落ち着くまでの間、貸してもらうことは出来るだろうとも言っておりました。

そのようなところは、話に出た途端にお断りする覚悟でしたし、あの人が挙げる他のどのような場所につきましても、その気でおりました。それでも、本気でそこを私にあてがうおつもりでいるのか、確かめてみようと思いました。仮に私がここで話し合いを中断するといたしまして、朝になって再びあの人が熱心にこの提案を持ち出すようでしたら、私のロンドン行きの件につきましても、見た目よりも無関心なのではなく、私向けの下宿の目当てはもうついているものと考えて良いでしょう。その場合には決して動くまい、という気持ちでした。

でも、あれだけ親切なことを言い出してくれた後ですし、陰険この上ない恩知らずな振舞いの出来る人を相手にしているみたいに、そんな態度であの人に接するのは少し残酷かなと思ったのも事実です。ただ、人柄にいたしましても考え方にいたしましても、ひどく欠点の多い人なのです。本当に軽薄で自惚れが強く、変わり身も早いものですから、今こういう人だろうと思いましても、次にはどうなるのか、一向に定かではございません。それに、この身を守ってくださる人など、現在は一人としておりませんでしょう。父も母もいないのです。頼りに出来ますのは、神様と警戒を怠らない心だけなのです。また、好都合な奇跡などは望むべくもございません。

「結構ですわ」　私は［引き下がろうとして立ち上がりながら］申しました。「何かを決めなくてはいけませんわね。でも、このお話は明日の朝まで中断することにいたしましょう」とです。

あの人はしきりに引き止めたがっておりましたが、私は次のように申しました。どんなに早くても結構ですが、明日の朝お目にかかりますので、それまでの間に、ロンドンかその近くに、どこか都合の好い場所を考えておいてください、とです。

こうしてあの人のところから戻ってまいりましたが、この辺でペンも置かせていただきます。今夜も残すところ二、三時間ですが、熟睡することが出来ればと思います。長いこと満足に寝ていないものですからね。

Cl. ハーロー

手紙　三十

クラリッサ・ハーロー嬢より　［承前］

四月十七日　月曜日　朝

遅くにベッドに入りましたのに、ほとんど休むことは出来ませんでした。眠りと仲違いをしてしまったのです。私のほうではご機嫌伺いをしているのですが、仲良くしてくれま

せん。折り合いのつかない点では同類というわけですが、ハーロー邸の者たちは心地好い慰みごとを享受してくれますよう願っております。でなければ、私の過ちはいよいよ罪深いものになってしまいます。兄と姉には眠られないなんてことはないのでしょうね。

六時頃庭に出ますと、私同様に早起きのラヴレースさんがやってまいりました。いつもどおりの挨拶の後、昨夜の話題を続けてほしいとのことでしたが、「ロンドンでの下宿の件ですよ」と言っておりました。

「一ヶ所お挙げになったと思いますが、違いましたかしら」　私が申しました。

「そのとおりですよ、マダム。ただ［と、私の表情の変化を窺いながら］、ご賛同いただけそうな場所というよりは、貴女が歓迎される場所というつもりだったのです」

「そうでしょうね。正直申しまして、確かな当てもなしに都会にまいりますのは、心地の好いものではございませんからね。でも、貴方とは関わりがないように思われたい立場ですのに、どなたであれ、貴方のお知り合いのお世話になるなんて　…　それも、身内の者たちが私のことを心に留めてくれます場合には、私宛の品を送る際の届け先になる人なのですから、なおさらですが　…　口に出すのもおかしな話ですわね」

あのようなことを口にしたのは、私のほうで受け入れるものと考えたからではなく、すでに話してあった点、つまり、私に相応しい場所はご自分も何一つ知らないことを納得してもらえたら、との思いからだったのだ、とあの人は言っておりました。

「ご一族が取引をしておられる小売商人で、この種の便宜を図ってくれそうな者はいないですかね、マダム。貴女が寄宿なさっていることを伏せておいてくれる者には、それなりのことはさせていただきましょう。小売商人というのは細々と商いをやっておりますので、一ポンドのプレゼントよりも一ペニーの買い物をしてくれる客のほうを有難がるものなのです。それが連中の流儀なのですからね。とはいえ、どちらも拒んだりはしないのですが、ちょうど、弁護士だの官吏だのが謝礼を拒まないのと同じことですよ」と、あの人は言っておりました。

「私を捜し出すのに真っ先に駆り出されますのは、疑いもなく、父の取引相手の商人たちでしょう。ですから、そのご提案も、もう一つのほうと同じくらいに、当を得たものではございません。それに、つい先頃まで、身内の者皆からあれほど愛顧をいただいていた人間なのです。このような立場でお願いの出来る人と申しますと、身内の者たちに対しましても（少なくとも）同じくらい、味方をするに決まっているのではないでしょうか」　私はこのように申し上げたのです。

この件につきましては、ずいぶんと話し合いました。でも、最終的には次のようになりました。あの人がドールマンという人に一筆認めたのです。結婚していらっしゃる、資産に恵まれた人格者とのことで（私がベルフォードさんに異議を唱えたからですが）、未婚女性向きで、家具付きの見苦しくないお部屋を［こちらの希望はお話ししておきました］用意していただくようお願いしたのです。寝室と侍女用にもう一部屋あって、食堂か客間を使わせてもらえるようなところです。あの人は、よく読むようにと私に渡してくださった上で手紙の封をし、目の前でご自分の召使の一人に手渡して送り出しました。その召使はロンドンに用がありますので、返事を持ち帰ってくれることになっております。

結果を待っているのですが、貴女からご異議がない場合にはすぐにもロンドンへ向けて出発出来ますよう、準備を整えているところです。

手紙　三十一
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

土曜日、日曜日、月曜日

《氏は、数通の手紙の中で、令嬢の先の七通の内容を書き記している。

氏が友人に語るところによれば、M邸への途中ローン荘に立ち寄ってみると（ウィンザーへは行かなかったことを白状しているのであるが）、ベティ・ローランス夫人と従姉妹のモンタギュー嬢から書状が届いており、グリーム夫人が特別の使者を立て、氏の元へ送り届けようとしているところであったという。

氏は、十五頁から十六頁にかけて見られる令嬢とグリーム夫人との会話に関し、夫人から受けた報告の詳細を示している。また、グリーム夫人に対し、令嬢への敬愛の念を強く表明し、その結果、夫人も妹のソーリングズ夫人へ手紙を認めることになるのであるが、その内容は九十六頁に示されているとおりである。

次いで、戻ってみると、令嬢が深刻な様子をしていた点に関し、氏は以下のとおり説明を加えているのである》

別れた時にはあんなにも良い関係であっただけに、戻ってみると、眉をしかめ、魅力的な目を赤く泣き腫らしているのには驚いてしまったよ。だが、ハウ嬢から手紙が届いたことが分かり、機嫌を損ねているのはあの小悪魔のせいだと、当然ながら察しがついた。

容易に看て取れることだが、あの牝狐から手紙を受け取って読み終わると、我が魅惑の君は他の時よりも不機嫌になるのだよ。だが、そんな場合でも、麗しの乙女が見せるのは勝ち気な気性というよりも、じっと悲しみに耐える姿なものだから、謀りごとをしているのではなく、むしろ、嘆いているのだと俺は思いたいのだ。実際の話、今さら何を謀るというのだ。俺は生まれ変わり、時間を追うごとに品行も改まっているのだからな。とはいえ、二人の手紙を手に入れる方策を何か捻り出さねばなるまいな。どんな趣のものなのかを調べてみたいだけだ。ただ、それだけのことだよ。

だが、この種のことを試みるのはまだまずい。いかにも神聖な事柄だけに、侵害したのを見破られれば、二度と立ち直ることの出来ない身の破滅だ。ただ、それにしても、彼女と俺の間の事柄すべてについて、彼女が胸の思いのありったけをのべつ書き綴っていると考えただけでも、心の底まで苦々しくなってしまう。同じ屋根の下にいながら、恐ろしく遠ざけられているため、俺の計略をすべて水泡に帰しかねない文通だというのに、妨害の手だてを講じる気にもならない有り様だけにな。

我が愛しの君の手紙を携えて行く途中で、あるいは、ハウ嬢の手紙を持ち帰って来た時に、使いの者の頭に一発お見舞いするというのは、どうだろう、ジャック、ひどく悪いことだろうかな。買収を試みて不成功に終われば、すべては台無しになる。それに、奴さんは貧しさに馴れきった様子をしているのだ。貧乏暮しに満足し、楽しむことの出来る男なのだよ。その日暮しに安んじ、明日こそは今日よりも、また、昨日よりも、良い暮しをしようなどと考えたりはしない輩だ。こういう手合いというのは、真実味があって信頼出来そうに見せないかぎり、誘惑にはひっかからないものだ。夢も野望もない人間に賄賂が効くとは考えられないだろう。

だが、奴さんが送っているのは、たかだか半人前の人生にすぎず、その中で呻吟しているのだよ。奴の場合、俺が一人前の人生を保障してやらなければいけないのかな。忌々しい野郎だが、生かしておいてやろう。俺が一国の王だとか国務大臣だとか、あるいは、アントニオ・ペレス(ア)のような人物だとかいうのなら、話は別だろう。しかし、よくよく考えてみれば、俺は世に言う放蕩児ではないのかな。何かに執着する放蕩児など、だれかお目に掛かった者でもいるというのか。だが、ジャック、貴公も知っているだろうが、俺の悪徳の大半は夢想のなせる業なのだよ。工夫の才をひけらかし、その気になれば悪さも出来ることを実証して見せたいのだよ。

《令嬢が手を振り、お辞儀をしながら、皮肉っぽい口調で「申し訳ございません、ご立派なラヴレースさん。私といたしましては、父のことを一番大切に思いたいのです」と語った例の部分（百一頁）にいたると、氏は令嬢にとって極めて有利に働く、その仕草や物腰を描いて見せ、次のように語っているのである》

それを聞くと、激情の嵐に襲われることは分かっていても、彼女をこの両腕に抱き締めずにはいられなかったよ。才気に溢れ、匂わんばかりの美しさなのだ。物腰は生き生きとし、明敏さと眼力の鋭さでも並外れている。あゝ、ベルフォード、俺以外のどこのだれにも彼女を渡すわけには行かん。シーザーとの会見から生きて戻れない時には、妻のマリアムネーを殺すよう命じた、あのヘロデ王の気持ちも今なら説明がつく(三一)。もっともなことと思うぞ。俺の死後であっても、この魅惑の女がだれか他の男の手に渡るなど、たとえ可能性だけでもあると知ったら、そう考えただけでも、そやつの首を掻き切る気になるのには十分だ。相手が君主だとしてもな。

この令嬢には、気違いじみた、粗暴な恋人と思われているのかもしれんな。それだけになおさら好いてくれないのだろう。だが、これまでに出会った女はどれもこれも、好んで激情を掻き立て、それを楽しんでいたものだ。連中がそうしてくれると、間違いなく俺のほうでも楽しめたのだよ。とにかく、いずれはうまくロンドン行きを果たしたいものだ。

《令嬢の手を掴み、彼女が「興奮した」と表現している（百五頁）ような態度によって彼女を大いに怯えさせた際の、あの狂喜の姿に関し、ラヴレース氏は次のような説明を加えているのである》

闇で覆うのも光を注ぐのも、彼女の思いのままだし、何を話題にされようと、すべて尤も至極に思われると俺は断言した。俺は過ちの固まりで、彼女は非の打ちどころなく完璧だ、ともな。そして、彼女の手を取った。唇を押し当てただけではない。今にも貪らんばかりの熱烈さだ。俺の仕草にはどこか狂気を思わせるものがあったはずだ。すっかり彼女を怯えさせてしまったのだが、その怯えようは、神々の用いる集光レンズ一万枚に囲まれた雷神ゼウスが、威風堂々たる姿を現して焼き尽くそうとした、あのセメレーにも、おそ

(ア) アントニオ・ペレスはスペイン王フェリペ二世の筆頭宰相で、王命によりエスコベドのドン・ファンを暗殺させたが、主君に裏切られ、自らの破滅を招いた。（『ゲディス論集』(三二)）

らく似ていたことだろう(三三)。

∴　　∴

心に不安があったのだ。また、彼女はまだこちらの思いのままなのではなく、あの家では俺よりも味方が多いゆえ、好きな時に俺を見捨てることも出来るのだと、危ないところで思い出したのだよ。そうでもなければ、あの瞬間、何らかの形ですべての決着をもたらしていたはずの行動に出ていたことだろう。だが、激情に駆られて腹の内をさらけ出してしまったのではないかと思い、その矛先を変えることにした。だが、我が魅惑の君もほとんど気づかなかったのだよ。彼女にしても俺にしても(事の次第によってはだが)、あの腕の中へとこの身を吹き飛ばそうとしていた一瞬の激情の嵐から、危うく逃れおおせたのだということをな。彼女が生を享けたのは、俺を幸せにし、魂を一つ救うためなのだと話しておいた。

《氏は自らの熱弁の残りの部分につき、令嬢の用いているものとほぼ同じ言葉で語った後、次のように筆を進めている》

彼女が怯えているのは看て取れた。また、これがロンドンでのことなら、彼女を連れて行こうと俺が目論んでいる、ロンドンの例の場所でのことなら、それも至極当然のことだっただろう。驚かせ過ぎたのではないかという不安が現実のものであることを、彼女は思い知らせてくれたのだ。彼女の差止め命令を尊重すると俺は得意げに語っているが、その真意のほどが分かったというのだよ。そして、俺もすぐに気づくことになるだろうが、それなりの対応をするつもりだというのだ。俺の言動の乱暴さにはショックを受けた、もしも好意を持ってほしいというのなら、今すぐに引き下がってもらいたい、独りで考えさせてほしい、と言っていた。

その言い方からして、彼女は固く心に決めている様子だったし、俺としても、最近乗り出したばかりの穏やかな役どころ、上品な役どころを踏み外してしまったわけだから、すぐにも意向に従うのが最善の策だと考えたのだよ。それに、実のところ、彼女の憤慨ぶりや拒絶の姿勢からして、俺自身も少し考えてみる時間が必要だと感じていたのだ。そんなわけで、俺はその場を辞した次第だが、その態度は、請願をしに来ていた臣下が主君の前から引き下がる時と同じ、恭しいものだった。それにしても、あゝ、ベルフォードよ、彼女が俺に対して忍耐心のほんのかけらでも持ち合わせていてくれたなら　…　この燃え立ち始めた情熱の火を許してくれそうだと思わせてくれさえしたら　…　彼女にしても、いつもいつも防御を固めているわけでもあるまいが　…

一人きりになるやいなや、ひどく心配になったよ。新たに演じ始めた役柄を半ば駄目にしてしまったのではないだろうかとな。貴公にも分かるだろうが、正直者が別人を装うのはきわめて難しいものなのだ。詩人も語っているように(三四)、「ピッチフォークで押し退けても、きっと戻ってくるのが天性」ということだ。思い出したのだが、彼女が固執していたのは、実際には、父親の屋敷を捨てる前に言明していた意向の一部であり、俺も別の折には(彼女を畏まらせるためのことだが)、不可侵なものとして遵守する振りをしてみせた

ものなのだ。そして、「それなりの対応をしたい」という言葉を思い起こした時には、俺としても、彼女が何か新たな決意を固める前に、すべてを取り戻すためなら、足や腕の一本くらいは犠牲にしても構わない気になったのだよ。

だから、叔母と従姉妹の手紙は、この点では、まことにもって折好く届いてくれたということなのだ。

∴　　∴

是非とも目通りを許してもらいたいと、繰り返し繰り返し使いの者をやったよ。ところが、ちょうど筆を執っている最中の、ハウ嬢宛の手紙を書き終えるまでは会えないというのだ。おそらく、つい先程のことを報告しようというのだろう。

∴　　∴

忌々しい話だが、質の悪い横暴さだ。話を聞いてもらおうと畏まっているのに、いつまで待たせるのだ。しばらく前に手紙は書き終えているのだよ。ロンドンへ連れて行くことさえ出来れば、たとえ君主が跪いて彼女のために命乞いをしても、容赦する気など起こすものか。ウーン、ジャック、苛立たしさのあまり、唇を噛み切ってしまったようだぞ、俺は。だが、お返しに彼女の唇も疼かせてやるさ、そのうちにな。

《氏は、日付を改め、面会を許されたこと、ならびに、その後の会話について語っているのだが、次に掲げる手紙の中で令嬢が述べている事柄と言葉遣い以外の相違はないため、割愛することにした。

高慢な氏にとっては耐え難い令嬢の言葉、例えば「名門の出で教育を受けた人間には必ず備わっているものと考える礼儀作法を弁えていない」とか、「自分で考えているほどの洗練された人間とは違う」等々を並べ立て、恨みを晴らすためにも、忘れずにおこうといきまいているのである。

自らの提案と巧みな弁舌とを誇らしげに友人に披露しているが、令嬢が先の四通の手紙で語るところとほぼ同趣旨のものとなっている。

ハンナが到着するまでの間、ハウ嬢から召使を借用してはとの提案に触れた後、氏は以下の如く記しているのである》

分かるだろう、ベルフォード。我が魅惑の君はまったく気づいていないのだ。ハウ嬢ですら、一人か二人を間に置いての話だが、俺の操る糸で踊らされている人形にすぎないということにな。すべてを知っているつもりの、これだけの娘二人を出し抜くのも、駆り立てるのも、こちらの思いのままなのだ。また、両家の親どものプライドの高さや根性の悪さを利用して、連中が俺に対する意趣晴らしをしているつもりのその最中に、同じように奴らの裏をかいてやろうというのだ。実に楽しい復讐さ。それに、愛しい女だよ。ハウ夫人が怒るのは、兄貴が陰にいるためではないかと尋ねたところ、彼女も残念ながら同意見だというのだよ。さもなければ、あの夫人に対して、彼女の立場を損ねるような行動を叔

父は取らなかったはずだ、というのだからな。可愛いものだよ。何とも無邪気な話だ。

だが、彼女の身内が敵意を抱き、怒りを燃やす原因も俺にあるなどとは考えないでもらおう。原因はすべて連中の胸の内にある。連中を材料に使っているにすぎないのだよ、俺は。奴らの邪心の赴くままに任せれば、おそらく、異端者の処刑まがいの復讐に出ることだろう。つまりだな、匕首を忍ばせるか、首席裁判官たちの令状を振りかざすか、あるいは、法に訴える等々の手口に走ることだろう。俺のほうは、稲妻の狙いを定め、雷鳴を立てずに落ちて行く先を指示するだけだ。言い換えるなら、結果の方向づけをするだけのことさ。原因は連中の悪意に満ちた胸の内にあるのだよ。そして、俺のほうは、ちっぽけな悪さはしながら、大いなる害を防いでいるというわけだ。

《令嬢がロンドンの名を挙げると、氏は以下のように歓喜してみせるのである》

ロンドンのことは、彼女のほうから持ち出してもらいたいと思っていた。もう一度ウィンザーを口にしたのもこのためだよ。女に何かをさせたい時には、別なことを持ち掛けなくちゃならんのだ。それが女だ。断言しても良い。それこそ女というものだ。裏表のある言動を男に強いるのは女のほうなのだよ、ジャック。それで、出し抜かれたことに気がつくと、今度は、お得意の手を使っても敵わなかった真正直な男に非難を浴びせ掛けるという寸法さ。

嬉しさを抑えるのがやっとだったな。心臓が喉元まで膨れ上がってきていた。鎮まるのだ、歓喜に踊る心よ、鎮まるのだ、と自分に言い聞かせたよ。急に咳が出たので、何とかごまかせた。彼女のほうに向き直った時には、あくまでも無関心な素振りを装った。待ち望んでいたことを初めて求められた娘のようにだ。娘のほうは、さらに二度求めを待つことになるのだがね。彼女の話を最後まで承った。そして、話が済むと、ロンドンのことには一切触れず、ノートン夫人に迎えを出すよう助言したのだ。

恩を着せられるのを嫌がることは分かっていたので、あの賢婦人と息子のために大いに力になろうと申し出ても構わなかったのだ。俺には何もさせまいという気持ちになるほどのことをな。ただし、これは出費を避けるためだけではない。ノートン夫人の付き添いを認めるなんて、到底考えられないことだ。彼女の母とか叔母のハーヴィーに一緒にいてもらうのと同じだろう。ハンナなら、来られる状態だったとして、また、実際に来た場合でも、十分に上手く扱えただろうがね。国許にやくざな連中を遊ばせているのは何のためだと思う。俺が希望する女を口説いてもらうためだよ。さらには、その女と一緒になってもらうためでもあるのだ。だが、よく考えてみれば、ノートン夫人がいようと叔母がいようと、たとえ母親がいたとしても、愛しの君を救うことにはなるまい。堕落させようと、俺が判決を下した場合にはな。

放蕩者の手中に自ら身を投じたが最後、淑やかな女にはまず勝ち目は無いということだよ。そういう女の場合、いつだって礼儀作法に拘るのを道理と心得ている。保証付きの慎み深さを捨て去ることは出来ないのだ。男との駆け落ちを考えたりするのは、恥知らずなズベ公どもだけさ。貴公らが思い浮かべるより前に牧師と教会の名を挙げ、次いで、服を脱ぎ捨てると、貴公らよりも先にベッドに飛び込んでみせるような女たちだけなのだ。

今のところ順調だ。この誇り高き美女の胸中の想いへの影響力が、時々刻々と増して行くのは疑いない。俺に恐れを抱かせるのに十分なほど、また、俺が女々しい男などではないことを示すに足るだけ、不作法な振舞いをしてみせたところだ。これで、慇懃な態度を取るごとに信用は倍加するはずなのだ。次なる狙いとしては、揺らめく胸の炎を認めさせることだ。少なくとも、他のすべての男よりも俺に好意を感じると言わせることさ。そうなれば、至福の時も遠くはないのだ。相思相愛を認めれば、些細な無礼はすべて許してしまうのだよ。そして、些細な無礼は大きな無礼を生むことになる。また、俺のことを公明正大ではないと言うのなら、彼女のことを残酷だと言ってやるのさ。女は残酷だと言われるのが好きなのだよ。俺も幾度となく残酷さを訴えたものだ。身を任せようとしている最中にもな。それで女のプライドが満たされることを心得ていたからだよ。

《ベルフォード氏の下宿の件は、ただ、令嬢に相応しい場所はロンドンについては一つとして知らないという、自らの発言を裏書きする例として触れただけであることを述べた上で、氏は次のように語っている》

何か目的とは一番かけ離れたものに彼女の警戒心を向けたかったのだ。(彼女は俺の提案をひどく嫌っているわけでもあり)そこには何の魂胆もなかったからだよ。オズグッド夫人はあまりにも信心深い女だし、俺よりも彼女の肩を持ったことだろう。

おまけに、自らの賢明さを誇りにしてもらおうとの思惑もあった。落とし穴を仕掛ける場合、獲物には確かな足取りで、目を見開いたまま墜落してもらうのが良いのだよ。そうなれば、男のほうでは、そいつを見下ろしながら、「おほー、可愛い子ちゃん、何でまたそんなところに　…　」と、声を掛けてやれるだろう。

四月十七日、月曜日

俺の手先、あの正直者のジョゼフ・リーマンから、ちょうど今新たな情報を受け取ったところだ。可哀相なことをしたが、あのノッティンガムのベタートン嬢との一件は貴公も知っているだろう。あの一族が俺に対して抱いた恨みを蒸し返そうと、ジェームズ・ハーローが企んでいるのだ。ハーロー家の連中は、事の真相に迫ろうと、ここしばらく躍起になっていたのだが、身の程を弁えない馬鹿どもは今、もしも可能ならの話だが、そいつを何かの種にしようと決めたわけだ。この能無し郷紳を陰謀家で気のきいた男に仕上げようと、俺のほうでは頭を絞っているところだ。奴の陰謀を利用するためだよ。あの妹がロンドンで俺を寄せつけなかったり、遠ざけたりする場合を考えているのだ。ジョゼフの手紙と俺の返事は、いずれ適当な折に見てもらうことにする(ア)。企みが練られているのを早目に知ろうとするのは、俺の場合、目論見を挫き、目論んだ奴にそっくり浴びせ返してやるためなのだ。

またジョゼフがひどく神経質になっているが、良心の呵責を持ち出すのは、手柄を大き

(ア)　本巻の手紙四十三、四十四を参照のこと。

くしようとの魂胆にすぎないのさ。あゝ、ベルフォード、人間の本性というものは、貧乏人の場合であれ金持ちの場合であれ、賄賂に目のないならず者だということだよ。

手紙　三十二

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ
［手紙二十四から三十まですべてへの返事として］

四月十八日、火曜日

本当に情け容赦もないご家族をお持ちですわね、貴女は。もう一度アントニー叔父様がいらしたお陰で、母はすっかり私たちの文通を敵視するようになってしまいましたし、それればかりか、皆さんの後について行きかねない有り様なのです。

でも、話題を変えましょう。

ヒックマンさんのこととなると、惜しみなく弁護なさるのですね。歌を唄う時にしばしばやっているのですが、おそらくあの人についても、同じことをしてしまったのかもしれません。出だしの調子と申しましょうか、キーが高すぎたのです。それなのに、やり直したりせずにそのまま続けているものですから、声を絞ったり、調子を外したりしてしまうのです。ただ、これだけははっきりしております。そのために一層、あの人は聞き耳を立てているということです。それに、貴女も教えてくださいましたわね。冷遇されて畏まってしまうような人は、優しくするとつけ上がるということでしょう。ですから、ご立派で真面目なヒックマンさん、今少しの間、私には構わないでいただきますわ。お願いね。私のために祭壇をお建てになったのですから、その前に額づきますのをお断りにはならないものと思いますわ。

でも、ラヴレースさんがヒックマンさんの立場にあったら、ヒックマンさんに対するのと同じようにラヴレースさんに接するのか、とお尋ねでしたね。まさかそんなことはないだろうと思いますわ。求婚中の男女両方の振舞いについて（一般論ですが）、とても真面目に考えましたので、その結果を思いきり率直にお話ししたいと思います。結論はこうなりました。男性の側には行き過ぎたくらいの丁重さが必要だ、ということです。あれほど大変な軛のところに首を差し出させようというのですもの、私たちが最初の求愛に耳を貸したくなるようにしてもらうためですわ。でも、本当に正直なところを申しますと、少しは傲慢さが入り込むことも、男の人には必要ではないかと思うのです。いったん手にした力を維持するためですわ。私たちが馬鹿にして構わないような素振りを、男の人たちは見せるべきでありません。それに、平穏無事な恋、つまり、障害を伴わない愛情、言い換えますと、熱情を伴わない愛ですが、そんなものは、浮かんだ藁一本も動かないように見える澱んだ流れみたいなものです。ですから、時には私たちを怯えさせたり、わずかな間でしたら、憎しみさえ覚えさせたりすることのほうが、その対極にある感情を誘い出してくれるものなのです。

もしこのとおりだといたしますと、ラヴレースは、初めの頃はだれにもまして丁重で媚びへつらっていたのですから、見事に勘どころを捕まえていたことになりますね。その後

の粗暴さや、すぐにも不快な振舞いに出るところ、また、それに劣らず簡単に畏まってしまうところなどは（分別もあれば勇気もある男ということで通っているのですから）、きっと女の人の気持ちを飽きさせないことでしょう。挙げ句には、疲れ果てた女の人は争う気もなくなり、亭主関白の夫が望むとおりの、言いなりの奥さんになってしまうのです。

本心からそう思うのですけれど、私たちの二人のヒーローはヒロインに向かってそれぞれ違う接し方をしていますから、この説は立派に証明されるはずです。私のほうは、ヒックマンさんのメソメソした卑屈で服従的な求婚の仕方にすっかり馴染んでしまっていますので、今では、泣き言やお追従以外には何も期待しない有り様ですし、あの人のつまらない言葉には心を動かされることも滅多にございませんから、ハープシコードを弾くことで眠気を覚ましたり、退屈なお話を押し止めたりすることもしょっちゅうなのです。ところが、ラヴレースのほうは、疑いもなく、座がしらけないようにしてくれますし、物腰にいたしましても会話にいたしましても、ラケット(三五)のゲームをいつまでも続けているような具合なのです。

貴女たちが頻繁に口争いと仲直りを繰り返しておられることからも、この見方の正しさは証明されましょう。ヒックマンさんがラヴレース流の仕方で、いつも私の気持ちを引きつけてくださっていたなら、今のままの品行を守った場合に限りますが、もうとっくにあの人と一緒になっていたはずだと、本当にそう思うのです。ただ、その場合、最初の出だしが適切であったはずです。今ではもう絶対に立ち直れないのですからね。これは確かなことですし、求婚している間は最後の最後まで、ペコペコと私の後をついて回ることでしょうね。そして、さらに困りますのは、命のありますかぎりこちらの言いなりになるということですわ。

お気の毒なヒックマンさん、と貴女はおっしゃることでしょうね。

私は貴女の真似ばかりしていると言われておりますから、声を揃えて申しますわ。お気の毒なヒックマンさん、とね。

ベティ夫人とお従姉妹さんからのお手紙について、朝までラヴレースさんが触れなかったことを怪訝に思っておられますね。これだけ重大で、いうならば、互いに関わりを持つ出来事ですもの、少しの間でも貴女から隠すなんて、私も気に入りません。翌日、貴女が怒っていらっしゃる時に内容を紹介したことからいたしますと、切羽詰まった際の奥の手としてしまってあったようにも見えるのです。もしもそうだといたしますと、貴女を怒らせることもあるのを予測していたことにならないでしょうか。あの人と行動を共にされてからありました出来事すべての中でも、今回のことが一番気に入りません。このことだけでも、無関心な人の目には些細なことと映るかもしれませんが、精一杯ご注意いただかねばならないように私には思われるのです。ただ、妹のソーリングズさんに宛てたグリーム夫人のお手紙のことがありますし、付き添い人の件ではハンナを繰り返し提案したり、ソーリングズ未亡人の娘さんたちの一人を持ち出したりしておりますし、何よりも、ノートン夫人の名を挙げているのは好感が持てますので、その埋め合わせをするものと考えております。このような事情を抜きにいたしますと、申し上げておくべきことはもっともっとございます。でも、あのようなお手紙を受け取っていたことを翌朝になって知らせるだなんて、なんというお馬鹿さんでしょう。あの人のことを一体どう考えたら良いのか、見当もつきませんわ。

ご婦人方からのお手紙の文面には満足しております。あのご家族のお気持ちをもう一度打診してもらいましたところ、皆さんが貴女との縁組にとても乗り気なのを知りましたので、それだけに一層嬉しく思うのです。

皆さん（お一人お一人がですが）、本当に貴女のことを心の底から敬服していらっしゃるのです。M卿などは貴女にぞっこんですし、甥御さんに信頼を寄せてくれたのがとても嬉しいとおっしゃって、然るべき償いを怠るようなら、甥御さんのことは必ず相続人から除外すると誓っておられるほどなのです。両方のご家族を失ってしまわれるようなことがありませぬよう、貴女も注意なさるべきですわ。

ノートン夫人は、私が耳にしておりますところでは、貴女とも私とも手紙のやり取りをしてはいけないと申し付けられているそうです。ご家族の他の方々からのご愛顧を大事に思うのだろうから、というのです。見下げ果てた人たちですわ。でも、あの人たちは貴女の……いいえ、〈縁続き〉なんかでもあるはずはないと思います。貴女の養育に当たられた方がだれか他の人だったのでしたら、貴女のことを、お宅からさらわれたお嬢さんの代わりに置いて行かれたお子さんだと、私は決め込んでいたでしょうね。御免なさい。皆さんの卑劣な悪意に晒され、私も辛い思いをしているものですからね。

この男にまっとうな振舞いを守らせていらっしゃるのは事実ですし、そうするためにお示しになった姿勢も、貴女が持ち合わせていらっしゃると思っておりましたもの以上に強気なものです。とりわけ、女性に相応しい特性としていつも貴女が目指しておられた、あの従順さや、間違いなくあの男に対して抱いておられるはずの（どのようにお考になろうと構いませんが）愛情に照らしてみますと、なおさらそのように思われるのです。非難がましいことを申しておりますが、憤慨なさったりせずに、むしろ、誇りに思っていただきたいのです。貴女は、私がこれまでに知り合ったり、書物で読んだり、人伝に聞いたりいたしております女性の中でも、恋愛感情が思慮分別によってしっかりと抑制されております、ただ一人の方なのですからね。でも、恋人の熱情に代わって夫としての冷めた気持ちが顔を出しますと、その時こそ貴女の出番ということになるのです。もしも見当違いをしていなければ、この男は、私がこれまでに知った中で唯一人の、伊達男とは違った自惚れ屋さんですから、望みの叶いました暁には、敬意を払うというよりも、むしろ、それを期待するだろうと思うのです。

ハンサムな夫というのは妻を悲しませることがとても多いものです。それに、あの男の風采が立派だといたしまして、どう控え目に見ましても、貴女はそれに負けないほど容姿端麗な女性なのです。にも拘らず、あの男は自分自身に惚れ込んでいますから、貴女に恩義を受けているなどとは思わず、むしろ、貴女のほうこそあの男の特別扱いや贔屓を有難く思うべきだくらいに考えるはずです。でも、その見事なご容姿や、もっと素晴らしい立派なお考えのことを思いますと、貴女に相応しい男性などは一人もいないのです。ですから、貴女の本当の価値を低く見積もられましても、我慢なさらなくてはいけないのでしょうね。どなたと結婚なさっても、それは避けられないことですもの。自惚れの強い美男子連中をこのように慎みもなく非難いたしますのは、自分自身の気持ちの中で、ヒックマンさんを私の相手に選びました母に恥をかかせないようにするためなのだと、おそらく貴女はそのようにお考えになるでしょうね。自分でも分からないのですが、何かがあるのですね。少なくとも、非難をしたくなるだけのことはです。

貴女がロンドンへ向かわれることに異論は有り得ないものと考えております。ロンドンでなら、どなたからお便りをいただくにせよ、だれにお手紙を出されるにせよ、ちょうど真ん中にいらっしゃるみたいに好都合です。そして、その時には、貴女のお傍を離れるという約束等々、すべてに亘ってあの男の誠意をお試しになることです。

それにいたしましても、とにかく、貴女のお立場では結婚以外にはないものと考えております。貴女の縁続きの人たちがどこまで歩み寄られるか、試してご覧になるのは（試してみたのだとおっしゃることが出来ますためにも）構わないと思います。でも、貴女のお申し出を拒否されるようでしたら、その場合はすぐに、例の軛に身を委ね、その中で最善を尽くされるべきです。貴女から言い出すように仕向けるようでしたら、あの男は確かに不作法者ということになりましょう。でも、貴女のほうでも少しは歩み寄るべきだというのが私の意見です。軽視されるのには耐えられない男なのですからね。

以前あの男が話していたことの中に、このようなものがありました。私を念頭においてのことなのでしょう。「恋人に対していずれ色好い返事をしようと思っている女性は、自分自身のためにも、恋人をその他大勢とは別扱いにしていることを世間に向かって示すべきだ」というのです。

あの男の名文句をもう一つご紹介いたしましょうか。その話し振りといったら、挑発的に手を突き出しながら、まさしく放蕩児そのものでしたわ。「自分を取るのか皇帝を選ぶのか、相手がわずかな間でも心の中で天秤に掛けていると思った時は、この世で一番の王女とだって、だれが結婚などするものか」というのですからね。

ともかく、世間中の人たちは貴女がこの男と結婚なさるものと思っております。お父様のお屋敷をお捨てになったのはまさしくそのためなのだと考えているのです。挙式が延びれば延びるほど、世間の目にはますます好ましくない様相を呈することでしょうね。それに、結婚なさらずにいらっしゃる間、ご評判に傷が付かないといたしましても、それは一部縁続きの人たちの落ち度ということにはならないはずです。特にアントニー叔父様などは、ご自分と同類のオーソン(三六)みたいな男の品行を根拠に、粗野で下品なことを口にしていらっしゃるのです。ただ、これまでのところは、貴女の素晴らしい名声がその毒を消す役目を果たしておりましたし、悪口を言っている人のほうが軽蔑され、皆さんの怒りもそちらへ向けられていたわけです。

ここまで、何度も中断させられながら書いてまいりました。一枚目の便箋が皺くちゃになっておりますのにお気づきでしょうが、不意に母が飛び込んでまいりましたため、胸の中に押し込まねばならなかったのです。結構な言い争いになりましたのは申すまでもありませんが、いちいち貴女を煩わせるようなことでもございません。ただ、本当に　…　でも、何でもございませんわ。

貴女のハンナはお仕えするわけにはまいりません。可哀相に、あの娘はお勤め先を二週間ほど前に辞めたのです。リューマチに罹ったためで、ずっと部屋から出られずにいるのです。お傍に呼び寄せたいとのお言葉をキティが伝えにまいりますと、あの娘はワッと泣き伏し、これほどお慕いしているお嬢様にお仕えすることが出来ないなんて、自分は重ね重ね不幸な人間だ、と言っていたそうです。

母が私の願いを叶えてくれておりましたなら、ハンナさんが来てくれるまで、私のキティに貴女の付き添いを頼むということにつきまして、ラヴレースさんのほうが先に提案し

たのを私は残念に思ったことでしょうね。赤の他人ばかりに囲まれ、そして、お住まいを移られるたびに初めての人が付き添いだなんて、本当に不愉快な話ですわ。でも、思いやりに溢れ、気前も良い貴女のことですもの、どこへ行かれましても、信頼の出来る付き添い人が得られることでしょう。

きっと貴女は思いどおりになさるのでしょうが、衣類のことにいたしましてもお金のことにいたしましても、私に手の打てますことで、少しでも不便な思いをなさるようなことがございましたら、私は決して貴女を許して上げないつもりでおります。そのようなことは一切、母には（もしも、貴女の反対理由がそこにあるのならですが）知らせる必要がないのですからね。

私たちはだれでも至らないところがあるものです。尊敬に値する人たちですのに、目が悪いのでなければ見逃すはずもないような、そんな特別な欠点がおありなのを、二人で残念がったこともよくありましたね。

前に話してくださいましたことが思い出されます。そして、そのご忠告は的を射たものでした。「ねえ、ナンシー、私たちって」というのが貴女のお言葉でした。「自分たちが咎めているのと同じ欠点を持ち合わせてはいないわけだけれど、私たちの中にある別の、もっと大きな欠点に気をつけましょうね」とです。でも、白状いたしますと、最近のことなのですが、母が疑り深く心の狭い振舞いをするものですから、私も少し腹を立ててしまいました。そのつもりはなかったのですが、一つご紹介いたしましょう。母が三十ギニー貸してほしいと言ってきたのですが、手形を現金に替えてもらうまでの間だけ、とのことでした。私は、用立て出来るのは精々八ギニーか十ギニーだと答えました。すると、八ギニーとか十ギニーとかではお話にならない。もっと持ち合わせていると思った、と言うのです。所持金のことを教えてしまうなんて　…　もっと利口ですわよ、私だって、と言ってやっても良かったのですが、数え直してみますと、九十五ギニーございました。貴女のためでしたら、心の底から喜んで全部をご用立ていたしますのにね。

母がこのような小賢しい手口を用いました陰には、アントニー叔父様がいらっしゃるものと確信しております。叔父様がお帰りになった一時間後のことですもの、母が現金を切らしてしまいましたのは。もしもそのとおりだといたしますと、皆さんが貴女を困らせるおつもりなのはお分かりいただけるでしょう。皆さんにはそうしていただきたいと思いますわ。そのことで、ご自分の財産を法廷で争おうというお気持ちを貴女が起こしてくださるのでしたらね。貴女がそのような手段に訴えるよう、皆さんのほうで仕向けてくだされば、貴女が皆さんのところを去らなければいけないのも尤もな話だということになりますからね。それに、お気持ちとは裏腹に、欺かれて連れ出されてしまいましたのをお認めになりますのは、貴女にとりまして名誉なことではございませんから、これでしたら、貴女がお宅を出られた理由として、私にも十分に利用出来るものとなるのです。お察しのとおり、この件に関するラヴレースの忠告には、私も賛成なのです。その点についてのあの人へのお返事に対しましては、私といたしましては、それほど重きを置きたくはございません。おそらく重視されて然るべきなのでしょうけれどね(ア)。

並外れた才能からいたしましても、この男の工夫の才はさほど驚くにあたりません。ど

(ア)　百十頁を参照のこと。

のようなことに頭を向けたといたしましても、その点では他に抜きん出るとか、非凡な人間になっていた（あるいは、途方もないことをしていた）ことでしょう。執念深い人だと言われておりますが、とても嫌な性質ですね。実際の話、足のことを除きますと(三七)、どの点でも悪魔だと思うのです、あの男は。ですから、重ねての忠告になりますが、あの男をあまり挑発なさって、敵に回したりなさらないことです。お姉様のところの不愉快なベティや、お兄様のジョゼフ・リーマンに襲いかかるよう、自由にさせてやることです。これでは卑劣な意趣晴らしですわね。でも、どなたにお手紙をしているのかは承知しているつもりです。でなければ、もっともっと昂ぶったことを申し上げるところです。請け合っても構いませんわ。

次回のお便りは、おそらくロンドンからになるのでしょうね。次のお便りとそれ以後のものは、追ってお知らせいたしますまで、どうかヒックマンさんのご自宅に宛ててお送り願います。あの人はすっかり貴女に夢中なのです。母の依怙贔屓や偏見のことはあまり心配なさらないでくださいね。私ももう子供ではないつもりですから。

神のご加護と、貴女に相応しく思われますかぎりの幸せとが授けられますよう、お祈りいたしております。

変わることなき愛を込めまして、貴女の

アナ・ハウ

手紙　三十三

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月十九日　水曜日　朝

私のロンドン行きにご賛同をいただき、嬉しく思います。

お母様と貴女の仲違いの件ですが、言い表しようもないほど心を痛めております。私はお二人のことを実際以上に不幸なように考えている、ということであってほしいと思います。ただ、「結構な」とおっしゃっておられる口論の細かな内容につきまして、是非ともお教えいただきとうございます。貴女独特の言い回しはよく承知しておりますもの。すべてをお知らせいただきました時には、お母様がどれほど厳しいことをおっしゃったといたしましても、私の心がずいぶんと楽になるように思うのです。落ち度のある人たちは怒りを向けられましたことに憤慨するよりも、むしろ、そのきっかけとなりましたことのほうを嘆くべきなのです。怒りは自分たちの落ち度の結果に過ぎないのですからね。

お金のことで、イギリスに住むどなたかにお世話を受けなければいけないということでしたら、貴女にお願いすることにいたします。温かいお心遣いのことをお母様が知る必要はないのだとのお言葉でしたね。でも、実行に移されます場合には、また、お母様が私の大切なお友達に釈明を求められるようでしたら、お母様には知っておいていただかねばならないでしょう。貴女は事実をお曲げになるとか、あるいは、言い逃れをなさるおつもりでしょうか。その点につきまして、お母様には安心していただけたらと思うのです。お許しくださいね。ただ、存じ上げているのです　…　でも、以前のお母様は私についてもっと良い見方をしていてくださいましたわね。あゝ、何て軽率なことをしてしまったのでし

ようね、私は。もう一度お許しをいただきとうございます。どうかお願いいたします。生まれついての思い上がった気持ちは、屈辱の最中にありましても、時々顔を出してしまうものです。でも、気力はすでに失せているのです。

ハンナに来てもらえないなんて、惨めな思いです。感心な娘ですもの。あの娘の病のことは気の毒に思います。期待の外れた残念さは申すまでもございませんが　…　ねえ、大好きなハウさん、ご親切に甘えるようにとの強いお勧めですし、ご厚意をはっきりお断りいたしますと、思い上がった女とお考えなのですから、いかがでしょう、私の名であの娘に二ギニーお届けいただけないでしょうか。

おっしゃるとおりに、私にとりまして結婚以外の道はないといたしますと、あの人のお身内の方々が、あれほど階級や地位に誇りを持つ人ならそうなさって当然のように思われますのに、家を捨てたことに対しまして、家出娘を軽蔑していらっしゃらないのは、少しばかり慰めになっております。

あゝ、それにいたしましても、本当に、本当に残酷な叔父です。もしも　…　でも、胸が一杯で筆を進めることが出来ません。叔父の頭にありますようなあまりにも恐ろしい考えのことなど、とても書き進める気持ちになれないのです。ただ、このように信じ込まされているのでしたら、決して歩み寄ろうとしなくても、何の不思議もございません。

すべて無情な兄の仕業です。兄の憶測なのです。神様が兄をお許しくださいますようにと、傷つきました妹は祈っております。

手紙　三十四

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月二十日　木曜日

すでにラヴレースさんの召使が、あの人のお友達のドールマンさんのところからお返事を携えて戻って来ております。ドールマンさんは一生懸命尋ね回ってくださいまして、とても詳細な文面です。ラヴレースさんは、ご自分がお読みになるとすぐに、そのお手紙を私のところへ持ってきてくれました。どのようなことがありましても、すべて貴女にお知らせしておりますことはもうご存じですから、詳しくお読みいただきますよう、貴女のところへその手紙を送らせてほしいとお願いいたしました。機会のあり次第、ご返送いただければと思います。ご覧いただけますとおり、ロンドンにいるあの人のお仲間は、私たちがもう実際に結ばれているものと考えているようです。

ロバート・ラヴレース殿

四月十八日　火曜日　夜

謹んで

長きに亘りましてお姿を拝見することも出来ずにおりましたが、近々ロンドンへお越しの由、欣快至極に存じます。風の噂が事実といたしますと、お迎えする歓びもいよいよ大きなものとなりましょう。盛んに賛辞を捧げておられました麗しいご婦人と現に結婚なさったとの噂です。愚妻ならびに義妹両人も、噂どおりならお祝いを、また、仮に違うといたしましても、近々のご予定にお慶びを申し上げたいと申しております。

私、可能ならば中風治癒の術を求めんものとロンドンにまいりましたのが一週間前。現在加療中であります。とは申せ、ご希望のございましたお問い合わせの件に怠りはございません。結果は以下のとおりであります。

コヴェントガーデンにほど近いベドフォード街の呉服屋ですが、その二階の家具付きの部屋が空いております。召使用の設備もありまして、四半期払いか月払いです。契約条件はご希望の設備次第となっております。

愚妻はノーフォーク街の下宿とセシル街のものをいくつか見てまいりました。いずれもテムズ河やサリーの丘の眺めに心惹かれるところはございますが、シティーに近すぎるやにも思われます。

ノーフォーク街の下宿の家主は、家半分をそっくり貸したいとの意向でした。従いまして、ご説明をいただきましたものには大きすぎましょうし、ご結婚を公になさるのが適当とお考えの頃には、下宿住まいなどはほぼ有り得ないことと拝察いたしております。

セシル街の下宿は小綺麗で使いやすいものとなっております。持ち主は評判の良い未亡人ですが、丸々一年間は借りてほしいと言い張っております。

ドーヴァー街にも良い部屋がございます。未亡人の持ち家で、近衛連隊の将校が遺したものです。この男が将校の地位を買い取った後に（その資格は服務状況からも十分でしたし、財産の大半を注ぎ込んだのですが）間もなく死亡したため、未亡人は下宿を始めざるを得なくなったわけです。

これがご異存の一つにはなりましょう。しかし、地位のある評判のしっかりした人物以外は置かないよう、十分に注意しているという話です。互いに独立した申し分のない家を二軒貸しに出しておりますが、連絡の方法といたしましては、広く立派な渡り廊下があるのみです。奥の家のほうが上品で、大変優雅な家具が付いております。ただ、通りへの目配りをお望みでしたら、表側の家の立派な客間をご利用いただくことも出来ましょう。

奥の家には小さな庭がついておりますが、老夫人のいかにも女性らしい趣味と申せましょう、数限りない花瓶、植木鉢、彫像などを所狭しと並べてございます。

この下宿が最もおめがねに適いそうに思い、ことさら詳細に調査いたしました。夫人が貸すと申しております部屋は奥のほうの家にございまして、食堂、小ざっぱりとした客間が二つ、休憩室、それに、立派な寝室が二、三室ですが、そのうちの一室には窓付きの小奇麗な控えの間が付いておりまして、そこから小庭を望む格好になっております。いずれも趣味の良い家具が備え付けになっております。

最後に住まっておりましたのは、品の良い牧師夫妻と嫁入り前の娘さんです。下宿を出ましたのはごく最近ですが、牧師がアイルランドの教会内で相当な高位に推薦されたためとのことです。夫人に言わせますと、牧師さんのほうでは丸三ヶ月間だけのつもりだったのですが、部屋と夫人の待遇とがすっかり気に入り、二年間住み続けましたし、立ち退く際には、そのように好ましい事情でありながら、未練を残していたというのです。これま

でのどの下宿人も同じことで、最初の考えの四倍は逗留してくれる、というのが夫人の自慢なのです。

私も中佐のことは多少知識がございまして、常日頃から信義を重んじる人間と見られていた人物です。未亡人のほうにはこれまで会ったことはございませんでした。仕草が男っぽくて、初対面では少々近づき難い感じですが、夫の姪で、それゆえ、二重の意味で身内だと称しております、感じの良い二人の独身女性に対する振舞いを目にし、また、未亡人を褒め称える彼女たちの言葉を耳にいたしまして、夫人の豊かな体躯そのものが気性の良さから来ているものと考えた次第です。気難しくつむじの曲がった人間が丸々と太っているのは滅多にないことですからね。世間の評判は良く、ゆとりのある暮しを送っているものと見受けられます。

この下宿ないし先に挙げました下宿のいずれもが、十分には奥様のお気に召さないということでありますれば、そこは短期間で切り上げ、ご自分で他をお探し下さることも出来ましょう。

例の未亡人は、間借りの期間を一ヶ月に限ること、また、お好きなものをお使いになることにも同意しております。契約条件につきましては、奥様のご希望の向き、そして、奥様の侍女たちの仕事や貴方様の下男たちの役割を知った上で柔軟に対応したいとのことですが、旦那様や奥様方に比べ、概して召使のほうが扱いにくいところがあるからだと申しておりました。

賄い付きになさるかどうかは、奥様の自由とのことです。

貴方様は結婚なさっているものと当方では考えておりますが、ご家族間の不和から、暫くは伏せておかれたいこともあろうかと拝察いたしまして、その辺の事情を（勿論、不確かなこととしてではありますが）未亡人に匂わせておくのも的はずれではあるまいと判断いたしました。そこで、その場合にも、奥様と侍女たちばかりでなく、貴方様と召使たちも受け入れて貰えるものかどうか尋ねてみましたところ、構わないとのことでしたし、是非そのようにしてもらいたいとも申しておりました。単身者というのは、この奥様のように立派な推薦がないかぎり、通常はお断りすることにしているからだというのです。

以上の下宿のどれ一つお気に召さないといたしましても、ハノーヴァースクェア、ソーホースクェア、ゴールデンスクェアの界隈、あるいは、グローヴナースクェア近くの新しい街区には、申し分なく立派な下宿が見つかりますのは疑いありません。また、奥様がさらにご希望に沿うお住まいに落ち着かれますまでの間は、愚妻、義理の妹、そして、私自身打ち揃いまして誠心誠意、アクスブリッジにて出来ますかぎり最善の設備を提供させていただく所存でおります（また、われわれ一同の望むところでありますが、お慶びを申し上げて構わないお立場なのでしたら、勿論、貴方様に対しましてもその心積もりでおります）。

ついでながら申し添えさせていただきますが、呉服屋の提供いたします下宿もセシル街の下宿も、ドーヴァー街の未亡人が経営する下宿も、いずれも一日前の通知で入居可能ということになっております。

貴方様の誠実にして親愛なる友、そして、しもべ

THO. ドールマン

この手紙をご覧いただきますと、私がどの下宿を選ぶことにしたのか、容易にお察しいただけるはずです。でも、あの人を試してみようと（このように重大な問題ですから、どれだけ用心いたしましても、度が過ぎることにはなるまいと考えたのです）、最初はノーフォーク街の下宿を優先しているふりをいたしましたが、理由といたしましては、この手紙の主が、私の好みには合わないだろうと考えて挙げましたものを、そっくりそのまま持ち出したのです。つまり、ロンドンのようにとても治安が良いと言われております街の近くなのだから、というわけです。また、反対側の町外れでは、時々ふしだらなことが行われていると、芳しくない噂を耳にしておりますので、中心部での下宿住まいも嫌なわけではない、とも申しておきました。その後、セシル街の下宿のほうに傾いてみせたり、呉服商の下宿に食指を動かして見せたりいたしました。でも、あの人は自分の好みを顔に出したりはいたしませんでした。そこで、未亡人の下宿についてご意見を伺いましたところ、次のように言っておりました。私の趣味から言っても便利さの点でも、そこが一番だと思うが、私のほうでも下宿をしなければならないのはほんのわずかな期間と考えているのだろうから、あの人としては、どれを推したものか判断し兼ねる、というのです。

その後、私が未亡人宅の下宿に決めますと、あの人はその旨ドールマンさん宛に一筆認め、ついでに奥様と妹さんにも、親切なお申し出に対する私からのお礼の気持ちを書き添えてくださいました。

私が使わせていただきますのは、食堂と窓付きの控えの間がある寝室（少しの間でも未亡人宅に落ち着くようでしたら、この小部屋はずいぶん利用することになりましょう）、それに、召使用の部屋ということになっております。土曜日の朝には出発の予定です。侍女の件につきましては、ハンナの病気のことが残念でなりませんが、あの人も言っておりますように、気に入る召使が得られますまでは、未亡人宅の者を一人雇って、お給金の肩代わりをすることも出来ましょう。それに、私の場合、ご存じのとおり、世話をしてもらう必要はそれほどございませんからね。

❁　❁

今、ラヴレースさんがご自分から、可哀相なハンナのためにということで、五ギニーを渡してくださったところです。同封いたします。お手数ではございましょうが、何卒、あの娘のところへお届けくださいますよう願います。それから、贈り主のこともお知らせいただきとうございます。

ささやかな印ではございますが、あの人の心遣いが大変嬉しく思われます。あの娘を呼び戻そうかと言ってくださってからというもの、あの人に対する考え方が良いほうへ変わってきているのは事実です。

❁　❁

つい先程のことですが、また一つ思いやりのあるところを見せてくださいました。あの人が見えまして、こうおっしゃったのです。考え直してみたが、ロンドンの未亡人とその姪たちは、友人の説明によれば、すこぶる上品な暮しをしているとのことでもあり、体裁

を保つためだけにせよ、だれの付き添いもなしに私がロンドンへ行くというのは、とりわけ、到着次第私の傍を離れるようにとの要求であり、赤の他人の間で一人きりになってしまうのだから、自分には耐えられない話だ。そこで考えたのだが、ソーリングズ夫人にお願いして、二人いる女中の一人を貸してもらうか、娘さんたちのどちらかに同行してもらい、付き添いが得られるまで残ってもらうようにしてはどうか。後の場合なら、若いお嬢さんも都会の珍しい事物に触れることの出来る絶好の機会だと喜ぶに違いないし、そのような折には、恰好の付き添いになるだろう、というのです。

以前にもお話ししてありましたように、私はこのように申しました。二人のお嬢さんはそれぞれ役に立っていることでは甲乙がつけられませんし、忙しい農場ではとても使用人を割くわけにまいりませんから、立派な仕事を離れてもらうのは気が重い。それに、私も暫くの間は娯楽のことなどに頭は回らないでしょうから、それだけに、外出時のお供はあまり必要といたしません、とです。

さて、このように移り変わりの激しい立場におりますゆえ、今後の見通しに（現在のところ、ハーロー邸を出まして以来かつてなかったほどに有望なのですが）黒い影を落とすようなことが、何かしら起こらないともかぎりませんので、この機会を捉え、次のように署名させていただきます。

望みなきにしもあらず、

変わることなき感謝の念を抱いております貴女の友、そして、しもべ

Cl. ハーロー

手紙　三十五

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

四月二十日　木曜日

《氏は先ず、ロンドンに適当な下宿を確保すべくドールマン氏宛に一筆認め、令嬢の同意を得て発送した手紙に触れ、次いで、その手紙への返事の写し（百三十三頁を参照のこと）を示し、次のように所見を述べるのである》

お馴染みの未亡人のことだよ。例の姪たちだ。あの下宿のことなのだよ。トム・ドールマンのこの手紙以上に技巧を凝らしたものは、貴公にしても、かつて一度でも目にしたことはあるだろうか。異議の出そうなことはすべて手を打ってある。あらゆる偶発事にも予防手段を講じてあるし、どんな微細な点であれ、裏をかかれる恐れはないのだ。

我が魅惑の君の姿を前にして、笑みを堪えきれる者などいなかっただろう。茶番じみた聖堂参事会長と参事会さながらに、既にあてがわれているものを選択しようとしているのだからな。したり顔をして（ちょうど連中が、自らの選択に神の導きあれと、型どおりの祈りを捧げるのと同じことだ）、様々な提案を検討してみせるのだが、まるで他のものに気があると信じ込ませたいような態度だ。おまけに、愛しの小悪魔のほうでは、俺に何か心の乱れでもあればそれを見抜こうと、覗き込んだりもするのだよ。心の乱れは確かにあったさ。だがな、断言してやっても構わないが、彼女の目では届かない、はるかな深みに潜

んでいるということだよ。たとえ、太陽光線ばりの眼光をしていたとしてもだ。

俺のことは信頼出来ないというのだな、麗しの君よ。信頼のかけらすらもないのは明らかだ。たとえ、こちらが魂胆を変える気になったとしても、俺の名誉心を潔く信じ、励まそうとは思わないのだな。恋の手管にかけては達人と呼ばれるこの俺だ。こんな未熟な初心者に手もなくあしらわれたなどと言われて良いものか。

だが、この目で見たのだよ。俺の企みにすっかり満足している魅惑の君の姿をな。ハウ嬢にも安心してもらうためだが、俺の相棒の手紙を借用したいと言い出す始末だ。

愚かな小悪魔どもだ。自らの判断力を頼って、脇道に迷い込むとはな。連中にわれわれの目論見を挫く力を与え、婆さん臭い分別を教え込むのは、経験以外にないのさ。本当に分別がついたなら、それこそ、カッサンドラー(三八)よろしく、腰を落ち着けて他の女たちに用心しろと説くのも良いだろうさ。だが、他の女たちにしても、連中が先達の言葉に耳を貸さなかったように、連中の言うことなどほとんど意に介そうともしないのだよ。ハンサムで押しの強い若者が目の前に現れるたびにな。だれのことを言っているのか、貴公には見当がつくはずだ。

だが、ベルフォードよ、抜け目のない悪党のドールマンが、未亡人の住所としてドーヴァー街の名を挙げているのは気にならなかったかな。そこにどんな意味があると思う。貴公には無理だろうな、見当をつけるのは。だから、貴公が頭を悩ませないために、ひとつ教えてやろうじゃないか。仮にどこかのお節介者から、詳しい情報を得るためだが、〈ドーヴァー街のシンクレア未亡人宅〉についての照会があるとして「ハウ嬢はえらく抜け目がないし、とことん世話を焼いてくれるからな」、その町内にはそんな名の人間もそんな家も見つからないし、説明書きに符合する建物も見当たらないということになれば、イギリス一鼻の利く猟犬だって、臭跡を失ってしまうのではないかな。

しかし、どうする気だ、と貴公は尋ねそうだな。ごまかしに対する令嬢の憤りや、家が別の町内にあるのを知った時、貴公の欺瞞性にますます不信の念を抱いたりするのを防ぐにはだよ、とな。

フン、気にすることはないんだよ、それは。何か手が見つかるということもあるし、その頃までには、互いにすっかり気心が通じ合うかもしれない。あるいは、そうならなくとも、彼女も俺のことが十分解って、その程度の微罪には驚かなくなっているだろう。

だが、令嬢が実際の名前を友達に知らせるのはどうして防ぐ、と訊くのだな。

馬鹿だなあ。その前に彼女は自分の力で知らなければいけないだろう。違うかな。なるほど。だが、どうやって彼女が町名を知るのを防ぐのだ。それに、彼女の友達がそこに手紙を出すのはどうして防ぐのだ。名を知られるのと同じことだろう、と訊くのか。

その点も放っておいてもらおうか。

トム・ドールマンは大馬鹿で、俺宛にこれだけの返事を書けるはずはないと、さらに異議を唱えるのなら、ひとつ考えてもらいたいな。律義なトムにわざわざそんな苦労をさせないためにも、ロンドンに精通しているこの俺が、あいつに書いてもらうべき事柄の文案を送り、ただ書き写すのだけを奴に任せることだって出来るわけだろう。

さあ、俺に向かってどんな台詞を吐くつもりだ、ベルフォード。

それから、この手の質問をするのは貴公の役目と決めてあったと言ったらどうする。俺が貴公を重んじているという、まったくそれだけの理由で、令嬢が貴公に異議を申し立て

るとしたら、その場合、令嬢にはどのように話すのだ、ジャック。

手隙の時間を作るためなのさ、これは。比類なき策謀家なのだよ、貴公の相棒は。俺の身体が膨れ上がって行く様を、そこで黙って見ているのだな。すでに象にも負けない巨漢になっているし、十倍は賢い。力だってはるかに強いのだよ。この長大な鼻で月を磨き上げてやるべき理由が俺にはあるのではないのかな。哀れなものだよ、貴公は。何とまた貧弱な姿なのだ。俺が心の底から貴公を軽蔑しても不思議がることはない。慎みもなく自画自賛に走る人間というのは、他人のことを誰かれなく分に応じて軽蔑する以外にその方法はないのだからな。

結婚を既成事実として仄めかすドールマンの論法は大いに利用するつもりだ。だが、一度にすべてを明かすのは止しておこう。今回の構想でも、その部分はまだ完全には呑み込んでいないのも事実だからな。戦略家が、油断のない敵の動きに合わせて自らを律しなければならない段階で、予定していることもしていないことも、前もって口に出すような真似は出来るわけがないだろう。

シンクレア未亡人だと　…　確かそう言ったのではなかったかな、ラヴレース、と貴公は叫ぶだろうな。

そのとおりだよ、ジャック、シンクレアだ。覚えておくのだな。もう一度言おう。シンクレアだ。他の名はない。顔の造作がはっきりしていて大振りだから、スコットランド高地地方の出ということにしよう。夫の中佐も［そこのところも注意してもらうぞ］スコットランド人で、いかにも勇敢で律義者だったことにする。

企みに当たっては、些細な事柄を見落とさないようにしている。疑問の出そうな点についてはすべてそうだが、細心の注意を払い、万全の備えを施してある瑣末事のほうが、その点への怠慢さを補うために千回も誓ったり、祈ったり、申し立てたりするよりも有効なものなのだよ。とりわけ、感じ易くなっている心に警戒の気持ちが入り込んできた時にはなおさらだ。

貴公は驚くことだろうな。俺が施した配慮のその半分でも知ったならな。一つだけ教えてやろう。令嬢の控えの間に並べてもらおうと、すでに書籍のリストを送るようなことまでしているのだ。大半は古本だがね。それに、あそこの女どもは揃って読書家なのも知っているはずだ。だが、先走った心配は止めにする。何事であれ、運の手に委ねてしまうのを怖がっているように映るからな。運とは旧知の仲と言って構わないのだよ。幾度となく見事に俺の後押しをしてくれたのだ。それに、侮辱を受けるとか、軽蔑されるとかいったことがあってはならない相棒なのだよ。とりわけ、望みの薄い出来ごとを自分の有利に変えてしまう技を身につけている者からはな。

手紙　三十六
ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

四月十九日　水曜日

お知らせしたいことがございます。お知り置きいただかねばならないことです。

貴女はまだ結婚なさっていないと確信されたお兄様が、貴女を捜し出し、待ち伏せをし

て連れ去ろうと決心なさったのです。お兄様の友人で、船長をしている人が引き受けたことなのですが、貴女を船に閉じ込めた上で、お兄様が持っておられるお屋敷の一つを目指し、ハルかリースへ向けて出帆するというのです。

本当にいやらしい人たちです。貴女は操を守っておられますのに、失くしてしまわれたと考えているのです。でも、貴女がお戻りになり、そうではないことに確信が持てました場合には、ソームズ夫人にしてしまうまで貴女を監禁するつもりなのです。一方、皆さんは、精々仕事を持ち込んでラヴレースさんの手を塞いでしまうためなのですが、小耳に挟んだ何かの罪の件で、あの人を相手に訴訟を起こそうかと話し合っているのです。皆さんの考えでは、死罪にはならなくとも、国外追放には相当するものだということです。

これはごく新しい情報なのです。ベル嬢が、ラヴレースに対する勝ち誇った気持ちを満面に表しながら、内緒でロイド嬢に話して聞かせたのです。ロイド嬢はこれまでどおり貴女のことを大変崇拝しておりますのに、今はベルさんのお気に入りなのです。ロイド嬢のほうでは、このような企てがきっかけとなって起こるかもしれない、恐ろしい出来事を心配なさって、私に教えてくださったというわけですが、私がこっそり貴女に伝えることは認めておられるのです。それでも、あのお嬢さんにしても私にしても、ラヴレースがまっとうな形で首を吊られるというのでしたら、何とも思わないことでしょうね。貴女のほうにまったくご異存がなければ、ということですけれど　…　ただ、私たちといたしましては、こんなにも立派な方が、気性の荒い男性二人に、テニスのボールみたいな扱いをされるのを黙ってはいられないのです。まして、貴女が捕えられ、血も涙もないような人でなしの野蛮な仕打ちに晒されるなんて、なおさら耐えられないことですわ。

その話を聞いても平静さは失わないと、もしもラヴレースさんからそんな約束を取り付けることがお出来になるのでしたら、お話しなさるべきだと思いますわ。ただ、ロイドさんの名は出さないでくださいね。おそらく、あの邪悪なスパイが情報を手に入れ、あの人に漏らすことでしょう。でも、貴女の分別にお任せいたしますので、適当と思われますことをなさって構いません。ただ、もっぱら心配いたしておりますのは、この向こう見ずで愚かな計画は、もしも実行に移されますと、貴女をこれまで以上にあの人の言いなりにしてしまう手段になるという点なのです。でも、和解の望みが一切ございませんことは、それで納得していただけるでしょう。貴女が実際に結婚しておられると宜しいのに、と願う所以です。告訴の原因として暗に触れられておりましたものが何であれ、殺人とか強姦といった重罪ではないのでしたらね。

ハンナさんはお心の籠もった贈り物に大層感謝しまして、貴女に祝福が授けられますようにと、繰り返し繰り返し神に祈っておりました。ラヴレースさんからのものも、もう受け取っている頃です。

まったくの話、ヒックマンさんのことが好ましく思われますわ。ラヴレースさんの五ギニーを届けに行く人に託しまして、名を伏せた贈り主からということで、ハンナさんに二ギニー送ってくださったのです。それも、私や貴女が気づかないようにです。でも、この種のことはずいぶん沢山なさっていますし、施しをなさっても黙っておられるのです。ですから、施しを受けた人たちが感謝の気持ちから、そのことを隠し通せなくなりますまでは、だれも気づかずにいるのです。時々は私の施物係になってくださるのですが、私のわずかな施し物にその都度追加をしておられるものと思います。

でも、こういったことで面と向かって褒め言葉を授かりますのは、あの人の場合、時期尚早ですし、また、その種の励ましを求めておられるようにも見受けられないのです。

善良な心の持ち主であることは確かです。それに、一人の人間にすべての美質を求めるというわけにもまいりません。でも、私のことで頭を悩ますなんて、本当にお馬鹿さんですわ。私が男性すべてをどれほど軽蔑しているのか、そして、これほど奇妙な身の固め方を切望されることで、ご自分を愚か者のように見せたりなさらなくても、当然のこととして、普通の男性を愚か者扱いするに違いないことくらい、お気づきのはずですからね。これまで何度となく考えたことですけれど、私たちが抱く好悪の感情というのは、思慮分別に導かれるとか、幸せを念頭に置くということは滅多にないものです。目ですわ。いけない目が愛する気持ちとしっかり手を結び、両方とも分別にはすっかり背を向けてしまうのです。何て不釣合な結び付きなのでしょうね、心と体というのは。五感のすべてが、それ相応の席次を認められますなら、全体に生気と名誉とをもたらしてくれるはずのものに対して、ハーロー邸のご一族みたいに、徒党を組んで歯向かっているというわけです。

お願いです。ロンドンへ向かわれます前に、四十八ギニーお送りいたしますのを是非ともお許しいただきたいのです。ご用立ての金額をそのようにいたしますのは、ハンナさんへの二ギニーをお返しいただくことで、貴女は私に五十ギニーの借りが出来ることになるというわけなのです。きっとこの話なら乗っていただけますわね。ご存じのとおり、私のほうでお金が入り用になることは考えられません。もうお話しいたしましたが、その二倍近い持ち合わせがございますし、その半分でも、私の所持金として母が承知しておりますものよりも多いのです。この件で母が私を問い質しますのを貴女は心配しておられるのでしょう。私が本当のことを明かしてしまうとお考えですね。曖昧な言い方はあまり好きでございませんし、貴女だって同じように、貴女のアナ・ハウにそのようなことを許してはくださらないでしょうけれど、私の立場を救い、そして、私の言葉に疑いを挟まれずに済みますような言い訳が何か見つけられないようでは（どれほどひどい目に遭わされたとしてもです）、それこそ辛い話だと思いますわ。ロンドンのような場所で、お手元のわずかなお金で何がお出来になるというのでしょう。お使いの人をお願いしたり、情報集めのようなこともしなければならないかもしれないのです。私の願いを入れてくださらないようでしたら、ご自分でおっしゃるほどには、そして、特にこの件につきまして私が当然視しておりますほどには、気力が失せていらっしゃるようには考えないことにいたします。

母との仲に関しましては、母の気質は十分ご存じですからお聞きいただく必要もないのでしょうけれど、肩を持つとか恨むとかいたします時にも、母の場合、どっちつかずということは決してないのです。未だに、私が自分の娘だということを思い出そうといたしません。本当の話、そうじゃなくて、私はどこから見てもパパの娘だ、というのです。

亡き父の気性の激しさには、母もよほど応えたのでしょうね。優しさや愛情の籠もった振舞いのことはすっかり念頭にないみたいですのに、そのことはこんなにも長く覚えているのですもの。子供に対して持っております権限を精一杯振るおうとし、夫に対しても同じような力を発揮出来なかったと、亡くなってから何年にも亘って残念がるような母親につきましては、抑えつけられるのはひどく辛かったのだろうなと、そんなふうに考えたくなってしまう娘も中にはいることでしょうね。

自分の母親のことですし、このような話し方は娘の私に似つかわしくないといたしまし

ても、父に対していつも抱いておりました愛情、そして、父の思い出をこれからもずっと大切にして行こうと思っております気持ちに免じて、そこのところは幾分大目に見ていただけることでしょう。優しい父親だったのです。母とは気質があまりにも似通っておりましたから、かえって反りが合わなかったのですが、でなければ、おそらく同じくらいに優しい夫になっていたことでしょうね。

要するに、不運でしたのは、片方が機嫌を損ねますと、もう一方も不機嫌にしていたということなのです。ただ、どちらの気質も悪いほうだったとは申せません。それはともかく、父のおりました頃には私もまだ小娘でしたから、想像もしなかったわけですが、私に母譲りのところはないなどと母が言い出しますたびに、母にとりましては夫婦の束縛がそれほどまでに重くのしかかっていたのかと考えるようなことにもなるのです。

しばしば考えることですけれど、両親というのは、子供たちからの分け隔てのない愛を確保したいのでしたら、子供たちがどちらの側を選んだら良いのか困ってしまうほどの長たらしい夫婦喧嘩は避けるよう、くれぐれも注意すべきだと思うのです。当然のことですが、子供というのは喜んで両方の親を敬いたい気持ちでいるのですからね。

でも、ここが大切な点なのですが、母ほど仕事の出来る女性は他にいないのです。それに、家事の切り回しが上手な妻というのは、怠惰な妻に比べ、抑えつけられることが我慢ならないのだと思うのです。怠惰な奥さんは、おそらく、多少折り合いをつけなければならないところがあると考えるのでしょうが、反対の性格の女性のほうは、自分自身の重要さを十分に弁えているものですから、他の人の存在意義など一切尊重しないのです。すべて思いどおりでなくちゃいけないのですわ。一言で申しますと、有能な人間なものですから、役に立つというだけでは飽き足らないというわけです。

請け合っても構いません。もしも私が男でしたら、そして、平穏さを好む男性なのでしたら、どのようなことがありましても、こういった切り盛り上手の女性を奥さんにするつもりはございません。自分の恋人が切り盛り上手だということを耳にいたしました場合には、その人の資質が男性的なものなのか女性的なものなのか、その点を前もって本気で調べようと思います。実際に私が役立たずな不精者で、執事の言いなりになる恐れのある人間だといたしますと、多分その場合には、執事としての能力を求めて結婚しようとすることでしょうね。

自分の母親なのですから、母の話はさておくといたしましても、ハートリー夫人がどこの女の人よりもお高くとまっておられますのを、確かに私は目にしているのです。女性の領分ではない事柄のあしらい方をご存じだ、という理由からなのですが、弁えがあるからといって、女性の手柄には決してならない事柄なのです。もっとも、それは実行に移す場合のことでして、考え方を承知しておくのは不都合なことではないかもしれません。

実際の話、男っぽい女性を素敵だなどとは少しも思いませんわ。先にもお話しいたしましたが、私が男でしたら、休む間もない私の召使を、馬番の者たちも例外なく、仕事の時間中（おそらく、用無しの私の目の前で）こき使おうとする妻、そして、箒を片手にとでも申しましょうか、役立たずのガラクタみたいに、私を私自身の家から追い出したがっているのではないかと、絶えず不安な気持ちで一杯にさせるような妻よりは、「家に飼い馴らされて雛を育てるのみ」(三九)と、芝居の台詞にもありますが、それ以外のことには一切向かない鳩のように従順な女性のほうを選ぶでしょうね。

もしも、本当に一家の女主人が（当然のことながら、私がこんなにも敬服いたしております素晴らしいお嬢さんがなさっていらっしゃいますように）針仕事や書き物、家政関係の請求書類、気晴らしのバター作りといった、自分に相応しい立派なお仕事だけに自制する術を承知し、放っておけば捨てられるだけの余り物を貧しい人たちの食卓に供するよう手配したり、家事の中でも本当に有益なことすべてに亘って努力を傾けたりいたしますなら、それこそ、主婦本来の姿と申せましょうし、有能な人と敬愛され、欠くことの出来ない人と尊敬もされます。それでこそ、一家の副輪となるのですし［貴女のアナ・ハウのことをどのようにお考えになろうと構いませんが、私といたしましては、主婦には主輪になってもらいたくないのです］、だれもが愛情を寄せてくれることになるのです。横柄なお兄様が柄にもない教養を振りかざし、意気揚々と戻ってこられて、何もかも目茶苦茶にしてしまわれますまでは、皆さんが貴女のことを愛していらっしゃったのと同じことです。

大まかに、貴女の不幸な出来事が話題となっていたのだということをお知りになりました上で、やはり、私たちの争いの細かな点について教えてもらいたいとおっしゃるのでしたら、それはもう、お話ししなければいけないでしょうね。

でも、どのようにお話ししたら宜しいのでしょう。恥ずかしさと腹立たしさとが入り交じり、頬が熱くなるのを感じております。実は、私 … 何と申しましょうか、ぶたれてしまったのです。本当なのです。私が手紙を書いておりますのを見つけました母が、そうするのが妥当なことと考えたのでしょうね、私の手をぶって、その一枚を取り上げたのです。私も、読まれては困りますので、それを奪い取り、母の目の前で火にくべました。

こんなことをお知りになれば、心配なさるのはよく分かっております。ですから、わざわざそのことにはお触れになりませぬようお願いいたします。

その後すぐにヒックマンさんが見えました。私は会おうといたしませんでした。「一人前の女として、ぶったりするのを止めていただくか、まだまだ子供で、〈謙虚な下僕〉を持つには早すぎるとお考えになるか、どちらかにしていただきますわ」と、母にはそう言ってやりました。指一本向けようと考えますのさえ許し難いことになりますから、対抗手段といたしましては、不機嫌を装う以外にございませんでしょう。

母は、ハーロー家の人みたいに、「どうしても従ってもらいますからね」と言っております。また、母としては黙って続けさせておくわけに行かない文通ですから、その片棒を担ぐようなら、ヒックマンさんでさえ出入りは禁じることにするというのです。

ヒックマンさんもお気の毒ですわね。私たち二人の気紛れに運命を委ねておられるのですもの。でも、母を当てにして構わないのはご存じなのです。もっとも、私につきましては別です。ですから、どちらの側を選んだら良いのかは、あの人にとりましては簡単なことなのです。貴女のお役に立ちたいというのがあの人のお気持ちでないのでしたらね。間違いなくそのおつもりですし、これであの人は私への点数稼ぎをしているわけです。でなければ、つい先程認めて上げました様々な長所のことがございましても、手柄顔などさせたりはいたしません。と申しますのは、他の点ではどのような欠点があるといたしましても、私自身、自惚れではございませんが、あの人の取り柄として認めましたような特質を心の中に持ち合わせているつもりだからです。それだけに、仮に二人が一緒になるといたしまして、あの人にそのような特質が見られない時にも、私は平気でいられることでしょうね。ですから、気前の良い妻と一緒になった夫がけちん坊ではなく、また、妻を抑えつ

けようとするのではなく、その行いのすべてを評価しているのでしたら、夫としてはそれで満足ということになりましょう。逆に、気前の良い夫が倹約好きの妻を持つことになりますと、両方にとりまして一番良いのですけれどね。だって、片方が与え、もう一方も与えているのでしたら、二人に分別があって、互いに意見の交換をするくらいに十分な意思の疎通がないかぎりは、分相応にしていることも出来なくなってしまうかもしれませんからね。これこそ、節約についての天晴な信条といったところですわね。もっとも、このような言い方は、打算的すぎる母の考えと貴女の高邁なお考えとから学び取りましたことの折衷案なのです。でも、信条のことはこれくらいにいたしまして、実際の出来事に話題を移しましょう。

その日は一日中閉じ籠もっておりましたし、口にいたしましたわずかな食事も、一人で頂きました。でも、夜には、母がキティを使いに寄越しまして、おとなしく従う気があるのなら、夜食の席に顔を出せとのお達しでした。

私は降りてまいりましたが、その仏頂面たるや、まさしく壮観といったところです。しばらくの間は、母が何を尋ねましても、「はい」「いいえ」と答えるだけで精一杯の有り様でした。

そんな態度をしても、自分には何の効き目もないと、母が言っておりました。

ぶっても、私に効き目はないでしょうねと、私も申しました。

母が申しますには、私の大胆な反抗に挑発され、手を叩く気になったというのです。そして、そんな気を起こして済まなかったと言っておりました。でも、文通をすっかり止めてしまうか、それとも、取り交わしたものを全部見せてくれるか、そのどちらかにしてほしいと、再び言い張っておりました。

私はどちらもするわけに行かないと答えました。卑劣な考えの人たちから唆されて、悲嘆にくれる友人を見捨てるような真似は、私の好みに合わないし、信義にも悖る、と言ったのです。

母は、やれ孝養心だ柔順さだ、子供としての感謝の念だのと、母親じみた言葉を手を変え品を変え、並べ立てておりました。

仮にも貴女が操を奪われているとしたら、あまりにも厳しく、理不尽なまでに孝養心を強要されたことにその原因があるのだと、私は申しました。私が結婚しても良い年頃になっているのでしたら、自分で友人を見つけることが出来るし、その友情を温めて行くことも出来るのだと考えてもらいたい、特にこの場合は、相手の方というのは女性であり、しかも、その人とのお付き合いにつきましては、母自身も、このように悲痛な情況に至りますまでは、私がこれまでに結びました交遊関係の中でも一番有益でためになるものと考えていたはずだ、とも言ってみました。

取り柄が大きいほど、行いの悪さは際立ちますし、才能が立派であればあるほど、その人を手本にした時の害は大きくなるものだ、というのです。

子としての務めの他にも、守らなければならない義務はある、と私は申しました。そして、苦しんでいる友達を見捨てたりする必要のないことを、とりわけ、友達の苦悩の種となっている人たちに唆されて見捨てるようなことにならないよう願っている、と言ったのです。また、次のようにも話しました。どちらもおろそかにすることなく、両方の義務を実行出来ると確信しているのに、そのような条件を私の義務に付け加えるのは、まことに

無情な話である。また、筋の通らない言い付けは（御免なさい。またぶたれるとしても言わせていただきます、と言葉を挟みましたが）一種の横暴であるし、関係しているのは一人の女性だけで、呪わしい男性は問題になっていないというのに、この年齢になっても自分の意思や選択の自由を認めてもらえないとは、思ってもいなかった、とです。

母の言い分の中でも一番の切り札となっておりましたのは、私たちが交わしております手紙を母に読ませるのは一切勘弁してほしいと、私が頼んだことなのです。この点には母もずいぶん固執しておりまして、貴女は世界一謀りごとに長けた男、そして、母が耳にしておりますところでは、お気に入りのヒックマンさんを笑いの種にするような、そんな男の手中にあるわけですから、このような文通を続けていると、貴女とか私とかが思いもしなかったような、とんでもない結果を招かないともかぎらない、と言うのです。

お分かりでしょう。ヒックマンさんのお陰で、私の立場はますます悪くなってしまうわけです。私たちが交わしておりますものすべては、母が目にいたしましても差し障りはないのです。ただ、それでは貴女のお気持ちを束縛して、自由に筆をお執りになれなくなるでしょうし、私も思いのままに書くことが出来なくなるのは承知しておりますからね。おまけに、母は相手側としっかり手を結んでしまっておりますから、いろいろな憶測や決めつけ、無理なこじつけや非難、そして、まったく一方的な解釈などが、私を悩ませようとして絶えず持ち出されるでしょうし、その挙げ句、ひっきりなしに二人で言い争いや詰り合いをしなくてはならなくなると思うのです。

それに、この狡猾な人でなしが、人間の心の高貴な面すべてに亘りましてはるかに勝ち優っております人を、見事に出し抜いたとも言えるのですから、そんなことを母には知ってもらいたくないわけです。

貴女の寛大なお気持ちやお考えの高貴さにつきましては、重々承知いたしてはおりますが、この文通を思い止どまるようお勧めにはなりませぬよう、何卒お願いいたします。

先に触れました争いのすぐ後で、ヒックマンさんがお役に立ちたいと申し出てくださいました。お申し出をお受けいたしましたが、その点はこの前の手紙からもお分かりいただけるでしょう。あの人は、とことん母を敬っておりますのに、母は私たちどちらにも不人情なことをしていると考えておられるのです。私たちの文通は容認出来るし、そればかりか、私の友情の固さには感心するとも言ってくださいました（勿体ぶっているようにも思いましたが）。そして、貴女の色男さんのことはあまり良く思っておられないのですが、私のことはすっかり買い被っておられるものですから、折に触れての私からの助言や情報は貴女のお役に立つというお考えで、そのことを思うと、貴女がどちらも得られずに苦労なさるのは、まことにもって残念な話だ、と言っておられました。

ヒックマンさんのお言葉は概ね好ましく思われました。全体の調子が好感の持てるものであったことも嬉しく思います。でなければ、「容認」などという台詞につきましては、問い詰めて上げなければいけないところでしたわ、本当に。私に話しかけます際には、これまで絶対に許さなかった言い方ですからね。これでお分かりでしょう、男がどういうものなのかは。男というのは、好ましい奉仕を行う力を女の人が与えてくれたことに気づきますとすぐに、女の人の振舞いを「容認する」などと、偉そうに言い出す始末なのですからね、まったく。その気になれば却下出来るのだという意味合いが、そこには隠されているのですわ。

貴女が縁続きの人たちとの和解をどれほど望んでおられるのかということ、そして、ラヴレースには一切お世話になっておられないことも母に話しました。

後のほうの主張がどんな結果を伴うか、注意することだと母は言うのです。また、和解のことで母が承知しておりますのは、皆さんに条件などをつけようとはなさらず、おとなしく戻って来られる以外にはないということであり（そして、それが当然だと言い張っております）、そうなされば、ラヴレースとは関わりのないことをお示しするのには一番良いだろう、と言っております。

母が考えております貴女の務めとはどのようなものなのか、お分かりですね。

ヒックマンさんのご自宅宛にしていただきますこの次のお手紙は、ロンドンからのものとなるのでしょうね。

神様が貴女の操と安全とをお守りくださいますよう祈っております。

着替えのことはどのようになさっておられるのでしょうね。見当もつきません。

皆さんそのおつもりのようですが、貴女に苦しい思いをさせるなんて、貴女の縁続きの人たちは一体どういうお考えなのでしょう。驚くばかりです。お気持ちなど無視して、貴女をあの男の腕に投げ込もうとしているように映ります。

急がねばなりませんので、これはロバートに届けてもらいます。ただ、重ねて申し上げます。これまではお断りになっておられますが、私に出来ますかぎりの便宜を図らせていただきとうございます。さようなら、大好きなお友達。変わることなく、

親愛の情と誠意とを添えまして、貴女の

アナ・ハウ

手紙　三十七

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月二十日　木曜日

耐え難いものとは申せ、自分自身の心配ごとがすっかり心を占めてしまいまして、大切なお友達に向かって、ある件でのお振舞いに心から不満を覚えております旨を申し上げるべく、二、三行認めますための時間的なゆとりも見つけられないようですと、私はお付き合いをいただきますのにはまったく相応しくない人間なのだと考えねばならないと思います。気高いお心ゆえに過ちを犯しておられるわけで、気高さそのものを意識なさるがゆえに過ちを見落としていらっしゃるのでしょうが、どなたにも増してそのことが嘆かわしく思われますのは、不幸にも、私自身がそのきっかけとなっているからでございます。

お母様との争いの件にお触れになりますと、私が心配することは分かっておられるとのお言葉でした。そして、気を揉んでおりますのをわざわざ知らせるような真似はしないようにとのご命令でしたね。

このように、前もって禁止なさることなど、これまでにはございませんでしたわね。ご自分でも認めていらっしゃるその激し易いところや短気なところを、良識がおありですから気になさるのでしょうが、私がお諫めいたしますと、だからこそ私のことがますます好きになるのだと、よくおっしゃってくださいました。とても惨めな状態に身を落とし、不

幸な境遇にある私ではございますが、仮にも顧慮に値する判断力を少しは持ち合わせているといたしますと、これまで同様、今でも耳をお貸しいただく価値はありましょう。と申しますのも、他のどなたに向ける場合とも同じ程度に、自分自身に対しましてもその判断力をぶつけることが出来る状態だからです。それに、私の過ちには人に感染するところがあるようでして、そのため、貴女も禁止に背いて文通を続けるお気持ちになられたわけですから、そのことについてお諫めいたしますのも当然ではないのでしょうか。貴女が背かれた結果、どのようなことが生じるといたしましても、それは私の間違いを大きくするだけのことですし、この間違いは、こんなにも不幸な枝を次々に伸ばす不吉な根になぞらえられるものなのですからね。

大好きなハウさんのもののように気高く、強固で揺るぎない友情、どのような災難、どのような苦難に見舞われましても弱まることなく、友人の不幸に接していよいよ強まる友情を育むことが出来ますのを誇りに感じられるような心の持ち主、そのような心の持ち主なら、お引立てを得ている友人の善意の諫めごとに気を悪くなさるようなことは有り得ないと思うのです。ですから、この件につきまして忌憚のないところを申し上げますが、弁解はいたしません。また、忌憚のないことを申しますのは、特にこの場合、私に唯一残されております慰めを自ら奪い去り兼ねないほどに、完全に私心を離れました愛情から出ておりますことだけに、弁解をする必要はなおさら少ないように思うのです。

貴女も認めておられる不機嫌な態度、ご覧になるのは当然のこととお母様が思われた手紙をその手からもぎ取り、白状しておられますように、お母様の目の前で燃やしてしまわれたこと、また、貴女の友人のため、あれだけ進んでご指示に従おうとしておられる男性とお会いになるのを拒否なさったこと、しかも、このようなことをただただお母様を困らせるためだけになさっておられるのですからね　…　ご自分の本分についてとてもよくご存じの方ですのに、貴女が触れておられる数々の落ち度の、その半分にも満たないこの手短な要約に照らしましても、このような過ちは許されて良いものだとお思いでしょうか。

以前のお母様は私のことを高く買ってくださっていたのです。そのこと自体、お母様のお考えがこれまで以上に尊重されなければならない理由にはならないでしょうか。そのようなご評価を失いましても当然至極なことを私がしたと、お母様はそのように考えておられるのですもの。好意的な先入観も、不利に働く偏見と同じことで、完全に克服するのは難しいものなのです。だといたしますと、今回のことでは当事者にはなっておられないお母様のお心を、こうもすっかりと私から離れさせてしまいました過ちというのは、お母様にはよほどひどいものと映ったに違いないのです。

子としての務めの他にも守らなければならない義務はある、と貴女はおっしゃっておられます。でも、それこそがすべての義務に優先する義務でなければいけません。貴女が生をお享けになる以前からの義務だと申しても構わないでしょう。それに、どちらを優先すべきか競い合うといたしまして、子としての務めに道を譲ってはいけない義務など、果たしてあるのでしょうか。

友への責務と子としての義務とは、どちらもおろそかにせずに成就出来ると、貴女はそう信じておられます。お母様は別のお考えを持っておられるのです。これらの考え方から引き出されます結論は、一体どのようなことになるのでしょうか。

自分の取りました行動のため、私がどれほど評判を落としてしまったか、お母様も世間

の皆さんももっと立派なことを期待しておられただけに、それを目にしておられるお母様が貴女から目を離さないようにしようと思われたといたしましても、尤も至極なことではないでしょうか。不幸というものは別の不幸を引き寄せるものですし、それがどこでお終いになるのかにつきましては、お母様にいたしましても、あるいは、どなたにいたしましても、どうしてお分かりになるでしょうか。

他の人の間違った行動を弁護するとか、その罪を軽減しようとする人は［お母様は貴女との間で問題となっております件をそのように見ておられるに違いないのです］、咎められても致し方のないような意向とか、判断力の弱さとかを示していることになるのではないでしょうか。また、そのような人は、以前のお手紙で私に向けられました貴女ご自身の言い方を使わせていただきますが、同じ「動機」と「挑発」とがあれば、きっと同じような過ちを犯していただろうと、口さがない人たちが考えますのを、お母様は心配なさるかもしれないのではありませんか。

娘に対しましては、その娘には分別があると、どれほど大きな評判を得ているといたしましても、両親は油断のない目配りを続けねばならないものですが、その証として、ここ二、三ヶ月の間に私が若い身空で提供いたしましたものよりも顕著な例は（私が出会いました尋常ならざる挑発の数々のことは別にいたしますが）、人の一生のうちに果たして有り得るものでしょうか。

十六才から二十一才までと申しますと、若い女性にとりましては、この目配りが他の年頃よりもさらに必要とされる時期なのではないでしょうか。と申しますのも、私たちがおしなべて男性の目を引き、求愛の対象となったり、珍しいことではございませんが、攻撃の的にされたりいたしますのは、その時期のことではないでしょうか。それに、私たちの行いの善し悪しが、その先一生涯ついてまわります評判の善し悪しを決めてしまう時期なのではないでしょうか。

またこの時期は、私たち自身のせいで危険を招くことが最も多い年頃ではないでしょうか。特定の男性を特別視しがちになるからです。

そして、私たちの危険が内からも外からも増してまいります時に、親というものは、用心を倍にもしなければならないことを知っているのではないでしょうか。そうだといたしますと、用心を増すのは当然のことなのですから、背丈も伸び、一人前の女に成長しているからといって、それを窮屈に感じたりして良いものでしょうか。

もしもそのようなことが理由になるのでしたら、お教えいただきたいのですが、良いお子さんが親への義務を解き放されたと結論して構わない背丈と年齢は、正確にはどの段階なのでしょう。また、獣の母親を真似て、人の親が子供への気配りや慈しみをすっかり捨て去って構わないのは、どの段階なのでしょう。

貴女にはそんなにも辛いことなのですか、子供扱いをされますのは。立派な母親にとりまして、一人前に育った娘さんを残念ながらそのように扱わねばならないと思ったりいたしますのは、負けず劣らず辛い話だとお考えになることは出来ないのでしょうか。

お母様が貴女で、貴女がお母様の立場であったといたしまして、もしも貴女のお嬢さんが、貴女がお母様になさったと同じように反抗した場合、禁じてあったわけですから、掴んでいる手を離して手紙を渡すようにさせるためでしたら、貴女のほうでもお母様と同じように、お嬢さんの手を叩こうとなさったとは考えられないでしょうか。

貴女が挑発なさるからこそ、このような酷いことをなさるお気持ちになったのだと、お母様はそう言っておられますが、おっしゃるとおりだと思います。そして、済まなかったと言ってくださいましたのは、非常に遜ったお言葉なのです（そして、貴女からは、その点に相応の注意が向けられておりませんね）。

幾つになりましても、未婚のうちは（と申しますのも、結婚いたしますと私たち、子としての務めをおろそかにするわけでは決してありませんが、別の種類の保護を受けることになるのですから）、両親の拡げてくださる翼が、禿げ鷹や鷹や鳶、そして、他の忌まわしい猛禽類から身を守りますためには、一番必要で一番有効な避難場所であることが分かるはずです。その鳥たちは、用心深い本来の後見人、そして、保護者でもある人たちの目や注意の届かないところで、私たちが独り歩きをしておりますのを見つけましたなら、すぐにも捕まえて殺してやろうと、そんな狙いを持って頭上を舞っているのですからね。

今は反対しておられますあの尊敬申し上げる方からさえ、かつてはあんなにも同意を得ておりました文通ですから、続けてはいけないとのお言葉は、貴女には厳しい響きを持つかもしれません。でも、身内の者たちでさえ私を見捨てているくらいですから、私の過ちというのは、文通を続けますと貴女の評判にかげりをもたらしかねないような、そのような性質のものだとお母様がお考えなのでしたら、その厳しさは甘受しなければいけないのです。貴女が文通に固執なさることから生じた最初の成果が、貴女のおっしゃる「壮観ともいえる仏頂面」と聞き分けのない反抗なのをご覧になりますと、お母様の側でも、ご自分のお考えを通そうとなさって、いよいよ執着なさるのではないでしょうか。

冗談のおつもりであんな言い方をなさったこと、そして、このような言い回しが貴女とのお話や文通に楽しい味を添えるものであることは承知いたしております。でも、宜しいですか、今回のは冗談には馴染まない事柄なのですよ。

こんな退屈なお説教にもう一つ付け加えさせていただきますが、どうしても賛成いたしかねることがいくつかございます。お父様とお母様の夫婦仲について書いておられることです。時折のことだったのでしょう。ほんの時折はあったということでしょうね。おそらく、頻繁すぎたのでしょうけれど　…

ハウ氏へのお振舞いに何かいけないところがあったとしての話ですが、どのような落ち度であれ、お母様がその責任をお取りになるといたしましても、他の人にはともかく、ご自分のお子さんに対して責めを負われることはないのです。立派な紳士でしたわね。お父様の霊を崇めていただかねばなりません、とだけ申しておきます。ただ、お母様へ向けられた怒りのお気持ちは、ペンを手にしておられた時に蘇ってきたお父様への尊敬の念とは何の関係もないことなのかどうか、お胸の内をお調べになるべきではないでしょうか。

完全な人などおりません。お母様が故人の不都合なところを覚えていらっしゃるのもあまり望ましいことではございません。それでも、だれのことで、どんなきっかけでお母様は思い出されたのか、貴女もその点に念を押してもらおうとなさったりすべきではありません。お二人の間にありましたことは貴女にはお分かりにならないのですし、また、分かろうとなさるべきでもございません。後に残されました者にいたしますと、不愉快な思い出がさらに苦々しく感じられ、忘れることも出来なくなるのですからね。

手紙　三十八
クラリッサ・ハーロー嬢から　［承前］

でも、この件を話題にするのは止しましょうね。もう一つのことでしたら、貴女らしい陽気な脱線のことですが、もっと楽しく（とは申しましても、先のものよりも賛同出来るというわけでもございませんが）話を進められるはずです。「容認する」という言葉について、ずいぶんと勿体をつけておられる件です。

群を抜く心の広さで世に知られるお嬢様ですのに、別け隔てなく寛大な態度をお取りにならないのはどういうわけなのでしょうね。不思議ですわ。賢明さ、分別、感謝の念からいたしまして、寛大さに欠けることは許されない場合に、そのことを忘れてしまわれるのは何故なのでしょう。ヒックマンさんが（貴女も認めておられるように）立派な心の持ち主であることは事実です。ずっと前からそのことを存じ上げていなければ、あの方に好意をお寄せになるよう、私のアナ・ハウさんにお勧めするようなことは決してしなかったはずです。貴女のところで楽しく過ごさせていただきました折にも、気掛かりになることが幾度となくございました。貴女のいらっしゃらない時には上手に会話に加わっておられたあの方が、貴女が仲間に入られると、途端に黙り込んでしまわれるのですからね。

このことは以前お話ししてありましたね。それから、貴女があの方にだけ横柄な態度をお取りになることにつきましても、ある解釈が可能なことを、一度、それとなくお伝えしてあったはずです。あの当時、そのような受け止め方をされますのは、貴女のプライドが許さなかったことでしょう。あの方の人気が上がるのと同じだけ、貴女の信望は落ちてしまったでしょうからね。

宜しいですね。ヒックマンさんは控え目な男性なのです。控え目な男性というのは、私が見ますところでは、間違いなく（機会に恵まれなかったのでなければ）心の中に宝を秘めておりますから、励ましという鍵さえあれば、きっと心を開いて、輝きを放ってくれるはずなのです。一方、自惚れた人というのは、自信を持ちますためにも、自分を尊重するのと同じくらいに周りの人たちを見下げねばなりませんので、どのような話題を扱いましても、その道の権威みたいな顔で話し出し、化けの皮を剥がされても上手に切り抜けられる自信があるものですから、熟知しておりますこと以上に口に出してしまうのです。

でも、控え目な人というのは……あゝ、ハウさん、控え目な女性は控え目な男性を特別に尊重し、そのような人との結婚を願うべきではないでしょうか。その人の前で、そして、その人に向かって口を開きましても、こちらの話すことすべてを高く評価してくれるのは確かなのですし、こちらの考え方につきましても、間違いなく公平で丁重な扱いをしてもらえるのですからね。ですから、女の人に好ましい自信を吹き込んでくださるに違いないのです。

私は何という籤を引き当ててしまったのでしょうね。私たちはだれでも教師みたいな口をききたがるものですが、このような話題につきましては、私、今まで以上にお話をしたり、筆にしたりする資格があるはずです。でも、出来ることでしたら、私の件は止めにいたしましょう。書き始めました時には、貴女ご自身に関わる事柄だけにするつもりでおりました便りなのですからね。

私の大好きな大好きなお友達らしくもございませんわ。他の人たちがなすべきことにつ

きましては、ずいぶんスラスラとお話しになるのですもの。それに、母親がなすべきであったことについてまで　…　でも、前に貴女がおっしゃったのを覚えておりますわ。様々な技能を修得するのにはそれぞれ別な才能が必要なように、書き物の場合にも同じことが言えて、自分では優れた文章を書くことが出来なくても、他人の書き物についてはヘボ批評家でない人もいる、とのことでしたわね。でも、こんなにも批判をしたがる傾向を、人間の本性に当てはめて説明させていただきます。人間の本性というのは、その短所を（つまり、自らの短所ということですが）痛感しているものですから、矯正するのを好むということではないでしょうか。ただ、その才能を用いるに当たりましては、内側というよりはむしろ外側に目を向けようとするのです。言い換えますと、自分の心の吟味よりも、他人のあら捜しに専念しているということでしょう。

それから、ここで一言付け加えさせていただきます（でも、気遣いもありまして、不本意ながらといったところです）。やり繰り上手の奥さんたちのことをずいぶんひどいおっしゃりようですし、また、その種の女性からですと、夫は自慢に出来る利点も数々得られるけれど、同じくらい不利益も被るかもしれないとのご意見に、私も賛成はいたします。でも、どこかのお母様を念頭に置かれたため、貴女のペンに毒気が染み込んでいたということではないのでしたら、おそらく、ハートリー夫人はもっと穏やかな扱いを受けていたことでしょうね。

ご親切に、そして、改めてお申し出のございましたお金の件につきましては、もう一度次のように申し上げましても、どうぞお怒りのなきようお願いいたします。つまり、私たちの間ではこれまで、その種のことは一度もなかったことだと、手加減とか遠慮とかは一切なしに、是非とも言明していただきたいということでございます。どうしても応じてもらいたい問い掛けをなさいます時の、お母様の強い言い方は存じております。でも、約束いたしましょう。その必要が生じました際には、貴女以外のどなたにもお世話にはならないつもりでおります。

手紙　三十九
クラリッサ・ハーロー嬢から　［承前］

ところで、貴女が言い渡されました禁止のことにつきまして、二言、三言申し上げましょうね。これまで頻繁に触れてまいりました事柄ですが、粗略な扱い方をしておりましたのは、お引き受けする自信がなかったからなのです。仮にお引き受けいたしましても、自分の振舞いを非とする判断に至ることは分かっておりますからね。

この文通を断念するよう働き掛けたりしてはいけないとのご命令ですね。それに、ヒックマンさんがご親切にも容認してくださっているとのことですね。あの方宛で文通を続けることを許してくださるなんて、まことに有難いお話だとは思います。でも、これで本当に満足というわけでもないのです。

私は詭弁を使うのがひどく不得手ですし、心の重荷を打ち明けることの出来ます人は貴女しかおりませんので、前にも触れましたとおり、お便りをする嬉しさから、自分の願っておりますことばかりに話が偏ってしまうかもしれません。そういうことがなければ、今

後ともお便りいたしますのを許していただきますことに、私といたしましては、喜びを感じるだろうと思います。承諾していただきたいと願いましても、率直で包み隠しのない心を装いました、狡猾なごまかしにはならないということでしたらね。また、私が間違っております時には間違いを正し、正しい時には承認し、迷っております時にはお導きくださるようなことだけで結構ですから、ヒックマンさんの手で、表書きばかりではなく、時々はお返事もいただけたら嬉しいのです。こうしていただけますなら、私の前に横たわっております困難な道も、もっと確信をもって進むことが出来るようになることでしょう。と申しますのも、他の人たちからお咎めを受け、どれほど苦しい思いをするといたしましても、いつも貴女に良く思っていただけるのでしたら、どのようなことが身に降りかかりましょうとも、とことん不幸だなどとは感じないはずだからです。

それに、実際のところ、書き物を控えますにはどのようにしたら良いのか、分からないのです。今は、他のお仕事も気晴らしも、何一つございません。また、お届けする相手の人がいなくとも、書き続けねばならないのです。この身に降りかかります重大事のすべてを、そして、いずれ役立ちそうな考えや行いのことごとくを書き留めておりますうちに見出しました数々の利点について私が認めておりますのを、貴女は何度も耳にしておられますね。と申しますのは、こうすることで文章のスタイルが身につき、素直な心を開き、膨らませる助けとなるばかりではありません。どなたもお分かりになるはずですが、考えているだけですと、たくさんの良い考えも霧散してしまいますし、また、多くの立派な決心も、おそらく他のさほど芳しくない考えのために忘却の彼方へ追いやられ、立ち消えになってしまうものなのです。ところが、折々にしようと思っておりますこととか、行いましたこととかを書き留めますと、その決心とか実際の振舞いとかが目の前にあるわけですから、守り通したり引っ込めたり、手直しをしたりすることが出来るのです。それに、いわば自分との契約を結んだと言っても良いわけですから、この先人生を送ってまいります上で、後戻りするのではなく、向上することに自ら署名したことにもなるのです。

ですから、そうして構わないのでしたら、貴女には喜んでお便りを差し上げたいと思うのです。単に書き物をしたいという強い気持ちを満たそうとするだけではありません。書きます物の中に、何かの目的を見出せるとか、だれかお友達に楽しんでいただくとかいったことになりますと、元気が一層湧いてくるだろうとも思うからです。

でも、内容をすべてお見せするということで、お母様も私たちの文通を許してくださるのでしたら、また、お母様がたった一つだけ条件を認めてくださるのでしたら、承諾いたしましても構わないかもしれませんわね。

いかがでしょう。内容をお知らせいたしましても、他の人にはお漏らしになりませぬようお願いをいたしまして、お母様にはご同意いただけないものでしょうか。

身内との和解の見込みが少しでもあるのでしたら、自分のプライドのことなどあまり気に留める必要はないのですから、貴女のおっしゃるように、ひどく「出し抜かれ」てしまいましたことを、どなたに知られようと構わない気持ちなのです。その場合でしたら（ラヴレースさんと別れた上での話ですが）、お母様にも身内の者たち皆にも、いきさつはすっかり打ち明けるつもりです。自分の評判のためにも、また、皆に納得してもらいますためにも、そうするのが義務と考えております。

でも、そのような見込みはないということでしたら、不承不承ラヴレースさんと家を出

ましたことや、私を脅して連れ去ろうとしたあの人の手管のことを知ってもらいましたところで、私にとりましては何の役に立つでしょう。お母様が暗に示しておられるところでは、身内の者たちは、私が（私の言い分の正しさを証明いたしますためにも）条件などをつけずに家に戻り、皆の思いどおりにこの身を委ねることを主張しているとのことでしたね。私がためらったりするようですと、兄のほうでは、私の秘密を守るよりも、むしろ勝ち誇った顔を向けることでしょう。お会いしたのを後悔している私のことは、今でもプライドが許さないのですから（お会いしていなければ、私はソームズさんの妻になっていたはずとお考えですし）、きっとラヴレースさんも無礼な扱いをすることでしょう。このように、避難すべき場所も保護の手もすべて奪われ、不義密通を企む者たちの嘲笑の的となってしまうでしょうし、女性の恥と思われましても、尤も至極に見えてしまうことでしょうね。一方、大っぴらな恋情も結婚につながることになりますと、いかに慎みのない形で人目に立ちましても、一般に当然と思われております以上に、いろいろと申し開きが出来るものなのです。

でも、お知らせいたしますことをお母様が内緒にしてくださるのでしたら、今まで筆にいたしましたもののすべて、そして、これから筆にいたしますもののすべてを、どうぞお見せいただきたいと存じます。もしもその場合、これまでの私の振舞いをご覧くださいました上で、重い罪に値するとは思われないようでしたら、貴女のものばかりではなく、もしかいたしますと、お母様のご助言にも恵まれるかもしれません。また、お母様のご好意を再び取り戻すことが出来ました後に、お咎めに値しますことを今後故意にいたしました場合は、お母様は勿論のこと、貴女のご好意を永久に拒絶されましても、それに甘んじて従う覚悟でございます。

貴女のおっしゃり方ですと（お母様がご覧になるに違いないと承知しております事柄を筆にすべく、腰を下ろします場合には）、私の心を束縛することになる、という点に関してですが、すでに心は束縛されているのです。それに、私に不利な偏った解釈をなさるのではないかと心配なさるなんて、お母様に対してそのように無礼な考えをお持ちになってはいけません。先入観なしにご自分のお考えだけに任せられておりましたなら、お母様は私に好意をお示しくださったはずだということ、これは、貴女と私、どちらにいたしましても疑いようのないところなのです。また、叔父のアントニーも、おそらくそうしてくれただろうと思うのです。いいえ、思いやりの心をもっと遠くまで向けても構いません。と申しますのは、時々はそんな考えを持つのですが、兄と姉が次の点を完全に確信いたしましたなら、つまり、私は二人の利害と衝突しそうだと、そんな心配をする必要もなくなるほどに、両方のおじが私に対して抱いておりました評価を落とすことが出来たと確信いたしました場合には、和解こそ望まないかもしれませんが、許しを与えることに反対はしないだろうと思うのです。とりわけ、私が少しばかり犠牲を払うことにいたしますとね。あの人から完全に解放され、関わりがなくなりました時には、請け合っても構いませんが、それくらいのことならしても良いという気持ちなのです。ご存じのとおり、世俗的な富に対しましては、私の心に適った事柄を行う力を増大してくれるという点を除きますと、これまで一度だって価値を置いてはいなかったのです。そして、その力を拒まれるようでしたら、今もそうしておりますが、自分の好みを抑えねばならないということです。

ただ、兄と姉についてこれまでお話しいたしましたことの中で、私に上辺を飾っている

ところがある、などとはお考えになりませぬようお願いいたします。精々好意的な受け止め方をいたしましても、十分に容赦のないものだと確信いたしております。それに、中立な立場の人でしたら、私が身内の者たち全員の愛顧を失いますよう二人が画策いたしましても、一族の名誉を守るという意味で、以前よりもはるかに正当化されることだとお考えになるはずです。

でも、先の話題に戻りますと、いかがでしょう、前述のことを条件に、私たちの書きますものを全部ご覧いただきまして、お母様は文通を許してくださるかどうか、打診していただきたいのです。でも、お許しいただけない場合ですが、もしも、私のために本分をないがしろにしていただきたいなどとお願いするようでは、貴女に対する私の愛情にもひどく利己的なところがあることになってしまいますわね。

ところで、この退屈なお説教では遠慮のないことばかり申し上げてしまいましたが、その点につきまして、一言申し添えます。お許しくださるものと厚かましくも考えておりますが、それと申しますのも、私たちのような基盤の上に築かれております友情はあまり例を見ないものだからなのです。私たちが基本としておりますのは、「必要に応じ、忌憚なく叱責を加え、感謝の念をもって叱責を受けること。それは、間違いを正し、言動においても態度においても、過ちを認め改善するための、そして、人物、事物、状況に関し、それぞれが下す判断を互いに修正し、承認するための機会を得るためである」ということでしたね。しかも、このすべては、次のような配慮に基づくものでした。つまり、「真の友人に期待して構わない、あの優しさをもって矯正されるというのは、無知か片意地か、そのいずれかを押し通すことによって、嫉妬深く、おそらくは悪意を抱いている、世間の人々の非難に身を晒してしまうのよりは名誉なことであり、同時にまた、はるかに望ましくもある」ということでした。

でも、このようなこと、改めてご注意申し上げる必要はおそらくございませんわね。何度も繰り返されておりますお願いですが、貴女のほうでも私の愚行や落ち度に容赦をなさらないよう、繰り返しお願いをする必要はないのと同じようにですわ。

変わることなき愛を込めまして、貴女の

Cl. ハーロー

［前掲の手紙への補遺］

私自身に関わります事柄の詳細につきまして先の便りで何か触れますのは、出来ることでしたら避けたいと、そのように申し上げましたね。

別にもう一通認めまして、あの人とはどのような状況なのか、お知らせするつもりでおります。ただ、宜しいでしょうか、禁止が続いております間は、その一通と貴女からのお返事（私の手紙の内容につきまして、ご助言をいただきたいのです）、それに、私が叔母宛に書きましたものの写しとを、私たちの間で交わされます最後のものとさせていただきたいのです。

私が心配しておりますのは、大変心配なのですが、不幸な境遇に流されまして、言い逃れをしたり、少し気取ってみたり、また、いつも喜びと感じておりましたし、他のあらゆる事柄よりも優先させておりました、あの飾りのない真実を曲げるという罪を犯しているのではないかという点なのです。でも、一言お許しをいただきたいと思います。これは貴

女のためのことですし、また、私たちの文通から生じかねないと心配しておられます悪い結果につきまして、お母様のご懸念を軽減するためのことでもありますが、先に触れました点で私がいつ間違いを犯すといたしましても、その間違いを重ねることなく、過ちがこの身に染みついてしまいませぬよう、失地回復の努力を惜しまないつもりだということでございます。

ソーリングズ夫人の熱心なお求めがあったものですから、ロンドン行きは延期いたしました。でも、次の手紙で触れますが、引っ越しは月曜日と決めております。

次の手紙も書き進めてはおりますが、思わぬ機会に恵まれましたので、これはこれだけでお届けすることといたします。

手紙　四十

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

四月二十一日　金曜日　朝

母は貴女の申し出られた条件に応じようといたしません。私自身からのもののようにして仄めかしてみたのです。でも、ハーロー一味が（御免なさいね）すっかり母を仲間に引き入れてしまっているのです。母が申しますには、それは私が練った計略で、ご両親に背く形で母を貴女の側に引き摺り込もうとするためのものだというのです。そして、母自身のためでもあり、そのようなことにならぬよう、十分気を配っているとのことでした。

母と私のことにつきましては、もう一度お頼みいたしますが、どうかあまりご心配なさいませぬよう、お願いいたします。十分うまく折り合ってまいりますからね。時にはそっぽを向き、時には歩み寄りながらですけれどね。貴女のことが問題になっておりません時でも、いつもそんな具合だったのです。

ただ、お咎めのお手紙は本当に有難いことと、その一行一行に心から感謝いたしております。癇癪が起こりそうになりましたら、そのたびに読ませていただくつもりです。

それでも、素直に白状いたしますと、最初目を通しました時には、少々たじろいでしまいました。でも、よく読み直しますごとに、そのようなことが可能ならばの話ですが、それまで以上に貴女をますますお慕いし、敬い申し上げるようになるものと思います。

ただ、私にも貴女より有利な点が一つあるように考えますので、この手紙でも、今後認めますすべての手紙の中でも、その有利さを維持しようと思っております。言い換えますと、私も貴女に負けないくらい無遠慮なことを言わせていただくつもりですが、私の場合には、無礼の段をお詫びする必要があるようにはまったく思われないということです。

でも、私のことをそのようにお考えになりますのは、私の熱しやすい気性をそれとなく批判された手短なお言葉もございますが、お優しいご気性のなせる業です。女性にとりましては、優しさは決して欠点などではないとのご意見ですね。私といたしましても、少々でしたら、正当な、あるいは、挑発されての怒りやすさは欠点にならないと思います。でも、これでは、私たちのどちらにとりましても避けようのない、また、おそらく、避けたいとも思いませんことを、両方で褒め合っているだけの話ですわ。私は自分の道を逸れるわけにまいりませんが、貴女とてそれは同じことです。どちらにとりましても、そのよう

な振舞いは苦痛の種となりましょう。だといたしますと、どちらにせよ、もって生まれた自分の性癖を是認いたしますのは、当然のことをして手柄顔をするのに他ならないのではないでしょうか。

でも、意見を一つ付け加えることにいたします。つまり、貴女のお人柄と私の性格とが正確に描かれました場合、私のもののほうがより自然なことは認めていただけるだろうということです。優れた絵では、明るい部分と同程度に、陰の部分も必要なのです。貴女のものは溢れんばかりの輝き、大変な華々しさに取り巻かれておりますから、本当に目眩くばかりですが、それを見習おうといたしますと、人は意気消沈してしまうのです。

あゝ、優しいご気性ゆえに、心卑しい世間のことで苦しまれたりなさいませぬよう、お祈り申し上げます。私の気性は激しいものですから、概して愛らしさに欠けてはおりますが、つけ込まれるようなことは一切ございませんので、これまでも口にしてまいりましたように、貴女と取り替えっこをしたくなる理由は何一つ見当たらないというわけです。

貴女みたいに、そんなにも素敵な気立ての人がお相手なのでしたら、母に反駁するような口のきき方をいたしますのは本当に許し難い話でしょうね。真実は真実ですわ。どうしてなのでしょうね、高貴な心の広さを備えた人にこそ相応しい賛辞を、心の狭い人が持ち去ってしまいますのは。私と同じように、皆さんが思っているままをお話しになれば（言い換えますと、称賛に値する場合だけに賛辞を贈り、非難を向けますのも、同じく相応しい場合だけにするということですが）、道義心とは申さないまでも、羞恥心が働いて、世の中は善くなるだろうと思うのです。いいえ、羞恥心があれば、一代か二代後には道義心も生まれてくることでしょう。本当にそうですわ。頑張ってくださいね。私は無理です。お慕いするのとほとんど同じくらいに、貴女のことを怖がってもいるのですからね。

でも、ただ黙って従わねばならない相手というのは、極めて寛大で高貴な心の持ち主だけなのだということを改めて証明する、そんな例を一つお示しいたしましょう。真実は真実だと先ほど申しましたのは何のことなのか、お分かりですね。

控え目で几帳面な人たちが相手の場合、時として不都合なことが起こるものです。貴女のおっしゃるところでは、ヒックマンさんは控え目な男性だということでしたね。懲らしめのお手紙を手渡してくれました時には、まことにご立派なお辞儀の仕方で、自己満足に浸っている様子でしたわ。[この律義なお方について貴女がおっしゃっておられることにつきましては、いずれそのうち二人で検討いたしましょう]あの人の勿体ぶった素振りも消えぬ間に、母が入ってまいりました。私はお手紙を読んでいるところでした。

怒ってみせたからこそ重きを置かれるようになったのだと気づきますと、四六時中腹を立ててみせたり、怒りをぶつける機会を探し求めたりするような人がいるものです。

「まあ、何でしょう、ヒックマンさん。まあ、何ですか、ナンシー[母が入ってきましたので、私はお手紙の包みをガウンとコルセットの間に押し込もうとしていたのです]。ちょうど今お手紙が届いたというわけね」と、母が言っておりました。一方、例の控え目な男性のほうは、「マ・ダ　…　マ・ダーム」と、とぎれとぎれにロバみたいな声を漏らしながら、その場を逃げ出して、決着をつけるのは母と私とに任せたものか、それとも、踏み留まり、正々堂々の闘いぶりを見届けるのが良いのか、分かりかねている様子でした。

言い逃れに嘘をつきますのも、パッとしない話だったでしょう。母は飛び出して行きました。私は反対側のドアから部屋を出ました。お手紙の中味を読むためです。独り残った

ヒックマンさんは、親指の爪を〈真っ白な歯〉で噛んでおりましたわ。

お手紙を読み終えますと、母を捜しにまいりました。思いやりに溢れた文面のこと、そして、禁じられたことは守ってほしいとのお言葉も母に伝えました。貴女の条件を提案いたしましたが、私自身からのようにして持ち出してみました。そして、先に申しましたとおり、断られてしまったのです。

母は、思慮よりも機知のほうが勝っている若い娘二人の間で、自分は悪し様に言われていると勘繰ったのです。それで、貴女のお気持ちの優しさに動かされるどころか、貴女のご意見も自分の考えを強化するためだけに利用しているのです。改めて禁止のことを口にしておりましたが、再度禁止を命じたことをお伝えする以外には、一切お返事をしてはいけないとのお達しでした。そして、お身内の方々が和解されるまで、禁止を取り下げる気はないとも付け加えておりましたが、まるでそのとおりのことを請け合ったみたいで、私にも従ってもらうと言うのです。

ご叱責いただきました点を思い、機嫌良くとは申せませんが、おとなしくはしていたのです。そこで、一言申し上げたいのですが、私たちの文通で意図されておりますのは善であって、そこから不都合が生じるようなことは考えられないのだという点を自ら納得しております間は、また、この禁止が元はといえば、このような災難すべてのきっかけとなりました、例の悪意に満ちた人たちから来ていることを知っておりますかぎり、そして、たとえお身内の方々と和解に至らなくとも、物の分かった人でしたらどなたも拒まない条件でのことですし、貴女の落ち度ではないのだということを存じ上げておりますかぎり、貴女のご判断に対しましても、また、立派なお教えにつきましても（これは、今回のことを除きますと、ほとんどすべての場合に当てはまるものと考えます）、心からの敬意を抱いているとは申せ、是非ともお手紙をくださいますよう要望させていただきたいのです。それも、このような禁止などはなかったように、事細かにお書きくださいますよう、お願い申し上げます。

このようなことをお願いいたしますのは、気紛れからではございません。強情さから来たことではないのです。言い表しようもないほどですが、心に浮かびますのは貴女のことばかりなのです。ですから、やはりお許しいただきたいのです。もしもお便りすることが何かのお役に立つというのでしたら、今後ともお便りを続けますことのほうが、母が禁止を言い渡しますのよりも正当化されるように考えたいのです。

ただ、精々お気持ちに沿いますよう、禁止命令を受けております間お返事を出すのは控えることにいたしますが、私の考えております友情と両立いたします範囲で、また、貴女のためなら当然の骨折りですし、私に出来ます骨折りと両立いたしますかぎりは、ということにさせていただきます。

ヒックマンさんの手を煩わせるという応急手段のことですが［ちょうど今、貴女のおっしゃる「控え目な男性」がいらしたところです。男性は控え目なのがお好きなようですから、あの人が貴女のご好意に与っていられますよう、努めてあの人とは適当な距離を置くことにいたします］、貴女の胸の内は分かっておりますわ。優しい方ね、貴女も。私があの人のことを大切に思うよう、仕向けるためですね。文通のことは、貴女がどれほど躊躇なさいましても、続行ということにさせていただきます。宜しいですね。あの人についてのご提案に私が応じなくても、文通には支障を来さないようにするためですわ。

是非とも申し上げなくてはいけませんが、私たちの間でこんなにも頻繁に名前が出ますのは、あの人にとりましても十分に名誉なことだと考えております。このこと自体、あの人に信頼を置いていることなのですから、あの人のほうでも、胸を張って濶歩し、〈真っ白な手〉と〈見事なダイヤモンドの指輪〉をちらつかせて見せることになるわけですし、この上なく仰々しい態度で、ご自分の尽力ぶり、役立つことを誇りに思う気持ち、勤勉ぶりや忠実さ、私たちの秘密を守るための工夫の数々、また、母に説明を求められた場合はかくかくの口実、しかじかの言い抜けを用いると断言したり、他にもその手の御託を五十も並べたりすることになるのです。そして、それに止どまらず、ご立派なハウ夫人の美しいお嬢様とやらのところへと、今まで以上に足繁く馳せ参じる口実や言い訳をあの人に与えることにもなるのではないでしょうか。

でも、貴女にお便りをしたくなりますたびに、あの人と差し向かいでご一緒し、私の控の間までお通しすることになりますと、私はただあの人に書き取りを指図するだけになるでしょうし、その間ずっと母のほうでは、私がいよいよあの人を本気で愛するつもりになっているなどと想像するでしょうが、お手紙を書く際の私の気持ち、そして、いわば私の心までですっかりあの人に知られてしまうわけですもの、正直に申しまして、そのようなことは到底いたしかねるのです。それに、たとえイギリス一の〈彼〉と結婚するといたしましても、文通の中味をお知らせるほどに、その人に敬意を表するつもりはないのです。

いいえ、間違いありませんわ。私たちの手紙の配達人だといって気取ったり、封筒に名を記すという名誉に与るくらいで、あの人には十分なのです。心配ご無用です。貴女も控え目な人とお考えのとおり、あの人はそれで満足するはずですわ。

あの人への優しさが足りない、影響力を悪用していると、貴女はいつもお叱りになりますが、でも、はっきり申しまして、どのようにしてそれを避けたら良いものか、分からないのです。お願いです。せめて今のうちは少し威張らせてほしいのです。時々は怖がられるようにするのを許していただきたいのです。お分かりいただけるでしょうが、今こそ私の時なのです。結婚いたしましてからこのような態度を取ったのでは、私にとりましてもあの人にとりましても、手柄な話とは申せませんからね。私が満足している様子を見せますと、あの人も喜んでおりますが、それは、私が不愉快な顔をいたします時に感じる苦しみがなければ分からない喜びなのです。

男の人たちも、女の人に劣らず、節度のある力の用い方は弁えていないのです。君主から農夫に至りますまで、それは常日頃から目にされていることではないでしょうか。時折はヒックマンさんを震え上がらせておかなければ、あの人のほうが私を怯えさせようと努力するはずです。神の造られた生き物すべては、多かれ少なかれ、互いに敵対しているのです。ライオンから逃げ出す狼も、次の瞬間には子羊を呑み込んでしまうのです。思い出しますが、別の一羽を（可哀相なおとなしい鶏、と私は思ったのですが）暇なし嘴でつついているシャモの若鶏にひどく憤りを感じたことがございまして、悪さをしているほうの鶏を捕まえてもらいました。そして、義憤からとでも申しましょうか、その場で首を捻ってもらったのです。こんなことをして、その後どうなったとお思いでしょうか。何ということでしょう。意地悪をしていたのがいなくなりますと、もう一方の鶏が途端に生意気になりまして、自分より弱い一、二羽を絶えずつつくようになったのです。精々つついて吊るされると良いんだわ、と私は言ってやりました。いっそ初めの鶏を生かしておいても良

かったのです。こういうのが獣の本性のようですからね。

不真面目なことをお話しして、申し訳ございません。貴女のお傍に行けたらと、本当にそう思います。これまでのように、思いきり真面目くさっておられる最中に笑わせて上げたいのです。お供いたしたいという私の申し出をお受けくださっていたら　…　でも、私の申し出は何一つ受けていただけないのですね。ご用心いただきましょう。私を本当に怒らせないことですわ。それに、ご存じでしょうが、私、腹が立ちますと、どなただって遠慮いたしませんからね。貴女のことは心から大切に思っておりますが、でも、どうしても正体を見せてしまいますし、それをいつも抑えているわけにはまいらないのです。

貴女のこしゃくな

アナ・ハウ

手紙　四十一

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月二十一日　金曜日

今朝早くラヴレースさんが、あの人のスパイからということで、兄の悪企みについての情報を知らせてくださいました。それをこともなげに受け止め、軽蔑した態度で扱っておられるものですから、あの人のことが一層気に入りました。正直申しまして、貴女からのご示唆がございませんでしたら、私のロンドン行きを急かせるための、あの人のちょっとした策略ぐらいに勘繰っていたことでしょう。ロンドンへまいりますのは、あの人自身が前々から望んでおられたことですからね。

例のリーマンの手紙の中からあの人が読み聞かせてくださいました部分は、貴女がロイド嬢のお話としてお書きくださったものとほぼ同じ趣旨でしたが、次のことが付け加えられておりました。スコットランドの商船の船長で、シングルトンという名前の人がこの暴挙の指揮を執る予定になっているという点です。

面識のある人なのです。兄の友人ということで、ハーロー邸に二度招待されたことがございます。見たところ本当に大胆不敵な様子をしておりますから、この人の考え出した計画に違いないと思っております。兄は私の取りました軽率な行動のことをだれにでも話しているはずなのです。と申しますのも、兄は、このように咎め立てをする尤もらしい理由が見つかります前から、私のことは容赦いたしませんでしたからね。

このシングルトンという人はリースに住んでおりますから、おそらく、私はあの港からさほど遠くないところにあります兄の屋敷へ連れて行かれることになるのでしょう。

これらの文面を合わせ考えますと、ラヴレースさんは豪胆な人ですから軽視しておりますが、私といたしましては、この企みを実行に移そうとする試みのことが少なからず心配ですし、その場合に生じかねない結果のことが気に掛かるのです。

大変に屈託がなく冷静なご様子に思えましたので、私はどう振る舞うべきか、ラヴレースさんに助言を求めてみました。

「貴女にこそお尋ねいたしましょう、マダム。貴女ご自身はどうお考えなのですか。何故ご質問をお返しするのかと申しますと、貴女がロンドンにお着きになり次第、お傍を去

るようにと、すこぶる熱心なお求めでしたので、どのようなことを申し上げればお気に障らずに済むのか、判じかねているからなのですよ」と、あの人が言っておりました。

「私の考えておりますのは、ハウ嬢は別ですが、他のどなたにも知られぬよう、努めて身を隠しているべきだということ、それに、片方が居りますと、程遠くない場所にもう一方の者も居ると、間違いなく皆のほうでは考えるでしょうし、私よりは貴方を探り出すほうが楽でしょうから、即座に私の傍を離れていただきたいということなのです」と、私は申しました。

「このような乱暴な手口なのです。兄上の手に落ちたいなどと、まさかお望みではないでしょうね」　あの人が言っておりました。「私のほうから差し出がましく皆さんの邪魔だてをしたりはしないつもりです。しかし、私は皆さんを避けているのだと、そのように考えて然るべき根拠を皆さんが得るようなことになりますと、貴女を捜し出そうという皆さんの熱意を煽り立てることにならないでしょうか。また、貴女を連れ去り、気概のある人間ならだれだって耐えることの出来ない辱めをこの私に嘗めさせようという、そんな皆さんの気力を奮い立たせることにはならないでしょうか」とです。

「あゝ、どういたしましょう」　私は申しました。「欺かれてのこととは申せ、私の取りましたこの致命的な一歩は何という　…　」

「お願いだ、最愛のマダム、慎んでもらいたいものですね、この厳しい言い方は。貴女がおっしゃるように欺かれていなかったなら、皆さんは例の企みを実行に移す決意をどれほど固めていたのか、この新たな企みからして、それはお分かりのはずだ。この私に、何か社会の掟を無視するような素振りはあったでしょうか。今回の計画に何らかの狙いがあるとすれば、おそらく兄上のほうではそのおつもりなのでしょうがね。私に劣らないほど乱暴で邪悪な冒険家もいることは、貴女もお認めくださるものと思います。ただ、これはあまりにも無謀な計画ですから、懸念すべきことはまずあり得ないと考えております。兄上のことはよく分かっているつもりです。学生時代には、いつも空想的な傾向を持っておられたが、何を考える知恵もなく、一人で頭を悩ませ、まごついている始末でした。工夫の才は半人前で自惚れは一人前なのですが、自分の利益を計るとか、他人に害を及ぼすといった才能は身につけておりません。精々のところ、他の者たちが自らヘマをして兄上に花を持たせるくらいなものです」

「これはまた、立て板に水ですわね。でも、気性の激しい人たちというのは、とかくあまりにも似通ってしまうものです。少なくとも、憤慨なさる時の、その仕方につきましてはね。これまでより少しは罪深い人間になろうなどと、まさかそんな厚かましいことをおっしゃるつもりではないでしょう。私が愚かな真似をいたしましたために、貴方は向こう見ずな行動に走らずに済みましたし、身内も辱めを受けずに終わったわけですが、でなければ、私の家族全員に身をもって立ち向かう覚悟をしておられたのですからね」

「あゝ、愛しのマダム。どうしても〈愚かさ〉のせいになさりたいのですね。〈向こう見ずな行動〉とおっしゃりたいのですね。ご一族以外の人間はだれであれ、貴女には出来ない相談なのでしょうね、大目に見るということは。ご家族のどなたにせよ、貴女の愛情に値するのは無理なのと同じことです。お許しいただきたい、愛しい人よ。かつて女性を愛したどの男にも負けないほどに貴女を愛しているのでなければ、これだけ不当な依怙贔屓に対しても、もっと平静な態度を装うことも出来るでしょう。だが、ひとつお尋ねしたい

のです、マダム。私のことでどのような苦労をなさったとおっしゃるのでしょう。私にいかなる原因があるというのでしょうか、こうも厳しい態度をお取りになり、これっぽっちも信頼を寄せてくださらないというのは。また、皆さんのことでご苦労はなさらなかったとでもおっしゃるのですか。私の品性を裁くに当たりましても、恨みと反感で判断しているのが実情であって、私に都合の好い判決など出ようもないのです。だが、貴方ご自身ご存じのことで、私に対してどのようなご異義がおありだとおっしゃるのでしょうか」

鋭い質問ではなかったでしょうか。いかがです。質問の仕方も同じように気迫のこもったものでした。私はびっくりしてしまいました。でも、自分を見失うまいと、私は心に決めていたのです。

「今がその時なのでしょうか、ラヴレースさん。私に向かって、保護の手を奪われました若い娘に向かって、このような高ぶった態度をお取りになるのに相応しい折だとおっしゃるのでしょうか。お尋ねの向きには驚いております。私の承知しておりますことで少しでも不都合に思う点があったのでしたら、こんな …… 」　そこまで言うと、私は急いで立ち去ろうといたしました。

あの人はすかさず私の手を掴み、機嫌を損ねたまま立ち去るのは止めてほしいと懇願しておりました。私への熱い想い、あの人に対する私の容赦のない態度、また、これだけ辛い思いをさせられた者たちに対する私の偏った気持ちなどを理由に抗弁し、皆が目論んでいる暴力行為こそ、今私たちが考えねばならない問題なのだと言っておりました。

やむなく、私も耳を貸さねばなりませんでした。

「かたじけないことに、愛しい人よ」　あの人が言いました。「私の助言を求めてくださいましたね。ひとつ言わせていただきますと、どうなさるべきか、お勧めするのはいとも簡単なことです。以前の差止め命令のことはありますが、新たな事態に至ったことでもありますし、申し上げてもお気を悪くはなさらないように思うのです。お身内との和解の望みがまったくないことはお分かりでしょう。いかがでしょうか、マダム、これまで一度として、進んでご好意を寄せてはいただけなかった哀れな男にですが、御手を委ねてくださることに同意してはいただけないものでしょうか」とです。

この種の質問を持ち出すにいたしましては、何という言い方なのでしょう。難詰しているようなものです。非難がましいったらありません。

あの時には、あの人にひどく憤りを感じておりましたところで、質問のことも、その持ち出し方につきましても、予想していなかったのです。思い出しましても恥じ入るばかりですが、すっかりうろたえてしまいました。ご忠告いただきましたことすべてがすぐに頭に浮かびましたが、あの人の言葉にはひどく人を寄せつけないものがあったのです。私が狼狽するのを楽しんでいるような、自信満々の様子で「確かですわ。敬意を忘れない愛情などというものを、あの人はご存じないのです」、まるで胸の内をすっかり見透かそうとするように、私を見据えておりました。

間もなくそのことに触れようと思いますが、確かに、あの人ももっとはっきりとした申し込みを後程いたしました。でも、無理に引き出された面も半分はあるのです。

私はほとんど感情を抑えられずにおりましたのに、自分の気持ちを思いのままに出来るかにも見えます人にこんなふうになぶり者にされたわけですから、怒りと恥ずかしさで私の心は激しく乱れ、遂には泣き伏してしまいました。すっかり嫌気がさし、立ち去ろうと

いたしますと、あの人は、大層優しさの籠もった恭しい態度ではありましたが、両腕で私を抱き止め、気の利かない説明をしておりました。

兄の愚かな計画が明るみに出たために私が追い込まれてしまいました窮状を利用し、許しもなく再びプロポーズを試みるような真似は、決して本意なのではない。これまでも私は好い顔をしてくれなかったわけだし、それゆえにこそ …… と、あの人は口ごもっているのです。

それからは、煮え切らない台詞ばかりで、およそプロポーズとは呼べないような先程の言葉を詫びておりました。

私に似つかわしくない言葉を口に出させることは出来ないものか、それを確かめますためにわざと私を焦らすような、そんな厚かましさは、まさかあの人にもなかったものと思います。でも、あの人にその気があったにせよなかったにせよ、確かに私には辛いことでした。あまりに辛いものですから、心の底まで苛立ちまして、遂には新たな涙を流しながら、とても惨めな思いをしている旨を申しました。そして、まるで腑抜けのように、おとなしくあの人の腕に抱かれたままになっております自分に気づきましたので、怒りを込めて腕を振りほどきました。でも、部屋を出ようといたしますと、あの人が手を掴み、跪いて、もう少しだけ居てほしいと懇願するのです。そして、それから、明快この上ない言い方でしたが、兄の目論見を挫き、すべてを丸く収めるためには最も効果的な方法ということで、求婚を受け入れてもらいたい旨の申し出をしてきたのです。

でも、私にどのようなことが言えたというのでしょう。愛情というよりは同情心に動かされ、無理に引き出された言葉のように私には思えたのです。何を申し上げることが出来たでしょう。口を開くことも出来ずに、ただポカンとしておりました。ひどく間の抜けた顔をしていたことでしょう。私がためらい、愚かな表情でおりますのも構わず、あの人は私が何か言い出しますのを待っておりました。ようやくのことで（うろたえている自分が恥ずかしくなりましたし、その言い訳のつもりでしたが）、私は次のようにお話しいたしました。和解に応じようとしない身内の者たちの態度や、この説明のしようもない兄の計画にお触れになった時、私の心に乱れが出たことははっきりと目にされたはずですが、不安を募らせかねないような手段は避けていただきたい、とお願いしたのです。

あの人は、すべての点で私の指図に従うことを約束していました。そして、分からず屋さんは、先の質問を強く迫るのではなく、「謹んで求婚をさせていただきましたが、お見逃しいただけるでしょうか」などと、再び尋ねるのです。私のなすべきことといたしましては、うろたえている姿を何とか言い繕おうとするくらいのものでしょう。そんな様子は何の役にも立たなかったわけですからね。

私は次のように申しました。モーデンさんの帰国もそう先のことではないと思うし、あの紳士のほうでも、私があの人（ラヴレースさんのことです）からの援助に頼ったといたしましても、それは、ソームズさんのような、私にはどうしても気に染まない男性の求婚から解放されるためのことに他ならなかったのだと分かってくれるなら、一層気持ち好く私のために働いてくれるのは疑いない。従って、従兄弟からの連絡があるまでは、すべて現状のままにしておきたいと願わざるを得ないのだ、といったことをです。

これは、あの人に焦らされていたとは申せ、お分かりいただけると思いますが、拒絶ではございませんでした。ところが、あの人は説得を試みるどころか、激しく怒り出したの

です。あの人のような立場でしたら、どなただって説得を試みようとしたはずです。このように怒り出したものですから、私といたしましても、拒否しているような姿勢を通さざるを得なくなってしまったのです。

あの人が口にした言葉は次のとおりですが、脅されたからといって言いなりになったりはしないような気概のある女性でしたら、どなたでも気持ちを硬化させてしまうに違いないような、そんな激しい言い方でした。

「何ということだ。では、マダム、どうあっても貴女はお示しになりたいのですね。私を完全に拒絶するのが条件なのでしょうが、私の不倶戴天の敵ともいうべき者たちに受け入れてもらうための、それこそ一縷の望みでも残っているかぎりは、ご好意のかけらすら私は期待してはいけないということをです」

私の返答は次のとおりでした。少し気色ばんだ調子でしたが、宥めようとの工夫も凝らしたつもりです。「ご覧になったとおりなのです、ラヴレースさん。兄が無茶なことをいたしますと、私はすっかり心を乱してしまうのです。でも、貴方がおとなしく同意なさったものとは逆の行動を、脅しつけることで私に取らせようとのお考えから、貴方まで乱暴な真似をなさるようでしたら、それは見当違いということになるでしょうね」とです。

あの人はただ、今後の振舞いをもって釈明に代えさせてもらいたいとだけ訴えておりました。そして、あの人のことを少しでも好意を寄せる価値があると見た場合には、友人知己の中で、考慮を向けるに値しない唯一の人間ということにはしないでほしい、とも言っておりました。

「今後のことを考えておられるのですね、ラヴレースさん。私もそうですわ。ある美点につきまして、これまでは欠けていたとお考えのご様子ですし、そう思われるのも当然でしょうが、その美点が将来的には保証されるのかということです」　そう言うと、私は再び立ち去ろうといたしました。

あと一言聞いてほしいと、あの人が頼むのです。兄の手口がどのようなものであれ、私の身に暴力が加えられるのでなければ、一切の危害、そして、危害を招きそうな行動のすべては努めて避ける覚悟でいる。ただし、私への暴力行為に発展しそうな試みが仮にも行われる場合、私が捕えられるとか、連れ戻されるとか、このシングルトンという男によって船に乗せられるとかするのを、おとなしく見守っていてほしいと言うのだろうか。あるいはまた、窮地に追い込まれた場合にも、私を守るために立ち上がるのを許してはもらえないのだろうか、というのです。

「私を守るために立ち上がるですって、ラヴレースさん。そのようなことが必要だといたしますと、本当に惨めな話ですわね。でも、ロンドンでは安全に身を隠しているのは無理だと、貴方はそのようにお考えなのでしょうか。お友達の説明からいたしまして、未亡人のお宅なら安全なように私は思うのですが」

あの人は次のように答えておりました。お友達の説明にあった未亡人宅は、表側の母屋の奥にある離れになっており、道路よりは庭に面しているため、人目に付かない佇まいではあるが、行ってみた上で同意が得られないようなら、もっと私の好みに合った場所を見つけるのも難しいことではない。もっとも、あの人が勧めたい段取りとしては、管財人の一人ということで、ジョン伯父様に手紙を書き、ここ、ソーリングズ婦人の家で結果を待つことであり、返事の宛先も、恐れることなくこの家にして構わない。狭量な者たちのこ

とを恐れたりするのは、無礼な態度を助長することに他ならない、と言うのです。手紙の内容は次のようにすべきだとのことでした。厚志として求められた場合には拒絶しようと皆が考えているものを、権利として請求するということ。私がお身内のご婦人方［あの人自身も、表向きは、ご婦人方とM卿のご指示に従った行動を取ることにするというのですが］の保護に身を委ねていることを認めるということ［あの人に言わせますと、皆の仕打ちを考えれば、これは十二分に正当化される振舞いだというのです］。ただしそれは、私自身が申し出た条件に沿っており、それゆえ、ご婦人方のご厚情を恩義のように感じる必要はない。同じような苦痛を受けている女性ならだれにでも、ご婦人方がきっと施される程度のご好意だから、といったことです。この方法が承認出来ないという場合には、あの人自身の名でそのような主張をする機会を用意してもらえるなら幸いに思う、と口にしながらも、ただし［と、間を置かずに、例の〈ただし〉をまた付け加えるのです］、この点はただ言及するだけに止どめたい、とのことでした。それでも、身内の暴挙は、この待ち望んでいた決断に私が踏み切る十分な動機になるように考えてもらえるなら有難い、とも言っておりました。

胸の内では苛立ちながら、私は次のようにお話しいたしました。ロンドンに着いた時には私の傍を離れると言い出したのはあの人のほうだということ。また、そうしていただくよう期待しているし、私がまったくあの人と関わりを持たずにいるのが周知のこととなった時点では、何を書くべきか、何をなすべきか考えるだろうが、あの人が傍におられる間はそのつもりはないし、出来ない相談でもある、と申し上げたのです。

極めて正直なところを話すと、とあの人は言っておりましたが、兄のこの目論見のせいで、事態の様相は一変したとおっしゃるのです。私がロンドンの未亡人一家のところへ行くのを選ぶものとして、そこに満足してくれるのかしてくれないのか、私の傍を離れる前に確かめておかねばならないというのです。そこの人たちは兄の買収が利くような人間かもしれない、というわけです。もっとも、高潔な人たちと分かりました時は、一、二日かそれくらいは離れても構わない。ただ、何としても言っておくが、一度にそれよりも長い間私を独りにしておくわけには行かない、とのことでした。

「私が下宿をいたします家に、貴方もお部屋を借りようとおっしゃるのですか」と、私は尋ねました。

あの人の不在中、私がその時間をどのように活用しようと思っているかは分かっているし、世間体を大切にしていることも承知しているので、そのつもりはない、とあの人は言っておりました。ただ、あの人が下宿をしていた家は正面の化粧直しをしているところなので、受け入れてもらえる状態ではないとのことでしたが、ソーホーにあるお友達のベルフォードさんのお宅には行くことも出来るし、兄のこの乱暴な企みが沙汰止みになったと考えるべき十分な根拠が得られるまでは、エッジウェアにある同じ紳士のお屋敷まで前夜のうちに行き、翌朝戻って来ることも可能かもしれない、と言っておりました。ただ、それまでは、それ以上離れた場所へはどこへも出かける気にならないとのことでした。

結局のところ、今度の月曜日にロンドンへ向かうこととなりました。楽しい一時間の道程であってほしいものだと思っております。

Cl. ハーロー

手紙　四十二
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

四月二十一日　金曜日

《ラヴレース氏からの求婚を受けた折に触れている心乱れる場面において、令嬢が内心の困惑を事細かに語り得たとは考えにくいため、上記日付の氏の手紙から、以下の抜粋を示すこととする》

さて、ベルフォードよ、燃え盛る蝋燭の周りを羽打ち震わせて飛ぶハエのように、俺も絹のごとき自由の翼を危うく焼き尽くすところだったとしたら、貴公は何と言うかな。自分の仕掛けた罠に掛かるということがあるが、俺以上にその危機に瀕した者もかつていなかっただろう。考えは何もかも見抜かれ、すべての計画は未だ試みられず、天晴な娘をロンドンへ連れ出すのも果たせていない。さらには、本物の天使なのか、それとも、ただの女なのか、確かめようとの骨折り一つ行われてもいないのだよ。

結婚を申し込んだのだが、確かに出し抜けで、彼女にしてみれば、慎みの衣に身を包む暇もなかった。思いやりを込めたというよりは熱に浮かされた言い回しで、これまでの冷淡さを責め、例の差止め命令を思い出させるようなものだった。何せ、彼女があの差止め命令を反故にする気になったのは、俺への愛情からではなく、兄貴に対する恐怖心からなのだからな。

あゝも魅惑的な困惑ぶりは、これまで見たことがない。絵にするには、まさしく絶好の美観であった。もっとも、あの戸惑う姿を、そして、この世に二つとないほど物言いたげな、また、端正この上ない面立ちの一つ一つにはっきり浮かんだ焦慮の交った表情を、見事描き切ることが出来ればの話だがね。二度か三度、軽い咳払いをしていた。心を魅了して止まない虚ろな顔を今見せたかと思えば、次には愛らしく意味ありげな表情を作る。とうとう麗しの小悪魔は、彼女の答えをためらいがちに待つ俺の態度に焦れ、はっきりと言葉を口にする力もすっかりなくして、どっとばかりに泣き伏したよ。そして、慌てて立ち去ろうとした。そこで俺は、大胆にもこの両腕でめでたく彼女を抱き締めると、こう語りかけたのだ。「あゝ、我が最愛の人よ、前にいただいた差止め命令にひどく背くものとお考えかもしれないこの提案を、お身内の残酷さを自分に都合好く利用しようとの思惑から来ているものだなどとは、何卒お考えいただきたくない。このような申し出をしたため、お気持ちに逆らったことになるのでしたら（思い切ってその点を匂わしはしたが、俺がどれほど丁重な気遣いを用いたか、貴公には分かるはずだ）、今後は細心の注意を　…　」とだが、俺はそこで止めておいたよ。

すると、彼女が口を開いたのだが、心痛の様子だった。「私　…　私、とても惨めな思いです」とな。真っ赤に染まった両の頬を涙がこぼれていた。俺は世界一美しい彼女の腰になおも両腕を回していたのだが、その間愛らしい顔をこの肩に埋めていた。愛しの君はすっかり放心の体で、俺がこの栄誉に与っていることにも気づかなかったのだ。

「だが、何故なのです。どうして惨めなのですか、愛しの君よ」　俺は尋ねた。「だれにもましてご愛顧をいただいた男の心にかつて溢れた感謝の念すべてを　…　」

そこまで言って口を噤んだのだが、俺自身の立場を正当に評価してのことだ。恩を受け

たとはいえ、あゝも不本意そうな態度で施されたものだ。感謝する義理などあるまい。

その後、彼女は我にかえり、いつもの慎み深さを取り戻すと、抱き締めている俺の腕から身を振りほどこうとしながら、「まあ、何ということでしょう」と声を上げたのだが。怒りでいよいよ頬を赤らめ、目も一段と厳しく燃えていた。

憤り、抗うままに任せておいたが、飾りのない戸惑いを露にする姿に俺はすっかり魅了され、急ぎ立ち去ろうとする彼女の手を掴むと、その足下に跪き、「あゝ、我が天使よ」と叫んでしまった（まるで自制心を忘れ、自分の声音にもほとんど気づかなかった。あの場に牧師がいたなら、間違いなく俺も年貢を納めていたことだろうな）。「どうか受け入れていただきたいのです、貴女の忠誠なるラヴレースの誓いを。永久に貴女のものにしていただきたい。貴女だけのものにです。そうなれば、すべてが旨く行くでしょう。私の妻に対して、敢えて企みや策略を巡らそうとする者がどこにいるというのです。皆さんが愚かなことを試み、また、無礼にもソームズに有利な望みを抱くのも、すべて根拠となっておりますのは、貴女が私の妻ではないということなのです。あゝ、私のものとなっていただきたい。どうか（こうして、膝をついてお願いする）私のものとなっていただきたい。そうなれば、世間の者はすべてわれわれの側についてくれるはずです。一人残らず、だれもが予測していた出来事に拍手喝采を贈ってくれるのです」

悪魔の仕業だよ。あの瞬間、空高く舞い上がることなど思いもしなかったが、我を忘れたこんな戯言を並べるつもりもなかったのだよ。すべてこの魅惑の君のなすがままさ。この調子では、厳しい試練につまずいてしまうのは彼女ではない。俺のほうだな。

前もっての考えや、得意にしていた計略のすべてを無視し、本能の衝動に任せて真面目くさった話をしてしまう男のことを、貴公はかつて聞いたことがあるだろうか。だが、この愛くるしい女は、自分にとって不都合な、男が目論む目的をことごとく捨てさせてしまうことも出来るのだ。本心からそう思うのだが、どちらが相手を出し抜くのかという、彼女の油断のなさから始まった競い合いのことさえなければ、さらなる試練は［だが、彼女は一体どんな試練を受けたというのだ］一切省いてやっても構わない気持ちになるだろうな。盾突くことのないローズバッドに対し、俺が寛大な処置を取ったことは貴公も承知のはずだ。最高の魅力を備えた女ですら、たとえ女王といえども、ごく平凡な女に優るところといえば、ただ日頃から人目に触れている部分だけなのだという考えに基づいてのことだが、まことにもって天晴なこの娘に対しても、燃える想いに手加減を加えることが、俺には時々あるのだ。天の配剤は、王に対してであれ田夫野人に対してであれ、かくも公平なのだよ。女という、この至上の贈り物に関してはな。

ところで、この本能の衝動はいかなる結果を俺にもたらしたのか。俺の申し出はそのまま受け入れられたとは思わないかな。これだけ厳かに、それも、片膝をついて申し出た求婚なのだからな。

それがまったく違うのだ。軽薄にもあの美女は、願ってもないほど簡単に、俺を放免してしまったのだよ。

兄貴の企みのことがあるし、和解の望みがまったくない点も彼女には分かっている。それに、危害につながるかもしれないとの懸念も抱いている。あの愛らしい困惑すべての原因として彼女が考えているのは、そういった点なのだ。俺の求婚でもなければ、俺への愛でもない。王者のごとく誇り高い俺に対しては、大逆罪にも等しい決め方だ。俺との結婚

を次善の逃げ道にするというのだからな。彼女のために命を賭けてきた、そして、彼女のためなら今も喜んで同じ危険を冒す覚悟でいる俺だというのに、彼女としては、その男とは手を切る旨の申し出を俺の敵どもが受け入れないのではないかとの懸念、その懸念こそが困惑の原因だと、そう言っているのと同じことだろう。

幸せ者にしてほしいと、俺は繰り返し懇願したよ。だが、従兄弟のモーデンが帰国するまで待てと言う。今や彼女の望みのすべては、あの男に懸かっているのだ。

俺は狂おしいばかりに言い寄った。だが、何一つ効果はないのだ。

もう一通、手紙を出すことになった。あるいは、もう出したのかもしれないが、叔母のハーヴィー宛で、彼女としては返事が来ることを期待している。

それでも、俺に度胸があったなら、彼女の引き延ばし策もどんどん無力になっていただろうと、時々はそう思うのだよ。ただ、怒らせてしまうのをひどく恐れていたのだ。

まったくもって忌々しい話だ。男のほうがこうも内気で、女のほうではこんなにも機嫌を取ってもらいたがるのだからな。こんな二人がどうやって一緒になれるというのだ。親切に仲立ちをしてくれる女もいないのではな。

だが、甘んじていなければならないのだ。ただ、俺の胸を焦がしているような熱烈な愛と、これだけの忍従の気持ちとが一人の人間の中で出会うことなど滅多にない話だ。今こそ確信出来たわけだが、真の愛というものは、ひたすらに願うだけなのだよ。崇拝の対象となっている者の意思以外には、自発的な意思も持たないものだ。

だが、あゝ、可愛い女だよ。再び自分からロンドンのことを口にするのだからな。シングルトンの策略が俺自身の考案によるものであったとしても、改めてロンドン行きを決断させるのに、これほどのうまい手は思いつかなかったことだろう。延期の理由は一体何なのか、見当もつかないのだがね。

月曜日の俺の手紙で触れておいたジョゼフ・リーマンからの手紙(ア)と、俺が出した返事とを同封する。得意な気持ちが抑え切れなくてな。知らせたくて仕方がないのだよ。でなければ、貴公の想像に委ねるほうが良いのかもしれないな。この淑女にとっては星のめぐり合わせが悪くて、事態は俺の有利に運ばれていることをだよ。もっとも、これは俺の完璧なる創意工夫の結果にすぎないわけだがね。

手紙　四十三

ロバート・ラヴレース閣下へ

四月十五日　土曜日

おそれながら閣下

出来ることでしたらごめんこうむりたいと思っておりました、そのお役目につかされておりますことをごしょう知いただきたくて、筆を取ったしだいです。ある若者からしょう言を引き出せとのおおせでありましたが、つい最近、その男は私めのばあ様方のえん者であることが分かりました。近ごろこのあたりにやってまいりましたが、若様のおっしゃい

(ア)　百二十六頁を参照のこと。

ますには、閣下に関係のございますひどい悪さについてとのことでした。おゆるしもなしに、このような言い方はけっしてしたくはないのです。私めのごとき平みんふぜいがおえら方を非難申し上げるなど、につかわしいことではございません。えらいべっぴんのようですが、ノッチンガムに住んでいる、バタートンとか申すおじょうさんに関することでございます。

閣下が、いつわりの手紙をもちいまして、そのおじょうさんを連れ去られたということのようです。おじょうさんの大のお気に入りのおいとこさんが会いに来られるところでしたが、途中で病気になられたように信じ込ませるものでした。そこで、バタートンおじょうさんは召使を一人お連れになり、病にふせていると思われますはたごからおいとこさんを移すため、シェーズでお出掛けになったのです。召使のほうはだまされ、シェーズを引いて帰りましたが、バタートンおじょうさんのほうは、ひと月かそこいらの間、消息がなかったのです。ご家族の方たちがおじょうさんを見つけ出し、閣下をうったえようということになりましたが、その時には閣下は国を出ておられたというのです。閣下が国にもどられますまえに、おじょうさんは、いうならば産気づきまして、お産の床でカゼを引いたものですから、おやつれになり、間もなく亡くなられました。お子さんは生きておられますが、閣下はすこしも心配をしてくださらないというのです。そして、この件と、その手のたいへんに悪いうわさをいくつか、おじょう様に耳をかされるお気持ちがあればのことですが、ソームズ様がお話しになるご予定だったのです。おじょう様との、心たのしいとでも申しましょうか、そんなお付き合いがこちらでは出来なくなってしまいます以前の話でございます(ア)。

おゆるしくださるものとは存じますが、耳にいたしましたことといっさいがっさいを話さねばなりませんでした。みな様は私のえん者を引きずりこんでおりまして、その男が私めにすべて話したと言っているはずだからです。ですから、しかられますのがこわくて、おだやかな言い方をするわけに行かなかったのです。ごようしゃのほどお願いいたします。

若様や若奥様へつげ口をするよう、閣下はよからぬ話をたくさんお教えくださいましたが、この件はお話しくださいませんでした。

ひらにお願いを申し上げます。心からおしたいいたしておりますおじょう様のことですが、閣下のものとなりましたからには、なにとぞ、お優しく親切にしてくださり、せい意をお示しいただきたいのです。さもなければ、このようなあり様にいたりますのに手をお貸しするようなことをいくつか仕出かしておりますゆえ、この胸もはりさけてしまうことでしょう。尊敬申し上げる閣下におかれましては、なにとぞ、公正さを守ってくださいますようお願いいたします。切に切にお願いする次第です。後生でございます、切に切にお願いする次第です。恐ろしさと悲しさで、今はこれ以上筆を進めることは　…

さて、ふたたび筆を取ることにいたしましたが、よろしければお教えをいただきたいことがございます。このことで閣下のお命にわずかでも危険がおよぶことはございますでしょうか。げんに私めのえん者がやとわれまして、この件で動き出すお気持ちがあるかどうかをバタートンおじょうさんのお身内に確かめるため、ご家族のもとを訪ねることになっているのです。閣下ご自身もご存じのとおり、あの男は当時バタートン家に住み込んでお

(ア) 第二巻の六十二頁から六十四頁にかけてを参照のこと。

りましたので、うってつけの証人にでも何にでもなることが出来るのでございます。

タイタスが申しておりますほどにはひどいものでなかったことを願っております。と申しますのも、失礼とは存じますが、この件でのお二人のことは、むりやり手ごめになさったのが始まりだったと、あの男は見ているのです。えん者のタイタスは聖さんを受けました者のだれにもまけない正直者です。それがあの男の特ちょうでして、それだけに、口をきくようになりました時に、喜んで血つづきとみとめる気にもなった次第です。

万が一、閣下のお命に危険がおよぶといたしましても、まるで私ども平みんふぜいの一人のように、首つりの刑にはあわれませぬよう願っております。せめて首をはねられるくらいのことにしていただきとう存じますが、そのようなお首が失われてしまいますのは残念しごくに思います。決してあってはならないことではございますが、もしも、それほどまでにきびしくうったえられることになりました場合は、はね首のせんこくをお受けになられます前に、どうか、閣下の忠じつなジョゼフ・リーマンのことをお考えいただきとうございます。人から聞かされておりますが、せんこくの後では、いっさいがっさいが王様か州長かん様のものとなるとのことでございますので …

以上のこと、閣下にお知らせしておくのがいちばんと考えた次第です。また、何か閣下のお役に立てることはないか、そして、えん者のタイタスがノッチンガムから戻りましたときに、報告をさせないためにはいざこざが起こるやもしれませんが、それをさけますのに、私めには何が出来るのか、お教えいただければ幸いに存じます。

すでに、あの男にはそれとなく言ってあるのです。なあ、タイタスよ、いさかいをあおり立てることもあるまい。お金持ちのおえらいさんたちに仲たがいをさせ、のどの切りあいやその手のことになるよう、わざわざ骨を折って何の意味があるのだ、と私は言ってやったのです。

まったくそのとおりだと、あのタイタスめは言っておりました。そういうわけでもありますし、あの男には望みをかけておりますが、閣下からのごしじがいただければの話でしょう。と申しますのは、たしかなことでございますが、私めにはひんじゃくな、まことにひんじゃくな工夫の力しかないからでございます。ただ、ありますのは、わざわいをさけたいという気持ちでして、そのことを第一に目指しておりますし、幸いにもつねにそうしてまいったのです。でなければ、どの召使とも同じように、私めもこれまでにずいぶん悪事をはたらいたはずでございます。にもかかわりませず、閣下は私めの思いつきの良さを折にふれておほめくださいます。はたしてこのような並の男に、一体どのようなことが思いつけるとおっしゃるのでしょうか。ただ、閣下がそのおみごとな工夫の才で動かしていただきますと、私めにも十分なはたらきは出来るものと思っております。また、出来ますならば、ご厚ぎにあずかりたいものと心から念じている次第でございます。

この長い手紙には、書いたり休んだりしながら、まる二日を掛けたと申せましょう。それでも、お話ししようと思いましたことすべてを申し上げたわけではございません。ご存じいただきたいのですが、前の二通の手紙でもお話しいたしましたとおり、あのシングルトン船長は好きになれないということでございます。あの男はいつも若様と頭をよせ合っておりまして、お二人の間で何か悪い相談でも進められているのではないかと、たいへんに心配なのです。それに、上のおじょう様がそのお仲間になられることもあるようですので、なおさら気掛かりになるのです。

先週のことでしたが、若様が私の目の前で、「このうらみを晴らさんものと、胸の血がにえたぎる思いなのだよ、シングルトン船長」と言っておられましたし、私めのような者には口にいたしかねますが、閣下のことを悪しざまにののしっておられました。シングルトン船長が小声で、私がそばにいることを若様に知らせました。すると、若様はこうおっしゃったのです。「ジョゼフの前なら何を話してもかまわないのだよ。あのように間のぬけた顔はしているが、どんな召使にも必要なだけの正直さとふんべつは持ちあわせているのだからな」とです。あの時ばかりは、私も良心が痛みました。でも、その必要はございますでしょうか。私めの行っておりますことは、すべてわざわいをさけるためのものでございます。それに、拝見いたしますに、閣下には、若様には欠けておりますが、たいへんに忍耐づよいところがおありですから、少しも恐れることなく、何ごとによらずお話しすることが出来るのです。

さらに申しますと、ご厚志にふさわしいことをしたいとひたすら願っておりまして、危害を防ぐためでありますが、私めからお話し出来ますことは何ごとであれ、ふれずにはいられないほどなのでございます。また、私めが大いに高く買っておりますブルーボア亭につきましての有難いお心づかいのこともございます。一生がいご恩には感しゃ申し上げる所存でございます。

それに、ブルーボア亭がすべてではございません。あの可愛いメスブタのことも（このようにまじめな話の最中に冗談めいたことを申し、神のおゆるしを乞う次第ですが）頭にございます。あのメスブタのことは、多分、閣下が期待なさる以上に好きになれるだろうと思うのです。優しくきげんが良くなってまいりましたし、ブルーボア亭の話などをいたしますと、まるで豆の花に囲まれたみたいに(四〇)、嬉しそうに耳を傾けるのです。

平みんふぜいのざれごとをどうかお許しいただきとうございます。おそれながら申し上げますが、おえらい方々と同様に、私どもしょみんにもなぐさみごとはございまして、ときどきおしかりを受けることがありましても、私どものほうでも、目下の者を見つけまして、代わりにしかりとばすことが出来るのです。また、そんなわけには行かなくとも、上さんをめとってどなりつけることも出来ましょう。ですから、ご主人様たちも、どうかいたしますと、私どもと変わりのないことになるわけでございます。

それにいたしましても、閣下に向かって、無礼がすぎましょう。召使もきげんを取られますと、ただ分相応にだけではございますが、よう気なところをお見せしてしまうものでございます。

以上の点からも、なにとぞお教えいただきたく存じますが、閣下の、そして、いちばん大切に思っておりますおじょう様のお役に立つため、私めに出来ますお仕事が何かございますでしょうか。ぜひともお与えいただけたらと、神にも祈る気持ちでおります。ひと様の話を聞くにつけ、おじょう様のことが気掛かりになってくるのです。勿論、閣下にかぎって、みなさんの言う「悪さ」などをおじょう様になさるはずはございません。あれほどのすばらしいおじょう様のことです。お優しくしてくださることはしょうちいたしております。そうなさらずにはいられないことでしょう。ただ、ここで良心の痛みをおぼえるのでありますが、閣下のご指示で口にいたしました、いくつかの私めの作り話のことがなければ、大だんな様も大奥様も、それに、二人の老紳士たちにいたしましても、若様と若奥様がどのようなことをおっしゃろうとも、今の半分もはくじょうなお気持ちになることは

お出来にならなかったはずだということでございます。
　そして、悲しいことですが、みなさんはどうしても大切なおじょう様とのことを水に流そうとはなさいません。閣下がさしずなさったことですが、あの話は私めが閣下の召使に鼻ぐすりをかがせて聞き出したものだと、みなさんは信じておられるからなのです。それに、そのことを打ち明けるわけにもまいりません。閣下があいつばかりか私までも亡き者にし、わいろを使った者に罪をかぶせられるのがこわいからです。あゝ、閣下、自分がひどくいかがわしい人間であって（ご加護のあらんことをと、神様に祈る次第でございますが）、その気がなかったというのは疑わしことに思えてくるのです。
　ただ、だれよりも大切なおじょう様にもしもわざわいがおよぶようでしたら、おそれながら、ブルーボア亭にあります馬用のため池に　…　でも、神様が私ども全いんをすべてのさいなんから、そして、不幸な結まつのすべてからおすくいくださるよう祈っております。と申しますのも、閣下はこの世の富のことはお心配りをくださいますが、おそれながら、聖しょにもありますとおり、「自分の命を失ったら、何の得があろうか」（四一）ということではないでしょうか。
　ただ、私めはまだ若い身ですから、たとえおろかさのせいで罪をおかしましても、これからのくい改めに望みを持っております。閣下はおえらがたでございますし、知恵の点でもすぐれておられます。私めは人の目にとまることもないびんぼう人でございますし、閣下はどのようなことでも責任をお取りになれるお方なのです。
　いずれにいたしましても、

何ごとによらず、閣下の忠じつなしもべ
ジョゼフ・リーマン

四月十五日から十六日にかけまして

手紙　四十四
ラヴレース氏よりジョゼフ・リーマンへ

四月十七日　月曜日
正直者ジョゼフへ
　君は自分の工夫の才を過少評価しているのだよ。もう一度褒めてやらねばなるまい。頭の良い平民ということでは、私の知るかぎり、君に優る者は多くはないのだよ。私の大体の指示がどのような首尾を収めるのか、あるいは、それを実行に移した暁にはどうなるのかが分からず、予測も出来ずにいた場合に、君の予想や分別のお陰で、私の望みが叶えられたことも何度となくあったのだ。君は自分の能力に疑いを持ち過ぎているのだよ、ジョゼフ。そこが君の欠点だな。しかしながら、生まれついての慎み深さに由来する欠点だけに、咎められるべきではない。同情されて然るべきなのだ。
　ベタートン嬢との一件は若さにまかせた戯れだよ。作り話に頭を捻るのが大好きなのだな、私は。誓って言うが、ジョゼフ、楽しいのは策を練ることのほうであって、その結果ではないのだよ。酒色に溺れた人間ではない。気力溢れる男なのだ。女というのはどれも同じようなものなのさ。分かるだろう、ジョゼフ。狩りが面白いのも、よろめいて逃げ惑

う野兎の姿があればこそだ。食って美味いのは、納屋の戸口にいる鶏のほうだよ。これで分かってもらえるだろう、ジョゼフ。

ベタートン嬢とはいっても、商人の娘にすぎなかったのだ。確かに、あの家族は財を築き、新たな紳士の家系を目指していたし、法外なことだが、私のような家系の男が娘と結婚してくれるのを期待していた。私は正直に振る舞ったよ。あの令嬢にそんな望みは一切与えなかった。実は、娘のほうからその話を持ち出したのだ。娘は怒ったさ。諦めなかったし、焚き付けられてもいたのだな。娘を連れ出すには、ちょっとした罪のない策を弄する必要があった。だが、誓っても良いが、ジョセフ、あれは手籠めなどではなかった。愛してくれていたのだ。私も愛していた。事実、旅籠へ連れ込んだ時には、こちらからは何も尋ねなかったよ。慎みのある女に同意を求めるなど、残酷な話だからな。両方にとって厄介の種だ。身内の者たちがでしゃばらなければ、今日の今日まで、あの娘には変わらない愛を守り通したはずだよ、おそらくな。何せ、私の天使を知る前の話だからな。

あの娘のことで国を出たわけではない。あの娘は私にぞっこんだったから、法廷で争うような真似はしなかった。告訴の根拠として身内の連中が作成した書類に署名するのも拒んだのだ。そして、残酷な連中は産婆が手を貸すのを許そうとしなかったものだから、あの娘の命まで危なくなってしまったのだ。そのためだと私は信じているのだよ、あの娘が亡くなったのはな。

当時は外国滞在中だったが、私はあの娘のため喪に服したよ。これは、私の子を孕んでお産の床で亡くなった立派な娘たちに対し、私がいつも与えてきた栄誉の印なのだ。

私はこれまで、色恋沙汰でもいつだって几帳面に振る舞ってきた。活動的な生活に入るに当たって、私が自分自身に課した規則は次のとおりだ。つまり、家族が無情で、私のほうでも似つかわしい夫を見つけてやれない場合は、母親となる者に貧の苦しみを味わわせないこと、商売女は避けること … これは私自身については勿論、無垢な女性たちに対しても当然の道義と言えよう … 新しい女に手を出す前に、出来れば前の女は結婚させておくこと、お産に当たっては手厚い介護を与えること、子供が生存している場合は、母親の身分に応じて扶養すること、母親死亡の際は喪に服すること、等々だ。可愛い女たちにとってこの約束は、お産が近づくにつれて大きな慰めとなっていたのだよ。

私の過ちのすべて、散財のすべては、女ゆえのものだ。従って、財産に関する思慮分別ということでも良心の点でも(女性にはこのように信義を尽くしているのだから)、疚しい気持ちにならずに済むわけだよ。

男というのはだれでも女が好きなものだ。こういった点で私よりも信義を守る男を見つけられるものなら、ジョゼフ、ひとつ見つけてきてもらおうじゃないか。

女がこのように私を愛するのも、不思議な話じゃないということだ。

だが、今は厳しく身を慎んでいる。心を入れ替えたのだよ。ずいぶんと前からのことだがね。女性の中でも飛び切り素晴らしい人だが、私と一緒になってくれるよう口説き落とせたら、彼女とはすぐにでも結婚する覚悟なのだ。他に考えている女など、一人としていない。それは不可能なことだよ。すこぶる可愛いらしい娘を見逃してやったのだが、彼女のためだ。本当だぞ、ジョゼフ。だから、君にはその正直な心を休めていてもらいたいのだ。君の良心の咎めを癒すために、私も骨を折っていることは分かってくれるな。

ところで、ベタートン嬢の件だが、繰り返して言おう。手籠めではないのだ。手籠めな

どというのは異常な出来事で、考えられているよりは希な話なのだよ、ジョゼフ。そこまで追い詰められるのは、私としても好まない。これまで一度だってなかったことだ。ベタートン嬢は彼女自身の意に反して、私との仲を裂かれたのさ。あの場合、手籠めにしたのは身内のほうだよ。私ではない。

二度ほど、男の子に会う算段をした。叔母に気づかれないようにしてだが、その叔母が世話をしているのだよ。あの子を愛していて、どうあっても手放そうとしないのだ。申し分のない男の子だ。どんな父親だって恥ずかしく思う必要はない。きちんと扶養してもらえることだろう。そうしてもらえない場合には、私が面倒を見るつもりでいる。母親の財産を受け取ることになっているのだ。恩知らずにも、連中は父親を呪っているのだが、子供の幸せは願っている。いずれにせよ、この件で私の側に悪い点は一切ない。多くの点で悪いのはベタートン家のほうなのだ。

それゆえ、ジョゼフ、私の頭のことでも君自身の首のことでも、悩み苦しむには当たらないのだ。ブルーボア亭に関しても、また、君の可愛い雌豚ちゃんについてもな。

君のおどけた言い種は気に入っている。貧しい人間には、良心の咎めよりもおどけのほうがよく似合うのだ。おどけてくれると嬉しい。私たちの言葉も振舞いも、そして、願いも、すべては冗談なのだ。人生そのものを笑いの種に出来ないようでは、それは憐れむべき人間だ。この上なく惨めな一生を送っているのだよ。

君の言うとおりだ、ジョゼフ。お偉方同様に、君たちには君たちなりの慰みがあるのは疑いない。君にはもっともっと楽しんでもらいたいのだよ、正直ジョゼフ君。貧しい者が楽しむのを許さないような人間は、自分も楽しむ資格はない。だから、どんどんおどけてもらいたい。繰り返すが、君には良心の咎めよりもおどけのほうが似合うのだ。

ベタートン嬢のことを君に教える必要はなかったのだ。彼女の件は別にしても、私自身にとって不利な話をたっぷり用意してやったはずだが、陰険なご主人たちから君がもっと信用してもらえるようにとの気持ちだったのだ。それに、ベタートン嬢のことに触れるのは気が進まなかったのだよ。身内の者が全員生きている上に、信望もあるのだからな。あの娘を愛していたということもある。私たちにとって歓びもまだ序の口という時だったのだよ、無情な身内に彼女を取り上げられてしまったのはな。

だが、愛しいベタートン嬢についてはもう十分だ。「愛しい」と呼んだが、死というものは愛しい気持ちを誘うものなのだ。御霊の安らかならんことを祈る。思わずも深い溜め息を漏らしてしまったところだよ、ジョゼフ。ベタートン嬢を偲びながらな。

タイタス君の遠征の件だが［名前を聞いて、今思い出したところだ］、成り行きに任せておくことにしよう。十八ヶ月前にお産で亡くなった婦人の話だ。彼女の存命中に訴訟手続きは取られていない。生きている間、私に不利な証言は彼女自身が拒んでいたのだ。強姦で起訴に持ち込むための根拠としては、見事な状況じゃないか。

君のお嬢様の場合、つまり、常日頃から敬い慕っているクラリッサ・ハーロー嬢の場合だが、妻になってもらおうとして、いつも言い寄っていたのだ。他の女たちが結婚に望みをかけたのは、私が約束したからではない。むしろ、連中自身の自惚れ心から出たことなのだ。約束については、いつも用心深くしていたからな。君の場合には、ジョゼフ、知ってのとおり、約束以上のことをしてきた。だれに対してもそうしているが、何故だか分かるかな。ケチだとか心の狭い人間だとかではないことを示す最良の道だからだよ。約束す

るということは義務を負うということだ。「廉直の人は約束を守り、寛大な人間は約束以上のことを行う」(四二)というが、これこそ私が主義としていることなのだ。

君のお嬢様に対する私の信義を疑っているとすれば、それはお嬢様を差し置いた振舞いだ。疑いを持っているのなら、お嬢様は一時間でも私のところに留まったりはしないだろうな。私の心はこの世に二つとないほど堅実なものなのだよ。そう考えるべき理由が君にはあるのではないかな。だとすれば、どうしたわけなのだ、正直ジョゼフよ、この神経質な態度は。

だが、正直者だからこその話だろう。それゆえ、許すことにしよう。女神のごときクラリッサを大切に思う者ならだれでも、私に好意を寄せてくれるのだ。

ジェームズ・ハーローがどのような悪口を吐こうと構わない。妹のために耐え忍ぶつもりでいる。私のことは心配無用だ。彼女の好意が得られれば、たっぷりと報いられるのだからな。あいつの心に卑劣極まる悪意があるのだから、いつだって奴の血は勝手に煮えくりかえるのさ。そんなことで私が心を痛めるとでも思うのか。私が平気なのに、なんで君の良心に障ることがあるのだ。あゝ、ジョゼフ、ジョゼフ。君の良心というのは、実に馬鹿げたことで君を悩ますのだなあ。一介の平民が精一杯の善意を見せようというのに、心に痛みを感じるというのでは、それは良心などではない。心の弱さというものだよ。

だが、何を言おうと構わないが、君の承知していること、耳にしていることはすべて書き送ってもらいたいのだ。だれのことであれ、じっと耐えるつもりだよ。どうして耐えないはずがある。危害を避けるのが君の望みだろうが、負けず劣らずに私の願いでもあるのだからな。

さて、ジョゼフよ、君の良心を満足させ、疑問のすべてに答え、そして、懸念のすべてを消し去るべく、私はこれだけ骨を折ったのだ。新たな問題に移らせてもらおう。

回り道とはいえ、頑固この上ない連中の意に反してでも、すべてを丸く収めるためのものであった君の骨折り、そして、私の努力も、ご覧のとおり、私たちが期待したようには目的に適うことなく、逆に、両家の不幸な争いを広げることになってしまった。だが、これは君の過ちでもないし、私が悪いわけでもないのだよ。私たちの誠実な願いが挫かれたのは、悪意に満ち満ちた君の若主人の、自分でも「煮えくりかえっている」と認める、あのどす黒い血のせいなのだ。

ただ、私たちはこれまでどおりの方針で行かねばならない。いずれ連中も根負けするだろう。条件を持ち出してくることになる。そうなれば、私の条件がどれほど理に適ったものなのかは、連中にも分かるはずだ。連中には勿体ないくらいのものだがね。

だから、ジョゼフよ、諦めずにやることだ。辛抱するのだ。見込みのなさそうな方法と君は思うかもしれないが、最後には私たちの望みは達成されるはずだ。

差し当たっては、当初からの方法でやり抜く以外にない。というのも、我が最愛の人は君に不信の念を抱いているのだから(先の手紙で話したことだ)、もしも私のものとならない場合は、君のことを暴露するだろう。私のものとなっていれば、私には君を守ることが出来るのだし、そのつもりでもいるのだよ。それに、何か不都合があると彼女が考えるとしても、それは私の過ちであって、君の落ち度ではないわけだから、彼女も君のことは許し、夫の秘密は守るはずだ。自分の夫の評判に関わることなのだからな。でなければ、自らの義務をひどく怠ることになるのだよ。そういうわけで、いったん仕事に取り掛かった

からには、振り返ってはいけないということなのさ、ジョゼフ。

さて、以上のすべてから言えることは何だろう。あと一仕事ということだよ。それで君の役目は完了ということだ。少なくとも、大事なことについてはな。

我が最愛の人は、身内の者たちに和解への働き掛けをしてみるまでは、結婚のことは考えないつもりだ。連中のほうでは、君も承知のとおり、あくまでも和解を拒むつもりでいる。彼女としては、疑いもないところだが、私を従わせようと考えているのだ。あの忌まわしい連中にな。もしもそんなことをすれば、連中のほうでは、そうして当たり前なのだが、私の遜った態度に応じるというより、むしろ、侮辱を加えてくることだろう。さらに彼女は、連中がソームズを諦めるなら、どうしてもという場合には、私と手を切っても良いとまで言っているのだ。だから、彼女を私のものと呼ぶ幸せは、どう見ても、相変わらず先の話なのだ。実際、これまで以上に彼女を失う恐れが出てきている（このきわどい状況に乗じる方法を何か考え出せないとしたらな）。そうなると、ジョゼフ、私が心を傾けてきたことのすべて、君が行ってきたことのすべてが、無駄骨になってしまうのだ。

私たちのいる場所では、長く人目を忍ぶことは不可能だ。二人が一緒の間は、また、彼女が結婚を拒んでいる間は、今の下宿では不都合なのだよ。彼女は私を傍から遠ざけたがっているのだ。ロンドンには、私からすればとてつもなく都合の好い下宿があって、そこなら人目を避けることも出来るし、災いもすべて避けられるのだ。向こうに着くと（彼女を連れて行けたらの話だが）、独りにしてくれと彼女は言い張るだろう。ハウ嬢が相変わらず唆すものだから、彼女もいろいろと策を弄するのだ。知ってのとおり、君の手を借りてのことだが、ハーロー邸の連中がハウ夫人に働きかけるよう、そして、ハウ夫人が自分の娘に対して力を振るうよう仕向けねばならなかったのは、それが理由なのだ。あゝ、ジョゼフ、我が天使のことで君が気を揉む必要はまずないのだよ。危険にさらされているのは私独りなのだ。だが、仮にも私が噂どおりの放蕩者だとしたら、俗な言い方だが、こんな問題はすべて苦もなく片付けてしまうことだろうな。

ただ、君が仄めかしてくれたことのお陰で、一つ便法を思いついたのだ。すべてに亘って効果があるし、君の評判を、既に立派なものだが、さらに高めてくれる方法だ。聞いたところでは、このシングルトンというのは山師根性のある奴らしい。もっと大きな商船の指揮を任せてもらいたがっており、その筆頭船主にジェームズ・ハーローを担ぎ出す魂胆なのだ。今二人の間で交わされている密談の内容はそんなところなのだろう。だが、シングルトンは、ジョゼフ、君のことを十分に信用するよう言われているのだから、君のほうからあの男にひとつ持ち掛けてはもらえないかな（相変わらず、私や私の目論見のことを憎んでいるふりをしてだ）。両人の家があるリース、または、別の場所へ、あいつが乗組員一同と機を見て妹を連れ去るのに手を貸すよう、ジェームズ・ハーローに（私への復讐をあれだけ熱望しているのだから）提案させるのだよ。

奴らにこう話してやっても構わない。これがうまく行けば、私はじだんだ踏んで悔しがるだろうし、君のお嬢様を連中の思いのままにすることにもなるのだ、とな。

私の召使から聞き出したということにして、お嬢様が私を遠ざけていることを知らせても構わないぞ。強要される場合には私を残酷に見捨て、父親の許しを得ようと願っているのだ、とな。

私の召使が君に明かそうとしなかった唯一の秘密は、私たちの居場所のことだけなのだ

から、二ギニーも鼻薬を嗅がせば、それを漏らすのは疑いないし、企てが安全に行われるためだが、何時になったら私が彼女の傍を離れるのか、その情報も聞き出せるはずだと話してやってくれ。

私たちは不便な下宿を捨てて、別のもっと便利なところへ移ろうとしているから（これは事実だ）、私が彼女の傍を離れることも多くなるはずだと話しても構わない（これも召使から聞き出したことにするのだ）。

もしも連中が君の申し出に耳を貸すようなら、内緒の話ということにして、それをベティに教えるのだよ。それで、あの娘に対する君の力も増すことになる。ベティはアラベラに話すはずだ。アラベラは私への復讐の足しになることなら何でも大歓迎だろうから、彼女のほうから（兄貴が黙っている場合は）叔父のアントニーに漏らすはずだ。多分、叔父はハウ夫人に囁くだろう。夫人は、年から年中言い争ってはいるが、何一つ娘に隠しごとは出来ないからな。あの娘が我が愛しの君に知らせることになるだろう。この件が連中のだれかの口を通してだが、私の耳に届くことがない場合、あるいは届くとしても、君のほうから内密の話として書き送ってもらいたい。災いを防ぐためのこととしてだ。それこそ私たち二人が目指していることだからな。

君が書き送ってくれれば、私から最愛の人に見せることも出来る。そうなれば、彼女としても、私にさらなる信頼を寄せる気になってくれるはずだ。それで、私も彼女の愛に確信を持てることになる。疑いたくなることも時にはあるのだよ、今のところはな。彼女のほうでは、もっと安全な下宿へ急ぐ気になるだろう。私にしても、護衛として彼女の身辺に留まる口実が出来るというものだ。和解の希望は一切持てないことを、彼女も納得してくれるだろう。君のほうでは、私から指示することにするが、絶えずジェームズ・ハーローとシングルトンに偽の手掛かりを与えてくれれば良い。災いに類したことが一切起こらないようにするためだよ。

そして、幸せな、幸せこの上ない結末としては、どういうことになると思うかな。令嬢は栄誉溢れる形で私のものとなり、私たちのすべてが目出度く親交を結ぶことになるだろうな。これまでも同じような手を使って、このケチな一族から君がいろいろと心付けにありつくことが出来るよう手伝ってきたわけだが、さらに二ギニーいただくのも悪くはなかろう。先に触れたとおり、頭の良さについても心の正しさのことでも、君の評判は上がるのだよ。ブルーボア亭も君のものになる。君にとって農場一式が所有に値するものであればの話だが、その購入資金にしても、拵えるのに少しの困難もないはずだ。

そうなると、ベティもまた君のものだ。二人とも貯め込んでいるのだろう。それだけ誠実に仕えてきたのだから［乱暴息子がもたらそうとした災いを未然に防ぐというのは、確かに連中に仕えていることになるのだよ］、ハーロー一族は君が所帯を持つのを少しは後押しするはずだ。私のほうでは、今後とも君の貯えが増すように努めよう。だから、君の前途にあるものといえば、ただ幸せの日々ということになる。

閨の声だよ、ジョゼフ、閨の声を上げるのだ。お山の大将になるのも目の前だ。召使を持つのだ。好きなように叱り飛ばしてやれ。喧嘩をしようが愛してやろうが、君の気持ち一つという妻も出来る。「ご亭主」と「女将さん」が一言ごとに添えられるのだ。君は自分の飲食に対して金を払ったりはしない。払ってもらうのだ。だが、君だけがこうも幸せなわけではない。長い目で見れば、キリスト者一人傷つけることなく、名門二家族の和平と

和解を目出度く助長することになるのだよ。あゝ、ジョゼフ、正直者ジョゼフ、君は羨望の的となるのだ。これだけ見込みのある話だ。細かいことに拘る者などいるまい。

もう一度言おう。この一踏ん張りでもって総仕上げになることなのだ。このような計画が連中の胸に浮かぶよう、君の方で仕向けることさえ出来れば、連中が実行するかどうかは問題でないのだ。私の意向にも合致するということだよ。

君の親友

R. ラヴレース

手紙　四十五

クラリッサ・ハーロー嬢からハーヴィー夫人へ

［ハウ嬢宛の先の手紙に同封されたもの］

四月二十日　木曜日

尊敬申し上げますマダム

十四日にはお手紙を差し上げるような無礼をいたしましたが、まだお返事をいただけずにおりますので、配達に手違いがあったのではと、自分勝手なことを考えております。と申しますのも、私のことは心にお留めくださる値もないと、私のハーヴィー叔母様がそのように見ておられるなど、考えましても無念ですので、それよりは、手違いがあってくれたほうがずっと嬉しいからです。

写しをとってありましたし、この不幸な状況にもっと似つかわしい言葉で自分の気持ちを表すことは出来ずにいる有り様ですので、このような気持ちから、あの日に認めました事柄を書き写し(ア)、同封させていただきます。その文面にご関心をお寄せくださいますよう、伏してお願い申し上げる次第です。

この手紙で請け合っております事柄を実行に移しますのも、これまでのところは、まだ可能なのです。心から願っております和解をさらに困難にしてしまいますような行動へと急き立てられますのは、まことにもって悲しい話でございます。

もしも、叔母様、お返事を期待してお手紙いたしますことを許していただけるのでしたら、以前の無分別な振舞いのことでは、幾人かの厳格この上ない裁き人たちに対しまして身の証を立てますのは、おそらく無理でしょうが、私の取りました行動の意図につきましては、疑いを晴らすことも可能でしょう。私が筆に出来ますことすべてを知ってくだされば、そして、身内全員の好意的な評価を失い、私がどれほど惨めな思いをしているのかをお知りになれば、きっと憐れみを掛けていただけるだろうと思うのです。

これからでも皆さんのご好意は取り戻せるものと、希望を抱いております。でも、ハーロー邸ではどのような決定がなされたにせよ、大好きな叔母様、叔母様だけはお拒みにならないでいただきたいのです。二、三行で結構なのです。これまで私に押し付けようと努めて来られたものほどには恐ろしくない条件で、何とか和解の望みはないものか、それとも、私は永久に見捨てられてしまうのか（そのようなことは絶対にありませぬよう、神に

(ア)　ここで触れられている手紙の内容は、八十六頁に示されている。

祈る次第ですが)、お知らせ願いたいのです。

大好きな叔母様、せめてこれくらいの公平な扱いはしてもらえますようお力添えを願いたいのです。姉への手紙でお願いしましたし、同封いたしましたものでも触れておりますが、私の衣類、わずかなお金やその他の品をお送りいただきたいのです。通常の便宜にも事欠くことのないよう、あるいは、(ただ、現在のところは、ですが)一番お世話になりたくない人にその種の恩義を受けざるを得なくなりますのは避けたいと思うからです。

言わせていただきたいのですが、今回の件を私が計画していたのでしたら、これまで耐え忍んでまいりました無念さ、そして、私の願いを入れていただけません時には、今後とも辛抱しなければと思っております無念の種のいくつかは(少なくとも、お金や宝石類につきましては)、味わわずに済ませることも出来たはずなのです。

遠回しに触れております事柄の説明を私に促しても良いと、もしもお許しが出るようでしたら、叔母様にはすっかり心を開きまして、すべてをお話しするつもりでおります。

私に無念な思いをさせるのが少しでも楽しいと思し召すのでしたら、私がこれ以上ないほど悔しがっておりますことを、どうぞお知らせください。でも、私が悔しがっておりますのは、すべて自分自身の反省の結果に他なりません。すべての災いの源と恐れられておりました人の振舞いには、何一つ非難すべき点は見出せなかったのですからね。

使いの者はお宅の方向に用事がありまして、叔母様が私の希望どおりにしてくださるのでしたら、お返事を土曜日の朝に届けてくれることになっております。このような機会に恵まれるなど、右の文面を書き終えますまで知らずにいたのです。大好きな叔母様、

変わることなく恭順なる貴女の

CL.ハーロー

ほんの数行でもお手を煩わせていただけるのでしたら、宛名はソーホースクェア近くのオズグッド氏宅気付でお願いいたします。叔母様のご親切のことは、内緒ごとにとお望みでしたら、決して他の人には知られないようにいたします。

手紙　四十六

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

四月二十二日　土曜日

貴女のあの恥知らずな男の焦れったいやり方、私にはどうしても説明がつきません。でも、貴女の愛情に疑いを持っているのは間違いありません。その意味では、他のだれかさんと同じように控え目な男なのでしょうね。また、貴女の愛には値しないことを暗黙のうちに認めていることにもなりましょう。

エジプトの玉葱にこがれたイスラエルの民(四三)にも似た、貴女のないものねだり(叔母様へのお手紙で一層はっきりいたしました)、何度となく繰り返しておられる、あの男にお会いになったことや、欺かれて連れ出されたことについての後悔の念　…　こういったことがあの男には耐えられないのです。

これまでのあの男の振舞いすべてを振り返りまして、あの男の人柄全般と照らし合わせ

てみたのです。そして、気がつきましたのは、私たちのいずれもがかつて考えておりましたのよりはずっと一貫して、また、いつも変わらずに、あの男は心が卑しく、執念深くてプライドが高いということです。

揺籠の時期からとでも申しましょうか、一人っ子で一人息子ですから、気紛れで我が儘な悪戯っ子だったのです。家庭教師たちに従うというより、従わせていたのです。

大人になりますと、放蕩三昧で体裁などはほとんど構いません。あまりにも易々と身を任せた何人かの女の不始末のせいで、女性全体に蔑みの気持ちを持っているのです。

クラリッサと呼ばれるほどの女性に狙いをつけたあの男の（愚かなお兄様があの男のお陰で一命を取り止めることになってからですが）、お宅での振舞いは一体どうだったでしょうか。挑まれると挑み返すだけでしたわね。貴女を手に入れるのにも、脅しと策略を用いるのです。こんな男に丁重な言動など期待出来るものでしょうか。

それはそうと、このような状況で出来ることは何でしょうか。勿論、軽蔑してやることです。出来ることでしたら、憎むのです。そして、あの男からお逃げになることです。でも、どこへでしょうか。本当に、どこへお逃げになると良いのでしょう。もしかいたしますと、今よりももっとひどい状態に貴女を追い込もうと、お兄様は馬鹿げた陰謀を企てているかもしれないのですからね。

でも、あの男を軽蔑したり憎んだりするわけには行かないとおっしゃるのでしたら、また、離れたくないということでしたら、少し堅苦しいことは抜きになさるべきです。そのようになさっても挙式にまでは至らないのでしたら、その時こそ、あの男の身内のご婦人方に保護をお求めになるのです。

あの方たちが貴女に敬意を抱いておられること自体、あの男が信義を守ることの保障にもなるのです。もしも、疑いの余地が少しでもあるというのでしたらね。ロンドンの新しい下宿で貴女をお迎えするよう、また、すべてが円満に解決するまでの間お傍にいてくださるよう、モンタギュー嬢のお一人を呼び寄せるとの申し出がありましたが、せめてその点を念押しなさるべきだと思います。

これでは、ご自分からあの男のものになることを明言するのに等しい、と貴女はおっしゃるでしょうね。それで構わないのじゃありませんか。今となりましては、あの男と一緒になられること以外には、一切お考えになってはいけないのです。お兄様の目論見のことがあるのですから、この点はますます納得していただけるのではないでしょうか。

ですから、お願いです、この望みのない和解のことはきっぱりと諦めていただきたいのです。そのためにこんなにも長く迷っておられたのでしょう。目の前にございますお手紙の中で、実際の言葉こそお示しくださいませんが、あの男がはっきりと求婚したことを認めておられます。それに、あの男は、貴女が承諾なさるよう、希望ともども理由も添えているようですわね。これは、あのやくざな連中にしてはとても珍しいことです。あの連中が口実にいたしますのは、通例、どんなに図々しく分不相応でありましても、「自分たちが愛しているのだから、私たちのほうでも愛してくれなければ困る」といった具合に、私たちの自愛の気持ちをくすぐろうとするだけなのですからね。

私が貴女のような立場に置かれ、貴女のような素敵な繊細さを持ち合わせているのでしたら、貴女と同じように振る舞うことでしょう。勿論、男の人には敬意の籠もった熱心さで迫ってもらいたいですし、変わらぬ心で求めてくれること、また、言動のすべてが肝心

な点に向かうことを期待いたします。とは申せ、私の愛情を疑ってのことでしょうが、手管を使うとか、引き延ばしを計っているように思えました時には、私なら一歩譲って疑念を解いて上げるか、それとも、きっぱりと絶交するか、そのどちらかにいたしますわ。

そして、後の場合でしたら、貴女のアナ・ハウですもの、精一杯頑張りまして、人目に付かない隠れ家を見つけて上げるか、それとも、貴女と運命を共にする決心を固めることになるでしょうね。

貴女がお従兄弟さんのモーデンさんの帰国のことに触れられると、あゝも簡単におとなしくなるなんて、何て情けない男なのでしょうね。でも、貴女も少し几帳面に過ぎたのではないかと思うのです。と申しますのも、その点にお触れになると、あの男は憤慨して見せたのではなかったでしょうか。

この件につきまして、あの男なりの言い分を聞くことが出来るのでしたら、私が思いますには、貴女は少々うるさすぎた、神経質にすぎた、と言えそうに思うのです(ア)。率直さを自認しているあの男の言葉につけ込んでおられたなら、今は貴女が言いなりになっておられるようですが、それに負けないくらいに、あの男も貴女の思いのままになっていたはずなのです。欺かれてとはいえ、貴女が取られたような行動に走る人間は、様々な屈辱に甘んじて当然なのだなどと、貴女がそのようなことを言われる必要はなかったのです。

でも、私でしたら、元気の良い娘と思われておりますし、あの男が何を目論んでいるのか、十五分もいただければ（貴女のような立場に置かれたといたしまして、形式ばったことに許せる時間といえばそれくらいのものです）間違いなく突き止めてみせますわ。善意からのことなのか、悪意があってのことなのか、どちらかに決まっていますもの。もしも悪意からのことでしたら、早くお気づきになるに越したことはございません。仮に善意からのことだといたしますと、何のことはございません、自分の奥様になる人の慎み深い心を苦しめているのに他ならないのじゃありませんか。

それと、貴女が耳にしてこられたあの男の不品行のことで、苛立ちを誘うような咎め立ては一切お避けになるよう、努力なさるべきだと存じます。とりわけ、幸いにも、実際の体験からそのような話をなさる必要が生じません間は、なおさらのことです。

立派な心の持ち主にとりましては、邪悪な心を立証してみせたということが、某かの満足感につながることはお認めいたしましょう。でも、矯正を加えるにいたしましても、時宜を得ないものですと、その人間を改心させるというよりも、むしろ頑な気持ちにするとか、あるいは、偽善者に変えてしまうようなことがありそうにも思うのです。

でも、あの男がお兄様の賢明な計画をあまり気に掛けておりませんのは、貴女と同じように、私も嬉しく思っております。何という哀れな人なのでしょうね。ジェミー・ハーローお坊っちゃまというのは、半人前の頭で、生意気にも謀りごとをしようだの悪さを企てようだのとなさるのですからね。それでいて、同じことをしているというので、ラヴレースには噛みつくのですもの。知恵の働く悪漢はその場で（宜しければ、面倒なことも一切抜きで）首を吊ってやるのが相応しいでしょう。でも、間の抜けた悪党の場合には、まず

(ア) このように書き記した際、ハウ嬢は目にし得なかったわけであるが、氏の説明を既に読み終えておられる読者諸氏としては、令嬢のごとき真に繊細な心の持ち主にとって、かくも残忍かつ傲慢な策士に対し、令嬢の取った振舞い以外の行動に出ることは不可能であったとお認めくださることであろう。

骨の二、三本もへし折ってやり、それから首吊りにするのが似合いなのです。お兄様のお人柄につきましては、ラヴレースがわずかな言葉で言い当てていると思います(ア)。

お怒りになりたいのでしたら、お好きなだけどうぞ。でも、貴女のお兄様と呼んでいる人もおりますこの見下げ果てた男といたしましては、疑いようもないことですが、貴女をお父様のお屋敷から飛び出させるのにまんまと成功し、気掛かりになることといえば、貴女がご自分の地所に落ち着き、お兄様から独立してしまうことだけだと見ているわけですから、どのようなことにも立ち向かえる気持ちになっているのです。そして、ラヴレースに対しましても、あの男の得意の武器で渡り合う気になっているのです。

お兄様の独り善がりな、得意満面の台詞を覚えていらっしゃらないのですか。直接あの愚かな口からお聞きになったということで、叔母様が貴女にお話しくださいましたし、例の生意気なベティ・バーンズも自慢げに漏らしていたことです(イ)。

叔母様に出されたお手紙には何も期待しておりません。ラヴレースが中身のことを知らずにいてくれたらと思います。どのお手紙を拝見いたしましても、あの男は、貴女がほとんど信頼を寄せておられないことに、出来る範囲内でですが、激しい怒りを表しているように見えるのです。仮に私があの男で、もっと信頼されて当たり前という気持ちでいるといたしますと、私でもやはり腹が立つだろうと思います。

お衣装のことですが、もしもあの男のお身内のご婦人方に保護を求められるお考えなのでしたら、気をお回しにならないことです。貴女と貴女のお身内の方々との間がどうなっているのかご存じですし、愚かな人たちが惨い仕打ちをしているからといって、貴女へのお気持ちが冷めることは決してないはずです。

ご自分の地所の所有権を請求なさるおつもりがないことは分かっております。でも、あの男には貴女の代わりに請求する権利を与えていただきたいのです。そのほうがもっと良いだろうと思います。

これにて失礼いたしますが、貴女の進まれる道のすべてを神様が導き、お示しくださいますよう、日々祈っております。

変わることなき親愛の情と誠意とを込めまして、貴女の

アナ・ハウ

手紙　四十七

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

四月二十一日　金曜日

慰みごとを提供するのは、ラヴレース、長きに亘って貴公の役どころであり、俺はそれに与る立場であったな。また、貴公が事を推し進めて行く間、貴公の拵え上げた話の数々とその行方に関し、俺は批判を加えようとは欲しなかった。何故ならば、いかに貴公が気取ってみせようとも、この淑女の比類のない嗜みや美質が常に彼女の防護とも保障ともなってくれるものと信じていたからなのだ。だが、俺の見るところでは、都へ向かう気を彼

(ア)　百六十頁を参照のこと。　(イ)　第二巻の二百三十三頁、二百三十六頁を参照のこと。

女に起こさせ、また、彼女を案じればこそ貴公の胸に生まれるかもしれない立派な考えなどは、おそらく鈍らせ、圧し潰してしまうという、そんな連中が住む家を下宿に選ばせるところまで、貴公はまんまと上首尾を収めたようだから、俺としても一筆認めずにはいられないのだよ。言うまでもないが、彼女の側に立ってのことだ。

こうする気になったのは、別に美徳ゆえのことではないのだが、仮にそうでも、その手の動機から訴えたのでは、貴公の心を動かす望みはまずないだろう。

それに、彼女ほどの品性、家柄、そして、財産に恵まれた女を辱めた場合に、いずれ受けるかもしれない報いのことを思い出させてやったところで、貴公のような男が怯むはずもあるまい。

また、思いのままに出来る女はすべて正当な獲物と考えているわれわれだが、そんな男に向かって、女に対する感謝の念や名誉心などを動機に上げるわけにも行くまい。われわれの言う名誉心と、世間で受け入れられているこの言葉の意味とは別なのだからな。

では、俺の動機は何だと思う。他でもない。貴公への真の友情なのだ。友情があればこそ、この比類なき女性に対しては道義に適った扱いをしなければならないと申し立てているのだ。それが貴公自身、そして、貴公の一族の利益になるからだよ。だが、この淑女というのは、彼女の利益を主たる理由に挙げてもらうのにも十分値する女性なのだぞ。

前回M邸を訪れた際、叔父上からまことに熱心なご要望があった。貴公が囲いの中に落ち着くよう説得するのに、俺の顔をきかせて欲しいとのお頼みだ。そして、ご一族の諸々のご事情を並べられたので、俺としても快く卿のご意向に従わざるを得なかったのだ。この天晴な女性に対する貴公自身の意図についても、当時は彼女に相応しいものだと思っていたわけだから、なおさらだよ。その点は卿に請け合っておいたが、卿としては、貴公が彼女の一族から受けた仕打ちのこともあり、かなり案じておられたのだ。だが、事情が一変した今、別の観点から思うところを直言させてもらうことにする。

この淑女の美点の数々について、貴公の口や貴公の認めた書面のすべてから、また、だれもが口を揃えて述べ立てているところから推して、これだけの女性をもう一人、貴公はどこで見つけるというのだ。何故に彼女の美徳を試すというのだ。疑うべき根拠は何一つないというのに、試してみたいと思うのは何故なのだ。

俺が貴公の立場に置かれ、また、結婚を予定されているとして、一人の女をこの世のどんな女よりも好きだという場合、この淑女について貴公がそんな考えなのは分かっているが、俺ならば、われわれのように女に通じた上で、さらに試練を与えるような真似は控えるだろうな。図に当たってしまうのが怖いからだよ。心の底から貞淑な女が仮にもこの世にいるとすれば、それはこの女だと信じて疑わない場合はなおさらだ。

それに、言わせてもらうが、ラヴレース、この淑女が置かれている状況では、試練としてフェアーなものではないということだ。貴公の企みや謀略の陰険さのことがある。愚かにも彼女の身内全員が、知らぬこととはいえ、貴公の悪辣な頭が捻り出した企てのままに行動しているわけだから、彼女の思いとは裏腹に、貴公の手中にあると見て構わない有利さのこともある。彼女には身を守るべき手段がいかに乏しいかも考えた。彼女が住み込むことになる家のこともある。貴公の手先に取り巻かれるのだぞ。見掛けも良ければ育ちも良く、上品な連中だから、外見を繕う気になれば、容易に見破られることはない。とりわけ、ロンドンにはまったく無案内な、若くて経験のない女性にはな。これらすべてを考え

るなら、万に一つ落とされるようなことが彼女にあるとしても、いかなる栄誉を貴公は手にするというのだ。誇る理由がどこにあるのだ。それに、貴公は生まれついての策略家ときている。発明の才に長け、大胆不敵で無慈悲だし、好機の到来を忍耐強く待つことも出来れば、大抵の者のように、激情の嵐に駆られて焦ることもない。激情というのは、計画を蕾のうちに摘んでしまうことが多いわけだし、誘いを掛けた者に向かってやっと角を出しかけた蝸牛を、殻の中に閉じ籠もらせてしまうものだからな。自分の言葉も女性への誓いも一切顧みない男だし、あの淑女のほうは、自分の言葉を几帳面なほど厳格に守っている。作為や謀りごとは出来ず、それゆえ、他人のことを信じやすいのだ。このような誘惑者、このような誘惑、そして、彼女に仕掛けられるはずだと俺が見ている、そんな罠に彼女が耐え抜くとしたら、それは奇跡というものだろう。要するに、男どもというのはしつこく責められなくても誘惑に陥りやすいというのに、女がそんなにも多くのことを望まれる理由が分からないということだよ。同じ父母から生まれた娘なのだ。同じ脆い成分の寄せ集めで出来上がっているのだ（違いといえば教育だけだが）。征服したからといって、どこに勝ち誇るべきものがあるのか、それも分からないのだよ。

その美しさに惹かれ、彼女を説き伏せようと骨を折る別のラヴレースもいるのではないか、と貴公は尋ねている(ア)。

否、他にこのような男は一人としているはずもない、と答えておこう。容姿に知力、財産、そして、上に触れたその性格を考慮に入れてのことだ。それだけプライドが高い貴公のことだから、仮にもいるなどと思えば、その分、己の評価を下げることだろうな。

だが、貴公を支配している感情について触れさせてもらおう。つまり、復讐心だよ。何度も言い聞かせてきたし、お陰で激怒を招くことにもなったが、愛情などは二番手に過ぎないということだ。彼女を連れ出すのにいろいろ骨を折ったというが、復讐への口実としては、何ともお粗末ではないだろうか。彼女が留まった場合には、ソームズの妻となる危険を冒すことになる点は認めるとしてもだよ。こういったことが口実とは違うと言うのなら、彼女を迫害することで貴公の願いに応え、彼女を貴公の手中へと投げ込んだ連中に感謝しないのは何故なのだ。それに、さらなる試練のためとして貴公が持ち出している口実にしても、貴公に対する好意に由来する彼女の過失を想定しての話だが、辻褄が合わないというだけではないぞ。まことにもって恩知らずなやり方ではないのかな。

そこで、ひとつ尋ねさせてもらうことにするが、この種のお粗末な口実を完膚なきまでに打ち崩すためだよ。貴公の考えでは、彼女が快く貴公と駆け落ちした場合、もっとましな待遇を受ける資格を与えられていたというのかな。情婦としてなら、確かにそうかもしれない。だが、妻として、そんな彼女を今の半分も愛する気持ちになっただろうかな。

彼女は証明してみせたのではないのかな。これ以上はないほどの挑発行為でさえ、両親に対する子の務めから、彼女の心を逸らせるには十分でないことをだ。子の務めというのは人間生来のものであり、生来のものであるがゆえに、いわば元来が自由意思には委ねられない義務なのだよ。そしてこれは、彼女がその気になった時には、堅い契りの言葉によって、また、完全に自らの意思によって動く人間として結ぼうとしている、より重大な義務関係を侵すべからざるものとして守り通してくれるという、その魅惑的な兆しではない

(ア)六十一頁を参照のこと。

のだろうか。

悪党であり、また、豹のごとくに残忍であるにも拘らず、そのような貴公を彼女が愛していることに疑いを入れる根拠はない。それにしても、何という自制心を備えているのだろうな、彼女は。貴公のごとく洞察力に富む自惚れ者にして、彼女の愛を疑いたくなる時もあるというのだからな。一方では、あのとおり身内の者たちから迫害を受け、また一方では、貴公の華麗さに心を奪われている彼女なのだが、一人残らずだれもが言い寄っているのだよ。自分たちの側の一員になってもらいたいとな。

ここまでの話からすると、俺は自分の発議したことを離れ、貴公のためというよりも彼女のために弁じているのだと、貴公はおそらくそんなふうに考えるだろうが、決してそうではない。書き記したことはすべて、彼女のためよりも貴公のためのことなのだよ。彼女が貴公を幸せにしてくれるかもしれないのだからな。ただ、彼女があの慎みを捨てないかぎりは、貴公が彼女を幸せにすることはまず不可能だと思う。放蕩児の心を占める愛とはどんなものかな。特に風変わりなものであるはずはない。だが、これ以上理由を上げるまでもあるまい。その必要が生じた際にも、おそらく、俺の意見に賛意を示してくれるくらいの率直さは貴公も持ち合わせていてくれるだろうと思うのだよ。

俺自身が大いに好ましく思っているからということで、結婚生活を勧めているわけではないのだ。また、差し当たっては、身を固める考えもないのだよ。ただ、貴公は一族の名を継ぐ最後の人間なのだし、一族は国許で重きをなす名門で、貴公自身にしても、いずれは結婚しようと考えているわけだから、ひとつ尋ねたいのだが、今回のものを見送った場合、果たして今手にしているのと同じような機会が、再び得られるのだろうかということだよ。貴公のものと比べても恥ずかしくない家族、そして、財産に恵まれた女でもあるのだ（旧家を誇り、プライドが高いゆえに、気にくわない家族のこととなると、貴公は軽蔑した言い方になりがちだがな）。美人の誉れが高く、また同時に、慎重さ、高尚な心（分別と言わずに、そう呼んでおこう）、そして、美徳の点でも、すこぶる名高いのだからな。

子孫のことを顧みず、自分一人の満足を優先させるような狭量者でないのなら、家系を守るために子を設けたいと願って当たり前の貴公のことだ、放蕩児お定まりの年貢の納め時まで引き延ばすはずはあるまい。つまり、病か老齢、あるいは、その両方に襲われるまで待ったりはしないだろうということだ。そんなことをすれば、貴公嫡出の子供たちから呪われて当然ということになるのだよ。まったく惨めな目に遭わせてくれたということでな。子供たちにしてみれば、貴公が最悪だと称している(ア)、あの借地人の善意よりももっと悪い条件で、言い換えるなら、医者のお情けで露命を繋がざるを得ない状態になるわけだからな。そして、子供たちのほうも浅ましい子孫を殖やすことになるだろう（生き長らえて子供を作ることが出来ればの話だがね）。その呪い、あるいは、呪いの種を末代にまで受け継がせるような子孫をだよ。

謹厳な世間の連中は貴公や俺のことを悪党と見ているが、われわれとて、良心の呵責をまったく感じないところまではまだ行っていない。宗教がわれわれに逆らうとはいえ、まだわれわれも、宗教をこちらの習慣に合わせるほどに厚かましくはない。そういう輩のことは軽蔑しているのだ。また、不信心者になるほどの馬鹿でもない。要するに、来世での

（ア）九十頁を参照のこと。

報いや懲らしめを信じているのだ。だが、溢れる若さと健康を手にしているため、悔い改める暇はあるだろうと思っているのだ。つまり、平たく言えば［真面目すぎるなどと思わないでくれ、ラヴレース。貴公にしても、頻繁なことではないが、真面目になる時はあるのだからな］、快感が得られる間は感覚を満たす暮しを願い、もうそれ以上罪を犯すことが出来なくなる頃には、心を改めようと考えているわけだ。

そして、この敬愛すべき女性は、貴公の改心に取り掛かろうという惜しみない努力のゆえに、また、貴公のものとなる前に、貴公の告白が嘘偽りのないものか、その証を求めたからといって、苦しみ悩まねばならないというのだろうか。

貴公が自ら歩まんとして線引きをし、今まさに踏み入ろうとしている小道を、この先一歩たりとも進まぬうちに、この件すべてに亘って、一体何をなさんとしているのか、よくよく考えてもらいたいのだよ。これまでのところは、すべて実にうまく行っているのだから、仮にも令嬢が貴公の信義に疑念を抱くようなことになれば、彼女にとって確信を持てるものはなくなるのだ。だから、彼女には誠実な態度を守ることだよ。彼女が用いているとおりの言葉の意味でな。貴公も承知のとおり、貴公の振舞いを笑おうとする者など、貴公の相棒にはだれ一人としていないのだよ。たとえ笑うことがあるとしても（貴公によって、また、われわれすべてによって、あれほど嘲笑の的にされて来た状態に貴公が身を落とすということでだが）、貴公には一つ有利な点があるだろう。つまり、恥じ入るいわれは貴公にはないということだよ。

集配日のこともあり、この手紙の結びをつけずにいたところ、従兄弟のオズグッド宅気付で、令嬢宛の手紙が一通届いているのを知った。この二時間ほどの間に、特別な使いの者の手で届けられたもので、ハーロー家の封印が押されている。従って、重要なものかもしれないので、俺の使用人に頼み、俺の手紙ともども大至急届けることにする(ア)。

ほどなく上京するのだろうが、令嬢は連れずに来てほしいものだな。では、失礼。

誠意を尽くし、幸せになってくれ

J. ベルフォード

四月二十二日　土曜日

手紙　四十八

ハーヴィー夫人よりクラリッサ・ハーロー嬢へ

［手紙四十五への返事として］

愛する姪へ

これほど懇願されておりますのに、数行の文も認めずにおりますのは難しいことでしょうね。いつも愛しく思っておりました貴女のことですからね。前のお手紙は受け取りました。でも、返事を出すこともままならない状態だったのです。こうして返事をいたしますのも、誓いを破ってのことなのです。

貴女のことにつきましては、毎日奇妙な話が伝わってまいります。貴女と一緒にいる卑

(ア) これはアラベラ・ハーローからの手紙であった。手紙五十一を参照のこと。

劣漢は、のべつ勝ち誇ったような素振りで、挑戦的な態度だと聞かされているのです。このようなことを知らされますと、事態をますます悪化させることになるのではないでしょうか。あの男の手に負えないところはご存じでしょう。貴女はそんなにも素敵な人間だというのに、あの男にとっては、貴女を愛することよりも、自分の気持ちのほうが大事なのです。私は何度も何度も注意いたしましたね。貴女以上に注意を受けたお嬢さんも他にはいないというのに　…　そのクラリッサ・ハーローがこんな真似を　…

身内の人たちとのあの話し合いに顔を出してくれても良かったのです。どうしても好きになれないと言い張れば、折れてもらえただろうと思うのです。その点は譲るという皆さんのご意向を伝えるよう頼まれますとすぐに、私はそれとなく触れたはずです。もしかいたしますと、分かりにくい仄めかし方だったかもしれませんが(ア)　…　でも、だれが思いついたでしょうね。あゝ、貴女が　…　あんな手管で家出をするなんて　…　あんなにもずるい手回しをしていたなんて　…

それでも、貴女は事情を説明したいと言うのですね。何をはっきりさせられるというのです。駆け落ちをしたのではありませんか。それも、ラヴレースのような男とですよ。一体、何をはっきりさせたいというのでしょうね。

行くつもりではなかったのだと、貴女はおっしゃいます。それじゃ、何故あの男と会ったのです。六頭立ての馬車も御者も、すべてあの男の手回しじゃありませんか。あゝ、あなた、一つ手管を使うと、次々に頼らなくてはならなくなるものなのですね。信じてもらえることでしょうか。仮に信じてもらえた場合でも、あの男が貴女に対して大変な力を持っていたのだと、そんなふうに考えられてしまうでしょうね。あの男がですよ。他ならぬラヴレースがです。札付きの放蕩者がですよ。その相手というのは、クラリッサなのですからね。こんな男への愛情が分別に打ち克ったとでもいうのでしょうか。決心にも優ったというのでしょうか。仮に信じてもらえても、それが貴女にはどんな手柄になるというのです。事態の改善にどうつながるというのです。あゝ、臆することなく次の話し合いに臨んでいてくれたなら　…

その場合にはどうするつもりであったのか、すべてお話しいたしましょう。

お父様からのご要請やご命令には、貴女も逆らえないはずだという考えがあったのは事実です。お父様は、貴女が新たにお怒りの種を蒔かないかぎり、どこまでも腰を低くなさるおつもりだったのです。あの致命的な知らせの届くわずか一時間前のことでしたが、お父様は、「クレアリー・ハーローを愛しているのだよ。私の命も同じことだ。他にもう手はないというのなら、あの娘の前に跪いても良い。私の気持ちに沿うよう言い聞かせるためだ」とおっしゃったのです。

お父様とお母様は貴女に向かって（本来の姿とは逆さまですわね）頭をお下げになるおつもりだったのです。そして、仮にも貴女がお二人に会うのを拒んだり、話し合いに先立って、結婚条件の書類に署名するのを拒否したりするようなことがあった場合は、ご無念ではありましょうが、折れてくださるおつもりだったのです。

それでも、貴女は生まれつき大変気立てが好く、克己心もとても強いとお二人はお考えですから、貴方がお二人に逆らうことは出来ないはずだと思われていたのです。一方の男

(ア) 第二巻の二百三十四頁から次頁にかけてを参照のこと。

性をどんなに嫌っているとしても、貴女のことですから、私たちのだれもが期待して当然と考えておりましたものよりももっと激しい、我がまま一方な恋情を、もう一方の男性に対して抱いているのではないのでしたらね。

たとえ貴女が逆らいましても、水曜日の話し合いは貴女にとって苦痛の少ないものになっていたはずなのです。身内一同がお揃いのところへ呼び出され、手短な紹介を受けるだけのことでした。「ここにいるのは、つい先頃までは非の打ちどころもない、謙虚でよく尽くしてくれていた娘だが、今では、寛大なことこの上ない父、母、おじたちの意向や一族の利益、一族の期待するところを踏み躙って得意顔をするのを当然と弁え、だれの気持ちよりも自分の意思を優先させている。それも、見てくれの良さばかりにたまたま気を引かれてのことだ。何せ、品行の点でなら、あの二人は到底比較にはならんのだからな」といった具合にです。

お父様とお母様にこのように願いを聞き入れていただき、もしかいたしますと祝福のお言葉もいただき、また、真似ようもなくご立派なお母様からは、貴女の反抗から生じる様々な結果を免れるよう、真剣そのもののお祈りを捧げていただいた上で、貴女が持っていたような義務観念では、動機として弱すぎるということになったでしょうから、思いやりの気持ちのほうに訴えかける予定だったのです。そして、三十分ほど考えてもらうためですが、引き下がるように命じられることになっておりました。その後、署名してもらうために、結婚条件の書類がもう一度差し出されることになっておりました。貴女にとって一番迷惑でない人の手でということですが、多分、貴女の優しいノートン夫人にお願いしたはずです。おそらく、これもお父様からのお口添えがあってのことでしょうね。そして、再度断られました場合には、断る旨をはっきり述べてもらうため、貴女はもう一度招き入れられることになっておりました。貴女自身の提案したいくつかの制約が強く求められたことでしょう。私の家かアントニー叔父様のお屋敷へ移りますのを許していただいたでしょうが（私たちのどちらの家になるかは合意を見ておりませんでしたが、皆さん、貴女が説得に応じるものと期待しておられたからです）、従兄弟のモーデンさんが帰国なさるまでの間、あるいは、お父様が貴女と顔を合わせるのに耐えてくださるようになるとか、ラヴレースの目論見が終わったことを確信なさるまで、貴女に滞在してもらうためでした。

目的がこのようなものでしたし、お父様はどうしても貴女には従ってもらおうとお気持ちを固め、きっと貴女は折れてくれるだろう、これだけ遜った、これだけ穏やかな方法でなら貴女も説得に応じるはずだと、大変に希望を持っておられましたから、貴女の家出のこと　…　蔦の東屋で食事をするというのも、私の、そして、私たち皆の目を眩ます手管だったのでしょうが　…　あんなにも計画的な家出のことを耳になさると、特にお父様が狂人のように取り乱してしまわれたのも、少しも驚くには当たらないのです。本当に、本当にいけないお嬢さんですこと。

私といたしましては、そのことを知らされましても信じる気にはなれませんでした。貴女のハーヴィー叔父様も信じようとなさいませんでしたよ。むしろ、私たちの胸に浮かびましたのは、私たちが恐れましたのは、それよりももっと捨て鉢な行動でした。もっと捨て鉢なことといえば、一つしかございませんね。私は庭の裏木戸よりも先に、滝のところへ駆けつけてもらおうと思いました。お母様はその二つの懸念でお心を掻き乱され、気を失ってしまわれたのです。貴女のお父様は、お気の毒に、お父様は小一時間も茫然自失の

状態で、呪いの言葉を、それはそれは恐ろしい呪いの言葉を口にしておられました。今でも、貴女の名が出ると耐え難いご様子なのですが、それなのに、他のどなたのこともお考えにはなれないのです。貴女の過ちというのは、取り柄がありますだけに、かえって重大なものになってしまうのです。ほとんど一時間ごとにですが、新たに事態を悪化させるようなことが何かしら起こっているのです。どのようなものであれ、好意などがどうして期待出来るというのでしょうか。

気の毒には思っておりますよ。でも、貴女の求めていることは、何一つ受け入れてもらえそうにありません。

男の人と駆け落ちをした娘なのですよ。無念な思いを味わわずに済ませるなどと、どうしてそのようなことが口に出来るのでしょうね。何とも情けない自尊心ですわね。他のことなら何でも、当てにしようというのですからね。

貴女のために口を開く勇気など私にはございません。どなたにもないと思いますよ。お手紙はそのままにしておかねばなりません。そういうわけで、ハーロー邸のほうへお届けいたしました。ですから、とても厳しい処置があると思わねばなりませんね。自ら選んだ定めではありますが、耐え抜く力を授かりますよう祈っております。あゝ、皆にどれほど辛い思いをさせてしまったのでしょうね、貴女も。貴女に幸せを願う資格などあるのでしょうか。お父様は、貴女は生まれてこなければ良かったのだと言っておられるのです。お気の毒に、お母様のほうでは … でも、貴女を苦しめることはありませんわね。もう救いの道は一つとしてないのですもの。考えごとの好きな貴女のことですから、いろいろと思い巡らすことも出てくるのでしょうが、それがそんなにも辛いことではないというのでしたら、貴女も本当に変わってしまったということですわね。

こうなりましたからには、貴女の定めの中で出来るかぎりの善後策を講じなければなりません。ですのに、どうやら、式はまだ済ませていないというのですからね。

請け合えることならどんなことでも、実行に移すことが出来る、と貴女は言っておりますね。考え違いかもしれませんよ。貴女の評判も身内の好意も取り戻せるかもしれないと思っているのですね。絶対に無理です。たとえどちらかは取り戻せましても、両方は絶対に無理でしょうね。貴女を元通り迎え入れますのには、傷つけられた者たち（つまり、貴女を愛し、貴女と血のつながりのある者全員のことですが）一人一人が心を合わせねばならないのです。これだけ世間に知れ渡った不始末なのです。皆さんが心を一つに出来るのは、一体何時のことでしょうね。

心から願っている和解をさらに困難にするような行動へ急き立てられるのは悲しいことだ、と貴女はおっしゃいます。今頃になってなのですかね、急き立てられることに恐れを抱くのは。何時の日か思いつくことがあるといたしましても、今のところ和解の考えはまったくありません。貴女の軽はずみな行動がどのような結末を迎えるのか、それを確かめるのが先です。私たちのほうでは、人命に関わることがまだあるかもしれないと考えているのです。一緒にいる男は、気持ちよく貴女と別れてくれるのですか。もしそうでないのなら、どんな結果になるのでしょう。もしも別れてくれるというのでしたら、どんな理由からと考えたら良いのでしょうね。恐ろしいことです。こんなことを考えますのは止めにいたします。貴女の貞潔さは承知しておりますよ。でも、貴女には身を守る術が一切ないのではありませんか。式はまだなのではありませんか。貴女は自ら（日々の祈りを無駄に

して）誘惑に身を任せたのではなかったですか。しかも、あの男は陰謀家の中でも一番性悪なのではありませんか。

これまでのところ、「すべての災いの源と恐れられていた男の振舞いに、何一つ非難すべき点は見出せない」と、貴女は言っています（それも、はっきり後悔の念を口にしている貴女には似つかわしくない口振りでです）。貴女が話していたことですが、「三月十五日にご用心」と忠告したローマの占い師に対するシーザーの話に似ておりますね。「三月十五日だ」と、二度と戻らぬ運命になっていた元老院へ向け、堂々と行進していた際、群衆の中に占い師を見つけ、シーザーは言いました。「三月十五日がやってきたぞ」とです。占い師の答えは、「でも、まだ過ぎ去ってはおりません」でした。これを当てはめてみてはいかがでしょうね。あの男の品行方正ぶりについて、お付き合いの最後の最後までこのような意見でいられますよう祈っております。あの男が、これまで自由にしてきた他のどんなお相手よりも、貴女には立派な振舞いをしてくれますように、ですわ。アーメン。

お返事は絶対になさらないよう、お願いいたします。私が貴女に手紙を出しましたことを、お使いの人がだれかに漏らしたりしないよう願っております。それから、まさかこの文面をラヴレースさんに見せたりはなさらないでしょうね。貴女の分別を信じまして、忌憚のないところを書かせていただきましたからね。

貴女のために祈っております。

お便りいたしますこと、私のドリーは知らずにおります。だれも知りません(ア)。夫のハーヴィーすら知らないことなのです。

ドリーは何度か手紙を書きたがっておりました。でも、熱心に貴女の落ち度を庇おうとしましたし、私たちが心配になるような偏った見方でしたから［貴女のように自堕落なことをされますと、どこの親だって心配になるのですよ］、禁じられてしまいました。背いた場合には、永久に私たちの愛顧を失うことになっているのです。父親の命令ですが、貴女のご家族からの要求でもあります。

あの子は、可哀相に、一時間ごとに貴女のためにお祈りをしております。でも、娘は気付いていませんが、私も祈っておりますことを申し添えましょう。

心の底から悩む叔母より

D. ハーヴィー

四月二十一日　金曜日

手紙　四十九

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

［先の手紙と共に］

四月二十二日　土曜日　朝

ちょうど今、同封いたしましたものを叔母のハーヴィーから受け取ったところです。叔

(ア) ハーヴィー夫人の言葉とは裏腹に、この手厳しい手紙は、後に分かることではあるが、執念深いアラベラと密かに申し合わせた上で認められたものなのである。

母が哀れな姪に便りをいたしましたことは、何卒、ご内聞にお願いいたします。
私がロンドンへ向かおうと、あるいは、好きなところへ進もうと、構わないように思われます。私などどうなっても平気なのでしょう。
ハーロー邸から便りがありますまでは、ロンドン行きを見合わせたい気持ちのほうが強かったのです。和解への望みをつなぐよう、励ましの言葉でもあれば、仮にあの人の自由になることがありましても、私自身の出します条件以外でなら、決して好きにさせたりはしないことを分かってもらうつもりでいたのです。
でも、私にその気があろうとなかろうと、どうしてもあの人のものにならなければいけないようです。それも、おそらく、すでに私が味わっておりますあの大変悔しい思いよりも、さらに大きな屈辱を受けた上での話になるのでしょう。私のほうでは少しも満足していない人なのです。それなのに、絶対にあの人のものとして放り出されなければならないのでしょうか。
ご覧のとおり、私の手紙はハーロー邸へ送られたのです。あちらでの受け取られ方を考えますと、心の痛む思いです。
あの手紙が届けられましたことで、一つだけ、私にとりまして慰めとなることがございます。叔母といたしましては、皆が見放す覚悟を決めました、その哀れな娘と文通をしているように勘繰られていたのですが、文面から身の証が立つことになるでしょう。大切な身内の者たちは、私のせいで互いへの信頼感を失い、冷ややかな目を向け合っているのですが、これは私の不幸の中でも決して小さなものではないのです。ご承知のように、可哀相な従姉妹のドリーは、叔母と同様に、このことを残念がっておりますが、それも当然のことと思います。ハウさんは、大好きな私のハウさんは、私のことでは、他のどのようなことにもましてお母様と言い合いをなさったわけですから、私の失態が及ぼしました悪影響をいやというほど感じておられますね。なのに私は、私をこれだけの不幸に引き摺り込みました男のところへ放り出されねばならないのです。失態を犯します前に、そのことを想定いたしまして、ずいぶんと考えたのです。心配もいたしました。でも、その忌まわしい側面のことは、十分に見極めてはいなかったのです。
それに、今分かったことですが、私は家出をしたらしいという知らせが届きます一時間前には、私のことを自分の命のように愛していると、父は認めてくれたのです。どこまでも腰を低くするつもりだったというのです。そして父は　…　あゝ、何という優しさでしょう。今となりましては、悔しいばかりの父の優しさです。叔母といたしましては、このような手紙を出しましたことが人に知れますのを、別に恐れる必要はなかったのです。父親が娘に向かって跪こうというのですからね。そのようなこと、私には到底耐えられなかっただろうと思います。そうなりました場合にはどうしていたか、見当もつきません。このような折に、とてもとても不快に思っております男性のことでそのような場面に立ち会うくらいでしたら、死んでしまうほうがはるかに望ましく思われたことでしょう。徒らに父を跪かせるようでしたら、この身は滅ぼされても当然なのです。
ただ、自分の気持ちや容姿についての好みを犠牲にするというだけの話でしたら、跪いてもらうまでもなかっただろうと思うのです。義務の念のほうが自分の気持ちに勝っていたはずです。でも、嫌悪の情が　…　心の底から嫌悪する気持ちがあるのです。残酷で野心的な兄が成功を収めますと、どこまでも抑えのきかない人間ですし、嫉妬に燃える姉の

仕打ちもあるでしょうから、そうでなければ、私に好意的になっていたはずの皆の気持ちを、自分たちのほうへ引き寄せてしまうでしょう。ないがしろにすることは絶対に許されない夫婦間の務めに対しましては、あくまでも厳粛に誓いを立てなければなりません。夫婦の睦まじさというものは［清純無垢な人でさえ、気乗りはしなくても、考えずにいられない事柄なのです。お友達のよしみで、貴女には言わせてくださいね］、本当に打ち解けたものなのです。私自身のことを申しますと、どのような務めであれ、まして、自分から誓ったことでしたらなおさらですが、決していい加減な扱いはしない人間なのです。そんな私が、虫酸の走るような人の手にこの手を委ねたり、このように不承不承というよりももっと嫌な、そして、こんな言い方をして構わなければですが、一心同体になることもない結婚に同意したりいたしますのは、果たして誠実な態度だったと言えるのでしょうか。しかも、一生涯のことなのです。大抵の若い人たちが考えております以上に、そして、もっと深く考えるということがないのでしたら、また、比較考察したり、内省したりするということがないのでしたら、私もこんなに強情を張ったりはしなかったかもしれません。繊細な心（厚かましいですが、このように呼んで構わないでしょうか）や深慮、比較考察や内省というものも、私のようなところまでまいりますと、恵みとは申せません（そうではないことが分かったということです）。とても微妙な問題の時などには、どっちつかずを装う術も弁えていれば良かったと願う次第です。ただ、無知なのが玉に傷だ、などと言われたくはないのです。あゝ、自分のものをそんなふうに考えて構わなければの話ですが、並よりもこまやかな感受性を持っておりますと、幸せにはなれないものなのですね。

この私に、何というひどい手を使うつもりだったのでしょうね、身内の者たちは。おそらく、兄の画策によるものと思われます。想像いたしますに、兄は一同お揃いの身内の前に私を引き出し、皆さんの意向よりも自分の気持ちを優先させることの出来る娘だと言いふらすつもりだったのです。確かに、厳しい試練の時となっていたことでしょう。それでも、試練の場に立ち向かっていれば　…　結果がどうであれ、耐え忍べば良かったと、つくづくそう思うのです。

人命に関わることがあるかもしれないと、叔母はそう申しております。この言葉からいたしまして、叔母にはシングルトンさんの無謀な企てのことが分かっているかにも思われます。叔母に言わせますと、この不幸な出来事の結末はそんなところ、ということになりましょう。避けられるものならと、神にも祈る気持ちです。

叔母はある考えを持ち出すのを避けておりますが、私としてはなおさらのこと、詳しくお話しするわけにまいらないものです。残酷な考えなのです。それにいたしましても、神のご恩寵により男性の誘惑に負けない人間になりますことが、私にはまだ出来ていないのだと、そのように考えているのだといたしますと、叔母も、私の貞節なことを褒めてくれておりますのに、あまり貞節さというものに信を置いてはいないことになりましょう。この人以上に容姿に心惹かれます男性に出会ったことはございませんが、ただ、人柄に問題がありますので、あの人について無関心を装いましても、さほど手柄になることではないのです。でも、こうしてあの人を間近に拝見いたしますと、これまで以上に好ましくない気持ちになるのです。礼儀を弁えず、無慈悲で傲慢です。分別もございません。ご自身の幸せを粗末にしておりますし、私の幸せを踏み躙る人です。今回の振舞いからいたしましても　…　私の運命があの人の手に握られているのはあまりにも明らかですし、あの人の

願いの数々にいたしましても［口に出すのも口惜しいかぎりです］、何を望んだら良いのか分かっていればの話ですが、自分の思いのままなのです。実際の話、今ほどあの人を不快に思ったことはございません。誓って申しましょう。これまでに良い印象を持ちましたどんな男性と比べましても、あの人には容易に憎しみを抱くことが（まだ嫌いになっていないなんてことがあればですが）出来そうに思うのです。立派な理由もございます。あの人には期待を寄せていたわけですが、失望の度合いのほうが強かったということです。もっとも、独身を通すことが許されたといたしまして、独身生活よりもあの人のほうを取るほど、大きな期待を寄せたことはなかったのです。ですから、あの人を永久に諦めることが和解への道を容易にしてくれるというのでしたら、また、皆のほうでその旨を示してくれるようでしたら、決してあの人のものになるつもりはないことを分かってもらおうと思うのです。と申しますのも、自惚れかもしれませんが、心の点では、私のほうがあの人よりも優っているように思うからです。

気の触れたような口ぶりだ、と貴女はおっしゃることでしょう。叔母への便りを禁じられ、和解への望みは捨てるよう教えられているのです。貴女には激しい怒りの言葉に耳を貸していただかねばなりません。あの人に面会を許すなんて、何という愚かなことをしたのでしょうね、私も。お陰で、顔を揃えている身内の者たちと会うことも出来なくなってしまったのですものね。皆に会っていたなら、すべてはもう終わっていたでしょうに、現在の苦しみのほうはいつ果てるとも知れないのです。両方の男性から放免され、おそらくハーヴィー叔母様かアントニー叔父様のお屋敷で、すべてを丸く収めてくれそうな従兄弟のモーデンが帰国いたしますのを待ち佗びていたはずなのです。

実際、私は話し合いの場に臨むつもりでいたのです。もしそうしておりましたなら、今頃はだれの名字で呼ばれるようになっていたことか …… 父のほうで怒りを抑えてくれました場合には、私といたしましても、腰を低くした父、跪いている父に向かって、逆らうような真似は出来なかっただろうと思うからです。

でも、私が譲らない場合は、父のほうで折れてくれるつもりだったのだと、叔母は言っております。そのように勿体ないほど腰を低くしてくれます前に、きっと父は、私の遜った態度に心を動かされていたはずです。私を受け入れようとしてくれます際の父の気持ちは、私の有利に働くよう利用できたかもしれません。それに、父も最後には折れてくれる考えだったというのですから、身内の者たちの心は痛まずに済み（少なくとも自分たち自身の気持ちではそうでしょう）、悪いのは私ということになってしまうのです。あゝ、叔母はどうして［今思い出したところですが］あんなにも分かり難い言い方をしたのでしょうね。でも、私は面談の後戻るつもりでいたのですから、叔母もその時にははっきりと話してくれたはずです。あゝ、何という狡猾な、何という腹黒い男なのでしょうね、このラヴレースは。ただ、あの人とお会いしたことの責めを一番負わなければいけないのは自分自身なのだということ、この点は重ねて申し上げねばなりません。

でも、実りのない非難の言葉は、はるか彼方へ追いやられねばなりません。遠くへ追いやられねばならないのです。何の実りをももたらさないのですからね。せめて、自らの清廉潔白さでこの身を包み、意図いたしましたところに咎められる点はなかったことを慰めとする所存です。後ろを振り返るのはもう手遅れなのですから、不屈の精神を精一杯奮い立たせまして、怒れる神が投げ掛けます、避けることを許されない矢の数々に耐え抜く努

力をしたいのです。耐え忍ぶよう運命づけられております試練がどのようなものでありましても、その最中にこの身にあるまじき振舞いをしたくはないのです。その試練によりまして、より良い人間に生まれ変われたらと願っております。

どうか、この祈りに加わってくださいますよう、お願いいたします。二人の友情のためにも、そして、貴女ご自身の名誉のためにも、一緒に祈っていただきたいのです。私が間違いを犯しましたばかりに、軽薄なところなどは一切なく、軽微な務めと同様に重大な務めにつきましても、向上を目指すことが基盤になっております友情ですのに、口やかましい人たちの間で、この友情にかげりが生じてはいけないと思うからです。

CL．ハーロー

手紙　五十
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月二十二日　土曜日　午後

あゝ、私の最良の、そして、唯一のお友達 …　今は、本当に胸の潰れる思いでおります。決して立ち直ることの出来ない一撃を受けてしまったのです。今では完全に呪われてしまったかにも思われます惨めな人間との文通のことは、何卒、お考えになりませぬようにお願いいたします。もしも、日頃私が認めておりましただけの重み、そして、耳にしてまいりましたたくさんの例から確認されますような重みが、親からの呪いにはあるというのでしたら、この胸がどうして潰れずに済みましょう。そうなのです、ハウさん。これだけの苦しみを味わっておりますのに、さらに加えて、父の呪いに伴います様々の事態に立ち向かわねばならないのです。このような思いをどう耐えたら良いのでしょう。これまでの状況、そして、現在の状況が十分憂慮に値するものだというのにです。

無情な姉からとうとう手紙が届いたのです。あんなことはしなければ良かったと、つくづくそう思います。叔母のハーヴィーに送りました二通目の手紙がきっかけになっているのです。すぐにも出せるよう、用意してあったのでしょう。寝ていた雷様を起こしてしまったのです。手紙そのものを同封いたします。書き写すなど、とても無理です。思い浮かべるのも耐えられないのです。と申しますのも、呪いは［思い返しても恐ろしくなるのですが］来世にまで及んでいるのです。

気力も失せ、すっかり塞ぎ込んでおります。このように呪われた人間はお避けいただきたい、お逃げください、文通もお止めくださいと、ただ繰り返すのみでございます。

クラリッサ・ハーロー

手紙　五十一
クラリッサ・ハーロー嬢へ
［ソーホースクェア近くのオズグッド氏宅気付］

四月二十一日　金曜日

私のところかハーヴィー叔母様のところへ、貴女がもう一度手紙を出すことは予想されていたところだわ。だから、ご指示に従い、同封したものはすぐにも出せるよう用意してあったというわけよ。貴女がだれに宛てて手紙を出そうと、何度出そうと、そして、何を書こうと、どなたからも返事はもらえないでしょうね。

その筋にお願いして貴女を連れ戻すか、それとも、貴女が私たち皆にもたらした不名誉も、少し時間が経てばお誂え向きの形で忘れ去られてしまうような、そんな場所へ貴女を送り込む計画だったのよ。でも、その計画もお終いになったものと思うわ。だから、貴女は安心してうろつき回っていて構わないというわけ。わざわざ貴女のことで骨を折るなんて、そんなことを考える人はいないでしょうね。でも、お母様は貴女の衣類を何もかも送り届けるお許しをいただいたわ。貴女のものだけですけどね。これはね、中に入っている手紙で分かるでしょうが、貴女への好意からというわけではないのよ。認めていただいたのは、貴女のためじゃなくて、お可哀相にお母様、貴女が身に着けていたものを目になさるのには耐えられないからなのよ。同封の手紙を読むことね。そして、ワナワナ震えると良いんだわ。

アラベラ・ハーロー

この上なく恩知らずで親不孝な娘へ

四月十五日　ハーロー邸にて

かつて妹であった者へ　…

だって、貴女にはどんな名前が許されるのか、貴女はどう名乗りたいのか、私には分からないわけですからね。

私たちは皆、貴女のせいで気も狂わんばかりよ。お父様は、貴女の不届きな、破廉恥な駆け落ちにお気づきになると、心の乱れも治まらないまま跪き、お祈りになったのよ。貴女に恐ろしい呪いがあるようにとだわ。それを繰り返してあげますから、震え上がるといいわね。こうまでおっしゃったのよ。「おまえが進んで邪心を通わせた卑劣漢当人の手により、この世にあっても、また、あの世においても、その身に罰が降りかからんことを」とだわ。

衣類は送ってもらえないでしょうね。置いて行ったところからして、頼めばいつだって手に出来るくらいに考えていたのかしら。きっと、良い人と落ち合うことの他には何も考えられなかったのでしょうね。その慎みのない体をどうやって抜け出させるかということ以外にはね。だって、不届きな家出の助けになること以外は、何もかも忘れてしまっていたみたいですもの。でも、衣類を持ち出そうとすれば見つかっていたかもしれないという判断は、多分正しかったのでしょうね。本当に狡猾な娘だわ。貴女を見抜く手掛かりになるような振舞いは、一つとして見せないのですからね。狡猾にも、我が身に破滅を、そして、一族全員には恥辱をもたらしたというわけね。

でも、貴女にお金が掛かりすぎるのを恐れてなのかしらね。あの破廉恥漢が、持ち物を要求する手紙を貴女に書かせたりするのは　…　きっと、図星でしょうね。

貴女より軽率な娘などは、これまでにいたでしょうかね。でも、これが世に名高い、あの燦然たるクラリッサなのよ。で、どちらのクラリッサさんでしたっけ。勿論、ハーロー

家のだわ。そして、今後ともハーロー家のなのよね。私たち皆には不面目な話だけど。

貴女の図画や刺繍の類はすべて取り外されたわ。これまで貴女の使っていた客間にあった、ヴァンダイク風の貴女の全身像の肖像画もだわ。皆取り外されて、控の間のほうに押し込まれました。あの控の間も、屋敷の一部ではないみたいに、釘付けされることになっているのよ。控の間で一緒に朽ち果てるようにとね。だって、我慢出来る人などいないでしょう、あんなものを目にするのは。でも、どなたがいらっしゃっても、きっと見ていただいていたものだったわね。図画や刺繍は貴女の指先の器用さを褒めそやすためだし、肖像画のほうは、自慢の種のその容姿に備わっていることになっていた高貴さを見てもらうためだったわね（高貴さも、今じゃ埃まみれというところだわね）。それも、あの情け深い両親のお気持ちから出たことだったというのに、貴女はその両親を捨てて逃げたのですからね。ずいぶんと策を弄していながら、工夫の乏しいやり方だったけどね。

お兄様は貴女と一緒の放蕩者に復讐を誓っておられるのだけれど、一族のために誓っておられるのよ。絶対に貴女のためなんかじゃありませんからね。だって、お兄様ははっきり口になさっていたのだけど、たとえ顔を合わせることがあっても、貴女のことは街の女のような扱いをするつもりでいるとのことだわ。そして、貴女の行く末はそんなところに間違いないと言っておられるわ。

ジョン伯父様は貴女とは永久に縁を切るとおっしゃっています。

アントニー叔父様もです。

ハーヴィー叔母様もよ。

私もそうします。見下げ果てた下劣な娘だわ。立派な一族の恥辱です。破廉恥な放蕩児の囲われ者でしょう。たとえ、まだそこまでは行っていないとしても、そうなっている自分に間もなく気づくのは疑いのないところでしょうからね。

貴女の蔵書のことだけれど、貴女の一族や女性としての立場、そして、貴女の受けた教育に相応しい事柄を教えてはくれなかったわけですから、送り届けてはもらえないでしょうね。貴女のお金もだわ。それに、ひどく分不相応な形で貴女のものとされてしまった宝石類も同じことよ。だって、私たちが見たいと思っているのは、ロンドンの通りを乞食になって歩く貴女の姿なのですからね。

これくらいのことで苛酷だと言うのなら、どうしてそんな目に遭わなければならないのか、胸に手を当てて自分自身に尋ねて見ることでしょうね。

貴女がお高く止まって鼻であしらった男の人はどなたも（ソームズ様は別だけれど、でも、貴女を捕らえ損ねたのを嬉しく思われるのにも一理あるわね）、貴女の恥さらしな駆け落ちのことを知って大喜びですし、どうしてご自分が断られたのか、その理由もこれで分かったことでしょうね。

立派なノートンさんは貴女のことを恥ずかしく思い、お母様と一緒になって涙に暮れているわ。お二人とも、貴女のために担ったお役目のこと、そして、教育に携わりながら実りがなかったということで、ご自分を責めておられるのです。

要するに、だれもかれもが貴女のことを恥と思っているのです。でも、その点では、私に優る人間などいないことでしょうね。

アラベラ・ハーロー

手紙　五十二

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

四月二十五日　火曜日

落ち着いてくださいね。落胆なさってはいけませんよ。だれよりも大切な、だれよりも大好きなお友達、悲観なさってはいけません。全能の神様は公正でお恵み深いお方なのです。無分別で冷酷な呪いに同意を与えるようなことはなさいません。堕落した人の悪意に満ちた怨念などを、神様が承認なさるとお思いなのですか。そんなことになれば、恨みや妬み、そして、遺恨の情がはびこり、善良この上ない人たちが見下げ果てた人たちの悪意に晒され、この世でもあの世でも惨めな思いをすることになってしまいます。

この非道の振舞いは、皆さんがどのような心の持ち主なのか、そして、皆さんの浅ましい目論見が、親としての愛情よりも勝っていることを示しているに他なりません。すべては激しい怒りと失望から来たことなのです。挫かれて当然の陰謀が当て外れに終わった結果なのです。

もしもこの悪意に満ちた言葉を、それに相応しい受け止め方で受け止めていらっしゃるのでしたら、貴女ほどの信仰心をお持ちの方なら、こんなことがあったからといって、恐れおののくよりは、むしろ、無分別なお父様を憐れみ、お父様のために祈って差し上げるべきですし、また、そうなさることでしょう。呪いを口にすることが出来ますのは、神様以外にはいらっしゃいません。両親であれ他の人たちであれ、どなたであろうと、出来ることと言いますと、呪っていただくよう神様に祈ることだけなのです。そして、そのような祈りにいたしましても、動機が理不尽で、企てた目的に無慈悲なところがあります場合には、公正で完全無欠な神様に対しましては、何の力も持ち得ないものなのです。

神様は「祝福を祈るのであって、呪ってはなりません」(四四)と私たちに命じなかったでしょうか。ですから、繰り返しますが、貴女に向けた呪いをご自分の身に招いたりしないよう、お父様のために祈って差し上げることです。ご覧のとおり、お父様は本当に神聖な命令をお破りになったわけですからね。一方、貴女のほうは、「私たちを虐げ呪う人たちのために祈る」(四五)よう命じておりますもう一つの教えに従うことで、呪いを祝福に転じることになるのです。

お姉様のこのひどいお手紙のことでは、母も皆さんのほうが悪いと考え、貴女に同情しております。そして、貴女を慰めるために一度だけ私が手紙を書くよう、母のほうから頼んでおりました。あんなにも気高かかった貴女のお心が（それも、過ちを犯したという意識と親御さんの呪いの重さとを痛切に感じておられる時ですし）、すっかり打ちひしがれてしまってはお気の毒だから、というのです。

驚きましたわ、叔母様のお手紙にも。分かりきった事柄の場合に、両方が正しくて両方が間違っているなどということはあり得るでしょうか。でも、叔母様が間違っておられるに違いありませんわ。それに、皆さんすべてが、今はどのようにご自分たちを正当化なさろうとも、これまでずっと間違っておられたのです。皆さんは、自分本位な考え方からですが、ご自分たち自身に向かって自己正当化がお出来になるだけの話で、自らを公正に裁くのではなく、責任逃れをするつもりなのです。不親切な叔母様は、貴女と皆さんの争いがだらだらと進んでいるその間に、皆さんのほうで矛を納めてくれそうだという、ほんの

わずかな希望でも与えてくださったでしょうか。貴女と同じように、私も叔母様の分かりにくい言い方を今思い出しているところです。でも、何であれ、良いこととか希望のあることなのでしたら、どうして分かりにくい遠回しな言い方をしなければならなかったのでしょうね。叔母様にしてみますと、貴女を愛していらっしゃるふりをいつもしていた人ですし、貴女を苦しめるために、あんなにもスラスラとペンを走らせることもお出来になるのですから、皆さんが手口を変えると言っておられるのを、たった一言、たった一行（こっそりと）貴女に知らせてくださるくらいのことはいとも簡単だったはずなのです。

でも、後でとり繕った皆さんの口実など、気になさることはありませんわよ。そのすべては、皆さんがあくどい仕打ちをしたことの暗黙の告白として役立つだけの話です。叔母様の秘密の件は口外いたしませんので、ご心配なく。どう考えましても、叔母様のお手紙を母の目には触れさせたくございません。

貴女にももうお分かりでしょうが、貴女に残されておりますことといえば、几帳面さへのこだわりをすべて乗り越え、機会のあり次第結婚なさる以外にはありません。そのお気持ちを是非とも固めてくださいね。

その理由ですが、私自身に関わります点をお話しいたしましょう。次のように私は決心いたしました。そして、誓いを立てたのです［あゝ、私の一番好きなお友達、どうぞ怒ったりなさらないでくださいね］。貴女の幸せがどっちつかずの状態の間は、結婚のことは決して考えるまい、ということです。一緒になる相手の人のことを思えばこそ、このような誓いを立てたのです。だって、もしも貴女が不幸せでしたら、私も惨めになるに決まっているのですからね。それに、どの男性がお相手でも、私はいかにも相応しくない妻ということになってしまうでしょうね。その人のせいではない悩みごとについてですが、丁重に接してくださることで埋め合わせをしてくださるような、それだけの力を私の心に対して持つことがお出来にならないとしたらですわ。

言語道断なお姉様の手紙ですが、私ならラヴレースに見せるでしょうね。私宛に来たものでしたらね。一緒にお送りいたします。同じ屋根の下に置いておく気にはなれないのです。あの男もこれを見れば、当然のことですが、貴女が今一番に念頭に置かなければいけない話題を持ち出すはずです。あの男のために貴女がどんな苦しみを味わっておられるのか、教えてやるのです。これだけ立派な人が相手では、あの男も卑劣な真似は出来ないはずです。仮にも貴女に向かって悪事を働くことの出来る男だということが証明されましたら、私は自分の頭のことでも分別のことでも、得意顔をするわけには行かなくなってしまうでしょうね。貴女はそれだけ素晴らしい美質に恵まれていらっしゃるのですもの、あの男を夫になさるのは、心ならずも犯した過ちとは申せ、その十分すぎるほどの罰ということになるかもしれません。

貴女を捕まえようという皆さんの計画が立ち消えになったとのこと、あまり信用し過ぎるのはいけないと思います。あの忌まわしいアラベラの手紙にありました、立ち消えを匂わす言葉には、貴女を安心させようとの計算があるように思うのです。あの人が言っているのは、その計画もお終いのはずだ、ということだけです。それに、ロイド嬢からも、否認されたようには未だ伺っておりません。ロンドンに着かれましたら、人目に付かないようになさるのが一番でしょう。そして、最悪の事態をお考えになり、宛名はすべて別の所になさることです。不意を襲われ、あのように気性の激しい、悪意に満ちた人たちの手に

落ちるようなことは、絶対にあってほしくないのです。

私自身、どこか関わりのない場所へお送りいたしますのに異存はございませんし、そうなれば、母に対しましてもどなたに対しましても、その必要が生じました際には、貴女の居場所は知らないと主張出来ることにもなるのです。

また、このような方法を用いますと、皆さんがラヴレースにはお構いなしに、貴女を連れ去ることを企てる気になったといたしましても、貴女のほうでは、皆さんの暴挙がどんな結果を招くことになるかなどと、あまり気を揉まずにいられるのです。

貴女にはヒックマンさんを宛先にしていただきたいと思います。この手紙へのお返事についてもです。そうしていただく理由があるのです。それに、母も今回のことだけは大目にみてくれたのですが、ひどく強硬なのです。その旨のことを命令するよう、皆さんが母を説き伏せたものと思います。何て意地の悪い人たちなのでしょう。特にお馬鹿さんのアントニー叔父様ときたら、本当に憎らしくなりますわ。

お姉様のショッキングな手紙の中味のことはあまりお考えにならず、別の問題に、貴女の目の前にある事柄のほうに心を向けていただきたく思います。そして、ラヴレースとのことはどう運んでいるのか、また、あの男がこの惨い呪いについてどのようなことを言っているのか、お知らせいただきたいのです。その程度でしたら、貴女にもこの嫌な話題を取り上げることがお出来になるでしょう。こうすれば、仲立ちをしてくれる人がいなくても、お二人の間で肝心の話題をうまく引き出すきっかけになるだろうと、私はそんな期待を抱いているのです。

宜しいですね、物事というものは、最悪の状態を迎えますと、良いほうへと転じることになるのです。災いが予想されます時に幸運が訪れることもしばしばです。でも、悲観してしまいますと、回復の望みはございません。皆さんが貴女の心を打ち砕いてしまうのを許してはなりません。私には一目瞭然ですが、それこそ、だれかさんが今目論んでいることなのですからね。

貴女のご本や宝石類、それに、お金を差し押さえるなんて、何という浅ましい話なのでしょう。衣類は送ってくださるとのことですし、今貴女に必要なものといえば、お金だけですから、お使いの人に託しまして五十ギニーお送りいたします。それぞれ紙に包みまして、『ノリス雑文集』(四六)に忍ばせておきますが、私のことを愛していてくださるのでしょうから、送り返すような真似はなさらないでくださいね。

もっとご用立てすることも出来るのです。ですから、ロンドンにお着きになって、下宿がお気に召さないとか、あの男の振舞いが好ましくない場合には、下宿とあの男の両方をすぐにお捨てになることですね。

急いでモーデンさんにお手紙を出されますよう、助言させていただきます。帰国を考えておられるのでしたら、予定を早めてくださるかもしれません。そして、あの人が帰られるまでの間、うまくおやりになることです。それにいたしましても、帰国後のモーデンさんの承認が必要、などということになります前に、貴女の同意を得て幸福を掴むくらいのことも出来ないようでしたら、確かにラヴレースは、貴女にのぼせて理性を失っているということになるでしょうね。

もう一度申し上げます。どうか心を落ち着けていただきたいのです。いつもの思慮深さを発揮なさって、目の前の難題に立ち向かってくだされば、すべてはまだ丸く収まるので

す。貴女ご自身が私で、私が貴女のお立場にあると考えてみてください［お出来になるでしょう。だって、貴女の苦しみは私の苦しみなのですもの］。そうすれば、私のほうから差し出されておりますこの微かな明りに、真昼間の光を添えていただけるはずです。

変わることなき親愛の情と誠意とを込めまして、貴女の

アナ・ハウ

これは、ロバートの手で急ぎ届けてもらいます。叔母様は、貴女がお屋敷を出られなかった場合、皆さんのほうでは手口を変えるつもりだったと言っておられますが、叔母様の言い種が本当かどうか、調べてみようと思います。

手紙　五十三

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月二十六日　水曜日　朝

大好きなハウさん、貴女のお手紙でずいぶんと慰められました。「誠実な友は、生命を保つ妙薬」(四七)という賢人の言葉の正しさを、心楽しく味わっているところです。

お使いの人も立ち会っておりますが、私はちょうどロンドンへ向けて出発するところでして、シェーズを玄関のところに待たせております。あの親切な未亡人にもすでにお別れの挨拶を済ませましたが、夫人は、ラヴレースさんが馬で付き添うこともあり、あの人の頼みを聞き入れ、上のお嬢さんが同伴するのを許してくれました。娘さんは、二、三日後になりますが、M卿のハートフォードシャーのお屋敷へ向かうシェーズと一緒に戻ることになっております。

姉の恐ろしい手紙は日曜日に受け取りましたが、ラヴレースさんは外出中でした。あの人は、帰宅すると、苦悶と落胆の極みという私の様子を目にいたしましたし、前にはもっともっとひどい状態であったことを聞かされました。と申しますのも、私は一度ならず気を失っていたのです。

手紙の内容は胸に応えましたが、頭のほうにも影響を及ぼしたように思います。あの人は是非とも手紙を見たいと言っておりました。でも、私は許しませんでした。見れば分かってしまいます、あの人への脅し文句のことがあったからです。ところが、手紙が私に及ぼした影響のほどをご覧になると、あの人は呪いの言葉や脅しの言葉を並べ立てたのです。私の具合がひどく悪かったものですから、私の申し出ました月曜日のロンドン行きを延ばしてはどうかと、あの人のほうから言ってくれたほどです。

私のことを大層気遣い、優しくしてくれています。この乱暴な手紙に続くあの人の行動ということで、貴女の予想なさったことがそっくりそのまま起こっております。結婚の申し込みを受け入れてもらいたいというのですが、それがとても率直な言い方だったものですから、あの人についてあれほど無遠慮なことを文字にし、また、ひどく気乗りがしない書き方をいたしましたことが気掛かりになるくらいなのです。私の申しましたことで、あの人の評判を落とすようなものは、何卒、一切口外なさいませぬよう、お願いいたします。

是非お知らせしておかねばなりません。あの日曜日の夜のことですが、あの人は思いや

り溢れる態度を見せてくれましたし、私が意気消沈していたこともありますが、貴女の以前のご忠告や自分の不幸な身の上のことも一緒になりまして、あの人からの愛の告白を素直に受け入れてしまったのです。そして今では、実際、これまでにもましてあの人の言いなりになっている状態です。

あの人は「実のところその必要はございませんし、不親切にさえ思えるのですが」、私があの人を尊敬していることや信頼していることを表すような、新たな証を四六時中しつこく求めるのです。それに、私はいくつか言質を取られてしまったわけですから、あの人は下劣な人間であることが分かった、などということになりますと、確かに、この乱暴な手紙に罪を着せますのも尤も至極な話ということになりましょう。自分では何ら決断出来ない有り様なのです。このように身内のすべてから見捨てられ、今では皆の好意を取り戻す望みも一切ありません。憐れんでくださるのは貴女だけですし、その貴女にいたしましても、制約を受けておられると申して構わないのですから、私のほうは、見つけ出だすことの出来ます保護の手に、この寄る辺ない心を託さざるを得ない状態だということです。

慰めになることと申しますと、私の取りました行動が、目の前にございます貴女の温かいお手紙の中で繰り返し述べられております、同趣旨のご忠告に適うものだという点だけでございます。そのことがありますので、これまでよりは安らかな気持ちでロンドンへ向かうつもりです。と申しますのも、今までですと、心に重くのしかかるものがございましたし、あちらへ行くのが一番良いことで、一番安全なのだとは思いながら、あれこれ準備をしておりましても、その都度、何故か気持ちの晴れることがなかったからなのです。

途中で悪いことが起こりませぬよう願っております。気性の激しい二人が出くわすことのないよう願う次第です。

皆さん、私が参りますのを待っております。御免なさい、私の最良の、そして、だれよりもご親切なお友達。貴女のノリスはお返しいたします。このように希望の持てる見通しですから、貴女のご好意に甘えずに済むはずです。それに、手紙では断られましたが、衣類と一緒に、頼んでありましたお金も送ってもらえそうに思うのです。送ってもらえないといたしましても、また、必要が生じましても、すぐにも応じてくださろうというお友達にその旨をお知らせするだけで済むことですもの。それに、お世話になるのは貴女だけと約束いたしましたね。ただ、考えますに、貴女に疑いが向けられました際にも、この種のことを無心されたこともなければ用立てしたこともないと、言い通せるようにしておかれるのが望ましいと思います。このようなことを申しますのは、いつの日か、再びお母様のご愛顧に与りたいものと念じていればこそなのです。そして、そのご愛顧こそは、父と母の寵愛を別にいたしますと、私が一番取り戻したいと願っているものなのです。

急いではおりますが、もう一つお知らせしておかねばならないことがございます。M卿のお屋敷まで私のお供をしても良いし、卿のチャプリンを呼び寄せても良いと、昨日ラヴレースさんが申し出てくれたという点です。是非この申し出に同意してほしいと、あの人は迫っておりましたが、それはそれは熱心なご様子で、ロンドンよりもここで式を挙げたがっているようにさえ見えました。このように重大で肝腎な事柄を考えますのは、あちらについてからでも十分に間に合うと、前に私が言っていたからなのです。今、貴女の温かい、励ましのお手紙をいただいてみますと、あの人の熱心な懇願に応えることが出来たならと、そんな願いを口にしたいようにも思います。でも、この恐ろしい手紙が頭の調子を

すっかり乱してしまいました。それに、少しばかり几帳面にいたしますのも、確かに必要なのです。仕度は一切整っておりません。契約書はまったく作成されていないのです。結婚許可証の用意も出来ておりません。この上ないほどの悲運に見舞われ、この先何の楽しみも見込めませんし、願うことさえ出来ないのです。あゝ、ハウさん、これほど厳粛な契約を結ぼうと思う人はいるのでしょうか。何の仕度もなしに、すぐにもお受けしたがっているような素振りを見せることの出来る人など、どこにいるというのでしょう。

この世のすべての喜びに無関心になっておりますのは、私の奢り高ぶった心が受けてまいりました数々の失望や無念な思いから来ているというよりは、むしろ、正しい動機があるからなのだと、心ひそかに信じることが出来るのでしたら、この世のどのような男性と結ばれますのよりも、経帷子に身を包むほうがはるかに好ましいだろうと思うのです。

本当の話ですが、貴女とのお付き合い以外に、今は何の楽しみもございません。お付き合いを続けてくださるよう、切にお願いいたします。今後、私の心がより多くのことに耐えられる力を備えるようになるといたしましても、貴女との友情を礎にしなければいけないのです。

出発に当たりまして、また気持ちが滅入ってまいります。御免なさいね。すっかり塞ぎ込んでしまい、希望さえ持てずにいる有り様ですが、希望というのは、活力の停滞を防いでくれる強壮剤ですし、四十八時間前までは拒まれることもなかったものですのにね。

でも、そろそろ貴女を解き放して差し上げる頃合です。

さようなら、だれよりも大好きな、だれよりも優しいお友達。私のためにお祈りいただきとうございます。

クラリッサ

手紙　五十四

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

四月二十七日　木曜日

私のノリスを送り返されましたこと、残念に思います。でも、お好きなようになさるのを許して差し上げねばならないのでしょうね。私のほうでもそうさせていただきます。もしかいたしますと私たち、相手が最も正しい行動を取るだろうなどと、無条件に期待したりしてはいけないのかもしれませんね。ただ、まだまだ未熟ですけれど、その最も正しいことに私たちほど通じている者も少ないのです。この点を主張いたしますのに、貴女と私とを一緒にしたのでは、自惚れているところを二重に証明しているようなものですが、でも、貴女のことを私とは別な人間のように考えることは出来ないのです。

見通しが大層改善されましたこと、そして、私の願っておりましたとおりに、災いが転じて福となりましたこと、心の底から喜んでおります。あれだけひどい手紙に接しましても、また、自分自身が主な原因になっていることなのですから、あれほどの非道の仕打ちを知りましても、このように態度を変えることがなかったといたしますと、一体あの男はどういう人間だったのかということです。どんなつもりだったのかということです。

返答を保留なさる動機のことは、貴女が一番よくご存じなのでしょう。でも、それだけ

熱心な申し込みをしてきたのですから、承諾してくだされは良かったのにと思っております(ア)。あの男がM卿のチャプリンを呼び寄せようとするのを許そうとなさらなかったのは何故なのでしょう。几帳面さだけが障害になっていたとおっしゃるのでしたら、結婚許可証がないとか、十分に仕度が整っていないとかいったことからなのでしたら、私といたしましては、謹んで敬意を表明させていただきますわ。これで、貴女の形式張ったところとおあいこということになりますわね。

是非ともお願いいたします。お望みのことが貴女の思いどおりになるのです。これまでにも正しく言い当てておられましたように、人間というのは自分の望む時に死ぬわけには行かないのです。経帷子のほうが好ましいなどと思われるほどに塞ぎ込まれて、申し出をお断りになるような真似は、二度と再びなさらないでいただきたいのです。

それにいたしましても、人間には妙につむじ曲がりなところがございますわね。遠くにある時には請い求めますのに、それが手元にまいりますと、軽んじてしまうのですもの。

貴女が今追い求めなければいけないことはただ一つだけです。つまり、結婚です。きちんと式を挙げていただくことです。後のことは神様の思し召しに委ね、以前のお手紙にございました貴女の言葉をお借りしますが、思し召しのままに従うことです。ハンサムな男性と一緒になるのです。育ちも良い男です。自分の才能を自惚れているところや、放埒で陰謀好きな点がなくなれば、利口な男になるでしょう。でも、あれほど見てくれが良くて才気走っているために、大勢の女性が目を奪われ、その自惚れ心を後押ししているわけですから、貴女のほうでも、白髪とともに分別が現れてまいりますまで我慢をして上げなければいけません。一人の男に何もかも求めるわけには行かないのですよ。

ヒックマンさんは絶対に曲がった道を歩む人ではないと信じております。でも、まっすぐな道を進んでおりましても、すこぶる格好が悪いのです。ただ、ヒックマンさんの場合は、私の目を喜ばせてくれることも耳を楽しませてくれることもなさいませんが、その代わり、目を覆うとか耳を塞ぎたくなるといったことも決してなさらないと思うのです。貴女の色男さんのほうは、先日も申しましたが、常に興味をつないでくれます。あの男と一緒でしたら、期待よりは不安のほうが大きいでしょうが、いつだって気を張っていられるでしょう。一方、ヒックマンさんのほうは、眠気を催さずにいられるようなお話は何一つしてくれませんが、ただ、びっくりするような行動で安眠を妨げるようなことも決してございませんわね。

貴女ほど分別のある人なら、最初、二人の男性のうちどちらを選ぼうとなさったか、今では分かっているつもりですし、また、そのようなことが出来たとして、私はどちらを選んでいたか、察しがおつきになることも疑いません。ただ、私たちにもプライドはございますが、私たちの中の一番プライドの高い者でさえも、お断りすることが出来るだけなのです。そして、女性の多くの者は、もっとつまらない申し込みが来るのを恐れ、あまり似つかわしくない相手を受け入れてしまうのです。

(ア) ラヴレース氏は氏の次の手紙で、令嬢が極度に体調を崩し、発作から回復しても更に激しい発作を起こす有り様で、だれ一人として令嬢が生命を取り止めるとは思わなかったことを友人に語っているのである。氏によれば、令嬢は体調の悪さをハウ嬢には伝えていなかったとのことである。令嬢は保留の動機が単に形式を重んじるためではないことを、二百六頁において語っている。

男の人たちが、自分の気性に似ているということで相手を選んだといたしますと、ラヴレースさんの場合、最終的には私の手に余る人になっていたかもしれませんが、私のほうでも、悲しい思いをさせられました時には、そっくりお返しをしていたのは疑いのないところです。少なくとも半年くらいはね。一方、貴女のほうは、私ののろまなあわてん坊さんと一緒になられて、移り変わる季節のように穏やかに、静かに、心安らかに月日を重ねて行かれたことでしょう。そして、季節の変化以外の変わりようはなさらずに、貴女の周囲一帯に新たな美と便益とをもたらすのです。

こんな調子で先を進めようとしておりましたところ、突然に母が、そうはさせないという顔付きで入ってまいりました。許したのは一通だけだ、と言うのです。母は貴女のいやらしい叔父様とお別れをしたばかりで、二人でまた密談をしていたのです。

母のせいで苛立っております。お届け先も承知しておりませんし、お便りがございますまで、これは手元に置いておかねばなりません。

先の手紙でお願いいたしましたように、お便りは別住所宛でお送りください。

母には次のように申しておきました（説明を求めてきたのです）。確かに手紙を書いていたし、それも、貴女宛のものだけれど、貴女の宛先は本当に知らないのだから、暇つぶしのためにすぎないのだ、とです。

次のお便りで御婚礼の様子をお知らせくださいますよう期待しております。たとえ、その次のお便りで、あの男がこの世で一番恩知らずな人非人であることを教えてくださることになるとしてもです。もしも、世界一優しい夫でないのでしたら、そんなところに決まっているでしょうからね。

母のせいで苛立ってしまったのです。でも、見直してみましたら、すでにそう書いておりましたね。でも母は、貴女も言っておられますように、私の頭の調子を乱してしまったのです。私たちが文通を続けているものと睨み、その手助けをしているのだろうと、厚かましくもヒックマンさんを問い質したのです。それも、手厳しくですからね、本当に。あのコソコソした人に、私、コッソリ親切心を抱いているのだと思いますわ。だって、私以外の人間があの人を馬鹿扱いするのは耐えられないのですもの。

これはここだけの話ですけれど、あの立派な奥様は我を忘れていたのだと思います。大声で話しているのが聞こえてまいりました。母といたしましては、父が甦ってきたように感じたのでしょう。でも、すぐにあの人のおとなしさに気づき、母も納得してくれるものと思っておりました。と申しますのも、父のほうでも、母に負けずに大声を張り上げていたらしいのです。私の想像ですが、まるで（数ヤードと離れておりませんのに）お互いに道を違えてしまい、もう一度落ち合おうと、半マイルも離れたところから呼び合っているような具合だったのだと思います。

こんな生意気なことをお話しして、お咎めがあるのは分かっております。でも、申し上げましたとおり、苛立たしい思いをさせられているのです。それに、私に勝ち気なところがないようでしたら、両親のどちらの側についてであれ、親子関係を疑われてしまうかもしれないでしょう。

でも、あまり厳しくお叱りになるのはお止めください。過ちの言い訳はしないよう、貴女から教わっているのですからね。間違いは認めます。それで宜しいでしょう。まだ十分ではないとお考えなのでしたら、この件にかぎりましては、他のいつもの場合ほど寛大にしてはくださらないことになってしまいますわよ。

では、お元気で。貴女をお慕いせずになどおられませんし、そうするつもりでもおりますわ。そして、これからもずっとお慕いいたします旨、署名いたしましょう。

貴女の

アナ・ハウ

手紙　五十五

ハウ嬢より

［前掲の手紙に同封されたもの］

四月二十七日　木曜日

叔母様がお手紙の中で触れておられました、手口の変更のことにつきまして、お身内の方々が本当に（貴女が皆さんの元を去られる前に）決意なさっていたのかどうか、そうするつもりだとお知らせいたしましたとおり、探りを入れていたところです。一部はアントニー叔父様のお話を通して母から引き出しましたし、一部はお姉様にお聞きになったロイド嬢からのお話で、また一部は、お教えするわけにはまいりませんが、別の方面から得たものでして、そういったいくつかの情報を総合いたしますと、真相といたしましては、次のように考えますのが妥当のように思われます。

貴女が出奔なさる二、三日前までは、手口を変える気持ちなどはなかったのです。それどころか、お兄様とお姉様は、ソームズをお引き立てになるよう貴女を説得する望みは一切ありませんでしたが、貴女を追い込んで、ある行動を取らせますまでは、虐待行為を決して止めるまいと心に決めていたのです。そして、その行動と申しますのは、お二人が付け込もうとしていた間の抜けた人たちからは、お二人の〈ご尽力〉によってですが、到底許し難いと見なされるはずのものだったのです。

でも、とうとうお母様が（言いなりになっておられたご自分の立場に嫌気を感じられたのでしょうし、おそらく、恥ずかしくもなられたのでしょう）、身内同士の反目は何とか終わりにするよう努めてみたいし、ジョン伯父様がご自分のお骨折りに手を貸してくださるように働き掛けてみるつもりだと、ベルさんに向かってお気持ちを打ち明けられるのが適切なこととお考えになったのです。

お兄様とお姉様もこれにはびっくりなさって、それで、手口の変更が決断されたというわけです。でも、ソームズの申し出があまりにも有利なものでしたから、とても諦めるわけにはまいりません。そこで、お二人にとりましては、お父様が遜った態度を取ってくださることだけが頼りとなりましたし、（お二人がおっしゃるところでは）そのようなお姿が貴女にはどのような効果をもたらすのか、それを試してみるのがお二人の最後の努力ということになったのです。

正直申しまして、あの二人が相手になさるのはこのような娘さんですから、おそらく神

様の前以外には生涯膝をおつきになったこともないでしょうに、そのお父様に、叔母様が書いておられたようなところまで遜った態度を取ることがお出来になれば、これは間違いなく成功していただろうと、私は本当にそう思うのです。

だといたしましても、それでどうなっていたというのでしょう。もしも皆さんが貴女に時間を与え、すぐに結婚を急がせるようなことをなさらなかったといたしますと、きっと貴女は、ラヴレースを宥めよう、また、災いを防ぎたいとお思いになって、あの男と面会なさっていたはずなのです。でも、お会いにならなかったといたしましても、お分かりでしょうが、あの男のほうでは皆さんのところを訪れる覚悟だったのです。それも、供の者にしっかりと付き添われてなのです。どんな結果になっていたことでしょうね。

ですから、結局のところ、今の状態が最善なのかもしれないのです。たとえその最善の状態が、どれほど好ましくないものだといたしましてもね。

察しが良くて思慮深い方なのですから、このヒントを有効に活用していただきたいと思います。たとえ大きな苦難だといたしましても、それはもっと大きな不幸を防ぐために親切心から施されたものなのだと、自ら納得出来ます場合には、どなただってじっと耐え忍ぼうとするのではないでしょうか。とりわけ、貴女のように、ご自分の心を咎める必要もなく、安んじて腰を落ち着けることの出来る人の場合はなおさらです。

さらにもう一つ言わせていただきます。先に触れました状況からいたしまして、私たちにも見当がつくのではないでしょうか。お身内にいらっしゃる立派なお方が、これだけ称賛に値する、それでいて、こんなにも迫害を受けておられるお子さんのために、もしも母親としての力を働かせておられたなら、このようなことになります前に、何らかの手は打たれていただろうということです。

では、さようなら。いつまでも貴女のものでおります。

アナ・ハウ

《クラリッサは、先の二通のうちの第一の手紙への返事の中で、母親に対する態度という点に関して、自分の与えた忠告をひどく軽視する友人を咎めている。やや時期尚早の感もあるが、その返事からの左記の抜粋をここで掲載するのが適当であろう》

「二人の紳士のことにつきましては」と、彼女は語っている。「いつものとおり、大変楽しい筆遣いですわね(ア)。また、お二人の選択がひどく不適切だとお考えですね。ヒックマンさんが貴女に求婚なさり、ラヴレースさんが私に言い寄っていることについてです。でも、幸せという観点からいたしますと、気性の穏やかな者同士はうまくやって行くといたしましても、気性の激しい者同士の場合、一方が無理を言い出します時に片方も折れようとしないのでは、大変難しいことになるように思えてくるのです。確かに貴女とラヴレースさんなら、おっしゃるとおりで(イ)、ボールの打ち合いのようにやり合われたことでしょう。でも、貴女があの人に向かって度を越したことをなさらなければ、あの穏やかな物腰からいたしまして、ヒックマンさんのほうが貴女にはお似合いの人に思われるのです。もしも度を越したりなさいますと、それを我慢なさるのがあの人の柔順さなのでしょうけれ

(ア) 二百二頁、および、百二十七百から次頁にかけてを参照のこと。 (イ) 百二十八頁。

ど、柔順さというのは、ヒックマンさんには決して当てはまらないほどに、男の人を情けない存在にしてしまうものなのです。また、女の人が後程どのような誓いを立てねばならないかを承知の上で、それに先立つ時期、大層追従的な態度を示しましたところで、それは勇敢な男性にとりましても不面目なことではないのです。

ラヴレースさんが無礼で乱暴な振舞いに及ぶこともあり得るというのは、あの人のお人柄にとりまして名誉になることだとお考えでしょうか。このような人たちは皆そうなるのでしょうが、あの人も度を過ごした挙げ句、おとなしくせざるを得なくなるのではないでしょうか。しかも、その柔順さは、血の気の多い者たちがヒックマンさんみたいな男性の気の弱いところだと決めつけたがっております、例の腰の低い態度よりも、誇りの高い人にとりましては、はるかに屈辱を覚えるようなものとならざるを得ないのです。

宜しいですか、ヒックマンさんは、女性に恥ずかしい思いをさせるくらいなら、女性の辱めに甘んじるほうがましだとお考えになるような人なのです。おそらくあの人は、ご自分が女性に謝るというよりも、むしろ、女性のほうが許しを請わねばならなくなるのを望んでおられるのです。でも、貴女の場合、初めての恋を無事乗り切られましたから、二人目の男性がたとえ天使のような人でありましても、とりたてて興味をそそられるわけではないような、そんな存在以上の人になることはなかったのでしょう」とである。

「保留することにいたしました動機は」と、彼女は言葉を続け、「形式ばかりを重んじるからではございません。実は、体調がとても悪かったのです。きちんと頭を上げていることが出来なかったのです。姉の手紙の文面で心はズタズタの状態でした。本当に、体調がひどく優れなかったのです。また、それに加えまして、あの人が二度と再び申し込みをしてくれなくなるのが怖いとばかりに、私のほうでも即座にお受けしなければいけなかったのか、ということもあるのです。

お母様が私たちの文通には今でも断固として反対しておられるようですが、残念至極に存じます。どのように対処したら良いのでしょう。私といたしましては、文通を続けるとか、お返事をお願いするとかいたしますのは気が進みません。ただ、このように事を進めてしまったものですから、ご助言をいただく知人も、貴女以外には一人としていないのです。立派な女性をご親戚にお持ちですから、正直なところ、瑕疵はございますが、この男性との結婚が望ましく思われてくるほどです。それに、お友達も何人か出来ることでしょう。何人かお友達が出来れば、さらに多くなるかもしれません。と申しますのも、お金はお金を生み出すと言われておりますが、しっかりとした人物からの支持がありますと、お友達も増えるものなのです。一方、見捨てられた人は恵まれないままでいなければなりません。私との文通を止めていただくようお願いするのは気が進みませんが、親御さんから禁止されながら続けますのは、自分の良心に背くことにもなるのです。でも、反対の理由として用意出来ますものをすべて持ち出す勇気もございません。それは何故だとお思いですか。貴女が尤もな話だとお考えになって、他のお友達がなさったように、私を捨てておしまいになるのが怖いからなのです。ですから、この件につきましての決断は貴女にお任せいたします。私に委ねられますのは妥当でないように思うのです。でも、悪いのはすべて私にしてください。また、罰するに値するというのでしたら、すべての罰も私が受けましょう。そして、それが当然なのです。目の前にありますお手紙を結ばれる際の、あの快活にすぎるお言葉を誘い出す原因になっているくらいですし、そのお言葉をこれ以上お諫

めするわけにも行かないのですからね。貴女はそれを禁じておられるのですもの」と述べているのである。

《二通目についても諸々述べているが、特に、次の点に触れている》

「すると、私の過ちには宿命のようなものがあったのだと、そのように貴女はお考えのようですわね。この件につきましてのご見解には、温かい、思いやり溢れる友人の姿が窺われます。それでも、このような事態に至ってしまったものですから、父のことを、少なくとも母のことを、世間の皆さんが無罪だと言ってくださるのをお聞きしたいものと、天にも祈る気持ちでございます。この身内同士の諍いが始まりますまでは、母の人柄は皆さんの称賛の的となっていたのです。母があの見事な才能を適切な機会に用いてくれましたなら、自分の不幸な子供を救うことも出来たかもしれない、などといったことを、母の耳に届きますよう、貴女からのお言葉として語らせるようなことは、どなたにであっても許していただきたくないのです。貴女もお気づきでしょうが、兄の虐待が止まりそうにないことを悟りました時、母といたしましては、自分なりに頃合を見計らいまして、骨折りをしてみる気持ちになっていたのです。ところが、運命を決めることとなりましたあの面会によって、自惚れ娘がすべてを加速させ、母の思いやり溢れる計画を頓挫させてしまったというわけです。あゝ、高い代償を払ってしまいましたが、これでよく分かりました。幸運にも相談に乗ってもらえる親とか保護者とかに恵まれております間、重大な事柄につきましては、子供は自分たち自身の考えに従うような自惚れた真似を（最善の、そして、純粋無垢な意図からでありましても）してはいけないということなのです。

貴女のお話では、私が家を出なければ、母は私のために一肌脱ぐつもりでいたとのお言葉でしたが、そこから、いつの日にか和解も出来るのではないかと、希望の光が一筋この胸に差し込んでまいります。それに、このお話が示してくれますように、母としては、ジョン伯父様のお力添えがいただければ、伯父様の〈顔〉が物を言いそうだと、そのように考えておりますことがはっきりいたしますので、望みも一層膨らむというものです。適当な機会がありましたら、伯父様に問い合わせてみますのも、私には必要なことだろうと考えております。

手紙　五十六
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

四月二十四日　月曜日

運命が貴公の友人のために奇妙な布地を織り上げている。はっきりとはしないが、手枷をはめられるのは避けられない模様だ。

ここでは働きづめだったよ。ある時は老練な坑夫のごとく、ただひたすらに穴を掘り続け、またある時は、熟練の鳥追いのごとくに罠を仕掛けた。そして、この比類なき娘を完全に我が掌中のものとすべき企みごとに喜々としていたのだ。何もかもが俺にとっては追い風となった。彼女の兄とおじたちは俺のための工作兵にすぎず、父親のほうも、俺の演

出どおりに激昂してくれた。ハウ夫人は俺が仕掛けたぜんまいに操られており、その娘も俺のために動いているが、自分では真っ向から俺に反対しているつもりだ。愛しの君にしても、すでにその強情な首を俺の網の中に突っ込んでおり、捕まったことには気づいていないのだ。まだきつく網を絞ってはいないからな。かくの如く、すべてが達成されたまさしくその時にだよ、貴公は信じてくれるだろうかな、この俺が自分を敵に回し、彼女の味方につくことになるとはな …… いつもの狙いすべてを完全に投げ出し、再び目論むことが自分には出来なくなるようにと、ロンドン到着前に結婚を申し込むのだからな。

これを知って、貴公の頭にはこんな考えが浮かびはしないかな。黒い天使が俺をちょろまかし、解消不能の絆へと追い込むことを思いついたのだ、とだよ。癖になっているのだからと言えば申し開きが立ちそうなほど、それほど長きに亘って俺が耽ってきた他愛のない悪事からして、俺を手中に出来るのは間違いないと、おそらく奴は考えていたのだろうが、もっと確実に（結婚した暁にはきっと唆そうとするに違いない、入り組んだ罪業の数々からだが）俺を捕縛せんがためのことだ。

黒い天使と純白の天使の間で提携関係が進められている模様だと明かしたら、貴公はさらに驚くことだろうな。というのも、彼女の天使が一時間ほどで、ある不都合な出来ごともあって、彼女に認める気持ちを起こさせたのだ。だれよりも俺に好意を寄せてくれているのだという、あの魅惑の君がこれまで決して認めようとしなかった点をだよ。俺のものになる意思があることを誓ってさえくれた。改心を条件にすることもなく、俺のものになってくれるというのだ。愛を語りかけることも、取り消し得ない儀式の件を話題にすることも、彼女は許してくれるのだよ。ただ、これもまた不思議の一つというわけだが、その儀式を先に延ばして、ロンドンへ向かいたいというのだな。ロンドンのあの未亡人宅へ行こうというのだよ。

それはそうと、どういうわけでこんなことになるのだ、と貴公が問いかけてくるような気がするぞ。ラヴレースよ、貴公は人様の度胆を抜くのを事としてはいるが、奇跡を目指しているわけでもないだろう。一体全体、どうしてこういうことになったのだ、とな。

話してやろうじゃないか。危うく我が魅惑の君を永久に失うところだったのだよ。彼女は故郷である天界へ飛び去ろうとしていたのだ。すでに地面を離れていたが、それも、地上に生を享けた者の手を借りてだ。われわれ地球の住人の側に引き留めておくには、何か並外れたことがなされねばならなかったのだよ。そして、覚束なさに苦しむ乙女の心の関心を、それも、曖昧な問いに痺れを切らしてしまう前に引き付けるのには、憎からず思う男からの心和む愛の言葉、そして、魅力的な結婚の申し込みほど効果の上がるものは他にあるまい。

要するに、真相は次のとおりだ。いかなる形であれ、俺の世話を受けるようなことは一切拒み、従兄弟のモーデンが帰国すれば、すぐにも全面的に、完全に俺から独立した状態にしてくれるものと思い、傲慢にも俺を遠ざけてもいたし、また、彼女を崇拝する男が己の熱情を彼女の手に委ねてしまうのではなく、自らその手綱を握りしめているのに嫌気がさしたこともあるのだろうが、そうこうするうちに、彼女は一通の手紙を認めることになる。後に残してきた自分の衣類や宝石類、それに、某かの現金を求めてすでに送ってあった手紙への返答を急かせるものだ。これらすべてがあれば、世話を受けて彼女のプライドに傷がつくこともないし、望みを掛けた自立に資することにもなるのだ。それで、どうな

ったかといえば、ショッキングな返事が来ただけのことさ。ただ祝福のみに値するという娘に対する父からの呪いの通達だけに、なおさらショッキングな話だ。呪いの言葉を吐いた者の心こそ呪われるべきだよ。そして、呪いを伝えた者、あの悪意に満ち嫉妬深きアラベラには、二倍の呪いが加えられるべきなのだ。

留守にしている時だよ、返事が届いたのは。戻ってみると、彼女は発作からいったん回復し、再びさらに激しい発作に見舞われるところだった。息を吹き返してくれるとはだれも思わず、俺を捜しに、急ぎ六人ほど使いの者が出されたのだ。彼女があれだけ打撃を受けたのも無理からぬ話だ。忠順なる孝行娘だけに、父親の呪いに怯え、信じ込んでしまったのだよ。しかも、この陰険な暴君の呪いは（口がきけるようになってから漏らした、彼女自身の言葉を使えば）現世と来世の両方に及ぶものなのだ。まったくの話、呪いが口を出る瞬間に、扁桃腺のあたりにものすごい膿瘍でも引き起こし、そいつが喉を塞ぎ、呪いを吐いたあの老いぼれを窒息させてしまえば良かったのだ。人の情も弁えないこの手の父親全員に対する警告としてだよ。

精一杯の愛情を示したよ。誓えることはすべて誓った。出来るかぎりのことを申し出もしたさ。彼女を生き返らせるべく、そんな努力を惜しむようでは、俺もよほどの悪党だったことになる。

見事に生き返らせたさ。彼女にとっては父親以上の存在ということになる。情け知らずの父親が奪い去りかねなかった生命を与えてやったわけだからな。どうだろう、自ら施した慈善の成果を慈しみ楽しんではいけないかな。結婚を誓ったのは本心だ。また、今この時にとしきりに急き立てたのも、真の熱意から出たものだった。だが、極度の失意に打ちひしがれていたし、彼女なら死の間際にあっても疑いなく保ち続けるはずの繊細な感情も交じり合って、日時については拒否されてしまった。ただ、式を挙げるのを拒んだわけではない。何故なら、今となっては、すべてに亘って俺の保護を受けなければならないと［他はすべて奪われてしまったためだ］、彼女はそんなふうに話していたからだよ。ご覧のとおりだ。色好い返事を引き出すにしても、やはり貴公の友は、彼女自身よりも彼女の残酷な親戚連中のほうに恩義があるということだな。

彼女は親戚の者たちの惨い仕打ちのことをハウ嬢宛に書き送ったのだが、すこぶる体調を崩していた点は知らせていないのだ。

彼女は塞ぎ込んでいる。ひどく塞ぎ込んだままだ。だが、間抜けな兄の企てを恐れ、ロンドンへ行きたがっている。こんなことがなかったなら、また（貴公は信じてくれただろうか）、ひどく具合が悪いのを見た俺からの説得がなかったなら、今夜にも着いていたはずなのだよ。これ以上悪化しなければ、水曜日の朝には本当に出発することにする。

さて、先週の土曜日に受けた厳しいお説教についてだが、ここで二言、三言触れておくことにしよう。

貴公としては、今度こそ令嬢が本物の危険に晒されていると案じ、かくの如き誘惑者を相手に持ち堪えることが出来るとしたら、それこそ奇跡だと言うのだな。貴公が俺の立場なら、われわれのように女に通じていながら、さらに試練を加えるような真似は、図に当たるのが怖いから控えることにする、と貴公は言う。また、別の箇所では、結婚生活を勧めるのは、自分がいくらかでもそれを好ましく思うからではないと語っている。

大した結婚支持者だよ、貴公も。議論ということになると、相変わらずからきし駄目な

奴だな。貴公の手紙の残りの部分に満ち溢れている結婚擁護のたわごとは、俺の転記したものが持つ反証の力と同じ強さでもって訴えかけるだろうかな。

目論んでいた試練がフェアーなものにはならないことを納得させようと、貴公もずいぶん骨を折っている。それも、令嬢が余儀なくされた苦難の数々（貴公は認めてくれるだろうと思うが、主として彼女の身内からの迫害や執念深さによるものであって、これまでのところ、俺ゆえのものではないのだ）を根拠にしての話だ。だが、ひとつ尋ねさせてもらうが、災難というのは美徳の試金石ではないのかな。それに、貴公としては、この魅力的な娘の真価を、その美点の吟味を経た上で俺に認めさせたいのではないのかな。俺のほうでも、その吟味に耐えた暁には、結婚をもって報いると言っているのではないのかな。

だが、すでに話してあったことを繰り返す必要もあるまい。見直してみるのだな、お粗末この上ない論客さんよ。俺の十三日付の長い手紙を読み直してみることだ(ア)。貴公の認めた一字一句に回答が与えられているか、論破されていることに気づくはずだよ。

ただし、貴公に腹を立てているわけではないぞ、ジャック。反対されるのは好きなのだよ。黄金は火によって、美徳は誘惑を経て確かめられるように、本物の機知は反論を受けて実証されるものなのだ。貴公が我が麗しの君の弁護を買って出る以前から、しばしば俺は、俺のやり方に異議を唱える貴公を相棒として受け入れてきたのではなかったかな。理由は他でもない。貴公が当て馬にすぎないことを証明することで、自らの声価を高めるためだよ。ホメーロスは多くの戦士を生み出し、恐ろしげな名前を与えた上で、何のことはない、英雄たちから脳天に一撃を加えられるよう仕向けているが、それと同じことさ。

ただ、次の忠告には留意してもらおう。厚かましくも、主人を正すなどという態度に出る時には、くれぐれも己の正しさを確認しておかねばならないということだ。

よかったら、もう一つ忠告してやろう。女性の間では美徳の教えが幅をきかさなければならないものだが、われわれが意志薄弱なことから、女性の脆さも大目に見てやろうなどと骨折って、その教えを無駄にするような真似をしてはいけないということだ。というのも、共に悪党ではないのかな、お互いにな。連中はわれわれを誘惑し、われわれは連中を唆しているのだよ。われわれ男性が誘惑に勝てないからといって、女性が抵抗していけない理由になるのかな。女の教育は一から十まで、われわれの誘惑に対する用心と警告だというのにだよ。婆さんどもが簡単な規則を連中に教え込んでいるのではないのかな。男は求めるもの、女は拒むもの、とだ。

さて、肝腎の話に戻ることにしよう。この令嬢に関し、将来へ向けての俺の覚悟がどのようなものであるにせよ、彼女の受け取った乱暴な手紙の内容のお陰で、二人の仲を少なくとも一ヶ月分は早めることになったと言って構うまい。先に触れたとおり、今では遠慮会釈なく愛を口にすることも、結婚を口にすることも出来るのだ。彼女の差止め命令ももう俺の恐怖の種にはならないのだからな。

かくもにこやかに打ち解けた様子で、二人一緒にロンドンへ向かうことになる。俺の提案なのだが、ソーリングズ夫人の長女が彼女とシェーズを共にすることになっている。俺は馬で護衛役だ。彼女がひどくシングルトンの企みのことを心配しているからで、道中何が起ころうと、ひたすら辛抱するよう約束させられたよ。だが、何も起こらないものと確

(ア) 手紙十四（五十八頁から六十六頁にかけて）を参照のこと。

信している。実は、先ほどジョゼフから受け取った手紙からすると、ジェームズ・ハーローはもうあの馬鹿げた計画を捨てたと考えられるのだ。奴が計画を打ち明けた身内全員からの熱心な要望によるものだが、連中はその結果に恐れを抱いているのだ。だが、俺にしてみると、まだ終わったわけではない。もっとも、これをどう利用したものか、今のところ考えを固めてはいないのだがね。

愛しの君の言うところでは、衣類は届けてもらえるとのことだし、後に残してきた宝石類やいくばくかの金子も送ってもらえるだろうと考えている。しかし、ジョゼフが言うには、送られるのは衣類だけとのことだ。ただ、そのことは話さないつもりだ。逆に、彼女が手紙で求めたものすべてを届けてくれるのは疑いのないところだ、と言っておこう。連中から受ける失望の念が大きいほど、ますます俺を頼りにするに違いないからな。

とにかく、これだけのずば抜けた美点を備えている者に対し、誠意をもって接することが出来るようになりたいものと願っている。彼女が落とされることもあり得るなどと、時宜を得ないこと甚だしい貴公の見解だが、とんでもない話だ。

誠意を守るつもりでいるのなら、どういうわけだ、と貴公は言い出しそうだな。彼女の兄の場合と違い、貴公にとってシングルトンの企みが終わったことにならないのは何故なのだ、とな。

何故かと言えば（是非とも答えねばならないというのならだが）、きわめて慎み深く、自分に何が出来るのか自信を持てない人間の場合には、逃げ道を用意しておくのが賢明な策だということだ。さらに言えば、人間だれしも、ある事柄に執着していて、そして、諦めねばならないような事態が何か生じた場合、断念している理由がなくなると、再び執着心が湧いてくるのを抑えようとしても、それは非常に難しいことなのだよ。

手紙　五十七
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

四月二十五日　火曜日

総出でロンドン行きの準備だ。胸がこうも高鳴るのは何故だ。この転居が果たす役割に思いを馳せる時、心臓が喉まで飛び上がり、その激しい鼓動に息の詰まる思いをするのは何故なのだ。今のところ、誠意を尽くそうと決心している。それだけに、意のままにならないこの胸の騒ぎに、いよいよ驚かされるのだ。陰謀好きのならず者だよ、この心は。いつもそうだったが、どうやら、今後も変わりはないらしい。悪事と聞けば大喜びだ。ほとんど俺の手には負えないくらいだよ。この三角形をした悪党の衝動には、頭までが実にうまく対応するように出来ている。構うものか。お前と一戦交えようじゃないか。今やっつけることが出来ないのなら、二度と再びお前の征服を試みたりはしないつもりだ。

愛しの君は相変わらず極度に落ち込み、意気消沈している。たおやかな花だ。遠慮なく吹きつける愛の嵐と争うのには、傲慢無礼な圧力に立ち向かうのには、あまりにも不向きなのだよ。称賛のまなざしを向けてくれた親の（「甘やかしてくれる」と言うのでは十分ではあるまい）その翼の下から、今の今まで一度として離れたこともないのだ。この魅惑の花を受け止めるに相応しいものといえば、ただ母の胸があるのみだ。

魅惑の君が発作から回復し、その愛らしい顔をソーリングズ未亡人の胸に横たえている姿に接して浮かんだ思いがこれだった。同時に、憐れみの情と高まる愛を感じていたのだが、彼女が呪わしい姉の手紙を受け取って間もなく、彼女の部屋を訪れた際のことだ。涙に濡れる顔の何と愛らしいことか。俺が入って行くと、ふと持ち上げたその顔は、しきりに保護の手を求めているかにも思えるものだった。こんな天使のような女を相手に、人でなしなどになれるものだろうか。無理な話だ。だが、どうしてだ、ベルフォード。もう一度言うが、彼女が落とされることもあり得るなどと、何故にそんなことを思い出させたりするのだ。それに、彼女にしても、俺の名誉心を信頼してくれるのがこうも遅くなったのは何故なのだ。あんなにも気が進まなかったのはどういうわけだ。

それはともかく、あまりに落ち込み、意気消沈の状態が続いているゆえ、実際に結婚したとしても、塞ぎの虫に取り憑かれた妻になるのではと、ひどく心配になるほどだ。そんなことになると、俺にとっては、それこそ踏んだり蹴ったりだ。家で長い時間を妻と過ごすつもりなのではない。多分、二週間かそこいら経った後ではな。だが、花から花へ飛び回る働き者の蜜蜂のように、おそらく丸一月は遊び回っていた男が、家のことや妻のことが懐かしく思われ始めている時に、ニオベー(四八)みたいな女の出迎えを受け、その女が傷付いた葡萄蔓のように、形だけは男の身体に絡みつきながら、腹わたを絞るように泣き叫ぶとしたら …… この俺にどうしてそんなことが耐えられるというのだ。

我が魅惑の君が健康を回復し、活気を取り戻してくれるよう、一時間ごとに神に祈っている。果たして彼女に、父親と母親以外の者を愛することが出来るのか、それを確かめるためだ。あの二人の気持ち一つなのは間違いない。いつ何時であれ、彼女の夫に侘しい思いをさせられるのだ。奴らを心の底から憎んでいるだけに、これは俺にとっては考えるのも癪な話なのだ。いくつかの点で女を越えた存在だ。天使だよ。ところが、他の点では赤子のようなものだ。まるで父親に弱く、家族にべったりだ。確かに、奴らが彼女と和解してくれなければ、そして、今後とも縒りを戻してくれるのでなければ、こんな妻が相手では、夫としてもはなはだ勝算に乏しくなるというものだ。

彼女にとっても俺にとっても、二人は一緒にならないほうがはるかに得策なのだ。このような女性にとって、貞淑な生活を送るというのは、どれほど悦ばしい生き方となることだろう「あゝ、そうするよう、何としても彼女を説き伏せたいものだな」。懸念もあれば動揺もある。昼の間は落ち着かず、眠れない夜もある。このすべてが、俺の意に逆らったのではないかとの疑念から生じるものだ。俺が家を空けるごとに、二度と再び戻らないのではと恐れを抱くが、歓喜を誘う帰宅により、十分に報われもするし、また、報いようともするのだ。このような熱烈な気持ちが愛を絶えず燃え立たせ、すっかり感じ易いものにしてくれるのだ。冬の夜などに、愛もさめたのか、炉端の両隅に腰を下ろしてまどろみ、互いにこっくりこっくり船を漕ぐような、そんな真似はしない。愛する二人はいつも新鮮な気持ちを抱き合い、いつも話題に事欠くことはないのだよ。

こういった折の俺の気持ちについては、我がステラ(四九)へ捧げた詩行を通して、貴公も承知のはずだ。二人してあの未亡人宅に落ち着いた暁には、つまり、すぐにも同意の上で教会へ向かうことにはならない場合だが、彼女の目に入るところにあの詩を置いておくつもりだ。何気ない感じでな。そこから、俺が結婚についてどんな考えでいるのか、彼女も汲み取ってくれることだろう。仮にも平静に受け止めてくれるようなら、それが足掛かり

になる。そうなれば、後の段取りは俺に任せてもらいたいのだよ。
　初めて耳元で囁かれるとか、色男ぶりを見せつけられるとかした時に、それなりの怒りを表していたなら狙われることもなかったはずの、そんな娘がわんさと攻め落とされているのだ。俺は卑猥な本とか軽薄な引用句、あるいは、いかがわしい絵で若い娘を試してきた。黙って我慢しているとか、顔を赤らめるだけで腹を立てないとかいう場合、特に、流し目をして笑ってみせるようであれば、その娘はもうこちらのものと見て構わない。絶対だ。あゝ、その気になれば、こういう小娘どもには、いくらでも注意してやれるのだ。年老いて楽しみもなくなった頃には、娘たちのための標識燈でも建てることにしよう。美徳というよりも、おそらく、嫉妬心に動かされてのことだろうがね。

　火曜日　午後

　俺が着く頃にロンドンにいるのなら、すぐにも会ってもらえるだろう。我が魅惑の君はわずかだが前より元気になっている。目を見れば分かるし、最後に会った時にはほとんど聞き取れなかった、あの妙なる声音が、俺の心に再び慰めをもたらし始めているのだ。だが、愛情はない。何も感じとってくれないのだ。他の女なら軟化することになる、あの意味ありげだが罪のない馴々しさで（手初めの段階では、罪のないと呼んでも構うまい）言い寄るわけに行かないのだ。今では俺一人に好意を感じることを認め、悲しみにはひどく敏感になっているだけに、なおさら不思議なのだよ、これは。悲しみは人を軟化させ、気力を奪うものだ。悲嘆にくれる者は辺りを見渡し、声もなく慰めを求める。そして、慰めてくれる者に愛を抱くものなのだ。悲しみというやつは、いつだって喜びと同居しているのだよ。揃って同じ窓から顔を出したりはしないが、両方で家一軒をそっくり共用しているものなのだ。

手紙　五十八
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

　四月二十六日　水曜日

ついに幸運の星がわれわれを念願の港へと導き、無事に上陸だ。ローも巧みに詠っているが、

　賢き者、意欲ある者は果敢に挑み、
　困難に打ち克つ。怠け者、愚かなる者は
　労苦と危険を前に打ち震え、後ずさり、
　案の定、叶わぬ夢としてしまう。（五〇）

ということだ。
　だが、歓喜の最中にあってすら、どう名づけたらよいのか分からない何者かが、俺の喜びを押し止め、明るさを増した見通しに暗い影を落としてくるのだ。良心ではないにしても、遠い遠い昔に俺が良心だと考えたものに驚くほど似ているのだよ。

まさか、ラヴレース、貴公の結構な考えがもう消えてしまったわけではあるまいな。ここに至って、まさかこの令嬢にあくどい真似をするつもりではないだろうなと、貴公の声が聞こえるようだよ。

どう返答したものか、俺にも判りかねるな。俺が誠心誠意、承諾してくれるよう申し出た時に、愛しの君は何故受け入れようとしなかったのだ。彼女をここへ連れ込んだからには、すでに事態の様相は一変しているのだ。お馴染みの母さんと娘どもがすでに俺のところにやって来て、大騒ぎしている。「魅力的なご婦人ね。何て綺麗なお肌なんでしょう。目が素敵だわ。何て威厳のあるお姿なんでしょうね。あゝ、ラヴレースさん、貴方って幸せ者ね。こんな婦人をものに出来るのも私たちのお陰ですよ」といった具合だ。そして、連中は彼女の身内全員に対する俺の復讐心や憎しみのことを思い出させてくれるのだ。

サリーは一目で彼女に心を奪われ、俺に向かって

花咲き乱るる草原の
麗しき百合にもまして、目に麗しく、
花咲き初めし五月よりも、さらに爽やか（五二）

と、ドライデンの詩行を口走っていた。

到着して三十分も経たないうちに、貴公の下宿に使いを送った。到着を祝う言葉でももらおうと思ったのだ。だが、どうやら、エッジウェアのほうへ出掛けていたようだな。

我が最愛の君は見事に元気を取り戻したが、独り引き籠もっていつものお仕事だ。書き物だよ。お目通りを許す気になってくれるまでは、俺も同じ慰みごとに甘んじていなければなるまい。実は、一人一人それぞれにすでに指示を与えてあるのだ。

いろいろとあるのだが、彼女のお手伝い役にはだれが予定されていると思う。デブ・バトラーだよ。

何ということだ、ラヴレース …

だから、何だというのだ、ベルフォード。他の者にするわけには行かんのだ。だが、デブの呼び名をどうしたら良いと思う。そうさな、ドーカスだ。ドーカス・ワイクスってことにする。素晴らしいことじゃないか。恐れとか怯えとかから、あるいは、気が合うってこともあるだろうが、もしも我が最愛の君に、ドーカス・ワイクスがベッドを共にするのを承諾させることが出来るとしたらだよ。

愛しの君をものにするのに、俺の思いのままに出来る手が今では多すぎて、一体どれを選んだら良いのか分からないほどだよ。

おや、ちょうど未亡人がドーカス・ワイクスの手を取ってやって来たところだ。俺が二人を我が麗しの君に紹介することになっているのさ。

∴　∴

さてと、正直な娘を受け入れてもらったよ。親は申し分ないからな。ただ、教育を怠ったものだから、ひどく学がない。文字を書くことも、書かれたものを読むことも出来ないのだ。シンクレア夫人の親戚ということだが、それゆえ、なかなか断るわけにも行かなか

ったのさ。未亡人本人が推しているのだし、娘を雇うのも、ハンナが来られるようになるまでのことにすぎないのだからな。押しつけがましくて図々しいのは、礼儀正しい者に対しては本当に強いものだよ。これで、文通やその手のことを促すようなきっかけが出来ることにもなるだろう。付き添いの者は字が読めないということになれば、だれだって、自分の書くもの、あるいは、テーブルとかの上に置いて行くものに、あまり気を配ったり用心したりしないのは確かだからな。

貴公も言うように、身を守ることがこの令嬢に出来るとしたら、それは奇跡というものだろうな。また、俺としても、ここまで来たからには、どうして後戻りなど出来るというのだ。それに、ハーロー一族に対する遺恨のこともある。連中の娘と駆け落ちをし、ラヴレース家の一人にしてやるのだ。彼女の一族に比べ、はるかに優る一門の一人にしてやるのだよ。これまでにも言ってきたことだが(ア)、連中にしてみれば、上々の首尾というわけさ。だが、別の見方をすれば、彼女と駆け落ちをし、こちらの思いのままに扱うということは、連中のプライドにとっては屈辱の極みというわけだ。俺にしてみれば満足至極というところだがね。

ところで、例の女どもが暇なしやって来ている。俺を魅了するこのただ一人の者への愛に身も心も奪われる前には、連中の庭に咲く花や初なりの果実でいつも俺をもてなしてくれていた女どもだ。正直言って、まったくの話、我が女神はこのロンドンの未亡人宅を選ぶべきではなかったのだよ。ただ、俺が選んでいたなら、おそらく、彼女のほうでは選ぼうとしなかっただろうな。盾突いてばかりいる人間はその償いをしなけりゃいけないということさ。そして、自ら選択した結果が裏目に出るというわけだから、大いに教訓とすべき話ではないだろうか。小過によって大いなる善を為す、そのきっかけといったところではないのかな、この俺様も。

ドーカスは容姿、服装とも上品なほうだ。顔付きも下品じゃない。前にも触れたことだが、初めての家ということもあり、一週間かそこいら、令嬢があの娘とベッドを共にするのを承諾してくれたらと思っている。ただ、あの娘が姿を現すなり、令嬢が嫌気を覚えたのは看て取れたよ。だが、あの娘の振舞いはずいぶん控え目だったと思う。少々やり過ぎのきらいはあるがね。令嬢は後ずさりして、疑わしげな表情を向けていたよ。好悪の感情が教唆するのは驚くべき教えだな。だが、ドーカスはとことん尽くすだろうから、いずれ令嬢の好意を勝ち取ってくれるのは疑いのないところだ。ただ、あの娘に備わる特質の中でも、当てに出来ることが一つあるのだ。賄賂は通用しないという点さ。素晴らしいことなのだよ、これは。婦人とその侍女ががっちり手を組んだ日には、極道者が十人掛かりでも、歯が立たないからな。

愛しの君は、馬車を降りる際のことだが、未亡人のほうから声を掛けた時にも、これに劣らずしりごみをしていた。だが、律義なドールマンの手紙のお陰で、未亡人の男っぽい外見に対しては、彼女も心の準備が出来ていたように思うね、俺は。

ところで、あの手紙に触れたついでだが、何で祝いの言葉はないのだ、ジャック。

何の祝いのことだ。

勿論、結婚祝いだよ。覚えておくんだな。俺の場合、言ったことはやったも同じってこ

(ア) 五十八頁を参照のこと。

となのさ。そのつもりになった時にはな。それから、二人はすでに夫婦なのだという点もだよ。ただ、例の仕上げだけはまだ済んでいない。厳粛なる誓いによって、それはお預けになっているのだ。彼女の一族との和解が成立するまではというわけだ。ここの女たちにもそのとおり話してある。愛しの君が気づく前に、連中には分かることになっている。そいつは奇妙だ、と貴公は言うだろうな。

だが、そいつを仄めかす時に、我が麗しの君をおとなしくさせておくにはどうしたものだろうな。どうってことはないさ。ここにいるのではないのかな、彼女は。シンクレア夫人のところにだよ。ただ、理由を耳を傾ける気持ちが彼女にあれば、黙って従うよう説得する自信はある。

彼女の傍を離れてくれと言い張るだろうな、多分。一つ屋根の下に部屋を取るのは困るともな。だが、初めてあの約束をしてから、事情は変わっているのだよ。空き部屋はすべて確保したのだし、この点も貫徹しなければならんのだ。

そのうち、催し物などに連れ出したいと思っている。都会の暮しにはまったくの不案内で、あれだけの審美眼や富、そして、資質に恵まれた女性にしては、都会の娯楽にはあまり接していないのだよ。確かに生まれついての上品さが備わっており、それはどんな技芸をも凌ぐものだ。同種のものを一つ見て百の事柄を判断する能力の点では、俺がかつて知った者の中でも一番だろうな。虐待されて楽しみを失ってしまうまでは、自分好みの娯楽に喜びを感じるあまり、都会の楽しみごとに接する暇もなければ、その気になることもなかったというわけだ。

こういった楽しみごとが気晴らしになるはずなのだ。そして、もう俺の求婚を受け入れているのだから、情に感じやすいところが少し出てくるようでなければ、どうかしているというものだ。とりわけ、彼女と一つ屋根の下で暮らすのを許してもらえるよう、何とか按配出来るとしたらな。強い東風に痛めつけられるのを怖がっているかにも見える、寒空の下に咲きだした早春の花のように、その感じ易さが最初は弱々しく、不承不承に示されたものだとしても構わないさ。それで十分なのだよ、俺にはな。

以前の手紙で触れたことだが(ア)、家にいる時の楽しみにと、本を用意しておいた。サリーとポリーは本が好きなのだ。我が愛しの君の窓付きの控の間は二人の読書室だったのだよ。宗教書を数冊含めておいたが、わざわざ古本で買ったものだ。

日頃から、本好きの女については、読んでいる本で判断することにしてきた。ここから得られた所見は、イギリス内でも国外でも、大いに役に立つものだったよ。おそらく、この賢い令嬢も、彼女のラヴレースと同様、この点に関心を抱いているはずなのだ。

差し当たってはこれくらいにしておこう。見てのとおり、やらなければならんことが山ほどあるのだ。もっとも、すぐにまた筆を執るつもりではいるがね。

《ラヴレース氏は、この手紙に添えてもう一通送っており、その中では、ソーリングズの長女が二人と共に出発した折の様子と、バーネットでの別れについて触れているが、その内容は令嬢の次の手紙の文面とほぼ同一であるため、ここでは割愛した》

(ア) 百三十九頁を参照のこと。

手紙　五十九
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月二十六日　水曜日　午後

大好きなハウさん、とうとうロンドンへまいりました。そして、新たな下宿に落ち着きました。家具類はさっぱりとしておりますし、場所柄も都会にいたしましては好ましいところです。でも、老婦人をどう思うかという点についてですが、それはお尋ねにならぬが花と存じます。ただ、丁重で親切な人のようです。馬車を降ります時に、その親戚筋の女の人たちが出迎えてくれました。育ちの良いお嬢様たちのようです。それでも、叔母という人につきましてもその人たちにつきましても、詳しいことはもう少しお目に掛かりましてからお知らせいたします

ソーリングズ嬢にはバーネットにお住まいの伯父様がいらっしゃるのですが、その人の体具合が大層悪いことを知り、しきりに気を揉むものですから（相当な遺産相続の見込みがあるのです）、私といたしましても、その人の元に留まりたいというお嬢さんの願いを聞き入れざるを得なかったのです。ただ、私の希望といたしましては、伯父様のほうではお嬢さんを当てにしていたわけでもありませんし、私がロンドンに落ち着きますのを見届けてもらいたかったのです。ラヴレースさんのほうでも、さらに熱心にそうしてくれるよう頼み、一、二日したら送り返してあげようとか、伯父様の病状は急変の恐れのないものだと力説しておられました。でも、私の気持ちを知ってもらった上でお嬢さんに選択を任せましたところ、期待しておりましたようにはこちらの意を汲んでくれなかったのです。それでも、お別れの時には、ラヴレースさんは気前良く心付けをしておられました。

何かありますたびにお示しになる気前の良さを目にいたしますと、もっと首尾一貫した人であってくれたならと、そんな願いを抱いてしまうこともしばしばございます。

到着するとすぐに、私は割り当てられました部屋を占領いたしました。ここにしばらく落ち着くようでしたら、奥の窓付きの控の間を大いに活用しようと思っております。

あの人の従者の一人が明朝ローン荘に戻りますので、その人の手で貴女への便りを届けてもらうことを口実にいたしまして、私は部屋に引き下がりました。

ところで、大好きな大好きなお友達にお小言を一つ進呈させていただきますわね。私の幸せがはっきりとしないうちは、ヒックマンさんを世界一の幸福者にして差し上げるわけには行かないとおっしゃっている、取り消しは可能なのでしょうけれど、軽率の謗りを免れない貴女のご決心の件です。仮に私が不幸になるといたしましても、このご決心が私にとりまして何の役に立つというのでしょう。結婚と申しますのは、友情の最も崇高な状態のことです。幸せですと、互いに分かち合うことで楽しみを倍加いたしますと同時に、心配ごとも分担することで軽減するものなのです。私のことを好いていてくださるのでしたら、いかがでしょう、間違いなくお友達と確信出来ます人を二人とは持ち合わせておりません者に、むしろもう一人のお友達を与えてくださるお気持ちになってはいただけないものでしょうか。お母様が望んでおられましたように、お母様の前回のお誕生日に結婚してくださっていたなら、私も難を避ける場所に困るようなことはなかったわけですし、そこに身を寄せておりましたなら、たくさんの悔しい思いやひどい不面目も受けずに済ませられただろうと思うのです。

ここで、ラヴレースさんに邪魔をされてしまったのです。未亡人を紹介するということですが、未亡人は親戚の女の人を連れておりました。私の付き添いにというのです。私の同意があればとのことでしたし、私のハンナがやってくるまで、あるいは、私自身でだれか別の召使を用意するまでの間ということでした。未亡人は娘さんのたくさんの美点を並べ立てておりましたが、大きな短所が一つあるというのです。字を書くことも、書いてあるものを読むことも出来ないとのことでした。幼い頃、その方面の教育がないがしろにされてしまったのだそうですが、分別があり、忠実で、よく尽くしてくれる点では人後に落ちないとおっしゃっていました。また、お裁縫の腕が確かなことでも、娘さんを推薦しておられました。

短所の点につきましては、別に異存はございません。とても感じが良く、上品で、召使にしては、少し上品すぎるかにも思われます。でも、あの娘さんについて一番好きになれませんところは、妙にずる賢い目付きをしている点なのです。あのような目付きは見たこともございません。かなり鉄面皮なところがあると思われます。ただ、確かにシンクレア夫人ご自身も(それが未亡人のお名前です)、妙なまばたきの仕方をなさいますし、その丁重さにも、ロンドン風の気安さや遠慮のなさと申しますには、わざとらしさが過ぎるように思われるのです。でも、だれにいたしましても、自分の容貌のことはどうしようもありませんわね。いずれにいたしましても、夫人は大層丁重ですし、親切にしてくださっています。それに、娘さんにいたしましても(ドーカスという名ですが)、長く傍にいるわけではありませんからね。

この娘さんを受け入れることにいたしました。伯母様が立ち会っておられますし、娘さんも傍にいるのです。そうする以外にはございませんでしょう(反対する気持ちがあったといたしましても、今置かれております立場では、異存はなかったのです)。それに、ご親切にも、ラヴレースさんがわざわざ二人を紹介してくださったのです。でも、あの方たちが退出いたしますと、あの人には(話し合いを始めたがっている様子でしたが)次のようにお話しいたしました。このお部屋は私が一人で引き籠もる場所と考えていただき、お会いするのは食堂になるだろう(食堂は階段を数段上がったところにございます。この離れは以前には二軒の家だったものですから、お部屋の間の連絡はどれもこれも、あまり都合好く出来てはいないのです)。そして、このお部屋におります時には、出来るかぎり邪魔をしてほしくない、とです。あの人はとても恭しい態度で戸口のところまで帰りかけましたが、そこで立ち止まり、今食堂で付き合ってほしいとおっしゃるのです。私はこう申しました。もし別の下宿のほうへ向かおうとしておられるのでしたら、すぐご一緒いたしますが、今行かれるのではないのでしたら、先にハウさん宛の手紙を書き上げたい、とです。

そうせずに済むのでしたら、私の元を去るお気持ちなど、あの人には一切ないことは分かっております。兄の計画を口実に、ご自分の約束はなかったことにするよう、言質を取ろうとなさるかもしれないのです。でも、今反故にしたりいたしますと、完全になかったことにして上げなければならなくなってしまいます。

悲しみに暮れております最中に優しく振る舞ってくださった点をお認めしたため、あの人は、互いに認め合った恋人みたいな馴々しさで言い寄る権利を得たとでも考えておられ

るようなのです。この男性を見ておりますと、女の人が一旦男の人と関わりを持ってしまいますと、後戻りをするわけには行かなくなるのが分かります。一つ容認するということは、男の人たちにとりましては、次の譲歩への序曲に他ならないのです。この前の日曜日からというもの、私がよそよそしいと、あの人は絶えずこぼしております。また、あの人に対する私の気持ちを云々する資格が出来たとお考えで、身内との和解のためでしたらあの人をすぐにでも諦めると、以前お話しいたしましたのを根拠に、疑いを強めていらっしゃるのです。それでいて、あの人が拠り所としております譲歩の数々を私から引き出すことになりました、あの〈追従的な優しさ〉は …… このような言葉の組み合わせ方は妙かもしれませんが …… すっかり忘れてしまわれたのです。

ドアのところで話し合っておりますと、私の新しい召使がやってまいりました。二人一緒にとのことですが、お茶へのお誘いでした。そうなさりたいのなら、あの人がお受けするのは構わないけれど、私は書き物を続けねばならないので、と申しました。そして、お茶も夕食も取る気はございませんでしたので、あの人には、階下に行かれたら、両方とも遠慮させていただくことを詫び、また、出来るかぎり部屋に引き籠もっているのが好みである旨を知らせてくださるようお願いいたしました。ただ、翌朝の朝食時には未亡人や姪御さんたちと同席することを、私に代わって約束していただきたいと申し添えました。

夕食の席を外しますのは、とりわけ初対面の人たちには失礼に当たると、あの人は反対しておられました。

私はこう申しました。「夕食を滅多にとりませんのはご存じでしょう。皆さんにそうお伝えくださって構いません。気が滅入っているのです。はっきりと申し上げました好みに反するようなことを、決して無理強いをなさってはいけませんわ。お願いです、ラヴレースさん、私の詳しいことをすっかり皆さんにお話しいただきたいのです。親切な方たちなのでしたら、大目にみていただけるはずですわ。新しい知人を作るためにここに参ったわけではございませんもの」とです。

控の間に並んでおります書物を調べまして、大層喜んでいるところです。そのこともありまして、ここの人たちに好い印象を持つようになっております。

宗教書の中には、スタンホープの『福音書』(五二)、シャープ、ティロットソン、サウスの説教集やネルソンの『祝宴と精進』、マン主教の聖礼典を扱ったものと、エクセター主教ゴーデン師による同じ主題のもの、そして、イネットの『勤行』がございます。もう少し娯楽的傾向の本の中には、選び方も難のない、次のようなものが含まれております。テレマコスのフランス語版と英語版、スティール、ロー、シェークスピアの劇作、シバー氏のあの上品な喜劇『呑気な亭主』と、同じ作家の他の作品、ドライデンの『雑文集』『タトラー』『スペクテーター』『ガーディアン』、それに、ポープ、スウィフト、アディソンの作品集などです。

ネルソンとゴーデン主教の白紙の紙面にはシンクレア夫人の署名がございますし、他のほとんどのものの白紙部分には、セアラ・マーティンかメアリー・ホートンの名(五三)が見られますが、これは二人の姪御さんのお名前なのです。

ラヴレースさんのことではひどく不愉快な思いをしております。それだけの大きな理由もございますが、これからお示しする会話の内容をお読みくだされば、その点はお認めいただけるものと存じます。と申しますのも、食堂でお付き合いをいたしますまでは、一休みする暇も与えようとはなさらなかったのですからね。

あの人はお話の切り出しとして、未亡人の身上調査のため外出していたことを教えてくださいましたが、そのようなことが殊更必要なのは、私のほうでは、あの人が頻繁に留守にしてくださるよう望んでいるものと推察するからだ、とおっしゃるのです。

ご想像のとおりです、と私は申しました。また、同じ家に下宿するようなことはお考えにならないように、ともです。でも、調査の結果はいかがでしたか、と尋ねてみました。

「いや、実際の話、未亡人のお人柄は大筋において十分好ましいものでしたよ」と、あの人が言っておりました。ただ、ハウ嬢のご意見では（これは私のほうからお話ししたことなのですが）、私の兄がまだ計画を断念していないとのことであるし、また、未亡人は下宿を生業としており、同じ棟に空き部屋がまだあって、敵側の者に借り取られることも考えられるから、他に良い方法を思いつかないし、長期に亘るはずもないことなので、ご自分で全室を借りることにした、とおっしゃるのです。私のほうで別の下宿へ移るような考えを持たないかぎりは、とのことでした。

これはこれで結構なのですが、ご自分がここに居座るための口実となるよう、殊更に未亡人を軽んじるような言い方をしておられるのは容易に看て取れましたから、その点についてのご意向を尋ねてみました。すると、あの人は次のようなことを素直に認めておられました。私がここに留まるつもりであれば、状況が状況だけに、六時間と私を一人きりにすることは考えられない。それに、二人の滞在はほんの二、三日だけのこと、二人の身分に相応しいところに居を定めるまでのことに過ぎないと考えてもらうよう、未亡人には言い含めてある。これは、私が引っ越す気持ちになった場合でも、あまり気まずい思いをしないようにと考えてのことだ、といった具合でした。

「二人が居を定めるだとか、〈二人が〉だの〈二人の〉だのとおっしゃいますのは、ラヴレースさん、一体どういうおつもりなのでしょう」

最後までは言わせず、あの人は、「あゝ、愛しい人よ、穏やかにお聞き願えれば　…　ただ、お気持ちも伺わずに、少々出過ぎた真似をしてしまったとは思いますが、ご覧いただいた手紙の中でドールマンも書いておりますとおり、ロンドンの知人はわれわれが結婚したものと思い込んでおりますから　…　」

「まさか貴方はそこまで　…　」

「最後までお聞き願いたい、愛しい人よ。私の求婚に色好いお返事をくださっているのです。勿体なくも、ご承諾いただけそうだとの希望を与えてくださったのです。とは申しましても、ソーリングズ夫人のところでは、この身のすべてを捧げたいとの衷心からの申し出をお断りになりましたから、私といたしましても、急いではいけないとの考えに至った次第なのです。勿体なくも私に信頼を寄せてくださいました以上、貴女を急き立てようと願うような、そんな心の狭い卑劣漢とは絶対に思われたくないのです。ただ、兄上の計画は放棄されていないのです。現にシングルトンはロンドンに来ているようでして、奴の船がロザリスに停泊しているのです。兄上はハーロー邸を離れておられます。耳にしておりますかぎりでは、まだシングルトンと合流してはおりませんが　…　貴女が私のものと

なっていることが分かれば、あるいは、そう思われるだけでも、兄上の策謀も終わりを告げるのです。未亡人のお人柄は噂どおりの立派なものかもしれません。しかし、兄上の手先の者がわれわれを見つけ出しました場合、夫人が立派であればあるほど、危険は大きくなるのです。何故なら、両親に逆らっている子供を敵に回しましても、道義上、親の側に立つべきだとの確信に至るかもしれないからです。ただし、われわれは結婚しているのだと夫人が信じてくれた場合には、その立派なお人柄がわれわれの役に立つことになるでしょうし、夫人も味方になってくれるはずです。ついでながら、就寝時に別々の部屋が必要なわけにつきましても、用心のためにと思い、説明しておきました」

私は完全に怒り狂っておりました。憤慨のあまり、あの人を残して飛び出そうといたしましたが、そうはさせてくれないのです。それに、私に何が出来たでしょう。何処へ行けば良いのでしょう。夜も遅くなっていたのです。

「貴方には驚いております」　私は申しました。「信義を重んじる人なのでしたら、妙に遠回しなことが、どうしてこうまで必要なのでしょう。曲がりくねった道がお好きなのですね。教えていただきますわ、ご一緒しなければいけないのでしょうからね（あの人が私の片手を握って離さなかったのです）。階下の皆さんにお話しになったことを何もかも教えていただきたいですわ。本当に、ラヴレースさん、本当に貴方って方は訳の分からない人ですわね」とです。

「あゝ、愛しい人よ、このようなことをお話ししておく必要があったのでしょうか。私の行動すべてにつきまして、貴女の判断にお任せするつもりでなかったなら、貴女には内緒でこの家に部屋を借りることも出来たのではないでしょうか。ともかく、姪御さんたちの前で、そして、貴女の新しい召使の前で、次のように未亡人にお話ししたのです。私たちがハートフォードで密かに結婚したのは事実だということ。ただ、それに先立ち、心から遵守する覚悟でもいるのだが、貴女に厳粛な誓いを立てているため、部屋を別にすることに甘んじなければならず、また、二人にとって重大な意味を持つある和解が成立するまでは、一つ屋根の下に下宿することさえも慎まねばならない、ということをです。さらには、私の意図の清廉さを、そして、この件で私が目指しているのは、ただただ災いを防ぐことである点を貴女に納得していただくためなのですが、皆さんには次のようにも明かしているのです。つまり、貴女に対しては、だれの前でも、二人は婚約しているだけで、結婚はまだであるかのような態度で接する旨を堅く誓っており、謹厳この上ない恋人同士ですら拒むことのない、あの天真爛漫な素振り一つ見せない約束になっている、といった具合にです」

そして、私へのそんな慇懃な態度をどこまでも厳しく守るつもりだと、あの人は大真面目になって誓うのです。

私は次のように申しました。あの人のなさったお話にはどうしても満足出来ないし、また、実際とは違う姿を私に装わせたがっておられるけれど、その必要性についても決して納得していない。あの人のお取りになった行動はどれもひねくれたもので、なくもがなのこじつけだ、とです。そして、階下の皆さんに私のことを話しておく必要があると考えておられるのだから、是非ともおっしゃったことをすべて取り消し、本当のところをお話しいただきたい、と言い張ったのです。

あの人がおっしゃいますには、皆さんにお話しした事柄には極めて多くの事情がからん

でおり、死んでも取り消すわけに行かないとのことでした。そして、先にお挙げになった理由からも、結婚しているように振る舞うことの妥当さをなおも主張しておりました。あの人はこう言っていたのです。「それに、最愛の人よ、ひたすら善かれと願っての方便なのです。こうもお怒りになるのは何故なのでしょう。貴女のことさえなければ、兄上が相手であれシングルトンが相手であれ、私が後ろを見せる気持ちになどなるはずもないことはご存じでしょう。私一人の場合なら、最初に取り掛かるのは、兄上たちを見つけ出すことでしょうね。だれかが私に向かって脅しを掛けるような厚かましい真似をした場合、いつだって私はそうしてきましたからね」とです。

「確かに、お気持ちを先ず伺い、お許しを得ておくべきだったのでしょう。だが、私の口にしたことがお気に召さないのであれば、その言葉を是認していただく唯一妥当な方策として、是非とも早目の日取りをお決めいただきたいものです。明日ということにしていただければ有難い。是非とも明日にしていただきたい。だが、もしも駄目なら［いかがでしょう、私が口を開きます前に（もっとも、私のことを恐れている様子はしておりましたが）〈もしも駄目なら〉などと、あの人のおっしゃるべきことでしょうか］、マダム、何卒お聞き入れ願いたい。私の振舞いがお気に召さないということでないのであれば、明朝の朝食の席では、私があの人たちに話した内容を覆すようなことはなさらないでいただきたいのです。容認くださったことを少しでも悪用していると、そのようにお考えになる根拠を私が与えました時には、即座に否定し、暴露なさって結構です。それが当然の話でしょう。念のために繰り返させていただきますが、このような方便を用いましたのは、決して我身に役立てるためでも、保身を考えてのことでもないということです。ただただ、起こり得る災いを防ごうとの一心からですが、これは貴女ご自身に安心していただくためですし、また、何らの考慮にも値しない者たちのためのことでもあるのです」と、あの人は言っておりました。

何と申し上げたら良いのでしょう。私に何が出来たでしょう。あの人が、然るべき態度でもう一押しなさっていたら、階下の広間などよりはもっと厳粛な場所で明朝お会いすることに（あの人に満足しているとは到底申せませんが）同意していたことでしょう。

でも、あの人が一晩でもこの屋根の下に留まりますことに同意は与えないつもりでおります。私がこのような決心に至りますような、以前にも増して強い理由を、あの人は与えたということなのです。

❁　❁

あゝ、本当に悲しいことですが、私たちはどうしたいとか、どんなことはしたくないとか口にいたしましても、男の人の手中に身を委ねてしまいますと、それはまことに無益な話なのです。一人にしてほしいと私がお願いいたしますと、あの人は階下の人たちのところへ行き、夕食の用意がすっかり整いますまで留まっておられました。その後、あの人の言い回しですと暫時の「拝謁」ということになりますが、少し話を聞いてほしいとのことで、一晩だけここに泊まることを許してもらいたいとおっしゃるのです。翌朝、朝食が済みましたら、M卿のお屋敷か、あるいは、お友達のベルフォードさんを訪ね、エッジウェアに向けて発つことにするから、とのお約束でした。ただ、私に異存があるのなら、ここ

で夕食は取らず、翌朝八時頃に伺うことにする、とおっしゃるのです。でも、こんなことも付け加えておりました。私が断りますと、あの人がなさったお話のこともあり、階下の人たちには極めて異様なことと映るだろうし、先に触れた理由から、空き部屋をすべて借りることで合意を見ているだけに（確かに、一ヶ月だけのことではあるが）、なおさらである。ただし、明日の朝、私が未亡人や姪御さんたちと話し合った結果、あの人たちに少しでも反感を覚えるようであれば、二日とここに留まる必要はない、というのです。

前述の決心のこともございますが、あの人が触れておられたような状況でお断りいたしますのは、あまりにも堅苦しすぎるように思いましたし、あの人も、この件では私と論戦を交える覚悟でおられるかにも見受けられましたから、どう考えましても、とてもこちらの気持ちに従ってもらえそうには思われなかったのです。また、もう身内との和解の見込みはまったくございませんし、あの人の求婚を実際にお受けしているのですから、避けられることなら争わないようにしようと考えたのです。とりわけ、あの人も一晩だけと頼んでおられるのですし、私に内緒でそうなさることも出来たわけですからね。また、貴女のご意見ですと、自惚れ屋さんのあの人は、私を惹きつけるようなご自分の取り柄に自信を失うとか、少なくも、私からの愛情に不信感を抱くとかして、おそらく、いろいろとご自分に有利な譲歩を引き出そうとなさるはず、とのことでしたわね。こういった諸々の理由もありまして、この点だけは譲るのが適当と考えるに至った次第です。ただ、もう一つの件につきましては、あの人にひどく腹を立てておりましたから、お淑やかに応じるようなわけにはとてもまいりませんでした。何かを譲歩いたします時には、そのような態度でなければなりませんものね。でなければ、譲歩など一切してはいけないのです。

私はこのように申しました。「思い立たれたことは、どうしてもやり通さねばならないのでしょう。いとも簡単に約束をなさいますが、反古になさるのもお速いのでしょうね。でも、明日の朝には田舎へ向けて発たれるとおっしゃるのですね。私の体具合がひどく悪かったのはご存じでしょう。貴方のそのつけ込むようなやり方につきまして話し合いますには、今はまだ体調が十分でございません。階下でなさったお話のことは、何もかも不満に思っております。それに、明日、ここの人たちに実際とは違う姿をお見せするようなことも、お約束いたし兼ねますわ」とです。

あの人はこれ以上ないというほどの慇懃な態度で引き下がって行きましたが、一つだけお願いがある、と懇願しておりました。明日の朝顔を合わせます時には、私が怒って当然なことをあの人のほうでしたのだと、そんな考えを未亡人や姪御さんに持たせないような振舞い方をしてもらいたいというのです。

私が自室に引き籠もりますとすぐに、ご用の向きがあれば、ということで、ドーカスがやってまいりました。私は、身の回りの世話をしてもらうことはほとんどないし、着替えはいつも自分でしていると話しておきました。

あの娘は、私が追い払ったとでも思ったのでしょうか、心配げな様子を見せながら、喜んでもらえるよう、ひたすら努めるつもりだと言っておりました。

私は気難しいほうではないし、お手伝いを頼みたいことがある場合は、折に触れて知らせることにすると申しました。ただ、その夜は、もうそれ以上傍にいてもらう必要はないと言ったのです。

あの娘は身形が良いだけでなく、育ちの点でも言葉遣いの点でも、上品なところがござ

います。一般に優雅だと思われております分野の教育を受けたに違いありません。それにいたしましても、父親や母親が、女性の教育の場合、心を磨くことにもなれば、他の教育すべてに気品を添えることにもなります、あの望ましい方面をひどく軽視しておりますのは、一般に行われていることとは申せ、奇妙な話でございます。

あの娘が引き下がりますとすぐに、ドア、窓、壁の板張り、窓の付いております控えの間と同様に、窓がないほうにつきましても、念入りに調べました。そして、ドアとすべての窓にとても頑丈な留め金具が付いておりますのを確かめました上で、再びペンを手にした次第です。

❁　❁

シンクレア夫人が今帰って行かれたところです。夫人がおっしゃいますには、今夜は下がるようにと申し渡しましたのを、ドーカスが夫人に話したというのです。夫人がいらっしゃいましたのは、部屋の感想を尋ね、ゆっくり休んでもらいたいとのご挨拶をなさるためでした。夕食の席に来てもらえず、そのことが気に掛かるとおっしゃるのです。ラヴレースさんから、私は引き籠もっているのが好きなのだというお話があったとのことで、邪魔が入らないようにするので安心してほしいと言っておられました。口を極めてあの人のことを褒め称えておりましたが、容姿の点では私もお褒めに与りました。ただ、ラヴレースさんのお話では、私たちとは早々にお別れすることになりそうで、それが残念だ、とおっしゃるのです。

失礼にならぬよう丁重にお答えいたしますと、夫人も大層慇懃な仕草を見せながら引き下がって行かれたのですが、年の差を考えますと、大袈裟なようにも思われます。紳士の奥様だったのですし、服装にいたしましてもお住まいにいたしましても、夫人を取り巻いておりますすべてのものが大変暮らし向きの良いことを表しておりますから、腰を低くなさる必要などはないのです。

禁じられたことではございますが、それでもお手紙をお出しになりたいとおっしゃるのでしたら、リティシャ・ボーモント嬢宛とし、ペルメル街のウィルソン氏宅留めにしていただきとうございます。

この所書きにいたしますのは、ラヴレースさんからの提案ですが、私たちの手紙は第三者の手を通したほうが良いという、貴女のご希望を知らずになさったことなのです。あの人にとりましては、兄が二人の居場所を嗅ぎ付けたりしてはいけないというのが動機ですから、他のこともございますが、この一例からいたしましても、恐ろしいことをするのはもうたくさんだと考えておられるようにも窺え、嬉しく思っております。

可哀相なハンナの様子につきましてはご存じでしょうか。

ラヴレースさんは計略や機略に長けた人ですから、このようにお願いいたしましても的はずれなことではないと存じますが、私からの便りの封印には十分にご注意いただきたいと思います。私のほうでも、お便りの封印には注意いたします。そのような卑劣な真似をしていることが分かりました時には、どのような悪事でも平気で出来る人だと思いますので、不倶戴天の敵のように考え、あの人の元を逃げ出す所存でおります。

手紙　六十

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

［彼女の最後の二通、手紙五十四、五十五を同封］

四月二十七日　木曜日　夜

お手紙いただきました。今届いたばかりです。ヒックマンさんが幸便な手段を勧めてくださったのですが、郵便の助けも借りますと、毎日お便りをすることが出来るようになるというものです。正直な行商人がおりまして［サイモン・コリンズという名です］、この手紙と同封いたしました二通の配達もその人にお願いするのですが（今は貴女への宛先も分かりましたからね）、月曜と水曜、それに、金曜日には決まってロンドンへ行っているのです。ですから、ウィルソンさんのところから、私宛でお預けになるものを持ち帰ってきてもらえるというわけです。

大層元気を取り戻されてロンドンにご到着の由、お慶び申し上げます。手短に申し上げねばなりません。私のノリスを送り返されましたのを後悔なさるようなことになりませぬよう、願っております。お求めがあれば、すぐにもお送りいたします。

お気の毒ですが、ハンナさんがお傍に参るのは無理です。まだ、とても具合が悪いのです。でも、危険はございません。

一緒におられるご婦人たちのこと、お話しいただければ幸いです。まっとうな人たちではないのでしたら、一度朝食を共になさればお気づきになるはずです。

貴女たちは実際に結婚なさっているのだと、あの人が皆さんに話したことにつきましては、どう書いたら良いものやら、私にも分かりません。あの人が挙げました理由にも、尤もなところはございますね。それにいたしましても、妙な方便や作り話の好きな人ですわね、あの人も。

皆さんのことがお気に召しても召さなくても、貴女の気高い、表裏のないお振舞いや率直さのために、憎まれるようなことになってはいけません。ご承知でしょうが、貴女も今は〈俗世間〉におられるのですからね。

あの人がもう一押ししていたら、その場で申し出を受けるお気持ちだったとのこと、嬉しく思います。何故なのでしょうね、もう一押ししなかったのは。でも、貴女にも承諾出来るような形で、すぐに求めてくることがないようでしたら、あの人の傍に留まろうなどとお考えになってはいけません。

間違いございませんわ。夜であれ昼間であれ、そうせずに済むのでしたら、貴女から離れる気など、あの人にはないのです。足場は確保したわけですからね。

お二人は結婚なさっているのだというあの人の発言の件ですが、あの人を遠ざけておくことがまだ貴女にお出来になるような状況でなされたことではありますが、そうでなければ、あの人には激しい憎悪を感じていたことでしょう。ほんの少しでも馴々しい態度を取ることがありましたら　…　でも、このようなことを貴女に申し上げる必要はございませんね。公言していることとは別な下心があの人にあるとは、とても考えられません。結婚しているような発言をすれば、貴女の警戒心を煽ってしまうくらいのことは、あの人も考えるはずですからね。

間違いなくお便りの封印はつぶさに調べることにいたします。おっしゃるように、そん

な卑劣な真似をするのでしたら、すべての面でそうなのだろうと思います。でも、貴女のような取り柄や財産や美徳を兼ね備えた人に向かって、あの人も卑劣な真似は出来ないように思うのです。馬鹿ではないのです、あの人も。貴女のことは勿論、あの人自身の身内の方々からの遺産相続のことを考えましても、誠実になさるのがご自分のためなのですからね。でも、本当に結婚なさっておられたならと、天にも祈る気持ちでおります。これが今の私の一番強い願いですもの。

貴女の
アナ・ハウ

手紙　六十一
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

木曜日　午前八時

思い返してみますと、ラヴレースさんにはますます不満が募ってまいります。あの人の大嘘を認めることになります証言を、いわば受け身の形でではありますが、私にさせようなどという鉄面皮なところが嫌なのです。それに、そのようなことをするあの人の目的というのが、もしも、好意的になろうとする私の決心を促したい気持ちから来ているのではないということでしたら、あの人に対する振舞い方も難しくなるわけですから、いよいよ好きになれなくなってしまうことでしょう。ドーカスに託して挨拶を送ってまいりましたが、食堂で会ってもらいたいとの言伝も一緒です。おそらく、私が機嫌良く会うつもりかどうかを推し測ろうというのです。でも、朝食の時にはお会いするのですから、遠慮させていただきたい、という返事をしておきました。

十時

降りてまいります前には、本意とは違う寛いだ態度に合わせ、表情を繕うよう心掛けました。未亡人と二人の姪御さんからは慇懃この上ない仕草の出迎えを受けました。容姿の点では本当に感じの良いお嬢さんたちですが、控え目な態度を装っているかにも見受けられました。一方、ラヴレースさんのほうは、どなたに対しましても、まるで長年の知り合いのように打ち解け、寛いだ様子でした。いかにも上品に振る舞っておられたと申さねばなりません。他の人たちに比べ、広く旅をした紳士に備わる強みということですね。

未亡人は、朝食後に交わしました会話の中で、ご主人であった中佐の武勲のことをお話しくださいました。そして、その際、二度三度と目にハンカチを当てておられました。誠意に関わることでもございますし、ハンカチをお濡らしになったものと思います。夫人はそんなふうに考えてもらいたいご様子だったのですからね。でも、私にはそうは見えませんでした。夫人は、ご自分の最愛の中佐がそうだったのだが、私も、かけがえのない夫を失うような不幸には決して遭わないよう願っている、とおっしゃるのです。そして、再び目にハンカチを押し当てておられました。

立派な夫に先立たれ、その上、困難な状況に一人取り残されるなんて　…　それも、夫のせいではございませんし、さらには、ご主人を失った時のご自分がそうであったと夫人

は言っておられましたが、心の卑しい人たちや恩知らずな人たちからの侮辱に晒されるのですから、この上なく心の痛む事態であることは疑いもありません。このお話を伺いまして、すっかり夫人贔屓になってしまいました。

ご存じのとおり、私は率直で拘りのない質ですから当然なのでしょうが、それが表情にも出てしまうのです。少なくとも、私をお褒めくださる人たちはそのように言っておられます。気が合いますと、すぐに遠慮なく心を通い合わせ、お互いに打ち解けた態度を取るよう勧めますし、進んで慎みを捨てもするのです。なのに、未亡人のこの二人の姪御さんにはどうしても親しみが持てないのです。何故なのかは分かりません。

ただ、状況からいたしまして、また、会話の内容からいたしましても、そんなふうに考えるのは憚られたわけですが、さもなければ、お嬢さんたちとラヴレースさんとは、昨日知り合ったというよりも、長いお付き合いがあるように考えたくなったことでしょう。と申しますのも、あの人はまるで盗むように、時々あの人たちのほうへ視線を向けるのですが、あの人たちもそれに応えていたからです。そして、私がそんなところに目を留め、見詰めますと、目を伏せてしまうのです。こう申して構わないでしょうが、まるで、私の吟味のまなざしには耐えられないと言わんばかりなのです。

未亡人はお話のすべてを、ラヴレース夫人を相手にしておられるように私に向けて来られました。私は不承不承、我慢しておりました。一度などは、それこそ余計なお世話でしたが、こんなことをおっしゃるのです。どのような誓いにせよ、どんな考えにせよ、いかほどの重みがあるものかは知らないけれど、こんな素敵なカップルに（と、夫人はあの人と私のことをそんなふうに呼んでおられましたが）ベッドを共にさせないようにするほどの力があるとは驚きだ、というのです。

この仄めかしを聞いたあの人たちの探るようなまなざしの前で、今度は私が目を伏せる番でした。それでも、私の胸に罪悪感などはなかったのです。だといたしますと、思い返してみたのですが、あの人たちの目付きについての私の非難が性急に過ぎるものではないのだなどと、どうして言えるでしょうね。罪の意識に伴います狼狽ぶりと、濡れ衣ですのに、そのようなことの出来る人間だと思われただけで、立派な精神の持ち主の表情を覆うことになります、そんな高邁な意識の表れとを区別出来ない者たちによって、本当に慎み深い人たちですのに（私のことは除外いたしますが）、中傷を受けて顔を赤らめましたために、疑われてしまったという人がたくさんおりますことも疑いのないところなのです。

ローマの偉人のお話を読んだことがございますね。自分が征服した世界の三つの地域の一つから（四つ目の地域は当時まだ知られておりませんでした）名字をつけた人で、部下に対する卑劣な行為で告発されますと、スキピオ(五四)が実に恥ずかしい嫌疑を受け、公衆の面前で尋問された、などと噂されますのを嫌い、潔く流刑（有罪とされた場合には、その罪に相当する刑罰ですが）に甘んじたということでした。いかがでしょう、その嫌疑のことを初めて伝えられました時にも、スキピオは憤慨のあまり顔を赤らめるようなことはなかったと、貴女はそのようにお考えでしょうか。

未亡人がお節介にも驚いてみせますと、ラヴレースさんは、まるで私の受け止め方を調べるみたいに、何食わぬ顔付きをして、横目で見ているのです。そして、皆さんもお気づきのこととは思うが、私の（「我が愛しの君」という呼び方をしておりましたが）意向や希望を大切に思う気持ちのほうが、ご自分を縛ることになった誓約よりも、さらに強く働き

掛けているのです、などとおっしゃるのです。

あの人と未亡人の両方を咎めるつもりで、私は次のように申しました。「妙なお話ですこと。誓約とか誓言とかがそんなにも軽々しく扱われて、一番目が何であれ、二番目の重要さしかないとお考えなのですからね」とです。

おっしゃるとおりですわ、とマーティンさんが口を開きました。誓いを結ぶいきさつがどうであれ、厳粛な誓いを破って良い口実などはどこにもありませんわ、というのです。

私は最寄りの教会はどこか尋ねてみました。礼拝をすっかりご無沙汰してしまっていたからです。皆さんはセントジェームズ、セントアン、それに、ブルームズベリにございますもう一つの教会の名を挙げておられました。姪御さんたちがおっしゃいますには、一番よく出掛けられるのはセントジェームズだそうで、お説教も見事ですが、会衆も立派だからとのことでした。

ラヴレースさんのほうでは、ロンドン滞在中に最もよく行くのはロイヤルチャペルだとおっしゃるのです。失礼でしたが、信仰の場所などに顔をお出しになるようなことを、あの人からお聞きするとは思ってもいなかったのです。私はこう申しました。比べてみますとほんの小さなものにすぎない領土を治めておられる、目で見ることの出来ます王様のお姿を眼前にいたしますと、それが世間一般の通例でしょうが、千もの世界の王であり創り主であるという、人の目には見えないお方を礼拝いたします時に求められますあの一心不乱な気持ちをそがれてしまうようなことはないのでしょうか、とお尋ねしたのです。

あの人はこんなふうに言っておられました。興味本位で出席した人たちについては、王室の方々が臨席しておられる場合、確かにそんなこともあるとは思う。しかし、そうでない場合には、ロイヤルチャペルにおいても、他のどの教会にも負けないほど多くの人々が悔恨の情を顔に浮かべているのを目にしてきた。それもまた当然の話で、宮廷に出入りしている連中にしても、洗い清めたい事柄の深刻さの点では、どこのだれにも負けないわけだから、というのです。

こうお話になった時の口調があまりにも軽薄なものでしたから、私のほうでも、あの人がお友達の選び方に通じていらっしゃることを疑う者など、だれ一人としておりませんわねと、つい口に出してしまいました。

「いや、恐れ入りました」と、あの人は頭を下げながら言っておりました。そして、皆さんのほうへ向かって、「もっとお付き合いをいただければ、皆さんお気づきになる折も数知れなく出てくると思いますが、こういった話題になりますと、我が最愛の君は決して容赦してくれないのです。ただ、お褒めに与ると嬉しいのは勿論ですが、お咎めを受けましても、また感心してしまうのですよ」とおっしゃるのです。

ホートンさんがおっしゃるには、何事であれ潮時というものがあり、無邪気に浮かれ騒ぐのは、思うに、若者にはまことに似つかわしいことだと言わずにいられない、というのです。

「本当におっしゃるとおりね」と、マーティンさんがお話に加わりました。「シェークスピアも見事に詠っているけれど、〈若さこそ人生の春、華やげる歳月の盛りの時〉(五五)ということね」と、演技がかった仕草で語っておりました」　そして、マーティンさんとしては、私の夫に備わっております、年格好にぴったりと似合ったあの魅力溢れる快活さにはついつい感心してしまう、とのことでした。

ラヴレースさんは頭を下げて見せました。あの人は褒め言葉が大好きなのです。褒められるに相応しいことをしたがるというのではなく、どうやら、褒められるのがお好きなのです。でも、確かに、この種の褒め言葉に相応しいところがございます。貴女もご存じのように、仕草は打ち解けた伸びやかなものですし、声も悪くはございません。元来が朗らかな人ですから、こんなお褒めをいただいてすっかり陽気な気分になったのでしょう、次のような詩を歌ってくださいました。あの人がおっしゃいますには、コングリーヴからの一節とのことです。

老齢に背を向ける
　千の喜びを若さはもたらす。
春の懐で戯れる楽しみごとも
　冷たく冬に抱かれて死ぬ(五六)。

そして、あの人がおっしゃいますには、これは二人の姪御さんへの挨拶がわりだというのです。また、無駄骨でもございませんでした。お二人が「アンコール」と声を掛けたのです。あの人がそれに応じたものですから、私も先の句を記憶に留めた次第です。

お食事のことが少し話題になりますと、未亡人は、私が希望することならどのような規則にでも合わせましょうと、ご親切に言ってくださいました。私は、いとも簡単に満足する質だということ、また、是非とも一人きりで食事を取りたいし、それも、どの大皿からでも構わないが、小皿に取り分けて届けてくださるものをいただきたい、と答えておきました。でも、このような細々としたことでお目を煩わせるつもりはございません。

皆さん、私のことを大変な変わり者とお考えですが、それも一理あるところです。それでも、皆さんのお気持ちを大事にして自分の好みを抑えるほど、あの人たちのことを好きにはなれませんでしたから、それだけに、皆さんがどのようにお考えになろうと、あまり気に留めませんでした。それに、ラヴレースさんにはひどく不愉快な思いをさせられておりましたので、なおさらのことです。

それでも、塞ぎの虫に取りつかれたりせぬよう、皆さんは注意してくださいました。一人きりになって自分自身を持て余すようでは、それこそ大変な不幸者ですわね、と私は申しておきました。

ラヴレースさんのほうでは、ご婦人たちに是非とも私の身の上のことを知ってもらいたいし、そうすれば、私の流儀を大目に見る術も会得してもらえるだろうとおっしゃるのです。「だが、愛しい人よ、私を愛してくださるからには」と、自惚れ屋さんは言っておりました。「出来るかぎり塞ぎ込むのは避けていただきたいのです。それほどまでに心を乱されるのは、ひとえに、優しい心根をしておられるからなのだ。強い義務の念から出たことに他ならないが、いくらそのお気持ちを向けられても、決して報いてもらえない人たちなのです。あゝ、愛する人よ、このような言い方をしたからといって［察するに、私が眉をひそめるのを目に留めたのでしょう］、どうか怒らないでいただきたい」というのです。そして、私の手を取ると、唇を押し当てておりました。

皆さんのところにあの人を残し、私は控えの間に引き下がりまして、ペンを手にした次第です。

ちょうどここまで筆を進めましたところ、あの人からの伝言があり、中断させられてしまいました。遠出をするところなので、ご用の向きがあれば伺いたいとのことです。そんなわけですから、ひとまずペンを置きまして、食堂であの人と会ってまいります。

❁　❁

乗馬服に身を包んだあの人のお姿を拝見し、悪い気持ちはいたしませんでした。

あの人は、私が階下のご婦人たちをどのように思っているのか、知りたがっている様子でした。大いに非難の余地があると考えているわけではありませんが、ただ、今の自分の立場では新たな知り合いは欲しくございませんので、あの人たちと親しくする気持ちにはなれないのですと、私はそのように申しておきました。

あの人はこの点に関し、なおも私の考えを求めてまいりました。

若いご婦人のどちらの方につきましても、大層気に入ったとは申せませんし、叔母に当たる方につきましても同じことです。それに、たとえ私がどれほど幸福な情況に置かれているといたしましても、あの人たちの気質は私には陽気すぎます、とお話ししました。

あの人がおっしゃいますには、私の口からそのような言葉が出ても、別に驚きはしないとのことでした。あの人がご存じの、ロンドンの催し物や楽しみごとにいつも顔を出している女性の中には、私に受け入れてもらえそうな者はまずいないとのことで、「ロンドンの貴婦人にとりましては、マダム、無口なことや、すぐに頬を染めてみせますのは、今では何の美質でもないのです。しばしば人前に出ることで慣れっこになっておりますから、そんな弱みを握られてしまうのを、男と同じくらいに恥ずかしく思うことでしょうね」というのです。

「女性の半数に非難を浴びせることで、この二人のご婦人の肩を持とうとなさるのでしょうか。それはそうと、朝食と夕食は（夕食をいただく場合はですが）一人で取りたいのです。是非ともお口添えを（もっとも、変わり者と思われるのは嫌ですが）いただきたいですわね、ラヴレースさん」

是非にということであれば、無論そのとおりになるはずだと、あの人が言ってくれました。ここの人たちはそれほど地位があるわけでもなく、どのような点であれ、私の意向に関わることなら、詫びを入れるまでのこともない、というのです。そして、あの人たちのことをもっと知った上で、いよいよ好きになれないようなら、どこか別の下宿に移ることを考えてほしい、と言っておりました。

別れ際には、大層残念そうな素振りを見せ、こうするのは、あくまでも私の指図に従ってのことだと断言しておりました。ただし、二人が結婚しているという発言を私が黙認いたしましたので、あの人も面目を施せたわけですが、そのことがなければ、兄の計画が進行中ということもあり、とても立ち去ることには同意しかねただろうというのです。そして、その発言によってここの家人全員をご自分の側に引き入れることが出来たのだし、そのお陰で一層安心して、また、納得もして、私の傍を離れることが出来るのだと言っておりました。

あの人の希望といたしましては、戻ってこられた時には、慶ばしい日を私のほうから指定してほしいというのです。兄の企みのこともあり、和解の望みがない点は確信してもら

えるだろうから、とのことでした。

私は、ジョン伯父様に一通認めておきたい気もする、と申しました。かつては愛してくださっていたのですし、一度直接にお頼みしておいたほうが気持ちも休まるように思うということ、また、祖父の地所につきましても、身内の者たちの関心を引き付けられそうな条件を提案出来るかもしれませんし、伯父への手紙を認め、返事を受け取るまでは、下宿を離れていてもらいたいということをお話ししたのです。

申し訳ないが、それは約束いたしかねる、とあの人は言っておりました。シングルトンと兄の動きを知りたいし、戻った時に何ら懸念すべき理由はないと分かれば、その足でバークシャーへ向かい、何とか従姉妹のシャーロット様をお連れするよう、努力してみたいとおっしゃるのですが、シャーロット様なら、現段階では「思案中とお見受けする」日取りよりももっと早い日に決めるよう、私を促してくれるはずだ、というのです。「思案中とお見受けする」だなんて　…　どうでしょう、ずいぶんと従順なお方のようですわね。

私は、あのお嬢様にご一緒いただけるのは大変有難いことと思う、と申しました。

あの人自身から出た提案ですし、渋々口になさった言葉ではないだけに、なおさら嬉しかったのです。

あの人は、是非とも銀行券を受け取ってほしいと熱心に言っておりましたが、私は辞退いたしました。その次には、お留守の間、あの人の召使のウィリアムさんを付き添わせようとのお申し出です。何か尋常ならざることが起きた場合には、急ぎあの人のところへ遣わすことも出来るだろうから、というのです。この件には同意いたしました。

暇乞いをなさった時は、これ以上はないというほどの恭しい態度で、私の手に唇を押し当てただけでした。私は気づかなかったのですが、銀行券をテーブルの上に置いて行かれました。勿論、お戻りになったらお返しするつもりです。

今では、あの人に対する気持ちも前よりはずっと和らいでおります。

どなたに対してであれ、疑わしい気持ちが取り除かれますと、心が狭いわけでもない人間でしたら、そんな疑いを抱いてしまったことへの埋め合わせのつもりもありまして、善意に解釈出来そうなことが起こりますと、何から何までその人にとって好意的な受け止め方をしようとするものです。お身内のご婦人たちのことになりますと、親戚の気安さでしょうか、あの人も遠慮のない話し方をなさるのですが、そこにはいつも優しい思いやりが込められているのです。そのようなところを拝見いたしますと、とりわけ嬉しくなってしまうのですが、男の人が親戚の女性の方たちに優しくしておられるのを目にしますと、女の人は、結婚いたしましても、そうしてもらうに相応しい者になろうという気持ちがあれば、自分に対しても立派な振舞いをしてもらえそうだと、そんな期待を抱きますし、ある意味では、それも当然のことなのです。

そのようなわけで、根っからの無法者ではないのだろうと考える余地もございますことて、私はこの男性を甘んじて受け入れる気持ちになってしまったというわけです。それにいたしましても、(自分自身を粗末に扱い)駆け落ちの機会を男の人に与えてしまいました人間が、当の男性から極めて丁重な扱いをしていただくなどということは、果たして期待出来るものなのでしょうか。

でも、何故なのでしょう。明るい見通しが開けてきたかにも思われる時ですのに、このように物思いに沈んでしまうのは何故なのでしょうと、私の大好きなお友達はクラリッサ

にお尋ねになるのでしょうか。

何故かとおっしゃるのですか、大好きな大好きなハウさん。世間の人たちの目からいたしますと、軽はずみで無思慮な者たちの間にその名を連ねた人間なのです。親から受けた呪いに苦しみ、また、子の務めにも自らの信条にも背いて男性の手に、それも、不品行な男の手に身を投じてしまったことを思い返しますにつけ、止めどなく湧いてまいります不安に苛まれ、苦しんでいる娘なのです。そのような人間に、何故かとお尋ねになるのでしょうか。考えが足りなかったとの思いがありますだけに、この上なく有望な見通しにもかげりが生じてしまいますのは、致し方のないことではないでしょうか。物思いに沈みがちな人間の場合には、見通しが最も明るい時にこそ、そんな思いが一番強く浮かんでしまうものではないでしょうか。その人にもたらされます喜びでさえ、たとえ相手の男性が予想以上に立派な人間だと分かりましても、いくらか割り引きされたものになってしまうのです。不正な手段で獲得した富の持ち主が、望みもすべて叶い（このような人間の望みが仮にも満たされるようなことがあればの話ですが）、不当に手にしたものをいざ楽しもうと腰を落ち着けながらも、自らの過去への思いこそが最大の苦痛となることを知り、痛恨の情を伴って体験いたします（反省を忘れない、麻痺していない心の持ち主ならばですが）、あの喜びと同じことなのです。

貴女には、ご自分のことを省みますたびに、どうか心安らかであっていただきたいものと祈っております。

変わることなき親愛の情を込めまして、貴女の

Cl. ハーロー

《ラヴレース氏は、氏の次の手紙において、令嬢を説き伏せ、下宿の者たちには妻として通すこと、そして、ただの一晩かぎりとはいえ、同じ下宿に泊まることを認めさせるという、氏の二大目的を達成したことに凱歌を奏でている。氏の語るところでは、事は順調に進んでおり、納得ずくとは行かなくとも、不意を突くことで、程なく思いを遂げることになるのは疑いないという。ただ、わずかながら悔恨の姿勢を装い、大誘惑者の役割を演じているとして、自己批判を行っている。しかしながら、氏の言によれば、ここまで上首尾を収めた以上は、当初からの決意に従い、さらに先へ行けないものか、試さずにはいられないというのである。

氏は上記の件に関して二人の間で交わされた論議の詳細を述べているが、これは、令嬢の先の手紙と同趣旨のものである。

すでにお分かりのことと思うが、この令嬢との一件における氏の功績は、もっぱら、自らの断罪につながるにも拘らず、心身両面について、令嬢の卓越性に正当な評価を加えている点なのである。以下の如き書き出しで、氏は手紙の筆を進めている》

さて、ベルフォードよ、初の朝食を共にした際の、その席での会話の様子を語り聞かせることにしよう。

われらが元へご降臨の際、我が女神の麗しの顔、魅惑のお姿は、淑やかに落ち着き払って屈託もなく、仰ぎ見る者すべてに畏敬の念を抱かせ、一人残らずが深々と膝を屈めるのだ。だれもが唇を震わせ、言葉にならない。畏れ多くて声も出ないのだな。一方、彼女の

立ち居振舞いといえば、自らの値打ちや優越性を意識したもので、取り巻く従者たちを睥睨する女帝の風情だ。だが、生まれついての威厳を備え、慈悲深い振舞いが身についているかの如く、高慢さや横柄さは微塵もないのだよ。

《令嬢に対する敬意に満ちた氏自身の振舞いに接し、サリー・マーティンとポリー・ホートンが示した嫉妬の情、プライド、そして、虚栄心に氏は触れているが、あまりにも身分不相応に育てられ、享楽や遊興の味を教わっていたため、この娘たちは易々と氏の魔手に落ちたとのことである（そのいきさつは、本作品の〈結び〉において見出されるところである）。また、氏の述べるところでは、「女心に働き掛け、一人の男性を他の男性よりも優先してしまう、例の恋の選り好みともいうべきものから、二人は未だ抜け切ってはいない」とのことである》氏曰く、

まことにもって難しいものだよ。いかに優劣が明らかとはいえ、当人以上の贔屓を作ることを女に認めさせるのはな。恋情が絡んでくるとなおさらだ。サリーのことだが、情熱家で、好きとなったら見境のなくなるこの小悪魔は、図々しくも、我が天使と自分とを比べようとするのだ。もっとも、彼女が天使であることは認めている。「止していただきますわ、ラヴレースさん。この不機嫌で陰気臭い美人に、途方もなく親切になさるのを見せつけたりしていただきたくないのよ。私、耐えられないわ」というのだ。そして、忘れちゃ困ると、初穂を捧げてくれた時のことに触れていた。

この手の女というのは、まったく取るに足らないことに大騒ぎをするものだ。博学の主教(五七)がそのイタリア通信の中で「恋の絡み合い」と呼んだもの、また、俺が「不倫の妙味」と称しているものを別にするとしたら、ベルフォードよ、女たちがわれわれのために何をしてくれようと、一体どこに面白みがあるというのだ。

ここの連中ときたら、やたらに俺を唆そうとするのだ。堕落した女というのは放蕩児よりもさらに手に負えないワルだ。改悛の情など考えられないからな。そこが俺とは違うところだよ。それに、この見事な娘さんに辱めを加えるなど、仮に連中が暗黒の神々から総出の後押しを受けているとしても、奴らの説得に屈するつもりはない。もっとも、この辱めというやつも、彼女は果たして女なのか天使なのか、そのいずれかなのかを確かめるための試練と区別出来るならの話だがね。

だが、連中に言わせると、俺は臆病者というわけだ。その気になりさえすれば、ここまで来る前にモノに出来ていただろうし、生身の人間として扱う気になれば、それだけの女であることも分かるはずだ、というのだよ。男が女を女神として扱えば、女のほうでも女神のように振る舞うだろう。また、女に力を与えたりすれば、他の者にはいざ知らず、与えた当人にその力を振るおうとするものだが、そういうことを仮にも知っている人間が世の中にいるとすれば、それは俺様だと連中は考えたのだよ。そして、D―r の女房の一件を俺の仕業にされてしまったのだが、貴公も知っているように、横柄な態度を装って堅苦しい夫を寄せつけず、陰では失敬な下僕に泣き言を漏らしていた女のことだ。罰当たりな蓮っぱ連中をたっぷり呪ってやったさ。連中にも言っているのだが、連中のせいでこの家が嫌になり、引っ越したくなりそうだ。まったくの話、サリーのことだけにしても、彼女はここに連れて来るべきではなかったのだと、そんなふうに考えてしまうことも時々あるの

だよ、ジャック。ただ、サリーの心もポリーの胸の内も知らないまま、愛しの君は、避けられないような場合はともかく、二人とは絶対に口をきくまいと心を固めているのだ。俺にとって、これは別に困ったことではない、と貴公は考えるだろうな。女同士では、嫉妬心を隠し通すのは無理だからな。それに、サリーの場合、自分を抑えることが出来ないのだからな。

何てことだろうな。今もこの小悪魔のサリーが、俺に嫌われては生きて行けないなどと抜かしていたが、ヒステリーを起こそうとしたところだ。だがな、その徴候に気づいたので、俺は部屋を出たよ。それであの娘も悟ったのだ。最後までやっても意味がないとな。

《令嬢に敬意を表し、下宿を留守にしようとする真意はいかなるものであったのか、その点に関し、氏は以下の如く述べるのである》

彼女の傍を離れる件だが、たとえ一晩であれ下宿を離れるなら、約束は果たしたことになるのだ。仮に、そうは思わないと彼女が言うのなら、またぐずぐずと不平を重ねた上で従うのだよ。そして、それを手柄顔に吹聴するさ。その後、傍を離れては生きて行かれないことにして、すぐに戻ってくるのさ。それに、女というのは、有り余る愛情ゆえに背かれることに対しては、心の奥底では腹を立てたりしないものなのだ。抑え難い激情というのがお好みなのだよ。ありとあらゆる親切をせびり取られるのが好きだし、貪欲な恋人にとことん食い尽くされ、吸い尽くされるのが好きなのだ。俺が女に通じていることは承知だろう。ところが、我がクラリッサに関しては、まだそうは行かないのだな。だが、頻繁に出掛けることになれば、彼女には俺の姿も新鮮に映るだろうし、二人の間にちょっとはお熱い場面も生まれることだろう。少なくとも、別れ際と戻った際には欠かさず、キスの一つはすることにしよう。折に触れてこういった馴々しい振舞いをしていれば（礼儀作法に適うわけだが）、我が魅惑の君も徐々に慣れてくれるのではないだろうかな。

ところで、ジャック、叔父貴と叔母上たち、それに、愛すべき従姉妹たちのことはどうしたものだろうな。俺の理解しているところでは、俺自身よりも、皆のほうが俺の結婚を急いでいるわけだからな。

手紙　六十二

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月二十八日　金曜日

ラヴレースさんはもう戻っておられます。兄の計画があの人の口実になったのです。この短いお留守のことは、お約束に対する逃げ口上と見做さざるを得ませんでした。階下の人たちにずいぶんと用心を頼んでおりましたし、家の中に閉じ籠もっていようと私が申し出ておりましたのをご存じだっただけに、なおさらそう思うのです。汚い手を使われますのには耐えられませんし、約束しておられたことなのですから、お従姉妹さんのご協力を得るため、すぐにもバークシャーへ向けて出発していただきたいと、私は厳しい口調でお願いいたしました。

「あゝ、我が最愛の人よ」　あの人が言いました。「何故にご面前から追い払おうとなさるのですか。長く留守にすることをお望みのようですが、そんなにもお傍を離れているわけには行かないのです。お別れしてからというもの、ロンドン市内を彷徨い歩いておりました。一番遠くは、エッジウェアまで足を伸ばしました。重大な時期でもありますし、何か起こりはしまいかと心配で、あそこには二時間と留まることが出来ませんでした。不安を抱いている心の動きについて、説明の出来る者などいるでしょうか。その心にとって貴重なもの、価値あるもののすべてが関わっているわけですからね。貴女が働き掛けをなさるにしても、私がそれに重みを添えるのを可能にしてくれる、あの儀式が執り行われますまでは、お身内のどなたにであれ、わざわざお便りをなさることもないでしょう。二人は結ばれているのだということが皆さんの知るところとなれば、兄上の企みもお終いになるのですし、父上、母上、そして、おじ上たちも、きっと仲直りをしてくださるに違いないのです。だとすれば、私の幸せを確かなものとしてくださるのを、一瞬といえど躊躇なさるのは何故なのでしょうか。もう一度お尋ねいたしましょう。私を追い払おうとなさるのは何故なのです。貴女を数々の困難に巻き込みました男、そして、そこから貴女を救い出したいと、これほど誠意をもって願っております男に、そうする幸せを何故に与えてはいただけないのでしょう」とです。

あの人は黙り込んでおりました。私といたしましては、このように熱心にお求めのありました点について、完全に思い止どまっていただくことにはならないようなことを少し申し上げたかったのですが、そんな気持ちとは裏腹に、声にはならなかったのです。

「申し上げましょう、我が天使よ」　あの人が再び口を開きました。「ご同意いただければの話なのですが、考えていることがあるのです。新たに出来ました立派な街区のいくつかと、それらの周りの綺麗な通りを調べにすぐにも出掛け、どこか貸してもらえる適当な家が見つかれば、ご報告しようと思うのです。お気に召すようなものがあれば、それを手に入れ、二人の身分に相応しい馬車と供の者を揃えましょう。すべて指図はお任せいたします。そして、落ち着く前でも落ち着いてからでも結構ですが［貴女ご自身に決めてもらわねばなりません］、いずれ遠からぬ日に、私をこの世で一番の幸せ者にしていただきたいのです。そうなれば、何もかもが望みどおりに運ぶことでしょう。私の身内全員からの挨拶も、貴女ご自身の家で（私の希望どおり、速やかに家具が整えばの話ですが）お受けいただくことになりましょう。そのうち、シャーロットに顔を出させます。また、準備に手間取るようでしたら、一番目、二番目、三番目と、夏場の間に貴女のほうからご訪問いただける相手を選んでもらいましょう。戻られた時には、新居に欠けていたものがすっかり揃っているのをご覧いただけるはずです。そして、二人を待ち構えておりますのは、絶えず繰り返す喜びの数々です。あゝ、我が天使よ、追い払おうなどとはなさらずに、私を迎え入れていただきたい。永久に貴女のものとしてほしいのです」とおっしゃるのです。

お分かりいただけますね。どの日にしてほしいと、日取りを迫られることは一切なかったのです。その点に不安は抱きませんでした。迫られることがありませんでしたので、その分、すぐに落ち着きを取り戻すことも出来たのです。ただ、家を探しに出掛けたいとのお申し出を断ったなどと、あの人が咎め立てをするような口実は与えませんでした。

そんなわけで、あの人は今述べました用件で外出なさいました。でも、今夜はここにお泊まりになるおつもりのようです。そして、もしも今夜お泊まりになれば、ロンドン滞在

中は、他の夜もということになりますのは疑いのないところでしょう。私の部屋のドアも窓も留め金具は頑丈に出来ておりますし、これまでの間、あの人の振舞いに懸念すべき点はございませんでした。兄の計画のことをあの人は口実になさっておりますし、階下の人たちもとても慇懃で親切にしてくださっています。特にホートンさんですが、このお嬢さんはすっかり私が気に入っているようですし、マーティンさんよりは気質も態度も穏やかな人らしいのです。それに、私たち、今では結構うまく行っているのですから、約束を守ってくれるよう、あの人に向かって言い張ったりいたしますと、皆さんの目にはやかましい女と映るでしょうし、あの人とも争うことになってしまうように思うのです。いつだって言い訳を（どのような点を突かれましても）山ほど用意しておられる人ですからね。これら諸々の理由からいたしまして、あの人のほうで言い出さないかぎり、ここにお泊まりになることには触れないでおこうと考えたのです。

すべての点につきまして、貴女のお考えをお知らせいただきとうございます。

申すまでもございませんが、顔を合わせますとすぐに、あの人の銀行券はお返しいたしました。

金曜日　夕刻

ラヴレースさんは家を二、三軒見てこられましたが、気に入るものはなかったとのことです。ただ、良さそうに思われる家のことが耳に入ったので、明朝には問い合わせてみるとおっしゃっています。

土曜日　朝

あの人はいろいろとお調べになり、昨夜耳になさった家を実際に見てこられました。持ち主は若い未亡人でして、夫に先立たれ、悲嘆にくれているのです。お名前はフレッチヴィルさんです。備え付けの家具類はとても趣味が良く、すべて新調して半年と経っていないものです。調度品が私の気に入らなければ、家と一緒に一時的な使用ということで合意が得られるはずとのことですが、もし気に入った場合には、すぐに家を借り、家具は買い取るよう努力してみる、とあの人はおっしゃっています。

夫人はどなたにも会おうとなさいませんし、二階にあります最上のお部屋も、夫人が外出なさるまで、あるいは、田舎へ向かわれるまでは見せていただけないことになっておりますが、夫人のお言葉では、二週間か、遅くても三週間後には田舎へ出掛けられ、そちらに引き籠もられるとのことです。

ラヴレースさんがご覧になったかぎりでは（大広間と二つの応接間ですが）、申し分なく上品なもので、すべて首尾一貫した造りであるのは間違いないとのことでした。家事のための部屋もとても使い勝手が良く、馬車置き場と馬屋も手近なところにございます。

あの人がおっしゃいますには、私がすべてに目を通すまではじっとしていられない気持ちだし、その家を入手出来ることが分かれば、他に好みの家が出てくれれば別だが、私が見終わるまではこれ以上探すのを止すというのです。値段は意に介さないとのことです。

今では、式のことを話してばかりおられます。ただ、日取りについては一切触れておりません。急かされたくはございませんが、それでも、口になさらないのが不思議です。

つい先程のことですが、あの人は特別な使いの者の手からベティ・ローランス夫人のお

手紙を受け取ったところです。文面は主として、夫人が関わっておられる、大法官裁判所での訴訟に関するものです。ただ、追伸では、ご親切にも丁重なお言葉をお寄せくださっているのです。

夫人がおっしゃいますには、慶びの日が無事終わりますのを皆さん心待ちにしておられるとのことですが、そうなれば、あの人の改心も約束されると期待なさってのことです。すぐにも皆さんの願い、そして、あの人ご自身の願いを叶えることの出来る立場にしてもらいたいものだと、そんなふうにあの人は言っておられました。

でも、心を奪うような絶好の機会でしたのに、あの人は肝心の日について要求なさらないのです。ロンドンにまいります前はあんなにも結婚を急いでおられただけに、なおさら異様なことに思われます。

月曜の夜に小さな宴があるので、あの人、それに、あの人のお友達四人に付き合ってほしいと、とても熱心に求められました。あの人がおっしゃいますには、マーティンさんとホートンさんは出られないとのことですが、ある年中行事のため、ソルコウム大佐の二人のお嬢さん、それに、アントニー・ホームズ卿の二人の姪御さんと、ご自分たちの集まりに出席なさる約束なのです。でも、シンクレア夫人はご出席の予定で、夫人があの人に話しておられたところでは、大変な資産と取り柄に恵まれた若い婦人（パーティントンさんという人です）の同伴が得られるかもしれないとのことです。遺産を相続されるお嬢さんで、ご存命中のシンクレア中佐が後見人になっておられたらしく、シンクレア夫人のことを「ママ」と呼んでいるのです。

私は遠慮させていただくようお願いいたしました。あの人のせいで、まことにもって不本意ながら、既婚者として振る舞わねばならない立場におかれており、私のことを既婚者と考えるような人たちとは、出来るかぎりお会いしたくないのだと申しました。

ひどく気が進まないのであれば無理強いはしない、とのことでしたが、四人はあの人の選り抜きのお友達で、生まれが良くて財産もあり、私に会いたがっている人たちだというのです。そして、お友達のドールマンさん同様、この人たちも私たちの結婚を確信しているけれど、階下の人たちにお話しになった例の制約にあの人が縛られているものと考えているのは間違いない、と付け加えておられました。安心してもらって構わないが、この人たちの前では、崇敬の極みともいえるほどに丁重な言動に努めるつもりでいる、とおっしゃるのです。

これまでにも申してまいりましたが、あの人が一旦何かを思い込みますと、どなたにいたしましても、果してどんなことが出来るのか、覚束ない有様なのです(ア)。でも、出来ることでしたら、見世物にされたくはございません。お人柄や考え方についてあまり芳しくは思っておりません男の人たちのことですから、なおさらそう思うのです。

変わることなき親愛の情を込めまして、貴女の

CL. ハーロー

《次の手紙においてラヴレース氏は、急ぎ帰宅したことに触れ、令嬢に語った彼なりの理由、それを聞いた令嬢の不興の様子、また、下宿の場所柄からしても、氏が出入りする

(ア) 二百二十二頁を参照のこと。なお、第二巻の九十一頁も参照のこと。

ことで嗅ぎ付けられるようなことにならないかぎりは安全であることを根拠に、姿を見せないよう令嬢が強く求めたことを述べている》氏の曰く、

これにはまったく面食らってしまったよ。それに、彼女を訪ね、付き添ってもらうためだが、従姉妹のシャーロットを連れ出しにバークシャーへ行こうなどと安請け合いをしたところ、それを実行してくれと言い張るものだからな。お粗末な言い訳を並べてしまったよ。そして、シャーロットは身体がきゃしゃに出来ているからと言うと、それを妙に曲解して怒り出すものだから、言い訳けのことで腹を立てられ、取り返しのつかないことになってもと思い、精一杯厳かに、そして率直に愛を告白し、そいつを隠れ蓑にせざるを得なかったのだ。

《次いで、氏はその愛の告白を繰り返すのであるが、これは、令嬢が伝えているものと同趣旨のものである》

愛を打ち明けるに当たっても、口を開いた時には、面目を尊んできた我が人生のことを忘れぬ覚悟でいたのだ。ところが、下院のある雄弁家は、長い演説を続けるうちに自ら納得して、当初は弁護するつもりであった側に不利な結論を下すことが一度ならずあったと言われているが、俺も同じ伝で、熱弁を振るっているうちに、自制心を忘れて本気で結婚を迫ってしまったのだよ。結婚生活をあれほど熱を込め、あれほどあからさまに求めるなど、およそ考えてもいなかったことだ、と氏は述べているのである。

《次いで氏は、家を借り、家具類を整えようという自分の提案が、きっと時間稼ぎになるに違いないと、誇らしげに語るのである。

氏は、かくも気高き佳人に対し、誠意ある態度で臨むべきか否か、その決断に迷いを見せている。

氏は、令嬢の身内に対する怒りを表明する際の、己の繊細な心遣いを誇らしげに語っているが、氏が怒りの姿勢を装う事柄について彼らが憶測していることに対し、想像するだにおこがましい話だと憤っているのである》

だが、この繊細な心遣いを褒めてくれないことに関して、俺が彼女に腹を立てるのも無理のない話ではないかな。彼女のほうでは、俺がほんのわずかでも礼を欠くようなことがあれば、すかさず釈明を求めようとするのだからな。ただ、この寛大な配慮によって［何しろ、自分の不利益になることでもあり、確かに寛大な話なのだ］、彼女についても大目に見ることが出来るものと確信している。彼女の心はまさしく繊細さの極みといったところだから、わずかでも繊細さに欠けるというのは、彼女にとってはショックなのだよ。俺にとってははなはだ尋常ならざることでも、彼女がそれに接した場合、尋常ならざることとして注目を引くには、あまりにも日常茶飯のことのように見えるというわけだ。

《氏は、貸家およびその所有者である若い未亡人、つまり、氏がフレッチヴィルと呼ぶ女性にまつわる話を得意げに語っている。そして、これが事実に即していることなのか

作り話なのか、ベルフォード氏に対して不明のままとしておくのである。

かくも熱心に求めた挙式に関し、様々の提案を行ったことに触れながら、日時の指定を避けた、その狡猾な意図を明かしている》氏の曰く、

さて、間もなく行動開始の機会が訪れるものと思っている。すべてが平穏無事に進んでいるのだからな。

結婚の話題に触れた時の我が愛しの君の困惑ぶりときたら、それこそ筆舌に尽くし難いものであった。いじらしく、声も出せない有り様だったよ。

彼女は疑うかもしれないな。危ぶむこともあるだろう。重要な事柄の場合、賢い人間というものは、確信を持てるまでいつも疑い、危ぶむものだ。ただ、これだけ工夫の才に富み、策を好む人間のことを、好意的に受け止めようとしているのは傍目にも明らかで、俺にとっては悦ばしい前兆なのだよ。あゝ、理性的なご婦人たちよ …… 俺としては、理性的なご婦人は大歓迎だ。一旦その胸に愛が忍び込めば、それですべてはお終いだ。そうなると、疑わしい恋人の振舞いも、責めようとするよりは許そうとするのだよ。理性の力を総動員してな。愛する男にとって状況がどれほど不利でも、構ったことではないのだ。

モーブレー、ベルトン、それに、ターヴィルが我が天使に会いたがっており、宴席には顔を出すはずだ。彼女は俺との同伴を断ったが、それでも出てもらわねばならん。俺ほど心の大きな人間になると、だれかに話し聞かせないと、嬉しいことも楽しむわけには行かないのだよ。貴公らの妬みと称賛の両方を一度に引き起こさないと、これだけ魅力に富む獲物を網に掛けた嬉しさも、ただの中途半端な喜びに終わってしまうのさ。従って、彼女には応じてもらわねばならないのだよ。それから、貴公にも来てもらうことにしよう。その時こそ、我が不倶戴天の敵たるハーロー一族の自慢の種、そして、誇りともなっている者を紹介しよう。奴ら全員に対する凱歌を俺と共に奏でてもらうことにする。

強情な美女をなおも待ち受けているのは、果たしていかなる運命なのか、これは俺にも分からないことだ。それゆえ、貴公には、彼女がまだ平静を保ち、希望に満ちている間に会ってもらい、賛美してほしいのだよ。彼女の不安が現実のものとならないうちにだ。仮にも現実のものとなる定めだというのならな。彼女が本当に俺に対し懸念を抱いているというのならだよ。あのつぶらな瞳が光を失わないうちに頼む。あの魅惑の顔が処女の栄光に包まれている間にだよ。落胆の鋤があの麗しい顔立ちの一つ一つに悲痛の溝を作り出さないうちにな。

君がこのような栄誉を得られるよう手配してやることが出来ればの話だが、この令嬢を前にした時の母さんの謹厳な振舞いには、君もすぐに吹き出してしまうことだろう。俺も堪えるのに四苦八苦することがよくあったのだよ。誓いの言葉、呪いの言葉、わずかでも慎みを欠く言葉など、一言としてあの女の唇から漏れることはない。歩く時は小股でしずしずとだよ。あの馬並みの口もきゅっと結んでお澄ましだ。その気になれば雷さながらの声なのに、控え目にメソメソ囁いている。十年この方、丁重な言葉を聞いても曲がったことのないあの硬直した尻が、今じゃしなやかに、一言ごとに三度重ねてお辞儀をしてみせるのだよ。太い両の腕を身体の前で組み、我が女神の前では、勧められても滅多に腰を下ろそうとしないのだ。

月曜の夜には遵守してもらわねばならないこともあるので、貴公ら全員のための指示書きを作成しているところだ。

土曜日　夜

「本当に肝を潰してしまいましたわ。旦那様、どう思われます」　ドーカスが大声を上げた。「奥様は明日礼拝式へお出掛けになるおつもりですわ」というのだ。俺は階下の女たちとカドリル(五八)に興じている最中だった。「礼拝式へだと」　俺は叫んだよ。そして、カードを投げ出してしまった。「礼拝式へですって」と、連中も顔を見合わせながら鸚鵡返しだよ。その夜の遊びはこれで終わりさ。

こんな気まぐれを夢想する者など、どこにいるというのだ。何の予告もなしにだ。問い掛けもない。衣裳も届いていないのだ。許可を求めたわけでもない。彼女が俺の妻になろうと考えるなど、有り得ないことだ。それに、彼女が礼拝式へ行くのなら、俺も行かねばならなくなるのも考えていないのだよ。それでいて、俺の同伴を求めるわけでもない。彼女をひっさらおうと、兄貴とシングルトンが待ち構えているのは承知のはずなのだ。着ているもので気づかれてしまう。容姿も顔立ちも、あれだけ際立っているのだ。イギリス広しといえど、あれほどの女は二人といない。こともあろうに礼拝式とはな。「魔物でも住み込んでいるのか、あの娘には」　ようやく俺が口にしたのはこの台詞だった。

ところで、この件は明日の朝までそっとしておくことにして、君と君の相棒の月曜の夜の振舞いに関して作成した指示書きをここで提示することにしよう。

ロバート・ラヴレース将軍本隊の郷紳、ジョン・ベルフォード、リチャード・モーブレー、トマス・ベルトン及びジェームズ・ターヴィルにより、将軍の女神の面前へ通されるに際して遵守さるべき指示の数々。

貴公らのその鈍い頭の奥深くに、しっかりと叩き込んでおいてもらわねばならないのだが、クラリッサ・ハーロー嬢のような淑女はこの世に二人といないという点、そして、彼女はラヴレース夫人に他ならず、それ以上のものでもそれ以下のものでもないという点をだよ。もっとも、口に出すのも面目ないが、今のところは生娘のままだ。

これも心に留めておいてもらおう。貴公らのお馴染みの母さんの呼び名だが、あの女の母親の娘時代の名に因み、今はシンクレアとなっているということ、そして、あの女の夫は中佐だったということだ。それに、ベルフォードよ、律義者ドールマンの手紙から君があの女について承知していることのすべてを(ア)、相棒たちに知らせるということだ。

モーブレーとターヴィルについては、四人の中では最もへまな二人でもあり、中佐を知っていたため、後家さんや姪たちとは面識があることにしてやろう。奴らのことだ、堪えきれずに、あの母さんと親しく言葉を交わしてしまうだろう。当日出会ったというのでなく、長い付き合いがあるみたいにな。だから、奴らの役どころも、能力に合わせたというわけなのだよ。

奴らが後家さんと中佐のことを、大いに信義を重んじる人間だと称えるのは構わないの

(ア)　百三十四頁以降を参照のこと。

だが、あまり露骨なのは困る。疑いを持たれるほどにくどくど話すのもいかん。

母さん自身や中佐を褒める時には、母さんのほうから口火を開いてくれるので、ターヴィルとモーブレーの両名は、そのとおりだと請け合って構わないが、俺と君、それに、ベルトンの場合は、そういう噂を聞いているというだけにしなければならん。

貧しい暮しをしていると、えてして人に疑われやすいものだから、あの後家さんには前もってたっぷりと握らせておかねばならん。また、懐具合が良いのも疑いのないところなのだ。家と家具は上品なものだし、請求されるものはすべて、これ見よがしと言えるほど快く支払っている。お陰で、近所の連中にも一層受けが良くなるのだろうが、それで金回りの良さは分かるというものだ。二人の姪にも相当なことをしてやろうと考えているのだろう。サリーは結婚を間近に控えているが、相手の男というのは、貴公らがそれで構わなければ、ストランド街で毛織物を手掛けている豪商ということになっている。あの辺りにはそんなのが五、六人はいるからな。

亡くなった立派な叔父のことがあるから、モーブレーとターヴィルに大切にされている人間として、姪たちについての問い合わせがあるかもしれないぞ。あそこには姿を見せないわけだからな。

俺の表情の変化ことごとくを抜かりなく見守ることだよ。目の動きの一つ一つもな。貴公らとしては、俺の目、そして、表情の中に最高の調整係を見出すことになるわけだからな。俺を大いに敬うべきなのは言うまでもあるまい。忠誠を誓っているからには当然のことだ。それに、俺を前にして、敬意を払わない者などどこにいるというのだ。

プリシラ・パーティントンは（容貌は実に天真爛漫としているし、思慮の深さも大変なものだが、上辺はまことに柔和だから）大いに頼りになりそうだ。母さんの付き添い役だが、絢爛豪華に着飾って、ユダヤ人の放縦さを剥き出しにした格好だ。まず令嬢をその気にさせ、その上で後押しをすることになっている。指示は受けているのだ。我が魅惑の君から交際を請われるようになってくれるものと期待している。

パーティントン嬢の身上書としては以下のとおりだ。シンクレア中佐の義理の兄弟の娘なのだが、その義理の兄弟というのは、多分、トルコ貿易か何かの商人で、どえらい金を拵えて死んだのだ。中佐はあの娘の後見人の一人で［その点で、付帯的な影響力が母さんに備わるのだ］、シンクレア夫人のことをいつもママと呼んでいるのはそのためだよ。もっとも、信託を継承してはいないのだがね。

あの娘がやってきたのは、ほんの一、二日過ごすためで、その後は、バーネットに生存している後見人のところへ戻ることになっている。

パーティントン嬢に言い寄る男は百人近くもいて（彼女の祖母は一区長の未亡人で、さらに大変な財産を残してやったのだ）、用心深いことで有名な付き添いの婆さんが一緒でないと、後見人の屋敷から出してもらえないのだ。ただし、シンクレア母さんのところは別で、時々、一週間ほど一緒に過ごすのを許してもらっている。

プリッシーは「ママ、ママ」と、しきりにシンクレア夫人を慕い、夫人と楽しい一週間を過ごさせてもらうよう、後見人に頼み込んでみると約束することになる。あまりにもたくさんの事柄で貴公らのそのお粗末な脳味噌が凝り固まってしまうのが心配だが、後見人にはエドワード・ホールデン卿になってもらっても良いだろう。多分、ホールデン夫人がプリシラのお供をすることになる。あの女は、いつだって、シンクレア母さんと付き合う

のを楽しみにしていたのだし、母さんのことや母さんのやり繰りの上手さについて、日に二十回は口にしているのだからな。

ジャックよ、気取り屋で才人と思われたがっている貴公のことだ、相棒たちのドジを防ぐのが貴公の主たる役目になる。俺が書いてきたことからも察しがつくはずだが、相手にするのは、この世でも一番用心深く、眼力鋭い淑女なのだ。欺くに値する淑女ということだよ。だが、彼女の眼光は、貴公が口を開いた途端、その浅薄な心の奥底までも見透かしてしまうのだ。それゆえ、モーブレーとターヴィルの間に席を取ることだな。奴らがヘマをしそうな時は、爪先を踏んづけて指図をするのだよ。是認の合図を送るのには肘を使うことだな。

貴公らの態度全般についてだが、偽善はいかん。偽善は嫌いなのだよ。我が魅惑の君にしても同じことだ。俺もそのつもりで努力していたなら、偽善的に振る舞うことも出来ただろうと思う。だが、俺の人柄全般はあまねく知れ渡っているわけだから、あまりにも清潔なふりをしたのでは、すぐに疑いの目を向けられていたことだろう。それにしても、偽善に走る必要などがどこにあるというのだ。女性が挙って、不品行を理由にわれわれを撥ねつけることになるというのでないのならな。ご立派なことこの上ない女性でさえ、われわれの行いを改めさせたと評判を取るのが好きなのさ。ひとつ、可愛い連中に試させてやろうじゃないか。不首尾に終わるとしても、意図は正しかったのだ。連中にはそれが慰めになることだろう。われわれの手助けなどはごくわずかなものであり、連中は自ら首を突っ込んで来ているわけだから、われわれの仕事のほうが容易だし、罪も軽いのだよ。われわれとしては、忌まわしい嘘八百を並べずに済むし、天使たちにも男どもにもありのままの姿を見せれば良いのだ。一方、連中の婆さんたちでさえわれわれのことを許し、連中の自業自得を責めようとするのだよ。承知の上での過ちだ、明々白々たる形勢を顧みもしない暴挙だ、とな。だとすれば、われわれのような種類の人間が偽善行為に走ることほど愚かな話はあるまい。

間違いなく他の者たちに教え込むのだぞ。貴公にも覚えておいてもらうが、淫らな話は慎むことだな。知ってのとおり、貴公らのだれに対しても淫らな言葉遣いを許したことはないのだよ。猥談にはまだ早い。年を取り、口先だけになってからの話だよ。それに、プリッシーの気取った姿、我が女神の本物の姿を考慮すべきだ。それゆえ、猥談はおろか、下品な含みを持つ言葉には触れてもいかん。何ということなのだ。何度も話してきたことだが、貴公らは婦人の耳を汚さずには、その心を動かし得ないというのかな。

必要なのは、貴公らが俺よりも劣った人間に見えることなのだ。嫌でもそんなふうに見えるさ、と貴公らは言うだろうな。結構だ。それじゃ、貴公らへの束縛は緩めることにしよう。束縛が緩めば、それだけわざとらしさも少なくなるというものだ。女を囲うのも悪いことではないと、もしもベルトンが得意の話題を持ち出すようなら、俺が反論を買って出るきっかけにもなるだろう。だが、心配無用だ。全力を傾けて論じたりはしないさ。

俺の相棒がどういう手合いなのか、確かめたい気持ちが彼女にもいくらかあるはずだと思う。貴公らの中に一人でも聖人がいるなどとは思ってもいないだろう。貴公らは、全部が全部才能ある人材とは言えないとしても、かなりの財産に恵まれた生まれではないのかな。この死すべき定めの人生で、富ゆえの過ちを犯さぬ者などいるのかな。富は悪事を働く力を与えてくれるのだ。その力の行使を慎むためには、大変な道徳心が求められるので

はないかな。悪魔は現世の神と呼ばれているのではないのかな。われわれは現世に生み落とされているのではないのかな。だとすればだ、ひとつ俺の意見を言わせてもらうが、貧しい者や並の者がいなければ、おそらくこの世界は、はるかな昔に天の劫火によって滅ぼされていただろうということだよ。その他の者たちというのは恩知らずの人非人だ、と貴公は言いたくなるのだろうな。連中は大抵そうしているわけだが、貧乏人や並の者たちにあんな粗末なお返しをするのだからな、とだよ。

この愛しの令嬢はけたはずれの理論通だ。だが、実践の面、経験の点では、あのうら若さからも察しがつくだろうが、まったくの未熟者さ。俺と知り合うまでは、どんなものを読んでいたか知らないが、貴公ら四人のような人間がこの世にいるとは、おそらく信じていなかったのだと思う。五人のうちでは俺が最も礼儀正しいことに気づいて、一座の者に驚きの目を向ける、その様子を観察するのは大いに楽しいことだろう。

月曜の夜の貴公らの振舞いに関する一般的指示ならびに個別例については、これくらいにしておこう。

一言付け加えておくが、それなりのわけがあるように思おうが思うまいが、どんな些細な事柄にも留意することだ。俺の趣意は深いところに潜んでいることが多いのだよ。金の鉱石のようにな。そして、掘り求めるに十分値するものなのだ。ごくごくつまらないヒントのように貴公らが考えがちなことであっても、そこに極めて重大な意味合いが込められていることがしばしばあるのだよ。黙って従うことだな。俺は貴公らの将軍ではないのかな。時には貴公ら自身も唖然として驚くばかりであったが、かつて俺が指揮を執り、何事もなく、そして、首尾よく貴公らを救出し得なかったことなどあったかな。

ところで、二人の間に四、五日平穏無事な時が過ぎたというのに、我が麗しの君の不興を招く危険を冒し、彼女の懸念を煽るとは、俺の意図は一体どこにあるのかと、貴公も興味津々といったところだろう。そこで、納得の行くように話してやろう。

二人の姪のところへ来た客でこの家は大入りとなる。ベッドが足りなくなるはずだ。愛らしく、内気で上品なパーティントン嬢は我が魅惑の君の虜になってしまい、友達付き合いを始めたがるだろう。一晩だけだが、ベッドを共にさせてほしいという願いが持ち出されるわけだ。まさしくその月曜の夜のことだが、我が愛しの君に対し、不幸にも俺が恐るべき犯罪行為に及ぶやも知れぬのだ。いかに用心深い小鳥といえど、寝込みを襲われることはあるものだ。その際、彼女がこの手から飛び去ろうとするとして、彼女を引き止める手段が俺にはないと思うのか。たとえ実際に逃げ出した場合でも、暗黙のうちにとはいいながら、彼女のほうで結婚を認めた数々の証拠がある以上は、その筋の許可を得るにせよ力ずくにせよ、彼女を連れ戻すのは無理な話かな。そして、まんまと成功を収めるにせよ不首尾に終わるにせよ、彼女が俺のことを許してくれるようなら、あるいは、俺を諫めることに甘んじてくれるとか、俺の姿を目にしても堪えてくれるようなら、もう彼女はすっかりこちらのものというわけだ。どこをとっても繊細なのが我が魅惑の君だ。是非とも見てみたいものだな。いずれの場合であれ、こういった折に、かくも繊細な人間がどんな振舞いを見せるのかをだよ。それに、俺のような立場にあれば、思わぬ事故すべてに備えておくのが義務というものなのだ。

実に捕らえ難い、ウナギみたいな人間を相手にするのは分かっているのだから、くねくねと身をよじる小悪魔がこの指の間をすり抜けてしまわないよう注意しなければならんの

だ。俺の手を抜け出し、泥に濁った川へ、あの家族の元へ飛び込んで行く彼女の後ろ姿を見送るようなことになれば、それこそ馬鹿を晒すことになるだろう。あそこからは大変な苦労をして奪い去ったわけだからな。

ところで、待てよ、月曜の夜以降の話だが、証言をしてくれる者がここには何人いるのだろうか。彼女が俺の姓で通っていたこと、俺の姓で呼ばれて返事をし、自分の身内を捨てた目的も、俺の姓を名乗るために他ならなかったのだといった点をだよ。彼女の身内すらその点は否定出来ないだろうし、する気もないはずだが、先ず第一に、俺の召使たちがいる。彼女の下女のドーカス、シンクレア夫人と夫人の姪二人もだ。それと、パーティントン嬢だな。

だが、これらの証言に疑念を持たれる心配もあるので、いよいよここで切り札の登場ということになる。つまり、「財産及び家柄に恵まれた四名に上る有徳の紳士が、とりわけ前述の夜、未亡人マグダレン・シンクレア、未婚女性プリシラ・パーティントン及び原告人たる婦人を伴ったランカスター州サンドーンホールの住人、郷紳ロバート・ラヴレースの招待に応じ、軽食の宴に打ち揃って同席せし折、前記ロバート・ラヴレースが、数多の機会に、前記婦人に向かって我が妻と呼び、前記諸氏及び参会者一同もまたラヴレース夫人と呼び掛け、各自が婦人の婚礼を祝い、慶賀の意を表したるところ、一同のかくのごとき祝辞に接した同婦人は、それらの祝辞により当然引き起こされる類いの深き戸惑いの念から、若妻が満面を朱に染め、愛くるしき困惑を浮かべながら表明すると思われるもの以外には、何らの不快感ないし嫌悪の情も示さなかったとのことである」というわけだ。罵声を浴びせるのではないぞ、ジャック。謀反も許さん。俺が何の目的もなしに、愛しの君をここまで連れて来たとでも思うのかな、貴公は。

俺の計画を控え目に述べれば、およそこんなところだ。脇へ寄るのだよ、家来たち。タンタ、ラ、ラ、ラ、　…　脱帽して告白するのだよ、貴公らの主人への忠誠をな。

手紙　六十三
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

日曜日

礼拝式に出てきたところだよ、ジャック。振舞いも天晴なものだった。我が魅惑の君も気に入ってくれている。説教に耳を傾けたのだよ、素晴らしく熱心な態度でな。聖歌の聴衆側のパートにも率先して加わった。目をキョロキョロさせることもあまりなかった。そんなことをするわけがないだろう。この上なく愛らしい対象、教会中を見渡してもずば抜けて最高に愛らしい者が目の前にいるのだからな。

祈る姿の熱烈さ　…　あの愛らしさ　…　何とも愛しい女だ。白状させてやったよ、俺のために祈っていたことをな。あれだけ並外れた心の持ち主に祈ってもらったのだ。無為に終わらぬよう願っている。

いずれにせよ、信仰には何か美しくも荘厳なところがある。安息日というのは、正しい心を持っていればだが、心を正しく保つには魅力的なしきたりだ。七日に一日というのだから、まことに当を得た話だよ。日に一度の教会詣でを頻繁に行うつもりでいる。俺の改

心には大いに役立つはずだ。見掛けの好い大勢の者たちが打ち揃って一つの敬虔な行いに加わる姿を目の当たりにするのだよ。これこそ理性ある生き物に相応しい行動というものだな。ただ、この魅惑的な女性に対する計画のことを考えると、心の古傷に一つ二つ刺すような痛みがまた加わることにもなる。正直言って、欠かさず礼拝式に出るようなことになれば、計画の遂行は不可能になると思うのだよ。

教会にいる間に、ある目論見が頭に浮かんだのだが、断念しようと思っている。場所柄も弁えずに割り込んできた考えだからな。それにしても、見事な娘だ。俺の心をその身に引き寄せることで、俺の注意を独占することで、何人の女の堕落を防いだことだろうか。

だが、今朝の最初の訪問の際、二人の間であったやり取りのことを話しておこう。礼拝式での俺のお利口さんぶりについては、その後にする。

八時過ぎまでは部屋に入れてもらえなかった。入って見ると、彼女は外出の用意が出来上がっているのだ。その点を俺に話したことは彼女に明かさないよう、ドーカスに命じてあったので、彼女の意向については知らないふりをした。

「お出掛けですか、マダム」と、何食わぬ素振りで訊いてみた。

「えゝ、礼拝式に出るつもりですわ」

「いかがでしょう、マダム、お供させていただけますね」

答えは「ノー」だったが、最寄りの教会まで駕籠で行くつもりだというのだ。

これには泡を食ってしまった。シンクレア夫人のところから一番近い教会まで駕籠を使うというのだからな。夫人の本名はシンクレアじゃないし、ここまで連れ帰ることにもなるわけだが、この家のことを芳しく思っていない者たちが居並ぶところでの話だから、これは認めるわけに行かん。ところが、俺としては何食わぬ顔をしていなけりゃならんのだよ。だが、こう言ってみた。「時間もあることですから、セントポールまで、馬車でのお供を許していただけると有難いのですが」とな。

彼女は、俺の衣裳が派手だと異議を唱え、セントポールへなら、俺を伴わずとも馬車で行けると言うのだ。

俺は反対の理由として、シングルトンと兄貴のこと持ち出し、手元にある中では一番地味なスーツを着用すると申し出た。

「是非お供をさせていただきたいのです、マダム」　俺は言ったよ。「ずいぶん長いこと礼拝式には出ていないのです。座席は別々にしましょう。この次に出掛けますのは、この身にとりましての最大の至福に、晴れて与るためのことであるよう願っております」

彼女はさらにいくつか異議を唱えていたが、最後には同行の栄誉を許してくれた。

彼女の目の届くところに席を取った。時間が長たらしく感じられるようなことのないためだ。というのも、われわれは早目に着いていたのだよ。そして、先にも触れたが、立ち居振舞いのことで、行儀が良いとお褒めに与った。

説教で取り上げた話というのは、十分に注目に値するものだった。予言者の物語というか、金持ちの男によって貧乏人から奪い取られた雌の小羊についての話で、貧乏人は小羊をひどく大事にしており、その男にとっては唯一の心の慰めだったのだ。ウリヤの妻バテシバと通じた上、夫を殺めたということで、ダビデの心に悔恨の情を起こさせんがためのものだ。女というのは、ジャック、この世の始まりから、ありとあらゆる災いの元だったというわけだ。さて、憤懣やるかたないダビデが、金持ちの男は死ぬべきだと毒づいたと

ころ［ダビデ王にして毒づくというのだ、ジャック。だが、ダビデ王が何者なのか、貴公には知る由もあるまい。聖書の中の話だからな］、ナタンという者が　…　これが予言者の名で、なかなかの利口者だが　…　「その男はあなただ」と叫んだのだ（聖書のとおりの言い回しだ(五九)）。誓っても良いが、牧師が真っ向から俺を見据えたように思ったよ。そして、その瞬間、俺のほうは我が雌の小羊に目を注いでいた。ただ、あのローズバッドのことを盛んに思い浮かべたことも言っておかねばなるまい。ともかく、俺もその点ではダビデ王よりはマシな人間だと思った次第だ。

帰宅すると、その話について二人で語り合ったよ。俺のほうでは、師がその話を見事に語ってみせた場所、より効果的に触れられたかもしれない部分を知らせ、注意深く説教に耳を傾けていたことを我が魅惑の君に示しておいた。実際、まことに感動的な物語であったし、これまでに読んだものに劣らない、洒落た趣向が凝らされているのだよ。また、俺が大いに真面目な態度でこれをやってのけたものだから、彼女のほうでもますます俺に満足している様子だった。明日の夜、俺の催す軽食の宴に同席してもらえることになるのは疑いないところだな。

日曜日　夕刻

シンクレア夫人の客間で全員揃っての食事をした。何もかもがすこぶる順調だ。二人の姪は役どころを立派に演じてみせたし、シンクレア夫人も同様だ。これだけ心安んじていられるのはかつてなかったことだよ。彼女が言うには、実のところ、最初のうちここの連中のことを少々訝しく思っていたというのだ。シンクレア夫人にはひどく険しいところがあるし、夫人の姪にしても、お近付きになりたいとは思えない人たちだった。ただ、人を咎めるのにあまり性急であってはいけないのも確かだ。中にはわれわれよりも優れた者もいる。未亡人も「まあまあ」のように思われる、というのだよ。「まあまあ」という言い方を超えることはなかったがね。「マーティン嬢とホートン嬢は良識のある娘さんですし、大変な読書家です。特に、マーティン嬢が結婚のことやご自分を崇めている男性について語ったお話には、とても堅実なところがありました。そのような考え方をしていれば、悪妻になるはずはないものと信じております」とも言っていた。俺のほうでは、サリーを崇め奉っている男は大層評判の良い毛織物商人で、あの娘は間もなく結婚する予定なのだと言っておいた。

貴公の人柄について、また、その他三人の俺の従者がいかなる人物なのか、彼女に明かしていたところだが、明日の夜、貴公らに会ってみたいという気持ちを彼女の心に掻き立てられたらとの考えからだ。貴公の人柄の最良の部分と同様、最悪の部分についても話してあるが、俺自身の引き立て役にするためだよ。また、彼女が願いを容れて同伴してくれる場合だが、どの手の男に会うことになりそうだと考えたら良いのか、それを教えておく意味もあるし、思いも寄らぬことで仰天してしまうのを未然に防ぐためでもある。

貴公ら一人一人に対する彼女の感想を手掛かりに、彼女の好意的評価を得るため、あるいは、失わずにおくためには、俺は何をして構わないのか、何をしてはいけないのか、彼女は何を好み何を好まないのか、その見極めをつけた上、適宜推し進めるべき点は推し進め、避けるべきは避けようと考えている。彼女が貴公らの薄っぺらな頭の中に探りを入れている間に、俺のほうは彼女の心に忍び込み、何に望みを掛けるよう自らの心に命じたら

良いのか、そいつを知ってしまおうという寸法だ。
三週間後には家を借りることになっている。三週間ですべては完了するのだよ。でなければ、よほどツキがないということだ。三日で終わるかもしれない話だろう。俺はあの大目的を達成したのではなかったかな。彼女は俺の妻なのだと、階下の連中に思わせるという点をだ。それに、昼夜を問わずここに腰を据えるという、あのもう一つの大目的も遂げたのだ。俺と一つ屋根の下に身を寄せて、かつてこの手を逃れた女はいただろうか。身を寄せた家がまた、例の家だ。住人といえば、俺の心のままに動く人間たちだ。彼女に付いた召使は、ウィルにしてもドーカスにしても、俺の召使なのだよ。三日と言ったのだったかな、俺は。フ、フ、フ、…　三時間てところだな。

∴　∴

三つ目の目的も達した。ただ、我が魅惑の君にとってははなはだしく気に食わないことであったので、雲行きが険しくなっている。彼女の許しもなしにパーティントン嬢を引き合わせてしまったわけだが、そのため彼女のほうでは、あれだけ上品な淑女からのたっての願いを断るべきか応じるべきか、返事を迫られてしまったのだ。何しろ、あの女は、我が愛しの君が出席するのならという条件で、俺の軽食の宴へのご臨席を約束してくれていたからだよ。
俺の友人たちを相手に、実際とは違う姿で振る舞わねばならないわけだからな。ここの女たちに事の真相を明かすべきだ、作り話を言い触らすのはもう止めてくれ、口裏を合わせていたのでは共犯になってしまう、などと彼女は言い張っていたよ。
だが、粘り抜いても通せない点などあるだろうか。それも、表向き、今背中を見せたかと思うと、すぐに例のパルティア人流の反撃(六〇)に戻るという手口を貫いている場合にはなおさらだ。女たちにしても、男相手に、同じ手口ですべての目的を遂げているのではないのかな。女たちとこれだけ打ち解けた言葉を交わしている俺だが、そこから何一つとして得るところはなかったとでも思うのかな。貴公には一度でも覚えがあるだろうか。些細なものであれ大きなものであれ、俺が望みを掛けていた願いを拒んで、それが女のためになったためしなどあったのかということだ。女が意地を張れば張るほど、動じないのが俺様だ。それが俺の流儀なのだよ。
だが、これだけ彼女の気持ちを無視して通したことだからな。貴公の目には、物腰穏やかなというよりは、機嫌を損ねた美女の姿のほうが強く映るのではないかと心配だ。というのも、パーティントン嬢が去ると、彼女はこう言っていたのだよ。パーティントン嬢は自分にとって何の意味があるのか。このような立場では、新たな知り合いなど欲しくはない。俺の四人の友達にしても、現在のような事情では、自分には何の意味もない。はっきり言っておくが、万一、もう一度　…　と、言葉はそこでとぎれたが、同時に手をくるりと回して見せたのだ。
その仕草については、われわれが落ち合った時、彼女が同席している際に目配せを送るので、貴公にも見てもらえるだろう。まことに愛らしいものだったからな。まったく目新しいものだよ。とはいえ、他の女が見せる愛らしく怒りを込めた手の動きは、これまでにも百度も目にしているのだ。男に嫁ぐ前の、思慮分別のある女を怒らせるというのは、例

外なく実に魅力的なものだな。舞台での怒鳴り合いの場面を見ると良いだろう。そのいずれもが証拠になるはずだ。用心なさることですな、我が魅惑の君よ。怒りを込めたその手の動きで俺を楽しませるに至ったからには、動作の一つ一つ、態度の一つ一つに豊かな分別と生気が込められている者から様々な手の動きを誘い出させるよう、この俺を唆すような真似は決してなさらないことですな。

だが、腹を立てるにせよ上機嫌にせよ、この魅惑の女性はどこまでも愛らしいに違いない。目鼻立ちは調和の極致で、一つ一つが互いにしっくり合っている。他のものを持ってきて、そのうちのどれと取り替えたにしても、あの完璧さは損なわれてしまうはずだ。我が麗しき獲物に関する貴公らの意見を、俺が聞きたがっていないとでも思うのか。

心は凍てつき、いまだかつて融けたことがないにも拘らず、明るく輝くその面立ちを拝んでみたいというのなら、また、繊細な感性、珊瑚の唇と象牙のごとき歯からこぼれる名言の数々、すべてを見通すまなざし、妙なる調べそのものの声、言い表しようもない柔和さを含んだ威厳溢れる物腰、たとえ匹敵するものがあったにせよ、凌駕されたためしのない丁重さ …… これらを好ましく思うというのなら、それらすべての美質、そして、その十倍のものを、この我がグローリアナ(六一)の中に見出すことだろう。

目を向けよ荘重なる骨格に。かの女は
生まれ尊く、神の手に成る神殿なり。
その心はその場に宿る神性にして
神にも恥ずかしからざる大建築なり(六二)。

あるいは、ローを借りて、もっと穏やかな言い回しを用いれば、

彼女がその身に帯びるのは、咲き初めた花の輝き、
汚れを知らぬ美しさ、柔和さとこの上なく愛らしい無垢の心で
その姿は、初めてこの世に訪れた春を彩る自然さながら(六三)

といったところだ。

さらば、従者四人よ。月曜の夕刻六時だぞ。全員の来訪を期待している。

手紙　六十四
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

四月三十日　日曜日

《この手紙に含まれる最重要箇所の幾つかについては、ラヴレース氏が先の数通の手紙において言及していたこともあり、以下の抜粋を挿入するに止どめる。

礼拝式に出ようとの令嬢の決意、氏からのセントポールの提案ならびに同行したいとの希望に関し、両者間で交わされた会話についての令嬢の記述は、氏のものとほぼ同一である。令嬢は教会における氏の行儀の良さに賛辞を呈しているが、説教および説教師に対し

ても同様で、時宜を得た説教には好感を表明している。教会退出後に交わされた両者の会話の詳細に触れ、説教に関する氏の適切な感想を称賛しているのである》

あの人に望みを持ちたい気持ちはございますが、あの人の真剣さと申しますのは、一時間にせよ、そのまま当てにしているにはどうしたら良いのか、皆目見当もつかないような代物ですから、この点につきましての私の好意的な言葉をお受け止めになる際には、すべてに亘りまして、割り引いていただかねばなりません。

ずいぶんしつこく責め立てられたものですから、未亡人と姪御さんたちが同席いたします今日の会食の件は、どうお断りしたものか決めかねておりました。あの人たちには、そのようなことは決してないものと考えておりましたが、以前よりは好意を感じるようになっているのです。人の評判のこととなりますと、ついつい厳しい言葉を口にしてしまうものですから、自責の念に駆られずにはおられません。人それぞれの生き方や気質、体質や受けてきた教育、そして、与えられた機会のことを斟酌いたしますと、気質や教育の異なる者がすぐにも非難しがちな相手の中には、私の知っておりますかぎりでは、咎め立てに当たらないように思われます人たちも多いものです。そして、その人たちのほうでも、同じ間違いを犯して、負けず劣らず性急に相手を責めようとするのです。ですから、今後は次の点を守って行こうと思うのです。初対面の際の外見で人を決めつけてはいけないということです。でも、やはり申し上げておかねばなりませんが、ここの人たちは親しくなりたいとか、生き方に好感を覚えるといった人たちではございません。もっとも、あの人たちの身分を考えますと、世間では相当の信望を得ているものと思われます。

ラヴレースさんの振舞いは大層立派なものでしたから、ここまでのところですが、今日は楽しい一日であったと申しても構わないでしょう。ただ、あの人はこの上なく寛ぎを感じておられたのでしょうが、私といたしましては、身内との関係のことが胸に浮かび、幾度も涙を流してしまいました。

この家の人たちには一層好意を感じるようになっておりますが、と申しますのも、身分の高い方たちとお知り合いで、その方たちが訪ねてこられるからです。

日曜日　夕刻

今でも、ラヴレースさんの振舞いには十分満足しております。二人でいろいろと真面目なお話をいたしました。本当は、正しい立派な考えの持ち主なのです。今日のことには大層満足しているということ、そして、このような日々を重ねて行きたいということを打ち明けておられます。それでも、折悪しく陽気な気分に逆戻りするようなことがあるかもしれないという点は前もって断っておくと、率直な態度で言っておられます。ただ、私を手本として会話を交わしているうちに、最後には揺るぎない態度が備わることも疑いのないところだ、とおっしゃるのです。

明日の夜お会いになる予定の四人の紳士について、あの人が面白いお話をしてくださいました。「面白い」と申しますのは、その人たちのご様子や流儀について、滑稽な説明をなさったからです。でも、その人たちにとりましては、褒め言葉というには程遠いようなご説明でした。ただ、その人たちを貶めるというよりも、むしろ、私の沈んだ気分を紛らそうというお気持ちからのことと見受けられました。根は気持ちの優しい人なのに違いない

と思いますわ。でも、幼い頃に制止されたり抑制されたりすることがなかったものですから、我が儘な人間になってしまったのだと思います。

私の置かれております情況を考えますと、今日のことは、最後まで楽しい一日だったと申さねばならないでしょう。あの人が今日みたいな態度をいつまでも続けてくれるのでしたら、それだけで、存じ上げておりますすべての男性よりもあの人のことを好きになれそうだと、本当にそう思うのです。これでお分かりいただけますね。私は、自分の気持ちがはっきりいたしました時には、貴女が責めておられたことを何もかも、すぐにも認める人間なのです。自分自身についていろいろと考えることの出来ます娘にとりましても、自分は愛を感じているのか、それとも、嫌っているのか、時には見極めをつけるのが難しいものだと、つくづくそう思います。でも、これからは出来るかぎり、憎むにせよ愛するにせよ、お相手とするに相応しい振舞いなのか相応しくないものなのか、その人の行動に基づいて決断する覚悟でおります。

《令嬢は月曜の日付で再び筆を執り、パーティントン嬢を紹介されたことに強い不満の意を表明している。また、ラヴレース氏が催す軽食の宴への出席を約束せざるを得なくなった点に関し、さらに強い不満を表している。令嬢の言によれば、不愉快な夕べとなることは予知出来るというのである》

手紙　六十五
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

五月一日　月曜日　夜

ひどく気は進まなかったのですが、やむをえず同席することになりましたとても不愉快な人たちのところから、やっと今逃げ出してきたところです。今夜交わされました会話につきまして事細かにお話しいたしますのは苦痛に存じます。ですから、その人たちの人物像の略図とでも呼べそうなものをお示しいたしまして、そこからお汲み取りいただけるもので満足していただかねばなりません。昨日ラヴレースさんが教えてくださった、お一人お一人の略歴も援用させていただきます。

紳士たちのお名前はベルトンさん、モーブレーさん、ターヴィルさん、それに、ベルフォードさんです。その場に集まりましたのは、この四人の方たちとシンクレア夫人、前回の手紙で触れました、大変な遺産の相続人となっておりますパーティントン嬢、ラヴレースさん、それと、私です。

この前は、シンクレア夫人とその姪御さんたちから伺ったこととして、パーティントン嬢のお人柄の好ましい面をお示しいたしました。今回は、この集まりでのお嬢さんの振舞いにつきまして、私自身の目で確かめました感想を二言三言付け加えようと思います。

もっと上品な人々の集まりでしたら、おそらく、芳しくない態度と映ることも少なかっただろうと思うのです。でも、お嬢さんは汚れのない顔付きをしており、ラヴレースさんもその点を大変褒めておりましたのに、本当の慎みということにつきましては、到底あの人の判断を鵜呑みにするわけにはまいりません。と申しますのは、紳士方からある話題が

出ました際、あからさまに非難を受けるほど不謹慎とは申せませんが、それでも、道徳的な人々の集まっておりますところでは、育ちの良い人間が口にいたしますのにはあまりにも上品さに欠ける含みを持ったお話でしたのに、このお嬢さんは即座に意味合いを汲み取ったのです。ところが、その人たちの不埒な無遠慮さを思い止どまらせるのではなく、むしろ進んで奨励するみたいに、お嬢さんは微笑みを浮かべたり、作り笑いをしてみせたりしていたのです。その人たちにいたしましても、わざわざそんなお話をいたしますと、意味もないことを口にするような馬鹿真似とか、何かを仄めかすような無作法さとか、そのどちらかを犯してしまうに違いありませんのにね(ア)。

でも、今シンクレア夫人に対して抱いていると申して構わないものよりももっと高い評価を与えておりました女性で、紳士方に対しまして、また自分自身に対しましても、この種の馴々しさを許している人たちが目に入りますのも事実です。女性の際立った特徴とならなければいけない、あの貞潔な態度に調和すると思われますものよりも、もっと馴々しい態度なのです。言葉というものは、考えを包み込む身体や衣裳に他ならないのではないでしょうか。そして、人の心というものは、それを覆う衣裳によってはっきりと示されるものではないでしょうか。

それはともかく、紳士方のことに話題を変えましょう。あの人たちが紳士と呼ばれておりますのは、どうやら、ご先祖様のお陰のように思われます。と申しますのも、他には何一つそのように呼ばれる権利を持ち合わせておられないようなのです。

ベルトンさんは大学の教育をお受けになり、聖職に就かれるはずだったのですが、陽気なご気質には合いませんでしたし、叔父様が亡くなられ、立派な地所の遺贈がございましたので、大学を卒業なさるとロンドンに上られ、お上品な紳士としての暮しを始められたのです。物の分かった人だと言われております。ベルトンさんの服装は派手ではありますが、まったくの伊達男風というわけでもございません。お酒が強く、何時までも付き合うのですが、それを自慢にしておられます。賭ごともなさいまして、その悪い遊びで被害を受けておられます。年齢は三十才くらいです。お顔は燃えるように赤く、少々浮腫んでいて吹き出物もございます。不規則な生活を送っておられますから、快楽の夢を貪りますのも長くは続きそうにございません。肺がお悪いのでしょう。結核に罹っておられるような、そんな軽い咳をなさるのです。ところが、とても危険な症状が出ましても、もっと深刻になって当然ですのに、そのことを馬鹿げた無思慮な冗談にして笑ってみせたり、お友達を笑わせたりしているのです。

モーブレーさんは大変な旅行家です。ラヴレースさんに負けず劣らず沢山の国の言葉を話されますが、ラヴレースさんほど達者ではございません。名門の出で、三十三、四才とお見受けいたします。背が高く、容姿に優れた方です。お顔付きには大胆不敵なところがございまして、額には大きな傷跡があり、頭のその部分を打たれたみたいに、少し窪みになっておりますし、右の頬には縫い跡のある傷が残っているのです。服装はやはりとても派手なものです。いつも召使たちを傍に侍らせ、絶えず呼び付けては些細な用事でお使いに出しておられます。皆さんとご一緒いたしましたわずかな間にも、そんなことが六回は

(ア) ベルフォード氏は、第四巻の手紙五十六に於いて、彼らの間で交わされた、令嬢にとっては大いに名誉となる特定の話題数例に関し、ラヴレース氏に留意を促している。

ございましたが、召使たちもこの方のこわい目の動きを見守っているらしく、用向きを半分も聞かずに飛び出す用意をしておりますし、恐れおののきながら仕えているのです。それでも、ご同輩の間での受けはかなり良いようです。催し物や娯楽についてのお話、特に外国のものについてのお話は的はずれではありません。でも、誇張しがちなところがございまして、到底考えられないような事柄を強く断言なさいます。実際、疑っておられますのは、信じられるのが当然という事柄だけなのです。と申しますのも、神聖な事柄を冗談になさいますし、どんな宗教であれ、聖職関係者は嫌いだと公言して憚りません。名誉というものを重視され、その言葉がお話に出ないことはほとんどございませんが、品行につきましてはあまり関心をお持ちではないように思われます。

ターヴィルさんは時々ご自分の年齢に触れておられまして、三十一才になられたばかりとのことです。この方も旧家の出なのですが、ご容姿の点でも態度の点でも、私でしたら気取り屋さんと呼ぶようなところを、お仲間のどなたよりも多く備えておられます。高価なもので着飾り、身にお着けになるものの好みや型が上品だと思われたがっておられるのですが、結局のところ、上品というよりもけばけばしい感じになってしまいます。外見に気を配っておられる点や、ご自身に自ら目を向けることで、皆さんの注目を引きたがっておられる点からいたしまして、内面のことにはちっとも留意しておられないのが分かります。ラヴレースさんがおっしゃいますには、ダンスがお上手で、音楽に通じ、歌は特技の一つだとのことです。歌ってほしいという皆さんからの説得もありまして、イタリア語とフランス語の両方で歌ってくださいましたが、公平に申しまして、両方ともなかなか結構なものでした。この方の歌唱に皆さん大喜びでしたが、一番感心しておりましたのは、シンクレア夫人とパーティントン嬢、それに、当のご本人でした。大変気取りのある方のように私には思われました。

ターヴィルさんの会話や話振りには、女性の理解力につきましての、例のまことに下劣な侮辱がたっぷりと含まれておりまして、それはもう耐えられないほどでした。当世風の人たちに言わせますと、これが〈ご愛想〉ということになりますし、嗜みの良さの証のつもりでしていることなのです。もっとも、思いつくかぎりの誇張に満ちた、わざとらしいものですし、〈ご愛想をする人〉の不誠実さを証明いたしますのに役立つだけなのです。そして、女の人にはご自分の出鱈目な戯言を喜んでもらえるのだと、そのような考えを持っております場合には、その愛想取りの目に映る〈ご愛想を受ける人〉の滑稽な姿を証明するのに役立っているにすぎません。

普段のお話の中に、イタリア語やフランス語を交えるような気取った真似をなさいますし、英語の質問にフランス語でお答になることもしばしばですが、その言葉のほうが、シュッシュッという響きが耳障りな英語よりも、ずっとお好きなのです。それでも、他の二つの言葉でお話しになった単語や文章を、ご自分のこの嫌悪を誘うお国言葉に必ず直してみせるのです。おそらく、ご自分の言っておられることを理解しているのかと、疑われるのを心配なさってのことでしょう。

お話をなさるのがお好きで、聞いてもらう人に注意を促すためでしょう、お始めになる前にはいつも、これは楽しいものだ、滑稽なものだとか、良い話だ、見事な話だとか切り出されるのですが、前置きで約束なさったことを果たすために、お話の進め具合とか結び方に意を用いるようなことは決してございません。実際、どのお話にせよ、結論をおつけ

になることは滅多にないのです。仮に一座の人たちが我慢強く最後までお聞きしているといたしましても、括弧で括った挿入部とでも呼べそうな、たくさんの挿話でご自分からお話の腰を折ってしまわれますし、いろいろと出来事が割り込んでくるものですから、ご自分がなさっているお話だというのに、筋道を見失ってしまわれることもしょっちゅうなのです。そして、時には、中途半端なところで満足し、腰を下ろしてしまわれるのです。あるいは、別の機会にそのお話に戻ろうとなさる場合でも、再び始めるのに一座の皆さんの助けをお願いし、「糞っ、忌々しい。何を話すつもりだったのか覚えてもいやしない」などと言っておられます。でも、もう十分ですわね、ターヴィルさんのことは。度を越して長くなってしまいました。

　ベルフォードさんが四人目の紳士で、ラヴレースさんは、他のどなたよりもこの方を好いておられるようです。と申しますのも、勇敢なことでは実証済みの人らしく、このお二人が知り合われましたのも、ある争いごとがあった際のことなのです（おそらく、女性を巡ってのことでしょう）。挑戦状が送られ、ケンジントンの砂利取り場で果たし合いになったのですが、お互い相手に一突き入れたところで、三人の見知らぬ紳士が割って入りまして、事無きを得たということです。

　ベルフォードさんは二十七、八才とお見受けいたします。ラヴレースさんを別にいたしますと、五人の中では一番お若く、悪さをするということでは、お二人がおそらく一番なのでしょう。他の三人の方たちを思うとおりに引き摺り回している模様です。他の方たち同様、ベルフォードさんも華美な服装をしておられます。でも、ラヴレースさんも自慢し過ぎなのですが、容姿の点であの人のような強みはございませんし、服装で引き立つということもございません。ただ、容姿にも物腰にも紳士らしいところがございます。古典の作家たち、それに、イギリス最良の詩人や作家たちもよく読んでおられます。この方のお陰で、時々は会話もより好ましい方向へ向かうことがございました。皆さんの間ではラヴレース夫人ということになっておりましたため、その役割に精々耐えようと努めておりました私ですが、そのような折には、何とかお話に加わるようにいたしました。そして、私の述べましたことに対しまして、一座の皆さんからたくさんのお褒めの言葉をいただいてしまいました(ア)。

　ベルフォードさんは人の好い、親切な方のように思われます。とても慇懃ですが、ターヴィルさんのように追従的になるほどではありません。また、どのような折にも、ご自分の考えを表明なさいますのに、上品で寛いだ話し方をなさいます。ベルトンさんもそうなのですが、理詰めな議論がお好きなようです。このお二人がそんな論法でお互いに攻撃し合ったのです。そして、お二人とも、ご自分たちの学識とか、洒落たことをおっしゃった時の機転の良さとかに私たちが感心してはいまいかと、まるで確かめるみたいに女性のほうを見ておりました。でも、頭の巡りの速さでは勝っておられるものですから、明らかにベルフォードさんのほうに分がございましたし、勝ち目のない側を受け持たれたこともあり、ご自分でも分があるように考えておられるようでした。この方のお振舞いや会話の全体に接しまして思い出しましたのは、ミルトンが描きました例の人物のことです。

（ア）先の注で触れた第四巻の手紙五十六を参照のこと。

その者の口を
こぼるるはマナにして、あくどき下心ありても
真っ当なる理由と繕い、賢明この上なき助言を
惑わし打ち砕く。そは卑しき心あればなり。
悪を求めてたゆみなく、貴き道に臨んでは
小胆にして怠惰なり。されどその言、人の耳には心地好し(六四)。

全体的にはどれほど私たちの意に添わないことだといたしましても、私たちって、そうして構わないだけの確かな見込みがあります場合には、自分の引き当てた運命に出来るかぎり善処しようと努力するものですわね。次のように認めずにはいられないことが幾度もございましたが、ラヴレースさんは、皆さんが秀でたいと願っておられるご様子のすべての点に亘りまして、四人のお友達全員よりもずっと優れておられるのです。でも、機知と快活さの点で対等に争える人など、あの場には一人としていなかったのです。あの人が口を開きかけますと、他の皆さんは諦めて譲ってしまわれるのです。ラヴレースさんがお話を始めようとなさると、高飛車なモーブレーさんがおしゃべりのターヴィルさんに口を閉じるよう求めますし、威張り散らしているベルトンさんに対しては、耳を澄ますよう、肘で突いて合図をなさるのです。そして、あの人が話し終わりますと、「まったく、惚れ惚れさせる男だよ」との声が上がり、どなたの口からも惜しみなく称賛の言葉、あるいは、妬みの言葉が洩れるのです。

事実、あの人は、容姿や物腰の面では非常に多くの利点に恵まれておりますから、他の人の時には見過ごすわけに行かないことでも、あの人の場合には似つかわしいことのように見えてしまうほどなのです。もしも、自分自身に目を配ることをせず、また、正邪の本質を見分けますことに骨折ることがない場合ですとね。

少なからず苛立ちを覚えましたし、困惑も感じたわけですが、ラヴレースさんが階下へ呼ばれました時、愛顧を受け信頼を寄せられている友人ゆえの厚かましさでしょうか、ベルフォードさんが私を脇のほうに導き、済んだことになっております婚礼について、お祝いの言葉を切り出されたのです。そして、このようにあまねく称賛を受けている男に課した苛酷な誓約に、あまり長く固執しないほうが良いと忠告なさるのです。

「二十人の男性の間にあの男を置いてみることです。傑出した者ばかりが揃ったところにですよ。それでも、注目を集めるのは、ラヴレース以外には一人もいないのです」と言っておられました。

実際、正直に申さねばなりませんが、あの人の立ち居振舞いには天性の威厳といったものがその隅々にまで備わっておりますから、傲慢さとか高飛車な態度の一切は、許し難いことは勿論ですが、また、必要でもないのです。それに、恩義を施すに値するとか、気を引いてみる価値があるとかお考えの時に、あの人の笑顔や口調、表情や言葉遣いのすべてに窺われます、あの心を惑わすような柔和さのことがございます。この点からも、無垢の心を持ってお生まれになったとでも申しましょうか、そのことがよく分かるのです。生まれついての非情な人間、乱暴で衝動的な人間などではなかったのです。たまたま交わってしまわれたのかもしれませんが、悪いお仲間があの人をそんなふうにしたのです。と申しますのも、あの人のお顔付きには率直なところもございますし、また、正直そうなお顔に

も思えるのです。いかがでしょう、貴女はそのようには思われないでしょうか。あの人にも心を改めてくださる日は来るはずと、こういった見掛け良く映ります点すべてに私は望みを掛けているのです。

それにいたしましても、正直申しまして驚いてしまいます。あれほどの紳士で、書物や人間のことであんなにも広い知識をお持ちですし、新しい言語と同様、古典の言葉にもあれだけ熟達しておられるというのに、ご紹介いたしましたような人たちとのお付き合いの件もそうですが、あの人の才能や、天性の利点や習得なさっている数々の利点に相応しくない、空虚で下らない話題にも、あのように大きな喜びを感じることがお出来になるのです。このことで思いつきます理由は一つだけございまして、その場合は、大変卑しい心の持ち主であることを証明することになってしまいます。つまり、虚栄心です。交際なさっている人たちの間で一番だと思われたがっておられますのは、虚栄心のせいなのです。男の人が褒め言葉に目がないというのですからね。でも、このように汚染された水源から賛辞を汲み出すことに満足しておられるのです。

ベルフォードさんからラヴレースさんへ向けてお世辞が一つ進呈されたのですが、そのせいで、このショッキングな集まりから逃げ出しますのを急ぐ結果になりました。シンクレア夫人が口に出され、パーティントン嬢も相槌を打っておられた、あの人への賛辞を耳になさると、ベルフォードさんがこうおっしゃったのです。「君は幸せな男だよ、ラヴレース。度胸満点だし機知にも富んでいるから、男であれ女であれ、君に立ち向かえる者などだれもいないよ」とです。

こうおっしゃると、ベルフォードさんは私のほうに目をお向けになるのです。そうなのです、笑みを浮かべながら、私のほうをご覧になったのです。そして、お褒めに与ったお友達のほうにお顔を向けられました。同意の気持ちを込めた、つまり、侮辱の意を含めたということですが、そんな皆さんの目が、男の人のも女の人のも、貴女のクラリッサのほうへと向けられたのです。少なくとも、自責の念に駆られております私の心には、そう思われたのです。と申しますのも、そんな気持ちでいるものですから、私は目を上げることもほとんど出来ない有り様だったのです。

あゝ、男の人に恋をしているのだと、世間の人たちがそう考えても当然なことをしてしまいました女性が「私の場合がそうだと決め込まれてしまうに違いありません。でなければ、自らの意思でしたことと思われておりますラヴレースさんとの駆け落ちの件は、どのような受け止め方が出来るというのでしょう」、相手の男性を得意にさせてしまうということや、我が身に招く恥辱のこと、また、男女を問わず、口さがない世間から受けがちな下劣な同情、無言の侮辱、無礼な冷笑やヒソヒソ話のことなどを、ほんの一瞬でも構いません、よくよく考えてくだされば、どれほど我と我が身を蔑むことでしょうか。また、このように堕落いたしましたのを世間に知られるくらいなら、死そのもののほうがはるかに望ましいと、そのようにも思うことでしょう。

今夜の談話の席で交わされました事柄を何故もっと詳しくお話し出来ないのか、このように大雑把に触れてまいりましたことで、そのことへの説明とさせていただきます。これまで書き記してまいりましたことからもお察しいただけるでしょうが、表向き賛同を装いました嫌味な台詞や、機知に富んだ逆襲と思われておりますような言い回しで満ち溢れていたのです。

手紙　六十六

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

月曜日　深夜

妙な出来事のため、ひどく苛立ち、狼狽しております。

今シンクレア夫人が戻って行かれたところですが、きっとお気持ちを悪くされてのことと思います。夫人のお求めを断ってしまったためですが、パーティントン嬢が私とベッドを共にするのを認めてほしいというお申し出だったのです。姪御さんたちのお客様とそのお伴の人たちやら、パーティントン嬢のお客様やらで、お部屋が塞がってしまったためというのです。

そのことには何の意味もないのでしょうし、お断りするのは、四角張って底意地の悪い態度にも思われました。でも、夫人のお申し出がありますとすぐに、次のようなことが心に浮かんだのです。ここにいらっしゃるどなたにいたしましても、ある意味ではお近付きになっておりませんし、自分の召使と呼べそうな、あるいは、少しでも高く買えそうな者は一人としていないということ、また、傍若無人に振る舞う男性が四人、同じ屋根の下におり、悪さをする時にはラヴレースさんの後ろ盾になると公言して憚りませんし、私が気づいておりますかぎりでは（退出いたしました後の騒々しいはしゃぎぶりから察しのつくことですが）、皆さんひどくお酒を飲んでいらっしゃるということ、パーティントン嬢にいたしましても、伺っておりましたほどのはにかみ屋さんではありませんし、お嬢さんについて好い印象を持たせようとして、差し出がましく根回しが行われていたということ、さらには、シンクレア夫人がお申し出をなさる時、このような頼みごとには不必要なほど仰々しい前口上を並べられたことなどです。今でも私のことを変っていると思っている人たちですから、お断りいたしましても、皆さんの目には変人と映るだけのことだとも考えました。同意いたしますと、不都合を来すことが予想される、とは申さないまでも、可能性はあるのです。それぞれから生じます結果には大きな差がございますので、不都合を招く危険を冒すことよりは、非難に甘んじることのほうが賢明ではないかと考えたのです。

私は、長い手紙を認めているところであり、眠気を催すまでは書いていたい旨をお話しいたしました。また、連れがいると気詰まりであるし、相手の人にもそのはずだ、とも申し上げたのです。

夫人といたしましては、パーティントン嬢のような、あんなにも華奢であんなにも財産に恵まれた娘さんのことでもあり、ドーカスと一緒に折り畳みのベッドで休んでもらうのは気が咎める、とおっしゃるのです。不適当なことを頼んだのであれば、大変申し訳ないことをしたとか、こんな事態に追い込まれたことはついぞなかった、私が手紙を書き終えるまで、お嬢さんにはご自分と一緒に起きていてもらう、などと言っておられました。

こうまで強く頼まれますと不安になってまいりましたし、お断りの言葉を新たに切り出しますのよりは、すでにお断りした点を押し通すことのほうが楽ですから、私は次のように申しました。ベッドはそっくり、喜んでパーティントン嬢にお譲りいたします。私は食堂のほうへ引き籠もり、錠を下ろして一晩中筆を執ることにいたしましょう、とです。

困った娘で、一人で休むのを怖がっているのです、と夫人はおっしゃるのです。パーティントン嬢にしても、そこまで迷惑をお掛けするつもりではないでしょう、とも言ってお

られました。
　夫人は引き下がって行かれましたが、また戻って来られました。お戻りになったことを詫びた上で、可哀相に、あの娘は泣きじゃくっておりますわ、とおっしゃるのです。パーティントン嬢はこれまで、私ほどに敬服の気持ちを覚え、手本にしたいと願うような淑女に出会ったためしがないそうで、愛らしいことにお嬢さんは、私に嫌われるような点がご自分の振舞いにはなかったことを願っておられるというのです。そして夫人は、あの娘をお連れいたしましょうか、とおっしゃるのです。
　私は大層忙しい旨をお伝えいたしました。私の認めております手紙は大変重要な事柄に触れたものだということ、お嬢さんには翌朝お目にかかりたいし、自分の気難しさについては、その折にお詫びするつもりでいる旨をお話ししたのです。すると、シンクレア夫人がためらいながらドアのほうへ進まれましたので（もう一度私のほうに振り向かれたのですが）、階段を降りられる際には足下にお気をつけくださいと、（明りを照らしながら）申し上げました。
「どうか、奥様、このようなお気遣いは一切なしにしてくださいませ」と、階段の降り口のところで夫人がおっしゃいました。私は、「決して悪気があってのことではございませんわ。でも、勝手な真似とお取りのご様子ですから、どうぞラヴレースさんにはお話しにならないでくださいね。きっと、厚かましい出過ぎたことをする女とお考えになるでしょうから」と申しておきました。
　さあ、いかがでしょう。自分でそう思ってしまったのか、それとも、目論まれたことなのか、いずれにいたしましても、異常な出来事ではないでしょうか。礼儀に悖ることをいたしますのは好きでございません。もしも、この求めに何の意味も含まれていないのでしたら、お断りいたしましたのを不作法と言われましても、当然だと思います。そんなつもりなどあろうはずもございませんのに、汚らわしいことをされるのではないかという疑念を見せたことになるのです。もしもその疑いが当たっているといたしますと、その場合には、すべてを怪しんでかからねばなりませんし、まるで伝染病でも避けるみたいに、この家から、そして、あの人の元から逃げ出さねばなりません。もしも当たっていないといたしまして、お断りいたしましたことに何か別の尤もらしい理由を挙げ、疑念を抱きました点につきまして、うまく皆さんの疑いを晴らすことが出来ません時には、ここでの滞在そのものが、私自身にとりまして少しも名誉なこととは映らなくなってしまうのです。
　今はあの人にも私自身にも、世の中すべてにも嫌気がさしておりますが、貴女だけは別です。あの人のお仲間はゾッとするような人たちです。繰り返しますが、このような人たちとのお付き合いをあの人が望んでおられたのは、一体何故なのでしょう。あの人のことがまた好ましくなくなります。本当に、好ましくありません。

手紙　六十七
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

五月二日　火曜日
　このようなことを申し上げねばなりませんのはとても残念なのですが、これ以上お便り

をすることは出来ませんし、お手紙をいただくわけにもまいりません。お母様がラヴレースさん宛てM卿のお屋敷にお出しになったお手紙の中に（今、あの人の手に届いたところです）、私宛のものも同封してくださったのですが、この点につきまして、大変厳しいお言葉で私をお咎めになり、お母様と貴女を不幸にするつもりだなどとは思われたくないだろうから、お母様のお許しなしに貴女にお便りをするのは止めてもらいたい、とおっしゃっておられるのです。

従いまして、事態が好転いたしますまで、私からお受け取りいただきます便りはこれを最後にしていただかねばなりません。私の将来の見通しがひどく暗いわけではございませんので、近いうちには、またお便りいたしますのを許していただけるでしょうし、お会いすることだって認めていただけるはずと考えております。ラヴレースさんのお身内のような誉れ高いご一族との縁組なのです。不名誉になることはないでしょうからね。

お母様は次のように記しておられるのです。貴女を興奮させたいと思うのなら、お母様が書面で禁止なさったことをお知らせしたら良いし、もしもそうでないのなら、相当前から禁じておられたのは承知のはずだから、私のほうで何か方法を見つけ（お母様を巻き込むようなことはせず）、文通を辞退することだ、とおっしゃるのです。でも、私から申し上げられますことといえば、興奮なさらないでいただきたいということだけです。お便りを控えます理由についてお話しいたしましたことは、どうぞお母様にはお知らせになりませぬよう、また、この件にお触れになります際は、貴女の態度からお母様に勘ぐられるようなこともありませぬようお願いいたします。と申しますのも、この件につきましては、今までずいぶんとためらいを見せながらも続けてまいりましたことだけに、このように突然止めてしまいますのを納得していただきたくとも、隠し立てなくお分かりいただく方法が他には見出せないからなのです。お分かりいただけますね。納得していただくことが出来ないような理由、いつも鋭く働くその眼で私の胸の底までお調べになりました上で、ついには、私が卑劣で浅ましい二枚舌であることにお気づきになるような、そんな理由を繕いますよりは、ご思慮の深さを頼りにしようと思うのです。それに、ありのままの真実を打ち明けましても安心していられるような分別が貴女にはないと考えているみたいな、貴女を傷つけるような意味合いも含まれてしまいますからね。

繰り返しますが、見通しは暗くないのです。家は、多分、間もなく借りることになると思います。パーティントン嬢のことでは気難しい態度を見せましたのに、ここの人たちは大変丁重に接してくれております。ストランド街の豪商と近く結婚なさるご予定のマーティン嬢は、つい先程、とても恭しい態度でしたが、挙式のための高価な絹地の見本のいくつかにつきまして、私の意見を求めておられました。未亡人は最初の頃ほど険しい顔付きをなさいません。ラヴレースさんも、四人のお友達のことは好きになれないとはっきり申し上げましたところ、あの人たちであれ、他のどなたであれ、断りなしに私と引き合わせるようなことはしない旨を約束してくださいました。

このような状況をお話しいたしますのは（お察しいただけるでしょうが）、気遣いに溢れたお心を休めていただきたいと思うからですし、状況が分かりますと、お母様のご命令に従う（快く従う）お気持ちになってもらえるかもしれないと願うからです。それに、私のためにもなることなのです。煽動家みたいに思われては困りますもの。それとはまったく反対の気持ちでおりますことは、私の一番大切な、一番お慕いするお友達ですもの、分か

っていただけるはずですわ。

変わることなき感謝の念と親愛の情とを込めまして、貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　六十八

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

五月三日　水曜日

母がこのような手段に訴えるなんて　…　驚いております。理不尽にも、立場にものを言わせようとの魂胆以外には考えられません。世界中で一番無慈悲な心の持ち主たちに恩を着せようというのですわ。助言させていただくとか情報をお知らせするとかで、貴女のお役に立つことが出来ると分かりました時に、私がそれを差し控えるとでもお考えでしょうか。そのような場合、どなたであれ、貴女よりもずっと親しみを感じていない人に対しましても、私が黙っていられるとでもお思いでしょうか。

ヒックマンさんは、この種の微妙な問題では詭弁を弄しがちな人ですが、事情を考えますと、文通を差し控えるのは良くないとのご意見です。そのお陰で、あの人も事なきを得たという次第です。母が挑発したものですから、だれか喧嘩相手が欲しいと思っていたところなのです。

お気持ちが楽になるとおっしゃるのでしたら、手を打つことにいたしましょう。特別なことがないかぎり、二、三日お便りするのを控えます。厳禁だと言っております母の気持ちが和らぐまでのことです。でも、宜しいですね、貴女が私宛にお書きになるのを免除して上げるつもりはありませんからね。そのようなこと、私の心が、私の良心が、私の自尊心が許さないのです。

でも、自分を抑えるにはどうしたら良いのでしょうね。どうしたらって　…　実に簡単な話ですわ。この上ほんの少しでも挑発があれば、こっそりロンドンへ向けて飛び出すつもりですもの。お約束いたしますわ。その場合には、貴女が立派に結婚なさるか、それとも、あの恥知らずときっぱり手をお切りになるか、そのどちらかになさるまで、貴女の傍を離れないつもりです。そして、後のほうの場合でしたら、世間の人たち皆さんが何を言おうと、私の家へ貴女をお連れする覚悟ですし、それをお拒みになるのでしたら、お傍に留まって、貴女の行かれるところでしたらどこへでも、影のように付き添わせていただくつもりでいるのです。

こんなことを言い出したからといって、怯えたりなさらないでくださいね。独りで閉じ籠もっておりますと、きっと監視を受けますし、母のために本を読まされましても声にならず、母の前で手仕事をいたしましても指はお留守になるとか、意に反して毎晩一緒に休むよう強いられているのですが、そのような行動に出るのを差し控えておりますのは、一つだけ考慮すべき点がございますし、一つだけ望みが残っているからなのです。考慮すべき点と申しますのは、このような性質の行動ですから、貴女がお家を出られたのを間違いだと考えている人たちの目には、同じ過ちの繰り返しと映ってしまいますのを、貴女が心配なさってはいけないということです。望みと申しますのは、これでもなお目出度し目出

度しということになるのではないか、だれかさんたちも正気に戻り、みっともない振舞いに走ったのを恥ずかしく思うのではないか、ということです。とは申せ、どちらとも決め兼ねることも多いのですが、この重大な時期に文通を諦めようとのご決断ですので、もう迷いはございませんわ。宜しいですね、お手紙を書いていただきますわ。でなければ、責任を取っていただきますからね。

ここ数通のお手紙の内容につきまして、二言、三言申し上げます。お兄様のご名案が反古になったのかどうか、私には分かりかねます。お宅からは物音一つなく、沈黙に包まれているのです。お兄様は三日間お留守でした。その後一日はおられましたが、今は不在です。でも、果たしてシングルトンと一緒なのかどうか、それは不明です。

あの恥知らずの遊び仲間につきましてのご説明からいたしますと、どう見ましても悪魔の一団で、あの男が魔王のベルゼブル(六五)といったところですね。おっしゃるとおり、貴女をこんな連中と引き合わせるのに懸命になるなんて　…　あの男も、一体どういう魂胆なのでしょう。あの男と連中を、互いの姿を映し出す鏡の代わりにする、恰好の機会を提供していることになりますのにね　…　間違いありません。馬鹿なのです、あの男は。少なくとも、おめでたい人なのです。恥知らずたちが貴女の前で精一杯良い格好をして見せているということでしょう。疑いありません。これが万物の霊長なのです。これが高貴なお方なのです。でも、そんな連中の最低の者の後ろをメソメソ言いながらついて行く、見下げ果てた女がどれほどたくさん居るか知れないのです。

パーティントン嬢とベッドを共にするのをお断りになって、不都合を招くことになったとおっしゃるのは、そのとおりだと思います。お嬢さんをお受け入れにならなかったのが残念です。用心深い貴女ですが、一体何が起こったというのでしょう。力ずくのつもりでしたら、あの男は夜まで待つこともないのです。お嬢さんが寝た後で起き出しても構わなかったのですし、ベッドに入らなくとも良かったのです。シンクレア夫人は無理強いが過ぎました。貴女のほうは用心が過ぎたのです。

挙式を引き延ばすようなことが何かございましたら、引越しをなさるようお勧めいたします。でも、結婚なさるのでしたら、ご自分の地所を手に入れられるまでそこにお残りになるのも、おそらく、それほど不都合なことではないとお考えでしょう。一旦絆が結ばれますと、あれだけ意志の固い男が相手ですし、お身内の方たちにいたしましても、合法的に所有しているわけに行かないものは、すぐにも諦めてしまわれるだろう、というのが私の考えです。それに、訴訟になるといたしましても、貴女には妨げることは出来ないことですし、そうなさりたがってもいけないと思うのです。貴女の地所はもうあの男の権利になるわけですし、あの男の手に渡らないよう願いますのも、道理に合わないことになってしまいます。

お考えいただきたいことが一つございます。つまり、きちんとした贈与財産の契約書の件です。この種のことをご結婚前になさっておいてこそ、貴女の思慮深さ、そして、あの男の公正さが（事情が事情だけに、なおさら）裏書きされることになるのです。あの男もワルには違いありませんが、ケチな男だという人はどこにもいないのです。あの男がこれまで、この話題を口にしていないのが不思議です。

未亡人のお宅に関するあの男の提案に不満はございません。そのお家で十分間に合うだろうと私は思います。ただ、はっきりしたことが分かりますまでに三週間かかるというの

でしたら、勿論、その間日取りをお延しになることはございません。調度品などの注文もあるでしょう。貴女もそうお思いでしょうが、驚きますのは、あの男がこうもおとなしく言うなりになっている点です。

繰り返しますが、お便りは続けていただきます。是非そうしてもらいます。それも、出来るかぎり詳しく願います。でなければ、どうなっても知りませんからね。これは特別な人にお願いして届けてもらいます。

だれよりも篤い親愛の情を込めまして、貴女の

アナ・ハウ

手紙　六十九
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

五月四日　木曜日

他の約束ごとは一切止めにいたしましょう。どんな願いごとも見合わせることにいたしますし、他の心配ごとも皆払い除けましてペンを手にいたします。愛情ゆえのこととは申せ、到底感謝いたしかねるばかりか、私にとりましては、いつまでも後悔の種となりますような、無謀な行動をお考えになるのは止していただきたいからです。お便りをどうしても続けねばならないとおっしゃるのでしたら、そういたします。お心の広さとか友情に傷がつきそうだと少しでもお感じの場合には、他人から指図されますのを我慢出来なくなってしまわれるのは、よく存じておりますからね。

あゝ、大好きな大好きな貴女 …　私は父の呪いを受けてしまいましたが、貴女もお母様からお受けになろうとおっしゃるのでしょうか。世間の人々は、ハウさんが同じ轍を踏んだりなされば、私の過ちには感染する力があると考えるのではないでしょうか。はなはだしく間違っておりますために、とても論議に耐えないという事柄がいくつかございますが、これもその一つです。このような軽率な行動に反対いたします理由は、口に出す必要もございませんね。動機がどれほど気高く、高潔なものだといたしましても、これだけの悪い前例に従おうというお考えを一度でもお持ちになりましたことは、絶対に知られてはなりません。そのようなことをなさいますと、私にとりましては言い訳として主張して構わないような事情、とりわけ、虚を突かれて不適切な行動に走ったという言い訳も、貴女のほうには存在しないのですから、なおさらのことと申せましょう。

お母様が貴女に課しておられる束縛も、私のことがなければ、苛酷なものとは映らなかったはずです。お母様とベッドを共にさせていただけるのを辛いことだなどと、一度でもお考えになったことはございましたか。母からそのような好意を受けますと、私は本当に嬉しく思ったものでした。母の前でお仕事をいたしますのを、どれほど楽しく思ったことでしょう。貴女だって以前は、お母様のいらっしゃるところで楽しげにお仕事をしておられましたね。それに、冬の夜などには、お母様にご本を読んで差し上げるのが、貴女の楽しみの一つであったように承知いたしております。貴女が変わってしまわれた動機は私にあるのかもしれないなどと、私自身を咎めたくなりますようなことはなさらないでいただきたいのです。

宜しいですね。学んでいただきたいのです。どうか貴女の激しいお気持ちを抑える術を学んでいただきたいのです。動機がどのようなものであれ、度を越しますと取り返しがつかなくなるものなのです。私たち女性が抱きます熱情は、抑えようとして骨折ることもございませんが、私たちがあんなにも頻繁に非難しておりました、乱暴で我が儘な男性に見られますような、あのはるかに邪悪な感情 … これは世の習わしや、より束縛のない教育によって一層強められているのでしょうが … そんな感情と根は一つなのかもしれません。私たち二人とも、こういう見方をよくよく考えてみることにいたしましょう。自分自身に目を凝らすのです。そして、恐れる気持ちを持つことです。

仮に私が、そうしなければならないようですから、お便りをするといたしましても、貴女のほうでは差し控えてくださるようお願いいたします。この便りにお返事がございません時は、貴女が匂わせておられるような軽率な真似はお考えにならず、また、文通に関しましても、とにかく貴女ご自身のほうではお母様のお気持ちに従われるおつもりなのだという、その兆しと受け止めることにいたします。とりわけ、重要なことが起こりました場合はいつでも、ヒックマンさんのペンに託してお知らせくださるとか、助言をしてくださることもお出来になるわけですから、そのようにしていただきたいのです。

筆の乱れをご覧くだされば、私の愛する性急なお友達、すっかり私が心を乱しておりますことをお分かりいただけることでしょう。

変わることなき感謝の念を込めまして、
あるいは、もしも軽率な行動に走られるようでしたら、
いつまでも、迷惑千万に思います、貴女の
クラリッサ・ハーロー

ちょうど今、私の衣類が届いたところです。でも、貴女のせいですっかり気が動転しておりますので、トランクの中身を調べてみる気持ちにはなれません。どうしてなのでしょう。その燃えるばかりの愛情で、私を怯えさせるようなことを何故なさるのでしょう。気の弱い者にとりまして、友情から生じるものであれ憎しみから生じるものであれ、心の乱れは苦悩の種となるのです。

これは、急いでおりますので、ラヴレースさんの召使の一人がヒックマンさんのところまでお届けすることになっております。あの尊敬すべき男性のペンが、この新たな心配ごとから私の心を救ってくださいますよう願っております。

手紙　七十

ヒックマン氏からクラリッサ・ハーロー嬢へ

［特別の使いにより、ウィルソン氏宅宛に送られたもの］

五月五日　金曜日

謹　啓

事情のほどは存じませんが、貴女様に以下の点をお知らせするよう、親愛なるハウ嬢から指図を賜っております。令嬢は、最後のお手紙で貴女様に懸念を抱かせましたことをこ

の上なく憂慮しておられるということ、また、貴女様がこれまでどおりの宛名でお便りをしてくださるかぎりは、貴女様が大層心配しておられるようなことをなさるおつもりはないということです。ただ、次の点を書き記すようにとのご命令でした。貴女様のお役に立ち、お救い出来るとの思いがごくわずかでもあります場合には　…　これが令嬢のお言葉でしたが　…　世間の非難すべても、令嬢にとりましては、副次的重要性を持つ事柄にすぎないとのことです。私自身、この際、貴女様の置かれております現状に対しまして、憤りを表明したいとの大いなる誘惑に駆られてはおりますが、その実態をつぶさには承っておらず、私にとりましてはこの世で最も大切な淑女、そして、貴女様にとりましては誠実なことこの上ないご友人の、そのお心を掻き乱しておりますご様子から、そうあってほしいと願っております幸せなお気持ちからは程遠いことを推測するだけでありますし、さらには、お心を苛んでおります話題に入りますのは禁じられておりますゆえ、私に出来ますことと申せば、誠心誠意お世話させていただきたい旨を、こうして申し出る以外にはございません。貴女様がすべての苦難から目出度く解放されますことを切に願う次第です。

衆に秀でたお嬢様、

誠実にして従順この上なき、貴女のしもべ

CH. ヒックマン

第三巻　目　次

手紙　一　ラヴレースからベルフォードへ
企みの上首尾に有頂天。クラリッサを深く愛してはいるが、自分以上に好意を寄せている男がいると思われる場合には、一切慈悲は示さないつもり。彼女が面会に先立って与えた差止め命令については、細心の注意を払って遵守する所存。

手紙　二　クラリッサからハウ嬢へ
ラヴレースとの非難合戦。氏は彼女の差止め命令を思い出させ、その免除を懇願するどころか、侵すべからざるものとして尊重することを約束する。それゆえ、速やかに結婚せよとの助言に従おうにも、自分の自由にはならない旨をハウ嬢に語るのである。[この箇所には、彼女の行動を正当化する注が付されている（九頁）] だれにせよ、氏の親戚は訪ねたくないという。その理由。ローン荘に住むM卿の家政婦、グリーム夫人に付き添われる。夫人は、彼女が下宿先として同意した、夫人の義理の妹に当たるソーリングズの家まで同伴する。彼の顔付きに不快感を覚える。衣類を送ってくれるよう、姉に手紙を書く。

手紙　三　ラヴレースからベルフォードへ
成功の子細につき、手短に述べる。氏に姿を見せた時の彼女の容姿と服装を描写。途方もない喜びよう。彼女に対する目論見が信義を守ったものかどうか、ベルフォードに尋ねさせ、どっちつかずの答え方をする。

手紙　四　ハウ嬢からクラリッサへ
事の顛末を綴った令嬢の手紙についての感想。アントニー・ハーローに唆され、母親が二人の文通を禁じる。二人の役に立とうとするヒックマン氏の熱意。クラリッサが家を出なかった場合のこととして、一族の者たちが現在主張している事柄。計画的と思われている家出についての彼らの受け止め方。現金と衣類の提供を申し出る。少しはラヴレースを信頼している様子も見せるよう希望する。クラリッサの兄と姉は父親とおじたちが冷静になるのを許そうとしないとのこと。

手紙　五、六　クラリッサからハウ嬢へ
二人の文通を禁止しているのだが、母親には従うよう忠告。現金提供の申し出を受諾するのは断る。その理由。ラヴレース氏は礼儀正しい人間ではないということ。氏が信頼に値しようとするようであれば、喜んで信頼を寄せるつもり。しかし、欺かれて連れ出されたことでもあり、すぐに大変愛想の良い態度に出る訳には行かないとのこと。母親に対する浮かれた態度を咎める。姉宛の手紙の写しを同封。

手紙　七　ラヴレースからベルフォードへ
二人の間の会話の中で用いた己の術策を誇らしげに語る。彼女の卓越した能力に恐れを抱く。敵対や抵抗については、最悪の行為を挑発するものと考える。ジョゼフ・リーマ

ンに対する狡猾な処置。

手紙　八　同　右

女性の愛顧に与ろうとする男は、ただ、放蕩児として世に知られるだけで良い、と氏は言う。ハウ嬢とクラリッサとがこうも親しい間柄ではないことを願う。その理由。

手紙　九　同　右

令嬢たちの文通を妨げるためにも、ハウ夫人相手にアントニー老をけしかけようと目論む。氏の心を支配する熱情の対象は、金ではなく女。容姿と外見とに関してベルフォードをからかう。ソーリングズ未亡人の二人の娘についてのユーモラスな寸評。

手紙　十　同　右

ハーロー一族に対するさらなる凱歌。蜘蛛とハエになぞらえた譬え話。男女別々の寄宿学校があるように、男子用と女子用別々の教会を希望。女性は彼を愛して然るべきだと言う。その理由。女性が愛してくれることを自慢。

手紙　十一　クラリッサからハウ嬢へ

ラヴレースとの口論の委細。真剣に怒る彼女を見て、氏は急ぎ挙式することを要請。恥じらいゆえの彼女の沈黙を立腹と解釈。彼女の差止め命令は侵すべからざるものとして尊重する旨を再び誓う。

手紙　十二、十三、十四　ラヴレースからベルフォードへ

困難を伴う狩りの喜びについて。狡猾で仰々しい結婚申し込みによって彼女に与えた苦痛や困惑振りを見て喜び勇む。彼女を正当に評価すべき理由と評価出来ない理由。彼女をとことん試そうと決意。彼女に対する試しの結果には、全女性の名誉が関わっているということ。彼女が手中にある今、結婚は自分の思いのままと見ている。

手紙　十五　ハウ嬢からクラリッサへ

二人の文通を禁じる母親には従わないつもりとのこと。その理由。クラリッサの気力を喜ばしく思う。

手紙　十六　クラリッサからハウ嬢へ

ラヴレースに対しては何が出来るのか、分かりかねている。自分のために骨を折ったのは、彼の自業自得だということ。彼に向かって何か約束をしたことはあるだろうか、氏を恋人として受け入れたことが一度でもあっただろうか、と彼女は自問する。

手紙　十七、十八　同　右

彼女を怯えさせ、氏との家出を促すこととともなった、庭木戸で耳にした物音や人声に関し、誠意をもって説明するようラヴレースに要求。氏の告白と、ソームズ、彼女の兄ならびにベティ・バーンズに関する大胆な暗示。彼女は恐れを覚える。

手紙　十九　ラヴレースからベルフォードへ

ハーロー一族の愚かさを嬉しく思う。悪事を行う能力を大いに喜ぶ。令嬢に取らせようと目論んでいる遜った態度のこと。女性にとっては不利な、放蕩児風の感想。これは女性に対する警鐘として役立つことになろう。

手紙　二十　クラリッサからハウ嬢へ

一貫して快適なラヴレース氏との会話。改心へ向けての氏の約束。ローズバッドと小作人に対する寛大さを思い出し、好印象を持つ。叔母ハーヴィー宛に筆を執る。

手紙　二十一、二十二　ラヴレースからベルフォードへ

自ら認める自惚れの強さ。尤もらしい振舞い、まことしやかな約束や提案について解説を加える。ハウ嬢とクラリッサの文通のことを心配。聞き慣れない語句で彼を面食らわせるのが楽しいとのこと。

手紙　二十三　ハウ嬢からクラリッサへ

ラヴレースのまことしやかな提案や約束をどう判断すべきか。ヒックマンが二人のために役立とうとして懸命。にも拘らず、彼をからかう。

手紙　二十四　クラリッサからハウ嬢へ

自分が例の差止め命令に固執していることについて、ラヴレースがグリーム夫人にこぼすのを耳にする。それでいて、手にした機会を見過ごすのはどういうつもりなのだろうかと尋ねる。模範になろうとした自惚れを罰せられたのだということ。ヒックマンに対する態度に関して、ハウ嬢を咎める。

手紙　二十五　同　右

ラヴレースと激しく言い争う。恥じらいを装って結婚を暗示する彼に腹を立てる。二人の唖み合い。彼女によれば、氏は奇妙にも、意に反して彼女を連れ出したことを恩に着せ、彼女を自分のものと見なしているとのこと。しかしながら、結婚については遠回しに触れるだけ。彼女は自分自身に嫌気がさす。

手紙　二十六　クラリッサからハウ嬢へ

ラヴレースはまったくプローテウスさながらの人間。以前なら腹を立てていたのと同じ接し方に対し、今は彼女を褒め称えており、二通の手紙、すなわち、一通はベティ・ローランス夫人から、もう一通はモンタギュー嬢からのもの、を見せてくれる。彼女にとって大いに歓迎出来るものであることを氏は承知しているはずであり、それだけに、これらの手紙をこれまで提示しなかったのは何故なのかと、彼女は不思議に思う。

手紙　二十七、二十八、二十九、三十　同　右

ベティ夫人およびモンタギュー嬢からの手紙の文面により、クラリッサはラヴレース氏に対し機嫌を直す。氏は結婚を匂わせる。しかし、その話を推し進めるのが恐ろしいふ

りをする。自分を独りにしてくれるよう、懸命になって氏に頼む。その理由。氏は彼女の論法を称賛する。彼女の真剣な問い掛け、そして、氏の軽薄な応答。氏からの様々な申し出。氏はノートン夫人を呼び寄せようと提案。彼に疑いを掛けたことに関し、彼女は自らを咎めようとする。しかし、用心をする理由も示す。彼女の同意を得て、氏は友人のドールマンに宛て、ロンドンに下宿を確保してくれるよう書き送る。

手紙　三十一　ラヴレースからベルフォードへ

己の策略を自慢。クラリッサの振舞いに関し、彼女に有利な説明。彼女がロンドンに言及したことを大いに喜ぶ。駆け落ちをするのは恥知らずな女だけだと氏は言う。さらなる計画、策略、陰謀。

手紙　三十二　ハウ嬢からクラリッサへ

ヒックマンに関する小言についてユーモラスに言及。平穏無事な恋に関する所感。M卿の一族がクラリッサを大いに称賛しているということ。ラヴレースに対する強気な応対ぶりとロンドン行きに関して、賛意を表明。母親の心の狭さを仄めかす。ラヴレースと仲良く付き合うよう忠告。

手紙　三十三、三十四　クラリッサからハウ嬢へ

父の歩み寄りを許さないほどに、兄が力を持っていることも不思議とは思わない。ロンドンの下宿に関するドールマン氏の返事の写し。下宿を選ぶに当たっての用心。ハンナのためにということで、ラヴレースが五ギニーを提供。氏の思いやりを示す他の例。現在の見通しを不満には思わないとのこと。

手紙　三十五　ラヴレースからベルフォードへ

下宿に関するドールマンの返事の意味するところ。反論に答えてみせるためだが、計画に反対することをベルフォードに強いる。有頂天となり、威張り散らし、誰彼なく軽蔑する。些細な事柄の大切さ。氏のさらなる手管、計画、そして、企みの数々。

手紙　三十六　ハウ嬢からクラリッサへ

クラリッサを連れ去るべく、兄とシングルトン船長によって練られた計画のことを知らせる。暗黙のうちに為されるヒックマンの慈善行為について。彼は勿論のこと、男性すべてを軽蔑する。自分の父親と母親の不仲について。家事の面での有能ぶりに関し、クラリッサを褒め称える。二人の文通に関して行われた、母親との大論戦の詳細。母親に打たれる。切り回し好きな妻に関する所感。

手紙　三十七、三十八、三十九　クラリッサからハウ嬢へ

母親への態度に関する強い諫めの言葉。その中で子供の本分を力説。ヒックマンに対する優しさの不足を責める。現金提供の申し出に対し、受け取りを遠慮するに当たってのさらなる弁解。ハウ夫人が二人の文面に目を通す場合の条件を提案。

手紙　四十　ハウ嬢からクラリッサへ

母親は提示された条件を拒否。ハウ嬢は叱責を有難く受け止めるが、文通は続行するつもり。自己弁護の言葉。シャモの若鶏に関するユーモラスな話。

手紙　四十一　クラリッサからハウ嬢へ

ラヴレースが兄とシングルトンの計画を彼女に知らせる。しかし、氏は軽蔑の態度をもって取り扱う。どのように対処すべきか、氏に助言を求める。このことが氏から結婚の申し込みを引き出す。それが立ち消えとなったいきさつについて。

手紙　四十二　ラヴレースからベルフォードへ

結婚の申し込みには狡猾な意図があったことを認めるのだが、危うく自分の仕掛けた罠にかかるところだったとのこと。

手紙　四十三　ジョゼフ・リーマンからラヴレース氏へ

ハーロー一族によって目論まれた氏への陰謀に関する情報。ジョゼフの卑劣な偽善ぶりと利己主義。

手紙　四十四　ラヴレースより［返事として］

ベタートン嬢に関する話。情婦の扱い方を自慢げに語る。ジョゼフの情報の狡猾な利用法について。

手紙　四十五　クラリッサから叔母ハーヴィーへ

叔母の無音を嘆く。ラヴレースとの駆け落ちを目論んだわけではないことを暗示。和解の望みを示し、励ましてもらえるなら、叔母に胸中を打ち明けるつもり。

手紙　四十六　ハウ嬢からクラリッサへ

ラヴレースの心の卑しさ、プライドの高さ、そして、執念深さについての所感。氏には丁重な言動は期待出来ないということ。クラリッサに結婚を迫る狡猾な手口に関し、氏を罵倒する。現状における振舞い方について助言。

手紙　四十七　ベルフォードからラヴレースへ

令嬢の熱烈な擁護者となる。彼女のための弁論を補強する多くの啓発的な理由を提示。

手紙　四十八　ハーヴィー夫人からクラリッサへ

手紙四十五に対する厳しく残酷な返事。気の進まない結婚を絶対的に強制する考えはなかったとのこと。

手紙　四十九　クラリッサからハウ嬢へ

右の知らせに接し、ラヴレースと面会したことを深く後悔。並外れて濃やか感受性は幸せをもたらさないということ。自分の運命が氏の手に握られているのはあまりにも明ら

か。氏は礼儀を弁えず、無慈悲で傲慢で分別もなく、自分の幸せを粗末に扱う人間であるという。これまで以上に氏を好ましくなく思う理由。心の高尚さでは自分のほうが氏に優るということ。彼女の不屈の心。祈り。

手紙　五十、五十一　同　右

今は、本当に胸も潰れる思いでいるとのこと。父から正式の呪いを受ける。その際の姉の残酷な手紙。

手紙　五十二　ハウ嬢からクラリッサへ

思いやり溢れる慰めと助言に満ちた手紙。友人らしい誓い。『ノリス雑文集』に忍ばせて五十ギニーを届ける。

手紙　五十三　クラリッサからハウ嬢へ

誠実な友は、生命を保つ妙薬。ロンドンへ向けて出発するところ。ラヴレースが極めて率直に結婚の申し込みをしたこともあり、氏について気乗りのしない書き方をしなければ良かったと願う。氏の熱心な求めに応じられない立場であったことを残念に思う。『ノリス』を返送。そうする理由。

手紙　五十四、五十五　ハウ嬢からクラリッサへ

『ノリス』の返却を残念に思うということ。ラヴレースの率直な結婚申し込みを承諾してもらいたかった旨を述べる。自分がヒックマンに密かな親切心を抱いていることを確信。その根拠。ハーロー夫人を非難。その理由。

手紙五十四への返事として、クラリッサはラヴレース氏とヒックマン氏の人柄の違いについて述べ、結婚を引き延ばす動機は単に形式を重んじるからではない旨を語る。ハウ夫人が文通を禁じているのを残念に思う。自分の母親についての、孝行娘らしい弁護の言葉。子たる者への教訓。

手紙　五十六　ラヴレースからベルフォードへ

結局のところ、手枷を掛けられるのは避けられないものと考えている。令嬢の激烈な病状。子としての忠順さから、父親の呪いに怯え、信じ込んでいる。ひどく体調を崩していることをハウ嬢に知らせようとしない彼女。結婚の誓いが彼女を生き返らせる。その誓いはまったく本気であったとのこと。[これは、氏にとっては初めてのことである]今では、愛や結婚という言葉を遠慮なく口にすることも出来る。ベルフォードからの手紙四十七についての批判。

手紙　五十七　ラヴレースからベルフォードへ

ロンドンへ向け出発するところ。自分の心との葛藤。自分の心はならず者であることを認める。強烈ではあるが、束の間の後悔の念。実際に結婚しても、塞ぎの虫に取りつかれた妻を持つことになるのではという疑念。二人にとっては、一緒にならないほうが得策なのだろうと考える。氏の放蕩児風な理由。女性への教訓。

手紙　五十八　同　右

二人はシンクレア夫人宅に到着。サリー・マーティンとポリー・ホートンが氏を急き立てる。氏の立派な意図はぐらつく。ハンナが来られるようになるまでということで、召使としてドーカス・ワイクスが推薦され、不承不承ながら受け入れられる。ドーカスの人柄。氏には目的を達すべき重要事が二つある。それは何か。

手紙　五十九　クラリッサからハウ嬢へ

下宿は気に入ったが、未亡人のことはあまり好ましく思わない。友情からとはいえ、軽はずみな誓いのことでハウ嬢を叱責。自分の控の間で見つけた良書の目録。二人は密かに結婚している旨を階下の女性たちに公言した点で、氏にすっかり不満を感じる。この件に関し、氏と激しく言い争う。氏は結婚を申し込むが、その態度のゆえに、彼女は応諾するわけに行かない。戸口や窓、および、手紙の封印についての用心。

手紙　六十　ハウ嬢からクラリッサへ

互いに毎日文通を行うための便法。氏が重ねて求婚した場合だが、クラリッサに結婚する考えがあったことを喜ぶ。氏が繰り返し求婚しなかったことを不思議に思う。

手紙　六十一　クラリッサからハウ嬢へ

ラヴレース、未亡人、ならびに、未亡人の二人の姪と朝食を共にする。その者たちの立ち居振舞いと外見についての所感。ラヴレースは彼女の元を去ることで手柄顔をし、戻った折には幸福な日を指定してくれるよう希望する。彼女としては、精一杯氏に有利な解釈をしようとする。

次の手紙で（抜粋のみが提示されているが）、氏は目的を達した点について誇らしげに語るのである。女たちに唆され、究極の試練を彼女に与えようと、再び決意を固める。

手紙　六十二　クラリッサからハウ嬢へ

ラヴレースが翌日戻って来る。軽んじられたと考え、彼女は怒る。氏は再び結婚を迫るが、彼女の返事も待たず、別の提案を行う。しかしながら、意図的に遅らせる考えだとは思わない。氏はフレッチヴィル夫人の家の件で交渉中。その家の様子。結婚の申し込みには恰好の機会が訪れる。氏がその機会を見過ごしたことに彼女は驚く。選り抜きの友人四名とパーティントン嬢のための軽食の宴に同席してくれるよう、氏は熱心に彼女を誘う。パーティントン嬢に関する説明。

ラヴレース氏の次の手紙では、ベルフォード、モーブレー、ベルトン、および、ターヴィルを軽食会に誘っている。令嬢の前での彼らの振舞いに関するユーモラスな指示。令嬢を彼らに会わせる二つの目的。

手紙　六十三　ラヴレースからベルフォードへ

礼拝式へクラリッサと同行。安息日は魅力的な制度とのこと。聖句が彼を驚かす。予言者ナタンを氏は利口者と呼んでいる。令嬢は女たちを当初よりは好ましく思う。不承不承、軽食の宴への出席に同意。麗しき獲物に関する彼らの意見を求める。彼女にとって

極めて有利な描写。

手紙　六十四　クラリッサからハウ嬢へ

セントポール大聖堂における氏の神妙な態度を称賛。説得され、シンクレア夫人ならびに夫人の姪と食事を共にする。夫人たちに対し、考えていたよりは好感を覚える。評判のこととなると人を非難しがちな自分を責める。この点に関する寛大な姿勢。この日を楽しい一日と思う。そうすることが正当と思われる事柄については、すべてラヴレース氏の有利に解釈。氏がいつもこの日のようであれば、面識のあるすべての男性よりも氏を好きになれそうとのこと。しかしながら、愛情を捧げるに当たっては、出来るかぎり真価や振舞いに基づくよう決心する。月曜日の日付で再び筆を執り、パーティントン嬢を紹介されたこと、および、予定している軽食の宴への出席を余儀なくさせたことに関し、不満を表明。

手紙　六十五　同　右

夜会には愛想を尽かす。氏の仲間四人の人物描写。パーティントン嬢の振舞いを好ましく思わない。

手紙　六十六　同　右

その夜パーティントン嬢がベッドを共にすることを彼女に認めさせようとの試み。彼女は拒絶する。その理由。はなはだ不満を感じるということ。

手紙　六十七　同　右

ハウ夫人から、娘との文通を禁じる、怒りに満ちた手紙を受け取る。自らの意に背いて応諾を勧め、その気持ちを促すため、現在の見通しを精一杯明るく語る。

手紙　六十八　ハウ嬢より［返事として］

母親のこの処置に激怒。文通の継続を主張。クラリッサが筆を執らない場合の脅し。ラヴレースを怒鳴り散らす。しかしながら、パーティントン嬢の意向に沿わなかった点について彼女を非難。その理由。贈与財産について検討するよう忠告。ラヴレースがフレッチヴィル宅を提案したことに好感を抱く。

手紙　六十九　クラリッサより　［返信］

ハウ嬢の脅しに怯え、続けて筆を執ることを約束。感情の抑制を学ぶよう要望。自分の衣類を受け取ったところ。

手紙　七十　ヒックマン氏からクラリッサへ

クラリッサを悩ませたことでハウ嬢が心安らかならざる旨を彼は伝える。以前と同様に筆を執ってくれるなら、彼女の案じている行動に出るようなことをハウ嬢は考えないはずだという。衷心からの誠意をもって奉仕したい旨を申し出る。

（第三巻終わり）

訳　注

（一）（一頁´一一〇行）あゝ´エクスタシー…Nathaniel Lee(?1649 - 92), *The Rival Queens, or, The Death of Alexander the Great. A Tragedy* (1667), III, i. （Ross）

（二）（一六頁´四〇行）手紙四十六…正しくは手紙四十八である。

（三）（一七頁´九行）厚かましくも無遠慮な雄弁さの … *A Midsummer Night's Dream*, V, i, 102. （Ross）

（四）（一九頁´三一行）ローン（lawn）…平織り薄地の亜麻布のこと。

（五）（一九頁´四〇行）モブキャップ（mobcap´または´mob）… 一八ー一九世紀に流行した´あご下で結ぶ婦人用室内帽。（Ross）

（六）（二〇頁´六行）ポードソア（paduasoy）…丈夫な絹織物の一種。

（七）（二〇頁´七行）アラクネー（Arachne）…ギリシア神話に登場する織物の名手。Athena に挑んだが敗れ´クモに変えられた。

（八）（二七頁´六行）アルゴス（Argus）…ギリシア神話で´一〇〇の目を持つ巨人。

（九）（三七頁´一二行）オウイディウス（Ovid, 43B.C. - ?A.D.17）…ローマの詩人で *Metamorphoses*（A.D.1-8）の作者。なお´*Metamorphoses* は『転身物語』の書名で田中秀央・前田敬作による邦訳が人文書院より出ている（一九六六年）。

（一〇）（四五頁´九行）エスクワイア（Esquire）…郷紳《Gentry に属し´Knight に次ぐ身分の者》。また´手紙の宛名などで氏名の後につける敬称で´「殿」「様」に当たり´Esq.や Esqr.と略されることも多い。（研究社『リーダーズ英和辞典』第二版´一九九九年）なお´次行の〈キャプテン〉(captain) は一八世紀には´羽振りの良い追剥ぎ等に冠するおどけた呼称としても用いられていたようである。Eric Partridge, *A Dictionary of Slang AND UNCONVENTIONAL ENGLISH* (1967) Vol. 1, p.126 を参照。

（一一）（四六頁´一九行）グローリアナ（Gloriana）…Spenser の *Faerie Queene* で描かれた´エリザベス一世を象徴する妖精国の女王´すなわち Faerie Queene その人の名であるが´Angus Ross は二四八頁一五行に見られるグローリアナに注を付し´イギリスの劇作家 Nathaniel Lee（1653? - 92）の *Gloriana, or, The Court of Augustus Caesar. A Tragedy* (1676)を出典としている。

（一二）（四八頁´九行）ユダヤ教会の仕切り格子（Synagogue-lattices）…一九世紀に廃止されるまで´ユダヤ教会では女性席を高い格子で隔てていたという。なお´http://www.jewishencyclopedia.com にアクセスし´Synagogue Architecture の Plans (Symbolic Designs)を参照のこと。

（一三）（四八頁´一六行）クローディアス（Publius Clodius Pulcher, *c.*92 - 52 B.C.）…キケロ（Marcus Tullius Cicero, 106 – 43B.C.）と対立する扇動政治家であり´ある祝祭において女性の仮装をしたため´裁判にかけられたという。（Ross）

（一四）（四八頁´一七行）ポーシャ（Portia）…Shakespeare の *Julius Caesar* では Brutus の妻ということになっている。また´*The Merchant of Venice* のヒロインでもある。なお´Joseph Addison の *Cato* (1713)においては´Cato の娘の名は Marcia ということになっている。

（一五）（五三頁´三一行）「善人以外のだれにも分からぬもの … 」…作者はナット・

リー（Nathaniel Lee）からの引用のように考えているようであるが、正しくは John Dryden, *The Spanish Friar; or, The Double Discovery* (1681), Act II, scene i からの引用のようであり、そこには、‘There is a pleasure sure in being mad which none but madmen know.’　という台詞が見られる。なお、左記 URL を参照のこと。
http://www.gutenberg.org/files/16456/16456-h/16456-h.htm#page_365

（一六）（六一頁、一一八行）「女が男のために造られたのであり、女のために男が造られたのではない」…コリントの信徒への手紙一一一章、九節。（Ross）

（一七）（六一頁、三三行）禿頭の好色漢…ローマの伝記作家・歴史家スエトニウス（Gaius Suetonius Tranquillus, c.69 - 22）の *De Vita Caesarum*, Divus Iulius, 51 を参照のこと。

（一八）（六一頁、三九行）「シーザーの妻は…（‘The Wife of Caesar must not be suspected!’）」…プルタルコスの「シーザー伝」に由来する有名な言葉。J.ドライデン訳による「シーザー伝」では、‘I wished my wife to be not so much as suspected.’ となっている。http://classics.mit.edu/Plutarch/caesar.html を参照のこと。なお、‘Caesar’s wife must be above suspicion.’ という意味合いの、古いローマの諺がある。*Everyman's Dictionary of Quotations and Provebs* (London, J.M.Dent & Sons Ltd., 1962), p.452 参照。

（一九）（六三頁、三二行）遠い昔のあの善人…聖書の Job のことである。（Ross）

（二〇）（六五頁、三〇行）彼女は女を越えた存在…出典不詳。（Ross）

（二一）（七八頁、三八行）あのお節介な女神…原文では that busy *Dea Bona* となっているが、Dea Bona（あるいは、Bona Dea）はローマの貞節と多産の女神。Angus Ross は巻末の、GLOSSARY OF WORDS AND PHRASES、において、もっぱら女性の崇拝を得ていた旨を記している。

（二二）（七九頁、一七行）テイレシアース(Tiresias)…テーバイ（Thebes）の伝説的な預言者で、交尾中の蛇を打ったため、一時的に女性に変えられたという。

（二三）（七九頁、二六行）詩人…Alexander Pope（1688 - 1744）のことである。*Of the Characters of Women: An Epistle to a Lady* (1735), 216. を参照のこと。（Ross）

（二四）（八二頁、三五行）〈太陽の下、新しいものは何ひとつない〉…コレクトの言葉一章、九節。

（二五）（八三頁、一〇行）シャフツベリー卿の吟味法…The 3rd Earl of Shaftesbury (1671 - 1731) の *Characteristics* (1711), vol.1 は、真実を試す手段として、嘲笑を提案している。（Ross）

（二六）（八五頁、一二行）身につきし悪癖は…Nicholas Rowe (1671- 1718), *Ulysses. A Tragedy* (1705), I, i.　(Ross)

（二七）（九〇頁、三六行）「牝牛の腹の中にいる仔牛は絶対に食わん」…M.P.Tilley には、He eats the calf in the cow's belly.　の形で収録（p.77）されているが、地代が入ることを見込んで出費する人間の譬え、となっている。

（二八）（一〇六頁、一三行）プローテウス（Proteus）…ギリシア神話で、変幻自在な姿と予言力を有する海神。

（二九）（一一〇頁、一二行）寓話に出てくるカケス…第一巻の訳注（一九）を参照のこ

と。

(三〇)(一一一頁、三四行)聖パウロみたいに…使徒言行録九章、三節、四節。

(三一)(一一二頁、一九行)あのヘロデ王の気持ち…Herod the Great(73B.C.－4B.C.)はユダヤの悪王で、この逸話は紀元前三〇年頃のこと。

(三二)(一一二頁、四〇行)『ゲディス論集』…The Rev. Michael Geddes(?1650－1713)は英国国教会の司祭であり、*Miscellaneous Tracts* (1702, 1705, 1706), *Several Tracts against Popery* … (1715)を出版している。(Ross)

(三三)(一一三頁、一行)あのセメレーにも、おそらく似ていたことだろう…ギリシア神話では、セメレー(Semele)はテーバイを創建したカドモス(Cadmus)の娘で、Zeusとの間にDionysusを産んだが、Zeusの勇姿を見た時、稲妻に打たれて死んだことになっている。

(三四)(一一三頁、三七行)詩人も語っているように…ローマの大詩人ホラティウス(Quintus Horatius Flaccus, 65－8B.C.)の *Epistles,* I. x. 24 より。*Everyman's Dictionary of Quotations and Proverbs* (p.152)では、‘Naturam expelles furca, tamen usque recurret.’と原文を示した後、‘Though you drive nature out with a pitchfork, she will ever return.’という英語訳を添えている。

(三五)(一一八頁、一一行)ラケット(raquet, racquet, racket)…壁に囲まれたコートでボールを壁に打ち合う、スカッシュに似た球技。

(三六)(一二〇頁、一五行)オーソン(Orson)…*Valentine and Orson* というフランスのロマンスに登場する人物。熊に育てられた野人で、双子の兄弟Valentineと多くの冒険を行う。(Ross)

(三七)(一二二頁、三行)足のことを除きますと…悪魔の足はひづめ状に割れていることになっている。なお、第五巻、四一頁、三一－三三行、六六頁の一三－一五行、一九五頁、一二行、および、第六巻、一八三頁の一－一二行も参照のこと。

(三八)(一二八頁、一〇行)カッサンドラー…カッサンドラー(Cassandra)はトロイア王プリアモスと王妃ヘカベーの娘で、予言の能力を備えていた。

(三九)(一四一頁、三九行)「家に飼い馴らされて　…　」…Angus Rossは Richard Steele(1672 – 1729)の喜劇, *The Tender Husband, or, The Accomplish*d *Fool* (1705), II, ii.に言及したものと考えている。

(四〇)(一七〇頁、一一行)まるで豆の花に囲まれたみたいに…開花期の豆の花の香りを嗅ぐと、軽薄で無思慮になるという民間の言い伝えがあった。(Ross)

(四一)(一七一頁、一三行)「自分の命を失ったら　…　」…マタイによる福音書一六章、二六節。(Ross)

(四二)(一七四頁、一行)「廉直の人は約束を守り　…　」…格言の類ないしは引用句のようにも思われるが、出典不詳。

(四三)(一七八頁、三六行)エジプトの王葱にこがれたイスラエルの民…「イスラエルの人々は彼ら(モーセとアロン)に言った。〈我々はエジプトの国で、主の手にかかって、死んだほうがましだった。あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに。あなたたちは我々をこの荒れ野に連れ出し、この全会衆を飢え死にさせようとしている〉」出エジプト記一六章、三節。(Ross)

(四四)(一九六頁、一三行)「祝福を祈るのであって、呪ってはなりません」…ローマの信徒への手紙一二章、一四節を参照のこと。
(四五)(一九六頁、一七行)「私たちを虐げ呪う人たちのために祈る」…マタイによる福音書五章、四四節やルカによる福音書六章、二八節等を参照のこと。
(四六)(一九八頁、一八行)『ノリス雑文集』…第一巻の訳注(一四)を参照のこと。
(四七)(一九九頁、一七行)「誠実な友は、生命を保つ妙薬」…シラ書六章、一六節。(Ross)
(四八)(二一二頁、一五行)ニオベー(Niobe)… Amphion の妻で、Apollo と Artemis に一四人の愛児をすべて殺され、悲嘆のあまり、石と化して涙を流し続けたという。
(四九)(二一二頁、三六行)我がステラ…ステラ(Stella)はイギリスの廷臣・軍人・文人 Sir Philip Sidney(1554‐86)の *Astrophel and Stella* から、純愛の対象となる女性名として用いられる。なお、第一巻の訳注(一八)も参照のこと。
(五〇)(二一三頁、三五行)「賢き者、意欲ある者は果敢に挑み … 」…Nicholas Rowe, *The Ambitious Stepmother, A Tragedy* (1700), I, i. (Ross)
(五一)(二一四頁、一五行)「花咲き乱るる草原の … 」…Dryden,‘ Palamon and Arcite, or,The Knight’s Tale, from Chaucer, Book I’, *Fables Ancient and Modern* (1700), 170 – 72. (Ross)
(五二)(二一九頁、一七行)スタンホープの『福音書』その他…スタンホープの『福音書』とは George Stanhope (1660 - 1728), *A Paraphrase and Comment upon the Epistles and Gospels appointed to be used by the Church of England on all Sundays and Holy-Days throughout the Year,* 4vols(1705 – 8)。のこと。
James Sharp(1618 – 79)は監督制の復活に尽力し、一六六一年にはセントアンドルーズの大監督に任命される。
John Tillotson(1630‐94)はイギリスの聖職者でカンタベリー大主教(一六九一‐九四)。
Robert South(1634 – 1716)はチャールズ二世の愛顧を得た著名な説教者。
ネルソン(Robert Nelson, 1656 – 1715)の『祝宴と精進』とは、*A Companion to Festivals and Fasts of the Church of England: with Collects and Prayers for each Solemnity* (1704)のこと。
マン主教とは、Thomas Wilson(1663‐1755)のことで、*The Principles and Duties of Christianity* (1707)や *A Short and Plain Instructions for the better Understanding of the Lord’s Supper* (1733) 等の著作がある。
エクセター主教ゴーデン師は、John Gauden(1605 – 62)のこと。*Eikon Basilike*(1649)の著者と言われていた。
イネットの『勤行』は、Dr. John Innet (1647 – 1718)の *A Guide to the Devout Christian* (1688)のことと思われる。
テレマコス(*Telemachus*)は一六九九年に出版された François de Salignac de la Mothe-Fénelon (1651 – 1715)の散文叙事詩で、英語版はリチャードソンの印刷所で一七一八年に印刷された。
シベー氏(Colley Cibber, 1671 – 1757)はリチャードソンと親交のあった劇作家、俳

優、桂冠詩人（一七三〇－五七）であり、*Love's Last Shift* (1696), *The Careless Husband* (1705)等の作品がある。

『タトラー』『スペクテーター』『ガーディアン』は当時の代表的な定期刊行物。アディソン（Joseph Addison, 1672 – 1719）はイギリスのエッセイスト、詩人で、スティール（Richard Steele, 1672 – 1729）と共に『スペクテーター』を創刊した。(Ross)

(五三)（一一九頁、三六行）セアラ・マーティンかメアリー・ホートンの名…セアラ（Sarah）の愛称がサリー（Sally）で、メアリー（Mary）の愛称がポリー（Polly）である。

(五四)（一一七頁、三二行）スキピオ(Scipio)…Publius Cornelius Scipio Africanus(236 – 183B.C.)はローマの将軍・政治家。紀元前二〇四年、北アフリカに遠征し、ザマの戦い（紀元前二〇二年）でカルタゴのハンニバルを破り、事実上、第二ポエニ戦争を終結させる。凱旋後、アフリカヌスの称号を授けられたが、後に収賄の嫌疑を受ける。

(五五)（一一八頁、三七行）〈若さこそ人生の春、華やげる歳月の盛りの時〉…Edward Bysshe, *The Art of English Poetry* (1702)その他の詩文選類はこの句を *Troilus and Cressida* のものとしているが、Shakespeare にも Dryden の改作、*Troilus and Cressida, or, Truth Found too Late* (1679)にも見当たらないとのことである。(Ross)

(五六)（一一九頁、一一行）「老齢に背中を向ける … 」…William Congreve (1670 – 1729), *Imitations of Horace; Odes*, Book I, ix (iii, 12 – 15). (Ross)

(五七)（一三三頁、一一行）博学の主教…Salisbury の主教になった Gilbert Burnet (1643 – 1715)のこと。*Some Letters concerning an Account of what seemed most remarkable in ... Italy ... &c., in the Year 1685 and 1686 ... to the Rt. Hon. R. B[oyle] ...* (Antwerp, 1686; Amsterdam, 1686)を参照のこと。(Ross)

(五八)（一四〇頁、七行）カドリル（quadrille）…四人が四〇枚のカードを使って行う、一七～一八世紀に流行したトランプゲーム。

(五九)（一四六頁、四行）聖書のとおりの言い回し…サムエル記下一二章、七節を参照のこと。

(六〇)（一四七頁、一三行）パルティア人流の反撃…パルティア（Parthia … 現在の北部イラン地方にあった古王国）の騎兵は退却時、後ろ向きに矢を射たという。

(六一)（一四八頁、一五行）グローリアナ…訳注の（一一）を参照のこと。

(六二)（一四八頁、一六行）「目を向けよ荘重なる … 」…Dryden, *Don Sebastian, King of Portugal. A Tragedy* (1690), II, i. (Ross)

(六三)（一四八頁、一六行）「彼女がその身に帯びるのは … 」…Rowe, *Tamerlane. A Tragedy* (1702), I, i, 139 – 41. (Ross)

(六四)（一五四頁、六行）「その者の口をこぼるるは … 」…Satan のことである。イギリスの詩人 John Milton（1608 – 74）の *Paradise Lost,* II, 113. (Ross)

(六五)（一六〇頁、一一行）ベルゼブル（Beelzebub）…マタイによる福音書一二章、二四節で言及されている悪霊の首領のこと。また、*Paradise Lost* の堕落天使であり、一般に悪魔を意味する。

ク　ラ　リ　ッ　サ

ある若き淑女の物語

私生活における最重要関心事を
収録し、

特に
結婚に関し
両親ならびに子供の
不行跡に伴いがちなる難儀の数々を示す。

第４巻

第３版

ロンドン

出版元：S.リチャードソン

パタノスター街、ジョン・オズボーン書店
ストランド街キャサリン通り向かい、アンドルー・ミラー書店
セントポールズチャーチヤード、J.and J.リヴィントン書店
ならびに、バース、J.リーク書店より発売

１７５０

クラリッサ・ハーローの物語

第四巻

手紙　一

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月二日　火曜日

寓話作者の話によると、ローマの神メルクリウス(一)は、人間たちの間での自分の評判を知りたくなって、変装して地上に降り、彫像を売っている店に入ると、主だった神々の彫像を、ユーピテルのもの、次にはユーノー(二)のもの、そして、その他のものと次々に値切り、最後に、「そのメルクリウスの像にはどれくらいの値が付いているのかね」と尋ねたのだそうだ。すると彫刻家は、「あゝ、お客様、他のを一つお買いなさい。そいつはただでおまけしておきますよ」と答えたということだ。

盗人の神様にしても、こんなふうに自惚れ心を挫かれたのでは、ひどくおどおどしてみせることだろうな。

貴公もそんなところだよ。この一人の令嬢に高く買ってもらうためなら、一千ポンドでも惜しまないことだろう。まあまあと思われるだけで、そして、まるっきり言葉を交わすに値しないわけでもないと思われれば、それだけで貴公は幸福なのだろう。昨夜、否、今朝と言ったほうが良いが、俺と別れる際にも、エッジウェアの住まいに数行書き送るよう約束させていたよな。貴公のことや貴公の同輩たちのことを彼女がどのように考えているのか、知らせろというわけだ。

ジャック、そっくり貴公のものだよ、一千ポンドは。何せ彼女のほうでは、貴公ら全員のことがとことんお気に召さないのだからな。他の連中は勿論、貴公についてもだ。

貴公に関するかぎり、俺もその点を残念に思っている。理由は二つある。一つには、貴公が関心を持つに至った動機は、恐怖心と自意識にあったと思うからだ。一方、例の大盗賊の動機は虚栄心だ。我慢ならないほどの自惚れ心だったのだよ。それゆえ、天国へ追いやられる際に顔を赤らめたのも当然だし、大口を叩くわけにも行かなかったのだ。もう一つの理由は、もしも彼女が貴公のことを嫌えば、俺のことも嫌うのではないかと心配するからだよ。何しろ、われわれは同じ穴の狢だからな。

彼女に言わせると、俺にはこんな仲間がいるし、見たところ、そのつまらない話をずいぶん楽しんでいる様子だが、それで改心を口にするなど以ての外、ということだ。

君もそう思っていただろうが、ジャック、彼女が貴公らを好きになることはまずあるまいと踏んでいたのだよ。とは言え、俺の友人ということもあるからな。彼女ほどの教育のある人間なら、非難めいたことを口にするにしても、もっと控え目にやってくれるものと思っていたのだ。

何故かは知らないが、ベルフォード、女どもというのは、われわれ相手にどんな気ままな振舞いをしても許されると考えているのだよ。確かに、男も礼儀を弁えないからな。それに、連中の有利になるよう、罰当たりな嘘八百を並べてみたり、黒を白と言いくるめる

ような真似をしないと、どうなるか分かったものじゃない。われわれに偽善者となるよう教え込んでいるわけだが、それでいて、別な時には詐欺師呼ばわりをするのさ。

貴公ら全員のことは精一杯弁護したよ。ただ、分かるだろうが、弁解がましいことを口にしてみる以外、打つ手がなかったのだ。彼女みたいにお堅い人間が相手ではな。

かいつまんで言うが、俺が並べ立てた言い訳というのは以下のとおりだ。

清純無垢な人間にとっては、些細な脱線行為の一つ一つも罪深いものに思われるのだろうが、友人のうちのだれについてであれ、その言葉遣いにせよ振舞いにせよ、あの夜の初めから終わりまで、俺の見るかぎり、不都合なものは何一つなかったということ、一つか二つの話題についてしか話すことの出来ない者もいるが、彼女はすべての話題に通じており、それゆえ、友人たちが自分の一番よく理解している話、また、感覚に訴えるだけの話題に加わったのも驚くに当たらないということ、彼女が口を開くたびに、だれもがすかさず敬意を表したのは見てのとおりで、彼女がもっとわれわれと言葉を交わしてくれていたなら、われわれの会話に嫌悪感を抱くことも少なかったはずだということ、特に君は、彼女が立ち去ると、彼女の言葉は美徳の声そのものだと言っていたが、しかし、持ち出された話題について彼女が一つ二つ見解を示してくれた後は、すっかり畏敬の念に打たれてしまい、これからはいつだって、彼女の前では、そのつもりが少しもなくても、大いに非難の余地のある人間と思われるのを心配することになるだろう、といったことだよ。

忌憚のないところを明かせば、俺の仲間のことも、今滞在している家のことも好きにはなれないのだ、と彼女は言っていた。

家の者たちはよく世話をしてくれるし、彼女のほうでも、異議を唱えたくなるような態度が最初の頃に比べ少なくなったことを認めてくれたが、この家が気に入らないということでは俺も同じであり、それゆえ、もう一軒自分たちの家のことを考えているのではないのか、と言っておいた。

どれほどの財産に恵まれているにせよ、また、その財産の話はずいぶん耳にしたが、彼女としてはパーティントン嬢のことが好きになれず、お近付きになろうとは思わない、と言っていた。知り合ってほんのわずかしか経たない自分に比べれば、もっと遠慮のない付き合いをして当然な下宿人が表のほうの家にいるというのに、昨夜のような難題を持ち込まれるのは辛い話だと思う、とも言うのだ。

この点に関し、俺は知らぬ顔の半兵衛を決め込んだよ。そして、彼女のほうから説明があった時には、シンクレア夫人の要請を非難し、厚かましい話だと言っておいた。

狡猾にも彼女は、あの娘と一緒に寝るのは嫌だと断ったのを、些細なことと考えている口振りだったが、胸の思いと違うのは看て取れた。彼女は気難しすぎるとか、用心が過ぎるとか、俺がそんな見方をする余地もありそうだと考えているのは明らかだったのだよ。

シンクレア夫人の馴々しいところは叱っておこう、と俺は申し出た。

それはいけない、と彼女は言っていた。別に大したことでもなく、そっとしておくのが一番だと言うのだよ。彼女のほうでこの種の要請を断ることのほうが、シンクレア夫人がそんな頼みごとを言い出したり、パーティントン嬢が、願いは入れてもらえるだろうと期待したりするのに比べれば、より気難しい態度と思われるかもしれないと言うのだな。ただ、階下の連中には知り合いが多いのだから、好い顔をすると、独りで居るところをどれだけ邪魔されることになるか知れないし、あのお嬢さんの振舞いには、確かに見過ごしに

出来ないような軽薄なところがあって、親しい付き合いを願う気にはなれないのだ、とも言っていた。

パーティントン嬢のことはお気に召さないようだが、俺とて好きになれないのは同じだと言っておいた。パーティントン嬢は愚かなお嬢さんで、後見人たちが目を光らせることになるのも至極当然なように思われる。とはいっても、次の点は認めねばならないが、あの娘の昨夜の会話や振舞い全般について言えば、あの娘に（思慮分別の点では、まだ小娘なのだから）非難されるべきところがあるとは思わず、ただ、徳義心を備えた客に囲まれ安心しきっている、屈託のない、気さくな娘のように振る舞っているにすぎないものと考えていた、と俺は言ったのだよ。

俺にもうまく当てはまる話だ、と彼女は答えていた。ただ、あのお嬢さんがそれほど客たちに満足しているというのなら、是非とも言っておかねばならないが、あの娘のことをそんな世間知らずと見ている俺も実に心優しい人間だ。自分としては、ロンドンの社交界についてはこれまで一切目にしたことはないが、遠慮のないところを言わせてもらえるなら、生まれてこの方、あのような連中と同席したことは一度としてないし、また、二度と再び加わりたいとも思わない、と言うのだよ。

どうだ、ベルフォード、メルクリウスよりも立場がないというわけだ。違うかな。

俺も苛立ってきた。彼女に備わっているような厳格な美徳の基準で裁かれることになると、パーティントン嬢より分別のある女性にしても、どうやら、その運命は厳しいものになりそうですね、と言ってやったよ。

そんなことはない、と彼女は言うのだ。ただ、あの娘の振舞いを見て、徳の高い人間が異議を唱えたくなるようなものは何一つなかったと、本当にそう思っているようなら、より適切な振舞いというものについての俺の無知さ加減も、あの娘のと同じ程度に情けない状態だと言わねばならないし、そのように考え方の似通った者は、お互いのためにも、願わくはいつまでも仲を裂かれずにいてもらいたいものだ、と言うのだよ。

見てのとおりだ、ジャック。情けを掛けた挙げ句がこの始末だ。

俺は心からの謝意を表したよ。もっとも、僭越ながらと断った上で、次のように述べておいた。立派な人間というのは概して甚だしく無慈悲なものであるから、俺としては、結果的に世間の者たちすべてに対しても惨い考え方をせざるを得なくなるくらいなら、立派な人間などになるつもりは絶対にない、とだよ。

彼女は、俺に慈悲の心があるのは目出度いことだと祝ってくれたが、彼女自身の慈悲心を増大するためにも、昨夜俺が彼女に引き合わせた〈低俗な連中〉を是認するようなことを期待されては困る、と言うのだ。

貴公も例外ではないのだ、ベルフォード。例の一千ポンドは心配ないということだな。

俺は失礼だがと断って、お見受けしたところ、お気に召すような人間がいるとは思えないのですが、と言ってやった［飾りのない態度には飾りなく応じるというわけだよ、ジャック。だとすれば、彼女が俺の仲間を悪し様に罵ったりしたのは何故なのだ］。ただ、気に入ったとか気に入らなかったというのは、だれのことで、また、どんなところなのかを教えてくれさえすれば、もしもそんなことが出来ればの話だが、俺もその人物やそういうところを好いたり嫌ったりするつもりだと話したのだ。

すると彼女は、焦れた様子でこう言ったのだ。「ご自分を嫌うことですね」とだよ。

何という厳しい言い種だ。いつかある日、つまり、ある夜にということだが、この借りは返してもらうことになるというのに、その必要はないとでも考えているのだろうか。それに、一度あれば、後は何度でもあるということだ。それが楽しみというわけだよ、俺にとってはな。

仲間のところに顔を出してもらいたいものと、その段取りに夢中になる前は、幸せに向けてあれだけ事が順調に進んでいただけに、パーティントン嬢にせよ仲間にせよ、消えてしまえと呪いたい気分だと、俺はそう言ったよ。ただ、是非とも言っておきたいが、ご立派な連中にしても、手本を示したり教えを垂れたりすることで悪人に心を改めさせようというのなら、善人とばかり付き合っていて、どうして目的の半分も叶えることが出来るのか、俺には見当もつかない、とも言っておいた。

二度、三度と、怒りに燃える彼女の目から稲妻にも似た閃光が走り、俺は危うく目が眩むところだったよ。そして、軽蔑したように背中を向けると、彼女は自分の部屋へ引き揚げて行ったのだ。

繰り返すが、ジャック、見てのとおり、貴公の一千ポンドは無事ということだ。

彼女に言わせると、俺は礼儀を弁えた人間ではないそうだが、この一例からして、彼女のほうが礼儀を弁えていると、果たして言えるのだろうかな。女としてだよ。

ところで、パーティントン嬢ほどの上品な、そして、大金持ちのお嬢さんを高慢にも拒絶した上、自分の下女のドーカスと一緒に、収納式の寝台などに潜り込ませるという残酷な仕打ちを加えたのだし、貴公としてはどうだろう、我が魅惑の君に何かお返しをしてやるのが俺の務めだとは思わないだろうか。パーティントン嬢も（涙ながらに）、シンクレア夫人を通じてだが、ラヴレース夫人が勿体なくもバーネットをお訪ねくださるなら、その時は、後見人の屋敷の中では最高のベッド、最高の部屋を使ってもらうつもりだと断言していたのだよ。俺に対する彼女のけしからぬ懸念について、俺には察しがつかなかったとでも貴公は思うのか。つまり、仮の夫のはずが、俺は我が物顔で彼女をモノにしようとするのではないか、そして、パーティントン嬢のほうでも、それは当然の報いだと、進んで手を貸すのではないかという懸念についてだよ。

すると、そなたはこうして、私のことを意に留めながら、同時に無視してもいるわけだな、魅惑の君よ。また、私の名誉心よりは自らの用心深さを頼るわけだから、ひとつ、そなたの懸念どおりにしてやろうではないか、麗しの君よ。

ところで、ジャック、我がグローリアナに対する貴公ならびに貴公の悪党仲間の意見を知らせてほしいのだ。

今耳に入ったばかりだが、ハンナが、間もなく十分に体調も回復すると思うので、ロンドンに着いたら令嬢のお世話をしたいと言っているそうだ。あの娘は医者に診てもらっていないらしい。医者を一人つけてやることにするが、あの娘の女主人に対する俺の純粋なる愛情と尊敬の念に動かされたというわけだ。薬が体力を低下させ、病状を進ませることだってないわけじゃない。あの娘の病は熱を伴うものではないだけに、これは十分にありそうな話なのだ。だが、おそらく、あの娘も気が早すぎたってことだな、そんな見込みを口にするのは。「この月もなお吹き荒ぶ空模様」ってところだし、そいつがリューマチの症状には良くないのだよ。

手紙　二
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月二日　火曜日

同封したものに封印を施していると、ちょうどその時だが、我が愛しの君のところに手紙が一通舞い込んだ。M卿の屋敷を配達先にして、俺に宛てたものだ。差出人はだれだと思うかな。何と、ハウ夫人だよ。

で、文面は、と訊くのか。

俺に分かるわけはないだろう。愛しの君が教えてくれたのでなければな。だが。ひどく惨いものだと思うぞ。彼女に与えた影響から推してな。読み進むにつれ、彼女の両の頬を涙がこぼれたよ。顔色が何度か変わっていた。終わってはいないのだと思うな、彼女への迫害は。

「何という惨い運命なのでしょう」　愛らしい乙女が嘆いていた。「もう諦めねばならなくなりました。この世の唯一の慰みでしたのに」とな。

ハウ嬢との文通のことだ。疑いない。

だが、あゝまで嘆いて良いものだろうか。この文通は前にも禁じられていたのだ。しかも、娘に向かっての話だし、これ以上ないほどの強い言葉だったのだ。ところが、両方の側で続行されたわけだよ。非の打ち所とてない二人ってことだがね。母親が自分の権威を主張したりはしないはずだ、とでも考えたのかな。自分のところのつむじ曲がりな娘には禁止の効き目がないと分かった場合、娘の友達にはどんな効果があるか、母親が試してみようとするくらいのことは想像して当然ではないのかな。今度こそ、見事に目的は達成されるものと信じているよ。我が愛しの君も、良心に関わることとして、真剣に受け止めるだろうと思うのだ。

残酷な仕打ちというのは大嫌いなのだよ。特に女が加えるものはな。今回のハウ夫人の場合にしても、俺はもっと案じていたはずなのだ。我が愛しの君がパーティントン嬢に加えた、輪をかけて残酷な仕打ちのことがなかったならな。というのも、あれだけ我が身のことは心配していたのだし、無邪気で用心の足りないあの娘のところへ、ドーカスがどんな人間を招き入れるか、彼女にも分からないわけだからな。とはいえ、ハーロー家の連中が言い出したにせよ、だれが言い出したにせよ、俺としては、このように禁止されたのをあまり気の毒なこととは思わないと言わざるを得ないな。何故かと言えば、我が愛しの君があゝも防御を固め、俺に厳しい目を向けるのは、疑いもなく、ハウ嬢に負うところが大なのだと考えるからだよ。それに、ここの人間というのは実に脆いところがあるし、扮装のいくつかもひどく見え透いたものだから、この親に背いた文通の結果がどんなことになるか、だれにだって分かりはしないのだ。だから、気の毒とは思わないと言っているのだよ。これで、彼女も意見を交わす相手がいなくなるわけだ。警告してくれる者一人としていないのだよ。俺にしても、長く懸念の種となっていた文通に探りを入れるような罪深いこと、恩知らずなことはせずに済むだろう。

すべてが何と俺の都合の好いように動いていることだろうか。この魅力溢れる娘は一体どういうつもりなのだ。俺にしてみれば厄介が増すわけだし、だれかに言わせると、罪を重ねることにもなるのだが、そんな企みの数々を余儀なくさせるとはな。だが、むしろこ

う尋ねるべきかもしれん。何故に彼女は自分の運命に逆らおうとするのか、とだよ。

手紙　三

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

五月二日　火曜日　夜　エッジウェアにて

われわれのことを令嬢はどう言っているか知らせてくれるという、君の約束の手紙を待たずに筆を執ることにする。彼女に関し、われわれは全員同じ意見であることを知らせたいのだ。つまり、理解力に関しては、あの年齢で彼女に優る女性はこの世にいないということだよ。容姿の点では、花も盛りの年頃ということもあって、実に見事なものだ。完璧な美女だな。だが、彼女と言葉を交わす栄誉に浴したことのある人間なら、この貧弱なほうの賛辞を捧げるような恥ずかしい真似はまず出来ないだろうな。ただ、彼女は心ならずもわれわれのところへ連れ込まれたのだということだよ。

親愛なるラヴレースよ、俺がこの天晴な女性を救い出す手立てとなることを認めてもらいたい。陰謀好きにかけては世界一という男のせいで、絶えず身を晒すこととなった数々の危険からだ。以前の手紙で訴えた際に理由としたのは、君の一族のこと、とりわけ、M卿の願いだった。あの当時、彼女にはまだお目に掛かっていなかったわけだが、今回は次の理由も付け加えることにする。つまり、彼女のため、名誉のためであり、また、正義や雅量、感謝の念、そして、慈悲の心に基づくことを訴えたいのだ。あの素晴らしい女性を守るということは、これらすべてに関わる問題なのだよ。猫被りのパーティントンがベッドを共にするのを認めさせようという、貴公の忌まわしい目論見をあの比類のない女性は挫いたそうだが、今朝出発する前にそれを知らなかったとしたら、俺も悩み苦しんでいたことだろう（何故そんな気持ちになるのか、見当もつかないのだがね）。そこが貴公には分かっていないのだよ。

お目に掛かってからというもの、俺が口にするのはこの淑女のことばかりだ。彼女の姿には、強い畏怖の念を誘いながらも、まことに淑やかなところがあるから、美徳と優雅さのすべてを一枚の絵に描かせるとしたら、その一つ一つは、彼女の折々の立ち居振舞いから取ってくることになるだろう。彼女こそ、生まれ落ちた時代を飾るためにこの世に生を享けた人間であり、最高の地位にも光彩を添えることだろう。そのまなざしは何ものをも見通し、それでいて、優しさに溢れているし、彼女が目を上げるたびに、そこには君への愛と恐れが入り交じっているように思えたのだ。美しい顔に立ち込めた暗雲を通してこぼれる微笑みの、何と魅力的なことか。表に出すまいとは思いつつも、心の底には大きな不安と悲しみが潜んでいることを物語っていたよ。

これから筆にすることをあまりにも突飛な話と君は考えるかもしれない。だが、誓っても構わないぞ。彼女の分別や判断力には深甚なる敬意を抱いているゆえ、彼女を卑しめるような男に申し開きの余地はないと考えるが、俺としては、それだけでは済まない。この天使のごとき女性が結婚することさえも残念に思えてくるのだよ。俺の目には、彼女の姿が全身これ心と映るのだ。同じように全身くまなく心という男性と出会うのなら、彼女を飾るあの美質も危険に晒されることはあるまい。あのような天使が、家庭生活といった低

俗な仕事にどうして身を落とさねばならないのだ。彼女が俺のものならば、母親となった姿を見たいという気持ちもほとんど湧くことはない。彼女に備わっているような心が子々孫々へ伝播されるという点に、いわば確信が得られるのでなければな。何故なら、要するに、肉体の所業というのは、肉体にのみ任されるべきではないかと思うからだ。君自身のほうでも、彼女に対し、これとほぼ変わらない高い評価をしているのは分かっているのだよ。ベルトン、モーブレー、ターヴィルも、全員が揃って俺と同じ考えだ。ふんだんに褒め言葉を連ねているし、その堕落を喜ぶのは悪魔だけという女性のことだけに、そのような女性を辱めるのは遺憾千万なことだと断言して憚らないのだ。

われわれからこんな気持ちを引き出す力があるとしたら、よほどの長所、よほどの美質でなければなるまい。君と同じ道楽者で、全員挙って君の側に立つ友人であり、彼女の身内に対しては、君が憤るのも尤もだと共に怒り、連中への復讐を実行する際には手を貸そうと申し出ている者たちなのだからな。だが、君をあんなにも愛しており、君の保護下にあり、親戚の犯した過ちゆえに、君のためにあれだけ苦しんできたのだ。そんな罪もない娘さんを罰するのは、われわれとしても、理屈に合ったこととは考えられないのだよ。

ここで、一つ二つ真面目な質問をさせてもらおう。この令嬢はまさしく称賛に値するわけだが、貴公の企んでいる目的は、仮に達成されるとしても、果たして、そのために用いる手段や背負い込む苦労、また、すでに貴公が弄してきた、そして、今後も目論んでいる背信やごまかし、策略や企みの数々に見合うものと考えているのかということだ。真の美質のいずれをとっても、彼女は全女性を凌駕しているのだ。だが、彼女に呑ませようと貴公が目指している一件に関して言えば、好き者を楽しませてくれるということでは、彼女にその意思とか能力があるとしても、パーティントンだのホートンだのマーティンだのといった、ただの淫乱のほうが千倍も上なのだよ。

快く与えられし喜びこそ甘美なり(三)

ということだ。それに、貴公は彼女に死ぬまで不幸な思いをさせようというのか。我が身には一瞬の幸せも味わわせないつもりなのか。

今のうちなら、まだ手遅れではないのだ。おそらく、言えることは精々そんなところだろう。もしも、彼女には指一本触れずにいるばかりでなく、彼女の尊敬や好意的評価を失わずにおこうと思うのならな。この呪わしい家に来てしまったからには、彼女が貴公の手を逃れるのは不可能なことだと考えるからだよ。貴公に言わせるとシンクレアだが、まったく途方もない偽善者だな。令嬢がわれわれと同席している間中、よくもあんな猫被りな真似が出来たものだ。誠意を尽くし、結婚することだ。そして、勿体なくも連れ添ってくれるというのを感謝することだ。有難く思わないようなら、貴公は最低の男だよ。この世でも、また、あの世でも呪われることだろう。いまだかつてこれほど女のために心を動かされたためしのない男、そして、承知のとおり、殊の外貴公に肩入れをしている友によって、仮に貴公が裁かれることになるのなら、そうなって然るべきだろうし、また、そうなるはずだと俺は確信しているのだ。

貴公贔屓の友
J. ベルフォード

友人一同は、俺が以上の趣旨の手紙を認めるため席を外すことに同意してくれた。われわれが手紙を認める際に用いている暗号について、連中にはまったく察しがつかないわけだから、この手紙を読み聞かせてやったよ。連中もこれで結構ということで、各自が自発的に署名をしてくれた。急ぎ発送することにする。何か忌まわしい企みが始まるのではないかと恐れるからだ。

トマス・ベルトン
リチャード・モーブレー
ジェームズ・ターヴィル

たった今、君の手紙が両方とも届けられたところだ。俺の考えを変えはしないし、また、彼女には嫌われてしまったわけだが、彼女のための、君に向けた衷心からの願いを取り下げるつもりもない。

手紙　四

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月三日　水曜日

この素晴らしい女性に対する俺の目的、計画、及び決意に関しては、労を厭わずにその全容を既に説明してあったわけだが、まことにもって奇妙な話ではないか。未だ何一つ試みず、何の企てもしていないというのに、彼女を案じ、とりとめのないことを言い出すのだからな、貴公も。それでいて、以前のある手紙においては、貴公の意見として、彼女の置かれている立場はうまく利用出来るかもしれないし、彼女にも落とされる可能性はあるとほざいていたのだぞ。

貴公の意見の大半、とりわけ、貞淑な女から与えられる喜びと不身持ちな女から受けるものとの違いを考察しているやつは、事に先立って言われるよりも、事後の感想として述べられるのが相応しいものだ。

「快く与えられし喜びこそ甘美なり」というのは、貴公と共に、詩人の言葉どおりだと認めよう。だが、教育があり、体裁を大切にする女が、攻められもしないうちに自分から応じるなど、考えられることかな。それに、俺はこの女性に投降を勧めるような真似をしていただろうか。困難が待ち受けていることは疑いのないところだ。それゆえ、初回の攻撃は奇襲に頼らねばならないわけだよ。もしかすると、多少残酷なことが必要になるかもしれないが、争いの中で同意が生まれることもあるだろう。抵抗の中で譲歩が得られるかもしれないのだよ。だが、最初の葛藤が終わると、それ以後のものは徐々に弱まり、ついには喜々とした応対が見られることになりはしないのか　…　これこそが試されねばならない点なのだ。これまで俺が述べたところを、捕えられて間もない小鳥の譬えで説明してみよう。われわれは、幼い頃には小鳥を相手にし、大人になると、今度は女に取り掛かるという寸法だ。そして、おそらくその両方が、われわれの戯れ気分の惨い仕打ちを順番に味わうことになるわけだよ。

囚われの身となった大空の生き物が新たな境遇に馴らされて行く際の、あの心を魅了す

る変化の過程を観察したことはないかな。最初はすべての餌を拒み、金網に突き当たって我が身を傷つけ、ついには、その華やかな羽毛を撒き散らし、びくともしない鳥籠をすっかり覆い尽くすのだ。頭を出してはみても、美しい肩が引っ掛かってしまう。そして、やっとの思いで頭を引っ込め、苦しそうに喘ぐのだ。それから、思案げなまなざしですっくと立ち上がると、よく眺め回した上で、金網で出来た天蓋を試してみる。息が整うと、新たな怒りを込めて、その美しい頭や身体を再びぶつけてくるのだ。金網を啄み、面白がっている飼い主の指をつつく。やがて、努力をしても効果のないことを知ると、疲れ果てて息も切れ、鳥籠の底に身を横たえて喘いでいるのだが、見るからに、惨い運命や失われた自由を嘆き悲しんでいる様子だ。そして二、三日も経つと、試みても無意味なことが分かって、抜け出そうとの奮闘はさらに影を潜め、新たな住まいにも馴れてくる。とまり木からとまり木へと跳び渡り、いつもの陽気さを取り戻す。そして、日毎に歌を囀っては我が身を慰め、また、飼い主の恩に報いてみせるのだ。

ところで、捕えられ、籠に押し込まれたのを嘆いて、本当に飢え死にしてしまった小鳥を俺は知っている。だが、そんな馬鹿真似をする女にはいまだかつて出会ったためしがない。ただ、こういった際に愛すべき者たちが、死んで見せる、と恐ろしく息巻くのは、これまでにも耳にしているところだ。だが、女には小鳥以上の分別があることを認めてやらなくては、女を贔屓していることにはなるまい。もっとも、だれしも認めるところだろうが、手に入れるのに骨が折れるという点では、ご婦人よりは小鳥のほうが上なのだ。

この譬えに沿って続けよう。囚われたご婦人の怒りが極めて大きい場合は、今も言ったことだが、脅しを掛けてくるのは事実だ。暫くの間は食べ物さえも拒むのだ。しきりに懇願したりするとなおさらで、拒んでみせると心配してくれると思うのだな。だが、愛らしく拗ねてはいても、間もなく食欲が戻ってくる。少しずつ折れてくる様子を眺めるのは愉快なものだよ。空腹に苛まれると、まずは、おそらく涙ながらの一かけらを、独りこっそり口にする。次には、君の目の前で、いやいや口に運んでは溜め息をつく。溜め息をついては億劫そうに口に運ぶようになるのだ。時々は、食べ物がまずいと、流れる涙を一滴二滴、薬味にして飲み込んでみせる。やがて、食ったり飲んだりするようになるが、君の願いを入れてのことだ。そして、君のために生きて行こうと心を決めるのだ。次には、叫ぶ言葉も媚びた調子を帯びてくるし、厳しい非難が穏やかな呟きに変わり、「よくもそんな厚かましいことを　…　裏切り者」だったのが、「そのようなことを、どうしてですの、あなた」になるといった具合だ。君を突き放していたのが、引き寄せるようになる。もう爪を剥き出しにして抗うこともなく、愛らしくじゃれつく気ままな小猫みたいに、鋭い爪をしまい込んだ柔らかな前足で君の頬を撫で、微笑んだり、涙をこぼしたり、身を寄せてきたりしながら、自分のことを思いやってほしい、心変わりはしないでほしいと懇願してくるのだ。この段階で女が君に求めることといえば、精々そんなところだ。そして、この時期こそ男にとっては、昨日よりは今日と、日々嬉しさが募って行く時期なのだよ。一人の相手だけで満足しなければならない場合だがね。

さて、ベルフォードよ、愛しの我がクラリッサ嬢に対し、これまで以上の行動に出てはいけないということになれば、彼女と他の娘との違いをどうやって知ったら良いというのだ。この段階で手放すことにすれば、それこそとんでもない笑い種だろう。見事な歌を奏でてくれる気にはさせられないものか、また、他の娘たち、それも、ひどく臆病な連中の

場合と同じように、甘んじる気持ちを彼女に起こさせられないものか、試してもみずにどうして分かるというのだ。

だが、ここで、人間という生き物の身勝手さについて少し考えてみよう。おそらくは自分たちに劣らないほど立派な他の生き物（少なくとも、罪を犯さないということでは上だよ）に対して、男と女の両方が加えている残虐行為のありふれた例を二つ三つ挙げることも出来るだろう。見慣れているから平気だが、でなければ、ゾッとするようなものだ。誓っても構わないが、ジャック、われわれが普通自覚している以上に、人間性の中には野蛮なところが含まれているのだよ。要するに、より罪のない生き物たちの恨みを晴らすためにも、時々は人間様を懲らしめてやるのもさほど的はずれな話ではないということだ。

具体例に移ることにしよう。

男は勿論のこと女たちにしても、極めてありふれた話だが、これっぽっちの自責の念も抱かずに、羽毛を纏った哀れな歌い手を［ご覧のとおり、小鳥の譬えはまだ終わっていないのだよ］罠に掛け、籠に押し込めて苛み、真っ赤に熱した編み針でその目を抉り出すことすらやってのけるのだ。だが、その歌い手は、大きさの割りからすると、人間たち以上の生気を備えており（小鳥というのは全身これ魂だからな）、その結果、人間と同程度の感情を持っていることになるわけだ。にも拘らずだよ、もしもどこかの正直者が、至極おとなしい言葉と穏やかなことこの上ない方法によって、幸運にも、籠の鳥となっている者を説き伏せて逃げ出す気持ちを起こさせた場合には、そして、女のほうでも、檻を破って喜びに満ちた自由の大空へ飛び出して行くことに同意するとしたら、驚くなかれ、その男に向かって四方八方から凄まじい抗議の叫びが沸き起こるのだ。

以前、君と俺がチェルムズフォード近くのしけた村で目にした騒ぎと同じことだよ。腹を空かせた哀れな狐が、スキを窺って艶やかな羽をしたガチョウの首に咬み付き、持ち去ってしまったわけだ。すると、付近一帯の男の子や女の子、爺さんや婆さんが駆けつけて来たが、爺さん婆さんたちの皺だらけの顔にはしばらくは敵意が漲っていた。爺さんたちの武器は熊手、干し草用のフォーク、棍棒にバットだ。婆さんたちが手にするのは、モップに石炭シャベル、火箸に火かき棒だし、ガキどもは手に手に土塊や小石や煉瓦の破片を握り締めている。風よりも足の早いコソドロを追い掛けて走るにつれ、雪達磨のように連中の数は増して行き、そのすぐ後ろでは、辺りのやくざな野良犬どもが総出でワンワン吠え立て、どえらいコーラスの仕上げをしている有り様だ。

覚えていないかな、あの光景を。貴公は覚えているはずだよ。想像力を働かせると、大胆な略奪者が晒された危難への深い同情の念に煽られることもあって、まるで昨日のことのようにあの光景が目に浮かんでくるのだ。それと、これも覚えていないかな。感心な狐君が、運よく通り掛かった踏み越し段、年寄りも若者も折り重なって転げ落ちたあの踏み越し段に助けられ、また、くねくね曲がりながら走ったお陰もあって、連中の獣みたいな激しい怒り、雨あられと飛んでくる棒をかいくぐって逃げおおせた時には、あたかも我がことのように、二人で心の底から喜んだことをだ。そして、頭の中では、知る者とてない隠れ家まで狐を追い掛け、あの不敵な盗人が、くぐり抜けた危険に釣り合うだけの喜びをもって、骨折って手にした獲物を楽しむ姿を目にしている気になったこともだ。

昔の話だが、魅力的な田舎娘を手ひどく後悔させてやったことがある。お気に入りの虎猫が、可愛らしくてまるまると太った、ガラス玉みたいな目をした二十日鼠を呑み込む前

に、残酷にいたぶるのを見て、その娘は大いに楽しんでいたからだ。いやはや、何て娘なのだ。腰を下ろしてその様子を眺めながら、俺はこんな独り言を漏らしてしまったよ。俺に放り上げられた上で、また捕えられるというのはどんな感じなのか、ぽんと突き放されたり引っ張り込まれたりすると、お前はどんな気持ちになるのか、恰好の機会が訪れるのを待って、ひとつ試してみることにする。だが、この野蛮な四つ足の獣が獲物に対して最後に加えた仕打ちのように、お前の命を奪おうというのではない。むしろ、生かしておいてやるつもりだ、とな。そして、この娘との間ですべてが終わった後、こんな気を起こすきっかけとなった出来事のことを思い出させてやったのだよ。

もう一つ別の場合にも、情けなどは一切掛けてやらなかった。老いぼれ美食家の娘との件だが、この爺さんは憐れみのかけらさえ見せずに娘に教え込んだのだ。ロブスターは生きたまま焼くのだとか、可哀相に、豚をつぶす時は死ぬまで鞭で打たせろだの、鯉のうろこはうろこに逆らって擦り落とせとか、シチュー鍋の中で飛び跳ねさせろ、その血をスープにして盛り付けろだのとだよ。これも豪勢にやるためであり、食欲を促すためというわけだが、俺の食欲ときたら、増進剤などは不要なのだよ。しかも、実際の話、きわめて旺盛に出来ているのだ。

ご立派なことこの上ない人間でさえ、ある種の生き物に対しては、われわれが他の生き物を扱う時と同じ気ままな態度で、いや、もしかすると、さらにあくどい態度で接しているのだよ。それを証明するような類似の例なら、もっともっと示すことも出来るさ。もしも、貴公に一切口を挟ませないつもりならな。だが、すべて神の造り出したものに変わりはない。それも、すでに述べたことだが、強い生気に溢れ、鋭敏な感情を持った生き物なのだ。だから、慈悲深い顔をする者は、すべてに亘って情け深く振る舞うべきなのだ。どこかで読んだことがあるが、「慈悲深き者は、自らの家畜にも情けを施す」(四)そうだぞ。

貴公の手紙の、令嬢に接する時は憐れみの情によって動け、と説いている部分についてだが、差し当たってはこれくらいにしておこう。

だが、この魅力的な娘のために貴公がこれほど熱心になる主な動機は何なのか、察しはついている。貴公がM卿と手紙のやり取りをしているのは分かっているし、枷をはめられた俺の姿を早く見たいと、ずっと前から卿が望んでいたことも承知している。それに、貴公は卿の姪の一人に目をつけているから、その叔父貴のお褒めに与りたいというわけなのだ。だが、貴公は知らないのかな。貴公の望みを叶えるためには、俺の同意が必要だということをだよ。それに、この世に二人といない素敵な女性を俺が征服したとして、その見返りに得るものは、掛けた苦労に見合うと思うのかなどと、貴公がそんな質問をぶつけることで、女性すべてを侮辱していたと教えてやったら、シャーロットみたいな女の子のことだ、それこそ、貴公にとっては結構な口添えとなることだろうな。勝ち気な女はどちらのほうを先に許すと貴公は考えるかな。そんな質問を口にして平気な顔をしている、人を見くびったようなろくでなしかな。それとも、いい女の尻を追い掛けてモノにするのが人生のどんな喜びよりも楽しいという男のほうかな。貞淑だと思われたがっている女でさえも、自分のことを、相手にするには年が行き過ぎているなどと言い放つ男に対しては、消え去ることのない反感を抱くものだというのを、俺が知らずにいたとでも思うのか。エセックス伯の破滅をもたらすのに与って力があったという点では、謀反以上に、老いぼれて腰も曲がっているという、エリザベス女王の容姿に対する非難(五)のほうが上だったのでは

なかったかな。
だが、俺の苦労と、それに対する見返りという点についての貴公の異論に関し、さらに一言、二言付け加えておこう。
狐狩りに夢中の者は、やくざな獣を追い掛けて、首や骨を折る危険も顧みないが、その獣は仕留められても、人間の食い物にも犬の餌にもならないのではないのかな。
もっと上等な獲物を狙う狩人たちにしても、狩りそのものに比べれば、鹿肉のほうにはさほど価値を見出していないのではないのかな。
だとすれば、あらゆる獲物の中で最も高尚なものに忍耐強く執着するからといって、さらには、愛の密猟者ではないからといって、何故に俺が非難されねばならないのだ。女性が侮辱を受けねばならないのかな。貴公の質問はそんな意味にも取れるのだぞ。
今後は貴公のご主人様を見習って、われわれの慰みや喜びの主たるものを提供してくれる女性には、もっと敬意を払うことだよ。
じきに続けることとする。

手紙　五
ラヴレース氏より　［承前］

俺の心のことを、「陰謀好きにかけては世界一」と言っているが、まさしく至言だな。名誉な話だよ。心から感謝しているぞ。結構目が利くじゃないか、貴公も。ボワローの聖職者(六)そのままといったところで、二重あごを突き出し、そっくり返って歩いているよ。お褒めに背かぬようしなくちゃならんだろうな。それに、人を殺めもしないうちから、人殺しの罪を悔いろとでも貴公は言うのかな。
「侍女のごとくこの淑女に仕えているのが美徳と優雅さだ。自分の生まれ落ちた時代を飾るためにこの世に生を亨けたのは確かだ」なんて、見事な台詞だな、ジャック。「最高の地位にも光彩を添えることだろう」というのだからな。しかし、それで褒めたことになるというのか。最高の地位が最高の美質によって飾られるのでなければな。地位など見掛け倒しだよ。最高の地位だと　…　何という愚か者なのだ。俺のことを知っていながら、白テンの毛皮だの、金糸銀糸に貴公はそうまで心を奪われているのか。黄金を纏うに相応しいのは、黄金を勝ち得た俺以外にはいないのだよ。それゆえ、これからは言い回しを改めることだな。彼女のことは、この世で最も幸せな男を、そして（彼女自身と女性に敬意を払って）、世界最大の征服者を飾る者と触れ回るのだよ。
それから、貴公が想像するところでは、彼女は俺を愛しているということになるが、それが俺には一向にはっきりしないのだ。場合によっては俺と手を切るという彼女の申し出や、俺にはほとんど信を置いてくれないことからしても、次のように尋ねる資格が俺にはあると思うのだよ。つまり、彼女自身の意思とは裏腹に彼女を口説き落とした男、頑強に一歩も引かぬ戦において、正々堂々と彼女を捕虜にした男にとって、彼女はいかなる価値を持ち得るのか、ということだよ。
われわれと同席した際の彼女の眼差しから得た貴公の推論についてだが、そこに愛の光が一筋でも差していたと考えるようでは、彼女の心はまったく見抜いていないということ

になる。彼女の目には俺も注目していたよ。そして、俺がはっきりと看て取ったのは、俺と俺が引き合わせた連中とに対する、まずは当然なところだろうが、無礼に当たらない程度の嫌悪の情だよ。あの夜、懇願するのをすべて振り切り、早いうちに退席したことからして、俺に対する優しい気持ちなど、彼女の心にはほとんど存在しなかったことを確信出来たはずだ。それに、心と裏腹な目付きなどというものは、いまだかつて見せたことのない女なのだよ。

彼女は全身これ心だと貴公は言う。そのとおりだと俺も思うよ。しかし、彼女のような心が俺のような心に出会った場合、また、この言い回しにこだわるが、彼女の内心の好みに〈出会った場合〉、彼女と同じような心を増やして行くことにはなるまいなどと、何故に貴公はそんな想像をするのだろうか。

貴公のくだらない忠告に従って結婚するとしたら、『放蕩児年鑑』で俺は途方もない醜態を晒すことになるだろう。令嬢はこの掌の内にあるのだよ。それでいて、俺の思いのままに身を委ねようとの気持ちからではないのだ。愛を拒み、愛に逆らっている。油断なく用心に用心を重ね、俺の廉恥心など一切信用してくれないのだ。身内の奴らのほうでは、すでに最後の一線は越えたものと考えているし、彼女自身も、最悪の試みがなされるものと予想しているらしいのだ［プリシラ・パーティントンの一件だよ］。何たることだ。これでも、俺らしく振る舞ってはいけないと言うのか。

それにしても、どうして令嬢に罪はないとするのだ。それに、彼女は俺を愛していると貴公は言うが、それは何故なのだ。

罪はないとのことだが、是非とも主張しておかねばなるまい。俺に関するかぎり、そして、人柄全般とは別の意味合いからするなら、彼女は罪がないとは言えないのだ。若さの盛りと絶頂にある俺、壮大なる悪事(ア)への能力をこれだけ備えた俺様に枷をはめようと願っているのであり、俺が立てることの出来る最も厳粛な誓いを、そんなことになりそうな気もするのだが、もしも破ったりすれば、俺の地獄行きをさらに確かなものにしてしまおというのだ。そんな女に罪はないなどと、果たして言えるのだろうか。いいかな、いかなる男といえども、守れそうにないと思う時には、ごくありきたりの誓いでさえも立ててはいけないのだ。これこそ良心というものだ。これを廉恥心と言うのだよ。結婚の誓いを守れそうに思う時、その時こそ結婚を考える時なのだ。

貴公の言うとおりで、疑いもなく、これほどの女が堕落するのを見て喜ぶのは悪魔だろう。ただ、この点は確信しているわけだが、俺は好きな時に結婚出来る立場にあると思うのだ。そして、こういう償い方がある以上は、彼女の感謝を要求する資格があるのではないだろうか。彼女のほうでも、恩義を施したというよりは、むしろ恩を受けているとの自覚を持つのではなかろうか。それに、実際の話、ベルフォードよ、これまでのところ、この令嬢のお堅いのには歯が立たないのだよ。貴公と貴公のろくでなし仲間が他の女たちを堕落させたようにはな。そして、その女たちが、今では、街中に争いの種を蒔き、心中沙汰を引き起こしているのだ。貴公らはその痛みを噛みしめてみることだな。

∴　　∴

(ア) 第三巻、手紙十九の第四段落を参照のこと。

ちょっと邪魔が入ったのだ。再開するとしよう。

この令嬢の道徳心が揺るぎないものであるということ、これが両者の罪を軽減してくれる点だ。そして、口説き落とされた際に、美徳と愛情の中間を取る術を弁えてくれるようなら、その時こそ彼女は俺の妻となることだろう。というのも、俺はすでに確信しているからだよ。愛に流されず、策略にも動かされない女といえば、この世には彼女をおいて他にいないことをな。

ところで、思い浮かべてもらいたいのだよ（魅惑の君が落ちた後の話だ）、俺がものうげに脚を組み、ソファーに身を横たえている姿をな。俺の目の中では愛の神が舞い、朱に染まった顔立ちの一つ一つを眺めては悦に入っている。先頃まであれほどお高くとまっていた愛しの駄々っ子が、今はすっかり俺の言うなりになり、手招きをすれば、ノロノロと近寄ってくる。溜め息に胸を波打たせ、指を目に添えながら、言葉にならない非難をブツブツ唇から漏らしている。そして、「こっちへ来るのだ、おまえ」という俺の言葉に、足を速めるのだよ。

俺は片方の手を脇腹に突っ込んだまま、もう一方の手を差し延べ、彼女が遠慮がちにしているのを、傍に来るよう促し、「さあ、キスをしておくれ。快く与えられし喜びは甘美なりと、ジャック・ベルフォードも言っているじゃないか」と語り掛ける。

彼女は紫色の唇を差し出してみせる［その時には、ジャック、彼女の珊瑚のような唇も紫色になるのだよ］。「そんなに深く溜め息をつくものではないぞ、おまえ。そなたの謙虚な愛を待ち受けているのは、誇り高い抵抗がもたらしたものよりもさらに幸せに満ちた時間なのだからな」

「私のこの燃える唇に、もう一度うつむけるのだよ。かつてはあんなにも勿体ぶっていた、白鳥のように艶やかなそのうなじをな」

「そうだ、それでこそ我が愛する乙女だ」

「さあ、もう一度」

「聞き分けの良い可愛い奴だ」

「あゝ、永遠に華やぎ匂う、我が誇りとする者よ。そなたを試すのはもう十分だ。明日の太陽は　…　」

この言葉と共に俺は立ち上がり、今にも物を言い出しそうなこの心臓に、胸波打たせている魅惑の君を抱き寄せるのだ。

「今こそ、そなたもプライドを捨てて遜り、私から受けた恩を認めることだろう」

「明日の太陽は　…　」と、そこまで言うと、俺はただ恥じらいながら身を任せていた者の手を振りほどき、悠然と部屋中を歩き回るのだ。「明日の太陽は、そなたへの誓いを捧げるべき祭壇を黄金色に染めてくれるのだ」

そして、ジャック、歓喜が押し寄せるのだ。そして、彼女の晴れやかな目を溢れ出る光が、一気に、真珠を滴らせた頬から立ちのぼる香気を吸い取ってしまうのだ。そして、熱い想いに両手をしっかりと握り締めたその目は、「私のラヴレースに神の恵みのあらんことを」と叫んでいるかにも思われる。喜びに言葉も出ない口の代役というわけだ。喜びがあまりにも強く、感謝の気持ちを伝えるのには、言葉はあまりにも無力なのさ。これからの暮しの中では（と、口がきけるようになると）、ひたすらに、ただひたすらに不滅の恩義を有難く感じ、それに報いるよう努める所存です、と彼女は誓ってくれるのだ。

我が魅惑の君をこの段階にまで至らしめることが出来れば、それこそ、願ったり叶ったりということではないかな。試してみる価値があるのではないかな。前にも言ったことだが、結婚する気になれば、俺にはいつだって出来るのだよ。彼女が俺以外の男のものになるなど、あり得ないことだ。外聞もあれば好みもある。まして、言い寄られるはずもないのだ。俺のことを分かっている者なら、彼女の恐れる最悪の事態が今こそ懸念されるなどと言ったところで、だれ一人信じたりはしないだろうからな。

俺はこの称賛すべき女性が備えている長所や嗜みに対し、また、その美徳や貞節に関しても、男として（貴公も承知のとおり）最高の評価を与えているのだ。もっとも、以前の手紙では、彼女にも「落とされる可能性はある」(ア)というのが貴公の意見だったな。だとすれば、俺としてはさらに事を進めざるを得ないことになるのではないのかな。貴公に反駁するために、そして、幾度となく主張してきたことだが、彼女は俺が実際に考えているとおりの女なのか、仮にも結婚した場合、望みどおりの姿を見せてくれる女なのか、その点に確信を得るためにもだよ。

それに、この令嬢はわれわれの感情を思いのままに操ることが出来るのだ。人の心を動かすことにかけては、その術をあれほど完璧に弁えている者もまずいない。これは、彼女の身内全員にも分かっていることで、彼女を恐れると同様、尊敬もしている点なのだ。俺も気づいているし、身をもって味わう場面が多くなるのは疑いのないところだ。この神々しい娘は、その妙なる調べの哀歌を（相応しい機会が与えられれば）魅力たっぷりに奏でてくれることだろう。涙を湛えた目は限りなく美しいものだ。俺が階下のニンフ二名に真っ先に教えたのは、新たな話題に際しては、そのいくつかの嘆き様に区別立てをすることだし、他のもの以上に、見事に苦悩に似合った嘆き方があるのだということだよ。

それはさておき、貴公が並べていた異議の件に話を戻そう。おそらく貴公は、貴公自身の名にかけて、また、相棒たちの名にかけて、こう言いたいのだろうな。貴公らがそれぞれに誘いの手を伸ばした相手すべてを見渡しても、魅惑的な我がハーロー嬢ほどの身分や美点を備える者は一人もいなかったのだ、とな。

だが、ひとつ尋ねたい。女の側の美点が大きいほど、男の得る勝利も誉れ高いものになるというのが、われわれが常に掲げてきた処世訓ではなかったのかな。また、身分について言えば、名誉心や廉恥心、家柄を誇る気持ちがあれば、身を落とした者を立ち直らせることにもなろうし、奮起して権利を回復することにもなろう。その結果、どのようなことが起ころうと、その種の女にとっては、一流の男ではなく二流の相手で我慢せざるを得ないことから、自尊心に傷がつくだけの話なのだ。それに、案外、そんな不運のためにかえって一層有益な者にもなれば、幸せにもなれるのだよ。何故なら、（評判を汚したため、大っぴらに出歩くわけにも行かず、家庭の暮しに馴染んで）さらなる非難に晒されることから救ってくれた男には恩義を受けていると考えて当然だろうし、一方、その女の財産や彼女との縁組が、男にとっては負い目になるからだ。そして、すでに過ちを犯しているということが、その女に思慮分別と良心があればの話だが、現在および将来に亘って、男にとっての担保ともなるわけだよ。

だが、貧乏な娘の場合［例えば、あのローズバッドのような娘のことだが］、教育のお陰

(ア) 第三巻、手紙四十七の第九段落を参照のこと。

で立ち直るということはない。世間体を重んじる家からはことごとく追い出される。秘密をうまく隠しおおせただけの者たちから、おそらく一番酷い仕打ちを受けるのだ。逃げ込む避難場所もなく、売春婦、娼婦、街娼に身を落とすのが、こういった貧しい女の運命というわけだよ。貧困や欠乏や病にしっかりと付き纏われ、その惨めな生涯は、時ならぬ死によって幕を閉じることになるのだ。

さあ、これで貴公らも全員口を揃えて言うのではなかろうか。羊よりもライオンに挑みかかるのがより男らしいことなのだ、とな。貴公も承知のことだが、常日頃から俺は、鷲たる者の力を例証すべく、最高の獲物に狙いをつけているのだよ。また、ミソサザイやシジュウカラ系（phyl-tits）(ア)、セキレイなどに襲いかかるのは潔しとしないのだ。

今回の件で俺自身にとって最も不都合なことは、勝利を収めた暁には、それがあまりにも栄光に満ちたものであるため、今後ともその水準を保って行くのは不可能になるという点だな。以後の企てはすべて、これに比べれば、みすぼらしいものになってしまうのは必定なのだよ。俺もそのうち、この征服のことを思い返すにつけ、オーストリアのドン・フアン(七)が世に名高いレパント海戦の勝利で味わったのと同じくらい不幸な思いをすることになるのだろうな。あの時提督は、その後の偉業のいずれにしても、以前の栄光とは肩を並べるわけに行かないことを悟ったということだ。

俺の申し立てや理由づけが容易に論破され得ること、また、正当な非難の的となるやもしれないことはよく分かっているのだ。だが、だれに非難されるというのかな。同志のだれからでもあるまい。同志たちはその不変の生き様によって、今貴公らが突然にしかつめらしい顔をして、また、妬みの気持ちから咎め立てしていることを、俺が貴公らの将軍となるはるか以前から今この時に至るまで、容認していたわけだからな。こと貴公らに関しては、これで身の証も立ち、企ての正しさを立証したことにもなるだろう。差し当たって懸念すべきこととしては、今触れた点のみということになる。

それゆえ、納得してもらいたいのだ。俺こそが（われわれの主義に則れば）正しく、貴公は間違っているということをだよ。あるいは、少なくとも、口を閉ざしてもらいたいということだな。否、納得することを命じておこう。次の手紙では、間違いなくその旨を知らせてもらいたいのだ。

手紙　六

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

五月四日　木曜日　エッジウェアにて

貴公は救いようもない破廉恥漢ゆえ、一旦心に決めたことを断念するよう、世の中でも最善の理由を並べて見せたところで、それは、われわれがかつて目にしたことのある狂人

(ア) Phyl-tits とは、Tom-tits（雄のシジュウカラ）に対する造語で、Phyllis-tits（雌のシジュウカラ）とすべきもの。ここで述べるまでもないことではあるが、ラヴレース氏は、この心許す友人へ宛てた手紙では、陽気な気分に羽目を外し、しばしば勝手気ままに単語や辞句を捏造しているのである。その点に関して氏が呈示する滑稽な理由については、第三巻、手紙二十一の最後から三番目の段落を参照のこと。

の振舞いを真似るようなものだろうな。帽子を振って嵐を鎮めようとしていた奴のことだよ。しかしながら、令嬢に備わる美点が貴公に対しては依然として力を持つものと考えたいのだ。だが、諦めるつもりはないというのなら、貴公が憎しみを抱く連中のところから選び出したこの淑やかな羊に対し、その番犬が犯した罪業の恨みを晴らすつもりだというのなら、そして、魅力溢れる人物の中で渾然と輝きを放つ美、知識、思慮分別、無垢さにも貴公は心動かされることなく、彼女は操を捨てねばならないというのなら、それも、自分が保護者として選んだ男の手に落ちねばならないというのなら、俺としては、貴公の罪に対して責を負うようなことは金輪際願い下げにするつもりだ。

まったくの話、この件が頭にこびりついて離れないのだよ、ラヴレース。令嬢から好意的見方をしていただくような栄誉に与っていないのは分かっているのだがな。あの父親の残忍な呪いのこと、また、身内全員の冷血非情さのことを思い返すと、いよいよ放って置けなくなるのだ。ただ、それにも拘らず、貴公の恩知らずな目的を実行に移すには一体どんな手順を積み重ね、どんな手管や仕掛けを用いるのか、その点を（先へ進めるつもりならの話だが）知りたい気もするのだよ。それに、あゝ、ラヴレースよ、俺のたっての願いだ。貴公も男なら、貴公が引き合わせたあの猫被りな連中が、得意げな顔で彼女を見下ろすようなことは絶対にさせないでもらいたい。それから、男らしくない手管の餌食にするのも止めてくれ。もしも彼女が、こんな言い方が許されるとして、正面きっての誘惑に屈するというのなら、そして、貴公が愛の力で、あるいは、人道に悖るところのない術策によって、彼女の心に弱さを誘い出すことが出来るというのなら、俺としても、これほど彼女を憐れんだりはしないことだろう。そして、大胆にして意志堅固なる恋人に抵抗し得る女性はこの世には存在しないとの結論を下すことだろう。

ちょうど今、俺の叔父のところから使いの者がやって来たところだ。叔父は壊疽が膝にまで及んだらしく、長くは持たないと外科医たちも宣告しているのだよ。それで、すぐに使いを寄越したわけだが、「臨終に立ち会い、両の目を閉じてもらいたい」というショッキングな伝言だ。叔父の件ないしは別の用件で、俺の召使か叔父の召使が毎日ロンドンに出掛けざるを得ないことになるので、何か貴公からの手紙とか指示の類いがありはしないかと、だれか一人を必ず出向かせることにしよう。可能なかぎり頻繁に便りをしてくれるのが、俺への思いやりということになるだろう。というのも、哀れな叔父貴が死ぬことにでもなれば、俺の懐具合が相当良くなりそうだということはあるのだが、死人と医者が間近にいる光景というのは、何と言っても好きになれないのだよ。「医者と死人」と言うべきだったな。それが自然な順序だし、大抵の場合、医者というのは死の先触れに他ならないのだからな。

それゆえ、貴公がこの頼みを断るようなら、俺の無礼さに腹を立てたのだと考えることにするが、同時にまた、次のようにも言わせてもらおう。自分では恥じらいもなく犯している罪に対して無礼な態度を取られたからといって、だれにせよ、腹を立てる権利などはないのだということだよ。

J. ベルフォード

手紙　七

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

ご親切にも早速お便りをいただきましたこと、貴女とヒックマンさんにお礼を申し上げました上で、女専制君主みたいに脅しをかけておられます、大好きなお友達のご命令に従うこととといたします。

《その後、令嬢は火曜日の朝ラヴレース氏と交わした、氏の四名の友人およびパーティントン嬢に関する話題の詳細について、氏の手紙（手紙一）とほぼ同趣旨のことを述べている。次いで、以下のとおりに筆を進めるのである》

あの人は絶えず私のことを、あまりにも堅苦しすぎると咎めております。あの人に言わせますと、私はいつもあの人に不機嫌な顔を見せているというのです。これほどまでに打ち解けない態度はソームズさんにも取らなかったはずだし、光栄なことに、間もなく自分のものと呼べそうに思う人間の心に、これだけの時間が経っていながら、前もってはっきりとした思いやりの気持ちをほんの少しでも起こさせることが出来ずにいるなんて、ご自分の期待していたこと、そして、考えていたことのいずれとも相反する話だ、とおっしゃるのです。

私の気持ちに取り入ろうというのですが、何て愚かで偏った考えなのでしょうね。私がよそよそしい態度を取らねばならないのは何のせいなのか、お分かりではないというのですからね。でも、プライドが分別を食べ尽くしてしまったのです。実際、薄汚い下劣なプライドが真のプライドを飲み込んでしまったのです。真のプライドであれば、あの人も心の中にはびこっております虚栄心などに動かされることはなかったはずなのです。

それでいて、あの人は私に喜んでもらうこと以外には一切誇りを感じないような素振りをなさるのです。そして、尊敬の念だの謙譲の心だのといったことをいつも口にしております。でも、初めてあの人と顔を合わせました時にも申しましたが(ア)、ご自身の容貌のことに関心があり過ぎますから、どんな人と結婚なさいましても、あまり奥様のことを高く評価することはないと思うのです。この点は確信いたしております。それに、あの人は外面的な強みや、あの押し出しの良さをひどく誇りに思っているのですが、それに気づかないようでしたら、私も見る目のない人間ということになりましょう。その押し出しの良さにいたしましても、上辺だけしか見ない人の目にはなにがしかの長所と映るといたしましても、他の何にもまして、おそらく、自信に由来するところが大きいのです。

貴女もご覧になられたのではないでしょうか。幸せにもお宅に泊めていただきました折のことですが、あの人がチャリオットのほうへ向かいます際、辺りに目を配りながら歩いていた姿をです。見てくれの良いご自分の容姿や風采がどのような人たちの目を引き付けているのか、まるでそれを観察しているみたいでしたわね。

でも、確かに、垢抜けもしない伊達男が、まるで誇りにすべき容姿を備えているみたいに、得意げにしている姿は私たちも目にしておりますわね。身の回りのことに骨を折りま

(ア) 第一巻の十頁を参照のこと。

しても、自分の欠陥をますますさらけ出すだけだということも、同時にまた明らかなことでしたのにね。

これまで何度も目にしてまいりましたが、実際よりも大物だとか、優秀だとか思われるのが好きな人間というのは、その見せ掛けの姿に探りを入れたいという気持ちを誘い出すだけなのです。そして、そうなりますと、大抵の場合は軽蔑の念を引き起こすことになってしまうのです。見せびらかすということは、すでに申し上げたと存じますが、弱点があることの、そして、頭とか心、あるいはその両方に何かおかしなところがあることの、絶対確実な印なのです。自分自身を褒めそやす人は、隣人を貶めることになりますが、隣人のほうでは、もしも相手が控え目にしておりますと、尤もなこととして認めるかもしれません長所でさえも、疑ってみたい気持ちになってしまうものなのです。

ひどく深刻なご様子ね、と貴女はおっしゃるでしょうね。そのとおりなのです。月曜日の夜以来というもの、私の中でラヴレースさんの評価は極端に下がっておりますし、好ましい見込みをもたらしてくれそうなものは、将来に何一つ見えないのです。あの人のようにムラのある心の持ち主が相手ですと、私にとりましては、一体どのようなものが最善の見込みと言えるのでしょうか。

私の衣類が届けられましたことは、先の手紙でお話ししたと思います。貴女のせいでひどく心が乱れてしまいましたので、その点に確信が持てないのです。でも、お話しするつもりでおりましたのは確かです。木曜日に届けられたのですが、私の数ギニーは添えられておりませんでした。また、ドレクセリウスの『永遠論』と、古くからの名著『信仰の実践』、それに、フランシス・スピラに関する一冊(八)以外には、本も送られてまいりませんでした。想像いたしますに、兄が機転を利かせたつもりなのでしょうね。兄は、死と絶望というものを私に指し示しておくのが適当だと考えているのです。死は私の望むところですし、時々は絶望の淵の間際を彷徨っている状態ですからね。

先に申しましたことや、私の置かれております不確かな立場のこともございますが、加えて、これらの本と一緒に、従兄弟のモーデンからの手紙を送ってよこしたと申し上げれば、私がこんなに深刻になっておりますことにも、貴女はあまり驚かれないはずです。その手紙で、ラヴレースさんを拒むよう私の心は固まりました。私自身を否定する気持ちもです。その手紙を同封いたしますので、もし宜しければ、ここでお読みください。

モーデン大佐よりクラリッサ・ハーロー嬢へ

四月十三日　フィレンツェにて

僕にとりましては大切な近親者である一族の他の人たちと、その人たちのだれよりもさらに大切に思う君との間に、何か諍いがあったことを耳にいたしまして、非常に心配しているところです。

君にあった縁談のこと、そして、君が断った話は、従兄弟のジェームズが教えてくれました。そのいずれについても驚きは覚えません。僕がイギリスを後にした頃、あの幼かった時でさえ、君は素晴らしい期待を寄せられていたのだし、幾度となく耳に届いているのですが、容姿の点でも考え方の点でも、その期待を大きく越えたとのことですから、それこそ君は大変な称賛の的になっていることでしょう。君に相応しい男もまた数少ないに違

いありません。

そうなさるに最も相応しい子供さんのことでもあり、世界一優しくしてくださっていたご両親は、君が縁談を幾つか断った時にも、譲歩してくださったようですね。遂に一人の男性だけを熱心に紹介しようとのお気持ちになられたのは、賛成なさるわけに行かない別の男性からの縁談が持ち上がったからなのです。

君の振舞いからしても、君がひどく嫌がっているのだとお考えになるだけの根拠は、どうやら、御両親にはなかった模様です。それで事を進められたのですが、君のような繊細な心の持ち主には、もしかすると、急ぎ過ぎているように感じられたかもしれません。ところが、皆さんのほうではすべて話し合いがつき、君にとってこれ以上はないという途方もなく有利な様々の条件、しかも、その男性が、当然のこととはいえ、君を高く買っていることを十二分に示す条件が結ばれたその矢先に、君は飛び出して行ってしまったのですが、それは、君の立ち居振舞いのすべてに優雅さを添えていた、あの淑やかさには到底似つかわしくない熱狂ぶりであり、猛烈さだったのです。

僕はどちらの男性のこともほとんど知らないのですが、それでも、ラヴレース氏については、ソームズ氏のことよりは知っているのです。彼にとってもっと有利になるようなことをお話し出来たらと、僕も思います。ある一点を除くすべての資質において、氏と肩を並べる者がいないことは、兄上も認めておられるところです。ただ、その一点が残りすべてにもまして重要なのです。クラリッサ・ハーロー嬢ともあろう人が、夫の品行に目を瞑るなどということは考えられない話でしょう。

最愛の従姉妹のことです。この際、理由としては一体何を最初に持ち出したら良いのでしょう。君の孝養心や君にとっての利益、この世での幸せや来世での幸せ、そして、そのすべてがこのただ一つの点、つまり、夫の徳性に掛かっているのです。たとえ悪い妻を持っても、立派な夫にはそれが出来るかもしれませんが、妻というものは、邪悪な夫を持った場合には、善良になろうとか善行を施そうとかしても、いつでも思いどおりになるとはかぎらないのです。君は宗教上の留意点すべてを守り通していると聞いています。君がそうしているのは驚くに当たりません。むしろ、そうしていなかった時にこそ驚いていたことでしょう。だが、君が守り通すとしても、不道徳な夫が相手では、一体何を期待出来るというのでしょうか。

この重大事に際して、ご両親と君との間に考え方の違いがある場合、僕の大好きな従姉妹に尋ねますが、どちらの側が譲らねばならないのでしょう。正直に言いますと、ラヴレース氏が品行方正な人物であったなら、氏との縁組以上に君に相応しいものはどこにだってあるはずがないと、そんなふうに考えていたことでしょう。だれについてであれ、僕はその行状を裁く立場にはないのですし、僕の従姉妹に求婚しているのでなければ、批判の言葉は慎むべきだと思います。ただ、この際、大好きな僕のクラリッサに言っておきたいのですが、どう見ても、ラヴレース氏は君に相応しくないのです。心を改めるかもしれない、と君は言うでしょうが、改めないかもしれないのです。習慣になっていることを振り払うのは、直ぐにとか、簡単にとかは行かないものです。放蕩児、それも、もって生まれた才能に背き、高等な知識、罪の意識を無視して放蕩に耽っている者は、奇跡が起きるとか、身体がきかなくなるとかの他には、滅多なことで改心したりはしないものです。僕も男ですから、男のことはよく分かるのです。病、苦悩、災難に取りつかれたことのない放

埒な若者、前途洋々たる将来が待ち受け、意気盛んで我が儘さは手に負えず、付き合うのはおそらく自分の同類で、やることなすことすべてを承認し、何を企てても片棒を担いでくれるという、そんな仲間を持つ放埒な若者の改心の可能性については、僕にも十分に判断能力はあるのです。

もう一人の男性のことですが、今のところは好きになれないとして、どうでしょう、将来好きになるということは決して有り得ない話ではないはずです。今は好きでないというのですから、なおさら有りそうなことです。その紳士に対する君の評価がさらに低くなることはまずないのです。上がるかもしれません。大きな期待を寄せていたことが、まあまあ我慢出来るという程度の結果に終わることでさえ、滅多にありません。そうなるわけもないのです。鋭敏で逞しい想像力というやつは、胸に抱いた期待を、現実をはるかに越えたところへと、現世の喜びの絶頂へと運んでしまいますからね。そんな想像力を備えている女性には、好意を寄せる相手の欠点が見えないのです（自分に故意の過ちは一切ないと思っている時には、ますます見えなくなるのです）。そして、おおらかな信じ易さのために引き起こされた失敗を正そうとしても、その時にはもう手遅れになっているのです。

でも、君のように才能豊かな人が才能の点で劣っている男性と結婚するとして、その場合、クラリッサ・ハーロー嬢ほどに自分に満足して暮らして行ける女性がどこにいるというのでしょう。それこそ、喜々として善行に励むことになるでしょうね。いかにも楽しげに、一日のうちの何時間かを自らの進歩改善のために、そして、君の活動範囲の中を往き来するすべての人々のために捧げるのです。それに、趣味の良さは大変なものですし、高尚な知識や上品な娯楽の嗜みも立派で、若いお嬢さんが点検したり実践したりするのに相応しい、家政の様々な方面すべてに亘って素晴らしく秀でておりますから、お身内の方々のほうでも、単に個人的と呼んで構わないような用事に君を取られてしまうのは、出来るかぎり少なくしたいと願っているほどなのです。

ただ、放蕩児のほうを贔屓していると君は思われているのですが、君自身にとって、君のような才能豊かなお嬢さんの場合、それはどのような結果を招くことになるのか、そこのところを君に、僕の大好きな従姉妹に、考えてもらいたいのです。そんなにも清らかな心が汚れた心と交わるだなんて　…　それに、このような男は、君の気遣いをすべて一人占めにするのではないでしょうか。その男や君自身についての心配ごとで、絶えず君の頭を一杯にしてしまうのではないでしょうか。その男によって、偶然にというばかりではなく、意図した場合も含め、あらゆる機会に神の権威や世俗の権威が無視され、その拘束力も踏み躙られてしまうのです。その男に喜んでもらうためには、また、愛情を失わずにおきたいと思えば、称賛の的となるような君自身の仕事も、おそらく、そのすべてを捨てざるを得なくなるのです。その男の好むもの嫌うものに自分を合わせねばなりません。その男の放埒な仲間と付き合うために、君の貞淑なお友達を諦めねばなりませんし、もしかすると、男が日毎に世間を騒がせることから、君の友人たちには見放されてしまうかもしれないのです。どうでしょう、このような男と一緒になって、長い間今と同じくらい立派にしていられると思うのでしょうか。それは望めないというのでしたら、考えてもらいたいのです。君が現在楽しみを見出している称賛に値する事柄のうち、諦めるのはどれにするのかをです。その男の芳しくない楽しみごとのうち、真似るものはどれにするのかについてです。模範となるほどに今は立派に果たしている務めの数々についても、一層励もうと

するのならともかく、それを怠るようなことに君は我慢出来るのでしょうか。また、一度言いなりになった場合、どこまで行けば立ち止まるのを許されるのか、どこで立ち止まることが出来るのか、君には分かっているというのでしょうか。

容姿の良さという点で、ソームズ氏がラヴレース氏に到底敵わないことは兄上も認めておられるのです。だが、光栄にも今僕が便りの筆を執っているような淑女にとって、容姿などに何の意味があるのでしょう。兄上はまた、その男性がラヴレース氏の如才のなさを持ち合わせていないことも認めておられます。しかし、道徳心を伴わなくては、尤もらしい如才のなさなど、ただの見てくれの良さにすぎないでしょう。女性にとっては、夫の物腰が、道徳心を伴わないことと引き替えにですが、すでに出来上がった状態で手に入ることに気づくのよりは、自分なりに作り上げることの出来る、そんな物腰の夫を持つほうが良いのです。あゝ、親愛なる従姉妹よ、君が僕たちと一緒にここフィレンツェに、あるいは、ローマとかパリにいて（そこにも僕は長いこと滞在したのですが）、出発時には粗野だと思われているイギリス風の行儀作法であった男性連中が磨きをかけられて行く様子、そして、同じ場所を通っての帰路、その者たちが身につけた進歩ぶりとはいかなるものなのか、それをご覧になりさえすれば、同じ人物であっても、その最後の段階よりは最初の段階にある時の方をはるかに好ましく思うことでしょう。違いに気づくのは、男たちが帰国した時です。外国風のファッションを好み、外国の悪習に執着し、横柄な態度で自分自身の国や同国人を軽蔑してみせるのです（その男自身は、自分が軽蔑している見下げ果てた者たちよりもさらに卑しい人間なのです）。あまりにもよくある例ですが、厚顔無恥なところも加えまして、こういった嗜みを寄せ集めますと、外遊帰りの紳士とやらが出来上がることになるわけです。

ラヴレース氏が良い意味での例外として扱われるのに相応しい男性であることは、僕も承知しています。実際に才能と学識のある男ですし、ここでもローマでも、そのように見られていたのです。それに、見事な容姿と寛容な気質が大きな強みになっていました。ただ、君には話すまでもないことですが、頭の働く放蕩児というのは、才能の乏しい放蕩児には及びもつかないほどの悪さをするものなのです。なお、この点にも触れておかねばなりませんが、当地の知識人の間で受けたものよりももっと大きな尊敬を得られなかったのは、ラヴレース氏自身に落ち度があったということなのです。要するに、身の安全や自由を脅かすような勝手気ままな振舞いがいくつかあったため、お引き立てくださった人たちの中の一流の名士たちも彼を見放すことになり、フィレンツェでもローマでも、彼の滞在期間は予定よりも短くなってしまったのです。

これが、ラヴレース氏について僕の言いたいことのすべてです。僕としても、これと正反対の人柄であることを証明出来るような根拠があれば、是非ともそうしたいのです。ただ、道楽者や放蕩児一般について、そういった連中のことをよく知っていますので、この点に関し、さらに二言、三言付け加えさせてもらわねばなりません。連中がいつも心の中で企んでおり、また、そうする力を持ち合わせていることがあまりにも多いのですが、女性を相手に働く連中の悪事のことがあるからです。

放蕩児というのは、いいですか、策を弄する、陰謀好きの放蕩児というのは、通例、悔いることがありませんし、常に不誠実なはずです。自分のしてもらいたいことを他人に対して行うという、あの崇高な規範こそ、放蕩児が真っ先に破る規範なのです。日毎に破っ

ていますし、その回数が増すほど勝利感も強くなるのです。女性に対しては強い軽蔑の念を抱いています。自分が不品行なものですから、貞淑な女性など存在しないと思い込んでいるのです。贔屓してくれる女性が現れるたびに、放蕩児の抱く不埒な猜疑心は一層固まることになります。楽しみとしている悪事をさらに推し進めんものと、常に策を練っているのです。このような男を愛した場合、街中の人間の半分、それも、おそらく屑みたいな連中と、その男の愛情を分け合うことになるのですが、そんな思いがどうして女性に耐えられるでしょう。それに、ひどく淫らなのです。君のように上品なお嬢さんが、どうやってそんな淫らな男に耐えて行くのでしょう。自分の立てた誓いを笑い種にする男です。まったく男らしくもない無礼を重ね、きっと君の気持ちを挫いてしまう男なのです。放蕩児となるには、その第一歩を踏み出す時に、良心のすべて、人間らしさのすべてが抹殺されなければいけないのです。放蕩児であり続けるというのは、あらゆる点において不道徳さや非情さを貫くということなのです。祈り、涙、そして、これ以上はないというほど惨めな服従も、放蕩児のプライドに火をつけるだけです。おそらく淫らな仲間を相手に、そして、ことによると、さらに猥褻な女たちを相手に賭をしているのでしょうが、そんな連中に向かって自慢話の種にした、君たちが苦しみを耐え忍んでいる姿、打ちひしがれている様子をお目に掛けようというのです。そして、その両方に立ち会わせようと、皆を引き連れて帰宅するのです。

僕が筆にしているのは、実際にあったことだと承知している事柄です。

身代を潰した話、地所が抵当に入ったとか売却されたとかいう話、また、子孫を取り上げられた話には触れませんし、山ほどある他の災難についても触れないことにします。君のような上品な人間に話すには、あまりにも下品でショッキングな事柄です。

いいですか、君のために別途用意されるはずのものによって、こういったことすべてが避けられるのです。これまで述べてきた災いのすべてが回避出来るのです。君の習慣となっていた善行についても、そのすべてを行う力が保持され、強化されることにもなるのです。君の楽しい気晴らしや模範となる立派な仕事も、そのすべてを続けさせてもらえるのです。良い習慣のどれもが長く維持されることになるのです。それも、たった一つ、すぐにも色褪せてしまうような目の楽しみを犠牲にするだけで済むことなのです。これだけ多くの大切な事柄を守るためなのです。そんなにも軽薄で、そんなにもはかない楽しみを諦めようとしない人間など（一人の人間の中にすべてが見出されるというわけには行かないのですからね）、どこにいるというのでしょう。

これらすべてについてよく考えてほしいのですが、もっと効き目のある訴え方も出来るのです。君ほどの分別を備えた人にその必要があると考えるのでしたらね。僕の大好きな従姉妹にこれらの点をよく考えてほしいのです。そして、君が独身を通すのは、ご両親のご意思ではないということであれば、お二人のお気持ちに沿うよう心を固めてもらいたいのです。また、浮ついた気持ちが強すぎて（他の多くの女性の場合のように）、義務を果たすことも分別を働かせることも出来なかったのだ、などと言われることのないようにしてもらいたいのです。好ましくない男性であればあるほど、承諾した時には、一層喜んでもらえることになるのです。覚えておいてほしいのは、その男性は謹厳な人物だということです。惜しんで然るべき名を備えている人物なのです。名を惜しむその気持ちが、ですから、好ましい態度で君に接してくれることの保証となるのです。

君は子としての務めの実例となり得るものの中でも、その最高の例を示す機会を提供してもらったのです。この機会を喜んで受け入れるのです。君にこそ相応しいことです。君だからこそ期待されているのです。ただ、気持ちの点を考えますと、君が身をもって範を示すよう求められるというのは、僕たちにしても気の毒な気はするのです。君はご両親に恩を着せることが出来たのだと（どうです、誇らしい言葉でしょう）、そんな言われ方をしてもらいたいのです。そしてこれは、君の気持ちに反してなされるのでなければ、出来ない相談でしょう。たくさんの恩義を施してくださったご両親に対してのことなのです。この点には執着しておられるご両親ですし、諦めるおつもりはないのです。これとまったく同じ性質の多くの事柄を君に対しては譲ってこられたのです。そして、今度は、お考えを通すためにも、また、お立場を守るためにも、ご意向に沿ってもらいたいと考えておられるのです。

君が見事にこのご意向に沿ってくれたことを、僕自身の口からお祝い出来るようになるのも間もなくのことと思います。管財人としての役目を果たし、職務を辞退すること。これが、こちらを離れる主な動機の一つなのです。だれもが納得するよう、とりわけ、君には満足してもらえるよう、処理したいものと考えています。

僕にとっては掛け替えのない方たちなのです。帰国に際しまして、以前と同じく、ご家族の皆さんが和気藹々、幸せにしておられるお姿に接することが出来ましたなら、それこそ、言葉にも表せない喜びでしょう。僕の仕事のほうも、いつまでも君の近くにいられるように処置しようと思っています。

ずいぶんと長い手紙になりました。大いなる敬意を込め、最愛の従姉妹、左記の点を付言するに止どめます。

心からの愛情と誠意とを添えまして、君のしもべ

WM. モーデン

宜しいですね、大好きなハウさん。従兄弟の手紙はお読みくださったことにいたしましょう。もっと早く届いていたなら、などと願いましても、今ではもう無駄なことです。でも、仮に早く届いたといたしましても、きっと私は、軽率にも、あの致命的な面会をラヴレースさんに許していただろうと思うのです。あの人と一緒に家を出るなど、考えてもいなかったわけですからね。

ただ、面会に先立ちまして、そのような行動への期待をあの人に持たせたりすべきではなかったのです。その期待があればこそ、あの人も準備を整えて来たわけですし、約束の取り消しも、実に狡猾に、あの人の手で効果を失ってしまったのです。

ひどい仕打ちを受けておりましたし、返す返すも悔しい話ですが、叔母が教えてくれました（貴女もそれを裏書きしておられますね）、あのような譲歩があろうとは、ほとんど期待しておりませんでしたので、仮に手紙が間に合っておりましても、あの人との面会に関しまして、私はどのようにしていたか、どのようなことは避けていたのか、それは申し上げかねるところがございます。でも、次のような効果はあっただろうと固く信じているのです。つまり、皆の迷惑にならないよう、この啓発的な手紙を書いてくれました親切な人のところへ赴きまして、管財人の一人でもありますその親戚を父親の代わり（後援者にして保護者）とする旨を精一杯主張していただろうということです。私の置かれておりまし

たような状況では、この人に保護を求めますのが自然なこと、少なくとも、異論のないところであったように思うのです。でも、不幸を背負うのが私の宿命だったのでしょう。それに、もうお読みになられたものと拝察いたします例の手紙の中で、実に見事に描写されております従兄弟の放蕩児像のことを、すでに私はそのとおりだと申し上げられるようになっているのです。そのことを考えますと、本当に胸の潰れる思いがいたします。

いつも忌み嫌っておりましたものですのに、そんな人柄の男性と結ばれますのが私の運命だなんて……でも、自分の力ばかりを頼っておりましたし、無鉄砲な、そして、恥ずべき衝動に由来いたします危険のことは案じるべきいわれもございませんでしたので、きっと、至高の指導者を仰ぎ見ることもほとんどなかったのでしょう。自分に疑いの目を向け、その指導者に全幅の信頼を寄せるべきだったのです。このような人柄の男性にあんなにもしつこく言い寄られておりますのに気づきました時点で、なおさらそうすべきだったと思うのです。

経験のなさと思い上がった気持ち、これが、私を貶めようという卑劣な目論見を抱いております兄と姉の力も加わって、私の破滅を招いたということなのです。破滅などと、確かに厳しい言い方ですわね。でも、よく考えました上で繰り返しているのです。と申しますのも、たとえ事態が現在起こり得る最善のものへ向かうといたしましても、私の評判はもう損なわれているのです。私に割り当てられましたのは道楽者なのです。そして、その割り当てられましたものがどのようなものなのか、それは、従兄弟のモーデンの手紙で貴女にもお分かりのはずです。

その手紙は、求めのありますまで、どうか貴女のお手元に保管しておいてください。私自身（トランクを調べてみる元気もございませんでしたので）、目を通しましたのは今朝のことでした。どうあっても、絶対にあの人には見せたくないのです。飛び切り気性の激しい男性と、この上なく沈着冷静な勇気を備えた人物と言われております、私の従兄弟との間で悶着が起きるかもしれないからです。

その手紙は、何も書かれていない封筒に（剥きだしのまま）入っておりました。皆がどれほど私のことを軽蔑し、嫌っているにいたしましても、一行の言葉も添えられていないのは奇妙です。こんな仕打ちも、スピラの本を届けてくれたのと同じ寛大な精神からなのでしょうが、その意図をより詳しく示すことになっただけだといたしましても、一言くらいはあっても良かったように思うのです。

封印をするのに用いられておりましたのは、黒い色の臘でした。黒の臘を必要とするような新たな理由が、家族の中に生じたのではないことを願っております。もしそのようなことがございましたら、間違いなく触れられていたはずですし、おそらくそれで当然なのでしょうが、私のせいにされていただろうと思うのです。

従兄弟への手紙を書き始めたのですが、止めてしまいました。事態が不確かなこともございますし、ここ数日というものは、より確かな状況を迎えられるのではないかと、毎日期待を抱いていたからなのです。従兄弟に便りをするようにと、以前からおっしゃっておられましたね。それで筆を執った次第なのです。私に出来ることでしたら何であれ、お言葉に従うのがとても楽しいのです。それも当然の話ですわね。私に残されましたたった一人のお友達ですもの。その上、失礼も顧みずにご忠告申し上げておりますのに、大抵の場合は、光栄にもそれを守っていただいていることもございます。思い切った言い方をいた

しますが、私は忠告を容れるのよりも、与えるのを得手にしておりますからね。また、それも止むを得ないことでした。と申しますのも、どういうわけかは存じませんが、頭では道を踏み外した惨めな人間と思いつつも、自分の中に罪深い気持ちや咎められるべき性向は何一つ見出すことが出来ずにいるのです。どうしてこのようなことになるのか、貴女にはお分かりでしょうか。

でも、こういうことに違いないと思うのです。つまり、最初の一歩を誤ったということです。そういうことに違いありません。そのまま進んできたものですから、すっかり道を外れてしまい、疑念と過誤の荒野に迷い込んでしまったのです。そして、そこから逃れる道を見出すことは決してないのです。と申しますのも、最初はほんの一歩逸れただけでしたのに、そのせいで、私の辿るべき道を何百マイルも離れたところまで来てしまっているのですからね。それに、この哀れな迷子には親切なお友達は一人もおりませんし、本来の道に戻るように手を貸し、導いてくださる旅人にも一人として出会っていないのです。

ところが私は、何という生意気な娘なのでしょうね、正しい道筋につきましては、あくまでも自分の知識に頼ろうとするのです。狐火がその偽りの火を灯して私を惑わそうとすることなど（でも、そのような話はたくさん耳にしていたのです）、ほとんど心配してもいないのです。そして、今、湿地や泥沼に取り囲まれました私の周りでは、ちろちろと狐火が揺らめいており、正しい道に辿り着いたと思いますたびに、また私を引き戻してしまうのです。でも、どれほどひどく道を踏み違えた人たちでも、だれもが出会うことになります共通の場所が一つあるのです。私も最後にはそこに物言わぬままの姿で横たえられることでしょう。そして、その時こそ、私の不幸のすべても終わりを告げるのです。

でも、またもや大幅に脱線しております。考えておりましたこととは違う方向へ進んでいるのです。私が申し上げようと思いましたのは、少し前から従兄弟のモーデンに宛てた手紙を書き始めたのですが、今の私では、とても最後まで書き進めるわけに行かないという、ただそれだけのことだったのです。書き進められずにおりますが、それも当然の話とお考えでしょうね。従兄弟からの嬉しい言葉の数々ですのに、私には受け取る資格がないなどと、どうして筆に出来ましょう。助言のすべてが役に立たなかった、警告はすべて無駄に終わった、そして、精々私に期待出来ることといえば、遠ざけねばならないと、切々たる言葉で従兄弟が訴えてくれました、あの道楽者の妻となることくらいですなどと、どうしてそのようなことを筆に出来るというのでしょう。

それでも、私と一緒に（私の運命は、このような男の口先一つに掛かっているみたいですから）次のことを祈っていただきたいのです。私を待ち受ける宿命がどのようなものだといたしましても、私が信頼を寄せているように父が考えております、その男性によって私は罰せられることになるのだという、父の呪いのあの恐ろしい部分が現実のこととはなりませぬよう祈っていただきたいのです。ラヴレースさん自身のために、また、人間性というもののためにも、そのようなことがあってはいけないのです。あるいは、親の権威を守りますためには、あの人によって罰せられるのは避けられないことなのだといたしましても、予め企んでいたとか、故意に加えられたような辱めであってほしくないのです。現実の行為は無理だといたしましても、意図しておられたところは許して差し上げられたらと、そんなふうに私は祈っているのです。でなければ、物事を結果次第で判断いたします世間の人たちの目には、私の過ちが二倍の大きさに映ることでしょう。ただ、父やおじた

ちの冷たい仕打ちにつきましては、心に重くのしかかっておりますこの呪いのことは別にいたしまして、私が間違いを犯しましたために、皆ももうずいぶんと心を痛めているのですから、すべての点で容認されることになれば嬉しいと思うのです。そして、父があの呪いを、広く世に知れ渡たります前に、少なくとも、来世にも及びますあの一番恐ろしい部分につきましては、取り下げる気になってくれたならと思うのです。

ペンを置かねばなりません。これらの反省点をよく考えなければいけません。従兄弟の手紙を同封いたします前に、もう一度、しっかりと読んでおきます。そうすれば、心に銘記することにもなりましょう。

手紙　八

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

五月七日　日曜日　夜

たくさんのはしたない事情、そして、ショッキングとさえ申して構わないような事情を伴います、私のこの不幸な立場をお考えくださいますなら、そのうちのいくつかにつきましては、プライドからいたしましても、おとなしく思案していられるようなことではございませんし、心に染みる従兄弟の文面によって、そのすべてが一層ひどいことに思われているわけですから、私の心を捉えております塞いだ気分がこのペン先に伝わったといたしましても、驚いたりはなさらないだろうと思います。でも、私個人の問題にそんなにも親身の関心をお寄せくださる貴女なのですから、私の不幸のうちでも最も悲痛なあの部分につきましては、伏せておきますのが一層思いやりのあること、より友達らしい振舞いなのだろうと思います。たとえお知らせいたしましても、また、愚痴をこぼしましても、それで和らぐような事柄でもないのですからね。

でも、貴女以外のどなたにこの胸の内を明かすことが出来るというのでしょう。私の苦悩のすべてをもたらしました張本人なのですから、保護者となってくれるのが当然ですのに、その当の男性が私の心配事を増やしているのです。私には、忠誠心を信頼することが出来るとか、あるいは、悲しいことが起こりますたびにそれを打ち明けることが出来ますような、そんな召使一人さえもいないのです。あの人のほうは、気前の良さや朗らかさで皆さんの心を引きつけておりますのに、私はゼロに他ならないのです。あの人に重要性を与え、自分には苦しみを加えるゼロなのです。ですから、何をいたしましても、このような辛い気持ちから、つい涙に暮れてしまう時もございますし、その涙がインクに混じりまして、書面を滲ませてしまうのです。それに、私は知っているのです。貴女が惜しむことなく一時の慰めを与えてくださいますことをね。

私の気持ちといたしましては、むしろ、塞ぎ込んでおりますのをお詫びするつもりでしたのに、これでは、放り出すみたいにして先の手紙を終えました、あの時と同じ書き方になってしまいますね。でも、これまで書き記しましたことで、お詫びのほうは終わりとさせていただきます。私に降り懸かりました不幸のことがございますので、助言と慰めという形で、互いに誓いました友情の、その最も高貴な務めを果たしていただく必要が生じているのです。そのことをわざわざお願いしなくてはならないなどと考えますのは、友情を

傷つけることになりますし、貴女にとりましても失礼な話だろうと思います。

《次いで令嬢は、彼女の衣類が届いたこともあり、気晴らしのためであれ催し物の見物であれ、彼女の意に沿う女性ならだれに同伴してもらっても構わないので、一緒に馬車で出掛けてもらいたいと、ラヴレース氏がしつこく言い寄って来ていることをハウ嬢に伝えている。

その問題に関して二人の間で交わされた会話の詳細と、氏からの様々な提案とを令嬢は報告しているのであるが、ロンドンへ着く以前にはかくも熱心に迫っていた挙式の件、令嬢の言によれば、氏の提案を正当化するには不可欠な挙式に関し、氏が一切触れようとしない点に注意を向けるのである。令嬢はこう述べている》

このような暮し、もう私には耐えられませんわ。あの人の手の届かないところへ行くことが出来たらと、心からそう思います。そうなれば、あの人もすぐに違いに気づくことでしょう。私はどうしても卑しめられねばならないのでしたら、あの人よりは、義務を負っております人たちの手で卑しめられるほうがましなのです。お手紙の中で(ア)叔母は、私のための提案は一切いたしかねると記しているのです。貴女のほうでも、お調べくださいましたところ、次のことが分かったと言っておられますね(イ)。つまり、私が不運にも誘い出されるようなことにならなかったなら、やり方を変えることが実際に決まっていたそうですし、特に母としては、家族内の和を取り戻すのに骨身を惜しまない覚悟で、さらに首尾よく事を運びますためにも、伯父を味方に引き入れる考えだったとのことですね。

こういった点を拠り所にしようと思うのです。私といたしましては、試してみる以外にはございませんでしょう。哀れな除け者が再び愛顧を取り戻すためです。考えられる方法はすべて試してみるのが私の務めなのです。それに、一族の中では大変力を持ち、かつては優しくしてくれました伯父が、もしかいたしますと、私のため仲立ちをする気になってくれるかもしれないのです。祖父から遺贈されました不動産と遺産の権利や資格のすべても、私の提案を兄にとって呑みやすいものにするためでしたら、だれにであれ、心の底から気持ちよくお譲りしようと思うのです。また、私の放棄が実際に効果を上げますためにも、決して結婚しないことを約束しようと思うのです。

このような方策につきましては、いかがお考えでしょうか。皆のほうでも、まさか私のことを永久に見捨てる決心は出来ないはずです。これまでの出来事にいたしましても、偏りのない目で見てくれますなら、私にも責任はありますが、自分たちにも責められるところは何かあるだろうと思うのです。

この方策は試してみる価値があると、貴女もそうお考えだろうと思います。ただ、ここが難しいところなのですが、仮に手紙を出すといたしましても、非情な兄のせいで皆はしっかりと一致団結し、私を除け者にしているのですから、私の手紙は次々とたらい回しにされるでしょうし、兄の働き掛けで一人残らず冷酷無情になった挙げ句、ついには私の願いを拒絶してしまうはずです。一方、ご自分から言い出したことのようにして私の言い分を支持してくださるよう、伯父を引き込むことが出来ますなら、少しは望みも持てること

(ア) 第三巻、手紙四十八を参照のこと。　(イ) 同、手紙五十五。

でしょう。図々しいとは存じますが、すぐにも母と叔母をご自分の側に引き入れてくださるだろうと思うからです。

ですから、目下考えておりますのは、こういうことなのです。立派なお人柄ゆえにだれからも敬われておりますヒックマンさんに、私の伯父と会っていただいてはどうだろうかということです。そして（ラヴレースさんと私との間の事態につきましては、貴女からお知りになったことにいたしまして）、先に記しました事柄だけではなく、今の私には、伯父の指示に従えないような負い目は一切ないことをも納得してもらいますよう、伯父に伝えていただくのです。

実行に移すべきかどうか、あるいは、どのような方法によるのか、すべては貴女のご判断に委ねることにいたします。でも、実行に移されるといたしまして、貴女からのお願いとしてヒックマンさんが申し出られます時に（そのような形にしていただかねばなりませんが、理由は明らかですね）、仮にも伯父が私のための尽力を断るようでしたら、望みは一切持てないことになるのです。そして、私の取るべき次の手段は、今の気持ちといたしましては、あの人のお身内のご婦人たちにこの身を委ね、守っていただくことでしょう。

次のような詩を引き合いに出しますのは不敬なことかもしれません。自分自身に大きな責任のある過ちですのに、それを神意のせいにするようなものですからね。ただ、私の不幸な、でも、心ならずも犯してしまいました失敗と、総じて似通っているところがございますので、この詩を思い浮かべることがよくあるのです。

汝、偉大なる神々よ、我、最後の訴えをなす。
我が美徳を証したまえ、さもなくば、我が罪を暴きたまえ。
人生の迷路を彷徨い、行きつ戻りつ
避けなむと努めし道を我辿らば、
この身の罪は汝が神意に帰したまえ。
我が足は過つとも、我が心に罪はなし(九)。

《令嬢は月曜日の日付で再び筆を執り、令嬢の落ち着かない様子を看て取ったラヴレース氏から、フレッチヴィル夫人の縁者で、夫人の仕事一切を処理しているメネル氏の紹介があったことをハウ嬢に知らせている。令嬢によると、メネル氏は良識と上品さを備えた若い将校で、例の家屋及び家具に関し、以前ラヴレース氏の述べていたものと同趣旨の説明(ア)が氏からあったとのことである。また、フレッチヴィル夫人の塞ぎ込んだ様子に関しても説明がなされたという。

令嬢がハウ嬢に語るところでは、ラヴレース氏はその紳士に対し、例の家屋を妻に（今は、人前ではいつも令嬢をそう呼んでいるのだが）見せてくれるよう、熱心この上ない態度で催促していたという。また、令嬢が訪れた際にフレッチヴィル夫人が在室している部屋は除き、その日の午後のうちに家の全てを案内する旨、メネル氏は請け合ったとのことである。ただし、令嬢としては、伯父打診の計画に関し、ハウ嬢がどのように賛

（ア）第三巻、手紙六十二を参照のこと。

意を示すか、また、実行に移された場合には、如何なる成果がもたらされるのか、その点を承知するまで、他の行動に出ることは好まないという。

ラヴレース氏は、氏一流のユーモラスな表現で、衣類と一緒に届いた手紙を受け取った際の令嬢の苛立ちや落胆ぶりを語っている。氏は令嬢の信頼を失ったことを遺憾としているが、その原因として、四人の友人に令嬢を引き合わせた点に求めるのである。しかしながら、氏は四人のことは大目に見るべきと考え、令嬢のあまりの几帳面さを咎めるのである。男たちが、少なくとも彼ら四人が、より優れた振舞いに出るのはかつて見たためしがないゆえとのことである。

メネル氏を令嬢に紹介した件に触れ、氏は次のように語っている》

さて、ジャックよ、メネル君も実によくしてくれたとは思わないかな［奴のことは時々メネル大尉と呼んでいたのだよ。貴公も知ってのとおり、軍人仲間じゃあ、中尉だの少尉だのは将校のうちに入らないからな。奴も実に親切ではなかったかな］。塞ぎの虫に取りつかれた夫人や例の家の件を我が愛しの君に納得してもらおうと、あゝも速やかに馳せ参じてくれるとはな。

だが、メネル大尉とはだれのことだ、と貴公は尋ねるのだろうな。メネル大尉なんていう男は聞いたこともない、とな。

尤もな話だよ。だが、ニューカムという若者を知らないかな。律義物のドールマンの甥だよ。

おやおや、あいつのことか。

そうなのだ。俺一人の権限において、奴の名を変えてしまったわけだ。軍人であれ役人であれ、俺は抜擢してやるのだよ。財産を持たせるのも奪うのも、俺の一存で決まることだ。身分もでっち上げている。また、さらに重宝な特権を行使して、俺自身の厳然たる意志の力により、降格させもするのだが、この身にとって便益となること以外、何らの科料も課したりはしない。一国の君主といえども、俺にとっては実に哀れなものさ。

ところがメネルの奴、この天使のごとき女性を目にして良心が痛んでいるのだよ。そこが厄介な点だ。あいつの正気を保つにはずいぶんと苦労することになるだろう。だが、あいつがたじろぐのも驚くには当たるまい。同じ婦人と二、三時間話し合うと、はるかに冷酷非情な四人の悪党にも心の存在を気づかせるくらいなのだからな。ただ、最後には彼女の美徳に報いることになるものと俺は確信しているのだよ。彼女の美徳が俺に打ち克つ場合、あるいは、俺が辛抱し切れないことを悟る場合にはだがね。というのも、俺自身、とてつもなく良心の痛むことがあるのだよ。相棒たちには、俺の良心のことなど、一言たりと漏らしてはならんぞ。また、貴公自身もその点を笑ったりしないことだな。

《月曜日の夜の日付があるもう一通の手紙で、氏は以下のごとく記している》

この意固地な令嬢があまりに俺を遠ざけるものだから、俺としては、彼女とハウ嬢の間で何かが進められているに違いないと踏んでいるのだ。二人の文通にはハウ夫人から禁止

が言い渡されているにも拘らずだよ。それに、他人の犯罪行為を罰してやるのも、多少は俺の手柄になると思っているので、この娘たちは両方とも、親の命令に背いた科で懲らしめてやるに値すると考えるのだ。それから、二人の手紙を運んでいる男についてだが、どんな暮しをしている奴なのか調査を進めていたのだが、ただの密猟者で、鹿を盗んだり養兎場を荒らしたりしていることが判明した。行商を装って馴染みの客たちに売りさばいているのだが、客のほうでも、この男の持ってくるものはいつも、魚であれ鳥であれ鹿肉であれ、すべて買い取っているのだ。それゆえ、この男を身ぐるみ剥いで、奴の持ち金を残らず貧乏人に恵んでやるよう仕向けても、俺の身の証は立つものと考えているのだ（今のところは、ウィルソンによる連絡手段を不可侵なものとしておかねばならないからな）。何しろ、手紙と一緒に金を奪わなければ、こちらが疑われてしまうからだよ。

自分のためになるのだし、また、同時に悪党を懲らしめることにもなるのだから、それこそ、公私共に好都合というわけだ。法律なんてものは、俺のような人物に適用すべく作られたのではないのだよ。それに、これだけ言い付けに背いた文通だ。是非とも中身を知っておかねばなるまい。

だが、よく考えてみると、もしも、愛しの君が手紙のどれかをポケットに忍ばせて持ち歩いていると分かれば、劇かコンサートに連れ出すことも出来るのだし、彼女がポケットの中味を掏り取られるという不運に見舞われないともかぎるまい。

しかし、これをどうやって探り出したら良いのだろうな。何しろ、あのドーカスにしてもこのラヴレースと同じことで、彼女の着替えの様子は知らないのだよ。召使の前に姿を見せる時でさえ、もう昼間の服装になっているのだ。嫌気がさすほど用心深い。まったくの話、ジャックよ、疑り深い気質というのは罰せられて当然の気質だな。女のほうが正直な男を悪党ではないかと怪しんだりするのであれば、それだけで十分ではないのかな。そのことに気づいている正直者を悪党にしてしまうのにはだよ。

ところで、彼女のポケットの中味といえば、喉から手が出る思いだよ。試してみても罪の軽い悪戯ということだな。だが、俺の見たいと思う手紙全部がポケットに入るわけはない。もっとも、女のポケットというのは、背丈の半分の深さがあるのだよ。察するに、愛らしい浮かれ女の身体のまわりに、底荷用の袋として結び付けてあるのだろうな。尻軽女たちが調子よく動き回っている際に、風のせいで、鯨の髭で形を整えた帆布から飛び出すことになってもいけないというわけだ。

《次いで氏は、二人の令嬢の間で何らかの企てが進められていること、あるいは、氏の手からハーロー嬢を奪い取る何らかの策が実行に移されることを恐れ、氏の企みの幾つかについて語り、ドーカスおよび氏の下男ウィル・サマーズに書面をもって与えた指示に関し、自慢げに話すのである。また、ありとあらゆる不測の事態に備えてあり、令嬢が逃走した場合とか、外出し、帰宅を拒んだ場合にも、連れ戻す用意があるとのことで、たとえ最後の行動に出た場合でも、首尾の如何に拘らず、何とか彼女を引き止める口実は準備しておきたいと述べている。

その後、氏は以下のように筆を進めるのである》

あらゆる手を尽くして令嬢に気に入ってもらえるよう、ドーカスには命じてある。読み書きの能力がないのを嘆くこと、田舎に親戚がいることにして、令嬢にその手紙を見せること、また、返事の仕方について助言を請うたり、返事を書いてもらうこと、そして、指にインクがついているのを疑われたりせぬよう、いつもペンを使おうとしている姿を見せることなども指示してあるのだ。その上、あの娘には銀製の鉛筆と一緒に象牙紙の手帳を与えておいた。必要な時にはメモをしておくためだよ。

それから、これも言っておかねばならないが、すでに令嬢は（シンクレア夫人の提案を受けて）、届いた時に入っていたトランクから衣裳を取り出し、マホガニー製の大型の衣裳箪笥に移しかえたのだよ。これなら畳まずにしまっておけるし、リンネル用の引き出しもついている。以前、ニンフたちの何人かが、高貴なお方の心を捉えようとしたり、貴婦人を真似て着飾らねばならない時に身に着けたりした、豪華この上ないスーツを入れてあった衣裳箪笥だよ。我らが母さんは、貴公も知ってのとおり、伯爵夫人は数多く手掛けているし、それどころか、公爵夫人も二、三人拵え上げていたのだが、その連中も今では、御主人様と上流婦人みたいな暮しを送っているのだよ。だがこれは、額面どおりになってくれるような女、そして、その場に臨んでは、自ら上流婦人として振る舞うことの出来るような女にして初めて可能な話だ。家柄に恵まれた人間の評判が、氏素性も分からないそこいらの罪人のなすがままでは困るからな。

この箪笥の錠すべてに合うマスターキーをドーカスに渡してある。また、書類を捜す時には、何を動かすにしても、その置き具合を見届けてからにしろと注意してある。寸分の違いもなく元どおりに出来るようにというわけだ。サリーとポリーにも時々は転記の手伝いをしてもらえる。これだけ油断のない美女が相手だ。俺の行動すべても、急がば回れで行かねばならん。

あの若さで、あれほどウブな女が、自分一人の考えであそこまで用心出来るなど有り得ない話だ。ここの女たちの振舞いも実に非の打ちどころがないし、この奥の建物では、ドンチャン騒ぎも来客も一切許されていない。ここでは、すべてが上品で、静かで、落ち着いている。ニンフたちは育ちが良く、本も読んでいるのだ。彼女が当初母さんに対して抱いた嫌悪感も克服されている。それゆえ、俺の前進を難しくしているのはハウ嬢に違いないということだ［貴公も耳にしているだろうが、以前彼女は、われわれの同類の一人、正直者のサー・ジョージ・コルマーの口車に乗せられそうになったことがあるのだよ］。

先に挙げた注意事項の数々から貴公も気づいたことだろうが、俺に見落としなど一つとしてないのだ。

どれほど脆い細糸に
左右されるものなのか、
男たちの誉れをもたらす事柄は（一〇）

と歌の文句にもあるが、これは予測し難いことだからな。

今までのところはこれで十分だ。今後については、先ず第一に、愛しの君が手紙をどこにしまっているのかを探り出すことだな。その次には、劇かコンサートへ同伴してもらうとか、一、二日郊外へ連れ出すとかすることだよ。それを果たすまでは、俺も気の休まる

ことはないだろうな。

∴　　∴

俺の企みのいくつかについては、今示したばかりだな。令嬢の動きすべてに常時目を注いでいるドーカスが、女主人の用心深さについて、その具体的なところを数例教えてくれた。手紙に封をする時は、ウェーファーを二箇所に用いるらしい。ウェーファーに刺し穴をあけ、その上に封印をするのだ。彼女のところへ届けられるものについても、同じ用心がなされているのは疑いない。届いた手紙の封を切る前に、彼女は必ず封印を調べているからな。

是非とも二人の手紙を、何としても手に入れねばなるまい。これが難しいだけに興味が募るのだよ。不思議なのは、あんなに書いていながら、それも四六時中だというのに、こちらにとって好都合な、眠気を誘われるとか、ついうっかりということが、彼女には一瞬たりともないという点だよ。

見てのとおり、正々堂々たる闘いなのだ。彼女の弁護に若さや美貌、家柄や財産のことを持ち出すのも止めてもらおう。騙され易さなど、彼女には微塵もないし、年端も行かぬというのなら、俺にしたって若輩者ではないのかな。美貌については、ジャック、慎みを忘れぬためにも、貴公のほうで比べてみてもらいたいのだ。女での我がクラリッサと男での貴公のラヴレースとをな。家柄ということなら、あの一族など、百年前には国許でも無名だったのだよ。それに、俺としては、彼女以外の奴等全員に憎しみを感じているわけだが、それも当然ではないのかな。それに、財産のことだが、貴公も知ってのとおり、かねがねそれが俺を奮い立たせていたし、これには卑しからざる理由もあるのだよ。そもそも財産持ちの娘というのは、われわれの気を引こうとして身を飾るのではないのか。われわれを引っ掛けようと罠を張るのではないのかな。われわれに狙いをつけると、自分たちの美点よりも財産のほうに頼るのが通例ではないのかな。われわれとしては、連中が主たる拠り所としているものの特典を奪って良いものだろうか。特に俺の場合だが、俺の気を引きたがっている娘すべてと結婚出来るとでも思うのか。だとすれば、放蕩者の信条に従っているからといって、われわれを憎む可愛い悪魔など一人としていないわけだが、その信条を維持するため、財産持ちの女が自分の皇帝となった者に忠順を尽くす立場になったとして、服従の生活がいかなる結果を伴おうとも、そのような女は自らの財産によって、貧窮からは勿論のこと、辱めや卑しめからも守られることになるのではないのかな。それゆえ、我が愛しの君と俺との間で争うべきことがあるとすれば、それはただ、二人のうち機知の点で優る者、用意周到さにおいて優る者はどちらなのかということ以外にはないのだよ。そして、それこそ試してみなければならん課題なのだ。

それにしても、このように懐疑と不安の中で日々を送るというのは、俺とて同じことだが、気の毒な令嬢にとっても辛い生活だ。もっとも、彼女の疑り深さが生まれついてのものでなければの話だよ、これは。生まれつきだとすれば、心配性なのは体質的なものであって、彼女にはどうしようもないことなのだ。また、その場合には、害をもたらすこともないのだよ。疑り深い性分というのは、当面気掛かりになることが一切ない場合でも、心配の種を見つけ出してくるものだからな。それゆえ、我が麗しの君も、生まれつき疑り深

いのであれば、俺のお陰で、そういう心配ごとに意を用いる手間は省いてもらっていることになるのだよ。だが、人生の旅路では、結局のところ、一番平坦な道を辿るのが一番安全で最良なのだと俺は思っている。もっとも、俺の場合には、その道を選ぶのは許されないのだがね。ただし、より入り組んだ小径のほうを追い求めるという点で、俺が変わり者だというわけでもないのだよ。魚を釣るにしても、穏やかな場所よりも、波立っているところを狙う者が何千、何万といるのだからな。

手紙　九
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月九日　火曜日

俺もまったく不運な男だよ。この令嬢は世界でも最も気立ての好い娘の一人だと言われているし、俺もそう思っていた。ところが、こと俺に関するかぎり、最も天の邪鬼な人間の一人なのだ。俺にしても、気難しい男などと思われたことは一度もないのだよ。一体全体、どうしてこうなるのかな。われわれはお互いを幸せにするためにこの世に生を享けたのだと、長いこと考えていたのだ。ところが、まるで逆なのさ。現実には、互いを悩ますために送り出されたかに思えるのだよ。

喜劇の一つも書いてみようかと思っている。タイトルは用意してあるので、半ば完成しているようなものだな。『喧嘩っ早い恋人たち』というのだが、これで構わんだろう。目新しくて印象的なところが少しあるのだよ。だが、恋人というのは多かれ少なかれ喧み合うものだ。老テレンティウス(一二)もこの点に目を留めて、恋する者たちの仲違いは新たな愛を育むと述べている。それに、勿論のこと、より良き理解もだ。そうなって当たり前なのだよ。ところが、われわれの場合には、喧み合うのはしょっちゅうだが、仲よくなることなどは一度だってない。最初の言い争いに折り合いがつく前に、大概は次のが始まる寸法で、二人のキューピッドにはどんな出来事が待ち受けているものやら、予想もし難いくらいなのだよ。だが、不屈の粘り強さこそ俺が誇りとしているところだし、忍耐心が俺の下女ということだ。試みるに値する相手に狙いをつけた場合にはな。易々と勝ち得たものに何の価値があるというのだ。ヒューディブラスは、

人の好い手軽な花嫁得んものと、
命を捨てた酔狂な恋人などがいるだろか。
すぐにも情にほだされる淑女を求め、渦を巻く
小川で身投げか、麻縄で首吊りした者いるだろか(一三)。

と問うているが、尤もな疑問だな。

だが、こんな前置きをするに至ったきっかけのほうに話題を移そう。

外出していたのだよ。帰宅したところ、階段でドーカスに出会ったので、「奥様はお部屋かね、ドーカス」と、俺は尋ねた。すると、「食堂にいらっしゃいますわ、旦那様。手紙を入手なさる機会を仮にもお望みでしたら、今こそその時ですわ。奥様の足下に一通落ちて

おりますのが目に入ったのです。折り目が開き加減なところからいたしまして、奥様が読んでおられたものでしょうね。今は、小さな束にした他の手紙に一生懸命になっておられます。全部一緒にポケットから取り出されたのだと思いますわ。ですから、この次にはどこをお探しになったら良いのか、お分かりになりますわね、旦那様」と言うのだよ。

嬉しさのあまり、飛び上がらんばかりだったね。密かに温めていた策を実行に移そうと決め、喜び勇んだ格好で食堂に入ると、座ったままの彼女を、大胆にも両腕で抱き締めてやった。その間彼女のほうは、ネッカチーフの中へ手紙を掻き集めていたよ。落とした手紙は目に入らないのだ。俺はまくし立てた。「あゝ、愛しい人、つい今し方、メネル氏と私とで恰好の策を思いついたのです。ご賛同いただければの話ですが、フレッチヴィル夫人に家の引き渡しを早めてもらうため、夫人のコックとお手伝い、それに、下男二名については（夫人がとても気を揉むものですから）、貴女のお気持ちに適った使用人が得られますまで、私が面倒を見るということで同意したのです。それから、不便な思いを一切なさらないよう、リンネル類についても、見積もりの上で買い取ることを承諾したのです。

頭金が五百ポンドで、残額は手形類の調べがつき、その総額が分かり次第支払うことになっているのです。ですから、貴女を迎えるべくすっかり準備の調った、素晴らしい家が貴女のものになるのです。我が一族の女性が何人か、すぐにも貴女のところへ馳せ参じることでしょう。私の吉日を長く引き延ばそうとなさっても、あの連中は許してくれないでしょうね。また、殊のほか形式に拘っておられるお気持ちに沿うためにも、一つとして遺漏のなきよう、その日が来ますまで、私はここシンクレア夫人宅に留まることに同意いたしましょう。貴女は新居に落ち着いてくだされば良い。それ以上のことは寛大なお心に委ねる所存です。あゝ、愛しい人よ、これでお気に召していただけないでしょうか。きっとお気に召すと思うのです。そのはずですよ」とな。そして、さらに強く彼女を抱き寄せると、これまではその勇気もなかったわけだが、かつてないほど熱烈なキスをしたのだ。それでも、熱情に駆られて思慮分別を忘れたわけではない。注意深く、片方の足を例の手紙の上に置き、少しずつ彼女から遠ざけた。彼女の椅子の陰に入るようにな。

俺の馴々しい態度に、彼女は癇癪を起こしていたよ。俺は頭を下げ、許しを請うた。そして、さらに身を屈めながら、同時に手紙を拾い上げると、さっとばかりに胸に押し込んだのだ。

何というドジなのだ、俺は。大馬鹿だよ。ぼんくらだ。ヘマな青二才さ。ただのジャック・ベルフォードというところだ。もっともっと切れ者のつもりでいたのだがね。どうしてドーカスについて来てもらわなかったのだろうな。あの娘が拾い上げることだって出来たのだよ。俺が奥様に話し掛けている間にな。

というのも、この場合、手紙は開いた状態だったものだから、彼女の耳を驚かすことなしには、胸の中に押し込むわけに行かなかったのだよ。俺の急な動作が彼女の目を驚かせてしまったようにな。次の瞬間、彼女はさっとばかりに立ち上がり、「裏切り者、ユダ」と叫んだ。両の目からは電光が閃き、その真剣な表情には狼狽の色が浮かんでいたが、それが何とも魅力的だった。「何を拾ったのです」と叫び、それから、俺にしてみれば両耳が惜しいから、彼女に対してはとても出来ない真似だったが、彼女のほうは何のためらいもなく、俺がくすねた手紙をぐいと握り締めたのだよ。この胸の中にあるというのにな。

これだけはっきりと見破られたのだからな。一体何が出来るというのだ。略奪された手

紙を掴んでいる彼女の手を、俺は両の手で握り締めたよ。そして、「あゝ、愛しい人よ、私に関心などないとでもお考えですか。貴女はそのようにいつもいつも掛かり切りになっておられるのだし、私は他のどんな書き物にもまして物語風の書簡文を好み、その方面での貴女の才能には感心しているのですから、(僭越ながら、このように幸せな日々の始まりを迎えているつもりですし)、それほど楽しい文通なら是非とも仲間にしていただきたいものだと、思い焦がれずにいることなど出来るものでしょうか」と、俺は言ったのだよ。

「手を放すのです」と、彼女は愛らしい足を踏み鳴らしながら言っていた。「よくもまあ厚かましい … この調子では、きっと … 火を見るよりも明らかだわ … 」と言うと、その先は言葉にならず、喘ぐばかりだ。怒りと驚きのため、今にも気絶してしまいそうなのだ。いつもの穏やかさのひとかけらさえ、あの魅惑的な顔には認められないし、あの響き妙なる声からも聞き取ることは出来なかったよ。

ここまで来たからには、俺も手にした宝を失いたくはなかった。手放すのは忍びなかったのだ。しわくちゃになった手紙に俺はもう一度手を掛けた。「無礼ですよ、あなた」というのが彼女の台詞だ。再び足を踏み鳴らしながらな。それから、「後生ですから」と付け加えていた。俺は宝を手放したよ。気絶されても困るからな。だが、それよりも、俺の手が彼女の両手に包まれているのに気づいて嬉しかったのだ。嫌がる俺の指をこじあけようとしていたのだ。あの時には、心臓が手のすぐそばまで来ていたね。指の先まで動悸を打つ始末なのさ。怒りが込められていたとはいえ、心魅する者にこうまで遠慮気兼ねのない扱いを受けたわけだからな。

手紙を手にすると、彼女はドアへ向かって急いだ。俺は彼女の行く手に割って入り、ドアを閉め、畏まるにいいだけ畏まった態度で彼女の許しを請うたよ。だが、ハーロー一族の心を持つ美女が(俺のもたらした好ましい報せにも拘らず)俺を許してくれるとでも思うのかな、君は。到底無理な話というものだ。乱暴に俺をドアから押し退けたのだよ。まるで、俺などは軽いものだと言わんばかりにな[もっとも、彼女の力のほどを、こんなふうに無邪気な形で試してみるのも好きなんだよ、俺は]。彼女は激情に駆られてそんな力が出たのだ。俺のほうでは、恐れの気持ちから力を殺がれてしまったのだがね。そして、彼女は自分の部屋へと駆け込んで行った[有難い話じゃないか。それ以上遠くへは逃げられないのだからな]。部屋に入るやいなや、興奮したまま、内側から二重に錠を下ろし、二重に閂を掛けたのだよ。考え直してみると、俺にとってこれは心強いかぎりだ。もっと不作法な真似をしても、これ以上まずいことにならないというのはな。

俺も自分の部屋へ退却した。胸も詰まる思いをしながらな。そして、下男のウィルが傍にいなかったこともあって、重ねた両の拳で思いきり自分の額を殴りつけたよ。

そして、現在のところ、我が魅惑の君は閉じ籠もっている。俺と会うのを拒否し、食事も拒んでいる。俺には会わない決心だ。その上、出来れば二度と再び、だそうだ。俺としては、「今の気持ちでは」とも言ってくれたように考えたいところだがね。

愛しい娘たちは、謙虚な奉仕者たちと喧嘩をする場合にはいつも、この但し書きの文句を忘れないようにすることだ。それっきりにされてしまわないためにもな。

だが、この二人の令嬢の間で交わされている手紙がひどく反逆的な性質のものではないというのなら、実に些細なこととして済んでいたはずの出来事だというのに、これほどまでの大騒ぎをする必要がどこにあるというのだ。その理由を突き止めてやること、それを

この俺が、俺の主たる企ての一つの、その主題にしないとでも思うのかな、貴公は。

水曜日　朝

夕食はいうまでもないが、朝食へのお呼びも掛からなかった。この令嬢はやっぱりお馬鹿さんだった、なんてことにはならないよう願っているよ。

メネル大尉の名で使いをやったところだ。

奥様、メネル大尉からの伝言でございます、とな。

それも効き目がない。おネンネなんだ、彼女は。彼女とていつもいつも……ソロモンのようなわけには行かない、と言うつもりだったのだよ、俺は。ソロモンというのは、ジャック、世界一賢い男だったのだ。だが、世界一賢い女というのはだれなのか、耳にしたことはあるかな。俺としては、この令嬢と比べる相手が欲しいのだ。ずる賢い女とか魔女の話は数知れないほど読んでいる。だが、女の特質に知恵というものが入り込んだためしはないようにも思うのだ。女性にとっての必要条件ではないからな。確かに、男性よりも女性のほうが立派な統治者となるものだ。しかし、何故だと思う。女性の統治者は男性に支配され、男性の統治者は女性に支配されているからだよ。まったくもって結構な話じゃないか。それでこそ、どちらの場合でも、どの方向へ向かうことになるのか、その舵取り具合も見当が付くわけだからな。

だが、知恵の件はひとまずおいて、ずる賢さのことを取り上げよう。つまり、女を女として見るのだよ。この令嬢が途方もない考えを温めているとしたら、われわれとしてはどう対処したら良いのだろう。自分宛の手紙はどんなものであれ、特別な使いの者を介してだが、着き次第すぐに送って寄越すよう、彼女は繰り返しウィルソンに命じているのだ。

警戒を怠らないようにしなくちゃならん。兄貴の陰謀のことも、彼女も今ではもう恐れていないのだ。仮にシングルトンがハウ嬢を訪ねるようなことになっても、俺は少しも驚かないだろうな。奴が彼女との面談を許してもらえるならの話だが、ハーロー嬢の居場所を知っている、あるいは、知っていそうなただ一人の人物というわけで、重要な話、それも、彼女にとって特に役に立つ話があるような顔をして近づくのだよ。ことによると、兄貴からの妥協案なんてものを持ち出すかもしれん。

その場合、隠れているようにと、ハウ嬢から彼女に警告があるだろう。そうなれば、俺の保護が再び必要となる寸法だ。これでうまく行くものと俺は信じている。ハウ嬢からの報せは、何にかぎらず、役に立つはずだよ。

彼女にとって、ジョゼフ・リーマンは卑劣漢であり、俺の手先なのだ。ジョゼフは、俺の言う正直者ジョゼフは、首を吊ることになるかもしれないな。もう十分に利用してやった。この先は、あいつの役目などほとんどないのだよ。時々刻々と新しいものを見つけ出せるというのに、使い物にならなくなるまで一つの策にしがみつくことはないのさ。

自分の才能を悪用しているなどと責めるのも止めてほしい。これだけの才能を持ち合わせながら、無駄に遊ばせておく者がどこにいるというのだ。

そうと決まれば、シングルトンを一人見つけ出すことにしよう。それが俺の仕事のすべてというわけだ。

「即刻見つけてくるのだ、ウィル」

「畏まりました」

「今すぐここに呼んでくるのだ。お前の従兄弟のポール・ホィートリーとやらをな。航海を終えたばかりだそうだが、俺が結婚して遊覧船を持った暁には、どうか雇っていただきたいと、お前が口入れしていた男のことだ」

さっとばかりに、ウィルは飛んで行った。間もなくポールが来るだろう。すぐにもハウ夫人宅へ向けて出発させる。ポールがシングルトンの航海士で、船長に遣わされて来たことにすれば、それで構うまい。シングルトン自身になるのと同じようなものだ。

小悪魔のサリーが、俺のやり方は手緩いと、しきりに責めている。だが、演劇では、主たる楽しみは最初の四幕にあるのじゃないかな。五幕目に来た時には、ある意味ではすべてが終わっているのじゃないかな。それに、獲物に飛び掛かるなり、その場で取り押さえて貪り食ってしまうのでは、まさしくハゲワシってところだね、そんな男は。

だが、本音を言えば、策に溺れたところがあるのだよ。仕事を確実なものにしようと思ってやったことだが、我がホッテントット君四人と引き合わせ、愛しの君を怯えさせてしまったのだよ。失地を回復するまでにはずいぶん時間が掛かるのではないかと思う。それに、ハーロー邸のあの忌まわしい一族のせいで、彼女は俺にも自分自身にも、そして、この世のすべてにも嫌気が差しているのだ。ハウ嬢だけは別だが、このハウ嬢が絶えず難題を持ち込んでくるのは確かだ。俺には他にもいろいろ厄介なことがあるというのにな。

階下の悪魔どもが暇なしけしかけているような手段に頼るのは、俺としてはひどく気が進まないのだ。最終的には、正当な形で彼女を自分のものにすることになるはずだと確信しているからな。

徹底的な試練を一つ乗り越えた暁には、見事な償いをしてやろうと考えている。

∴　∴

さあ、ポールが出発した。もう行ったのだよ。教えはすべて受けている。仕事の出来る男だ。船乗りになる前は、W卿の右腕だったのだよ。ジョゼフに比べ、ポールはもっと物の分かった悪党だ。あいつみたいに信心家ぶったりもしない。ジョセフの買収にどれほど金を掛けたと思うのだ。奴っこさん、いずれは懲らしめねばならんな。だが、先ずは所帯を持たせることだ。そうなれば（それでも十分懲らしめになるだろうが）、夫婦まとめて一度にやっつけることになる。それに、我が女神に対する振舞いのことがある。ベティは懲らしめを受けるに相応しいところがたっぷりとあるのだよ。

だが、待て。我が愛しの君のドアの錆びた蝶番が、キーキー音を立てて招いているところだ。俺の心臓もそれに応えてキーキー、ドキドキと震えるのだよ。奇抜な考えだな、それにしても。恋する者の心臓と一対の錆びた蝶番との間に、何のつながりがあるというのだ。だが、我が愛しの君の寝室のドアを開け閉めする蝶番なのだ。それで十分につながりがあるというわけだ。

ドアの閉まった音は聞いていない。間もなくお指図があるものと思う。このように俺を遠ざけたところで、何の意味があるというのだ。俺が何をしようと、どんな振舞いに出ようと、彼女は俺のものになる運命なのだよ。俺が度胸を据えれば、いつだって終わってしまうのさ、すべてがな。仮にここから逃げ出すことを考えたとしても、俺を避けられるような逃げ場所がどこにあるというのだ。両親に受け入れる気はないのだ。おじたちももて

なしてはくれない。最愛のノートン夫人は連中の指図を受けていて、彼女を迎えるわけに行かないのさ。ハウ嬢にも踏み切れないことだ。ロンドンでは、俺以外には知人一人としていないし、この街にはまったくの不案内なのだ。なのに、一体どうしたというのだ、俺様は。最愛の者のせいで、訳も分からないほどに恐れおののき、傍若無人の扱いに甘んじているのだからな。惨い仕打ちを加えている親戚連中に対してと同じ程度に、俺に対しても謙虚になるためには、俺の手を逃れるのはおよそ不可能だということを知ってもらうだけで良いという、そんな娘のためにだよ。

仮に俺が壮大な企てを試み、失敗するとしよう。そして、そのために彼女が俺を憎むとしよう。だが、その憎しみもほんの一時のことにすぎないのだよ。彼女は既に世間の非難を招いてしまったのだ。それゆえ、彼女としては、俺のものになることを選ばざるを得ないのさ。あの無遠慮な世間の目に対し、自らの評判を繕うためにもな。俺を知る人間、そして、二十四時間だけとはいえ、彼女が俺の手の内にあったことを知る人間なら、彼女の気持ちはどうであれ、現実のこととして、彼女が一点の汚れもないままでいるなどと考える者はどこにもいないはずだからな。おまけに、人間性というやつは周知のとおりの不埒者で、男女を問わずだれもが、自分自身についての知識で判断するものなのさ。人の気持ちというのは、機会が与えられさえすれば、俺同様に当てにならないものなのだとな。若くて、花も盛りの女が、一緒に駆け落ちをするほど男を愛している場合はなおさらの話だよ。この件についての世間の受け止め方はそんなところだろうからな。

彼女が侍女のドーカスを呼んでいる。疑いない。あの美しい調べの声を聞かせてくれるというのだ。彼女の足下でこの胸の内を吐露し、改めて誓いのすべてを繰り返し、これまでの無礼に対する許しを受ける、その機会を与えてくれるというのだよ。そうなれば、それこそ喜々として俺は新たな借りを作ることに取り掛かり、返済は後日まわしだ。次々に借りを作り、ついには止どめの一撃が加えられることになる。それ以上のことはあり得ないのだからな。そして、その後は、一度お許しが出ると、いつまでも許してもらえるということになるのさ。

∴

∴

ドアは再び閉ざされた。食事を一緒にと思ったのだが、ドーカスの話では、奥様は拒否しているそうだ。今度奥様の前に出たら俺のために頼んでくれと、あの娘に言い付けておいた願いごとなのだがね。ただ、断るにしても、冷たい言い方ではなかったそうだ。徐々に元どおりになるのだろう。この感心な娘に言わせると、階下の先輩たちの言い回しを真似ているのだが、奥様には止どめの一撃以外には効き目がない、というのだ。止どめの一撃のことは検討中さ。ところが、裏切り者のこの心は俺をカモにしているのだよ。

だが、この辺で終わりにしておこう。俺としては、女暴君のせいで、物を読んだり書いたり、そして、やきもきしたりする以外、何もすることはないのだがね。

われわれの間で結語などは堅苦しい。それに、彼女のものになりきっている俺だ。「衷心より貴公の　…　」だとか、「何某の　…　」などと書き添えるわけには行かんのだよ。

手紙　十

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

五月九日　火曜日

ジョン伯父様への働き掛けのことですが、もしもご同意いただけるのでしたら、出来るだけ早くにしていただきたいと思います。また私たち、すっかり仲違いをしてしまったのです。あの人を避け、部屋に閉じ籠もっております。実際には、そんなにひどいことをされたわけではございません。でも、やはり無礼な話です。手紙を盗ろうとしたのです。貴女からの一通です。でも、あの人が出入りは自由だと考えているような部屋では、手紙を認めるとか、読み直すようなことは、今後二度としないつもりです。あの人は一行も読んでおりません。本当に読まなかったのです。ですから、ご心配は要りません。それに、これからは用心いたしますので、ご安心ください。

事の次第というのは、こんな具合でした。控えの間に日が差し込んでおりましたし、ラヴレースさんは外出中ということで　…

《次いで彼女はハウ嬢に対し、氏の不意の入室や心乱すその言葉、厚かましい態度のこと、そして、手紙の奪い合い等について語り、以下のように筆を進めている》

そして、今ではすっかりあの人の掌中のものとなっているわけですから、あの人と一緒におりますのは賢明なことではないと、ますます確信するようになっているのです。身内の者たちが望みを持たせてくれるのでしたら、それだけで、私はあの人と永久に手を切る決心をするつもりです。

あゝ、あの人は感情の激しい、愚かで横柄な人間なのですわ。正直申しまして、とても仲良くやって行けそうに思えません。父と結婚した後の母がそうでしたが、私は今でもはるかに不幸な思いをしております。あの人ときたら（そんなことをする理由も口実も何一つございませんのに）、まだあの人のものにはなっていないうちから、私の気力を挫こうとしているのですからね。私は自由の身なのですし、自分の思いどおりにして当然ですのにね［それが出来ないなんて、本当に馬鹿なことをしてしまいました］。

私に望みを持たせてくれる気持ちが身内の者たちにあるのかないのか、それがはっきりいたしますまでは、かつてどのような場合にも心掛けたことのない手段を講じなければなりません。この仲違いをそのままにしておくよう努力するということです。でも、それでは、自分自身の目にも自分が卑しい人間と映ってしまうことでしょうね。心にもない振舞いまでしなくてはいけなくなるのですからね。でも、これは、終生悔やむことになります行動の一つの結果なのです。心が一つに結ばれておりませんすべての婚約、私の場合ですと、心の結びつきは絶望的に断ち切られているとでも申せましょうか、そんな婚約の当然の結果なのです。

次の点を、この先いつまでも、女性一人一人に対する私からの警告とさせていただきたいのです。自分の目には用心なさいということです。皆さんの判断に背くほうに与するのが常なのですからね。選ぶべきものが二つあるといたしますと、目はいつも、反逆者ですから、間違ったほうを取ろうとするものなのです。

この警告がどんなふうに私に当てはまるのか、とのお尋ねでしたら、ある秘密のことをお話しさせていただきます。貴女はずっと以前から気づいておられたようですが、内省いたしました結果、つい最近分かったことなのです。つまり、この愚かな目があまりにも強く引き寄せられるということがなかったなら、あの人と身内の者たちとの間で恐ろしい出来事が起こるのを防ごうと、わざわざあんな差し出がましいことはしなかったはずだと思うのです。そのことが私たちの文通のそもそものきっかけでしたし、気掛かりなその出来事が二倍の重さとなってのしかかってくる原因にもなっていたのです。虚栄心や自惚れた気持ちも、私の承知しておりますかぎりでは、その無分別な手段の一端を担っているのでしょう。と申しますのも、あれでは、障害を取り除く力が、身内のだれにもまして自分にあるのだと、私はそんなふうに考えているみたいに人目に映るのではないでしょうか。

でも、やはり私の心は目と結託しているらしい、などとはお考えにならないでくださいね。欺かれておりましたあの目も、今では過ちにはっきり気づいておりますし、惑わされました心も、そのことで目を蔑んでいるのです。伯父に向けての働き掛けもそれゆえのことですし、それで済むのでしたら、たとえ手足を一、二本失うことになりましても（本当にそう思います）、何としても過ちを償いたい気持ちでおりますと申し上げることが出来ますのも、それゆえのことなのです。

さようなら、私の一番大切なお友達。今私の心が感じております苦しみのその百分の一でも、決して貴女のお心が知ることのありませぬよう、私は祈っております。

貴女のクラリッサ・ハーロー

手紙　十一

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

五月十日　水曜日

書きますとも。どんな男の人にも代筆は頼みません(ア)。どんな女性にだって邪魔させたりいたしませんわ。分別と気紛れの区別くらいは出来る年齢になっておりますもの。男の人に手紙をするわけではないでしょう。母の認めない男の人、私が励ましたりするのは妥当でない、そんな男の人と文通を続けているとでもいうのでしたら、私自身の名誉、そして、義務の念からいたしましても、言い付けに従う必要があると思います。でも、事情はまるっきり違うのですから、この件につきましては、お願いですから、もう一言だっておっしゃっていただきたくないのです。

伯父様との和解が可能なら、あの人とは手を切るおつもりとのことでしたが、私は大賛成ですわ。

あの男は大嫌いです。なぶり者にするような手口を使いますからね。心の底から憎しみを覚えるのです。あのご報告を読ませていただくだけでも、貴女がお悩みになるのと同じくらい、私のほうでも焦れてしまいます。あの愚かな破廉恥漢からお逃げになるための励

(ア) クラリッサは、ハウ嬢の代筆としてヒックマン氏を推薦しているのである。第三巻、手紙六十九の第五段落以降を参照のこと。

ましとなりますことが得られますよう、心から願っておりますわ。
　そのように願う理由が他にもございます。と申しますのは、ある人物と知り合ったばかりなのですが、この人はあの男の私生活のことをたくさんご存じなのです。あの男はまったくのワルですわ。私の耳にいたしましたことすべてが真実だといたしますと、本当にひどい悪党です。でも、他にもいろいろ教えていただく約束になっております。たとえあの男に命が一ダース有るといたしましても、二十件も前の罪のことでそのすべてを失い、とっくに死んでしまっていたことでしょうね。これは保証いたしますわ。
　あんな男ですが、もう一度親しく言葉を掛けても構わないと、そんなお気持ちがございましたら、ベタートン嬢のこと、そして、その女性がどのようなことになったのかをお尋ねになるのですね。その人についてうまく言い逃れをするようでしたら、ロッキアー嬢のことについて質してご覧になることです。まったく、何てワルなんでしょう、あの男は。
　ご希望どおり、伯父様のことは打診してもらいます。それも、すぐにね。ただ、成功の目途はありそうに思えません。理由もいくつかございます。貴女の地所を犠牲になさっても、一部の人たちにどんな効果を及ぼすのか、判じ難いところがあるのです。でも、それを試してご覧になる場合、私といたしましては、黙って見ているわけにはまいりません。
　ハンナさんのお身体の具合は相変わらずなのですから、ドーカスを貴女の側に引き込む工夫をなさるようお勧めいたします。ドーカスを避けるような無策なことはなさっておられないでしょうね。
　あの男の手紙を何通か手に入れられると宜しいのですけれどね。あのように無頓着な性格の男なのですから、いつもいつも用心しているわけではないでしょう。もしも、いつも用心しているようでしたら、また、ご自分の召使ですのに、その娘を引き込むことが貴女にお出来にならないのでしたら、私なら両方に疑いを掛けるでしょうね。あの男が手紙を書いている時とか、傍らに手紙を置きっぱなしにしている時に、予告した後、間をおかずにだれか使いを送るのです。不意を突いて、用心する暇を与えないというわけです。
　これは、私たちが旅先の宿で行う検査と同じ性質のものだと思います。悪い男でも潜んではいまいかと、部屋の隅々や控えの間を覗いてみるものですが、だれかを見つけたりすると、肝を潰すほど驚いてしまいますね。でも、目をしっかり開けて起きている間に見つけるほうが、ベッドに就いて寝ているところを襲われるよりはマシなのです。
　ご自分の衣類を手になさいましたこと、喜んでおります。でも、お金はなかったとのことでしたね。ご本につきましても、スピラ、ドレクセリウス、そして、『信仰の実践』以外には送ってくださらないというのですからね。最後のものは、送った人たちこそ手元に残しておくべきだったと思いますわ。でも、この件につきましては端折らねばなりません。
　あの男が私の手紙を一通手に入れようとしたことに触れておられましたが、すっかり肝を冷やしてしまいました。新たに情報を与えてくれております人が、間違いないこととして教えてくださったのですが、あの男は、罪もない娘さんたちを弄んだ後、暴力に訴えても互いの立場を守ろうとグルになっております、そんな破廉恥漢仲間の頭目だというのです（貴女に引き合わせた男たちというのは、そのうちの何人かに違いありません）。私の遠慮会釈のない扱いぶりをあの男が知るようなことになれば、怖くて、護衛なしに出歩いたりは出来なくなるでしょうね。
　こう申し上げますのは残念なのですが、私の考えでは、根拠もあってのことですが、お

兄様はあの馬鹿げた策謀を捨ててはおりません。つい今し方、日に焼けた船乗り風の男が私を訪ねてまいりまして、貴女との面談を許してもらえるなら、シングルトン船長が大いに貴女のお役に立てるはずだと言うのです。貴女の居場所につきましては、知らないことにしておきました。十分に指図を受けているのでしょうね。その男からは何一つ引き出すことも出来ませんでした。

お従兄弟さんのモーデン様からのものを同封してありました、あのお手紙(ア)を読ませていただきましたが、二時間も涙が止まりませんでした。宜しいですね、自暴自棄になってはいけません。私たちの心を一つに結んでおりますあの友情の求めに従いまして、貴女のアナ・ハウのほうで一生懸命お慰めすることが出来るようにしていただきたいのです。

貴女のお取りになった行動について、一面では余儀なく強いられたことですし、また一面では、欺かれてのことではありますが、お手紙の中で何度も何度もご自分を責めては塞ぎ込んでおられますのも、無理のないことと存じます。不思議な宿命ということなのでしょうね。まるで、人間の分別すべてが空しいことを証明しようとしているみたいに思われます。貴女の匂わせておられるとおりですわ。貴女も私も、おそらく強く意識し過ぎていたのでしょうが、他の人たちよりも優れておりますことをあまり誇りにしなければ良かったと思います。でも、止しましょう。弱い心を持った人間というのは、何か尋常でないことがありますと、すぐにも判断を外に求めたがるものですね。神様の思し召しを責めるよりも、自分自身とか最愛の友とかを咎めるほうがより適切であり、また、安全でもあれば当然でもあるというのが、はるかに正しいことなのです。神様は、物事をお定めになるに当たりまして、いつも賢明な目的を用意しておられるに違いないのですからね。

でも、以前のお手紙にもございましたが、ご自分のことをただの警鐘にすぎないようなおっしゃり方はお止めください(イ)。警鐘となるのは勿論ですが、かねてから望んでおられたとおりの、見事なお手本にもなるのですからね。そして、その意味で貴女の一件は、これから耳にされる人たちすべてにとりまして、二重の効果を持つはずです。と申しますのは、貴女が備えておられるような美質をもってしても、放蕩好きな心の持ち主から立派で思いやり溢れる扱いを受ける保証にはなり得ないというのでしたら、まずまず我慢が出来るという程度の振舞いでも、その種の男性に期待する人はいなくなるはずですからね。

あの男と駆け落ちなさるお考えなど一切なくとも、貴女を誤った道へ追い込むような行動に走ったという点で、ご自分のことを釈明の余地もないとお考えになるのでしたら、貴女の半分も挑発や誘いを受けておりませんのに、また、慎みなど一切顧みずに、塀を飛び越えたり、窓から飛び下りたり、両親の屋敷を逃げ出して、その日のうちに誘惑した男のベッドに潜り込むような、そんな軽はずみな女たちというのは、自分のことをどのように考えたら良いのでしょうね。

さらに申しますと、貴女のほうでは、理不尽この上ないご両親の禁令、当初は中途半端なものにすぎなかった禁令に従わなかったということで、そんなにも進んでご自分をお咎めになるのでしたら、この上なく道理に適った忠告にわざと耳を塞ぐような人たち、それも、おそらく、計画どおりの軽率な行動に走りました結果、身の破滅は明らかだとか、不都合を来すのは疑いないような場合なのですが、そのような人たちは一体どうしたら良い

(ア) 手紙七を参照のこと。 (イ) 第三巻、手紙二十四を参照のこと。

というのでしょうか。

それに、これで最後にいたしますが、貴女の身の上話にいずれ接することになります人たちすべてにとりましては、貴女は油断のなさの立派なお手本となることでしょうし、少しばかり道を踏み違えたように思われております用心深い人が、過ちを正そうと努力いたします際に、また、好んで踏み外したというよりは、やむなく離れねばならなかった道に立ち戻ろうとして、自らの本分は一度として見失うこともなく、全力を尽くします際に用いる、あの慎重さや自制心の立派なお手本ともなるのです。

さあ、さあ、お願いです、これらの点だけをお考えになるのです。力を落としたりなさらず、不都合だったとお考えの点を改めようとの真剣な意図を、堅実に推し進めていただきたいのです。それに、過ちを犯されましたことも、長い目で見ますと、不幸なことではないかもしれません。とりわけ、貴女の過ちには、貴女の意思はほとんど関わっていないわけですからね。

それから、是非とも申し上げねばなりませんが、〈踏み違えた〉や〈過ち〉など、その種の言葉を私が用いますのは、貴女がすぐにもご自身を責めようとなさるお気持ちや、私が義務を負うております者の意見に敬意を表してのことにすぎないという点です。と申しますのは、貴女の行いのどれを取りましても、いずれもが申し開きの出来るものだと思いますし、貴女に罪を着せる以外には身の証を立てる術のない人たちこそが咎められるべきなのだと、本心からそう考えているからなのです。

ただ、あまりにも頻繁に貴女のペンからこぼれてまいりますような陰鬱なお考えは、仮にラヴレースと結婚なさって、あの男が最高の夫になるといたしましても、貴女のその後の楽しみごとすべての中に紛れ込んでくるように思うのです。

あの男をお知りになるまで、貴女は素晴らしく幸せでしたね。この世の人間には及びもつかないほどの幸せさだったのです。貴女に対しましては、だれもが崇拝に近い感情を抱いておりました。嫉妬心でさえも、最近では貴女に向かってその悪意に満ちた頭をもたげておりますが、衆に秀でた貴女の立派さには恐れ畏まり、声も立てずに称賛のまなざしを送っていたのです。訪問なさる先々で、貴女は一座の人気の的となっておられました。貴女がご意見をお述べになるまでは、年上の方たちがご自分の考えは差し控えておられますのを、私は目にしたこともあるのです。多くの場合、貴女のご意見を伺った後で、ご自分たちのを引っ込めるような悔しい思いをしないためなのです。でも、このようなことがありますといつでも、だれもが貴女のお考えに、そして、貴女が秀でておられることに同意するのですが、その際にも、貴女にはお振舞いの淑やかさ、偉ぶらないところや愛想の良さがございますから、空々しさもためらいの気持ちも、同じく認められることはなかったのです。褒め言葉を口にしたり、我が身を差し置いて貴女のほうを贔屓したりいたしましても、ご自分たちが恥ずかしい思いをするわけでもなければ、貴女が思い上がって、これ見よがしに勝ち誇るわけでもありませんのは、皆さんもご存じだったからです。と申しますのも、貴女はどのような主張を通されます時にも、その都度、皆さんから譲ろうとする気持ちを引き出すようなことを何か口になさいますし、皆さんのほうでも、勝利を得たわけではなくとも、満足し、納得した気持ちにさせられるからなのです。

高尚な技芸のことが話題になりますと、いつも貴女の作品が持ち出され、参考にされておりました。勤勉さや節約上手のこと、読み書きの能力や記憶の良さ、称賛に値すること

すべてに亘りまして、それを会得する手際の良さ、そして、さらに羨望の的となっております魅力溢れるご容姿と着こなし、また、その両方の点での比類のない優雅さのことでさえ、貴女をご存じの人たちの間でそのような話題が取り沙汰されます場合には、どなたであれ、お粗末で二番煎じの褒め言葉しかいただけなかったのです。

貧しい人たちは、行かれる先々で貴女のことを祝福しておりましたし、裕福な人たちは貴女のことを自分たちの誉れと考え、自分たちの階級の評判を高めてくれるお手本を下の階級から探したりせずに済みますのを誇らしく思っていたのです。

男の人たちは皆、その若さですのに、貴女を望み、求めてまいりましたが、でも、求婚者として連れてこられた人たちにいたしましても、さもしくて悪意に満ちた下心の後押しがなかったなら、だれ一人として、貴女を仰ぎ見るような厚かましい真似はしなかっただろうと思うのです。

このように、貴女を取り巻く者すべてに幸せをお感じになり、このように、周りに集まる人たちすべてを幸せにしておられる貴女ですが、ご自分の身には何事も起こりはしないのだ、などとお考えになることが出来るのでしょうか。貴女にいたしましても、人間共通の運命を免れるわけに行かないのだということを証明するためにです。貴女も完全無欠ではないことを、そして、試練や誘惑や不幸に遭わずに生涯を送りたいなどと思ってはいけないことを納得させるためにですわ。

確かに、次の点は認められねばなりません。試練にいたしましても、誘惑にいたしましても、貴女の美徳に相応しいもの、貴女の分別に見合ったものは、まだお若いこともございますから、今苦しんでおられる厳しいものと比べまして、もっと早くに貴女の身に降り懸かったほうが良かったというわけではありませんし、また、そのほうがより効果的だったとも思われないということです。落ち着きと洞察力を備えておられるため、ありきたりの事故にお遭いになるような人でないことはお認めしなければなりませんからね。と申しますのも、凡庸な人たちの定めとなっております災難の大部分は、身の程を知らない望みを抱いているか、それとも、その人たちの値打ちが低すぎるか、そのどちらかのためにもたらされているのではないでしょうか。いずれの場合も、貴女には当てはまらないことです。ですから、貴女を攻め落とす目的でわざわざ送り出されてまいりますのは、男性、あるいは、男性の姿を装った悪霊でなければならなかったのです。一方、お身内の人たちと同じ数のその手の悪霊が、暗闇に紛れてそれぞれに、皆さん一人一人の心を捉えますのを放任された結果、おそらく、そこに腰を落ち着けてしまったのです。そして、外にいる誘惑者の動きに沿うよう、行動の一つ一つを指図していたのです。あの男とお会いになるよう、貴女を苛立たせ、挑発し、駆り立てるためにです。

全体を通して申せますことは、これまで何度もお話ししておりますとおり、貴女の過ちには、もしもそれが過ちならばの話ですが、宿命に類したものがあったように思われるという点です。そしてこれは、貴女が過ちを犯さなかった場合に示されますものよりももっと良いお手本が、貴女の苦しみから得られるようにとの考えから是認されたことなのかもしれません。と申しますのは、逆境こそ貴女が光輝を放つ時なのですからね。私にははっきりと分かるのですが、逆境こそは、幼い頃からつい先頃まで貴女が歩んでこられた、その順風満帆の幸せな日々には光を当てられることもなかったような、そんな心の強さや美しさを引き出してくれるに違いないのです。あのような幸せが貴女には見事にお似合いで

したし、大層相応しいことだと、私たちだれもが考えておりましたけれどね …

それでもやはり、試練の場に立たされますのは、貴女にとりまして辛いことに違いありません。私も辛いのです。貴女を好いております者はだれでも、そして、貴女も最近お気づきになられたような、妬み心がその矢を向ける的としてではなく、称賛を受け、お手本となりますために高いところに立っておられる人として、貴女のことを眺めております者はだれでも、皆同じ気持ちでいるのです。

これまで書き記してまいりましたことに、どうぞ、それ相応の注意は払っていただきたいのです。そうしていただけますなら、思いやりに動かされた考えというものには狂信的なところもないわけではございませんから、これを読み返しまして、いつもの文体よりははるかに優れたものになっていると考えております貴女のアナ・ハウは、苦しんでおられるお友達の打ちひしがれた心を慰め、奮い起こしますような助言を、いわば神のお導きで思いついたのだと、すぐにも自惚れた気持ちを起こしてしまうことでしょうね。そのお友達は、まだ若さの盛りですのに、このような厳しい試練に遭われたため、時にはすっかり意気消沈なさって、周囲に立ち込める暗闇を突き破って進むことが出来ずにおられるのです。その先には、闇に遮られてはおりますが、より佳き日の希望に溢れる朝の光が待ち受けておりますのにね。

とりあえず、これにて筆を置くことにいたします。

変わることなき誠意と親愛の情とを込めまして、貴女の

アナ・ハウ

手紙　十二

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

五月十二日　金曜日

あゝ、心気高いお友達、申し上げる言葉もございません。お褒めには相応しくないとの自覚が心に重くのしかかるのです。とは申せ、お褒めのお言葉から窺われます優しいお気持ちが心を奮い立たせ、慰めてもくれるのです。大好きな人たちから高く買っていただけますのは、そして、不慮の災難を乗り越え、肉体も血のつながりも乗り越えて友情を育んでくださる人もおられることを知りますのは、素敵なことですからね。私が輝くのはどんな時だといたしましても、友人の逆境こそは貴女が輝きを放つ時なのですわ。また、私がこういった不幸を嘆きますのは、過ちにも近いことなのでしょうね。女性を気高くするばかりでなく、人間性に威厳を添えることにもなります、そんな美質を発揮する素晴らしい機会が貴女に与えられるわけですからね。

でも、これよりは楽しみの少ない話題のほうへ進ませていただきます。

シングルトンの計画は終わっていないと考えるべき根拠があるとのお話、残念に思います。でも、その船乗りは一体どんなことを持ち出すつもりだったのでしょうね。ただ、仮にも私のためになることでしたら、こんな方法を思いつくことはまずなかったようにも思われます。

ご安心ください。お手紙の安全はお約束いたします。

ラヴレースさんが大胆な試みや無礼な振舞いをいたしましたので、それを口実に、そうするつもりだと申し上げてありましたが、あれ以来ずっと、あの人は近づかせないようにしております。伯父への働き掛けの首尾を確かめる機会が欲しいこともありますし、そこから何か有利な提案でも出てくるようなら、自由にそれを受け入れられるようにしておきたいからなのです。でも、あの人はとてもしつこく付き纏っておりまして、フレッチヴィル夫人のところから、家のお話のため、二度もメネルさんを連れてまいりました。あの人とまた縒りを戻さねばならなくなるようでしたら、絶えず自分自身を辱めているような気持ちになることでしょうね。

新たに暴かれましたあの人の罪業の件や、ドーカスを味方に引き入れ、あの人の手紙を何通か手に入れるようにとのご助言でしたが、これらにつきましては、果たして伯父の好意が期待出来るものかどうか、それ次第で気持ちの向け方も違ってくることでしょう。

可哀相に、私のハンナの具合が依然思わしくないとのこと、残念に思います。お願いです。何か今のあの娘に必要なものはないのか、どうぞお調べくださって、お教えいただきたいのです。

明日が過ぎますまで、この手紙は結ばずにおきます。礼拝式に出るつもりなのです。そうするのが務めということもありますし、また、付き添いとか同伴者なしに、好きな時に自由に外出させてもらえるのか、調べるためでもございます。

五月十四日　日曜日

短いものでしたが、ラヴレースさんとの衝突を避けるわけにまいりませんでした。玄関先まで馬車を呼んであったのです。馬車が着いたという知らせがありましたので、部屋を出てそちらへ向かったのですが、階段の降り口で身形を整えたあの人に出会いました。本を手にしておりましたが、帽子は被らず丸腰でした。外出するのかと、ひどく真面目な顔付きで、でも、丁重に尋ねておりました。そのとおりだと私は答えました。あの人は、礼拝式ならお供させてもらいたい、と言うのです。私はお断りいたしました。すると、あの人に対する私の態度のことをしきりにこぼし、ここ一週間のような暮しを繰り返す気にはとてもなれない、などと言い出すのです。

私は包み隠さずにはっきりと、身内の者たちへの働き掛けをしたこと、そして、その結果が分かるまでは一人きりでいるつもりであることをお話しいたしました。

あの人は顔を赤らめ、驚いている様子でした。でも、何か口に出そうとしたことを押し止どめ、シングルトンのせいで危険な目に遭ってはいけないということを口実に、再びお供を申し出ておりました。

それからあの人は、フレッチヴィル夫人がさらに二週間、あの家に残りたがっておられたことを話しておりました。あの人に言わせますと、私があの家に入る決心をし兼ねていることは、夫人のほうでも気づいているというのです。こんな塞ぎの虫はいつになったら決心がつくのか、だれにだって分かりませんものね。そして、「惨めな一週間でしたよ、マダム。貴女とのことがこれほどひどくなかったなら、今頃は貴女も、あの家の主になっておられたでしょうね。おそらく、ベティ夫人は駄目としても、従姉妹のモンタギューには来てもらえたかもしれないのです」と言うのです。

「それじゃあ、すべて貴方のおっしゃるとおりだといたしますと、お従姉妹さんのモン

タギュー様がシンクレア夫人のところをお訪ねになるわけには行かないことになりますわね。シンクレア夫人のお宅に対して、一体どんな不服を唱えておられるのでしょう。この家は、私が一、二ヶ月住むのには適当でも、お身内のどなたにとりましても、数日滞在するのにも相応しくない場所だということでしょうか。それに、フレッチヴィル夫人も延長なさったのですね」　そう言うと、私はあの人を押し退け、急いで階段を降りました。

あの人はドーカスに声を掛け、剣と帽子を取ってくるよう申し付けました。そして、私の後を追って階段から廊下に降りますと、私とドアの間に割って入り、お供を許してほしいと、また頼むのです。

その時でした、シンクレア夫人が出てまいりまして、チョコレートを一杯いかがでしょう、と誘うのです。

「チョコレートでしたら、この人を呼んでいただきたいですわ、シンクレア夫人。この人の許可なしに自由に出歩いて構わないのかどうか、私には分かり兼ねますので」と、私は申しました。

そして、あの人のほうへ振り向くと、こう尋ねたのです。囚人のつもりで私を閉じ込めておくのでしょうか、とです。

ちょうどその時、ドーカスが剣と帽子を持ってまいりましたので、あの人は玄関のドアを開き、嫌がっている私の手を取ると、ひどく媚びるような態度で馬車のところまで私を引っ張って行きました。通りすがりの人たちは立ち止まって、じろじろ見つめながら囁き合っておりました。ただ、あの人の容姿や服装は大変上品なものですから、大抵は皆の目を引き付けてしまうのです。

すっかり人目に晒されたものですから、きまりの悪い思いをしておりました。私に続いてあの人が乗り込みますと、御者はセントポールへと馬車を走らせました。

途中ずっと、あの人はしきりに気を遣っておりました。私のほうでは、出来るかぎり打ち解けない態度を守っていたのです。そして、帰宅いたしますと、この一週間はほとんどそうしていたのですが、一人きりで食事をいたしました。

私がそうするつもりでいるのを知りますと、あの人は次のように話しておりました。私の働き掛けの結果が分かるまではおとなしく意向に従うことにするが、その後は、目出度い日を決めてくれるまで、一瞬たりと息をつく暇もないことになると思ってほしい。私があの人を軽んじたり、恨んでみたり、待たせたりするので、心の底から苛立っているためだ、というのです。

何という男なのでしょうね。これは二重の意味で悔やんでも悔やみ切れない話なのですが、あの人のこぼしていることすべては、身から出た錆だと言っても構わないことなのですからね。

あゝ、伯父から良い知らせが届いてくれたらと、本当にそう思います。

さようなら、私の一番大切なお友達。これをすぐにも交換出来ますよう、用意しておくことにいたします（明日には貴女からのお便りがあるでしょうからね）。それで私の運命は決まると言っても構わないでしょう。

貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　十三
ハウ嬢からジュディス・ノートン夫人へ

五月十一日　木曜日

ノートン夫人へ

私の大好きなお友達が親戚の方たちとの和解を切に望んでおられますことは、たまたま私と言葉を交わされた際に確信なさったというふうに、いかがでしょう、あのご家族からは恨みを買っておりますゆえ、入れ知恵をしたのは私だと名を挙げないようにして、ハーローの奥様にお知らせする手立てを講じることは出来ないものでしょうか。また、お嬢様は和解に望みを託されて、少しでもその妨げになるような恩義をお受けになるのは、これまで一切断っておられるということ、おじい様の地所の件で、一族の方たちを不安に陥れるような力をラヴレースさんに与えますのは、何としても避けようとしておられるということ、お嬢様が望んでおられますのは、これまでどおり、独身生活を選ぶのを許していただきたいということだけですし、それを聞き入れていただけるのでしたら、あの地所のことはお父様のお気持ちどおりにしたがっておられるということ、ラヴレースさんが絶えず結婚を迫っており、あの人のお身内の方たちも同様だということ、ただ、あの人は品行に芳しくないところがありますし、ご自分の親戚の方たちが憎しみを抱いておられることもありまして、お嬢様はほとんどあの人に好意を感じておられず、和解の望みをわずかでも示していただけるのでしたら、あの人のことはすっかり諦めまして、お父様の庇護に身を委ねるおつもりなのは確かだということ、ただ、皆さんには決断を急いでいただかねばならず、でなければ、お嬢様もあの人の熱心な懇願に折れざるを得なくなるでしょうし、そうなりますと、不愉快な裁判沙汰を防ぎますのも、お嬢様の力の及ばないものになってしまう、といったことをお知らせ願いたいのです。

名誉にかけてお約束いたしますが、ノートン夫人、私の取りましたこの処置につきましては、私たちの大切なお友達は一切ご存じないことなのです。従いまして、このような行動に踏み切りました理由につきまして、お話ししておきますのが妥当なことでしょう。内緒に願いますが、次のとおりです。

今申しましたような趣旨のことを、ヒックマンさんにお願いいたしまして、ジョン伯父様に匂わせてもらいたいと、お嬢様からご希望があったのです。ただ、ヒックマンさん自身からのように、遠回しな言い方で、とのことでした。万一にも働き掛けが不首尾に終わるようですと、そして、ラヴレースさんが（お嬢様からほとんど好意を寄せていただけないことを、今でも不満に思っているのですから）働き掛けの件を知るようなことになりますと、お嬢様は身を守る術をすべて奪われてしまわれるかもしれませんし、あれだけ高慢ちきな男なのですから、きっとひどく不都合な目に遭わされることにもなりましょう。そのようなことにならないためのご配慮なのです。

このような権限をお嬢様から与えられておりますし、働き掛けが功を奏しますよう切に望んでいることもございますが、周知のとおり、ハーロー夫人は奥様としてもお母様としても、また、義姉・義妹としても立派な人なのですから、夫人のお力とジョン・ハーロー様のお力が一緒になれば（伯父様を引き入れることが出来るとしてですが）、それ相応の効果が上がるに違いないと考えた次第なのです。

ヒックマンさんが明日にはジョン・ハーロー様にお会いいたします。その頃には、ハーロー夫人に会っていただいて構いません。あの老紳士に好意的なところが見受けられました場合は、貴女も同じ理由でハーロー夫人と面会しているはずだと、ヒックマンさんのほうでお知らせいたしますし、世界中で最も冷酷になっておられる人たちの心を和らげるにはどのような手順で進めるのが最善か、ハーロー夫人と共に相談してくださるよう、伯父様に進言なさる予定なのです。

これがありのままの事情です。そして、貴女にお便りをする本当の動機なのです。従いまして、すべては貴女の分別にお任せすることにいたします。そして、事が首尾よく進みますよう、心の底から願う次第です。ラヴレースさんが私たちの素敵なお友達に相応しいとは到底考えられませんし、実際、あの方に相応しい男性など一人として思い浮かばないからです。

仲立ちくださいました結果を、ほんの一行で結構です、是非ともお知らせ願います。無理なく期待出来ます程度の結果でないことが分かりました場合は、私の取りました行動につきまして、大切なお友達に私のほうからは一切お知らせいたしません。貴女もお知らせになりませぬよう願います。と申しますのは、その場合、すでに有り余るほどたくさんの苦痛に苛まれておりますお心に、さらに深い苦しみを与えるだけのことだからです。親愛にして有徳なるノートン夫人へ。

貴女の真の友

アナ・ハウ

手紙　十四

ノートン夫人からハウ嬢へ

五月十三日　土曜日

謹んで、お嬢様へ

このようなことをお知らせいたさねばなりませんのは、心も張り裂ける思いでございますが、日頃よりお慕い申し上げておりますハーローお嬢様のご家族にとりましては、大変な事態に立ち至っておりますゆえ、お嬢様のためにどのような働き掛けをいたしましたところで、差し当たりましては、成功の見込みはまったく考えられないということでございます。お気の毒に、お母様にはご同情申し上げずにはおられません、お母様からは哀切の情かぎりないお便りを頂戴いたしておりますが、貴女様にご覧いただくわけにもまいりません。この件につきまして筆をお執りになりましたことは、どなたにも知られないようにとのお達しなのでございます。いうならば、お心の安らぎのためにも、そうなさらずにはいられないということなのでしょう　…　私がこの点に触れましたことは、何卒ご内密にお願いいたします。

私の大好きなお嬢様は、神のご加護により、操を堅く守っておられることと信じております。そのように忌まわしい冒瀆行為に手を染めるような男性は、この世に一人として存在しないと思うのでございます。あのように揺るぎのない美徳なのです。本分を怠ることなど、少しも案じてはおりません。あのように清らかなお心は、不意打ちや乱暴な手の届

かないところへ、いつまでも神様がお守りくださいますよう願っております。マダム、どうぞお願いいたします。心配の過ぎるこの心を落ち着けていただきますためにも、一行で構わないのです。わずか一行で結構です。使いの者にお託しいただきとうございます。お嬢様の操は今も汚れなきことを（貴女様には間違いなくお出来になるのですから）お知らせいただきとうございます。もしも違うとのことでしたら、現世の慰めすべてに別れを告げねばなりません。この身にとりまして、世の中に何の慰めがございましょう。

不幸者ジュディス・ノートン

手紙　十五
ハウ嬢からジュディス・ノートン夫人へ

五月十三日　土曜日　夕刻

親愛なる奥様へ

貴女の最愛のお嬢様は汚れのない操を守っておられます。そうあっていただかねばなりませんし、男の手管、悪魔の仕業にも、操は守り通されるはずです。和解に望みを託すことが出来たとしての話ですが、私が目指しましたのは、もっぱら、お嬢様があの男とは結婚なさらないようにすることだったのです。今申し上げられますことといえば、ただ、お嬢様はひどい夫に連れ添う危険を冒さねばならないということだけです。似合いの男性など、この世に一人もいないほど立派なお嬢様ですのにね　…

あの人のお母様のことを、貴女は同情しておられますね。私はいたしませんわ。風の吹くたびに乱れてしまいますような、そんな不確かで、惨めな、自分だけの平穏さを取り繕いますために、母としての愛情や慈悲を示すことが出来なくなっております母親に、私は憐れみなど感じないのです。

どのような姿や形をしていましても、すべての暴君に私は憎しみを感じます。でも、父の姿を装った暴君と母の姿を装った暴君こそ最悪のものです。情けを持ち合わせることは出来ないのですからね。

繰り返しますが、そのような親御さんのどちらにも私は同情いたしません。憐れみを受けるに値いたしますのは、私たちの大切なお友達だけなのです。あの人も、ご両親のことがなければ、決してこんな男に捕まることはなかったのです。貴女も、あの人の事情すべてをご存じではないのです。こんな男とお屋敷を出るおつもりはなかったのだなどとお話しいたしましたところで、何の役に立ちましょう。あの人を極端な行動へ追いやった人たちにとりまして、あの男を非難するのに都合が好いというだけの話です。今はあの人が避難先としなければならない男ですのにね。

貴女の誠実なる友、そして、しもべ

アナ・ハウ

手紙　十六
ハーロー夫人からノートン夫人へ

［この書簡集の編纂が行われるまでは公開されなかったもの］

五月十三日　土曜日

ご通知いただきました件、約束いたしましたとおり、書面をもちましてお返事いたします。ただ、私が筆を執りましたことは、ベラの世話をしているベティにも（時々貴女のところを訪ねているのは分かっております）、あの救い難い娘自身にも、また、他のどなたにも知らせてはなりません。その点は申し渡しておきます。胸が一杯なのです。筆を進めておりますうちに、苦しい胸の思いを少しは漏らすこともあるでしょうし、もしかいたしますと、厳しく当面の問題だけに絞るのではなく、一番心に掛かっております事柄を筆にしてしまうこともあるかもしれません。

この恩知らずな娘が、かつて私たちすべての者からどれほど愛されていたか、ご存じですね。ご存じのとおり私たちは、あの娘を目になさったとか、言葉を交わされたとかいう人たちのお一人お一人と一緒になって、あの娘を褒め称えておりましたし、褒めるにいたしましても、我が子のことなのですから、控え目にして当然なのでしょうが、その限度さえも越えてしまう有り様でした。私たちといたしましては、あのように際立った美質を備えているのですから、褒め言葉を控えたりいたしますと、自分の子供を得意顔で依怙贔屓しているとも非難されるよりも、むしろ、目が利かないとか、気づかない振りをしているとか受け止められてしまうに違いないと考えていたのです。

ですから、このような娘に恵まれましたことを祝ってくださる人がいますと、私たちはそのお祝いの言葉を少しも割り引くことなしにお受けしていたのです。こんなお子様を授かり、お幸せですね、とのお言葉をいただくような場合は、私たちほどに子供に恵まれた両親はかつていなかったことを認めておりました。もっと具体的に、私たちに対するあの娘の孝行ぶりのことを褒めてくださるような場合には、私たちは、あの娘には、背こうにもその術が分からないのですと申しておりました。クラリッサ・ハーローさんは年齢以上の分別と洞察力とをお持ちですね、と言われますと、それを否定するどころか、分別に優るとも劣らないほどの並外れた判断力も備えておりますわよ、と私たちは付け加えていたのです。あの娘の思慮深さのこと、そして、他の人たちの場合ですと、年齢と経験を積み重ねますことで初めて備わるものですが、その代わりになっているとどなたもが見ておりました、そんな〈先見の明〉のことが称えられますと、クラリッサ・ハーローから教えをお受けになりますのに、どなたも遠慮なさる必要はございませんわと、私たちは誇らしげに答えたものでした。

御免なさいね、あゝ、ノートンさん、許してくださいね。でも、貴女が許してくださることは分かっております。良い子でおりました頃には、この娘は貴女の子でしたし、私にとりましてと同様、貴女の誇りでもあったのですからね。

でも、貴女も耳になさったはずです。教会の行き帰りにあの娘が通り掛かりますと、見知らぬ人たちが立ち止まり、皆さんのおっしゃいますには、天使みたいなお嬢さんとのことでしたが、そんなあの娘を褒めそやしておりましたね。あの娘がだれなのかご存じの人たちのほうでは、クラリッサ・ハーローのことやあの娘の素晴らしさについては、だれもが知っていなければいけない、あるいは、耳にしていて当然と言わんばかりに、「あら、クラリッサ・ハーロー嬢ですわよ」と、大きな声を上げるだけのことでした。一方、あの娘

のほうは、お褒めに与るのに慣れっこになっておりますから、日常茶飯のことと受け止めまして、表情も足並みも変えることはなかったのです。

私自身といたしましては、あんなにも素敵な子供の母親なのだと話題にされたり、話し掛けられたりいたしますたびに、嬉しさを抑えきれずにおりましたが、きっとそんな気持ちの底には罪深い自惚れ心があったのでしょう。その間ずっと、主人と私は、あのような娘を分かち合っているということで、互いへの愛を一層深めていたのです。

やはり、どうしても負けてしまいます。愚かしい母の情が胸に溢れてしまうのです。あの娘がかつてはどうだったのか、その思い出でしたら、いつまでだって語り続けることも出来るでしょう。もしもその思い出が、今のあの娘の姿をこの胸から掻き消してくれるのでしたらね。

年端も行かぬ娘ですのに、あの娘の胸にでしたら、私の悲しみごとすべてを委ねることも出来たのですが、思慮深いこともあり、慰めばかりでなく、助言も得られることは確かだったからです。それに、そのどちらに言及いたします時でも、とても謙虚な恭しい態度で遠回しに語ってくれますから、よそのどのお嬢さんの場合でも、母親と娘という、年齢や立場の違いもあって懸念されることなのですが、不服を唱えるような気持ちにはとてもなれなかったのです。家の外では私たちの誇りでしたし、家の中にありましては歓喜の源だったのです。だれもがあの娘と一緒に過ごすことをしきりに望みましたし、私たちのほうでは、ハーロー兄弟にも、また、私たちの妹と弟にあたりますハーヴィーにも、あの娘を渡すのは渋ったものでした。ですから、次にはだれがあの娘の引き立てを受けるのかということ以外、私たちの間で争いごとなどは一切なかったのです。私たちからの咎めごとなどは、あの娘には一度だって覚えのないことでした。咎めがありましても、愛しさゆえのものに他なりません。あの娘が私たちに構わず、あまりにも長い間一人で閉じ籠もろうとする場合の話です。例の素敵な娯楽や有益なお仕事に身を入れるためですが、でも、それらのお陰で、家族全員は一層幸せになっていたのです。

私どもの他の子供たちが（いつだって良い子でしたが）ないがしろにされていると考えたのも尤もなことでしょう。でも、あの子たちにいたしましても、妹のほうが優れていることや、あの娘が家族全員に栄誉をもたらしていることは十分弁えておりましたから、自分たちの存在がかげってしまいましたことを、影を落とした相手を妬むこともなしに認めていたのです。実際、あの娘に匹敵するほどの人はどこにもおりませんから、せめて真似るだけでも出来ればとだれもが願っておりますことに、だれだって妬みを覚えたりはしなかったのです。貴女もご存じでしょうが、ノートンさん、愛しいあの娘は私たちのすべてに名声をもたらしてくれたということなのです。

それに、あの娘が身につけております数々の嗜みのこともございます。音楽の才、見事な針仕事の腕前、また、着こなしの優雅さですが、これは大層称賛されておりまして、近所のご婦人たちも、ロンドンから流行の型を取り寄せる必要はないとよくおっしゃっていたものです。クラリッサ・ハーロー嬢の身に着けるものは何であれ、それが最高のファッションだからというのですが、あの娘の選ぶ自然なままの美しさには、技巧を凝らした美しさもはるかに及ばないという理由からでした。上品さを忘れない打ち解けた様子や見事な容姿。深い学識。そして、こういったものが屈託のない態度や心地の好い謙虚さと結び合わされていたのです　…　あゝ、ノートンさん、何という素晴らしい子供だったのでし

ようね、私のかつてのクレアリー・ハーローは　…

あの娘がこのとおりだということ、そして、これ以上であるということを貴女はご存じです。あの娘の秀でているところの多くのものは、貴女ご自身のお陰なのですからね。あの娘に与えてくださったお乳と一緒に、この世のどのような乳母でも与えることの出来ないものを、貴女は授けてくださったのです。

このような子供の故意の背信が許されることだと、貴女は、立派な貴女は、お考えでしょうか。あの娘自身にいたしましても、自分に委ねられましたこれほどの才能を悪用しておきながら、最も厳しい罰には値しないなどと考えることは出来るものでしょうか。

あの娘の罪は計画した上でのものです。狡猾さや企みから生まれた罪なのです。皆さんの期待を裏切ったのです。あの娘の出自となりました一族ばかりでなく、女性のすべてがあの娘の罪によって体面を汚されたのです。

一体、信じる人などどこにいたでしょうか。多感にすぎるお友達が伊達男で放蕩好きな男性と結婚なさるのを、自らの助言によって防いであげたこともあったのです。このような若い娘が、自分のほうでは、放蕩児の中でも不道徳極まりない、最も悪名を馳せている者と駆け落ちをするなんて　…　あの娘には人柄の分かっていた男なのです。お友達を救って差し上げた時の、その相手の男性の人柄よりもさらにひどいものであることは承知していたのです。危険だと注意を受けていた男です。兄の生命を弄んだことがあり、私たち一族に絶えず挑みかかっていた男なのです。

どうか、お考えいただきたいのです、ノートンさん。妻として、また、母といたしまして、私の不幸がどれほどのものか、お考えいただきたいのです。心休まらぬ日を、眠られぬ夜を、どれだけ重ねたことでしょう。でも、私自身の疼くような苦しみのほうは、努めて取り繕っておりました。私よりも気性の激しい人たちの苦悩を和らげるためでした。怒りに駆られ、さらなる災いへと向かいますのを防ぐためです。あゝ、ふしだらな、この悪い娘は　…　自分のしていることはよくよく分かっていたのです。結果について十分に見通すことも出来たのです。ですから、あんなことをするくらいなら、きっと死を選ぶはずだと私たちは思っておりました。

思慮深いということで世に知られていたのですから、申し開きの余地はまったくございません。あの娘のために弁護を申し出るなど、どうして出来ましょう。たとえ、母親の盲目的な愛情から、私自身は許す気になったとしてもです。それに、私たちは考え得るかぎりの恥辱を受けたのではないでしょうか。あの娘は違うのでしょうか。

もしもあの娘が今、あの男の品行にそんなにも異存があるというのでしたら、こうなる前にも同じように感じて当然ではなかったのでしょうか。それともあの娘は、すでにその不品行ぶりを身をもって味わったとでもいうのでしょうか。あゝ、心配で心配でならないのです。あのような人物のことです。一度あの男の掌中のものとなれば、天使にだって疑いをかけたくなるのではないでしょうか。世間というものは最悪の事態を思い浮かべるものです。現にそんな噂が私の耳にも届いているのです。あの娘の父も同じ不安を抱いておりますし、兄も耳にしているのです。一体、この私に何が出来ましょう。

人柄についてもそうですが、あの男に私たちが反感を抱いておりますことも、あの娘は前から知っていたのです。ですから、新たな理由でもないかぎりは、このようなことは新たな動機とはなり得ないのです。あゝ、ノートンさん、このように考えますと、不安に圧

し潰されてしまうのですが、どのようにして耐えたら良いのでしょう。貴女には耐えられるのでしょうか。

貴女のおっしゃるところでは、あの男が絶えず娘に結婚を迫っており、あの男のお身内の方々も同様だとのことでしたね。こうしてあの娘が私たちに働き掛けましたのには、疑いもございませんが、それなりの理由があってのことです。うまく罪をごまかしておりますが、戻って来て、私たちに新たな恥をかかせるためなのです。心得違いをした人間というのは、一歩間違った道に足を踏み入れますと、一体どこまで迷い込んでしまうものなのでしょうね。そして今では、実際の話、頑なな心の救いとなりますよう、私たちに探りが入れられるだけなのですからね。働き掛けが随時引っ込められるとか、拒否されるとかしても構わないようにとの考えからですわ。

すべてを考えました上で申せますことは、仮に私があの娘の弁護をする気になったといたしましても、今は最も不適切な時期だということです。主人の兄が（わざわざその件を話すためにこちらへ見えたのですが）、遠回しに持ち出されましたヒックマンさんの働き掛けに不賛意を表したばかりですし、その点で義兄は褒めそやされていたのです。また、義弟のアントニーのほうでも、あの娘が間違いを犯しましたことから、莫大な財産を別の家族に譲る考えになっているところなのです。疑いもなくあの娘としては、和解が成立した暁には、そして、間違いを犯したご褒美として、祖父の地所を自分のものに出来ると思っているのでしょう。それで、前に申し出て断られた条件、とは申しましても、私の落ち度から断られたのでないのは確かなのですが、その同じ条件をいまだに主張しているというわけです。

これらすべてをご勘案くださって、実情に沿ったお返事をしていただきたいのです。今この時期にあの娘のために動いたりいたしますと、私は一生涯安らぎを失うことになるかもしれないのです。あの娘に神のお許しがあらんことを祈るばかりです。私は許すといたしましても、他にはだれ一人として許してくれる者はいないでしょう。それから、私のことは勿論、貴女ご自身のためにも、私たちがこの件を取り上げましたことは内緒にしていただきます。また、特に許しの出た場合を除き、この点には二度とお触れにならぬようお願いいたします。あゝ、貴女だから打ち明けるのですが、この話になりますと、私は胸に血の滲む思いをしてしまうのです。その血管の数と同じだけの流れとなりまして　…

ただ、あの娘がきちんと悔恨の情を覚え、良心の呵責を感じましても、私は心を閉ざしたままでいるなどとはお考えにならぬよう願います。それにいたしましても、気持ちはありますのに、それを行う力を持ち合わせないというのは　…　本当に辛いことです。

さようなら、さようなら。私たちが共に神の慰安に与らんことを、そして、かつて愛しておりました　…　いつだって愛しく思っておりますあの娘には（我が子を忘れてしまうなど、どこの母親に出来るというのでしょう）後悔の念を、心からの改悛の情を賜らんことを　…　そして、神聖な御心に適い、あの娘の嘆かわしい罪に見合いますかぎりは、出来るだけ苦しみを和らげてくださいますよう、私は祈っております。

貴女の真の友

シャーロット・ハーロー

手紙　十七

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

五月十四日　日曜日

貴女とラヴレースさんの仲は一体どんな具合になっているのでしょうね。私には測りかねるところですわ。ただ、不道徳な男ではありますが、やはり貴女のご主人様とならざるを得ないのかとも思うのです。

前回の手紙では、あの男について何度かひどい言い方をしてしまいましたね。筆を執ろうと腰を下ろしました時には、丁度、あの男の悪辣な振舞いのことをいくつか耳に入れたばかりでして、怒りが昂じていたのです。でも、問い合わせたり思い返したりいたしましたところ、あの男に非があるとされております事柄は、そのすべてが、かなり前になされたことであって、貴女から好意を寄せてもらえるという確かな期待を抱いた後のことではない点に気がついたのです。

これは、あの男にとりましては相当な言い訳になります。宿屋の娘さんに対する鷹揚な態度は、あの男の手柄となる最近の一例ですし、情け深い地主として広く好評を博しておりますことは言わずもがなです。それに、フレッチヴィル夫人宅に貴女を住まわせ、自分のほうは、一つ屋根の下で暮らすことに貴女が同意なさるまでは、もう一人の未亡人宅に留まろうというあの男の提案ですが、私は大方賛成なのです。このとおりになればと願っております。この申し出は是非ともお受けになって（すぐ祭壇の前に行かれるのではないのでしたらね）、あの男のお従姉妹さんの一人をお呼びになることです。

一旦結婚なされれば、貴女もそんなに不幸なことにはならないはずと考えております。もっとも、あの男とでは、貴女に相応しい幸せは得られないかもしれませんけれどね。あの男が国許に持っている利権や相続権、財務への目配りに怠りのない点、債務には一切縛られていないことがございます。いいえ、貴女ほどの美質に加え、あの男のプライドをくすぐるようになされれば、相当安心なさって構わないとも思うのです。不埒な振舞いの一つ一つが明るみに出てまいりますと、私も不快になりますし腹立たしくも思うのですが、それでも、結局のところ、時間を掛けて思い返してみますと、私が耳にしておりますあの男にとって不利な事柄すべては、M卿のお屋敷、それに、あの男自身のところからも解雇されました土地管理人がずっと以前に語っていた、あの男の凡その人物像に関する話の中に含まれていたことなのです(ア)。そして、この点につきましては、前にもお知らせいたしましたとおり、私はフォーテスキュー夫人から確認を受けておりますし(イ)、貴女にもグリーム夫人からの御墨付きがあったことなのです(ウ)。

ですから、貴女が深刻に悩まれるようなことは一つとしてあり得ないようにも思うのです。ただ、あの男の将来の幸せのこと、それに、あの男が自分の家族に対してこれから示すかもしれません悪い手本のことは別です。確かに、これは心配なさるのも尤も至極な事柄でしょう。でも、同意を得てにせよ、同意なしにせよ、今あの男をお捨てになったりしますと、財産の点でも縁故関係の点でも大いに考慮に値する人ですし、容姿や押し出しにも大層魅力があるのですから（だれもが貴女のことを大目に見ておりますのは、その点が

（ア）第一巻、十七頁。（イ）同、五十頁から五十三頁にかけて。（ウ）第三巻、十六頁。

あるからですし、また、お身内の方たちのほうにこそ非があると思うからなのです）、貴女の評判という点では、極めて体裁の悪いことになるでしょう。ですから、慎重に検討を加えた上で申せますのは、あの男の廉恥心を疑うに足るだけの根拠があるということでなければ、そのようなことをお考えになるのはお勧めいたしかねるということです。この種の不安を覚えさせるようなことをあの男がしているのでしたら、そんな悪党への復讐はあの世までも続くよう祈るばかりです。

それにいたしましても、あの男のなぶり者にするような手口には我慢なりません。貴女が少し引き延ばしをなさいましても黙っておりますし、今はあの男をお傍に近づけないようになさっておられますが、それにもおとなしく従うわけでして（懲罰に比べ、過失のほうははるかに些細なものだと、あの男は考えているはずです）、そこが私には解らないのです。貴女の愛情を疑っている、というのは大いにあり得ることでしょう。でも、貴女といたしましては、あの男が熱意に欠けているのを驚かれて当然だと思います。これほどの大きな至福が手の届くところにあると言っても構わないのですからね。

ここまでお読みになれば、例の殿方二名の話し合いの結果につきましては、もうご疑念はないものと存じます。私も皆さんにはショックを受けると同時に、怒りを感じてもおります。皆さんの全員に対してですわ。と申しますのも、例の紳士に伯父様を打診していただいたのと同じ趣旨で、貴女のお母様への働き掛けをノートン夫人にお願いしてみたのです（初めは、この点は伏せておくつもりだったのですが）。あれほど頑固で情け知らずな人たちがこの世にいたなんて … 遠回しに言うことはございませんわね。ただ、お母様だけは別だと考えたい気持ちにもなるのです。

伯父様は貴女が操を捨てたものと決め込んでおられます。「男と、それも、選りに選ってラヴレースのような男と駆け落ちをする娘だ。どんなひどい話だって信じられる」とおっしゃるのです。何か大きな苦しみでも降り懸かれば、貴女のほうから働き掛けがあるはずだと、皆さんも予想しておられたのですが、貴女のためには、いいえ、貴女のお命を救うためであっても、一歩たりとも動くものかと、皆さんは全員揃って心を固めているというのです。

宜しいですね。断固、ご自分の権利を主張なさることです。ご自分の地所の権利を主張なさって、そこに住み込むのです。そうなさるのが当然なのですから。そうなれば、たとえ結婚なさらなくとも、あの蛆虫どもは貴女のところへ這い寄ってくるはずです。将来見込むことの出来ます財産の処分の件がございますからね。

貴女が責められておりますのは（叔母様のお手紙にもございましたが）、「貴女の家出は計画的で策略を用いたものだ」という点なのです。仲立ちをいたしました人物は、貴女を憐れむのではなく、皆さんに同情するよう求められているのです。伯父様がおっしゃいますには、かつては貴女のことに夢中になり、貴女と一緒にいること以外には何の喜びも感じず、貴女が口をお開きになると、貪るようにその言葉に聞き入り、貴女が先に立って歩まれますと、その足取りをそのまま辿った人々なのだから、というのです。そして、これに類したことをあれこれ並べておられたのです。

すべてを勘案いたしまして明らかなのは、この手紙をお読みになればよくお分かりのはずですが、貴女はあの男のものにならなければいけないということです。そして、早ければ早いほど好都合だということです。結婚は貴女のご一存では駄目だということなのでし

ょうか。そのようなこと、私には耐えられませんわ、想像するだけでも。

あの男と折り合いをお付けになる時にはどんなふうになさるのか（あの男のものにならなければいけないことは、もうお分かりでしょうから）、知っておきたい気持ちもいたします。ずいぶん遠ざけておられた後のことですし、あの男にもプライドがありますから、その仕返しをする気になるかもしれないのです。でも、申し上げておきたいのは、私がそちらに出向き、苦楽を分かち合うことで、貴女ほどの気高い方があまりにも身を落としてしまわれるのを防ぐことになるのでしたら、いいえ、それが貴女の破滅を救うことにもなるというのでしたら、私は一瞬でもためらったりはしないということです。貴女のようなお友達と比べましたら、世界のすべてにだって何ほどの意味があるでしょうか。この世の悦びのいずれにいたしましても、私にとりまして、それが悦びになり得るとでもお考えなのでしょうか。もしも、貴女が災難に巻き込まれておられる場合に、そのような悦びを諦めることによって、貴女のお気持ちを和らげたり、救って差し上げたりすることが出来るというのでしたらね。それに、このようなことを申し上げ、このとおりの行動を取るといたしましても、そうすることで私が貴女に提供いたしますものといえば、ただ、貴女の立派さが生み出してくれました友情の、その果実に他ならないのです。

興奮した言い方をお許しくださいね。胸の中が煮えくり返っているものですから、そんな言い回しに事欠きません。縁続きの方たちに強い憤りを感じているのです。と申しますのも、触れてまいりました事柄でさえひどいものですが、すべてをお話ししたわけではないのです。おそらく、今後ともその点に触れることはないものと思います。母の心の狭さには、そして、見境なく古い考えにしがみついております点にも腹を立てております。また、貴女の愚かなラヴレース、下劣な虚栄心に取りつかれているラヴレースにも憤慨しているのです。でも、あのとおりの浅ましい人間ですが、恥を忍んで受け入れましょう。そして、精々あの男の良い点に目を向けることです。貴女は、追従家や俗物たちの顔を立てて上げるために、ご自分は屈辱に甘んじる運命なのですからね。あの男も、これまで、直接貴女に向かって不作法な振舞いに及んではおりませんし、また、踏み切る勇気もないのです。そういう意味では、あの男も救いようのない極悪人というわけではありません。もしもあの男にそのような不埒な下心があったのでしたら、貴女はすっかりあの男の手中にあるのですし、それだけ鋭く油断のない目と清らかな心をお持ちなのですから、とっくの昔に本心は露になっていたはずです。ですから、出来ることでしたら、あの恥知らずを救ってやることにいたしましょう。泥の中から引き上げる際に、私たちの指は汚れてしまうことでしょうが　…

貴女のように財産に恵まれ、独立しておられる方のことですから、それ相応の条件を結ばれるのでしたら、なすべきことはまだたくさんございます。これまで一度だった、あの男が贈与財産の件を口にしていたようには思われませんし、結婚許可証につきましても同じことです。本当に馬鹿な男です。でも、不運のためとは申せ、他の保護の手や仲立ちは一切望めないお立場なのですから、ご自分が父親や母親の代わり、そして、おじ代わりとなって、必要な事柄にお一人で取り組まねばならないのです。貴女にとりましては辛い話でしょうが、どうしてもなさらねばなりません。お立場上、避けるわけには行かないのです。慎みなどを考えている時なのでしょうか。それとも、私のほうからあの男に手紙を出してもらいたいとおっしゃるのでしょうか。ただ、それは貴女ご自身が筆を執られるのと

同じことになるのです。口で伝えることは出来ないといたしましても、やはり、一筆認めるべきだと思います。でも、口頭でお伝えになるのが一番なのです。言葉は跡を残しません。吐く息のように消え去ります。大気と混じり合ってしまうのです。それに、説明に幅を持たせることも出来るのです。ところが、筆にいたしましたことのほうは、証拠として記録に残ってしまうのです。

気立ての優しい方であることは存じ上げておりますし、胸に秘めておられる立派な自尊心のこと、そして、こういった微妙な点での女性の品位というものにつきまして、正しい考えを持っておられることも承知しているのです。でも、もう一度繰り返しましょう。そういったもののすべてが、今となりましては何の意味もないのです。貴女の名誉に関わることなのです。私の申し上げておりますような品位に固執なさってはいけません。

私なら次のように話し掛けるでしょうね。ただ、自分の奥様の品位に打ち克とうとする下劣で馬鹿げたプライドのことがありますから、あの愚か者には憎しみを感じてしまうでしょうが …… 「ラヴレースさん、貴方のせいで、私はこの世の友達という友達をすべて失ってしまいました。貴方のことはどのような見方をしたら宜しいのでしょう。すべての点をよく考えてみたのです。幾人かの人たちには、ひどく意に反したことですが、私のことを奥様のように思わせておられますね。他の人たちは私が結婚していないことをご存じですし、私といたしましても、どなたにも結婚しているように思われたくないのです。この同じ家に貴方が一緒にいるのは、私の評判にとって良いことだとお思いですか。フレッチヴィル夫人のことをお話しくださいましたわね ……」といった調子ですが、こうなされば、あの男も、この件について最後に話しておりましたことを、自分からは持ち出さないといたしましても、また取り上げざるを得なくなるはずです。そこで、「フレッチヴィル夫人は決心がおつきにならないのでしたら、夫人のお宅は私にとって何の意味がございましょう。ご一緒いただくよう、お従姉妹さんのモンタギュー嬢をお呼びくださるとのお話でしたが、貴方がお迎えに行かれない口実として、兄の計画のことを持ち出されるのでしたら、お手紙を出すという方法もあるはずです。この二点につきまして、はっきりさせていただきますよう主張いたします。いずれになるのか、それはあの方たちの関心事でないというのでしたら、私も興味を持たないことにいたしますわ」と付け加えるのです。

こんなふうに言明なされば、すべてが前進するに違いないのです。貴女にだって、同じ立場の人のために見つけて上げられる方法が二十はあるでしょう。あの男は、生まれつき傲慢なところがございますから、相談相手などがいるように思われるのは嫌なのです。だといたしますと、あの男も意思表示をせざるを得なくなるのではないでしょうか。もしあの男が意思表示をした場合、お願いですから、貴女のほうで引き延ばしをなさるのは止めていただきたいのです。日を指定なさることです。早目の日取りにしてくださいね。たとえあの男が、そうして当然ですのに、はっきりとした言い方をしない場合でも、宜しいですか、少しでもあの男の真意を疑うような素振りをなさってはいけませんし、また、説明が必要なようでは、あの男を一生涯軽蔑することでしょうが、そんな説明の言葉を待つような様子をなさってはいけません。貴女ご自身の価値を、そして、名誉も損ねることになるのですからね。貴女はすでに二度も、たとえ二度以上はなかったといたしましても、慎みとやらのせいで、決して逃してはいけないようなチャンスを見過ごしてしまわれたのです。贈与財産の件につきましては、自然な形で話題に上るのでなければ、あの男自身の公

正な処置、一族の方たちの公正な処置に委ねるのです。それですべては解決するのです。

私に助言出来ますことは以上のとおりです。事情に応じて手直しをなさり、ご自分のお考えに従ってください。でも、私でしたらきっとこのとおりのことを、あるいは、これに近いことをするでしょうね。そして、後で次のような台詞を私に向かって言わせてみせますわ。「俺は、称揚することが俺の誇りとなるはずの人間を、足下に這いつくばるほど卑しめたのだ」とです。あの男にそんなことを口にする勇気があるなら、あるいは、言い出す気があるならの話ですけれど　…

貴女ご自身に似つかわしい考え方をなさって、当座を耐え忍ぶのです。欺かれてこの男の手中に落ちたとは申せ、卑しめに甘んじながら屈服しておられるのではないのです。貴女は、あの男の尊敬の念をそっくり集めておられるのです。いいえ、むしろ呼び覚ましておられると言っても良いでしょう。あの男は、貴女がご一緒なさるまでは、どのような立派なことに対しましても、敬意の気持ちのかけらさえ見せることはないと思われていたのですからね。それに、時々は、貴女の立派なお手本には畏敬の念を感じるし、魅了されてもいると打ち明けるほどなのですから、お手本の力があの男の矯正につながることも考えられるのです。

あの男にお手本を守らせますのが難しいお仕事になることはよく分かります。でも、首尾よくあの男を改心させることがお出来になれば、貴女の栄誉はますます大きなものとなるのです。そして、もしもこの見掛け倒しの大ペテン師の行いを改めさせることがお出来になるとしたら、実際の話、まだまだ先のある男のことですし、罪のない大勢の娘さんたちを破滅から救って上げることになると、私は確信しております。と申しますのも、そういった娘さんたちが、あの男の仕掛けました邪悪な罠の餌食になっていたように思われるからです。それに、もしかいたしますと、主としてこのような目的そのものから、横道に逸れることを許していただいた人もいるかもしれないのです。過ちを犯したのは本意からのことではないとか、決してそのつもりではなかったという人、そして、ともかく過ちを犯してしまったのだとご自分で考え、ひどく後悔しておられるような女の人の場合ですけれどね。さようなら、大好きなお友達。

アナ・ハウ

［前掲の手紙に同封されたもの］

気掛かりなことがございまして、お心を煩わせねばなりません。貴女ご自身の心配ごとが大層重くのしかかっておりますのにね。お知らせしておかねばならないニュースがあるのです。アントニー叔父様が結婚なさるお気持ちになっておられるのです。お相手はだれだとお思いですか。私の母ですわ。嘘偽りもございません。お身内の方たちもご存じのことです。何もかもが貴女の責任にされておりますが、旧に倍する意地悪さということですね。あのお爺ちゃん自身が貴女のせいにしているのです。

この情報につきましては、私へのお便りの中でもですが、決してお触れになりませぬよう、お願いいたします。思わぬ事が起こりましてもいけませんからね。

うまく行くはずはないと私は思うのです。でも、母を刺激したりいたしますと、口実を与えることになるかもしれないのです。でなければ、私はとっくの昔にお傍へ参っていた

だろうと思いますわ。

希望を持たせているように思われます態度が一つでもありましたら、私のほうではすぐにもヒックマンを袖にしてやりますわ。それは確かです。これだけ重要な事柄で母が私の意に背くのでしたら、私だって、同じような場合に母の意に沿おうと考えたりはいたしません。私をあの正直者に押しつけたいと願う気持ちの裏に、まさかそんな下心があるなんて、絶対にあり得ない話だと思うのです。

繰り返しますが、何ともなるはずのないお話なのです。それにいたしましても、後家さんというのは …… それに、私たちって一人残らず、老いも若きも、言い寄られ崇拝されるのが大好きですからね。また、お年を召した人たちというのは、魅力がすべて褪せたわけではなく、まだ自分たちの娘と一緒に派手なことをして構わないくらいだなどというお世辞には、本当に逆らえないものなのです。この求婚のことを、さも満足げに作り笑いを浮かべながら口にされますと、私は心の奥まで苛立ってしまいました。ただ、母のほうでも、希望を持たせる気持ちは一切ないような口振りを装ってはおりました。

年配の独身男性というのは（自分ではそんなふうに思えないうちに年をとっているのですが）、身を固めようなどと自ら納得ずくで考え出したが最後、後のことなどはお構いなしで、相手の女性に胸の内を打ち明けてしまうものなのです。

叔父様の有り余るほどの財産は確かに魅力ですし、食指の動く誘いでもあります。生意気な娘の厄介払いにもなるのです。その娘の父親の思い出にいたしましても、重きをなすほど尊いものではないのです。それでも、厚かましくも叔父様が事を推し進めたりなされば …… 母のほうで希望を持たせるようなことがあれば …… でも、母にその気はないものと、私は考えておりますわ。

御免なさいね。私、苛立っているのです。二人のせいで、ゴージット（一三）が恐ろしく皺くちゃになってしまいましたわ。私は間違っているとお考えになるのでしょうね。ですから、別にいたしましたこちらの便箋には、私の名は記さないことにいたします。私のに似た筆跡は他にもございますからね。私が筆を執っておりますところを、貴女はご覧になっておられないのですもの。

手紙　十八

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

五月十五日　月曜日　午後

これではっきりいたしましたわね、私の一番大切な、そして、ただ一人のお友達。私の選ぶ道はたった一つしかないということがです。それに、今では、この男性に向けました怒りの態度も度を越してしまったように思うのです。と申しますのは、私の振舞いを大目に見てもらえますのも、あの人の我慢強さのお陰であるみたいに、今ではそんなふうに人の目に映ってしまうに違いないからです。私にはあの人を重んじる気持ちがほとんどないことを、そして、あの人の美点からというよりは、むしろプライドからなのですが、第一級のものを期待しておられたでしょうに、私が二流の評価しかしていないことをはっきり証明していると、あの人なら多分（我が儘で子供っぽいとは思わないまでも）そのように

お考えになるような振舞いについてですわ。あゝ、寛大な心の持ち主どころか、本当は残酷非情と言って良い、そんな男にすがらねばならないなんて　…　不幸な巡り合わせから自分の手中に落ちた娘を相手に、新たな苦痛の種を作り出すことの出来る男なのです。そして、それを楽しむことの出来る男だと言っても構わないでしょう［この殘忍な男につきましては、そんな言い方をして構わないと、心の底からそう思うのです］。本当に、何という運命なのでしょうね、私も。

あの人に対して取るべき厳しい口調のこと、良いご助言をいただきました。でも、だれに向けてのご助言なのか、その点はお考えでしょうか。それに、私がご助言どおりにいたします場合、仮に引き延ばしをすることがあの人に可能だといたしますと、無防備で寄る辺もなく、救いを求めて飛び込む相手もいない私なのです。あの人の目には、そして、これがまた負けず劣らず辛い点ですが、私自身の目にも、我と我が身がどれほど惨めな姿に映ることでしょう。このように見苦しい状況、このショッキングな事態が、こともあろうに、この私によって引き起こされるなんて　…　そんなことは決してあってはならなかったと思うのですが、貴女はそのようには思われないでしょうか。考えが足りなかったばかりに陥ってしまいましたものですが、私には耐えられない境遇です。まったく対応のしようもないのです。この私が、夫になってほしいと男の人に迫るなんて　…　この私が、引き延ばしをしている人に決断を促すだなんて　…　それに、お考えのとおり、機会を逃してしまっているのです。その機会を呼び戻そうという試みを、自分から、そして、自分自身のために始めるようなことは　…　いわば脅しつけて、あの人に結婚を余儀なくさせるようなものです。たとえこうするのが正しいのだといたしましても、うまくやってみせますのはどんなに難しいことでしょうか。慎みもありますし、自分自身に関わること（それとも、プライドに関わるとおっしゃりたいのでしたら、それでも結構です）でもあるのですからね。あるいは、貴女の言い回しをお借りしますと、自ら父や母、そして、おじの代わりをしなくてはならないのです。とりわけ、自分に打ち克つことが意図されているのだと、そのように考えているわけでもありますしね。

ノートン夫人のお力で母を動かすことは出来ないか、お試しくださったそうですね。ヒックマンさんを通しましての私の働き掛けへの回答はひどいものですが、貴女は「悪いことすべてをお話ししたわけではありませんし、おそらく、今後ともその点に触れることはないと思います」と言っておられますね。でも、どうしてそんなおっしゃり方をなさるのでしょう。今後とも決してお話しくださらない悪いこととは、一体どのようなことなのでしょう。そんな悪いことがあり得るのでしょうか。私を、それも永久に、お見捨てになること以上の不幸はあるでしょうか。「伯父は私が操を捨てたものと思い込んでおり、男と駆け落ちをする娘ならどんなひどい話だって信じられる、と断言しておりますし、皆のほうでも、私のためには、私の命を救うためでありましても、一歩たりとも動くものかと、全員揃って心を固めている」とのことですね。これよりひどいことを貴女はご存じなのでしょうか。まさか、父があの恐ろしい呪いを改めて口に出したのではないでしょうね。たとえそうだといたしましても、まさか母までが加わったのではないでしょうね。おじたちがそれを是認し、一族の決議事項としたのでしょうか。そんなことをすれば、私が犯しているように考えておりますものよりもさらに大きな罪を、実際には、皆のほうが自ら犯すことになるのです。皆のその大きな罪の原因が私にあるのは勿論ですが　…　永久に明かさ

ずにおこうとなさる最悪のこととは、果たして何なのでしょうか。

あゝ、ラヴレース、何故にそなたは今この時に姿を見せないのです。この暗い見通しが私の前途を覆っているうちにです。今、そなたの目が私の胸中を見通すなら、そなたの残酷な勝利に相応しい深い苦悩をそこに見出すことでしょうに　…

❁　❁

やむなくペンを置かねばならなかったのです。それでは、貴女は、ノートン夫人のお力で母を動かすことは出来ないものか、お試しになったとおっしゃるのですね。

済んでしまいましたことに手直しはききません。でも、私にとりましてはこれほど重大な意味を持つ行動です。踏み切られます前に、先ずはご相談いただきたかったと思うのです。御免なさいね。でも、お話ししておかねばなりません。ご親切この上ない、並々ならぬ熱意を込めて常に言明していただいております、あの気高く高尚な友情は、日頃より感謝の気持ち共々に憬れの的とさせていただいているとは申せ、その抑えようもない熱烈さゆえに、しばしば懸念の種にもなっているということです。

それはそうと、これからのことに目を向けることにいたしましょう。私はあの人のものにならねばならないし、同意のあるなしに拘らず、評判を損なうことなくあの人のところを離れるわけには行かない、とのご意見でしたね。だといたしますと、この窮状に対しまして、精々善処しなくてはいけないということですわね。

あの人は朝のうちに外出なさいました。ディナーを共にするのを認めてくれるのでなければ（という伝言があったのですが）、食事時までに戻るつもりはないとのことです。

私はお断りいたしました。不興を買いますのが、私にとりまして今では大問題となる相手なのですが、どうやら、あの人は機嫌を損ねた様子でした。

あの人は（私も同様ですが）、貴女からのお手紙が今日にはコリンズさんの手で届くものと期待しておりましたから、お帰りは遅くはならないだろうと思います。帰ってきましたなら、あの人は途方もなく厳めしい顔で、いかにも男らしく振る舞い、ひどく冷たい態度を装うことでしょうね、きっと。そうなりますと、私のほうではひどく腰を低くしていなければなりません。ひどく素直になって、お気に召すよう取り入る努力をしなければいけないのです。言葉にならない場合には、伏し目がちの顔をして、あんなにも意固地になってあの人を遠ざけておりましたことの許しを請わねばならないわけです。このとおりになるに違いありません。でも、このような振舞いが私にしっくりするものか、そのうちに分かることでしょう。思いますに、貴女は私の従順なところをいつもからかっておられましたね。ですから、ひとつ試してみることにいたします。もっとおとなしくなれるものかどうかをですわ　…　あゝ、何てことなのでしょうね　…

でも、両手を前に揃え、ただおとなしく、何もかも諦め、座っていることにいたしましょう。あの人のやってまいりますのが聞こえたように思うからです。それとも、貴女が指図なさったとおりの言葉で、あのやり方で、ずばりと話し掛けましょうか。

あの人が戻りました。伝言を送ってまいりましたが、ドーカスの言葉ですと、お顔付きからいたしまして、耐え切れなくなっておられる模様です。でも、私は会うわけにはまいりません。とても出来る相談ではございませんもの。

月曜日　夜

お手紙の内容のことがございますし、私自身、胸も潰れるような思いをしておりましたため、待ち佗びておりますあの人に会うわけにはまいりませんでした。あの人がドーカスに尋ねた最初の言葉は、ご自分の外出後、私が手紙を受け取ったか、というものだったそうです。あの娘が教えてくれたのです。そして、あの娘は、確かに受け取っており、それからというものは、食事もとらずに涙にくれている、と答えたそうです。

あの人が話し合いたい旨の伝言を送ってよこしました。

私は、あまり体調が良くないので、という返事をあの娘に頼みました。体調が良くなれば、明日の朝にはお好きなだけ早い時刻にお会いする、と伝えたのです。

ずいぶんと腰の低い態度ではないでしょうか。いかがですか。ところが、あの人はあまりに殿様気取りなものですから、これでも遜っているとは受け止めてくれないのです。ドーカスの申しますには、片一方の頬を焦れったそうに擦ったり、性急な言葉を口にしたりで、機嫌が悪かったそうで、部屋の中を歩き回っていたというのです。

三十分後、再び伝言がございました。夕食を一緒させてもらいたいと、それはそれは熱心な要望です。私のほうで導き出す話題以外のことをご自分から切り出したりはしないから、というのです。

つまり、あの人への求婚も、私の思いのままだったはず、というわけですわね。

私はもう一度、遠慮させていただきたいと伝えました。

正直な話、両目が腫れ上がっていたのです。ひどく気持ちも沈んでおりました。貴女のご忠告のことがございますし、身内の者たちからはすっかり見捨てられたこともありまして、打ち解けた会話も必要になってはいたのですが、数日の間あの人を遠ざけていた後のことですから、一気に親しげな話し合いに入るようなことは考えられなかったのです。

あの人は使いの者をよこし、次のように伝えてまいりました。私が食事を断っていると聞いているので、もしもシンクレア夫人が夕食に注文したチキンを少しでも口にしてくれるなら、自分のほうはおとなしく引き下がろう、というのです。ご立腹だというのに、何て優しい言葉なのでしょう。そうではございませんか。

私はいただくことを約束しました。前もってこれ以上に腰を低くすることなど出来るでしょうか。お会いするにいたしましても、優しく鷹揚な気持ちでいてくださるなら、どんなに嬉しいことでしょう。本当にそう思うのです。

自分のことが嫌になってしまいます。でも、馬鹿にされるつもりはございません。このような状況ですが、それだけはお断りです。

手紙　十九

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

五月十六日　火曜日

もう一度申しますが、私たちは行列にでも加わっているみたいに思われるのです。ただし、嵐の中をです。詳しくお話しいたしましょう。

今朝五時のことですが、物音であの人が食堂にいるのが分かりました。ひどく寝つかれ

なかったものですから、私も起きていたのです。でも、ドアを開けずにおりますと、六時になって、付き合ってほしいとの伝言をドーカスが持ってまいりました。

私が食堂に入りますと、あの人は近寄って来て手を取り、「二時までベッドに入らなかったのですが、一睡も出来なかったのですよ、マダム。どうかお願いだ。苦しめないでほしいのです、ここ一週間のようには」とおっしゃるのです。

あの人が一息入れました。私は黙っておりました。

「最初は」と、あの人が言葉を続けました。「私のあの好奇心のことですが、当てを外されてしまったわけですから、貴女のお怒りも強いはずはないし、自ずから治まってくれるものと考えていたのです。ところが、そのお怒りは、貴女のなさったいくつかの新たなご提案、それも、受け入れられた暁には永久に貴女を失うことになるような、そんなご提案の首尾をお知りになるまで続くものだと知ったのです。考えるだけでも、マダム、どうして私に耐えられるというのでしょう。これだけ利害が一致しておりますのに、私にとって有利な印象をほとんどお与えすることが出来ずにいたなんて …」

あの人がまた一息入れました。私は依然黙っておりました。あの人が話を続けました。「私が誇り高い点は認めます、マダム。いずれは我が妻と呼びたいという大きな望みを掛けております淑女のことなのです。前もってのご好意の証をいくらかでもお示しくださるよう願わずにはいられませんし、また、私をお選びいただくにしても、私にとっては不倶戴天の敵とも言うべき、身勝手に迫害を加えている連中の理不尽な意向に動かされてのことなどと人目には映らないよう、それも、甚だしく目立つことのないよう、望まずにはいられないのです」とおっしゃるのです。

同じ趣旨のことを、あの人はさらに口にしておりました。貴女もご存じのとおり、あの人を非難する気になれば、その例は山ほど与えてくれているのです。私は容赦いたしませんでした。

「こういった例の一つ一つからも」と、私は（すべてを列挙いたしました上で）申しました。「貴方のプライドの高さにつきましては確信いたしておりますわ。ただ、美点のこととなりますと、とても納得いたしかねるのです。正直申しまして、私にも貴方に負けないほどのプライドがございます。ただ、貴方がそのように易々と口になさるのとは違った種類のものだと存じますわ。でも、もしも貴方のプライドの中には、貴方ほどのお生まれや縁故、そして、財産に恵まれた人に望まれますようなもの、そして、称賛に値すると思われますものがほんのわずかでも交じっているのでしたら、僭越とは存じますが、貴方のおっしゃる私のプライドとやらを抑えつけようとなさるとか、私のプライドの高さを残念がられるのではなくて、むしろそれを助長したいと願われるべきでしょうね」と話したのです。そして、さらに続けまして、「自ら認めておりますこのプライドがあるからこそ、次のようにお話しする気にもなるのです。つまり、ここ数日の間、貴方と言葉を交わしますのを一切お断りするとか、私の一存では決しかねますような話題へ向かう恐れもありますので、伯父の便りが届きますまではと、メネル様のご訪問をお断りしてまいりましたが、その動機がどのようなものであったのか、お認めしないのは私らしくもないことのように思われるということですわ。正直に申しますが、伯父を打診していただきました。他の方面から申し出ていただくことにしてありました条件で、身内との和解が得られますよう、一肌脱いでいただけないかというお願いだったのです」と申しました。

「その条件がどのようなものなのか、私は承知しておりませんし、また、お尋ねしては無礼に当たるでしょうね」　あの人が言いました。「ただ、十分察しはつきますよ。私は予め生贄にされるという段取りになっていたはずです。だが、マダム、ひとつ言わせてもらわねばなりません。貴女のお考えすべてに見受けられます気高さ、とりわけ、今も口にしておられた見上げたプライドには感心いたしておりますから、その点で首尾一貫しておられることに賛辞を進呈出来ればと願う次第です。私へのご愛顧や遜った態度などは一切無視なさるお気持ちになられたわけですが、同じように、無慈悲で理不尽な者たちに（兄上と姉上のことをそのように申し上げても無礼には当たるまいと思うのですが）従うお気持ちのことも、きっぱり忘れていただきたいということですよ」と言うのです。

「おっしゃるような柔順な態度を取らねばなりませんのは、子としての義務がございますし、人の情というものもあるからですわ。この場合には、父親、母親、そして、おじたちがおりまして、そういった柔順な態度を当然と思っておりますし、また、求めてもいるのです。貴方のおっしゃる遜った態度ですが、それを主張なさる理由は一体何なのでしょう。お教え願いたいですわ。身内の者たちに対してであれ、私自身に対してであれ、貴方の美点が根拠になるとでもおっしゃりたいのでしょうか」　私は申しました。

「あのような親戚の方たちから虐待を受けられても、なおもこのようなことをおっしゃるのですか、マダム。あれだけ苦しまれた後で　…　あれほどの望みを抱かせてくださったというのに　…　あゝ、愛しい人よ、ひとつお尋ねしたい（プライドのことを話していたのでしたね）。自分が崇める女性の意向や好みに目を瞑ることの出来るプライドとは、果たしてどのようなものなのでしょう。そのような愛情とは、果たして　…　」　「愛情ですって　…　だれが愛情の話をしているのでしょう。お話ししておりましたのは美点のことではございませんでしたか。その種の感情をこの私が一度でも告白いたしましたか。貴方に告白していただくよう、一度でも求めたことはございますか。でも、こんな言い争いをいつまで続けてもきりがありませんわ。お互い、自分にはまったく罪がなく、自分を言い張るばかりで　…　」

「自分に罪がないとは考えていないのです、マダム。ただ　…　」

「ただ、何だとおっしゃりたいのです。まるで子供のように、いつまでも論じ合うおつもりでしょうか。言い訳を見つけ出したり、約束をなさったりするおつもりなのでしょうか。何のお約束なのでしょう。そうでなくては紳士として恥ずかしいという人間に、将来はなろうとでもおっしゃるのでしょうか。どんな人間かと申しますと　…　」

「おゝ、神よ」と、あの人が遮りました。天を仰ぎながらです。「こうまで厳しいことをおっしゃるようでは　…　」

「えゝ、えゝ（と、苛立ちながら）、これだけ考え方に違いがあるのですから、私たちの心がおよそ不釣合いなことははっきりしていると、そう申し上げるだけで事足りるでしょうね。ですから、私たち　…　」

「どうしようとおっしゃるのです、マダム。乱れ騒いでいるのです、心が　…　」　こう言いながら、あの人があまりにも興奮した様子を見せるものですから、私はすっかり怯えてしまいました。「どうしようとおっしゃるのです、マダム　…　」　あの人が尋ねておりました。

それでも、自分を忘れるような真似はするまいと、私は心に決めていたのです。「こうい

うことですわ。お互い、相手への考えはすべて忘れることにいたしましょう。あら、お怒りになってはいけませんわ。私もいくつかの点では気の弱い、哀れな人間です。でも、自分のあるべき姿とか、そうでない場合には生きるに値しないといった姿のことが問題になります時には、自惚れではございませんが、強靭で不屈の心を備えているのです。礼儀に適った心遣い以上のことにつきましては、お互い、相手への考えはすべて忘れることにいたしましょう。この点は安心していただいて構いませんが、他の男の方とは決して結婚いたしません。男の方のことは、私、十分に拝見いたしました。少なくとも貴方に関しましてはね。私は今後とも独身生活のほうを選ぶつもりでおりますから、貴方もご自分の好きな生き方をお求めになって結構ですわ」

「冷たい話だ。いや、冷たいどころでない」と、あの人が激昂して言いました。

その言葉を遮って、「冷たくて結構ですわ。貴方は（少なくとも私の考えでは）別な扱いを受けるに値しなかったということです。ご自分では値したように考えておられるのでしたら、私の思い違いを恨まれて当然な根拠を（少なくとも、貴方のプライドからいたしまして）お持ちだということになりますわね」と、私は申しました。

「あゝ、愛しい人よ、最愛の人よ」と、あの人は乱暴に私の手を取り、「心からのお願いです。一貫して高潔さを守っていただきたいのです。礼儀に適った心遣いとおっしゃるのですね、マダム。礼に適った心遣いとは　…　貴女はそのように制限し、抑え込みたいと思われるのですか、私のこの燃える想いを」と言うのです。

「貴方のもののような激しい感情こそが、ラヴレースさん、制限され抑え込まれるに値するのです。貴方が思っておられないような感情なのか、それとも、私の考えておりませんものということでしょうか、そのどちらかなのでしょうね。貴方のお心が、私の願っております姿になりますのに必要なだけ制限されたり拡張されたり出来るのかどうか、私は疑問に思うのです。どうぞ、驚きに声も忘れ、両手を差し上げて天を仰いでくださって結構ですわ。でも、驚いておられるのを拝見してはっきりいたしますのは、また、確信を与えてくれますのは、他でもありません、私たちは互いのためにこの世に生まれてきたのではないということですわね」

「この魂に誓っても良い」と、あの人は痛くなるほど激しく私の手を握りしめ、「互いのために生まれ落ちたのですよ、二人は。貴女は絶対に私のものにならなければいけないのです。そうなってもらいます［と言うと、もう一方の腕を私に回しました］。たとえ、この身の破滅と引き替えになるとしてもだ」と言っておりました。

私はいよいよ怯えてしまいました。「失礼させていただきますわ、ラヴレースさん。でなければ、貴方にお引き取りいただきましょう。ご自慢の熱情とやらは、このように恐ろしい仕方で証明されねばならないのでしょうか」　私は申しました。

「行ってはいけません、マダム。お怒りのまま私の元を去るのは　…　」

「戻ってまいります。戻ってまいりますわ。その激しさを、その恐ろしいところを抑えることがお出来になります頃にはね」

すると、あの人は私を放してくれました。

本当にあの人にはびっくりしてしまいました。ひどく驚いたものですから、部屋に戻りますと、急に涙が溢れてまいりましたが、それでずいぶんと救われました。

三十分ほどいたしますと、あの人が短い手紙を送ってよこしましたが、乱暴に振る舞っ

たことへの懸念を表しつつ、是非会いたいと懇願するものでした。
私はまいりました。仕方なかったものですから、まいりました。
あの人は盛んに言い訳をしておりました。貴女は、いかがでしょう、貴女ならこのような男性はどうなさいますか。私の立場に立たれたといたしまして　…
精神錯乱の初期症状にも似た振舞いにつきまして、今なら説明も十分可能だと、あの人は言っておりました。あの人としては、すぐにも気が狂いそうだったというのです。ここ一週間ずっと苦しい思いをした上で、私の心の高潔さに望みをかけていた矢先、礼儀に適った心遣い以外は、などと口にされては　…　というのです。
それを遮って、私はこう申しました。「どのような望みをお持ちにせよ、次の点は主張させていただきますわ。私たちの心は、お互い、決して似合いのものではないということです。この私は、貴方のせいで難儀をしているのです。ハウ嬢は別といたしましても、ことごとく友人から見捨てられてしまいました。本当の気持ちを包み隠さず申しましょう。ハウ嬢のお考えでは、まだ諦めていないとのことですが、兄のその企てから守っていただくのを貴方にお願いしなければなりませんのは、私の意には沿わないということです。私をこのような苦しい立場に、それも、私の同意なしに追い込んだ人なのですからね。その点はお忘れになりませぬよう　…　」
「勿論、忘れてはおりません、マダム。こうも頻繁に思い出させられているのです。どうして忘れることなど出来ましょうか」
「でも、この保護につきましては、必要になればの話ですが、貴方にお願いすることにいたしましょう。この先、なおも私の捜索がなされるといたしましても、貴方のほうから争いを求めるのではなく、むしろ避けていただくよう切に望んでいるからです。それにいたしましても、どのようなことがあって、私を一人にしてくださらないのでしょうか。貴方のところへ使いを出すようなわけには行かないのでしょうか。フレッチヴィルの奥様が心を決めかねていらっしゃるのは明らかですし、ここの人たちが日毎に丁重になっておられるのも確かですわ。でも、もっと私の境遇に適った下宿のほうを望んでいるのです。どのようなものが似つかわしいか、私が一番よく承知いたしておりますし、どなたのお世話も受けまいと心に決めているのです。もしも、私を一人にしてくださるのなら、どこか近くの村へ人知れず姿を隠しまして、そこでじっと従兄弟のモーデンの帰国を待つつもりなのです」
「おっしゃるところから拝察いたしますに、マダム」と、あの人が答えました。「ハーロー邸への働き掛けは不首尾に終わったものと考えております。それゆえ、そろそろ贈与財産に類した条件に触れさせてもらっても構うまいと思うのですが、以前から申し出ようとの心積もりでいたものです。また、私自身から出たことではありませんが、不都合が重なりまして今まで引き延ばしてしまったものですから、貴女が新しい家に落ち着き次第、そして、事実上のみならず外見上も独り立ちなさったと思われるようになり次第、強く促そうと考えていたものなのです。お許しがあれば、マダム、次の事柄を申し出させていただきますが、ただ、即答を期待しているわけではありません。ひとつお考えいただければとの気持ちからです」とおっしゃるのです。
ためらいを見せたり、自分にも感じ取れるくらい赤く頬を染めたり、目を伏せたりいたしますのは、十分すぎるほど色好い返事をするのと同じことではなかったでしょうか。そ

れでも、貴女はお気づきでしょうが（思い返してみまして、私も今では気づいているのです）、日取りのことにつきましては、あの人からそれほど熱心な求めはなかったということです。私が新しい家に落ち着きますまでは、贈与財産の件を申し出るような考えはなかったからです。それに、今度は、私への大層な思いやりからでしょうが、条件を申し出る許しを求めましても、即答を期待してのことではなく、ただ、ご一考を願いたいというだけだったのです。なのに、この時には、貴女のご助言が頭にこびりついておりました。私はためらって見せたのです。

私が黙っているものですから、あの人はなおも迫ってまいりました。贈与財産の件で申し出ようとしている点に親切にも耳を貸してもらえるならの話だが、胸に温めている事柄の公正さ、否、その寛大さについては、神に誓っても良い、などと言い出すのです。

このお話を切り出すにいたしましても、これほど仰々しいやり方でなしに始めるわけには行かなかったのでしょうか。この件を持ち出すのを認めてほしいと、許可を求められましたなら、勿論、多くの点は拒絶されておりますし、また、そうなって当然なのです。そして、一旦お断りいたしますと、名誉にかけて拒否の姿勢を貫かねばなりません。それに対しまして、いつの間にかそのお話に入っていたと言って構わないような場合ですと、再考に値していたかもしれません。ラヴレースさんのような人がこんなことにお気づきでないとしたら、一体どなたに分かるというのでしょう。

でも、贈与財産のことに触れる許しを求めただけで十分なのだと、あの人は考えている様子でした。ラヴレースさんみたいに〈控え目な〉男性でも、似たような場合にはそうしていただろうと思うのですが、あの人は、私が黙っておりますのにつけ込もうとはいたしませんでした。それでも、ずいぶん自信ありげに私の顔を覗き込んで、返答を期待している素振りでしたので、もっと漠然とした方向へお話を持って行かなければいけないように考えました。こんなにもあの人を遠ざけていた後のことです。お受けするにいたしましても、大喜びで飛びついたみたいに映りますのは口惜しいですから、そのような思いをしないためのことでした。でも、再び私たちを脇道へ追い遣ってしまうかもしれない、そんな反駁が必要となるような事態は、（ご助言のとおりに）避けたいと思っていたのです。それにいたしましても、何とも残酷な選択を余儀なくされたものです。

「寛大さということを話しておられますね、ラヴレースさん」　私は申しました。「それに、公正さということも話しておられますが、今使っておられる意味では、それらの言葉の重みにつきまして、おそらく、十分考えてはおられなかったのでしょうね。私の用います意味での寛大さとはどのようなことか、お話しさせていただきますわ。真の寛大さというのは、金銭的な事柄に限定されるものではないのです。礼儀正しさ以上のものです。誠実さ以上のものなのです。名誉心に優り、正義に優るものです。これらはすべて義務に過ぎませんし、立派な心の持ち主にとりましては欠かせないものですからね。ところが、真の寛大さというのは、心の偉大さのことなのです。同胞に対しまして、私たちに厳しく求められておりますもの以上のことをして上げたいという気持ちを起こさせるのです。助けを必要としている者に、そのような者の望みや期待を先取りして、急いで救いの手を差し延べずにはいられなくなる気持ちです。寛大さというのは、宜しいですか、その高貴で慈悲深い意図につきまして、立派な心の持ち主に疑念の余地を与えたりはいたしませんが。まして、人を驚かせたり傷つけたりするような真似はいたしませんが、とりわけ、災難とか

不幸とか不慮の出来事のせいで、寛大な心に保護を求めねばならないような人に対しましては、決してそのようなことはしないものなのです」とです。

この急所を突く言葉の最後の部分からいたしましても、あの人にとりましては、もしもその気があるのでしたら、ご自分の考えを明らかになさるのには恰好の機会だったはずなのです。でも、あの人は最初の部分に飛びつきますと、その話題から離れようとはなさらないのです。

「見事な定義ですね」　あの人が言いました。「だが、その調子では、マダム、貴女にとって寛大と言えるような人間は、果たして存在するのでしょうか。貴女のおっしゃる寛大さを私に賜りたいものです。公正さのほうは、私の唯一の取り柄なのでしょうから、それを目標にすることにいたします。ここまで几帳面でむずかしい考え方をする女性には、これまで会ったこともありませんよ」

「このような考え方を几帳面だのむずかしいだのと思われるのでしたら、それは貴方ご自身、そして、貴方のお仲間に対する非難となるのですよ。私以上に几帳面な女性が何千人といるのです。その人たちはこの誤った道は避けていたことでしょうからね。私こそ不意を突かれて踏み込んでしまいましたが　…　そのように不意を突かれましたために、この私は、女性の特性のうちでも、その誇りとなり栄誉となるような部分を理解出来るだけの繊細さも持ち合わせない男性に、真の寛大さとは何なのか、お教えしなければならない羽目に陥っているというわけですわ」　私が申しました。

あの人は、私のことを神にも似た我が訓戒者、と呼ぶのです。礼儀作法を身につけるよう（何度も約束していたことですが）、私を手本に努力したいとのことでした。ただ、贈与財産の条件の中で私のために計画している公正な扱いについて、手短に触れることを今は許してもらえるものと思う、というのです。これまでに取り上げられていて当然の話題であるし、また、私がたびたび機嫌を損ねていたために（いつだって私が悪いというわけですわね）、しばしば期待を抱きながらも機会を失っていたのだが、そのことがなければ、はるか昔に取り上げられていたはずの話題でもある、というのです。ただ、危険を冒して掴み取ったこの機会だから、今はどんなことがあろうと、無為に見過ごすつもりはない、とも言っておられました。

「今は、そのように重要な事柄に耳を傾ける精神状態にはございません。提案なさろうと考えておられる点は、書面でお願いいたします。それならば、どのようにお答えしたら宜しいのかも判るだろうと思います。一つだけ覚えておいていただきたいのですが、どのようなことであれ、私の父に関わりのあります事柄にお触れになるのでしたら、父に対する貴方の扱い方如何によって、娘にどれほどの価値を置いていらっしゃるのかを量るつもりでいるということです」

あの人は、書面よりも口頭のほうが望ましいという表情を浮かべておりましたが、そのようなことを口になさっていたなら、私のほうでもきついお返しをするつもりでいたのです。私の顔付きから、あの人もきっとそのことには気づかれたことでしょうね。

❁　❁

私たちは今このような状態でいるのです。申し上げましたように、いわば、嵐が過ぎ去

った後の静けさのようなものです。この次には何が起こりますことやら、嵐でしょうか静けさでしょうか、このような人を相手にしなければならないのでは、見当もつきません。

でも、どう転ぶにいたしましても、さもしい真似はせずに済むと思いますわ。私にとりまして、これは重大な点ですし、そうお聞きになれば、貴女も喜んでくださるものと存じます。たとえ、この男性とお会いする際に、例の品位を少しも失わずにいられるというだけの話だとしてもです［自分自身について語るのですもの、傲慢さではなく礼儀正しさを表しますのに、他のどんな言葉を用いたら良いというのでしょうか］。あの人のようなタイプの男性を仰ぎ見ることが出来るようになりますためには、と申しましょうか、心の目では、むしろ見下すと言ったほうが良さそうですが、そのようにすることが出来ますために是非とも必要な、あの品位のことを申しているのです。

事情が事情でしたので、あの人への対処の仕方につきまして、ご助言どおりにはまいりませんでしたが、でも、ご助言のお陰で、大層勇気づけられましたので、このように事を進めることが出来たわけですし、あの人の元を去るのは止そうと、心を決めることにもなったのです。以前は、万難を排してもそうしようと考えておりました。いざという時になりまして、果たして実行に移していたかどうか、それは、その際のあの人の態度如何によるでしょうから、申し上げかねますけれどね。

でも、あの人の態度がどのようなものであれ、結局あの人の元を去らねばならないような事態が起こるといたしますと、世間の人たちに対しまして、私の立場が良くなることはなく、むしろその逆ではないかと、（貴女と共に）不安を覚えるのです。とは申せ、少しでも自力で出来ることがあります間は、無礼な扱いに甘んじたりはしないつもりです。

何度もありましたチャンスを、貴女の言い回しをお借りしますと、慎みのせいで見逃してしまったと、貴女は咎めておられましたね。でも、何のチャンスなのでしょう。道楽者の妻となるチャンスではありせんか。道楽者やその妻がどのようなものか、それは、従兄弟のモーデンの手紙から、私たちにも分かっていることです。ここで、これっきりにいたしますが、説明の労を取らせていただきます。この男性に対する私の振舞いの動機、それに、私が拠り所としてまいりました信念につきまして、自分自身の心を厳しく吟味いたしますと明らかになってくるのですが、それをそのままにお話しいたします。

さて、次のように考えますのをお許しいただきたいのです。つまり、この際の動機と申しますのは、娘らしい几帳面さばかりから来ているのではないということです。また、今私を苦しめております人、そして、将来は夫となる人は、あのように不愉快な態度を見せておりますのに、私が即座に承諾いたしますとどのように考えるか、その点を心配するからでもございません。そうではなく、主として、私自身の心を占めておりますことから生まれてきているのです。心そのものの公正さ、適・不適についての判断に関わることと申しても良いでしょう。先ず何よりも、苦心することなしに自らに身の証が立つようにしたいのです。あの人や世間の人たちに証を立てますのは、二番目のことにすぎません。私の心にあります信念、そこに見出しました信念は、疑いもなく、あの尊いお方によって刻み込まれたものなのです。だからこそ、それに恥ずかしくない振舞いを強いられているのだと申して構わないでしょう。出来るかぎり慎重に考えました上で、どちらの立場（独身の場合と結婚いたしました場合とですが）にも相応しい振舞いが出来るようになるためなのです。他の人たちがどのように私に接しましょうと、それは別問題です。

自分を欺くような真似はしていないつもりですわ。また、心の至りませぬところを正そうとする代わりに、取り除いたり克服したりする気持ちにはなれませんような、そんな自分の癖や風変わりな点に言い訳を見つけ出そうとしているわけでもございません。心というのは、まことに当てにならないものです。どうかお願いいたします。私の心を裸になさって「でも、貴女の前ではいつも素裸のはずですわね」、いけないところがあるとお思いでしたら、手心は無用にしていただきたいのです。

これっきりにいたしますと申しましたが、このような所感を述べておくのが適当と思いましたのは、どう考えましても、私の過ちは、重大な事柄にいたしましても、さほど重大でない事柄にいたしましても、私の意思というよりは判断力に落ち度があってのことだという点を、貴女には納得していただきたいと思うからなのです。大好きなお友達、

変わることなき感謝の念を込めまして、貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　二十

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

五月十六日　火曜日　夜

ラヴレースさんが、ドーカスに託しまして、結婚の条件を伝えてまいりましたが、次のように記してありました。

「そのように極端とも言える繊細なお心を斟酌いたしまして、また、ご命令に従いますためにも、筆を執ることといたします。貴女のほうでこの書状をハウ嬢にお示しになることも出来ましょうし、ハウ嬢といたしましても、令嬢のお友達のうち、貴女がこの際打ち明けて然るべきだとお考えのどなたかに相談なさることも出来るわけですから、なおさら好都合でしょう。「打ち明けて」と申しますのは、私のほうでも、ご存じのとおり、二人は実際に結ばれている旨を幾人かの者たちに公言してあるからであります。

先ず第一に、マダム、寡婦給与といたしまして、貴女の地所全体に終身受益権の設定を提案いたします。さらに、ランカシャーの私の地所のうち、正味四千ポンドの年収を産み出します部分を管理人に委ね、貴女個人の単独使用に供するため、四半期ごとの支払いを行わせることといたします。

私自身の地所につきましては、名目上ではない正味の年収が二千ポンドとなっております。M卿からは、卿があのようにいたく感心しておられる女性との婚礼に際し、ランカシャーに所有しておられる土地［ちなみに、この土地の権利は、卿ご自身よりも私のほうに利があるものと考えております］、あるいは、われわれが〈ローン荘〉と呼んでおりますハートフォードシャーのものか、そのいずれかを譲りたいとのお申し出ですし、私が選択いたしますものの年収を正味一千ポンドにしようとのご提案なのです。

世間の非難を軽視するあまり、私は激しい中傷の矢面に立たされてまいりました。それゆえ、紳士として誓約しておきますのも的はずれなことではありますまい。私の地所のうち、かつて抵当に入ったものは一つとしてないということ、また、異国では贅沢三昧の日々を送り、銀行から多額の引き出しもいたしましたが、次のミドサマーデー(二四)には、一切

の借財は完済の運びとなっているということです。私の考え方すべてが間違っているわけではないのです。金銭上のことでは太っ腹だと思われております。まず何よりも公正でなかったなら、別の呼び名を頂戴していたことでしょう。

現段階では、貴女ご自身の地所はお父上の掌中にあるわけですから、もしも、貴女の地所に相当する寡婦給与を、私自身の地所から設定してほしいとのお考えでしたら、額の如何にかかわらず、ご希望のとおりにいたします。慶事に際し、M卿にはどのようなご用意があるのか、卿にお願いし、貴女宛に一筆認めてもらうつもりですが、貴女のご要望やご期待に添うためではありません。今貴女が置かれておられるご一族との関係を利用しようなどという考えは一切ないことを証明するためのことであります。

最愛の娘御さんのことでありますから、そのお嬢さんへの配慮に怠りなきことを示しますためにも、おじい様の地所から得られる、父上のものとなるに違いない多額の所得に関する合意条件につきましては、そのお嬢さんの指図に従うことを約束いたしましょう。父上が多額の要求を出すよう仕向けられますのは疑いのないところでしょう。それら一切に同意なさるのも、お任せいたしますが、貴女が心を安めていただくためです。残額は貴女にお支払いいたしますので、すべてお好きなようになさって構いません。ご一族以外の者たちの間で大評判となっておりますのは私の耳にも届いておりますが、お身内の間では大層非難を受けておられる、例の慈善の施しをお続けになるための基金となりましょう。

衣装、宝石類等に関しましては、いずれ人前に出ようと思われる時期もまいりましょうから、その時に備え、二人の身分に相応しい品々の仕度をなさるにつきましては、ご自分たちには過ぎたお嬢さんですが、そんな娘さんを勘当するような愚かな真似を演じた者たちのお世話にならずに済みますよう、取り計らうつもりでおります。また、それを誇りとも思うのです。無礼の段はお許し願いますが、マダム、貴女にとりましては極めて近い縁者とは申せ、あの者たちに対しましてこの程度の苦言を口に出せないようでは、貴女としても、その他の点での私の誠意を疑わしく思われることでしょう。

私の申し出ます条件は、マダム、以上のとおりであります。この楽しい話題に入ることをお許しいただけました場合にはいつでも口に出そうと、常日頃より胸に温めておりましたものなのです。ただ、私を完全に諦めることになるとしても、お身内との和解につながる方策は一つ残らず試みてみようとの貴女のお気持ちには少しの揺るぎもありませんでしたので、私の見ますところ、貴女の念頭を占めておりますそのご希望の結果が判明するまでは、私を遠ざけておくのは当然至極のこととお考えのように思われたのです。すでに結果は判明いたしました。クラリッサ・ハーロー嬢としての貴女から賜りたいと願っておりましたご好意には及ばないところがございますのを、これまではすぐにも残念がっておりましたし、おそらく、今もその気持ちに変わりはないのです。しかしながら、私の心の寛大さ、と申しますよりは、むしろその公正さを疑ってかかるよう、我が不倶戴天の敵どもは貴女に教え込んできたのでしょうが、ラヴレース夫人の夫といたしましては、貴女がこの心に与えた苦しみの数々に関し、貴女を咎めるよりも、むしろ喜んで賛辞を呈する所存です。また、その苦しみの数々にいたしましても、疑念を吹き込まれることがなかったならば（おそらく、まことに尤もらしい言い種だったのでしょう）、そのように高貴な心の持ち主からは与えられるはずはなかったものと確信しておりますし、また、疑念に打ち克っていただけました暁には、すぐにもよそよそしさは終わるように考えたいと願っておりま

すので、そのような気持ちも尚更強くなるわけであります。
次の点だけは申し添えておきますが、さらにご満足をいただけます事柄で、私のほうに何か見落としがあります場合には、あるいは、前記の条件ではまだご希望には適わないとお考えでしたら、是非とも、貴女のほうで適宜補足していただきますようお願いいたします。ご希望の向きを承知いたしました上で、ご満足いただきますために私に出来ますことにつきましては、何一つ欠けるところのなきよう、即刻ご希望どおりの条項を作成させる所存です。
これでお分かりとは思いますが、マダム、後のことすべては貴女のお気持ち次第ということなのです」
あの人の申し出はご覧のとおりです。あの人がこれだけの申し出をもっと前になさらなかったのも、ご覧のように、すべて私の落ち度ということになります。妙な人間なのですね、この私は。すべての事柄につきまして、また、どなたに対しましても、私が悪いことになりますのに、それでいて、その時点では悪いことをするつもりなどはないのです。また、手遅れになりますまで、あるいは、ほとんど手遅れと申して構わない頃まで、悪いことだなどと思いもしませんので、過ちの埋め合わせをいたしますために、あの人のおっしゃる慎みとやらはすっかり投げ捨てねばならなくなってしまうのです。
「これで、後のことすべては私の気持ち次第ということが分かるだろう」というのですからね。何て冷淡な結び方なのでしょう。これだけ情のこもった、そして、大筋では反論の余地もない申し出ですのにね。読んでおられるうちに、式の日取りを求める熱烈この上ない言葉が結びのところには出てくるものと、貴女も思われたのではないでしょうか。正直申しまして、先に記されておりましたことの当然の結果とも言えましょうが、私も大変大きな期待を抱いてしまったものですから、結びのところまでまいりました時には、不満の種を探すまでもなく、満たされない気持ちを抱かずにはおられませんでした。
でも、手の打ちようもないということですわね。きっと、さらに犠牲を払わねばならないのでしょう。慎みなどすべて、もう私には用なしということのようです。でも、そうだといたしますと、賢い男性ならどなたでもご存じのことを、この男性は知らないということになりますわね。つまり、妻に備わる分別や美徳、そして、繊細な心というのは、世間の目からいたしますと、その同じ美質が（妻は持ち合わせていないといたしまして）自分自身に備わっております場合に比べ、より現実的な名誉を夫にもたらすのだということをです。妻にそれらが欠けておりますと、夫にとりましてはますます不名誉な話になるのと同じことです。と申しますのも、妻が過ちを犯しますと、夫が非難を受けることになるのではないでしょうか。夫への非難がどこまで当たっているか、それはまた別の話です。
この書状を検討してみるつもりです。そして、出来ましたら、返事を書こうと思っております。何しろ、「後のことはすべて私の気持ち次第」なのですからね。

手紙　二十一
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

五月十七日　水曜日　朝

昨夜、ラヴレースさんはしきりに私と話し合いたがっておりました。でも、翌朝まではお会いするのを遠慮したいと申しました。あの人の申し出の件を話題にする準備は出来ておりませんでしたし（じっくりと考えてみるつもりだったのです）、あの人の結びの言葉をあまり好ましく思ってもおりませんでしたからね。それよりも、昨夜のうちの適当な時刻にあの人から逃げ出そうといたしましても、それはほとんど無理な相談だからです。

そういうわけで、七時頃に食堂でお会いいたしました。

あの人は、私が大変好意的な、もしかいたしますと、感謝のこもった表情で会ってくれるはずと、期待に胸を膨らませていたようです。私が期待どおりでないのに少なからず落胆していることは、あの人の不機嫌な顔付きからすぐに分かりました。

「あゝ、最愛の人よ、ご気分はいかがですか。何故そのようにしかつめらしいお顔をなさるのです。貴女のよそよそしさに決して終わりはないということなのでしょうか。もしも、どの点にせよ、私の申し出にはご期待の向きに沿わないところがあるということでしたら　…　」と、あの人が言っておりました。

私は次のように申しました。お申し出の点をハウさんにお教えするよう言ってくださったのは、大変行き届いた心遣いであり、早速にもコリンズさんの手でハウさんへお届けする機会もあろうから、その件を話題とするのは、ハウさんのご意見が得られるまでは一切見合わせたい、と言ったのです。

「あゝ、神よ。針の穴ほどの抜け道でもあるなら　…　引き延ばしの余地が少しでもあるとしたら　…　」と、あの人は叫んでおりましたが、私との現状についてお知らせするため、M卿宛に一筆認めていたところで、卿にとりましてもご自分にとりましても、納得の行くような結び方を出来ずにいるというのです。まるで、あの人の申し出られた条件が私にとっては満足の行くものなのか否か、明かしてほしいと言わんばかりでした。

私は次のようにお話しいたしました。これだけは申し上げて構わないけれど、私が第一に目指しておりますのは、身内の者たちとの和睦であり、和解なのだということです。他の問題につきましては、あの人ご自身紳士らしいお気持ちをしておられるのですから、私が求めている、あるいは、期待しております以上のことをしていただけるものと思っている。だから、私のためにM卿が何をしてくださるのかをお知りになるためだけに筆をお執りになるのであれば、そのお骨折りは無用にしていただきたい。私自身については、どれほどの望みがあるとしても、それは、あの人が多分想像しておられるのよりもずっと簡単に満たされるものなのだから、とです。

するとあの人は、慶ばしい日について触れることを許してくれるなら、当日はM卿のご同席を請い、私の父親役をお願いしたいのだが、と尋ねておりました。

〈父親〉という言葉には耳に心地の好い、尊い響きがある、と私は申しました。私を我が娘と認めてくれる父親がいれば、本当に嬉しいのだが、とです。

いかがでしょう。飾りのない言い方だったとはお思いになりませんか。でも、正直に申しますと、振り返ってみてそのように思われるということなのです。その場で遠慮のない言い方をしようとしたわけではありません。と申しますのも、あの時には、自らの父親のことを思い浮かべ、心の底からの溜め息を漏らしておりましたし、父に、そして、母にも見捨てられた娘であることを思い、痛切に嘆き悲しんでいたのです。

私の話しぶりのことがありますし、おそらく、悲痛な胸の思いにも気づかれたのでしょ

うね。ラヴレースさんが少し心を動かされているように私は思いました。

「ご親切からでしょうし、また、愛情ゆえのことなのでしょうが、ラヴレースさん、既にずいぶんと悲しい思いをさせてくださいましたけれど、私もただのうら若い娘にすぎないのです」　私は申しました［そして、顔を背け、目を拭いました］。「ですから、驚かれるには当たりませんわ。貴方と知り合いますまでは、いつだって親孝行に励んでおりましたし、幼さのゆえに、まだ親からの保護の翼を必要としておりますような子供の心に、父という言葉がこんなにも強い影響を及ぼすといたしましてもね」とです。

あの人は窓のほうへ顔を向けておりました［まったく無感覚な人というわけでもない点を一緒に喜んでくださいね。私はあの人への捧げ物となる定めのようですからね］。心を動かされておられるのは明らかでした。でも、あの人は努めてそれを抑えつけようとしておりました。また私のほうへ近寄って来るのですが、再び背を向けずにはいられなくなるのです。「天使にも似た　…　」と、あの人は呟いておりました。でも、その後、もっと自分のお気持ちに適った精神状態になりますと、もう一度私のほうへやってまいりました。そして、M卿はとても痛風の発作を起こしやすく、あの人ご自身としては、つい先程口にした卿を慮っての提案ではあるけれど、仮に実行に移された場合、考えるだけでも耐えられないほどの長い延期をもたらすことになるかもしれないし、もしもそのような事態になれば、卿への配慮を心の底から悔やむことにもなるだろう、と言っておりました。

お分かりでしょうが、これには一つとして返す言葉もございませんでした。でも、あの人の言い種を私がどのように受け止めたのか、お察しいただけるでしょう。あれだけの熱烈な愛が、口先だけのものだったのです。大層分別を備えておりますし、また、今まではあれほど不従順な態度で軽蔑していたご親戚ですのに、本心では、大層従順に耐え忍ばれるというのですからね。一体どうして、何故このような男性に振り当てられてしまうのかと、私は思いました。

自分の心と争っているみたいに、あの人はためらっておりました。そして、一、二度部屋の中を往き来した後、どう心を固めたら良いものか、はなはだ当惑を覚える、と言っておりました。いつになれば世界一幸せな男にしてもらえるのか、教えていただけないからで、今この場で決めてもらえるなら本当に有難い、とおっしゃるのです。

ほんの束の間、あの人は口を噤み、いつもの自信に溢れた態度で、私の伏し目がちの顔を見つめておりました［あの時ばかりは、あゝ、大好きなお友達、父か母が私には必要だったのではないかと、そのようには思われないでしょうか］。でも、願いどおりすぐに日取りについての同意が得られないのであれば、その場合は、M卿に敬意を表そうが表すまいが同じことだと考えているというのです［案の定ですわね］。そうしている間に贈与財産の証書の作成と清書が出来るわけであり、無駄に時間が費やされることもなく、自分の苛立ちは鎮まるはずだから、とのことでした。

その件についてあの人がおっしゃった事柄の概要を繰り返しますと、どれほどこの言葉に私が心を乱されたのか、ご想像いただけるでしょう。あの人のお話は次のとおりです。

だが、誓っても構わないが、こんなにも私の態度がよそよそしく、こうも意味深長なまなざしを向けられたのでは、私を喜ばせようと切に願いながら、その願いとは及びもつかないことをしているのではないかと、ご自分としても覚束ない気持ちになる。M卿への心遣いの件には賛成してもらえるのか否か、答えがいただければ幸いだ、というのです。

熱心に促すべきであった早目の日取りについて、早めることを選ぶのか延期のほうを選ぶのか、それは私に任せるというのですからね。ハウさんがおっしゃるには、この男から逃げ出してはいけないということだわと、これを聞きました瞬間、私はそう思いました。

「勿論のことですが、ラヴレースさん」　私が申しました。「万が一そのようなことになるのでしたら、私といたしましては、片方の人々からの全面的なご承認がありますと嬉しいのですが　…　もう一方の側の承認は得られないのですからね」

「〈万が一そのようなことになるのなら〉ですって　…　おゝ、神よ　…　事ここに至って、何というお言葉です。それに、片方の側の全面的な承認というのですからね　…　どうして、〈承認〉などという言葉を使われるのです。光栄にも、最愛の人を身内にお迎え出来ることを、我が一族全員は最大の誇りと考えているのですよ」とおっしゃるのです。そして、「あゝ、お願いだ、愛しい人よ。だれにであれ、心遣いなどをするのは止め、明日という日を我が人生最高の日としていただきたい」と付け加えておりました。また、「いかがでしょう、我が天使よ。明日ということではいかかでしょうか」と、見せ掛けのようには思えませんでしたが、もどかしげに身体を震わせているのです。

これに対しましては、大いに申し述べることも出来そうでした。あるいは、あの人のほうからこのように日延べを仄めかされたこともありますので、延期のほうに自分の気持ちが傾いていたのでしたら、別の日を指定することも出来そうではあったのです。

私は何も言わずにおりました。

「明日が駄目なら、マダム、その次の日ではいかがです」

答える時間を与えてくれたとしても、返事が「ハイ」だったなんて有り得ないわ、と貴女はお考えでしょうね。ところが、「それとも、その次の日ではいかがでしょうか」と、あの人は息もつかずに言葉を続けたのです。そして、私の両手を取りますと、まじまじと顔を覗き込むものですから、私も半ばうろたえてしまいました。どうでしょう、このような男性、貴女なら辛抱なさったでしょうか。

「いいえ、そんなにも急ぐ理由がありそうだと私が思うなんて」と、出来るだけ穏やかな口調で私は申しました。「まさか貴方もお考えではないでしょう　…　卿のご同席を賜ることが出来るのでしたら、勿論、この上ない悦びですもの」

「何もかも仰せのとおりに甘んじることにいたしましょう」と、恥知らずな男は答えておりましたが、得意げな様子なのです。私からの申し出をおとなしく受け入れ、私への慮りから、大層克己的な行動を取ったと言わんばかりでした。

あの人の目的が私を悩ませ、苦しめることであるのは明らかではないでしょうか。もしそうなら、誇りは高くても、卑劣で愚かな男だということになります。でも、几帳面にいたしますのは、私の場合はすべてお終いとのご意見でしたわね。何故なのでしょうね。当然の礼儀作法ですし、それも、私自身のためばかりかあの人のためにも守りたいと、それだけを願っております心ですのに、どうしてあの人は、そんな心が慎みの殻の中に閉じ籠もってしまうよう、骨折ったりなさるのでしょうね。

あの人のおっしゃったとおりにいたしますのが、慎み深さの点からも必要だったように思われるのです。そうではないでしょうか。私はそうだと思うのです。願わくは　…　でも、願いなど口にいたしましても、何の意味がございましょう。

それでも、これまでもそんな言い方をしておりましたが、自分で勝手に決め込んでおり

ますこの譲歩とやらの〈ご褒美〉として、あの人がキスを求めてまいりました時には、当然のことながら、心からの軽蔑の念を込めて撥ね付けてやりました。

あの人は、結構至極な申し出と譲歩を行ったのに、感謝の言葉一つ報いてもらえないと考えている人のように、苛立つと同時に驚いてもいる様子でした。私たちの置かれている立場からして、この手の罪のない打ち解けた振舞いは許されて当然のように思うと、あの人は飾ることなく言っておりました。そして、こんなふうに蔑んだ態度で突き放されたのでは面食らってしまうし、また、悲しいことでもあるというのです。

このような話題には返事のしようもありません。私は乱暴に手を振りほどき、あの人から逃れました。ある姿見の前を通り過ぎた時のことですが、あの人が怒りに駆られ、片方の拳を額に打ちつけている姿が映っていたのを覚えております。「冷たい人だ。まったくの話、憎しみと言っても構わない」といった台詞を口にしているのが耳に入りました。そして、「氷みたいな」何かについても言及しておりましたが、何のことなのかは聞き取れませんでした。

卿なりモンタギュー嬢なりにお便りをする気持ちがあの人にあるのかどうか、それは私にも分かりかねます。でも、もう私にとりまして、慎みはすべて用なしということなのですから、慎みがどのようなものかご存じない人にそれを期待いたしますのは、おそらく間違いなのでしょう。もしもあの人が、慎みというものを知らず、それでいて自分のことを大層礼儀を弁えていると考え、行いを改めるつもりがないのでしたら、あの人に非難が向けられますよりは、むしろ、私に同情が寄せられて然るべきなのでしょう。

それに、何と申しましても、今拝見しておりますままのあの人を受け入れざるを得ないわけですから、そうする以外にないのです。言い換えますと、大変自惚れが強く、いつも褒め言葉を聞き慣れておりますため、内面の欠陥には気づかず、外見以上のものを磨くことには少しも意を用いないという男性をです。それに、あの人の申し出は私の予想を越えたものでしたし、また、私のことでは、辛抱しなければならない点が多々あるとのお考えなのですから、私といたしましても（新たな侮辱を受け、思い止どまるようなことにならなければですが）、腰を下ろしてお返事に取り掛かろうと思います。そして、出来ることでしたら、私にとりましてあの人の言い回しがそうでありますように、あの人にとりましても不満のない表現にしようと思うのです。

それにいたしましても、やはり、私たちの考え方に相容れない点がありますことは、貴女にはますますお分かりなのではないでしょうか。

それでも、あの人ならそうなるのではないかと心配なのですが、ひどい夫と結ばれ、この世の幸せと思われておりますものへの望みを捨てることで（仮に、私への懲らしめはそれですべてといたしまして）、私の犯しました間違いの埋め合わせになるのでしたら、喜んでそのようにするつもりです。要するに、この生涯が終わりますまで、妻として苦しみ悩む人間に甘んじようと思うのです。長い生涯となるはずはございませんもの。

こうすればあの人も（いずれ分かることですが）、最初の妻を不当に扱ったという良心の痛みから、二番目の奥様に対しましては、より立派な人間とは申せないまでも、もっと我慢の出来る人間になってもらえるかもしれません。また、私の身の上話は、やがてご存じになる人たちすべてにとりまして、次のような教訓を提供することになるでしょう。つまり、目というものは裏切り者であり、いつだって信頼を置くべきではないということ。外

見は人を誤らせるものだということです。言い換えますと、優れた容姿が優れた心と結びついていることは稀で、現世のことであれ来世のことであれ、幸せな未来を望むのでしたら、しっかりとした道義心と善良な心のみがその礎になり得るのだということです。

ラヴレースさんの申し出につきましては、差し当たり、これくらいにいたしますが、貴女のご意見をいただきとうございます(ア)。

《ラヴレース氏の最後の手紙の日付以降、氏の筆により四通の手紙が認められていのだが、その文面にみられる滑稽味、及び、身内の者たちが和解を了承するに至った場合には氏の元を去るという、令嬢の決意を知った際の激しい憤りの表現を別にすれば、同時期に書かれた令嬢の手紙とほぼ同趣旨のものである。数箇所の抜粋のみを呈示することとする》

彼女の父親、そして、その他の無慈悲な連中が俺の味方になってくれなかったら、この

(ア) ここで是非とも一言述べておかねばならないのは、前掲の会話において、その発言に潔癖過ぎるものがあるとして、女性の中からさえも、特に令嬢に対して非難の声が向けられてきた点である。しかしこれは、令嬢の置かれている立場、そして、令嬢が対処すべき男性の人柄ばかりでなく、令嬢の人柄に対する注意不足に原因を求めざるを得まい。氏の陰謀に関し、ベルフォード宛の氏の手紙を通して読者が承知しているものに匹敵する知識が令嬢にもあるとは思われないのだが、にも拘らず、氏の不品行ぶりについて、そして、自らに対する氏の振舞いのすべてからして、令嬢はしばしば氏をそのように呼んでいたわけであるが、このような〈侵略者〉に対しては距離を保つ必要のあることも、令嬢は十分すぎるほど確信していたのである。第三巻の手紙二十九において読者は、多少の事態好転の兆しに接して、すぐにも氏に疑いを向けたがる、そんな自分を責めている令嬢の姿に出会うのである。令嬢の曰く、「ただ、人柄にいたしましても考え方にいたしましても、ひどく欠点の多い人なのです。本当に軽薄で自惚れが強く、変わり身も早いのです。それに、この身を守ってくださる人など、現在は一人としておりませんでしょう。父も母もいないのです。頼りに出来ますのは、神様と警戒を怠らない心だけなのです」とのことである。第三巻の三十四頁で令嬢は、「こんな男が相手なのですから、細心の注意を払い、警戒怠りなくしていなければ、私らしくもないと言われても仕方のないことではないでしょうか」とも語っているのである。

ここに至って、読者はお気づきであろうが、細心の注意を払い、警戒に努むべきさらに大きな理由が令嬢にはあったということである。また、ラヴレースは本巻の手紙五十四において、女性に対し、「最初のうちの無遠慮な振舞いに憤りを示さない女は、きっと身を持ち崩すことになるのだよ。愛というのは侵略者なのだ。愛は決して後戻りをしない。抑制されることのない愛を満足させ得るものといえば、ただ、愛の極みともいうべき行為を措いては他にないのだよ」と語ることになるのである。

しかしながら、おそらく読者は、重大局面におけるクラリッサの振舞いに関しては、令嬢の冷たさをこぼすラヴレースの言葉に基づいて判断する傾向が強すぎるのであり、以下の点への考慮に欠けているのであろう。つまり、氏の目論見の件であり、そして、令嬢が女性の鑑として呈示されているということである。このゆえにこそ令嬢は、試練や苦難の時にあっても、同じ微妙な立場に置かれた他の女性なら遵守することをさほど厳しく義務づけられているとは考えないような規範の類いに対しても、目を瞑ることは許されないわけである。仮にも令嬢がそれらの遵守を怠った場合には、ラヴレースのような人物のことでもあり、目的のすべてを達成していたと思われる点を付言しておく。

身は、また、俺の計画は、果たしていかなる運命を辿っていたことか、と氏は言っている。

《復讐を誓う激しい言葉の後、氏は次のように語るのである》

俺を永久に諦めるつもりだったのは明らかだ。また、俺を捨てようとしても、それを防ぐことは出来なかったことだろう。果実を手に入れようと、木を根こそぎにしていなかったならな。ただ、果実は優しく一、二度揺することで落としたいものだと、今でも思っているのだよ。熟れる時を待つだけの忍耐心があればの話だがね。

《このように、非道の残虐さを得意げに語った後、氏は次のように述べている》

つっけんどんに扱われた後のことだ、絶対に口を割らせるつもりだよ。切り出したいと願っている話題のことを真剣に思い巡らしながらも、切り出す術を知らずにいる女のその顔、その口調、そして、探りを入れながら逡巡するその姿には、目を楽しませてくれるものが千ほども見つかるものなのだ。心優しい人間と自称する馬鹿者たちは、女をうろたえさせるようなことはしないと自慢するだろうが、正真正銘の馬鹿者だよ。でしゃばった真似をして、無上の悦びを自ら捨てているわけだし、同時に、こんな時でなければ証明されることのない魅力の数々だというのに、そのご披露の機会を女から奪っていることにもなるのだからな。

このような場合、我が魅惑の君はどう振る舞うことになるのか、貴公には前もって話してやろう。彼女は切り出そう、切り出そうと、数度試みることだろう。だが、俺は知らぬ顔だ。そして、とうとう、エヘン、エヘンと咳払いを半ダースは重ねた後、口に出さずにはいられなくなるのだ。「確か、ラヴレースさん、確か、貴方は数日前におっしゃっておられたように思うのですが　…　」と来る。それでもやはり、俺のほうは黙ったままさ。彼女の目は、向き合って座る俺の靴のバックルから離れない。こんな具合に追い詰められた女というのは、男の靴のバックルとか、カーペットの格別に美しいところを褒めてみせるのが常だ。「フレッチヴィル夫人のことをおっしゃっておられたと思うのですが　…　」と言うと、真紅に染まる両の頬を、水晶の涙がこぼれ落ちる。乙女心のプライドを守るようなことはほとんどしてもらえないものだから、困り果てているのさ。だが、俺様は胸の中でこう叫ぶのだよ。「さあ、物言いたげな恋人よ、思い出すのだ。そなたのために俺はいかなる苦痛を嘗めたのか、そなたの手からいかなる苦痛を受けたのかをな。涙を浮かべて言葉に詰まろうと、俺の助けは得られないのだ。すっかり話すのだ、愛しの君よ。あゝ、愛らしい困惑の姿よ。葛藤に苦しむ魅惑の姿をこれだけふんだんに披露してくれるというのに、恋人を憐れむようなそそっかしい馬鹿真似をして、それを見逃す手はあるまい。もっと丁重な男ならば「俺が決して丁重な男などでないことは、愛しの君よ、そなたも承知のはずなのだ」、己自身の優しさに裏をかかれ、女の涙に不慣れなこともあって、圧倒されていたことだろうな。俺としては、この際、優柔不断の心を装うことにしよう。彼女が完全に俺を敬遠したりしないためにだ。俺のいないところでこの場面を回想した時に、俺のほうにもいくらか魅力的なところがあったことを思い出してもらおうというのだ。畏怖、尊敬、深い崇拝の念から生じる優柔不断さだ。また、言葉にも勝る雄弁さを秘めた優柔不断

さだよ。さあ、すっかり話すのだよ、愛しの君。遠慮することはないのだ」とな。

いわゆる薄情さというのが、放蕩児にとっては不可欠な点だ。自ら引き起こす悲惨な光景に馴れ親しんでいるから、憐憫の情に動かされて放蕩児らしくもない親切心からの愚行に走る、などということはまずないのだよ。

《贈与財産の件に触れ、氏は次のように語っている》

契約条件については本気なのだよ。結婚となれば［俺のプライドと野望、貴公に言わせれば復讐だが、これが満たされた暁には、疑いもなく俺はそうするつもりなのだ］、彼女の真価に似つかわしい豪華なことをしてやるつもりだ。あれだけ思慮の深い、あんなにも優れた節約家だ。出してやればやるほど、ますますこちらが報いられるのだよ。だが、誓って言うが、ベルフォード、あの高慢の鼻はへし折らねばならん。俺に対する愛情と恩義の両方を認めるようになるまでな。また、贈与財産の概略をこんなふうに描いてみせたところで、予定外に事態を進展させることにもならないのだよ。女性の慎みというやつが、いつだって俺の味方になってくれるはずだ。あの祭壇の前に手に手を取って並んだ場合でさえ、この誇り高い美女が、牧師と俺を後に残し、独り立ち去ることになるのは請け合っても良い。立ち会った俺の身内全員が、頭数にして二十にはなるだろうが、呆気にとられて顔を見合わせている間に、彼女は逃げ出し、教会のドア、あるいは、窓から（窓が開いていて、ドアの閉まっている場合だが）飛び出て行ってしまうというわけだ。しかも、これはたったの一言で済むことなのだ。

《氏は、たとえ身の破滅と引き替えであっても、令嬢には自分のものになってもらうのだという、自らの無思慮な発言に触れ、次のように述べている》

あの時は、すぐにも力ずくの暴挙に出ようとしていたところだった。だが、きわどいところで思い止どまり、危うくこの身を救うことが出来たのだ。怯えながらも愛くるしい彼女の顔に再び目を向けると、その顔の輪郭ことごとくに、一点の汚れもない彼女の心が浮かんでいるように思われ、畏怖の念に打たれてしまったためなのだよ。

あゝ、美徳よ、美徳よ（と、氏は言葉を続けている）、ラヴレースが如き者の胸に、心とは裏腹に感銘を与えるとは、一体いかなる力がそなたには備わっているのか。我知らずこのように身を震わせ、致命的な害を及ぼすことを恐れるのは何故なのだ。か弱き女の胸に働き掛け、かくも豪胆な心にこうまで畏怖の念を吹き込むとは　…　何者なのだ、そなたは。いまだかつて、こうまで俺の心を動かしたことのない畏怖の念だ。否、最初の試みの時でさえなかったことだ。当時は、俺もまだ未熟で、自分自身の大胆さに（許しが得られたと知るまでの話だが）肝を冷やしていたのだよ。

《令嬢が「〈父親〉という言葉には耳に心地の好い、尊い響きがある」と語った、氏と令嬢とが関わる場面の例の部分について、氏は生彩に富んだ筆致で次のように描いて見せるのである。氏の曰く》

この時ばかりは、俺も甚だしく心を動かされてしまったよ。だが、不意を突かれ、男にあるまじき軟弱さをこんなふうに晒して見せるのを恥ずかしく思ったのだ。まことに恥ずべきことと思ったので、すぐにも気持ちを抑えつけ、二度と同じ轍は踏むまいと心に決めた。だが、あの瞬間には、彼女に勝利の喜びを与えてやれないことを悔やむ気持ちが、俺の心の半ば以上を占めていたのだ。勝利の歓喜を味わうに十分値する女だからな。あの若さ、あの美貌、飾りのない無垢さとあの物腰 … そのどれもが同じように比類のないものであり、あるいは、筆舌に尽くせないものなのだ。ただ、あの冷淡さのことがあるのだよ、ベルフォード。俺を敵対する者たちの悪意の犠牲にする決意を固めることも出来るのだよ。しかも、その企みをあゝもコソコソとやる気なのだ。だが、このとおり、気も狂わんばかりに愛しているのだ、俺は。このとおり、崇拝せんばかりに崇めているのだ。これらの点を思い返し、俺はこの臆病な心の強化に努めた。彼女に対抗するためだ。だが、結局のところ、忍耐強く粘るようなら、彼女が勝利を収めることになるはずだ。これまで一度として臆病な真似をしたことのない俺だが、彼女のせいですっかり臆病者だよ。

《氏は激しい怒りの言葉で四通目の手紙を結んでいるが、氏が接吻を試みた際に、令嬢が氏を撥ね付けたためである。氏としては、自ら認めているとおり、申し出を受けた令嬢が、万事遜った態度に出るものと考えていたのである。氏曰く》

この恨みは絶対に忘れない。俺の心を鋼で覆い、氷の壁を突き破っても彼女の心を捉えるためだ。乱暴に俺を振り切っていった際の、彼女の顔に燃えていた、彼女の態度にはっきりと出た、あの侮り、あの蔑みにお返しをするのだ。俺のほうではあれだけ親身な態度を示し、あれだけの熱意をもって早目の日取りを迫った後なのだからな。階下の女たちに言わせると、彼女は俺を憎んでいるということだ。軽蔑しているというのだよ。確かにそうだ。そうに違いない。連中の助言に耳を貸しても良さそうだな。長いことではないのだぞ、麗しの君よ。そなたに蔑まれ、連中の物笑いの種にされるのもな。

ジャックよ、貴公には知らせておこう（と、氏は追伸として以下の点を書き添えるのである）。もしも迎え入れてもらえるならの話だが、俺の元を去ろうとする彼女のこの奮闘ぶり、また、日曜日に馬車を呼ばせた件 … 疑いもなくこれは、俺の同伴なしに出掛けた場合、二度と戻らない覚悟だったのだろうが（どこかロンドン近くの村で、安全に人目を避けることの出来るところへ引き籠もる考えがあると、彼女は明言していたのではなかったかな） … こういったことが一緒になって、俺としても大いに不安を覚えたので、俺の不在中に彼女が遁走した場合、いかなる行動に出るべきかということについて、同志と階下の連中のために認めておいた指示書に加筆していたところなのだ。特にウィルに対しては、彼女が俺を捨てる覚悟でだれか面識もない者の元へ身を委ねた場合、そんな連中にどう話したら良いのか教えてあるのだよ。状況次第では、これらの指示にさらなる追加を行うことにもなるだろう。

手紙 二十二

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

五月十八日　木曜日

今受け取りましたばかりのお手紙ですが、その重要な項目一つ一つにお答えいたしますのには、大好きなお友達、私には暇も根気もございません。ラヴレースさんが好ましく思われますのは、あの人の申し出の件だけです。でも（貴女も同じお考えでしょうが）、その結び方にいたしましても、私たちが当然のこととして期待いたしますような熱意や真剣さは見られなかったように思われます。手を伸ばせば届くところに、これほどの至福があるのでしょう。こんなに辛抱強い男なんて、これまで耳にしたことも、物語で読んだこともありませんわ。でも、こういった恥知らずというのは、ここだけの話ですけれど、誠実な男性に備わっております熱情は持ち合わせていないもののようですね。以前、お宅のベルが意地の悪い言い方をしておりましたけれど、もしかいたしますとこの男、一生の契りを結びます前に、手を切らなければならない女が半ダースはいるのかもしれませんわね。それでも、この男がまともになるなんてこと、大厄年（二五）を迎えるまで期待なさってはいけないと思いますわ。

M卿へのご挨拶の件があるので遅れることも考えられるなどと、あの男のほうから言い出すのですからね。それで、贈与財産証書のための時間を作るですって　…　自分の身内の願いを入れるというのはどういうことなのか、それに気づかないのが人柄の一面になっている男ですもの　…　あの男には我慢なりませんわ。昨日の朝のお手紙で触れておられました心乱れる場面では、間に立ってくださるお友達が確かに必要でしたわね。でも、誓って申し上げますが、その際に私が貴女と同じ状況に置かれ、同じ扱いを受けておりましたなら、あの男の両目を抉り取っていたことでしょうし、そうした後で、理由を知りたければ自分の胸にお聞きなさいと、突っ撥ねていたはずですわ。

「お願いだ。だれにであれ、心遣いなどをするのは止め、明日という日を幸せな日にしていただきたい」というのですからね。悪党ですわ。心遣いのことは自分から仄めかしたのでしょう。それに、日延べのことも貴女のせいにしているのだと思いますわ。本当の卑劣漢なのです、あの男は。腹立たしくて、胸の締めつけられる思いでおります。

ただ、現在のお二人のことを考えますと、私があの男への怒りを表に出しますのは、ひどく場違いなことですわね。でも、場違いなのかそうでもないのか、その点も分かりかねているのです。女性にとりましては、胸のうちで軽蔑しているような男性と無理やり一緒にさせられますのは、一番惨い運命ですもの。貴女も、せめて軽蔑くらいはなさらなくちゃいけませんわ。時々は、ですけれどね。当然のことですが、貴女が怒ってあの男の元を去られた時、あの男は握り締めた拳で額を叩いていたそうですが、拳ではなくてマサカリだったら良かったのにと思います。それも、最悪の敵の手に握られたものでしたらね。

あの男のところから貴女を連れ出し、お従兄弟のモーデンさんが戻られるまでの間、どこか安全な場所に落ち着いていただくような、何らかの方策を考え出すよう努力してみるつもりです。お手元に温めておき、機会のあり次第実行に移せるような方策です。お好きな時に外出なさって構わないのは確かなのでしょうか。私たちの文通が安全なのは間違いございませんか。ただ、信義を疑いたくなるようなことをしないかぎりは、あの男の元を離れていただきたくないのです（貴女の評判のことで、これまでにも触れてまいりました理由からです）。でも、必要な時にどこか避難する場所が確保出来ておりましたなら、貴女ももっと安心なさるだろうとは思います。

ただ、もう一度申しますが、貴女を辱めることがあの男に出来るとか、あるいは、そのような挙に出る勇気があるとは、私にはとても考えられないのです。それですと、あの男は愚か者ということになりますわね。それだけの話になってしまいます。

でも、愚か者に身を委ねることになってしまわれたのですから、その愚か者と、機会のあり次第すぐにでも結婚なさることです。機知があって自惚れの強い愚か者は皆そうなのですが、この男は愚か者の中でも一番手に負えない夫になりそうに思います。でも、罰として添われることです。ご褒美としては無理なのですからね。要するに、この世には不完全なものしか存在しないことを貴女に納得していただくために与えられた夫として、ということですわ。

色々と書いてまいりましたが、結論として申し上げられますのは次のことだけでしょうね。結婚なさるか、さもなければ、皆さんのところから、そして、あの男からも、お逃げなさいということですわ。

貴女は、機会があればすぐにも後のほうを選ぶつもり、とおっしゃるでしょうね。先にも触れましたとおり、すぐにその機会をご用意出来るものとは思いますが、そうなりますと、いよいよやってまいりますのが、貴女と貴女ご自身のどちらに分を認めるのか、という裁きの問題です。

この連中というのは、私たち女性としては本来的に憎しみを感じることのない、まさしくそういった手合いなのです。私たちは何が出来て何が出来ないのか、私たちもその点をいつも弁えているわけではございません。長いこと目指しておりました肝腎の点がひどく危うくなり、取捨選択を迫られるようなことになりますと、私たちは辺りを見渡し、目の前に展がる雑然として不確かな様相に恐れをなしてしまうのです。そして、二度、三度と努力を重ね、心痛を味わいました後、試みてもいない新たな道を捨ててしまいます。弱気の虫に取りつかれ、以前どおりに、通い慣れた道をとぼとぼ辿ることに決めるのです。

次のお手紙をいただきますまでは、苛々のしどおしになるのでしょうね。

変わることなき親愛の情と誠意とを込めまして、貴女の

アナ・ハウ

手紙　二十三

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

五月十七日　水曜日

同封したもののように、何であれ、君自身に大いに関わりのあることは隠し立てするわけに行かないのだ。一読してもらえば、筆を執られた高貴なお方が、ハーロー嬢との一件ではいかなる点を懸念し、何を君に望んでおられるのか、また、お身内全員が、令嬢には誠意をもって接するよう心から求めておられることも分かってもらえることだろう。忝くも皆さんは、俺の影響力に期待しておられるのだよ。この一件では、俺の顔を立ててくれるよう切に願う次第だ。

今一度頼むことにするが、ラヴレース、手遅れにならないうちに（致命的な禍害が加えられる前にということだ）、この令嬢の長所や美点を是非とも思い起こしてもらいたいのだ

よ。貴公は幾度となく後悔してきたわけだが、これを最後に、今度こそ実際に悔い改めてもらいたい。プライドや気紛れ心から、これまで以上に有望な見込みを台無しにしてもらいたくないのだ。誓って言うが、ラヴレース、われわれの無謀な目論見に見出されるものといえば、虚栄心、自惚れ、そして、無意味なたわごと以外にはない。歳を取ればわれわれも賢くなるだろうし、現在のくだらない考え方を振り返って（若さも失せてしまっているのだが）、己を軽蔑することになるのは間違いない。われわれにも結ぶことが出来たかもしれない名誉な契りのことを思い浮かべてだよ。貴公の場合、仮にもこの比類なき女性を指の間から取り逃がすことにでもなれば、なおさらだ。生まれついての純粋無垢な女性なのだよ。その立ち居振舞いにしても考え方にしても、終始一貫、気高いものがある。理不尽この上ない父親への、報われることのない義務を果たすに当たっても、何一つ怠るところはないのだ。彼女は何と素晴らしい妻になってくれることだろうか　…　光栄にも彼女を我が妻と呼ぶことになる男にとってはな。

しつこく迫れば、どこの馬の骨が用いても同じように有効だという、そんな軽薄な、あるいは、薄弱な動機で彼女が口説き落とされたというのなら、大いに案じて然るべき根拠が貴公にもあったことだろう。

われわれ一同、貴公がいかに発明工夫の才に長けた男であるか知っている。策士の頭脳と実践家の度胸を持ち合わせていることもよく承知している。貴公の心のことは、世界一策略好きな心と俺も称していたのではなかったかな。そう呼んだのは、熟知した上でのことなのだよ。さらに何を望むというのだ、貴公は。能力があることでは一番なのだ。何をこの上、悪辣さでも一番にならなければいけないのだ。令嬢と結婚するのだよ。結婚した上で、どれだけの術策を実行に移すべく用意していたのか、明かしてみせるのだ。それを明かしても嫌ったりしないよう、彼女に懇願するのだな。後悔の念があったし、並外れて優れた彼女の美点を評価したこともあって、それらの術策は棄てたのだと納得してもらうのだよ。貴公に言わせれば「華麗なる悪事」というわけだが、そんな企みを平気でやってのける男に打ち克ったのは幸運だったと、彼女にも思わせてやることだ。こうすれば、彼女にも勝利を味わう余地があることになるし、貴公にとってすら、負けず劣らずそれは言えるのだ。彼女の場合は、貴公に対する勝利感ということだが、貴公の場合には、克己の快感というわけだよ。

彼女が貴公のために耐え忍んでいる苦難のことも思い起こすのだ。彼女を傷物にしようと（少なくとも彼女はそう考えているのだ）貴公が計画を練っているその時にも、彼女のほうは、貴公のせいで、そして、貴公のために受けた、父親の呪いの下で苦しんでいるのではないのかな。その呪いを実現し、成就したいと貴公は思うのか。そんなことでもなければ、効力など持ち得ない呪いをだよ。

それに、ラヴレース、貴公のプライドはその間どうなるというのだ。ハーロー家の連中全員が、そして、ハウ家の者たちにしても、貴公の道具に過ぎず、貴公の目的、貴公の復讐を実現するのに我知らず手を貸しているものと考え、得々としている貴公だが、下品なまでに下等卑劣な動機に促され、天晴なことこの上ない妹に永遠の恥辱をもたらそうという、執念深い兄と妬みに狂う姉の方策に比べてさえも、何が勝っているというのだ。何が優れているというのだ。貴公の不倶戴天の敵、ジェームズ・ハーローの道具と目されることに、ラヴレース、貴公は耐えられるというのか。否、さらに汚いあのジョゼフ・リーマ

ン、貴公の指図で果たしている二重スパイの役割によって貴公に仕えるのと同じく、貴公の金で自分の懐を肥やしてもいるあのジョゼフ・リーマンと、貴公は同じ穴の狢ではないのかな。そして、さらに言えば、貴公は悪魔の使いではないのかな。貴公が事を運び、その邪悪な目論見を実現するとして、それ相応の褒美を与えることの出来る者、また、必ずや与えてくれる者といえば、悪魔を措いて他にはいないのだからな。

貴公の書きっぷりはそう映るのだが、以下の如き問いをこれほど平然と紙に認めることの出来る人間は、貴公以外にいるだろうか。あゝ、冷血漢め、今一度じっくり読み直してみるのだな。「俺を避けられるような逃げ場所がどこにあるというのだ。両親に受け入れる気はないのだ。おじたちももてなしてはくれない。最愛のノートン夫人は連中の指図を受けていて、彼女を迎えるわけに行かないのさ。ハウ嬢にも踏み切れないことだ。ロンドンでは、俺以外には知人一人としていないし、この街にはまったくの不案内なのだ」(ア)というのだからな。かくも深い苦悩を得意げに語ることが出来る心とは、一体どういうものなのだ。手の込んだ貴公の手管や術策ゆえに陥った苦悩なのだぞ。それに、あれは、貴公にも相応の効果をもたらすところであったのだが、何とも愛らしい、それでいて、哀れを誘う感慨の吐露ではなかっただろうか。結婚式の父親役として、貴公がM卿のお名前を口にした時のことだよ。年端も行かぬゆえ、父親を切望することになるのだな。友達も欲しいのだよ。あゝ、ラヴレース、貴公が奪い去った父親に取って代わって、貴公は悪魔になるつもりだとでもいうのか。

貴公も承知のとおり、この素晴らしい女性を正当に扱ってほしいと願ったところで、俺に何の利益があるわけでもない。下心などあるはずがないのだ。今一度懇願するが、貴公自身のためになることだ。貴公一門のためであり、われわれに共通する人間性のためなのだよ。クラリッサ・ハーロー嬢に対しては、公明正大であってほしいのだ。

こういった諫めごとが俺の柄なのかどうか、それは問題でない。俺も結構なワルであったし、今もそうだ。俺の忠告を受け入れるとしても、これは貴公の一族全員からの忠告でもあるのだが(同封の手紙で貴公にも分かることだろう)、おそらく、俺以上のワルではないのだと、俺を責めようとして言い張ることだろうな(まあ、しかし、多分そういうこともあるまい)。だが、受け入れないというのなら、そして、あれほどの美徳の持ち主を傷物にするようであれば、無垢な者たちの群れの中に解き放たれ、したい放題に力を振るう十人の悪魔が重ねる、複雑多岐に亘る悪行をもってしても、貴公がもたらすほどの不快にして悪質な害を及ぼすことにはならないだろうな。

己の生命に価値を置かないほど向こう見ずな人間がいれば、玉座にある君主といえども安全ではない、と言われている。それゆえ、こうも言えるだろう。己の名誉を顧みず、最も厳粛な誓いや言明を茶化して見せるような男と出くわせば、清浄無垢なことこの上ない操といえど無事には済まない、ということだよ。

恋の盗人よりも質の悪い貴公のことでもあるし、そのように貴公の仕掛けた罠に絡めとられ、貴公の仕業で無防備になっている哀れな令嬢が相手だ。策略や詭弁を弄し、まことしやかに繕って征服することも可能だろう。だが、考えるのだな。貴公自身に打ち克つことのほうが、はるかに、彼女に対しては寛大公正であり、貴公自身にとっても高尚なこと

(ア) 三十八頁から次頁にかけてを参照のこと。

だという点をだよ。

今一度言おう。おそらく貴公は、俺がこれまで筆にしてきたことをお説教と呼ぶのだろうが、俺の過去および将来の行動がその説教に見合うものかどうかは問題でないのだ。ただ、次の点は約束しておこう。ハーロー嬢の完璧さの半分でも持ち合わせ、好意を以て俺を受け入れてくれる女性に出会った時には、必ずや、今口にしている忠告に従い、俺は結婚に踏み切るということだ。また、自らの名誉を危険に晒してまで、その女の貞操を試すような真似もしないつもりだ。言い換えるなら、疑う理由を持たない場合には、試練などを課して、天晴な女性を、彼女自身の見方からしてという意味でだが、卑しめたりはしないということだよ。それに、一言付け加えさせてもらいたい。ミソサザイやセキレイ、そして、貴公に言わせればシジュウカラ系というわけだが、剽軽にもそんななぞらえ方をした小物ではなく(ア)、無垢で堕落を知らない者たちを襲う際の、貴公ご自慢の「鷲らしさ」とやらに関することだ。俺としては、自分を咎めるようなことは一度としてないつもりなのだ。どんな相手であれ、何もなければ清らかなままであったはずだという、そんな女の品行を堕落させたことはだよ。仮にも俺が、一度身を持ち崩した女は二度と立ち直れないように取り計らう人間の一人であれば、他の浅ましい連中が懲りずに続けている罪業に手を貸すという点で、十分に罪深いことにはなるのだがね。

貴公もその旗の下に名を連ねているわけだが、あの悪魔の首領が、この比類なき女性に関し、いかなる行動を貴公に許すとしても、同封の書面については誠意ある対応をしてくれるよう望んでいる。M卿と俺の間で交わされたものだ。目を通してくれれば分かるように、卿としては、この件で筆を執られたことを貴公に気取られないようお望みだが、貴公自身にとって到底名誉とはならない理由からのことと拝察する。また、貴公の助けになろうとする、俺の衷心よりの誠意を真剣に受け止めてもらいたいとお望みなのだ。

貴公の真の友
J. ベルフォード

手紙　二十四
M卿からジョン・ベルフォード氏へ
［先の手紙に同封されたもの］

五月十五日　月曜日、M邸にて、

略　啓

我が甥を意のままに動かす御仁がだれかこの世にいるとすれば、それは君なのだ。それゆえ、この書面をもってお願いする次第だが、だれに言わせても天下随一の才媛とのことであるし、「だれもが口にすることは真実なるべし」というわけで、その女性と甥との間の懸案事項に関し、君に仲立ちの労を取ってもらいたいのだ。

甥がその令嬢に対し何か不埒な考えを抱いているとは思わないが、甥の気質のことは十二分に承知しているゆえ、こうまで手間取っていると、気遣わずにいられないのだ。当家

(ア)　十六頁を参照のこと。

の婦人連中も、令嬢のことではしばらく前から気を揉んでいる。とりわけ、セアラ夫人に言わせると、(君もご存じのはずの)賢い女性なのだが、今回の一件でこれほど手間取るのは、令嬢のせいというよりも、甥ゆえのことに違いないというのだ。

甥は常日頃より、結婚に対し実に強い反感を抱いており、令嬢に対しても、他の多くの女性に用いてきたように、くだらぬ小細工を弄する考えでいるのかもしれない。その心配が少しでもあるかぎり、間に合ううちに先手を打つのが最善なのだ。何しろ、「事が済んでは、助言も手遅れ」と言うからな。

愚かにも、また、図々しくも、甥はいつも私を冗談の種にしていたのだ。格言じみた物言いをするということでな。だが、格言というのは諸国民の、そして、あらゆる時代の叡智を簡潔にまとめたものであるから、我が国の大抵の牧師や道徳家連中が弁じ立てる退屈な長広舌よりも豊かな叡智を含むことの多い名文句を、恥じて捨て去るというわけには行かないのだ。笑いたいというのなら、笑わせておくのだな、奴には。君と私はもっと利口なのだ、ベルフォード君。「狼と付き合ってきたからといって、遠吠えを覚えたわけでもない」だろう。

にも拘らず、この話題に関して私が筆を執ったことは、甥に知らせてもらっては困るのだ。口に出すだに恥じ入る次第だが、かねがね甥は、この私を凡庸な人間の如くに扱っているのだ。そして、おそらく奴は、私の口から出たということで、世界一立派な忠告でも見直すような真似は決してしないだろう。「惚れた者ほどみくびられ」というやつだよ、ベルフォード君。だが、「豚の耳からビロードが出来ると思う者はなし」だろう。

しかしながら、あのように私を軽んじる根拠は甥にもないものと確信している。私よりも長生きをすることになれば、私のお陰で良い思いをするかもしれないのだし、また、そうなるはずなのだ。私の地所のことは、私の好きにして構わないなどと、面と向かってほざいたこともあるのだがな。奴としては、「自由を愛する気持ちは金を蔑む気持ちにも劣らない」からだというのだ。また、別の折には、私の言い方を茶化してのことだが、「借財に走ること、ないし、阿ることを潔しとしない者は、他人の指図を受けることなし」などと言っていた。察するに、私は「翼にかくまい嘴でこづく」に違いないと考えたのだな。もっとも、よほど大きな理由でもないかぎり、甥を小突き回すような真似はしなかったのだがな。それに、神もご承知のことだが、己の利益を図り、私の意向に沿うよう努めてくれさえすれば、甥にはこの心臓を託しても構わない気持ちなのだ。私として甥に望むことといえば、ただそれだけなのだ。確かに、最初に甥を駄目にしたのは、今は亡きあの子の母親であった。そして、その後を受け、私もあまりに甘すぎたのだ。君に言わせるなら、「善意に悪意をもって報いる」[一六]というのは、恩義を忘れないご立派な気質だ、ということだろうが、日頃からそれがあいつのやり方だったのだ。これははけだし名言であるし、甥によってはっきりと立証されたことになるわけだが、「子供というのは、幼いうちは親の正気を奪い、大きくなっては、その心を砕く」ということだな。甥の両親にしても、生き長らえて、私が見てきたことを目にしたなら、確かに心を砕いていたことだろう。

だが、令嬢には並外れた知恵と善良さが備わっていることでもあり、この縁組がすべてを正してくれるやも知れぬのだ。もしも、君のほうでこの縁組を進めてもらえるなら、私としては、甥が望むとおりの贈与財産を設定出来るようにしてやるつもりでいるし、相当な地所をさらに一ヶ所、進呈するのも吝かではない。私が強欲者でないことは、甥も承知

のはずだ。実際、強欲者をなぞらえてぴったりのものと言えば、「他人のための肉を焼く肉焼き車に潜り込んだ犬」だろう。私にとって何が生きがいかと言えば（たびたび口にしてきたとおり）、甥と二人の姪が申し分のない結婚をし、落ち着いてくれること以外にはないのだ。甥がもっとまっとうな考え方に落ち着き、徳行や思いやりにさらに意を用いてくれるよう、天にも祈る気持ちなのだ。

甥ゆえに遅れているのだとすれば、令嬢のことが気掛かりになるし、令嬢ゆえに手間取っているのであれば（あいつは姪のシャーロットにそう言っているのだが）、「引き延ばすのは危険を伴う」ことを、令嬢に知らせてもらえたらと思うのだ。大変優れたお嬢さんではあるが、自分の美点に頼るべきではないのだよ。あのように気紛れな男、そして、これまでがそうであったのだが、あのように結婚嫌いを公言して憚らない男が相手なのだからな。お嬢さんには請け合っても良いが、「功績に見合う報奨は稀有のこと」なのだ。

ただ、甥に覚えておいてもらいたいのは、「復讐の足取りは鉛でも、打ち振るうのは鋼の手」ということだ。今回の件で芳しくない振舞いをするようなら、甥もその点を思い知ることだろうな。何とも残念な話ではないか。甥ほどの才能と学識に恵まれた男が、あのように極悪非道の放蕩者だというのはな。あゝ、まことにもって情けない。Une poignée de bonne vie vaut mieux que plein muy de clergé. つまり、「一握りの善行でも、山ほどの学識に優る」ということだよ。

また、私の怒りを誘うような言動があれば、友人として申し添えてくれて構わない。私にしても結婚するのに遅すぎるわけではないのだ、とな。私の馴染みのウィッチャリーにしても[一七]、現在の私より年上の時に結婚しているのだ。彼の甥を困らせるためだよ。私にも、痛風のことはあるが、まだ子供の一人や二人は出来るかもしれないだろう。これまでにも、そんなことを考えなかったわけではないのだ。甥のせいで尋常ならざる怒りを感じた場合のことだよ。だが、そういった考えも、今はまた失せているのだ。「若僧の子と年寄りの子は（私もそれほど年寄りではないのだが）長生き出来ぬ」ということ、また、「若い嫁を娶る老人は死神をもてはやす」と言われている点を考えてのことだ。ただし、結婚生活が薬になるかもしれないのだよ。悩みの種となっている痛風気質にはな。

すべてを兼ね備えた人間などはいない。ベルフォード君、君には学問がある。私には爵位があるのだ。そこで、先に並べたものと同様に、以下に掲げる名言の効能を甥に説き聞かせてやってほしいのだ（その方法については、君が一番よく知っているのだからな）。ただし、「ひとの褌で相撲を取る」ことに気づかれぬよう、十分慎重にお願いする。その名言というのは次のようなものだ。「若いうちに己の過ちを悟る者は幸なり」「行い正しき者は天命を全うす」また、「一年を無為に過ごす者は七年悲しむ」とも言う。さらに、スペイン人が言うには、「善き日々を送る者は、遠き彼方に目をやる」ということだが、確かに、はるか彼方だ。来世に目を向けていると言っても構わないわけだからな。そして、これとは別に、例の名言もある。「無用の危険で身を滅ぼすのは悪魔の殉教者」というものだよ。もう一つの格言は、スペイン大使として派遣されたレキシントン卿[一八]に随行した際、マドリードで耳にしたものだ。甥の性情からして、期待は致し兼ねるわけだが、もっと慈悲心や憐れみの心を働かすよう教えてくれることになるかもしれないな。つまり、こういうものだよ。「他人を憐れむ者は己を忘れぬ者なり」というのだ。それに、これから挙げるものについては、甥もその正しさを百回は実証したものと私は確信している。つまり、「意に添

うことを行う者がなすべきことを行うは稀」というやつだ。また、あの言葉も、甥の心に留めておいて無駄ではあるまい。「若気の過ちを年老いて痛感する」というものだ。忌々しいが、この痛風の奴が　…　だが、その先は言わぬが花というものだろう。

私が簡潔かつ賢明なる言葉を好んでいることに賛辞を寄せてくれた際のことだが、君自身が話していたのを覚えているのだよ。それで君を高く買うことになったのだが、次のような言葉だった。「才能に恵まれた人間というのは、長たらしいお説教よりも、むしろ手短な言葉で得心するものです。手短な言葉というのは心の中に入り込み、そこに残るものですが、一方、長い説法となりますと、いかに立派なものでありましても、注意力を散漫にさせてしまいますし、次々に出てくる良い話が前のものを念頭から追い払いまして、挙げ句には、すべてが忘れ去られてしまうからです」というものだよ。

ベルフォード君、私の示したこれらの心得に基づく君の適切な忠言が、甥の心の底まで染み透り、甥のほうでも、自分自身にとってまことに目出度く、あの素晴らしい令嬢の名誉を守るためには不可欠な、例の一件を進める気持ちになってくれたらと祈っている。あの令嬢には、甥の妻になってもらいたいものと願っているのだよ。そうなれば、たとえ可能な話ではあっても、私自身が妻を娶るような考えは捨てるつもりだ。

万一、令嬢の寄せてくれている信頼を甥が裏切るようなら、私自らが祈願することになるだろう。甥の身に復讐の手の迫らんことを、とな。〈Raro　…　〉だったかな。ラテン語はすっかり忘れてしまったのだが、こうだったように思う。〈Raro antecedentem scelestum deseruit pede poena claudo〉(一九)だったな。「先に罪業があれば、復讐は（早晩）行われるべし」という意味だよ。だが、君に訳文などは添えるまでもなかったな。

世話を掛けるが、詫びは止そう。甥と私のことは大事に思ってくれているはずだ。それに、われわれ両名のため重大な働きをしてもらえるとしたら、全力を傾けてこの縁組を前進させること以上のものはないのだよ。一件落着の暁には、是非ともM邸にお越しいただきたい。とりあえずは、首尾よく進めておられる旨のご一報をお待ちする。

不一

君の誠実この上なき友、そして、しもべ

M.

《ベルフォード氏は、氏の諫めの手紙に対し、ラヴレース氏が期待したほどには返信を急がなかったこともあり、一筆認め、忌憚なき直言ゆえに怒りに触れたのでは、との懸念を表明している。氏が縷々述べた言葉のうちに、以下のものが見られる》

ここ、ワトフォードで時を過ごしているが、死の床についている叔父の看病だ。まことに気の晴れない毎日だ。それゆえ、貴公との文通はどうあっても欠かすわけに行かないのだ。それに、貴公以上に良心を、そして、貴公以上に改悛の情を持ち合わせているからといって、俺を罰するいわれは一体どこにあるというのだ。良心にせよ改悛の情にせよ、それを名誉なものと考えたことなど一度としてない貴公がだよ。おまけに、憂鬱な話があるのだ。ベルトンと奴のトマシンに関わることだが、これは、女を囲っている連中すべてにとって教訓にもなりそうな話なのだ。

そうこうしている間に、相棒三人それぞれから手紙を受け取った。貴公のあくどさはそ

っくり備えているが、知恵は持ち合わせない連中だ。そのうちの二名は、新たな悪事のことをいくつか自慢げに吹聴しているが、俺の考えるところ、言葉どおりにやってのけたりすれば、絞首台行きというものだ。

原則的には、俺も決して陰謀が嫌いなわけでないのだ。だが、不器用な連中が策を巡らし、その策謀を味付けもなく、貴公の才能である明敏さもなしに筆にされたのでは、何ともショッキングなことこの上ない手紙となるわけだよ。だが、ラヴレースよ、貴公の手の内にある素晴らしい女性に対して、いかなる手段を講じるのか、すでに決定済みにせよ未定にせよ、貴公の報告をもって、俺の沈む心に生気を吹き込んでくれると有難いのだ。

貴公の鬱々たる友

J. ベルフォード

手紙　二十五

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月十九日　金曜日　夜

先の数通でもそうしたが、俺の考えについてはたっぷりと打ち明けてあるし、俺の主たる眼目は、ただ、操の堅さを審理することだけであり、貞淑であれば、恐れる必要のないものだということ、また、それには結婚をもって報いるということも話してあったというのに（つまり、目的を達した後でも、俺と信義に基づいた暮しを送ってくれるよう説得出来ない場合にはだよ(ア)。貴公も知ってのとおり、それこそが俺の心からの願いなのだからな）、要領を得ないたわごとを繰り返すとは、貴公にも呆れ果ててしまう。

貴公の言う、いつの日か俺がもっと賢くなった時には、「俺のこの無謀な目論見に見出されるものといえば、虚栄心、自惚れ、そして、無意味なたわごと以外にはない」と結論するだろうという点では、俺も貴公と同意見だよ。だが、その意味するところは、俺は先ず賢くならねばならないということに過ぎないのではないのかな。

「この比類なき女性を指の間から取り逃がす」など、そんなつもりはまったくない。俺がこれまで語ってきた、そして、絶えず口にし筆にもしている彼女への賛辞の、その半分でも語る能力が貴公にはあるのだろうか。

あの陰気な父親が愛らしい娘に呪いの言葉を投げ掛けることになったのは、嫌いな男と一緒にさせようと権柄ずくで迫るのを、彼女が不可能にしてしまったからなのだ。この点に関しては、貴公も承知のとおり、俺に対して彼女が手柄顔を出来ることはほとんどないのだよ。それに、十分に証明されたならば報いてやろうと思っている操なのだ。父親が暴君だから試すのは止そう、とでもいうのかな。あれだけ卓越した女性に、こうものべつ暇なしに難癖をつけるのは何故だ。まるで、彼女が試練につまずくのは間違いないと言わんばかりではないか。それだけじゃない。罠に落ちた以上、彼女は屈するだろう、折れるに違いないと、この件を筆にするたびに貴公は断言している。それでいて、彼女の貞淑さを持ち出しては、憂慮の口実とするのだ。

(ア) 第三巻の六十五頁を参照のこと。

「卑劣なジェームズ・ハーローの道具」と貴公は呼ぶのだな、俺のことを。あゝ、ジャックよ、いくら呪っても呪い足りないぞ、貴公のことは。この俺様が、あの兄の、あの姉の道具だというのか　…　だが、最後まで見届けることだな。あの兄がどうなるか、あの姉がどうなるか、いずれ貴公にも分かることだよ。

俺の感じ易さは自ら認めるところだが、それを逆手に取るのは止してもらおう。感じ易さというのは、友の無情な心を責める貴公の言葉に矛盾するわけだが、それと同時に、俺が打ち明けていなかったならば、貴公にはまったく気づかなかったものなのだ。

「あれほどの美徳の持ち主を傷物にするようであれば」と言うのだな。相も変わらずの一本調子だな。さらには、「己の名誉を顧みず、最も厳粛な誓い等々を茶化して見せるような男と出くわせば、清浄無垢なことこの上ない操といえど無事には済まない」などと抜かすのだからな。誓いの言葉を受けずに崩れ去る美徳とは、一体いかなるものなのだ。こういったまやかし物でこの世は満ち満ちているのではないのかな。また、恋人同士の誓いというのは、何百年にも亘って常用されている冗談の種ではないのか。それに、男の不実に対する警告というのは、女子教育の中でも不可欠な部分ではないのかな。

己に打ち克つよう努力する気持ちがあるのは勿論だが、この淑女を征服出来ないものかどうか、先ずは試してみなければならんのだ。すでに話してあったのではないかな。女性の名誉のためにこそ試してみなければならんのだよ。

「彼女の完璧さの半分でも持ち合わせている女性に出会ったら、必ずや結婚する」と言うのだな。それも結構じゃないか、ジャック。

征服されてもいない娘が「試練によって卑しめられる」など、あり得る話かな。

他の連中によって傷物とされた哀れな者たちの回心に努めていないということで、貴公が自ら罪を背負ってくれるのは有難い話だ。言い返しても良いのだが、ベルフォード、難詰するのは止しておこう。どんな相手であれ、何もなければ清らかなままであったはずだという、そんな女の品行を堕落させた覚えはないと貴公は得意がっているが、ホッテントットみたいにちっぽけな心に浮かぶ言い訳がましい慰めだ。心を改めようというより、他の悪食家の食い残しにありついて腹を膨らまそうという魂胆だ。だが、どうなのだ、ジャック、俺が自ら範を示し、貴公の寛大さに訴えていなかったなら、ローズバッドのような娘を見逃してくれたというのかな。また、俺が見逃した娘はローズバッドだけでもないのだよ。貴公の友人以上に慈悲深い人間がどこにいるというのだ。俺の力に一目置いてくれた場合には、ということだがね。

欲望を募らせ、愛の矢を研ぎ、
その火を煽り立てるは抵抗なり。
愛の神は苦もなきものには矛を納め、
生気も失せて、楽しみごとに背を向ける。

男と同様、女のほうでもこれは承知のことだ。熱意を込めて言い寄られるのが大好きなのだよ、女というのは。

ゆえに、女は黄金の果実を見張る。

ということだな。

そういうわけで、ついでに浮かぶ感想ということになるが、冷ややかで崇めてもくれない夫より、情熱的で慇懃な女たらしのほうが好かれるという事態が、極めて頻繁に起こることになるのだよ。ところが、女どもは考えていないのだ。熱に浮かされたり媚びへつらったりするのは、目先の変化や物珍しさのためなのだということをな。それに、放蕩者にしても、そういったところに夫と同じくらい慣れてしまうと、女どもが寄せる好意にも［結婚している場合には、自分の妻に対してということになるが］、夫と同じように冷淡になってしまうだろうし、夫は夫で、他の女を相手に放蕩に耽ることになるという点もだよ。要するに、ラヴレースのような男が相手の場合には、女どもは次の点を肝に銘じるべきなのだ。つまり、「恋人の目にはそのように映りたいと願っている姿であるし、事実、恋人であった頃の夫にはそうであったわけだが、夫に対しては常に初々しさを心掛け、優雅かつ献身的態度と映るよう努めること。そうすれば、女どもすべての愛する放蕩者の姿が、通常よりも長く夫の中に持続するだろう」ということだよ。

だが、本題に戻ることにしよう。これまでの記述では、俺の行動を十分説明したことにはならないというのなら、もう一度、先月十三日の俺の手紙を参照することだよ(ア)。ひとつ頼みがあるのだがな、ジャック。同じ事をこうも頻繁に繰り返さねばならないような状況に追い込まないでほしいということだよ。俺が書いたものには、一度ならず目を通してもらいたいものだ。

俺の怒りを買うのがひどく心配で、俺が一日でも連絡を怠ると、不安を覚えずにはいられないとのことだが、悪い気はしないぞ。明らかに貴公の良心が語っているのだよ、俺が機嫌を損ねるのも当然だという思いはな。良心に照らしてそう確信したのなら、過ちを繰り返すのは恐れるはずだ。そうするように留意することだな。さもなければ、懲らしめる術を教えてくれたわけだから、音信を絶って貴公を罰することも大いに有り得る話だ。もっとも、俺が書くものを読んで得られる貴公の喜びに負けないくらい、この魅惑的な話題を綴る俺の楽しみもまた大きいのだがね。

子供の頃、犬が怖がって俺のところから逃げ出すと、石か棒切れはないかと、いつも辺りを見回したものだった。どちらも手に入らない時には、犬めがけて帽子を投げつけてやったよ。何かしら不安を覚えさせるためにだ。力があっても、使わずにいたのでは、何の意味があるというのだ。

貴公が俺宛に一筆認めたことを卿に知らせてやるのだな。ただし、文面は明かさないことだ。生硬な言い回しの寄せ集めだが、卿のほうでは、まともなことも含まれているとお考えになることだろう。自分の意に沿うことのために用いられる場合は、下手な議論でも通用するものなのだ。ただ、頭の鈍い殿様は、ほとんど考えが及ばないのだよ。この令嬢が愛に反旗を翻していることにはな。ところが、卿ばかりか、世間中の者たちは、彼女が喜んで愛に仕えようとしているものと信じ込んでいるのだ。だから、何か不都合でも起これば、俺は非難を招くだろうし、彼女には同情が集まることになるのだよ。

（ア）第三巻の五十六頁以降を参照のこと。

卿はこの縁組にすっかりご執心だから、すでに俺のほうでも一筆啓上して、次のとおり知らせてあるのだよ。つまり、俺の不幸な性格がもとで、彼女のほうでは、狭量にも俺に不信感を抱いているということ、彼女はひどく母親に恋い焦がれ、父親をも慕っているゆえ、結婚よりはハーロー邸へ戻ることを願っているということ、俺と一緒に家を出るような行動に踏み切ったため、われわれのように地位と名誉を備えた一門の女性たちが、彼女を冷たく扱うようになることを懸念してもいるということ、それゆえ、卿には（この点には極めて慎重に触れていただかねばならないと話してあるが）、彼女に見せても支障のないような手紙を一通認めてほしいということ（その中で、俺のことをどれほど無遠慮に扱おうと、気を悪くはしない旨を卿に伝えてある。俺宛の手紙では、窘めるような書き方を好んで用いるのを承知しているからな）、結婚に際してのご祝儀については、お気持ち次第で構わないということ、そして、式にはご臨席を賜りたいのだが、この世の人間が与え得る最高の至福を卿の手より受けるためだ、といったことをだよ。

こういった趣旨の手紙を卿宛に書くつもりでいることを令嬢にはまったく話してないのだが、ただ、書きそうだと考えて当然な根拠は示してあるのだ。だから、とことん追い詰められないかぎりは、卿から届くはずの返事も彼女には見せないようにする。事を運ぶために、だれのものであれ、一族の者の名を利用するのは、正直なところ、はなはだ気が進まないのだ。とはいっても、仮面を脱ぐまでには、すべてを確実なものにしておかねばならないのだよ。これこそ、彼女をここに連れて来る動機ではなかったのかな。

従って、貴公にも察しがつくだろうが、卿の手紙は実に時宜を得たものだったというわけだ。貴公にも礼を言うよ。ただ、卿の警句だが、俺には何の効き目もないだろうな。早いうちから、卿の言う「諸国民の叡智」とやらには息の詰まる思いをしていたのだ。小さい頃、何を頼んでも、決まって卿の口から飛び出してくるのは格言だったし、それが俺の願いを拒む意味合いのものである場合には、どんな小さな頼みでも絶対聞き入れてはもらえなかったのだ。そんなことから、格言という言葉そのものがとことん嫌いになってしまい、子供の時のことだが、家庭教師にある条件を出したくらいなのだよ。実直な牧師だったが、最も叡智に溢れた書の一つを免除してくれるのでなければ、聖書は一切読まないと言ってやったのだ。その書に反対したのは、他でもない、『箴言』と呼ばれるものだったからだ。それに、ソロモンという奴も、当時の俺にとっては憎しみの対象となる人物だったのだよ。何人も妻を持っていたからではない。叔父貴そっくりの黴臭い爺さんくらいに思っていたからなのだ。

それはそうと、古臭い諺は年寄りたちに任せることにしよう。あの世に行こうとしている親戚のことで退屈な泣き言を並べたところで、何の役に立つというのだ。持ち直すことはないというのが、皆の一致した意見ではないのかな。苦痛から開放してあげるのが、貴公の親切ということにならないか。聞くところでは、いまだに内科医だの薬剤師だの外科医だのに付き纏われているそうだな。医者も壊疽の進んでいるところまでは切開出来ないらしいし、往診のたびに、乱刺法(二)を施すたびに、死は免れないと宣告されているそうだな。それじゃあ連中は、何故にいつまでも叔父上を苦しめるのだろうな。叔父上の壊死した肉より、頭の生皮をたっぷり剥ぎ取るためのことではないのかな。患者が見放された時には、治療費の受け取りは辞退されて然るべきだよ。ここまで来たら、跡取りたちの金を奪っていることになりはしないかな。遺言が望みどおりのものになるのには、貴公とし

てはどんな手を打たねばならんのだ。叔父上も、臨終に立ち会い、目を閉じてもらおうと思って貴公を呼んだのだ（そうではなかったかな）。ただの叔父にすぎないのだろう。

待ってくれよ。思い違いでなけりゃ、聖書か、何か他の立派な本に出ているのだよ。ヘロドトスということはあるかな。そうだ、確かヨセフス〔二二〕だったと思う。聖俗相半ばするような書き手だよ。この著者の語るところでは、シリアのある王様が総理大臣かだれかの手によって苦痛から解放されたというのだが、こういう企みが出来れば、その男も総理大臣になって当然だろうな。俺の間違いでなければ、話はこうだ。この男が王の顔に濡れた布を被せて殺し、王に代わって国を治めたというのだよ。天晴な男じゃないか。原文に出てくるこの濡れた布というのは、多分、われわれが今アヘンチンキと呼んでいるものなのだろう。一服で効き目が全身に行きわたるやつさ。濡れた布が病める王の顔を覆ったようにだ。訳者がどう訳したら良いのか、分からなかったのだな。

それにしても、貴公の筆遣いときたら、まるで見捨てられた小姓ってところだな。〈鬱々たる貴公の友、J. ベルフォード〉というのだからな。憂鬱だというが、何故なのだ。老人と死神とが正々堂々渡り合うのを傍らで見守っているからなのか。もっと男気のある人間だと思っていたよ。急死を恐れぬ貴公、剣先をものともせぬ貴公が、宿痾の末の死にざまにこうも腹立たしいほど塞ぎ込むとはな。来る日も来る日も乱刺者が叔父上に術を施すからといって、何だというのだ。残り滓を突き刺しているだけの話だよ。願わくは、古臭い言い回しを用いるが、国王陛下の屠殺人たちに学んでもらいたいものだ。連中は冗談半分で（貴公のラヴレースよりも百倍は悪い奴らだからな）、一挙に一万人は未亡人にしてしまうのだし、その二倍は父なし子を作っているのだよ。たった一人の人間の死をどう耐えるのかなんてことは、いいかな、あの連中に習うことだな。

だが、ジャック、壊疽というのは確かなのか。俺の叔父も以前、その種の不治の病を期待させてくれたことがあったのだが、残念ながら、激しい痛風の発作に変わってしまったのだよ。お陰で、無念の思いを強いられたのは、叔父ではなくて俺だった。聞いたところでは、キナ皮の粉末を適量服用すると、壊疽の進行を抑え、最後には治してくれるそうなのだよ。叔父上の外科医に言ってやるのだな。キナ皮を一度処方してくれるよう聞き入れてくれるなら、奴の両耳をいただくのよりももっと有難い話だ、とな。

叔父貴が機会を与えてくれていたらと、本心そう思う。もっと立派な手本を貴公に示す機会をだよ。俺がいかに雄々しい人間なのか、見届けてもらえただろうにな。また、筆を執る機会を与えられていたなら、俺の結びの言葉はこうなっていただろう。〈老勇士に幸あらんことを期待す。その期待あれば、我も幸なり。しかして、

歓喜に浸る貴公が友

R. ラヴレース〉。

同じ話題をいつまでもくどくど論じるものではないぞ、ジャック。哀れなベルトンの話を教えてほしいのだ。早いにこしたことはない。俺で役に立つことがあるなら、財布であれこの身体であれ、自由に利用して構わないと伝えてくれ。ただ、より気持ちよくということでは、後のほうよりは前のものだな。何せ、我が女神の傍を離れるわけには行かないからな。だが、他の家来どもには命じておくよ。貴公からの招集が掛かった時には馳せ参じるように、とな。

知恵が欲しいというのなら、一報してくれ。その心配はないのなら、今回俺が分担するのは金ということにしよう。

手紙　二十六
ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

五月二十日　土曜日

一言たりとも答える気にはならないのだよ。昨夜の手紙で正体を暴露してくれたわけだが、貴公のような度し難い破廉恥漢に向かってはな。令嬢のことは、奇跡を働くことの出来るただ一人のお方の保護の手、そして、彼女自身に備わる美点に委ねることとする。これらの力が令嬢を救ってくれるものと、なおも願っているのだよ、俺としては。

貴公の希望ゆえ、哀れなベルトンの事情に筆を向けようと思うのだが、この一件がきっかけとなり、これまでのわれわれの暮らしぶり、現在の行状、そして、今後の見通しについて、いろいろ考えてみたということもあるからだ。この一連の考えというのは、そこから生まれる反省に十分重きを置くことが出来れば、われわれの両方にとって役に立つかもしれないものなのだよ。

あの哀れな男は、木曜日だったが、この憂鬱な看病を続けている俺を訪ねてくれた。口を開くなりこぼしていたよ。体調は優れず、意気も上がらないのだそうだ。また、熱っぽくて咳が止まらないし、喀血もますますひどくなっているというのだ。そして、事情を明かしてくれた。

まったく話にもならない。あれじゃあ、他の病も悪化の一途だ。奴のトマシンは（知ってのとおり、新しい名で呼ばれたがっていたのは事実だ。惚れ込んでいるように装っていた、その相手の名と似通った響きになるようにというわけだ）、自分の父親（ダーキングの旅籠の主人なのだが）の馬丁をしていた男と、長年に亘って通じていたことが発覚したのだよ。この男を紳士にしてやったのだが、それが、気の毒に、ベルトンの金を使ってのことなのだ。彼女は抜け目なくベルトンの出納係になりおおせたのだが、請求すればすぐに用意してもらえるとの考えから、奴が預けてあった大金について、彼女には説明が出来なくなってしまったというわけだよ。ケント州にある奴の父方の地所が抵当に入っていたので、その支払いに使う金だ。奴としては、債務のない状態にしておきたいと熱望していた地所だよ。だが、それももう出来ない話だ。すぐに抵当流れ処分を受けることだろう。ところが、あの女はもう長いこと奴の妻として通っているものだから、女をどう処置したら良いものか、奴としては決断し兼ねているというわけさ。それに、溺愛している男の子二人についてもだよ。自分の子だと思っていたからな。だが、今では奴も、自分の血が混じっているのかどうか、疑い始めているところだ。

要するに、女を囲うのは引き合わないということだよ、ラヴレース。望ましい暮しなどではないということだな。可哀相に、奴は俺に向かってこう言っていたよ。「女を囲うことは出来るさ。だけど、地所のほうは無理だぞ。二兎を追うわけだからな。それに、体もガタガタになるのさ」と、骸骨みたいに痩せ衰えた自分の体を指差しながらだ。

われわれの自由さを、否、もっと適切な言い方をするなら、われわれの勝手気ままな振

舞いということだが、それを得意がるのは結構だ。われわれとしては、今もそうだが、結婚生活をけなす必要があったし、夫婦関係をくだらない冗談の種にしなければならなかったのだ。われわれ自らが女たちの手先や道具になっている場合が多いからだよ（このトムの例も特殊なものじゃないのだ）。そして、一般的には、その手の女たちが、妻が企てる以上に、われわれを完全に抑えつけているというわけだ（われわれの賢明な頭脳をもってしても見抜けない手管を弄してだよ）。

この点を少し考えてみよう。それも、放蕩児たるわれわれの根本方針に基づいてだ。我が国の法律やしきたりによって強いられるものは脇に置くこととする。もっとも、社会の一員として、道徳的な通常の義務をほぼすべて乗り越えてしまうまでは、これとてもなしに済ますわけには行かないのだがね。

先ず第一に考えるべき点は（われわれのように、法に適った相続で地所を所有している者の場合だが）、こうだ。われわれの父親がわれわれと同じほど賢明で、われわれ同様に結婚生活を軽んじた場合には、われわれはそうなっていたに違いないのだが、まるで裸同然の貧乏人に落ちぶれてしまうのをどう思っただろうかということだ。そして、自分の胸に問うてみようじゃないか。有難いことに、われわれの父親は子供たちへの配慮を忘れなかったのだが、われわれとて、同じ配慮を己の子孫に向けるべきではないのか、とな。

だがこれは、多分、道徳的に過ぎる考え方だろう。それゆえ、もっとわれわれの心に触れる問題の方へ話を進めることにする。われわれとは異なる利害関係を持つ女たち、従って、目当ても違う女たちに、節約とかつましさとかを期待するのは（実際、放縦さや浪費癖以外の何でも良いが）、果たして道理に適ったことなのだろうか。

女たちにも分かっているのだよ。自分たちのしがみついている保有条件が（つまり、われわれのむらっ気のことだが）不安定なものであることはな。だとすれば、仮に連中が用心深い娼婦だとして、その力がある場合には、「まさかの時に備えて蓄える」努力をするとか、あるいは、その力のない場合には、手に入るものすべてを浪費するとかしても、驚くべきことだろうかな。連中にとって確かなものといえば、今この時だけなのだし、連中の送っている暮し、そして、これまでに払った犠牲からして、良心だの節操だのは問題外になるわけだからな。

これに対し、妻の場合には、家族のためを思うという点では夫と一致しているから、同じような不安に晒されることも、誘惑に陥ることもない。また、教育が課した抑制の数々を破ってはいないのだ（少なくとも、当然な顔をして捨て去っているわけではない）。それに、結婚を毛嫌いする者たちの言では、すべての妻が好んで行うと言われている、例のヘソクリを作るとしても、また、子供が出来ても、長い目で見れば、すべては同じ家族のものとなるわけだよ。

次に、男への貞節を守るという、重要な問題についてだが、たとえ世間の評判を得ているとしても、さもしい事柄のために、あるいは、男の言いなりになった途端、さらに浅ましい欲望のために、そんな評判などは犠牲にしてしまう娘たちに比べれば、しっかりとした教育を受けている良家の女性のほうが、より厳しい拘束を受けているのではないだろうか。まんまと彼女を射止めたという貴公の実例は、他の男たちにも、彼女を誘惑しようという気持ちを起こさせることにはならないかな。何しろ、自分に口説き落とすことの出来た女なのだよ。彼女がどれだけおだてたところで、別の男には彼女を説き伏せることは出

来ないのだと思い込むほどお人好しな男、あるいは、そこまで自惚れた男がどこにいるというのだ。

不義密通というのは極刑に値する罪だから、とことん堕落しきっている者の場合や、いわば女の軽薄さに誘われたとでもいうのでないかぎり、放蕩児や道楽者ですら関与していることを否定するし、また、その非を認めもするのだよ。だが、この場合、つまり、囲われ者の状態ならば、女のほうからその罪を招く恐れは（少なくとも、法律上は）ないことになる。貴公にしても、女の貞節を守る柵や垣根のすべてを突き破り、打ち倒したし、女性らしい慎みや遠慮深さを踏み躙ってきている。いかなる絆をもってすれば、心を傾けているものとか、関心を寄せているものとかから女を引き止めることになるというのだ。また、誘惑しようとする者を思い止どまらせるものは何なのだ。

一方、夫のほうには次のような保証手段が法的に認められている。つまり、彼の妻が財産のある男（おそらくは、金を握らせてたらしこむのだ）と密会している現場を抑えられた場合、夫のほうでは高額の慰謝料が得られるし、おまけに、離婚も可能だということだよ。これは当事者両方に対して、不面目な思いには触れないまでも、少しは効果を持って然るべき考えだ。それに、気紛れ心を満たそうとして、また、心惑わす美点のためでも堕落を招く富のせいでもなしに、数々の危険を冒して、夫のどこよりも一番敏感な部分に傷を負わせるような妻は、まさしく性悪女だし、そんな女を選んだ男にとっては、不名誉の種となるのだ。

だが、離婚を成立させるのはなかなか難しいものだ［また、それで当然なのだよ］。そして、放蕩児に言わせると、囲っている女と手を切るのには何の苦労もないのだ。女に疑わしいところがあると思えば、何時でもだ。あるいは、飽きがきて、別の女に乗換えたくなれば、何時だって構わないのだよ。

しかし、自分がたらしこんだ女を［その女を街で拾うのであれば、話は別だが］、何かひどい理由もなしに捨て去ることの出来る男というのは、本物の畜生に違いないのではないだろうか。その女や世間に対してと同様、自分自身に対しても、ただの支配力や物珍しさ以上に、何か自分を正当化するようなものもないというのではな。

ところが、事実から判断するなら、また、われわれの知り合いで、女を囲っている者たち全員のやり口から判断するなら、われわれは、女を囲っている時にも、手の切り方を承知しているようには思われないのだよ。

その気になれば手を切れるのは分かっているということ　…　われわれに言えるのは精々それだけだ。そんなわけで、妻からであれば黙っていないような色々なことも、愛人の場合には我慢することになるのだ。だが、男がお人好しで人情にもろかったり、女が手管に通じていると［手管で落ちた女が手管を用いないわけはないのだし、相手任せの立場では、手管は欠かせないからな］、また、男が、自分の名字で呼ばれることを女に許してしまった場合や、決まった住まいがあって、妻を装う女と一緒に客を迎えたり、人を訪ねたりする場合には、そして、女が子供を拵えたりすると、世間の目ばかりか、自分自身の心に照らしても、こういったことが大きな負い目に思われ、これだけ親密な関係から身を引くのは忍びなくなるのだ。女のほうもべったりとへばりついてくる。そして、女を捨てるのは、自分の生皮を剥ぐのとほとんど同じことになってしまうのだよ。

不貞により、離婚の原因がある場合でさえ、女の肩を持ってくれる人間がいないようで

は、それは女のやり方がまずいのだよ。それに、原因とか人物とかについてだが、一方への悪意からにせよ、片方への同情からにせよ、支持者が得られないほどにひどい例などというのは、俺はいまだかつて知らないのだ。また、そうなると、男のほうは冷酷無情な悪党と思われてしまうのさ。そして、たとえ女が不面目な去り方をするとしても、面目の立たないことでは、男のほうとて変わりはない。とりわけ、高く買ってもらいたいと思っている者たちに対して、面目の立たないことになるのだ。

だとすれば、その気になれば女とは手を切れるのだという、このささやかな特権は、他の様々な不都合を相殺するものと見なされるのだろうか。門地もあれば財産もあるわれわれにとって、それは身分の釣り合いということを諦め、ベッドを共にする相手として、そして、大いに有り得ることだろうが、自分の財産の共有者以上のものとして（一族の決めごとや秩序をすべて破ってだ）、生まれの卑しい、教育もお粗末な女を受け入れるのに相当する事柄と考えられるのだろうか。女は共同資産として何をもたらすわけでもなく、女が受け取る実質的な利益のお返しとしては、吹聴したりすると男が廃ることになり、思い浮かべても二人の面目は丸潰れという、そんな淫らなことしか与えてくれない女なのだ。

さらに言えば、男も年を取ると、女道楽の熱は冷めるものだ。違った目標や楽しみごとが出来て、浮気の虫も鎮まり、夫婦での暮しや家庭生活といった規律のある生き方が性に合ってくる。日増しに合ってくるのだよ。

もしも子供があり、自分の子と考えて然るべき根拠もある場合、また、淫らな生活の果てに、いくらかの財産が残ったような場合、男としては、自慢にしていた自由さゆえに被る制約、そして、そのために失った大事な特権を悔やむべき理由が出来ることになるわけだ。近い親戚であれ遠い親戚であれ、ちっとも好ましいと思っていない者、そして、相手のほうでも（もしも、徳の高い人間なら）、自堕落な暮しのことで、おそらく徹底した軽蔑の念を抱いているのだろうが、そんな親戚の手に財産が渡ってしまうことに気づいた時にはだよ。

男が自分の財産を好きなように遺贈出来るものと仮定しての話だが、自分の愚かしい気紛れ心だけを満たすために、子孫に私生児の汚名を着せる気になるのは、一体何故だ。何故に我が子を世間中の蔑みや侮辱に晒したいと思うのだ。息子の場合であれ娘の場合であれ、自分の子供を、資産の点で劣るとか、年齢が不釣合とかいう結婚の申し出を受けざるを得ない状態に追い込むのは何故だ。愛する子供たちが得たいと望み、また、得て当然の世間からの敬意を、そして、自分たちに相応しい、つまり、尊敬に値する人々と交わる機会を、子供自身には何の罪もないのに奪ってしまうのは何故だ。また、親切にも訪ねて来てくれる品性優れた人物一人一人に対し、子供たちが負い目を感じるように仕向けたりするのは何故なのだ。要するにだな、父親が自分の国の法律や習わしに強情に盾突いて来たことを有難いと思う理由は、そのような子供の側にはほとんどないということだよ。尊敬の念を抱くわけに行かない母親を与えてくれたことに対してもだ。自分たちが存在していること自体、母親の罪から出たことだし、それを戒めとして避けることこそ、自分たちの努めになるのだからな。

こういった子供たちの教育や品行が、極めてよくあることなのだが（というのも、慈愛と温かな心を備え、子孫を思いやることの出来る男なら、結婚するのが当たり前と思うからだ）、偶然の手に任せられると、事態は一層ひどいことになる。自分の悪事が子供たちに

よって、いわば永久不滅のものになると言っても構うまい。そして、男の子の場合であれば、船乗り、軍隊、もしかすると、追剥ぎ稼業に走り、女の子の場合であれば、売春婦に身を持ち崩し、さらなる破局への道を進むことがあまりにも多いのだ。

従って、全体を通して言えるのは、こういった悪の道を辿ることで得られるものとしては、危険や不名誉、そして、遅すぎる懺悔以外に何があるのかということだな。

そして、結局のところ、われわれは自らの女道楽のカモになることが多いのではないだろうか。半ば萎びてしまったような浮気女たちと関係を結ぶことになるのだが、まさしくそんな関係を連中の奥様たちと、少なくとも、身分にしても財産にしても、連中の上を行く者たちと結ぶことが出来たかもしれないのだよ。そして、その間、われわれに見合った立派な暮しを送れたかもしれないのだ。人目を避けたむさくるしい場所にしけこんだりせずにな。また、自分の女とコソコソ出歩く時にも、キョロキョロと辺りを見回したり、通り過ぎる者一人一人に目を配ったりすることもなかったのだ。まるで、正直者皆が口にしている咎めごとは、自分に責任のあることだと認めるみたいにだよ。

従兄弟のトニー・ジェニンズのことは知っているな。貴公やベルトン、モーブレー、タールヴィル、そして、俺が持ち合わせているような、進んで悪事を求める根性など奴にはなかったのさ。なのに、われわれと同じ考えに染まり、それを実行に移してしまったのだ。

結婚のこととなると、ひどい言葉でけなしていたよ。すっかり才子や粋人を気取ってのし歩いていた。ずいぶんと偉そうにしているものだから、一族の男の子も女の子も皆（俺もその一人なのだが、あの頃は小僧だったからな）、大変な利口者でハイカラさんだと思っていた。「結婚だって … 嫌だね。絶対に願い下げだ。女房なんてものは、横柄で、怒りっぽくて、金の掛かるものさ。物の分かった人間で、それを我慢しようなんて者がどこにいるというのだ。俺としちゃあ、身分も財産も対等な女、それに、ないことでもないだろうが、俺より才能に恵まれた女が、自分の持ち込んだ財産の分け前に与るのは当然だという顔をするのは、どうあっても耐えられそうに思えないのさ」といった塩梅だった。

そんな調子で二、三年ロンドンをほっつき回り、その間ずっと自分のことを、だれが考えるよりも買い被っていたわけだが、挙げ句に何をしでかすのかと思いきや、手ほどきを受けていたフェンシングの教師の娘と色恋沙汰だよ。

想いが叶って、女のためにハックニーの人目に付かない下宿を借りる。人目を忍んでの逢瀬だ。二人とも世間の評判が気になるのさ。極端に傷つきやすい評判だが、すっかり投げ捨てたわけではなかったのだ。道楽者というのは、男女どちらの場合も、決して自分を責めたりけなしたりはしないのが常だからな。だれ一人訪れてくれる者もいないし、他人を訪ねもしない。泥棒の暮しだな。借金取りに付き纏われている人間の生活だよ。自分の家から顔を出すのが怖いし、女と一緒に出歩いているところを見られるのも怖いのだ。こんな生活を十二年間続け、結構な財産はあったのだが、なかなか帳尻を合わせるわけには行かなかった。派手なことはしないのだが、倹約することもなかったのさ。おまけに、毎年子供が出来たし、子供には目のない男だったのだよ。だが、三年以上生き延びた子供は一人もいなかったな。そして、一ダース目の子供が死んだ今では、まるで本当の夫みたいに、退屈なほどおとなしい男になったものだから、トマスの奥さん（実は、女が自分の姓を名乗るのを奴は許していなかったのだよ）の説得もあり、子供を亡くしたのは、道を外れた生き方をしてきた両親への天罰なのだと考えるようになった［われわれも長生きをす

れば、気弱になった心を反省の気持ちが捕まえて放さなくなるような時がきっと来るのだよ、ラヴレース」。そうなると、神様と折り合いをつけるためにも結婚してくれと、女のほうから誘うのも難しいことではなかった。式が済むと、彼もゆっくり腰を据えて考えてみた。男盛りの頃に断ってしまった、門地もあれば財産もある者とのたくさんの縁談のことを思い返してみたのだよ。使わねばならない金の点では、少なくとも似たものだし、世間の評判ということでは、下がったというばかりでなく、地に落ちた状態だよ。楽しみごとは奪われてしまっている。連れ合いとなる相手は不釣合で、日頃から恥ずかしく思っていたような人間だ。それでも、女たちは言っていたのだよ。十二、三年も同棲した後だというのに、トニーは彼女に誠意を尽くしてくれた、とな。古くからの情婦を新妻に迎えた俺の従兄弟が得たものといえば、気の毒にも、ただそれだけなのだよ。太鼓一つ鳴るわけでも、トランペットが響くわけでもない。笛や小太鼓も聴かれない。彼の心を励ましてくれる新たな喜びの見込みもないのさ。

ベルトンがトマシンのことをどうするつもりなのか、俺には分かり兼ねるし、忠告もしたくないのだ。哀れな奴だよ。どこのだれであれ、自分以外の者があの女を呪うのは気に入らない様子だからな。それに、ひどく情けない状態に追い込まれているから、これまであの女の子供を可愛がってきたこと、そして、今では自分の子かどうか疑わしいのを思い起こしては、泣き言を並べているのだ。「何とも癪な話だぞ、ベルフォード。トムとハルが俺の子じゃなくて、馬丁の犬野郎のガキだとしたらな」といった具合だ。

まったく、奴の言うとおりだよ。丸ぽちゃの顔をした肉付きの良いガキどもがすこぶる元気なのを見ても、大いにありそうなその話が、確かなことに思えるのだ。だが、あいつにそんなことを言ったりはしないさ。

君はひどく陽気で活発な人間だから、こういう哀れっぽい話には少しも心を動かさないだろう、と奴は言っている。そのようにすっかり心を奪われてしまっているのだから、今は特にそうだろう、というのだよ。モーブレーに分かれば、度を越して無茶なことをするだろう。奴に言わせると、モーブレーには思いやりの心がないそうだ。ターヴィルのほうは分別がない。そして、まったく笑ってしまうのだが、奴とトマシンは世間体などと縁のない暮しをしてきたというのに（あの女は奴の姓を名乗っていたのだが、二人が結婚していないことは皆察しているのだよ）、奴としては、「忌々しい恩知らずだが、あまり疑いを掛けるような真似もしたくない」と言うのだ。

実際に結婚していたのだとしても、また、血を分けた子供たちの母親と手を切ろうとしているのは確かなことだとしても、男として、これ以上にみっともない役どころを演じたり出来るものだろうか。

以上の点を、教訓として貴公の胸に委ねることにする。何かに当てはめて見せるようなことはしないが、次の点だけは述べておこう。つまり、われわれ放蕩児は、自分の淫らな欲望を満たし、口先で、また、生きざまによって、先祖たちや古き良き習わしに盾突いてみせた後（独り善がりの自惚れ心からそう思うのだが）、分別のある年頃になると、その頃まで生き長らえるならの話だが、自らの見下げ果てた愚かしさに（つまり、われわれを知る者すべてにはすでに分かっていることだが）気づくのだということ、また、その古き良き習わしこそは、世の中の他の連中にとってと同様、われわれにも最も有益なものであったはずだということ、その習わしから一歩逸れるごとに、われわれは自らの虚栄心を、そ

して、同時に無知さ加減もさらけ出していたにすぎないのだ、といったことをだよ。

J. ベルフォード

手紙　二十七
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月二十日　土曜日

貴公の今度の手紙の結びとなっていた、あの生真面目な意見を嬉しく思うし、また、感謝もしている。

ベルトンも気の毒な話だな。奴のトマシンがそこまで悪女だったとは、思ってもみなかった。だが、これは、生まれの卑しい女を囲う男には永久につき纏うリスクなのだよ。これだけは俺もやったことがない。また、その必要もなかったのだな。俺のような者の場合には、ジャック、今までの話だが、一番堂々としている樹を揺するだけで事足りていたのだ。それで、熟した果実がこの口に落ちてくるという寸法だよ。貴公も承知のとおり、俺は日頃からモンテーニュ風(二三)の好みをしていたのさ。家柄の良い娘を征服するのを誇りと考えていたのだ。俺に真の喜びをもたらすということでは、誘惑への道程のほうが上なのだよ。最後を飾るあの行為よりもな。あれは空しいものだよ。泡みたいなものさ。それから、心の底から礼を言いたいのは、遠回しな言い方ではあったが、今回の件に従事するのは正しいと言っているようにも取れる貴公の言葉だな。

ハーロー嬢のような女性であれば、貴公がくどくどと並べ立てているような不都合は一切心配ないのだ。

それゆえ、今一度礼を言うが、ベルフォード、賛同してくれて嬉しく思う。この令嬢のような女性と一緒なら、貴公も言っているとおり、男たるものはむさくるしい場所にしけこんだり、昼間の外出を避けたりすることはないのだ。貴公も友情に篤い男だよ。俺が心を傾けている目論見をこうも煽り立ててくれるのだからな。また、これだけの令嬢が俺の姓で呼ばれるのを許したところで、何の不名誉になるものでもないのだ。それに、俺が丸め込まれて、先祖たちの昔のまっとうな道を辿るよう説き伏せられた時のことを仮定しているのだろうが、貴公の言う分別ある年頃まで生き長らえるとしても、世間の非難を気に掛けるなど、それもまったく有り得ないことなのだよ、俺にはな。

貴公の心に祝福あれ　…　まったく感心な男だ。この令嬢のために、貴公が結婚を説くとはな。冗談を言っているのだと思ったぞ。M卿との約束を果たすためだけのことと思った。貴公の信念などであるはずがない。同情でもない。少し妬いているのだとまで勘繰ったよ。だが、これでまた、貴公の本当の姿に接したわけだ。もう一度言っておこう。貴公の心に祝福あれ、とな。真の友だよ。まったくもって感心な男だ。

これで、俺も勇気を持って計画のすべてを推し進めることにするし、計画実現に向けての進捗状況に関し、続報を届けることも出来るというわけだ。ただ、感謝の意を表すためにも、俺の物語を中断せずにいられなかったのだよ。

手紙　二十八
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

さて、われわれの現況について、ここで手短に語り聞かせてやろう。

最も上位の者から最下位の者まで、全員がこの上ない幸せに浸っているところだ。ドーカスは令嬢のご愛顧を賜っている。ポリーは、自分のところにきている縁談のことで、彼女に助言を求めたのだ。あれ以上のご託宣はかつてなかったな。サリーは、例の毛織物商と一悶着起こし、我が魅惑の君に裁きをお願いしたのだよ。令嬢は、愛してくれている男を虐げているということで、サリーを咎めていた。困ったお嬢さんだよ。鏡の前に立ちながら、自分の顔を見ようとせずに目を瞑っているのだからな。かくも過つことのない裁き人には、シンクレア夫人もご機嫌伺いだが、二人の姪のことで助言を求めたのだ。

ここ数日、階下の連中とはこんな具合だった。ただし、食事をする時は大概一人っきりだし、他の場合でも、連中と交わることは滅多にない。連中も今では、彼女のやり方に慣れたのだな［辛抱する木に花が咲くってやつだよ］、決して強要したりはしないのだ。だから、顔を合わせても、どちらの側でも丁重そのものというわけさ。俺は本心からそう思うのだが、ジャック、既婚者連中にしても、たまにしか顔を合わせないようにすれば、口喧嘩の多くは防げるはずだぞ。

それにしても、乱暴な立ち去り方をしたし、水曜日の朝には反抗的に撥ねつけてみせたわけだが、その俺と令嬢との仲はどうなっているのだ、と貴公は尋ねるのだろうな。

そうさな、概ね良好ってところだよ。いや、極めて良好だ。何故かと言えば、我が身を助けようにも、どうしたものか、愛しのおナマちゃんには分からないのだよ。他の者の保護を求めて飛び出すわけにも行かないのさ。おまけに、あの水曜日の午後にシンクレア夫人、マーティン嬢、そして、俺との間で交わされた会話が、偶然彼女の耳に入ってしまったのだよ［そんな近くに彼女がいるなんて、だれが思ったというのだ］。それを聞いて、いくつかの疑わしい点に関し、彼女も心を休めることになったわけだ。

中でも次のような点だ。フレッチヴィル夫人の惨めな精神状態については、夫人と懇意のマーティン嬢から、まことに人情味溢れる同情が寄せられたのだ。今は亡き夫と夫人とは（サリーが言うのだが）幼い頃から恋仲だったというのだよ。ある人物からの同情というものは、その理由の強弱とは関係なく、別の人物からの同情を生み出すものなのだ。それに、気の毒なフレッチヴィル夫人の災難については、たっぷりと詳しい話があったものだから、我が愛しの君としても、心の優しさでは劣るマーティン嬢が大いに同情している夫人のことでもあり、これ以上ないほどの憐れみを寄せずにはいられなくなったのさ。

M卿にとって、俺の妻を訪ねる妨げとなるものは、ただ痛風だけだという点。ベティ夫人とモンタギュー嬢はまもなく上京のはずだということ。

フレッチヴィル夫人の気持ちが固まりさえすればの話だが、俺の妻には、両婦人を自宅に迎えてもらいたいのだという、俺の心からなる希望が表明されたこと。そして、夫人の気持ちが固まらないゆえの滞りについて、俺が切々と嘆いてみせたということ。

連中にはすでに伝えてあると話したはずだが、俺の妻が自分の家に住んでいる間は（フレッチヴィル夫人が家を引き払う気になってくれた場合だが）、俺のほうは、細かな点への彼女の徹底したこだわりを満たすためにも、シンクレア夫人の屋敷に留まるつもりだとい

うこと。

最愛の君への熱情を誇らしげに語ったこと（連中に向かって、昂ぶった、熱に浮かされた口調でまくし立てたのだが、それは、女性に対して抱き得るかぎりの真の愛情だと言っておいたのだ）。俺はこう言ったよ。要するに、それは真にプラトニックな種類のものであり、でなければ、プラトニックラブの何たるかを俺は知らないことになる、とだ。

実際、そのとおりなのだよ、ジャック。プラトニックラブの通例となっている終わり方にならねばいかんのだ。

次には、サリーとシンクレア夫人が我が最愛の君に賛辞を呈した。だが、露骨にではなかったぞ。特にサリーは、彼女の高潔さを称え、婦徳の鑑と呼んでいた。ただ、俺を前にして不遜な話ではあるけれど、あまりにも潔癖すぎるようにも思うと、（疑われるのを避けるためだが）自分の考えを口に出していた。とは言いながらも、俺が誓いを厳しく守っている点は盛んに褒めていたよ。

俺のほうでは、彼女が打ち解けてくれない点を、もっと率直に詰ったよ。彼女のことを惨いと言ったのだ。身内の者たちを罵ったし、彼女の愛情を疑ってもみせた。何を求めてもことごとく断られる。なのに、彼女に対する俺の振舞いは、皆の前でと同様、二人きりになった時でも清潔で上品なものなのだ、といった具合にだよ。当日二人の間であったある出来事のことも匂わせてみせた。俺への冷淡な気持ちを如実に示すもので、俺には到底耐えられないのだ、とだよ。それでも、観劇への同伴をお願いするつもりだと言った。『ヴェニスは揺るがず』[二四]だが、土曜の夜の寄付興行で、一流の役者たちが出ることになっているのだ。こんなことをするのは、俺の願いは何もかも断られてしまうのかどうか、ひとつ試してみようというわけなのだよ。もっとも、俺自身としては悲劇は好みじゃないのだが、彼女のほうでは、悲劇には概して教訓や戒め、そして、手本とすべき事柄が含まれているので好きだ、というのだな。

私はひどく感じ易い質なのです、と俺は言ったよ。楽しみごとの中に悲しみを持ち込んだり、他人の災難を自分のものにしたりするまでもなく、この世には、私たちの心を憂鬱にすることが十分に存在しているのですよ、とだ。

このとおりなのだよ、ベルフォード。それに、一般論としてだが、われわれのような性向の男はすべて、俺と同じ意見だと信じているのだ。自分自身が暴君や死刑執行人の役割を演じるものを別にすると、悲劇などは一切好まないのだ。真面目で厳粛な考えなどは自分たちの柄じゃないとの想いから、喜劇のほうに走るのだよ。自分たちが引き起こした災難を笑い飛ばし、自分たちに負けず劣らず不道徳な人間の実例を見つけ出そうというわけさ。何せ、喜劇を見ても、貴公も承知のとおり、立派な人物の例を示してくれるものは極めて少ないのだからな。ただ、こう言って構わないのは俺自身についてだよ。思い返してみると、貴公は哀れっぽいのに関わるのを好んでいるように思うのだ。

愁嘆場よりも滑稽な場面が好きだいうことでは、居合わせなかったポリーのためにサリーが保証していたし、シンクレア夫人も、自分はもとより知り合いのすべて、また、パーティントン嬢でさえもそうだと請け合っていた。そして、あの連中が正しいのだと俺は思っている。というのも、胸の内を打ち明けられた放蕩児が、相手の娘に、茶番に交えてたっぷりと悲劇を味わわせてやらないようでは、世も末ってところだからな。

我が麗しの君のお供をお願いすると、サリーに頼んでみた。彼女は先約があるとのこと

だった［それは結構だと、貴公は考えるだろうな］。そこで、ポリーはどうだろうかと、シンクレア夫人に伺いを立てた。ラヴレース夫人のお供だなんて、きっとポリーは名誉なことと思いますわ、というのが夫人の返事だった。ただ、気持ちの優しい娘だし、あの悲劇は深刻なものだから、目がつぶれるほど泣きじゃくることでしょうね、とも言っていた。

一方、サリーはシングルトンの件があると異議を唱えていた。俺がその異議に答えられるようにして、愛しの君が異議を申し出るとか、この件で俺とやり合うような手数を省いてやろうというわけさ。そして、この際とばかりに、俺は嘆いてみせたのだ。兄の目論見が断念されたわけではないことをだよ。中止になったものなら、妻に付き添ってもらうべく、身内の婦人たちを迎えに俺自ら赴くところなのに、とな。

そこで俺は、彼女の父親の屋敷にいるある人物からつい先頃受け取ったばかりの手紙からのこととして、われわれの捜索を引き受けた男がいるので注意してくれるよう、連中に頼んだのだ。そして、この家の者すべてが備えを固められるようにと、その男の様子を［ペンとインクを持って来させ］記述して見せた。「日に焼けたあばた面の船乗りで、人相が悪く、骨太の体格。背丈は六フィート前後。生気のない目付きで、額はせり出しており、甲板を動き回るような歩き方をする。通常は短剣を持ち歩いていて、あたかも熱帯の地で太陽を睨んでいたためのように、歯茎から先、上下の唇は干からびている。茶のコートを着用。色物のネッカチーフを首に巻き、背丈ほどの長さで、それに見合った太さのオーク材の棒を手にしている」といった具合だ。

また、この男の問いには一切答えてはならないこと、現れた時には、俺を呼び出さねばならないということ、ただし、避け得るかぎり、我が愛しの君には一言たりともそのことを知らせてはならないことを話してやった。そして、次の点も加えておいた。彼女の兄かシングルトンがやって来るとして、奴らが礼を失しない態度で振る舞うようであれば、彼女のためを思い、俺のほうでも丁重に振る舞うつもりでいるということ。また、この場合には、彼女としてはただ結婚したことを認めるだけで良いのであって、そうすれば、どちらの側にも力に訴える口実はなくなるはずだということだ。ただし、これ以上ないほど熱っぽい口調で、次のように誓っておいたよ。説得によってであれ力ずくであれ、仮にも彼女が連れ去られるようなことがあれば、たった一日姿が見当たらなくても、すぐにハーロー邸へ赴いて、邸内にいようといまいと、彼女を出すよう要求するつもりであり、もしも妹を取り戻せないのなら、兄のほうをいただくし、兄ばかりでなく、どこかの船の船長とやらも見つけ出してみせる、とだ。

さあ、どうだ、ジャック。俺がどう出るにせよ、彼女は逃亡を企てると思うかな。

自分の屋敷の中でもめごとは困ると、シンクレア夫人が心配し始めた。芝居が度を越して、柄にもないことを夫人がしはしまいかと、俺は不安だったよ。だから、目配せをしてやった。夫人は顔をひき締め、頷いてみせたが、分かったことを示そうとしてだ。やれやれと、鼻に掛かった調子で呟くと、品のない上下の唇を重ね、黙り込んでしまった。

手筈は整っているのだよ、ベルフォード。貴公が何を言おうと、M卿が何を書いてよこそうと、俺がすべてを棒に振るとでも思うのか。ムッとした時に我が魅惑の君の使う台詞だが、「とんでもございませんわ」ってところだよ。

∴

∴

俺に対する愛しの君の態度についてだが、こういったこと一切合切がもたらす必然の結果は何だと思う。次に顔を合わせてくれた時、どこまでも従順であったことを、貴公は疑ったり出来るというのか。

木曜日の二人は幸せだった。午前中一杯、この上なく幸せだったよ。あの魅力的な手に接吻したのだ。彼女の手、そして、腕のことを描いて見せる必要はあるまい。貴公が彼女と対面している際に気づいたのだが、貴公の目は釘付けだったからな。彼女の顔から、あの驚異を秘めた美観から、目を逸らすことの出来る場合にはいつでもだよ。俺はあの手に五十回は接吻したと思うぞ。一度は頬にもだ。唇を狙ったのだが、夢中になり過ぎたものだから、さすがに彼女としても、怒った素振りをせずにはいられないほどだったよ。

このように彼女がよそよそしい態度を取らなかったなら、また、男のほうは一歩一歩と先を目指すものだが、そのような罪のない馴々しさを拒んでいなかったなら、そして、人目を気にせず寛いだ身形でいる折の彼女に近寄ることだけでも俺に出来ていたなら［何しろ、正装すると威厳が備わるし、意識を高め、相手を遠ざけずにいられなくなるものだからな］、二人ははるか昔に親密な間柄になっていたのだよ。だが、どんなに遅くまで彼女を引き止めても、どんなに早く顔を合わせても、朝食の時までには昼間の服装になっているし、起き出したばかりの時でも、身形を整えた他の者たちに負けないくらいきちんとしているのだ。このように、作法というものをすべて守っている女だから、企てていた俺の試みがほとんど前進しないからといって、驚くには当たらないのさ。ただ、これだけよそよそしくされると、ひどく刺激されるのは確かなことだな。

木曜の朝は、前にも言ったが、われわれは至極幸せだったよ。正午近くだった。彼女が俺と共に過ごした時間を数えて見せるのだ。俺にとっては、そのすべてがほんの一分間のことだったがね。そして、彼女は一人きりになりたいと言い出した。同意したくはなかったのだが、にこやかさに翳りの出始めているのが分かったので、応じることにした。

食事は外で取った。帰宅した後、例の家の件、それに、フレッチヴィル夫人のことを話題にした。メネルに会い、未亡人に屋敷を出てもらうよう急がせたことを話すと、彼女はフレッチヴィル夫人に同情していたよ［これも、偶然耳にしたあの会話の効果というわけだ］。M卿に一筆認めてあり、まもなく返事が届くはずだとも言っておいた。一緒に夕食をとるのを許してくれたよ。俺が書き記した条件に賛成してもらえるのか、それとも、修正が必要なのかと迫ってみた。彼女のほうでは、ハウ嬢からの手紙が届き次第返答する旨を重ねて約束していた。

それから、土曜の夜の観劇をご一緒願いたいとせがんだ。予想したとおりだが、反対の理由を並べ立てていたよ。兄の企てのこと、天候の暑さなどだ。だが、俺の意向に背くのを半ば恐れているような様子だった［これもまた、立ち聞きした会話がもたらす鮮やかな効果だ］。だから、こんな異議などすぐに片付けてしまったさ。俺の願いを叶えると、彼女は承諾してくれたのだよ。

金曜日も前日と同様だった。

われわれ両方にとって、幸せな日が二日続いたわけだ。どうして俺は毎日を同じように幸せに出来ないのかな。それは俺の気持ち一つであるかのようにも思われるのだよ。奇妙な話だよな。心底愛している女をこうも苦しめて喜んでいるのだからな。俺の気質の中には、どこかハウ嬢に似たところがあるに違いないようにも思うのだ。あの女も、自分の思

いのままになろうとしている男を悩ませるのが大好きだからな。だが、この天使のような女に対し、そんな仕業が出来るわけはないのだ。もしも、試しの期間が終わりを告げ、そして、同棲生活に（念願の目標だが）引き込むことが出来なかった場合には、彼女の願いどおりに報いてやることを確信しているというのでなければな。

土曜日も半分が過ぎ去った。二人とも同じように満ち足りた気持ちでいる。観劇の準備をしているところだ。ポリーがお供を申し出、受け入れてもらった。涙を流すべき場面についての指示をしておいたが、情のあるところを見せるためばかりではない［涙に潤んだ目というのは、優しい心の証だからな］。扇子かハンカチで顔を隠す口実にもなるからなのだよ。とはいえ、ポリーはだれでも客にするような女なんかではないのだ。それに、われわれが陣取るのは最上階のグリーンボックス(二五)なんだよ。

特にベルヴィデラ(二六)のものがそうだろうが、他の者たちが味わう、巧みに描き出された深い悲しみの数々は、きっと我が魅惑の君の心の鍵を外し、解き放ってくれるに違いないと思うのだよ。女を口説いて、観劇への同伴を許してもらえるようなら、その場合、女は間違いなくこちらのものと、俺は思っているのだ。女というのは（元来、思いやりや調和の精神に満ち溢れているから）、我を忘れて心地の好い娯楽とか、心打つ楽しみごととかに惹かれると、音楽や、多分その後の軽食の助けもあるのだろうが、心を開き、堅苦しい作法のことは忘れてしまうものなのだ。

今度の場合、その手の効果を期待出来そうにないのは確かだが、彼女を劇に誘うことで叶えようとしている目的は、一つだけではないのだよ。一つだけ挙げるとすれば、すでに話したことだが、ドーカスはマスターキーを持っているということだな。だが、彼女なんかに考えられるもの以上に深い苦悩が、これまでにもあったし、また、有り得るのだということを教えるためだけでも、『ヴェニスは揺るがず』の観劇に連れて行く価値はあろうというものだよ。

そんなわけで、今のところわれわれはこの上なく幸せにしている。ナット・リーの描いてみせた不吉な神々(二七)のうちのだれかが、われわれの喜び交わす杯に苦悩の種を混ぜ込もうと動き回っていた、などということにならないよう願っている。

R.ラヴレース

手紙　二十九
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

五月十九日　金曜日

より有望な見通しを楽しむことも出来ない人間と思われてしまいますほどに、自分の置かれております立場の、暗く陰鬱な面ばかりをいつもいつも考えておりますのは、私といたしましても、避けられるものでしたら避けたいのです［ご存じのとおり、森羅万象、その一つ一つには、明るい面と暗い面がございますからね］。それに、これは私のためばかりではございません。私に降り懸かりますことすべてに、このように思いやりに満ちた関心を寄せてくださる貴女のためにもなることなのです。

ですから、貴女にはお知らせいたしますが、私の現在の立場を考えますと、不幸せとは

申せないような時をまるまる二十四時間過ごしたということでございます。

《次いで令嬢は、彼女が立ち聞きした、ラヴレース氏、シンクレア夫人、およびマーティン嬢の間で交わされた会話の詳細を伝えているが、三人には知られずにその会話を漏れ聞くに至ったきっかけに関しては、氏よりも詳しい説明を加えている。

令嬢は、三人それぞれの発言を歓迎すべき理由を述べているが、たとえ一日でも彼女の姿を見失った場合には踏み切る覚悟だという、氏が口にした手段のことでは衝撃を受けるのである。しかしながら、令嬢の兄と市中で遭遇するとしても、自ら暴力に訴えるのは避けようという氏の言葉には、満足の意を表している。彼女曰く》

以前に比べますと、ドーカスでさえ非難すべき点が少ないように映るのです。あの娘の教育がないがしろにされましたことは、気の毒としか言い様もございません。あの娘自身にとりまして、大層悔やまれることなのですからね。その点を別にいたしますと、教育にそれほど大きな意味はございません。身分が低く、読み書きの出来ない人たちこそ、お国にとりましては一番役に立つ人たちですし（そういう人たちが社会の働き手になっているのです）、読み書きを習い覚えた人たちというのは、よくあることですが、世間の実務が進められる基となります、あの卑しい仕事に就こうとしないものですからね。それに、世の中全体を通して見ますと、学校教育を授かった者の中で幸せになっている人が一人いるといたしまして、読み書きの出来ない人たちの中ですと、二十人いるのは疑いのないところだと思うのです。

とは申しましても、学問をしたり読み書きを習ったりしてはいけないと結論しているのではございません。能力を備え、生まれも卑しくなく、尽力に対しては報いてやりたいと思っております者たちにつきましては、少しは引き立てて上げたいですし、もっと上品なお仕事で役に立ってもらおうと願いもするものですからね。

心に何の心配ごともないのでしたら、この問題につきましては、もっと詳しくお話しすることも出来ましょうし、無駄話にはならないものと存じます。私の年齢、そして、ささやかな経験や観察に基づきまして、出来るかぎり注意深く検討を加えてまいりました事柄ですからね。

それにいたしましても、好奇心に欠けているわけではなく、向学心もあるかに思えますし、他の点で聡いところもあるのを考えますと、この侍女の徹底した無学ぶりや教え難さには驚かされてしまいます。どんな人にとりましても、低い所から高い所へと（一年ごとに）一歩一歩導かれ、心が改善されて行くような、学びの時とでも申しましょうか、教え込みやすい時期があるのだという意見を耳にしたことがございますが、この娘を見ておりますと、その言葉も納得出来るというものです。このような時期は、訪れ次第、子供や若者の才能を育成することが委ねられております家庭教師、両親、そして、他の家族の者たちの手で労を惜しまずに捉えられねばならないということでしょう。一度過ぎ去ってしまいますと、そして、何の礎も築かれておりませんと、再び戻って来るようなことは滅多にないからです。ただ、ある種類の果物と同様に、遅くまで熟成しない才能があることは認めねばならないでしょう。それに、勤勉と根気強さは素晴らしい成果をもたらしますから

ね。でも、他の人たちが十歳の時に教えられ、また、自ら身につけていたかもしれないこれらの基本的な事柄を、ある学び手が、例えば二十歳で習得しなければならないといたしますと、それこそ大変骨の折れる仕事ということになりましょう。

こういった種類の感想は、私の心に浮かぶままに織り交ぜてほしいと、貴女はいつもお望みでしたわね。でも、見通しが少し明るくなった印なのですね。でなければ、ここしばらく心を占めておりました、もっと関心を引きつける事柄がたくさんあるのですから、このような感想を述べるだけの心のゆとりは持てなかっただろうと思うのです。

より有望な見通しということにつきまして、私の考えをお話しいたしましょう。

まず第一には、家の話が遅れております点につきまして、以前よりもうまく説明が付くようになったということです。お気の毒なフレッチヴィル夫人 … 存じ上げてはおりませんが、ご同情申し上げますわ。次に、私があちらの家に移った後、あの人はこの家に留まるつもりでいることを、ご婦人方に（皆さんとのこの会話が始まります以前に）知らせてあったのが好ましく思われるということです。あの人の声の調子からいたしまして、この新たな遅れが私にどう受け取られるか、心配しておられる様子でした。

マーティン嬢が私についてあまりに立派なことを言ってくださるものですから、初めてこちらに参りました時には、あんなにひどい見方をしてしまいまして、申し訳ない気がいたします。自由な生き方をしている人たちというのは、大変なことまでやってのけるかもしれませんが、最後まで行くわけでもございません。そういう人たちというのは、大抵の場合、不用意でそそっかしく、考えの足りないところがございますから、その同じせっかちな心や移り気、そして、俄か心とでも呼べそうなものが入り込んでまいりまして、（心が腐っておりません場合には）考え直したり、務めを思い出したりすることになるのです。

兄とシングルトンが企みを続けている間は、お身内のご婦人方を迎えに自ら出向くのは断念するとのことですが、その理由にいぶかしい点はございません。それに、あの人が時々言っておられますように、ご婦人方は形式にこだわる人たちとのことですから、それだけに、こんな折にはあの人のような誇りの高い人間に付き添ってもらおうと期待なさったとしても、それは分からないことではございません。

たまたま耳にしましたこの会話ですが、それを耳にいたします前よりも、心に安らぎを覚えることになりました他の理由も並べて見ましょう。

シングルトンの航海士について、あの人が受け取った忠告のこともそうなのですが、これは、五月十日付のお手紙で書いてくださったものにぴったり符合するのです(ア)。

その件を私に知らせまいとする、あの人の心遣いのこと。

船乗りが現れ、私たちのことで探りを入れた場合の対処の仕方として、召使たちに与えた注意のこと。

兄とか、このシングルトンという人物に出くわした場合でも、暴力沙汰は避けるようにするというあの人の決意。また、その場合にも、危害を防ぐためということで、あの人が計画している便法の件もあります。この方法ですと、私のほうでは、あの人のものであることを否定しないようにするだけで良いから、という理由でした。でも、二人は結婚しているのだという、階下の人たちの信念を裏付けるような状況に（私の気持ちとはひどく裏

(ア)四十三頁を参照のこと。

腹に）誘い込まれてしまいましたが、実際にそうなりますまで、初対面の人ごとにこのような暗黙の了承を続けなければなりませんのは、私自身の考え方からいたしますと、この上なく不幸なことに思われるのです。

水曜日にありましたラヴレースさんとのやり取りや、たまたま耳にしましたあの人の言葉からいたしまして、観劇のお供には同意せざるを得ないように思われます。慎重を期して、夫人の姪御さんの一人に同伴してもらおうと言ってくださっているのですから、なおさらです。

白状しないわけにはまいりませんが、あの人が実際にM卿宛にお手紙を書かれたのを知り、嬉しく思う次第です。

ラヴレースさんに約束してあるのですが、あの人の申し出の件は、その問題に触れた貴女のお手紙が届き次第、お返事をすることにしてあります。

このように順調と映る状況ですが、次にお便りいたします時には、これが確かなものであると申し上げられるような根拠を得たいものと思っております。順調と受け止めなければいけないのですわ、これまで苦しんでまいりました哀れな状況を考えますとね　…

あの人の元を去らずにはいられなくなるような態度をあの人が取った場合、貴女が匂わせておられる、「私」と「私自身」の間で起こりそうだという試練の時（貴女の用いた言い方(ア)ですが）を迎えましても、貴女からご覧になって、この身に何らの不名誉ももたらすものではないと映りますような、そのような振舞いは出来るものと考えております。そして、それこそ、今の私が願いを寄せておりますことのすべてなのです。でも私が、たとえ貴女が想像してくださった程度にあの人を大切に思っております場合でも、私には大層つらいものになりそうだと考えておられる試練と申しますのは、おそらく、逃亡を果たすための手段が授けられ、あの人の元を逃げ出します際に味わうものではなく、逃げ出しました後でどのように振る舞うのか、また、古のイスラエル人みたいに(二八)、エジプト人の囚われの身に戻ることを望むような、ひどく心の弱い人間になりはしまいか、という点だろうと思うのです。

今のところ、希望の持てそうな状況にも見えますが、それでも、頭に浮かんだと言っておられましたご方策(イ)のほうは（どのようなものだといたしましても）、必要が生じました際の逃げ場所を確保してくださるためということでしたし、仕上げをしてくださって不都合はないものと考えております。ラヴレースさんが腹黒い危険人物であることは確かなのです。ですから、油断をせずに最悪の事態に備えておきますのが分別というものでしょう。何という惨めな話なのでしょうね。私に対する信義心につきまして、露ほどでも疑問の余地が残りますような男性の元に留まらざるを得ない立場になるなんて　…　夢にも思いませんでしたわ。でも、将来に目を向けることにいたします。そして、一番良いことを期待することにいたします。

貴女のお手紙が安全なことは確かだと思います。ですから、その点につきましては、心配は一切ご無用に願います。

善かれと思われてでしょうが、ラヴレースさんは決して私を一人にしてくださらないのです。でなければ、家の出入りが自由になりますのは疑いございません。ですから、もし

（ア）八十四頁を参照のこと。（イ）八十三頁を参照のこと。

も必要と考えました場合には、また、兄とシングルトン船長の心配がないのでしたら、もっと頻繁にその点を試して見ようと思っております。

手紙　三十

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

五月二十日　土曜日

私の考えがお分かりになるまで、ラヴレースさんの申し出への返答をお延ばしになるなんて、私、知りませんでしたわ。時々ロンドンへまいります特別な雇人にお願いして、これをウィルソンさんのところへ届けてもらいます。そのことのために、少しでも遅れが出たりしてはいけませんからね。

贈与財産につきましては、あの人の公正さ、気前の良さには少しの疑念も抱いておりませんでした。それに、あの人のご親戚の皆さんは、血筋もそうですが、それと同様、高貴な精神をお持ちの方ばかりです。でも、今度ばかりは、あの人の招待状に卿がどのようなお返事をなさるのか、お待ちになってみるのも悪いことではないと思います。

私の考えております方策は次のとおりです。

確か、私と一緒のところをご覧になっているはずですが、タウンゼンドさんという名の女の人がおります。インド更紗、ブラッセルやフランス製のレース、キャンブリック、リンネル製品、その他高価な品物を手広く扱っているのですが、無税で仕入れる手段をお持ちで、私どもの周りに引き籠もって暮らしておられる紳士方のご家族相手に、大量に（外国から輸入しておりますその他の珍しい品物もですが）売りさばいているのです。

一定の期間ロンドンに滞在されまして、その際は、サザックの旅籠に借りたお部屋で過ごされます。絹織物全部の見本や持ち運びの出来ます品物の大半をそこに保管しているのですが、ロンドンのお得意様の便宜のためなのです。でも、主な倉庫を備えておりますお住まいのほうは、商品の荷揚げの都合もあり、デトフォードにございます。

最初は母に連れられて来たのですが、私が近々結婚しそうだということで、母に紹介されたというわけです。母に言わせますと、「お手頃な費用で、お姫様みたいに着飾ることが出来るように」というわけです。

ところで、正直申しまして、こういった密輸商人たちを励ますような真似はしたくないのです。それでは、お国の法律を無視することに他なりませんし、まっとうな貿易商に損害を与えることになりましょう。また、同時に、国王様から、法律上お受けになって当然なものを奪い去り、税収の減少を招くことになりますし、おそらく、新税を国民に課すことによって埋め合わせをしなくてはいけなくなるのではないでしょうか。

とは申しながら、タウンゼンド夫人と私とは、今までのところはまだ取引関係にはないのですが、互いに大変気心の知れた間柄なのです。分別のある女性で、外国におられたことがありますし、お仕事でしょっちゅう海外に出掛けられるのです。そして、ご覧になったものすべてについて、とても面白いお話をしてくださるのです。それに、貴女に紹介してもらいたいと声を掛けてきておりますので（結婚を控えた若い淑女と面識を持つのが夫人の目的なのです）、デトフォードのお屋敷に貴女をかくまってくださるよう、間違いなく

お願い出来るものと考えているのです。夫人がおっしゃいますには、デトフォードは人口の多いところだそうですし、捜索の手が及ぶことはまずあり得ない村だと、私は思うのです。夫人があちらにあまりいらっしゃらないことは、商いの仕方からいたしまして、貴女にもお分かりでしょう。でも、信頼を寄せられるような人を住まわせておられるのは疑いございません。ですから、あそこなら、貴女もお従兄弟さんが戻られるまで、多分安全に過ごしていただけるはずです。お従兄弟さんにすぐお手紙を出されても不都合はないものと存じます。どのような文面になさるべきか、私から示唆するわけにはまいりません。それは貴女ご自身の分別に委ねられねばならないことです。二人の男性が衝突したりいたしますと一体どうなるのか、きっとそのことがご心配でしょうからね。

ただ、こういったことすべてにも拘わりませず、また、貴女をあの男の元から無事に救い出すことが確実だといたしましても、あの男とすっかり折り合いをつけられて、明日にも結婚なさるというのでしたら、やはり許して差し上げようと考えております。でも、タウンゼンド夫人との関わりで考えつきました計画は進めて行くつもりです。見通しに変化が現れたようですし、「不幸せとは申せないような時を、まるまる二十四時間過ごした」とのことですから、計画を実行に移す必要がなければ宜しいのに、とは思っておりますけれどね。これほどの女性にとりましての求婚期間ですのに「これを求婚期間などと呼ばなければならないのでしょうか」、何という惨めな慰めなのでしょうね。どうしても怒りが込み上げて来てしまいます。どうか、一言述べさせてくださいね。貴女が完全に独り立ちなさった暁には、これまで筆にいたしましたこととは一切関わりなしに、ラヴレースとかソームズとかの奥様になるくらいでしたら、世の中のどんな男と一緒になられましても、そちらのほうがまだしもだと、そんな気持ちに駆られてしまうのです。

思い出したところですが、タウンゼンド夫人にはご兄弟が二人おりまして、それぞれ船を一艘お持ちなのです。夫人とご兄弟は同じ利害で結ばれておりますから、必要な場合には、全乗組員が挙って貴女のために身を挺してくれるなんてこともなきにしもあらずでしょう。もしも、ラヴレースと手をお切りになるような原因をあの男のほうから拵えるようでしたら、ハーロー邸の人たちへの慮りは一切お捨てになることです。ご自分たちのことは、互いに注意をなされば良いのです。これまでもしてきたことですもの。法律の力を借りれば身の安全は図れるでしょう。あの恥知らずは暗殺者などではございません。闇に紛れて人殺しをするような男ではないのです。恐れを知らないからこそ、公然と敵対して見せるのです。仮にもあの男が、世の掟からいたしまして爪弾きになるような真似を何かしたりいたしますと、逃亡するか吊るし首に遭うか、いずれにいたしましても同じことですが、貴女にとりましては、きれいさっぱりと厄介払いが出来ることになるのです。

ラヴレースさんと二人のご婦人との間で交わされました会話を、折よくお耳になさるに至りましたいきさつにつきまして、あのように詳細にご説明くださらなかったなら、この話し合いは、貴女のお耳に入れるために、意図的に仕組まれたもののように考えていたことでしょう。

ラヴレースさんの申し出をヒックマンさんにお見せしました。ヒックマンさんは、お兄様が亡くなられる前は法律家を目指しておりましたから、リンカーンズイン法学院に所属していたことがあるのです。この時ばかりは、いかにも得意げで、偉そうに勿体ぶっておりました。そして、「じっくりと考えてみたいですね　…　宜しければ、家に持ち帰りたい

のですが　…　十分に検討を加えてみましょう」などと、これに類した台詞をあれこれしきりに並べるものですから、私ももう我慢が出来なくなりまして、腹立ち紛れに書類を奪い返してしまいました。

「いやはや、そうまでご立腹とは。失礼ながら、熱心さゆえのことでして　…　」

「えゝ、心得もなしに熱心なのですわ」　私は言ってやりました。「他の熱意も大抵はそんなところでしょうね。すぐに思い浮かぶ異論がないのなら、問題はないのです」

「貴女もずいぶんせっかちですね、最愛のマダム」

「貴方のほうはずいぶんのろまなのですね、愛しくないお方」と言っても構わなかったのです。でも、「まあ、歯向かうおつもり」と言わんばかりの表情で、「勿論ですわ」と言ってやりましたわ。

あの人は詫びておりました。異論はまったくないというのですからね。ただ、許してもらえるなら、もう一度　…　と言っておりました。

「もう結構よ。結構ですわ。母に見せようと思ったのです」　私は申しました。法学院にいたわけではございませんが、この手の問題につきましては、のらくらと暮らしております怠け者たちの半分よりは、母のほうがよく心得ているのです。それも、一目で分かるのです。ただ、私たちの間で続いております文通のことを打ち明けるわけですから、母は怒り出していたでしょうね。

それはともかく、契約条項を作成し、清書してもらうことですわね。そして、それに基づいて式をお挙げになるのです。そうなれば、それ以上申し上げることはございません。

申し添えますが、例の船乗り風情が私のキティを抱き込もうとしております。賄賂を使ったのですが、貴女の宛先を探り出そうというのです。今度来た時には、捕まえさせるつもりです。そして、何も引き出せないようでしたら、その男を養魚池の中でも一番深いものに突き落とし、引っ張り回すよう言ってやりますわ。私の召使を堕落させようとしたのですもの、正当な指図でしょうね。

この手紙はすぐに発送いたします。でも、もう一通お届けするつもりです。母と私、それに、アントニー叔父様のことだけを話題としたものです。貴女の見通しもこれまでよりは希望の持てるものとなっておりますから、この際、貴女に笑みを浮かべてもらいますよう、骨折って見ようと思うのです。実は、ご承知いただきたいのですが、母があの胡麻塩頭のお馬鹿さんから正式の申し出を頂戴したのです。色好い返事をするようですと、母自身にとりましても、贈与財産に精通しておりますのが役立つことでしょう。

貴女の見通しがますます望ましいものになりますよう、お祈りいたします。

貴女のアナ・ハウ

手紙　三十一

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

五月二十日、二十一日　土曜日、日曜日

それでは、お約束の話をいたしましょうね。これからお示しするものの原文［実際にこのとおりなのですが］をどのようにして手に入れたか、お尋ねになってはいけません。母

のほうでも、叔父様のお手紙のある部分につきましては、どうしても読んでくれようとはしないのですからね。私のことを手厳しく扱っておりまして、これで、叔父様も私の慈悲をお求めになる資格はなし、という箇所なのです。それに、母は自分の書いた返事の中でも都合の好いところ以外には、聞かせてくれないのです。母もわざわざ返事を出すような真似をしたのですよ。もっとも、お断りの返事ですけれどね。ただ、その断り方というのが、年を取った男やもめでもなければ、後家さんなどに言われて、おとなしく引き下がるわけには行かないような代物だったのです。

続いておりましたなら、きっとそうなっていたはずなのですが、こんな見掛け倒しな求婚のことを知った人でしたら、私は別にいたしまして、だれだって進行して行くのを喜んだことでしょうね。それに、生意気な娘のことがなければ、多分お話は進んでいただろうと思うのです。そうなりますと、私の優しいお母様はそのお陰でおそらく十才は若返っていたことでしょう。そして、そのようなことがこの私に容認出来ればの話ですが、私のほうは実際よりも十才は歳を取っているように母から扱われたことでしょうね。と申しますのも、いかにもありそうなことですが、「ねえ、おまえ、私たち未亡人にしても、どうやって男の方たちを突き放しておくか、判りかねるところがあるのよ。苦しい思いをさせようというのだけれど、愛情を確かめるためですよ。助言してちょうだいね、おまえ。惨い女になるよう教えてちょうだい。でもね、惨くなり過ぎてもいけないのだわ。熱が冷めてしまうほどにはね。確かに、無駄に出来る時間などない人ですもの」といった話になっていたことでしょうからね。そして、ヒックマンさんに対する私の振舞いが今よりはお気に召して、母のほうでも、娘の真似をして反り返って見せるというわけですわ。

とっくの昔に忘れてしまったものを取り戻そうと、あれこれ演じる姿を目にいたしましたなら、私たちもどんなにか楽しめたことでしょうね、本当に。アイルランドの人たちの言い方(二九)ですと、「出会ってしまった前に」ということでしょうが、もしも、そんな具合に二人の仲を引き裂くことが間違いなく私に出来るのでしたらね。ただ、動産一切を自分の掌中に収めている未亡人の好きにさせておくわけにもまいりません。年寄りの独身者に言い寄られているのです。申し分のない物件を所有しておられますし、母の財産を調べました上で、それに一万ポンド上乗せした額を遺贈しようと申し出、おまけに、注目に値する母の持ち物すべてにつきまして、自由にいたしますのを許そうと言っておられるのですからね。と申しますのも、おいおい気づかれることでしょうが、叔父様のお申し出の内容というのは、まさしくこのとおりなのです。

老いぼれトリトーン(三〇)の求婚の手紙は、その宛名書きからして、書き手の特徴が表れておりますわ。「愛すべき、しかして、当然なる称賛の的たる［ほら、こうですもの］、ミセス・アナベラ・ハウ未亡人様へ」というのですからね。最後の言葉は、おそらく、男の方への「…殿」のように、敬語のつもりで添えられたのだと思います。あるいは、アナにベラを付けただけでは、意中の人と嫁ぎそびれている娘とを区別するには十分でないとでも考えたのでしょうね［自惚れた小娘ね、とおっしゃるのは分かっておりますわ］。これに続いて、「謹んで本書をもって証す」とあります。察するところ、覚書のつもりで書き留めたのでしょうね。片足を後ろに引いて会釈をし、見事な仕草で差し出そうというのですわ。おそらく、ご自分で手渡すおつもりだったのでしょうからね。

それでは、傍でお手並みをご覧願います。

老海神の登場

頭に海草を飾り、ザルガイの殻で出来た冠を戴いております。ロビンソン夫人のお宅のおかしな岩屋に飾り立てられている、あの姿ですわ。

五月十五日　月曜日

奥様へ

結婚は断念すべく、十年前、小生はある種の決意を固めたのであります。裕福なことこの上ない暮しを送る …… この点にご留意いただきたいのですが …… よその家族を拝見いたしますに、小生には堪えることの出来ないいかがわしさを見出したのであります。そして、兄の家族のため、就中、その内の一人の子供のため、独身を通すことに十分満足していたのであります。ところが、当の娘が我々一同を掻き乱すことになってしまったのであります。小生自身の安寧を犠牲にして、何故に感謝もせぬ者のために己を殺さねばならぬのか、小生には分かり兼ねるところであります。

小生自身および一族に由来する動機といたしましては、以上のとおりであります。しかし、さらに筆を進めますのは、親愛なるハウ夫人ゆえのことなのであります。

神への感謝を込めて申すわけですが、小生、莫大なる資産を有しておりますが、そのすべて、あるいは、その大部分を、独力にて築き上げたのでありまして、この点にはご留意いただかねばなりません。何しろ、小生は三人息子の末っ子なのであります。有難いことには、貴女様も立派な地所をお持ちですし、自らつましくすることに努められ、また、賢明なる管理の手腕によりまして、その価値を高めてこられました。話題を中断し、一言述べさせていただきますが、つましさというものは、この人の世におきましては最大の美徳の一つであります。何故ならば、それにより我々はすべての者を公正に扱うことが出来ますし、また、ある者には、その分に応じて恩恵を施すことも可能となるからであります。

貴女様はお子さんが一人きりですし、小生は独身ゆえ、子供一人持ったこともありません。これは、独身者のすべてに言えることではないのです。それゆえ、お嬢様にとりましてもなおさら好都合というものでしょう。お嬢様が小生の気性に合わせてくれるならの話ではありますが、小生は、とりわけ身分の等しい者相手の場合には然りですが、不機嫌な人間だと思われたためしはかつてないのであります。召使につきましては、こちらの気持ちのままに怒りを向けて何らの問題もないのです。連中は怒りを耐えるため給金を受けているのであり、また、怒りを受けて当然なことがあまりにも多すぎるのです。これは、これまでにも度々、我々が互いに話題としてきた点であります。また、さらに言えば、召使というのは、我々が距離を置かずにおりますと、馴々しくしてくるものなのです。日頃より小生は、理非はともかくとして、咎め立てをすることにしてきましたが、咎め立てをするいわれがなくなるようにとの考えからであります。概して若い娘と召使というのは（尊敬すべきソームズ氏も述べているところですが）、愛情よりは恐怖を与えたほうが、うまく手なずけ易いものです。ただし、召使を相手とした時の小生のこの気性は、勿論、貴女様とかお嬢様とかに影響を及ぼすものではありません。

貴女様には極めて有利な贈与財産を設定する所存でありますが、一般の知人ならばだれにせよ、そのように判断することでしょう。ただし、小生の生存中は、すべて小生の自由

にさせていただかなくてはなりません。そうするのが、奥様もご存じのとおり、夫にとってと同様、妻の信用にもつながることだからであります。

言葉を飾るつもりはありません。我々も子供ではないのです。もっとも、子供に恵まれるなら幸いとは思うのです。と申すのも、神を称える所以でありますが、小生いまだ五体壮健でして、航海に出ようと旅に出ようと、出発時の健康を損ねて戻ったためしは一度としてないのです。その手の男でなかったことは断言いたします。ただし、次の点は請け合うこととといたしましょう。つまり、貴女様のほうが長生きをされた場合には、最低一万ポンドの増収をお約束するということであります。逆の場合、小生にいかなる利益がもたらされるのか、それは、貴女様へ寄せる小生の愛情をどのようにお受け止めになるかによることでありまして、ご一存に委ねる所存であります。

ただ、奥様、一つ希望があります。漏れ伺いますに、ハウ嬢はまもなくご結婚とのことでもありますゆえ、お嬢様は我々と同居することなく［この点はお嬢様がお知りになるに及ばぬことです］、ヒックマン氏のお宅に住まうようにしていただければ、ということであります。また、当然のこととは申せ、我々両名に対し孝養を尽くしてもらえますなら、お嬢様にも得るところがあるものと存じますが、これは前にも申し上げたとおりです。

小生の財産も奥様ご自身のものも、すべての管理は奥様にお願いすることといたしましょう。小生は土地の問題には不案内なのです。異議を唱えることもありましょうが、それはすべて、お身体に触るほど無理をされていると考えた場合であり、ひとえに愛情ゆえのことであります。

冬の夜長などに、経験豊富な男が傍らに座り、数々の異郷の物語や、その男が交わった様々な国民の習俗をお聞かせいたしますのは、貴女様にとりましても大いに楽しみなことと考える次第であります。また、小生はご婦人方が愛好するインド産の見事な珍品を所持しており、中には、申し分なかった頃の姪のクレアリーでさえ目にしたことのないものもあるのです。これらの品が、親切にしてくださるごとに（その点につきましては、小生も思いやりを忘れぬつもりでおりますゆえ、何らの疑いも抱いておりません）、一つまた一つと、すべて奥様のものとなるのです。時として機嫌を損ね、つむじを曲げたり癪に触ることをおっしゃったりする、才気に走り過ぎた娘さんと顔を合わせておられるよりは、はるかに愉快な娯楽となりましょう。娘というのはそんなものですし（とりわけ、一人前の女になるとそうだと、奥様がしばしばおっしゃるのを耳にしております）、両親のことを、その年齢に見合った敬意を払いもせず、年寄り扱いをするのです。奥様の場合がそうでありますが、連中が鼻たれの青二才であることにはいささかの疑いもないのにです。小生の言わんとするところは、奥様、お分かりいただけるものと存じます。

小生自身といたしましては、小生同様の経験を積まれたご婦人と、楽しく馬車で一巡りかそこいらいたしました後に帰宅し、唯一つの関心事を分かち合いますことは大きな幸せでありますし、考えるだに悦ばしい限りであります。つまり、様々な収益を、また、当該の一日、当該の一週間がもたらしましたものを、一緒に勘定することとなるのです。こうして愛も育まれることでしょう。途方もなく深まって行くはずです。奥様をお慕いするのにこれで十分ということはないでしょうし、また、小生の愛情も、そのすべてをお示しすることは不可能と確信している次第です。

口頭でお伝えいたしました際には即答を避けておられましたが、奥様、小生といたしま

しては、この書き認めました申し込みに対し、一行なり二行なりのお返事も拒まれるような、そのような生娘の如きお上品振りや、はにかみとでも申せそうなものは、我々二人だけの間では（はにかんでお見せになるためでしたら）無用にしていただきたいのです。拝察いたしますに、お嬢様がすぐ近くにおられたからでしょう。奥様は辺りを見回しておられましたが、いかにも盗み聞きをされたくないとのご様子でした。それゆえ、書面にしようと決めた次第であります。この書面が小生の高潔なる意図を保証する記録となりましょう。と申しますのも、この点にご留意を願いたいのですが、小生はラヴレースに類した人間などでは断じてなく、紛れもない、正真正銘の、率直かつ忠実なイギリス人なのであります。従いまして、小生のこの申し込みを無視なさることなく、一行なり二行なり筆をお執りくださるものと考えております。小生といたしましては、間違いなく、それを大いなる名誉と受け止めますし、また、誇りともする所存であります。この上、何を申し上げることが出来ましょう。奥様は自由の身でありますし、小生とて同じ立場です。そして、何卒ご留意いただきたいのですが、今後とも自由に振る舞っていただく所存であります。奥様ほどの思慮分別と経験を備えた女性には、それが当然のことでありましょうから。

長い手紙となってしまいました。しかし、内容からいたしまして、やむを得ないことでもあります。小生といたしましては、一度にて済むことを二度書き認めますのは気が進まず、意味するところ、意図するところを一度でご説明いたしたかったからであります。

まるまる二ヶ月近く、筆を執ろうと心掛けてはおりましたが、どのように書き始めたものか、（この手のことには不慣れでして）分かり兼ねていたのであります。さて、奥様におかれましては、何卒小生にご厚情を賜りますよう、お願い申し上げる次第であります。

貴女様の謙虚この上なき恋人にして、

従順なるしもべ

ANT. ハーロー

いかがです。見事な求婚の手紙ですわね。私のほうから一言付け加えさせていただきますが、母に向かって私のことを言いたい放題のこの忌まわしい色男に対しまして、もしも今、あるいは、今後とも、私が無愛想な態度を取るといたしまして、貴女がそれに愛想を尽かすようでしたら、貴女が注がれる愛情の中で、私は特別扱いをしていただいてはいないものと考えることにいたしますわ。私はそうしているつもりですけれどね。

ところで、どちらを先にお話ししたら宜しいのでしょうか。優しいママの返事のほうでしょうか。それとも、恋文を受け取ったのを教えてくれました際に、独り者の母とその小生意気な娘との間で交わされました会話のほうでしょうか。

会話のほうを先に聞いていただくことにしようと思います。でも、一つだけ前置きさせてくださいね。無遠慮なことを言い過ぎると思われるかもしれませんが、貴女の叔父様とか私の母のこととかを書いているのだとはお考えにならず、どこのだれということではなく、年老いた恋人同士というものについて記しているのだとお考えいただきたいということです。目上の人たちが先にご自分たちのあるべき姿を忘れてしまうようですと、子供たちの心から尊敬の気持ちが消えてしまうことが多くなるものなのです。いかがです。真面目な言葉でしょう。ですから、お好きなようにお使いになって構いませんわよ。

それでは、ひとつご想像願いますが、母も三度目に入ってまいりました時には（控えの

間に二度私を訪ねて来まして、ひどく意味ありげな顔付きをして、唇は今にも勢いよく開きそうですのに、やむなくといった様子で依然閉じたまま、肺までは決して届かないような軽い咳払いを言葉に代えまして、二度とも帰って行った後のことです)、前よりも覚悟が出来たのでしょう、私の横に腰を下ろしますと、次のように話し始めたというわけです。

母　：　「貴女と話し合っておかなければならない、とても大事な事柄があるのよ、ナンシー。私たちだけの事に耳を傾ける気持ちになってくれて、私たちとは関わりのない事ですっかり心をお留守にするようなことがないのならですけどね」

ずいぶんと身勝手な話ではないでしょうか。ただ、私といたしましては、友情、感謝の念、そして、慈愛の心こそ、私たちにとりまして最も本質的な関心事と見なされねばならない事柄のように考えていたのです。でも、言葉尻をあげつらうのは止めにいたします。

娘　：　「今だって耳を傾けたい気持ちよ。ママがお話しになりたいことなら、どんなことでもだわ」

母　：　「あのね、お前　：　あのね、貴女　：　［母君のお顔がとてもふくよかに見えましたわ。とてもつややかで、とても輝いているのです］　まあ、全身これ耳といった様子ね、ナンシー。でも、驚いちゃいけませんよ。気を揉むことはありませんからね。私ね、私　：　あらあら、どこかしら［でも、心臓のすぐ傍にあったのです。そんなところに何かを忍ばせたことなど、これまでなかったのです。ですから、見つけるのに何の苦労もいりません］。私、お手紙をいただいたのですよ、貴女［母の胸からその手紙が出てまいりました。でも、母はそのまま手に握っているのです］。お手紙をいただいたのですよ、お前。そう、そうですよ、紳士の方からですよ、勿論」［母はつんと頭を反らし、笑みを浮かべておりました］。

こんな不意打ちを娘が面白がるはずないでしょう、まだ先がありそうだし、と私は思いました。母も小出しにして明かすのが楽しみなのでしょうけれど、そうは問屋が卸しませんからね。

娘　：　「きっと、アントニー・ハーロー様からでしょうね、お母様」

母　：　［唇をきゅっと結んで、目を上げながら］「そうなのよ、あなた。言わないわけには行かないわね。でも、一体どうしてアントニー・ハーロー様だと思ったのかしら」

娘　：　「他に思い浮かぶ人などいませんでしょう、お母様」

母　：　「他に思い浮かぶ人など、ですって　：　［むっとした口調で、顔を引っ込めながら言っておりました］　でも、何のお話か分かっているの、ナンシー」

娘　：　「切りだし方で分かりましたわ、お母様。だって、訪ねて来られるのには動機が二つあるに違いないと睨んでおりましたもの。両方とも私には同じくらい嬉しいものですわ。あちらのご家族の皆さんからは、私、とても好かれておりますから」

母　：　「そういうことなら、皆さんとは仲良く出来るでしょう。でも、私は［立ち上がりながら］こんな目に遭うわけね。お父様そっくりだわ。心を打ち明けることは一度だって出来ませんでしたからね、お父様には」

娘　：　「御免なさい、お母様。是非打ち明けていただきたいわ、私には。私ね、ハーロー家の人たちのことは好きじゃないの。でも、お願い、許してほしいのよ」

母　：　「本当に苛立ってしまいますよ、お前の出過ぎたところには」［腹立たしげな様

子で、また腰を下ろしました」

娘　：「精一杯おとなしく伺うわ。あの人のお手紙、読ませていただけるのかしら」

母　：「そのことで相談に乗ってもらいたかったのよ。なのに、お前ったら、本当に妙な子なんだから。いつだって、人が口を開きもしないうちから、答えようとするのですからね」

娘　：「許してくださるでしょう、お母様。でも、どなたもが（あの人もその一人ですけど）ご存じのことと思っていたのよ、私。再婚には反対だと、お母様がいつも明言なさっていたことは　…　」

母　：「そのとおりですよ。でもね、その時の気持ちから出たことですよ。事と次第によっては　…　」

私は目を丸くしました。

母　：「あら、びっくりしないでよ。別に私は　…　そんなつもりじゃ　…　」

娘　：「ないのでしょうね、多分。今のお気持ちではね、お母様」

母　：「小癪な娘だこと［と、再び立ち上がりました］。喧嘩になってしまうわ、きっと。到底　…　」

娘　：「もう一度謝りますわ、大好きなお母様。黙ってお聞きします。お願い、お母様、お席に戻っていただきたいのよ、お願い［母は腰を下ろしました］。お手紙を拝見して宜しいかしら」

「いいえ。お前の気に入らないことが少し書いてありますからね。好ましくないものとして通っているようね、お前の気性は。でも、お前が困るような悪いことは何も書いてありませんよ。それどころか、あの人のご意向に沿ってくれれば、報いてもらえそうなお言葉もありますよ」

私のことを気難しいと考えるような人は、ハーロー家の人たちを別にすれば、どこにもいない、と私は申しました。それに、とても気立てが好いと世間中から認められている方にあのような仕打ちをする人たちですもの、あの人たちがそんなふうに考えても、私は満足だ、とも言ったのです。

ここで少し言い合いになりましたが、最後には、母も手紙の一部を読み聞かせてくれました。ただ、滑稽極まりないとは申しませんが、それでも、澄ました顔でいるわけにもまいりませんでした。特に、〈五体壮健〉のことに触れた部分に来た時がそうでした。母はその箇所で一息入れておりましたが、何故なのかは母が一番よく分かっていたことです。でも、すぐにまた続けました。

母　：「それじゃ、ナンシー、お前の考えを聞かせてちょうだい」

娘　：「いいえ、お母様、お母様のお考えを聞かせていただきたいわ」

母　：「私が期待しているのは答えですよ。質問を返してもらおうなんて思っておりません。自分の考えを口に出すのに、そんなに尻込みするなんて、これまでのお前にはないことだわね」

娘　：「お母様のご命令とあれば、そんなことはありませんわ」

母　：「じゃあ、すぐに話してちょうだい」

娘　：「お手紙のすべてを聞きもせずにですの」

母　：「これまで聞いたことについて話してちょうだい」

娘　…　「じゃあ、申しますけど、お母様、そんなお話に乗るようでしたら、私のお母様のハウ夫人じゃなくなりますわ」

母　…　「驚いたわ、ナンシー。お前の厚かましさには」

娘　…　「私が申したいのは、お母様、そうなると、私のハーロー・ママになってしまわれるということですわ」

母　…　「おやおや。でも、ごまかされませんよ」

母は顔を赤くしたり青くしたりしておりました。

娘　…　「あゝ、お母様［でも、実際、ハーロー家の人は好きになれないのです。私はそれが言いたかったのです］、私はお母様の子供ですし、お母様が何をなさろうと、やっぱり、お母様の子供であることに変わりはないんです」

母　…　「すごく生意気な子供なのは確かだわ。どこの母親にとってもね。私が何をしようと、私の子供であることに変わりはないですって　…　それじゃあ、避けられることなら、なりたくないと言ってるのと同じじゃない。仮に私が　…　」

娘　…　「どうしてそんな考え方を私がしたりするでしょう。確かにでしゃばったことですわ。もしも、申し込みの件をお母様がどう考えておられるのか、知りもしないでそんなふうに考えたのでしたらね。それに、大変有利なお話ですしね」

母　…　「［少し落ち着きを取り戻した感じで］えゝ、そうよ。一万ポンドが　…　」

娘　…　「それに、お母様のほうが長生きするのは確かですし」

これには、母も少々たじろいでおりました。

母　…　「確かですって。確かなことなどだれにもありませんよ。ただ、もしかしますと　…　」

娘　…　「それはありませんわ、お母様。あの人の体質のことについて、何か読み上げようとしていましたわね（お止めになったけど）。節制しておられることはよく知られておりますわ。そうよ、お母様、航海に出ていろいろな気候の国々を訪れた後、穏やかな土地で気苦労から解放されようと故国に戻って、節制に努めているこの種の男の人たちというのは、この世でも一番長生きをしそうな人たちですわね。お母様はお気づきにならないのかしら。あの人の肌そのものがなめし革の防具みたいになっておりますのを」

母　…　「妙な子ね」

娘　…　「絶対にいやですわ。だれにせよ、私の敬愛する人が、死別を期待して男の方と結婚するなんて。だけど、もしかしてお母様、お母様のお年頃で　…　」

母　…　「私の年頃で、ですって。驚いたわね。私の年頃が何だというの、本当に」

娘　…　「老けてはいないということですわ、お母様。そして、老けてはいないからこそ、危ないことになるかもしれないのよ、お母様にとっては」

嘘なんかじゃありませんよ。母が笑みを浮かべたのです。まんざら悪い気はしないという態度になりました。

母　…　「そういうことならね、おまえ、そういうことなら言っておきますけど、私としては（時々はつむじ曲がりなところのあるお前だけど）、お前の損になるようなことは決してしないつもりですよ」

娘　…　「あら、そのことでしたら、お母様、お気持ちの済むようになさるのを少しでも我慢していただこうなどとは思いませんわ」

母　：　「まあ、気の済むようにするですって　：　気が済むようなことになるとは言わないわ。ただ、何かお前のために出来ることがあれば、という気持ちからなのでしょうね、きっと。この件について一度話し合っておこうと思うのは　：　」

娘　：　「私の財産でもすでにお相手よりも多くなるということなのでしょうね、ヒックマンさんと結婚するとしましてね」

母　：　「どうしてかしら。ヒックマンさんは十分な財産に恵まれていますよ。貴女と結ばれるのに相応しいだけのね」

娘　：　「お母様がそうお考えなら、それで十分ですわ」

母　：　「だれかが亡くなられるのを望んだりして、自分自身のことが嫌にならないわけではないのですよ。でも、お前も言うとおり、アントニー・ハーロー様は丈夫なお方ですし、長生きなさるのは確かですからね」

おやおや、これを難点と考えたら良いのか取り柄と受け止めたものか、見当もつかないわ、と私は思いました。

娘　：　「失礼ですけど、お母様　：　」

母　：　「何を言いたいのかしらね、この娘は」[何を言われるのかと、半ば心配そうな顔付きをしているのです]

娘　：　「ただ、あのような年配の方と結婚なさると、そのお年でお守りをなさる機会が、一つじゃなくて二つになるということだけですわ」

母　：　「いやらしい子ね」

娘　：　「あら、お母様、申し上げたいのは、こういう丈夫なお年寄りは、あっという間に長患いに罹ってしまうことが時々あるということだけですわ。それに、私のつまらない考えですけど、お年を召してから身体が衰えますのは、元気でいるほうの人の心の慰めとなりますような、楽しかった頃の思い出にも乏しい場合ですと、あまりにも心もとなく耐え難いものだと思いますわ」

母　：　「妙な子だこと。ちょっと前には、あの人の丈夫な体質を難点にしていたというのにね。でも、これはいつも言ってきたことだけど、お前は、言い争いの相手にするのにはわけを知りすぎているか、それとも、知らなさすぎて私には我慢がならないか、そのどちらかなのよ」

娘　：　「これは言わずにおられませんけど、今度アントニー・ハーロー様がいらした時には、お母様、私のほうではどう振る舞ったら宜しいのか、お指図をいただければ嬉しいですわ　：　」

母　：　「どう振る舞うですって　：　あら、この次いらした時に蔑んだ態度で引き下がるとしても、ここしばらくお前がやっていたことをするだけの話でしょう」

娘　：　「それじゃあ、またいらっしゃるご予定なのね、お母様」

母　：　「そうだとしたら、どうだというの」

娘　：　「私にはどうしようもないことですわ、お母様。それがお母様のお気持ちなのでしたらね。あの人は、素敵なお手紙の返事に、お母様から一言ご所望ですわ。いらっしゃるとしたら、その一言に沿ってのことなのでしょうね、きっと」

母　：　「そのずる賢い小生意気な流し目は止めるのです、この子ときたら。我慢ならないのは知ってるでしょう。お前がこのお話についてどんなことを言うか、聞いてみたか

ったんですよ。お返事はまだですけど、間もなく書くことになるでしょうね」

娘　：　「あの人の一度目の申し込みに手紙でお返事をなさるなんて、本当にご親切なことですわ（あの人もそう思ってくださると良いですね）、お母様。（一度で済むことを二度書き認める）のでは、お気の毒ですもの、あの人にとりましても」

母　：　「そんな手を使っても、私が何を書くつもりなのか、お前には教えませんからね。生意気すぎますよ、言い方が」

娘　：　「多分、お考えは推測出来ると思いますわ、お母様。そうするのが私に相応しいことでしたらね」

母　：　「多分、私はどなたにもヒックマンさんの二の舞いをさせたりはしないでしょうね。敬ってくださると、ますます虐待するようなことをしましてね」

娘　：　「多分、私もしないでしょうね、お母様。もしも、あの人の敬い方が気に入るようでしたらね」

母　：　「お前の言いたいことは分かりますよ。でも、多分、お前次第でしょうね。私がハーロー様に耳を貸すか貸さないかはね」

娘　：　「若い男性というのは、人生まだまだ先があることでしょうから、慌てて奥様を求める必要はございませんわ。お気の毒に、ヒックマンさんには最後まで頑張っていただくか、それとも、自分で救済策を講じていただかねばなりませんわね」

母　：　「あの人は、男性なら当然と思われているものよりももっと耐えておられるのですよ、お前のことでは」

娘　：　「だといたしますと、そんな目に遭って当然なわけが、あの人のほうにおありなのではないでしょうか」

母　：　「腹の立つ子ですね、お前も」

娘　：　「一つだけお願いしたいことがありますわ、お母様」

母　：　「子の務めに適ったものなのでしょうね。さあ、何なの」

娘　：　「お母様が結婚なさるのなら、私のほうは独身で通すのを許していただきたいということですわ」

母　：　「ひねくれた子ですね、まったく」

娘　：　「こんな条件をお断りになるだろうなんて、どうして私に考えられますの、お母様。一万ポンドなのですよ。最低でも一万ポンドですからね。とても素晴らしいお申し出だわ。一つずつくださるという素敵な品物も沢山ありますしね。許してくださいね、大好きなお母様。この男性をからかいますのは、お母様への孝養心に欠けることだと、そのように思われてしまうほどには、まだお話は進んでいないものと思いますもの」

母　：　「はっきりしているわ。あの人をからかう気持ちも私への敬いの気持ちも、出所は一つだということね」

娘　：　「そんなつもりじゃありませんわ、お母様。でも、一万ポンドは　…　」

母　：　「決して悪くはないお申し出ですよね」

娘　：　「えゝ、そう思いますわ、私。気前の良さでは、お母様、お母様にも後れを取っていただきたくないですわ」

母　：　「あの人のほうが長生きされましても、私のお陰で一万ポンド財産が増すということにはならないでしょうね」

娘　：　「そうですわね、お母様。あの人もそんなことは期待しておられないでしょうね。お母様には娘がおりますもの。それに、あの人は独り者で、お子様がいらっしゃいませんからね。お気の毒なお爺さん　：　」

母　：　「お爺さんですって、ナンシー。独身でお子様がいらっしゃらないからといって、そんな言い方はないでしょう。お前に似つかわしいことですか」

娘　：　「そんなつもりでお爺さんと言ったのじゃありませんわ、お母様。でも、半分ですね。五千ポンドでしょうね。お約束なさるのでしたら、それ以下ということは有り得ませんわ」

母　：　「じゃあ、その金額なら同意してもらえるのね」［まるで、鬱憤ばらしをしようという顔付きでした］

娘　：　「あの人の愛情にどう報いるのか、それはお母様の寛大さに委ねるとおっしゃっているのですもの、お母様、それ以下ということは有り得ませんわ。ねえ、お母様、もう一度〈お気の毒なお爺さん〉て言わせてもらいたいの。お怒りにはならないでしょう」

母　：　「こんな妙な子は見たこともないわ」と、母は顔を背けましたが、思わず込み上げてきた笑みを隠すためです［と申しますのも、私の表情が茶目っ気たっぷりだったからに違いありません。少なくとも、私はそのつもりだったのです］。「その底意地の悪い顔付き、私、大嫌いですよ。ずいぶん遠慮のない振舞いをするものですね、お前も」

娘　：　［急いで母の手を取り、その手に接吻いたしました］「あゝ、お母様、お怒りになるのは止めてください、我が子でしょう。お母様だって以前はとても活発だったと、お話ししてくださったわ」

母　：　「〈以前は〉ですか　：　寂しいわね。でも、仮にあの人に望みを持たせるようなことがあるとしても、請け合って構わないけど、お前のためにもヒックマンさんのためにも、分別のある合意を目指すつもりですよ」

娘　：　「お二人とも分別盛りになっておられますわ、お母様」

母　：　「そうね。きっとお婆さんというわけね、私も」

娘　：　「あの人のほうでも、分別ある合意を求めておられますわ。少なくとも、そう仄めかしておられますもの」

母　：　「いいわ。かいつまんでいうと、こうでしょう。私の結婚について、お前の同意は得られないということね」

娘　：　「正直に申しまして、お母様、私のほうからご結婚を願うというわけにはまいりませんわ」

母　：　「言わせてもらいますけど、もしも思慮分別というものが自分自身の幸福を願うことにあるというのでしたら、軽薄な若者連中も、お爺さんお婆さん並の分別を備えていないわけじゃないってことね」

娘　：　「あゝ、お母様、お母様がアントニー・ハーロー様と結婚なさらないよう願うのが、私自身の幸せを願うことだといたしましても、そのことでお母様は私を責めるおつもりでしょうか」

母　：　「恐ろしく機転の利く子ですね、お前も。同じくらい孝養心を持っていてくれたらと思いますよ」

娘　：　「機転よりも孝養心のほうが強いつもりですわ。でなければ、こまっしゃくれ

の上に馬鹿ということになってしまいますもの」

母　：「判断は私に任せてもらいましょう。そのどちらについてもね。両親は子供のためにだけ生きて行くのよ。子供たちがそれに見合った人間かどうかは別にしてね。子供の孝養心なんてそんなものだわ」

娘　：「お母様と私とで利害損得が分かれます場合に、私のためにお母様がご自分の便宜のほうを先へお延ばしになるとか、私を喜ばそうとなさって、何であれ、ご自分の人生の真の楽しみを増してくれるようなものを断念なさるようなことは、私、決して望んだりいたしませんわ。教えていただきたいのです、お母様。このお話をまとめることがその一つだとお考えなのでしょうか」

母　：「一万ポンドというのは、家族にとりましては大変な所得ですからね、それだけのお申し出には丁重なお返しをするのが似つかわしいと言っているのです」

娘　：「申し出じゃなくて、見込みがあるというだけのことでしょう、お母様。本当に家族を増やそうと考えておられるのでしたら、そのお金があれば　：」

母　：「ほどほどにしておくということは出来ないのね、お前は。その生意気な言いぐさは我慢なりませんよ」

娘　：「御免なさい、大好きな、大好きなお母様。でも、お爺さんのことがまた頭に浮かんだのです。いやですからね、本当に。お母様のその素敵な笑顔が見られなくなるなんて、絶対にいや」　こう言って、再び母の手に接吻いたしました。

母　：「止しなさい。図々しい子ね。怒ろうとしているというのに、また、怒って当然だというのに、笑わせられてしまうなんて、これくらい癪に触ることは他にないわね」

娘　：「でも、お母様、仮にこのお話がまとまるといたしましても、冬になる前に結婚なさるおつもりはないでしょうね」

母　：「今度は何をたくらんでいるのかしら、この生意気さんは」

娘　：「だって、あの人が申し出ておられるのは、冬の夜長に、外国の楽しいお話でお母様をもてなそうということだけですもの。お願いよ、大好きな大好きなお母様。あの人のお手紙を終わりまで読ませていただきたいの。私についてどんなことをおっしゃっていても、許して差し上げますわ」

母　：「至難の技でしょうね、きっと。どれほど分別のある人でも、難癖をつけられることのない恋文を書き上げますのはね」

娘　：「それは、手紙を認めます際にも、恋人たちは中庸を守るということがないからですわ。無意味なことを書きすぎるか、それとも、書き足りないか、そのどちらかですもの。ところで、この変人さんのお手紙を［出来ることでしたら、これからはもうお爺さんなどとは呼ばないことにいたしますわ］、お母様は恋文だとおっしゃるのですか」

母　：「えゝ、えゝ、結構よ。この件に反対なのは分かりました。お前の母親でいるわけには行かないということですね。私が結婚すれば、お前のほうは独りで暮らすつもりなのですからね。確かめてみたかったのよ。物事を考える時に、お前は寛大な心というものに従っているのかどうかをね。私は自分の気持ちに従うことにいたしますが、もしかして、それがお前の意向に沿うようなことになりましたら、これからは、今までよりはもうちょっとマシなお返しをしてもらえると有難いわね」

こう言うと、母は飛ぶようにして出て行ってしまいました。返事も待たずにです。この

申し込みについて、私がもっと快く同意を与えないものですから、おそらく、焦れてしまったのですね。母の気持ちといたしましては、お断りすれば手柄を独り占めに出来たかもしれないのですし、また、生意気な娘にもっと恩を着せることにもなるという、ただそれだけのことだといたしましてもね。

私の元を去りますと、母は、他のどの求婚者に対しましても望みを奪ってしまうことにはならないような、いかにも未亡人ふうの断り状を認めました。トニー・ハーロー様にはどのような作用を及ぼすといたしましてもね。

求婚を取り下げてくださるなら叔父様をお訪ねしても良いと、母は半ば約束したようなものですから(母の返事をご覧になるとお分かりになるはずです)、その訪問を阻止するよう意を用いますのが私の役目と存じております。そうでもしなければ、あの独り者の老人が持っております舶来品とやらは「遠来の品で、高価なものは　…　」(三)という諺もございますでしょう」、余計な物や安ぴか物、飾り立てた物ばかりを求める女心にどんな効果をもたらすか分かったものじゃありませんからね。しかも、容易にはお目に掛かれないとか、手に入れ難いというような品物を差し出されるのですからね。

ところで、叔父様のお手紙に書きました母の返事の写しを、ここで、今この場所でお読みいただきましょう。私のコメントは一切控えさせていただきます。子の務めはよく弁えておりますのでね。ですから、ここで、まったく快適とは言えなくとも、不快さも軽減いたしました現在のお立場ですし、無遠慮とは存じますが、貴女のお顔に笑みを誘うことが出来ればと願いつつ、筆を置くことにいたします。

変わることなき親愛の情と誠意とを込めまして、貴女の

アナ・ハウ

アナベラ・ハウ夫人からアントニー・ハーロー氏へ

五月十九日　金曜日

アントニー・ハーロー様

謹んで

私ども女性が、このような折、最初のお手紙にペンを取り、お返事いたしますのは、尋常ならざることと存じます。一度目のお手紙なのです。いかにも常軌を逸したことでございましょう。まるで、次のお手紙を期待しているかにも見えましょうが、そのようなつもりはございません。ただ、お申し出の件を奨励いたしますのは適当なこととは申し兼ねますが、さりとて、これほどご丁重なお気持ちをお寄せいただいておりますのに、丁重なお返事をせずに済ますいわれもないものと存じます。実際、ある方が私に関心をお寄せくださるからといって、その方が冷遇されるようなことがあってはならず、丁重な応対をお受けになる資格をお持ちなのだというのが、日頃よりの私の考えでございます。また、その点は繰り返し娘にも言い聞かせているところでございます。

男の方に対しまして、女性が前もって暴君のような振舞いをいたしますと、後になりまして、その男性の目に惨めな姿を晒すだけでございますし、決して女性の名を高めることでもないと存じます。

これは確かなことでございますが、仮に私が結婚に踏み切るといたしましても、お話以上に結構なお申し出をしてくださる殿方は一人として存じ上げません。甥御様も姪御様たちも、貴方様からのものを別にいたしましても、十分な財産をお持ちです。私の娘にいたしましても、私に頼らずとも申し分のない財産に恵まれておりますし、私といたしましては、お話のようなことになりました時には、生死にかかわらず、その財産を倍加するよう心掛ける所存です。従いまして、お話を進めましても、だれに害が及ぶ心配もないことでございます。ところが、ナンシーはそのように考えようとはいたしません。

私の承知しておりますところ、子供が精々慰めとなりますのは、幼い頃ですと、私どもに向かって思いどおりのことをいたしましても、過ちそのものに至りますまで、なすことのすべてが愛らしいということでしょう。そして、子供は大きくなりますと、両親は子供たちのためだけに生きており、子供のためには何もかも我慢するものだと考えるようになるのです。義理の父というのは、ナンシーには耐えられないものと存じます。私が義理の父親を作ろうとしているのは本心からなのだと考えますだけで、あの娘は飛び出してしまうことでしょう。とは申しましても、自分の娘を恐れているわけでもございません。それはあってはならぬこととと存じます。ただ、あの娘は亡き父親の気質を受け継いでおりまして、それがまた、まことにもって激しいものだったのでございます。それに、貴方様もお分かりでしょうが、どのようなことであれ、娘と縁を切らなければいけないとか、娘も母を断念しなくてはいけなくなるとかいったことを承知の上で、好んでそのような事態に入る者はいないのです。確かに、強く心奪われております場合は別でしょうが、幸い、それも私には当てはまらないことでございます。

私も寡婦となりまして十年の歳月を重ねておりますし、この身を縛る者は一人としておりません。また、縛られることには耐えられない人間との風評を得ているのです。従いまして、貴方様と私の場合には、このままにしておりますのが一番なのだと、本心からそう思うのです。また、そのように確信もいたしております。二人とも、使い途も分からないほどの財産に恵まれておりますから、互いのものを必要とすることもございません。それに、私の暮らし方のいずれにつきましても、釈明を求められるようなことは一切あり得ないものと存じます。

他のお嬢さんと比べましても、申し分のない娘ではございますが［実際、女の子にいたしましては分別が勝ちすぎたところがありますし、娘もそれは自覚しております］、私にとりまして、この娘が望ましくないほどに障害となっておりますのは事実でございます。絶えず咥み合っておりますのを好む人など、どこの世界におりましょう。ただ、あの娘も間もなく結婚いたしましょう。そうなりますと、同居はいたしませんので、気分の良い時にだけ出会い、そうでなければ、離れていることになりましょう。こうして、他の恋人たちと同じく、互いの一番良いところ以外には決して目を向けないようにするのです。

とは申しながら、あの娘を大変愛しておりますことはお認めいたしますし、また、おそらく、あの娘のほうでも私を慕ってくれているものと思います。ですから、あの娘の心を遠ざけてしまうような真似はしたくございません。それに、あの娘は行く先々で大層大事にされているということもございますので、女盛りの大半をやもめとして暮らしてまいりました今、貴方様にはお分かりいただけましょうが、あの娘の非難の的とはなりたくございませんし、よそよそしい態度を向けられることでさえ、忍びない気持ちなのです。

寛大なるお申し出に沿い、このように忌憚なく申し上げる次第です。私を高く買ってくださいましたこと、感謝申し上げます。このとおり丁重にお断りいたしておりますが「それにまた、もっと飾りのない言葉で申し上げました場合と変わらないほど、真剣なつもりでおります」、ご同意いただけることが分かりました暁には、お許しが得られますなら、ナンシー共々素敵な品々を拝見に伺うことがあるかもしれません。と申しますのも、舶来の珍しい品物には、私、大変な憧れを抱いているからでございます。

このような次第でございますから、時々お会いいたします際には、これまでどおり言葉を交わすだけに止めまして、お互いの幸せを願う気持ち以外には、別の想いは抱かないことにいたしましょう。そして、このようにお断りをいたしましても、その気持ちにいささかも変わるところはないものと考えております。

そうしていただけますならば、この身をいつも左記のように考えることでしょう。

感謝の念を込めまして、貴方のしもべ

アナベラ・ハウ

追　伸　お返事はいたしますが、考えるところもあり、時間は掛かる旨の言伝をロリマー夫人にお願いしてありました。従いまして、もっと早くにお便りをせずにおりました点、貴方様を軽んじてのこととはお考えくださいませぬようお願いいたします。

手紙　三十二

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月二十一日　日曜日

心が乱れに乱れ、復讐以外のことは何一つ頭に浮かばないのだ。でなければ、例の劇についてのハーロー嬢の感想を報告するつもりだったのだよ。いいかな、〈ハーロー嬢の〉だよ。貴公も知ってのとおり、ハーローという名は好かんのだ。あの女には、そして、あの女の小生意気な友達にも、とてつもなく腹が立っているところだ。

何が問題なのだよ、今度は、と訊いてくれるのか。

問題だらけなのだよ、まったく。実は、われわれが劇を観にいっている間にだが、ドーカスが、指示を受けていたし、令嬢の部屋の鍵は勿論、箪笥やマホガニーの収納箱のマスターキー、それに、控えの間の鍵やら一切を持っているものだから、方策を講じて、ハウ嬢の最新の手紙の一部を手に入れたのだよ。怠りなく見張っていたあの小娘はまっすぐに手紙のところへ向かったが、俺と出掛ける前、令嬢が手紙を一通コルセットから取り出して、別のコルセットにしまうのを目にしていたからだ。非難まじりの口調で女どもが言うところでは、令嬢としても心配になってのことなのだそうだ。俺がそんなところから手紙を探り出すようなことになっては、とな。

手紙を見つけるとすぐに、ドーカスは人目を忍ぶ連中の中から筆まめなのを三人駆り集め、サリーと自分とその連中とで、以前からの指示に従ってのことだが、俺の役に立てようと、これら呪わしい手紙の抜粋作りに脇目も振らずに取り掛かったのだ。「呪わしい」と呼んで当然だろうな、これらの手紙は。甚だしい暴言なのだ。悪意の極みだよ。このじゃ

じゃ馬娘のハウときたら　…　あの小娘の生意気な女友達が（これがまた、負けず劣らず俺のことを勝手気ままに扱っているのだが、でなければ、こんな真似をする必要などなかったのだよ）、つい先頃のように、あれだけ激しい態度を見せたのも無理からぬ話というこだろうな。俺がこれらの手紙の一通を手に入れようと一工夫した際のことだよ。

まだあの若さで、健全な体質に恵まれ、眩いほどの健やかさなのだ。キラキラと瞳が輝くのを見ると、将来の見込みは極めて明るく、胸は希望に満ち溢れているのだよ。俺としても思い知った次第だが、こういう美女が、それも、自ら警戒心を働かせ、あそこまで完璧に防御を固め、あそこまで懸念を抱くなど、有り得ないことだと確信していたのだ。

輝きを湛えた瞳というのは、ジャック、詩人どもが力の限りを尽くして賛辞を述べようとも、心の中に悪党が住みついていることの、少なくとも、入り込む余地があることの確かな証なのだよ。

貴公がその説教を続けようと、また、M卿が例の諸国民の叡智とやらを並べ立てるとしても、彼女をモノに出来るのは間違いないと、今では以前にもまして確信している。そして、今、復讐心が燃えたぎっているのだ。この胸の恋情と手を組めば、いかなる抵抗といえども崩れ去るに違いない。また、天地神明にかけて誓おう。ハウの小娘にも一端の責任は負わせるつもりだ。

ちょうど今、もう一通手紙が届いたところだ。敵意に満ちた例の小悪魔からだよ。この写しも急ぎ確保しようと思う。他のと一緒にされるようならな。実は、小癪な美女が午前中礼拝式に出るつもりでいるのだよ。こう考えてしかるべき節があるのだが、敬虔な気持ちからというよりも、制限とか抑制とか、あるいは、俺のお供とかいったことなしに外出出来るのかどうか、そいつを試してみたいのだな。

∴

∴

彼女との朝食は断られてしまった。実際、昨夜は少々ご機嫌斜めだったが、劇から戻ると、寝るまでの間、女たちの客間で連中や俺と過ごすよう無理強いしたからだよ。一時近くまで居残らねばならなかったのだ。翌日はまるまる自分のものにしたいと、別れ際に言っていた。その時はまだ、俺も例の抜粋には目を通していなかったのだよ。だから、こちらとしては、あくまでも愛情を込めた恭しい態度で畏まり、慎みを守っていた。新たな方針に踏み出す決心を固めていたし、もし可能なら、警戒心や猜疑心などは彼女の心からすべて消し去ってやるつもりだったからだ。だが、これまでの彼女の疑り深さをひどく厄介なことと思ういわれも一切なかったのだよ。というのは、女のほうで、逃げ出すことが出来るとか、それも可能なことと考えているのに、疑わしく思っている男の元に居つづけるような場合、それは大いに望みがある証拠と考えて間違いないからだ。

∴

∴

彼女は出掛けたよ。気づかぬうちに抜け出したのだ。駕籠を呼んでいたのだが、俺自ら付き添うのを避けるためだったのだな。だが、適切な手は打ってあったのさ。同意の上でウィルが彼女に付き添っていたし、ピーターという住み込みの召使も、ウィルが呼べば駆

けつけて来られるところにいたわけだよ。
　シングルトンが及ぼす危険のことは、ドーカスの口を借りて伝えてあったのだ。俺のお供を認めてくれるのでなければ、外出は一切控えてもらおうとの考えからだ。だが、いつもどおりの、癪なほど抜け目のない答が返ってきた。劇場は二軒しかないのに、あの劇場で出会うのを心配するいわれがないのなら、教会はこれだけたくさんあるのだから、教会で顔を合わせる恐れがさらに少ないのは確かだ、というのだよ。駕籠かきたちの受けた指示は、セントジェームズ教会までということだった。
　だが、彼女にしても、あゝまで俺の意向に無頓着ではいられないはずなのだよ。俺がすでに手にしているもののことを、また、女どもがどれほどけしかけているのかということを知っていればだがね。何せ、連中はひっきりなしに不満を並べているのだよ。自分たちの振舞いにしても、世話のことにしても、窮屈な思いを強いられているし、表の家での仕事はすっかりおろそかになっている　…　自分たちのことを彼女が少しでも疑わないようにだろうが、この上品な離れには、まったくお客様も近寄れなくなっている、といった具合だ。俺の気前の良さを疑うわけではないのだが、と連中は言っている。M卿の言い回しを真似るが、自分一人のために、「何故に、実入りの乏しい麦の刈り入れに時間を掛けるのか」ということだな。
　女どもよ、そなたたちの言にも一理ある。彼女が戻り次第、すぐにも作戦開始ということにしようと思う。

∴　　∴

　ハウ嬢から今日届けられた手紙も手に入れた。陰謀に呪い、妖術に魔術と、そのすべてが進行中だ。このハーロー嬢と顔を合わせて、おとなしくしているわけには行かなくなりそうだよ。階下の妖精どもが尋ねているし、俺とて同じ気持ちなのだが、どうして夜を待つ必要があるのか、ということだな。そして、サリーとポリーも、俺が初めて二人に挑んだ時の様子を、非難がましい言い方で思い出させてくれる始末なのだ。だが、力ずくというのでは俺の目的には適わないのだよ。とはいえ、「一度屈すれば、常に従う」という、放蕩児の信条の例の部分だが、もしもそこに真理が含まれているのであれば、その手も考えられるだろう。それに、どんな女が先の問いに肯定的に答えるというのだ。

∴　　∴

　彼女は戻った。だが、俺を部屋に通すのは拒んでいるし、今日一日は独りで過ごすと言い張っている。ドーカスの考えでは、拒むのは信仰心ゆえのことだというのだが、べらぼうめ、俺と顔を合わせるのが不信心に当たるというのかな、ジャック。俺を更生させるというのは、最も信仰心に溢れた行いではないのかな。しかも、彼女がいつにも増して敬虔な気分になっている時なのだよ、俺との面会を拒むことで、それが達成されるというのかな。しかし、彼女が憎いのだ。心の底から憎いのだよ。婆さんで、不器量で、醜悪だ。しかし、これじゃあ冒瀆というものだな。ただ、ハーロー家の者なのだ。そして、その点でこそ憎んでいるし、また、憎むことも可能なのだよ。

だが、彼女に会うわけには行かないのだから［自己の意思、そして、自分の時間については、他人の干渉を許そうとしないのだよ、まったくの話］、俺の時間のほうは、入手したものの話でもして潰すことにする。

女どもが最初に目にした手紙は四月二十七日の日付だ(ア)。これに先立つ手紙は、一体どこに隠したのだろうな。この手紙では、二人の間でヒックマンがでしゃばった真似をしていることに触れている。ヒックマンなどは我が身の心配でもしていれば、それが一番なのだ。手紙の中で、あの女はこう言っているのだ。「私のノリスを送り返されましたのを後悔なさるようなことになりませぬよう、願っております。お求めがあれば、すぐにもお送りいたします」とだよ。さて、一体全体これはどういう意味なのだ。求めのあり次第、彼女のノリスを送るというのはな。ノリスなどに出し抜かれてたまるか。こういう罪のない連中が策略を用いて（つまり、「ノリス頼み」というわけだが）平気だというのなら、俺が策を弄するのも当然至極というものだ。

あの女は、ハンナが令嬢のところへ来られないのを残念がっている。仮に来られたとして、それでどうだというのだ。このような家に居るのだよ。ハンナが何の役に立つ。

一度朝食を共にすれば、手紙を交わしている両名に対して憤慨していたよ。そして、今までにも増して、令嬢を口説き落としてくれと言い張っているのだ。俺としても、ハウの小娘のことは、連中の手にそっくり委ねてやりたい気持ちに駆られたよ。一言そう言ってくれれば、実行に移して見せるぞ、ジャック。

あの女は、俺の言葉を真に受ける気持ちがハーロー嬢にあったのを喜んでいる。俺がもう一度申し込まなかったのは不思議だ、というのだ。俺のほうからすぐに重ねての申し込みがない場合には、俺の傍に留まるのは止せと助言している。俺を遠ざけておけ、馴々しい態度はほんの少しでも許すな、との警告だよ。どうだ、ジャック。分かるだろう、ベルフォード。俺の考えていたとおりなのだよ。彼女の用心深さは、すべてあの冷ややかな友人のせいというわけだ。平然と腰を下ろしたまま、あんな助言を口に出来るような友達なのだ。我と我が身の場合には受け入れられなかった助言をだ。計画を推し進めて行く上では、大いに勇気づけられるというものだよ。我が最愛の君が打ち解けてくれないのは、彼女自身の気持ちというよりも、むしろ、ハウ嬢の警告から来ていると考えるべき節があるわけだからな。だが、ハウ嬢は彼女に教えているのだ。俺自身の利益につながるというのだよ、誠意を示すことがな。利益というのだから、馬鹿な奴らさ。この娘たちには分かっていると思っていたよ。俺の場合、利益などというものは、快楽に比べればいつも二の次だということはな。

何がなんでも手に入れたいものだな。ハウ嬢の手紙が返事になっている、その元々の手紙の写しをだよ。

次の手紙は五月三日の日付だ(イ)。その中で、あの口やかましい小娘は、母親がハーロー嬢に手紙を送り、娘との文通を禁じたりするとは、と驚きの気持ちを表明している。小娘の言によると、母親に従うべきではないというのがヒックマンの意見だそうだ。まったく

（ア）第三巻の手紙六十を参照のこと。（イ）第三巻の手紙六十八を参照のこと。

の二股膏薬だな、あのおべっか野郎は。このガミガミ女は勿論のことだが、どうやら、あの男も懲らしめてやらなくてはいけないな。ちょっとした案が頭の中を駆け巡っているところだが、ほんの三十分も考えれば、はっきりとした形になるだろう。二人まとめて片付けるような手だ。俺としては、親の権威がこのように侮られるのは耐えられないのだ。このように踏み付けにされるのはな。あの牝狐の言い種を聞いてくれ。「自分と同じ考えなので、あの男も事なきを得ている。というのも、母親が挑発するものだから、だれか喧嘩相手が欲しいと思っていたところだ」と言うのだよ。ラヴレースと呼ばれるような男にしても、これ以上放埒な発言は可能だっただろうか。この娘の本性はとてつもない放蕩者なのだよ。もしも男で、われわれの一員だったならば、冒険心と根性の点で、われわれ全員の上を行っていたことだろうな。

この上ほんの少しでも挑発があれば、こっそりロンドンへ向けて飛び出すつもりでいるし、飛び出した場合には、令嬢が立派に結婚をするか、恥知らずな男ときっぱりと手を切るか、そのどちらかを確認するまで、令嬢の傍を離れないつもりだ、と言っている。写しを取っていたサリーがここで祈願の言葉を書き添えているのだよ、ジャック。「後生ですから、愛しいラヴレース様、何卒、このじゃじゃ馬娘をロンドンへお連れくださいますように……」とな。請け合っても良いぞ、ジャック。われわれのところへ来たが最後、あの女の運命を決めるのに、そう長くは掛からないはずだよ。奴の友達の場合ほどにはな。あの女も、俺が手をつけてしまえば、情け容赦のない一ダースばかりの女たちの間で、それこそとことん小突き回されることになるのだよ。我が魅惑の君の目には決して触れることのない女たちだがね。だが、この話の先はいずれまたということにしよう。

この手紙で分かることだが、俺の小癪な囚人は貴公ら下郎一人一人の人物像を描き出していたのだよ。俺とて貴公らと変わりなく、その筆先を免れてはいない。「間違いございません。馬鹿なのです」というのだよ。この身は滅びても構わないぞ。仮にも、あの二人のどちらであれ、俺を馬鹿と見るようなことになるとしたらな。「少なくとも、おめでたい人なのです」というのだよ。忌々しい小娘だな。「どう見ましても悪魔の一団で……」とある。貴公のことだよ、ベルフォード。俺様、ラヴレースには、「あの男が魔王のベルゼブルといったところで」ときたもんだ。それでいて、友達をベルゼブルに嫁がせようとしているのだからな。ハウ嬢にこれほどの罵詈雑言を許すような報告を彼女がするとは、われわれのうちのだれであれ、一体何を（ハーロー嬢の知り得る範囲でだが）しでかしたというのだ。だが、これだけの罵詈雑言を吐くのが当然と思われるような、そんなきっかけもやがて生じることになっているのだよ。

パーティントン嬢とベッドを共にするのを断ったということで、あの娘が令嬢を咎めている。「用心深い貴女ですが、一体何が起こったというのでしょう。力ずくのつもりでしたら、あの男は夜まで待つこともないのです」というのだ。この口汚い女からこういう助言を受けるとは、恥じ入るばかりだ。サリーもこの助言のことに触れている。「お分かりでしょう、どんなことが貴方には期待されているのか。この点は私たち、何百回もお話しして来ましたわね」というのだよ。そのとおりで、連中も言ってくれていたことだ。だが、連中のそんな助言も、ハウ嬢からの場合に比べると、その半分の効果も持たなかったのは確かだよ。あの女はさらに、「お嬢さんが寝た後で起き出しても構わなかったのですし、ベッドに入らなくとも良かったのです」とも言っているのだ。

しかし、二人の間でこれだけの懸念がありながら、それでいて、片方は留まるよう助言し、一方は俺からの荘厳なる結婚への発議を待つ決心だというのだろうか。そうと分かったのは、俺としては喜ばしい話だよ。

フレッチヴィル夫人の屋敷に関する俺の提案には同意を示している。贈与財産の契約は前もって考えるよう、また、日取りを指定するよう促している。結びの言葉としては、母親が禁止したにも拘らず、手紙を書くよう強要しており、でなければ、どうなっても知らない、と言い渡しているのだ。親不孝で恥知らずな娘どもだよ。何としても、あの二人の侮辱から親の体面を守ってやりたいものと考えている。

この辺りで、貴公はひとり呟くだろうな。この高慢で横柄な娘があのハウ嬢なのか、とな。律義者のサー・ジョージ・コルマーに恋い焦がれ、あの男がイギリスを去らねばならなくなった時、この愛する友さえいなかったなら、一文無しに成り下がった奴の後を追い掛けようとした、あのハウ嬢と同一人物なのか、とだよ。

そうなのだ。まったく同じ人物なのさ。これは日頃から気づいていた点だが、俺ばかりか、他の者たちにも言えることだ。つまり、最初の熱情がすっかり抑え込まれてしまったような場合だが、克服し得た男のほうはプレイボーイとなり、女のほうは女暴君になるということだな。

それはともかく、ここで一通の手紙がしゃなりしゃなりと登場することになる。「親愛なるハウ嬢から指図を賜っている」という人物からのもので(ア)、ハウ嬢が「貴女様に懸念を抱かせましたことをこの上なく憂慮しておられる」ことについて、ハーロー嬢に知らせようというわけだよ。

気取り屋の間抜けはこう書いている。「私自身、この際、貴女様の置かれております現状に対しまして、憤りを表明したいとの大いなる誘惑に駆られております」というのだよ。「私自身 … 憤り」だと … じゃあ、何故なのだ、誘惑に陥らなかったのは。何のことはない。それほどに心誘う話題を提供している状況も、「推測するだけ」くらいにしか分かっていないからだよ。

その後も、この気取った調子で筆を進めているが、まるで奴の歩きっぷりとそっくりなのだよ。なるほど、確かにグランドツアーを経験しているに違いない。そして、ティペレアリー経由で帰国したのだろうな(三二)。

「さらには、お心を苛んでおります話題に入りますのは禁じられておりますゆえ」ときたもんだ、この気取り屋が。禁じられたのを幸運と思うのだな、ヒックマン君。だが、どうして〈心苛む話題〉なのだよ。その実態を知らず、ただ、小娘の心を掻き乱しているところから〈推測〉してのことだというのならな。それも、母親の心配の種であり、お前さんの悩みの種ともなる小娘だ。俺があの鼻柱をへし折ってやらなければ、やがては、親しくしている者たち一人一人を騒がせることにもなる小娘のことだろう。

もう一通の手紙では(イ)、「書きますとも。どんな男の人にも代筆は頼みません」と、このじゃじゃ馬娘は公言しているのだが、その種の手段が何か提案されていたのかもしれないな。もしも身内の者たちに受け入れてもらえるのなら俺の元は去りたいという、美しい友の意向に大賛成だ。俺は破廉恥漢ということになっている。「愚かな破廉恥漢」だよ。俺

(ア) 第三巻の手紙七十を参照のこと。(イ) 本巻の手紙十一を参照のこと。

に憎しみを覚えるのは、なぶり者にするような手口を使うからだそうだ。俺の私生活について山ほど知っているという、ある人物と知り合ったばかりだと言っている。畜生め、この小娘が。俺の経歴に通じているという、その人物も呪われてしまえば良いのだ。「あの男はまったくのワルで、本当にひどい悪党です」というのだからな。あんな小娘など、くたばってしまえ。たとえ俺に命が一ダース有るとしても、二十件も前の罪のことでそのすべてを失っていたかもしれない、というのだ。奇妙な算術じゃないか、ジャック。

ベタートン嬢とロッキアー嬢の名が挙げられている。そして、「あの男は（と、不遜にもこの言い方を繰り返しているのだが）」と、またもや悪党呼ばわりだ。もう一度言おう。この身が滅びようと、いわれもない悪党呼ばわりは聞き捨てならんのだ。あの娘が（ハーロー嬢の頼みもあって）、令嬢を受け入れてくれるかどうか、伯父を打診する予定だ。ドーカスは令嬢の側に引っ張り込まれねばならんというし、俺の手紙についても、不意を突くか細工をするかして手に入れるという話だよ。

これをどう考えるかな、ジャック。

ハウ嬢は、俺が彼女の手紙を一通手に入れようとしたことで、恐怖に陥っている。もしも、俺の人柄を遠慮会釈なく扱っていることが俺の知るところとなれば、護衛なしに出歩くのは怖くなる、というのだ。この牝狐に忠告してやりたいよ。護衛を用意しておくように、とな。

俺は、グルになって罪もない娘たちを欺き、互いに支えあって悪事を働く破廉恥漢［自ら認めているのだが、小娘が念頭に置いているのは貴公のことだ、ジャック。それに、貴公の相棒の悪党どものことだよ］の、その頭目ということだ。これに対し、貴公は何と言い返すつもりかな、ベルフォード。

俺と面会したこと、やむなく俺の元に追いやられたこと、また、俺に欺かれたことを思い返し、令嬢が塞ぎ込むのも無理はないと言っているのだよ。今後、お説教はお終いにしてもらいたいものだな、ジャック。

だが、あの小娘も令嬢を慰めているぞ。全女性の戒めにもなれば、また、手本にもなるだろうというのだ。この点では、俺に対して女性から謝辞があっても良いだろうな。

妖精たちに言わせると、この手紙で触れている、俺の怒りを買って当然な事柄すべてを書き写すには、時間が足りなかったそうだ。それゆえ、折を見て、自分で手に入れねばなるまい。連中が言うには、仰々しい言葉が綴ってあるそうだ。ただ、俺のことは、誘惑者だの堕落漢だのと、悪口が百ほども並んでいるという。それに、悪魔が闇に紛れ、俺の心と彼女の身内の者たちの心を同時に捉えたらしいのだよ。令嬢を唆して俺に会わせるためだ。またまた小娘が言っているぞ。令嬢の過ちには宿命のようなものがある、とな。それじゃあ、何故なのだよ、令嬢が嘆き悲しむのはな。「逆境こそ令嬢が光輝を放つ時」だの何だのと　…　それでいて、光輝の原因となっている男には、感謝の一つもないのだよ。

その次の手紙では(ア)、不道徳な男とはいえ、俺が令嬢のご主人様にならざるを得ないのではないかと、小娘は案じているのだ。

そうありたいものだよ、俺としてもな。

すぐ前の手紙で筆にしていた俺への非難は取り下げている。ローズバッドに対する俺の

（ア）手紙十七を参照のこと。

振舞い、ハーロー嬢がフレッチヴィル夫人の屋敷に住まい、俺のほうはシンクレア夫人のところに残るという話、俺の地元での利権、相続権、倹約ぶり、容姿、押し出し［このすべてが素晴らしいというわけだよ］、こういったところが俺の利点として持ち出されているのだが、今度は、俺と手を切ったりしないよう令嬢を促そうというのだ。俺としても大いに好むところなのだよ。こういう先見の明のある娘たちを悩ませるのはな。

ただ、俺の「なぶり者にするような手口」には「我慢ならない」らしいぞ。焦らすのは女の専売特許だとでも思っているのかな。自業自得というものだろう。より以上に焦らすことを俺に教え込んだのは、女のほうなのだからな。同じ伝で、強情なスウェーデン王カール十二世(三三)は、自分の国の古い諺を無視してロシアとの戦を続けたのだが、その挙げ句、自分を打ち負かす術をピョートル大帝に教える羽目になったということだ。

廉恥心を疑わせるところが俺に少しでもあるようなら、そんな悪党への復讐はあの世まで続くようにと［有難いことに、「果たされるように」とは言っていないが］呪っているのだ。女というのは、ジャック、悪態をつくわけには行かないのさ。可愛いものだな。口に出来るのは呪いの文句だけだ。

俺は令嬢の愛に疑いを抱いている、ということだ。俺にはそれだけの理由があるのではないかな。また、令嬢のほうでは俺の熱意を疑っているというのだ。熱意なのだよ、ジャック。そう、まさにそのとおりだ。女というのは、ハウ嬢も言っているし、放蕩児ならだれでも知っていることだが、熱烈なのがお好みなのさ。

令嬢の伯父への打診が不首尾に終わった旨を通知している。ヒックマンを通じてのことだろう。疑いない。こいつの両耳はそっくりいただかねばならん。それも、すぐにな。

小娘に言わせると、令嬢の身内全員にはショックを受けたし、同時に怒りも感じているそうだ。ヒックマンによる伯父への働き掛けと同様に、ハーロー夫人に対するノートン夫人の影響力も試みられたのだが、この牝狐によれば、あれほど頑固で情け知らずな人間はかつていなかったということだよ。伯父は、令嬢が既に操を捨てたものと決め込んでいるそうだ。これは俺を責める言葉だが、呼び掛けとも取れないかな。大きな苦しみでも降り懸かれば、令嬢のほうから働き掛けがあるはずだと、皆予想していたのだが、令嬢の命を救うためであっても、一歩たりとも動くまいと、揃って心を固めているという。令嬢が責められているのは、計画的で策略を用いたという点なのだよ。ハウ嬢が言うには、心配な点としては、俺にもプライドがあるわけだから、俺を遠ざけていたことで、その仕返しをする気になりはしないかということだ。心配して当然だな。令嬢が俺のものとならねばならないことは、今では小娘にも明白なのだ（実は、従兄弟のモーデンも令嬢の敵に回っているらしいのだ）。やむを得ざる行動であり、便宜上の行動というわけさ。貴公の友も、ジャック、今や女の便宜に供される始末なのだよ。ラヴレースとも称される者にとって耐えられることだろうかな、これは。

この手紙は大いに利用させてもらう。ハウ嬢が仄めかしている、伯父とヒックマン［ヒックマンに違いないのだ］との交渉結果からすると、俺の発明の才を発揮する余地もあるというわけだ。小娘は、すべてを明かすつもりはない、と言っているのだからな。この手紙は自分で手に入れるよう努力しなくちゃならんな。実際に用いている言葉を知りたいのだよ。抜粋では間に合わないのだ。この手紙は、手に入った暁には、俺の進むべき路を示す羅針盤となってくれるはずだ。

そして、友情の炎がパチパチと音を立てて燃え出すことになるのだ。これまで一度だって想像したことはなかったよ。美人同士、それも、共に花形の二人の間に、あれほど熱い友情が存在し得るとはな。だが、こういう場合でさえ、妨害を受けることで、また、熱しやすくロマンティックなものに傾きがちな女心にとっては活力の元となるのだが、そんな反対に出会うことで、友情が燃え盛ることもあるのだよ。

こちらへ出向くとわめいているぞ、あの小娘が。そうすることで、あれほどの気高い女があまりにも身を落としてしまうのを防ぐことが出来るなら、あるいは、彼女を破滅から救うことが出来るのなら、と言っている。葦同士が互いを支え合おうというわけだな。俺としてもひとつ工夫してみようと考えている。あの小娘をこちらへ連れ出す算段をだよ。

どういうわけなのだろうな。お陰で苦労をさせられているというのに、あのガミガミ女の気の強さには好感を禁じ得ないのだ。請け合おうじゃないか。ここにさえ連れ込むことが出来れば、あの小娘に一週間で教えてやるよ。無条件の服従というものをな。あれだけの鼻っ柱をへし折るのはどれほど楽しいことだろうな。あの娘を求める気持ちも、精々一ヶ月といったところだろうな。それが過ぎると、あまりにも従順になり、気力も失せてしまうだろうから、俺向きとは言えなくなるだろうな。おとなしく畏まっている愛らしい友達二人が、揃って部屋の暗がりに腰を下ろし、腕と腕とを絡み合わせながら、互いのために涙を流し、泣きじゃくっている姿 … 何とも心地好く愛らしい眺めではないか。そして、二人の皇帝たる俺様、二人も公認の皇帝が、同じ部屋に身を横たえて寛ぎ、トルコの皇帝よろしく、先に白羽の矢を立てるのはどちらにしたものかと迷っているのだよ。

もう一度、小娘の言葉に耳を傾けてくれ。ハーロー家の者たちには強い憤りを感じているという。自分の母親にも腹が立つし、下劣な虚栄心に取りつかれている愚かなラヴレースにも憤慨しているということだよ。「愚かな」とはな … このヒキガエルめが「貞淑な娘をヒキガエルなどと … 神よ赦し給え」。「恥を忍んで、あの恥知らずを泥の中から引き上げてやることにいたしましょう。そのために私たちの指は汚れてしまうことでしょうが … あの男も、これまで、直接貴女に向かって不作法な振舞いには及んでいないのですから」と言うのだよ。俺がまだその挙に及んでいないのは、ハウ嬢には異常なことと映るらしい。「また、踏み切る勇気もないのです」とも言っている。本気でそう思っていてもらいたいものだな。この手のことは女でも頭に思い浮かべるのであれば、俺様が心に抱いてどこが悪いというのだよ。「そういう意味では、あの男も救いようのない極悪人というわけではありません。そのような不埒な下心があったとしたら、とっくの昔に本心は露になっていたはずです」と言うのだ。救い難い奴らだよ、まったく。

次いで小娘は、贈与財産証書や許可証などを急ぎ整えさせるよう促している。小娘に言わせると、慎みなどを考えている時ではないというわけで、俺のほうからすべてを前進させるようにするためだが、口にすべき文言を令嬢に伝授しているのだ。この牝狐さえいなければ、とっくの昔に目的を達していたのは明らかだが、俺同様、貴公にもそれは明白なことではないのかな。当人の言い回しを使えば、「慎みとやらのせいで見過ごしてしまわれた」ということになるが、決して逃してはいけないチャンスを一度ならず見逃したと、小娘は令嬢を責めているのだ。これで貴公にも分かるはずだが、女の中の最も心気高い者たちが装う恥じらいやよそよそしさは何のつもりかといえば、他でもない、憎からず思う男が自分の縄張りに入り込んできた時に、その哀れな男に猛攻撃を加えようとの魂胆に他な

らないということだよ。

「欺かれてこの男の手中に落ちたとは申せ」と、小娘は令嬢に話している。「卑しめに甘んじながら屈服しておられるのではない」とだ。どうやら、俺には改心の望みがあるらしいな。令嬢を敬う俺の態度から推してのことだが、彼女と会うまでは、どんな立派なことに対しても、敬意の気持ちのかけらさえ見せたことがないのだから、というのだ。大のペテン師、見掛け倒しの詐欺師なのだそうだ、この俺は。だが、次の点では小娘に感謝している。俺に口説き落とされ、令嬢が横道に逸れてしまったことからも、良い教訓が得られるかもしれないというのだよ。どんなことであれ、俺の行いから良い結果が得られるというのは喜ばしいことだ。

この手紙にはもう一枚添えてあるが、娘の筆になる母親評としては、生意気なことこの上ないものだ。未亡人や男やもめについては、言いたい放題のけなし方で、ハウ嬢がどうやってあんな知識を手に入れたか、俺としても驚かずにいられない。サー・ジョージ・コルマーは、はっきり言って、貴公の友よりもはるかに愚か者だったということだな。もしもあの小娘が、何の見返りも与えずにそのすべてをものにしたのならな。

その文面というのは、令嬢の叔父のアントニーが小娘の母親に結婚の申し込みをしてきたわけだが、それをハーロー嬢に知らせるものだ。

あの爺さん、上首尾を収めるようなら、心臓に毛が生えていなければいけないな。でなければ、はるかに立派な男だった、今は亡きハウ氏に悲痛な思いをさせた女のことだ、すぐにも袖にしてしまうだろう。

だが、これがどう転ぶにせよ、アントニー爺さんが結婚などを思いついたお陰で、あの愚かな一族は以前にもまして、女神のような娘と相入れない状態なのだよ。それゆえ、彼女のことはこれまで以上に安心していて良いというわけだ。ただ、俺もとうとう本心からそう信じるのだが、この思いやり溢れる心を動かされ、彼女の有利を図ることになるのだろうな。俺としても、彼女が迫害や悲惨な目にばかり遭うことを願ったわけではないのだよ。だが、何故に令嬢は、いみじくもハウ嬢がそう呼んでいるわけだが、あの「情け知らずども」をあゝまで大切にし、俺のことはこうまで軽んじるのだ。

さらに容赦し難い、他の手紙からの写しも手元にあるのだ。

手紙　三十三　ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

次の手紙というのがまた大変な代物だから、おそらく、この高慢ちきな茶目公たちにしても、俺の手に落ちるようなことは、どうあっても避けたかったはずだ(ア)。

結婚の申し込みに関してだが、俺に対する令嬢の不満は何に由来するのか、これを見ると分かるのだよ。要点をかいつまんで述べたわけだが、どうやら、令嬢が期待していたような熱意、いわゆる熱烈さが籠もっていなかったものと見える。

この手紙の全文はドーカスの手で転記されたのだが、たまたまあの娘の割り当てになったというわけだ。すべての詳しい写しを間もなく届けることにする。

(ア) 手紙二十二を参照のこと。

この小悪魔に言わせると、彼女の思いつきだそうだが、われわれのような手合いは誠実な男に備わる熱情を持ち合わせないものらしい、とのことだ。ハウ嬢というのは、実に面白いことを思いつく女だよ、ジャック。魅惑的な娘だ。我が麗しの君も彼女同様の自由な筆遣いで返事をしているのかどうか、何としても知りたいものだな。このガミガミ女がまっとうな形でこういう思いつきを得たとすると、男としても心穏やかではいられまい。

もしかすると、一生の契りを結ぶ前に手を切らなければならない女が、俺には半ダースはいるかもしれない、と言うのだよ。ただし、この言葉が俺の改心を想定してのお世辞に聞こえてはまずいと考えたのだろうな、俺がまともになるなんてことは、大厄年を迎えるまで期待してはいけないと、自分の信ずるところを書き添えている。女なんてものは皆似たりよったりなのだと十分に弁えている男を、そんなに長く惹きつけておけるように考えるとは、女のことを買いかぶっているということだな、この小娘は。

「M卿へのご挨拶の件があるので遅れることも考えられるなどと、あの男のほうから言い出すのですからね」と、小娘は驚いてみせている。そうだよ、この俺がだよ、可愛い子チャン。日頃は孝養を尽くすことのない男だからといって、絶対に義理を果たしてはいけないというのかな。これほど重大な問題でもあるのだよ。一族の者すべてが心を傾けている事柄なのだ。「間に立ってくださるお友達が確かに必要でしたわね。でも、貴女と同じ状況に置かれていたといたしますと、私なら、あの男の両目を抉り取っていたことでしょうし、理由を知りたければ自分の胸にお聞きなさいと、突っ撥ねていたはずですわ」と言うのだぞ。さあ、どうかな、ジャック、貴公ならこれにどう答えるのだ。

「悪党ですわ　…　本当の卑劣漢なのです」という言葉が続いている。で、何故だと思う。明日という日を幸せな日にしてほしいと願っただけのことでだよ。一番近い親戚への義理を果たそうと思っただけでだ。

「女性にとりましては、胸のうちで軽蔑しているような男性と無理やり一緒にさせられますのは、一番惨い運命ですものね」と、小娘は言っている。それこそ俺が確信したかった点だ。我が愛しの君は自分の才能を、自分の優れていることを、意識し過ぎているかにも思っていたのだよ。彼女が実際に俺を蔑んでいることが怖かったのだ。また、そんな気持ちでいると考えるのは、耐えられないのだよ。だが、ベルフォード、この令嬢がそれほど残酷な運命に縛られてしまうことは、俺としても意図してはいないのだ。「あの人は貴方のことを軽蔑していますわ」などと言い出すような根拠を、自分の最も親しい友達に与えた女と、どうして結婚など出来るというのだ。死んでも御免蒙るよ。ラヴレースともあろう者が蔑みの的にされるのだぞ、ジャック。

「当然のことですが、貴女が怒ってあの男の元を去られた時、あの男は握り締めた拳で額を叩いていた」というのだが、つまりは、俺の熱烈さでは彼女には満足出来なかった際の話ってわけだろうな。そんな仕草をしたのは覚えている。だが、あの時、彼女は俺に背を向けていたのだ(ア)。こういう用心深い女というのは、身体中が目なのかな。だが、この後の言葉に注目してほしいのだよ。「拳ではなくてマサカリだったら良かったのにと思います。それも、最悪の敵の手に握られたものでしたらね」というのだからな。

堪えてみせるぞ、ジャック。堪えてみるつもりだ。勝利の日は近いのだからな。その時

(ア) この仕草が姿見に映っているのを見たと、令嬢はハウ嬢に語っている。七十八頁を参照のこと。

には、この心を鋼で覆ってやるつもりだよ。こういったことを思い出してな。

ところで、一計が案じられているのだ。俺に疑わしい節があった場合の話だが、この美しい獲物を俺の手中から奪い去ろうとしているのだよ。

正直な話、これには俺も不安を覚えている。いよいよこの合戦も厳しい場面を迎えるわけだ。これで貴公も驚きはしないだろうな。たとえ、あの二人に向かって、俺が計略の才を遺憾なく発揮するとしてもだ。この俺がノリスとやらに出し抜かれてたまるかというのだよ、ベルフォード。

ただ、あの小娘も重ねて言っているのだ。「令嬢を辱めることが俺に出来るとか、そのような挙に出る勇気があるとは、とても考えられない」とな。だが、「それですと、あの男は愚か者ということになりますわね。それだけの話になってしまいます」と言うのだよ。こんな具合に事を進め、結婚を考えるようでは、確かに俺も愚か者ということになるだろうな。「でも、愚か者に身を委ねることになってしまわれたのですから、その愚か者と、機会のあり次第すぐにでも結婚なさることです。機知があって自惚れの強い愚か者は皆そうなのですが、この男は愚か者の中でも一番手に負えない夫になりそうに思います。でも、罰として添われることです。ご褒美としては無理なのですからね」とも言っている。これをどうして我慢出来るというのだよ、ベルフォード。

だが、「俺に類した連中というのは、女どもが本来的に憎しみを感じることのない手合いなのだ」と言っている。キリストの教えにも似た真理だよ、ジャック。ついに真理は明かされたというわけだ。常日頃から、俺もそのように話していたのではなかったかな。気立ての好い連中で、真のキリスト教徒なのだよ、この若い娘たちというのは。自分の敵を愛しているのだからな。ところが、心の底ではならず者なのさ。一人残らずな。同気相求むと言うが、そういうことなのだよ。俺としても、牝狐のこの言葉の正しさを十分に確信しているのでなければ、善人にとは言わないまでも、もっと偽善者になってみせるのも無駄ではないと考えていたことだろう。やむなく偽善に頼った面もあるのだがね。

だが、今日、令嬢が礼拝式に出ている間に手に入れた手紙では、例の企みがさらに明らかにされているのだ。実に忌々しいものなのだよ、それが。

《次いでラヴレース氏は、自ら速記した草稿に基づき、モーデン大佐が帰国するまで（必要な場合には）保護を与えてくれるよう、タウンゼンド夫人の約束を取り付けるという、ハウ嬢の企てに関わる部分をその手紙から転記し(ア)、とりわけ以下の言辞に関し、復讐の誓いを繰り返しているのである。つまり、「仮にもあの男が、世の掟からいたしまして爪弾きになるような真似を何かしたりいたしますと、逃亡するか吊るし首に遭うか、いずれにいたしましても同じことですが、貴女にとりましては、きれいさっぱりと厄介払いが出来ることになるのです」というものである》

そして氏は、「俺が誇りとしているのは、あまりにも自分のことをわけ知りと思い、自らの知識に疑いを抱かないような娘たちを征服することなのだ。また、知り過ぎていることの不都合さから身を守るためには、あまりにも知識が足りないことを分からせてやること

(ア) 手紙三十、百十一頁を参照のこと。

なのだよ」と言い添えている。

氏はさらに続け、「激情というのはひどく人を駆り立てるものだな。わずかな時間だというのに、恐ろしく長い手紙になってしまった。怒りの火が燃え盛っている今、この誇り高い美女、二重に武装したこの美女に会うつもりでいる。そして、多分、懲らしめてやることになるだろうな。夕食を共にするため、是非とも部屋に招いてもらいたい旨を伝言してある。二人とも食事は取っていないのだよ。彼女は午後のお茶を断っていた。われわれどちらにしても、あまり食欲は起きないものと思う」と述べるのである。

手紙　三十四

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

日曜日　午前七時

昨夜は、ラヴレースさんとホートンさんのお供でお芝居を観にまいりました。貴女もご存じでしょうが、読んでみますと深刻ですし、大変哀れを誘う悲劇です。私の感想でしたら、舞台で演じられます主だったお芝居につきまして貴女のお指図で書いております、あの小さな冊子でご覧いただけます。このようにお話しいたしますことに私は少しばかり喜びを感じるのですが、最も哀れを誘う場面のいくつかでは、ラヴレースさん自身がとても強く心を打たれていたと申し上げれば、ホートンさんが、私同様に、お芝居に強く心を動かされておりましたことにも、貴女は驚かれたりなさらないでしょう。これは作家の手際を称えて申し上げているのです。と申しますのも、ラヴレースさんはこの世でも一番冷酷な心の持ち主の一人だと、私は思っておりますからね。誓って申し上げますが、私はそのように受け止めているのです。

でも、今回の、そして、帰路でのあの人の振舞いは非の打ち所のないものでしたが、ただ、帰宅いたしますと、階下の婦人たちと夕食を共にするよう、引き止めようといたしますし、あの人や皆さんと今朝の一時近くまで起きていなければならなくなってしまいました。このお返しをしようと心に決めました。それに、実際の話、口実を設けましても、それほど悪いことだとは思わないのです。日曜日は一人で過ごすのが好きですからね。

あの人のしつこい催促を避けるためのより良い理由といたしまして、午前中に礼拝式に出られますよう、すっかり身形を整えているところです。セントジェームズ教会へだけまいりますが、駕籠にいたしました。前の二回のようにあの人につき纏われることなく、好きな時に出入りが出来ますことを確かめておきたいのです。

九時近い頃

思いやりに満ちた昨日のお手紙、拝受いたしました。私がお手紙をいただきましたことは、あの人も知っております。今度顔を合わせます時には、ご自分の申し込みについての貴女のご意見を知りたがるものと思われます。貴女がご賛同くださるのは疑いないものと思いましたので、その推測に基づきました返事を認め、手渡せますよう用意してございます。二人がまた仲違いをするようなことが何かあるようでしたら、あの人も、引き延ばしを図ったり、私の意に逆らったりする理由を探し出さなければならないでしょうね。

顔を見たいと、矢の催促です。礼拝式へ同行したいとの申し出がございました。朝食を共にするのは辞退いたしましたので、ご立腹なのです。間違いありませんが、ご一緒しておりましたなら、思いどおりには出来なかったことでしょう。ドーカスに頼んで、今日一日は一人きりでいたい旨を伝えてもらいました。明朝でしたら、お好きなだけ早くにお目に掛ります、と申しておきました。あの娘が申しますには、何がお辛いのかは知らないけれど、あの人はどなたに対しても不機嫌にしておられるとのことです。

もう一度、有無を言わせないような伝言を届けてまいりました。シングルトンについての警告です。昨夜劇場に出掛けましても、あの人にはシングルトンへの不安がなかったというのでしたら、劇場一軒に対してこんなにもたくさん教会があるのですから、今日礼拝式へ参りましたところで、私が心配するには及ばないはずだ、と伝えておきました。あの人の召使からのお供の申し出は承諾いたしました。でも、本当に機嫌を損ねているらしいのです。別に気に留めてはおりません。いつもいつも、横柄なあの人の言いなりになってはおられませんもの。戻りますまで、これで失礼させてくださいね。駕籠を待たせてあるのです。駕籠のところへ降りてまいりますが、きっとあの人も留め立てなどはしないと思いますわ。

❁　❁

降りてまいります際、あの人と顔を合わせることはございませんでした。これ以上ないほどに機嫌を損ねているらしいのです。ドーカスが申しますには、私のことでではないのも確かだけれど、何か心を悩ますものがある、とのことです。もしかいたしますと、一緒に食事をさせようとして装っていることかもしれません。でも、出来ることでしたら、遠慮しようと思います。そんなことをいたしますと、今日はこの先、あの人を遠ざけておくわけにまいらなくなってしまいますもの。

❁　❁

一緒に食事をしたいと、とても熱心に求めておりました。でも、今触れましたささやかな言い分だけは通そうと心に決めておりましたので、私自身、お食事はお断りいたしました。それに、実際の話、従兄弟のモーデンに宛てた手紙を書こうとして、骨を折っていたところなのです。三度も書き始めてみたのですが、納得出来ずにいたのです。

ドーカスが申しますには、あの人はとても書き物に忙しく、私がお相伴を断ったこともありまして、食事も取らずに続けているとのことです。

その後、〈権利として〉とでも申しましょうか、午後のお茶に呼んでくれるよう求めてまいりました。そして、ドーカスを通して、昨夜の振舞いのことを持ち出すのです。私もあの娘を通して伝えてもらったのですが、まるで、自分の申し分ない態度は大手柄だったと考えているみたいなのです。でも、明朝はお好きなだけ早くにお会いしても良いし、あるいは、一緒に朝食を取っても良いと、繰り返し約束しておきました。

ドーカスによりますと、あの人は荒れ狂っていたそうです。大声を上げているのが耳に届きましたし、あの人の召使が逃げ出す物音が聞こえたようにも思います。貴女もお手紙

の一つでおっしゃっておられましたね(ア)。お母様のせいで感情が高ぶりますと、怒りをぶつける相手がだれかいなくては困るのです、と …… 一緒に並べたりいたしますのは大変気が進まないのですが、でも、激しい感情の働きというものは、放置いたしますと、男の人の場合でも女の人の場合でも、そっくりのものになってしまうということなのですね。

❁　❁

ちょうどあの人から言伝が届いたところです。どうしても一緒に食事をすると言ってきかないのです。ここ数日、私たちのことは順調に進んでおりましたので、些細なことで諍いをするのは賢明でないと考えました。ただ、ある意味では、脅されて意向に従うようなものなのです。どう耐えたものか、その術も分からない有り様です。

❁　❁

思いを巡らしておりますと、あの人が上がってまいりました。そして、ドアを叩き、強い怒りの籠もった声で、今夜のうちに会わなければならない、と言うのです。私が加えているような仕打ちに値するどんなことを自分はしたのか、それを教えてもらうまでは心を休めるわけに行かない、とも言っておりました。

「私が加えているような仕打ち」というのですからね。恥知らずな男です。でも、新たに話すようなことは、おそらく一つもないのです。ひどく腹立たしい思いをすることになるでしょうね、あの人には。

《ラヴレース氏の下心がいかなるものなのかについて、また、氏の不機嫌の原因についても、令嬢は知り得なかったわけであるから、その点に関しては、氏の手紙により話を進めるのも不適当なことではあるまい。

夕食を共にしてくれるよう、自ら令嬢に要求した際の激しい態度を描いた後、氏は次のように筆を進めているのである》

麗しき天の邪鬼が答えてくれたよ。「辛い話ですわね。こんなにも自分の思いどおりに出来ないなんて …… 今から三十分いたしましたら、食堂でお会いしますわ」とな。

その三十分間を待つため、俺は階下に降りた。女たちが揃ってしきりにけしかけるのだよ。こんな横暴な真似をされても仕方がないようなことを、彼女に対してもやってしまえというのさ。女の本性を引き合いに出し、また、事態の性質からも立証していたよ。おとなしくしていたのでは何一つ期待出来ないのだし、最後の一線を越えたところで、これ以上ひどい仕打ちに遭うはずがないことをな。これまでよりももっと無遠慮な振舞いをいくつかしてみると、どういう効果が生じるのか、少なくとも試して見るべきだと、連中は猛烈にけしかけたのだ。それに、この手で暴き出した事柄に対しては、当然ながら強い憤りを感じたし、それが連中の論点を補強することにもなって、俺も決意を固めたのだよ。少

(ア) 第三巻、手紙六十八の第二段落を参照のこと。

しは無礼なこともしてみようとな。そして、その受け取られ方によっては、さらに厚かましく振る舞って、彼女の横柄さに一切の罪を被せてやろうと決めたのだ。こんな気持ちで階段を上った。彼女の動きを窺いながら食堂の中を歩き回っていたが、中風を患っている人間でさえ、あの時の俺ほどに、関節の動きにぎこちなさを感じはしなかったはずだよ。

彼女はピンと背筋を伸ばして入って来た。顔を背け、あの愛らしい胸を突き出しているのだ。直立した姿勢だけに、一層心を奪うふくよかさだった。あゝ、ジャック、不機嫌さやよそよそしさも、この高慢な乙女の魅力を高めてみせるのだ。だが、いかなる態度を取り、いかなる気分でいようと、いかなる仕草をしようとも、美女は美しいのだよ。その背けた顔、怒りを込めた表情からして、傲慢なお嬢さんが憤慨してみせるつもりでいるのは分かった。だが、俺が震える手で彼女の手を掴まえ、厳めしい顔をしてみせると、すぐに彼女の中では恐怖が支配的な感情となったのだ。ところが、彼女を見た瞬間、俺の心は卑怯者と化してしまったのだよ。そして、彼女の態度すべてにありありと看て取れる乙女の清純さを崇める思いが、再びこの心に湧いてきたのだ。確かにこれは天使だよ、ベルフォード。ただ、家族の者たちにしても、女であることが分かっていたのでなかったなら、赤ん坊の頃から彼女を女の子として着飾ったりはしなかったことだろう。また、彼女にしても、そう確信していたのでなければ、女の服装を続けることはなかったはずなのだ。

「是非ともお話しいただきたいのだが、マダム、このよそよそしい仕打ちに値するような振舞いが私にあったのでしょうか」　俺が尋ねた。

「じゃあ、私からもお尋ねいたしますが、ラヴレースさん、引き籠もっておりますところを、何故このように邪魔されねばならないのでしょうか。昨夜以後のことで、一体どんな話がおありだというのでしょう。あんなにも自分の気持ちを抑えてお芝居へご一緒いたしましたし、それに、これも同じくらい意に沿わないことでしたが、ずいぶん遅くまでお相手をして起きていたのです」

「これは言っておかねばなりませんが、マダム、一つ屋根の下で、こうもよそよそしくされては堪らないということです」

「まあ、一つ屋根の下ですって　…　どういうおつもりで　…　」

「終わりまで聞いていただきましょう、マダム［と、彼女の震える手を離し、もう一度夢中で奪い返したのだが、その勢いには彼女も跳び上がっていたよ］。言いたいこと、話しておきたいことは千もあるのです。現在の、そして、今後のわれわれの見通しに関することなのです。なのに、私が心の内をすっかり打ち明けようとする時には、いつも貴女は私を遠ざける工夫をしているのだ。お陰で、自分でも辻褄の合わないことになってしまうのです。貴女は遅くなることに望みを掛けておられる。口にこそお出しにならないが、考えておられることがあるに違いない。お話しいただきたいのだ、マダム。今こそ、言い抜けとか隠し立てとかはなしに、何卒お教えいただきたい。今後の私は、貴女の目にはいかなる姿に映ることになるのですか。このよそよそしさは耐えられないのです。貴女ゆえに置かれている、このどっちつかずの立場には耐えられないのだ」

「いかなる姿かとおっしゃるのですね、ラヴレースさん［怯えているのははっきりと看て取れた］。ひどいお姿ではないと思いますわ。お願いです、ラヴレースさん、そんなに強く手を掴まないでください［と、引っ込めようとするのだ］。お願いです、離していただきますわ」

「私を憎んでおられるのですね、マダム」
「どなたも憎んでなどおりませんわ、私」
「貴女は私を憎んでおられるのですよ、マダム」　俺はもう一度繰り返した。
上がって来る際には唆されていたし、決意を固めてもいたわけだが、何か新たなきっかけが必要だった。我が天使が姿を現すやいなや、邪念のほうはコソコソとこの胸から逃げ出してしまったのだよ。だが、出入り口は開けっ放しにして行ったし、この肘よりも遠くへ離れたわけでもなかったのだよ、そいつは。
「お見受けいたしますに、上機嫌で上がっていらしたのではなさそうですわね、ラヴレースさん。でも、乱暴は慎んでいただきますわ。気を悪くなさるようなことは、私、何もしておりませんもの。どうか、乱暴は慎んでいただきましょう　…　」
「可愛い人だ」　そう叫ぶと、一方の手で彼女の片手を掴んだまま、俺はもう一方の腕で彼女を抱き寄せた。「私が気を悪くするようなことは何もしておられないとおっしゃるのですね」　彼女を食べてしまいたいほどだったが、そんな気持ちを抑え、「大いに気分を害するようなことをなさっているのです。私が何をしたというのです。こうもよそよそしくされるとは　…　」と言った。何を話したものか、俺にも分からなかったのだよ。
彼女は身をふりほどこうとしてもがいていた。「お願いです、ラヴレースさん、下がらせていただきます。何故このような真似をなさるのか、私、分かりませんわ。何か貴方を怒らせるようなこと、私にございましたでしょうか。見当もつきません。私と諍いをするおつもりで、ここにいらっしゃったようですわね。そのように不機嫌な態度で私を怯えさせたくないとお思いでしたら、引き下がりますのを許していただきたいのです。おっしゃりたいことはすべて、別の折に伺いますわ。お伝えしましたとおり、明日の朝にいたしましょう。でも、本当に怖いのです、貴方のことが。どうかお願いいたします。少しでも私のことを大事に思ってくださるのでしたら、引き下がらせていただきたいのです」と、彼女は言っていた。
夜だよ、ベルフォード。真夜中でなくちゃいかんのだ。不意を突くことだ。怯えさせねばならんのだ。この魅惑的な娘に最後の試練を加えるのにはな。階下の女どもがどう言おうとだ。目論見どおりに振る舞うことは出来なかったよ。これが最初ではないのだ。彼女が許してくれるかどうか、試す気になったのはな。
彼女の手に熱烈なキスをしてやった。その手にこの唇を残しておきたいと言わんばかりにな。「それなら、お戻りなさい、最愛の人よ。とこしえに愛する人よ。ここへまいりました時、ひどく機嫌を損ねていたのは確かです。貴女がいわれもなくよそよそしくなさるのに我慢がならなかったのですよ。お戻りなさい、マダム。それが貴女のご意向なのですからね。そして、私のことは、寛大なお裁きを願いたい。裁きを受けて当然と思われる点のみをお裁きいただきたい。そして、明朝早くには、私たちが今置かれている立場に相応しい、また、私を待ち受けている希望に似つかわしい気分でお会い出来るものと思わせていただきたいのです」
こう言うと、俺はドアのところまで彼女を導き、そこで別れた。だが、女たちのところへ降りては行かず、自分の部屋へ入ると錠を下ろして閉じ籠もったよ。彼女の生意気な友達の手紙から　…　これはわれわれ二人の間の事実や実情を伝える彼女自身の言葉に基づいたものなのだが　…　憤慨するのも当然至極と言えるような数々の挑発を受けていたに

も拘らず、彼女の威厳に満ちた美しさに、また、警戒を怠らない操の堅さに気後れしてしまい、意図したところから大きく逸れてしまった自分が恥ずかしかったのだ。

《令嬢は（日曜日夜の日付で）自らの感じた恐怖の念と、その際のラヴレース氏の振舞いに関し、以下のとおり記述している》

私が食堂に入りますと、あの人は私の両手を取りましたが、諍いを起こすつもりでいるのがはっきりと看て取れますような、そんなご機嫌でした。何のためなのでしょう。私があの人に何をしたというのでしょうか。あのように荒々しく、怒気を含んで苛立った態度というのは、これまで一度だってどなたにも見たことのないものでした。私は怖じ気づいてしまい、考えておりましたほどに怒りは表に出さず、ただただおとなしくしておりました。あの人が最初に口にしたのがどのような言葉だったのか、ほとんど思い出せないほどに怯えていたのです。でも、「私を憎んでおられるのですね、マダム。私を憎んでおられるのですよ、マダム」という言葉がその中にございました。ひどく険しい口調なものですから、あの人から千マイルは離れたい気持ちになったほどでした。「どなたも憎んではおりません。有難いことですが、どなたにも憎しみは持っていないのです。貴方のことが恐ろしいのです、ラヴレースさん。去らせていただきますわ」と、私は申しました。あの人の姿といったら、それはそれは醜悪なものでした。男の人が激情に駆られ、あんなにも醜い姿を晒すところは、これまで見たこともございませんでした。一体、何のためになのでしょうね。それに、私の両手をぎゅっと鷲掴みにしているのです。本当に激しい人です。ぎゅっと鷲掴みなのです。要するに、表情からいたしまして、また、言葉遣いにいたしましても（一度は私の身体に両腕を回して来ました）、私のほうからあの人を怒らせるのを望んでいるようにも思えたのです。ですから、私に出来ますことといえば、ただ、引き下がるのを許してもらいたいと願い出て（これは何度も繰り返しました）、明朝、あの人の言うとおりの時刻に会おうと約束する以外には、何一つとしてございませんでした。

そのような条件で願いを入れてはくれたのですが、それはもう、不承不承という態度でした。そして、別れ際には、私の手にとても乱暴なキスをしたものですから、そこには今も赤く跡が残っているような有り様です。

いかがでしょう。私の置かれております立場を考慮いたしますと、あの人に強い憤りを感じて当然だと、そのようにお考えではないでしょうか。私といたしましては、あの人と諍いをすることが、いわば不可避なのではないでしょうか。顔を合わせましても、少なくとも一回おきにはです。私の心の中に、あるいは、振舞いに、あの人に向かって淑女ぶったところも媚びたところも、強圧的なところも、承知いたしておりますかぎり、何一つなかったものと存じます。わざと引き延ばしを図ったつもりもございません。ひたすら節度を守ることだけを目指しているのです。その点が遵守されなければいけませんのは、私と同様、あの人にとっての関心事でもあるのです。また、そのように考えて然るべきなのです。身内の残酷な仕打ちによってあの人の元に放り出され、思いのままに操られている有り様なのです。保護を求めて逃げ出そうにも、あの人のところ以外には行き先もございません。平坦な道が一本、私たちの前には開けているのです。それなのに、当惑させられます事柄や難問の数々、疑念、咎め立て、不安を誘う話題に事欠くことがないのです。一つ

解決いたしますと、すぐに次のものが出てまいります。それも、私自身からではございません。どのようにして出てくるのか、見当もつきません。こんな恥知らずな人と顔を合わせるのです。どのような喜びをこの身に約束出来るというのでしょう。

仕上げをお願いいたします、大好きなハウさん。何卒お願いいたします。タウンゼンド夫人と手を結ぶという、貴女のご親切な計画を完成させていただきたいのです。その時には、きっとあの人の元を去るつもりでおります。

私の気質は変わってしまったのでしょうね、きっと。変わるのも不思議ではございません。果たしてこれまでの気質に戻ることはあるのか、疑わしく思われます。でも、そのように変わりましても、自分自身が感じております不安の半分も、あの人を動揺させることは出来ないのです。あの人が段々と私に対して力を持つようになっておりますのは、貴女も気づいておられるのではないでしょうか。あの人が私に取り入ったいろいろな点を思い返しますと、身震いを覚えてしまいます。そして、今では、怒りの気持ちから口にいたしておりますものよりもさらに大きな災いがもたらされるのではないかという、そのような恐れを抱いて当然なことをあの人はしてみせるのです。あゝ、どうか、ご計画の仕上げをお願いいたします。このひどく奇妙な卑劣漢から逃げ出させていただきたいのです。

それにいたしましても、世間の人たちはそう考えているのでしょうが、最初は家族からあの人の元へと駆け落ちをし、今度は、あの人から逃げ出そうというのです「どなたの元へかもしらずにです」。込み入った道は避けようと、いつも努めてまいりました人間にとりましては、何とも辛い話でございます。でも、確かにあの人は、自分から認めようとはいたしませんが、このように私と諍いを起こす心積もりでいたに違いありません。一体どのような考えからなのでしょう。推測するだけでも恐怖に駆られてしまいます。

あの人の元を離れることさえ出来れば　…　あの人と別れました場合の私の評判のことでしたら　…　それも今ではもうすっかり傷ついてしまっておりますから、気を配ることなどございません。ただ、自分の心に照らし、咎め立てを受けずに済むよう振る舞いますにはどのようにしたら良いのかという点だけでございます。世間の人たちの非難につきましては、甘んじてお受けしなければなりません。それにいたしましても、情けない折り合いの付け方ですね。何とも惨めな難破船といったところですわね、私の運命も　…　貴重なものをこんなにもたくさん投げ捨てねばならない羽目に陥ってしまったのです。たった一つ大切なものを守りますために　…　以前でしたら、受け入れざるを得なくなる恐れがほんのわずかでもあると考えるだけで、半ば悲嘆にくれてしまっていたと思われますような、そんな折り合いの付け方ですからね。

教えてくださろうとはなさいませんが、私の心の一番奥に潜んでおります欠点を、貴女がご存じないわけはございませんわね。皆さんからお褒めに与りますのを、どれほど誇りに思ったことでしょう。そんな誇りは持ち合わせていないのだと考えることにさえ、誇りを感じていたのです。それが、謙遜という見てくれの良いベールに覆われて、内省を怠る私の心には見えなくなってしまいまして、慈善を施します際の態度に優雅さがあると思われたり、また、実際にそのように言われますことで、自分が二重にお手柄を立てているように考えていたのです。私の行いに手柄とすべきことなど一つとしてございませんし、さやかな善行を果たすという喜びから過分の見返りもあり、また、授かった才能に衝き動かされてとでも申しましょうか、行わずにはいられなかったことなのです。でも、どんな

才能だというのでしょう。とても誇れるようなことではございません。

要するに、模範と思われますことをひたすらに望んでいたのです。依怙贔屓で讃美してくださる人たちが私の頭に吹き込んだ自惚れ心なのです。そして、自分の操に揺るぎはないものと安心しきっていたのです。

この自惚れ心に対しまして、私は十分な罰を受けたのです。たっぷりと屈辱を味わいました。罰をお与えになる慈愛に満ちたお方がこれで十分だとお考えくださいますよう、期待いたしております。と申しますのは、本心からそう思うのですが、自惚れておりました点でも、また、厚かましく自信に溢れておりました点でも、今では自分自身に対して軽蔑の念を覚えるからなのです。自分の好ましい性向を密かに自慢したことがあったといたしましても、それ以上に軽蔑しております。でも、「密かに」ということです。このように屈辱を味わいますまでは、自分がまことにもって不完全な人間であるということ、また、神学者の方たちが教えておられる、「私たちはその最も善き行いにおいて罪を犯す」(三四)という言葉に大きな真理が含まれておりますのを、ゆっくりと時間を掛けて考えることはなかったのですからね。

ただ、私はまだまだ若かったのです … でも、もう一度ここで自分を見つめ直してみることにいたしましょう。この「私はまだまだ若かった」という言葉の奥には、弁解の気持ちが潜んではいないでしょうか。気づきましたことや告白しておりますことを、すっかり無効にしてしまうほどの逃げ口上がです。

何と訳の分からない、不完全な生き物なのでしょうね。でも、この場合、私たちの行いのすべて、望むことすべての底に横たわっております〈私心〉というものが、私たちを惑わす張本人なのです。

このように真面目な考えを記しましたこと、お詫びはいたしません。あのように高い評判を得ていながら、高慢で厚かましい私心に心を委ねましたため、たった一度の思慮のない行動から、今置かれております恐ろしい立場へと追い詰められてしまうような不幸者なのです。そのような人間の目を自分の内側に向けさせ、また、自分自身を暴き出すよう努めさせるだけで十分なのではないでしょうか。

でも、前向きに生きたいとも思うのです。絶望したのではさらに罪を重ねることになりましょう。それに、自分で自分を見捨てたりいたしますと、この身を支え起こしてくださるのはどなたになるのでしょう。どなたが慰めてくださるのでしょう。あゝ、神様、貴方様です。まだお見捨てになってはおられないものと思うのです。まだ呪いを垂れてはおられないはずです。この私は貴方様のものですもの。瞑想が他の事柄の埋め合わせをいたしますことこそ似つかわしいことと存じます。

❁　❁

あの人には恐れをなすと同時に、すっかり愛想を尽かしておりましたので、自分の部屋へ戻りますと、激しい絶望感に駆られ、あの人からの申し込みに対して認めてありました返事を、ほとんど真二つに引き裂いてしまいました。

明朝あの人と会うことにいたします。そのように約束いたしましたからね。でも、外出するつもりなのです。それも、あの人とか他の人の付き添いは一切なしにいたします。あ

の人が態度を急変させたことにつきまして、納得の行く説明がない場合には、また、どこか信用のあるお宅にこっそり下宿をする適当な機会が生じるようでしたら、もうここへは戻らないつもりなのです。今はそう考えております。そして、そのお宅でご計画の完成を待たせていただくか、あるいは、お手紙による仲立ちを貴女にお願いいたしまして、あの卑劣漢にこちらの条件を呑ませるようにするか、そのどちらかにしたいと思うのです。貴女のお考えでは、私はあの人のものにならざるを得ないのであって、自ら打つべき手はないとのことでしたからね。あるいは、今すぐベティ夫人の庇護にこの身を委ねる決心をすることになるかもしれません。そうすれば、あの人が傲慢な態度で脅しておりましたハーロー邸への顔出しを妨げることにもなりましょう。

《令嬢は月曜日の夜に再び筆を執り、その日令嬢とラヴレース氏の間で起こった事柄すべてを、また、恐ろしさのあまり外出の目的を遂げられなかったことを報告しているのである。ただし、次に掲げるラヴレース氏の手紙が、そのすべてに関して、さらに多くの説明を用意してくれることもあり、令嬢の手紙は割愛することとした。

しかしながら、タウンゼンド夫人に関わる計画を完成するよう、令嬢が重ねてハウ嬢に要請している点について（ラヴレース氏との間での出来事から根拠を得てのことであるが、令嬢としては納得の行かないところがあったのである）、ここで触れておくのが適当であろう。令嬢はこの手紙を次のような言葉で結んでいる》

最後にお送りくださいましたお便り（拝受いたしましたのはほんの二、三時間前のことです）につきまして、それと、お母様とのお話し合いにつきましても、少し申し上げておくべきでしょうね。貴女にもずいぶんと気紛れなところがおありではないでしょうか。今回の件では、希望させていただきたい点が二つだけございます。一つは、貴女の素敵なおふざけの対象といたしましては、このお話し合いで見つけておられるものよりももっと立派な話題にしていただきたい、ということですし、もう一つは、私の置かれております状況が、貴女のそのおふざけにのべつ水を差してしまうようなものでなければ良いのに、との思いです。そして、今の私には、これまでしておりましたように、おふざけを楽しむのは許されないのだということでございます。でも、貴女ご自身には楽しんでいただきとうございます。私のことで喜びを見出していただきますのは無理でしょうけれど　…

貴女のクラリッサ・ハーロー

手紙　三十五
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月二十二日　月曜日　朝

この淑女には寛大さがない。ひとかけらとて見当たらないのだ。俺のほうは、悪さに及ぶつもりでいながら、彼女が引き下がるのをおとなしく許したのだよ。翌朝早くに会ってくれるものと、貴公としても思わなかったかな。それも、微笑みを湛えてだ。飛び切り上等のお辞儀をしてくれた上でだよ。

六時前から、彼女を待って食堂に陣取っていたのだ、俺は。彼女は部屋のドアを開けないのだよ。俺は階段を昇り、そして、降りた。咳払いをした。ウィルに声を掛け、ドーカスを呼んだ。ドアを閉める時には、激しくバタンバタンとやってみせたよ。それでも、彼女は部屋のドアを開けないのだ。こんな具合で八時半まで、俺は無駄に時間を潰してしまったのだ。それから（朝食の用意も出来たので）、同席願いたい旨を伝えるよう、ドーカスを遣わした。

ところが、驚いたね。入って来たのを見ると（初めて招いた時と同じで、娘の後について来たのだが）、正装しているのだよ。手袋だけは別で、手袋と扇子は手に持っていた。そして、入るなり、ウィルに言って駕籠を玄関先に呼ぶよう、ドーカスに命じるのだ。

俺を階下の女どもの嘲笑の的にするとは、残酷なお嬢さんだ、と俺は思った。

「外出なさるのですか、マダム」

「えゝ、そのとおりです」

俺は恐ろしく間の抜けた顔をしたに違いない。その前に、マダム、朝食をお取りになるのでしょうねと、すこぶる遜った口調で尋ねたのだが、俺の心臓には、張り枠の釘が百本も突き刺さっている気分だったよ。

彼女のほうで外出の意向をもっと漏らしてくれていたなら、俺としても、多分、昨日の気分を奮い起こし、復讐に乗り出していたことだろうな。すぐに頭に浮かんだのは、ハウ嬢の手紙から書き写してもらった、悪意に満ちた言葉のすべて、それに、俺自身が書き写した例の手紙にあった悪口のすべてだよ。

えゝ、お茶を一杯いただきますわ、と彼女は言っていた。そして、手袋と扇子をすぐ近くの窓のところに置いた。

俺は完全にまごついてしまったよ。咳払いをし、何度も口を開こうとした。だが、どんな具合に切り出したものか分からないのだ。これじゃあ、どっちが遠慮深いんだ　…　俺は思ったよ。どっちが横柄なんだ、とな。強圧的な女というのは、内気な男をえらくまごつかせるものだ。彼女がハウ嬢を演じているかに思えたよ。俺のほうは意気地無しのヒックマンというところだ。

やっとのことで、こちらから切り出すことにしよう、と俺は考えた。

彼女がカップを手にする　…　俺もだ。

一口、いつもどおりの目付きで彼女が啜る。尊大傲慢な君主のごとく威厳を気取り、向けるまなざしの一つ一つがご褒美なのだ。

一口、家臣のごとく俺が啜る。唇と両手を震わせ、啜ったのか味わったのか分からない有り様だ。

「私は　…　私といたしましては　…　」と、口ごもりながら一口啜った（口に火傷をしてしまったのだが、お茶もろともに息を吸い込んだのだ）。そして、「私といたしましては、マダム、期待をして　…　」と言いかけた。

ちょうどその時、ドーカスが入って来た。彼女が言うのだよ。「駕籠は呼んでもらったのかしら、ドーカス」とだ。

とてつもなく無礼な話だ、と俺は思ったよ。話し掛けているのに、こんなふうに口を噤ませるとはな。横柄な女主人の質問に召使が答えるまで待つ羽目になった。

「ウィリアムが呼びにまいりましたわ、奥様」

このお陰で、また口を開くまでに一分間の沈黙を強いられた。そして、私が期待いたしましたのは　…　希望としては　…　望ましくは　…　願わくは　…　早くにお目通りを許していただけたなら　…　と俺が話し出したのだ。

すると、「空模様はどうなの、ドーカス」と彼女が聞くのだよ。まるで俺はその場にいないみたいに、無視の態度なのだ。

「少々怪しゅうございます、奥様。日がかげっておりますわ。三十分前は晴れわたっておりましたのに」

堪忍袋の緒が切れた。俺は立ち上がったよ。茶碗が落っこちた。受け皿ごとだ。「空模様など糞喰らえだ。陽射しが何だ。忌々しい小娘が　…　さっさと失せろ。奥様と話しているというのに、ろくに口をきくチャンスもない」

小生意気なお嬢さんが立ち上がった。半ば怯えた顔付きだ。窓のところから手袋と扇子をひったくった。

「行ってはいけませんよ、マダム」　俺は彼女の手を掴んで叫んだよ。「絶対にいけません　…　」とだ。

「いけないとおっしゃるのですか。いいえ、参りますわ。メードを罵るのでしたら、私のいないところでもお出来になれますもの。私がおりますのと同じようにね。ただ、あの娘に浴びせておられるお言葉を私に向けるおつもりなのでしたら　…　それなら話は別ですけれど」

「行ってはいけません、愛しい人。置いてきぼりにしてはいけません。こうもはっきりと蔑まれ、こうも無視されたのでは　…　大して意味のないことを召使に尋ねておられるが、何のことはない、こちらの話の腰を折るためだ。それが我慢ならんのですよ、私は」

「引き止めないでいただきますわ」と、もがきながらだ。お引き止めは受けません。貴方のことは好きになれないのです。貴方のやり方もです。昨日は諍いを求めておられましたが、私のほうで貴方の願いを入れ過ぎたということの他には、何一つ理由は思い浮かばないのです。恩知らずな方ですわね、貴方も。私、貴方のことは心の底から嫌っておりますわ、ラヴレースさん」

「絶望に追い込むのは止めていただきたい、マダム。一言申し上げるが、こんな気持ちのまま置き去りにされるつもりはないのだ。どこへ行かれようと、ついて参りますよ。ハウ嬢が私の味方であったなら、このような扱いは受けなかったのだ。私の苦労がだれのせいなのか、火を見るよりも明らかだ。あのお嬢さんから手紙を受け取られるたびに、私に対する貴女の振舞いが変わって行くのは、ずっと前から気づいていたのです。察するところ、自分がヒックマン氏をあしらっているのと同じように、貴女にも私を扱ってもらいたいのでしょう。だが、そのような仕打ちに出るのは、貴女の素晴らしいご気性には似合わないのだし、また、それに甘んじるのも、私に相応しいことではないのです」

これで、彼女もハッとした。ハウ嬢のことを俺に悪く思われたくはないのだよ。

だが、落ち着きを取り戻すと、こう言っていた。「ハウさんは美徳の味方です。徳のある男性の味方なのです。もしも貴方のことをお好きでないといたしますと、それは、貴方がそのような男性の一人ではないからですわ」

「仰せのとおりです、マダム。それゆえ、ヒックマン氏と私に関して、それぞれの男性について、おそらくお二人揃ってでしょうが、貴女たちが考えておられるとおりに語るた

めに、お嬢さんは、ラヴレースのような男には決して見せない態度で、あの男性に接しておられるわけですね。いかがでしょう、マダム、お嬢さんから受け取られたたくさんの手紙の中の一通で構いません、私のことが触れられているところを、ひとつお見せいただけませんでしょうかね」

「ハウさんは公明正大です。ハウさんは善い人ですわ」　彼女が答えた。「どなたについても、その人の値打ちどおりのことを筆になさいます。口になさるのです。たった一つで結構ですわ。公正なこととか善良なこと、それとも、気前のよいことでも構いません、貴方がご自分のお手柄にして当然と思われるようなことがございましたら、どんなことでもお示しいただきましょう。その際のハウさんのお手紙を探してみますわ［そのようなことがありました場合には、私もきっとハウさんにお知らせしているはずですもの］。貴方に好意的なお手紙なのは請け合いますわ」

何とも手厳しいことだ。手厳しいばかりか、不躾でもある。慎み深い男を掴まえ、過去を振り返って手柄になることを探せというのだからな。

彼女は俺を振り切って行こうとし、「心外ですわ、ラヴレースさん、引き止められますのは。私は出掛けるのです」と言うのだ。

「いや、行ってはいけません、マダム、こんなお気持ちのままでは」　こう言うと、俺は彼女とドアの間に割って入った。すると彼女は、扇子を使いながら、椅子に身を投げ出したのだ。怒りに燃えたその美しい顔は、一面朱に染まっていたよ。

俺は彼女の足下にこの身を投げ出したよ。「立ち去るのです、ラヴレースさん」　彼女が言っていた。扇子を片手に、撥ねつける仕草なのだ。「私には構わないでください。貴方ご自身のためなのです。宜しいですか、貴方などの手の及ばないところにあるのです、私の心は」と、両手で俺を押し戻すのだよ。「言わせないでいただきたいのです。私の心は貴方の手の及ばないところにあると、本気でそう考えておりますことを　…　誇り高い心なのです。争うにいたしましても、あまりにも誇りに満ちているのです、私の心は。諦めることです。私のことは永久に諦めるのです。誇り高い心を相手に争わなければいけないのですよ、貴方は」

その態度、物腰、声音には、魂を奪う高貴さがあった。口にする言葉はまことに厳しいものだったがね。

「天使を崇めましょう。女性などではないのだ」　俺は言った。「お許し願いたい、最愛の人よ。もしも貴女が人の子なら、許していただきたい。私の落ち度を、私の及ばぬところを許してほしい。私の弱さを憐れんでほしいのです。我がクラリッサに匹敵する人間などどこにいるというのでしょう」

讃美の念と愛の狭間で、俺は身を打ち震わせていた。そして、この両腕で、腰掛けている彼女の両膝を抱き締めた。その瞬間、彼女は立ち上がろうとしたのだが、そんなふうに俺が必死に抱きかかえていたものだから、再び座り込んでしまうこととなった。あれだけ怯えてみせた女もかつてない。だが、抱き締める俺の動作は、不安におののく彼女の心には慎みのないものと映ったことだろうが、あの時には、崇拝の念に導かれたもの以外、何の邪念もなかったのだよ。そして、彼女が実際に退出してしまうまで［すぐに戻るという約束であったし、駕籠を断るのにも同意してくれたので認めたのだが］、俺の心の動き一切は、彼女の心に負けず劣らず清らかなものだったのだ。

彼女は約束を守らなかった。一時間待って、約束を果たしてくれるよう言伝をした。まだとても無理との返答だ。顔を合わせられるようになり次第会う、とのことだった。

ドーカスが言うには、彼女は今でもひどく震えているとのことで、鹿角精と水を持って来るよう命じたのだそうだ。

妙に気を回す女だよ。ことの割には怯えすぎだ。災いというのは、案じる心には実際より大きく見えることが多いものなのだ。捕まって現に手の中にいる小鳥の怯え方には、捕えられる前のその小鳥の臆病さから判断したとして、われわれがさもあらんと想像していた怯えぶりとは比較にならないところがあるものだが、そういうことにこれまで気づいたことはないというのかな、貴公は。

可愛い女だよ。羽目を外したことはこれまで一度もないのかな。幼い時分から今の今まで、一度もお転婆をしたためしはないのかな。こういった際に、罪のないものだが、馴々しいことをされ、また、それが大目に見られていれば、もっと不作法なことにも平気になっていたはずなのだ。着ているものの縁に触れるだけでも、汚らわしいとされるのだからな。すこぶるつきの上品さだ。あゝ、聖なる美女 … 人の妻になるような考えが、どうして彼女に思い浮かぶというのだ。

だが、試しもせずにどうして分かる。今少し懸念を招かない接し方をすれば、口説き落とせないとも限るまい。夜襲に遭えば［昼間よ、汝のことは諦めたのだ］、降伏しないとも限るまい。俺は今も繰り返しこう唱えているのだ。その気になれば、結婚はいつでも出来るのだ、とな。それに、説き伏せた上で結婚するとしても（不意打ちを使うにせよ、不承不承の同意を得るにせよ）、俺自身の他に一体だれを傷つけることになるというのだ。

∴ ∴

今十一時だ。彼女は、顔を合わせられる状態になり次第、すぐにも俺に会おうと、ポリー・ホートンに話している。ポリーが心配して訪ねたわけだが、彼女のほうでも、他のだれに対してよりも、ポリーには心を開いて見せるのだよ。彼女がポリーに保証しているというのだが、感情を露にしたのは、片意地を張ってのことではないし、気難しさや不機嫌のせいでもなく、心の弱さから来たことだというのだ。自分の置かれている状態を耐え忍ぶに足るだけの精神的強さを持ち合わせていない、と言っているそうだ。

それにしても、何たる矛盾だ。あれだけ強固な意志をしていながら、心の弱さなどということを口にするのだからな。あゝ、ベルフォード、自分の名誉に関わる場合、というよりも、几帳面さを守るために気丈にならなければいけないという時には、彼女はいつだって獅子の心を持った女になるのだ。だが、彼女については、次のごとく結論すべき根拠を一度ならず得ているのだよ。つまり、穏やかこの上ない者の感情、短気な人間のものよりも動かされ難い感情は、一旦掻き立てられた暁には、最も激しく燃え上がり、最も抗い難いものになるということだ。ところが、彼女のあの魅力的な肉体のほうは、同じようには作られていないのだよ。釣り合いを欠いたパートナーが別々の方角へ引っ張っているというわけだ。そして、心の中の天使があの絹のような身体を引き裂いているのだ。それにしても、もしも同じ魂が男の肉体に宿っていたなら、これに優る真のヒーローなど存在しなかったことだろうな。

月曜日　二時

いまだに姿を現さない。我が愛しの君は具合が悪いのだ。俺の熱烈な賛辞から、彼女はいかなる期待を抱いたというのだ。復讐よりも不作法な行いを案じていたのだ。だが、俺の心はこれら両嬢への復讐をひたすらに渇望しているのだよ。手練の手際を用いねばならない。ハウ嬢とタウンゼンド夫人とのこの忌まわしい計画は（頓挫させる手を捻り出すことが出来なければ）、これから常に、頭上にぶら下がる剣となることだろう。わずかな迷惑を掛けるたびに、我が愛しの君は逃走を図ろうとするだろうし、完全に俺を頼るよう、他の逃げ場や保護の手をことごとく奪い去るべく重ねて来た努力も、すべて水泡に帰すことになるのだよ。だが、おそらく、密輸に関わっている人間が見つかるだろうと思う。ハウ嬢の計画の裏をかくためだよ。

寓話に出てくる、太陽と北風とが争った話を覚えているな。正直な旅人に、どちらが先に外套を脱がせるかというやつだ。

ボレアース(三五)が先に始めた。猛然と風を吹き掛け、気の毒な男は何度も身体を丸めてよろめくこととはなったが、一向に効果はなかった。ますますぴったりと外套を掻き寄せさせることになっただけだったのだよ。

ポイボス(三六)の番になると、陽射しをふんだんに旅人の上に降り注いだため、旅人もまずボタンを外し、すっかり外套を脱ぎ捨てることとなったが、太陽がそれだけでは止めなかったものだから、とうとう旅人は、優しく枝を広げたブナの木陰に逃げ込み、投げ捨ててあった外套の上に大の字になると、心地好い眠りに就いたのだ。

そこで、勝利を収めた神様はボレアースと旅人の両者に大きな笑い声を浴びせると、その燦然たる行路を踊るように辿りながら、千もの新たな事物を照らし、暖め、育んだのだよ。そして、夜を迎え、その灼熱の行程を終えると、昼間の戯れごとを語り聞かせ、テティス(三七)を喜ばせてやったというのだ。

これに倣って、俺も乱暴な策は一切捨てようと思うのだ。我が麗しき旅人に、ほんの一瞬でも良い、あの厳めしい美徳の外套を脱ぎ捨てさせることが出来るなら、俺の為すべきことと言えば、他でもない、太陽と同じく、新たな対象に俺の陽射しを授けてやるだけなのだ。だが、あらゆる紆余曲折を経た後、会話と休息のためのとっておきの時間は、我が女神に捧げられることとなるのだよ。

∴　∴

ところで、ベルフォード、この新方式に従うと、例のフレッチヴィル夫人の屋敷が厄介の種に思われるのだ。あれは捨てることにする。少なくとも暫くの間はな。俺の外出中にメネルが尋ねて来るよう手配するつもりだ。何のためだ、と貴公は訊くだろうな。何のためだって　…　貴公は聞いていないのか。気の毒にも、フレッチヴィル夫人の身に降り懸かったことをだよ。それじゃあ、教えてやろう。

一週間ほど前のことだが、夫人のメードの一人が疱瘡に罹った。他のメードたちは金曜日までそのことを夫人に内緒にしていたのだが、たまたま夫人の知るところとなった。気の毒に、上流の者たちが悩まされる厄介ごとの大半というのは、見栄の部分もあるが、また、役に立ってもらおうという気もあって、自分たちの苦労を減らすつもりで雇い入れて

いる、当の召使たちに起因するものなのだよ。
　これには未亡人もひどく怯えてしまい、美しい顔の大敵とされている、あの病気ではないかと思わせる症状をすべて呈することとなったのだ。それゆえ、引っ越すことなど考えられないのだが、ただ、自分のことでこれ以上われわれに待ってもらうわけにも行かないというのだよ。
　俺が家の交渉に入った時に、自分のほうでも決心を固め、田舎へ引っ込んでいれば良かったと、心の底からそう思うし、そうしていれば、こんな災いには遭わなかったのに、と夫人は言うのだよ。われわれにとっても、忌まわしい不都合な事態というわけだ。やれやれ、俺が思うに、この憂き世には不都合なことしかないということだな。癇癪などを起こして、わざわざ難儀を招くことはないのだよ。
　従って、例の家の件はこれでご破算になるだろう。少なくとも一時はな。それでも、この当て外れの埋め合わせとなる便法を思いつくことは出来るのだ。動くにしてもゆっくりやらねばならん。確実なものにするためにもな。たとえ我が愛しの君が逃げ去った場合でさえ、彼女を連れ戻すことになる妙案が一つ二つ頭に浮かんでいるのだよ。
　それにしても、俺の招待状に答え、返信を認めてくれないとは、一体、M卿はどうなっているのかな。見せて構わないような手紙を書いてくれれば、完全な和解へ向け、大いに歩を進めることにもなるのだよ。そのことをシャーロットには書き送ってあるのだ。急ぎ卿に便りを出すことにしよう。それも、卿にとっては好ましくない形でだよ。もしも、すぐに筆を執ってくれないようならな。卿はこれまでにも時々、俺の相続権を取り上げると脅していたのだ。だが、俺のほうから卿と縁を切るようなことになれば、それこそ当然の報いというものだろうし、卿がどんなことをして俺を困らせようと、その十倍は卿を悩ませることになるはずなのだ。それに、卿の怠慢のせいで、贈与財産の取り決めも遅れてしまうのは避けられないのだよ。こんなグズグズとした日々を送るなど、どうやって耐えたら良いというのだ。我が儘さや堪え性のなさなどといった点については、俺には本当に女染みたところがあって、飛び切り上等のご婦人方に劣らず、抑えつけられたり望みを挫かれたりするのは我慢ならないのだよ。

∴

∴

　また一通、ハウ嬢からだ。叔父のトニー老と母のアラベラとの間での求婚について書き送ると、前の手紙で約束していたものだろう。一読出来ることになれば、この上ない喜びだ。まさか、密輸商の絡んだ企みのことはもう触れてないだろう。どうやら令嬢は、この手紙をポケットにしまった模様だ。だが、いずれ他のと一緒になっているのを見つけ出すことになるだろうな。

　月曜日　夕刻
　俺の度重なる求めに、彼女も会ってくれることになったが、食堂で午後のお茶の際にということで、それより前というわけには行かなかった。
　彼女は恥じらいながら入ってきた。俺はそう見たのだよ。取り越し苦労が過ぎて、すっかり狼狽の体なのだ。不機嫌な様子で、ノロノロとティーテーブルの方へ進んで来た。ド

ーカスが居合わせ、忙しげにティーカップの用意をしていた。俺は嫌がる彼女の手を取ると、唇に押し当てながらこう言った。「愛しい人よ、最愛の人よ。何故にこうもよそよそしくなさるのです。このようにご機嫌を損ねておられるのは何故なのです。比類なく忠実な心にこうまで苦痛を与えることがお出来になるとは、どういうわけなのでしょう」とな。

彼女が手をほどいた。俺はもう一度その手を掴もうとした。

「穏やかに願います」と、拗ねたように手を引っ込めながら言うと、彼女は腰を下ろした。美女の中の美女は静かに身を震わせ、不機嫌さと怒りの入り交じった表情をのぞかせていたよ。胸を覆う雪のように白いネッカチーフが波打ち、魅惑的な頬は愛らしく朱に染まっていた。

「お願いです、マダム　…　」　これで三度目になるが、俺は拒むその手を握り締めようとした。

「私もお願いいたしますわ。うるさく付き纏うのはもう止めていただきましょう」

ドーカスが引き下がった。俺は椅子をさらに彼女のほうへ引き寄せ、これ以上ない恭しい態度で優しく手を取り、こう言ったのだ。私としては（こうも私を遠ざけたがっているのだから）懸念を口にせずにいられない。もっと強い言い方は避けることにするが、彼女にとって他の者よりも重要でない人間が仮にこの世に一人でもいるとすれば、それは彼女の目の前にいる不幸者だ、とだよ。

暫くの間、彼女はじっと俺を見つめていたが、俺が握っている手は引っ込めず、もう一方の手でポケットからハンカチを取り出した。そして、目をしばたたくと、涙を一粒二粒絞りだした。愛らしい両の目に浮かんでいたもので、その仕草からして明らかだが、拭い去ってしまいたかったのだろう。だが、俺への返答としては、溜め息をついて見せただけだった。それも、顔を背けてだよ。

口を開いてほしい、こちらを見てもらいたい、もっと好意のこもったまなざしを向けていただきたい、と俺はしきりに頼んだよ。

彼女の冷たさをこぼしているが、それなりの理由が俺にあるからだ、と彼女は言っていた。俺の心には優しさのかけらも見当たらない。意向に沿うとか好意を向けるとかするのには値しない男だ。彼女の承知しているかぎりではまったくいわれのないことだが、土曜の夜以来俺が見せている異様な振舞いを考えれば、その点は間違いないものと確信している。俺に関してどのような望みを抱いていたにせよ、そのすべてが跡形もなく消え去っており、俺のやり方すべてに嫌悪を催す、というのだよ。

こいつはぐさりと胸に応えたね。思うに、罪深い人間というのは、すべての場合においてそうだが、潔白な者が中傷誹謗に耐えるほどには、赤裸々な真実をおとなしく耐え抜くわけには行かないということだな。

俺は辛抱してくれるよう頼みながら、失礼も顧みず、自分のこの変わり様について説明を加えたよ。自分のプライドの高さを改めて認め、それゆえ、彼女が常日頃からあからさまに示していることだが、妻と呼ぶ日を夢見ている当の女性の心に愛情が不足しているなどということは、考えるだけでも耐え難いと話した。結婚というのは、どちらの側にであれ、気乗りのしないところがある場合には踏み切るべきものでない、とも言ったのだ。

「それは傲慢というものですわ」と、彼女が言葉を挟んだ。「好意を受けるに相応しい人間になろうとも考えずに、好意の印を期待するのは、厚かましいというものです。貴方の

目の前におりますのは、宜しいですか、ラヴレースさん、貧弱な動機に流されて価値もないものを好いてしまうような、そんな女々しい人間などではないのです。ハウさんが教えてくださるでしょうが、これまで私、あのお友達の欠点に好意を感じたことは一度もございませんし、あの人が欠点のゆえに私を好きになってくれたらなどと願ったことも決してございません。お互いに容赦をしないというのが、私たちの約束でした。欠点以外にはない人ですのに（お教えいただきたいのですが、貴方の美点とは一体何なのでしょうか）、私がその人に重きを置くようなことは、果たして望めるものでしょうか。仮にも私がそのようなことをいたしますと、その人の評価にすら私は相応しくないばかりか、蔑まれて当然ということになりましょう」

「確かにマダム、貴女はこの気高い考え方のとおりに振る舞ってこられました。貴女の場合は、優しさとかご愛顧の印を目の前におります男にどれだけ示されましても、蔑まれる恐れは一切ないのです。おそらく貴女は、いささかでも私に思いをお寄せくださったとしても、それは好んでなさったことでは決してないのだと明言なさる機会を、努めて作ろうとなさったり、利用なさろうとしてこられたのでしょうし、それを称賛に足ることとお考えなのでしょう。私の魂のすべては、マダム、その罪過の一切、願望の一切、見込みの一切もろとも、貴女の眼前に晒し出され、丸裸にされていたはずなのです。もしも、折に触れて私が打ち明け、また、ご相談いたしますことに対しましても、懸念しております最悪の受け止め方はないものと安心していられるような、それだけの信頼と敬意とをお分かちいただき、勇気づけられていたとすればです。と申しますのも、私ほどに率直な心の持ち主、そして、己を責めるに吝かでないという男もかつていないからなのです［これは事実なのだ、ベルフォード］。だが、私たちの関係がどれほどそれとは違っていたか、貴女もご存じのとおりです。貴女の側での疑り深さ、よそよそしさ、そして、遠慮が、私の疑り深さ、恐れ、畏怖の念を生み出したのです。信頼などはおよそない。まるで、互いのことを、恋人というよりも陰謀家ではないかと案じているようなものです。ウィルソンのところから貴女への手紙が届けられるたびに、どれほど恐れおののいたことでしょう。それも当然なのです。前回のものにしても、書面をもって申し込みをしていたこともあり、私としては大いに期待を寄せていたのですが、その影響から判断いたしますと、また、昨日は会うのをお拒みになったことから考えますなら（外出はお出来になったわけですし、それも、私の付き添いを避けようと、駕籠を使われたわけですが）、以前にもまして、私を敵に回すよう仕向ける結果となってしまったのですからね」

「いけないことだったようですわね、礼拝式に出ましたのは」　怒りに燃える魅惑の君が言った。「それも、男の方の同伴なしですからね。私が行かなければ、出掛けるつもりはなかった人ですのにね。日曜日を一日一杯独りで過ごそうといたしましたのは、いけないことだったのですね。気が進みませんのに、お芝居をお付き合いいたしましたし、その後でも、夜通し、ずいぶんと遅くまで（同じくらい嫌なことでしたが）お引き止めになりましたのにね。こういったところが私の落ち度なのです。こういったことのために、私は罰を受けねばならなかったのですね。無理やりに顔を出させられましたし、実際にお会いいたしますと、怯えずにはおられませんでしたが、私のような立場の人間に向けられましたものの中でも、これ以上ないほどの恐ろしい不機嫌さだったからです。しかも、それを耐え忍ぶいわれなど、私にはないのです。これまで貴方は、父の気性のことを好きなだけけ

なそうとなさいましたね、ラヴレースさん。でも、結婚後に父が見せました一番悪いところでさえ、貴方が結婚もしないうちから何度も何度も示しておられるものとでは、全然比較にならないのです。それに、最も良く見積もったところで、私の見通しはどのようなものでしょう。お話をしておりましても、貴方への怒りが込み上げてくるのです、ラヴレースさん。ご自分が災難に引きずり込んだ当の人間に対する貴方の態度の、卑劣でもあれば無礼でもある、そのたくさんの例を思い起こしますとね。それに、私、とても耐えられないのです、貴方のお姿を目にいたしますのはね」とだ。

彼女は立ち上がり、俺に背を向けた。そして、組み合わせた両の手を差し上げると、その魅力的な目に溢れんばかりの涙を浮かべながら、「あゝ、お父様」と、比類のない女は嘆きの声を上げたのだよ。「本分を忘れました私の足に導かれ、お父様の庭の木戸を抜け出してこの男と落ち合ってからというものずっと、私がどれほどの罰を受けてきたのかをご存じでしたなら、お父様もあの厳しい呪いはお控えになっていたことでしょう」とだ。そして、椅子に沈み込むと、感情の昂ぶりに抗し切れなかったのだろうな、赤く染まった両の頬を伝って、どっとばかりに涙がこぼれ落ちたのだ。

「あゝ、愛しい人よ」と、なおも組み合わせたままの彼女の両手を取りながら、俺は言ったよ。「そのように感情に流されたものとは申せ、こうも哀れを誘う訴えに、果たしてだれが耐えられましょう」とな。

正直な話、鼻にツンと来るものがあったのだ。前に一度、子供の頃だが、そうなったのを覚えている（確かに、ごく最近も一度あったよ）。涙が目に浮かぶ直前のことだ。俺としては、彼女の目の前にこの顔を晒しておく気にはとてもなれなかった。

「こうももどかしげに嘆きの声を上げられるとは、一体何をしたというのです、この私が。私の廉恥心に、そして、貴女の美点を敬う気持ち、いや、崇拝の念と言っても良いのだが、それに疑いを掛けられても仕方のないようなことが、いつであれ、私にあったというのでしょうか。言葉であれ、振舞いであれ、また、顔付きであれ …… すべては互いの誤解から生じたことと思うのです。貴女についてだけで構わない。どうか誤解は解いていただきたいのだ。私もそうしましょう。そうなれば、すぐにも万事が丸く収まるに違いないのです。神に祈る気持ちだ。神を愛したい。貴女を愛するように。だが、仮にも、愛が報われるのは疑わしいのであれば、貴女に私のものとなっていただく手立てを思いつくようなことは、たとえこの身は滅びても、絶対にないはずです。最愛の人よ、望みを与えていただきたいのだ。望みだけで良いのです。せめて、貴女は私を嫌ってはいないのだ、蔑んではいないのだという望みをです」

「あゝ、ラヴレースさん、お互いの気性や流儀にうんざりしてしまいますほど、私たちは長らくご一緒いたしました。流儀も気性も大層違うのですから、私と同じくらいに、きっと貴方も私のことがお嫌いになっているはずです。私、思いますに、おっしゃっておられるようなご厚情に見合ったお返しは出来そうにございません。私の気持ちはすっかり荒んでしまいました。貴方のせいで、特に貴方ご自身についてそうですが、人間すべてのことを悪く考えるようになってしまったのです。その上、自分自身のことがひどく情けない人間に思えますので、これからは二度と世間に顔向けも出来なくなることでしょう。この世で、それなりの充実感を持ちながら女が生きてまいりますのにとても必要な、あの自己満足や誇らしい気持ちをすっかり、そして、永久に失ってしまったのですからね」

彼女が一息入れた。俺は沈黙を守っていた。そして、心の中でこう思ったのだ。この愛らしい女は、まったくの話、最後には俺を腑抜けにしてしまうのだろうな、とだよ。

彼女が言葉を続けた。「こうなりましたからには、後は、はっきりとおっしゃっていただくだけではないでしょうか。貴方への負い目は一切ご破算にしてくださるということをです。そして、この身に割り当てられます運命に私が従ってまいりますのを、邪魔なさらないということをですわ」

彼女がまた一息入れた。俺はなおも黙っていた。今後は彼女に対する目論見の一切を放棄すべきなのか、また、疑いとか非難の余地もない、美徳と高邁な精神との十分な証を俺はすでに得ているのではないか、と黙想に耽っていたのだよ。

彼女が続けた。「黙っておられるのが吉兆ですと嬉しいですわね、ラヴレースさん。おっしゃってください。貴方への負い目はすべてご破算にしてくださると　…　ご存じのはずです。貴方にお約束をした覚えはないのです。勿論、貴方も私に縛られるところは何一つございません。財産を失いましたことにつきましては、私、少しも　…　」

彼女は先を続けようとしていたが、「あゝ、愛しい人よ」と、俺が口を挟んだ。「お見受けいたしますに、ご好意に与れるものかどうか、疑わしい気持ちに満たされてしまうのですが、この間ずっと、式の準備のことをしきりと思い巡らしていたのです。現に供回り付きの馬車の件では商談を進めているのです」

「供回り付きの馬車ですって　…　虚飾です。見掛け倒しです。供回り付きの馬車が何なのでしょう。暮らし向きが何なのでしょう。どのようなことにせよ、何だというのでしょうか。私のように、自らの評価がこうも落ちてしまいました人間には　…　父親の呪いの下で苦しんでいるのです。振り返りますと、心の咎めることばかりですし、待ち受けておりますのは恐ろしいことばかりです。不都合なことのありますたびに、この思いがますます正しいことと感じられるのです。しかも、この身に降り懸かりますのは、不都合な出来事ばかりですからね。心に温めておりました計画のすべてが粉々に潰されてしまいました。望みのすべてもお終いです。どこか人目に付かない片隅に身を隠します自由を拒まないでいただきたいのです。軽率な行動に走ったと思われております人間の消息が、あらゆる罪の贖いとなるあの幸せな瞬間が迫りますまでは、貴方のせいで敵に回った人々の耳にも、また、私に残してくださった数少ないお友達の耳にも決して届くことのない、そんな場所へ身を隠したいのです」

弁解の言葉は一つとしてなかったよ。これほどの内心の葛藤は、かつて覚えがない。目の前にいる天晴な娘への感謝の念や讃美の気持ちがぶつかり合っているのだよ。身に染みついた悪党の習癖や十分練った上での決断、そして、大きな誇りを感じていた様々な見込みとだ。俺の頭、そして、心には、新たな企みが百も浮かんでいるのだが、いわゆる誠意をもって事に当たるためには、そのすべてを諦めねばならんのだ。術策と困難とに喜びを見出す心を持ちながらな。ハウ嬢の罵詈雑言を思い出そうと努力してはみたが、記憶力も働かず、うまい具合には呼び起こせないのだ。だから、折よくドーカスが手紙を届けに入ってこなかったら、間違いなく俺も年貢を納めることになっていたはずだ。その封筒の上には、「何卒、今すぐにご開封くださいませ」と記してあった。

俺は窓のところへ引き下がり、封を開いた。当のドーカスからのものだった。こんな内容だ。「どうぞ、奥様をお引き止めくださいませ。書き写さねばなりません重要な書面がご

ざいます。写し終えましたなら、合図に咳をいたします」というのだよ。

俺はこれをポケットに押し込み、我が魅惑の君のほうへ振り向いたのだが、心の動揺はやや鎮まっていた。彼女のほうでも、その頃までには少し落ち着きを取り戻していた。「お願いしたいことが一つあるのです、最愛の人よ。私の申し込みについて、ハウ嬢は賛成しておられるのか反対なのか、それをお知らせ願いたいのです。令嬢が私を敵視しているのは承知しております。今回の話し合いの最初のところで貴女からお咎めのありました、私の態度の変化ということにつきまして、ご説明申し上げようと考えていたのですが、貴女の剣幕が激しいものですから、脇道に逸れてしまったのです。いや、まったくひどい剣幕でしたよ、貴女も。歩み寄ろうとなさらないお身内の方々との和解を一番の目標にしておられる貴女のために、こうも頻繁に私の願いが後回しにされるのを知っても、私にとってはさほど残念な話ではないはずだとでもお考えなのでしょうか。このためでしたね、ロンドンへ来る前に式を挙げようとしても断られましたのは。姉上から、そして、ご家族全員からも、極悪非道の仕打ちを受けておられましたし、また、私からは、あのように熱意を込めた催促があったというのにです。私の友人四人に対して、会うなり気を悪くなされたのもこのためでした。そして、これほどの淑女がお二人、互いに筆になさっておられるものなのですから、拝見したところで、取り返しがつかないほどのご不興を招く恐れがあるなどとは夢にも思わず、落ちておりました手紙を覗こうといたしました私の空しい試みでしたが、それに立腹なさったのもこのためだったのでしょうね。そして、このことがあるからこそ、もう一つの打診の結果をご存じになるまで、私を一週間も遠ざけておられたということなのでしょう。だが、皆さんは拒絶されたのですし、冷たい受け止め方をされてしまいました私の申し込みにしても、確かに私自身がお勧めしたことでしたが、ハウ嬢に届けられ、賛同なり助言なりをお求めになっておられるのです。また、土曜の夜には、かたじけなくも芝居へのお付き合いをいただいているのです（最後の最後まで、私の振舞いすべてにわたって、異議の出るようなところはなかったのです）。その翌日の朝のことだというのに、貴女の振舞いの突然の変わりようには、マダム、私としても、驚き悲しむのが当然なのではないでしょうか。しかも、待ち焦がれておられたハウ嬢のお手紙を受け取られた後は、さらにはっきりとした形でその態度をお続けになったのです。すべては令嬢に感化されてのことなのだと、また、何か他にも、問い合わせとか計画とかが目論まれているのだと、そのように結論してはいけないのでしょうか。結果が分かりますまでは私を遠ざけておく必要があるような、そして、貴女を永久に私の手の届かない存在にしてしまうようなものがですよ。何故なら、それこそが、絶えず貴女の持ち出しておられた条件だったのですからね。このような不安から、マダム、私が半狂乱になってしまいますのも無理からぬことでしょう。私を憎んでおられるのだと貴女を責めても、それは当然というものです。さあ、お教えいただきたい、最愛の人よ。重ねてお願いいたします。私の申し込みにつきまして、ハウ嬢のご意見はどのようなものなのでしょうか」

「貴方と議論を交わしたい気持ちでいるのでしたら、ラヴレースさん、そのお見事な演説にも、いとも簡単にお答え出来るはずです。でも、今のところは、貴方の進め方が極めて不可解であったとだけ申し上げておきましょう。貴方の意図するところが常に正しいものだといたしましても、私の目には、貴方がわざわざ骨折ってそれを難しくしておられるように映るのです。明晰な頭脳とか健全な精神が貴方に欠けているためなのかどうか、そ

れは私には決めかねます。でも、貴方の奇妙な振舞いの大部分は、そのどちらかの不足に帰すべきものだと、本心から私はそう考えているのです」

「畜生め、小悪魔の陰謀だ。この世に並ぶ者とてない誠実な男のことを、こうまで不快に思うよう貴女を唆すとは」と、俺が言った。

「よくも、貴方は　…　」　そこまで言うと、彼女は口ごもった。度を過ごしそうになったからだが、それこそ俺が意図したところだったのだ。

「よくも私が、何だとおっしゃるのでしょう」　こう言うと、含みのある顔付きをして見せた。「何だというのでしょう」

「何という汚い人なのでしょう。貴方は　…　」と、彼女は再び口籠もっていた。

「私が何だとおっしゃりたいのです。それに、汚い人間とはどういうことです」

「どなたのことであれ、私の前で罵りの言葉など、よくも口に出来るものですわね」

あゝ、可愛い女め。逃げを打とうというのだよ。だが、ラヴレースともあろう者が相手だ。そうは問屋がおろさないさ。

「それじゃあ、貴女を唆す者がどなたかいるということでしょうか、最愛の人よ。いるのなら、それがだれでも構わない、もう一度呪って見せましょう」

彼女は気色ばんでいたが、それがまた、心魅する愛らしさなのだ。これが最初だよ、俺に勝ち目が出たのはな。

「やはり、マダム、考えていたとおりです。これで説明がつくというものですよ。カッとなさるのは生来のご気性ではなさそうですね」

「狡猾な男だこと。こうして罠に掛けるというわけですね。でも、宜しいですか、私がお手紙をいただいております人は、ハウさん以外にはおりません。ハウさんも、私と同じように、貴方の進め方のいくつかにつきましては、あまり好ましく思っておられないのですが、あの人には何もかもお知らせしているからですわ。ただ、これまでのところ、貴方の敵に回ってはおりますが、私にとりましても同じことなのです。貴方の申し出を拒むのではなく、定めと思い、善処すべきだというお考えなのです。さあ、これが事実です。貴方のほうでも同じように誠意を示していただけますかしら。天にも祈る気持ちですわ」

「勿論です、マダム。さあ、こうして片膝をつき、改めて誓い、嘆願いたします。この私を貴女のものとしていただきたい。永遠に貴女のものとしていただきたいのだ。貴女とハウ嬢に同時に感謝の言葉を捧げられるような、十分な根拠が欲しいのです」

実を言うと、ベルフォード、あの牝狐のような小娘は、ヒックマンを好きでないのは明らかだが、俺に惚れ込んでいるのだと、そんなふうに前から考え始めていたのだよ。

「ずいぶん便利なお膝ですけれど、どうぞ、お立ちください。からかうのは止していただきますわ」

「ずいぶん便利な膝」だと　…　俺は胸の中で呟いた。この遜った姿勢も、この高慢な美女にはほとんど効果を表さないが、他の女にはどれだけ成果を上げてきたか、また、最後の試みに対しても、跪くことで何度許してもらったことか、この女は知らないのだよ。

「貴女をからかうですって、マダム」と叫んで立ち上がると、俺は、日取りを決めていただきたいと、もう一度嘆願した。また、同時に、自分を責めて見せたよ。M卿に送った招待状の件についてだが、卿の病のために日延べを余儀なくされるかもしれないので、というわけだ。だが、こうも話しておいた。彼女に異存がないようであれば、卿に宛てて一

筆認め、詫びを入れるつもりだし、あるいは、彼女の指定する日取りをお知らせし、間に合わせてもらえないようなら、卿を待つのは止めても良い、とだよ。

「私から申し上げる日取りでしたら、未来永劫ありえないということですわ」　彼女が言っていた。「驚かれてはいけません。礼儀を弁えた方が私たちのことを秤に掛けてくださるとしたら、私がこのように申しましても、驚かないはずですわ。でも、本当に、ラヴレースさん［と言いながら、苛立たしさに涙を浮かべていたよ］、貴方は、それほどのお生まれで教育も受けておられますのに、ほんの少しでも繊細な心を持ち合わせているような人間の扱いには通じておられないのか、それとも、恩知らずな人間なのか、そのどちらかですわね。そして［と、一息入れ］、恩知らずよりももっとひどい方なのですわ。でも、下がることにいたします。明日、またお目にかかりましょう。それまでは、お会いするわけにまいりません。私、貴方を憎んでいると思うのです。目を剥かれても結構です。憎んでいると思いますわ、本当に。もしも、もう一度自分の心を確かめてみまして、そのとおりだと分かりましたら、何に代えましても、私たちの間で事態がこれ以上先へ進むことのないようにするつもりです」

だが、分かるのだ。俺には分かるのだよ。俺を憎んでなどいないことがな。俺の自惚れ心にとってはとてつもない屈辱だ。俺を憎むことの出来る女がこの世にいるなどと、ましてや、この女がそうだなどと思うのはな。彼女は俺のことをワルと見ているが、憎悪を誘うワルなどでないことは明らかなのだ。最後の最後になって、何かの際にワルを卒業することが出来さえすればだがね。彼女にしても、自分では固く心に決めたことと思い込んでいたのだが、固執するわけには行かなかったのだよ。それは、彼女に言わせると「ずいぶん便利な膝」ということになるが、俺が膝をつき、彼女の懸念を消し去ろうと試みた途端に、彼女の目付きで分かったことなのだ。俺の焦らすような態度が彼女の愛情に蓋をしてしまったわけだが、そのザラザラとした覆いが完全に取り除かれるなら、すぐにもその奥に見出されるものは、あくまでも柔らかく、光沢を放ち、心を魅了する絹糸や銀糸ばかりなのは疑いないのだよ。

しかし、俺としてもすっかり困惑し、平静を失い、屈辱を味わっていたので、退出しようとする彼女を引き止めるわけには行かなかったのだよ。だが、ドーカスが合図の咳をしなかったら、彼女も立ち去りはしなかったのだ。

あの小娘は、女主人が引き下がるとすぐに入ってきて、自分の取った写しを渡してくれた。一体何の写しかと思えば、驚くなかれ、贈与財産に関する俺の書面による申し出に対して、あの真に称賛すべき女がよこそうとしていた返事の写しなのだよ。

今のところ、この心ときめかす文面にはざっと目を通しただけだ。注意深く読むとなれば、今夜は一睡もしないことになるだろう。明日にしよう。真剣に検討するのはな。

手紙　三十六
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月二十三日　火曜日　朝

顔を出すのは夕方まで勘弁してほしいと、愛しの君のご希望だ。ドーカスの言では、具

合があまり良くないのだよ。
　もし良かったら、ドーカスに書き写してもらった手紙をここで読んでもらおう。この称賛すべき女性を相手に俺の計画を推し進めたりするのは、出来ない話だな。さらに二、三の試練を加えた上でだが、既に通り抜けたものと同じように、立派にそれらを耐え抜いた場合には、俺としても、法に適った形で（本当に俺を憎んでいないのならだが）彼女を迎え入れる覚悟が出来ている、というのでなければな。

ラヴレース様へ

　女性は結婚いたしますと、俗界でのあの至上の義務という点からも、夫の真の名誉に関わりますすべての場合におきまして、夫の意向に対しましては、自らの意思を譲らねばならなくなるのです。でも、そうなります前に、これまでいつも表明してまいりました考えに沿うことなのですが、父との訴訟沙汰を避ける方途は一つ残らず試みられて然るべきだという、はっきりとしたお約束をいただけますと有難いのです。時間を掛けまして耐え忍びますなら、どのようなことでも克服出来るはずです。私が幸せになる見込みは極度に狭められております。夫の権利のほうはいつだって同じままでしょう。生きておりますかぎり、このようなことには決してなりませぬよう、心から願う次第です。貴方の暮らし向きからいたしまして、父の所有しておりますものを無理やり奪い取らねばならないということでもありますまい。私の一存に委ねられておりますこと一切につきましては、身嗜みのことであれ娯楽であれ、あるいは、既婚の女性でしたら、地位とか身分とかを問わず、どなたもが決してないがしろにしてはいけない倹約のことにつきましても、その種の処置が講じられる必要のなきよう努める所存でおります。そして、そのような処置は不要という場合でしても、さらに申し開きの立ち難い動機が影響を及ぼすことのなきよう希望する次第です。つまり、心の狭さに由来しているに違いないものですが、そういった心の狭さを持ち合わせない女性といたしましては、狭量な人だということで夫を見下したくなりますような誘惑、妻としての務めをもってしましても、いつも抑えるわけにはまいらないという、そんな誘惑に駆られてしまいますような動機のことです。とりわけ、自分自身にとりまして大きな部分を占めております家族、また、決して免れることの出来ない義務を（ただ、妻となりました時には、二番目の義務に過ぎなくなりますが）負わせることにもなります自分の家族と深い関わりがあります場合には、なおさらのことになりましょう。
　それゆえ、私の心を捉えて放さないこととといたしまして、この点を真剣にお考えくださいますよう要請いたします。身内の者たちと貴方との免れ難い不和につきまして、ここで詳しく触れることはいたしません。落ち度はどちらの側にもあるのでしょう。でも、貴方のものがきっかけになっているのです。少なくとも、兄が敵意を向けますためのいかにも尤もな口実を用意なさったのは、貴方のほうなのです。譲るということを、貴方は少しも学んできておられないのです。貴方は、汚名をすすぐことに努力なさるよりも、被せられました汚名に耐えることのほうを選ばれたのです。
　でも、これでは、悪意に満ちた非難合戦になるかもしれません。ここで申し上げておきたいのは、ただ、身内の者たちにいたしますと、自分たちの溺愛していた娘を貴方が奪い取ってしまったように見えるという点、そして、そのための怒りは、皆の愛情と失望の大

きさを反映しているに他ならないのだという点を覚えておいていただきたいということだけです。仮に皆の取りました手段のいくつかが間違っているといたしましても、自分たち自身はそう思わないのでしたら、皆に代わって判断を下すのは一体だれなのでしょう。貴方は、だれのことでもご自分のお気持ちの向くままに判断なさいますし、貴方ご自身に関しましては、だれにも判断を任せたりはなさらないのですから、皆の裁き人になってはいけないのです。従いまして、皆のほうでは最後まで頑張ることが予想されましょう。

私自身のことにつきましては、貴方の公正な処置に「それが運命のようですから」委ねまして、私に相応しいと貴方がお考えになる、そのとおりの扱いに甘んじなければいけないと思います。でも、身内の者たちに対する貴方のお振舞いが今後とも、一部の者の気性について貴方も非難しておられる、あの辛辣苛酷な無慈悲さに支配されることがないようでしたら、お家柄の見事さや、素晴らしいご声望の方たちもおられます点が（確かに、皆様が、と申し上げるべきところなのでしょうが、良心に照らしてご覧になれば、お一人だけ例外がありますのは貴方にもお分かりでしょう）、身内の者たちにとりましては、よくよく考えました時には、絶大な力を発揮するはずなのです。と申しますのも、皆のほうから折れてくることも考えられるからです。ただ、非常に家運の栄えております者は、他の人たちに比べまして、抑えつけられるとか、望みを挫かれることに耐えるのは苦手なものですから、それだけに、おそらく、一層大きな困難を伴うこととは存じます。貴方には正直に打ち明けますが、身内の者たちにとりましては、手にした莫大な富が落とし穴だったのだと、私といたしましては、心密かに恨んだこともしばしばございました。貴方にとりましては、何か他の偶然の賜物がそうだったのでしょうが、皆にとりましては、おそらくこれが同じくらい大きな落とし穴だったのです。貴方が授かりましたものは、ただちに貴方ご自身の資質とは申し難いわけですから、私の身内と比べましても、それを自慢なさる根拠はさらに乏しいように思います。

この件につきましては、次のことを申し添えるに止めます。つまり、謙譲は卑しさとは違うということです。譲るということには、気性の激しい人にはなかなか計り知ることの出来ない喜びがあるものなのです。この点は、おそらく、貴方と同様に兄にも理解出来ないことなのでしょう。ただ、貴方は兄にはない才能に恵まれておられるのですから（とは申せ、兄には品行を重んじる気持ちがあるように思われますし、その面で欠けておられるところこそ、貴方に対して兄が唱える異議の一つとなっているのです）、互いに抱いておられる反感が収まらないのは貴方に起因するのだ、などということになりませぬよう願う次第です。と申しますのも、いずれ貴方たちが顔を合わせましても、妻として、また、妹として、その結果につきまして不安を掻き立てられるようなことになりませぬよう、真剣に願うからなのです。貴方の名誉と真に関わりを持ちます点について譲っていただきたいと申しているのではありません。断じて違います。そのような事柄につきましては、貴方ご自身に負けないくらい敏感なつもりですし、その気持ちが一貫していることでは優っておりますから、敢えて、貴方以上に気を遣うほうだと申しておきましょう。つまらないしきたりに拘ることを誇示し、最も大切な義務の数々を放棄したり、冗談の種にしたりいたしますようなプライドは、何と無益なことでしょうか。それこそ見下げ果てたプライドというものです。

私の希望どおりにこの点を考慮していただけますなら、その他のことはすべて容易に決

まりましょう。私のために予定しておられるように思われます、多額の別会計分をお受けするといたしますと、祖父が亡くなりました際に、その地所から得ました相当な額のお金もございますし（お申し出の向きから拝察いたしますに、おそらく、貴方の予想を越えた額なのです）、そのうちから、家族のため、また、予期せぬ出来事のために蓄えておきますのが、私の務めかと存じます。私が行います施しと申しますのは、収入のいかんに拘わりませず、通常はその十分の一に止めているからでございます。その種の行いで人目を奪おうというつもりはございません。障害のある人、盲人、病弱な人、それに、せっせと働きながらも貧乏な人たち、また、事故のために、あるいは、不慮の災難に遭ってそうなりました人たちを救う力を授かりますこと、ただそれだけが私の願いなのです。普通の貧乏人とか、生まれつき貧しい人たちのことは、他の方たちにお任せいたしますし、公的な支給に委ねます。あの人たちも、さらに身を落とすことは有り得ませんし、おそらく、身を立てたいとは思っていないのです。それに、すべての人たちに尽くすわけにもまいりませんので、余徳の業を目指すつもりはございません。別会計の中でしたいと願っておりますことのすべては、年二百ポンドで間に合うことでしょう。今申しました額を請求させていただくことで満足したいと思います。ただ、ご自分は家政の手腕には自信がないということで、将来の偶発事に備えるため、さらに多額のお金の管理や保管を私に委ねたいとおっしゃるのでしたら別です。その場合にも、貴方の執事として、収支の報告は定期的にさせていただきます。

衣装に関しましては、私個人用のスーツが二揃いございまして、いわば試着をしてみただけのものですから、差し当たりましては、どのような折にも対処出来ましょう。宝石類は祖母のものがございまして、仕立て直しをするだけとなっております。もう一セット所持しておりますが、これは特別な日によく身に着けていたものです。これらはまだ届けられてはおりませんが、ただの動産にすぎませんから、別姓で請求いたしました時には、必ずや送り届けられるものと存じます。ただ、それまでは、どれにいたしましても、この身に飾りたいとは思いません。

私の臆病さなどにつきまして漏らしておられる不平の件ですが、お咎めを受けますよりは、むしろ、容認されて当然ではないのか、また、あれだけのことを公言しておられるのですから、この世の男性すべての中でも貴方に限りましては、そのような考え方をなさってはいけないのではないか、この点を貴方ご自身の胸に訴えたいと存じます。もしも、ほんの一瞬でも私の立場にご自分を置かれ、ご自分の態度や言動のいくつかを思い起こしていただけるのでしたら　…　そうしてはいただけないのでしたら、きっと私たちの心に浮かんでくるはずの、大層不釣合な組み合わせという考えからいたしましても、最も親密であるべき関係を私との間に結ぼうとなさること、そして、それを望まれることすらなさってはいけないと忠告させていただこうと思います。

五月二十日

クラリッサ・ハーロー

この魅惑的な書面の現物は、ドーカスによると、ほぼ真っ二つに引き裂かれていたそうだ。カッとした際にやったことなのだろう。誇りとすべき第一のものは従順さであり、忍耐であり、そして、諦めであるというのが女なのだよ。怒りに流されたりしてどうするというのだ、まったく。生娘のうちからこれだけ勝手な真似をしてみせるのだぞ。結婚すれ

ば、もっと気儘に振る舞うのではないのかな。

癇癪持ちの妻とはな　…　一言ご婦人たちに言わせてもらおう。妻たる者が癇癪を起こしたりするのは、それっきり手を切るつもりだとか、不埒にも反抗してみせるつもりだとかいうのでなければ、失礼ながら、厚かましい話なのだよ。厚かましい上に無分別なことだ。それでは、一気に捨て去ってしまうことになるのではないのかな。諫めごとを口にする時のあの柔和さ一切をだよ。そして、穏やかな溜め息を交え、膝を折り、懇願の手を差し伸べ、涙が溢れ出した目で夫の厳めしい顔付きを仰ぎ見ながら淑やかになされる、あの穏やかに筋を通した諭し方もだ。それこそが速やかな和解をもたらすものなのだ。速やかにして永遠の和解をだよ。たとえ、夫が間違っているとしても構わない。夫に非があるのであれば、妻の諫めはいよいよ力を得ることになるのではないのかな。

思うに、男としては、妻を際立たせるためにも、時々は過ちを犯すべきなのだよ。逆境こそ彼女が輝きを放つ時だと、我が魅惑の君に向かってハウ嬢は言っている。自分を犠牲にして妻を際立たせるなど、男の優しさというものだな。辛抱強く説くことで、妻が夫に対して凱歌を奏でるというわけだが、それを許そうというのだ。夫が尊大すぎて、自らの落ち度をその場では認めないとしても、妻のほうでは、本分を尽くし、おとなしく従うことがもたらす有難味をいずれ知るのだし、思慮深さや協力的なところを夫に高く評価してもらう有難味も分かるのだよ。こうして妻は、徐々に主人の主となるわけだ。

だが、片方の手を腰に当てて肘を張り、もう一方の手を、多分、指差しながらだが、投げ出すようにして近寄り、妻がこんな台詞を吐くとしたら　…　「ほら、いいわね、あんた。気をつけるのね。あんたが間違ったことをするのなら、私だってするわよ。あんたが腹を立てるのなら、私も怒りますからね。そっちが撥ねつけるのなら、こっちだって絶交よ。食って掛かるのなら、掻きむしって上げるわ。毒づくのなら呪うわよ。一つ屋根の下でベッドを共にするなんて、もう御免だわ。どうしようもないわね、あんたって人は。あんたの名誉とやらも、心の安らぎ同様、私の手の内にあるんですからね。それに、これが気に食わないとおっしゃるのなら、もっと手酷く扱って上げるわ」とだよ。

あゝ、ジャック、ジャック、それとなくであれ、あからさまにであれ、他の家族のこんなところを目にしたことのある者で、夫になろうと思う奴などがどこにいるというのだ。

ドーカスはこの手紙を、奥様の鏡台の引き出しの一つから見つけ出したのだ。律義な娘の推測によると、茶の席に顔を出してもらいたいという俺の伝言を携えて行った時、令嬢はこの手紙を読み返していたらしいのだ。というのも、娘が入って行くと、引き出しに手紙を投げ込む奥様の姿が目に入ったというのだ。そこで、食堂で俺に会うため、奥様が出て行ったので、引き出しから探し出してみたところ、この手紙だったというわけだ。

だが、俺の知るかぎりでは、写しを手に入れないほうが良かったようにも思うのだ。というのは、それまでは作戦決行のつもりでいたのだが、写しを見た途端、すっかり決心が変わってしまい、彼女のために一肌脱ぐ気になったのだよ。ただ、何をおいても確信しておきたいことがあるのだ。彼女が小娘の前で手紙を引き出しに投げ入れたのは、俺の目に入れるためではなかったのだということ、また、もしかして（俺が手紙に言及したりすればの話だが）、ドーカスはもっぱら俺の味方なのか、それとも、彼女の味方なのか、ハウ嬢の忠告どおりに、それを見破ろうとしてのことでもなかったのだという点をだ。

こんなことを疑うこと自体、彼女のためにはなるまい。何しろ、俺は手管を使われるの

が我慢出来ない男だからな。独自の才能は、人間だれしも、いわば独り占めにしたがるものなのだよ。そんなことを言うと、彼女のための貴公の反論を強化することになるのは自覚しているさ。だが、すべて分かっているのだよ。貴公が口に出来ることくらいはな。そこで頼むのだが、とりとめもないたわごとは無しにしてもらいたいのだ。そして、この卓越せる麗人と俺のことは、二人の運命に委ねてもらいたい。その運命がわれわれに成り代わって決めてくれるはずだよ、気の済むようにな。カウリーもこう詠っている。

見えない手が生み出すのだよ、われわれの動きすべては。
壮大なものもあれば、また、卑小なものもある。
ある者は幸福へとよじ登り、幸を失い墜ちる者もある。
ある者を賢者と称し、ある者は愚者と呼ぶ。
あゝ、言葉のあやだ　…　われわれすべてを弄ぶのは運命だ(三八)。

しかし、結局の話、気の毒だが、さらに吟味を重ねてみるまでは、結婚に踏み切るわけに行かないのだよ。気の毒な気もするといったところだな（だって、本気で気の毒がるようなことが、どうして俺に出来るのだ。そんな心は持ち合わせていないわけだからな）。俺の申し出に答えるつもりだったこの返事を、今もう一度読み返してみたところだ。何とも素晴らしい女だと思うぞ。

だが、しかしだ。もう一つ「しかし」と言っておくが、俺に手渡したのでも、送り届けたのでもないのだよ。それゆえ、彼女の返事ということにはならんのだよ。俺宛に書かれてはいるが、俺に渡すべく書かれたわけではないのだ。

いいや、送り届けるつもりなど彼女にはなかったのさ。引き裂いてさえいるのだ。俺には立派すぎると考え、多分、腹立ち紛れにやったことなのだろう。こういう挙に出たということは、完全に撤回するという意味なのだよ。それでいて、どうしてなのだ。ふがいのない我が恋情は、彼女の行いを天晴なものとして、この胸にしっかり刻み込もうとしているのだよ。まるで、彼女が率直に愛を認めたかのようにな。親愛なるベルフォードよ、重ねての頼みだ。われわれのことは運命に委ねてほしいのだよ。貴公のたわごとは差し挟まないでくれ。既にすっかり臆病風に吹かれているのだ。それでは気力が萎えてしまう。彼女の味方だと公言している良心に力を貸すことになるのだ。

それにだな、ラヴレース、近頃気づいた事柄を思い起こすことだ。彼女のよそよそしさを思い出してみろ。どう見ても、軽蔑の念と嫌悪の情に付き纏われている様子がありありだ。彼女の姿はどうだ。今でさえ打ち解けようとせず、謎に包まれている。貴公の知るかぎりでは、陰謀を企てているわけだが、貴公が勝利者の権利として、彼女相手に勝ち得た主権に対してなのだよ。要するにだ、貴公がこの高慢なる美女を相手に、つまり、臣下の列に自分の名を連ねながら、その権威者に盾突いている反逆者に向かって、いずれ思い出してやるぞと脅しておいた事柄すべてを思い起こすのだよ。

だが、それにしても、どうやって貴公の愛らしき敵を屈服させるつもりかな。力ずくというのは、力に頼らねばならない状態というのは、断じて忌避されねばならんのだ。避けられるものならな。力ずくでは勝ったことにはなるまい。心を征服するわけには行かんのだ。穏やかな手順を踏んで、穏やかな感情に打ち克つのとは違うのだよ。力は悪なのだ。

何度も話したことだが、当初は、俺の忌まわしい人柄が障害だったのだ。しかし、彼女とて女ではないのかな。骨の髄まで俺を憎んでいるのではないのなら、心を傾けてくれる瞬間、せめて半分なりと心を傾けてくれる瞬間は見つからないものだろうか。

だが、何をもってすれば彼女を誘惑出来るのだ。彼女は生まれた時から富裕の身であるし、その何たるかを承知の上で、富を軽蔑しているのだ。宝石や装身具にしても、宝石さながらの心、それも、豪華に飾り立てられた心にしてみれば、自らの値打ちを自覚しているだけに、そんなものに価値を置く気にはならないだろう。愛情はどうかと言えば、たとえ愛に動かされることが彼女にあるとしても、その愛はすっかり思慮分別の言いなりになっているらしいから、一瞬のことであっても無防備な状態を期待するというのは、どうやら無理なように思うのだ。それに、あれだけ警戒し、あれだけ察しが良いわけだから、いつだって懸念のほうが先に立ち、危ないことなどには近寄りもしない。また、徳を愛するのが方針らしい。生まれついての主義なのだろう。あるいは、生まれついてのものではないにしても、胸の奥深くに根を張っているため、そのひげ根は心の中にまで潜り込んでいるのだ。そして、彼女が成長するにつれ、生命の糸と渾然一体絡み合ってしまい、片方を切断しないことには、もう一方を引き離すわけに行かないように思うのだよ。

だとすれば、こんな類い稀な娘に最初の試練をいくつか乗り越えさせるには、一体何が出来るのかということだ。彼女を、「一度落とされれば、常に落ちはしまいか」という、最大の試練に遭わせるためにだがね。

例の母さんと彼女の妖精たちは、俺がまったくの意気地無しで、ラヴレースの面影もないと言っている。そのとおりだと思うぞ。ただ、この女は、これまでの他の女たちはそうだったのだが、俺が艶っぽい話題にそれとなく触れると、ニヤニヤと愛想笑いをしてみせるような、男心をそそる女ではないということだよ。これは、俺も一、二度試したことなのだ。われわれ三人だけになった時のことだが、母さんがその種の話題を持ち出してくれたのだよ（そんな無礼も、女のよしみでというつもりだ）。分かり兼ねている振りをしてみせる女ではない。淫らな心は卑猥な言葉で判るものだということを、不快そうな顔や、普段とは違う厳しい目付きで示して見せるのだよ。そして、スキあらばとにじり寄る女たらしの膨らみかけたばかりの希望の芽でさえも、ひと睨みで睨み殺してしまうのだ。いかに遠回しな言い方がなされようと、その意味ありげな仄めかしが下卑た曖昧言葉となって発せられる前にだよ。

誓って言うが、ジャック、腰を下ろし、全神経をこの目に集中して彼女の非の打ち所とてない姿を眺めていると、そして、彼女が寛ぎ、晴れやかなのを見て、一体何を思い巡らしているのか、俺の胸の内を俺同様に分かっているのかと考えると、また、うろたえながら一途に心を配っている姿に触れ、彼女の懸念が当を得たものであり、いかに危惧しようと、なお危惧すべき余地が残っているのを思うと、この心に不安がよぎることもしばしばなのだよ。

また、こうも思う。あゝ、神々しいまでに卓越した、心の底より愛する人よ …… 君主さえも幸せにするというその腕、この身を包むその両腕は、荒々しい力を撥ね返すために用いられねばならないのか。おそらくは無駄に終わるのだろうが、撥ねつけようとしてあらん限りの力を振り絞り、あゝも華奢な造りの身体を守るために用いられねばならないのか、とだよ。自ら進んで寄せてくれる愛、ただし、高潔な愛の、そのすべてを受ける立場

となるかもしれず、また、切望してやまない祝福にしても、それを授けるのは彼女の義務というようにすることも出来るかもしれないのに、破廉恥な男の心には、手籠めなどという考えが思い浮かぶものだろうか。消えてなくなるのだ、邪悪な意図の数々よ。全部揃って地獄に墜ちろ。お前らに生気を与えるのはそこしかないのだ。そうなれば、すぐにも彼女の足下にこの身を投げ出し、悪辣な意図を打ち明けよう。悔い改めることを率直に認めよう。そして、これだけ卓越した女を相手に卑劣な振舞いに及ぶような真似は、俺の力の及ばないことにしてしまうのだ。

だとすれば、この憐憫の情、人によっては真っ当な感情と呼ぶこの気持ちが、跡形もなく消え去ってしまうのは何故なのだ。そうだ、ハウ嬢が貴公に教えてくれるだろう。あの女に言わせると、俺は悪魔なのだそうだ。今のところは、まったくの話、俺の体の中では悪魔がのさばっているように思われるのだよ。

どうだ。正直なものだろう。すっかりさらけ出してしまうのだよ、貴公には。だが、分かってはもらえないかな。俺が自分に不利な言葉を並べれば並べるほど、貴公には俺を咎めるべき余地がなくなって行くということをだ。あゝ、ベルフォード、ベルフォード、結婚は無理なのだよ、俺にはな。結婚するわけには（少なくとも現在のところはだが）行かないのだよ。

それに、彼女の一族のことがある。不倶戴天の敵だというのに、連中の言いなりにならねばならんのだ。そうしなければ、彼女が不幸になるのだよ。俺の企てによって不幸になるのと同じくらいにな。

それに、彼女は連中を愛しすぎており、俺への愛が乏しすぎるのではないのかな。

今では俺を軽蔑しているらしいのだ。心底軽蔑していることは、ハウ嬢もはっきり口にしていることなのだ。妻から軽蔑されるというのだぞ。何という考えだ。称賛に値する知識すべてに亘って、妻に凌駕されることにもなるのだよ。妻に教えを受け、指図を受けるというのだ。軽蔑しているだけではない。彼女自身も、俺を憎んではいまいかと、時間を掛けて検討しているのだ。「私、貴方のことは心の底から嫌っておりますわ、ラヴレースさん」と、つい昨日のことだが、彼女は言っていたのだよ。「貴方などの手の及ばないところにあるのです、私の心は。言わせないでほしいのです。私の心は貴方の手の及ばないところにあると、本気でそう考えておりますことを　…　」ともだ。あの時ばかりは、我がことながら、何とも実に惨めな思いだったよ。俺のように誇り高い者にとっても、彼女の優位は歴然たるものなのだ。それに、ここでは階下から、正しく下のほうからだが、あの女どものひどい突き上げがあるのだよ。

だが、自分のことをあんな恥知らずどもの手に握られた道具のように思うのは、これまた惨めな話なのだ。俺が道具などであってたまるか。ラヴレースよ、自分を道具であるかのように考えるなど、お前にとってはそれだけでも身の恥というものだ。

しかし、ここまで事を進めてしまったのだ。結婚した後、不機嫌の虫に襲われた際などに、最後のところまで試して見なかったことで自分を責めねばならなくなるようでは、それも不幸な話だろう。だが、どういう訳かは分からないのだが、俺が面前に罷り出た途端にこの淑女は、俺をその美徳に半ば同化してしまうのだよ。一度か二度（日曜の夜の彼女の勝利については触れずにおくが）、取り乱した態度を取る気になったことがある。少しばかり攻め込んでみようと考えてのことだが、撤退を余儀なくされた場合にも、気持ちが高

ぶっていたせいに出来ると思ったのだよ。ところが、彼女と顔を合わせた途端、生真面目な気分になり、畏敬の念を抱いてしまったのだ。目にも鮮やかな彼女の貞潔さに備わる威厳が、俺の陰険な炎に先ずは水を注ぎ、やがては完全に消し去ってしまったのだ。

何とも驚くほど強烈な影響力だ。こうもしっかりと、こうも長い間、彼女は俺の手中にあるというのにだよ。女どもの何人かからはしきりに唆され、激情にこれだけ衝き動かされているのだよ、俺のほうは。一体、これにはどんな説明のつけ方があるというのだ。ラヴレースともあろう男についてなのだからな。

それにしても、ずいぶん御託を並べたものだ。ひどく抑えがきかなくなってしまっている。一体、何のせいでなのだ。何故だと思うかな、貴公は。あゝ、汝、心に潜む侍女、良心よ。かくのごとく俺を俺自身に敵対せしめたのは、そなたなのか。いかなる手を用いて潜り込んだのだ。いかなる姿に身を変えたのだ、そなたは。より心地好き時間を言語道断にも邪魔する者よ。立つのだ。運命と並んでな。だが、この論争にあっては、中立を守ってもらおう。そして、俺のような生き方は人間の本性にとって誉れとはなり得ないものだというのであれば、そしてまた、かくのごとき天使を女人の列に引きずり下ろし、女の飾りとするようでは（何しろ、彼女の短所そのものですら、女性の美を引き立たせてくれるのだ）、女性に名誉をもたらすことにはならないというのなら、その時こそ、この身すべてをそなたに委ね、以後は、一切の抵抗を止すことにしよう。

ここで、俺は立ち上がると、ブルンと体をひとゆすりした。窓は開け放ってあった。この胸に入り込んだ厄介者、あの侵入者は、サッとばかりに飛び去っていったよ。まだその姿が見えるぞ。まだ見えるのだ。ようやく、この痛みに疼く目にもその姿は小さくなっている。そして今、奴の通り抜けて行った後ろで大気の隙間が閉じ、その姿は視界から消え去った。そして再び、俺は自分を取り戻したというわけだ。

ロバート・ラヴレース

手紙　三十七

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月二十三日　火曜日

フレッチヴィル夫人と例の家の話はなかったことにしようと決めたわけだが、これは正解だった。それも、ぎりぎり間に合ったというところだな。メネルが、良心の点でも信義からしても、これ以上事を進めるわけに行かないと言い出しているのだ。あれほどの淑女を欺く片棒を担ぐようなことは、金輪際したくないというのだよ。俺も馬鹿な真似をしたものだ。貴公にせよあいつにせよ、彼女に会わせてしまったのはな。何しろ、あれ以後ずっとだからな、貴公らが良心の咎めを感じているのは。ただの女のことが問題になっていたのならば、二人のどちらにしても、そんなものは感じなかったはずなのだ。

まあ、俺にはどうにもならんことだよ。

それでもメネルは、不本意なところもいくぶんあるようだが、俺宛の手紙を一通書くことには同意してくれたよ。この件で奴が果たす最後の仕事にしてくれるなら、ということだった。

俺は話してやったよ。奴の抜けた穴にフレッチヴィル夫人の下女を当てることになっても、異存はないだろうな、とだ。

「まったくございませんが、お気の毒では　…　」と、奴は言っている。

情けない男だよ、奴も。奴の同情心などは実に滑稽なものさ。どうあっても罪のない若鶏を殺す気にはなれないと抜かしながら、つぶされたのが手元に用意されると、いつだって、だれにも負けない勢いでかぶりつくような、そんな連中の憐れみの心と似たようなものなのだ。

ところで、この手紙によると、下女が疱瘡に罹り、幸薄いふさぎがちなご婦人にうつしてしまったことになるのだ。ふさぎがちな人間というのは、絶えず病魔が働き掛ける相手なのだよ。病名を口にするだけで、瞬く間に連中は病人なのだ。病菌を植え込まれる用意はいつだって出来ているのさ。医を生業とする者にとっては金蔓なのだ。医者どもにしてみれば、ふさぎ込んだ者や憂欝症の人間はヴァイオリンといったところで、連中はいつまでもそいつを弾き奏でているというわけだ。妙なる調べを奏でてくれるのだな、連中にとっては。骨の折れるところといえば、異常な事態になる場合を除くと（気の毒に、フレッチヴィル夫人の場合がそうで、懸念していたことが現実になってしまったわけだが）、精々のところ、患者が自分自身に向かって起訴状の原案を作成している間、顔色一つ変えずにおくことくらいなものだ。そして、訴えを聞き終えた上で処罰に取り掛かるわけだが、処方というよりは、この処罰というほうが正しい言い方なのだ。何せ、罪人が罪を認めたようなものだからな。そして、いやというほど懲らしめるのが連中の通例なのだよ。

だが、考えてみると、思慮の足りない鼻つまみ連中でもあるわけだ。というのも、自分たちでは役に立たないことが分かっているのなら、患者の舌を楽しませる努力をしても悪くはないと思うからだよ。吐き気を催させるだけではなくな。

俺が医者なら、この商売を独り占めにしてみせるな。何しろ、俺が主に与える薬は、マームジー(三九)、それと、キプロスや少し手を加えたケープ地方の馥郁たる酒だからな。こういったものは新たな活力源となるわけだから、元気を取り戻した患者はしきりと薬を欲しがるだろうし、医者を崇めることになるという寸法だ。

貴公の知り合いの医者仲間のうち、偉そうにしている奴ら全員に、こういった心得を教えてやるのだな。不都合が起こるとしても、精々一つだ。薬剤師にとっては薬代が結構かさむことになるというだけだよ。しかし、それも需要が多いことで解決するだろう。律義な看護人が患者のために毒味をし、この前の強壮剤をまた頼むと、ひっきりなしに求めることになるからだよ。

それはともかく、例の手紙に戻ることにする。だが、先の手紙であれこれ触れたことでもあり、これ以上は説明の必要もあるまい。例の未亡人は他所へ移るわけに行かないのだし、それで十分なのだ。メネルの仕事は終わったということだ。他の人間が犯した罪のためでなく、自分の罪業で苦しむのは、奴の良心次第というわけだ。そして、おそらく、たっぷりと苛まれることだろう。

この手紙の宛名は、「ロバート・ラヴレース殿へ。なお、氏ご不在の場合は奥方へ」となっている。彼女は俺との食事を、つまり、俺と顔を合わせるのを断っていたので、手紙が届いた時には、俺は外出中だった。開封したのは彼女なのだ。つまり、尊大で威勢も良いが、自ら俺の妻であることを認めたというわけだ。

内心嬉しく思っているよ。二人のことがすっかり落ち着く前に手紙が届いたのをな。でなかったら、おそらく彼女のほうでは、引き延ばしのためのはかりごとと考えていただろうからな。おまけに、争いごとは古いのも新しいのも、これでまとめて折り合いをつけられるわけだ。それでこそ、はかりごとというものだろう。それにしても、初めて知り合った頃と比べると、愛しの君の高慢な心もずいぶんと謙虚になったものだよ。俺のほうから少しでも引き延ばすようなことがあっては、と案じてくれるし、引き延ばしをされて顔に出すのは、もっぱら苛立ちの表情なのだからな。

俺が戻ったのはディナーの時だ。彼女は手紙を階下へ届けてよこしたが、開封したことを詫びていた。知らぬ間に開けてしまっていたということだ。女の矜持ってやつだよ、ベルフォード。思い起こしてみた上で、後は逃げの一手さ。

手紙の件で今すぐ会ってほしいと俺は願い出た。ところが、彼女のほうでは、会うのを翌朝まで延ばしてもらいたいというのだよ。何度会っても会い足りない気持ちだと、彼女の口から白状させてやるつもりだ。ケリをつける前にな。

あまりの予期せぬ出来事に、俺としてはとてもじっとしておられず、一筆認め、次のように彼女に伝えた。この偶発事にはひどく困惑しているということ、ただ、慶ばしい日取りついては、家の件で左右されるわけのものでもなく［それはかねてより承知のことと彼女は考えるだろうし、俺もそう思ったのだ］、延期には及ばないということ、また、メネル氏を通じ、フレッチヴィル夫人のほうでもその点についての懸念を大層丁重な言葉で表明し、われわれ二人に差し障りがなければ、やむを得ざる延期を呑んでもらえると有難い旨を話していたとのことでもあり、俺としては、最高の果報者にしていただいた暁には、夏の間の二、三ヶ月、ローン荘へ赴くのが関係者一同にとって好都合のように思う、といったことをだ。

愛しの君はこの不慮の出来事をひどく気に病んでいるのだろう。間違いない。彼女の拒絶にも拘らず繰り返し行った、会ってもらいたいという俺の求めに対し、翌朝までは無理だが、俺が構わないのなら、六時にしましょう、と彼女は言ってよこした。

勿論、俺は構わないさ。

今じゃあ、彼女と会えるのは日に一度なのだよ、ジャック。

従姉妹のモンタギューに手紙を出したことは話してあったかな。極めて興味深い話題なのに、M卿から便りがないのは妙だと言ってやったのだよ。その中で、俺が手に入れようとしている家のこと、それと、フレッチヴィル夫人がふさぎがちなために、話が遅れていることを知らせておいた。

男であれ女であれ、一族の者を今回の件に巻き込むのは、俺としても甚だ気が進まなかったのだが、抜かりなく事を進めなければいけないのだ。それに、かねてから連中は、一人残らず、精一杯俺のことを悪党扱いしているのだよ。君本人宛のM卿の手紙から君も気づいてくれるだろうが、お行儀の良い殿様は、俺がこの天晴な女に対して、いつもの汚い手でも使うのではないかと案じているのだ。

ちょうど今し方、シャーロットからの返事が届いたところだ。

シャーロットは体調を崩している。腹具合が悪いんだとよ。

腹の調子で女の子が悩むのに不思議はないさ。独り者だからな。そういうことだよ。悩ませてやる男の一人も出来た暁には、腹そのもの以外にも食いものにするものを見つける

ことになるだろう。それに、貴公は知らなかったのかな。男は女の太陽であって、女は男にとっての大地なのだよ。太陽の光が降り注ぐことのない大地なんて、実に荒涼として侘しいものさ。

シャーロットも気の毒だが、あの娘の具合が良くないことは耳にしていたのだ。だからこそ、手紙を出す気になったのさ。我が魅惑の君訪問のための上京を、自ら思いついてくれなかったのは少々気になるところだ、とな。

この後に掲げるのが、あの娘の手紙の写しだ。これで分かってもらえるだろうが、お節介な奴らがどいつもこいつも、俺様をうるさく問い質そうとするのだよ。皆揃って俺の善良な気質を当てにしているというわけだ。

五月二十二日、M邸にて

親愛なる従兄弟へ

ずいぶん長いことと申さねばなりませんが、私どもといたしましては、幸せな絆が結ばれたとの吉報を、今日か今日かとお待ちいたしておりました。卿は大層ご体調を損ねておられました。それでも、貴方へのお返事を御自らお書きになるのでなければ、どうしても満足なさいません。少しばかりご助言を申し上げますのには、おそらく、後にも先にもこれが最後の機会ということだったのでしょう。いささかでもお役に立てばとのお考えからです。痛風の発作に煩わされておられない時には、一日に何時間もせっせと励んでおられました。今では、最終的な手直しをお加えになるだけとなっております。すべて卿の直筆となれば、それだけ貴方への効き目も大きいものと期待しておられるのです。

正直に申しまして、ラヴレースさん、卿の尊いお心は貴方のことで一杯なのです。貴方がその半分でもご自分を大切にしてくだされればと思います。でも、一族の者皆がもう少し貴方のことを大事にしなくなりますなら、貴方のほうではもっと自分を大切になさるはずと、私はそのようにも確信いたしております。

筆をお執りになれません時には、卿はプリチャードとしきりに相談を重ねてこられました。ご慶事に際しまして、貴方に贈与なさるご予定の地所の件でですが、最も満足していただけるようなお返事を認め、貴方のご招待をどんなに嬉しく思っておられるのか、その点を具体的な形でお示しになろうとのお気持ちからです。卿がご招待を大層誇らしく思っておられますことは保証いたします。

私自身のことですが、体調がまったく芳しくございません。ここ数週間というもの、思わしくないのですが、例の胃病です。でなければ、まだなのを貴方も不思議がっておられる表敬は、間違いなくもっと前に済ませていたことでしょう。お供してくださることになっておりましたベティ夫人も（私たち、すっかり準備を整えていたのです）、訴訟沙汰がございまして、すこぶるお忙しかったのです。相手の人は、現にその場に姿を見せておりまして、和解の申し入れをしているのです。でも、身内になってくださることになりましたあの愛しい人が、貴方の触れておられる新たなお住まいに落ち着かれました暁には、お訪ねさせていただくという栄誉に浴したいものと考えておりますので、その点はご安心くださって構いません。また、あのお嬢様に勇気が不足していて、少しでも遅れるようなことがございましたら（相手の男性のことを考慮いたしますと、そうなるのも当然至極かもしれないと申し上げておきます）、勇気を奮い起こしていただくよう、私たちのほうで努力い

たしますし、貴方の保証人にもなるつもりでおります。と申しますのも、あなた、これほどの至福への資格を授かりますためには、その前にもう一度、洗礼をし直していただく必要があるように思うのですよ。いかがでしょうか。

ちょうど今、お手紙を届けるための人を明日遣わすつもりだと、卿のお言葉がございました。ですから、私が筆を執る必要はなかったのです。でも、書き終えましたので、お届けすることにいたしましょう。エンプソンに頼みますが、間もなくロンドンへ戻ることになっているのです。

世界一立派なお嬢様に［どなたのことか、他の指示書きは必要ありませんね］、私と妹からくれぐれも宜しくお伝えくださいますようお願いいたしまして、結びといたします。

親愛なる貴方の従姉妹、そして、しもべ

CHARL. モンタギュー

実に都合の好い時にこの手紙が届いたということは、貴公にも察しがつくだろう。俺としては、卿が我が愛しの君に見せて構わないこと以外には何一つ筆にしないよう願っているよ。シャーロットのこの手紙は、現に彼女のところへ届けてあるのだ。良い効果を期待してもいるところさ。

R. L.

《次回の手紙において、令嬢はラヴレース氏との間の出来事の顛末をハウ嬢に報告している。いつもの威厳を忘れず、氏の振舞いに不快の意を表明するのであるが、メネル氏の手紙に言及する際には、氏の元を去る決心が固まったとして、自分の救出計画の仕上げをしてくれるよう、再度ハウ嬢に要請している。しかし、氏がモンタギュー嬢の手紙を届けると、令嬢は考えを変え、タウンゼンド夫人への働き掛けは暫時中断してくれるよう、同じ日付で願い出るのである。令嬢は以下のように述べている》

フレッチヴィル夫人と夫人のお屋敷についてあの人が言っておりましたこと一切を、それに、見てくれのとても良い人ではありますが、メネルさんのことさえ、私、疑い始めておりました。でも、あのお屋敷を買い取るおつもりでいることをお身内の方たちにお知らせしてありましたことや、あちらへ訪ねてくださるよう、ご婦人方の幾人かからお約束をいただいていることも分かってみますと、悪辣極まりない欺瞞行為にも走りかねないとしてあの人を非難いたしました点、我と我が身を咎めずにはおられませんでした。ただ、まことに説明のつけ難い振舞いをなさいました点や、あのとおり無用なまでにひねくれた行動に出られたという点では、私も申し上げましたが、たとえ善かれと考えたことでも、その妨げとなってしまうわけですから、自業自得と言って構わないのではないでしょうか。

手紙　三十八
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月二十四日　水曜日

《氏は友人に宛て、あの日の朝の面談について、また、従姉妹モンタギュー嬢の手紙がもたらした、氏に有利となる好影響について報告している。しかしながら、令嬢のよそよそしさが完全には払拭されていないことも語るのである。ただし、これは作法を重んじるがゆえのことと氏は考えている。氏の言葉は以下のとおりである》

本音をさらけ出すようなことは女には出来ないのだよ、こういった際にはな。だが、何故なのだろう。女というのは、ありのままの姿を見抜かれるのがそんなにも不名誉なことだと考えているのだろうか。

フレッチヴィル夫人の病気のことは遺憾だった。幸せな絆が結ばれる前に、愛しの君にはあの家に落ち着いてもらおうと思ったのだが、そうなれば、事実上も外見上も、彼女の選択は自由意思によるものだったことを世間中に知らせるのに必要な、あの独り立ちの状態に彼女を置くことになったはずだからだよ。それに、一族のご婦人方も、あちらの家へなら、取り決めごとや家財道具を整えている間に、ご機嫌伺いに出向くのを誇らしく思ってくれただろうからな。だが、他のいかなる点でも、大きな問題となることは別になかったのだ。目出度い日が過ぎてしまえば、ローン荘、M卿の屋敷、セアラ夫人やベティ夫人のところへ代わる代わる行けば良いのだし、それが大いに好都合でもあるのだ。召使にせよ他の受け入れ態勢にせよ、たっぷりと用意の時間が出来るわけだからな。

魅惑の君が耳を傾けて聞き入る姿には、まことにもって心和むものがあった。

疱瘡に罹ったことはあるかと、俺は尋ねてみたよ。

罹ったことがないとすると、一万ポンドの欠損という勘定だな、と俺は考えたよ。何しろ、彼女の素晴らしい魅力はどれ一つだって割愛するわけに行かんのだからな。

母親にとってもノートン夫人にしても、いつもそこがはっきりしない点だった、と彼女は認めていた。ただ、疱瘡を怖がるわけではないが、わざわざ疱瘡の出た場所へ好んで飛び込むつもりはないとのことだった。

それは結構、と俺は胸の内で叫んだよ。ただ、口では次のように言っておいた。そういうことでなければ、あの家を気に入ってもらえない場合は、俺としても買い取る義理はないのだから、田舎へ発つ前に一目見ておいてもらうのも悪いことではなかったのだ、とだ。

モンタギュー嬢の手紙の写しを取っても構わないかと、彼女が尋ねてきた。

手紙そのものを進呈するし、そうしたいならハウ嬢に届けても構わない。察するに、そのつもりなのだろうから、と言ってやった。

彼女は俺に向かって頭を下げてみせた。

どうだ、ジャック。そのうちには丁重なお辞儀もしてくれるようになるはずだ。疑いのないところだな。一体何の必要があったのだろうな。荒っぽいことを目論んで、あのたおやかなお嬢さんを怯えさせるなんてな。だが、俺に恐れを抱かせるよう仕向けたのは間違いではなかったと思うのだ。俺のことを不作法者だと彼女は言っているが、そういう男が見せる丁重な態度は、その一つ一つが恩恵のように受け止められるものなのだよ。

贈与財産が話題となった際には、この件では、プリチャード（従姉妹のシャーロットの手紙に出てきた名だが）に相談を持ち込むようなことはしてほしくなかった、と言っておいた。実際、プリチャードは誠実な男だし、雇われてから一世代ほども経っており、地所のことやその状況については、卿や俺よりも詳しいのだが、他の年寄り連中と同じく、臆

病で仕事が遅いのだよ。それに、文案作りの腕前が自慢なものだから、そんなつまらない評判が大事で、すべてにわたって自分のやり方を通すと言ってきかないのだ。たとえ、国王の即位は彼の手際良さ次第、ということになってもだよ。

この話し合いの間、撥ね除けようともしない彼女の手にキスをしたのだが、それも五回は下るまい。あゝ、ジャック、俺の気前の良い心は今にも溢れんばかりだったよ。別れ際にも実に優しくしてくれた。いわば退出の許しを請うてみせたのだ。シャーロットの手紙を今一度読み直すというのだ。俺に向かって両膝を曲げたようにも思うのだよ。だが、安心はしないことにする。いつもあのように従順にしてくれていたなら、とっくの昔に二人とも幸せになっていたのだ。実際、俺は敬われるのが好きだからな。また、そうしてもらうに相応しいかどうかは別にしても、この誇り高き美女と出会うまでは、俺はいつも尊敬を得ていたのだよ。

これでわれわれのこともいよいよ軌道に乗るわけだよ、ベルフォード。でなければ、本当にどうかしていることになる。城塞をめぐらせたどの町にだって、堅固な場所もあれば弱点もあるものなのだ。これまでは、難攻不落の部分に攻撃を加えていたのだよ。きっと彼女の外套を脱がせてみせるが、今後は陽射しを注ぐか、それとも、密輸に類した手口を用いることになるだろう。何しろ、彼女とハウ嬢は、俺から身を守るのに、密輸業者を雇う考えだったわけだからな。差し当たっては、卿からの便りを待つのみということだ。

ところで、危うく言い忘れるところだったが、俺と愛しの君についてちょっとした問い合わせがあったものだから、われわれとしても少なからず警戒しているのだよ。昨日、この近くの商人を使ってドーカスを呼び出した、立派な身なりの男からのものだが、この男が、われわれのことについていくつか、とりわけ（われわれが同じ家で寝食を共にしていることもあり）、二人は結婚しているのかどうか、ドーカスに尋ねたというのだ。

このため、我が愛しの君はすっかり落ち着きを失っている。俺としても、ここぞとばかりに、われわれは結婚しているのだと階下の者たちに知らせておいたのはまことに適切な処置であったと、所見を述べずにはいられなかったよ。問い合わせは、まず間違いないところだが、兄上の筋からのものであろうし、結婚していることが明らかになった以上、もう兄上の策謀について耳にすることはおそらくあるまい、と言っておいた。男は挙式の日を知りたがっていたようだ。だが、われわれが結婚しているということ以外の詳細については、ドーカスは教えるのを断ったのだ。それに、男のほうが問い合わせの動機を話したがらなかったこともあり、あの娘もなおさら口を慎んだというわけだよ。

手紙　三十九
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月二十四日

まったくどうにもならんよ、この叔父貴ときたら。やっとのことで手紙を送ってよこしたのだが、他人には見せられない代物だ。我が一族の頭に立つ者の馬鹿さ加減を世間に晒すことになるからな。俺目掛けて豆鉄砲の一斉射撃だ。この手のことは、貴公宛の手紙ですっかり蔵ざらえが済んだものと思っていたよ。こんなたわごとの寄せ集めをそっくり思

い起こすまで、手紙をしまい込み、発送を遅らせるとは　…　「諸国民の叡智」なんぞはくたばってしまえだ。これだけたっぷりと掻き集めた挙げ句に大馬鹿者が一人出来上がるのでは、知恵のほうでも面目が立つまい。しかし、この馬鹿丸出しの一例がこちらの立場の強化につながるのが嬉しいのだ。というのも、すべからくこの世のことは好都合と不都合、善と悪とが渾然一体となって入り交じっているために、一方を掌中にすれば、もう一方も手にしないわけには行かなくなるからだよ。

　同封してあった手形はもう愛しの君に渡したし、手紙の一部も読み聞かせた。だが、手形は受け取らなかったよ。俺も現金を持ち合わせているから、返送することになるだろうな。しきりと彼女は手紙の全文を詳しく読みたがっていた。書き手を晒し者にしてしまうということさえなければ、意向に沿いたいのだが、と俺が言うと、彼女のほうでは、手紙を見せてくれたからといって、卿を世の晒し者にすることにはならないだろうし、自分としては、常日頃から頭よりも心のほうが大切と思っている、と言っていた。彼女の言わんとするところは察しがついたが、嬉しくはなかったね。

　この手紙の俺に都合の好いところを全部、彼女のために書き写そうと思っている。それにしても、忌々しい話だ。一度で良いのだよ。承諾の印に唇を許してくれれば、あんな手紙はくれてやるのにな。俺の魂も添えてだ。

∴　　∴

　手紙は彼女の手に渡った。お返しもなしにだ。口惜しいかぎりだよ。条件を申し出る勇気があったらな　…　新たな一面ということだな、貴公の友のこの自信のなさは。本当に慎み深い女性というのは、自惚れの強い男にさえ遠慮の気持ちを抱かせるものだと知ったよ。誓って言うが、ベルフォード、身を持ち崩す女の十人中九人は、虚栄心とか軽率さとかのために、あるいは、用心深さや礼に適った慎みといったものを欠くために堕落するのだと、俺はそう確信しているぞ。

∴　　∴

　われわれ両名にとってこんなにも好意的な手紙のことだ、戻してくれる時にはお返しの一つもいただくつもりでいたのだ。ところが、ドーカスに託して送ってよこした。封までしてだ。思うに、二、三ヶ所あったのかもしれないな。彼女の几帳面さからすると、すぐには調子を合わせ兼ねるような仄めかしがだ。手紙を届けることにする。だから、ここでひとまず筆を置き、時間をやるので、読んでみることだな。じっくりと読み通したら、出来るだけ早く返してもらおう。

手紙　四十
M卿からロバート・ラヴレース氏へ

五月二十三日　火曜日

「待てば海路の日和あり」ということだ。諺を用いるからといって、馬鹿にしないでもらいたい。私が日頃から諺を好んでいるのは周知のとおりであるし、お前にも同じ気持ちがあったなら、もっとましなことになっていたはずだと言っておこう。天地神明に誓って間違いない。お前がすぐにも目出度いことになりそうな、当の相手の素敵な淑女は、決して諺を蔑んだりはしないものと思う。聞き及ぶところでは、お嬢さんは筆が立ち、その手紙は金言名句に溢れているというではないか。神がお前の心を改めてくださるよう祈りたい。神とこの淑女を除けば、他のだれにも出来ないことだからな。

お前の父が、そして、先祖代々の者たちすべてがしてきたように、お前が身を固めるだろうということに、今は何らの疑念もない。さもなければ、私の跡取りとなる権利は一切得られなくなるのだし、お前の子孫にしても、嫡子でないかぎり、お前の跡取りとなる何の権利もないわけだからな。そこのところは覚えておくに値しよう。「年から年中の馬鹿もいないが、時にはだれもが馬鹿になる」ということだ。だが、お前の愚行もようやく終わりを告げるものと願っている。

この素敵な淑女の一族に対し、お前が復讐を誓っていることは承知している。だが、それももう止めにするのだ。その者たちすべてを身内と見なければならんのだ。水に流して忘れることだ。その者たちも、お前が良き夫、良き父となっているところを見れば［われわれ全員のためにも、そうなってくれることを神に祈る気持ちだ］、くだらない敵意を抱いたことに呆れ、お前に許しを請うことだろう。だが、お前のことを不埒者と考え、放蕩者と思っている間は、その者たちにしても、お前に好意を寄せるとか、あるいは、娘御を許すとか、そんな気持ちなどにどうしてなれるというのだ。

慰めともなろうから、淑女に一言進呈しておこうと思う。これまでのお前がそうであったわけだが、このような乱暴者をどうしたら抑えつけることが出来るのかと、大いに気を揉んでいるのは疑いないところだからな。しっかりと筋道を立て、優しい言葉を用いるならば、お前を思いのままに扱えるのだということを教えておきたいのだ。お前はすぐにも熱くなるほうではあるが、優しい言葉を掛ければ冷静になるのだし、お前の魂を救うのに欠かせない、あの平静さへと引き戻すことにもなるのだからな。

不憫な我が妻が、つまり、今は亡きお前の叔母だが、同じ治療法で効果の上がる患者であってくれたならと、衷心からそう思う。妻の魂の安らかならんことを　…　思い出を汚すことはない。「無くてこそ知る物の価値」というところだ。妻の真価が今の私には分かるのだよ。私が先立っていたなら、妻も今頃は私の有難味に気づいてくれたことだろう。

例の名言には大いなる叡智が含まれているな。「神よ、私の過ちを説き聞かせてくれる友を授けたまえ。さもなくば、敵を。敵は我が過ちを暴く」というやつだよ。私がお前の敵ということではないぞ。それはお前も十分承知のはずだ。「心気高ければ、慎みいよいよ深し」とも言う。それゆえ、辛抱して聞いてもらおう。心の気高い人間と思われたいのならな。お前の叔父ではないのかな、私は。また、お前の父親にも出来なかったほどの親切を施そうとしているのではないのかな、私は。否、慶ばしい日が訪れたなら、お前の父親にもなろうとしているのだ。それが望みなのだからな。可愛い姪御によろしく伝えてもらいたい。そして、話してやってくれ。お前の幸せをかくも長きに亘って先送りにしてきたのを、大いに不思議に思う、とな。

令嬢に是非とも知らせてほしいのだが、令嬢には（お前にではないぞ）ランカシャーの

地所か、ハートフォードシャーのローン荘かのどちらかを贈るし、現金で年一千ポンドを贈与するつもりでいるということだ。われわれが損得勘定に卑しい一族ではないことを示すためだよ。書類の作成はお前のほうでも出来るだろうし、気の向くように決めてくれて構わない。両方の地所の地代帳は律義者のプリチャードが保管している。あの男は昔からよく仕えてくれたのだから、お前の奥方のご愛顧を受けられるよう推薦しておく。すでにあの男と相談しているのだよ。お前にとって最善の道を、そして、私にとっても一番望ましい方法を話してくれることだろう。

痛風は相変わらずの重症だ。だが、日取りが決まり次第、担い駕籠に乗ってもそちらへ赴くつもりでいる。お前たち二人の手を結ぶのは、私としても心から喜びとするところだからな。ひとつ言っておくが、あれだけ立派な若い淑女のことであり、また、お前のためにこれだけ勇気ある行動を取ってくれたのだ。もしも、どこのだれにも負けない最高の夫にならないようなら、お前とは縁を切るつもりでいるし、私が自由に出来るものすべては彼女に、そして、お前と彼女の間に出来た子供たちに譲り、お前については一切無視するということだ。

さらなる安定を図る上で、何か不足なものでもあるのであれば、喜んで与えることにしよう。日頃から私の約束が証文と同じように受け止められてきたのは、お前も承知のことではあるがな。そして、このすべてがハーロー家の者たちの知るところとなった時、あの者たちには顔を赤らめる心があるのか、恥じ入る気持ちを持ち合わせているのか、ひとつ拝見させてもらおうではないか。

セアラ夫人とベティ夫人はひたすら式の日取りを知りたがっている。近隣一帯を沸き立たせ、小作人たちを狂喜させようというのだ。また、だれであれ、私の小作人の中に、その日を迎えて素面でいるような者がおれば、プリチャードが領地から追い出すことになるだろう。そして、第一子誕生の暁には、それが息子なら、お前のため、さらに何かしてやろうと思うし、祝賀の行事をそのまま繰り返すつもりでいるのだ。

確かに、便りはもっと早くにすべきであった。だが、時間が掛かっていると考え、挙式のことで急いでいる場合には、お前のほうからその旨を手紙で知らせてくるはずと思っていたのだ。ただ、痛風が手に負えない状態であったし、知ってのとおり、どう見ても私は筆まめとは言えない。何せ、案文というのは、以前は大いに得意としていたのだが（レキシントン卿がよくそう言っていたものだ）、ずいぶん長い間離れていたこともあり、今では得手とは言えなくなっているのだよ。それに、今回はすべてに亘り、自分の頭と記憶を頼りに書こうと決めているのだ。そして、私として最善の忠告を与えたいのだよ。このような機会は二度と再び得られないかもしれないからだ。お前はこれまで［神がお前の行いを改めてくださるよう祈る次第だ］、まことに奇妙な態度であったが、私の言葉一切に背を向けてきた。お前のためを思っての忠告だ。今度ばかりは、これまで以上に耳を傾けてくれるものと考えたい。

私にはさらにもう一つ目的があった。否、目当てがあと二つあったのだ。

一つは、ようやくにしてお前も、いわば比翼連理の契りを目の前にしているのだし、若気の道楽すべてから足を洗うことになるのだから、お前の私的ならびに公的な生き方に関し、少しばかり教訓を与えておこうと思うのだ。心からお前のためを思ってのことなのだから、聞いてもらわねばならん。それに、これほどの尋常ならざる出来事に際してでもな

ければ、絶対に耳を傾けてはくれなかっただろうからな。

二つ目には、お前の奥方として選ばれた淑女にも（お嬢さん自身、大層筆が立ち、教訓めいた文章を書く人らしいが）、これを読んでくれるなら、お前がこれまでと違う、もっとまともな人間にならなかったのは、われわれの落ち度でもなければ、最良の助言が得られなかったためでもないことを分かってもらえるからだよ。

それでは、忠告を垂れるに相応しい人間と見てくれるならの話だが、私生活の場でと同様、公の場でもお前に真似てもらいたいと願う振舞いにつき、掻い摘まんで示すこととしよう。手短に話すつもりだ。だから、気を揉むことはない。

私生活についてだが、奥さんを大切にすることだ。彼女の値打ちに相応しくな。「称賛を求めるには行いをもってせよ」という。良き夫たることを目指すのだ。敵対する者すべての偽りを暴き、誹謗したことを恥じ入らせるのだよ。そして、ハーロー嬢は、我が一族の人間となることで、自分自身に対して、また、家族に対しても、不面目となるような真似は一切しなかったのだと、誇りを持って語ろうではないか。こうしてもらえるのなら、私も、セアラ夫人やベティ夫人も、お前のことをいつまでも愛することになるのだよ。

公の場での振舞いについてだが、私が望みたいのは以下のとおりだ。ただ、奥さんの賢さがわれわれ両者を正してくれるものと考えている。とはいえ、これは別に不面目なことではないのだぞ。これまでのお前は、それだけ機転が利きながら、賢いところを見せてくれたためしはなかったのだからな。そうだろう。

出来るだけ早く下院議員になることだ。議会で名を馳せるだけの腕力には恵まれているのだからな。規制力のある新法制定を助ける上では、いかなる現行法をもってしても規制出来ない人間ほどに適任の者がどこにいるというのだ。

それから、長きに亘って、セントスティーヴンズチャペル（四〇）の下院に出席することになるわけだが、あそこがチャペルと呼ばれているからといって、嫌気を起こしたりしないよう願っているぞ。下院での大騒動は山ほど知っている。議長にとっては辛い話だな。ただ、われわれ上院の人間はもっと作法を弁えているのだよ。だが、私は何を言おうとしていたのかな。話を元に戻さねばならん。

お前も長いこと議会に出席するのだから、それだけ悪さとはご無沙汰することになるのだ。少なくとも私的な悪事からはな。そして、公序良俗に反することを故意に行うようであれば、聖ステファノの運命（四一）がお前に降り懸かるよう祈るだけだよ。

新たに選挙ということになると、お前も知ってのとおり、二つか三つの選挙区から議員を選ぶことになるわけだが、それまでお前のほうは出馬しないというのなら、私の希望としては、州選出ということになってもらいたいのだ。

お前が十分な信用を勝ち取るのは間違いないし、それだけの男前だ、お前に票を投ずるよう、女たちも夫に働き掛けることだろう。

お前の演説に目を通すのが楽しみだよ。機会に恵まれればの話だが、初日からの弁論を期待しているぞ。度胸に欠けるところなどこれっぽっちもなく、自分のことはたっぷりと買いかぶり、他人はすべて見下しているお前だから、あらゆる機会に一席ぶってくれることだろう。

議会での様々な手口についてだが、お前は血気に溢れているから、この手のことを無視してしまうのが心配だ。そこのところは留意してもらおう。お前がマナーに欠けることに

ついては、あまり心配していない。男に対してなら、別に上品にする必要もないのだ。相手が挑発しないかぎりはな。その点に関して私が望むのは、他人からの反発を辛抱するようになってもらうことだけだ。お前自身、他人からそうしてもらいたいと思う程度にな。

政府のご機嫌取りになってほしくはないが、不平分子にもなってもらいたくない。旧友アーチボルド・ハッチソン(四二)の言ったことを覚えているが(というのも、書き留めてあるのだよ)、まことにもって適切な言葉であった(クラッグズ大臣(四三)に向かってのものだったと思う)。「閣僚たるものは、私が良心に従って投ずる票のその一票一票を受ける資格を有するものと考えている。下院は政府機関に対し、無用の輪止めを施すべきではないのだ。一票を投じなかった場合においても、私は慙愧の念を禁じ得なかったのである。我が国のためを思えばこそ、本議案が私の承認し得るものであったならと、衷心より願った次第である」というものだよ。

彼にはもう一つ名文句があるのだが、次のようなものだ。「野党にせよ、あるいは、内閣にせよ、いずれもが常に過ちを犯すということは有り得ない。ゆえに、徹底していずれかにつくということは、その人物が自ら認める以上のことを、そして、より以上の悪を意図していることの絶対確実な証拠なのである」というものだよ。

さあ、いかがかな。これがつまらない言葉だろうか。軽んじられねばならないものなのかな。そこで尋ねるのだが、この言葉を思い出したからといって、また、そうするのが好きなものだから引き合いに出すわけだが、それでどうして私が軽蔑されねばならないのかな。ひとつ言わせてもらうが、今以上に私との付き合いを好んでくれたとしても、お前に損はないということだよ。こんなことを口にしても、自惚れていることにはなるまい。私が大いに好むのは他人の知恵であって、自分の知恵ではないのだからな。

だが、この際だ、さらに一言、二言付け加えておこう。それに、こんな機会は私には二度とないかもしれんのだよ。何せ、お前はこれを最後まで読まねばならんのだからな。「家の内外を問わず、正直者を愛し、正直者と付き合え」ということだ。そういった者たちがいかなる名によって貴ばれ、世に知られているとしてもだよ。「善人と交われば、その仲間となる」ということだな。だが、これはもう筆にしていたかな。それとも、まだだったかな。何度となく筆を取り直した上に、こうも長々と書き綴っているのだ。失念することもあるだろう。

これは如何ともし難いわけだが、私がこの世を去ることになれば、お前は爵位を受けるやも知れんのだ。それゆえ、お前には中立を守ってもらいたい。一旦、弁舌爽やかな男だとの評判を取れば、後は何でも手に入るのだよ。それに、確かに、お前は生まれつき雄弁術に長けている。女どもに言わせるなら、天使をも惑わす弁舌というやつだが、連中の幾人かはそれで痛い目を見るわけだよ、気の毒なことにな。下院の指導的人物というのは極めて重要な存在なのだ。下院が財布を握っているわけだからな。「地獄の沙汰も金次第」というが、そのとおりなのだよ。いいかな、時には女王や王たちにしても、別の場合ならこうしたいと考えるものと、ある意味ではなはだしく違う方向へ進まねばならなくなるものなのだ。

しかしながら、また、役職には就いてもらいたくないような気もするのだよ。役職を蹴るつもりだと信じてもらえるなら、お前の評価や信用は倍加することになるだろう。何しろ、そうなると、だれの邪魔をすることにもならないわけだから、妬みを買うこともない

のだ。受けるのはまったくの雑じりけなしの尊敬だよ。そして、両方の陣営がお前に言い寄ってくることだろう。

お前としても、役職を求めるまでもあるまい。中には、破産の埋め合わせをするために求める者もいるのだがな。今のところ、年二千ポンドで恥ずかしくない暮しが出来るのなら、今後、七千ないし八千ポンドでやって行けないということはまずあるまい。今後とも私の願いを入れてくれるなら、それより低い額になることは決してないのだ、お前が譲り受けるものはな。今回のように、あれだけ素敵な淑女と結婚してくれるとなれば、大いに私の意に適うというものだよ。そして、これはすべて、ベティ夫人とセアラ夫人からの贈り物にさらに加えての話だ。尊大なハーロー家の者たちを思いのままにするには、一体全体どうすれば良いのかな。あの息子 … あの家の息子ときたら … だが、大事な妹さんのためだ。あの男のことはこれきりにしておこう。

私自身は役職を提供されたことは一度もなかった。それに、仮に申し出があったとしても、就きたいと思う役職は鹿狩り用小猟犬係長くらいなものだった。若い頃は狩には目がなかったのだし、田舎暮しのわれわれにしてみれば、聞こえの良い名称だからだよ。私は何度となく、古来のあの優れた格言を思い浮かべたものだったよ。「王のガチョウを食べる者は、その羽毛で喉が詰まる」というものだ。役職を漁る者たちには、願わくは、よくよく考えてもらいたい点だな、これは。そういう連中にとっては、そして、連中の気の毒な家族にとっても、ためになることだろう。

話しておこうと思えば、言うべきことはまだ数多あるのだし、そのすべてが的を射たものでもある。しかし、本当に疲れてしまった。お前もそうではないかと思う。それに、話し合う時のために、少しは取っておきたいのだよ。

我が将来の姪に宜しく伝えてほしいと、姪のモンタギュー姉妹、そして、セアラ夫人とベティ夫人が口を揃えて言っている。われわれとの縁組を令嬢が望んでいるようなら、われわれのほうでも、是非とも伝えてほしいのだが、その絆が堅く結ばれるよう取り計らうつもりでいるということだ。そして、まるまる一週間というもの、領地の隅々まで鐘を鳴り響かせ、沸き立たせようと思っている。だが、これはもう言ってあったはずだな。

互いの幸せを深める上で、さらに必要なものがあるというのなら、何でも構わない、私に知らせてもらいたい。それと、当日の段取等々についてもだ。同封した手形は、好きなように使ってもらって結構だ。一覧払いということになっているが、今後お前が入り用となるものすべてについても、同じ扱いにしようと考えている。

二人に神の祝福のあらんことを。また、出来るかぎり、この痛風への心配りを願いたいものだな。ただし、日取りの如何に拘らず、足を引き摺っても出向くつもりでいる。お前の顔を見たいのは勿論だが、それにもまして、私の姪に会いたいのだよ。(その喜ばしき機会の到来を念じながら)

愛してやまぬお前の叔父　M.

手紙　四十一
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月二十五日　木曜日

分かるだろう、ベルフォード。今やわれわれは順風満帆といったところだよ。愛しの君も今では、同席の栄を所望するたびに、ほとんど最初の一言で顔を見せてくれるのだ。昨夜はこんなことを話して聞かせた。プリチャードの愚図のせいで遅れるようなことがあってはと思い、卿からのご厚志については、卿の気の向くよう、作成を一任することに決めたということ、また、俺関係の書類は、昨日の午後、極めて有能な弁護士であるウィリアムズ弁護士の手に現に委ねてあり、俺自身の資産をもとに、そして、これも一緒に手渡してあるのだが、母の時のものに見合うよう、贈与財産証書を作成してくれるよう指示してあるといったことだ。また、彼女はしばしば機嫌を損ねていたし、互いに誤解をしていたこともあり、前もってこの問題について相談する機会に恵まれなかったのは、少なからず気になっていた点であることを納得してもらい、「いや、まったくの話、愛しい人よ、これまで貴女が許してくれる求婚といえば、大いに困難を伴うものばかりでしたからね」とも言っておいた。

彼女は無言だった。優しさゆえの沈黙だ。というのも、その気になれば、徹底的に言い返すことが出来たのは十分承知しているのだよ。だが、俺としては、もう俺の意に背くのは嫌になっていないか、それを確かめたかったのだ。俺にとっての障害が今はすべて解消し、また、これまでの迷惑もことごとく忘れ去られるだろうと考え、心慰められている旨を話しておいた。

ところで、ベルフォード、これらの書類はウィリアムズ弁護士の手に実際に預けてあるのだよ。遅くとも一週間以内には草案が出来るはずだ。だから、二段構えの備えということさ。仮に手を出して失敗することがあっても、これらのものがすぐに役立ってくれるだろうから、再度の試みが可能となるまで、彼女も俺を辛抱する気になるというわけだ。

心に浮かんだばかりの趣向ならもっとある。数え上げれば百にはなるし、途中で持ち出そうと密かに用意しているものがさらに百はあるのだよ。貴公の驚きを誘い、注意を引きつけておくためさ。だが、俺に向かってわめき立てるのは止めるのだな。仲間のつもりなら、ハウ嬢の手紙を頭に思い浮かべるのだ。密輸商を巻き込んだ彼女の計画に思いを馳せることだよ。すべて、我が麗しの囚人からの情報と扇動に由来することなのだからな。すでに、あの二人にとって俺は悪党になっているのではないのかな。愚か者であり、ベルゼブルではないのかな。ところが、俺からの害悪は何一つとして加えられていないのではないのかな。試みられてさえいないのではないのかな。

この種の事柄はすべて俺に任せると、愛しの君はそう答えてくれた（目を伏せ、頬を朱に染めながらだよ）。

俺は挙式の場所として、卿のチャペルを提案した。あそこなら、ベティ夫人、セアラ夫人、それに、従姉妹のモンタギュー両名にも出席してもらえるのだ。

彼女は人前での挙式には賛成ではないらしく、目下のところ、この話題は差し控えている。俺とて同様だが、彼女にも人前での結婚式に応じる気持ちがないのは分かっていたのだよ。だから、今回は、さらにこの点を強いるようなことはせずにおいた。

しかし、服地の見本は目の前に出して見せたし、今日には宝石商が数組の装身具を持ち込んで、彼女に選んでもらうことになっていたのだ。ところが、服地見本を開こうとしない。俺が見本のことを口にすると、彼女は溜め息をつき、見本を差し出されたのはこれで

二度目になる、と言うのだよ(ア)。そして、すこぶる断固とした口調で宝石商の来訪を禁じていた。それに、母の宝石類をセットし直してもらうという、俺の申し出についても断っていたよ。少なくとも当座は、とのことだがね。

これら一切について、俺が本気であったことは保証するぞ、ベルフォード。俺の全財産にしても、願ってやまない彼女からの愛顧に比べれば、無に等しいのだ。

その後彼女が語ったところでは、俺の申し出全般についての彼女の見解は書面に認めてあり、その中で、衣装や装身具についての考えを述べたのだが、日曜の夜の俺の異常な振舞いに接し(自分としては身に覚えのない話だと、彼女はそう言っていた)、真二つに引き裂いてしまったというのだよ。

たとえ破れたものであっても、その書面を一目でも拝見出来るなら有難いと、俺は熱心にせがんで見せた。少しためらってはいたが、彼女は引き下がり、ドーカスに託して送ってよこしたよ。

俺はもう一度つぶさに読んで見た。つい先頃読んでいたというのに、何か目新しく思われたし、まったくの話、とても平気ではいられなかったのだよ。彼女を称える言葉を百は呟いてしまったな。だが、命令だぞ。彼女のためを思うなら、彼女に有利なことは一語たりとも筆にしないことだな。仮に彼女を見逃すことになるとしても、それはまったく「己の一存によりて」ということでなければいけないのだからな。

容易に察しがつくだろうが、再びお目通りを許されると、彼女への賛辞を並べ立て、感謝の気持ち、そして、変わらぬ愛をしきりに誓ったよ。ところが、忌々しいことに、俺が何を言おうと、彼女は相変わらず冷淡な態度で受け止めているのだ。たとえ冷淡ではないにしても、あまりにも当然といった受け止め方であり、それで機嫌が良くなるようなことは一向にない。女の中には、褒め言葉や追従で堕落させられてしまう者もいるのだよ。俺自身、男でもあり、褒め言葉を向けられると誇らしく思う。おそらく、貴公はこう言うだろうな。最も称賛に値しない者こそ、称賛を誇りに思うものだ。ちょうど、富や豪奢な暮しを誇るのは、そのいずれの立場にも生まれ落ちていない者たちであるのと同じことなのだよ、とな。こういった弱点を乗り越えるには、高尚な心が必要だということ、それは俺も認めている。だとすれば、高尚な心が備わっているのではないのかな、俺には。間違いなく備わっているのだよ。従って、俺のことは特殊例と考えてもらいたいのだ。

さて、こちらの条件で事を進める足場がこれで出来たわけだ。卿は溢れんばかりの気前の良さから、彼女に対する年一千ポンドの現金支給について語っている。これは分かっていることなのだが、もしも俺がこの令嬢と結婚することになれば、卿としては、分与する考えでいるもの一切を俺よりはむしろ、彼女のほうに与えたいと思っているのだ。俺が良い夫であることを実証して見せなければ、この世を去る時には、自分の力の及ぶものすべての遺贈は、俺から彼女へ変更すると脅してさえいる。だが、卿にしても考えが及ばないのだな。あれほど完璧な女性の場合、夫に不満を抱いたりすれば、きっと夫の面目を潰す結果になるのだということにだよ。そんな女性を咎める者はいないわけだからな。ラヴレースのような男はクラリッサのような女性との結婚を望んではいけない、もう一つの理由ということだな。

(ア) 第一巻の二百十二頁を参照のこと。

しかし、何とも困った叔父貴だよ、この愚かな上院議員殿はな。妻をその皇帝たる者から独立させ、そして、当然のことだが、反逆者に仕立て上げようと考えるのだからな。それでいて自分は、この手の過ちで痛い目に遭っていたのだよ。

我が愛しの君が別途の歳費として口にしているのは、例の引き裂いた手紙では、二百ポンドだけだ。もっと大きな額を指定するよう、俺は力説した。それでは三百ポンドで構わない、と彼女は言っていた。また、俺のほうでは、大変な額を申し出られるかもしれないと彼女が心配してはとも思い、五百ポンドだけを提示した。ただし、ノートン夫人のためであれ、あるいは、彼女の意に適うだれのためであれ、彼女の父が握っている支払い残金全額の処分については、全面的に彼女の手に委ねると言い添えておいた。

彼女に言わせると、あの貞潔な女性は、生活に不自由を来さない程度以上のことが何かなされれば、心穏やかではいられないはずだというのだ。彼女としては、この種の施しを行うに当たっては、当の相手の通常の暮らし向きに見合うようにしている、とのことだった。それ以上のことをすると、恩恵を受けた者たちに事業を興す気持ちを抱かせたり、慣れ親しんでいる身分の中で秀でることも出来るのに、新たな地位で堅苦しい思いをさせたりすることになるだけだ、と言うのだ。そして、あれだけ優しい母親のことでもあり、適当な時期に息子が事業を始められるようにしてやることが自分の力で可能になり、それでいて、自分自身の分も残り、貧しい思いはせずに済むとか、せっかく与えることが出来るようにしてもらったのに、それを息子から返してもらわねばならないような、そんな必要に迫られることがないのであれば、あの立派な母親にとっては、これに過ぎる望みはないだろう、ということだった。

これこそ分別というものだ。あの若さにして、見事な判断力だ。これほどの天使を生み出すとは、ますますハーロー一族が憎くなる。あゝ、何故だ。この家へ来る前、真心込めた俺の求婚を拒んだのは何故なのだ。

しかしながら、俺の誇りを傷つけるのは、たとえ結ばれることになるとしても、俺に対するこの気高い女性の振舞いが、愛に支配されたものではなく、単に寛容の心とか、盲目的義務心に従ったものであり、俺のものになるよりは、むしろ独身を守った方がましだと考えている点なのだ。

これは耐え難いことだよ。俺としては、仮にもだれかにそのような名誉を授けることになればの話だが、我が姓をもって遇する女性には、至高の義務でさえも、俺のためには差し控えてもらいたい気持ちなのだ。俺が外出する際、妻には、姿が見える間はずっと見送っていてもらいたいのだ。ローズバッドが愛しのジョニーにそうしているようにな。そして、帰宅の時には、喜びに満ち溢れた表情で出迎えてほしい。目を覚ましている間中考えるのが俺のことなら、夢枕に立つのも俺、という具合になりたいのだ。俺と共に過ごさなかった時間の一刻一刻を、無為に過ごした時間と考えるようになってほしい。俺の望む時に歌を歌い、本を読み聞かせ、楽器を奏でてもらいたい。俺の言葉に従うほどの大きな喜びは他にないというふうになってほしいのだ。俺が愛を注ぐ気持ちになった時には、愛をもって圧倒してほしい。考えごとをしたいとか一人きりになりたいとか思い、邪魔されるのを懸念している場合には、頭の一振りで退くのだ。笑みを浮かべて促す時にだけ近づくことだ。俺のところへ近寄るにも、静かに物音を立てることなく、気づいてもらえない場合は、足音を忍ばせて立ち去るのだよ。俺の楽しみごとすべてに対しては呑気な奥方とな

り、楽しみに最も寄与した者たちを最高に評価し、今度は自分ではなかったのだと、一人密かに溜め息を漏らすことだ。昔から、立派な族長どもの妻たちは、こうして競い合っていたのだよ。各々が主人に喜んでもらおうと考えて自分の侍女を差し出し、生み落とされた子を我が子と見なしてきたのだ。

生まれの良いウォラー(四四)も言っているぞ。「支配されるために女は生まれた」とな。家柄が良いだけに、そのことが分かっていたのだよ。亭主関白にして従順なる妻あり、ということだ。それに、何故に女は道楽者を好むのだ。女どもの揺らめく心に指図を与え、女を操る術を弁えているからに他ならないのではないのかな。

∴　　∴

気持ちの良い話し合いがまた行われた。話題になったのは、肝心のあの日のことだ。日取りについては、贈与財産証書が出来上がるまで決める必要はないと、我が魅惑の君は言っている。卿のチャペルでの挙式については、我が一族のご婦人方が出席するわけで、それでは表立ったことになる、と言うのだ。そして、そうするのが卿のご意向らしいのを残念に思うと、愛しの君は話していた。

俺はこう言っておいた。卿は派手好きだという点があり、また、ようやくにして、しかも、彼女のような素晴らしい女性と、俺が結婚するのを目の当たりにして喜んでくれるということもあるのだが、そればかりでなく、担い駕籠に乗ってロンドンへやって来るような事態になれば、それだけでも、卿のチャペルで婦人方全員の臨席を得て式が執り行なわれる場合と変わらないほど、表立った結婚式の様相を呈することになるのは想像に難くないだろう、とだ。

彼女のほうではこう言っていた。「表沙汰にしてその日を祝うような考えには耐えられません。私の家族皆を侮辱しているようにも映ることでしょう。それに、私といたしましては、もしも卿がお気持ちを悪くなさらないようでしたら［おそらく、悪くはお取りにならないと思いますわ、ラヴレースさん。あのご提案は卿ご自身からではなく、貴方のほうから出たものなのですからね］、お越しいただきますのはご遠慮申し上げたいのです。そうしていただけますなら、ドレスや体裁のことを考えずに済みますので、なおさら好都合なのです。両親が涙に暮れておりますのに、この身を飾ることなど、考えるだけでも耐えられないことですからね」とだ。

何という見事な言葉だ、これは。だが、涙に暮れて当然なところがたっぷりとあるのではないのかな、彼女の両親には。

ほら、分かるだろう、ベルフォード。心魅する几帳面さなものだから、われわれはすぐにも結婚出来るところまでとっくの昔に近づいていたかもしれないのだが、いざ踏み切ろうとすると、なすべき事柄が山ほど見つかったというわけなのさ。

ひたすらおとなしくしていたよ。忍の一文字だ。ただただ彼女の意に従うだけだ。俺は退出し、すぐさま卿宛に一筆認めたのだが、彼女のほうでも異議はないという話だったので、発送した。要旨としては以下のとおりだ。写しは取らなかったものだからな。

我が人生における最も厳粛な祝典に際しての卿のご高配には、深く感謝しているということ。お褒めくださるのも極めて当然なあの天晴な淑女は、卿のお申し出を身に余るご厚

意と受け止めているということ。彼女は、当方の身内の者たちの気持ちに背くことなしに避けられるのであれば、自分の身内との和解が成し遂げられるまで、表立った形を取るのは好ましくないと考えているということ。卿自ら彼女と俺の手を結ぶことに同意してくれた点には感謝の念を表しつつも、この思いやり溢れるご意向の動機となっているのは、彼女に敬意を表するためのことであって、さもなければ、ご自分から進んで選ばれたことではないものと拝察し（とりわけ、この時期に旅をされるのはご迷惑でもあろうから）、彼女としては、この際、お手数を省いていただくのが当を得たことと考えるし、ご厚意を辞退申し上げるのは本心からのことと受け止めてもらいたいということ。

引き籠もる場所としては、われわれどちらにとってもローン荘が最も好ましいが、それが卿の意に適うことでもあるだけになおさらだということ。

ただし、卿にご異存がなければ、寡婦給与については俺自身の財産から出し、代替手段に関しては、卿のご好意に委ねるということ、などだ。

結びとしては、次のように伝えてある。卿の手形を令嬢に贈るべく差し出したが、令嬢が受け取るのを辞退したゆえ（俺のほうでも当面は必要としないので）、感謝の気持ち共々に、同封の上お返しする、といったようなことだ。

これでは、ちとやり過ぎではないだろうか。挙げ句の果てに、自ら仕掛けた罠に掛かるようなことにでもなれば、『放蕩児年鑑』でどんな醜態を晒すことか …

女がどう言おうと、哀れなお人好しとしては、精々我が身を大切にしなければならなかったのだよ。一歩間違えば結婚という、絶壁の縁でダンスを踊って見せるからにはな。冗談半分で始めたのに、あるいは、艶事を真似てみるだけのつもりだったのに、乗り気になり過ぎたために、やむなく本気にさせられてしまったり、女のほうで勘繰っているようなところまで進む気はなかったのを認める術も心得ていないために、言質を取られてしまうような者も、意気地のない男の中には数知れずいるのだよ。多くの小悪党どもの例がこうだったに違いないという判断が、俺にはうまく出来るわけだが、それというのも、俺と同じ立場にあるどんな男にも負けないほど女の世界に通じているこの俺様にしてからが、自分自身に対する疑念を抱いたり、事態をどう理解したらよいのか分からなくなったりすることが、実に頻繁にあるからなのだ。

それに、この油断ならない小悪魔どもときたら、われわれのごとき邪気のない男たちが手の届くところへ近づこうものなら、すかさず飛び掛かろうと身を屈めて待ち伏せているのだ。氷が解けるのを待って、全速力で港をめざす船みたいなものさ。その間、連中にとって最も言及し難い話題が、連中の頭を最も占めているわけだよ。こちらで結婚式を話題にする頃には、連中の胸の中では一切の式次第が出来上がっているという寸法だ。面の皮の厚い策士なのだよ、連中は。まずは自ら誘いに乗り、次いでわれわれを引きずり込むという段取りさ。

だが、こういったこと一切はともかくとして、M卿にしても、これほど見事な手紙を甥から受け取ったことなど、生まれてこの方なかったのだよ。

ラヴレース

《令嬢は、ラヴレース氏の最後の手紙の詳細をハウ嬢に報告した後、自らの考えを以下のごとく表明しているのである》

この順調な状況から生じます主な慰めと申しますと、たった一人のお友達しかおりません私にも、おそらくきっと、こちらに落ち度がなければの話ですが、ラヴレースさんのご家族の数だけ新しいお友達が出来るだろうという点です。そしてこれは、ラヴレースさんが優しくしてくださるとかくださらないとかに関係なく言えることなのです。そして、この新しいお友達が次第に、皆さんの高い身分や取り柄によりまして、身内の者たちの愛顧を取り戻すに十分なほど重きをなしてくださることも考えられるのです。そのような状態がもたらされますまでは、まずまず安心、というところまではまいらないでしょう。幸せなど、決して期待しておりません。ラヴレースさんの心と私の心とでは、甚だしい隔たりがございます。肝心なところで隔たりがあるのです。

でも、現在の状況がこのようなものですから、明るみに出ました場合にはあの人の名折れとなりますようなことすべては、どうか貴女お一人の胸に納めておいていただきたいのです。あの人のものとなるのが私の定めなのでしたら、夫を晒し者にいたしますのは、妻ではなくて、どなたか別の人からのほうが望ましいのです。それに、貴女が口になさることは、私から出ているのだと思われてしまうでしょう。

この世で得られます至福のすべてが貴女にもたらされますよう、絶えずお祈りをさせていただきます。また、全能の神様の思し召しにより、貴女と貴女のご子孫が末代に至りますまで、私にとりましてのこれまでのアナ・ハウさんみたいなお友達を欠くことのありませぬよう、祈っております。

かしこ

クラリッサ・ハーロー

手紙　四十二

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

さて、我が愛しの君を網の中にしっかりと捕獲したかにも思えるので、じゃじゃ馬ハウ嬢とその母親に対する計画のほうへ移ることにする。この計画では、お節介焼きの跳ね上がり者、あのヒックマンが一発見舞われることになっているのだ。

しかし、どうして母親を的にするのだ、と貴公は尋ねるだろうな。手下のジョゼフ・リーマンを介した俺の唆しに乗り、叔父トニー老の愚行に合わせて我知らず振る舞っただけのことではないのか、とな。

そんなことは構うものか。自らの判断に基づいての振舞いと信じているのだよ、あの女は。そんなものは何一つ持ち合わせていないくせに、判断力を自負するような、その厚かましさが罰に値するのだ。言っておくが、かくも崇拝の的となっている淑女に対し、残酷な、あるいは、不遜な態度を取る者は、俺だけは別だが、この世のいかなる人間といえども罰されることになるのだよ。まったくの話、俺自らの手で嬲られ、悩まされるだけで十分ではないのかな、あの淑女は。

われわれの相棒三名にはすでに事情を打ち明けてある。勿論、決定済みのこととしてではなく、仮定の一例としてだ。だが、連中には分かっているのだよ。俺の場合、何か悪さに取り掛かると、立案してから実施に移すまで、その足取りは極めて敏速だから、滅多な

ことでは三歩と遅れたりしないことをな。そして、立案にもたつくなどということもまずないのだ。

モーブレーは反対していない。奴の言では、われわれの名に背かぬ計画だそうだ。それに、われわれもずいぶん長いこと、世間を騒がすことは何一つしていない、と言うのだ。

ベルトンが少々ためらっているのは事実だ。トマシンとの仲がまずくなっているからだよ。それに、情けない奴で、痛いところを徹底的に探って見る勇気がないのだ。

ターヴィルは新たなゲームを始めたところで、肩をすくめて見せている。そして、俺が構わなければ、とのことだが、今のところ国を出たくはないのだそうだ。というのも、俺としては、すべてが収まるまでには、(計画の性質からして)やむなく旅に出なければならないような事態が生じそうにも思うからだよ。

俺自身はどこの国でも結構だし、こんなむさ苦しい国を捨てる気持ちになら、すぐにもなるように思うのだ。我が運命の女主人がこの国での同居に同意し、不意を突いて国外へ連れ出すような真似を不要にしてくれるなら別だがね。貴公も知ってのとおり、旅行というのは、男女両方にとって、互いに打ち解ける絶好の機会となるのだよ。俺と我が比類なき美女との件は、あとわずか数日もすれば、すべて落着ということだ。

本件では顧問弁護士としてしか出番のないドールマンが、われわれの不在中に起こる一切の事柄について、文面をもって知らせてくれることになっている[奴の右手と右半身はまだ麻痺に襲われてはいないし、左半身も感覚が戻り始めているのだよ]。

貴公に関しては、一枚加わってもらうほうが良いように思う。工夫の才という点では情けない男だが、事に当たっては恐れを知らないところがあるからな。ただ、今関わりあっていることからすると、確実な参加は無理だろうから、われわれの計画にあって、貴公の役割を不可欠なものにするつもりはないが、われわれが国外に出たら、後を追ってもらおうとは思っている。われわれなしじゃあ長く生きられないのは分かっているのだよ。

掻い摘まんで言えば、計画は以下のとおりだ。ハウ夫人には夫に先立たれて間もない姉が一人、ワイト島にいるのだよ。確かな情報だが、娘が結婚する前に、母娘でこの夫人を訪ねる約束をしたのだ。夫人は財産家で、ハウ嬢を跡取りにしようと考えているのだ。それで、差し当たり、近づいている彼女の結婚式に向け、何か高価な贈り物をしようというわけだよ。その贈り物というのは、我が身を別にすると、何にもまして金に目のないハウ夫人が俺の知人の一人に話したことだが、「頂いてくるに値する」ものなのだそうだ。

さて、なすべきこととしては、ジャック、他でもない、脚本に沿ってわれわれの役割に取り掛かるまでの一週間か二週間のことだが、ポーツマスとワイト島間をスピットヘッド経由で往復する遊覧船として、装備の行き届いた小船を借り上げることだけなのだよ。ハウ夫人は出来るだけ船賃を値引きさせようとするだろうから、船長には夫人の言い値にするよう指図しておいても良いだろう(借り主のほうから心付けをしておくのさ)。船長の名は、本名が何であれ、今回はガンモアということにする。そういう名の悪党を一人知っているのだが、われわれ同様、国籍などにはこだわらない男なのだ。

さて、母娘が船上にあるものとしよう。俺は変装して乗船することにする。貴公ら四人については、仮に貴公がその一人になるとしても(計画は実に魅力的だからな)、あの二人はだれとも面識がないのだ。

嵐に出くわすことが出来なければ、あるいは、嵐の一つも起こせないようでは、それこ

そ弱ったことになるな。

おそらく二人は船酔いに罹るだろうが、罹ろうが罹るまいが、船室に閉じ籠もるのは疑いのないところだ。

ハウ夫人にハウ嬢、ヒックマン氏に侍女と下男という顔ぶれになるのだろう、多分。そこで、われわれとしては次のような段取りをすることになる。

荒れ模様になるのは分かっている。承知しているのだよ、そうなることは。そして、おかしいという気持ちがかけらほども浮かばないうちに、われわれはガーンジー島、ジャージー島、ディエップ、シェルブールの見えるところ、あるいは、どこであれ、フランス沿岸の沖合へと、風向きに任せて流されて行くのだ。それから、下男を取り押さえ、女たちは別々にした上で、籤でも引いて決めるのだが、われわれの一人が、口説き落とすにせよ力ずくにせよ、侍女を征服することになる。別に難しいことでもあるまい。それに、結構感じの好い女なのだ［何度も目にしているのだよ］。一人はハウ夫人が相手だが、これも大して難しくはない。何しろ、健康な身体でピチピチしているし、やもめ暮しも長いわけだからな。もう一人が［そいつは俺でなくちゃいかんと、威風堂々たるライオンが吼えているぞ］あの小生意気な娘だが、すっかり怯えてしまい、あまり抵抗も出来ないはずだ［気が強いとはいっても、女の場合、本物の根性であることは滅多にないのさ。逆らうことの出来る場合に限られるのだよ］。気晴らしのため、また、間違いなく事をし遂げるために、そして、不機嫌な小鳥どもが餌をついばみ、水をちびちび飲み始めるまでのことだが、海岸沿いに三、四日進んだ後、全員を一番都合の好い場所に上陸させ、船は売却するか［タウンゼンド夫人の手先の者たちへなら、心から喜んで売り渡すし、あるいは、他の密輸商でも構わない］、それとも、ガンモアにくれてやることにする。そして、われわれは旅の途につき、すべてが沈静化するまで滞在するという寸法だ。

ところで、貴公が異議を唱えてくるのは分かっているのだ。それが貴公のやり方だからな。だが、それを克服してみせるのが俺なのさ。他の家来どもそれぞれが苦情を持ち出してきたので、俺は親切にも、連中にとっての障害を取り除いてやったのだ。貴公にも同じことをしてやろうと思うのだが、先に、その粘液的性質を弁えた上で、難点としそうなところを貴公に成り代わって述べることにしよう。

第一には、ヒックマンはどうするのだ、と尋ねてくるだろうな。やけに洒落た甥が出来そうだということを、老いぼれの伯母に見せつけようと、精一杯着飾り、取り澄ましている男だぞ、とな。

どうする、だと。こうだよ。マナーを守って、ヒックマンは船室の女たちの傍を離れるのだよ。そして、格好良く勇気のあるところを示そうと、デッキに出るのだ。

で、そうするとして …

そうするとして … だって。なに、そうなれば簡単な話だと思うのだよ。ガンモアでも、他のだれでも構わない。厚手の羅紗ジャケツか夜警番の大外套に身をくるんだ俺でも良いのだが（他の者が、そんなことをするのは気が咎めると言うのならだ）、行く手に奴が突っ立ち、新米みたいに口をぽかんと開け、じろじろ見ているところへ、こちらがよろめいてぶつかり、甲板から突き落としてやるくらいのことはな。面白い考えじゃないか。違うかな、ベルフォード。令嬢たちの文通に奴がやたらと首を突っ込んでいるのは確かなのだ。また、俺が聞いたところでは、母親と娘の間で二股膏薬を演じているのだよ。両方が

怖いのだな。どうだ、ジャック、奴の姿が目に浮かびはしないかな。俺には見えるぞ。鬘と帽子を傍らに漂わせながら、浮かび上がったり沈んだりしているところがだ。怯えた雑種犬さながらに、ばちゃばちゃ水を叩き、掻きよせ、大奮闘だ。どうやら、泳ぎを習ってみようとは思わなかったらしいな。

だが、可哀相に、奴を溺れさせるつもりじゃないだろうな。

まさか。そんなつもりはない。計画に欠かせないことではないからな。余計な悪さをするのは好きじゃないのだ。船は進路を保って行くが、その間にも、奴を救い上げるボートの用意はしておくさ。鬘と帽子だけは失うことになるし、乏しい才気も半減してしまうだろうが、乗船した港か、それとも、どこか他の場所に降ろしてやることになっている。

なるほど。しかし、ヒックマンは腹一杯に海水を飲み込むだけで免れるわけだが、これほどの無法な強姦が三件だ。首を吊られる危険がありはしないか。

勿論あるさ。捕まった場合にはな。だが、その可能性は少しでもあるのかな。そればかりか、危険は今までにもあったのではないのか。もっとあくどい犯行のことでだよ。それに、単に危険だということに何があるというのだ。たとえわれわれが実際に、事態が収拾する前に、イギリス国内で白昼堂々と姿を現したとしても、この女たちが訴えて出る可能性より、訴えない可能性のほうが大きいはずだ。俺自身としては、告訴に踏み切ってくれたらと願う気持ちだ。勇敢な男ならば、この手の起訴に対しては、むしろ法廷に立ち、己の企てに箔を付けてくれることになる女たちとの対決を選ぶのではないだろうか。こういった件では、他の事件に比べると、この国には慈悲深いところがあるのだよ。俺が我が国の裁きにこの身を委ねたいと思うのはそれゆえなのだ。

生じ得る最悪の事態、と貴公が考えるかもしれない事柄につき、少しばかり考察を加えさせてもらおう。貴公がわれわれに加わるものと仮定し、実際にわれわれ五人が公判に付されることとしよう。実に颯爽と入廷することになるだろうな、われわれは。先頭を切るのが俺だが、全員正装だよ。まるで、自分の結婚式に臨むみたいにな。女たちが、老いも若きも、揃って味方につくことは確実だ。「何て凛々しい人たちでしょう」「素敵な紳士方ね」「ほら、ご覧なさい。チャーミングな美男子よ」　勿論、これは俺のことだ。「あれだけの紳士を吊るし首にするなんて　…　どこのだれなんでしょうね、そんなことを思いつくのは」と、おそらく記録係の右手に陣取っているのだろうが「場面はロンドンという想定だ」、ある婦人から呟きが漏れる。一方、別の一人は、俺に不利な宣誓を堂々とやってのける女のいることが信じられないのだ。傍聴人一同が俺の後を追って群がるだろう。等閑視されるのが（たまたま貴公らに内気なところがあればだが）、各人にとってはもっけの幸いということになる。俺が最大の罪人とされるだろう。そして、俺の身の安全が、それを求める声が法廷中から沸き上がるのだが、貴公らの安全につながるというわけだよ。

だが、そこで最大の勝利の瞬間がやって来て、被告人たちは胸を張り、告訴人たちは困惑に度を失うこととなるのだ。

「道を開けてくれ。よけるんだよ。退いてくれ」　ある者は叩かれ、ある者は肘打ちを食らい、十人ほどはそれぞれ押し返される。

そろりそろりと、頭巾で顔を隠し、目を伏せた原告たちのお出ましだ。

まずは後家さんだ。半分顔を覆っているが、悲痛な表情で、我が身よりも娘のことを憐れんでいる。居合わせた者たち、特に女は、この場合傍聴人の六分の五に上るのだが、後

家さんに非難を浴びせている。「良心が咎めないのかしらね。こんなにも凛々しい紳士方が五人、確かでもないことなのに、あんたのせいで吊るし首になるのよ」てな具合だ。

次に登場するのは気の毒な侍女だが、おそらく、これまでにも二十回は辱めを受けているのだから、お付き合いのためということさえなければ、今回は出頭しなかったはずなのだ。控え目な口振りだったり、ニタニタしたり、泣いてみたり、代わる代わるだ。悲しんだら良いのか喜んだら良いのか、分からないのだな。

だが、皆の目を捉えて離さないのはお嬢さんだ。「ほら、ご覧なさいよ。あのハンサムな紳士が娘さんに向かって頭を下げているわ」

勿論、床まで頭を下げるだろうな、俺は。そして、この手にキスをして見せるのだ。

「娘さんの困惑ぶりをご覧なさいな。ほら、顔を背けたわ。そりゃそうよね。公開法廷の中ですもの」　茶目っ気のあるのが叫んでみせる。一方、他の者たちは彼女を賛美している。「確かにそうね。首を賭けるだけの値打ちのある娘さんね」とだよ。

そして、われわれが褒めそやされることとなる。裁判官たちですら、また、満員の法廷全体が、心の中ではわれわれを無罪にするつもりだ。独り者の男は一人残らず、俺のようになりたかったと思っている。その間ずっと、女たちは、自分たちの場合を想定し、告訴の取り下げを口にしているのだ。まったくの話、ベルフォード、殉教者たちにしても、われわれの半分ほども平然とした態度で事態に立ち向かうことは出来ないのだよ。

それに、この一件で世間は大騒ぎにな

ひとつ言わせてもらいたいのだが、ジャック、仮にこのとおりのことがわれわれの身に起こるとして、われわれの行進を得意に思ってはいけないという理由が、俺には（われわれの主義や習わしから判断して）分からないのだよ。群衆を引きつけることこの上ない何か別の行事の際に、他の者たちが誇らしく感じるのと同じ程度にということだが、大晩餐会でのロンドン市長を想像してみてくれ。公衆を前にした入場式での凱旋将軍とか、大使とかを想像してくれ。想像し得る最大の行列、戴冠式のことを思い浮かべてくれ（最も下等なものから始めたからな）。何しろ、これらすべての場合にあって、見せ物の主要な部分をなしているのは、近衛兵であり、隊伍を組む鍛え抜かれた勇士たちであり、先に描いてみせたとおり、家のてっぺんから土台や路上に至るまで、頭をあちらこちらへと波打たせながら、ぶら下がったりしがみついたりしている見物人の群れのはずだからな。

それに、貴公にひとつ尋ねてみたいのだが、市長にせよ大使にせよ、あるいは、将軍にしても、奴らを祝うお祭り騒ぎに際し、トランペットと小太鼓が一緒になって烏合の衆の目を引きつけてくれるのでなければ、まことにもって惨めな姿を晒すことになりはしないかと、そんなふうに貴公は考えないのかということだよ。また、おそらく、われわれが最も罪深い英雄だということにもならないはずなのだ。何せ、行政の長がどんな手を使ってあの黄金の鎖を我が物としたか、分かったものではないのだよ。将軍にしても、多分、人の首を掻き切ったり、殺人を犯したりして来たのだろうが、それはしきたりで正当化されているだけの話なのだ。われわれに言い伝えられているところでは(ア)、シーザーは五十六才の時に、この年齢で暗殺されたわけだが、五十回の総力戦に勝利を収め、千を超える都市を攻め落とし、百二十万人近くを殺害したということだ。おそらく、それだけの人間を殺すために戦死した、自軍の兵の数は除いてのことだろうな。貴公や俺にしても、ジャック、シーザーに比べるなら、また、武勇の点ではシーザーの先輩に当たり、殺人と略奪によって〈大王〉という称号を与えられた、あのアレクサンドロスと比べるなら、罪のないほうではないのかな。産着にくるまった赤子ではないのかな。

われわれと祝宴に臨む市長や大使や将軍とを比較して、俺の心に浮かぶ主な相違点といえば、前者の場合よりも後者の場合に、群衆がより騒々しい音を立て、より大きな歓声を上げるということだ。これは〈口頭表決〉と呼ばれており、最後は〈より高尚な〉趣味で終わることがしばしばなのだ。散会する前に、互いに死んだ動物をぶつけ合うのだよ。だが、われわれにつき従う時に群衆が見せるものといえば、もっぱら畏怖の念か、声にならない（精々小声で囁かれる）敬意の印だ。その口は、あたかも開口器で広げられたみたいに、あんぐりと開いているし、目を丸くして感嘆するあまり、漏らす声にしても大概は途絶えてしまうのだ。

それはそうと、結局のところ、われわれに有罪判決が出たものとしよう。われわれのなすべきことといえば、他でもない、時を失することなく財産を委譲するだけだ。州長官どもが分捕り品でどんちゃん騒ぎをしないためにだよ。われわれに金があり、仲間がいる間は、これしきの悪事で首を吊られる恐れはない。それに、二名ないし三名が死罪になるという最悪の事態を想定しても、それぞれには免れるチャンスもあるのではないのかな。三

(ア) プリニウスにこの記述があり、死者数は百十万九十二人としている。なお、リプシウスの『不動心について』も参照のこと(四五)。

人の女を強姦した科で五人を吊そうだなんて、とんでもない奴らだよ。
　少なくとも俺個人は、家門のためだけにしても、罪を免れることになるのは分かっているのだ。それに、ハンサムな男のことだから、若い娘が一ダースか二ダース、全員白装束に身を固め、助命嘆願のために宮廷へ赴いてくれると思うのだよ。こいつは見事な眺めだろうな。白い頭巾に白いガウンと白いペチコート、スカーフも白なら手袋も白だ。整然と二列に並んで、真っ白なハンカチを目に当てながら、俺のため跪いているのだ。国王陛下がその間を進み、娘たちのためにも恩赦を与えようと頷いて見せる。そして、一度恩赦が出さえすれば、すべては解決だよ。何しろ、ジャック、この種の犯罪にあっては、殺人罪同様に控訴は成立しないのだからな。
　これで貴公にも分かるだろう。今回は大陸旅行などに逃げ出さず、国内に留まって裁判を受けるとして、その場合に起こり得る最悪の事態というものがだよ。だが、一番ありそうに思われるのは、連中がまったく告訴を行わないということだ。たとえこの予想が外れても、われわれの側では危険は一切冒さないことにする。最悪の場合でも、国を離れて楽しくやるだけの話だ。われわれに飽き飽きしている友人たちの元を去るわけだが、不在にしたお陰で、われわれが彼らを愛しく感じるように、われわれに対して愛着が湧いてきたという、その同じ友人のところへ暫くしてから戻るためだ。
　以上が俺の計画というわけだよ、ジャック。醸成の第一段階にあるのだがね。改良の余地があるのは分かっている。例えば、このご婦人たちをフランスに上陸させ、連中が帰りの船に乗り込む前に、あるいは、動転しているヒックマンが我に返る前に急いで戻り、何かの手段を講じて、我が愛しの君を乗船させることも出来るだろう。そうなれば、万事がうまく行くだろうし、二度とイギリスに戻れなくとも、気にする必要はないわけだ。
［考慮にいれて然るべき覚書　…　我が復讐を完全たらしめるためにも、ジェームズ・ハーローかソームズのどちらか、あるいは、その両名の誘拐を策することは出来ないものだろうかな。男たる者、何もなしに国外追放に甘んじたりするわけには行かないのだよ、ジャック］

手紙　四十三
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

　もしもハウ嬢に関する俺の計画が気に入らないというのなら、ベルフォード、さらに三つないし四つ用意してあるのだ。俺自身は似たりよったりと思っているが、貴公の考えでは、おそらく、より優れたものということになるだろうな。それゆえ、貴公としては現在の仕事から手を引くだけで良いのだ。そうすれば、好きなのを選んでもらえるだろう。ただ、貴公の三人の舎弟については、俺の思うとおりに動いてもらわねばならん。正直なところを言えば、貴公にもそうしてもらいたいのだ。でなければ、何故に貴公らの将軍ということになるのかな、この俺は。だが、この問題については、相応しい時期が来たら触れることとしよう。貴公も知ってのとおり、俺は企てを思いついても、最終的な決定を下すようなことは決してしないのだよ。実行に移すべき時期が到来するまではな。そして、時が至れば、襲撃を加えるその速さでは、稲妻といえども俺に勝ることはないのさ。

さて、俺の心を捉えて放さない問題に移ることにする。

こう話したら、貴公は信じてくれるだろうか。我がグローリアナに関することだが、あまりにも多くの趣向が胸に浮かび、優先順を争って押し寄せてくるものだから、どれを選んだものか、自分でも分かり兼ねるほどなのだよ。内輪に見ても六つ以上は秀抜なやつを聞かせてやれるのだが、どれ一つを取っても、十分に使えるはずだ。だが、我が愛しの君も惜しむことなく苦労を掛けてくれたわけだから、俺としては、お返しのためにも、弾薬を惜しんではいけないように思うのだ。むしろ、不意打ちに地雷を三つか四つ一時に爆発させ、目を剥いて唖然と立ちつくすように仕向けてやらねばならんと思っている。

貴公は覚えているだろうな。『トロイラスとクレシダ』の中で、アキレウスとの会見の場でのことだが、大口を叩くことには慣れていないヘクトールに、シェークスピアが語らせた台詞だよ。あの台詞を用心深いこの淑女に当てはめるなら、そして、彼女が俺に与えた苦痛のことや、今では間違いないことと考えているが、彼女を征服出来そうな状況になぞらえるなら、次のようになるだろう。魅惑の君が目の前にいることにして、俺はその麗しい姿を、頭のてっぺんから爪先まで凝視しているわけだ。

これからは、あゝ、用心深い美女よ、努めてその身を守ることだ。
とどめを刺すのは、そこではない。そこでもなければ、そこでもなく、
ヴィーナスの腰を取り巻く帯にかけて、
至るところに致命傷を負わせるのだ。そう、身体中くまなくな。
賢明この上なき汝、ベルフォード、余の大言を許せ。
愚かな言葉を口にするのも、彼女の用心深さゆえのことだ。
だが、言葉に背かぬ行いには努めるつもりだ。
さもなくば、二度と　…

そこで、俺の苛立ちを和らげようと、貴公が割って入ることになるのだろうな。ちょうど、アキレウスに向かってアイアースがしたのと同じようにだよ。

短気はいけませんぞ、ご同輩。
それに、そんな脅し文句もお預けだ。
偶然にせよ思惑どおりにせよ、その場に臨むまではな(四六)。

誇りとしている我が趣向の数々の最中にあって、なお腹立たしく思うことといえば、情けない人間が世の中にはいるものだという点だ。そいつは、この獲物が手中に落ちたとして、果たして我が身に強いた労苦に値するものなのかと、生意気にも疑問を投げ掛けてきたのだが、それでいながら、鳥追いがどれほどの忍耐と苦労とを重ねて一エーカーもの土地に網や罠を張り巡らしたり、隠れ馬や遠眼鏡を用意したり、囮を配置したり、口笛で鳥の群れをおびき寄せたりした挙げ句の果てに、手にした獲物といえば（朝早くから起き出して、午前中いっぱい骨を折った報いが）、代わりばえもしないムネアカヒワがたったの一羽、ということになるのは承知しているのだよ。

真面目な話、ベルフォード、幼児の頃から成人するまで、われわれが追い求めているも

のは、年格好や考え方に見合うよう、その種類や大きさこそ違うが、どれもこれもくだらないオモチャに過ぎないことは認めねばならないな。とはいえ、美女というのは、これまで男の手に入った中では、あるいは、手に入れることが出来た中では、最も上等なオモチャではないのかな。それに、われわれの望みどおりの形ではないのなら、「手に入れる」などと言ったところで何になるのだ。女が男の獲物になるというより、男のほうが女の獲物になるとしたらだよ。

∴　　∴

さあ、どう思うかな、ベルフォード。

呪わしい奴だと思うさ、もしも …

もしも、だって … もしもは止めてもらおう。明日、俺は重い病に罹るのだよ。きっとな。

病だと … どうして具合が悪いのだ。一体、何のために病気などをしなけりゃいかんのだ。

立派な理由があるのだよ、ジャック。一つならずな。

一つだけでも聞きたいものだよ。病気とはな。なるほどな。色々ある貴公のあくどいでっち上げの中でも、こいつは思いつかなかっただろうな、俺も。

令嬢をベッドの傍らに引き寄せるのが俺の目論見なのだと、おそらく貴公は考えているのだろうな。そんなのは三千年か四千年前からある古臭い手だ。俺のほうで彼女のベッドに近寄ることが出来れば、はるかに目的に適うことだろう。だが、手の内をすっかり明かしてやるから、忝く思うことだな。

密輸商を巻き込んだハウ嬢のこの計画のことで、俺は極度に狼狽しているのだよ。俺が手を出し、不首尾に終わるようなことになれば、我が麗しの君は、疑いもなく逃げ出そうとするだろう、もしも可能ならばな。彼女は俺を愛していると、俺もかつては信じていたが、今では、愛しているものかどうか、疑わしく思うのだ。少なくとも、ハウ嬢の言っている、たとえ計画的な悪事を俺が犯しても、それを見逃す気持ちになるような、そんな〈熱情〉を伴った愛であるとは思われないのだな。

で、病気が何の役に立つのかな。

まあ、慌てるな。病状はドーカスに伝えさせるが、あの娘が言うほどの重病になるつもりはないのだ。それでも、やたら吐き気を催して、少しは血の固まりも吐くはずだ。間違いなく血管の一本くらいは切れることになるだろう。疑いないところだな。イートンの血止め薬(四七)を一瓶注文するが、医者は呼ばないことにする。慈悲の心があるのなら、彼女も案じてくれることだろう。だが、愛情があるのなら、たとえ、それがどれほど心の片隅へ追いやられてきたにしても、こんな場合のことだ、表に出てきて、はっきりとその姿を現すはずなのだ。まなざしの中ばかりではなく、あの優美な顔立ちを造り上げている輪郭の一つ一つにもだよ。

すこぶる豪胆に振る舞おうと思う。死であれ、他の何であれ、怖がる素振りは見せないつもりだ。一、二時間もすれば、具合が良くなるのは確かさ。以前にもこの収斂剤にはお世話になり、その大変な効き目のほどは分かっているからだよ。狩猟中の落馬で打ち身を

負った際のことだが、この病気は、おそらくその名残りなのだろう、とな。こんなことを言えば、周りの者たちが精一杯病気にかこつけるような真似をしたところで、俺にはその気がないこと、従って、何らの下心もないことが彼女にも分かってもらえるだろう。

なるほど、この手も悪くないように思えてきたよ、と貴公は言い出しそうだな。

胸の内を話して聞かせれば、貴公がそう言ってくれるのは分かっていたのだ。またの折には、すかさず感心してみせるのだな。そして、疑いの気持ちは捨てることだよ。

さて、ベルフォード、血管が切れたことに、彼女も少しは気遣いを見せてくれることを期待したいのだ。血管が切れるというのは、とりわけ俺みたいに、気性が火のようだという定評を得ている人間にあっては、極めて大きな危険を伴うことがあるからだよ。俺としては、この病の原因をここしばらく苦しんできた悩みごとや不信感のせいだと、穏やかに話すわけで、なおさらそのように期待する次第なのだ。これでまた、俺の愛のさらなる証となるだろうし、感謝の気持ちの籠もったお返しを求めることにもなるのだよ。

それで、その場合にはどうなるというのだ。途方もない策士めが。

なに、そうなれば、良心の咎めが少なくて済むということさ。少しばかり力に訴えたとしてもな。何しろ、自分のほうからはこれっぽっちも示してくれない彼女なのだよ。同情なんかに値するとでも思うのか。

それで、もしも彼女がたっぷりと気遣いを見せたとしたら、その時はどうなるのだ。

その時には、確かな土台を当てにする望みも生まれるわけだよ。愛は数多の欠点を隠すものだし、隠し得ないものについては忘れてしまうのだ。一旦愛が受け入れられると、遠慮はいらなくなるし、遠慮がなくなれば、馴々しさが生まれる。そうなれば、どこまでやれるか試してみるだけさ。

それはそうと、ラヴレース、それだけ五体壮健で頑強な体質だ。顔はそんなにも健康色に輝いているのだぞ。だれが相手であれ、病気だなどと、一体どうやって思い込ませるつもりなのだ。

どうやってだと　…　何のことはない、少しばかりトコンを口にするまでの話だ。猛烈な吐き気を催す程度にな。

良いだろう。だが、どんな具合にやってのけるのかな。血を流して、無傷のままというのだろう。

分からない奴だな。鳩や鶏がいるじゃないか、家禽商のところならどこにでもな。

恐れ入ったよ、降参だ。

だが、そうこうしていると、シンクレア夫人から勧めを受けることになる。近頃俺は閉じ籠もり過ぎている、とな。そこで、駕籠を呼んでもらい、セントジェームズ公園へ連れられて行くことになる。マルの遊歩道を中程くらいまで歩いて見るのさ。帰り際には、ホワイツ(四八)とか、カカオの木で楽しむという寸法だ。

それで、どういう効能があるというのだ。

また疑ってかかるのか。貴公には信じる心などはないようだな、ベルフォード。そうだな、その場合には、我が愛しの君が俺の不在中に逃げ出そうとしたりしないか、それが分かることになるのではないかな。それに、俺が戻った時に、彼女が優しく迎えてくれるかどうか、それも確かめられるのではないのか。しかし、それがすべてではない。俺の外出中に、何か痛ましい出来事が起こりそうな予感もするのだよ。もっとも、この件について

は、その時が来たら詳しく話すことにする。

さあ、ベルフォード、病気になるのはうまい手だと認めてもらえるかな。それとも、認めるつもりはないのかな。いやはや、ジャック、俺としては、とにかく企みごとが好きなものだから、その機会が過ぎ去ってしまうのが残念にさえ思えるのだ。何しろ、俺の工夫の才を駆使するのに、これほど魅惑的な機会は二度と再び得られないはずだからな。

話は変わるが、ここのうるさい女どもがあまりに生意気な口を挟み、非難がましいことばかり言うものだから、俺としては、奴らに呪いの言葉を投げつける以外には手がない始末なのだ。実を言うと連中は、俺が思いを遂げる助けになればと、いかにも連中らしい陳腐低俗な手管をいくつか持ち出してくるのだよ。特にサリーなどは、大層な策士のつもりでいるのだが、つい今し方も、申し出のあった手助けを断ったところ、無礼な態度でこう言っていた。俺には征服しようという気持ちがないし、また、自分には打ち明けてくれないが、すっかり堕落してしまって、結婚する考えになっているのだ、とだよ。

この小悪魔は、我が祭壇に自らの初穂を奉納したといういきさつがあるものだから、俺に対しては勝手気ままに振る舞っても構わないと思っているのだ。それに、時としてあの娘を言語道断な振舞いに走らせるのは、唯々諾々としてあの娘が捧げてくれた愛情を、長いこと俺が、あの娘に言わせると「故意に」ということになるが、ないがしろにしてきたからなのだよ。それにしても、俺が他の男の後釜になるようなことを考えるとは、あの娘もずいぶんと無礼ではないかな。そこまで落ちぶれたわけでもないのだよ。貴公も承知のとおり、俺は常日頃から次の点を守ってきたのだ。つまり、一度他の男と通じた場合、そして、それを俺が知るに至った場合には、二度と再び、俺の女でいることはないということだよ。貴公や貴公の同輩たちくらいなものだろう、商売女を相手にするのはな。いつも俺が目指してきたのは、最初の探検家としての手柄なのだ。

汚れのないものを汚そうと骨折るのだから、俺のほうがもっとワルだと、おそらく貴公はそう言うのだろうな。

だが、否と言わせてもらおう。今後は、責任を負うべき不義密通の数もごくわずかなものに過ぎなくなるのだからな。

パリでの既婚婦人との一件では［確か、話したことはなかったと思う］、さすがに、少し良心が痛んだよ。しかし、まったくの邪心から出た仕業ではなく、謀りごとへの熱意のほうが強かったのだ。掻い摘まんで話してやろう。

少々お年を召したフランスのある侯爵が、マドリードの宮殿での公式行事に宮廷から派遣されることになり、新婚間もない魅惑的な若い妻を、横柄な自分の妹の支配下に、そして、いわば監視下に置いたのだが、この妹がまた、淑やかぶった年増女なのだ。

奥方を目にしたのはオペラ劇場でだ。一目見て気に入ったし、二度目にはもっと好きになったのだが、彼女の置かれている立場を知ってのことだよ。そこで、淑やかぶったほうに言い寄るような振りをして、両方に受け入れてもらったわけだ。

まず最初になすべきこととしては、引っ込みがちなところが俺には不満だとお世辞を並べ立てて、淑やかぶったのを引っ込み思案にしてやることだった。次には、夫の嫉妬心と義理の妹の横柄さとの板挟みになっている侯爵夫人の立場につけ込み、彼女の心に憤慨の念を、そして、叶うことなら、俺の容姿に対する関心を吹き込むことだった。フランスのご婦人たちは密かな情事を嫌っているわけでは決してないのだよ。

義妹が俺を疑い始めた。奥方のほうでは、屋敷への訪問を許された唯一の男との交わりを諦める気などさらさらない。そして、義妹が怪しんでいることを教えてくれた。彼女の私室の控えの間に、俺には内緒でということにして、淑やかぶったのを忍ばせておき、錠を掛けた上で、鍵は自分のポケットにしまうよう促した。俺は義妹への愛を公言しているようだが、果たして本心なのかどうか、義妹に聞こえるところで、彼女がそれを問い質すという筋書きだ。

彼女は同意した。我が恋人は閉じ込められ、奥方と俺は席に着いた。俺は激しい恋情を認め、熱烈な告白をした。何しろ、侯爵夫人は単刀直入に仕掛けて来たからな。淑やかぶったのは耳にした台詞に大喜びだよ。

で、どんな具合に幕が下りたと思うかな。奥方のほうの弱みにつけ込んだのだよ。死んでも大声を上げるわけに行かない立場だからな。隣の部屋へ引っ張り込んだのだ。義妹を探すような振りをしてな。義妹のほうは、その間ずっと、控えの間に閉じ込められていたというわけさ。

密会の機会を俺に与え、事なきを得た女性はかつてなし、ということだ。我が最愛のハーロー嬢は別だがね。

策が巧妙だということで、俺はお許しに与った。奥方としても、二人一緒に滅多にないような騙され方をしたのを知って、この一件の初めから終わりまで、笑いを堪えることが出来なかったのだ。自分を見張るはずの女が自分の囚人となり、しっかり閉じ込められてしまった上、われわれのどちらにも負けないくらい喜んだのだから、というわけだよ。

頻繁にある話じゃないのだよ、ジャック、イギリス人がフランス人を出し抜くのはな。その後われわれは同じように巧妙な様々の手を用いたが、奥方のほうでも、一旦打ち解けてしまうと「一度屈すれば、いつでも従う、というやつで」、協力的になってくれたのだよ。ところが、もっと堅物の密告者が秘密を暴露してしまった。侯爵が不面目を隠蔽しにやってくる前にばらしてしまったのだ。義妹はいつまでも恨んでいるし、夫も和解してくれない。どこから見ても夫には相応しくない男なのだ。フランス人の夫としてもだよ。侯爵が当時滞在していた国の習俗のこともあるのだろうが、自分の国のものとはひどく違っているわけで、おそらく、こういった点には特に敏感になっていたのだろうな。奥方は俺の庇護に身を委ねざるを得なくなったのだが、彼女自身、それで不幸だとも思わなかったのだよ。出産の床で苦しむことになるまでだがね。そして、改悛の情が湧くと同時に命を落としてしまったという次第だ。

涙の一つくらいは大目に見てくれ、ベルフォード。もっとマシな運命を辿って然るべきだったのだよ、あの女は。あのように下劣で冷酷な夫は、どれほど責めを負うても負い切れまい。義妹のほうは十分に罰を受けた。思い返しても嬉しくなるのだが、十分な罰を義妹は受けたのだよ。だが、おそらく、この顛末は前にも話してあったな。

手紙　四十四
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

金曜日　夕刻

我が魅惑の君との馬車での遠出から、今戻ったところだ。しきりと頼み込んで、やっと同意が得られたのだよ。ニンフ二人が彼女のお供をした。二人とも立派に役割をこなしてくれたが、度を越さぬよう目を配り、時々は道徳じみた感想も口にしていた。あゝ、ジャック、まったく手に負えないものだよ、女というのは。すべての試練を乗り越え、われわれの手で落ちるところまで落ちてしまった暁にはな。

馬車に揺られてハムステッド、ハイゲート、マスウェルヒルを訪ねたのだ。ハムステッドに戻り、アッパーフラスク(四九)に着くと、そこで我が愛しの君は、ニンフたちに敬意を表し、馬車を降りて軽い食事を取ることに同意した。その後、ケンティッシュタウン経由で早目に帰宅したのだよ。

彼女は楽しげに寛いでくれたし、俺のほうでは、全行程を通して、また、あの心地好い高台から広がる変化に富んだ眺望を楽しもうとヒースの野に二人で歩み出た際にも、ひたすら丁重に振る舞い、まめまめしく尽くしたものだから、ちょっとした遠出なら時々は付き合っても良いと約束してくれたほどだ。二人で歩を進めながら、俺は胸の中で時々こう呟いていた。「俺の考えでは、ハウさん、どうやら、貴女の姦計も御用済みのように思うのですがね」とだよ。

だが、一巡りをしたこの遠出の際に、われわれが馬車の中で交わした会話の詳細を二つ三つ聞かせてやろう。昨日、ハウ嬢からお手紙を受け取られたように思うのですが、と俺は尋ねてみた。

彼女は何も答えなかった。二人の文通に加えてもらえるとしたら、どんなにか幸せに思うことだろう。喜んで情報交換をしたいものだ、とも言ってみた。

つまり、了解の上で望みを通そうとは思わなかったのだが「また、彼女のほうではほとんど気づいていないのだよ。まことに幸運だったが、部分的にとはいえ、俺が了解なしに成功を収めていたことにはな」、強くお願いしておくのも不都合なことではないと考えたのだ。理由はいくつかあるのだが、その一つは、俺がしょっちゅうペンを手にしていることへの説明にもなるからだよ。自分のことが貴公や俺の手紙の話題になっているのではという、彼女の疑念を取り除くためなのだ。それに、俺が隠し立てをしたり、心の内を明かさずに置くとしても、彼女の同じ態度からそれを正当化しようというわけさ。

それゆえ、俺は次のように言葉を続けた。これまでにも一度ならず話したことだが、俺はどんな種類の書き物よりも、打ち解けた様式の手紙を書くのが好きだということ。これは、通信（つまりは、通心）という言葉自体(五〇)が含みとしているように、真心に促されて（文章作法とか推敲のために課せられる束縛なしに）筆を進めることである。真心ばかりでなく、そこには魂も込められている。友人同士が手紙を交わす時には、肉体を一切離れ、精神が君主のごとくに振る舞い、臣下たる指を駆り立てる。それは、要するに、文字に書き留められた友情のことであって、署名捺印の上で保証された友情であり、時が経とうと不慮の事故に見舞われようと、当事者たちに心変わりの恐れはないことを証明していることになる。というのも、守り通せなかったり背いたりした場合には、いつでもすぐに我が身に矛先が向いてくるような、そんな誓いの言葉を惜しげもなく与え合った者同士なのだからである。俺にとってそれは、彼女と離れて過ごす時の主な気晴らしであり、この罪のない楽しみごとがなかったならば、こんなに頻繁に遠ざけられていたのでは、耐えられなかったことだろう、といった具合にだよ。

サリーが俺の意図を汲み、次のように言ってくれた。俺の手紙を二、三通と、ベルフォードさんの手紙も拝見したことがあるが、彼女の考えでは、これまでに読んだ中でも一番楽しいものだった、とだよ。

俺はこう言っておいた。友人のベルフォードは、手紙を書かせると、それも、あらゆる話題についてだが、結構な腕前をしているのだ、とな。

我が愛しの君はわれわれの話題について知りたがるものと、俺は思っていたのだ。ところが、彼女は（待ち伏せのつもりだと俺は睨んだが）一言も口にしないのだ。そこで、この件に関しては、俺のほうから触れておいた。

われわれはとりとめもなく、様々なことを話し合っており、文学に関する話題を取り上げることもあれば［彼女はこの話題には熱心に耳を傾けてくれたよ］、催し物について話し合ったりもする。時には、われわれが親交を結んだ外国滞在中の人間と続けている、各自の文通から得られた成果を突き合わせ、互いに面白がったり、特に親しい友人たちの短所や嗜みについて触れることもあれば、われわれ自身の現在の希望や将来の夢を語り合ったり、互いに洒落や冗談をぶつけ合ったりもしている。それだけの繊細さと判断力を持ち合わせた淑女のことでもあり、俺の手紙が慰みになるなどと考えるのは、確かに、自惚れの気味があるように見えるかもしれないが、是非とも言っておきたいのは、ベルフォードと俺との間で通常交わされている手紙に目を通してくれるなら［もう少しマナーを弁え、俺の嘘を暴くような真似は止してもらいたいものだよ、ジャック。貴公の胸の内だけのことだとしてもな］、時々そんな考えでいるように思えるのだが、おそらく、俺にそうまで厳しく当たるようなことは決してしないはずだ、とだよ。

すると、彼女が口を開いた。賛辞を受けて当然な人間だけに許されるような仕方で俺のお世辞を退けた後、こう言うのだよ。彼女としては、日頃から俺のことを良識のある人間と考えていた［良識ある人間だというのだよ、ジャック。何ともしみったれた褒め言葉ではないか］。それゆえ、俺が筆を執れば、弁舌をも凌ぐはずだと考える。何故なら、手紙というものには、どれほど平易な打ち解けた文体で認められようと、腰を落ち着けて筆を進めることから生じる利点が必ずや備わるに違いないからで、これは、咄嗟に口にする言葉については常に当てはまることではない。それゆえ、俺の手紙に洗練された情趣が見出せないとしたら奇妙な話だし、あらかじめ考えた上で慎みのない書き方をしているのであれば、それもまた負けず劣らず奇妙なことであって、無思慮さからのこととする以外にはまったく弁明の余地もないし、そのこと自体にも、申し開きが必要となる。ただ、ベルフォード氏の手紙や俺のものがごく一般的な話題を取り上げており、そのうちの何通かは（そのはずだと彼女も思うのだが）啓発的であると同時に慰みともなるものだとすれば、そのいずれであれ、とりわけ、マーティン嬢が見て称賛していたものについては、拝見出来れば嬉しいと申さねばならない、というのだ。

厳しい言葉だったよ、これは。

俺は彼女の顔色を窺った。この遠まわしな言葉には、まだ彼女に見せていないものをマーティンが既に目にしていたことを妬む、嫉妬心のかけらでも見つかりはしないかと思ってだ。だが、彼女にそんな素振りは見られなかったのだよ。それで、俺は次のようにだけ言っておいた。そのような手紙ばかりでなく、ベルフォードと俺との間で交わされたものすべてをご覧いただけるなら、それこそ大変に名誉なこととは思う。ただ、一言注意させ

ていただくが、条件はお分かりでしょうね、とだ。

「存じませんわ、本当に」と、彼女は魅力的な唇を突き出していたが、可憐であり、また、小生意気にも映った。愛らしく蔑んで見せようというのだが、あの咲き誇るような若さや、神々しいほど際立った美しさにだけ許される愛らしさだったよ。

是非とも、あのような仕草をもう一度眺めたいものだね。彼女の口にして初めて出来る仕草だからな。

それにしても、気も狂わんばかりに愛しているのだよ、俺は。だが、二人を隔てる溝は永久に塞がらないだろうな、この調子では。火と燃え上がるかと思えば、氷のように凍てつき、いわば俺の心は、絶えずシューシュー音を立てているのだ。しかし、消し去ろうと試みても無駄だろう。結局のところ、消し切れないものなのだからな。

お願いだ、ベルフォード。俺のたわごとを、そして、鍛冶屋みたいな譬え方を大目に見てもらいたいのだよ。貴公に打ち明けていなかったかな。俺は愛に飽きたのではなく、愛で狂っているのだ、とな。あれほどの天使を、何でまたこんな家へ、こんな奴らのところへ連れてきたのだろう。それに、俺が結婚嫌いなのを承知の上で、のべつその話を持ち出しているあの男たらしどもの言葉に、どうして耳を塞ごうとしないのだ。

あゝも易々と言葉を返されるつもりはなかったのだ。あれほどの淑女二人（それもまことに親密な間柄だが）の間で交わされているものだけに、だれに見られても構わないはずだと、俺は確信していたのだよ。彼女とハウ嬢とが交わした書簡を見たがるのには、他のだれにも増して理由があったのだ。つまり、素晴らしい教訓で満ち溢れているものと確信していたからだよ。それに、文通を続けている愛すべき者たちの一人は、俺の完全なる改心に望みを掛けようと考えてくれていたのだからな。

彼女が俺のほうに顔を向けたが、まるで腹の中まで見透かそうとするようだった。一瞥を受けるごとに、それがおののき震える腎臓の辺りを突き通す感じなのだ。だが、彼女は無言のままだった。また、あの目なら、言葉の助けなどは無用なのだよ。

それでも、俺は少し落ち着きを取り戻し、ハウ嬢であれ、ハウ嬢の母君であれ、別に不幸なことはなかったものと思いますが、と話し掛けた。そして、昨日の手紙は特別な使いの手で届けられ、封を切る際にはひどく動揺していたし、もっと前に届くことを期待していた様子だったからと、そんなことを懸念の理由にしておいた。

その頃には、われわれはマスウェルヒルに着いていたわけだが、彼女は、俺には答えようともせず、ポリーに向かって「美しい土地ですわね、見渡すかぎり」などと、感想を口にしているのだ。

だが、俺はそんな応じ方をされるわけには行かんのだ。次のように言ってみたよ。あのような二人が筆を執るのだから、何か魅力的な話題や人物のことが取り上げられているはずだと思うし、ヒックマン氏とハウ嬢とは万事順調なことと願っている。ハウ嬢の母君はあの縁談にご執心だし、ヒックマン氏にも取り柄がないわけではなく、ご婦人たちが口にする「謹厳実直」な人物ではある。ただ、俺としては是非とも言っておきたいのだが、ハウ嬢はまったく性格の違う男を夫に持って当然のように考えている、とだよ。

こんな話をすれば、何かを誘い出せるような話題に彼女を引き込むことになると思ったのだよ。何しろ、ヒックマンは彼女のお気に入りの一人だからな。ただ、貴公の真っ正直な友人の人柄とは正反対だから、ということ以外、何故そうなのか、俺にも見当はつかな

いのだよ。

ところが彼女は、咎めるようなまなざしを俺に向け、涼しい顔でもう一度遠くの眺めのことに触れ、俺の言葉を遮ってしまった。そして、馬車の外を指差しながら、「ねえ、ホートンさん、あの茂みまではどれくらい離れているとお思いかしら」などと言っているのだよ。それで、俺も諦めてしまった次第だ。

この快適な遠出の際に交わした会話について書いておくべき点のすべては、これでお終いということだ。

われわれ二人とも、帰宅後はずっと筆を手にしたままだ。彼女が床に就く前に、一時間ほど付き合ってもらえることになっている。

明日の病気に向け、彼女の優しい気持ちを精一杯引きつけるためだが、従順な恋心が思い浮かべ得ることのすべてを、顔を合わせたら試してみようと思っている。ただ、別れ際には、胃の不調を訴えておくつもりだ。

∴　∴

会って来たところだ。俺のほうでは終始一貫して愛情に溢れ、申し分のない恭しさだった。彼女のほうも打ち解け、そして、慇懃な態度だった。俺の具合が悪いのを気遣ってくれて、本当に、急な話だ、今別れたばかりなのに、と言っていた。俺は、なに、大したことではない。明日の朝にはすっかり良くなっているだろう、と言っておいた。

正直言って、ジャック、既に吐き気がする感じだよ。納得ずくで病気になるなんてことは、俺みたいな浮ついた人間に出来ることなのだろうか。この調子では、望みもしないほどの巧みな物真似師ということになりそうだな、俺も。だが、心に決めた悪事を実行に移すためであれば、壮健さによってであれ病によってであれ、身体中の神経という神経、筋という筋のすべてが、いつでも喜んで助けの手を差し延べようとするのだよ。

五月十四日、日曜日の日付がついているハウ嬢の手紙(ア)の全文を、ドーカスが書き写してくれた。以前には抜き書きだけが手に入ったやつだ。あの束には別の手紙は付け加えられていなかったそうだが、この手紙、それに、先週の日曜日、彼女が礼拝式に出ている間に暗号を用いて自分で書き写した、密輸商を巻き込んだ計画に触れている例の手紙(イ)だけでも、俺にとっては十分なのだ。

∴　∴

ドーカスの話では、奥様が手紙類をマホガニー製の箪笥からオーク材で出来た箱へ移し替えていたそうだ。彼女のリンネル製品を入れてあったもので、窓がないほうの控えの間に置いてある。今のところ、その鍵はわれわれの手元にはないのだ。疑いないだろう。俺の手に入ったものよりも前の手紙すべてがあの箱にしまってあるはずだ。ドーカスはこの件を気に病んでいるが、それでも、奥様は自分に疑いを掛けたりしないだろうと思っている。間違いなく、すべてのものを最初に見たとおりに戻しておいたから、というのだ。

(ア) 五十六頁以降を参照のこと。(イ) 百十一頁以降を参照のこと。

手紙　四十五
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月二十七日　土曜日、カカオの木にて

このトコン剤というのは、不快なことこの上ない薬だよ。医薬品を扱うこの忌々しい連中に見つけ出せるものといえば、われわれの身体に良いものなどは何一つとしてなく、悪魔をも毒殺してしまうようなものばかりなのだ。連中があの世で薬の一つも口にしてくれるとしたら、それだけで、役立たずな生涯への十分な懲らしめになることだろう。哀れな患者は、片方には医者、もう一方には薬剤師が立ち会う中、二人の指示どおりの処置で苛まれるのだよ。これ以上の拷問を加える者など、患者には要らないのだ。

ところで、これは俺の顔から血色を奪うためだった。効果てきめんだったよ。嘔吐を催すに十分な量を摂り、薬を洗い流してしまうほどの水は飲まなかったので、猛烈な吐き気が来て、間もなく、二週間も病の床に就いていたような顔付きになった。薬を用いている最中に考えたのだが、「刃物でふざけるのも良くないが、薬を弄ぶのはもっと良くない」ということだな。

効き目は二時間続いた。この件については、奥様には一切知らせてならんと、ドーカスに命じておいたのさ。彼女への思いやりからというわけだが、俺が口止めしたのを知った時に、彼女にも分かってもらいたかったのだよ。彼女は気を揉むだろうと俺が予想していたことをな。

それはそうと、やはりドーカスは女だったよ。守るよう言いつけられた秘密を、自分の奥様に囁いて平気なのだ。

ここへ来るんだ、ヒキガエルめ［この時は気分が滅法悪かったのだ］。その丸くてのっぺりとした顔をしかめると、悲しみと驚きとが入り交じった、どんな表情が出来上がるものか、ひとつ見せてもらおうじゃないか。

そんなんじゃ駄目だな。そんなふうに顎を垂らし、細長い卵みたいに口を開けたんじゃあ、嘆き悲しんでいるというよりも、恐れおののいている顔だ。

憎悪を誘う目だと、我が魅惑の君も以前言っていたが、お前の目をそんなふうにしばたいて見せるのも駄目だよ。

それなら少しはマシだな。でも、十分じゃない。ともかく、口は閉じておくんだ。お前には思いどおりに動かせない筋肉が一、二本あるのだよ、頬骨と唇との間にな。口の片端を目尻のほうへ持ち上げ、目尻を下げて口の端と出会うようにさせるやつだ。

ほら、行くんだ。大慌てで階段を昇ったり降りたりして、食堂から取って来るんだ。持って来るためにわざと運び上げる品物をだよ。普段とは違う運動のために息が切れ、自然と吐息が出るようになるまでだぞ。

「何があったの、ドーカス」

「何でもございませんわ、奥様」

今朝はまだ俺の姿を見ていないと、我が愛しの君がいぶかるのは疑いない。だが、恥じらいのほうが強くて、いぶかる気持ちを口には出さないのだ。しかし、彼女のドアの前を通り、ドーカスが階段を昇ったり降りたりするものだから、「何があったの」と繰り返し尋ねると、「あゝ、奥様、旦那様が　…　お気の毒に、旦那様が　…　」という答えが返って

来るのだよ。

「何ですって、どうして、いつなの」と、驚きを表す短い単語が勢揃いだ。

［括弧付きで言わせてもらうが、たびたび考えることがあるのだよ。国家の中での庶民と同じことで、言葉の共和国にあって最も大きな意味を持つのは、短い語なのだ。三音節で出来た語や三音節を超える騒々しいやつは、他でもない、ほとんど役に立たないお偉方といったところなのだ］

「申し上げるわけにはまいりません、奥様。お話ししてはならぬと、旦那様のご命令なのです。ただ、ご自分が考えておられるよりもお悪いのです。それでも、奥様を驚かせたくはないとのお気持ちなのです」

憂慮の陰が優美な顔立ちの一つ一つを覆い尽くした。俺のことを気の毒に思ってくれたのだよ、彼女は。確かだ。気の毒に思ってくれたのだよ。

「どこにいらっしゃるの、あの人は」

あまりに慌てているから、マナーなどはそっちのけで［もう一度括弧付きで言うが、ジャック、行儀作法というのは、生まれながらに備わっているものとは訳が違うから、守るためには平静でなければならん。騒動の最中に上品ぶってはいられないのだよ］、ご質問にお答えしている暇はございませんわ、と小娘が叫ぶ。答えたいのだがね［三度目の括弧になるが、売りつけようと思う客から逃げるように走り去る、布告書の広め屋みたいなものさ］。こんなふうに大慌てなものだから、奥様も慌てて尋ねるわけだ［四度目になるが、三度目のやつに潤色を施すためだ］。ちょうど、広め屋が走り去るので、皆が急いで買い求めるのと似たようなものさ。そして今、目に浮かんでくるのだが、町中の者が総出で布告書とか至急報とかの広め屋を追いかけることになる。まるで、広め屋が盗人で、町民は追手の一団といった塩梅だ。

終いには、「あゝ、神様。ラヴレース夫人にお知らせいたしましょう。危ないのだわ、きっと」と、ニンフたちが互いに囁くわけだが、ドアの前だし、耳をそばだてている麗しの君にも聞こえるような大きな声でだ。

彼女が飛び出して来て叫ぶ。「どんなご様子。どんなお具合なの、ドーカス」

「あゝ、奥様、血を吐かれたのです。血管が切れたのですわ、きっと」

彼女は階下へと急ぎ、だれもが入り口のところで、まるでナポリの聖人（五十一）の血でもあるかのように、俺の血の始末で忙しくしているのを知るのだ。

我が魅惑の君が入って来る。顔には優しい懸念の表情を浮かべてな。

「いかがですの、ラヴレースさん」

「あゝ、最愛の人。すこぶる元気ですよ。元気そのものです。何でもないのです。大したことではありません。間もなく良くなりますよ」　そして、もう一度、無理に吐こうとした。実際、ひどくむかついていたのだ。もっとも、血はもう出なかったがね。

要するに、ベルフォード、俺は目的を達したわけだよ。愛しの君が愛してくれているのが分かったのだ。過去のすべては水に流してくれたのだよ。新たなツケに対しても信用が得られるということだ。

どうだ、ハウ嬢、参っただろう。タウンゼンド夫人　…　一体どこの馬の骨だ、お前さんは。密輸品もろとも消え失せるのだな。密輸は御法度だ。密輸業者もいらん。俺だけで良いのさ。我が麗しの君の愛情の最上のものが禁制品扱いとされるのも、俺にとってはも

う長いことでもないのだよ。

∴　　∴

彼女は俺を愛していると、今ではだれもが確信している。俺のため、彼女の目に涙が浮かんだのも一度ではない。彼女の手を取り、その手に好きなだけ何度もキスするのを黙って許してくれたのだ。俺が閉じ籠もり過ぎていることにシンクレア夫人が触れると、散歩に出掛けるよう、彼女はしきりに勧めていたが、親切なことに、くれぐれも身体には気をつけてもらいたいと言ってくれたのだ。医者の診察を受けてくれると有難い、医者は神の造り給いしものなのだから、と言うのだ。

俺はそんなふうには考えていなかったのだよ、ジャック。確かに、神はわれわれのすべてを造り給うた。しかし、彼女が言おうとしたのは、〈医者〉ではなく〈医薬〉のことだったのだと思うのだな。それならば、あの言葉の意味合いは、「食べ物を送り給うは神、料理人を寄越すは悪魔」（五二）という、例の俗間で用いられている言い回しが含みとしているものになるだろう。

彼女の愛しい手から止血薬を受け取った途端、もうすっかり具合は良くなった。

散歩に出てほしいと彼女が求めるので、馬車でご一緒願えないものかと尋ねてみた。これは、俺の不在中に外出する考えかどうか、看て取るためだ。

俺の体調には駕籠のほうがもっと適した乗り物のように思うけれど、そうではないということなら、喜んでお供をするところです、と言うのだよ。

可愛いじゃないか、本当に。

もう一度彼女の手にキスをした。どこまでも優しくしてくれるのだよ。もっとその優しさに値する男になれたら　…　と俺は呟いた。だが、われわれを待ち受けているのは、ただただ黄金の日々だけなのだ。彼女が顔を出し、思いやり溢れる気遣いを示してくれたことで、すべて解決だ。具合も良くなったよ。苦しいところ一つとしてない。だが、我が愛しの君がどうしてもと言うものだから、少し散歩をしてくるつもりだ。駕籠を呼んでもらおう。あゝ、我が魅惑の君よ、たとえこの病が最近の俺を悩ませていたことや、君の意に背きはしないかという不安な気持ちから引き起こされたものだとしても、君の優しさによって、すべては計り知れないほどに償われたのだよ。病を癒す技のすべてが君の笑みの中にはある。近頃の君の不機嫌さこそが、唯一病の源だったのだ。

こうしている間にも、シンクレア夫人、ドーカス、ポリー、それに、うすのろのメイベルまでが［実は、我が天使が入って来ると、サリーの奴は出て行ったのだよ］両手を差し上げ、空を仰いで立ち尽くし、俺が快方に向かっているのを小声で神に感謝していたのだが、それははっきりと聞き取れた。「これが愛の力なのね」と囁く者があれば、「何て素敵なご主人なのでしょう」と呟く者もいる。そして、「お幸せなカップルだこと」と、これは全員揃ってだ。

あゝ、愛しの君の頬は見事な朱に染まった。両の目のその輝き　…　取り柄を自覚している者にとっては、褒め言葉は何と心地好く受け取られることか。褒められるに値しない者に向けられた場合、そんな言葉は心を咎めるだけなのにな。何という新たな気分を、何という晴れやかな気持ちを、自信のない心、意気消沈している心に、褒め言葉はすぐさま

生み出してくれるのだろうか。
さあ、どうかな、ベルフォード。仮病を使うのも悪くはなかっただろう。ただ、もっと楽しい便法が目白押しなものだから、この忌々しいトコン剤をこれ以上試す気にはなれないのだよ。それは言っておかねばならないな。

手紙　四十六
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

五月二十七日　土曜日

ラヴレースさんの具合がとても悪かったのです。突然の病で、大量の吐血がございました。どこかの血管が切れたのでしょうね。前の晩から胃の不調を訴えておりました。私たちの間でありました激しい言い争いがきっかけかとも思われますだけに、尚更のこと、心が乱れました。でも、私が悪かったのでしょうか。

ごく最近までのことでしたわね、あの人を憎く思っておりましたのは。でも、憎しみとか怒りと申しましても、私の場合には、ほんの一時的な感情のように思われるのです。生命の危ない人、あるいは、災難とか苦悩に見舞われている人を憎むなんて、だれにだって出来ませんでしょう。私って、親切を施されたり、犯した過ちを認められたりいたしますと、心を鬼にすることは出来なくなるようなのです。

自分の病のことは出来るかぎり長く私には伏せておくよう、あの人は大層気を配っておりました。激しい症状の最中、そんな思いやりを示してくれたのです。出来ることでしたら、私の目に触れるところでは病気になっていただきたくなかったと、そんな気持ちでおります。あの人が危ないと、だれもが驚かすものですから、私はすっかり心が乱れてしまいました。お気の毒に、あんなにも元気だったあの人が、こうも突然の病なのです。それも、まったくの不意打ちです。

あの人は駕籠で出掛けました。私がそのようにお勧めしたのです。私の助言は間違っていたようにも思います。このような病気の時は、安静にしているのが一番に決まっておりますからね。危急の折には、私たちってすぐにも助言をしがちなものですが、確かな考えもなしに、あるいは、考えがまとまるのを待ちもせずに助言してしまうのです。勿論、お医者様を呼ぶよう、私は申しました。でも、あの人はお医者様に診てもらおうとはなさらないのです。私はお医者様たちを大層尊敬いたしております。それに、常日頃から目にしてきたことですが、治療の業に携わっておられる先生たちを軽んじる人々というのは、さらに高貴な機関に対しましても同じ態度で臨むのが通例となっておりますだけに、私といたしましては、なおさらその気持ちが強くなるのです。

本当に落ち着かない気持ちでおります。あの人に、そして、階下の女の人たちにも、自分を露にしてしまったようにも思うからです。女の人たちのほうでは、私たちは結婚しているという考えですから、勿論、大目に見てくれるはずです。でも、もしもあの人が寛大な心をお持ちでないとしたら、私といたしましては、この不意の出来事を悔やんで当然ということになるでしょう。私自身について私が気づいております以上のことを、この出来事は教えてくれた（あの人からは訳の分からない扱いを受けていると、そのように考えて

当然な理由がございましたので）わけですからね。

どんな男の方よりもラヴレースさんを好きになることは出来ただろうと、確かに一度ならずお認めいたしました。貴女のところで楽しく過ごさせていただきました折に、この件につきまして、二人でよく話し合いましたのを覚えております。貴女がよく言っておられましたのは、そして、一度はお手紙にも書いてくださいましたが(ア)、あの人のような気質の男性というのは、女性が本来的に憎しみを感じることのない男性なのだということでした。それに対し、私が主張いたしましたのは、そのような人たちは（どのような訳でそうなるにいたしましても）、私たちが好意を寄せるべき男性ではないということでした。ところが、一方では身内の者たちが私を急き立てるということがございましたし、また一方では、あの人の芳しくないお人柄や、困惑を招く振舞いのことがございましたので、それやこれやで、この点に関しまして自分自身の心の内を検討してみようという気持ちはありましても、時間のほうがなかったのです。また、これで思い出しますのは、以前のお手紙の一つにございました一節のことです。からかうお気持ちで筆にされたものですが、書き写してみることにいたしましょう。「貴女の場合には、これまで、とんでもない人たちと対処なさってきたため、ご自分の胸の高鳴りにまでは注意が回らなかったということではないでしょうか。あるいは、少しは胸の高鳴ることも時としてあったといたしましても、その動機と考えられますものが二つありますために、誤って間違ったほうに原因を求めてしまわれた、ということなのではないでしょうか」と、貴女はこのように言っておられるのです(イ)。これは、ラヴレースさんに問題と思われます点がほとんど見当たりません時点で私の心に浮かんで来た一節なのですが、それでも、あの人が私を悩ませ、苛立たせました時には、そして、疑いを抱きたくなるようなことをなさった際には、きっぱりとその有効性を否定させていただきましたお言葉です。と申しますのは、結局のところ、ラヴレースさんもすべてに亘って賢いわけではないのですからね。それに、私たちは可能なかぎり（血のつながりによって結ばれているのではない場合です）、理性の命じますところに従い、そして、相手の方の功罪に即しまして、好いたり嫌ったりするよう努力すべきなのではないでしょうか。愛と称されておりますものが、私たちのこの上なく無分別な愚行の言い訳として通るのでしたら、また、用意周到な教育が私たちの周りに巡らしてくれました柵を打ち崩してしまいますのも、愛には許されることだといたしますと、感情を抑えよという教えには、一体何の意味があるというのでしょう。でも、あゝ、私の大好きなお友達、この過ちだらけの男の人を愛したりいたしますと、私は罰を受けても仕方のないような間違いを犯していることになるのではないでしょうか。また、愛してなどいないのだと考えておりましたのに、私自身の心も私を欺いていたのではないでしょうか。それに、相手の方に対して幾分かの清廉さを持ち合わせないようでしたら、それは一体どんな愛だというのでしょう。従兄弟のモーデンの便り(ウ)にありました数箇所は、思い出しますのも怖い気持ちです。でも、十分に検討いたしますと、その話題は私の心を正し、清めてくれるかもしれない話題なのです。どうして私は避けようとするのでしょうね。この点につきましての考え方を、私はあまりにも高邁なものにしてしまったのかもしれません。もっとも、実践不可能なほどとは申しません。私にとりましては実行し兼ねるところまで、ということなの

(ア)八十四頁を参照のこと。(イ) 第一巻の五十一頁を参照のこと。(ウ) 本巻の十九頁以降を参照のこと。

です。それでも、罪深いまでに淑女ぶっているなどと、そんなふうに私のことをお考えになるのもお止めください。以前からこれくらい自分のことに気づいておりましたなら、と申しますよりも、そのことに気づくだけの心のゆとりをあの人がこれまでに与えてくれましたなら、貴女ももっと早くに私の告白をお聞きになっていたことでしょうからね。

それでもやはり、お知らせしておきたいと思いますのは（お話ししておきますのが当然と思われることです）、もしも、よそよそしさや打ち解けない態度に私が戻らねばならないようなことを、再びあの人がなさるようでしたら、私にも分別はございますから、あの人のいたらなさに力を得まして、感情を抑えつけるくらいは出来るはずだと考えているということです。私たちに貸し与えられました束の間の光で我が身を律しますことの他に、私たちには一体何が出来るというのでしょうか。

このことが発覚いたしまして、私が深刻な気分になっておりますのを、貴女は驚いたりなさらないでしょうね　…　でも、「発覚」と呼ばねばならないのでしょうか。どんな呼び方があるのでしょう。

自分のことが不満なものですから、これまで書いてまいりました事柄を見直すのが怖くなります。でも、どう書き終えたら良いものか、それも分からないのです。このように奇妙な気持ち、かつてなかったことです。説明のしようもございません。貴女にはそんなこと、これまでにございましたでしょうか。好意を寄せる女性からの咎めを恐れながら、それでいて、咎められるようなことをした自覚はない、という気持ちです。

ただ、次の点は確信いたしております。私の心の内を少しでも貴女に隠したりいたしますと、本当にお咎めに値することになってしまうだろうということです。

でも、これまで以上に厳しく胸の内を吟味してみるとお約束いたしましたからには、この上付け加えるべき言葉はございません。

誠意、そして、親愛の情を等しく込めまして、

CL. ハーロー

手紙　四十七

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

土曜日　夕刻

素晴らしい遠出だった。病気のぶり返しはない。気分は完璧なまでに寛いでいるというのに、どうして胃の調子が楽にならないわけがある。

ところが、帰宅してみると、我が優しの君が新たな出来事で恐怖に陥っていたのを知ることとなった。極めてうさん臭いやり方でだが、われわれ両名についての問い合わせがあったのだよ。それも、名を挙げてではなく、二人の姿格好に触れてのことだ。袖の折り返しや縁取りに黄を配した青色の仕着せを着た従僕をよこしてな。

上働きの使用人ということで、ドーカスがその男のところへ呼び出された。その男の用向きは何で、だれに遣わされて来たのかを教えないかぎり、どんな質問であれ、答えるのは断るとドーカスが言ったものだから、奴のほうでも（あの娘と同じく無愛想に）、俺に答えるつもりはなくても、他のだれかになら答えるかもしれんな、と言い残すと、不機嫌な

様子で帰って行ったのだ。

ドーカスは大急ぎで奥様のところへ飛んで行き、彼女を慌てさせることになったわけだが、それも、あったとおりの話だけでなく、自分の憶測まで交えてのことだ。そして、恐ろしい顔付きをした男だし、ろくでもないことのためにやって来たに違いない、とあの娘は言い添えたのだ。

その従僕の着ていた仕着せと奴の人相について、事細かな問い掛けがあり、負けず劣らず細かな説明がなされると、彼女は、「何てことでしょう。心配の種が尽きることはないのね」と呟いた。そして、不安な気持ちから、起こり得るありとあらゆる災難について、取り越し苦労をしていたそうだ。

ラヴレースさんにお出で願えればと、彼女がお望みだ。

時を移さず、ラヴレース氏のご到来だよ。どこまでも元気はつらつ、謝意を満面に浮かべ、希望、義務の念、愛に溢れている。魅惑の君に感謝し、彼女がもたらした癒しを共に祝おうというのだ。すると、彼女が微に入り細にわたっていきさつを語る。そこで、ドーカスも奥様の不安を強めるように、例の従僕は日焼け顔の男で、まるで航海に出ていたような様子だったと、われわれに教える。

それじゃあ、疑いの余地もなく、その男はシングルトン船長の雇人ですわ。この次耳にする報せといえば、この家は乗組員全員に包囲されているということで、船も、自分の考えでは、遠くてもロザーハイズには停泊しているはずです、と彼女が言う。

あり得ない話ですよ、と俺が言う。このような探りの入れ方は、その手の企ての下工作には用いられないものです。そうじゃなくて、貴女の従兄弟のモーデンさんの使用人ということはありませんかね。帰国されたこと、また、貴女のところへ伺う旨の知らせを託したわけですよ。

こんな推測を聞いて、彼女は大喜びだった。不安は解消し、心のゆとりも出来て、俺の思いがけない回復を喜んでくれたのだが、それがまた飛び切り好意に溢れたものだった。

ところが、二人が腰を下ろして長くも経たないうちに、またドーカスが慌てた様子でやって来て、こう言うのだよ。あの従僕が、あの同じ従僕がまた玄関に来て、ラヴレース氏と奥様はこの家に下宿しておられないかと、名指しで尋ねたというのだ。男はドーカスに向かって、悪意があって尋ねているのではないと話したそうだが、不安に駆られる我が麗しの君にとっては、このように悪意はないと言うこと自体、悪事を企んでいる証ということになるのだよ。そこで、男がドーカスの返答を受け取っていなかったこともあり、俺が表の客間へ赴いて、男の言い分を聞くことにしようと申し出た。

「お見受けいたしますに、我が最愛の人よ、いわれもない恐れを抱いておられるようですし、それに、堪え切れないご様子だ。いかがでしょう、階下へご足労願えませんか。そうしていただければ、お姿を見られずに（あの男を客間のドアより中へは入らせませんので）、事の一部始終をお聞きになれるはずで」と、俺は言ったのだ。

彼女が同意し、二人で階下へ降りた。こちらへいらっしゃいと、ドーカスが男に呼び掛けた。「やあ、君、ラヴレース夫妻に何のご用かな」

ペコペコと頭を掻きながら、男はこう答えた。「貴方様がそのお方なのでしょうね、きっと。用向きと申しますのは、ただ、貴方様がここにおられるのかどうか、また、話をお聞きいただけるものかどうかを、あるいは、少しの間でもここにおられるのかどうかを知っ

ておくだけのことでして」
「どなたの使いかな」
「ある紳士に頼まれまして、その方のお指図では、強いられたのならともかく、それ以外には話してはならぬとのことでしたが、ラヴレース夫人の伯父上、ジョン・ハーロー殿の友人からの使いである旨をお話しするよう言われております」
これを耳にして、愛しの君は今にも倒れ込みそうだった。つい最近のことなのだよ、彼女が気付け薬を身に備えるようになったのはな。彼女はそれを取り出した。
「モーデン大佐については何かご存じかな、君」　俺が訊いた。
「いいえ。そのようなお名前は耳にしたこともございません」
「シングルトン船長はどうかな」
「存じません。ただ、私の主人の紳士も船長でして」
「何というお名前かな」
「お話しして良いものかどうか、分かり兼ねます」
「紳士の名を告げて困ることなどあるまい。立派な理由があって来ているのならな」
「それはそのとおりでして、主人もそう申しておりました。それに、天下広しといえども、主人ほど律義な紳士はおりません。主人の名はトムリンソン船長でございます」
「そのような人物は知らんな」
「そうでございましょう。主人のほうでも、貴方様のことは存じ上げないと申しておりました。ただ、そのようなことはございましても、招かれざる客となるわけでもない、と申しておりますのを耳にいたしております」
「トムリンソン船長とかいう人物はご存じですかね、最愛の人よ［と、これは脇に向かっての台詞だ］。伯父上の友人とのことですが」
「いいえ。でも、疑いございませんが、伯父には私の存じ上げない知人がいることでしょうね。ただ、これが［と、震えながら］企みでなければ良いと思うのです」
「結構だ、君。君のご主人のほうで何かラヴレース氏に話すことがあるのなら、ラヴレース氏はここにいるし、お好きな時にお会いするつもりだと伝えてもらって構わない」
俺の身の安全を考えると、この約束は即断に過ぎはしまいかと、愛しの君は案じている様子だった。こうして、男は去って行ったわけだが、このトムリンソン船長がどこのだれであれ、自ら出向いて来ないのは妙だとか、二度目の時に、俺がここにいると考えて当然な根拠がありながら、書面を送ってよこさなかったのは変だとか、俺のほうで不思議がって見せたのだが、彼女が怪しまないためのことだよ。
その一方で、その頭もないくせに企みごとが好きな男だから、と俺は言ったのだが、これがあのジェームズ・ハーローの仕組んだことだとまずいというわけで、われわれの前に呼び集めた召使いや女たちに向かって、一層仰々しく見せようと、用心のための指示をいくつか与えておいた。そして、我が愛しの君は、この奇妙な出来事の結末が分かるまでは外出を控えると、心に決めた次第だ。
大いに困惑の体というわけだが、ここで筆を置かねばならん。
ただ、気の毒に、ベルトンが貴公を必要としていることだけは付言しておく。俺は出歩くわけに行かないのだよ。生命に関わるからな。
モーブレーとターヴィルは、頭も手も魂も欠いた状態で、浮浪者みたいにコソコソ歩き

回っているところだ。奴らを導いてやる貴公も、そして、俺もいないわけだからな。連中に言わせると、油を注すとか動かしてみるとかしたところで、ピカピカになるとか作動し始めるとかいったことがないほどに、すっかり錆びついてしまうだろう、とのことだ。

叔父貴のほうはどんな具合かな。

手紙　四十八
ラヴレースからジョン・ベルフォードへ

五月二十八日　日曜日

昨夜一緒にいた間だけではない。今朝、朝食の席に着いている間もずっと、このトムリンソン船長の件がわれわれの話題となった。シングルトン船長のもたらす何らかの災いの前触れなのだと、なおも彼女は言い張るのだよ。俺のほうでは（先に匂わせてあった話に沿って）もっとありそうな話として、モーデン大佐が、自ら訪ねて来るのに先だち、彼女を驚かすために用いた手口なのだと主張した。旅慣れた紳士というのは、こんなふうにして人をびっくりさせる手を好んで用いるものだ、とな。「それに、最愛の人よ、すぐに説明のつかない出来事のどれもこれもが、どうしてわれわれの一番望んでいないことでなければならないのですか」と、俺は尋ねみたのだ。

ここ暫く、嫌なことがあまりに沢山身に降り懸かったため、希望よりも不安のほうが強くなることが多いのです、と彼女は答えていた。

「だから心配になるのです、マダム。あまりに憂鬱なお気持ちになられて、二人を待ち受けているかに思われます幸せを味わうことがお出来にならないのでは、とです」

あらゆる善を施し与えてくださるお方への義務の意識と感謝の念があるので、恩知らずな真似をする心配はないはずだと、彼女は厳粛な口調で語っていた。そして、感謝を忘れない心というのは、喜びに溢れる心と同じことだ、と言うのだ。

従って、ベルフォード、彼女は将来の喜びすべてを、姿も見えない神に全面的に頼っているということだ。確かに、彼女が正しいのだよ。何しろ、被造物に執着することの最も少ない者が、失望を味わう見込みも最も少ないわけだからな。それに、この真面目くさった物言いにしても、彼女の生真面目さゆえのことではないのかな。

彼女が語り終わるか終わらないうちに、ドーカスが大慌てで駆け上がって来た。あの娘のお陰で俺の心臓までが早鐘を打つ始末だ。ドッキ、ドッキ、ドッキと、柱時計の枠の中で速度を上げた振り子みたいにだ。パタ、パタ、パタと、我が魅惑の君の心臓もだよ。あの魅力的な胸が顎先に届かんばかりに波打つのを見て分かったのだがね。

この下層階級の連中というのは、我が愛しの君自身も述べていたが、面白くもない不思議な話をのべつ狙っているし、ありきたりの出来事を驚きの種にしたがるものなのだ。

「一体全体どういうわけなのだ、この不安を掻き立てるような慌てぶりは」と、娘に向かって俺が言った。「それに、指をおっ広げた格好で、〈あゝ、奥様、あゝ、旦那様〉の連続だ。くたばってしまえ。ゆっくり上がって来たところで、一秒の違いでもあったというのか」

「トムリンソン船長がお見えでございます」

「糞ったれ船長など、屁とも思わん。分かっているのか。お前のせいで、奥様はすっかり心を乱しておられるのだぞ」

「お願い、ラヴレース様」と、我が魅惑の君が震えながら口を開いた［分かるかな、ジャック。彼女に目的があって、それを叶えたいとなると、俺もラヴレース様になるというわけだよ］。仮に私の兄が　…　たとえシングルトン船長が現れましても　…　さあ、お願いです　…　お頼みいたします　…　短気なことは堪えてくださいね　…　兄はやはり兄なのです　…　シングルトン船長は代理人に過ぎません」

「我が最愛の人よ」と、両の腕で彼女を抱き寄せながら、俺は言った［頼みごとがあるのなら、この程度の悪気のない無遠慮は許してくれなくちゃ困るぞ、と俺は思ったよ。それも、ラヴレース様がやることなのだからな］。「交渉の一部始終に立ち会っていただきましょう。ドーカス、その紳士に上がって来てもらうよう伝えるのだ」

「その前に、自分の部屋へ下がらせていただきますわ。この家に居りますのを知られたくないのです」

まったく魅力的な女だ。分かるだろう、ベルフォード。俺と離れるのを怖がっているのだよ。あゝ、可愛いらしい魔術だよ。時々不意を突かれてしまうことさえなければ、律義な男にしても、こんな魔術はどこで手に入るのか、しきりに知りたがることだろうな。

傍聴するために彼女は引きさがった。この一件は、俺の期待に全面的に応える結果とはならなかったわけだが、それでも、俺の活動の全体像を知ってもらおうとすれば、トムリンソン船長と俺との間で交わされた事柄について、細大漏らさず述べておく必要があるだろうな。

［乗馬服姿のトムリンソン船長、鞭を手に登場］

「失礼いたします。ラヴレース殿と拝察いたしますが」

「いかにも、ラヴレースですが」

「このような日に申し訳ない。こんな身形をお許しいただければ有難いですな。すぐにも街を出なくてはならんのですよ。日暮れには戻りたいもので」

「好い日ですよ。服装も詫びるには及びませんね」

「召使いを差し向けました際には、このような栄誉に与る時間が見つかるとは思いませんで　…　友人の願いを入れてのこの旅ですが、私のなし得ることといえば、精々貴方のお住まいを確かめ、また、貴方か奥方かいずれかとの面談を許していただける可能性はあるのか、それを確かめるくらいのものと考えていたのです」

「君自身の動機については、君が一番よくご存じでしょう。君に与えられた時間で何がお出来になるか、それもまた君が一番よく承知のことだ。それに、ご意向に沿うべくこの場にいるのですよ、私は」

［我が魅惑の君は、後になってだが、俺があまり無愛想にするので心配になったと告白していた。彼女の感じた気持ちとして文中に交えてあるものは、貴公にも容易に察しがつくだろうが、すべて後ほど知ったものだよ］

「無礼に当たる点はないものと存じますが。その気は一切ありませんので」

「ないですね。まったくありませんよ」

「お訪ねいたしました用件には、何の関心もないのです、私は。差し出がましい人間と映るかもしれませんね。そのように映りそうだと思いました時には、いかなる用向きなのか簡単に触れました上で、この件からは一切手を引く所存です」

「で、どのようなご用向きですかね」

「ひとつお尋ねさせていただきたいのですが、お腹立ちのなきよう願います。ハーローという名のある紳士と和解され、お立場に恥ずかしくない条件で協力関係を結ばれるお気持ちはございませんかね。願わくは、全面的和解への下準備として、ということですが」

「あゝ、本当に胸がどきどきいたしましたわ」　我が魅惑の君が叫んでいた。

「お答えいたしかねますな、私としては　…　［これを聞いて、彼女の胸がさらに激しく動悸を打ったのは疑いない］一族挙って、私に対しては、はなはだしく悪意に満ちたあしらい方なのです。私の人柄については、正当とは認められないほどに罵詈雑言を吐いておりますし、我が一族についても同じなのです。これはさらに許し難いことですよ」

「いやはや、これまでですな。立ち入った真似をお許しいただきたい」

［我が愛しの君は、その時点で今にもくずおれそうになった。そして、俺のほうが大いに悪いと思ったのだそうだ］

「だが、君の今回のお役目の当面の目的を伺いたいものですな。委託されてのこととお見受けするのだが」

「委託を受けての任務です。また、私の考えますところでは、当事者皆さんのご意向に沿うと思われるものです。さもなければ、私とて関わりを持つ気にはならなかったことでしょうね」

「もしかすると沿うかもしれませんよ、委細が分かれば。だが、それに先立って、一つ質問をさせていただこう。モーデン大佐はご存じですか」

「存じませんな。直接にとのことであれば、存じ上げません。ただ、親しくしておりますジョン・ハーロー氏がその方のことを話しておられるのは耳にしております。大層敬意のこもった話し振りですし、ある信託物件に関し、氏と共同管財人ということですね」

ラヴレース「私としてはありそうな話と考えたわけですが、つまり、もしかすると大佐が帰国しており、君は大佐の知り合いで、何か嬉しい驚きといったようなものが目論まれたのでは、ということですよ」

船　　長「モーデン大佐がイギリスに着いておられたなら、ジョン・ハーロー氏の知るところとなっていたことでしょうし、私の耳にも届かぬはずはなかったでしょうね」

ラヴレース「それはそうと、私宛にジョン・ハーロー氏から託されたことが何かおありなのですね」

船　　長「お伝えすべきことの一部始終を、出来るだけ掻い摘まんで申し上げることにいたします。しかし、その前に、私にも一つ質問を許していただきたいですね。好奇心からのことではないのですが、先へ進む前にお答えいただく必要があるのです。お聞きになれば、貴方もそう判断されるでしょうが　…　」

ラヴレース「で、ご質問とはいかなることでしょうかね」

船　　長「掻い摘まんで申しますと、貴方は実際に、正真正銘、クラリッサ・ハーロー嬢と結婚しておられるのか、ということです」

俺は驚いて見せたよ。そして、横柄な口調で、「君の引き受けた用件へ向かう前に答えを

もらわねばならない質問というのが、これなのですかね」と言ってやったのだ。

「悪意からではないのです、ラヴレース殿。ハーロー氏は、私を見込んで、この仕事を引き受けるよう頼まれたのです。私にも娘と姪がおりましてね。お役に立てる仕事と考えたのです。でなければ、私としても、結構大変な業務を多々抱えておりますゆえ、お引き受けはしなかったのです。世間のことは知っておりますので、遠慮なく言わせていただきたいのですが、もしもそのご令嬢が　…　」

「トムリンソン船長とおっしゃるのでしたね、確か」

「トムリンソンと申します」

「ならば、トムリンソン船長、その令嬢の名が出る時には、君の言う無遠慮のいかなるものといえど、心遣いのかぎりを尽くしていないものは聞き流してはもらえませんよ」

「最後までお聞きいただいた上で、そのご警告が必要となるような振舞いが私にあったと思われるのでしたら、ラヴレース殿、警告なさって当然だったということになりましょう。自分で言うのも何ですが、私、貞淑なる女性はいかにあるべきか、どんな男性にも負けないくらい弁えているつもりでしてね」

「これは、これは、トムリンソン船長、お腹立ちのご様子ですね。このようなことをして何か目論んでおられるのなら［「あゝ、体が震えて仕方ありませんでした」と、令嬢は言っていたが、後になって、われわれの会話のこの部分に心を留めた時のことだそうだ］、ここは特別な場所だということだけは言っておきましょう。現在は私の住まいであり、私についての問い合わせは行う価値があるとお考えの紳士ならば、だれでも歓迎される場所なのです。問い合わせの態度、あるいは、その目的が、どのようなものであってもです」

「このようなお言葉を引き出す振舞いがあったとは存じませんで　…　ここではお邪魔とあれば、他のどこへなりとお供をしても、一向に構いませんよ。掛け合う相手は激しやすい若紳士と聞いておりましたが、趣旨は弁えておりましたし、この任務が友好的なものと存じておりましたゆえ、その点はさほど案じていなかったのです。年齢なら、ラヴレース殿、おそらく貴方の倍にはなっておりましょう。だが、請け合っても構わないが、私の伝言なり態度なりが貴方には腹立たしいものだとおっしゃるのなら、そのどちらかを一日の間保留することも出来るのです。あるいは、お望みとあらば、永久にでも良い。それゆえ、明朝八時前ならいつでも結構ですので、追っての指示を賜りたいものです」　船長はこう言うと、自分の問い合わせ先を教えようとするのだ。

「トムリンソン船長、天晴なご返答ぶりですな」と、俺が言った。「私としては、気骨のある男性が好きでしてね。軍隊におられたのではありませんか」

「おりましたとも。だが、聖書にもあるとおり、〈剣を打ちかえて、鋤とし〉(五三)たというわけですよ。［気のきいたことをいう男だよ、ジャック。だれかさんには善人で通っていることだろう。間違いない。あゝ、聖書の文句というやつは、うまく用いられると、偽善者向けの立派な上着や外套になるのだ。信心家の目にはいつだってそう映るのさ。いとも簡単にたぶらかされるものなのだよ、善良な人間てのはな］　また、私の楽しみごとと申しますと」と、船長は言い添えていた。「ここ数年は、もっぱら父から譲り受けた土地を耕すことでしてね。私としても、ラヴレース殿、これまでもそうでしたが、今も変わらず勇敢な男は好きですよ。だが、ひとつ申し上げましょう。貴方も私と同じ年代を迎えられる頃には、そういう意見になられるのだろうが、若さゆえの怒りには、今考えておられるほ

どの本物の勇ましさはないということです」

まただよ、ベルフォード。切れる奴だ。我が魅惑の君の耳と心を、同時に虜にしてしまったのだ。彼女が言っている。「怒りの中にも分別を忘れない男性がおられるのは、結構なことですわ」とな。

「いや、船長、それでは非難のぶつけ合いだ。これでおあいこでしょう。そこで、君のお役目の趣旨をお聞かせいただければ有難いのですが」

「その前に一つ、先ほどの質問を繰り返させていただかねばなりませんね。本当に、正真正銘、クラリッサ・ハーロー嬢とは結ばれておられるのですかね。それとも、ご結婚はまだなのですかね」

「単刀直入ですな、船長。だが、イエスと答えた場合はどうなるのですかね」

「なに、その場合には、信義を重んじるお方だと申し上げましょう」

「君に言われずとも、そのつもりでいるのですがね、トムリンソン船長」

「この件に関して申すべき事柄はすべて、ごくごく率直にお話しいたしましょう。ジョン・ハーロー氏は、最近のことですが、貴方と氏の姪御さんが同宿しておられること、それが長期間に及んでいること、また、一週間前の夜、令嬢が貴方と劇を観に行かれたことを知ったのです。それで、氏としては、お二人が実際に結婚していてほしいものだと考えておられるのです。確かに、氏もそのようには聞いているのです。ただ、貴方の冒険好きな気質のことや、あちらの一族との姻戚関係を蔑視しておられる旨を公言してこられたのはご存じですから、氏といたしましても、姪御さんのために取ろうとしておられる処置に踏み切る前に、私の力を借り、貴方自身の口からご結婚の確認を得たがっておられるというわけです。こう申し上げて構わないでしょうが、露ほどでも疑念を残すようなご返答には、氏は満足されないということです」

「言わせてもらうが、トムリンソン船長、極めて卑劣な中傷ですな。いかなる人間にせよ、仮にも …… 」

「まあまあラヴレース殿、興奮なさらないことです。奥様のお身内は一族の名誉というものを後生大事にしておられるのです。皆さんも、貴方と同様、乗り越えねばならない偏見をお持ちなのだ。弱みをつけ込まれたということも …… それに、あの時点では、奥様に非はないわけで …… 」

「この淑女にはつけ込まれる弱みなどあるわけもない。また、仮にあったとしても、弱みにつけ込んだりする男とは、トムリンソン船長、一体どんな人間なのだ。妻をご存じなのですか、貴方は」

「拝見いたしましたのは一度きりでしてね。礼拝式でのことでした。またお目に掛かりましても、奥様とは分からないでしょうね」

「また会っても分からないですと …… 一度妻を目にした者で、千人の中からでも妻を見分けられない人間など、この世には一人としていないと思っておりましたがね」

「生まれてこのかた、あれ以上見事な女性を見たことはないと思ったのは覚えておりますよ。だが、ラヴレース殿、貴方もお認めくださるものと信じているのだが、奥様のお身内が貴方を不当に扱ったにせよ、そのほうが、貴方が奥様に害を及ぼすよりはましなのですよ。今一度、質問を繰り返しても構わないでしょうな」

［ドーカス、急ぎ足で登場］

「今すぐにとのことですが、旦那様とお話をしたいと、紳士がお一人お見えでございます」［奥様ですわ、と脇を向いてそっと言っていた］

愛しの君も、こんな可愛い嘘をドーカスにつかせることは出来るのに、俺にはつかせたくないというのかな。

「客間の一つに通ってもらうよう、その紳士に伝えるのだ。すぐに行く」

［ドーカス退場

愛しの君は、疑うべくもないが、船長からの急所への一撃にどう答えたら良いか、教えたかったのだよ。俺としてはどう応じたものか、心積もりは出来ていた。貴公も確信するとおりに、ずばりとだ。ところが、ドーカスの伝言で迷いが出てしまった。とはいえ、手練の太刀捌きの一つも披露しようと思っていたのだよ。つまり、船長の詮索を逆手に取って、結婚していることをこの男の前でも、階下の連中にしたのと同じように、彼女に認めさせようというわけだ。彼女がその気を起こしてくれたなら、そこで、伯父を納得させるためにも、礼状の一つも書くように促すのだよ。署名は、勿論、クラリッサ・ラヴレースとしてもらわねばならんだろうな。それゆえ、俺としては、信じてもらえるだろうが、彼女の突然の呼び出しに応じるのは気が進まなかったのだ。ただ、度を越して、彼女との間が取り返しのつかないことになってもまずいと思い、船長を例の質問から逸らすのが適当なことと考えた。船長自身のこと、ハーロー氏がわれわれの居場所を知るに至ったいきさつや、その他の詳細について、説明させようというのだ。こういった事柄が必ずや彼女の心を釘付けにすることは分かっていたし、それを耳にすれば、おそらく彼女としても、俺が与えるつもりでいた肯定的な返事を黙認する必要があることを得心するはずだと思ったのだ。それに、これは彼女自身のためなのだよ。何しろ、後になって彼女にも尋ねてみたのだが、仮に俺が彼女の一族と和解するとしても、俺にとってそれは何の意味も持たないわけだからな。俺としては、ジャック、永久に蔑まねばならない一族なのだよ。

「ご質問に対し、はっきりしない答え方をしているとお考えですね、船長。そのようにお考えかもしれない。そこで、ご承知いただかねばならないのは、私には相当なプライドがあるということ、そして、君は紳士であり、今回の件では、高潔な動機に動かされておられるようにお見受けするわけだが、さもなければ、かくも大切に思う淑女への私の信義心に疑いを掛けられたのでは、黙過するわけには行かないということです。だが、より核心に触れた返答をする前に、これからお尋ねする一つか二つの質問に、得心の行くお答えをいただきたいものですね」

「結構ですとも。お好きなことを、何なりとお尋ねいただきたい。誠実に、そして、虚心坦懐にお答えいたしましょう」

「ハーロー氏は、われわれが一緒に観劇していたこと、また、同じ下宿に住んでいることをお知りになったとのことでしたね。お教えいただきたいのだが、いかなる方法で氏はお知りになったのですかね。実を申しますと、色々と考えがありまして（私自身に関わることでないのは保証いたしますが）、心ならずも、われわれの住まいについては人に知られないようにしてきたのです。この秘密は実に厳しく守られておりましたから、ハウ嬢と我が最愛の妻は文通を続けているのですが、そのハウ嬢ですら、直接われわれのところへ届

けるにはどこ宛にしたら良いのか、ご存じないほどなのです」

「なに、貴方たちを劇場で見掛けた人物というのは、ジョン・ハーロー氏の小作人でしてね。貴方たちの行動の一部始終を見守っていたのです。劇がはねると、貴方の下宿まで馬車の後を追いました。そして、翌朝早く、日曜日でしたが、馬を駆って、目にしたことを地主に知らせたというわけです」

ラヴレース「事の成り行きというのは実に奇妙なものですな。だが、ハーロー家の連中でわれわれの居所を知っている者は他にいるのですか」

船　　長「ご家族の他の皆さんには絶対の秘密となっておりますし、秘密のままにしておくお考えなのです。また、ジョン・ハーロー氏が、姪御さんが実際に結婚しておられる場合、私を介して貴方との示談に入りたがっておられる点についてもです。おそらく氏のほうでは、結婚の件を保証出来るとしても、一部の人たちについて、望ましい和解をもたらすのに大変骨が折れそうなことは自覚しておられるのでしょうね」

「それは疑いのないところですね、船長。一族の愚挙の一切はジェームズ・ハーローが原因になっているのですよ。呆れた連中だ［と、勇ましくもったいぶった歩き方をしてみせた］。あんな男の思いのままになってしまうとはね。普段とはうって変わった騒々しいはしゃぎぶりを見せているが、あれは才気からではない。悪意ゆえのことですよ。だが、どれくらい経つのですか、ジョン・ハーロー氏がそのように和解を求めるお気持ちになってからは」

「お話しいたしましょう、ラヴレース殿。それに、きっかけにつきましてもね。その点につきまして、また、私のことや、この手で果たすべく引き受けました任務に関し、お知りになる必要のある事柄一切につきましても、包み隠さずお話しいたします。と申しますのは、私の話を最後までお聞き下さった暁には、今こうしてご挨拶に伺いましたのも、差し出がましさから出たことではないのだと、納得いただけるものと考えるからです」

「心して拝聴いたしますよ、トムリンソン船長」

［我が愛しの君も同じ気持ちだったことは疑いない］

船　　長「ご承知いただかねばならないのですが、私、ジョン・ハーロー氏のお近くに住まいましてから、まだ月日は浅いのです。ノーサンプトンシャーから越してきたのですが、一部には、避けられずに携わることとなった二件の遺言執行人としての仕事（このために、頻繁にロンドンに出てまいりますし、今回の用向きの一つにはそれもあるのですが）のうちの一件を、より円滑に処理するためですし、また一部には、最近たまたま私のものとなりました、放置されていた農場に住み込むためです。ただ、それ以前からの知り合いというわけではありませんし、ローンボウリングの競技場から始まったお付き合いではありますが［伯父のジョンは大のボウリング好きなのだよ、ベルフォード］（一人残らず満足の行くよう、私が得点を決めた際のことでしたが、紳士全員から裁定の求めが私にありまして、芳しからぬ結果を招きかねないところだったのです）、お互い心からの敬意を抱いているということでは、血を分けた兄弟でも敵わぬほどなのです。貴方もご存じでしょうが、ラヴレース殿、気が合うとでも申しますか、そういう人間がおりましてね、意気投合いたしますと、他の人間、それも、嫌悪の目を向けているわけではない相手との間に長い年月を要して出来上がります絆よりもさらに強い絆が、二、三時間のうちに結ばれるものなのです」

ラヴレース「まさにおっしゃるとおりですよ、船長」

船　　長「互いに認めるこの友情があればこそでしょうな。はっきりと覚えておりますが、十五日の月曜日、ハーロー氏のほうから言い出されまして、拙宅までご同行いただいたのです。拙宅に落ち着きますと、氏は皆さんを大変な不安に陥れることとなった例の不幸な出来事につき、その一部始終を語ってくれました。私の場合、それまでは世間の噂で耳にしていたにすぎません。親しい間柄ではありましたが、あれだけ気に掛けておられる事柄だけに、氏のほうから切り出されるまでは、口にするのを控えていたのです。そして、氏がおっしゃるには、氏自身と姪御さんとが和解するだけではなく、姪御さんのため全面的な和解を進めてくれるよう、二、三日前、名も挙げておられましたが(ア)、ある紳士からの働き掛けがあったというのです。

義理の妹さんのハーロー夫人にも同じような働き掛けがあったことを氏は話してくれましたが、だれもが尊敬している立派な女性からのもので、その女性が暗に仄めかしていたところでは、姪御さんは、励ましとなるような言葉が得られるなら、今一度お身内の人たちの保護に身を委ね、貴方の元を去るつもりだが、その言葉が得られないようなら、貴方との結婚は到底避けられないものと考えている、というのです。

ご迷惑ではないでしょうね、ラヴレース殿。気掛かりなご様子だし、溜め息をついておられる」

「続けていただきましょう、トムリンソン船長。さあ、その続きを」　そして、俺はさらに深く溜め息をついて見せた。

船　　長「つい先頃家をお捨てになる際の相手だというのに、その男性との結婚を女性のほうから辞退するというのは極めて異常なことだと、皆さんは一人残らずそのように考えたのです」

「あゝ、船長　…　お願いだ、トムリンソンさん。この話はそれまでにしてほしい。我が最愛の妻は天使なのです。どれ一つを取っても、責められるようなところはない。どんな間違いがあったにせよ、そのすべては、連中と私とに帰すべきものなのです。その先さらにお話しになるとすれば、あの執念深い一族が彼女の働き掛けを拒んだということでしょう。連中は断ったのですよ。彼女と私の間に誤解があったということもある。例の、愛するがゆえの仲違い(五四)というやつですよ、船長。それからというもの、前にもまして幸せにやっているのです、われわれは」

船　　長「それは結構ですな。だが、ジョン・ハーロー氏としては、その後、再考を加えずにはいられなくなったのです。それで、どう行動したものか、私の助言を求められたというわけです。この姪御さんを愛しているということでは、娘を愛するどんな父親の気持ちにも負けないそうでして、事実、令嬢のことは、娘代わりの姪とかねがね呼び習わしていたとのことでした。令嬢が兄上と姉上からつれない扱いを受けておられたのは事実だとのお言葉でした。それに、貴方との縁組は、氏のお身内にとっても決して不名誉になるものではなく、貴方たちが実際に結婚なさっていることに確信が持てるなら、関係者一同の和解のために骨身を惜しむつもりはない、とも言っておられるのです」

ラヴレース「で、船長、どのような助言をなさったのですか、君は」

(ア)　ハウ嬢の手紙（四十二頁と五十七頁）を参照のこと。

船　　長「私の意見として、次のように述べました。もしも、姪御さんが不当な扱いを受け、悲痛な思いをしておられるのなら（ご自分に働き掛けがあったことからして、氏はその点を懸念しておられるのです）、間もなく重ねて連絡があるでしょう。だが、この働き掛けは、成功の見込みなどは考えずに、皆さんの同意なしに結婚するに当たって、ただ自分自身への言い訳としてなされたとも考えられます、とお話ししたのです。と言いますのも、氏が教えてくれたのですが、その働き掛けは直接に姪御さん自身からではなく、お友達のお嬢さんからあったとのことですし、そのお嬢さんというのが、ご家族からは好ましく思われておらず、それゆえ、成功を期待していたのなら、およそ雇われるはずのない人物だということでした。それで、なおさらそのように考えた次第なのです」

ラヴレース「結構でしょう、トムリンソン船長。先を願います」

船　　長「そのまま話は沙汰やみとなっていたのですが、先週の日曜日のこと、ジョン・ハーロー氏が、劇場で貴方と奥様（そうなっておられるものと考えますが）とを目に留め、間違いなくお二人とも同じ下宿に住んでおられると知らせた、例の男を伴って訪ねて来られました。そして、あの働き掛けはごく最近なされたものであり、だとすれば、その時点で貴方たちはまだ結婚なさっていないことになるというわけで、氏が姪御さんの操のことをあまりに心配なさるものですから、私も、だれか信頼の出来る人間を急ぎ都に送り、然るべき調査をさせるよう助言させてもらったのです」

ラヴレース「ご尤もですね、船長。で、その手の使い走りのために、その種の人物がだれか伯父上に雇われたのでしょうか」

船　　長「信頼の置ける、そして、思慮分別のある人物が早速送り出されました。そして、この前の火曜日のことだったと思いますが（水曜日にはわれわれのところへ戻って来ましたから）、先ず隣近所の人たちに問い合わせてみたのです［われわれをことごとくひどい不安に陥れることとなった、例の問い合わせのことだよ、ジャック］(ア)。だが、いささかでも満足の行く説明をしてくれる者が一人としていないものですから、奥様の侍女に当たってみましたところ、お二人は実際に結婚されていると言明したのです。ただ、問い合わせをした人間が自分の雇主のことを明かすのは控えたものですから、女の子のほうでも、式を挙げた日時とか、その他の詳細について教えるのを拒んだというわけです」

ラヴレース「すべてに亘って、実に明快なご説明ですよ、トムリンソン船長。さあ、続けていただきましょう」

船　　長「その紳士が戻りました。報告を受けたハーロー氏としては、やはり疑いが晴れませんし、極めて重要な点でもありますから、何らかの根拠に基づいた行動を取りたいと考え、この問題を引き受けるよう、私に懇願なさったのです（仕事のこともあり、私は頻繁に上京しておりますからね）。〈なあ、トムリンソン君、君には子供があるし、世間のことにも通じている。私の目指すところはお分かりのはずだ。思慮と勇気をもって事に当たってくれるのは間違いない。君の意に適うようなら、どんなことであれ、私も納得することにしよう〉と、氏はこんなことまで言ってくれたのです」

［ドーカス、大急ぎで再登場］

(ア) 百七十四頁を参照のこと。

「旦那様、あのお方が待ち兼ねておられます」
「すぐに伺う」
それから船長は、われわれはここにいると考えて当然な根拠がありながら、自ら訪れなかった理由を説明した。
彼に言わせるとこうだ。ロンドンから数マイル離れたところに大切な用件があり、昨日中に赴かねばならないものと考えていた。その小旅行を今日まで延期せざるを得なくなったし、われわれが在宅しているのは知っており、再びこのような機会に巡り合えるかどうかも分からず、出発前に運を試してみたくなった。そんなわけで、見たとおりの、乗馬靴に拍車を着けた格好でやってきた次第だ、というのだ。
彼はこの家の住人たちを持ち上げるような台詞をそれとなく漏らしていた。しかし、その言い方は巧みなものであり、彼の見るところ、まことに上品な振舞いを見せているわけだから、連中について身上調査の必要性を感じているなどと思わせるような余地は一切与えない口振りだったのだよ。
ここで一言、私見を述べさせてもらうが、我が愛しの君は階下の連中に関して、たとえその人柄に疑いを抱いていたとしても、また一つ有利な状況を手にしたことになるというわけだ。火曜日にこの近所で尋ね回った、伯父に遣わされて来た男からは何の報告もなかったからだよ。
船　　長「ところで、私の任務に関しましては、すべての点でご満足いただけたものと思いますので、こちらの質問を繰り返させていただきますが、お許しいただけるでしょうね。つまり　…　」

［ドーカス、息を切らして再び登場］

「旦那様、あのお方が旦那様のところへ伺おうとの仰せです」「奥様が苛立っておられますわ。旦那様が手間取るのを不思議がっておられますと、脇に寄っての小声の台詞だ」
「ちょっと失礼いたしますよ、船長」
「私も時間ぎりぎりまでお邪魔いたしました、ラヴレース殿。私の質問と貴方のお答えからいかなる結果が生じるにせよ、それには時間を要することでしょう。また、貴方にはご用事もある。明朝、帰宅の途につく前にお伺いして構いませんかね」
「それならば、船長、朝食をご一緒願いましょう」
「お言葉に甘えるといたしましても、早くなりますよ。明晩には帰宅しなければならんのです。さもないと、最高の妻に悲しい思いをさせてしまいますからな。それに、途中で二、三箇所立ち寄る所もあるのです」
「七時ということで宜しいですかね、船長。われわれは早起きでしてね。それから、これは言っておきましょう。常日頃からハーロー家の者たちのことはそう思っていたのですが、仮にもあのように執念深い一族と和解に至るとすれば、それには、君のように冷静で穏やかな紳士に執り成していただかねばならんということですよ」
こうして二人は、どちらの側でも礼を尽くし、別れたという次第だ。ただ、これだけの好人物に内心満足してもらうためにも、直接的に言明したわけではないが、われわれが夫婦となっていることに疑念の残らないようにはしておいた。

手紙　四十九
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

日曜日　夜

このトムリンソン船長はこの世でも最も立派な人間の一人であり、かつ、最も幸せな人間の一人というわけだ。奴と同じくらいに我が愛しの君から高く買ってもらえるなら、何だってくれてやるぞ。だがな、俺だって奴に劣らない善人さ。自前の話を披露して、同じだけ信用してもらえるのならな。ただ、奴などは、訪ねてきた用件のことで顔を合わせる前に、くたばっていたほうが良かったくらいなのだよ。もしも、面談に託した俺の主たる目的は叶えられそうにないと考えたのであればな。その目的の何たるかについては、先の手紙でそれとなく触れておいたはずだ。

だが、我が麗しの君の慌ただしい伝言がきっかけとなったわけだが、彼女と俺との間で行われた協議の委細に移ることにする。俺としては、話し合いに入るのは億劫だったのだよ。入る前から、彼女のほうが半ば勝利を手にしているわけだからな。

出入り口のところまで降りて船長を見送ると、俺は食堂へ戻った。そして、我が愛しの君が入って来たので、楽しげな表情を浮かべてみせたよ。「あゝ、最愛の人、お慶び申し上げます。まさに願いどおりの見通しですね」　こう言うと、やにわに彼女の手を取り、その手にキスの雨を降らせたのだ。

なおも続けようとすると、それを遮り、彼女がこう言うのだ。「お分かりですね、ラヴレースさん。ひねくれた事ばかりなさるから、ご自分でもまごつくようなことになってしまうのですわ。率直で飾りのない質問にまっすぐな答えを返すことがお出来にならなかったでしょう。見通しが開けたと祝ってくださいましたけれど、幸せのすべてはそのお答え次第ですのにね」

「二人が結婚していることを公表しようとする、私の用心深い、否、敢えて思いやりのあると申しておきますが、そんな動機につきましては、最愛の君よ、貴女もお分かりのはずでしょう。ご承知のとおり、そこにつけ込むような真似はしておりませんし、また、不都合な結果を招いていないこともご存じのはずです。伯父上は、ただ、われわれ自身の口からそのとおりだと保証してもらいたいだけでしょう　…　」

「この点につきましては、もうこれ以上一言も触れないでいただきますわ、ラヴレースさん。こんな事実無根のお話を黙認するような真似をするくらいでしたら、深く想いを寄せていることですけれど、その和解を危うくいたしましても、いいえ、駄目にしてしまいましても構わないつもりですわ」

「我が最愛の人よ。私にどんな姿を装ってほしいと　…　」

「ありのままの姿を見せていただきたいのです。私は伯父のお友達に、また、伯父に対しましても、ありのままの姿を見せることに決めたのです」

「一週間で良いのだ、愛しい人よ。だめでしょうかね、一週間でも　…　せめて、贈与財産の証書が　…　」

「自ら納得ずくでということでしたら、一時間でも嫌ですわ。階下の人たちに実際とは違う姿を装ってきまして、どれほど苦しい思いを味わっているのか、貴方にはお分かりにならないのです。でも、偽りの姿を故意に信じ込ませたなどと、伯父に咎め立ての余地を

与えたくはございませんし、自らを責めねばならないようなこともしたくないのです」

「明日の朝、船長にはどう話せとおっしゃるのですか。私の言い方からして、船長のほうでは　…　」

「それじゃあ、間違いを正して上げるのですね、ラヴレースさん。本当のことをお教えするのです。お身内の方々からの私へのご厚意につきましては、お好きな点をお話ししてくださいい。贈与財産について考えておられるところをお知らせするのです。そして、証書が作成されましたなら、あの人に目を通してもらい、承認をいただくようになされば、貴方がどれほど真剣なのか、あの人にお示しすることになるでしょう」

「あゝ、愛しい人よ。彼が不満を唱えるとお考えなのですか、私の申し出た条件に」

「いいえ」

「私に敵意を抱く者たちの足で踏みにじられるのに唯々諾々と甘んじるくらいなら、呪われたほうがマシですよ」

「じゃあ、私もこの世の幸せは決して望みませんわ、ラヴレースさん。伯父のハーローに対しまして、故意で計画的な嘘を真実みたいに繕ってみせるのに甘んじなければいけないのでしたらね。身内の者全員の拒絶に会い、あまりにも長く苦悩の日々を重ねてまいりましたから、もう今では、正直さという掛け替えのないものが代価になるというのでしたら、身内との和解も求める気持ちにはなれないのです」

「階下のご婦人たちは　…　」

「私にとりまして、階下のご婦人たちにどのような意味があるというのでしょう。あの人たちと長いお付き合いをする気はないのです。身内の者たちと貴方や私との間のことを何もかも知る必要が、あの人たちにあるというのでしょうか」

「私にとりましても、あの婦人たちは何の意味もないのです、マダム。ただ、兄上の企みに伴って起こっていたかもしれない、生命にも関わる危害を防ぐために、われわれは結婚しているものとあの人たちに思わせてあるわけですから、貴女ご自身がそれほどショッキングだとお考えになる姿を、あの人たちに見せたくはないのです。われわれの結婚については、あれだけ事細かに説明してあるのです。誓って申し上げますが、マダム、そんな不様な自己撞着を晒すくらいなら、いっそ死んだほうがマシというものですよ、私は」

「あの人たちがどうお考えになろうと、構いませんわ。貴方がお話しになった点を黙認してしまいましたのは、私の間違いでした。一つの虚偽のせいで話すことになったと、ご自分でも認めておられるその様々な委細こそ、この場合、私がお断りすることの正当な理由にもなるのです」

「お分かりいただけないのですか、マダム。伯父上が知りたがっておられるのは、二人が結婚していることなのですよ。内輪に式を済ませるわけにはまいりませんかね、伯父上の仲立ちが得られます前に」

「この問題はそれ以上主張なさらないでいただきますわ、ラヴレースさん。貴方のほうから実際のところをお話しくださらないのでしたら、明日の朝（トムリンソン船長にお会いしましたら）、私が自分でお話しいたします。本当にそうするつもりです」

「階下の人たちにはこれまでどおり事を進めるという点は、ご同意いただけるでしょうか、マダム。このトムリンソン氏の仲立ちも無に終わるかもしれないのです。兄上の計画が進められることになるかもしれません。貴女が正当な保護の下にあるのではないという

ことは、これで兄上にも（おそらく伯父上から）分かるでしょうから、なおさらです。少なくとも、この家では以前どおりにやって行くことに同意していただけますね」

「これを認めますのは、間違いを続けて行くことですわ、ラヴレースさん。でも、そうする根拠は（貴方のお考えでは、虚偽を是認する根拠があり得るというのでしたらね）すぐに失せてしまうものと私は思いますので、その点につきましては、さほど争う気持ちはございません。ただ、避けられるものでしたら、新たな間違いを犯すようなことはしたくないのです」

「ご自分のご家族との和解に向け、貴女が躊躇なくお取りになるとばかり考えておりました手段なのです。私がそこに何か卑劣な目論見を込めるようなことがあると、貴女はお考えなのでしょうか、マダム。貴女がその手段をお取りになれるよう望みましたのは、ご承知のとおり、私自身のためではないのです。貴女のご家族とはついに和解に至ることがないといたしましても、私にとりましては何らの意味もないことですからね。皆さんからのご厚意は必要としていないのですよ、私は」

「不快とは申せない私たちの現在の状況からいたしまして、ラヴレースさん、そのようなご質問にお答えする必要はないものと存じます。それに、一言申し上げさせていただきたいのですが、明日の朝、真相そのものをお話しいただくだけではなく、貴方が取ってこられました、そして、今も取っておられる手段につきまして、伯父が私への好意的な気持ちを持ち続けられますような、そんな説明を伯父のお友達に与えてくださいますと、私の見通しはさらに好ましいものに思われるだろうということです。これは、お好きなだけ内証事として進められて構いません。トムリンソン船長は分別のあるお方ですし、一族の平安を支援しようとしておられる人であることは、貴方にもお分かりでしょう。それに、味方にもなっていただけるかもしれないのです」

救済の手はないことが分かった。あのハーロー一族の頑固一徹さが彼女の心の中ですっかりのさばっているのだ。小癪な魔女だよ、まったく。小癪な … 彼女への悪態を許し給え、愛の女神よ。そこで俺は、勿体ぶってこう言ったのだ。「私たちの間では、これまであまりにも多くの誤解がありましたから、マダム、私としても新たな誤解は望まないのです。お言葉には無条件で従うことにいたしましょう。もう一つの方法ならご希望に沿えるものと考えておりましたが（とりわけ、伯父上のご意向から何らかの効果がもたらされます前に、式は済んでいるかもしれませんし、その結果として、嘘を通すこともないわけですからね）、でなければ、あのようなことを申し出たりはしなかったのです。だが、今回は私の判断よりも優っていたからといって、無条件で喜んでいられるとはお考えにならないことですね、愛しい人よ」

こう言うと、俺は両の腕に彼女を抱き締め、その背けた頬に（あの魅惑の唇が目当てだったのだが）熱烈なキスを浴びせかけた。そして、「この甘美なる特権を大目に見てくださることが［と、頭を下げながら］、その条件ですがね」と言ってやったのだ。

彼女のほうでも、致命的なまでに機嫌を損ねることはなかったのだ。もうそろそろ、残りの仕上げに入らねばなるまい。出来るだけ上手くな。ただ、これは言っておこう。彼女に一本取られたからといって、彼女への愛が減じることはなかったのだが、貴公が口にしがちな「復讐」への思いを、これまで以上に煽ったということだよ。ただし、より適切な言葉としては、「勝利」ないしは「征服」だろうな。

こういった用心深い美女の一人を征服するというのは、確かに楽しいことだ。だが、誓って言うが、ベルフォード、われわれのような性向の男というのは、律義者になるのに必要な苦労のその二十倍も骨折って、悪党になろうとするものなのだよ。そして、額に汗して大きな犠牲を払い、頭を絞りながら（敢えて冒す危険の数々は言うまでもない）、ようやく獲物を手にするのだ。それゆえ、成功を収めた際には、渋々認めてもらうようなことでは困るのだよ。特にわれわれの場合には、目的を達してしまうとすぐに飽きが来て、成功の証として示すに足るものなどはほとんど、あるいは、何一つとして、残ってはいないのだからな。だが、実際には、これはこの世の楽しみごとすべてについて言えることかもしれないのだよ。どうだ、俺にしては真面目な感想ではないかな。

最後のところまで書き上げたかったのだよ。主たる目的を達成するわけには行かなかったが、トムリンソン船長の使い走りから、何か俺に有利な事柄を生み出すことになるだろう。ただ、この点は注意しておこう。俺の方策を部分だけで判断するような、自惚れた真似をしてはいけないということだ。全体に目を通すまでは辛抱するのだよ。だが、もう一度誓っておこう。ノリスとやらに出し抜かれたりはしないということだ。初心者の二人などにはな。それでも、大いに気掛かりになることもあるのだよ。密輸業者を利用したハウ嬢の計画の、その結果のことがな。

策に走ったからといって、良心の咎めを受けることはないと思うのだ。これだけの娘二人にしてもいろいろと策を弄するわけだから、正当化されることなのだよ。そのうちの一人は（より優れた方だ）、彼女自身も是認していることと思うが、俺が常日頃から手本にしようと企てていた娘なのだからな。

ところが、ジャック、俺に確信を抱かせるもの、俺の心を金剛石の箱で覆ってしまうものがあるのだ。ハウ嬢の手紙で分かるのだが、花と輝く我が麗しの君に対し、俺がこれ以上の前進を出来ずにいるのは、あの女のせいなのだということだ。彼女は俺を愛しているのだよ。トコン剤を用いた趣向からも、愛してくれていることは確信しているのだ。愛のあるところには、信頼があるはずだ。あるいは、信用すべき根拠を得たいという気持ちがあるはずだ。俺には心の寛さがあるという思い込みに基づいた寛大さが、彼女の心を捉えているのだよ。今こそ分かるのではないのかな（仮に彼女と結ばれるとして、いかなる試練も企てずにいたのでは、俺は永久に不幸な思いをするに違いないのだからな）。彼女の愛を、そして、やっと呼び起こされたばかりの信頼感を、どう受け止めたら良いのかということがだよ。思いを遂げることになれば、それは俺の誉れとなるのではないのかな。もしも思いを遂げられない場合には、彼女の誉れとなり、女性の誇りともなるのではないのかな。だとすれば、どちらの側にとっても、試してみたところでどこに害を及ぼすことになるというのだ。それに、何度も言ってきたことだが、俺は好きな時に彼女に報いてやることが出来るのではないのかな。結婚によってだよ。

夜も更けた。というよりは、明け方だ。夜が明け始めているのだよ。やたらに眠い。そんなことは話すまでもなかったかもしれないな。だが、この椅子で仮眠を取るだけにしておく。一時間ほどな。その後、身体を揺すり、顔を洗ってシャキッとするさ。これだけの体質に恵まれ、この若さなのだ。それで事足りるのだよ。

おやすみを言ってくれ。目が覚めたら真っ昼間なんてことはあるまい。あ～うぉ～。一体何て欠伸だ。

叔父貴はまだ亡くなっていないのか。

こちらの叔父は一体どうしたというのだ。この前の手紙に返事もない。またぞろ、「諸国民の叡智」とやらを漁っているのだろうな、おそらく。あ～あ～と、また欠伸だ。ペンなどはどこかへ失せてしまえ。

手紙　五十

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月二十九日　月曜日

今や俺は、我が魅惑の君の心の中に永久不変の地位を確立したのだ。

船長は約束どおり七時に、旅仕度を整えてやって来た。われわれの最初の会話が一段落するまで、我が愛しの君は話に加わろうとしなかった。人妻となっていることが伯父に報告された後でもあり、俺の告白によって生娘の立場に後戻りすることになる、そんな話し合いのあの部分に居合わせるのは、察するに、恥ずかしかったのだろうな。それでも、手引きに従い、会話の一部始終を耳にしたのだよ。

慎み深いことこの上ない女でも頭は使うはずだ。それも、時によっては、深謀遠慮を用いるに違いない。人前ではあんなにも愛らしく顔を染めて見せる術を心得ているが、一人きりの時には、果たして同じことで顔を赤らめたりするのだろうかな。そういうことがないとすれば、そして、赤面は上品さや慎み深さを装う素振りだというのなら、女というものは涙を思いのままに駆使すると言われているが、同じように、顔を染めるのも思いのままなのではないのかな。この点をつき詰めてみれば、かなりのところまで女の心に迫ることが出来るだろうと思うのだよ。俺に追及する気があればの話だがね。

彼の問いに対し、俺は先手を打ちたい旨を船長に伝えた。そこで俺は（少しでもジェームズ・ハーローの有利に働くことがないよう、極秘扱いにすることを頼み、船長自身は勿論、ハーロー氏についてもその保証を得た上でだが）真相のすべてを、つまり、われわれは結婚していないことを包み隠さず、はっきりと認めたのだ。また、結婚を引き延ばすこととなった数々の原因についても、遠回しに触れておいた。その一部は不幸な誤解から来ているのだが、主として、結婚に先立ち、身内との和解を遂げておきたいという令嬢の願望、そして、他に例を見ないほど濃やかな心遣いによるものだ、といったことにだよ。

この令嬢よりも几帳面さの点で劣る婦人たちならば、ジャック、こういった場合には延期、それも、故意による計画的なものということになるが、その延期の原因を自分たちのせいにされるのを喜ぶものだ。ただ、連中の慎みの装いが品位に欠けているのだな。何しろ、そんな態度を取るというのは、結婚によって一番有利な立場になるのを期待しているのだということを、そして、延期の件を自慢話にするのは克己心があるからなのだということを、無言のうちに告白していることになるのではないのかな。

階下の連中に対してわれわれは結婚していることにしてある、その理由を船長に話してやった。ただ、いわゆる〈床入り〉は差し控えようと誓いを立てており、そのため、一方は自制の極みという状態であるし、もう一方は油断なく作法を守ることに徹しているものだから、婚約している恋人同士なら何のためらいもなく許し合う、あの無邪気で屈託のな

い振舞いさえも慎んでいるのだ、とも話してやった。

その後、俺が申し出ている贈与財産証書の写し、書面による彼女の回答の要旨、婚礼の際には彼女の父親代わりになってくれるよう、俺がM卿に送った招待状の中身、また、卿からの心温まる返信の内容などを船長に見せてやった。ただ、卿の病のため、日取りの延びる恐れがあるし、我が愛しの君のほうでは、是非とも内輪の式にしたいということでもあり（子の務めを果たせなかった点を考えてのことだが）、卿の来席を遠慮させていただく旨の手紙を出し、今か今かと返事を待ち侘びているところである、といったことも話しておいた。

贈与財産証書は現にウィリアムズ弁護士の手で作成中であるが、この弁護士の名声についてはお聞き及びのはずだ、と俺は話した。

船長も耳にしている、とのことだった。

それに、これが事実かどうかについては、ロンドンを出る前に確かめることも出来るだろう、と言うのだ。

この証書が作成され、是認された上で正式文書となれば、その上欠けていることといえば、署名と目出度い日取りの指定のみである、と俺は話した。また、次のようにも断言しておいたのだ。これほど愛しく思う者に対しては、俺自らの意思によって、また、俺がこれ以上ないほどの侮辱を数々受けてきた当の一族の仲立ちなどによらず、出来るかぎりの償いを行うことに誇りを感じているということ。そして、現在われわれが置かれている状況は以上のとおりであるから、ジョン・ハーロー氏が、実際にわれわれの結婚式が執り行なわれるまで、和解への意向を見合わせるとしても不満はない、ということをだよ。

俺の話すことすべてについて、船長は大いに満足していた。ただ、われわれが実際に結婚していることを聞き大変嬉しく思うと、親友のハーロー氏がそんなことを口にしていただけに、正直なところ、そのとおりであってほしかった、というのだ。とはいえ、万事うまく収まることになるのは疑いない、とも言っていた。

挙式は済んでいるのだと、階下の婦人たちに［連中のことは立派な人たちだと思っていると、もう一度言っていたが］信じ込ませようとする理由は分かるし、また、賛成でもある、と船長は言っていた。令嬢の下女がハーロー氏の友人に語った話も、それで実によく説明がつくから、というのだ。ジェームズ・ハーロー氏が不和を未解決のままにしているのは、確かに、それなりの目的があってのことであるし、俺の手から妹さんを奪い取る計画を立てていたのも、それに劣らず確かなことだ、とも言っていた。だからこそ、少なくとも、氏が一隊を組織して行動に踏み切るまでの間、この取決めごとを秘密にしておくのは、俺にとってと同様、尊敬すべき友人にとっても重要な意味を持つことなのだ、と言うのだよ。悪意や激情に駆られると、ものごとをひどく歪めてしまうものだ。まことに平和的で名誉を重んじた考え方の出来る男性に対して、そして、俺のように、今回の一件では終始一貫、見事に怒りをおさえてみせた男性に対し、あれほどまでに激しい敵意をぶつけられるとは驚くばかりだ、とのことだった。実際、どの一例を取っても、策略や陰謀を好む気持ちが入り込んで来ない場合には（船長のことだから、大目に見よう）、寛大さこそが俺の人柄の一部をなすものだ、とも言っていた。

船長はさらに言葉を続けようとしていたのだが、朝食の用意も整い、我が心の女王様のお出ましとなった。後光でも差すかのように、周りのものすべてを輝かせ、その表情は仁

愛と慈悲深さとを湛えている。生まれつき備わったものとはいえ、長いことあの顔からは消えてしまっていたのだよ。

船長は、ひれ伏さんばかりに深々とお辞儀をしていた。あゝ、船長を称えようとして麗しの君が浮かべた笑顔の、何と素晴らしかったことか … 敬いの気持ちというのは次々に伝わるものだな。人間は、人真似をするという点では、自分が思っている以上に猿に近いのだよ。いわば思わず知らずなのだが、俺も片膝を曲げ、「我が最愛の人よ」と切り出しながら、船長の紹介に見事な演説をやってのける始末だった。彼女の唇や頬に口付けする資格は俺にすらないのだから、船長もそこまでは試みなかったのだが、それで穏当というものだ。実を言えば、船長は今にも彼女を拝まんばかりで、その美しい手に触れるだけでも精一杯だったのだよ。

「船長にお話ししたところです、愛しい人よ」と呼び掛けると、俺は船長に語った一部始終を（彼女は聞いていなかったものと考えているみたいに）手短に繰り返したのだ。

船長のほうでは、これほどの天使をほんの一瞬でも不愉快に思う人間がいるとは、と驚いていた。彼女のために一肌脱いでくれることになったのだが、船長自身、それを最高に誇らしいことと考える、ということだった。

是非とも言っておかねばならんが、かつてなかったことだよ。あの天使があれほど天使らしく見えたのはな。どこまでも落ち着き払い、穏やかに笑みを湛えて、自信に溢れているのだ。いつも以上に愛らしい紅潮した顔が、もって生まれた優雅さを一層引き立て、あの見事な肌に眩いばかりの魅力を添えているのだ。

腰を下ろした後、あの楽しい話題が改めて取り上げられることとなった。チョコレートをいただきながらだよ。伯父の寵愛を取り戻すことになれば、彼女としてはどんなに幸せなことだろうか、とのことだった。

船長はその点について請け合っていた。これ以上、彼女のほうで日取りを延ばすことのないように願う、とのことだった。ともかく、あのお目出度い日が無事に過ぎれば、万事はうまく収まるはずだというのだよ。ただ、自分の親友、つまり、彼女の伯父に見せるためなのだが、俺の申し出と彼女の回答それぞれの写しを要求するのは不適切なことだろうか、というのだ。

「ラヴレースさんのお気に召すままで結構ですわ」という返答だった。あゝ、いつもそんなふうに言ってもらいたいものだよ、愛しの君にはな。

じゃあ、極秘扱いにしなければなりませんね、と俺は言った。ただ、伯父上には、作成され次第の話だが、贈与財産の草稿をお見せするほうが良いのではないだろうか、とも言っておいた。

「ご親切ですわね、ラヴレースさん。そうしていただけますかしら」

ご覧のとおりだ、ベルフォード。われわれも以前は『喧嘩っ早い恋人たち』[五五]だったわけだが、今じゃあ、『愛想良しの恋人たち』というわけだよ。

「勿論ですとも、最愛の人、それがお望みでしたらね。それと、ハーロー氏が絶対に秘密にしてくれることを、トムリンソン船長から請け合ってもらえるならです。私にはずいぶんひどい仕打ちを加えてきた一族のことです。他のだれであれ、その者たちに揚げ足を取られたり、抑え込まれたりなどしたくはないですからね」

「まあ、本当に、大層ご親切ですこと」

俺の顔もこれでパッと輝いたとは思わないかな、ジャック。

俺は彼女の手を求め、片方の手を（まず、唇を当てて清めた後）差し伸べた。忝いことに、彼女も手を差し出してくれたのだよ。その手をこの唇へ押し当てながら、「お分かりいただけないでしょうね、トムリンソン船長（と、勿体ぶって）、嵐が過ぎ去れば、どれほどの幸せ者に　…　」と言いかけた。

「素敵なカップルですな」と、両手を差し上げたままだ」。私の友人もどれほどお喜びのことか。あゝ、この場にいてくれましたらな。伯父上のハーロー氏にとっては、今なお貴女がどれほど大切な人なのか、貴女にもお分かりではないのですよ、マダム」

「伯父に背いてしまいましたこと、惨めな思いをしておりますわ」

だが、度を過ごすことはありません、麗しき人よ、と俺は胸の内で叫んでいた。

船長は、お役に立ちたいと、改めて決意のほどを繰り返していた。そして、その物腰が実に感じの良いものであったため、愛しの君のほうでも、船長は勿論、船長の身内だれもが、同じくらい善意に溢れた友人にいつも恵まれるよう願っていると言っていた。

「お身内のどなたもが」と、彼女は口にしたが、というのも、船長のほうから次のような話が持ち出されていたからなのだよ。船長には五人の子供がいるが、妻としても母としても最高の一人と言えるような女性との間に恵まれたものであり、この女性の見事な切り盛りの腕前によって、自分の年八百ポンドの収入が（自慢に出来るものとしては、それきりなのだが）あたかも二千ポンドでもあるかのように、幸せな日々を送らせてもらっている、というのだ。

「倹約の心がなければ」と、予言者みたいな口調で令嬢のご託宣があった。「どのような地所も十分に広いとは申せません。倹約が行われますなら、どんなに小さな土地でも狭すぎることはございませんわ」というのだ。

「じっとしろ、うるさい奴め。じっとしているのだ　…　」　自分の良心に語り掛けていただけだよ、ジャック。

「さて、お尋ねいたしますが、ラヴレース殿」と、船長の問いだ。「疑いがあるからというわけではありません。しっかりとした足場に立って事を進めたいからですが、全面的な和解に向け、貴方には私の親友と協力なさるお気持ちがおありでしょうか」

「ひとつ言わせてもらいましょう、トムリンソンさん。心の広さということでは、高く買うわけに行かないあの一族なのですが、その一族と私が快く和解しようというのは、あくまでも、この天使のような女性を重んじるがゆえなのだという点をはっきりさせてもらえるのでしたら、お求めのありましたとおりに、ジョン・ハーロー氏と協力もいたしましょうし、そればかりか、父親のほうのジェームズ・ハーロー氏とその奥方に会うため、はるばる出向くことにもいたします。さらには、息子のジェームズ・ハーローとその妹のアラベラとをすっかり安心させるためにも、私は愛しの君の祖父殿が彼女に遺贈くださったものだけに甘んじ、あの三兄弟の地所のいずれについても、生死に関わらず、今後一切の権利を放棄することにいたします。と申しますのも、私自身の暮らし向きや将来の見通しは大いに満足して然るべきものですし、また、財産の力すべてをも凌駕するような美点に恵まれた女性と結ばれるのですから、たとえ一シリングの持参金すらないとしても、十分に報われたと考えて当然なのです」　これは福音にも劣らない真実なのだよ、ベルフォード。一体、どうしてなのだ、このような場面に事実の裏付がなかったというのは。

愛しの君は、感謝の言葉が口をついて出るより先に、その気持ちを両の目に浮かべてみせてくれた。そして、「あゝ、ラヴレースさん、測り知れないほどに貴方は　…　」とだけ言うと、口ごもってしまったのだ。

船長はしきりと俺を褒めそやしていた。本当に心を打たれたのだな。

あゝ、この恋情にこんなにも復讐心やプライドが紛れ込んでいなければ、と俺は思ったよ。だが（いつもどおりの言い訳だな）、彼女への償いなら、いつだって出来るのではないのかな。彼女の美徳は今、その試練の真っ直中にあるのではないのか。逆らおうとはしない我がローズバッドの身内の者たちのように、彼女が反抗的な考えを一切捨ててくれたなら　…　俺の慈悲心にすべてを委ね、俺には信義を守った生活が出来るのかどうか、ほんの二週間、それを試してくれたなら　…　その時はどうだと言うのだ。その時はどうなるのか、言い兼ねるのだな、この俺には。

無定見な男だと軽蔑しないでほしいのだよ、ジャック。手紙にしても、おそらくどの二通をとってみても、同じ考えで書かれているものはないだろうからな。われわれのような性格の人間に一貫性を期待する者などいるはずもない。ところが、俺は恋に狂っているのだよ。復讐心に煽られ、己自身の趣向に面食らっている有り様なのだ。発明工夫の才が災いの元だな。高慢の鼻をへし折られたというところだ。同時に五つか六つの方向へ引っ張られて、果たして俺に負けないほど不幸な思いが出来るのかな、彼女には。あゝ、何故なのだ。どうしてなのだ。彼女がかくも神々しいまでに天晴だったのは。だが、今もそうだと、一体どうしたら分かるのだ、この俺に。一体どのようなものだったというのだ、彼女の試練というのは。たったの一度でも勇を振るったことはあったのかな、彼女の体を狙った試みでだよ。心を苛むことなら、千もやってきたわけだがね。これ以上俺の意に逆らっては恐ろしいことになると、彼女が怖じ気づくほどにだ。

∴　　∴

反省の気持ちなど追い払わなくちゃならんな。さもないと、俺もこれまでということになってしまう。二時間前から自分自身に愛想が尽きていたのだよ。この頭が考え出した数々の企みのことでな。しかも、今までに述べてきた件からだけではないのだ。この先さらに話して聞かせることがあるのだよ。だが、もう一度、心を鋼に変えたところだ。何よりもまず、復讐心が心を占めている。ハウ嬢の辛辣な言葉のいくつかを、もう一度読み直してみたというわけだ。二人揃って俺を馬鹿にしているが、それが耐えられんのだよ。

我が愛しの君が白状していたが、父親の屋敷を抜け出してからでは「この点には触れるまでもなかっただろうに」、一番楽しい朝食だったというのだよ。船長のほうでも、必ずお役に立つ覚悟ですと、先に明言していた点をそっくり繰り返していた。そして、われわれのことに関しては、喜ばしい状況に至っていると伝えるが、親友がその報告をどのように受け止めるか、また、快く約束した草稿を俺が届けたらすぐにも、贈与財産をどのように考えているのかについて、一筆認めるつもりだと言っていた。こうして、われわれは互いに敬意のこもった言葉をしきりと交わし合いながら別れたわけだが、我が愛しの君は、船長の思いやり溢れる仲立ちが上首尾に終わるようにと、何度か願を掛けていた。

船長を階下へ見送り、表の玄関口まで付き添ってから戻ると、食堂へ入って行く俺を愛

しの君が出迎えてくれた。その愛らしい顔立ちの一つ一つが満足感に満ちているのだ。

「お分かりでしょう。私はもう別の人間ですわ」と、彼女が言っていた。「望みを寄せてまいりましたこの和解が、私にとりましてどんなに掛け替えのないものなのか、ご存じいただけないのですわ、ラヴレースさん。不愉快な思い出は、一つ残らず払い捨ててしまいたい気持ちです。どれほどの恩義を施してくださったことになるのか、貴方はお分かりでないのです。それに、あゝ、ラヴレースさん、何もかもを押しつぶしてしまいます父の呪いの重荷からこの心が解き放されました時には、どんなにか幸せなことでしょうね。私の大好きな母が「私の大好きな母の素晴らしさにつきましては、その半分もお分かりにならないのですわ、貴方には。それに、自らの衝動に従うよう任されました時の母は、どれほど思いやりに溢れた心を示してくれることでしょう。この清らかな母が」もう一度、その優しい胸に私を抱き締めてくれるのです。再びおじたちやおばたち、兄と姉に恵まれるのです。哀れな除け者に対しまして … もうその時には除け者じゃありませんが … 優しさや親切を一番多く示すのはだれなのかと、皆で競い合うのです。そして、ラヴレースさん、このすべてを貴方にはご覧いただきますし、また、私にとりましてはこれほど大切な一族に迎え入れられることになるのです。それも、歓迎の気持ちを込めてですわ。最初のうちは少々冷やかなところがあるといたしましても、それが何でしょうか。皆のほうでも、貴方のことをもっとよく知り、もっと頻繁に顔を合わせておりますと、愛想を尽かすような原因が改めて生じないかぎりは、それに、きっと貴方も新たな生き方を始めておられるでしょうから、両方の側ですべてに亘りまして、いよいよ愛着を強めることとなりますから、どうして貴方と衝突するようなことになったのかと、だれもがきっと不思議がることでしょうね」というのだよ。

そして彼女は、しばらく口を閉ざした後、ハンカチで涙を拭っていたのだが、突然、俺には見せるつもりのなかった喜びの表情なのに、嬉しさのあまり露にしてしまっていることに気が付いた、とでもいうふうに、大慌てで自室に引き下がって行ったのだ。後に残された俺も、これには平気でいられなかったよ、彼女自身と同じくらいにな。

要するに、俺としては … どれほど心を動かされたのか … それを言い表す言葉が見つからない有り様なのだ。以前には、鼻の奥をヒクヒクさせられたことがあったよ。目が潤んでしまったことも以前にはあるのだ。魂を揺するこの美女のお陰でな。だが、こうまで強く心を打たれたというのは、これまで一度としてなかったことだ。何しろ、感じ易い心を抑えようと努めてみたのだが、そんな気持ちが手に負えないほど強くて、この俺が咽び泣いてしまったのだ。そうなのだよ。嘘ではない。泣き声を漏らしてしまったものだから、彼女があの感動的な言葉を最後まで言い終わるのも待たず、彼女から顔を背けずにはいられなかったほどなのだ。

奇妙な気分になったことを打ち明けたわけだが、多分、説明してやりたい気分なのだろうな。まことにもって不思議な経験だった。どうしてなのかは分からないのだが、何かで喉を、いわば締めつけられるような感じなのだ。ただ、これは是非言っておかねばなるまい。思い返すと恥じ入る次第ではあるのだが、何か極めて好ましいものがそこにはあったということだよ。そして、もう一度味わうことが出来るものなら、と願っている。それが一体何なのか、もっと完全に把握し、もっと上手に貴公に説明出来たらと思うからだ。

だが、こんな折に、彼女の喜びがこれほどの効果をもたらすことからして、例の美徳と

は［他にどんな呼び方があるというのだ］一体いかなるものなのか、高く買う気になってしまうのだよ。あれだけ敏感に感動することの出来る心の中にありながら、憎からず思っている男からの求愛の一つ一つに対して、花なら盛りという時期にある、あれほど魅力的な娘を霜か雪のように冷淡無情にしてしまうのだからな。このすべては教育にも由来しているはずだと思うのだが、そうではないのかな、ベルフォード。教育というのは、女の心に対して、天性以上に強い力を及ぼすことが出来るものなのだろうか。そんなはずはないと思うのだよ。だが、仮にもそういうことがあるとしたら、両親が自分の娘たちの心を啓発したり、男に対しては慎みを守って距離を保つという考えを吹き込んだりするのは、そして、実際、女性のことは高く買うよう教え込んでいるのは、まったくもって正しいことだと言わねばなるまい。何しろ、ひとつ言わせてもらうが、美徳が、太陽のように、借り物ではない自らの光輝によって光り輝くのではない場合には、プライドというやつが実に立派な代役を果たしてくれるものだからだよ。

手紙　五十一
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

さて、そろそろ打ち明けても良い頃だな（ただ、俺の解説よりも先に、貴公の推測のほうが出来上がっているのは分かっているのだ）。我が魅惑の君の大のお気に入りで、不和を修復したり、紛争を調停したりすることにかくも大きな喜びを見出しているこのトムリンソン船長というのは、別に大物でもなければ小物でもなく、あの律義者のパトリック・マクドナルドその者に他ならず、自分で見つけて来た、どこかの屋敷をお払い箱になった男を従者にしていたというわけなのだよ。

貴公も承知のことだろうが、奴は実にいろいろなことをやってきた悪党で、生まれからしても受けた教育の点でも、もっと上等なことを期待されていた男なのだ。だが、身の破滅を招くことになった原因というのは、ダブリン大学を追い出されるに至った、例の巧妙極まる偽造の才であり、また、後になって、偽証が露見したということもあるのだ。こういったことのために、奴は次々と国を追われ、挙げ句の果てに辿り着いた暮らしぶりからすれば、ハウ嬢の言っていた、禁制品に囲まれたタウンゼンド夫人の夫にぴったりということになるわけだよ。貴公も承知のとおり、奴は抜け目のなさとしかつめらしさが必要な企てには、どんなことであれ、まさしく適任という男なのだ。それに、密輸商人の対抗馬として密輸商を一人準備しておくわけだが、結局のところ、それ以上に公正な処置など果たして有り得るのだろうか、ということだな。

「ところで、ラヴレース、敢えてこんな策を弄する気になったのは何故なのだ（と、貴公は尋ねることだろうな）。すでに話してくれたことだが、令嬢はこの伯父貴のところに一ヶ月ほど続けて滞在する習わしだったのだから、どう見たって、トムリンソン船長などという人物、少なくとも、この男が言い張るほどに伯父貴と親しくしている、そんな名前の人物は、近所中探してもいないことは分かるはずだろう」

これはまことにもって当然至極の異議だよ、ジャック。だから、俺のほうでも、伯父上がこの紳士について口にするのを間違いなく耳にしているはずだと、我が魅惑の君に向か

って言わずにはいられなかったほどなのだよ。いいえ、一度も聞いたことはございませんわ、と彼女が言っていた。それに、伯父のジョン・ハーローのところは十ヶ月近く訪れていないないし[彼女が前にもこう言っていたのを聞いているのだ]、同じ球技場を利用している者で、彼女には面識のない紳士が数人はいる、というのだ。

われわれはだれだって、自分に都合の好いことはすぐにも信じたがるものだよな。で、そんなにも長いこと、彼女がこの伯父のところへ行かずにいた理由は何だと思うかな。他でもない。女性に対する慎みのない振舞いの点で、俺に釈明を求める資格が自分にはあるのだと、この老いぼれ罪人は勝手にそう思っているわけだが、どうやら、自分のところの家政婦と近頃親密な間柄になっているらしいのだよ。そんなわけで、この女の態度が大きくなっているのだ。人をたぶらかす忌々しい連中だよ、女というのはな。若い時にも中年になっても、あるいは、老いさらばえても、女はわれわれを一人残らずたぶらかすものなのだよ。

だが、貴公には察しがつかないかな。この家政婦は、実行に移されようとしている和解の約束については一切知らないし、また、知ってはならないことになっているのだ。それゆえなのだよ、いつも伯父のほうが船長を訪ね、船長が伯父の屋敷へ赴かないのはな。俺の推測ということで、令嬢にはこんな具合に話しておいたのだよ。こうすれば、まず船長のほうに当たって見ようというのが、自然な提案になるわけだ。船長は一族の他の者たちとは面識がないのだからな。これらすべてが意味するところについてだが、貴公に語り聞かせておく必要はあるのだろうか。

ただ、年寄りどものこの火遊びだが、私生活に関わることでもあり、事の真相については、我が愛しの君も認めたがらず、表向きは信じていないような振りをしている。愚かな兄貴のお粗末な色事のいくつかについても同じ態度だが、これらについては、非難へのお返しのつもりもあって、仄めかしておいたのだ。奴らの中にいる通報者の名は出さずにおいたけれどな。

「ところで」と、貴公はまた尋ねるだろうな。「トムリンソンという人物について、ハウ嬢が問い合わせをするということは考えられないかな。そして、彼女にも……」

貴公の言わんとするところは分かっている。ただ、疑いはないと思うのだ。親切にウィルソンが、この先一週間、俺が頼めばの話だが、コリンズの手で奴の家へ届けられる手紙はどれでも、直接俺に手渡してくれるはずなのだよ。さあ、これで貴公も納得してくれるだろうな。

短い物語を紹介して、結びに代えよう。

隣り合った二つの国の殿様同士が戦をしていた。何か他愛のない一件をめぐってなのだが、それが何であったかは触れずに置こう。何しろ、殿様や子供というのは、実に些細な事で仲違いをするものだからな。両軍が戦闘隊形を整えてから数日が経っており、それぞれの宮廷では、今にも決戦の報が届くものと思われていた。ついに衝突があり、血みどろの戦闘となった。その様子を見物していた一人の男が、指名されていた使者よりも少し前に一方の殿様の国の都に到着し、完勝の報せをもたらすと、一斉に鐘が打ち鳴らされ、大きな篝火は焚かれるし、灯火も点された。そして、人々は喜びと美酒に酔いしれ、床に就いたのだ。ところが、翌日、すべてが逆転した。勝ち誇る敵の軍隊が優勢に乗じて、ほぼ無防備になっている都の城門へ今にも侵攻して来るものと思われているのだ。そこで、最

初の報告者の行方が尋ねられ、見つけ出された。そして、問い質されると、こう主張したのだよ。つまり、このような惨澹たる状況の中で、同胞の市民が苦しみ悩む時間からその一部をもらい、偽りの吉報を受けてから実際の悲報に接するまでの時間がそうであったように、それを浮き浮きとしたお祭り気分に変えたという点では、大いに功績を認められて然るべきだ、とな。

さあ、ベルフォード、俺の場合に当てはめてみることだな。すぐにも自分のものになるはずだと、我が愛しの君がそのように考えていたものよりもさらに大きな喜びを、俺は彼女に与えたのだということ … これは確かな話なのだ。それに、人間の一生は市松模様の細工だという旨い言い回しがあるが、彼女のように思慮分別に恵まれた人間のことだから、最善を尽くした生き方をしてくれるのは疑いない。災いに出会えば、それに見合うだけの福を探し出して、出来るだけ釣り合いが取れるようにしてくれるはずなのだよ。

《令嬢は三通の手紙を認め、そのそれぞれにおいて、先のラヴレース氏の手紙に含まれる最も重要な文面と会話のいくつかにつき、友人に通知しているのである。あの遠回しになされた問い合わせによって引き起こされた懸念の後、トムリンソンを名乗る男の用向きについて語る彼女の言葉は以下のとおりである》

やっとの思いで、といったところですが、この疑念と不安のすべてが雲散霧消いたしました。そして、その代わりに、明るい見通しが開けてきたのです。と申しますのは、嬉しいことに（でも、今のところは絶対の秘密にしておかねばなりません。理由は後程お話しいたします）、例の紳士はジョン伯父様から遣わされていたことが判明したのです「伯父が私のことでいつまでも立腹なさるわけはないと考えておりましたもの」。すべては、貴女の素敵なヒックマンさんと伯父との間にございました話し合いから出たことなのです。ヒックマンさんからの働き掛けは、あの時には、あまりにも乱暴な形で断られてしまったわけですが、伯父といたしましては、お話の件や、私のためにあの立派な紳士が用いられました論拠につきまして、後になって考え直さずにはいられなかったのです。

道理に適った要求を認めてもらおうとしております時に、感情的な激しい反発を受けたからといって、諦めてしまうような人はいるでしょうか。だれでも穏やかに、また、腰を低くして、怒りに燃える相手の心に好印象を残そうと努めるのではありませんか。その怒りに燃える心にいたしましても、冷静に振り返って考えるようになりますと、遜った考え方をしてみようかと、そんな気持ちも起こすかもしれないのです。何度も申し上げてまいりましたけれど、ご恩顧をお願いいたしますのと、それを当然の権利として請求いたしますのとでは、まったく別の話になるのです。それに、恩義として請い求めておりますものにつきまして、それを要求する権利などない場合でしたら、請願している人にいたしましても、撥ねつけられたことに腹を立てる権利などどこにあるというのでしょう。

《令嬢は、朝食に訪れた際のトムリンソン船長を、真面目な好人物として描くのである。また、別の箇所では、極めて謹厳な品の良い男性で、外見も好ましく、五十歳は越えているはずとし、「お会いした途端に好感を抱きました」と述べるのである。

令嬢の言では、自らの見通しが今では以前よりも好転しているとのことであり、これまで幾度となく約束のあったラヴレース氏の改心の望みも、予想していた以上に根拠のあることであってほしいと願っている。そして、次のように語るのである》

ラヴレースさんのお人柄のある部分とその他の部分、つまり、あの人の良いところと悪いところとの調和を図ろうといたしまして、私たち二人とも、これまでひどく面食らっておりましたわね。特に、良いところといたしましては、小作人たちへの寛大さや、旅籠の主人の娘に与えたお手当てのこと、そして、立派なノートン夫人やその他の人々に親切を施すよう、私に働き掛けました際の、あの滞りなく気持ちの良い態度、などです。

あの人の心の中は、本人にもお話ししていることなのですが、奇妙な混ぜ物になっているのです。と申しますのも、確かに、あの人は（私に対するこれまでの接し方の、二十にも上ります実際例を振り返って申し上げられることなのですが）薄情な人なのです。正直申しまして、あの人に好感を抱くような動機を私に与えるくらいなら、私が涙にくれているのを見たほうがましだと、あの人はそんなふうに考えているのではないかと思いましたことも一度だけではございません。

従兄弟のモーデンが申しますには、道楽者は悔いることがないとのことです(ア)。物の道理からいたしましても、そうであって当然なのでしょうね。

ラヴレースさんは誇りの高い人です。その点は、私たち二人とも、ずっと前から気づいておりましたわね。私が本当に恐れておりますのは、あの人の気前の良さそのものが、情け深い心を特徴づけますあの博愛の精神（そう呼んでおきましょうね）よりも、むしろプライドや虚栄心から来ているのではないかということなのです。

自分のプライドを支え、独立を維持する手段としてでなければ、お金に拘るような人ではありません。それに、そんなふうに考えることがよくあるのですが、どなたにいたしましても、二番手を占める欲求は容易に捨て去ることが出来るものなのです。そうすることで、一番強い欲求を助長するとか、満たすとかが出来ます場合にはね。

あの人の教育にはどこか間違ったところがあったに違いないと、そんなふうに私は考えております。生まれつきの性癖に対しまして、十分には注意が向けられなかったように思うのです。善を行うよう、また、慈善を施すよう、おそらく教えは受けたのでしょうが（あの人は大きな力を握ることになりそうでしたからね）、でも、正しい動機に基づいてそのような振舞いをすることは教えられていないらしいのです。

もしも、そのように教えられていたのでしたら、あの人の気前の良さも、誇らしく思うだけに止まったりせず、人をいたわる気持ちにまで溶け込んでいたことでしょうし、そうなれば、思い出したみたいに、称賛に値する事柄を時折行うことで満足するとか、信賞必罰の教義に頼るかのように、善行によって悪行の償いにしようと望んだりはせずに(イ)、一貫して高貴な心を保ち、善そのもののために善行に邁進していたことでしょう。

(ア) 二十二頁を参照のこと。なお、ラヴレース氏自らが、氏の手紙の様々な箇所で、女性の涙を目にすることの楽しさを告白している点にも留意されたい。

(イ) ここで令嬢は氏を正しく見極めていることになるが、その点に関しては、第一巻の百七十七頁から百七十八頁にかけてをご覧いただきたい。そこでは、ローズバッドへの寛大な処置の動機について述べた

あゝ、何という籤を引いてしまったのでしょうね、私は。プライドの高さがこの困った男性の美点で、復讐心がもう一つの際立った特質だというのですからね。でも、こんな慰めが一つ残っております。あの人も無神論者ではございません。不信心者ではないということです。もしもあの人が無神論者だったといたしますと、夢を託せるようなところは一切なかったことでしょう。むしろ（あのように創意工夫の才が豊かなのを得意がっているのですから）、骨の髄まで堕落し切って救いようもない人間、未開人のような男になっていたことでしょうね。

《心を動かされることになったと、ラヴレース氏自身が談話の中で認めている例の出来事を語る段になると、令嬢は次のように胸の内を表明するのである》

あの人は、前にも一度そのようなことがございましたが、感情を隠そうとして骨を折っておりました。それにいたしましても、一体どうしてなのでしょうね。こういった男の人たちというのは（と申しますのも、この点でラヴレースさんが特異だということではございませんので）、感じ易い心の持ち主であることを示す素敵な証ですのに、そんな姿を晒すわけには行かないと考えるのですからね。もしも、選んだり拒んだりすることがもう一度私に許されるのでしたら、適切な折に感動していることをはっきり表に出すような、そんな力を抑えつけようとしたり、わざわざ否定して見せたりするような男性は、残忍な心の持ち主として、あるいは、人間性の第一の誇りともいうべきものを知らないばかりに、野蛮な無神経さを自慢にしている人間ということで、軽蔑の念を込めて撥ねつけようと思うのです。

次に掲げますのは、テート氏によって翻訳されましたユウェナリスの詩行ですが、私にはしばしば喜びの元となっておりましたものなのです。

同情は人間独自のもののらしく
われわれに涙を授けた時からの、造化の女神のお墨付き。

後、「極悪非道の振舞いをした時はいつも、償いとして何かしら善行を施すというのが俺のやり方になっている。そして、この点では相当な借りがあるようにも思うので、ジョニーの叔母の百ポンドに、もう百ポンド加えてやろうと思うのだよ。あの無邪気なカップルを幸せにしてやりたいのだ」と、氏は語っているのである。このような動機と合わせ、第二巻の手紙二十五、二十六、二十七、二十八にも見られるとおり、氏の優しさを示すこととなるあの一例において、氏としては実現すべきさらなる目的を持っていたのである。なお、第二巻の百十七頁に付した注記も参照されたい。

氏の行動が、今や明瞭なことであるが、初期の手紙の中で触れていた氏の見解や主義と首尾一貫していることを例証するためにも、第一巻の三十四番目及び三十五番目に掲載した氏の手紙に読者諸兄の注意を向けるのも的はずれなことではあるまい。

また、ラヴレース氏に対しクラリッサが抱いていた当初の見解については、第一巻の百四十五頁から百四十八頁にかけてと二百五頁から二百八頁にかけても参照いただきたい。氏は令嬢の冷淡さやよそよそしさを繰り返し責めているが、それが何に由来するのか、その説明が用意されており、これは氏に名誉をもたらすというよりも、むしろ令嬢の誉れとなるようなものなのである。

濃やかな情を備える証にと、われわれは
これらの証拠を示すのみ。泣くのはわれらが生得の力にして、
憐れみを湛えた表情、また、涙に潤む目をもって示すのだ、
悩み苦しむ友への思いがどれほどまでに深いかを。
他人の不幸の一切を平気で見過ごすことが出来るのは
人間の姿かたちを装った畜生くらいが関の山（五六）。

この家の人たちにつきましては、私も厳しい見方をしたことが時々ありましたが、トムリンソン船長のような立派な方から、問い合わせをなさった上で、好意的な言葉がございましたのは、私といたしましても、喜ばしいことと申さずにはおられません。

ここでちょっと筆を置くことにいたしますが、貴女からの温かいお祝いの言葉をお受けするためなのだと、そんな空想をいたしております。

次に筆を執ります時には、現在の状況を追認するばかりでなく、さらに望ましい見通しにつきましてもお知らせしたいものと考えております。それまでは、どうかご確信をいただきとうございます。貴女との友情から得ておりますものに匹敵するような、そんな喜びをもって眺めますほどの幸運は、おそらく、私の身には何一つ起こり得ないだろうということをです。

あの立派なヒックマンさんには、今回ご親切にも仲立ちの労を取っていただき、大層お世話になりましたが、大好きなハウさん、あの人への謝辞をもちまして本状の結びとさせていただきます。

変わることなき親愛の情と謝意とを込めまして、貴女の

CL. ハーロー

手紙　五十二
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

五月三十日　火曜日

M卿の手紙を受け取ったところだ。結婚するつもりでいるのなら、それこそ願ったり叶ったりの文面だよ。だが、状況が状況だけに、我が愛しの君に見せるなど、とても考えられないことだ。

結婚式で令嬢の父親役を演じることが出来なくなるという点を卿は残念がっている。また、俺の挙げた理由にも尤もらしいところはあるが、依然として何か悪事を企んでいるのだろうと、卿は懸念している模様だよ。

俺が好きな時に結婚出来る立場にあるという点では、有難いことに、卿も同意してくれていて、俺の従姉妹のどちらかを、あるいは、両方を差し向けようとの申し出だ。我が花嫁を助け、その時に臨んでは、彼女の心の支えとなるためにとのことだが、卿の理解するところでは、俺と共に冒険に乗り出すことに関しては、彼女は大変な不安を抱いているのだから、というのだよ。

卿の話では、終身年金としてだが、年一千ポンドを俺に支払うための証書を作成するよう、プリチャードに最終的な指示を与えてあるとのことで、令嬢本人が結婚のことを認め次第、それを実行に移すつもりでいるというのだ。

寡婦給与を俺自身の地所から用意することに関しては、卿も同意している。

卿としては、例の手形を令嬢に受け取ってもらいたかったそうで、俺がその旨を申し出たことについては褒めてくれている。ただ、俺自身も受け取らなかったわけで、そのプライドの高さは非難しているのだ。卿に言わせると、「右の手放すものが左の利益となることもある」というわけだ。

娘たちのことだよ、卿の念頭にあるのは。左寄りの娘たち（五七）のことなのさ。

大いに結構じゃないか。俺としては、我がクラリッサさえこの手に入れば、他のことなど一切糞くらえだね。

他にも山ほど筆にしているのだよ、この馬鹿殿様は。半ダースほど線を引いている場所が何箇所かあるが、他でもない、その数だけ古い諺のカビ臭い言葉を持ち出そうとの理由からなのは明らかだな。

俺が書き送ったような手紙に対し、卿からの返事がないことを我が愛しの君は妙に思うだろうし、もしも返事をもらっていることを認めると、俺の手紙の時と同様、見せてくれるよう彼女は期待するはずであり、その辺をどう切り抜けるつもりなのだ、と貴公が尋ねる場合には、こんなふうに答えておこう。つまり、プリチャードの口から知らせてもらうことだって出来るというわけだよ。卿が右手に痛風の発作を起こしているということ、そして、俺のところに赴いて、財産譲与に関して特に指示を仰ぐよう、卿がプリチャードに命じたということをだよ。それに、貴公も知ってのとおり、キングズアームズ亭であれどこであれ、一時間も前に知らせてやれば、俺の好きな場所でプリチャードと落ち合うことが出来るのだよ。たとえ、奴がM邸にいて、俺はロンドンにいようともだ。また、卿の手紙の内容に関しても、奴は口頭で俺に知らせてくれることが出来るのだ。我が魅惑の君が知っておく必要のある事柄すべてについてな。

老いぼれ貴族の右手を元に戻してやるくらい、俺の都合次第で、いつだって出来ることなのだ。そして、今回送って寄越したこの手紙よりもはるかに分別のある手紙を書いてもらうことも可能なのさ。

貴公も承知のはずだが、署名を模写してみせるその巧みさというのは、俺が最初に身につけた嗜みの一つだったのだ。こういった際によく言われてきたのは、もしも財産帰属の区別という点に関して悪質な男であったなら、俺は生きていられては困る人間になっていただろう、ということだったのだ。女については、騙すのは何の罪にもならないというのがわれわれの考えさ。それに、そもそも人間の幸せというものはすべからく、巧みに騙されるところにある（五八）と、われわれは教えられているのではないのかな。

五月三十一日　水曜日

万事ますますうまい具合に進んでいる。まことにもって光栄な扱いを受けることとなったのだ。乗合馬車の代わりにチャリオットを用いるのを許してくれたのだが、主題の中の主題ともいうべき話に夢中になっても構わないということなのだろう。

今回の快適な遠出の際の会話は、もっぱら将来の二人の暮らしぶりのことになった。式

の日取りのことも、恥じらいを込めながら約束してくれたよ。俺からの矢の催促に返って来た言葉は、「速やかに」というものだった。楽しい話題の一部としては、供回りのついた馬車、使用人、お仕着せのことなどが取り上げられた。家族の情報を俺に漏らしていた破廉恥漢は（律義者のジョゼフ・リーマンのことだ）われわれの奉公人に加えてもらいたくないという希望、そして、健康回復の如何に関わらず、あの忠実なハンナを呼び寄せるつもりだとの決意が表明され、両方とも二つ返事で承諾を得ることとなった。

セントポールへ一緒に行った際の、熱心に聞き入る俺の態度を見てのことだが(ア)、礼拝式にはしばしば同伴してほしいという願いが、それとなく彼女のほうから持ち出されたので、これも二つ返事で請け合っておいた。聖職者一同のことは日頃から敬ってきたし、その中の何人かについては（彼女のリーウェン師がその一人だが）、特に強い敬意の念を抱いていることを保証しておいた。そして［貴公にも以前話したことだが］(イ)、たとえ教会詣でが信心深さから出た行為ではない場合であっても、週に一度、金持ちと貧乏人とが同じ場所で、いわば仲間同志として一堂に会し、男も女も晴れ着に身を包んで、自分たちをお造りくださった神を崇めている姿に接するのは、まことにもって気持ちの良い眺めだと思う、と言っておいた。また、広く教育を受けた人間にとっては、そういった厳粛な場で熱弁を振るったり、学識豊かな者の演説に耳を傾けたりするのも（ごく普通に考えられている形での礼拝式の主要な部分とはとても言えないが）、苦痛になるようなことは決してないはずだ。その学問は自分のものとは傾向を異にしているわけで、いつも何か耳新しいことを口にするに違いないのだから、とも言ったのだよ。

彼女は首を振り、「耳新しい」という言葉を繰り返していたが、ただ、今のところはこの返答で満足しておこうと、そんな気持ちでいるような顔付きだった。間違いないぞ、ジャック。俺を改心させようとの思いから、彼女は悪魔の大王に途方もない無礼を働くつもりなのだ。だから、大王のほうで彼女を止めようと骨を折ったり、仕返しをしようとしたりしても不思議はないということだよ。だが、どういうわけでこういうことになってしまったのかな。いつだって自分に背くことになってしまうのだ。いずれそのうち、今まさに取り掛かっていることを思い出して、自分を憎むようになるのではないかと思うのだよ。だが、その時まではこのままでいなくてはなるまい。われわれはすべからく、後悔するようなことを何かしないではいられないものなのさ。

和解の見通しのことが詳しく話し合われた。伯父のジョン・ハーローがそのための道を用意してくれさえすれば、そして、もしも和解が実現されるようなことになれば、彼女は幸せだというのだ。今ではその可能性も出てきたということで、「幸せ」という言葉も溜め息交じりに語っていた。

彼女には堪え切れなくなっているのだよ、ジャック。

俺のほうでは、二人が遠出に出掛ける直前にプリチャードから通知があったこと、そして、俺の指示を受けるため、M卿に遣わされてあの男が明日には上京する予定であることを話して聞かせた。俺に対する卿のご厚意を有難く思っているし、セアラ夫人、ベティ夫人、それに、モンタギューの二人の従姉妹が彼女に尊敬の念を抱いていることを嬉しく思うということ、さらには、俺の先の手紙に対し、痛風のために自らの手で返事を書けなか

(ア) 第三巻の二百四十五頁から次頁にかけてを参照のこと。(イ) 同巻、二百四十四頁から次頁にかけて。

った点を卿が気に掛けていることも話しておいた。

彼女は卿のことを気の毒がってくれた。気の毒なフレッチヴィル夫人にも同情していたが、親切にも夫人の容体を尋ねてくれたのだよ。憐れみを掛けてもらいたがっているような者に対しては、愛しの君はだれかれなく同情を寄せていた。自分の見通しが明るいものだから、周りに目を向けるゆとりが出来て、だれもが同じように幸せになってほしいと願っているわけなのだよ。

フレッチヴィル夫人にとってはひどく辛い話になりそうだな。自慢にしていたあの顔がすっかり台なしになってしまうのだよ。「ただ、このように大きな災いとはいえ、夫人にも得るところはあるでしょうね」と、俺も一言述べずにはいられなかったのだ。「つまり、重い病というものは軽い病などは飲み込んでしまうのが常ですから、今回の件で夫人の味わう悲しみも、もう一方の悲しみを和らげ、堪えやすいものにしてくれるかもしれないというわけです」とだよ。

それだけ大きな不幸をこのように軽々しく扱うということで、穏やかにではあるが、お叱りを受けたよ。「美貌を損なうことなどは、大切な夫を失うことに比べますなら、どれほどのことがあるのでしょうね」とだよ。何という素晴らしい女なのだろうな。

ハウ嬢の母親が和解してくれそうだという希望（そして、その希望に基づいた喜び）についても触れられていた。「立派な」ハウ夫人というのが彼女の言い方だったが、ひどく欲の皮が張っているし、非情なまでの強欲さだから、「立派な」などと呼ぶ者は他にはだれ一人としていない女なのだよ。ところが、この愛すべき女には実に情の濃やかなところがあって、尊敬する相手と関わりのあるものなら、どんなにつまらない動物でも愛玩することが出来るほどなのだ。M卿が言うのを耳にしたことがあるが、「我を愛さば、我が犬をも愛せよ」というやつだな。いずれそのうち、俺への敬意の表れとして、彼女が貴公に好意を抱くよう仕向けてしまうことになるかもしれないな、ジャック。

それにしても、一体何をやっているのだろうな、俺は。この間ずっと、自分自身の心を問い詰めていたことになるのではないのかな。そして、そのとおりだと思うのだよ。この筆が彼女の素晴らしさを証明してみせる間にも、俺の心には後悔の念が浮かんでくるわけだからな。だがしかし、次の点は付け加えておかねばなるまい（自分本位な考えから、彼女を正当に扱うことが出来なくなっても困るからだ）。つまり、この話し合いにおいて彼女は、家政の中でも一家の主婦の役目となるようなことすべてに関して、実に分別豊かな知識があることを証明してくれたわけで、俺としても、同じ年頃の女で彼女と肩を並べられるような者は、この世に一人としていないものと信じる、ということだよ。

それにしても、実際の話、俺が承知しているかぎりでの彼女は、どんな話題を取り上げようと、惚れ惚れするほど明瞭に弁じてみせるのだよ。それはもう見事なものだから、この俺にしても、もしも結婚についての偏見を克服出来るのであれば、そして、先祖たちの歩んだ退屈な踏みならされた道を辿る決心がつきさえすれば、世界一の幸せ者にだってなれるはずなのだよ。なれないようであれば、おそらく、彼女の十倍は同情に値することになるだろうな。

俺の心が、自分の心が、頼りに出来ないのだよ、ベルフォード。ちょっと筆を置くことにしよう。ハウ嬢の悪口のいくつかにもう一度目を通してみるためだ。

忌々しいものなのだよ、ジャック、ハウ嬢から来たこれらの手紙はな　…　それらについて触れている俺の手紙を、貴公も是非もう一度見直しておいてくれ。俺のほうは先へ筆を進めることにする。

総体的には、この快適な遠出の間、我が魅惑の君はどこまでも穏やかで、寛ぎ、落ち着き払った様子だった。そうなれない理由もまたないのだよ。何しろ、ただ一人でお供をするという栄誉は、俺としても初めてのことだから、精々恭しく振る舞って、そんな恩恵をまた授けてくれるよう促す心積もりでいたのだ。

二人で帰宅して分かったのだが、婚姻不動産設定契約書の草稿を携え、弁護士のところの書記が俺を待っていた。

これは、俺の母のために作られた契約書をもとに、必要な変更だけを加えて作成されたものだ。その原本も（今は弁護士から返してもらってあるのだが）、新たな草稿共々、我が愛しの君の手に届けてあるのだよ。

母のこの契約書のお陰で、弁護士の手間も省けたわけだが、彼女もこれに優る先例は得られないはずだ。母の親戚に求められて、あの偉いＳ卿が設定したものなのだよ。違いとしては、精々、我が魅惑の君のものが母のよりも年百ポンド多いという点だな。

彼女が草稿に目を通している間に、古い証書を読み聞かせようと、俺は申し出た。というのも、書記との検討の場に加わるのを彼女は断っていたからだ。だが、彼女はこれも辞退したのだよ。

察するところ、〈上記クラリッサ・ハーローの母体によってもうけられるべき〉長男、次男、三男、四男、五男、六男、七男、ならびに、同数の女児、などという、そんなにも大勢の子供のことを歌い聞かせる小粋なレチタティーヴォ（五九）だな。ただし、常に〈合法的にもうけられるべき〉という言い回しにもなっているのだよ。男というのは、自分の妻の身体を借りて、〈非合法的に〉子供を拵えることも出来ると言っているようなものだな。しかし、弁護士というこの大悪党どもは、男は結婚前に妻との間に子供を作るかもしれないということを、この言い回しで暗示しているのだとは思わないかな。奴らの真意はここにあるに違いない。何故この狡猾な連中は、こういった悪さのことを律義者に思い出させようとするのだ。ただ、他にも例は無数にあるのだが、法律と福音とは別物なのだということが、ここからも分かるというものだよ。

二人の留守中にドーカスが、窓のついていない控えの間に置いてあるオーク材の箱の中身を手に入れようとした。ところが、乱暴でもしないことには開かないのだ。このような時に、ただの好奇心のために成り行き任せの危ない真似をしたのでは、申し開きが立たんだろうな。

シンクレア夫人と妖精たちは揃って次のような意見だ。つまり、今では俺もすっかり彼女のお気に入りとなり、よそ目にも明らかなほど信頼を寄せられているし、愛情すら勝ち得ているのだから、俺の思いどおりのことをしても構わないし、激情に流されたことを言い訳に持ち出すことも出来るだろう、というのだよ。連中に言わせると、情熱の激しさがあれば、女性にとっては乱暴な行動も許せるということなのだ。また、男女を問わず、関

わりのない者たちからは、当然のこととして、そんな罪などは軽減してもらえるというのだな。そして、全員揃って援助の手を差し延べてくれているのだよ。連中はこんなふうに言っている。そうしていけないわけがどこにあるのか、皆の前では俺の妻として通っているのではないのか、また、身内の者たちとの和解は順調に進むことになっているのではないのか、和解に達していないこととこそが、床入りを延ばす口実になっていたのではないのか、といった塩梅だ。

白昼試みてはどうかと、連中がまたけしかけている。夜陰に乗じてというのは極めて難しいことだから、というのだよ。この家の建っている場所柄からしても、物音が外へ漏れる心配はないというのが連中の言い分だ。そして、女性に衣装を脱いでもらわねばならなくなるなんて、と俺のことをからかうのだよ。「情けないのね。でも、いつもそんなふうだったわけでもないわよね」と、生意気にもサリーが、俺の鼻先にハンカチを投げ付けながら言っていた。

手紙　五十三
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月二日　金曜日

ここ数日というもの、努めて如才なく丁重に振る舞ってきたし、すっかり仮面を捨て去ってしまうだけの勇気には欠けていたのだが、それでも、激しく燃え盛る胸の内を、上品とは言いながらも熱烈な口調で吐露したものだから、愛しの君の警戒心を一度ならず駆り立てることになってしまった。俺が彼女にとって可もなく不可もなしという程度の存在以上の者であるということ、それはなんとか白状させたのだよ。ただ、愛情については、認めさせようと激しく迫ってみたのだが、「女のほうで結婚を承諾しているのです。その種のことを認める必要などあるのでしょうか」というのだよ。そして、一度などは、不愉快そうに俺を押し退けながら、俺が彼女に誓っている真の愛情の証となるのは、遠慮のない言動ではなく、敬意を忘れない態度なのだ、と言っていた。そして、自己弁護をしようとすると、彼女はこんなことを言い出すのだよ。間違った情熱に関する考えとして、彼女に思いつくことの出来たものとしては、ただ、その手の情熱というのは、俺のものが目指していたような形で現れるに違いないという点だけです、と言うのだ。

俺としては、彼女が細かいことにこだわり過ぎる点を責め、自分の感情を正当化しようと努力してみた。彼女に言わせると、繊細に過ぎるところが彼女にあるとしても、これは俺に当てはまる落ち度ではないとのことだ。忌憚なく言わせてもらうが、とのことではあったが、彼女は次のように言っていた。彼女の目には、清らかな心に求められるものを見分ける力が俺にはないように映る、というのだ。清らかな心と不純な心とはいっても、心には何らの違いもないのだし、また、教育と慣行から生じるもの以外に違いは一切ないのだと、おそらく、放蕩児の厚顔さからそのように思っているのだろう、とも言うのだ。ただ、もしもそんなふうに考えているのであれば、一言述べさせてもらうが、良い習慣についても悪い習慣についても、慣行のみが第二の天性を作り上げることになるのです、と言うのだよ。

つい今し方も、罪のないちょっとした馴々しい振舞いに対して、弁明を求められたところだ。俺としては、女どもの前でそのような態度を取る資格はあるものと思っていたのだよ。何しろ、連中のほうでは、二人は結婚の予定で、床入りも間近いものと考えているのだからな。

∴　∴

このお叱りは実に恨めしい思いで受け止めた。そして、待ち切れないという態度で俺はせがんで見せたのだ。目出度い日時をな。彼女のことをすっかり自分のものだと称したところで、例を見ない几帳面さのせいで制止されるようなこともない、その日時をだ。

彼女は俺を見つめていたが、軽蔑の念を恥じらいで隠すようなまなざしだった。俺はそれを蔑みと受け止め、彼女に釈明を求めたのだ。彼女にも話したことだが、無礼を働いたという自覚はなかったからだよ。

「貴方のことを不愉快に感じて当然のように思いましたのは、これが最初ではございませんわ、ラヴレースさん」　彼女が言っていた。「多分、貴方ご自身は、異議を唱えられても仕方がないのだとはお考えにならないのでしょうけれどね。でも、申し上げておきますが、私の目からいたしますと、結婚というのは汚れのない状態のことでして、［彼女の言い方はこうだったと思うのだが］放埒な状態のことではございませんわ」とだよ。少なくとも、彼女はそう言ったように俺は理解しているのだ。

結婚が汚れのないものだとはな、ジャック。まったくの話、実に滑稽だ。ところが、世の中の女性の半分は、そこが可愛いのだが、すぐにも放蕩児と駆け落ちをしたがっているのだよ。それも、相手が放蕩児だからなのであって、他の理由などないのだ。否、他の理由はすべて、そんな相手を選ぶことに反対しているのにだよ。

だが、君と俺はこれまで目にしていたのではないだろうかな、ベルフォード。おとなしいと思われたがっている若い妻、生娘の時には異様なほど内気だった若妻が、妻に首ったけの夫が人前も憚らず、慎みのない振舞いに及ぶのを許している姿をだ。それも、思慮分別とか上品さとか、二人ともそのどちらかを忘れてしまっていることを証明してみせるような振舞いだ。一方、慎み深い者はだれも、この厚顔無恥な行為を前に目を伏せ、赤面することを知らない者たちのために頬を赤らめていたものだ。

俺も一度、その種の場面での話だが、このような態度に憤慨した十二人ほどの仲間に退散するよう提案したことがあった。紳士ばかりでなく、夫人のほうでも二人きりになりたがっていることは、皆の目にもすぐに分かるはずだから、とな。この提案は、いちゃついている二人に効果を及ぼした。そして、二人の放埒な行為を制止したことに対し、俺は称賛を浴びたというわけだ。

だが、この種のことを味わった別の機会には、もう少し俺らしい行動に出たのだ。花嫁に挑んでみたのだよ。首ったけの夫が人前も憚らずにいちゃついてくるのだが、それを顔も赤らめずに黙って受けているものだから（婦人一人一人に恥じらいのまなざしを送るのではなく、誇らしげに辺りを見回している有り様なのだ）、個人的な付き合いをしている友人に対しても同じような愛想の良さを示してもらえないものかどうか、知りたい気持ちを掻き立てられたわけだよ。もっとも、そういうことでもなければ、挑んでみる勇気などは湧かなかったことだろうな。信義の点からしても、この秘密を隠し通さねばならないこと

になったのは確かだよ。だが、それからというもの、お熱い二人が睦み合っているのを目にするたびに、例の女にとってのナンバーツーのことを思い浮かべるのが常だったね。そして、甘い夫に対しては、心中密かに感謝したものだった。奥方に授けておいてくれた教えのことをな。

これまでに述べて来たことから、貴公にも見当はつくだろうな。我が愛しの君は人前で愛し合うことには異議を唱えているが、俺も彼女に賛成だということだよ。「結婚の汚れのない状態」という言葉でもって、氷柱にも似た我が魅惑の君が言い表そうとしたのは、ただそれだけのことであってほしいものだと、俺はそう願っているのだ。だが、話題を元に戻すことにしよう。

我が愛しの君と俺との間で交わされた事柄として、これまで触れてきたことのすべてから、貴公にも察しはつくはずだ。ここ数日間、俺が完全に活動的であり、ラヴレースらしい振舞いをしていた、とは言えないまでも、ただ女に付き纏うだけだった、即ち、ヒックマンを演じていただけだった、というわけでもないのだよ。

愛しの君も今では、俺の妻の座を約束された人間と自ら見做しているのだ。悲しみから心を解き放たれ、もう慎み深さを装うこともないのだし、これからは、嫌っているわけでもない男が言い寄る言葉一つ一つを陰気に受け止めたりしないことを願っているのだ。ただ、彼女としても、これまで自分を曲げずに来たのだから、辻褄を合わせる程度のよそよそしさは保たねばならないだろうな。「好意を寄せている男が、その好意ゆえに、かえって自分を見くびるかもしれないという恐れのない場合には、数多くの可愛い娘がなびくことになる」というわけさ。これも道楽者の信条の一つなのだ。だが、彼女がどれほど強く憤ったところで、もう俺と別れるわけには行かないのだよ。もしもそんなことをすれば、一族との和解の件はご破算になってしまうのだ。それも、彼女自身にとっては極めて面目の立たない形でな。

六月三日　土曜日

民法博士会館(六〇)からたった今戻ったところだ。結婚許可証の取得に骨を折っていたのだよ。遺憾ながら、ジャック、難しい点があるのは確かに事実なのだ。地位もあれば財産にも恵まれた令嬢のことであるし、また、すべてを束縛することになるこの証文を入手するに当たっても、父親ないし最近親に当たる者の同意は得ていないわけだからな。

こんな障害があったことについては報告しておいた。「そのような異議が唱えられるのは尤も至極な話ですわね」と、彼女は言っていた。しかし、たとえ相手の女が伯爵令嬢だとしても、俺のような世に知られた資産家にしてみれば、尤もな話などでは決してないのだよ、ジャック。

贈与財産に関しては同意してもらえるのか、彼女に尋ねてみた。彼女のほうでは、俺の母のものと比較してみたし、異議はないとのことだった。この件に関して、また、われわれの現況を知らせるため、ハウ嬢に書き送ったことを認めていたよ(ア)。

(ア)　ハウ嬢に宛てた令嬢のこの手紙は、ラヴレース氏の手紙から得られるもの以外、何らの新しい事柄をも含んでいないため、割愛することとした。

ちょうど今、我が愛しの君が贈与財産証書の草案を返してくれたところだが、彼女は上機嫌そのものだった。トムリンソン船長に写しを一通送っておいたのだよ。彼女は世辞を言ってくれたのだが、この種の問題では、俺の名誉心に少しの疑念も抱いたことはないというのだ。

男同士の間の問題に関してなら、俺に疑念を抱く者など一人としていないのは、貴公も承知のとおりだ。

長所をいくつか備える必要が俺にはあったのだと、貴公は言うだろうな。

大きな欠点と大きな美点が同一人物の中に見出されることもよくある話だ。女関係を別にすれば、ひどく悪いところは何一つないのだよ。それに、女どもの一人が俺に手を出したのではなかったかな(ア)。

女に高尚な心などはないというのがわれわれの持論だ。この点についてなら、俺はトルコ人そのものといったところで、女に魂はないことを喜んで信じたいのだよ。で、もしもそのとおりだとしたら、女相手の所業に関し、俺はだれに責任を取るというのだ。否、たとえ女に魂があったとしても、天上の世界では男女の区別はなく、また、その必要もないのだから、女性としての身に加えられた危害に対して、女性たる立場に別れを告げようとしている女には、どんな申し立てが出来るというのかな。

手紙　五十四
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月五日　月曜日

俺も今ではほとんど絶望している有り様だよ。愛情とか優しさとかによってこの氷のような美女を首尾よく責め落とすことはな。前にも話したことだが、トムリンソン船長のところへ草稿の写しを一部届けておいた。それも、特別な使者の手によってだ。清書の手続きは進められている。民法博士会館へ再度足を運んでみた。結婚許可証はマロリーのこねで十中八九手に入るところだったのだ。マロリーの知人で代訴人をしている男が、ある老婦人の遺言を作成するために、急にチェスントへ出張させられるようなことがなかったならな。彼女に見せることが出来なかった卿の手紙の中で、彼女が知っておく必要のある事柄すべてについては、プリチャードが、我が魅惑の君との面会は叶わなかったのだが、口頭で俺に教えてくれた。そして、婚礼に際して譲渡されることになっている地所の件については、俺の指示に従ってくれた。ただ、これだけ有利な状況の中にありながら、譲ろうとする姿勢は一瞬といえども見られないし、つけ込む手立てとすべき優しい気持ちも、一つとして引き出すことが出来ないのだよ。

ただ、本心からそう思うのだが、この淑女の場合のように、正真正銘の慎み深さ、あれほど潔癖な慎みの深さを心に備えた人間はかつていなかったはずなのだ。そして、これま

(ア) 第一巻の百五十頁を参照のこと。

での間ずっと、俺にとってはこれこそが安全の保障となっていたのだ。また、ハウ嬢の忠告にも拘らず、今後ともそうなってくれるはずなのだよ。仮に彼女の潔癖さが短所だとしても、俺が結婚を嫌悪する気持ちに打ち克てないのと同じことで、彼女にもそれは克服出来ないわけだからな。習慣だよ。習慣というやつなのだよ、ジャック。貴公も分かるのではないかと思うのだが、習慣になってしまうと、われわれ両名にしても、いろいろ弱みを晒すことになるかもしれないのだよ。だとすれば、俺は情けを掛けているわけだから、彼女のほうでも情けを施してくれて良いのではないだろうかな。

二度にわたり、まさに狂喜の体で彼女に接吻をした。そのうち一度は、彼女も粗野だと言っていたし、いずれの場合にも、無遠慮なのを憤って引き上げて行った。もっとも、この点は正当に評価しなければならないが、俺からの懇願があると、すぐにもまた顔を見せてくれたし、また、引き上げることとなった原因について触れるようなことも一切なかったのだよ。

彼女の立場からすれば、すぐに容赦しなければならなくなるような、罪のない馴々しさだというのに、そんなことにあれだけ怒りを露にするのは、賢明なことだと言えるのだろうかな。

しかし、最初のうちの無遠慮な振舞いに憤りを示さない女は、きっと身を持ち崩すことになるのだよ。愛というのは侵略者なのだ。愛は決して後戻りをしない。愛はいつも野心に燃えているし、常に高きを望まずにはいられないものなのだ。抑制されることのない愛を満足させ得るものといえば、ただ、愛の極みともいうべき行為を措いては他にないのだよ。平安を守りたいと願っている恋人に対し、平安を乱すことを何とも思わない男は、どれほど有利な立場に立つことだろうか。

まさしく今この瞬間、十二度目くらいになるが、半ば覚悟を決めたところだ。愛想の良いことを千は話してやらねばなるまいな。彼女は食堂だ。ちょうど今行ったところだ。あの部屋では、俺が現れるのをいつも待っているのだよ。

∴　∴

すっかり機嫌を損ね、その後、唐突に部屋を出て行ってしまった。

俺は彼女の横に腰を下ろし、彼女の両手をこの手に包み込んだ。どうしてもそうしたかったのだよ。口調はどこまでも穏やかだ。父親のことを口にする時には、敬意を込めて語ったさ。母親は崇めておいた。兄についてさえ友好的な話し方をしたのだ。本気でそう願っていると彼女にも話したのだが、彼女の一族との和解をこれほど熱心に願うようになるなんて、思ってもいなかったことだ、と言ったのだ。

すると、淑やかに、そして、感謝の気持ちからだろうが、彼女はあの美しい顔一面を紅潮させたのだ。そして、時々静かに溜め息をつくのだが、その都度、ネッカチーフが波打っていた。

トムリンソン船長からの便りが本当に待ち遠しかった。贈与財産証書の草稿に彼女の伯父が難癖をつけるなど、考えられないことなのだ。しかし、証書を送り届けることで、俺の吉日の先送りを彼女の伯父の手に委ねるつもりだったのだ、などとは理解してもらいたくないのだよ。いつなのだろうな。一体、いつにしてもらえるのだ、その日は。

もう一度民法博士会館へ飛んで行き、結婚許可証が手に入らないかぎりは戻らない覚悟でいる。

目出度い式が済み次第、すぐにもローン荘へ引き籠もろうと俺は申し出た。この日はどうか、あの日ではどうだろうか、と提案してみたのだ。

日取りを決めるのは、贈与財産証書が完成し、許可証を得てからでも間に合う。密かに伯父が来席するよう、親切なトムリンソン船長が一肌脱いでくれると嬉しいのだが、と彼女は言っていた。

お誂え向きの話だよ、これは。多分、うまく利用することも出来るはずだ。延期をするにしても、あるいは、宥めるのに使うとしてもだよ。

後生だから、この上新たな延期はなしにしてほしいと嘆願し、これまでの彼女のことをやんわり咎めておいた。その日が近づくのを歓呼して迎え、遅々として進まない時間を指折り数えるためのことだが、日取りだけでも示してほしい（翌週の早目にしてもらえると有難い）、と話したのだ。

俺は彼女の肩に頬を預け、両の手に代わる代わる接吻をした。怒りというよりは恥じらいの気持ちから嫌がったわけだが、何とか手を引っ込めようとするし、肩のほうも俺の傾けた頬を避けようとするのだ。ただ、俺と争うのはだんだん気が進まなくなってきているのは明らかだ。口に出して言えることよりさらに多くのことを、その伏せた目が物語っているのだよ。俺がこれまでに取った態度よりももっと大胆な馴々しい行動を、果たして彼女は許してくれるのかどうか、間違いなく今こそそれを試す時だと、俺は思ったのだ。

そこで俺は、争っている彼女の手を解き放した。片方の腕を彼女の腰に回し、あの魅力的な唇にこの唇を重ねたのだが、「穏やかに願います」と言うだけで、二度目を恐れるかのように、彼女は顔を背けていたよ。

こんな柔らかな拒み方なものだから、俺も勇気づけられ、これ以上はないほど甘い言葉を並べたてた。そして、美の中の美ともいうべきものを隠しているネッカチーフを、もう一方の手で脇へ寄せると、恍惚とした俺の目にこれまで映った中でも最も魅力に溢れたあの胸に、この燃えるような唇を押し当てたのだ。

まったく惚れ惚れするほどの膨らみを彼女の胸にもたらしていた感情とは正反対の感情が、すぐに彼女の心に湧き上がって来た。身を包み込んでいる俺の腕から、彼女は憤慨した様子でどうにかこうにか逃げ出した。俺のほうは、彼女の嫌がる片手をなおも掴んでいたのだ。「お放しください」　彼女が言った。「貴方と交渉の余地などございません。卑劣な侵略者ですわね。お世辞タラタラのお話には、こんな下心があったということでしょうか。事態は相当なところまで進んでおりますけれど、貴方とは永久に絶交です。忌まわしい心の持ち主です、貴方は。さあ、放すのです」と言うのだよ。

俺はやむなくその言葉に従ったよ。すると、彼女は飛ぶようにして俺の元を去って行ったわけだが、「おべっか使いの」を付け加えながら、「卑劣な」侵略者という言葉を繰り返していたのだ。

∴　　∴

夕食を共にするという、かねて約束のご好意にあずかりたいと、ドーカスを通して執拗

に頼んだのだが、駄目だった。夕食を取る気にはまったくならないし、とても喉を通らないだろうと言うのだ。

それにしても、どうして彼女は、徹頭徹尾、自分の体をあのように神聖化するのだ。それに、時は間近に迫っており、譲り受け証書と贈与財産によって、すべては俺のものになるだろうくらいなことは、彼女も考えなけりゃいけないのだよ。

東洋の君主たちが用いる手管について、彼女は読んだことがあるのだろう。疑いのないところだよ。君主たちは臣下の目の届かないところに隠遁するのだが、これは、何か厳粛な式典に際し、公の場に姿を見せるのが適当と思われるような折に、臣下たちの崇敬の念を掻き立てるためなのだ。

だが、ひとつ尋ねさせてもらいたいのだよ、ベルフォード。こちらには高官、あちらにはお偉い大臣といったふうに、従者や眩いばかりの馬車を連ねて先へと進む華麗な行列こそが（そういった厳粛な式典でのことだが）、感嘆しながら眺めている観衆の目を徐々に慣らし、天蓋の下に鎮座し、自らの広大な帝国から集めた富に囲まれて光り輝いている君主の（たとえ、本人は醜い老いぼれだとしてもだが）きらめきに耐える準備を整えてくれるのではないのかな。

それに、我が愛しの君にしても、彼女自身のためにも、女神の座から徐々に生身の人間へと降りてくるべきではないのかな。もしも彼女を引き止めている観衆のプライドだとすれば、そんなプライドは罰せられて当然ではないのかな。もしも、東洋の皇帝たちの場合のように、それがプライドであると同時に手管だとすれば、手管などというものは、女がどれほどの数この世にいるにしても、彼女だけは用いる必要のないものなのだ。仮にそれが恥じらいの気持ちだとしても、彼女の姿態の優美さの中でも最も称賛に値するものを、彼女を崇拝している者の目に披露してやるのだからな。恥じ入らねばならないような不面目な点がどこにあるというのだ。

あの魅惑的な乳房のそれぞれに双子のラヴレースがしゃぶりつき、そこから最初の滋養分を吸い取っている姿 … これは、身体上の理由もあり(ア)、一ヶ月間だけ続けられ、それ以上には及ばない敬虔な作業なのだが、そんな様子を目にする喜びのためならば、この世で最も輝きを放つ王冠でさえ、俺は捨てて顧みないつもりでいるのだが、もしもそれが出来ないようなら、ベルフォード、この身は滅びても構わない覚悟だ。

女の中でも最も魅力に溢れるこの女性が、このような快い仕事に就いている姿 … 今それが俺の目に浮かんでくるようにも思われるのだ。自覚に満ちたまなざしが一方の子に今注がれたかと思うと、次にはもう一方の子の上に留まり、母の真情が溜め息となって漏れるのだ。そして、その視線は喜びを湛えた俺の目のほうへと上げられるのだが、そこには切なる願いが込められているのだよ。愛らしい乳飲み子のために、また、彼女自身のためにも、俺のほうでその子たちを嫡子として認知してくれるなら忝い、結婚の枷を進んで身につけてくれるのなら有難い、とな。

(ア) これらの理由については、『パミラ』第四巻の手紙六（六一）に提示されており、それは、世の親すべてにとって考慮に値するものであるが、また、我が子への母親による授乳という重要問題に関するB氏とパミラとの議論を含むこの手紙全体についても、それは言えることである。

手紙　五十五
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

月曜日　午後

君子トムリンソン船長から手紙が届いたのだが、おそらくそのお陰だろう、我が魅惑の君へのお目通りを意外に早く許してもらうこととなった。

食堂へ入って来た当初は、不機嫌そうに額に皺を寄せていた。だが、俺が前回のことには触れずにいると、彼女の怒りもひとりでに鎮まって行ったのだよ。

船長は、約束の贈与財産証書の写しが届くまで、筆を執りたくはなかったのだがと断った上で、次の点を知らせてくれている。つまり、友人のジョン・ハーロー氏は、二人の最初の話し合いの場で（船長が戻るとすぐに持たれたものだが）、われわれが結婚していないことを耳にすると、非常に驚いていたし、（船長の心配したとおり）悲しんでさえいたというのだ。氏の言によれば、われわれが同じ下宿にこんなにも長い間住んでいたことが分かると、今後二人の結婚がどんなに公な形で祝われることになろうとも、俺の人柄を承知している世間の者たちからは、強い非難の声が上がるはずだ、というのだよ。

間違いなく、甥のジェームズはそれを口実として盛んに利用し、和解へ向けてなされるどんな動きにも反対するだろうし、体面ということに関しては、自分たちほど心を配っている一族もこの王国には他に存在しないのだから、それだけに一層大きな首尾を収めることになるだろう、とも言っていたそうだ。

これは、ハーロー一族に関しては、まさしくそのとおりなのだよ、ジャック。〈誇り高きハーロー一族〉と呼ばれてきているのだ、奴らは。それに、日頃から気づいていることだが、地位を得て日の浅い輩というのは、おしなべて傲慢で怒りっぽいものなのだよ。

それはともかく、二人は結婚しているのだと伯父の友人に思わせるよう、我が麗しの君を説き伏せようと骨折ったわけだが、いかに俺は正しかったのか、それが貴公にも分かってもらえるのではないだろうかな。船長はそう信じようという心積もりでやって来ていただけになおさらだし、伯父もそう望んでいたわけだからな。ただ、何か言い分を通そうと心を固めていたり、扱う相手がおとなしい男であるとか、平穏さを愛している男だという場合の女ほどに天の邪鬼なものは、この世には他に何一つ存在しないということだ。

我が愛しの君は苛立っていた。ハンカチをひっぱり出していたが、自分を責める気持ちになるというよりも、むしろ、俺のほうに責任を負わせたがっていたのだ。

「ロンドンに参りました際に、約束を守って、私を一人にしてくださっていたなら、ラヴレースさん　…　」と、そこまで言うと、彼女は口ごもっていた。彼女にも分かっているからなのだよ。田舎を発つ前に結ばれなかったのは、彼女自身の落ち度だということがな。それに、その後、彼女の傍を離れるような真似がどうして俺に出来たというのだ。力ずくで彼女を連れ去ろうと、兄が企みを練っていたわけだからな。

また、この兄がいまだに陰謀を諦めていないということもあるのだよ。

というのも、船長はこんなふうに筆を進めているのだ。ジョン・ハーロー氏が彼に明かしたこととして（ただし、内緒でということだが）、現在のところ氏の甥は、われわれが一緒にいるものと確信し（俺の消息が身内の屋敷のいずれでも、あるいは、定宿としている場所でも得られないからだ）、われわれの居場所を捜し出そうと、懸命に骨を折っていると

いうのだ。そして、つい最近もヒックマン氏から伯父への働き掛けがあり、その件に関して、ノートン夫人から母親に口添えがあったことからも分かるというのだが、われわれが結婚していないのは明らかだ、と言い張っているそうだ。また、どこのだれからも悩まされることなく、俺がこのような大勝利を楽しんでいるのが、あの兄にとっては耐えられないことだというのだよ。

深い溜め息が一つ、そして、目頭にもう一度ハンカチが当てられていた。ただ、罪深い話だが、ヒックマンからの働き掛けが成功を収めた場合には、俺の元から身を引こうと心に決めていたわけだからな。あの愛らしい娘もこれくらいの仕打ちは受けて当然ではないのかな。

俺は読み進め、以下のような意味合いの箇所に触れた。

調べに行ったもう一人の友人に対しては、何故（と、ハーロー氏が尋ねたわけだが）二人は結婚しているとの返答だったのか。それも、姪の侍女からの返答であるが、その娘は事情に通じていて当然であるし、疑いもなく、納得の行く理由を上げることも出来たはずだ、というのだよ。

ここで再び、彼女は涙を浮かべていた。部屋を横切って向こう側へ回り、そして、戻って来ると、「先をお読みください」との言葉だった。

「ご自分で読んでみませんか、最愛の人」

「お手紙はいずれ頂いてまいります。読もうにも、今は目が見えないのです」と、目を拭っているのだよ。「先をお読みください。全部聞かせていただきますわ。このお手紙につきまして、私自身の感想を申し上げますのも結構ですが、同じように、貴方のお考えも伺えたらと思うからですわ」

それから、船長は伯父のジョンに話してやったのだ。われわれは結婚しているものと世間に思わせようとした俺の理由について、そして、我が愛しの君もそれを黙認する気持ちにさせられ、また、われわれが極めて厳格に互いの間に距離を置くこととなった、その条件についてだ。

それでもなお、ハーロー氏は俺の人柄を理由に異議を唱えていた。そして、不満を残したまま去って行ったとのことだ。船長としても大いに気掛かりなところがあったので、一回目の会談の結果について筆を執るのは気が進まなかったというのだよ。

だが、草稿を受け取るとすぐに船長宅で開かれた（先回も同じだが、そのほうが秘密を守れるからだ）二回目の会談の時には、草稿を読み、また、船長の意見を聞くと、ご老体は前よりもずっと満足の様子だったとのことだ。ただ、われわれが結婚もしないまま、こんなにも長く同居していたことを一族の者たちが知るようなことになれば、その点を快く信じてくれるよう説得するのは、自分こそ今では信じる気持ちになっているのだが、他のだれについてであれ、容易な話ではないはずだ、と断言していたそうだ。

船長の言では、その後彼の親友から提案が一つあったそうで、それは次のとおりだ。つまり、われわれは即刻結婚すべきだということ。ただ、われわれもそのつもりでいるのは氏にも分かったが、出来るかぎり人目を避けるようにしてほしいということ（草稿に関して、氏には何一つとして異存は有り得ないからだ）。しかしながら、氏がさらに満足するためには、氏自身の友人で信頼の置ける者を一人、式に参列させてもらえると有難い、というのだよ。

ここで俺は一息入れた。怒ったふりをして見せようとの考えからだ。だが、先を続けてもらいたいとの願いでもあり、彼女の言葉に従うことにした。

ただし、その信頼に足る友人と氏自身、それに、船長は別にしても、この世のありとあらゆる人間に対しては、一つ屋根の下で暮らすようになった時から二人は結婚していたことにしてもらうし、その時期は、ヒックマン氏が、ハウ嬢からということで、氏に打診して来た時期と一致するようにしてもらわなければいけない、というのだ。

「これはまた、実に思いやりに溢れた提案ですよ、最愛の人」と俺が言った。「われわれとしては、この点について階下の連中にきちんと注意しておくだけで事足りますね。伯父上がこのように見事な便法を思いつくとは、考えてもみませんでした。ただ、伯父上がどれほど和解に執着しておられるのか、貴女にもお分かりでしょう」とだよ。

俺が頂戴した返事はこうだった。「私の身内一人一人のことをどれほどむさ苦しく思っておられるのか、いつも貴方は教えてくださいましたわ。丁重さの印といたしましてね」というのだよ。

だが、貴公はこう考えるのだろうな、ベルフォード。非難がましい台詞を吐いても、彼女のことは許してやれるはずだ、とだよ。

この提案がわれわれにどれほど歓迎されるものなのか、自分にも分からない、と船長は言っている。ただ、船長としてはこれを、多くの困難を回避し、ジェームズ・ハーロー氏のさらなる策謀に終止符を打つことになるかもしれない便法と考える、とのことだ。そして、このことがあるので、ヒックマン氏からの打診が退けられた直後にわれわれは結ばれたのだと、そう信ずべき十分な根拠が彼［トムリンソン船長］にはある旨を、〈伯父からの助言〉として、二人の人物に向かって個別に明言してあり、その話はこれらの人物を通してあの青年紳士の耳にも届くはずだ、というのだよ。

「また、こうすれば、ラヴレース殿」と、これは船長の言葉だが、「令嬢に向かって貴方が私の面前で言明してくださったいくつかの点、つまり、すぐにも請求する資格はお持ちなのに、令嬢の地所を急いで請求なさらなかった点ですが、そこからも窺われる心の大きさ（ジョン・ハーロー氏も、それを和解のために善用するかもしれません）に不釣合とはならないようなご挨拶を、あの一族にお送りになることが貴方にも可能になるというわけですよ」というのだ。きっと彼女も、何という見事な策略家なのだと、この君子トムリンソン氏のことを考えるはずだ。

だが、船長は次のように付け加えている。もしも、二人は結婚しているのだという報告について、令嬢にせよ俺にせよ、どちらかに賛成出来ない気持ちがあるのならば、船長としてはその報告を撤回して構わないということ。にも拘らず、一言話しておかねばならないが、ジョン・ハーロー氏としては、このような進め方が全面的和解へと活用し得る唯一の方法であるとの考えでもあり、非常に強く執着しているということ。ただ、われわれが同意するなら、とした上で、俺の吉日を引き延ばすことのないよう、船長は我が麗しの君に懇願しているが、主たる事実の真実味について、自分が口にしている事柄の正当性を認めてもらうためなのだそうだ［どこまで真面目なのだろうな、この善人は］。また、実際に式が挙げられるまでは、待望の和解へ向け、彼女の伯父がほんの一歩でも動き出すようなことを期待されては困る、ということだ。

船長は、ごく近日中に別の要件で上京する予定、とも付け加えている。そして、その際

にはわれわれを訪ね、ハーロー氏と船長との間でのこれまでの出来事、また、これから起こることの一切について、もっと詳しい報告をしたいというのだ。

「さあ、伯父上の応急処置についてはいかがお考えですか、最愛の人よ。船長に一筆認め、われわれのほうにはその処置に異存はないと知らせましょうか」と、俺は尋ねた。

彼女は数分間口を噤んだままだった。ようやくのこと、溜め息を交えながら、彼女は言っていたよ。「お分かりですわね、ラヴレースさん、何という状態に貴方は私を追い込んでしまわれたのでしょうね。こんなにも曲がりくねった道を、貴方の後ろを追って辿ったからですわ。ご覧なさい。私は何という不面目を招いてしまったことでしょうか。正直申しまして、貴方は賢い人間のように振る舞っては来られませんでしたわ」とだ。

「愛しい人よ、覚えてはおられないのですか。ロンドンへ来る前から、結婚を承諾していただくよう、どれほど熱心にお願いしていたことでしょう。あの頃に私の願いが入れられていたなら　…　」

「えゝ、えゝ、どこかに大きな間違いがあったのでしょうね。今のところはそのようにだけ申し上げておきますわ。それに、済んでしまいましたことを元に戻すわけにはまいりませんでしょうから、伯父には従わねばならないものと思いますわ」

まったく惚れ惚れするほどの従順さだよ。そこで、俺のなすべきことと言えば、ご立派な船長と彼女の伯父貴に遅れを取らないためにも、日取りを決めてくれるよう迫る以外にはなかったというわけだ。俺は熱烈な調子で迫った。だが（予想されたとおりだが）、彼女は前の答えを繰り返すのだ。つまり、贈与財産証書が出来上がり、実際に結婚許可証が取得されてから日取りを決めても、十分間に合うというのだ。そして、「あゝ、ラヴレースさん」と、比類のないほどに優しい上品な仕草で俺に背を向け、ハンカチを両の目に当てながら、「もしも、大好きな伯父様に、この際、父を持たない哀れな娘のため自ら父親となってくれるようお願いをして、聞き入れてもらえるようでしたら、どれほど幸せなことでしょう」と言っていた。

一体どうなってしまったというのだ、この俺は。この露の滴はどこから来たものだ。涙だよ。誓って言おう、ジャック、涙なのだ。ひどく涙もろいように思う。ただ繰り返しているだけなのにな。だが、彼女の愛らしい姿が眼前に彷彿としていたのだよ。あの言葉を口にした時の、あのままの姿勢でだ。それに、実を言うと、彼女があの話をした時、俺の頭にはシェークスピアの次の一句が浮かんで来たのだよ。

お前も胸が詰まるのだな。むこうへ行って泣くがよい。
悲痛な思いは伝染するものらしいな。お前の目に浮かんだ
その悲しみの滴を見ているうちに、私の目まで
濡れて来たからな　…　（六二）

俺は部屋へ引き上げ、船長宛に次のような趣旨で一筆認めた。つまり、われわれは提案を全面的に受け入れるつもりでおり、この家の淑女たち、それに、われわれ自身の召使は勿論、彼女たちの召使にもすでに適切な注意を与えてあるので、その点を親友の方にお伝えくださるようお骨折り願いたいし、また、氏自らの手で愛する姪御さんを私に授けてくださることになれば、われわれ両名の願いはそこに極まるという点もお伝え願いたい。こ

の場合には、氏が指定する日を、近日中のことと思われるので、われわれの日取りとすることに賛成であるということ。こうすることにより、事実を隠さねばならない相手はより少なくて済むということ。式がどれほど内輪な形で執り行なわれようと不都合は有り得ないと、氏同様に俺も考えているということ。しかもこれは、氏がそれによって達成したいと考えた、あの賢明なる意図のためばかりではなく、俺としては、軽視されたような印象をM卿に持たれるのは望ましくないからでもある。というのも、かつてあの貴人は、以前にも話したように［船長にだが］、われわれの結婚式で父親代わりを演じようという考えを持ち、実際、その申し出もあったのだが、われわれのほうでお受けするのを断ったのだということ。その理由は、人目につく結婚式は避けたいということに他ならないのだが、氏の愛する姪御さんも、身内の者たちの寵愛を失っているかぎり、そのような挙式に加わるわけに行かないと考えていたということ。ただし、氏のほうでそこまで敬意を表すわけには行かないということであれば、俺の願いとしては、氏が目出度い席に出席させようと考えている、例の信頼すべき人物というのは、トムリンソン船長にしてもらいたい、といったことなどだ。

我が麗しの君にこの手紙を見せたが、彼女から不満は出なかったのだ。それゆえ、ジャック、現在のわれわれとしては、贈与財産証書と結婚許可証の件をどれほど急いでも、急ぎすることにはならないわけだよ。日取りについても、彼女の伯父、あるいは、多分トムリンソン船長の指定する日ということになろうが、最も相応しい時にということだ。密輸業者の絡んだハウ嬢の計画に対しても、あらゆる場合の備えが出来ていることは、今はもう間違いのないところだ。

だが、俺のこの手の込んだ企みから生じる利点のすべてについて、あらかじめ貴公の判断を仰ごうなどという気持ちはないのだよ。何故なのだろうな、達人の妙技を披露するよう、この娘たちが俺を促すのは　…

ところで、不意に爆発させてやろうと準備を進めている、ちっぽけな地雷のことに話を移そう。俺が爆発させた最初のものということであり、この調子だと（今決心を固めたかと思うと、すぐに後悔している有り様なのだよ）、おそらく、爆発させようと企てる最後のものになるのだろう。

ちっぽけな地雷などと称してはいるが、大きな効果をもたらすかもしれないのだ。しかしながら、その首尾にすべてを賭けるような真似はしないようにする。有効性においてはるかに優るものをいくつか準備してあるからだよ。とはいえ、強力な発動機も小さなバネによって動かされることが多いものだ。ある包囲戦では、弾薬庫に偶然飛び込んだ火花が百門の大砲でも及ばないほどの効果を上げたことがあるのだよ。

たとえ最悪の事態になろうとも、俺にとっては祝婚の松明と白装束（六三）とが、フランス人の言う〈公的な謝罪〉となるはずなのだ。

手紙　五十六
ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

六月六日　火曜日

貴公への働き掛けがこれまで不首尾に終わっているのは確かだが、この素晴らしい女性のためにもう一度、どうしても筆を執らずにはいられないのだよ。ただ、このように心からの誠意をもって彼女の味方になろうとする熱意はどこから来るのか、自分でもその説明がつけられずにいるのだ。

だが、彼女の取り柄を貴公はすべて認めている。貴公自身の悪辣さをすべて白状し、自慢にすらしている。だとすれば、そこまで非情になっている男の心を動かす望みがどこにあるというのだ。ただ、手遅れというわけではないのだし、やはり貴公はどっちつかずの状態にあるのだから、もう一通認めるとどうなるのか、試して見る決心をした次第だ。何の役にも立たないとしても、俺が無駄に筆を走らせただけのことだし、もしも説得を受けてくれるようなら、これからは俺のことを、感謝されて当然の資格をたっぷりと備えた人間のように考えてくれるはずだと思うのだよ。

貴公に議論を挑むなど、愚かな話だろう。その必要もあり得ない事例だ。それゆえ、懇願するだけに止めるつもりでいる。あれほど上等な女性が、その油断なき美徳の報酬を貴公のせいで失うことのなきよう、切に願う次第だよ。

俺は本心そう思うのだが、どれほど極悪非道の道楽者でも、生きている間にいずれは改心に向けて歩み出そうと、きっと決意をしたことがあるはずなのだ。そこで、是非とも貴公に頼みたいのは、この重大な事例では、そうしておけば良かったといずれそのうち願うことになるのだろうが、やがて味わう悔恨の思いが穏やかなものになるようにしてほしいということだよ。

貴公のほうでこのまま事を進めるなら、この一件がどのみち悲劇に終わることは疑いないところだ。きっとそうなるに決まっている。あれだけの女性は必ずや神々と人間の両方を自分の言い分のほうへ引き寄せてしまうに違いないのだ。ただ、俺が最も恐れているのは、いわれもなく加えられた暴虐行為に憤慨し、彼女が（いま一人のルクレティアよろしく(六四)）自分の心の清らかさを自分の手で証してみせようとすることだ。あるいは、たとえ彼女の信仰心がこのような暴挙から身を守ってくれるとしても、心身の衰弱を招くあの深い悲しみが、すぐにも彼女の人生に終止符を打つことになるという点だ。そして、いずれの場合においても、いつまでも付き纏う罪の意識と束の間に過ぎ去った勝利に思いを馳せるのは、貴公にとっても苦痛の中の苦痛ということになるのではないだろうか。

とにかく、あれだけ見事な娘がこのように悪辣で無慈悲な者の手に落ちてしまったというのは、まことにもって悲しい話だ。何しろ、貴公が白状するのを耳にしたことがあるのだが、鳥であれ四足獣であれ、可愛がっており、思いのままに扱うことも出来る動物を弄んだり苛めたりするのが、貴公にとっては揺り籠の頃からの変わらぬ楽しみだったというのだからな。

貴公がこれまでにたらし込んだ他のどの女の場合と比べても、この天晴な女性との一件は何と違うことだろうか。その際立った違いを貴公に向かって口にする必要はないし、力説するまでもない。公明正大さ、感謝の念、貴公の利益、貴公の誓い …… すべてが貴公を縛りつけているわけだし、また、人を愛することが貴公にも可能だとすれば、その力の限りを尽くし、この世のすべての女よりも彼女のことを愛しているのは確かなのだよ。彼女のほうは、手管によって脇道へ引きずり込まれる女ではない。あるいは、騙され易さとか、知力や洞察力の不足などから辛い思いをさせられるような（彼女ほどの秀でた心の持

ち主にとっては、それがまた胸を抉る思いとなるのだろう)、そんな女でもない。貴公ら二人の間の争いが要するに公平さを欠いているのだ。無防備のあどけない人間と武装した罪人との間の争いのようにな。それ以外の点では、貴公も認めているとおり、何ごとにつけても彼女の才能は貴公の才能をはるかに凌駕しているのだよ。もしも、度重なる悔恨の思いに、貴公もついに圧倒されるということがないとしたら、彼女の運命は一体どうなるというのだろうな。

正直言って、最初、彼女の面前へ通された時には(ア)(そして、意味ありげな彼女の姿に接したり、言葉を耳にしたりするまでの間のことだが)、自慢にするような並外れて優れた判断力を彼女は持ち合わせていないように思ったのだよ。というのは、花も盛りという彼女の若々しさや容姿の美しさに対して、また、洗練されたものにするのには、彼女としても自分の時間と努力の半ばを費やしたに違いないと思われた、あの着こなしの屈託のなさや優雅さについても、俺の考えでは、まったく妥当な斟酌を加えただけのつもりでいたのだが、ただ、彼女の分別や読書の広さのことでは、貴公のお陰で、極めて高く買いたくなるような心構えがすでに出来上がっていたからなのだ。この派手な男を、こんなにも危険な条件で選ぶなんて、彼女の知恵も、歳月と経験のみが与えることの出来る、あの円熟味には欠けていることを認めているようなものだ(と、俺は思ったのだよ)。彼女が身につけている知識とやらも、すべて机上の空論に違いないし(俺はそう自分に言い聞かせた)、あんなにも世間を知らない令嬢のことだ、若々しさや華やかさに溢れた年頃にとってはいつだって慰めとなる、あの人当たりの良さに触れると、居合わせた女性たち、そして、男性の一部の者たちが耽っている(大変に学があって、書物にも通じ、広く旅をしている者がだよ)不躾な会話に対し、愛想を尽かしている態度を示すようなことは、少なくとも我慢することになるだろう、とな。

こんな憶測を抱いたまま、俺は事を進めて行った。そして、貴公を別にすれば、仲間のうちではだれよりも有利な立場にあると自惚れていたし、えらく頭の切れる男と彼女の目に映ることを願っていたので、何か意味よりは響きのほうが勝っているというような、馬鹿げたことを口にした時、また、下らない冗談を言って、貴公の贔屓のシンクレアや見掛け倒しのパーティントンの笑いを誘った時には、良いところを披露出来たような気持ちになっていたのだ。そして、ハーロー嬢も一緒に笑ってくれないのは、若さか気取りから来たこと、あるいは、その両方が交じり合ってのことだろうし、もしかすると、表情を抑える力が優れているからなのだろうと考えたのだよ。その間ずっと、彼女の心に軽蔑の念を引き起こしていたなんて、俺は夢にも思わなかったのだ。

だが、われわれ全員を底の底まで見抜いた後のことだが、前にも言ったとおり、彼女が話し出すのを耳にした時、二、三の事柄について彼女の意見を伺い、われわれの薄っぺらな脳ミソの一番奥にある細胞にまでも突き刺さる、あの探るようなまなざしに気づいた時には、正直なところ、キョロキョロと辺りを見回してしまったよ。そして、それまでに口にしたことすべてを思い出しては、穴があったら入りたい気持ちになり始めていた。要するに、自分の愚行の顔を立てるためにも、一人ずつ全員が話し終わるまで、口を閉ざして座っていようと決心したのだ。そして、その後、彼女も加わることの出来るような話題を

(ア) 第三巻の二百五十三頁を参照のこと。

持ち出したのだが、実際に彼女が加わると、われわれは一人残らずすっかり面食らい、度肝を抜かれてしまったというわけだ。何しろ、ラヴレースよ、近くに来る者すべてを楽しませてくれる才気煥発さや当意即妙の受け答え、また、愚弄嘲笑の才能によってそれほどの名声を博している貴公でさえ、われわれと同様、手に感じるほどの真っ暗闇（六五）の只中に座り込み、辺りをキョロキョロと見回していたのだからな。

たった一つだけ、そんな例を思い出してもらうことにしようかな。

われわれは繰り返し繰り返し機知のことを話題に取り上げた。そして、才人たらんことを目指し、互いに頓智の利いた言葉をボールみたいに投げつけ合いながら、才気に恵まれているのは貴公だということに概ね落ち着いた。その才能のことを日頃からたっぷりと自慢し、自惚れてもいた貴公だからな。それに、貴公がわれわれを招集したのも、俺の知るかぎりでは、貴公がわれわれより秀でているところを令嬢にひけらかすこと、また、彼女に対する貴公の勝利をわれわれに見せつけることが主な目的であったわけだから、なおさらそういうことにしたのだよ。その後ターヴィルが（いつも受け売りの才気でもって、つまり、思い出してきた気の利いた言葉とか、他の者たちが用いた機知で満足している男なのだが）、この話題に当てはまるような詩をいくつか復唱し、下品な掛け言葉に満ち満ちてはいたが、われわれのうちの二人がそれを褒めそやしたわけだ。貴公のほうは、令嬢がこういった復唱の一つにむずかしい顔付きをしているのを目にすると、彼女に向かって話し掛け、機知について、つまり、貴公の言い方では、自分自身から生じたものであれ他人の中に見出したものであれ、だれもが重んじている一つの特質ということになるが、その機知について、彼女の考えを尋ねたわけだ。

そこで、彼女がわれわれ全員の注目を集めることとなった。彼女が言うには、それはよく人が口にする特質ではあるが、ほとんどと言って良いほど理解されていないもののように思う、とのことだった。今し方交わされていた会話から判断した点について、忌憚のないところを述べさせてもらえるならば、少なくとも、男性にとっての機知と女性にとっての機知とは別物であると申さねばならない、というのだ。

われわれ一同、これにはギクリとしてしまった。女たちの表情といったら　…　しきりに口をすぼめて見せるのだよ。ほんの少し前までは、それぞれおおっぴらに笑い興じていたのにな。復唱された例の詩を耳にしたからだが、連中の顔付きから推して、十分に意味は分かっていたのだ。そうこうしている間にも、俺は彼女に頼み込んだ。女性にとっての機知とはいかなるものなのか、男性にとってもそうあるべきものと確信するゆえ、蒙を啓くためにも、是非ともわれわれにご教示いただきたい、とな。

彼女によると、カウリー（六六）が、否定の表現を用いて、見事にそれを定義しているとのことだった。

その定義を聞かせてくれるよう、貴公は彼女に頼んでいたな。

彼女は聞かせてくれたのだが、暗唱する際の口調は、不出来な詩をも楽しいものに変えるほどの優雅な寛ぎ、美しさ、そして、抑揚の適切さを伴ったものだった。

それは千もの異なる姿を装い、
千もの姿で目を楽しませる。
この称号を得べきものは

絵空事などではない。笑いを誘い
宴席を沸かせる冗談でも、美辞麗句でもない。
才気の証はとこしえに消滅してはならない。
まして、乙女が顔を覆う事柄とは
決して関わりを持つことはない。
かくのごとき不純物は火が清めねばならず、読者の
赤面すべき場所で、作者が顔赤らめるは当然のこと。

彼女はここで一息入れ、われわれ一同をぐるりと見回したのだが、俺の考えでは、自分の優位を意識している様子だった。いやはや、われわれは目を見張ったよ。貴公は貴公なりの機知の定義を示そうとした。何か一言挟むためだが、度肝を抜かれ、言葉もなく畏まってしまったように映らないためだな。

だが彼女は、このような話題を貴公に任せるわけには行かないとばかりに、より肯定的な定義を同じ作家に求め、先程と同じ調和に満ちた声色と口調によって、次のようにきっぱりと明示してみせたのだ。

機知は、繁茂するブドウ蔓に似て、
美徳の支柱に結ばれて
揺るぎなく真っ直ぐ天を目指さぬかぎり、
たとえ、美しき葉振りやたわわな果房に恵まれるとも　〻
醜い姿を地に晒し、朽ちて果てるのがその定め。

あの会話のこの部分を思い出してくれるなら、また、われわれが呆然として互いに見つめ合っていたこと、そして、われわれが自惚れ心から、疑いもなく自分たちのものだと考えていた特徴から、われわれの会話がこのように排除されてしまうのを知った時、われわれはすっかり自信を失い、彼女に恐れを抱くようになったということを思い出してくれるなら、さらには、そんな回想を貴公がうまく善用してくれるなら、貴公も俺と同じ気持ちになってくれることだろうな。つまり、自分たちではそう思って得意になっていたわけだが、悪事を行うのにはそれほど才気は要らないということだよ。

結局のところ、あの会話以降ずっと、俺は次のような見解を抱いているのだ。華麗なボブ・ラヴレースから駄洒落好きの若僧ジョニー・ハートップに至るまで、俺が言葉を交わしたことのある放蕩児や道楽者すべてに見られる才気というのは、大抵の場合、厚かましいことやショッキングなことを、慎み深い者は赤面し、恥知らずは笑い出し、無知な者は目を見張るような、そんな大胆さで口にして憚らない点に存するということだ。

また、まことにお門違いとも見えるわけだが、俺がこれらの事柄を口にするのは何故だと思うかな。はっきり言って、他でもない、この天晴な女性の卓越した才能を例証するためだよ(同じあの夜の会話から示すことの出来る数多くのものの一つとしてだ)。人間の本性を高揚し、女性に威厳を添えることになる才能の数々だが、それらは、無礼に及んだ際のわれわれ一人一人に対してだけでなく、軽薄なパーティントンや、もっと野卑だが途方もなく偽善的なシンクレアに対しても、窘めるようなまなざし、また、不賛成の気持ちか

ら赤く染まった頬などにはっきりと示されていたのだ。そしてそこには、慎み深さばかりでなく、不快の念もたっぷり交じり込んでいたし、時々、必要に迫られた場合には（何しろ、われわれの一部の者は心臓がすっかり苔に覆われており、微妙な言い回しによる非難を感じとる感性などは超越してしまっているからな）、この上ない侮蔑の念も込められていたのだが、これには、自分の立派さを意識すると同時に、われわれの見下げ果てた無価値さを見せつけるような、軽蔑気味の同情心も入り込んでいたのだよ。

だとすれば、あゝ、ラヴレース、浅薄な冗談や笑止千万な下らなさ、また、罪人にとってさえもあまりに破廉恥なため、掛け言葉以外では言及し兼ねるような卑猥さに対し、本物の淑やかさ、本物の機知、そして、本物の慇懃さが勝ち優る姿というのは、この俺の目にさえも、どのように映ったことだろうか。また、思い返してみる時、今なおどのように映っていることだろうか。

それに、貴公もどこかで述べていたように(ア)、彼女の懲らしめの意図はすべて、そのまなざしによって率直に示されるのだ。それも、大抵の女性の場合のように、あまりにも明白で隠しようのない意味合いに対して無知を装って見せるような、そんな弱々しい形でではない。道を踏み違えた心清らかな者がこのような連中に引き込まれた際に加えられ、甘受されもした侮辱を、不躾に笑い興じる者一人一人に突きつけて見せるほど、憤りの気持ちに満ちているのだよ。

それほどの女性なのだぞ。それほどの天使なのだ。貴公が騙して手中に収め、欺いてやろう、堕落させてやろうと考えている相手というのはな。愛らしい娘さんじゃないか。自分がどのような状況に置かれているのかを、そして、何が目論まれているのかを知りさえすれば（今も考えているが、あの時にも考えたことなのだ）、このように恐ろしい立場を選ぶよりは、むしろ、進んで死のほうを選ぶことだろう。そして、彼女の身の上話は、もしも広く世間に知れ渡ることになれば、たとえわれわれの約束や誓い、申し立ての類いがいかなるものであれ、われわれの手中に身を投じてはいけないのだという点を、全女性に対して、どれほど効果的に警告することになるだろうか。

だが、親愛なるラヴレースよ、今一度懇願させてもらおう。貴公自身の名誉、貴公の一族の名誉、将来にわたっての貴公の心の平安、あるいは、貴公に対する俺の評価といったものを少しでも大切に思っているのなら（さらに強く貴公を魅了して当然という、あの眩いばかりの美点ほどには、節義によって心を動かされることがないかのように貴公は今なお装っているが）、説得に応じてほしいのだ。慈悲の心を忘れないでもらいたいのだ。それだけだよ。他でもない、われわれに共通に備わっている人間性というものを汚さないでほしいということだ。

貴公が冷酷非情になっているのも確かだが、彼女に不利な決断を続行するよう貴公を焚きつけているのが、あの家の破廉恥な連中であることは分かっているのだ。あゝ、賢明な麗人が（彼女自身の心には、無垢の慈悲心がたっぷり備わっているのだから）例の女たちをあれほど断固とした態度で突き放したりしなかったならと惜しまれるのだ。彼女もあの家に下宿したからには、もっと頻繁に連中と食事を共にしてほしかったと思うのだよ、彼女なら、一週間もすれば、奴らの正体は見破っていたはずだ。上辺だけの連中なのだから

(ア) 百六十六頁を参照のこと。

な。奴らにしても、ほんのたまにしか彼女に会わない場合、また、心構えをした上で会う場合とは違って、いつもそんなに守りを固めているわけには行かなかっただろうし、彼女のほうでも、悪に染まった場所ということで、あの家を逃げ出そうとしたことだろう。ただし、それだけ決意を固めている冒険好きが相手だからな。こんなことが分かると、もしかして、彼女の破滅を早める結果になっていたかもしれないな。

色恋沙汰に関して、貴公にやかましいところがあるのは承知している。だが、まったくの破廉恥女ではなくても、ただ見てくれだけに惹かれて貴公に惚れ込む女も何百人といるのではないのかな。女の中でも、節義を玩弄物のように見ている者たちに対しては、もしもそうしたいというのなら、貴公のほうでも節義を無視してやるのだな。だが、天使から奪い取ってはいけないのだよ。彼女自身の考えからすると、天使の特性と獣的な性質との違いをなすことになる、あの数々の純粋さはな。

情熱そのものに関して言えば、男の場合であれ女の場合であれ、心が貧しいほど、淫らになって行くものなのだ。貴公には、ラヴレース、堕落しているとはいえ、心が備わっているのだよ。それに、征服という目的よりは、むしろ準備段階での策謀に貴公は夢中になって（そして、誇りにさえして）いるのだ。

愚か者や狂人たちの生来の性癖が、われわれの目に浮かんで来はしないだろうか。肉体というのは欲の塊であり、われわれ自身、それ以上ないほどに愚かしく正気を失っている時には、こういったものの追及に最も熱を上げるのだ。この熱情が最高の賢者たちをどれほどの愚か者に変えてしまうものか、よく見ておくのだな。そんな者たちでさえ、この熱情のままに流されてしまうと、何とも女々しい泣き虫になってしまうのだ。ただの耄碌爺さんということだ。まったく永続性のない激情なのだ。何せ、仮にそれを愛と呼ばねばならないにしても（より適切な名称を用いるのは恥ずかしいからな）、愛が叶えられるということは、愛が満たされるということであり、そして、愛が満たされたということは、無頓着さが始まるということなのだよ。そしてこれが、一方の側での同意が他方の責務を増大させるような場合の通例なのだ。だとすれば、無理強いの後に生じるものとしては、悔恨の情を除いて他に何があるというのだ。

婚約期間中、いろいろと準備を進めるに当たっても、操を守ってきた恋人たちでさえ二人きりになるのを好むものではないだろうか。自分たちの浅はかな振舞いや、それにも増して愚かしい言葉遣いを子供にまで証言されてはと、恥じる気持ちがあるからだよ。この神聖視されている感情にしても、その高さの極みにある時でさえ、白日の下に晒されるのに適しているのだろうか。互いに心を許し、相手の願いを容れようと待ち構えている恋人たちも、その思いを遂げるためには、人目に付かない場所、闇の帳へと引き下がるのではないだろうか。そして、もっと下劣な対象で簡単に叶えられてしまうような、こんな卑しい感情に、最も高尚な感情を汚させておいて良いものだろうか。

貴公の悪辣な目論見に遅れが出たのは、悪事を働く器用さが「この件については、自分の気持ちを忌憚なく吐かせてもらうぞ。何しろ、俺としては、天使を目の当たりにしたわけだからな」貴公に欠けていたからというよりは、威厳に満ちた彼女の美徳によって、貴公の心に畏敬の念が吹き込まれたためではなかったのかな。予期されていた日を引き延ばそうとする貴公の計略や口実のいくつかについては、すぐにでも非難したい気持ちだ。陳腐で使い古された手だし、（貴公の意図を承知しているだけに、俺にとっては）お粗末なも

のだとな。また、そこから得られるものなどは何一つとしてないのだから、得意顔をするには、頼りにし過ぎている観もある、とだよ。とりわけ、メネルや例の塞ぎがちな婦人に関する件、それに、家具付きの屋敷の件がそうだ。

彼女も時々はそんなふうに考えたに違いない。そして、それらに関し、心の中では貴公を軽蔑したはずだ。さもなければ、貴公を愛して（恩知らずな男ではあるが）不運を嘆くことになるだろうし、見込みもない望みを抱くことにもなるのだろう。ただ、女性にとっては、彼女の身の上話を知った場合のことだが、これがまた警告の一つとなるのだよ。策略好きの男に一度身を委ねた暁には、どれほど貧弱な口実に満足しているふりをしなければならないのか、それを女たちに示してみせるわけだからな。

かつての貴公の口実がそうであったが(ア)、もしも試してみることだけが貴公の目的なのであれば、この美徳と用心の手本ともいうべき者を十分に試したのは間違いのないところだよ。ただ、貴公のことは熟知しているゆえ、あの当時、貴公があそこで手を引くようなことは期待するわけに行かなかったのだ。われわれのような類いの男性というのは、どんな女性に対してであれ、企みを抱いた時には、力及ばないために致し方のないもの以外には、いかなる制限をも自らの目的に加えたりしないものなのだ。貴公が、一つ優位を確保すると、次の優位を求めて歩を進めようとすることくらいは、俺としても承知の上だ。結婚生活に対して貴公が常日頃から反感を抱いていたのも、十分すぎるほどに分かっていたことだし、実際の話、試しこそが貴公の主眼だと主張していた例の手紙の中でも、彼女を同棲に引っ張り込みたいという希望を貴公は公言していたのだよ(イ)。

しかしながら、貴公の邪悪な策を推し進めるのに好都合な時間、場所、相棒、その他あらゆる状況に恵まれているというのに、貴公自身が頻繁に、そして、心ならずも、後悔の念に襲われていること自体からして、貴公にも納得が行くのではないだろうか。そんな厚かましい望みを抱く余地は有り得ないということだよ。だとすれば、貴公にしても、彼女を失うくらいなら結婚のほうを選ぶのだろうに、彼女が永久に嫌悪感を抱くよう、貴公のほうから仕向けているのは何故なのか、ということだな。

ただ、向こう見ずにも身体への試練を企てているのであれば、また、その際には、彼女の振舞いに応じて報いようと、心の底から決意を固めているのであれば、彼女をこの邪悪な家から別の場所へ移してくれるよう、切にお願いしたいのだ。それでこそ、彼女のことも、また、貴公の良心のことも、公正な扱いが可能になるわけだよ。迷える美しき麗人も今では、彼女にとってはより幸福な見通しと思われているものに完全な信頼を寄せているのだから、貴公も心配する必要はないのだ。彼女が貴公の元を逃げ出そうとするとか、あるいは、自称「手練の手際」とやらを貴公に使わせることとなった、例のハウ嬢の陰謀に頼るような気持ちを彼女が起こす、といったことについてはな。

だが、この件に関する貴公の決意がどのようなものであっても、また、仮に俺の便りが間に合わず、貴公が実際に仮面を取り去ってしまっているとしても、万人の心からの呪いを、また、将来に向けては、貴公自身の心の咎めを避けたいと願うのであれば、たとえ一時間たりとも、彼女をあの極悪非道の女の手に委ねるようなことを（彼女の怒りがどれほ

(ア) 第三巻の手紙十四を参照のこと。 (イ) 第三巻の六十五頁を参照のこと。なお、同じ巻の手紙十二、十三も参照いただきたい。

ど大きいものだとしてもだよ)、貴公の策略の一つにしてはいけないということだ。あの女は、仮にもそんなことが可能ならの話だが、改悛の情に乏しいという点では貴公自身にも優っており、また、抵抗する者の気力を挫き、悪事に通じていない心を完全に堕落させることを仕事にしているわけだからな。あゝ、ラヴレースよ、ラヴレース、この忌まわしい女なら、どれほどたくさんの恐ろしい話を娘たちに語り聞かせてやることが出来るのだろうか。また、クラリッサのような女性の物語を加えて、犯罪者のリストを膨らませようというのだろうか。

ただ、これは言わずもがなであったかもしれない。悪魔さながらの男とはいえ、貴公にもここまでは出来ないのだよ。慈悲心にとっては勿論のこと、貴公の邪悪なプライドにとってさえ、こうも大きな不面目をもたらす勝利であれば、貴公とて楽しむわけには行かないはずなのだ。

絶え間なく眼前で繰り広げられている陰気な光景のために、俺がいつもよりは厳粛な気持ちになったのだと考えるのなら、多分、見当はずれにはならないだろうな。だが、そこから引き出される推論としては(俺が以前の暮らしぶりに戻るとしてもだ)、自らの不幸によってもたらされるのであれ、他人の不幸に促されるのであれ、いずれにせよ、冷静な反省の時がやって来るたびに、疑いもなくわれわれはいつも同じ考え方をするだろうということ以外にはないのだ。仮にも考える力があり、また、その時間がわれわれにあるのであればな。

われわれ二人のどちらにしても、来世を信じないほどの愚か者ではない。あるいは、実際の生き方がどうであれ、われわれがこの世に生まれ落ちたのは偶然のことであり、その目的も、力の及ぶかぎりの悪さをすることに他ならない、などと考えるような馬鹿でもない。そして、次のように告白しても、俺は恥とは思わないのだよ。つまり、俺の哀れな叔父貴は、いつも付き添ってくれている大層立派な牧師が席を外すと、祈祷文を読み聞かせるよう俺に頼むのだが、俺のほうではその祈りに、自分自身のための文句を一つ二つ忘れずに挟んでいるということだよ。

もしも俺のことを笑うようであれば、ラヴレース、その嘲笑は貴公の信仰心というよりは、むしろ、行いのほうに相応しいことになるだろうな。「悪霊どももそう信じて、おののいている」(六七)のだよ。悪霊以上に破廉恥な真似が出来るというのかな、貴公には。

それからここで、哀れな我がご老体のことについて、一言付け加えさせてもらおう。一日にわずか半時間で良いから、貴公にも立ち会ってもらえたならと思うことがよくあるのだよ。仙痛、結石、それに、医者のメスが一緒になって引き起こす、極度の苦痛に苛まれながら、放蕩の末の生命の残り火が消え去って行くのを見てもらうためだ。また、最後の審判へ呼び出されるのを今か今かと待っている人間がこの上ない苦悩を込めて語る、過去の暮しの自堕落さを嘆く言葉に耳を傾けてもらうためでもあるのだよ。だが、叔父貴の六十七年の生涯で己を責めるべきことといえば、すべての告白を聞いた上でも、貴公と俺がこの七年間だけで犯した数々の極悪非道の大罪の半分にも達しないのだ。

これまで認めた事柄すべてについて、俺の衷心からの言葉として、真剣な考察を加えてもらうよう願いながら結びとする。

誓って君の友

ジョン・ベルフォード

手紙　五十七
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月六日　火曜日　午後

この腹立たしい結婚許可証を手に入れるには、なおも乗り越えなくてはならない難題がある。こういった教会関係の弁護士や裁判所に対しては、これまで常に反感を持っていたわけだが、今後とも憎しみを抱くことになるだろうな。

ところで、ジャック、たとえ勝利が確実ではないとしても、俺には逃げ道があるのだよ。だが、待ってくれ。貴公の召使が手紙を携えてきたところだ。

∴　∴

べらぼうに長い手紙じゃないか。物語風でもないのにな。またぞろ、令嬢の肩を持とうというのだな。引っ込んでいてもらおう、変人め。この重大局面にあって、俺に影響を与え得るどのようなことを貴公は筆に出来るというのだ。それに、事を進めるに際し、貴公にとって話す必要のある事柄すべてを発言させてやったのは、この俺ではなかったのか。

∴　∴

だが、もう一度貴公の挑戦に応じることにしよう。

俺の計略のいくつかは（貴公に言わせると）「陳腐」で「使い古し」で「お粗末だ」というのだな。例の未亡人を巻き込んだのが特にそうだというのだな。我慢ならないぞ、貴公には。あの趣向は当時、それなりの効果をもたらしたのではなかったかな。引き延ばしのためにはな。それに、あの頃の俺には恐れるに足るだけの理由があったのではなかったかな。この家に反感を抱いて当然な事柄を令嬢が見つけ出すのではないかとだよ。また、彼女自身の家の準備が間もなく整うのだという思いを時折は抱かせながら、先へ先へと誘ってやるのが（こちらの意図が意図だけに）、正しいことではなかったのかな。それまではこの家に残ろうという気持ちを促すためにもだよ。

「陳腐」で「使い古し」で「お粗末だ」というのだからな。こんな口を利いているようでは、貴公も愚か者だよ。裁きを下す柄じゃない。俺は心に秘めていた目的を事を進めながら貴公に明かしてきたわけだが、そんな愚かな真似をせず、成り行きによって謎の説明がつくまで、すべてを内緒にしていたとしたら、何が彼女の身に降り懸かろうとしているのか、令嬢は勿論のことだが、どうだろう、貴公のほうでも、実際に事が起こるまで、察しをつけるなんてことはとても出来なかったのではないだろうかな。また、この場合には疑いもないのだが、「俺を愛して不運を嘆くことになる」だの「見込みもない望みを抱く」だのと、彼女の信じ易さを咎めるような差し出がましい態度に出る代わりに、彼女の気難しさやあまりにも堅苦しすぎる点を非難する気持ちのほうが、貴公としてもはるかに強かっただろうということだよ。それに、ひとつ言っておきたいのだが、もしも彼女が俺の望むとおりに愛してくれていたなら、俺の目論見をあんなにも懸念するようなことは、おそらく有り得なかっただろということだ。それに、用心を促すハウ嬢の言葉に、いつものこ

とではあるが、彼女があんなに簡単に動かされるようなこともなかったはずなのだ。もっとも、彼女に対しては、俺の人柄全般が俺の有利には働いていなかったのだがね。

だが、貴公の意見によると、俺の計画の優秀性の中心をなすあの単純さゆえに、俺は酷い目に遭っているということだな。いかなるからくりも俺には不要なのさ。不自然な奇想も一切目指しはしないのだ。すべてがまったく自然であり、人間の本性の赴くままに、その本性を利用するのだよ。そして、俺の趣向も単純そのものだから、実際のところが分かると、貴公にも、貴公でさえも同じものを考え出すことは出来ただろうと、そんな思いを抱いてしまうほどなのだ。それに、実際、貴公も認めているように思われるのだよ。俺の趣向を軽視するのは、俺がそれらについて前もって貴公に明かしていたからだ、とな。恩知らずなだけではないのだ。違いの分からない男でもあるのだよ、貴公は。

だが、要するに、自分の弱点を知らずにいるなどとは思ってもらいたくないのだな、俺としては。前に話したことがあるが、有能なことでは右に出る者もいない戦略家にとっても、用心深い敵の動きによって自らの行動を律しなければいけない場合は、自分は何をするつもりなのか、自分には何が出来るのか、それを口に出すのは難しいことなのだ(ア)。このような考えに十分重きを置いてくれるなら、俺が何度も前進したり後退したりするとしても、そして、そのいくつかは不注意な観察者には無用にも見えるわけだが、貴公も不思議には思わないことだろう。

だが、俺も旅の目的地が見えるところまで来ているのだから、大雑把にではあるが、この問題について貴公との議論に入ることにしよう。

この手紙では、貴公も生意気なことをたっぷり語ってくれたが、そのうちの一部は俺自身から得たものだし、他の件も、俺としてはすでに承知の事柄だよ。

この魅惑の乙女への賛辞として貴公が述べていることのすべてにしても、語っても語り尽くせないその話題に関し、俺が口にし、また、筆にもしてきたものには及ばないのだ。

彼女の真価となっているあの美徳、あの抵抗こそが俺の刺激剤なのだ。そのことについては、もう二十回も繰り返し話してあったのではないのかな。

あの娘たちの間では、俺のことを悪魔と称しているわけだが、策謀の点を除けば、俺のどこに悪魔的なものがあるというのだ。俺が目指している目的の点では、他の者たち以上に悪魔的とは思わない。何しろ、目的を達成したところで、それは誘惑の一つにすぎないわけだからな。おまけに、その間、多くの誘惑を重ねるという罪を、おそらく免れていることになるのだよ。

彼女の用心深さを別にすれば、今度の一件にどんな異常さがあるというのだ。俺としては、陰謀と戦略を大いに好むとはいえ、より少ない苦労で、また、より軽い罪で目的を遂げたかったのではないかと、貴公はそんなふうに考えるのかな。

好きなだけ悪事を働くことの出来る人間というのは、言わせてもらうが、俺よりももっと悪党なのだよ。イギリス中のどんな放蕩児でも構わないから、ひとつ尋ねてみたいものだな。目的を遂げようと決意を固めた後、果たして、俺のように長期間に亘ってその件にかかずらったりしたのだろうか、あるいは、俺に負けないほど強い自責の念を抱いたのだろうか、とだよ。

(ア) 第三巻の百三十九頁を参照のこと。

仮に放蕩児の一人一人が、否、男という男が挙って俺のように腰を下ろして、自分の頭とか心とかに浮かぶ事柄のすべてを書き留め、俺と同じ率直さと誠実さで自分を咎めるようなことになれば、俺も悪党の大群に取り囲まれることになり、立派にこの顔が立つようになるというものだよ。

女性と二人きりの状態に置かれながら、攻撃の一つも仕掛けないようでは、その女は侮辱された気になるものだ、というのをモットーにしている者も中にはいるのだよ。こういう手合いこそ、俺以上のワルではないのかな。そういう連中は女性全体のことをどのように考えているのだろうな。

女性の弁護をさせてもらおう。女性のことは心の底から愛しているのだよ。もしも、われわれよりも年配の同志が、自分たちの主張を正当化するような普遍的根拠があると考えるようであれば、きっとひどい相手と付き合ってきたに違いないのだ。あるいは、女性の心を判断するのも、自らの心に照らしてのことに違いないのだよ。露骨で唐突な誘いに遭っても、蝸牛よろしく自分の殻の中に閉じ籠もろうとしないとしたら、そういうのは莫蓮女に決まっているのだ。慎み深い女というのは生まれつき冷たく、打ち解けず、引っ込み思案なものなのだよ。放蕩児たちが想像しがちなほどに、そんなにも深く、そんなにも速やかに心を動かされてしまうようなことは有り得ないのだ。少なくとも、相手の名誉心や口の堅さにある程度の信頼を寄せられるようにならなければ、自分の内部に欲望が芽生えて来て、男の情熱の炎を煽り立てたり、それに応えたりするなどということは、まず考えられない。俺自身についていえば、女の前ではいつも上品にしてきたのだ。確信が得られるまではな。それに、小さな無礼を見過ごしてもらえるのが分かるまで、また、俺の人柄を知った上で、俺を避けたりしないことが分かるまでは、決して大きなやつを試みたことはなかったのだよ。

神々しいばかりの我がクラリッサには俺も面食らい、遊びごとでは済まされなくなってしまった。一時は、脅しを掛けて抑えつけてやろうと思ったし、別の時期には、愛情によって、つまり、俺が「シーソーにも似た恋の手管」と称してきたもので圧倒したいと思ったのだ(ア)。そして今では、その二つに付け加えるものとしては不意打ち以外にないし、後は、その三つが全部揃うと何が出来るのか、そいつを調べてみるだけというわけだ。

それに、いいかな、俺が愛と復讐の計画を進めたとして、だれの財産を侵害することになるというのだ。彼女に対する権利を有する者は、その権利を放棄したのではなかったのか。連中は故意に彼女を危険に晒したのではなかったかな。だが、連中は知らねばならないのだ。これほどの女性は、誘惑の手を差し延べる機会に恵まれた数多くの男性から、正当な獲物と見做されるのだということをな。それに、たとえ連中が彼女のことをこれほど残酷な形で晒し者にするようなことはなかったとしても、独り者の女ではないのか、彼女は。こんなことを、ジャック、貴公に話す必要はあるのかな。つまり、われわれのような手合い、その最善の者たち［最悪の連中は何事にも拘泥しないものだ］の考えでは、他人の女房のことはその夫たちだけに任せ、自分たちのほうではその姉妹や娘、被後見人や姪などで手を打つような場合、それは女房持ちの男に対する大きな恩恵であり、非常な好意と見なしているということだよ。内省的な心を持つ者にとって、こういった考え方はショ

(ア) 第三巻の五十六頁を参照のこと。

ッキングなものに違いないが、ただ、貴公も承知のとおり、何千人という者たち（この連中は、手中にした女のほぼ全員に対して、俺が取ってきたのと同じような、寛大な態度は取らないはずだ）の考え方がこうなのであり、また、機会の許すかぎり、そして、度胸のあるかぎり、頻繁に実行されているものなのだ。そのような連中には、従って、俺を咎める権利はないということだよ。

貴公は、彼女の弁護のためだが、彼女が身内の者たちから受けた仕打ちのことを繰り返し持ち出している。しかし、この申し立てに対しては、すでに何度となく答えて来たわけだから、彼女が苦しんだのは俺のためではないのだということ以外に、今はもう何も口にする必要はないだろう。彼女は飽くことを知らない兄と、妬みに狂う姉の悪意の犠牲にされたのであって、あの二人は、他の身内に対して彼女の評判を台無しに出来る機会をひたすら待ち続け、これを最初の機会として捉え、屋敷から彼女を追い出したのであり、たまたま、彼女が俺の腕に転げ込んだということではなかっただろうか。それがどれほど彼女の意に反したことであったか、これは貴公も承知のはずだ。

彼女自身の罪状について言えば、愛というものに対し、また、俺に対しても、彼女が釈明すべき点のいかに多いことか。あの忌まわしいソームズを拒絶したのも俺への好意からではないと、二十回、そして、二十を二十倍した回数、俺に向かって彼女は語っていなかっただろうか。そして、同じ回数、彼女は申し出たのではなかっただろうか。あの無慈悲な連中がそんな条件で彼女を受け入れるならの話だが、独身を守るために、俺とは手を切るということをだよ。貴公の愚かな同情心のために、俺は何度同じ台詞を繰り返さねばならないというのだ。

もう少し時間を遡ってみよう。ハーロー邸の界隈や、「白い牡鹿亭」とわれわれが呼んでいたニールの小さな店で、彼女の誇らしげな動きを追い掛けていたその間中、俺はこの尊大な美女からどれほどの苦しみを味わったことか。貴公にはそれが忘れられるとでもいうのだろうか。あの時俺は、約束してあった面会をすっぽかした件で、彼女への復讐を仄めかさなかっただろうか（また、そうするのが当然ではなかっただろうかな）。

あゝ、ジャック、彼女の父親のパドックに続くあの吹き曝しの雑木林の中で、俺がどんな夜を過ごしたと思うのだ。下着と鬘は凍りつき、手足はすっかり感覚も失せていた。かろうじて指先に暖かみを感じ、やっとペンを握っていられたのだが、それも、皮が剥けるほど両手を擦ったり、震える脇腹に叩きつけたりして得られたものなのだ。白く霜を置いた苔に片膝をつき、もう一方の膝の上で書き物をしたわけだが、あのぎこちなくなぐり書きしたものが書き物などと呼べるならの話だ。書き終えた頃には、俺の両足は根が生えたみたいで、実際のところ、数分間はこの身を支えることも出来なかったのだ。あの時、俺の心臓を活動させていたのは、愛と激しい怒りの気持ちだったわけだが［そして、愛と激怒にのみそれが可能だったのだ］、さもなければ、実際に味わった苦しみよりもはるかに大きな苦しみを、俺は被っていたに違いないのだよ。

鬱々たる思いで戻ると、俺の認めた文面はいかなるものであったか(ア)、俺は貴公に知らせた。また、後には、その手紙への彼女の残酷な返事も見せてやったな(イ)。あの頃は、ジャック、貴公も友を愛してくれており、苦しみ悩む貴公の哀れなラヴレースに同情を寄せ

（ア）第二巻の八十九頁を参照のこと。（イ）同じく、九十一頁を参照のこと。

てくれたものだった。蔑みを受けていた愛の神ですら、当時は、約束だけの美女に向かって俺が投げつけた復讐の脅しを是認していたのだ。もっとも、俺が力を握った今では、その神も貴公の側に与し、俺が悩み苦しんだ夜のことは忘れ去って、彼女の擁護者となってしまっているのだよ。

いや、敬慕すべき復讐の女神、我がネメシスを俺の元へ遣わされたのも、神ご自身ではなかったのか。そして、両者が力を合わせ、正しく次のとおり俺に誓わせたのだよ。ハーロー一族のこの女神のごとき娘をたぶらかし、俺との同棲へ引きずり込むまでは、絶対に息を抜くまい、とだよ。それも、誇り高い一族全員を向こうに回してだ。

この誓いのことは、貴公も忘れるわけに行かないはずだ。今この瞬間も、貴公の顔が目に浮かぶのだ。悲しげにして見せたあの時のままでな。俺への同情から、貴公の険しい顔は燃え立つように思えたよ。唇は歪み、額には皺が寄っていた。顔全体も間の抜けた円形から、ぞっとするような楕円形へと引き伸ばされ、一つ一つの筋肉が、悲嘆に沈む表情を完成すべく力を寄せあっているのだ。そして貴公は、俺が漏らした誓いの言葉に対し、アーメン（六八）以外に一語として言葉を発することも出来ずにいたのだよ。

そして、その後俺様は、この誓いを捨て去る気になるような、はっきりとした愛情、好意、あるいは信頼を、どれほど彼女から寄せてもらったというのだろう。

俺としても、以後それを繰り返すような真似は確かにしなかったし、実際の話、長い間忘れたがってもいたのだよ。ところが、同じ過ちを繰り返されているうちに、とうとう前の記憶が蘇ってきたというわけだ。今はそれに加え、つい先頃手に入ったのだが、ハウ嬢から来た何通かの手紙の、悪意に満ちた文面のことがあるのだよ。貴公の友に対する忠誠心と矛盾しないどのようなことを、あの反逆者のために言えるというのだ、貴公は。

天分や体質というものは、人それぞれなのだよ。ハンニバルは戦術の父と呼ばれたわけだが、仮にハンニバルが民間人であって、その深謀遠慮に長けた頭を女性に向けていた場合、あるいは、俺が将軍で、異国の風土に生まれ暮らしてきたがゆえに敵と見なして当然と思われる、そんな男どもを相手にこの頭を働かせた場合、ハンニバルのもたらす害のほうがより小さく、俺の行う害はより大きかったことだろうな。そこが違うところだったはずなのだよ。

世界のどんな君主にしても、善人ではないとしたら、そして、好戦的な気質をしているとしたら、俺の千倍の被害はもたらすに決まっているのだ。何故だと思うかな。より大きな害を行う力を有しているからだよ。

おそらく、貴公はこう言うだろうな。正直者は害を行う力を持とうと願ったりはしないものだ、とな。俺のほうからも、持つべきではないのだと言っておこう。何しろ、仮にもそんな力を手にしたりすると、気儘さと邪悪さとを合わせ持った人間になってしまうのは間違いのないところだからだよ。

それじゃあ、俺がそんなにも飛び抜けてワルだとされるのは、一体、どの点でのことなのかな。

数々の策を弄する点でだよ。その策に込めた俺の目的のことは言わないまでもな、と貴公は言うのだろう（俺の言葉を繰り返すだけの男だからな、貴公は）。

念頭を占めている激しい感情を抑えるというのは、俺とて同じことだが、だれにとっても何と難しく思われることだろう。三つの感情が俺の心を捉えており、それらが代わる代

わる俺の気持ちを揺り動かしているのだが、いずれも最高の力を備えているものだ。愛と復讐、そして、野望、あるいは、征服欲だよ。

トムリンソンと伯父を使ったこの趣向に限って言えば、おそらく、貴公は陰険なものと考えているのだろうが、罪がないというこの令嬢たちのほうで、タウンゼンド夫人のための夫捜しに俺を駆り立てるような真似をしなかったなら、あれは用いずとも済んでいたものなのだよ。従って、あの工夫はただの予防策にすぎないのだ。策の裏をかかれて、俺が黙っていられるとでも思うのかな、貴公は。それに、まさしくこの策によって、大きな害を免れることにもなるのではないのかな。まさか、俺がタウンゼンドの水夫どもにあの令嬢をおとなしく譲り渡すなどと、貴公も考えたりはしまいからな。

「われわれのような類いの男性というのは、力及ばないために致し方のないもの以外には、いかなる制限をも自らの邪悪さに加えたりしない」みたいなことを貴公は語っているのだが、しかしながら、この令嬢が俺の手中にあることも承知しているのだ。自らの申し立てを覆すためではないとしたら、一体全体どういうつもりなのだろうな、貴公は。

貴公に言わせると、「この美徳の手本とも言うべき者を俺はもう十分に試している」ということだな。そうではないのだよ。まだ何一つ試してはいないのだからな。これまでやってきたことのすべては、〈試し〉に向けての準備なのだ。

だが、その試しに際して俺が用いるかもしれない手段のこと、そして、俺の真実性を貴公は気に掛けている。

愚か者めが。自らの真実性を犠牲にすること以外の方法で女を騙したような男が、かつていたとでも思うのか、貴公は。でなければ、その男が「騙している」などとどうして言えるのかな。

手段に関してだが、即座に同意してもらうことを俺が期待しているなどとは、貴公も思うまい。俺が望みを寄せている主なことといえば、屈しながらも反抗して見せる、その姿に尽きるのさ。それがなくては、誓っても良いが、どのようなレイプがこれまでに企てられたにせよ、遂行されたものは一つとしてないことになるのだ。一対一の関係ではな。そして、もしもイングランドの善き女王ベス（六九）がご存命中で、お考えを求められたとしたら、俺と同じお気持ちであることを言明なさったことだろうな。

この問題に関するわれわれの意見はどのようなものか、女性が承知しておくのも悪いことではあるまい。俺は女性に警告を与えるのが好きなのだよ。俺以外の男には、女相手に上首尾を収めてもらいたくないのだ。前に一度話したことだが、俺は「道楽者ではあっても、道楽者の味方というわけではない」のだよ(ア)。

貴公に言わせると、俺は常日頃から結婚生活を嫌っていたということだ。そして、貴公の言うとおりなのだよ。しかしながら、「この令嬢を失うくらいなら、俺も結婚に踏み切るだろう」と貴公は言っているが、それもまた同じくらいに本当のことなのだ。そして、彼女の操を試して不首尾に終わった場合、彼女は俺のことを永遠に憎む、と貴公は考えるのだな。気をつけることだ。注意するのだよ、ジャック。俺に警告していることになるのが分からないのかな、貴公には。征服への決意を固めるのでなければ、試したりはしないように、とだよ。

（ア）第三巻の六十四頁を参照のこと。

次の点は付け加えておかねばならない。これまでの俺のように、何事についても腹蔵なく筆にしてきたのは間違いだったと、少し前から確信するに至っているということだ（令嬢を合法的な形で俺のものにするというのであれば、なおさらそうだ）。というのも、貴公宛に認めた手紙のことごとくが、俺自身に対する起訴状になっていたのではなかっただろうか。その点に関しては、一面では己の虚栄心を呪うことになろうし、今後は自制することになるだろうとも思うのだ。何しろ、まったくもって差し出がましいことをやって見せるのだからな、貴公も。

貴公の主張する事柄の多くのものを、有徳の士は力説するかもしれないということ、その点は俺も認めよう。しかし、誓って言うが、貴公の口からでは、それがずいぶんとぎこちなく聞こえるのだよ。それに、貴公も気づいているはずだが、貴公が筆にしている点すべてに対して、俺としては、われわれが長きに亘って支持し、実践して来た処世訓に基づいて返答することも出来るのだということだよ。先に挙げた適例からも、そのことは分かってもらえるだろう。

それに、是非とも貴公の考えを聞きたいのだが、ジャック、俺が貴公宛に、この件に関して一切筆にしていなかったとしたら、また、自らを責めることが決してなかったとしたら、十年間に亘る同棲生活の後に、俺の経歴と我が愛しの君の身の上話の概略は、果たして、以下に記すもの以外のどのようなものになっていただろうか、ということだよ。

〔女たらしとして悪名の高いロバート・ラヴレースは、比類なき美質に恵まれた若い淑女クラリッサ・ハーローに対し、恥ずかしからざる形で求婚する。財産に関しては、両家共に問題となる点は見当たらない。

励ましを受けた後、氏は気性の激しい令嬢の兄に侮辱されるのだが、この人物は縁談に反対することが自らの利益につながると考えているのであり、また、最後には氏に決闘を申し込み、そのつまらない命を氏に見逃してもらう羽目となる。

氏が見逃してやった命であるにも拘らず、あたかも、氏がその命を奪い去ったかのように、一族の者たちは激怒し、氏に対し人身攻撃を加え、若い淑女に対しては、嫌悪の情を催させるような求婚者を見つけ出してくるのである。

強制された結婚を避けるため、やむなく令嬢はある行動に踏み切ることとなるが、その結果、ラヴレース氏の保護にその身を委ねざるを得なくなる。

しかしながら彼女は、氏への気持ち一切を否認し、永久に氏と手を切ることを繰り返し申し出るのである。もしも、一族の者たちがその条件で彼女を迎え入れ、忌み嫌っている男の求婚から彼女を解放してくれるのなら、というのである。

感情が激しく、一部の者によると、極めてプライドも高いというラヴレース氏は、この点からしても、彼女への義理はほとんどないものと考えている。また、生来、結婚を好んでおらず、彼女の身内を憎むべき十分な理由もあることから、氏の言う「信義に基づいた暮し」を共に送ってくれるよう、彼女の説得に努め、策略や手管、計略を用いることにより、ついには彼女を説き伏せるのである。

氏は他の女とは決して結婚しないとの決意を固めており、彼女が氏の姓で呼ばれることを得意に思っている。二人の争点となるのは、精々が教会での祭式の件のみであり、彼女に対し、氏は当然の愛情をもって接しているのである。二人の結婚に疑念を挟むのは、彼女のあの高慢な身内だけであり、氏としても、それは望むところなのである。毎年一人ず

つ、愛らしい男児を授かり、増大して行く家族の豪奢な暮しを支える財産にも恵まれている。父としては思いやりに満ち、友としては常に心暖かく、寛大な領主にして、給金の支払日は遅滞なく守っている。しかし、おそらく時には、新しい対象に熱中することもあるだろうが、それは、氏の魅力溢れるクラリッサの元へと戻り、以前にもまして大きな喜びを味わうためなのである。氏の唯一の欠点は女性に目がないということであるが、その病にしても、女性たちに言わせるなら、いずれ自然に癒えるものでもあり、これまでのところ、女遊びのために約束を反古にするようなことが一切ない点は弁護に値しよう」といったところだよ。

　このすべてについて、世間の通り相場からするなら、一体どこにひどく大きな不都合があるというのだ。

　ひとつ断言しておこう。我が大目的へ向けての進捗状況に貴公の興味を引きつけておかなかったとしたら、今回の一件が呈する姿よりもさらにひどい経歴を背負った人間が、何千人、何万人といるということだよ。それに、貴公も承知のはずだが、囲った女たちを俺がどんなふうに扱ってきたのか、その様子に関してジョゼフ・リーマンに与えた説明というのは、ほぼ事実に即したものなのだ(ア)。

　俺を糾弾することに貴公は熱を上げているが、俺が同じくらい真面目に自己弁護に努めたならば、他の論拠や所見、そして、比較対照を用いることによって（人間の善悪はすべて相対的なものではないのかな）、貴公を納得させることも出来るだろう。俺も性格が率直なゆえ（貴公一人を相手に筆を執っているのだが、俺の心の奥に秘めた秘密ことごとくに貴公は通じているわけだからな）、事の顛末を語るに当たって、しきりと己を咎めがちになるのだよ。しかしながら、話を進めて行くうち、自己弁護の言葉を多少は呟くこともあるだろう。もっとも、放蕩に耽ったことのない他の者で、そこに少しでも重要性を認めるような人間は恐らく一人もいないだろうがね。そして、俺に投げつける石を拾うべく身を屈めようとする何千もの者たちに対しては、次のような忠告を与えることだって出来るのだよ。つまり、「汝ら自身を支配する感情がいかなるものであれ、それが、小生の場合にも劣らぬほどの悪事へと汝らを急き立てることのなきよう留意すべし。偶然にも、いくつかの点において汝らが小生に優るとしても、その他の点において劣ることのなきよう留意すべし。また、男には欺かれぬよう揺り籠の中から警護を固めてきた乙女を誘惑することよりも（そして、その後の面倒も見てやるのだが）、さらに広く悪影響を及ぼすこととなる諸点についてもまた然りである」とだよ。さりながら、俺にしても、自分自身の愚行に対しては、この過ちを軽視するほど片寄った見方をしているわけでもないのだ。ゆっくりと思いを巡らす時にはな。

　乗り掛かった船ということもあるから、もう一つ真面目な話を付け加えておこう。俺の場合、女性への愛着心が極めて強いわけだから、女性に受け入れてもらうには、高潔だとの評判が遍く求められているのだということに気づいていたなら、女性関係での自分の品行については、これまでよりははるかに大きな配慮を行っていただろうということだ。

　要するにだな、俺としては十分に承知しているのだよ。計画的に企んだ悪事に耽ったためしはなく、この天晴な娘の見事さを考慮に入れているような、尊敬に値する正直な心の

(ア) 第三巻の百七十二頁を参照のこと。

持ち主ならば、貴公と同じくらい俺のことを知るに至った場合には、きっと非難を投げつけるだけでは終わらず、俺を忌み嫌うことになるだろうし、また、そうするに決まっているということをだ。しかしまた、生命に関わる厳しい試練や誘惑がどのようなものか、いまだかつてそれを知らないという男ども、また、女どももそうだが、そんな連中からの非難については、避けられると嬉しく思うことだろうな。つまり、企画の才に恵まれない連中、意志というよりも勇気を欠いている連中、そして特に、俺も秘密を守ってきたし、守ろうと願ってもきたわけだが、ただ俺よりも巧みに秘密を守ったにすぎないという、そんな連中からの非難のことだ。こういった除外が認められることになれば、おそらくジャック、俺を有罪とする罪状一つに対し、無罪となる罪状はその十倍に上ることだろう。俺は何度となく言っていたのではなかったかな。人間の本性はならず者なのだとな。

∴　∴

貴公への手紙は差し控えることにすると、俺は先のほうで脅してしまった。だが、あまり気に留めないでほしいのだ、ジャック。筆を進めなければならんし、そうしないではいられないのだよ。

手紙　五十八
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

水曜日　夜十一時

本当だぞ、ジャック。昨日の手紙では認めようとしなかったが、貴公のたわごとのせいで、俺もほぼ駄目かと思っていたのだよ。以前から良心は貴公の側に傾いていたこともあるからな。だが、再び自分を取り戻せたように思うのだ。

計画は決行寸前になっている。俺の仕掛けた地雷をすぐにも爆発させられるところに来たのだよ。女どもと俺の間で、万事に亘って合意が出来ている。でなければ、貴公が俺の目論見を挫いていたのは確かだと思うな。

一、二時間後には起こるはずの事柄につき、前もって数行認めておこう。時間のあることだからな。それに、俺は時をおかずに書き記すのが大好きなのだよ。

われわれはすこぶる幸せだった。二人共々、快適な日々を何日過ごしたことだろう。この二時間で、一体どのようなことになるのだろうな。

我が魅惑の君の傍を離れたのは（非常に不本意だったのだが、三十分前のことだ）、書き物や読書のため、夜通し起きているようなことはしないとの約束を得たからだ。というのも、会話があまりにも心を捉えて放さなかったものだから（話し合いの間中、俺の態度というのが、彼女も認めるところだが、彼女にとって確かに快いものだったのだ）、彼女がすぐに引き下がって休むというのでなければ、さらに後一時間、それまでの楽しかった時間に追加をしてくれるよう、俺は言い張っていたのだよ。

彼女は時折そうしているのだが、書き物とか読書とかで真夜中まで起きていられたのでは、俺の目論見は不発に終わっていたことだろう。その点は、俺のささやかな企てが明ら

かになるにつれ、貴公も気づいてくれることだろうがね。

∴　　∴

何だ、何だ、今度はどうしたというのだ。跳ねっ返りの悪党めが。俺を窒息させようというのか、貴様は。

俺の心臓に語りかけていたのだよ、ジャック。あの時には、心臓が喉元まで飛び上がっていたのだ。それで、一体何のせいだと思うかな、この有り様は。内気と称しているこの女どもときたら、男が標的に近づいたつもりになると、えらく心を掻き乱してくれるというわけだよ。

∴　　∴

準備は万端整っているのか、ドーカス。我が愛しの君は、俺との約束を守ってくれたのかな。大波にも似たこの胸の高まりは愛によるところが大なのか、それとも、恐れからくるものなのか　…　そのいずれが一番大きな部分を占めるのか、どうしても俺には判じかねるのだ。彼女の懸念が目を覚ます前に　…　彼女の雄弁さが発揮される前にモノにすることが出来さえすれば　…

手足が　…　何故こんなにピクピクするのだ。今の今まで、あれだけ固く組まれていた両膝が、何故こんなに緩んでしまうのだ。このように、膝小僧がぶつかり合うのは何故なのだ。筆を進めるのを二度拒んだこの震える指は、あの困難を極める瞬間に臨んで、役に立たなくなったりしないだろうか。

もう一度言おう。これだけ痙攣が起きるのは何故なのだ。何のためなのだ。この企てが結婚という結末を迎えたりしてたまるものか。

だが、結果のほうは、今の今まで思い浮かべていたのよりも重大なものとなるに違いない。我が愛しの君の運命、そして、俺自身の運命が、これからの二時間の成り行き次第というわけなのだ。

手を引くことにも　…

∴　　∴

お静かに、あゝ、聖処女よ。そなたの眠りの静かにして安らかならんことを　…

ここで今一度、我が友ベルフォードの手紙に目を向けることにしよう。そなたにはフェアプレーで臨みたいのだ、魅惑の君よ。そなたの弁護人がそなたのために弁じようとしている点を、今一度熟読してみることにする。説得力を欠いた論拠ではあっても、俺のこの精神状態なら、効き目があるはずだ。

ところで、どうしたのだ。何があったのだ。俺も何という陰険な　…　だが、騒ぎは鎮まって来ている。何という陰険な臆病者なのだろう、俺は。それとも、臆病風に吹かれているところを取り抑えられたということなのだろうか。英雄にしても、一時的に恐怖に襲われることはあるのだからな。臆病者がそれなりの勇を奮う時もあるのだ。それに、操の

堅い女すべてにとっても、きわどい瞬間というものはあるのだよ。我がクラリッサだけは別にしてもな。

それにしても、嵐の最中に、かくも冷静に内省を楽しむとはな　…　またもや混乱に陥っているところだ。

何なのだ。どこなのだ。どういうことなのだ。

愛しの君は無事だろうな。

あゝ、我が最愛の君よ、あまり乱れた姿で目を覚まさないでいただきたい。

手紙　五十九
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

木曜日　午前五時（六月八日）

俺の改心も今や間違いのないところだ。この先、他の女を好きになるようなことは絶対にないわけだからな。あゝ、彼女は実に変化に富んでいる。いつも新鮮な姿を見せてくれるに違いない。かくも精妙に、かくも優雅に愛らしい天使なのだ。想像の力をもってしても造り出すことは出来まい。まして、絵筆によって描き尽くすわけには行かないし、絵画の魂たる詩歌をもってしても、叙述し得ないのだよ。だが、あらかじめ貴公の苛立ちを静めようとは思わない。卑俗な思考の対象とするには神聖すぎる話題ではあるが、そのすべてを進展どおりに貴公の前に示すことにしよう。そしてこれは、このように豊かな意味合いを持つ話題の記述にうつつを抜かそうとの気持ちからではない。とりとめもなくうろつきまわる貴公の考えに制限を加えようとの意図からのことなのだよ。俺が承認する枠を越えて考えを広げたりするのは、ラヴレースがごとき人物ですら、これまで犯したためしがないほどの大罪ということになろう。

そこで、このように前回の手紙と今回のものとに脈絡を付けた上で、その話題へと向かうことにする。

前回の手紙の結びから、貴公も俺の狼狽ぶりを感じ取りはしなかっただろうか。就寝中の我が魅惑の君を恐怖のうちに目覚めさせようとの計画から手を引くよう、自分自身に言い聞かせるためだが、ちょうど貴公の手紙を読み直そうとしていた際のことだよ。で、何事だったと貴公は思うかな。

話して聞かせよう。

二時を少し回った頃で、家中が静まり返り、あるいは、静まり返っているかに思われた頃、そして、後ほど判明したのだが、我がクラリッサがベッドで熟睡していた時のことだった。俺も下着姿のようなもので（実際、一時間前に着替えは終わっていたのだ）、貴公の希望に添うべく筆を執っていたのだが、ガウンを纏ったスリッパ姿でいると、上のほうから聞こえるドシン、ドシンという足音や、様々な声が入り交じった混沌たる騒音にびっくりさせられてしまった。中には、叱りつけているみたいに他の声よりも甲高くて、悲鳴と大して変わらないようなものも聞こえるのだ。一体何ごとかと訝かっていると、ドーカスが階段を駆け降りてきて、俺のドアのところで、「火事です、火事でございます」と叫んだのだが、その声色というのが、金切り声で騒々しいというよりも、怯えを含み、嗄れて陰

に籠もったものだったのだ。それに、もっと大きな声を出そうと努めながら出せずにいる様子だっただけに、俺としてはなおさら驚いてしまったわけだよ。

手にしていたペンが（その最後の一筆は我が愛しの君への祝福の言葉だったのだが）指を離れて落ちた。俺は椅子を蹴って立ち上がると、わずかの三歩で出入り口のところまで進み、ドアを開け、「どこだ、どこがなのだ」と大声を上げたのだが、ほとんどあの小娘と変わらないくらいに怯えていた。あの娘は半ば以上裸の有り様で、ペチコートを片手に握り締め、はっきりとは口もきけないまま上の階を指差していた。

瞬く間に俺は上の階へ上がった。そして、すべてはシンクレア夫人のおさんどんの不注意から来たことだと分かった。眠りに就いていなければいけない時刻だというのに、『ドラスタスとフォーニアの物語』(七〇)という単純な物語を読もうと夜更かしをして、窓に掛かっている一対の古いキャラコ製のカーテンに火をつけてしまったのだよ。

この女は、驚きながらも落ち着きを忘れず、半ば焼け焦げたカーテンの掛け布をカーテンと一緒に剥ぎ取り、俺が到着した時には、炎を上げて燃えていたのだが、そのまま暖炉の中へと放り込んだところだった。それゆえ、幸いにも危険は去ったことを知り、俺としても一安心した次第なのだよ。

一方、ドーカスのほうは、俺を上の階へ赴かせた後、最悪の事態は乗り越えられたことを知らないし、今にも家が炎に包まれるはずと考えているものだから、自分の女主人を思いやる気持ちから［そのことでは、今後とも長くあの娘を大事にしてやるつもりだが］、彼女の部屋の出入り口のところまで駆けて行くと、激しくドアを叩き、また声が出るようになっていたので、敬慕の想いはかくばかりと、金切り声を振り絞って、「火事です。火事でございます。お屋敷が燃えています。起きてくださいませ、奥様。さあ、寝たまま焼き殺されるおつもりでないのでしたら、今すぐ起きてください」と叫んだのだ。

あの娘がこんな恐ろしい叫びを上げるとすぐに、女主人の出入り口のところでは、掛け金や閂、錠が慌ただしく乱暴に外され、ドアの開かれる音がした。そして、発作を起こしかけている人間の声にも似た響きで、我が魅惑の君の声が聞こえてきたのだ。

信じてもらって構わないが、俺も大いに心を動かされたよ。彼女のことが心配で身体が震え、火事の警報を聞いて急行した時よりもさらに足早に、彼女の元へと急いだ。危険はすべて去ったことを確信してもらうためだ。

彼女の部屋のドアまで飛んで行って、そこで俺は目にしたのだよ。世界一魅力的な娘の姿をだ。荒い息をつくドーカスの片方の腕で身を支え、溜め息を漏らし震えながら、今にも気を失いそうにしている。身に着けているのは地肌を覆うペチコートだけで、あの愛らしい胸が半ば露となり、両の足も靴の中に滑り込ませたばかりなのだ。俺に目を留めるなり、彼女は喘ぎ、懸命に話そうとするのだが、口を突いて出たのは、「あゝ、ラヴレースさん」という言葉だけだった。そして、今にも崩れ落ちそうにしているのだよ。

俺はこの両腕で彼女を抱き寄せたわけだが、その熱烈さは彼女もこれまで感じたことのないものだった。そして、「最愛の人よ、恐れることはまったくありません。見て来たのです。危険は去りました。鎮火したのです。それに、よくもまあこの馬鹿者は［と、ドーカスに向かって］、そんな恐ろしい叫び声を上げ、私の天使をこうも驚かせたり、怯えさせたり出来るものだな」と、俺は言ったのだ。

あゝ、ジャックよ、彼女をこの胸に抱き寄せた時、どれほど彼女の美しい胸が喘ぎ、波

打ったことか。彼女の愛しい心臓がパタパタ、パタパタと、俺の心臓に打ちつけてくるのを、はっきりと聞き取ることさえ出来たのだよ。そして、暫くの間は、彼女が発作を起こすのではないかと心配だった。

こんな肌も露な姿で、息も絶え絶えの愛しの君が風邪を引いてもいけないと思い、彼女をベッドへと抱え上げると、俺はその傍らに腰を下ろし、仕草にも言い回しにも精一杯の優しさを込め、彼女の恐怖心を追い払うべく骨折ったのだ。

だが、彼女への俺のこの優しい心遣い、また、彼女の正気を首尾よく取り戻してみせた骨折りから、俺は一体何を得たと思うかな。他でもなく（まったくもって彼女も恩知らずだよ）、これ以上はないというほど激しい叫び声だけだったのだ。というのも、俺の腕の中へと彼女の身を投げ入れることとなった出来事について、確かに恐ろしいものではあったけれど、二人ともすでに忘れてしまっていたからだよ。俺のほうは、女性の中でも最も魅力的な者の、そのほとんど衣装も纏わぬ体を抱き締めている嬉しさからであり、彼女のほうでは、自分の体が俺の腕の中にあるということ、それも、つい先ほど怯えのあまりに飛び出したそのベッドの上に、二人揃って腰を下ろしているのに気づいて生じた、さらに大きな恐怖の念からだったのだ。

今こそ考えてもらいたいのだよ、ベルフォード。あの油断のない美女が、これまで俺に対して保ち続けて来た距離のことをだ。俺の愛情を、そして、彼女のために俺が味わった苦痛のことを考えてもらいたい。彼女の警戒心のことを、また、それを逃れるため、俺がどれほど長く待ち伏せしたかを考えてほしい。彼女の氷のごとき操や度を越した潔癖さゆえに俺が受けた畏怖の気持ち、また、これまで一度として、彼女とあんなにも楽しい思いをしたことはなかった点についてもだ。そして、俺の恍惚たる思いが、あのように楽しい瞬間には、必ずやひどく手に負えないものになるはずだということに思いを巡らせてもらいたいのだよ。ただし、自分で言うのも何だが、俺は上品さを保つとともに、思いやりも忘れなかったつもりなのだ。

ところが、あれだけ熱烈に言い寄ったのだが（好意を感じていることをつい最近も認めており、ほんの一、二時間前には、あんなに満たされた気持ちで別れた男からだというのに）、彼女はこちらの望みどおりに心を動かされたりはしなかった。それどころか、彼女が完全に意識を取り戻した頃には、俺としても、あれ以上痛切な、あれほど胸を打つ悲嘆ぶりは見たこともないほどだったのだよ。

彼女に言わせると俺の「裏切り行為」というわけだが、その件について、彼女は天に向かって訴えていたよ。俺のほうは、自分自身も同じように驚いたということ、そして、われわれ二人をびっくりさせた危険な出来事というのは、現実に起こったことなのだという点を、天地神明に誓いながら訴えたのだ。

彼女は、代わる代わる脅したりすかしたりしながら、俺に向かって厳粛この上ない、まことに心を打つ態度で、しきりに懇願していた。彼女の部屋から立ち去ってほしいというのだ。また、灯りから身を隠すこと、そして、人目すべてを避けるのを認めてほしいというのだよ。

俺としては、許しを請うてはみたものの、無礼に及ぶのを避けるわけにも行かなかったのだよ。それで、翌朝の太陽にはわれわれの婚礼を目の当たりにしてもらうつもりだなどと、繰り返し繰り返し誓ってみせたのだ。ところが彼女のほうでは、俺が行ったこの手の

言明のすべてを、おそらく、最後の一線まで進もうとの意図の表れと受け止めたのだろうが、俺が何を言おうと一切耳を貸そうともせず、俺の腕から逃げ出そうと、前にも増して身をもがき、とぎれとぎれの言葉で、また、ひときわ激しく声を張り上げながら、彼女に言わせるなら、実に恥ずかしく卑劣な扱いというわけだが、そんな仕打ちを受けるようであれば、生き長らえる気はないのだ、と断言していた。そして、何か凶器になるものでも探すのか、気が触れたみたいに辺りをキョロキョロ見渡し、ベッドの傍らの椅子の上に先の鋭くとがった鋏があるのを目に留めると、今言ったことをその場で実行に移すつもりなのだろう、何とかその鋏を拾い上げようとするのだよ。

彼女が死に物狂いになっているのを目にした俺は、心を落ち着けてくれるように、そして、ほんの一言だけ俺の話を聞いてくれるように頼み、彼女を辱めるような意図はまったくないことを言明し、鋏を掴み取ると炉の中へほうり投げたのだ。そして、俺に離れてくれるよう、なおも彼女が激しい口調で言い張るものだから、俺も彼女がその椅子に座るのを許した次第だ。

だが、あゝ、何と愛らしい取り乱し方なのだ。露となった両の肩と腕は比類のないほどに色白で麗しく、広げた両手は魅力的なうなじのところで組み合わされているのだが、その艶やかな美しさを半分も隠してはいないのだ。俺の傍から立ち上がった際にも、肌を隠すには十分ともいえない下着を通して、その素晴らしい姿態のすべてや形の良い手足が拝めるのだよ。両の目は涙に潤んでいるが、いずれそのうち仕返しをすると脅しているかにも見える。そして、ついに、怒りに燃えるまなざしや赤く染まった表情の一つ一つに込められていた思いが口を突いて溢れ、俺がこの手でなし得る最大の悪事を働いたかのようにわめき立て、俺を決して許しはしないと誓ってみせるのだよ。この怒り昂ぶる麗人を、すでに度を越したほど憤慨している麗人を、俺がこの胸に取り戻しても、貴公としては奇妙なことと思うだろうか。

取り戻したのだよ、俺は。彼女をもう一度この胸に抱き締めたのだ。だが、体格の華奢な点を考えると、彼女の力の強さは驚くべきものであったし、また、彼女がどれほど本気で怒っているのかを示してもいた。何しろ、彼女を抑えておくのにはこの上ない困難が伴ったし、俺の腕をすり抜けて跪くのを妨げることも出来なかったのだよ。彼女は俺の足下に跪いたのだ。そして、その場で、心の底から苦悶し、涙に溢れる目には懇願するような優しさを湛えながら、俺の顔を仰ぎ見ていた。両手を組み合わせ、髪を乱している。というのも、彼女のナイトキャップは争っている間に落ちてしまい、彼女のうなじから両肩へかけての眩いばかりの美しさをお節介にも隠そうとするかのように、房々とした魅力溢れる頭髪がこぼれ出し、天然の輝きを放つ巻き毛をなしていたのだ。あの美しい胸も、自らの弁護のために震えわななく唇を助けようとするかのごとく、溜め息やとぎれがちに漏れる咽び泣きとともに波打っている。このような姿で、彼女は俺の憐れみを懇願し、俺の廉恥心に訴えかけてきたのだよ。ただ、悲痛な思いも鎮まり、口がきけるようになった時には、例の特筆すべき的確さを伴って発せられる言葉遣いだったのだが、これは、弁舌を揮う際のこの天晴な娘を、かつてこの耳でその話し振りを聞いたことのあるすべての女性から際立たせているものなのだ。

「私のことはこんなふうに見ていただきたいのです、ラヴレース様［彼女が〈様〉と言ってくれたのだよ、素敵な言葉じゃないか］。両膝をつきましてお願いいたします。私のこ

とは、貴方以外には一人の保護者もなく、また、貴方の廉恥心の他には身を護るもの一つとして持たない哀れな人間とお考えいただきたいのです。貴方の廉恥心、貴方の人間らしいお心、貴方がこれまでに誓われたことすべてにかけまして、懇願いたします。我と我が身を忌み嫌うよう仕向けないでいただきたいのです。堕落した人間と自らの目に映るようにはしていただきたくないのです」とだよ。

明日にしようと俺は申し出た。我が人生で最も幸せな日のことだよ。

「明日のことを口になさるのはお止めください。本当に信義を守った扱いをしてくださるのでしたら、今、今この瞬間に、それを見せていただかねばなりません。そして、ここから立ち去っていただきます。今この場で私に遭わせようとしておられるのかもしれない災難は、長い長い一生を費やしましても、決して償うわけには行かないのですよ」　彼女が言っていた。

「邪悪な破廉恥漢　…　傲慢無礼な悪党　…　」　そうなのだよ。彼女は俺のことを傲慢無礼な悪党と呼んだのだ。ここまで俺の手中に落ちているというのにな。で、何故のことだと思うかな。何のことはない。ただ、キスをしただけなのだ（確かに熱烈なやつだったがね）。あの比類なきうなじ、あの唇、あの頬、あの額、そして、涙の溢れる両の目にだよ。これだけの美が一つに集まって、有頂天になっている俺の目の前に一気にその姿を露にしたのだ。腰を下ろしている俺の足下で、彼女はなおも跪いていたのだよ。

「もしも私が悪党なら、マダム　…　」　俺は言った。そして、貪欲な、だが、震えの止まらない俺の手が　…　彼女の美しさの中でも最も敏感で魅力的なものを傷つけはしなかったはずと思うのだが　…　「もしも私が悪党なら、マダム　…　」

彼女は俺の袖口のひだ飾りを引き裂き、この幸せな手をすり抜けてしまったのだ。俺がもう一方の腕を彼女の腰に回そうとしていた時のことだが、びっくりするような力強さと敏捷さだったよ。

「えゝ、そのとおりですわ。悪党の中でも一番のワルですわ。助けてください、幸せな方々　…　」　そして、彼女は金切り声を上げていた。「哀れな娘に救いの手一つないなんて　…　」とだ。「それでは、私は悪党なのですね、マダム。私が悪党だとおっしゃるのですね」　こう言いながら、俺は両方の腕で彼女を抱き締めると、飛び出してきそうなこの心臓のところまで彼女を引き上げようとした。

「いいえ、そんなことは　…　でも、そうですわ」　こう言うと、再びラヴレース様などと様づけで俺を呼び、あの魅力的な胸の上でまた両手を握り締めるのだ。そして、「死なせてください。死なせてください。こんな扱いを受けても仕方がないほど、私が貴方の目には不快極まる人間と映るのでしたらね。そうしてくだされば、私、感謝いたします。長い間、あまりにも長い間、生きることが重荷になっているのです。でなければ（と、気が狂ったように辺り一面を見渡しながら）、その手段だけでもお与えください。すぐにも納得していただけるはずです。私にとりましては、操というものが命以上に大切なことをですわ」と言うのだよ。

そして、なおも両手を握り締めたまま、新たに溢れ出た涙で目を潤ませながら、俺のことを「私の幸せなラヴレースさん」などと呼び、そのような選択を許してくれるなら、あるいは、さらなる侮辱を免れるようにしてくれるのなら、最後の一息で感謝の言葉を伝えたいと言うのだ。

暫くの間、俺は宙ぶらりんな気持ちで座っていた。「誓っても良い」と、俺は思った。「十分に証明済みだが、そなたは天使なのだ。女などではない」とな。しかしながら、跪いていた彼女を引き上げ、なおもしっかりとこの胸に抱き締めていると、彼女は再び俺の腕をすり抜けて跪き、「ご覧ください、ラヴレースさん。あゝ、神様、このような時を目にするまで、このような仕打ちに甘んじるまで、生き長らえてしまうなんて　…　貴方の足下の哀れな娘をご覧ください。お情けを請うておりますが、貴方のために世間中から見放された者なのです。父の呪いがこんな恐ろしい形で果たされるようなことになってはいけません。貴方がきっかけになっていることなのですもの、呪いをもたらす人間などになったりせず、私を見逃すことです。是非とも見逃していただきたいのです。貴方からこのような扱いを受けるいわれがどこにあるのでしょうか。私のためではなくても、貴方ご自身のために、また、最期の時に臨みまして、全能の神様が慈悲を施してくださいますよう貴方もお望みでしょうから、私のことは見逃していただきたいのです」

こんな言葉に胸を抉られることのない者がどこにいるというのだ。

再び俺は、哀願している愛しい者を、跪いた状態から立ち上がらせようとしたのだ。ところが、彼女に言わせると、俺の和らいだ心が彼女の祈りに屈し、立ち上がって操を守るよう彼女に命じるまでは、とのことだが、それまではどうしても立ち上がるべく手を借りようとはしないのだよ。

「それならば、立ち上がるのです、我が天使よ。立ち上がって、あるがままの貴女におなりなさい。そして、何であれ、お望みのとおりになさることです。ただ、明言してほしいのです。今回の件はご容赦くださるということをです。そして、ここ数日に亘って享受しておりました、あの好意と静穏さに溢れたまなざしを、今後とも私に向けてくださるとおっしゃってほしいのです。その時には、我が愛しの征服者の言葉に甘んじて従うことにいたします。私にとってその力が今ほどに強烈なものとなったためしはかつてないのですからね。そして、私は自分の部屋へ引き下がることにいたしましょう」

「貴方が私の祈りを聞き入れてくださったように」と、彼女が言っていた。「一番苦しい瞬間に貴方が捧げるお祈りを、全能の神様がお聞き入れくださいますよう祈っておりますわ。さあ、もう私の傍を離れていただきましょう。今すぐ、一人きりで反省の時を持てるようにしていただきたいのです。そうなされば、私にたっぷりと不幸を味わわせることになるのです。最も憎らしい敵の身に降り懸かることを望んでおられる、その不幸よりもさらに大きな不幸をですわ」とだよ。

「何もかも策略からのことにはしていただきたくないのです、最愛の人よ。策略などではなかったのですから」

「あゝ、ラヴレースさん」

「誓って申しますが、マダム、火事は現実の出来事です［実はそのとおりなのだよ、ジャック］。家が焼き尽くされていたかもしれないのです、最愛の人よ。明朝その目で確かめてくだされば、納得していただけることでしょう」

「あゝ、ラヴレースさん」

「貴女への熱い想いのことがありますし、マダム、お部屋の戸口でそのように魅惑的なお姿を、思いも寄らず目にいたしましたため　…　」

「私の傍を離れてください。立ち去っていただきましょう。今すぐにです。お願いいた

します。私の傍を離れるのです」と、錯乱気味に、また、狼狽した様子で、辺りや己の姿を見やりながら彼女が求めるのだ。

「無礼の段はお許しいただきたい、最愛の人よ。罪のないものであったとは申せ、繊細過ぎるお気持ちをしておられますゆえ、あるいは悪くお取りになることも …」

「お止めください。もう結構です。お願いです、私の傍を離れていただきます」と、愛らしい困惑ぶりを見せながら、彼女は再び我が身を、そして、辺りを見回し、「立ち去るのです。立ち去るのです」と叫んでいた。

それから彼女は、涙に暮れながら、俺が両手でずっと握り締めていた手を引っ込めようと激しく争っていたが、彼女のもがきようと言ったら …あゝ、あれだけ心を魅了してやまない優雅さや愛らしさに恵まれた姿態なのだ、今思い返して見ても、彼女が身悶えをするたびに、その顔の造作一つ一つに、手足のすべてに、新たな魅力がどれほど加わったことだろうか。

「それは無理な話です、最愛の人、容赦すると明言してくださるまでは …ただ、許すとだけ言ってほしい。ただ、許すとだけ言ってほしいのです」

「お願いです。どうか立ち去ってください。一人にしてほしいのです。私に何が出来るのか、そして、何をすべきなのか。それを考えるためです」

「それでは十分でないのです、最愛の人よ。私を許していると、そう言ってもらわねばならないのです。そして、何事も起こらなかったかのように、明日には会うつもりだと言ってもらわねばならないのです」

そして俺は、再び彼女をこの両腕で抱き締めたのだ。許してはくれないことを期待しながらな。

「宜しいでしょう。確かにお許しいたします。何て恥知らずな人なのでしょう」

「それじゃあ駄目だ、我がクラリッサよ。このように貴女は［と、強く彼女を抱き寄せながら］我が手中にあるというのに、厳しいお小言を交えた不承不承の許しくらいで、私は追い立てられねばならないのでしょうか」

「本当に、本当に貴方のことはお許しいたします」

「心の底からですか」

「えゝ、心からですわ」

「ご自分から進んでのことですか」

「自ら進んでですわ」

「私について、明日は何事もなかったかのような見方をしていただけますか」

「えゝ、えゝ」

「まるで否定を目指しているみたいな、この拗ねたような肯定の言葉を受け入れるわけには行きませんね。貴女の名誉にかけてそうするつもりだとおっしゃってください」

「それじゃあ、私の名誉にかけまして …あゝ、もう立ち去ってください。立ち去ってもらいます。そして、二度と、二度と再び …」

「何ですって、二度と再びというのですか、我が天使よ。これで許しているとおっしゃるのですか」

「終わったことが二度と再び思い出されないように、というつもりですわ」と、彼女は言っていた。

許しの確認として、一度キスをしてほしいと俺は言い張ったよ。そして、間抜けみたいに引き下がったわけだが、実際、女の弄び者といった有り様だった。この俺がコソコソと引き下がったのだよ。そんなことが信じられるかな、貴公には。

だが、自分の部屋に入るなり、逃してしまったチャンスのことを思い返し、また、得たものといえば他でもなく、自らの難儀を増しただけだという点、そして、俺の日頃の姿とは大きくずれている弱々しい態度のことで、きっと階下で出くわすはずの嘲りについても考え直し、俺は悔やんだよ。そして、急いで戻ったのだ。一人にしてきた際の彼女の苦悩ぶりからして、そんなにもすぐにドアの錠前を下ろしてはいないだろうとの期待があったし、また、結果はどうあれ、意図したところをすべて実行に移そうと、しっかり決意を固めてもいたのだよ。というのも、俺の考えでは、どうやら、快く許してはもらえないところまですでに罪を犯してしまったように思われたし、仮に興奮状態に陥ったり、自暴自棄な行為に走るようなことがあるとしても、結局のところ、俺としては結婚するだけのことだし、それで償いにもなるだろうと思ったからだ。

ところが、正当な罰を受けることとなったのだよ、俺は。彼女のドアはぴったりと閉じられていたのだ。彼女が心臓も張り裂けんばかりに溜め息をつき、すすり泣いているのが聞こえたので、俺は静かにドアを叩きながら［すると、彼女のすすり泣きが途絶えたのだが］、「愛しの君よ、ほんの二言、三言申し上げたいことがあるのです。これまで私の口からお聞きになった言葉の中でも一番受け入れやすいもののはずです。ほんの一時だけで良い。お顔を見せていただきたいのです」と呼び掛けた。

彼女がドアを開けにやって来るのが聞こえたように思い、俺の心臓はその期待で躍り上がった。だが、戸締まりを一層強固なものにするため、もう一本の閂を掛けようとしたにすぎなかったのだよ。俺に答えることが出来なかったのか、それとも、答える気がなかったのか、そのいずれかであろうが、彼女は部屋のさらに奥へ、おそらく控えの間のほうへと引っ込んだ。そして俺は、前回以上に間の抜けた格好でコソコソと退散したのだよ。

これが俺の仕掛けた地雷なのだ。俺の謀略だよ。そして、これがその成果のすべてというわけだ。

以前にも増して、俺は彼女への思いを募らせている。そして、それも当然なのだ。磨き上げた象牙にしても、彼女の腕や肩ほどに美しいものを目にしたことはかつてないし、彼女の肌ほどに滑らかなビロードにも触ったためしはないのだよ。まだだれの手も触れていないあの胸 … あゝ、ベルフォード、彼女はすべてに亘って完璧なのだ。そして、あの上品さだ。争っているうちに片方の靴が脱げてしまったのだが（前述のように、ちょっとつっ掛けただけだったのだよ）、その可愛らしい足ときたら、どんな女の手にも劣らないほど、彼女自身の手にだって負けないほどに白くて華奢なのだ。

だが、貴公には分かるのではないかな。俺はある美点を手柄にする権利を有しているということがだよ。これまではだれ一人認めようとしなかったものだがね。つまり、祈りや涙によって動かされる心を備えているという点だ。今度の場合でも、俺の心臓を取り囲んでいると言われている、例の〈たこ〉だの火打ち石だのは、一体どこにあったのだ。

確かにこれは、似たような事例において、俺が心を動かされることとなった最初のものだよ。だが、何故だと思うかな。これまでは、こんなにも真剣な抵抗に出くわしたことが一度もなかったからだよ。要するに、まったくもって抗いようのない抵抗なのだ。

この試練によって、また、この抵抗によって、俺の考えの中で女どもがどれほどの勝利を収めたことだろうか。

しかし、今俺を許すことが彼女に出来るとしたら　…　出来る出来ないの問題ではないのだ。許さねばならんのだよ。すでに彼女のほうでも、名誉にかけて許すと言っていたのではなかったかな。だが、約束のあの部分を、一体どうやって愛しの君は守るつもりなのだろう。明日の朝には、何事もなかったかのように俺と顔を合わせねばならなくなるという、例の部分をだ。

最初の面会を済ませてしまうためなら、全世界を譲り渡しても良いと、おそらくそんな思いで彼女はいるのだろう。彼女としては、俺のことを咎め立てせずにおくのが最善の策だろう。だが、俺を咎めずにいるなんて　…　実に心惹く難題だな。俺との約束を破る場合は、身の破滅を覚悟しておくことだな。俺から逃げ出すなどということは、彼女には無理なのさ。俺の裁きを不服とする上訴は考えられないことだ。同情心から、俺のほうで好意をもって接することがないとしたら、彼女には一体どんな味方がこの世にいるというのだ。それに、俺の犯す次の罪がどのようなものであろうと、人格者トムリンソン船長と彼女の伯父ジョン・ハーロー氏には、俺のためにすべてに亘って埋め合わせをしてもらえるだろうしな。

彼女が自ら早まったことをするのではないかという貴公の懸念についてだが、彼女が鋏とか、何か他の凶器を掴み取ることが出来たとして、興奮のあまりどのような行動に出るとしても、あの思慮深い心からして、その点の心配はおそらくないだろうな。男のほうでは、こういう本当に信心深くて本当に貞潔な娘たちには「俺も今ではそういった女がいることを信じているのだが」、十分苦労をさせられているのだ。男としては、連中の心の正しさから何らかの恩恵に与って然るべきであるし、また、その点の保証を多少なりとも得ておくべきなのだよ。

要するに、この令嬢については、何の心配もしていないということだ。深い悲しみ以外にはな。ただ、貴公も承知のとおり、そいつはゆっくりと効き目を現わしてくるわけだから、発作的に起こる不機嫌さの合間にわずかな喜びが顔を出すようにするのにも、時間が掛かるものなのだよ。

第四巻　目　次

手紙　一、二　ラヴレースからベルフォードへ
ベルフォードについても他の者たちと同列だが、令嬢が相棒たちのことをどれほど嫌っているかを語る。彼らのために令嬢と激論を交わす。パーティントン嬢とベッドを共にするのを拒否するのは、自分を疑うことであり、反抗であると見做す。彼女を脅す。氏自身に扇動されたもののようであるが、文通の禁止を告げるハウ夫人からの手紙を受け取った彼女の悲嘆ぶりを、残酷にも得意がってみせる。

手紙　三　ベルフォードからラヴレースへ
クラリッサに対する自分および仲間からの激賞の言葉。彼女を正当に扱うよう、全員が挙って氏に懇願。

手紙　四、五　ラヴレースより［返事として］
小鳥への残虐行為等の身近な例により、己の目的の弁解に努める。邪悪な魂胆を擁護するための、いかにも氏らしい論法のさらなる例。令嬢を追い込みたいと願っている、その無抵抗な状態について。

手紙　六　ベルフォードより［返信］
なおも令嬢のために熱弁を振るう。臨終の近い叔父に付き添わざるを得ず、氏の行動一切についての報告を時折書き送ってくれるよう懇願。

手紙　七　クラリッサからハウ嬢へ
ラヴレースは、氏自らがきっかけを作っている彼女の打ち解けない態度について不平を述べているという。氏のプライドは汚らわしい低劣なプライドであり、氏の分別を蝕んでいる。氏に対する評価は低下したということ。従兄弟のモーデンから苦悩の種となる手紙が届く。
その手紙を同封。文中、従兄弟は（兄の説明に影響され）ソームズのために、また、一族の目的のために弁じており、放蕩児の人物像を鮮烈かつ正当な姿に描き、彼女の眼前に提示して見せるのである。
文面に接しての重苦しい思い。私心を離れた祈り。

手紙　八　同　右
氏が連れ立っての外出をしきりに求めるが、そのしつこさを正当化するはずの挙式の件には触れない。現在の暮しには耐えられないとのこと。和解に関し、伯父への打診がヒックマン氏によってなされることを希望。メネルを紹介される。予定している伯父への働き掛けの成果が判明するまで、ラヴレースとは行動を共にしないつもり。
ラヴレースからベルフォードに宛てた二通の手紙の要旨。その中で、氏はメネルの正体を明かし、新たな企みや用心の数々について語るのである。女性のポケットは底荷を入れる袋だという話。シンクレア夫人の衣装箪笥について。彼女の家では秩序が保たれてい

るとのこと。令嬢の用心深さが氏の企みを正当化するという発言。

手紙　九　ラヴレースからベルフォードへ

芝居の脚本を書くつもり。タイトルは『喧嘩っ早い恋人たち』。不屈の粘り強さこそは氏の誇りであり、忍耐心は氏の侍女、とのこと。腰掛けている時に令嬢が落としたものだが、その手紙の入手を試みる。それを知った彼女の怒り。さらなる策略について。ポール・フィートリーの正体と、雇った目的について。サリー・マーティンからの非難。策に溺れたことを認める。人間の本性は周知のとおりの不埒者だということ。

手紙　十　クラリッサからハウ嬢へ

現在の諍いについて知らせる。氏の元に留まるのは無分別なことと悟る。伯父への働き掛けを再び要請。目に惑わされることの危険性に関して女性に警告。

手紙　十一　ハウ嬢より[返事として]

彼女がラヴレースの元を離れることに賛成。氏の邪悪さについての新たな話。彼女の伯父を打診してもらうつもり。慰めの言葉。彼女の場合は、他のいかなる女性逃亡者の例ともはなはだ異なるということ。彼女は警鐘になると同様、手本にもなるはず。ラヴレースと知り合う前のクラリッサの幸せな様子。高潔な人柄を手短に描く。逆境こそは彼女が輝きを放つ時、とのこと。

手紙　十二　クラリッサより[返信]

礼拝式出席に関し、ラヴレースと争う。氏はセントポール大聖堂への同伴を再び彼女に承諾させる。

手紙　十三　ハウ嬢からノートン夫人へ

和解の促進のため、ハーロー夫人への働き掛けを試みるよう要望。

手紙　十四　ノートン夫人より[返事として]

手紙　十五　ハウ嬢より[返信]

手紙　十六　ノートン夫人へ宛てたハーロー夫人の哀感切々たる手紙。

手紙　十七　ハウ嬢からクラリッサへ

彼女の伯父に対するヒックマン氏の働き掛けが実を結ばずに終わったこと。ラヴレースへの今後の対応、そして、彼に向けるべき言葉について助言。焦らすような彼の手口の説明に努める。自分の愛する友は、ことによると、彼の改心を実現するために逸脱を許されたのかもしれないとのこと。彼女の叔父アントニーが目論んでいる自分の母への求婚について知らせる。

手紙　十八　クラリッサからハウ嬢へ

度量が狭く無慈悲な男の元へ投げ出されることの不運。彼女の助言どおりにラヴレースと接して行くことが不可能な理由。ラヴレースへの心打つ呼び掛けの言葉。

手紙　十九　同　右

ラヴレースとの興味深い会話。氏が彼女を怯えさせる。氏は贈与財産に触れる。控え目な彼女の励まし。氏のほうでは逃げを打つ。真の心の大きさとは何か。氏の贈与財産の申し出を文書化してくれるよう、彼女は要求。ラヴレースに対する行動のすべてについて内省する。乙女らしい几帳面さが氏を遠ざけて来た動機ではないということ。何が動機か。自分が思い違いをしているのであれば訂正してくれるよう、令嬢を促す。

手紙　二十　同　右

ラヴレースの書面による申し出を添える。その冷淡な結論部分に対する彼女の所感。妻に求められる分別および慎重さに関し、賢明な者すべてが承知している点を氏は知らないとのこと。

手紙　二十一　同　右

ラヴレースは日取りを決めるよう迫るが、それでいて、必然的に遅延をもたらすような提案を行う。彼女の率直で哀れを誘う返答。氏はそれに心打たれている。氏も心を動かされることがあるのを彼女は喜ぶ。氏は即座に決断するよう彼女に迫るが、同時に、遅延も仄めかす。彼女の立腹を看て取ると、翌日にしてくれるように主張する。だが、彼女の返答も待たず、他の日々を代案として示す。しかしながら、彼女に恩恵を施したかのごとく、自らに報いたがっているため、彼女は氏の取ろうとした無礼な振舞いのことで氏を拒絶する。氏の立腹。このような男との将来の見通しについての憂鬱な思い。自分の身の上から引き出される教訓。[几帳面に過ぎるとして、一部の者が彼女に加えた非難から彼女の行動を弁護する注記]。

氏の手紙四通からの抜粋。そこでは、氏は自らの無慈悲さを得意がっている。冷酷さこそが放蕩児的な性格にとって必須のものであることを認める。上品な女性が示す狼狽が楽しみの種だということ。美徳に対する氏の呼び掛け。人目にもはっきりと心動かされてしまったことを氏は恥じる。自分を拒絶したことに対し、彼女に立腹。岩のごとき氷を突き抜け、彼女の心に到達するため、自分の心を鋼鉄のようにするつもりとのこと。彼女の操に攻撃を仕掛けるよう、女たちが改めて氏を唆す。

手紙　二十二　ハウ嬢からクラリッサへ

氏の引き延ばしに立腹。氏の手から彼女を救い出す方策を考え出すつもり。彼女を辱めるようなことが氏に出来るとは思わないし、そんな不埒な思いを抱くとも思わないという。女性はラヴレースのような男に本来的に憎しみを感じないものだということ。

手紙　二十三　ベルフォードからラヴレースへ

令嬢の立場を熱烈に支持。放蕩児の放縦な営みに見出されるものは、虚栄心と無意味な

たわごと以外にないということ。氏自身のため、氏の一族のため、そして、彼らに共通の人間性のためにも、令嬢を公明正大に扱うよう懇願。

手紙　二十四　M卿からベルフォード氏へ

令嬢を支持する格言仕立ての手紙。

手紙　二十五　ラヴレースからベルフォードへ

ベルフォードの論法を逆用して彼を茶化す。抵抗が氏を煽り立てるということ。慇懃な女たらしのほうが夫よりも好まれるのは何故か。既婚女性への忠告。親代わりとなって令嬢を手ずから授けてほしい旨を記した、M卿宛の手紙の要旨。格言好きなことに関してM卿を嘲笑する。死にかけている叔父に関する、ベルフォードへのふざけた助言。患者が見放された場合に医者の為すべき事柄。

手紙　二十六　ベルフォードからラヴレースへ

女を囲うことの愚かしさ、不便、不得策、および、結婚生活の好ましさに関して、放蕩児たる彼ら自身の根本方針に基づいて説明。

手紙　二十七　ラヴレースからベルフォードへ

ベルフォードの手紙の趣旨を取り違えたように装い、現在の企てを是認してくれたものとして礼を言う。氏の語るところでは、氏にとっては、誘惑の道程のほうが最後を飾る行為よりも楽しいという。

手紙　二十八　同　右

現在のところ、全員すこぶる幸せだとのこと。令嬢に立ち聞きしてもらうよう、会話を捏造。プラトニックラブは通常いかなる結末を迎えるか。彼女を観劇へ連れて行くつもりであるが、悲劇は好まないという。自分は多感に過ぎるとのこと。氏のような種類の男が悲劇よりも喜劇のほうを好むのは何故か。妖婦たちとシンクレア夫人、そして、彼女らの知り合い全員が同じ気持ちだという。氏のその他の術策。服装を乱し、注意を怠っている時刻に目通りを許されることが出来たなら、とっくの昔に望みを叶えていたとのこと。彼女を観劇へ連れて行く目的。観劇とその後の軽食は恋人の狙いを大いに助けてくれるという。そして、その理由。彼女は悲劇『ヴェニスは揺るがず』の見物へ同伴することを承諾する。

手紙　二十九　クラリッサからハウ嬢へ

立ち聞きした会話の詳細を伝える。見通しがやや改善されたと考えている。まずまずと映る状況で妥協したいとのこと。また、そうして当然の理由が生じた際には、希望を温めたいという。

手紙　三十　ハウ嬢からクラリッサへ

タウンゼンド夫人についての計画。禁制品業者を助成する気はさほどないとのこと。そ

の理由。ラヴレースの贈与財産の申し出に関して相談した際の、ヒックマンに対するユーモラスな接し方。

手紙　三十一　同　右

母親に対するアントニー・ハーローの求婚、および、母がその件を打ち明けた際の会話に関する報告。アントニー・ハーローの手紙に対するハウ夫人の返事の写し。

手紙　三十二、三十三　ラヴレースからベルフォードへ

ハウ嬢の手紙数通を入手。クラリッサについては、これまで以上に自信を深める。その理由。輝きを湛えた目が暗示するもの。彼女が氏を遠ざける。女たちからの度重なる唆し。入手した手紙についての報告。その文面に対し、怒りと復讐心に満たされる。ヒックマンに対する威嚇。脅迫していたとおりにハウ嬢が上京したなら、と願う。

手紙　三十四　クラリッサからハウ嬢へ

氏に恐怖を覚える。淑女ぶっていることを否認。氏の元を去ることが出来るよう、計画の達成をハウ嬢に懇願。自分の気質が悪くなっているように思う。氏のつけ込み方を振り返って見ると、身も震える思い。災難をきっかけとしてのことであるが、詳しい自己分析を行った結果、これまでの生涯の最善の行為においてすら、密かなプライドから完全に解放されてはいなかったのでないかと、不安を覚える。氏の申し出に対して認めた返事をほぼ真二つに引き裂く。翌日は外出して戻らないつもり。さらなる意図の数々。

手紙　三十五　ラヴレースからベルフォードへ

朝食の席で令嬢と会う。ティーカップと受け皿をひっくり返してしまう。その原因。遠慮のない言葉が彼女を驚かせ、怯えさせる。戯れごと、そして、恋する者にとってのその効用。夜中の奇襲攻撃に彼女も屈しはしないか、試して見るつもり。彼女は、自分の名誉に関わる場合には、獅子の心を備えた淑女であるということ。手練の手際を駆使せざるを得ないという。太陽と北風についての寓話。フレッチヴイル夫人の家が厄介の種とのこと。フレッチヴイル夫人と称する者は疱瘡に罹っていることにする。逃亡したクラリッサを連れ戻すためのものだが、氏の念頭にあるその他の策略。タウンゼンド夫人についてのハウ嬢の計画は、氏にとっては、頭上に垂れ下がっている剣だという。計画を挫折させるため、方法を変えなくてはいけない。自分にはまったく女染みたところがあるという。それは何か。クラリッサとの間でのもう一つの会話。父親へ向けた彼女の呼び掛け。一時的に心を動かされる。手に入れ、写しを取っている最中の文書についてドーカスが知らせる。令嬢を引き止めるため、日取りのことを迫る。ハウ嬢は自分に恋をしているように思われるとのこと。その理由。クラリッサが自分を憎んではいないことを知る。

手紙　三十六　同　右

転記された文書の写し。自分の申し出に対する返事の、その引き裂かれた断片であることが分かる。従順さこそが女性の誇りである。口やかましい女房が呈する滑稽な姿。こ

の文書は目にしないほうが良かったという。極めて強い自責の思い。それを鮮烈に描いて見せる。令嬢の並外れた美徳、そして、心の大きさを提示。良心に不意を突かれ、こういった令嬢支持の論議へ引き込まれたということ。良心を追い払う。

手紙　三十七　同　右

メネルはこれ以上氏の企みに手を貸すことを躊躇する。塞ぎがちな人間は医者仲間にとっての金蔓だということ。医者連中への忠告。フレッチヴィル夫人宅にまつわる企画はご破産とのこと。令嬢が氏に疑いを抱く。従姉妹のシャーロットからの時宜に適った手紙。その手紙を令嬢に届ける。手紙を読み終えると、令嬢はタウンゼンド夫人への働きかけを差し当たっては中止するよう、ハウ嬢宛に筆を執る。

手紙　三十八　同　右

終始一貫して穏やかで心地の好い面談。いよいよ手筈が整う。今待たれるものはM卿からの手紙のみ。身形の良い見知らぬ人間から、二人の結婚に関する問い合わせが為される。令嬢はそれに警戒心を抱く。

手紙　三十九　同　右

氏宛に送ってよこしたもう一通の格言仕立ての手紙に対し、叔父を呪う。令嬢に通読を許す。堕落する女の十中八九は自らの落ち度で堕落するとのこと。

手紙　四十　M卿からの特色ある手紙。

手紙　四十一　ラヴレースからベルフォードへ

今や令嬢は最初の一言ですぐに顔を見せてくれるという。彼女の気性の温和さを誇らしげに語り、自分に対する忍耐強さに得意満面。贈与財産証書を用意するため、自ら認めた書類を弁護士ウィリアムズに渡す。これで二段構えの備えが出来るとのこと。己の策略を密かに自慢。服地見本を取り寄せる。宝石についての申し出。氏がノートンのために取らせた処置に関する彼女の思慮深さを称賛。氏の妻の為すべきこと、ならびに、あるべき姿。彼女は人前での挙式を辞退。孝行娘らしいその理由。彼女としては、M卿の臨席を遠慮したい意向。氏はその旨をM卿へ書き送る。

クラリッサの手紙からの抜粋。現在の好ましい見通しについてハウ嬢に説明した後、彼女に明かした詳細のうち、ラヴレースの評判を落としそうな点はすべて内密にしてくれるよう頼んでいる。

手紙　四十二　ラヴレースからベルフォードへ

ハウ嬢に復讐すべく企てた策略。

手紙　四十三　同　右

新たな趣向の数々が胸中に押し寄せて来る。翌朝、重い病に罹るという。その理由。生意気な態度で階下の女たちが咎めている。だれの後釜にもなるつもりはない。娼婦たち

とは寝たくないとのこと。フランス人侯爵夫人との逸話。

手紙　四十四　同　右

令嬢との心地好い遠乗り。喜ばしいほど寛いでいる彼女。追従的なほど慇懃な氏。ハウ嬢の策謀ももはや恐れるに足らずとのこと。外出中の心地好い会話の詳細を知らせる。

手紙　四十五　同　右

トコンを用いた策略の説明。驚きと恐れの演じ方をドーカスに伝授。単音節の語と三音節の語は何になぞらえられるか。騒動の最中に上品ぶってはいられないとのこと。布告書の広め屋について。令嬢も今では氏を愛していることが看て取れるという。氏に対する彼女の思いやりに満ちた慈しみ。今や新たなツケに対しても信用を得る。タウンゼンド夫人のことは無視。

手紙　四十六　クラリッサからハウ嬢へ

ラヴレースに対する慈しみの気持ちを認める。瑕疵のある人間に愛情を抱くのは懲罰に値するという。

手紙　四十七　ラヴレースからベルフォードへ

トムリンソン船長なる者のところからやってきたという、仕着せを着た従僕によって為された、氏と令嬢とに関するうさん臭い問い合わせ。その折の彼女の怯えよう。警戒を促す処置。彼女は外出を控えようと決心する。彼女が自分の元を去りたがってはいないことを知り、氏は大いに喜ぶ。

手紙　四十八、四十九　同　右

ジョン・ハーロー氏からの委任を装い、トムリンソン船長が到着。二人の結婚が事実であることに確信を持てるなら、との条件で、全面的和解を推し進めるためとのこと。この際の様々な話し合い。トムリンソンに真実が明かされるよう令嬢は主張。彼女の主張は通るが、氏の密かな目的の一つは挫かれることになる。トコンを用いた計略の効果から、成功への望みを大きく膨らませる。

手紙　五十　同　右

トムリンソン船長に対し、氏は令嬢との関係を極めて公正に語る。その振舞いは尤も至極なもので、包み隠さぬ話しぶりであったため、彼女もひたすらに優しく、遠慮のない態度で接する。見通しの好転に、彼女は心を打つ喜びようを見せる。通常は見られない氏の感傷的な態度。教育の好ましい効果についての所見。プライドは美徳の優れた代役だということ。

手紙　五十一　同　右

トムリンソンの正体。再びベルフォードに反論させているが、その反論に答えることによって、己の魂胆を説明するためなのである。ジョン・ハーローは狡猾な罪人だという

こと。令嬢にわずかな喜びを与えることについての冷酷非常な理由。戦争状態にある二人の君主の物語によって例示。

ハウ嬢に宛てたクラリッサの手紙からの抜粋。現在の好ましい見通しを喜ぶ。多くの点をヒックマン氏のお陰だとする。トムリンソン船長の描写。ラヴレースの人柄について述べる［この点は、とりわけ、その気前の良いいくつかの振舞いから氏に対して好意的な考えを持った者たち、ならびに、当初氏に対して取ったよそよそしい態度のゆえに、彼女に対し厳しい考え方をしていた者たちにとっては、傾聴を要するところである］。

手紙　五十二　ラヴレースからベルフォードへ

M卿からの手紙。氏のさらなる手管、そして、用心の数々。幸せな日の近いことを約束される。聖職者および礼拝式に関する氏の見解。彼女は同情心を欠く者ことごとくに同情を寄せ、すべての人間を愛している。結婚に対する偏見を克服出来るなら、世界一の幸せ者になれることを氏は認める。贈与財産証書の草稿。草稿を読み上げてもらうのを彼女が拒む理由について、滑稽な解説を加える。法律と福音とは別物だということ。サリーが氏の鼻先にハンカチを投げつける。

手紙　五十三　同　右

令嬢の警戒心を一度ならず駆り立てることとなる。氏が可もなし不可もなしという存在以上のものであることを彼女は認める。彼女は気性の柔和さをもって、遠慮なく取り入ろうとする氏を制する。彼女にとっての真の愛情の証。結婚は汚れのない状態だという観念を嘲笑。夫婦が人前で見せる慎みのない振舞いを厳しく非難。以前、そのような場面を利用したことについて。結婚許可証を申請する。入手に際しての障害。大きな欠点と大きな美点とが同じ人物に見出されるということ。女性に魂はないことを信じたいという。氏なりの奇抜な理由。

手紙　五十四　同　右

愛情と優しさをもって（希望したように）成功を収めることはほぼ断念。彼女の慎み深さを称賛。遠慮なく取り入ろうとして憤慨される。無遠慮になり始めたことに憤慨しない女性は堕落するに違いないという氏の所見。氏らしい自由気儘な仕方で彼女の潔癖さを理由づける。東洋の君主たちが弄する手管について。

手紙　五十五　同　右

トムリンソン船長からの手紙ですべてが丸く収まる。伯父の偽りの提案は策略と尤もらしい欺瞞とに溢れているということ。彼女は黙従する。彼女の心打つ暗示に従い、トムリンソンを装う者に一筆認め、伯父本人が姪を氏に引き渡してくれるか、あるいは、その席でトムリンソンが代役となることを許すよう要請。次いで、すぐにも爆発するよう用意してあるちっぽけな地雷について触れる。

手紙　五十六　ベルフォードからラヴレースへ

令嬢のため、改めて氏を熱心に諫める。軽食の会で彼女が担った役割を思い返し、褒め

称える。放蕩児の空虚な機知はいかに軽蔑に値するかということ。肉欲の愚かしさ、弱さ、下品さ、永続性のなさを非難。ラヴレースの術策のいくつかについて、陳腐で使い古されており、お粗末なものと呼ぶ。彼女を邪悪な家から移すよう懇願。忌まわしいシンクレアは、女性に向かって語り聞かせるべき恐ろしい話をどれほどたくさん知っていることか。死に瀕した叔父の状態についての真面目な所感。

手紙　五十七　ラヴレースからベルフォードへ

依然として結婚許可証は取得出来ていないとのこと。勝利とは言わないが、逃げ道は確保してあるという。自分の創意に富む計略の単純さにつき、怒りを込めて弁護。他の放蕩児たちの方針や実践するところと比較し、全面的な自己弁護に転じる。英雄ならびに好戦的な君主たちは自分よりも悪者だということ。十年間の同棲の後の自分と令嬢の身の上話の梗概。氏を咎めようとする者たちへの警告。愛顧に与るには有徳であることが条件と、女性がそのように決めていたなら、氏としてももっと品行に配慮していたはずだという。

手紙　五十八　ラヴレースからベルフォードへ

氏の言うちっぽけな地雷を爆発させるための準備。時をおかずに書き記すのが大好きだとのこと。警鐘が鳴り始める。怯えた様子を装う。

手紙　五十九　同　右

火事だという恐ろしい叫び声に怯え、令嬢はベッドを飛び出す。彼女は氏を恐れ畏まらせ、品位ある振舞いを促す。許すという約束を強要し、氏は彼女の傍を離れる。悔やみながら、氏は戻ってみる。しかし、彼女の部屋のドアには鍵が掛けられていることを知る。彼女の美徳により、女性はいかに大きな勝利を手にしたかということ。氏は約束を取り付けたわけだが、翌朝、果たして彼女はどのような態度で氏と顔を合わせるのだろうか。彼女にもたらした当惑ぶりのことを大いに得意がる。

（第四巻終わり）

訳　注

(一)（一頁，九行）メルクリウス（Mercury）…ローマ神話の雄弁家・職人・商人・盗賊の守護神。ギリシア神話の Hermes に当たる。なお，寓話作者とはイソップのことである。（Ross）　中務訳『イソップ寓話集』，第一部，八八話を参照のこと。

(二)（一頁，一一行）ユーノー（Juno）…ユーピテル（Jupiter）の妻で，ギリシア神話の Hera に当たる。

(三)（七頁，一四行）快く与えられし喜びこそ甘美なり…Dryden, *Aureng-Zebe* (1676), II, i.（Ross）

(四)（一一頁，一三行）「慈悲深き者は …」…人口に膾炙した諺の類いであろう。なお，箴言一一章，一〇節も参照のこと。

(五)（一一頁，四〇行）エリザベス女王の容姿に対する非難…L.ストレチーの『エリザベスとエセックス』（世界教養全集二七，平凡社，一九六二，一三六頁及び一四九頁）にも類似の言及があるが，出典は不詳。

(六)（一二頁，一一行）ボワローの聖職者…Nicholas Boileau-Despréaux (1636 – 1711), *Le Lutrin*, Chant I, 66 を参照のこと。(Ross)　Boileau はフランスの批評家・詩人。モリエール，ラ・フォンテーヌ，ラシーヌ等の友人で，当時のフランスの文学趣味を確立するのに貢献。古典主義文学の理論書 *L' Art Poétiqu* (1674) はその後の文壇に大きな影響を及ぼした。

(七)（一六頁，一四行）オーストリアのドン・ファン…ファンデアウストリーア（1547 - 78）のこと。スペインの軍人で，Don John of Austria が通称。レパントの海戦（一五七一）でトルコ軍を破った。

(八)（一九頁，一〇行）ドレクセリウスの『永遠論』他…ドイツのイエズス会士 Jeremiah Drexel(1581 – 1638)の *De Considerationes Aeternitatis* (1620)は一七一〇年に英訳され，広く読まれていた。『信仰の実践』は Lewis Bayly (1565 – 1613)の *The Practice of Piety* (1613)のことで，広く読まれ，一七八五年には五九版を重ねていた。フランシス・スピラに関する一冊とは，Nathaniel Bacon の作とされる *A relation of the fearful Estate of Francis Spira in the year 1548* (1638) のこと。(Ross)

(九)(二九頁，一五行)「汝，偉大なる神々よ …」…原詩は Dryden and Lee, *Oedipus.A Tragedy* (1679). III, i. を参照のこと。(Ross)

(一〇)（三二頁，三五行）「どれほど脆い細糸に …」…不詳。(Ross)

(一一)（三四頁，一二行）老テレンティウス…ローマの喜劇作家 Publius Terentius Afer (*c.*190 – *c.*159B.C.)のことである。*Andria*, 555 を参照のこと。(Ross)

(一二)（三四頁，三四行）「人の好い手軽な花嫁得んものと …」…Samuel Butler (1612 – 80), *Hudibras*, *Part Third*, I, 23 – 26.

(一三)（六一頁，一三行）ゴージット（gorget）…首・胸を覆う装飾的な襟。

(一四)（七二頁，四〇行）ミドサマーデー（Midsummer Day）…六月二四日であるが，この日はバプテスマのヨハネの祭日で，英国では四季支払勘定日（quarter days）の一つになっている。　ちなみに，英国の四季支払日は，Lady Day（三月二五日），Midsummer Day（六月二四日），Michaelmas Day（九月二九日）および Christmas

Day（一一月一三五日）である。

（一五）（八三頁、一一行）大厄年（the grand climacteric）…六三歳または八一歳である。

（一六）（八八頁、三一行）「善意に悪意をもって報いる」…サムエル記上二五章、一一節。（Ross）

（一七）（八九頁、一一〇行）ウィッチャリー…王政復古期の英国の劇作家・詩人 William Wycherly (1640? – 1716) のことか。密かに Drogheda 伯未亡人と結婚したのは、ウィッチャリー四〇歳頃のことと言われている。

（一八）（八九頁、三六行）レキシントン卿（Lord Lexington）…Robert Sutton, second Baron Lexington(1661 – 1723)のことか。マドリードに派遣されたのは一七一二年のことである。

（一九）（九頁、一九行）〈Raro antecedentem … 〉…跛なる Pœna（復讐の女神）は自分に先行する罪人を見逃すこと稀なり（復讐は来ることは遅きも、罪人はそれより免るることは能はず）Horace, *Carmina*, III, 2, 31.

（二〇）（九三頁、一行）「欲望を募らせ … 得難きものとするために」…Dryden, *Aureng-Zebe*, II, i. （Ross）

（二一）（九四頁、三六行）乱刺法（scarification）…多数の切込みによる皮膚切開術。（Ross）

（二二）（九五頁、四行）〈ロドトス、ヨセフス…Herodotus(484? - ?425 B.C.)はギリシアの歴史家で、〈歴史の父〉と称される。Flavius Josephus(37? - ?100)はユダヤの歴史家・軍人。その著 *Antiquities of the Jews*, IX. iv. 92（trans. W. Wilson 1737）に本文で言及された記述が見られるという。（Ross） なお、ダンテの『神曲』（集英社版世界文学全集2、集英社、一九八〇）三六九頁の注（8）も参照のこと。

（二三）（一〇二頁、一六行）モンテーニュ風…Michel Eyquem de Montaigne(1533 – 92), *Essays,* trans. John Florio(1603), III, iii.（Ross） なお、原二郎訳『モンテーニュII』（筑摩世界文学大系一三、筑摩書房、昭和四八年）、一六三頁～一六七頁も参照のこと。

（二四）（一〇四頁、一九行）『ヴェニスは揺るがず』…*Venice Preserved, or, A Plot Discovered. A Tragedy* という、イギリスの劇作家 Thomas Otway(1652 – 85)の一六八二年の作品。

（二五）（一〇七頁、一〇行）グリーンボックス（green box）…上階の桝席のこと。

（二六）（一〇七頁、一一行）ベルヴィデラ（Belvidera）…『ヴェニスは揺るがず』のヒロイン。

（二七）（一〇七頁、一三五行）ナット・リーの描いてみせた不吉な神々…Dryden と Lee の合作 *Oedipus* (1678), I, i.を参照のこと。

（二八）（一一〇頁、一三行）古のイスラエル人みたいに…第三巻の訳注（四三）を参照のこと。

（二九）（一一四頁、一三行）アイルランドの人たちの言い方…いわゆる Irish bull は、一見したところでは尤もらしいが、その実、矛盾した不合理な言い回しを特徴としている。

（三〇）（一一四頁、三一行）トリトーン（Triton）…海神 Poseidon と Amphitrite の息

子で上半身は人、下半身は魚の半神で、海馬（馬頭魚尾の怪物）に乗ってほら貝を吹き鳴らす。

(三一)（一二五頁、一一行）「遠来の品で、高価なものは　…　」…一四世紀半ばからの諺に、Dear bought and far fetched are dainties for ladies.　とか、Far-fetched and dear bought is good for ladies.　というものがある。(Ross)

(三二)（一三二頁、二八行）テイペレアリー（Tipperary）…アイルランド中南部の州、および、その州内の市場町の名であるが、〈テイペレアリー経由〉という表現の含意については不詳。

(三三)（一三四頁、九行）カール一二世…Charles XII（1682 - 1718）在位は一六九八 - 一七一八。ロシア侵略を図ったが大敗し（一七〇八）、トルコへ逃亡した。

(三四)（一四六頁、一二行）「私たちはその最も善き行いにおいて罪を犯す」…出典不詳。

(三五)（一五二頁、一三行）ボレアース（Boreas）…ギリシア神話の北風の神。ちなみに、東風の神は Eurus、南風の神は Notus、西風の神は Zephyrus である。

(三六)（一五二頁、一六行）ポイボス（Phoebus）…ギリシア神話で太陽を表す。

(三七)（一五二頁、一三行）テティス（Thetis）…ギリシア神話の海神 Poseidon の五〇人の娘（海の精 Nereid）の一人で、Peleus との間に Achilles をもうける。

(三八)（一六五頁、一二行）「見えない手が生み出すのだよ　…　」…A. Cowley のピンダロス風頌詩、Destiny, ii, 11 – 15 を参照のこと。(Ross)

(三九)（一六九頁、二四行）マームジー（Malmsey）…（Madeira 産の）強い甘口の（白）ワイン。キプロス産、クープ産のものも同じ。(Ross)

(四〇)（一七八頁、二二行）セントステイーヴンズチャペル…St.Stephen's chapel は英国下院議会の俗称である。

(四一)（一七八頁、二九）聖ステファノの運命…聖ステファノ（St.Stephen）はモーセと神を冒涜したとの偽りの告発を受けて殉教した、〈霊〉と〈知恵〉に満ちた七人の一人。使徒言行録六章と七章を参照のこと。

(四二)（一七九頁、五行）アーチボルド・ハッチソン（Archibald Hutcheson)…ロンドンの法廷弁護士で、トーリー党の議員。(Ross)

(四三)（一七九頁、六行）クラッグズ大臣…James Craggs (1686 – 1721) は一七一九年から南方省の大臣で、南海泡沫事件の最中に天然痘に罹って死ぬ。(Ross)

(四四)（一八四頁、五行）ウォラー…英国の詩人 Edmund Waller（1606 – 87）のことで、*Of Love*, 13 – 14 を参照のこと。(Ross)

(四五)（一九一頁、四〇行）プリニウス、リプシウス…Pliny (A.D.23 – 79) はラテン語名は Gaius Plinius Secundus で、ローマの政治家・作家。*Historia Naturalis*（77）を著す。Justus Lipsius (1547 – 1606) はフランドルの人文主義者・古典学者であり、主著は *De Constatia*（『不動心について』1584）。

(四六)（一九三頁、三〇行）「これからは　…　」… Shakespeare, *Troilus and Cressida*, IV, v, 233～40 と、260～62 を参照のこと。(Ross) なお、「ヴィーナスの腰を取り巻く帯」とは、愛情を起こさせる飾りがついていたという、cestus、のことである。

(四七)（一九四頁、三三行）イートンの血止め薬…嘔吐、出血、痔疾に効果があるとい

う Dr.Eaton's balsamic styptic と称する薬が当時出回っていたとのことである。（Ross）

（四八）（一九五頁、三四行）マルの遊歩道、ホワイツ…マルの遊歩道（the Mall）はロンドンの St.James 公園内の木陰の多い遊歩道。また、ホワイツ（White's）は Almack's や Boodle's 等とともに男性客を集めて栄えていた、当時ロンドンにあったクラブの一つ。A.S.Turberville, *English Men and Manners in the 18th Century* (A Galaxy Book, New York, 1926, 1964), p.88 et al. を参照。なお、カカオの木については第二巻の訳注（四）を参照のこと。

（四九）（一九八頁、七行）アッパーフラスク（the Upper Flask）…ハムステッドの頂上近くの居酒屋であり、麓に the Flask という旅籠があった。（Ross）

（五〇）（一九八頁、三〇行）通信（つまり、通心）という言葉自体…ラヴレースの言葉遊びである。つまり、correspondence という語を cor（心臓を意味するラテン語）と respondence との合成語と見做し、「心同士の応答」という含意を与えているのである。

（五一）（二〇三頁、一八行）ナポリの聖人…ナポリの聖人とは St.Januarius のことで、その血はガラスの小瓶に入れられ、祭壇に祀られた。（Ross）

（五二）（二〇四頁、一四行）「食べ物を送り給うは神、料理人を寄越すは悪魔」…一六世紀の諺である。

（五三）（二一三頁、三二行）〈剣を打ちかえて、鋤とし〉…イザヤ書二章、四節及び、ミカ書四章、三節を参照のこと。

（五四）（二一七頁、一八行）愛するがゆえの仲違い…三四頁二一-二三行、及び訳注（一一）を参照のこと。

（五五）（二二六頁、三四行）『喧嘩っ早い恋人たち』…本巻の手紙九、三四頁を参照のこと。

（五六）（二三五頁、六行）「同情は人間独自のものらしく　…　」…ローマの詩人ユウェナリス（Decrimus Junius Juvenalis, c.60 - c.128）の *Satire, XV*, 131 – 47. なお、テート氏とは Nahum Tate (1652 – 1715) のことで、*Satire* の一部を英訳した。(Ross)

（五七）（二三六頁、九行）左寄りの娘たち（the *left-sided* girls）…不詳。初版に基づくペンギン版では、この語句はなく、単に、The girls, he means.、となっている。あるいは、、left-handed marriage（身分違い、ないし、正式でない結婚）への言及か。ドイツにおける貴賤間の結婚（morganatic marriage）においては、花婿は花嫁に左手を与えるのがしきたりであったという。

（五八）（二三六頁、三四行）「そもそも人間の幸せというものは　…　」…英国の文人・諷刺作家 Jonathan Swift（1667 - 1745）の *A Tale of a Tub* (1704), Section IX を参照のこと。（Ross）

（五九）（二三九頁、一四行）レチタティーヴォ（recitativo）…オペラやオラトリオの叙述部で用いられる、語るように歌う歌唱法を意味するイタリア語。英語では recitative と綴る。

（六〇）（二四二頁、一六行）民法博士会館（Doctors' Commons）…St.Paul's の境内にあった The College of Doctors of Civil Law のこと。一八五七年に廃止された。

（六一）（二四六頁、三八行）『ペンブローク』第四巻の手紙六…いわゆる『ペンブローク』第二部に含

まれ′ Everyman′s Library 版では Volume II, Letter XLV(pp.228 - 31)に該当する。

(六二) (二二五〇頁′ 三四行)「お前も胸が詰まるのだな … 」…Shakespeare, *Julius Caesar*, III, i, 282.(Ross)

(六三) (二二五一頁′三三行)白装束…懺悔を行う者は白衣を纏うことになっている。(Ross)

(六四) (二二五二頁′一四行)ルクレティア(Lucretia)…ローマの伝説によると′Tarquinius Collatinus の妻 Lucretia は′睡眠中に Tarquinius Superbus の息子 Sextus に凌辱され′それを苦にし′自殺を遂げたという。

(六五) (二二五四頁′四行)手に感じるほどの真っ暗闇…出エジプト記一〇章′二二節。

(六六) (二二五四頁′三二行)カウリー…第一巻の訳注(二四)を参照のこと。なお′引用された詩行はそれぞれ′ *Miscellanies* (1656)中の′ Ode of Wit′ と *Occasional Verses* (1668)中の′ On the Death of Mrs.Philips′ から。(Ross)

(六七) (二二五九頁′一八行)「悪霊どももそう信じて … 」…ヤコブの手紙二章′一九節。(Ross)

(六八) (二二六四頁′一四行)アーメン…本来′′ amen′ は′ certainty, truth′ という意味のヘブライ語の名詞であり′祈祷や祈願の結びの言葉として「かくあらせたまえ(Be it so really!)」といった意味合いで用いられる間投詞用法が一般的であろうが′古くは′是認や同意を示す副詞用法もあった。また′「同意の表現・表明」という意味の名詞もあり′′ say amen to ~′ で「~に全面的に賛成する」の意となる。なお′第一巻二一九頁三〇行目に見られるクラリッサの言葉は′神の力添えを願う姉の祈願への結びの形を取りながら′姉を茶化していることになろう。

(六九) (二二六五頁′一六行)イングランドの善き女王ベス…エリザベス一世への敬慕の念を込めて′′ good Queen Beth of England′ という表現が好んで用いられていた。なお′エリザベス一世に関する含意については不詳。

(七〇) (二二七一頁′一〇行)『ドラスタスとフォーニアの物語』…英国の詩人・劇作家 Robert Greene(1558 – 92)の散文ロマンス *Pandosto:The Triumph of Time* (1588)のこと。この作品はその後′ *The History of Dorastus and Faunia, or, The Royal Shepherdess* というタイトルで再版された。(Ross)

クラリッサ

ある若き淑女の物語

私生活における最重要関心事を
収録し、

特に
結婚に関し
両親ならびに子供の
不行跡に伴いがちなる難儀の数々を示す。

第５巻

第３版

ロンドン

出版元：S.リチャードソン

パタノスター街、ジョン・オズボーン
ストランド街キャサリン通り向かい、アンドルー・ミラー
セントポールズチャーチヤード、J.and J.リヴィントン
ならびに、バース、J.リークより発売

１７５０

クラリッサ・ハーローの物語

第五巻

手紙　一

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

木曜日　午前八時

彼女の部屋のドアは未だ開いていない。彼女が朝食を共にしてくれるようなことを期待してはいけないのだ。ディナーについても駄目なのだろう。可愛いお馬鹿さんだよ。几帳面さが過ぎて、自分からとんでもない苦労を背負い込んでいるのだ。彼女に対する俺の行為のすべてというのは、ただの浮かれ騒ぎ、ないしは、おふざけと見做されるようなものであり、従って、九割がたの女性からは笑って済まされるようなものなのだ。重大に取り扱えば取り扱うほど、俺にとってと同じく、彼女自身にとってもますます苦痛をもたらすことになるのだよ。

だとすれば、ジャック、ひどく怒っているとしても、彼女自身の考え方からして、あんなにも腹に据えかねているような素振りは見せないほうが得策だったのではないだろうかな。どうしてもそのように見せたがるわけだがね。

だが、もしかすると、俺は必要以上に恐れているのかもしれないな。そうに違いないのだよ。憤慨されるような何か途方もない理由があってというよりも、むしろ、彼女が几帳面すぎるところから俺の恐れは生じているのだ。次の機会にこれよりもひどい目に遭わずに済むようであれば、彼女としても、自分のことを果報者と考えて良いだろう。

愛しの君も昨夜はすっかり怯え、疲れ果てたわけだから、昼まで横になっていても不思議はないのだ。

俺よりは体を休めてくれたものと考えている。彼女の眠りが心地好く、さわやかなものであったことを期待しているが、顔を合わせてくれる時には、まずまずの機嫌であってほしいのだよ。ただただ愛らしく頬を染め、困惑の体で　…　彼女がどんな様子を見せてくれるのか、俺にはお見通しさ。だが、どうしてなのだ。罪人の俺に恥じらうところがないのに、受難者の彼女のほうが恥じらって見せるというのはな。

それにしても、習慣というのは驚くべきものだな。赤面することがどれほど自分たちの魅力を増すものか、女たちは教え込まれているのだよ。従って、連中は顔を赤らめる練習を積み重ね、連中の涙と同じことだが、必要な時にはたやすく頬が染まるようになっているわけだ。要するに、そういうことなのだよ。一方、われわれ男性のほうでは、赤面を罪悪感とか小心さの表れと受け止め、赤くなるのを抑えることに同じくらい骨を折るのだ。

∴　　∴

誓って言うが、ジャック、我が麗しの君が俺に会いたがらないのとほぼ同じ程度に、俺としても、階下の女どもと顔を合わせるのは気恥ずかしく思うのだよ。まだ部屋のドアは

開けていない。奴らに押し入られたりしたくはないからだ。
　要するに、女からはとてつもない人非人を作り出すことが出来る、ということだな。どう呼んだら良いのか分からないが、ある状態の、その大変な高みへと、女の一部の者たちは到達しているにちがいないということだ。ポリーとサリーの両名が俺を愛したのにも負けないくらいに、かつては一人の男を特別に愛しておきながら、嫉妬心の疼きをはるかに乗り越えることが出来た女たちのことだよ。他のだれよりも好きな男の愛情を新たな相手と分かち合い、共有することから生じる無念の思いをすっかり超越した挙げ句に、その男の愛情を競り合うことを望み、促進しようとしたり、自分たちにとっての最高の喜びは他の者たちを自分と同じ立場に引きずり下ろすことにあるとするような、そんな女たちのことだ。何しろ、サリー・マーティンでさえ昨夜は、令嬢の運命の時が近づいていることに思いを馳せ、それこそ大変な喜びようだったのだからな。貴公には想像もつくまい。

　十時過ぎ
　俺はこれまでの人生において、我が魅惑の君に会いたいという、その一念と同じ性急さで何かを切望したことなどは一度としてないのだよ。どうやら彼女は、二時間も前から起き出していたらしい。
　朝の御用を伺おうと、つい先ほど、ドーカスが彼女のドアを叩いたところだ。
　あの娘に頼みなどないという返事だった。
　朝食は召し上がらないのでしょうかと、娘が尋ねた。
　ドーカスが受けたのは、不機嫌に声を抑えた拒否の言葉だ。
　俺自ら出向くことにしよう。

∴

∴

　三度に亘ってドアを叩いてみたのだが、返事は得られなかった。
　「宜しければ、最愛の人よ、お体の具合を伺いたいのです。今日はまだお顔を見せてもらえないものですから、どんな具合か知りたくて、やきもきしているのですよ」と、俺が尋ねた。
　一言の返答もない。ただ、深い溜め息が漏れてきた。咽び泣きにも近いものだ。
　「お願いです、マダム。もう一つ上の階までお供願います。われわれ全員、いかに運よく難を免れたのか、それをご覧になれば、喜んでもらえるはずです」　俺が言った。
　本当に幸運だったのだよ、ジャック、難を免れたのはな。というのも、火は窓の下枠を焦がし、カーテンを焼き、縦枠に張った細割りの樅材の裏にまで達していたのだ。
　「お返事はいただけないのですね、マダム。一語たりとも言葉を交わすに値しない人間ということでしょうか、私は。私との約束を守ってくださるというのは、こういうことなのでしょうか。食堂で二分間［ただの二分間だけです］、ご同席賜るわけにはまいらないものでしょうか」　俺は頼んだよ。
　「えへん」と咳払いが一つ、そして、深い溜め息。返事はそれだけだった。
　「どうしておられるかだけ答えてほしいのです。せめて、元気だとだけでも答えてもらいたいのです。私がお言葉に従う条件となっていた、例の許しというのは、こういうこと

なのでしょうか」

　すると、消え入りそうな、しかし、怒気を含んだ言葉が返って来た。「私のドアから立ち去るのです。破廉恥漢が　…　非情で冷酷ですし、卑劣で当てにならないものすべてを寄せ集めたような人ですね。立ち去るのです、私のドアから。そして、哀れな娘をこのようになぶり者にするのも止めることです。保護されてこそ当然で、踏みにじられるいわれなどはないのですからね」とだよ。

　「私との約束をどんなふうに果たしてくださるのか、分かりましたよ、マダム。もしも衝動的な行為が、これは予想だにしなかった出来事の結果なのですが、大目に見てもらえないというのなら　…　」

　「あゝ、父親の呪いの恐ろしい重みが、このように一字一句違わぬ形で　…　」

　それから、彼女の声がはっきりとは聞き取れない呟きとなって途切れたこともあり、鍵穴から覗いて見ると、両膝をつき、両手と同じようにあの顔を、俺にではなく、天に向けている彼女の姿が目に入った。両手を組み合わせていたが、多分、あの陰湿な暴君の垂れた呪いを免れるよう、祈りを捧げていたのだろう。

　俺も心を動かされずにはいられなかったよ。

　「我が最愛の人よ、ただの二分間で良い。お目通りを許していただきたいのです。お約束くださったあの許しを確かなものとしてほしいのです。そして、もしも私が、かくも神聖な祭壇に何を供えるにせよ、改悛の情だけは決して捧げることがないというのなら、その場で雷光に打ち倒してもらって結構なのだ。その後は一人にして上げましょう。一日中でも、明日の朝までででも構わない。その後、すべて署名するばかりの書類を携えて伺うことにしましょう。結婚許可証を取得の上でです。あるいは、それが無理なら、許可証なしに牧師を伴って参ります。生憎にも貴女がこのように立腹なさる原因となった、あの危険な出来事が現実のことであったのをご覧くだされば、私への厳しい見方ももう少し緩めていただけるはずです。是非とも約束を果たしていただきたい。私はそこに、まんざら生半可とも言えない信頼を寄せているのですからね。」

　「お会いするわけにはまいりません。一度だってお会いしなければ良かったのにと、心からそう思っているのです。仮に筆を執るといたしましても、私に出来ることといたしましては、それが精一杯でしょうね」

　「それなら、最愛の人よ、書面をもってお約束の件を裏書きしていただきたい。そうしてくださるものと期待し、引き下がることにいたします」

　十一時過ぎ

　彼女が呼び鈴を鳴らしてドーカスを呼んだところだ。そして、半分だけ開いたドアを片手で掴んだまま、俺宛の短い手紙をあの娘に渡したのだ。

　「愛しの君はどんなご様子かな、ドーカス」

　「身仕度を済ませておられました。私からはすっかりお顔を背けられまして、まるで胸も潰れてしまいそうに溜め息をついておられましたわ」

　愛しい娘ではないか。まだ乾き切っていない封緘紙に俺はキスをし、吸う息とともにそれを封筒から引き剥がした。

　次のとおりの内容だ。冒頭語の〈謹んで〉は無しだよ。〈ラヴレース様へ〉というのも見

当たらないのだ。

貴方にお会いすることは出来ませんし、避けられるものでしたら、お会いするつもりもございません。貴方の卑劣さや恩知らずなところに接しましてのこの心の苦しみは、言葉で言い表すことの出来ないものなのです。

このような不法行為から私を守ってくれて当然の者たちとの和解につきましても、事情が事情ですし、貴方の仲立ち以外には方法がないということでしたら「これが、ほんの一瞬でも貴方の目の届くところに留まろうといたしますことの、私にとりましては唯一考えられる動機なのですが」、差し当たりましては、ペンとインクだけが私たちの間での意思疎通の手段とならねばなりません。

貴方は一番下等な人間です。最も忌まわしい陰謀家です。ぞっとするほどの侮辱を貴方から受けても仕方のないようなことを、この私がしてきたということなのでしょうか。でも、もう止しましょう。貴方ご自身のためにだけ申し上げるのです。少なくともここ一週間は、この私に会おうなどとはなさらないことです。

不当にも傷付けられ、辱められました

クラリッサ・ハーロー

これで貴公にも分かるだろうが、俺にとって大いに役立ってくれるものなどは、トムリンソンと彼女の伯父とが関わっているこの計画を別にすると、何一つなかったというわけだ。それでいて、何という厳しい立場に我が身を追い込んでしまったのだろうか。シーザーがこれほどの馬鹿であったなら、ルビコン川を渡ったりはしなかったことだろうな。ただ、渡った後で、元老院の布告に怖じ気づいて、事半ばにして退却していたなら、何とも見事な姿を歴史に残していたことだろう。強盗を企てて、体に危害が及びそうだとの恐れを相手に抱かせるのは、強盗が実際に行われたのと同じ程度に処罰に値するのだということを、俺も承知していて良かったようだな。

だが、一週間彼女と会ってはならないというのだからな　…　何とも可愛い女だよ。すべてに亘って俺の先手を打ってみせるのだ。書類のほうは今日中か、遅くとも明日には弁護士の手で完成することだろう。牧師と一緒に結婚許可証が、あるいは、結婚許可証なしに牧師だけかもしれないが、これから二十四時間以内にはそれも確保されるに違いないのだよ。プリチャードの契約書三通もほぼ出来上がっているし、トムリンソンも、彼女の伯父からの好意的な手紙を用意の上で控えている。ただ、一週間彼女と会ってはならないというのだからな。何とも魅惑的な女だよ。彼女の守護天使は旅に出てしまったのだ。少なくとも、ズル休みをしているのだな。だが、それにも拘らず、我が魅惑の君よ、そなたの言う一週間が過ぎれば、否、もっと早いうちに、疑いもなく我が勝利は完全なものとなるはずなのだ。

だが、俺にとって何よりも腹立たしいのは、これほど天晴な娘が約束を破るような真似をするということだ。いやはや、困ったお嬢さんだよ。ただ、完全無欠な人間などはいないのだ。「過つは人の性」だが、「貫徹するは人の常ならず」なのだ　…　まさか、人間離れをしているわけでもあるまい、我が魅惑の君は。

手紙　二

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

木曜日　二時、ペルメル、キングズアームズ亭にて

ドーカスの仲立ちによるのだが、俺の外出に先立って、二人の間で数通の短信が交わされた。俺のものの宛名書きが彼女の結婚後の姓になっているのはそんな理由からだ。それらを受け取るのに、彼女はドアを開けたがらなかったそうだが、おそらく、俺が傍にいたりしてはと恐れてのことだろう。そのため、ドーカスはドアの下に手紙を差し込まざるを得なかったし（貴公のための写しを取った上でだが）、返事もそこから受け取らねばならなかったのだよ。良ければ、ここで読んでもらおう。

ラヴレース夫人へ

まったくの話、最愛の人よ、今回のことについては大袈裟に考え過ぎておられます。階下の者たちは私たちのことを形式上はすでに夫婦だと思っているのです。これほどまでの几帳面さをどう受け止めることでしょう。無礼があったとは申せ、あのように罪のないことなのです。きっかけとなったのも、あのように偶然の出来事なのです。私同様、貴女ご自身の実際の姿を暴露してしまうことになりましょう。これまでのところは、あの者たちも何があったのか承知していないのです。それに、このようなお怒りを招くとは、実際の話、一体何があったというのでしょう。貴女のお言葉に従わなくとも、これよりひどい目に遭うことはなかったはずだなどと、そんな結論を引き出して当然な理由を私にお与えになるようなことは、名誉にかけたお約束を破ることにもなりましょうし、まさかなさらないものと確信している次第です。

貴女の繊細なお気持ちを傷つけることとなりました点は、私も心の底から後悔しております。とは申せ、極めて偶発的な出来事だったのです。そのために、あれほどのひどい汚名を着せられねばならないものでしょうか。「一番下等な人間」、そして「最も忌まわしい陰謀家」とは　…　何とも厳しいお言葉です。それも、これだけの淑女のペンで綴られたものなのですからね。

もう一階上までご足労願えますなら、今回の一件で私は、貴女にとりましてはどれほど嫌悪を誘う人間だといたしましても、何の陰謀も企んでいないことを納得していただけるはずなのです。

何としても会っていただかねばなりませんが、昨夜話し合いました問題の何点かにつきまして、お指図をいただくためです。

「必要以上のものはすべて余計」ということです。私が求めておりますのは、お約束くださった貴女からの許しです。両膝をついてその点を訴えたいものと考えております。

食堂に十五分間、お顔をお出しくださいますようお願いいたします。その後は、一日中自由にしていただいて結構です。

最愛の人へ

変わることなき敬愛の念と、衷心よりの改悛の情を添えて

ラヴレース

ラヴレース氏へ

お会いするつもりはございません。お会いするわけにはまいらないのです。私といたしましては、貴方に指示すべきことは一切ございません。神様の思し召しのままに委ねたいと存じます。

貴方の下劣さを、貴方の恩知らずで野卑な下劣さを思い返しますたびに、貴方への怒りはますます募ってまいります。

上品さという点に関しまして、何がやり過ぎで何がやり過ぎではないのかの判断を、貴方に仰ぐような真似は金輪際しないつもりでおります。

現在のところ、貴方のことを筆にいたしますのは、あるいは、頭に思い浮かべますことさえも、私にとりましては苦痛の種になっているのです。ですから、もうこれ以上は強制しないでいただきたいのです。繰り返しますが、お会いするつもりはございません。貴方のせいで、自分自身が下劣に思えるのです。また、他の方たちが私のことをどのようにお考えになりましても、気にもなりません。

ラヴレース夫人へ

お約束の件はお忘れなきよう、マダム、今一度ご注意いたします。また、是非とも履行くださいますよう申し上げますこと、お許しを願います。

最愛の人にご承知おき願いたいのですが、非難されて当然の人間に過ちがあるからといって、より完璧な人間が犯す過ちを正当化することにはならないという点です。度を越した几帳面さは、几帳面さに欠けるのと変わりないのです。

これほどの厳しいお叱りを受けて当然な不手際が、いささかでも私にあったとは考えられないのです。

貴女へ寄せる想いの激しさゆえに、穏当な範囲を越えることが私の側にあったかもしれない点はお認めいたしましょう。しかし、ご命令ならびにご懇願の向きが、あのような折にも拘らず、私に対し力を発揮したということ、これは、僭越とは存じますが、ご一考に値するかにも思われるのです。

一週間は顔を出さないようにとのお申し付けですが、トムリンソン船長の上京前にお許しが得られない場合、船長には何と話したら良いのでしょうか。

食堂までお越しくださいますよう、今一度懇願いたします。この魂にかけて申し上げますが、マダム、どうしてもお会いしなければなりません。

結婚許可証の件や、その他極めて重要な委細につき、ご相談いたしたく存じます。階下の者たちは私たちが結婚しているものと考えているわけですし、このような問題をドア越しに話し合うような真似はしたくないのです。

何卒、数分間のご同席を賜りたいものと存じます。その後は一日、お一人にして差し上げましょう。

もしも、お約束どおりにお許しをいただけるのでしたら、心から悔い改め、苦しんでおります私は勿論、貴女ご自身にとりましても、早速にお許しいただくことこそが、最も苦痛が少なくて済むことに違いないのです。

心から悔い、悲嘆に暮れております、貴女の

ラヴレース

ラヴレース氏へ

私に付き纏いますと付き纏いますほど、貴方にとってますます事態は悪化することになるのです。

仮にも貴方のことを思いやるようになる時期があるのかどうか、その点を検討いたしますのには時間が必要です。

差し当たりまして、私が心から願っておりますのは、今後二度とお顔を見ずにいられることなのです。

貴方への好意をほんのかけらほどでも私から引き出すことの出来るものがあるといたしますと、そのすべては、ユダのような似非保護者ではなく、血のつながっております実の身内との、あの待望の和解に由来するのです。

差し当たりまして、結果のことは気に掛けておりません。自分自身に嫌悪を感じるのです。それに、私が高く買って当然なのはどのような人なのでしょうか。考えるのも耐えられないような侮辱を加えることで、寄る辺ない哀れな娘に（他ならぬご当人のせいで友人を失ったのです）汚名を着せるばかりか、ご自分の望みまでも汚すこととなる、そんな陰謀を企む男などではございません。

ラヴレース夫人へ

マダム、

民法博士会館へ出向くことにいたしましょう。そして、ご不興を招くという不運はなかったかのように、細々とした事柄一切につき、手続きを進めるつもりです。

是非とも言わせてもらわねばなりません。あのように思いも寄らぬ出来事なのです。熱意のあまりとは申せ、貴女のような繊細な心を備えた淑女の目には、私の態度がどれほど間違ったものに映ったといたしましても、あのような際に貴女の嘆願を受け入れたという点を「貴女が私に対して支配力を有しておられることの一例ですし、これを例示出来る男は多くはいないはずです」正しく評価していただけますなら、お言葉に従う条件となっております、例の厳粛な約束事を果たしてくださるよう要求する資格が、私にも与えられて然るべきだということです。

帰宅後、お目にかかります際には、もっとお優しい、そして、あえて申しますなら、より公正なお気持ちになっていていただきたいものと願っております。結婚許可証取得の如何に拘らず、私に望みをつなぐよう命じてくださいました、あの「間もなく」という時期を、是非とも明朝のこととしていただきたいのです。こうすることですべてが丸く収まりますし、私もこの上ない果報者になれるのです。

贈与財産証書につきましては、すぐにも署名出来るのです。あるいは、今夜にもその用意を整えることにいたします。

後生です、マダム。怒りのお気持ちを煽り立て、過ちの程度とはあまりにも不釣合な不

機嫌さにまで変えてしまわれるようなことはお止めいただきたいのです。それでは、私たち二人のことが階下の者たちに露見してしまうでしょうし、また、私たちにとってははるかに重大な意味を持つのですが、トムリンソン船長にも正体がばれてしまうということです。マダム、何卒お願いいたします。この次に船長が訪ねて来られる時にも、私たちが夫婦であることを、氏に確信してもらえるようにしておきたいのです。

ディナーのお相伴は認めていただけそうにもありませんから、夕刻までは戻らないことになるでしょう。その頃には、明日の件にご同意の上、この私に祝福を垂れるお気持ちになっていただけるものと、僭越ながらも期待する［お約束のことがあるのですから、私もこの種の言葉を用いる有資格者であると考えるのです］次第です。

敬愛して止まぬ貴女の

ラヴレース

俺はどんなに楽しみにしていたことだろうか。すべては起こってからまだ間もないことでもあり、彼女が陥っているはずの愛らしい当惑ぶりをどう楽しんでやろうかとだよ。だが、俺の帰宅に際しては、彼女には顔を合わせてもらわねばならんし、そうしてもらうつもりだ。何でもないことにあんなにも空騒ぎはしないほうが良かったのだ。俺は勿論のこと、彼女自身にとってもな。怒りの火を燃やし続けねばならんな。気持ちが萎えて、憐憫の情などに化けてもいけないからだ。愛情と憐憫の情とは、いかに強力なきっかけによってであれ、切り離すのは困難なのだが、一方、怒気というのは、それがなければ同情ともなり得るものを、憤りに変えてしまうのだ。男が完全に不快感を抱いているもので、その目に愛らしく映るものなどは、一つとして有り得ないということだな。

最後の短信をドアの下に押し込み、それが拾い上げられるのを見届けた上で彼女に伝えるよう、ドーカスに命じた。外出前に返事が欲しいということをだよ。

返事は口頭によるものだった。どちらへ行かれようと、何をなさろうと構わないと伝えてほしい、とのことだった。そして、再度ドーカスに促されると、彼女が俺に話すべきこととしては、これがすべてだ、というのだよ。

彼女のドアの前を通り過ぎる時に鍵穴から覗いて見ると、彼女がベッドの脚のところに両膝をつき、顔と胸はベッドに沈め、両腕を投げ出している姿が目に入った［惚れ惚れする娘だよ。たまらなく好きだね］。そして、苦悩に身悶えしている様子で、あれだけ離れていても聞こえたのだが、胸も張り裂けんばかりに咽び泣いているのだ。誓っても構わないが、ジャック、俺は情け深い男なのさ。回想は俺にとっては敵ということだな。神々しいばかりの素晴らしさなのだ。これだけの日々を、彼女と共に幸せに過ごしてきたというのに、今はこうも不幸な目に遭っているのだ。そして、それは何故だと思うかな。だが、彼女は純粋そのものなのだ。そして、結局のところ、どうして俺はこんなにも苦しめなくちゃいかんのか、ということになるが、ただ、こんな気持ちのままでは、我と我が身を当てにするわけに行かないということだよ。

∴　　∴

結婚許可証を取得する際に二人の助けを借りようというのだが、ここでモーブレーとマ

ロリーを待っている間、気晴らしのつもりでポケットから書類を取り出したところ、差し出がましいことに、俺の手に最初に飛び込んで来たのは貴公の最後の手紙だった。再度詳しく読んでみるという栄誉を授けてやったわけだが、このお陰で、自分から進んで触れるのは慎もうと心に決めていた話題が、この胸に蘇ってくることになったのだ。

俺は覚えているのだが、俺の求婚に対する引き裂かれた返信の中で、「謙譲は卑しさとは違う」と愛しの君は言っているのだよ。この見分け方については、この世の誰よりも彼女のほうが良く承知しているのだ。確かに、謙譲には高貴さが含まれるものだし、彼女の謙譲さにはいつも高貴なところがあったのだ。ただし、その高貴さも、謙虚な態度に優雅さを添えるものだった。何しろ、そこには、高慢なところ、無礼な言動、一見して分かる優越感などは一切窺えなかったからだ。これが、ハウ嬢も認めるところなのだが、彼女の人柄全般の一部になっているということだな(ア)。

永久に俺を彼女一人のものとするにはどう振る舞ったら良いのか、彼女に教えてやることは出来る。俺の元を逃げ出すわけに行かないことは、彼女も分かっているのだ。遅かれ早かれ俺に会わねばならないのは承知のはずだし、早ければ早いほど礼に適ったことにもなるのだよ。彼女が腹を立てるのは大目に見よう［たとえ、彼女がクラリッサと称する女でなくとも、彼女に見せた俺の馴々しい態度は憤慨に値する、ということではない。そうではなく、あのように気難しい潔癖さからすれば、憤慨するのが似つかわしいことだからだ］。しかし、彼女が怒りを表すにしても、俺への憎悪より愛情のほうを多く示してくれるようであれば、また、火事の件は策略などではなく、その後に起こったことすべても、ただの偶然であったと信じるふりをしてくれるなら、そうだよ、ふりをしてくれるだけで良いのだ　…　そして、それに基づいて、優しく諫めたり、彼女の驚きにつけ込もうとした俺を窘めるような、そんな遜った態度を取ってくれるなら、そして、最後には、この件があれ以上の結果を伴わなかった点に満足し（そうして当然なのだが）、俺の名誉心に対して少し気前良く信頼を寄せてくれるようであれば［力を持つ者は、信頼されるのを好むものなのだよ、ジャック］、彼女の試練のすべてに終止符を打ち、祭壇の前で彼女と誓いを交わしても良いように思うのだ。

それしても、トムリンソンと彼女の伯父に関するもののように、あんなにも大胆な手段に訴えるとは　…　こんなところまで進んでしまうとは　…　あゝ、ベルフォード、ベルフォード、彼女を困惑させたわけだが、同じく、俺自身も途方にくれているのだ。結婚に対するこの忌まわしい嫌悪感のせいなのだよ、すっかり面倒に巻き込まれてしまったのはな。お陰で、どれだけ辻褄の合わないことをしでかす羽目に陥ったことだろうか。

彼女に捧げた幸せな日々を振り返るのは、俺自身にとってもまことに楽しいものだ。もっとも、俺も趣向を凝らすのは止めるよう決心することが出来たなら、また、そうしてやって当然なわけだが、彼女に似つかわしいような、誠意のある態度をいつも保つよう心を固めることが出来たなら、疑いもなく、俺のほうがもっと純粋に幸せな日々を迎えていたはずなのだよ。

せめて明日の朝までで良いのだが、こんな気分が持続すると分かれば［もう丸々二時間は続いたのだし、この気持ちを奨励するのに喜びを見出しているかにも思えるのだ］、俺の

（ア）第四巻の四十四頁を参照のこと。

ほうから貴公を訪問しようと思っている。あるいは、こちらまで貴公にご足労を願うことにしよう。そして、その時こそ　…　相談に乗ってもらうつもりだ。

だが、俺を信じようとしないのだよ、彼女は。俺の名誉心に信を置こうとしてくれないのだ。このような場合には、疑うというのは拒むのと同じことだ。気前よく許してくれるほどには俺を愛していないということだな。俺よりも大幅に優っているのだ、彼女は。えらく自尊心を傷つけてくれるような、そんな美質に恵まれた彼女なのだよ。どうして許したり出来るというのだ。俺よりも自分のほうが優れた人間だと思っているし、それを承知で、面と向かって口にしてもいるのだよ、彼女は。こんな言葉が今も俺の耳には残っているのだ。「立ち去るのです、ラヴレース。貴方などの手の及ばないところにあるのです、私の心は。誇り高い心を相手に争わねばならないのです。宜しいですか、貴方などの手の及ばないところにあるのです、私の心は」(ア)というのだからな。彼女のほうが俺よりも優れていると、ハウ嬢も考えている。貴公にしても、俺の友達、親友にして相棒たる貴公にしてからが同じ見解なのだ。それに俺は、彼女のことを愛するのと同じくらいに恐れてもいるのだよ。こういった思いが、俺の自尊心からして、どうして耐えられるというのだ。妻が（繰り返し何度も心に浮かぶゆえ、これだけ頻繁に口にしてきたわけだが）自分よりも甚だしく優れているとは　…　自分の家だというのに、ただ二番目の人物としてしか見てもらえないのだ。こんな思いをどう耐えるのか、貴公は俺に教示出来るのだろうか。間違いなのだよ。彼女を通して俺が取得するもののことを語るのはな。また、卓越した美質のすべてをそっくり備えたまま、彼女がそっくり俺の所有に帰すのだなどと語り聞かせるのもだよ。そんなわけには行かないのだ。何故ならば、俺のほうが、俺自身のものにではなく、彼女のものになってしまうのではないのかな。妻としての努めを全うする彼女の行い一つ一つが（俺にはそれを受ける資格がないのだから）、俺に恩義を施すことであり、俺に対する功績ともなるのではないのかな。それに、彼女が俺を蔑まないという保証のことだが、ただ彼女の優しさにのみ委ねなければいけないのかな。俺の落ち度を我慢してくれるよう、彼女に身を屈してもらうとはな　…　憐れみのまなざしで俺を傷つけるのだよ。ハーロー一族の娘が、こうして、ラヴレース家を継ぐ最後の者、そして、これまでにも口にして来たことだが、一番卑しいわけではない者(イ)を凌駕するなど　…　そんなことは絶対に御免蒙りたいものだな。

だが、それもやむを得まいな。何しろ、今や俺は、どんな瞬間にも、彼女を目の前にしているのではないかな。全身くまなく魅力に溢れ、優雅さと無垢さを湛えた姿でだ。昨日の真夜中の争いの際と同じにな。そして、あの争いの最中にあっても、彼女の心、声、目や手、そして感情は、揺籠の頃から今の今まで彼女が保ち続けて来た名声と見事に、天晴れなまでに一致していたのではなかったかな。

それにしても、俺もどこまで弱みを見せるつもりなのだろうな、貴公には。

だが、彼女に対しては、常日頃から正当な扱いをして来たのではなかったかな。だとすれば、心を苛立たせるような出過ぎた真似に貴公が走るのは、一体何故なのだ。

それでも、貴公のことは許しているのだよ、ジャック。何しろ（寛大な愛をたっぷり注ぐことの出来る男だからな、俺は）、どんな微かなものであれ、彼女の名声に疑義が唱えら

(ア)　第四巻の手紙三十五を参照のこと。　(イ)　第三巻の五十八頁を参照のこと。

れるくらいなら、世界中の人間が俺を非難してくれるほうが有難いと思っているからだ。
愛しの君自身が以前話してくれたことだが、俺の心には奇妙に入り交じったところがある、というのだよ(ア)。

あの高慢ちきな二人の美女の間で、俺は「悪魔」と呼ばれ、「ベルゼブル」と呼ばれてきたのだよ。まずまずという長所も多少あるのでなければ、まさしく俺はベルゼブルということになってしまうのだ。

だが、ハウ嬢も言っているように、この卓越した娘にとっては、苦難の時こそが光輝を放つ時なのさ(イ)。これまで、彼女はただひたすらに輝きを放つだけだったのだ。

ここ数時間以内のことだが、ベルフォード、俺のことを「悪党」と呼んだのだよ、彼女は。それで、今回の議論を要約するとどうなるのかな。他でもない。俺が彼女の用いる意味合いでの悪党でなかったとしたら、彼女もあれほどまでの天使にはならなかったということだよ。

あゝ、ジャック、ジャック、この真夜中の企てのせいで血迷ってしまったよ。俺ももう完全に終わりだ。俺のせいで自分の姿が自分自身の目にも下劣に映るなどと、愛しの君はどうしてこんな台詞が吐けるのだ。あんな不意打ちを受けての振舞い方、また、あのような状況での憤り方からも、俺の目には、すこぶる株を上げていたというのにだよ。

だが、この奇妙な歓喜の高まりはどこから生じるものなのだ。ここに来ているからなのか。シンクレア夫人のところにいないためなのか。だが、あの家に悪い影響力があるというのなら、我が愛しの君はいかにしてそれを免れてきたのだ。

だが、こんな書き方はもう止めだ。俺の帰宅に際して彼女がどう振る舞うのか、ひとつ拝見することにしよう。ただ、すでに気掛かりになり始めているのは、少しばかり意気消沈したり、幾分か後戻りしたりすることもあるだろうという点だ。というのも、たった今疑念が一つ湧いて来たのだよ。彼女自身のためには、俺のことを気安く許してもらうよう願うべきなのか、それとも、やっとの思いで許してもらうように願うべきなのか、そのどちらが良いのかということだ。

∴

∴

待望の結婚許可証の取得に向けて動き出したところだ。

愛しの君と俺との間のあらゆる事柄に関して、すでに十分な検討を加えてあり、今は困惑もない。俺をより迅速な決定へと至らしめたのは、俺を一週間遠ざけておこうとする彼女の意図について、その真意を見抜けたように思うからだ。つまり、ハウ嬢宛に一筆認める時間を得ようというのだが、彼女のあの忌まわしい計画を実行に移し、その上で、俺を捨て、永久に手を切ることが可能になるような処置を施すのが目的なのさ。さて、ジャック、もしも俺の帰宅に際しても目通りを許してもらえず、横柄な態度で拒絶されるようであれば、また、例の一週間の件が（これだけの見込みが出て来ているのに）主張されるようであれば、俺の推測の正しいことが確認されるわけだし、以下の点も明瞭になるというわけだ。つまり、すべてを丸く収めることとなる儀式が、自分でもそう思っているはずだ

（ア）第三巻の手紙二十九を参照のこと。（イ）第四巻の四十五頁を参照のこと。

が、後は彼女の命令を待つだけというところまで来ているというのに、そんな時に堅苦しい形式に屈してしまうような愛情というのは、精々良くても、あやふやな愛情だったということだよ。そうなれば、俺は彼女の意固地さを何もかも思い出すことになるだろう。その時には、ハウ嬢からの手紙を、そして、その一部については転写したものだが、詳しく読み返してみることになるだろうし、束縛の多い生活を忌み嫌う気持ちに負けてしまうことにもなるだろうな。そして、その時こそは、彼女も俺のものになってもらうのだよ。俺なりのやり方でな。

だが、結局のところ、俺は期待しているのだ。夕方までには、彼女のほうですべてに亘ってさらなる検討を加えてくれていることをだよ。一週間疎遠にするという彼女の脅し文句は、激情に駆られるあまり口に出したのだということ、そして、平安を乱したことに対し、俺と争ういわれが当然あるように彼女は考えているが、約束不履行の点では、俺にも彼女と争う理由が同じくらいあるのを認めてもらえるだろうということをだよ。

ローの次の詩行が頭に浮かんで来たところだ。間もなくのことだが、駕籠かきが恭しく俺を担いで彼女の元へと連れて行く際には、その道すがらずっと、これを繰り返し熱心に唱えることにしよう。

どなたか神よ、巧みな弁舌の技を授けてほしい、
意図するところを優雅な言葉で飾るためにも。
音もなく彼女の心に忍び込み、
怒りの嵐を決して目覚めさせることのない言葉で(二)。

手紙　三
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月八日　木曜日　夕刻

あゝ、呪い殺してやる。台無しだ。お終いだよ。出し抜かれたのだ。一杯食わされたのだよ。畜生め。姿を消したのだ、令嬢が。完全にもぬけの殻だ。ずらかったのだよ。

胸を締めつけるこの痛みが貴公には分かるまい。想像も出来ないだろうな。一体どうしたら良いのだ、俺は。あゝ、主よ。あゝ、主よ。あゝ、主よ。

貴公にしても、俺の邪魔をしようと骨折って来たわけだから、この知らせに接してすることといえば、ドラゴンの翼みたいなその両手を打ち鳴らしてみせるだけだろうな。

だが、筆を進めねばならん。そうでもしなければ、気が触れてしまうだろう。ここ二時間ばかりは、それとさほど違わない状態で、駅馬車のあらゆる駅に、また、旅籠という旅籠に、急ぎ使いの者を送ったのだ。急いでいるものであれノロノロと進んでいるものであれ、荷馬車や乗り合い馬車のすべてに、そして、五マイル四方の看板を掲げている家すべてにもだよ。

偽善者の小娘め。この街には一人の知人もいないのだ[彼女のことはいつだって大丈夫だと思っていたのだよ]。あんな未熟な裏切り者が　…　一族との和解の期待もあるのだから、このような行動に出るのは慎むはずと、最初の短信では、俺に希望を抱かせてもいた

のだ。畜生め。彼女が策を弄するとはな。罪のない馴々しさに何度か晒された後、俺の顔をまともに見ることが出来ないのは、恥じらいから来ていること、慎み深さゆえのこととばかり思っていたのだ。ところが、その間ずっと、厚かましくも彼女は［そう、たとえクラリッサ・ハーローのことではあっても、「厚かましくも」と言っておこう］俺の手から奪い去るべく画策していたのだよ。俺がこれまでに勝ち取ったものの中でも最も高価な財産をな。何ヶ月にも及ぶ苦痛に満ちた労役に服した上で勝ち取られたものなのだ。彼女を求め、野獣のような身内の奴らの間をすり抜け、あの風車にも似た強大な美徳の権化と戦ったというのにな。この美徳というのが、ただ挑んでみるだけでも、何百万という偽証の罪を犯さねばならない代物だったし、今では俺も、その忌々しい翼に吹き飛ばされて、一マイル半も希望から遠ざけられてしまったのだ。しかもこれは、俺の望みすべてが達成されるのも目前のこととなった、まさしくそんな折の話なのだよ。

あゝ、愛の魔王よ、愛の神などとはもう呼ぶまい。貴様の手からこんな仕打ちを受けねばならんいわれがどこにあるのだ。氷のような美徳と手を組んだことなど、かつてなかったはずだ。力弱き鬼神め　…　というのも、俺の望みを挫くつもりではないのなら、貴様は無力に違いないからだが、これからは、果たしてだれが貴様の祭壇に跪くことになるのだ。冒険心に富む者は一人残らず、俺に倣って貴様を忌み嫌い、蔑み、呪い、放棄してもらいたいものだ。だが、あゝ、ベルフォード、ベルフォード、今さら呪ったところで、何の意味があるというのだ。

∴　∴

どうやって彼女はこの不埒な脱出を実現出来たのか。そこが俺には驚きなのだ。ここの女どもが全員で彼女を預かっていたのだからな。実を言うと、今はまだ、細部に亘って問い質すだけの忍耐心はないし、奴らのだれかを近づかせる気にもなれないのだよ。

次の点については確信を持っている。でなければ、彼女をここへ連れて来たりはしなかったのだからな。つまり、この家に属する者で、美徳か悔恨の情か、そのいずれかに動かされて自分を売ってしまうような人間は一人もいないということだよ。地獄にも優るこの悪の巣窟の極悪非道の妖精たちに味わい得る喜びがあるとすれば、その最大のものは、この誇り高き美女を自分たちと同じ立場に引きずり下ろすことだったはずだ。それに、俺に仕えている悪党に関して言えば、奴も彼女を預かっていたわけだが、まことに経験豊かな従者で、悪さそのものが楽しくて悪事を働くような手合いなのだ。どんなに賄賂を掴ませても、絶対に信頼を裏切るよう唆すことは出来ないのだ。そこに悪の要素がありさえすればの話だがね。それにしても、忌まわしい知らせが俺に伝えられた際、あの男が傍にいなくて良かったよ。飛び出して行ったのだ、悪党は。彼女を捜しにな。彼女の消息を少しでも耳にするまでは戻って来ないし、俺と顔を合わせるつもりもない［そんなふうに奴は宣言したらしい］。奴の夥しい数の知り合いのうち、失業中の従者がことごとく招集され、その同じ仕事に雇われたというわけだよ。

この忌まわしい家にこのような天使を（やはり彼女を天使と呼ばねばならんのだ）連れ込んだのは、一体何のためだったのだ。それに、彼女には分相応の面目を施してやろうと目論んでいたのではなかったかな。誓って言うが、ベルフォード、俺はその覚悟だったの

だよ。だが、条件付きで決めたのは何であったのか、貴公も承知のはずだ。そして今、彼女がどんな人間の手に落ちてしまったのか、だれにも分かることではないのだよ。

　このことを考えると、まったく、気も狂わんばかりだ。まさに狂気の沙汰なのだ。身の回りの品はないし、金の持ち合わせもなく、知り合いとていないのだよ。俺に輪を掛けた悪党が、俺が崇めるようには彼女を崇拝することのない悪党が、彼女を手中に収め、彼女の悲痛な気持ちに付け込んでいるかもしれないのだ。もしも、あの小癪な連中はそう呼ばれているわけだが、例の〈汚れなき者たち〉をそっくり生け贄に供し、よってこの無慈悲な娘の約束違反や悪質な策略の埋め合わせにしようとしても、ベルフォード、絶対にお断りだからな、俺は。

∴

∴

　このとおり、彼女にとって好都合な決意を胸に秘めて帰宅したのだよ、俺は。途切れ途切れの言葉ではあったが、彼女の逃亡の件が初めて匂わされた時の、俺の動揺ぶりを判断してもらいたい。自分が何を話しているのか分からなかった。何をしているのかもだ。だれかを殺してやりたい気持ちだった。一つの部屋を飛び出しては別の部屋へ飛び込んで行ったのだが、その間、だれもかれも俺を避けていたよ。古狸のベティ・カーベリーだけは別で、事の次第を俺に打ち明けたのがこの女だったのだ。激しい怒りの最初の衝動に駆られた俺は、鼻薬を嗅がされたのだ、買収されたのだと全員を咎め、年を取っているのだろうが若いのだろうが、邪魔立てする者は身の破滅を招くことになるぞと脅してやった。

　ドーカスは俺を避けて、部屋の錠を下ろしたままだ。サリーとポリーはまだ姿を見せる勇気が湧かない。性悪のシンクレアは　…

　待て。あの忌まわしい女がやって来る。ほんの少し隙間が開いているというのに、ドアを叩いているぞ。メソメソと泣き声で、また、鼻をつまらせながら、察するに、宥めすかして俺の怒りを鎮めようというのだろう。

∴

∴

　自分自身を、そして、他人を呪うしかないというのは、何とも腑甲斐の無い状態だ。怒りの原因はそのまま残っており、思い返すにつけ、被害は大きくなるのだ。時間までが手を結んでその増大に協力している。あゝ、あの女をどんなに呪ったことだろう。

　俺に向かって泣き言を並べ立てるあの女の姿が目に浮かぶようだよ。何という不快なものになるのだろうな、悲しみに歪んだ醜い顔は。悔い改めている時の貴公の顔は、ジャック、それに、この醜悪な婆さんのもだが、憐憫の情を動かすどころか、憎しみをいよいよ不動のものとせずにはおかないのだよ。一方、涙にくれている美女というのは、その美しさに一層磨きがかかるわけで、俺としては、目にするたびにいつも、心の底から楽しんでいたものなのだ。

「どんな言い訳があるというのだ。くたばってしまうのだな、お前も、お前の呪わしい娘たちも。一体、どんな言い訳があるというのだよ。彼女は姿を消してしまったのではないのか。逃げてしまったのではないのか。だが、完全に気が触れてしまう前に、五十人も

殺めてしまわないうちに、ひとつ事の顛末を聞かせてもらおうじゃないか」

∴　　∴

あの女の話を聞いた。策略だよ。あれほどの徳を備えた女性にしては、忌まわしくもけしからん、不埒で許し難い策略なのだ。だが、俺に女を一人紹介してみてくれ。そうしたら、貴公には陰謀家を一人紹介してやろうじゃないか。女性というこの癪に触る連中というのは、策略そのものなのだな。どの一人を取ってみても、生まれついての陰謀家だ。

破廉恥な婆さんから得た報告の大要は以下のとおりだ。

あの女が言うには、俺がこの悪徳の住処を出るとすぐに、ドーカスがあのセイレーンみたいな女に知らせたのだよ「彼女の悪口を言わせてもらいたいのだよ、ジャック。お願いだ、ジャック、罵るのを許してほしいのだ。繰り返すが、すぐにドーカスが奥様に知らせたのだよ」その旨をな。そして、俺は民法博士会館のほうへ赴いており、弁護士から、あるいは、他のだれからにせよ、俺のことを尋ねられた場合、数時間の間はあそこのホーン亭に問い合わせると見つかるということ、そして、その後は、カカオの木かキングズアームズ亭におり、遅くなるまで戻らないはずだということもだよ。それから、何か少し口にしてくれるよう、あの娘は彼女に勧めたのだそうだ。

ドーカスが近づくと、彼女は涙に暮れており、あの生意気な目を泣き腫らしていた。食べ物も飲み物も断り、まるで心臓が張り裂けるみたいに溜め息をついていたそうだ。見せかけの、極端な嘆きようさ。あの唯一同情に値する、慎ましやかで声も立てない嘆き方とは違うのだ。嘆きの真っ直中に身を沈めながら、俺の破滅をもたらし、俺が大切に思っているものを何もかも奪い去ろうと企んでいるのさ。

それでも、俺とは少なくとも一週間は会わない決心だということで、フレンチロールを三、四個に少々のバターとデカンターに水を入れて持ってくるよう、彼女はあの娘に命じたのだが、付き添っての世話は不要とのことであり、また、当座はそれだけの食物で間に合わせるつもりだとも言っていたそうだ。つまり、狡猾なお嬢さんだが、表向きは一週間の籠城のための蓄えにしようというわけなのだ。というのも、たっぷりとした食事は他の天使たちも取りはしないが、彼女とて … 天使と言ったのかな、俺は。これからは死んでも天使扱いなどするものか。彼女の姿が俺の目には汚らわしく映るのだ。俺は死ぬほど嫌っているのだよ、あの女のことはな。

だが、あゝ、ラヴレース、お前は嘘つきだよ。彼女は愛らしさそのものだ。何から何まで、すべてに亘って申し分ないのだよ。

それにしても、彼女が逃げ出したとは … そんなことがあり得るとは … あゝ、ハウ嬢はどれほど勝ち誇ってみせることだろう。ただし、仮にもあの怒り狂う小娘が彼女を迎え入れるようなことになれば、運命の女神が俺のためにたっぷり埋め合わせをしてくれるだろうな。何しろ、その時には、二人をまとめてものにするような手を考え出すつもりでいるのだよ、俺のほうではな。

話の筋を通すために振り返っていたところだ。だが、話の筋道など糞くらえだ。そんなものに用はないのだよ。その逆こそが狂気には最も似つかわしいのだし、間もなくそれが俺の運命にもなるのだろうからな。

彼女の言葉に応じるべきかどうか、ドーカスが破廉恥婆さんに相談すると、「えゝ、結構よ。是非そうしてちょうだい。ラヴレースさんはご存じですもの。お好きな時に奥様を抱く手をね」とのことだった。そして、シェリー酒を一瓶追加するようにとの指示だった。

彼女のほうでも、このように快諾してくれたことを有難く思い、説得に応じて階段を登り、火事騒ぎの被害を見届けることとなった。そして、被害の跡にショックを受けただけではなく、連中の見るところでは、あれが企みなどではなかったことを納得している様子だったそうだ。実は、彼女も認めていたのだが、そんなことではないのかと最初は心配したということだ。こういったこと一切が連中を安心させてしまったわけだな。そして連中は、怒りを表すにしても、何という子供っぽい仕方を彼女は見つけたものかと考え、密かにほくそ笑んでいたのだ。サリーなどは嫌味交じりに、「だけど、ラヴレースさんの奥さんは正しいんだわ。腹立ち紛れにパンやバターと絶交したりなさらない点ではね」などと言っていた。

ところで、連中は子供っぽさと想像したわけだが、これほどの才媛のことでもあり、俺ならば、そんな態度そのものからして、前夜の事件の後だし、彼女の頭を疑うか、あるいは、彼女の目的に疑念を抱いたか、そのどちらかだろうな。何しろ、同じ屋根の下に暮らしていながら、俺から姿を隠していようと彼女が決心を固めた、その一週間の間には、結婚も（彼女の知るかぎりでは）完全なものとなる予定だったわけだからな。

彼女はハウ嬢宛の手紙を持たせて、ウィルをウィルソンのところへ遣わし、自分宛のものは届いていないか尋ねてみるように命じた。

あの男は出掛けるふりをしただけだった。そして、一通も届いていなかった旨の報告をし、彼女の手紙は俺に渡そうと、自分のポケットに納めてしまったのだよ。

すると彼女は、もう一通を（こちらのほうもあの男に渡したのだが）ホーン亭まで持って行き、俺に届けるように命じた。こういったことすべてが、一見したところでは、少しも急ぐ様子なしに行われたのだ。ただ、彼女はひどく真面目くさった顔付きをし、ハンカチを頻繁に目に当てていたそうだ。

ウィルはこの手紙を携えて俺のいるところへ向かうふりをした。もっとも、奴さんにしても、彼女が二度目の使いを頼んだ時には（それも、顔を合わせるのは拒んだのに、当の俺のところへだから）、少しおかしいと気づくだけの頭はあって、異常なことと感じたわけだ。そこで、不審に思う気持ちをサリー、ポリー、そして、ドーカスに話して聞かせたのだよ。ところが、ドーカスが、令嬢は行動的というより、むしろ悲しみに茫然自失の様子だと皆に請け合い、少し興奮しているため、自分が何をしているのか分からない状態のように確信する、などと言ったものだから、連中はあの男が疑問に思った事柄を軽く考えてしまったのだよ。ただ、一人残らず皆が当てにしていたのは、彼女が世慣れていないことや、隠し立てのない彼女の気質のこと、そして、外出するような素振りを少しもしていない点とか、これまでに何度かしたように、馬車や駕籠を呼んでいない点だったのだ。それに、言うならば一週間の籠城というわけだが、その準備を整えていたことにも一層強い信頼を寄せてしまったのだな。

ウィルは俺のところへ手紙を届けることを口実に外出したが、すぐに引き返した。俺から頻繁に与えられていた注意を思い返してのことだが、やはり心配だったのだな。明確な指示を受けた場合には、自分一人で判断したりせず、俺にも予見出来ない状況のため、少

しでも疑問が生じた際には、つぶさにその状況を見守るべきであり、それが咎められずに済む唯一の方法だ、という注意だったのだよ。

しかし、彼女が抜け出したのは、このわずかな合間のことだったに違いない。実は、あいつが戻るとすぐに、連中は正面玄関とくぐり戸の戸締まりをして、母さんと二人のニンフは少し庭を歩き回り、ドーカスは二階へ、そして、ウィルのほうは（奥様に姿を見られるとか、声を聞かれるとかするのを避けるためだが）台所へ逃げ込んでいたのだ。

ドーカスは奥様の部屋のドアが開くのを確かめられる場所に陣取っていたのだが、三十分ほどすると、ドアのところへ行って鍵穴から覗いて見ようという気持ちを起こした。彼女の言によると、一日中塞ぎ込んでいた様子からして、奥様が早まったことをなさるのではないかと心配だったというのだ。そして、鍵がドアに差し込んだままになっているのに気づいたが、これはあまり普通のことでないし、ドアを三度か四度叩いてみても返事がないので、「奥様、奥様、お呼びでございますか」と声を掛けながら、開いてみた。控えの間にいるのだろうと想像してのことだよ。

返事がないので、あの娘は控えの間のほうへ進んだ。そして、彼女がいないのを知って驚いてしまったというわけだ。娘は食堂へ、次いで俺の部屋へと駆け込み、控えの間という控えの間をくまなく探したのだが、その間ずっと、何か悲しい破局を目撃することになりはしまいかと恐れていたそうだ。

彼女がどこにも見当たらないので、娘は、「奥様をご覧になりましたか。じゃあ、逃げてしまわれたのですわ。上にはどこにもいらっしゃらないのですもの」と叫びながら、婆さんと二人のニンフたちのところへ駆け降りて行った。

連中は自信を持っていたのだよ。彼女が逃げ出したはずはないとな。

すぐに、家中が大騒ぎだ。階段を駆け上って行く者があれば、上の部屋から下の部屋へと降りて来る者もいる。そして、誰もかれもが、どうして俺の顔をまともに見られようかと、金切り声を上げているのだ。

自分もこれまでだな、とウィルが叫んだ。奴は連中を咎めたが、連中も奴が悪いと言うのだよ。そして、だれもが相手を非難し、また同時に、言い訳をしているのだ。

家の中すべてを、控えの間も一つ残らずだが、十回も繰り返し調べ、無駄なことが分かると、連中はここ二時間ほどの間にこの家の近くに来たポーター、駕籠かき、貸し馬車の御者全員に使いを出し、彼女の特徴を説明した上で、しかじかの若い婦人を目にした者はだれかいないか、問い合わせてみることを思いついたのだ。

お陰で、連中にも少し光が見えて来たのだが、俺にとってもそれは、この胸に抱くことの出来る唯一の希望の曙光といったようなものであり、完全に絶望することなくいられるのも、そのお陰というわけだ。駕籠かきの一人が連中に次のような話をしたのだよ。問題の婦人が四時少し前に（大急ぎで、まるで怯えているような様子だったが）、ハンカチにくるんだ小さな包みを片手に持って、家から出て来るのを目にしたというのだ。また、返事ももらえないのに盛んに彼女を誘っていた相棒に向かって、次のような意見を述べたのだそうだ。見事なご令嬢だが、悪い夫か、ひどく怒りっぽい両親がいるに違いない。両目を泣きはらしているように見えるから、とな。これを耳にした三番目の男が、やり手婆さんの囲い地から逃げ出した雌鹿かもしれないぞ、と答えていたというのだ。これを話してくれた時のシンクレア夫人は、呪いの言葉を交え、また、その小生意気な悪党がだれなのか

知りたいものだと願っていたよ。自分の評判はもっと立派なものだと、彼女としては本当にそう思っているというのだ。暮らし向きは申し分なく、買い物をすれば、だれに対してもきちんと支払いをしているし、客として家を訪れるのは、紳士の中でも最高の、極めて礼儀正しい人たちであって、騒ぎや諍いが外に漏れたり、世間に知られたりしたことは一度としてないのだから、というのだな。

この情報を提供した男は、こういった様子に興味を掻き立てられ、気づかれないようにして彼女を尾行したのだ。彼女は何度も後ろを振り向いていたそうだ。彼女とすれ違う者は全員振り返り、後ろ姿を目で追いながら、彼女の涙や忙しげな足取り、そして、その魅力的な容姿について、思うところを口にしていたという。やがて馬車溜まりのところまで来ると、乗って行きませんかと、一人の御者がしつこく誘い掛けた。乗っても良いとの返事に、御者は馬車を降り、彼女が急いでいる様子なので急ぎドアを開けた。すると、彼女も慌てたためにつまずいて、馬車の中に転げ込んでしまったのだよ。そして、つまずいた際に彼女が両方のすねを痛めたものと、御者は信じているのだ。

彼女の悪質な欺瞞行為のことはあるにしても、当時の彼女の胸には一体どんな思いや不安がよぎっていたのだろうな。その点に思いを馳せても、この寛大な心が彼女のために動かされることはなかったというのであれば、ベルフォード、この身は悪魔にくれてやっても惜しくない気持ちだよ。あの繊細な心の持ち主が、世の非難をまったく気に留めないというのだからな。だが、おそらく、出会う者一人一人の中にあるラヴレース的なものによって捉えられてしまうのを恐れているのだ。それと同時に、どんな危険にこれから身を晒そうとしているのか知らないし、どこのだれから保護が得られるのかも分からずにいるのだ。この都会についても、その習わしのすべてに関しても不案内なのだよ。午後の日もすっかり傾いているというのに、金はほとんど持ち合わせていないのだ。また、衣装にしても、今身に着けているもの以外には一つもないのだからな。

ハウ嬢の触れていたタウンゼンドが、昨夜からのこの短い時間で、示し合わせて動き出していたなどということは有り得ない話だ。

それにしても、ここまで危険を冒そうというのだから、ひどく俺を嫌悪しているに違いない。昨夜の不躾な振舞いに対しては、心の底から俺を憎んでいるはずなのだ。あゝ、こんなにも激しい怒りを受けるくらいなら、それに相応しいもっと大きな理由を提供してやるのだったな。彼女の美徳に関しては、俺としても、憤る気持ちのほうが強すぎて、その真価に見合った評価が出来ずにいるのだ。眼前に開けていた素晴らしい見込みから逃げ出したりするのが、美徳に基づくこととは考えられまい。悪意、憎しみ、蔑みの心、ハーロー家特有のプライド（プライドの中でも最低のものだが）、それに、かつて女の胸を支配したことのある憎悪に満ちた激情すべてに由来することなのだよ。そして、もしも彼女を取り戻すことさえ出来れば　…　だが、嵐のごとき我が激情よ、静まるのだ、おとなしく声を潜めるのだよ。かくも激しい非難を浴びせかけている相手というのは、クラリッサ「ハーローとまでは言うこともあるまいが」その人ではないのかな。

例の男には、彼女が「急いでね。大急ぎでね」と言っているのが聞こえた。「どちらまでしょう、マダム」という問いには、「ホルボーンバーズ〔二〕までお願いね」との返事だったが、もう一度「大急ぎでね」と繰り返すと、彼女は両側の窓を引き上げた。そして、男はやがて馬車を見失ってしまったということだ。

この情報を得るとすぐに、ウィルは、彼女の足取りが掴めるかもしれないと、希望に燃えて飛び出して行ったのだが、奥様の消息を少しでも耳にするまでは、とても俺と顔を合わせる気にはなれないと言明していたそうだ。

ところで、ベルフォード、もっぱら俺が望みを掛けているのは、この男が（ハムステッド、ハイゲート、マスウェルヒル、そして、ケンティッシュタウンへの遠出の際に、われわれのお供をしたのだが）これらの場所のいずれかで彼女の噂を耳にしてくれることなのだよ。また、そこに期待を寄せたくなるのは、彼女が前に一度、遠出から帰宅した際にだが、駅馬車のことやその値段について根掘り葉掘り聞いていたからで、一時間ごとに出発するのは利用者には便利だなどと感心していたのだが、それも、あの時付き添っていたウィルに聞こえるように話していたのだ。これを思い出さないようなら、あの悪党め、こっぴどい目に遭わせてやるつもりだ。

∴　∴

彼女の部屋の中をあちこち歩いては、物思いに耽ったり、彼女がちょっとでも触れたとか、用いたとかいう品物を、この手に取り上げたりしていたところだ。着替えの際に彼女が使っていた鏡は、すぐにも割ってしまいたい気分だった。何しろ、よく映し出していたはずの彼女の姿形を俺には見せてくれないからだが、彼女についての考えがいつまでもこの胸から消えないということもある。時にはこれ以上ない優しい言葉で、また時には、最大限の非難の言葉を用い、まるで聞こえるところにいるみたいに彼女の名を呼んでみるのだ。彼女を求めながら、己自身の魂を、そして、少なくとも、魂にとって大切なものすべてを求めているのだ。心にはぽっかりと穴が開いている。体中の血も、その循環を止められたみたいに冷えきった状態だ。彼女の部屋から俺の部屋へ、食堂の中へ、そして、我が心の最愛の者を見掛けたあらゆる場所に入ったり出たり、俺は忙しく動き回るのだが、どこにも留まるわけに行かないのだ。いずれの場所においても、別々に思い出される会話の中で、彼女の愛らしい姿が、何かしら生き生きとした姿勢を装って、残酷にもこの胸に蘇って来るものだからな。

だが、帰宅した際、激しい怒りの最初の衝動に駆られ、閉じ籠っているドーカスを見つけ出してやろうとの決意から三階まで上がり、空しく焼け焦げた膳板を目にしたり、自らの意志の薄弱さから来る愚行ゆえに腰砕けとなったわけだが、あの頓挫してしまった目論見のことを思い出したりした時には、俺の精神錯乱もこれで完了したような気がしたのだよ。そして、亡霊の姿に怯える者のように階下へ駆け降りたのだが、不安で今にも大声を上げそうになっていた。頭とこめかみが、これまで一度だって味わったことのない激しさで、ズキンズキンと突き刺すような感じだったし、それに背中も、背骨がはずれてバラバラになってしまったみたいに痛む始末だ。

だが、母さんの話を聞き、駕籠かきの情報によって兆し始めた希望のことをじっくりと考えてみた今では、ずいぶん気持ちが楽になったし、より冷静な思考も出来るようになっている。心の底からウィルの成功を祈っているのだが、それも、四分か五分おきのことだよ。仮にも彼女を失うようなことになれば、俺の怒りのすべてが、旧に倍する激しさで戻ってくることになるだろう。激しく燃える彼女への想いに加え、こんなふうに初心者など

に、そして、策略や企みに関しては子供みたいな人間に出し抜かれた不面目さのことがあるのだ。俺の胸は張り裂けてしまうか、あるいは、（耐え難い不幸に見舞われた多くの者にとっては、心の救いとなることなのだが）脳味噌がひっくり返ってしまうか、いずれかだろうな。結婚許可証を欲しがって外出する必要など、どこにあったというのだ。少なくとも、彼女と会い、話が纏まるまでは不要だったのだよ。それに、実際の話、自分自身の間違いすべてを手下に押しつけ、決して自分の責任を問わずに済むのが頭目の特権でなければ、俺としては、どこのだれよりも落ち度があったのだと反省したくなるところだな。そして、彼女を取り戻すことが出来なければ、この反省がもたらす心の痛みはいよいよ鋭くなるわけだから、どうしたらそれに耐えられるのだろうか、ということだ。

仮にも　…

《ここでラヴレース氏は、今一度令嬢を掌中にした場合に、仮にも復讐を遂げずに終わるようなことがあればと、自らに呪いをかけているのであるが、あまりにもショッキングなものであり、繰り返すのは憚られる》

∴　　∴

ちょうど今、すすり泣いているドーカスの奴を追い出したところだ。許してやってほしいと、メソメソ訴える母さんに連れられて来ていたのだよ。いわば消極的に、無愛想な形で勘弁してやった。だが、あの二人のニンフについても、俺自身の愚行の結果に対してだが、いずれそのうち、同じくらい猛烈に呪ってやるつもりでいる。そして、これがまた上手いやり方でもあるのだよ。昨夜、というよりはむしろ今朝のことになるが、あれだけの素晴らしい機会に恵まれながら、俺はみすみすそれを見逃してしまったのだなどと、連中が嘲笑的な態度に出ようとするのを防ぐ上ではな。

駕籠かきに対してなされた問い合わせの結果から、また、あのむごいお嬢さんの脱走前の姿を見ていたドーカスの所見から、彼女の服装の様子が判明した。そこで、決心したのだが、もしも他の方法では彼女の消息が得られない場合には、失踪した妻ということにして、ギャゼット紙に尋ね人の広告を出そうと思うのだ。結婚前の旧姓と公に認められた名前との両方でだよ。彼女の失踪のことはすぐにも敵対する者すべての知るところとなるだろうからな。だとすれば、俺の仲間たちに知られていけない理由はないのだよ。連中の問い合わせや情報から、俺としては、彼女についての音信をいくらかでも得られるかもしれないのだからな。

「茶色い光沢地のナイトガウンを着用していたが、生まれつき備わる優雅さもあり、その新古を問わず、彼女が身に着けるものすべてと同様、一見したところ、おろしたての新品のよう。ビーバー帽を被り、首には黒いリボン、胸には青い結び紐あり。淡紅色のサテン地で刺し子縫いのペチコートを纏い、指にはローズカットのダイヤのリングをはめているものと思われる。また、彼女の容姿および外観すべてには、美しさと共に、威厳とも称すべきものが備わっており、彼女を目にする者すべてから、繰り返し注目を集めることとなる」といった具合にだよ。

彼女の容姿の描写については、もう少し骨を折ってみることにする。それに取り掛かる

には、もっと心に寛いだところがなくてはいかんのだ。そして、次のように脅しておくことにしよう。つまり、自発的な帰宅のための猶予期間が過ぎても、なお彼女の音沙汰がない場合、厚かましくも彼女をもてなしたり、かくまったり、扇動したり、あるいは、激励したりする者については、それがだれであれ、俺は告訴に踏み切り、損害を受けた紳士や夫が法律によって、あるいは、他の方法によって保証されているかぎりの復讐をもって報いてやるつもりである、とだよ。

∴　　∴

事態の悪化を招く新たな問題がある。このようにすぐに筆にしたがる質だから良いようなものの、でなければ、俺は依然として狂気に走ることだろうな。

もう一度彼女の部屋に入ってみた。彼女の部屋だったわけだからな。ベッドや部屋の家具一つ一つを眺めては溜め息を漏らしていたのだが、鏡台の引き出しのほうへ目を向けてみたところ、半ば開いている引き出しの一つから、手紙の端が、いわば顔を覗かせるようにしているのが目に入ったのだよ。急いで取り出してみると、彼女の手で〈ラヴレース氏へ〉と宛名書きをしてあるのが分かった。それを目にすると、心臓も飛び上がるような気持ちになり、あまりに手が震えるものだから、封を切るのもやっとという有り様だった。

この忌々しい愛とやらのせいで、俺もすっかり女々しくなったものだよ。だが、かつてこれまで、だれ一人としていないのだよ、俺ほどに深い愛を抱いた人間はな。しかもその愛は、彼女にあるまじき逃亡のことや、俺の失望のことがあってもなお、さらなる深まりを見せているのだ。まったく恩知らずな娘だよ。このように激しく燃え盛る熱情に背を向けて逃げ出すとはな。この火は、椰子の木にも似て、弱められ軽んじられるたびに、一層高い炎を上げてみせるのだよ。

貴公にこの手紙の写しは届けないことにする。彼女のためにそこまで奉仕をしてやるいわれはないのだからな。

それにしても、この傲慢な約束不履行者は、昨夜の一件を根拠として、俺との関係を完全かつ永久に絶つつもりでいるわけだが、そんな覚悟が彼女に出来るなどと、貴公は考えただろうか。見通しが開け始めている和解の件にしても、彼女がひたすら望みをかけてきた、何の値打ちもない一族とのあの和解だが、そのすべてを捨て去る決心が出来るなどということをだよ。だが、確かにそのつもりなのだ、彼女は。俺に対しては、彼女への義務を一切ご破算にし、俺が寄せる期待のすべてから自分自身を解放しようというのだよ。一体、何のためのことだと思うかな。まったくの話、こんな目に遭うくらいなら、それだけのことを実際にやっておけば良かったと、本当にそう思うぞ。忌々しくもけしからん気難しさだな。淑女ぶった気取り屋だよ。気取りではないというのなら、見事な無知さ加減だな。誓って言うが、ベルフォード、貴公にはすべてを話した。俺の過激さのせいというより、むしろ、彼女の抵抗によるところが大なのだよ。思い返して見て、我ながら耐えられないのは、お上品にしていたのに、あんなにも報いてもらえなかったという点だ。もしも俺が彼女の怒りに触れて当然なことを、本当はそうしておくべきだったのだろうが、実行に移していたのなら、彼女としても、たとえ憤慨するにしても、あそこまでハーロー風にはなれなかっただろうし、また、そうなるつもりもなかったはずなのだ。そうなれば、彼

女の恐れていたことのすべてが終わってしまうわけだし、彼女の良識からしても、慎み深いところからしても、事態に対し精々善処することを悟っていたはずなのだ。

ただし、彼女を再び掌中にするようなことが仮にもあれば、彼女のほうからそれを必要にするならばの話だが［そして、他の手では一切間に合わないことははっきりしているのだ］、彼女は次々に手管を、そして、強制的な仕打ちを味わうことになるだろうな。彼女への恐怖心のほうが熱烈な想いにさえも優っているという男、そして、その男の優しさと自制心に対して、彼女がこのように不正手段を弄して勝ち誇ってきたという、その当の相手の男からだ。詩人が巧みに述べているぞ。

食欲の求めに従って、獅子のように襲い、
自らの獲物を手中にするのがより高貴なこと。
ちんちんをする犬のようにおとなしく待ち、
気のない同意を与えられ、愛のかけらにありつくよりは(三)。

とだよ。

つい先頃俺が誓いを立てた件については、貴公も承知のはずだ。それでも、時々は［残酷な娘だよ、まったく。残酷な上に恩知らずだ］、いかにも真相を伝えるものとして、もう一人の詩人の次のような詩行に同意を示したくもなるのだよ。

以前にも優る完全さで彼女は我が魂を支配する。
我が胸に駐屯し、我が意を顧みることなく
己に背く想いにすら千の美質と一万の魅力、
そして、新たに見出された美を備えてくれるのだ(四)。

手紙　四

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

ちょうど今、一通の手紙がウィルソン本人によって俺の手に届けられたところだが、とんでもない手紙だ。

残酷な友に宛てた、ハウ嬢からの手紙だ。ためらうことなく、俺は開封したよ。

手紙を読んでも、また、手紙がこのクラリッサ・ハーローの手中のものとなった暁にはいかなる結果を招いていたか、そのことを思い巡らしても、なお発作を起こさずに済んだというのは、まさしく奇跡というものだな。不敬な点は大目に見てもらおう。何しろ、腹を立てて当たり前なのだからな。

今日の午後コリンズが、当番の日ではなかったのだが、この手紙をウィルソンのところへ持って来た。大至急ボーモント嬢の下宿先へ届けてほしいが、出来ることなら彼女自身に手渡してもらいたいという、たっての望みであった。自ら令嬢に手渡したいと考え、先にこの屋敷（シンクレア夫人の家のことだ）を訪ねてみたのだが、彼女は外出中だと教えられ［残念ながら、そのとおりだ］、ただ、預けて行きたいものがあるのなら、彼女が戻り

次第お渡ししても構わない、と言われたというのだ。しかし、用向きを連中に委ねてしまうのは気が進まなかったこともあり、ウィルソン宅へ赴き（両方の家で受けた、奴に関する説明から分かることだが）、手紙を託したわけだ。ただし、もう一度ここを訪れ、彼女が戻っていないことを知った上でのことだよ。

この手紙で［同封することにするが、書き写すには長すぎるのでな］、コリンズがここへやって来たことについての説明はつくはずだ。

あゝ、呪わしい女だよ、このハウ嬢という奴は。あのじゃじゃ馬に対しては、何か決断をしなくちゃならん。何らかの手を打たねばなるまいな。

∴　　∴

見てのとおり、この忌々しい手紙の余白は指印［☜］で一杯だ。書き手のガミガミ女に復讐しなければならない場所、あるいは、非難に値する場所を示すために、俺が書き込んでおいたのだよ。よく読んだ上で、すぐに送り返してもらいたい。

この場で読んでくれ。俺のことを思うと震えが止まらない、なんてことのないようにしてもらおう。それが出来ればの話だがね。

リティシャ・ボーモント嬢へ

六月七日　水曜日

大好きなお友達へ

ずいぶん長いこと音沙汰がなかったと、きっと貴女はそのようにお考えでしょう。でも、最後になりましたもの以降、別々の折に二通の便りに取り掛かりましたし、その都度、大変な分量を筆にしてもいたのです。それも、勿論のことですが、十分に元気の良☜いものでした。一緒におられるあの憎たらしい破廉恥漢には、すっかり腹が立ってしまいましたからね。とりわけ、先月二十一日付のお便りを読ませていただきました後はそうでした(ア)。

☜　一通目につきましては、タウンゼンド夫人との一件の進捗状況を何かお知らせ出来るようになりますまで、封をせずにおく考えでした。お会いするまでには何日かございましたので、その間、すでに筆にいたしましたものを読み直して見るゆとりが得られましたので、これを中断いたしまして、もう少し熱っぽいところを抑えた文体で書くのが適☜当と考えたのです。貴女のことですから、私の用いましたいくつかの不作法な言い方［☜のほうがお気に召すのでしたら、〈呪い方〉と申しましょう］のことで、きっと私を非難なさったことでしょうからね。そして、二通目もかなり筆を進めておりました頃、あの男がモンタギュー嬢からのお手紙を見せてくれましたことや、あの男の態度が改善されましたこともあって、貴女のお気持ちに変化が生じ、貴方の見通しも変わってまいりましたので、こちらのほうも中断することにしたのです。そして、間もなくすべてが何らかの形で決着を迎えるものと確信いたしておりましたので、このようにどっちつかずの

（ア）第四巻の手紙三十四を参照のこと。

状態では、もう一度筆を手にいたします前に、お二人の間の出来事の成り行きを見守ってみようと考えたのです。

この二日間で、ご承知おきいただきますのが極めて大切と思われます情報を入手いたしましたが、でなければ「貴女のお便りからいたしますと、どの点を見ましても、見通しはますます明るくなっておりましたからね」、おそらくこの決心は今も持ち続けていたことでしょうね。

でも、ここで筆を置き、少し歩いてこなければなりません。お伝えしなければいけないことをお話ししようといたします時に、このペン先にまで溢れてまいります、憤慨して当然な思いを努めて鎮めるためのことですわ。

ヾ　ヾ

自分自身のことですのに、なかなか思いのままにまいりません。それに、母が　…　絶えず行ったり来たり　…　まるで私が色男への手紙でも書いているみたいに、見張っているのです。でも、一つ試してみますわ。大目に見ていただける範囲内に気持ちを抑えることが出来るものかどうか　…

貴女が住んでおられるお家の女の人たちのことですが　…　あゝ、本当に　…　あの家の女性たちというのは　…　でも、あの人たちを高く買うようなことは決してなさいませんでしたわね。ですから、それほど驚くことではございません。それに、貴女ご自身のお家のほうへ移るというお考えがあったため、不安な気持ちが和らいだり、あの人たちの人柄や振舞いについて詮索するお気持ちも鈍ってしまうということがありませんでしたなら、あの人たちのところにそんなにも長く滞在したりはなさらなかったでしょう。ただ、あの人たちの間ではそんなに遠慮なさらないほうが良かったのにと、今ではそう思っております。でも、これでは焦らしているようなものですね。手短に申しますと、貴女が魔窟におられるのは確かだということです。間違いございません。そこの夫人というのは、最も汚らわしい女の一人なのです。しかも、貴女の前では本名を使っておりません。本当のことです。その人の名はシンクレアではありません。それに、その人の住んでいる街路の名も〈ドーヴァー通り〉ではないのです。一人で外出なさったことは一度もないのでしょうか。乗っておられた馬車とか駕籠とかを送り返して、別の馬車か駕籠でお戻りになったことはございませんか。もしも、そうなされば「でも、そのようになさったと、これまで一度でもお手紙で触れておられたようには記憶していないのです」、あの汚らわしい家へ辿り着くことは決してなかったでしょうね。シンクレアという例の女の名をお告げになっても、下宿のことを扱った手紙の中で、あのドールマンが触れていた街路の名前を手掛かりになさろうとです(ア)。

あの恥知らずにいたしましても、その家がまっとうな家で、また、お兄様が引き起こす災難を防ぐことだけが目的だったのでしたら、こんなでっち上げの話も、もう少し言い逃れのしやすい形にすることが出来ただろうと思うのです。でも、この計略はお兄様の計画に先立つものであったのだと、私はそう思っているのです。ですから、その当時

(ア)　第三巻の手紙三十四と三十五。

では、あの男の意図に対しましてはどのような言い訳も成り立たないわけです。あの男が今どのような意図を持っているといたしましても、間違いなくあの時には、あの当時ですら、その本性は悪党だったということです。

☜　はなはだ心配いたしておりますのは、一方には貴女の過度の几帳面さのことがありますし、母の独断的なところがもう一方にはございますから、その間に挟まれまして、貴女の下宿への連絡方法も知らぬまま、甘んじているよう言いくるめられてしまうことなのです。それに、次のようにも考えております。つまり、又聞きで知っているだけの状態に私を追いやる、というよりもむしろ、自らの手で無知のベールに覆われてしまうように仕向けようという案は、あの男から出た話で、私とて同じことでしたが(ア)、貴女がおとなしくそれを受け入れてしまわれたのは、無用の、そして、愚かしい配慮に基づいてのことに過ぎなかったのだというふうにです。と申しますのも、まったくの話、もしも挑まれました場合には、貴女にお便りをするのにはどこへお送りしたら良いのか知らなかったのですと、そんなふうに私は主張出来るわけですからね。本当に自分が恥ずかしくなってしまいます。たとえこれが最初のうちは許されることだったといたしましても、その家には少しも好感をお持ちになれなかったのですし、あの男も策を弄して引き延ばしに出始めていた時なのですから、愚かな行為を続けることの尤もな理由にはなり得ないのです。何ということでしょうね。自分自身にも信頼をおかないようにしなければいけなかったのでしょうか。私は自分の秘密さえ守れなかったのだと、そんなふうに思われますのを黙っていなければならないのでしょうか。ただ、例の家を今度は借りられる、この次には手に入るということで、私たち二人とも、同じ轍を踏んでしまったわけです。愚か者のようにです　…　一緒に並んでいるおとなしいお馬鹿さんのようにですわ。忌憚なく言わせていただきましょう。誓って申しますが、この男は下劣で軽蔑に値する悪党です。間違いございません。どれほど前からなのかは判じ兼ねますが、密かに私たち二人のことをたっぷり笑っていたはずですわ、あの男は。

　それにいたしましても、だれに思いつくことが出来たでしょうね。財産もあれば、それなりの信望もある男で［このドールマンの話ですよ。勿論、貴女のあの恥知らずのことではございません］、確かに以前は放蕩児でしたが［あの男についてはずっと前に問い合わせてありましたから、それだけに一層簡単に納得いたしました］、名門の婦人と結婚し、中風の発作に見舞われたこともありまして、悔い改めた人間なのだと人も考えたくなるような男が、あんな家を［ちょっと調べて見れば、悪いところだということは、き

(ア) 第三巻、手紙五十二の第十二段落および手紙五十四の第十二段落を参照のこと。そこで読者は、この提案が彼女自身から出ていたことに気づくはずである。ただ、そのことがラヴレース氏によっても触れられているため（第三巻、手紙五十九の結末近く）、彼女は忘れてしまったのだと推し量ることも出来るだろう。それゆえ、クラリッサにとっては、ハウ嬢との文通をウィルソンの手を煩わし、リティシャ・ボーモントの名で続けて行くという、提案されていた方法をおとなしく受諾すべき二重の誘因があったことになる。

っとあの男にも分かったはずなのです」、未来の、いいえ、あの当時でもそう思われていたのですが、いずれは花嫁さんになる人をお連れする場所として、ラヴレースみたいな男に推薦するというのですからね。

☜ あまりにも乱暴な書き方のため、多分、明瞭さに欠けていることでしょう。でも、それは避けられないことなのです。それでも、十分おきにペンを置いたり拾い上げたりいたしております。いくらかでも冷静に書き進めたいとの思いからですが、母が出たり入ったりしていることもございます。これまでの書簡に目を通しているだけなら、どういうわけで（と、母が私に尋ねるのです）閉じ籠もる必要があるのか、というのです。と☜申しますのも、母が詮索をしにまいりますと、私のほうではそれを口実にしているからなのです。母も好奇心に駆られてのことなのでしょうが、その好奇心は楽しみよりも苦☜しみをもたらすもののようで、まるで刃物みたいに顔を尖らせております。主のお許しを願いつつ申しますが、今度入ってまいりました時には、きっと母を怒鳴りつけてしまうだろうと、心からそう思います。

ヾ　ヾ

貴女にも大目に見ていただければと思いますわ。母が許すのは当然でしょう。私のことを父親譲りの娘だなどと言っているからです。それに、私のほうでは母親似だと確信しているからでもありますわ。どうしたら良いのか、分かり兼ねております。次に何を書いたら良いのか分からないのです。書くべきことが山ほどございます。なのに、あまりにも忍耐心に欠けておりますし、また、ほとんど機会にも恵まれないのです。

でも、この情報を知るに至りましたいきさつをお話しいたしましょう。

☜ 事実ということもありまして、それだけ気遣いも少なくて済みますので、その点につきまして、ひとつご説明いたします。

さて、こんないきさつだったのです。ラードナー嬢が（お従姉妹さんに当たるビダルフさんのところで、貴女もお会いしたことのある人です）先々週の日曜、セントジェームズ教会で貴女のお姿を目になさったのです。教会にいる間、ずっと貴女から目を離さずにおりました。でも、貴女に向かって二度膝を曲げてお辞儀をなさいましたのに、一度も貴女の注意を引くことは出来ませんでした。礼拝式が終わり次第、ご挨拶に伺うおつもりだったのですが、貴女が結婚なさったのは疑いないものと思われたからです。☜それに、妙な理由もございました。貴女は一人きりで礼拝式へいらっしゃったのですからね。皆さんの目が（あの人に言わせますと、貴女がおられるところではいつものことなのだそうですが）貴女に注がれておりました。このことがあったからでしょうか、貴女は先を急がれましたし、あの人よりドアの近くにおられたこともあって、あの人がお傍に近づきます前に、貴女は外へ出てしまわれたというわけです。でも、あの人は、貴女がお住まいにしておられる建物にお入りになるまで跡をつけるよう、ご自分の下男に指示なさったのです。この下男は、待たせてあった駕籠に貴女が乗り込み、駕籠かきに向

かって、貴女をお乗せした場所までやってほしいと頼んでおられるのを目にしたのです。

次の日、ただの好奇心からですが、貴女と一緒にラヴレースさんがその家に住んでいるのかどうか、こっそり調べさせようと思い、ラードナー嬢は同じ下男を使いに出したのです。そして、この問い合わせの結果、様々な人たちの言葉から、その家は、男女の別なく社交界の人々を迎え入れては便宜を提供している、例の上流向けの曖昧宿の一つと目されていることが判明したのです。

この奇妙な情報に面食らってしまいましたラードナー嬢は、使いに出した下男は勿論のこと、雇った紳士にも口止めをした上で、さらに問い合わせてみました。その紳士は道楽者の友人から、情報が事実であることの確認を受けていたのですが、この友人が例の家のことを知っておりまして、そこには二つの建物があることを教えてくれたというのです。つまり、一つは上品な外観が保たれていて、客の出入りも滅多に許されないものであり、もう一つのほうは、すっかり不道徳な仕事に携わっておりまして、その輒に馴れてしまっている者たちを収容するものだというのです。

いかがでしょうか、あなた。いかがでしょう、あの恥知らずを呪ってはいけないでしょうか。でも、言葉では力不足です。クラリッサとも呼ばれる人をそのような場所へ連れ込もうと企んでいた時のあの男は悪党であったに違いありませんが、そんな悪党に対する私の憎悪の気持ちをうまく表しますには、どのようなことを申し上げたら良いというのでしょうか。

ラードナー嬢といたしましては、どうしたら良いものか分からず、数日の間この件を自分の胸に隠しておりました。貴女のことが好きですし、女性の中で最も敬服しているのが貴女だということもございます。とうとうあの人はビダルフ嬢に手紙を送り、内緒の話ということでしたが、打ち明けてしまいました。ビダルフ嬢も、私が知るようなことになれば、正気ではいられないだろうと恐れ、同じように内緒の話として、ロイド嬢に伝えたのです。そんなふうにして、この一件は耳から耳へ囁かれるスキャンダルみたいに、いくつかの水路を経由いたしまして、やがて私の耳へと届いたわけです。やっとこの前の月曜日のことですけれどね。

このびっくりするような知らせに接しました時には、気力も萎えてしまいそうに思いました。でも、怒りの気持ちが湧き上がってまいりまして、この突然の病を吹き飛ばしてしまいました。私は、内密にしてくれるよう改めて皆さんに頼んでほしいと、ロイド嬢にお願いいたしました。私の母とか、どなたであれ、お身内の方とかには、どのようなことがありましても絶対に知られたくないのだと、お話しいたしました。そして、すぐに私は信頼の置ける知り合いに頼み、トムリンソンのことを出来るかぎり調べてもらうことにしたのです。

この情報が手に入ります前から、そうしようとは思っていたのです。でも、そんなことが必要になるとは想像いたしませんでしたし、仮にも貴女がそのような家にいらっしゃるなんてこと、思い浮かべることもほとんどございませんでした。それに、貴女が見通しの変化を喜んでおられたものですから、私といたしましては、差し控えることにしたのです。また、貴女の受け入れについて計画されておりました決めごとをホッジズ夫人は一切ご存じないことになっておりますし、そればかりか、あの夫人にも、また、直接の当事者以外の人全員にも秘密にしておこうという予定だったわけですから、なおさ

らのこととして差し控えたわけです。そして、間接的に打診してみようと、私のほうで計画しておりましたのが、当のホッジズ夫人だったという次第です。

☜　さて、例の厚遇されすぎております家政婦に問い合わせてみるまでもなく確かなのですが、伯父様のお屋敷から十マイル以内には、該当するような人物は一人としていないということでございます。嘘偽りもございません。四マイルほど離れたところに、トムキンズという名の人がおります。でも、日雇い仕事で暮らしている人なのです。それから、逆の方角へ五マイルほど行きましたところには、トンプソンという人が住んでおりますが、こちらのほうは教区の学校の先生で、貧しく、歳も七十近い人なのです。

☜　年収わずか八百ポンドとは申せ、一人の人間がどこかの州から別の州へ移り住んだりいたしますと、必ずや皆さんの知るところとなりましょうし、また、話題にもなるはずなのです。

☜　ホッジズ夫人につきましては、もしもお望みでしたら、これからでも遠回しな打診は可能でしょう。伯父様もお年を召しておられます。年寄りというのは、愛人が自分たちよりも若い場合には、負い目があるように思いますし、どんなことでも伏せておくのは☜滅多に出来なくなるものです。でも、計画されておりました決めごとを伯父様が秘密にしてくださるものと想定いたしましても、その決めごとを思いつきます前に、夫人がそういう人物を目にしていないことは考えられませんし、少なくとも、それだけ親しくしていらっしゃるという話なのですから、あの辺りに来てからどれほど日が浅いといたしましても、伯父様がその人をお褒めになるのを耳にしていないわけはないのです。

☜　でも、この話はいかにも尤もらしく思えます。貴女のご説明ですと、トムリンソンは大層善良な人物ですし、立派な紳士です。その人がペテンを働くことによって叶えられる事柄というのは、もしもラヴレースが不届きな考えを抱いているのでしたら、その目☜的に必要となる点をはるかに越えております。それに、貴女はそのようなところにおら☜れるわけですからね。貴女のあの恥知らずが見せました応対ぶりは、大変気難しく、尊大なものでしたし、トムリンソンの返答のほうは、大層気迫に満ちており、委細を尽く☜したものでした。それに、伯父様に対するヒックマンさんの働き掛けのことや、お母様へのノートン夫人の働き掛けの件につきまして［私が満足に思いますのは、あの卑劣な☜手先のジョゼフ・リーマンが、その具体的な事柄の一部を、さらに悪辣な雇主に打ち明けることが出来ずにいた点なのです］、貴女に知らせてくれたことがございますし、結婚式の日取りを決めてほしいと、伯父様の名において、しきりに求めていたこともありま☜すが、このようなことをいたしましても、あの男が目論んでいるどんな邪悪な目的にも沿わないのです。それに、伯父様のご提案についてあの男が書いていることもありますが、これは、同じ屋根の下に住まわれるようになった時から、貴女たちは結婚なさっていたのだと考えてもらうためなのです。しかも、ヒックマンさんが伯父様を訪ねた時に☜合わせようとしてのことです。式の時には、信頼の置ける人に同席してもらうように主張しておりますし、それも、伯父様のご指名によるものです。こういった点からいたしますと、すべてにわたりまして、容認するような受け止め方をしてみたい気持ちにもなるのです。とは申せ、賛否両方の面で、困惑することばかりが起こりますので、極悪非☜道の破廉恥漢に対しましては、嫌悪の情を覚えずにはいられません。あの男の作り話や企みのお陰で、私のような詮索好きはせっせと頭を使うことになるのですが、完全に見

破るための手掛かりは提供してもらえないのです。

ただ、すぐに察しがつきますのは以下の点です。つまり、尤もらしく振る舞ってはおりますが、トムリンソンはラヴレースの道具なのだということです。そして、この男は☜何らかの目的のために雇われたのですが、その目的は未だ叶えられていないということです。トムリンソンばかりでなく、メネルにいたしましても、貴女に会いに、この汚らわしい家へ一度ならず来ていたと思いますが、そこが汚らわしい家であることを承知しているのは確かなのです。

だといたしますと、調べた上で好感を抱くようになったと、トムリンソン自身が言明しているのをどのようにお考えでしょう。

ラヴレースにしても、貴女をお連れする前は無理といたしましても、お連れして間もなくそのことは分かったはずなのです。

☜あの男が〈そこに見出しました交友関係〉こそは、おそらく、あの男がそんな家で我慢をしておりますことや、そのように天使みたいな女性を自分のものと呼ぶことが出来る立場にありながら、奇妙にも結婚を引き延ばしておりますことに説明をつけます方法としては、一番尤もらしいものなのかもしれませんね。

☜あゝ、あなた　…　あの男は悪党ですわ。どこから見ましても、極悪非道の悪党なのです。私は確信しております。そして、このドールマンもまた、道具の一人に違いないということです。

あらゆる罪の中でも最大のもので、また、一番恩知らずなものですのに、自分たちに☜信頼を寄せている若い娘を汚しましても、それは罪ではないと考えるような恥知らずがあまりに多いものですから、容姿の優れた者、少なくとも、見てくれの良い人が財産や権力に恵まれた放蕩者の恐ろしい目論見を助長しようとしていると分かりましても、恥ずかしい思いはともかく、驚きを誘うことは少ないとさえ言えるのです。

☜でも、私には考えられることなのでしょうか［と、憤りを交え、驚きながら貴女はお尋ねになるのでしょうね］。貴女の操に狙いをつけるようなことが、ラヴレースには出来るのだろうか、とです。

たとえ、今も持ち続けていることはないといたしましても、あの男がかつてそのよう☜な目論見を抱いていたのは疑いのないところだと思います。私といたしましては、あの男が貴女をお連れした家が汚らわしい家であることを知ってしまったのですからね。このことは、貴女があの男の手中に落ちてしまわれてからこの方、あの男が貴女に見せてきました振舞いのすべてに説明をつける手掛かりとなっているのです。

手短にそのすべてを振り返ってみようと思います。

プライドの高さ、復讐心、そして、踏み均されていない道を辿りますのを喜びとしている点、それらがこの札つきの放蕩児の性格の中心的な要素であることは、私たち二人ともが承知しているところです。

☜あの男は、貴女だけは別ですが、お身内の方たち全員を憎んでおります。そして、愛☜するがゆえに貴女の足載せ台の前に跪かねばならないわけですが、貴女がハーロー家のお一人なものですから、それを苦々しく感じ、無念がっているところを目撃したように思いましたことも何度かあるのです。でも、この破廉恥漢は、その愛においては野蛮人なのです。蛮勇をもって鳴る人間にさえ情けを覚えさせる愛情も、この男の血気を抑え

☜込むことは出来なかったということです。あの男のプライドの高さ、そして、あのいや
☜らしい性質の合間に点在する、わずかな称賛すべき性質から得た声望によるのでしょう
が、目の判断を頼り、見分ける力は持たず、自惚れが強くて、自信過剰なところのあり
ますわれわれ女性から、あまりにも良い待遇で迎えられることが保証されていたもので
すから、たゆまぬ努力を続けたり、忠実な態度を身につけること、そして、自分の御し
難い感情を克服することには、少しも意を用いようとしなかったのです。
☜　あの男にいたしますと、お身内の男性全員に対して、そして、女性のうちの一人に対
しましては、敵意を抱いて当然なちょっとした理由があるのです。貴女に向かって、ま
☜た、自分自身の身内に対しても日頃から示しているとおり、利得よりもプライドのほう
を優先させる男だということです。結婚嫌いを公言して憚りません。女たらしとして悪
名の高い男です。権謀術数に長けていて、それを得意にもしているのです。貴女から愛
の告白を誘い出すことは出来ませんでしたし、貴方のお利口さんの縁続きの人たちがあ
のように貴女を虐待なさるまでは、恋人としての求愛を受け入れてくれるよう、貴女の
☜心を引きつけることも出来なかったのです。あの男の不道徳なところが嫌いだと、貴女
がはっきり口に出しておられるのを、あの男は知っていました。ですから、貴女のあの
男への接し方に冷淡で無関心なところがございましても、あの男といたしましては、貴
女を非難いたしますのは正当なことと言えないのです。
☜　あの男が貴女を引きずり込みました文通でも、危害を防止するということが、貴女の
第一の眼目でした。だといたしますと、どんな結婚の約束よりも独身生活のほうが好ま
しいと貴女が言明なさるのを、あの男は不思議がったりしてはいけなかったのです。そ
れが常日頃からの貴女の好みであることは、承知していたのですからね。しかも、あの
☜ように狡猾な方法で貴女を騙して連れ去ることになる前の話なのです。あの男の貴女に
対するその後の振舞いというのは、一体どのようなものだったのでしょうね。急にお気
持ちを変えてしまわれるのですもの　…
　このように、貴女の態度はすべて整然と首尾一貫しておりましたし、生まれながらの
義務を負うている人々に対しましても、孝養を忘れないものでした。それに、あの男に
対しまして、取り澄ましたところも媚びたところもなければ、暴君のように振る舞われ
たこともございませんでした。
☜　あの男のほうで同意していたのですよ。貴女がおっしゃるとおりの条件でお付き合い
をするということ、また、ご好意をいただくための拠り所とするのは、ただ自分本来の
価値と、いずれ達成されるはずの改心だけだということをですわ。
☜　かなり早い段階で、愛が貴女の心の中に地歩を占めておりましたのは、実際の話、私
にははっきりと分かっておりました。ご自分の胸中について、私にはご存じのことをす
べてお話しくださいましたからね。もっとも、私が見つけ出しましたことのすべて、と
いうわけではございませんけれどね。また、貴女ご自身、実際よりももっと早くこのこ
とには気づいておられたはずなのです。もしも、不安を掻き立てる、不躾で乱暴なあの
☜男の振舞いのために、そんなお気持ちが抑え込まれてしまうということがなかったなら
の話ですけれどね。
☜　経験から分かっているのですが、愛というのは一種の火なのです。遊び半分で扱いま
すと、きっと指に火傷をしてしまいます。独り者の男女が互いに懇意になったり、文通

を始めたりいたしますのは、危険なことだと承知しておりました。と申しますのも、後のほうの場合には、腰を落ち着けて筆を取りながら、本心とは違うことを書くことも出来るような男でしたら、予てから用意の策を用いるのも可能ということになるのではありませんか。それに、いつも詐欺まがいのことをしている男に向かって、あるいは、ある程度品性を備えた男の人であっても同じことですが、女性が心の内を書き送ったりいたしますと、とんでもなく有利な立場をその男に与えてしまうことになるのではないでしょうか。

☜ この男は、自惚れが強いからなのですが、自分の求婚が信義に背かないものである場合、愛の力に抗し切れる女は一人もいないと思っているものですから、報いられていないように考えております熱情に対して、罠に捕らえられたライオンみたいに争ってみせましても、一向に不思議なことではないのです。それに、あのように気性の荒い男ですし、卑劣な手管を用いて貴女を誘い出した男なのです、貴女のほうから愛情のお返しをして見せるようなこと、最初の段階では、どうしてお出来になれましょう。その手管を容認することになってしまうだけですもの。

☜ 従いまして、あのような恥知らずにとりまして、結婚に対して持っておりました以前からの偏見に負けてしまうとか、いつもあの男の心を真っ先に捉えておりました復讐への情熱に流されるようなことが可能になったといたしましても、おそらくそれは、信じ難い話ではないということになりましょう。

貴女を汚らわしい家へお連れするなどという、あの男のゾッとしてしまうような思惑を説明いたしますには、これが唯一の方法のように私には思われるのです。

さあ、これで残りの点すべてにつきましても、無理なく説明がつくのではないでしょうか。あの男の度重なる引き延ばしのことや、焦れったいやり方、また、あの男が一つ屋根の下で寝起きするのを貴女が我慢なさるように仕向けたこともそうですし、その家の人たちに対して、貴女をあの男の妻と思わせるようにしたこともあります。もっともこれは、制約のついた形ではありましたが、でも、(悪党の中でも卑劣極まりない男のことですから)貴女の虚を衝こうと思っていたのは疑いのないところです。また、あの男の放蕩仲間に貴女を引き合わせた点や、悪辣この上ない目的のために、おそらくはあの男自身が考え出したことなのでしょうが、ベッドを共にしていただくよう、あのパーティントン嬢を貴女に押しつけようとしたこともそうです。様々な機会に何度も貴女を怯えさせるような真似もしていますし、貴女が礼拝式へお出掛けの際には、でしゃばって同伴を申し出ていますが、これは、その家の住人がどんな連中なのか、貴女が気づくのを妨げようとの魂胆に違いないのです。さらには、シングルトンと手を組んだ、お兄様の馬鹿げた企みをあの男は利用しましたが、これについても同じことが言えるのです。

お分かりいただけますわね。これらすべては、ラードナー嬢のお陰で露見いたしました事柄の、その当然至極な結果だということですわ。ご覧のとおりです。愚か者だと私は見ておりましたし、従いまして、しばしばそのように呼んでおりましたその人でなしは、この間ずっと、世界でも最大の悪党の一人であったということです。

でも、もしもこのとおりだといたしますと、これまで貴女を救って来たのは、一体何だったのでしょう[中立な立場の人からは、そう問い掛けられることでしょうね]。何という素晴らしい人なのでしょう。間違いなく申せますのは、貴女の用心深さに他ならな

いということです。それ以外の何ものでもございません。そして、貴女の美徳に備わる威厳、つまり、生まれつき身につけておられる気高さのお陰なのです。そのような非常に困難な状況に置かれながら（友人はなく、お金に事欠き、周りの者には人妻ということで通り、無垢な人たちを裏切ったり傷物にしたりしても平気な連中と付き合わせられるのですからね）、これほど危険な放蕩児を相手に戦い、威圧し、目的を挫くことがこれまでお出来になりましたのは、そのお陰だということです。貴女もお気づきになったとおりの、日頃から悔恨の情などとは無縁の男なのです。ひどく変わり易い気性をしておりますし、やたらと悪知恵が働きます。それに、いかにもありそうな話ですが、力添えや後押しをしてくれる者が多く、しきりに煽り立てられてもいた男が相手なのですからね。生まれつき身につけておられる、あの気高さ、それとも、あの英雄的資質とお呼びしても良いでしょうが、それが、適当な折にはいつでも、その輝きを最高度に発揮してみせたのです。お心が解き放たれ、心配事に煩わされておられない時ならば、いつもその気高さを和らげてくれることになります、あの素敵な柔和さや腰の低い親切さと交じり合うことなしにですわ。

☜ ここで中断させていただきますが、私の最愛のお友達に賛辞を呈し、また、お慶び申し上げるためです。そのようなうら若さで、世の中のことにつきましても、放蕩児連中の卑劣な手管につきましても不案内なのですから、ご自分としては不幸なことだったのでしょうが、一方では虐げようとする縁続きの人たちから、また一方では、悪に染まっている恋人から、極めて厳しく、この上なく恐ろしい試練に立ち向かうことを求められながら、これまで他の女性のだれにもなし得なかったような、堅忍不抜の心と思慮深さの、その輝くばかりの模範を示すことがお出来になったのですからね。また、これまでにも申し上げてきた点ですが(ア)、貴女の十九年の生涯のうちの十八年間を飾ってくれました、あの順風満帆と言える幸運がさらに続いておりました場合に、その輝かしい美質のすべてを精一杯、力の限りに発揮いたしまして実現出来ますお姿と比べまして、それよりもはるかに立派なお姿を逆境の中でお示しになったのですもの。

☜ でも、今本当に心配いたしておりますのは、かつてこれまでに遭遇なさったどんなものにも負けない、もっと大きな危険に貴女が直面しておられることです。もしも、一週間以内に結婚なさることなく、しかも、その忌まわしい家に留まられる場合は、ということです。仮にもその家を出ておられるのでしたら、正直申しまして、それほど気を揉むことはないだろうと思うのです。

これ以上ないほど慎重に検討を重ねました上での私の考えは、以下のとおりです。つまり、あの男も今では、貴女を油断させるわけには行かなかったことを思い知っているのです。ですから、今後のなり行きの中で、貴女に対して新たな利点が一切得られない場合には、あの男のような恥知らずにとって実行可能な卑劣行為の、そのすべてを実行に移す覚悟でいるということです。あの男の身内の方たちがことごとく、熱心に貴女の

(ア) 第四巻の四十五頁を参照のこと。

肩を持とうとしている姿は、あの男の目にも入るものですから、なおさらこんなことをしようという気になるわけです。また、貴女に見合った扱いをすることこそ、あの男にとりましては、最も肝心な点なのですからね。それに、あの忌まわしい破廉恥漢は（そうするのが当たり前ですが）、どこの女の人よりも貴女のことを愛しているのです。この点に疑いの余地はございません。あのような恥知らずに抱くことの出来る、そんな愛情をもってです。ヘロデ大王が妻のマリアムネに注いだような愛情によってです(五)。ですから、十分に考えられることですが、あの男も今では、ようやく本気になったというわけなのです。

その性質こそ様々ですが、時間を掛けていろいろなことを問い合わせてみました。と申しますのも、トムリンソンと伯父様とに関わる、あの男のこの新たな企みから何かが生じますまでは、あの男の魂胆がどのようなものでありましても、貴女が置かれております一連の状況から考えまして、望ましいほうにであれ芳しくないほうにであれ、その機が熟すことはないものと承知していたからなのです

この謎めいた人間、この不可解な人物が何を目指しているといたしましても、企みなのだという点では、露ほどの疑いも私は抱いておりません。

ただ、次の点は事実のように思います。つまり、弁護士のウィリアムズさんは（お仕事の方面で名の通った人であることは、ヒックマンさんもご存じですが）、事実上、贈与財産証書を仕上げたに等しい状態であり、二通の草稿が作成され、書記の言葉によりますと、そのうちの一通は明らかにトムリンソン船長とかいう人物へ送付の予定であるというのです。また、結婚許可証取得のための努力が、実際に一度ならず行われてきたようですし、これまでのところは、ラヴレースにとっては無念であり、また同時に、失望の種にもなっているのでしょうが、難色が示されている模様なのです。母の代理人をしております者が、あの恥知らずから依頼のあった代理人と非常に親しいこともありまして、内緒でこの情報を手に入れたのです。そして、その人は、遠回しにですが、ラヴレース氏は大変なお金持ちであるから、こういった難問もおそらく乗り越えられるはずだと言っているのです。

でも、貴女を待ち受けております危険につきまして、私が心配いたします理由を以下に掲げておきます。これは、貴女がどんな家に居られるのかを知ることがなければ、また、そのことを知りました上で、これまでの出来事を突き合わせてみたり、繰り返し検討してみたりすることがなければ、思い浮かべることもなかったような（ひどく汚らしい行為というのは、今までのところ、まだ試みられておりませんでしたからね）事柄なのです。

一見有望と思われます現在の形勢からいたしまして、貴女も、あの男が要望する時には、いつでもお付き合いをして上げなければいけません。貴女がこれまでに受けた迷惑はお忘れになるとか、覚えていないような顔をなさらねばなりませんし、あの男の求婚も、結婚を約束した恋人からのもののように受け入れる必要がございます。これまで身の安全を守ることになっておりました、あの男へのよそよそしい態度ですが、それを保とうといたしますと、取り澄ましているだの気取っているだのと、非難を浴びてしまいますし、ご自分でもそんな不安を覚えることさえあるかもしれません。あの男にとりまして、突然の病は（そして、同じく突然に回復したわけですが）、あの男に貴女が好意を

持っていらっしゃることを知る機会になったのです。［残念ながら、貴女があの男を好いておられるのは知っておりました］貴女のお言葉ですと、そんなことがありましてからのあの男は、時々刻々、ますますつけ入ってくるとのことですね。性質を一変させてしまったようで、愛情と優しさのかたまりになっているとおっしゃるのですね。狼が羊の衣を纏ったわけですが、でも、これまでにも、その牙とひっ込め切れない鉤爪とを覗かせたことが一度ならずあるのです。あの男が貴女のお体に加えた無遠慮な振舞いについてお示しくださいました実例にいたしましても(ア)、これは、トムリンソンからの手紙のことがあり、やむなくあの男と同席なさった際のことで(イ)、憤慨せずにはいられなかったけれど、お二人が置かれている状況からいたしまして、大目に見る他なかった、ということでしたね。でも、この一例でも、今あの男が貴女に対して握っております有利な立場を実証しておりますし、また、もっと有利な立場が得られるものなら、それを手に入れようとすることをも証明しているのです。そして、トムリンソンが引っ張り出されましたのは、まさしく（私の懸念しているところですが）そのためなのだということです。つまりは、貴女を一層安心させるためですし、何か卑劣な試みがなされ、致命的な犯罪行為が貴女に加えられました場合には、仲裁役を引き受けてもらおうとの魂胆なのです。式の日取りも、そうあって当然ですのに、現在では、それほど貴女の自由にはならないように思うのです。今となりましては、貴女の伯父様のお気持ち次第という部分があるのです。貴女ご自身からの申し立てによりまして、あの男も挙式の際にはご出席くださることを希望していた伯父様なのですからね。ただ、すべてが本当のことだといたしましても、とても受け入れてもらえそうにない希望のようにも私は思います。

そして、このような状況の下ですと、仮にあの男がもっと無礼な振舞いに出るようなことがありましても、貴女といたしましては、許して上げねばならないということになるのではないでしょうか。

それほどの揺るぎのない美徳(ウ)に対し、正々堂々と行うことでしたら、悪魔の分身であれ化身であれ、私は（どなたのお言葉かも存じておりますので）何一つ心配はいたしません。でも、宜しいですか、今貴女が居られるような家でのことですし、また、すでに触れましたような状況ですから、奇襲攻撃ということになりますと、ひどく心配になってしまうのです。当の男というのが、縁組をするのに相応しい人たちを相手に、すでに何度も凱歌を奏でてきた人間なのですからね。

だといたしますと、貴女のなさるべきことは何でしょう。その家を、その地獄のような家を逃げ出すこと以外にはございません。あの男の元を去るお気持ちになれると宜しいのですが　…

もしも、そうなさるお気持ちがおありでしたら、ご命令のあり次第準備を整えられるよう、タウンゼンド夫人にお願いいたします。でも、何の障害にぶつかることもないのでしたら、新たな疑惑の種に出くわすこともないのでしたら、貴女の幸せとは申しませ

(ア) 彼女の念頭にあるのは、ラヴレースが火事騒ぎ以前に令嬢に対して取っていた無礼な態度のことである。第四巻の手紙五十四を参照のこと。この手紙を書いている時点では、ハウ嬢は例の事件を知り得なかったはずである。(イ) 第四巻の手紙五十五を参照のこと。(ウ) ノートン夫人の手紙（第四巻、五十頁）を参照のこと。

んが、世間体の点からいたしますと、あの男のものになられるのが肝心なことのように思うのです。それでも、こういった放蕩児たちがその悪事に対しまして、最低の女の人でさえもったいなさ過ぎますのに、女性の中でも最高の人を授かるというのが、私には☜我慢のならないところなのです。

ただ、疑わしいところがほんの少しでも見つかりましたら、もしもあの男が、貴女をその忌まわしい家に引き止めようとしたり、残るよう希望したりするようでしたら、そこの住人がどのような者たちなのか、今では貴女もお分かりなのですから、貴女の見通☜しがどうであれ、あの男の元を、そして、そこの人たちからも逃げ出すことです。

これから遠出をなさることがあれば、そのいずれかの時に、他に方法がないようでし☜たら、一緒に戻るのを拒んでみることです。貴女が良からぬ家に居られるという情報に関しましては、私の名をお出しになって構いません。そして、今となってはあの男と手を切るわけにも行かないと、もしもそのようにお考えでしたら、むしろ、そんな家であるのをあの男は知らないのかもしれないということ、また、私もあの男が知っていると☜は思っていないのだということを信じるような振りをなさることです。それにいたしましても、私たち二人が揃ってこのように思い込んだりいたしますと、ずいぶんみっともない姿を呈することにはなるでしょうね。

でも、郊外へ散歩に出掛けたいと頼んでみるのはいかがでしょうか。この蒸し暑い天候ですし、しつこく求めてみるのです。その理由に、お体具合のことを持ち出されても☜良いでしょう。あの男もこのような理由を無視したりは出来ないはずです。お兄様の馬鹿げた企みに見切りがつけられましたのは間違いないと、私はそのように聞いております。ですから、その点に関しましては、ご心配には及ばないのです。

これをお読みになって、すぐにその家を飛び出すとか、何かの方法で抜け出すといったことをなさらないようでしたら、あの男とか貴女ご自身とか、そのどちらかに対しまして貴女がお持ちになるはずの力の弱さを基に、あの男が貴女に対して持っております力のほどを測ることになるでしょうね。

☜フレッチヴィル夫人に関しまして、私の情報源の一人が少し調べてくれました。夫人がお住まいの通りとか街区の名を、あの男は一度でも教えてくれたでしょうか。いずれのお手紙の中でも、夫人の住んでおられる場所に触れてくださったことがあったように☜は覚えていないのです。奇妙です。これはまことに奇妙な話だと思うのです。貴女のお手紙から得られます手掛かりに導かれ、その家がありそうだと見当をつけました新しい通りや街区いずれの界隈でも、そのような人物や家は見つけられないのです。その家は☜どこの通りにあるのか、まだ教えてくれていないのでしたら、あの男にお訊きなってみるのですね。そして、私にもお教え願います。その辺の事情につきまして、あの男が渋☜って見せるようでしたら、正体を一つ暴いたも同然です。でも、これを別にいたしましても、お気づきの点は十分におありのことと存じます。

この長い手紙は、私の気持ちに添うために仕事の日を変更してくれるということですので、コリンズにお願いしてお届けいたします。それも、貴女ご自身の手に（今は貴女の居られる所も存じておりますので）お渡しするよう、試してもらうためです。それが無理でしたら、ウィルソンさんのところに預けてもらいます。貴女が表向きは今よりももっと好ましくない状況に居られました間も、例の通信手段で、私たちの手紙が紛失し

たことは一度もないのですから、たとえコリンズがあそこに預けてこなければならないといたしましても、これは無事に届いてくれるものと考えております。

☜　最初の慌てふためいた状態で書きましたのは、短い手紙だったのです。二十行にも満たないもので、驚きや不安、そして、呪いの言葉に溢れておりました。でも、私の激しさのせいで、貴女のお心をひどく乱してしまうのが心配で、少し間を置いたほうが良いだろうと考えました。すでに触れました理由からでもありますし、また、詳細な点を可能なかぎりお知らせし、そのすべてにつきまして、私の考えをお伝え出来るようにとも思ったのです。そして今では、これまでに生じました、そして、今後も生じます他の状況の助けをお借りになれば、あの男の策略のすべてに対しまして、それがどのようなものだといたしましても、対抗する備えが十分お出来になるはずだと考えております。

☜　あと一言申し添えます。もしもわずかでもお役に立つことが私に出来るとか、喜んでいただけるということでしたら、呼び出してください。評判などに重きは置いておりません。世の咎めも気にはいたしません。生命そのものさえも、貴女の名誉や貴女との友情に比べますなら、さほど大切なものではないと、本当にそう思っているのです。だって、貴女の名誉は私の名誉ということではないでしょうか。そして、貴女との友情こそが私の生きがいなのではないでしょうか。

　神様のお力添えを得まして、貴女の名誉と安全とが保たれますよう、絶えずお祈り申し上げております。

変わることなき誠意と親愛の情とを込めまして、貴女の

アナ・ハウ

木曜日　午前五時　　夜通し筆を執っておりました。

ハウ様へ

　私の一番大切なお方

　恐ろしいお知らせには大変ショックを受けましたし、うろたえてしまいました。本当に意外ですし、愕然としております。このような打撃を耐え忍びますには、私の心はあまりにも弱すぎます。すべての望みを手にしておりましたのに　…　ずいぶん見通しが明るくなっておりましたのに　…　それにいたしましても、この悪辣極まる首謀者のように、また、負けず劣らず悪辣な手先の場合のように、人間の内側にはこれほどの悪が潜んでいるものなのでしょうか。

　本物の病人になっております。ひどく気分が優れません。悲痛な思いや不意の驚き、そして、今度は絶望が、私を打ちのめしてしまったのです。すべてが、推測としてお示しくださったことのすべてが、今の私には推測以上のことのように思われます。

　悩み苦しみ、半ば打ち砕かれております私の心ですが、その心を奮い立たせていただけるたった一人の慰め手が姿を見せてくださいますのを、優しいお気持ちでお母様もお許しくださるとしたら、あゝ、どんなにか　…　でも、命令させていただきます。お母様の寛大なご了承もなしに上京なさるようなことは、決してお考えになってはいけません。現在のところは体調があまりに優れないものですから、この恐ろしい男と争うことや、この忌

まわしい家を逃げ出すようなことは、とても考えられません。筆が乱れておりますところからも、この点はお分かりいただけるでしょう。でも、仮にもあの男が本当に悪事を目論んだといたしましても、体調の悪さが、差し当たりましては身の安全をもたらしてくれることでしょう。お許しくださいね。ご迷惑をお掛けしてしまいましたこと、どうかお許し願いたいのです。いずれすべては　…　でも、悲しみを募らせるような真似をどうしていたしましょう。どうして苦労の種を増やしたりいたしましょう。ただ、命令をさせていただきますね、大好きなあなた。本当に見捨てられ、気力も萎え果てております私の元へとは申せ、お母様のお許しなしに、上京のことをお考えになったりしてはいけません。

クラリッサ・ハーロー

こういうわけだよ、ジャック。で、この最後の手紙について、貴公はどう思うかな。ハウ嬢は世の評判にも咎めにも、そのどちらにも重きを置いてはいないのだよ。あのじゃじゃ馬がこの手紙で上京を諦めると思うかな。自分用のが一つ、侍女のためのが一つと、輸送の手段が行商人の荷かご以外には確保出来ないとしてもだよ。あの娘も、どこに来れば良いのか、今では分かっているのだ。知ってほしいと思う以上に知ってしまったということで、俺が懲らしめてやった生意気な娘も数多いのだよ。それも、その娘の知識と経験をさらに深めてやるという形でな。貴公はどう思うかな、ベルフォード。このガミガミ女をここまで誘い出し、そして、麗しの逃亡者宛に彼女のほうから哀れな手紙を出すような原因を作ってやった場合、あの逃亡者を取り戻すことが出来るようになるだろうか。逃亡しているほうの娘も、どうだろう、悲嘆に暮れる友人の元を訪れる気持ちになるとは思わないかな。悲しみ嘆いている自分を訪ねようとしたために友人は、自分自身がかくも背信的な方法で逃げ出したものと同じ状態に陥ることになったわけだからな。

ひとつ楽しませてもらうことにするよ。この考えをな。

この手紙を発送しようかな。あれだけの見事な筆跡だが、見てのとおり、正確に真似られなかった場合を考え、厳しすぎる詮索を避けるための余地は残してあるのだよ。俺からそんな仕打ちを受けるのも、あの娘たちなら、二人とも当然ではないだろうか。わめき散らしている娘がどれだけ母親を脅しているのか、貴公は気づかないのかな。罰せられて然るべきではないかな、そんな娘は。復讐心に駆られるまま、あの二人を両方とも罰したとしよう。その場合俺は、あの娘が同封の長い手紙の中で用いていたのよりも（以前の手紙でもそうしていたのだが）さらにひどい悪魔とか悪党、あるいは、怪物になるとでもいうのかな。それに、俺のあの復讐を実行に移した場合でも、二人とも、傍目にも気持ちの良いほど納得して田舎に引き籠もり、一つ屋根の下で暮らすことになるだろうし、二人ともそれが大層お気に入りのように見えるのだが、結婚せずに一生を送るに当たっても、プライドから来るものよりははるかに結構な理由が得られるというわけだよ。

今すぐ転記に取り掛かろうかな、とも考えている。心を固めるのは後でも構うまい。ただ、気の毒なのはヒックマンだ。俺からこんな目に遭わされるなんて、それに見合ったことを何かしたとでもいうのか。だが、母親にとっては（娘と同様）素晴らしい懲らしめになるだろうな。あの浅ましい貪欲さのすべてに対してだ。それに、律義なハウ氏に向かって反抗的な態度を取っていたことに対してもだよ。氏の心を実際に打ち砕いてしまったのだからな、あの女は。俺はこの企画に取り掛かりたくてうずうずしているところだよ、ジ

ャック。そのためにもう一度旅に出なければならないとしても、どこの国であれ、俺にとっては似たようなものではないのかな。

∴　∴

ただ、危険を冒すのは慎むことにする。ヒックマンは善人だという話だ。俺は善人が大好きなのだよ。俺自身、いずれは善人になりたいものだと思っている。それに、ここ一週間以内のことだが、この正直者には気概があることの証となる、ちょっとした話を耳に挟んでいるのだ。俺の考えでは、仮に気概があるとしても、少しばかり奥まったところに潜んでいるために、よほど異常な場合でもなければ、人目に付くほど表には出てこないはずだし、出てきたとしても、すぐにまたその〈脂肪の小部屋〉へ沈み込んでしまうものと思っていたのだよ。小太りの男なのさ。奴を目にしたことはあるかな、ジャック。

だが、俺を思い止まらせる主な理由は［何せ心をそそられる企画だからな］、俺が早目に手紙を仕上げないでいると、あるいは、ハウ嬢が出発のことをくよくよ考えたり、先に母親の許可を得ようと努めたりすると、すべてが完全に無に帰してしまう恐れがあるということだ。そうこうしている間に、怯えている我が美女からの手紙が小娘の元に届くかもしれないのだよ。彼女がどこに身を寄せたとしても、最初に手掛けることといえば、あの牝狐のような友達に手紙を出すことだからな。それゆえ、俺としては、気長にやろうと思うのだよ。そして、あのじゃじゃ馬の小娘には、いずれゆっくりと恨みを晴らしてやるつもりなのだ。

ヒックマンに同情しているとはいえ、奴の声望の優っていることが時として俺にも妬ましく思えるのだ。また奴は、ぎこちなさのゆえに母親たちの信望を集め、その挙げ句、娘たちの間で、われわれ才子の面目を丸つぶしにしたり、しばしば失望に追いやったりするような、そんな人間の一人なのだよ。それに、この二重に防備を固めた美女たちが俺に歯向うのを、せっせと助けてきた男なのだ。偉大なる神、そして、下位の神も含めたすべての神々にかけて誓うぞ。ハウ嬢をものにしてみせるということをだよ。もしも、より高貴な友のほうを手に入れるわけに行かない場合にはな。そうなれば、この娘たちの間に、二人が主張するような燃え上がらんばかりの愛情が存在するのであれば、この逃走によって我が魅惑の君はどんな利益を得ることになるというのかな。

ところで、今少しの間、ハウ嬢が君臨するのを許しておこうというわけだが、ひとつ貴公に尋ねておきたいことがあるのだ。彼女とは姉妹のようなあの美女相手に出くわす難儀の多くのものは、この気紛れ娘に由来するのだという、その新たな実例が同封の手紙の中に見つかりはしないか、ということだよ。当然のことながらこの辺りでは、えらく肌を刺す冬の冷気が漂っていたのは事実だ。だから、わずかな冷水を道に撒いたりすれば、それが一瞬のうちに凍りついても不思議な話ではないし、また、気の毒なことに、真面目な旅人がそのまま進むのは不可能に近いと気づいても、少しも不思議なことではないのだ。片方の足が前のほうに滑るのと同じ勢いで、もう一方が後ろへ滑るものだから、手足とか首が危うくなるのだよ。ただ、それでも、俺の裏をかくような真似は、実際にはやってのけたわけだが、彼女には不可能なことのように思うのだよ（新米なのだし、これまで、両親の翼を抜け出したこともないのだからな）。忠告は巧みだが実践のほうは覚束ないというと

ころを、以前の話だが、もう少しで実証しそうになった、そんな女丈夫が一人、彼女の防御についていたということでもなければな。だが、これまでこの件を口にしたのは、確か一度だけではなかったはずだな。

残酷な娘が俺の元を去った今では、我と我が身を責めるのは気が進まないのだ。というのも、そんなことをしたところで、苦悩を増すだけの話ではないのかな。自らが引き起こした災難、そして、回避可能な災難の場合には、酌量とか慰めとかの余地はないわけだからな。それでも、彼女の強さのすべては俺の弱さに由来しているということ、また、この一件の全体を通して、俺が忌々しいばかりの臆病者だったということを、貴公が話し聞かせてくれるというのなら、その時には、ジャック、俺も顔を赤らめ、悔しがってみせることだろうな。何と言っても、貴公に盾突くことは出来ないのさ、この俺にもな。

ただ、次の点には希望を抱いているのだよ、ベルフォード。同封の手紙に含まれる毒気を健康的な食物に変えることが出来るなら、つまり、俺に有利となるように利用出来るならの話だが、その時には、貴公にも快く同意してもらえるだろうということだ。

封筒は慎重に開封し、封臘を無傷のまま残すよう、日頃から用心している。この忌まわしい手紙から、一つ手掛かりを引き出そうと思うのだ。ある貴族から現実離れをした助言を受けてスペイン語を学ぼうとした、ニック・ローの勤勉ぶり[六]といえども、この牝狐の筆跡を習得しようとする俺の熱心さに比べるなら、その半分にも当たらないだろうな。

手紙　五

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

六月八日　木曜日　夕刻

他の望みの数々であんなにも満ち溢れておりました前回の手紙の後ですから、貴女もこの手紙の内容には驚かれることでしょう。あゝ、私の一番大切なお友達、あの男はとうとう証明して見せたのです。自分が悪党であることをです。

昨夜は、破廉恥極まりない汚辱から身を守ることが出来たのですが、やっとの思いで辛うじて、といったところでした。許すという約束を、そして、翌日には何もなかったかのように顔を合わせるということを、あの男は無理やり私から引き出しました。でも、そう信じるべき節がたっぷりとあるのですが、火事騒ぎを企み、怯えた私が裸同然の姿であの男の腕に飛び込むよう仕組んだ男なのです。もしもその男から逃げ出すことが可能なのでしたら、翌日顔を合わせるなど、どうして考えられましょう。

私は逃げ出したのです。有難いことに、逃げおおせたのです。今気に掛かっておりますことと申しますと、あのような夫を堪えられるものにしてくれたはずの唯一の希望、つまり、伯父のほうであんなにも快く引き受けてくれました身内との和解に背を向けているということ、それ以外にはございません。

差し当たりましての私の望みと申しますと、評判のしっかりしておりますどこかのご家族とか、どなたか同性の方を見つけ出すことがすべてですが、外国へ出掛けねばならないとか、海外に居住していらっしゃるような人のことです。どこの国へでも私は構わないのですが、ただ、選ぶことが出来るのでしたら、アメリカにございます我が国の植民地のど

れかにいたします。大変嘆かわしいことに、ひどく不快な思いをさせてしまったわけですから、親戚の者たちの耳にはこの先二度と消息が届かないようにするためです。

また、私の文面のため、優しいお心が乱されるようなことがあってもいけません。父の呪いの一番恐ろしい部分を免れることが出来るのでしたら（と申しますのも、現世に関わります部分は、ある意味ではすでに現実のこととなっておりますし、それだけに、もう一方のことが怖くて身も震える思いなのです）、この世での運勢は破滅に向かうといたしましても、それは有難い妥協策なのだと考えたいのです。

それに、何度も何度もお申し出のございましたご厚志につきましても、改めてお寄せいただくまでもないものと存じます。と申しますのも、衣類と共に送られてまいりました指輪や、他の高価な品々を携えているのです。こういった品は、この上さらに懲らしめを受けますために、私の望んでおります以上に命が引き延ばされる場合のことですが、神様の思し召しによりまして、自らの助けとなりますような何らかの方途が得られますまで、私の必要を満たすためのお金に換わってくれるはずなのです。

この計画の誘因につきましては、私の大好きなお友達、一つには失意ということがございましょうし、もう一つには、十五歳から二十二歳にかけまして、広く女性の心を捉えるものと思われております、あのロマンティックな傾向ということもございましょうが、そのどちらとも考えていただきたくないのです。と申しますのは、私の不幸な状況につきましては、それをご存じの思慮深い方々皆さんの目に実際に映るに違いない、その姿のままにご考察いただきたいからなのです。まず何よりも、厚かましくも、私のことを自分の持ち物のように考えたり、そうしようと骨折ったりするような男なのですから、あちこちと私の後を追い、〈迷い家畜〉として捜し求めることでしょう。しかも、そんなことをしても罪に問われないのを、あの男は承知しているのです。だって、あの男から私を守ってくださる人など、どこにもいらっしゃらないわけですからね。

それから、元はと申しますとすべての不幸の原因になっております私の地所、あの妬みの的となっております地所につきましては、法廷で争ってまで自分のものにしたくはございません。自分に使用出来ます以上に、あるいは、使用したいと願う以上に財産がありますことを自慢出来るようになったところで、何の意味がございましょう。それに、たとえ私の力が制限されましても、その力を正しく用いなかった場合に問われますような責任は負わなくて済むことでしょう。そして、正しく力を用いる人はとても少ないのです。夫の利益というものは大いに尊重しなければなりませんから、その挙げ句、夫への正当な扱いに不備があってはいけないとばかりに、他の人たちに対しまして、当然と思われますもの以上のことを行います妨げともなるのです。私はそのような夫は持たないつもりです。従いまして、もしも父があの地所から二件の年金支払いを快く引き受けてくれるようでしたら（厚かましくも、適当な折には提案することになりましょう）、残りの分で皆が気持ちを和らげ、満足してくれますよう、神の祝福を祈ろうと思うのですが、その二件の年金と申しますのは、一つは私の大切なノートン夫人へのものです。夫人も今ではお年を召して来ておりますから、それで余生を楽に暮らしていただけることでしょう。年五十ポンドのもう一件につきましても、同じ善良な夫人に支払われるものでして、〈私の貧者〉のために使っていただくのです。自惚れたことに、私は一部の人たちのことをそのように呼んでいたのですが、その人たちに関しまして、夫人は私の気持ちを熟知しておられるのです。そし

て、これは、私の過ちの結果として辛い目に遭うことになる人が出来るかぎり少なくて済むように、との考えからなのです。

先に触れましたような処置を取る他の理由は、次のとおりです。

私には貴女以外のお友達がこの世におりませんことを、この邪悪な男は知っているのです。ですから、私はお宅のご近所に身を隠すことも出来るなどと、貴女のほうでお考えになりますと、あの男が真っ先に私を捜す場所といたしましては、その辺りということになるでしょうね。そして、この場合には、すでに私のために被ってこられたものよりもさらに大きな迷惑を、貴女はお受けになるかもしれないのです。

従兄弟のモーデンが帰国するといたしましても、あの人から保護の手を期待するわけにはまいりません。あの人の手紙によりますと、兄があの人を自分の側に引き込んだのは明らかなのです。また、私といたしましては、どのようなことがありましても、あのように立派な人を危険に晒したくはないのです。この抑えの利かない人間の暴力沙汰から、そんなことになり兼ねないようにも思われるからです。

こういった点を考慮いたしまして、イギリスを離れ、お国の植民地のどれかに向かおうと思うのですが、それよりも良い方法が何かあるのでしょうか。あちらでは、貴女ご自身は別にいたしますが、どなたにも私のことは一切知らせないつもりです。それに、宜しいですか、貴女にもすぐにというわけにはまいりません。また、私が居を定め、（神様の思し召しによりまして）まずまず自分の気に入るような暮らし向きになりますまでは、お知らせいたし兼ねるのです。と申しますのも、かつては、苦痛よりも喜びのほうを提供出来るようにと願っておりました大好きな貴女ですのに、私の無分別から、そのようなお友達にあんなにも重い負担をお掛けしてしまいましたことが、私の懸念の中でも、決して小さくない部分を占めているからなのです。

現在のところ、ハムステッドのムーア夫人とおっしゃる方のお宅に居ります。この村へは、あの男と一度ならず来たことがございますので、こちらへまいります際には、不安な気持ちにもなりました。ただ、こちらへの馬車の都合が大層良かったということもありまして、もっと良い方策は浮かばなかったのです。それに、ここに留まりますのは、この手紙へのお返事をいただくまでの間のつもりなのです。そのお返事では、以前のご計画に従いまして［あの時お話に乗っていれば、どんなに良かったことでしょう］、捜索の熱が冷めますまで、タウンゼンド夫人のお力添えでかくまってはいただけないものか、お知らせくださると有難いのです。船の便のことを耳にいたしますのには、また、無事に乗船いたしますのにも、デトフォードへの街道筋が恰好の方角のように思われます。

あゝ、何故なのでしょうね。最大の悪鬼が鎖を解かれ、あのように尤もらしい姿を装っても構わないなんて　…　それでいて、その足や爪を隠すことを許されるのですもの。その挙げ句、すぐにも一方を用いて私の操を踏みにじり、もう一方を私の心臓に突き立てようとするのですからね。それに、特にこの私に襲いかかるよう、あの男が解き放たれるなんて　…　そうされても仕方のない、どのようなことを私がしたというのでしょうか。

こんな愚痴っぽいことをお尋ねして、御免なさいね。私の性急さのせいですわ。罪深い性急さから出たことなのでしょう。操の清らかなまま抜け出したのですし、もっと有望な運勢こそはこのように打ち砕かれてしまいましたが、私の現世的な見通しとプライド、野望、そして、虚栄心の外には、何一つとして被害は受けていないのですから、これからも

なお、分相応以上の幸せに恵まれることも有り得る話ではないでしょうか。また、神のご愛顧がありますなら、最大の利益を確保いたしますことも、依然として、私自身の力で出来ることなのではないでしょうか。それに、どなたにも測り兼ねることですが、軽率さから迷い込んでしまいましたこの小道そのものにいたしましても、より華やかな衣装をズタズタに引き裂きますイバラの藪に覆われているとは申せ、将来の幸福へ続く大きな道に私を導いてくれます、その小道なのかもしれません。もっとも、悪に染まるようなことがあれば、その幸福も危うい状態に追い込まれてしまっていたかもしれないのですが　…

それに、結局のところ、本分に関しまして、重要な点のいずれにつきましても過ちを犯したことは決してないような、私よりももっと立派な方たちで、私以上に恥ずかしい思いをさせられた人たちもいるのではないでしょうか。そして、それはご両親やご親戚の方たちの過ちからくること、後見人や管財人のごまかしによるものであって、自分自身の無分別さとか愚かさなどとは一切関係のない話だ、という人たちも中にはいるのです。

そこで、私といたしましては、現在の運命を最大限活用いたしますよう努力する所存です。ですから、私の一番の、たった一人のお友達の貴女には、私の懲らしめがここまでで終わりますよう、そして、現在の苦しみの数々が私にとりまして神聖なものとなりますよう、一緒に祈っていただきたいと思うのです。

この手紙をご覧いただければ、貴女に届けていただくよう、ウィルソンさんのところへ送りました一、二行の文にも説明がつくことでしょう。あの男の召使を遠ざけておくための牽制に過ぎなかったのです。私の監視役としてこの召使が後に残されたみたいにも思えたのです。ところが、この召使があまりに早く戻ってきたものですから、あの男に届けてもらうよう、召使のために二、三行書かねばならなくなりました。民法博士会館の近くの居酒屋まで行ってもらうのですが、同じ考えからのことです。そして、うまいことに、これは狙いのとおりになったのです。

朝早くに、あの恥知らずに宛てて厳しい手紙を書きました。そして、すぐにも目に触れるような形にいたしまして、置いてきたのです。今頃は、あの男もそれを手にしているものと思われます。写しは取っておりません。もっと時間が出来ましたなら、内容を思い出し、すべてにつきましてその詳細をお知らせいたします。

逃げ出しましたことに賛成してくださるものと、私は確信いたしております。あの家の住人はひどくいかがわしい人たちに違いありませんから、なおさらそう思うのです。と申しますのも、確かにあの人たちは、それに、あのドーカスもですが、助けを求めて上げました私の叫び声を耳にしていたのです（聞こえたのは分かっているのです）。もしも、あの火事が邪悪な企みとは別のものだったのでしたら（もっとも、翌朝には、あの人たちの目をくらますためですが、別ものと考えているような素振りをしておきましたが）、あの人たちも私と同じくらいに慌てたことでしょうし、私が悲鳴を上げるのを聞いて、駆け込んできていたはずなのです。私が怖がっているのは火事のせいだと考えたのでしたら、元気づけようとしてですし、何か他のことだと想像したのであれば、安心させるためにです。ところが、あの恥知らずが私の体に腕を回すのを目にするとすぐに、下劣なドーカスは出て行ってしまうのですからね。本当に、何と申し上げたら良いのでしょう。私が身につけておりましたのは、室内履きとペチコートだけだったのですからね。火事です、すぐにも丸焼けですよという、あの娘の叫び声に仰天いたしまして、私はベッドから飛び出していた

のです。そして、あの娘は行ってしまい、二度と戻ってこないのです。他のだれかが来るわけでもありません。それなのに、隣の部屋からは女性の声が聞こえておりました。確かに聞こえたのです。はっきりしております。皆が企んだことなのです。でも、有難いことに、あの人たちの家は抜け出したのです。

恐怖はまだ鎮まっておりません。なかなか安心出来ないのです。窓越しに目に入ります身形の良い男性は、馬に乗っている人も徒歩の人も、だれもかれもがあの男のように思われるのです。

お返事を急いでくださることは分かっております。明朝早く、男の人と馬を用意してもらうことになっております。これを持って行っていただくためです。勿論、お返事をその同じ人の手で届けていただくわけにまいりませんわね。その前に、タウンゼンド夫人にお会いしなければならないでしょうからね。それでも、届けていただけるようになりますまでは、今か今かと待ち焦がれることでしょう。頼みごとの出来ますお友達は貴女以外にございませんし、この辺りのことはまったく不案内なものですから、どちらを向いたら良いのか、覚束ないのです。どこへ行くべきか、何をすべきかについてもです。何という恐ろしい結末のつけ方をしてしまったのでしょうね、私は。

今お宅に身を寄せさせていただいておりますムーア夫人と申しますのは、未亡人で、品性の立派な方です。この点は、近所のある婦人が教えてくれたのですが、思い切った行動を取ります前に特に調べておきたいとの気持ちもありまして、その婦人からハンカチを一枚買って上げたのです。

ご指示のありますまで、外出は控えるつもりです。それに、馬車が着いて私を降ろしてくれましたその宿の人たちには、いくつか言葉を漏らして置きましたので、なおさら安心しているのです。ここから少し離れた村なのですが、ヘンドンというところへ向かう出迎えの馬車を待ってでもいるかのような意味合いのことをです。また、その宿を後にしました時には、丘の上を行ったり来たりいたしました。最初は、何をしたら良いのか分からなかったからですが、後には、思い切って下宿のことを尋ねます前に、監視されてはいないかを確認するためでした。

お便りの宛名は、宜しいですね、ハリアット・ルーカス夫人ということでお願いいたします。

このように脱出を果たせなかった場合には、何度でも繰り返し試みるつもりでおりました。あの男は、文面で知らせてくれたことですが、結婚許可証の件で民法博士会館のほうへ行っていたのです。あの男が無理やり取りつけました約束にも拘らず、私は面会を断っていたからです。

欺かれてのこととは申せ、重大な過ちを犯してしまいますと、たくさんの軽い過ちを避けますのも本当に難しくなります。ほとんど不可能に近いくらいですわ。

一度目の骨折りでは抜け出せないという心配もございましたので、一週間以内にはあの男に目を向けるつもりのないことを通告してあったのです。いろいろな仕方で骨を折ってみる時間を確保するためでした。また、そうする必要が生じますほどに監視を受けるようでしたら、あの家の女の人たちからはあんなにも見て見ぬ振りをされたわけですから、通りに飛び出しまして、入り込むことの出来ます最初のお宅に身を委ねるとか、出会った最初の人に庇護を求めていたことでしょうね。このような立場におります同性の哀れな人間

の、その言い分を見捨てるというのですから、そんな人たちというのは、一体どんな女性なのでしょう。それに、翌朝、あの男が出掛けた後、皆さんは何かやましいところでもあるみたいな、とてもみっともない姿をしてみせたのです。私を上の階へ案内し、焦げた窓の膳板、焼けたカーテンやカーテンの掛け布によって、火事騒ぎは本当であったことを信じ込ませようと、あまりに熱心なものですから（私に信じてもらおうと皆が望んでおりますことにつきましては、すべて信じるような顔をしてみせましたが）、どんな危険がありましても、あの人たちの家は逃げ出そうと、ますます心を固めた次第なのです。

書き始めました時には、ほんの二、三行のつもりだったのです。でも、どのようなことが話題だといたしましても、貴女への手紙となりますと、どのように結びを付けたら良いのか分からないのです。どんな時でもそうでした。ですから、一番関心を引き、一番不幸なあの状況が特別な原因となっているわけではないのです。それでも、今のところその状況が、私の心の全体を占めておりますことはお認めいただけるものと存じます。

不幸とは申せ、変わることなき親愛の情を込めまして、貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　六

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

金曜日　午前二時過ぎ

イヨッ、大勝利！　イヨッ、クラリッサ！　謳い称えよう。今再び、何という果報者になったのだ、貴公の友は。御目出度い新米さんということだよ。どこまで送ってもらうのか、御者に話しているのを聞かれるとはな。しかも、こともあろうに、ロンドン周辺の数ある村の中で、ハムステッドに向うというのだからな。一度ならず、二人で一緒に出掛けた場所だというのにだよ。

もっと手際良くやってくれなかったのが残念な気もするね。どうやら、彼女を取り戻すのは簡単すぎる仕事にも思えるのだ。俺にとっては、何事であれ、困難があってこそその価値がいやが上にも高まるのだという点を弁えていてくれさえしたら、また、そうすることで、少しでも俺の願いを入れようという気があったとしたら、彼女にしても、間違いのないところだが、ハムステッドくんだりで急停止するような真似は絶対にしなかったはずなのだ。

ところで、こうまで有頂天になっているわけだし、貴公は尋ねることだろうな。我が魅惑の君はすでに連れ戻してあるのか、とな。まだなのだよ。だが、居場所が分かったからには、手中にしたも同じことさ。そして、俺が不意に姿を見せた時、彼女はどんなふうに飛び上がり、震え出すのか、考えても楽しくなるのだよ。水曜の夜の俺の罪を帳消しにしてもなお余りあるような罪を犯したという自覚があるわけだし、この俺と顔を合わせる時には、一体どんな表情を彼女は見せてくれるのだろうな。これは重罪の中でもその最大のものだろうが、面目を潰された恋人、そして、世間も認める夫から、我と我が身を取り上げてしまおうとしたのだからな。

だが、いかにして俺が事実解明に至ったか、貴公も知りたくてうずうずしていることだ

ろう。ここで、同封の書面に目を通した上、思い出してほしいのだ。貴公にも話してあったことだが、このような逃亡を懸念し、時折あの男に与えていた指示のことをだよ。貴公には、それですべて説明がつくことだろう。それに、奴の精励ぶりや処理に対し、俺が当然のこととして期待を寄せて構わない点についてもだ。もっともこれは、何とかもう一度俺の顔を拝みたいと、奴が望むならの話だがね。

これは三十分ほど前に受け取ったのだが、ちょうど、服を着たまま横になろうとしていた時のことだった。このお陰ですっかり元気になってしまい、真夜中ではあったが、ブラント型チャリオット(七)を一台予約したのだ。出来ればいつもの御者で、夜明け方ここまで迎えを頼む、とな。そして、他に身支度をすることもないので腰を下ろし、歓喜に胸をときめかせながらここまで筆を進めたわけだが、それだけではない。目通りを許された際に取るべき行動に関しても、結論を出しておいたのだ。俺としても十分に承知しているのだよ。彼女も天の邪鬼だから、面倒なことになりそうなのはな。

閣下へ

これは、私めがここハムステットに居りますことを閣下に対しまして証明するものでございますが、ハムステットヘース近くのムーア夫人とやら申す者のお宅に奥様が下宿しておられますことを、当地にてつき止めた次第です。奥様がすこしでもお動きになられますと、奥様の出入りについての知らせがかならずこの私めにとどきますよう、手はいをすませてございます。いうなれば、十五分のうちに家出をなさったようなものとは申せ、奥様をさがし出せずにおわりましたあかつきには、閣下のお顔をはい見するわけにはいかないものと承知しておりましたので、さがし当てましたことをお知りになれば、心からお喜びいただけるものと承知いたしておりました。それゆえ、このピーター・パトリックを使いに出しますが、今は夜中の十二時近いこともありまして、この男は五シリングを受け取ることになっております。何しろ、酒をしたたかにのみほしますまでは、一歩も動こうとはしなかったのです。また、私めといたしましては、使いをおくり出しますまでは、下宿もすべてにわたっておだやかであってほしいものと願っていたことがございます。

閣下のお金はあずかっております。しかしながら、私の手から前金で支払いを受けたりいたしますと、あの男はズルをはたらくかもしれないと考えました。それゆえ、そのあたりにつきましては、閣下におまかせすることにいたしました。

私めがこのあたりに来ておりますことは、奥様はまったくご存じではありません。ですが、奥様が部屋をお取りになりましたのはほんのいく晩かのためのことでして、私めといたしましては、この場をはなれないのがいちばん良いと考えた次第です。

閣下がアッパーフラックス(八)へおこしくださいますなら、私めの姿は、一日中、居酒屋か原野のあたりでお目にとまりましょう。閣下のお仕着せのかわりに、外とうを一着と黒いかつらを借りました。それゆえ、たとえこの姿を目になさいましても、奥様に見ぬかれるはずはないものと存じます。また、歯がいたむようによそおい、ハンカチを口元に当てておりますから、閣下がご自身のこぶしでたたき折ってくださいました歯も、どえらく大きいと閣下がおっしゃるこの口も、私めのものと知られることはないはずと存じます。

中にはいっておりますふたつの手紙は、家出をなさいますまえに奥様からいただいたも

のでございます。ひとつ目は、ハウのお嬢様にあててウィルソン様のところへおくられることになっていたものです。その次のものは、閣下の元へとどけられることになっていたものでございます。ただ、閣下がご指示のありましたところに居られないことは分かっておりましたし、どんなことになるか気がかりでもありましたので、手紙は閣下のためにのこしておくことにいたしまして、ちょくせつお目にかかりますまでは、お渡し出来なかった次第でございます。ハウお嬢様へのお手紙だけは、おとどけに上がったものと奥様が信じてくださるようにいたしました。また、奥様は知りたがっておられたわけですが、奥様あてのものは何一つとどいていなかったと申し上げておきました。したがいまして、ふたつともそろっているわけでございます。

つつしんで、

もっとも忠じゅんにして、

いま一度幸せをむかえさせていただきます閣下のしもべ

ウィリアム・サマーズ

ウィルの言う「中に入っている」二通の手紙だが、その意図は一目瞭然で、それを持たせて、邪魔にならないところへ奴を追い払おうということに他ならない。そのうちの一通は俺の機嫌を取るためだがね。ハウ嬢宛のものも、何のことはない、次のとおりだ。

六月八日　木曜日

大好きなハウさん、こんな便りをいたしますのは、ただ見せ掛けのためだけですし、滞りなく送付されるかを確かめるためなのです。すぐにも詳しいことを筆にしようと思っておりますが、惨めな形で妨害されるということがございませんでしたらね。

CL. H.

さあ、どうだ、ジャック。彼女は見せ掛けのフェイントを掛けて来たのだよ。俺がフェイントを用いるのも正当化されることにならないかな。彼女が俺の専門分野を侵害していると、そんなふうに貴公は思わないかな。そして、今では、すっかり〈狐と狸の化かし合い〉になっているのではないのかな。従って、幸運を感謝するばかりだが、この点に関しては、われわれもついに対等になったというわけだよ。そしてこれは、信じてもらえるはずだが、俺の良心にとっては大いなる安らぎとなっているのだ。もしも、ヒューディブラスの言っていることが本当なら、愛しの逃亡者には、今後ともたっぷりと楽しみがあることになるはずだ。

騙される楽しさは、疑いもなく、
騙すことの楽しさに匹敵する。
曲芸師の術に気づくことの最も少ない観客が
最も大きな喜びを見出し、
理解の及ばぬ者ほどいよいよ
手練の早業を称賛するのと同じこと(九)。

次のが、我が愛しの手品師からの俺宛の手紙だ。ウィルによって届けられた、「中に入っている」という手紙のもう一通のほうだよ。

ラヴレース氏へ

六月八日　木曜日

貴方のお帰りが恐ろしく思えてしまいますようなことは、どうかなさらないでいただきましょう。いつまでも貴方を憎むような真似はしてほしくないとのお気持ちでしたら、これからの一週間、私に会おうとはなさらない旨を保証するお言葉を、一行の半分で結構ですから、使いの者に託していただきたいのです。貴方と正面から顔を合わせますと、困惑の思いと同様に、強い怒りも覚えないではいられません。この点で私の願いを入れてくださいましても、貴方の昨夜の卑劣なお振舞いに対しましては、ただ貧弱な償いとなるに過ぎません。

その間は、M卿のお屋敷へのご訪問でお過ごしになることも出来ましょう。それに、もしもお身内のご婦人方が、貴方が請け合っておられたほどのご好意を私に対して感じていてくださるのでしたら、私とお付き合いくださいますよう、ご婦人方のお一人を説得なさるだけの力は、疑いもなく貴方には備わっているはずと思うのです。昨夜の卑劣な仕打ちがあっての話です。今後は信義を守ってくださいますよう、その保証をこのように迫りましたところで、少しも驚かれるには当たらないものと存じます。

その間にトムリンソン船長がお見えになりましたら、あの方のご意見を伺いまして、ご報告することも出来ましょう。

でも、一週間経たないうちに顔を合わせることになります場合は、それは新たな違反行為によるものに違いありませんが、それがどのような結果を招くのか、貴方はご存じではないのです。

貴方は無理やりその約束を取り付けられましたが、もしも、私の許しを確かなものとしたいのでしたら、お頼みいたしましたとおり、一筆認めていただきとうございます。

幸薄き

CL. H.

さあ、ベルフォードよ、この愛らしいいたずら者のお嬢さんに対して、いかなる弁護が可能だというのだ。彼女のためにどんなことが言えるというのかな。これを書いた時、完全に逃げ出す決心を固めていたのは明らかなのだ。そして、その逃亡を完全なものにするためにも、彼女に一週間の猶予を与えるよう俺をたぶらかし、俺が我と我が身に裏切りを働くように仕向けるつもりだったのだよ。しかも、さらに悪質なのは、従姉妹の一人を連れて来るためだが、俺に無駄足をさせようとした点だ。われわれが戻ってみると、彼女は姿をくらましているし、俺の正体は永久に世間の晒者になっているのを思い知るという寸法だ。これほど性悪なお嬢さんなのだよ。一体、どんなふうに罰したら十分に厳しい懲らしめになるというのだ。

だが、さらに注意を促したいのは、俺と一週間会わないという決心のこと、そして、われわれとしてはいかにも子供っぽい話と思ったわけだが、例のパンとバターにまつわる方

便についても、彼女がこの短信で（俺の帰宅前には逃亡の機会を見出せない場合を想定してのことだが）、実に尤もらしい説明を付けているという点だよ。

チャリオットは未だ着いていない。また、着いたところで、何をするにも早すぎるだろう。精々この胸の苛立ちを鎮めるだけのことだ。それに、すべての手はすでに打ってあるのだし、成功を収めること以外には考えられないのだから、彼女の無茶苦茶な手紙に改めて目を通すことにしよう。彼女への敵対心をさらに強化するためだよ。以前はあまりに陰鬱な状態だったもので、読み進めるわけにも行かなかったのだが、今は、話題も俺の興味を駆り立てて止まないものであるし、快活さを増した俺の空想力が、陽光のようにその話題に光を注ぎ、くすんだ深い緑色を明るい新緑へと変えてくれることだろう。

我が魅惑の君に、彼女の手紙のいくつかの部分については釈明するよう、また、他の部分については償いをするよう求めた上で、その手紙、あるいは、手紙の写しを貴公にも送り届けることにする。

差し当たっては、まず第一に、〈彼女には俺の妻になる気がまったくない〉という点を話しておくだけで十分だろう。勿論、かくも重大なる一件においては、いかなる無理強いもあってはならないのだ。無理強いというのは、彼女の両親が犯した過ちであり、俺はそれを激しく非難してきたのだから、まさか同じ轍を踏むわけにも行くまい。それゆえ、この肝心な点に関し、彼女の考えが分かっているというのは喜ぶべきことなのだよ。

彼女が言うには、俺が彼女を〈堕落させた〉ということだ。ところで、彼女なりの意味合いに受け止めても、そいつは眉唾ものだよ。もしも、そのとおりだったのなら、俺から逃げ出すような真似を、おそらく彼女はしなかっただろうからな。

彼女は〈広い世界に放り出された〉とのことだ。確かに、ハムステッドヒースはまことにもって美しく、きわめて〈広大な〉眺望を提供してくれることは認めるさ。しかし、あそこにしても〈広い世界〉というわけではないのだよ。また、広い世界に不安があるというのなら、〈もっと狭い〉世界にすぐにも連れ戻してやれると思うのだ。

俺は〈彼女の操にとってと同様、魂にとっても敵なのだ〉そうだ。この厳しさには面食らってしまうよ。だがな、これも出鱈目なのだ。何しろ、彼女の魂のことは大いに愛しているわけだからな。ただし、今回の件では、俺の魂は勿論、彼女の魂についてももう考えないことにする。

彼女は〈赤の他人の中に投げ出される〉ことになるというが、それは彼女自身の落ち度ではないのかな。俺の気持ちにひどく背いてのことなのは確かだよ。

彼女は〈独立した〉状態から〈恩義を受ける〉立場に追いやられるという。彼女が独り立ちの状態にあったことは一度だってないのだし、また、女はそうあるべきではないのだよ。どのような年齢であろうと、いかなる立場にあろうとな。それに、恩義を受ける立場ということだが、だれの世話にもならずに暮らして行くなどということは有り得ない話なのだ。相互に義務を負うことこそ、社会生活と商業生活の要諦であり、魂なのさ。どうして彼女ならそれを免れるというのだ。彼女が怒声を投げつけている相手の男も、そのような免除を望んでいないのは確かなところだよ。長い間彼女に〈頼って〉いたのだし、これまで自慢して構わなかったもの以上の、〈さらなる恩義〉に与れるとしたら、それこそ大喜びすることだろう。

彼女は〈父親の呪い〉のことを話題にしているが、俺のほうから百倍にもして父親にお

返しをしてあるのではないのかな。それにしても、他の者たちの過ちを何で俺のせいにしなくちゃならんのだ。自分自身の過ちがたっぷりとあるのではないのか、この俺には。

だが、夜明けの薄明りが差し込んで来た。纏めに取り掛かることとしよう。

そこで、かいつまんで言うなら、我が愛しの君の手紙は、俺にとってはあまり新味のない罵詈雑言の寄せ集めだということだよ。もっとも、そのきっかけとなる出来事は、彼女にとって疑いもなく目新しいものだろうがね。手紙のそこかしこには、ロマンティックなところと矛盾したところが散見されるのだ。彼女は愛し、かつ憎んでいる。彼女を追い求めても安全だと語り掛け、そうするよう促しておきながら、止めてくれと頼むのだ。貧困や困窮のことを案じながら、それでいて、自分の地所を放棄する覚悟でいる。一体だれを喜ばせようというのだろうな。何のことはない。要するに、彼女の不幸の原因となった連中を満足させるためだ。そして、これで最後だが、絶対に俺のものにはならない決心をしていながら、俺の元を去るに当たって、少しばかり未練もあるのだよ。身内の者たちとの和解への展望が開けてきているからだな。

それにしても、夜が明けるのにこれだけ時間の掛かった例もかつてないな。チャリオットもまだ着いていないのだ。

∴　∴

紳士が一人、俺と話したがっているというのだな、ドーカス。一体だれなのだ、こんなにも早く。

何、トムリンソン船長だと言うのか！　じゃあ、夜通しでやって来たに違いない。確かに俺も早起きだが、これほど早くから起き出しているところに会えるなどと、どうして思いついたのだろうな。

ともかく、チャリオットが到着してくれれば、船長には丘の麓まで同乗してもらおうと思う（ロンドンへの帰路は徒歩にしてもらうとしてもだ。あの船長ときたら、どこまでも慇懃そのものだからな）。船長の話をすべて聞き、こちらの胸の内もすっかり明かしながらだよ。時間を無駄にしないためにな。

さて、この反逆的な逃亡が俺の有利に働きそうなことに今は満足している。鎮圧された謀反のすべてが、支配権を持つ君主の有利へと働くようにだよ。

∴　∴

これはこれは、船長。お会い出来て嬉しいです。ちょうど良い時にお見えだ。ほれ、ご覧なさい。

バラ色の指をした夜明けが訪れ、
そのマントから涙を振り払う。
太陽は昇り、人々を励まし、
輝かしい朝を約して、
立ち込める霧を吹き払う（一〇）。

挨拶代わりに、贔屓の詩人から引用するのをお許しいただきたい。ヒバリと共に起き出す者は、ヒバリと共に歌う、というわけですよ。お目に掛かった後のことだが、妙な知らせがあるのです、船長。困ったことに、誤解しているのです、お嬢さんは。だが、善意に満ち溢れた貴方のことですから、この移り気な美女の失敗を伯父上に明かすようなことはなさらないものと存じます。すべて善かれと思ってのことであるのは分かるはずです。途中までご一緒していただかねばなりません。不和の調停に喜びを見出しておられるのは承知しているのですよ。だが、無分別な者の軽率さや愚かさから生じた仲違いを癒すことこそ、分別ある人間の役目なのです。

∴　　∴

そして、ほら（辺りは物音一つなく、静まり返っているから）、一丁先から、カタカタというチャリオットの車輪の音が聞こえている。さあ、この天使のごとき女性のところへひとっ飛びだ。

褒美をいただきたい、あゝ、愛の神よ［元はと言えば、そなたゆえのことなのだ］。私の苦難に満ちた不屈の努力に対し、それに相応しい褒美をいただきたいのだ。そなたの意に添わしめるべく、この心魅する逃亡者を連れ戻そうという私の努力を、成功へと導いてほしい。自分の軽率さを彼女に認めさせてもらいたい。自らの無礼を悔い改め、私の許しを嘆願し、再び私の寵愛を受けられることを請い求めるよう、そして、そなたとそなたの忠実な崇拝者たる私に対して犯した憎むべき罪の記憶を、私が忘却の淵に沈めるよう、彼女に請い求めさせてもらいたい。

∴　　∴

チャリオットが玄関に来た。すぐ行くぞ。すぐにだ。
ご一緒いたします、善良なる船長殿。
恐れ入りますな。
さあ、さあ、礼儀正しいのは結構だが、堅苦しくなってはいけません。

そして、花婿のごとくに身を装い、この上なく希望に燃え盛る胸も及ばないほどに、さらにこの胸を膨らませているうちに（我が愛しの君がまだ一度も目にしたことのない下男を伴っているのだ）、ほら、もうハムステッドだ。

手紙　七
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

金曜日　午前七時（六月九日）　ハムステッド、アッパーフラスクにて

今この地に来ている。来てから一時間半になるところだ。何という勤勉な精神の持ち主なのだろうな、俺は。俺が無為徒食の日々を送っているなどと言える者は、一人としてい

ないのだよ。自分の味わう快楽のためには、そのすべてに対し、俺は真の努力を傾けているのだ。奇妙な形でだが、自画自賛をせずにいられない。何しろ、このように活動的な魂に恵まれていることもあって、どのような地位に身を置いたにせよ、俺が大変な大物になっていたことは確かなのだ。だが、もしも君主であったなら …… 間違いのないところだが、堂々たること比類のない君主になっていたことだろうな。偉大なるマケドニア王にも匹敵するような戦闘を指揮していたことだろう。〈大ロバート〉の称号を得んがため、次々に王国を併合し、隣接する独立国家すべてから略奪していたことだろう。そして、トルコ皇帝やペルシャ皇帝、また、ムガール皇帝と戦争を起こしていたはずだが、奴らの後宮のことがきっかけだよ。これら東方の君主たちのだれ一人として、可愛い女を楽しもうと思っても、俺がお払い箱にするまでは手に入れるわけに行かなかっただろうからな。

ところで、たっぷりと暇が出来たこともあり、必要な詳細すべてに関する情報を収集した上で、速記による記述に取り掛かっている。出来るだけ同時進行を心掛けようというのだよ。何しろ、話題も俺に相応しいものとなってきているし、我が魅惑の君のご機嫌を伺うには、まだ早すぎるようにも思われるのだ。ここ二、三日は疲労困憊したことだろうからな。それに、俺の今後の処置への備えとして、詳しく話しておくことが山ほどあるのだよ。すべてに脈絡を付け、分かり易くするためにもな。

船長とは丘の麓で別れたのだが、三つの点について指示を出しておいた。つまり、事実について、そして、ありそうなことと起こり得ることについてだ。我が愛しの君と俺とが顔を合わせ、この立派な紳士の仲裁を受けずに和解出来るのであれば、そのほうがはるかに結構なことだろう。痴話喧嘩においては、出来るかぎり第三者の助けを借りないということ。俺は常日頃からこれを規則としてきたのだよ。もっとも、今回はずいぶんと助けを求めねばならなくなったのだがね。それに、令嬢にとっても、助けを必要とすることが少なければ少ないほど、より好都合かもしれないのだ。俺にとって耐えられないのは、これほど些細なことで、あるいは、どんなきっかけであっても、本気で俺と永久に手を切る気持ちになるくらいに、彼女が俺に対し無関心でいられるということなのだ。もしもそのとおりだと知ったら …… だが、彼女が掌中のものとなるまでは、これ以上の脅しは止すことにする。俺の立てた誓いについては、貴公も承知のことだからな。

ウィルの報告の一部始終、つまり、令嬢の逃亡から奴による再発見までのこと、その家の住人に関する報告のすべて、そして、御者からのウィルへの情報等々は、一纏めにすると次のようになる。

愛しの逃亡者がやってきた時、ハムステッドコーチには二人の客しか乗っていなかったのだ。しかし、彼女は空席の分の料金を支払い、すぐに馬車を出させた。

二人の乗客がアッパーフラスクで降ろしてくれるよう、御者に指示していたので、自分もそこで降ろしてくれるよう、彼女は命じた。

乗客が彼女に別れを告げると「大層丁重にであったことは疑うべくもない」、彼女は宿に入り、お茶を一杯と、三十分ほど一人になれる部屋を用意してもらえないかと尋ねた。

宿の者は、今俺がいるこの同じ部屋へ彼女を案内した。彼女が腰を下ろしたのは、今俺が手紙を書くのに使っている、まさしくこのテーブルの前なのだ。そして、俺の座っている椅子は彼女が座ったものだと確信している。あゝ、ベルフォード、貴公にしても、愛の何たるかを弁えていれば、このように些細な点に拘る態度にも説明がつくことだろう。

彼女は打ちしおれ、疲れている様子だった。あのように上品で、愛らしいお客様ということもあり、女将さん自身が接待することになった。お茶と一緒にバター付パンを召し上がりますかと、女将さんは尋ねてみた。

「いいえ、喉を通りませんので」

「とても美味しいビスケットがございますが」

「お任せいたしますわ」

女将さんは、ビスケットを少し持って来ようとして、部屋を出て行った。出し抜けに戻ってみると、女将さんの目には、激しい勢いで溢れて来る悲痛な思いを懸命に抑えようとしている麗しの逃亡者の姿が映った。そのわずかな間にも、そんな気持ちに流されてしまっていたのだろう。

しかしながら、お茶が届くと、彼女は女将さんを一緒に座らせ、この辺りの村や街道について、山ほども質問をしたのだ。

彼女が心配事で心を乱しているように見受けられると、女将さんは気づいた点を指摘してみた。

「心根の優しい人間というのは、愛する友人知人と別れて、平気ではいられないものなのです」というのが彼女の返事だった。

俺のことを念頭においていたのだよ、彼女は。疑いのないところだ。

彼女は宿泊のことについては一切尋ねなかった。もっとも、その後のいきさつから貴公も気づくだろうが、あの夜彼女は、ハムステッドより先へ進むつもりはなかったらしいのだ。しかし、お茶を二杯飲み、ビスケットを一枚ポケットに入れると［可愛い娘だよ。きっと夕食代わりにするためだな］、半クラウン銀貨を一枚置いた。釣り銭は断り、溜め息を漏らし、ヘンドンの方へ向かうつもりだと話しながら退出したのだが、彼女がしていた質問の一つには、そこまでの距離のこともあったのだよ。

ハムステッドコーチはその夜ヘンドンまで行かないのかどうか、人をやって尋ねさせようと宿の者たちが申し出た。

「お構いなく。きっと、迎えの馬車が来ますので …」

これも彼女のフェイントの一つなのだよ、おそらくは。何せ、昨日の朝以来のことだからな。一体どうやって、あるいは、どこのどいつと、どんなことであれ、この手の打ち合わせが出来ていたというのだ。

皆が互いに口にし合っていたわけだが、彼女の態度、その容姿や振舞いには、どこか尋常ならざるほどに気高いところがあるので、きっと高貴なお方に違いない、ということだった。そして、彼女が男女いずれの召使も連れておらず、目は［女将さんは、赤の他人だし、女性だというのに、あの方の素敵な目、という言い方をしていたのだ］赤く腫れ上がっているものだから、両親からなのか、それとも、後見人からなのか、駆け落ち騒ぎに違いないと皆は考えたのだよ。既婚の令夫人というには若すぎるし、あまりにも娘っぽいと見たからだな。それに、もしも結婚しているとしたら、どんな夫だって、これだけ素敵な若奥様を付き添いもなしに一人っきりにしておくような真似はしないだろうし、あの表情に染みついているかにも思えるような、それほど大きな悲しみを与えたりもしないはずだというのだよ。そして、連中に言わせると、あまりにも途方に暮れている様子を彼女が時々見せるものだから、自殺でも考えているのではないかと心配したということだ。

こういったことすべてが一緒になって、連中の好奇心を煽りたてることになった。そして、連中の言い方では「詮索好き」の召使というわけだが、居酒屋で馬丁のキットと酒を飲んでいた下男に頼んで、彼女の動きの一部始終を見張らせたのだ。この男が次のような詳細を報告したのだが、それがそのまま俺にも報告されたというわけだ。

彼女は実際にヘンドンの方へ向かって進み、キャッスルオンザヒース〔二〕の看板のところを通り過ぎたのだが、そこで立ち止まり、辺りを見回したり、目の前にある谷を覗き込んだりしていた。その後、顔をロンドンの方へ向けたのだが、目のところにハンカチをもっていく仕草からして、涙を流している様子だった。自分の取った早まった行動を〔もしかすると〕後悔し、またあそこに戻れたなら、と願っていたのかもしれない。

そうしたほうが彼女には良いのだよ、ジャック。もう一度言っておくけどな。

俺との結婚を念頭に置きながら、俺の元を逃げ出したり、永久に手を切ったりするようなことが出来るなんて … そんな女には災いのあらんことを、だよ。

それから、二、三歩先へ進み、再び彼女は立ち止まった。そして、自分の辿っている道が気に入らないかのように、もう一度涙に暮れる様子をして、進路をハムステッドの方へ向け直したのだ。

彼女がそんなにも涙を流してくれて、俺としては嬉しく思う。そういった恰好の救済手段を備えているもので、悲しみのために張り裂けてしまう心臓などは（その原因がどのようなものであってもだ）一つとしてないからだよ。そんなわけで、上品な女が心ならずも流す澄んだ滴を目にしても、俺としては滅多に心を動かされることはないのだ。ここ十二時間の間に、何度願ったことだろう。出来れば、俺も思い切り泣いてみたいものだとな。

その後、空のまま自分のほうへ走って来る四頭立ての馬車が彼女の目に留まった。彼女は、まるでその馬車を迎えようとするみたいに、自分のいる小道を横切った。そして、御者が馬車を止めるとか、先に話し掛けるとかすれば、言葉を交わしたがっているような様子だった。御者も負けずにじっと彼女を見つめた。彼女とすれちがう者は、一人残らずそうしたのだよ（そんなわけで、彼女の後をつけた男もあまり疑われずに済んだのだ）。御者風情で、幸せな奴だよ、まったく。だれの注意を引いているのか、また、だれに恩義を施すことが出来たのか、それが分かっていたのならな。貴様が見つめた相手は、神のごときクラリッサ・ハーローだ。我がクラリッサ・ハーローその人なのだ。それにしても、貴様という人間が、貴様の追い立てている獣同様、人目も引かぬ凡夫だったのは、俺にとってももっけの幸というところだよ。そうでなければ、俺は当てもない追跡に駆り立てられていたことだろうからな。

要するに、御者と同じく、令嬢も決断をしかねている様子だった。馬は先へ進み〔疑いもなく、御者の頭と目は後ろを振り向いたのだよ〕、すぐに二人の間の距離は呼び戻しもきかないほどになってしまった。彼女は、物思わしげなまなざしで御者を見送り、再び溜め息を漏らしながら涙を流していたそうだ。ちょうどその折にこっそりと彼女の脇を通り抜けた、例の召使が目に留めたことだよ。

この頃には彼女も、家々が軒を連ねているところまでやって来た。通り過ぎる家の一つ一つを見上げ、時々は、むき出しの手に息を吹き掛け、それを腫れた目にあてがっていたが、充血を和らげ、涙を乾かそうというわけだ。とうとう、〈下宿アリマス〉というビラが張ってあるのを見つけると、どうするか決し兼ねているみたいに、六回ほどその前を行き

つ戻りつしていた。それから、さらに町の中へと進んで行ったのだが、そこで、例の男は顔馴染みの一人から声を掛けられたため、ほんの数分間だが彼女を見失ってしまった。だが、間もなく、生地商人の店から出て来る彼女の姿が目に入った。お手伝いの女と連れ立っていたのだが、奴の考えでは、何か小さな買い物をしたからだという。そして、その女中には、後で分かったのだが、今彼女がいる家まで同行してもらったというわけだ(ア)。

例の男は一時間ほど待ってみたが、彼女が出て来る様子もないので、彼女はそこに下宿することにしたものと結論し、帰って来たというわけだ。

そして、俺の解説を脚本のように考えるなら、ここで第一幕は幕を下ろすのだよ。そして今、幕が上がる。

第二幕

場面：同じくハムステッドヒース

［我が与太公の登場

ウィルの奴がこれら詳細のすべてを手に入れておいてくれたわけだが、それと引き換えに、俺が口頭と書面の両方で前もって用意してやった別の話を、負けず劣らずふんだんに聞かせていたものだから、ここの連中は、会ってみると、すでに俺の側についており、奴に話したことの一切を俺にも繰り返し語りながら、この一件が上首尾に終わることをしきりに願っていた。

だが、奴が真っ先に教えてくれたのは、奴の奥様と俺とに関して、連中に話し聞かせた説明のことだった。奴の話の詳細については、貴公に話しておかねばなるまい。少々時間のゆとりもあることだしな。使い走りで外に出ていたその家の女中の話によると、ムーア夫人が［最初の仕事は、この女が相手になるのだろう］自分の家から二、三軒先の、若い紳士の家に入って行くのを見たというのだ。その紳士にはローリンズ嬢という名の未婚の妹がいるのだが、思慮深いということで世間に知れ渡っているものだから、その娘の知り合いで、何か重要なことに取り掛かろうとしている場合、彼女に相談を持ち掛けない者などは一人としていないほどなのだそうだ。

ところで、俺の律義な御者がローリンズ嬢の家の玄関口の辺りをぶらついているところだ。ムーア夫人が自宅に戻るのを俺に知らせようというのだよ。夫人の女友達の話については、俺の話と同様に、間もなく話題になるものと思うが、俺のは以下のとおりだ。

俺が到着する前に、ウィルは次のようなことを連中に話していたのだ。奥様は世界最高の紳士の一人と最近結婚したばかりなのだが、旦那様というのが大変な道楽好きで、活動的でもあるため、奥様は旦那様に激しいやきもちを妬いておられる。そして、そんな気持ちが爆発してしまい、旦那様のところから逃げ出してしまわれた。というのも、奥様は旦那様を大層愛しておられるし、旦那様も奥様には首ったけなのだけれど（皆さんもご覧のとおり、奥様は、おてんとう様がこれまでに照らした中でも飛び切り上等なお方なのだか

(ア) 四十三頁を参照のこと。

ら、それも当然でしょうが)、ただ、こんなことを話すのは失礼かもしれないが、事実は事実なので申し上げると、奥様にはひどく我が儘を言ったり、機嫌を損ねたりしがちなところがあって、どんなことであれ、自分の思いどおりにならないと、旦那様を放り出して行こうとなさる。すでに三度か四度、そのような手を使って旦那様を困らせているが、奥様の美徳や操には何ら差し障りのないことで、ある親しい友人のところへ逃げてしまわれるのだ。その友人というのは、信義に厚い若いお嬢さんなのだが、奥様のこのたった一つの短所に関しては、とにかく甘すぎるという人である。旦那様が奥様をロンドンへ連れてこられたのは、そんなわけであり、通常お二人が住んでおられるのは田舎なのである。そして、旦那様が、セントジェームズ公園で一緒におられるところを見つかったあるご婦人について、納得の行くような説明をなさるのを断られたこともあって、奥様は、上京されてからでは初めてのことなのだが、このような仕打ちに出られたというわけである。そのため、自分が出発する時には、旦那様は半狂乱の状態であった、というのだよ。

「本当に、当然至極のことですわね、お気の毒な方」と、会いもしないうちから俺に同情して、ここの律義者たちは叫んでいたのだ。

奴は彼女に関する情報をどのようにして手に入れたかを語り、すっかり連中の信用を勝ち得たものだから、服装を変えるのにも、連中のほうから手を貸してくれた。そして、奴が頼むと、宿の主人は、実際に令嬢はムーア夫人の家に留まっているのか、また、いつまで下宿することになっているのか、こっそり問い合わせてくれたのだ。亭主の知ったところでは、まるまる一週間だけの契約ということだったが、彼女のほうでは、そんなに長く滞在するようなことはとても考えられない、とも言っていたそうだ。そして、それからの話だが、奴はあの手紙を書き上げ、貴公も聞き及んでいるとおり、律義者のピーター・パトリックに頼んで送ってよこしたというわけだ。

俺が到着すると、容姿や服装がウィルの説明と符合していたものだから、一同すぐに俺を崇め始めた。俺は時に溜め息を漏らし、時には浮き浮きと振る舞って見せたのだが、それも、本当の晴れやかさというより、うまくは隠し切れない心痛の方を表に出すように意図した仕草だ。連中のほうでも、あれほどの素敵なご婦人にそんな浮ついた悪い癖があるとは、いかにも残念な話だとウィルに語り、そんなことを続けていると、大変な危険に身を晒すことにもなりかねない、と付言していた。放蕩児というのはそこいらじゅうにいるのだし[辻ごとにラヴレースがいるというわけだ、ジャック]、この町にも数多くいて、ありとあらゆる手を尽くし、彼女と近づきになろうとするはずだ。それに、彼女を説き伏せることは出来ないにしても、それでも、彼女の評判に傷をつけることになるだろうし、やがては、あんなにも立派な紳士のお気持ちを彼女から引き離すことにもなりかねないだろう、というのだよ。

物のよく分かった善人たちじゃないか、ここの連中は。なあ、ジャック。

「これ、ご主人、少し話がある。私が当地へ赴いた理由については、下男の口からお聞き及びのようですね。不幸な出来事なのです、ご主人。まことにもって不幸な出来事ですよ。だが、貞淑なことでは、あれに優る女もおりませんからね」

「仰せのとおりのようでございますね。奥様がかようなやり方をなさるのは、残念至極に存じます。それに、大変愛想の良いお方と拝察いたしておりますが、そのようなお方に向かってのことでもございますから　…　」

「母親に甘やかされたのですよ、ご主人。母親に甘やかされたと、まあ、そういうわけなのですよ。だが［と、溜め息をつきながら］、最善を尽くさねばならんのです。ご主人にお願いしたいのは、大外套を一着お貸しいただきたいということです。どのようなものでも構いません。連れ合いが私の姿を遠くから目に留めたりしますと、口をきいてもらうのも大層難しいことになってしまうのです。お持ちならば、ケープ付きの大外套をお願いしたい。妻が気づく前に、不意を襲わねばなりませんからね」

「御前様のような紳士に相応しい品は、どうも持ち合わせがございませんで　…　」

「あゝ、何でも構わんのです。粗末なものほど良いのですよ」

［宿の主人退場。大外套を二着携えて、再び登場。

「やあ、ご主人、これ以上のものはありませんよ。ボタンを留めると、顔の下半分はケープで覆えますからね。どうだろう、えらく塞ぎ込んで、心配げな様子には見えませんかね、ご主人」

「御前様よりも気さくな紳士には、これまでお目にかかったこともございません。このような苦難に遭われるとは、お気の毒に存じます」

「大変な不幸者ということですよ。それは疑いようもありませんな、ご主人。だが、ご主人とて同じ思いのはずだが、私にとってわずかな喜びとなっているのは、妻の身に何か大きな不都合が降り懸かる前に、妻を見つけ出せたということですよ。しかしながら、妻のこういった酔狂に終止符を打つことが出来なければ、妻のほうが私の心臓に止めを刺してしまうことでしょうね。いくら欠点があるとはいえ、確かに愛しているのですよ、妻のことは」

この一部始終を聞き取れるところにいた、例の愛想の良い女は、俺のことをしきりと気の毒がってくれた。

「大変厚かましいとは存じますが、いかがでしょうか御前様、奥様はお母様になられたことはございますでしょうか」　彼女が尋ねていた。

「いや、ないのですよ」と、俺は溜め息をついてみせた。「結ばれてから、まだ日も浅いものですからね。また、貴女にはお話ししても構わないだろうが、そのようになりませんのは、妻の責任でしてね［これには一言たりとも偽りはないのだよ、ジャック］。ただ、本当のところをお話ししますと、マダム、例の飼い葉桶に入り込んだ犬〔二〕に似たところが妻にはありまして　…　」

「おっしゃることはよく分かりますわ、御前様［と、作り笑いだ］。奥様はまだお若いですもの。私が娘の頃にも、同じような跳ね上がりのお嬢様のことを一人か二人耳にしたことがございます。でも、奥様にあの兆候が現れましたなら、御前様のことを愛していらっしゃるのですから（愛しておられないとしたら、それこそ奇妙な話です）、きっとこういったことはすべて終わりを告げ、最高の奥様になってくださるものと思うのです」

「それこそ、私が望んでいることのすべてですよ」

「私がこれまでに拝見いたしましたどなたにも負けないほどの、素敵な奥様でいらっしゃいます。どうぞ、あまり厳しくなさらぬようにお願いいたしますわ。一度お母様におなりになれば、間違いなく、このような移り気はすべて克服してくださるものと存じます」

「厳しくなど、私には出来ませんね。妻にはそれが分かっているのです。妻が優しい顔を向けてくれれば、ただそれだけで、一目顔を合わせた途端に私の怒りはすべて鎮まってしまうのです」

この間ずっと、俺は乗馬用外套を身体に合わせ、ウィルは俺の鬘の飾り結び(ア)を押し込んだり、ケープが顎を覆うようにボタンを留めたりしていた。

俺は白粉が少し欲しいと女将さんに頼んだ。女将さんが白粉箱を持って来ると、俺は帽子の上にパフを軽く振り、俺の身を覆うものとしてはモールが少々派手すぎるようにも思えたが、帽子の片方を引き下ろし、両目を隠すように覆いながら、「正体を見抜かれるとお思いでしょうか、マダム」と尋ねた。

「熟練しておられるのですね、御前様は。このようなことを申し上げては、厚かましいかとも存じますが、何かやきもちを妬かれる原因を奥様がお持ちになりませぬよう願っております。それはそうと、モールを施しましたお衣装を隠しておられるかぎり、その服装の御前様を御前様ご本人と分かる人間などどこにもいないものと存じます。その縫い取り飾りのつきましたお靴下で見抜く場合を除きますと　…　」

「良く気づいてくれましたね。どうだろう、ご主人、この上に被さるような靴下を貸してくださるか、それとも、売ってはいただけませんかね。それで靴に収まらなくなるのなら、足のほうを切り落としても構わないのだ」

亭主のほうでは、もしも俺の気に入るようなら、地は粗いが清潔な脚半を一組譲っても良いとのことだった。

「それは願ったり叶ったりですな」

亭主がその品を取って来た。ウィルが履かせてくれると、俺の足は通風よろしく、見事に腫れ上がった姿を呈することとなった。

女将さんは笑みを浮かべながら、うまく行くよう願っていたし、亭主も同じだった。貴公も知ってのとおり、俺は物真似が苦手というわけではなく、亭主から借りた杖を手に取ると、肩をすぼめて四分の一フィートは背丈を低く見せ、ボウリング用の芝生の方へ、顔をしかめてトボトボ歩いて行った。痛風患者のびっこを引いた歩き方を少し練習しておこうというのだよ。ウィルの語るところでは、「善い人なのよ、確かだわ。責任がすべて片方にあるというものでもないでしょう」と、女将が亭主に囁いていたそうだ。一方、亭主のほうでは、大層陽気で気さくな紳士なのだから、俺が何をしでかそうと、俺に向かって腹を立てるような人間がいるとは思えない、と答えていたそうだよ。物の分かった男じゃないか。願わくは、我が魅惑の君も同意見であってほしいものだ。

ところで、貸部屋やその他の設備について、ムーア小母さんと合意に至ることは出来ないものか、試して見ようと思っているところだ。病身の妻のためだがね。

「妻だって、ラヴレース」と、貴公は問い質すことだろうな。

そのとおりだよ。妻だよ。何しろ、俺のことを恐れて、愛しの逃亡者がどんな警告を与えているのか、分かったものじゃないからな。

「しかし、ムーア小母さんは他にも貸部屋を持っているのか」

大丈夫、大丈夫。その点には注意をしたし、ちょうどこちらの望みどおりの設備を備え

(ア) 当時流行の鬘である。

ていることが分かっているのだ。また、妻が気に入ってくれることも知っているのさ。というのも、既婚の身とはいえ、俺は何でも好きなことをやって構わないのだからな。そして、貴公も分かっているだろうが、これはなかなかに思い切った言葉なのだよ。だが、貸せるのは屋根裏部屋だけだと言われても、俺はそれで間に合わせることにし、逮捕を恐れる貧乏作家になって、そこを避難所にしていたことだろう。ただし、借りたものに対しては、何とか前金で支払いをしていたことだろうな。どのような立場にも対処出来るというのが、俺の慰めというわけだよ。

∴　　∴

何、ムーア未亡人が戻って来たというのか。落ち着け。落ち着くのだ。バタバタするものじゃない。俺にとっては、この差し出がましい心臓のほうが良心以上の厄介者に思えるよ。その子犬みたいなはしゃぎようと付き合うには、声を枯らし、性格まで荒くしなくちゃならないようだな。

だが、ちょっと待てよ。我が愛しの君へのお目通りを許された時には、果たして、怒ったものだろうか、喜んだものだろうか。

当然、怒るのだろうな。彼女は俺との約束を破ったのではないのかな。しかも、恩に報いようと考えていた矢先のことなのだ。それに、善良な人間の間では、約束違反というのは恐ろしい罪ではないのかな。俺は物事や行動の本質を判断するに当たっては、それら自体がいかなるものであるかということよりは、むしろ、行動を起こした本人の品性のほうを、常日頃から拠り所としてきたのだよ。従って、女のほうでわれわれとの約束を破ったりすれば不埒な話になるのだろうが、われわれのような者が女との誓いを守り通すというのは、それと同じくらいに奇妙なことなのだよ。

貴公には分からないのだろうか。このように時ならぬ生真面目さを装うのも、抑えのきかないこの心臓の動悸を鎮めるためには、致し方のないことだったのだよ。だが、それでも心臓は激しい動悸を続けているのだ。チャリオットを進めながら、落ち着くように心掛けて見よう。

「チャリオットを使うだって、ボブ。そんな近くへか」

勿論、チャリオットを使うのだよ、ジャック。足が悪いのではないのかな、俺は。それに、チャリオットを持つ下宿人を置くというのは、見てくれも良いのではないのかな。供回り付きの馬車を持つ男について、どこの未亡人が、どんな召使が疑問を投げ掛けるというのだ。

俺の御者は、もう一方の召使とて同じことだが、ウィルの監督下に置かれているのだ。奴が自ら装ったわけだが、あれほど気味の悪い与太公の姿も見たためしはない。奴の正体を見抜くことが出来るのは悪魔だけだよ。それと、奴のもう一方の主人だな。両方の主人がそれぞれの目印を奴の体に残してやったわけだが、我が輩の目印に関して言えば、奴がほざくところの「どえらく大きい口」から絶対に消え去ることはないのだよ。奴っこさん、寄る年波で残りの歯をなくしてしまう前に、首を吊られてしまうだろうからな。

それじゃあ、失敬する。

手紙　八
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月九日　金曜日　夜　ハムステッドにて

さて、ベルフォードよ、物語の中の物語とも称すべきものに取り掛かることにする。機会のあり次第続けることになるし、極めて巧妙に行われるから、たとえ中断が二十回あるとしても、どこで俺が話の筋道を継ぎ合わせているのか、貴公には見分けがつかないことだろう。

嘆かわしいほど痛風に苦しんでいるとは言いながら、新しい召使がドアをノックするのとほぼ同時に、俺は馬車から降りたのだ（片方の手で杖にしっかりと身をもたせ、もう一方の手では召使の肩に寄り掛かりながらな）。間違いなく家に入れてもらえるようにというわけだよ。

大外套のボタンを留めてピッタリと身に纏い、剣の柄頭さえもその下に覆い隠すよう用心した。年の割には少し派手すぎる造りなものだからな。剣が必要になるかもしれないと思ったのだ。前屈みの姿勢を取り、目をしばたかせながら、その輝きを隠そうとした［そんな言い方をしても、決して自惚れではないのだ、ジャック］。歯がしみるということにして、顎は覆い隠していた。へりを引き下ろしたモール飾りのついた帽子と、俺の鬘の目につきやすい部分とが一緒になって、年老いたダンディの風情を醸し出してくれていた。

前もって決めていたわけだが、俺の妻には様々な症状を呈してもらうことにした。

女中が玄関口に出て来た。俺は奥様にお会いしたいと申し入れた。女中が客間の一つに案内してくれた。そこで、おー、と痛風の叫びを一つ漏らして、俺は腰を下ろした。

［ムーア小母さん登場］

「恐れ入りますな、マダム。このままで失礼させていただきますぞ。じっと立っていることが出来ないものですからな。ドアの張り紙からいたしますと、貸部屋がおありとのことですな［下男のウィルと同じく前歯を何本か失くしてしまったみたいに、モグモグと話しながらだ］。どのようなものか、お教えいただけますかな。お宅の場所柄が気に入ったのですよ。私の家族のことをお話ししましょう。妻がおりましてな。結構な年ですが、ついでに申しますと、私よりもかなりの年上なのです。健康が優れませんで、ハムステッドへ転地療養を勧められたというわけです。女中二人と従僕を一人連れてまいります。コーチにせよチャリトットにせよ（両方とも揃えるようなことはいたしませんが）、どこにでも置くことは出来ますし、御者は馬と一緒に過ごすことになりましょう」

「ご入居はいつ頃からをお望みでございましょうか」

「早速今日からお借りしましょう。構わなければ、午後には妻を連れて来ようと思いますが」

「お部屋の他に、食事のほうもお望みでございましょうね」

「それはお任せいたします。そうなれば、料理番を連れてくる面倒は省けますな。それに、一品か二品、料理の仕方を弁えた召使も、おそらく置いておられることでしょう。妻はあっさりとした食べ物でなければなりませんし、私も凝った料理は好まんのです」

「独り者のご婦人が一人おられまして、二、三日中には立ち退かれることになっております。最高のお部屋の一つに入っておられるのですが、そうなりますと、そのお部屋もご自由にお使いいただけることになりましょう」

「それまでの間、妻を迎えるためだけのことですが、一つか二つ良い部屋がおありだろうと踏んでいるのですよ、マダム。時間を無駄にしてしまったものですからね、われわれは。あの忌々しい医者どもときたら …… 失礼いたしましたな、マダム、普段は罵りの言葉など使わないのですが、妻を愛するがゆえのことでして …… 医者たちは、この上治療代を取るのが恥ずかしくなるような頃合まで妻を手元に抑えつけておき、挙げ句の果てに今では、転地療養を勧めているのです。最初からこちらへ寄越しておけば良かったと思います。ただ、こうなったからには、最善を尽くさねばなりませんな。

この暖かい天気に、こうも体を包み込んだりして、お許し願いますぞ、マダム「というのも、この女がじっと俺に目を注いでいたのだ」。部屋を抜け出すのが早すぎたと、身にしみて感じているところなのです。おそらく痛風の症状がぶり返すことでしょう。顎の辺りがおそろしく痛むもので、このようにくるまって出掛けて来たようなわけですよ。おこりの発作と思われます。ただ、私の妻が、可愛いことに、私以外の者の世話では満足しないものですからな。それに、申し上げたとおり、われわれは時間を無駄にしてしまったものですからね」

「もし宜しければ、ここの設備がどんな具合か、ご覧いただきましょう。ただ、そのおみ足の具合では、階段をお登りになるのはご無理かと存じますが …… 」

「少し息をつきましたからな。これで何とか、びっこを引きながらでも登れることでしょう。妻が使う予定のお部屋だけでも覗いてみましょう。召使にはどんなところでも構わないのです。それに、なかなか立派な女性とお見受けいたしますので、部屋代で争うようなことはいたしますまい。そればかりか、お世話を掛けることになりましょうから、その費用についても十分に支払うつもりです」

彼女が先を進み、俺のほうは手摺で身を支えながら、すっかり足首が弱っている割には思ったほどの疲労もなく、何とか登ることが出来たのだ。だが、あゝ、ジャック、俺の技巧に比べれば、本来の体力をまんまと抑えて見せたシクストゥス五世〔一三〕の腕前も何ほどのことがあろう。この御仁、死んだも同然のモンタルトーとして、欲しくもないように装いながら教皇の位を熱望していたが、一旦選ばれたとなると、後ろ脚で跳ね回っている暴れ馬に飛び乗ってみせたというのだよ。仰天している枢機卿一同からは、椅子や人の助けなしに乗ることは出来まいと思われた暴れ馬にだ。俺の場合ほどに、喜び勇む心と軽やかな踵とが結びついた例もかつてなかったのだが、ただ、両方ともその働きを拒まれているのだよ。一方は密かに鼓動を打ちながら、気の張らない言い回しを求めて、今にもその檻を破ろうとしているし、もう一方は、よたよたした動きを余儀なくされているのだが、制約がなければ、ご主人をその想像力の赴くままに、梯子の助けも借りずに月の世界へとお連れしていたことだろう。

一つの階に三部屋あった。そのうちの二部屋は立派なもので、三つ目は、女将の言によれば、さらに見事なものだそうだが、そこに例の婦人が入っているというのだ。

見たのだよ、俺は。彼女のいるのが見えたのだ。力のない足首に向かって、しわがれ声を装い、ブツブツと呟きかけながら、ヨタヨタ登って行くと、だれがやって来るのか見て

やろうと、ちょうど視線を投げ掛けたところだったのだが（いわゆる、細目にドアを開けてだ）、そんな彼女の体の端が目に入ったのだ。そして、大層暖かいというのに大外套を纏い、帽子は目深に引き下ろし、衣装にくるまっているという、まことに不格好な老人を目にすると、彼女は身を引き、何の感情も見せずにドアを閉めたのだ。だが、俺のほうはそういうわけに行かなかったよ。貴公には想像もつくまいが、彼女の姿がチラリと目に映ったそれだけのことで、俺の心臓は口のところまで躍り上がってきたのだ。つい最近も、負けずに胸を高鳴らせながら無駄骨を折ってしまった、このドキドキ、ドキドキと動悸を打つならず者が、俺を窒息させてしまうのではないかと心配になったほどだ。

貸間は十分気に入ったよ。女将に言わせると、三番目の部屋はさらに立派だということなので、なおさらそう思うのだ。「座らせていただきますよ、マダム」と言いながら、俺はその部屋でも一番に暗い場所を選んだ」。貴女もお座りになりませんか。部屋代のことなどでご破算にするつもりはありません。だが、料金については、宜しければ、貴女と妻に任せる所存です。それから、食事付きにするのかどうか、その点につきましてもな。ともかく、この内金をお収めいただきましょう」と、一ギニーを握らせた。「それに、一つお話ししておきますが、愚妻はお金が大好きだということです。だが、根性の曲がった人間ではありません。大変な富をもたらしてくれたのですが、不動産の方は妻の死亡時に他人の手に渡ることとなっておりますので、その意味でも、是非とも妻には丈夫でいてもらいたいのですよ。誠実な男として妻に抱いております、その愛情のためにもです。ただ、妻があまり細かな話を持ち出すようでしたら、私に知らせてもらいたいですな。妻には悟られないようにして、私のほうで埋め合わせをしましょう。常日頃からこうしているのです。ほんのわずかな額であっても、それに見合ったものを得たがる妻でしてな。それに、私としては、どんなことがあっても、妻に悔しい思いとか心配とかはさせたくないのですよ」

女将に言わせると、俺はすこぶる思いやりに溢れた紳士だそうで、俺の出した条件に沿って、料金の件を奥様にお任せすることに異存はない、とも言っていた。

「しかし、マダム、もう一つの部屋を一目だけでも覗かせてもらうわけにはまいりませんかな。中の家具について、もっと詳しく妻に話してやりたいのですよ」

「あの方は人目を避けたがっておられるのです　…　でも」と、女将は許可を求めに行こうとした。

俺は女将の手をつかんだ。「だが、お待ちください、マダム、お待ち願います。適当ではないかもしれませんな、そのご婦人が一人になりたがっておられるというのなら。ご婦人のお邪魔になるようなことは止めて　…　」

「多分、お邪魔にはならないものと存じますわ。気立ての好いお方なのです。客間へ行っていてくださるだろうと思います。大変短かなご滞在なのですから、こちらの不都合となりますことは、決してお望みにならないはずでございますもの」

「そうでしょうな、マダム。おっしゃるように気立ての好い方なら、そのとおりでしょう。貴女のところには長く居られるのですかな、マダム」

「昨日来られたばかりですわ」

「先ほど、チラリとですが、お姿を拝見したように思います。年配のご婦人とお見受けいたしましたが」

「いいえ、おめがね違いでございますわ。若いお方です。私がこれまでにお目に掛かり

ました中でも一番に美しいご婦人のお一人ですわ」

「何ですって。これは失礼をいたしましたな。年配のご婦人であったなら、もっと長くご滞在くださるとしても、それだけ一層の好意を感じないわけではなかっただろうと思うのですよ。奇妙な趣味を持っていると、マダム、貴女はそうおっしゃることでしょう。だが、愚妻のためにもですが、本当に私は年配の女性なら一人残らず好きなのですよ。実際の話、高齢というのは尊敬に値するものだと、いつも考えておりまして、現在の妻に求婚することになりましたのも（持参金も天秤に掛けた上のことですが、その点は認めましょう）、そんな考えからなのですよ」

「老齢を敬われますのは、大変にご立派なことでございますわ。私たちはだれでも、長生きを望みますもの」

「仰せのとおりですよ、マダム。だが、ご婦人は美しい方とのことですな。ご承知いただきたいのだが、年配のご婦人と言葉を交わすのを好むとは申せ、美しい若いご婦人を拝見いたしますのも好きでしてな。庭の見事な花々を愛でるのと同じことですよ。気づかれることなく、一目お姿を拝見させていただく手はございませんかな。何せ、この服装ですし、顎まで外套にくるまっている有り様ですからな、ご婦人がどれほど人目を忍ぼうとしておられるにしても、私とて同じことでして、姿を見られるのは好まんのですよ」

「殿方にお部屋をお見せして宜しいか、尋ねてまいりますわ。それに、御前様は結婚なさっておられるのですし、大層お若いわけでもございませんから、おそらく、あの方もあまりうるさいことは申されますまい」

「では、私同様で、ご婦人も年配の者のほうをお好みなのでしょうな。だが、若者のことで苦い思いでもなさったのかもしれませんな」

「そのようなことがあったのだと思いますわ。あるいは、そうなるのを恐れておられるのでしょうね。ひどく人目を避けたがっておられますし、もしも人相などでの問い合わせがありました時には、知らないと答えるよう望んでおられるのです」

ムーア小母さん、お前さんは紛れもない女だよ、と俺は胸の中で呟いた。

「それは、それは、お気の毒に。で、どのようないきさつなのか、伺えますかな」

「ご事情につきましては、とてもお口が固いのです。でも、私の考えを申しますと、恋愛が絡んでいるものと存じます。いつも涙を浮かべておられますし、人と交わるのはあまりお好きでないのです」

「いや、マダム、ご婦人の秘め事に首を突っ込みますのは、この身に相応しいこととは申せませんな。他人様のことを詮索したくはないのです。だが、どうでしょう、ご婦人はどんなふうに時を過ごしておられるのですかな。もっとも、昨日来られたばかりとのことでしたから、貴女にもお分かりではないでしょうな」

「頻繁に書き物をしておられますわ」

教えてほしいことがあると言って、こちらから物を尋ねる場合、こういった女どもというのは、ジャック、何事であれ、無知だと思われるのを好まないものなのだ。

「いや、お許し願いたい、マダム。詮索好きな男などでは決してないのです。ただ、ご婦人のお立場が難しいものであり、ただの恋愛沙汰に止まらないというのでしたら、貴女のお知り合いでもあり、私からも助言が出来ればと思うのですよ」

「それじゃあ、法律のお仕事をしておられるわけですね」

「いや、確かに、マダム、しばらくは法廷弁護士をやっておりましたが、ずいぶん前から実務を離れておりましてな。それでも、難しい話になりますと、知人たちからしきりに相談を受けているのですよ。貧乏人に関わる事例では、金を与えることがしょっちゅうですが、どんな大金持ちからも、決して料金はいただかないのです」

「それじゃあ、本当に立派なお方でございますわ、御前様は」

「あゝ、マダム、われわれはいつまでもこの世にいるわけではありません。力の及ぶかぎり、善行を積んでおくべきなのです。ただ、お節介に見えるのは嫌いでしてな。ご婦人がしばらく滞在なさる場合ですが、お近付きを得た上で、ご事情をお知らせくださっても良いとお考えなら、それこそ、ご婦人にはもっけの幸いということになりましょうな。ご事情が正当なものと分かればの話ですがね。と申すのも、ご承知おきいただかねばなりませんが、この私、法廷に出ておりました時分にも、わずかな料金のために請け合って、一度でも白を黒、黒を白と言いくるめようとしたためしのある、そんな情けない人間ではないということです。そんな真似は、何のことはない、逃げ口上を用いて不正を蔓延させようと骨折ることに他なりません。そして、その一方で、罪のない者に対して盗みを働いていることになりますからな」

「並外れて立派なお方でございますわ、御前様は。このような弁護士の先生がこの世にはいらっしゃるのだと、幸いにもそのことが分かっておりましたなら［こう言うと、女将は溜め息を漏らしていた］、また、そんな方を存じ上げておりましたなら …… 」

「さあ、さあ、ムーア夫人 …… このお名前と承知しておりますが …… 手遅れではないかもしれませんよ。さらにお近付きをいただければ、力をお貸しすることが出来るかもしれません。だが、このことは、ご婦人には一切お話しにならぬよう願いますよ。先ほども申しましたが、お節介と映るのは嫌でしてな」

ムーア小母さんが女たることの証として示していた、あの見本どおりの行動に出てくれるとしたら、このように口止めをしておけば、機会のあり次第、話を漏らすだろうということ、それを俺は承知しているのだよ。女将にそうしてもらうのが、俺の目的には不可欠なことになるのであればだがね。

その部屋とか例の婦人とかを見ることについては、概して、実に無関心な態度を取ったものだから、気の良いこの女は、その両方を俺に見てもらおうと、ますます熱意を示すことになったのだよ。俺のほうでも、女将にその気を起こさせようというわけだが、美女として俺のめがねに適うためには、大概の人間にとって必要と思われるもの以上のものが求められるし、生涯を通じて、真に愛らしい女性には六人とお目に掛かっていない、と断言してやったものだから、女将もいよいよ熱心になったというわけだ。

要するに、女将は部屋に入って行き、ほどなくして戻って来た。そして、「婦人は控えの間の方へ引き籠もっておられます。ですから、中に入られて、お部屋をご覧くださっても構いませんわ」と言うのだ。

それを聞くと、またもやこの心臓がパグみたいな馬鹿げた動きを始めるのだよ。

俺はびっこを引きながら入って行き、たどたどしく歩き回った。そして、部屋は大変結構だったし、妻も気に入るに違いないと思った。許しを請うた上で腰を下ろすと、次のように尋ねたよ。「当地の牧師さんはどなたですかな。説教の上手な人ですかね。チャペルでの説教はだれが行うのでしょうか。それに、立派な説教師で、また、生活者としても立派

な人なのかどうかということですよ、マダム。そこのところを伺わねばなりませんな。と申すのも、是非とも言わせていただきたいのだが、聖職に就いておられる方には、説教なさったことを実行してもらえると有難いということですよ」とな。

「仰せのとおりですわ、御前様。でも、そのようなことになりますのは、期待されておりますほどに多くはございませんわね」

「それだけに残念なわけですよ、マダム。ただ、聖職者一般に対しては、大いに尊敬の念を抱いているのです。善良になるための最高の機会に恵まれた者が、完璧さの点で他の者たちに劣るような事態を想定いたしますのは、聖職に対してというよりは、むしろ人間性に対する嘲笑になりましょう。私としては、国家に対する非難と同様に、職業を中傷するのも好まないのです。だが、ご婦人を控えの間に閉じ込めてしまっておりますな。痛風とはいえ、不作法をしてしまいました」

そして、俺はヨタヨタと席から立ち上がった。「何と呼ぶものですかね、マダム、これらの窓のカーテンは」

「ラシャのダマスク織でございますわ」

「実に見事なものですな、まったく。絹よりも気に入りましたよ。こちらの方が確かに暖かいでしょうし、田舎の下宿にははるかに似合っている。とりわけ、年配の者にとってはですよ。ベッドも趣味が良いですな」

「こざっぱりとして清潔ですわ。その点だけは自信がございますもの」

「いや、まことにもって結構。大変結構ですな。絹のラクダ織と存じますが、大変結構ですよ、まったく。間違いありません。妻も気に入ってくれることでしょう。だが、われわれといたしましては、どうあってもご婦人をお部屋から追い出すような真似はしたくないですな。当座は、別の二部屋でわれわれには十分でしょう」

それから、控えの間のほうへヨタヨタ歩いて行くと、ドアの上には一枚の絵が飾ってあった。「何の絵でしょうかな。あゝ、なるほど、聖セシリア（一四）ですな」

「ありきたりの版画でございますわ、御前様」

「結構ですよ。結構ですよ。イタリアの巨匠に倣ったものですな。どうあっても、ご婦人をお部屋から追い立てるようなことはしたくないのですよ。別の二部屋でやり繰り出来るでしょう」と、さらに声を大きくして、俺は繰り返した。ただ、ブツブツという嗄れ声でだ。というのも、使う言葉と同様に、話っぷりの一様さということにも大いに意を用いたからだよ。

あゝ、ベルフォードよ、思い浮かべてくれ。我が天使を間近にしながら、じっと堪えなければいけないこの苦しさをだよ。

出来ることなら、彼女を引っ張り出すつもりでいたのだよ、俺は。そこで、立ち去ろうとしている様子を装いながら、「いつごろになりますとこの三つ目の部屋を使えるのか、その時期につきましては、ムーア夫人、貴女のほうでもお決めくださるわけにはまいらないのでしょうな。いや、決して［と、俺は呟いてみせた。隣の部屋にも聞こえるだけの大きさでな］ご婦人に迷惑をお掛けしようというのではないのです。ただ、いつごろのことになるのか、妻に話してやりたいのですよ。それに、女性というのは、貴女もご存じでしょうが、ムーア夫人、こういった性質の事柄については、何もかも目の前に示してもらいたがるものですからな」と、俺は話したのだ。

「ムーア夫人」と、我が魅惑の君の声だ［彼女の声も、これほど心地好く響いたことはかつてなかったほどだ。あゝ、この心臓がまたもや躍り上がるのだ。ある意味では、俺に語り掛けてきたとさえ言えるだろう。何しろ、その抑え難い鼓動を感じると同様、耳にしたようにも思えたのだからな、俺としては。そして、体中の血管の一本一本が脈打っているみたいだったのだ］。「ムーア夫人、その紳士にお知らせくださっても構いませんわ。私がここに留まりますのは、田舎のほうに出しました手紙への返事を受け取るまでのことでして、精々二日か三日にすぎないのです。それに、お邪魔になるようでしたら、私のほうは上の階のどのお部屋を取っても構いませんわ」

「それはいけませんな。絶対にいけませんぞ、お嬢さん」　俺は叫んだ。「大層思いやり溢れるご婦人とお見受けいたしますが、そのようなお方にこれっぽっちでも不便な思いをしていただくくらいなら、私の妻に、心から愛してはおりますが、屋根裏部屋で寝てもらいますよ」。

彼女はまだドアを開けてはいなかった。そこで俺は、「だが、そのように折角のご親切ですし、マダム、控えの間を、こうしたままで、ちょいと拝見出来ますなら、妻が大層大事にして、どこへ行くにも携えてまいります飾り箪笥があるのですが、それが収まるだけの大きさがあるかどうか、話してやれますからな」と言った。

そこで、我が魅惑の君がドアを開き、燦然として俺の前に現れたわけだが、いわば溢れんばかりの光に包まれており、その眩さときたら　…　生まれついての盲人だが、何か慈悲深い力のお陰で、真昼間の陽射しの中で突然に視力を授けられたという、そんな人間の驚きもかくやと思わせるほどのものだったのだよ。

誓って言うが、あれほど奇妙な感動の仕方はかつて味わったことのないものだ。その場で正体を明かしてしまいそうになるのを堪えようと、大変な苦労だった。だが、ためらいがちに、また、ひどく取り乱した口調で、控えの間を覗きこみ、辺りを見渡しながら、俺はこう言ったのだ。「どうやら、妻の飾り箪笥を収めるゆとりはありそうですな。高価な宝石がどっさりと入っておりましてな。だが、誓っても良いが［まるで青二才だが、誓いを立てずにはいられなかったのだ。習慣というやつは忌々しいものだな、ジャック］、拝見いたしておりますご婦人に匹敵するほどの貴重な品は、一つとしてその中に含まれるはずもありませんな」とだよ。

彼女はギョッとして立ちすくみ、怯えた目付きで俺を見つめていた。この賛辞が嘘偽りのないものだけに、作った声色が俺の口調から消えてしまっていたのだろう。俺の知るかぎりではな。

彼女を前に、正体を明かさぬよう堪えるのも（熱い想いの激しい衝動からして）無理な話だが、同様に、この身を隠し通すのももはや不可能なことと悟ったのだ。それゆえ、ケープのボタンを外し、縁を下げて目深にかぶっていた帽子も取った。大外套をぱっと開くと、ミルトンの描く悪魔さながらに［妙な譬え方ではあるがな、まったくの話］、

イスリエルの槍よりさらに確かなる
その天女のごとき眼光に射すくめられ
神々しき正体のままに我は出現す（一五）

という次第となったわけだ。

さて、ベルフォード、この驚愕の場面、そして、それが我が魅惑の君と女将とに与えた効果を例証するような類似の場面、そっくりの例をここで一つというところだが、それに似たもの、あるいは、匹敵するものなどはまったくなかったのだ。その場面を描き、引き立てることの出来るものは、ただ飾るところのない事実だけなのだよ。それゆえ、事実のまま受け止めてもらうことにしよう。

だれなのかが分かった途端、彼女は三度にわたって凄まじい悲鳴を上げた。そして、この腕に抱きとめる暇もなく（名乗り出るとすぐに、俺はそうしようとしていたのだが）卒倒し、俺の足下に崩れ落ちた。俺としては、あんなにも突然に、また、あんなにも興奮した状態で正体を明かしてしまった、自分の思慮のなさを呪う羽目になったのだよ。

俺の容姿や顔付き、声や服装がこうも奇妙に一変してしまうのを目の当たりにした女将は、「人殺し！」「助けて！」「人殺し！」「助けて！」と、交互に、立て続けに六回は叫んでいた。お陰で家中が大騒ぎとなり、女中が二人と、その後を追って、俺の下男も駆け寄って来た。「水と鹿角精を頼む」と、俺が大声を上げると、各人がばらばらの方角へ飛んで行った。女中の一人は、やって来た時に負けない慌てぶりで戻って行くし、女将はこっちの部屋から駆け出したかと思うとあちらの部屋に飛び込み、やがて、われわれのいる部屋にもやって来て、意味もなければ目当てもなしに、わけもなく手を揉みながら、そこいら中を歩き回り、何をしているのか、自分にも分かっていないのだよ。

するとそこへ、一人の紳士とその妹が駆けて来た。先ほど走り去って行った女中に呼び出され、連れて来られたのだ。痛風のためにびっこを引き、歯の欠けた嗄れ声でブツブツしゃべる、いやらしい気難し屋の年寄りを家に通したところ、この年寄りが、はきはきとした口調で話すし、歯も全部揃っている、活発で陽気な若者に突然変身してしまったものだから、この女中は、俺は悪魔以外の何者でもないと言って譲らず、俺の足から目を離すことが出来ずにいるのだ。疑いもなく、割れた蹄の先が露呈されるのを見届けようと、今か今かと待ち侘びていたのだよ。

俺のほうでは、我が天使の意識を回復させようと夢中だったものだから、他の人間のことはまったく気に留めなかった。そして、ようやく彼女が悲痛な溜め息を漏らし、咽び泣きながらもゆっくりと動きを取り戻して来たので（ただ、暫くの間、彼女の目には白目の部分しか見えなかった）、傍らに跪き、片方の腕で彼女の頭を支えながら、これ以上はない優しい口調で、「私の天使。心魅する人よ。私のクラリッサよ。私をご覧なさい、最愛の人よ。怒ってなどいるものか。許しましょう、最愛の君」と呼び掛けたのだ。

例の紳士と妹は、このすべてをどう理解したものか、測り兼ねていた。目が見えるようになり、今一度チラリと俺の姿に目をやると、我が麗しの君は再び呻き声を上げ、気を失ってしまったものだから、なおさらのこと測り兼ねたというわけだよ。

俺は控えの間の窓を引き上げて、風を入れた。それから、彼女の世話を若い婦人、つまり、フラスク亭で耳にしていた、あの評判のローリンズ嬢その人と、この頃には意識を取り戻していたムーア夫人とに任せ、部屋の片隅に引き下がると、下男に命じ、痛風を演じてくれた靴下を脱がせてもらったり、帽子にはブラシをかけ、また、いつもどおりの粋な反り具合になるよう、糸で括らせたりしていたのだ。

それから、そこら一帯が混乱している中で、これまであまり気に留めていなかったロー

リンズ氏に会うべく、俺は控えの間へと赴いた。「さて、尋常ならざる場面をお見せいたしましたが」と、俺は話しかけた。「その淑女は私の妻でしてね。私以外に、他の男性がこの場に立ち会う必要はないのですよ」

「無礼の段はお詫びいたしましょう。もしも、ご婦人が貴方の奥様なら、私の出る幕はありませんね。ただ、貴方を目になさった時の奥様の心配げなご様子から　…　」

「失礼ですが、その〈もしも〉や〈ただ〉は是非とも止していただきたい。奥様の心配ごとに関する貴方の懸念についてもです。この件を裁きますには、貴方はまことに不適格なのです。それゆえ、お引き取りいただけると有難いですな。この際、立ち会ってもらうに相応しいのは女性だけなのですよ」と、俺は付け加えておいた。それに、女性たちの気遣いや親切な助力のことは有難く思っている、ともな。

あの男がそれ以上一言も口にしなかったのは幸運だった。というのも、癇癪玉が破裂しそうになっているのに俺は気づいたのだよ。世界一美しいうなじ、腕、そして足が、この世のだれであれ、俺以外の男の目に晒されるなんてことは、到底我慢ならなかったのだ。

俺は再び控えの間から引き下がったのだが、彼女が意識を取り戻し始めているのに気づいたからで、俺の姿を見たため、彼女がすぐにまた元の状態に戻るようなことになってもいけないと思ったのだよ。

激しい感情を露に、辺りを見回しながら彼女が口にした最初の言葉は、「あゝ、匿ってください。匿ってください。いなくなりましたか、あの人は。あゝ、匿ってください。いなくなりましたか、あの人は」というものだったのだ。

「失礼ですが」と、断固とした、そして、自信に満ちた態度で俺に近寄って来て、ローリンズ嬢が切り出した。「これは思いも寄らない出来事なのでございますね。奥様には貴方のお姿が耐えられないのです。何をなさったのか、それは貴方が一番よくご存じのはずですわ。ただ、このような発作がもう一度まいりますと、きっと奥様の最期になってしまうでしょう。ですから、お引き取りいただきますのが真の思いやりと申せましょう」とな。

これだけ評判の良い人物を味方にするのは、俺にとっては義務とも言えた。この女の生意気な兄貴に失礼な真似をしてしまっただけに、なおさらのことだよ。

「愛しの妻が私と顔を合わせるのを不安に思うのも尤もな話でしょうね」と、俺は言った。「もしも、マダム、私が妻を愛しているのと同じほど貴女を愛しておられるご主人がおありなら、ご主人から逃げ出し、危険に身を晒すような真似を貴女はなさらないものと私は確信いたしておりますが、自分の思いどおりにならないと、妻は決まってそうするのですよ。しかし、計画的な悪事など思いつくはずもない人間なのです。ただ、母親からひどく甘やかされておりましてね。ここが妻のまずいところですし、また、欠点のすべてというわけです。そして、なおさらに言い訳が立たないのは、私こそ妻の選んだ男であり、この世のどんな男よりも私のことを愛してくれていると、そう考えるに足る理由もあるからなのですよ」とだ。

これで、ジャック、お嬢さん相手に、それも面と向かってだが、立証して見せる話が一つ出来上がったってわけだよ[ア]。

[ア]ところで、ベルフォード、注意力の乏しさゆえのことだが、俺の自信満々な姿にびっくりされても困るので、ここでひとつ思い出してもらいたいのだよ（しかも、このように欄外に記した所見の形を取ら

「紳士らしい話し方をなさいますし、ご様子からも、貴方のことは紳士とお見受けいたします」と、ローリンズ嬢が言っていた。「でも、おかしな話ですわね。奥様は貴方のお姿に怯えておられるようなのです」とだ。

「別に驚くことではないのですよ、マダム」と、少しばかりムーア夫人に近い側へと彼女を誘いながら、俺は言った。「すでに三度目になるのです、愛する妻を勘弁してやりましたのはね。それにしても、このやきもちというのは　…　そんなところがあるのです。それに、逆上しやすいところもありましてね［と、俺は声をひそめてみせたのだが、秘密めいた様子が備わり、その結果、皆の気持ちをより一層引きつけるようにというわけだ］。ただ、話があまりにも長くなりますので　…　」とな。

そして、我が愛しの君のところへ向かうような素振りを俺は見せたのだ。ところが、隣

せてもらうのは、自分の物語に割り込んだりしないためのことなのだ）。俺のこの大胆さも、今回のような出来事が起こりはしまいかと案じ、以前から手筈を整えていたことの（時々は貴公にも知らせて来たわけだが）、その結果に他ならないということなのだ。すでに愛しの君は、家柄と資産に恵まれた四名にも上る立派な紳士の前で（※）、また、シンクレア夫人と夫人の家の子郎党やパーティントン嬢の前で、俺の妻として通っていたのではなかっただろうか。それに、彼女は伯父の便法に同意していたのではなかったかな。ヒックマン氏からあの伯父に働きかけがあった場合には、その時点以降は妻ということで通すという点でだよ（†）。また、そう信ずべき旨を、人格者のトムリンソン船長が広めることを認めてもらうという点もだ。現実に氏は双方の家族に報告したわけだが（連中はおそらくさらに多くの家族に話したことだろうが）、ジェームズ・ハーローの耳に届くよう、また、伯父のジョンが進める和解工作の礎になるようにとの考えからなのだよ（‖）。それに、これだけの策を弄しながら、目論みは一切なかったなどということは、貴公には考えられるだろうか。また、この作り話の裏付けとなるさらなる用意が俺に出来ていないなどということは、考えられることだろうかな。

実際の話、これらの予防策を練った時には、俺の手から抜け出すような真似が、たとえその気になったところで、彼女に出来るとは夢にも思わなかったのだ。それら予防策に頼らねばならなくなる事態といえば、希望的観測では、唯一、俺が勇を鼓して壮大な企てに取り組み、成功を収めた際に、俺を目の当たりにしても耐え忍ぶ、そんな気持ちを愛しの君に起こさせようという場合に限るのだよ［そしてこれは、彼女への慈しみの気持ちから出たことなのだ。かつて俺は、征服した女の嘆きや呪いの言葉、また、涙に対し、一体どれほどの注意を払っていたというのだ］。俺を諫める気持ちを起こさせる場合のことだし、俺からの申し立てや、和解への目論見や繰り返し与えられる俺の誓約、また、船長からの保証の言葉などに基づいた、彼女自身の将来へ向けての希望によって、心を和らげてもらおうとする場合のことなのだ。何故なら、その場合、一週間を共に過ごした上で俺を許すということは、いつまでも俺と暮らすのを認めることになるわけだからな。そして、その時こそ、信義に基づく望ましい人生が始まったことだろう。その時には、彼女の試練の数々もすべて終わりを告げていることだろうし、われわれのどちらか一方の人生が終わるまで、彼女が味わうものは、ただ感謝の念、愛情、そして、喜びのみとなることだろう。というのは、俺にしても、これだけ素晴らしい娘を捨てる気になどなるはずがなく、また、捨てられるわけもないのだよ。貴公も承知のはずだが、彼女に劣るどんな女に対してさえ、俺は　…　彼女より劣る者たちと言って構うまい。何しろ、彼女に劣らない者などはいないのだからな　…　けちな真似をしたことは一度だってないのだよ。

（※）第三巻の手紙六十二の結末部分を参照のこと。（†）第四巻の手紙五十五を参照のこと。（‖）同所。

の部屋に引き下がってもらいたいと、連中は俺に頼むのだよ。横になって休むよう、彼女の説得に努めて見るというのだ。

俺のほうでは、彼女に話をさせないよう頼んでおいた。彼女は引きつけを起こすことが多く、そんな際には、思いついたことは何でも口に出してしまうのだが、しゃべらせておくとそれだけ容体は悪化するし、安静にしておかないと錯乱状態に陥ってしまい、場合によっては、それが一週間にも及ぶことがあるから、というわけだ。

彼女の安静を保つ旨、連中も約束してくれた。そこで、俺は隣室に引き下がり、ムーア夫人とローリンズ嬢を除き、一人残らず階下へ降りるよう命じた。彼女のほうではしきりと叫び声を上げていた。「不幸者」だの「惨めな」「堕落した」「もうお終い」だのと、自分のことをそんなふうに言っていた。そして、両手を握り締めて懇願するのだよ。皆の助力がない場合には身をもって受けなければならない、その恐ろしい災いから逃れるのに手を貸してほしい、とな。

連中のほうでは、じっとおとなしくしていることを説き、横になって休んでもらおうとした。彼女は拒んだのだが、ただ、安楽椅子に深々と身を沈めてはいた。身体の震えがひどくて、立っていられないほどだったのだよ。

俺としては、この頃には彼女も十分回復しており、同席しても耐えてくれるだろうと考えていた。また、耐えさせるのが義務なのだとも思った。そこで、俺にとってさらに当惑を誘うようなことを、叫び声と一緒に何か漏らしはしまいかと気遣いながらも、俺は例の部屋にもう一度入って行った。

「あゝ、ほら、あの人よ」と、彼女は叫び、エプロンで顔を覆うのだよ。そして、「会うわけにはまいりません。顔を向けることも出来ないのです。立ち去るのです。立ち去るのです。私には触らないで」と言うのだ。

というのも、俺は彼女の抗う手を取り、落ち着いてくれるよう懇願していたのだよ。そして、すべてに亘って彼女自身の条件どおりに、そして、希望のとおりに折り合いをつける旨を請け合っていたところだったのだ。

「卑劣な人」と、激昂したお嬢さんが言っていた。「この先二度と貴方を見ずに済むということ、そのこと以外に望みなどは一つもございません。このように追いかけられ、付き纏われねばならないのは何故なのでしょう。もう十分不幸にしてくださったのではないでしょうか、私のことは。ありとあらゆる救いや援助の手を、そして、友人も一人残らず奪い取られながら、貧しさや卑しさ、そして、惨めさに甘んじようとしているのです。それも、貴方のしつこい求めを免れるためのことなのです」とだ。

ローリンズ嬢が俺をジロジロと見つめるのだ「厚かましいあばずれ娘だよ、このローリンズ嬢というのも、と俺は考えていた」。ムーア夫人も同じ態度だ。「お話ししたとおりでしょう」　俺は婦人たちのほうを振り向き、小声で囁いてみせた。大層心配し、また、憐れんでもいるような表情を浮かべ、頭を振りながらだよ。それから、我が魅惑の君に向かって、「愛しい人よ、何というわめきようですか。こんなに興奮したのでは、立ち直るのも容易でなくなります。堪えるのですよ、君。落ち着くのです。そして、この件について冷静に話し合ってみましょう。そんな具合では、私ばかりか君自身のことも、世の晒しものにしているのですよ。君が盗賊連中の手に落ち、私がその首領なのだと、ここのご婦人たちもきっとそんなふうに思われることでしょう」

「そのとおりですわよ。そんなところですわ、貴方は」と、彼女は足を踏み鳴らし、顔はなおも覆ったままだ「水曜の夜の一件を思い浮かべていたのだよ、彼女は。疑いのないところだ」。そして、心臓も張り裂けんばかりに溜め息をつき、手を額に当てながら、「すっかり心が乱れてしまいそうですわ、私」と言うのだ。

「お顔が見えるようにしようというのではないのです、最愛の人よ。私を見つめてくれなくても結構だ。君にはひどく毛嫌いされているのだからね。それにしても、こんなにも興奮することが君に出来るなんて、思いもしなかったですよ」

そう言いながら俺は、掴んだままの彼女の手に唇を押し当てようとした。ところが、彼女は怒りを込めてその手を引っ込めたのだよ。

「どうぞ、手を放していただきましょう」彼女が言っていた。「触れてもらいたくはないのです。私のことは、運命の手に委ねていただきます。どのような権利、どのような資格があって、このように私を迫害なさるのでしょうか」

「どのような権利、どのような資格ですって、君。だが、今は時機ではない。トムリンソン船長から手紙を受け取ったのですよ。さあ、これです」と、彼女のほうへ手紙を差し出しながら、俺は言った。

「何一つ受け取りませんからね、貴方の手からは。トムリンソン船長のことはおっしゃらないでください。どなたのこともですわ。このように私の邪魔をする権利など、貴方にはないのです。もう一度申しますが、私のことは運命の手に委ねていただきましょう。もう、十分不幸な目に遭わせてくださったのではありませんか」

俺のほうでは微妙な話題に触れて見せた。これは故意に行ったことなのだ。彼女は逆上のあまり半狂乱になることがあると仄めかしてあったわけだが、婦人たちの目の前で、その話を確証するような興奮状態に彼女を追い込む算段だよ。

「これはまた、何という変わりようです。先頃までは、あれほど幸せだったのです。欠けているものといえば、ただ、君とお身内の方々との和解以外にはなかったし、その和解の件も、順調そのものに進んでいたのです。あんなにも些細な、あんなにも偶発的な出来事のために、二人の幸せすべてが覆されるようなことになって良いものでしょうか」

彼女は苛立たしさに身を震わせて立ち上がったのだが、怒りに燃えるその顔からエプロンがはずれて落ちた。「厚かましくも」と、彼女の言葉だ。そして、「あの出来事を些細で偶発的だとおっしゃるのですし、幸い、私は貴方の卑劣な手を、そして、負けず劣らずいかがわしいものと見るのが当然な、そんな家からも抜け出したわけですから、裏切り者で卑劣漢の貴方のことではありますが、思い切って、貴方に目を向けてみることにいたしましょう。そして、あゝ、もしも、最初の一瞥で貴方を恥じ入らせて後悔の念へと導き、次の一睨みで死に至らしめることがこの私に出来るのでしたら、それこそ、女性への神からのお恵みということになりましょう」と言うのだよ。

この大袈裟な、悲劇じみた台詞、そして、それを語る際の彼女の気取った態度が、こちらの願ったとおりの効果をもたらしてくれたのだ。俺は憐れみの籠もったまなざしを代わる代わる、婦人たちと彼女のほうへ向けてみた。婦人たちは心得顔に首を振りながら、俺には引き下がるよう、そして、彼女には横になって心を落ち着けるように懇願していた。

間もなく、この大あらしも他の暴風と同様、俄か雨によって鎮まることとなった。彼女はもう一度肘掛け椅子に身を沈め、婦人たちに向かって、感情を露にし過ぎたことを謝っ

ていた。しかし、俺に対する詫びはないのだよ。それでも、丁重な言葉が口の端に上るようになれば、その時には、俺もお裾分けに与れるものと期待を寄せていたのだ。

「実を言いますと、ご婦人方」と、俺は言った［本当に図々しい話だ、と貴公は言うだろうな］。「この興奮ぶりは、愛する妻のもって生まれた気性ではないのです。考え違いがありまして　…　」とだよ。

「考え違いですって。恥知らず。それに、貴方などに弁解してもらうなんて　…　」

愛らしい顔立ちのその一つ一つが、何という根深い蔑みの思いに掻き乱されたことだろうか。

そして、俺から顔を背け、こう言うのだよ。「あゝ、悪巧みに長けた裏切り者、貴方の姿は見るに耐えません。立ち去るのです。立ち去るのです。顔色一つ変えずに、よくも私の前に出られたものですね」とだ。

そこで、俺としては、夫という立場からしても、腹を立てずにいるわけには行くまいと考えた。

「いつの日にか、この扱いを後悔することになりますよ、マダム。誓っても良い。そうなるでしょうね。こんな目に遭わねばならないようなことを私がやっていないことは、君も承知のはずなのだ。お分かりでしょう、やっていないことは」

「貴方がやっていないことは私も承知ですって　…　何という恥知らずでしょう。承知だなんて　…　」

「そのはずです、マダム。私ほどの地位にある、そして、重要な人物が［そう言っておくのが適当と思ったのだ］このような仕打ちに遭うなど、かつてないことですよ」

彼女は天に向かって両手を差し上げた。怒りで言葉が出ないのだな。

「だが、すべては、私に向けたあの非難と同類のものなのだ。〈ありとあらゆる救いや援助の手を君から奪い取った〉だの、〈君に貧しさや卑しさを嘗めさせた〉だのというやつですよ。その他前例も見当たらないような罵詈雑言もある。私としては、このお二人の女性の前で、ただ次のことだけを言っておこう。それが宿命ということであり、また、以前君が抱いていてくれた私への愛情が、そのように根深い嫌悪の情へと変わってしまったからには、私としても間もなく、早速に、君を全面的に解放してやるということだ。私は立ち去ることにする。君のことは、君の言うとおり、君自身の運命に委ねることにする。そして、それが幸せなものであるよう、祈ることにしよう。ただ、私が略奪者、いや、泥棒などと見られないためにだが、君の衣服、それから、君の持ち物一切をどこへ届けたら良いのか、それを知らせてほしいのだ。知らせてくれれば、送り届けることにしよう」

「ここへ送っていただきます。そして、これ以上私を悩まさないこと、二度と私に近づかないことを約束していただきたいのです。貴方にお願いすることはそれだけです」

「そのとおりにいたしましょう、マダム」と、俺は気落ちした様子で言った。「それにしても、これまでに一度でも考えたことがあっただろうか。私という人間がそれほど君の眼中になかったなんて　…　だが、この手紙に目を通していただくよう主張するのは、許してもらわねばなりませんね。それと、トムリンソン船長に会い、船長が話そうとしている伯父上からの伝言に耳を貸していただくという点もです。船長もおっつけこちらに見えるはずです」

「愚弄するのはお止めなさい」　彼女が尊大な口調で言った。「申し出のとおりにしてい

ただきましょう。どんなお手紙も、貴方の手からは受け取りません。トムリンソン船長にお会いするといたしましても、それは、あの人自身のことでです。貴方の件でではございません。私の衣服を送り届けるとのことでしたわね。おっしゃることを一言でも私に信じてもらいたいのでしたら、この点を貴方の誠意を試す試金石といたします。今すぐに私の傍を離れるのです。そして、私の持ち物を届けていただきましょう」

婦人たちは目を丸くしていた。ただただ目を剥いているだけなのだ。そして、われわれ二人の間の一件をどう理解したら良いのかと、ますます途方に暮れている様子だった。

癇癪を起こして彼女を捨てて行くような、そんな素振りを俺はして見せた。だが、ドアのところまで行くと、俺は振り返り、我に返ったというように、「あと一言あるのです、最愛の人よ。怒る姿にさえ、心惹かれるものがある。あゝ、我ながら、情にもろい心をしているものだ」と、半ば後ろを向き、ハンカチを取り出しながら言った。

実際、俺の両の目は涙でわずかに光っていたに違いないのだ、ジャック。それは疑うべくもないところだな。婦人たちが俺に同情を寄せてくれたのだよ。まったくもって感心な連中じゃないか。俺と同様、それぞれにハンカチは携えているということを、婦人たちは見せてくれたのだよ。貴公は目にしたことは（卑近な例だが）ないだろうか。十二人かそれ以上の人間の集まりで、だれかが「何時だろう」と尋ねると、一人残らずだれもが、親切そうに時計を取り出してみせるところをだよ。似たような人数の集まりの場で、一人があご髭の話を持ち出すと、だれもかれもが、親指と残りの指とで挟んで、髭をしごき始めるのと同じことだ。

「ただ一言だけお聞き願いたい、マダム」　俺は繰り返した（いつもの声音を取り戻すとすぐにだ）。「私たちの今回の誤解の原因についても、トムリンソン船長に対しては、最も有利に働くような説明をしてあるのです。伯父上が主張なさっている点は君も承知なのだし、黙認してくれてもいる。私が手にしている手紙に目を通してくれるなら［と、もう一度手紙を差し出した］、兄上の激しい敵意からどのようなことを案じなければならないのか、それは分かってもらえるはずなのです」とだよ。

彼女は掌を広げ、手紙を遠ざけながら、激しい口調で話し出そうとしていた。「いや、最後まで聞いてもらいますよ、マダム。船長は、君も知ってのとおり、われわれの結婚のことを二人の人間に報告したのです。兄上の耳にも届いています。私の身内もまた聞き及んでいるところです。今朝、ロンドンから手紙が届きましたが、ベティ・ローランス夫人とモンタギュー嬢からのものです。これがそうですよ［と、俺はそれらをポケットから取り出すと、船長からのものと一緒に彼女のほうへ差し出した。しかし彼女は、受け取ったりせぬようにと、まだ開いたままの掌をひっ込めた］。是非とも考えてもらいたいのです、マダム。君のこの激しい憤りに伴うかもしれない、致命的な結果のことに思いを馳せてもらいたいのですよ」

「貴方と知り合ってからというもの、私は疑念と過ちのはびこる荒野へと追いやられてしまったのです。貴方の手を逃れたことを神様に感謝いたしております。自分に関わります事柄は自分で処理するつもりです。私へのお気遣いは一切無用です。自分のことを思いどおりに出来る立場なのではないでしょうか、私は。貴方には何か資格でも　…　」

婦人たちは目を丸くしていた。［ずいぶんと目を丸くするものだな、君たちも、と俺は思ったよ。目を剥く以外、他には何も出来ないのかね、とな］　この辺が彼女を黙らせる潮

時というものだな。

彼女の声をかき消そうと、俺は声を張り上げた。「我が最愛の人よ、優しさと気遣いに溢れた心を君もかつては備えていたのだ。現在のような心を備えねばならない理由など、多くはなかったはずです」

「自分自身で判断させてもらいますわ。目にすることに基づいてです。耳にすることを基にしてではありません。考えられることでしょうか、仮にも私が　…　」

俺が恐れたのは、彼女がその話の先を続けることだったのだよ。そこで、「聞いてもらいますよ、マダム」と、俺はさらに声を大きくした。「この手紙を一段落か二段落、代読させてもらわなくちゃいけませんね。自分では読む気にならないというのなら　…　」

「立ち去るのです、あなた。それらの手紙を持って消え去るのです。どのような口実があって、こんなにも私を責め苛むのでしょうか。どのような権利が　…　どのような資格が　…　」

「最愛の人よ、何という質問をなさるのでしょうね、君も。自分一人で十分に答えを出せる質問では　…　」

「答えられますとも。答えてみせますわ。ですから、こうお答えいたしますわ　…　」

俺はなおも声を張り上げた。彼女も圧倒されていたよ。可愛い奴じゃないか。そなたのような気立ての者が、俺みたいな気性の人間に屈するわけに行かないとは、それまた辛い話だろうな、と俺は思ったよ［だが、俺としても、彼女にはひどく腹を立てていたのだ］。

彼女が黙っているので、俺は声を低くした。あくまでも穏やかで、ひたすら懇願の口調だ。頭は垂れ、片方の手を差し出し、正直なこの心臓にもう一方の手を添えながら、次のように話したのだよ。「一生のお願いだ、我が最愛の人よ。穏やかな気持ちでトムリンソン船長と会う決心をしてほしいのです。氏は同行したがっていたのです。ただ、このように重大な行き違いがあったことでもあり、まずは君の心を和らげるよう努めてみたかったのです。しかもこれは、君自身の願いに添うことでもあるのです。でなければ、お身内の方々が私どもと仲直りをしてくれようがくれまいが、私にとって何の意味がありましょう。皆さんからのご厚志を、私は少しでも望んでいるでしょうか。ですから、君自身の気持ちのためにも、トムリンソン船長の交渉を徒労に終わらせないでほしいのです。あの立派な紳士も午後にはここへお見えになりましょう。ベティ夫人が、従姉妹のモンタギューと一緒に、一両日中には上京しますし、二人揃って君を訪ねるはずです。どうかお願いだ。M卿やベティ夫人やセアラ夫人のお耳に届いてしまうほどに、この行き違いをそこまでこじらせてもらいたくないのです。［この言葉で、婦人たちの目には、俺がかなりの大物と映ることになったわけだよ］ベティ夫人のほうでは、君が田舎のお屋敷へのお供に同意をするまで、のんびりとはさせてくれないことでしょうね。また、あの夫人になら、君も安心して申し立てをすることが出来るはずです」

俺の言葉が一瞬途切れるのを見て、彼女は再び話し出そうとした。彼女の表情の変化も声の調子も、俺には気に入らないものだった。「それじゃあ、卑劣な恥知らずさんの考えでは　…　」というものだったよ、実際に彼女の口をついて出た言葉というのはな。俺は再び声を張り上げ、彼女の言葉をかき消してやった。「君が口にした悪口が私に当てはまらないことは、君だって承知のはずだ。あまりに侮辱的だ。そんなにも優しい心の持ち主の言葉としては　…　だが、この仕打ちも君からのものなのだ、マダム。私が自分の魂以上に

大切に思っている、その君からのものなのだ。そして、その魂にかけて誓おう。君を愛していることをだ。「婦人たちは互いに顔を見合わせていたよ。俺の情熱的なところが気に入ったらしいのだな。人妻であれ生娘であれ、あるいは後家さんであっても、女というのはお熱いのが好きなのさ。ハウ嬢ですら情熱的なのに賛成しているのは、貴公も知ってのとおりだ」(ア)とは言っても、きっかけとなった事柄に比べ、度を過ごしたところまで君は事態を押し進めてしまっていると言わなければいけませんね。どうやら、君は私のことを憎んで……」

彼女がすぐにも口を開こうとしていた。「もしも、私たちが永久に別れることになるのであれば」と、強く厳かな声で俺は言葉を続けた。「この島国が私のために長く迷惑を被ることはないでしょう。ともかく、せめてこの手紙にしっかりと目を通していただきたい。また、伯父上の友人には何を話すべきなのか、そして、氏は伯父上にどのように伝えたら良いのか、それをお考えいただくだけで良いのだ。君に落ち着きをもたらすこと、また、つい先頃まで君が心を傾けていたあの和解に役立つことであれば、どんなことでも手を打つつもりなのだ(もしもその気なら、縁を切ってくれても構わない)。ただ、失礼ながらこう思うのだが、私への機嫌をもっと良くしてもらう必要があるのです。たとえそれが、過ぎ去った出来事を有利に見せるためだけのことだとしてもです。そして、いかなる方法を用いるのが適切とお考えかは知らないが、今後お身内の方々に働き掛ける際、それに重みを持たせるためのことに過ぎないとしてもですよ」と言ったのだ。

そして俺は、手紙を彼女の膝に置くと、深々と頭を下げ、えらく厳粛な面持ちで隣の部屋へ引き下がったのだよ。

すぐに二人の婦人が俺の後を追ってきた。ムーア夫人が引き下がってきたのは、手紙に目を通す時間をあの麗しき天の邪鬼に与えようというわけだ。ローリンズ嬢も同じ理由からだったが、彼女のほうには、家に戻るようにとの伝言もあったのだ。

急いで戻ってくれるよう、未亡人がお嬢さんに懇願していた。俺も一緒になって同じお願いをすると、彼女も、われわれの願いに応じることを、実に快く約束してくれた。

俺が当初装った偽りの姿について、また、創作した作り話のことに関し、ムーア夫人に詫びた。そして、償いのためにも、二人が居合わせたその階全部と、召使のために上の階の一部屋を借りるのが、それも、丸々一ヶ月借りるというのが、俺の義務と心得ている旨を話してやった。

夫人はしきりに遠慮して見せた。そして、この点に関しては、ローリンズ嬢と相談してみるまで、急き立てられることのないように願いたいと言うのだ。

俺は同意した。ただ、すでに夫人も俺の手付けを受け取ったことであり、異議の出る余地などはないものと願う、と言っておいた。

ちょうどその時、ローリンズ嬢が興味津々という様子で戻って来た。そして、ムーア夫人と俺との間で交わされた話し合いのことを聞かされると、すぐに勿体ぶった様子で世話を焼き始めたので、俺もそれに調子を合わせておいた。この女を味方につければ、もう一方の女もこちらのものになるということがはっきりと看て取れたからだよ。

ローリンズ嬢の願いというわけだが、もしも時間があるなら、また、そんなことを頼ん

(ア) 第四巻の五十七頁および八十三頁を参照のこと。

だとしても、ひどく出過ぎた真似にはならないのであれば、事件のいきさつを手短にムーア夫人と自分に教えてもらいたい、とのことだった。この件には、彼女に言わせると、新奇さや謎めいた様子、そして、意表を突くようなところが見受けられるというのだ。彼女の目には、われわれが結ばれているかに映ることも時にはあるし、また、別の時には、その点が怪しくなることもあるのだが、しかしながら、奥様のほうでもそこをはっきりとは否定なさらないし、それでいて、全体的には、大変に感情を傷付けられたように考えておられるからだ、というのだな。

俺は次のように話しておいた。つまり、われわれの件は極めて特殊なものであって、二人に打ち明けたところで、その一部は到底信じ難いものに見えるだろうということ。しかしながら、二人は思慮深い人物のように見受けられるので、一切合切を掻い摘まんで述べてみたい。それも、飾ることなく、誠意を尽くしてお話しするので、われわれの間ですでにあった事柄、あるいは、今後起こるかもしれない事柄すべてについて、納得の行く説明がつくはずである、といったことをだ。

婦人たちは俺の傍らに腰を下ろし、何事も聞き逃すまいと、顔の造作一つ一つを緊張させているのだ。俺としては、出来るかぎり事実に沿って話すつもりだった。俺の正直さに疑いを投げ掛けるようなことが何か、妻の口から漏れてもまずいからだ。ただ、フラスク亭での出来事も視野に入れておかねばならんのだよ。

貴公は事の顛末のすべてに通じているのだし、俺の目論見についても大方は知っているわけだが、俺が婦人たちに語った事柄の概要は承知しておいてもらう必要がある。

俺は出来るかぎりの簡潔さで、われわれの家族のこと、縁戚のことや反目し合っているいきさつを語り、とりわけ、彼女の兄と俺との間の悪感情のことを話して聞かせた。われわれが密かに結婚していることは事実に相違ないのだと断言しておいた。そのようなことをした理由については、同封するつもりでいるのだが、船長の手紙で貴公にも分かることだろう。それに、妥協案として、婦人たちが牧師を紹介して来るということも考えられたからだよ。妻が俺に誓わせた条件のことを話してやった。妻の身内との和解をより一層早める気持ちにさせようとして、という言い方をしたのだが、妻が俺を縛り付けた、その条件のことをだよ。

この制約があるため、俺も時には爆発しそうになると白状しておいた。すると、それを聞いてもあまり驚きはしないと、親切にもムーア夫人が言明してくれたのだよ。

「君もなかなか見どころのある女だよ、ムーア夫人」と、俺は心で呟いた。

ハウ嬢が現にわれわれの母さんのことを見破っているわけだし、もしかすると、露見した事柄を友人に知らせる、さらなる方策を見出すかもしれないのだから、この婦人たちには、シンクレア夫人と彼女の二人の姪について、好い印象を植えつけておくのが適当なことだと考えた。

俺は次の点を話しておいた。つまり、連中は生まれ育ちのよい女だということ。心根が悪いわけではないこと。妻が俺に対してやかましくし過ぎることに関し、一緒になって妻を非難するような勝手な真似をしたことがあったために、妻も連中を好いていない、といったことだ。また、こうも言ったのだよ。つまり、改める気のない過ちを何か犯していることを承知している人間というのは、善良な人間の場合でさえ実によくある話だが、そのことを知らされると、だれよりも堪え性がなくなるもので、ちょうど、その手の者にとっ

ては、軽視されることに甘んじるのが他の者よりも苦手なのと同じことです、とだ。

本当によくある例ですわねと、婦人たちも認めていたよ。

「シンクレア夫人のお宅というのは実に立派なものでして、第一級の貴人たちをお迎えするのにも相応しいところなのです。[紛れもない事実だろう、ジャック]　シンクレア夫人は何不足ない暮しをしておりましてね、ムーア夫人、貴女と同じく、夫に先立たれた良家の出の婦人なのです。下宿を営んでいるのですが、これも貴女と同じですね、ムーア夫人。貴女にも同じ経験がおありでしょうが、ムーア夫人、以前にはさらに明るい見通しに恵まれたことのあった人なのです。シンクレア大佐の未亡人ということです。シンクレア大佐のことは、貴女もご存じかもしれませんね、ムーア夫人。ハムステッドに部屋を借りていたのですよ」

名前は耳にしたことがある、と彼女が言っていた。

「あゝ、スコットランドでも最高の名家とつながりがありましてね。その未亡人が下宿を営んでいるからといって、どうでしょう、ムーア夫人、中傷されて良いわけでもありますまい。いかがです、ローリンズさん」

「本当にそのとおりですわ」「本当にそのとおりですね」と、婦人たちは言っていた。そして、俺の妻となるほどの淑女が、あんなにも非難がましいことを口にするのは、決して気持ちの良いものではないと、是非ともそのように申し上げねばならない、と言うのだ。

我が逃亡者を連れ戻すに際し、この婦人たちの助力を確保するための足場とか、俺がその挙に出た場合にも、少なくとも目をつぶっていてもらうための足場はこれで出来たわけだし、今後ハウ嬢からいかなる情報が寄せられようと、その先手を打つための根拠にも使えると、俺はそんなふうに考えたのだ。

俺はあのガミガミ女の特徴を婦人たちに描いて見せた。そして、いたずらを思いつく頭とそれを実行して見せる勇気の点で、彼女に匹敵する女性はほとんどいないことを仄めかしておいた。

昨夜ベッドに就く前に書いた手紙を持たせ、急ぎの使いを馬で夜明け前に送り出したいと、俺の妻はしきりに願っていたし、滞在についても、長くともその手紙の返事を受けとるまでのことにしたいという申し出だったが、察するに、このハウ嬢へ宛ててのことなのだろう、とムーア夫人は言っていた。

「まさしく同一人物ですよ」　俺が言った。「妻がすぐにも彼女を頼ることくらい、承知していたのです。そのような手紙が発送されるのを妨ぐことが出来たなら、あるいは、娘さんにではなくハウ夫人に届くよう、何とか手を打っていたなら、それに過ぎる幸せもなかっただろうと思うのです。少し世の中で暮らしてきた女性でしたら、若妻のこういったじゃじゃ馬ぶりを助長するような馬鹿真似はいたしませんからね」とだ。

ちょっと中断し、忘れないうちに貴公に話しておこう。その後ウィルには、麗しき逃亡者の手紙を携えて行った男がどこに住んでいるのか見つけ出し、出来ることなら、その男が彼女と会わないうちに、帰り道で奴と出会うよう、指示を与えてあるのだよ。

婦人たちには次のように話した。ハウ嬢が俺の妻に対してかくも奇妙なまでの支配力を持ち、本人が未婚のままでいる間は、そして、妻の身内との和解、あるいは、一族の最後の男性である俺としてはそのように考えるわけだが、さらに幸せなある出来事、そしてそれは、俺が立てた愚かな誓いと妻の謹厳さゆえに、これまで実現されずにいるのだが、そ

の出来事が達成されないうちは、二人の関係が好転することは有り得ないものと諦めているのだ、とな。

ここで俺は一息入れ、指のダイヤのリングを回しながら、内気そうな表情を浮かべて見せた。その間、ムーア小母さんはえらく意味ありげな顔付きをして、これは極めて特殊なケースだと言い出すし、小娘のほうでは、しきりに扇子を使いながら、取り澄ました顔をしたり、口をすぼめて見せたりしていたよ。俺の言葉にはそれ以上何の説明も必要ないことを身をもって示そうというわけだ。

俺は今回の仲違いのきっかけについて話して聞かせた。火事騒ぎが現実の出来事であったことは言明したのだが、妻が思わず仰天して俺の腕に倒れかかってきた時には、この身を縛り付けている妻との誓いとはいえ、あの異常な誓約を（夫としての権利はこちらにあることでもあり）破っても構わないような気持ちになったことは認めた。そして、そうしなかった自分を口を極めて責めて見せたが、それというのも、妻のほうでは、怒りをあそこまで押し進めるのを妥当なことと考えたり、不当にも、火事を俺の企みによることと勘繰ったりしたからである、と話したのだ。

「いえ、その点に関しましては」と、ムーア夫人が言っていた。われわれは結婚しており、奥様が大層風変わりなこともあるので、殿方すべてがなさるというわけではないでしょうが　…　と、そこまで言って、夫人は口を噤んでいた。

「愛しの妻とは四六時中顔を合わせているというのに、私がそんな拙劣な企みに頼るなどと勘繰るのは　…　」と、俺は言ったのだよ。これは大胆な一押しではなかっただろうかな、ジャック。

「極めて異常なケースですわ、本当に」と、お嬢さんが叫んだ。扇子をパタパタさせているのだが、その間も彼女は、「えゝ、でも」と口を挟んでくるのだよ。また、探りを入れるように、「どうぞ、お願いいたします」と懇願したり、「もう結構ですわ」と制止したりしながらも、次々と質問を繰り出してくるのだ。俺には繊細さが不足しているということで、自分の有り余るほどの慎み深さを損なうようなことになってはと案じ、時々は腰も落ち着かず、気まずそうにしている。それでいて、自分の飛び切り豊かな好奇心を満足させるのは容易ではないのさ。

俺が強調しておいたのは、我が愛しの君の嫉妬心のこと［嫉妬心それ自体、女性の心にとっては、説明し難い無数の事柄に説明をつけてくれるものなのだよ］、そして、父親の忌まわしい呪いと、それ以前に彼女が身内全員から受けていた非道の仕打ちとによってもたらされた、半狂乱とも言える彼女の精神状態に関する告発の弁だが、これは、今後起こり兼ねないことへ備えた予防手段というわけなのだ。

要するに、彼女が婦人たちの耳に入れようとするのは疑うべくもないような、俺に対する咎めごとの大部分を、俺は自ら認めておいたということだ。また、どんなことにも陰と陽の両面が備わっているわけだから、われわれの一件の最悪の部分に最も穏やかな表現を与えておいたということだよ。そして、そうした上で、令嬢の手元に残して来た、あのトムリンソン船長の手紙から、その内容の一部を婦人たちに教えてやったのだ。話を結ぶに当たっては、ジェームズ・ハーローやシングルトン船長からの問い合わせ、あるいは、どんな人物であれ、船員風の人間の問い合わせには用心してくれるよう、注意しておいた。

このような処置が必要であったのは、手紙そのものから貴公にも察しがつくだろう。そ

れゆえ、この場で手紙に目を通してもらうことにしよう。それに、ほんのわずかでも文面に注意を向けてくれるなら、俺の目的には見事に合致したものであることが分かってもらえるはずなのだよ。

ロバート・ラヴレース殿

六月七日　水曜日

拝　啓

明日にも、あるいは、遅くとも明後日には上京しなければならないのでありますが、貴殿に宛てて筆を執る、その労を省く気持ちはございません。当家の召使一人を遣わし（特別の用件にて、一足先に送り出すわけですが）、［執り行なわれたものと考えられております*］貴殿の婚礼に際し、お身内の一部の方からお便りが届きそうなことをお知らせするためであります。貴殿の結婚を間違いないことと考えております、小生の確信を示唆いたしました相手の一人が（リルバーンという名の男ですが）、たまたま、ベティ・ローランス夫人の執事をしておりますスパリアー氏と面識がございまして、（別に遠慮すべきいわれもないことゆえ）その旨を氏に語り、氏のほうでは、確実な話として、ベティ夫人にお知らせしたのです。この結果（小生、親しく令夫人の知遇を得るという栄誉に浴してはおりませんが）、夫人からの小生へのお問い合わせが、夫人の侍従を通してございまして、侍従の方がリルバーン氏同伴でやって来られたこともありまして、小生といたしましても、例の報告を確証する以外に方法がなかったわけです。また、小生が理解いたしておりますところでは、ベティ夫人といたしましては、そのような吉報が貴殿ご自身の口から知らされなかったことに気を悪くなさっておられるものと考えられます。

令夫人はご用件のため上京なさる模様です。［事情によりましては、貴殿としても夫人の誤解を正そうとなさるのでしょうね。その場合は、内緒ごととしていただくことになりましょう。小生が発言してまいりました内容に矛盾するようなことが、貴殿自身のお身内から一切漏出せぬようにとの気持ちからです。］

［〈あらゆる場合において、厳しく真実に固執すべし〉というのが、常日頃からの小生の持論でして、かねてよりの自らの処世訓に背いたことが（まことに立派な目的のためとは申せ）気に懸かる次第です。ただ、それは親友ジョン・ハーロー氏が望まれたことだったのです。さりながら、この種の違反が一度だけで終わったためしを、小生はいまだ知らないということです。ただ、現時点での最善の策といたしましては、僭越ながら、今一度お願いをさせていただきますが、奥様におかれましては、出来るかぎり速やかに、公にされております報告の信頼性に関しまして、ご証明をいただきたいのです。］貴殿と奥様のご両名が揃って結婚を承認なさる時、だれにせよ、挙式の日だの週だのを詮索したりいたしましては、無礼に当たることになりましょう。［また、貴殿が意図されましたとおりに内輪で祝われたことであれば（貴殿の泊まっておられる家のご婦人方が、お二人ははるか以前から結婚されているのだと、現に信じ込んでいることでもあり、お言葉どおり、適切な指図

＊貴公にも察しはつくだろうが、ジャック、この手紙の内容を婦人たちに説明するに当たっては、角括弧（［　］）に挟まれた部分は省いたのだよ。

を受けているかぎり)、小生の報告に異議を唱えられる者が出てくるようなことは、果たしてあるのでしょうか。」

しかしながら、詳細に亘る問い合わせがなされることも十分に考えられましょう。それゆえにこそ、用心が必要となるのです。と申しますのも、ジェームズ・ハーロー氏はお二人が結婚しておられることを信じようとなさらないのです。ジョン・ハーロー氏に向けたヒックマン氏からの働き掛けがあった頃、お二人が同棲しておられたのは間違いないと言っておられますし、どれほどの期間であっても、同棲しておられたとすれば、貴殿のお人柄からしてということですが、ラヴレース殿、貴殿が結婚に踏み切るなどということは有り得ない話だと、氏はそのように推論しているのです。また、万が一貴殿との結婚が執り行なわれるとしても、氏の妹さんは前もって辱めを受けていたのだと信ずべき余地はないのか、その点について、氏は二人のおじ上に決定を委ねているのです。また、もしもそうだったのであれば、皆さんの好意を授かる資格はあるのか、一族のだれからであれ、許しを受ける資格はあるのか、その判断もお任せしているのです。小生の手紙のこの部分につきましては、奥様には伏せておかれるのが最善と存じます。

ハーロー家の若主人は上記の点を解明すべく、また、妹さんのお言葉を聞き出すべく決意を固めておられるのです。そして、その目的のために明朝出発の予定ですが、確かな情報によりますと、武装した大勢の従者を伴っており、その一行には、ソームズ氏も加わっているとのことです。事態究明への熱意を一層駆り立てておりますわけは、以下のとおりです。遺書を書き替えて新規に作成する旨を、ジョン・ハーロー氏がご家族全員に伝えられたのです。アントニー・ハーロー氏のほうでも、ご自分の遺書に対して同じ処置を取ろうとのお考えですが、どうやら、身を固めようとのお気持ちも、今はすっかり捨てておられるようなのです。ハウ夫人に対して抱いておられたその種の期待が、最近に至って挫かれてしまったためでしょう。この二人のご兄弟は、大抵の場合、共同一致の行動を取っておられるのです。それで、ジェームズ・ハーロー氏が懸念しておりますのは(また、言わせていただきますなら、我がハーロー氏のためにも、氏が懸念なさるのは当然というものですが)、意図されておりますこの変更により、最終的には、氏が望んでおられる以上の恩恵が妹さんに与えられることなのです。すでに氏はこの問題に関し、ジョン・ハーロー氏に探りを入れようと努力してきましたし、妹さんの側から何か新たな働き掛けがあったかどうか、知りたがっておられたのです。ジョン・ハーロー氏のほうではっきりとした回答は避け、全面的和解への願い、そして、姪御さんは結婚しておられるはずとの希望的観測を口にされたのです。この言葉は猛り狂った若者の怒りを誘うことになりまして、若者のほうでは、全員の同意による以外は和解せざることという、妹さんの出奔に際して、一族揃って結んだ約束を思い出してくれるよう、伯父上に注意を促したのです。

ジョン・ハーロー氏は、甥御さんが意のままにならないのをこぼされることが多く、この若者にとりましては、現在のところ、畏敬の念をもってその卓越した思慮分別を称えるべき人物が一人としていないため、一族のだれに対する振舞いにおいても、礼儀作法を守ることがなくなっている、と話しておられるのです。そして、このことゆえに我がハーロー氏は、お若いほうの姪御さんを再び引き立てたいとのお気持ちを、ますます募らせておられるというわけです。この若者の異様なほどの貪欲さにつきましては、そのすべてを申し上げようとは思いませんが、ただ、この手の欲深い人間は永遠の生命を得たがっている

のだと、そのように考えたくなってしまいます。

僭越ながら小生も、ここ二時間以内に提案を一つ行いました。我が友人と氏の〈娘さん代わりの姪御さん〉……氏は今でも愛情を込めてそう呼んでおられるのです……との間での文通に取り掛かられてはいかがか、というものです（そして、小生の封筒を利用なさるよう申し出ました）。姪御さんは非常に思慮分別に富んでおられますから、他のどなたにも増して、万事をその望ましい結末へと導くことがお出来になるはずと、小生はそのように確信していることを申し添えたのです。しかし、氏がおっしゃいますには、現段階では、まったく随意にそのような行動を取ることの出来る立場にあるとは思わないとのことです。また、姪御さんとの通信は一切ないとか、手紙が届いたこともないとか、時に応じてそのような発言が出来るようにしておくのが最善なのだ、とも言っておられるのです。

以上のすべてからも、われわれの約束を絶対の秘密にしておく必要があることはお分かりいただけましょう。仮に奥様が、尊敬すべきお友達のハウ嬢にその点を漏らしてしまわれたといたしましても、内緒のこととしてくださっているものと希望しております。

［さて、月曜日のお便りへの回答として、ここで数行認めることにいたします。］

［ご自分の提案を貴殿が快く受け入れてくださったことに、ハーロー氏は大変満足しておられます。ただ、式には氏のご来席を仰ぎたいという、貴殿たちお二人のご要望につきましては、甥御さんが氏の動きすべてをつぶさに監視していることもあり、貴殿たちのご意向に沿いますのは（たとえ、氏にそのお気持ちがおありでも）実現不可能と考える、とのお言葉でした。ただし、その式への氏の側からの個人的参加者として予定していた人物が小生ということになれば、それは両手を挙げて賛成だ、とも言っておられました。］

［しかしながら、奥様のほうで伯父上のご参列を相変わらず強く望んでおられるのでしたら、これには便法が一つあるかにも思われるのです（小生へのご返答から窺われますところよりも、氏のご決心がさらに固い場合は別といたします）。その点につきましては、また、その点に対する氏のお言葉につきましても、多分、ロンドンにてお目にかかります際にお知らせすることとなりましょう。ただ、貴殿といたしましても、実際の話、無駄にすべき時間はないものと存じます。ハーロー氏は、貴殿たちが実際に結ばれたとの知らせを聞きたいものと、待ち焦がれておられます。小生といたしましても、次回貴殿の元を辞します際には、式が執り行なわれますのをこの目で確かめましたと、そんな言葉を氏のところまでお届けすることが出来ればと願っている次第です。］

［奥様側から（貴殿からは有り得ないことですが）何か障害が生じるようでしたら、奥様の几帳面さには少々厳しい見方をしなくてはと、そんな気持ちに傾いております。］

ハーロー氏といたしましては、この激情家の若者と対決するのではなく、むしろ避けるよう、貴殿には骨を折っていただきたいと望んでおられるのです。申し添えますが、貴殿に対する氏の評価には以前に優るものがございまして、それは、貴殿の節度ある言動や丁重なお振舞いに関し、小生から説明申し上げたことによるものでしょう。そして、こういった特質は、そのいずれもが氏の甥御さんとは無縁のものなのです。もっとも、われわれだれしも、なにがしかの改善すべき点は持ち合わせているものでしょう。

我が友がこの天晴なる姪御さんを、今もどれほど深く愛しておられるのか、ご想像はいただけますまい。その一例をご紹介いたしますが、これには小生も強く心を打たれた次第です。「もしももう一度」と、氏は言っておられました（最後にご一緒いたしました、その

すぐ前の時のことです)。「この愛らしい子供が、私の割り当ての月に、屋敷の女主人として食卓の上座を飾っている姿を見ることさえ出来れば　…　家族の他の者たちは、ただあの娘の客として居並んでいるだけでしてね。と申すのも、以前の私は、きっとそうさせておりましたし、そのことでは、あの娘の母の同意も得ていたのですよ」と、そこで氏は口を噤んでしまわれました。あの尊いお顔を背けずにはいられなかったわけです。その両の頬を涙がこぼれておりました。懸命にそれを隠そうとしておられましたが、無理だったのです。「だが　…　しかし　…　」　氏が言っておられました。「果たして　…　どのようにしたら　…　」「お気の毒に、氏はすっかり涙にくれておられました」「どうしたら耐えられるというのでしょうな、最初の出会いには　…　」とおっしゃるのです。

神に感謝する次第ですが、ラヴレース殿、小生は不人情者ではございません。我が高潔なる友人に、この両目がはっきりと示していたのです。私の前では、情にもろいことを恥じと思われる理由は一切ないということをです。

長々と書き連ねてまいりましたが、これにて終わりといたします。衆に秀でて素晴らしき令夫人には、くれぐれも宜しくお伝えくださいますようお願いいたします。

敬　具

貴殿の忠実なる友、そして、謙虚なるしもべ

アントニー・トムリンソン

俺と婦人たちとが交わしたこの会話の間中、俺はわれわれのいた部屋の一番奥まったところに身を置いていた。開いているドアを背にし、令嬢の部屋の閉じたままのドアを正面に見据える位置だ。俺は極めて小さな声で話したので、あれだけ離れていては、彼女がわれわれの話を聞き取るのは不可能なことだったのだ。また、この状態では、彼女のドアが開けば、俺の目に留まるというわけだよ。

ベティ夫人が姪のモンタギューを伴って上京するという話、それに、夫人たちはまだ一度も妻に会ったことがなく、妻も夫人たちを見たことはないのだが、夫人たちのほうでは我が最愛の君を訪ねる考えでいるという件について、俺が妻に伝えたことは本当の話である旨を、ここの女性たちに話してやった。また、夫人たちの到着を今か今かと待ち侘びているということも話したのだ。そして、妻の手に預けてきた他の二通の手紙の写しを女性たちに見せたのだが、一通はベティ夫人からのものであり、もう一通は従姉妹のモンタギューからのものだ。そうしたいなら、貴公にもここで目を通してもらって構わないぞ。

相変わらずの咎めごとだ。相も変わらず俺を非難して見せるのだよ、無礼な身内の者たちはな。それにしても、機会があると、好んでケチをつけてくるのだからな、連中も。愛情というやつだよ。連中なりの愛情なのだ、ジャック。それと、世に知られた俺の陽気さを当てにしてのことなのさ。連中がこんなことをする気になるというのもな。

ロバート・ラヴレース様

六月七日　水曜日　朝

親愛なる甥へ

私たちの願いすべてが、貴方のお目出度い結婚という形で、ようやく叶えられることに

なったものと理解しております。でも、私たちがそのことを承知するに至りました、あの回りくどい仕方も結構ですが、私といたしましては、貴方のお口から直接お聞きしても良かったようにも思うのです。私たちには貴方のご希望に沿う力も意欲もございますが、でも、そのためになおさら、貴方の軽蔑やぞんざいな態度に晒されることになっても良いようには思いませんよ。貴方が一緒になってくれますようにと、私たち一人残らずがこんなにも長いこと願っておりました奥様を貴方に手渡すのは自分だと、兄は固く心に決めていたのです。でも、そのことを兄にお頼みになった時（痛風のために兄が参列出来ないことは、おそらく読んでいたのでしょうね）、実際に貴方たちが結ばれていたのでしたら、それこそ貴方らしいお話ですわね*。お身内の方々とご自分との不和が続いている間、式は内輪な形になさりたいという、奥様には奥様なりの理由がおありだとしても、貴方のほうでは、そのような限定付きでお知らせくださっても良かったのです。そうなれば、私たちといたしましても、これほど長く願っておりました出来事ではありますが、表立っての祝いごとは差し控えていたことでしょう。

私たちがこのお話を知るに至りました遠回しな方法と申しますのは、私のところの執事を通してのことなのですが、執事はトムリンソン船長のお友達の一人と親交がございまして、そのお友達にあの紳士が打ち明けられたわけです。また、あの紳士のほうでは、貴方自身と奥様からお聞きしたらしいのですが、それも、疑いを挟む余地のないような状況でのことだったようです。

貴方のことは、正直申しまして、大変遺憾に思っておりますし、セアラ夫人とて同じお気持ちです。でも、そのことを直接に申し上げる機会はすぐにも訪れることでしょう。例の訴訟のことで上京しなくてはいけないのです。親戚のリーソンのところに通知があったわけですが、あの人はアルバマール街に引っ越した模様です。あの人のお宅にお邪魔することにいたしますので、日曜日の夜にでもお顔を出していただければと思います。親戚のシャーロットに便りをいたしまして、あの人か妹さんかどちらかに、レディングで落ち合ってロンドンまでお供をしてほしいと、そのようにお願いしてあるのです。滞在はほんの数日のことになりましょう。用件と申しましても、私の場合はただ形を整えるだけのことですからね。田舎に戻りましたら、この前の発作の後お身体具合はいかがか、卿のお見舞いにM邸をお訪ねしようと思っております。

さて、貴方の不行き届きなところにつきまして、思うままを述べさせていただきましたからには、この慶事に際しまして、ご両人へのお祝いを申し上げないわけにはまいりませんね。とりわけ美しい奥様には、称賛の念と愛情とをもってお迎えしようと待ち構えております一門への仲間入りをなさいますこと、お慶びを申し上げます。

貴方にお便りをいたします主な目的と申しますと（欠いてはならない作法もはしょりまして）、私の愛する新たな姪にオクスフォードシャーまでご同行いただけるなら名誉なことと考えておりますが、お断りには応じ兼ねます旨を、貴方のほうからお伝えいただくことなのです。貴方が予定しておられるお家や家具類につきましては、すぐには用意が整わないものと理解しております。用意が整いますまで、あの方には私の所にいていただこうと思います。是非ともそうなさることです。これですべてが丸く収まるのです。拙宅を奥様

＊ムーア夫人とローリンズ嬢には、この非難も当然だと考える余地を与えておいたのだ、ジャック。

のご自宅にしていただきましょう。私の召使も家具類も奥様のものにして差し上げます。
ここ数ヶ月の間、ご自宅を離れたことのございませんでしたセアラ夫人ですが、一週間ほどお付き合いをしていただけることになっております。私たち全員にとりまして最愛の人となりますことは間違いないものと確信いたしておりますが、そのように深く愛されております姪に敬意を表してのことでございます。
ロンドンではただの間借りの暮しなのですから、貴方にいたしましても奥様にいたしましても、それほど大掛かりな準備は要らないことでしょう。
何時頃とは申し兼ねますが、月曜日には若奥様のところへ伺いたいものと考えております。ご挨拶のためですし、また、貴方の不行き届きな点につきまして、奥様からの謝罪をお受けするためです。そのようにしてくださいますなら、先にも触れました、田舎へご同行いただく件と合わせ、完全に納得いたすこととなりましょう。それはさておき、奥様のご勇気に対し、神の御恵みのあらんことを　…　［私がそのように申していると奥様にお伝え願います］。また、貴方たちが互いに良い伴侶となりますよう、神の御恵みのあらんことを　…　そのことこそが私たち全員にとりまして、とりわけ、私にとりましては、幸せなことと申せましょう。

貴方のことを心から愛しております叔母
Eliz. ローランス

ロバート・ラヴレース様

親愛なる従兄弟へ
ようやくのことで、貴方にも少しは望みを託せそうだと、私どもはそのように理解いたしております。御前様のほうでは、この時とばかりに、諺の目録に目を通しておられますが、例の「黒い雄牛」や「カラスムギ」「海路の日和」（二六）等々にまつわるものですわ。
さあ、これで貴方もいよいよ年貢の納め時ってわけですわね。これまで、女の人のことはずいぶんと過小評価なさるふりをしておられましたが、その能力とか優秀さとかへの不信心も、この先はもうお止めになるでしょうし、また、真面目な人たちは挙って敬い、すべての放蕩児にしましても、早晩、敬う気持ちを起こさせられるとか、敬っておけば良かったと思うようになりますある制度につきましても、もう嘲ったり馬鹿にしたりはなさらないはずと期待いたしておりますわ。
絹の足枷が貴方にはどんなふうにお似合いなのか、魅惑のくびきが貴方の肩には軽く感じられるのかどうか、ひとつ拝見したいものですわね。もしも、そんなにも愛らしいお方とくびきを共にしながら、軽くは感じないというのでしたら、貴方のお首にはもっときつい紐のほうが似つかわしいのだと、私ばかりでなく、御前様も妹もそのように考えることでしょうね。
貴方のほうから式の日時や段取り、その他一切につきまして、一言もお便りがないというわけで、御前様は大層ご機嫌を損ねていらっしゃるのです。でも、何か敬意とか丁重さの印となるようなものを、早くも貴方に期待して良いものでしょうかと、私は御前様にお尋ねしているのです。貴方の奥様の影響力やお手本のお陰で、他にもいろいろございましょうが、あの改心の兆しが現れてまいりますまではお待ちいただかねばなりませんと、そ

のようにお話しいたしました。ただ、仮にも貴方が何か役に立つことをなさるといたしますと、それはすぐにも目に留まるようになるはずです、とも申し上げてあるのです。そして、あゝ、貴方は何という果てしのない旅路を辿らねばならないのでしょうね。荒涼たる放蕩の地を後にして、輝かしい改心の領土を通り抜け、平穏な幸せの王国へと進んで行くのです。無為の時を過ごすわけにはまいりません。貴方ほどには辺鄙でない土地から王国を目指して出発している、そんな旅人たちに追いつきますまでには、ずいぶんと辛い道程を辿ることにもなりましょう。でも、貴方を導いてくれる素敵な北極星が、貴方にはあるのです。そこが貴方の強みですね。お慶び申し上げることにいたします。それに、大層丁重なご挨拶などを貴方に期待したためしはこれまでにもございませんので、少しのためらいもなくこちらから申し上げる次第ですわ。でもこれは、念のために申しますが、私の新しい従姉妹に敬意を表すためのことに他なりません。この方が私どもの一族に加わってくださいますことを、私どもは心の底からお祝い申し上げますし、大きな喜びと受け止めてもいるわけですからね。

ベティ夫人からのお便りを受け取りました。私か妹かどちらかにですが、レディングで落ち合ってロンドンまで、親戚のリーソンさんのお宅へお供するようにとのご命令なのです。私たちの愛らしい新たな親戚をきっと連れ帰るに違いないと、夫人はそんな期待をM卿に抱かせておられます。断られて、おとなしく引っ込むつもりはないと、そんなふうにおっしゃっておられるからですわ。御前様といたしましては、お供いたします人間をこの私にしたがっておられます。あの方にお会いしたいと、私が幾分気が触れたみたいになっていることもあるからです。妹の方は、二年前にロバート・ビダルフ卿のお屋敷でのことですが、その栄誉に浴しておりますからね。ですから、私たちが帰途につきます際にはご同行いただけますよう、ご用意をなさることです。ただ、私たち全員を納得させるほどの強い異論が奥様におありの場合は別でしょう。セアラ夫人も奥様とお会いするのを望んでおられまして、この方が一族に加わってくだされば、最愛のお嬢さんを亡くされたその埋め合わせが出来るだろうと、そんなふうにおっしゃっておられるのです。

私のほうは、間もなく直接奥様へのご挨拶に伺うことになろうかと思います。従いまして、この上付け加えることといたしましては、ただ結びの言葉だけでしょう。

羽目を外して一緒に遊びました、幼馴染みの従姉妹

シャーロット・モンタギュー

婦人たちもこの二通の手紙の写しに目を通したわけだから、そろそろはったりをかましたり、法螺を吹いたりしても構うまいと俺は考えたのだ。「ただ」と、俺は言った。「ベティ夫人とモンタギュー嬢からの、私の妻へのこういった訪問を奨励する気持ちは、私にはほとんどなくなっているのですよ。と言いますのは、私といたしましても、妻の風変わりなやり方にはとうとう愛想が尽きたからなのです。かつての妻ではなくなってしまいました。それに、(奥様たちお二人がお聞きのところで申したことですが)この腹立たしい島国は捨てるつもりなのです。私にとりましては生誕の地でありますし、この国に持っております利権も相当に大きなものなのですがね。そして、フランスかイタリアに移り住みまして、自分を既婚者と考えることも、また、そのような生活を送ることも絶対にしないつもりでいるのですよ」とだ。

「まあ、どういたしましょう」と、一方が叫んだ。

「不幸なことですわね」と、もう一方が言っていた。

「いえ、マダム［と、ムーア夫人に向かって］……正直申しまして、マダム［と、これはローリンズ嬢に向かってだ］、まったく望みはないのです。このような仕打ちにはもう耐えられないのですよ。自分で言うのも何ですが［と、内気なふりをして］、他国におきましても、また、本国にあっても、これまでは、大変上品な淑女たちから笑みをもって迎えられるという幸運に恵まれて来たのです。［これが本当なのは、ジャック、貴公も承知だろう］私のこの妻に関しましては、たった一つだけ望みが残されていたのです（妻の身内との和解の件ですが、私は連中を一人残らずとことん軽蔑しておりますので、妻のためということ以外では、それに重きを置く気にはなれないわけです）。つまり、神の思し召しによって、私たちが子供に恵まれるようなことになりますなら、妻のほうでもいつもの落ち着きを完全に取り戻してくれることでしょうし、その時こそは、二人も幸せになれるはずなのです。しかし、妻があのようにひたすら心を傾けておりました和解ですが、先に触れましたとおり、今ではすっかり望みも消え失せてしまいました。妻が取りましたこの早まった行動のせいですよ。そして、さらに性急な妻の気性のせいなのです。何しろ（奥様たちにも信じていただけるでしょうが）、妻の兄と姉は、事情が分かりました暁には、それを絶好の口実にして、私たち二人を責め立ててくるはずです。現在でもそうなのですが、私たちの結婚を信じないような顔をして見せるでしょうね。それに、愛する妻自身、そのような不信の姿勢を大目に見過ぎる嫌いがあるのですよ。妻に言わせますと、〈式を挙げただけのことですからね……それ以上のことは……えゝ……式を挙げただけのことですものの……〉といった具合なのです」

貴公にも分かるだろうが、ここで俺ははにかんで見せたのだ。ローリンズ嬢が、何かを言い出す前触れみたいに、上品ぶった顔付きをしてみせるものだから、そうしておくのが適当だろうと考えたわけだよ。

俺は半回転ほど身体を回した。それから、扇子を使っている女と年配の女のほうに向き直ると、「貴女たちご自身にいたしましても、いかがでしょう、私たちのいきさつについてお話しいたしました今の今まで、何をお信じになれば良いのか、見当もつかなかったことでしょうね。それに、請け合っても構わないのですが、憎しみを覚えます者たちを説得するために、同じ労を取ろうとは思わないのですよ。私といたしましては、いかなる好意も期待しておりませんし、望んでもいない相手なのです。また、説得には決して応じないと心に決めている連中なのです。それに、真に高潔な人物と思われる人なのですが、妻の伯父の友人とやらがやって来られた時には、どうでしょう、どのような結果になるとお思いですか。その人がこうおっしゃるのも当然ではないでしょうか。つまり、〈ラヴレース夫人の年長の伯父上をつてに、夫人とお身内の方々との間に和解をもたらすべく仮に骨を折るといたしましても、貴方たちご自身の間に十分な理解が欠けている状態では、私の努力は一体何のためのことになるのでしょうか〉とです。妥当な推論ですよ、ムーア夫人。妥当な推論でしょう、ローリンズさん。そして、ここが不幸なところなのですが、連中との和解が成り立つまでは、妻の考え方では、この忌々しい誓いが拘束力を持つということなのです」と話したのだよ。

婦人たちは心を動かされている様子だった。何しろ、声こそ低いが、俺は大いに熱を込

めて語ったからな。おまけに、女というのは自分たちが、そして、自分たちの施す恩恵がわれわれにとって重要なものと映ることを喜ぶものなのだ。二人は沈んだ顔で互いに向かって首を振り、悲しげな様子をしていた。そして、これが俺の感じやすい心をも動かすことになったというわけだよ。

「前代未聞のケースなのですよ、ご婦人方 … 妻が、あらゆる人間を差し置いて、この私を選んだのでなかったなら … 」 そこで、俺は一息入れた。「そして、そのことがありましたから … 」と、ハンカチをまさぐりながら、改めて話し出したのだ。「妻の失踪のことを耳にされた時、トムリンソン船長も仰天されたわけです。われわれが一緒のところを最後に目にされた時には、この世でも最も仲睦まじい夫婦をご覧いただいたのですからね。この世でも最も仲睦まじい夫婦をですよ」と、悲痛な思いの籠もった口調で俺は繰り返したのだ。

こう言いながら、俺はハンカチを取り出した。そして、目頭を押さえながら立ち上がると、窓辺へと足を運び、「私も、女の人以上に女々しくなってしまうのです。かつてどんな夫にも愛せなかったほどに、それだけ深く妻を愛しているのでなかったなら … 」と呟いて見せたのだ。「このとおりなのは疑いのないところだよ、ジャック」

そこで、俺は再び中断した。そして、改めてこう切り出したのだ。「ご覧のとおりの魅力溢れる女なのですよ。あの顔を目にすることがなかったならと、心からそう思っているのです。失礼、ご婦人方」と、俺は部屋を横切った。そして、赤くなっていると思われる頃合まで両目を擦った上で婦人たちのほうへ振り向き、手紙入れを取り出しながら、「手紙を一通お見せいたしましょう。さあ、これです。宜しければ、ローリンズさん、ひとつお読みいただきましょう。私の一族のほうでは、全員がどれほど妻に賛辞を捧げる気持ちになっていたか、それで確認いただけるでしょう。その手紙では、私も勝手気ままな扱いを受けております。別の二通でも同じことです。だが、これまでお話ししてきましたことの後では、貴女たちお二人に隠し立てをする必要のあるものなど、一つとしてないのです」と言ったのだ。

彼女は興味津々という態度で手紙を受け取り、これみよがしに宝冠を浮き上がらせた封臘を眺め、そして、宛名にも目をやると、「ロバート・ラヴレース殿へ」と、声に出して読み上げるのだ。俺は、「そうなのです、奥様。そうなのですよ、お嬢さん。それが私の名前なのですよ」と、二人にはすでに伝えてあったのだが、気取ってみせたのだ」。そして、その名を恥とは思っておりません。妻が娘の間の … いや、むしろ〈結婚前の〉と言うべきでした … 私も愚かなものですね … 」と、苛立たしげに頬を撫でながら「正直な話、実に愚かなものだよ、ジャック」、「その頃の名はハーローでした。クラリッサ・ハーローですよ。貴女も耳にしておられるでしょう、私が〈私のクラリッサ〉と呼んでいたのは」と話し掛けたのだ。

「お聞きいたしましたわ。でも、偽名か、それとも、恋人同士での愛称のように思っておりましたわ」と、ローリンズ嬢が言っていた。

恋愛中のローリンズ嬢の愛称は、果たしてどんなのだろうな、ジャック。恋を夢見る女性は大概、初々しい娘の頃に、恋愛用の愛称を選んでいるものなのだ。これまで俺は数々の偽名を授けてきたのだが、それに勝る数の本名を授けた牧師など、この世に一人としていないのだよ。しかも、上々の首尾を収めているのだ。実に多くの愛らしい娘たちが俺宛

の返事を書いてくれたのだが、それは、教母が授けてもいない名を自分のものだと認めるためだったのだ。

「いえいえ、それが妻の本名なのです」　俺は言った。

俺は、手紙の全文を朗読してくれるよう、彼女に頼んだ。「綴りが正確でなくとも、ご容赦願いますよ、ローリンズさん」と、俺は言った。「書いたのは貴族です。ただ、妻に見せるわけには行かないでしょうね、おそらく。妻の手元に置いてまいりましたものが妻に何らの効果ももたらさないのでしたら、これとて同じことでしょう。それに、M卿を妻の軽蔑の的にはしたくないということもあります。実際、結果についてはまったく気にならなくなっているのです、私は」とだよ。

ローリンズ嬢は、このような俺からの信頼の証を嬉しく思わないはずもなく、俺に同情するような顔付きを見せていたのだ。

さて、ここで貴公に〈手紙その三〉を読んでもらうことにしよう。

ロバート・ラヴレース殿

六月七日　水曜日　M邸にて

縁者ラヴレースへ

お前の婚礼が実際に執り行なわれたことを、時間を工面し、われわれに知らせてくれても良かったように思うぞ。これくらいの礼儀作法はお前に期待して構わないように思うのだよ。だが、おそらく、奥さんの父親役を頼んできたちょうどあの時に、式のほうは執り行われていたのだろうな。ただ、推測を続けていると、腹立たしくなってくるのだ。それに、「言葉少なければ、改むるに易し」と言うこともある。

だが、断言しても構わないが、セアラ夫人がどう出ようとも、ベティ・ローランス夫人のほうでは、私のようにおいそれとは許してくれないだろう。「軽んじられたことへの怒りは、男よりも女のほうが長引く」のだよ。そこまで女に通じたお前のことだ（だが、これは褒め言葉ではないのだぞ）、それくらいは弁えてもいよう。だが、お前にしても、これほど気立ての好い淑女と知り合うのは、これまでになかったことなのだ。お前たちが一つの心に結ばれてくれるよう希望する次第だ。これまでにも言って来たことだが、立派な夫であるところを見せてくれない場合は、お前から相続権を奪い去り、私の自由に出来るものすべてを奥さんに譲渡するつもりなのだ。

かくも歴史ある旧家を再興せんがためにも、この結婚が大勢の見事な男児の誕生をもって報いられるよう（私としては、女の子は要らんのだよ）祈るばかりだ。長男には、議会制定法に則り、私の姓を名乗ってもらう。それは私の遺書に記してあることだ。

ベティ夫人と姪のシャーロットが用件で上京するが、お前たちにとっては、「腰を落ち着ける暇もなく」といった塩梅だろう。麗しい花嫁に挨拶をしたがっているのだよ。あの二人が都に着く頃にも、お前たちは、察するに、まだローン荘には落ち着いていないのだろうな。グリームが知らせてくれたのだが、奥さんを迎え入れるための指示も、お前はまだ伝えていないとのことだからな。

プリチャードはすべてを署名するばかりの状態に整えてくれた。お前が私を軽んじる態度に出たからといって、それにつけ込むような考えは私にはないのだ。実際、その手のこ

とにはもうすっかり慣れっこになっているからな。しかし、称賛すべきなのは、お前の愛想の良さというより、むしろ私の忍耐強さの方だろう。

ベティ夫人が上京する理由の一つは、お前には〈秘密裡に〉教えても構うまいが、セアラ夫人および私たち全員がこの慶事に際してなすべき、何か相応しい贈物を購入せんがためなのだ。

私たちとしても、適切なる頃合に知らせを受けることが出来たなら、また、周囲の人間すべてにとってそれが好ましいことであると考えたのなら、広く世間に公表していたことだろう。「似たことは毎日起こるわけではない」との譬えもあることだ。

新たな姪への哀心よりの敬意と祝いの言葉をもって、差し当っては結びに替えることとする。その豪胆さのすべてをもってしても、お前も狂おしさを覚えるほどの激しい苦痛に苛まれつつ　…

心からなる親愛の情を込めて、お前の叔父

M.

この手紙が最後の決め手となった。ローリンズ嬢のほうでは、俺のことを放蕩に耽っていた紳士と見なかったわけではないし、実際には、顔を合わせた瞬間からそんなふうに思っておりました、などと言っていた。

婦人たちは俺の妻のための仲裁に取り掛かり（実に巧妙に形勢を逆転させたのだよ、俺は）、そして、俺に向かっては、一方の側からはあのように切に望まれ、もう一方の側の俺の一族にあっては、こんなにも望ましい見通しを持った和解なのだから、国外に逃れ、それを頓挫させるような真似はしないでくれと言い出した。

密かに期待していたところもあるわけだが、もしかするとこの構想からは予想以上の成果が得られるかもしれないぞと、俺は一人考えていた。何とも運の良い男ということになるだろうな、俺も。床入りによる婚姻の完成に荷担してくれるよう、この婦人たちを動かすことが出来るのであればだよ。

「われわれ両名に対しましては、ご婦人方、この上ないご厚情を賜っております。不幸なほどに几帳面な妻ですが、もしも、私に背負わせましたあの異常な誓いをなかったことにしても良いと、そんな気持ちを妻に起こさせることが出来るのでしたら、私もいくらか望みを持てることでしょう。私の立場がどのようなものか、お分かりでしょう。この忌まわしい誓いから私を解いてくれるよう、妻に求めてはならないとお考えでしょうか。床に就く時間が参りましたなら、夫と妻には一つの部屋で用が足りるのだと、ひとつ助言をしていただけると有難いのですよ」　慎み深い言い方だろう、ベルフォード。ここで一言述べさせてもらうが、この種の話題について、慎み深い女たちを会話に引き込むような、そんな上品な言葉遣いを探し出してくる放蕩児も多くはいないということだよ。

二人は揃ってニヤニヤと笑いながら、互いに顔を見合わせていたよ。

こういう話題になると、女は決まって、少なくとも、ニヤニヤして見せるものだよ。連中に必要なものは、微妙なことこの上ない仄めかし以外にはないのだ。女と一緒の席で野卑なことを言う男などは、棍棒で叩きのめされて然るべきなのだ。何しろ、あの可愛い連中ときたら、楽器と同じことでな、たった一本の弦に触れるだけでも、体のすみずみまで敏感になってしまうのだよ。

「確かに」と、扇子を弄びながら、学者ぶった態度でローリンズ嬢が言った。「決疑論者でしたら、夫婦の契りは他のいかなる責務にも取って代わるべきだと、そのようにおっしゃることでしょうね」とだよ。

ムーア夫人自身の意見としては、もしもあのご婦人のほうで、ご自分が人妻であることをお認めになるのであれば、妻らしく振る舞われるのが当然だ、とのことであった。

全身これすべて眼といった、この警戒怠りなき美女を相手にしての首尾についてはともかく、この世の他のどんな女にしても、十五から二十五までの間の者なら、朝を迎えないうちにこちらの言いなりになっているはずだと、俺は一人考えていた。

それに、こうなったからには、あらゆることをすぐに利用出来るよう、有利な部署の確保に努めることにしようと、俺は自分に言い聞かせていたよ。

「このいくつかの部屋のために、それから、上の階のどれであれ、召使用にご用意くださる部屋のためにお払いした手付けのことがありますから、ムーア夫人、私も貴女の下宿人というわけです。実際の話、ご用意いただけるすべての部屋のための手付けにしても良いのです。妻の兄がどんなことを企てるのか、分かったものじゃありませんからね。貴女ご自身のお口から請求されるとおりのものをお支払いいたしましょう。それも、ご迷惑をお掛けするかどうかにもよりますが、まるまる一ヶ月か二ヶ月分を（食事込みで）お渡しします。これは担保です。お受け取りいただきましょう。あるいは、支払いの一部ということでも結構です」と、三十ポンドの銀行手形を差し出した。

夫人は受け取るのを辞退していたが、まずはあのご婦人に相談してみたいとのことだった。そして、俺の信義心を疑っているわけではないし、また、俺とあのご婦人が逗留している間は、他のだれであれ、ある程度懇意にしている者にでなければ、部屋は貸さないつもりだと付け加えていた。

絶えず両方の女の口をついて出るのは、「あのご婦人、あのご婦人」だ（やはり、心の中では疑っていることを暗示しているわけだ）。「お連れ合い」でも「奥様」でもないのだからな。

こんな女たちには一度も会ったためしはないと、俺はそんなふうに思った。たった今完全に納得したばかりだというのに、もう疑いを抱いているのだ。どうやら、懐疑論者二人を相手に回してしまったようだ、とな。

ロンドンのシンクレア夫人宅での場合も同じだが、ここで同じ家に間借りすることに何故妻が反対するのか、俺にはその理由が思い浮かばないのだと話した。ただ、仮に妻のほうでそのような反対をしても、ハムステッドへの逃避行の原因となった、例の気紛れから来る病のために、俺にはまったく消息のつかみようもないところへ彼女が立ち去ってしまうことも、決してない話ではないわけだから、俺としても占有権を放棄するつもりはないのだ、とも言っておいた。

婦人たちは二人とも当惑している様子で、互いに顔を見合わせているのだ。ただ、俺の言うことにも一理あると考えているみたいな態度だった。そこで俺は、部屋を借りるばかりでなく、賄い付きにもしてもらいたい旨を表明した。そして、食事の時刻が近づく頃には、下宿人となるのを拒まれずに済んだというわけだよ。

手紙　九
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

そろそろ、我が愛しの君に全精神を傾注して然るべき時期だと俺は考えた。俺が預けた手紙の内容を比較考量する時間的ゆとりは十分にあったわけだからな。

そこで俺は、妻の部屋へ出向いて以下の点を打診してくれるよう、ムーア夫人に頼んだのだよ。つまり、預けておいた手紙のことがあるので、妻の部屋でお傍に仕えるのを許してもらえるかどうか、あるいは、食堂でお付き合いいただけるものかどうかをだ。

ムーア夫人は、ご婦人のところまでご同行願いたいと、ローリンズ嬢に頼んでいた。二人がドアを叩くと、共に入室を許された。

ここで暫時、中断しないではいられない。俺自身の不利に働くことではあるが、例の不用意さについて一言述べておくためだ。これは潔白なるがゆえに生じるものなのだが、無邪気さと共にもっと陰険さを交えているほうが望ましいのだよ。というのも、俺のほうは彼女の陰口を叩くことが出来るわけだが、ここでも彼女は、自らの善良さに満足しているためだろう、そんなことには一切留意することなく、俺が自分なりの話を邪魔されずに続けて行くのを許しているのだ。それも、俺にとってと同様、彼女にとっても赤の他人という人物が相手なのだ。また、どちらにとっても他人なのだから、より大きな被害を受けている側に傾くと思われる者たちであって、それが、やりくりをした結果、俺の側になったというわけだ。心というものは、その動きによる以外、中まで見通すことは出来ないというのに、自らの心の善良さに頼るとは、何とも可愛いお馬鹿さんだよと、俺はあの時そう考えたのだ。それに彼女は、傍目からすれば、逃亡者と映るのだよ。心優しくて飛び切り甘い夫から逃げ出した脱走者なのさ。世間のことすべてが外観に左右されているというのに、個々人の評価を求めることには無関心なのだからな。

しかしながら、二十歳前の天使のような娘に何が期待出来るというのだ。膨大な知識は有しているが、言うならば、瞑想のための知識で、経験はゼロなのだよ。あるはずもなかろう。理論だけから得た知識というやつは、曖昧で不確かな光にしかならないのだ。狐火みたいなもので、疑わしく思っている心を正してくれることもあるが、惑わすことも同じくらいに多いのだよ。

われわれの手元に届く際には混ぜ物を伴っているのだが、それさえなければ、内省的な心にとっては言い表しようもないほどの喜びをもたらしてくれる物が、この世にはたくさん存在するのだと、道学者に言わしめれば、そういうことになるのだろう。さらに真面目なことを言わせてもらうが、俺はこんな親たちを目にしているのだよ［おそらく、俺自身の両親もそうしていたのだろう］。つまり、自分の子供たちの小さな頃のいくつかの特徴に喜びを見出していたのだが、まさにその特徴の自然の結果として（あまりにも好き放題にされ、助長されたため）、成長するにつれ、子供たちが自分の悩みの種になってしまったという親たちだよ。これを俺の差し当たっての目的に合致させるために、次のように話しておかねばなるまい。つまり、俺はこの魅惑の君を、その警戒怠りなき慎重さゆえに敬慕しているとはいいながら、この世の残りすべての者たちの策略に打ち克つ上で必要となるものではあっても、あの思慮分別の力により、俺の策も歯が立たないほどに賢くなってもらいたくない気もするということだ。

にも拘らず（彼女を敬慕しているのは確かなのだが）、あの復讐が、天地神明に誓ったあの復讐が、何よりもまず心に浮かんで来るのだよ。ハウ嬢に言わせると、俺の愛はヘロデ大王に似た愛だという(ア)。誓っても良いが、あの娘は魔女だな。こんなことを口にするのは済まない気もするのだが、俺は愛するものに対して暴君のように振る舞うのが楽しいのだよ。これを卑劣な楽しみと呼びたいのなら、そう呼んで構わないさ。俺より慈悲深い心を持つ者も知っている楽しみなのさ。女どもも一人残らず承知しているもので、力を委ねられた時にはいつだって、連中はそいつを態度に出しても見せるのだよ。それに、女をこれだけ熱愛し、また、大いに研究してもいる俺様のことだ、連中の感化を受けたからといって、どうして不思議がられねばならんのかな。

手紙　十

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

さて、あの二人の女と令嬢との間で交わされた会話の大要を話してやることにしよう。意固地な妻のお陰で、夫がもっぱら聞き手に回るとしても驚かないでくれ。ただ、ご覧のとおり、事の成り行きからして、「聞き耳を立てる者が褒め言葉に巡り合うことは滅多にない」という、昔からの所見の正しさを裏付けることとなったのだよ。自分自身に照らして推測するなら［正直なものだろう、ジャック］、自らの欠点は自覚しているし、非難を恐れてもいるわけだが、それが当て外れになることなど滅多にないということだな。こういった諺、これらの警句、この「諸国民の叡智」というやつにも、結局のところ、いくぶんか道理はあるということだよ。

ムーア夫人が使者の役目を果たすことになっていたのだが、ローリンズ嬢のほうから会話を切り出したのだ。

「貴女のお連れ合いが、マダム　…　［駄目だよ、それじゃあ　…　否か応か、どちらかの宣言を引き出すだけなんだよ］」

クラリッサ「私の連れ合いとのことですが、マダム　…　」

ローリンズ嬢「ラヴレース様のほうでは、マダム、貴女があの方と結婚しておられるのだと、そう言明しておられるのです。そして、お部屋に入れていただくか、それとも、食堂でお付き合いいただくよう、望んでおられるのです。あの方が貴女にお預けになったお手紙について話し合われるためですわ」

クラリッサ「あの人は見下げ果てた性悪の破廉恥漢なのです。お願いです、マダム。あの人がこの辺りにおります間、そして、私がここに留まっております間は、出来るかぎり頻繁にお付き合いをいただきたいのです」

ローリンズ嬢「喜んでお傍に仕えさせていただきますわ、マダム。ただ、あの方にお会いになって、お手紙のことにつきまして、お話しになりたいところを聞いて差し上げれば宜しいのにと、そんなふうにも私は思うのですが」

クラリッサ「私の一件は厄介な、大変に厄介なものでして、すっかり途方にくれている

（ア）三十三頁を参照のこと。

のです。一体どうしたものか、見当もつきません。救いの手を差し伸べることがお出来になるとか、そうする気持ちをお持ちだとかいうお友達が、この世には一人としていないのです。でも、あの人と知り合いますまでは、お友達でない人など一人もおりませんでしたのにね」

ローリンズ嬢「あの方は、外見にいたしましてもお話のし方にいたしましても、悪い人ではありませんわ。ひどい悪人とは申せません。男の方といたしましてはね」

男としては、だと　…　困った人だ、ローリンズさんも、と俺は思ったよ。それで、男とはどういうものかご存じなのかね、あんたは、とな。

クラリッサ「あゝ、マダム、あの人のことをご存じないのです、貴女は。あの人は光の天使の姿を装うことも出来ます。でも、黒い、真っ黒い心を持っているのです」

情けない話だよな、俺も。

ローリンズ嬢「私にはそんな考えは浮かばなかったことでしょうね、本当に。でも、近頃の男性は人を欺くことがとても多いですからね」

近頃の、だと　…　馬鹿が　…　彼女の歴史の本は教えてくれなかったのかな。男は常にそうだったのだということをだよ。

ムーア夫人［溜め息をつきながら］「そのとおりですわよ、確かに。お陰で辛い思いをいたしましたけれどね」

気の毒なムーア小母さんにしたって、若い頃にはラヴレースとかベルフォードとか、だれかその手の悪党と出会っていたかもしれないのだよ。自立心をほんのわずかでも備えているこの世の女一人一人は、そういう女が彼女と同じくらいに話好きな場合だが、どんな変わった身の上話を聞かせてくれるものか、俺の軽はずみな可愛い子ちゃんには分かっていないということだ。だが、ここが重要なところだが、腹を立てる原因をたっぷりと与えてやったとはいえ、黙り込ませるほどには十分でなかったということだな。

クラリッサ「あの人が置いて行きました手紙のことですが、何と申し上げたら良いものか、私には分かり兼ねます。でも、あの人に対しましては、一切口を開くまいと心に決めているのです」

ローリンズ嬢「こんなことを申し上げて、お許しいただければの話ですが、マダム、事をひどく大袈裟になさっておられるように思うのです」

クラリッサ「あの人は、マダム、悪質な動機も立派なものだと、貴女に向かって言い繕っていたのでしょうか。あの人を知らない人間が相手でしたら、そんなことも出来るでしょうね。確かに、あの人が話しているのは聞こえましたわ。何を言っていたのか聞き取ることは出来ませんでしたし、また、そのことには関心もございません。でも、自分自身について、あの人はどう言っていたのでしょうか」

これを聞いて、俺は嬉しく思った。彼女が自分の激情をその極みで抑え、鎮めてみせるというのは良い兆だと、そんなふうに考えたのだよ。

そこで、お節介なローリンズ嬢はしきりに探りを入れていた。俺の話の追認か否認、そのいずれかを彼女から引き出そうというわけさ。M卿は俺の叔父なのか。俺が彼女に言い寄ったのは、彼女の兄は別としても、先に彼女の身内の者たちの承認を得てのことだったのか。俺とその兄との間に果たし合いはあったのか。ソームズとかいう極めて不快な人物を贔屓するためだが、俺の保護の手に身を委ねたくなるほどに、彼女はひどい迫害を受け

ていたのか、といった具合だ。
　これらのうち、否定されたものは何一つとしてなかった。彼女に持ち出せそうな異議の数々も、ここにはわずかな間しか滞在しないのだし、いささつを話すと長くなりすぎるという考えから（これは彼女も口に出していたことなのだ）、そのすべてが握りつぶされ、胸に納められることになったのだ。だが、そんな安易な答え方では、ローリンズ嬢が納得するはずもなかったのだよ。
　ローリンズ嬢「あの方はこう言っておられるのですよ、マダム。お身内の方々が仲直りをしてくださらないうちはベッドは別々にすると、正式な宣誓を行った上で同意なさるまでは、結婚に賛成してもらえなかったのだと、そうおっしゃっているのです」
　クラリッサ「まあ、恥知らずが　…　この上何を企んでいるのでしょう、あの人は。こんな話を見知らぬ人たちに聞かせようとするなんて　…　」
　つまり、真っ向からの否定ではないわけだ、と俺は考えた。素晴らしいじゃないか。いずれはすべてがうまく行くことだろう、とだよ。
　ローリンズ嬢「水曜日の夜、失火騒ぎで貴女をひどく驚かせてしまったと、あの方も認めておられます。それから　…　それに　…　えー、失火のため貴女を驚かせて　…　大変驚かせてしまったと　…　この水曜日の夜のことですわ」
　そして、ちょっと間を置いてから、あの娘が続けた。「手短に申しますと、罪のないものですけれど、貴女があの方に負わせられた誓いを破ることにもなり兼ねないような、そんな馴々しい行動をお取りになったこと、そして、これがご立腹の原因であることを認めておられるのです」とだよ。
　我が魅惑の君がこの時どんな表情を見せたのか、ひとつ拝見したかった気もするよ。きっと心の中では、こんな取るに足らない罪に対して、あんなにも激怒したことをどう正当化したものか、途方にくれていたことだろうな。彼女は逡巡していた。すぐには口を開かず、開いた時に漏らしたのは、あの娘が、つまりローリンズ嬢が、罪のないものだが、あんなにも馴々しい行動を取るような男とは決して出会うことのないようにという、願望の言葉だった。
　ローリンズ嬢はさらに追いつめた。
「確かに貴女の場合は、マダム、非常に特殊な例ですわね。でも、もしも、あの方をお捨てになると、お身内の方々との和解への望みは一層遠のくのでしたら、一言述べさせていただきますが、残念に思いますわ。残念です［察するに、残念ですと言いながら、娘はキュッと口を結んで、扇子を使いながら頬を赤くしてみせたのだろう］。例の誓いを反故にしていただけませんのはね。とりわけ、それほど厳格な生活を送ってきたわけでもないのだと、あの方もご自分から白状しておられるわけですからね」
　出来るものなら飛び込んで行って、あの娘にキスをしてやりたかったよ。
　クラリッサ「あの人の話はお聞きになったわけですね。私のものは、前にもお話しいたしましたが、長くなりすぎますし、それに、あまりにも悲しい話なのです。あの恥知らずを目にいたしまして、ひどく心が乱れておりますし、ここに滞在いたします時間も短いことですから、話に取り掛かるというわけにはまいらないのです。それに、たとえあの人が自己弁護を行うことで、何かの役に立てようと目論んでいるとしましても、そのことでこの身に被害が及ぶことにならないのでしたら、あの人が自分のことをまるで天使みたいに

汚れのない姿に装いましても、私には何の異存もございませんわ」
そこで、彼女に対する俺の愛情のこと、そして、彼女を素晴らしく褒めていたことが弁護の理由に持ち出された。
クラリッサ「見てくれだけの女たらしですわ。教えてくださるだけで良いのですが、どこかの裏道でも使って、あの人から逃げ出すことは出来ないものでしょうか」
これを聞いて、私の心臓はどんなに〈ドキドキ〉したことでしょう、と言ったところだよ。女言葉を使うならな。
クラリッサ「外を見させていただきますわ。[窓の引き上げられる音が聞こえた]　あの小道はどこへ通じているのでしょうか。乗り合い馬車のところへ出る可能性はございませんか。あの人が悪魔と通じているのは確かですわ。でなければ、どうやって私を見つけ出せたのでしょうね。無事に逃げおおせますまでの間匿っていただけるような、どこか近くのお宅まで逃れることは出来ないものでしょうか。貴女たちは善良な方たちですわ。いつもこのような人たちに囲まれていたというわけでもないのです。あゝ、助けていただきたいのです。お助けください、ご婦人方[と、もどかしげな声色だ]。でなければ、この身は破滅してしまいます」
それから、一息入れた後、「あれはヘンドンへの街道でしょうか。[指差しながらのことだろうな]ヘンドンというのは、人目に付かない場所なのでしょうか。ハムステッドコーチはあそこまで運行していると聞いておりますが　…　」
ムーア夫人「ミルヒルに信用出来る友人が一人おりますわ[この忌々しい女めが、と俺は思ったよ]。あそこでしたら安全に過ごしていただけると思います。そうなさるのが、マダム、貴女のご決意で、また、ご自分が危険に晒されていると、そのように考えておられるならの話ですけれど」
クラリッサ「どんなところへでも参りますわ。この男から逃げ出すことさえ出来るのでしたらね。向こうのあの小道はどこへ通じているのでしょう。右手に見えますあの町は何と呼ばれているのでしょうか」
ムーア夫人「ハイゲートですわ、マダム」
ローリンズ嬢「原野の傍にはノースエンドという名の小さな村がございます。私の親類の女性がそこに住んでおりますが、小さな家なのです。このような淑女をお迎え出来るものか、定かではございません」
忌々しい女だよな、こいつも、と俺は思った。この女たちにはもっと信用を得ているものと思っていたよ。だがな、女というのはおしなべて企みごとが好きなのさ。それに、陰謀家のこともなのだよ、ジャック。
クラリッサ「納屋でも、離れ家でも、屋根裏部屋でも、この男からの避難場所を提供してくれるのでしたら、それだけで、私にとりましては宮殿となりましょう」
彼女は俺よりもはるかに鋭い勘をしているなと、俺はそう思った。彼女があそこまで無慈悲に振る舞うとは、俺が一体何をしでかしたというのだ。俺がやったことのすべては話して聞かせたよな、ベルフォード。そんなにもひどく不都合なことが何かあったのだろうか。彼女の眼前には、一家の和解への見通しもこんなに開けているというのにだよ。間違いない。極めて勘の鋭い淑女なのだよ、彼女は。
それから彼女は、俺が新たに雇った男が窓の下を歩いているのを目に留め、俺の召使の

一人ではないのかと尋ねていた。

ウィルがグライムズ爺さんの見張りに出ていたのだ［我が愛しの君がハウ嬢のところへ急がせた男は、そういう名で呼ばれているのだよ］。彼女の目にした男が俺の召使であることを教えられると、彼女は次のように言っていた。「私がもっと遠いところへまいりますまで、マダム［と、ローリンズ嬢に向かってのことと思われるが］、貴女が味方をしてくださらなければ、どうやら、逃げ切る術はないようですわね。あの者は、疑いもございませんが、私の動きを見守るために家の近くに配置されているのです。でも、あの者の主人である悪党にも、私を支配する権利はないのです。私が好きなところへまいりますのを、あの男に邪魔させたりはいたしません。私にからんだりするようでしたら、町中の人たちに呼び掛け、あの男に立ち向かっていただきますわ。いかがでしょう、お二人があの男を引き止めて話しておられる間に私が抜け出しますような、そんな裏口はないのでしょうか」

ローリンズ嬢「一つ質問をさせていただきたいのですが、マダム、調停に望みを寄せる余地は一切ないのでしょうか。あの方にお会いになったほうが良くはないでしょうか。貴女を深く愛しておられるのは確かなことですし、素敵な殿方です。あの方を怒らせ、貴女ご自身にとりまして、事態を一層不幸なものにしてしまわれるということもあるかもしれないのです」

クラリッサ「あゝ、ムーア夫人、あゝ、ローリンズさん、貴女たちはあの男のことをご存じないのです。生きております間は、あの男の顔は見たくないのです。あの男とは、もう一言でも言葉を交わしたくございません」

ムーア夫人「どのようなことであれ、あの殿方が事実を曲げて話されたとは、私には思えませんわ、ローリンズさん。あの方がどんなに遠慮しておられるのか、貴女もお分かりですね、マダム［と、我がクラリッサに向かってだ］。お許しがあるまでは、お部屋にもお入りにならないのですからね。間違いございませんわ。あの方は貴女のことを深く愛していらっしゃるのです。お願いいたしますわ、マダム。あの方はそのようにお望みなのですから、お手紙の件でお話しなさるのを許して上げていただきたいのです」

実に親切なものだよ、ムーア夫人も。ムーア夫人は非常に善い人だ、と俺は思った。この時には、彼女を呪うような真似はしなかったのだ。

ローリンズ嬢が何か言っていたが、ひどく低い声だったので、何と言ったのか聞き取ることは出来なかった。その言葉への返答は次のようなものだった。

クラリッサ「大きな苦しみに苛まれているのです。どうしたら良いのか分からないのです。でも、ムーア夫人、例の手紙をあの人に返していただけると有難いのです。ここにございますわ。あの人にもベティ夫人とモンタギュー嬢にも、楽しい出会いとなりますよう祈っておりますことを、何卒、あの人にお伝えいただきたいのです。これまでのいきさつをあの方たちに話します場合にも、たぶらかそうとしている相手に用います口実に事欠かないのと同じことで、あの人が弁解の言葉に窮するなど、有り得ない話です。身内の間での私の評価を台無しにしてくれたのだと、あの人に話してやってください。そのことがございますので、あの人の身内の方々に私がどう映るのかといった点への気遣いは、なおさら薄れてしまっているのです」

ここで、ムーア夫人が俺のところへやって来た。その間にも、あちらの二人の間で何か俺にとって好ましくないことが起こりはしまいかと心配で、俺は手紙を受け取り、部屋の

中へ入って見ると、二人は控えの間のほうへ引っ込んでいるのだ。全身これ耳といったローリンズ嬢に向かって、我が愛しの君が熱心に囁きかけているのだよ。

彼女の背中はこちらを向いていた。ローリンズ嬢が彼女の片方の袖を引っ張り、俺がいることを知らせようとしていた。「邪魔をされずに引き籠もっているわけにはまいらないのでしょうか」と、何か心を傾けていた話の腰を折られたかのように、憤慨した様子で彼女が話し掛けてきた。「ここに何のご用でしょう。それとも、私にでしょうか。お手紙は受け取られたのでしょうね」とだよ。

ラヴレース「えゝ、いただきましたよ。そこで、お考え願いたいのですよ、何をなさるおつもりなのか。今すぐにも、トムリンソン船長がここにお見えになるものと考えております。確かにそう思うのですよ。事の成り行きを伯父上には隠しておくと、氏は約束してくれているのです。ただ、君がこの妙な気紛れを続けているのをお知りになると、果たしてどうお考えになるでしょうね」

クラリッサ「ほんの少しの間ですが、このご婦人の前で、また、ムーア夫人の前で［ちょうどその時、夫人が入ってきたのだ］、質問を二つ三ついたします間、貴方のことを辛抱するよう努めてみようと思いますが、貴方は尤もらしい話をなさって、このお二人に自分に都合の良い先入観念を植えつけたのですわ。私たちは一心同体に結ばれていると、貴方はおっしゃるのでしょうか。胸に手を当てて答えていただきましょう。私は結婚によって結ばれた貴方の妻なのでしょうか」

ここまできたからには、これくらいの一突きで諦めるわけには行かんのだよ。急所の一撃には違いないがな …… と、俺はそう考えた。

「あゝ、最愛の人よ、何故そのような質問が出来るのでしょうね。君あるいは私自身の名誉になることなのでしょうか、その点に疑いが向けられたりするのは。確かだ。間違いない。トムリンソン船長のお手紙の中身を注意深くお読みになったようには思われませんね、マダム」

われわれが言い争っている間中、彼女は何度も気力の衰えをこぼしていたし、卒倒させられたこともあって、心身が衰弱していることを訴えてもいた。もっとも、このとおり俺に争いを続けさせることが出来るわけだし、こんな泣き言を漏らす根拠は彼女にはほとんどない、というのが俺の気持ちだった。正直なところを言えば、彼女の様子がひどく心配になることも何度かあったのだがね。

「貴方と私でしょう。卑劣この上ない男が ……」

「私にはラヴレースという名があるのですよ、マダム」

「ですから、卑劣この上ない男とお呼びしているのです［これが許せると思うか、ジャック］。真実を知っておりますのは、すべての真実に通じておりますのは、貴方と私なのです。このご婦人たちに対しましては、私の評判を正したいとは思いません。大切にいたしますのが当然と思われます人々すべての間で、私の評判はもうすっかり地に落ちているのですからね。でも、貴方はどんなことをやってのけられるのか、このように改めて確かめさせていただきますわ。さあ、言うのです、恥知らず（というより、こちらのほうがお好みでしたら、〈言うのです、ラヴレース〉と申しましょう）。貴方は実際に、本当に、結婚で結ばれた私の夫なのでしょうか。言うのです。躊躇せずに答えるのです」

彼女は堪え切れない怒りに身を震わせていたが、その態度にはある種狂気じみたものが

含まれていたので、それを少しばかり利用させてもらうことにした。この忌々しい突きを受け流すためだ。確かに、忌まわしい一突きだったのだよ。何せ、そのとおりだと言明したりすれば、彼女のほうでは、俺の話したことは一切信じなくなるだろうし、結婚していないことを認めた場合には、彼女に対してばかりか婦人たちに対しても、自らの企てをぶち壊しにしてしまっていただろうからな。それに、彼女を追い続けるとか、彼女が何処なりと好きなところへ行くのを妨げる、その口実もなくなるわけだよ。結婚を事実であると言明するのが恥ずかしかったわけではないのだ。もしも、それが方針と一致していたのであればな。俺のことをそれほどの腰抜けだなどと、貴公に思われてしまうのもまた御免蒙りたいものだな。

ラヴレース「あゝ、最愛の人よ、何と乱暴な話し方なのでしょう。私にはどう答えてもらいたいのですか。どうしても答えねばならないのでしょうか。この件は、トムリンソン船長の約束と手紙とに訴えるのと同様、もう一度君の胸に訴えてはいけませんか。私たちのことについては、君自身が承知のはずです。それに、トムリンソン船長が　…　」

クラリッサ「あゝ、恥知らず。これが私の質問への答えなのですか。言いなさい。私たちは結婚しているのですか、それとも、していないのですか」

ラヴレース「結婚を成立させるものは何なのか、われわれは皆承知していますよ。もしも、二つの心の一致和合ということであれば「一捻りしたのだ、ジャック」、悲しいかぎりですが、二人は結ばれていないと言わねばなりませんね。君が私を憎んでいることは、今でははっきりしていますからね。もしも、婚姻関係の完成ということであれば、困惑もすれば、また、無念にも思う次第ですが、結ばれていないことを認めないわけにはまいりませんよ。しかし、お願いだ。考えてもらいたい。君がいた家の半ダースほどの者たちにしても、君の質問にはどう答えることが出来るのか、ということをですよ。また、心の乱れるままに、そして、激昂するあまり、われわれのことをもっと良くご存じの人たちの前で君が認めていた点について、このご婦人たちの前で疑義を差し挟んだりするのは止めてほしいのです」

俺のほうでは、彼女の伯父との約束のことや、船長の手紙の内容について、彼女の耳に囁き掛けようとしたのだよ。ところが、愛しの傲慢娘は、後退り、拒むように手を突き出しながら叫ぶのだ。「さあ、離れているのです。このようにみっともないはぐらかし方をするのですから、貴方自身の胸に訴えることにいたしましょう。貴方との結婚は一切認めません。貴女たちには証人になっていただきたいのです。私が認めていないということについてですわ。そして、私を苦しめるのは終わりにしていただきます。付き纏うのは止めてもらいましょう。確かに、確かに私にも落ち度はございました、でも、これほどの仕打ちに値するようなことはしていないのです。ですから、前の言い方を繰り返しますが、貴方には私の後を追い回す権利はないということなのです。権利のないことは貴方も承知のはずです。ですから、立ち去っていただきましょう。そして、辛い運命ではありますが、精一杯善処いたしますので、私のことは放っておいてください」とだよ。そして、悲しみの激しい発作の中で「崩れるように両膝をつき、差し上げた両手を握り締めて」、「あゝ、私の大切な、残酷なお父様。心を捧げております貴方の娘の身に、貴方の厳しい呪いは成就されたのです。私は罰せられました。不正な信頼を寄せてしまいました卑劣漢その者の手によって、私は恐ろしいほどに罰せられたのです」と言っていた。

誓って言うが、ベルフォード、あの可愛い魔女は言葉巧みに、もっとも、態度によるほうが大きいのだが、俺の心を揺り動かしたのだ。だから、彼女の動作や悲しみよう、そして、涙が婦人たちを動かし、同じように同情的な態度を引き出すことになっても、驚くには当たらないのだよ。

えらく厄介なことになったとは思わないかな。

二人の婦人は部屋の向こう端へ引き下がり、囁いていた。俺の耳に届いたのは、「奇妙な話ですわね。逆上のためじゃございませんわ」という言葉だった。

魅惑の君は頭と首にハンカチを被せ、なおも跪いたまま俺に背を向け、椅子に顔を埋めていた、そして、悲しみと興奮から、繰り返し泣きじゃくるのだ。

この機を利用して、俺は婦人たちのほうへ歩み寄った。婦人たちには動じないようにしてもらうためだよ。

「お分かりでしょう、ご婦人方」と、囁きながら」、私が何という不幸者なのかは。お分かりですね、この愛すべき者がどれほど激しい気性をしているのかということは。何もかもすべて、妻の無慈悲な身内のせいなのです。父親の呪いに由来することなのです。呪われてしまえば良いのですよ、あんな連中は。あの連中がこの世で最も魅力的な女性の頭を狂わせてしまったのです」

「あゝ、ご主人様、ご主人様」と、ローリンズ嬢が答えていた。そして、「あの方の親戚の人たちにどのような落ち度があるといたしましても、貴方とあの方との間では、すべてが本来あるべき姿とは申せないわけですね。ご自分が結婚なさっているようにあの方が考えておられないのは明らかですわ。明らかにそのようには考えておられません。あのお気の毒なご婦人のことを少しでも大切に思われるのでしたら、そして、完全に正気を奪ってしまうおつもりではないのでしたら、お引き取りになるほうが良いでしょうね。また、事態の好転を図りますためにも、時間を掛けまして、もっと冷静に検討なさるほうが良いでしょう」と言うのだよ。

「妻も最後には、ローリンズさん、私をそんな羽目に追い込むはずですよ。きっと、そのはずです。そうなれば、私たちは二人とも破滅なのです。何しろ、私は妻なしには生きて行けませんからね。そのことは妻も分かりすぎるほど分かっているのです。それに、妻には、世話をしてくれる知人一人としていないのですよ。この点も妻は承知しているのです。われわれの結婚につきましては、妻の伯父の友人が到着いたしますと、議論の余地なく証明されることなのです。ただ、これは結婚ではないのだと考えるような余地を妻に与えていたと思うと、私としては恥じ入るばかりです。妻もくどくどと繰り返していることですがね」

「えゝ、妙なお話ですわね。本当に奇妙なケースです」と、ローリンズ嬢が言った。そして、彼女がさらに言葉を続けようとすると、怒り狂った美女が戸口までやってきて、「ちょっとお話があるのですが、ムーア夫人」と言うのだ。そして、二人揃って食堂へと入って行ったのだよ。

少し前のことだが、俺は彼女が小さな包みをポケットに入れるところを目に留めていたのだよ。それで、二人の後について部屋を出た。彼女の逃げ去ってしまうことが心配だったからだ。そして、彼女が横をすり抜けてしまわないよう、俺は階段のところへ歩いて行くと、「ウィル！」と大声で叫んだ［奴が居ないのは知っていたのだがね］。そして、返事

をした女中に向かって、「さあ、お前、どちらのほうでも良いから、私の召使を呼んできてくれないか」と頼んだのだよ。

すると、怒りも露な表情で彼女が近づいてきて、「召使を呼んでおられるのは、私が好きなところへ参りますのを貴方たちで邪魔なさるおつもりなのですね」と訊くのだよ。

「我が最愛の人よ、私のすることを何もかも悪く受け止めるのは止めていただきましょう。君を拘束するために召使の手を借りるような、そんなさもしくて下劣な男だと私のことをお考えなのでしょうか。召使を呼んでおりますのは、この町の居酒屋か旅籠へ使いに出すためなのです。トムリンソン船長のことを尋ねさせようというわけですが、船長はその手の場所のどこかで馬車を降り、必要もないほどに衣装を整えているところかもしれませんからね。船長には、たとえ衣類を纏っていなくとも、来てもらいたいのですよ。おっと、これは失礼 … 君の無情さには心の底まで痛めつけられているものですからね」

俺の召使はどちらも居合わせないという答えが返って来た。

「居合わせないだと」 俺は叫んだ。「一体どこへずらかったのだ、犬どもめ」

「おやおや」と、彼女は軽蔑した態度だ。「遠くへではございませんわね、きっと。つい今し方も、片方の人が窓の下におりましたもの。私の動きを見張るため、指図に従ってのことなのでしょうね。でも、私は好きなことをいたしますし、好きなところへも参りますわ。それも、貴方の目の前でですわ」と言うのだよ。

「私が君の邪魔するなど、それは絶対にあってはならない話です。君が身の危険なしに行うことの出来るどんなことについてもですよ」と、俺は言っておいた。

今では本当にそう思っているのだが、彼女が計画していたのは、彼女とローリンズ嬢とが控えの間で囁き合っていたところに従い、多分ローリンズ嬢の家へだろうが、ここを抜け出すことだったのだよ。

それから、彼女はムーア夫人のところへ戻り、何かを手渡していた。後でこれはダイヤモンドの指輪と判明したのだが、それを、請求されたものを支払うまでの担保にしてほしいと頼んでいるのだよ［小声で囁くのではなく、俺への当てつけといった態度なのだ］。支払い手段はすぐにも見つけるつもりでいるが、知人のところへ辿り着くまでに必要となりそうな額以上には、現金の持ち合わせがないものだから、とのことだった。

ムーア夫人のほうでは受け取りを辞退しようとしたのだが、彼女が是非にと言って引き下がらないのだよ。それから、両目を拭うと、手袋をはめ、こう言うのだ。「どなたにも私を引き止める権利はございません。私は参りますわ。この私がだれを恐れるというのでしょうか」とだよ。心魅する女じゃないか。彼女の問い掛けそのものが、胸中の怯えを証明しているのだ。

「迷惑をお掛けしましたこと、お詫びいたしますわ、マダム［と、ムーア夫人のほうを振り向き、片膝を折ったお辞儀をしながらだ］。お詫びいたしますわ、マダム（と、ローリンズ嬢に向かってだ）［彼女にも同じお辞儀をしていた］。もしも、もっと幸せな時間が私に割り当てられるようなことがございましたなら、その時にはお便りをいたします。そして、お二人の両方に神の祝福がございますように」と、涙を堪えていたのだが、やがて泣きじゃくり出し、立ち去ろうとするのだ。

俺は入り口まで進み、ドアを閉めた。そして、ドアに背を当てたまま、彼女の争う手をこの手に握り締め、こう言ったのだ。「我が最愛の人よ。我が天使よ。こうまで私を苦しめ

るのは何故なのです。これが厳かに誓ってくださった許しなのでしょうか」とだ。

「手をお離しください。私にご用はないはずです。私を思いのままになさる権利を、貴方はお持ちではないのです。お持ちでないことはご存じでしょう」

「だが、最愛の人よ、何処へ、どちらへ行こうとおっしゃるのです。たとえ世界の果てまででも私はお供をすると、そのようにはお思いにならないのでしょうか。どちらへ行こうとおっしゃるのです」

「私がどこへ参るつもりかなどと、よくもまあ質問出来るものですね。私が友人を一人残らず失う、そのきっかけとなった貴方ですのにね。でも、私に罪はなく、真っ当な考えでいたことをご存じの神様です。私が貴方の手から逃れました時には、完全に見捨ててしまわれるようなことはないと思うのです。でも、貴方の手の内にあります間は、神のお慈悲とかご恩寵の光が一筋でも私に届きますことを期待するわけにはまいりません」

「何とも手厳しい話ですね、これは。ショックですよ、この厳しさは。君の面前から追い出されますと、あゝ、怒りに燃える麗しき人、一方のものにせよ、もう一方のものにせよ、私には望めなくなるのです。お読みいただいた手紙で従姉妹のモンタギューも述べておりますとおり、君は私の北極星であり、指針なのです。この世であれあの世であれ、仮にも私が幸せになるとすれば、それは、君との暮しの中に見出されるもの、そして、君によってもたらされるものでなければならないのです」

すると、彼女はドアを開けようとするのだよ。しかし、丁重な態度とはいえ、俺が立ちはだかっているものだから、彼女は次のように言っていた。「立ち去るのです、あなた。立ち去るのです、ラヴレースさん。邪魔をするのはお止めなさい。窓から出るような真似を私にさせたくないのでしたら、ドアから通していただきましょう。もう一度申します。貴方に私を引き止める権利はないのですからね」とだよ。

「我が最愛の人よ、君の怒りが十分な根拠に基づいていることは認めましょう。何から何まで私が悪かったと認めますよ。跪いて許しを請いましょう「そう言うと、俺は膝をついたのだ」。それでも君は拒んでみせるのだろうか。君自身の約束の承認をですよ。私たちを待っている明るい見通しに望みを託すのです。お分かりではないのですか。M卿とセアラ夫人が君に祝福を与えたがっているのです。君が私に、そして、一族全員に至福を授けてくれたからこそなのです。ベティ夫人と私の従姉妹のモンタギューが約束してくれた訪問を、楽しいことと受け止めてはもらえないのでしょうか。それに、あの二人が申し出ている保護の手を、私の保護では満足してもらえない場合だが、喜んでいただくわけには行かないのでしょうか。伯父上の友人に会いたいというお気持ちはないのでしょうか。トムリンソン船長が到着するまでの間だけで良いのですよ。それまで待っていただきたいのです。伯父上がご承諾くださったとの知らせを、ご両人からのお祝いの言葉ともども受け取っていただきたいのです」

彼女は苦悩に疲れ切った様子で、今にも崩れ落ちそうだった。そして、俺が彼女の足下で跪いている間、壁の板張りに寄り掛からずにはいられなかったのだ。少し怒りの和らいだ彼女の両目から、とうとう一筋の涙が溢れ落ちた。その愛らしい顔と握り合わせた両手を天に向かって差し上げながら、「あゝ、神様、結局のところ、私の運命はどうなるのでしょう。何卒、この男の手から私を救い出し、行く手をお示しください。どうしたら良いのか、私に何が出来るのか、分かり兼ねております。また、何をなすべきなのか、それも分

からないのです」と言うのだよ。

われわれの結婚が半分しか成就されていないことは俺も認めていたので、婦人たちとしては、この場面全体を通して、俺の主張と矛盾する点は（甚だしくは矛盾しないという意味だが）、一切耳にしなかったことになるのだ。連中は、落ち着きを取り戻してきた彼女の姿や、決意がぐらついている様子の陰に、俺への愛情を垣間見たように思ったのだ。彼女の怒りのために、これまでは抑え込まれていた愛情だよ。そして、船長が到着し、船長の提案を耳にするまでは留まるよう説得すべく、連中は力を合わせていた。彼女が晒されることになりそうな様々な危険や、耐え忍ぶことになるかもしれない労苦の数々について言い聞かせるのだが、彼女のような外見をした淑女が無防備で、かつ保護者もなしでいたのでは、というわけだよ。その一方で連中は、俺が悔恨の情をはっきりと口にしている点を力説し、俺の約束のことにも詳しく触れていたが、その履行に関しては自分たちが保証人になりましょうと申し出ていた。膝をついて見せた俺の遜った態度が、そこまで連中の心を動かしたというわけだ。

女というのはな、ジャック、自分の足下に跪いている恋人を眺めることに誇りを感じるものだが、自分たちが劣っていることを暗黙のうちに認めているわけだよ。

彼女は俺に背を向け、そして、椅子に身を沈めた。

俺は立ち上がり、恭しい態度で彼女のほうへ歩を進めた。俺は「我が最愛の人よ」と呼び掛け、言葉を続けようとしたのだが、彼女のほうは、高潔さの自覚から顔を紅潮させながら、俺を遮ると、「卑劣で恩知らずなラヴレース。貴方はご存じないのです。その手で侮辱を加えた心の価値のことをです。また、私の魂がどれほど貴方の卑しさを軽蔑しているのか、そのことにも貴方は気づいてはいないのです。でも、下劣な振舞いの出来る男に割り当てられておりますのは、いつだって卑しさに決まっているのです」と言うのだよ。

婦人たちはわれわれの関係が改善されるものとばかり考え、引き下がって行った。可愛い天の邪鬼さんは婦人たちが退出するのに反対したのだが、婦人たちのほうでは、席を外してもらうよう俺が願っているのを看て取ったのだな。連中が引き下がってしまうと、俺はもう一度彼女の足下に身を投げ出し、自分に無礼のあったことを認め、今度だけは許してほしいと懇願した。そして、今後は慎重の上にも慎重を期すことを約束したのだよ。

記憶の力を保ちながら、なおも俺を許すなどということは、自分には出来ない相談だと彼女は言っていた。そして、「臆面もなくやってくださいましたが、これほどの侮辱をこの身に加える気持ちを起こすなんて、貴方はクラリッサ・ハーローの振舞いの中に一体何を見出したとおっしゃるのでしょうか。ご自分は平然とそれだけの罪を犯し、クラリッサに対しましては、貴方を許すような、そんな弱い人間になることを期待なさるとは、よほどクラリッサのことを軽く見ておられるのでしょうね」と言うのだよ。

トムリンソン船長からの手紙について読み聞かせるのを許してほしいと、俺は彼女に懇願した。俺は確信していたのだが、彼女があの手紙に然るべき注意を払ったなどということは、到底有り得ない話だと思ったのだよ。

「必要なだけの注意は払っております」と、彼女が言っていた。「別の手紙のほうにもですわ。ですから、私が口にしておりますのは、熟慮の上での事柄なのです。それに、兄と姉につきましても、私が何を恐れなければいけないというのでしょうか。あの二人に出来ますのは、精々のところ、父やおじたちに対しまして、私の破産を完全なものにするだけ

のことです。二人にはそうさせておきましょう。私はそれで結構です。感謝いたしておりますが、貴方は私の財産を減じてくださいました。でも、有難いことに、私の心が財産と共に下落したわけではございません。それどころか、富などに左右されない、そして、貴方などには手の届かない高い所へ、私の心は引き上げられているです。私を妬む原因となってまいりました地所は、ほんの一言でもあれば、あの二人に譲りますし、二人にとっては気掛かりの種となるかもしれないわけですが、身内からの遺産相続の見込みにつきましても、そのすべてを譲渡するつもりなのです」と言うのだよ。

俺は賛嘆のあまり声もなく、両手を差し上げながら天を仰いでいた。

「私は操を奪われたのだと、兄のほうでは考えるかもしれませんね。貴方のお人柄にとっては賛辞となるわけですが、貴方と一緒にいて無垢のままでいるなど、それは不可能なことだと兄は考えるかもしれません。苛酷なことこの上ない兄たちの非難ですのに、それすらも貴方は、ご自分の振舞いの一つ一つによって、見事なまでに正当化してしまわれたのです。それでも、貴方の元を逃れました今、そして、貴方の不可解な策謀の力も及ばないところへ脱しました今では、自らの無垢さでこの身を包みまして「こう言いながら、感情を高ぶらせている美女は両腕で自分の体を抱き締めたのだ」、自分の声望を再び確立いたしますのは、時の流れとこれからの慎重な行動とに委ねようと思うのです。ですから、私のことは諦めていただきたいのです。私を追い求めるのは止めていただきます」と、彼女が言うのだよ。

「何ということでしょう」と、彼女を遮りながら、俺はこう言ったのだ。「こうまでなさって、何のためだというのですか。君の嘆願に私が応じていなかったならば（お許し願いますよ、マダム）、君にしても、さらに先へと怒りを持ち越すようなことは出来なかったはずなのです」とだよ。

「恥知らず！　あのような嘆願のきっかけを作ることだけでも、立派な罪ではないのですか。保護してくれるのが当然ですのに、そんな私をとことん辱めることはしなかったからといって、手柄顔をして見せたいというのですか。立ち去るのです、あなた」と、俺に背を向けたのだが、興奮のあまり顔を真っ赤にしていたよ。そして、「これ以上顔を出さないでもらいましょう。耐えられないのです、貴方を目にするのは」と叫んでいた。

「あゝ、愛する人よ、最愛の君よ」　俺も叫んだ。

「たとえ貴方を許すとしても、ラヴレース」と、彼女はそこで一息つき、次のように言葉を続けた。「貴方と共に一生の間、勝ち目の薄い賭けをしてみようと同意いたしましたのに、その哀れな娘を計画的に、卑劣な策を弄し、火事だという叫び声によって怯えさせようと骨折るなんて　…　」

「お願いだ、神かけて　…　」と叫びながら、俺は、俺を逃れて控えの間へと急ぐ彼女の、その撥ねつけようとする手を掴もうとしたのだ。

「ご自分のことのために神様を持ち出すなんて、どういうつもりでしょう。あゝ、この世のだれよりも腹黒い人」　彼女が叫んでいた。

それから、俺に背を向けて目を拭い、再び俺のほうへ向き直ったのだが、あの優しい顔を半ば背けてこう言うのだよ。「何という厄介ごとに私を巻き込んでくださったのでしょうね。欺いて私を手中になさいました後でも、前途には平坦な道が開けておりました貴方ですのにね。貴方の不正直な行いの一部始終に、私の心はすぐにも気づくのです。クラリッ

サ・ハーローのことを貴方はこんなふうに考えるべきだと、誇り高いこの心は自らに説いているわけですが、もしもそのとおりに私のことを考えてくださるのでしたら、貴方はどこか別なところに幸運をお求めになるはずです。私の心は貴方の手などの届かない高い所にあるのだと、貴方に挑発され、そんな台詞をぶつけたくなったことが何度あったことでしょうか」とだよ。

「神かけて、マダム、君の手で破滅から救うことも出来るという魂のためにも、私のこれまでの無礼は何卒お許し願いたい。それが計画的なものだというのであれば、私はこの世でも最大の悪党ということになりましょう。ただ、敢えて申し開きをしようとは思いません。君の慈悲の心にこの身を委ねます。改悛の情以外のいかなるものも、弁解に持ち出すことはいたしません。せめて、トムリンソン船長には会っていただきたい。ベティ夫人と私の従姉妹にだけは会ってほしいのです。弁護はあの人たちに任せます。私の信義心に関して保証人になってもらうのです」

「私がここに居ります間にトムリンソン船長がお見えになるのでしたら、あの方にはお会いしても構いません。でも、貴方につきましては、失礼ですが　…　」

「最愛の人よ、船長が来られても、氏に向かって私の罪を誇張なさらないよう願いたいのです。お頼みいたしますが　…　」

「どんな頼みがあるというのでしょうか、貴方などに。私が自分自身に背いてしまうようなことではないのでしょうか。私が甘い顔を　…　」

「悪質な計画的犯行だなどと、マダム」彼女を遮って、俺が言った。「そんな非難は止めていただきましょう。私の罪についても、伯父上の発言を弱め、兄上の考えを補強しかねない解釈は慎んでもらいたいのです」

彼女は俺をすり抜けて部屋の奥のほうへ逃れた[それ以上先へは進めないのだ]。ちょうどその時、ムーア夫人がやって来て、食事の用意が出来たこと、そして、ローリンズ嬢にご相伴願うよう説得したことを話していた。

「ご勘弁願います、ムーア夫人」と、彼女が言った。「それに、ローリンズ嬢にもご勘弁いただければと思いますわ。喉を通らないのです。階下へ参るわけにも行きません。貴方につきましては、拝察いたしますに、ここから出られるのが適切なこととお考えのはずですわ。少なくとも、貴方の待っていらっしゃる殿方がお見えになりますまではね」と言うのだよ。

俺は恭しい態度で隣室へと退いた。俺が夫人の間借り人であり、賄いつきの下宿人でもあるのだということを、そうしてくれるよう（囁き声で）頼みもしたわけだが、ムーア夫人から（自分で話す勇気はなかったのだ）彼女に知らせてもらうためだよ。また、廊下でローリンズ嬢に出会ったので、「やあ、ローリンズさん、私の肩を持ってほしいのです。ムーア夫人に協力なさって、妻を落ち着かせていただきたいのですよ。私がここに部屋を借り、下宿するつもりでいるのを知って、新たな気紛れを起こすようでしたらね。立派な女性が貸間業を営もうとしておられるのに、邪魔をしようなどと目論むのではなく、もっと広い心を妻にも持っていてもらいたいのですよ」と言っておいた。

察するに、ローリンズ嬢が部屋に入るより前に、ムーア夫人は（我が麗しの君の元に残してきたわけだが）この点を知らせてくれていたらしいのだ。というのは、俺がローリンズ嬢を引き止めている間にも、「とんでもございませんわ。ひどい考え違いですわ、あの人

も。まさか、私がそんなことをするなどと、あの人は考えないはずです」と言っている彼女の声が聞こえてきたのだよ。

婦人たちが口にした片言隻句から推測出来たわけだが、二人揃って、彼女を諫めてくれたらしいのだ。実は、ひどく低い声で話し合っていたので、はっきりとした文言は一つとして聞き取れなかったのだよ。ただ、麗しの天の邪鬼さんの言葉は別で、怒りのために他の者より声高だったのだ。そして、婦人たちからの話のいろいろな部分に答えて、彼女が次のような趣旨の意見を吐露するのが聞こえて来たのだ。「あゝ、ムーア夫人、ねえ、ローリンズさん、もうこれ以上は強要なさらないでくださいね。あの人と一緒の食卓に着くわけにはまいりませんわ」といった具合だ。

連中が何か言っていたが、察するに、俺のためを思っての言葉だろう。「あゝ、追従上手の恥知らずですわ。私にはどのような防御の方法があるというのでしょうか。私がどこへ参りましても、一人残らず、操の堅い女性までも自分の味方に変えてしまうことの出来る男を敵に回しているのですからね」と、こんな言葉が聞こえたのだ。

はっきりとは聞き取れなかったのだが、何か他の言葉の後で、こう言うのだよ。「呪わしい悪知恵ですわ、これは。もしも、あの人の邪悪な心をお知りになればの話ですが、極悪非道の陰謀に力添えなさるよう、善良な貴女たちお二人を引きずり込むことにも、あの人は望みを抱いていないわけではないということですね」とだ。

一体全体、これだけの眼力を彼女はどうやって手に入れたのだ（と、その瞬間、俺は思ったぞ）。疫病神の奴め、まさか俺に悪さを働くことはあるまい。もしも、奴がそんなことをしているように思えた時には、俺は結婚して、堅気の暮しを送ることにするさ。奴への仕返しにな。

その後、察するに二人の婦人のほうでは、部屋に入ろうとするローリンズ嬢に俺が仄めかしておいた、ムーア夫人の仕事を妨害してはいけないという、例の言い分を持ち出したのだろう。「あの人はきっと貴女のおっしゃるとおりの代金を払うでしょうね。あの人の気前の良さに疑いを挟む必要はございません。でも、私たち、同じ屋根の下で暮らすわけには参らないのです。それが出来るのでしたら、どうしてあの人から逃げ出し、他人様に救いを求めるような真似をいたしましょう」と言っているのが聞こえてきたのだ。

それから、二人が弁じ立てた何か他のことへの返答として、「違いますわ、マダム。あの人と縒を戻したわけではございません。私、あの人の言うことは何一つ信じないつもりです。変装しているところをご覧になったでしょうが、あの人がどんな男なのか、どのようなことをやってのける人間なのか、その甚だしい例をあの変装で実証して見せたことにはならないでしょうか。お話をいたしますと長くなってしまいますし、私がここに留まりますのもほんの短い間のことなのです。でなければ、あの人に対する私の怒りが十分すぎるほどの根拠に基づいておりますことは、貴女たちに納得していただけるはずなのです」と言っていた。

おそらく連中は、その後、俺が皆と一緒に食事を取れるよう、彼女の許しを請うたのだろう。彼女が次のように話していたのだよ。「その点につきましては、別に申し上げることはございません。貴女のお宅ですもの、ムーア夫人。貴女ご自身の食卓ですわ。お好きな方をお呼びになって結構です。ただ、私の相手を選びますのは、私の自由に任せていただきたいのです」とだ。

それから、料理を一皿届けさせようという申し出に答えてのことだと思うのだが、「宜しければ、パン一切れとお水を一杯だけお願いいたしますわ。今のところ喉を通るものといえば、精々それくらいなのです。本当に、とても体具合が良くないのです。ひどく体調を崩しておりましたのは、お分かりいただけなかったでしょうか。気持ちを支えてくれるものといたしましては、ただ憤慨の念があるだけといった状態でしたからね」と、彼女が言っていた。

「あの人が貴女と食事を共にいたしましても、マダム、私には異存など一つもございませんわ」と、彼女が付け加えていたのだが、おそらく、さらに尋ねられた同種の問いへの返事だったのだろう。「でも、あの人が間借りをしております家には、一晩でも留まるつもりはございません」とも言っていた。

おそらく、食事の時まで残るわけには行かないとローリンズ嬢が話したのだろう。彼女のほうでは次のように言っていた。「私のせいで、貴女とのお付き合いをムーア夫人から取り上げることになってはいけませんわね、ローリンズさん。貴女たちでしたら、あの人の話に不愉快な思いをなさることもないでしょう。貴女たちに対しましては、何を企むはずもございませんからね」とだ。

俺ならば、自分の話を信じさせるためにも、彼女の陰で口にするような、そんな事柄を連中がその後申し立てたらしいのだよ。「あの人が私のことをどのように言いましても、あるいは、どのように考えるといたしましても、私は気にしません。悔い改めてもらいますこと、それこそが、この身はどうなりましょうとも、私があの人に加えたいと願っております危害のすべてなのです」と、彼女はそう言っていた。

その口調からすると、この最後の言葉を口にした時には、彼女は泣いていたのだ。

連中は、二人ともだが、目を拭いながら出て来ると、部屋を借りるのは我慢して、彼女の伯父の友人がやって来るまでここから離れてくれるよう、俺に向かって説得しようとしたのだ。だがな、俺はもっと利口なのさ。彼女とハウ嬢のほうでは、俺は悪魔と通じているのだろうと勘繰っており、それもまた尤も至極な話なのだが、俺としては、仮にもう一度彼女が逃げ出したりした場合、再度見つけ出してくるのに悪魔を当てにするようなことはしたくなかったのだよ。

俺が最も恐れているのは、彼女が自分の親戚どものところに身を投じることなのだ。そして、そのような行動に出た場合だが、哀れを誘う彼女の弁舌には奴らも抵抗出来ないものと俺は確信しているのだよ。しかしながら、いずれは貴公にも分かるだろうが、俺宛の船長の手紙というのは、この点に関するさまざまな懸念を取り除くよう、見事な計算が施されているのだ。とりわけ、次のように述べられている部分がそうだ。つまり、伯父としては、直接彼女と手紙のやり取りをすることも、あるいは、彼女からの働き掛けに応じることも、強く暗示されているように(ア)、トムリンソン船長の手を通さないかぎりは随意に出来る立場にあるとは考えていない、と言っている辺りだよ。

白状すると(あれだけ厳粛に誓いを立てた復讐のことにも拘らずだ)、彼女が好意を取り戻してくれるなら、それを恩に着る気持ちは大いにあったし、トムリンソン船長の仲立ちにも出来るだけ頼りたくはなかったのだ。これには俺のプライドが絡んでいるし、彼を連

(ア) 八十頁を参照のこと。

れてこなかった理由の一つがこれなのだよ。もう一つは、やむなく彼の助力に頼ることになった場合でも、彼女の気持ちの変化を知った上でだが、どんなことを話し、どう振る舞うべきなのか、(彼を伴わずに彼女を訪ねることで)より適切な指示を彼に与えることが出来るようになると思うからだ。

しかし、食事の用意が出来たとの知らせを持って、まことに都合の良い時にムーア夫人がやって来てくれたのを、俺は心の底で嬉しく思ったよ。麗しの逃亡者はすっかり気持ちが高ぶっていたのだ。勝敗の鍵は彼女が握っているのだよ。それに、引き下がるのには恰好の口実を与えてくれたことで、俺としても、元気をつける時間が得られたわけだ。船長もゆっくりとやって来れば良いのだし、お嬢さんには心を落ち着ける暇が出来たことになる。シェークスピアが有益な助言を与えてくれているぞ。次のとおりだ。

勢い盛んなるうちは、嵐に歯向かうことなく
しばしその赴くままに任せ、衰え弱るのを待て。
押し寄せる洪水がダムによって阻まれることはなく
そこかしこのダムを圧しつぶし、収穫の望みを呑み尽くす。
しかし、巧みに操られ、その分散された力が
幾本もの枝川に導かれて着実に排水されるなら、
また、勢いが尽き果て、補強もされない時には、
最後のあがきは土手によって阻止され、
われわれは靴もぬらさず、川底を晒す瀬を渡るのだ(二七)。

俺は食事をしに婦人たちと階下に降りた。ムーア婦人が麗しの下宿人に料理を一皿届けてくれたのだが、彼女のほうでは、パンをほんの一かけらとグラス一杯の水を口に入れただけだった。彼女は一度口に出した言葉はきっと守るということ、その点に疑いを持ったりはしなかったさ、俺は。ハーロー家の一人ではないのかな、彼女は。苦難に耐えられるよう、自分を鍛えようとしている様子なのだが、最悪の場合でも、そんな目には遭わずに済むだろうな。何しろ、俺のことを有難く思うとか、あるいは(もっと自分の気持ちに合った言い回しを用いるなら)、俺に有難い思いをさせてくれるようなことについては、結局は拒んでみせるのだろうが、彼女を目にする者はだれでも、きっと彼女の味方になるわけだからな。

だが、ひとつ訊きたいのだよ、ベルフォード。怒れる美女が筆にし、馬を使って急送した例の手紙の内容に関して、また、ハウ嬢からの返信はどんな具合なのかと、俺のために気を揉んでくれているのではないのかな。貴公はすぐにも尋ねたいのではないのかな。小癪な友の逃走を知った時、ハウ嬢が自分の手紙のことを憂慮するということも有り得る話ではないのか、とだよ。あの逃走以前には、手紙がウィルソンのところへ届くはずはないわけであり、従って、おそらく俺の手に落ちてしまうのだろうということは、彼女のほうでも承知しているに違いないのだからな。

これらすべての点に関しては、結果を見れば貴公にも分かってもらえるだろうが、人知の及ぶ限りの工夫を凝らし、予防の策を講じてあるのさ。

ウィルがグライムズ爺さんを見張りに行っていることはすでに話してあったな。グライ

ムズ爺さんというのは、どうやら、お喋り好きの呑んだくれらしいのだよ。ウィルが爺さんと出くわしてくれさえすれば、後のことについては請け合っても構わないのだよ。何しろ、ウィルにしても、俺の召使となって七年以上になるのではないのかな。

手紙　十一
ラヴレース氏より［承前］

食事の席には、ローリンズ嬢に加え、ムーア夫人の姪の若い未亡人がいた。叔母のところに一ヶ月滞在するために来ているのだよ。名はベヴィスという。非常に積極的で、極めて威勢が良く、請け合っても構わないが、俺のことを大変な崇拝ぶりなのだ。俺の話すことなら何であれ、笑顔を浮かべて熱心に聞き入って見せるし、どんな言葉もすべて、俺が口に出す前から同意する気になっているのだ。それで、食事が半ばまで進んだ頃には（それまでに集めた情報にも助けられ）、他の二人の婦人のどちらにも負けないくらい、われわれの事情に関して明るくなったというわけだ。

ハウ嬢から生じるいかなる事態に対しても俺の味方をしたくなるよう、連中の気持ちを整えておくのが俺の義務だったわけだから、二階で漏らした、あの疫病神のお嬢さんについての遠回しな非難をさらに強調しておいた。彼女のことを傲慢で執念深く、狡猾で冒険心の旺盛な人物として描いて見せたのだ。もしも彼女が男であったなら、おそらく［疑うべくもないことだよ、ジャック］、毒づいたり罵ったりしながら女を犯していたことだろうが、ただ、そうは言っても、婦人向けの教育を受けているし、プライドや尊大さのお陰もあって、一個の人間としては、操の堅い女性に間違いないのだ、とだよ。

ベヴィス夫人が教育には極めて大きな力があることを認めていた。そして、プライドもそうですわね、と言っていた。一方、ローリンズ嬢は、美徳が教育だけに委ねられるなんて、あってはならないことですなどと、淑女ぶった言い種だ。俺のほうでは、ハウ嬢というのは、悪事を計画させると抜け目のない女であることを言明した。いつも俺に敵対してきた女で、その動機は知らないのだが、ヒックマンという者で、夫として迎えるよう母親が望んでいる男を軽蔑しているのだということもだ。彼女としては、むしろ俺と一緒になりたかったのだと、そのようなことを俺は正面切って断言したわけではないのだが、それでも、連中は揃ってすぐに、俺に対する彼女の敵意や、我が愛しの君への妬みの原因がその辺にあるものと考えたわけだ。そして、あんなにも素敵な若いご婦人ですのに、そのようにお友達を装っているだけの人を見抜けずにいらっしゃるのは残念なことですわね、と言っていた。

「しかしながら、だれにせよ［と、俺は付言した］、妬みに根差した憎しみの強さについては、身をもって承知しておりますと、妻以上に確かな根拠に基づいて言い切れる人間は一人としていないのですよ。この点は貴女に、ムーア夫人、それから、ローリンズ嬢、貴女にも二階で触れてありましたね。彼女の姉のアラベラのことでですよ」とだ。

この際、俺はこの容姿と才能とに賛辞を呈してもらったわけだが、お陰で、控え目なところを披露するにはまたとない機会が得られることとなったのだ。「いえ、いえ、とんでもありません。そんな考えを持つようでしたら、ご婦人方、私もずいぶんと自惚れているこ

とになりましょう」と叫んで、それらの価値を否認してみせたのだよ。このように我が身を貶め、ハウ嬢を称揚しながら、その一方で、控え目な点と寛大さの両方について、連中の高い評価を勝ち得たというわけだ。その上、俺としては拒んでみせたのだが、ありとあらゆる美質を授けられることにもなったのだよ。

　要するに、俺が口にする自己批判については一切信じようとしないこともあり、連中の褒め言葉から創り出されたものなのだが（自分のことでもあり控え目に言っておくが）、例の控え目なところさえも連中は押し潰してしまったというわけなのだ。

　それから、本当の話、是非とも言っておかねばならないが、連中はもう少しで俺自身をも説き伏せるところだったのだ。実際にハウ嬢は俺に恋をしているのだとな。これは、俺としてもこれまでに何度となく望みを寄せたく思っていた点なのだよ。それに、もしかすると、彼女がその気を起こすかもしれないだろう。場合によっては、そんな仄めかしも必要だという点では、船長と俺は意見が一致しているのさ。で、貴公の考えはどうかな、ジャック。彼女がヒックマンを嫌っているのは確かだし、決まった相手のいない娘というのは、人を愛することはないかもしれないが、憎むことも滅多にないものだよ。そして、彼女が別の男を求めるとして、その別の男というのが俺であってはいけない理由はあるのだろうか。何せ、俺は小粋な男ではないのかな。放蕩児ではないのかな。そして、いわゆる活発なお嬢さんというのは、いわゆる小粋な男や放蕩児に目がないのではないのかな。従って、ハーロー嬢の心に愛を掻き立てることの出来る男が、彼女に次ぐ二番手と目されることを名誉に思うような、そんな淑女の愛情を惹きつけたとして（「残念ながら　…　」という彼女の台詞とともに(ア)だが）、どこに驚くことがあるというのだ。

　また、このような推測をしたからといって、ベルフォード、俺のことを類を見ない自惚れ屋だなどと咎めるのも止めてもらいたい。自惚れ心を偽装するとか、覆い隠すとかするのが至極巧みな者たちの心に潜む、その密かな虚栄心に気づいてくれるなら、俺を無罪放免とすべき大きな理由、少なくとも、情状酌量すべき理由が貴公にも見つかるはずなのだよ。というのも、大抵の場合がそうだが、自惚れ心を隠すよう偽善者に最も用心を促すものは、自惚れ心が強すぎることへの自覚に他ならないからだ。ただ、こういった連中の場合には、謙虚なのを鼻に掛けて見せるわけだが、隠れ蓑は被っていても、自惚れ心が時々顔を出してしまうのだよ。自分を抑え、お褒めに与ろうと、自分をけなして見せるだけのことだとしてもな。

　ところで、このたびの件のお詫びに自分を卑下してみせたわけだが、一般にご婦人方は真面目くさった男よりも放蕩児を好むという俺の見解、そして、ハウ嬢は俺に惚れているのだという、その見解に基づいた推定を支持することになる、もう一つの論点を持ち出すのを許してほしいのだ。つまり、こういうことだ。世間の評判では、ヒックマンは非常に道徳的で、極めて清廉潔白な男ということになっている。間違いなく童貞だろう。変わった奴だといつも思っていたのだがね。ところで、ジャック、女というのは未経験者は好まんものなのだよ。「おぼこ同士が結婚すれば、最初の子供はお馬鹿さん」というが、女たちの間では知れ渡っている警句だ。女たちを愛するにしても、連中が喜ぶのは、女に関する

(ア) 三十四頁を参照のこと。そこでは、ハウ嬢が「残念ながら、貴女があの男を好いておられるのは知っておりました」と嘆いているのである。

知識に根差した愛情なのさ。立派な理由もある。つまり、未経験な連中というのは、女との付き合いに、見つかりそうにもないものまで期待してしまうからなのだ。女のことについて通暁しており、それでいて、ハウ嬢の言葉を借りれば(ア)、なおも熱意を忘れないということになるわけだが、そういう男は女たちに対して最も丁重な、そして、最も心の籠もった謝意を表す男ということになるのだよ。もっとも、一般的には、こういった熱意は自分の外にいる魔女よりも自分の内なる悪魔に起因しているものなのだがね。何を期待すべきか、何をもって満足すべきなのか、そういう男にはそれが分かっているということさ。

それに、女の取り柄が、実際にであれ見掛け上のことであれ、無知さでなければならない場合もあるのだよ。こういった場合には、男のほうは熟練者でなくちゃいかんのだ。だとすれば、女が素人よりも道楽者を好んだとしても、それは驚くことなのだろうか。女は一方の者に対し、自分には欠けている大胆さを期待するわけだが、もう一方の者と自分自身のことは平行に引かれた二本の線のように考えるのだよ。並んで進んではいても、決して一緒になることはないというわけだ。

しかしながら、大抵の場合、この点に関して女たちは考え違いをしてもいるのだ。というのも、この手の小心者たちというのはずる賢いからだよ。俺自身、かつては内気だったのだ。そして、別のところで貴公にも匂わせてあったはずだが(イ)、そのお陰で、男女両方について判断することが一層可能になったわけだよ。

だが、話を先へ進めることにしよう。

このように、ハウ嬢からどのような手紙が届こうと、また、我が愛しの君の使いの者が戻って来ようと、それに対処出来るよう、皆に心の準備をさせたことでもあり、この話を結ぶに当たっては、次の点を仄めかしておくのが適当と考えたのだ。つまり、俺の妻としては、ハウ嬢への非難となることは何であれ、話題にされるのが耐えられないということだ。そして、深く溜め息をつきながら、こう付け加えておいた。決して無礼を働いたわけではないのだが、ご婦人方の恨みを買い、俺は大変不幸な思いをさせられたことが一度ならずあるのだ、とな。

それは大いにありそうな話だと、ベヴィス未亡人が言っていた。

こういった点を家人に仄めかしておけば、ウィルに示しておいた、家の内外を問わない他の心得と合わせ［奴をムーア未亡人の女中と恋仲にさせるつもりなのだ。そして、俺への奉公によって、少なくとも百ポンドは貯めこんでもらおうと思うのだよ］、事と次第によっては、大きな助けとなるはずなのだ。

手紙　十二
ラヴレース氏より［承前］

ウィルはグライムズ爺さんを見張りに行っていたわけだが、同じようにトムリンソン船長の見張りに出ていた俺の御者が、われわれの食事が終わるか終わらないかという頃、あの立派な紳士をここまで案内して来た。召使が一人船長のお供をしていたが、両者とも馬

(ア) 第四巻の五十七頁と八十三頁を参照のこと。(イ) 第三巻の七十九頁を参照のこと。

に乗っているのだよ。船長が馬を降りた。俺は玄関口まで迎えに出た。
あいつの勿体ぶった様子や厚かましくも馴々しい態度のことは覚えているはずだ。しかし、あの悪党がどれほどの威厳を装い、俺がどれほど恭しく接したか、貴公にも想像出来ないだろうな。
俺は奴を客間へ導き、奴を婦人たちに、そして、婦人たちを奴に紹介した。俺が主張したことすべての正しさを連中に完全に納得してもらうのが、俺にとっては極めて重要なことと思ったのだ（われわれの結婚についても、その件に関する我が麗しの君の急所を突いた質問のせいで、依然として連中には多少の不信感があるかもしれないからだ）。また、連中の目の前で奴と少し話し合うこと以上に、この点をより効果的に達成出来る方法などは他にないのだよ。
「これはこれは、船長、遅いと思っていたところですよ。何しろ、妻とひどくぶつかってしまったものですからね」
船長「予定より遅れてしまい、申し訳ありません。当方の銀行口座の精算に［よくもまあ、厚かましいことを抜かす野郎だよ、ジャック］予想以上の時間が掛かってしまいましてね［と、この間ずっと、ひだ飾りを外して撫でまわしているのだ］。少し合わないところが出まして、それも、わずかに十ポンドのことなものですから、こちらでは気にも留めなかったのですがね」
この悪党は自前の持ち金二十ポンドなど、ここ十年間拝んだことがないのだよ。
それから、われわれは二人でハーロー家の者たちの人柄のことを話題にした。俺は連中一人残らずに対して悪口を並べ立てるのだが、船長のほうでは、親友ジョン・ハーロー氏の肩を持ち、「そう捲し立てられても … そう捲し立てられましても … 若いお方」とか、この手の勿体ぶった台詞を遠慮もなしに吐いて見せるのだよ。
奴は連中が示す敵意について、俺の反抗的姿勢のためだと説明した。立派な家族で、あれだけの魅力的な娘に恵まれている場合、求婚される代わりに挑戦されることを好むような家は一軒としてない、というのだ。奴としては忌憚なく言わせてもらうし、二枚舌を使ったことのない人間なのだ、とも言っていた。そして、婦人たちに向かって、自分の言い分が正しくはないかと訴えてみせたのだよ。
奴は婦人たちを味方につけた。
奴が俺に話したことだが、俺が兄に加えた例の懲らしめが事態を悪化させたに違いないというのだ。
この言葉で、婦人たちの目には、俺がどれほど勇敢な男に映ったことだろう。女というのは血気盛んな男がお好みなのだよ。心の奥ではな。
俺のほうでは、それはともかく、彼女を別にするなら、あの一族はだれ一人として好きになれないし、連中に求めるものも一切ないのだから、彼女のことさえなければ、和解に向けてこうまで歩み寄ることもなかったのだ、と言ってやった。
それはとてもご親切な話ですわね、とムーア夫人が言っていた。
本当に、大層ご親切な話ですわ、とローリンズ嬢の言葉だ。
「親切ですって … 。親切以上ですわよ。非常に寛大なことですわ」と、未亡人は言っていた。
船長「いや、まったくそのとおりだと言わねばなりませんな。ラヴレース氏があちらの

人たち全員から失礼な扱いをお受けになったことは、私も痛感しているのですよ。氏ほどの身分と気概を備えておられる男性が黙って看過すとは、とても想像出来ないほどの無礼さでしたからな。とは申せ、貴方にしても［と、俺のほうへ向き直り］、あのような淑女に恵まれ、たっぷりと埋め合わせは出来たと思うのです。また、父親のことは、娘さんのためにも許してやるべきだと考えております」

ムーア夫人「本当に、私もそう思いますわ」

ローリンズ嬢「あの婦人を目になさった方ならどなたでも、そう思うに決まっておりますわよ」

ベヴィス未亡人「素敵なご婦人ですわね、確かに。でも、激しい気性をしておられますわ。それに、お聞きしておりますところでは、ひどく突飛なこともなさるようですね。良い夫の有難さというのは、失ってしまいますまでは分からないものですわ」

良心が咎めるのか、彼女はここで溜め息を漏らしていた。

ラヴレース「どなたにも許しませんよ、我が天使への非難は。天使なのです、妻は。せっかちに過ぎる気性や執念深い点は、確かに、小さな欠点と申せましょう。しかし、これはハーロー一族から受け継いだものですし、また、あのハウ嬢に唆されたことでもあるのです。だが、数え切れない彼女の美点は、そのすべてが彼女自身のものなのです」

船長「いや、まったく、気性ということになりますと、ハウ嬢の名前が出ましたが、あのお嬢さんも活発ですな」［そこで俺は、あの牝狐について話したことすべてを裏書きしてくれるよう、彼を誘導したのだよ］ただ、あのお嬢さんには同情すべき点もございましてね、と船長は意味ありげに俺を見つめるのだよ。

すでにそれとなく触れてあったことだが、船長とは以前から同意が出来上がっていたのだよ。場合によっては、ハウ嬢が人知れず恋をしていることにしようというのだが、これは、彼女のほうから出てくるかもしれない、俺の不利に働くすべての事柄を無力化する上では、その最善の方法というわけなのだ。

船長「ラヴレース殿、貴方の控え目なことは承知しておりますが、でなければ、理由の一つくらいは貴方のほうでも　…　」

ラヴレース「（うつむきながら、ひどく控え目に）そうは思えませんね、船長。だが、他の原因を上げてみましょう」

居合わせた女は一人残らず、その気になれば、俺の顔をまともに見据えることも出来たはずだ。それほどまでにはにかんで見せたのだよ、俺は。

船長「結構ですが、現在のわれわれの立場につきまして　…　ただ、まずくはありませんかね　…　」と、俺のほうに顔を向け、それから、婦人たちを見回しているのだ。

ラヴレース「あゝ、船長、ここに居られる人たちの前では何をおっしゃっても構いません。だが、アンドリュー［と、食事の間われわれの世話をしていた、新しい召使に向かって］、お前は下がりなさい。この感心な娘さんが［と、女中を見ながら］必要なことは全部お手伝いしてくれるだろう」

アンドリューはすぐに引き下がった。あいつに指図は不要だし、女中のほうでも、俺のような高貴なお方にお引き立ていただいたと、喜んでいる様子だった。

船長「現在のわれわれの立場につきましては、宜しいですかね、ラヴレース殿、もしも友人のジョン・ハーロー氏が事の真相をお知りになれば、はっきり申しまして、われわれ

はすべてバラバラになってしまうということですよ。氏はお身内の他のだれにも負けないくらい、貴方たちのご結婚について、その真偽のほどを質したがっておられるのです」

ここで、婦人たちは耳をそばだてたよ。そして、声一つ立てずに傾聴していた。

船長「詳細については以前にもお尋ねいたしましたね、ラヴレース殿。だが、詳しい話はお断りになった。確かに、私が細かな点にまで通じるというのは適当なことではないかもしれませんね。ただ、正直に申しますと、夫が実行に移して構わないいかなる事柄に対してでありましても（治安を乱すことでなければです）、妻たるものが、逐電しても正当視されると考えるほどに憤慨することが出来るというのは、私の理解を越えていると言わねばなりませんね」

ラヴレース「宜しいですか、トムリンソン船長。断っておきますが、不愉快ですね。私としては、極めて遺憾に思いますよ。仮にも、その〈逐電〉という言葉が再び言及されますのを耳にするようなことになりますとね」

船長「貴方も気難しいところがおありだし、また、愛しておられるだけに、不愉快に思われるかもしれないが、どなたが立腹されようと、何事も有り体に申し上げるのが私のやり方なのですよ」

貴公には想像出来ないことだろうな、ベルフォード。あの悪党がどれほど勇ましい様子をしてみせたのか、そして、どんなに一人前の顔をしてみせたのかはな。

船長「委細についてお話しくださるのが適当だと、貴方のほうでそのようにお考えの時には、若いお方、当方でも、あのように天晴な淑女のこの早まった行いにつきまして、もっと貴方のお気持ちに適うような言葉を探し出してまいりましょう。小生といたしましては、ご覧のとおり、親友ジョン・ハーロー氏の名代ということでして、忌憚のないところを申し上げておりますが、氏がこの場に居合わせました場合には、同じようになさるだろうと思うのです。だが、お詫びいたします、ラヴレース殿。赤面しておられますね、貴方は。慎みのある人間が打ち明けられずにいる秘密を詮索いたしますのは、慎みのある人間に似つかわしいことではありませんからね」

俺は赤面したわけではないのだよ、ジャック。だが、このお愛想を撥ねつけたりはせずに、うつむいてみせたのだ。婦人たちのほうでは、俺の内気なところがお気に召したようであったが、ただ、ベヴィス未亡人は、その点で俺を褒めるというよりも、むしろ笑いものにしたがっていたのだ。

船長「この方策に踏み切られた原因が何であれ（〈逐電〉などとは二度と呼ばないことにいたしましょう。そのような不快な言葉では、貴方の感じやすい心を傷付けてしまいますからね）、前回伺いました際に目の当たりにいたしました、お二人の間の愛情溢れるお振舞いを思い起こしますにつけ、驚きの気持ちを表さずにはいられないのです。以前、口にしておられたように思うのですが、〈度を越した愛情〉というやつですな。しかし、ひとつ言わせていただけるなら、〈度を越した愛情〉が喧嘩の原因とは奇妙ですね。ご婦人方でしたら滅多に　…　」

ラヴレース「おやおや、船長　…　」と、俺は顔を赤らめようとした。

婦人たちのほうでもそうしようと努めていた。そして、赤面するのは連中のほうが慣れていることもあり、上々の首尾を収めていた。実際、ベヴィス夫人は顔色が燃えるように赤いし、いつも赤面しているのだよ。

ローリンズ嬢「気取っていても意味がございませんので申し上げますが、二階のご婦人のほうでは、結婚を否認なさっているも同然なのです。そのことは貴方様もご存じですわね」　そう言うと、彼女は俺のほうを振り向くのだ。

船長「結婚を否認しておられるというのですね。何ということだ。それじゃあ、親友のジョン・ハーロー氏をすっかり欺いていたことになりますね、私は」

ラヴレース「可哀相な女ですよ。だが、妻の正直さに疑いを挟むような真似は止めましょう。どんなことがあろうと、故意に虚言を弄するような女ではないのです」

これでまた、俺は連中全員のお褒めに与った。

ラヴレース「可愛い女ですよ。自分では否認するのが当然と思っているのです。貴女はご存じですね、ムーア夫人。ご存じでしょう、ローリンズさん。私の誓いについて、二階で貴女たちに打ち明けました点は　…　」

俺はうつむき、そして、前にも一度やってみせたことだが、ダイヤの指輪をクルクル回していた。

ムーア夫人は横目を使い、言及された事柄については相棒だということで、ローリンズ嬢に流し目を送っていた。

ローリンズ嬢は俺同様にうつむいていた。瞼が半ば閉じているのだが、まるで、嗅ぎタバコ入れに思いを馳せながら、主の祈りをブツブツと唱えているみたいなのだ。しっかり結んだ口のせいで、鼻と顎の間が長くなったようにも見えるのだよ。

彼女を見ていると、オクスフォードの信心深いフェザーストーン夫人が心に浮かんできたよ。この夫人の二人の妹を見物に行ったセントメアリー教会で、並み居るグロテスクな連中の中から、かつて貴公のために選び出してやったあの女のことだ。あの女は目を閉じていたが、両目を開けたままでは、自分の心を信用するわけに行かなかったからだよ。そして、次に来るのはだれだろうかと、ほんの半分だけ瞼を持ち上げ、好奇心が満たされると、再び瞼を閉じていたというわけだ。

ベヴィス未亡人は、秘密でも探り出そうとするみたいに、じろじろと見ていた。

船長のほうはいたずらっぽい顔をしてみせたのだが、まるで秘密はほぼ握っていると言わんばかりだった。

恥ずかしげに黙り込んでいたムーア夫人がようやく口を開いた。夫人によると、ラヴレース夫人の振舞いは、あのハウ嬢のお節介と、お身内の方々からの厳しい仕打ちによる以外、他には適切な説明のつけようがないし、また、それらのため、時々夫人の精神にわずかな変調が起こるようなことも十分に考えられる話だ、というのだな。そして、嵐が起こったその時に、俺は腹を立てるのではなく、むしろ嵐に身を任せているわけだが、それは大変に思いやりのあることであると付け加えていた。

「でも、殿方に申し上げますが」と、ベヴィス未亡人が口を開いた。「そんなふうにしてくださる夫なんて、千人に一人もいないでしょうね」というのだよ。

俺は、この会話のいかなる部分も妻の耳に届くことのないように頼み、さらに一層恥ずかしげな顔付きをしてみせた。妻の大きな欠点というのは、正直な話、デリケート過ぎるところなのだから、とだよ。

船長が周囲の連中に流し目を送り、そして、ロンドンで俺が漏らしたヒントから（例の度を越した愛情のことだ）、また、先のやり取りからも、われわれは床入りを済ませていな

いものと推測して間違いないように思う、などと言い出すのだ。

あゝ、ジャック、そこでどれほどはにかんで見せたことだろうか、貴公の友は。あるいは、そう見えるよう努力したことか。ムーア小母さんがどれほど取り澄まし、ローリンズ嬢がどれほど気取ってみせたことだろうか。一方、貞淑なるベヴィス未亡人は、臆することなく辺りを見回しているのだ。口元こそ含み笑いだけだったが、その目は心から笑っていたよ。そして、居合わせた者すべての目から笑いを誘い出そうとしているようだった。

船長のほうでは、もしもそのとおりなら、俺はフェニックスにも類した希有の人間だと言っていた。そして、一両日中には、万事が円満に解決することを希望せずにはいられないし、そうなれば、こう言って構わないわけだが、彼女の伯父に向かって、われわれの結婚式に出席したと言明する喜びも得られることになるだろう、と言うのだよ。

婦人たちも揃って同じ願いを抱いている様子だった。

「あゝ、船長。あゝ、ご婦人方。同じような考えになってくれるよう、愛する妻の心を動かすことが出来るなら、どんなに幸せなことでしょうか」

「そうなれば、大変な難問が目出度く解決することになりましょうね。それに、早速にも今夜をその楽しい夜にして何故いけないのか、私には分かり兼ねますわ」と、ベヴィス未亡人が言っていた。

船長は軽蔑したような笑みを俺に向けていた。われわれがこれまで〈おママゴト〉に興じていたのは明らかだ、と言うのだよ。こんな気紛れに甘んじていられるという俺のような人間は、とてつもないほど奥方を大切にしているに違いない。しかし、敢えて一言申し上げたいことがある。つまり、はにかみ屋の若夫人たちが、特にこの点に関し、どんなに自分たちの思いどおりにしたがるとしても、それは夫にとっては非常にまずい出だしということになる。というのも、それでは、花嫁が夫に対して握っている支配力の極めて明白な証を、彼女に向かって示すことにもなるからである。それに、請け合っても構わないのだが、そんなふうに機嫌を取ってもらったからといって、それだけ一層夫を大事にするような女性の話はかつて聞いたこともないし、むしろその正反対である。また、何故そうなのか、いくつか理由を並べることも出来るのだ、などと言っていた。

「いや、いや、船長、ご婦人方の前ではもうこの話は止めにしましょう。自分がひどく滑稽に思えてしまうのですよ」と、恥ずかしげな、顔を赤らめようと努める仕草で肩をすくめながらだ」。甘さゆえの過ちに対しては、十分に罰を受けたのです」

ローリンズ嬢が扇子を手に取り、しきりに顔を隠そうとするのだ。察するに、即座に顔が赤くなってくれなかったからのことだろう。

ムーア夫人は一つ咳払いをすると、下を向いた。そして、その仕草によって、赤面するのは諦めていた。

一方、陽気な未亡人は声を出して笑い、船長のことをヒューディブラスの純正哲学者の一人だと褒めたたえ、次の詩句を唱えていた。

その男俗事については知っていた、そして、純正哲学者の
知恵たるや、精々のところがそれくらい（一八）。

これを聞いたローリンズ嬢は、本当に顔を赤らめることになった。「あら、あら、ベヴィ

ス夫人たら …」と彼女は叫んでいたが、察するに、まるっきりの無学と思われるのが嫌だったからなのだろう。

結局の話、俺たちの玄人の母さんから素人のムーア夫人に代わったのも、悪い交替ではなかったと思い始めているところだ。それに、婦人たちにしても俺にしても、また愛しの君にしても、実際に意図しているのは誰もかれも皆同じことなのだ。われわれが異なっているところといえば、目指した目標に到達する際のその態度だけなのだよ。

手紙　十三
ラヴレースより［承前］

そろそろ、トムリンソン船長の来訪を妻に知らせても良い頃合になっていた。女中の話では、これこれの紳士は［と、姿格好を説明しながら］客間にお見えではないかと、奥様が尋ねておられたとのことだから、なおさらだろう。

ムーア夫人が二階へ上がって行き、俺に成り代わって、われわれに耳を貸してくれるよう彼女に頼んでくれた。

だが、夫人が戻って来て、今は失礼させていただくようトムリンソン船長にお願いしたいという、我が愛しの君の希望を伝えていた。ひどく具合が悪いのだそうだ。すっかり気力が萎えてしまい、とても船長と話し合える状態ではないし、横にならなければいけないというのだよ。

俺は苛立ちを覚えたし、最初のうちは、ひどくうろたえてしまった。船長もまた苛立っていたのだよ。それで、船長のことがあるので、俺の心配のほうが一層大きかったわけだが、その点は貴公にも信じてもらえることだろう。

彼女が疲労困憊していたことは認めよう。朝方の興奮状態が体に障ったに違いない。それに、あまりにも激しい憤り方だったわけだから、昂ぶった気持ちが鎮まった時、我が身の無気力さに気づくのは、なおさら驚くに当たらないのだ。沈み込む度合いが昂ぶる度合いと比例するものなら、大変な無気力さと言って構わないだろう。何しろ、彼女は普通の人間の水準を越えた高さへと引き上げられていたわけだからな。

それでも、船長は自分の名で伝言を届けさせた。一杯のお茶を共にしてもらうべくお目通りを許していただけるなら有難いし、もしも可能なら、お傍に伺うよう午前中を明けるためにも、ロンドンに赴き、ある避けられない仕事を急ぎ片付けて来たい、というのだ。

だが、彼女のほうでは激しい頭痛を理由に持ち出して来たのだよ。そして、ムーア夫人がその申し立ての正当なことを認めていた。

俺としては、船長に一晩泊まってもらうつもりだったのだ。彼に敬意を表してということもあるが、俺自身、新たに借りた部屋に住み込む考えでいるわけだから、その前置きにする意味合いもあったのだよ。ところが、彼にとっては時間が極めて貴重であり、寝るまで留まっているわけには行かないというのだ。

実際の話、朝のうちに戻ってくるというのは、自分にとっても極めて不便なことだ、と船長は言っていた。ただ、この不和を癒すために自分に出来ることなら、そのすべてを行いたい気持ちでいるし、それも、俺と奥様のためだけのことではなく、親友ジョン・ハー

ロー氏のためでもあるが、この誤解がどんなに深まってしまったかについては、絶対に氏の知るところとなってはいけないことだ、というのだよ。船長としては、それゆえ、婦人たちや俺ともお茶一杯だけしか付き合えないとのことだった。

そして、言葉どおりに、お茶を一杯飲み、俺と内々の話を少し交わした後、船長は大急ぎで立ち去ったのだ。

その間、船長の従者がムーア夫人の召使たちを相手に、船長の立派な人柄のことを吹聴していたのだ。そして、これがベヴィス未亡人によって報告されたものだから（彼女はお高くとまった女などではなく、叔母の召使のだれとでも、俗に言う「まあ、ちょうど良かったわ、あなた」といった言葉を交わす間柄なのだ）、船長は皆の間で〈上品な〉紳士、〈思慮深い〉紳士であり、〈分別〉も〈教養〉もあるお方になったというわけだ。そして、そんなにも大きな仕事を抱えているのに、また戻らねばならないとはお気の毒な話だ、ということになっていた。

「誓っても良くってよ」と、ベヴィス未亡人が囁いたが、皆に聞こえるように、大きな声だった。「この立派な殿方にお会いするのをだれかさんがお断りするのは、頭痛もあるのでしょうが、気紛れもあるのだわ。あゝ、神様、だれかさんたちもそのお気持ちがおありなら、とても幸せになれますのにね」というのだ。

「この世に完全無欠な幸せなどありませんよ」と、俺が言った。極めて真面目に、溜め息交じりにだ。俺の耳に声が届いたことを未亡人に知ってもらわなくてはいけないからだよ。「たとえ、現実に不幸なことがあるのではなくても、不幸を作り出すことも出来ますからね。溢れんばかりの幸運からでさえもです」とな。

「本当にそのとおりですわ」「本当にそうですわね」と、二人の未亡人の言葉だ。「素敵なご意見ですわね」と、ベヴィス未亡人が言っていた。ローリンズ嬢は笑みを浮かべ、彼女なりの賛意を表していた。彼女が心の中で俺のことを「素敵な方」と呼んでいるように思えたのだが、彼女は道徳的所見の大の賛美者であることを公言していたからだよ。

船長に別れを告げ、再び婦人たちのところに加わり、腰を下ろしたと思う間もなく、ウィルがやって来た。そして、俺を呼び出すと、「やれ、やれ」と、ニタニタ笑いながら口を開いた。話そうとしていることからして、大きな態度も許されると言わんばかりの馴々しさだ。「取り押さえましたよ。グライムズ爺さんは掴まえました。アハハハハ … ロワーフラスク亭におりますが、ほとんどへべれけって有り様でしてね、閣下［と、あいつ自身も大して変わらない状態なのだ］。ほれ、奴さんの持ってた手紙ですよ。えーと、ハウのお嬢さんからのものです、ハハハハ … 」と、悪党は笑っていたが、手紙をしっかり握り締め、まるで、俺と取引をしようとでも言わんばかりだ。俺の苛立ちを誘い、また、お褒めにも与ろうというわけだよ。

殴り倒してやることも出来たのだが、あいつは胸のうちにあることを一切合切言おうとするのだ。「グライムズ爺さんの奴、あっしが手紙を持ってるのは知らんのですよ。なくなってるのに気づく前に、奴さんのところに戻らにゃいかんのです。ほんの数分間席を外す格好をしただけですからね。ただ、でも … 」と口ごもりながら、あいつはまた笑い声を上げ、「奴さん、帰るわけにいかんのです。グライム爺さんは待ってなけりゃいかんのですよ。あっしが戻って勘定を払ってやるまではね」と言うのだ。

黙れ、おしゃべり。にやけた悪党め。手紙だよ、手紙をよこすのだ。

あいつは、自分でもそう言っているわけだが、あのどえらくでかい口をすぼめ、手紙を渡してよこした。だが、頭を下げながらというよりも、気取ってみせるのだ。そして、ソーリングズ未亡人のところの臆病な雄鶏よろしく、コソコソと歩いて行ったが、大仕事をやり遂げた後とあって、喜々としているのだよ。そして俺が、封臘をくずすことなく中身を知ろうと［実は、急ぎ送られたものだから、封筒には入っていなかったのだ］、手紙を明かりにかざしている間中、あいつはそこに立ったままで笑い声を上げたり、首をすくめたり、足を揺すったりしているのだ。テカテカに光った顎を今撫でているかと思えば、親指で帽子をクルクル回したりする。また、俺に向かって流し目を送るかと思えば、頭を振り振り、「おや、おや、何とまあ」などと時々叫んでいるのだよ、この悪党は。

こいつは本当に悪さを楽しんでいるのだ。宿願を達成した際に俺が得る喜びにも優る喜びを、こいつは見出しているのだよ。いつだってこういう連中のほうが、主人たちよりも幸せなものなのさ。

封印がくずれ落ちるまでこの手紙を揉んでやろうかと、俺も一度は考えてみた。新興の家族というのは［ハウ嬢の家は旧家ではないのだ］派手な封印を好むのだよ。それに、グライムズ爺さんのズボンのポケットの中でしわくちゃになった、というふうに考えてもらえるかもしれないしな。だが、嬉しいことには、そんな汚い手口を使っているように疑われること、そして、実際に用いることさえも免れたのだ。というのは、そんな手を使わずとも、次に挙げるだけの内容を（俺の目的には十分なものだ）、急ぎ暗号で書き留めることが出来たのだよ。折り目のため、つなぎの単語いくつかだけは読み取れなかったが、それらについては、俺のほうで角括弧をつけて補っておいた。

貴公も知ってのとおり、我がハーロー嬢は以前、自分の名をリティシャ・ボーモント嬢に変えたことがあったよな。今度はまた別の名なのだ、ジャック。実は、この手紙はハリアット・ルーカス夫人の宛名で彼女に送られて来たのだよ。見てのとおり、彼女も結構ワルだということを知った次第だ。

あの悪党の手から［逃れられました］こと、心の底からお祝い申し上げます。一部始終の詳細につきまして［心待ちに］いたしておりますわ。［母は］外出中です。でも、今にも戻ってきそうですので、［貴女の］お使いの人にはすぐに発ってもらいました。時を移さずに、タウンゼンド夫人と［接触を図るよう努力いたします］。一両日中に夫人に会えましたなら、その時に詳しくお便りいたします。［それはそうと、私］、コリンズさんの手で昨日お送りしました手紙のことが気掛かりでなりません。貴女が逃げ出された後で、ウィルソンさんのお宅へ［置いてきたに違いないのです］。［非常に］大切な用件なのです。あの悪党の手に渡っていないよう［願っております］。［そんなことは］絶対にあってはなりません。すぐに届けてもらうよう、使いを出してください。そうなさっても、貴女の居られるところが見つかる［ようなことにならない］のでしたらね。もしも、あの男の手に渡っているのでしたら、その旨を［即］刻、何かの方法でお知らせ願います。渡っておりません場合は、その必要はございません。

六月九日

いついつまでも貴女の

A. H.

あゝ、ジャック、この〈横取り〉のお陰で、どれほど心が安らぐことか。奴を手紙と一緒にグライムズ爺さんのところへ送り返し、それ以上深酒はするなと命じておいた。奴の言い方では〈ほろ酔い加減〉ということだが、そこまでは奴も認めていたのだよ。

「馬鹿者めが。今夜、ムーア夫人の女中の一人に言い寄る予定じゃなかったのか」　俺は言ってやった。

「お慈悲を願います、旦那様。素面になりましょう。それを忘れてましたよ。ただ、グライムズ爺さんの奴、やたらと手強いもんで　…　奴をつぶすなんてとても無理だと思いましたよ」

「行くんだよ、ろくでなし。グライムズ爺さんを寄越すんだ。それも、馬でだ。玄関先までだぞ」

「そのつもりではおります　…　閣下　…　奴を鞍に乗せることが出来れば　…　そして、奴が跨がっていられるならですが　…　」

「それから、言い含めておくのだ。馬から降りたり、だれかに会ったりしたことはなかったとな　…　」

「承知の上ですって、旦那様」と、俺の胸の内は分かっていると言わんばかりに、馴々しく頷いていた。こうして悪党が出掛けて行き、俺のほうは、客間の婦人たちのところへ戻ったというわけだ。

十五分ほどして、グライムズ爺さんが馬でやって来たが、鞍の猪の首に向かって、今こちらへ揺れたかと思うと、次にはあちら側へと体が揺れていた。そして、それ以外の時には、奴よりは素面でいる生き物の頭に自分の頭をくっつけているのだよ。

俺はグライムズ爺さんに話し掛けようと骨折ったりせず（もっとも、爺さんが携えてきたものの中身を知りたいものだと、婦人たちの前で願って見せはしたよ）、逆に、使いの者が戻ったことをすぐ妻に知らせてもらいたいと頼んだのだが、これが連中の目には好ましく映ったわけだ。

彼女は飛ぶようにして降りてきたよ。ひどく頭痛がしていたのだがね。

あゝ、俺はどれほど祈ったことだろうか　…　彼女が恩知らずにも伯父の友人に掛けた苦労に対し、復讐してやる機会をだよ。

彼女は自らの手でグライムズ爺さんから手紙を受け取り、奥の客間に引き下がって読んでいた。

間もなく彼女は戻って来て、馬に跨ろうとして大騒ぎをしている爺さんのところへ行くと、「さあ、お駄賃ですよ、あなた。遅かったのですね。ところで、どなたかに急いでロンドンまで行っていただくのには、どうしたら良いのでしょうね。見たところ、貴方には無理ですからね」と言うのだ。

グライムズ爺さんは金を受け取り、帽子を脱ごうとして落としてしまった。帽子を渡してもらうと、馬で去って行ったのだが、奴の目は寒天みたいで、窓越しに見たところ、すっかり据わっているのだ。そして、言葉もない有り様といったところで、口をついて出るのはしゃっくりばかりだった。俺の犬野郎も、〈手強い〉グライムズ爺さんとそんなに深く付き合うことはなかったのだよ。だが、あの悪党、爺さん相手に王様気分だったのさ。

奥様はムーア夫人に問い合わせた。費用のことは問わないという。人と馬を雇ってもらえるだろうか　…　ペルメルのウィルソンという人のお宅だが、彼女宛に預けられている

手紙を取りに行ってもらうだけのことだ、というのだよ。
近所の貧乏人が一人雇われた。その男のために馬も確保された。男はいろいろと指示を受けていたよ。
我が愛しの君が降りて来た時、約束を取り付けようとして骨折ってみたのだが、無駄だった。察するに、頭痛がぶり返したのだろうな。彼女も、他の女たちと同じことで、具合が悪くなるのも良くなるのも、思いのままなのだよ。
彼女の狙いが見えた、と俺は思ったね。決心を固める前に、解明のための光明のすべてをハウ嬢から受け、それに則って手段を講じようというのだよ。
彼女は二階へ上がって行ったのだが、受け取ってくるよう使いを出した例の手紙について、強い焦りの気持ちを表していた。そして、俺が召使のだれかをロンドンへ遣わそうとしたかどうか教えてくれるよう、ムーア夫人に頼んでいた。例の手紙を入手しようとしてというのが、察するに、彼女の恐れた点なのだろう。しかし、その点に関しては、彼女もすっかり安心していて良かったのだろうが、ただ、立派なトムリンソン船長が（彼女の使いより早くロンドンに着くわけで）例の重要な手紙をあそこに置いて行くことを知っていたとしたら、おそらくそうも行かないだろうな。その手紙が彼女の心を宥め、歩み寄ってくれる助けにもなるはずと、俺は願っているのだよ。
あゝ、ジャック、ジャック、俺が見返りもなしにここまで苦労を重ねたり、何度も悪漢呼ばわりをされたりしているとでも思うのかな、貴公としては。
しかしだな、世界でも最高の女性を手に入れようというのだよ。骨の折れることではないのかな。それも、ほんの一時的なことだけではないのだ。一生の間なのだよ。争点となるのはただ一つ。彼女を手に入れるのは俺自身のやり方でなのか、それとも、彼女の流儀に従うのか、ということだ。
だが、俺のために貴公が震え上がってしまうのは分かっているのだ。「何だと、ラヴレース、あの手紙を彼女に渡そうというのか。貴公の信用を台無しにしてしまうのは避けられないのだぞ。母さんのことも、母さんのところの性悪女全員もだよ。それでいて、改心するつもりはないというのか。結婚する気持ちもないのか」とな。
辛抱するのだよ、未熟者めが。ご主人様を信頼出来ないのかね、お前さんは。

手紙　十四
ラヴレース氏より［承前］

俺は新たに借りた部屋へ赴き、書き物に取り掛かったが、いつもどおり暗号でだ。居所は万全に確保したつもりだったのだよ、俺としてはな。ところが、残酷なお嬢さんは、俺があそこに部屋を取るつもりだと知って猛烈な勢いで反対を表明したため、俺も従わざるを得なくなり、ムーア夫人が勧めてくれた、十二軒ほど離れたところにある別の下宿で我慢することになったのだよ。それで、俺が手に入れることの出来た利点としては、妻には知られないようにして、また、気紛れな行動を恐れてだが、ウィルがあの家に泊まるということだけなのだ。
ムーア夫人としては、実際、われわれのどちらに対しても、不便を強いるようなことは

したくなかったのさ。だが、俺にそれ以上のことは何一つとして許されるべきでない、というのがローリンズ嬢の考えだったのだ。ただし、ムーア夫人は認めていたのだが、あのように拒絶したりするのは、仮にも俺が夫なのであれば、夫に対する奇妙な虐待行為に当たる、というのだな。

ローリンズ嬢については、このお返しとして、是非とも痛い目に遭わせてやろうという気になったよ。ローリンズ嬢に会いに来てもらいたいものだな、ジャック。彼女を気に入ってくれるようなら、俗に言う「何の苦もなく」というところだが、貴公のためにモノにして見せるぞ。

ベヴィス未亡人は、実際、俺のために粘り強く弁じてくれていた［無実の人間、あるいは、不当に苦しめられている人間には、至るところに共鳴者が出来るものなのさ］。未亡人の言では、どこかの奥様たちを相手に辛抱を重ねるのは、さらなる辛抱を余儀なくされることになるというのだ。そこで俺も、従順な人間というのは、いつもつけ込まれてしまうのですよと、溜め息を交えながら感想を漏らしておいた。そして、心の中では、この高慢で強情な美女に対する復讐を改めて誓った次第だよ。

九時頃のことだが、ハウ嬢の水曜日の手紙を携え、二人目の男がロンドンから戻って来た。どうやら、手紙を預けた際、コリンズはその手紙を無事に、そして、早急にリティシャ・ボーモント嬢自身の手に届けてもらうよう頼んだらしいのだ。ところが、ウィルソンのほうでは、彼女も俺もロンドンにはいないものと思って［われわれの諍いのことをあの男は知り得ないはずだと、貴公はそう考えるに違いないな］、われわれのどちらかに直接渡すためだが、われわれが戻るまでは大切に保管しようと決心し、そして今、彼女の使いに委ねたのだよ。

以上の点が彼女に伝えられた。お陰でウィルソンは、疑いのないところだが、彼女の覚えめでたいことになるだろう。

彼女は大層待ち焦がれていた様子で手紙を受け取ると、ムーア夫人とベヴィス夫人がいる前で［ローリンズ嬢は帰宅していたのだ］もどかしげに封を切った［彼女がそうしてくれたのを、俺は嬉しく思っている。ただ、すべて順調だったものと信じているのだよ］。そして、次のようなことを話していたのだ。どんなことがあっても、手紙が俺の手に渡るようなことになったりしては困る。手紙の書き手である大切な友達のためだが、その友達が手紙のことを非常に心配している便りをくれたから、というのだ。

「〈大切な友達〉とおっしゃるのですからね」と、俺にこの話をしてくれた際、ベヴィス夫人が繰り返していた。「人の仲を裂くような、こういった人たちというのは、その正体が暴かれますまでは、いつだって〈大切な友達〉と思われているものですわ」とだよ。

未亡人に言わせると、俺は夫人がこれまでに目にした中でも一番洗練された紳士なのだそうだ。

前から気づいていたことだが、時々熱いキスをしてやると、すごく喜んで受けてくれるのだよ。

自分に出来る悪さをすべてやってのけるようなことになれば、俺もすこぶる付きの悪党になることだろうな。だが、あまりに簡単な獲物は質の悪い放蕩児に譲りたいと、以前にもましてそう思っているのだ。そして、この場合、これほどの不屈の努力へと俺を引き込むものとして、困難さ以外に（令嬢は天使ではあるが）何があるというのだ。そして、今

回の件では、もう心は決まっているのだよ。征服、さもなくば死、とな。

∴　　∴

この感心な未亡人と今別れたところだ。俺の新しい下宿を訪ねてくれたのだよ。俺としては、この難事件の成り行き次第では、さらに夫人のお世話にならなければいけないようにも思っていることを話した。万事めでたく解決の暁には、かなりの贈り物を考えているが、そうするのを許してもらいたい、ともな。ただ、次の点は頼んでおいた。つまり、今後二人の間のことは気に留めないようにしてほしいが、叔母上に対してもそのとおりである。というのも、俺の見るところ、叔母上はローリンズ嬢の言いなりであるが、ローリンズ嬢は未婚の淑女でもあり、夫婦間の事柄の適切さや妥当さについて、我が親愛なる未亡人のようには通じていないのだから、とだよ。

「おっしゃるとおりですわ。どうしてあの人などに分かりましょう」と、ベヴィス夫人が言っていた。分かっておりますと、したり顔をしていたが、何一つ分かってはいないのさ。ただ、彼女としては、贈り物は一切望まないというのだよ。夫婦の和解に貢献出来るのであれば、そして、仲を裂こうとする者たちの目論見を挫くことが出来るのなら、それだけで十分である。ハウ嬢のように嫉妬心の強い者がラヴレース夫人の家出を喜んでいるのは疑いないし、嫉妬心に愛情が絡んだのでは、手に負えない話である、というのだ。

ご覧のとおりなのだよ、ベルフォード。俺と俺の新たな知り合いであるこの未亡人との間では、実に気持ちよく事が運ぶのだ。今少し親密の度を深めた暁には（夜にはあの家を追い出されるのだが）、辺りすべてが寝静まった頃に、彼女のほうで我が妻への深夜の訪問を工面してくれるかもしれないな。

策略に長けた大胆不敵な男と共にいったん試合場に入ったからには、女にとって安全な場所など、どこにあるというのだ。

だが、このハウ嬢の手紙についてはどうなのだ、と貴公が言い出しそうに思うな。

俺のために気を揉んでくれることは分かっていたのだよ。だが、貴公に話してなかったかな。すべてに亘って予防手段を講じてあるということをだ。日頃から封臘は無傷のままで残し、封筒も元のままに保つよう心掛けていることをだよ(ア)。それじゃあ、簡単だったのではないのかな、と貴公は考えるだろうな。長いものから短い手紙をでっち上げることなどは、また、実際の言葉を模写することなどは、とな。

まったくの話、実に見事な段取りだったものだから、俺の手中にあったのを疑われることもなく、俺が関わっていることに気づくのは容易でなかったのだよ。我が愛しの君の筆跡であったのなら、あれだけの長さに亘って模写するなどということは無理だったことだろう。彼女の繊細で一様不変な心は、文字の綴り方そのものにも現れているのだ。ハウ嬢の書体も汚いものではないが、それほど均一で整然とはしていない。あの小悪魔の生来の性急さが彼女の指を急き立てるものだから、おそらく最初からのことと思うのだが、彼女の筆跡にも、また、他の点に関しても、気紛れで発作的なところや、あの風変わりな特徴が備わってしまうのだよ。そしてこれは、強く男性的な顔の輪郭と同様、ペンにしろ絵筆

(ア) 三十九頁を参照のこと。

にしろ、見落とすことの出来ないものなのだ。

俺の許しを得たハウ嬢が、美しき友に向かっていかなる事柄を筆にすることとなったのか、拝んでみようという気持ちはあるかな。それなら、ここでひとつ読んでもらおう。この前の水曜日に来た彼女の手紙からの抜き書きなのだが、何ヶ所かは俺自身が加筆している。加筆した部分には傍線を施しておいた。

大好きなお友達へ

ずいぶん長いこと音沙汰がなかったと、きっと貴女はそのようにお考えでしょう。でも、最後になりましたもの以降、別々の折に二通の便りに取り掛かりましたし、その都度、大変な分量を筆にしてもいたのです。それも、勿論のことですが、十分に元気の良いものでした。一緒におられるあの憎たらしい破廉恥漢には、すっかり腹が立ってしまいましたからね。とりわけ、先月二十一日付のお便りを読ませていただきました後はそうでした。

一通目につきましては、タウンゼンド夫人との一件の進捗状況を何かお知らせ出来るようになりますまで、封をせずにおく考えでした。お会いするまでには何日かございましたので、その間、すでに筆にいたしましたものを読み直して見るゆとりが得られましたので、これを中断いたしまして、もう少し熱っぽいところを抑えた文体で書くのが適当と考えたのです。貴女のことですから、私の用いましたいくつかの不作法な言い方［そのほうがお気に召すのでしたら、〈呪い方〉と申しましょう］のことで、きっと私を非難なさったことでしょうからね。そして、二通目もかなり筆を進めておりました頃、あの男がモンタギュー嬢からのお手紙を見せてくれましたことや、あの男の態度が改善されましたこともあって、貴女のお気持ちに変化が生じ、貴女の見通しも変わってまいりましたので、こちらのほうも中断することにいたしました。そして、間もなくすべてが何らかの形で決着を迎えるものと確信いたしておりましたので、このようにどっちつかずの状態では、もう一度筆を手にいたします前に、お二人の間の出来事の成り行きを見守って見ようと考えたわけです――

ここで中断を強いられてしまったのです。自分自身のことですのに、あまりにも思いのままになりません。母が(ア)絶えず行ったり来たりしているのですが、まるで私が色男への手紙でも書いているみたいに、見張っているのです。これまでの書簡に目を通しているだけなら、どういうわけで［と、母が私に訊くのです］閉じ籠もる必要があるのか(イ)、というのです。と申しますのも、母が詮索をしにまいりますと、私のほうではそれを口実にしているからなのです。母も好奇心に駆られてのことなのでしょうが、その好奇心は楽しみよりも苦しみをもたらすもののようで、まるで刃物みたいに顔を尖らせております。主のお許しを願いつつ申しますが、今度入ってまいりました時には、母を怒鳴りつけてしまうだろうと、心からそう思います。

(ア) 二十四頁を参照のこと。(イ) 二十六頁。

貴女にも大目に見ていただければと思いますわ。母が許すのは当然でしょう。私のことを父親譲りの娘だなどと言っているからです。それに、私のほうでは母親似だと確信しているからでもありますわ。

私、誓って申し上げますが、この悪辣な男には貴女を辱めようと目論むことも出来たのではないかと、時々そんな考え方になるのです。この男のこれまでの振舞いを振り返って見ますと、そのように思わずにはいられなくなります。もしもそのとおりだといたしますと、何という悪者なのでしょうね。でも、あの男も今では、そのような考えは捨てたものと願っておりますし、また、心からそのように信じてもおります。この両方の考えにつきまして、その根拠をお話しいたしましょう。

まず第一にはこうです。かつてあの男には、それが可能ならばの話ですが、貴女の不意を突きたいという考えがあったのだということです。私の考えますところでは(ウ)、プライドの高さ、復讐心、そして、踏み均されていない道を辿りますのを喜びとしている点、それらがこの札つきの放蕩児の性格の中心的な要素なのです。あの男は、貴女だけは別ですが、お身内の方たち全員を憎んでおります。でも、その愛においては野蛮人なのです。あの男のプライドの高さ、そして、あのいやらしい性質の合間に点在する、わずかな称賛すべき性質から得た声望によるのでしょうが、目の判断を頼り、見分ける力は持たず、自惚れが強く、自信過剰なところのありますわれわれ女性から、あまりにも良い待遇で迎えられることが保証されていたものですから、たゆまぬ努力を続けたり、忠実な態度を身につけること、そして、自分の御し難い感情を克服することには、少しも意を用いようとしなかったのです。

あの男にいたしますと、お身内の男性全員に対して、そして、女性のうちの一人に対しましては、敵意を抱いて当然なちょっとした理由があるのです。貴女に向かって、また、自分自身の身内に対しても日頃から示しているとおり、利得よりもプライドのほうを優先させる男だということです。結婚嫌いを公言して憚りません。女たらしとして悪名の高い男です。権謀術数に長けていて、それを得意にもしているのです。この男は、自惚れが強いからなのですが、自分の愛の力に抗し切れる女は一人もいないと思っているものですから、報いられていないように考えております熱情に対して(エ)、罠に捕らえられたライオンみたいに争って見せましても(オ)、一向に不思議なことではないのです。従いまして、あのような恥知らずにとりまして、結婚に対して持っておりました以前からの偏見に負けてしまうとか、いつもあの男の心を真っ先に捉えておりました復讐への情熱に流されるようなことが可能になったといたしましても、おそらくそれは、信じ難い話ではないということになりましょう(カ)。

そして、ここから説明をつけられそうに思うのです。あの男の度重なる引き延ばしのことや、焦れったいやり方、また、あの男が一つ屋根の下で寝起きするのを貴女が我慢なさるように仕向けたこともそうですし、その家の人たちに対して、貴女をあの男の妻と思わせるようにしたこともあります。また、あの男の放蕩仲間に貴女を引き合わせた点や、べ

(ウ) 二十九頁。(エ) 三十一頁参照のこと。(オ) 同所。(カ) 同所。

ッドを共にしていただくよう、あのパーティントン嬢を貴女に押しつけようとしたこと等々についてもです。

逆の意見、つまり、あの男も今は、自分に出来るかぎりの償いを貴女のためにする決心でいるという考えの根拠といたしましては、次の点がございます。つまり、あの男の身内の方たちがことごとく(キ)、熱心に貴方の肩を持とうとしている姿は、あの男の目にも入るということ、それに、あの忌まわしい破廉恥漢は貴女のことを愛していることです。ただし、ヘロデ大王が妻のマリアムネに注いだような愛情によってです。それから、調査の結果事実と判明したのですが、弁護士のウィリアムズさんは（お仕事の方面で名の通った人であることは、ヒックマンさんもご存じですが）、事実上、贈与財産証書を仕上げたに等しい状態であり、二通の草稿が作成され、そのうちの一通は明らかにこのトムリンソン船長当人に送付の予定であるということ、また、結婚許可証取得のための努力が、実際に一度ならず行われてきたようですし、これまでのところは、ラヴレースにとっては無念であり、また同時に、失望の種にもなっているのでしょうが、難色が示されている模様なのです。母の代理人をしております者が、あの恥知らずから依頼のあった代理人と非常に親しいこともありまして、内緒でこの情報を手に入れたのです。そして、その人は、遠回しにですが、ラヴレース氏は大変なお金持ちであるから、こういった難問もおそらく乗り越えられるはずだと言っているのです。

以前に一度、トムリンソンのことを詳しく調べて見る決心をしたことがございます。もしもお望みでしたら、これからでも、遠回しにですが、伯父様ご贔屓の家政婦に探りを入れることも出来ましょう。

トムリンソン船長の力で実行に移された約束のことをホッジズ夫人は一切ご存じないものとして、事が進められる予定なのは承知いたしております(ク)。でも、伯父様もお年を召しておられます(ケ)。年寄りというのは、愛人が自分たちよりも若い場合には、負い目があるように思いますし、どんなことでも伏せておくのは滅多に出来なくなるものです。とは申しましても、その必要はないかにも思います。貴女のご説明ですと、トムリンソンは大層善良な人物ですし、立派な紳士です。その人がペテンを働くことによって叶えられます事柄というのは、もしもラヴレースが不届きな考えを抱いているのでしたら、その目的に必要となる点をはるかに越えておりますからね。従いまして、伯父様に対するヒックマンさんの働き掛けのことや、お母様へのノートン夫人の働き掛けの件につきまして（私が満足に思いますのは、あの卑劣な手先のジョゼフ・リーマンが、その具体的な事柄の一部を、さらに悪辣な雇主に打ち明けることが出来ずにいたという点です）、貴女に知らせてくれたことがございますし、結婚式の日取りを決めてほしいと、伯父様の名において、しきりに求めていたこともありますが、このようなことをいたしましても、あの男が目論んでいるどんな邪悪な目的にも沿わないのです。それに、伯父様のご提案についてあの男が書いていることもありますが、これは、同じ屋根の下に住まわれるようになった時から、貴女たちは結婚なさっていたのだと考えてもらうためなのです。しかも、ヒックマンさんが伯父様を訪ねた時に合わせようとしてのことです。式の時には、信頼の置ける人に同席してもらうように主張しておりますし、それも、伯父様のご指名によるものです。こういった点

（キ）三十二頁から次頁にかけて。（ク）二十七頁。（ケ）二十八頁。

からいたしますと、あの男もやっと今では信義を重んじる気持ちになったのだと、そのように私は確信しているのです。

でも、あの男の側から予期せぬ遅れが少しでも出るようでしたら、シンクレア夫人が住んでいるその街路のことを、それから、フレッチヴィル夫人のお宅がある街路につきましても（そのことを以前のお手紙で触れておられたようには思えないのですが、ちょっと妙な話ですわね）、私に知らせていただきたいのです。お知らせいただけましたなら、二人のことを、また、トムリンソンのことも、詳しく調べて見るつもりです。そして、あの男から逃げ出された場合の避難所を（私の助言を受け入れても良いというお気持ちがおありでしたら）、すぐにもタウンゼンド夫人のところに確保して差し上げましょう。

でも、こんなにも順調に事が運んでおりますのに、そんな時にどうして私、過去のことを持ち出すような真似をして、貴女を悩ませたり困らせたりするのでしょうね。でも、あの男のほうから少しでも引き延ばしが行われるようでしたら、こういったことも貴女のお役に立つようになるかもしれませんわね。

でも、そんなことになって良いわけはないものと存じます。ですから、貴女が今なさるべきことと申しますと、あの傲慢不遜な破廉恥漢に対しましては、これまで掛けてこられた迷惑の記憶一切をあの男の心から追い払ってしまうよう振る舞われることですし(ヨ)、あの男の求婚も、結婚を約束した恋人からのもののように受け入れるようになさることなのです。これまであの男に取っておられたよそよそしい態度ですが、それを保とうといたしますと、取り澄ましているだの気取っているだのと、非難を浴びてしまいます。あの男にとりまして、突然の病は（そして、同じく突然に回復したわけですが）、あの男に貴女が好意を持っていらっしゃることを知る機会となったのです［残念ながら、貴女があの男を好いておられるのは知っておりました］。あの男は性質を一変させてしまったようで、愛情と優しさのかたまりですね。もう、争いはお止めになることです。お願いいたしますね。

とは申しながら、あの男にはとても腹を立てております。貴女のお体に加えた無遠慮な振舞いのことがあるからですわ(サ)。つけこんで来る男なのは間違いございませんから、何か防御手段が必要ですね。でも、実際の話、男はおしなべてそういうものなのです。それに、貴女は大変チャーミングな方ですし、しかも、あの男をそんなにも遠ざけて来られたわけですからね。でも、この件はもう止しましょうね。ただ、潔癖なのも度を越してはいけないということですわ。もうすぐのことなのですからね、夫婦となられますのも。トムリンソンからの手紙のことでやむなくあの破廉恥漢と再び同席なさった際には、どれほどの難儀をご自分から招くことになられたか、ご存じでしょう。

もしも、何の障害にぶつかることもないのでしたら、新たな疑惑の種に出くわすこともないのでしたら(シ)、世間体の点からいたしますと、あの男のものになられるのが肝心なことなのです。それに、伯父様が正しく判断しておられるわけですが、もっと前にあの男のものになっておられたのだと思われることが肝心です。それでも、一言述べさせていただきますが、こういった放蕩児たちがその悪事に対しまして、最低の女の人でさえもったいなさ過ぎますのに、女性の中でも最高の人を授かるというのが、考えるだけでも私には到底我慢のならない点だということです。

（ヨ）三十三頁参照のこと。（サ）第四巻の手紙五十四。（シ）三十四頁から次頁にかけてを参照のこと。

この長い手紙は、私の気持ちに添うために仕事の日を変更してくれるということですので、コリンズにお願いしてお届けいたします(ス)。貴女が表向きは今よりももっと好ましくない状況に居られました間も、ウィルソンさんを通した通信手段で、私たちの手紙が紛失したことは一度もないのですから、疑いもなく、これも無事に届くことでしょう。

ラードナー嬢が(セ)（お従姉妹さんに当たるビダルフさんのところで、貴女もお会いしたことのある人です）先々週の日曜、セントジェームズ教会で貴女のお姿を目になさったのです。教会にいる間、ずっと貴女から目を離さずにおりました。でも、貴女に向かって二度膝を曲げてお辞儀をなさいましたのに、一度も貴女の注意を引くことは出来ませんでした。礼拝式が終わり次第、ご挨拶に伺うおつもりだったのですが、貴女が結婚なさったのは疑いないものと思われたからです。それに、妙な理由もございました。貴女は一人きりで礼拝式へいらっしゃったのですからね。あの人に言わせますと、貴女がおられるところではいつものことなのだそうですが、皆さんの目が貴女に注がれておりました。このことがあったからでしょうか、貴女は先を急がれましたし、あの人よりドアの近くにおられたこともあって、あの人がお傍に近づきます前に、貴女は外へ出てしまわれたというわけです。でも、あの人は、貴女がお住まいにしておられる建物にお入りになるまで後をつけるよう、ご自分の下男に指示なさったのです。この下男は、待たせてあった駕籠に貴女が乗り込み、駕籠かきに向かって、貴女をお乗せした場所までやってほしいと頼んでおられるのを目にしたのです。あの人の説明では、その家は大変上品で、社交界の人々をお迎えするのに相応しいものだとのことでした。また、このようなことに触れますのは、もしかすると、あの人の訪問をお受けになるかもしれませんし、少なくとも、伝言くらいはあるはずだと思うからなのです。

そういうわけですから、貴女が入っておられる家と、一緒に過ごしておられる人々の信用につきましては、ドールマンさんの証言で保証されたことになります。それに、この人は財産もあれば、それなりの信望もある男で、確かに以前は放蕩児でしたが、名門の婦人と結婚し、中風の発作に見舞われたこともありまして、悔い改めた人間なのだと人も考えたくなるような男なのです(ソ)。それに、少なくとも消極的な形では証言に使えますメネルさんの言葉もございますし、トムリンソンさんのものもございます。また、今では、これで最後ですが、ラードナー嬢の証言があるわけです。ですから、調査の必要はそれだけ少なくなっているのですが、でも、貴女への愛情、貴女の操を気遣う私の気持ちと同じように、お節介で詮索好きな私の気性のことも知っておられるでしょう。ただ、すべての疑念がすぐにも消え去るのは間違いのないことと存じております。

それでもやはり、一言申し添えさせていただかねばなりませんが、もしもわずかでもお役に立つことが私に出来るとか、喜んでいただけるということでしたら、どうぞ呼び出していただきとうございます(タ)。評判などに重きは置いておりません。世の咎めも気にはいたしません。生命そのものさえも、貴女の名誉や貴女との友情に比べますなら、さほど大切なものではないと、本当にそう思っているのです。だって、貴女の名誉は私の名誉ということではないでしょうか。そして、貴女との友情こそが私の生きがいなのではないでしょうか。

（ス）三十五頁。（セ）二十六頁。（ソ）二十五頁。（タ）三十六頁。

神様のお力添えを得まして、貴女の名誉と安全とが保たれますよう、絶えずお祈り申し上げております。

変わることなき誠意と親愛の情とを込めまして、貴女の

アナ・ハウ

木曜日　午前五時

夜通し筆を執っておりました。乱筆乱文をお許し願います。私のカラスの羽のペンが軸のところまですり減ってしまいました。新しいのを補給しなければなりません。

この手のお嬢さんたちは、いつもカラスの羽のペンを使って書くのだよ、ジャック。

この手紙に込めた俺の配慮のすべてが理解出来るのであれば、貴公も俺の賢明さ、そして、工夫の才を称賛してくれることだろう。俺自身が思っているのとほとんど変わらないほどにな。ご覧のとおり、ラードナー嬢、シンクレア夫人、トムリンソン、フレッチヴィル夫人、メネルと、全員の名が挙げられているのだ。初めて俺が彼女の身体に加えた無遠慮な振舞いについてもだよ［慎み、慎み、というけれど、ベルフォード、どうやら慎みというのは、繊細この上ない心の持ち主の場合でさえも、そういった連中が信じてもらいたがっている以上に、時や場所、そして、時機の点で制約のあるものらしいぞ］。そして、本物の手紙から、何故これらの名すべてが取り上げられたのかといえば、他でもなく、今後あの牝狐から来る手紙のうちで、俺の手を逃れるものの中に、こういった名に彼女が言及するようなものがあってはいけないと恐れるからだよ。それに、彼女のものとして通ることになるこの手紙の中に一人の名も見出されない時には、M卿なら類似の場合にこう言うだろうが、俺も「歩兵も騎兵も入り乱れての」敗走の憂き目を見る、ということになるかもしれないのだよ。

バカに厳しい話ではないか（もっとも、自業自得と言ったところかもしれないな）、これだけの災難や苦労を嘗めさせられるとはな。それに、何のためなのだ、と貴公は尋ねるのかな。あゝ、ジャック、前もって俺に対して持っている価値という点では、王冠をも凌ぐような、そんな勝利のためなのだよ。これから一ヶ月後のその価値を問うような真似はしないでくれ。しかし、実際、王冠そのものにしても、慣れてしまえばどんな意味があるというのだ。

ハウ嬢が自分の書いた手紙のことを心配するのも当然の話だ。俺が漏らした彼女の文面からも、淑やかな友達としては、その手紙が俺の手に落ちずに済んだことを思って歓喜するだけの理由があるわけだからな。

さて、いよいよ俺の工夫の才のすべてが発揮されねばならないのだ。ハウ嬢から届くと思われる手紙を途中で奪うためだが、察するにこの手紙は、彼女を安全なところへ、そして、俺の知らない場所へと差し向けるためのものなのだろう。この場合、タウンゼンド夫人がこっそり彼女を連れ去ることになるのは疑いのないところだ。この二人のお嬢さんの間で俺はしきりにそう呼ばれているわけだが、いわゆる破廉恥漢とやらには、この点に対処する力があるはずと願う次第だ。

しかし、ローリンズ嬢の工夫によって、夜中にこっそりこの家を抜け出すような考えを

令嬢が思いついたりした場合には、どうする気なのだと、おそらく貴公は訊くだろうな。
その点は考慮済みなのだよ、ジャック。ウィルがあの家に泊まるのではないのか。それに、ベヴィス未亡人は俺の忠実な味方ではないのかな。

手紙　十五
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月十日　土曜日　六時

今朝のうちに郵便局へ持って行くようにと、昨夜、ウィルの恋人に令嬢が手紙を一通託したのだが、ヒックマン宛を装ってハウ嬢に出されたものだ。その封筒と書面のどちらにしても、開かれたのを見破られることはないはずだ。文面はわずか八行だ。即ち、二つの日付がある彼女の手紙を無事受け取ったとのことであり、心が落ち着きを増し、指の震えも治まった時には書くつもりだという、もっと長い手紙に言及している。しかし、ある出来事に触れ［俺が彼女を見つけ出したことを言っているのだよ］、大変な動揺、混乱、そして、不安を覚えたということ。ただし、自分の件で彼女に新たな狼狽や心配を与えることにもなるので、その前に事の成り行きを見守りたいということ［これをみると、俺にも少しは望みがあるというわけだ、ジャック］。そして、彼女の次の便りが待ち遠しいこと等々を語っているのだ。

さて、ベルフォード、このギクッとするような仄めかしに対するハウ嬢の不安を取り除いてやること、それこそ親切というものだろうと、俺としてはそう考えたのだ。というのは、あのような気質の人間のことでもあり、あんなことを仄めかされれば、途方もなく好奇心を掻き立てられたに違いないからだ。

従って、模写するにはまさにお誂え向きの原稿があるわけで、俺も筆を執ったというわけだ。そして、我が愛しの君の書面との差し替えに、同じ封筒の中に次のような短信を入れておいたのだが、その冒頭部と結びの部分は彼女自身の言葉だよ。

火曜日　夕刻、ハムステッドにて

大切な大切な私のハウ様

もう少し穏やかな心と指先の落ち着きが得られますまで、そして、貴女の情報がもたらしましたショックを克服いたしますまでは、わずか数行でご容赦願います。水曜日の、そして、木曜日の朝にかけましての、と申し上げて構わないのでしょうが、貴女の心温まる長いお手紙が無事手元に届きましたことをお知らせするためです。貴女のところへ出しました使いの者からお手紙を受け取りますとすぐに、例のお手紙をウィルソンさん宅から送っていただくように手配いたしました。有難いことに、お手紙はあのお宅に保管されていたのです。これまでのご親切のすべて、そして、今お考えくださっているご親切のすべてに対しまして、神様から貴女にご褒美がございますよう、お祈りいたしております。

変わることなき感謝の念を込めまして、貴女の

Cl. ハーロー

これを書き上げるのには、ずいぶんと骨を折ったのだ。疑われるなど、有り得ないことだと考えている。彼女の筆跡はまことにもって繊細なのだよ。ただし、いつもの書き方に比べると、彼女の手紙の字もそれほど綺麗には書かれていなかったのだ。それに、ハウ嬢のほうでも、〈揺れ騒がしい心〉と〈震えて止まぬ指先〉のことを多少は考慮してくれるだろうと思うのだ。

ハウ嬢の〈心の安寧〉に対する俺の配慮は、すでに触れた件だけには止まらず、さらにその先へも及んだのだよ。

この短い手紙は出来るかぎり速やかに彼女の手元に届くようにと（それも、郵送でヒックマンに届くのよりもさらに早く着くようにだ）、モーブレーの召使に託して急送したのだよ。何かの手落ちがあったり遅れて届いたりすれば、貴公も考えるとおり、ハウ嬢は逃亡中の友に懸念を漏らしたかもしれないからな。そして、その逃亡者も、おそらく俺にとっては喜んでなどいられない形でだが、俺に知らせることになっただろう。

もう一度、貴公は驚きながらこう尋ねるだろうな。たった一人の娘のために、これほどまでの苦労を重ねるのか、とな。

そのとおりだよ、ジャック。しかしだな、この娘というのはクラリッサと称される者ではないのか。それに、情け深い運命の女神が、辛抱を重ねた褒美として、彼女の魅惑的な友のところへ俺を放り出さないともかぎらないだろう。これまでにも、ベルフォード、もっとありそうにもないことが起こっているのだよ。それに、間違いなく彼女は俺がいただくことになるのさ。俺がその気になればの話だがね。

手紙　十六
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月十日　土曜日　午前八時

今、ムーア夫人の家から戻ったところだ。我が魅惑の君の指図に従うべく出掛けて行ったわけだが、目通りは許されなかった。ひどく眠られなかったというのだ。

水曜の夜に得たチャンスを全然うまく生かせなかった点では、俺としても気に掛けて当然なところがあるのだが、同じように彼女のほうでも、度を越して怒ってしまったのを気に病んでいるのは疑いないところだな。

ところで、ジャック、俺が置かれている現在の状況を手短に振り返って見ることにしよう。ついでに、俺が講じた予防措置の一つか二つについて軽く触れておく。

今朝会ったところでは、婦人たちのことは安心半分、不安半分といった状態だ。

ローリンズ嬢の兄は、妹に向かって、お前はムーア夫人のところに住み着いているのと変わりないと言っている。

ムーア夫人のほうは、ローリンズ嬢がいなくては何も出来ないのだ。

公になっている場所で下宿を営む人間というのは、自分たちの縄張りに入り込んで来る者は一人残らずカモにしようとするものだ。俺自身があそこに泊まることは許されなかったわけだが、空いている部屋はすべて、屋根裏部屋に至るまで予約してある。それも、前に話したように、丸一ヶ月間、彼女の言い値で、食事込みの約束だよ。妻の分も一切合切

だ。ただ、今のところは妻に知れないようにと言ってある。だから、利害絡みだが、ムーア夫人のことは大丈夫だと思うのだ。

これは、悪魔の仕業にも近いが、好みに合わせて誘いをかけるということなのだよ。常日頃から目に留めてきたことであるし、以前にも似たようなことにそれとなく触れていたはずだと思うのだが(ア)、商人というものはすべて、ただのピンを扱う場合でも、ピンの値の十倍という、露骨に示された賄賂よりも、ピンを買い求める客に食指を動かされることのほうが多いのさ。良心的であることを自負している者の場合には特にそうだ。賄賂を提供するのは、疑惑の余地を与えるばかりでなく、連中の良心を驚かせ、警戒心を起こさせてしまうのだな。一方、買った品物に高い代価を支払うというのは、人が稼ぎの手段と公言しているその方法で騙されることに甘んじるだけの話なのさ。人間の本性は悪党だと、すでに話してなかったかな(イ)。そして、俺がそのことを知らないとでも思うのか。

もっと上流の者たちの例を挙げると、一七二〇年には、どれだけ多くの誇り高い上院議員たちが、南海会社の株券の贈与、あるいは、予約申し込みに唆され、国家の破滅を孕んだ陰謀に荷担する羽目に陥ったことだろう。しかし、あの議員連中にしても、例の株で儲ける見込みのあった額の丸々二倍を差し上げようなどと申し出る、そんな鉄面皮な人間は撥ねつけていたはずなのだ。だが、俺の現状に関する〈おさらい〉と〈予防手段〉の件に話を戻すこととする。

ローリンズ嬢の心は、奥様の話を聞くのか俺の話を聞くのか、それにつれて揺れ動いている。少しく不信心者の気味がありそうに思うのだよ、このローリンズ嬢にはな。この娘の弱みについては未検討だ。今度顔を合わせたら、彼女の心の汚れやシミについては、そのすべてに特段の注意を払うつもりでいる。そして、推理し、適用しようというわけだ。

ベヴィス未亡人のほうは、すでに話したとおり、すっかりこちらのものさ。

下男のウィルがあの家に寝泊まりしている。新しく雇ったもう一人の男が俺様の身近に仕えている。従って、まるっきりの馬鹿ということはないはずだ。

ウィルの奴め、ムーア夫人のところの女中の一人に早くもベタ惚れだ。姿を一目見た途端にのぼせ上がってしまったのだよ。それも、田舎丸出しの小娘だ。だが、伯爵夫人からおさんどんに至るまで、おしなべて女というのは、男が一目で夢中になってくれると、胸の内で大いに機嫌を良くしているものなのだよ。女は顔立ちがいかに地味でも［女に醜い顔などはあり得ないのだ、ジャック］、外側では鏡の助けを借りるし（また、多分、鏡などお構いなしにということなのだろうが）、内側では自惚れの力添えもあるものだから、律義な男が虜になるのも無理はないと考える理由なら、大きなもの（好い人のためだから、というわけだ）の他にも、立派なのを二十は見つけ出して来ることだろうな。

この悪党は俺に仕えることで百五十ポンド貯め込んだそうだが、俺が貯めておくよう命じたのより五十ポンドは多い。そうして構わなかったのだと、そんなふうに奴が考えているのは疑いのないところだ。もっとも、俺のほうでは、一文の価値もない奴と確信しているのだがね。主人としては最高なのだそうだよ、俺様は。激しやすいところがあるのは確かだが、すぐにも穏やかになるのだそうだ。

すでに娘は奴に対してすこぶる親切にしている。もう一人の女中のほうも奴にはずいぶ

（ア）第三巻の百二十頁。（イ）第三巻の百二十七頁および第四巻の三十九頁を参照のこと。

んと丁寧なのだよ。その娘の婿さんのことを奴が考えてやっているというわけだ。こちらの娘は、口さえ開けば、俺のもう一人の召使のことだが［あの娘は相手を決めたがっているのだよ］、アンドルーさんはとても言葉遣いが上品で、礼儀正しい若者ですわね、などと言い出す始末だ。

「おそれながら申し上げますが、おえらい方々と同様に、私どももしょみんにもなぐさみごとはございまして」と、正直者のジョゼフ・リーマンも言っている(ア)。そして、正直ジョゼフの言うとおりなのだよ。俺が困難よりも安楽のほうを選んだのであれば、こういった生まれの卑しい罪人たちに対し、その楽しみのいくつかを妬ましく思うことだろう。

しかし、たとえウィルが小娘たちに近づくのに恋の手管を用いなかったとしても、意見交換という共通の大目的で団結している召使連中というのは、周知のとおり、互いに顔を合わせるやいなや親密になってしまうし、優れた系図学者でもあるのだよ。何しろ、自分たちが仕えている者たちの系譜や親類縁者のことと同様、お互いの一族郎党すべてのことを、たとえ三つの王国に散らばっていようと、すぐにも知ってしまうのだからな。

しかし、俺の予防策はこんなところで終わるものではない。

あゝ、ジャックよ、これだけの工夫の才がありながら、我が愛しの君をシンクレア夫人のところへ連れ込むなんて、一体どんな必要があったというのだ。

一人はハウ嬢のところ、もう一人はウィルソンのところへと急がせたわけだが、妻としては、この使いの者たちにもっと用事が出来るかもしれないな。そのうちの一人とは、貴公も耳にしているだろうが、ウィルがもう昵懇になっているのだよ。こういった手合いにとっては、酒を酌み交わすということは、心を通わせ合うことなのさ。もう一人のほうとも、すぐに懇意になってくれることだろう。まだだとしてもな。

船長の召使にもあいつなりの役目を割り振り、指示を与えてある。そのいくつかについては、もう触れてあったな(イ)。あいつもまた、極めて人情に厚く思いやり溢れる主人に仕えているというわけだ。俺としては、力の及ぶかぎり、だれもが尊敬の的となるようにしてやるのが好きなのだよ。

郵便については、中央郵便本局分もペニー郵便(一九)も、同じく厳重に見張ってもらう。ハウ嬢のところのコリンズを思い出し、その様子の記述が進められている。ハウ嬢とヒックマンの召使の仕着せについても同じだ。

ジェームズ・ハーローとシングルトンには気を付けるよう指示を出してある。結婚後の姓によってであれ結婚前の姓によってであれ、俺の妻に関する問い合わせがなされたりした場合には、どのようなものであれ、彼女に知らせる前に、俺に報告してもらうことになっているのだ。そしてこれは、俺の力で災いを防ぐことが出来るようにするためだよ。

モーブレーとターヴィルに（それと、体の具合が許せばの話だが、ベルトンにも）指示を出したところだ。下僕を従えて、一週間ほどハムステッドに陣取ってもらおうというのだよ。当面、貴公については勘弁してやろう。個人的な心配事もあるわけだからな。ただし、忠誠を誓った証に、快く命令に応じられるよう準備を整えておいてくれ。

俺の配偶者本人に関して言えば、ハウ嬢の手紙をウィルソンのところから受け取ることが出来るようにしてやったということでは、俺に好感を抱いて当然なのではないだろうか

（ア）第三巻の手紙四十三を参照のこと。（イ）百十六頁を参照のこと。

な。これは、俺が腹の底の知れない策謀家などでないことを示す、あるいは、あのように軽微で、あのように偶発的に犯した不作法に対し、彼女と折り合いをつけること以上には何の下心もないことを示す、明白この上ない事例というわけだよ。

ハウ嬢に言わせると、「残念ながら」と前置きはしているわけだが、彼女の魅力的な友人は俺を愛していることになるのだ。従って、この和解を切望するに違いないし、見通しも有望なのだよ。俺に対してもう少し厳しさを緩め、丁重な扱いをしてくれるのなら、そして、少しは同情を示してくれるとか、俺のことを容赦し、精一杯好意的な受け止め方をしたがっているところを見せてくれるというのであれば、彼女に向かっていくらかでもそのような態度を示さずにいるなどということは、俺には不可能な話だと言わざるを得ないのだ。とはいえ、支配下に置いている謀反人に侮られたり挑まれたりするなど、そんなことに耐えられる君主がどこの世界にいるというのだ。

だが、作戦行動の場に戻ることにする。婦人たちが動揺を来たさないようにしなければならないな。ご立派なベヴィス夫人と内密に話し合う機会がなかったのだよ。

トムリンソンの犬野郎め、未だに姿を見せないのだからな。

手紙　十七
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

ムーア夫人宅の俺の部屋より

ローリンズ嬢は兄のところだし、ムーア夫人は家事に携わっている。ベヴィス未亡人は身支度を整えている最中というわけで、俺としても、筆を執る以外には何もすることがない。この忌まわしいトムリンソンときたら、未だに到着していないのだが、あいつなしでは手の打ちようがないのだよ。

昨日受けた仕打ちに対し、あいつは結構強い言葉で不平を漏らすように思うのだ。「われわれの間の出来事が彼にとっては何だというのだ。われわれの役に立つこと以外、彼には何の目的も有り得ない。彼ほどの実業家で、有力者でもある人間が、耳を貸してもらうことも顔を出すことも認められず、ロンドンへ送り返されるとは残酷な話だ。彼が一歩でも動き出すと、きっと、何か重要な事柄がその行動に左右されることになるのだ。これだけの紳士の時間を気紛れにあしらうというのは、けしからぬ話だ。こういった女どもというのは、連中の〈むら気〉[女にピッタリの言葉だよ、ジャック]に合わせて、世の中の業務すべてが停止してくれなければいけないくらいに考えているのだ。神の創造物の中でも一番軽薄なものが、己のことをその最も重要な存在みたいに思っているのだ。「まあ、あきれちゃうわね」ってところだ（これはソーリングズの女将さんが召使たちを怒鳴りつけている時の台詞で、怒りと軽蔑とをない交ぜにして、そう叫んでいるのを俺も耳にしたことがあるのだ）」といった具合にだよ。

結局のところ、俺としてはこういった〈狂おしさ〉が[ご覧のとおりさ。女のこと、そして、女言葉でこの頭は一杯なのだ]終わること、めでたく終わりを告げることを願っているのだよ。静かに腰を下ろし、くぐり抜けてきた危険のことや耐え忍んできた苦難のことを思い返してみるためだ。貴公も知ってのとおり、俺は〈回想的〉な心をしているわけ

だが、〈回想的〉という言葉そのものに〈すべてを乗り越えた〉という意味合いが暗に含まれているのだよ。

伸び放題の茂みを通り抜ける新たな小道を是非とも切り開きたいと思い（顔には引っ掻き傷、着ているものはボロボロ、というのが避けることの出来ない結果なのだが）、同じ道筋を辿った先人たちが踏み均してくれた道を捨てるような哀れな人間は、ひどい野バラやイバラの中に飛び込んでしまうものなのさ。

∴　　∴

ベヴィス未亡人から訪問を受けた。俺の自室へだよ。彼女の話では、妻は昨夜、俺が下宿へ帰った後だが、ムーア夫人のところから引っ越すことを考えていたというのだ。

ひとつ試してみてくれたら良かったのにと、そんな気持ちにさえなっている。

どうやら、その件について相談を受けたローリンズ嬢が説得し、彼女を思い止どまらせたらしいのだ。

ムーア夫人のほうでも、ウィルがあの家で寝泊まりしていることは（というよりも、夜通し起きて口説いているのだよ）明かさなかったのだが、夫人の考えでは、俺に知られることなく彼女が突破しなくてはいけないという、そんな障害の数々を眼前に並べてみせたのだ。そして、行く先がはっきりと決まるまでは、自分のところ以上に安全な場所はどこにも有り得ないことを確約したのだ。また、奥様ご自身としても、もしも出掛けてしまうと、親友のハウ嬢から届くはずの手紙を受け取り損なうかもしれないことを思い出したのだよ。そして、この手紙というのは、自ら認めていたように、彼女の今後の行動の指針ともなるものだったのだ。

それに、伯父の伝言ということで、伯父の友人が話そうとしていたことを知りたい気持ちが、いくらか彼女にあったことも間違いないのだよ。昨日の彼女は、あれほどの大物だというのに、無礼な扱いをしていたわけだけれどな。また、俺の考えるところでは、我が一族の主だった婦人二人からの訪問を受けずにおこう、そして、婦人連中全員に公然と背き、俺とは完全に手を切ろうと、そんなふうにきっぱり決心を固めるような真似が彼女に出来るとは思えないのだ。おまけに、彼女は一体どこへ行くことが出来たというのだ。さらに言えば、ハウ嬢の手紙が無事に（彼女の家出の後でだ）届いたこともあって、俺のことを、そして、他の皆についても、もっと信頼する気持ちになってくれるのは間違いのないところなのだよ。すぐにその点を認めるようなことはしないだろうがね。

それにしても、この善良な人間どもというのは、実に慈悲心に乏しいものだな。まことにもって厳しい酷評家なのだ。しかし、完全無欠な人間などがどこにいるというのだ。ただ、願わくは、あの手の連中も時々自分を疑うくらいの慎み深さは持ってもらいたいものだな。そうすれば、他人のことを斟酌するようにもなるだろう。他の者たちが（自分自身のことを図抜けた人間だと思い込んでいるのだが）きっと連中のことを大目に見てくれるようにだよ。

土曜日　一時

ようやく、トムリンソンが到着した。馬で五マイル遠回りするのを余儀なくされたわけ

だが（もっとも、俺としては、奴の遅れを重大な要件のためということにしておくつもりでいる）、奴がだれの仕事に駆り出されているのかをほとんど考えもせずに、行く手を邪魔しようとした生意気な悪党二、三人の姿を避けるためだったのだよ。もしもこいつが、この一件で、俺の気に入るような振舞いをするようであれば、楽な暮しをさせてやろうと思っている。

奴が着くとすぐに、俺は二階へ使いを出した。

奴の訪問を受けるのは、午後の四時まで御免蒙りたい、と彼女は言うのだ。

耐えられない話だ。思いやりが見られない。女というものにはひとかけらの思いやりもないのだよ。連中の忌まわしい気紛れ心が妨害をする時にはな。清算をする日が、否、むしろ清算の時間と言ったほうが良いだろうが、それがきっと来るのだよ。あゝ、それが明日のことであってくれたらと思う。

船長が怒っている。だれが責められるというのだ。彼ほどの社会的地位を備えた人物であり、また、二人の役に立とうと、義侠心を発揮してやって来てくれたというのに、あれでは惨い仕打ちだと、婦人たちでさえもそう考えているのだ。昨夜、彼女が脱出を図ってくれたら良かったのにと、つくづくそう思う。婦人たちは俺の敵ではないわけだし、もしかすると、夫の権威を振り回しても大目に見てくれて、彼女を前の下宿へ連れ戻す結果に落ち着くとか、あるいは、ムーア夫人のところでの床入りに終わるといったこともあったかもしれないのだよ。いくら悲鳴を上げようと発作を起こそうと、そして、女っぽい哀願のかぎりを尽くそうともだ。

今日一日、我が愛しの君は、ムーア夫人を別にすると、だれの前にも姿を現していないのだ。どうやら、ひどく塞ぎ込んでいて、午後に持たれることになっている興味深い話し合いの場に加わるのにも相応しくない状態らしい。親友ハウ嬢からの便りを待ち望んでいるのだが、一日か二日は、一通も期待出来ないのだ。男性のすべてに対して厳しい評価をしているが、無理もない話だよ。まったくもって素晴らしい娘だからな。あんな父親、あんなおじたち、あんな兄貴を持ちながらな。

どんな様子ですか。

昨日の疲れ、それに、昨夜の睡眠不足を考えますと、思ったより良い顔色をしておられますわ。

こういったか弱い鳩ちゃんたちは、辛い目に遭わされるまで、どのようなことに耐えられるのか気づかずにいるのだ。恋をし、心をすっかり奪われている時には特にそうだ。だが、女というのは賑々しい場面が好きなのだよ。動きのない暮しなどは連中の毛嫌いするところだ。嵐がないくらいなら、一つ引き起こしてやろうとするものだ。だから、吹きすさぶ嵐を取り仕切り、風向きを指図出来ると幸せなのだよ。ただ、我が愛しの君にとって不運なのは、激動の中を生きて行かねばならないというのに、その嵐を自ら引き起こす力も、また、統御する能力も持っていないことなのさ。

手紙　十八
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月十日　土曜日　夜

これだけ策謀と計略の限りを尽くして、その結果が一体どう出るのか、予測も何も出来たもんじゃない。しかし、俺としては、M卿ならこんな言い方をするのだろうが、「自分の市場で買い占め行為に走る」つもりはないのだよ。

約束の時刻の四時に、船長と俺自身の名で、目通りを許してくれるよう言伝をした。船長には「俺にではないのだよ」、塞がっていなければだが、客間ですぐにお目に掛かりたい、というのだ。

食堂は俺が占領していたのだが、多分それが客間を指定した理由なのだろう。もしそうなら、またもやずいぶん気難しいことだ。吉兆とはいえないぞ、このしゃっちょこばった堅苦しさは、と俺はそう思った。

客間には、俺と船長に加え、ムーア夫人、ローリンズ嬢、そして、ベヴィス未亡人が同席していたのだ。

婦人たちのほうでは、奥様がお見えになったら退席いたしましょう、と言っていた。

ラヴレース「そうしていただくのが妻の意向でないかぎり、ご婦人方、それはお止め願いますよ。私のように公明正大な人間は、どんなことであっても、自分に関わる事柄を秘密にする必要はないのです。それに、貴女たちお三方は、私どもの問題点すべてにつきまして、もうご存じなのですからね」

船長「奥様にお話ししたいことが少しあるのですが、おそらく奥様ご自身といたしましては、他の人間が、たとえ貴方であっても、ラヴレース殿、耳にするのを好まれないような事柄です。貴方と奥様のお身内の方々とは、望ましいほどに折り合いのついている間柄ではありませんからね」

ラヴレース「結構でしょう、船長。仰せには従わねばなりませんね。合図をお願いいたします。そうすれば、われわれは引き下がることにいたします」

婦人たちに席を外してもらう話は、俺からよりも、奴の口から出るほうが妥当なことだったのだよ。

船長「奥様と二人だけになりたい時は、会釈をして、こんなふうに手を振ることにいたします。伯父上は奥様を溺愛しておられるのです。和解を実現しようと、私の親友が熱意を見せるからといって、ラヴレース殿、和解を一層難しくするようなことはなさらないよう希望いたします。しかし、これまでにも一度ならず申したことですが、貴方はこの仲違いのきっかけを話してくださる際、あってはならないくらいに軽視した伝え方をなさったのではないかと、そのように申さねばなりませんね」

ラヴレース「まさか、私の正直さを疑っておられるのではないでしょうね、トムリンソン船長」

船長「お詫びいたします、ラヴレース殿。ただ、われわれ男性が軽く考えております事柄も、慎み深い女性にとりましては、軽視出来ない場合もありましょう。それに、誓いを立てられたのでしたら、是非とも　…　」

ローリンズ嬢はツンとそり返り、唇を閉じて見せたが（ただ、その口元は、左右に伸びて是認を表す笑みの形となり、固く結ばれていないために、一層長く見えるのだ）、船長の濃やかな心遣いが気に入ったことを暗黙のうちに示していた。

ムーア夫人も一言述べることは出来たのだ。だが、彼女が口にしたのは、賛成の気持ち

を込めて頷きながらだが、ただ「そのとおりですわ」という台詞だけだったのだよ。
「私といたしましても」と、卵ほどの大きさに目を見開きながら、陽気な未亡人が話し出した。「承知すべきところは承知しておりますわ。でも、夫婦というのは、やはり夫婦なのですわ。でなければ、夫婦じゃございませんもの。そこまで堅苦しくなさるのは、私には考えられませんわ」とだよ。
「でも、ほら、いらっしゃいますわ」と、彼女の部屋のドアが開くのを耳にして、一人が叫ぶと、もう一人も、彼女の出た後、ドアが閉まるのを耳にすると、「ほら、いらっしゃいますわよ」と叫んでいた。そして、われわれのところへ天使がご降臨というわけだ。
われわれは一同揃って立ち上がり、頭を下げたり、膝を折ったお辞儀をしたりしてみせたのだが、そうせずにはいられなかったのだ。何しろ、入って来た時の彼女の様子といったら、われわれ全員の尊敬を集めずにはおかないものだったのだからな。ただ、船長はやけに真面目腐った顔付きをしていた。
クラリッサ「さあ、そのままお席に着いていてください、ご婦人方。どうか、行かないでください」[というのは、連中が退席を申し出たからだ。ただ、退出するのを容認されたりしたなら、ローリンズ嬢としては飛び出していたことだろうな]。私の身の上話につきましては、皆さんもうお聞き及びのことと存じます。疑いもございません。どうか、そのままお席に着いていてください。少なくても、ラヴレースさんのお話はすっかりお聞きでしょう」
実に無礼で風変わりな切り出し方だ、と俺は思ったよ。
「恐れ入ります、トムリンソン船長」と、彼女は真似ようもない威厳に溢れた態度で話し掛けた。「昨日はお訪ねくださいましたのに、お引き取りいただきまして、お気を悪くはなさらなかったでしょうね。どのような話題にいたしましても、心遣いの必要なものでしたら、本当に、お話を出来る状態ではなかったのです」
船長「もう良くなられたようにお見受けし、嬉しく思います、マダム。そう願っておりますが　…　」
クラリッサ「実は、芳しくございません。何時間か前の時にも、お目に掛かりますのを辞退したくはなかったのですが、ただ、良くなっているだろうとの期待があってのことでした。お骨折りをいただきましたことにつきましては、謹んでお詫びをいたしますし、また、お許しいただけるものと考えたいのです。今日のこの日がすべてに終止符を打ってくれるはずと思いますので」
ここまで決心は固いのか、ここまで覚悟が出来ているのかと、俺はそう思ったよ。それでいて、翌日まで返事を延ばすというのだからな。ただ、彼女の言葉は悪く取ることも良く取ることも出来るものだったので、都合の悪い解釈を加えたくはなかったのだ。
ラヴレース「船長はね、君、昨日到着された時すぐに面会を申し出られなかった点を悔やんでおられるのだよ。そうなさらなかったことに君が気を悪くしているのではと、心配しておられたのだ」
クラリッサ「伯父のお友達でしたら、お着きになり次第すぐに私に会いたがられても良かっただろうにと、私といたしましても、おそらくそんなふうに思ったでしょうね[われわれは呆然と見つめ合っていたよ]。でも[と、俺に向かってだ]、その方をお引き止めになるほうが、貴方には都合が良かったのでしょうね」

畜生め、と俺は思ったよ。彼女が正直者の紳士に会うのを拒んだのには、我が良き友のベヴィス夫人も口にしていたことだが、頭痛は勿論のこと、実際に憤りの気持ちもあったというわけだ。

船長「引き止めようとなさったのは貴方ですよ、ラヴレース殿。私のほうは奥様へのご挨拶に伺うつもりでしたからね、到着するとすぐにも　…　」

クラリッサ「結構でしょう［と、船長を遮り］、もうこのお話は。うるさい人間とは思われたくございませんからね。もう一度いらっしゃらなくてはいけなくなって、不便な思いをなさったということでなければ、私も気が楽になりますわ」

船長［半ばまごつきながら］「わずかばかりの不便な思いは、味わわなかったとは申せませんね。何しろ、あまりにも多くの仕事を抱え込んでいるものですからね。ただ、親友でもある伯父上ハーロー氏のご希望に沿うことは勿論、貴女とラヴレース氏のお役に立ちたいとの気持ちを持っておりますので、どれほど大きな不便でも、私にはほんの軽微なものに感じられるのですよ」

クラリッサ「本当にお世話になっておりますわ。先日貴方が私どもと別れられてからのことですが、大きな変化がございます」

船長「いや、本当に大きな変化ですね、マダム。木曜日の夕方、ラヴレース氏が私を貴女の下宿へ連れて行ってくださった時には、お会い出来るものと期待いたしておりましたし、そのことを知りまして、ずいぶんと驚いてしまいましたよ」

クラリッサ「伯父自身からの言葉で、私だけの耳にお入れになりたいことは何かございましょうか。どうぞ、皆さん、行かないでください［婦人たちが立ち上がり、退出しようとしたのだよ］。ラヴレースさんが残るのでしたら、勿論、皆さんがお残りになられても構わないはずですわ」

俺は顔をしかめ、唇を噛んだよ。婦人たちのほうに顔を向け、首を振った。

船長「ラヴレース氏が関わっておられ、また、氏が耳になさっても構わない事柄を別にしますと、内密にお話ししたいほんの一言二言以外には、何もお伝えすることはございませんし、それとて、最後まで延ばしても構わないものなのです」

クラリッサ「どうぞ、皆さん、お席に着いていてください。貴方にお会いいたしましてから、事態は変わりました。現在私に関わりのありますどのようなことにお触れになりましても、あの紳士が関わりを持ち得るようなことは一切ございませんわ」

船長「驚きましたね、マダム。このようなお言葉、残念です。伯父上のために、貴女のために、そして、ラヴレース氏のためにも残念に思います。ただ、これは確信しておりますが、氏のほうには、私にお話しくださったものよりももっと大きな原因があったに違いありませんね。さもなければ　…　」

ラヴレース「そうです、船長。そうですよ、ご婦人方。私に関する事の顛末につきましては、その大部分をお話しいたしましたね。自分の罪としてお話しした事柄は事実なのです。隠して触れなかった部分と言いますのは、もしも人に知られた場合、この愛しい妻が寛大というよりは、むしろ、口やかましい人間のように思われることになりそうだと、そんな懸念を抱いた部分だけなのです」

クラリッサ「結構ですわ。どうぞ、お好きなことをおっしゃってください。好きなだけ黒くしてくださって構いませんわ、私のことは。ご自分のことは精々真っ白に描かれると

良いでしょう。私も今では貴方の手中にはないのです。そのことを考えますと、何がありましても慰められますわ」

船長「美徳と貞節を重んじるご婦人にとりましては許すことの出来ない罪の、その弁護を買って出るような真似は絶対にしないつもりです。しかしながら、確かに、マダム、確かにこれは度を越しております」

クラリッサ「責めないでいただきたいのです、トムリンソン船長さん。伯父のお友達ということですし、貴方のことは高く買っております。でも、ラヴレースさんの肩を持とうとなさるのでしたら、話は違ってまいります。私の利益とラヴレースさんの利益とは、今ではもう永久に切り離されねばならないわけですからね」

船長「一言お耳に入れたいことがあるのですが、マダム。宜しければ　…　」と、部屋を出ようとするのだ。

クラリッサ「おっしゃりたいことは何もかも、このご婦人方のいらっしゃるところでお話しくださって結構ですわ。ラヴレースさんは秘密をお持ちかもしれませんが、私には一つもございません。私に落ち度があるとお考えのようですね、貴方は。世間の人たち皆さんが私の胸の内を知ってくださると有難いのですが。私の振舞いを裁こうと、敵方の人たちが裁きの席に着きましても、私は構いません。公平に調べてもらえるのでしたら、結果のことは恐れておりません。胸の一番奥に秘めております考えのことを、そして、それは私に有利に働くものか、それとも不利に働くものなのか、そんなことまでお尋ねくださっても構わないのです。すべてを打ち明けるつもりです」

船長「何という気高いお方だ。貴女のような言い方の出来る者がどこにおりましょう」

婦人たちは手を差し上げ、天を仰いでいた。一人一人があたかも、私にはとても、と言わんばかりにだ。

「これですと、心を乱しておられるようなところは微塵もございませんわね」と、ローリンズ嬢が言っていた。でも（と、自分の心に照らして）、本当らしくないところなら面食らうほどたくさんあるわね、というのが彼女の考えであったと俺は信じている。

「本当にご立派なお言葉ですこと」と、ベヴィス未亡人が両方の肩をすくめながら言っていた。

ムーア夫人のほうでは溜め息を漏らしていたよ。

この胸の内なら、ジャック・ベルフォードがすべて承知だ、と俺は考えた。それに、三人のだれと比べても、この点では俺のほうが率直だし、この婦徳の鑑にも似合いの相手なのだ、とだよ。

クラリッサ「ラヴレースさんがここにいる私をどのような方法で見つけ出したのか、それは分かり兼ねます。でも、無理やり私との同席を果たそうと、あのように卑劣な策略を弄し、あのように狡猾で、ウォルサムの密猟者よりももっとあくどい変装（二〇）をして憚らない人なのです。あんなにも見え透いた、あんなにもお粗末な嘘を　…　」

船長「ほんの一言だけです、マダム、内密にお耳に入れたく　…　」

クラリッサ「あの男には備わってもいない私に対する権利ですのに、それを支持しようというのですね。あゝ、あなた、あゝ、トムリンソン船長。あの男には（ほら、あそこに立っておりますが）どんな悪事も可能なのだと申し上げて構わない、それだけの理由が私にはあると思うのです」

婦人たちは互いの顔と俺の顔とを代わる代わる眺めていた。俺がこの言葉にどう耐えるのか、確かめるためだ。その途端、頭の中がキリキリとひどく痛むものだから、気が狂ってしまうのではないかと思った。脳味噌に火がついた感じだ。彼女と二人きりになるためなら、何でもくれてやろうという気持ちだったよ。俺は握り締めた拳を額に当て、部屋を横切って歩いた。あゝ、デーイアネイラ〔二〕が送った毒を染み込ませたシャツのもたらす苦痛に苛まれて逆上した時の、あのヘラクレスのように、八つ裂きにしてやれる者がだれか傍にいてくれたならと、俺はそんなことを願っていたのだよ。

船長「あゝ、奥様、お目に入らないのでしょうか、お気の毒にご主人は … 何ということでしょうね。これでは、すっかり伯父上を騙してしまったことになりますな。お二人がどんなに幸せにしておられるのか、お話ししたのです。お互いにどれほど幸せを感じておられることか、それは間違いのないところだとお伝えしたのですよ」

クラリッサ「あゝ、貴方はご存じないのです。今後はそうなりたいと願っておりました姿をお見せ出来るようになります前のことですが、前回お会いいたしました際にも、どれほど多くの計画的な不作法に私は目をつぶっていたことでしょう。でも、宜しければ、もう伯父にも話してくださって構いません。伯父の執り成しに望みを掛けるわけにはまいらないということをです。伯父に伝えていただきましょう。頼りになり、経験も積んでおります私本来の身内（私に辛く当たっておりましたが）のところから、私を連れ去るような機会をこの男に与えてしまいましたその罪が、日毎にいよいよ厳しく、私を正面から見据えて来るのです。それに、立腹いたしました父の呪いの言葉どおり、私の運命は重大局面へと近づいているかにも思われますだけに、なおさらその感が強いのです」

こう言うと、ワッとばかりに彼女は泣き出したのだが、これにはあの犬野郎も心を動かされていた。俺の気持ちを煽り立てるために来てもらったというのに、あいつ自身がすっかりベルフォードかぶれになっているのだよ。

婦人たちのほうでは、いわれもなく笑い転げて見せるのと同様、悲しくないのに泣き出すのには慣れっこなものだから、見本を示されただけで「その即応ぶりには呆れるが」、ハンカチを引っ張り出さずにいられない有り様なのだよ。だが、それも無理のない話だろうな。何しろ、俺自身にしてからが、狼狽、驚き、そして、不安の狭間を揺れ動いていたこともあり、平然と見守っているのは容易でなかったわけだからな。

敏感な心などが何の役に立つのだろうな。感じ易い心をしていて、幸せになれる人間などいるのだろうか。だが、貴公はこう言うだろうな。そんな心を持ち合わせない者というのは、人間なんかじゃなくて虎に違いないのだ、とな。

船長「ただの一言だけお許し願いたい、マダム。貴女お一人にお話ししたいことがあるのです。それも、私自身のためのことなのです」

これを聞いた婦人たちが退出しようと申し出た。彼女は、もしも婦人たちが出て行くのであれば、俺も留まるべきではないと言い張っていた。

船長「さて［と、俺に頭を下げながら］、お願い出来ますかね」

この真面目腐った犬野郎を信頼しても良さそうだな、と俺は考えた。指示は与えてあるわけだからな。彼女は奴を疑っていないのだよ。彼女に与えるのは、最初の怒りを鎮めるための時間だけにする。俺としても、それ以上長く外に出ているつもりはないのだ。

そこで、俺は言われるままにおとなしく退出した。婦人たちと一緒にな。ただ、我が女

神に向かって、大層なお辞儀をしてみせたものだから、お陰で、皆の同情を引き寄せることとなった。もっとも、一番勝ち得たいと思っていた相手の心は別だよ。何しろ、あの傲慢な小娘ときたら、お返しに膝を折っても見せなかったのだからな。

われわれが引き下がっていた際の船長と奥様との話し合いは、次のような趣旨のものだった。二人揃って声高に話すものだから、俺にも聞き取れたのだよ。奥様のほうでは怒りのあまりの大声だが、船長のほうは計画どおりというわけだ。それに、請け合っても良いが、聞いていたのは俺ただ一人だ。完全でなかったところは後で補っておいたが、というのも、すべてを書き留めようと、俺はベラム紙の手帳を携えていたのだよ。もしもこのことに気づいていたら、彼女としても悪口雑言はもう少し差し控えていたことだろうな、おそらくは。また、「おそらく」としか言えないのだよ。

船長は次のように彼女に話していた。つまり、彼女の兄が万難を排しても彼女に会う決心を固めているし、船長自身のほうでも、彼女の伯父が言い出した便法に従って、彼女は結婚しているように報告してあるということ。また、その報告はM卿、ベティ夫人、そして、俺の親族の残りの者たちの耳に届いているし、第一報を伝えた行き掛かり上、その件について請け合わざるを得なかったということ。そして、彼女の兄が彼女の居場所を突き止め、結婚に関しての追認あるいは反論を得るために、ここの婦人たちに照会して来るかもしれないということ。こういった理由から、船長としても、婦人たちの前では例の報告を黙認せざるを得ないものと考えていたし、このことは少なからず彼を悩ませていた。というのも、彼のことをごまかしや策謀、あるいは、裏表のある行為の出来る人間だなどとは、どんなことがあっても彼女には考えてもらいたくなかったからであり、また、彼女と二人きりの会話を望んだのも、このことがあったからだ、というのだよ。

彼女が言うには、そのような便法に同意を与えたのは確かだが、それは、伯父から出た話だと信じたからであり、また、そのためにこれほど多くの過ちを招く結果になろうとは思いもよらなかったからだ、とのことだった。ただ、一つの間違いがしばしば多くの間違いを生み出す元となることくらいは知っていて良かったことである。そういった見方の正しさについては、ラヴレースさんから一度ならず思い知らされていたのであり、また、昨日見せてもらった手紙の一通で、船長が触れていた見解でもある(ア)、とも言っていた。

船長としては、自分に対し彼女が少しの不信感も持っていないことを、また、信義心についても疑念を挟むことのないよう願っている、というのだ。そして、「もしも私をお疑いになるのなら、マダム、もしも、貴女のお考えでは、この私がそんなことの出来る人間だと　…　一体どんな人間だと　…　主よ慈悲を垂れ給え　…　私をどんな人間と考えておられるのでしょうな、貴女は」と嘆いてみせるのだよ。

「このような場合に、疑いの目を向けられて当然なことを行うことの出来る人など、この世には存在し得ないものと願っております。貴方を疑っているのではありません。そのような人間が一人でも存在し得るといたしましても、トムリンソン船長、子供さんを持つ父親、年配の方、分別と経験をお持ちの方は、そのような人間にはなり得ないはずと、私はそのように確信いたしております」

奴が話してくれたことだが、ちょうどこの時、彼女の目から突然、奴に言わせると「鋭

(ア)　七十八頁を参照のこと。

い一瞥」というわけだが、閃光のようなものがきらめいて、それが奴の震える血管の中を突き進んで行くのを感じたように思い、身体の震えを抑えられなかったというのだ。

犬の良心っていうやつなのさ、ジャック。それだけのことだ。そういったきらめき、その手の一瞥なら、半ダースは味わっているのだよ、俺様は。魂の底の底まで見通すこの美女と、別の会話を半ダース交わす間にな。

彼女の伯父というのは、彼女も白状せずにいられないわけだが、日頃からその種の便法を思いつくような人間ではないというのだ。だが、この点に関しては、不幸にも事態が異常だということ、それに、伯父が彼女の名誉を気遣ってくれていることもあって、彼女もやむなく納得したというわけだ。

それで、あの犬っころも安堵の胸を撫でおろし、少し勇気も湧いてきたのだ。

彼女は奴に訊いていたよ。ベティ夫人とモンタギュー嬢には、自分を訪ねる気持ちがあるように思うか、とな。

そのつもりであるのは疑うべくもない、と奴が答えた。

「それから、あの人のほうでは、私が説得に応じ、貴方がなさった報告を夫人たちに対して黙認するようなこともあり得ると、そのように考えているのでしょうか」と、彼女が訊いていた。

「彼女にこんな考えを抱かせること、それこそ俺が希望していたことなのだよ、ジャック。さもなければ、夫人たちの手紙を見せたりはしなかったはずだ。ただ、船長には話してあったのだよ。この望みは諦めざるを得ないものと考えているとな」

否、と奴は言っていた。俺にはそのような考えはないものと確信している。夫人たちと顔を合わせた際、俺が包み隠しのない真相を（内緒の話ということでだが）打ち明けるつもりでいるのはほぼ間違いないと思う、というのだ。

それから奴は、全面的和解に向け、彼女の伯父がすでにいくつかの手段を講じたことを話し聞かせていた。「貴女が本当に結婚なさっていることをお知りになれば、伯父上はすぐにそのことについて父上と話し合いに入られることでしょう。現に、貴女との縒りを戻したい旨のご希望を母上に明かしておられたのですからね」

「で、母はどのように申したのでしょうか。大好きなお母様はどのように言っていたのでしょうか」

激しい動揺を見せながら、彼女はそう尋ねていた。船長が描いてくれたところでは、一心不乱に耳を傾けながら、その愛くるしい顔を突き出し、まるで、奴の言葉が彼女の心に届くまでに掛かる道程を縮めたがっているみたいだったとのことだ。

「それをお聞きになると、マダム、母上の目からは涙が溢れ出たのです。そして、伯父上も、母上の優しいお気持ちにすっかり心を打たれ、その話題を進めることが出来なくなってしまわれました。だが、式が執り行なわれたことをお聞き及びになれば、すぐにも正式な形でその件を母上と話し合われるおつもりなのです」

声の調子からして、彼女は泣いていたのだ。愛しの君も情にほだされ始めていると俺は思ったよ。そして、奴の雄弁さが妬ましく思えた。たとえ俺自身のためになることではあっても、この高貴な魂を持つ女性を説き伏せるという、俺の失ってしまった能力を持ち合わせた人間が、だれにせよこの世にいるなどというのは、考えるだけでもほとんど耐えられないことだったのだ。そして、こんなことを考えていると、あの瞬間には、彼女が並べ

立てたえらく激しい非難の言葉から感じたものよりもさらに大きな不安を覚えたし、それはまた、彼女は情にほだされているのだという想いから得た喜びよりもさらに強いものだったのだが、貴公にその辺の見当は付くだろうかな。何しろ、彼女の言動というのは、その一つ一つが美しいのだよ。興奮するところが美しいし、涙に暮れる姿も美しい。船長が若者で、地位と財産を備えていたとしたら、奴の喉は危険に晒されることになっただろうし、彼女に対しても、俺としては極めて厳しい評価を与えていたことだろうな。

「あゝ、トムリンソン船長、この人の奇妙なやり方のせいで、私がどんな辛い目に遭ってきたのか、貴方はご存じないのです」と、彼女が言った。「昨日も、恥じることなくあの人にお話しいたしましたが、あの人の前途には平坦な道が開けていたのです。初めあの人は、欺いて私を自分の手中に収めました。でも、あの人の手に落ちました時」と、そこで彼女は話を中断した。それから、再び口を開くと、「あゝ、貴方はご存じないのです、あの人がどんなに奇妙な人間であったのかを。不作法で、行儀の悪い男だったのです。自分の生まれや受けた教育、そして、学んだ知識に泥を塗るような不作法な男です。それに、世俗的な面や容姿の面での利点が備わっているものですから、そのお陰で、紳士の特徴となっておりますあの礼儀作法にも縛られずに済むみたいに、そんな振舞いをしてみせるのです」と言うのだよ。

俺のことをそんなふうに言った、あるいは、そんなふうに考えた、これまでで最初の女だということ、その点は慰めになるな、と俺は考えたよ。だが、これは（伯父の友人に向かって語られた俺についての陰口なのだから）、最愛の者よ、すでに崩れんばかりに積み重なっているそなたの罪状の山を、さらに嵩張らせる助けとなるものなのだぞ。俺のベラム紙の手帳に書き留められているのだからな。

クラリッサ「哀れな若い娘に対する（と申しますのも、私はほんの小娘にすぎないのですからね）あの男の振舞い全体を振り返って見ますと、大変な愚かさ加減とか、腹黒い企みとか、そのどちらにつきましても、あの男を許すわけにはまいりません。それに、この前の水曜日にも …」と、そこまで言って、彼女は話を中断した。察するに、顔を背けたのだろう。

不思議なのは、あんなにも恥ずかしく思っている点に、彼女が恥じらいもなく触れていたことだよ。それも、男に向かって、その男と二人きりだというのにだ。

船長「私がそのように微妙な問題に深入りしようなどとは、マダム、滅相もございません。ラヴレース氏も、貴女が氏に不満を抱かれるだけの理由をお持ちなのは認めておられるのです。ただ、故意に働いた不作法ではないのだという点につきましては、私に向かって実に厳かに身の証を立てておられますし …」

クラリッサ「あの人に身の証の立つわけはございませんわ、トムリンソンさん。あの家の人たちも、あの人と同じように堕落した人たちに違いありません。悪辣な共同謀議があったものと私は確信しているのです。でも、このような話題はもう止めましょう」

船長「あと一言だけお願いいたします、マダム。氏のお言葉では、貴女は氏をお許しになる約束をなさったそうですね。氏がおっしゃるには …」

「あの人は分かっていたのです」と、彼女が言葉を挟んだ。「自分が許すに値しないことをです。でなければ、そのような約束を私に強要したりはしなかったのです。私のほうでも、そのような約束を与えたりはしなかったのです。下劣極まりない暴挙からこの身を守

るということさえなければ　…　」

船長「願わくは、マダム、氏の振舞いが言い訳の立たないものであったとは申せ、お約束を頼りとしておられることでは、多少は弁護すべき点もございましょうから、世間体のためにも、また、氏ときっぱり手を切られた場合ですが、その後で起こるやもしれない災いを避けますためにも、御身に生来備わっております寛大なお心に働き掛けられました上で、大目に見ていただき、氏に恩義を施してくださると有難いのです」

彼女は黙ったままだ。

船長「お父上とお母上は、マダム、お二人の元から姿を隠されたお嬢さんのことを嘆いておられますが、そのお嬢さんというのは、貴女がラヴレース氏に寛大な態度をお示しになることで連れ戻して上げることの出来る人なのです。お二人が二重の損失を嘆かれて当然ということにもなりかねないのですが、そのようなことを運に任せてはなりません。お嬢さんと同じく、息子さんも失われるのです。息子さんは、もしかいたしますと、これは貴女の手で防ぐことが出来るかもしれないことですが、ご自分の乱暴さが元で、お二人にとりましても、また、ご一族全員にとりましても、永久に失われてしまうのです」

彼女の声が途切れた。泣いているのだよ。この言葉が強く胸に響いたことは、彼女のほうでも認めていた。

この男の立身出世のために一肌脱いでやろうと思ったぞ、まったくの話。

船長「宜しければ、マダム、一言述べさせていただきたいのです。もしも、貴女が是非にとおっしゃるならの話ですが、伯父上にこっそりと上京していただき、伯父上ご自身の手で貴女をラヴレース氏に手渡されるよう説得するのも、私には難しいこととは思えないのです。ただ、勿論、あなたたちの現在の不仲のことが氏のお耳に届くようなことになれば、話は別です。それから、マダム、兄上は今この時にもロンドンに着いているかもしれないのです。また、決意を固めてもおられるのですよ。貴女を見つけ出そうと　…　」

クラリッサ「兄のことをどうしてそこまで恐れねばならないのでしょう。兄が私に害を及ぼしたのです。私が兄を傷つけたわけではございません。ラヴレースさんがこの身に加えてきましたことを、兄も加えようとするのでしょうか。邪悪で、恩知らずな男です。あの人自身の手で寄る辺ない身となりましたのに、そんな友達も保護者もいない娘に無礼な真似をしようとするなんて　…　かつてしておりましたような見方をするなど、とても私には出来ない相談です。あれだけ卑劣な計画を練ってこの私に接してきた男です。そんな恥知らずの手に自らこの身を委ねたりすれば、どのようなことになりましょう。そのようなことをいたしますと、あの人のためにどれほど辛い目に遭いましても、どなたが憐れんでくれましょう。だれが許してくれるというのでしょう。いいえ、ラヴレースさんには私の傍から離れていただきたいのです。兄が私を見つけ出しても構いません。私に害を及ぼしました兄と対面するのを怖がるような、そんな情けない人間ではないのです、私は」

船長「貴女と兄上がお会いになるのは相談をなさるためだけのこと、諫めたり、障害を解決したりなさるためだけのことだというのでしたら、話は別でしょうね。しかし、マダム、貴女が結婚してはおられず、また、ラヴレース氏とは絶対に一緒にならないおつもりなのを、兄上も気づいてしまわれるのです。お二人が顔を合わせられた結果は（ソームズ氏が兄上に付き添っておりますし）、果たしてどうなるとお考えでしょうか。ラヴレース氏は邪魔をなさらないものと仮定しての話ですが、それは考えられないことでしょう」

クラリッサ「そうですわね、申し上げられることといたしましては、自分がひどく不幸な人間だということだけですわ。神のご意思に任せ、災いの下でじっと耐えねばならないのです。災いを避けたくとも、それを神は許してくださらないのです。でも、私も手を打ってあるのです。私を幸せにするなど、ラヴレースさんには出来ないことですし、私もあの人を幸せにはして上げられません。後はハウさんからのお手紙を待つだけなのです。それで決断がつくはずと　…　」

「決断とは、マダム、ラヴレース氏のことに関してということでしょうか」と、船長が口を挟んだ。

クラリッサ「あの人のことでしたら、とっくに心は決まっているのです」

船長「氏のためになるようにではないのでしたら、私は手を引かせてもらいます。先ほど用いましたものよりも強い論拠を持ち出すことは出来ませんし、繰り返し申し上げますのは無礼というものでしょう。氏の無礼をお許しいただけないということですと、きっとそれは、氏が私に打ち明けておられたものよりもはるかに罪深いものだったに違いありません。もしも完全に心を決めておられるのでしたら、伯父上にはどのように申し上げたら宜しいのか、何卒ご教示願いたいと思います。〈私の骨折り〉と言っておられましたが、それも今日で最後だと、そう貴女はおっしゃってくださいました。もしもこの私が、立派な価値と名誉心を備えた方たちが互いに和解するための、そのささやかな手立てとなることが出来たのでしたら、骨折りなどとは少しも思わなかったことでしょうね」

ここで、しかつめらしい顔付きを装いながら、俺は入って行ったのだ。

ラヴレース「トムリンソン船長、貴方とこの容赦のない（だが、その他の点では衆に秀でた）淑女との間で交わされました話の大部分は、私も耳にいたしました。愛する者がそこまで決意を固めていたのを知り、身を切られる思いです。これほどの前途の見込みがありながら、彼女の敬意に与るところがこうも少なかったなんて、そんなことが有り得るとはとても信じられませんでした。しかしながら、不幸にして不作法を働いてしまいましたことにつきましては、身の証を立てねばなりますまい。お見受けするところ、貴方もそれを実際よりはるかに大きなもののように考えたがっておられるのですからね」

クラリッサ「貴方が繰り返されるのに耳を貸すつもりはありませんわ。この身に加えられました無礼のことは、私一人で判断いたしますし、それが当然なのです。貴方と討論するつもりはございませんし、あのショッキングな話題について、貴方の説明に耳を貸す気もございません」　そう言うと、彼女は出て行こうとした。

俺は彼女とドアの間に割って入った。「お話ししようとしているのは、マダム、すべてお聞きいただいて差支えのないことなのです。私の落ち度と申しましても、お聞きいただくわけに行かないような種類のものではないのです。公正な態度で自らの罪を告発するつもりです。お気持ちを傷つけるようなことは申しません」

そこで俺は、火事騒ぎは本物だったのだと「そのとおりなのだからな」主張し、計画的だという点については「確かに、事実とは少し離れるが」否認してみせた。若い熱情の激しさ、そして、突然の衝動に急き立てられてしまったことは認めたが、似たような状況において、それを抑えこむことの出来る者も少なかったはずだ、と言っておいた。また、許してもらう約束を取り付けた上でだったが、彼女からの命令と懇願により引き下がっており、その際、不作法な真似は少しもしなかったし、あるいはまた、あのように魅惑的な姿

でいる時に不意を突かれた慎み深い人間からはとても見逃してもらえないような、そんな無遠慮な振舞いも一切なかったつもりであるということ、そして、火事を知らせる叫びに接しての彼女の怯えようからすると、すぐにも卒倒しそうな様子でもあり、落ち着きを誘う態度と体へのいたわりが必要だったのであり、待ち望んでいる目出度い日はすぐ目の前に迫っていることでもあるから、俺が結婚の約束を交わした恋人のように周囲から見てもらおうとするのは当然のことのように思われるということ、さらには、あの家の婦人たちに対しても、次のような言い訳を持ち出すことが出来そうだということ、つまり、婦人たちはわれわれが実際に結ばれているものと考えており、それだけに、あのように微妙な場合には、あまり口出しはしたくないと思うかもしれない、といったことを話したのだ。あの女たちのための、思い切った仄めかしといったところだよ、ジャック。

激しい憤りが彼女の軽蔑を含んだまなざしに溢れ、俺に向け鋭い一瞥が次々と投げ掛けられた。あの愛らしい顔立ちの一つ一つに気迫がこもっているのだ。だが、彼女は一言も口にしないのだよ。もしかすると、ジャック、彼女は次のような考えを思いついたのかもしれないのだ。つまり、女たちのためにこんな言い訳をするところを見ると、初めてあの家へ連れ込んだ際に、彼女のことを結婚しているものとして連中に通そうとした、俺のその策略にも説明が付きそうだ、とな。

船長「すでにずいぶん怯えておられるご婦人にさらなる心配事をお与えになるとは、正直な話、まずいことをなさったと申さねばなりませんね」

愛しの君が俺の脇をすり抜けて行こうとした。俺はドアに背を押し当て、今少し居てくれるよう懇願した。そして、「私自身のためでもありますが、同じく、貴女のためでなければ、我が最愛の人よ、私もここまで言葉を重ねたりはしなかったのです。トムリンソン船長が私のことを、実際よりもさらに悪辣な男であったのだとお考えにならないようにですよ。そして、これだけ申し上げるのが私には必要なことではなかったのか、その点を貴女ご自身のお心に訴えまして、また、そうしなければ船長のほうでは、貴女の憤り方の激しさから私の罪を判断され、私のことをはるかに低く評価してお帰りになったのではないかと、船長にもその点をお尋ねいたしました上で、この件につきましては、この先もう一言も触れないようにいたしましょう」と言ったのだ。

船長「確かに、そうしていたでしょうね。そのつもりであったことを認めましょう。それに、ラヴレース殿、そこまでご自分の立場を弁護出来ますこと、私といたしましても大変嬉しく思いますよ」

クラリッサ「罪を犯した者が裁く人と同じベンチに腰掛けるというのでしたら、その言い分は十分に聞されたものに違いありませんわね。私といたしましては、自分の言い分を男の人たちに付託したりはいたしません。また、これは言わせていただきますが、トムリンソン船長、貴方のことを高く買いたい気持ちはございますが、貴方に付託するつもりもございません。自分の有利に働くよう貴方に感化を及ぼしたとの確信がなければ、この人も貴方をハムステッドまで呼び出したりはしなかったはずですからね」

船長「感化を受けたとのおっしゃりようですが、マダム、それは伯父上のためのことですし、また、(ラヴレース氏を目の前にして申しますが)彼のためというよりは、貴女ご自身のためのことなのです。平安と和解をもたらすこと以外に、一体この私にどんな狙いがありましょう。最初から非難してまいりましたことではありますが、苦しみ悩む心にさら

なる苦悩を強い、怯える心をなおも恐怖に陥れました点では、今再び、ラヴレース氏に非があったと申しましょう。貴方も認めておられることですが［と、勇ましい顔をして見せながら］、すでに奥様はすぐにも卒倒なさりそうなご様子だったわけですからね」

ラヴレース「白状させてもらいますが、トムリンソン船長、まことに罪深い、大馬鹿者だったのですよ、私は。そして、たとえこの愛すべき者が光栄にも愛を注いでくれたとしても、その恩に報いることがなかったのです。だが、愛を疑って当然なところがありすぎたのです。そして、今度のこの一件こそ、紛れもない証拠になるのです。この誇り高い心が願って止まなかったものですが、私を重んじる気持ち、そんなものを彼女はいまだかつて持ったためしもないことのですよ。二人の前途にはこれほど有望な見込みがあるわけですし、あの日はすぐ先に迫っているのです。贈与財産の件は合意を得て、文書も作成されております。彼女の伯父が全面的和解を企てており、私といたしましては、自分自身のためなどではなく、彼女のためにこそ、言われるままに従いたいと思っているのですが、彼女のほうでは、まったく偶発的な出来事に際しての、実に些細な不作法のことで、私を永久に放棄することが出来るのです。また、私を袖にするのと一緒に、伯父上が進めようとしていた形での、そして、彼女も暗黙のうちに同意していた、あの和解への望みをことごとく断念し、結果のすべてを危険に晒して平気なのです。それらが致命的なものとなる可能性はあまりにも大きいというのに　…　絶対に間違いのないところですが、トムリンソン船長、愛しの君は、もったいなくもその手を私に委ねようとしてくれましたその間もずっと、私を憎んでいたに違いないのです。そして今、私の知るかぎりでは、彼女は私を捨て去る決心をするに違いないし、胸中では、嫌悪を誘うことこの上ない男のほうを選んでいるのです。つまり、貴方のお言葉では、彼女の兄に同行しているという、あのソームズのためなのです。それにしても、どんな望みを抱き、どんな目的を持って同行しているというのでしょうか。このような思いが、どうして私に耐えられるというのです」

クラリッサ「貴方に対する私の気持ちをお測りになるのに、貴方が自覚しておられるご自分の短所で判断なさるのは適切なことですわ。でも、ご自分の値打ち以上に私の好意を受けておられたのはご存じのはずです。でなければ、時々なさったような、あのような厚かましい接し方をなさることはなかったでしょうからね」

彼女はわれわれの傍を離れ、歩いて行った。そして、戻って来ると、こう言っていたのだよ。「私のこの手を、ええ、ただこの手だけのことですが、トムリンソン船長、他人様に委ねる決心をつけられずにおりましたことはお認めいたします。かつては非常に優しくしてくれました両親に対し、この点につきましての紛れもない証拠を示したことがこれまでにもあったのではないでしょうか。お陰で、苦しみを味わうことになりましたが、この人は、感謝の念や尊敬の気持ちからいたしましても、その苦しみを辛抱出来るものにしてくれて当たり前でしたのに、一層辛いものにしてみせたのです。ためらわずに白状いたしますが、この人に傾いて行く気持ちさえも私は感じていたのです。長い間（あまりにも長すぎたのです）、この人の訳の分からないやり方に耐えてまいりましたが、この人の過ちの数々にいたしましても、軽佻浮薄さに由来すること、そして、自分のせいで不幸な状況に巻き込まれました者に感謝の気持ちを抱くことの出来る、そんな心に求められます真の心遣いや真の優しさとはどのようなものなのか、その知識の不足から来ていることと考えていたのです。この人が加えてまいりました残酷で恩知らずな先の侮辱につきましても、あ

れは計画的なものではなかったのだなどと言い出しますのは、今となりましては、この人の邪悪さというものでしょう（この人が公言しておりました点すべてに疑惑を招くことになる邪悪さというわけです）。でも、この侮辱につきまして、どのようなことをこれ以上申し上げる必要があるというのでしょう。そのあまりの悪質さゆえに、あの好意的な気持ちも一変してしまいましたし、この人が口にしております結構な見通しのすべてをも捨て去り、この人の手を逃れるためにですが、あらゆる危険を冒すことのほうを選ぶ気になったわけですからね」というのだ。

「あゝ、最愛の人よ、かつて出くわした者もないようなよそよそしさの奥に、勿体なくもこう呼んでくださったわけだが、〈あの傾いて行く気持ちを見つけ出す〉ことが私に出来ていたなら、私たち二人にとりましては、どれほど幸せだったことでしょう」

「この人は間違いなくそのことに気づいていたのです、トムリンソン船長。私にそんな気持ちを認めさせましたのも、一度だけではございません。この人は自惚れの強さからいたしまして、おそらく、疑念を抱くことのない人ですし、また、私がその点を認めますのに積極的でありませんでしたのは、当然すぎるほどの根拠に基づいて申し上げますが、この人に心の広さが欠けているのを懸念したからでして、それ以外の動機がなかったことは明らかなのですから、それだけに、必要もなしに認めさせたとの思いがますます募るわけです。一言で申しますと、トムリンソン船長（それに、今では、自分なりの処置を取ろうと心を固めておりますだけに、なおさらためらいもなく申し上げるのですが）、結婚相手として考えております男の人に向かって、気取った態度、あるいは、暴君のような振舞いが出来る人間であることが分かりました時には、私は自分のことを蔑んでいたはずだということです。この世で一番大切にしておりますお友達に対してさえ、この種の欠点のことでは、いつもお小言を進呈していたのです。一言で申しまして …」

ラヴレース「で、我が天使は、かたじけなくも認めておられる私への好意的なお気持ちを、実際に、そして、本当に持ってくださったのでしょうか。許してほしいのです、最愛の人よ。もう一度良い評価を賜りたいのです。どう見ましても、お許しいただけないほどの罪を犯したわけではないのです。お約束くださった事柄も、私の強要によるものだとおっしゃるのですね。しかし、許していただくことを期待出来そうなところがあると考えたのでなければ、そのお約束をお言葉に従う条件とするような厚かましい真似は、私にも出来なかったはずです。前途に開けておりましたあのように好ましい見通しを、是非とも実現出来るようにしていただきたいのです。ロンドンへ赴き、結婚許可証を携えてまいりましょう。許可証取得のための障害も、そのすべてが克服されております。証書類の証人には、トムリンソン船長になっていただくことにしましょう。船長は伯父上の側からとして式に出席してくださるおつもりなのです。実際、望みを抱かせてくださったのですよ、船長は。伯父上ご自身が …」

船長「そのとおりでしたね、ラヴレース殿。それでは、望みを持っていただくことにしました根拠についてお話しいたしましょう。〈田舎家〉と私が呼んでおります、ノーサンプトン近くの小さな屋敷へ、一週間かそこいらですが、私と一緒に出掛ける旨を皆さんにお知らせするようにと、私は親友に（伯父上のことですよ、マダム）提案したのです。お気の毒なことに、最近の氏はほとんど外出なさらないのです。実際、目に見えて弱っておられるのです。公にされて構わないでしょうが、氏には転地が有効だったのです。でも、ど

うやら、マダム、あまりにもお気持ちに障る話題のようですね、これは」

愛しの君は涙をこぼしていたのだよ。伯父が健康を損ねることになったきっかけについての船長の仄めかしだが、その含意をどのように当てはめたら良いのか、彼女にも分かっていたわけだ。

船長「伯父上にも申し上げたのですが、二人揃って実際にあちらに向け出発した後、私のチャリオットでロンドンへ引き返すことも出来るのです。そうすれば、伯父上もご自分の目で式が執り行なわれるところをご覧になれますし、最愛の伯父上であると同様、ご待望の父親代わりにもなっていただけるかもしれないのです」

彼女はわれわれに背を向け、両目を拭っていた。

船長「それに、実際の話、今ではそのようにいたしましても、不都合となることは二つしかないように思います。ハーロー氏のほうでも、その提案をお断りにはならなかったのですからね。一つは、あなたたちの間の不幸な誤解の件でして、氏がこの点をお知りになるようなことは、絶対にあってはならないのです。そのようなことになりますと、氏といたしましても、ジェームズ・ハーロー氏の不当な憶測に重きを置こうとするかもしれないからです。もう一つは、必ずや挙式に多少の遅れを生じてしまうという点です。一両日中には間違いなく執り行なわれることでしょうが、もしも …」

こう言うと、我が女神に向かって、奴は恭しく頭を下げていた。まったくもって、惚れ惚れする男だよ。ただし、こうまで奴の手際の良さに感謝しなくちゃならないという、そんな我が身の運命を何度も呪った次第だ。

彼女が口を開こうとしていた。だが、彼女の顔の動きが気に入らなかったので（もっとも、その厳めしさと憤りは少し和らいだように俺には思えた）、俺のほうから「妙案を一つ今思いついたところです」と話し掛け、お陰で、我と我が身を吹き飛ばしてしまいそうになったのだ。

クラリッサ「貴方の妙案は遠慮申し上げますわ、ラヴレースさん。貴方の妙案、貴方の新工夫とやらには、ぞっとしてしまうのです。食傷いたしておりますので」

ラヴレース「こうなのですよ、トムリンソン船長。ご覧のとおりです。何というみっともないところをお見せしているのでしょうね、われわれも。おそらく、貴方にもなかなか思い及ばなかったことでしょう、われわれがこのように絶え間ない誤解の日々を送っていたなどとは …だが、精々宜しくお願いいたしましょう。われわれもまだ幸せを掴むことは出来るのですよ。あゝ、彼女に対して私が抱いているもののその百分の一でも良いのだ。この愛しき者が私に愛を注いでくれていることを確信出来たなら …われわれは互いに遠慮し合っていたのです。敢えてお話しするのですが、妻は少し細かい点にこだわり過ぎるところがありますし、私にはどうやらそれがなさ過ぎるのです。そんなわけなのです、二人が難しい状態に陥るのは。だが、私には心があるのです、トムリンソン船長。彼女の愛に期待するよう私に命じる心がですよ。人間として可能なかぎり、出来るだけその愛に値するようになろうと心に決めているわけですからね」

船長「拝見いたしましたこと、また、耳にいたしましたことには、本当に驚いている次第です。氏が貴女に加えられました無礼につきましては、マダム、ラヴレース氏の弁護をするつもりはありません。氏の落ち度は案じておりましたよりも軽微なものにも思われますが、私自身も娘を持つ父親といたしまして、氏を弁護するわけには行かないのです。た

だ、正直申しまして、マダム、お怒りが度を越しているように思うのです」

クラリッサ「度を越しているとおっしゃるのですね。その気になれば幸せになれたかもしれないという、そのような人には度を越しているのです。私を自由に出来る力を（手管と策略を弄してですが）得たことで、百度も私の魂を宙ぶらりんな状態に追いやってきた人にとりましては、度を越しているのです。話すのです、ラヴレース。自分の口から言うのです。そなたこそ、私に侮辱を加えることで、自らの望みを損ねてしまった、あのラヴレースその人ではないのですか。病身の奥様のために部屋を探している、足が不自由な老人に化け、卑劣な扮装に身を隠して現れた、あの恥知らずではないのですか。ここのご婦人たちには、何から何まで自分でででっち上げた作り話をお聞かせし、私に対する夫としての権利を、持ち合わせてもいないのに、皆さんに向かって断言したのではないですか。このような男の申し立てを私が信用するなど［と、船長のほうへ向き直りながら］、期待されて良いことでしょうか」

ラヴレース「お好きな仕打ちをしていただいて結構だ、最愛の人よ。耐え抜いて見せましょう。だが、君の蔑み、そして、君の不当な扱いのお陰で、私の心臓には短剣がぐさりと突き刺さっているのです。しかし、あのような変装をせずに、君と言葉を交わすことは可能だったのでしょうか。それに、もしも努力を積み工夫を重ねることで、君の怒りを押し止めることが私に可能となり、また、お約束の許しを保証してくれるよう、君の心を引きつける望みも出てくるのでしたら、君を手放すような真似がこの私に出来るものでしょうか。ご婦人たちの前で君に向かって口にした言葉も、まるで結婚式は済んでいるかのような口振りでしたが、あれにしても、伯父上が助言をなさり、君が黙認してくれた点を踏まえてのことなのです。それに、兄上やシングルトン、そして、ソームズが、君の結婚に関する知らせは事実なのか、それとも、事実ではないのか、そのいずれかによって自分たちの処置を取るためにも、真偽のほどを探り出そうと決心を固めていただけに、あんな言い方になってしまったのです。また、その防止には気を配りすぎたくらいですが、例の傷害沙汰を防ぎたいとの気持ちからのことだったのです。何しろ、この意気地のない態度というのは、兄上や共謀者たちから傲慢な態度を引き出しただけですからね」

クラリッサ「まあ、奇妙な人ですわね。何て話がお上手なんでしょう。でも、トムリンソン船長、これは言わせていただきますが、仮にこのお話をさらに進める気がありましても、私といたしましては、ローリンズ嬢のお考えを伺いたいと思うのです（他にお願いできる人など、私にはいるでしょうか）。あの人は分別と廉恥心とを備えたお方とお見受けいたしております。でも、私の憤り方が妥当な程度を越えたものかどうか、どんな男の方のお考えも伺うつもりはございません。私が決心を　…　」

船長「お話の途中を申し訳ありませんが、マダム、そうなさる理由は一切有り得ないものと考えております。貴女に加えられました無礼な言動につきましては、貴女もおっしゃるとおり、貴女一人で判断なさるべき事柄でしょう。ここにおられるご婦人方は、貴女にとりましては赤の他人です。皆さんのところに滞在なさるのも、おそらく、ほんの短い間のことでしょう。この人たちのどなたかにご事情をお漏らしになれば、そして、兄上がやって来られて、皆さんに問い合わせるようなことになれば、伯父上が計画しておられる調停のことが露見し、頓挫させられてしまうのです。私もこれまでの生涯で見せたことのない姿を呈することになりましょう。このご婦人たちのほうでは、秘密を守る義務があると

はお考えにならないかもしれませんからね」

惚れ惚れする男だよ、まったく。

クラリッサ「あゝ、何という窮状に私を巻き込んでしまったのでしょうね、致命的な一歩が … でも、こんなお願い、どなたに対しましてもする必要はないのです。私なりの手段を講じる覚悟でおりますからね」

船長「すっかり決心しておられるということでしょうか、マダム」

クラリッサ「えゝ、そのとおりです」

船長「伯父上にはいかがお伝えしたものでしょうかね、マダム。お気の毒な方だ。どんなにか驚かれることでしょうな。お分かりでしょう、ラヴレース殿。貴方もお分かりでしょう」と、勿体をつけて手を振りながら、俺の方を振り向き、「だが、ご自分を恨まれることですな」と言うと、悠然たる足取りで奴はわれわれのところから離れて行ったのだよ。

まったくそのとおりだ、と俺は思った。俺は部屋を横切り、悔しい思いに駆られて、口説き下手なこの唇を噛みしめていた。上唇を、そして、次には下の唇を、とな。

奴は彼女に向かって深々とお辞儀をし、窓の方へと進んだ。帽子と鞭が置いてあったわけだが、それらを手にすると、ドアを開けた。そして、「馬を玄関へ引いて来るよう、私の召使に言ってくれたまえ、君」と、見掛けた者に向かって言っているのだ。

ラヴレース「お待ちください。お待ちいただきたいのです。これでは、世界一の不幸せ者だ。お待ち願います。ただ、あゝ … だが、お待ちいただきましょう。ベティ夫人からの働き掛けが何か効果をもたらす望みも … 」

船長「おやおや、ラヴレース殿、愛情溢れる伯父上である私の高潔な友人は望んでおられないでしょうかね。お嬢さん代わりの姪御さんに対して、少しは影響力を持ちたいということをですよ。だが、無礼の段、お詫びいたします。お便りをいただけますならば、いつ何時であれ、奥様のお役に立つ所存です。それも、我が親友のためでありますし、奥様のためを思えばのことでもあります」

彼女は椅子に身を沈めていたのだが、両の目を伏せたままだ。物思いに耽っているかのように、身動き一つしないのだよ。

船長はもう一度彼女にお辞儀をしたのだが、返礼はなかった。「ラヴレース殿」と、奴が言っていた（対等の立場にあり、また、自立してもいる人間の態度でだ）。「私は失礼いたしますよ」とだ。

不可解なる愛しの君は、まるで彫像のように、なおも不動のままだ。手も足も頭も、目すらも動かさない。これほどの深い夢想に耽っている人間、このような白日夢に浸っている人間はかつて見たこともなかったよ。

彼女が座っていた場所に近いドアから出ようと、船長はその傍らを通り過ぎた。もっとも、もう一方のドアを通るのが奴には一番の近道だったのだがね。そして、もう一度頭を下げていた。彼女はじっとしているのだよ。「奥様はご思案中ですので、お騒がせはいたしますまい。それでは、ラヴレース殿。どうぞ、そのままに願います」

ハッとしたように彼女の体が動き、溜め息が漏れた。そして、「お帰りでしょうか」と尋ねていた。

船長「そのつもりです、マダム。お役に立てると嬉しかったのですが、私の力では及ばないことと知りました」

彼女は立ち上がり、片手を差し出していたが、真似ようもない威厳と柔和さを湛えた仕草だった。そして、「お帰りとは残念です。仕方ございませんわね。ご相談申し上げるお友達は一人もいないのです。ラヴレースさんはたくさんのお友達を作り出す術に恵まれているのです（あるいは、幸運にと申し上げるべきかもしれませんわね）。とにかく、お帰りになるのでしたら、私といたしましては仕方のないことですわ」と言うのだよ。

船長「帰りはいたしません、マダム」　奴が目をしばたたかせていた［情にもろいところがまた出てしまったわけだ］。「帰りはいたしません。もしも、私が今少し留まりますことで、貴女のお役に立つとか、喜んでいただけるとかいうのでしたらね。どのようなものでしたかね（と、俺のほうへ向き直って）、ラヴレース殿、貴方が便法とおっしゃるのはどのようなものでしたか。あるいは、マダム、何かご提案が　…　」

彼女は溜め息を漏らすと、口を噤んだのだ。

「復讐心よ」と、俺は自らに呼び掛けた。「汝の玉座を我が心の内に保持せよ。簒奪者の愛が再び汝を玉座から追い落とすこととなれば、汝の手中に玉座が戻ることは二度と有り得ないのだ」とだよ。

ラヴレース「私が考えておりましたのは、提案するつもりでおりましたのは［と言いながら、俺は溜め息をついてみせた］、こういうことです。つまり、愛しの君には、約束どおりに許してもらえないとしても、ベティ夫人が到着するまで、私に対して抱いている怒りを抑えてもらいたいということなのです。あの夫人が二人の調停人となってくれるかもしれないのです。この愛しの君が夫人の保護の手に身を委ね、オクスフォードシャーの邸宅まで夫人に同行することも出来るのです。田舎までの道連れになってくれるよう、新たな姪となるはずの者を説き伏せるのが、夫人の目的の一つなのです。だれに対しても、二人は暫く前に結婚していたのだということで通るでしょうが、ベティ夫人と貴方は別にします、トムリンソン船長。それと、お友達のハーロー氏もです（氏もお望みですからね）。そして、彼女が私の身内と一緒にいることは、ジェームズ・ハーローに対して、二人が結婚していることの、そして、二人の式が内輪に、それも、この愛すべき者の希望に従って執り行なわれたことの証にもなりますし、貴方の報告の正しさも、船長、証明されることになるのですよ」

船長「名誉にかけて申しますが、マダム」と、奴は胸をひとつ叩いて見せた。「見事な応急処置ですよ。すべての目的に適うものだ」というのだ。

彼女は考え込んでいた。ひどく当惑しているのだ。そして、ようやく、「神よ私を導きたまえ」と言っていた。「どうしたら良いものか、分からないのです。寄る辺のない若い娘です。どなたに相談出来るというのでしょう。下がらせていただきますわ、もしも引き下がっても宜しいのでしたらね」ともだ。

彼女はゆっくりとした、震える足取りで退室し、自分の部屋へと上がって行った。

「後生ですから」と、心打たれた悪党が訴えていた［両手を差し上げながらだ］。「後生ですから、この天晴な女性に憐れみを掛けてやってください。続けるわけに行かないのですよ。私には続けられない。どんなことにだって値する女性ですよ、彼女は」とだ。

静かにしろ、忌々しい野郎だ。女たちが入ってくるぞ。

奴はすすり泣くことで悲しみにけりをつけ、くるりと振り返ると、咳払いをし、もっと男らしい口調になった。お前のその忌々しい目を拭くのだ。奴は拭いた。片側の頬に陽光

のような明るさが浮かぶと、もう一方の頬へゆっくりと広がり、そうして奴は、再び元どおりの顔になったというわけだ。

婦人たちは三人揃って入ってきたのだが、先頭に立っていたのは、いつも好奇心に溢れているローリンズ嬢だった。俺は、すべてを検討するため妻が二階へ上がったこと、妻に関し、われわれにも望みが出てきたことを連中に話して聞かせた。そして、われわれの間で交わされた事柄すべてを報告したわけだが、無慈悲なところや慎重過ぎるという点に対して、暗黙のものであれ、はっきりと口を突いて出たものであれ、麗しき天の邪鬼のほうへ非難が向けられるような表し方をわれわれはしてみせたのだ。

とりわけベヴィス未亡人などは、片方の唇を突き出し、頭をツンと後ろに反らして額に皺を寄せ、今上目遣いになったかと思うと、すぐに目を伏せたりして、奥様には意固地なところや気取ったところがたっぷりとあるように思うと言わんばかりの、そんな素振りをして見せていた。時には、その非難がましい表情を、俺への同情を込めた顔付きに変えてみせるのだ。でも（と、未亡人が言っていた）、事を荒立てるのは好きじゃないんです、と言うのだ。重々お気の毒には思いますが、と肩をすくめてみせながら、こんな大騒ぎをするほどのことではございませんわね、とも言っていた。そして、彼女の目は心の底から笑っていたよ。甘くなさるのは結構でしょう。愛情を注がれるのも結構ですわ。でも、過ぎたるは何とやらと申しますわよ、と言うのだよ。

しかし、ローリンズ嬢は、取り澄ました追従笑いを浮かべながら、ベヴィス未亡人のことを「剽軽なお方」と呼んだ上で、われわれの一件には、何か彼女には測り知ることの出来ない事情があるに違いないのだと語り、われわれの元を離れて部屋の片隅へ向かい、腰を下ろしたのだが、察しのつかないことに苛立っている様子だった。

手紙　十九
ラヴレース氏より［承前］

令嬢は長く二階に留まっていたが、われわれにとっては望ましくないと思われるほどの時間だった。俺としては、われわれのところへ戻るようにとの誘いの声が掛かるのを（淑女らしく）待っているだけのことと思い、同席いただけると有難いという願いを、船長の名で（ロンドンへ向けて発ちたがっているのだが）、ベヴィス未亡人を煩わして伝えてもらうことにした。

ローリンズ嬢にせよムーア夫人にせよ、そのどちらもこの使いに送るのは気が進まなかったのだ。我が愛しの君が話をしたがっているとまずいと考えたのだよ。とりわけ、ローリンズ嬢に訴えかけるようなことを仄めかしていたからだ。おまけに、このお嬢さんの好奇心ときたら、まったく際限がないのだよ。

間もなくベヴィス夫人が、奥様はすぐ後を追って降りて来られますわ、という返事を持って（俺に向かって片方の目を瞑ってみせたり、目をしばたかせたりしながら）戻ってきた。ローリンズ嬢としては、他の者たちがしたように、引き下がることを申し出る以外になかったのだ。だが、その両目には、残れるものなら残っていたいとの思いが込められていたのだよ。ところが、そのまなざしに対しても、望んでいたかに思われる対応は得られ

ないものだから、彼女は他の者たちと一緒に客間を出て行ったのだ。しかし、その足取りはだれよりもゆっくりとしたものだった。そして、彼女が客間を出るか出ないかという時に、令嬢がもう一つのドアから入ってきたのだが、その容姿にも態度にも、物悲しさを誘う荘重さが漂っていたのだよ。

彼女は腰を下ろし、「どうか、トムリンソン船長、お掛けください」と言っていた。奴は彼女の真向かいの椅子に座った。俺は彼女の後ろに立っていたが、かねて示し合わせてあった合図を奴に送るためだよ。万一、その必要があればの話だがね。

こんな具合にだ。左目を瞑って見せるのは、〈その点を推し進めるのだ、船長〉ということを意味している。

右目を瞑り、頷いてみせると、奴の言ったことへの賛意を示す。

人差し指を立て、唇を噛むのは、〈その話は出来るだけ早目に切り上げろ〉だ。

右前方へ頭を傾け、顔をしかめるのは、〈そのとおりだと誓って見せろ、船長〉だ。

掌を一杯に広げて見せるのは、〈その話題に限っては、言葉が過ぎないよう注意せよ〉ということだ。

額に皺を寄せ、肯定的に頷くのは、〈気色ばんで見せる〉ことを指示しているのだ。

そして、こういった仕草は、手を使うものでさえも、腕を持ち上げたり手首を動かしたりせずに行うことの出来るものなのだ。仮に婦人たちが居合わせたとしてもだよ。というのは、これらの仕草を示し合わせた時には、定かではなかったが、連中がその場に居合わせることもあるだろうと思ったからだ。

彼女が咳払いをした。俺は口を開こうとしていたのだが、彼女が味わっていると思われる内心の乱れを省いてやるためだ。だが、心の落着きに欠けるなどということは決してないのだよ、この淑女には。自分の名誉にとって、あるいは、俺がかつて知ったすべての女性から彼女を際立たせている、あの意識的な威厳に満ちた態度のいずれかにとって、心の落ち着きが必要不可欠だという場合にはな。

「私なりに精一杯考えていたところなのです」と、彼女が言っていた。「これまでにありました出来事のすべて、お話に出ましたことのすべて、そして、自分の置かれております不幸な状況のことをです。悪意からではないのです。この世のどなたに対しましても、トムリンソン船長、私は不幸を願ったりはいたしません。私は不利益をもたらします結論よりも、有利な結論を引き出すことにいつも喜びを見出していたのです。時には、とても邪悪な心の持ち主に対しましても、そうしておりました。この点は今になって分かったことですけれどね。私にどのような欠点があるといたしましても、詮索好きというのは、私に生まれつき備わっている欠点ではございません。でも、このような立場に置かれておりますと、そして、策略に溢れ、それを得意にもしている男の人からこれまでのような仕打ちを、この身には相応しくない仕打ちを受けますと　…　」

ラヴレース「我が最愛の人よ　…　だが、口を挟むような真似は止めにしましょう」

クラリッサ「このような仕打ちを受けているのですから、疑って掛かるのが私には似つかわしいのです。私の名誉に関わることなのです。疑い、恐れ、懸念しなければいけないのです。貴方の仲裁はこの男のためには大層時宜に適っておりますし、ずいぶんと思いやりに溢れたものとなっておりますわね。伯父の応急の処置にいたしましても、かつて伯父が思いつきました種類の中の最初のものと、私は信じております。飾りがなく正直で、善

良な心をしている人だけに、伯父はそのような便法の類いを好んで用いたりはしないのです。伯父の便法に合わせたような貴方のご報告、その報告がもたらしました結果、知らせを聞いての兄の驚きようと、そこから生まれました早まった決断、知らせをお聞きになってのベティ夫人やその他のラヴレースさんのお身内の方々の驚きよう、貴方のものと一緒に見せてくれたのですが、知らせを受け、突然にこの人宛に書かれましたお手紙、儀礼的なことを生来大切に守っておられますし、その面で抜きん出ていらっしゃることを自慢なさって当然な資格をお持ちの方たちですのに、儀礼的なことすべてが省かれておりますこと、こういったことすべてが大層迅速に起こっておりますし、そのうちの幾つかは、ずいぶんと都合の好い時に　…　」

　ラヴレース「ベティ夫人が儀礼上の細かい点を省くのは、夫人の手紙で君も承知のはずですが、マダム、君に敬意を表してのことだと明言しているところです。シャーロットのほうでも、その手紙の中で、同じ理由から同じようにする旨のことを公言しています。何ということでしょうね。他のあらゆる点では本当に儀礼的なことにうるさい人間たちなのですが、そんな身内の者たちから向けられた君への敬意が、このような受け止め方をされてしまうとは　…　身内の者たちは喜んでいたのですよ、マダム、私をダシにして君に敬意を表する機会を得たことをです。一族の者たちは一人残らず、私に毒づくのを楽しみにしているのです。ただ、あの祝い事を想定した連中の喜びようときたら　…　」

　クラリッサ「一言あって然るべきとお考えのどのような事柄に対しましても、貴方にはおっしゃりたいことはないのではないかなどと、この私がそんな疑いを抱いたりするとでもお思いでしょうか。私はトムリンソン船長にお話ししているのです。宜しければ、お引き取り願いたいですわね。せめて、椅子の後ろから出てくださいませんか」

　こう言うと、彼女は船長に目を向けた。疑いもないが、奴の目が俺の目から指導を受けているらしいのに気づいたのだ。

　敵に回して不足のない相手だよ、まったくの話。

　船長はまごついていた。あの犬にしてみれば、あれほど顔を赤らめたことなど、十年この方なかったはずだ。俺は悔しさに唇を噛みしめ、部屋の中を歩き回った。だが、再び持ち場につくと、船長に向かって目をしばたたかせた。自分の目の動きにもっと注意するようにとの警告だ。それから、眉をしかめ、次いで、肯定の頷きをしてみせたのだが、ほとんど、「それに腹を立てて見せるのだよ、船長」と言ったも同然だ。

　船長「疑ってはおられないでしょうね、マダム。私がそんなことの出来る　…　」

　クラリッサ「私のことを不愉快には思わないでくださいね、トムリンソン船長。疑り深い気質でないことはすでに申し上げました。誠意ゆえのこととしてお許しいただきたいのです。こんな言い方をして厚かましいとは存じますが、貴方の目の前におります者の心よりも誠意溢れる心は、この世には存在しないのです」

　ハンカチを取り出すと、彼女はそれを目に当てていた。

　その瞬間、俺のほうでも彼女の手本に倣って、自分の心の誠実さを立証してみせるところだったのだ。ただ、良心の野郎がメネルの二の舞いを演じ、胸に温めていた誓いの言葉がこの唇から離れるのを許そうとしないのだ。自分らしさが最も求められる時に、こうも自分らしさを見失ってしまうというのでは、男としては慙愧の極みというものだと、俺はそう思ったね。

悪党のトムリンソンが、悲しげな顔で俺を見るのだよ。まるで、お付き合いで涙を流すのを許してくれと頼むようにだ。奴が泣いていたとしても、それもまた結構なことだったろうな。感じ易い心とか、思慮深い目に浮かぶそんな気持ちの表れというのは、きっかけの点でも恥ずかしくないものである場合には、大いに尊敬されるべきものなのだよ。

ここで貴公には包み隠さず白状させてもらうことにするが、この辛い会話の間に二十回は、次のように一人呟いていたということだ。これほどまでの苦労を重ね、これほどの罪を背負い込むことになると分かっていたのなら、最初から誠実な態度を取っていたことだろう、とだよ。それにしても、ジャックよ、この愛しの者は何故にこうまで愛らしく、それでいて、これほどまでに打ち克ち難いのだろうな。貴公はこれまでに一度でも聞いたことがあるかな。香しい五月の花が十二月に咲き誇ったような話をだよ。

船長「お願いいたします、お願いです、マダム、仮にも私の廉恥心を疑っておられるのなら　…　」

女々しい下郎だよ。大いに憤慨して然るべきところなのだ。肯定の頷きをして見せたのは何のためだと思うのだ。もう一度大股で窓のほうへ進むべきだったのだ。鞭と帽子を手に取ろうとしてだよ。

クラリッサ「私の若さ、経験のなさ、そして、現在の不幸な状況から思い浮かびますような考えを述べているだけのことなのです。立派な心でしたら（トムリンソン船長のお心がそのようなものであることを願っておりますが）、吟味されますのを恐れる必要はございません。調査されますのを恐れる必要はないのです。私の過ちの原因となっておりますあの男、そして、厳しい父の呪いにもありましたとおり、自分が原因となっております過ちを罰しようとするあの男が、私に対しまして、あるいは、私の貞節さにつきまして、どのような疑念を抱いたといたしましても、私といたしましては不問に付すつもりでいたのです。その疑念をまともな形で申し出てくれたのでしたらね。と申しますのも、父親の禁止に背いて、また、自らの思慮分別に照らして得た見方にも背いて行われた、そんな文通に誘い込むことが出来た相手の将来の行動につきまして、おそらくこのような男なら、少しは疑いを抱くはずだからです。もしも、そういった疑念のことを男らしく、また、紳士らしく提議してくださっていたのなら、私のほうでも自分の考えを明らかにし、私はこの男から尊敬される資格を備えた人間なのだと、証明してみせます機会が得られましたのを喜んでいたはずなのです。それに、私の希望といたしましては、貴方が　…　」

船長「喜んで伺いましょう、マダム、ご疑念の一切を。そして、疑いを晴らして差し上げましょう」

クラリッサ「ただ、貴方の良心と廉恥心とに頼ることにいたしますわ　…　」

あの犬め、落ち着きのない様子で椅子に腰掛けていた。足をモゾモゾと動かしているのだよ。彼女の目が奴の上に注がれているのだ。それゆえ奴は、すでに一撃をくらっていたこともあり、俺の仕草を見ようとしてこちらへ目を向けるのが怖いのだ。そして、こちらを見たかと思うと、すぐに目を逸らす。まるで、自分が向けたまなざしを、その目で引き戻そうとしているかのようにだよ。

クラリッサ「貴方が筆になさいましたこと、貴方が話してくださいましたことのすべてが真実であるという点につきましてはね」

俺は右前方へ頭を傾け、顔をしかめた。「そのとおりだと誓ってみせろ、船長」と言った

も同然なのだ。それなのに、あの悪党の奴め、こちらの期待どおりにはやってくれないのだよ。ただ、すべて真実であることは断言していた。

奴が言うには、自分の任務を取り巻く状況からして、また、彼女に知らせた事柄というのが、彼女の伯父である奴の親友以外の人間からは知りようのない事柄だということもあり、露ほどの疑いも自分には向けられないものと思っていた、というのだよ。「ただ、納得していただきますまでは … それまでは、私がどのように受け取られましても … 貴女がお考えになるとおりの姿に受け取られましても、それに甘んじることにいたしましょう」と、奴は口ごもりながら言っていた。

情けない野郎だよ、まったく。

クラリッサ「おっしゃっておられる状況が貴方を疑惑から守って当然なことは認めないわけにまいりませんわね、私も。でも、貴方の目の前にいる男というのは、たとえ天使であっても、その男の弁護を買って出たりいたしますと、疑いの目を向けられることになってしまうような、そんな男なのです」

俺は前に進み出た。部屋を端から端へと歩いたのだが、激しい感情の渦に巻き込まれた状態だ。「我慢をするのもこれまでだ、マダム」と俺は叫び、もう一度、説得力を伴わないこの唇を噛みしめていた。

クラリッサ「非難に値することを恥じらいもなくやってのける人間はだれでも、非難を受けて苛立つべきではありませんわ。身に覚えのない人はこれくらいの非難を受けて大騒ぎをしたりはしないでしょう。身に覚えのある人は騒ぐべきではないのです。「この魅惑的な娘なら、M卿と格言の掛合いをこれ以上ないほど見事に演じてみせることだろうな」でも、今の私は貴方を「と、俺に向かって」貴方の美点に基づいて裁いているわけではないのです。残念に思いますのは、質問をこちらのもっと立派な紳士に「〈もっと立派な〉紳士というのだからな、ジャック」向けなければいけないことだけですわ。ご本人に関わりますかぎりでは、お尋ねすべきではない事柄かもしれませんのにね。不幸なことに私はよく知っているのですが、私ほどにはラヴレースさんをご存じないのですし、ご自分のお子さんもお持ちの貴方なのですから、トムリンソン船長、哀れな若い娘のことはお許しいただけるはずと考えているのです。立派な方からの保護の手をすべて奪われ、この世で最も策略を弄する男によって、そして、おそらくは、その男の手先の者たちの共謀を得てのことなのでしょうが、侮辱を加えられ、危険に晒されてまいりました娘なのです」

そこで彼女は話を止めた。そして、立ち上がると、俺に目を向けていた。しかし、彼女の怒りには明らかに恐れの気持ちも入り交じっていたのだ。そして、そうあって当然なのだよ。だが、この微かな愛の印が俺には嬉しかったのだ。少しも大切に思っていない相手のことで、恐れを感じたりする者はいないのだからな。

「女の口は天下御免ですね」と、俺はそんな台詞を口にするところだった。だが、彼女を〈女〉と呼ぶようなこと、あるいは、彼女に対してそんな俗っぽい言い回しを用いるようなことは、そのどちらも良心が許してくれないのだよ。荒れ狂う思いを示そうにも、動作による以外にはなく、俺は天を仰ぎ、両手を広げ、顔をこすり、鬘をつかんで馬鹿面を晒していたのだ。正直な話、狂気に陥っても構わない気持ちだった。彼女と二人きりであったなら、そうなっていたことだろうな。そして、その結果については、彼女に責任を取ってもらうのが筋というものだろう。

船長が俺のため仲裁に入ってくれた。ただし、おとなしい調子だし、自分自身が無罪放免になることに十分確信を持てない男のような態度でだった。われわれ二人がすでに持ち出していた言い訳のいくつかを、奴は再び強調していた。そして、声をひそめ、「お気の毒な方ですな。だれが同情せずにいられましょうか。実際の話、マダム、いろいろと欠点のある方ではありますが、貴女が及ぼす影響力のほどは容易に看て取れますよ」などと言っているのだよ。

クラリッサ「私、どなたを苦しめますのも楽しいこととは思いません。私をこれほど苦しめてきた人でさえもです。でも、私、この人のことを思い浮かべますと、また、目にいたしますと、平静を保っていることが出来なくなるのです。本当です、本当なのです、トムリンソン船長。私に対するラヴレースさんの接し方というのは、感謝の気持ちを忘れない人とか、心の広い人とかの態度、あるいは、思慮分別を備えている人の態度ですらありませんでした。この人は、昨日もお話ししたことなのですが、自分が侮辱を加えました心の価値をご存じないのです」

そこまで言うと、天使は口を閉ざしてハンカチを目に当てていた。

あゝ、ベルフォード、ベルフォード、彼女がこうまで卓越しているとはな。俺自身の目にさえも、自分のことが時には悪党に映るほどなのだ。

俺は彼女の許しを請うたよ。許しを受けるに足る人間となることを、俺の一生涯の課題にしようと約束したのだ。俺の欠点というのは、これまではどうであったにせよ、現実の欠点というよりも、むしろ、彼女の懸念が生み出したものなのだと俺は話した。俺が思い付いた便法を、一歩譲って受け入れてくれるように懇願し、その便法を繰り返し口にしたのだ。彼女の伯父のためにということで、船長が力添えをしてくれた。俺はもう一度申し出たが、全面的和解のためにというわけだ。俺の身内全員のためでもあり、また、さらなる災いを防ぐためにということだよ。

彼女は泣いていた。どうやら決心がぐらついている様子で、俺に背を向けるのだ。俺はM卿の手紙に触れてみた。二人の争いのすべてについて、ベティ夫人の仲裁に委ねてくれるようにも懇願した。もしも、夫人と面会する前には俺のことを許す気にはなれない、というのであればだがね。

彼女が俺のほうへ振り向き、口を開こうとした。だが、彼女は胸が一杯なのだ。再び顔を背けていた。そして、半分こちらに顔を向け、目にハンカチを当てながら、「で、貴方はベティ夫人とモンタギュー嬢がお見えになるのを本当に、実際に期待しているのでしょうか。貴方は　…　」と言うと、再び口を閉じた。

俺は真面目くさった口調で答えたよ。

彼女は顔をすっかり俺から背け、口を閉じた。そして、考え込んでいる様子だった。しかし、再び俺のほうへ振り向きながら、激しい口調で［あゝ、ジャック、ハーロー家の気質を受け継いでいる者にとって、許すというのはいかにも難しいことなのだ］こう言うのだよ。「お越しになりたいとの夫人の仰せでしたら、どうぞお越しいただきましょう。お会いしたいという気持ちにはとてもなれませんし、実際にお会いすることになりまして、夫人が貴方の弁護をなさるといたしましても、夫人のお話を伺いたいという気持ちにはなれないのです。私を破滅に追いやる魂胆であったと確信いたしておりますが、そのような試みのことですから、考えますたびにますます許せなくなるのです。［仮に彼女が正しいとし

ても、きっかけとなった出来事に比べ、えらく大袈裟な言葉ではないか」大目に見たりいたしますのは道徳意識の低さにつながりますような、そのような種類の侮辱がこの身に加えられるなんて、私の行動は一体どのようなものだったというのでしょうか。自分自身の目にさえ、自分が堕落した姿に映っているのです。この身をさらにみすぼらしいものにしてしまうはずのご訪問を、どうしてお受け出来るでしょうか」とだ。

船長はこれまで以上の熱心さで、俺のことを好意的に見てくれるよう、しきりに彼女を促していた。われわれ両名は慈悲と許しを求め、わめき声さえ上げたと言って構わないのだ。[強襲によって天国を占領する、などという言い方を善良な者たちがしているのを、貴公は耳にしたことはなかったかな」改悛の情が繰り返し表明された。全面的に悔い改める約束がなされ、例の幸便な応急処置に頼ることが再び主張されたのだ。

クラリッサ「私なりの処置は講じてあるのです。後戻りの出来ないところまで、あるいは、後戻りを願うことの出来ないところまで来てしまっております。苦難の道を歩む心の準備は出来ているのです。これまで味わってまいりました不幸に値するようなことはしていないという点が、私にはせめてもの慰めなのです。私が考えておりますことにつきましては、ハウさんに書き送ってあります。私の心は、ラヴレースさん、貴方と共にあるのではありません。貴方に対立しているのです。この身はどうなりましょうとも、貴方との関係は永久に絶つのだという、そのような決心がついていなかったなら、置いてまいりました手紙で筆にいたしましたような、あのような書き方はしなかったはずです」

今や俺は希望に溢れていた。言い回しは厳しいものだったが、彼女は恐れているように見えたのだよ。自分が筆にしたことを俺が思い浮かべるのをだよ。また、事実、彼女の手紙は暴言そのものなのだ。腹を立てている人間は、ジャック、怒りが続いている間は絶対に筆を執るべきではないということだな。

ラヴレース「私に向けてお示しになった厳しいお言葉のことは、筆によるものにせよ口頭によるものにせよ、君の名誉になるようなものでなければ、決して記憶に留めたりはしません。物事に対する君の受け止め方からするなら、すべては当然の報いですし、道徳心から来る憤りの、その自然な結果に他なりません。そして、君が与えた心の苦しみに対してすら、私は君を敬慕しているのです」

彼女は黙り込んでいた。目に添えたハンカチに掛かりきりなのだよ。

ラヴレース「相談相手になってもらう同性の友人がいないことを、時々君は嘆いていますね。心を打ち明けるのには、ローリンズ嬢に訴えかけるのを好ましく思わなかったのだと、貴公はそう考えるかもしれんな」彼女も悪気はないのかもしれませんね。ただ、信頼に値する人間で、他人の秘密をほじくり返すのが好きだという者には、私はこれまでの人生でお目に掛かったためしがないのです。こういった者たちの好奇心はプライドに支配されておりまして、そのプライドというのがまた、自分たちの重要性とか、賢さとかを見せつけるためなのですが、周知の事柄となってしまうまで秘密を囁いて回ること以外では、決して満たされたりはしないのです。それは、どのような場合にも言えることです。男にせよ女にせよ、力とか富とかをむやみに欲しがる人間で、正しく用いるために、そのいずれかを手に入れようと夢中になる者などどこにおりましょう。だが、私の身内の婦人たちでしたら、君にも信用してもらえるでしょう。君のことを自分たちの一員だと考えるのが、彼女

たちの夢なのですよ。伯父上が言われた応急の処置のために、そして、災いを防ぐためにも、世間向けには、少し前に結婚した婦人として通すということを、改めて約束してくれるだけで良いのです。ベティ夫人にはありのままの事実をお知らせしても構わないでしょう。そして、君は（夫人は君がそうしてくれるのを望んでいるわけですが）夫人の田舎の邸宅までお供しても良いでしょうし、また、どうしてもとおっしゃるのであれば、私のことは懺悔の最中、あるいは、保護観察中とでもお考えいただきまして、今後の功罪に応じて、受け入れてくださっても、拒んでくださっても結構ですよ」

船長はもう一度自分の胸を叩き、この提案について、名誉にかけてというわけだが、次のように断言していた。つまり、これが船長自身の娘に関する話であって、娘のほうでは即座に結婚する決心がつかずにいる場合（しかし、船長はすぐに結婚してくれるほうがはるかに望ましい選択と考えているのだが）、娘が断ったりするようなら、船長としても大いに不安を覚えるような、それほどの提案だというのだよ。

クラリッサ「私がラヴレースさんのお身内の方々と一緒になり、世間にはあの人の妻ということで通したりいたしますと、私は何の選択肢も得られなくなってしまいます。それに、そのような場合、どうしてあの人が保護観察の状態にあると言えましょう。あゝ、トムリンソンさん、貴方はあの人の肩を持ちすぎているため、あの人の胸の内を見通すことがお出来にならないのですわ」

船長「私が氏の味方であることは、マダム、前にもお話ししたとおりですし、貴女の味方であり、また、伯父上の味方でもあるのと同じことなのです。全面的な和解をもたらすためですが、これは、あなたたちご自身がもっと互いを理解し合うことから出発しなければならない問題なのです」

ラヴレース「あゝ、我が最愛の人よ、ベティ夫人の到着に立ち会い、夫人の訪問に応じる決心をしてくれるだけで良いのですよ。そして、夫人がわれわれの調停に立つのを許してほしいのです」

船長「そうなさって、害になることなど有り得ませんよ、マダム。それで貴女に不都合が及ぶようなことは考えられません。もしもラヴレース氏の罪が大層ひどいもので、ベティ夫人ほどのお人柄の女性が許し難いと判断なさるようであれば、その時こそ …… 」

クラリッサ［船長の言葉を遮り、俺に向かって］「もしも貴方に邪魔されることがないのでしたら、もしも思いどおりに出来る立場でしたら（それが当然と思うのですが）、ハウさんからのお手紙を受け取りますまでの間、私はここに、この堅気の人のお宅に［この言葉に続いて、船長が言っていた例の〈一瞥〉が俺に向けて放たれたのだ］留まりたく思います。一日か二日のことと思うのです。もしもその間に、貴方が待っておられるご婦人たちがお見えになり、貴方が不幸に陥れた娘に会いたいと望まれるとしてですが、ご訪問をお受け出来るのか出来ないのか、それはその時になって分かることでしょう」

彼女は突然ドアの方へ向き直った。そして、部屋を出ると、階段を上がって自室へと戻って行ったのだ。

彼女が去るとすぐに、船長がこう言っていた。「あゝ、まさしく天使そのものの女性ですね、この方は。これまでの私は、そして、今もそうなのですが、まことにもって邪悪な人間でした。しかし、この素晴らしい女性の身に、どんなことであれ、私のせいで不都合が降り懸かるようなことがあれば、これまでの生涯の悪行すべてを寄せ集めたものに対して

よりも、もっと強い自責の念を覚えることになるでしょう」とだ。

そして、奴は目を潤ませているのだよ。

不都合など別に起こるはずもないじゃないか、情けない奴だな。一体、どんな不都合が考えられるのだ。われわれの意見を形作るに当たって、災厄の中でも最も軽微なものを最大の不幸のように想像する、そんな女の子の空想的な考えに拠らねばならんのかな。われわれの間の事の顛末に関しては、その一切を語り聞かせたのではなかったかな。彼女が自分の約束を破ったのではないのかな。寛大にも俺は、彼女を見逃してやったのではなかったかな、我が掌中のものとなっているというのにだよ。これほど有利な条件で彼女を手中にしていながら、俺は上品に振る舞ったのだよ。通常の無礼講の集まりで、しっかり者で通る娘たちを相手に、もっと馴々しい真似をしたことだってあるのだ。そして、すべてが笑って済まされてきたのだよ。ネッカチーフやヘッドクロースの乱れが整えられ、ずれたペチコートも揺すって元に戻されるのだが、俺の目の前でのことなのさ。似たような状況に立ち、俺同様に決意を固め、俺同様に激情の衝動に、そして、女そのものにも駆り立てられている男で、あんなにも上品な振舞いをした者などはかつていなかったのだよ。それなのに、俺に対してどれほどの慈悲を彼女は示してくれたというのだ。

さて、ジャック、この哀れな犬も貴公そっくりの不幸者だったのだよ。奴の論拠というのは、俺にある目的を断念させるための説得材料として持ち出したのだが、かえって、その目的そのものに対して、俺がますます決意を固めるのを助けたというわけだ。奥様が退室した時にはすっかり心を動かされていたのだから、奴も俺を一人きりにしてくれていたなら、生来の心の優しさにこの身を委ねるようにしてくれていたなら、そして、腰を下ろして嫌らしい表情を浮かべ、何も言わずにいてくれたなら、これは十分に有り得ることだが、俺も奴の真ん前の、彼女が席を外して立ち去って行ったその椅子に座り、丸々三十分は奴と一緒にオイオイ泣いていただろうと思うのだよ。なのに、従僕の分際で俺と議論をするというのだ。悪事を働いていることくらい、心の中で自覚しているというのに、そんな男に罪を立証してみせようというのだよ。こうすれば、俺にはどんな自己弁護があるのか、俺もそれを試してみることになるだろうし、掻き立てられた悔恨の情が心から唇へと溢れ出るようなことになれば、きっと言葉となって発散するはずだと、奴はそう考えるに違いないのだよ。

おそらく、貴公もここで奴が主張したのと同じ口実を持ち出して訴えようとしたことだろう。それゆえ、貴公に対しても、俺が奴に与えた答えで間に合わせることにしよう。そうすれば、貴公にしても、無意味なことを長々と筆にするような骨折りをせずに済むわけだし、俺のほうでも、読む手間が省けるというものだ。

船長「あの方の貞節を試すこと以外には考えていないのだと、また、実際にあの方と結婚することになるのは確信していると、貴方はそうおっしゃっておられましたね」

ラヴレース「そうなるはずだし、それは避けられないことなのだ。疑いもなく、そういうことになるのだろう。それに、彼女を試すという件だが、今こそ彼女は、試練の真っ只中にいるのではないかな。彼女は変わりつつあるのだと、そう考えるべき根拠が俺にはあるのではないのかな。彼女としては許すべきでないと考えている試みなわけだが、それを憤る気持ちを、今は彼女も捨て去ろうとしているのではないのかな。そして、もしもそうなれば、最終的な試みをも許すことになるのではないのか。要するに、そんな試みをこの

試み以上に憤ることは出来るのかということだよ。我と我が身のために、最後の秘密を隠しておこうとすることが女にはよくあるのだが、それでいて、纏まらなかった縁談のことは騒ぎ立て、わざわざ、神々や男たちの耳をつんざかんばかりに叫んでみせるのだ。この情け容赦のない暴言に甘んじるだけの、もっと大きな原因を彼女に与えなかったというのは、俺の愚かなところだよ。俺の弱いところだったのだ」

船長「あゝ、力に頼らずこの淑女を征服するようなことは、貴方にも絶対に不可能でしょう」

ラヴレース「だとすればだな、犬ころめ、俺としても適当な時期と場所とを見つけるのに骨を折らなくちゃあ …… 」

船長「私は勘弁していただきます。それにいたしましても、あんな見事な娘さんを力ずくでなど …… 考えられることでしょうか」

ラヴレース「力ずくというのは、確かに、考えるだけでもぞっとするよ。それに、これまで重ねて来た苦労のすべては何のためだった思うのだ。また、俺のためにかくも多くの者たちを引きずり込んだのは何故だと思うのだ。勿論、暴力による強制が必要となるのを避けるために他ならないのだよ。だがしかし、この淑女のような世に知られた形式尊重家から、俺が直接の同意を期待しているとでも思うのか、お前は。ひとつ言っておくが、マクドナルド、お前の側からこの問題について主張出来るようなことはすべて、お前の主人のベルフォードも主張していたのだよ。俺自身の良心ばかりか、哀れな輩一人一人の良心まで鎮めてやらねばならんとでもいうのか。誓っても良いが、パトリック、彼女の味方がここにいて［と、この胸を叩きながらだ］、彼女のために嘆願しているのだよ。世界中の男が総出で弁護に立つのよりもさらに見事な、もっと抵抗し難い弁舌の冴えをもってだ。それに、彼女は俺のところを逃げ出したのではなかったかな。しかしながら、彼女を試すという(ア)、そして、女性の中で最も操の正しい者の、その操を彼女によって試すという当初の目論見に、俺はどう応えてきたというのだ。辛抱だよ、お前。辛抱するのだ。何ということだ。われわれのすべてがかくも熱愛している、女性というものの名誉を高めることにもなる試練なのだぞ。そんな試練を加えるのは慎んでほしいと言いたいのかな」

「それじゃあ、お考えはまったくないということでしょうか …… この素晴らしい淑女と結婚なさるお考えは［と、これまでに輪を掛けて悲しげな表情を浮かべながら］少しもないということなのでしょうか」

「いや、いや、パトリック、勿論あるのだよ。だが、まず先に、俺のプライドを満足させるためなのだが、彼女のプライドを挫いてやりたいのさ。俺自身のことを思って許してくれるくらいに、彼女が俺のことを十分愛しているのを確かめたいのだ。これまでの彼女は、父親の家に留まらなかったことを嘆いていたのではなかったかな。もしも留まっていたとしたら、その結果は、あの忌まわしいソームズの妻となっていたに違いないというのにだ。仮に今、俺のものとなることに同意するところまで彼女の気持ちが動かされるようであっても、お前には分からないのかな。今までいつもそうだったのだが、彼女のあの憎むべき身内の連中との和解こそが彼女の動機だったのであり、俺への愛情に促されてのことではないという点がだよ。彼女の操の堅さにしても愛情にしても、十分な試練、つまり

（ア）第三巻の五十八頁以降を参照のこと。

は、究極の試練を経て初めて確かなものとなるのだ。ただし、これまで根拠があって期待を寄せていたわけだが、彼女の抵抗ぶりや怒りが期待どおりのものであるなら、また、その怒りの中では、俺に向けられた憎しみのほうが、事実に対する憎しみよりも軽微なものと思われるようであれば、その時こそ彼女には、彼女の思うとおりの形で俺のものになってもらうつもりなのだ。束縛された生活が俺にとって疎ましいものではあっても、その時こそ、俺は彼女と結ばれることになるのだよ」

「結構でございます、旦那様。私に申し上げられますのは、私は貴方様の手の中のパン生地で、お好きな形に作り上げていただけるということだけでございます。ただ、前述のとおりですが、もしも …… 」

「その〈前述〉というやつは無しにしてもらおうか、パトリック。お前が言ったことは全部覚えているのだよ。それに、この先お前が口に出来ることも、すべて承知しているのだ。単にお前は、ポンティウス・ピラト〔二二〕と同じことで、手を洗おうとしているだけなのだ（お前のことを知らないとでも思うのかな）。俺に重荷を背負わせることで、何かお前の良心を落ち着かせるものを手に入れようというわけだ。だがな、俺たちは引っ込みのつかないところまで来てしまっているのだよ。準備万端整っているのではないのかな。その悲しげな目を乾かすのだよ。その厳めしい顔付きをもう一度、無関心さと心安さに占領してもらうのだ。これまでのお前は極めて立派な仕事ぶりだった。これからの振舞いによって、今までのことに泥を塗ったりしてはいけないぞ。それに、たんまりと見返りも待っているわけだしな。自分をパン生地だというのなら、パン生地らしくすることだよ」そう言うと、俺は奴の肩をポンと叩いてやった。「お前は元の姿に戻るだけで良いのだよ。後のことについては、俺が責任を取ることにするさ」

奴は同意と承諾の気持ちを込めてお辞儀をし、鏡のほうへ向かった。そして、こわばって悲しげな表情を解き始めた。良心の呵責のため、自分の頭や心と同じく、鬘までが乱れてしまったというように、その鬘を整えていた。こうして再び、魔王の家来、そして、俺の手先に戻ったというわけだ。

それにしても、ジャック、貴公は考えたことがあったかな。このトムリンソンにこんなにも …… それをどう呼んだら良いのか見当もつかないのだが …… そいつがあるなんてことをだよ。あのような輩に憐れみの気持ちがあるなど、貴公は想像したことがあっただろうか。慈悲心を動かすことすべてに対しては、長きに亘って感覚を失い、体の奥に埋もれていた人間本来の情が、このように息を吹き返し、その力を及ぼそうとするなんてことをだよ。しかし、何でこのような問いを貴公に向けたりするのだろうな、俺も。俺にとっては等しく驚きであったわけだが、同じような際に、似たような同情心を披露して見せた貴公だというのにな。

トムリンソンの場合は、貧しさが奴をあのような悪党に仕上げたらしいのだ。豊かさと贅沢さがわれわれを今の姿に作り上げたようにだよ。結局のところ、窮乏こそが節操の試金石となるのだな。それにしても、〈貞節〉と呼ばれるこの退屈な言葉、あるいは、物の中には、一体何があるというのだ。当面の目論見についてはそのお世話になるわけに行かない俺でさえ、トムリンソンが、女性との件で示されたものとは言え、それを偶然に漏らして見せるのを好ましいことと思わずにはいられないのだ。また、そのようなことが出来るという点で、より高い評価を奴に与えないではいられなくなるのだよ。

手紙　二十
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

船長と俺との間でのこの話し合いが終わるか終わらないかという時に、例の三人の婦人たちが入って来た。ローリンズ嬢が先頭に立っており、お邪魔をしたくはないが、われわれが縒りを戻しそうかどうか、是非とも知りたいものですから、と言うのだよ。

「あゝ、勿論ですよ。そうなるものと考えております。ご承知のとおり、ご婦人方、女性はこのような場合、形を重んじなければなりませんからね。自らの幸せにつながることに応じるのにも、言い寄ってもらわなければいけないというわけです。二人で絶好の便法を思いついたところなのです。伯父上としては、われわれの結婚を疑わしく思っているのです。だれにしても同じことでしょうが、伯父上もこんなことがあるとは信じられないわけですよ。男のほうはこんなに愛しているのですし、女性は実に望ましい　…　」

婦人たちは揃って言わんとするところを汲み取ってくれた。極めて異例のケースなのだと、二人の未亡人が認めていた。女というのはだな、ジャック［間違いなく、他のどこかですでに述べていた(ア)と思うのだが］、われわれのためにやってのけることの出来る事柄を高く評価するものなのだよ。ローリンズ嬢が、もしも宜しければと断ってだが、その便法を皆に教えてもらいたいとの希望を述べていた。そして、俺の話の他の事柄へ進む必要はないと言わんばかりの顔をしているのだ。

この便法がいかなるものか、それを皆に話したことは妻には知らせないようにしてもらいたいと頼み、そうしてくれるなら、話して聞かせよう、と俺は言った。

連中は約束すると言っていた。

便法というのはこうです。ハーロー氏の願いを入れ、納得してもらうために、もう一度式を執り行なうということです。氏は内緒で出席し、自らの手で姪を私に与えることになっています。それで、彼女は検討を加えるために退室したというわけです。

分かってもらえるな、ジャック。俺が言い抜けの用意をしておいたことをだよ。結婚のほうへ俺の気持ちが傾き、彼女が式の際にローリンズ嬢の手伝いを希望するようなことになっても、俺が本当のことを言っているようにここの婦人たちに見せるためだ。また、この際に、我が麗しの君に俺の信用を守る気持ちになってもらうのは疑いのないところだと思ったのだ。俺のものとなってくれるよう、彼女の同意が得られるならばの話だがね。

素晴らしい便法ですわね、と未亡人が叫んだ。連中は三人とも、便法を耳にした嬉しさで、すぐにも拍手喝采しそうな様子だった。女というのは、ジャック、少なくとも二度は結婚したがるものなのだ。確かに、同じ男とではないにしてもだよ。それで連中は、この和解計画のことや、その提案者のことを揃って祝福していた。そして、計画は船長から出たものと考え、喜びの表情を浮かべながら、奴を見ていた。奴のほうでも、その表情に込められた称賛を感じとり、顔を輝かせているのだよ。全面的な和解をもたらすことが出来ますなら、私といたしましても幸甚の至りです、などと言いながら、グライムズ爺さんの件で上首尾を収めた時の、俺の下男のウィルと同じように、得意げに頭を振ってみせるのだが、精一杯澄まして見せる際のローリンズ嬢のように、ツンと頭を反らす仕草を交互に

(ア)　本巻の八十六頁を参照のこと。

交えていた。

だが、船長にとっては、そろそろロンドンへの帰還を考えるべき時刻になっていた。朝までに片付けておかねばならない仕事が山積みというわけだ。また、自宅へ戻る前にもう一度、われわれを訪ねてハムステッドへ来られるかどうか、その点も定かではないということだった。

しかし、すべてが山場に差し掛かっていることでもあり、俺の考えとしては、奴が今夜のうちにハムステッドを去るようなことにはしたくなかったのだ。

今述べたような趣旨の伝言が、俺の願いを受けてのことだが、ムーア夫人の手で二階へ届けられた。それには、船長からの挨拶と、彼女のほうには伯父に伝えるべく、船長宛の指示が何かあるか、知りたい旨の言葉が添えられていたのだよ。

だが、俺は婦人たちに向かって、妻が降りてくるようなら、皆さんには退室していただくのが適当だろうと、そんな意味合いのことを仄めかしておいた。あのように特殊な申し出のことでもあり、検討してくれるよう提案したわれわれに対しては忌憚なく話してくれるだろうが、皆さんの前で、同じように遠慮のない態度を取るのを嫌がると困るから、というわけだよ。

ムーア夫人の伝えるところでは、奥様はすぐにも後を追っていらっしゃいます、とのことだった。婦人たちは三人揃って引き下がり、片方のドアから出ようとしているちょうどその時、彼女がもう一方のドアから入って来たのだ。

船長のほうから彼女に声を掛け、送り届けた伝言の内容を繰り返し、伯父のハーロー氏に報告をするつもりだが、その点に関して彼女の指示をいただきたいのだと言っていた。

「何を申し上げたら良いのか、分からないのです。また、伯父にどのようにお話しいただくのが良いのか、それも分かり兼ねております。貴方はロンドンにご用事がおありなのでしょう。もしかいたしますと、伯父に会っていただく必要もないのかもしれません。ハウさんからお便りがありますまではね。早くとも、ベティ夫人が　…　私、分かり兼ねますわ、何と申し上げたら宜しいのか」

実に寛大な心から、かつては俺に対して抱いたこともあると認めてくれた、あの高い評価を彼女が取り戻してくれるよう、俺は哀願した。俺は次のように話したのだ。約束してあった俺の改心、そして、悔恨の情に接すれば、厚かましい話ではあるが、ベティ夫人本人が、それも、一族全員の名において俺のための説得に努めてくれるものと期待しているし、念願の全面的和解に関する他の様々な点でも、われわれの見通しが極めて有望なものだけに、とりわけそのように思うのだ、とだよ。そして、こうも言ったのだよ。「だが、最愛の人よ、身を伏してお願いしている許しのことは、この世のどんな人間の仲立ちをいただくよりも、君自身の寛大さのお陰となるようにしていただきたいのです。あゝ、我が魂の最愛の人よ、君が私の身内と直接知り合うことになる最初の出会い、そして、身内の者たちのほうでも、君と知り合う最初の出会いというわけですが（何故なら、君が身内の者たちの挨拶を断ろうとしても、連中は引き下がらないでしょうからね）、それが非難の言葉や訴えで始まるようなことにならなければ、そのほうが私にとっては有難く思われるのと同様に、君自身にとってもはるかに好ましいはずでしょう。ベティ夫人がこちらを訪れるのはいかにも急な話ですから、君としても、完全に落ち着き払った表情でお迎えするわけには行かないかもしれませんね。だが、宜しいですね、最愛の人よ、是非ともお願いした

いのだ。われわれの不和のことは軽微なものとして、解決済みの誤解ということで通していただきたいのです。訴えごとをしますと、訴えを受けた人間はプライドと優越感を持ちますし、訴え出たほうは、相手ばかりか自分自身の目にさえ、より卑小な姿に映りがちなものなのです。君から教えや指導を受ける心積もりでいる人間を、裁き人の立場へ持ち上げてやることはないのです。私の一族の一人一人も、私が世間で言われているのと同じくらいにプライドが高いのです。だが、そんな連中にしても、君が抜きん出ている点は気持ち好く認めることでしょう。だれの目にだって、君が一族の女性の中では一番と映ることでしょう」とだよ。

この女性を別にすれば、世の中の他のどんな女に対しても、これで十分だったはずなのだ。しかしながら、彼女は、そんなことを言っても嘘にならない、この世で唯一の女なのだよ。怒りを露にして、彼女はこんなふうにお世辞を撥ねつけて見せたのだ。

「えゝ、そうでしょうとも［そこまで言うと、彼女は一瞬言葉を止めた。気高い心に生じた軽蔑の念からだろうが、その愛らしい胸は波打っていた］。そもそもの初めから、欺かれて自分らしさを失くしているのです。自分の家族から逃げ回っているのです。身内の者たちから縁を切られたのです。貴方には侮辱を加えられ、貴方のお身内の方々の保護の手を控え目にお願いしている娘です。貴方のご家族のご婦人方ばかりか、世間の人たちすべての目に映る私の姿というのは、こんなところではないでしょうか。このような状況に置かれましては、あるいは、たとえ幸福この上ない状態にあります場合でさえも、この分不相応な、他人様よりも優れているなどという言い種で、私が心を動かされるとでも貴方はお思いなのでしょうか。そのようにお粗末な、そのように不適切なプライドを持つことが出来るなどとお考えなのでしたら、貴方はクラリッサ・ハーローの心をまったくご存じないということですわ」

彼女はわれわれを離れ、部屋の奥のほうへ行った。

船長はまた心を打たれていた。素晴らしい人よ、と俺は彼女に呼び掛け、恭しい態度で近づくと、先ほど懇願した点をさらに力説した。

俺は次のように言った。「好意的なものであれ批判的なものであれ、身内の者たちの意見に対して無関心でいられなくなったのは、つい最近のことですし、一族のすべての者たちと折り合いをつけたいと願うのも、自分自身のためというより、君のためを思えばこそなのです。ベティ夫人が上京する主な動機も、慶事に際して一族全員が行うプレゼントの品を購入するためなのですよ」とだ。

そして、船長のほうを振り向きながら、次のように続けたのだ。「こういった考えが、あのように高貴な心を備えている愛しの者にとりまして、何の力も及ぼし得ないことは私も承知しているのです。精々、身内の者たちが抱いている高い評価と敬意の念を示すだけの意味合いしか持たないのでしょう。ただ、身内の者たちにしましても、今では新しい姪と考えている、自分たちの褒め称えている者が姪ではないばかりか、私との関係を永久に絶つことも出来るのだと知ったなら、立派な心を持ち合わせる者たちですし、どれほど失望を覚えることでしょうか。皆は私を愛しているのです。全員が私を愛してくれているのです。確かに私は、これまで皆をぞんざいに扱ったり、軽率な接し方をしたりしておりましたよ。しかし、ぞんざいであったり軽率であったりしただけの話ですし、それも、卑劣な行動に出ることを許さない、あのプライドゆえのことなのです。もっとも、そのプライド

にしても、すべての面で私の役に立ってきたわけではありませんがね。

私がこの愛する者に対して行儀良く振る舞うことについては、一族の全員が保証人になってくれるはずです。皆にとっては、姪、娘、従姉妹、友人、そして、選び抜かれた話し相手であり指導者でもあって、そのすべてを一身に集めた存在なわけですからね。誓っても構わないのですが、船長、二人は幸福になることも出来るのです。そうならねばいけないのですよ」とだ。

「だが、最愛の人よ、こうして両膝をついて［そう言うと、俺は跪いたのだが、窓辺に佇んでいた彼女は、この間ずっと、顔を半ば俺から背け、しきりにハンカチを目に当てているのだ］、この膝をついた姿勢で、約束してくださった君の許しを懇願させてもらいましょう。そして、連中が訪ねてきた時には、このように互いに惨めな思いをしている姿は晒さないようにしたいのです。君と会った次の時刻には、君のことや二人が将来幸福になる見通しについて、ベティ夫人が姉のセアラ夫人に自分の意見を書き送るはずです。セアラ夫人というのは気の弱い女性で、相変わらずその死を悲しんでいるのですが、亡くした自分の娘さんの代わりに、今は、私の妻で埋め合わせをしたいと願っているのです」

そこで船長が話に加わり、彼女の伯父が望んだり期待したりしている事柄や、効果的な方法で全面的な和解に取り掛かろうと決意を固めていること、阻止することも可能な例の災いの件、そして、伯父の上京を待つのが彼女にとって望ましいのであれば、伯父のほうでも、自らの手で彼女を俺に与えるようにとの説得に応じるのは確実に思われるということなどを、改めて強調していた。ただ、船長自身としては翌日その日を、あるいは、遅くとも月曜日を俺の慶びの日にしてくれるよう、謹んで助言させていただくし、熱心にお勧めもするというのだよ。

「お許しいただきたいのです、親愛なる奥様」と、奴が言った。「私自身、貴女に跪いても構わないのです［と、片膝を屈めるのだ］。真剣になりましたところで、別に自分の利益になるものはなく、ただ、皆さんのお役に立てるということで得られる喜びだけなのですが、幸せな絆が結ばれるのを私自身がこの目で見届けたのだと、伯父上に向かってそのように保証する機会を是非ともお与えいただきたいのです。そうなれば、すべての誤解、すべての疑念、そして、不信のすべてが終わりを告げることになるのです」とも言っていた。

「それに、マダム」と、なおも跪いたまま、俺が再び言葉を挟んだ。「君の新しい方策には、それがどのようなものか知らないが、当面の難問をまことに都合好く、また、思いきって申し上げるなら、周囲の者すべてにとってはいささかも評判を傷つけない形で解消してくれることになるような、一体どのようなものが含まれているのでしょう」とだよ。

「ハウ嬢ご自身にいたしましても、もしも貴女を愛しておられるのなら、そして、貴女のご声望を大切に思っておられるのなら、マダム」と、なおも膝を屈めたまま、船長が力説していた。「このような目出度い結末を迎えましたことでは、貴女にお祝いを申し上げずにはいられないはずですよ」とだ。

すると、彼女が振りむいて、半ば跪いている船長の姿を目に留めた。彼女は、「まあ、そのようなことを　…　あゝ、トムリンソン船長。度を越したこの遜りようは何故なのでしょう」と言いながら、奴を立たせようとして、肘のところへ手を伸ばし、「私には耐えられませんわ、こんなこと」と叫んでいた。それから、俺に一瞥を投げ掛けながら、「お立ちなさい、ラヴレースさん。哀れな娘に向かって跪くのはお止めなさい。ご自分が辱めた相手

ではありませんか。きっかけとなりましたことは何と残酷なのでしょう。そして、服従の態度の何と卑しいことでしょうか」と言うのだよ。

「これほどの天使に向けての態度です。卑しいことにはなりませんよ。それに、立つわけにもまいりません。許してもらえるのでなければ　…　」

そこで、船長が今一度、日取りを決めてくれるよう重ねて促した。そして、当惑を覚えるのは、仮にも俺を重んじる気持ちが彼女にあるのなら　…　と奴が言いかけた。

「あゝ、トムリンソン船長」と、彼女が言葉を挟んだ。「一体どこまで、貴方はこの男の肩をお持ちになるのでしょうね。もしも、この人を重んじるような真似を私が一度もしていなかったなら、私を侮辱する力をこの人が持つようなことは絶対になかったはずなのです。また、この人を好意的な目で見るようなことが一度もなかったのでしたら、これほど不当に、これほど恩知らずな形で加えられました侮辱とはいえ（呪わしいものではありましたが）、私もこのように気に病むことはなかったはずなのです。でも、この人には退出していただきましょう。しばらくの間退出していただきましょう」と言うのだ。

船長一人に彼女を任せるのは、俺としては大いに心配だったのだよ。奴のほうでは、信頼してくれて構わないという合図をしていた。そこで俺は、俺宛の奴の手紙と、ベティ夫人、モンタギュー嬢、M卿の手紙をポケットから取り出し（彼女はこの時、最後のものはまだ見ていなかったのだ）、奴に手渡しながらこう言ったのだよ。「何はさておき、トムリンソン船長、この三通の手紙を今一度詳しくお読みいただきたいのです。それから、M卿からのこの手紙もです。また、これらの手紙については、最愛の人よ、君のほうでもそれ相応の考慮を払ってくれるよう、是非ともお願いしたいのです。そして、私が戻って来る時には、その考慮から生じる望ましい結果をこの目で確かめられるようにしてほしいのです」とだ。

こう言うと、俺は退室したのだが、その足取りは重く、心には不安が渦巻いていた。

船長が言っているのだが、彼女の言わんとする事柄に先立ち、手紙を再読してくれるよう、奴は主張したそうだ。彼女も承諾したのだが、少し難色を示していたとのことで、まるで、自分の気持ちが軟化して、俺の有利に働いてしまうのを恐れているみたいだったらしいのだよ。

親しい者たちはおらず、どこへ行けば良いのか、あるいは、何をしたら良いのかも分からないという、自分の置かれている不幸な状況を彼女は嘆いていた。伯父のことや家族のこと、また、彼女のためを願ってヒックマンが行った実りのない働き掛けについて、船長が知っている事柄などを尋ねていたのだが、詮索するような尋ね方だったそうだ。

この点に関しては、奴としても準備怠りなかったのだ。というのも、幸運にもこの手に入った、例のハウ嬢の手紙と手紙からの抜粋を奴に見せてあったのだよ(ア)。実際に彼女の兄がシングルトン、ソームズを引き連れ、彼女を探しているというのは確かなことと考えて良いのか、彼女は奴に尋ねたのだ。

そのとおりだと奴は断言した。

ロンドンへ戻るよう彼女を説き伏せられそうに俺は考えていると思うかどうか、彼女が尋ねた。

（ア）第四巻の百二十七頁以降を参照のこと。

俺がそんな望みを抱いていないのは確かだ、と奴は答えた。
ベティ夫人が彼女を訪ねてくれると、船長は本当にそう思うのか、との問いだ。
露ほどの疑念もありません、というのが返答だよ。
「とは申しましても　…　でも、トムリンソン船長　…　［と、もどかしげに船長に背を向け、また彼のほうへ向き直って］、どうしたものか、分からないのです。ただ、もしも私が貴方の娘でしたら　…　貴方が私の実の父だといたしますと　…　あゝ、でも、私にはいないのですわ、父にいたしましても、母にいたしましても　…　」
奴は彼女に背を向け、そして、目を拭ったのだそうだ。
「まあ、貴方には優しい心がおありなのですね。［彼女も泣いていたのだよ］心を動かされるような男の人も、まだこの世に幾人かはいらっしゃるのですね。神に感謝いたしますわ。あゝ、冷酷な心を持った男の人たちを私は目にしてまいりました。自分の家の中にあってもです。でなければ、これほどの不幸を味わうはずはなかったのです。でも、私が皆を不幸にしているのですわ」
奴の目が涙で溢れていたのは間違いない。
「あゝ、親愛なるマダム、神々しいばかりの奥様、どこのだれに、一体、だれに出来ると　…　」　奴め、自分でも認めていたが、口ごもって涙声になってしまったのだ。確かに、話し合いの一部は俺の耳にも届いたのだよ。二人は両方とも、こちらが願ったよりは低い声で話していたのだがね。何しろ、二人の会話の性質からして、昂ぶった口調に走る余地などなかったのだよ。
「二人を」だの「両方とも」だの「二人が」だのと、この天使のような娘と、どんな男であれ、俺以外の者を同じ言葉の中に含めてしまうというのは、俺にとっては何とも気に食わない話だよな。
船長「だれに出来るというのでしょう、心を動かされずにおくなどということが。しかし、マダム、貴女は他のだれのものにもなるわけに行かないのです」
クラリッサ「そのつもりもございません。でも、あの人の評価は私の中ではすっかり地に落ちているのです。家に火をつけるなんて　…　本当に卑劣な手管ですし、悪辣なことこの上ない目的のために考え出されたものです。貴方は自分のお嬢さんに　…　でも、何を申し上げようとしているのでしょうね、私。ただ、ご覧のとおり、打ち明けてお話の出来る人が私にはおりません。ラヴレースさんは執念深い人です。私を辱めたみたいに、同じように辱めを加えて構わないという相手を、あの人が愛せるはずはないのです」
彼女は一息入れた。それから、再び口を開くと、こう言うのだよ。「要するに、私といたしましては決して、決してあの人を許すわけにはまいりませんし、あの人のほうでも、私を許すことは出来ないのです。仮にも私が、あの人と一つの軛につながれて歩いて行く考えでいたのでしたら、このようなところまで事を運ぼうとしたとお思いでしょうか。あのような手紙を後に残して来たのですし　…　」
「ご承知のとおり、マダム、貴女がお怒りになって当然なことは、氏も認めておられるわけで　…　」
「あゝ、あの人は日に五十回も認めることが出来ますし、また、前言を取り下げることも出来るのです。でも、あの人を許すよう、そして、あの人のものとなるよう説得してもらいますのを、私が望んでいるなどとお考えになってはいけません。それでは、自分自身

のことを、そして、貴方のお気持ちを弄んでいることになりましょう。私自身と似た心の持ち主がお相手でしたら、その人のものになろうという考えを持ちました瞬間から、私はそうしていただろうと思うのですが、私よりも腹蔵がなく、私以上に率直な態度を取るような人は、女性の中には一人としていないのです。臆面もなく申しますが、疑念を抱くいわれのございません時には、私はいつだって遠慮などとは縁のない人間だったのです。ラヴレースさんの行いのことがございましたので、もしかいたしますと、私の姿は几帳面すぎるものと映ったかもしれませんが、この心は勇気づけられたい、安心したいと望んでおりましたし、また、そのとおりになっておりましたなら、私の振舞いすべてがその心のままになってしまいそうな場合だったのですからね」

彼女は話を止め、ハンカチを目に当てていた。

俺は彼女の言葉はもとより、その振舞いのほんの些細なものまでも尋ねてみた。貴公も承知のとおり、俺は人間の本性を、とりわけ、女性の性質についてだが、その最も人目につき難い奥まったところまで踏み込んで探ってみるのが大好きなのだ。

哀れな野郎のほうは、ただただ彼女に敬服し、声も出ないような有り様だ。そして、心気高い娘は次のように話を進めたのだ。

「不釣合いな結婚の宿命と申しますのは、結構立派な人が、もっと幸せに結ばれました場合ですと、お褒めに与るだけの資格を得るかもしれませんのに、そんな結婚をしたために、非難を被ることが頻繁に起こるという点なのです。善良になろうとする性質に恵まれていると心密かに喜んでおりますし、また、少しでも関わりのあります人でしたらどんな人をも、自分の召使でさえも、一人残らず幸せにして上げたいと願っておりますのに、そんな娘を過ちへ導こうとする男の人との結婚は、私といたしましては、避けることになるのではないでしょうか。

彼女は話を中断し、部屋の中を一巡りした。奴のほうは、救いようのない野郎だが、その間ずっとミイラさながらの有り様なのだ。そこで、彼女は話を進めた。

「確かに、私も以前は、あの人が行いを改めますための、そのささやかな手段になりたいものと考えておりました。でも、その望みもありませんのに、自分自身の品行を危険に晒してしまいそうな冒険をいたしますのは、いかがでしょう［貴方は真面目なお方と存じますが］、正しいことなのでしょうか」

あいつは依然として口を噤んだままだ。俺の弁護に立つ者が、申し立てるべきことを何一つ持ち合わせないようでは、俺の主張を通す望みなどどこにあるというのだ。

「ところで、これら一切の結果として申せますのは、一体、どのようなことになるのでしょうか。次のとおりですわ。つまり、貴方のような分別と経験に恵まれた方には備わっていて当然のものですが、もしもあの人に対しましてそのような影響力をお持ちなのでしたら、私のためはもとより、あの人自身のためにもなることですけれど、自分の定めを追い求めるに当たりまして、私を自由にしてくださるよう、あの人を説得するのに骨折っていただくということでしょう。それから、この点はあの人に確約してくださって結構なのですが、私は決して他の男の人のものにはならないということです」

「無理ですね、マダム。そのような話題につきまして、ラヴレース氏がおとなしく耳を傾けてくれないことは分かっているのです。それに、保証いたしますが、私にも少しは根性がありまして、氏からであれ、他のどのような男性からであれ、侮辱を受けたくはない

ということです」

彼女は一息入れてから、話を再開した。「それから、私の便りを受け取りますのを、伯父は断るとお思いでしょうか。[俺の有利となるよう、ほんのわずかでも譲るのを、こうまで忌み嫌っているというわけだよ、ジャック]」

「状況が状況ですから、マダム、伯父上は返事をお出しにならないものと思います。宜しければ、お便りをお届けいたしますよ」

「それで、私が結婚するのでなければ、伯父は私のための計画を推し進めてはくれないのでしょうか。また、伯父自身、和解してくれることはないのでしょうか」

「ラヴレース氏が貴女と同じ家に住んでおられることについてですが、兄上が言い立てておられることや、信じているように振る舞っておられる点からいたしますと …」

「その先は勘弁願います。不幸な人間ですわね、私も」

そこで奴は、その場ですぐに、あるいは、翌朝にでも、彼女の抱えている難問すべてに終止符を打つことが彼女には出来るのだという点を、改めて力説してみせたのだ。

「どうしてそのようなことになるのでしょう」彼女が言っていた。「結婚許可証の取得もまだではないでしょうか。贈与財産の書類への署名もこれからでしたわね。私の最後の手紙へのハウさんからのお返事も、まだ受け取っておりませんでしたわね。なのに、まるで遅れたりすると自分の体面が危うくなるとでも考えているみたいに、そんなにも私が急いだりして良いものでしょうか。でも、私の体面に危険が及ぶといたしまして、そのようなことが起こり得る唯一の男性と結婚するのです。不幸な人間です、この上なく不幸な人間なのです、クラリッサ・ハーローは。たった一度の軽はずみな行いが、何と多くの困難にその身を巻き込んでしまったことでしょう」そこまで言うと、彼女は奴に背を向け、涙に暮れていたのだ。

悪党も、慰めのつもりだろう、一緒に泣いていた。だが、彼女の涙は、奴も気づいたことだろうが、意固地というよりは、むしろ従順な気質を暗示する涙だったのだよ。

貴公も知っているだろうが、切り出した時には非常に柔らかく、ある程度はナイフで切り刻むことも出来るのだが、その機会を逸し、少しでも空気に晒しておくと、大理石と同じくらい硬くなり、たがねで扱うのも困難になる、そんな種類の石があるのだよ(ア)。この淑女にしても同じことで、肝心な時に掴まえておかなかったものだから、部屋を横切って一、二度行ったり来りしている間に、前よりもさらに心を固めてしまったというわけなのだ。そして、前にも一度言っていたことだが、ここから出した手紙に対するハウ嬢の返事を待ち、その結果如何で、自分なりの処置を講じたい、と言明したのだよ。その間、伯父にどのような報告をするのが適当か、その点は奴の一存に任せるが、トムリンソン船長であれば、事実に抵触しない範囲で、出来るかぎり好意的なものにしてもらえることは疑いない、というのだ。そして、どのような報告となったのかを知るためにも、二、三行でも書き送ってくださると嬉しいのだが、と言っていた。

彼女は船長のために道中の無事を願っていた。彼女は頭痛を訴え、すぐにも退室しようとしたのだが、俺は、庭から今戻ったばかりという格好をして（入る時には、まことに見事なものですねと、庭のことを口にしながらだよ）、階段に一番近いドアのほうへと回り込

（ア）特に、バス石（Bath stone）（二三）がこの特性を有する。

み、出て行こうとする彼女の嫌がる手を掴むと、「出て行くのではないでしょうね、我が最愛の人よ。どのような望みがあるのでしょう、船長。許してくれること、そして、縒りを戻してくれることについて、何か希望を与えてはもらえないのでしょうか、君」と、声を掛けた。

引き止めには応じませんわ、と彼女が言っていた。しかし、彼女の決意がどのようなものか、船長がその報告を済ませる頃にはということだが、その頃には戻って来ると彼女が約束をしてくれるまで、俺は手を離さなかったのだよ。

そして、奴が報告を終わると、俺は使いを送り、彼女の約束を果たしてくれるよう求めた。すると、彼女がもう一度降りて来て、次の言葉を（心に決めたこととして）繰り返していた。つまり、彼女が出した手紙へのハウ嬢の返事を待ち、その文面の如何に応じて処置を取る、ということだよ。

その点について、俺はこれ以上ないほど恭しく、また、真剣な態度で彼女を諫めた。俺のほうでは、彼女のせいで、すでに主張してあった申し立ての多くのものを繰り返さねばならなくなったわけだ。船長も負けず劣らず真剣に口添えをしていた。最後には、各々が彼女の前に跪いたのだよ。

彼女は悲嘆にくれていた。気を失ってしまうのでは、と心配になった時もあったよ。だが、われわれはどちらも、いくらかの譲歩が得られるまでは立ち上がろうとしなかったのだよ。俺は我と我が身のために嘆願し、船長のほうでは、親友である彼女の伯父のために嘆願していた。そして、二人揃って、将来の災禍を防ぐためなのだということ、また、両家の平安と幸福のためであることを改めて主張したのだ。

この苦しみが自分の身に余ることを彼女は認めた。溜め息を漏らし、むせび泣き、涙に暮れて、両手を固く握り締めていた。

俺は熟練の弁舌を駆使して誓い、言明した。涙に溢れる彼女の目は俺の上に投げ掛けられ、魅力的な左右の頬それぞれが紅潮していた。愛らしい目鼻立ちの一つ一つには、ありありと苦悩の色が浮かんでいるのだ。ついに彼女は、震える膝が力尽きたらしく、崩れるようにすぐ近くの椅子に座り込んだのだが、その魅力的な顔は、あたかも隠れ場所を探すかのように［母親の胸こそが最も相応しい場所を提供してくれたのだろうが］、自らの肩の上でうなだれていたのだよ。

この瞬間、俺は復讐の誓いすべてを忘れてしまったのだ。彼女が座っているその足下にこの身を投げ出し、奪い取るように彼女の手を掴むと、唇を押し当てた。我が心を魅了する者に対しては、もしも今一度俺への好意を取り戻してくれるなら、俺としても誠意をもって、また、公明正大に接するつもりであるから、過去の罪過を大目に見、将来の夢を叶えてくださらんことをと、天上の神に向かって懇願したのだよ。そして、灼熱の液体が数滴［涙だったなどということはあり得るのだろうか］、俺の頬を伝って落ちるのを感じたようにも思ったのだ。一方、火と燃える両の頬がこの招かれざるよそ者を干上がらせているようであった。

そこで俺は立ち上がったのだが、言葉もなく苦しみ悩むこの姿には、疑いもなく許しの気持ちが含まれているものと考えたのだ。俺は船長を立たせ、こう囁いた。「おい、誓っても良いぞ。俺は本気だ。さあ、和解のことを話すんだよ。彼女の伯父のことも、結婚許可証のことも、贈与財産のこともだよ」とだ。それから、声を大きめにして、「もしも、今よ

うやくにして、トムリンソン船長、このような素晴らしい恵みを我が物と呼んでも構わないのだと、私の天使から許しが出るようであれば、見事な姪御さんに対して私が抱いている感謝の念や愛情、そして、誠意について、貴方が伯父上に向かってどれだけ賛辞を並べられようとも、褒め過ぎになることなどあり得ない話なのです。それに、伯父上のほうでも、望まれております和解を現実のものとするための思いやり溢れるご計画に、お好きなだけ早めに取り掛かっていただいて構わないのです。また、伯父上がどのような条件を指示されましょうと、私が従わないものなどは、一つとしてないのです」と言った。

船長はその目と両手とで俺のために祈り、「有難いことです」と囁いていた。われわれは打ち揃って淑女のほうへ歩み寄ったのだ。

船長「どのような支障があるのでしょうか、親愛なるマダム。今はどのようなことが差し障りとなって、ベティ・ローランス夫人がお見えになられても、すべての真相をお知らせするわけにはまいらないのでしょうか。また、貴女のご婚礼に際し、人目に付かぬよう夫人が貴女のお世話をなさるわけにもまいらないのでしょうか。ご婚礼が執り行われますまで、私は留まりましょう。そうすれば、親愛なるハーロー氏のもとへ出立するのも、目出度い知らせを携えてのこととなりましょう。そして、すぐにもすべてが丸く収まることになるでしょうし、また、すべてそうなるに違いないのです」

「ハウさんからのお返事をいただかねばなりません」と、なおも身を震わせている麗しの君が答えていた。「あの方の助言がなくては、私の新しい方策を変えるわけにはまいらないのです。あの方の評価を失うくらいでしたら、また、あの方が私のことを軽はずみだとか、落ち着きがないとか、無謀だとかお考えになるくらいでしたら、むしろ、この世での幸せの望みをすべて捨てても構わない気持ちなのです。この問題につきまして、さらに私のほうから申し上げることといたしましては、次の点だけです。つまり、私が筆にいたしましたことへのあの方のお返事が届きましたら、その時にはそうすることも出来るようになっているでしょうから、事態の一部始終につきまして、あの方に書き送ろうと思っているということです」というのだ。

ラヴレース「それでは、私としては永久に望みを捨てねばなりませんね。あゝ、トムリンソン船長、ハウ嬢は私を憎んでいるのですよ。ハウ嬢は　…　」

船長「そうでもありますまい、恐らく　…　無礼を働いたのではないかという貴方の懸念をお知りになれば、ハウ嬢といたしましても、これだけ全面的和解への見通しが明るいわけですし、ご両家のかくも多くの重要人物たちの抱いておられる望みが挫かれてしまいますようなことは、決して助言なさらないはずです。この天晴なご婦人が予見され、それとなく触れてもおられましたように、実際に結婚許可証を取得するのに、また、贈与財産の書類に詳しく目を通して署名いたしますのに、少々の時間が掛かりますのは避けられないことなのです。その間に、ハウ嬢からのお返事を受け取られることになるかもしれませんし、ベティ夫人がお着きになるかもしれません。夫人でしたら疑いもなく、奥様の不安を拭い去りまして、日取りを早めますのに力を振るっていただけるはずです。一方、ハーロー氏に安心していただきますのが私の役目ということになりましょう。延期に伴います心配ごとというのは、すべてジェームズ・ハーロー氏の方面から来ることなのです。従いまして、すべては、マダム、伯父上が提案されましたとおり、慎重かつ内密に進められねばならないわけです」

彼女は沈黙していた。俺は彼女の沈黙を嬉しく思ったよ。愛しの君も心の中では、俺のことを現に許しているのだと考えたわけだ。しかし、彼女が、はっきり告白するという心の広さを示すことで、俺に義務を負わせようとしないのは何故なのだろう。ただ、結婚許可証が俺の手に入らないうちは、そんなことをしたところで何一つ早まるわけではないのだから、折れてくれるのにもっと時間を掛けたからといって、彼女も（公平に評するならば）それほど責められるべきではないのだよ。

俺は、明日の晩にでもロンドンへ向かうことにして構わないし、月曜日の朝には、間違いなく結婚許可証を持参出来るものと思うと申し出た。そして、ムーア夫人のところを離れないと確約してもらえるかどうか、彼女に尋ねてみた。

ハウ嬢からの返事を手にするまでは、ムーア夫人のところに滞在するつもりでいる、とのことであった。

結婚許可証の取得について、少なくとも暗黙の了承はいただけるものと考えている、と俺は話し掛けたのだ。

彼女の表情の変化を目にして、この問い掛けはすべきでなかったのだと悟った。彼女のほうでは、暗黙の了承をする気など毛頭なく、その正反対だと断言するのだよ。

俺は次のように話した。彼女が住人にひどく腹を立てている家のことでもあり、そんなところに再び入居してくれるよう頼む気持ちは一切ないので、彼女の衣類をこちらへ届けてもらうよう、命令を出していただきたい。それとも、その方面の指示については、そのいずれに関しても、ドーカスに担当してもらいましょうか、と言ったのだ。

だれであれ、今後一切、あの家の者には会いたくないと彼女が言っていた。多分、自分の代わりに、ムーア夫人かベヴィス夫人があそこまで行ってくださるだろうし、鍵も持って行っていただけるだろう、と言うのだよ。

その頃までには、疑いもなく、ベティ夫人が到着するはずだと俺は言った。そして、俺があの夫人と従姉妹のモンタギューを連れて来ることにご異存はないものと思うが、とも言っておいた。

彼女は黙っていた。

「勿論でしょう、ラヴレース殿」と、船長が言った。「この点に奥様が反対なさるはずはありませんよ」とだ。

彼女はなおも押し黙ったままだった。このような場合、黙っているのは同意したのと同じことになるのさ。

ハウ嬢宛に一筆認めていただけますか、と彼女に訊いてみた。

「あら、あら」と、彼女は拗ねたように口を挟み、「もう質問は遠慮願います。指図なさるのはもう止していただきますわ。貴方のほうで適当と考えられたとおりになさってください。私のほうも気の向くようにさせていただきますわ。貴方から恩義は一切受けていないのです。失礼いたしますわね、トムリンソン船長。伯父に宜しくお伝え願います」と言うと、立ち去ろうとしたのだ。

俺は、嫌がる彼女の手を掴み、明日の朝早くに会ってくれる約束だけでもしてもらいたいと、切に懇願したのだ。

「何のためにお会いするのでしょうか。これまで口にされたことの他に、まだおっしゃることがおありなのでしょうか。誓いの言葉や誓約は、ラヴレースさん、もう沢山なので

す、私。一体何のために、明朝貴方にお会いするのでしょうか」

俺は繰り返しその願いを口にした。それも、これ以上はないという熱心な態度で、翌朝六時を指定したのだ。

「この時節には、私がいつもその時刻前に起き出しておりますのをご存じでしょう」というのが、半ば同意を表す言い方だった。

それから、伯父に宜しくともう一度頼み、彼女は退室したのだ。

こうして彼女は、M卿ならこう言うのだろうが、「取引を有利に運び」、俺のほうはますます立場を不利にしてしまったのだよ。今やわれわれ両方にとって、ハウ嬢の次の手紙が運命の分かれ目となるわけだ。その手紙を途中で奪い取ることが出来なければ、俺は完全に破滅するのだよ。すべてはお終いということさ。

手紙　二十一
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

土曜日　深更

以前、説教で触れられているのを聞いたことがあるのだが、聖書では「神に逆らう者に休息はない」(二四)と言っている。俺も目を閉じることが出来ないのだよ（ただし、肘掛け椅子で三十分ばかり体と折り合いをつけたかっただけの話だ）。だから、筆を走らせ続けねばならんというわけだ。

この淑女の運命はどうあるべきかに関して、もう一度激しく論じ合った後、船長と別れた。奴は優秀な頭脳を備えているのだから、その青年期が深刻な罪業によって汚されることなく、また、悪事を暴き出されるようなことにならなかったなら、どんな身分に置かれたとしても、著名人になっていたはずだ。それに、この論議では、奴のほうが道理に適った側を持っていたため、俺としても、奴を相手にひどく難儀してしまい、とうとう、次のような約束をする羽目に陥ったのだよ。つまり、寛大にも俺を許し、もう一度引き立ててくれるよう彼女を説き伏せることが出来た場合には、出来るだけ手際良く自分の策謀から身を引くことに努力のすべてを傾け（ただ、ベティ夫人とシャーロットにはどうあっても来てもらわねばならないが）、その上で、奴を彼女の伯父の代理人に仕立て上げ、恥を忍んで結婚するというわけだ。

しかし、仮にもそんなことをすれば、ジャック、（その状態になることに対しては、かつて男が感じたものの中でも最も強烈な反感を抱いているわけだから）『放蕩児年鑑』にあって、何という醜態を俺は晒すことになるのだろう。それに、俺がこれだけの苦労を重ねながら、何一つ代償がないなどということは考えられる話だろうか。あるいはまた、女房一人のためのことにすぎないとも言える。いかに優れた妻とはいえ［それに、どんな女であっても申し分ないものに仕上げることが出来ると、俺は本気でそう思っているのだ。どんな女が相手であれ、俺を愛するように仕向けるのと同様、恐れさせることも出来るのだからな］、これまで味わってきた面倒な思いをせずに、また、あんな苦労をするよりもずっと恥ずかしくない形で、手に入れることが出来たかもしれないわけだからな。それに、貴公も気づいたのではないかな。この高慢ちきな女は［彼女を高慢ちきだの、女だのと呼ぶの

を許してほしいが、それにしても、彼女は高慢ではないだろうか」鷹揚な態度で許すということを知らないのだよ。実際、俺のことはまったく許していないのではないのかな。むしろ、俺の魂を、自分自身にとっては実に苦しいものであった、あの宙ぶらりんな状態に置きっ放しにしているのだよ。

この静寂の時に、俺はこう考えているのだ。もしも、以前の計画を推し進め、些細な罪を拭い去るスポンジの役目を、より大きな罪に担わせることは出来ないものかどうか、そして、そのことへの許しを得るわけには行かないものか、ひとつ腹を決めて試してみることにすれば、自分自身に対して申し開きが出来るし、それこそが、あの克服し難い麗人ならこう言うだろうが、何よりも大切なことなのだ、とだ。

俺が感想を述べるに当たって、いずれの場合にも意図しているところは、事態に変化はなかったかもしれないが、貴公宛にすでに書き送っていた点を繰り返し述べるのは、少なくとも、その点に関して長広舌に及ぶのは、避けるということなのだよ。それゆえ、以前挙げた論拠を（とりわけ、前回の貴公の非難がましいたわごとに対する俺の返答(ア)の中に含まれていたもののことだが）、貴公のほうで再検討してもらいたいのだ。そして、新たなものについては、それらが俺のペン先を離れるにつれて追加してもらいたいのだよ。そうなれば、俺も自らを無敵の者と考えることになるだろう。少なくとも、放蕩児同士の論争においてはな。

この淑女を獲得することこそ、幸福になるための必須の条件だと、俺はそう考えているのだ。それに、どのようなものであれ、自らを幸福にしてくれそうに思えるものの獲得を目指すというのは、すべての人間にとって自然なことではないのだろうか。たとえ他人の目には、その対象物の持つ意味合いに軽重の差が出ようともだよ。

出鱈目な誓いや誓約、そして、それに類したものを用いるといった、彼女を手に入れるための骨折りの仕方についてだが、二千年以上も前の詩人たちがわれわれに教えてくれているのではないかな。ユーピテルは恋人たちの偽誓を笑う(二五)、とだよ。その点に関してこれまで俺が述べてきたことに加え、質問を一つ二つさせてもらいたいのだ。

愛らしいおぼこ娘の母親やおばたち、祖母や家庭教師の連中は、娘たちがほんの幼児の頃から年頃になるまで、男は当てにならないことを、いつも説き聞かせているのではないのかな。男の誓い、誓約、そして、約束に耳を貸してはいけない、とだよ。その説教の正しさを証明するように、また、残りの者たちのために灯を点された灯台の役割を果たすためだが、だまされやすい可愛い娘が時々罠に掛かるようでなければ、こういった立派なご婦人方は、とんでもない嘘つきということになってしまうのじゃないのかな。

だとすれば、カモを求めてうろつき回る律義者にしても、多くの点で必要悪なのだということが分かるのではないだろうか。可愛い娘が時々、こういった男によって横道へ引っ張り込まれるのも、大いに必要なことだと分かるのではないのかな。そして、その娘が容姿や考え方や財産の面で、並外れた魅力を備えていればいるほど、手本としては一層効果をもたらすことになるのではないだろうか。

以上の前提条件を認めてもらえるとして、これらすべての点で、どうだろう、一体どこのだれが我が魅惑の君に匹敵するというのだろうか。それゆえ、残りの女性すべての鑑と

(ア) 第四巻の手紙五十七を参照のこと。

して、彼女ほどに適切な者がどこにいるのかということだ。いかに悪く見積もったところで、俺は尊敬すべき友マンデヴィルが主張した説の枠内にすっぽり収まっているというわけだ。曰く、「私的不徳行為が公益となる」（二六）というやつだ。

それで、もしもこの魅力溢れる者が、愛すべき馬鹿娘たちすべての利益のために、いわゆる〈堕落〉をしなければならないというのであれば、そうしてもらわねばならんし、それで万事は終了というわけだ。それに、俺がこうも手間取ったりしなかったとして、そこに異常さだの珍しさだのは、これっぽっちでもあったのだろうか。それゆえ、この点に関する議論の類は、今後一切を切り捨てることとし、貴公が俺宛に筆を執る際にも、この件に関しては永久に沈黙を守るよう申し付けておこう。

《二重の鉤括弧（つまり、『　』）で表示された後続の数段落への前置きとして、後ほど記され、封緘用の糊で添付されたもの》

いやはや、ジャック、どうしたものだろうな。悪いことが引きも切らず、次から次へと降り懸かるのだ。恐ろしい知らせがあるぞ。ただの盗みのことに思いを巡らしていたわけだが、ここで俺は（確かに、自己防衛のためではあるが）殺人の罪を犯してしまったのだよ。流血の殺人事件だ。そう立証されるものと固く信じている。まさに最後の息を引き取ろうとしているのだ、あの女が。生意気に歯向かっていたのだが、気の毒な話だよな。果てしのない抵抗であった。終わることのない反駁であった。あの女があそこに倒れているのだ、自ら流した血の海でのたうちながらな。死に至る深手を彼女に負わせたのだよ、俺は。だが、苦しみを与える者というだけではなく、あの女は盗人でもあったのだよ。ペテン師でもあったのだ。俺のペンを盗んでいたのだよ。今後の手段についてだが、俺が気も晴れないまま物思いに耽り、危ぶんでいるその間に盗んだのさ。こうしてあの女は、俺のペンを用い、俺そのままの筆跡で認めたのだよ。そして、本当に俺の書いたものだと、厚かましくも言い通そうとしたのだ。

『だが、手遅れとならないうちに思い返してみよう。この常に称賛すべき娘の身に備わっている数多の嗜みのことを振り返ってみたい。今のところ、手が振り上げられただけの話だ。打撃は未だ加えられていないのだよ。ハウ嬢の次の手紙がお前の息の根を止めることになるかもしれん。深慮という点からして、今は少なくとも誠実に振る舞うべきだろうな。お前は彼女なしには生きられないのだ。彼女を完全に失ってしまうくらいなら、結婚しても良いという気持ちでいる。彼女は毅然として揺るぎないかにも見受けられるが、結婚してくれるよう説得可能なことも疑いのないところなのだ。しかし、今彼女がお前を悪党だと見抜けば、この先、彼女の心を引きつけることは絶対にないだろう。そして、おそらく彼女はお前を拒み、忌み嫌うことになるのだ。

『だが、すでに俺は引き返すことの出来ないところまで来てしまっているのではないのかな。後悔はしていても一味のことが怖く、絞首刑に怯えながらやむなく泥棒稼業を続けているうちに、ついには首を吊られることになってしまう、そんな盗人と同じように、俺も自ら案出した忌まわしい策略の数々が怖いのだ。

『命にかけても構わないが、（今こうして書き進めるに当たっても）残念に思っているのだよ。俺はどうやらそうしてしまったようなのだが、誠実に振る舞おうとしても、それを

自らの力の及ばないことにしてしまうような、それほどまでに愚かな策略家であったという点をだ。無理強いというものについては、そのすべての手口を俺は嫌っているし、惨めな姿を強制されるのでさえ我慢ならないのだよ。自ら選んだこととはいってもな。だから今では、ベルフォード、貴公も言っていたことだが、俺はとうとう機械になり下がったというわけだ。自らの意思によって行動する人間ではないということだよ。

『誓って言うが、ジャック、自ら非道の極みへとその身を至らしめたため、先へ先へと進まねばならず、自分には手の打ちようもないのだが、それでいて、勝利そのものが自らを窮地に追いやることになるのはほぼ間違いないなどというのは、意気軒昂たる男にとってはまことに愚かしい話だな。

『俺の行く手にこのような女が投げ入れられたのは何故なのだ。堕落すること自体が彼女には栄光をもたらし、我が身にとっては、おそらく、恥辱ばかりではなく破滅をももたらすという女なのだ。

『何か称賛に値する事柄を目指して規則正しく行動し、その目的に向かって進むに際しても、自らを咎めるべき点など一つとしてないという者は、どれほどその身の幸せを感じることだろう。公正な手段によってこの目的を達する時、その喜びはどれほど大きく、どれほど純粋なことだろう。今回のこの一件においても、人目にそう映りたいと願っていたその姿だけを装う力が与えられていたのならば、俺は一体どれほどの果報者となっていたことだろうか』

ここまでは、俺の良心とやらが俺のペンを用いて書き綴ったものだ。そして、分かってもらいたいのは、良心の奴が俺をとんでもない卑怯者にしてしまったという点だ。俺は奴の喉元を掴み、こう言ったのだ。「ほら、ほら、生意気なあばずれめ。それでも食らうんだな。そいつもだよ。何度注意してやったと思うのだ。今度こそお前もお終いだろうな、お節介な売女め」とだよ。

シクシクと声を潜めて泣き、その忌まわしい頭を上げながら、徒に俺の慈悲を乞うているが、自分が羽振りの良かった頃には、俺に慈悲を示してくれるなど、滅多に無かったことなのだ。ほら、そいつでも食らうんだな。アッパーカットだよ。さあ、これでお前の苦しみ、そして、お前から受ける俺の苦しみも、間もなく終わりを告げることになるのだろう。転がっているのだよ、そこにな。のたくり続けることだ。俺がお前に致命傷を負わせていなかったなら、お前は俺の喜びすべてを奪い去っていたことだろう。お前などに俺を改心させることは出来なかったはずなのさ。それは明白なのだよ。お前に出来ることといえば、俺を絶望に追い込むことだけだっただろう。引き返すわけに行かないところまで俺が来てしまっていることに、お前は気づかなかったのかな。繰り返しの命令だが、のたくり続けることだな。喘ぎ続けることだ。それがお前の最後の喘ぎということさ、間違いない。何て往生際が悪いんだよ、お前さんも。

さようなら。不幸なお方、さようなら。

それにしても親切な話だな、お前も。別れを告げてくれるとはな。

さらば、さらば、さらばだよ、お前とは。あゝ、己を曲げることなく、今の今まで屈することも知らなかった、心の侵略者よ。お前とは永遠におさらばだ。

手紙　二十二

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

日曜日（六月十一日）午前四時

昨夜届けてくれた、貴公の哀れな老人に関する伝言について、二言、三言認めることにする。それから、椅子を離れ、全身を揺さぶって気分を爽快にし、着替えをした上で、我が魅惑の君の元へと赴くことにする。打ち解けない態度を見せてはいるが、この暖かく晴れ上がった朝、ヒースの生い茂る野へ一緒に散歩に出掛けてくれるよう、誘って見ようと思うのだ。

もっと前に小鳥たちが彼女を起こしていたに違いない。盛んに囀っているのだ。昇る太陽を眺めるのが習慣になっているというのが、常日頃から彼女が誇りとしていた点であるし、日の出こそは神の手に成る自然の驚異の一つだと、以前、彼女はそう言っていたこともあるのだよ。

彼女の部屋の窓は東に面しているのだ。俺が彼女と連れだって歩く頃には、太陽の光に谷も金色に染まっていることだろう。というのも、すでに高台は光を浴びて微笑むばかりに輝き、自然は満面に喜色を浮かべているのだ。

心も浮き立つこの序文ではあるが、俺がこれから取り上げようとしているもののような暗い話題には、いかにも不似合いだと、貴公としてはそう思うことだろう。

グズグズと手間取っていた遺産相続の見込みもようやくにして叶えられるとの由、喜ばしく思っている。

貴公の召使が話していたが、あの爺さんの死に接し、貴公はやたらに心を痛めているとのことだな。

心を痛めているような顔をしてはいかんなどと言うわけにも行くまい。死に瀕した人間の傍らにピッタリと付き添い、迫り来る時を見つめながら、何昼夜にも及ぶ苦しみを貴公は味わってきたのだからな。爺さんの激しい苦しみ様を見ては、体裁上、メソメソと涙を流すふりをしなくちゃならんのだよ。貴公としてはくたばってほしいと願っているわけだが、その人間の体具合を気遣う千もの余計な質問に返事をする立場なのだ。傍らで祈ってやるし　…　前に一度、そんなことを書き送ってよこしていたよな　…　横で本も読んでやる。しかつめらしい顔で練り歩く医者の一団や、その腰巾着でお節介な薬剤師連中、また、屠殺人まがいの乱切り外科医たちも仲間に加わっているという、そんな連中との相談に加わらねばならんのだが、連中のほうでは、医術を種にした茶番を演じ、爺さんの肉体と地所の両方を弄んでやろうと、全員手を結んでいるのだ。おまけに、求めて止むことを知らず、決して満足することのない親戚や遺産受取人の一群、さらには、どこの馬の骨とも分からないが、称賛に値するものであれ値しないものであれ、己の願望を密かに満たそうとしている輩を相手に、爺さんが遺してくれるものについての権利を分かつという、余計な心配ごとまでも背負わされるのだよ。こんな状況に置かれたなら、貴公が召使たちの前で（奴らも貴公と同じく、心の底ではほとんど悲しんでいないし、貴公が相続を切望するように、連中は形見分けを欲しがっているわけだが）本心から悲しんでいるような、また、しかめっ面を誘うことこの上ない災難が降り懸かったみたいな、そんな表情をして見せても、俺としては驚きはしないのだよ。

それに、これまでしばしば考えていたことだが、われわれが親しくしていた者の死に際し、ゆっくりと近づいてくる最期の時、そして、顔も歪むほどの苦痛に満ちた臨終の場に立ち会わねばならないとなると、きっとそんな考えも浮かぶだろうが、そのように心痛む光景から当然生まれるはずの、われわれ自身もいずれ同じ道を歩むのだという思いは、悲痛な表情が本心からのものだと信用させるのに、大いに寄与しているのだ。

そして、真面目に思い返して見るなら、陽気な後家さんや心躍らせている相続人、そして、それ以外のあらゆる種類の遺産受取人たちの嘆きに、見事な真実味を暫時添えてくれるのがこれなのだよ。何しろ、そういった関心を引く思いの数々が、内心の喜びを抑えることで、表情を沈んだものにし、喪服の装いにも本当に案じているような様子を付け加えることになるからだ。

ところで、寝ずの番や数々の心配ごと、また、傍に付き添っての世話等々、貴公も今はこういったことすべての報いを受ける段になったわけだが、どんな具合か教えてくれ。果たして骨を折った分の埋め合わせになるのか、期待に応えてくれるものなのか、教えてほしいのだよ。

俺自身に関して言えば、俺を悔しがらせるのにこの話題がどれほど役立ったのか、真面目腐った筆法からして、貴公もそれはお見通しだろう。ただ、結婚を急ぐのか、それとも手籠めにするのか、そのどちらかに頼らざるを得ない立場に置かれていることが、もっと晴れやかなはずの俺の見通しに暗雲を漂わせることとなったし、また、貴公の今回の喜ばしい悲しみごとに同情する気を起こさせたということでは、事態そのもの以上に貢献したわけだよ。

さらばだ、ジャック。俺はすぐにもこの苦しみから逃げ出さねばならん。そして、我がクラリッサにもその苦しみから抜け出てもらうのだ。事態の厳しさからして、そうすることが必要なのだよ。

手紙　二十三
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

日曜日　朝

丸々二時間に亘って、我が魅惑の君にお付き合いをいただくという栄誉に浴した。六時前に、ムーア夫人の庭で顔を合わせたのだ。原野の散歩は断られたのだがね。

彼女の表情は落ち着いていたし、親切にこの面会に応じてくれたこともあり、俺としては希望を抱いたのだよ。そして、全面的で無制限の許しを得んものと、船長か俺かどちらかが昨日力説した点すべてを改めて要求したのだ。そして、さらに、次の点も話して聞かせた。つまり、かつて男が授かった中でも最高の祝福を俺に与えてくれるためにだが、本人が上京してくれるよう、彼女の伯父のハーロー氏を説得したいとの望みを抱いて、トムリンソン船長が田舎に向かったということをだよ。

ところが、俺が獲得することの出来た最大のものといえば、ハウ嬢の次の手紙を受け取るまでは、俺の有利に働く一切の事柄について、決断は差し控えるということだった。俺が用いた論拠を繰り返し述べることはしないが、ただ、その返答として彼女が口にし

ていた事柄の要旨を示しておこう。

彼女が言うには、何もかも残らず検討したそうだ。俺の行動すべても閲してみた。俺が彼女を連れて行った家というのはいかがわしい家に違いない。その住人にしても、あのパーティントン嬢を、疑いもなく俺の賛同を得た上でだろうが、自分に押しつけようと熱心に試みたことからも分かるとおり、どのような事をやってのけることが出来るのか、早いうちから示していた「まさか、ハウ嬢のすっぱ抜きの手紙の写しなどを受け取ったわけじゃあるまいなと、俺はそう思ったよ」。自分の上げた叫び声は皆に聞こえていたのだ。俺の加えた侮辱は、疑いもなく計画的なものだ。あの件より前の、彼女に対する俺の振舞いすべてを思い返してみるなら、そうでなければならないことになる。俺が卑劣極まりない目論見を抱いていたのは確かなことだ。そして、彼女に対する扱い方からして、その点に関して疑問の余地は一切ない、というのだよ。

全身これ魂なのだ、ベルフォード。熱情に駆られるあまり、こちらに自覚はなかったわけだが、彼女のほうでは俺の取った不躾な態度を肝に銘じているらしいのだよ。さもなければ、あんなに根にもった憤り方は出来ないはずだ。

自分への思いは一切捨ててもらいたい、と彼女が懇願していた。一番の近親者で、一番大切に思っている者たちから残酷な仕打ちを受けたと、彼女も時にはそう思うことがあるとのことで、そんな折には、後悔の念が、そして、怒りの気持ちさえ起こってくるのであり、そういう時には、他の場合にはあんなにも望ましく思われる和解にしても、以前から考えていた計画に比べるなら、つまり、管理人兼指導者として、あの善良なノートン夫人を迎え入れ、祖父が意図していたとおりの暮らしぶりで、自分自身の地所に住まうという計画に比べると、心から愛着を感じるほどの願いでもなくなるというのだ。

この計画ならば、例の地所の管財人の一人になっている従兄弟のモーデンも、彼女が遂行出来るように（それも、彼女の希望どおり、訴訟を起こさずにだが）計らってくれるのは疑いないというのだ。「それに、そうすることがあの人に出来るのでしたら、また、そうしてくれるようでしたら、ひとつ貴方にお尋ねいたしますが」と、彼女が言っていた。「心にはこんなにも不一致がございますのに、その計画をさしおいて利害で結ばれますことのほうを選びたくなるような、どのようなものを私は貴方の振舞いの中に見出したというのでしょうか」とだよ。

だから、貴公にも分かるだろうが、ジャック、彼女が俺にとって不利になることを選ぶのには、怒りと同様、いわれもあるということなのだ。厚かましくも彼女は、俺なしで幸せになれるのだと、そして、俺と一緒では不幸になるに違いないと考えているのだ。

改めて力説した俺の論拠を結ぶに当たって、ハウ嬢の返信が届く前に、彼女宛に一筆認めてくれるよう懇願しておいた。事態の現況をハウ嬢に提示するためであるし、また、ハウ嬢の見解を尊重したいということであれば、事情を十分に知った上で、意見を述べる機会を彼女に持ってもらうためでもある、とだよ。

「そうすることでしょうね、ラヴレースさん」というのが答えだった。「結婚のほうなのか、それとも、先に触れた計画なのか、どちらを選んだら良いのか、この私が迷っているというのでしたらね。私の選びますものは後のほうにならざるを得ないのだと、それしか貴方もお考えになれないはずです。貴方とは穏やかにお別れしたいのです。繰り返し申し上げるようなことは、どうか　…　」

「私と別れるですって、マダム」と、俺が口を挟んだ。「そのようなお言葉には耐えられませんね。だが、お願いだ、ハウ嬢宛に一筆認めていただきたいのです。ハウ嬢が私に敵意を抱いていないのであれば、もしかして　…　」

「私宛のあの人の最後のお手紙(ア)をご覧になれば、貴方も納得なさるでしょうが、あの人は敵意などを抱いてはおられないのです。貴方のお姿にはね。でも、貴方の行いに対して敵ではないといたしますと、私の味方ではございませんし、美徳の味方でもございません。厳しい言い方を引き出そうとして、私を挑発なさるのは何故なのでしょうか、ラヴレースさん。それがどれほど貴方に似つかわしいものだといたしましても、今この際は用いたくないものですわ。自分自身の激しい言葉遣いのせいで、ここ二日の間、たっぷりと苦しみましたからね、私は」

腹立たしさのあまり、俺は唇を噛んだよ。声も出なかった。

「ハウさんはもうご存じなのです」と、彼女が言葉を続けた。「実情のすべてに亘りましてね。私が待っておりますあの人からのお返事は、私自身に関わることでして、貴方には関わりのないことなのです。あの人の心は友情のために燃え盛っておりますから、私が知りたいと思っておりますことにつきまして、必要以上には、一瞬でも私を宙ぶらりんな状態に放っておくことが出来ないのです。それに、あの人のお返事も、あの人がまったくの一人だけで決められるわけでもございません。先にある方にお会いしなければなりませんし、その方も、おそらく、別の人たちにお会いしなければならないのです。

例の密輸をやっている忌まわしい女のことだよ、ジャック。ハウ嬢が言っていたタウンゼンドだ。疑いない。企みだ。計略だ。陰謀だ。謀略だ。地中深くを動き回るモグラなのだよ、こういった女たちは。だが、大地で俺を覆ってもらいたい、俺もモグラにしてもらいたいものだ、と俺は考えた。もしも、連中が言い分を通すというのならな。もしも、この淑女が今俺の手から逃げ出すというのならだ。

彼女は次のようなことを率直に打ち明けていた。つまり、われわれの出入りする場所は一切避け、アメリカにある植民地のいずれかに向けて発とうと、一度は考えたのだが、俺との面会を余儀なくされた今となっては（これは彼女が一番恐れていたことであり、命に代えても避けたかったというのだが）、従兄弟のモーデンが来るまでの間、評判が良くて人目に付かない逃げ場をハウ嬢のほうで見つけてくれるようなら、以前好ましく思った例の計画を再び推し進めることが、自分には最も好都合のように思われる、というのだ。ただし、従兄弟がすぐに来ないようなら、また、兄からであれ、他のだれからであれ「想像するに、俺のことを念頭に置いているのだろう」、避難する場所を見つけるのが難しいようであれば、やはり国外へ逃れることになるかもしれない。というのは、本当のところを言うと、父親の屋敷へ戻ることは考えられないからだ、というのだが、その理由としては、兄の激情、姉の厳しい批判、父親の立腹、それにも増して心にしみる母親の嘆きよう、さらには、それらすべてを意識しての自分自身の気持ちは、我がことながら、到底堪え難いものであろうから、とのことだった。

あゝ、ジャック、もううんざりだよ。ハウ嬢の次の手紙に恋い焦がれている。欲しくて

(ア) 無邪気にも令嬢は、ラヴレース氏が捏造した手紙を念頭に置いて話しているのである。百二十二頁以降を参照のこと。

たまらないのだ。途中で奪い取るためなら、縛り上げようが猿轡をかませようが、身ぐるみ剥ごうが強奪だろうが、殺人以外のことなら何でもやる気だよ。

だが、一見したところ決心は固いかにも思えるのだが、それでも、俺には明々白々だったのだよ。俺を憎からず思う気持ちが、今も少しは彼女にあることがな。

話しながら、彼女は何度も泣いていたし、溜め息はもっと頻繁に漏らしていた。疑うべくもない優しさを湛えたまなざしを二度、彼女は俺に向けていたし、憐れみと柔和さに近いまなざしは三度あったのだ。だが、放たれた穏やかな輝きも、その都度慌てて引き戻されたと言って構わないし、彼女の顔も背けられていたのだが、まるで、自分の優しい目は信頼しかねるし、俺の熱烈なまなざしに立ち向かうことも出来ないと言わんばかりだったのだよ。俺の両目は、失われた愛を彼女の心の中に探し求め、魂そのものにも届けと、懸命になっていたからな。

彼女の手を取ったのは一度だけではない。この無遠慮な振舞いにも、彼女はあまり争おうとしなかった。その手に一度、この唇を押しつけた。ひどく怒りはしなかったよ。確かに眉はひそめていたさ。それでも、怒りというより、むしろ苦悩のほうを多分に含んだしかめっ面なのだよ。

愛しの君の魂が（あのような絹の衣を纏っていながら）いかにしてあの揺るぎなさのすべてを獲得するに至ったのか(ア)。いまだかつていかなる女にも誇ることが出来なかったような志操の堅固さ、平静な心、そして、揺るぎなさを娘の中に生み出すためには、あのように暴君まがいの父親の、人に働き掛けて止まない陰気さと、自らの意思を持たない母親の唯々諾々としたおとなしさとが交じり合うことが必要だったのだろうか。もしもそうだとすれば、彼女はあの専制君主のごとき父親に大いに恩義を被っていることになるな。国王でさえ授けることが出来ない栄誉を親戚関係の者一人一人に与えている、そんな娘としては、俺の想像を超える程度にだよ。

すでに何度も口にしてきたことではあるが、予定されている、例の二人の婦人からの訪問には応じてもらいたいのだが、と俺は言った。

自分はここにいるのだし、俺と顔を合わせもした。我と我が身のことながら、今の自分にはどうにもならない。俺の身内の婦人たちに対しては、その立派な人柄ゆえに、日頃から大いなる尊敬の念を抱いている、などと彼女は話していた。そこまで言うと、彼女は愛らしい顔を背け、半ば出掛かった溜め息を押し殺しているのだよ。

そこで、俺は彼女の前に跪いた。緑のクッションに膝をついたのだが、実は、われわれは草に覆われた遊歩道を歩いていたのだよ。俺は彼女の手を取った。現にそんな感じがしたわけだが、胸の思いを呼び出してこの両目に込めたような、それほどの熱心さで懇願したのだ。許しを与え、手本を示すことによって、それらを受けるのにより相応しい、そして、彼女自身の思いやりと寛大さに満ちた希望に対しても、もっと似つかわしい人間にしてほしいのだ、とな。「誓って申しましょう、マダム。貴女の優しさが、この身には似つかわしくない貴女の優しさが、この胸を突き刺しているのです。それが私には耐えられないのです」とだよ。

(ア) ラヴレース氏すら、その当然の被害者でありながら敬服せずにいられないという、あの揺るぎなさに関する彼女自身の言葉については、第一巻の三十八、六十五、九十六頁を参照のこと。

この話し合いの間に何度か浮かんだ考えなのだが、どうしてなのだろうな。どうして彼女は、広い心をもって俺を許そうとしないのだろうな。ベティ夫人と俺の従姉妹を手助けのために駆り出さねばならなくなるようなことを、どうして彼女はするのだろう。抵抗不可能な征服者の降伏勧告に応じようとしない要塞というのは、わざわざ重砲部隊を繰り出し、砲撃態勢を敷くような面倒を掛けていない場合と同じように、有利な条件での降伏を期待したりしても構わないのだろうか。

「繊細な心の働きを」と、神々しい娘がその手を引っ込めながら言っていた。「貴方はずいぶんと押し殺してきたのでしょうね。何とも恐ろしい、それこそ裁判官にうってつけの非情さなのでしょうね、貴方の心の冷酷さというのは。これまで時折見せておられましたが、あのように情に動かされることがお出来になるのですし、時として貴方の唇から溢れ出ておりましたように、あれだけの感慨を思い浮かべることもお出来になりますのに、それでいながら、こういったものすべてをすっかり克服なさって、これまでやってこられたように振る舞うこと、それも、確固とした目的と計画に基づいて振る舞うことがお出来になるほどになっておられるのですからね。しかも、世間の噂ですと、幼い頃から今日に至るまで、貴方の一生涯を通してこのとおりなのだそうですね」というのだよ。

俺のほうでは、俺があのように突然の病に襲われ、危険に陥った際に寄せてくれた「トコン剤を使ってみた時のことだよ、ジャック」、あの思いやりに溢れた心遣いからして、願わくは　…　と言い掛けた。

彼女は俺を遮って、こう言うのだ。「おっしゃっておられる心遣いに対しましては、たっぷりとお返しをいただきましたわ。でも、もう貴方のことは考えまいと決心しておりますので、率直に申し上げることにいたしますが、貴方のほうで（やはり、貴方に満足するわけにはまいりませんでしたけれど）働き掛けをしてくださっても　…　」とだよ。

彼女が一息入れた。先へ進んでくれるよう、俺は懇願したよ。

「貴方のお考えでは」と言って彼女は、一緒に歩いていたのだが、愛らしい顔を横に向けた。そして、「私があのように不幸な形で出し抜かれまして、いわば、欺かれて自分らしさを忘れておりますことに気づきました時に、我が身を律するための計画を立てようという考えが私にはなかったとでもお思いでしょうか。自分がなりたいと願っておりましたものになることは出来ず、自分が行いたいと願っておりましたことを行うわけにもまいりませんことに気づきました際に、次善の策としてどのように対処したら良いのかにつきまして、この私は思い巡らすこともなかったとお考えなのでしょうか。また、この次善の策にいたしましても、なにがしかの痛みをもたらすものではないと、貴方はそのように信じておられるのでしょうか。止むなく　…　」

そこでもう一度、彼女は話を中断した。

「でも、話し合いは止めにいたしましょう」と、再び彼女が口を開いた。「話題があまりにも　…　」と、溜め息をつくと、「止めにいたしましょう、話し合いは。私、中へ入りますわ。礼拝式への用意をいたしますので　…　［厄介な女めと、俺はそう思った］この疲れた普段着のままでも平気ですので」と、自分の姿を眺めながら、「礼拝式に出席するつもりです」と言うのだ。

それから彼女は、家の中へ入ろうとして俺に背を向けた。

「お願いだ、愛する人よ。この心動かすお話をどうか続けていただきたい。後悔の念が

この心を捉えて放さないのです。途方もなく間違っていたのです、私は。穏やかな、しかし、魂までも染み透るこの話し合いを続けることによって、思慮に欠けた己の愚行を呪うべき、さらなる根拠を示していただきたいのです」

「いいえ、だめですわ、ラヴレースさん。余計なことまで申しました。苛立たしさが生じ始めております。失礼させてだきますことのお詫びを、貴方のほうからご婦人方にしていただけるのでしたら、私といたしましては、顔を出さずにおくほうが気が楽ですし、貴方の信用にとりましても好都合なことでしょう。あの人たちには私のことを潔癖すぎて気難しく、取り澄ましているのだとおっしゃってください。貴方のお好きなようにおっしゃってくださって構いません。故意の過ちという点につきましては、全能の神に、また、私自身の母に次ぐ人といたしまして、ハウさんに、無罪であることを認めていただけたらと願っておりますが、そのハウさん以外のどなたにも、出来事の一部始終を知ってもらいたくはないのです。貴方には幸せになっていただきましょう。幸せになることも可能なのですからね。幸せに値するようになさることです。そうすれば貴方も、他の点ではどれほど不幸だといたしましても、少なくとも、自分自身を振り返って見ました時には、幸せと思われることでしょう。私自身といたしましては、きちんとした反省の上で、故意に、そして、自らの判断にも背いて過ちを犯したのだという、そんな重大なお咎めを受けることなしに自分の振舞いを振り返ることが出来るようでしたら、世間の人たちが望ましいと考えておりますものすべてを手にいたしました場合に比べましても、それよりももっと幸せな気持ちになることでしょうね」

心気高い娘が話を続けていた。俺のほうは口を開くことも出来なかったのだよ。

「この点で自らに恥じるところがないのでしたら、私の心を覆ってしまうことが現在あまりにも頻繁なわけですが、その闇を払い除ける気力が貸し与えられました時には、この身に降り懸かるありとあらゆる災難に対しましても、勝ち優ることが出来るものと思うのです」とのことだった。

そんな心情が彼女の全身には満ち溢れていた。彼女の背丈が以前よりも高くなったように思えたよ。その身に宿った神が彼女を引き上げたというわけだ。俺よりも上方へというだけではない。彼女自身をも越えたところへなのだ。

神々しい人よ、と俺は呼び掛けた（現にそう思ったのだよ）。彼女の心が卓越していることを認め、その上で、俺は先へ進もうとしたのだが、彼女が遮った。「人間の美質は、おしなべて相対的なものに過ぎません。私の心は、確かに、貴方のものには優っていると存じます。悪癖のために、貴方の心は卑しいものになっておりますからね。でも、貴方のものが劣っていることを確信させるため、わざわざ骨折ったりなどなさらなければ、私もそうだとは気づかなかったのです」と言うのだよ。

何と立派なのだろう。崇高なまでに立派なのだ、この娘は。その美徳の数々のゆえにこそ、彼女を許すわけには行かないということだ。彼女によって植えつけられたのだが、計り知れないほど劣っているという自覚には、耐えられないものがあるのだよ。それにしても、立派な決断がなされようとしているその時に、俺様と袂を分かとうとするのは何故なのだろうな。真っ赤に熱している状態だというのに、その鉄を打つのを彼女は拒んでいるのだよ。あゝ、何故に彼女は、柔軟な臓が固まってしまうのを放って置こうとするのだ。

われわれが家に向かってわずか二、三歩も行かないうちに、お節介な女たちの出迎えを

受けた。朝食の用意が整ったことを知らせるためだ。俺に出来ることといえば、ただ、朝食の後で、改めて話し合いに応じてもらいたいのだがと、両手を差し上げて懇願するくらいのことだったよ。

答えはノーだ。礼拝式に出席したいというのだよ。

そう言うと、彼女は家に入り、真っ直ぐ二階へ向かった。お茶の席に加わってくれるような気持ちもないというのだ。

彼女が引き籠もるようなこと、あるいは、彼女と付き合う恩恵を二人の未亡人から奪うようなことになるくらいなら、俺のほうがテーブルを離れ、広間からも立ち去るつもりでいると、俺はムーア夫人を通じて申し出た。

彼女がムーア夫人に語ったところでは、その点ばかりを問題にしているわけではないというのだ。怒りを静めようとして、自分と戦っていたのだそうだ。そのために少しばかり辛い思いをしたという。彼女としては心を落ち着けたいのだが、これから参加しようとしている神への礼拝によって、利益を得たいものと願っているからだ、というのだよ。

ディナーの席には加わってもらいたいと、ムーア夫人が希望を述べた。

彼女のほうでは、出来れば遠慮させてもらいたいと言っていた。ただ、望んでいるような精神状態が得られた場合のこととして、自分とかつてのような関係に戻るにはもはや値しない男ではあるけれど、そんな男に斟酌を加えることとなった、例の感じ易い心を克服している点については、厭わずに証明してみせたい、というのだよ。

こんな言い方をしたのは、疑いもないが、庭での話し合いが和解をもたらすものではなかったことを、ムーア夫人に知ってもらうためなのだ。

ムーア夫人は、あれだけ長い話し合いの後でも、われわれがより良い理解に至っていないことを知り、驚いている様子だった。それも、伯父のジョン・ハーローから要求されたこととして婦人たちに話しておいた、式をやり直すという例の提案を彼女が呑んだものとばかり思い込んでいたわけだから、なおさらのことだ。だが、俺は次のような説明をしておいた。つまり、彼女としては、伯父本人が式に出てくれるのか、それとも、トムリンソン船長を代理人として指名するのか、あの立派な紳士から便りがあるまでは行動を慎む覚悟でいるのだと、そんなふうに俺は両方の後家さんに話してやったのだよ。

この点に関しても、再び秘密厳守を申し付けておいた。後家さんたちの約束が得られたのだが、自分たち自身は勿論、ローリンズ嬢についても保証するとのことだった。ローリンズ嬢の口の堅さについて、二人があまりに持ち上げるものだから、あのお嬢さんは、ハムステッドの社交界に出入りする女性全員にとって、秘密保持局長の地位にあることが判明した次第だよ。

いやはや、ジャック、この調子では、いたずらに類したことを山ほども知っていることだろうな、ローリンズ嬢は。彼女の胸の内は、それこそパンドラの箱といったところなのだろう。だが、俺が注意を向けるのにもっと相応しいものが何一つないのであれば、そいつをこじ開けて、見つけたものを俺なりに利用してみせることを誓っておこう。

ところで、ベルフォード、貴公もお見通しだろうが、俺の頼みの綱として残るのは、ベティ夫人とモンタギュー嬢による調停であり、ハウ嬢の次の手紙を途中で奪い去る、その望みだけというわけだ。

手紙　二十四
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

容赦するということを知らない麗人は、ムーア夫人とベヴィス夫人を伴い、実際に礼拝式へ出掛けてしまった。だが、ウィルがピッタリと彼女の動きを見張っているし、俺のほうでも、いつ何時でも奴の知らせを受け取ることの出来る状態にあるのだよ。

俺がお供をするのは、彼女の「好むところ」ではなかったのだ［女にとっては力強い言葉だよ。常に自分たちの意思を通すことになっていると言わんばかりだからな］。俺もあまり強く迫ることはしなかったのだが、彼女が自発的に戻って来るのかどうか、疑って当然な理由があるように俺は考えているのだと、彼女がそんな懸念を抱くことのないようにという気持ちからだ。

ベヴィス未亡人に別の仕事を探してやろうかと、頭に思い浮かべたこともあった。礼拝式に出るのに負けないくらい、俺との付き合いを楽しんでくれたはずだと思うのだよ。というのも、教会参りは、一軒の家からは一日に二名で十分だろうと話したところ、後家さんは気持ちがぐらついているような様子をしていたからだ。ただ、お出掛けの仕度は整っているし（女たちは何かにつけてこんな言い方をするものだ）、叔母のムーアが一緒に来てもらいたがっていることもあり、彼女も出掛けるのが一番良いと考えたわけだが、「お分かりでしょう。外見のことなど気になさらずに済むお方の目に、奇妙に映ってはいけないからですわ」と囁いていた。

そんなわけで、俺はここ、自分の食堂にいるという次第なのだ。そして、連中が戻って来るまでは、書き物以外に何もすることがないのだよ。

それで、どんな話題になりそうだと思うのかな、貴公としては。何のことはない、毎度お馴染みのものに決まっている。自己との対話というやつだが、一時的な後悔から来るものだよ。何しろ、一撃が加えられていないこともあって、彼女の守護天使は彼女を守ろうと、旧に倍する努力を払っているわけだからな。

そういうことでもなければ［しかしながら、彼女の守護天使が俺に対してどんな影響力を持つというのだ］、あのような至高の美徳に対する反逆を思い描くたびに、俺の復讐心を抑え込もうとするのは果たして何なのか、それが分からなくなるのだ。前にも話したとおり、良心は死に絶えたのだから、そんなものであるはずはない。不死鳥みたいに、お古になった良心の灰の中から新たな良心が生まれ育つなどということは、確かにあり得ない話ではある。だが、仮にそういうことになった場合に、芽生え始めた良心を圧倒することが出来ないようだと、厄介な話になるだろうな。

だとすれば、そいつは愛に違いあるまいと思うのだよ、俺としてはな。愛そのものというわけさ。かくも賛嘆すべき対象への摩訶不思議な力を湛えた愛だよ。彼女のためを思う貴公の女々しい議論にも、おそらく幾許かの注意は払われているのだろう。

そこで、愛が動機として働いている点を認めることにしたい。というのも、愛情があれば当然のことだが、愛する者は、情熱の対象となっている者の意に背くことを嫌がるようになるからだ。そして、愛にしてみれば、悪事でも計画的な種類のものは、彼女に対しては致命的な犯罪行為になることを知っているだけに、俺がそんな悪事を企んだりするのが我慢ならないわけだよ。

この件に関しては、少しばかり愛と話し合いをさせてほしいのだ。たとえ芽生え始めた良心についてであれ、愛についてであれ、あるいは、ジャック、貴公自身に関する話でも構わない。風見鶏のようにコロコロ変わる人間一人一人に対しても、俺のほうでは耳を貸すつもりでいることを分かってもらえるはずだ。だが、この件に関する話し合いは、これで最後にしなければならん。ある意味では、彼女の運命が山場に差し掛かっているということではないのかな。それに、俺が踏み出す次の一歩は、それがどちらの方へ向かうにしても、元に戻すことは出来ないものとならざるを得ないのではないのかな。

∴　　∴

さあ、話し合いは終わった。

この腕白小僧は、千にも上る心魅する事柄を（良心よりも優しいからな、愛というやつは）、彼女のために仄めかして見せたのだ。

奴のほうでは、われわれの胸の内のことなら、その両方に通じているというふりをして見せるのだよ。そして、次のように言い張っていた。つまり、俺の愛は驚異的なまでに強力で、力に満ちたものであるし、また、何ヶ月にも亘って誠実に尽くしてきた点を申し立てることが出来るという取り柄に恵まれ、数限りない困難と戦って来たわけであるが、しかしながら、正しい種類の愛ではない、というのだな。

「正しい種類の愛だと　…　生意気な　…　だが、あんたも神様なのだから、それなりの敬意は払うことにするが」と、俺は言った。「彼女の側につくなんて、彼女はあんたに対して一体どんな手柄を立てたと言うのかな。ひとつ教えてほしいのだが、彼女のは正しい種類の愛なのかな。そもそも、あれは愛なのかね。彼女のほうでは、そうは言っていないのだよ。あんたのことを主君とは認めていないのだぞ、彼女は。どこの馬の骨があんたを動かしているのかな。あんたの力を軽蔑している反逆者のために、こうも熱心に弁護を買って出るなんてな　…　」とだよ。

すると奴のほうでは、「もしも　…　」だの「だとすれば　…　」だのを持ち出して来たのだ。そして、それはこれまでにも愛となっていたであろうし、俺のほうで、奴の言う正しい種類の愛によって助長するなら、今後とも愛に、それも、高尚な種類の愛になるものと信じている、と言うのだ。そして奴は、自説を正当化するために、昨日のものと同様に今朝のものも併せ、彼女自身の告白を理由として持ち出したのだ。さらには、トコン剤による俺の病の件にまで溯って見せたのだよ。

今まで、この神様とこれほど親しく話したことは一度もなかった。従って、奴独特の言い回しが俺の耳には奇妙に響いたと、貴公としては考えるかもしれないな。その後奴のほうでは、これまで淑女の胸を温めた中でも最も魅惑的な炎に対して、火が着き始めたばかりで、燃え立とうとしている時だというのに、俺が何度冷水を浴びせかけたことかと、その点を俺に語り聞かせていた。

俺はこの正しい種類の愛とやらを定義するよう要求した。奴も定義を試みてはみたのだが、何ともお粗末な手際なもので、俺のほうでも、奴の称揚しようとしているものが愛だとは、どうあっても納得出来なかったのだよ。

全体的に見れば、われわれはこの件に関して注目に値する論議を行ったわけだが、奴の

ほうでは、前例もないという令嬢の美点について力説していた。にも拘らず、俺が奴を言い負かす結果となったのだ。というのも、俺のほうでは、愛は美点などによって左右されるものではないし、思慮分別とか、他のどのような理性の力の支配下にあるわけでもないということ、そして、もしもあの令嬢に愛することが可能だとすれば、それは、これまで一度として女性の心の中に君臨したことがなく、奴などにはまったく関わりのない種類の愛なのだということを主張し（彼女が現在見せている天の邪鬼ぶりに触れるのは控えたのだが、それだけでも奴の申し立てのすべてに対する十分な回答となるのだよ）、千もの例を即座に持ち出してその証明をしてみせようとしたのだよ。すると、奴のほうではすっかり黙り込んでしまったという次第なのさ。

奴の言う正しい種類の愛とやらに俺が半ば以上圧倒されていたその矢先、彼女が俺の元を逃げ出したことについてはどう思うのか、俺は奴に尋ねてみた。それから、彼女の書いた手紙を奴に見せてやったのだが、俺をすっかり悲嘆にくれさせようとの意図で、あるいは、首吊りとか身投げとか銃とかで命を断つ気を起こさせようとのつもりで残して行ったのは疑うべくもない、俺宛の例の手紙のことだよ。奴の力を侮り、俺への振舞いに窺われた、あの愛とも思しきものすべてを、身内の者たちからの虐待や拒絶のせいにし、俺のことは単に最後の手段にしか考えていなかったなどという、彼女が言明していた数多の事柄については、この際まったく触れなかったのだがね。

そこで、愛の神様も彼女のことを見捨てたというわけだよ。奴に言わせると、あの手紙は到底許し難いし、申し開きも立たないものだというのだ。このような公然たる反逆者のために弁じていたとは思いもしなかったとのことだった。そして、その他の点では、俺の誓っていた事柄が本当の話であるとして、さらに彼女の弁護を続けるようなら、奴は君主としての自らの権利を危険に晒していることになる、とも言っていた。

俺はすべて真実であると誓った。本気で誓ってみせたのだよ。いつもしていることだなどとは、おそらく言えないのだがね。

ところで、愛そのものが見捨て、良心のほうでも弁護しかねるということだが、貴公としては、どんなことになってしまうと思うのかな、この令嬢は。

手紙　二十五
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

日曜日　午後

あゝ、ベルフォード、まさしく間一髪だったのだ。あまりのことに、俺としても、起こり兼ねなかったことと起こらずに済んだこととを併せ考えると、恐怖と歓喜との狭間で身震いを禁じ得ないのだよ。

何と意固地な娘なのだろうな、この女は。自分の運命と争おうというのだからな。しかも、運命の星そのものが自分に逆らっていると考えて然るべき理由がありながらだよ。俺様のほうはこの世でも一番の幸運児だな。ただ、俺の運命がどんなに細い糸で吊り下げられていたのか、そのことを思い返すと、息も止まりそうな思いがするのだ。

だが、宙ぶらりんな気持ちにさせておくのは止そう。まだ三十分も経っていないが、確

かに手に入れたのだよ。待ち侘びていたハウ嬢からの手紙をな。それも、まったくの偶然によってだ。だが、この手紙はここまでにして、前のものと一緒に急ぎ届けよう。貴公の使いが待っているのでな。

手紙　二十六
ラヴレース氏より［承前］

事の次第というのはこうだ。我が魅惑の君は、午後になって、ムーア夫人と再び礼拝式へ出掛けたのだ。俺はまず、食事を共にしてくれるよう誠心誠意お願いしたのだが、無駄に終わった。彼女がムーア夫人に語ったところでは(ア)、彼女にとって俺は、あまりにも斟酌を加えなければならない人間だけに、そのような恩恵に与るわけには行かないのだそうだよ。次に、食後にもう一度庭の散歩を付き合ってもらいたいと、俺は懇願したのだ。だが、彼女のほうでは再び礼拝式へ出掛けるつもりでいる、とのことだった。そして、出掛けてくれたことを大いに喜んで当然な理由が生じたというわけだよ。

尊敬すべき我が友ベヴィス夫人は、お説教というものは、きちんと守るのなら、一日に一つで十分だという考えなものだから、家に残って俺と付き合ってくれたのだ。

令嬢とムーア夫人が出掛けて十五分も経たないうちに、田舎ふうの若者が馬に乗って玄関先に現れ、ハリオット・ルーカス夫人に会いたいと言うのだよ。未亡人と俺は（互いに相手をどうもてなしたものか、考えがまとまらないまま）玄関の横の客間にいたのだ。そして、その男の問い合わせを耳にすると、俺はこう言ったのだよ。「あゝ、親愛なるベヴィス夫人、救い出していただかないと、私は破滅してしまいます。永遠に破滅です。おそらく、あの執念深いハウ嬢のところから、使いの者が手紙を携えて来たのですよ。それがラヴレース夫人の手に渡ったりすれば、われわれのやって来たことすべては台無しになってしまうことでしょう」とだ。

「私にどうしてほしいとおっしゃるのかしら」　夫人が言っていた。

「私のほうから指示を与えたいのですが、今すぐに侍女をお呼びください。それで、もしも私の想像どおりでしたら、貴女にしていただくことをお教えいたします」

未亡人「マーガレット、ねえ、マーガレットや、急いで来てちょうだい」

ラヴレース「マーガレットさん、あの男がハリオット・ルーカス夫人に会いたいと言った時、君はどんな返事をしたのかね」

ペギー(二七)「どのようなご用件で、どなたのところからお見えになったのか、その点を尋ねただけでございます（と申しますのも、旦那様の召使が事情を話してくださっていたからでございますわ）。それに、お呼びがございましたので、奥様、あの人の返事も待たずにこちらへまいったのです」

ラヴレース「いいかね、君。もしも、君自身も幸せな結婚生活を送りたいと思っているのなら、そして、君とご主人に仲違いをさせたがっているような者たちの目論見を挫いてやりたいと思うのなら、あの男が伝言なり手紙なりを携えていたらの話だが、それをあい

(ア)　百八十五頁を参照のこと。

つから頂戴して、私のところへ持って来るのだよ。それから、ラヴレース夫人が戻って来ても、何も話してはいけないぞ。さあ、一ギニーあるから受け取っておきなさい」

ペギー「旦那様のお役に立てることでしたら、何もいただかずとも、どんなことでもさせていただきますわ［などと言いながら、すぐに手を出し、その一ギニーを受け取ったのだよ］。と申しますのも、旦那様がどんなに立派な紳士でいらっしゃるのか、ウィリアムさんから伺っておりますもの」

すぐにペギーは玄関口の男のところへ向かった。

ペギー「ねえ、あなた、ハリー・ルーカス卿様にどんなご用なの」

男「お話しするのは、当のご本人にでなくちゃならんのですよ」

ラヴレース「頼みますよ、奥さん。ラヴレース夫人役をお願いいたします。一生のお願いです。ラヴレース夫人を演じていただきたいのです」

未亡人「私がラヴレース夫人の役をですって　…　そんなこと、どうして私に出来るのでしょう。あの方は金髪ですし、私のは茶色の髪ですわ。あの方はほっそりしておられるのに、私のほうは丸々と太っておりますもの　…　」

ラヴレース「構いません。構うものですか。あの男は新参の召使かもしれんのです。どうやら、お仕着せ姿ではないようですね。妻の容姿に見覚えはないかもしれません。貴女も、ただ水腫を患ってむくみがきているだけ、ということにすることも出来ましょう」

未亡人「水腫に罹っております人たちの顔色は、私のようにはつらつとして血色が良くはございませんでしょう　…　」

ラヴレース「確かに。だが、あの田舎者にそんなことは分かりませんよ。当座を言い抜けるだけのことですからね」

ペギー、ペギーと、女の口調で、ドアのところから俺が小声で呼んだ。はい、奥様、とペギーが答え、客間のドアのところにいる俺の元へとやって来た。

ラヴレース「あの男には、奥様は具合が悪く、寝椅子で休んでしまわれたと言ってやるのだ。そして、何をしても構わないから、用件を聞き出すのだよ」

ペギーは飛んで行った。

ラヴレース「さて、親愛なる奥様には長椅子に横になっていただくこととして、お顔にはハンカチを被せていただきましょう。あの男が自分から話し掛けようとした場合、貴女の目と髪の毛を見たりしないためですよ。そう　…　それで結構。私は貴女の傍の控えの間に入っております」

俺は控えの間に入った。

ペギー［戻って来て］「どうしても私には用件を伝えてくれないのです。ハリー・ルーカス夫人ご本人に話すのだと言っております」

ラヴレース［ドアを手で支えながら］「こちらがハリオット・ルーカス夫人ですと話してやるのだな。そして、ここへ通しなさい。あの男には（疑う場合にはだが）囁いておくのだよ。夫人は水腫気味でむくみが出てしまい、以前とはお変わりなのです、とな」

マージェリーが飛んで行った。

ラヴレース「ところで、親愛なる未亡人様、どれほど魅力的なラヴレース夫人となられるか、ひとつお手並みを拝見いたしますよ。ハウ嬢からの使いなのか、尋ねてみてください。ハウ嬢の家に住まっているのか、訊いてみてください。ハウ嬢はお元気か、尋ねるの

です。一言口にするたびに、ハウ嬢のことを〈大好きな私のハウさん〉と呼ぶのです。金を握らせるのです。さあ、この半ギニーはあいつの分です。頭痛を訴えるのですね。頭を低くしておくための口実というわけです。ハンカチでお顔を隠せない場合ですが、額と目を掌で覆うことですね。そう、それで結構でしょう。そして、あいつは［ほら、やって来ますよ］出来るだけ早く追っ払うことですね」

腰をかがめ、右足を後ろに引いたお辞儀をして、当の男が入って来た。両手で持った帽子を前に突き出すような格好でだ。

男「おそれながら、奥様、ごあんばいのよろしくないご様子、お気の毒に存じますだ」

未亡人「私に何のご用かしら、あなた」

男「ハリオット・ルーカス夫人様でございましょうね、奥様」

未亡人「えゝ、そうよ。ハウさんのところからいらっしゃったのかしら」

男「そのとおりですだ、奥様」

未亡人「私の本当の名をご存じなのかしら、あなたは」

男「抜け目なくめぼしはつけておりますだ。ただ、わっしの用向きとは何の関わりもございませんでして」

未亡人「何なのかしら、あなたのご用件は。ハウさんはお元気なのでしょうね」

男「はい、奥様、お元気そのものでございますだ。ありがたいことです。奥様にもそうあっていただきたいものと存じますだ」

未亡人「悲しいことが多すぎて、とても元気にはなれませんわ」

男「そんなことを耳にしたようにも思いますだ」

未亡人「頭が恐ろしいほど痛むもので、顔を上げてはいられないのよ。あなたのご用件を知らせてほしいのだけれど、お願いしなければいけないのかしら」

男「いえ、そういうことでしたら、わっしの用向きのほうはすぐにもご承知いただきますよ。このお手紙を奥様ご当人の手にじかにお渡しするということでして、さあ、これでございますだ」

未亡人［手紙を受け取りながら］「大好きなお友達のハウさんからかしら　…　あゝ、この頭が　…　」

男「はい、奥様。それにしても、ひどくお加減がお悪くて、お気の毒に存じますだ」

未亡人「あなたはハウさんのお宅に住んでいるのかしら」

男「いいえ、奥様。小作人のせがれの一人ですだ。わっしがお使いにまいりましたいきさつのことは、大奥様に知れてはいけねえのです。ただ、想像いたしますに、そのお手紙で何もかもお分かりになるはずですだ」

未亡人「この種のお骨折りには、どうしたら満足してもらえるのかしらね」

男「お気づかいは一切なしに願えます。こんなことをしておりますのも、ハウお嬢様のためを思えばこそですだ。お嬢様のほうで十分すぎるほどに手当てをしてくだせえますので。ですが、多分、お返事は無理でしょうね。そんなにお加減がお悪いのですから」

未亡人「返事を待つように言われて来たというわけでもございません。ただ、奥様のご様子とお体具合はよく見てくるよう、言いつけられましただ。そして、奥様が一行か二行お書きくださった時には、それを大切にして、わっしどもの若奥様にだけこっそりと手渡す

ようにも言われておりますだ」

未亡人「妙な顔付きなのはお分かりでしょう。以前の見てくれのようには行かないのですよ、私」

男「いえ、前に一度お目にかかったのを別にしますと、お会いしたことがあるとは思いません。踏みこし段のところでのことで、あそこで奥様とわっしらの若奥様にお会いしました。ただ、行儀というものがございますので、生まれの良いご婦人方のお顔をジロジロ見るような真似はいたしませんでした。特に、踏みこし段でのことでございますので」

未亡人「何か食べ物かお飲み物はどうかしら、あなた」

男「弱いビール一杯でしたら、構わねえと思います」

未亡人「マーガレットや、この若者をお連れして、有り合わせのものを何かお出ししてちょうだい」

男「きょうしゅくでございます、奥様。でも、こちらへ向う途中、ちょうどあそこの原野のところでですが、一休みしいたしまして腹ごしらえしたのです。でなければ、まったくの話、もっと早くにおじゃましていたはずなのです。[お前がそうしてくれて、俺もついていると思ったよ]このお屋敷のことを尋ねに立ち寄ったのですが、〈キャッスル〉という看板の出ているはたご(二八)に入りましたところ、テーブルの上に一切れ、塩漬けの牛肉がのっておりまして、それで、のどをしめらせるだけのつもりが、食べずにはいられなくなったという次第です。従いまして、お宅のビールだけをちょうだいいたします。牛肉がえらく塩のきいたやつだったもので」

お喋りな犬め、くたばってしまえ、と俺は思った。

奴は腰をかがめ、右足を後ろに引いたお辞儀をして、部屋を出て行った。

「マーガレットや」と、俺が女の口調で囁いた[控えの間から飛び出し、客間のドアを手にしながらだよ]。「あの男を出来るだけ早く家から追い出すのだよ。皆が教会から戻って、あの男がここにいるのを見つけるといけないからね」とだ。

ペギー「心配ご無用ですわ」

奴は引き下がって行き、どうやら、たっぷりとビールを頂戴したらしい。そして、奴がひどく話好きなのを知って、マーガレットはこう言ったのだ。申し訳ないけれど、自分には航海から戻ったばかりの恋人がいて、その男をやむなく食料貯蔵室に匿うことになってしまったのだけれど、そんなわけでもあるから、奴に付き合ってその場に居残るのは勘弁してもらえるに違いない、とだよ。

「えゝ、えゝ、ごもっともで」と、あの田舎者が言っていた。「楽しみが得られないからといって、他人の楽しみに水を差したりはしねえ」から、とだよ。ただ、本当のことを言えば、ラヴレースとかいう殿様は途方もないワルですねと、奴は女中の耳に囁いたのだ。

どんな点でなのかと、マーガレットは訊いた。そして、この娘が未亡人に話したことなのだが(その未亡人がこのすべてを俺に語ったのさ)、奴の顎のあたりにきついのを一発お見舞いしても構わなかったのですが、と言っていたそうだ。

女に近寄ると、一人残らずキスをしてしまうから、ということだ。

こんな台詞を口にすると同時に、野郎はマージェリーを包み込むようにして、チュッとばかりにキスをしたわけだが、その音は客間にも届いたかもしれませんねと、彼女が後でベヴィス夫人に話していた。

こんなものなのだよ、ジャック、人間の本性というのはな。地位階級の違いなく、こんな働き方をするものなのだ。従って、田夫野人も、目上の者たちに負けず劣らず、自らが非難することを実践し、また、実践していることを咎めるのだよ。だが、小娘には食料貯蔵室に閉じ込められた色男がいることを、このずる賢い野郎は知らないわけではないのだよ。もしも、本当のところが分かれば、赤い顔をした乳搾りの娘たちの中には、もっと上等な女たちがラヴレース殿のことを呼ぶのとそっくり同じように、奴のことを〈途方もないワル〉と呼ぶ者も出てくることだろうな。

あいつは女中にこう言っていた。若い奥様の顔をしっかりと眺めたところ、思っていたよりも大層赤みが強いし、横になっている姿はかなり太っており、背丈も足りないように思う、というのだ。

女というのはだれにせよ、ジャック、不義密通のために生まれ落ちてきているのだ。そして、父親、保護者、家庭教師の女たちが高価な代償を払って得た経験に基づいて教えるとおりに、それを実践してみせるのだよ。それに、こと色恋沙汰に関しては、女は生まれついての達人で、男よりははるかに機転が利くものだ。山だしとはいえ、当意即妙のこの娘がその良い例で、先に仄めかしておいた水腫の話を手掛かりに、うまく辻褄を合わせて見せたのだよ。奥様が太って見えたのは水腫症のせいだし、体を丸めた寝姿にもよる、というわけだ。すると、大いにありそうな話ですね、まったく、と奴が言っていた。奴の目に奥様の背丈が低く映ったのは、気づいたかもしれないが、痛みのために足を縮めていたからであり、また、自分の推測するところでは、寝椅子が短すぎたこともあるだろう、と彼女が話すと、いやはや、それは思い及ばなかったな、と奴が答える。赤みがかった顔色は悲しみと頭痛から来たものだと言えば、なるほど、そいつはまことに尤もな話だと応じる、といった具合なのだよ。ただ、手紙をハリオット夫人本人の手に渡したことを奴は大いに喜び、そのとおりをハウ嬢に話すのだと言っていた。

帰り際にもう一度奥様に会いたいと、奴が言い張るので、断り切れなかったのだ。そこで、未亡人は顔をハンカチで覆ったまま上体を起こし、腰羽目に頭をもたせ掛けていた。

何か特にお伝えすることはございましょうか、と奴が尋ねた。

いいえ、ございません。ひどく具合が悪く、筆を執ることも出来ません。とても悲しいことですけれど、と未亡人が答えた。

明日にでも参りましょうか、と奴が訊いた。こんなに近くへ来たのだから、ロンドンへ寄るつもりであり、今夜は、フェターレーンという名の通りに住む親類のところに泊まることにする、というのだ。

いいえ、結構よ。筆を執れるようになり次第、すぐにも一筆認め、郵送いたしますからね、と彼女が言った。

じゃあ、自分に託して届けるようなものが、もしも奥様のほうにないということであれば、おそらく、一日か二日ロンドンで過ごすことになるだろう、と奴が言っていた。というのも、ロンドン塔のライオン、そして、ベドラムにしても墓地にしても(二九)、まだ一度も見物したことがないからということで、翌日早馬で戻らねばならないような用事とか伝言とかが奥様にないのであれば、お許しを得ていることでもあり、一、二日休みを取るつもりだ、というのだよ。

未亡人のほうでは、ないとのことだった。

奴の分として俺が渡しておいたあの半ギニーを彼女は差し出したのだが、奴は断っていた。利得のためにしているのではないことを、そして、奴に言わせるなら敬慕の念というわけだが、ハウ嬢への好意からのことである点をしきりと主張していた。ハウ嬢の役に立つためなら、世界の果てまでも、あるいは、エリコ（三〇）とやらへでさえも、馬を走らせる気持ちがあると言うのだよ。

こうして、不届きな与太公は立ち去ったのだが、奴がいなくなった時には、俺も心中ホッとした。何しろ、俺にとっては、皆が礼拝式から戻るまで、奴が居残ろうとすること以上に恐れていたことはなかったのだからな。

かくして、ジャック、俺は心の安寧を、つまり、ハウ嬢の手紙を手に入れた次第だ。それも、偶然に次ぐ偶然の結果なわけだから、令嬢の星回りは逆向きになっていると言いたくもなるのだよ。ただし、その多くの部分は、適切な処置を講じてきたという点で、俺自身の用心の賜物だと言わねばなるまい。というのも、未亡人を作り話によって、また、女中のほうは俺の下男を餌にしたのだが、二人をこちらの側にしっかり引っ張り込んでおかなかったなら、すべては何の意味も持たなかったはずだからだよ。そして、片方の女はたったの一ギニーで、もう一方の女は心を込めた半ダースほどのキスによってだが、二人は心の底からこちらの側についてくれたし、夫婦を仲違いさせて楽しむような不埒な人間は毛嫌いしていたこともあって、この件については、ムーア夫人、ローリンズ嬢、ラヴレース夫人はもとより、この世のいかなる人間に対しても、少なくとも一週間が経過するまでは、また、俺が許可を出すまでは、一切知らせないようにすると約束してくれたのだよ。

不和の種を蒔いている人間からの手紙を俺が手に入れたということで、未亡人は大喜びだった。俺は未亡人に向かって席を外すことを詫び、手紙を携えて急ぎ部屋を出た。手紙を読み終えると、俺の幸運を貴公に知らせるため、速記に取り掛かった。そして、皆は礼拝式が終わってもすぐには戻らなかったので（後で分かったのだが、ローリンズ嬢のところに寄り、そこにしばらく居たのだ。あの忙しい娘をお茶に連れて来るためだ）、貴公のためにここまで書き留めた次第だ。この部分へ至ったなら、俺共々この機会に喜んでもらおうというわけだよ。

ちょうど今、三人揃ってご帰還だ。

急いで出迎えることにしよう。

手紙　二十七
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

話の続きとして、もう一通別の手紙を貴公宛に書き出したところだが、それが書き上がる前にこちらのほうを送ることになるはずだ。同封したものを読めば、貴公にも分かることだろうが、この文通をしている二人は、そのどちらにしても、憐れみを垂れるには値しないということだな。それに、一人を片付け、もう一人のほうに取り掛かる決心を俺は固めているのだ。

俺が片方の女に加えた挑発の数々からすれば、あの女の言いたい放題の無遠慮さも正当化されることになろう、と貴公が言うのなら、「そのとおりだろう、だれであれ、俺以外の

者に対してならな」というのが俺の答えだ。だが、その手の挑発を加えることの出来る男は、そして、その挑発に対し悪口を浴びせる者たちを罰する力のある男は、怒りを露にして見せるはずなのだ。それも、無遠慮な扱いを受けるに値することをしてきた男の場合には、おそらく、冷酷非常さが一層増すことになるのだよ。

だが、そんなことをするのは間違っていると貴公が言うのなら、俺は次のように答えることにしよう。残念ながら、それが人間の本性なのだよ、とだ。それに、ジャック、俺には男でいてほしいのだと、貴公はそんなふうには思わないのかな。

良ければ、ここで例の手紙を読んでくれ。だが、読み終わった後で、あの小生意気な娘たちのどちらに対してであれ、弁護を買って出るようであれば、貴公はもう俺の友達ではないと心得てくれ。

ハムステッド、ムーア夫人方　ハリオット・ルーカス様

先週の水曜日に認めましたあの長い手紙(ア)の中で詳しく触れておきましたが、この破廉恥極まりない男の極悪非道の策謀が明るみに出た後のことでもありますから、ハムステッドから発送されました、木曜の午後の貴女のお手紙(イ)をじっくりと読ませていただきました時には、信じていただけることでしょうが、驚くというよりも、むしろ激しい憤りのほうを感じてしまいましたわ。たとえあの悪党が、一軒の家ではなく、町一つを焼き払おうとしましても、私は驚いたりしなかったことでしょうね。ただ、あの男が（漏れ聞いておりますところでは、女性の寝室へ潜り込もうと心に決めたが最後、自分を遠ざけておくことの出来る女性など一人としていないのだ、というのが自慢の種の男ですから）これまで爪先を露呈せずにいたという点だけは、奇妙に感じられるのです。また、同じくらい私が不思議に思いますのは、あの男がそのような恐ろしいほどに有利な立場で、しかも、そのような忌まわしい家の中で貴女を手中にしていながら、貴女のほうでは、あの際、辱めを受けるのは免れ得たという点、そして、その後では、あんな悪魔のような連中から逃げ出すことがお出来になったという点なのです。

例の尤もらしく振る舞うトムリンソンをどうして疑わなければいけないのか、その理由につきましては、先週の水曜日から木曜日にかけて認めました長い手紙の中でお示しいたしましたね。謹厳な顔はしておりましても、悪党に違いないと思いますわ、その男は。その男と、残忍非情な一味の残りの者たちをけしかけ、瑕疵一つとてない完璧な美徳を台無しにするよう骨折らせた、そんな破廉恥漢など、天空から閃く稲妻にでも打たれてしまえば良いのです。神様を称えましょう。悪党たちの仕掛けた罠をすべて逃れ、今こそ貴女は危険を脱したわけですからね。従いまして、この忌まわしい詐欺行為に関しまして、さらに集めました詳細な事柄を並べ立て、ご迷惑をお掛けするような真似は、今のところは慎むことといたします。

同じ理由からですが、私の耳に入りました、あの忌まわしい破廉恥漢本人に関する新たな噂のいくつかにつきましても、貴女にお知らせするのは控えることといたします。特にその中の一つなどは、それこそゾッとするような性質のものなのです。実際の話、あの男

(ア) 二十三頁から三十六頁にかけてを参照のこと。(イ) 三十九頁から四十四頁にかけてを参照のこと。

は悪魔なのです。

フレッチヴィル夫人にまつわる話すべても、何の疑いも持たずに断言いたしますが、同じようにまったくの作り話のはずです。あの男ときたら　…　心の底の底から軽蔑いたしますわ、あの男のことは。

国外に逃れようとのお考え、そして、そうなさろうとする貴女の理由が、私の胸にはひどく応えるのです。でも、安心してくださいね、あなた。やむなく故国をお捨てになる必要はないものと存じますわ。非情にも、そうせざるを得ないことが確かになりました場合には、自分自身の明るい見通しもすべてかなぐり捨てまして、すぐにも貴女のお傍へ参る所存です。そして、貴女の行かれる所でしたらどこへでもお供をし、貴女の運命を分かち合いたいと思うのです。と申しますのも、貴女が海上での危険ばかりか、別の卑劣漢からの攻撃にも晒されておられるのを知ったといたしますと、この私が幸せでいられるなどということは有り得ない話だからです。貴女は、ご容姿の優雅さゆえに、だれの目をも魅了してしまいますし、また、天与の美質がさほど際立ってはいない他の方々なら避けることも出来る、そんな絶え間のない危険に身を晒すことにもなるのですからね。美の効能なんて（あれほど熱心に求められ、あれほど熱心に賛美されておりますが）、私の知るかぎりではそんなところですわ。

あゝ、あなた、私が結婚をいたしまして、クラリッサという娘の母親になるといたしましょう［名はクラリッサでなくちゃいけないのです。将来を約束するほどに可愛らしい娘でしたらね］。その場合、愛しい娘が成長するにつれまして、その娘のために私は何度この胸を痛めることになるのでしょうね。一目見た人をすべて崇拝者に変え、その後を追わせることになりますあの美しさに対しましては、貴女の場合、女性には例を見ないほどの思慮分別と用心深さをもってしましても、十分な防護の手立てとはなり得なかったのだということを思い出す時があるわけですからね。優美なことこの上ないお顔にこそ最も大きな破壊の跡を残すことの多い、あの〈むごい病〉とも呼ばれております病気（三）の仕業を嘆きますのは、精々慎まねばならないように私は思うのです。

土曜日　午後

ちょうど今、タウンゼンド夫人とお別れをしてきたところです（ア）。貴女も、夫人が私と一緒の時に、一度お会いになったはずと思っておりましたが、夫人のお話では、貴女に直接紹介していただくという栄誉にはまだ浴していない、とのことでした。夫人は男性みたいな気性の方で、世間のことに通じておられます。それに、ご兄弟が二人ロンドンに住んでいるのですが、このように立派な目的のためなのですから、その人たちに一肌脱いでいただくこと、そして、（もしも必要とあれば）両方の船の乗組員全員に貴女のお役に立ってもらうことも出来るはずと、夫人のほうでは確信しておられるのです。

ご同意をいただけますね。そうすれば、あの憎らしい悪党は、その悪行すべての報いとして、少なくとも骨の何本かはへし折られることになるはずです。

運の悪いことですが、タウンゼンド夫人といたしましては、来週の木曜日まで、早くとも水曜日までは、貴女と会うわけにはまいらないのです。その時まで今の場所で安全にし

（ア）タウンゼンド夫人の身上等々に関しては、第四巻の百十一頁から次頁にかけてを参照のこと。

ていられることは確かなのでしょうか。ロンドンに近すぎるようにも思われます。ロンドンに入ってしまわれるほうが、もしかすると良いのかもしれません。もしも、お住まいを移られるのでしたら、すぐにも行き先をお知らせ願います。

こんなにも大切な方が身を隠す必要に迫られるなんて　…　そのことを考えますと、私の心は千々に乱れてしまうのです。呪わしい男です。策を企てている時のあの男は、遊び半分で気紛れな気持ちだったに違いありません。ただ、残酷で野蛮なその遊び気分が貴方を救うことにもなったのです。他の、名もあれば家柄も恥ずかしくない人たちを乱暴いたします時にあの男が用いてきた、不意に加える暴力行為からですわ。そういった人たちに罠を仕掛けるのを、この悪党はいつも得意に思っていたのです。

この見掛け倒しの怪物の悪辣さは、ヒックマンさんが私の信用を勝ち取ります上で、他のどのような理由も及ばないほど寄与していることになります。貴女の逃亡のこと、そして、その理由につきましては、ヒックマンさんだけが（私を通して）ご存じです。理由を教えないでおきましたなら、例の卑劣な試みのことをあの人はもっと悪く受け止めていたことでしょうね。その点につきましては、ハムステッドからの貴女のお手紙を見せることであの人に伝えました。お手紙を読み終わると［読み進めているうちに、体を震わせたり赤くなったりしておりましたが］、あの人は私の足下に身を投げだし、貴女のところへ伺うことを、そして、貴女に保護の手を差し延べるためですが、自分の家にお連れすることを許してほしいと懇願するのです。心の優しいあの人は目に涙を浮かべ、繰り返し熱心にこの話を持ち出しておりました。世間体などものともせず、自ら四頭立て、あるいは、六頭立ての馬車で繰り出し、このような罪もなく虐げられている人に保護の手を差し延べる栄誉を担いたいというのです。

この私も、あの人のことを嬉しく思わずにはおられませんでした。そして、そんな気持ちでいることをあの人にも分かってもらうようにいたしました。あれほどの気概があの人にあるなんて、ほとんど期待しておりませんでしたわ。でも、大切に思う女性の言いなりになっておりましても、それは、然るべき機会に勇敢さに欠けることの証拠になるわけではないのかもしれませんわね。

私のほうでも、お返しに、あの人の身の安全には多少なりとも配慮して上げるべきだと考えました。このように開けっぴろげな行動に出たりいたしますと、この世に並ぶ者とていない極悪非道の山師からの復讐をその身に招くことにもなるからですが、この山師というのは、悪辣この上ない破廉恥行為であっても、一声掛かればすぐにも互いを支え合おうとするような、自分と同類の悪党一味をいつも思いのままに動かしている男なのです。それでも、ヒックマンさんにいたしましても、法的な手段に訴えることで自分の立場を固めようとしたかもしれませんから、私もその点に固執すべきではなかったでしょうね。もしも、貴女の繊細なお気持ちのことを存じ上げずにいたのでしたらね［そのような挙に出たりいたしますと、大いに世間を騒がせていたでしょうし、物議をかもすきっかけを与えていたに違いありませんからね。まるで、貴女に対して何か有利な立場が得られたみたいにですわ］。また、タウンゼンド夫人にお願いしてすべてをもっと穏やかに、もっと効果的に処理していただくという、極めて大きな見込みもないのでしたらね。

出来ることなら水曜日にということでしたが、タウンゼンド夫人ご本人が貴女をお迎えに伺います。夫人の二人のご兄弟と、お二人に使われている人たち数名があちこちに散ら

ばり、貴女のことは何も知らないふりをいたしまして「私たちが工夫したことですが」、ロンドンへだけではなく、デトフォードにあります夫人のお宅まで、無事に貴女を送って差し上げることになっているのです。

夫人には血続きの女性が一人おりまして、夫人ご自身のほうでどうしても貴女の傍を離れなくてはいけなくなりました場合には、その人が夫人のお宅で貴女のご命令を受けることになっております。それから、貴女を失ったことで燃え上がりますあの卑劣漢の怒りの炎が鎮まり、捜索も打ち切られますまでは、夫人のお宅に留まられて構わないのです。

いかにもありそうな話ですが、あの男はすぐにも新たな悪事に手を染め、そのことに心を奪われてしまうかもしれません。それに、世間向けには、フィレンツェで従兄弟のモーデンさんの保護の手を求めるために、貴女は出発なさったことにも出来るのです。

ことによりますとあの男は、そのように信じさせることが出来る場合ですが、あちらで貴女に会えることを願って、出掛けてくれるかもしれません。

少し間を置きまして、私どもの近くの村のいずれかに貸間を確保することも可能でしょう。そして、幸せなことに、私は毎日そこで貴女のお客様になることが出来るというわけです。それに、もしもこのヒックマンがお馬鹿さんでお猿さんみたいな人でないのでしたら、そして、私の母が訳も分からないことをせずにいてくれるようでしたら、私ももっと結婚のことを考えるかもしれません。心の底からお慕いしている人を、何の制約も受けずにお迎えし、おもてなしするためにですわ。

これからもなおたくさんの、本当にたくさんの幸せな日々を、二人で一緒に迎えたいものと、私は心から願っているのです。そして、これが他ならぬ私の希望なのですから、貴女にとりましても慰めとなってくれますよう期待する次第です。

貴女の地所の件ですが、貴女のほうでは訴訟を起こさないおつもりなのですから、モーデン大佐が帰国なさるまでは、あるいは、だれかさんたちが恥の意識に駆られまして、公正な気持ちを持ってくださるまでは、私たちもじっと耐えることにいたしましょう。

全体的に見まして、貴女の将来の見通しは、このような男と実際に結婚なさっていた場合のものに比べますと、今はずっと喜ばしいものになっているのだと、そのように考えないわけにまいりませんわ。ですから、脱出なさいましたことをお祝い申し上げねばなりません。身の毛もよだつ放蕩児の手からというだけではございません。どのような女性に対しましても、まして、貴女のような美徳と繊細さを備えられた方にはなおさらですが、あの男がなっていたに違いない、そんな極悪非道の夫からも逃れられたわけですもの。

貴女があの男のことを嫌っておられる、心から嫌っておられるものと思います。間違いなく嫌悪しておられるものと確信いたしております。そのように清らかな生活習慣をしておられる人が、その生き方にこうも矛盾しておりますものを嫌悪なさらないとしたら、それこそおかしな話ですからね。

私の前にございますお手紙では、牽制の意味合いで私宛に書かれたお手紙のことに触れておられますね(ア)。その種のものはまだ受け取っておりません。ですから、間違いございませんし、あの男が手にしているはずです。だといたしますと、七日付の私の長い手紙のほうも、同じようにあの男の手に落ちなかったのは奇跡と申せましょう。あの男が我が物と

(ア) 四十二頁と四十六頁を参照のこと。

することなしに、無事貴女のお手元に届いたとは、何という有難いことなのでしょう。

この手紙は、貴女以外の人には渡さないよう申し付けました上で、ある若者に頼んで届けてもらいますが、この若者の父親は私どもの小作人の一人なのです。貴女が何かお手紙をお渡しになる場合には、この男は真っ直ぐ戻ることになっております。でなければ、ロンドンへ向かいまして、骨休めでもするようです。単純な男ではありますが、大変正直な人間です。ですから、この若者には何をお話しになっても構いません。お手紙をこの若者に預けていただけないのでしたら、一行でも二行でも、出来るだけ早くに筆にしていただけたらと願っております。

この若者が貴女のところへまいりますことは、母は一切承知しておりません。貴女が例の〈下郎〉をお捨てになったことにつきましてもまだなのです。御免なさいね。でも、礼儀正しい扱いを受ける資格などないのです、あんな男には。

貴女とタウンゼンド夫人がどう事態に対処なさるのか、お聞きしたいものですね。夫人がもっと早くに貴女と落ち合ってくださっていたら良かったのにと思います。でも、お察しいただけるでしょうが、夫人の件にいたしましても、一刻の猶予もなしにお願いしたのです。この先お話ししたいこと、ご忠告申し上げたいことにつきましては、夫人からお聞きくださるようお願いいたします。天の神様が私の一番大切な方を導き、お守りくださいますよう、そして、貴女のこれからの日々を幸せなものにしてくださいますよう祈りながら、結びとさせていただきます。

アナ・ハウ

さて、ジャック、この忌まわしい手紙を貴公も読み終えたものと仮定しよう。その文面の何点かにつき、少しばかり感想を述べさせてもらいたい。

ハウ嬢にとって不思議に思われるのは、彼女の友をかくも恐ろしいほどに有利な立場で手中にしていながら、云々、という箇所についてだが、俺にとっても不思議なのだよ、その点はな。もう一度似たような機会が与えられるようなことになれば、われわれ両名にとっての謎の原因は消滅するものと確信している。

ご覧のとおりだよ。トムリンソンの正体がさらに暴かれている。フレッチヴィル夫人などという人物も見当たらないのだそうだ。「天空から閃く稲妻にでも …… 」というのだからな。おゝ、主よ。おゝ、主よ。何という恐ろしい牝狐なのだろうな、この小娘は。俺の「一味」、俺の「残忍非情な一味」のことも持ち出されているのだぞ。それでもまだこんな娘たちの弁護をしようというのかな、貴公は。「神様を称えましょう」と言っているが、友人が危険を脱したことに対してというわけだよ。ハウ嬢もその点は確認しておくべきだろうな。それと、自分自身の身の安全もだ。この口やかましい女さえいなければ（これまでに何度も言ってきたことだが）、間違いなく、もっと手際の良い始末のつけ方をしていたはずなのだ。

俺に関する「新たな噂」とのことだよ、ジャック。一体何の話だというのだ。我がローズバッドに対する寛大なる振舞いにしても、この一対の女友達からは、それ相応の功績をこれまで一度でも認められたようには思わないのだよ。借方と対置して貸方を記入し、そこいらの凡夫一人一人の場合と同じように、道楽者にも有利に働くような差引勘定をして

もらえないとなると、これはまことに辛い話だぞ、ベルフォード。だが、有益なことなど何一つ期待されていない人間というのは、その者の為す善行さえ手柄としては認めてもらえないものなのだ。

これまでよりはもう少しばかり、俺も世間の評判には注意を向けるべきだったな。正誤の尺度は明瞭この上ないとはいうものの、言わせてもらえば、評判というやつがすべての人間に偏見を抱かせ、早合点させてしまうものなのだよ。世間の者たちに一度認めてもらえば、男であれ女であれ、その者の為すことすべては是認されるようになるのだ。否、法廷においてすら、事実によるのと同じ程度に、また、時には事実があるにも拘らず、評判によって無罪とされたり有罪とされたりすることが多いのではないのかな。なのに［まったく無策な話であったし、今もそうなのだが］、自分の評判にはこうも無頓着だったわけだよ。そして、今となっては、どうやら取り返しのつかない状態なのだ。だが、説教染みた物言いは止しにしよう。

覚えておくに値するような俺の冒険については、ジャック、そのほとんどすべてに貴公は通じているのだ。この娘が特に取り上げ、遠回しに触れている話というのは、もしかして、ルーシー・ヴィラーズとの一件のことなのだろうか。それとも、ノーウッドで俺の前に現れた美しいジプシー女との密通の件や、その残酷な夫を［ハーローの親父と似たりよったりの、陰気で横暴な男だった］陥れるのに仕掛けてやった罠の話が、彼女の耳に届いたとでもいうのだろうか。そいつがある人妻を追っかけていた時の話だが、その女のほうでも、奴が自分の気持ちに十分沿ってくれるなら、むげに邪険なことはしたくないと思っていたのだ。しかし、奴は完全に土左衛門になってしまったというわけではないのだ。現に今、奴は生きているのだし、ハウ嬢も、その話というのは極めてショッキングなものだと言っているのだよ。おまけに、これらの件は両方とも、丸々一年かそれ以上も経っていることなのだ。

しかし、悪い噂や醜聞というやつはいつまでも新しいままなのだ。罪を犯した人間が悪質な事実を忘れてしまった頃、その件が、一人また一人と、別の者たちに語り継がれて行くこともよくあるのだが、この連中も、これまで一度も耳にしたことはなかったというわけで、珍しい話として他の者たちに吹聴して回るという塩梅なのだ。それにしても、マドリードの律義な治安判事[三二]はうまいことを言ったものだ［俺がM卿のコレクションの充実に寄与することとなった名言の一つだ］。「善行が記憶に留まるのは一日のみ。悪行は罪人の死後も長年にわたり記憶される」というのだよ。それくらい世間の連中は醜聞を楽しみにしているのだ。言い換えるならば、隣人に罪を着せることで自らの身の証を立てたいという、だれもが抱いている願望はそれほどまでに強いということだな。貴公にしても俺にしても、世間に対してはずいぶんと親切を施してきたわけだよ、ベルフォード。世間の者たちのそんな熱情を満たす機会をたっぷり提供したという点ではな。

〈令嬢が国外へ逃れるのであれば、ハウ嬢としては、自分自身の明るい見通しもすべてかなぐり捨てて、彼女の運命を分かち合うつもりでいる〉という箇所についてだが、魅力溢れる空想家だよ。この娘には、ジャック、一つ攻撃を仕掛けなくちゃならんな。感情的になるとこのような昂ぶりを見せる女には脈があるのだと、俺は常日頃からそう考えているのだ。先にハウ嬢に攻撃を仕掛けていたとしたら、彼女は興奮のあまり（俺の操縦のままに焚きつけられ、導かれるわけだが）、二週間もすれば、俺の撒いた餌におびき寄せられ

ていたことだろうな。

だが、女どもの間に見られるこういったはなはだしい妄想に、何か意味でもあると貴公は考えるのかな［ただ、そう考えているのだろうと俺は思うのだよ］。嘘偽りのないところだが、ジャック、この種の熱狂的な友情というのは、籾殻や切り株のようながらくたに他ならず、それらに吹きつけ、舞い上がらせたのとそっくり同じ風によって吹き飛ばされてしまうことが多いものなのだよ。エテ公なのだな。われわれの猿真似をしているだけの話さ。〈友情〉という言葉には心地好い響きがあると連中は考えている。それはしきりに口にされており、はやりの言葉なのだ。それゆえ、実際の話、自分はしっかりとした心を備えているし、また、自分には何か欠けているものがあると考えている独り者の女は、同性の者の中に似合いの心を見つけ出したように思われたがってもいるのだよ。だが、繰り返して言うが、連中にとってその語はただの言葉にすぎず、そのこと自体もただ名ばかりのものなのだよ。独身生活の身に染みる寒さの中で、互いに体を温めようとして連中が好んで打ち合いをする、あのコルクの台がついたシャトルみたいなものなのだ。ところが、それも、別れ難いはずだった者たちの間に男が入り込んで来ると、音楽やその他の娘らしい楽しみごとと同様に、放り出されてしまうのさ。そういったものも、もっと活発な悪さから可愛らしいいたずらっ子たちを遠ざけておくのには、やはり必要なものかもしれないのだがね。そして、手短に言えば、もう魚は釣り上げたとばかりに、連中は網をしまってしまうというわけなのだ(ア)。

貴公のほうでは、おそらく、この二人の淑女については例外扱いにしたい気持ちなのだろうな。俺としては一向に構わないぞ。仮にも、友情を育むことの出来る心が女にあるというのなら、我がクラリッサにはその心が備わっているのだ。彼女の胸に燃える炎は輝きに満ちているし、また、安定もしている。ところが、ハウ嬢のものはあまりに激しいために、母親の反対によって持続させられるということがなければ、持ち堪えるわけには行かないのだよ。俺もこれまでに何度悟ったことだろうな。反対は友情を堅固なものにするだけでなく、愛情を生み出しもするのだということをだよ。哀れなヒックマンにしても、疑うべくもないのだが、この牝狐ともっと懇ろになっているはずなのさ。もしも彼女の母親が、すっかり奴を贔屓にしているわけだが、同じくらいに心の底から奴に反感を抱いているとしたらだよ。

これら二人の淑女について、実際、次の点だけは貴公の言い分を認めることにする。つまり、片方の活発な精神ともう一方の従順な気質とが相俟って、二人の友情を、別の場合に比べ、より長続きするものにしているのかもしれないということだよ。というのも、男同士であれ女同士であれ、すべての友達付き合いにあって、それを永久不変のものにするためには、男性的な精神と女性的な精神とが必要なのだということ（換言するなら、片方は忍耐強い心をしているということだが）、この点は確実に言えることだからな。

だが、あらゆる経験が確証している真理として、以下の点は断言しておく。つまり、女

(ア) 氏がここで言及しているのは、ある教皇の話である。かつては貧しい漁師であったこの教皇は、高い地位へと昇進を重ねている間いつも、枢機卿の位に就いてさえ、訪問客すべての目に留まるよう、謙譲な心の印として、自分の漁網を吊り下げていたという。しかし、教皇就任に際し、すでに魚を捕えたからには、もはや網に必要はなしと語り、その網を取り払ったとのことである。

同士にあっては、友情に固執するあまり最大の楽しみごとを犠牲にするようなこと、あるいは、より高貴な存在としてのわれわれ男性同士の場合にはよくある事例だが、生命とか手足とか地所とかを危険に晒すような真似は決してしないということだ。

それはそうと、次に来るのは、何と、哀れな美に対する告発状だ。ハウ嬢ほどの者が腹を立てるとは、美は一体何をしでかしたというのだ。ハウ嬢というのは、ジャック、魅惑的な娘なのだよ。美と反目するいわれなど、あの娘にはないのだ。貴公はこれまでにあの娘と顔を合わせたことはあったかな。確かに、彼女の目の燃えるような輝き、そして、その生気には、女の子としては度を越したものがある。だが、その輝きと生気を思いのままに抑えることの出来る男にとっては、それも欠点とはならないのだよ。そして俺は、それが出来る男であることを自認しているのだ。

鳶色の髪をした魅力的な美女なのだよ、ハウ嬢は。美女の中でも第一級の美女というところだろう。さらに魅力に溢れる彼女の友達が［こちらは、落ち着いた優雅さ、自然な上品さ、生まれついての愛らしさが組み合わされた見事な姿をしているが、しかし、傲慢無礼に及ぶことはないまでも、自らの威厳を意識し、目鼻立ちの一つ一つが知性の輝きを湛えているのだ］同席していない時にはな。

二人が相並んで立っている時に、その面前へ入って来た客の話し振りから、一緒にいる際の両者の違いを読み取って、俺は時々楽しんだものだった。このような折に、客がその最初の敬意を我がクラリッサに向けなかったような例は、一度もなかったのだよ。

話し掛ける者の顔立ちの一つ一つには、恭しく厳粛な畏怖の念が込められていた。その目は彼女の傍に近寄ることの許可を求めているようであり、また、男であれ女であれ、頭の下げ方とか片足を引くお辞儀の仕方とかも、普通よりは深々としたものであった。そして、彼女の腰の低い柔和さで、この畏怖の念もすぐに軽減することになるのだが、完全に消えてしまうわけではなく、その者の胸の中で尊敬の思いが生き続けているのを看て取ることも出来るといった具合なのだ。あたかも、女性というよりはむしろ女神の要素のほうを多く彼女の中に見たかのようにだよ。

ところが、その同じ客がハウ嬢のほうへ振り向いた途端に（誇り高く生意気で、相手を見下ろすように顎を引き、直立した姿勢を取っている彼女だが）、人はその表情の変化や話し掛ける際の態度に、ある種の対等さが装われていることに気づくのだ。彼女の中に女を見出したという様子なのだよ。その女が実に魅力的なわけだがね。客の顔には笑みが浮かぶ。当意即妙の応答や機知に富んだ言葉を期待しているように見えるし、決して失望させられることもないのだ。しかし、また、ただ受け取るばかりでなく、自分からも与える準備をしていることがはっきり看て取れるのだよ。暫く付き合っているうちに、何かの点について彼女と議論を戦わせてみようという気持ちが湧いて来るのだな。もう一方の女性に対しては、僭越で独断的な態度などのためでは決してないのだが、いかなる点についてであれ、すべてが放棄されることになるのだがね。

要するに、ハウ嬢に関しては、ごく近日中に互いに打ち解け合うことが出来るかもしれないとか［罪のない形でという意味だ］、あるいは、永久にお目通りを禁じられてしまうくらいに、彼女の怒りを招くことになるかもしれないとか、大胆な男にはお見通しだということだよ［サー・ジョージ・コルマーが見抜いていたのは疑いのないところだ］。

我が女神当人がハウ夫人の客となっていた際の話で、その女神を通してのことだが、俺

自身、この令嬢に初めて紹介された時には、相手をして半時間も経たないうちに、あのチャキチャキ娘とのふざけ合いを渇望さえするようになってしまったのだよ。そして、二度目か三度目の訪問の際にも、積極的な行動に出るのを躊躇したのは、彼女の友人の慎み深さによるほうが大なのだ。彼女自身が慎重なゆえに懸念するところがあったわけではないのだよ。われわれは二人とも、この魅惑的なお嬢さんがいることで怖じ気づいてしまうのだと、俺はそんなふうに思った。それで、他のどんな女が同席していても良いが、彼女には席を外してもらいたいと願ったよ。友人の目の前にいる時と友人のいない時とでは、ハウ嬢の振舞いに違いはあるのか、それを試してみるためだ。

慎み深い女というのは、男を上品にしてくれるのと同じく、濃やかな心遣いの出来る女をも作り出すものなのだ。ハウ嬢は、目には燃え立つばかりの輝きを湛え、生気に溢れていながら、その目自体からも容易に看て取れたわけだが、自分よりも穏やかな気質をしている友人の、その鋭く見通す目から教えを得ようと待ち構えていたし、咎められるのを恐れてもいたのだよ(ア)。しかしながら、相手の女性の率直さや淑やかな態度から、同じくらい容易に観察出来たことだが、ハウ嬢がその女性に対して抱いている恐れというのは、むしろ、相手の素晴らしさに及ばないところが自分にあることを認めようとする、寛大な心に芽生える不安から来たものであって、彼女よりも優れていることを自覚している、ハーロー家の令嬢の意識に由来するものではないということなのだ。ハウ嬢の手紙に接してからというもの、その中の一通に含まれていた次のような尤も至極で見事な賛辞を、俺は何度となく胸の内で思い巡らして来たのだ(イ)。「我が身を差し置いて貴女のほうを贔屓したりいたしましても、貴女が思い上がって、これ見よがしに勝ち誇るわけでもありませんのは、皆さんもご存じだったからです。と申しますのも、貴女はどのような主張を通されます時にも、その都度、皆さんから譲ろうとする気持ちを引き出すようなことを何か口になさいますし、皆さんのほうでも、勝利を得たわけではなくとも、満足し納得した気持ちにさせられるからなのです」というのだよ。

俺ももっと年齢を重ねたなら、女性全体に注意やら教訓やらを進呈することで、個々の女性に加えた若い頃の無礼を償おうと考えているものだから、次のような教義に肉付けをするためにもと、メモを取っているのだよ。つまり、男の下心から娘たちを守ることは必要であるが、毫も劣らず不可欠なのは、女友達を選ぶに際し、娘たちに指示を与えることである、という考えだ。

しかし、ハウ嬢を非難するためにこんなことを言っているわけではないのだ。彼女にしても、友人が信念によって得たものを、プライドから身につけているのだよ［女にプライドがなくなるようだと、それこそ救いようもないな］。しかしながら、その最も向上進歩した点に関しては、ハウ嬢はハーロー嬢との会話や文通に負うているのだと、俺はそのように確信しているのだ。だが、両方のお嬢さんを別にするなら、躊躇なく次の点は断言して

(ア) ハウ嬢は第三巻の六十六頁において、いつもクラリッサのことを自分の母親以上に恐れていたと述べているし、また、第三巻の百五十六頁では、彼女のことを、慕うのとほとんど同じくらいに怖がってもいると述べているのであり、その手紙の他の多くの箇所において、ラヴレースのこの見方を実証しているのである。

(イ) 第四巻の四十四頁を参照のこと。

構わないだろうな［また、その辺の事情に関しては、ジャック、俺も少しは明るいわけだからな］。つまり、直接男の攻撃や惑わしによるよりも、同じ女性の手によって（友達は勿論、召使も含めるが）操を失う娘、少なくともその準備をさせられる娘のほうが、これまでにも多かったということだ。

だが、年老いて楽しみもなくなり、この問題を詳しく論じるようになるのには、時間がたっぷりとあるのだよ。

二人のお嬢さんの比較ということに関してさらに詳しく説き及ぶのは（俺も気に入っている話題だからな）、両方ともモノにした上でのことにするが、牝狐のような娘のこの手紙自体、貴公も認めてくれるだろうが、そんなことを試みる十分な理由になるのだよ。

なお二、三の点について、文面の検討に戻ることとするが、今や極めて間近に迫った観のある俺の復讐を正当化するのが目的だ。

タウンゼンド夫人については、その男っぽい気性、二人の兄弟の件、そして、両兄弟の船の乗組員のこともあるが、そんな生意気な脅迫に対しては、次のようにだけ言っておこう。そいつらを寄越してみることだよ、とな。だが、お嬢さんの卑劣な脅し文句の件に移ろう。彼女に言わせるなら、「あの憎らしい悪党」というわけだが、そんな「俺の悪行すべての報いとして」、「骨の何本かをへし折ってもらおう」とのことだ。「骨を何本かへし折ってもらおう」というのだぞ、ベルフォード。担ぎ人夫に似合いのこんな脅しを堪えるような男が、一体どこにいるというのだ。骨を何本かへし折ってもらおうというのだぞ、ジャック。忌々しい下種女めが。悪口の一つも言わせてもらいたいものだ。だが、激しい怒りはすべてこの胸から追い払うことにする。たとえこの二人の娘を掌中にすることがあっても、例の牡牛の仕掛けを制作者で試そうとした、あのパラリス(三三)の二の舞いは絶対にお断りだ。二人の骨は一本だって折ったりするものか。二人にとっても、俺との付き合いははるかに気楽なものになるはずだよ。

だが、これらの連中は、どうやら密輸を生業としているらしいのだ。それに、俺もまた密輸商人ではなかったかな。そのとおりさ。そして、何の疑いもないところだが、俺の商品は木曜日以前には、あるいは、水曜日かもしれんが、確保することになるのだよ。

しかし、策に欠けるところが仮にも俺にあるとしたら、ハウ嬢のこの手紙は、何と魅力的な新方策を編み出してくれることだろう。すでに一つ心に決めてしまっているのが残念なくらいだよ。というのも、ここでなら、のろまな乗組員一同を駆り集めたり、タウンゼンド夫人を一人でっち上げたりすることくらい（夫人の容姿のことは、察しがつくだろうが、我が愛しの君はご存じないのだ）、俺にとっては実に簡単な話だからな。夫人には、ハウ嬢の重ね重ねの要望を受けて火曜日に来てもらうのだが、俺自身が用意した倉庫へと我が愛しの君をお連れいただくためだよ。

しかし、こんなことを期待してついつい勝ち誇った気分になってしまうのだが、この浮浪者どもがハムステッドにやって来る（われわれを捜しにだ）ちょうど同じ時刻には、我が愛しのハーロー嬢と俺とは［運命の女神たちがそのように決定したものと俺は想像しているのだが］、ロンドンで、互いの腕に抱かれてぐっすり眠りに就いているだろうということだよ。じっとしているのだ、悪党め、その時が来るまではな。俺の心臓に言っているのだよ、ジャック。俺の心臓にだ。この種の見込みがチラリとでも姿を見せると、俺の心臓ときたら、決まってドキドキし始めるのだよ。

だが、どうやら、「この見掛け倒しの怪物［俺のことだぞ、ジャック］の悪辣さ」とやらのお陰で、ヒックマンはあの娘の信用を勝ち取ったらしいのだ。つまり、俺も役に立つことを少しはしているということになるのさ。ただ、だれにとってなのかは判り兼ねるところだな。何故なら、この情けない輩にしても、この口やかましい女と一緒になるのを許してやれば、自分の願いを享受することで、われわれすべてと同じだけ罰せられることになるからだよ。それに、奴が彼女の気持ちのままになり、自分の意思を一切持たないようなら、俺の見るところでは、彼女も奴とでは幸せになれないだろうと思うのだ。何しろ、嬶天下の女で、止まるべきところを弁えている者など、いまだかつて存在しないわけだからな。力を得ると、この手の女は気紛れになる。自分が思いのままに出来るような男は蔑むのだよ。もう征服すべき国がないことを嘆いたアレクサンドロス大王にも似て、自分の力を発揮すべき新たな対象を探し求めることだろう。そして、遂には自分自身に苛立ち、夫には不名誉をもたらし、周囲の人間すべてにとっての厄介者となるのだ。

ところが、どうやらこの律義者は、目に涙を浮かべ、平身低頭して牝狐に懇願したらしいのだ。「世間体などはものともせず、このような罪もなく虐げられている人に保護の手を差し延べるという栄誉を担う」ためだが、「四頭立ての馬車」で繰り出すのを許してもらいたい、とだよ。そればかりか、顔を赤らめていたようだ。体を震わせてもいたらしい。麗しき告訴人の手紙を読みながらだ。これはまた、何とも勇ましい姿ではないか。女は勇敢な男がお好きなのだよ。従って、奴の〈涙〉や〈身を震わせる仕草〉、そして〈平身低頭した姿〉が〈おとなしい〉ハウ嬢から高い評価を得たとしても、何の不思議もないのさ。

しかし、ジャック、同じような場合に（また、その苦しみに同じくらい心を動かされているとして）、俺がこのような振舞いに出たなどと貴公は思うかな。俺ならば先ずは淑女を救い出し、しかる後に、もし必要とあらば、淑女をこの手で支えながら、そんな行動に出たことを詫びたとは思わないかな。貴公にしても、俺同様、このように振る舞っていたのではないだろうか。

だが、このままにしておくのが一番良いのだよ。律義者のヒックマンにしても、これで無事に眠りにつくことが出来るというものさ。しかし、奴がこんな許可を願い出たことについては、横取りしたことを気づかれてはいけない例の手紙で知ったのだが、それ以外のどんな方法で知ったとしても、おそらく、奴としてもそういうわけには（令嬢救出の試みは手付かずのままだし）行かなかったことだろうな。

我が魅惑の君に対する俺の執着心も、何か新たな「悪事」に手を染めることで、方向転換の可能性はある、というのがハウ嬢の考えだ。「悪事」というのは、あのお嬢さんが極めてお好きな言葉なのだよ。だが、お嬢さんにはっきりと言っておくが、それは俺には有り得ないことだ。この「悪事」の目的が達せられるまではな。俺のような気概のある人間にとっては、困難こそが発奮材料となるものなのさ。俺としては、ハウ嬢がもっと俺のことを解っているように思っていたのだがね。ロマンティックな友情の念に燃えるあまり、友達を救うための身代わりとして、ハウ嬢が自分の体を投げ出すとしても、愛しの者がお月様のこちら側に残っているかぎりは、それで手を打つわけには行かないのだよ。

七日付の自分の手紙を友人が受け取ったということで、お嬢さんは天上の神様に感謝している。その点については、われわれ全員が喜んでいるのだよ。俺にも感謝して然るべきだろうな。しかし、今のところ謝辞は求めないことにする。

だが、手紙が届いたと彼女が大喜びをする時、実際には声高に復讐を求め、期待していることにもなりはしないかな。すべては機会を見てのことですな、ハウのお嬢さん。ワイト島へ向けてお発ちになるのは、ねえ、君、いつのことでしたっけね。

この時点で結びとするが、同封の手紙にふんだんに含まれている悪意に満ちた言葉のリストを作成するよう頼んで置く。そして、俺のほうでも同様のものを別に作ってあり、その生意気な娘当人からの以前の手紙を飾っている、同趣旨の文言の精華ともいうべきもののすべて、それに、逃亡の折に俺宛に残して行った、ハーロー嬢の手紙の中に見られるものも付け加えているはずだと考えてもらえるなら、この娘たちのいずれかに対して行おうとしていることすべてについて、そうして当然な動機が俺には十分あるのだと、貴公もきっとそのように考えることだろう。

同封のものは、目を通し次第、返送してもらおう。

手紙　二十八
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

日曜日の夜から月曜日の朝にかけて

ハーロー嬢とムーア夫人とが（ローリンズ嬢が一緒だったが）戻って来るとすぐに、ハウ嬢の手紙の文面でほとんど頭が一杯になっていたこともあり、俺は復讐心を燃やしながら降りて行ったのだ。しかし、顔に浮かべた表情というのは、鏡が教示してくれたとおりの、どこまでも慇懃で穏やかで落ち着いたものだったし、振舞いの点にしても、俺は行儀作法を知らないのだと、何度も彼女は言っていたわけだが、そんな不作法者が装うことの出来る精一杯の上品さだったのだよ。

ローリンズ嬢のほうは、戻って来たのとほぼ同時に、不意の客をもてなすため帰宅するようにとの呼び出しがあった。これは両者の表情から窺うことが出来たのだが、我が麗しの君が落胆したのと同じように、ローリンズ嬢も大いに残念がっていた。というのは、そのつもりでいることを俺のほうから話してあったわけだが、俺がロンドンへ出掛けた場合には、ヒースの野、少なくとも、ムーア夫人の庭を散歩しようという約束が、二人の間で出来ていたらしいからだ。で、どんな結果を生じていたのだろうな。一方の女の知りたい気持ちと、もう一方の女の知らせたい気持ちとが出会っていたとしたらな。

ローリンズ嬢は、もしも可能なら戻ってくる旨を約束していた。だが、失礼させてもらうとの伝言をよこしたのだ。客が泊まるつもりでいるから、というのだよ。

この伝言を聞いて、俺は腹の中でしめたと思った。そして、我が愛しの君にもう一度庭の散策の相手になってもらう許可を、しきりに嘆願した上で得たわけだ。今後の身の処し方について最終的な決定を行うためにも、話しておくこと、提案したいこと、そして、教えてもらいたいことが山ほどあるから、というのがこちらの言い分だった。

これは話しておくべきだったが、彼女は俺から目を逸らし、半ば脇を向いたような姿勢で、お茶を二杯ご親切にも付き合ってくださったのだよ。いやはや、呆れた話だ。怒りに駆られると、飛び切り行儀の良い者でさえ行儀作法を捨ててしまうということだな。何しろ、ハーローのお嬢さんがあんなにもぎこちなく振る舞うところは、いまだかつて見たこ

ともなかったからな。ぎこちのない振舞いなど、お嬢さんはその仕方さえ知らないのだろうと、俺は思っていたのだよ。

二人が庭に出ると、熱心に傾けてくれる彼女の耳に向かって、俺は情熱のすべてを注ぎ込み、俺への好意を取り戻してくれるよう懇願したのだ。

彼女のほうでは、今後の生活設計がすでに出来上がっていると言っていた。また、俺から受けた仕打ちはひどいものであったが、俺の求婚を斥けるのはそれだけが理由になっているわけではなく、十二分に検討した上で確信するに至ったのだけれど、俺と一緒になっても幸せにはなれないし、俺を幸せにすることも出来ない、と言うのだよ。そして、われわれ両方のためになることなのだから、もうこれ以上彼女のことは考えないようにしてほしいと頼んでいた。

俺としては、いわば早馬を駆るようにして船長が国許へ急いだのは、彼女の伯父と一緒になって俺の希望を推し進めるためなのだ、と話して聞かせた。今頃はもう、ベティ夫人とモンタギュー嬢がロンドンに着いているのは疑いのないところである。夫人たちのお世話をするため、翌朝早くには出発しようと思う。夫人たちは彼女を敬慕しており、会うのを心待ちにしている。是非とも顔を合わせるつもりでおり、オクスフォードシャーまでご同行を願うが、断るのは許すまい。兄上の失敬な振舞いから解放されるためには、あそこ以上に良い逃れ場所が果たしてあるのだろうか。他のだれについてであれ、一切の不安を解消されるためには、一体どこへ行くというのか。もしも、ハウ嬢が説得に応じ、俺のために仲裁の労を取ってくれる場合には、彼女のほうでも好意的な気持ちを取り戻してくれるという、そんな望みはいくらかでもあるのだろうか、といったことも尋ねてみた。

あのハウさんが説得に応じ、貴方のための仲裁に立つですって、と彼女は言葉を繰り返してみせたが、軽蔑したように頭をツンと反らせていた。ただ、実に可愛らしい反らせ方だったよ。そして、そこまで言うと、彼女は口を噤んでしまったのだ。

俺のほうでは、二人の間の意見の相違について、今後の仲裁を待つ必要のある不和としてベティ夫人と従姉妹に話さざるを得ないということ、また、俺には極めて重要な意味を持つ大切な人であるのに、その人にとって俺はごく些細な意味しか持っていないかのように話さねばならないということが、俺としては憂慮される点なのだと、今一度繰り返しておいた。そして、こういった状況は、俺自身ばかりでなく、身内の者たちの見方においても、俺の評価をはなはだしく下げることになる旨を強調したのだ。

それでもなお、ハウ嬢の次の便りにすべて委ねたいと彼女は言うのだ。そして、この話し合いの全体を通じて、彼女に歩み寄ってもらったことといえば、やっと次の点だけだったのだ。つまり、二人の婦人が一両日中に、あるいは、待ち侘びているハウ嬢からの便りが届く前に来てくれるのであれば、二人の到着と訪問を待つことにする、というのだよ。

こいつは有難い、と俺は思ったね。それなら、最愛の人よ、俺が戻って来る時にも、君と別れるその場所に君の姿を見出す望みを胸に抱きながら、ロンドンへ出掛けることが出来るというわけだな、とだ。

だが、しかし、俺の留守中に、心変わりをしたくなるような理由を彼女が見つけるということもあるわけだから、これに全面的な信頼を置くのは止すことにする。従って、ここに住み込んでおり、ベヴィス夫人からの親切な通報もあって、彼女が取ることの出来る動きについては、そのすべてを知る立場にあるあの男に、アンドルーと馬一頭とをすぐにも

使えるよう用意してやることにしよう。彼女の動きについて、即座に俺に知らせるためだよ。さらには、彼女がどこへ出掛けようとも、奴には彼女の供の者の一人になってもらうのだ。もっとも、彼女には知られないようにしてだよ。出来ればの話だがね。

この仮借のない麗人について知り得たことは、これですべてだ。これは喜ぶべきことなのだろうか、それとも、悲しむべきことなのだろうか。

喜ぶべきことと信じているのだよ、俺としてはな。しかしながら、ハーロー一族のこの娘の気持ちをこうも捉え切れずにいたのかと思うと、俺のプライドもひどく傷ついてしまうのだ。

この場合、美徳と道義心が彼女の指針になっている、などとは言わないでもらおう。彼女を支配しているのはプライドなのだ。俺のよりもさらに誇り高い心なのだよ。貴公も見てのとおり、愛情というものを彼女は一切持ち合わせていないのだ。これまで一度だって愛情を抱いたことはないのだよ。少なくとも、すべてを超越する程度にはな。愛情というやつは、その名に背かぬものであれば、思慮分別の統治下に入ったことなど一度もないのだ。あるいは、いかなる道理の力の支配を受けたこともないということだ。彼女は、断言しても構わないが、女と見られることに耐えられないのだよ。だから、もしも最後の試みにおいて、彼女が女ではないことを知るとしても、そのような試練に遭うことで、彼女の不利益がどれだけ増すというのだ。逃れることも避けることも出来ない災いに苦しんでいるからといって、その責めを負わねばならない人間がどこにいるというのだよ。

ある将軍が追剥ぎに力負けをして、身ぐるみ奪われるとしよう。だからこそその将軍は軍隊を指揮する適性に欠けるのだ、ということに果たしてなるのだろうか。大いに勇敢であることを吹聴し、追剥ぎに金品を奪われるようなことは決してないと豪語していた将軍が、それをいざ試される段になると、実際のところ、ほんの微々たる抵抗しか示さず、自分の剣を自由に使える状態にありながら、財布のほうを差し出してしまうということであれば、確かにその時には、将軍を裸にする追剥ぎのほうがもっと勇敢な男に見られることになるだろうな。

しかし、この最後の話し合いから、俺は一つの論拠を提供してもらったのだよ。これまでまだ一度も持ち出したことはなかったのだが、俺が胸に温めている目的の弁明に使えるものなのだ。

あゝ、ジャック、たとえどのようなものであれ、支配的な感情を克服するためには、何という困難が伴うことか　…　その点は認めてもらわねばならないだろうな。その感情を満たそうと決断するのがどれほど間違ったことなのか弁えているとしても、満足させる力が己に備わっている場合にはだよ。そこのところをよく考えてほしいものだな。そうすれば、制御のしようもなく、猛り狂ってもいる胸に温めた悪事、その言い訳としては、習慣になっているのだからという点が持ち出されるのだが、そんな悪事に対し、容赦するわけには行かないとしても、説明を付けることは貴公にも出来るはずなのだ。

次に掲げる点が俺の新たな論拠というわけだ。

仮に彼女が試練につまずくとしよう。仮に俺が成功を収めるとしよう。そして、例えば彼女のほうで俺との関係の継続を拒むとして、また、俺とは結婚するまいとの決意までも固めるとして（その点は、まったく見当もつかないのだよ）、さらには、彼女のためにそうするのを誇りに感じているわけだが、俺の資産の半ばにまでも及ぶ、例の気前の良い契約

条項の件で、俺の恩義に与るのを軽蔑するようなことがあるとしても、それでも、彼女がまったく不幸になるということは有り得ない話なのだ。楽に暮らして行けるだけの財産を受ける資格が彼女にはあるのではなかったかな。彼女の管財人として、モーデン大佐がその財産を彼女のものにしてくれるのではないのかな。それに、以前の話し合いの中で、結婚生活よりも好ましいものとして、常日頃から優先させていた暮らし方を彼女は指摘して見せたのではなかったかな。つまり、彼女の管理人兼指導者として、あの善良なノートン夫人を迎え入れ、祖父が意図していたとおりの暮らしぶりで、自分自身の地所に住まうということだ(ア)。

さらに、次の点も考慮されねばなるまい。つまり、彼女自身の考え方からすると、今二人が互いに結ばれると、彼女の声望の〈半分〉以上を取り戻すのは不可能なことになるのだ。俺との駆け落ちによって、それほどの損害を被ったと彼女は考えているわけだよ。だから、後の半分を失くしてしまったと、彼女は絶えず嘆き悲しむことになるのではないだろうか。そして、もしも半分のことのために、それほど気詰まりと後悔の念に満ちた生活を送らねばならないというのであれば、いっそ丸々全部を失ったと嘆き悲しむのも、彼女にとっては同じことではないのだろうか。

それに、ひとつ言わせてもらいたいのだが、この件に関する彼女自身の懺悔の目論見にしても、操を失わずにいるのであれば、失う場合に比べ、その半分も完全なものとは言えなくなるのだよ。何故なら、後悔すべきことなど何一つとしてない彼女にしてみれば、ひどく間の抜けた悔悟者の姿を呈することになるからだよ。貴公も知ってのとおり、彼女が自慢の種にし、俺への非難材料としているのは、自らの意思で俺と駆け落ちしたわけではなく、欺かれて自分らしさを忘れることになってしまったという点なのだ。

また、あれほど繰り返し口にしていた誓いをわざと破るからといって、俺を責めないでもらいたい。ご覧のとおり、俺がその誓いを果たすのを彼女は許してくれないのだよ。それに、もしも彼女が許そうとするなら、俺には次のような言い分があるのだ。一番厳粛な誓いを立てたその時には、俺のほうでは十分に守る覚悟でいたのだ、とな。だが、最も神聖な形で誓約を交わした協定の条項であっても、自分の利益や好みに合う期間を越えてまで遵守する義務があると考える君主がどこにいるだろう。たとえ、その君主も承知なわけだが、違反の結果として何千人もの殺害が避けられなくなるとしてもだよ。

だとすれば、すべての結果は次のようになるのではないのかな。クラリッサ・ハーロー嬢は、いわゆる女の操とやらを失った後も、彼女自身に落ち度がなければ、以前と変わらず貞潔であり得るというわけだ。女性にとってのさらに傑出した手本ともなり得るのであり、たとえ試練の中で屈するとしても(わずかに屈するだけだが)、より完全な悔悟者となるかもしれないのだ。それに、彼女自身が意地を張るのならともかく、それ以外では、貧乏暮しに追いやられるはずもないのだよ。

こうして、彼女の年老いた乳母と彼女、老御者と一対の老いぼれ馬車馬、年寄りの女中が二、三名と、それに、多分、非常に年取った下男一人か二人が身を寄せ合い(彼女を取り巻く者すべてが老齢で、罪を悔いているわけなのだよ)、極めて快適な暮しを送ることにもなるのだろう。古臭い説教や昔ながらの祈祷書を読み、爺さんや婆さんに救いの手を差

(ア) 百八十頁を参照のこと。

し延べ、近隣の若い婦人たちを相手に、古臭い話題ばかりか新しい問題についても時代遅れの教訓や陳腐な警告を与えたりしながら、教えと実例の両方によって、同世代の者たちに数多の善を施し、めでたく長寿を迎えることになるのだよ。

それに、制約も受けずこのように結構な暮しが出来る女、結婚生活よりは独り身で暮らすことのほうをいつも好んでいたし、今も良いと思っている女、そして、自分の立てた計画が指示することであるかぎりは、何をしても構わない女のことだというのに、傷物にされただの貞操を奪われただのと、そんな戯けた言い種が用いられて良いものだろうか。ほんの束の間の災いのことを語るのに、そんな大袈裟な言い回しを使う愛らしいお馬鹿さんたちには、俺は我慢がならんのだ。単なる教会の礼式一つで、災いのうちには入らなくなるものだというのにな。

こんな大袈裟な言い方をされたのでは、俺ばかりか貴公にしても、どれほどたくさん知っていることになるのだろうな。〈華麗に生きる傷物たち〉のことをだよ。ほんのちょっと周りに目を向けるだけでも、われわれの知っている女性で、今は貞淑な妻として通っている者たちの中に、極めて尊大でこの上なく詮索好きなのが何人か目に付くのだが、その女たちについて、奇妙な噂が囁かれることだってあるのだよ。その他にも、結婚の前後を問わず、あまり派手に振る舞うものだから、夫が心を痛めてしまうような女たちがいるのだが、その夫たちにしても、われわれ正直者の何人かが教えてやれることに比べるなら、その半分も連中について知らずにいるのだ。

だが、この心魅する女の身に降りかかり得る最悪の事態について、また、不幸な目に遭うのは彼女自身に落ち度があるためだという点については、以上のとおり懸念を解消したのだが、俺自身の運命がいかなるものになりそうなのかに関しては、一切考慮していなかったことになる。

ハウ嬢のほうでは、われわれ放蕩児に最高の女を与えるのを渋り、最低の女でもわれわれにはもったいなさ過ぎると言っているわけだが(ア)、俺の常日頃からの信念としては、道楽者の妻は清純無垢で汚れのない者でなければならないということなのだ。そのような人間は何のために気ままな生活を送っていると思うのかな。他でもない。世間を知り、己に利するためなのだよ。それに、大いに真面目なことを言えば、家族の一番上に立つ二人の人間が揃って不届き者だというのでは、世間にとっては不幸なことになるだろうな。何しろ、そんな二人の間では、やくざな人間が次々に増えて行き（お望みとあれば、第二、第三のラヴレースやベルフォードたちということにしよう）、世の中で盛んに悪さを重ねるかもしれないからだ。

ご覧のとおり、俺も根は破廉恥な人間じゃないし、生真面目なところも交じり込んでいるのだよ。これが、年を取るとともに増えるかもしれないのだ。そして、俺の活力が衰え始める頃には、伝道者と共に腰を下ろし、過去の生き方について、「どれもみな空しく、風を追うようなことであった」[三四]という結論に至るかもしれないのだ。

クラリッサ・ハーロー嬢ほどに俺の好みに合った女性を今後見出すことは決してないだろう。これは確かなことだよ。俺が願っていることといえば、ただ、彼女のような淑女に我が人生の黄昏時を慰め、飾ってもらいたいということだけだ。しょっちゅう考えていた

(ア) 三十五頁を参照のこと。

ことなのだが、あれほど見事な女の出現も、我が人生行路の出発時にはわずかに間に合わず、その途上にあっては、少々早すぎたため、引き返そうという考えが浮かばなくなってしまったのは、われわれ両名にとってはまことに不幸な話だよな。しかしながら、途中で愛らしい旅人を拾い上げたことでもあり、残りの旅路を共に歩んでもらえたらと願わずにはいられないのだよ。彼女のほうでは、俺の意に沿うため、自分の進む道から逸れなければいけないとしてもだ。そうなれば、おそらく二人は、夕暮れ時には同じ旅籠に泊まることになるのだろうし、旅籠への途中で通り抜けてきた困難や危険を数え上げながら、互いの話を大いに楽しむことにもなるだろう。

貴公としては勘ぐりたくなるだろうと思うぞ。この文面の何ヶ所かはロンドンで認められたのだろうとな。確かに、ジャック、ウエストミンスターの空気は、ハムステッドのものに比べると、少し濃いところがあるし、シンクレア夫人や妖精たちの会話も、ムーア夫人やローリンズ嬢のものと比べると、清らかさで劣ると言わざるを得ない。それに、別の場所では、否、どんな場所であっても、口にしたり筆にしたりしてはいけないことも、ある場所では構わないのだと、俺も心の底ではそんなふうに考えているのだ。

今朝の七時頃にロンドンに着いたのだよ。必要な指示や注意の類いは、すべて忘れずに与えておいた。

出発前に会って話を聞いてくれるよう、俺は頼んだよ。彼女の愛らしさにもいろいろあるが、もう一晩過ぎた後に装ってくれるのはどんな表情なのか、そいつを知りたいと思ったのだ。だが、彼女のほうでは二人の諍いを人目にも露なままにしておく覚悟でいることが分かったのだ。ベティ夫人と従姉妹が到着するまで、もう一度胸にしまい込んでくれるよう、そんなふうに懇願する機会すら与えようとしないのだ。

俺の代理人からの知らせを出発の直前に手にした。早馬で届けられた数行のものだったが、厄介な点は二日前にすべて克服されており、結婚許可証も、受け取りに出向けば交付されることになっているというのだ。

俺はベヴィス夫人の手を煩わせ、手紙を愛しの君のところへ届けてもらった。その件でお目通りを許してほしいと、重ねての要望を添えてみたのだが、これもまた俺の助けとはならなかったのだ。想像するに、彼女はこんなふうに考えたのだろうな。この文面の件で俺と会うことに同意したりすれば、そのような栄誉を与えるのは、手紙を届ける前には断っていたわけでもあり、この証書の獲得に続いて起こると当然予想されている、いろいろな結果を容認するのと同じことになる、とだよ。彼女に不意打ちを食らわすなど、不可能ということだな。微妙この上ない状況にあっても、彼女の不注意に付け込むなどということは有り得ない話なのだ。

それでは、ベルフォード、俺も所用で出掛けることにする。

手紙　二十九
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月十二日　月曜日

貴公は、これまで一度でも、結婚許可証を目にしたことはあるかな、ジャック。

神のご認可によりその座にあるロンドン主教エドマンド猊下におかれては、セントマーティンズインザフィールド教区の独身男性にして、我が親愛なるキリスト者ロバート・ラヴレース［恐縮に存じます、猊下。これほどのご芳情を賜るとは、一度もご尊顔を拝したことのない小生でありますが、いかなる手柄あってのことなのでしょうか］、並びに、同教区民たる独身女性、クラリッサ・ハーローにお慶びを申し上げる。申し立てに見られるごとく、汝らは〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇の同意を得、かつその同意に従い、神聖なる結婚生活に入る決意を固めているが故に［これが申し立てにすぎないことは、貴公も見てのとおりだよ］、また、結婚式をキリスト教会において執り行ないたいとの強い希望を有するが故に、われわれとしては、汝らのかくのごとき貞潔なる願望が［貞潔なる願望なのだぞ、ジャック］その正当なる効力をより速やかに発揮することを願うものであり、それ故、ミドルセックス州のセントマーティンズインザフィールドないしセントジャイルズインザフィールドの教区教会において、当該教区の主任牧師、代理牧師、ないし助任牧師の司祭により、結婚予告の公布なしに、当該年のいかなる時期においてであれ［その年のいつでも良いのだよ、ジャック］、自由かつ合法的にかくのごとき結婚が挙式されるべく取り計らうことが出来るよう願うものである。ただし、何らかの結婚予約［結婚予約は、これまでの生涯で、俺も確か三度か四度していたと思うぞ。しかし、ここしばらくの間、おとなしい娘たちから損害賠償の要求はないのだよ］、血縁関係、近親関係、あるいは、その他いかなる合法的原因によるにせよ、本件に対する何らの法的障害も存在しておらず、また、現時点に於いて、汝らのいずれかにより、あるいは、いずれかとの間に結ばれた結婚の約束に関し、聖俗いずれかの裁き人の前に提議された、もしくは、その裁定を待っている訴え、訴訟、苦情、争論、ないし請求も存在せず、また、当該結婚式が、午前八時から十二時までの間に、前記教会において公に、かつ、当該婦人が教区民となっている土地の聖職者に不利益をもたらすことなく挙行されることを条件とし、ここにわれわれは十分なる根拠に基づき［そのための俺の出費というのは　…　ちょっと待てよ、ジャック、いかほど掛かっていたのかな］、汝ら婚約の当事者と同様、当該結婚式の挙式が予定される前記教会の主任牧師、代理牧師ないし助任牧師に対し、結婚許可証ないし権能を交付、あるいは、授与するものである。国会の権限に基づき、その目的のため公布されたる『祈祷書』に規定される典礼ならびに儀式に則り、既に明記したる式次第により挙式せんがためである。この結婚許可証の交付時に、虚偽の表示ないし真実の隠蔽のいずれかにより、何らかの欺瞞の行われたことが今後判明した場合には［さあ、ベルフォード、われわれには少々厳しいことになったぞ。何しろ、われわれが仄めかしているものすべてが文字どおりの真実とは言い難いのだからな。それゆえ、正直言って、俺はこの許可証で結婚すべきではないということだな］、本許可証は交付されなかったに等しく、あらゆる意図ならびに目的に対し常に効力を欠くものとする。また、その場合、前記事項のいずれかを知るに至った時には、われわれないし我が主教代理と先に合議することなく上記結婚式の挙行に及ぶことは、聖職に就く者すべてに対し禁ずるものである。

〇年〇月〇日作成

そして、この後に続いているのは、登記係の氏名と垂れ飾りのついた大きな印章で、その周囲を【ロンドン主教管区主教代理及び教会裁判所判事の印】という文字が取り囲んでいるのだ。

かなり滑稽な証書だよ、全体的に見るとな。だが、この結婚の先触れとも言えるものを

飾っている紋章はどんなものだと貴公は思うかな。えーと、まず最初は互いに切り結んでいる二本の剣だが、結婚というものが防御の態勢であると同時に、攻撃態勢でもあることを示すためだよ。三頭のライオンは、その状態に入る者たちが三倍分の勇気を持つべきことを意味しているのだ。それに［自らの「貞潔なる願望」が充足されるよう、その方途を求めてやって来る哀れな者たちを相手に、こういった聖職に携わる連中が、これほど厳粛な場合だというのに、冗談を飛ばして見せるなど、貴公には想像出来たかな］、三本の曲がった角だが、小粋に結んだリボンで飾ってあるのだ。リボンというのは婦人たちが身に着けるものであるから、女は男の額に角を生やしたりするが（三五）、同じように、その角を飾ることも大いにあるということを示しているらしいのだよ。

紋章学に則って説明すると、俺に間違いがなければの話だが、次のようになる。赤色紋章で、X形十字をなす二本の剣の図柄だ。また、第二の盾は三本の角笛に挟まれた黒色の山形紋になっている。また［それで当然なのだが］、第二の盾の上部には第一のものにもあった、左後肢で立ち上がっている三頭のライオン … だが、判読に骨の折れるこんな絵文字を使うとは、連中などくたばってしまえ、といったところだよ。もしも、俺が本気で結婚する気になった場合にはな。

また、もしも一度夫婦の絆を結ぶと、生涯軛に繋がれることになるという、そんな考えさえなければ、俺としても結婚の決意を固めることだろうな。

そこが厄介なところなのだよ。人間も鳥たちと同じように出来るのなら、つまり、バレンタインの祭日が来るたびに相手を変えることが可能なら［それが自然の摂理というやつなのだよ。何せ、われわれ賢人気取りの人間としては、そのために大いに骨を折り、懸命の努力を傾けているわけだが、自らに足枷をはめるような〈分別〉は、まったくの話、鳥たちにはないのだからな］、何の問題もなくなるはずなのだ。それに、一方では法律家たちが例の「万人に知らしめよ」（三六）だの、人的財産の返還に基づく訴訟だので、大繁盛の日々を迎えることになるし、もう一方では牧師連中が、お得意さんたちの「貞潔なる願望」を満たしてやるのに（他の許可証同様に、一年ごとに更新出来るわけだからな）、楽しい時を送ることになるのだ。

そして、相手を変更するごとに、身分と財産によって規定される科料が、国の難局に備えるために支払われることになれば［ただし、とりわけ下層民の場合がそうだが、貞節というものを助長するためにも、かつての伴侶と再婚する場合には無料とするのだよ］、変更は十分に困難を伴ったものとなり、そのため、世間全体にとっても利益がもたらされることになるわけだよ。一方、その養育に関して両親の同意が得られない子供の場合は、国民共有の子供と見做され、古代スパルタの子供たちのように扶養されることになろうが、昔のスパルタ人というのは（こうすれば、我が国民もそうなるのだろうが）英雄の集まりだったのだよ。もしも俺が立法者であったなら、ジャック、リュクルゴスの憲法（三七）にどれほど改善を加えていたことだろうな。

こんな考え方に基づいて作成した俺の計画案なのだが、貴公にはまったく見せていなかったかな。その中で俺は、現在の慣行を前述のように変更することの有利さを例証し、かつ、不都合点を解消してみせたわけだが、確か、まだ見せてはいなかったと思うぞ。

俺の記憶しているところでは、この種の変更が極悪非道で、死刑にも値する罪業を四つないし五つ根絶するための、それも、完全に根絶するための手段となることを、決定的に

証明してみせたのだよ。つまり、俗に〈強姦〉と呼ばれているもの、また、不義密通や姦淫のことだ。〈一夫多妻〉にしても、憧れの念をもって追い求められることはなくなるのだよ。しばしば〈殺人〉や〈決闘〉を防止することにもなるだろうな。〈嫉妬〉に類したものは（けしからぬ暴力行為の原因だが）ほとんど聞かれなくなるだろうし、夫婦の間での偽善など、どちらの胸からも払拭されてしまうのだ。また、子供が出来ないという咎めにしても、最も不当なところへ非難が向けられるようなことは、おそらくなくなるのだよ。今はそうなることがあまりにも多いわけだがね。そして、多分、石女などというものも存在しなくなることだろうな。

おまけに、このような計画案が実行に移されるとしたら、家庭内のいざこざもどれほど避けられることだろうか。何しろ、二、三ヶ月もすれば救われる見込みがあるということで、男女両方が互いに我慢しようと思うわけだからな。

それに、潔く惜しげもなしに行われる夫婦の最後の別れというのは、話の種として、何とも魅力溢れるものになることだろう。おそらく新たな伴侶を心に描き、また、隷属状態から解き放たれるのを密かに喜びながら、それぞれが愛想良く、表向きは悲しそうな顔をして見せることも出来るのだよ。記者からはこんな報告がなされることだろう。「夫は、手本にとばかり、かくかくの宝石を妻に贈り、妻のほうは夫にしかじかの宝石を贈ったのである。止めどなく夫は涙を流し、妻はひたすらにすすり泣く。互いにその後ろ姿を飽かず追い続けるのであった」とな。しかし、そこが面白いところなのだが、さらに十二ヶ月間の苦難に立ち向かおうとは、どちらのほうでも思っていないということだよ。

そして、軽薄な若者とか軽はずみな娘が、未熟者のこととて、そこに見つかりもしないものまで見つけ出そうと期待したり、あるいは、娘の側の意固地さとか男の側の独断のせいで、それぞれがお互いを誤解することから［同一人物にしても、ジャック、同居人の場合か訪問者の場合かで、えらく違うものなのだよ］、最初の結婚で不品行な振舞いに及ぶとしても、この案に従えば、失った評判を取り戻したり、次回の冒険ですべてを矯正するための、実に見事な機会に各々が恵まれることになるのだよ。

それに、あゝ、ジャック、〈変節漢たち〉（あるいは、こちらの言い方のほうが好きだというのなら、〈移り気屋さんたち〉だが）は、一年間の務めがその願わしい結末へと近づいた時には、どれほどの喜びを抱き、どれほどの歓喜を覚えながら週の数を、日数を、そして、時間を数えることだろう。

不機嫌だの塞ぎの虫だのについて言えば、そんな病が見つかるとか、噂に上るとかいうこともなくなるだろう。実際の話、医者連中が被害者になるのだよ。唯一の被害者だ。というのも、新鮮な血液とさわやかな気持ちの結果だが（心と体とが、互いに対して絶えず満ち足りているわけだからな）、はつらつとした健やかさと清新な気分が不断に流れ込んでくるし、われわれの喜びの中でも最高のものである、〈期待〉がもたらす喜びによって、何もかもすべては活気づき、生き生きと保たれるからなのだ。

だが、いかなる団体にしても損害を被らないようにとの願いからなのだが、医者たちは牧師に商売替えをしても良いように思うのだ。牧師がずいぶんと入り用になるわけだからな。おまけに、連中も全体の利益を分かち合うわけだから、もしも世間よりも自分たちのことに重きを置くようだと、本当に情けない奴らということになるのだよ。

だれもが少なくとも十二回は結婚することになるだろう。男も女も評判に気を配り、容

姿は上品で服装が優雅なばかりでなく［ひとつ言わせてもらうが、情熱を活気あるものに保つためには、このいずれもが極めて重要なのだよ］、その振舞いも礼儀作法を守ったものになることだろう。焼けぼっくいに火を点けようとの狙いか、あるいは、新しい相手に取り入るためだ。その間、新聞紙面は記事で一杯になる。誰と誰とが結ばれたのかと、世間のだれもが気に留めるようになるので、世の中一人残らず読者というわけさ。

例えば、「昨日、伯爵ロバート・ラヴレース閣下におかれては［それまでには、俺も伯爵になっていることだろう］、五十の領地を有する公爵閣下未亡人との間に神聖なる夫婦の契りを結ばれた［その頃には、われわれ全員が結婚生活のことを敬虔な態度で語るようになるのだよ］。なお、閣下三十一番目のご令室に当たる」といった具合にだ。そうなると、おそらく俺としても、安んじて、いわゆる腐れ縁をどこかの未亡人と結ぶことになるのだろう。ただ、彼女がそれまでに夫としたのは一人だけでなくちゃいかん。俺には、貴公も知っているだろうが、こういった細かい点についてやかましいところがあるのだよ。

俺は分かっているのだ、ジャック。貴公個人としては、俺の計画案に賛成するつもりでいることをな。

M卿と俺とは、思いのままに出来る選挙区を三つか四つ共有しているわけだから、俺としては下院議員になろうかとも考えているのだよ。こんな立派な趣旨の法案を提出するためにもな。

また、国会の両院にしても聖職議会にしても、反対する理由はないはずだ。そして、それが可決されて法律となった暁には、すべての法廷が、霊魂を扱うものであれ肉体に関わるものであれ、民事であろうとなかろうと、そこから利益を得ることになるのだ。

誓って言うが、ジャック、俺としては心配になってしまうのだよ。これほどの法案が否決されたりすれば、一斉に暴動が、それも、女性に煽動された暴動が引き起こされるのではないかとな。というのも、ここが我が計画案の傑出したところなのだが、女性も男性と同等の理由によって、本案を歓迎するようになるからだよ。

このような法律が施行されていたら、例えば特権を振り回すハーローの親父などは、どうだろう、行動を慎んでいたはずだとは思わないか。奴も実に天晴な妻に恵まれているわけだが、他のだれにせよ、あんな陰気な暴君とやり直そうとは思わなかっただろうし、あの暴君にしても、他の亭主関白たちと同様、年々神妙になっていたに違いないのだ。

仮にこのような法律が通過することになれば、口やかましい女なんてものは不死鳥みたいな存在になるだろうな。

女性にとっては教会が唯一の市場となり、家事に秀でていることが重要なセールスポイントになるのだ。

また、大ブリテンとその全領土にわたって、一人としてオールドミスもいなくなるのだよ。何しろ、十二ヶ月間の試練を受けるのも嫌だという女は、よほどの変わり者に違いないのだからな。

要するに、このような健全な法律の結果としては、ほんの二、三年後のことだが、男女両性の品行や生き方に、改善へ向けての全面的な変化が現れるはずなのだ。

こんなことを俺が持ち出すなんて、一体、だれが期待しただろうな。そのことで悪魔が俺に恨みを抱いたりしないように願いたいものだな。

そうなれば、ジャック、草花の場合と同様、区別もまことに至当なものになるのではな

いだろうか。かくかくの紳士、あるいは、かくかくの婦人は一年もの　…　かくかくの者は多年生、といった具合だ。

ただ、俺の記憶しているところでは、問題が一つ生じたのだよ。つまり、法律家連中の言う〈妊娠状態〉に妻が至る可能性のことでだ。だが、俺はそれも次のようにして克服した次第だ。

いかなる男性も、その時点での妻の同意なしには、妻がお産の床に就き、お産に掛かる費用一切の支払いが完了するまでは、また、生まれた子供を夫のものとするか妻のものとするか、あるいは、国民共有のものとするのか、その点に関し両者の間で合意を見るまでは、他の女性との結婚は認められないことにするというわけだ。この場合の女性は、俺なりの言い回しを使えば、〈強制力を伴う選択権〉を有することになるのだが、それというのも、犬畜生みたいに振る舞う力を男には持ってもらいたくない気持ちもあるからなのだ。

また、実際の話、俺の計画案のあらゆる部分において、秤の針が女性の有利に傾くようにしてあるのだ。何しろ、可愛い子ちゃんたちのことが本当に好きなものだからな。

俺のこの計画案のほうが、夥しい数の妻や妾を侍らせていた昔の祖先たちの一夫多妻制と比べるならば、測り知れないほどに好ましいものなのだよ。確か、ダビデやソロモンには、同時に何百人もの妻や妾がいたと思うぞ。そうではなかったかな、ジャック。

一年ごとの議会と一年ごとの結婚　…　これこそ俺が大切に胸に温めている計画なのだよ。この両方から生じる利益に関してなら、いくらでも詳しく論じてみせるのだがね。

手紙　三十
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

それはそうと、話がいよいよ複雑になってきているし、この件について貴公に書き送るという仕事もまもなく終了することになるだろう。というのも、結婚許可証はすでに手に入ったし、今度の水曜日か木曜日には、タウンゼンド夫人が水夫たちを引き連れてハムステッドへやって来る予定なのだ。それに、おそらく手紙がもう一通、あるいは伝言が、ハウ嬢から届くはずだ。ハーロー嬢の具合が良くないという百姓からの報告に接して、彼女の様子を尋ね、併せて、彼女の逃亡について触れた自分の手紙への返事をいただけないのは妙だと、訝る気持ちを表すためのものだよ。それゆえ、すぐにも令嬢にとどめを刺しておかなければ、こちらがお終いになってしまうのだよ。そんなわけで、ベティ夫人と従姉妹のモンタギュー共々、四頭立てないしは六頭立ての馬車で我が愛しの君にお仕えする準備を進めているところなのだ。何しろ、ベティ夫人ときたら、ほんの二、三マイルのことでも、絶対に二頭立てのでは出掛けようとしないのだよ。そして、これは夫人の人柄の中でも良く知られたものなのだ。

だが、馬車や馬飾りの紋章と兜飾りのことはどうするのかと問うのか。

貴公は知らないのかな。夫人の馬車の内張りを張り替えたり、修理をしている間、ブラントの貸馬車で間に合わせなければならないってことをだよ。ロンドンへ出て来ていることでもあり、この機会にと思っているわけだ。どうしてもこの手のことは、田舎では夫人の望みどおりに行かないのだよ。お仕着せはベティ夫人のものとほぼ同じだ。

ベティ・ローランス夫人には貴公も何度かお目に掛かっていたのではなかったかな、ベルフォード。

ないさ。生まれてこの方、一度だってな。

あるんだよ、それが。それに、彼女と寝たこともあるんだ。でなければ、貴公にとっては身に過ぎた噂が流れていることになるぞ。なあ、ジャックよ、ベティ夫人のまたの名を知っているかな。

またの名だって　…　二つ名前があるのか。

そうなのだよ。で、バーブ・ウォリス夫人のことはどう思っているのかな。

おゝ、悪魔めが。

これで謎が解けただろう。バーバラ夫人は、貴公も承知のとおり、暮らしぶりが上向いたし、また、プライドもあって、特別な場合でもないかぎりは決して姿を見せないというか、お出ましにならないのだ。上流の者たち、つまりは、高値をつけてくれる連中を相手に公爵未亡人として、少なくとも、伯爵未亡人として通すためだ。物腰に威厳のあることでいつも称賛を受けて来たわけだが、上流の女でもその威厳に匹敵する者は少ないほどなのだよ。そして、自称している人物以外の者だと思われたことなど、これまで一度だってないのさ。何度も何度も貴族の情婦になっているのだがね。

それから、従姉妹のモンタギューはだれのことだと思うかな。

分かるはずがないだろう、俺には。

いや、そのとおりだな。なに、快活な娘だが、お淑やかな顔付きをした、我が愛しのジョハネッタ・ゴールディングが従姉妹のモンタギューというわけだ。

ほらな、ベルフォード、叔母上だよ。それに、従姉妹だ。二人とも機転は思いのままだし、上流婦人の真似は慣れたものだ。両方とも良家の出だよ。自制心に長けているし、教養もある。ただし、すでに同情には値しなくなっているのだがね。正しくスパルタ式婦人そのもので、何一つとして恥じることもないが、正体を暴かれるのだけは別の話というわけだ。それゆえ、その点については常日頃から用心を怠らないのだよ。そして、最高の役柄を担っている時には、自分たちが演じている上流婦人そのものになったつもりなのだ。

それで、俺は連中をどんなふうに飾り立てると思うかな。教えてやろう。

ベティ夫人は贅沢な金紗のドレスにしてもらうが、高価な宝石を飾ったものだ。

従姉妹のモンタギューのほうは淡いピンク地で、銀の糸で自ら刺繍した花柄がちりばめてある。我が愛しの君もそうだが、シャーロットも刺繍が素晴らしく上手いのだよ。宝石はベティ夫人ほど豪華に飾り立ててはいないが、イヤリングとソリテール〔三八〕は極めて高価なものさ。それに、実に良く似合っているのだ。

貴公も知ってのとおり、ジョハネッタは肌の色艶が良いし、うなじが綺麗で、目を引くほど形の良い耳をしている。シャーロットもそうなのだよ。また、あの娘は背丈もシャーロットとほぼ同じなのだ。

二人ともレースで飾ってもらうが、手に入るものとしては最高の品だぜ。

宝石の借り賃が一体どれくらいになるのか、貴公には想像もつくまい。わずか三日間のことだがね。

この可愛らしいお嬢さんのお陰で、俺も半ば破産だよ。だが、もうそろそろ貴公にも分かっているのではないかな。彼女の支配も長くはないということがだよ。そうでなくては

いかんのだ。それに、もう一度彼女を受け入れるために、シンクレア夫人がすでに準備万端整えているのさ。

∴　　∴

ほーら、貴婦人たちのお出ましだぞ。小作人の娘のスーザン・モリソンがお供をしている。ベティ夫人の侍女役というわけだよ。両手を前に揃えているし、指導も徹底しているということだな。

服装でずいぶん得をするものだな、女というのは。物腰や体型が生まれつき上品で、躾を受けている者は特にそうだよ。

連中の練り歩く様を目にしてくれたなら…　一言話すたびに、「あなた」「あなた」だの「おまえ」だのと呼び掛けるのだよ。ベティ夫人はツンと頭を反らし、尊大に遜った素振りだ。シャーロットのほうは扇子を弄びながら、床に触れるともなしに、滑るように進んでいる。

「是非ともお目に掛かりたいわね、私の姪として選ばれた方に」と、一方が叫ぶ。というのも、連中は話を聞いているのだよ。われわれが結ばれていないことをな。そして、俺が連中を無視しなかったのを喜んでいるのだ。俺のことだからと、連中もその点を心配していたというわけさ。

「本当にお会いしたいですわね、大切な従姉妹になってくださるお方に」と、もう一方が叫ぶ。

「奥様、それに、お嬢様」という呼び声、そして、呼び掛けるたびにぎこちなく片足を引いてのお辞儀だが、取り澄ましたスーザン・モリソンからのものだよ。

役柄をしっかりと演じるのだぞ、売女どもめ。俺の目敏いことは知っているだろう。今度の一件では、情熱のあまりに判断が鈍るということもなければ、思惑どおりの幻想を誘い出すというわけにも行かないのだよ。肩書きを持った遊び人たちを相手にする時のようにはな。我が魅惑の君は、女性に関する知識の点ではさほどでもないが、冷静で目敏いことにかけては俺にも負けないくらいだからな。お前たちが普段装ってみせる重々しい態度でも、今度の俺には役に立たんのだ。偉そうに振る舞うのだよ、高貴な家柄に生まれたみたいにな。ただし、やり過ぎてはいかんぞ。何も疑わずにな。心が咎めても、顔に出さないようにすることだ。

寛いだ態度を取るのだよ。気取らぬことだ。その服装だけでも誇りの高いところは十分に出るのだからな。

もう少しむずかしい顔をするのだ、ベティ夫人。もっと意味深長に振る舞うのだよ。威厳を示そうとしてそっくり返るのは、もう少し控え目にすることだな。

その感じだよ。うまいものだ。もう一度だ。それで良い。

だめだ、だめだ。傲慢さを抑えるんだ。上流のご令嬢の態度になっちまった。新たな身分のことをそんなに意識しちゃいかん。高貴な生まれの人間というのは、求めるまでもなく、尊敬を集めるものなのだよ。

さて、君の役柄だが、従姉妹のシャーロット。

なかなか結構だよ。ただ、その態度では少し浮かれすぎだな。もっとも、我が愛しの君

に心の準備をさせてあるのだよ。お前さんたちの両方には、えらく陽気なところと上流らしい屈託のなさとを期待するようにな。

嫌らしい目だな、それは。そういう目付きは絶対にだめだ。うつむき加減にして、遠慮がちに向けるのだよ。俺を見るのだ。差し当たり、俺を愛しの君だと思ってくれ。

その流し目は止めるのだ。いたずらっぽいところも、思わせぶりが度を越している。お前たちもかつては、今なってほしいと思っているような娘だったのだよ。

元気良く振る舞うのだ。だが、鉄面皮になったりしてはいけないぞ、従姉妹のシャーロット。絶対に忘れないようにしてくれ。顔を向けられた時にはうつむくか、あるいは、目を逸らすことだ。目と目が合った場合には、お前のほうが引っ込めることにするのだ。お前の面の皮なら、吟味をされても平気だろう。

おゝ、主よ、主よ … こんな年端も行かぬ娘だというのに、当初は見る者の心を魅了していた、その無垢な表情をこうも簡単に忘れ去ってしまうとはな。お前たちすべてが生まれつき身につけてきたものと思っていたのだ。二十年を費やして育んできたものを、五年で駄目にしてしまうのだからな。五年間の教えの何と体に馴染んでいることか。以前のものを取り戻すのは何と難しいことだろうか。

まさか、女の手管の中でも主要なものに不案内とはな。もう一度言うが、その目に一体どんな用事があるというのだ、お前の心は。

話してなかったかな。他人の目を読み取ることにかけては達人なのだよ、我が愛しの君は。前に聖書の句を引き合いに出してくれたことがあったが(ア)、どうして彼女があんな知識を身につけることになったのか、それで分かったという次第だよ。彼女が初めてドーカスと会った時の話だが、その瞬間に、あの娘の目には不実な思いが宿っていることを見抜かれてしまったのだ。

繰り返すが、俺のことを我が愛しの君と考えるのだ。さあ、俺の吟味のまなざし、疑り深い心と向かい合うわけだが …

それで良いんだよ。

その物腰を姿見に写して見ておくんだ。

素晴らしいぞ。申し分ない。

さあ、お辞儀をしてみるんだよ、お前たち。

田舎育ちのご令嬢としては、結構なものだよ、従姉妹のシャーロット。親しみが増して来て、作法などに拘らなくなるまでは、深々とお辞儀をするのも良いだろう。寄宿学校の雰囲気を忘れてしまったように思われてはいけないぞ。

だが、深すぎる、深すぎるのだ、ベティ夫人。お前の年齢や身分の割には、お辞儀が深すぎるんだよ。女に共通の欠点が危険の種というわけだ。いつまでも若いつもりでいてはいかんということだな。自分のことを判断するに当たっても、連中の願いのとおりにさせておいたり、見栄を張らせたりすると、女というのはどれもこれも手に負えなくなるものなのだ。そんな場合、五十歳でも十五以上になることは決してないのだからな。

優雅さに溢れるゆったりとした様子、そして、威厳を忘れぬ物腰だよ。ちょうど、我が

(ア) シラ書二十六章。「身持ちの悪い女はみだらな目と、流し目でそれと分かる。その恥知らずな目つきには警戒せよ。彼女がお前を挑発しても驚くな」

愛しの君の態度のようにだが、実に難しいことだよ、正確に真似るのはな。
今度は二人一緒にだ。
素晴らしいぞ。その感じだよ、ベティ夫人。それがそれぞれの役柄にピッタリの仕草だよ、従姉妹のシャーロット。だが、もう一度言っておくが、自分の目付きについてはきっと用心するのだぞ。
心配ないわよ、おまえ。
心配なさらないでね、あなた。
各自バルバドス水(三九)をほんの一口　…
そして今、われわれは踏み出したのだ。

手紙　三十一
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

月曜日　午後　シンクレア夫人宅にて
まさに心からの願いどおり、万事がこの上なく順調に進んでいる。あくまでも反対していたし、不本意なあまり気を失いかけていたにも拘らず、また、慎重さや用心深さ、猜疑心のすべてにも拘らず、我が魂を魅する者は再び元の下宿へと戻ったのだ。
今、脈搏の一つ一つが激しく波打つのだ。今や高鳴る心臓はドキドキ、ドキドキと、何かを求めて早鐘を撞いている。
だが、われわれがどのように事を運んだのか、詳しく述べている暇はない。
今、衣類の一部を荷造りしてくれるよう、我が愛しの君は指図をしているところだ。二度とこの家には入らないためだという。確かに、もう一度逃げ出した暁には、再び戻ることはないだろうな。
だが、許しについての条件一つさえ話に出ないのだ。ハーロー気質が染み込んでいる麗しの君としては、俺の慈悲心にすがるような真似はしたくないというわけだな。ハウ嬢からの次の便りを待つと言っている。その上で、自分の新たな計画に難点が見つかるようであれば［別に有難いとは思わないが］、その時には　…　果たして、その時はどうなるのだろうな。何のことはない、その場合でも、俺を許して良いのか、それとも、永久に拒絶すべきなのか、時間を掛けて考えるというのだよ。この冷淡さのお陰で、似通った性質の千にも上る出来事の記憶がこの胸に甦ってくる始末だ。ただ、ベティ夫人とモンタギュー嬢が断言しているのだが［あの二人は、ジャック、俺が復讐心を燃え立たせるよう、彼女のほうで挑発するのを望んでいるのだと、男ならそう考えたくもなるだろうな］、この尊大な留保については、俺のほうでも納得して然るべきだというのだよ。
二人はすっかり彼女に夢中になっている。彼女が口にすることは、そのすべてが神の教えであり、そうでなければいけないのだ。彼女が今夜中にハムステッドに戻ることに関しても、二人が保証人なのだよ。二人も彼女と同行して戻ることになっている。夕食はムーア夫人のところでというベティ夫人からの注文だ。あそこの空き部屋すべてが、俺の了承もあって(すでに丸々一ヶ月の契約をしてあったからな)、二人と二人のお付きの者たちによって埋まる予定だ。最低でも一週間、あるいは、二人のほうではそう出来るものと考え

ているわけだが、俺のことを再び好意をもって迎えてくれるよう、また、オクスフォードシャーまでベティ夫人に同行してくれるよう、愛しの天の邪鬼さんを説得するまでの間ということだ。

愛しの君も次の点までは譲ってくれている。つまり、ハウ嬢に一筆認め、現在の事態について知らせることにするというのだよ。

彼女が筆を執るようなら、俺はその文面を拝見することになるだろう。しかし、俺が思うには、彼女はすぐにも別の仕事に携わることになるはずなのだ。

ベティ夫人は彼女にこう話している。俺は許すに値しないのだと、彼女のほうでは思い切った言い方をしているけれど、彼女を説き伏せ、俺を許す気持ちになってもらえるのは間違いないところだ、とだよ。ベティ夫人としては、すこぶる繊細な神経の持ち主ということもあり、俺の犯した罪がどんな性質のものなのか、厳しく追及するわけにも行かないのだな。ただ、それは、彼女自身やモンタギュー嬢、そして、全女性の中でも貞節な者たちに向けられた犯罪行為に違いなく、そうでなければ、これほどまでに恨まれるはずがない、というのだ。しかし、彼女が俺のことを許すまでは、そして、われわれの結婚式が内輪な形で挙げられるのを見届けるまでは、彼女の傍を離れるつもりはないとのことだ。それまでの間は、彼女の伯父が言い出した便法に賛成なので、他人の前で彼女に話し掛ける際は、すでに俺の妻になっているような言い方をしたいというのだよ。

夫人の弁護士をしているステッドマンが、訴訟の件に関してだが、彼女の指図を受けにハムステッドへ訪ねてくるかもしれないとのことだ。これほど大切な、これほど魅力的な新しい親戚と席を同じくし、言葉を交わす折角の機会でもあり、与えてもらえる時間は一時間でも失いたくないというわけさ。

だから、従姉妹のリーソンのところへの往復の際、連中の四頭立ての馬車でだが、彼女が同行の依頼を受け入れなかったら、辛いことになるだろうな。リーソンのほうでは、世間で褒め称えられるのがいかにも当然という淑女でもあり、是非とも彼女に会いたいものだと（以前の連中自身もそうだったのだが）願っていたのだよ。

「M卿も、あの方にお会いになり、ご自分の姪御さんとしてお迎え出来るようになりましたら、どんなにか感激なさることでしょうね」

「セアラ夫人は一心に十字を切って、ご自分の幸福を喜ばれるはずですわ。大切にしておられたお嬢さんが亡くなられて嘆いておられますが、幸せなことに、今はその埋め合わせが出来たとお考えになられることでしょう」

モンタギュー嬢は彼女の口から漏れる言葉一つ一つについて詳しく触れている。新しく出来た従姉妹に完全に首ったけだ。是非とも自分の従姉妹になってもらうし、彼女のことは〈私の従姉妹〉と呼ぶつもりだという。そして、妹のパティも同じように敬愛の念を抱くはずだと請け合っているのだよ。

「いや、まったくだ」と、俺が叫ぶ（彼女に聞こえるような声で囁く真似だ）。「初めて出会ったその時にも、従姉妹のパティの鳩のような目はすっかり潤んで、涙で溢れることでしょうね。まことに優雅で気高く、実に気取りのないお嬢さんだから」とな。

「どんなにか幸せな一族になることでしょうね、私たちは」と、われわれ全員が声を揃えて叫ぶのだ。

こんな言葉が、また、祝いとして寄せられるこの種の賛辞が常時繰り返されており、恍

惚として捧げられる次のような褒め言葉には、慎み深い彼女の気持ちも傷ついてしまうのだよ。つまり、「あの方の優美さはあまりにも自然に身に備わっているものですから、自慢になさることさえないのですわ。でも、罰を受けることに甘んじていただかねばなりませんわね。一番に秀でておられる方々をも陰のほうへ追いやってしまう、そんな素晴らしさのためにですわ」といった塩梅なのだ。

要するに、ここでもわれわれは、ハムステッドの時と同じく、ひたすら喜びに沸き立っているわけだよ。われわれの全員がだ。我が愛しの君だけは別なのだが、その美しい顔を支配しているのは「もう一度この玄関に足を踏み入れるのは、ほとんど気を失いそうなほどに嫌なわけで」、不安を湛えた一種の平静さだ。だが、その表情にしても、あと二、三時間でどんな変化を見せることだろうな。

半ば懸念を抱いている美女に対し、憐れみを感じ始めているかにも思うのだ、俺は。だが、頃合も弁えずに押し入ってくる憐憫の情よ、貴様などは消え失せてしまうのだ。すでに一度ならず、危うく俺を破滅させるところだったのだぞ、貴様は。そして、〈反省〉などとはおさらばだ。思いやりも同情も立ち去るのだ。貴様らすべてを追放しよう。少なくとも、今後一週間はな。思い起こすのだよ、彼女が破った約束のことを。この甘い心が彼女への慈悲深い処置を考えていた矢先の、あの逃亡のことをだよ。ハムステッドへの逃亡の後、彼女の手紙の中に見られた俺の扱いぶりをだ。ハムステッドでの憎悪に満ちた振舞いもな。相手は野放しの魔王ベルゼブルだ。陰謀好きの破廉恥漢なのだよ。彼女が予測していけないようなものが何かあるとでもいうのかな。

俺よりも独身生活のほうを優先させている点も忘れないことだな。俺を軽蔑しているのだよ。俺の妻となることを拒んでさえいるのだ。誇り高きラヴレースが妻に迎えようというのに、それを断られたのだ。ハーロー家の娘に拒否されたのだ。俺以上の誇りに満ちた態度でな。我が一族の婦人たちが「彼女も連中のことを我が一族の婦人だと考えているのだ」、徒労とはいえ、軽んじられた親戚の者への好意を取り戻してほしいと嘆願し、自分たち以上の几帳面さから範を得ようとしているというのにだよ。

彼女の友人のあの牝狐が吐いた呪いの言葉も忘れてはならん。彼女からの報告があったればこそ、俺の上に注がれた呪いなのであり、それゆえ、彼女自身の呪いの言葉ともなるわけなのだよ。

これらにもまして、特に忘れていけないのは、彼女たちの間で着手され、今では、あと一、二日もすれば動きだしかねない状態の、例のタウンゼンドの陰謀だ。それに、あのじゃじゃ馬から投げ掛けられた薄汚い脅しの文句のこともだよ。

これこそは、長い間俺が待ち続けてきた、すべてを決する局面ではないのかな。トムリンソン、そして、この女どもが従事し、また、莫大な金を費やし、数多の策を弄し、これほど多くの手下が駆り出されながら、すべては無に帰することになるとでもいうのか。

これこそは、彼女の試練の時ではないのか。そして、彼女を介し、全女性の美徳が試練を受ける時ではないのかな。かくも長期に亘り計画が練られ、かくも長く脅威の元となっていた試練というわけだがね。彼女の氷のごとき冷たさは真の冷淡さなのかどうか。彼女の貞淑さは信念に基づくものなのかどうか。「一度屈すれば、常に従うことになりはしないのか」。そして、最後の試練を前に、もしも俺が踏み止まったりすれば、彼女は名誉の極みとなるものを欠くことになるのではないのかな。これまですべてを凌ぐものとされてきた

彼女の優越性の、その証をだよ。

畏怖の念から長く敬遠され、しばしば中途で投げ出されてもいた目的の、その終着点が今や間近に迫っているのだ。それに、あまりにも重くなっている天秤の皿に、あの忌わしい一族の罪過を放り込んでやる必要があるというのだろうか。

力ずくというのは忌避されねばならん。力に頼ろうという考えもだ。力ずくでは、心を征服するわけには行かんのだ。これは、確か、すでに口にしていたことだよ(ア)。だが、それは俺としても、出来るなら避けようとしたのではなかったかな。他の方法もすべて試してみたのではなかったかな。他に何か俺に残されている手段はあるのかな。あまり力の入らない試みに対して、これまで怒りを露にしてきた彼女だが、最後の暴挙については、より激しく憤って見せることが出来るのだろうか。また、彼女の憤りがいかに激しいものだとしても、俺としては、結婚によって償うことも出来るのではないのかな。彼女が俺を拒んだりしないことくらい分かっているのだよ、ジャック。あの高慢な美女も俺を拒みはしないはずなのだ。肉体的には汚れていないという誇りを打ち砕かれた暁にはな。彼女としては嘘をつくわけに行かないのだが、その抵抗の中に、女の性そのものが（彼女の抵抗がどれほどのものだとしても）応じる姿勢を嗅ぎ取る時にはだよ。そしてまた、彼女の胸を怒りで満たすあの慎みの心が、彼女の口に錠を掛けてしまう時にはだ。

しかし、どんな具合にして俺には分かるのだろうな。自ら難題を背負い込んだのではないことがだよ。彼女も女ではないのかな。現実のこととなった災いに対しては、いかなる償いがあるというのだ。彼女は生き長らえなければいけないのではないのか。信仰心からして、命は大事にするだろう。それに、時間が俺の味方をしてくれるのではないかな。一言で言えば、その後の彼女の振舞いはどうなるのかということだな。俺を捨てて逃げ出したりは出来ないのさ。俺を許さねばならないのだよ。そして、これまで何度も言ってきたように、「一度許してもらえば、永久に許される」ということだ。

だとすれば、何故にこの女々しい憐憫の情は、俺の愚かな心を和らげてしまうのだ。

そうはさせるものか。こういったことすべてを忘れずに置くつもりだ。そして、他のことは考えるまい。心に決めた点を堅持するためにもな。やはり俺にはそれを守り通すのは無理なのだろうと、まわりの女どもが言い張っているのだがね。

愛しの魅惑の君に思い知らせてやるのだ。策を凝らす点で俺と張り合ったりすれば、どんな目に遭うのかをな。自分の征服者に対して陰謀を企てたり、策を巡らせたりすればどうなるのか、教えてやるのだよ。あの密輸商を巻き込んだ計画においても、俺に比べるなら、彼女は蜘蛛にすぎないということ、そして、この間ずっと彼女が紡いでいたものといえば、ただ蜘蛛の巣にすぎなかったのだということをだよ。

∴　　∴

さて、どうしたものだろうか。悲嘆と懸念の深みの底に沈み込んでいるのだよ、われわれは。本当に、女というのは失望に耐えられない動物だ。ハムステッドへ戻ること、そして、計り知れないほどの不本意さで再び足を踏み入れたわけだが、その家から永久に立ち

(ア) 第四巻の百六十五頁を参照のこと。

去ることにひたすら心を傾けていたのだし、携えて行こうとしたものはすべて荷造りが済んでおり、彼女自身、出掛けるのを首を長くして待ち侘びていたのだ。俺にしても、あちらまでお供をする用意は出来ていたのさ。なのに、出掛けるのは今夜のことではなさそうだと、彼女が心配し始めているのだ。そして、悲しみと絶望のあまり、彼女は前に使っていた部屋に飛び込み、錠を掛けて閉じ籠もってしまったのだ。ドーカスが鍵穴から覗いてみると、両膝をついていたそうだ。察するに、祈っているのだろうな。無事救い出されることをだよ。

で、何から救い出されようというのかな。それに、この苦しみ悶えんばかりの憂慮ぶりは何故のことなのだ。

何のことはない。ここでこの意地悪なベテイ夫人が、愛しの君にとって心配の種というわけだが、彼女の了承を得て、それから、この頭のおかしい従姉妹のモンタギューのほうは了解なしに、彼女が荷造りの指図に気を取られている間に、馬車を急がせて自分たちの宿へ向かってしまったのだよ［勿論、ハムステッドまで可愛い従姉妹のお供をするためにも、夜着などを少し詰め込んで来ようとの目的にすぎないのだが］。そして、彼女に負けず劣らず俺も驚いているのだが、連中はまだ戻ってこないのだ。

どういうつもりか知らせてほしいと、使いの者を出したところだ。

俺自ら出掛けてもらいたいと、ひどく気忙しい口調で彼女が言い張るのだ。どうにも宥めようのない有り様だった。可哀相にあの娘は、自分で作り出したくだらない心配ごとのために半狂乱なのだよ。一体何が不安だというのかな、あの娘は。

こんなに遅くなるなんて、忌々しい連中だよ。俺ののろまの悪党にしても、何て尻が重いんだ。連中など悪魔に食われてしまえ。連中に言うのだ。連中の馬車を届けて寄越すようにだよ。そうしてくれれば、連中は伴わず、われわれで出掛けることにする。連中にそう伝えるよう、彼女が聞いているところで、俺が奴に命じておく。おそらく奴は、馬車を持って来るために居残るだろうな。夫人たちに何か不都合が生じて、今夜は我が愛しの君のお傍に仕えるわけに行かなくなる場合にはだよ。

∴

∴

もう一度言ってやろう。連中など悪魔に食われてしまえ、とな。連中は泊まらないことを約束してもいたのだ。わずか二晩前のことだが、ハムステッドの丘の麓で一台のチャリオットが追剥ぎに遭ったからだよ。そのことを聞かされると、我が麗しの君は恐怖に陥っていたのだ。

あゝ、ベティ夫人の召使が伝言の紙片を持ってやって来た。

ロバート・ラヴレース様

月曜日　夜

私たちが失礼いたしますこと、親類となられた最愛のご婦人には、どうぞお詫びしておいてくださいね。一晩なのですから、たいしたことではありますまい。実は、モンタギュー嬢がここで急な病に襲われ、続けざまに三度も失神の発作を起こしているのです。私の

確信いたしますところでは、貴方の愛する奥様があらゆる予想をはるかに越えておられるのを知った、その喜びゆえの興奮［ご存じのとおり、家族の愛が私どもの一族のように強く働いた例は他にございませんからね］、そして、あの方のお傍にお仕えしたいという、あまりにも強い願望が引き起こしたことなのです。と申しますのも、可哀相にあの娘は弱々しい気力しか持ち合わせていないのです。表向きは元気そうなのですがね。

あの娘の具合が良くなるようでしたら、明日の朝には、貴方の下宿であの方と朝食を済ませました上で、間違いなく貴方たちとご一緒いたしましょう。でも、私といたしましては、あの娘が回復するしないに拘らず、喜んでハムステッドまで奥様のお供をしたいと思います。また、そのためにも、明朝九時頃には貴方のところへ伺うつもりです。貴方に愛されて当然至極の方に、宜しくお伝えくださいね。

かしこ

Elizab. ローランス

真っ正直なところ、ジャック、俺としても我と我が身をどう扱ったものか、分かり兼ねているのだ。というのも、ちょうど今、ドーカスに頼んでこの短い手紙を届けてやったのだが、我が愛しの君がその手紙を手にして飛び出して来たのだよ。狂気の発作だな。間違いない。誓っても良いぞ。

実際、夕方中ずっと、彼女は頭痛を訴えていたのだよ。

ドーカスが息を切らして駆けてきた。奥様がやって来るが、少し様子が変だと、俺にご注進というわけだよ。ただ、彼女が直ぐ後を追ってきたこともあり、どんな様子か、怯えた小娘のほうではゆっくり話す暇もなかったのだ。

あの短い手紙に目を通した時、「どうやら、これで私も本当にお終いということなのでしょうね。あゝ、哀れなクラリッサ・ハーロー」と、彼女が言っていたらしいのだ。

彼女はヘッドクロースをむしり取り、俺はどこにいるのかを尋ねた。そして、飛び込んできたのだが、艶やかな巻毛をうなじの辺りになびかせ、ひだ飾りは引きちぎられ、雪のように白い手の回りにズタズタの状態でぶら下がっている。腕を拡げ、両目を激しくぎょろつかせるものだから、まるで眼窩から飛び出さんばかりだ。近寄ってくるやいなや、彼女は俺の足下へと崩れ落ちた。あの魅力的な胸が波打ち、上に向けた顔のところまでせり上っている。そして、両腕をしっかりと俺の膝に回し、「ラヴレースさん、仮にも … 仮にも … 仮にも … 」と口ごもっているのだよ。その先は一言も口に出来ず、抱き締めていた腕を緩めると、彼女は床に崩れて平伏してしまったのだが、発作を起こしたからでもなければ、発作が治まったからでもない。

俺はすっかり驚いてしまったよ。しばらくの間は、目的のすべてに待ったを掛けられたまま、どんなことを言ったら良いのか、また、何をしたら良いのかも分からない状態だった。だが、気持ちが落ち着くと、こんなふうに考えた。見方によっては、またも俺は、いわば打ち負かされた形で、物笑いの種にされるのか。今手を引いたりすれば、俺の望みは永久に絶えてしまうのだぞ、とだ。

俺は彼女を起こしてやった。だが、関節がすっかり外れているみたいに、彼女は倒れ込んでしまったのだ。手足が言うことを聞いてくれないのだな。ただ、発作を起こしているわけでもないのだよ。これまで一度だって俺は耳にしたことも目にしたことも無いな、こ

んな訳の分からないお嬢さんは。ほとんど息絶えたみたいで、しばらくの間は口もきかないのだよ。あの瞬間、彼女の心配は一体どれほどのものだったのだろう。そして、何故のことだったのだろうな。知能に秀でた愛しの者だというのに　…　とんでもないお馬鹿さんだな、と俺は思ったよ。

あれほど真剣で、あれほど疑いようのない嫌悪感には、これまで一度として出くわしたことがなかったものだから、俺もたじろぎ、まごついてしまったのだ。だが、試してみるまでは、そんなふうだということがどうして分かるというのだ。それに、ここまで来てしまった以上、どうして止められるのだ。女どもに責め苛まれたり、事態を軽視されたりしたくないのならだよ。その事態にしても、奴らは俺よりも適切な判断が出来るような顔をして見せるのだからな。

だが、俺は彼女を抱き起こし、椅子に座らせた。そして、心の乱れをそのままに映す言葉遣いで、恐れる必要など一切ないことを語り、恐れるのは奇妙な話だと不思議がって見せた。気持ちを落ち着けてくれるように頼み、俺の信義心や名誉を重んじる心に信を置いてもらいたい旨を懇願した。そして、以前の誓約すべてを重ねて誓い、新たな誓いの言葉も雨あられと降り注いだのだ。

ようやくのこと、胸も張り裂けそうに泣きじゃくりながら、「えゝ、えゝ、ラヴレースさん」と、彼女がとぎれがちに話し出した。「そうですわ。そうなのですわ。とうとう、とうとう私も終わりなのですね。破滅なのですね、もしも貴方が憐れみを　…　何卒、憐れみを垂れていただきたいのです。お願いです」とだ。そして、しとど朝露に濡れて頂きを垂れる、茎が半分折れた百合の花さながらに、彼女の頭は、俺の心臓を突き通すような溜め息を一つ漏らしながら、あの胸元に埋もれたのだよ。

俺も少し落ち着きを取り戻すと、彼女を安心させようと、思いつくかぎりのことをすべて口にした。

それとなく触れていたとおり、婦人たちの馬車を届けてくれるよう、俺はどうして使いを出さなかったのだろうな。婦人たちを迎えに、翌朝戻ることも出来るのだよ。

彼女の奇妙な心配ぶりを目にするとすぐ、実際に使いは出したのだと彼女に話した。ただ、馬車はその時には、モンタギュー嬢の医者を迎えに出てしまっていたのだよ。医者のチャリオットがすぐに用意出来ないといけないからな。

あゝ、ラヴレース、と彼女は言ったが、疑るような顔付きだ。哀願のまなざしには苦悩が滲んでいた。

あんなにも多くの夜を過ごした家だというのに、ベティ夫人との付き合いのため、そこに一晩留まることが彼女にとってはそれほど不愉快なのだと夫人に知れると、夫人としてもずいぶん変に思うことだろうと、俺は彼女に話して聞かせた。

これを聞くと、彼女は俺を罵った。彼女が俺を罵るのは前にもあったことだ。俺はじっと堪えたよ。

それじゃあ、ベティ夫人の下宿へ行かせてもらいましょう。ただちに行かせてもらいます、と言うのだよ。もしも、俺がベティ夫人と呼んでいる人物が、本当にベティ夫人であるのなら、とな。

「〈もしも〉と言うのですか、君は。あゝ、神よ。私のことをどれだけの悪党と思い込んでいるのか、その〈もしも〉ではっきりと分かりますね」

「それは仕方のないことでしょう。もう一度お願いいたします。リーソン夫人のところへ行かせていただきたいのです。もしも、その〈もしも〉を口にしてはいけないということでしたらね」

それから、もっと断固とした気構えを見せながら、「私、参りますわ。道は尋ねることにいたしましょう。私一人で参りますわ」と言うのだよ。そして、俺の横をすり抜けて行こうとするのだ。

引き止めようと、俺は両腕で彼女を抱き寄せ、俺が耳にしている、気の毒なシャーロットの不調ぶりを引き合いに出して訴えた。そして、もしも彼女が行ったりすれば、その性急な行動が可哀相なシャーロットに、さらなる懸念をどれほどもたらすことになるか、とも言って嘆願したのだ。

彼女は、俺が即座に馬車を一台呼び寄せ（ベティ夫人のものは得られないのだし、リーソン夫人のところへ行くことも許してもらえないのだから）、遅くなってはいるが、その馬車でハムステッドまで行かせてくれるのでなければ、俺の言うことは何一つ信じるつもりはないというのだ。それも、たった一人で行くとのことで、そのほうがはるかに良いというのだ。というのも、ベティ夫人が問い合わせたところ、良からぬ噂が聞こえてきたとのことだが［これは、新しく俺の親戚となった話好きな女の口から、愚かにも漏れてしまったわけで、他人をけなして手柄顔をしようとの目的から出たことだ］、そんな人たちの家には、あと一晩だって留まらない覚悟でいるというのだよ。そこではすべてが、そして、一人一人の顔付きが、俺の顔同様に［我が魅惑の君よ、相変わらずそなたは敏感すぎる、と俺は思ったよ］、ひどく意味ありげで不快な様相を呈しているからだというのだ。

彼女の精神状態に何かあってはと不安を覚えたし、夜が明けるまでには、おそらくいろいろな経験を積むことになるのが大いに心配であったので（もっとも、彼女にしたところで、恐れている最悪の事態を迎えるとしても、これ以上に取り乱すようなことは有り得ないのだが）、彼女の機嫌を取り、ハムステッドまでわれわれを運んでもらうためだが、料金はいくらでも構わないから、すぐに馬車の手配をするよう骨折ってくれと、ウィルに指図をしたのだよ。

俺としては彼女を怯えさせようと思ったわけだが、その追剥ぎの件も彼女は怖くないというのだ。俺こそが彼女の懸念のすべて、ということらしい。そして、この家が恐怖の種というわけだ。実は、はっきりと看て取れるのだが、今や彼女のほうでは、ベティ夫人とモンタギュー嬢の二人は、共に名を騙っているものと確信しているのだ。

だが、彼女の疑念にしても、役に立つためには少々遅すぎた感があるのだよ。

そして、あゝ、ジャック、燃え盛る愛の炎が、渦巻く復讐の念が押し寄せてくる。それらが代わる代わるこの身を引き裂くのだ。すでに辿った行程や女どもの煽動のこともあるのだ。それに、最後の一線まで試した上で、それでもなお彼女と結婚する力が俺にはあるのだよ。同棲を承知させることが出来ない場合にはな。仮にも彼女がこの手から逃げおおせるようなことがあれば、この身などは滅びてしまえば良いのだよ、ベルフォード。

∴　　∴

ウィルがまだ戻らない。間もなく十一時なのにな　…

ウィルが今戻ったところだ。どうしても馬車が捕まらないという。情に訴えようが金を積もうが、とのことだ。

再び彼女が言い張っているぞ。「私をリーソン夫人のところへ行かせるのです、ラヴレース。お願い、ラヴレースさん。リーソンさんのところへ行かせてちょうだい。モンタギューさんのご病気など、私の恐怖の種に比べたらどれほどのことがありましょう。後生ですから、お願い、ラヴレース様」とだ。両手をしっかりと握り合わせながらな。

「あゝ、我が天使よ。何という取り乱しようですか、これは。いわれもない懸念のためにどんな姿を呈しておられるのか、ご承知ですか君は。お分かりなのですか、我が最愛の人よ。十一時を過ぎているのはご存じですか」

「十二時でも一時でも、二時でも三時でも四時でも、何時だって構わないのです、私には。仮にも信義を守ってくださるおつもりでしたら、この忌まわしい家から出させていただきたいのです」

貴公も気づいているだろうな、ベルフォード。以上の話は後から書き記したものではあるが、ただ（他の場所でも同じことだが）、まるで、一つ一つの文章を話されたとおりに書き留めようとして退室したみたいに、語られたまま、起こったままに筆にしているということだ。この生き生きとした現在形での筆遣いが貴公のお気に入りなのは分かっているのだよ。俺の特技の一つでもあるわけだからな。

「仮にも信義を守ってくださるおつもりでしたら、この忌まわしい家から出させていただきたいのです」と、彼女が最後の言葉を繰り返したちょうどその時、シンクレア夫人が飛び込んで来たのだが、それはもう大変な興奮ぶりだったよ。そして、「あら、マダム、貴女様にどんなご迷惑をお掛けしたというのでしょうか、この家は。ラヴレース様、貴方様のお近付きをいただきましてから、もうかなりになりますし、たとえ、このご婦人の几帳面さが私には欠けているといたしましても、こんな扱いを受けるいわれはないものと存じますわ」と言うのだよ。

夫人は両手を腰に当て、丸太のような腕で肘を張りながら、こう言うのだ。「へぇー、ひとつ言わせていただきますが、マダム、私、驚いているところですわ。私のことは言いたい放題ですものね。それに、ラヴレース様［頭をツンと上げ、激しく振りながらだよ］、貴方様も紳士で、名誉を重んじる男の方なのでしたら　…　」とだ。

これまでは、この女の追従的なところ以外は一切目にしていなかったし、あまり好意を感じないこともあって、その男のような態度や厳めしい顔付きに、彼女は怖じ気づいてしまったのだな。「神よ、お助けください」と、彼女は叫び声を上げていた。「これで、私は一体どうなってしまうのでしょう」とだ。それから、心が千々に乱れ、途方にくれているように、あちこちへ頭を向けながら、「どなたに保護を求めたら良いのでしょうね、私。これで、私は一体どうなってしまうのでしょうね」とだよ。

「保護者にはこの私がなりましょう、最愛の人よ。だが、実際の話、貴女も無慈悲なほどに厳しいですね、シンクレア夫人には。確かに厳しいと思います。夫人もお生まれは立派なものですし、名誉を重んじる男性の未亡人なのです。それに、下宿をやって行かざるを得ないような境遇に置かれているとはいえ、故意に卑劣な振舞いに走るようなことは恥

と感じておられるのです」

「それなら宜しいのですが　…　そうかもしれませんわね　…　私の考え違いかもしれません。ただ　…　でも、この方のお宅を好きになれないと申しましても、それが罪になるとは　…　私　…　大それた罪だとは思えないのです」

例の怖い小母さんは、もう一度両手を腰に当てて肘を張った格好をし、大股で彼女のところへ歩み寄った。両の眉は逆立っていて、豚の背の剛毛みたいでもあり、また、低く欠けた鼻の上に不機嫌そうに垂れ、イタチみたいな目を半ば以上覆っているのだ。口は歪んでいた。厚ぼったい唇を突き出しているのだが、まるで、空気を吸い込んで、その馬のような鼻の穴に吹き込もうとしているみたいなのだ。顎の先はこわばり、怒りのためいつもにも増して突き出て見えるのだよ。

夫人は「へぇー、マダム」というのを二度繰り返し、怯えている麗しの君に話し掛けたのだが、麗しの君は恐れおののき、俺の袖口を握り締めていた。

俺としては、彼女が気を失ってしまうのではと心配だった。そこで、憤慨した顔付きでシンクレア夫人にこう言ったのだ。この部屋は俺のものであるし、俺と俺の連れ合いとの間で交わされた話に聞き耳を立てたり、招かれもせずに入り込んで来たりするのは、一体どういうつもりなのか、俺には考えられないことだし、さらに不可解なのは、このような妙に厚かましい振舞いに走ることだ、とな。

この恥知らずな女にこういった偉そうな態度を取らせるというのは、俺に責任のあることかもしれないのだよ、ジャック。ただ、あいつが飛び込んで来たのは、俺の指示なしにやったことなのだ。

口やかましい婆さんは椅子に身を投げ出すと、泣き言や不平を並べ立てていた。婆さんを宥めたり、お嬢さんに頼んで婆さんと仲直りをしてもらったりするのに、ほとんど一時近くまで骨折った次第だ。

そして、怯えもあれば夜が更けたこともあり、また、続いて起こった出来事のこともあって、この家を逃げ出してリーソン夫人のところ、あるいは、どこであれ、他の場所へ行こうという彼女の気持ちも消え失せてしまったという次第だ。

手紙　三十二
ラヴレースからジョン・ベルフォードへ

六月十三日　火曜日　朝

さて、ベルフォードよ、俺としてもこれ以上先へ進むわけには行かないな。終わったのだよ。クラリッサは生きている。

謙虚なる君のしもべ
R. ラヴレース

この凶悪事件の全貌は、被害者たる令嬢により、七月六日木曜日の日付のある手紙以降の数通の中でハウ嬢に宛てて報告されている。第六巻の手紙四十四、四十五及び四十

六を参照のこと。

手紙　三十三

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

六月十四日　水曜日、ワトフォードにて

あゝ、残酷な心を持った怪物だよ、貴公は。罪深い一時間の間に、何ということをしでかしてしまったのだ。一生涯に亘って、後悔の日々を送ることになるのだぞ。

俺には言い表しようもないほど気掛かりなのだ。この類いまれなる淑女の運命がな。この世の他のどんな男の手に落ちたとしても、貴公との場合ほどに彼女が苦しむことはなかったはずだよ。

もう一通長い手紙に取り掛かり、その大部分は書き終えていたのだが、彼女のために貴公の冷酷非情な心を和らげようとしてのことだったのだ。というのも、貴公があの呪わしい女のところへ首尾よく彼女を連れ戻すというのは、大いにありそうなことだと考えたからだ。だが、たとえその手紙を書き上げ、発送していたとしても、手遅れだったというわけだな。しかしながら、書くのを差し控えるわけにも行かないのだよ、俺は。貴公が入手した結婚許可証を適切に用いることで、今の貴公に可能なただ一つの償いを果たしてくれるよう促すためだ。

いたわしくも、お気の毒な令嬢だよ。一度会っているだけに心が痛むのだ。あのように美徳を崇拝する人間が、女の中でも最も堕落した者たちへの生け贄に供されるとはな。そして貴公が、まことに狭量卑劣で不人情な目的のために、悪魔の言うなりにあの女たちの道具となるのだからな。あゝ、比類なく残酷な男よ、こういった点を思い返して、精々得意がることだ。また、貴公のためにこの世の知人すべてから見放されたという、そんな女性に対する貴公の勝利が、その女の弱さや信じ易い心にうまくつけ込んで得たものではなく、陰険この上ない策略により達成されたものだという点もだよ。長きに亘って故意のごまかしを試みながら、効果を得られなかった後のことだがな。

これは言っておくが、貴公か俺のいずれかにとっては、俺があの淑女の兄でないのは幸運というものだぞ。もしも俺が兄であったら、彼女に暴力が加えられた暁には、われわれのどちらかがきっと血を流していたに違いないのだからな。

許してくれ、ラヴレース。そして、俺がその身を案じるからといって、彼女が余計ひどい目に遭うことにはならないようにしてもらいたいのだ。ただし、貴公の許しを請う他の動機としては、たった一つあるだけだ。つまり、貴公が筆まめなお陰で、貴公の蛮行について俺も知ることが出来るからだよ。何しろ、この蛮行にしても、もしも貴公がその気になれば、ありきたりの情事として伝えることも出来たわけだからな。

「クラリッサは生きている」とのことだったな。そこが俺には驚きなのだ。また、この言い方からすると、蹂躙された後も、彼女が生き長らえるようなことは、貴公自身にしてもほとんど予想していなかったことが分かるというものだ（ただ、それでもやはり、貴公なら先へ進むことは出来ただろう）。苦痛の種ともなっていた懸念が、恐ろしいまでに確か

なこととなった時、お気の毒に、令嬢の苦悩はいかほどのものだったことだろう（操について、彼女はくれぐれも用心していたわけだからな）。しかしながら、貴婦人を詐称する連中に欺かれ、見捨てられ、そして、裏切られたのではないかと、彼女が疑念を抱いた際のことだが、その時に貴公が描いてくれた様子によって、彼女の苦悩ぶりを人は推測出来そうに思うのだよ。

この際の彼女の狂乱ぶりを、そして、貴公の足下で半ば言葉を失い、半ば気を失いかけている姿を目にしながら、しかも悪辣な目的に固執するなど、彼女の姿を拝んだことのある人間ならば、たとえ貴公のことを知っている者たちにとっても、とてもありそうなこととは思われないのだよ。

いたわしくも、お気の毒な令嬢だ。この上なく高貴な結婚生活にとってすら、その飾りともなるほどの高尚な美質に恵まれているのだよ。それでいて、貴公がやってのけたような扱いを彼女に対して行うことの出来る者というのは、この世でもただ一人だろうに、そんな男の手に落ちるのだからな。それに、貴公もうまく言い当てているが、例の「怖い小母さん」を、すでに怯えている初な娘に向かって襲いかからせるというのだからな　…　何たる野蛮行為なのだ、これは。何とも哀れな蛮行ではないか。愛情で獲得する夢は断念した相手だが、脅しを使って手に入れようというのだからな。もっとも、陰険この上ない計略の数々によって支えられた愛情だったわけだがな。

おゝ、ラヴレースよ、ラヴレース。たとえ、以前には疑わしく思っていたにしても、俺も今では確信出来るのだ。来世というものが必ずや存在することをだよ。不当に扱われた功績を正しく評価し、非情なる背信を罰するためなのだ。でなければ、神にも似たソクラテスにしても、そして、神々しいばかりのクラリッサにしても、苦難を嘗めたりするものだろうか。

だが、衆に秀でた女性に加えられたこの極悪非道の破廉恥行為のことは、出来ればの話だが、ほんの一瞬でも忘れさせてもらいたいのだ。

俺は当地に用事があり、なお二、三日留まることになろうが、その後は、おそらく、この屋敷とは永久におさらばということになるだろうな。

堅苦しく退屈な時間を過ごしていたのだよ、俺は。叔父の熱心な頼みもあって、これだけ身近に世話をしたり、苦しみ悶える姿を目の当たりにしたりしていなかったならば、現に分かった尊敬の念のその半分だって、あの老紳士に敬意を抱いていたとは気づかなかったことだろうな。

俺が人間らしい心を持つに至ったのには、おそらく、この心痛む出来事が与って力あるのだろうが、ただ、確かなこととして言えるのは、この淑女に備わる美質の半分しか持ち合わせない女に対しても、貴公ほどの無慈悲な卑劣漢として振る舞うことは、俺には到底出来なかっただろうということだな。

だが、お願いだ、親愛なるラヴレース。貴公も人の子であり、悪魔ではないというのなら、忘恩という貴公の罪の埋め合わせをすべく、即刻心を固めてもらいたいのだ。彼女を正式に貴公のものとするに際して、貴公が受けることの出来る最高の栄誉を貴公自身の身に授けることによってだよ。

だが、こんな形で彼女に報いてやるよう、貴公自身を説き伏せることが出来ない場合だが、もしも、あの忌まわしい女に彼女を生け贄として供するような真似をすれば、俺とし

ては、貴公との対決も辞さないつもりなのだよ［その結果は、最小限に見積もって、永遠の断絶ということだろうな］。

叔父の死去によって、俺がいかなる利益を手にすることになるのか、それを知りたいとのことだったな。確実なところは俺にも分からないのだ。この点に関しては、貪欲に要求する者も何人か身内にはいたのだが、俺のほうにはそれほど欲張った気持ちがなかったものだからな。あの連中は、俺も口に出して言ったことだが、もっと礼儀というものを弁えていて然るべきだったのだよ。そして、あの欲の皮のつっぱった問い合わせにしても、遺体が冷たくなるまでは慎むべきだったのだ。ただ、俺にとっては望ましくないほど頻繁にこの件に触れていたのだが、そんな気の毒な叔父貴の話から判断すると、遺産の支払いをすべて済ませた上で、現金と公債とで五千ポンドは下らないように思うのだ。純益にして年一千ポンドをもたらす不動産は別にしてだよ。

貴公が守銭奴であったならと、心の底からそう願っている。財産の総額がこの二倍だとしても、その最後の一シリングまで貴公にくれてやるつもりなのだ。たった一つだけ条件を付けてな［というのは、これまでの暮らし向きでも、独り者でいるかぎり、俺にとっては望みどおりの気楽なものだったわけだからな］。つまり、祭壇の前に立つ時には、この父親を欠く令嬢のため、いわゆる父親役を演じる栄誉を与えてもらいたいということだ。

この点を考えてほしいのだよ、親愛なるラヴレース。誠意を見せてくれ。そして、この手から貴公に贈らせてもらいたいのだ。男がかつて所持したものの中でも最も輝かしい宝玉をだよ。そして、その時こそは、俺のこの体も心も貴公と永遠に結び付くことになるはずなのだ。

ベルフォード

手紙　三十四
ラヴレースからジョン・ベルフォードへ

六月十五日　木曜日

「構わないでよ、大きなお兄ちゃん。ねえ、放っておいてよ」と、臆病そうに両腕で頭と顔を覆い隠しながら、小さい方の子供が大きい方の男の子に向かって言っているのを聞いたことがあるが、その大きな子は、自分のリンゴかミカン、それとも、生姜入りクッキーか何かを盗んで逃げたということで、小さな子をポカポカと殴っていたのだよ。

哀れな友に対する貴公の手厳しい姿勢に接した今、俺も同じように貴公に頼むことにするが、貴公も認めるとおり、そうも恐ろしげに友に向かって貴公が振りかざしている、その武器を提供した友なのだぞ、この俺様は（貴公も恩知らずな男だよ）。それに、何のために振りかざすのかな。危害は加えられたのだ。従って、元どおりには出来ない状況なのだよ。そして、クラリッサと称するほどの者にしても、俺の心を動かすわけには行かなかったということなのだ。

だが、結局のところ、この令嬢との一件には何かしら変わったところがある点は認めねばなるまい。そして、時には俺も、彼女に手を出したりしてしまったことを悔やまずにはいられなくなるのだよ。何しろ、心身両面のいずれについても、俺の有利に働くよう何ら

の力も動かすわけに行かなかったわけだし、もっと厳粛な出来事に際して哲人が用いた言い回しを借りるなら、フィリッポス王の頭蓋骨ともう一人の人間の頭蓋骨との間には、何らの相違点も見つからないわけだからな(四〇)。

しかし、人々が物事に対して途方もない考えを持ったとしても、ベルフォード、それで事実が変わるわけでもないのだよ。それに、クラリッサ・ハーロー嬢にしても、すべてが終わってみれば、千人もの他の女たちに降り懸かる運命を辿っただけの話なのだ。他の女たちのほうは、連中の言う〈操〉とやらにあれほどまでに現実離れをした価値は置かないだけの話で、ただそれだけのことなのだよ。

しかしながら、次の点は認めておこう。ある人間が何かに高い価値を置く場合、そのもの自体は、あるいは、他人の目にはそれがいかに些細なものであっても、それを奪い取るということは、その人物には決して些細なことではないという点だよ。このような見地から事態を捉えるなら、俺としても、この天晴な娘に対して罪を犯したこと、しかも、大きな罪を犯したことは認めるところなのだ。

だが、貞節ということについては高邁な考えを持っているように見えながら、試練の場に立たされると、その厳しさを緩めてしまったという女なら、俺も数知れないほど知っていたのではないだろうか。それに、果たしてその中のだれが試練に耐えるのか、試してみるまでは、確信などどうして持てるというのだ。

千回も俺は言ってきたのだよ。このような女にはこれまでのところ、まだ一度も会ったことがない、とな。もしも会っていたなら、滅多なことではクラリッサ・ハーロー嬢に手を出したりはしなかったはずなのだ。これまでは、すべてに亘って天使だったのだよ、彼女は。そして、事を始めるに当たって、俺が試してやろうと目論んだ点はそこではなかったかな(ア)。俺が胸中に温めていた狙いは、一貫して同棲ではなかったのかな。そして、ついに今、俺はそこに至る街道に立っているのではないのかな。なるほど、彼女の気持ちということに関しては、誇れる点など俺にも何一つとしてないさ。まさしくその逆ってところだよ。だが、今こそわれわれは、修復不可能の災難に対して最大限の善処をしてくれるよう、彼女を説き伏せることは出来ないものか、それを試す段階に至っているのだよ。仮に彼女が悲鳴を上げるとしても「悲鳴を上げて当然な理由が彼女にはあるのだし、俺としても、何時間にも亘っておとなしく腰を下ろし、彼女が叫び疲れるまで、その悲鳴に耳を貸すつもりなのだ」、その後は、身を屈して諫めの言葉を並べることになるだろう、おそらくな。諫めてくれるなら望みはある。諫めるというのは、憎んでいないことを示すことになるはずだ。そして、もしも憎んでいないのであれば、俺を許すことにもなるだろう。また、今許してくれるようであれば、すべてが終わることになるのだよ。そして、彼女は俺のものとなるのだ。俺自身が持ち出す条件でだよ。そして、その暁には、彼女を幸せにしてやることそれだけが、今後の人生において俺が努力の対象とすべき事柄のすべてということになるわけだ。

それゆえ、ベルフォード、貴公もお見通しだろうが、俺は最初から確定的な一点を見据えながらこの段階へとはるばる進んできたのだよ「確かに、果てしない迷路を通り抜けてきたし、後悔する点も数限りなかったがね」。そこで、結婚によって恩義を忘れぬ償いをせ

(ア) 第三巻の六十三頁から次頁にかけてを参照のこと。

よという貴公の矢の催促に対しては、マット・プライアーの詩句二行を借りて答えさせてもらおう。彼が望みをかけていた接見の場において、セント・ジョンとハーリーの口に上せた言葉だよ。つまり、こうだ。

「マットの申しておりますことが実行に移されますよう願います」

「分かっておる」　伯爵が言う。「だが、今日ではないぞ」(四一)とだ。

貴公にも分かるだろう、ジャック。俺としては、しかしながら、たとえ主たる眼目である同棲を実現することになっても、そのうち、念願のとおり公正な扱いをしてやることに反対する腹を固めているわけではないということだ。それに、この点は貴公に確約しておこう。つまり、仮にも俺が結婚をするとなれば、相手はクラリッサ・ハーロー嬢でなければならないのだし、また、そうするつもりだということだよ。それに、俺にとっては、これまでの受難によって彼女の貞節に少しでも傷がついたなどということは有り得ず、むしろ、正反対なのだ。彼女に注意してもらいたい点といえば、最終的に俺を許す気持ちになった時にも、同様の場合に許しを与えることの出来るような相手は、この世でラヴレースただ一人だというところを、俺に向かって示してほしいということだけなのだ。

だが、あゝ、ジャック、この素晴らしいお嬢さんを、差し当たってはどう扱ったら良いものかな。今のところ　…　［口にするのも辛いのだよ　…　だが、今のところ］彼女は完全に知覚の失せた状態なのだ。

俺としては、爪痕を残されたり歯形をつけられたりはしたのだが、むしろ、あの活動力のすべてを彼女が持ち続けていてくれたほうが良かったように思うのだ。あのようなまったくの　…　無感覚状態（とでも呼ぶべきだろうか）に陥ってしまうよりはな。火曜日の朝からというもの、ずっとそんな様子なのだよ。だが、俺が恐れているのは、彼女が少し回復し、時々悪口を吐いたり金切り声を上げ始めたりするようになった折には、苦痛に悶える心と一戦交えそうになることなのだ。その異常なまでの動揺ぶりは、昔話にも近代の物語にも類例のない潔癖さに由来するという、そんな心を相手に回すわけだからな。結局のところ、彼女の場合には一体どういうことがあるのだろうな。あのように輝くばかりの生気にあふれ、花も盛りという美女の知覚を喪失させてしまうというのはだよ。極度の悲しみ、極度の恐怖というのは、人の髪の毛を逆立たせてきたし、また、（書物によれば）その色を一変させてしまったことさえあるという。だが、極度の悲しみがある人物の知覚を奪い、他の者たちを無感覚状態から呼び覚ますことになるような仮想の災難に対し、時として無感覚にしてしまうというのは、まことにもって驚くべきことだよ。

だが、この問題には触れずにおこう。あまり真面目腐ってもいけないからだ。

昨日はハムステッドを訪ね、あそこでの費用すべての支払いを済ませたが、少なからず称賛を博することとなった。妻も今では俺と同じくらい幸せにしていると連中に話してあるし、それも大それた嘘とは言えないのだよ。よくよく考えてみると、俺もまったくの幸せ者というわけではないのだからな。

タウンゼンド夫人は、手下の水夫連中とだが、あの時点では姿を見せていなかった。夫人がやって来た際に、連中の口から夫人に話してもらいたいことを教えておいたよ。

だが、結局のところ［〈結局のところ〉を俺は何度繰り返すのだろうな］、俺は大いに真

面目になることも出来るのだよ。そんな気分に負けた時にはな。畜生め、何という馬鹿なのだ、俺も。一体どうしてしまったというのだ、俺は。二、三日、もっと新鮮な空気に当たらなければいかんな。

だが、その間、この素晴らしいお嬢さんにはどう接したものだろうか。それが皆目見当もつかんのだ。何しろ、俺が出掛けたりすれば、ここに棲みついた毒蜘蛛が可愛らしい蠅に飛び掛かりたがるのだが、この蠅の絹のような羽はすでに俺が張った巨大な巣にひどく絡まり、手も足も動かせない有り様だからな。というのも、悲しみのため彼女はすっかり感覚を失ったものだから、常日頃から欲望がないように見えていたわけだが、今では同じく意思にも欠けている状態なのだ。それゆえ、今のところはまだ、彼女の傍を丸々二日離れるようなことは考えるわけに行かないのだよ。

手紙　三十五

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

つい先ほどのことだが、一つの見本にお目にかかったところだ。完全に回復した場合には、この愛しの君の怒りはどんな具合になるのか、その見本というわけだよ。実に心打つものであったな。ドーカスの後について部屋に入り、彼女の千々に乱れる心を慰め、落ち着かせようと骨折ってみたのだが、俺が甘言を並べているその最中にも、彼女は、苦悶のあまり言葉もなく、罪のない結婚許可証を（彼女の掌中のものとなっているのだが）天に向かってかざして見せるのだよ。悲嘆に暮れる哀れなカタロニアの住人たちが、イギリスとの協定書(四二)を差し上げて見せたようにだよ。俺の行いの中の最も不埒なものでさえも面目が立つように見えてしまうという、そんな事件に際しての話だがね。

彼女の様子からすると、俺に対する復讐を祈り求めようとしていたのだろうが、幸運なことには、ちょうどその時、鉛の心を持った神様が、身を震わせている彼女のラヴレースに同情してくださったのだろう、眠りを誘うその杖を、涙に潤んで半ば見えなくなっている彼女の目の上で振り、嘆き悲しむ美女を眠りに就かせてくれたのだよ。彼女が胸に思い描いていた呪いの言葉を半分も口にしないうちにだ。

これまで俺が筆にしてきたことからして、貴公も推測するだろうな。何かちょっとした手管が用いられたことをだよ。だが、思いやりの気持ちから（そんな言葉をこのような折に使うのを許してくれるならの話だが）考えついたことなのだ。やがて味わうことになる痛みを、彼女としてはきっとあまりにも鋭いものと感じることだろうが、その辛さを軽減してやるつもりだったのだよ。いまだかつて用いたことのない手だし、思いつくこともなかったはずなのだ。シンクレア夫人が提案したりしなければな。段取りについては夫人に一任したのだよ。そして、あれからというもの、何をするということもなく、ただ夫人を呪ってばかりいるのだ。分量が多かったため、彼女の見事な分別を永遠に曇らせることになってしまったのではないのか、とな。

そこが俺には気掛かりなところなのだ。気の毒に、令嬢はあのような扱いを受けるべきではなかったように思う。「気の毒に、令嬢は」と言ったかな、俺は。貴公の卑屈な文体などと何の関わりがあるというのだ、この俺が。しかし、俺が一番の貧乏くじを引いたので

はないのかな。何しろ、彼女が無感覚状態なものだから、俺は自分自身の楽しみごとに対し、ただ盗みを働いているにすぎないような気分になってしまうのだよ。

貴公に話す考えはなかったのだ、この無邪気な小細工のことは。というのも、その程度のことにするつもりだったのだからな。ただ、俺としても、とりわけ貴公に対しては隠しごとをしたくないのだよ。それに、いつもよりも真面目な調子で書くのは避けられないわけだから、おそらく貴公のほうでは、本当の原因を匂わせておかなかったなら、俺が事実そのものを遺憾に思っているように勘繰っていたことだろう。そして、そうなると、結婚によって償えと、退屈な説得の言葉を書き連ねることになるわけで、貴公にはずいぶん面倒を掛けていただろうし、俺としても、貴公の野暮なたわごとを読むのにひどく厄介な思いをしたはずなのだ。また、俺から白状しておかなかったなら、貴公のほうでは、いずれそのうち、この一件について尾ひれのついた形で耳にしていたかもしれないのだよ。それに、この令嬢の美徳のことを貴公が極めて高く買っているのは承知しているから、彼女は自らの同意によって、あるいは、ほんのわずかでも応じる気持ちがあって征服されることになったのだと、そのように考えるべき根拠を得たりすれば、貴公も落胆するだろうと思ったのだ。それゆえ、ある程度は彼女も俺に恩義があるわけだよ。彼女が自分の名誉心にとって完全な慰めとなるような申し立てを行っても、極めて当然なことと見られるのだろうが、それは俺の名誉を犠牲にしてのことなのだからな。

さて、秘密のすべてがこれで明らかになったわけだ。

貴公に言わせるなら、忌まわしい男ということになるのだろうな、俺は。令嬢の言によれば、解き放たれた魔王ベルゼブルであり、謀略家の悪党ということだ。これは貴公ら両名が前にも言っていたことであり、これ以上のひどい言い方は有り得ないわけだから、貴公も悪口は慎んでくれるよう希望しておこう。もしも、俺が完全に冗談抜きの態度を貴公に対して取るのは望まないということであればな。また、貴公は俺と対決するようなことを仄めかしているが、その言葉に、俺が信じたいと思っている以上の意味を込めているように思われたくないのであればだよ。というのも、終わったことではないのかな。避けられることなのかな。それに、俺も精一杯善処するよう努めなければならないのではないのかな。そして、俺としてはむしろ、この点を貴公に申し渡しておきたいのだ。それと、徹底した秘密厳守もだ。俺の受ける罰が、仮にそれが俺自身の反省の結果に他ならないとしても、犯した罪以上に大きなものとなりそうに思い始めているからなのだよ。

手紙　三十六

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月十六日　金曜日

災難に遭ったとのこと、気の毒に思うが、そのために長く床に就くようなことのないよう願っている。貴公の召使の言によれば、まさしく間一髪のところだったそうだな、首の骨を折らずに済んだのは。不吉な前兆ではないことを願っているが、貴公も以前ほどの進取の気概が見当たらないように思うのだよ。ただ、喜ぶべきなのか悲しむべきなのかは知らないが、貴公にも分かるはずだ。道楽者の首が首吊り役人からではないにしても、自分

の馬からでさえ、常に危険に晒されているのだということはな。それにしても、貴公の馬も性悪な奴らしいな。そいつの背に跨がるような真似は二度と再びすべきではないと思うぞ。乗り手も馬も両方とも性悪なのでは、それこそ厄介な話になるからな。

あいつが言うには、止むなき蟄居の無念さを紛らすためにも、俺には筆を止めないよう願っているとのことだな。しかし、貴公の気持ちを紛らす力が俺にあるなどと、どうして考えられるのだ。俺自身にとってさえ楽しくはない話題だというのにだよ。

俺に言わせるなら〈塞ぎの虫〉というわけだが、心が塞ぐというのはどういうものなのか、ついぞ知ることはなかったのだよ、シーザーは。ポンペイウスの後釜に納まるまではということだがね。つまり、奴の野望の頂点に到達するまではというわけだよ。貴公のラヴレースにしても同じことで、気が滅入るとはどういうことなのか、この世でも最も魅力的な娘に対する想いを遂げてしまうまでは、知らずにいた次第なのだ。

しかし、「遂げた」などとどうして言えるのかな。〈気持ち〉が、つまり〈同意〉が伴っていないというのにだよ。それを確保しようという目標が、いまなお俺の眼前にあるわけだからな。

だが、俺も貴公の願いに加わっても良いくらいの気持ちだよ。友達甲斐のないものだったが、貴公が召使に託してよこした願いのことだ。この前の月曜日以前に、俺が貴公の災難に出くわしていたら良かったのに、というやつだよ。実を言うと、気の毒なことに令嬢は、先の便りで話したのとは逆の極端へと進んでしまったのだ。というのも、以前はひどく無感覚な状態になっていた令嬢なのだが、今はそれに劣らないほど騒々しくすることがあるのだよ。正気に戻る時間も結構頻繁にあるのだが、それを別にすると、ひどい錯乱状態と見て良く、監禁も止むなしということになるだろう。

俺としてもまったくもって忌々しいほどに心が乱れてしまうのだよ、そのことを考えるとな。というのも、彼女の思考力が取り返しのつかないほど損なわれてしまったのではないかと、心配になり始めているからだ。

これほどありふれた、そして、これほど些細な原因から、これほどまでに奇妙な結果を予想し得た者など、一体どこにいるというのだ。

だが、他の女性の行く手を照らす灯りであることを、そして、手本であることを公言して憚らない、心気高く、高尚な感性を備えたこの種の娘というのは、一般の基準まで引き摺り下ろすのには大変な困難が伴うものだから、そういったご立派な連中の一人を征服するという栄光よりは、自らの心の平安のほうを選ぶという賢明な男性なら、そんな連中には一言たりとも言葉を掛けようとはしないものなのだ。

彼女の興奮を鎮めようと、俺に出来ることはすべてやっているところだ。無理やり彼女の前に出た時にはな。

今許しを請うたかと思うと、次には誠意や敬意を誓ってみせるといった具合に、そんなことを繰り返している状態だよ。

われわれは実際に結ばれたのだということを、初めのうちは納得してもらうつもりであったし、その真実性を証言してくれる証人を呼ぶことも申し出たのだ。結婚許可証は彼女の手中にあったわけだが、心を乱している折でもあり、そんなふうに断言すれば、受け容れてもらえるようにも思ったのだよ。そして、素晴らしい結果が後に続くように願ったわけだ。ところが、これではどうしてもうまく行かないのだな。

それゆえ、俺もそんな望みには見切りをつけた。そして、彼女に対して今は次のように明言しているのだよ。つまり、伯父ジョン・ハーローが出席し、式に華を添えてくれるとの通知があり次第、彼女と結婚する決心でいるということをだよ。

だが、俺の言うことを彼女は一切信じてくれないのだ。また、(正気の時であれ、そうではない時であれ)俺の姿を目にすることにも耐えられないのだよ。

彼女には心の底から同情するし、彼女が発作的に嘆き悲しんでいる際や、あれほど見事な知性が永久に鈍ってしまうのではと不安になる時などは、我と我が身を呪うことになるのだ。だが、それにも増して、ここの女たちのことを呪っている。俺にこんな手段を取らせたわけだからな。あゝ、主よ、主よ、それで、どんな首尾だったというのだ、俺は。そして、何のためだったというのだ、すべては。

昨夜、彼女がペンとインクを手にしたのだが、この前の月曜日以降初めてのことだ。ただ、その書き方というのが、大変な熱中ぶりであり、また、せっかちなものだから、心の動揺が手にとるように分かるのだよ。

それでも、こうすることで気持ちを落ち着かせる助けになれば、と思っている。

∴　∴

たった今ドーカスが教えてくれたところでは、彼女は書いたものを引き裂き、自分のしていることに気づかないのか、それとも、気に入らないというのか、その紙をバラバラにしてテーブルの下に捨てているそうだ。そして、立ち上がると両手を揉み、涙を流し、部屋中のいたる所へ席を変える。それから、机に戻って腰を下ろし、再び筆を進めているというのだよ。

∴　∴

奇妙な、と言って構わないのだろうが、彼女からのそんな手紙を一通、ちょうど今ドーカスが届けてくれたところだ。「これを届けるのよ、この世で一番卑劣な男に」と、彼女が言ったのだよ。ドーカスもいけ好かない奴で、それ以上の指示は受けずに、この俺様のところへ持って来るのだからな。俺も貴公に写しを送ろうとの考えから(相当に長いものなのだが)、腰は下ろしたのだよ。だが、どうあっても出来ない相談だ。実に途方もないものなのだ。それに、原物というのがすこぶる独創的なものだから、おいそれとは手放すわけに行かないのだよ。

ただ、引き裂かれるか、あるいは、投げ捨てられるかしたものだが、そういった破片や断片のいくつかについては、写しを取ろうと思っている。物珍しさもあるし、また、このような奇妙な状態に陥った今、彼女の心がどんな動きをしているのか、それを貴公に見せるためでもあるのだ。ただ、俺に歯向かうための新たな武器を、相変わらず貴公に提供しているという点は、俺も承知してはいるのだ。だが、コメントは差し控えてくれ。自ら思い返してみれば、貴公のコメントなどは不用になるのだ。奥様が紙片のことを尋ねるはずだと、ドーカスはそう考えており、それで、机の下に戻しておくためだが、紙片を欲しがっているのだよ。

最初のものからも察しはつくだろうが、ハウ嬢は重病で、手紙を書くわけに行かないのだと彼女に話してある。彼女宛の手紙をまだ受け取っていないことに、うまく説明がつけられるようにとの狙いからだ。

紙片　その一
（二つに引き裂かれたもの）

大好きなハウさんへ

あゝ、何て恐ろしい、何て恐ろしいお話をしなければいけないのでしょうね、私。それでも、お話をするわけにもまいりませんわ。ただ、おっしゃっていただきたいのです。卑劣な恥知らずの報告のとおり、貴女は本当にご病気なのでしょうか。

でも、あの男はこれまで一度だって本当のことを言ったためしはございませんし、このことでも真実を語ってはいないものと思いたいのです。それでも、もしも本当ではないのでしたら、確かに、もっと前にお便りをいただいていたはずですわね。でも、お咎めするなんて、どうして私に出来ましょう。私にうんざりなさって当然なのですもの。また、うんざりなさっていても、許して差し上げることは出来ます。私自身、自分に嫌気がさしているのです。私の身内の者たちは皆、貴女よりもずっと前から、私に愛想を尽かしているのですからね。

大好きな大好きな私のアナ・ハウさん。いつだって貴女はとても優しくしてくださいましたわ。でも、何というとりとめのない書き方をするのでしょうね、私。

たくさんのことをお話しするつもりで腰を下ろしたのです。胸が一杯になって、まず最初に何からお話ししたら良いのか、分かりませんでした。そして、考えごとや悲しさや迷いが、それに（情けのない頭ですね）、訳の分からないことが　…　そして、考えごとや悲しさや迷いが隙間もないほどに、どっと押し寄せてきたのです。あるものが先頭に立とうといたしますと、別のものが前に出ようとし、すべてのものが一番手を争うのです。その挙げ句、私は何一つとして筆に出来ずにいるのです。ただ、あの人たちが私に何をしたといたしましても、私にはそれが何か分からない、ということだけは申せましょう。どれ一つを取りましても、私はもう以前の私とは違うのです。「どれ一つを」と申しましたでしょうか、私は。いいえ、同じところもございます。だって、今でもまだ、そして、いついつまでも、

私は貴女の本当の　…

忌々しいかぎりだ。俺自身、もうこれ以上筆にすることが出来ないのだよ、この雄弁なたわごとについてはな。想像力に抑えが利いているというよりも、むしろ、煽り立てられていることを示すものだからだ。だが、他のものについては、ドーカスを煩わせ、気紛れな美女の手で書かれたままに、別々の紙に転記してもらうことにする。そして、これから暫くして、すべてに収まりがつき、俺としても目を通すことにもっと辛抱が出来るようになった時には、一目拝ませてくれと貴公に頼むかもしれん。それゆえ、これらの紙片をとっておいてもらいたいのだ。この上なく重くのしかかっている悲しみであっても、その原因が取り除かれた時、振り返って見て喜びを感じるということが、われわれにはしばしば

あるわけだからな。

紙片　その二
（取り消し線を引かれ、机の下に捨てられていたもの）

それに、敬愛いたしておりますお父様、ご自分の哀れな子供を永遠に見捨てようと決心なさるようなことが、貴方にはお出来になるのでしょうか。でも、そのようなことはなさらないものと、私は確信いたしております。もしも、あの不幸な出来事があった後、その子供が味わってまいりました苦しみのことを知ってくだされればの話ですが　…　また、だれ一人として、貴方の悩める哀れな娘の弁護に立とうとはなさらないのでしょうか。親切な者一人としていないのでしょうか。それならば、だれよりも大切なお父様、貴方ご自身が生まれつき備えておられる、あの優しさのなせる業ということにしていただきたいのです。私があんなにも味わい、あのように裏切ってしまいました、あの優しさです。私を迎え入れてくださるのは当然のことだと考えるような、そんな厚かましい気持ちはないのです。えゝ、決してございません。私の名は　…　何と申すのでしょう。私には分からないのです、自分の名前が。貴方の一族に今一度加えてほしいなどと、そんな図々しい望みを抱くことは絶対にございません。でも、重くのしかかっております貴方の呪いが、私のパパ　…　そう、私はパパとお呼びしようと思います。出来るだけ、ご自分の力で困難を切り抜けてください。貴方がそうなさろうとなさるまいと、他ならぬ私の大切なパパなのですから。それに、貴方にとりましては、私は相応しくない子供なのでしょうが、でも、やはり貴方の子供ではあるのですから　…

紙片　その三

ある婦人のことですが、若いライオンか熊をすっかり好きになってしまいました。どちらかは忘れましたが、確か熊か虎だったはずです。まだ幼獣のうちにプレゼントとして贈られたものでした。婦人はご自分の手から餌を与え、大変優しくそのいたずらな幼獣を育てましたし、一緒に遊ぶ時にも、恐れを抱いたり、危険はないかと案じたりすることはございませんでした。それに、獣のほうも、すべてにわたって婦人の言い付けどおりにしていたのです。そして、婦人もよく自慢しておられましたが、その従順さが成長するとともに増していったのです。ですからその獣は、まるで小さな愛玩犬みたいに、家中どこへ行くのにも婦人の後について歩いていたのです。でも、その後の出来事に留意していただきたいのです。とうとう、どういうわけでしょうか、その飢えた胃袋を満たしてやるのを忘れたのでしょうか、それとも、何かの折に、別の点で意に沿うことが出来なかったためでしょうか、獣がその本性を取り戻してしまったのです。そして、突然のことでしたが、襲いかかって、婦人をズタズタに引き裂いてしまったのです。さて、いかがでしょう。一番咎められねばならないのは誰なのでしょうか。獣のほうでしょうか、それとも、婦人のほうでしょうか。勿論のこと、婦人のほうですわ。婦人のなさったことは自然の道から逸れております。少なくとも、本性を無視しております。獣の行動のほうは、その本性に則ったものなのです。

紙片　その四

今は何という屈辱に甘んじているのでしょう、誇り高き者、クラリッサよ。父の屋敷から外に出ると、称賛の的とならないことのなかったそなた。あたかも（そなたの眼光鋭い姉が日頃から述べていたとおり）そなたを仰ぎ見る者すべてから寄せられるはずの賛辞が誇らしいかのごとく、健やかな生気と自信に輝くそのまなざしを、歩を進めつつ、様々なものへ同時に向けるのを習わしとしていたそなた。一日の終わりに、そなたに向けられた追従の数々に満ち足りて就寝するのを常とし、自らの虚栄心以外はすべてを眠りに就かせることの出来たそなたよ。

紙片　その五

悦に入っている場合ではないのよ、ベラ。私の姉でしょう。身内でしょう。憐れんでほしいの、高慢の鼻をへし折られた娘をね。その愚かな心が、自分の目には、周りを覆う謙遜の薄膜を通して透けて見えると、貴女はよく言っていたわね。

きっとそんなところだったのだわ、私は。でなければ、私の堕落が容認されることはなかったはずよ。

貴女は、姉としての鋭いまなざしを油断なく配ることで、私の自惚れた心を見抜いていたのね。

貴女のほうが、私以上に私のことを知っていたというわけね。

だからこそ、私がフラフラし始めた時には、貴女のお咎めがあり、お小言があったというわけね。

でも、もう許してほしいのよ。いわれもなく勝ち誇ってみせた私の心をね。

情けない、恥知らずな自惚れ屋だったわけだけど、貴女が口にしていることは妬みから出たものと私は考えていたのだわ。

私の気持ちはそんな虚栄心とは無縁のものとも考えていたわ。

自分自身の心については知り尽くしているはずだと考え、そのことを過信していたのだわ、私。

私の利点のように思われていたものが、私にとっては罠になったということね。

そして今、すべてはどのような結末を迎えることになるのでしょうね。

紙片　その六

あの幸せな暮しの見通しも、かつては私の眼前に展けているものと思われておりましたのに、今はどうなっているのでしょうか。厳かな式の仕度をいたしますのに、今はどなたにお手伝いをいただけば良いのでしょうか。恐れおののく乙女の不安を和らげ、逸らせてくれます婚礼のための品々も、今はどなたが整えてくださるのでしょう。私の笑みが媚びをもって迎えられることも、今は一切ございません。そなたに不相応ではない心の持ち主に恩義を施すという、そんな望みをそなたに抱かせる励ましの言葉も、今は一つとしてないのです。真の価値を自覚し、また、汚れのなさを称えられております心にいたしまして

も、平伏している崇拝者や感嘆する世間の人たちを見下ろしたり、喜びに歓声を上げる両親や親戚の者たちを仰ぎ見たりするような立場に登ることは、今はないのです。

紙片　その七

汚れなき名声の美しき葉を食い物とし、貪り食らうこと叶わぬ葉には毒を吐く、汝、邪悪なる芋虫よ。

汝、破壊的なる葉枯れ病よ。東風に乗りて来る毒気よ。一面に広がるウドンコ病よ。輝かしき年の当初の見込みを打ち砕き、勤勉なる農夫の艱難辛苦をあざ笑い、その楽しき希望を打ち砕く者よ。

汝、衣蛾よ。美しきことこの上なき衣類に穴をうがつ者。

汝、貪欲なる幼虫よ。開き初めし蕾を食い物とし、ダマスクローズをも鈍き土色へと変色させる者。

宗教の教えにあるが如く、われわれを裁くに当たりて神は、われわれが相互に行う善行と悪行とに基づくこと多しとすれば、あゝ、恥知らずよ、熟慮すべし。速やかに熟慮すべし。汝に対する断罪のいかに大なるかを。

紙片　その八

私も最初のうちは、何かしら不愉快とは言えないものを貴方の態度や容姿に見出していたのです。貴方のお生まれや財産は、少なからず貴方の有利に働いておりました。短気な兄に対する貴方の振舞いも、卑劣なものではありませんでした。貴方は勇敢だとだれもが言っておりましたし、貴方が寛大な方だということも、だれもが口にしていたのです。勇敢な人が卑劣な人間になることは有り得ないと私は考えましたし、恩義を受けているのを認めながら狭量な真似をするようなことは、寛大な人には出来るはずもないと確信しておりました。そのような先入観念を抱いていたこともありまして、貴方の改心に対し、私が大切に心に温め、願いもいたしましたその他一切のことに望みを託したのです。貴方の悪辣さの甚だしい例につきましても、人伝による以外、知らずにおりました。一見したところでは、貴方は寛大で率直に思われましたし、率直さと寛大さとは、いつも私の心を惹きつけてやまないものだったのです。そのような様子をした人はだれであれ、私はその人の心を自分の心に照らして判断しておりました。それに、私は、そのような人たちに見出したいと願っておりました美点を、進んで探し出してもいたのです。そして、見つかりました時には、それらは元からそこに根を張っていたもののように思い込んでいたのです。

私の財産、身分、人柄がさらに保証として役立つものと考えておりました。これらのどれ一つを取りましても、M卿や卿の二人の妹さんの姪となりますのに似つかわしくないものはございませんでした。貴方の誓約や呪いの言葉が　…　でも、あゝ、貴方は野蛮なことに、そして、卑劣なやり方で、陰謀を企てたのです。守ってくださるのが当然な、あの操に対してです。そして、貴方のせいで今の私は　…　一体どのような辱めがあるというのでしょうか、貴方が私に加えなかったものとしては　…

でも、私の心は神様がご存じです。不埒な考えなど、私にはございませんでした。美徳

を敬っておりました。悪徳は憎んでいたのです。なのに、気づかなかったのです、私。貴方が悪の権化だったなんて …

紙片　その九

お目に掛かったこともなければ存じ上げもせず、これまで一度としてお名前を伺ったこともないわけですが、世間から見捨てられた、この世でも一番お気の毒な方がいらっしゃるとして、どなたであれ、そのような方の幸せが、私の幸せが貴方の手中にあるのと同じように、この私の手に握られているというのでしたら、そのような苦悩に喘ぐお気の毒な人を救おうと、私は慈悲心に駆られて飛び出していたことでしょう。がっくりとうなだれている頭を喜んで支えて上げたでしょうし、意気消沈している心をそれこそ喜々として慰めて上げたことでしょう。でも、不幸な人々の数を減らすのではなく、逆に増やしてしまいました情けない恥知らずを、今はだれが憐れんでくださるのでしょうか。

紙片　その十

導きたまえ。私の考えそのものが私のことを忘れる場所へ。
生命の残りをまどろみのうちに過し、
わが身のことを、そして、あの日の罪を忘れる場所へ。
残酷非情の思い出よ、いかにしてそなたを鎮めよう。

あゝ、あなたの行った仕業は
慎み深い顔つきと赤く染まった頬を汚すもの。
　無垢の愛の
その麗しい額のバラを奪い去り
そこに火ぶくれを作るもの。

　そして私はこの顔を
冷たい地面に横たえて、暫しは息も絶えていた。
すると、自由になった魂は、見知らぬどこかへ飛び去った。
　あゝ、酔いどれ者よ、と私は
自分の檻へ飛び帰る魂を見て呼びかけた。
　愚かなり、切れた鎖にまた身を繋ぎ、
ガレー船をここまで漕ぎ戻るとは。
　愚かなり、あの肉体へ戻るとは。
嘆き悲しむのが宿命と宣告された肉体へ。

あゝ、助けてください、私のハウさん、もしも友情がおありなら。
そして、私の内部でいがみ合い，五感のいずれをも
　呼び起こし、私を当惑させている

邪悪なる者にとっては、罪なき者にとっては、
化け物のごとく、子供を脅かすのみ死は恐ろしく、
やがて友の姿を現す。仮面を剥ぐことで楽しく、

二つに裂けた魂に安らぎの言葉を聞かせてください。
　安らぎの間際にあって、私はよろめいて
いるのです。そして、私に残された支えとしては貴女がすべて。
ご援助を願います　…　苦難の痛みに喘ぐ私に。

貞節の失われた時、死が慰めとなるのです。
死は不名誉からの確実な退路に他なりません。

さらば、若き日々よ
若き日々と生命とに宿る
歓びのすべてよ。
そして、生命そのものよ、さらば。

生命は心から祝福されたことがないからです。
神は邪悪なるものを罰し、最善のものをも試すのです。

多謝多謝多謝多謝。

足並み不揃いの
追駒を急ぐ。
互いに踵を接し、
波の如くに離り返す。

とにかく、ベルフォード、ドーカスが転記してくれたこれらのものに大急ぎで目を通したばかりなのだ。そして、俺が見たところ、中には筋が通っていたり、立派に道理に適っているものもあるということだよ。他のは狂気じみたものだがね。それと、この詩的飛翔に大いに役立っている彼女の記憶力が、少しも損なわれてなどいないということだ。そして、このことが、彼女はあの素晴らしい知力を間もなく取り戻すだろうという望みを与えてくれるのだ。もっとも、あれを取り戻した暁には、俺が苦労することになるのは疑いのないところだがね。

　だが、俺宛の手紙には、さらに途方もない言葉が見られるのだよ。あまりにも心を動かす手紙で、貴公に写しを送ることは出来ないと言ったわけだが、同封した断片的な紙片を見せた後のことでもあり、あの手紙の写しを添えても良いように思うのだ。それゆえ、ここでドーカスに転記させることにしよう。俺には出来ない相談だ。あれを読んで、まともな考えの持ち主が口にする最も厳しい非難の、その十倍も心を打たれてしまったのだ。

ラヴレース氏へ

　ただの一行でも、改めて筆を執ろうなどという考えは決してなかったのです。避けられるものでしたら、顔を合わせたくもございませんでした。あゝ、出会うことがなかったならと、心からそう願っているのです。
　でも、本当のところを知らせてほしいのです。ハウさんは実際に、本当にご病気なのでしょうか。ひどくお悪いのでしょうか。あの方のご病気は毒によるものではないのでしょうか。そして、毒を盛ったのはだれなのか、貴方はご存じないのでしょうか。

貴方かシンクレア夫人が、それとも、どなたかが（どなたなのか、私には分からないのです）情けないこの頭に何をなさったのか、それは貴方が一番良くご存じです。でも、これからは、私、これまでの私には決してなれないのです。頭が駄目になってしまっているのです。脳髄をすっかり涙で流してしまったのだと思います。もうこれ以上は涙を流すことも出来ないのです。実際、私といたしましては思う存分に泣きましたので、その点は問題でございません。

でも、お願い、ラヴレース。二度としないでほしいのです。シンクレア夫人を私にけしかけるようなことは。私、あの人に何一つ害を与えておりません。あの人を見ると、ひどく怯えてしまうのです。あの時以来 … いつのことだったのでしょう。私には分かりかねます。貴方ならお分かりでしょうね、多分。恐らく、立派な女性なのでしょう、あの人も。生計のために間貸しをせざるを得なくなっておられますが、信義を重んじる人の奥様であったとのこと … 大変尤もなお話と思われます。お気の毒なご婦人ですこと。同情申し上げていることはお知らせ願います。でも、二度と私の傍へは来させないようにしていただきます。是非ともお願いいたします。

それでも、大変善良な女性なのかも …

何を話すつもりだったのでしょう。言おうとしておりましたことを忘れました。

おゝ、ラヴレース、貴方はサタンそのものです。でなければ、何ごとにつけても、サタンが貴方に手を貸しているわけで、救いようのないことでは似たりよったりなのです。

でも、貴方は実際に、そして、本当に魔王に魂を売ったのでしょうか。それはいつまでのことなのでしょう。貴方の君臨が続くのはどれくらいの間のことなのでしょうか。

哀れな男ですね。やがて契約期限も切れるはずです。その時には、一体、どうなるのでしょうね、貴方の運命は。

おゝ、ラヴレース。もしも、後悔するようなことが貴方にあるというのであれば、私も気の毒に感じて上げることでしょう。でも、私のドアのすべてが固く閉ざされ、開いているのは鍵穴だけですし、その鍵穴にも最近では鍵が差し込まれているというのに、ある意味ではどのドアも開けることなく、貴方の居るところに居るなんて … あゝ、惨めな惨めなクラリッサ・ハーロー。

だって、私、絶対にラヴレースを名乗るつもりはないからです。そのことを伯父がどう受け止めようと構わないのです。

そうでした。言おうとしておりましたことを思い出しました。貴方のためになることです。私のためではありません。私の役に立つことなど、今は何一つとしてございませんからね。あゝ、汝、極悪非道の男よ。汝、憎悪の的ラヴレースよ。

でも、シンクレア夫人は善良な女性なのかもしれません。もしも、貴方が私を愛してくださるなら … そんなこと、貴方にはありませんが … でも、男顔負けのあのひどい剣幕で、私に向かって怒鳴り散らすことはさせないようにしてください。あゝ、恐ろしい女の人です、あの方は。仮にも、女性なのでしたらね。私を脅し、私からわずかな分別を奪ってしまうために、あの恐ろしい仮面をつける必要はなかったのです。でも、私の話していることをあの人にはおっしゃらないでください。あの人を憎んでいるのではありません。ただ怯えているだけで、馬鹿げた恐怖心です。それだけのことなのです。悪い女の人ではないのかもしれませんね。でも、すべての男性が、女性の場合にも当てはまることで

すが、すべて同じわけではございません。だれもが貴方と同じだなんて、決してあってはならないことです。

残念ですわ。貴方たちが皆して私の頭を駄目にしてしまったのです。どなたがとは申しません。神様が皆さんをお許しくださいますように　…　でも、私が皆さんの邪魔にならないよう、ひと思いに片づけてくださったほうが良かったのではないでしょうか。安全にそうすることも出来たはずです。私を返してくれと、貴方に要求する者はだれもいないでしょうからね。えゝ、だれ一人としていないはずです。確かに、ハウさんは別で、貴方と顔を合わせるようなことになりました時、あの人、こう言ったことでしょうね。貴方はクラリッサ・ハーローに一体何をなさったのです、ラヴレースさん、とです。その場合、貴方といたしましては、どんな下らない浮ついた返事をなさっても構わないのです。「海の向こうへ送ったのだよ」とか、「ご両親のところを逃げ出したように、私のところからも逃げ出してしまいましてね」とかです。そして、このような言い方をなされば、容易に信じてもらえたでしょう。と申しますのも、ラヴレースさん、両親の元を逃げ出すことの出来る娘でしたら、貴方のところを逃げ出すのは至極当然な話でしょうからね。

でも、申し上げたいと思っておりましたことに比べますと、こんなのは何ほどの意味もございません。今、思いつきましたわ。

また忘れてしまいました。この気のきかない娘が邪魔ばかりしに来るのです。食事をして一体何になるというのでしょう。どんな目的があって生きたいと思うのでしょう。言っておきますよ、ドーカス。私は食べ物も飲み物もいただきませんからね。今以上に悪くはなり得ないのです、私。

お前の望むようにいたしましょう。ねえ、ドーカスや、そんな怖い顔をしないでちょうだい。でも、お前には私の見た誰かさんみたいなひどい顔は出来ないはずよ。

ラヴレースさん、何を申し上げたくてペンを手にしたのか、思い出しましたので、急ぎその考えを述べさせていただきます。また忘れますといけませんので。ここで気づきますのは　…　とは申せ、ほとんど分別を欠いてもいるのですが、ただ、それでもやはり、自分の頭が本来の状態でないことは分かるのです。ですから、一つ提案をさせていただきます。貴方のためを思っているのです。自分のためのことではございません。で、それは次のとおりです。

貴方にとりまして、きっと私は世話も掛かればお金も掛かる人間になるはずです。それに、このようなことになりましては、伯父のジョン・ハーローも、私の様子が分かりました時には、どなたに対しましても私と一緒になってもらいたいとは決して望まないことでしょう。そうです。このような事態のきっかけになりました張本人の、その貴方に対してもですわ。何て野蛮で恩知らずなのでしょうね。もっと手の込んでいない悪事でも、タルクイニウスのような裏切り者(四三)にとりましては　…　でも、お話ししようとしたことをまた失念してしまいますね　…

それで、こういうことです。私は元の自分には二度と戻れないということです。とてもいけない人間でしたわ、私。自惚れ屋で高慢ちきなつまらない人間でした。密かなプライドに溢れているのに、それを慎ましやかな装いの下に隠し持ち、皆さんを欺いていたということです。姉がそう言っているのです。そして今、私は罰を与えられたわけです。ですから、私をこの家から、そして、貴方の目の前から運び出し、あのベドラムへ密かに閉じ

込めてほしいのです。あそこは一度見たことがありますが、あの時の私には、悲しくなってしまうような光景でした。自分自身がどのような羽目になるのか、ほとんど考えておりませんでしたからね。それが私の申し上げたいことのすべてです。これが望みとして持っておりますことのすべてなのです。そうしていただけますと、貴方の邪魔には一切ならないわけですし、身の回りの世話はしてもらえるのです。貴方に悩まされるということがなければ、パンと水がご馳走になるでしょう。そして、藁のベッドも、これまでに私が横になりましたものの中でも一番に寛げるものとなるのです。どれほど長くかは申し上げられませんが　…

　私の衣類を売りますと、おそらく生きている間中ですが、私をあそこに収容しておくだけの費用にはなるはずです。でも、ラヴレースさん、大切なラヴレースさんとお呼びいたしますが　…　確かに、私はずいぶんと高いものについたわけですからね　…　私が見せ物にされることのないように願います。一族の者たちのためにです。いいえ、貴方ご自身のためにも、そんなことはなさらないでください。何故なら、私の受けました苦難のすべてが分かりますと、今は分かりませんし、永遠に分からなくとも構わないのですが、その時には、貴方を名指しで罵ったり、高慢の鼻を折られてしまいました哀れな娘に対する貴方の卑劣な行いのすべてを語ったりしたくなるかもしれないからです。以前はどなたにも負けないほど誇りを持っておりましたのに　…　でも、何についてかは申せません。私自身の愚かさや虚栄心は別でしょう　…　でも、それは問わずにおきましょう　…　十分に罰を受けている点なのですから　…

　ですから、ベドラムではなく、だれ一人訪れることのない私設の精神病院だとしたらいかがでしょう。そのほうがずっとずっと良いことでしょうね。

　でも、もう一つございます、ラヴレースさん。私がそこに入りました際には、残酷な取り扱いをさせないようにしていただきたいのです。残酷な仕打ちは、もう貴方が十分になさいましたでしょう。そこの人たちには残酷な扱いをさせないようにしてください。大変おとなしくするつもりです。また、どなたが望まれることでも、言われるとおりにしようと思うのです。ただ、貴方がさせようとなさることは別です。それだけは、私、決してしないつもりです。もう一つございます、ラヴレースさん。この善良な婦人には　…　下劣な女性と言うところでしたが　…　あの人にはその点をお話しにならないでください。貴方がこの幸せな避難所へ私を送り届けようと思われても、あの人はそうはさせまいとなさるでしょうからね。もしも、そのことを知ったりいたしますと　…

　もう一つございます、ラヴレースさん。ペンをいただきたいのです。それに、インクと紙を支給してほしいのです。それだけが私の楽しみのすべてになるのです。でも、私が筆にいたしますものを、宛先になっておりますどの方にも発送する必要はございません。ご迷惑を掛けるだけですから。それに、もしかいたしますと、だれかが貴方に危害を加えるということもございましょう。どなたがどなたに対してであれ、私の件で危害を加えるようなこと、私は望まないのです。

　貴方のお話では、ベティ・ローランス夫人とお従姉妹さんのモンタギュー様がお暇乞いのためにお見えになったけれど、私は眠っていて、起こしても目を覚まさなかった、とのことですね。それで、私に向かって最初は、あのように、私は結ばれたのだとおっしゃったわけですね。そして、貴方は私の夫なのだ、とです。あゝ、ラヴレース、言葉に気をつ

けるのです。でも、あの人たちには（あの人たちは私の不幸を冗談の種にするでしょうから）、あのベティ夫人には、あのモンタギュー嬢には、〈当のご本人〉たちでしたら何をなさっても構いませんが、それから、シンクレア夫人にも、夫人の下宿人のどなたにも、さらには姪御さんたちにもですが、私の落ち着き先には会いに来させないようにしていただきたいのです。〈当のご本人〉たちと申しますのは、ラヴレースさん、いずれ貴方の悪行のすべてを暴き出すことになるからです。きっとそうなることでしょう。ですから、出来るだけ早く、私をあそこに閉じ込めるのです。貴方のためなのです。そうすれば、どんなことを私が口にいたしましても、すべてたわごとということになりましょう。たくさんの哀れな者たちの叫びが、疑いもなく、そのようなものとして通るのと同じわけです。もっとも、そこには多くの真実が含まれているのかもしれませんけれど　…　それに、私がおかしくなり始めましたのは、貴方がおっしゃっていたように、ハムステッドでのことですからね。あゝ、何という悪辣な人なのでしょう。貴方には釈明出来ないことなどあるのでしょうか。

❁　❁

わずかなものでしょうが、私に時間が貸し与えられた模様です。筆にいたしましたことに詳しく目を通し始めていたところです。改めて詳しく目を通すことが出来ましたかぎりでは、どなたがご覧になるのにも適当なものではございません。でも、私の頭が最後までは持ち堪えないのではと、心配なのです。ですから、もしも私の衷心からの願いをまだ申し上げていないのでしたら、お話しさせていただきますが、こういうことです。この忌まわしい家から私を遅滞なく運び出し、この街にございますどこか私設の精神病院に閉じ込めていただきたいということです。そのようなところがありそうに思われますからね。二度と姿を見られないためのことです。あるいは、だれの前にも引き出されないためのことです。ただ、万が一にも貴方が私の体を台無しにした科で告発された時の話ですが、貴方自身の弁護に立つ場合は除くことにいたしましょう。地上最大の悪党が奪い去ったものということですが、私の操を踏みにじりました罪に比べますなら、はるかに軽い罪なのですからね。そして、私のこの最後の願いは拒絶なさらぬよう懇願いたします。それから、もう一つございます。つまり、二度と再び貴方と顔を合わせることのないようにしていただきましょう。この点は、当然ながら、ご承諾いただけるものと存じます。

惨めにも虐待されました
クラリッサ・ハーロー

この心打つ手紙に接して貴公が垂れる重苦しい説教には、ベルフォード、耳を貸す気などはないのだよ。だから、その手のものは一言たりとも筆にしないことだな。見てのとおり、紙面がぶよぶよになっているが、冷酷無情な転記者ですら涙をこぼしたのだよ。そのせいで、あちこちインクが滲んだというわけだ。

シンクレア夫人こそ本物の女傑だよ。われわれ全員にしても、彼女にかかっては面目丸潰れだと思う。それに、女そのものでもあるのだよ。貴公は言うだろうな。最善のものが堕落すると最悪のものになる、とな。だが、これは確かなことだよ。つまり、女というの

は執着を持ったものなら、それが何であっても、徹底的にやり抜くということだ。だからこその話なのだよ。男の悪党同士ならただの盗みで済むことも、女が加わると殺人事件になってしまうというのはな。

手管を弄したことに関して、貴公が俺を非難するのは承知している。しかし、激痛を伴う場合には、医者も麻酔剤を処方するのではないのかな。病状の激しさから、患者が極度の幻覚に陥りがちな場合にはだよ。断言しておくが、このような便法に頼った動機は慈悲心であり、その他のいかなるものでも有り得なかったということだ。何しろ、レイプというのは、貴公も知ってのとおり、われわれ道楽者にとっては、望ましからざるものなどでは決してないのだからな。レイプに関して邪魔なことといえば、法律以外には何もないのだし、慎み深い女は口に出して非難したりせず、むしろずいぶんと耐え忍ぶものだという見方が、その点についての律義者の不安を大いに軽減してくれるのだよ。だから、仮にこういった催眠剤が「この際、〈麻酔剤〉という言葉には嫌悪を覚えるのだ」彼女の頭を狂わせたとしても、それは、催眠剤がある種の体質にしばしばもたらす影響なのであって、この場合についても、投与者の意図というよりは、むしろ投与量のほうに間違いがあったということなのだ。

しかし、ワインだってそれなりに麻酔剤ではないのかな。ワインや、他のもっと酔いを誘うご馳走を用いて、弱みにつけ込まれた女がどれほど多いことだろうか。言わせてもらうが、ジャック、受け身の立場にある女の多くの者たちの実体験と、攻める側にある男のさらに多くの者たちの良心に照らしてみれば、貴公のラヴレースが悪党の中でも最悪のものではないことを立証してくれるはずだ。それに、類例を持ち出して身の証を立てるようなところへ俺を追い込んでもらいたくもないのだよ、貴公にはな。

俺の企みの数々が明るみに出る時に、彼女が永続的な錯乱状態を免れるようなら、それこそ俺が危惧すべき点のように思われるのだ。それゆえ、貴公に望みたいのは、俺の行動に対して二通りの解釈が可能な場合には、好意的なほうを当てはめてもらいたいということだ。こうしてもらう義務が貴公にはあるということだよ。単に友情からというだけではないのだ。貴公がすぐにでも罵詈雑言を吐きたがっているような、そういった事実に関する情報を提供した俺の率直さからしてもだよ。

∴　∴

ハムステッドへの使いから、ウィルがちょうど今戻ったところだ。奴の話では、昨日タウンゼンド夫人がムーア夫人のところへ現れたが、屈強の男を三、四人伴っており、離れたところにもさらに大勢いたらしい（推測だが）とのことだ。その女は次のように知らされると、不思議そうに驚いてみせたそうだ。つまり、俺の妻と俺とが完全に縒りを戻したということ、また、俺の親戚に当たる二人の上品な婦人が妻を訪れ、ロンドンまで同行したこと、そして、妻はロンドンで俺と大層幸せにやっているということをだ。女のほうでは、ハムステッド滞在中に結ばれたというのでなければ、われわれは結婚していないはずだと言うのだ。そこで、連中のほうでは、あそこで式が執り行なわれなかったのは確かだが、奥様が幸せに、そして、心安らかに過ごしておられるのは疑いのないところだ、というわけで、ムーア夫人とベヴィス夫人のほうから、夫婦の仲を裂こうとしている連中に向

けて嘲笑の言葉が投げつけられたのだよ。タウンゼンド夫人とハウ嬢とが通じていることは、連中も承知していたからな。

さて、我が麗しの君のほうでは手紙を受け取ることも発送することも出来ないわけだから、俺としても、このタウンゼンド夫人とその雇主のことに関しては、かなり気が楽になっている。想像するに、ハウ嬢としても、事態をどう考えるべきか分かった時には面食らい、ウィルを通信手段とすることに不安を抱くことだろうな。そして、おそらく、友達が自分をないがしろにしているように推測したり、あるいは、気持ちが変わって俺に好意を感じてしまい、それを認めるのが恥ずかしいのだ、などと勘繰ったりすることだろう。何しろ、自分の書いたものへの返事をまだ受け取っていないのだし、あの百姓が自分の最後の手紙を彼女自身の手に渡したものと思い込むわけだからな。

それはそうと、ちょっとした計画が頭に浮かんでいる。新手のものだ。まったくのお遊びにすぎないのだが、目先を変えてみるというのにも、抗し切れない魅力があってな。俺は色恋抜きでは生きて行かれないのだ。我が魅惑の君は情熱を持ち合わせていない。つまり、持っていてほしいと俺が願うような情熱は一つもという意味だ。彼女は俺の崇敬の念をすっかり惹きつけてしまうのだ。俺も今では、新たな悪さに取り掛かりたいというよりも、やってしまったことを後悔したい気持ちなのだ。そして、回復した時に、彼女があの一件をどう受け止めるのか分かるまで、後悔することになるのだろう。

ひとつ俺の計画を話して聞かせようかな。高尚なものじゃない。こういうことだよ。ムーア夫人、ローリンズ嬢、そして、我がベヴィス未亡人にここへ来てもらうのだ。というのも、連中が俺の妻のところを訪ねたがっているのだよ。二人が極めて幸せにやっているというわけでな。それで、うまく段取りをつけることが出来ればだが、ベルトン、モーブレー、ターヴィル、それに俺とで、この悪に染まった都会の習わしについて、婦人たちが現在弁えているのよりはもう少し多くのことを教示してやろうというわけだよ。俺ほどの人物と近付きになりながら、前より賢く優れた人間にならないわけがあるだろうか。だれに対しても願っていることなのだが、道楽者を仮にも罵るのなら、思慮分別を働かせ、知識に基づいて罵ってもらいたいのだよ。この女たちの二人はずいぶんと面倒を掛けてくれたのだ。そして、楽しい一夜を送ることを三人目の女は許してくれるものと、俺は確信しているのだ。

俺がこれほどの栄誉を与えようとしているこの女たちの容姿がどんなものなのか、貴公も知りたがっていることだろう。思うに、連中の容姿の特徴的な点については、これまで何一つ触れていなかったよな。

ムーア夫人は三十八くらいの未亡人だ。重なる不幸に少々痛めつけられてはいるが、しかし、あゝいう連中こそ、火がついたとなると、一番はしゃぐものなのだよ。目鼻立ちは今でも上等なものだし、いわゆるなかなかの淑女ぶりといったところで、体つきも服装も実にこざっぱりとしている。男のことはすっかり諦めているものと思われるのだが、半ば燃え尽きた切り株のまわりで、消えかけている燃えさしが掻き立てられた場合、まだ火種は十分に残っているとも言えるだろうから、パッとばかりに燃え盛り、その傍らで半ば凍え死んでいる者に、心地好い暖かさを提供することも出来るはずなのだよ。

ベヴィス夫人は色っぽい。つまり、ふくよかなのだよ。陽気なことが大好きで、言ってみれば、どんな悲しみだって一週間とその胸に留まることのない人間だ。年の頃は二十五

くらいで、この女をものにするくらい、モーブレーにとってはほとんど造作のないことだろうと確信している。何しろ、すべてを独りでやってのけるわけにも行かないからな。しかしながら、この種の気ままな気質の女というのは、その楽しげで乗り気になっている様子ゆえに、連中に目をつけた男も期待を抱いてしまうわけだが、ことが肝心の点へ差し掛かると、往々にしてそんな男の期待には応えてくれないものなのだ。

ローリンズ嬢は好感の持てる若い淑女としての資格十分てところだな。だが、美人じゃない。分別があるし、いわゆる〈世間通〉と思われたがっている。しかし、その知識というのが、経験よりは理論に負うところが大きいのだ。こういうのはただのホイップの泡みたいな知識なのだよ、ジャック。持ち堪えて役に立ってほしいと思っているのに、信頼を寄せている人間のその期待にいつも背いてしまうものなのさ。というのも、この手の若い淑女というのは、自らの理解力や用心深さを大幅に頼り、それほど自説に固執しない者なら恩恵を受けることにもなるような、そんな忠告にも耳を貸そうとしないため、連中の思い上がりが破滅の元となることが一般的なのだよ。連中の愚かさにつけ込むためだが、連中の虚栄心を満足させたり、賢さを誇張してみせたりする術を弁えているという、そんな経験豊かな男に挑まれた場合の話だがね。しかし、ローリンズ嬢のために、理論の上に経験を加えてやることが出来るとしたら、彼女もどんなにか洗練された人間になることだろう。そして、俺にはどれほど恩義を受けることになるだろうかな。それに、彼女だけではないのさ。今でもすでに教訓を垂れる資格は十分にあると彼女は考えているわけだが、彼女が垂れるその教訓によって利益を得る者すべてについてもそれは言えることだな。俺としては大いに好むところなのだよ、ジャック、教訓を唱えたり範を垂れたりして得意になっている、こういった手合いと一戦交えるのはな。

さて、ベルフォード、これらの人物のいずれを取っても、別に特筆すべきものを持っているわけではない。しかし、切羽詰まった場合などには、連中と楽しく戯れて半日を過ごすことも出来るのだよ。もしも、元気づけるようなご馳走を用い、食卓で連中の固さをほぐした後、連中とわれわれの女たちとをダンスに取り掛からせることが出来ればな。女はだれもが愛しており、それゆえ、男女両方のため、男もすべからく奨励して然るべき、あのダンスにだよ。

こうして、ターヴィルが歌い、ベルトンがバイオリンを奏で、モーブレーが手荒に言い寄り、俺はよどみなく愛を囁くわけだ。そして、ジャック、その頃には貴公も十分に元気を回復して、この合唱に加わってくれることだろうが、それでも、あの連中をわれわれの好みの姿に作り上げることが出来ないとしたら、それこそ悪魔の仕業というものだな。我が方の女どもも、笑いさんざめきながら不躾に振る舞い、普段の慎みをかなぐり捨ててしまうよう、連中に勧めるわけだからな。何しろ女というのは、貴公も知ってのとおり、女が相手となるとすこぶる挑発的で、また、刺激的にもなるものなのだよ。他の女に遅れを取ることとか黙殺されるのを好む者などは一人としていないのさ。すっかり心が燃え上がった時にはな。

俺も承知しているが、真っ先に難問となるのは、我が愛しのラヴレース夫人に〈たまたま〉家を空けてもらうことだろう。連中が計画している訪問相手というのは、主として彼女なわけだからな。ただ、われわれの力で連中の気分を浮き立たせることが出来れば、連中も彼女に会いたがったりはしないはずだ。それに、彼女の不在の言い訳となる話や偶然

の出来事なら、一時間ごとに二十はでっち上げることも出来るのだから、やがては、それぞれの頭を一杯にしてしまうような話題を各人が持つことになるわけだよ。

実際の話、少し浮かれ騒ぎをしたくてたまらない気持ちでいるのだし、これが恰好のものとなることも疑いのないところだ。この婦人たちはすでに俺のことを放蕩者と考えているが、それゆえに俺への好意が減じるというわけではないことも感じ取れるのだよ。それに、連中がお互いの見ている前で大層馴々しい扱いを受けるよう、俺のほうで取り計らうので、連中にしても、それぞれの思いを胸に納めて漏らさないのが得策ということになるだろうな。そして、これは連中に親切を施すことではないのだろうか。近所同士で、今のところはありきたりの恩義を互いに負うているにすぎない三人の婦人を、連帯と友情の永久不変の絆で結んでやるわけだからな。というのも、貴公なら語り聞かせてもらう必要もあるまいが、恋の秘密、そして、この手の秘密こそは、一般的に言って、女同士の友情を最も強く固めてくれるものだからだよ。

しかし、結局の話、我が愛しの君がめでたく正気に戻った場合には、貴公の友の全能力を傾けるに足るような修羅場が、新たなきっかけを探し求めるまでもなく、われわれ二人の間で繰り広げられることになるかもしれないな。俺が何度となく述べてきた点だが、すでに彼女は、何十人という女を救う手段になっているのだよ。ただ、自分では気づいていないだけの話さ。

土曜日　夜

奥様のお振舞いについてというわけだが、ドーカスの説明によれば、我が愛しの君は快方に向かっている模様だ。律義なトムリンソン船長には、出来るだけ早くこの点を通知することにしよう。伯父のジョンに知らせてもらうためだよ。彼女を宥められるよう、少なくとも、彼女の最初の激しい発作を和らげることが出来るよう、あちらの方面から適切な力添えをしてもらわねばならんのだ。

手紙　三十七
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

日曜日　午後六時（六月十八日）

今朝早くに出掛け、つい今し方まで戻らなかったのだが、俺の留守中に、我が愛しの君がその気を起こし、逃亡を試みたという報告を受けた。

彼女は降りて来たのだが、ハンカチに包んだ小さな荷物を携え、頭巾を被っていた。そして、実際に出入り口のところまで来た時に、彼女の姿がシンクレア夫人の目に留まったというわけだ。

「お願いですわ、マダム」と呼び掛けながら、夫人は急いで彼女と表口との間に割って入った。「どちらへお出掛けなのか、是非ともお教えいただきたいのですが」

「どなたにあるというのでしょうか、私を支配する権利が」との言葉だ。

「私にですわ、マダム。旦那様のご命令ですがね」と夫人は認め、両手を腰に当てて肘を張って見せながら、「お部屋へお戻りいただけますと有難いですわね」と言った。

彼女は何か言おうとしたのだが果たせず、ワッと泣き出すと向きを変え、自分の部屋へと戻って行った。そして、見つからずに出入り口まで来るようなことを彼女にさせたというわけで、ドーカスがひどく叱られたのだよ。

この一件は、昨夜われわれも期待したことだが、彼女があの惚れぼれするような分別を取り戻しつつあることを示すものだろう。

ドーカスの言によれば、あの日彼女が姿を見せたのは、あの一件の前に一度だけで、その時には、大層しかつめらしく落ち着き払った様子だったらしい。

顔を合わせる努力をしてみるつもりだ。彼女の部屋でなくてはいけないのだろう、おそらく。食堂ではなかなか会ってくれないだろうからな。もしも彼女が正常な状態に戻るようであれば、男の図々しさのお陰で、俺は女性の慎み深さに対して大変な優位を得ることになるだろう。俺は男の中でも図々しいことでは一番だし、彼女は女の中でも一番慎み深いわけだからな。可愛い女さ。彼女の姿が目に浮かぶようだね。顔を背け、言葉も溜め息に呑み込まれてしまう。きまりが悪く、神経質になっているのだ。伏し目がちな彼女の表情を覗き込み、俺はそれこそ得意満面といったところだろうな。

∴

∴

たった今ドーカスが教えてくれたのだが、彼女が俺を捜しに来るはずとのことだ。俺のことをあの娘に尋ねたのだよ、彼女が。ドーカスは彼女を残して来たのだが、赤く腫れた目を鏡のところで拭っていたそうだ［涙で俺の心を動かそうとの企みなんかじゃあるまいがね］。痛々しいほど俺の大胆さに恋い焦がれながらだよ。それにしても、俺は何のためにこのような所業にまで及んだのだろうな。もしも、肝心の目的を追及するためではないのであればな。几帳面さも少しは解消されたに違いない。彼女も最悪の事態を承知しているのだ。俺から逃げ出すわけには行かないということ。俺には顔を見せなければいけないということ。そして、俺の一瞥で、彼女を愛らしい困惑へと追い込むことが出来るのだということ。これらは俺にとって極めて有利な状況なのだ。彼女に出来るのは、ただ呪い、絶叫するだけではないのかな。俺も呪いの言葉や絶叫には慣れっこだが、ただ、彼女が回復しているのであれば、あんな目に遭った後では最初の、分別をもっての話し合いということでもあるし、果たしてどんな振舞いをするのか、ひとつ拝見することにしよう。

さあ、彼女のお出ましだ。

手紙　三十八
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

日曜日　夜

決して責めないでくれ。この天晴な娘に対して手管を使うという話に乗ってしまったことはな。悪魔や地上の王侯すべてが俺に加勢したところで、彼女が正気の間は、彼女を征服するわけには行かなかったことだろう。

先走ったことを書くつもりはない。ただ、彼女のせいですっかり目が冴えてしまい、た

とえベッドに入っても、眠ることなど考えられない状態でいるとだけ言っておこう。それゆえ、俺としては、二人の間で交わされた奇妙な会話について書き綴る以外、他にはなすべきこともないわけだよ。別のことには一切頭が回らないほど、その会話が強く心に残っている間はな。

彼女はダマスク織りの白いナイトガウンを纏っていたが、その様子はここ数日のような無頓着さではなかった。俺はペンを手にして腰掛けていた。そして、彼女を一目見ると立ち上がったのだが、実に慇懃な態度でだ。依然として勝利は彼女のものだと言わんばかりにな。そして、事実、そのとおりなのだよ。

彼女が大層威厳に満ちた態度で入って来たため、俺はすっかり畏まってしまい、その後の話し合いの中で呈することになる惨めな姿に向けて、心の準備をすることとなった次第だよ。まったくもって惨めな姿なのだな、これが。だが、彼女については正当な扱いをしようと思うのだ。

彼女は足早に近づくと、俺のごく間近までやって来た。片手には白いハンカチを握っており、そのまなざしは厳しくもなければ穏やかでもないが、ただ、極めて真剣なものだった。そして、表情全体からは揺るぎのない落ち着きが感じられるのだが、沈思黙考の結果と見受けられる。そして、彼女はこんなふうに話し掛けてきたのだが、俺にしてもそれに匹敵するようなものはかつてこれまで目にしたこともないという、そんな態度であり、また、身振りだったのだ。

「貴方の目の前におりますのは、どの男性よりも貴方のことを優先させておりましたのに、そのことに対し、確かにそれが相応しいのでしょうが、貴方が罰をもって報いた、その哀れな相手なのです。父の恐ろしい呪いは、現世のことにつきましては、まさにその言葉どおりに、すでにこの身に降り懸かってまいりました。そして、私にはあまりにも明白なことのように思われますが、私の操と同様、魂をも失ってしまうという形で呪いが完全に成就されなくとも、それは貴方の落ち度にはならないということです。操のほうは、何という悪党なのでしょう、貴方が奪ってしまわれましたが、それがあまりに非情で、あまりに人間らしくない卑劣な仕方ですから、どうやら、貴方も、当の貴方でさえ、前もって私の五感が犠牲にされなければ、試みる勇気を持てなかったほどなのです」とだよ。

ここで俺はペンを置き、ためらいながらも口を開こうとしたのだ。だが、彼女が言葉を続けた。「最後まで聞くのです、浅ましい罪人 … 無頼の輩 … 〈輩〉などと申しましたでしょうか、私。でも、他のどんな呼び方があるのでしょうか。獲物を牙にかけて死ぬまで弄ぶという、残虐極まりない獣の行為でさえ、私に対して為された貴方の所業に比べますなら、より自然で、はるかに歓迎されるものだったはずなのですからね。しかも、恩知らずなばかりか卑劣でもある貴方ではありますが、貴方の胸の中でわなないているらしい、その心臓にだけ似つかわしいような予謀と術策とを用いた仕業なのです。貴方がひるむのは当然でしょう。貴方のために私がどんな苦しみを嘗めてきたのか、また、貴方は私にどのようなお返しをしてきたのか、そのことを思い返す時、貴方がそのように震え、よろめき、ためらうのも、また当然のことなのです」

誓っても良いが、ベルフォード、俺の体は全身くまなく震えていたのだよ。彼女の表情や身振りばかりでなく、声までがひどく厳粛で、言い様もないほど心に響いていたからだよ。それに、俺には呪わしいばかりの罪悪感があるし、彼女の潔白さや美点、身分、そし

て、卓越した才能の数々、それらすべてがあの瞬間に、あまりに恐ろしい形相で俺を真っ正面から見据えるものだから、彼女のお陰で思いがけなく引き出されてしまったこの弁明の場が、まるで　…　あの時はそんなふうに考えたのだが　…　われわれの良心がわれわれの告訴人となる際に呼び出されることになっていると言われる、だれもが受ける例の最後の審判に似ているように思われたほどなのだ。

だが、あの弁舌の力のすべてを駆り集めるのには、彼女も時間を要したのだ。あの頭の状態では、おそらく丸一日は掛かったことだろう。それに、俺としても、一瞥すれば彼女をうろたえさせることが出来るものと考えていただけに、失望の度合いが一層大きかったわけだよ。ただ、はっきりしているのは、この比類のない女性が、不当な扱いを受けたという意識から、すべての瑣末な事柄、比較的くだらない事柄のすべてには拘らなくなっているという点だな。

「愛しの君よ　…　愛する人よ　…　私は　…　私は　…　私は決して　…　あゝ、絶対に　…　」といった調子で、唇は震え、手足もガタガタだ。声は低く、口ごもり、途切れとぎれの有り様なのだ。外道がこれほどまでに外道らしく見えたことも、かつてなかったに違いない。一方、彼女のほうはあの雪のように白い手を振りながら、心打つ雄弁の魅力をたっぷり盛り込みながら、言葉を続けたのだよ。

「あなたの全身から窺われます狼狽ぶりに接しましても、私は誇らしくなんて思いません。もしも、この悪の染み込んだ家を抜け出すことが出来ないのでしたら、罪もなく被害に遭った人間としての自覚を持ちながら、この身を破滅に追いやった者にもう一度目を向けることを可能にしてくれます、あの心の落ち着きをせめて授かりたいものと、私は一日中祈っていたのです。ご覧のとおりです。私の受けました仕打ちが言葉の力では表し得ないものであることを考えますと、今私はあなたのために祈ることが出来ますほどの、穏やかな心でおりますことをご覧いただけると思います。十分な後悔の念があなたの心を占領いたしますまでは、あなた自身の良心の働きに悩まされ続けますようにと祈っているのです。今あなたの目の前におります哀れな娘、最悪の敵に遭遇してしまいましたが、その同じ場面で忠実な味方に出会っていて当然であったという、そんな娘には示していただけなかったものですが、あの慈悲心に与る資格を、あなたがすっかり失くしてしまわれないようにとの気持ちからなのです。

でも、教えていただきましょう（何か進めようとしておられる計画がおありなのは疑いのないところですからね）。私は堕落し切った家の囚人となり、この身を守ってくださるとか救ってくださるとかいう味方の人も、だれ一人としていないことが分かったわけですから、教えていただきましょう。守る値もない命ですが、その残り火をあなたはどうなさるおつもりなのかをです。教えてください。さらなる災難がなおも私のためにとってあるのでしょうか。あなたはこの家に遣わされた忌まわしい手先として、あの最大の詐欺師と契約を結んでいるのでしょうか。そして、父の呪いが果たされますためにも、私の魂を滅ぼすことがそのような不埒な共謀関係の勝利を完全なものにすることなのでしょうか。答えるのです。自分が傷物にした相手に話し掛ける勇気があるのなら、さあ、話すのです。あなたの蛮行から、この上さらにどのような苦しみを私は味わうことになるのでしょう」

彼女はここで一息入れた。そして、溜め息を漏らしながら、あの愛らしい顔を俺から背け、ハンカチで涙を拭っていたのだが、それは、懸命に堪えようとしていた、そして、堪

え切れなくなると、俺には見られまいと骨折っていた、その涙なのだよ。

前にも話したことだが、激情の発作や、支離滅裂で一時的な、激しい呪いの言葉に対しては心の備えをしてあったのだよ。こういったすぐにも治まる乱暴な言動というのは、突然の悲しみや恥辱、そして、復讐心の作用なのだが、二人を対等な立場に置き、互いに貸し借りのない状態にしていたことだろう。俺もこういったものには慣れているし、激しいもので長続きするものは一つとしてないのだから、この手のものになら直面しても構わないくらいに思っていたのだよ。だが、あれだけ威厳に満ちた落ち着きぶりだ …… 俺を探し求めているのだが …… 逃げ出そうと試みたことからも明らかなように、顔を合わせるのは避けたかった相手のはずだ …… ルクレティアの如く、我が身に危害を加えるようなことは彼女の念頭にはない …… ただ、彼女自身の言い方を借りれば、言葉の力では表し得ないほどのというわけだが、そんな沈痛な悲しみに呑み込まれているのだな。いわば心のすべてが呑み込まれているのだよ。それも、この朝まで心を乱していたというのに、まるで俺の今後の狙いを見透かしたように、あれだけ急所を突いた質問をぶつけることが出来るとは …… 腑抜けみたいな顔をしたり、前と同じように途切れとぎれの言葉で、ドギマギしながら答えたりするのをどうして避けられるというのだ、この俺に。

「済んで …… あゝ …… 済んでしまったことは …… 私としては、私は、私といたしましては …… 正しくはなかった …… あるべき形ではなかったと …… えーと …… 言わなくては …… 認めねば …… 白状しなければなりませんね …… ただ、あゝ …… ただ …… しかしながら …… 私といたしましては、本当に …… 本当の話 …… 申し訳ないと …… 誓って申しますが、申し訳ないことと思っているのです。それで …… ですから …… すべてのことを …… 一つ残らず …… 何もかも …… 私に責任のあることは何であれやるつもりなのです …… すべて貴女が …… 貴女の …… 貴女の要求なさることは …… 埋め合わせのためです」といった有り様だったよ。

おゝ、ベルフォード、ベルフォード、これで、勝利はだれのものだというのだ。彼女のものかな。それとも、俺のものだろうか。

「埋め合わせですって！　あゝ、本当に見下げ果てた男ですね、あなたは」と、彼女は言っていた。そして、天を仰ぎながら、「おゝ、神よ。こんなにも卑劣な心をした人間の手にかかって堕落する娘に、だれが憐れみを寄せるというのでしょう。でも …… 」と言うのだよ。それから、俺に怒りのまなざしを投げ掛けながら、「でも、あなたのことは（卑劣で下品な心の持ち主ではありますが）、自分自身を憎む気持ちのその半分も憎んでいないのです。自分のことを憎らしく思いますのは、もっと早くにあなたの正体を見破れなかったからなのです。道徳心とか感謝の念、あるいは、人間らしい心を、放蕩児などに期待してしまったからです。放蕩児になりますのには、道徳的な拘束力のすべてを踏みにじり、逆らって来たに違いない(ア)のですからね」と、彼女は言っていた。

次いで彼女は、従兄弟のモーデンの名を呼んでいたが、まるで、気ままな考え方の人間には気をつけるよう、あの男が忠告を与えていたみたいなのだ。それから、両目にハンカチを当てて窓の方へと歩いて行った。しかし、くるりと俺のほうへ向き直ると、蔑みの交

(ア) 彼女に宛てたフィレンツェからの手紙に見られる、従兄弟モーデンの言葉である。第四巻の二十三頁を参照のこと。

じった威厳溢れる態度で［あの時ばかりは、俺もどんなものでも犠牲にしようという気持ちだったよ。彼女を傷つけずに済んでいたのならな］、こう言うのだよ。「どのような埋め合わせを申し出られるおつもりでしょうか。あなたのような者が、こんなにも冷酷非情なやり方で私に嘗めさせました悪事の埋め合わせとして、気概のある人間、あるいは、常識を弁えた人間を相手に、どのようなことをしてくださるというのでしょう」とだ。

「急ぎ、マダム　…　すぐに　…　伯父上が来られ次第　…　それとも、お待ちすることなく　…　」

「多分、おっしゃりたいのは　…　おっしゃりたいことは分かっています。でも、結婚することで、あなたが犯したような罪の贖いになるとお考えなのでしょうか。お友達とお金のどちらにも事欠く状態へと、あなたは私を追い込みましたが、私は、自分の妻の操を自ら奪い取るような恥知らずな人間のことはとことん軽蔑しているのです。ですから、あなたとしては、私がある見方に則ってあなたを受け入れるよう期待しておられるようですが、そのような見方であなたのことを考えますのは、私にはとても耐えられないことなのです」

俺はためらいながらも口を挟もうとした。だが、言わんとしたことも、唇が震えてうまく言えないのだ。口に出来たのは「結婚」という言葉だけだった。それで、彼女がこんなふうに先を続けたのだ。

「ですから教えていただきたいのです。今後の身の処し方につきまして、私は監督を受けることになるのでしょうか。このような自由を尊ぶ国におきましては、君主たる者は貴方のような邪悪な行いに走ってはなりませんし、また、見守ってくれる友達なり親戚なりが、仮に一人でもこの私におりましたなら、貴方もあのようなことを手掛ける勇気は絶対に持ち合わせなかったのでしょうが、そんな自由な国で、私は囚人として監禁され、新たな侮辱を受けねばならないのでしょうか。一言で申しますなら、私が運命の導く場所へと赴きますのを邪魔なさるお考えなのか、ということです」

少し間を置いて、彼女が続けた。というのも、俺はなおも口を噤んでいたのだよ。

「この明白な質問に、貴方は答えられないのですか。私のほうでは、貴方に対する一切の要求、一切の期待を放棄いたします。ここに私を引き止めるどんな権利を貴方はお持ちなのでしょう」

俺は何も言えなかったよ。何が言えるというのだ、このような質問には。

「あゝ、恥知らず」と、差し上げた両手を握り締めながら、こう言うのだよ。「意識を奪われてしまうようなことがなければ　…　それも、卑劣この上ない方法でですが、手口のことは貴方が一番よくご存じでしょう　…　自分自身につきまして、そして、貴方の行為につきまして説明の出来る状態でしたなら、あるいは、せめて一日一日の過ぎて行きますのに気づくことが出来ましたなら、どうやら一週間が過ぎたようですが、丸々一週間を無為に見送るような真似はせずに、今申し上げます点をお伝えしていたはずなのです。つまり、貴方が演じたとおりの破廉恥漢として私に接した男の人には、私を妻にするようなことは決して許さないつもりだということです。私のためを思っての親切なご意向のことは断念していただくよう、伯父に一筆認めるつもりです。私の見通しはすべて閉ざされております。この世に関しましては、もはや救われることのない人間として、自ら諦めることにいたしましょう。厳しい懺悔の日々を送る覚悟ですので、邪魔をしないようお願いいた

します。皆の警告や敵意のすべてが当然すぎるほど当然なものであることを証明いたしました、そんな恥知らずな男と、禁じられました後も文通いたしましたのを悔いてのことです。また、貴方の卑劣な術策にこの身を委ねてしまいましたことも悔やまれるのです。私に残されました唯一の希望を手放さぬよう、努めさせていただきたいのです。私が貴方に求めております埋め合わせといたしましては、これがすべてということになります。従いまして、繰り返しお尋ねいたしますが、今の私は、自分のことを思いのままに扱っても構わないのでしょうか」とだ。

ここで、腑抜けの出番ということになるが、やはり外道そのままで、返事もためらいがちに途切れとぎれだ。「最愛の人よ、私も面食らっているのです。まったく面食らっているところです。何が　…　一体何があったのかを考え、また、だれになのかと　…　そのことを考えますとね。結構でしょう、結構でしょう。貴女の弁舌には抵抗のしようもありません。美徳をただそれ自体のために愛しておられるという、このように説得力のある証拠は、私の読書体験のすべてに照らしましても、いまだかつて耳にしたことも目にしたこともないものです。もしも、このように両膝をついて貴女の許しを懇願しております「ここで俺は跪いたのだが、口にしたことすべてについてまったくの本気なのだ」、悔い改めようとする不埒者を容赦していただけるものであれば、神聖なるもの、公正なるものすべてにかけて誓いましょう（また、これが本心からのことでない場合には、雷に打たれ、貴女の足下で息絶えることを願っているのです）。明日の正午前には、伯父上を待つことなく、あるいは、だれを待つこともなく、結婚によって、今の私に出来ますかぎりの償いをする覚悟でいるということです。そして、その後はずっとお気の召すように私を監督し、指示を与えていただきます。私を今よりももっと、貴女の天使のような清らかさに相応しい人間にしてくださるまでの間です。また、これほどの大きな恩恵を合法的に自分のものと呼ぶことが出来るという、そんな栄誉に浴しますまでは、貴女の着ておられるものに手を触れることさえ無礼と考え、慎む所存なのです」といった具合だよ。

「あゝ、何という奸計に長けた裏切り者なのでしょう、あなたは。あなたが呼び掛けている公正な神様はいらっしゃいます。でも、雷の落ちることはありません。そして、あなたは生き長らえ、呪い、欺くことになるのです」

「我が最愛の人よ！」と、俺は立ち上がりながら叫んだ。何しろ、俺としては、彼女が怒りを和らげてくれるものとばかり　…

「あなたの犯した罪が、許すことも出来そうな程度のものだったのでしたら」と、彼女が口を挟んだ。「また、あなたがこれまで何度も無視してこられた復讐を、このように厳かに約束なさったり祈念なさったりするのは、これが最初のことだというのでしたら、私といたしましても、絶望的な状態に追い込まれているということがございますから、こんなにも不品行な男の人に、成算などはありませんが、ひとつ賭けてみようという考えを起こしていたかもしれません。でも、あなたのために苦しい思いをしてまいりました後で、ほとんど地獄に落ちかけている人と私の魂とを、契約によって結びつけようと願ったりいたしますのは、私にとりましては犯罪行為とも申せましょう」と言うのだよ。

「おゝ、神よ。何という無情なお言葉だ。弁明しようとは思わない。取り消すことが出来るのなら、何卒　…　〈ほとんど地獄に落ちかけている〉とおっしゃるのですか、マダム。〈こんなにも不品行な男〉とおっしゃるのですか、マダム」

「あゝ、あなたの悪事の数々、そして、私の苦難の数々を言い表す言葉の何と舌足らずなことでしょうか。あなたの卑劣さがこんなにも計画的だったとは　…　あなた自身のお身内で、信義を重んじておられる方々の、その名声を悪用するのですからね。しかも、すべては哀れな娘一人を欺くためのことなのです。本来でしたらあなたが　…　でも、何であなたなどに話し掛けたりするのでしょう。あなたの悪事が貴方の頭上に降り懸かりますように　…　もう一度あなたにお尋ねします。今、私は自由の身なのでしょうか、それとも、違うのでしょうか。

俺は女たちのために弁護をしようと思い、連中は実際に本人そのものなのだと言明したのだが　…

「厚かましいですよ」と、彼女が遮った。そして、「卑劣な男ですね、あなたも。この点について一言たりとも、自分を正当化するような言葉は口にしないことです。あの人たちの振舞いのことや会話のこと、また、あなたの不利になるような私の発言にあまりにも易々と同意する点につきまして、私はよく考えてみたのです。慎みのないものでしたが、不自然に他人行儀で軽薄な、あの人たちの物腰についてもです。また、悲しい出来事が私の目を開き、私に与えられましたわずかな時間の間に、実際の事柄と交わし合いました言葉とを突き合わせて見ました今では、私を欺こうとしてあなたが連れてこられた、上品な年配の婦人とは似ても似つかない振舞いをする蓮っぱ女と、あなたが光栄にもご自分の叔母と呼んでおられる立派な貴婦人とを区別出来なかったのが不思議なのです。それに、私に対して貞淑なモンタギュー嬢として通された、あの浅薄な娘さんのことを見抜くことが出来なかった点もです」と言うのだよ。

「ご自分はそんなにも優しい淑女だというのに、驚くばかりの無慈悲さですね。あの婦人たちにしても、貴女に会えたからこそ気持ちが高ぶったのでしょうが、それをこうまで非難されるとは　…　天地神明にかけて誓いますが、マダム　…　」

「あの人たちが」と、彼女は俺を遮り、こんなことを言うのだよ。「確かに、本当にベティ・ローランス夫人とお従姉妹さんのモンタギュー様だとおっしゃるのですね。あゝ、恥知らずな　…　あなたのその物々しい誓い方からいたしまして［俺はまだ誓っていなかったのだが］、残りのことすべてにつきましても、どんなふうに信じたら良いのか、察しはつくというものです。別に他の証拠はなくとも　…　」とだ。

俺も彼女を遮り、辛抱して聞いてくれるように懇願した。俺は次のようなことを話したのだよ。自分が半ば公然と軽蔑され、憎まれていることにはすでに気づいていたということ。彼女の愛情とか信頼とかを勝ち得る望みはないということ。彼女がハムステッドへ移った際に残して行った手紙からも十分に確信出来るのだが、彼女は完全にハウ嬢の影響下にあり、俺が永久に彼女を失ってしまうような処置を講じるに当たっても、彼女はハウ嬢からの返事が届くのを待つだけだったということ。かねてからハウ嬢は俺の敵であったわけだが、疑いもなくあの時のハウ嬢は、彼女が最初にハムステッドに着いた時に書き送った手紙の内容からしても、これまで以上の敵意を抱いていたということ。俺としては、そのような手紙がもたらす結果を耐え抜く自信がなく、ベティ夫人と従姉妹のお陰で（俺の動機を二人は知らないわけだが）、彼女をロンドンへ連れ戻す機会を得たのを嬉しく思ったということ。そして、自分は絶望的になっていたし、彼女が信頼してくれないこともあって、不埒にも手掛けてしまったのだが、そのような暴挙に出る考えはあの時にはなかった

ということ、等々だ。

俺としてはもっと続けるつもりだったし、とりわけトムリンソ船長と彼女の伯父についていくらか触れようと思っていたのだ。ところが、彼女はそれ以上耳を貸そうとしないのだよ。実際、俺の話をここまで聞く間にも、憤慨しているのは明らかだったし、腹立たしげに口を挟むことも何度かあったのだ。

厚かましくも俺は、己の卑劣さを軽減しようとするのか、と彼女が尋ねるのだ。例の二人の婦人は名を騙っているものと確信している。はっきりとは分からないが、トムリンソン船長とメネル氏も同類だろう。ただ、連中がそうであろうとなかろうと、俺が詐欺師なのは確かだ、と言うのだ。そして、短い人生の残りを、自分の思うままに過ごさせてほしいと、彼女は言い張るのだよ。実際、どの点から見ても、俺のことはひどく忌み嫌っており、とりわけ、彼女の承諾を求めて申し出をしている立場の人間として見た場合には、一層嫌悪の念が強くなるからだ、というのだよ。

そして、こう言うと、彼女は身を翻して立ち去って行った。後に残った俺は、話し合いの中で彼女が口にした言葉にすっかり度肝を抜かれ、周章狼狽の体たらくだった。いかに厳しいものとはいえ、あのように異常なほどの落ち着きをもって始められ、あれだけ真摯で気取りのない憤りをもって結ばれた会話だったものだからな。

ここで、ジャック、特に貴公に向かって話すのだが、ひとくさり真面目なことを言わなくてはなるまい。

今までのところ、俺は同棲の件には触れていないのだよ。嬉しいことに、この会話の中のあるヒントから気づいたのだが、彼女は伯父の仲裁のことを完全に疑っているわけでもないからだ。にも拘らず、彼女は俺の今後の狙いに感づき、メネルやトムリンソンのことを疑っているのだ。

彼女が真相解明の光を、手掛かりを、あるいは、何と呼ぶべきかは分からないが、それらを公明正大な手段で手に入れたというのであれば、彼女の洞察力には驚くべきものがあると言っておこう。

しかし、もしも公明正大な方法で手に入れているのではないのであれば、それなら、彼女の疑り深さ、そして、俺に対する反感にも明瞭な説明がつくというものだ。

遠慮のないところを言わせてもらう。まさか、ジャック、俺をカモにするような真似は出来ないだろうな、貴公には。彼女への女々しい同情心から、許し難い背信行為に走るようなことは、まさか貴公には出来るまい。これほどまでに腹蔵なく、心の内を打ち明けて来た貴公の友に対してだ。

このような卑劣な行いが貴公に出来るなどとは、俺には思えないのだよ。しかし、この点に関して、納得の行く説明をしてもらおう。俺も時に応じて躊躇なく誓い、断言することになろうが、そんなふうに誓ったり断言したりしている俺の姿も、彼女の目には忌まわしいものと映るに違いないのだ。もしも彼女が、その間ずっと、俺の背信行為に関する疑いようのない情報を得ていたりすればだよ。男としてのどの点においても、俺が貴公を恐れないのと同様、貴公も俺を恐れたりしないことは承知しているのだ。それに、もしもやっていたのであれば、これだけ厳しく迫られながらシラを切るようなことは、貴公としても潔しとはしないはずだ。

ここで手を休め、貴公の返事をもらうまで、これ以上は筆を進めたくない気持ちに駆ら

れている。
それゆえ、一息入れることにする。
月曜日　午前三時過ぎ

手紙　三十九
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

月曜日　午前五時（六月十九日）
筆を進めなければならない。他のことでは気晴らしにならんのだ。それに、貴公が俺に汚い真似をしたはずはないと思うのだよ。
目を閉じたい気持ちはあったのだが、眠気のほうが消え失せてしまったのだ。ホラティウスが旨いことを言っているぞ。カウリーの訳だがね。

アルキュオーンの熟睡は揺れ騒がしき胸に
　居を定めることなし。
心の内に雲と闇とを見出せども
　それにてはなお十分にあらず。
闇はただ仕事の半ばを為すのみなり。
そは十分にはあらず、静寂をも見出さねばならぬなり（四四）。

とな。
実のところ、今では心の底から願っているのだよ。この淑女と知り合うことがなかったなら良かったのに、とだ。しかし、これほどの女性がこの世にいたなんて、だれが思い浮かべたりしただろうな。俺がこれまでに知った女、あるいは、耳にしたり書物で見たりしたすべての女の場合には、「一度屈すれば、常に従う」というやつだった。最初の抵抗が最後のものとなるのが普通で、少なくとも、その後の抵抗はどんどんと弱いものになって行くわけだから、男のほうでは、抵抗がないのよりも、むしろあったほうが良いと思うくらいなのだよ。だが、もしかすると、これから　…

∴　　∴

もう六時になるところだ。太陽が俺の周りのものすべてを照らし始めて、すでに二時間になる。何しろ、あの偏見のない天体というのは、シンクレア母さんの家にも陽射しを注いでくれるわけだからな。他のどんなものの上にも降り注ぐようにだよ。だが、俺の胸中のものは、何一つとして照らし出してくれないのだ。
夜が明けた時には、我が愛しの君のドアの鍵穴ごしに中を覗いてみた。彼女は宣言していたのだよ。今後、この家では着替えをしないことにするとな。気持ち好くまどろんでいる姿が目に入ったが、彼女の乱れた心にとってはその眠りが、気分を一新するものであってほしいと願っている。肘掛け椅子に体を沈め、エプロンで頭を覆っているのだが、その

頭は綺麗な片方の手に支えられ、もう一方の手は、眠さに生気もなく、体の横にだらりと垂れているのだ。可愛らしい片方の足が半分だけ見えている。

何という違いなのだ、われわれ二人の場合では、と俺は思ったよ。魅力溢れる被害者としての彼女が心地好く眠りに就いているというのに、悪党の加害者のほうは目を閉じることも出来ず、一晩中、塞ぎの虫を吹き払おう、自分自身から逃げ出そうと、無駄な努力を重ねていたのだからな。

ありとあらゆる悪徳は、この現世においてさえ、それ独自の罰を伴うのが普通なのだから、何らかの理由で、来世での懲罰ということに疑いを挟みたくなるとしたら、それはこういう理由からだろうな。つまり、今この瞬間に、俺が自責の念に駆られて味わっているもの以上に大きな苦しみは、まず有り得ないだろうから、ということだよ。

それもやがては消滅してくれるものと願っているよ。もしも消えないとすれば、愛しの君は十分に恨みを晴らすことになるだろう。というのは、男の中でも最も惨めな者になるはずだからだよ、この俺が。

六時

たった今ドーカスが教えてくれたのだが、奥様は公然と、何の隠しだてもせずに、立ち退く準備をしているという。十分に考えられることだな。昨夜俺の元を飛び出した際の彼女の精神状態からして、このような企てに出ることは予想していたのだ。

さて、ジャック、これほど憎まれ、蔑まれるとはな … また、仮に許し難い罪を犯したにしても …

∴ ∴

だが、彼女がドーカスに託して、食堂で俺に会ってくれるという伝言を届けてよこしたのだ。そして、[実に奇妙な話だが]われわれの間で交わされる話し合いの場に、あの小娘が同席するようにとの希望なのだよ。この伝言で望みが出てきたぞ。

九時

けしからん術策だ。悪賢いたくらみだよ。誓って言うが、彼女はすんでのところで俺の指の間をすり抜けてしまうところだったのだ。伝言をよこした狙いは他でもない。ドーカスを離れたところに追いやり、邪魔をなくするためなのだ。この淑女が自らの信念を曲げるとしても、空想上の苦悩にはそれを正当化するに足るものがあるというのだろうか。俺と同様、故意に人を欺くことが彼女にも出来るのだということを、彼女自ら示してくれているのではないのかな。

彼女が表側の家にいて、表口へ出るのに廊下を通る必要もなかったとしたら、間違いなく彼女は抜け出していたことだろう。だが、急いでいたため、彼女も尻尾を出してしまったのだよ。実は、サリー・マーティンが表側の客間に偶然居合わせ、まるでだれか急いでいる人間が出すような、普段よりも慌ただしい動きの音や衣擦れの音を聞きつけ、顔を出してみた。そして、それがだれか分かると、彼女とドアとの間に割って入り、ドアに背を当てて寄り掛かったのだ。

「外出なさるわけにはまいりませんわ、マダム。本当に駄目なのです」

「何の権利があってかしら。よくもまあ、厚かましい」といった具合に、愛しの君は傲然たる態度を取って見せたのだ。一方、サリーのほうは叔母に呼び掛けた。すると、すぐさま半ダースほどの声が合わさって、大きな叫びとなったのだよ。俺に向かって、急いで降りて来てほしい、今すぐ降りて来ていただきたい、とな。

俺が二階でドーカス相手に真剣に指示を与え、あの小娘に立ち会い人になってもらうような会話の話題は一体どんなものだろうかと頭をひねっていたところ、例の叫び声が俺の耳に届いたのだ。俺は飛ぶようにして降りて行った。すると、そこには魅惑の君が、あの愛らしいペテン師がいたというわけだよ。彼女は喘ぎながら仕切り壁を背に、片手に包みを抱えている[女というのは包みを持たずに外出することはないものだ]。彼女の周りを取り囲んでいるのは、サリー、ポリー（もっとも、ポリーは親切にも彼女の弁護役だ）、母さん、メーベル、それにピーターだ（この家の玄関番だよ）。ただし、全員が距離を置いて遠巻きにしているのだ。母さんとサリーは彼女とドアとの中間に陣取っている。穏やかな憤りの中で、愛しの女はこう繰り返していたよ。「私は参ります。どなたにだって権利はないのです。参りますわ、私。宜しいですね、皆さん。あなたたちが私の生命を奪うといたしましても、私、もう二階へは行きませんからね」とだ。

俺の姿を目にするとすぐ、彼女は一、二歩こちらへ歩み寄り、「ラヴレースさん、私は参りますからね」と言うのだよ。「貴方からこの人たちに委任なさっているのでしょうか。この人たちは、あるいは、貴方にいたしましても、どんな権利があって私を引き止めようとなさるのでしょう」とだ。

「食堂で話し合えそうだとの期待を抱かせてくれましたのに、これがそのための準備というわけでしょうか。こんな別れ方が私に出来るとでもお考えですか。こんな別れ方を私がするとでもお思いですか」

「それで、こんな包囲を受けるのでしょうか、私は。このように取り囲まれるわけでしょうか。私とどんな関わりがあるというのですか、この女の人たちは」

われわれを残して立ち去ってくれるよう、俺は女たちに頼んだ。ドーカスを除き全員にだ。あの娘も俺と同じく、急いで降りて来ていたのだよ。それから俺は、決然とした態度を装うのが適当と考えたのだが、おとなしくしていたために、すっかり勝ち誇った顔をされていることに気づいたからだよ。「それじゃあ、そろそろ」と、俺が声を掛けた（嫌がる彼女の足取りを急き立てながらだ）。そして、「表の客間にお入りいただきますか。二階へは上がっていただけないのでしょうから、ここでということにしましょう。この場で話し合いを持っても構わないでしょう。そして、ドーカスに立ち会いを頼みましょう」と、彼女を椅子に座らせ、両手を横腹に押し当てた格好で俺は言ったのだ。「さて、マダム、何なりとどうぞ」とな。

「盗人猛々しい　…　」と、激昂した淑女は言っていた。それから、立ち上がると、窓のところまで駆けて行き、勢い良く窓枠を引き上げたのだ[彼女は知らなかったのだと思うぞ。窓に鉄格子がついているなんてことはな]。そして、通りには出られないことを知ると、例の包みを手放し、差し上げた両手を握り合わせながら、「後生ですから、そこの正直な方。後生ですから、奥様（と、通りがかりの者二人に向かって）、哀れな、哀れな娘が毒牙にかけられ　…　」と、彼女は呼び掛けたのだよ。

俺は両腕で彼女を抱き締めた。窓のところに人だかりが出来始めたのだ。すると、彼女が大声を上げるのだよ。「人殺しです　…　助けて　…　助けてください　…　」とな。そこで俺は、あの可愛らしい陰謀好きな心など（今じゃあ、そう呼んで構わないだろう）ものともせずに、彼女を食堂へ運び上げたのだよ。もっとも、手が届きさえすれば、手摺をあちこちと掴んで、彼女も猛烈に暴れたけれどな。俺は彼女を食堂の椅子に座らせようとしたのだが、彼女はぐったりと崩れ落ち、ほとんど身動きをせず、血の気も失せて顔面蒼白だ。そして、激しい勢いで涙が溢れてきたのだが、幸いにもそれが彼女を救うことになったのだよ。

ドーカスが彼女を憐れんで泣いていた。なんとあの小娘、彼女のために、実際に心を動かされたというのだよ。

激しい興奮状態がこれに続いた。彼女のことはメーベル、ドーカス、それと、ポリーに任せることにしたのだが、ここの娘たちの中では、最後の奴が彼女にとって最も我慢の出来る女なのだよ。

実に断固とした態度で決行されたこの企ては、大いに俺を慌てさせるものであった。シンクレア夫人とあのニンフたちのほうがはるかに心配げだったが、連中の言う、家の評判とやらのためだよ。叫び声を上げた若い娘を差し出させようとして、いくつか無礼な文句を（窓を破るという脅しもあったのだ）投げつけられたからだ。

暴徒のようになった詮索好きな連中が盛んに余計な世話を焼いている時に、どう対処したら良いのか知りたいということで、女たちが俺のところへ駆けてきた。実際に巡査が一人連れて来られたというのだ。

「巡査を客間に通すのだ」と、俺は言った。「野次馬の先頭に立っている三、四人も一緒にだぞ。そして、ニンフたちの一人を、玉葱で目を潤ませている奴だが、すぐに差し出すのだ。頭飾りやネッカチーフが乱れたままの姿でな。そして、自分が例の人物だと白状させるのだ。原因は女同士のちょっとした争いなのだが、正当な扱いを受けたことで、今は満足している、とな。その後で、一人一人に酒の一、二杯も振る舞えば、それですべてはうまく行くはずだよ」とだ。

十一時

すべてが俺の助言どおりに行われ、万事上々の首尾だ。

シンクレア夫人に言わせると、こんなにも御しにくいお嬢さんとは顔を合わせずにおきたかったとのことだ。そして、夫人とサリーがすこぶる熱心に俺をせっついている。連中が「馴らし」と称しているもののために、あの天の邪鬼な美女を四、五日の間預けろというのだ。だが俺は、散々悪態をついて連中を黙り込ませ、以後は警戒を倍加するようにと指示するに止どめておいた。

ポリーのほうでは、一緒にいる間、愛しの天の邪鬼さんを精一杯慰めていたのだが、俺に対しては、脅しつける以外には、我慢の出来るような待遇を得る方法はないだろうと言い張っているのだよ。

涙のことでドーカスが女たちに問い詰められた。あの娘は本物の涙であることを認めていたよ。自分でも恥ずかしくなるが、耐えられなかった、というのだ。あのように優しい奥様があのように心の底から、そして、ひたすらに悲しんでおられるなんて、とだ。

女たちはあの娘のことを笑っていたのだが、俺はあの娘に向かって、涙について詫びることはないし、連中の笑いを気にすることもないと言ってやった。また、次のようにも言っておいた。そんなにも涙もろいのを俺は好ましく思うし、そういった場違いなものにだってうまい利用法はあるかもしれない。要するに、しょっちゅう涙を流してもらって構わないのだし、それに、奥様の身を案じることで、奥様の信頼を勝ち得ることは出来ないものか、ひとつ試してもらいたいのだよ、とな。

あの娘が言うには、涙がこぼれていますよと、奥様は優しく注意してくれたそうで、あの娘にそのような人間らしさの証を見出し、喜んでもくれたというのだ。

「それじゃあ」と、俺は言った。「お前の役目は、それで何かの得があるかどうかは別だが、情に脆くなることだな。それならば、まったく利益にはならなくても、害をもたらすことも有り得ないわけだからな。だが、あまりにも突然に、あるいは、あまりにも差し出がましく情け深くならないように、注意することだな」とだ。

従ってドーカスは、奥様に対しては今すぐにでも、人情を弁えた善良な娘になってくれるものと俺は信じているのだ。また、そういうのが女には似合っているのだし、我が愛しの君としては、女性を高く評価したがっているわけでもあり、そういうところはなおさら大目に見てもらい易いというわけだよ。

俺としては、同棲について一押し（事ここに至ったわけだから）してみようとも考えたのだ。だが、成功の見通しはどの程度あると思うかな。難攻不落なのだよ、彼女は。俺の信念のすべてに反し、また、俺が抱く観念のすべてに反し（彼女を女として、それも、女性的魅力の盛りにあるものと考えているのだが）、まさしく彼女は難攻不落なのだ。差し当たっての俺の狙いとしては、法的に至当な措置を彼女のために取ってやることがそのすべてということだな。もう一度だけでも、あの高みから彼女を引き下ろすことが出来るならの話だがね。

あれだけの女が合意の上でということになれば、いつも新鮮で、いつも魅力に溢れた女になるに違いないな。それにしても、驚いた話だよ。たかが教会の儀式の一つだというのに、それを端折ったりすると、こうも違ってしまうのだからな。

俺に承諾を与える義務が彼女にはあるのだよ。何しろ、これまでの俺には、一つとして誇り得ることはなかったのだからな。俺のほうでは、ただただ痛切な後悔の念と、激しい胸の痛みがあっただけだし、愛が冷めるというよりも、むしろ、一層深まってきたわけだからな。

彼女の誇りに満ちた拒絶の姿勢が、ぐさりと胸に突き刺さるのだよ。それでも、一族の和解への構想や、彼女の伯父とトムリンソン船長についての話には耳を傾けてもらえるものと、今なお期待しているのだ。それに、意に反してでも彼女を引き止める口実を、彼女の方で用意してくれたことになるのだから、気分が落ち着いていようといまいと、俺には顔を見せてもらわなくてはいけないな。それは避けられないことなのだよ、彼女としてはな。そして、愛をもってしても駄目だというのなら、女どもが助言しているように、恐怖心に訴えてみなくてはなるまい。

ともかく、我が愛しの君としても難しい役割を演じなくてはならんわけだ。簡単に許してくれるようなら、おそらく俺としては、計画を再び推し進めることになるだろう。もしも、手荒に拒むようであれば、その手荒さのせいで、俺も自暴自棄になり、新たな暴力行

為を引き起こすことになるかもしれないのだ。彼女としても、ここの女どもの化けの皮は剥がれたと思っているわけだから、自分が今どういう場所にいるのか、その点を考慮に入れるべきだろうな

自分自身にやけに嫌気がさしているところだ。さまざまな趣向を放棄するとなると、戦略を練り、計略を用い、そして、作り話をでっち上げる楽しみを諦めるとなると、俺もただの凡人にすぎなくなってしまうのだ。貴公と同類の、鈍くて退屈な男がもう一人出来上がるというわけだ。とはいえ、俺の陰謀が仮に成功したとしても、不名誉、悔恨、失望の他に、一体何をもたらしてくれるというのだ。だが、この女が相手では、俺も力不足だったのだよ。とんでもない手合い違いだった。彼女をどう扱ったものか、あるいは、彼女なしにどうしたら良いのか、見当もつかないのだ。

手紙　四十

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

たった今、M卿の執事の一人なのだが、サイモン・パーソンズという者から知らせを受け取ったところだ。卿の具合がひどく悪いそうだ。俺が推定相続人になっていることもあって、サイモンは何かと俺に媚びへつらうところがあるのだが、奴は手紙の中で、俺がM邸に姿を見せておくのも的はずれな話ではないようなことを仄めかしているのだよ。それゆえ、俺が辿ることを許される進路、あるいは、強制される進路がどのようなものであるにせよ、歩調を早めなければいかんということなのだ。

老いぼれ貴族殿がご親切にも白旗を振ってくれるなら、この魅力溢れる娘さんにとっても、見通しは決して暗いわけではないのだ。それに、痛風のお陰で、卿にはずいぶんとお呼びが掛かってもいるのだよ。おそらく復帰権付きで、年にたっぷり八千ポンド、あるいはそれ以上の不動産だ。彼女を口説く助けになってくれるはずさ。

プライドはすべて超越しているのだと、この淑女は誇らしげに装っているが、豪勢な暮しの魅力は彼女にも通用するはずだ。豪勢な暮しをしている男の顔は、女の目にはいつだって輝いて見えるものなのだよ。俺も、負債がないだけに、現在のままでも結構立派な資産家ということだな。だが、年八千ポンドということになれば、男としては見事なまでに多種多様ないたずらに取り掛かることが可能になるというものだろう。

おそらく、貴公としてはこう言うだろうな。俺は頭に浮かぶものすべてをすでに手掛けている、とな。だが、それは間違いだよ。半分もやっていないのさ。請け合っても構わないぞ。それに、俺が聞き及んでいるところでは、善良な人間たちでさえ、悪さをする力を持つのが大好きだということだぞ。それを利用するかしないかは別の話だがね。故アン女王(四五)にしても、まことに立派な女性だったのだが、常日頃から、君主の大権というやつを好んでいたのだよ。それで、大臣たちが、女王の名においてだが、女王のこの弱点を行政面で利用した例が一度ならずあるということだ。

∴　∴

だが今、ようやくのことで、我が怒れる美女の面前に罷り出ることを許されたのだ。もっとも、三度拒まれた上でのことであったし、また、食堂で駄目なら、彼女の部屋で会わねばならないという、断固とした言葉をドーカスに託して伝えた上でのことなのだ。

ところが、ドーカスによると、彼女のほうでは、もしも自由の身であれば、俺とはもう顔を合わせたくないと言っているそうだし、隣近所の住人の人柄や暮らしぶりのことを尋ねていたとのことなのだ。察するところ、いよいよ彼女も大声を上げるつもりになっているのだろう。だれか聞きつけてくれる者がいれば、助けを求めようというのだよ。

今のところ、彼女は次のように言い張ってきかないらしい。つまり、悪辣にも俺は、そもそもの初めから、彼女の操を奪うためのことだが、そのような恐ろしい悪事を行うのに恰好の家を用意していた、というのだよ。

ドーカスのほうでは、気持ちを落ち着けてほしいと彼女に懇願しているし、おとなしく俺と会ってくれるよう頼んでもいる。そして、次のように話しているのだ。あの娘が耳にしているところでは、俺はずば抜けて意志の固い男の一人であるということ。俺の場合には、おとなしく出るとうまい具合に行くかもしれないが、ただ、それ以外の態度は一切効き目がないものと信じているということ。それに、奥様は（あの娘は彼女のことをいつもこんなふうに呼んでいるのだ）結婚なさっているのだから、俺が誓いを破ったからといって、あるいは、破ろうという気を起こしたからといって、どうってことはないのではないだろうか、といったことをだ。

彼女としては、十分率直な言い方で、結婚していないことをあの感心な娘に仄めかしたのだよ。だが、ドーカスのほうでは、彼女の言うことを理解しようとはしなかったのだ。

このことからして、彼女がなりふり構わぬ覚悟でいるのは明白だ。そして、彼女がその気であろうとなかろうと、今こそ腕の見せ所ということになるのだよ。

ドーカスが、話し合いの中で俺の口から漏れた情報として、卿が病に伏せていることをそれとなく伝えてくれた。

だが、ここで一休みにしよう。我が愛しの君が今、俺の断固たる伝言に従い、食堂へ入って行ったところなのだ。

手紙　四十一
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

月曜日　午後

同情してくれ、ジャック、哀れと思ってな。何しろ、貴公が駄目だとなると、俺を憐れんでくれる者など他には一人もいないわけだからな。それにしても、俺ほどの才能と明朗な気質に恵まれた人間で、これ以上に憐れみを必要とした者もかつていないのだ。何事であれ、起こってほしくないことが起こるたびに、われわれはそれをすべて悪魔のせいにしたがるのだが、この場合は俺自身が（おそらく貴公はそう言うのだろうが）悪魔なわけだから、俺の災難は天使のせいということになる。察するに、人間はすべからく相反するものによって悩まされるということなのだろう。

俺が食堂に足を踏み入れるなり、彼女はまさしく女そのもののやり方で［過失は彼女に

あるが、責任は俺がとる、というやつだ」、俺に向かって切り出した。彼女が引き起こした騒ぎのことや、俺に面倒を掛けた点については、これっぽっちの謝罪もなければ、これっぽっちの弁明もないのだよ。

「忌まわしいあなたの面前に来ておりますのは、それを避けるわけにはまいらないからです。でも、何故このような家に私は監禁されなければいけないのでしょう。無駄なこととは存じますが、それでも　…　」と、彼女は話し出したのだ。

「最愛の人よ」と、俺は口を挟んだよ。「そう興奮なさってはいけません。ご存じのはずだ。貴女を引き止めているのは、もっぱら、私の力で可能な償いはすべてして上げたいという願いから出ていることなのです。そしてこれは、私のためであると同時に、貴女のためでもあるのです。貴女の受けた不当な仕打ちを埋め合わせる道が、確かに、今なお一つ残されて　…　」

「あなたはこの一週間を消し去ることが出来るというのでしょうか。ここ数週間と言うべきでしょうね。あなたと行動を共にして以来のことです。時間を呼び戻すことがお出来なのですか。もしも、お出来になるのでしたら　…　」

「確かなことは、マダム」と、俺は再び口を挟んだ。「もしも、貴女を私のものと呼ぶことが合法的に許されるようになれば、私はただ先取りをしただけの　…　」

「破廉恥な人間ですね、あなたも。この件につきましては、もう一言も触れてほしくありません。あなたが誓いを立てた時には、ハムステッドで約束をなさった時には、私もあなたのものにならなくてはいけないように考え始めていたのです。仮に、あなたのご親戚と思われました方々の要望に沿って、私が承諾を与えていたといたしますと、その主な動機は次のようなことであったはずです。その場合には、最も必要とされているものをあなたに提供すること、つまり、節操を一切持ち合わせない破廉恥漢に対して、汚れのない貞節を持参金とすることも出来ただろうということです。また、あなたの生き方のせいで絶えず不面目な思いをしてこられたご家族からのお祝いにつきましても、そのお祝いに値する人間なのだという自覚を持ちましてお受けすることが出来ただろうということです。でも、あなたの立派な叔父様に、そして、本当の叔母様たちにも、売春婦のような姪をこの私が与えたりするとでもお考えでしょうか。従姉妹さんたちに対しまして、売春宿出の従姉妹を与えるとお考えなのでしょうか。と申しますのも、私の考えでは、この忌まわしい家は大方そんなところでしょうからね」　そして、握り締めた両手を差し上げながら、彼女はこう言ったのだよ。「偉大にして善なる天の神様、この重くのし掛かります災いに耐え抜く忍耐心をお与えください。今の私には計り知れないことではございますが、賢明で有益な目的のために、貴方様が許可されたことなのでしょうから」とだ。

それから、彼女にはどんな言葉を掛けたものか、また、自分のためには何を言ったら良いのか、そのどちらも分かり兼ねている俺のほうへ向き直り、「あなたとの関係は永久に絶つことにいたします、ラヴレース。心の底から忌まわしく思われます。あなたとは永久に絶交いたします。どこなりとお好きなところで立身出世を求めるのですね。すでに私を傷物にしてしまわれた今こそ　…　」と言うのだよ。

「マダム、貴女を傷物にですって　…　世間では別に　…　」とは言ってみたが、何を話したら良いのか、俺には分からなかったのだ。

「自分自身の目に傷物と映っているのです。そしてそれは、私にとりましては、世界中

の人たちが知っているのと同じことです。私の不可思議な運命が導きますままに進むつもりです。邪魔はなさらないでください。

何故躊躇なさるのです。先ほどもそうでしたが、どんな権利があって私を妨害なさったり、力ずくで二階へ連れて来たりなさるのでしょう。貴方の乱暴のせいで、手や腕が擦りむけているのです。貴方はどんな権利をお持ちなのです、私をここに引き止めるのは」

「まことに激しい非難のお言葉ですね、マダム。この胸の奥を抉っております。貴女に加えました不当な仕打ちのことは、重々分かっているのです。でなければ、貴女の非難に甘んじるわけには行かないでしょうね。悪事を犯し、悪事を続ける覚悟でいる人間は、今私が見せております悔恨の情を示すことはないのです。しかし、貴女は私の手中にあるのだと、もしもそのようにお考えなら、ひとつご注意申し上げましょう。私を自暴自棄にしないことです。私のものになっていただくか、さもなくば、私の生命を奪っていただくかなのですからね。また、貴女なしでは、生きている意味もないのですよ」

「あなたのものになるですって … この私があなたのものにですって … 」と、激情に駆られた美女が言っていた。あゝ、興奮したその姿の何と愛らしいことか。

「そうです、マダム、私のものになるのです。重ねて申しましょう。私のものになっていただきましょう。私の罪そのものが貴女には栄光となるのです。貴女への愛、貴女を賛美する気持ちは、あの一件で一層強くなりましたし、また、それで当然なのです。再びご愛顧を賜りますようお願いしたいと思います、マダム。だが、ひとつ言わせていただきますが、私の手から貴女を奪おうと決意を固めているような、武装した一千人の男にこの家が包囲されることになっても、私の目の黒いうちは、そんな奴らに目的を遂げさせたりはしないということですよ」

「決して、決して貴方のものにはなりませんわ、私」と、彼女は両手を握り締め、天を仰ぎながら言うのだよ。「絶対に貴方のものにはなりません」とだ。

「まだ私たちは多くの幸せな年月を迎えられるかもしれないのですよ、マダム。お身内の方々全員が繕りを戻してくれるかもしれません。そのための協議も、貴女の想像を超える熱心さで進められているのです。貴女も賢い方なのですから、避けることの出来なかった災難に遭ったからといって、ご自分のことを最低と考えたりはなさらないはずです。私に履行可能な和解条件を提示してほしいのです。即座に応じてご覧にいれます」

「決して、決して貴方のものにはなりませんわ」　彼女が繰り返した。

「今回だけは私を許してほしいのです、最愛の人よ。まさに打ち克ち難い美徳だ。貴女に対して、これ以上どんな目論見を抱くというのでしょう、この私が。私が何か不埒な振舞いをさらに試みるようなことはあったでしょうか。私のものになってくだされば、貴女の受ける侮辱は、すべて私に向けられた侮辱となるのです。尋常でない術策が用いられましたこと、見事に言い当てておられます。だが、貴女の貞淑さの証として、これ以上に強力なものが果たして考えられるのでしょうか。そして、今私が希望いたしますのは、完全な償いこそ出来ませんが、ただ、なし得るかぎりの埋め合わせをこの私にさせていただきたいということだけなのです。

何卒、最後までお聞き願いたいのです、マダム（実は、内心穏やかでないことを示す怒りの表情を浮かべ、彼女が口を開こうとしていたのだ）。貴女が仕えておられる神が求めているのは、懺悔と改心だけなのです。神に倣っていただきたいのです、最愛の人よ。そし

て、自分にとっても嫌悪すべきものになり始めているのですが、そんな生き方を改める手段を授けていただきたいのです。それこそ、かつては貴女が力を入れておられた点なのです。再びそれを取り上げていただきたいのです、最愛の人よ。かつての貴女にとりましては無関心では済まされなかったはずと自惚れておりますが、この肉体同様、魂をも哀れと思し召し、もう一度取り上げていただきたいのです。そして、明日の太陽には、私たちの結婚の証人になってもらいましょう」

「私があなたを裁くわけにはまいりませんが」と、彼女が言った。「でも、あなたが大層大胆に言及しておられる、あの神様にはお出来になることです。また、神様のお裁きがきっとあるはずと確信なさるべきです。ただ、実際に良心の呵責を感じておられるというのでしたら、そして、自分の恩知らずで卑劣な振舞いには本当に心を痛めており、私も倣うようお勧めになった、その神聖なお手本を引き合いに出して訴えられたのも、思うところあってのことだとおっしゃるのでしたら、後悔しているかに装っておられるこの折に、あなたのことをとことん調べさせていただきます。そして、あなたのお答えによって、表向き言明しておられる事柄の真意のほどを判断させていただきますわ。

そこで、お教えいただきたいのですが、私の伯父とトムリンソン船長、それに、あなたご自身との間で進んでいるように主張しておられる協定というのは、何か実体を伴ったものなのでしょうか。さあ、躊躇せずに言っていただきましょう。あの話には本当のところが少しでもあるのでしょうか。でも、覚えておくのですね。本当ではないのに、本当だと断言しているのでしたら、あなたの言明に対して、さらにどれほどの非難が浴びせられることになるのかという点をです。仮にも、その言明が私の求めております程度に真面目なものであればの話ですが」

忌々しい一撃だったよ、これは。俺に何が言えたというのだ。慈悲心を持たないこの淑女が俺を地獄に落とすつもりでいるのは間違いのないところだと、俺はそんなふうに思ったよ。それでいて彼女は、自分の魂に対する企みの件で俺を責めるのだからな。だが、俺としては、当初の方針どおりに進まざるを得なかったのではないのかな。

要するに、俺は厳かに誓ったのだ。本当なのだとな。善人たちが言っているように、何か罪を犯すと、一つでは済まなくなってしまうってことだな。

俺は次のように付言しておいた。船長がロンドンに来ており、彼女の体の不調ということがなかったなら、挨拶に伺うはずだったということ。彼女のことで、また、伯父上のためにも、船長は大層心を痛めながら国許へ戻ったということ。ただ、彼女の病気の性質についても、あるいは、いつまでも悔やまれて然るべきその原因についても、俺のほうから船長には知らせておらず、ひどい熱病のように話してあるということ。船長がその後、伯父上からの要望で、二度使いをよこし、彼女の具合を尋ねて来たということ。彼女が回復したことを船長に知らせるべく（そして、船長を通して彼女の伯父にもだが）、手紙を持たせた男を一人すでに馬で送り出しており、二人の結婚を祝う内輪の宴に伯父上のご臨席を賜るよう、船長のほうから働き掛けを再開してもらいたいと、熱心に頼んであるということ。そして、今夜は無理としても、明日には返事が届くものと期待しているのだ、といったことをだよ。

「次にお尋ねいたしますのは」と、彼女が言った（「ハムステッドであなたが私に引き合わせました、そして、私を傷物にしようとしてここへ誘い出した、あの女の人たちについ

ての私の意見のことはご存じなのですから、それでお尋ねするのです」というのだよ)。「実際に、そして、本当に、あの人たちはベティ・ローランス夫人とお従姉妹さんのモンタギュー様だったのでしょうか。いかがでしょう。躊躇せずに言ってもらいます。この質問にあなたはどうおっしゃるのでしょうか」

「いやはや、驚きましたね。あの人たちに疑いを持つとは。だが、あの人たちについて貴女が奇妙な考え方をしているのは承知しているのです。一体何をお話しすれば信じていただけるというのでしょう」

「これが私にお返しになるあなたのお答えなのでしょうか。こんなふうに私の質問をはぐらかそうとなさるのでしょうか。でも、教えていただきましょう。今はあなたの誠実味を試しているところですし、この質問に対するあなたの返答によってあなたが新たに告白なさる事柄を判断しようとしているわけですからね。繰り返しますが、あの女の人たちは本当にベティ・ローランス夫人とお従姉妹さんのモンタギュー様だったのかどうか、教えていただきましょう」

「明日の朝には、最愛の人よ、君のことを正式に私のものと呼べるようにしていただきたいのです。そして、もし宜しければ、その翌日にはバークシャーへ、M卿の屋敷へ向けて出発するのです。あの二人は両名とも今頃は卿のところでしょう。ですから、ご自分の目で、そして、ご自分の耳で確信していただこうと思うのです。私の申し上げるどんなことよりも、あるいは、断言するどんなことよりも、そちらのほうが貴女には信じ易いことでしょうからね」

ところで、ベルフォード、実際のところいくらかは心配したのだよ、俺は。貴公に裏切り行為があったのではないのだろうかとな。だからこそ、あんな情けないはぐらかし方をする羽目になったわけだ。でなければ、前の場合と同様に、これについても、本当のことだと不安なく断言出来たのだよ。ところが、彼女がなおも明確な返答を要求してくるものだから、俺もはったりをかませて誓ってみせたのだ「愛する者の誓いというやつだよ、ジャック」。あの二人は実際に、そして本当に、ベティ・ローランス夫人と従姉妹のモンタギューなのだ、とな。

彼女は両手を差し上げ、天を仰ぎながら、「どう考えたら良いのでしょう。一体どのように考えれば良いのでしょう、私 … 」と叫ぶのだ。

「貴女は、マダム、私のことを悪魔のように考えておられますね。悪魔そのもののようにですよ。でなければ、あんな質問をぶつけた上、疑っているような素振りをなさったりは出来ないはずです。あれだけ厳かに誓って答えた言葉のその真実性をです」

「仮に、あなたのことをそのように考えているといたしましても、理由があるのではないでしょうか、この私には。友達のいない哀れな娘さんのどなたに対してであれ、あなたが私を相手になさったのと同じように振る舞うことの出来る人が、この世には他にもいるというのでしょうか(人間の本性のためにも、私はいないことを願っております)。私には友達もいなくなりましたが、あなたのせいなのです。それも、あなたと知り合いますまでは、顔見知りになってくださった方には、一人残らずお友達になっていただいておりました私ですのにね」

「前にもお話ししましたが、マダム、ベティ夫人と従姉妹は実際にここに来ていたのです。バークシャーへ向けて発つ前に、貴女にお暇乞いをするためでした。ただ、私の恩知

らずな犯罪行為（あれがそのようなものであったことをお認めいたしますが、まことにもって恥ずかしく、また、悔やまれる次第です）の影響のこともあり、会っていただくことは出来なかったのです。また、あの二人が貴女に会うことも、私としては好ましく思えなかったのです。何があったのかが分かったりしますと、あの二人は私のことを絶対に許しはしなかっただろうと思うからです。それに、健康を回復された時に、あの件に関し、貴女が沈黙を守ってくださることを期待すべきどんな理由が私にはあったでしょうか」

「あの人たちの登場する目的が私の操を奪うことで叶えられてしまいました今となりましては、あの人たちがどなたなのかとか、どういう人たちなのかといったことは、もう何の意味もないのです。でも、もしもあなたが、そのように厳かな態度で、二つの嘘を本当のことのように断言しているのでしたら、私は何という破廉恥漢を目の前にしていることになるのでしょうね」

もうこれで、彼女にも納得すべき理由は出来たのだと、俺はそう考えた。そこで、我が人生の中でも最も幸せな日として、明日のことを話題にするのを認めてほしいと頼んだのだ。「私たちには結婚許可証があるのです。それに、こんなことを申して、ご容赦いただかねばなりませんが、貴女のお許しを得るために、私に試みることの出来る方法を一つ残らず試して見るまでは、ここから立ち去っていただくわけには行かないのです」

「それじゃあ私は［と、一種逆上したような粗暴さで］、囚人としてこの忌まわしい家に拘留されることになるのですか。そうなのでしょうか。気をつけるのですね。注意なさることですわ」と、両手を差し上げ、脅すのだよ。「貴方のせいで自棄を起こしてしまいますわ。もしも私が倒れますと、たとえ自らの手による場合でしても、私の血がこぼれたことへの審問があるはずです。ですから、ラヴレース、手詰まりを来たしたりなさらないようにすることです。もしも策を弄しているのでしたらね。間違いのない仕事をなさることです。宜しいですね。この不幸な体を押し込んで隠すのに十分な深い穴を掘るのです。と申しますのは、請け合っても宜しいですが、私が生きております間は私を守るために動くことのなかった人たちの中にも、全力を傾けて、事切れた私の仇を討とうとする者がいるはずだからです」

恐ろしいお嬢さんだよ。まったくの話、俺は震えおののいてしまったのだ。俺のやったとおりに彼女を扱う力を持った、この世でただ一人の男の掌中に落ちた、そんな自分の不幸について彼女は語っているのだが、確かにそうしないではいられなかったのだ。彼女にしても、あのように俺にショックを与え、俺の心をかき乱すことが出来る、この世でただ一人の女ということだよ。従って、その点に関しては、われわれは五分五分というわけだな。そして、俺のほうがずっと割を食っているように思うのだ。というのも、楽しみなどほとんどなく、苦労のほうはたっぷりとあったわけだからな。それに、彼女の言う「私への罰」とやらはもう済んでいるわけだが、俺のがいつになったら終わるのか、一体どんなものになるのか、だれにも分かりはしないのだ。

要点を繰り返しているだけだというのに、ここで筆を置き、歌の一曲も口ずさまずにはいられなくなったよ（だから、あの時には俺もどれほど心を動かされてしまったのか、ひとつ考えてみてほしい）。元気の良い曲にするつもりだったのだが、歌声というよりはしわがれた泣き声で、一月の三十日に唱える例の陰鬱な旋律（四六）になってしまったのだ。もっと威勢の良い調子を出そうと、咳払いをしてみたのだが、効き目はない。そして、最後に

は、まるで罪人みたいに、絞首台で歌う賛美歌のメロディーになってしまったのだよ。
やれやれ、俺はポカンと口を開けたままだ。獲物を漁ってくる母鳥からひょいと口先に差し出されたひよこを飲み込もうとする、巣の中の鳶の若鳥のようにだよ。
一体全体どこを病んでいるというのだろうな、俺は。考えることも出来なければ、書くことも出来ないのだよ。
ペンよ、しばしの間横になって休むのだ。

手紙　四十二
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

「善人になるための苦労と比べると、悪人になるのには十倍骨が折れる」という所見には、確かに、大いに傾聴すべきところがある。一体どれほど多くの趣向を凝らして来たというのだ、俺は。この魅惑的な娘相手に目的を遂げるためにはだよ。そして、結局のところ、どんなに頭を絞ったことだろう。それなのに、あの落とし穴に今にも転げ落ちようとしているのだからな。その穴を避けることこそ、俺のすべての企みの目的であったというのにだよ。これほどの傑出した女性と生涯を共にするのだ。父親の家を捨てるよう彼女を説き伏せた最初の時に、結婚への決意を固めることが出来ていたなら、俺も何という幸せ者になっていたことだろう。しかし、これまでにもしばしば考えていたことだが、あの頃の俺にどうして分かったりしたというのだ。花開き始めたばかりの美女で、秘密の文通を続けたり、名うての放蕩児とこれだけの危険を冒してみせるというのに、それが性向に促されたものではないということをだよ。そしてこれは、俺のような道楽者にその当時は楽しみを与えてくれたわけだが、いずれそのうち、振り返って見た時には、同じくらいの苦痛をもたらすことになるのかもしれないのだ。アリオストの中の「亭主の話」は、貴公も覚えているだろう。それに、俺のばかりか、貴公の経験に照らしても、女の愚かさの証として、フィアメッタ（四七）の二十人は用意することが出来るのだよ。
それはさておき、俺の話を先へ進めよう。
愛しの君は、とことんご執心の話題をまた取り上げ、〈嫌悪すべき家〉を出たいと言い張るのだよ。それも、非常に激しい言い方でだ。
結婚許可証に記された二つの教会のどちらでも結構だが、明日、その祭壇の前で出会ってくれるよう、俺は力説した。そして、彼女がどのように心を固めているにせよ、この件については穏やかな話し合いをさせてほしいと懇願したのだよ。
彼女のほうでは、俺が願い出たことについて、ほんの一瞬でも考慮してもらいたいと思うのなら、彼女が意のままに振る舞うことを妨げてはならないと言っていた。もしも、自分の体とか行動とかのいずれについても、自ら律する力が彼女にないのであれば、彼女の同意を求めたところで何の意味があるのか、と言うのだ。
「貴女には極めて不快な家とのことですが、ここを立ち去られるのに私が同意するとして、マダム、その場合には、貴女の名誉にかけてお約束いただけるのでしょうか」
「私の名誉とおっしゃるのでしょうか。あゝ　…　」と、愛しの君が絶句した。それから、涙を浮かべながら俺に背を向けたのだが、その仕草の淑やかさときたら、真似ようも

ないもので、あたかも、「あゝ、私が名誉としておりましたものは、貴方が奪ってしまったのです」と言わんばかりなのだ。

そこで俺は、彼女の激怒も鎮まりつつあるものと思ったのだ。だが、それは間違いだった。日取りを決めてくれるよう、俺は熱心に迫ったのだよ。それも、互いの名誉のためであるし、また、両家の名誉になることでもあるのだから、とな。ところが、彼女は俺に対し、次のようにひどく大袈裟な、そして、心の高貴さを思わせる口調で答えたのだ。

「すると、ラヴレース、私になさったみたいに、自ら暴力を加え、辱め、操を奪った娘を人の妻にしたいと願うような、そんな卑しい真似があなたにはお出来になるということなのでしょうか。私があなたに似合いの妻となるためには、その前に、あなたの卑しさのその低さまで私を引きずり下ろすことが必要だったのでしょうか。あなたには名誉を重んじるお父様がおられましたし、もっと立派な息子さんに恵まれて当然なお母様がおられました。叔父様がいらっしゃいますが、他のどの国の貴人たちよりももっと立派な貴族を有しております王国の、その貴族階級にとっても決して不名誉にはならないお方です。その他のご親戚もお持ちですが、その方たちがあなたの自慢の種になるといたしましても、あなたがその方たちの誇りになることは有り得ない話なのです。また、あなたには想像出来ないのでしょうか。親戚の方々が呼び掛けている声が聞こえるようには思いませんか。あなたが道路の塵にも等しいところまでその身を卑しめ、女性の中でも最も下等な者の同類にしてしまわれた、そんな娘と夫婦の契りを結ぶことで、長い歴史を誇る名門のお家柄を汚したりはしないようにと、亡くなられた方たちはお墓から、また、存命中の方々は称賛すべき自尊心からですが、あなたに向かって呼び掛けておられる声がです」

俺は彼女の心の大きさ、そして、徳の高さを口を極めて褒め称えた。己の罪業に対して我と我が身を呪い、こう話したのだ。俺が懇願している栄誉は、存命中の者の願いにとってと同様、先祖の霊にとってもどれほど喜ばしいものとなることだろうか、とだよ。

それでも、依然として彼女は、行動の自由を保証してもらいたい、俺が要求する事柄に対してほんのわずかでも考慮を加えることがあるとしても、それは別の下宿に落ち着いてからのことにしたい、と言い張っていた。また、そうなった場合でも、俺に好意を示すようなことは約束したくないし、俺からの訪問を認める気もないと言うのだ。それでは、と俺は尋ねてやったよ。どうして同意したり出来るというのでしょうか。貴女を永久に失う覚悟を固めることになってしまうというのに、とだよ。

彼女は、話している間も、しきりと額に手を当てていたのだ。そして、とうとう、頭の不調を訴えて退席した。両者とも互いに納得の行かない状態だったよ。だが、彼女に対する俺の不満に比べるなら、俺に対する彼女の不満のほうが十倍は強かったのだ。

ドーカスは彼女から目を掛けてもらえるようになったようだが　…

さて、どうしたものだろうな。さあ、どうするのだ。

月曜日　夜

何という意志の堅さなのだ、このお嬢さんは。またもや、危うく逃げ出すところだったのだ。何とも抜き去り難い敵意だよ。今になって分かったのだが、彼女は少し落ち着いたふりをして見せただけだったのだ。疑念を静めるためだ。彼女は階下へ降り、現に表口の閂を外していたのだよ。俺が彼女のところへ到着する前にだ。シンクレア夫人のおさんど

んに急を知らされたのだが、廊下を飛ぶように走る彼女の姿を目にしたのは、この娘だけだったのだ。だが、稲妻だって俺の素早さにはかなわなかったのだよ。

再び彼女を食堂へ連れ戻したわけだが、彼女の嫌がる様子といったら、それこそ大変なものだった。そして、彼女の目の前で、以後は召使を一名いつも階段の下のところに立たせておくよう命じたのだよ。

彼女は悲しさと無念さが込み上げ、息を詰まらせているようにさえ見えた。

ドーカスは極めて献身的な態度で彼女の世話を続けた。そして、自分の意見ということで、自信たっぷりに次のように話したのだ。大事な奥様はここが大変お嫌いなので、別の下宿に移ることを許してもらわねばならない。そんな発言のために命を奪われることがあるとしても、自分としてはそのように申し上げたい、というのだよ。そして、この一件により、それ以後は覚えめでたいドーカスというわけだ。

だが、愛しの君は暫くの間、ただただ激しい感情を爆発させ、荒れ狂ったままだった。

二階へ連れて来た後だが、彼女は、「分かっておりますわ。貴方の新たな告白から何を期待したら良いのかくらい分かっているのです。あゝ、不道徳極まりない男ですわ」と言っていた。

「回復を思わせる落着きの後のこのお苛立ちです。貴女がそうなさって当然と言えるようなことを何か、私はしようとしたというのでしょうか、愛しい人よ」

彼女は両手を固く握り締めた。ヘッドドレスを掻き乱し、フリルを引き裂くのだ。完全に錯乱状態だよ。

彼女の病が再発するのも怖かったのだが、哀願していてはむしろ病状を悪化させることもあり、俺は怒りの態度を装った。懸念すべき最悪の事態に備えるよう言い聞かせ、怖じ気づかせることが出来ればと、脅しの言葉を並べていたところ、俺の足下に崩れ落ちながら、彼女がこう言うのだ。

「今すぐにこの場で、いまわの際にはそう申すつもりですが、この幸せな場所で、私の命を奪ってくださるのが慈悲というものでしょう。貴方に出来る最も情け深い処置というものです」とだ。それから、さらに狂気染みた乱暴さであの魅惑的な首の一部を露にすると、魂を切り刻むような美女は、「ここです。ここに、お慈悲ですから、あなたの刃の切っ先を突き通してください。そうしてくだされば、お礼を申し上げましょう。恐ろしい過去の一切につきまして許して差し上げます。最後の一息であなたを許し、あなたに感謝いたしましょう。あるいは、手段を整えていただけるのでしたら、こんな惨めな人間は自分の手であなたの前から片付けてご覧に入れますわ。そして、その手段を与えてくださいましたことで、あなたに感謝申し上げます」と言うのだよ。

「一体何ゆえのことなのです、この途方もない激情は。感情も露なお言葉の数々は何故なのです。私が何か新たな危害を加えようとしたのでしょうか、最愛の人よ。これはまた何という錯乱ぶりなのでしょう。私は今すぐにも、私に出来るかぎりの償いをしようとしているのではありませんか。望みを抱いて然るべき理由が私にも　…　」

「ありません、ありません　…　」と六度も、口が回るかぎりの早口で彼女は繰り返していた。

「およそいわれのない、そして、極めて無謀な逃走のことを考えているのではなく、むしろ、私を幸せにしてくださり、貴女自身を不幸にしないような方法を貴女は思い巡らし

ているのだと、そう期待して然るべき理由が、私の側にもあったのではないでしょうか」
「ありません、ありません　…　」と、前と同じで、俺の言葉には耳を貸すまいと決意を固めたみたいに、彼女は激しい苛立ちの色を浮かべながら、首を横に振っていた。
「私が心に決めております事柄は、実行に移すのを貴女が許してくださるならの話ですが、極めて信義に適ったものですから、貴女がどちらへ行かれるのかにつきましては、私の訪問を許し、誓いを聞き入れてくださるかぎり、案じる必要はないのです。また、神が私の証人になってくださいますが、貴女を玄関から連れ戻しましたのも、貴女を辱めようとの考えからのことなどでなく、むしろその逆だということです。そして、今この瞬間にも、牧師さんを迎えに使いを出し、貴女の疑念や不安のすべてに終止符を打とうと思っているのです」
「どうぞ、おっしゃってください。その千倍もおっしゃってくださって結構ですわ。そして、一言おっしゃるごとに、神様への厳かな訴えをお添えになるのですね。卑劣極まりない偽りごとを事実と思わせるため、あなたが常日頃から呼び掛けておられたあの神様へです。でも、そのすべてをもってしても、あなたが私に誓い、約束してこられたことには及ばないのです。それに、あなたの偽りに対しましては、現にそのような気持ちを抱いているのですが、仮に、心の底からあなたを忌み嫌ったり、憤ったりすることがないといたしましても、もう一度申しますが、金輪際このような男の方と誓約によって魂を結ぶつもりはないということです。そのような気持ちは一切ございません」
「だが、心を落ち着けていただきましょう、マダム。貴女ご自身のためです。落ち着くのです。お許しをいただいて、立たせてあげましょう。すっかり嫌われ者になってしまいましたがね。
いや、触れてはいけないということでしたら　…　」と、俺は言いかけたが、実は、彼女が俺の手を乱暴に叩いたからなのだ。ただ、まことに魅惑的な、感情をむき出しにした態度であったし、俺を見上げるその胸が波打ち震えていたものだから、俺も本気で腹を立ててはいたのだが、恍惚として彼女をこの胸に抱き締めることも出来そうだったのだよ。
「貴女に触れてはいけないということでしたら、触れずにおきましょう。だが、請け合っても良い［と、自分が装うことの出来る最も険しい顔付きをして見せたのだ。それでどんな効き目があるか試して見ようというわけだよ］、請け合っても構わないが、マダム、こんなやり方では、貴女の恐れている災いを避けることなど出来ませんよ。私が何をしたところで、これ以上ひどい扱いを受けることは有り得ないでしょう。下がっていなさい、ドーカス」
彼女は立ち上がったが、ドーカスが退出しようとしていたのだよ。そして、乱暴にあの娘の腕を掴むと、「あゝ、ドーカス。お前も女なら、私を一人にしないでちょうだい。命令ですよ」と言いつけていた。それから、ドーカスの傍を離れ、部屋の一番奥の隅のところへ行くと、がくりと両膝をつき、座部に顔を埋めながら椅子を抱き締め、「あゝ、安全なのはどこなのでしょうね。どこなら、どこへ行けば、この乱暴者から私は安全でいられるのでしょう」と言うのだよ。
ドーカスにとってこれは、奥様の信頼を確実なものとするための好機となった。俺が激しい怒りの表情を見せている間に、あの小娘は俺の足下に身を投げだし、両膝を抱きかかえると、「私を殺してくださいませ。宜しければ、私を殺してくださいませ。旦那様にはお

邪魔でしょうが、奥様をお救いするためなのです。失礼とは存じますが、だれかに唆されておられるに違いありません。お二人の仲を裂こうとしている人たちに神様のお許しがありますよう、お祈りいたしましょう。でも、旦那様ご自身のお心にいたしましても、横槍を入れられずにおりましたなら、このようなことを許したりはしないものと存じます。でも、お見逃し願います。奥様はお見逃しください。お願いいたします」と言いながら、膝をついたまま、せかせかと俺の周りを動き回るのだよ。まるで、あの娘に静止されなかったなら、俺は奥様のところへ近づく魂胆でいるのだ、と言わんばかりにな。

こんな動きを聞きつけた愛しの君は、俺も調子を合わせ、「失せろ、こいつめ。お節介めが、失せるのだよ」などと凄んだものだから、すっかり度を失ってしまったのだ。慌てて椅子から頭をもたげると、恐怖に駆られ、同じ慌て方で顔を伏せたのだが、おそらく椅子の角に鼻をぶつけたのだろう。どっと血が溢れ出たのだ。そして、その血が一筋の流れとなり、胸を伝って落ちたのだが、恐れのあまり彼女は気に留めようともしないのだよ。

この世の人間で、俺ほどに怯えうろたえた者もかつていなかっただろうな。彼女が何か隠し持った凶器で我と我が身を突き刺したのだと、咄嗟に俺はそんな結論を下してしまったからだよ。

狂わんばかりに苦しみ悶えながら、俺は彼女の傍らへ走った。ドーカスが肝を潰してしまい、仲裁人の真似などすっかり忘れてしまっていたものだからな。

「何をなさったのです。あゝ、何ということをなさったのです。お顔を上げ、僕を見るのです、最愛の人よ。罪なく虐げられた麗しの君よ。顔を上げ、僕を見るのです。何ということをなさったのです。貴女の後、僕も長く生き残るつもりはないのだ」　こう言いながら、自らの命を絶とうとして、俺は剣を抜きかけたのだが、ちょうどその時気がついたのだよ［この魅惑の君は、俺を何という女々しいのろまに変えてしまうのだろうな。それも、思いのままにだ］。俺が危惧したものは、何のことはない、鼻血にすぎなかったのだということにだ。そしてそれは、もしかすると（十五分では止まるわけがないのだから）彼女の頭と分別を守ることになったのかもしれないということだ。

だが、この場面から分かるのは、愛しの娘さんも、根は相当な臆病者に他ならないということだし、俺が険しい顔をしたり怒って見せたりすれば、いつだって彼女を怖じ気づかせ、俺への敵意の矛先を納めさせることが出来るという点だ。とはいえ、このことがもたらしてくれる彼女に対する優位さに水を差すように、これまでは疑ってみたこともなかった点だが、俺自身もまた臆病者であることが判明したのだよ。何しろ、彼女が自害するのではという懸念から、あゝも簡単に怯えてしまったわけだからな。

手紙　四十三

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

しかし、この愛しの君が俺に対してこうまで怒りを燃やしているとは言いながら、彼女はすべてを乗り越え、俺と一緒に囲いの中へと飛び込むことに同意してくれるはずと、俺としてはどうしてもそう思わずにいられないのだ。仮に明日死ぬことになっているとしても、そして、そのことを承知しているとしても、あれほどの分別と几帳面さを備え、あの

ような立場におかれているのだし、あれだけ誇りを持っている一族の娘なのだ。結婚した身で死ぬことを何よりも彼女は望むのではないだろうか。疑いの余地もなく、そうするはずなのだ。相手の男を心底憎んでいるとしてもだよ。もしもそうなら、今の彼女には、自分のものに出来る男というのは、この世にただ一人しかいないのだ。そして、それはこの俺というわけだよ。

ところで、俺と一緒に囲いの中へ入るなどと、俺のお喋りが弾んでいるゆえ［打ち解けた私信というのは、談話と変わるところはないのだよ、ジャック］、貴公としては、この点についての俺の意図を質したく思っていることだろうな。承知の上だよ。

貴公にはこの胸の内を、俺自身が承知しているかぎりについて語り聞かせることにしよう。彼女から離れている時には、今でも結婚については躊躇せずにいられないし、結婚など止めようと心に決め、俺の得意の同棲計画を強行しようと決心することさえしばしばあるのだ。ところが、彼女と一緒になると、彼女にとって一番受け入れ易いだろうと思われることなら何であれ、すぐに口に出し、誓い、実行に移そうとするのだよ。そして、もしも牧師が近くにでもいようものなら、その場で結婚生活に飛び込んでしまうのは疑いようもないところなのだ。

しばしば俺は、一般論としてだが、多くの軽薄な男にとって［軽薄な娘というのがいるが、ジャック、軽薄な男というのもいるのだよ。そして、その手の男というのは、その手の娘と同様、おそらく、だまされやすいものなのだ］、次の点は幸福なことだと考えているのだ。つまり、取り消すことの出来ない厳粛な結婚にとっては、儀式やお披露目が必要だということ、そして、興奮状態の前夜と冷静さを取り戻した翌朝との間には、通常、男が心を静めるための時間もあるという点だよ。そうでもなければ、あの愛らしいジプシーどもの手を逃れることの出来る者など果たしているのか、俺には分からないな。連中に備わる魅力というのは、われわれ自身の掻き立てられた想像力にずいぶんと助けられているわけだからな。

「女房の一人くらいいつだって」というのが俺の口癖だった。日頃から俺にはたっぷり自信もあれば、自惚れ心もあって、こちらが手を差し延べているのに、結婚を拒むことの出来る女などこの世に一人としていないと考えていたのだ。俺を寄せつけず、また、俺の本心からの誓いをすべて撥ねつけることもこの淑女には出来るのだと知った今、俺としては、忌々しいまでの屈辱感を味わっているところなのだよ。

悪癖というやつは、人間の心に対して何という力を［生真面目な感想になるが、勘弁してくれ、ジャック。いずれは終わることだ。繰り返して言うが、何という力を］及ぼすのだろうな。脇道に入り込むとわれわれは、正しい道へ戻ることくらい、その気になればいつでも自分の力で出来ると考えるのだ。だが、そういうものではないのだよ。はっきりと分かったことだがね。何しろ、この愛すべき者の長所と自分自身の過失について、俺以上に公正な態度で認めることの出来る人間などいないわけだからな。その後悔の念が、時として、彼女に加えた無礼を悔やむ俺の気持ちよりも痛切だという人間、そして、その無礼を償おうという決意が俺以上に強いという人間などはだよ。それでいて、俺の改悛の情はほんの束の間に薄れてしまうのだ。俺はひどく駆り立てられているわけだが、何によってなのか、貴公には分かるかな。あゝ、若気の過ちよ、陰謀に耽る心よ、汝らはどこまで俺を惑わすのだろうか。気紛れ心から始めることだというのに、痛切極まりない悔恨へのき

っかけとなって終わる場合の何と多いことだろうか。

だが、こうして筆を執っている今、情勢は結婚のほうへ傾いている。というのも、俺のお気に入りの点を彼女に対して押し通すことは諦めているからだよ。

令嬢は、悲嘆のあまり胸も潰れる思いだということ、そして、あとわずかな命しか自分にはないはずだということをドーカスに話している。その点については、二人が結ばれるならの話だが、俺としては意に介していないのだ。先ず何よりも、女ならだれでも非常な満足感をもって期待するあの暮しの中で、不安のない心というものがどれだけ助けになるのか、彼女は知らずにいるからだ。同じように、教皇選挙会議を構成する聖者一同にしても、教皇を選ぶに当たって間違いを犯した場合が何度あったことだろうか。新たな地位それだけで、新たな生き方をもたらすのに十分なのだということには考えが及ばないからなのだよ。二、三ヶ月の間安らかな気持ちでいてくれれば、我が魅惑の君にしても、事態に関してまったく別な考え方をしてくれるはずなのだ。それに、これまでにも言ってきたことだが(ア)、おそらく、一度夫婦の絆を結ぶと、俺は生涯軛に繋がれることになるだろうと思うからだよ。

彼女の面目がある意味で失われる羽目になった点は認めることにする。しかし、その他のすべての面では、彼女の勝利のほうが大きいのだよ。それに、彼女の試練はすべからく彼女の名誉を増大させるものに他ならないのだし、俺自身の恥辱の上に彼女の栄光の基盤を据えてやったのだと考えることの出来る間は、たとえ、どこかの男どものように、彼女の悲嘆ぶりに心を動かされることはないとしても、この俺が残酷無情呼ばわりをされて良いものだろうか。

それに、何故に彼女の胸は潰れるというのだろうか。彼女の気持ちは踏みにじられていないのだよ。ともかく、今のところ彼女の意思は侵害されてはいないのだ。良い習慣をぶち壊し、悪い癖への手ほどきをして、心を丸ごと堕落させるようなら、それこそ侵害ということなのだ。彼女の精神が堕落することはなく、彼女の心が卑しめられることもないというのは、これまで疑念を挟む余地もないほどに彼女が証明して来た点だ。それに、彼女がさらなる試練への種を蒔き、そして、あの高潔さを堅持するとしたら、彼女の品行を堕落させる可能性のあるどんな考え方について、彼女は説き及ばねばならなくなるというのだろうか。名残の品にせよ思い出にせよ、すべからく、操を狙う男への嫌悪の情を誘うものだけになるのではないだろうか。

だとすれば、彼女が受けたような単なる観念上の侵害行為に、生命の糸を断ち切る力があるなどと考えるのは、途方もないたわごとではないだろうかな。

このような些細な出来事、心ならずも被ったこの種の災難を、自分にとって致命的なものにしてしまうような愚かな真似は、結婚しているとかしていないとかに関わりなく、彼女の宗教心が許さないはずなのだ。

恐ろしい結果を案じる気持ちのすべてに対し、俺の支えとなっているものがこういった考えなのだ。そして、俺としては、そういった考えが貴公にとっても大きな意味合いを持つよう願っているのだよ。彼女のこととなると、そんなにも勇猛果敢に弁護をしてみせるわけだからな。ただ、次の点は認めてやろう。実際の話、彼女は事態を重大視し過ぎてい

(ア) 二百十三頁を参照のこと。

るのだ。あまりにも深刻に受け止め過ぎているということだよ。これ以上事を進めなくても生じるのではないかと、俺としては今でも期待しているわけだが、そんな楽しい楽しい結果が訪れるということでもなければ、彼女にしても、確かに、そろそろ忘れてしまって良い頃合なのだ。また、彼女自身のほうにもこの点への不安があるというのであれば、几帳面に過ぎる愛しの君としては、あれだけ深刻に受け止める理由がいくらかはあることになるな。とはいえ、嫡出と認めることを拒んだりはしないだろうと思うのだよ。

あゝ、ジャック、誓って言うが、たとえ俺が王冠を戴いているとしても、この淑女との間に玉のような男の子を一人授かるのなら、王冠などは放棄するつもりだよ。それも、俺の敵にだって譲りたい気持ちなのだ。そして、仮にも彼女が俺の元を逃げ出すようなことになり、また、今触れたような結果が出ないようであれば、彼女の一族に対しての、そして、その結果を見ない場合は彼女自身に対してもだが、俺の復讐も終了することはないだろうし、命のあるかぎり、我と我が身を咎め続けることにもなるだろう。

足場は固まっているのだと確信出来るなら「また、そうだと期待していけない理由はあるのだろうか」、今なお俺自身の条件で彼女をものにすることに（彼女が悔恨の日々を耐え抜くならばだ）疑念一つ抱かないだろうし、もしもそうなれば、彼女の胸に愛情が蘇ってくるのに疑いを持つこともないはずだ。嫡出であろうと庶出であろうと、自分の最初の子供の父親に対して、女がほぼ間違いなく抱くことになる、あの愛情がだよ。

それに、たっての願いなのだが、ジャック、俺のこの熱烈なる希望の中に、俺の有利に働くような、他の放蕩児たちとは異なる点を一つ見つけてほしいのだ。あの連中は、ほとんど一人残らずだが、結果について頭を悩ますことなどなしに、勝手気儘に振る舞っているのだよ。王侯さながらに、快楽を求めて牝の小鳥を次々に追い回し、挙げ句には、艶やかな羽毛で身を飾った情婦たちが、自分たちで見つけ出した穴の中や人目に付かない片隅で婚姻の産物を孵すのを放任している、あの偉そうにのし歩く牡の小鳥の真似をしているのだと、そんなふうに人は考えることだろうがね。

第五巻　目　次

手紙　一　ラヴレースからベルフォードへ
ドア越しに交わしたクラリッサとの会話。氏に宛てた彼女の手紙。一週間は会いたくないとのこと。

手紙　二　同　右
二人の間で交わされた数通の手紙の写し。結婚許可証の取得を目指し、民法博士会館へ赴く。帰宅後には彼女に会ってもらうつもりであることを言明。愛情と同情とは区別し難いということ。二人の現状についての一貫性のない論法。彼女の卓越した美質を妬ましく思う。彼女の揺るぎない美徳に関しては正当に評価。

手紙　三　同　右
令嬢が逃亡。彼の激怒。今一度彼女を手中にした暁にはと、復讐を厳かに誓う。下僕のウィルが彼女の探索に向かう。氏が望みを掛けている点。その根拠。尋ね人の広告を出そうとする。彼女の服装を描いてみせる。後に残されていた手紙のこと。気難しさ、淑女ぶり、気取りについて彼女を咎める（つまり、ラヴレースのような者が彼女を咎めているのである）。

手紙　四　同　右
ハウ嬢に宛てたクラリッサの手紙（四八）が氏の手中に落ちることとなる。もしも彼女の手に届いていたなら、氏の企みのすべてを明るみに晒していたはずのものである。ハウ嬢はその文面において、クラリッサに向けられた淑女ぶり、媚び、ならびに、過度の慎みに関する嫌疑を晴らして見せる。困難極まりない状況下での行動によって、女性に範を示した点について、また、女性の面目を施した点に関し、彼女を賛美し、称え、祝福している。

《この手紙はクラリッサの試練、迫害、および、これまでの模範的な振舞いについての一種の要約、そして、ハウ嬢が承知していると思われる、あるいは、推測していると思われるかぎりでのラヴレースの陰謀、策略、ならびに、意図についての要約と見做されて構わないだろう》

ラヴレースからの一通の手紙。氏の陰謀の才の豊かさをさらに証明するもの。

手紙　五　クラリッサからハウ嬢へ
ラヴレースの悪行と自らの逃走について知らせる。唯一の心配ごととは何か。今後の行動予定。

手紙　六　ラヴレースからベルフォードへ
下僕のウィルから令嬢がハムステッドに身を隠したことを聞き、躍り上がって喜ぶ。彼

女が残していった手紙の数箇所に関する軽薄な文体による所感。目的遂行のための助けとして、トムリンソン船長が到着したことを仄めかす。チャリオットが到着する。そして今、花婿のように着飾り、彼女が一度も顔を合わせたことのない従僕を伴い、すでにハムステッドに来ているとのこと。

手紙　七、八　同　右

己の策謀に得意満面となる。いかなる手段によってムーア夫人宅で令嬢の面前へ罷り出るか。彼女の怯えよう、気絶、叫び。ムーア夫人およびローリンズ嬢に明かした氏の尤もらしい話。令嬢に対する大胆不敵な態度。トムリンソン船長からの手紙と、氏の身内からのものとされる手紙の写し。彼女を宥め、欺くよう計算されたもの。

手紙　九、十　ラヴレースからベルフォードへ

氏のさらなる手管、企み、そして、不敵さ。彼女が核心に触れた質問をぶつける。彼女は氏のことを狭量な恩知らずと称する。氏は自分が辱めた心の価値を知らないのだという。彼女を父親の屋敷から欺いて連れ出した後、氏の前途は平坦なものであったにも拘らず、今や、彼女の心は運命を超越し、氏の手の届かないところにあるとのこと。氏が用意した予防措置としての企み。

手紙　十一、十二、十三、十四、十五、十六　同　右

ベヴィス未亡人の人柄。ハウ嬢に関する悪い先入観念を婦人たちに吹き込む。婦人たちにはハウ嬢が自分に恋をしているように思い込ませる。自分自身、その考えに傾いているという。その理由。女性はうぶな男性を好まないということ。その理由。女性の間で一般的な警句に向けられた批判。トムリンソンが到着。作為に満ちた二人の会話。ローリンズ嬢の淑女ぶった様子。ハウ嬢の手紙（手紙四参照）を模して捏造された氏の手紙。令嬢を欺き、婦人たちを味方に引き入れるためのその他の策略。

手紙　十七、十八、十九、二十　同　右

氏、トムリンソン、および令嬢の間で交わされたいくつかの会話の詳細。前二者の狡猾な術策。令嬢の気高い心。氏は、彼女の面前で、愛情の証は一切得ていない旨をトムリンソンに語る。かつては氏に思いを寄せたこともあると、彼女は率直に認める。氏が一度ならずその点を彼女に白状させていたことを、トムリンソンと氏に向かって彼女は話す。また、自惚れの強い氏がその点に疑いを抱くこともなかったはずと、彼女は確信している。氏は百度も彼女の魂を宙ぶらりんな状態に保ってきたということ。彼女の高潔な振舞いと崇高な感慨により、男性両名は代わる代わる心を打たれる。彼女の怒りを和らげようとする二人の嘆願、祈り、申し立て。彼女の苦悩。

手紙　二十一、二十二　同　右

令嬢のためにトムリンソンと交わした条件付きの約束。二人の置かれている現状、ならびに、氏お気に入りの、これまでは達成されなかった目的に関する訴えと論拠。良心との奇妙な葛藤。良心ときっぱり袂を分かつことを表明。ベルフォードの叔父の死に際し

ての異様な軽薄さ。氏はこれを生真面目さと称している。

手紙　二十三、二十四　同　右

令嬢が庭での面談を許す。令嬢の落ち着いた様子。その会話が崇高で高尚なこと。ただし、氏に有利な決定は一切行わない。しかしながら、今も自分に対していくばくかの愛情を温めているのは明らか、と氏は言う。氏なりの根拠。二人の間での心打つ場面。令嬢の純真で率直な心。令嬢は礼拝式に出ることを決心するが、氏の同伴を認めようとしない。令嬢の弁護役として導入しているわけであるが、愛の神との奇抜な問答。

手紙　二十五、二十六、二十七　同　右

待ち望んでいたハウ嬢からの手紙を入手。入手の経緯を教える。ハウ嬢からの手紙についての意見。女性同士の友情に関する所感。クラリッサとハウ嬢とを比較対照。

手紙　二十八　同　右

令嬢との再度の会話。令嬢の愛情を取り戻そうとする氏の尤もらしい論議も効果を上げない。プライドを刺激される。復讐心を煽られる。邪悪な企てにとって有利となる新たな論拠。実際に結婚許可証が得られたとの通知を受ける。

手紙　二十九、三十　同　右

結婚許可証の写し。併せて、結婚許可証についての感想。結婚一年制に関する企画。ベティ夫人およびモンタギュー嬢と共にクラリッサを訪れる準備。これらの婦人を詐称した者たちの正体。その服装。婦人たちは上流を気取る。装った身分に相応しい振舞いをするよう、おどけ半分に婦人たちを指導。

手紙　三十一、三十二　同　右

氏の魂を魅了する者が前の下宿へ再び戻る。恐るべき詐欺行為の手短な説明。追想のうちに復讐心を促され、冷酷非情な心を固める。苦悶に満ちた令嬢の不安。一時的な狂乱状態。すぐにも気を失いがちになる。だが、彼女の苦悩、祈り、無垢な心、美徳のすべてをもってしても、極悪非道の破廉恥行為からその身を救うことは出来ない。

手紙　三十三　ベルフォードからラヴレースへ

激しく氏を罵倒。令嬢のために深く悲しむ。不当に扱われた功績を正しく評価するためにも、来世というものが必ずや存在することを今は確信しているとのこと。氏も人の子であり、悪魔ではないのであれば、今の氏に出来るせめてもの償いをするように懇願。

手紙　三十四　ラヴレースからベルフォードへ

令嬢の操を狙ったりしたことを後悔。情状酌量を目指す。最初から確定的な一点を見据えつつ、この段階へとはるばる進んできたことが分からないのか、と問うている。令嬢は今のところ無感覚な状態にある、と氏は言う。

手紙　三十五　同　右

錯乱状態の中での令嬢の心打つ振舞い。彼女に対して手管が用いられたことを白状。悔恨の情を感じ始める。

手紙　三十六　同　右

令嬢は紙片に文字を連ねるが、それを引き裂き、テーブルの下に投げ捨てる。これら取り留めのない十枚の紙片の写し、ならびに、心痛むまでに脈絡を欠く、氏宛の手紙の写し。己の悪行のさらなる軽減を図る。いつもの軽薄さを取り戻そうとし、ハムステッドの住人をロンドンの破廉恥女の家へ誘い込む計画を立てる。

手紙　三十七　同　右

氏の留守中に令嬢が逃亡を図る。忌まわしいシンクレアによって阻止される。面会の際には、自らの一瞥によって彼女をうろたえさせることも出来そうだと思い、喜ぶ。氏を捜し求め、彼女が食堂へ向かっていることをドーカスから知らされる。

手紙　三十八　同　右

気高さに満ちた令嬢の振舞いと、打ちひしがれた氏の行動とを示す高揚した場面。結婚による償いを令嬢に申し出る。彼女は氏の申し出を軽蔑をもって一蹴。ベルフォードの裏切りを懸念。

手紙　三十九　同　右

令嬢とは会わなければ良かったと願う。これまでに知った女性すべてについては、「一度屈すれば、常に従う」ということであったとのこと。惨めな落胆ぶり。後悔。令嬢が逃亡を試みる。野次馬が集まる。それを鎮めるための咄嗟の工夫。自分自身に対し、また、自分の趣向に対しても、愛想が尽きているとのこと。

手紙　四十、四十一　同　右

M卿の体調が極めて良くない。M邸ではラヴレースの同席が必要となる。ドーカスを唆して奥様に取り入らせる。再び令嬢に結婚を迫る。崇高この上ない動機から、令嬢は断固として拒絶。

手紙　四十二　ラヴレースからベルフォードへ

我が身を振り返る。悪事は善行よりも骨が折れるという。令嬢からの厳粛な諫め。彼女の心の大きさを褒めたたえる。ドーカスが令嬢の愛顧を得つつあるということ。令嬢の再度の逃亡の試みに警戒心を抱く。妨げられ、令嬢は悲痛な思いに沈む。氏は脅しを試みる。ドーカスが令嬢のために嘆願。危うく我と我が身に刃を向けそうになる。そのきっかけ。

手紙　四十三　同　右

令嬢は自分のものになるはずとの思い以外には、今も得心の行く考えは浮かばない。そ

の考え方の根拠。令嬢に対する目論みに関し、胸中をベルフォードに打ち明ける。自分の誠意ある誓いを令嬢が断ることで、屈辱を味わう。令嬢の受けた侵害行為は観念上のものにすぎないということ。令嬢の勝利は苦難に勝る。令嬢の意思は踏みにじられていない。大半の放蕩児よりも自分は善人だと氏は言う。その理由。

（第五巻終わり）

訳　注

（一）（一一二頁´一一〇行）「どなたか神よ　…　」…Nicholas Rowe, *The Fair Penitent*, III, i. に見られる´ Horatio の台詞。

（二）（一一八頁´三一八行）ホルボーンバーズ（Holborn Bars）…Holborn は旧 London の Metropolitan boroughs の一つで´ the City の北西部に位置する地域。通行税を徴収する関所があった。イギリス法曹界の中心地でもあり´かつて法学院であった Staple Inn は観光スポットとして有名。

（三）（一一二頁´一一三行）「食欲の求めに従って　…　」…*Valentinian. A Tragedy as˘ tis altered by the late Earl of Rochester* (1685), IV, ii.（Ross）元来は´ John Fletcher (1579 – 1625) 作の悲劇であり´一六一〇年から一六一四年の間に上演された。

（四）（一一二頁´一一三行）「以前にも優る完全さで　…　」…Nathaniel Lee, *Caesar Borgia, Son of Pope Alexander the Sixth. A Tragedy* (1679), II, i.（Ross）

（五）（一一三頁´六行）ヘロデ大王が妻のマリアムネに注いだような愛情…ユダヤのヘロデ大王は才色兼備のマリアムネと結婚するためにその父と兄を殺した。また´故あって彼女と彼女との間にもうけた息子二人の命も奪っているが´その後は´彼女への想いに苦しんだという。Josephus, *Antiquities of the Jews,* XV. iv and x. 及び´Addison, *Spectator,* No.171 を参照のこと。（Ross）なお´第三巻の訳注（一一）も参照のこと。

（六）（一一九頁´一六行）スペイン語を学ぼうとしたニック・ローの勤勉ぶり…Nicholas Rowe が公職の道を求めて Oxford 伯爵を訪ねると´伯爵はスペイン語の習得を勧めた。その後´Rowe が伯爵を再訪し´スペイン語を習得した旨を伝えると´伯爵は´「羨ましい話だ。ドンキホーテを原文で楽しめるというのだからな」と言って´Rowe を追い返したとのことである。（Ross）Samuel Johnson, *Lives of the Poets* (Everyman˙s Library, 1964), I, p.322 を参照のこと。

（七）（四五頁´八行）プラント型チャリオット…一七世紀中葉に活躍した王立協会会員の Thomas Blount (or, Blunt, *fl.*1668) は´懸架装置と作動に改良を加え´人馬両方にとって負担の軽い馬車を考案していた。（Ross）

（八）（四五頁´三四行）アッパーフラックス（Upper Flax）…アッパーフラスク（Upper Flask）のことである。第四巻の訳注（四九）を参照。

（九）（四六頁´三九行）「騙される楽しさは　…　」…Samuel Butler, *Hudibras, Part First*, III, 1 – 6.（Ross）

（一〇）（四九頁´四〇行）「バラ色の指をした夜明けが　…　」…Dryden, *Albion and Albianus. An Opera* (1685), II.（Ross）

（一一）（五三頁´五行）キャッスルオンザヒース（The Castle on the Heath）…旅籠か居酒屋の名であろう。訳注（一一八）で解説されているものと同一と考えられる。

（一一二）（五六頁´三〇行）飼い葉桶に入り込んだ犬…「イソップ寓話集」の中の話からで´自分にとっては用のないものを´他人に使わせまいとする意地の悪い人間の譬え。S.A.Handford 訳による Penguin Classics 版（1954´1970）では´第一一五話として一一九頁に収録されているが´Olivia *and* Robert Temple 訳による新版（1998）には見当たらない。中務哲郎訳の岩波文庫版にも見当たらないようである。

(一三)(六〇頁、一七行) シクストゥス五世…Sixtus V (Felice Peretti, 1521 – 90) は法王在位中(一五八五 – 九〇)に数々の教会改革を行い、偉大な教皇の一人とされるが、敵も多かった。なお、モンタルトー(Montalto)はシクストゥス五世の生地近くの地名で、枢機卿に任じられた一五七〇年以降、この名で呼ばれるようになった。

(一四)(六四頁、一四行) 聖セシリア (St.Cecilia or Caecilia) …紀元二三〇年にローマで死去した殉教者で、教会音楽の保護者となっている。また、独身の誓いを立てていたにも拘らず、結婚を強制され、夫をキリスト教徒に改宗させたという。

(一五)(六五頁、三九行)「イスリエルの槍より … 」…Milton, *Paradise Lost*, IV, 812. (Ross)該当箇所の原文は Him thus intent *Ithuriel* with his Spear/ Touch'd lightly; for no falshood can endure/ Touch of Celestial temper, but returns/ Of force to its own likeness: up he starts/ Discoverd and surpriz'd.となっている。 なお、イスリエル(Ithuriel)はケルビム(cherub=智天使)で、その槍に触れられると、悪魔は正体を現すという。

(一六)(八三頁、一四行)「黒い雄牛」や「カラスムギ」「海路の日和」…黒い雄牛(black ox)は Pluto その他冥界の神々への生贄で、不幸との連想があり、古くから、The black ox has trod on his foot.(不幸が彼を襲った)という諺がある。カラスムギ(wild oats)に関しては、sow one's wild oats(若気の放蕩をする)という言い回しがある。また、「待てば海路の日和あり」に当たる英語の諺としては It is a long lane that has no turning.がある。

(一七)(一〇六頁、一二〇行)「勢い盛んなるうちは … 」… Shakespeare の劇を脚色した Dryden の作品からの引用である。 *Troilus and Cressida, or, Truth Found too Late* (1679), V, ii. (Ross)

(一八)(一一四頁、三八行)「その男俗事については知っていた … 」…Butler, *Hudibras, Part First*, I. 149 - 50. (Ross)

(一九)(一三一頁、一六行) 中央郵便本局分もペニー郵便も…ペニー郵便制はロンドンとその近郊で実施されていた。(Ross)

(二〇)(一三八頁、三四行) ウォルサムの密猟者よりももっとあくどい変装…Hampshire の Waltham Chase の使用制限に反対する者や密猟者(Waltham Blacks)は、顔を黒く塗ったり、女性の服装に変装したりしていたという。(Ross) なお、OED にも同様の説明が見られ、 *Clarissa* のこの箇所が引用されている。

(二一)(一三九頁、五行) デーイアネイラ…ヘラクレス (Hercules) の妻デーイアネイラ (Deianira) はネッソス (Nessus … ケンタウロス族の一、ヘラクレスの妻を犯そうとして毒矢で射られた) の血を夫の下着に染み込ませて送ったが、これを着用したヘラクレスはその毒に冒されて死んだ。(Ross)

(二二)(一六二頁、一二行) ポンテイウス・ピラト (Pontius Pilate) …キリストに死刑の判決を下したローマのユダヤ総督 (A.D.26 - 37) で、判決に際し、自らには責任のないことを示すため、群集の前で手を洗って見せたという。マタイによる福音書二七章、二四節を参照のこと。

(二三)(一七〇頁、四〇行) バス石…イングランドの Bath で産する建築用石材。

(二四)(一七四頁、一八行)「神に逆らう者に休息はない」…本文では、No rest to the

wicked.」となっているが、イザヤ書四八章、二二節では、There is no peace, saith the Lord, unto the wicked.「神に逆らう者に平和はない、と主は言われる」となっている。また、五七章、二〇～二一節には、But the wicked are like the troubled sea, when it cannot rest, whose waters cast up mire and dirt./ There is no peace, saith my God, to the wicked.「神に逆らう者は巻き上がる海のようで静めることはできない。その水は泥や土を巻き上げる。/ 神に逆らう者に平和はないとわたしの神は言われる」とある。

(二五)(一七五頁、一四行)「ユーピテルは恋人たちの偽誓を笑う」…オウィディウスの『恋の手管』I, 633 に、Jupiter ex alto perjuria ridet amantum.(ユーピテルは天上より愛人たちの偽誓を笑う)とある。

(二六)(一七六頁、三行)「私的不徳行為が公益となる」…Bernard Mandeville (1670 – 1733), *The Fable of the Bees, or, Private Vices Public Benefits* (1714); *Part II* (1729). (Ross)

(二七)(一八九頁、三三行)ペギー(Peggy)…後出(一九〇頁、三七行他)のマージェリー(Margery)同様、マーガレット(Margaret)の愛称である。

(二八)(一九二頁、一六行)〈キャッスル〉という看板の出ているはたごⅰ…The Castle Inn on Hampstead Heath のことである。(Ross)

(二九)(一九三頁、三六行)ロンドン塔のライオン、そして、ベドラムにしても墓地にしても…昔、ロンドン塔ではライオンを飼っており、多くの見物客を集めた。ベドラム(ベツレヘム病院、Bedlam)は精神病院として有名。また、墓地とはウェストミンスター寺院の墓地のことで、ウェストミンスター寺院は歴代国王の戴冠式や葬儀が行われた寺院で、ロンドン見物の名所の一つとなっていた。(Ross)

(三〇)(一九四頁、四行)エリコ(Jericho)…パレスチナの古都で、イスラエル人が攻略に成功し、神の恵みを得た土地。なお、英語には、Go to Jericho!(どこかへなりと好きなところへ行っちまえ)という成句がある。

(三一)(一九六頁、一四行)〈むごい病〉とも呼ばれております病気…疱瘡(天然痘)のことである。

(三二)(二〇〇頁、一八行)マドリードの律義な治安判事…不詳。

(三三)(二〇四頁、一一行)パラリス(Phalaris)…シシリー島 Agrigentum の僭主 Phalaris は Perillus という者に真鍮製の牡牛を作らせ、その中で人を焼き殺していたが、その残虐さのゆえに自らも火あぶりにされたという。(Ross)

(三四)(二一〇頁、三五行)「どれもみな空しく、風を追うようなことであった」…コレトの言葉一章、一四節。

(三五)(二一三頁、八行)女は男の額に角を生やしたりするが…妻を寝取られた男(cuckold)の額には角が生えると言われていた。

(三六)(二一三頁、一三行)「万人に知らしめよ」…、noverint universi(Let all men know.)、は一部法律文書の冒頭に置かれる常套句である。(Ross)

(三七)(二一三頁、三四行)リュクルゴスの憲法…リュクルゴス(Lucurgus)は紀元前九世紀頃のスパルタの立法者である。

(三八)(二一七頁、三一行)ソリテール(solitaire)…一つ石の宝石(普通はダイヤモ

ンド）。また、宝石を一つだけ取り付けたイヤリングやカフスボタンなど。

（三九）（二二〇頁、八行）バルバドス水（Barbados）…レモンとかオレンジの果皮で香りを付けたコーディアル（甘味と香味を加えた濃厚なアルコール性飲料）。（Ross）

（四〇）（二三三頁、三行）フィリッポス王の頭蓋骨ともう一人の人間の頭蓋骨…ギリシアのキニク学派の哲学者 Diogenes（412? - ?323B.C.）の言葉とされている。

（四一）（二三四頁、六行）「マットの申しておりますことが　…　」…Matthew Prior (1664 - 1721), *Earle Robert's Mice* (1712). を参照のこと。（Ross）

（四二）（二三五頁、一二行）イギリスとの協定書…スペイン継承戦争（一七〇一 - 一四）の間、イギリス政府はカタロニア人をスペインで戦わせ、その代償として分離主義者の憲法上の権利を保証していたが、ユトレヒト講和条約（一七一三 - 一四）により、カタロニア人を捨て、フランスとスペインの弾圧に任せたという。（Ross）

（四三）（二四六頁、三四行）タルクイニウスのような裏切り者…第四巻の訳注（六四）を参照のこと。

（四四）（二六一頁、一二〇行）「アルキュオーンの熟睡は　…　」…Horace, *Odes*, Book II, i. および、Abraham Cowley's *Several Discourses by way of Essays in Verse and Prose*, "Of Greatness". （Ross）なお、アルキュオーン（halcyon）はギリシア神話で、冬至の頃に波風を鎮めて卵を孵化すると想像された鳥のことで、カワセミと同一視される。なお、冬至前後の穏やかな気候を、halcyon days、と呼ぶ。

（四五）（二六六頁、三五行）故アン女王（the late Queen Anne）…ウィリアム三世の後を継いだイギリスの女王。在位は一七〇二 - 一四年。

（四六）（二七二頁、三九行）例の陰鬱な旋律…一月三〇日は一六四九年にチャールズ一世が処刑された日であり、英国国教会では断食を行う。（Ross）

（四七）（二七三頁、一六行）フィアメッタ…Ludovico Ariosto (1474 – 1533), *Orlando Furioso* (1532), Canto XXVIII, Stanzas 1 – 64. を参照のこと。女性の不貞を責める物語となっているこの Canto においては、共に妻を寝取られた King Astolfo と Jocundo が女性の貞節を試す旅に出るのだが、道連れとして Fiam(m)etta を共有することになる。（Ross）なお、脇功訳『狂えるオルランド』（名古屋大学出版会、二〇〇一年、六月）も参照のこと。脇功氏の貴重な訳書の該当箇所を、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院の古賀弘人教授がコピーしてくださった。この場を借り、お礼申し上げる。

（四八）（二八一頁、一二行）ハウ嬢に宛てたクラリッサの手紙…原文では、A Letter to Miss Howe from Clarissa falls into his hands、となっているが、作者の勘違いであろう。実際にはクラリッサに宛てたハウ嬢の手紙である。従って、同じ行に見られる〈彼女〉はクラリッサのことである。

ク　ラ　リ　ッ　サ

ある若き淑女の物語

私生活における最重要関心事を
収録し、

特に
結婚に関し
両親ならびに子供の
不行跡に伴いがちなる難儀の数々を示す。

第６巻

第３版

ロンドン

出版元：S.リチャードソン

パタノスター街、ジョン・オズボーン書店
ストランド街キャサリン通り向かい、アンドルー・ミラー書店
セントポールズチャーチヤード、J.and J.リヴィントン書店
ならびに、バース、J.リーク書店より発売

１７５０

クラリッサ・ハーローの物語

第六巻

手紙　一

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月二十日　火曜日　朝

さて、ジャック、今ではわれわれ相互の関係が違ったものになっている。この愛しの君は、俺が善人になるのを許してくれないのだよ。今では自ら範を垂れ、俺の陰謀すべてを承認してくれていることになるのさ。

以前の計画を再び取り上げることに関し、今俺を非難するようであれば、貴公は最高に不公平な男だと言わねばなるまいな。何しろ、その場合、俺のほうでは彼女が与える手掛かりを辿っているだけの話なのだからな。邪悪な動機とか、もっと不埒な目論見を正当化するために、この際、彼女の行動についてこじつけた解釈などをしているのではない。狼が子羊との口論を目指した際には、確かに、些細な口実で事足りたのだ。だが、そういうわけには行かないのだよ、今度の俺の場合にはな。

実は、ここで「貴公はそんなことを思いついただろうか」ドーカスの情け深い気質、そして、男の残酷さについてこの心優しい小娘が思わず漏らした、いくつかの熱っぽい言葉につけ込み、また、あの娘の力になることが出来ればとの願いを添え、彼女が次のような覚書を小娘に渡したのだよ。署名が結婚前の名前になっているのは、同情を寄せてくれるドーカスに対しては、結婚していないことを明確率直な言葉で認めるのが適切と、彼女はそのように判断したからだ。

＊＊＊＊年六月十九日　月曜日

私こと署名人は以下の事柄につき、ここに契約する。署名人は、署名人自身の地所を占有するに至った暁には、署名人自身の屋敷において、侍女に相応しい待遇をドーカス・マーチンデールに与えることとする。あるいは、署名人が速やかにその占有を果たせない場合、あるいは、先に死亡する場合には、署名人自身、署名人指定の遺言執行人および管財人の責任において、前記の者ないしはその指定先に対し、生涯に亘り、年間の通常四季支払日ごとに金五ポンドを、すなわち、年間二十ポンドを支払うことをここに誓うものである。ただし、署名人が現在被っている不法監禁から脱出するに際して、署名人を忠実に援助することを条件とする。四季払いの初回は、署名人釈放の日の直後より三ヶ月の経過を見て開始され、かつ、支払われるべきものとする。加えて署名人は、その他の点に関する信義の証として、内示済みのダイヤの指輪一個を前記の者に与えることを約束するものである。上記の年の六月十九日、自筆にて署名する。

クラリッサ・ハーロー

どうかな、ジャック、賄賂を使うこんな可愛いお嬢さんとは、どんな間柄でいてほしいと貴公はいうのかな。彼女がどれほど俺を憎んでいるのか、貴公にはそれが見えていないのか。だが、貴公には分からないだろうか。もしも彼女が実際に逃げ出したりすると、世間の者たちの目には、自ら名を汚しているように映ってしまうということがだよ。測り知れない苦痛と危険に晒されねばならないことがだよ。というのも、彼女を迎え入れ、守ってくれる者などどこにもいないわけだからな。それでいて、こういった災難のすべてを承知で、危険を冒す覚悟なのだ。さらには、身を屈して術策に頼ろうというのだ。賄賂や買収という、当世はやりの悪徳にも手を染めようというのだよ。あゝ、ジャックよ、ジャックよ、口に出すのは止めてくれ。筆にするのも止めるのだ。彼女の肩を持つような言葉はあと一つでもな。

彼女をこの家へ連れ込んだということで、貴公はこれまで俺を責めて来た。だが、イギリス中のどんなところであれ、他の家へ連れて行ったとして、そこに一人、同情心があるとか、あるいは、賄賂がきくような召使ないし同宿人がいた場合、果たしてどのような結果が生じていたことだろうか。

ただし、次の点に貴公も気づきはしないかな。つまり、和解を拒む愛しの君も、この見え透いた策を弄するということは、溺れかけている人間同様に、命のためなら藁にもすがろうとしているということだよ。これまで彼女が頼りにして来た例の避難所が、一本の藁しべなのだということを気づかせてやるさ。

手紙　二
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

火曜日　午前十時

ドーカスに言わせれば、大層具合が良くない　…　極めて重症、とのことだが、俺と会うのを避けるためだよ。ただ、愛しの君の心は重症かもしれないな。しかし、それも言い逃れではないのかな。どんな人間の場合も、ある一つの感情が胸の中で優勢になると、信念の枠を突き破り、われわれすべてを支配してしまうものなのだよ。俺の場合、愛と復讐心とが代わる代わる勢力を得ている。彼女の場合には憎しみだな。だが、「憎しみが鎮まれば、愛の始まり」というが、これこそ俺が慰めとしているところなのだよ。むしろ、「愛が復活する」と言ったほうが良いかもしれないな。かつて一度でも愛の足場が築かれていたのであればの話だがね。

だが、振り返るのは止めにするが、貴公にも察しはつくだろうな、ジャック。彼女の企みが動き初めているのだよ。明日にも開始の運びとなっている。

外出していたのだが、出し抜きのための対抗策を実行に移そうというわけなのだ。今のところはすべて順調だよ、ベルフォード。

具合の悪い麗しの君を見舞いたいと、俺は言い張ったのだ。ドーカスの奴め、お節介にも、彼女のために口実を作って断るのだよ。でしゃばった真似をするなと、あの小娘を罵ってやったのだが、彼女に聞こえるところでだ。そして、足を踏み鳴らして、騒ぎ立ててみせたのだが、それを逆用され、忠実な腹心の下女を俺が階段のてっぺんから下まで投げ

落とすつもりだという、奥様への訴えへとすり替えられてしまったよ。

「その人は乱暴で恥知らずな男よ。でも、ドーカスや［今では〈親愛なる〉ドーカスってところなのさ］、命のあるかぎり、最後の最後まで私はお前の味方ですからね」

それで、ジャック、彼女の〈守り神〉の名前は今は何だと思うかな。なに、俺の先の手紙に載せた約束手形にもあったように、飛び切り立派なキリスト者、ドーカス・マーチンデールってわけだ（もうワイクスなんかじゃないのだ）。そして、愛しの君は、利害の絆に加え、この上なく厳粛な責務をあの小娘に対して負うことになったのだよ。

「この家を出られましたら、奥様、どちらへ行かれるお考えなのですか」

「私を招き入れてくださるお宅が見つかれば、その最初のお宅に身を投じようと思っているのよ。そして、馬車を手に入れるか、それとも、どこか立派なご家族のところで部屋を借りられるようになるまで、保護をお願いするつもりだわ」

「お召し物はどうなさいますの、奥様。身に着けておられますものの他には、何一つ持ち出すわけにもまいらないように思うのですが」

「あゝ、着物などどうでも良いのよ。この家から抜け出すことさえ出来たらね」

「お金のことはどうなさいますか、奥様。旦那様が案じておられるのを耳にいたしましたが、奥様はお金に不足しておられるはずで心配だが、ご自分の融通をお受けになるよう奥様を説得することは出来なかったのだと、旦那様はそうおっしゃっておられました」

「あゝ、指輪があるのよ。それに、他にも貴重品がありますからね。確かに、四ギニーしか持ち合わせはないし、そのうちの二ギニーは、レースの布切れに包んであるのを先頃見つけたもので、施しに使うためだったのよ。ただ、今は、残念ながら、〈慈善は我が家から始まる〉ということになるわね。でも、生きていてくださるよう、神様に望みを寄せるわけだけれど、もしも生きておられるのなら、私には大切なお友達が一人残されておりますからね。必要が生じた時には、その方に融通していただくことも出来るのよ。あゝ、もうとっくにあの方からお便りがあったはずなのよ、ドーカス。もしも私がまっとうな扱いを受けていたのでしたらね」

「まあ、奥様、お辛いことでございますわね。心からご同情申し上げますわ」

「有難うね、ドーカス。私が悲しく思うのはね、お前の情け深いところや、同じ女の身だということに信頼を寄せて構わないのだと、これまではそんなふうに考えなかったことなのよ」

「奥様のことは何度も何度もご同情申し上げておりました。でも、奥様は私のことをいつも疑っておられたように思うのです。それに、私といたしましては、奥様は結婚なさっておられるものと信じて疑いませんでしたし、旦那様が奥様から邪険な扱いを受けておられるのだと考えていたのです。ですから、私には奥様の気紛れと思われました事柄がうまく運びますよりも、むしろ旦那様のお幸せを願うことのほうが私の努めと考えたのでございます。奥様が結婚しておられないことを前から知っておりましたならと、本当にそう思いますわ。これほどの淑女が　…　そのように財産に恵まれていらっしゃるのに　…　こんなにもひどい裏切りに遭われるなんて　…　」

「あゝ、ドーカス、卑劣な方法で騙されたのよ、私は。私の若さ　…　世間知らずなところ　…　それに、振り返って見ると、自分でも責めるべき点はいくつかあるのよ」

「まったくですわ、奥様。何て偽りの多い人たちなのでしょうね、殿方というのは。誓

いも約束も　…　本当に、本当に「こう言うと、六回ほどエプロンで目を思い切りこすってみせた」、この家にまいりました時のことを呪いたくなりますわ」

これで説明がつくわけだよ、あの図々しい目付きにもな。それに、この家の弁護などをして、申し出た奉仕の件に疑いを掛けられるよりは、誠実だとの評判を得るためにも、奥様が自分以上に悪く考えるはずもない家を見限るほうが、ドーカスにとっては得策だったのではないのかな。

「可愛そうなドーカス。本当ですね。これまでずっと田舎で暮らしていた私たちというのは、何て無知なのでしょうね、この邪悪な街のことについてはね」

「字を書くことが出来ていましたなら」と、老獪な小娘が叫んだ。「ウェールズにおります他の近親者たちに、私のほうから間違いなく、事の次第につきましてそれとなく匂わせていたことでしょうし、その者たちが救おうとしてくれたはずなのですわ。私をあのような　…　あの　…　あんな　…　」とだよ。

あの娘がすすり泣くだけで十分だった。この種の話題の場合には、女というのはいつだって、話を聞くより先に察してしまうものさ。

それから、なおもすすり泣きながら、あの娘はもう一度エプロンを顔のほうへ持ち上げたそうだ。俺の前でその仕草をしてみせたよ。

「可愛そうなドーカス」と、彼女のほうも再びあの魅力的な目を拭っていた。

この愛しの君は、苦しんでいる者ならだれに対しても、全身これ愛情の固まりだ。思いやりに満ち溢れているのだよ。俺に対してだけは別なのだがね。

「で、親戚の娘なのに、伯母様はかばおうとなさらなかったのね。ひどい人ね」

「伯母が関わっていたなんて、私も　…　私には　…　申し兼ねますわ。良い助言を与えてくれたのです。伯母は長い間知らずにいたのです。私が　…　私が　…　ウゥー、ウゥー、ウゥー　…　」

「もう止しましょう。止しましょうね、ドーカス。私たちは何という世の中に住んでいるのでしょうね。何という家にいるのでしょうね、私は。でも、さあ、泣かないでね（とは言っても、彼女自身が堪え切れなくなっているのだよ）。私が騙されてこの家に連れ込まれたのは、私自身にとっては身の破滅でしたが、お前には幸運なことなのかもしれないわね。それに、私の目の黒いうちは、そうなるようにするつもりよ」

「お礼申し上げます、お優しい奥様」と、泣き声まじりだ。「そのような辛い目に遭われましたこと、お気の毒に存じます。本当にお気の毒に存じますわ。でも、奥様のお宅へ伺うことが出来ましたなら、私、魂が救われるかもしれません。奥様が結婚しておられないことを知ってさえおりましたら、我と我が身を貪ることはありましても、決してあのようなことは　…　絶対に　…　」とだよ。

ドーカスはすすり上げ、涙を流していた。令嬢も溜め息をつき、涙をこぼしたのだ。

ところで、ジャック、ここで前述の事項に関するお堅い感想に移ることとする。

善人たちはどのように説明をつけるというのかな。サタンにはこうも忠実な手先がいるということに関してだよ。また、あたかも人間の心の本性は邪悪なものだと言わんばかりにだが、悪を通じての結束が美徳の絆よりもさらに固く結ばれていることに関してだ。というのは、この場合、仮にドーカスが善良な女だったとして、また、現に誘惑を受けたわけだが、何か邪悪なことへの誘いを受けたとして、その誘いに奴が乗っていたのは疑いの

ないところだと、俺はそう思うからだよ。

それに、われわれの仲間は、百にも及ぶ事例において、美徳よりも悪徳が同じように優位を占めている証拠を示すことが出来るのではないのかな。そして、われわれは悪に奉仕し、悪を助長するために、一人の善人が別の善人とか大義とかのために尽くす以上に、大きな危険を冒して来たのだということもだよ。何しろ、われわれは生命と財産とを浪費して来たのではないのかな。時には、司法長官に公然と盾突いたのではなかったかな。そしてわれわれは、拘置された放蕩児を留置場から解放してやるという、ただそのことだけのために、不法奪還を試み、ありとあらゆることに挑んだのではなかったのか。

果たして、ジャック、これは何故のことなのだ。

あゝ、分かったぞ、間違いない。堕落した連中は好きなだけ悪事に耽り、振り返ることもなく悪魔の仕業に打ち込んでいるのだが、一方、他の者たちへの罠を絶えず仕掛けてもいるのだよ。そして、腕の良い釣人のように、狙った魚に合う餌を用意しているのだ。

また、ろくでもない目的に対して忠実だからといって、気の毒なドーカスを責めるようなことは、いわゆる正直者にだってさせてはいけないのだよ。近隣の国々に対する、あるいは、虐げられている自らの臣民に対する不正な目論見について、野望を抱く君主におとなしく奉仕する将軍、そして、わずかな報酬のために悪質な言い分を尤もらしく見せかけたり、正しいことが分かっている言い分に対して抗弁に立つことを引き受けたりするような弁護士でさえも、ドーカスとまったく同じことをやっているのではないだろうか。そして、その者たちは両者とも、どの点からしてもドーカスと同罪ではないのだろうかな。ところが、一方は英雄と呼ばれることとなるし、もう一方は腕利きと言われ、依頼人が先を争って訪れることになるのだ。そして、二枚舌に長けているお陰で、名声を博し喝采を浴びながら、法曹界のありとあらゆる高官の地位に就くことになるのだよ。

それはそうと、どうしたものだろうな。令嬢はすっかり他所へ移る気になっているわけだからな。彼女の意に沿いながら、それでいて、そうすること自体が俺の目的に適うような手はないものだろうか。そんな方法が見つかりそうな気もするのだよ。

検討してみることにしよう。

彼女を逃がして見るのはどうだろうか。彼女もそれにご執心なのだ。もしも実現の暁には、彼女が感じるはずの、俺に対する勝利の意識は、彼女がこれまでに受けた苦痛のすべてを帳消しにすることだろう。

出来ることなら、彼女の意に沿いたいものだよ。

手紙　三

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

昼間は疲れ果て、夜は寝つかれないという日が続いたり、我が愛しの君との不安定な関係に頭を悩ませたりで疲労困憊したこともあって、すっかり空想に耽っているうちに眠ってしまい、そして、夢を見たのだよ。それが幸運な夢で、想像するに、俺が今改めて望みを掛けている、彼女の意向に沿いながらも二通りに役立つという、そんな目的達成のための手段をこの揺れ動く心に提供してくれることになりそうな夢なのだ。

これまで何度も考えてきたことだが、巧みに練り上げた計画を考案することや、そこからもたらされる騒ぎや意外な展開、そして、最後には目出度い結末を迎えるということに比べるなら、世界最高の女をものにする喜びもどれほどの意味を持つというのだ。家への一番の近道に到るための楽しい回り道や、疑い、不安、心痛の数々、また、腹で目論む勝利の数々 … こういった楽しみがあって、授かり物の女が高価なものとなるわけだ。何しろ、残りのすべては … 何だというのだ。他でもない。頭に思い描いた天使が、現実にはただの女に身をやつしていることを知るだけの話なのだよ。だが、俺の見た夢の話に移ることにしよう。

水曜日の朝九時頃のことだと思うが、ドアに貴族未亡人の紋章を描き、落ち着いた年配の貴婦人［顔付きはH母さんに似てないこともないが、心の内は似ても似つかぬ女だ］の乗ったチャリオットが一台、通りの向かい側の十軒ほど離れたところにある食料雑貨の店の前に止まったのだよ。食料品を少々購入するためだ。そして、奥様の逃亡を邪魔するものはないか、また、近くで馬車は捕まるのかどうか、その辺を調べに出て来ていたドーカスが、貴族未亡人の紋をつけ、例の年配の婦人を乗せたこのチャリオットに目を留めたらしいのだな。そして、あのずる賢い裏切り女のドーカスが何をしでかすのかと思っていたら、落ち着いた感じの老婦人のところへ駆け寄り、声を張り上げてこう言うのだよ。「失礼とは存じますが、奥様、一言申し上げたいことがございます」とだ。

「私に話したいということを、さあ、言ってごらんなさい」と、老婦人が言った。雑貨商が引き下がり、離れたところに立っている。ドーカスに話をさせるためだが、ドーカスのほうでは、次のような言葉で婦人に話しかけたように思う。

「奥様のことは、とても立派なお方とお見受けいたしました。ここのすぐ近いところですが、評判のあまり良くないお宅に、身分にも財産にも恵まれました汚れのない淑女が一人おられるのです。五月の朝のようにお美しく、バラの蕾にも似た若々しさですし、同じほど綺麗で愛らしい方です。都会の流儀を身につけた性悪な殿方にたぶらかされ、こちらへ連れて来られた方なのです。そして、その人の手を逃れずにいますと、今晩にも傷物にされてしまうでしょう。ですから、あゝ、奥様、お会いになられました途端に、私の申しておりますことすべてを信じてくださって構わない、そんな根拠を見つけていただけるような方ですので、この美しい若婦人のことを哀れと思し召しくださり、ご親切をいただけますならば、そして、奥様のチャリオットに同乗させていただくだけで結構ですし、裕福で権力も備えたご親戚の方々のところへ、馬で人を遣わすことが出来るようになりますまで、一日だけ保護をしていただけますなら、美しさ同様に貞淑さの点でも並ぶ者もいない淑女を破滅から救ってくださることになるのです」とだよ。

老婦人はドーカスの話に心を打たれたのだろう、答えてこう言ったのだよ。「急ぐのですよ、さあ、娘さん。ちょうど良い時にお見えでしたね。汚れのない方や貞淑な方のお役に立つことを、私の力で出来るようにしてくださいましたもの。これは日頃から私が喜びとして来たところなのです。早くその若婦人のところへ行き、私のところまで大急ぎでいらっしゃるよう告げるのです。そして、私のチャリオットを避難所にして差し上げますとお伝えするのですよ。また、貴女の言っていることがすべてそのとおりでしたら、私の屋敷をその方の安らぎの場といたしますし、迫害している人すべてから保護して差し上げましょう」とだ。

ここで、どうやら、この裏切り女のドーカスは令嬢のところへ急いで戻り、自分の行ったことについて報告したらしい。すると、令嬢はドーカスの振舞いを大いに称賛し、その優しい思いやりに感謝したようなのだ。

そして、俺が目を上げると、何と、令嬢は家を抜け出し、後ろを振り返ることなく、貴族未亡人の紋章をつけた例のチャリオットまで駆けて行って、あの年配の婦人に迎えられているところだった。婦人は両腕を広げ、「ようこそ、ようこそ、美しいお嬢さん。あの忠実な娘さんの描いたお姿にぴったりですわね。今すぐにも私の屋敷へお連れいたしますが、あちらでは、お望みのとおりの待遇を楽しんでいただきますよ。過ぎ去りました危険のことや、今は逃げおおせておられることを、裕福で権力もお持ちのご親戚にお知らせ出来るようになりますまでのことですが」と言うのだよ。

「ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。ご立派な、本当にご立派な奥様。卑劣な手口で誘惑され、欺かれ、破滅の間際まで追い込まれておりました、不幸この上ない娘に対しまして、かくもご親切に保護の手を差し延べてくださいますとは　…　」

それから、若い淑女がやって来た時にはすでに必要な品を買い求め、代金の支払いを済ませていた年配の婦人が、どうやら、屋敷まで全速力で馬車を走らせるよう御者に命じたようだ。そこで、御者も途中で止まることなく、リンカンズインフィールズからそんなに遠くない、とある通りに到着した。年配の婦人はそこに住んでいるのだが、豪華な屋敷であり、溢れそうなほどに下女たちがいて、モスリン、キャンブリック、目の細かいリンネルに手の込んだ刺繍を施したり、織機や紡ぎ車は別にするが、働き者の娘たちが雇われたがるような、ありとあらゆる立派な仕事に就いたりしているのだ。

それに、若い淑女と年配の婦人が馬車に乗っていた間中、そして、屋敷に着き、食事の用意が出来るまでの間、若い淑女のほうは、その類例は普通の人間の耳に届いたためしもないというものだが、自分の味わった不当な仕打ちや苦難についての陰鬱な話に時間を費やしたらしい。しかも、大層心を打つ話し振りだったため、心優しい老婦人のほうではただただ涙をこぼし、溜め息をつき、すすり泣き、邪悪な男の手管を、そして、郷紳ラヴレースを激しく責めていたのだが、どうやら、老婦人は俺のことを「陰謀家の悪党」と言ったらしいし、それどころか、「解き放たれたベルゼブル」とも呼んだらしいのだ。

令嬢が逃走したことに気づいた時には、俺もおそろしく苦しみ悶えたように思う。そして、怒りのあまりドーカスやわれわれの母さんを、また、出会う奴ならだれでも殺し兼ねないところだったのだよ。ところが、夢は大抵の場合説明をつけないわけだが、何か急な変化、そして、奇妙な変貌が起こって、この年配の婦人が突然、かの有名なH母さんに変わってしまったのだ。そして、シンクレア母さんとは旧知の間柄ということもあり、若い淑女に対する俺の企てを助けるよう説き伏せられたというわけだ。

その後、妙な場面が続いたような気がする。というのも、H母さんとしては若い淑女の話をもっと聞きたかったし、夜になったこともあって、自分とベッドを共にしてくれるよう、若い淑女に頼んだのだよ。一切の話を二人だけのものとするためだ。実は、例の陰鬱な話の最中に、老婦人の若い姪が二人飛び込んで来たらしいのだよ。

そんなわけで、早めにベッドに入ると、悲しい話が再開されることとなり、大変真剣に片方は話すし、一方も負けず劣らず熱心に耳を傾けていたのだが、若い淑女が詳しい話に

入る前に、H母さんが腹痛の発作に見舞われたらしいのだ。そして、痛みが増して行くこともあって、母さんは、不幸にしてこの病気には罹りやすいわけだが、以前から特に効能があることに気づいていた薬を取るため、起き上がらねばならなくなったのだ。

そこで、起き上がり、奥の小部屋のほうへ歩いて行ったが、どうやら、戻り際に蝋燭を落としたらしいのだ。それから［おゝ、前のものよりもさらに奇妙な変貌だよ。何とも訳の分からないものだな、夢というやつは］、暗闇の中をベッドまで戻って来たのだが、若い淑女はH母さんが若い男性の姿に変わっているのを知って、かぎりなく驚き、悲しみ、そして、意表を突かれたのだよ。そして、ラヴレースのことは心の底から忌み嫌っていたわけだが、だれか別の人物であることを懸念していたものだから、その男が他ならぬラヴレースその者であること、また、ベッドを共にしたのは、今のところはまだ、ただ当の男とだけであることを知って、彼女もいくぶん慰められたというわけだ。

奇妙で雑然とした出来事がとりとめもなく続いた。状況が絶え間なく移り変わり、令嬢の口から今漏れて来るのは、溜め息、呻き声、叫び声で、気が遠くなる、死にそうだとの言葉だけだ。紳士から聞こえてくるのは、誓い、約束、言明の他にはなく、所期の目的を否認する言葉ばかりであり、また、丁重なものも粗野なものもない交ぜにした、恋の戦で用いられるありとあらゆる圧力なのだ。

その後、瞬く間に（貴公も承知のとおり、夢というのはドラマの規則には従わないものだからな）健康の回復、お産、洗礼と続くのだが、そのにこやかな男の子が、苦しみ悩む母親にとっては、彼女自身の考えからしても十分な埋め合わせになるというわけさ。

それから、祖父の地所を譲渡され、占有し、そこで幸せに暮らすことになる。愛するノートンが話し相手だ。ハウ嬢がお客となり、そして（素晴らしいじゃないか。実に素晴らしい話だよ）、彼女と情報を交わすことが出来るようになる。うっとりするほど美しい女の子が一人、父親は同じなのだが、友達のところの魅力的な男の子と出会うわけだよ。この子供たちは、成長すると、母親同士の友情を固めるために結婚し（何しろ、夢は近親関係に気を留めることもないからな）、俺の地所を享受するために、国会制定法に則って名を変えることになる。そして、俺にも訳の分からないものだが、これに類した辻褄の合わない話が続いたのだよ。

目が覚めると、信じてもらえるだろうが、俺の心はひどく動揺していた。そして、我が魅惑の君が隣の部屋におり、ドーカスも裏切っていないことを知った時には、大いに喜んだという次第なのだ。

さて、ずいぶん奇妙な夢だと、貴公は言うだろうな。しかしながら（何しろ、俺は変わった夢を見るからな）、何かこれに似たことが起こる可能性はまったくないわけでもないのだよ。今までは嫌っていたというのに、そのドーカスに信頼を寄せてしまうような弱いところが、愛らしいお馬鹿さんにはあるわけだからな。

ところで、俺の夢のある部分について、貴公に話すのを忘れていたよ。つまり、翌朝のことだが、令嬢は悲しみと怒りに茫然自失といった有り様であり、自害の試みを思い止どまらせるのに困難を極めたという点だ。しかし、説得の結果やっとのことで、生き残って最善を尽くす覚悟を決めてくれたのだよ。トムリンソン船長からの手紙が彼女を落ち着かせる助けになったようにも思われるのだが、次のことを俺に知らせようとして書かれたものなのだ。つまり、六月二十八日水曜日の夜に、伯父のジョン・ハーローが間違いなくケ

ンティッシュタウンを訪ねることになっているが、翌日（二十九日）は氏の誕生日ということもあり、われわれの結婚式がその折に氏の同席を得てひっそりと挙げられるよう、その点からも氏は重ねて希望しておられるというのだよ。

だが、二十九日の木曜日が彼女の伯父の記念日だというのか、と貴公が訊いてくるような気もするな。そのとおりなのだよ。でなければ、挙式の日はもっと早くなっていたはずなのだ。三週間ほど前に彼女がそう言っているのを耳にしたのさ。ついでに、彼女の一族一人一人の誕生日、それに、父親と母親の結婚記念日も分かっているぞ。最も重要な事柄に関しては、極めて些細な状況が大層役に立ってくれることが多いものなのだよ。

さて、これで貴公はどう言うのだろうな。俺の夢についてだよ。

俺の場合、寝ている時でも起きている時でも、さる〈お方〉からの …… 貴公なら、さる〈悪霊〉からのと言い出しそうだが …… うまい助けは得られないのだなどと、一体どこのどいつの台詞なのだ。だがな、呼び出しに応じる小悪魔がいるのは、ベルゼブルにとっては別に不思議なことではないのだよ。

この計画のH母さんの役どころについては、上首尾を収めることに何ら疑いの挟みようはないのだ。何故なら、あの令嬢は（入り込むことの出来る家なら、その一軒目から身を投じようとか、最初に出会う者の保護を求めようと決意を固める人間なのだし、家の中で俺から受けることを懸念している危険に匹敵するものは、この家の外には有り得ないと考えているわけだから）、たまたま現れた未亡人のチャリオットに乗り込むのをためらったりするだろうかな。それに、令嬢の身の安全に関しては、彼女の逃亡を推し進めるためにあれだけ高額の賄賂をつかませてある、あの忠実なドーカスに保証されているのだ。さらには、H母さんは敬うに足るような老婦人の態度や容姿を備えており、シンクレア夫人のような近づき難い悍婦ではないのだよ。

愛らしいお馬鹿さんは世知には全く疎いし、金のある人間というのは、いかなる目論見であれ、その目論見を助けてくれる者に事欠くことはないのだということも知らないのだよ。そういうことでもなければ、この世の君主たちがどうしてあゝまで盲目的に奉仕を受けることになるというのだ。どれほど頻繁に方向転換をしようとだよ。目的がどれほど邪悪なものであろうとだ。

来週の水曜日まで、俺との関係を彼女に続けさせることが出来さえすれば、その頃までには、われわれも結構穏やかに落ち着いているはずなのだ。それに、実際の話、彼女にいくらかでも感謝の気持ちがあれば、そして、ほんの少しでも女らしい弱みを宿していてくれるなら、自分が与えた苦痛からしても、俺は彼女の好意を受けるに値すると考えてくれるに違いないのだよ。何せ、すべからく女というのは、自分たちのことで、また、自分たちのために、男が骨を折るのを喜ぶものだからな。

さて、差し当たってはここでペンを置くことにしよう。そして、我ながら天晴な発明の才を一人楽しむことにする（というのも、彼女が頑固なものだから、改めてこの才能を発揮しなくてはいけないのだよ）。ただ、次の点は覚悟しておこうと思うのだ。つまり、今回の企てが失敗に帰した場合には、俺の知力のすべて、才能のすべてを振り絞り、彼女の好意に浴すべき合法的権利を確保するということだ。それも、身を固めることに対して抱いているあらゆる嫌悪の念に抗してだよ。また、家の外の魔王だの、中にいるその密かな手先だのについての仄めかしも無視してのことなのだ。何と言っても、彼女を説き落とすと

か、丸め込むことが今出来なければ、これ以上彼女を攻め立てようとしても、無駄に終わってしまうことだろうからな。

手紙　四
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月二十日　火曜日　夜

いまだに、我が魅惑の君のところへは通してもらえないのだよ。彼女の容体が非常に悪く、大変な高熱のようにドーカスは考えているのだ。ところが、まったく助言を受け入れようとしないのだな。

俺がどんなに心配しているか、ドーカスが彼女に話してくれている。

だが、改めて尋ねたい。病気に罹ったわけでもないのに、自ら体調を崩したりして、このお嬢さんの振舞いは正しいと言えるのだろうか。俺の場合、世間の者たちは放蕩者と思っているわけだが、吐き気を催す必要が出た時には、トコン剤を服用したのだよ。偽りを犯さないためさ。そして、思い切り吐き気を催したのだ。あの時には同情を寄せてくれた彼女も十分承知のとおりにだよ。だが、自分を傷つけた男を許すのは避けようというつもりだろうが、逃げ出す機会を得るという、ただそれだけのために、ここで重病を装ってみせるとは、何ともキリスト教徒らしからぬ振舞いではないか。こうして周知の義務を怠ったり、この種の厚かましい策を弄して人を欺いたりするようなことが、善良な民に許されるというのであれば、ベルフォード、われわれを咎めても構わない人間などがどこにいるというのだよ。

妙な考えだが、年配の婦人が明朝九時に、間違いなく食料品店の前に現れるように思うのだ。実は、俺がシンクレア夫人に向かって、八時きっかりに出掛けると言っているのをドーカスが聞いていたのさ。そこで、あの娘は馬車を探すことになるし、そこに未亡人のチャリオットが居合わせることになれば、我が魅惑の君にとっては、何とも幸運な話ということになるわけだ。何とも奇妙な形で俺の夢は実現されることになるものだな。

∴

∴

ちょうど今、トムリンソン船長から手紙が一通届いたところだ。素晴らしい話じゃないか。それも俺の夢の一部だったわけだからな。

これからはいつだって、夢に対しては絶大なる敬意を払うことにしよう。その問題を論じた書物を一冊、そのうちに著すことになるかもしれないぞ。何しろ、その大部分については、俺自身の経験で埋まることになるだろうからな。『魔女論』のグランヴィル〔一〕、バクスターの『霊魂と亡霊の歴史』、そして、学究肌の王が著した『悪魔学』にしても、ラヴレースの『夢想論』に比べるなら、物の数にも入らなくなるのだよ。

手紙は、まさしく俺が夢に描いたとおりのものだった。気に掛かる点といえば、伯父ジョンの記念日が三日か四日早めになってくれなかったことだけだ。というのも、万一我が魅惑の君の身に何か新たな不幸が降りかかったりすれば、来週の木曜日まで気持ちを支え

続ける力が彼女にはないかもしれないからだよ。ただ、そのお陰で、新たな便法を捻り出すための時間が増すというものだな。今俺の用いている趣向がたとえ失敗に終わるとしてもだよ。もっとも、それは俺にも想像しかねる点だがね。

ロバート・ラヴレース殿へ

六月十九日　月曜日

謹　啓

親友ハーロー氏の愛する姪御さんがめでたく回復されました由、氏共々、私にとりましても喜びとなりましたが、このたびは、そのお返しに、貴方にもお喜びいただけることをお知らせいたします。実は、姪御さんならびに貴方のご希望に沿い、姪御さんを自らの手で貴方にお渡ししようと、氏は決意を固めておられるのです。

姪御さんのご病気のため、やむなく式が延びておりましたし、また、ハーロー氏の誕生日が今月、つまり六月の二十九日木曜日であり、その日をもちまして七十四歳になられますし、さらには、大切なお嬢様の全快にはなお時間も必要であろうとのことから、氏といたしましては、その日に挙式されることを強く希望しておられるのです。今後お命の続くかぎり、その日には二重の喜びを得ようとのお考えなのです。

このため、来週水曜日の夜にはケンティッシュタウンに着くよう、密かに出発なさるお心積もりでおられます。

氏のお言葉では、ご家族全員がお集りになり、その日を氏と共に祝うのが常であったそうですが、現在のところ、そのようなことをなさるには、皆さんあまりにも不幸な状況におられますので、氏といたしましては、お宅でその日を迎えるのには耐えられず、二、三日の間留守にする決心であることを公表されるおつもりなのです。

氏は乗馬にて出発なさいますが、より密やかに事を運ぶため、お供につきますのは信頼の置ける召使一人だけです。最も信用出来そうな体裁のパブにて、翌朝、お二人のご到来をお待ちになるご予定ですが、中止を求める私よりの知らせがない場合に限ります。そして、式の終了後は、貴方が乗ってこられるはずと氏は考えておられるのですが、その馬車にてロンドンまで貴方たちと同行なさるおつもりです。

氏は私が式に出席するよう強く希望しておられるのです。ただ、氏のご要望もありまして、次の点は約束させていただいた次第です。つまり、贈与財産の執行と、一切の事柄が適切に準備されるのを確認するため、式当日以前に上京するということです。

貴方が結婚許可証を用意なさったこと、氏は大層喜んでおられます。

氏は貴方について極めて好意的発言をしておられるのですが、ラヴレース殿、挙式の様子を氏がご覧になられた後にも、ご家族の中にどなたか、あくまでも抵抗なさる方がいらっしゃるようなら、皆さんとは一線を画し、愛する姪御さんと姪御さんの利益に与するつもりだとおっしゃるのです。

前回上京いたしました際にお認めいたしましたとおり、貴方と氏の姪御さんとの間に誤解のありました点につき、親友にはそれとなく通知いたしましたし、また、このような挙に出ましたのも、あの当時はまだ疑わしく思われておりましたが、氏が自ら上京なさるよう私のほうで説得出来たといたしまして、氏の面前でご令嬢が少しでも不満顔をなさって

はいけないと考えてのことであります。ただ、そのようなご不満も今では一切残っていないことを希望いたしております。

貴方の使者がまいりました際には留守にしておりまして、お使いの者に託して返信をお届け出来なかった点、ご容赦いただきたく存じます。

天晴なるご令嬢にはくれぐれも宜しくお伝えくださいますよう、衷心よりお願い申し上げる次第です。

貴方の最も誠実にして従順なるしもべ

アントニー・トムリンソン

この手紙は俺が封をし、そして、開封したのだよ。お察しのとおり、特別な配達人によって届けられたもので、封印にしても、書き手が恥じる必要のないようなものだ。俺は注意を怠らず、我が愛しの君に聞こえる所で船長の安否を尋ねておいた。そして、手紙はもう差し出すばかりになっているのだ。俺の素晴らしい夢に合わせて、もしも二度の変貌が行われるとしたら、そして、俺としては夢を深く信頼しているだけに、おそらくそうなるだろうと思うのだが、その場合に、彼女が悲嘆に暮れるのか怒り出すのか、その状況次第で、手紙を宥めるための道具にしようというわけだ。高潔な船長のこの手紙を、俺が着替えをする際にだが、我が愛しの君の目に触れるところに置いておくのも悪いことではあるまいと思うのだ。

手紙　五

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月二十一日　水曜日　正午

いやはや、今度はどう言ったら良いのだ。わずか数時間前には、あゝまで夢を信じ、睡眠時の夢と覚醒時の夢に関する論文にすぐにも着手しようと目論み、また、落ち着いた感じの老婦人と若い淑女との間の問答を一人楽しんだり、二度の変貌のことで（すべては夢の描き出したとおりに起こるのだと、絶対的確信を抱いていたのだ）悦に入ったりしていた俺が、こういった束の間に消え去る愚かな考え、下劣かつ狂気染みている幻想には二度と再び信を置こうとしないのだからな。

こんな忌々しい形で事は進んだのだよ。

我がことながらすっかり気分を良くして、俺は八時に出掛けた。陰謀を企んでいる女主人と、買収されたその下女に、探し求めていた機会を与えるためだ。俺の企みに奥様が不信感を抱いたり、貸馬車を未亡人のチャリオットと取り違えたりしてはいけないので、十分に用心するよう、ウィルへの指示だけはしておいたのだ。ただ、先に彼女の具合を知っておこうとして人を遣わしたところ、非常に悪いという返事を受け取った。また、良く眠れない夜を過ごしたとのことでもあった。これは十分に考えられる話なのだよ。俺も承知しているのだが、策略を胸に秘めている人間というのは、資格の点でも実際上も、安らかな眠りに就くなんてことは滅多に出来ないものなのさ。

医者に往診してもらおうと勧めてみたのだが、断られてしまった。

俺はセントジェームズ公園で散歩をしたのだが、散歩の間中ずっと、我が稀有なる工夫の数々に一人悦に入っていたのだよ。それから、じっとしてはいられなくなって、馬車に乗り込むと、片方の窓はすっかり開け放し、もう一方もほぼ開けて、リンカンズインフィールズへの道すがら、すれちがうチャリオット一台一台に「いないいないばあっ！」をしてみせたのだ。そして、あそこへ着くと、H母さんの一族ならだれでも構わないから、俺の馬車の傍らまで来てくれるよう、御者を送って頼んでもらった。あそこでは、我が麗しの逃亡者についての情報が得られるものと信じて疑わなかったのだよ。時刻は十時を三十分過ぎたころだった。

召使が一人やって来て知らせてくれたのだが、あの年配の婦人が一人きりで、今チャリオットで戻ったところだというのだ。

びっくり仰天してしまい、俺は馬車を飛び降りたよ。そして、母さん本人の口から聞いたところによると、ドーカスが奥様の保護を引き受けていたのだが、奥様は心変わりをして、どうしても家を出ようとしないことを、後ほど伝えに来たというのだ。

果たして何があったのかも分からず、すっかり肝を潰し、われわれの母さんのところまで飛ばしてくれるよう、俺は御者に命じた。

あっという間にここに着いたのだが、俺が真っ先に口にしたのは、令嬢の安否を尋ねる言葉だったよ。

《ラヴレース氏はここで、令嬢とドーカスの間で交わされた会話の一部始終に関し、委曲を尽くして語るのである。しかし、未亡人から保護の確約を得たとドーカスが知らせた際に、令嬢が逃亡を拒んだその動機に関しては、氏としても単に推測し得るのみであるから、氏の陳述は省略し、代わりに、令嬢の手になる覚書をもって補填するのが適当と考えた次第である。ただし、この覚書が作成されるに至ったきっかけについて説明しておくことが、まず必要であろう。

《読者も記憶しておられるだろうが、ハムステッドへ逃亡の際、ハウ嬢宛に認めた手紙の中で(ア)、時間的余裕を得た場合には、逃避行の詳細に関して報告する旨、令嬢は約束をしていたのである

《事実、令嬢としては、物語風な最後の手紙以降にラヴレース氏との間で起こった出来事すべてに関し、報告を続行する考えであった。しかし、その後彼女が置かれることになった不確定な状態のため、また、騙されて連れ戻された際に受けた呪わしい仕打ちと、それに続く一週間に及ぶ精神錯乱のこともあり、これまでのところは自らの意図を遂行することも出来ずにいたのである。しかしながら、機会のあり次第約束を履行することをなおも目指していたため、事が起こる都度、彼女はその手控えを取っていたわけである。自らの記憶の助けとして、とのことであるが、ある場所で彼女も述べているとおり、「自分の記憶に対しまして、先の病気以降、以前ほど信頼することが出来なくなっているのです」というのである。

（ア）第五巻の四十二頁を参照のこと。

《これらの手控え、あるいは、覚書帳で、彼女は次のように述べているのである。「ドーカスが裏切りを働いているかもしれないという懸念もあり、あの娘が馬車を探しに出掛けている間に逃げ出してしまおうと思い、実際、そのつもりでこっそりと階下へ降りた。しかし、シンクレア夫人が入り口のところにいるのを目にしたため（自分の外出中は、ということで、ドーカスが頼んで、そこに立っていてもらったのだ）、急いで二階へ戻ったのだが、見つかることはなかった」というのである。

《その後、彼女は食堂へ赴き、トムリンソン船長の手紙を目に留めることとなるが、その件に関し、彼女は覚書の中で以下のように述べているのである》

これには、どれほど頭を捻ったことでしょう。あの人は故意にこの手紙を放置しているのかもしれない。一緒に置いてある他の手紙のどれ一つを取っても、別に重要なものではないのだから。一体、どちらを選ぶべきなのか。ここに留まり、悪辣なことこの上ない男の妻となるのか　…　それには心にひどい抵抗がある　…　脱出を試み、失敗すれば、身の破滅は避けられない。ドーカスは裏切るかもしれない。今でもやはりあの人の手先ではないのか、疑わしく思われる。あの人は外出する際、私が気づかれずに見ていたところでは、あの娘に囁いていた。それも、極めて親しげな態度で。「ご心配は無用ですわ」と、あの娘は膝を曲げてお辞儀をしていた。

あの娘は、私の逃走に目をつむることには同意していたけれど、私が抜け出した場合の自分の身の安全については備えていなかった。でも、その場合、あの人の復讐があるはずと予期して当然な理由があの娘にはあったのだ。それに、先見の明に欠けているわけでもない。あの娘を一緒に連れて行ったとして、もしも信頼出来ない娘なのであれば、あの娘の通報次第という立場におかれることになる。しかし、警戒は解かないことにするが、慈悲の心も忘れないようにしよう。女性に対してそれほど悪いことの出来る女性など、果たしているのだろうか。あゝ、いるのだ。シンクレア夫人だ。あの娘の伯母だ。主よ救い給え　…　だが、あゝ、私は通常の手段による主の保護の手も及ばないところへ我が身を追いやってしまったのだ。それに、すでに私は操を奪われている。父の呪いにも祟られている。身内の者たちの忠告や気遣いをすべて無にしたのだ。私に都合の良い奇跡など、望むわけには行かない。

仮に逃げおおせたとして、この身はどうなるというのだろう。貧しく、無力な、見捨てられた人間なのだ。女ゆえに無力なのだ。境遇ゆえに無力なのだ。ありとあらゆる危険に晒されている。主のご加護のあらんことを。

卑劣な召使はあの人に同行しなかった。疑いもなく、ここら辺りに潜み、私の動きを見張っているのだ。とにかく、チャリオットで逃げるのは止めにしよう。

❁　❁

このチャリオットがこんなにもうまい具合に現れるとは　…　いかにも、あの人によくある〈うまい具合に〉の好例だ。ドーカスが突然に思いつくなんて　…　その考えと一緒に、勇気を奮って貴婦人に話し掛けるとは　…　しかも、その婦人にとっては、まったく

の赤の他人という人間のことで　…　婦人もあんなに快く同意するとは　…　だが、身分の隔たりを考えても、二人のやり取りにあれほど時間が掛かるというのは　…　というのも、骨の折れる事態であり、また、時間も貴重であったのに、ドーカスは三十分以上も出掛けたままだったのだ。なのに、チャリオットは何軒も離れていない食料品店のところに待っていたとのことなのだ。

勿論、年配の婦人の中に話好きな方はいるし、この世に善人が何人かいることも疑いのないところだろう　…

ただ、偶然にも、自分の思いどおりに振る舞うことの出来る未亡人に行き当たるというのは　…　そのことに、ドーカスが菱形の紋(二)で気づくのは　…　あの娘のような身分の人間というのは、普通の場合、そんなに紋章のことには通じていないはずなのだ。

でも、通じている者も中にはいるのだろう。召使というものは、自分たちが仕えている上流の人々とか地位のある人々から、いわば〈間接的〉とでも呼べそうな名誉や栄誉を引き出すのが好きなのだ。

ただ、あの人の狡猾な召使は一緒に出掛けていない。それに、このトムリンソンからの手紙が　…

この恥知らずな人とは決して一緒にならないつもりでいるが、それでも、前もって逃げおおせることが出来ず、あの人を遠ざけることも出来ない場合には、ケンティッシュタウンかハイゲートで伯父の保護に身を委ねても良いのではないだろうか。私が承知している災いも、さらなる非道の振舞いを避けることが出来るなら、今後陥るかもしれない不幸よりは軽微なものとなり得ないのだろうか。私はあの人に対し遠慮のない、そして、当然な扱いをしたけれど、さらなる非道の振舞いは、あの人もまだ匂わせてはいない。出掛けずにおこうと思う。少なくとも、この下男を追い払うことが出来ないのであれば(ア)。

❁　❁

あの下男は悪党だ。あの娘も、どうやら、悪い娘なのだろう。結局は、身の安全が大事なのだ。馬車の話を持ち出したり引っ込めたりしている。

差し当たって、脱出の望みはすべて消えた。幸薄き人間なのだ。この上、どのような災いが待っているのだろう。あれほどの極悪非道の男とこれからも顔を合わせ、言葉を交わさねばならないことを思うと、ひどく胸が悪くなってしまう。

手紙　六
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

水曜日　午後

(ア) 令嬢もこの点を試みて見たのだが、足を滑らせて階段から落ち、足首を脱臼したという下男の偽装工作によって阻止されたのである。この男の策略好きの主人が、その陳述の割愛部分で語っているところによれば、これは、「アミアンでの類似の出来事の折に、俺が奴に伝授した小細工」とのことである。

予定していた脱走の望みを挫かれ、心ならずも、食堂で俺に会わねばならなくなったことがあるし、また、仮病のような手管を弄した点を咎められはしまいかと、おそらく懸念を抱いているはずだから、俺としては、愛しの天の邪鬼さんが元気に、そして、憤慨した調子で切り出してくるものと予想していたのだよ。ただ、彼女本来の気性の穏やかさからして、また、そうしてくれるものと彼女には期待していたわけだが、自分の置かれている立場について考慮した結果、そして、ドーカスが教えてくれたところでは、彼女は目を通していたという、あのトムリンソン船長の手紙の内容からして、また、最後に目通りを許してくれた後、心を鎮め反省するための時間があったことからして、彼女も前の場合ほど強くその姿勢を押し通そうとはしないはずだと、そんな望みを俺は抱いていたのだ。

食堂に入ると、彼女の〈突然の〉回復を祝うとともに、俺も喜んでみせた。そして、恭しくも慈しむような仕草で、彼女の手を取ろうとしたのだよ。ところが、彼女のほうはこの前の続きにしようと心を固めていたのだ。

彼女は手を引っ込めながら、撥ねつけるような怒りの表情を浮かべ、俺に背を向けていた。そして、「貴方ともう一度顔を合わせますのは、それを避けるわけにまいらないからなのです。私にどのようなお話がおありなのでしょうか。意に反したことですのに、このように引き止められますのは何故なのでしょう」と言うのだよ。

俺のほうでは、言葉遣いにしても態度にしても、これ以上はないほどの厳粛さで挙式を迫ったのだ。それ以外に手はないと見たのだよ。ポケットに手紙が一通あるのです、と俺は言った「同じ部屋の、手紙を乗せて置いたあのテーブルから、まだ取って来ていなかったのだが、手探りをしながらだよ」。その文面というのは、もしも耳を傾けてもらえるならの話ですが、われわれ両方に幸せをもたらしてくれるものです。もっと前にお見せするのを渋った理由は、手紙の中で挙げられている日取りよりも前に自分のものとなってくれるよう、説得したいものと願っていたからなのですよ、とだ。

俺はすべてのポケットに手を突っ込んで探した。その間に彼女の目を見守っていたのだが、その目は、手紙が乗っているテーブルのほうをチラチラ見ているのだよ。

手紙が見つからず、俺は落ち着かない様子をしていた。ようやくのこと、彼女の密かな目の動きにもう一度導かれ、俺は部屋の一番奥にあるテーブルの上に手紙が乗っているのを目にしたのだよ。

喜び勇んで、俺は手紙を取って来る。マダム、どうかその手紙をお読みください、と話し掛けたのだが、満ち足りて確信に溢れた態度でだ。

彼女は手紙を取り、ざっと目を通すのだが、いかにもぞんざいな様子で、すでに読んでいることが歴然と分かるのだ。それから彼女は、有難くもなさそうに、目の前にある窓辺の腰掛けの上に手紙を放り投げたのだ。

俺のほうでは、明日か金曜日の朝には俺を幸せ者にしてほしいと急き立てた。少なくとも、伯父上のご足労、そして、われわれ全員に和解をもたらそうという、思いやり溢れるご努力を無駄にすることのないようにと主張したのだ。

「私たち全員にですって」と、彼女は鸚鵡返しに言っていたが、その時の素振りは軽蔑的なものであり、また、それと同じくらいに、容易には信じようとしないものだった。そして、「あゝ、ラヴレース、誘惑の魔手を心の好みに合わせようと努めることでは、間違いなくあなたはあの大詐欺師と密接な繋がりを持っていますね。ただ、この問題に関してあ

なたと話し合いに入るようなことがこの私に可能だといたしましても（それは有り得ない話ですが）、あなたが自ら明かしてくれたような、そんな正体を持つ男に、果たしてどれほどの名誉心、どれほどの誠意、そして、どれほどの真実味を期待出来るというのでしょうか」と言うのだよ。

俺もこれにはムカッとしてしまった。そこで、「貴女のことを崇拝している男と会うのを避けるために、わざと仮病をお使いになったわけだが、貴女のように完璧な人柄を備えた淑女は、決して　…　」と言い掛けたのだ。

「何をおっしゃりたいのかは分かっています」と、彼女が口を挟んだ。そして、「自分の心のままに従いますなら、恥ずかしくてとても犯すわけに行かなかったような、また、そのために自らを軽蔑することになったのですが、そんな何十にも及ぶ卑しい行いに、私は引きずり込まれてしまったのです。あなたの仲間に感化されてのことでしょうし、あなたのせいで、やむなく卑しい姿を装わねばならなくなったからなのです。でも、神に感謝申し上げる所以ですが、困窮しているとは申せ、それでも、あなたのものになりたいと願うところまで身を持ち崩してはいないということです」と言うのだよ。

「損害を与えた者として、マダム、耐えるのが私には当然のことでしょう。非難する権利は損害を受けた側にあるのです。しかし、貴女の伯父上が、まさか、貴女に対する陰謀に荷担しておられるようなことはないでしょうね。貴女が目を通されたその手紙では、事情によっては　…　」

彼女がまた口を挟んできた。「もう一度お尋ねいたします。私がこの家に引き止められておりますのは、何故なのでしょう。私には見えていないとでもお思いでしょうか。私と同じ女性の服装はしていましても、私の承知いたしておりますかぎりでは、私を破滅させようとなおも待ち伏せているのかもしれない、そんな恥知らずな人たちに取り巻かれている自分自身の姿がです」とだよ。

俺はこう言ったよ。身の証を立てるために、また、家に掛けられた嫌疑を晴らすためにも、シンクレア夫人と夫人の姪たちが呼び出されるようなことになるのは、彼女としてもひどく気が進まないだろう、とだ。

「あの人たちがこの命を奪ってくれるというのでしたら、それなら、来ていただいて構いません。歓迎いたしますわ。一撃を加えてくださるその手を、私は祝福いたします。本当にそのつもりですわ」

「死ぬなどということを口になさっても、無駄なことです。まことにもって甲斐のない話です。憎しみを覚える相手に抑えつけられている時の、単なるお嬢さん好みの台詞にすぎません。だが、是非ともお願いしたいのです、最愛の人よ　…　」

「嘆願は一切止めていただきましょう。このように、意に反して引き止められることのないよう、お願いいたします。本当に幸薄い人間なのですね、私は」と彼女は話していたが、一種の狂乱状態で、その言葉と同時に両手を絞るようにしながら、天を仰いだまま俺に背を向けたのだ。そして、「あゝ、冷酷無情なお父様、貴方の呪いの効果は、今その勢いの盛りにあるかに思われます。弱くなってしまいました私の心は、現世と来世のどちらにつきましても、私が救われることのない人間になろうとしているような、そんな予感で一杯になっております。神聖な、神聖な神よ」と言うと、さっとばかりに跪き、「お救いください。あゝ、私を私自身から、そして、この男からお救いください」と祈るのだよ。

俺もはなはだしく心を動かされ、彼女の傍らに跪くと、「あゝ、出来ることなら、昨日という日を呼び戻したい。許していただきたいのです、最愛の人よ。過ぎたことは許してほしいのです。唯一つの方法を除きますと、今となりましては、埋め合わせも利かなくなっているのです。次のことだけを条件に、何卒お許し願いたいのです。これからの私の誠意と信義に　…　」と言いかけたのだ。

彼女は俺の言葉を遮って立ち上がり、「法律に訴えるとか、あるいは、イギリスへ戻ってまいりました場合の従兄弟のモーデンが特にそうですが、私の身内の者たちに訴えるとかして復讐を図るのは止めてほしいと、そのように私に頼むおつもりでしたら　…　」と話し出したのだ。

「法律などくたばってしまえだ」と、俺も立ち上がると「彼女は驚いて飛び上がっていたよ」、「それに、貴女が訴えかけることを口にされた相手の人間全員もです。法律であれお身内であれ、その両方を私は何とも思わないのだ。私が求めているのは、ただ貴女からの許しだけなのです。そして、私の偽らざる悔恨の姿をご覧の上、今一度ご愛顧を賜るよう　…　」と言いかけたのだよ。

「いえ、いえ、駄目です」と、彼女は握り合わせた両手を差し上げながら、「貴方を許すつもりは毛頭ございません。また、絶対に許すわけにもまいりません。それに、貴方と会わざるを得ないということは、貴方と付き合わねばならないというのは、私にとりましては死よりも重い罰なのです」と言うのだ。

「今後とも、このような折に、この姿勢を取る私をご覧になるのは、最愛の人よ、これが最後になりましょう」　そう言うと、俺は彼女に向かって再び跪いた。そして、「来週の木曜日、伯父上のお誕生日でありますが、それ以前は無理としても、その日には私のものになってくださるのだと、そんな希望を抱かせてほしいのです。悪の道に入ることがなかったならと、心から思っているのです。貴女の憤りも、私の悔恨の情を凌ぐことはありませんし、凌ぎようもないのです」と話したのだよ。そして、俺は彼女のガウンを掴んだのだが、彼女が立ち去ろうとしていたからだ。

「悔恨の情をあなたの定めとすることです。あなた自身のためです。悔恨の情をあなたの定めとするのです。私、決して、決してあなたを許したりはいたしません。絶対に、絶対にあなたのものにはならないつもりです。さあ、下がらせていただきましょう。あなたがあんなにも卑劣な手口で卑しめた、そんな惨めな女に向かって、何で跪いたりなさるのでしょうね、あなたは」

「ただ一言で良いのです、最愛の人よ。〈考えてみる〉と、そう言ってくださるだけで構わない。われわれ両家の名誉という点から貴女に求められている事柄を、時間を掛けて考えてみると、そうおっしゃってくださるだけで良いのです。立ちはしません。考えようと言ってくださるまでは、お下がりになるのを認めるわけにはまいりません［と、なおもガウンを掴んだままでだ］。この手紙をお持ちください。貴女のお立場、そして、私の立場をも、十分にご考察いただきたいのです。お部屋に下がって考えてみると、そう言っていただきたいのです。そうしてくださるなら、差し出がましくお引き止めするような真似はいたしますまい」

「強制なさっても、私には何の効果もありませんよ。情況からいたしますと、奴隷の立場なのでしょう。囚われの身なのでしょうね。でも、意思の点では、決して奴隷などでは

ないのです、私は。あなたに約束するようなことは、何一つとしてございません。引き止められましても、強制されましても、あなたへのお約束は何一つとしていたしかねます」

「実に気高いお方だ。しかし、容赦のないお方ではないはずと思っております。一時間で戻ると、そうお約束願います」

「約束は一切いたしません、あなたには」

「今夜もう一度会ってくださると、せめてそれだけは言っていただきたい」

「あゝ、言いたいものですわ。口に出して言うことが私に出来るのなら　…　あなたとはもう二度と会う気はないということをです。二度と再び会わずに済むならと、天にも祈る気持ちです」

「激し易い美女よ」と、なおも彼女を掴まえたまま、俺が言った。

「口調は激しくとも、よく考えた上での衷心からの願いを申しているのです。あゝ、出来ることなら避けたいものです。卑しいおべっか使いのあなたを、無礼でもあれば卑屈でもあるあなたを見下ろすようなことはです。下がらせていただきます」

俺はガウンを放し、両手を握り合わせると、「さあ、お下がりなさい。あゝ、我が運命を司る者よ。どうしても下がりたいとおっしゃるのなら、お下がりなさい。私の運命は貴女の手中にあるのです。貴女の吐く息一つで決まるのです。貴女の軽蔑は私の愛を強めるだけのことです。お怒りになるのは当然すぎるほど当然でしょう。だが、最愛の人よ、戻って来てほしいのだ。忠実なる貴女の崇拝者を許し、平安を授けようとのご決意でお戻りいただきたいのです」と訴えたのだよ。

彼女は飛ぶようにして去って行った。あの天使は、自分の翼を見出すや否や、俺から飛び去ったのだよ。虫けらのように跪く者、卑しむべき奴隷となり、もはや誇り高き征服者の姿もなく、俺は立ち上がったよ。そして、引き下がると、次のように自らを慰めようとしたのだ。彼女は友達もいなければ金にも事欠く状況なのだし、さらには、すぐに万事を丸く収めてくれることになっている、彼女の伯父が訪れる予定でもあるわけだから（幸運を感謝する所以だが、彼女は今なおそう信じているのだよ）、とな。

あゝ、何とか彼女には許してもらいたいものだ。寛大な心をもって俺のことを許してくれさえすれば、そして、許すと同時に、祭壇の前で俺の誓いを受けてくれるならと、本当にそう願っているのだよ。以前からの偏見に再び陥ることがないようにというわけだ。誓って言うが、ベルフォード、この愛すべきお嬢さんは、われわれの信奉する放蕩児の処世訓すべてが嘘偽りであることを暴いてみせるのだよ。美徳というものには、何か言葉以上のものがあるに違いない。今、俺にはそれが分かるのだ。「一度屈すれば、常に従う」と言うが、とんでもない嘘っぱちだな、あれは。それにしても、あゝ、ジャック、彼女は一度だって屈したことはないのだよ。俺のほうでは何を得たかといえば、他でもない、恥の上塗りに過ぎないのだ。困惑を深めただけの話さ。その間、苦悩を味わうことで、彼女の栄光は揺るぎないものとなったのだよ。

しかしながら、次の手柄だけは俺のものとして残されているのだ。つまり、俺はこの気高い娘さんを試練の場に立たせたのだが、その試練は見事に耐え抜かれ、すべての女性に栄誉をもたらしたわけだから、女性全員に恩を施したことになるという点だ。

しかし、　…　いや、これ以上言葉を重ねるのは止そう。何という力を備えているのだ

ろうな、悪癖という奴は　…　散歩に出掛けることにしよう。自分自身から逃げ出せないものかどうか、試してみるのだよ。突然の弱気の虫を咎めないでくれ。狙いにちぐはぐな点があるからといって、優柔不断だからといって、俺を責めないでほしいのだ。そうすれば、すべてがうまく運ぶことになるだろう。

手紙　七
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

水曜日　夜

ちょうど今、M邸から男が一人やって来たところで、そいつの話では、卿が極めて危険な状態だというのだよ。レモネードをしこたま飲んだためだが、胃が極度の痛風症状を呈しているというわけだな。

年収八千ポンドの人間が、健康よりも食欲のほうを優先させるというのだからな。命を落としても文句は言えないのだよ。しかし、われわれはだれしも、常軌を逸した情熱というものを抱いており、そいつを満足させずにはいられないものなのさ。また、そういった情熱には、通常、独自の苦痛が伴うものなのだ。叔父貴がそうだが、甥のほうもまたその証拠を提供しているということだな。

例の男は別の用で上京したのだが、指示内容に少しばかり拡大解釈を加え、跡継ぎのご機嫌伺いに上がったというわけだ。

卿がその歓迎すべき分量をあおった時に「その時の卿には、確かに快いものであったはずなのだ」、M邸に居合わせなかったのを俺は喜んでいる。それを飲むように俺が卿を説き伏せたのだなどと、そんなことを言い出しかねない、悪意に満ちた人間たちもこの世にはいるのだよ。

男が言うには、奴が屋敷を出た時、卿の容体がひどく悪かったもので、身内の者たちのほうでは、大急ぎで俺に迎えを出そうといったことを話し始めていたそうだ。俺も承知しているのだが、あの老貴族は大変な額の現金を身の回りに置いているのに、その記帳をすることは滅多にないわけだから、出来るかぎり早めにあちらへ向かうのが適当だろう。しかし、その間、この愛しの君のことはどうしたものだろうな。明日一日が過ぎれば、自分のこの問いにもおそらく答えが出ることだろう。心配な点といえば、彼女が俺を自暴自棄へと追い込むことだな。

というのも、ここで人を送り、彼女の同席を懇願したところ、軽蔑のこもった言い種で断られてしまったからだよ。

∴　　∴

幸せなことに、たった今のことだが、我が愛する文通相手たるハウ嬢からの三通目の手紙を受け取ったところだ。手厳しいじゃじゃ馬だよ、まったく。もしも手紙が我が愛しの君の手に渡っていたら、彼女を悲嘆に暮れさせていたことだろうな。写しを同封することにする。ここで読んでくれ。

六月二十日　火曜日

親愛なるハーロー様

敢えてもう一度（心ならずも、と言っても良いくらいですが）、お手紙を差し上げることにいたします。それも、私はあまり好ましいことと思わないのですが、貴女のこれまでどおりの連絡方法を用いてです。

一体、いかがお暮らしなのでしょう。順調ではないのかもしれませんね。それなら、ご自分では避けられないことかもしれないのですから、音沙汰がないからといって、お咎めするのは酷でしょうね。でも、そうではないのでしたら、私の手紙のどちらにもお返事をいただけないことに対しましては、どんなに厳しいことを申し上げても足りないくらいですわ。最初の手紙(ア)につきましては［それも、貴女にとりましてはあまりにも重大な内容でしたから、一言もないはずはないと思うのです］、貴女も受け取られたことを認めておられました。もう一通のほうは貴女ご自身に手渡されたものですが(イ)、せめて一行でもお知らせいただければと、あれだけ強くお願いいたしましただけに、希望に沿っていただけなかったことには驚いております。そして、その後もお便りをいただけませんことが、さらに大きな驚きとなっているのです。

例の使いの者は、貴女のご様子や、自分に向けられたお言葉につきまして、大層奇妙な話をしておりましたので、そこからどのような結論を引き出したら良いものか、私には分かりかねるのです。一つだけ言えますのは、あの男は単純でヘマばかりやっておりますのに、自惚れたところがございまして、言い回しに懲ったり、〈田舎っぽい驚異〉を狙ったりするものですから、何を話してもそのすべてに野暮ったい伝奇物語の趣を添えてしまうのです。これがこの男の個性だということは、貴女のご様子を次のように描いてみせたと知らされましたら、貴女にも納得していただけることでしょう。貴女は悲しみの極みに浸っておられたけれど(ウ)、お身体や目鼻立ちがとても立派になられ、お顔は、あの男の言い方ですと、大層赤みが強く、上気したような顔色で、腕も太く浮腫んでいるため、ということですが、貴女は何か悪性の毒に当たって苦しんでおられるのだと、だれしも結論するだろうというのです。そして、あの男は貴女が寝椅子に横になっておられる時に案内されたわけですが、貴女は立ち上がろうとも起き上がろうともなさらなかっただけに、なおさらそのように思いたくなる、というのです。

誓って申しますが、ハーローさん、貴女のことで大変悲しい思いをしているのです。遠慮のないところを申し上げねばなりませんが、貴女を欺いた男と一緒に即座にお戻りになりました点では、私の期待には少しも応えてくださいませんでしたし、また、貴女のお人柄に相応しい振舞いをしてもおられないということです。と申しますのは、ハムステッドのご婦人方からのお話ということで、タウンゼンド夫人が教えてくださったのですが、貴女はとても嬉しそうにあの男の手に再び身を委ねられたとのことでした。でも、貴女が結婚なさっているというのは、その時点では有り得ないことなのです。

本当に、何てお気の毒なのでしょう。あの男から逃げ出されるのに、あんなにも骨を折られましたのにね。でも、貴女が一番よくご存じなのでしょう。時々考えてしまうのです

(ア) 第五巻の二十三頁を参照のこと。　(イ) 同、百九十五頁。　(ウ) 同、百九十一頁から百九十四頁にかけて。

が、あの農夫が私の手紙をお届けいたしましたのは、貴女などではなかったのでは、ということです。でも、また、そうでなければならないようにも思うのです。それにいたしましても、あの使いの者に一行のお便りも託していただけなかったのが不思議なのです。ただの一行すらいただけないのですからね。それに、貴女はずいぶんと早くにお元気になられ、再びあの恥知らずとお戻りになったわけですからね。

今書いております手紙が貴女のお手元に届くようには確信出来ないのです、私。ですから、お話ししたいことの半分も申し上げないことにいたしましょう。でも、私のことをお便りをしてくださるに値する人間だと思し召しなのでしたら、どうかお知らせいただきとうございます。ハムステッドへ貴女を訪ねてこられ、私があれほど徹底してご忠告申し上げました場所へ、そんなにも楽しげに貴女を連れ戻された人たちは、あの男の身内の方たちですが、どんなに素敵なご婦人方であったのかという点をです。でも、これ以上のことは、少なくとも、事情がもっと詳らかになりますまでは、申し上げないことにいたしましょう。と申しますのも、私はただただ不思議さに呆気にとられ、立ち尽くすことしか出来ずにいるものですからね。

どれほどあの男が卑劣だといたしましても、密やかな愛情以上のものが存在しておりましたのは明らかです。何てことなのでしょうね。でも、止しましょうね。ただ、どのようにして止したら良いのか、それも分からないのです。それでも、止さねばなりません。止すことにいたします。

ただ、私にはまったく理由の分からないことがございますので、その点のご説明だけでもいただきたいのです。それから、本当に結婚なさったのかまだなのか、そのこともお知らせいただきとうございます。そうすれば、私にも分かることになりましょう。これまで私の誇りとも自慢の種ともなっておりました友情が、私たちいずれかの寿命よりも短い命とならねばならないのか、それとも、そのようなことはないのかについてです。

貴女のアナ・ハウ

ドーカスの話では、たった今奥様と、あの娘の言い回しだが、「探り合いの会話」をしてきたとのことだ。彼女としては、今でも信用したい気持ちはあるのだと、あの娘に向かって話している。ドーカスのほうでは、彼女に安心してもらえたつもりではあるが、俺がそれを当てにしないよう願っている。ただ、トムリンソン船長の手紙が彼女に対して大きな意味を持つのは間違いない。たった今、もう一度詳しく読んでもらいたいと、ドーカスに託して届けてもらったところだ。突き返されるのではと心配したのだが、今のところまだ戻されていない。そして、それは良い兆しのように俺には思われるのだよ。

「俺には思われる」という言い方を時々するのは、実は、俺も自らの策に絡めとられた有り様だが、この魅惑の君というのは、俺が彼女を途方に暮れさせるその百倍も俺を面食らわせるところがあるからなのだよ。

手紙　八

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月二十二日　木曜日　正午

自分自身について、あるいは、今穏やかであったかと思うと、今度は嵐のように荒れ狂う、この驚くべきお嬢さんについて、そのいずれについても、どう考えたら良いのか、からっきし見当がつかない有り様だ。だが、俺とて同じわけだが、先取りして判断するのを貴公が好まないことは承知しているのだよ。

俺からの度重なる要望があり、彼女も今朝六時に会ってくれた。彼女はすでに身形を整えていた。実は、この家の中では今後二度と服を脱いだりはしないと宣言してからというもの、彼女はずっと脱いだことがないのだよ。三時間に及ぶ激しい腹痛に見舞われ（ドーカスの話では、彼女は実際に具合が悪かったということだ）、休息は得られず、涙に暮れて目は赤く腫れ上がっているという不利さはあっても、彼女は魅力溢れる姿を見せてくれたのだ。俺にとって不思議に思われるのは、あの魅力の源がとっくの昔に枯れ尽きてしまわなかったことだよ。しかし、彼女とて女なのだ。そして、解剖学者は認めるはずと思うのだが、女というのは、男よりも水っぽい頭をしているものなのだよ。

「ところで、最愛の人よ、トムリンソン船長の手紙の中味につきましては、もう十分にご検討いただけたことでしょう。だが、このように朝早く顔を合わせたわけですから、どうか、この日を私の幸せな日としてくださるようお願いしたいのです」

俺へ向けた彼女のまなざしは好意的なものではなかった。彼女が入ってきた時も、その額には黒い雲が懸かっていたのだ。だが、俺に答えようとする際には、それをも凌ぐ厳めしさがあの魅力的な目鼻立ちを覆ってしまったのだ。

「貴女の物腰、そして、そのお顔付きからいたしますと、愛しの君よ、私にとって幸先は良くありませんね。お話を始められる前に是非ともお願いしたいのですが、これ以上の罪のなすり合いは一切お控えいただきたいのです。何しろ、貴女に対して卑劣な振舞いをしたという意識がすでに大変強くなっておりまして、自分自身の心の咎めにどう耐えたら良いのか、分かり兼ねている有り様なのです」

「貴方を避けることは許されないのですから」と、彼女が言った。「平静になろうと努力をしていたところです。貴方と顔を合わせます時には、もう決して得られないだろうと思っておりました、そんな平静さをです。いつまで平静な心を楽しむことが出来るのか、私には分かりません。でも、昨日用いてしまいました、また、そうせずにはいられなかったのですが、あの激しい口調(ア)に陥ることなく、お話しすることが出来るようになりたいものと願っているのです」とだよ。

一呼吸おき（俺は全身を耳にして聞いていたのだ）、彼女は次のように言葉を続けた。

「私が貴方の狙いに従わない場合には、ラヴレースさん、それが一体何であれ、私に対

(ア) 例の手控えの中で、令嬢は次のように述べているのである。「ドーカスは信の置けない娘のように思われる。私を自由にしてくれるよう、あの男を説得することは出来ないものだろうか。あの娘を頼りにするよりは、試してみるほうが良い。説得出来ずに、あの男や伯父に会わなければいけない場合には、その場であの男との関わりを断って見せるだけの強い心を持ちたいものだ。ただ、あの恥知らずに手加減を加えるとか、私には応えてあげるつもりのない、そんな期待をあの男に抱かせるとかいったことは、何としても避けたい。自分の決心を貫くことが出来れば、伯父としても、あれほど悪辣な男とこの心とを誓約によって結び合わせるべく、説得したりはしないはずだ」

して重ねて暴行を加えるおつもりでいることは容易に看て取れるのです。そんなに厳かに言明しておられるわけですから、貴方のおっしゃるとおりのものなのだろうと考えることにいたしましょう。でも、すでに私のほうでも、同じほど厳かに自分の気持ちは申し上げておりますが、決して貴方のものになるつもりはございませんし、なるわけにもまいらないということです。また、貴方のものにはならない場合でも、この世のいかなる男性のものになるつもりもございません。ですが、貴方が私に加えてきました不当な仕打ちに対する復讐は、その一切を放棄いたします。私の望みといたしましては、ただ、どこか辺鄙な片隅へと身を寄せまして、貴方から、また、かつて私を愛してくださいました皆さん一人一人からも、姿を隠すことだけなのです。身内の者たちとの和解という、近頃まではあんなにも心を占めておりました願いも、ずいぶん冷めてしまっているのです。皆のほうにその気がありましても、今の私といたしましては、迎え入れてほしくはないのです。自分自身の目に堕落した者と映るのです。今では私自身、皆の好意を得るには相応しくない人間と考えております。従いまして、苦しみ悶えております心の叫びとして懇願させていただきますが、ラヴレースさん「と、両目に涙を浮かべながらだ」、この身は私の運命のままに任せていただきたいのです。そうしてくださるなら、今の私に知ることの出来ます最高の喜びを貴方は与えてくださることになるのです」

「一体どちらへ、最愛の人よ　…　」

「どこであろうと構わないのです。この家を出ましたなら、その後の歩みにつきましては、神意に委ねる所存です。今の私には、この世に一人の友もいないことを承知しております。ハウさんまでが私を見捨ててしまわれました。でなければ、貴方は　…　でも、何とか我慢いたしましょう。貴方のせいで、私はお友達すべてを失ってしまいました。そして貴方は、これまでずっと冷酷無情な敵だったのです。その点はご承知でしょう」

彼女が一息入れた。

俺は口を開くことが出来なかった。

「私の被りました災いは」と、彼女が言葉を続けた「俺に背を向けてだよ」。「いかに取り返しのつかないものではありましても、この世の災いにすぎません。騙されてのこととは申せ、両親の気持ちを傷つけ、美徳を侮辱いたしましたことに対しまして、神の許しを得られるようになりたいものと願っておりますが、そんな望みを持たせていただきたいのです。この世だけには止まらない災いを避けたいと思うからです。今の私にはそれが願いのすべてなのです。それに、私が求めておりますもので、私には要求する権利がないというもの、それは一体どのようなものなのでしょう。私に与えずにおきますのが不法な暴力行為に当たるものとは何でしょう」とだよ。

彼女の求めに応じるのは不可能なことだと、俺は率直に話した。今日本日中にも結婚の承諾を与えてほしいと懇願したよ。彼女なしに生きて行くことは出来ない、とな。卿の病について知らせたのだが、彼女の伯父の記念日まで待つのを望まない理由としてだ。是非とも同意を賜りたいし、式が済んだなら、バークシャーへ同行願いたいと懇願したよ。「そして、こうなさることで貴女は、最愛の人よ、それほどまでに根強い反感を抱いてしまわれた家から解き放されることになるのですよ」とだ。

貴公も認めてくれることだろうが、これは実に気前の良い申し出だ。そして、俺としては約束を果たす覚悟でいたのだ。貴公にも話したとおり、ベルフォード、良心はしばらく

前に殺してしまったつもりでいたのだよ。ところが、どうやら良心というやつは、一時的に息を止めてやることは出来ても、くたばることはないものと見える。声高に語る勇気のない時には、囁き掛けて来るのだよ。今この瞬間にも、息を吹き返したあの端女が（かすかな逆戻りの動きを感じ取ると）俺の心膜の辺りで蛇のようにのたくり回り、死に際の最後のあがきでもって（力のすべてを頭に集中し）、その毒牙を俺の心臓に突き立てた感じがしたようにも思えるのだ。

彼女はためらい、目を伏せていたが、まるで決心がつきかねている様子なのだ。この姿に接し、俺の心臓は口のところまで飛び上がってきた。そして、信じてくれ。想像の中での話だが、俺は眼鏡を掛けた老牧師を即座に招き入れたのだ。黒の聖職服の上に白いサープリス(三)を羽織り［温和な外見を装いながら、激動の日々へと続くことの多い、例の和やかな儀式を象徴するのにはぴったりのものだな］、メソメソ、フンフンと、鼻に掛かった声で取り消すことの出来ない儀式を執り行う牧師をだよ。

「それでは、最愛の人よ、黙っておられるのは」と、彼女の手を掴み取り、この唇に押し当てながら俺は言った。「良い兆しだと考えることにします。せめて、愛しの君よ、暗黙の了解だけでもいただきたいのです。そうしていただけるなら、今すぐに部屋を出て、牧師さんを呼んで来ましょう」とだ。それから、今後は俺の全生涯が彼女の命じるままに捧げられるということ、そして、最良の夫、だれよりも優しい夫になるということを約束したのだよ。

ようやくのことで俺のほうへ振り向くと、「私の気持ちはもうお話しいたしました、ラヴレースさん」と、彼女が口を開いた。「貴方はお考えなのでしょうか。このように厳かな形で私が …… 」と、そこまで言うと一息入れ、こう続けたのだよ。「私はすっかり貴方の手中のものとなってしまいました。何をしたいのか、何になりたいのか、自分で選ぶとか口に出すといったことが自由になります人間というよりは、むしろ貴方の囚人なのです。でも、私のためを思ってくださっている証として、今すぐにこの家から出していただきたいのです。そうしてくだされば、私の不幸な状況に最も相応しい返答を、書面をもってお示しいたしましょう」というのだ。

「で、こんなことが、麗しの人よ、ラヴレースともあろう者に通用するとでも思っているのかね」と、俺は腹の中で思ったよ。「君も弁えておくべきだったのだ。道楽者というのは、国務を司る大臣たちと同様、自分が手にした権力は、その二倍の価値に相当するものが得られなければ、手放したりはしないのだということをだよ」とだ。

俺は次のような申し立てをした。つまり、今朝のうちに結婚を済ませ（駄目なら明日にするし、それも駄目なら、彼女の伯父の誕生日である木曜日に、伯父の面前でということにするが）、その後、すでに提案してあったように、バークシャーへ向けて出発することになれば、勿論この家を出ることになるし、ロンドンへ戻って来た際には、俺が交渉している最中の家の入居準備も整っているはずだ、と言ったのだよ。

彼女は答えず、ただ涙を流し、溜め息をついて見せるだけだった。期待を掛けていることについては信じたくなるものだから、俺としては、彼女が黙っているのを女性らしい慎みのせいにしたのだよ。俺に対しては厳めしい態度で話し始めたわけだが、どっちつかずの状態に愛らしく戸惑いながらも、謙虚な心に秘めた優しい気持ちを、どうしたら適切な言葉で言い表すことが出来るのかと、愛しの君は思い巡らしているのだ（と、俺はそう思

ったのだ)。ところが、宥めるような優しい態度で彼女の背けた顔を覗きこむと、そこにはっきりと看て取れたのだが、彼女の胸を掻き乱しているのは、恥じらいの気持ちなどではなく、怒りだったというわけだ(ア)。

遂に、彼女は沈黙を破った。「自分自身がいかがわしい家の奴隷となり、囚われの身となっておりますのに気づきますのは、私、耐えられないのです」と、彼女は言っていた。「教えていただきたいのです。私がこの家を出ますのを許してくださるおつもりなのか、それとも、そのお気持ちはないのか、簡潔にお話しいただきたいのです。イギリスの国民といたしまして、生まれついての権利であります自由を、この私に許してくださるおつもりなのかどうかをです」とだ。

「貴女がここを立ち退かれると、その結果として、貴女を永久に失うことになるのではないでしょうか。そして、そのような考えが私に耐えられるものでしょうか」

彼女は飛び退くようにして俺の傍を離れた。「あなたのような人とお話をするのは、心の底から恥ずかしく思います」というのが、彼女の口をついて出た暴言だ。だが、俺は彼女の足下に身を投げだすと、その嫌がる手を取って祈り始めた。誓いを立て、約束をし始めたのだ。ところが、怒りに燃える美女は俺を遮り、次のように言葉を続けたのだよ。

「ほらほら、もうあなたにはうんざりです。あなたの口に溢れるものといえば、のべつ幕無しの約束や誓い、そして、言明の台詞ばかりで、時と場所によって違ってくるだけの話です。なぜ私を引き止めるのでしょうか、あなたは。怒りがこみ上げてくるのです、あなたには。あゝ、兄のいわれのない復讐を遂行するための残酷非情な手先なのです、あなたは。あなたにお願いすることといえば、精々、父の恐ろしい呪いの来世についての部分を思い止まっていただくことだけです。現世に関わる部分につきましては、卑劣で恩知らずなことに、あなたは成し遂げてしまわれたのですからね」とだよ。

俺は声も出なかった。それも当然だろう。彼女の兄の手先だというのだからな。ジェームズ・ハーローの手先とはな … いやはや、ジャック、何て言い種なのだよ、これは。

俺は彼女の争う手を放してやった。彼女は部屋の端から端へ二、三度歩いていたが、誇り高い心がそっくりそのまま態度に現れていたよ。それから、俺のところへ近寄って来たのだが、黙ったまま背を向けた。そして、再びこちらを向き直ると、前よりも穏やかな声で、「困惑の様子ですね、ラヴレース。それとも、良心の咎めなのでしょうか。一つだけお願いがあります。これまで何度も繰り返してきたお願いですが、今この瞬間に、この家から出ることを許していただきたいということです。そして、さよならを言わせてほしいのです。永遠にさようなら、とです。それから、この世の幸せを楽しまれますようお祈りいたしましょう。この世におります私の知人一人一人から奪ってしまったように、私からもあなたが奪ってしまった、あの幸せをです」と言うのだ。

こう言うと、彼女は飛び出して行ったが、俺のほうはひどくうろたえたままで、どのように考え、何を話し、どう振る舞ったら良いのか、見当もつかない有り様だった。

(ア) 令嬢は、例の手控えの中で、この話し合いに際しては、平静さを保つのに困難を覚えたことを認めている。そして、「ただ、私の訴えのすべてが無効であること、また、あの人が私を引き止める覚悟でいることを知った時には、それ以上苛立ちを抑えることも出来なくなってしまった」と、彼女は述べているのである。

だが、すぐにドーカスが俺を奮い立たせてくれたのだ。慌ただしく走って来ると、「ご存じなのですか。奥様は階下へ降りられたのですよ」と叫ぶのだよ。

「何だと、まさか」　そう言うと、俺は飛ぶようにして駆け降りた。見ると、彼女がまた表口のところへ来ており、外へ出ようとしてポリー・ホートンと争っているのだ。

彼女は勢いよく俺の脇をすり抜け、表側の客間へ入ると、窓のところへ飛んで行き、またサッシを引き上げようとした。そして、「皆さん、皆さん」と大声を上げるのだ。

俺は両腕で彼女を抱え込み、窓辺から引き離してやった。だが、魅惑の君に（怒る姿そのものが魅惑的なのだ）怪我を負わせてはと怖がっている間に、彼女は俺の腕から床へと滑り落ちたのだ。この場で死なせてください、ここで死なせてください、と彼女は叫んでいたが、サリーとシンクレア夫人が飛び込んで来るまでは、そのまま体を強張らせ、身動き一つしないのだよ。

恥知らずな婆さんの姿を見ると、彼女は傍目にも怯えた様子をしていたが、その間、俺のほうでは（正直な話、深く心を動かされてしまい）、「証言してもらいましょう、シンクレア夫人。証言してもらいましょう、マーティンさん。ホートンさんもだ。この愛しい人に暴力を加えていないことを証言してもらいますよ、皆さん」と叫んでいたのだよ。

そうしているうちに、彼女が立ち上がり、「あゝ、ここは［と、窓のほうに目をやり、そして、周りをぐるりと見渡しながら］、私の操を奪おうとして、わざわざしつらえられた家なのですね」と言うのだ。「でも、私のいるところへあの女の人は入れないようにしていただきます。あのホートンさんもです。見下げ果てた女の人ではなかったのなら、厚かましくも、私を抑えようとなどなさらなかったはずですからね」とだよ。

「おやおや、旦那様。おやおや、奥様」と、監視役の婆さんが大声を上げた。両手を腰に当てて肘を張り、ペチコートの裾一杯のところまで片方の足を振り出して見せながらだよ。「つまらないことに何という大騒ぎなのでしょう。こんなのは生まれてこの方初めてだわね。ヒヨコみたいな殿方に虎のような奥方ですからね」と言うのだよ。

彼女が怯えているのは明らかだった。そして、急ぎ二階へと上がって行ったのだ。女のワルというのは、ジャック、確かに、女自身にとってはワルの男よりもさらに恐ろしいものなのだよ。

俺は彼女の後を追って二階へ上がった。彼女は自分の部屋の前を駆け抜け、食堂へ入った。どれだけ怖い目に遭っても、几帳面さを捨てることは出来ないのだな、彼女は。

食堂であったことについて語るのは、あまりにも胸に応えるところがある。一方からは罵りや叫び声、また、自らの命さえも脅かす言葉がぶつけられるし、もう一方は、諫めたり嘆願したりで、時には脅しの台詞も交じっていたのだ。それに、似たような場面について詳述した後のことでもあり、こういった事柄は言葉でもって言い表されるのも良いだろうが、想像してもらっても良いだろうな。

従って、最後には彼女から譲歩を引き出すことになったという点だけを述べておく。もしも譲歩していなかったならば、すぐにももっとひどいことになっていたと、そう考えて当然な理由が彼女にはあったのだ(ア)。その譲歩というのは、「次の木曜日、つまり、彼女

(ア) 令嬢は覚書帳の中で、その場で辱めを受けることから身を守るためには、このような譲歩をする以外には、他に術がないように思われた、と述べているのである。ドーカスが見ぬふりをしている間に（た

の伯父の誕生日にどのようなことが起こるのか、それを確かめるまでは、自分の気持ちを寛がせるよう努力する」ということだよ。「でも、あゝ」と、この下手な譲歩をするに当たって、感情も露に彼女は叫んでいた。俺に対して、身を屈し、その点だけでも請け合うような真似をするよりも、罪にならずに済むならの話ではあるが、むしろ自らの命を絶ちたい気持ちだ、というのだよ。

しかし、これで明らかに分かるわけだが、彼女は気づいているのさ。しぶしぶ与えられた言質とはいえ、俺からは結婚生活への期待と受け止められて当然なのだということにだよ。そして今、今でさえ、もしも彼女が将来へ望みを託してくれるようなら、俺も彼女のお仕着せを身に纏い、一生涯着用することになるだろうと、本心からそう思うのだ。

くだらない工夫の数々を精一杯に凝らしながら、俺は一体いかなる状況にあるというのだろうか。結局のところは、途方に暮れ、まごつき、恥じ入っている始末なのだよ。これだけ骨を折った挙げ句の悪党呼ばわりとはな。だが（五十回目にもなるが）、ひとつ貴公に尋ねたいのだよ。こんな女がこの世にいるなどということを考えた者が、一体どこにいただろうかということだ。しかしながら、彼女にしても、あまり強情を張らないよう注意するのが肝要だろうな。愛情を鼻であしらわれた俺がどんな復讐をやってのけるか、彼女には分かっていないのだよ。

今切り抜けたばかりの修羅場のせいで、俺の心は激しく乱れ、しばらくは落ち着かないのだよ。この心は、俺の見るところでは（書き綴ったものを読み直したのだが）、その震えを指先へも伝えたらしいのだ。ところどころ、文字があまりに不明瞭で体裁をなしていないから、貴公にしてもほとんど判読しかねることだろう。ただ、仮にその半分だけでも読み取れたなら、貴公の軽蔑のまなざしにこの身を晒すのには、それで十分ということになるだろうな。自らの構想や趣向が惨めな結果に終わったという点でだよ。ただ、間違いないように思うのだが、ジャック、この約束によって、俺も少しは有利な立場を得たことになるはずなのだ。

ところで、この魅惑の君に関する俺の秘密は漏らしていないのだという、貴公が言ってよこした保証の言葉について、一言だけ触れておこう。あんなことはしなくても良かったのだよ、ベルフォード。あの件を筆にしている時こそ疑ってはみたが、その後も疑念を抱くようなことはなかったのだ(ア)。というのも、時間を掛けて考えてみたところ、迷いを引き起こすような信条にしても徳にしても、貴公は一切持ち合わせていないのだということがよく分かったからだよ。貴公の動機として俺が承知しているのは、強い妬みの気持ちが大部分で、それに、わずかばかりの水っぽい憐れみの情なのさ。俺を怒らせることなど貴公に出来たためしはないのだし、俺の同情ならいつだって受けていたのだ。そして、今こだし、この娘も彼女は疑っているのであるが）逃げ出すことが出来ないとすれば、今、彼女にとっての唯一の望みは、必要とあらば次の木曜日に伯父の保護、さらには、長官の保護を受けるための手立てを見出すことだと彼女は言う。「あの人は私のことをおとなしくて臆病だと考えていたのでしょうが、こんなにも呪わしい強制を避けるためでしたら、また、あのように計画的になされた、悪辣非情な卑劣さも平気な男を避けるためでしたら、どんなことまで私はやってのけるのか、思い知らせてやるのです」と、彼女は述べているのである。

（ア）第五巻の二百六十頁を参照のこと。

そ、これまで以上に同情に値するのだよ。何しろ、貴公は「憐れむべき」男なのだからな。
我が愛しの君を慮っての、貴公の新たな諫めごと一切については、顔を合わせた時にでも答えることにしよう。

手紙　九
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

木曜日　夜

この強情な女には忌々しいほど腹が立つ。また、貴公も咎めはしないはずだよ。もしも俺の友達ならばな。彼女は、自分から与えた譲歩だというのに、強要されたもののように考えているのだ。だから、われわれは、何のことはない、彼女が譲歩をする前とそっくりそのままの状態というわけだよ。

ずいぶんと骨を折ったが、今夕三十分ほど付き合ってもらうよう話をつけた。持ち出したかった話題というのは、M邸へ赴かざるを得ない俺の立場のことだ。

俺は次のように話したよ。来週の木曜日が過ぎるまでは気持ちを寛がせるよう、努力する旨を約束してくれたのだから、俺がM邸から戻った時にも、彼女の姿をこの家で見出すことになるよう、ためらうことなく誓ってほしい、とだ。

正直言って、そんな約束をするつもりはない、と彼女は言うのだ。「この家のことにつきましては、一切触れられておりませんでしたわ」とも彼女は言っていた。「貴方もそれはご存じでしょう。それに、この家に監禁されることになるわけですが、私が自分からそれに同意を与えるなどと、貴方はそんなふうにお考えなのでしょうか」と言うのだよ。

俺はひどく苛立ったし、また、失望も覚えた。「私がM邸へ向かわないのであれば、マダム、貴女としては、木曜過ぎまでここに居ても構わないということでしょうか」

「自分にはどうにもならないのでしたら、致し方ありませんわね。でも、貴方が留守になさろうとなさるまいと、私がこの家を出るのを許してくださるよう、それは主張させていただきます」

「それならば、マダム、貴女のご命令に従うことにしましょう。貴女が反対なさらないような下宿を探しに、今晩にも出掛けることにいたします」

「貴方が用意なさる下宿には入りたくございません。ハムステッドのムーア夫人のお宅へまいります」

「ムーア夫人のお宅ですって、マダム。ムーア夫人のところなら異存はありません。しかし、あちらで目通りを許してくださることは約束してもらえますか」

「ここと同じことですわ。避けられません時にはね」

「結構ですよ、マダム。宜しければ、ひとつお教え願いたいのですが、どのようなおつもりからのことなのでしょうか、お気持ちを寛がせるとのお約束は　…　」

「気持ちを寛がせるよう〈努力する〉という言い方でしたわ　…　」

「〈次の木曜日にどのようなことが起こるのか、それを確かめるまでは〉でしょう」

「罠に掛けるような質問はなさらないでいただきましょう。私は真面目すぎて、このようなお相手には向かないのです」

「ひとつお尋ねいたしますが、マダム、〈そのようなことを請け合うよりは、罪にならずに済むのであれば、むしろ死にたい気持ちだ〉とおっしゃった時には、一体どのようなおつもりだったのでしょうかね」

彼女は怒りのあまり黙り込んでしまった。

「それで、貴女の許しに望みをかける余地を私に与えたことになると、マダム、貴女はそうお考えになったのでしょうか」

「穏やかにお答えしなくてはいけないと思う時がまいりましたら、お話しいたします」

「貴女はご自分が私の手中にあるとお考えですか、マダム」

「そうでないのであれば　…　」と、そこまで言って彼女は止めた。

「最愛の人よ、遠慮なくおっしゃってください。お願いだ、最愛の人よ、はっきりと言ってほしいのです」

彼女は黙したままだったが、あの魅力的な顔一面を紅潮させているのだ。

「貴女は、マダム、私の名誉心に少しは信頼を寄せてくださっているのでしょうか」

なおも黙ったままだ。

「私を憎んでおられますね、マダム。神の創造物の最も忌まわしいものよりも、私のことを蔑んでおられるのだ、貴女は」

「でなければ、そんな私を貴方が軽蔑すべきでしょうね」

「貴女が居るのは、マダム、いかがわしい家だとおっしゃるのですね。私の名誉心は少しも信頼しておられないし、私を避けることは出来ないものと確信しておられる　…　」

彼女が立ち上がった。「お願いです。下がらせていただきますわ」と言うのだ。

俺は立ち上がりながら彼女の手を掴み取ると、まずは口に押し当て、それから心臓の所へ持っていったのだが、ひどく取り乱した格好だった。暴れ回るいたずら者の心臓が今にも壁を破って飛び出しそうになっているのは、彼女も感じ取ったことだろう。「お行きなさい。さあ、そうなさりたいのなら、ご自分のお部屋へどうぞ。だが、偉大なる天上の神にかけて誓いますが、お部屋へは絶対にご一緒させてもらいますからね」

彼女は震え、「あゝ、お願い、ラヴレースさん、そんなに怖がらせないで」と言っていた。

「お座りなさい、マダム。さあ、どうかお座り願います」

「座りますから　…　」

「さあ、どうぞ、マダム、さあ、さあ　…　」と、俺の胸の想いが両目に溢れ、心臓の動悸は指先にまで響いていた。

「座ります。座りますよ。痛いじゃありませんか。お願いです、ラヴレースさん、私を脅さないでください、そんなにも　…　」　こうして、彼女は身を震わせながら腰を下ろしたが、俺はなおも彼女の手を掴んでいたのだよ。

俺は彼女の波打つ胸に覆いかぶさるようにして寄り添い、もう一方の腕を彼女の腰に回した。「それで、貴女は私を憎んでいるとおっしゃるのですね、マダム。また、軽蔑しているともおっしゃるのですね。そして、私には何一つとして約束していないとおっしゃるのですね　…　」

「いえ、いえ、確かにお約束いたしました。そのように抑えつけるのは、お止めください。言われたとおり、座りましたでしょう。どうして［と、争いながら］このように抑えつける必要があるのでしょう。木曜日が過ぎるまで気持ちを寛がせるよう努力すると、確

かにお約束したのです。なのに、貴方がそうさせてくださらないのです。どうして寛いだり出来るのですか。さあ、お願いです、こんなに怖がらせないでください」

「で、マダム、貴女の約束はどのようなおつもりからだったのでしょうか。私に好都合なことを少しでもお考えいただいたのでしょうか。あの時、そうしてくださったのだと私が考えるよう、貴女は目論んでおられた。何か私に都合の好いことをお考えだったのでしょうか、マダム。そうなさったのだと私が考えるよう、貴女は意図なさったのですか」

「手を放してください。私から腕をほどいてください［と、争いながらも、身を震わせているのだ］。どうしてそんなに私を見詰めるのです」

「答えていただきましょう、マダム。あのお約束で、私に都合の好いことを何か考えてくださったのでしょうか」

「こんなふうに返答を無理強いされては困ります」

それから、一息入れて気力を高めると、「放すのです」と、彼女が言った。「私はただの女です。ただのか弱い女に過ぎません。でも、私の命は私自身が握っているのです。体こそそうはまいりませんが … このような無理強いを受けたくはございません、私」と言うのだよ。

「無理強いはいたしませんよ、マダム」と、俺は手を放し、頭を下げたのだが、心臓が口まで飛び出して来た感じで、さらなる挑発を待っているのだ。

彼女が立ち上がり、足早に立ち去ろうとしていた。

「お後を追ったりはいたしません、マダム。貴女の寛大さを試してみることにいたしましょう。止まりなさい … 戻るのです。すぐに止まって戻るのです。私を自暴自棄に追い込むつもりではないのでしたらね、マダム」

彼女はドアのところで立ち止まると、ワッと泣き出し、「あゝ、ラヴレース … どうしてでしょう。どうして私がこんな目に … 」と言うのだ。

「何卒、愛しの天使よ、お戻りいただきたい」

彼女は戻って来たが、不本意な気持ちを露骨に表しているし、恐ろしいから応じるのだと言うのだよ。

これまでにも俺は気づいていたし、気づいたからといって、ほとんど得にはならなかったわけだが、彼女のせいでそうせざるを得ない場合には、ジャック、恐怖心に頼らねばならないのだよ。あの毅然として揺るぎない魅惑の君に対しては、他のいかなるものをもってしても効き目がないのだ。

彼女は俺の真向かいに席を取った。極度に落ち着きのない様子だが、その面立ちを支配しているものは、明らかに憤りの気持ちだ。

俺は彼女のところへ近寄ろうとした。表情を一変させ、愛情と優しさを満面に浮かべながらだ。愛しの君、最愛の人よ、というのが俺が口にした台詞で、口調もそれ以上ないほどの優しく甘いものだった。ところが、彼女は立ち上がると、俺は離れたところに座るよう言い張るのだ。

俺は言われたとおりにしたよ。そして、この手を伸ばし、テーブル越しに彼女の手を求めたのだ。これは、口に出して言ったとおり、何か一つでも俺の願いを入れる気持ちが彼女にはあるのか、それを知るためだったのだよ。ところが、慇懃さ、優しさ、情愛の深さといったものは何一つ役に立たないのだな。彼女は手を拒んでみせたのだ。恐怖以外には

効き目がないことを確証して見せるとは、ジャック、利口だったのだろうかな、彼女は。

「これだけは教えていただきたいのですが、マダム、来週の木曜日の成り行きをおとなしく待つよう努力するとのお約束でしたが、あれは私のためを思ってくださってのことなのでしょうか」

「相手には選ぶ自由を与えようとなさらないのに、貴方のほうでは、相手が進んで好意を示すことを期待なさるのですか」

「お手を与えてくださるのは、マダム、伯父上のおられるところでとお考えなのでしょうか、それとも、そのおつもりはないのでしょうか」

「自分の心と手に別々の動きをさせるようなことは決してございません。私にとりましては最も大切な、血を分けた親戚に対しまして、何故に私は盾突いたのだと貴方はお考えでしょうか」

「何をおっしゃりたいのかは分かりますよ、マダム。それでは、私はあの卑しいソームズと同じ程度に、貴方にとっては厭わしいわけですね」

「そのような質問は止めていただきますわ、ラヴレースさん」

「お答えいただかねばなりませんね。私はあの卑しいソームズと同じくらい、貴女には厭わしいのでしょうか」

「どうしてソームズさんのことを卑しいとおっしゃるのでしょう」

「貴女はそのようには思わないのですか、マダム」

「どうして私がそんなふうに考えたりするのでしょうか。ソームズさんが私に卑劣な真似などなさったことはあったでしょうか」

「最愛の人よ、私を逆上させないでほしいのです。悪意に溢れた比較などをなさってです。それに、もしかすると、もっと悪意の籠もった選び方をなさるかもしれないのだ」

「貴方こそお尋ねにならないことですね。私の返事がどれほど貴方を怒らせることになりましても、ご承知のとおり、私のほうでは本当のところをお答えすることになりますような、そんなご質問についてはです」

「私の心が、マダム、私の魂が、すべて今は貴女のものなのです。だが、希望を与えていただかねばなりません。貴女ご自身の受け止め方からしても、あのお約束が貴女を縛ることになるでしょうが、そうしてはいけない新たな原因が生じないかぎり、木曜日には私のものになってくださるのだという望みをです。でなければ、どうして貴女と離れることなど出来ましょう」

「ハムステッドへ行かせていただきますわ。私の好意を当てになさることですね」

「当てにして良いのでしょうか。一言、お願いします。当てにして構わないのですか」

「どのようにして当てになさるおつもりなのでしょうか。もしも、この問いへの答えを無理強いなさるのでしたらね」

「一言で良いのです、最愛の人よ、一言お願いいたします。ハムステッドへ行かれた場合には、ご好意を当てにして宜しいのでしょうか」

「遠慮なく言わせていただきますが、愛顧に与る約束を取り付けようなどと、よくもまあ厚かましいことをお考えになるものですね。私のことをどんなにか卑しい人間のようにお考えになることでしょうね。貴方のあの恩知らずな仕打ちがあった後ですのに、もしもそのような約束を与えるようでしたらね」

そして、立ち上がると、「あなたはこの私を、あゝ、極悪非道の男」と、両手の指を組み合わせ、怒りに顔一面を真紅に染めながらだ」、不道徳極まりない家の住人にしてしまわれたのです。とは申せ、ここに留まっております間、この家への嫌悪の情、そして、あなたへの嫌悪の情以外、私の心に浮かびますものは他にはないはずです」と言うのだよ。

それから、天使はぐるりと辺りを見渡し、俺にも目を向けたのだが、その愛らしい表情には、自分が口にした遠慮のない言葉の結果に対する恐怖の色が窺われたのだよ。それにしても、男の勇猛さを愛する俺ではあるが、あの瞬間、復讐心を刺激されるよりも、彼女の堅忍不抜さを称賛する気持ちに動かされるほうが強かったというのでなければ、よほどの外道だったに違いないな、この俺も。

「心気高き人よ。貴女を危険な状態に放置しておくようなことが、そして、このように衆に秀でた人に対する自分の権利を危険に晒すようなことが、この私に出来るなどと貴女はお考えなのでしょうか。お約束は一切していただけないのですね。何一つ望みはないわけですね。私を絶望に追い込まないようにしてくださるならの話だが、その場合にも、私の力でなし得るかぎりの、ありとあらゆる償いを行わないようであれば、稲妻にこの身を吹き飛ばしてもらっても構わないのだ」

「私を喜ばせようというお気持ちが少しでもおありなら、私の好きなようにさせていただきたいのです。そして、この忌まわしい家に引き止めないでいただきたいのです。こんなふうに閉じ込められてしまうなんて　…　貴方の卑劣な手先たちによって制止されるなんて　…　力ずくで階上へと連れて来られ、そして、このような不法な暴力行為から身を守ろうとして、傷を負わされるなんて　…　私は怖がらずに死んでみせますよ、ラヴレース。そして、死を恐れない者は、脅されたからといって、自分の心と信念に相応しくない卑劣な振舞いをしたりしないものなのです」

「何と素晴らしい人なのだ。だが、何故に貴女は、マダム、この次の木曜日に向け、何か有望なことを期待させるよう仕向けたりなさったのです。今一度申しましょう。私を絶望へと追い込まないことです。それだけの寛大さを備えてはおられても、誉れ高き人よ」「俺はほとんど狂乱状態だったのだよ、ベルフォード」、やはり貴女も、貴女にしても　…　いや、いや、野獣のように貴女を脅すような真似はさせないでほしい。どうか、私を絶望に追い込まないでいただきたいのだ」

俺の顔付きが言葉にもまして脅威を与えたのだろうと思う。俺が立とうとすると、彼女が立ち上がった。「落ち着いてください、ラヴレースさん。長いこと恐れておりましたあのラヴレースにさらに輪を掛けたように、貴方が恐ろしく思われるのです　…　下がらせてください　…　引き下がる許可をいただきたいのです　…　本当に、貴方のことが怖くなってしまいます　…　それでも、希望は一切与えるわけにまいりません　…　心の底から私は忌み　…　」

「おっしゃってはなりません、マダム、私を忌み嫌っているなどとは。貴女ご自身のためなのです。私への憎しみはお隠しにならなければいけません　…　少なくとも、断言してはいけません」　俺は彼女の手を掴んだ。

「下がらせてください　…　下がらせていただきます」と、彼女はやや息を切らしながら言っていた。

「貴女の寛大なお心に、マダム、この身を委ねると、それだけ申しておきましょう。今

この瞬間は、自分の心が当てにならないのです。ご意向に従う印といたしまして、もしもそうなさりたいのなら、お引き取りいただくことにしましょう。だが、私はM邸へはまいりません。M卿が生きておられようと亡くなられようとです。M邸へは行かず、お約束の結果を待つことにいたします。お忘れなきよう願います、マダム。〈来週の木曜日の成り行きを見届けるまでは、気持ちを寛がせるよう努力する〉と、貴女はそのように約束してくださったのです。来週の木曜日には、宜しいですね、伯父上が上京なさるのです。私たちが結ばれるところをご覧になるためです。それが〈成り行き〉なのですよ。貴女はご自分のラヴレースのことを良くは思っておられませんが … 貴女もおっしゃるように、マダム、そんなラヴレースの例に〈感染〉して、貴女ご自身の品行が堕落するのを放っておくようなことをなさってはいけません」

魅惑の君は、この半ば許可とも取れる言葉を聞くと、飛ぶようにして去って行った。そして、難を逃れたと彼女が考えたのは疑いのないところだろうが、それにも一理無いわけでもないのだよ。

この身をどう処したものか、俺も半時間は判断のつかない状態だった。しかしながら（今は彼女も俺の元を去ったわけだし、俺に対する彼女の憎悪の念や公然たる反抗のことを振り返って見ての話なのだが）、すっかり威圧され、制止を受け、抑制されるままになっていた自分の姿に、心の中で困惑を覚えていたのだよ。

そして、ここまで書き進めてみたわけだが（勿論、二人の会話を何から何まで思い出してのことだ）、自分自身にますます腹が立ってしまうのだ。

だが、ここの女たちのところへ降りて行くことにする。おそらく、連中からは笑い者にされてしまうことだろうな。

あの連中ときたら救いようのない奴らだよ。女のことについては、やはり自分たちが知っているのだという顔をするのだ。サリーはきちんと教育を受けた女だし、ポリーにしても同じだ。二人とも学があるし、共に分別を備えている。家柄も卑しくない。以前は二人とも淑やかであったし、俺さえいなければ、今も淑やかだったはずだと、二人は言っている。今だって、まったく慎みがないというわけでもないのだよ。もっとも、個人的に親しく付き合うのには、あまりにも上品さが欠けているのだ。二人とも、俺がそんなふうに考えるのは嫌がっているのだがね。年増のほうにしても、こうまで惨めに身を落としてはいるが（当初の苦しい暮らし向きにもよるが、また、芳しくない性向のためもあるのだ）、これまた良家の出なのだよ。そんなこともあって、連中は揃ってかつての自分たちのことを思い出したような振りをするのだ。女すべてに備わる性向や偽善的な気持ちのことを断言してみせるし、また、俺がバークシャーへ行っている間、あの強情な淑女を自分たちの管理下に置いてくれるよう、そのことを他の何にもまして熱望しているのだが、俺が戻る頃には、彼女も謙虚な態度になり、言うことを聞くようになっているのは絶対に請け合うというのだよ。そして、自分たちと同じ道を辿らざるを得ないようにしてやった、たくさんの強情者たちのことを絶えず自慢の種にしているのだ。

∴　　∴

この女妖術師たちのところから今戻って来た。

やむなく母さんの鼻をへし折ってやらねばならなかったよ。というのも、母さんは俺に向かって、例の「おやおや、旦那様」という台詞をぶつけ始め、俺を問い詰めたり、叱りつけたりし出したのだ。まるで、俺は母さんに借金があるといわんばかりの、そんな横柄な態度でだよ。

やっとのことで母さんを追い出したところだ。母さんが姿を消す際、われわれはお互いに対して奇妙な願いを口にしたのだよ。どんな願いだと訊くのか。教えてやろう。俺が結婚して、妻のことを嫉妬するよう、母さんは願っていた。また、俺の法定推定相続人が別の男の子供であってほしいと言うのだよ。俺もまさしく互角に渡り合ってやったさ。しかし、貴公としては、それは到底無理な話だと思うだろうな。一体どんな手を使ってのことなのだ、とな。どんな手だと、ジャック。なに、彼女の良心が甦るよう願ってやったまでさ。俺自身、三十分おきに良心には苛まれているわけだから、彼女にしても、そんなことになれば、ひどく辛い時を過ごすことになるはずなのだよ。

サリーとポリーも偉そうに格好をつけていた。連中の初穂というのは、俺に捧げられたわけだが［女が例の捧げものについて手柄顔をするというのだからな。受け取る俺にも負けないくらい、大喜びで連中はあれを手放すつもりでいたのだよ。連中にとって骨の折れる点といえば、最初の体裁を整えるところだけだからな］、俺には感謝の気持ちが欠けているだの、臆病だのと詰られたよ。そして、俺が我が天使にてこずっているのも、すべて俺が悪いということにされてしまった。一撃の後の止めを忘れたためであり、高慢な令嬢に思いどおりの我が儘を許し、彼女自身を咎めるような余地は与えなかったためだというのだ。そして、全員の一致した考えとしては、ある特別な折に彼女に対して用いられた、例の手管の効力があまりに強かったため、厳しい試練に直面した場合には、彼女の気持ちはどうなっていたのか、連中にしても俺にしても、その点について判断することが出来ずにいるのだ、ということだった。その後、連中は互いに相手を非難していたよ。俺のほうでも連中全員を呪ってやったがね。

連中の結論としては、俺は確かに結婚すべきであって、年貢を納める頃合だというのだな。そして、この際、サリーは勿体ぶった、意地の悪い笑みを浮かべながら、俺に向かって指を鳴らし、それぞれの手の指を二本ずつフォークのようにして俺に突き付けると、かつて俺が彼女に見せてやったことのある、俺の贔屓のジャック・ドライデンの次の詩行を思い出せと言うのだが、この娘はあの著名な詩人のことをいつも馴れ馴れしくそんなふうに呼んでいるのだ。

我ら女性も人知れぬ新たなる歓びへ向かうことあり。
愛の小道に残されし跡は一つとしてなし。
他の物はすべからく公の標しによりて知らるる。
されど、人が保持せんと最も望む物は一切の標しを持たず（四）。

というやつだよ。

地獄から遣わされたようなこの女は、厚かましいことに、さらにこんなことまで仄めかしたのだ。つまり、だれか別の男が我が天使を相手にしても、人妻となった暁には、俺が味わった苦労の半分もてこずることはないだろう、というのだな。まったく、厚かましい

かぎりだ。だが、言っておかねばなるまいが、この愛しの君は、俺が嫉妬を覚えたりすることのない、この世で唯一人の女だということだよ。ただ、こんな悪魔みたいな女たちとの付き合いに耽ってしまうと、決して心を休めさせてはくれないから、男としても、やがては自分の妻を疑ったり憎しみを感じたりすることになってしまうのさ。

だが、他の件について一言、二言、出来れば触れておこうと思う。

M邸では事態はどのように進んでいるのか、知りたい気もするのだよ。老いぼれ貴族が極めて危険な状態にあるという、別の非公式な情報も入っているのだ。

田舎へ向かわねばならん。だが、その間、この令嬢のことはどうしたものだろうか。この忌々しい女どもは残酷さと冒険心をたっぷりと備えているのだ。俺の留守中、あの連中と一緒では、彼女も決して心の休まることはないだろう。連中としては挑発を受けるだろうし、それゆえ、口実も出来ることになるのだ。もっとも、ひどい目に遭わせてやるつもりではいるのだよ、仮にも連中が　…

だが、侮辱が加えられた後では、復讐をしたところでどうなるというのだ。二人の妖精は激しい嫉妬に駆り立てられてしまうことだろう。それに、どうやって引き止めるというのだ。嫉妬深くて、すでに操も捨てた女をだよ。

彼女をどこか別の場所に預けるなど　…　それは出来ない相談だ。彼女が望みを与えてくれるなら、俺としては今も誠意を示す決意でいるのだよ。俺が誠意をもって振る舞うことを、彼女のほうで今なお許してくれるというのなら　…　しかし、彼女はきっと味わうはずなのだが、憤慨する気持ち、それに、前回の話し合いから感じて当然な怯えとの間の葛藤の後で、彼女が果たしてどうなるのか、俺としてはそれを見届けようと思うのだ。それゆえ、この件は明日の朝までお預けということにしよう。そして、もう一度老貴族の話に戻ることにする。

俺としても、卑しい人間などでは決してないのだが、予想される出来事の折に礼儀正しくしているのは、相当に骨が折れそうに思うのだよ。それに、弔問の期間はどう振る舞ったら良いというのだ（偽善家などでは決してない俺だからな）。どんな茶番を演じなくてはならんのだろうな。しかも、その主役の一人になるというのだ。自分の末期のことを思い浮かべるよう努力して見るさ。白髪まじりのあごひげのこと、そして、不作法な跡取りのことをだよ。深刻な気分になるためにな。

貴公なら、ベルフォード、この手のしかめ面についてはたっぷりと知識があるし、陽気な心が少しばかり憂鬱な気分を味わうのに手を貸すことも出来る。それどころか、貴公の顔の造作ときたら、その一つ一つがそんな気分にぴったりの造りになっているからな。俺の心のほうは、おそらく、貴公のよりも容易に動かされてしまうだろうな。実は、信じないかもしれないが、俺は極めて感じ易い心をしているのだよ。とは言っても、悲しみの原因がどれほど大きい場合でも、俺の顔を覗き込んだ者で、この心が悲しみに打ちひしがれていると信じるような人間は一人としていないのだ。

俺の顔付きというのは、すべてが穏やかで屈託がなく、晴れやかなものだ。悲しみが丸々半時間の間そこに腰を据えているというのは不可能なのだよ。それどころか、M卿が回復しても、万が一そのようなことが起こればの話だが、十五分以上にわたって俺の感情を動かすことはないはずと信じている。目新しい光景のことがあるだけなのだ（それに、個人的付き合いのある連中の間では、デモクリトスとして通っている俺だが、一族に向かって

ヘラクレイトス(五)を真似て見せるという楽しみもある)。でなければ、老いぼれ貴族が遺してくれるようなものは、何一つ欲しくはないのだよ。だとすれば、こんなにも陽気で楽しげな目鼻立ちが、どうして悲しみのために暗く沈んだり、歪んだりするというのだ。

だが、貴公の顔の場合だが、仮に街角で人殺しがあり、貴公がその場を通り掛かっただけだとしても、殺人犯の姿が見えている時でさえ、追跡者たちは犯人を追うのは止め、貴公を取り押さえることになるだろう。そして、その顔付きだけでも、逮捕は勿論、絞首刑にもつながることになるのだよ、貴公の場合にはな。

ところで、ジャック、取引のことでちょっと話がある。喪服の類については、貴公はどこと取引をしているのだ。損のない取引だったのか。大変な数の喪服が入り用になることだろう。何しろ、一族の連中全員に哀悼の意を表してもらうつもりなのだからな。家の中でとは言わなくとも、外ではだよ。

手紙　十

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月二十三日　金曜日　朝

今朝は早くに外出した。推し進めるべきか否かを今も測り兼ねている、ある計画のことでだ。そして、帰宅したところ、バークシャーで卿の執事をやっているサイモン・パーソンズが俺を待っていた(直前に到着したのだ)。形式に適った伝言を携えていたが、一族全員から託されたもので、俺が田舎へ戻るよう強く迫るものだよ。それも、卿の特段の願いとのことであり、卿としては、この世を去る前に俺に会いたいというのだ。

田舎まで俺を運ぶためだが、サイモンは卿の六頭立てのチャリオット［おそらく、今頃は俺のものになっているのだろうが］を伴って来ていた。明朝四時までには出発準備を整えておくよう、命じたところだ。遅れるようなことがあれば、馬どもが湯気を立てるだけの話だ。それに、途中で取ることになる休息のお陰で、汗を流すのにも一層耐えられるというものだろう。

結婚への決意は依然として揺るがない。我が麗しの天の邪鬼さんが俺を受け入れてくれるならの話だがね。しかし、もしも彼女が受け入れてくれないとしたら　…　何のことはないさ。その場合には、絶え間なく耳を傾けねばならなくなるということだな。俺の良心にではなく、階下のあの女たちにだよ。

サイモンが訪れたことと、その用向きについて、ドーカスが奥様に知らせた。我が愛しの君はあの男に会いたがっていたのだ。だが、俺が戻って来たため、あの男は彼女のご機嫌を伺うわけには行かなくなったのだよ。折しも、尋ねられそうなものの中で、答えてはいけない質問について、ドーカスがあの男に指示を与えていたのだがね。

今すぐにも彼女のところへお目通りを許されることになっている。繰り返しお願いした上でのことだ。財産を手にするのは目前なのだから、きっと彼女と縒りを戻すのにも役立つはずだよ。今、彼女が食堂へ入って行った。

∴　∴

何をやってもうまく行かんのだよ、ジャック。彼女からは好意一つ受けることも出来ない状態だ。彼女のほうでは、切望していた点を俺から勝ち取ったというのにな。

二人の間で交わされた事柄について、掻い摘んで報告しておこう。

俺は先ず、即刻結婚することを提案したのだ。しかも、これ以上はないという熱烈さでだよ。ところが、負けず劣らず熱の入った態度で断られてしまった。

「火曜の朝までのことに過ぎないのだが、この家に留まってくれるよう、約束してもらえるだろうか。俺としては、ちょっと田舎へ足を運び、M卿の容体を確かめたい　…　ひどく俺に会いたがっておられたので、まだ意識のあるうちに、何か取り立てて俺に話したいこととか、指示したいことでもあるかどうか、それを知りたいのだ」とだ。そして、「おそらく、日曜日には戻れるはずです。少しは譲歩していただきたい。お願いします、マダム、わずかなことで結構なのです。思いやりを示していただきたいのです」と、俺は頼み込んだのだ。

「貴方の行動次第で私のことが決められてしまいますのは、何故なのでしょう、ラヴレースさん。自分の体を拘束することになりますのに、私が進んでそれに認可を与えるとでもお思いでしょうか。貴方が滞在なさろうとお戻りになろうと、この私にとりまして、それが一体どれほどの意味を持つべきなのでしょうか」

「〈貴女のお体を拘束することに認可を与える〉ですって　…　！　私が法律を恐れるとでもお思いなのですか、マダム」

この馬鹿げた挑戦的な質問は、口に出さずにおくことも出来たのだよ。だが、俺のプライドが許さなかったのだ。俺としては、ジャック、彼女が脅しをかけているように思ったのだよ。

「貴方が法律を怖がっておられるとは思いませんわ。道徳的な制裁にせよ神の制裁にせよ、そのどちらに留意なさるにいたしましても、そのためには、貴方はあまりにも勇敢でいらっしゃいますからね」

「結構でしょう、マダム。だが、何でも構いませんから、私にも出来る、貴女に喜んでいただけるようなことを要求していただきましょう。満足していただくつもりですよ。貴女のほうからは、何一つ恩恵を施していただけないのでしょうが」

「じゃあ、お願いいたします。ハムステッドへまいりますのを許してくださるよう要求いたしますわ」

俺は言葉に詰まったよ。そして、ようやくのことで、「行っていただきますとも。確かなことですよ。今すぐにでもお供をいたしまして、あちらに落ち着かれるのを見届けようと思います。木曜日に、伯父上のいらっしゃるところでですが、結婚してくださることを約束していただけるならです」と言ったのだ。

「落ち着くところを貴方に見届けていただく必要などございませんわ。お約束は何一ついたしかねます」

「今後ともご好意は一切頼りに出来ないのだということを、マダム、私に見抜かれないよう、注意なさるのですね」

「貴方からの脅しには慣らされてしまいましたわ。でも、ハムステッドへのご同伴はお受けいたします。十五分で出発の用意は整いましょう。衣類は後ほど届けてもらうことも出来ますわね」

「条件はご承知でしょうね、マダム。今度の木曜日のことです」
「当てになさるような真似は貴方でも　…　」
「数え切れないほどの自分の落ち度からいたしましても、そうすべきでないことは弁えているのです。それでもやはり、貴女のお心の広さには頼りたいと思うのです。明朝（そうしてはいけない根拠となるような、新たな原因でも生じないかぎりは）、お好きなだけ早くにハムステッドへ向けて発たれて結構です」
これは彼女の願いに適ったようだった。それなのに、彼女は疑わしげな表情を見せていたのだよ。
女たちのところへ降りて行くことにするよ、ベルフォード。そして、もっと優れた目利きが手近にいないこともあるが、この誇り高き美女を相手とした俺の重大局面に関し、連中はどんなことを言うのか、ひとつ聞いてみようと思うのだ。足下に跪いている、ラヴレースとも呼ばれた男を、あれほど横柄な態度で拒んでくれたのだからな。手枷足枷で縛られるような立場は毛嫌いしているにも拘らず、夫としてこの身を捧げようと、熱心に申し入れていたというのにだよ。

手紙　十一
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

ちょうど今、女どもと別れて来たところだ。
「ここまで事を進めたというのに、もう一押しするのが怖いのか。彼女の振舞いからも明らかだが、すでに俺は許すことの出来ない罪を犯しているのではないのか。女の涙などというものは、これまでの俺にとっては、燃え盛る火に振り掛けられた水滴に過ぎず、ますます火勢を煽り、鮮やかに炎を燃え立たせるのが常だったのだ。涙と雄弁さを別にすると、この淑女にはどんな防御手段があるというのか。彼女はこれまで、弱みにつけ込まれたようなことは決してなかった。あの試練の瞬間にも、彼女は無意識だったのだ。意識があったのであれば、悟ったに違いないのだよ。連中はそう言っている。彼女に用いた手口は、彼女の栄誉と誇りとを一層高めることになったのだ。今の彼女にしてみれば、語るべき話の種が出来たわけだが、それは、人に話してやっても、自分の名誉になるようなものなのだ。片棒を担ぐ気などはさらさらない。一睨みでもって俺をドギマギさせることが出来るというのに、彼女のほうでは、恥と思うことが必要な、そんな思いの一つすら意識することはない」
こういったところが、ジャック、女どもが俺相手に論じていた事柄の要旨だ。
これと併せて、一言つけ加えさせてもらうが、俺が彼女の元を去らねばならない状況にあることに、今や愛しの君は気づいているということだ。俺のことを見破ってやろうという考えが彼女の頭に浮かんでいる。俺の企みときたら大変な性質のものだから、結婚生活に入る前に正体を見破られでもしたら、忌まわしいことこの上ない男と映ってしまうに違いないのだよ。しかしながら、見てのとおり、彼女には明朝好きなだけ早くに、また、条件に縛られることなく、ハムステッドへ発ってもらうよう約束してしまったのだ。
どんなつもりでこのような約束をしたのだ、と貴公は尋ねるのか。

貴公も覚えているだろうが、「新たな原因でも生じないかぎりは」というのが、俺の側で付けた条件だったのだよ。しかしだな、新たな原因はきっと生じるのさ。

ドーカスが奥様からいただいた約束手形を落としたりしたらどうだろうか。召使というものは、読み書きの出来ない者たちは特にそうだが、書類に関してはこの世でも一番無頓着な連中なのだ。俺がそいつを拾い上げることにしよう。それも、愛しの君に思いのままの行動してもらおうと決意した、まさにその時にだよ。これが露見した暁には、〈新たな原因〉が生じることになるのではないのかな。彼女を相手に、恩知らずな外見を装うことになるような原因だよ。

その件を俺には秘密にしておこうと彼女が目論んだということは、露見するのを恐れる気持ちがあったこと、そして、間接的には、罪の意識があったことを立証しているわけだよ。俺には口実が必要だったのだ。果たして、これ以上のものは得られるだろうか。この一件を見つけ出して、仮に俺が激昂するとしても、激情というのは暴挙の言い訳として広く認められたものではないのだろうか。男にしても女にしても、人はだれしも、自分自身の場合にも御し難いほどの効果を伴っていることに時として気づくような、そんな他人の欠点については、大目に見てやらなければいけないのではないのかな。

おそらく、母さんと娼婦仲間が駆り出され、買収された不埒者を裁くことになろう。この偶然の発見の結果として生じるはずの利益というのは、最小限に見積もって、悪事を働くための口実ではないにしても［もっとも、これが実際のところかもしれないな］、M邸から俺が戻るまでは彼女を引き止めて置くよう、改めて指示を出すための言い訳、また、彼女の手になるものであれ、彼女のところへ送られてくるものであれ、どんな手紙であっても、俺に届けるように指示を出し、以前にも増して厳しく彼女を見張るための言い訳が出来るという点だ。そして、俺が戻ってきた時には、悪魔が邪魔でもしないかぎり、見つかるはずなのだ。俺の目論見のすべてに適った下宿を（彼女にはここがあんなにも嫌なわけだから）、彼女に自分から選ばせる方法がだよ。しかも、以前ここに決めた時と同じく、俺が彼女の選び方に指示を与えているようには見えない形でな。

ここまで来ると、貴公は俺のことを呪うだろうな。貴公がそうすることは分かっているのだよ。しかし、これだけ工夫を重ねた上で、後一歩の工夫が欠けたために、この比類なき女性を失ってしまうような、そんな真似を俺がするなどと貴公は思うのかな。放蕩者はあくまでも放蕩者なのだよ、ジャック。それに、自分が切望し、また、首尾よく成し遂げられると考えている悪事について、信条ゆえにその犯行を差し控えるような放蕩児は、果たしているだろうか。さらに、結婚のことでは、俺は本気なのではないのかな。もしも本当に結婚すれば、世間の大多数の者は俺を許すのではないだろうか。また、教会での式がいつでも埋め合わせをしてくれるのであれば、そんな損害などは何だというのだ。最終的に結婚生活を迎える場合、すべての物語の結末は目出度いものと見做されるのではないのかな。結婚生活へと向かう行程がどれほど困難なものだとしてもだよ。

それにしても、こんなところで俺は、この令嬢のことでどこまで心を奪われているというのだろう。その間も哀れなM卿は、サイモンが教えてくれているように、病床に伏したまま、これ以上はないという恐ろしいほどの苦痛に呻き声を上げているのだよ。大変な苦しみに違いないのだ。天よ、卿の苦しみを和らげ給え。俺はあまりにも憐れみ深い心をしているのだ。また、愛しの君もそこに気づいてくれたはずなのだ。もしも、彼女の苦しみ

の最大のものが卿の苦痛の最も軽いものに等しいというふうに、俺に考えることが出来たならの話だがね。俺が言っているのは、事実に関してだぞ。彼女の苦しみのうちで、度を越した感受性から生じている部分については、俺にも皆目分からない。従って、責任のあることは言えないのだよ。

手紙　十二
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

魅惑の君と今別れて来たところだ。俺の誠実な心は、喜んでもらえそうな事柄や、優しさのこもった言葉ですぐにも溢れそうになるのだが、彼女はその半分も俺に言わせてくれないのだよ。男のほうでは滔々と論じたい気持ち、そして同時に、感情に訴えたい気分になっているというのに、立派な演説に耳を貸してくれるよう、自分の運命を握る恋人の心を引きつけることが出来ないとは、まったくもって忌々しい話だな。

どうしてそんなことになるのか、今では説明を付けることも出来るわけだが、自分の恋人が無情な場合には、愛する男たちは孤独に浸り、木石の類いに胸の想いを打ち明けるものなのだよ。俺も貴公を相手に泣き言を並べざるを得なかったのではなかったかな。

俺の姿を目にするやいなや、彼女は約束の履行を迫ってきた。俺がバークシャーへ向けて発ったならすぐにも、彼女のハムステッド行きを〈認める〉という［彼女は傲慢な口調でこの語を口にしたのだ］、俺の約束のことだよ。

俺は改めて約束したのだが、これ以上はないほどの気持ちの好い態度でだ。

自分が聞いているところで指示を出してほしいと、彼女が希望するのだ。

俺はドーカスとウィルを呼ぶよう命じた。二人がやってきた。「お前たち二人には気をつけてもらいたいのだが［ただ、もしかすると、お前たちは私が連れて行くことになるかもしれないな］、すべてに亘って奥様の指図のとおりにしてもらいたいのだよ。私が出掛けたらすぐに、奥様はハムステッドへ戻られるおつもりなのだ。お供に召使は連れて行かないのかね、君」

「あちらでは召使は要りませんわ」

「ドーカスは連れて行くのかな」

「万一ドーカスが必要になりましたなら、呼び寄せることも出来ましょう」

ドーカスも、「光栄ですわ、もしも　…　」としか言いようがなかった。

「まあ、まあ、その件については、奥様が許してくださるならの話だが、私が戻ってからでも構わないだろう。ところで、君、シンクレア夫人をお呼びして、同じ趣旨の指示を君が聞いているところで与えましょうかね」

「シンクレア夫人にはお会いしたくございません。夫人のところのどなたにもです」

「お好きなように、マダム」

それから（召使たちが引き下がったので）、次の木曜日には祭壇のところで顔を合わせてくれるという保証を、俺はもう一度彼女に迫ったのだ。しかし、何の成果も得られないのだよ。この先どんなことになろうと、すべては彼女の自業自得ではないのだろうかな。

しかしながら、俺としても拒絶されたくない恩恵が一つあったのだ。つまり、その夕べ

を彼女と過ごすよう、部屋へ通してもらうことだよ。
その際には俺も、全身これ柔和さと従順さとの固まりになるつもりだ。許してもらえるよう、彼女の心を動かすことに全身全霊を傾けるのだよ。もしも彼女が許してくれないようなら、そして、例の約束手形が俺の歩く道筋に落ちたりすれば、復讐の念が、頭のてっぺんから爪先まで、俺を虜にしてしまうのは疑いのないところだな。
家中が俺のためを思っており、その一人一人が、必要となれば、脅したり手を貸したりすることを請け合ってくれているだけではないのだ。俺の成功のためには、自分たちの経験のすべても傾けようというのだ。俺自身がドジを踏みさえしなければ、結果は目に見えているというものだな
しかしながら、ジャックよ、これを彼女の最後の試練にするつもりなのだ。そして、この二度目の企ての最中に、また、その後も［意識をそっくり備えたままでだよ］、最初の企ての後と同じように気高く振る舞うようであれば、男を、女を、また、悪魔すらものともしない、完全に実証済みの天使と認められることになるわけだよ。そして、彼女の苦難のすべては終わりを告げることになるのだ。その暁には、俺もあの打ち負かされた悪魔と袂を分かち、改心するつもりでいる。そして、何か下劣な策謀が頭をもたげ、生意気にも俺を迷わそうと目論むようなら、そんな考えに身を任せたりせず、そいつが立ち上がろうとするところを、この心の中で刺し殺してやるつもりなのだ。
二、三時間もすれば、いよいよすべてが決まるのだ。だが、事がどう運ぶにせよ、M邸に着くまでは、あまりに忙しくて、改めて筆を執るわけには行かないだろう。
それはそうと、妙に心が動揺している。思い切って彼女の面前へと罷り出る前に、出来ることなら、この動揺は静めておかなければならないな。この心臓のせいで、胸がテーブルから飛び上がるのだよ。ペンを置くことにしよう。そして、その衝動のままに身を任せることにする。

手紙　十三
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

金曜日　夜、というより、土曜日の午前一時
M邸に到着するまでは、もう一行認める時間もなければ、その気にもなれないものと考えていた。だが、時間はあるのだよ。気持ちのほうの工面をしなければならないな。何しろ、眠れはしないし、また、書くことが出来ればの話だが、書き物以外には何をすることも出来ないのだよ。まったくもって忌々しいほど気持ちが晴れない。分別に従わせることだな。もしもつき従うようであればな。俺のほうから手筈はしないことにする。
優しさと愛情とをもって和らげてやろうと試みたわけだが、何をだと思うかな。大理石をだよ。愛情と優しさと、そのどちらをも持ち合わせない心をだ。絶えず彼女の頭を占めているのは、これまでの被害のことなのだ。恩恵は喜んで受けようとする。ハムステッド行きの許可の件だよ。ところが、それに相応しいことをするわけでもなければ、何のお返しもないのだ。従って、慇懃丁寧に振る舞う作戦のほうはすぐに止めることにした。
次に俺は、彼女のほうから挑発してくれることを願った。戦う気持ちを起こすよう自分

に言い聞かせるよりも先に、最初の一撃が加えられるのを待っている臆病な男の子みたいに、俺は、挑戦するなり反抗するなりしてみろと、彼女に半ば挑みかかったのだよ。彼女のほうでは、自分の危険な立場を自覚している様子で、俺の怒りに直接立ち向かおうとはせず、巧みに中道を守っていたため、俺としては無礼を働く口実も、望みを抱く根拠も見つけられない有り様だったのだ。ただし、彼女の伯父がケンティッシュタウンへ来るという俺の作り話は彼女も信じてくれた。そして、トムリンソンが詐欺師だという懸念は抱いていないようだったのだよ。

全体を通して、彼女は俺と一緒にいることを大変不安に感じており、何度もその場から逃げ出したがっていた。それでいて、彼女のハムステッド行きを許すという例の約束を守るよう、しきりと迫るものだから、どうやって免れたら良いものか、俺にも分かりかねる始末なのだ。もっとも、彼女とのことが不確かな現在の状況では、約束の履行を考えるなど不可能な話だがね。

こんな状況で、女どもは今すぐにでも手を貸す気でいるのだし、もしも俺が事を進めない場合には、同じようにすぐにでも嘲笑する気でいるのだよ。俺に何が残されているかといえば、他でもない、申し合わせてあった計画を推し進めること、そして、約束してあった許可を取り下げ、野蛮この上ない強姦魔などという非難を受けてただでは済まないことを思い知らせるためにも、彼女と争う口実を探し出すことだけだろうな。

女どもと同意が出来ていたわけだが、彼女の面前で作戦開始の口実が見つからない場合には、例の手形が俺の行く手に落ちているようにして、彼女が退出したらすぐ、俺がそれを拾い上げる予定になっていたのだ。だが、十時近くなると疑念が生じて来たのだよ（あまりにも熱の籠もった俺の態度、そして、彼女の目が不安と懸念の色を見せているというのに、これは自分でも感じたことだが、眼球を動かす筋肉をこわばらせながら、俺が二度か三度、夢中になって彼女の手を握り締めるのを怪しく思ったのだろうな。彼女は俺の元を去ろうとして懸命だったのだ）。彼女が朝まで休むために実際に引き籠もった場合、果たして再び彼女に近づくのは容易なことかどうか、それは運任せになってしまうのではないのだろうか、とだ。従って、このような危険を冒すのを嫌い、十時を少し回った頃、あらかじめ打ち合わせてあった段取りを変更しようと思って、すぐにまたお相手する旨を言い残し、俺は部屋を出たのだ。ところが、戻って来ると、ドアのところで彼女と出会ったのだ。朝まで休むために引き下がるつもりなのだな。戻ってくれるよう、説得に努めたのだが駄目だった。また、無理にも引き止めるような沈着さも持ち合わせなかったのだ（今し方まではあんなにも愛想良くしていたのだからな）。そんなわけで、彼女は俺の手をすり抜け、自分の部屋へ逃げ込んでしまったのだよ。それゆえ、俺のなすべきことといえば、以前の打ち合わせどおりに事を進めるだけになったというわけだ。

前もって触れておくべきであったが（ただ、時間的な順序とか脈絡、あるいは、他のいかなることであれ、気に留めないようにしてくれ）、夜の八時から九時の間に、M卿の別の召使が馬でやって来て、S医師を田舎まで連れて来てもらいたいとのことだった。老いぼれ貴族が以前（連中の判断によれば、卿は今や「死に瀕している」というわけだよ）この医師に治してもらい、命拾いをしたことがあるというのだ。俺は使いを出して、田舎へ同行してくれるよう医者の約束を取った。そして、今朝の四時までには俺が迎えに行くことになっているのだ。でなければ、卿と医者の両方とも悪魔にくれてやるところだよ。万事

収まりがつくまでの話だが、俺が一歩でも動くようであればな。

この一件にその忌々しい鼻先を突っ込もうというのなら、ひとつやってみるのだな。適切な頃合いと場所に至るまで、貴公の思いのままになるようであれば、この身は呪われても構わないぞ。それに、ほんの間もなくの話だからね。

彼女が自分の部屋に入るか入らないかという時に、俺は一片の小さな紙切れを見つけたのだ。俺の部屋へ向かっている際のことで、拾い上げて開いて見たのだが（実は、別の紙に注意深く包み込まれていたのだよ）、一体何かと思えば、奥様の逃亡に際して、便宜を図る気持ちをドーカスに起こさせるため、ダイヤモンドの指輪を贈るという、さらなる約束も添えて、賄賂として与えられた約束手形なのだ。

俺の気分は、それこそあっという間に一変してしまった。リリリン、リリリン、リリリンと、やたらにベルを鳴らした。紐が切れてしまいそうなほど乱暴にだ。まるで家に火がついたみたいにだよ。

だれもかれもが慌てふためき、盛んに動き回る。家中が大騒ぎだ。ウィルが駆け上がって来る。「旦那様、旦那様、旦那様」と、目をぎょろつかせ、だらしなく口は開きっぱなしだ。「いけ好かないドーカスの奴にここへ来るように言うのだ」と、（階段のてっぺんに立ちはだかり）恐ろしいまでの剣幕で、息を切らせながら俺は叫んだ。

ガタガタ震えている奴の姿が見えて来た。だが、離れたところに立っているのだ。自分が耳にしたことにもよるのだろうが、俺が激怒しているという、ウィルからの報告もあってのことなのだ。

俺の剣が直ちに鞘を離れ、キラリと閃光が走った。いつでも使えるように、剣は身に帯びていたのだよ。「忌々しい。けしからん。ひどい話だ。賄賂だよ。買収だ」

奥様の部屋へと小娘が駆けて行く、身の安全と保護を求め、金切り声を上げながらだ。「旦那様、後生ですから」と、ウィルが仲裁に入った。「あゝ、神様、あゝ、神様」と叫んでいるのは、まともに一発横面を張られたからだ。

「それでも食らえ、下種め。思い知らせてやろうというのに、恩知らずの野郎なんかを守ってやるからだ」

「野郎」なのだよ。俺はそう言おうとしたのだ。だが、もしも似たような終り方をする何か別の語(六)になっていても、激情に駆られていたことを言い訳にしてもらおう。

仲間の娼婦が二、三人駆け上がって来た。「何ですの。何がありましたの」とな。

「何があっただと」と、俺が叫ぶ（というのも、我が愛しの君は依然としてドアを開けないのだよ。それどころか、さらにもう一つ差し金を掛けたからだ）。「この忌まわしいドーカスときたら　…　（奴の伯母を呼んで来るんだな。伯母に分かってもらおうじゃないか。何という裏切り女を私の傍に仕えさせたのかということをだよ。その上で、伯母にやってもらうのだ。あいつの申し開きを引き出すのをな）　…　賄賂を受け取ったのだ。生涯を保証するものだが、自分に寄せられていた信頼を裏切るためだ。そうやって、夫婦のいざこざを長引かせようというのだ。私たちの和解の望みを永久に挫いてしまおうというのだよ」とな。

こんな茶番を辛抱して続けるなんて、ベルフォード、とてもじゃないがやってられないのだよ、俺としても。

どうしても続けねばならんというのなら、仕方あるまいな　…

ふうふう喘ぎながら伯母がやって来た。お慈悲を願って申し上げるが、この件に自分は一切関わりがない　…　これほど陰謀好きで意固地なご婦人には生まれてこの方会ったこともない　…　ラヴレース夫人のようなご婦人方が、鼻薬を嗅がせて良心の痛みも感じないようでは、召使たちがこんな状態なのも無理のない話だ　…　自分としては、あの恥知らずに情けを掛けていただくことは決して望まないし、信頼に対して忠実に応えるようでなければ、自分の姪などではない　…　と言うのだ。そして、でも、何を証拠におっしゃるのでしょう、と尋ねるのだ。

伯母に例の紙片が示されると　…

それにいたしましても、あまりにもはっきりしておりますわね、とのことだった。それぞれの者の口を突いて出たのは、忌々しい奴だよ、人でなしね、あばずれ女だわ、といった言葉で、そして、買収された者の堕落ぶりと、賄賂を使った女性の卑劣さとが激しい非難の的となったのだ。

われわれは全員打ち揃い、令嬢のドアの前を通って食堂へと向かった。裁判に取り掛かるためだ。

ドタ、ドタ、ドタと、それぞれがふん反り返って歩を進め、喧々囂々と、誰も彼もが声を張り上げる。

その娘を皆の前に引き出すのだ、今すぐに　…

それで、奥様は家を出ようとしておられたというのかな。

こういったところが、麗しき女流買収家のドアの前をわれわれが騒々しく通り過ぎた際に発した物音と話し声だ。

二人の者に挟まれて、ドーカスが（ベソをかきながら）連れて来られた。あの娘を二階へ上げようとして、引っ張ったり押したりしながら、二人は大声でこう叫んでいた。「行かなくてはならないのよ」「行ってもらいますからね」「お前が自分でお答えするのが良いのよ」「律義な使用人たち皆にとっては面汚しだわ」とだ。娘のほうでは、「旦那様にはお会いするわけにまいりません。あんなにも優しくて気前の良い紳士ですもの。お顔をまともに拝見することなど出来ませんわ。あゝ、伯母の怒鳴り声にどう耐えたら良いというのでしょう」と、鼻を鳴らしながら泣き言を並べていたよ。

「こっちへ来るんだ、畜生め。その娘を引っ張り出してもらおうか」と、厳然たる判事様の言葉だよ。「まったく、何てことだ。罪を犯したからじゃなくて、見つかったからなのだよ、お前がうろたえているのは。日付からすると、悪事を働きながら、何日もの間平気な顔をしていられたというわけだな、お前は。話すんだな、恩知らずの人でなしめ。最初に言い出したのはだれなんだ。話すんだよ」とな。

「そのとおりよ。私の家族や血筋を汚すものだわ」と、年増が叫んだ。「旦那様にお話しするのよ。本当のことをおっしゃい。先に言い出したのはだれなの」

「すでに信頼を一つ裏切っているのです。あゝ、また裏切るような真似はさせないでください。奥様は立派な奥様なのです。辛い目に遭われることのないようお願いします」

「知っていることは残らず話すのね。本当のところを全部話すのよ、ドーカス」と、ポ

リー・ホートンが叫んだ。「旦那様は奥様のことをとっても愛していらっしゃるのですからね。ひどく辛い目に遭わせられるようなことはありませんよ。奥様のほうでは、その愛にあまり報いてはおられませんけれどね」

「それはだれの目にもはっきりしてますわね」　サリーが叫んでいた。あまりにはっきりしていて、面目が立たんくらいだと、もう少しで俺も口にするところだった。

「今までは、私の愛に応えてくれるものと思っていたのだ。だが、また家出をするのを恐れ、妻の動きを見張るよう命令を受けていると想像してのことだが、こんなふうに、召使に鼻薬を嗅がせるなんて　…　そして、そんな用心を犯罪行為として私の責任にするとは　…　それでも、愛してしまうのだ、妻のことは。ご婦人方、弱いところをお見せしてしまいましたね。お許し願いたい」

こんな気取った真似はやってられん。繰り返してみせる辛抱強さがあるにしてもだ。だが、貴公にはすべてを明かすことにしよう。貴公が俺を軽蔑することはあっても、俺が我と我が身を軽蔑する以上に蔑むことは出来ないのだからな。

∴　　∴

「でも、いかがでしょうか」と、サリーが大声を上げた。「この娘を奥様に引き合わせてみられては。ご覧のとおり、白状したがらないのですから」とだ。

「あゝ、私が不注意なばっかりに　…　」と、ドーカスが叫んだ。「お気の毒な奥様を苦しませないでいただきたいのです。本当に、私の知っておりますことを皆さんもご存じになれば、奥様は惨い仕打ちをお受けになったのだと、きっとおっしゃってくださるはずですわ」

「ほら、ほら、そうよ、そうよ」と、皆が一斉に繰り返した。「旦那様のおっしゃるとおり、見つかったのを後悔しているだけよ。過ちを悔いているのじゃないわ」とだ。

皆の口から漏れるのは、罰当たりな娘ね、人でなしだわ、という声だ。

「お前の奥様は、お前を助けにお部屋を出てくださらないのね。出ようとはなさらないのよ」と、サリーが叫んでいた。「旦那様が今この場で、お前のその汚らわしい喉を掻き切ってしまわれないのは、それがお前に相応のことだからじゃなくて、むしろ旦那様のお情けなのだけれどもね」

「話すのよ」と、ポリーが重ねて言っていた。「最初に言い出されたのは奥様なの。それとも、あんたなのかしら。さあ、どうなの、お前」

「もし奥様に道義心が」と、母さんが大声を上げた。「失礼ですけれど、あん　…　［困った婆さんだよ。もう少しで〈あんた〉と呼ぶところだったのだ］、失礼ですけれど、旦那様、もしも奥様に私たちが考えておりましたとおりの道義心がおありでしたら、哀れな召使の汚名を晴らすために出ていらっしゃるはずですわ。あのように気前の良い約束をいただきましたために、娘もあのとおり間違いを犯してしまったのですからね。でも、どちらにも公正な扱いをしてくださるものと期待しておりますわ。そうしていただけるのでしょうね。本当に何てことでしょう。本当に何てことなのでしょうね」と、両手を握り合わせながら話すのだ。「あの方のお求めであれば、何もかもお許しになるのですもの。清浄無垢な拙宅にあの方がいわれのない敵意を抱かれましても、そのまま放っておかれるのですか

らね。旦那様のお言葉ですと、あの方からは何一つ、そう、これっぽっちも譲歩は得られないとのことでしたのに、ハムステッドへ行かせてお上げになるなんて　…　あゝ、旦那様、旦那様、私といたしましては、私の希望といたしましては　…　どうしても奥様が出ていらっしゃらないのでしたら、奥様の前でこの申し開きをお聞きくださるような、そんな方策を見つけ出していただきたいものですわ。このような折ですから、私、部屋のドアなど少しも惜しいとは思いませんわ。正義というものを私はいつも大切にしてまいりました。真相を突き止められ、私の身の証を立てていただけたらと思いますわ。誓って申し上げますが、この腹黒い買収行為に密かに関与していたなどということは一切ございませんからね、私は」とだよ。

ちょうどその時、令嬢のドアの閂、錠、差し金の外れる音がわれわれの耳に届いた。

さあ、旦那様。

さあ、ラヴレース様。

さあ、旦那様と、だれの口からも励ましの言葉だ。

だが、あゝ、ジャック、ジャック、ジャック、これ以上は書くに耐えんのだよ、俺も。

∴

∴

どうしてもすべてを明かせというのなら、そうしなければなるまい。

さて、ベルフォードよ、われわれ全員が裁きの場に臨み、麗しき賄賂使いの女を罰する決意でいるものと想定してもらおう。俺、そして、あの母さん、つまり、これまで恐れられていたあの母さん、その姪のサリーとポリー、裏切りを働いたドーカス、それにメーベルだが、これはいわばドーカスの見張り番で、ドーカスが逃げ出して姿を消したりしないようにというわけだよ。全員すでに気持ちは固まっているのだ。それも、俺が出掛けることになっている例の旅のこと、また、彼女との間の不確かな状況のことがあるため、やむなく前もって決めてしまっているのだよ。そして、彼女がドアの差し金、錠、閂を外す音が聞こえて来るのだ。それから彼女は、後になって分かったことだが、ドアの外側から鍵を差し込んで錠を掛け、鍵はポケットにしまったのだ。ウィルが階下に控えているのは知っていたが、もしも、われわれ全員が二階にいる間に、万が一彼女が方向を間違え、食堂へ来る代わりに階下に降りるようなことがあれば、俺に知らせようというのだよ。表口の戸締まりも二重にしてあるし、家中の窓の雨戸も一つ残らず閉め立ててあるが、物音とか叫び声とかを一つでも聞きつけられることのないようにというわけだ「残酷な手筈はこうまで整えられていたのだよ」。それから、こちらへ向かう彼女の足音が聞こえ、そして即座に、自らの潔白を信じながらわれわれのところへ入って来る姿が目に映るのだ。彼女の容姿にも態度にもある種の威厳が備わっているのだ。もって生まれたものではあるが、この時ばかりは、そのあらん限りの栄光に包まれて輝いていたのだよ。だれもが黙り込んでしまった。だれの目にも畏怖の色が浮かんだ。だれもが心を震わせているのだ。俺のは特別で、鼓動も立てず、一度喉元まで飛び上がったかと思うと、二度は日頃の場所よりも沈み込んでしまうという有り様なのだよ。情けない卑怯者だ。彼女も口を閉ざしたまま、周りに視線を投げ掛けていた。初めは俺のほうに、次には母さんに向かってだが、もう母さんを怖がってはいないようにだよ。それから、サリーとポリー、そして、被告人のドーカス

といった具合だ。あの恐ろしい瞬間にも、清廉潔白の身はその輝かしい力をこうまで発揮してみせたというわけだ。

彼女は口を開こうとしたのだが、言葉にはならなかった。そして、睨みつけてくるものだから、俺も罪の意識にうろたえてしまったのだ。床を走るネズミの足音でさえ聞き取れたことだろうな。彼女のあの軽やかな足取りや衣擦れの音も、邪魔にはならなかったはずだ。何しろ、彼女の動きは空中を滑るがごとくであり、魂だけの存在に思えたからな。今俺のほうへ来たかと思うと、次にはドアに向かって進むといった具合に、彼女は何度か行きつ戻りつしていたが、やがて、怒りに打ち克って口を開いた。そして、明瞭な声を取り戻すべく、二度か三度空咳をした後、ようやくにしてこう言ったのだ。「あゝ、見下げ果てた堕落漢ラヴレース、あなたの、そして、あなたの邪悪な共犯者たるこの者たちの、こんな拙劣な姦計が私には見抜けないとでも考えているのですか。

かつては私の恐怖の源であり、絶えず嫌悪を誘っておりましたが、今では憎悪の的となっている女よ［と、母さんを見据えながらだ］、私の意識を奪うためにも、今一度あなたはあの酩酊を誘う薬を（おそらく、用意をしたのはあなただったのでしょうから）盛るべきだったのです。

そうすれば、破廉恥漢よ［と、俺のほうを振り向き］、このような卑劣な策略ではあっても、あなたはもっと安心して頼ることも出来たのでしょう。

それに、邪悪な女たちよ、あなたたちはきっと何百人という無垢なお嬢さんたちを、心身ともに堕落させてしまっているのでしょうが（あなたたちは総出で、その手口を私に示してくれたわけです）、私は結婚していないのだという点を承知しておいてもらいます。あなたたちが手を貸したこともあって、私は操を奪われてしまいましたが、それでも、有難いことに、この悪党と契りを結んだわけではないのです。それに、私には身内がおりまして、私の名誉の回復をあなたたちの手から要求することになりましょう。そして、その者たちの力に私は訴えることにいたします。と申しますのも、この男は私に対して何の力も持たないからなのです。ですから、次の点に留意してもらいます。つまり、あなたたちがこの上さらにどのような侮辱を私に加えるといたしましても、あるいは、そうするようあの男を唆すようなことがありましても、私は、このような悪辣な仕方で裏切られたとは申せ、身分にも財産にも恵まれた人間なのだということです。私は絶対にあの男のものにはならないつもりなのです。また、あなたたちをとことん破滅させるよう、あなたたちを追い詰めてくださるような味方を見つけ出す所存です。そして今、あなたたちの忌まわしい邪悪さについて、このように十分な証拠を手にしましたし、あなたたちの卑劣な挑発の言葉も耳にしたわけですから、情けは一切無用にしようと思うのです」とだ。

連中にしても、俺の惨めな姿を笑うわけには行かなかったのだ。まったくの話、気が咎めているあの人でなしどもは、その一人一人がどれほど身を震わせていたことだろうか。

いつもこのように己の力を発揮することが無実の身には可能だとすれば、罪ある者の分け前として、どれほどの失意が常にその身には降り懸かることになるのだろうか。

「それから、お前のことですよ、浅ましいドーカス。お前は両方を裏切っていたのですね。いかにも私を慕っているようなことを哀れっぽく口にしていたのに　…　立ち去るのです、恥知らず　…　だれ一人お前に危害を加えたりはしないはずです。さあ、消え去るのです。お前は自分の役割を実に立派に演じて見せたのですから、私自身は別として、こ

こに顔を揃えている者のだれからだって咎められることはないのです。お前に危険はありません。このような家では、罪を犯すことが身の安全につながるのです。お前はその破廉恥な役割を、その哀れな役割を、下劣な茶番としては可能なかぎり上手に演じてみせました。お前が目にしている者たち一人一人が（お前より優れた人間ではありませんが、お前の上に立っている者たちです）それぞれの役割を演じるのにも負けないくらい、上手な演技でした。お前は闇の中へと逃げ込むことです。お前なのか、それとも私なのか、一体だれが先に持ち出した話だったのか、この点についての調査は一切なされないはずです」とも言っていた。

　するとあの小娘は、嘘も偽りもないところだが、やたらに怯えた様子で、コソコソと逃げ出したのだ。見張り役のメーベルも右に倣えだよ。もっとも、俺のほうでは陣容の立て直しを図り、残っているようにと、大声でドーカスに呼び掛けたのだがね。ただ、本心からそう思うのだが、悪魔でもあの娘を引き止めることは出来なかったはずだよ。天使が立ち去るように命じたのだからな。

「マダム、ひとつ申し上げたいのだが」と言いながら、俺は彼女のほうへ向かって進もうとした。厳めしい顔付きだが、ひどく苛立ち、恥じらいの色も浮かべてだよ。

　ところが、彼女は俺のほうへ向き直ると、「その場に留まっているのです、あゝ、極悪非道で破廉恥極まりない男。その場に留まりなさい。そんな断固とした顔付きをして、私に触れようとするのも止めるのです。私がむくろとなって、あなたの足下に横たわるようなことを望まないのでしたらね」と叫ぶのだよ。

　驚いたことに、彼女は片手に持ったペンナイフを突き出したのだ。その切っ先を自らの胸に向け、決然とした様子で柄の部分をすっかり握り締めているものだから、奪い取ろうと企てることすら出来ない有り様なのだ。

「私自身以外のどなたにも危害を加えるつもりはございません。貴方は、そして、あなたたち婦人方も、私が行います暴力行為いずれにつきましても、その害が及ぶ恐れはありません。私が頼りといたしますのは、専ら法律のみです。法律こそは　…　」と、彼女はこの語を強調してみせたのだが、こういった者たちには当然の怯えを誘うものであり、今や連中の間にパニックを引き起こした〈法律〉をだ。

　それも無理はないのだよ。何しろ、この世の安逸と富を得んがために身を堕とす者たちというのは、その安逸と富を得る手段に脅威を及ぼすかに思われるものを前にすると、そのすべてに対し、恐れおののいてしまうからな。

「ただ法律だけを手段といたします」と言うのだ。

　ワルで通っている母さんが俺に囁いていたよ。この変わったお嬢さんは、話をつけて手放したほうが良さそうですね、とな。

　サリーも、他の時には厚かましいほどの威勢の良さを見せるのに、もしもラヴレース様が、この方は奥様だということについて、私たちに本当ではないことをおっしゃっておられたのでしたら　…　などと言い出すのだ。

　また、ポリー・ホートンのほうでも、是非とも言っておかねばならない、もしも俺の妻ではないのなら、そのご婦人は極めて不当な扱いを受けたとしか言いようがない、というのだよ。

「その点は、今論じられるべき問題ではないのだ」と、俺が叫んだ。「君と私には分かっ

ていることだが、マダム　…　」

「そのとおりですわね」と、彼女が言っていた。「そして、有難いことに、私はあなたのものではないのです。重ねて申しましょう。そのことを私は有難いことと思っているのです。この悪辣下劣な策略によって、あなたが私に対して卑劣な行為をさらに企てていたことは疑いのないところだと思います。でも、ラヴレース、今の私は意識がしっかりしているのです。あなたのことは心の底から軽蔑しております。あなたは本当に哀れな男です、ラヴレース。よくも出来るものですね、私の前に姿を晒すなんて　…　あなたのような男が　…　」

「マダム、マダム、マダム　…　我慢なりませんね、これほどの侮辱は　…　」と、俺は彼女に詰め寄ったよ。

彼女はドアのところまで退くと、ドアを背に、鋭く尖ったナイフを自らの波打つ胸に向けたのだ。一方、女どもは俺を引き止め、荒れ狂っている婦人を挑発するのは止めてくれるよう懇願していた。連中の〈家〉のために、また、災いの種だからと、連中は懇願するのだよ。そして、三人とも俺にしがみついて離れないのだ。一方、真に勇ましい淑女のほうは、それだけの距離を置くと、俺に挑みかかるような言葉を投げつけて来たのだ。

「怒りを抱いて私に近づこうというのなら、やってみるのですね、ラヴレース。思い切って死んでご覧に入れましょう。自分の名誉を守るためなのです。神様も私の惨めな魂に憐れみを垂れてくださることでしょう。あなたからの憐れみは一切期待いたしません。これだけの距離を置くことが出来ましたが、あなたが二歩近寄ったなら、ひとつご覧に入れましょう。私が思い切ってどんなことをやってのけるのかをです」とだよ。

「私を一人にしてくれないか、君たち。私の天使とだ」　連中は少し離れたところへ退いた。「あゝ、愛しの君よ、ひどくびっくりさせてくれますね」と、両腕を差し出し、片方の膝を床につけながらの台詞だ。そして、「被害に遭った者の、自らの命を脅かしているその手から、私自身が死を受けるためでないのなら、一歩たりとも、これ以上一歩たりとも動きはいたしません。悪党なのです、私は。悪党の中でも一番の札付きなのです。被害に遭った者ではなく、被害をもたらした者の心臓にそのナイフを突き刺すのだと、そう言ってくれるなら、確かにお傍に近寄りましょう。しかし、それ以外のことで近づきはいたしません」と言ったのだ。

母さんがあの忌まわしい鼻を、大きな音を立ててかむし、サリーとポリーはハンカチを取り出し、われわれに背を向けるのだよ。二人が後で話してくれたのだが、生まれてこの方、こんな場面は見たこともなかったそうだ。

潔白さがこのように勝ち誇り、こうも悪行が貶められているのは、と連中は言いたいのに違いない。

自分でも気づかないうちに、我が天使に向かって俺は前進していたのだな。「すると、あなたは、あなたは、なおも放棄を表明しながら、なおも前進を続け　…　あなたは、あなたは、狡猾にもなおも私に近づこうとするのですか」と、彼女が言うのだよ［そして、彼女の一方の手が突き出された］。そして、「思い切って、私　…　思い切って　…　早まってのことでもありません　…　あなたのせいで避けられなくなってしまいましたが、このような振舞いは、信念からいたしましても、心の底から忌み嫌っているのです。神よ、憐れみ給え［と、天を仰ぎ、両手を差し上げながらだ］。神よ、憐れみ給え」と叫ぶのだ。

俺は部屋の向こう端へと跳び退いたよ。その瞬間、突然の叫び、声にならない叫びが彼女の考えを捉えていたのだ。ポリーが言うには、あの愛らしい目も、見えるのは白目の部分だけだったそうだ。そして、致命的な一撃を加えるためだったのは紛れもないが［詳しく述べるだけでも、俺はひどく怯えてしまうのだ］、片手を突き出したその瞬間に、彼女は俺のほうへ視線を向け、俺が部屋の一番離れたところにいるのを目にし、また、俺の声は完全に切れ切れになっていたわけだが、俺のその途切れがちな声を耳にしたのだ。俺にしても、自分が何を話しているのか、あるいは、その言葉が果たして要領を得ているのかないのかも分からない有り様だったのだ。そして、前にはすっかり紅潮していた彼女の魅力的な頬は、あたかも自らの目的に怯えているかのように、蒼白に変わっていたのだ。そして、天を仰ぎ見ながら、「神に感謝いたします。あゝ、神に感謝いたします」と、天使は言っていた。「今のところは救われました。救われたのです、今のところは。自分自身からですわ　…　そのまま、どうか、そのまま離れていていただきましょう［と、床にひれ伏した俺のほうを見下ろしているのだが、俺は百本の短剣で心臓を突き抜かれた気分なのだよ］。その距離が命を一つ救ったのですが、何のために取って置かれた命なのか、それは全知の神のみがご存じなのです」と、彼女は言うのだよ。

「幸せになっていただくためにです、マダム。そして、幸せにしていただくためなのです。あゝ、明日を佳き日としてくださるよう、せめて望みを抱かせてほしいのです。それまでは、旅を延ばすことにします。神よ　…　」

「誓うのは止めてもらいます」と、恐ろしい、射抜くような表情だ。そして、「あまりにも、あまりにも頻繁に、貴方は誓いを立ててこられました。私たちには神の目が注がれているのですよ。常にもまして真っ直ぐ注がれるまなざしです」と言うと、狂気じみた表情を浮かべていた。だが、女どものほうは、まるで神の目を恐れるように天井を見上げ、震えていたのだ。それもまた無理のない話だが、俺とて同じことだよ。何しろ、つい先頃までは、われわれの一人一人が心の中に悪魔を宿していたわけだからな。

「明日で駄目なら、マダム、是非とも、伯父上のお誕生日となる来週の木曜日にしていただきましょう。次の木曜とだけおっしゃってくだされば良いのです」

「これは申しておきましょう。この点は確かなこととお考えいただいて構わないのですが、私には決して、決して貴方のものとなる気持ちはないということですわ。それに、どなたかがそう言っておられたわけですが（でも、このように言葉を逆さまに用いることには、もう長いこと慣れっこになっているのです）、この〈清浄無垢〉な家から、夜が明け次第立ち去るのを許してくださるという、あのお約束を果たしていただく資格が私にはあるものと希望いたしますわ」

「こう言えば身の破滅を招きかねないとしても、マダム、条件無しに期待されては困るのです。それから、恐ろしい真似は止めにしていただきたいのです」と、なおもあの忌まわしいナイフを恐れての台詞だよ。

「操を狙おうというのでしたら別ですが、それほどのことでなければ、私も決して向こう見ずな真似はしないのです。操を守ること以外、私には何の意図もございません。階下におります貴方の破廉恥な手先と約束を結びましたのも、ただ、このような意図からのことだったのです。同じようなことがありました際には、ご覧いただきましたとおりの果断さを、神様が再び与えてくださるものと信じております。でも、もっと些細な出来事にで

したら、そのようなことを望んだりはいたしません。ただ、皆さん、あなたたちには気をつけていただきたい点がございます。私はこの男の妻ではないのだということです。この男は私に卑劣な振舞いをしてまいりましたが、私はこの男の妻ではないのです。私に対しては、何の権限もございません。この男はやがて旅に出るのでしょうが、その場合、もしもあなたたちが、この男の権限に従って、私を引き止めたりするようでしたら、思い知らせてあげますからね」

それから、蝋燭を一つ手にとると、彼女はわれわれに背を向け、邪魔されることもなく立ち去って行った。彼女を妨害出来る者など、一人としていなかったのだよ。

メーベルが見ていたのだが、彼女は震えながら、そして大急ぎで、自室のドアの鍵をポケットから取り出し、錠を開けたとのことだ。そして、彼女が中に入るとすぐにだが、二重に錠を下ろし、閂と差し金を掛ける音が聞こえてきたのだそうだ。

われわれのところへ来ようとして部屋を出た際に、鍵を抜き取ったことからして、彼女が俺の計画に感づいていたのは疑いないところだ。脅しつけて怯えさせ、両腕に抱えて彼女を部屋へ連れ込むつもりだったのだよ。彼女のせいでそんな力ずくの行為が必要になればの話だがね。そして、その夜は一晩中付き合うつもりだったのだ。

その場に臨んでは、衣装を脱ぐ手伝いとして、数人の寝室係の女が彼女に付くことになっていたのだよ。ところが、彼女があんなにも豪胆な態度で食堂へ足を踏み入れた瞬間から、彼女相手に俺の極悪非道の計画を実行に移そうなどという考えは、まったくの不可能事になってしまったというわけだ。

∴

∴

こんなところなのだ、ベルフォード。俺としてもずいぶんと期待を掛けた企みであったのだが、その首尾たるや、この始末なのさ。今では、これまでの十倍も立場が悪くなってしまったという有り様だ。

母さんと母さんの相棒たち、それに俺が数分間そうしていたわけだが、貴公もこれまでの生涯の中で、あんなにも間の抜けた顔をして互いを見詰め合う者たちを目にしたことはないはずだ。そして、悪魔みたいな二人の妖精が、とうとう堰を切ったみたいに、侮辱的な嘲りを俺に浴びせかけてきた。一方、恥知らずの婆さんのほうは自分の家のこと、家の評判のことで気を揉んでいるのだ。俺は連中を一纏めにして呪ってやったよ。そして、自分の部屋に引き下がると、錠を下ろして閉じ籠もってしまったのだ。

さて、出発の時刻だ。俺が得たものといえば、他でもない。事は露見するし、面目は丸潰れというわけだ。偽証を重ねることで新たな罪を犯し、首ったけの女から、そして、誇り高い心にとってはもっと困った話だが、自分自身からも軽蔑される始末なのだ。

成功だよ。計画の成功、それこそがすべてなのだ。今の今まで、俺は何という見事な立案家を自認していたことだろう。中でも、今回の計画についてはそうなのだ。なのに、今の俺にはそれが何とも情けないほど間の抜けたものに見えるのだよ。俺のこれまでの手紙の中で、その点に誇らしげに触れていた部分は、一つ残らず線を引いて消してくれ。抹消するのだ。二度と読まれないようにな。また、この忌まわしい話題のことで俺を冷やかすような厚かましい真似は慎むことだ。何しろ、耐えられんのだよ、俺には。

だが、あの令嬢についてだが　…　彼女のことはこれまでにもまして心底愛しているのだ。賛美しているのだよ。どうあっても、自分のものにしなければならん。やはり、手に入れるつもりだ。しばしば誓ってきたことだが、礼に適おうと適うまいとだよ。つい先頃も、彼女がふとしたことから鼻血を流すのを目にして、不覚にも怯えたところを見せてしまったわけだが、そこから彼女は、こんなふうに俺の上手を取ることになったのだ。彼女がこの俺様を脅したというのであれば、腕の一本くらい即座に取り押さえていたことだろうな。それも、両腕でだよ。だが、あれほど志操堅固な女が我と我が身を脅かし、他人については、だれを怯えさせようともしないというのだ。しかも、あれほどの冷静さをもって、激情に駆られた思いの最中にあっても、自らの操を守るためにはあの振舞いが必要であることを見極め、より些細な理由については公明正大に否認してみせるというのは、非常に優れた思慮、選択力、信念を示していることになるのだ。それに、あれだけ油断なく俺とは距離をおいていたわけだから、俺としても、彼女が致命的な一撃を加えようとする際に、遅れずに彼女の手を掴むわけには行かなかっただろうということもある。あのように正真正銘の、また、慎重さも備えた心の大きさに心服せずにいるなどということは、およそ不可能な話なのだ。

しかし、彼女は消え去ったわけではない。彼女を行かせるつもりはないのだよ。木曜日に向け、手紙で迫ることにする。いずれは俺のものにしてみせるつもりだ。正式の妻にだよ。何せ、同棲については、今はとても考えられない話だからな。

船長に花嫁の引き渡し役をやってもらうことにする。伯父の代理としてだ。卿は亡くなるだろうからな。財産が気持ちに力を添え、俺をどんなものよりも、また、だれよりも上位に就かせてくれるはずなのだ。

ただ、ここが忌々しいところなのだが、ジャック、彼女は俺を軽蔑しているのだ。これまでにも言ってきたことだが、軽蔑されるのを、とりわけ、自分の妻に軽蔑されるのを我慢出来る男がどこにいるというのだ。あゝ、主よ、あゝ、主よ。この企みではとんでもないドジを、何とも忌々しいドジをやってしまったものだよ。これで終わりだ。

令嬢とペンナイフの一件についてはな。ペンナイフなど消えてなくなれだよ。こんな言葉を口にするのは気に食わないのだが、

令嬢に神の祝福のあらんことを

土曜日　午前五時近く

手紙　十四

ラヴレース氏からクラリッサ・ハーロー嬢へ

［〈ラヴレース夫人へ〉と宛名書きされたもの］

六月二十四日　土曜日　夜　M邸にて

我が最愛の君へ

私が貴女の前で昨夜お見せいたしました哀れな姿を、愛情ゆえのこと、そして、愛から生じる恐れゆえのこととお考えいただけないようでしたら、私を正当に扱ってはおられないことになりましょう。もっと早い日にすることを貴女はお断りになったわけですが、す

べてに亘って貴女の求めに応じることで、次の木曜日に私のものとなる約束をしてくださるよう説得出来ないものか、最後の最後まで試して見ようと私は考えたのです。私がそのような幸せに与ることが出来ましたなら、貴女もハムステッド行きを、あるいは、どこでもお好みの場所へ行かれるのを妨害されることはなかったのです。しかし、この確約を与えてくださるよう、貴女を説得することは出来なかったのです。仮に貴女があちらへ行かれても、貴女を永久に失うことにはならないのだと考える余地が、果たして私には（私の落ち度はこんなにも大きいのですから）あったでしょうか。

貴女には打ち明けましょう、マダム。昨日の午後、私は紙片を拾ったのですが、ドーカスの落としたもので、あの娘は、その機会があれば貴女の逃亡に手を貸すつもりであったことを白状しているのです。また、例の紙片を偶然に落としたのは疑いのないところなのです。それに、次の木曜日のことに関して、貴女を説得出来ていたならば、この件を利用するつもりはなかったのです。その場合には、私のものになってくださるという貴女の約束に疑念を挟むようなことはなかったでしょうからね。だが、お気持ちに揺るぎのないことを知り、ドーカスの裏切りを憤ってみせることによって、ひとつ試してみようと心に決めたのです。つまり、私があの娘を許すためには、貴女が私を許してくださることをその条件に出来ないものか、また、それが駄目でも、貴女がシンクレア夫人の屋敷を出ることに対して与えました私の同意を取り消す口実には出来ないものか、ということをです。そんなことになれば、私にとりまして、極めて致命的な結果となるわけですからね。

ここまでは、確かに、私のやり方は卑劣で狡猾なものでした。それに、あのように気高く、上品な態度で、その点を問い質されました時には、仰せのとおりと恥じ入らずにはいられなかった次第です。

しかし、マダム、あのようにお粗末な目論見のことで、あまり厳しく罰したりはなさらないものと期待いたしておりますが、その点はお許しいただかねばなりません。貴女を辱める意図は一切なかったのですし、それを実行に移す瞬間にも、間違ったことや下劣な行動を正当化するような真似は私には出来ないのだということについて、また、同時に、私に対して握っておられる貴女の力についてもですが、この世の人間が示し得るかぎりのその確かな実例を、貴女は手にされたのですからね。掻い摘まんで申しますと、私が良心と愛情両方の完全な支配下にありますところを、貴女はご覧になったに違いないからです。

木曜日に祭壇の前で会ってくださるとのお約束をいただけるまでは、あるいは、その日を私の生涯最良の日にしてくれる儀式に先立ち、貴女のお傍に仕える名誉を授かりますまでの間は、今居られるところに残っていただけたらと願っておりますが、その点に関しまして、自己弁護をするつもりはありません。

この種の処置が、勝手気ままで不法な押しつけ行為の様相を呈するものとして、貴女の目には映るかもしれないということ、それは私も重々承知しているところです。しかしながら、もしも私の有利となるようにお気持ちを動かしていただくことが出来ないようでと、その結果は、私たち自身ばかりでなく、両家にとりましても、致命的なものになるかもしれないわけですから、この強制的行為につきましては、貴女ご自身が私をそうせざるを得ない状態に追い込まれたといういきさつもございますので、是非ともお許しをいただき、併せて、次の木曜日の儀式には、これまでの無礼の一切を忘却の彼方へと葬り去ることをも含めていただくようお願いする次第です。

その家の者たちに私が与えました指示は次のとおりです。つまり、来週水曜日の私の帰京に際し、貴女にはその家にいていただきたいのですが、私のこの希望に抵触しない事柄につきましては、ご意向のすべてに従ってもらうということ。シンクレア夫人と夫人の姪御さんたちは、貴女の当然至極なお怒りを招いたわけでもありますから、貴女の指示がなければ、貴女の居られるところに姿を現してはいけないということ。ドーカスにつきましても、その振舞いについて、貴女に満足していただけるほどに身の証を立てるまでは、お傍にお仕えすることを許されず、少し前に貴女が好感を表明しておられたように思われます、あのメーベルが代わりを務めるといったことです。ウィルにつきましては、ご命令があればお仕えするよう、残してまいりました。もしも怠慢であるとか、あるいは、無礼な真似をする場合には、貴女のほうで追い出してくださるなら、私への勤めからも永久に解雇する所存です。ただし、貴女の元へ送られてくるかもしれない手紙、あるいは、貴女が発送しなければならないどのような手紙にいたしましても、私が留守にいたします数日の間、貴女からも貴女へも、文通は一切行われませんよう、謹んでお願いをしなければなりません。ただ、お約束いたしますが、マダム、どちらのものにせよ、封印には手を触れないことにいたしますし、手紙の類が届きました場合には、式が執り行なわれ次第、あるいは、ご希望があればそれ以前に、貴方ご自身の手にお渡しいたしましょう。

その間、ハウ嬢はいかがお過ごしなのか、また、長く音信がありませんのは何故のことなのか、情報が得られるならの話ですが、問い合わせました上で、一言お知らせすることにいたします。

S医師を伴って到着いたしましたところ、パーキンズ医師が見えており、卿の治療に当たっておりました。医者が知らせてくれたところでは、お父上、お母上、おじ上たち、そして、さらに取り立てるに値しないお身内の方々もお元気であり、来週にはジョン伯父上のところへ皆さんお揃いの予定とのことですが、伯父上の記念日を祝ってのことと思われます。だといたしましても、木曜日の参列者に関しましては、喜ばしい変更以外、何らの変更もあり得ません。何故なら、トムリンソン船長が明言しているのですが、貴女の伯父上ご本人の上京を妨げるようなことが何かありました場合には（ただ、その時点では、伯父上は予想しておられませんでした）、伯父上といたしましては、お友達の船長に代役を務めてもらえるならそれで満足だ、とのことなのです。明日には船長のところへ馬で使いを出しまして、さらに確認を取る所存です。

この手紙は特別な配達人の手でお届けいたしますが、ひたすら待ち焦がれております木曜日の件につき、ご意向を伺うべくこの男を待機させますので、一筆お知らせいただけますならと、謹んでお願いする次第です。

私たちの幸せのこと以外には、何事に対しましてもほとんど意識を向けず、また、無頓着な卿ではありますが、貴女にはくれぐれも宜しく伝えてもらいたいと、大層思いやりに溢れたお言葉をいただいております。すぐにも貴女への贈物に出来るよう、極めて高価な一揃いの宝石を用意しておられますが、貴女がそれらに輝きを添えてくださるところを拝見出来るまで生き長らえるか否かに拘らず、お納めいただけるなら有難い、との仰せなのです。

セアラ夫人とベティ夫人のほうでも、是非ともお受け取りいただきたいと、数々の進物をすぐにも差し出せますよう用意しているところです。ただ、来週が終わります前に、夫

人たちから、また、従姉妹のモンタギュー嬢たちからも、直接挨拶をお受けになる機会を拵えても良いと、貴女をそんなお気持ちに傾けてくださいますよう、神に呼び掛けたい心境でおります。

卿は重体に陥っております。S医師によりますと、望みはないとの見立てです。このように私を深く愛してくれております身内の臨終に際し、実際に亡くなればの話ですが、唯一慰めとなりますのは、私が左記のとおりの人間であることをお示しすべきさらなる能力を、この死が私に与えてくれるところから生じているに違いないという点なのです。

我が最愛の人よ、

変わることなき親愛の情と誠意とを込めまして、貴女の

ラヴレース

手紙　十五

ラヴレース氏からクラリッサ・ハーロー嬢へ

［〈ラヴレース夫人へ〉と宛名書きされたもの］

六月二十五日　日曜日　夜　M邸にて

我が最愛の人へ

一行のお便りもいただけずに使者が戻り、どれほど無念に思いましたことか、その気持ちを表す言葉も見つかりません。

木曜日も目の前に迫っておりますので、色好いお返事をいただけますまでは、三時間おきに次々と使者を遣わす所存です。前日の夕刻を迎えますまでは、先に出掛けた者が次に出掛けた者と落ち合うようなこともございましょうが、当日には私の願いが叶えられるのだという望みを胸に、思い切って貴女の前に罷り出ることが出来るのかどうか、その点を知るためなのです。

貴女の愛情につきましては、マダム、期待することも求めることもいたしませんし、私の今後の振舞いから、愛情を注ぐに相応しい男だとお考えになるだけの十分な根拠をお持ちになりますまでの間は、そのつもりでおります。厚かましいとは存じますが、差し当たっての望みといたしましては、ただ、今の私に行うことが可能な償いのすべてを、貴女に対して果たせるようになりたいということだけですし、私の今後の功罪に応じ、愛をもって報いていただくという点につきましては、貴女のお心の広さに委ねる所存であります。

現在のところ、金曜日の夜の貴女の前でのみっともない振舞いのことを思い巡らしてみますと、私を忌まわしい罪人（それがいかに相応しいこととは申せ）としてではなく、選ばれた夫として迎えていただける、そんな望みをいくらかでも与えてくださるのでなければ、貴女の前に罷り出ますことよりも、むしろ、その心構えは出来ておりませんが、私にとりましての最後の審判の場に臨むほうを選びたい気持ちになるのです。

そこで、便法を一つ提案させていただきます。私自身が困惑に陥るのを免れるためのことでありますし、また、私には耐えられませんし、貴女ご自身にも不愉快なものに違いない、あの魂も引き裂くような難詰の言葉をお使いになる必要性を省いて差し上げるためでもあります。つまり、教会の名を挙げていただきたいということです。そうしてくださる

なら、すべての用意は私のほうでいたしましょう。私たちの次の出会いが、いわば、祭壇そのものの前になるようにです。そして、その時には、恩知らずな恋人として数々の間違いを重ねましたが、それも水に流していただけるような、愛情溢れる夫を貴女は得ることになるのです。お怒りが今なお鎮まらないゆえ、多くの事を筆にするわけに行かない、ということでしたら、ただ貴女ご自身のその愛しい手で、次の言葉をお記し願います。〈セント・ジャイルズ・教会、木曜日〉とです。あるいは、次の言葉をです。〈セント・マーティンズ・教会、木曜日〉とです。また、冒頭語の類とかご署名とかをお願いすることもありませんし、お名前のイニシャルさえも求めはいたしません。私の堅固にして侵し難い信義心と名誉心の証人となっていただくべく呼びかけます神の御前において、その愛しき手そのものがこの手に委ねられますまでは、私が期待いたしておりますご好意は、これですべてということです。

敬慕の念を込めまして、貴女の

ラヴレース

手紙　十六

ラヴレース氏からクラリッサ・ハーロー嬢へ

［〈ラヴレース夫人へ〉と宛名書きされたもの］

六月二十六日　月曜日　M邸にて

今一度、お頼みいたします、最愛の人よ。お願いいたしました四つの言葉を、何卒、お届けいただきたいのです。もう、時間がありません。貴女を私のものとお呼びする資格も得ずに、それも、私のためばかりか、貴女のためでもありますので、次の木曜日をやり過ごしてしまうようなことは、絶対にしたくないのです。これまでのことはすべて、貴女と私だけの間の出来事だったのです。しかし、木曜日以後は、もしも私の願いが叶えられませんん時には、すべてが公のこととなるのです。

卿は容体が極めて悪く、私の姿が見えませんと、半時間でも我慢出来ないのです。しかし、このことにいたしましても、もしも貴女が、お願いいたしました四つの言葉を和解の印として差し出してくださるのなら、私にとりましては少しの重みも持たない事柄となりましょう。

トムリンソン船長から次のような知らせが届いております。

ご一族の皆さんが伯父上のところにお集まりです。上京なさるのは無理と分かり、伯父上は代理人としてトムリンソン船長をご指名です。伯父上といたしましては、船長のほうから式が挙行された旨の確認を得るまでは、ご家族の皆さんを引き止めておこうと提案しておられます。

すでに伯父上は、母上が貴女と和解してくださるよう、成功の望みを持ってのことですが、お骨折りを始められたとのことです。

つい今し方、卿が話しておられたのですが、この世を去られる前に、姪としての貴女にご挨拶する機会を持てるのなら、ご自分のことを大変な幸せ者と考えることだろう、との仰せでした。卿には、貴女に会っていただく見込みがあると、そのように申し上げている

のです。また、水曜日には上京しますが、木曜日か金曜日に田舎まで貴女にご同行願うよう説得するためであるとも話しておきました。都まで乗って行けるよう、馬車用の馬の用意を命じたところです。また、従姉妹のモンタギューが私に申しているのですが、卿がこのように重体でなければ、ご機嫌を伺いに貴女のお傍にまいりたいとのことでした。従いまして、もしも宜しければ、式が執り行なわれ次第、二人でこちらへ向け出発して構わないのです。

前途有望と見えますこれらの状況ですが、そのすべてを消滅させるようなことは、最愛の人よ、お止めいただきたいものです。また、貴女ご自身、そして、ご家族の評判を世間の目から守るのを拒むことにより、この世でも最も恩知らずな破廉恥漢の仕打ちよりもさらにひどい仕打ちをご自分に加えたりなさらぬよう願いたいのです。と申しますのも、貴女が独身女性として被ってきたと考えておられる恥辱の類も、もしも私たちが結婚いたしますと、そのすべてが私自身のものとなるからです。私たちだけが承知している事柄となるからなのです。

そこで、重ねて申し上げますが、私たち両人の置かれております状況を十分にお考えいただきたいのです。また、最愛の人よ、木曜日は間もなくやって来るのだということ、そして、貴女には時間的ゆとりはないのだという点を思い出していただきたいのです。

この手紙を持たせて送り出しました、その配達人に届けてもらった書状の中でのことですが、貴女を大層崇拝しており、私の胸の秘密すべてに通じております我が友人ベルフォード氏に、私は頼んであるのです。貴方に会い、所定の日取りに関しまして、当てにすべき点は何なのか、それを確かめてくれるようにとです。

いつ何時であれ、貴女が残酷なまでの不安に苦しまれたとしても、確かに、今の私の半分も苦しまれなかったはずなのです。

貴女のご好意からにせよ、ベルフォード氏の仲立ちを得てのことにせよ、この手紙へのお返事をいただきたいものと存じますが、お返事がない場合、私の出発には間に合わないことになりますし、また、ご機嫌を伺うことを目的に上京されるトムリンソン船長も失望なさることでしょう。

厚かましいことではありましたが、貴女に穏やかな制約を加えることにいたしました動機の一つは、私への反感がそこまで激しく燃え盛っておりますうちにどなたかへお便りを出されたりした場合に起こり兼ねないような（おそらく、あまり罪がないとは言えない人間に対してと同様、もっと潔白な者に対してもですが）、そんな被害を防ぐためのことだったのです。この点に関して、私がロンドンの婦人たちに与えました指示は、貴女にもお知らせしてあったわけですから、ハウ嬢にお手紙を届けようと骨折られたりなさった点につきましては、あの若いご令嬢(ア)の召使を宛名とした封筒にお入れになったとはいえ、驚いている次第です。私の手中に落ちそうなことくらい、貴女もお考えのはずですからね。

私にとりまして、いかなる文面が分相応なのか、それは正しく弁えているつもりですので、お手紙の内容につきましては、疑いの余地もないところです。とは申しながら、ご覧のとおり封緘したまま、お手紙は本状に同封してお返しいたします。

是非ともお願いいたします、最愛の君よ。お頼みしてありました四つの言葉により、あ

（ア）令嬢は手紙の発送を試みていたのである。

るいは、ベルフォード氏を介することによりまして、この胸の不安を取り去っていただきたいのです。

変わることなき親愛の情と感謝の念とを込めまして、貴女の

ラヴレース

お忘れなきよう願いますが、これ以上筆を進めるための時間、そして、伯父上のお誕生日であります木曜日までに私が上京するための時間はないということです。もはやあり得ないのです。

手紙　十七

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月二十六日　月曜日

ハーロー嬢に対する俺の立場ということについては、同封した三通の手紙の写しによって、貴公にも分かってもらえることだろう。俺もすっかり軽く見られているため、そのうちの二通に関しては、一言の返事も得られない有り様なのだ。また、三通目についても同じで（これを貴公のところへ持って行く使いの者に託して、今送り届けたところだ）、ほとんど気に留めてもらえそうもないのだが、もしもそのとおりになるようであれば、彼女の猶予期間は完全に満了ということになるのだよ。

金曜日の夜にわれわれ全員に対して得た勝利をもって、彼女は満足しても良かったのではないかと、人はそんなふうに考えたくなるだろう（あのように彼女は、束縛されることにもずいぶん長いこと慣れてきたわけだからな）。俺のプライドや自惚れ心をすっかり打ちのめしてしまい、ほとんど俺は、計略、趣向、目論見といった言葉に憎しみを覚えてしまうほどだし、今後は、工夫の才に恵まれたこの頭にその手のものが浮かぶたびに、自分自身を疑うことになりそうな、それほどの勝利だったのだよ。

だが、俺は彼女をシンクレアのところに引き止め、すべての文通を差し止める必要に迫られているということ、これは貴公にも察しがつくのではないのかな。

ところで、ベルフォード、彼女が木曜日をやり過ごしてしまわなければの話だが、俺としても今の気持ちでは、実際、結婚以下のことは一切考えられないわけだから、今日の日付の手紙の中で彼女に仄めかしておいた点を実行するためだが、ひとつ貴公のほうから彼女を訪ねてもらいたいのだよ。そして、俺のために誓うのだ。断言するのだ。貴公の魂にかけても、俺の信義心を彼女に請け合うのだよ。友情に溢れるその心に思い浮かぶかぎりの理由を持ち出してくれ。彼女からの返事をとりつけるためだが、見てのとおり、彼女にしてみればたった四つの言葉で表すことの出来る返事なのだよ。その場合には、M卿を後に残し（危篤状態ではあるのだが）、式を挙げるため、彼女の指定した教会で会うつもりでいる。貴公の記す四つの言葉に彼女がただ *Cl. H.* とだけ署名するとしても、それで十分なのだよ。何しろ、俺としても、俺の家族や知人が勢揃いしているところで笑い者にされるために上京する気はないわけだからな。

万が一にも彼女が例の日をやり過ごすようなら、俺としては自暴自棄になってしまうこ

とだろうな。自分の仕掛けた罠に絡まっていることでもあり、彼女が俺の化けの皮を剥いだりするのには耐えられんのだよ。

あゝ、真っ正直に事を進めていたならと、本当にそう思う。一体何というザマなのだろうな、俺の計略のすべても …… とどのつまりは、他でもなく、我と我が身に降り懸かる大陰謀だよ。永久に消えない汚名と恥辱への資格を授かったというわけだ。だが、この件にはもう触れないことにする。友に相応しい貴公の尽力を頼りとしてな。ただの一行だけでも俺に書き送るよう、彼女に言ってくれ。たったの一行で良いのだよ。一顧だにするには値しないかのごとく俺を扱うというのだからな。それでいて、すっかり俺の手中にあるのだよ …… 耐えることは出来ないし、耐えるつもりもないのだよ、そんなことはな。

前にも言ったとおり、卿の容体は極めて悪い。医者たちは匙を投げており、卿自身も諦めているのだ。卿を死なせたくないと思っている者たちは、亡くなってしまうのではと心配している。だが、俺自身としては、疑わしく思っているのだ。というのも、体質と病との間のこの長く、そして激しい鬩ぎ合いからして（もっとも、病のほうには三名の医者と薬剤師が一名ついていて、病状の進行を助けており、処方に関しても、三人が三人とも見解を異にしているわけだが）、べらぼうに頑健な質であることが分かるし、亡くなるよりは回復する可能性のほうを裏付けているのだよ。それに、肉体の諸器官を刺激して、症状を知るのに役立つ程度以上の高熱を引き起こすような、それほど鋭利な、あるいは明敏な精神の器官を卿は持ち合わせていないだけに、なおさらそれは言えることなのだ。

同封のものを読めば、貴公にも分かってもらえるだろうが、使いの者たちを派遣するのに、俺はどれほど骨を折っていることか。連中は常時街道を往来している。お互いに落ち合うためで、そのうちの一名が四人目の者と手をつなごうというのだが、この男の持ち場はロンドンで、五マイルに及ぶものだ。あるいは、相棒に出会うまでとなっている。ただし、実のところを言うと、連中には、卿が取り引きしている銀行家と弁護士を相手にしての話だが、同時にやってもらいたいことが別にあるのだよ。親切にも、今度こそ卿が亡くなってくれるとしたら、その場合、俺の他の身内の何人かに対して、圧倒的優勢を保証してくれるようなことなのだ。シャーロットとパティのことを言っているのではない。あの二人は心の気高い娘だからな。俺が留守にしている間に、まさにモグラよろしく、地面の下をひっかいたり掘り返したりしていた連中のことだ。連中の仕業にはこちらに来てから気づいたのだが、連中が積み上げた小さな泥の山を見つけたからだよ。

貴公に託した任務に関し、急ぎ報告してほしいのだ、ジャック。手紙は夜を徹して進んで行くわけだからな。

手紙　十八

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

六月二十七日　火曜日　ロンドンにて

貴公が俺に引き受けさせたがっている任務の件だが、ラヴレース、大いに不当な扱いを受けたこの淑女に対し、貴公は真に誠意を尽くす気持ちでいるのだと、さらに強い確信が得られるまで、俺としては勘弁してもらわねばなるまいな。

貴公の友ベルフォードのことは、貴公も熟知しているわけであり、貴公に対し、あるいは、どこのだれであれ、自分ではまったく実行する気のないことを代わりに約束させようとする人間に対して、その友が寛大な態度を取るだろうなどとは、貴公も考えたりしないものと信じている。それに、ひとつ言わせてもらうが、筆跡を真似たりして（その点を問うだけにしておこう）、自分の身内の者たちの名誉についてはほとんど顧慮することもなかったという、そんな人間の名誉心に俺はあまり信を置いてはいないのだよ。

かくも陰険狡猾な資質が貴公に備わっていなければの話だが、ついに貴公も悔恨の念に打たれ、忌まわしい策謀の数々に恥じ入るその目前のところまでやって来たのだと、そう思いたくなるくらいだよ。最後の策が不首尾に終わったがゆえのことだが、その失敗には心からのお祝いを申し上げておこう。

あゝ、神々しいばかりの淑女よ　…　だが、事を荒立てるような真似は止めよう。

とはいえ、貴公の「今の気持ち」としては結婚を考えていると、そんなことを筆にしながら、こうも簡単に気持ちを変えることが出来るようでは　…　結婚生活に対し、貴公が心から反感を抱いているのを知りながら　…　貴公が令嬢に請い求めている四つの言葉というのは、彼女が四十の言葉を筆にしたのと変わらないほど、貴公の目的に適っているのを知りながら　…　何しろそれは、女性に加え得る最大の侮辱でさえも、彼女には許せることを示すわけだからな　…　そして、延期のための口実なら、どれほど容易に貴公には見つかるのかを思い返してみるなら、貴公の真の意図に関し、また、今後の信義を守った行動について、現在よりも数段は明確にしてもらわねばならんのだよ。一時の悔恨を信用するわけには行かないからな。それも、失望からもたらされているのであって、信念に基づいたものではないのだし、似たようなものを何度となく、貴公は乗り越えてきたわけだからな。

彼女自身が使う意味でだが、名誉を傷つけない遇し方を彼女に対してするつもりでいるのだと、例の日までにたっぷりと時間を取り、俺を納得させてくれるのであれば、あるいは、時間が十分ない場合、他のどの日かに決めてくれるというのであれば（それも彼女の選択に委ねるべきで、木曜日に縛りつけてはいけない。そうする口実がまったくの作り話に基づいているだけになおさらだ）、その時には、それこそ喜々として貴公のために一肌脱ごうと思っている。彼女がお目通りを許してくれるようなら、自ら出向くし、許してもらえないようであれば、ペンに託してだ。しかし、この場合、俺が貴公の信義に関する保証人になることを認めてもらわねばならんな。また、そうなれば、俺としても貴公のことは大いに高く買っているし、紳士としての資格すべてに亘る貴公の手腕にも敬意を抱いているわけだから、当てにしてもらっても構わないが、保証人という資格に相応しい振舞いをするつもりでいるのだ。それも、こんなことを言われては連中も面目丸潰れだろうが、昨今の君主たちが通常行っているのよりももっと立派にだよ。

それはともかく、ひとつ言わせてもらうが、この天使のごとき淑女が被った不当な仕打ちには心が痛むのだよ。そして、貴公を受け入れる気持ちが彼女にあるとして、その彼女と貴公が結婚しないようであれば、また、結婚した場合にも、貴公が彼女にとっての最高の夫、この上なく愛情に溢れた夫とならないようであれば、俺としては、貴公のような男になるよりも、犬か猿、熊か毒蛇、あるいは、ヒキガエルにでもなるほうがましというものだな。

体面を保てるような命令を出してほしいのだよ。そうしてくれるなら、俺ほどに快く貴公の願いを入れようとしている者も、一人として他には見つからないことだろう。

貴公の誠実なる友
ジョン・ベルフォード

手紙　十九
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月二十七日　火曜日　夜十二時近く　M邸にて

貴公の手紙が今届いたところだが、使いの者の驚異的な頑張りによってだよ。やたら信義にうるさい人間になったものだな、貴公も。それも突然にだ。

だから、保証人という仮想の姿を装って、俺に脅しを掛けるというわけだな。

令嬢のことで本気になっているのでなかったなら、貴公をこの一件に巻き込むようなことは言い出さなかったのだよ。ただ、ひとつ言わせてもらうが、貴公が仕事を引き受けたとして、その後、意を翻すのが適当と俺が考えた場合、俺としては、貴公が請け負ってくれた際の俺の気持ちはそのようなものだったのだと語り、心変わりの理由を述べ、後は貴公の好きに任せて安心していただろうということだ。というのも、クラリッサ・ハーロー嬢と知り合うまでは、否、ここが一番驚いている点だが、彼女を手中に収めるようになるまでは、女に対する恐れについても同じだが、男に対する恐れとはどんなものなのか、俺は一切知らずにいたからなのだ。

すると、貴公としては、合意事項や条件なしに我が魅惑の君を訪ねる気はないというわけだな。放っておいてくれ。忌々しい奴め。結構だよ。ただ、貴公が表明していた彼女に対する評価をすっかり信用していたので、この役目というのは、俺にとっては役に立つものであるわけだが、貴公にとっても同じように受け入れ易いものだろうと考えていたのだよ。どんな仕事かというと、他でもなく、彼女自身の名誉の回復に同意するよう、彼女の説得に努めることなのだからな。というのも、俺はこれまで何をして来たかといえば、他でもなく、我と我が身に恥辱をもたらし、自らの楽しみを奪うだけだったからだよ。それに、もしも心の一致があり、また、結婚を厳粛な形で祝おうとの気持ちがあるのなら、欠けているものとしては、あの愚かな儀式以外にはないのだよ。そして、俺は今もなおそれを申し出ているのだ。だが、彼女が手を引っ込めたままでいるというのであれば、俺に徒に手を差し出させておくというのなら、俺にはどうしようもないことではないのかな。

彼女にはもう一通手紙を出すことにする。そして、それを受け取った上で、もしも不機嫌に沈黙を守っているようであれば、その後のことは自業自得というわけだよ。

だが、結局のところ、俺の心はそっくり彼女のものなのだ。言い表しようもないほど彼女を愛しているし、また、それは避けられないことなのだ。それゆえ、この最後の申し出も、こちらの望みどおりに受け止めてくれるよう願っているのだよ。彼女も今は自分の力に気づいたわけだが、女の本性を現して、俺を悩ませ、苦しめ、苛立たせるようなつもりはないことを希望している。この心に後悔の念が生じている今（もっとも、俺の誠意を条件に、貴公と交渉を進めるようなみっともない真似は出来ないが）、もしも彼女が憐れみを

垂れてくれるようであれば、これまでにも明言してきたように、彼女の試練のすべては終わりを告げることになるのさ。そして、俺に可能なかぎり、彼女には幸せになってもらうつもりだよ。というのも、初めて知り合ったその時から現在に至るまで、二人の間にあった事柄すべてを思い巡らしてみると、俺は次のように宣言しなくてはいけないからだ。つまり、彼女は美徳そのものであり、そして、繰り返しになるが、匹敵する者などは一人としていないのだ、とだよ。

彼女に任せて別の日を選んでは、との貴公の示唆についてだが、考えているのかな、貴公は。俺の目論見や戦略をなおも長きに亘って秘密にしておくのは不可能なのだという点をだよ。目前に差し迫っているというのに、あの日を強要するのはこのためなのだ。彼女の伯父の誕生日についてあれだけ騒いだわけだから、なおさらということになる。彼女が例の四つの言葉を書き送ってくれるなら、教会が定めた教会での挙式の時刻（七）には無理だとしても、その日のうちのいずれかの時刻に、彼女の部屋、あるいは、別のどこかの部屋で挙げる式には間に合わせるよう、骨身を惜しまないつもりなのだ。何ごとも金の世の中なのだし、今回の件で金を惜しむようなことは、一度としてなかったのだからな。

貴公に敵意を抱いているのではないことを示すため、二通の手紙の写しを同封する。一通は彼女宛のものだが、この問題に触れた四通目であり、その最後の一通としなければならないものだ。もう一通はトムリンソン船長に宛てたもので、見てのとおり、船長が彼女に見せるのを計算に入れてあるのだよ。

さあ、ジャック、本件に口出しをするにせよしないにせよ、貴公もこれで俺の胸の内は分かるはずだ。

R. ラヴレース

手紙　二十

ラヴレース氏からクラリッサ・ハーロー嬢へ

［〈ラヴレース夫人へ〉と宛名書きされたもの］

六月二十八日　水曜日　午前一時　M邸にて

ただの一行も、ただの一言も、私の認めました三通の手紙にお返事はいただけないのですね、最愛の人よ。今は時間も極めて少なくなっておりますので、正式に二人を一心同体としてくれるあの重大な時を迎える以前に、お手元に届くものといたしましては、これが最後の手紙とならざるを得ないのです。

友人のベルフォード氏は、氏自身に急用が出来たためですが、貴女の元へ伺うのが間に合わなくなることを懸念しております。

残念なことではありますが、私といたしましてはさほど悔しさは覚えません。と申しますのも、一層お気持ちに沿うはずと期待しておりますが、お傍に仕えてもらうべく、ある人物を確保しているからなのです。つまり、トムリンソン船長です。ベルフォード氏からの返信を受け取ります前に、この点について船長にお願いをしてあったのです。

船長が明日お引き受けくださるものと、私は僭越ながら期待を寄せているのですが、そのお役目のことがありますだけになおさら、是非そうしていただきたいと熱心にお願いし

た次第なのです。そのお役目のため、やむなく船長は今日のうちに上京されたのです。それで、貴女との不幸な状況を船長にお知らせし、私も貴女の伯父上と同じ程度に船長のご愛顧と友情を授かっているのだということを、この際お示しいただくようお願いしたのです。私のために貴女を説得することが、もしも船長に出来ないようですと、約束いたしました件はすべて中止のやむなきに至るわけですからね。

船長は即刻使いの者を出してくれます。その使いの者とは、私自身がスラウで落ち合おうと考えております。歓喜に溢れる心を抱いて、そのままロンドンへ向けて進むのか、それとも、打ちひしがれた心でM邸へ戻るのか、そのいずれかのためです。

トムリンソン氏がご自分だけのものにしようと考えておられる楽しみですから、その先を越して、貴女にお知らせしたりするのはいけないのでしょうが（ただ、そうせずにはいられないのです）、母上が伯父上のご意見を支持なさる可能性があるのです。と申しますのも、伯父上がそのご立派なお考えを〈内緒ごと〉ということにして、母上にお話にならられたらしいのです。母上がどのように決心なさるのか、それは、伯父上のお気持ちもそうですが、明日の成り行き次第ということなのです。

ですから、何卒お願いいたしますが、ご不興を買われてしまいましたのを貴女はしばしば嘆いておられると聞き及んでおりますあの伯父上、そして、あの母上のご期待に背くことは止めていただきたいのです。私のためであると同様、百人もの人々のためにもです。

教会の定める挙式の時刻までに私がロンドンに着くのは不可能だとお考えかもしれませんね。万が一そのようなことになりましても、昼間のどの時刻でも、あるいは夜でも、貴女ご自身のお部屋で式を挙げることは出来ましょう。式は伯父上のお誕生日に挙行されたのだと、トムリンソン船長から伯父上に言明出来るようにというわけです。

私がお傍にお仕えいたしますのを禁じはしないと、そう船長にお伝えくださるだけで良いのです。恋の翼に乗せ、私を貴女の元へと馳せ参じさせますには、それだけで十分ということになりましょう。

変わることなき謝意と親愛の情とを込めまして、貴女の

ラヴレース

手紙　二十一

ウェストミンスター、セントマーティンズレーン

髪師　ブラウン氏宅寄宿人

パトリック・マクドナルド　殿

水曜日　午前二時　M邸にて

親愛なるマクドナルドへ

これを持参する者は令嬢へ届ける手紙(ア)を携えている。骨身を惜しまずに写しを取ったので同封しておくが、君が手掛かりを取り違えたりしないためだ。

同封した封書(イ)を実際よりも前の日付にした理由については、そちらで判断してもらお

（ア）直前の手紙を参照のこと。（イ）次の手紙を参照のこと。

う。トムリンソンの名で君に宛てたものだが、内緒でということにして令嬢に見せてもらいたい。勿論のこと、君が開封するのだよ。

君の手際の良さ、そして、駆け引きの巧みさについては、何の疑いも抱いていないのだよ、マクドナルド君。それと、君の熱意についてもだが、今や同棲への望みは諦めねばならなくなっているだけに、なおさらだ。実行に移すのは不可能なのだよ、あの計画は。悲嘆に暮れさせることにはなっても、気持ちを傾けさせるわけには行かないのだな。それゆえ、俺は本気で彼女と結婚するつもりなのだ。彼女のほうでその日をやり過ごしてしまうようなことがなければな。

母親のことを匂わせてあるので、うまく活用してもらいたい。あれは彼女の心を動かすはずだ。だが、覚えておいてほしいのは、ジョン・ハーローはあの婦人を〈内緒で〉引っ張り込んだのだという点だ。いいかね、〈内緒で〉なのだよ。でなければ（伯父から出た先の便法についての理由は言うまでもなく）、君にも分かるだろうが、一方か他方か、どちらかの者に手紙を届ける手立てを彼女は見つけ出すかもしれないのだよ。真相を知ろうとしてだ。あるいは、ハウ嬢に手紙を出し、問い合わせの仕事を引き受けさせるかもしれないな。万が一彼女がそんな行動に出た場合でも、〈内緒で〉という言葉が、伯父と母親が否認することの説明になるわけだ。

ただ、われわれの母さんとあの妖精たちには、俺からの言葉として、間違いなく命じておいてほしいのだが、彼女の身柄と手紙の両方について、警戒を一層強めてもらうということをだ。今、すべてが重大な局面を迎えているのだ。ただし、彼女に対する扱いがひどくなってもいけないのだよ。

木曜日が過ぎれば、どのように心を固めるべきかも見えて来ることだろう。

必要な場合には威光を振りかざしてもらわねばならん。君くらいの年配で経験もある男を、こんな娘が畏まらせるようでは、それこそとんでもない話だろう。俺とは違って、君は彼女に恋をしているわけではないのだよ。君の信義に疑いを挟むようなら、食ってかかることだな。生まれつき穏やかな人間というのは、より激しい怒りに出会うと、気圧されて演技を忘れ、（どんなに激していても）圧倒されてしまうものなのだ。女はすべて、根は臆病者なのだよ。荒れて構わない場合にだけ荒れて見せるのだ。俺も何度となく女の子を怒鳴りつけ、その娘に不信の念を捨てさせたし、また、怒りながらに疑念を表明していたその点を、（自分でも気づかないうちに）呑むようにさせてきているのだ。それも、俺に埋め合わせをするためだよ。攻撃を仕掛けた人間というのは俺のほうなのだがね。

この一件が俺の望みどおりに成功を収めた暁には（あるいは、成功しなくとも、君の落ち度から不首尾に終わるのではないのであれば）、そのやくざな密輸商売を続けなければいけない状況から君を解放するつもりなのだ。でなければ、いずれその仕事は、君にとって致命的な結末を迎えるかもしれないのだからな。

われわれはだれ一人として完全ではないのだよ、マクドナルド君。この可愛らしいお嬢さんのお陰で、俺も時々は心ならずも真面目な考えを抱くことがあるのだ。だが、公的な犯罪行為に比べれば、私的なものは罪が軽いわけだし、密輸というのは（そう呼ばれているのだが）国家的な悪だと俺は考えているので、君のことを俺よりもさらに上を行く悪人だと断言するのに、何の疑念も感じないのだ。また、そのような者として、喜んで君の矯正を図りたいのだよ。

十ギニーを同封しておくが、さらなる援助のちょっとした手付けのつもりだ。これまでのところは、君も実に抜け目のない仕事ぶりだったからな。

木曜日のための衣装については、モンマス街ですぐに仕度出来るはずだ。まったくの新調では身分を疑われてしまうだろう。だが、その用心については、彼女が説得に応じてくれるのかどうかが分かるまで、先に延ばしても構うまい。一回目の訪問の際は、君の乗馬服で間に合うだろう。ブーツも綺麗すぎてはいけない。技巧を（あるいは、行儀の悪い連中に言わせると、〈ペテン〉というわけだが）用いることが目論まれている場合、細かい点に拘るのが大切なのだということ、それはいつも話してきたところだ。彼女の前に出る時には、シャツが皺になり、汚れていることだ。簡単な話だろ、こんなのは。上京したばかり、というわけだ。忘れないでほしいのだが（前の時と同じにだ）、だらしなく横になるのだぞ。足を投げ出すのだ。ひだ飾りを撫でつけ、もぎ取るのだ。まるで、無頓着な格好をしても構わないほどの大物みたいにだよ。上品な淑女が居合わせた場合には、違った振舞いを求められるとしても、君はもう礼儀作法などには用のない年齢でないのかな。彼女を襲うようなことは考えるはずもないだろう。君自身が彼女と同じ年頃の娘たちの父親なのだからな。今まで以上に、これみよがしな態度や追従的な姿勢は疑いを招くことになるだろう。頭の弱さか心の狡猾さか、そのどちらかを示しているに違いないのだからな。従って、大物の態度を装うことだ。そうすれば、大物として扱ってもらえるのだよ。愛想が良いばかりに、危うく身を滅ぼしそうになったことが、この俺にも何度となくあるのだ。それに、束縛することを恐れ、自分が束縛される羽目に陥ったことも多いのだよ。

差し当たって、これ以上言っておくことはないように思う。令嬢宛の俺の手紙にあるとおり、スラウに行っている予定だ。あるいは、その途につくつもりだ。律義者のマクドナルドよ、では、さらばだ。

R. L.

手紙　二十二

アントニー・トムリンソン船長殿

［前の手紙に同封され、内緒で令嬢に示されるよう目論まれたもの］

六月二十七日　火曜日　朝　M邸にて

親愛なるトムリンソン船長へ

この世で最も愛しております淑女と私との間に不幸な誤解が生じまして（その詳細につきましては、おそらく、彼女のほうから話があるのでしょうが、身贔屓に思われるかもしれませんので、私のほうでは触れないことにいたします）、私からのこの上なく熱心で丁重な手紙に対しましても、彼女は返事を拒んでおりますので、今度の木曜日、挙式のためにわれわれと落ち合ってくれるのかどうかも定かではなく、私といたしましては、ただただ当惑するばかりなのです。

卿の容体が極めて悪いものですから、彼女が私の意に沿ってくれそうもないと考えました場合は、上京を二、三日延ばそうかとも思っております。卿は私の姿を目から離したがらないのですが、それでいて、亡くなる前には、我が愛しの君をご自分の姪として迎えら

れるよう、切望しておられます。その機会を捧えて差し上げる旨、卿には約束してあるのです。愛しの君が私を幸せにしてくれるようであれば、教会から真っ直ぐこちらへ向けて発とうと考えてのことです。

我が魂を魅する者についてこのようなことを口にいたしますのは、まことに残念なのですが、あの妥協のないところは、血筋から来る短所でして、そのために彼女自身、自分の身内からあれほどまでの辛い思いをさせられているわけですから、彼女の場合には、なおさら弁解の出来ないことであるのは確かでしょう。

さて、貴方といたしましては、木曜日よりいくぶん早めに上京なさるお考えだったわけですから、ひどくご迷惑なことにはならないのでしたら、私のため、出来るかぎり早めにご上京いただけると嬉しいのです。貴方のようにご自分の重要なお仕事を数多く抱えておられる方ですし、日取りのことはご自分でもはっきりさせておくのを喜ばれるはずと拝察いたしますだけに、なおさら大胆にこのようなことをお願いする次第です。

式が延期されました場合の不幸な結果のことは、彼女の伯父の落胆ぶりはもとより、これは貴方が保証しておられた件ですが、待望の和解のことで彼女の母が喜んで引き受けようとしている役割につきましても、貴方ならまことに切々たる調子で、また、極めて公正に彼女に示して見せることがお出来になるわけですから、彼女も説得に応じてくれるものと、大きな期待を寄せている次第です。貴方からの至急のお便りを受け取り、私へ届けるよう、馬を伴った男を一人待機させることにいたします。

しかしながら、私のための説得が貴方にも果たせない場合には、ご友人のジョン・ハーロー氏に対し、ご希望が叶えられないのは私の落ち度ゆえのことではない点を納得いただけますよう、ご説明くださいますなら幸いです。

深甚なる感謝の念と誠意とを込めまして、貴方のしもべ

R. ラヴレース

手紙　二十三

ロバート・ラヴレース　殿

六月二十八日　水曜日　十二時近く

恭　啓

貴方様にお知らせおき願いたいとのご使用人からの希望ですが、お手紙は今朝十時までには拝受いたしておりました。人馬ともに汗まみれの状態でした。

早速、いかにも旅から戻ったばかりという格好に仕度を整えまして、奥様の元へと馳せ参じた次第です。貴方様の実際よりも早い日付にとりまして有利に働くよう、もっと前にお訪ねしなかった言い訳といたしましては、大きな仕事のことを持ち出す考えでおりました。また、奥様を急がせ、否応なしに、貴方様の使いの者に満足の行くお返事を渡してくださるようにする口実といたしましても、急いでいる振りをするつもりでおりました。ところが、シンクレア夫人の家に一歩足を踏み入れますと、何もかもすべてがこれ以上はないというほどの狼狽振りだったのです。

びっくりなさってはいけません。悪い知らせを伝える役目は辛いものですが、そうなのです、悪い知らせです。奥様がお逃げになったのです。私が到着いたしましたのは、奥様のお姿が見えなくなりましてから三十分も経たない頃でした。

奥様の侍女が逃げ失せたのです。あるいは、今までのところ見つかっていないということです。従いまして、皆さんの結論では、あの娘が見て見ぬふりをしたのだろうということになっているのです。

私が到着いたします前に、皆さんは誉れ高き旦那様方、つまり、ベルトン様、モーブレー様、そして、ベルフォード様に使いの者を送っておりました。ターヴィル様はロンドンを出ておられるのです。

シンクレアさん、ホートンさん、そして、マーティンさんの間で激しい言葉が飛び交っておりますし、ドーカスについても同じ具合です。また、貴方様の召使ウィリアムのほうは、首を吊るか、あるいは身投げをしそうなことを言っております。

侍女のメーベルの消息が得られるかどうかを確かめるべく、あの娘の母親へ使いを出しました。母親はウェストスミスフィールドのチックレーンに住んでいるらしいのです。それに、あの娘の叔父のところへも使いを出しましたが、この男はすぐ近くのカウクロスで居酒屋をやっておりまして、あの娘が最後に暮らしておりましたのが、この男のところだったのです。

ちょうど馬を交換し終わり、貴方様の使いの者が戻ってまいりました。従いまして、あの人を引き止めることのなきよう、この不幸な出来事を憂慮しつつ、時宜に適った貴方様のご厚志と親切なるお心遣いに［これは私の落ち度ではないものと確信いたします］感謝いたしておりますことを付け加えるにとどめさせていただく次第です。

謹　具

心からの感謝の念をこめまして、貴方の謙虚なるしもべ

パトリック・マクドナルド

手紙　二十四

モーブレー氏からロバート・ラヴレース氏へ

水曜日　十二時

親愛なるラヴレースへ

貴公に知らせねばならん腹立たしい話がある。ハーロー嬢が姿をくらましたのだ。完全に姿をくらましたのだよ。本当だ。貴公の召使が去ろうとしているので、詳細にわたって書いている時間はない。しかし、時間があったとしても、われわれはまだ真相を究明するには至っていないのだよ。ここの婦人たちはメチャクチャに互いを責め合いながら、皆で猛烈に泣きわめいているところだ。一方、ベルトンと俺は、全員をまとめて呪ってやっている。貴公の名を借りてな。

万が一、貴公の相棒のウィルがどこかの馬洗い池から死体で引き上げられたことを耳にしても、また、ドーカスがベッドの天蓋から自分のガーターで首を吊り、ぶら下がっているところを引き下ろされたと聞いても、驚かないことだな。まさに後の災いというやつだ

よ。落ち着き払っているのはジャック・ベルフォードただ一人だ。ミドルセックスの治安判事みたいな意味ありげな態度で尋問や告発、そして、告白の控えを取っており、推察するに、すべてにわたって詳しいことを書くつもりらしいのだ。

貴公のことは心から気の毒に思う。ベルトンも同じ気持ちだ。だが、一番都合の好い展開になるかもしれないのだよ。察するに、彼女は貴公の烙印をつけて逃げ出したわけだからな。愚かな小悪魔だよ。どこで身を清めるというのだ。彼女に目を向ける者はだれ一人としていないのだ。それに、小耳に挟んだところでは、彼女が残っていた場合には、貴公はきっと結婚するつもりだったそうだな。ただ、俺は貴公のことをもっとよく知っているつもりだよ。

親愛なるボビーよ、さらばだ。もしも今M卿が亡くなれば、貴公のこの損失の慰めとなるわけだが、何ともまた、見事に時宜を得た死に際というものだな。われわれにも一筆認めてほしいものだ。是非とも頼む。ベルフォードに対しては貴公もえらく筆まめなわけだが、奴は何一つとしてわれわれには見せてくれないのだよ。

心より貴公のもの

RD. モーブレー

手紙　二十五

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

六月二十九日　木曜日

マクドナルドとモーブレーから知らせは受けたことだろう。悪い知らせと見るのか、それとも吉報と見るか、貴公がどちらに受け止めるのか、俺には分かり兼ねる。ただ、俺としては、不幸な令嬢がハムステッドから誘い出される前に、同じ理由で貴公に祝いを述べることが出来たならと、ただそう願うだけだよ。何しろ、その場合には、貴公にしても途方もない恩知らずな悪事を犯すことは免れていたはずだからな。今こそ貴公はその責めを負わねばならないわけだがね。

俺が上京した純然たる目的は、彼女を貴公と添わせることだったのだし、また、そのための骨折りをしても恥とならないことは、貴公の次の手紙が納得させてくれるものと期待していたのだよ。それで、最初、彼女が逃げたのを知った時には、貴公にやや同情したくらいなのだ。これで貴公もお陀仏になるのは避けられないわけだからな。そして、何という極悪非道の姿を貴公は世間中に晒すことになるのだろうか。気の毒なラヴレースよ。自分の仕掛けた罠に捕まるとはな。貴公の罰は始まったばかりなのだ。

だが、俺の話に戻ろう。細かな点を俺が書き集めていたことはモーブレーから知らせがあったわけだし、そのすべてについて、貴公は俺に期待を寄せているだろうからな。

金曜日の夜には健気にも気力を奮い立たせたものだから、どうやら、彼女はすこぶる体調を損ねた様子だ。そのため、土曜日の夕刻まで彼女は姿を見せなかったわけだが、その際にメーベルが見たところでは、彼女は大層具合が悪そうだったのだ。ところが、日曜日の朝には、身仕度が出来上がると、いかにも教会へ行こうとしているみたいに、玄関先ま

で馬車を呼んでくれるよう、メーベルに命じたのだ。

娘は、すべてに亘って彼女の命令に従うよう言われているが、馬車とか駕籠とかを呼ぶこと、あるいは、手紙の類については別である旨を彼女に話した。

彼女はウィルを呼び寄せ、同じことを言いつけた。

奴のほうでは、主人からそれとは逆の指示を受けていることを言い訳に、勘弁してもらいたいと願い出たのだ。

これを聞くと、彼女は自分で階下に降り、人目に止まることなく出て行こうとしたのだよ。だが、表口には二重に錠が掛かっていて、鍵は挟まっていないことを知ると、通りに面した客間に入ってサッシ窓を引き上げ、連中に言わせるなら、疑いのないところということになるが、通行人に呼び掛けようとしたというのだ。しかし、彼女は前に同種の試みをしていたわけで、それ以来、サッシ窓は固定されていたのだ。

そこで彼女は、決然として、離れのほうにあるシンクレア夫人の客間へ踏み込んだ。そこには、あの人でなしの婆さんと、二人の相棒がいたのだが、彼女は表口のドアの鍵を渡すか、それとも、彼女のためにドアを開けてくれるよう要求したのだよ。

連中は皆驚いたが、それは御免蒙りたいと言い、貴公の指示のことを言い訳に持ち出したのだ。

彼女のほうでは、貴公は彼女に対して何の権限も持っていないし、持つはずもないということ、そして、連中のこの拒絶は、連中自身にとっての後日の証拠となるものであることを主張していた。離れの用途、そして、彼女をそこに押し込めた理由はお見通しであるとし、自分の身分や財産のことを引き合いに出してもいた。そして、彼女のためにドアを開けるか、それとも、彼女を殺し、見つかる心配のないほど深く、庭か地下室に埋める以外には、連中にとって、完全な破滅を免れる方法はないし、彼女に加えられた仕打ちからして、すでに死罪に値する、と言うのだよ。そして、彼女を引き止めるのであれば、身の危険は覚悟することだと言っていた。

この魅惑の君は、気力を奮い立たせて当然な場合には、実に見事な、まさしく本物の気迫を備えているのだよ。

連中のほうでは、ラヴレース氏が自らの結婚について証明し、自分たちの責任を免じてくれるはずだと答えた。そして、連中は挙って、金曜の夜の自分たちの振舞いや家の評判に対する疑いを晴らそうとしたのだ。だが、その件については耳を貸そうともせず、脅しの言葉を口にしながら、彼女は連中のところから飛び出して行ったのだよ。

それから彼女は自分の部屋へ向かい、階段を六段登ったのだが、まるで思い直したみたいに、再び降りてきた。そして、通りに面した客間のほうへ歩を進めたのだが、窓は壊れるけれど、身を守るものは自分で用意するわ、と言いながら、破廉恥なドーカスの横を通り過ぎて行ったのだ。だが、あの娘は、自分の頭で考えてのことだが、奥様がその客間を出てシンクレア夫人の客間へ向かうのを見ると、ドアに錠を掛けて鍵を抜き取っておいたのだよ。そんなわけで、望みが挫かれたのを知ると、彼女はワッとばかりに泣き出し、そして、脅すような言葉を吐き、すすり泣きながら、再び階段を登って行ったのだ。

効果的な企てに取り掛かるまで、彼女がそれ以外の試みを行うことはなかったのだ。連中の推測だが、貴公の手紙や伝言が次々に届くものだから（彼女はそのどれ一つにも返事を出そうとしなかったのだが）、彼女にはそれが少しは楽しみになったらしいし、連中のほ

うでも、彼女も最後には貴公を許すことになり、そして、すべてが貴公の願ったとおりの結末を迎えるのだろうと、そんな確信を抱くようになったというのだよ。

女たちは貴公の言いつけを守り、彼女に対して差し出がましい真似をするようなことはなかったのだ。ドーカスのほうでも、日曜日の残り一杯は、彼女の目に付かないようにしたし、月曜と火曜も同じようにしていた。しかし、連中が想像するところでは、メーベルに対する令嬢の遜った（親密さとも言えそうな）態度からして、彼女はその間ずっと脱走のことを思い巡らしていたに違いないというのだ。それゆえ、連中としては小娘に対する用心をさらに強めることにしたのだが、あの娘が令嬢と自分との間で交わされた事柄のすべてを極めて忠実に報告していたこともあり、委託された邪な役目も忠実に果たしてくれるものと、信じて疑わなかったわけだ。

この間ずっと、彼女が何かを企んでいたということは有り得る話だろう。しかし、どんな企みにせよ、遂行する機会が見つからなかったのだよ。脱走を果たした際の工夫にしても、まさしくその当日までは思い当たらなかったように俺には思えるのだ。後で分かったことなのだが、それには天候次第という部分があったわけだからな。それでも、その間ずっとメーベルへの丁重な態度に磨きをかけることによって、あの娘の無邪気さとか感謝の念、あるいは、憐れみの気持ちに何かを期待していたことは明らかなのだ。

水曜日の朝早くにポリーがご挨拶に伺ったところ、当然のこととして予期していたものとは違い、もっとマシな接待を受けたのだ。しかしながら、監禁されていることについては、彼女も強く不満を漏らしていた。ポリーは、拝察するに、明日にはそれも（たとえ監禁だとしても）目出度く終わるはずだ、と言ったのだ。彼女のほうでは、ポリーが言わんとしている意味ではその正反対だと、きっぱり言明した。そして、次のようにも言っていたのだ。ラヴレースさんも戻って来れば［これからすると、彼女は貴公の帰宅を待つつもりのようにも思えたのだ］、ご自分の出した命令を後悔なさるだけの理由が見つかることでしょう。貴女たち皆さんがその命令に従ったことを悔やむのと同じようにです。あの人が二十通の手紙を出すとして、それがどのような結果を招こうとも、私は決して返事は書きませんし、この家にいるかぎりは、私からの好意につきましてはこれっぽっちでも、あの人に望みを持たせる気はないのです、とだ。シンクレア夫人と連中に対してははっきりとした警告を与えてあったのであり、他の者からどのような命令があるとしても、自由な人間を引き止めるようなことになってはいけない、と彼女は言うのだ。ただ、家を出る試みを公然と行った上で連中に引き止められたこともあり、その分一層落ち着いた気持ちになっている、とポリーに語っていたのだよ。どのような結果になるか、皆で楽しみに待つことだ、ともな。

しかし、彼女はこれを穏やかな調子で語っていたのだよ。そこでポリーは、自分の考えではということだが（自分たちの身の安全を気に掛けていたこともあり）、彼女は連中全員を罰する絶好の機会を手にしているのだから、逃げ出すことが出来るとしても、逃げはしないはずだ、と言っていた。そして、婦女暴行の中でも最も卑劣なものを身分ある人間に加えた男、そして、その罪状で告訴された場合には、自ら逃亡するか、あるいは、首吊りの刑を受けなければならない男にとって、一体いかなる免責が考えられるのだろうか、とポリーは話していたのだ。

ポリーのこの説明を聞くと、シンクレアのほうでは［あの女にはまだこの名を用いるこ

とにするが」、こんな奇妙な仕事を引き受けた結果としてだが、自分の家が駄目になってしまうことは予見していた、と言うのだよ。そして、破廉恥なサリーとドーカスも、それぞれにこの懸念を分かち合ったのだ。こんなこともあって、今後は次のようにするのが得策と連中は考えるに至ったわけだ。つまり、通常昼間のうちは、表口は内側からはだれにでも開けられる、いわゆる差し錠だけを掛けておき、鍵はドアに差し込んだままにしておくということだが、その気があれば、彼女は逃げ出すことも可能だったのだという点を、数え切れないほどの〈来る人行く人〉が … 連中は客のことをこう呼んでいるのだ … 証言出来るようにというわけだ。しかし、彼女の逃亡を防ぐためにも、この際警戒をさらに強めるよう、ウィル、ドーカス、メーベル、および、その他の者たちに改めて指示を出すことも忘れはしなかったのだ。同時に、次の点に疑いを挟む者は連中の中には一人としていなかったのだよ。つまり、連中の目には極めて重要な人物と映る、そんな男に対する彼女の愛があり、また、彼女としては信じるに足る理由もあるわけだが、伯父の誕生日でもある例の木曜日に起こるはずの事柄への期待もあるのだから（もっとも、プライドを満たすためにも、おそらく、ぎりぎりの最後までそうはならないだろう、というのが連中の言い方だったが）、彼女も機嫌を変える気になってくれるはずだ、というのだな。

連中のほうでは、彼女は鍵がドアに差し込まれたままであることに気づいたのだと信じている。というのも、小さな庭を散歩するため、彼女は一度ならず階下に降りたし、その都度、表口のほうへ視線を向けているようだったからとのことだ。

昨日の朝の八時頃、ポリーが彼女の元を辞して一時間後のことだが、彼女はメーベルに向かってこんなことを話したのだ。自分はきっとこの先長くはないと思うし、何着もの衣装を持っているのだけれど、自分の死んだ後は、どなたにせよ、自分が大切に思っている人のお役に立つこともないだろうから、ラストリング地（八）の茶色のガウンを一着お前に上げましょう。もっと身分に似合ったものになるよう、少し手を加えたなら、長いこと晴れ着として使えるはずです、とだ。頭に思い浮かべても恐怖や敵意を感じずに済む人間としては、あの家の中ではあの娘（メーベル）だけだから、というのだな。

それを受けてメーベルが謝意を表すと、令嬢のほうでは、何もすることがないので、お針子さんを一人すぐに連れてきてくれるなら、自分の持ち物に目を通した上で、あの娘に譲ろうと予定していたものを進呈することにしよう、と言ったのだ。

ほんのわずか離れたところに、女主人がお得意にしている婦人服の仕立屋さんが住んでいるので、すぐにガウンの仕立て直しをしてもらうよう、その仕立て人か、そこの女子職人を一人呼んで来ることなら、間違いなく出来るはずです、と女中が答えた。

お前にはキルト地のコートも上げますよ、と令嬢が言った。手直しをするにしても、ほんの少しで済むでしょう。お前は背丈が私と大体同じですからね。でも、ガウンにつきましては、指示することがあるのです。袖口と縁取りと折返しは、お前の身分には過ぎたものだと思いますので、お前が着るには取り替えてもらわねばなりませんからね、とだ。だから、そのお針子さんを連れて来るわけには行かないものかどうか、ひとつ試してみるのですね、と彼女は言っていた。そして、手直しについて、私たちで助言をしてあげましょう、と言うのだよ。今来られないのなら、午後に来てもらうのですね。でも、私としては今のほうが望ましいですよ。お前に喜んでもらうと、私も気が紛れるでしょうからね、とも言っていた。

そして、窓のところへ歩いて行き、「雨ですよ」と言っていた［午前中はずっと降っていたのだよ］。そして、「お前が着ているところを目にしたのだけれど、あのフードと短い外套を羽織って行くことね。それから、出掛ける用意が出来たら、私のところへ来てちょうだい。買い求めて来てもらいたいものがありますからね」と言ったのだ。

メーベルは言われたとおりの身仕度をし、ちょっとした買い物についての指示を受けると、彼女の元を辞した。だが、外へ出る前に奥の客間に立ち寄ると、ドーカスがシンクレア夫人と会っているところだったので、行き先と用向きを伝え、自分が戻るまで注意してくれるようドーカスに頼んだのだ。それほどまでにあの小娘は委ねられた仕事に忠実だったのであり、令嬢の気前の良さもほとんど効果をもたらしてはいなかったわけだ。

シンクレア夫人があの娘を褒めていた。ドーカスは羨み、役目を引き受けた。婦人服の仕立屋のところの女子職人を連れて、メーベルが間もなく戻って来た（あの娘に言わせると、その女を伴わずに帰るつもりはなかったのだそうだ）。そこで、ドーカスの見張りの仕事もお役御免となったわけだ。

令嬢はガウンとペチコートを捜し出して来ると、お針子の前でメーベルに試着させて見た。そして、もっとよく体に合わせるためにというわけで、喜んでいる娘に外側のペチコートを脱がせると、彼女が与えた方を着けさせたのだ。それから彼女は、ラヴレースさんのお部屋へ行き、あそこの姿見の前で工夫して見るように、また、自分の意見を述べるためだが、彼女が来るまでは残っているようにと、娘たちに向かって命じたのだ。

メーベルは自分の衣類、それに、フードと短いコートも持って行こうとしたのだが、令嬢がこう言ったのだ。「構いませんよ。手直しのことを考えた後、またここで着るかもしれないでしょう。それに、あちらのお部屋をちらかすことはありませんからね」とだよ。

二人が出て行った。すると、すかさず、と思われているのだが、彼女はメーベルのガウンとペチコートを羽織ったのだ。白いダマスク織りの自分の服の上にだよ。それに、あの娘のフード、短いコートといつものエプロンもだ。こうして彼女は降りて行ったのだ。

だれかが廊下を歩いているのを聞きつけ、ウィルとドーカスの両名が奥の広間のドアのところへ飛んで行くと、彼女の姿が目に入った。しかし、メーベルだと思っているものだから、「遠くまでなのかい、メーベル」と、ウィルは叫んだのだ。

彼女は顔も向けなければ、返事もせず、片手を延ばして階段の方を指差していた。二人はこれを、あの娘が留守にしている間用心するようにという注意と受け取ったのだよ。そして、あの娘が改まった形で二人への注意を繰り返しはしなかったので、ウィルも、長い外出ではないのだろうと考え、階段を昇り、メーベルと思っている者が帰って来るのを降り口の辺りで待ち侘びていたのだよ。

メーベルとお針子は長い間待っていたわけだが、片方は仕事のことで工夫を凝らしていたし、もう一方は立派なガウンとコートのことが嬉しいものだから、不愉快とも思わずに楽しんでいた。だが、とうとう、令嬢が来てくれないのを不思議に思い、メーベルが抜き足差し足で彼女のドアのところまでやって来た。そして、ドアを叩いてみても返事がないので、あの娘は部屋に入ったのだよ。

ちょうどその時、ウィルは階段の降り口の持ち場から奥様の衣装を纏ったメーベルの姿を目に留めたのだが、プレゼントの件は奴も耳にしていたので［使用人たちへの贈物というのは、一瞬のうちに使用人から使用人へと伝わるものなのだよ］、ひどく肝を潰してしま

った。つい今し方、あの娘が自分の衣装を着て出掛けて行くのを見たように思っているわけだからな。そこで、部屋のほうへ行くと、ドアのところであの娘に出会ったのだよ。「一体、どういうわけだよ、これは」と、奴は言った。そして、「お前、さっきは自分の服で出掛けたのだぞ。どうやってこんな格好になって戻って来たんだ。それに、どうやって俺のところを見つからずに通ったんだい。だけど、構うもんか　…　」と、あの娘にキスをしながら、これで俺も、奥様か、奥様の衣装を着けた人にキスをしたと自慢が出来るぞ、と言っていた。

「ウィリアムさん、そんなにも休みなく顔を出してくれて、私、嬉しいわ」と、メーベルは大声を上げ、「でも、奥様はどちらなのかしら。あなたご存じ」と尋ねた。

「旦那様のお部屋さ」と、ウィルは答え、「いらっしゃらないだって　…　お前と今まで話しておられたのじゃないのか」と問い返した。

「いいえ、あれはドーリンズ夫人のところの女子職人さんよ」

こう言いながら、二人とも愕然と立ちつくしてしまったのだが、ウィルのほうでは、自分ではメーベルだとばかり思っていた人物が、あの娘の服装で出て行くのを目にしたことをまた思い出していたのだ。そして、二人が論じ合ったり不思議がったりしているところへ、奥様宛に届いたばかりの貴公の四通目の手紙を携えて、ドーカスが上がって来た。そして、メーベルが着飾っているのを目にすると（この女のほうでも、あの娘の普段着姿をちょっと前に見たと思っていたものだから）、一緒になって不思議がっていたのだが、やがて、再び奥様の部屋へ入ったメーベルは自分の服が見当たらないことに気づいたのだ。それから、何が起こったのかをうすうす感じ取り、その推測の根拠を他の者たちにも明かすと、奥様は間違いなく逃げ出したのだということで意見が一致したわけだ。その後は、「お前はこうすべきだったのだ」とか「あんたがあゝすれば良かったのよ」と、大声を張り上げての咎め合いなものだから、家中が戦々恐々といった有り様だ。両方の棟にある部屋の一つ一つから、それぞれ売女が飛び出して来て、母さんとその相棒も加えると、総勢十四人か十五人にもなったのだよ。

ウィルは、奴なりのいきさつを皆に話すと、駆け出して行った。以前、似たような出来事があった時と同じように、あの近くで客待ちをしている御者とか駕籠かきとかポーターとかのだれかに奥様の姿が目撃されていないかどうか、調べるためだ。一方、ドーカスはすぐに自分への疑いを晴らそうとした。それも、気の毒に、メーベルを犠牲にしてのことだよ。メーベルのほうは、ぎこちがなく、身に覚えのあるような仕草でもあったが、裏切りの代償と勘繰られているものを身に着けているからだ。そして、妬ましさゆえのことだが、ドーカスなどはそいつをあの娘の背から剥ぎ取りたがっていたのだよ。

ここで、あの娘に向かって、猟犬みたいな連中が一斉に吠え立て始めたわけだが、母さんは、怪しいと思われる不届き者を取り押さえるようにとの指示を、口から泡を吹きながらわめいていた。容疑者のほうは、自己弁護をしても耳を貸してはもらえないし、たとえ貸してもらえても、信じてはもらえなかっただろうな。

こんな裏切り者の恥知らずが私の家の評判を汚したりするとは、というのが、母さんの上げた叫び声だ。ご立派なお歴々なら、賄賂で買収されることもあるだろう。しかし、母さんのところのような家が、自分の就く仕事を承知の上で雇われた、そして、道義心などはこれっぽちも装うことのない、そんな罰当たりな連中から誠意をもって仕えてもらうこ

とも出来ないようでは、それこそ結構な話じゃないか、というのだよ。そして、「忌々しい娘だわ」と、恥知らずは言葉を続けていた。あの娘にはもう我慢が出来ないわ。コックを呼んでちょうだい。それから、皿洗いも呼ぶのよ、とだ。

コックも皿洗いもすぐ近くに来ていたのだ。

「見てごらん、あの疚しいところのある斑模様の人でなしを」というのが母さんの台詞だ（奥様のガウンが娘の背を覆っていたのだよ）。「でも、あの娘を罰するのは、信頼を裏切るような者皆への見せしめですからね。すぐに大焼き網を乗せてちょうだい（と、一言ごとに呪ったり、毒づいたりだよ）。火を勢い良く燃やすのよ。今すぐ、肉切り包丁を持ってきてちょうだい。この手であの娘を四つに切り分けてやるのさ。裏切り女に切目をいれて炙るのよ。近所の犬や猫に残らず振る舞ってやるご馳走にするためだわ。あの嫌な奴の最初の一切れは私が食べてやるからね。塩胡椒なしでよ」とも言っていた。

気の毒に、メーベルはびっくり仰天してしまい、鋭い爪をむき出しにした十本の手が一斉に掴み掛かってきたこともあり、今にもバラバラに引き裂かれてしまいそうな気になっていた。あの娘はすべてを白状すると約束した。しかし、そのすべても、発言の機会を得た時には何の役にも立たなかったのだよ。何しろ、あの娘には、白状すべきことなど何一つとしてなかったわけだからな。

ここでサリーが、慈悲心を呪いつつ、引き下がるようあの娘に命じた。旦那様に詳細のすべてを書き送れるようにするためにも、あの娘の吟味は自分とポリーの二人だけで行おうと請け合ったのだ。そして、あの娘が身の証を立てられない場合、あるいは、罪を犯しているとして、奥様を連れ戻すためだが、何か奥様のことで（皆にこんな面倒な思いをさせるいけない人なのだが）明らかに出来ることがない場合、自分としては、肉切り包丁と大焼き網に一働きしてもらって大いに結構だ、というのだよ。

あの娘は、このように刑の執行が延期されたのを喜び、二階へ上がった。そして、サリーが法律のことを説明し、いつもの指図がましい口調で無駄話をしている間に、もう一着のガウンを羽織り、こっそりと階段を下りると、身内のところへ姿を隠してしまったのだよ。そして、この脱走は、罪の意識よりも恐怖によるところが大なのは間違いないが、まさしくオールドベイリー（九）流の解釈に従って、有罪の確かな証拠ということにされてしまったのだ。

以上がハーロー嬢逃亡の詳細だよ。貴公としては、詳しすぎるように思うことはまずないだろう。この機会に、貴公の苛立ちようや激昂ぶりを眺めながら、勝利の美酒でも傾けたいものだな。

たっての願いだ、親愛なるラヴレース。この次の便りでは、ひとつ思い切り盛大に猛り狂って見せてもらいたいのだよ。でなければ、俺は失望のあまり、悲嘆に暮れることになるだろうからな。

可哀相に、一体どこへ令嬢は行ってしまったのだろうな、ラヴレース。そして、彼女が嘗めているに違いない苦難の数々を、一体だれが描き出してくれるというのだ。

以前の貴公の手紙からすると、彼女にはごくわずかな所持金しかないし、また、逃亡の突然さからして、身に着けているものの他には、衣類の持ち合わせもないと見て良いだろ

うな。そして、以前こう語ったのはだれなのか、貴公は承知しているのだよ(ア)。「両親に受け入れる気はないのだ。おじたちももてなしてはくれない。彼女のノートンは連中の指図を受けていて、彼女を迎えるわけに行かないのだ。ハウ嬢にも踏み切れないことだ。ロンドンでは、一人の知人も親友もなく、この街にはまったくの不案内なのだ」とだ。それに、付け加えさせてもらうが、これらすべてを犠牲にして得た男、また、千にも及ぶ宣誓や誓約により、彼女の夫、保護者、そして、友となるべく義務づけられた男によって、彼女は操を奪い去られてもいるということだよ。

自分の受けた残酷な仕打ちを憤る彼女の気持ちは、どんなにか強いことだろう。その気持ちから、かつて愛した男に憎しみを抱くようになったのは、いかにも彼女らしい立派な話ではないか。そして、そんな男と結婚するよりは、むしろ自らの恥辱を世間中にさらけ出し、あんなにも望みをかけていた身内との和解も捨て去ろうというのだ。そして、若さゆえに、また、女の身ゆえに、金もなければ寄る辺もないその美しい姿を間違いなく晒すことになるはずの千もの災いに、敢えて挑もうというのだよ。

貴公は思い出さないのか。貴公の急所に迫るあの一撃をだよ。彼女が錯乱状態の時に書いた紙片の中の一枚にあったものだが、錯乱しているようには思わせないものだ。

これは保証するが、あれからというもの俺は、実に頻繁に、極めて真剣にその言葉のことを考えてきたのだよ。そして、貴公が二度目の怒りを装って見せようとしたこともあって確信を得ているわけだが、当時、あの言葉は何の印象も貴公には与えなかったし、それ以後も、おそらく、貴公は一度も考えてみたことがないはずだから、俺のほうで例の文章を転記することにしよう。

「宗教の教えにあるが如く、われわれを裁くに当たりて神は、われわれが相互に行う善行と悪行とに基づくこと多しとすれば、あゝ、恥知らずよ、熟慮すべし。速やかに熟慮すべし。汝に対する断罪のいかに大なるかを」(イ)というのだよ。

それで、この好ましい信条が宗教の要点ということなのだろうか。まさしくそのとおりだと、俺は信じて疑わないのだ。というのも、実際の行動については別だが、われわれも無神論者ではないわけだから、ひとつ真面目な考えに浸ってみることにするが、生きとし生くる者の主である神は、ご自身のためになるよう、われわれに何かを求めたりなさるだろうか。また、神のお慈悲に与る手段として、互いに慈善の行いをするよう、神はわれわれに命じておられるのではないのかな。崇高な信条であり、また、至高の監督者、万物の父たる者に相応しい考え方だよ。それにしても、この高貴なる信条によってわれわれは裁かれるのだとしたら、この令嬢との一件だけでも、まったくの話、貴公に対する断罪は一体どんなものになるのだろうな。また、他の女たちとの件での俺の断罪、そして、われら同志全員の断罪はいかなるものになるのだろうか。機会の少ないこともあるし、性癖の点でも欠けるところがあるためだと思いたいが、われわれのどの一人をとってみても、貴公の半分もワルではないのだけれどな。

申し添えておかねばならないが、俺としては、令嬢のためにも、また、貴公自身のためにも、貴公らが互いに結ばれることになるのをやはり願っているのだ。それが、両名の評判を守る上で思いつくことの出来る唯一の手段ということだ。過ぎたことすべては、世間

(ア) 第四巻の三十八頁から次頁にかけてを参照のこと。(イ) 第五巻の二百四十二頁を参照のこと。

の目から、そして、彼女の身内の者たちからも、まだ隠しておくことが出来るのだよ。それに、彼女にとって優しく、思いやりに溢れた夫になる決意を固めるなら、彼女の嘗めた苦難のすべてに償いをすることも出来るのだ。

そして、これが本当に貴公の狙いだというのなら、貴公から委託された任務は喜んで引き受けることにする。そんな立派な目的を進捗させることにもなるのだろうから、いつであれ、彼女が見つかる時にやってみよう。つまり、貴公への友情を公言している男に、彼女がお目通りを許してくれるならの話だよ。また、左記の点を立証するのに、これに優るものもあるまいな。

貴公の誠実なる友
J. ベルフォード

追　伸　今朝、メーベルの衣類が廊下に投げ込まれたのだが、だれの仕業なのか、だれにも分からないのだよ。

手紙　二十六
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

六月三十日　金曜日

破滅だよ。終わりだ。木っ端微塵にぶち壊しだ。全滅よりもひどい有り様だ。そいつは間違いのないところだな。それにしても、耐え難い重量が掛かっている天秤の皿に、咎めの言葉を投げ入れたりしなくても、どうだろう、あの知らせで十分に衝撃的だったのではないのかな。俺自ら打ち明けることがなかったならば、貴公としては口にする機会もなかったはずの咎めなのだよ。それも、今判明したことだが、俺としては、ひどく心の痛むもう一つの期待外れな出来事と取り組まねばならない時期だというのにだ。

来世での懲罰というものが仮にもあるとしたら、新参の極悪人がもっとあくどい古顔から懲らしめを受けるというのは、屈辱の中でも軽微、卑小なものなどでは決してないように思うのだ。悲鳴を上げる罪人に向かって、さあ、これでも食らえ、さあ、これでも食らえと、老サテュロス（一〇）が声を張り上げ、九尾の猫笞を打ち下ろしているのだが、その尾っぽ一本一本の先には、焼けた真鍮の星がついているのだよ。そして、何の科なのでしょう、何の科なのでしょう、と叫びが上がるのだが、包み隠さずに真実が語られるなら、何のことはない、俺に匹敵するほどの極悪人ではないがゆえの話なのだ。

確かに、貴公も立派な詭弁家なのだから、騙され易い、人の好い娘を誘惑する罪も、懐疑的で用心深い娘を誘惑する罪と同じ程度に重いということは分かっているはずだ（これまで俺が主張してきた(ア)点だよ）。

これから述べようとしていることが、俺のペンを通した場合、どんなに度量の狭いものに見えるとしても、ひとつ言わせてもらいたいのだ。つまり、ハーロー嬢ほどの女性が結婚生活に入ることを選び［怒り狂い、絶望する俺の姿を見て勝ち誇ろうなどという、貴公

（ア）第四巻の十六頁を参照のこと。

のそんな目論見は挫いてやる覚悟なのだ」、そして、昔の家長制度を守り、子供を敬虔な心をもって育て、善良で役に立つ国民とすること以外には何らの目的も持たずに、息子や娘をもうけることに寄与し続けようというのであれば、道楽者などの後を、それも、自分でも道楽者だと承知している男の後をほっつき歩くような気紛れを起こすなんて、彼女は一体何のつもりだったのか、ということだよ。

あゝ、だが、本当なのだ。彼女は願っていたのだよ。その道楽者を改心させる手柄を自分のものにしたいとな。自らの手で改悛へと導いた男を傍らにぶらつかせながら、喝采を送る隣人たちの間を通って教会へ向かうのは、どんなに魅力的な眺めなのか、そして、家族が増してくると、いわば行列を成して進む息子や娘たちの先頭にその男が立ち、あの立派な主教が結婚許可証の中で述べている〈貞潔なる願望〉の果実を誇りながら、彼女と共に教会へと行進するのはどんなに素敵なことかと、そんな楽しい考えを彼女は胸に描いていたのだ。そして、何という美しい光景なのだろう。全員が揃って、家族席の中で、年齢順に跪いているのだよ。ちょうど、われわれも絵で見たことがある光景だ。何かの古い記念碑に刻まれた一家の様子で、鎧に身を固めた見苦しくない騎士の、両手を差し上げながら跪く姿が描かれており、その後ろのほうには、大きな頭で髪を短く刈り込んだ半ダースの男の子が、年齢と体格に従って順々に、つまり、階段状に、皆同じ姿勢で連なっているのだよ。そして、首に襞襟を巻いた信心深い奥方と向き合っているのだが、奥方の後ろには、青ざめた顔色の同じ人数の女の子が全員跪いて並んでいるのだ。その者たちの中間に祭壇があり、開いた本が一冊置いてある。彼らの頭上には、大紋章の銘文を取り囲む美しく輝く雲から半月の光が降り注いでいるが、その銘文というのが「天に安全あり」というものだ。あるいは、もしかすると、「天に安静あり」かもしれないな〔二〕。たまたま、口論と反目とを重ねる通常の結婚生活を送ってきたのであればだがね。

もしも世間の評判とか、我が身の安寧といったものに重きを置こうとしたのなら、クラリッサ・ハーロー嬢に出会ったのは、俺にとって不幸なことであったのも確かだ。俺と知り合ったのがハーロー嬢にとっては不幸な話であったのと同じ程度にだよ。それに、結局のところ、俺は格言を実行して見せたわけだが、それ以上のどんな事をしでかしたというのだ。貴公や俺、そして、道楽者のだれもが自らを律している格言であり、また、田舎の縁日で、「お次はどなた」「お次はどなた」と囃し立てながら、野郎どもがメリーゴーラウンドの馬車や馬を操るのとちょうど同じことだが、一人やっつけるとすぐに別のに乗り換えるといった具合に、次々と可愛い娘を追いかけるに当たって、われわれがあの淑女を知るまでは遵守していた、例の格言なのだ。

だが、今度の場合、活動的な比喩を続けると（俺は陽気になるか、それとも狂気に走るか、そのどちらかでなければならないのだからな）、登場するのは垂れ袖の上着を卒業したばかりという可愛らしいお嬢ちゃんで、縁日の可愛らしい買い物をしに連れられて来たのだよ。というのは、貴公も承知のとおり、ジャック、この世は大掛かりな縁日に他ならないわけだからな。それに、貴公が真面目な考えに浸っているので、そのお返しというわけだが、縁日に並んだオモチャというのは、すべて見掛けだけの木馬やけばけばしい安ぴか物、キーキー軋るラッパやペンキを塗りたくった太鼓などに他ならないのだよ。

さて、この可愛らしいお嬢ちゃんが実に愛らしい仕草で、次々と露店の前をかすめるように進んで行くところだ。多分ワイアリーと呼ばれている小粋な男、もう一人はバイロン

と呼ばれるせわしない与太公で、三人目はシムズという名のにやけた下郎、そして、他のどれよりもいやらしい悪党で、長い袋を小脇に抱え、踵に羊皮紙の書類をくくり付けているのは、ソームズと呼ばれる奴だが、こいつらが見世物から見世物へとお嬢ちゃんを追いかけ、曲がり角に来るたびに互いに押し合いへし合いしながら、彼女が立ち止まれば奴らも止まり、彼女が動くとまた回り出すといった塩梅なのだ。そして、こんな具合につき纏われながらも、依然として用心深い保護者の監視の下に置かれたまま、愛らしいお嬢ちゃんは縁日の会場を隅々まで見て歩くわけだが、自分が楽しむと同じくらい、人の目を楽しませてもいるのだ。そして、モールの付いた帽子を被った口上人の誘いに心を惹かれ、また、よだれ掛けを着けた可愛い子供が何人か、回転木馬の馬車の中で身を寄せ合っているのを目にし、一方が上がれば片方が下がる、この世の似姿とも言える乗り物に乗り、何事もなく滑らかに風を切って進む様子、それも、分別もないのだろうが、不安を覗かせもせずに進む皆の様子を見ると、とうとう、次には自分も乗ってみようという気持ちになってしまうのだよ。

それから、知っている者が一人も傍にいなくなると、お嬢ちゃんはこっそり乗り込んでしまう。そして、二、三度上がったり下がったりしているうちに、愛らしい頭がグラグラしてきて、高く上がった時に馬車から身を投げ出し、あの愛らしい小さな脳髄を打ち砕いてしまうとしても、それを防ぐことが一体だれに出来るというのだ。また、可愛い子供たちに空中を駆けさせるのが生業だという、そんな哀れな野郎の首を吊るす気になどなるものだろうか。

すこぶる愛らしいお嬢ちゃんではあるし、大いに褒め称えられているお嬢ちゃんでもあり、実にお利口さんのお嬢ちゃんで、いつも本のことを心に掛け、刺繍の手本指導を受けても盛んに称賛を浴び、きらびやかな配色も巧みに、イサクを捧げるアブラハムやサムソンとペリシテ人（二）のような図柄、花、結び目模様、樹木、太陽と月、そして、昴を刺繍してみせもしたのだが、そのすべてはガラス付きの額に飾ってあるのだよ。いずれ孫たちに褒めてもらおうというのだな。また、実に結構な小さな地所の権利も持っており、上流社会に入って百年余りにもなるちょっとした家族の出だが、この一族は非常に慎ましい暮らしぶりで、自分たちのことで尊敬を受けることは極めて少なく、お嬢ちゃんのことでは大層敬愛されているというわけだが、確かに、この愛らしいお嬢ちゃんが　…

このように愛らしいお嬢ちゃんがこんなにも大きな不幸に遭うというのは、まことにもって悲しむべきことには違いない。しかし、どうだろう、さほど重要でもない他のどんな家族であれ、その家のあまり目立たないとか、気立てが好くないとかいう、普通の子供のだれを失う場合にしても、この愛らしいお嬢ちゃんを失うことがお嬢ちゃんの家族にもたらしたものと同じくらいに、その家族にとっては大きく、また、重くのし掛かる損失だったのではないのだろうか。

極めて卑俗な例まで話を落とすことにしよう。それも、もっぱら個人の特徴に関わることだが、貴公のその筋肉質で骨張った顔でも、まるでラヴレース風の、あるいは、どこかの美男子風の顔でもあるかのように、貴公のお袋さんからは大いなる称賛の念をもって眺められていたのだということに、貴公は少しでも疑念を挟むだろうか。また、貴公の肖像を描いてもらった場合、だれもが似ていることを認めるほどに、貴公の目鼻立ちを画家が正確に描き出さなかったとしたら、お袋さんはその画家を許していただろうかな。しっか

りと似通っていることこそが望まれていることのすべてなのだ。われわれの見慣れた醜さも、溺愛している両親には当然のあの贔屓目が加わると、世界中どこへ行っても美しさになるものなのだよ。貴公もひとつ試してみることだな。

∴　　∴

だが、あゝ、ジャック、これはすべて、貴公の悪意をかわそうとして描かれた、俺の表情の写しにすぎないのだよ。こんなことを白状すると、友達甲斐もない貴公の目的には適うのだろうが、この不幸な〈事故〉……そう呼ばねばならんのかな……には、俺も心の底から悩んでいることを認めずにはいられないのだ。俺の復讐心を鎮めるためのことだが、不注意についてであれ裏切りに対してであれ、喉元を掻き切ってやるのが当然という相手は、この俺様にはただの一人もいないのだろうかな。

最初の暴虐行為については、彼女の力の及ぶ範囲で、まことにもって堂々とした抵抗がなされたし、また、まことに気高い憤りも示されたわけだが、前回の俺の不埒な目論見のことを思い返してみると、俺はこの忌まわしいキルケーたち(一三)の魔力に捉えられていたのだと結論せざるを得ないのだよ。自分たち女のことについては分かっているわとばかりに、連中は次のように言い張ってきかなかったのだ。どんな女にも言いなりになってしまう瞬間、つまり、抵抗の弱まる瞬間が見つかるということ。そして、それなのに（と、三度繰り返していたが）、俺は十分に試してはいないということ。ただし、愛情に訴えようが恐怖心を煽ろうが、いずれを用いても、俺はその幸運な瞬間に出会うに至らないというのであれば、その時には、連中の呪わしい手管の助けを借りることで、彼女も「一度落ちれば、ずっと言いなり」になるはずだ、というのだよ。そして、俺の経験のすべて、女に関する俺の知識のすべてを引き合いに出し、自分たちの主張を正当化してみせたのだ。

引き合いに出された俺の経験というのは、正直な話、連中の論点にはいかにも有利なものであったのだよ。愛情を感じている男が飽かずに仕掛けてくる手練手管や、その執拗さを向こうに回し、あんなにも熱心に操を守ろうとする女に、俺がこれまでに一度でも出会っていたとしたら、その場合、このような天使を相手に目的を貫くような真似が俺に出来たとは、貴公としても思はないだろうからな。そのような揺るぎない美徳を示すもっと多くの例が見られなかったのはどうしてなのだろうな。あるいは、この稀有な例が俺の割当てとなったのは何故なのだろう。実際の話、俺の罪を倍加するためのこと、そして、同時に、彼女の身の上話を耳にするすべての者に対し、「肉体には悪魔と同様に天使も住みついている」のを確信させるためのことに他ならないのではないのかな。

告白はこれくらいにしておこう。良心を癒すためだよ。それに、認むべき点は認めることで、貴公の悪意を和らげようとの意図でもあるのだ。何しろ、だれにも俺のことを悪し様に語らせたくはないのだよ。この機会に俺自らが口にする言葉以上にはな。

しかしながら、一言付け加えておくことにする。悔恨の念の真摯なることを示すためだよ。つまり、ここ三日間のうちに、あるいは、彼女がトムリンソン船長と伯父とに関する話の真相を暴き出す前ならいつでも良いのだが、何らかの方法によって、貴公が彼女を見つけ出してくれるなら、そして、彼女を説き伏せて同意を取ってもらえるのなら、貴公とあの男（彼女の伯父の名代となる男だ）の目の前で、本当に彼女と結婚してみせるという

ことだよ。

そのようなことになるかもしれないと、俺は今なお希望を抱いている。彼女も長く身を隠しているわけには行かないのだよ。すでに手下ども全員を仕事に就かせてあるが、彼女を捜し出すためなのだ。そして、見つけ出した場合だが、中立の立場にある人間で「それに、貴公も述べている点だが、彼女の身内の中で、彼女に目を向けようとする者など一人としていないのだし」、俺ほどの風采、財産、そして、意志の堅固さを備えた男と、好んで騒動を起こそうとする者が、一体どこにいるというのだ。彼女を見つけることが出来るなら、この手紙のこの部分、あるいは、他のどの部分であれ、貴公の自由に任せるが、彼女に見せてほしいのだ。というのも、結局のところ、この一件はそれ自体でも十分に不幸なものではあるが、他のだれに対してであれ、身体的にもっと不幸な結果をもたらすことなしに済んでくれるなら有難いようにも思うからだ。しかし、彼女と俺との二人で話をまとめることが出来るなら別だが、そのため数滴の血を流すことに早晩なりそうだと、何故かは分からないのだが、そんな思いが胸をよぎるのだよ。そして、これがもう一つの理由かもしれないな。彼女が度を越した怒りに身を任せてはいけないことのだよ。俺のほうで相手を選ぶのであれば、一人であれ数人であれ、その手の事柄が俺にとって大きな心配事となるわけでもないのだ。何しろ、彼女を除くと、あの一族全員には心の底から憎しみを覚えるし、今後とも憎むことになるのだからな。

∴　∴

俺の目には、令嬢の逃亡計画が別に驚くべきものには映らないという点も付言させてもらいたい。うまく行く見込みがあったというよりも、幸運に恵まれた面がはるかに大きいのだよ。というのも、計画を成功に導くためには、ドーカスとウィル、それに、シンクレアと彼女の妖精たちが揃って騙されてしまうか、あるいは、油断してしまうことが必要だったわけだからな。連中と顔を合わせたら、遠慮なく礼をしてやるのが俺に相応しい振舞いというものだろう。そのとおりになってしまったことに対してだよ。また、将来の身の安全を図ろうという利己的な気遣いに動かされて、外へのドアを差し錠を掛けたままにしておき、災いの種を作るような真似をした点に対してもだな。

メーベルにはラストリング地のガウンなどより、ピッチスーツと大篝火（二四）のほうが相応しいのだよ。それに、あの娘の衣類は戻って来たのだから、奥様のものも他のと一緒にまとめておくことだ。届け先が分かった際には発送出来るようにだよ。ただし、俺が号令するまでは駄目ということにもしておこう。出来ればの話だが、愛しの逃亡者をもう一度連れ戻さなければならないわけだからな。

あのように女神にも似た体つきで、物腰にも高貴さの溢れる淑女と、無様で肩を窄めているメーベルとの見分けもつかなかった愚か者だが、あの悪党は彼女を捜しにハムステッドへ行ってきたのだろう。しかし、彼女があちらへ足を運ぶとは、俺にはあまり思えないのだよ。奴としては、下宿の張り紙が出ている通りを一つ残らず調べるべきだ。新しく入った者はいないかを尋ねるためだ。女物や、茶、コーヒー等々を扱うような店こそ、彼女に関する問い合わせが向けられて然るべき店なのだ。彼女についての何らかの消息がすぐにも得られないようなら、ドーカス、ウィル、メーベルの中のだれについてであれ、俺の

目の届くところには顔を出してもらいたくない気持ちだ。連中の上役どもがどんな処置を適切と考えるとしてもだよ。

暗号で書かれたものとはいえ、これはまことにもって長い手紙だ。俺の以前の手紙の大部分がそうであったわけだが、物語風の手紙、あるいは、出来事の日誌ではないことを考えるとだよ。というのも、その手のものは長くなってしまうのを避けられないのだし、また、それが自然なこととも言えるのだからな。しかし、最近では、俺も長々と書き進めることにすっかり慣れてしまって、それを避けるにはどうしたら良いのか、分からなくなっているほどなのだよ。なのに、さらに長さを増さなくてはいけない。冒頭で触れてあった点をはっきりさせるためなのだが、つまり、このハーロー嬢の逃亡の他にも、嘆き悲しむべき期待外れな出来事がもう一つあるということだ。

で、それはどんなことだと思うかな。何のことはない、老貴族は、あの頑健な体質が呪わしいわけだが（というのも、あの病が手を貸してくれそうだったのだよ）、火と硫黄、そして、訳も分からないものを用いて、胃を取り巻く外堀の傾斜面からどうにかこうにか痛風を撤退させたのだよ。卿の心臓を守っている要塞に襲いかかろうと、痛風がありったけの力を結集していたちょうどその時のことだ。要するに、前述のものが、悪臭弾や手榴弾や豆鉄砲の力だけで、行動の緩慢な先発隊をすっかり胴体から末端部へと追いやってしまったのだ。そして、痛風は末端部に留まって、足の親指をつついたり齧ったりしているというわけだよ。俺としては、病と病に罹った者の両方が、きれいさっぱりこの世に別れを告げてくれるものと期待していたというのにな。

しかし、以前にはアヘンチンキや濡れた布地のことを貴公に書き送ることも出来たというのに、それでいて、頭の中だけでではなく、実際にその事態に入り込んでみると、年収八千ポンドが指の間からこぼれて行くのをそのままにしているような俺だから［俺も執事たちに質問をしたり、連中が借地契約負担金だの更新料だの、その類いのことを口にするのに耳を傾けたりし始めていたのだ］、悔しい思いをして当然なわけだよ。

貴公には想像出来ないことだな。召使たちの、そして、従姉妹たちまでもがそうなのだが、俺を見る目付きが昨日から、これまでに比べるとひどく違っているのだ。いずれの者がお辞儀をする場合にも、頭を下げるにしても腰を落とすにしても、それが以前の半分の深さにも及ばないのだ。また、召使から「閣下」だの「殿様」だのと呼ばれる回数は、ここ数時間に比べ、その四分の一にもならないし、従姉妹たちの場合も、「サー」「サー」と敬称を使ったり、「宜しければ、ラヴレースさん」などと勿体ぶったりする代わりに、いつもの馴々しい言いまわしに戻って、再び「ねえ、ボビー」なのだよ。そして今では、「最高の叔父」とやらが回復したことについて、俺に向かって祝いの言葉を述べるような厚かましい真似を連中はしてみせるのだ。その間、俺としては、連中と同じくらい喜んでいるような顔をしなければならないわけだが、腰を下ろして目がつぶれるほど泣きわめいても構わない気持ちなのだよ。それが俺の役に立つというのであればな。

胸の内では喪服の注文を済ませてあったのだよ。ある外国人使節の例に倣ってのことなのだが、正直者のホワイト・ケネットが語るところでは（一五）、チャールズ二世が亡くなる前に、否、最後の病にも罹からないうちに、ブラックウェルホール（一六）では、この使節のお陰で喪服の類がほぼ払底してしまったということだ。これは、歴史家がそんなふうに匂わせているのだが、あの君主には毒が盛られることになっていて、大使はその秘密に通じ

ていた、ということを示すものだというのだな。だが、愚かなことに俺は、このヒントを生かすことが出来なかったのだよ。歴史に目を通したところで、そこに見られる手本から利益を引き出すことが出来ないようでは、何のために歴史を読むのかということだな。

だが、ジャックよ、「悪いことは続きがちなもの」という老いぼれ貴族のご意見の正しさが、こうして証明されたということだよ。そんなところだな、俺の結論は。

二重に悔しい思いに苛まれる貴公の友

ラヴレース

手紙　二十七

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

六月二十八日　水曜日　夜

あゝ、私の一番大切なハウさん。

もう一度、逃げ出しました。でも、あゝ、私は、私の一番大切なところは、逃げおおせなかったのです。あゝ、貴女の哀れなクラリッサ・ハーロー　…　貴女も私のことを嫌いになってしまわれるのではと、心配しております。でも、すべてをお知りになれば、嫌ったりなさらないはずですわ。

でも、私自身のことは、失ってしまいました自分のことにつきましては、これくらいにいたしましょう。朝、起きて来られると祝福を受けられ、また、お授けにもなるという貴女　…　ご自分のことを顧みて、満ち足りたお気持ちで眠りに就き、途切れのない、怯えに妨げられることもない眠りの中で、聖者や天使と言葉を交わされる貴女　…　貴女よりも聖者が清らかなのは、ただ、肉の煩悩を免れている分だけという、そんな貴女のことを話題にさせていただきましょう。長いことずっと、私の唯一の喜びの種であったわけですからね。そして、ひどく離れたところからではありますが、大好きなアナ・ハウさんへの敬愛の念を温めさせていただきたいのです。また、そのお姿を、クラリッサ・ハーローのかつての姿に思いを馳せますためのよすがとさせていただきたいのです。

❁　❁

御免なさい。あゝ、とりとめのないことを、お許しくださいね。心の安らぎは損なわれてしまいました。頭の具合が変なのです。以前と同じように、今も文通をしてくださることになりましても、一体、どのような気違いじみたたわごとを読んでいただかねばならないことになるのでしょうか。

あゝ、私の最良の、一番大切な、そして、たった一人のお友達　…　何という話をご披露しなくてはいけないのでしょうね。それでも、やはり自分自身のことなのです。この汚らわしくて忌まわしい自分の話なのです。出来ることでしたら、振り払ってしまいたい気持ちです。また、そうしていけないことなどあるでしょうか。私といたしましては、一人の破廉恥漢を別にいたしますと、これほどに憎しみを覚えるものは他にないと考えているわけですからね。そこで、一瞬だけのことですが（それ以上は無理だろうと思います）、自

分というものを念頭から追い払うことにいたします。もっと愛しいものについてお尋ねするためです。大好きなアナ・ハウさんのことについてですが、そのお心は、純白の衣にすっぽりと包まれ、魅力に溢れ、光り輝いておりますからね。でも、何を申し上げたら良いのでしょう …

❁　❁

さて、大好きなお友達、読み返して見ますと、ひどく取り乱した心が私の震えるペンに指図を与えておりますのをお示しするためということでもなければ、お届けする気にはなれません、この熱に浮かされたような言葉の後ではございますが、ご機嫌はいかがでしょうか。お加減がとても悪かったご様子ですね。回復なさったことをお聞かせいただきたいのです。お母様がお元気なこと、是非ともお聞かせ願いたいと思います。それも早急にです。この慰めは、確かに私次第なのでしょうね。と申しますのも、人生は悪くても市松模様なのだといたしますと、私にも今度は少しばかり白いほうが訪れるはずだからです。とてもとても長い間、私は黒ばかりを、のっぺらぼうに続く陰鬱な黒ばかりを眺めてまいりましたからね。

❁　❁

この途方もない支離滅裂さは、一体何のためなのでしょう。貴女はどのように過ごしておられたのか、そして、今はお元気なのか、ただ、その点につきまして一言お知らせくださるようお願いするためなのです。宛名は〈コヴェントガーデン、キングストリート、手袋屋スミス氏気付、レーチェル・クラーク夫人〉としていただきます。これで（私の住いのことは、他のどなたにも秘密になっておりますが）**貴女の不幸な**友の手に届くこととなっております。 … いいえ、そんな言葉では足りません …

貴女の惨めな友の手にです。

クラリッサ・ハーロー

手紙　二十八

ハウ夫人からクラリッサ・ハーロー嬢へ

［前の手紙の指示どおりに宛名書きされたもの］

六月三十日　金曜日

クラリッサ・ハーロー様

私からの便りを受け取り、驚かれることでしょうね。大変難儀しておられるご様子、お気の毒に思います。貴女のように末頼もしいお嬢さんでしたのにね。でも、両親に背きますとどのようなことになるのか、これでお分かりですね。

私といたしましては、貴女のことも哀れとは思いますが、でも、お気の毒なお父様お母様のほうにはるかに同情申し上げております。あれほどの教育をお授けになりましたのにね。貴女もあんなに進歩なさいましたし、貴女のことをご両親はあのように喜んでおられ

たのです。なのに、すべてがこんなことになろうとは　…

でも、お願いいたしますね、お嬢さん。私のナンシーには貴女の轍を、つまり、不服従の罪のことですけれど、踏ませないでほしいのです。このような軽率な行動に走った方とは文通をしないよう、あの娘には何度も何度も命じてまいりました。評判を上げることにならないのは確かですからね。私がそのようにあの娘に命じましたことは、貴女もご存じだったのです。なのに、貴女たちは文通を続けておりますから、私にしてみますと、本当に腹立たしい話なのです。そのことでは、あの娘が以前にも増して、とても意固地になっているものですからね。「朱に交われば　…　」ということですね、お嬢さん。残りの言葉についてはご存じでしょう。

この世界では、自分たちだけで不幸を背負うというわけにはまいりません。その人たちの思慮分別のお陰で過ちを避けることが出来たという、そんな身内や知り合いの方々をも巻き込まずにはおかないものなのです。まるで、その人たちが自分の考えで飛び込んだのとほぼ同じくらいの大きな不幸にですよ。ですから、私の娘もいつも涙に暮れ、悲しみに浸っているのです。そして、実際、自分の幸福を後回しにしております。貴女が不仕合わせだからですわ。

もしも、自分から破滅を求めている人たちが、その我が儘な行動で自分たちだけ辛い思いをするのでしたら、それはそれで結構でしょう。でも、あゝ、お嬢さん、お嬢さん、知り合いが出来ますたびにその人たちを悲しませて来たような方に、果たしてどんな申し開きがあるというのでしょう。正直な話、女性のすべてが貴女のために辱めを受けているのです。すべての父親と母親から自分の娘への手本として推薦されておりましたのは、クラリッサ・ハーローさんを措いて他にはだれもいなかったのですからね。

長い手紙になっておりますが、ほんの二言か三言申し述べるつもりでした。私のナンシーへのお便りを禁じるためのものですわ。そしてこれは、貴女が道を踏み違えたからですし、また、気の毒に、あの娘の心を悲しませることになり、少しも貴女のためにはならないからなのです。ですから、もしもあの娘のことを好いていらっしゃるのでしたら、あの娘にはお便りをなさらないことです。貴女の悲しいお便りは、ナンシーが外出中ということもあり、私の手に届きました。あの娘には見せないことにいたします。仮に目を通しましても、あの娘には何の慰めにもなりませんし、それは、あの娘が楽しみの種となっております私にとりましても、同じことなのです。貴女もかつては、ご両親にとりましてそのとおりだったのでしょうけれどね。

それでも、今は貴女もご自分の間違いに十分気づいているご様子ですね。軽薄な娘さんたちというのは皆さん、手遅れになってから気づくものなのです。そして、その後、独り善がりの頑固さや強情さのせいですが、何という惨めな姿を晒さねばならなくなるのでしょうか。

余計なことまでお話ししてしまいそうですね。ただ、貴女の軽率さをお咎めするのが適切なことと考えるからなのです。だれであれ、注意深い親でしたらそうするのが義務なのですが、私にとりましてそれは、どなたにも増して相応しいことなのです。

貴女のことを不憫と思い、幸せを願っております

アナベラ・ハウ

これは特別な使いの者にお願いしてお届けいたします。バーネットまでしか用事のない人なのですが、もう一度筆をお執りになるには及ばないからです。書き物をするのがとてもお好きなことは存じておりますし、また、「不幸は人を愚痴っぽくする」ことも承知いたしておりますのでね。

手紙　二十九

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ夫人へ

七月一日　土曜日

ご迷惑とは存じますが、マダム、数行お目をお通しくださいますようお願い申し上げます。ただ、お咎めくださいましたことにお礼申し上げるためとは申せ、そのお咎めは、血を吐く思いをしております胸から、新たに数条の血を絞り出すこととなりました。

私の身の上話は陰鬱なものでございます。ご承知いただきました暁には、ご同情やまったく不利とも申せないご判断をきっといただけるような、そんな事情もいくつかは含まれているのです。でも、自分の失敗を悔い改め、その言い訳に骨折ったりせぬようにいたしますのが私の務めですし、また、私の務めのすべてとするつもりなのです。

それに、小母様の優しいお気持ちを苦しめようと考えているわけでもございません。もしも、苦しみを自分だけに止めておくわけに行かないのでしたら、苦しみを分かち合ってくださる人は出来るだけ少なくしようと思うのです。そして、実際、小母様のお手元に届きました手紙を認めました際にも、このような決意で筆を手にした次第なのです。しばらくお便りをいただいておりませんハウさんは、そのように伺っていたのですが、ご病気だったのかどうか、そして、もしもそうなら、今はいかがお過ごしなのか、それを知りたかっただけなのです。それも、限りない愛情ゆえのことでありますが、また、大変特別な理由があってのことでもございます。でも、私の身に降り懸かりました被害は最近のことですし、その苦しみが並外れて大きかったものですから、手紙の中にどうしても〈自分〉が押し入ってしまったのです。困った時には、人間の心は同情や慰めを求めまして、どなたであれ、関心を持っていてくださるように思われるとか、関心を持っていただけたらと願っておりますような人の方を向いてしまいがちなものなのです。あるいは、小母様ご自身のお言葉を借りまして、自分のことをもっと適切に、そして、もっと簡潔に表現いたしますと、「不幸は人を愚痴っぽくする」ということなのです。それに、苦しんでおります者が愚痴をこぼして構いませんのが、お友達に向かってのことではないのでしたら、どなたに向かってのことになるのでしょうか。

私の手紙が届きました時、ハウさんは外出中とのことでしたから、回復なさったものと考え、喜んでおります。ただ、ご病気だったのかどうかをお知らせいただけますと、私もいくらか満足出来そうに思うのです。小母様からさらに一言賜りますのは、それは身に余るご厚意と申せましょう。でも、その問いにイエスかノーのお返事をしてくださる召使の人をだれか差し向けてくださいますなら、この先、私のほうからご迷惑をお掛けするようなことはないものと存じます。

それでも、次の点ははっきりと申し上げておかねばなりません。つまり、私のハウさん

との友情こそは、私がこの世で手にする、あるいは、手にすることを期待しております慰めのすべてであったということ。また、あの方からの一行のお言葉は、気力も失せております私の心にとりましては、強心剤となっていただろうということです。ですから、最も敬愛いたしておりますマダム、お言葉に従いますのが私にはどれほど気の進まないことなのか、ご判断いただきたいのです。でも、従うべく努力する所存です。もっとも、ハウさんと私との間で交わされましたものすべての性質からいたしまして、また、あの方の確固とした美徳の点からいたしましても、一、二通の手紙のやり取りをお許しいただきましても、「朱に交わる」ことであの方が染まってしまうことは有り得ないと、私は考えたことでしょう。でも、この点をお頼みはいたしません。私のなすべきことといたしましては、私の気持ちがすでに十分挫かれているのでなければ、本当に気持ちを挫いていただき、その上で、憐れみを垂れてくださいますよう、神様に（私の落ち度に対しましては裁きを下してくださいましたが、ご恩寵はまだ撤回なさってはおられないものと期待いたしておりますので）お頼みする以外には何もないと考えるからでございます。

幸薄き

クラリッサ・ハーロー

お優しい小母様、お願いをしなければならないことが二つございます。一つは、私から便りがありましたことを、私の身内には一切お知らせいただきたくないということです。もう一つは、私の消息はどこで聞くことが出来るのか、あるいは、宛先はどこにしたら良いのかという点につきましては、この世のどなたにも明かしていただきたくはないということです。これは言葉では表せないほどの影響を私に及ぼす事柄なのです。要するに、さらなる災難からこの身を守ることが出来るのかどうか、それは懸かってその点にあるということなのです。

手紙　三十

クラリッサ・ハーロー嬢からハンナ・バートンへ

六月二十九日　木曜日

私の感心なハンナへ

あなたが私のためのお勤めから解雇され（私の意に反したことで、とても心が痛みました）、あなたのでしゃばりな同輩があてがわれましてからは、妙なことがこの身に降り懸かったのです。でも、そのことはもうすべて忘れ去られねばならないのです。

いかがお暮らしでしょう、ハンナさん。ご病気は回復いたしましたか。回復なさったものといたしまして、私のところへ来てくださるお気持ちはありますか。あるいは、来ていただいても、不都合はございませんか。

大変不幸な思いをしておりますし、見知らぬ人ばかりの中におりますので、あなたが傍にいてくれますと嬉しいのです。あなたの忠実さや愛着心につきましては、私の気持ちに適うような例がたくさんございましたからね。

生きております間は、あるいは、死ぬことになりましても、あなたにとって骨折り甲斐

があるよう、私は努力するつもりですよ、ハンナさん。
私の願いどおり、もしも回復しているのでしたら、そして、良いお仕事に就いているのでしたら、あなたがお休みを取るのをそちらの方には我慢していただき、一ヶ月くらいの間、だれかにあなたの代わりを勤めてもらうことも出来ましょう。その頃までには、私のほうでも人が見つかっているでしょうから、あなたもお仕事に戻って構わないわけです。
私のこの希望につきましては、来てくださるくださらないに関わらず、私の身内のだれにも知らせぬよう願います。
私はコヴェントガーデンのキングストリートにございます、靴下と手袋を扱っておりますお店の、スミス様のところにお世話になっております。
私への宛名はレーチェル・クラークとしていただきます。
どうぞ、ハンナさん、お出来になるようでしたら、あなたの哀れな若い女主人のところへいらしてほしいのです。いつもあなたのことは高く買っておりましたし、また、来てくださるくださらないに拘らず、これからもそうするつもりなのですからね。
あなたの宛先は存じませんので、これはセントオールバンズにおられるあなたのお母様のところへ送ります。一行でもお返事をくださいね。どのようなことは当てにして構わないのか、それを知るためです。それに、幸せでした頃に、この手から習い覚えてくれました、あの美しい筆跡を忘れてはいないことを確かめるためなのです。

貴女の真の友
クラリッサ・ハーロー

手紙　三十一
ハンナ・バートンより［返事として］

七月三日　月曜日
尊けい申し上げますマダム
書き方を忘れてはおりませんし、それに、ご親切にも、大好きなお嬢さま、お嬢さまがまなばせてくださいましたことは、何であれ忘れはいたしません。ごふこうのことは、一番大切なお嬢さま、とっても悲しく思います。あまりに悲しいものですから、何をしたら良いのか分からずにいるほどです。おそばにまいることが出来るのでしたら、こころからうれしく思います。でも、しょうじきに申しまして、ここ母の家で、自分のへやから出ることも出来ずにいるのです。しかたなくおつとめを離れることになりましてからはずっとルーマチのため、体の自由がすっかりきかなくなっているのです。一番大切な、一番お優しい、一番ごりっぱなお嬢さま、そんなにもひどい仕打ちに会われた貴女さまのため、昼も夜もお祈りすることにいたします。おそばにうかがい、この身をささげておつかえするわけにまいりませんこと、大変残念に思いますが、わたしにその力があるのでしたら、喜んでそうしたいものと、いつもこころでは願っているのです。
おおせに従いますいちずに忠実なしもべ
ハンナ・バートン

手紙　三十二

Cf. ハーロー嬢からジュディス・ノートン夫人へ

六月二十九日　木曜日

親愛なるノートン夫人へ

ずいぶん長いこと無沙汰をいたしました末に（でも、愛情とか義務心とか、いずれかが欠けていたためではございません）言葉をお掛けいたしますが、その主な目的と申しますのは、私のほうで承知しておくのが当然と思われます二、三の点につきまして、納得の行くように貴女からご説明をいただきたいということなのです。

耳にしておりますところでは、父と家族の全員が今日、いつものとおり伯父の屋敷に集まる予定とのことなのです。是非ともお教えいただきたいのですが、皆はあちらに集まったのかどうかということです。また、この年中行事に際しまして、皆は楽しんだのかということ、さらには、シングルトン船長とソームズさんが同行するという兄の旅行、あるいは、旅行計画について何か耳にしてはおられないかということです。

奇妙な出来事がこの身に降り懸かったのです、あゝ、立派で、母親にも似た私の大切なお友達 … 本当に奇妙な出来事なのです。私にとりまして、ラヴレースさんは非常に残忍で、恩知らずな人であることが判明いたしました。でも、有難いことに、私はあの人のところを逃げ出したのです。まったく見ず知らずの人たちに囲まれておりますので（ただし、立派な人たちだと思います）、私の傍に来てくれるよう、ハンナ・バートンに一筆認めておきました。あの感心な娘が貴女と顔を合わせるようなことがございましたら、私のところへ来るように、どうか勧めてやっていただきたいのです。私がいつも呼び寄せたがっておりましたことは、あの娘も承知しております。ただ、もっと幸せな境遇になることを私は願っていたのです。

私から便りのありましたこと、身内のだれにもお話しになりませぬよう願います。

ハーロー邸を後にいたしました際、父が私に垂れましたあの苛酷な呪のことですが、私のほうから書面をもって嘆願するといたしまして、どうでしょう、取り下げてくださるよう、父は説得に応じてくれるでしょうか。それ以外の好意を父に期待するわけにはまいりません。でも、あの呪は、この世での見通しに関するかぎり、言葉どおりに果たされたのですから、すでに十分な働きをしたものと考えてもらいたいように思います。それに、私の心は大層弱っているのです。とても弱くなっております。でも、父自身のために … どう申したら宜しいのでしょうか。本当の話、この悲しい話題につきましては、自分の気持ちをどう表すべきなのか、ほとんど分かり兼ねる有り様なのです。でも、呪いを解いていただくと、私には心の安らぎになることでしょう。

忠実な貴女のお手を煩わせまして、その必要を満たして上げる習わしとなっておりました人々のことは、いつも〈私の貧者たち〉と呼んでまいりましたが、ここしばらく私がおりませんので、あの人たちも困っているように思うのです。でも、あゝ、今は私自身が貧しくなっているのです。そのためにこそ自分はこの世に生を享けたのだと考え、かつては喜びを覚えておりました慈善の行いですが、神様が授けてくださいましたこのような性向を備えながら、それを自分の力の及ばないものにしてしまいました点は、私の過ちを一層悪化させ、また、無念な思いを募らせますものの中でも、一番小さなものではございませ

ん。自分自身と世間の両方に役立てるよう、神様が私たちに委ねてくださいました才能ですのに、あゝ、大好きなノートン夫人、自らの軽率な振舞いによりまして、それを自分自身にとりましても、また、世間に対しましても、無益なものにしてしまいますのは悲しい話でございます。

でも、こんな思いも今は手遅れとなってしまいましたし、おそらく、自分一人の胸に納めておくべきだったのかもしれません。それでも、貴女は今なお私を愛していてくださるのだと、そんな望みを抱かせていただきたいのです。どうか、そのとおりなのだという望みを抱かせていただきたいのです。そうしてくださいますなら、揺籠の頃から私のために重ねていただきました、思いやりに溢れ、真に母親らしいお骨折りに対しまして、不幸ゆえに恩知らずとも映る態度を取ってしまいましたが、いかに不幸の身とは申せ、私のことを憎んではおられない、徳の高いお方が一人いらっしゃるのだという、そんな思いを私は温めることになりましょう。

不運なる
クラリッサ・ハーロー

乳兄弟にどうぞよろしくお伝え願います。変わることなく、子の務めを果たし、優しくしてくださっているものと思います。

宛名は、コヴェントガーデン、キングストリートのスミス氏気付、レーチェル・クラークとしてください。でも、宛先は絶対に秘密にしていただきます。

手紙　三十三
ノートン夫人より［返事として］

七月一日　土曜日

お手紙を拝読いたしましたが、大好きなお嬢様、胸の張り裂ける思いでおります。苦しんでおられる事柄のすべてを、どうしてお知らせいただけないのでしょう。でも、おっしゃられたことだけでも十分ですわね。

息子はとても良くしてくれております。二、三時間前、具合を悪くしまして熱が出たのです。でも、親切な親方が快く休暇を出してくれそうですから、仕事熱心な手を少し休めてくれますなら、無事に熱も下がることでしょう。あの子は、謹んで貴女様への敬意を表しております。また、悲しいお手紙を読み聞かされますと、涙をこぼしておりました。

ご家族の方々が伯父様のお屋敷にお集まりになるとのお話ですが、貴女は間違った情報を伝えられておられるのです。皆さん、あちらへ向かわれるおつもりはございませんでした。また、お誕生日のお祝いも一切なかったのです。実際、貴女がお屋敷を出られましたあの日からは、教会へのお参りを除きますと（それも、たったの三回ですが）、皆さん外出なさっておられないのです。厄日ということになりますね。皆さんにとりましても、貴女を存じ上げている者すべてにとりましてもね。私にとりましては、間違いもございませんが、どなたにも増して特段にそういうことになりましょう。貴女のことが辛くて、私の心はますます血の出る思いをいたしております。

貴女が触れておられますような、お兄様、シングルトン船長、そして、ソームズ様のご旅行につきましては、一言もお聞きしておりません。確かに、お兄様が北のほうのご領地へ向けて発たれるようなお話はございました。けれども、近頃はそのことも耳にいたしておりません。

貴女からのお手紙は、一切受け取っていただけないように思います。そんなふうに申し上げますのは、大好きなお嬢様、私には心の痛むことでございます。どのような災いが貴女に降り懸かりましても、皆さんがその知らせを予期なさらないようなものは、何一つなかったことでしょう。それほどまでに、あの悪人に対する皆さんの反感は強いということですし、あの男の人柄もそれほど邪悪なものだということです。

皆さんの容赦のありませんところは、酷いことと思わずにはおられませんが、自分を基準にして他人を判断してはいけないのです。それでも、一言付け加えますが、貴女と同じような、あるいは、不遜なこととは存じながら申しますが、私と同じような穏やかな気性の人々を相手になさっていたのでしたら、皆さんにせよ貴女にせよ、このような災いが降り懸かることは決してなかったということです。貴女の美徳につきましては、そして、美徳を愛しておられることにつきましては、貴女がまだ幼かった頃から存じ上げておりますし、神のご恩寵により、それがいつも貴女にとりまして盾となりますことも疑ってはおりません。でも、貴女が追い詰められることはなかったのですし、また、貴女を追い詰める必要もなかったのです。そんなにも思いやりに溢れ、そんなにも気高く、そんなにも分別に富んでいらっしゃるのですから …… でも、貴女の気立ての好さを愛しておりますだけに、私の苦しみは募るばかりなのです。このようなことを思い出されますと、きっと貴女の苦しみも深まるのでしょうけれど ……

お逃げになられたとのことですが、大好きなお嬢様、〈無事めでたく〉のことであってほしいと思います。つまり、操を守ってということでございます。そうではないのだといたしますと、貴女の悲しみの深さはいかばかりのものでしょう。ただ、お手紙からも、最悪の事態は懸念いたしております。

ハーロー邸へは滅多に伺いません。貴女が去られましてから、お屋敷は以前のお屋敷ではないのです。それに、皆さん本当に無情なのです。また、この胸で、そして、この心でお育ていたしました愛しいお子さんにつきまして、厳しいことを申し上げることなど私には出来ませんので、私の足が遠のいておりましても、皆さんのほうでは、気を悪くなさるようなことはないのです。

貴女のハンナは、少し前ですが、病のためお仕事を離れました。今でもセントオールバンズの母親のところにおりますので、病気のままなのだと思います。もしそうだといたしますと、貴女は見知らぬ人たちに囲まれておりますし、それに、こちらへいらっしゃるようお勧めすることは、今のところ出来ませんので、私のほうでお傍に出向くのが務めと考えております(どのように受け止められようと構いません)。私のトミーの容体が許しますかぎり早めにいたしますが、それも間もなくのことと思うのです。

私には蓄えが少しばかりございます。お言葉では、ご自身が貧しくなってしまわれたとのことでしたね。裕福になる資格を備え、また、裕福さに慣れておられた方からのそのようなお言葉は、何と悲しいことでございましょう。愛しいお嬢様、私の蓄えを自由にお使いくださると有難いのです。その大部分は貴女ご自身からの賜り物でございます。本来の

持ち主にお返しいたしますことを誇らしく感じる次第です。

貴女の貧者たちは貴女のために神の恵みを求め、頻繁に祈っております。最後にお預かりいたしました慈善のための資金は、私のほうでやり繰りをいたしましたし、皆さん健康に恵まれ、たえず働き口もございましたので、持ち堪えております。また、その時が訪れますのを私はたえず祈っておりますが、もっと幸せな時が戻ってまいりますまで、持ち堪えることでしょう。

お願いでございます、大好きなお嬢様。貴女にそっくりの立派な人たちが、身の不幸に耐えようとして宗教から引き出しております、あの助けのすべてをご自分に用いていただきたいということです。貴女の災難がどのようなものだといたしましても、意図されたところに罪はなかったものと確信いたします。ですから、悲観なさってはいけません。耐えることが出来るもの、従いまして、耐えなければいけないものということですが、それ以上の苦しみを強いられるような人間は一人としていないのです。

神の摂理が働くその道筋は、私たちには分からないのです。また、哀れな被造物に向かって施されます際の、一見して無情とも思われます神意が、いかなる賢明な目的に資するものなのか、それも私たちには測り兼ねることなのです。

このようなことを申し上げますのに、私自身よりももっと大きな理由をお持ちの方などあまりいらっしゃらないのです。それに、私たちは災難に見舞われますと、教訓よりも実例に慰めを求めがちになりますので、お許しを得まして、私自身に降り懸かりました運命のことを思い出していただこうと思うのです。私以上に大きな苦難を振り当てられました人間もいないでしょうからね。

母親からの保護が最も必要な年頃に、素晴らしい母を失いましたことは申すに及びませんし、聖職に就く者の誇りでもありました（そして、自分の筆記者、書記としての資格を私に授けてくれたのですが）、愛する父の死のこともございます。家族の暮しを楽にしてくれるはずでした昇任を目の前にしてのことだったのですが、この死は、私を身寄りもなしに広い世間へ投げ出すことになりましたし、とても無頓着な、また、それよりもはるかに不都合なことですが、非常に不親切な夫の元へと投げ出すこととなったのです。気の毒な人でした。でも、ダラダラとした病で、有難いことに、亡くなるまでにはたっぷり時間がございましたから、いろいろな機会を棒に振ってしまいましたことや、自分の軽薄な考え方につきまして、あの人にも後悔をする暇はあったのです。そして、そのことを私はいつも悦ばしく思っておりました。もっとも、お金の掛かるあの人の病のため、私は一層貧しくなっておりましたし、あの人が亡くなる時には、トミーのお産ももうすぐという状態だったのです。

ところが、先立たれるにいたしましても、私にとりまして最も不幸なものと考えておりましたこの状況そのものが（人間の思慮分別などというものは、そんなにも先見の明に欠けているのです）、貴女のお母様のおめがねに適う幸運な手段となったのです。私の人柄を顧慮くださり、また、非常に貧しい暮らし向きに同情なさったお母様は、私が良心を守って哀れな息子を手放そうとはしないこともございまして、二、三日おいて誕生いたしました貴女と息子とを一緒に育てますのをお許しくださったのです。そして、それからというもの、神様の思し召しによりまして、ささやかな幸せに事欠くこともなく、満ち足りた暮しを送ってまいりました。

また、哀れな夫が亡くなりました日以降、ご両親から、貴女にはソームズさんと一緒になっていただきたく、お二人はどれほど固く心を決めておられるのかというお話がございました日まで、本当に大きな悲しみとはどのようなものなのか、それを知ることもなく過ごしてまいりました。そしてあの時、貴女があの方のことを嫌悪しておられることだけでなく、あの方が貴女にはどんなに相応しくないのかということも知らされたのです。と申しますのも、あの時には、そのように思いやり溢れるお心をお持ちの方に無理強いを加えますことの結果が心配になり始めていたからでございます。それに、あの時までは、容姿に心を引きつけるものがございますし、態度や話し振りにもあか抜けたところがございますが、ラヴレースさんに不安を抱くことは一度もなかったからなのです。あの人がご自分の改心につきまして、貴女も納得なさるほどの立派な根拠をお示しにならないかぎり、そして、お身内の方々もその点につきまして、貴女と同じくらいに得心なさるまでは、貴女は決してあの人と結婚なさらないものと確信していたからでございます。でも、お兄様とラヴレースさんとの間に生じましたあの不幸な仲違いと、貴女を無理やりソームズさんに押しつけようとなさって、皆さんがあのように手を結ばれたことが、あの災いの一切をもたらし、貴女と皆さんは非常に大きな代価を払うこととなりましたし、哀れな私も心の平安を失うこととなったのです。あゝ、この恩知らずで、二重に罪を犯しております人が責めを負わずに済ませられるようなことは、果たしてあるのでしょうか。

それでも、貴女はご存じないのです。今なお神様が貴女のために用意しておられるのはどのようなものなのか、ということをです。ただ、このような重大事につきましてこの世にあります間ずっと、貴女は見せしめとして、たった一度の過ちのことで罰せられることになるといたしましても、この世での生活というものは、試練の状態に他ならないのだという点をお考えいただけたらと思うのです。そして、その中で身を清めることが出来ますならば、それだけ一層幸福になるのだということをです。また、この世で忍耐心と諦めの心をもって神のご意向に従いますなら、あの世では一層大きな報いに与るのだということも、私は疑っておりません。

お分かりですね、大好きなクレアリーお嬢様。貴女がお取りになった方法は賢明さに欠けるものであったと、私は躊躇なく申し上げているのです。貴女の場合には、他のどんなお嬢さんよりも申し訳の立たないところがあったのです。貴女が抜きんでた才能に恵まれておられるからだけではなく、貴女とあの人とでは、お人柄に正反対のところがあるからでもございます。ですから、お父様のお屋敷を捨てたくなるようなことが仮にあったといたしましても、あの人と一緒である必要はなかったのです。また、実際の話、私といたしましては偏りのない愛情を例証するためのことに他ならないのですが、でなければ、このようなお便りをする必要もなかったわけです(ア)。

これまで、ただ一行のお便りもお寄せいただけませんでした点への懸念を口にいたしますのは、このようなことを申しました後では思いやりがないように見えるでしょうし、今

(ア) ノートン夫人が判断材料として得ていたものは、ただ、家族からの説明および非難の言葉だけであったため、クラリッサがラヴレースとは家を出ない覚悟でいたことを夫人は知らないのである。また、家に留まった場合にはソームズ氏との結婚を逃れる術がない点を懸念した際に、だれであれ、ラヴレース以外の者の保護の手を確保しようと、鋭意努めていた点についても承知していないのである。

この時点では、おそらく、時宜を得ない振舞いと映ることでしょうね。でも、音沙汰がございませんでしたことに関しまして、ご自身には説明が付くというのでしたら、私といたしましては納得すべきなのでしょうね。と申しますのも、私のことを大事に思っていてくださるものと確信しているからでございます。私が貴女のことを慈しみ、また、尊敬させていただいているのと同じようにです。いつまでもそのつもりでおりますし、また、貴女が不幸な目に遭われましただけに、一層その気持ちを募らせているのです。

貴女の悲運を嘆いておりますその最中にも、私には慰めが一つあるようにも思われるのです。つまり、課されるかもしれません苦難のゆえに一層輝きを増す力をそんなにも備えておられる若い方を、私はだれ一人存じ上げないということです。でも、それは貴女の不幸を残念に思います私の気持ちを、結局は強めることになる慰めなのです。何故かと申しますと、貴女は幸運を担い、それゆえに周りの人々を一人残らず一層幸福にすることが十分お出来になるような、そんなお心に恵まれておられるからなのです。あの男にこそ災いあれ、ということですね。あゝ、この忌まわしい破廉恥漢は　…　でも、もっと詳しいことが分かりますまでは、慎むことにいたします。

気の滅入るようなお手紙が暗示しております点すべてをよくよく考えまして、また、お気持ちの優しさやご容姿の愛らしさ、そして、お若いことからいたしまして、さらなる不幸や不都合に追い込まれてしまわれるようなこともありそうに思われますので、お傍に伺うお許しを請わずには、それも、本当に真剣そのものの態度でお願いをせずには、結びの言葉を筆にするわけにまいらないのです。もしも、貴女のお役に立つとか、慰めになるとかといったことがこの私に出来るのでしたら、私につきましての、あるいは、今一人の愛する子供の病につきましてのご高配から、この申し出をお断りになるようなことのなきようお願いする次第です。ほんの二日か三日で良いのです、大好きなお嬢様。息子の病状が悪化し、その二日か三日が過ぎました頃に再び戻らなくてはいけないことになるといたしましても、お傍に伺いますことを是非ともお許しいただきとうございます。貴女の貧者たちへのお施し、それに、この私へ賜りましたもののうち、手元に残っております小額のお金につきましても請求くださいますよう、同じく重ねてお願いを申し上げます。

変わることなき親愛の情と誠意とを添えまして、貴女のしもべ

ジュディス・ノートン

手紙　三十四

Cf. ハーロー嬢からベティ・ローランス夫人へ

六月二十九日　木曜日

奥様へ

クラリッサ・ハーローのことは多々お聞き及びに違いないとは申せ、親しくお会いいただく栄誉にも浴しておりませぬ者から、このように言葉をお掛けいたします無礼をお許しいただきとう存じます。以下の質問事項へのご返答を奥様ご自身から賜わることが出来ますならと（ご都合が宜しければ、次の便にてお願いいたします）、ただそのことをお願い申し上げる次第です。

一．トムリンソン船長なる者からの情報として、奥様の執事スパリアーさんから報告のございました、挙式を想定されておりました婚礼につきまして、甥御さんのラヴレースさんにお祝いを述べられ、また、奥様とご一族の方々に結婚のことを知らせなかった点で、あの人が皆さんをなおざりにしているとお咎めになる内容ですが、私の覚書によりますと六月七日水曜日の日付となっております、そのようなお手紙はお出しになられたのでしょうか。

二．アルバマール通りに住んでおられるご親戚のリーソン様のところへご同行願うためですが、レディングで落ち合っていただくよう、モンタギュー嬢にお便りはなさいましたでしょうか。「例の訴訟のことで」とのお言葉であったと記憶しておりますが、奥様が上京を余儀なくされました際のことでございます。それから、十一日の日曜日の夜、アルバマール通りまで来ていただくよう、甥御さんにお頼みになられたでしょうか。

三．その際、奥様とモンタギュー嬢は本当に上京なさったのでしょうか。また、月曜日には、奥様ご自身の馬車は修理中との話でしたが、賃貸しの四頭立て馬車でハムステッドまで赴かれ、お訪ねになった相手の若い娘をロンドンへ連れて来られたでしょうか。

おそらく、奥様にはご賢察いただけるものと存じますが、このようなことをお尋ねいたしました理由は、奥様の甥御さんに当たりますラヴレースさんにとりましては、都合の好いものではございません。でも、お答えがどのようなものでありましても、あの人に害となりますことは一切ございませんし、私にとりましては何の利益にもならないことなのです。ただ、もっと立派な人のように受け止めて上げたいと、かつては思っておりましただけに、以前抱いておりました希望への忠義立ての意味で（どれほど裏切られたにいたしましても）、また、博愛の精神からいたしましても、その人物が、紳士としての資格には不可欠なあの誠実さに関しまして、すべての面で期待に添わないところがあると証明されますほどに、そんなにも放埒であっては困ると考えているだけのことでございます。

宛名につきましては（当面の間、宛先は秘密にしておりますので）、奥様、ラドゲートヒル、ベルサヴィッジ亭留置きとしていただきとうございます。

心よりの謹みをもちまして、奥様のしもべ

クラリッサ・ハーロー

手紙　三十五

ベティ・ローランス夫人からCl. ハーロー嬢へ

七月一日　土曜日

親愛なるマダム

お見受けいたしますに、貴女と甥のラヴレースの仲は、万事が順調というわけにも参らぬご様子ですね。貴女のような道徳心と美質を備えておられる淑女に対しまして、あの人が故意に卑劣な振舞いに及んだといたしますと、私にとりましては、また、あの人の身内全員にとりましても、大変悲しむべきことでございます。

私たちは、全員の衷心からの願いが寄せられておりました慶事に際しまして、貴女にお祝いを申し上げ、また、私たち自身も慶び合いたいものと、長いことその機会を待ち侘びていたのです。と申しますのも、あの人について私たちが温めております望みのすべてにいたしましても、あの人に対して持っておられる貴女の影響力を頼りとしているからなのです。かつてこれまで、女の人に敬慕の念を抱いた男性が一人でもいるとしますと、あの人がその男性ですし、貴女こそその女性なのですからね。

あの人が貴女のことを自分のものと呼べるようになっているのかどうか、あるいは、そのような栄誉をまもなく手にすることになりそうなのかどうか、あの人から聞いてはいないか、その点を問い合わせました私の手紙のうちの一通への返事として、モンタギュー嬢は、最後に届きましたお手紙で、次のように話しているのです。「奥様がそのように熱心になっておられます点に関しましては、従兄弟のラヴレースさんのことをどう理解したら良いものやら、私も分かり兼ねております。クラリッサ・ハーロー嬢とは実際に結ばれているのだとおっしゃることもありますし、別の折には、そうなっていないとすれば、それはあのお嬢様ご自身に落ち度があるからだ、などとおっしゃることもあるのです。あの方のことをお話しになる時には、愛情ばかりでなく、尊敬の念も籠もった口振りなのです。それなのに、お二人の間に誤解のあることを打ち明けておられるのです。ただ、あの方のほうにはまったく落ち度がないことも認めておられます。〈天使なのだよ。女性なんかではないのだ、彼女は。それに、彼女に相応しい男性など、この世にはいないのだよ〉とおっしゃっておられます」というのです。

これが、姪のモンタギューからの文面なのです。

親愛なるお嬢様、貴女としてはあの人を許すわけに行かないような、それほどの非道の仕打ちをあの人が加えたのではないことを、私は神に祈っているのです。すでに結婚なさったわけではなく、また、あの人と一緒になるのは断るとおっしゃるのでしたら、あの人がいつかは結婚をしてくれるとか、あるいは、私が願っておりますような人間になってくれるといった、そんな望みすべてを私は失ってしまうことになりましょう。M卿も望みをお捨てになるでしょうし、セアラ・サドレアー夫人とて同じでしょう。

そろそろご質問にお答えすることといたします。でも、正直な話、どのようなことを書いたら良いものか、分かり兼ねております。お二人の間の不幸な仲違いをさらに深めることになってはと恐れるからです。とは申しましても、このような若いお嬢様のご命令とあれば、何事につきましてもお応えしなければなりますまい。そこで、私の返答は以下のとおりということになります。

六月七日、あるいは、その前後には、あの人への手紙は一切出しておりません。

私にいたしましても執事にいたしましても、トムリンソン船長という人物は存じ上げておりません。

レディングで落ち合ってもらうためにも、また、ロンドンの親戚リーソンのところまで同行してもらいますためにも、依頼の手紙を姪に出したことはございません。

私の訴訟は、大抵の訴訟と同じく長期に及ぶものではございますが、それでも、今は極めて順調に運んでおりまして、私が上京する必要はないのです。

また、ここ六ヶ月間上京したことはございませんし、ハムステッドへも数年行ってお

りません。

それに、上京を促されますようなことも一切ないものと存じますが、ただ、お祝いのご挨拶にラヴレース夫人をお訪ねするのだけは別でして、そのためでしたら、それこそ喜々として馳せ参じることでしょう。そして、是非ともグレナムホールまでご同行を願いまして、少なくとも一ヶ月はご滞在いただけるものと考えております。

お尋ねの件がどのような理由からのことだといたしましても、親愛なるお嬢様、M卿のためにも、私のためにも、身も心も引っ括めまして、この軽薄な男のために、そして、私たち一族全員のために、この返答のせいでお二人の不和が深まり、その挙げ句、貴女があの人を拒むようなことにはなりませぬよう、何卒お願いいたします。これは、あの人がまだ貴女を自分のものと呼ぶ栄誉に浴していない場合の話ですが、貴女がご自分の姓で署名しておられるところからいたしまして、まだではないのかと懸念されるからなのです。

ここでひとつ提案がございますが、お二人の間の不和がどのようなものだといたしましても、私にその調停役を任せていただきたいのです。貴女のお申し立てをどなたの手に委ねられるにいたしましても、親愛なるお嬢様、私以上に貴女のお役に立とうとしております者は、この世にいないということでございます。

貴女を心から敬服いたしております謙虚なるしもべ

エリザベス・ローランス

手紙　三十六

クラリッサ・ハーロー嬢からホッジズ夫人へ

六月二十九日　エンフィールドにて

ホッジズ夫人へ

いわば必要に迫られまして、お手紙を差し上げる次第です。思い切って便りを出せます相手が身内には一人もいないからです。あるいは、たとえ便りをいたしましても、一行でも返信を期待出来そうな者はいないのです。質問にお答えいただくだけのことでして、質問は次のとおりです。

トムリンソン船長という人物をご存じかどうか、ということです。それと、ご存じの場合ですが、その人はジョン伯父様と大変親密な間柄なのかどうか、ということです。

その人の容姿につきましてご説明いたしますが、もしかして、そちらでは別の名で通っていることもあるかと考えるからです。ただ、そのようなことをなさる理由は私にも分かり兼ねます。

痩せた人で、やや背が高く、少しあばたがございます。顔色のほうはあまり良くありません。年の頃は五十、あるいは、五十を越えたくらいです。上を向くと、立派な顔付きをしておられます。真面目な人のようですし、また、世間に通じている人のようです。肩は少しすぼめ加減です。バークシャーの出です。奥様はオクスフォード出身で、子供が数人おります。最近、ノーサンプトンシャーからそちらのほうへ引っ越したのです。

お願いしなければならないのですが、ホッジズ夫人、お便りをいたしましたことは伯父

にも、また、身内のだれにも知らせないでいただきたいのです。
私の役に立つことが出来ると嬉しいのだがと、貴女はよく言っておられましたね。確かに、あれは私が順風満帆の頃のことでした。でも、多分、私が喜びますようなことをお断りになると、貴女ご自身が嫌な思いをなさるのではないでしょうか。
父、母、姉、それに、おそらく兄もでしょうが、それと、アントニー叔父様が、ジョン伯父様のところへ今日集まる予定と聞き及んでおります。皆に神様のご加護があらんことを、そして、幾久しくお誕生日を祝われますよう祈る次第です。貴女には、皆の健康状態につきまして、手短にお知らせいただきたいのです。
特別な理由がございますので、表書きはビショップスゲート通り、〈四羽の白鳥亭〉留置き、ドロシー・ソールコム夫人宛としていただきます。
この手紙の文面だけでは、名を伏せますことの、あるいは、ただ下のように記します以外に何の署名も添えませんことの、満足の行く理由とはならないといたしましても、私の筆跡であることは十分お分かりのことと存じます。

貴女の友より

手紙　三十七
ホッジズ夫人より［返事として］

七月一日　土曜日

マダム

お望みですから、お返じをいたします。そんな人のことはだんな様はぜんぜんご存じありません。まちがいありませんが、そんな人が私どものところへ見えたことは一度だってないはずです。それに、だんな様がお出かけなさることはほとんどございません。外へ出られるお気持ちがないのです。なぜだと思われます。あなた様が強情にしておられるものですから、みなさんお互いに顔を合わせるお気持ちになれないのです。だんな様のおたんじょう日があんなふうだったことは、これまで一度だってございません。だれ一人お見えになりませんでした。そして、これまではどんなだったかを思われて、だんな様からもれるのは、ただため息となげきの言葉ばかりでした。
もしかして、トムリンソン船長とかいう人をご存じではありませんかと、だんな様にたずねてみました。でも、何のためにおたずねするのかについては申しませんでした。だんな様の方では、いやいや、わしは知らんね、とおっしゃっておられました。
まさかこれは、トムリンソンという男によってくわだてられた、だんな様への悪いじょうだんとかペテンなどではないのでしょうね。お屋敷を出られてからは、マダム、よろしいですか、あなた様がどんな人間とのおつき合いを強いられておられたのか、だれにも分からないことですからね。お許し願います、マダム。でも、ロンドンはとても危険なところなのです。それに、みなさんが口にしておられるのを耳にしましたし、あなた様もこれで気づかれたものと思うのですが、あのラヴレース様は悪魔みたいな人なのです（目を向けますのにはもってこいの紳士だとしてもです）。
信じておりますが、マダム、どこのだれであれ、だんな様とおつき合いがあるような顔

をする人のせいでだんな様に害がおよぶようなことを、あなた様がしょうちの上でなさるはずはないと思います。でも、心配なもので、だんな様にお話しすべきでないかと、自分自身に問い掛けて見ました。でも、幸福ばかりではなく、不幸もあなた様のさだめならばの話でございますが、困っておられるあなた様をよろこばせて上げたい気持ちでおりますことをお見せしたかったのです。と申しますのも、私はそれ以外のふるまいにおよぶような人間では決してないからでございます。とりいそぎ、これにて失礼いたします。

あなた様のお仕合わせを祈って、あなた様のいたらぬしもべ

セアラ・ホッジズ

手紙　三十八

Cf. ハーロー嬢からベティ・ローランス夫人へ

七月三日　月曜日

奥様へ

奥様には重ね重ねのご迷惑ではございましょうが、御免蒙りましたままでおりますわけにもまいりません。ご親切なお手紙をいただき、本当に心の底から有難く、感謝申し上げる次第です。

白状いたさねばなりませんが、マダム、お家柄と同様に、徳の高さで世に知られましたご婦人方と縁続きとなります栄誉が、ラヴレースさんの口説きの言葉に耳をお貸しする動機といたしまして、最初は決して小さなものではなかったということです。それも、口説きが功を奏しました暁には、奥様の好意的なご意見に与れますよう、私の力で出来ますことはすべて行おうと心に決めておりましただけに、なおさらのことだったのです。

私にはもう一つ動機がございましたが、それだけでも、ご一族の皆様方からは手柄を認めていただけるはずでした。厚かましい動機でして（その後分かったことですが、罪深いほどに自惚れの強いものでした）、神のご意向に従いつつ、一人の男性を矯正して差し上げます、そのささやかな手段となることを私は望んだのです。その人も矯正を受けるに足るだけの分別は元来備えていらっしゃるのだと、私はそう考えたのです。あるいは、少なくとも、この思いやりの籠もった願いが実現するとかしないとかは別にいたしましても、意図されました恩恵を認めてくださるだけの感謝の念は持ち合わせていらっしゃるものと考えておりました。

でも、ラヴレースさんのことはとんでもないほどのめがね違いでした。自分にも言い聞かせておりますが、紳士を装っておられる人の中では、私のめがねがひどく狂ってしまいました、ただ一人の男性だろうと思います。溺れかけている人を救おうとしておりますうちに、偶発的にではなく故意に、また、はっきりとした目的があってのことだったのでしょうが、私はその人に引きずり込まれてしまったのです。そして、あの人といたしましては、ご自分が毒牙にかけました者たちの名簿に、名前を一つ付け加えるという栄誉を手にしたのですが、その名前と申しますのは、不遜とは存じますが、あの人自身のお名前を汚すようなことにはならないものだったのです。しかもこれは、マダム、分かりました暁には、人間の心に戦慄を覚えさせますような、そんな手段を用いてのことだったのです。

失礼も顧みず書面にてお尋ねいたしましたが、その質問への奥様のお答えで、私の目的はすべて満たされたのです。また、せっかくお申し出くださいました仲裁のお話をきっぱりとお断りいたします、その言い訳に必要となります以上には、あの厄介な人が奥様の目にさらに不快な姿に映りますことも私は望んでいないのです。

以下の点をご存じいただきました時には　…　つまり、

私を欺き、一緒に駆け落ちをするよう、いわば否応のない形で追い込みました上で、これは後ほど分かったことですが、ロンドンでも最もいかがわしいという、そんな家へ私を連れ込むような真似があの人には出来たのだという点　…

あの人が邪悪な試みに走るものですから、憤慨した私は、手段を見つけまして、あの人の元を抜け出し、ハムステッドへ逃れたという点　…

あの人は、そこにおりました私を見つけ出しますと（どのような方法を用いたのかは分かり兼ねます）、奥様とモンタギュー嬢の身代わりを演じる、豪華な衣装に身を固めました二人の女性を用意いたしましたが、この二人は、ロンドンで奥様のご親戚のリーソン様のところを訪ねてもらうということを口実に（その夜のうちにハムステッドへ戻る約束でしたが）私を騙し、例のいかがわしい家へと連れ戻したのです。そして、再びそこに囚われの身となりました上で、私はまず初めに意識を、そして、次には操を奪われてしまったという点をです。あの恥辱を、どうして私は他の人から隠そうとしたりいたしましょう。自分自身から隠し通すことのできない恥辱なのです。

私の破滅へ向けてのこの恐るべき過程の中で、故意の虚言や、繰り返し用いられました偽造の手紙（とりわけ、一通は奥様からのものですし、もう一通はモンタギュー嬢からのもの、三通目はM卿からのものでした）、さらには、数え切れないほどの偽証が、あの人の犯しました罪の中でも最も軽微なものではなかったのだということをご存じいただきました暁には、奥様は次のように判断なさることでしょう。つまり、このような縁組は今ではもう起こり得ないのだと、心の奥底からそのように申し上げることがもしも私に出来ないようでしたら、奥様や高貴なお妹様のようなお人柄のご婦人方と縁を結ぶに相応しい者としてくれます節操を、この私は一切持ち合わせていないのだ、とです。

私自身の責任をすべて免れようとしているのではございません。ただ、あの人のことに関しましては、我が身を責めなければならないような落ち度は一切ないのです。私が犯しました罪と申しますと、私の服従を求める権利を有しております者たちから禁じられておりましたのに、初めのうち、あの人と文通を続けた点でございます。そしてこれは、あの人の術中に陥るきっかけとなりました、あの秘密の面会を許すことで、一層申し開きの出来ないものとなってしまったのです。そして、この点で罰せられますことには納得しているのです。ようやくあの人の元から逃げおおせました点、また、あれほど邪悪な男性を夫として拒むことが出来ます点は感謝しておりますし、そうなるのだとかつては自分に言い聞かせていたわけですが（私は大変に自惚れ、大変に思い上がっていたのです）、皆さんの手本となるわけにはまいりませんので、せめて戒めにでもなることが出来れば嬉しいと思うからです。

私があの人に望みます不幸と申しますと、ただ、あの人が心を改めることだけでございます。そして、あの人の卑劣さの犠牲者といたしましては、私を最後にしてもらいたいということなのです。あの人の非情な術策によって天涯孤独の身に追いやられました哀れな

娘に対する邪悪な仕打ち、不当に加えられました邪悪な仕打ちが果たしてどのような結末を迎えるのか、そのことをあの人がご覧になる時、この望ましい願いは、おそらく、達成されることになるのでしょう。

奥様には、好意的な評価をいただきましたことをお礼申し上げ、また、この身に命が貸し与えられておりますかぎり、感謝の気持ちを忘れず、喜んでお仕えする所存でおりますことをお約束いたしまして、結びとさせていただきます。

ご恩義に与り感謝いたしております、奥様のしもべ

クラリッサ・ハーロー

手紙　三十九

クラリッサ・ハーロー嬢からノートン夫人へ

七月二日　日曜日　夕刻

血も流さんばかりの心の苦しみを、貴女は、私の大好きなノートン夫人、何と優しく和らげてくださるのでしょうか。きっと、貴女こそ私の実の母親なのでしょうね。何か説明の付かない間違いのために、私はある家族の子供とされてきたのに違いないのです。家族の人たちが最近そのペテンに気づいたか、あるいは、少なくとも疑いを抱き、憤慨のあまり、自分たちの心の中から私を追い出してしまったわけですが、そのようなことが分かれば、憤慨するのも無理のない話ということになりましょう。

私が実際に貴女の子供として生まれ落ち、貴女のささやかな財産を分かち合い、貴女がそんなにも楽しんでおられるその満ち足りた気持ちだけを受け継ぐ娘であったならと、本当にそう思うのです。その場合には、無理強いや卑劣な仕打ちには到底馴染まない私の素直な心を導いてくださる、真に寛大な精神の満ち主に恵まれることになったはずです。そして、起こってしまいましたような出来事も一切起こらなかったことでしょう。

でも、用心することにいたします。軽率さから、すでに本分に背いてしまったわけですが、せっかちなあまり、その罪を大きくすることのないようにです。と申しますのも、私が間違いを犯さなければ、少なくとも母に関しましては、無情だの冷酷だのと思われるようなことは決してなかったはずだからです。だといたしますと、自分の失敗ばかりではなく、その結果に対しましても、私は責めを負うべきではないでしょうか。これまで一度として問題視されたこともございません母親という身分の価値を落とし、その名を汚すことにもなりそうな結果なのですからね。

それにいたしましても、過ちを犯しましたことを大変強く意識しております人間の、その過ちを軽減しようと骨折ってくださいますのは、ご親切なことと存じます。もしも完全にこの過ちを拭い去ることが出来るのでしたら、私ももっと、私の養育のために重ねてくださいましたご苦労に値する人間になれることでしょう。あのように末頼もしいすべり出しをしていながら、貴女や私の他の身内にとりましての名誉となるどころか、恥となるような行動に走ってしまうなんて、私も困惑いたしておりますが、貴女にとりましても、ますます苦悩の募る話に違いないと思うからです。

でも、私のことを実際よりも罪が深いようにお考えにならないようにとの気持ちからで

すが、お許しをいただいて、次の点を手短に保証させていただきます。つまり、事の顛末が明らかになりました暁には、ラヴレースさんとの出奔の件でさえ、お咎めよりは同情をお寄せくださって然るべきなのだということです。

その後の出来事すべてにつきましては、ただ、次のように言わせていただきます。この世に関しましては、自分のことを堕落した者と呼ばねばならないのでしょうが、でも、私にはこのような慰めが残されているのです。つまり、私が苦しみを嘗めましたのは、慎重さを欠いていたためでもなければ、騙され易さとか優柔不断さとかのためでもないということです。用心を忘れたこと、あるいは、幼い頃にいただきました貴女の教えを失念いたしましたことは、ただの一瞬たりともなかったのです。でも（数々の卑劣な企みを挫くことは出来ましたけれど）、これ以上はない非人間的な術策によりまして、とうとう私は操を奪われてしまったのです。ただ、身内の者一人残らずから拒絶されるということがなかったなら、この心卑しい男にしましても、私をあんなふうにあしらう度胸はなかったでしょうし、その機会を掴むこともなかったはずなのです。

現在のところ、これ以上のことは申し上げられませんし、また、申し上げる必要もございません。それから、このことは貴女の胸の内に納めておいていただきたいのですが、私が世を去りました後に意趣返しが行われ、私の命とともに終わりを告げてもらいたいと願っております災難ですのに、それを広めてしまうようなことになってはいけないと思うからです。

私の親戚の主だった者たちがジョン伯父様のところへ集まる件についてですが、私の情報は間違っているとおっしゃるのですね。誕生日のお祝いもなかったとおっしゃるのですね。それに、兄とソームズさんの件も …… 驚くばかりです。この恥知らずな男が責めを負わなければならない悪事というのは、どこまで込み入ったものなのでしょう。たとえ私のほうからお話しいたしましても、人間にはこんな心もあったなんて …… おいそれとは信じていただけないだろうと思います。

でも、いつの日か、事情のすべてを知っていただけることでしょう。今のところは、お話しする気持ちになれませんし、その言葉も見つかりません。あゝ、この胸は張り裂けてしまいそうです。でも、喜ばしい、待望の救いです。この涙が残りのことは代弁してくれるでしょう。もしも、貴女がこの場におられるのでしたらね。

❁　❁

改めて筆を進めることにいたします。

それでは、私からの手紙は一切受け取ってはもらえないだろうと、貴女はそのようにお考えなのですね。でも、そのようなお話をなさるとしても、心をお痛めになることはございません。悪いことでしたら、私、一つ残らず予期しているのです。それに、大変に難儀をしているものですから、貴女のほうから、神様が慈悲の御座から垂れ給うお慈悲に望みをかけるようにおっしゃってくださらなかったなら、私といたしましては、現世と来世の両方につきまして、父のあの恐ろしい呪いが成し遂げられてしまいますのを懸念していたことでしょう。

と申しますのも、ここで新たな不幸が加わったのです。興奮のあまりの無思慮からです

が、あの方の内緒の宛先を思い返すこともなく、愛しいハウさんにお便りを差し上げましたところ、手紙は立腹しておられるお母様の手に渡ってしまったのです。ですから、大好きなお友達は、おそらく、私のために新たに不興を買うことになったものと思われるのです。それにまた、貴女の感心な息子さんがご病気ですし、私の哀れなハンナにいたしましても、貴女のお考えでは、私のところへ来てくれるのは無理というわけです。あゝ、大好きなノートンさん、私に憤りを抱きますのを神様が是認しておられるように思われます人々のことを、貴女は非難なさるおつもりでしょうか。非難することがお出来になるのでしょうか。また、神様がその罪を認めました娘を、貴女はお許しになるのでしょうか。

でも、落胆しないようにと、貴女は言ってくださいます。出来ますならば、そのようにいたしましょう。それに、実際のところ、貴女のお手紙はまことに時宜に適った慰めをもたらしてくれました。ただ、全能の神様に訴えさせていただきます。私に対する不当な扱いに仕返しをし、そして、立証していただきたいのです、私の無実を …

でも、鎮まるのです、猛り狂う私の激情よ。今も口にしたばかりではなかったでしょうか、貴女のお手紙が慰めをもたらしてくれましたことは。私を許そうとする父の邪魔をする者たちに許しが与えられんことを … そして、あの人たちに関しましては、これをもちまして、私が筆にする最も厳しい言葉といたしましょう。

ただ、息子さんが回復なさいましても、大好きなノートンさん、こちらへいらっしゃるようなことをお考えになってはいけません。私にもまだ分かり兼ねますが、でも、後は成就されるのを待つばかりという、父の呪いの中でも一番に恐ろしいあの部分を撤回してもらいますのに、母への貴女のお執り成しが（貴女が口を挟まれても、今のところはほとんど耳を貸してはもらえないでしょうが）役立たないともかぎらないのです。人間の本性から発しております声は、最後には私の有利になるよう聞き届けてもらえるはずと、そのように確信いたしております。その声も最初のうちは、ただ、成りたてで恥じらいをなくしてはいない物乞いの、まだ自意識を忘れぬ哀れっぽさで身内の者たちに嘆願するだけのことでしょう。でも、私にその勇気が出ました時には、もっと強い要求の声に高まることでしょうし、おそらく、さらなる零落を防ぎます父親の保護を、そして、許しを求めることにもなりましょう。計画的ではなく、偶然に犯したものですのに、また、あの人たちがいなければ決して陥ることのなかったものですのに、そんな間違いについて、私への許しは拒むよう口を出す人たちには、その人たち自身の落ち度のこともありますから、期待する資格などはほとんどないはずの、あの許しをです。

でも、おそらく、奇妙に人を惑わせますあの身勝手さに基づくものなのでしょうが、堪え性のなさが再び優勢を占めてしまいます。

手短に申しますと、貴女が私の家族と仲良くしてくださることが、私の現在の望み、そして、将来に向けての望みにとりまして必要なのです。その上、貴女がこちらへいらっしゃったりしますと、破廉恥極まりない男によって、そちらの方面から私の居所を探り出されるかもしれません。ですから、どう受け取られましても構いませんが、私の傍へいらっしゃるのが当然だなどとはおっしゃらないことです。繰り返させていただきますが（私が希望しておりますように、私の乳兄弟が回復なさいましても）、私のためにも、貴女はいらっしゃってはいけないのです。それに、私のほうからお便りをいたしますことが可能な間は、そして、貴女のほうでお返事をしていただけます間は、貴女のご忠告に事欠くような

ことも有り得ないわけです。また、ご助言が必要になり次第、私は頻繁にお便りをするつもりでもいるのです。

それから、今私が一緒におります人たちですが、正直ですし、また、人情味もある人たちのように思われます。同じ家に一人の未亡人が下宿しております。財産は乏しいのですが、大変な美質に恵まれた方で、今私がお便りをしております大好きな人にほとんど生き写しという、真面目で善良な婦人です。そして、その婦人がおっしゃるのですが、満ち足りた気持ちで世を去る助けとなるものを除きますと、この世への他の思いはすべて捨て去っているとのことなのです。私自身の目的には何て似つかわしいことでしょうね。少なくともこの点には、心の慰めとなる神慮があるように思われます。ですから、差し当たりましては、急を要することは一切ないのです。貴女に来ていただくのが必要となるようなこと、あるいは、来ていただく口実となることさえ、何一つないということなのです。今居られる場所に残られることで、多くのより良い目的が叶えられるわけですからね。貴女の最後の、そして、最善のご援助を必要とする時が訪れることでしょう。そして、その時こそは、大好きなノートンさん、その時こそはご援助をお頼みいたしますし、心の底から喜んでお受けすることになりましょう。また、その時には、どなたからも助力を拒まれることはないものと思うのです。

お金のお申し出をいただき、まことに有難く存じます。でも、衣類は残してこなければなりませんでしたが、それでも、高価な品をいくつか携えてまいりましたので、当面は困ることもないはずです。惨めな成り行きだと、貴女はおっしゃるでしょうね。確かにそのとおりです。それに、振り返って見ますと、とても短い間のことでもございました。

でも、呪いを取り消してくれるようにとの説得に、もしも父が応じない場合、私は一体どうしたら良いのでしょうか。あゝ、大好きなノートンさん、私のもののように、強い危惧の念を抱いております心にとりましては、父親の呪いはどれほどの重荷となることでしょう。父親の呪いを免れるべく祈るようなことになるなんて、私は考えたりしたでしょうか。でも、あの呪いの現世に関します部分は恐ろしいほどに成就されたわけですが、そのことさえなければ、私自身のためと同じように、父のためにも負けず劣らず熱心に撤回を求めることでしょう。

もっと前にお便りをいたしませんでしたこと、お怒りにはならないでくださいね。私が貴女のことを大切に思っているものと確信しておられるとのお言葉でしたが、まさしく仰せのとおりですし、大変有難いことと存じます。本当に私は大切に思っているのです。それに、称賛に値する者になろうとする競争心を引き出すためなのでしょうが、受けるに値する以上のものを私に認めてくださるなんて、お褒めのお言葉には何という寛大なお気持ちが含まれているのでしょうか「いかにも貴女らしいことですわね」。耐え忍ぶことを求められております不幸の最中で私に期待しておられる点を、貴女は語っておられますね。ご期待に添えますよう振る舞いたいものと存じます。

優しく、大好きな、母のような私のお友達ですもの、無沙汰をしてしまいました点につきましては、私なりの理由が少しばかりあることはあるのです。この際のお気持ちの表し方は何とお優しく、そして、負けず劣らず丁重なことでしょうか。私自身のためであると同様に、貴女のためでもあるのですが、私たちの間に手紙のやり取りはなかったと貴女におっしゃっていただけますことを、私といたしましては切に望んでいたのです。私たちは

文通をしているのだと、皆がそのように考えました場合は、貴女が私のために口になさる事柄ことごとくが撥ねつけられていたはずなのです。そして、貴女と会うこととか貴女のお言葉に少しでも耳を傾けることとかは、母も禁じられていたことでしょうね。

それに、見通しが明るくなる時期もあれば、暗くなる時期もあったのです。最悪の見通しのことをお知りになりましても、辛い思いをなさるだけだったはずです。また、見通しが明るくなりました時にも、次の便では、その次の便でこそ、といった具合で、何週間にもわたりまして、貴女にお伝えするその時点での最善の知らせを手にしたいものと願うことがしばしばでした。もっとも、あの卑劣漢のせいで、私の心はその最善のものに対しましても冷淡になっておりましたが …… だって、貴女にお便りをすることなど、どうして考えられるでしょうか。結婚はいたしておりませんのに、一つ屋根の下であのような男と暮らしている（私には避けられないことでもありましたが）旨の告白を伴うわけですからね。また、その男は、身内との和解の如何によって左右されます様々な制約はありますものの、私たちは実際に結婚しているのだと、数人の人たちに向かって公言してもいるのです。それに、真実を偽るとか、露骨なものであれ曖昧なものであれ、虚言を弄するといったこと …… それは、一度だって貴女が私に教えたりなさらなかったことなのです。

それでも、あやふやな状況におりました時には、助言を求めてお便りを差し上げても良かったのではないかと、おそらく貴女はお考えでしょうね。でも、正直申しまして、大好きなノートンさん、助言が得られなかったために堕落したわけではないのです。そしてこの点は、これ以上ご説明申し上げなくとも、すでにそれとなく触れてまいりましたことからも、貴女には明白なはずです。仮にも、本分にもとるようなところがこの私にあったのでしたら、あの残酷な強奪者が前例もないほどの手管に頼る必要が、もっとはっきり申しますと（でも、今のところ他言は無用ですが）、感覚を麻痺させる薬剤と、野蛮で無法極まりない暴力行為に頼る必要がどこにあったというのでしょうか。

この嘆かわしい話題につきまして、二言、三言申し添えましょう。

この身に降り懸かりました事柄のすべてを振り返って見ますと、次の点は明らかなのです。つまり、一般には思慮の足りない女たらしと思われておりますこの男が、私に対しましては、整然とした、事前に取り決められていた悪事計画に基づいて行動してきたのだということです。

あの男の下劣な企みすべてを実行に移すのに欠けているものといえば、最初から、他でもありません、力に訴えるか、不正手段に頼るかいたしまして、この身をあの人の手中に委ねるよう私を説き伏せることだけだったのです。そして、この点が実現されました暁には、少なくとも父親の権威を介入させるくらいでなければ（私のためにその力を振るっていただこうにも、その値打ちが私にはなかったのです）、あの男の腹黒い策謀の効果から私を救い出すことの出来るものなどなかったはずなのです。それ以外のどのような方面からの妨害にいたしましても、いかにもありそうなことですが、あの男の野蛮で恩知らずな暴挙を急き立てることになっていたでしょう。また、貴女ご自身が私の傍におられたといたしますと、今では十分な根拠があってそのように考えるのですが、私を救おうとして骨を折っておられるうちに、何かの形で貴女が被害に遭うことになっていただろうと思うのです。と申しますのも、今の私には分かるのですが、あの男からはもっと感謝されて当然という不幸な娘に対しまして、あの男のもの以上に着実に、また、変わることなく推し進め

られました悪事の計画は、これまで一度だってなかったからなのです。でも、全能の神様は、神の摂理が行われます時のいつもの方針に従ってのことでしょうが、過ちにはそれ相応の罰を課すのが適当とお考えになられたのです。ただ、「私が邪心を通わせた卑劣漢当人の手により、私がこの世で罰せられんことを［あゝ、私のノートン・ママ、もしもそのとおりになるのでしたら、呪いがこの世だけに止まりますよう、私と一緒に祈ってくださいね］」という、父の恐ろしい呪いの結果でないことは間違いありません。

このように重苦しい話題で結びといたしますのは、貴女のためにも残念に思います。でも、その他のことは手短にいたしましょう。

お話しいたしました件は、少なくとも私からの公表への同意が得られますまでは、内緒にしておいていただくようお願いいたします。

私よりも過ちのないほうのお子さんが、神のご加護により、末長く貴女と共にありますよう、お祈りいたします。

私は、この世のどなたの慈悲も得られないのでしょうが、神様のお慈悲に望みを掛けることといたします。

そして、重ねて禁じさせていただきます。私のところへいらっしゃるようなことをお考えになってはいけません。

貴女の変わることなく恭順な

Cl. ハーロー

貴女のお手紙を私宛に今日届けてくださった親切な人が、何かお返しするものが私にあるかどうかを確かめるため、明日訪ねてみると約束してくれました。このような好機を見逃したくはございません。

手紙　四十

ノートン夫人からクラリッサ・ハーロー嬢へ

七月三日　月曜日　夜

あゝ、何という野蛮な悪事を働くのでしょうね、この忌まわしい男は。

そして、そのように素敵なお嬢さんを相手に、平気で暴行を加えようとする男性がこの世にはいるのでしょうか。

それから、今はあの人の手の届かないところへ来ていらっしゃるというのは確かなのでしょうか。

貴女がお受けになったひどい仕打ちの詳細につきましては、内緒にしておくようにとの仰せでしたね。でなければ、心の痛むお手紙を受け取りましたすぐ後のことですが、思いもかけずハーローお嬢様がお訪ねくださいました時に、貴女からお便りのありましたことを打ち明け、二通のお手紙の中から、貴女が後悔なさっているという点、それに、なおも加えられかねない暴行からの保護と同様に、お父様の呪いの撤回を切に望んでおられるという点を証明することになりそうな、そんな部分をお知らせしたい気持ちに駆られていたことでしょう。でも、その場合、お姉様はお手紙を一目ご覧になりたがるでしょうし、ご

家族のところへ持って行かれる了承さえも得ようとなさったはずです。

でも、いずれは皆さんにも悲しいお話のことを知っていただかねばなりませんし、貴女が早いうちから悔いておられたことや、例を見ない苦難に遭われたことをお知りになった時には、また、貴女が貞操を失われたのは、心惑わす女たらしの下劣な手管によってではなく、残忍な凌辱者の獣のような力によってなのだということをお分かりになれば、皆さんも貴女のことを哀れと思われ、許して差し上げずにはいられなくなるはずなのです。

あの悪者は、ハーローお嬢様のお話ですと、M卿のお屋敷では、実際に貴女と結婚しているように言い触らしているとのことです。でも、お嬢様は信じておられませんし、私といたしましても、お嬢様に本当のことをお知らせする気にはなれなかったのです。

貴女がお屋敷を出られましてから、手紙のやり取りはなかったかどうか、お嬢様は厳しく問い質されました。なかった旨を申し上げますのに（現にそう申しましたが）、差し障りはございませんでした。ただ、貴女がお父様の呪いを極度に気に病んでおられるのは十分存じ上げているとお話しいたしました。また、お許しをいただけますならと断って、貴女がその呪いを解いていただけるよう、お嬢様のほうから働き掛けてくださるなら、それこそ親切でお姉様らしい振舞いでしょう、とも申しておきました。

他にも厳しいお言葉がございましたが、お嬢様は次のようにもおっしゃっておられました。つまり、貴女のことを依怙贔屓するあまり、私は他のお身内の方々の体面というものをほとんど考えなくなっているとのことでしたが、ただ、この点につきましては、貴女からお話があってのことではないのだとしたら、ハウ嬢にけしかけられてのことのように思われる、とおっしゃるのです。

お嬢様はずいぶん苦々しげな口振りであのご令嬢のことを話しておられましたが、あの方はどこへ行かれましても、また、どなたに対しましても（と申しますのも、貴女のお話はあらゆる会話の話題になっていると思っていただかねばなりません）、お身内の方々について不平を漏らしておられるらしく、お姉様がおっしゃいますには、皆さんのことを軽蔑しておられますし、嘲笑すらしておられるということなのです。

このような怒りに任せての無遠慮なお振舞いを残念に感じておりますが、その理由は二つございます。一つには、この手の勝手気儘な行動が良い結果をもたらすことは決してないからなのです。ハウ嬢が皮肉っぽい性質をお持ちだという点は、貴女が認めておられますのをお聞きしたことがございます。でも、あの方ほどの分別を備え、正しい考え方をしていらっしゃるお嬢さんでしたら、諷刺を用いる目的は、悪いところをさらに悪くするためではなく、直して上げるためですし、それに、決して個人相手のものになってはいけないということはご存じのはずだと思うのです。私の父がよく言っておりましたが、もしも個人的なものになってしまいますと、公明正大な人のほうでは次のように勘ぐるようになるのです。つまり、諷刺を用いている人は生まれつき不平不満を持っていて、それを満たさねばならないのだろう、とです。これは、諷刺家が僭越にも非難したり暴露したりして見せます他人の欠点の、そのいずれにも劣らない、諷刺家そのものに備わる大きな欠点とも申せましょう。

貴女からそれとなくこの点に触れていただきますと、おそらく無駄にはならないことでしょう。

二つ目の理由といたしましては、こういった無遠慮な言動も、ハウ嬢のように、貴女の

大変親密なお友達として知られた人からのものですと、貴女のせいにされてしまう恐れが極めて大きいということなのです。

この卑劣極まりない男には非常に憤慨しておりますので、その男の卑劣な振舞いとして貴女が挙げておられた、恐ろしいばかりの詳細につきましては、私には触れる勇気もございません。このように鉄面皮な卑劣漢に対しましては、実際の話、その手中に落ちました後では、身を守りますのに一体どのような手段があるというのでしょう。私といたしましては、状況は暗澹たる様相を呈しているとは申せ、絶望なさってはいけませんと、ただひたすらに嘆願を繰り返すだけにいたします。貴女の災難は飛び抜けて大きなものです。でも、貴女には試練の大きさに釣り合うだけの能力がおありなのです。これはどなたもが認めておられるところです。

最悪の事態を想定いたしましょう、そして、お身内の方々のお気持ちが、貴女の有利になるように動かされることがないといたしましても、ハーローお嬢様が教えてくださったのですが、お従兄弟さんのモーデン様はまもなく帰国なさるのです。仮にもあの方が皆さんの側に引きずり込まれるようなことになりましても、その場合ですら、貴女が正当な扱いをお受けになるよう、あの方は取り計らってくださるはずなのです。そうなれば、貴女は模範的な生涯を送られて、何百人もの人々を幸せになさったり、貴女がそのように恐ろしい形で巻き込まれてしまわれた数々の罠を避けるよう、若いお嬢さんたちにお教えになったりすることも可能なのです。

貴女が手を切られた男性についてですが、あの人のような嘘で凝り固まった心と、貴女のような素晴らしい心との結合は、果たして望ましいことなのでしょうか。家柄のことをあんなにも誇りにしていながら、貴女も正しく言い当てておられますように、卑劣で、「心卑しい」破廉恥漢なのです。それに、貴女に加えました野蛮で恩知らずな仕打ちからいたしまして、現世の、そして来世の幸せという点では、貴女の敵と申しますよりは、むしろあの人自身の敵でもあるのです。このような男は軽蔑なさるよう、私のほうから説くまでもないことと確信いたしております。と申しますのも、いつも貴女は女性の誉れとされて来たわけですが、そうなさることがお出来にならないようですと、女性の名誉を汚すことにもなってしまうからです。

貴女の品性が堕落したわけではございません。貴女も的確に述べておられますが、貴女の味わっておられる苦難の性質それ自体がそのことを証明しているのです。ですから、貴女のお心を奮い立たせるのです。望みを捨ててはいけません。世界を支配なさり、お気持ちのままに、あることはお認めになり、別のことを指示なさいますのは神様ではないでしょうか。そして神様は、罪もなく招いてしまい、敬虔な心で耐え忍びましたこの世の苦難に対しましては、永遠の至福をもって報いてくださるのではないでしょうか。それに、果てしなく広がる永遠の未来に比べますなら、たかだか針の先程にしか当たらないこの現在などは、一体何だというのでしょう。

とは申しながら、私の心は二重の苦しみを味わっております。可哀相に、息子の具合がとても、とても悪いのです。ひどい熱が出まして、一時的な解熱もままなりません。大好きなお嬢様、神様がそれを妥当なこととお考えになればの話ですが、あの子が回復しますよう、あの子のために祈っていただきたいのです。きっと神様は妥当なこととお考えくださるものと、私は期待いたしております。そうお考えくださらない場合には（そのような

ことは、想像するだけでもどうして耐えられましょう)、私のために祈ってくださいますよう、お願いいたします。貴女に持っていただきたいと願っておりました、あの忍耐心と服従の心を、神様が私にお与えくださるようにです。

変わることなき親愛の情を込めまして、貴女の

ジュディス・ノートン

手紙　四十一

Cf. ハーロー嬢からジュディス・ノートン夫人へ

七月六日　木曜日

とりわけこのような折でもありますから、貴女の苦しみを増大させるようなことはすべきでないのです。でも、この身に降り懸かってまいりました新たな災難のことを、貴女には(今では、この心を和ませてくださいますただ一人のお友達なのですから)お知らせしないわけにまいりません。

私には、この世でもう一人、貴女の他にお友達がございました。そしてその人が、私のことですっかり腹を立てておられるのです(ア)。大好きな人からお咎めを受けますのは、ほんの一瞬のことでありましても、とても悲しいものです。しかもこれは、人の名誉心や思慮分別を貶めるような謗りに由来することなのです。貴女もご存じでしょうが、大好きなノートンさん、扱いがとても微妙なために、自己弁護の必要性があるように人の目に映ってしまいますのは少々不名誉なことだという、そのような事柄がいろいろとございますわね。今回の件では、私にとりまして不運なのは、説明を求められております事実のいくつかにつきまして、推測による以外(不幸にも関わり合ってしまいました陰険な精神のその働きには、極めて狡猾なところがあったのです)、説明の術がないということなのです。

かいつまんで申しますと、私の人柄に疵を見つけたようにハウさんは考えておられるということです。あの人の容赦のないお手紙を今受け取ったところなのです。でも、貴女のお手紙のほうを先に検討するとしたらですが、おそらく、あの人よりは穏やかな気持ちでお返事をすることになるでしょう。と申しますのは、実際のところ、私の我慢もほとんど限度に来ているからなのです。ただ、「愛する人の与える傷は忠実さのしるし」(一七)という点は良く考えなければなりません。でも、あまりにも多くのことが一度に起こるものですから　…　あゝ、大好きな私のノートンさん、苦難の修行に入りましてからまだまだ日の浅い初心者にとりましては、このように苛酷で、このように多様な災いがどうして耐えられるというのでしょう。

でも、この話題は暫く脇に置きまして、貴女のお手紙のことに移ります。

ハウさんが私の件でそんなにも激しく怒りをぶつけておられますのは、とても残念に思います。私の身内に対しましての、あの人のこの種の無遠慮さにつきましては、私のほうでも日頃から遠慮なくお咎めしていたのです。私もかつては、あの人の優しい心に多大の影響を及ぼしておりましたし、あの人も、私が申しますことすべてを、ご自分の掟として

(ア)　次の手紙を参照のこと。

くださったのです。でも、災難の渦中にある人間というのは、何事につきましても、あるいは、どなたに対しましても、重きを成すことはないものなのです。裕福さと自立の状態が心を惹きつけますのは、友情溢れる心が与えます忠告にそれらが力を添えてくれるという理由からなのですが、それに対し、惨めな立場におります人間の場合には、助言を与えるようなこと、あるいは、諫めごとまでいたしますのは、傲慢な振舞いと思われてしまうものなのです。

でも、計り知れないほどに貴重な人なのです、ハウさんは。それに、思慮深いと呼ばれますのに相応しい資格を私がすっかり失くしてしまいます前には、あの人も持っていてくださったわけですが、それと同じ尊敬の念を、私の判断力に対して持ち続けてくださるようなことは、果たして期待出来るものでしょうか。この私には、一体どのような顔をしてあの人の思慮の足りなさを非難することが出来るというのでしょう。でも、いつも大切に思っておりましたあの人のご意見の中に、再び地歩を築くようなことが幸いにも出来ました場合には、この点につきましての貴女の尤も至極なお考えを、あの人に受け入れていただくよう努力する所存でございます。

私が苦しむ原因となりましたこのような男を軽蔑するよう、貴女のほうから説くまでもないとのお言葉でしたが、まったくの話、その必要はございません。あの人のものになるくらいでしたら、残酷この上ない死のほうをむしろ選ぶつもりでおります。でも、いつも大切に思っておりましたあの人のご意見の中に、再び地歩を築くようなことが幸いにも出来ました場合には、この点につきましての貴女の尤も至極なお考えを、あの人に受け入れていただくよう努力する所存でございます。

私が苦しむ原因となりましたこのような男を軽蔑するよう、貴女のほうから説くまでもないとのお言葉でしたが、まったくの話、その必要はございません。あの人のものになるくらいでしたら、残酷この上ない死のほうをむしろ選ぶつもりでおります。ただ、貴女には白状いたしますが、ノートンさん、かつては私にもあの人を愛することは出来そうだったのです。本当に、恩知らずな人です。もしも、愛情を感じるようにしてくださっていたなら、あの人を愛することもかつては出来たはずなのです。それなのに、私の愛を受けるに相応しいことを、あの人は一度だってすることはなかったのです。そして、これは間違いではなかったでしょうか。でも、今となりましては、あの人の手の届かないところに落ち着きまして、最終的な許しを得ることさえ出来ますなら、それも、私自身の当座の慰めのためばかりではなく、愛する身内の者たちが今後いろいろと思いを巡らします際のためでもありますが、私の願いといたしましては、それに尽きるということでございます。

身内の者たちとの和解のことは期待しておりません。また、皆からの許しにつきましても、少なくとも、死の際に臨みまして臨終の聖餐として受けるのでなければ、同じように望みはいたしません。

あゝ、大好きなノートンさん、私がどれほどの苦しみを嘗めたのか、貴女には想像のつかないことなのです。まったくの話、悲しくて胸の潰れる思いです。私のこれまでの行状をいくらか埋め合わせることを可能にしてくれるとお考えの、例の自立を勝ち取りますまで生き延びることはないものと、私は確信しているのです。

このような考えでおりますかぎりは、信じていただけるでしょうが、最終的な許しが得られますまでは、私に心の安らぐ時はないということでございます。

この恩恵を獲得すべく努力するに当たりましては、私なりの方針に従いますことをお許し願いたいのです。もっとも、その方針がどのようなものになるのか、現在のところは私にも分かり兼ねます。

手紙を書こうと思います。でも、どなた宛にかということになりますと、覚束なくなってしまいます。不幸に苦しんでいるとは申せ、父親に宛てて筆を執る鉄面皮さはまだございません。おじたちには（かつては私のことをとても可愛がってくれましたが）冷酷なと

ころがございます。「お父様」という愛情の籠もった呼び名によって、その男っぽい感情を人情味のあるものにしていただいたことが、これまで一度もないのです。兄に対しましては、まったく望みを持っておりません。そういたしますと、私から声を掛けることが出来ます相手といたしましては、母と姉しかいないわけです。「そこで、大好きな大好きなお母様、すべてを元気づけてくださるお母様の目、かつては優しさを越え、甘やかしてもくださったお母様の目を、私のおののき震える目で仰ぎ見ることを許してはいただけないものでしょうか。惨めな病める心に折よく慈悲が授けられますのを期待してのことですが、この胸は、さらに大切に思っておりますお母様のそのお胸から譲り受けました命で、今も脈打っているのです。請い求められておりますのは許していただくことであって、元の状態に戻していただくことではありませんだけに、なおさらそんな思いが募るのです」

でも、たとえ母の憐れみを買うことが出来るといたしましても、その憐れみの気持ちに実効を持たせようとする場合に出会います抵抗のことがありますので、それでは、すでに不幸な目に遭わせております母に、さらに不幸な思いをさせる手段になってしまうのではないでしょうか。

ですから、姉のほうに働き掛けてみようと私は考えているのです。それにいたしましても、これまでの姉はどれほど薄情だったことでしょうか。でも、保護を求めるつもりはございませんが、ただ、保護の手が必要になることを絶えず恐れてはいるのです。差し当たり私が求めますものは（やがて懇願するつもりでおります最後の許しに先立つものといたしまして）、この世に関しましては、可能なかぎりの効果を挙げたかに思われます、例の苛酷な呪いを解いていただくことだけなのです。それに、間違いございませんが、呪いの及ぶ範囲をあの世にまでも引き延ばしましたのは、激情に流されてのことで、考えがあってのことではなかったはずなのです。

でも、何故このように貴女の苦悩を増そうとするのでしょうね、私は。自分の不幸にすっかり気を取られてしまい、貴女の不幸を思いやる心は一切持ち合わせない、ということではないのです、ノートンさん。貴女が不幸な目に遭われますと、私自身の不幸も増すわけですからね。でも、私にはない慰めが一つ（非常に大きなものですが）、貴女にはございますわね。貴女の苦しみは、貴女にとってより似つかわしいほうのお子さんに関わることであれ、より似つかわしくない子供のことであれ、貴女ご自身の落ち度に由来するものではないのだという点ですわ。

でも、貴女のために、お祈り以上のどんなことをして差し上げられるのでしょうね、私は。確かにお約束いたします。自分のための祈願をいたします時には、その都度、同じだけの熱意を込めまして、貴女と息子さんのことも忘れずにお祈りいたします。

心からの同情と従順な心を添えまして、貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　四十二

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

［〈レーチェル・クラーク夫人宛〉等々と宛名書きされたもの］

七月五日　水曜日

大好きな私のクラリッサへ

ようやくのことで貴女の消息を得ましたが、それが、ほとんど予期していなかった方面からなのです。

母からですわ。

母は私がここしばらくの間気持ちが落ち着かず、悲しそうにしているのを目にいたしまして、図星でしたが、それは貴女のことでなのだと推測したのです。そして、今朝、ヒントになるようなことを漏らしましたので、私のほうでも、母は貴女について私が知っております以上のことを耳にしたに違いないと考えるようになったわけです。そして、このために私が一層不安を募らせているのに気づきました母は、貴女のお手紙を手にしていることを認めたのですが、六月二十九日と日付のある、私宛のもの〔二八〕です。

このために、お察しでしょうが、どちらにとりましても望ましくない、ちょっとした興奮状態を招くこととなりました。

［私が貴女との文通を禁じられておりますのをご存じの上で、私どもの家へ私宛でお手紙を出されるなんて、驚きですわ。ひどく驚いております。何故かと申しますと、ご覧のようにそのとおりになったわけですが、お手紙が母の手に落ちます確率は五十対一に違いないのですからね］

要するに、母は私が言うなりにならないことに腹を立てましたし、私のほうでは、母が私の手紙を開封したり、渡そうとしてくれませんことに、負けず劣らず懸念を覚えたのです。そして、最後には折り合いをつけてくれました。お手紙を譲り渡してくれ、また、母が私の文面に目を通すという条件で、貴女宛に一度か二度お便りいたしますのを許してくれたというわけです。と申しますのも、母といたしましては、貴女のことを高く買っておりますし上に、貴女の憂鬱なお手紙が示しておりますような、大変に嘆かわしいお立場になられたきっかけについて知りたいという、強い好奇心を抱かずにはいられなかったからなのです。

［でも、母には、私が文面を読み上げますのを聞くことで満足してもらおうと思うのです。そして、読み聞かせるつもりのない部分は、［　］というふうに、角括弧で括っておくことにいたします］

ところで、思い出していただくよう、ご注意申し上げる必要はあるのでしょうか、クラリッサ・ハーローさん。私がお送りした三通の手紙のことです。そのいずれに対しましても、何のお返事もいただいておりません。最初のは別ですが、それとて、詳しいお手紙を約束なさる、数行だけのものでした。私の二通目を受け取られた次の日には、喜々としてあの男といかがわしい家へ戻られるほどお元気でしたのにね。でも、これらの点につきまして、詳しいことは後ほどにいたします。急ぎ触れなければなりませんのは、先週の水曜日のお手紙の件です。母の手に渡るように、わざと工夫なさったもののことですわ。

言わせていただきますが、あのお手紙は私の心をほとんど打ち砕いてしまうところだったのです。あゝ、何という有り様なのでしょうね、クラリッサ・ハーローさん。あの悪党の元を逃げ出された後（あれだけ骨を折り、懸命の思いで逃げおおせたのです）、また、あの男の試みましたような誘惑があった後ですのに、説き伏せられ、あの男を許すばかりでなく、あの忌まわしい家へ一緒に戻ることまで（それも、結婚することなしにです）認め

てしまわれるなんて、そんなことが私に信じられたでしょうか。私のほうからあのような説明をして差し上げた家なのです。驚きですわ。一体どこまで心を酔わせてしまうのでしょうね、この恋というものは。恋の気紛れさには貴女も、貴女でさえ安全とは申せないことを、私は常日頃から心配していたのです。

貴女の一番大切なところは逃げおおせていなかった、とのことでしたね。実際の話、逃げおおせるようなことをどうして期待なさったのか、私には分かり兼ねますわ。

「何という話をご披露しなくてはいけないのでしょうね」とおっしゃるのですね。披露なさる必要はございませんわよ。あれほど骨折って逃げ出された後で、ご自分のことは今一度あの男に任せるつもりですと、そう話してくださっていたなら、それだけで私は、出来事のすべてを予言して差し上げましょうと、請け合っていたでしょうね。

「心の安らぎは損なわれてしまいました」とのことでしたわね。別に不思議とも思いませんわ。そのように相手も弁えない信じ易さの点で、今頃はご自分を責めておれるに違いありませんからね。

「頭の具合が変なのです」とも言っておられますね。勿論、私は貴女のことでひどく心を痛めております。でも、失礼とは存じますが、ハムステッドを去られる前から、貴女の頭はおかしかったようにも思うのです。でなければ、決してあの男に貴女を捜し出させたりはなさらなかったはずですわ。あるいは、あの男が捜し出しました時にも、例の忌まわしい売春宿へ戻るようにとの説得に、耳を貸したりはなさらなかったはずなのです。

宜しいですね。お送りした手紙は三通なのですよ。最初のものは六月の七日と八日の日付(ア)ですが（二度に亘って筆を執りましたからね）、九日の日付で数行のお言葉を送ってくださったのですから、無事お手元に届いたはずです。無事に届かなかった場合には、私は自分の身の安全を危ぶんでいたことでしょうね。と申しますのも、その中では、例の忌まわしい家につきまして、あのような報告をいたしましたし、あのトムリンソンに関しましても、あれだけご注意申し上げていたのですから、再びあそこに戻ろうと思われたことに、私はいよいよ驚いてしまったわけです。あの家から、そして、ラヴレースから逃げおおせた後のことですからね。何てことなのでしょう。でも、私、どんなことにももう驚いたりはしないでしょうね。

六月十日付の二通目(イ)は、十一日の日曜日に、ハムステッドで貴女ご自身の手に渡されたのです。貴女が奇妙な格好で寝椅子に横になっておられた際のことで、使いの者の説明によりますと、どの程度なのか私には分かり兼ねますが、貴女はむくんだ赤ら顔をしておられたというのです。

三通目は六月二十日の日付(ウ)です。その後に望みを持たせてくださるような九日付の短いお手紙の後、一言のお便りもありませんでしたので、正直に申しまして、書面では容赦のないところを述べさせていただきました。これは、他の手立てもございませんので、思い切っていつもの方法で、つまり、ウィルソンさんを通してお届けいたしました。ですから、受け取っていただけたという確信はございません。実際には、むしろ受け取っておられないようにも考えているのです。と申しますのも、母の手に渡ってしまいましたお手紙

(ア) 第五巻の二十三頁以降を参照のこと。(イ) 同、百八十九頁以降。(ウ) 本巻の二十一、二十二頁を参照のこと。

の中で、貴女はそのことに一切触れておられないからです。それに、もしもお手元に届いておりましたなら、貴女には大変関わりのあることなのですから、少しも触れられずに看過されるようなことは有り得ないはずだと、そのように思うのです。

私が体調を崩していたようにお聞きおよびだったと、貴女はそのように言っておられますね。確かに、風邪は引きました。でも、ほんの軽いものでしたから、一時間だって部屋に籠もったりはいたしませんでした。ただ、奇妙な事柄を耳にされたり、吹き込まれたりなさった結果、あのような行動に踏み切るお気持ちになられたのは疑いのないところだと考えております。また、あのような行動に踏み切られますまでは（この悪党とお戻りになった点を申しているのです）、貴女の場合以上に同情に値するような例は何一つとして存じませんでした。貴女がお宅でどのような仕打ちを受けておられるかを知っている人、そして、貴女の思慮深さや用心深さを存じ上げている人ならどなたでも、貴女のことは前から許していたに違いないからです。でも、悲しいことですわね。恋心とやらが、まるで鬼火のように、人を惑わすその灯りを眼前にかざします時には、最も賢い人々でさえも当てにはならなくなるもののようですね。

私を悲しませることになるからという理由で、お便りをなさらないようにお願いする返事を出したと、母が申しておりました。確かに私は悲しんでおります。ひどく悲しんでいるのです。また、このように申し上げるのをお許し願わねばなりませんが、失望もしております。と申しますのも、そのお年頃で貴女ほどの女性は、この世にはいないのだと常日頃から考えておりましたからね。

でも、前に貴女が主張なさっていたのを覚えておりますわ。大変立派な生活を送っているとは言えないのですが、素晴らしい説教をなさる牧師様に対しまして、人前で非難が浴びせられた際のことでした。「教えを説くことと実行することとでは、全然別の能力が求められるのですが(ア)、それらが同じ人の中で一つに合わされました時、その人は聖者となるのです。英知と判断力とが手を結びまして天才を生み出すのと同じようにです」と、貴女はそうおっしゃったのです。

覚えておりますが、とても見事なお話し振りでしたわ。でも、私が不平を唱えております、最近のお振舞いの中のあの部分以上に、その点をもっと説得力に溢れた形で実証してくださったことは、失礼ながら、いまだかつてなかったのです。

貴女を愛するあまり、また、貴女の名誉を案じるあまりのことですが、もしかいたしますと、少々厳し過ぎたかもしれませんね。そのようにお考えの節は、然るべき理由があってのこと、つまり、この愛情、そして、この懸念によることとお考えください。それでこそ、私を公正に扱ってくださることになりましょう。

貴女の悩み苦しんでおります忠実な

A. H.

追　伸　私の手紙を自分自身で読まないことには、母はどうしても満足いたしませんでしたし、それも、計画しておりました角括弧をすべて書き終える前のことだったのです。こうして、母は私たちの以前の文通のことを知り、そして、大目に見てくれるこ

(ア) 第二巻の七頁を参照のこと。

とになりました。

確かに、母は以前から疑っていたのです。それもまた極めて当然な話でしょう。私のこと、そして、私が貴女に寄せる愛情のことを知っているわけですからね。

本当に心の底から、母は貴女のご不幸のことを心配しておりまして、貴女にとりましては慰めとなり、また、私には恩義を施すことになると考えてのことですが、貴女の悲しいお話の細かな点を、貴女のほうから詳しく書き送っていただくことに同意してくれたのです。ただ、貴女ご自身とあの卑劣極まりない男に関しまして、私たちの間で交わされましたことはすべて母に見せるという条件がついているのです。この文通が貴女の不利に働くことなど有り得ませんので、それだけに、私といたしましても快く承諾した次第です。

ですから、腹蔵のないところを筆にされて構わないのですよ。私どものところへ宛ててくださって結構なのです。

母のほうでは、貴女へ送りました自分の手紙の写しと貴女からのお返事とを、私に見せると約束してくれていますが、お返事のことにつきましては、つい先程話してくれたばかりなのです。自分の文面の厳しさを母はすでに詫びておりますし、また、貴女のお返事を目にしますと、私があまりにも心を乱してしまうように考えているのです。それでも、母が約束したことなのですから、免除はしないつもりです。

母の手紙は十分に厳しいようですね。私のものにつきましても、そのようにお考えになるのが心配です。でも、貴女が教えてくださっていたのですよ。友達のよしみで欠点を見過ごしたりしてはいけないということをですわ。そして、重大な過ちというものは、私たちが大事に思っている人に見られる場合のほうが、私たちにとってはどうでも良い人の場合以上に、さらに許し難いものであるべきだということもです。何故なら、重大な過ちがございますと、その人を選んだ私たちの選択眼に非難が及ぶことになりますし、慕い合う心にひびを生じたり、依怙贔屓をするということで、世の笑い種になったりしがちなものですからね。繰り返し申しますが、〈慕い合う心〉にですよ。最愛の友人の過ちでありましても、その友人に対する私たちの内心の評価を下げずにはおかないはずですし、そのことから、いずれは疎遠になり、もしかいたしますと、愛想を尽かすことにもなるのでしょうが、その土台を据えることになってしまうからです。

ハムステッドからお逃げになった後のお振舞いにつき、願わくは無実の証明がお出来になりますよう、神に祈る次第です。あの時までは、すべてが気高く寛大で、思慮に溢れていたわけですからね。あの男は悪魔で、貴女は聖者だったのですからね。でも、貴女にはお出来になるように思いますし、それゆえに、期待もしているのです。

特別な使者の手で、これをお届けいたします。お返事をいただきに、ご指示どおりに貴女のところを訪ねてくれるはずです。

この忌まわしい卑劣漢は、もしも注意を怠りますと、郵便局から辿りまして、貴女の居場所を探り出すのではと、それを私は心配しているのです。

悪党になるためのお金や、意志や、頭脳があるというのは、それらが一人の男の中で出会う場合ですが、世間の残りの者たちにとりましては、手に負えない話ですわね。

手紙　四十三

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

七月六日　木曜日

自らの宿望としておりましたものを享受することが、真の幸せとはどれほど無縁なことなのか、その点につきまして、私以上に説得力のある証拠を提供出来ますような若い人間も、これまで少なかったはずです。

この見解の正しさを示す実例を一つだけ挙げてみます。ここ何週間かは、大好きなハウさんからのお手紙に恵まれるのなら何を犠牲にしても構わないと、どれだけ思ったことでしょうか。私に残されました慰めのすべては、ハウさんの友情に託していたわけですからね。次にお届けくださるお手紙があんな筆遣いのものになるなんて、思いも寄らないことでした。もう一人のA. H. さんの記名によるものではないことを確認したくて（お名前が詳しくは記されておりませんでしたから）、一度ならずご署名に目を向けてしまったほどなのです。と申しますのも、確かにこれは姉のアラベラの筆遣いだと、私はそのように思ったのです。ハウさんならば、ご自分の友達に向かって（他の点につきましては、どのように非難なさっても構いませんが）、その者が悲痛な心で、また、乱れた頭で記しました言葉を、あんなにも鋭い口調で鸚鵡返しになさるようなことは絶対にお出来にならないはずなのです。それに、ある議論のことを辛辣に、また、ウィットを交えながら思い出させるような真似もなさらないはずなのです。万事が順調で（その当時の私がそうでしたが）意気盛んになっております心、また、その議論がやがて我が身にもたらします厳しいしっぺい返しのことなどほとんど気にも留めておりません心の、その朗らかさにまかせて行われました議論のことをです。

でも、運勢は傾き、評判を落とし、操も失ってしまったのです［自分が承知しておりますかぎり、どなたがそのことをお知りになろうと構いません］。友を、そして、希望さえも奪われてしまいました、そんな私なのです。大好きなお友達に向かって、その人が姉よりも親切にしてくださらないからといって、気持ちを奮い立たせ、不平や諫めの言葉をぶつけましたところで、何の役に立つというのでしょう。

❁　❁

貴女はこれまで、私のことを大層寛大に扱ってくださいましたね。もしもそれが、私には分不相応な寛大さなのでしたら、これまでに負けず劣らず、今こそ寛大に扱っていただいて当然なのだという思いから、そんなお気持ちに頼ったりいたしますのは、お咎めに値することにもなりましょう。ただ、苦々しい思いが湧いてまいりまして、インクの中の没食子と交じり合うのを見ますと、私はまだ十分に自分の境遇に慣れきってはいないようにも思われるのです。少しの間ペンを置かせていただきます。

❁　❁

御免なさいね、私のハウさん。気持ちも落ち着きましたので、お手紙に詳しくお返事を

するよう努力いたします。もっとも、大変な時間が掛かりますので、使いの人の手で明日お届けするようなことは到底考えられませんが、あの人は、土曜日まで出発を延ばしても構わないと言ってくれているのです。事の顛末一切を土曜日までにはご披露出来ますように、用意を整えるべく努力いたしたいと思います。

ただ、出来事のすべてにつきまして、どのように自己弁護をしたものか、分かり兼ねております。と申しますのも、人目には私の振舞いが非難に値するように映ります時期のある期間、私は正気を失っていたわけですし、また、現在に至りますまで、私を欺き、操を奪うために用いられました、その手段のすべてを承知しているわけでもないからです。

最初のお便りでは、私の居りましたいかがわしい家につきまして、あれだけの説明をなさり、あのトムリンソンのことでも、あれだけご注意くださっただけに、戻ろうなどということをどうして私は考えたのか、その点が不思議に思われる、とのことでしたね。

あゝ、悔しいことですが、騙されたのです。その時がまいりましたらお聞きいただきますが、とても卑劣な方法で欺かれ、連れ戻されてしまったのです。

貴女が伝えようとなさった情報から、あの家がひどくいかがわしい家であることを知るまでもなかったのです。あそこの人たちが堪らなく嫌いでしたから、自分から戻るようなことは絶対になかったはずなのです。でも、トムリンソンや家のことについて、そのおつもりだったようには窺われますが、意図されたとおりのご注意を実際に書き記してくださったといたしまして、手元に届くのが間に合っていましたなら、私には計り知れないほど有益であったに違いありません。ところが、あれほど強い口調で私に送ったとおっしゃっている三通のお手紙のうちの、あの最初のものの中では、いずれに関しましても、お気持ちはどうであったといたしましても、貴女は一言も触れておられないのです。納得していただきますために、例のお手紙を同封いたします(ア)。

ただ、使いの人が二通目のお手紙を私に届けてくれました状況につきましての貴女のご説明、そして、「私が奇妙な格好で寝椅子に横になり、どの程度かは貴女にも分かり兼ねるとのことですが、むくんだ赤ら顔をしていた」という、私の様子を述べた使いの人の言葉には、まったく訳が分からず、面食らっております。

哀れなクラリッサ・ハーローに神の恵みのあらんことを　…　一体、どういうことなのでしょう、これは。貴女が出された使いの者はだれだったのでしょうか。その者もラヴレースの手下の一人だったのでしょうか。私に近づくことの出来る人間というのは、そうなろうとしている者であれ、あるいは、そうさせられた者であれ、あの男の共謀者以外にはいないのでしょうか。この件につきましては、どう申したら良いものやら、皆目見当が付きません。本当に分からないのです。

お待ちください。これは私がハムステッドを発つ前のことだとおっしゃるのですね。その時には、まだ私の頭もおかしくはなっておりませんでしたし、ワインで酩酊してしまったことなど、一度だってなかったのです［もしもあったら、妙な話です］。だといたしますと、どうして私がそのように「奇妙な格好をして、どの程度かは貴女には分かり兼ねるというほどに、むくんだ、赤ら顔」をしているところを見られたりするわけがございましょ

(ア) 令嬢が同封する手紙というのは、ラヴレース氏が捏造したものである。第五巻の百二十二頁以降を参照のこと。

う。それにいたしましても、貴女の使いの人は、私が何という下品な、何といういやらしい姿をしていたように描いて見せたことでしょうか。

でも、正直に申しまして、どなたであれ、貴女からのお使いの人につきましては、一切存じ上げないのです。

ハムステッドは安全だと確信しておりましたので、考えておりましたよりも長く滞在いたしました。私のほうの使いの手で届けられました九日付の短いお手紙、例の、タウンゼンド夫人に私のため一肌脱いでいただくよう、人を送ってお願いすることを請け合ってくださっているものですが(ア)、その中で約束しておられたお手紙を待ち侘びていたのです。

お便りがございませんのを不思議に思っておりました。そして、ご病気だと知らされていたのです。また、別の時には、貴女のお母様と貴女とが私のことで衝突され、その件についてのヒックマンさんのご訪問をお受けになるのを、貴女が拒んでおられるようにも伺っていたのです。ですから、ある時は、筆をお執りになるのは無理なのだろうと拝察いたしましたし、別の折には、お母様からの禁止のご命令がそれ相応の効果をもたらしたように考えたのです。でも、今では何の疑いもございません。あの悪者が貴女のお手紙を横取りしたに違いないのです。そんな奇妙な話を貴女にお聞かせするよう、何か手段を見つけて、使いの人を買収したのでなければ良いのですが …

その男の人がお手紙を私に届けてくれましたのは、六月十一日の日曜日のことだったとおっしゃるのですね。私、その日は二度、ムーア夫人と一緒に礼拝式へまいりました。その間、夫人のお宅にはラヴレースさんがおりました。あの人が食事をなさるのは夫人のお宅でして、間借りをしたがっておりました。でも、それは私が許さなかったのです。もっとも、食事のほうは仕方ございませんでしたけれどね。ラヴレースさんが使いの人に働き掛ける機会を得たのは、こういった折のいずれかであったに違いありません。使いの人がムーア夫人のお宅に着いた時刻や、その人が「寝椅子の上で」見たと言う、私の「奇妙な格好」にまつわる他の状況等々を問い質してくだされば、それは容易にお分かりになることでしょう。

その後に、騙されてあのいかがわしい家に連れ戻されました私が、悪い薬の作用にもがき、実際に正気を奪われておりますところを（これが、いずれお聞きいただきますが、私の場合の恐るべき真相だったのです）、どなたかがご覧になったのでしたら、その時にはおそらく、自分にも分からないほど、私はむくんだ赤ら顔を晒していたかもしれません。でも、貴女の哀れなクラリッサ・ハーローを今ご覧になれば（あるいは、破廉恥行為の中でも最も卑劣な仕打ちを受けます前に、ハムステッドでご覧いただいた場合でも）、むくんでいるとか、赤ら顔だなどとは思われないはずです。絶対にないはずです。

要するに、お使いの人が見たのは私ではあり得ないということです。また、だれであったのか（だれかを見たといたしまして）、推測することも出来ないのです。

さて、話題が話題ですから、出来るだけ手短にいたしますが、私の悲しい物語の、より暗い部分へと筆を進めようと思います。それでも、少しは詳しいこともお話ししなければなりません。〈隠し立て〉や〈言い繕い〉が私にも出来るなどと、貴女にはお考えいただきたくないからです。〈言い繕い〉につきましては、必要なこととは感じておりません。貴女

（ア）第五巻の百十七頁を参照のこと。

に向かって〈隠し立て〉をするようでしたら、それこそ、絶対に許してはいただけないでしょうね。ただ、こんなにも辛い記憶のことを思い巡らしておりますと、どれほど気持ちが滅入ってしまうのか、そこのところをお分かりくださいますなら、私のことも哀れと思し召しいただけることでしょう。

書き記さねばなりません事柄を完結いたしますには、おそらく、二通とか三通の手紙を費やしましても無理でしょうから、筆を改めまして、私の物語に取り掛かる所存です。そして、筆を執ることが出来ますその折々に書き記されるものとなりますが、すべてをまとめまして、お送りしようと思います。

ここで一息入れさせていただきます。そして、左記のように署名いたします。

変わることなき親愛の情と感謝の念とを込めまして、貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　四十四

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

［第五巻の二百二十九頁から二百三十頁にかけて言及されていたもの］

木曜日　夜

あの人はハムステッドにいた私を捜し出しました。不思議なことですが、捜し出したのです。どのような方法を用いたのか、今でも分からず、当惑いたしております。

九日付の私の短信(ア)では、そのようにお話しするのは気が進まなかったのですが、私のことでご心配を掛けたくはないという気持ちからでした。それに、あの時には、貴女のお力添えも得まして、私が出会いましたものよりはもっと簡単な、そして、もっと楽しい成り行きの報告で済みそうに思っていたのです。

《その後令嬢は、ハムステッドで令嬢自身とラヴレース氏、トムリンソン船長、および当地の婦人たちとの間で交わされた事柄の一切を物語るのであるが、ラヴレース氏により極めて詳細に述べられたところと同趣旨のものとなっている》

ラヴレースさんは、とてもあくどい仕方で企てられました破廉恥行為を許すよう、私を説き伏せるためのことですが、ご自分が何を話しましても、また、トムリンソン船長が何を力説しましても効果のないことが分かりますと、私相手に予定されておりました、ベティ・ローランス夫人とモンタギュー嬢のご訪問に望みのすべてを託したのです。

先の見通しは真っ暗という、不確かな状況に置かれておりましたので、最後の最後にはどなたを頼らねばならなくなるのか、それも定かではございませんでした。そして、このご婦人方はご声望の点で申し分がなく、最初から（身内の者たちの保護の手を失いました際に）この方たちの庇護に身を委ねずにおりました点は悔やんで当然というほどでしたから、この方たちとの面談を避けたりはしない考えでおりました。もっとも、お二人のご親

(ア) 第五巻の百二十七頁、百二十八頁を参照のこと。

戚に当たります男性に対しましては、すっかり無関心になっておりましたから、面談をこちらから求めるつもりはございませんでした。ご訪問の目的の一つが、その男性と私とを仲直りさせることであったのは疑いありませんけれどね。

六月十二日の月曜日、これらの貴婦人を名乗る女性がハムステッドへまいりました。そして、お二人のご親戚の男性によって、私たちはお互いに紹介されたわけです。

お二人は豪華な服装に身を包み、宝石類で飾り立てておりまして、ベティ夫人を名乗るほうの人はとりわけ見事でした。

四頭立ての馬車で来られたのですが、ご自分のものはロンドンで修理中とのことで、貸し馬車であることを認めておられました。これは、今は気づいておりますが、本物の夫人の紋章が見当たらないことから、私がペテンを見抜いたりしないようにとでっち上げた口実なのです。ベティ夫人には侍女が付き添っており、その娘さんを夫人はモリソンと呼んでおりました。控え目で田舎風の娘さんです。

ベティ夫人が洗練された婦人であるということ、また、モンタギュー嬢は美しくうら若い淑女であって、優雅で上品で明朗快活な方だということを耳にしておりましたが、このペテン師たちはそのとおりの様子だったのです。どちらの方ともこれまで一度もお会いしたことがありませんでしたので、この人たちはこの人たちが演じてみせているご婦人方とは違うのだなどという疑いは、これっぽっちも持ちませんでした。そして、この人たちの衣装の豪華さに少し気圧されておりましたので、自分の服装のことを弁解せずには（何て愚かだったのでしょうね、私も）いられなかったのです。

その後、私たちの間で事態はどうなっているのか、その点については甥御さんが知らせてくれたと、ベティ夫人を騙る人が話しておりました。また、噂からすると心配して当然だったのだけれど（ただ、そのような噂の根拠については、大いに支持すべきところもあるとのことでした）、甥御さんが卿やご自分たちのことをそこまで軽んじていなかったのは大変嬉しいと言わずにいられない。しかしながら、もしも丸く収まらない場合にはご自分たちの望みのすべてを遠ざけてしまうという、それほど大きな意見の相違が私たちの間にあることを知り、そのことがご自分にとっても、また、姪御さんのモンタギュー嬢にとっても、大変な心配の種となっていたし、ご一族の皆さんにとっても同じことだろう、とのことでした。

だれに落ち度があるのか、それは容易に分かることだ、と夫人は言っておりました。そして、怒りと軽蔑の両方が籠もったまなざしをあの人に投げ掛け、こんなにも魅力的なご令嬢に対して［夫人は私のことをそんなふうに呼んだのです］、これほど激しい怒りを引き起こすような性質の無礼を働くなんて、どうしてそんなことが貴方にはお出来になるのでしょう、と尋ねておられました。

あの人は威厳に打たれ恥じ入った様子を装い、押し黙っておりました。

夫人は「私の最愛の姪」と呼び掛け、私の手を取りました。そして、「（伯父様のお見事な便法と足並みを揃えますために、また、敬慕の念からいたしましても、貴女のことは姪とお呼びしなければなりませんが）あの男の弁護人ではなく、調停人となることを認めてほしいのです。それも、あの男のためというより、むしろ私自身のため、そして、シャーロットや私たち一族全員のためのことです。あの男が貴女に加えました侮辱は、その扱いに大変慎重さを要する性質のもので、詮索するわけには行かないのかもしれませんね。た

だ、計画的な仕業でなかった点は、あの男も明言しているのですから、ねえ、あなた［これを聞いてカッといたしました私は、すぐにも立ち上がろうとしていたのです］、そうであったにせよなかったにせよ、あの男も遺憾の意を表明しているのですし（また、どのような罪に対してであれ、あの男以上に衷心から遺憾の意を表してみせる人間もおりませんでした）、さらには、償いの可能なことでもあるわけですから、いかがでしょう、私たちといたしましては、今回の一度に限りましては、あの男を許すことにいたしましょうよ。そして、過ちを犯してばかりいるこの男に恩を着せることにいたしましょう。私たちといたしましては、と申し上げているのですよ、あなた。だって、宜しいですか（と、あの人に向かってです）、この方のような比類のない淑女に加えられた侮辱というのは、私に対する侮辱ですし、ここにいる貴方の従姉妹への侮辱でもあって、女性の中の操の正しい者すべてに対する侮辱とならざるを得ないわけですからね」と言っておりました。

ご覧のとおりですわ。何という人間をあの人は見つけてきたのでしょうね。こんな考えを口にしていながら、それでいて、卑劣な振舞いに及ぶような女の人がこの世に存在するなんて、貴女には考えられることだったでしょうか。でも、この婦人も主要な指示につきましてはあの人から、しかも、そう考えるべき根拠があるのですが、文書の形で受けていたのです。と申しますのは、その後思い出したことですが、このベティ夫人が（何度も席を立ち、まるで、心の底から嬉しくて、じっと座ってはいられないと言わんばかりに感動した様子で、部屋のあちらの端へ向かったりしておりましたが）コルセットから紙片を取り出して目を通し、再びしまい込むところを、私は一度見たのです。あの婦人がもっと頻繁にそうしても、私は気に留めなかったでしょうね。何しろ、こんなペテン師がこの世にいるなんて、ほとんど考えてもおりませんでしたからね。

あの婦人の言葉には熱心に耳を傾けずにはいられませんでした。気がつくと、今にも涙が溢れそうなのです。私はハンカチを取り出し、口を噤んでおりました。人格者で、世にも知られている人物から［そのようにこの婦人のことを考えておりました］あんなにも優しく扱ってもらいますのは、ずいぶん長い間なかったことなのです。それに、自分の声の調子を信頼する勇気もなかったからです。

モンタギュー嬢を騙る人がここで話に加わってまいりました。自分の椅子を私のほうへ引き寄せると、私のもう一方の手を取り、従兄弟を許してくれるように、そして、私と縁続きになるという栄誉を長い間、本当に長いこと切望していた一族の、その主だった人間の一人となることに同意してくれるよう、頼んでおりました。

私が口にいたしました愛情濃やかで、感謝の念や敬意に満ちた言葉の数々も、この人たちがどれほど浅ましい人間なのかを承知しております今では、繰り返してお聞かせいたしますのは恥ずかしくなってしまいます。

それから、あの破廉恥漢本人が出てまいりました。私の足下に身を投げ出すのです。私は見事に包囲されてしまったというわけです。女の人たちが、一人は私の右手を、もう一人は左手をしっかり握っておりますし、モンタギュー嬢を騙っている人は、握った手を一度ならず自分の唇に押しつけているのです。悪い男は、跪いて許しを請うております。そして、許すのか許さないのか、そのいずれか次第で決まる、私の幸福な見通しと不幸な見通しとを例示して見せるのです。以前に自分が持ち出した口実の中で、私の心を動かすと考えたものはすべて、それに、トムリンソン船長が申し立てていたことを、あの男は繰り

返しました。誓いを立て、約束の言葉を並べ、そして、保証人になってくれるよう、名を騙っている二人の婦人に懇願してもおりました。婦人たちのほうでも、あの男のためなら名誉にかけても、と請け合っていました。

正直に申しまして、私は悩んでおりました。完全に困ってしまいました。この訪問をお受けしたことを残念に思いました。あのように立派な親戚の方たち（私はそう思ったのですが）を大切に思う気持ちもありまして、あの人たちと近い関係にある男性のことを、その男性に相応しいだけ遠慮なしに扱うにはどうしたら良いものか、分からなかったからです。ですから、私の論拠、そして、私の決意も、その最大の力を奪い取られてしまったという次第なのです。

それでも、貴女に働き掛けておりますことを主張いたしました。私の認めました手紙に対するものですが、私の今後の運命を定めることになります貴女からのお返事を、今か今かと待ち侘びているところだとお話ししたのです。

婦人たちのほうでは、貴女への働き掛けを自分たちでしても良いと申し出ておりましたが、丁寧なことに、「自分たち自身のためにも」という言い方をしておりました。私に対しましては、お返事を急いでもらう手紙を書くよう、求めておりました。

第三の人物に向かって成される予定の働き掛けの結果如何によりますが、筆をお執りになることが出来るようになり次第、貴女がお手紙を書いてくださるのは確かだと、私はそう言ったのです。ただ、親戚の男の方のためを願うご婦人方の要求が叶えられるかどうかという点につきましては、それは、待ち侘びておりますお返事に左右されるものではない旨を伝えておきました。と申しますのも、お許しを請うた上でお話ししたのですが、そのようなことは論外だからであり、あの人のことは善かれと願っているし、幸せも願っているのですが、それでも、あの人を幸せにすることは私には絶対に無理ですし、あの人が私を幸せにしてくださることも有り得ない話と確信している、と申しました。

すると、あの卑劣漢の約束の仕方といったら　…　どれだけ誓ったことでしょう。どれだけ懇願したでしょう。そして、あの婦人たちの弁護ぶりといったら　…　自分たちの責任において、また、一族全員の名誉にかけて、あの人が私に対し公正で、思いやりと愛情に溢れた振舞いをすることを約束するというのです。

要するに、私はひどく追い詰められてしまったものですから、意図しておりましたのよりはもっと好意的な形で、あの人たちと妥協せざるを得なくなったわけです。私の手紙への貴女のお返事を待つつもりでいると、私は申しました。そして、そのお返事から、私の決めました変更処置や、計画しておりました暮らし方は覚束ないとか、困難だとかいうことになりました場合には、お話の点を考慮することにいたしますし、もしもお許しをいただけるなら、お二人にすべてを打ち明け、お一人は私自身の叔母、もうお一人は従姉妹でもあるかのように、貴女のご助言共々、お二人のご助言に従う旨をお話ししたのです。

これを聞くと、二人は涙を流しておりました。二人が言いますには、嬉し涙とのことでした。でも、二人にとっては面目を施すことになりますが、後になって思いますに、悪い女ではありましょうが、あれは一時的な後悔の涙だったのだと信じております。と申しますのは、モンタギュー嬢を騙る女の人がくるりと背を向けまして、よく覚えているのですが、とても耐えられないわ、と言っていたからなのです。

ただ、ラヴレースさんのほうは、そう簡単には納得いたしませんでした。おそらく、破

廉恥な行動に踏み切る覚悟だったのでしょう。ですから、私と反目するような態度を取ることも意に介さなかったのです。あの人は唇を噛んでおりました。そして、最高の幸せを目の前にしているというのに、これまでは、あまりの無関心さ、また、あまりの冷淡さに慣らされ過ぎていた、と言うのです。さらに、自分にとっては限りなく残念であったけれど、何度にも亘って私が証明してきたのは、私の施す恩恵のどれ一つを取っても、それはあることの結果なのであって（と、あの人は一息入れてから）、私の選択の結果ではないのです、とも言ったのです。

この一言で、すべてが逆戻りしてしまいそうでした。私といたしましても、腹立たしいかぎりです。でも、名を騙っている婦人たちが仲裁に入ったのです。年上のほうの婦人があの人を厳しく咎めました。私が申しましたことで満足すべきなのだと、あの人に向かって話しておりました。ご自分といたしましては、それ以上の条件を望むつもりはないというのです。それで貴方は、と、威厳のある態度でしたが、間違いを犯しておきながら、そのご褒美にありつこうとでも考えているのですか、とも言っておりました。

その後、婦人たちはもっと楽しい会話に私を引き込んでくれました。ベティ夫人を騙っている人は、ご自分もM卿もセアラ夫人も、両家の全面的な和解を達成するためには、ただちに、また、個人的にも尽力するつもりでおり、それも、ジョン伯父様のご都合次第とのことではありますが、公然と、あるいは、秘密裏に、伯父様と協力して行くつもりであることを言明しておりました。一方の側ではずいぶんと敵意が煽られてきましたし、もう一方の側でも、気持ちを宥めるとか、和解をもたらすとかするための配慮があまりにも示されていなかった、というのです。父のことを兄弟として、また、身内として扱うことが皆さんには出来るところを父に見てもらいたい。そして、あまりに下劣なために、公言することも憚られるような動機から胸に宿した妬みとか羨望の気持ちですが、そのいずれにしても用無しであることを、兄と姉のほうでも納得すべきだ、というのです。

あの人たちに好感を抱かずにいるなんて、この私に出来ることだったでしょうか。

ここで中断いたしますことをお許し願います。この仕事も、今では、私の心にとりましては過重なものになり始めているのです。

貴女の　クラリッサ・ハーロー

手紙　四十五

クラリッサ・ハーローより［承前］

とても体調が悪く、ペンを置かずにはいられなかったのです。気を失ってしまいそうに思いました。でも、今は良くなりましたので、先へ進むことにいたします。

名を騙っている婦人たちのほうでは、私たちが言葉を交わせば交わすほど、ますます私のことを好きになったようでした。そして、ベティ夫人役の人がムーア夫人を呼び、姪御さんとご自分、それに、お付きの女中と二人の下男が三、四日泊まる部屋はあるかどうかを尋ねておりました。

部屋はある旨を、ラヴレースさんが夫人の代わりに答えておりました。

ベティ夫人役の人は次のように言っておりました。こんなにもお傍近くにまいりますの

を歓迎していただけるのかどうかなど、愛しい姪のラヴレースさんに「他人の前でこの素敵な呼び方を用いますのを許してくださいね、あなた。伯父様の秘密はお守りいたしますからね」と、あの婦人は囁いておりました」お尋ねするつもりはございません。でも、この辺りに滞在しております間は、毎晩お邪魔させていただきますからね。貴女はどう思います、姪のシャーロットや、といった具合です。

シャーロット役の人のほうでは、何をさておいてもそうしたい気持ちでおります、と答えておりました。

優しい娘ね、あなたも、とベティ夫人役の人が言っておりました。あの土地が気に入ったというのです。従姉妹のリーソンも許してくれるだろう。空気といい、私との付きあいといい、体のためには良いはずだ。煙で煤けたようなロンドンに滞在したいと思ったことは、そう出来ればの話だけれど、一度だってない、というのです。そして、私のほうに向かって、「要するにですね、あなた、ハウさんからのお便りがあるまで、そして、グレナムホールまでご一緒していただくことに同意してくださるまで、私は残ることにいたしますわ。お付き合いを願えます時は、一瞬だってお傍を離れませんよ。ロンドンからは大層近いのですから、私の弁護士のステッドマンさんも、指示を受けにここまで訪ねてくれることでしょう」というのです。そして、「姪のシャーロットや、貴女にちょっとお話があるのです」と呼び掛けておりました。

二人は部屋の向こう端へと引き下がり、就寝時の衣服のことを話しておりました。

シャーロット役の人は、モリソンを遣わせて取ってきてもらうことも出来る、と言っておりました。

「そのとおりね」　相手の人が言いました。「でも、私の内緒の箱の中には手紙が何通か入っておりましてね。それを持って来なければいけないのよ。お分かりでしょう、シャーロット、あの鍵はだれにも預けたくありませんからね」

「モリソンに箱ごと持って来てもらうわけには行かないのですか」

それは駄目だと、ベティ夫人役の人が言いました。今置いてある場所が一番安全だと思うというのです。ほんの二日前にハムステッドの丘の麓であった強奪事件のことを耳にしているし、あの箱を失うと身の破滅だから、とのことでした。

だとすれば、ロンドンへ行って衣装替えをするまでの話であり、宝石類もあちらに置いて戻って来ることにするから、あらゆる点でずっと安心だ、と言っておりました。

私といたしましては、何故あの人たちが宝石類を身に着けていらっしゃったのか、不思議でした。でも、私に対する敬意の表れと受け止められるべきだったのです。それに、別に予定していた儀式張った訪問のことも仄めかしておりました。私が実に言い様もないほど魅力的であることが分かったので、とのことですが、さもなければ、そちらのほうを訪れる考えでいたというのです。

二人は私にも聞き取れるほど大きな声で話しておりました。囁き合っているように装ってはおりましたが、わざと声を張り上げていたのは疑いのないところです。そして、話し合いを終えるに当たりましては、私を褒め称える言葉を並べ立てておりました。

私も二人の褒め言葉を真に受けるとか、それで得意になってしまうほどの愚か者ではございませんが、それでも、二人のことを疑っていないものですから、立派な方たちだという噂をいつも耳にしておりましたご婦人方とのお付き合いが（あの方たちと縁続きになる

にせよならないにせよ)、こんなにも順調に始まりましたことに不満を感じたりはいたしませんでした。ただ、私のことを大層褒め称えてはおりましたが、いくつかの点で(どの点で、ともなかなか申し兼ねるのですが)、私が予想しておりましたお姿には及ばないところがあると、あの時にはそう思ったのです。

人を惑わすことにかけては大物というあの人が、部屋のもう一方の端のところにおりました。おそらく、あらかじめ示し合わせてあったこの称賛の言葉を聞く機会を私に与えるためだったのでしょう。ある本を覗き込んでおりましたが、前もっての打ち合わせでもなければ、一瞬でもあの人の注意を引いたりはしないものでした。テーラーの『清らかに生き、清らかに死す』(一九)だったのです。

名を騙っている婦人たちが私のところへやって来ますと、あの人がその本を手にして近づいてまいりました。そして、「これは、君、洒落た本ですよ。この昔の神学者は、極めて厳粛な話題についてえらく華やかな文体を用いるのです。だが、お陰で、よくある田舎の葬式が頭に浮かびました。若い娘さんたちが亡くなったお友達を悼んですることなのですが、そのお友達が生娘であったり、生娘として通っていた場合には特にそうで、お友達の棺を花の褥にしてあげるのですよ」と言っておりました。

それから、その本を置くと、いつものはしゃいだ時の仕草の一つですが、くるりと後ろを振り向いて、「で、ご婦人方としては、我が魅惑の君と一つ屋根の下にお泊まりになるご決心ですかね」と言うのです。

勿論、あの人たちはそのつもりでした。

この女の人たち以上に狡猾で技巧を弄するペテン師などは、かつていなかったことでしょうね。場数を踏んでいるのは確かなのです。それでいて、上品さを失わないのです。それに、しっかりとした教育も受けたに違いありません。おそらく、私がそうであったのと同じ程度に、かつてはご両親の喜びの種だったのでしょう。それに、どのような手管によって身も心も堕落させられたのか、だれにも分からないのです。あゝ、こんなふうに考えますと、いろんなことが思い起こされてしまいます。

それにいたしましても、あの男ときたら … あんなにも腹黒い男はいまだかつていなかったのです。あのように骨の髄まで詐欺師というのは、あの忌まわしいトムリンソンを除いてはおりません。トムリンソンの場合は、年齢のことがありますし、並外れているとも見えますしっかりとした分別と判断力を兼ね備えた生真面目さもありますから、もう一方の男には携わっている暇がないような、そんな悪事を働きます際にも好都合な点があると、人はそのように思ったことでしょうね。これほど浅ましい人間二人に知られてしまうなんて、私にとりましては辛い、本当に辛い話でございます。この先、こんな二人組にこの世で出会うことのないよう願っておりますのにね。野蛮この上ない、そして、不誠実なこと極まりない企みを、哀れな若い娘を相手に実行しようと、二人が二人とも固く固く心に決めているのです。どちらの男に対しましても危害を加えたとか、害が及ぶように願うとかしたことなどはございませんのにね。

以下に簡単にお話しいたしますのは、この女の人たちとこの男とが、私の前で互いに対して取りました態度のことです。

ラヴレースさんは、叔母を名乗る人に対しましては、大変敬意に溢れた態度で接し、おっしゃることすべてを恭しく拝聴しておりました。二人の間で交わされました当意即妙の

受け答えや言い返しでも、叔母役の人が優位に立ちますのをすべて許しておりました。実際の話、次の点は容易に看て取れたのです。つまり、黙ってそうさせているのだということ、そして、モンタギュー嬢役の人に向かっては慎むことなく示しておりました、あの陽気さ、あの機転の良さを差し控えていたということです。機知に富んだ人というのは、自分の機知をひけらかす機会に恵まれますと、披露せずにおりますのはなかなか出来ないものですからね。

叔母役の人への振舞いということでは、モンタギュー嬢役の人のほうがさらに敬意に溢れておりました。一方、叔母役の人も、自分が装った身分に相応しい威厳を保ち、二人のことを冷やかしておりましたが、その態度は、存命中か臨終に際してか、いずれかの折に恩恵に与ろうと狙っている年下の人間に対しまして、年の功や財力が与えてくれます優位さを頼りにするような、そんな人間の態度だったのです。

でも、あの婦人の辛辣な冷やかしの矛先はラヴレースさんに向けられました。そのきっかけとなりましたのは、例の下宿を営んでいる人たちの評判のことからでしたが、あの婦人の言葉ですと、こっそり立ち去りましても十分に正当視してもらえると私が考えるような、そんな下宿だったというのです。

これを聞いて、私はドキッといたしました。と申しますのは、この時には、あの下劣なトムリンソンに何の疑いも抱いていなかったものですから、もしも家の評判が悪いのであれば、トムリンソンかメネルさんのどちらかが、私かあの人に何らかの暗示を与えてくれていたはずだと、そんなふうに決めてかかっていたからです（それに、貴女の七日付のお手紙(ア)も、私の結論を裏付けるものだったのです）。また、あそこの人たちのことは好きになれませんでしたが、それまでは、何か強く咎められるべき点をあの人たちに見出していたわけでもありませんでした。ただ、その前の水曜日の夜のことですが、危難を告げる私の叫び声が聞こえるところにおりましたし（そのように私は確信しております）、もしも本物の火事だったのでしたら、私と同じように驚いて当然でしたのに、あの人たちは私を助けに来ようとしなかったということがあるのです。

この仄めかしを聞いた私は、怒りのまなざしをラヴレースさんに向けました。

あの人はきまり悪そうな顔をしていました。この卑劣な詐欺師の尤もらしい顔付きを思い出すだけで、私は耐えられなくなってしまいます。それにいたしましても、あんなにも血色の良い顔をしていながら、どうして思いのままに赤面して見せるようなことが出来たのでしょうね。と申しますのも、一度ならず顔を赤くしていたのですよ、あの人が。それに、この際の赤面ぶりは、濃い真紅に染まり、無理に作ったところがなく、私には自然なものに思えたのです。でも、あの人は大変な役者で、どんな役柄にもなり切ることが出来るらしいのです。そして、あの人の顔の筋肉や造作の一つ一つは、完全にあの邪な心の思うままになっているように思われるのです(イ)。

(ア) 氏が捏造した手紙のこと。第五巻の百二十二頁以降を参照のこと。

(イ) ラヴレース氏の赤面に関しては、令嬢がここに挙げているものよりももっと自然な理由が存在したことに触れておくのが適切であろう。それは、後ほど氏が会話の中で友人のベルフォードに向かって認めているとおり、怒りから来る顔面の紅潮だったのである。というのは、ベティ夫人を騙る者が指示を取り違え、例の家を非難したからであり、その失策の修復に氏は大いに苦労したのである。夫人役の者の先導

夫人を騙る人は言葉を続け、こう言っておりました。私が愛想を尽かしてあの家を出たことを耳にするとすぐ、家人たちについて自ら問い合わせてみたところ、ひどく不都合なことは何も聞かなかったけれど、それでも、こんなにも繊細な心の持ち主である自分の妻を、たとえ悪い噂はないにしても、良い評判もないような家へあの人が連れて行くのを不思議に思う程度のことは、たっぷりと耳にしたというのです。

これを聞いて、私はベティ夫人役の人が一層好きになったと、貴女もきっとそうお考えでしょうね。私がそんな気持ちになるよう、目論まれていたことのように思われます。

あの人は次のように言っておりました。あの者たちについての悪い評判を奥様が耳にされるなんて、驚いた話だ。あの人たちには当然のものだなどとは、これまで聞いたためしもないような評判だ。あの人たちが、粗野ではないにしても、素晴らしく繊細なところを持ち合わせているわけでもないことは、確かに、容易に看て取れる。部屋を貸し、食事を用意するという、その生業の性質からしても（ただし、それらの点に関しては、あの者たちも細心の注意を払っているものと考えていた）、遠慮のなさや愛想の良さを目指すことになったのだ。それに、陽気な気質の人間にとっては、非難を避けるように振る舞うのは難しいことであり、女性の場合には（なおさら残念なことだが）、財産に恵まれず、世間に対して超然たる態度を取ることの出来ない好人物が、ざっくばらんな心や表情のせいで、情け容赦のない非難の的になってしまうことがあまりにも多いのだ、というのです。

しかし、どのようなことを耳にされたのか、奥様のほうから話していただければと、あの人は願っておりました。もっとも、あの家に足を踏み入れてくれるよう、私には二度と頼まないつもりなので、今となってはほとんど意味もないことだが、とも言っておりました。そして、遠慮なくおっしゃっていただきたいと、夫人役の人に頼んでおりました。

夫人役の人がこう言っておりました。いえ、大したことではないのです。ただ、下宿している人は男性よりも女性のほうが多いのですが、訪問客は女性よりも男性のほうが多いと教えられたのです。そして、これは、いかにも言外にさらに含みがあるみたいな、そんな口振りで仄めかされたのです（おそらく、悪意を持っている人たちによってなのでしょうが、それは保証のかぎりではございません）、といった具合にです。

まさしくこれは、誹謗者が相手を描写する時に用いる当てこすりの手法だと、あの人が言いました。どんなものにも、また、だれにだって、汚れた面と清らかな面とがあるのであって、それを、他人の幸福を願う人と不幸を願う人とがそれぞれに活用することになるのだ、というのです。あの人が観察したところ、表側の棟は十分に埋まっており、男性よりも女性に多く貸し出されているものと思われる。というのも、たまたま通り掛かった時などに、上品で淑やかな感じの女性を数人目にしたことがあるからだというのです。そして、その者たちがひどく毛嫌いされているわけではなく、男女を問わず、客や親戚が訪ねて来るということも十分に考えられる話だが、ただ、そういう者たちのだれ一人として私たちにとっては、あるいは、私たちにしてもその者たちにとっては、何らの意味も持つものではないというのです。私たちは一度だって、あの連中のだれとも付き合ったことはない

に従わねばならない立場であり、当初の計画に変更を加えざるを得なくなったためであるが、当初の計画では、令嬢の衣装をハムステッドへ運ぶよう指示するという、ただそれだけの口実にせよ、令嬢に戻る気持ちを起こさせるよう、あの家の者たちを褒めてもらうことになっていたのである。

く、二つの棟のうちの、ある意味では私たちだけで占領している、より上品で奥まっている方の棟に住まい、通りに面した応接間を使わせてもらっているが、これは使用人部屋の代わりとして、あるいは、二階まで迎え入れるには及ばない普通の訪問者とか商人だけと会うためのものにしている、とも言っておりました。

あの人としては、常日頃から、気づいたままに語ることを好んで来たというのです。自分ほどに誹謗中傷に苦しんだ者も、この世には他にいない、とのことでした。

女というものは、自分が下宿する場所について、男にとって必要な程度以上に慎重でなければならないということ、その点はあの人も認めておりました。しかしながら、自分たちの間では、とりわけ、互いのことを話し合う時には、憶測ではなく事実を判断基準とするように願いたい、と言うのです。

奥様の情報提供者たち、というよりは、憶測家たち（と呼んで構わないだろう）がどんな手合いであれ、その者たちを咎め立てするつもりはないし、美徳と信義心とを備えた女性から問題視された、あるいは、良く思われなかった者たちを弁護する義務が自分にあるようにも考えない。また、これだけの言辞を弄するほどに、あの者たちが重要なわけでもないのだ、とあの人は言っておりました。

ベティ夫人を騙っている人のほうでは、次のように言っておりました。夫人のことを知っている者ならだれでも、夫人が口やかましくはないことを証明してくれるだろう。あの人があんなにも長い間、私と一緒にあそこに留まっていたという点や、私があの人たちを嫌うのも、積極的というよりはむしろ消極的な理由からであった点、そして、トムリンソン船長は大層洞察力に富んでいると聞いていたが、それほどの人物があの人たちに異議を唱えていないという点からして、是非とも話しておかねばならないが、自分としても、多少はあの人たちを買っているところがあるのだ、というのです。

「姪のシャーロットや」と、夫人役の人が言葉を続けました。「甥はこの下宿を手放していないのですから、貴女と私とで（ハーローさんはあの人たちのことを嫌っておられますから、お供はお願いしないことにいたしますわ）、ロンドンを発つ前に、甥とあそこでお茶をいただくことにしましょう。そうすれば、あの人たちがどんな人たちなのか、私たちにも分かるでしょう。シンクレア夫人は大層こわい人だと聞いておりますわ」

「宜しいですとも、マダム。奥様のお供でしたら、どんなところへまいりますにも、ためらったりいたしませんわ」

一言口にするごとに「…奥様」だったのです。そして、夫人役の人は自分の称号のことを、また、ドレスのことも自慢げな様子でしたから、そのどちらにも慣れていない人のように推測しても良かったのかもしれません。

「貴方はどうかしら、ラヴレースさん。セアラ夫人は塞ぎ込みがちな人ですけど、貴方の件につきましては、その一切を是非とも知りたいとおっしゃっているのです。田舎に戻りましたら、詳しい状況を一つ残らずお知らせしなくてはいけないのです」

心から喜んで、とあの人が言いました。お好きな時にいつでもお供いたします、というのです。大変立派な部屋と大変礼儀正しい人たちを見ていただくことになりましょう、とも言っておりました。

モンタギュー嬢役の人のほうでは、「私たちには別の姿に映るようでしたら、それこそ悪魔の仕業ですわね」と言っておりました。

その後、あの人たちはご一族の話に移り、待ち侘びていた私との縁組に際しての、ご一族の幸福のことを話しておりました。M卿とセアラ夫人が大層私に会いたがっておられるとのことでした。どれだけ沢山のお友達や賛美者が私には出来ることでしょうねと、両手を差し上げながら言うのです「あゝ、この連中は、それに、あの人もですが、この間ずっと、餌食とされました哀れな者に対して、どれほど勝ち誇った思いを抱いていたことでしょうか」。あの人は大変な幸せ者になるだろう、とのことでした。ベティ夫人役の人が言っておりましたが、私があの人たちの一員にならないような事態を想像するだけで、悔しい気持ちになるのだけれど、自分たちとしては、そんな無念さを甘受するつもりはない、とのことでした。

それとなく贈り物のことが話題になりました。夫人役の人としては、グレナムホールまで同行してもらうことに決めたというのです。私のために予定よりも一週間長く滞在することになるかもしれないが、それでも、拒絶されるのはお断りだ、というのです。

この婦人は貴女から届くはずのお手紙を待ち焦がれておりました。お手紙を急いでいただくよう、そして、最後にお便りをいたしましてから、すべてはどのような具合になっているか、ハウさんに知っていただくよう、私のほうから一筆認めてもらいたい、というのです。そうすることによって、私は婦人たちに、また、あの夫人の甥にも完全に好感を覚えるようになるかもしれないし、また、そうなれば、何か新しい手段を講じるようなことを、私のほうで考える必要はなくなるはずだ、というのです。

正直申しまして、あの時には、もしも朝までにお便りがなければ、何もかも詳しく記しましたものを持たせ、貴女のところまで早馬で人を遣わすつもりだったのです。少なくとも（もしも、そうするのが妥当とお考えなら）、タウンゼンド夫人の上京を別の日に延ばしていただくためでした。でも、惨めにも邪魔されてしまったのです。

貴女からのお手紙が届いても届かなくても、この件につきまして貴女にお便りいたしますことを、夫人は私に約束させたのです。夫人の召使の一人が馬を飛ばして私の手紙をお届けし、ハウさんのお返事を待つ、というのです。

その後この夫人は、当然の賛辞ですが、貴女を褒め称えることに取り掛かっておりました。貴女とお近付きになるという栄誉に浴せるなら、どんなに誇らしく思うことか、というのです。

モンタギュー嬢役の人が賛同しておりましたが、自分ばかりでなく、妹さんについても同じことだというのです。

二人とも、忌まわしくなるほどですが、事細かに指示を受けていたというわけです。

あゝ、本当に、軽はずみな困った娘さんたちは、実の親兄弟の保護の手を離れ、広い世間へ飛び出したりいたしますと、何という危険を冒すことになるのでしょうね。

その後、この人たちは私の身内一人一人との和解のこと、そして、親密な交際のことを改めて話題にしておりました。特に母とのことが取り上げられまして、あの立派なご婦人へということで、賛辞を寄せておりましたが、それは、幸せにも母をご存じの方でしたらどなたでも寄せてくださるような褒め言葉だったのです。

あゝ、大好きなハウさん。甥を装っております男への憤りをほとんど忘れてしまうところでしたわ。感じの好いことを山ほど聞かされたものですから、次のように考えてしまったのです。もしも貴女からそのようなご助言があるのなら、そして、あれほど計画的に卑

劣な手口を弄した、あの破廉恥漢の暴挙を許す気持ちになることが出来るのであれば、また、そのことやその他の恩知らずで邪悪な振舞いにつきましても、あの男を軽蔑せずにいられるのでしたら、あれだけの一族と縁を結ぶのも不幸なことではないかもしれない、とです。それでも、あの時にはこんなふうにも思ったのです。外観は良さそうなのに、何もかもがひどい混ぜものばかりなのね、とです。でも、後ほど振り返ってみますと、嫌悪の情も手伝いまして、目に付くようになった欠点なのですが、そんな欠点も、確かな望みが出てきましたことで、他人の名を騙っておりますこれらの婦人たちの振舞いにさほど見出すことが出来ず、あの人たちの保護の手に最初からこの身を委ねなかったのがいけないのだと、我と我が身を責め始めることになってしまったわけです。

でも、こういった楽しい見通しの真っ只中で、「忘れてはいけませんわね。ロンドンへ行くことになっておりますのをね」と、ベティ夫人役の人が言うのです。

それから、馬車を玄関へ回してくれるよう、夫人は命じておりました。「ロンドンへは皆で一緒にまいりましょう。そして、戻るのも一緒ですよ」と、夫人が言いました。「モリソンはここに残ってもらいます。私の部屋のこと、それからベッドについて、すべて私がいつもしているとおりになるよう取り計らってもらいます。私にもとてもやかましいところがいくつかございますからね。従姉妹のリーソンのところの召使たちは、寝間着やその手のものに関しましては、すべて私の願うとおりにしてくれるのです。貴女にはちょっとした散歩になりますでしょう。それに、ラヴレースさんにしてみますと、貴女の衣類の中でご入り用のものを貴女の前の下宿からリーソン夫人の屋敷へ送らせるよう、指示を与える恰好の機会になりますからね。そして、ご衣装はそこから運べば良いのですからね」というのです。

応じるつもりはなかったのです、私。でも、あの夫人がロンドンまでの同行を私に強要するなんて、思いも寄らなかったものですから、夫人の言葉のうち、その部分に対しましては何の返事もせずにいたのです。

ここでひとまず、くたびれたペンを置かねばなりません。

回想です。心を掻き乱す回想です。本当に心の痛むことでございます。

手紙　四十六

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

このように良い気持ちになっておりますと、馬車が玄関のところにまいりました。従姉妹のリーソンさんのところまで同伴してほしいと、ベティ夫人役の人が私に頼んでおりました。私は遠慮したい旨を申しましたが、別に何を疑ったわけでもございません。あの夫人のほうでは、断るのは許さないと言うのです。本当に勿体ないことだけれど、訪ねてもらえるなら、従姉妹のリーソンはどれほど幸せに思うことだろうか　…　従姉妹のリーソンは、私がお近付きになるのに値しない人間ではないし、私と面識が出来るのをこの世でも最大の恩恵と受け止めることでしょうね、というのです。

私は服装のことを理由にお断りいたしました。でも、そんな異議は認めてもらえません

でした。九時には夕食が出来るよう用意をしておいてほしいと、夫人のほうからムーア夫人に注文しておりました。

ラヴレースさんは、本当に卑劣な偽善者で、腹黒い詐欺師ですが、私が行きたがっていないのは看て取れるということで、強要なさらないようにしていただきたいと、奥様に頼んでおりました。

私との付き合いを熱望する気持ちが理由として持ち出されました。是非とも願いを入れてもらいたいと、夫人は私に頼み、私が扇子を取るのに自ら手を貸すような仕草をしておりました。そして、手短に申しますと、あまりにうるさく催促するものですから、自分の言葉や心とは裏腹に、足の方が言われるままになってしまったのです。あの夫人に手を引かれるようにして馬車まで連れて行かれ、だれよりも先に乗り込むような有り様で、夫人が私の後に続きました。そして、姪を騙っている人とあの破廉恥漢とがその後に続き、馬車は走り出してしまったというわけです。

その途中ずっと、口をついて出てまいりますのは、愛情濃やかで丁重この上ない言葉ばかりでした。従姉妹のリーソンさんには、この予期せぬ訪問がどれほどの喜びをもたらすことだろうかとか、近付きになる人すべてにこんなにも大きな喜びを与えることが出来るというのは、私のような心の持ち主にとってはどれほど楽しいことだろうか、といった台詞が何度も何度も繰り返されておりました。

残酷で野蛮な女たらしは(後になって思い出したことですが)、その間ずっと有頂天の様子でした。もっとも、押し殺そうと骨折っているのが手にとるように分かる、そんな有頂天ぶりでした。

忌まわしい悪党です。本当に憎らしく思います。あの陰謀好きな心の中で、あの時、どんな悪事が企まれていたことでしょうか。あの人たち全員の目に、私は何という献身的な犠牲者と映ったことでしょうか。

嬉しいという気持ちはなかったのですが、それでもあの時には、危険のことは私の念頭にございませんでした。私がそんな心配を一切乗り越え、我を忘れてしまうよう、皆でこのように骨折っていたからです。

でも、私のまったく知らない通りや道路をいくつか通って、馬車がその速度を緩め、私にも正体が分かったわけですが、世にも恐ろしいあの女の、あの恐ろしい家の見えるところへ近づきました頃には、皆してどんなに恐ろしい仕打ちに出たことか、ひとつお考えいただきたいのです。

「主よ、慈悲を垂れ給え」と、馬車から顔を出し、哀れな愚か者は叫びました。「ラヴレースさん … マダム … 」と、ベティ夫人を騙る人のほうへ顔を向けながらです。そして、両手を差し上げ、天を見上げながら、「マダム … 」と、姪役の人のほうへも振り向いたのです。「主よ、慈悲を垂れ給え」と叫びながら …

「何です … 何ごとです … どうしたのです、君」

あの人がベルの引き綱を引きました。「何でこっちへ来る必要があったのだ」と、あの人は言っておりました。「だが、来てしまったわけだし、尋ねるだけは尋ねてみましょう。それにしても、どうしてこんなに心配なさるのですかね、我が最愛の人は」とです。

御者が馬車を止めました。あの人の召使が、夫人の召使の一人と一緒に後ろに続いていたのですが、馬を降りました。「手紙が何か来ているか、尋ねるのだ」と、あの人が言いま

した。「もしかすると、最愛の君よ」と、私のほうへ振り向き、「船長からのものがすでに届いているかもしれませんよ。馬車から出たりはしないんですよ。何も恐れることはないのです。何故そう心配なさるのです。あゝ、この繊細な心ときたら　…　」と、呪わしい無礼者が叫んでおりました。

恐ろしいほど心配になってまいりました。すぐにも卒倒しそうな感じでした。「どうしてこんなにも怯えるのですか、君。一歩だって、馬車から離れてもらうつもりはないのですよ。だが、御者のせいで、こんなところへ来てしまいましたので、一つだけ尋ねることにしましょう」と、あの人が言うのです。

「気絶なさるわよ、貴方の奥様　…　」と、あの人のほうへ向き直りながら、呪わしいベティ夫人が叫びました。「私の大切な姪（〈貴女のことは姪と呼ぶことにいたしますからね〉と、私の手を取りながらです）。そんなに具合がお悪いのでしたら、私たち、降りなくてはいけませんね。さあ、降りましょう。お水一杯と鹿角精をいただくだけのことですからね。本当に降りなくてはいけませんわ」というのです。

「駄目よ、駄目、駄目。大丈夫です。本当に大丈夫です。馬車を出してくださらないかしら。大丈夫ですわ。本当に大丈夫です。本当ですわ。ねえ、出してちょうだい」と、馬車から頭を出して申しました。「さあ、出すのよ」と　…　でも、私の声はあまりにも低くて、聞き取ってはもらえなかったのです。

馬車は玄関口で止まりました。私はただただ震えておりました。

馬車が止まりますと、ドーカスが玄関へ出てまいりました。

「最愛の君よ」と悪党が申しましたが、まるで喘ぐような調子です。「降りるには及びません。私宛の手紙はあるかね、ドーカス」

「二通ございますわ、旦那様。それに、ベルトン様とおっしゃる紳士が旦那様を待っておられますが、三十分以上も前からでございます」

「ちょっと声を掛けてくるだけです。ドアを開けてくれ。君は出ないでくださいよ。多分、早くも船長から便りがあったのでしょう。出てはいけませんよ、君は」　あの男が言っておりました。

私は溜め息を漏らしておりました。胸も張り裂けんばかりにです。

「でも、私たち降りなくてはいけませんわ、貴方。奥様が気絶なさりそうなのよ。女中さん、鹿角精の入ったお水を一杯持ってきてちょうだい。さあ、降りなくてはいけませんよ、あなた。ほら、倒れてしまうでしょう。お召し物の紐、切り離さなくてはいけませんわ［私の顔はありとあらゆる色合いを、かわるがわるに見せていたものと思われます］。本当に、降りなくてはいけませんわ、あなた」

馬車が玄関を離れたら、その瞬間に私の具合が良くなるのは分かっているのだ、とあの人が言っておりました。私は降りてはいけないのだ。どうあっても、絶対に降りてはいけないのだ、というのです。

「おやおや、貴方」「あらあら、貴方」と、両方の婦人が同時に叫びました。「大したことではありませんのに、何て大袈裟なのでしょう。貴方がそんなおっしゃり方をなさるから、奥様も降りるのを怖がってしまうのですわ。お分かりじゃないのかしら、今にも気絶なさりそうなのが」

「とにかく、マダム」と、汚らわしい女たらしが申しました。「我が最愛の君は、この点

について、意に沿わない移動を強いられたりしてはいけないのです。そこのところを強要されることのないよう、お願いいたします」

「おやおや、馬鹿馬鹿しい。何て騒ぎでしょう。きっと、こういうことね。奥様を仲間入りさせた、その相手の人たちを私たちに見せるのが恥ずかしいのだわ。ともかく、行ってらっしゃいな。お友達と話していらっしゃい。それから、お手紙も取ってくるのね」

あの人は出て行きました。でも、私のことを思ってでしょう、出た後、馬車のドアを閉めてくれました。

「馬車を出しても構いませんわ、マダム」　私が申しました。

「馬車を出させましょう、愛しの君」と、あの男が言いました。でも、先へ進むよう指示は出しませんでしたし、その気もなかったのです。

「馬車を出していただきますわ」　私は申しました。「ラヴレースさんは後からいらっしゃれば良いでしょう」

「とにかく、ね、お加減が宜しくないのです。とにかく、降りなくてはなりません。ほんの十五分だけ降りましょう。お持ち物についてのご指示をなさるためだけでも、降りることにいたしましょう。私が一緒ですし、姪も一緒だというのに、一体、だれのことを恐れていらっしゃるのです。本当にひどい振舞いをしたのでしょうね、ここの人たちは。何とか、調べてみたいものですわ。どんな人たちなのか、ひとつ確かめてみましょう」

すぐに例の年増女が玄関まで出て来ました。「どのようなことであれ、私どもに無礼がございましたなら、マダム、深く深くお詫びいたしますわ」と言いながら、馬車の横までやって来ました。そして、「ご婦人方には［と、別の二人のほうに向かって］、何卒、お降りいただきとうございますわ」と言っておりました。

「ねえ、あなた」と、ベティ夫人役の人が囁きました。「これで分かりましたが、一度も見たことのない人を恐ろしい姿に描いて見せますのは、その人たちに有利に働くものですわね。あの女性のことは怪物みたいに考えていたのですよ。でも、実際には、まあまあに見えますもの」と言うのです。

激しい興奮状態に陥ってしまいそうで、私は不安でした。それでも、外へ出るのはなおも拒んでおりました。「さあ、さあ、さあ」　私は喘ぐように叫びました。馬車から頭を出したり、引っ込めたり、代わる代わるに続けて六回もです。「馬車を出してちょうだい。さあ、まいりましょう」とです。

あまりに不安が募るものですから、何故心配になるのか、自分でも説明が付かないのです。と申しますのは、この婦人たちにはまだ疑いを掛けていなかったからです。でも、あの汚らわしい家に抱いておりました反感のことがあります。それに、予想だにしていませんのに、気づいてみるとあの家の間近にいるわけですし、あの年増女の姿が目に映ったこともありまして、まるで気の触れた人間のように振る舞うことになったのです。

鹿角精入りのお水が運ばれてまいりました。それを、ベティ夫人を騙っている者が私に飲ませました。その中に何か他のものが交じっておりましても、どなたにだって分かることではございません。

「それに」と、あの女が言いましたが、囁くような口調でした。「姪御さんたちがどんな人間なのか、調べなくてはいけませんでしょう。繊細さに欠けたところがあれば、私の目を逃れることは出来ませんからね。ここの女の人たちが、私の甥が知ってはいけないほど

に、それほど憚りもなく下劣な真似をする人たちだということでもなければ、貴女は何週間か下宿なさっておられたわけですし、私たちもご一緒するのですから、もう一度その家に二、三分だけお入りになるのを、こんなにも嫌がったりなさるようなことは、お出来にならないはずですわ」というのです。

ここで、夫人を騙っている者が外へ出ました。この者に命じられ、召使がすでにドアを開けていたのです。

「どうぞ、お先に願います［私のほうがドアに近かったのです］」、マダム」と、もう一人の女が言いました。「怖がることは何もございませんわ。お傍を離れたりはいたしませんからね」というのです。

「さあ、あなた」と、夫人を騙っている者が言いました。「お手をどうぞ」と、自分の手を差し出しながら、「今度だけは私の願いを入れてくださいね」と言っておりました。

「今一度、拙宅までご来臨くださいますならば、御足の歩みに神のご加護がありますよう、祈らせていただきますわ」と、例の年増女が言っておりました。

この頃になりますと、私たちの回りには人だかりが出来ていたのですが、ひどく心が乱れておりましたので、それが気になることはございませんでした。

モンタギュー嬢を騙っている人が、再び私を促しました。私が通してくれればすぐにも外に出ようと、立ち上がっているのです。そして、「まあ、あなた、何て人だかりなのでしょう。耐えられませんわ。あの人たちはどう考えるでしょうね」と言っておりました。

夫人を騙っている人が両手を差し出し、もう一度私を急き立てました。「ただ、お持ち物についての指示をしていただくだけですわ」と言うのです。

そして、こんなふうに急き立てられ、また、女の人たちの服装が大層高価なもので、衆目の的にもなっておりましたし（と申しますのは、私もその時には周りに目を向けてみたのです）、人々はヒソヒソ話し合っているものですから、不幸にも私は外へ出てしまいましたが、体は震えますし、ベティ夫人を騙っている人の腕に（すっかり怯えてしまい、行儀作法など気に留めていられなかったのです）両の手でもたれ掛からずにはおられませんでした。あの罪深い敷居のところに崩れ落ち、その場で息絶えていたら良かったのにと、本当にそんな気持ちです。

「ほんの二、三分だけのことですからね、あなた、私たちが立ち寄りますのはね。ほんの二、三分だけですよ」と、あの尤もらしい顔をした性悪女が、息を切らせながら言っておりました。後になってそう思えたのですが、惨めな犠牲者に対して、こうして上々の首尾を収めたことが嬉しかったからなのです。

「さあ、シンクレアさん、そのようなお名前だったと思いますが、ご案内願いましょうか」と、私の先に立って、あの女の後を追うのです。「喉がカラカラですわ。変な怖がり方をなさるから、私も肝を潰してしまいましたよ。お茶をいただきたいですわね、すぐに用意が出来るのでしたらね。私たち、先へ進まねばなりませんし、今晩中にはハムステッドまで戻らねばいけませんのよ、シンクレアさん」

すぐにご用意いたしますわと、恥知らずな女が言いました。お湯を沸かしているところですから、というのです。

「じゃあ、急いでくださいね。さあ、いらっしゃい」と、あの宿命的な奥の棟へと続く通路を先に立って歩きながら、夫人役の女が言いました。そして、「私に寄り掛かってごら

んなさい。何という震え方なのでしょう。何て覚束ない足取りなのでしょうね。大好きな姪のラヴレースさん（恥知らずの年増女が聞こえるところにいたからです）、どうしてこんなに気持ちを急かせていらっしゃるのかしら。私たち、すぐに発ちますからね」と言っておりました。

こうしてあの女は哀れな生け贄を、恥知らずな年増女の、嫌というほど見慣れた客間へと導いて行ったのです。

どこのだれにせよ、あの忌まわしい女ほどにおとなしく従順に振る舞ったり、低い声で話したりしたことはなかったでしょう。口に出来ますかぎりの丁重な言葉を、弱々しい声でのろのろと話すのです。宝石をキラキラさせている、威厳を意識した上流婦人の態度に気圧されてのことと、あの時はそんなふうに思っておりました。

求めのありましたお茶はすぐに出てまいりました。

ベルトンさんなどはいなかったのだと思います。私たちが馬車の中で言い合っている間のことならともかく、それ以外には、あの破廉恥漢はだれのところへも行きはしなかったのですからね。とにかく、そのような人物はお茶の席には現れなかったのです。

私は二杯いただくことになりましたが、ミルクも入れました。名を騙っている婦人たちそれぞれから一杯ずつ、愛想良く勧められてのことです。私は二人には思いのままの愚か者だったのです。お茶を口にいたしました時には、湯気のために息が詰まりそうで、なかなか飲み込むことは出来ませんでした。

私の考えでは、チラッと思ったのですが、お茶は、特に後の一杯がそうでしたが、妙な味がいたしました。あの人たちは、私が味を確かめているのを見ますと、ミルクはロンドンのものだと言っておりました。自分たちの搾乳場で搾った飲み慣れたものに比べ、はるかに質は劣るというのです。

疑いございませんが、出されました二杯のお茶は、おそらく鹿角精もですが、私のために用意されていたのでしょう。だといたしますと、私が自分でお茶を注ぐよりも、あの人たちのほうで勧めてよこすほうが、あの人たちの目的には適っているわけです。前から具合は悪かったのですが、頭の乱れがますますひどくなって行くように思いました。麻痺を伴う激痛が急速に強まって来るのです。でも、恐怖心のせいだと思っておりました。

それでも、名を騙っている婦人たちからの提案で、私は二階へまいりました。ドーカスが付き添っておりまして、「至福に満ちた」顔というのがあの不道徳な娘の言い回しでしたが、もう一度私の顔を拝めたのが嬉しいと、涙を流すような素振りをしてみせました。そこで、私はすぐに衣類の一部を持ち出す仕事に取り掛かり、包んでもらうものと、後から送り届けてもらうものとの指示をいたしました。

私がこのような仕事に携わっておりますと、ベティ夫人を騙っている人が急ぐ様子でやってまいりました。そして、「ねえ、ご用意に長くは掛かりませんわね。甥は手紙の返事を書くので大忙しなの。ですから、急いで着替えをしてまいりますわ。すぐにお迎えにまいりますからね」と言うのです。

「あゝ、マダム、用意は出来ますわ。さあ、用意は出来ております。私をここに置いて行かないでください」　こう言うと、私は恐ろしさのあまり、椅子の上へ崩れ落ちてしまいました。

「すぐですよ。すぐに戻りますからね。お仕度が出来る前にです。荷造りがお済みにな

る前にですよ。遅くはなりたくないですからね。私たちの聞いた追剥ぎが出るかもしれないでしょう。遅くなるようなことにはならないよう、お願いしますね」

私がさらに一言口にする暇も与えず、婦人は急いで去って行きました。姪を装っている人も一緒でしたが、出掛けることを知らせてくれるわけでもありませんでした。

この女の人たちは、実際には、二人の演じている貴婦人ではなかったのですが、そのことを私はまだ疑っていなかったのです。そして、女々しく怯えている自分のほうを責めたのです。自分たちがとても好意を感じている哀れな娘に対する裏切り行為を、あれほどの貴婦人が扇動するなんて、それは有り得ないことだと考えたのです。あの人たちは、疑いもなく、この目に映っているとおりの人に違いない。疑いを掛けるなんて、何と馬鹿げた話でしょう。物腰にしても服装にしても、また、上流婦人に備わる威厳にしても …… このように狭量な疑念を露ほどでも抱くのは、あの人たちに対して、また、私の博愛の心にとりましても、何と不当なことなのでしょうと、そのように私は結論したのです。

そこで、取り戻せるかぎりの元気を取り戻しますと（と申しますのも、ますます体がだるくなってまいりまして、一体どうしたのだろうと、ドーカスに尋ねていたのです。目をこすり、あの娘のかぎタバコを少し、一つまみ、また一つまみと使ってみたのですが、ほとんど効果はなかったのです）、私は仕事を続けました。でも、梱包してもらうつもりでおりましたものすべての荷造りも出来上がり、その仕事が終わりますと、考えること以外にはすることもなくなってしまいました。そして、あの人たちがずいぶんと手間取っていることに気づきました。すっかり気が狂ってしまいそうな感じでした。私は自分のものであった例の部屋に閉じ籠もり、跪いて祈りました。でも、何のために祈っているのか、分かりませんでした。そして、再び部屋から駆け出しました。「もう暗くって、夜と同じよ。どこなのかしら。ラヴレースさんはどこなの」　私が申しました。

あの人がやってまいりましたが、最初のうちは、私の仰天ぶりや狂乱状態に気を留めようとしないのです［あの人たちが飲ませましたもののせいで、私は辻褄の合わないことをしゃべり、興奮状態になっていたのです］。「万事順調に進んでいますよ、君。一筆届いていたのです、トムリンソン船長から」　あの人が言いました。

残酷なことこの上ない極悪人の、その極悪非道の目論みにとっては、確かに、すべては順調に進んでいたわけです。

あの人の叔母を連れて来るよう、私は要求いたしました。あの人の従姉妹を出してくれるよう求めたのです。夕方も過ぎてしまうのですよ、と私は申しました。頭の具合がとても、とても良くないのですと、そう言ったように覚えております。そして、どんどん悪くなっていたのです。

それでも、恐怖心のお陰で、まだ気持ちは奮い立たせておりました、そして、婦人たちを急がせるよう、あの人自身が出掛けることを私は主張したのです。

あの人は自分の召使を呼びました。仕事に手間取るという点で、あの人は女性のことを罵倒しておりました。重大な用件というのは、こういった気取り屋で時間を守らない軽薄な連中に任されることは滅多にないのだが、それも当然の話だ、というのです。

あの人の召使がやってまいりました。

あの人は召使に向かって、親戚のリーソンさんの家を大至急訪ね、ベティ夫人と従姉妹さんに、あの人たちが遅れていることを私たち二人ともどんなに気に掛けているか、知ら

せるよう命じておりました。そして、自発的に、「すぐに来てもらえないようなら、二人の馬車を届けてくれるように頼むのだ。二人がいなくとも、われわれだけで行くことにするから、とな。何でこんな目に遭わせてくれるのか、驚いていると伝えるのだ」と付け加えておりました。

これは私の気持ちを慮った、公明正大な言葉だと、私は思いました。それでも、頭の具合は良くなかったのですが、あの人とその所作を注意して眺めるわずかな時間はあったのです。あの人は私にじっと目を注いでいたのですが、その表情、そして、激しい感情を露にした姿に、私は怯えてしまいました。後になって思い出したことですが、その激情というのは、明らかに喜びを押し殺したものでした。口にする言葉は短く、まるで呼吸をするのに支障があるような発音の仕方でした。あの人の忌まわしい目があの時のような目付きになるのは、一度だって見たことはありませんでした。歓喜の光を湛えているのです。獰猛で狂気じみておりました。また、初めて見た時のあの汚らわしい家の女の人たちの様子よりももっと不快に映りました。そして時々は、本当に意地の悪い、胸に一物在るような目付きになるのです。あの人から百マイル遠ざかるためでしたら、何を手放しても構わない気持ちでした。ただ、振舞いは慎みを忘れないものでした。それでも、無理に取って付けたものであることが看て取れそうな、そんな慎み深さでした。と申しますのも、あの人は二、三度私の手を奪い取るようにして握り締めたのですが、痛くなるほど激しい勢いだったのです。優しい言葉を口にしても、食いしばった歯の間から漏れてくるもののようでしたし、つい先程のあの汚らわしい女の言い方に似て、物乞いをするような畏まった口調だったのです。ただ、その言葉や態度には、強烈な、ほとんど痙攣を伴うほどの激情が現れていたのです。あゝ、あなた　…　あの男はあの時、一体何を企んでいたというのでしょうね。

一度か二度、私は喉の渇きを訴えました。口がカラカラに乾いた感じなのです。あの時には、口蓋の辺りがカラカラになるのは恐れのせいなのだと（何度も喘ぐように息をついていましたので）、私はそのように思ったのです。私は水を要求いたしました。軽いビールが少し届けられました。あの人たちの毒薬を働かせますのには（前に盛られた量では十分でない場合です）、私の想像ですが、ビールのほうが効くのでしょう。私が麦芽を用いた醸造酒は滅多に口にしないのを知っているはずだと、女中に言ってやりました。でも、このようなことは疑っておりませんでしたし、極端に喉が渇くものですから、手っ取り早いものということでビールを飲んでしまったのです。すると、いわば即座にといったところですが、前よりも一層具合の悪くなるのが分かりました。まるで酔い痴れたような、そんな感じなのです。どういうわけでなのかは存じません。

あの人の召使が戻るのには、所要時間の倍も掛かりました。そして、その召使が戻る寸前に、ベティ夫人を騙っている人の召使の一人がやってまいりましたが、ラヴレースさんへの手紙を一通携えておりました。

あの人はその手紙を私のところへ届けてよこしました。私は手紙に目を通しました。そして、その時だったのです、自分に救いのないことを悟りましたのは　…　モンタギュー嬢が襲われたことになっております激しい発作のせいなのですが、その夜のハムステッド行きを延期するためのものだったからです。と申しますのも、その時、あの人がこの家で私に対して汚らわしい振舞いに及ぶような考えが、すぐに私の頭に浮かんだのです。復讐

というわけですが、私が逃げましたことで、あの際にあの人がそんなことを思いつきますのは、十分すぎるほどに考えられることでしょう。それに、あの人を許したり、縒りを戻したりいたしますのに、私が難色を示していたこともあるのです。あの人の表情そのものも狂気じみて、私には恐ろしいものでしたし、あの家の女の人たちにつきましても、ベティ夫人を騙っている人の仄めかした言葉からでさえ、懸念を抱いて当然の理由がこれまで以上に出来たわけです。こういったことすべてが私の不安な心に押し寄せてきたものですから、私は一種の錯乱状態に陥ってしまったのです。

その状態が続いておりました間、自分はどんな具合だったのか、記憶がないのです。でも、最初の興奮状態の中で、ヘッドドレスを脱ぎ捨て、襞飾りもズタズタに引きちぎりますと、あの人を見つけようとして駆け出しましたことは知っております。

少し回復いたしますと、私は、婦人たちの馬車についてあの人が仄めかしていたことですが、その言葉のとおりにしてほしいと言い張りました。ところが、あの人が言いますには、使いの者が話してくれたのだそうですが、馬車はお医者さんを迎えに出てしまっているとのことなのです。お医者さんのチャリオットがしまい込まれていたり、準備が出来ていなかったりすると困るから、とのことでした。

次に私は、まっすぐにベティ夫人の宿舎へ向かうことを主張いたしました。

リーソン夫人の屋敷も今は取り込み中だと、あの人が言っていました。そして、私が一生懸命になるのは、ただ、根拠のない危惧の念から出たことに他ならないはずだから［そして、あゝ、あの人はどれほど約束し、どれほど名誉にかけて誓ったことでしょう］、あの人たちの当面の心配事を増すようなことはしないでもらいたい、というのです。喜ばしいことであれ悲しいことであれ、確かに、大きな驚きに会うと、シャーロットはよく発作を起こすのだと、あの人は言っておりました。そして、二、三時間のうちに回復しない場合は、一週間は続くことになる、というのです。

「君は人の目をよく観察していますからね」と、悪党が言っておりました。多分、密かに侮辱を込めた言葉なのでしょう。「ハムステッドで時々、モンタギュー嬢の目をご覧になって気づきませんでしたか。何かしら、少し狂気に類したものをですよ。あの時はあの娘のことが心配でした。彼女のために良いことと言えば、安静を守ることだけなのです。もしも君が訪ねたりしますと、あの娘のことを案じてくれる君の気持ち、それに、君に対するあの娘の愛情のこともありますから、可哀想に、かえってあの娘の病状を悪くするだけなのです」というのです。

悲痛な思いと不安とですっかり落ち着きをなくした私は、朝まであの家に留まるつもりはないと、なおも断言しておりました。自分のありったけの持ち物、指輪も時計も、わずかな現金も、すべてに換えても馬車を呼んでほしいと頼みました。それとも、馬車が得られないようなら、独り旅になっても、その夜のうちにハムステッドまで歩いて行くと言ったのです。

そこで、馬車を呼びに使いが出されました。あるいは、使いを出したような装いがなされたのです。もう遅いけれど、どんな代価を払っても、私の希望に沿うつもりだと、あの人は言っておりました。そして、喜んでお供をしたいというのです。でも、一台の馬車もつかまらなかったのです。

その他の点につきましては、手短にお話しいたしましょう。頭の具合がますますおかし

くなってまいりました。ボーっとしているかと思うと、次には支離滅裂な状態になり、また、感覚が麻痺したようにもなってしまうのです。いかがわしい女の中でも不道徳なことこの上ないあの女が連れて来られ、私を怯えさせました。あの時に私の目に映りましたあの女ほどに、それほど恐ろしい姿をした人間もかつていなかったことでしょうね。

慈悲を請いましたのは覚えております。あの人のものになりましょう、きっとあの人のものになります、と言ったのを覚えておりますが、慈悲を得るためでした。でも、何らの慈悲も見出すことはございませんでした。力は萎え、思考も停止してしまいました。そして、その後に続いた光景ときたら　…　あゝ、何と恐ろしい光景なのでしょう。次々に発作に襲われましても（本当にぼんやりと、そして、不完全に記憶しているのですが）、何の同情も得られませんでした。なのに、死ぬことも私にはままならないのです。死ぬことが出来るのでしたら、それこそ、身に余る慈悲だったことでしょう。

❁　❁

このようにして私は、同じ女性ですのに、この世のものとは思われないほどに腹黒い人たち、そして、私の目には信義を重んじる人間と映りました、そんな人たちに騙され、欺かれて連れ戻されたわけです。そして、この極悪非道の男の手中に落ちますと、その男によってこのように残酷な仕打ちを加えられることになってしまったのです。

すっかり意識を失っていたこともありますから、あの家の忌まわしい連中が直接手を貸したり、煽り立てたりしたと断言する勇気はございません。でも、舞い飛ぶようにとでも申しましょうか、私の目の前を動いている女性の姿が、何度か目に映ったように記憶しているのです。中でも、あの恥知らずな女の姿がそうでした。ただ、私があの女の家に対して嫌悪感を露にしたということで、あの女は私に向かって乱暴に振る舞うことを許されていたわけですが、男性のものよりももっとひどい、あの女の暴力行為に対して抱いておりました私の恐怖心に、こういった混沌とした考えは由来しているのかもしれませんし、あの人の残虐さから被りました苦しみをそんなふうにさらに増大させる必要もございませんので、このように、思い出しますたびにいつだって大変ショッキングなものとならざるを得ません話題につきましては、もうこれ以上触れないことにいたします。

他人に成り済ましておりました破廉恥な女たちには、二度と会っておりません。あの婦人たちは正真正銘、二人が演じていた当の貴婦人たちなのだと、あの人は最後まで言い張っておりましたが（自分の主張が正しいことの証人になってほしいと、恐ろしい口調で天に呼び掛けていました）、二人がロンドンを去るに当たり暇乞いが出来なかったのは、私が意識朦朧として錯乱状態にあったためだと断言しておりました。と申しますのは、酔いを誘うというよりも、むしろ麻痺を誘う、あの人たちの盛った毒薬には、前にも触れたことですが、ほとんど私の思考力を損ねてしまうような効力がございまして、大変な効き目だったものですから、数日の間、私はずっと奇妙な錯乱状態に陥っていたのです。塞ぎ込んでいるかと思いますと、うたた寝をいたしますし、すすり泣いているかと思いますと、狂乱状態になります。今書きなぐっていたかと思うと、書き散らしたものを、書く先から破り捨てるのです。理知の光が時折射してまいりまして、自分の苦しみましたことを朧げに思い出したりいたしますと、惨めなことこの上ない気持ちになってしまうのです。

手紙　四十七

クラリッサ・ハーローより［承前］

《次いで、令嬢は以下の諸点につき説明を加えている》

錯乱状態と嗜眠症からの回復について。

氏の不在時になされた脱出の試みについて。

氏の帰宅に際し、両者間でその後に交わされた会話について。

氏が見せた罪深い姿について。

氏とは結婚しないという決意について。

数度におよぶ脱出への努力について。

脱出を助けてもらうための、ドーカスとの取決めごとについて。

ドーカスが約束手形を落とした件について。令嬢によると、これは疑いもなく自分を裏切るためのことであるという。

自分を怯えさせるために、そして、おそらく新たな侮辱を加えんとして集まった、例の家の住人すべてに対する勝利について。

M邸へ向けての氏の出発について。

伯父の誕生日に祭壇の前で氏と会ってくれるように促す、氏からの度重なる手紙について。

それらすべてに対し、断固として沈黙を守ったことについて。

令嬢の語るところでは、予想とは裏腹に実現を見たことになる、二度目の脱出について。この試みは、当初は、胸中に温めていたさらに有望な試みへの序曲のつもりに過ぎなかったのである。

《その他の詳細に関しても説明がなされているが、それらは先に掲げたラヴレース氏の手紙、及び、氏の友人ベルフォードの手紙に見出される事柄でもあり、割愛することとする。次いで、令嬢は以下のとおり筆を進めている》

自分が安全な場所にいることを知りますとすぐに、貴女にお便りをするため、ペンを手にいたしました。書き始めました時には、お体具合を伺うためですが、六行か八行だけにするつもりでした。と申しますのも、まったく音沙汰がございませんでしたから、これまでは、そして現在も、本当にお体具合が悪くて筆をお執りになることが出来ずにいらっしゃるのではと、心配していたのです。ところが、ペンが用箋を汚し始めますと、淋しい思いに急き立てられますまま、長い手紙となってしまったのです。逃げ出すことは出来ないのではないかと、憂慮いたしておりましたし、脱出を実現いたします際の疲労のこともございます。下宿を確保いたしますにも困難が伴いました。二軒の下宿につきましては、私がそこの住人を好きになれませんでしたし、三軒目の人たちは私に好意を感じてくれなかったからです。お分かりでしょうが、私が怯えた様子をしていたからなのです。こういったことに加えまして、あの人から受けた仕打ちのことが思い出されたり、身の危険のことや心細い懐具合のことがさらに案じられたりするものですから、すっかり心が乱れてしまいまして、あの手紙では、訳も分からないほどとりとめのない筆遣いであったように記憶

いたしております。

要するに、あの手紙のことは、読み返してみまして、半狂乱のもののように考えたのです。でも、あの時には（仮に書き改めるといたしましても）、良くすることは諦めておりました。それで、あのままお送りした次第です。また、宛先をあのようにいたしましたことにつきましては、文面を支離滅裂にしておりますその原因が、大いに同情に値する言い訳を用意してくれるということにならないのでしたら、まったくもって申し開きのしようもございません。

お母様からいただきましたお手紙は、私にとりましては恐ろしい打撃となりました。にも拘らず、あのお手紙は、大量の瀉血や水ぶくれが中風や卒中の発作に対して持っておりますのと同じ、良い影響を私にもたらしてくれました（ちょうどあの時には、気も滅入るような落胆の激しい発作に悩まされ、ほとんど屈してしまいそうだったのです）。私の注意力を蘇らせ、この身を取り巻きます不幸に立ち向かうための気力を呼び戻してくれたのです。またもや私の思考力を圧し潰しそうになっておりました、そんな圧倒的な悲しみの水門を開き、その流れを新たな水路へと（もう一度比喩的な言い方をいたしますのを許していただけますなら）導いてくださったというわけです。

それでも、お母様のお言葉をお借りしますと、「私だけで不幸を背負うというわけには行かない」ということでしたが、その点が心の底から悲しかったのです（また、今でも悲しく思っているのです）。そして、前にお掛けいたしました迷惑のことばかりでなく、私が不注意なばっかりに、新たに面倒をお掛けいたしましたことでも、本当に悲しくなってしまいました。

《次いで令嬢は、ノートン夫人、ベティ・ローランス夫人及びホッジズ夫人に宛てた手紙の内容並びに夫人たちの返事を紹介するのであるが、その文面から、令嬢はラヴレース氏のペテンの全容を知るに至ったのである。令嬢は次のように筆を進めている》

それでも、不思議に思わずにはいられないのですが、あの卑劣なトムリンソンは、私に教えてくれましたいくつかの事柄、そして、私があの男に信を置く一因ともなりました事柄につきまして、一体どのようにして知るに至ったというのでしょう(ア)。

疑いのないところですが、フレッチヴィル夫人と夫人の家についての話も、他のどの話にも負けないくらい下劣な作り話であることは、問い合わせてみれば分かるはずです。それに、偽証の罪を犯した者に反駁すべき点も、私にはすでに十分、そして、有り余るほどあったのではないでしょうか。

何という騙され方をしていたのでしょうね。このように不実で偽証を働くような人間の最後はどうなるのでしょう。私が欺かれ侮辱を加えられましたのに劣らず、天もあの男によって冒涜され、侮られたことになるのです。ただ、自分の不利になることですが、次の

(ア) 令嬢としては説明をつけられなかった事柄に関して、注意深い読者には遡ってご参照いただく必要もないであろうが、ラヴィレイス氏がハウ嬢の手紙を入手していたことを令嬢は知らなかったからなのである。とりわけ、第四巻の五十六頁以降の手紙がそうであり、その手紙に関し、氏は同じ巻の百三十三頁以降で解説を加えているのである。

点は申しておかねばなりません。つまり、私の受けました苦しみが最初の過ちの自然な結果だといたしますと、貴女はずいぶん依怙贔屓をしてくださり、一回目の脱出以前の出来事に関しましては、私に非難されるべきところはない、などとおっしゃってくださいますが、私といたしましては、決して自分を許すわけに行かないということです。

さて、尊敬申し上げておりますマダム、それに、大好きなハウさん、私の一件を裁いていただくことになるのでしょうが、一つお願いをいたしました上で、ペンを置かせていただきます。切なる願いといたしまして、お二人に申し上げるのですが、私が暗に言及いたしました薬物と暴力行為に関しましては、どちら様も決して口になさらないでいただきたいということでございます。自分の恥辱を世間から隠してもらいたがっているとか、あの男が私に悪事を働きましたことが証明されましたのを、広く知られないようにしたがっているとかということではございません。私自身は別にいたしまして、どなたもが、あの男の人柄からこの点は予想しておられたようですからね。でも、どうでしょうか、私に対するあの男の振舞いは実際に死罪にも値する性質のものだということで、あの男とあの男の共犯者を告訴するため、裁判所に出頭するよう求められるといたしまして、そのようなことにも私は耐えられるだろうなどと、どうしてお考えでしょうか。

でも、あの大罪が行われます前から、世間の人たちの見るところでは、私の声望は地に落ちていたのですし、それも、私が父の屋敷を出たその時からのことなのです。また、現世で幸せを得る望みはすべて完全に失われてしまったわけでもありますから、自分のお墓に静かに入って行きますことをお許しいただきたいのです。また、私の悲しみのすべてに終止符を打ってくれることになります幸せな日にも、貴女の優しい目、私の大切な大切なアナ・ハウさんの、その優しい目から溢れます友情に満ちた一滴の涙だけをいただきとうございます。それ以上には、私のような者のおりましたことが思い出話となったりしないようにしていただきたいのです。

クラリッサ・ハーロー

七月八日　土曜日

手紙　四十八
ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

七月九日　日曜日

天上の神が世界中に向かって、破廉恥極まりない放蕩児への復讐の合図を出してくだされば良いのにと、本当にそう思います。また、機を見てそうしてくださるのは、疑いのないところだと思います。それに、貴女がお受けになった苦難の報いにつきましては、私たち、来世に期待を寄せなければいけないということですわね。

また一つ、ショッキングなことが発覚したのですよ、あなた。一体、どこまで騙されておられたのでしょうね。貴女は。貴女のことは大変用心深い方だと考えておりました。とても賢い方だとも　…　でも、あゝ、用心深さの点でも賢さの点でも、十分ではなかったということなのです。貴女がお相手をしなければいけなかった、恐ろしい破廉恥漢に対しましてはね。

私のものとして同封くださいました六月七日付の手紙は、悪質な贋物なのです(ア)。筆跡は確かに、驚くほど私のに似ておりますし、封筒も、見たところでは、本当に私のものなのです。それでも、文面の真似方はそれほど正確ではございませんから、私の筆跡をよくご存じなこともあり（その当時、あの男の卑劣さについて少しでも疑問をお持ちになっていたら）、貴女もそのことは見抜いておられたかもしれないのです。

要するに、この卑劣な贋手紙は、長いものではありますが、私のものからの抜粋はわずかしか含まれていないのです。私のは非常に長文のものだったのです。例の家がどれほど忌まわしい家なのかを貴女にお教えし、また、卑劣なトムリンソンについて疑念を持っていただくことが出来たはずの文面につきましては、どうやら、あの男はすべて省いてしまったようです。同封いたします本物の手紙の草稿からも(イ)、この点につきましてはお分かりいただけることでしょう。それに、ラードナー嬢からの情報や私の助言を、自分の恐ろしい目的のために［本当に忌まわしい悪党ですが］ねじ曲げてしまったこともです。

あのように図太く放埒な策略家の悪行から、私たち二人が安全でいられるかどうか、気掛かりにもなりますので、ひとつお願いをしなければなりませんが、あの極悪非道の男に対しまして、法律に則った仕返しをなさるよう決断していただきたいということです。そしてこれは、私たちのためばかりではございません。そうしなければ、これからもあの男のために騙され、操を奪われてしまうかもしれない、そんな無邪気な人たちのためでもあるのです。

《その後ハウ嬢は、自らの手紙を持たせ、ハムステッドまで使いに出した若者、令嬢本人の手に手紙を渡したと考えている若者が行った報告の詳細に触れ(ウ)、次いで以下のとおりに筆を進めている》

私が驚いておりますのは、あの卑劣漢が、私の使いの者（この者の正直さは保証いたします）の到着する時刻についてはまったく知るはずもありませんのに、貴女の身代わりとなる人間をすぐに用意出来た点です。妙ですわね。貴女がちょうど礼拝式へ行ってしまわれた頃に、使いの者が到着することになるなんて（使いの者の申しておりますことと、あの日は二度礼拝式へ出られたような貴女のお言葉とを照らし合わせて見ますと、それが事実のように思われるのです）　…　使いの者はムーア夫人のところへ二時間早く着いていても良かったのですからね。それにいたしましても、あの悪党が貴女を見つけ出し、お傍におりましたことをお話しくださっていたなら　…　そうしてくださるべきでしたわ。でも、結果だけに基づいた判断でお咎めしていることになりますわね、私も。

田舎の娘さんたちの間で流布しております妖怪や悪魔の使いや悪霊にまつわる話を、私といたしましては、少しでも信じたためしはないのですが、でも、上々の首尾を収めるこの卑劣漢の悪事、それに、尤もらしい幻想を作り上げるその手法につきましては、悪魔の使いを絶えず自分の傍に侍らせているのだろうと想像する以外には（あの男が悪魔そのものではないとしてですが）、他に説明の仕方も見当たりません。時々、この悪魔の使いがあ

(ア) 第五巻の百二十二頁以降を参照のこと。(イ) 同巻の二十三頁以降を参照のこと。(ウ) 第五巻の百八十八頁以降を参照のこと。

の真面目くさった悪党、トムリンソンの姿を装っているのだと、私にはそのように思われるのです。時には、あの男がシンクレアと呼んでおります、例の忌まわしい女の姿となりますし、また時には、ベティ・ローランス夫人のお姿を装いますことを許してもらうというわけです。でも、私の大好きなお友達の天使のようなご容姿や物腰を装おうとしました時には、何というむくんだ醜態を晒したことでしょうか。

これは私の意見ですけれど、貴女がその場所で安全にしていられますのは、あの悪玉が田舎にいる間だけのことでしょう。言葉なんて無力なものですわね。でなければ、あの男をどんなにか呪ってやることでしょう。ほぼ疑いのないところと思うのですが、あの男は少しの間魂を売ってしまったのです。あゝ、その時間が短いことを祈っております。あるいは、地獄で手を引いている者も、あの男が他人との約束を守らないのと同じように、あの男との誓約を守らないようにしてくれたらと思います。

先に触れました私の長い手紙の草稿だけではなく、例の若者がハムステッドで、貴女ご自身に直接お届けしたように考えておりますものの要点も同封いたします。ですから、それらの手紙をよくお読みいただいた上で、ご判断はお任せいたしますが、いずれの手紙にもお返事いただけませんでしたことを私が驚きますのにも、どれほど当然な理由があったのかということでございます。片方につきましては、お受け取りになられたことを貴女のほうで認めておられましたし（もっとも、あの男のでっち上げた手紙と分かったわけですが）、もう一通の方は、そのような保証もございましたが、貴女ご自身の手に渡されたということだったわけです。また、両方とも、貴女の貞節と極めて大きな関わりを持つものでしたからね。それに、ハムステッドからのものですが、六月十五日付のタウンゼンド夫人のお手紙を受け取りました時には、私の驚きは、さらにまたどれほど大きなものだったことでしょう。その言わんとするところは、次のようなものだったのです。貴女と共に数日を過ごしたラヴレースさんは、豪華に着飾ったベティ夫人と従姉妹さんから、その前の月曜日に、四頭立ての馬車での訪問を受けており、貴女ご自身からの同意もあって、その方たちと一緒に貴女をロンドンへ、前の下宿へと連れて行き、貴女もまだそこにいらっしゃるということ。ハムステッドの婦人たちは貴女が結婚なさっているものと信じており、夫婦の間の不和を助長する者として、私を中傷していたということ。その前日、即ち、十四日の水曜日には、あの男自身がハムステッドにいて、貴女と幸せにしていることを得意そうに話し、自分の妻を訪ねにロンドンへ来てくれるよう、ムーア夫人、ベヴィス夫人、そしてローリンズ嬢を誘ったところ、婦人たちのほうでもそうする旨を約束していたということ。貴女は前の下宿とすっかり折り合いをつけておられると、あの男が明言していたということ。そして、最後に、あの男は気前良く支払いを済ませたと、ハムステッドの婦人たちがタウンゼンド夫人に向かって語ったということ、等々です。

貴女には白状いたしますが、その時までは非の打ち所一つとしてございませんでしたお振舞いとは裏腹な、これらの状況にひどく驚き、愛想を尽かしてしまいましたので、出来るかぎり気を揉まないことにし、お便りをしてくださるお気持ちになるまで待とうと決心いたしました。でも、苛立ちを抑えることが出来ましたのは、ほんの二、三日だけだったのです。そして、六月二十日には手厳しい便りを差し上げたのですが、どうやら、お受け取りいただけなかった様子ですね。

事の始まりから今の今まで、貴女の一件にはまさに不運がつきまとっていたのです。私

の母が許してくれていましたなら　…

でも、私に母を責めることは出来るでしょうか。貴女には、極めて大きな責任を負わねばならないお父様とお母様が生存していらっしゃるわけですからね。ご自分たちが追い詰め、虐げ、捨て去り、勘当なさった子供さんのことを考慮いたしますと、かつていかなる父母も負うたことがないほどの、まことに大きな責任を負うておられるのです。

でも、改めて、あの無頼の輩を呪わねばなりませんね。ただ、前にも申しましたが、言葉はすべからく無力なものでして、必要を満たすにはいたらないのです。

ただ、若い娘を自らの手中に収めると、放蕩児や道楽者はどんなことをやってのけるものなのか、この男の恐ろしい偽証や裏切り行為を見ますと、私たちにも分かるのではないでしょうか。耐えられないほど厚かましいことですが、もっと簡単に征服したいと、あの男が思っていたというのは有りそうな話です。でも、前例もないほどの貴女の用心深さと気高い婦徳のゆえに、己の忌まわしい目的を達成するためには、薬物に頼ったり手籠めにしたり、また、乱暴の限りを尽くしたりすることが必要になりますと、見てのとおり、あの男はそういったことにも決してひるんだりはしなかったのです。あの男のような悪質な連中の手によって、もしも、そんな連中に身を委ねる哀れなお馬鹿さんたちが、愚かさや騙され易さから、もっと容易な勝利を提供するようなことがなければの話ですが、同じ悪事、あるいは、同じ程度の悪事がより頻繁に行われることになりますのは疑いのないところでしょう。

善良な男性との結婚によって、自分たちの娘を目出度く片付けることの出来ました世の親たちは、このようなことに思いを馳せます時、どれほど心慰められることでしょう。また、自分が立派な人によって無事に守られていることを知る若い女性というのは、どんなに幸せなことでしょう。もしも、クラリッサ・ハーローさんのような方にも逃れることが出来ないのでしたら、どこに安全な人がいるというのでしょうか。と申しますのは、すべての放蕩児がラヴレースのような男ではないといたしましても、女性すべてがクラリッサさんのような方というわけにもまいらないからです。それに、あの男の攻撃にいたしましても、貴女からの抵抗や警戒心と釣り合っていただけの話なのです。

貴女の悲しい物語全般に亘りまして、自分たちの考えを貴女に伝えてほしいという母の命令がございました。その件につきましては筆を改めまして、この手紙と一緒に、特別な使者の手でお届けすることといたします。

でも、ご賛同いただけるようでしたら、これからは、私の手紙はいつもの人（コリンズさん）の手を煩わせまして、スノーヒルのサラセンズヘッド宛でお送りいたします。貴女もそこへお送りくださって結構ですが（私たちがウィルソン宛によく送っていたようにです）、郵送したほうが良さそうに思われますものは別にいたしましょう。郵便の場合、私の次の手紙以降は、以前のようにヒックマンさん宛でなければいけないように思います。と申しますのも、母が私たちの文通に条件を付けたがっているのです。その条件と言いますのは、受け入れていただきたいとは思うのですが、貴女には応じてもらえそうにもないものだからです。この条件につきましては、いずれお話しいたします。

ところで、貴女のお淑やかな我慢強さや卓越したお心の広さに触れまして、今では心の底から恥じ入っている次第なのですが、私の最後の手紙にございました手厳しい言葉すべてにつきましては、お詫びいたします。そしてその上で、私のことは次のとおりに信じて

くださいますよう、何卒、お願いいたします。、心からご同情申し上げております

変わることなき貴女の友

アナ・ハウ

手紙　四十九

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

七月十日　月曜日

大好きな大好きなお友達、ここで改めてペンを執ることにいたしましょう。母の命令に従いまして、貴女の不幸な物語についての母の意見をお伝えするためです。

相変わらず、母は以前からの主張を繰り返しておりまして、貴女の災難のすべては、致命的な最初の一歩に由来することだと言って譲りません。と申しますのも、母は次のように信じ込んでいるからなのです（私には信じられないことですけれど）。つまり、貴女の抱いておられる憎悪の念のことですが、あれだけ何度も、滑稽なまでに繰り返し試されました後でも、そのとおりなのだと気づかれることがないみたいに想像いたしますのは、言わせていただけますなら、愚かな話というものでしょうが、そのとおりに根深いものだと分かりました暁には、縁続きの方々といたしましても、さらに一度全般的な吟味を加えました上で、貴女のそんなお気持ちを受け入れるおつもりだったのだ、というのです。

あの卑劣極まりない外道からお受けになったその後の災難のことにつきましては、もしも、薬物の件や耐え忍ばれた暴虐行為の件に関しまして、すべて貴女のおっしゃるとおりだといたしますと（母もそのことは疑っておりません）、どうあっても、あの男とあの男の悪魔のような共犯者たちに対しまして、告訴に踏み切られるべきだというのが、母の変わらぬ意見なのです。

母が尋ねているのですが、もしも、告訴の目的で出廷いたしますのを拒むための口実として、だれもが〈慎み深さ〉というものを持ち出し、それが認められるようなことになりますと、法律によって処罰される殺人犯や凌辱犯人など、一体どこにいるでしょうか、というのです。

母が申しますには、社会の利益という点からいたしまして、このような猛獣は世の中から狩り出される必要があるのであって、貴女があの男を告訴なさらない場合には、あの男が今後の無頼の人生において流す害悪のすべてに対して、貴女が責任を持つことになるだろう、というのです。

「ねえ、ナンシー」　母が申しました。「クラリッサ・ハーローさんも、ご自分の恥を世間から隠したいとは思わない、などとおっしゃっているけれど、法廷に出るのを怖がったり、恥ずかしがったりするようでしたら、本気だと思ってもらえるでしょうかね。あの男を相手に、ご自分の、そして、女性の正当性を認めさせるためなのですからね。その奇妙な申し立てを審理しているうちに、何か弱みとか、密かな恋情とかが表に出るのを懸念しているのかもしれないと、むしろそんなふうに勘繰られるのではないかしら」とです。そして、これが母の結論なのですが、「このように手の込んだ悪事が（清浄無垢なお嬢さんの身の破滅をもたらそうとして、また、名の通ったご一族の名誉を汚そうとして、偽証、薬

物、捏造、買収のすべてが結び合わされておりますし、そういった犯罪行為そのものがお嬢さんの潔白さの証になるようにも思われるわけですが）お咎めなしに済むというのでしたら、一体どのようなケースなら裁判にかけるのが相応しいことになるのでしょう。どんな罪人なら首を吊られて当然ということになるのでしょうね」というのです。

それに、母の意見では、私も同じ考えですが、あの男を公判に付すことで、そうならねばいけませんし、また、そうなることでしょうが、是非とも、あの男の共犯者である卑劣な連中もそれ相応の刑罰に処せられるようにすべきだというのです。そして、こうすることが、腹黒い輩たちの巣窟全体を根こそぎ吹き飛ばし、多くの罪のない娘さんたちを救う一つの手段になるかもしれない、というのです。

クラリッサ・ハーローさんとしては、ご自分のためのこととして、あのような恥知らずにこの公の裁きを下してもらうのはとても気が進まないということでしたら、ご家族やお知り合いのこと、そして、女性のことを考慮なさって、ためらいの気持ちを克服なさるべきでしょう。そういった人たち皆さんが、貴女に対するあの男の非道の仕打ちに大層傷つけられ、憤慨しているのですからね、と母が付け加えておりました。

自分自身としてはということで、母が断言しておりましたが、もしも、自分が貴女の母親なら、これ以外のどんな条件でも貴女を許すつもりはないとのことでした。そして、これらの条件に貴女が応じてくださるなら、お身内の皆さんと貴女との和解の件は、母自身が引き受けるというのです。

こういったところが、貴女の悲しい物語に関しましての母の所感というわけです。

これらの見方にも理屈があり、道理があると申さずにはおられません。それに、これは私の意見ですが、男の側に作為に満ちた卑劣さがあり、女性の意図には何らの落ち度も見当たらないという場合には、法律によって、被害を受けた女性が告訴せざるを得なくなるようにし、また、男の側での誘惑行為を死罪に値するようにするのは、極めて正しいことだろうと思うのです。

このような目的には、マン島のしきたりは大変優れたものだと言えましょう。

仮に、あの島の独身女性が、強姦の罪で独身男性を告訴いたしました場合、教会裁判所の裁判官たちが陪審員を選任いたします。そして、この陪審員がくだんの男を罪ありと認めますと、その男は世俗の法廷に有罪と答申されるのです。そして、その法廷で有罪の宣告が下されますと、ディームスターが、つまり、裁判官のことですが、例の女性にロープと剣と指輪を渡します。男を絞首刑にしてもらうのか、打ち首にしてもらうのか、自分と結婚させるのか、その選択権は女性にあるのです。

前の二つのうちのどちらかが、常に女性の選択であるべきだと、私はそう思います。

貴女のお話の詳細すべてを心待ちにいたしております。まずまずの体調と気力が与えられましたなら、貴女のように活発に働く心の持ち主ですと、きっと時間を持て余すことになるでしょうからね。

私宛にお便りをしてくださいます時に用いておられたのと同じ、あの一貫性のある詳細な書き方をしていただけますなら、最低の男の悪行、そして、並外れて立派な女性の美徳のその実例を、ご報告の中で示していただけるものと期待する次第です。

そのご努力をお願いいたしますわ、大好きなお友達。それに、貴女が実例をお示しになりますと、必ずや警告を与えることにもなるわけですから、貴女の不幸な運命を耳になさ

るすべての人たちのために、その両方をお示し願いたいのです。六月五日のお手紙から始めていただきますが、あの当時、貴女の見通しも芳しくないものではなかったのです。こんなお仕事を引き受けていただきますのは、お気の毒とは存じます。でも、進んで免除して差し上げる気持ちにもなれないのです。

ヘ　ヘ

母が付け加えるようにと言ってきかないのですが、母といたしましては、貴女があの悪党を告訴なさるよう主張せずにはいられないというのです。そのことを、私たちの今後の文通を許可する条件にするのだと、繰り返し言っております。従いまして、その点につきまして、貴女のお考えをお知らせ願いたいのです。貴女が応じてくださった場合の話ですが、私が貴女の付き添いとして出廷いたしますのを快諾してくれるかどうか、母に尋ねてみました。そのことで貴女が、あの男や忌まわしい女たち相手の訴訟を始めるお気持ちを起こしてくださるというのなら、是非ともそうしてもらいたいものだと、母はそのように申しておりました。私はお供出来そうに思います。極悪非道の人非人に分相応の死に方をさせてやります、その見込みだけでもあるのでしたら、間違いなくお供いたしましょう。

もう一度繰り返しますが、そうなさることで縁続きの方々のご賛同を得ることになると仮定いたしまして、貴女のお考えを伺いたいのです。

でも、この点に関しまして、貴女の決心がどのようなものでありましても、私は絶えず祈ることにいたしましょう。苛酷な苦しみに耐え抜く忍耐心を神様が貴女に授けてくださいますように、とです。間違った考えから我が身に招いたわけではない人も、そんな苦しみを耐えねばならないのですからね。また、傷つきました貴女の心に、神様が平安と慰安を語り掛けてくださいますこと、そして、多くの幸せな年月を授けてくださいますこともお祈りいたします。いつも、いついつまでも、

貴女の親愛にして忠実なる友
アナ・ハウ

《以上二通の手紙は特別な使者の手で届けられたものであり、その封筒には次の数行が記されていた》

七月十日　月曜日

大好きな大好きなお友達、数行の言葉を添えることもなく、封緘いたしましたものをそのまま発送するわけにはまいりません。二通とも、母の検閲を経なければならなかったからですが、それなしに筆を進めます場合に比べ、優しさに欠けるところが何ケ所かあることをお知らせするためでございます。でも、このように別個に書きます主な理由は、きっと乏しくなっているはずのお金や必要な品物をお送りいたしますのを許していただくためなのです。それと、私なり、私に動かすことの出来ますどなたかなりが、貴女のお役に立つことは出来るものかどうか、その点をお知らせ願いたいと思うからです。貴女が今おられる場所では、悪党の手の届く範囲を十分に抜け出しておられないのではと、はなはだ心配になるのです。ただ、人目を避けますには、他のどこよりもロンドンが一番だと、私も

そのように信じております。
私個人の力で貴女を守って差し上げられませんのが悔しくて、自分の髪の毛を引きむしってしまいたい気持ちでおります。

変わることなき敬愛の念を込めまして、貴女の
アナ・ハウ

五日付の私の書面にございました酷い詰りの言葉をお許しくださいますよう、大好きなあなた、今一度お願い申し上げます。でも、自分を許すわけにはなかなかまいりません。私があんなにも残酷だなんて … しかも、貴女のことはこんなにもよく存じ上げておりますのにね … このいやらしい気の短さは、一体全体どこから来ているものなのでしょう。

手紙　五十

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

七月十一日　火曜日

貴女のことを許すですって … 心の底から許しておりますわ。私のことこそ許してくださいますね。五日付のお手紙への返事として筆にいたしましたいくつかの手厳しい言葉についてですわ。あのお手紙をお書きになった際に私の振舞いが呈しておりました様子からして、私にすっかり愛想を尽かしてしまわれたというのでなければ、現に愛していただいておりますように私を愛してくださっていたことにはならないでしょうし、いつもお示しくださいましたような私の貞節につきましてのご心配も、感じていてはくださらなかったことになりましょう。私の一番の、そして、たった一人の愛しい人、そんな行状への嫌疑を一掃いたします機会をお与えくださいましたことに、また、私の陰鬱な話をお読みになると早速、ご親切にも、故意の過ちではなかったのだと、嫌疑を晴らしてくださいましたことに、心の底からお礼申し上げる次第です。

私の悲しい物語の詳細すべてをお示しするよう、そのように熱心にお求めですので、私に命と気力が貸し与えられるようでしたら、貴女が触れておられる時点からですが、この身に降り懸かりました出来事すべてにつきまして、十分にご説明申し上げることにいたしましょう。でも、私の臨終の場面が幕を閉じますまで、これをご覧いただけないということも十分にあり得ることですし、また、その点を考慮いたしまして筆を進めますので、どなたがお読みになるにせよ、書き手の正直さにつきましては、他に保証人が必要となりますようなことのなきよう願っております。

この男のさらなる暴虐行為の力が及ばない所にいるなどと、決してそのように考えているわけではございません。でも、私に何が出来るでしょう。どこへ逃げることが出来るというのでしょうか。もしかいたしますと、体調を崩しておりますことが（これまでの災いの思い出や、その災いにつきましての感慨がますます重く私にのし掛かってまいりますにつれて、体調もさらに悪化するに違いないのです）、この身を守ることになるのかもしれません。以前には、確かに、国を出ることを考えましたし、この先長年に亘って生きる見通

しでもあるのでしたら、出て行きたいようにも思うのです。でも、致命的な一撃が加えられたのです。私はこのような状況に置かれておりますだけに、今では、貴女がそのことを心配なさる理由もないのです。これで悲嘆に暮れることがないといたしますと、私は一体どのような心を持ち合わせていることになるのでしょう。それに、正直申しまして、大切なお友達、私は命の尽きます最後の場面を本心から切望いたしておりますし、自分が衰えておりますのを知りますと、大層慰められるものですから、恩知らずな話ですが、私の楽しみのすべてを倍加してくれるのが常でした、あの生まれついての壮健な体質を悔やむことさえ、時にはあったくらいなのです。

熱心にお勧めくださいました告訴の件ですが、もっとしっかりとした気力に恵まれることが仮にもありましたなら、今後さらに詳しく触れる機会もございましょうが、今のところは、極端に意気消沈している状態なのです。ただ、差し当たりましては、次のことだけ申し上げておきましょう。身の証を立てますため、法廷で人様の前に姿を見せるくらいでしたら、ありとあらゆる災いを被るほうが（最大の災いを繰り返すことは除きますが）ましだということでございます(ア)。また、私たちの今後の文通の条件といたしまして、そのような手段に訴えるようお母様が指示なさいますのを、心から悲しく思っております。と申しますのも、貴女の友情が続いてくれますこと、また、命のありますかぎり、貴女と文通をしたいという願い、それこそが私に残されました希望のすべてであり、慰めだったからです。とは申しましても、その友情は〈心〉の支配下にあり、〈手〉だけの自由になるものではございませんから、心を失うようなことにはなりませぬよう願っております。

あゝ、父の呪いを撤回してもらうためでしたら、どんな犠牲でも払うことでしょう。和解は望むべくもございません。一度も父を好いてくださったことのない貴女のことですから、この点について気遣いますのを弱さとお考えになるかもしれませんね。でも、時々気力が衰えてしまうとは申しましても、そのような気遣いの動機は必ずしも弱さとは限らないのです。

❁　❁

私たちの手紙の配達の仕方として指示のございました方法、私は賛成いたしますし、すでに宿のボーイに頼みまして、コリンズさんが貴女のお手紙を届けてくれましたら、すぐに私のところへ持ってきてくれるように手配してあるのです。また、今私がおります家の召使も、お許しを得た上で、私の手紙を貴女宛でコリンズさんに渡してくれることになっております。

ハムステッドのローリンズ嬢に便りをしてあったのですが、ちょうど今受け取りましたお返事のお陰で、この悪党が六月十日付の貴女のお手紙を横取りいたしました、その悪質な手口を知ることにもなりました。両方の手紙の要旨をお知らせいたします。

あの方への私の手紙では、極悪非道の男の叔母と従姉妹として紹介されておりました婦

(ア) リーウェン師は、第七巻の手紙五十八において、師の人柄に相応しい論法によって、この公訴に踏み切るよう令嬢を促しており、令嬢のほうでも、その身に似つかわしい態度で応答しているのである。その巻の手紙五十九を参照のこと。

人たちの卑劣さのせいでこの身に降り懸かりました事柄を手短にお知らせし、あの男と結婚した事実はない旨を打ち明けております。詳しく調べていただいて、六月十一日、日曜日の午後にムーア夫人のお宅で、私が礼拝式へ出掛けております間に私を装い、寝椅子の上に寝てハウさんのお手紙 … もしも私の手に渡っておりましたなら、破滅からこの身を救ってくれたはずのものですが … そのお手紙を受け取ったのはだれなのか、お知らせくださるようお願いしております。ムーア夫人にお払いしなければならないものの請求書につきまして、前もって夫人に問い合わせずにおりました点をお詫びし（私の受けた恐ろしい仕打ちのゆえに追い込まれました錯乱状態が理由ですし、また、同じように残酷で無法な監禁のためでもありますが）、請求書をお示しくださるよう、ここでお願いいたしました。そして、ラヴレースさんに突き止められますのを恐れてのことですが、お返事の宛名書きにつきましては、メアリー・アトキンズ夫人宛で、ラドゲートヒル、ベルサヴィッジ亭留置きとしてくださいますよう、夫人に指示いたしました。

お返事の中で、夫人は次のように述べておられます。卑劣な破廉恥漢は私を演じるようベヴィス夫人を説き伏せ「貴女の使いの人が現れました時に、急遽あの男が言い出したことのようです」、寝椅子の上に横たわり、首と顔をハンカチで覆っているよう言いくるめたのですが、病気を装ってのことです。騙され易いあの夫人は、貴女が夫婦の間の不和を煽り立てるようなお節介をしているという間違った考えによって誘い込まれたわけです。そして、私に成りすまし、貴女の使いの人からお手紙を受け取った、というのです。

ローリンズ嬢はベヴィス夫人の意図を弁解しようと骨折っておられます。私のお伝えする事柄に接し、皆さんは驚き、心配しておられるということです。それでも、見下げ果てた男の卑劣さをちょうど良い時に知ることになったのは幸運なことだと思うし、皆さんも揃って同じ気持ちだというのですが、二人の未亡人とお嬢さん自身とで、あの男の熱心な招待もあって、シンクレア夫人宅に私を訪ねてくださるご計画だったというのです。あの男と私の間のことがすべてうまく行っているものと想定してのことですが、あの男は皆さんに向かってそのように保証していたのです。ムーア夫人への支払いの件は、ラヴレースさんのほうで手厚く済ませてあるとのことです。そして、ローリンズ嬢は、こんなにも異様な話だけに、詳細を教えてもらえるなら有難いと希望しながら、お手紙を結んでおられますが、これらの詳細は、この世にはどれほど邪悪な人間が（男性と同様、女性にもですが）いるのか、そのことを知るよすがになるかもしれないから、というのです。

この忌まわしい男に横取りされました二通のお手紙の草稿のこと、本当に有難うございました。長きに亘って自分の憎むべき趣向の弄びものとしてきました、その哀れな人間に対する忌まわしい目論見を実行に移すに当たりまして、この二通はあの男にとって極めて好都合なものであったことと思われます。

繰り返し申しますが、生きておりますことがすっかり嫌になっているのです。また、罪のない人間や慈悲深い心の持ち主がきっと異邦人のように見做され、紛れもない現世の息子や娘たちによって受難者にさせられてしまいます、そのような世の中にもうんざりしているということでございます。

あの男の恐ろしい目的を私に知らせ、その目的に対し、また、見下げ果てた婦人たちの卑劣さに対しましても防御を固めることを可能にしてくれていたかもしれない、そんなお手紙だけがあの男の手中に落ちるとは、何と不運なことなのでしょう。私がハムステッド

へ逃れましたそのこと自体が、あの男にお手紙を受け取る機会を与えたという点では、なお一層不運であったとも申せましょう。

それでもなお、不思議に思わずにおられませんのは、あの卑劣な詐欺師が、私に対しまして最も面目を施すこととなりましたいきさつなのですが、あのトムリンソンに、ヒックマンさんとジョン伯父様との間で交わされました話をどうして知ることが出来たのかという点でございます(ア)。

あの極悪人本人につきましても、ハムステッドで私を捜し出すことがどうして出来たのか、それもまた私には完全な謎として残ることでしょう。あの男は、才気よりも邪心のほうをたくさん持ち合わせておりますあの男は、自分の策謀のことを得意がるかもしれませんわね。でも、厚かましいとは存じますが、結局のところ、私は幸せになれそうな気もするのです。哀れなあの恥知らずが …… あゝ、どうなるのか、それはだれにも言えないことですわね。

さようなら、大好きなお友達。幸せになってくださいますよう、お祈りいたします。そうなってくだされば、貴女のクラリッサもとことん不幸なわけではありませんもの。

手紙　五十一

ハウ嬢（二〇）からクラリッサ・ハーロー嬢へ

七月十二日　水曜日　夜

私、書きますわよ、大好きなあなた。書かずにはいられません。貴女が気落ちなさっておられることへの懸念を述べるためですわ。お願いいたします、私の素敵なお方、後生ですから、失意に挫けてしまわれぬようお願いいたします。

それどころか、汚れ一つとしてない美徳の勝利につきまして、ご自分を慰めていただきたいのです。落ち度一つとしてないご意思のことをです。貴女が乗り越えられた試練に耐えられる人など、一体どこにいるでしょうか。お従兄弟さんのモーデン様が間もなく戻られるのです。貴女の地所のこと同様、貴女ご自身のことにつきましても、正当な処置が講じられますよう、あの方が取り計らってくださるのは疑いのないところです。そして、たくさんの幸せな日々をこれからも迎えることがお出来になるのですし、依然としてたくさんの善を施していただくことにもなるでしょう。もしも、避けることの出来ない災難を誇張して考え、罪深いまでの失意を招いたりなさらなければですが ……

それにいたしましても、無慈悲なばかりか、尊敬にも値しない縁続きの方々との和解を切望するお気持ちがなおも続いておりますのは、一体何故なのでしょうね。皆さんのご意思は、争いを解消せずにおくことで利益を得ている、どこまでも貪欲なお兄様に支配されているのです。今では私にもはっきりいたしましたが、卑劣極まりないあの男がすべての企みの基盤といたしましたのは、この度を越した熱意だったわけです。あの男は看て取ったのです。まったく道理に合わないほどの願いを込め、貴女が和解を渇望しておられることをですわ。そのお考え、その願いが、極めて望ましいものであることはお認めいたしま

（ア）本巻百四十一頁末の注を参照のこと。

しょう。ただし、ご家族の方々がクリスチャンになっておられたのなら、あるいは、たとえ異教徒であっても、憐れみの心を持っておられたならの話ですけれどね。

この短い手紙は［短いものにせざるを得なかったのです］ロジャーズの「倅」…　私たちはそんな呼び方をしているのですが　…　の手でお届けすることにいたします。ハムステッドの貴女のところへ使いに出しました例の男で、独断的なところはございますが、悪気のない田舎者です。どうかお目通りを許してやっていただきたいと存じます。貴女のご様子、貴女のお具合のことを報告してもらうためですわ。

ヒックマンさんに貴女の付き添いをしてもらうべきなのでしょうが、あの人の行動のすべては、私自身の動きについてもですが、あの忌まわしい卑劣漢に見張られているかもしれないのです。実は、あの男の動きも、私の手の者によって監視されているのです。と申しますのも、正直な話、私の猛烈な非難の手紙をあの男が横取りしましたのを承知しております今では、あの男の企みや復讐のことが非常に気掛かりになるものですから、あの男が、目を覚ましております時の不安の種になるばかりでなく、夢の中にも出てくるような有り様だからです。

＊　＊　＊

たった今、私の熱心な懇願もありまして、貴女へお便りいたしますこと、そして、貴女のお手紙を受け取りますことを母が許してくれたところです。ただ、譲歩するに当たりましても、こんな条件を付けておりました。つまり、貴女のものはヒックマンさん宛の封書にしていただかねばならないというのです［想像いたしますに、私に対しましてあの人が重きをなすようにするのが目的のように思われます］。また、さらには、私たちが筆にいたしますものすべてに母が目を通すという条件も加えたのです。母がある人に話し、その人が私に繰り返してくれたことですが、「女の子たちがあることに執着している時には、母親のほうでも、出来ることでしたら、反対するよりは子供たちと手を結ぶようにするのが良いのです。そうすれば、依然として手綱を自分の手に握っておく望みもあるわけですからね」というのです。

貴女が下宿しておられるところの人たちはどんな人たちなのでしょうか、是非ともお知らせください。もっと安全な下宿、あるいは、もっと貴女に好都合な下宿のどちらかを教えていただくよう、タウンゼンド夫人に行っていただきましょうか。

どうか、ロジャーズにお手紙を預けていただきたいのです。お返事をいただきに、ご都合の良い時にお伺いするはずです。

さようなら、大好きなあなた。同じような不幸な状況にありました時に、この私をよく元気づけてくださいましたように、どうかご自分を慰めていただきとうございます。

貴女のもの

アナ・ハウ

手紙　五十二

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

七月十三日　木曜日

大好きなハウさん、この邪悪な男の復讐のことを心配なさっておられますが、元はと言えば私がそのきっかけとなっておりますこと、はなはだ気に掛かる次第です。一体どこまで累を及ぼすものなのでしょうね、私の過ちというのは。

どのようなものであれ、あの男が貴女とかヒックマンさんとかに対する策謀に取り掛かっているのを知りました場合は、あの男が罪状の認否を問われることになります、その最初の法廷におきまして、あの男の起訴に同意いたしますことを、間違いなくお約束いたします。私には最後まで耐え忍ぶことが出来ないのは確かでしょうけれどね。

その問題につきましてのお母様の論拠の正しさはお認めいたしますが、私の場合に限りましては、控えるべき事情があるように考えていると申さねばなりません。もっとも、貴女が懸念しておられるのよりも軽微な事件の場合でしても、あの男を告訴するために出廷いたしますのは遠慮したいのです。すでにお話しいたしておりますが、この理由につきましては、そのうちにもっと詳しく取り上げる日もまいりましょう。

お使いの人が今、確かに私を見て行きました。ハムステッドで仕掛けられましたペテンのことを話し合いました。残念ながら、こう申して当然なのでしょうが、あの気の毒な若者が大変に単純で、大変な自惚れ屋さんでなかったならば、あんなにも不様な騙され方はしなかっただろうということです。ベヴィス夫人にいたしましても、同じ言い訳が出来ましょう。気立ての好い、軽率な女性でして、この浅はかな二人を利用した男のような、あんなにも卑劣で、あんなにも尤もらしいペテン師とは、日頃から言葉を交わすこともあまりなかったのです。

人目に付かずにいられるということでは、今おりますところ以上の場所はないように考えます。安全なように思うのです。私の冒す危険と申しますと、朝の礼拝式への行き帰りだけですし、それもすでに二、三度敢行したことなのです。一度はリンカンズインチャペルで、十一時のことでした。もう一度はフリート街のセントダンスタン教会で、午前七時のことでしたが(ア)、二度とも駕籠でまいりました。また、二度、朝の六時にですが、コヴェントガーデンにございます、近くの教会での礼拝式に出席いたしました。私が逃げ出してまいりました、あの邪悪な恥知らずたちは、私を捜しに礼拝式などへ、とりわけ、こんなに早い礼拝式にはやって来ないだろうと思うのです。それに、後のほうの教会では、身を隠すためなのですが、一番人目に付きにくい座席を選んであるのです。また、変装のためですが、少しばかりお金を割きまして、普通のガウンを誂えることも出来ましょう。モブキャップで顔半分が隠れるようにするのです。今では、私、自分の外見にはすっかり無頓着になっているのですよ。こざっぱりとして清潔であること。私が留意いたしますのはその点だけなのです。

私が下宿しております家のご主人の名はスミスさんで、手袋を作り、販売もしている人です。奥様がお店番のほうをしております。ストッキング、リボン、かぎタバコや香水も商っております。落ち着きのある年配の婦人で、率直な心をした分別のある人です。ご主人は律義な働き者です。そして、この人たちはお互いによく理解し合って暮らしているのですが、これは、私にとりましては、お二人の心の正しさの証ということになります。と

(ア) セントダンスタン教会での午前七時の礼拝式は、その後廃止された。

申しますのも、夫婦の折り合いが芳しくない場合、それは、気質の点であれ、品行の点であれ、何か至らない点が相手にあることに互いに気づいている印だと思うからです。つまり、もしも当の夫婦ばかりか世間の人たちも気づくようなことになりますと、夫婦がお互いを好きになれないのと同じ程度に、世間の人たちもその夫婦のことを好きになれなくなってしまいますような、そんな欠点があることにです。その行動の全体を通しまして、お互いに咎め立てをすることになるような、故意の、あるいは、計画的な邪悪さが、夫のほうにも妻のほうにも一切ない結婚というのは、それこそ幸せなものだと言えましょう。と申しますのも、悪い心を持つ人間でさえも、立派な心の持ち主に対しましては、尊敬の念を抱くものですからね。

質素ながら清潔な家具を備えた、二階のこざっぱりとした二部屋、これが私のものでして、片方の部屋を皆さんは食堂と呼んでおります。

もう一階上には、大変立派な未亡人の下宿人がおります。ロヴィック夫人というお名前で、財産には恵まれない方なのですが、信心深さや分別、そして、理解力を身につけておられるということでは、スミス夫人も保証しておりましたが、お知り合いの身分の高い人たちから大変尊敬されているとのことです。この方とは親しくお付き合いしたいものと考えております。

思いやりに溢れる、そして、時宜に適ったご助言とお慰めをいただき、本当に有難うございました。悲観したりいたしませぬよう、宗教的な意味合いで申すのですが、さらなる神の恩寵をいずれ授かるものと考えております。意思の点でも、あるいは、無分別さの点でも、どちらも私の災難の一因になってはいないという、貴女がくださった慰めのお言葉を我が身に当てはめることが出来ますだけに、なおさらそのように思うのです。とは申しながら、変わることのない尊敬の念をもって愛しておりますのに、その身内の者たちのほうでは和解に応じてくれませんし、新たな暴虐行為の心配もございます［どうやら、この悪人はまだ私を休ませてはくれないのでしょう］。保護してくださる人はおりませんし、若輩者で、女の身でもあります。それに、世間知らずなことからも、無礼な言動に晒されてしまいます。ひどい仕打ちをされて当然だという接し方はいたしませんでしたのに、相手の男性から辱めを受けたという意識に加え、世間の憤慨を招きましたことへの数々の思いもあるのです。こういったことすべてが一緒になりまして、ある結果を引き起こすことは疑いございませんが、それは、私にとりましては、決して望ましからざるものでもないのです。ただ、時間は掛かるものと思われますが、おそらくそれは、生まれついての丈夫な体質のせいでしょうし、厚かましくもそのように考えておりますが、信条に由来することでもあるのです。そして、この信条は、その時がまいりますと、また、十分な黙想を加えることによりまして、〈すべての世俗的な失望感を超越したところへ〉私を引き上げてくれるだろうと思うのです。

現在のところは、ひどく頭が混乱しております。私がその手中に放り込まれてしまいました、あの破廉恥な者たちの邪悪な術策によりまして、この頭に、そして、この心にも暴行が加えられましてからというもの、確かに、少しでも頭がはっきりしてくれたことはなかったのです。

私にはさらなる葛藤があるに違いございません。自らの立場を受け入れますのには、十分に屈服し切っていない自分に気づくことが時々あるのです。そんな葛藤も、試練のため

のものとして、生じるままに歓迎したいと思います。とは申しましても、現世に関します部分がこんなにも不思議な、そして、文字どおりの形で実現してしまいました父の呪いのことが …… それでも、気持ちがこの上なくしっかりとしております時には、私には考えられなく …… でも、イサクとヤコブとエサウの物語、そして、エサウに予定されておりました祝福を、リベカが（ヤコブのために）騙し取る話は、何のために創世記の二十七章に出ているのでしょう。私は覚えておりますが、そこから引き出されます教訓を、父はたくさんの論拠を交えまして、自分の子供たちによく教え込んでいたのです。ですから、自分の申し渡しました呪いに大きな重みがありますことを、少なくとも父のほうでは信じているはずなのです。それを取り下げてくれますよう、私が切望してはいけないのでしょうか。これから後に父が、私のためを思い、取り下げずにおりましたことを嘆いたりしないためにもです。

差し当たり付け加えておくべきことといたしましては、私たちへの寛大なご処置につきまして、お母様にお礼申し上げますことと、ヒックマンさんにはくれぐれも宜しくお伝えいただきたいということ、そして、次のことを信じていただきたいというお願いだけでございます。つまり、私の大好きなお友達、そして、自分自身よりももっと大切な、私の分身とも言うべき貴女（だって、今では、私自身はどうなっているというのでしょう）、私は最期の時まで、そして、出来ることでしたらその先までもですが、左記のとおりの人間なのだということをです。

感謝の念と愛情とに溢れる、貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　五十三

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

七月七日　金曜日

返事をすべき貴公の手紙が、三通一緒に目の前にあるが、いずれの中でも、貴公は俺の沈黙に不平を唱えている。そして、その一通においては、毎日、あるいは、少なくとも一日おきに、貴公に宛てて俺が何か書きなぐらないことには、貴公は生きて行けないなどとほざいているのだ。

ならば、ジャックよ、死にたければ死ねば良いのだよ。筆を執る気分などになれると思うのか、俺が。筆にする価値のある唯一の主題を失ってしまったというのにだよ。

今一度、我が天使、我がクラリッサのところへ導いてほしいのだよ。その時には、手紙を届けることにしよう。少なくとも、手紙の一部を書くことにする。毎時間な。我が心を魅する者が口にすることのすべて、それを俺が書き留めることにするさ。動作の一つ一つを、あの愛らしい肢体が呈する姿のすべてを、また、あらゆる表情を描き出すように努めよう。そして、彼女が沈黙している時は、彼女の胸の内を貴公に知らせるように努力しよう。それがどんなものであるのか、あるいは、俺としては、どんなものであってほしいのかをな。従って、彼女が傍にいてくれれば、話題に事欠くことなど決してないのだよ。彼女を失った今、俺の心はその全体が空白状態なのだ。周囲の被造物のすべてが、頭上や足

下の自然の要素が、そして、俺の〈眺める〉もの何もかもが（俺に〈楽しめる〉ものなどは、何一つとしてないわけだから）、彼女なしでは空白なのだよ。

あゝ、戻り給え、戻り給え、我が魂を魅するただ一人の者よ。敬慕して止まぬ、そなたがラヴレースの元へと戻り給え。そなたなくしては、光が何であろうか。大気が何であろうか。都会が、田舎が、すべてが何であろうか。光も大気も、喜びも調和も、思うに、そなたの一部に過ぎないのだ。そして、それらすべてが一つの語によって表され得るとするなら、その語は〈クラリッサ〉であろう。

されば、戻り給え、あゝ、我が愛しのクラリッサ。今一度戻りたまえ。そなたがラヴレースを祝福せんがために。ラヴレースも今は、そなたを失ったことにより、ないがしろにして来た宝石の価値に気づいているのだ。そして、毎朝起き出しては、ただただ、自分以外の者すべてに光を注ぐ太陽を呪うだけなのだ。

∴

∴

それにしても、ジャック、愛しの逃亡者がだれの目にも触れず、何の消息もないというのは、俺にとっては驚くべきことだな。彼女は実にお粗末な陰謀家なのだから（陰謀というのは彼女の得手ではないのだよ）、もしも、俺が自由の身であったなら、今頃はもう彼女を捜し出していたはずだと確信している。もっとも、俺が雇ってロンドン界隈や近隣の村の周辺、そして、ハウ嬢の近辺に配置したスパイの面々にしても、これまでのところ成果を上げられずにいるのだよ。ただ、卿は相変わらずひどく弱っていて、意気消沈したままなものだから、傍を離れるわけにも行かない始末なのだ。今なお危険な状態にあると思われる人間の意向に逆らったりしたくはないしな。というのも、もしも卿の痛風が、卿をダウンさせた今、まっとうなボクサーのように、アッパーカットを一発お見舞いすれば、それだけで卿は万事休すということになるからだよ。それに、ここでは［猫可愛がりしてくれるのも迷惑千万てところだよ。はなはだしく間の悪い話だ］、ぶっ続け何時間も俺を傍に座らせ、俺のしでかした悪事の話で慰めてもらおうというのだ（病人向けとしては、とんでもない娯楽だよな）。それでいて、痛風の発作がある度に、チャプレンと一緒になってのべつ祈っているのだ。それにしても、鼻に掛かった声でブツブツと応唱した後、神様と折り合いがついたと考えているみたいに、さも満足げな溜め息とか呻き声とかを漏らしてみせるというのに、俺の武勇談を聞く段になると、欲望も新たに、また耳を傾けてくるというのだから、そんな人間の宗教に対する考え方というのは、一体どうなっているのだろうな。腹を捩って笑いながら、話を促してくるし、俺のことを呆れた奴だなどと呼んで見せるのだが、それも、自分の親族に当たる男のことを少なからず愉快に思っているのが分かるようなロ調なのだよ。

老いぼれ貴族も若い頃には遊び人だったのであり、その苦痛を今味わっているというわけだ。悪事に向かって〈突進〉するというよりは、むしろ〈紛れ込む〉ような、人目を忍ぶ遊び人なのだが、世間の評判を気にしてのことだろう。あるいは、むしろ、露見することや確証を与えるのが怖いのだよ。というのも、こういった手合いは、ジャック、本当に評判を尊重してはいないのさ。一度も手に入れたことのないものに金を支払い、自ら手を下す企て、つまり、果たし合いを目前にするところまで、あるいは、法廷の主役と目され

る栄誉を目前にするところまで導いてくれる、そんな企てのもたらす楽しみへと立ち上がる勇気も、決して持ち合わせてはいないものなのだ。

　このような年老いた偉丈夫が墓穴 … もっと前に掘ってあって、卿の体で塞がっていてほしかったのだが … その墓穴へと落ちて行くのを目の当たりにするとは … 痛さに悲鳴を上げ、力が入らないと愚痴をこぼしながらだが、それでいて、同時に、革みたいな顔面をくしゃくしゃにし、恐ろしい笑顔を作って見せるのだ。そして、若い遊び人を小粋な野郎と呼び、以前、イタリアの去勢男〔二〕に向かってよくやっていたように、その若者にアンコールを求めるのだ。昔からの習癖とはいえ、何とも馬鹿げた、何とも異常な執着ぶりではないだろうか。

　老いぼれ貴族の言い方では「慰み」というわけだが、俺がそんな話をしてやる時には大抵、二人の従姉妹が同席しているのだよ。聞き手や拍手喝采を送る者が語り手よりも多くないような話というのは、恐ろしくダラダラと長引くことだろうな。

　拍手喝采を送る者たち …

　そうなのだよ、ベルフォード。もう一度言うが、拍手喝采を送る者だ。というのは、この従姉妹たちも事実に関しては時々俺を責めて見せるのだが、俺の手口や工夫の才、豪胆さは称賛しているのだ。それに、他の者たちが〈非難〉と呼ぶものを、俺は〈賛辞〉と称しているわけであり、いつもそうしてきたのだ。それゆえ、進取の気性に冷水を注ぐことになる、例の〈恥〉というやつも、ずいぶん若い頃に投げ捨ててしまったのだよ。

　溌剌としているのだな、この従姉妹たちは。活気に溢れ、機知もある。昨日などは、語り聞かせたある企てのことで、シャーロットが俺を罵るものだから、次のように言ってやったのだ。俺とあの娘との血の繋がりが近すぎやしないかどうか、その点を何度か考えてみたということ、また、一、二ケ月の間、あの娘を熱愛するわけに行かないのだろうかということが、かつて俺には議論の余地のある点となっていたし、俺がそんな行動に踏み出そうとしている矢先に、別の愛らしい小娘が現れ、俺の気を逸らしてくれたわけだが、そのほうが、おそらくあの娘には幸運なことだったのだろう、といったことをだ。

　あの三人は両手を差し上げ、天を仰いだよ。皆で一斉にだ。だが、俺は看て取ったのだよ。俺に向かって非難の叫びを上げたとはいえ、娘たちがこの率直な言い方にさほど腹を立ててはいないのをな。我が愛しの君ほどにはということだが、こちらのお嬢さんのほうは、極めて曖昧な仄めかしにも怒り出すことが分かって、俺としても、その勘の鋭さには驚いているくらいなのだ。

　シャーロットには次のように言ってやった。この発言に接して見せた、笑みを交えた怒りのことを、あの娘は真面目なもののように装ってはいるが、血縁関係にあるという障害から彼女の良心を解き放すことが出来さえすれば、二つか三つの策を講じることはあるにしても（実は、気の利いた趣向をあの娘以上に感心してくれる者は他にいないのだよ）、それ以上の必要はなかったはずだ、とな。

　あの娘は大いに腹を立てている振りをして見せた。妹のほうでも、姉のためにそうして見せるのだ。俺はあの娘に言ってやったよ。ずいぶん真剣な様子だが、まるで、俺のことを本気と考え、試してみる気になったみたいだぞ、とだ。こういった場合、単刀直入な台詞のほうが、漸進的な行動よりも女性にはショックが大きいものだ、ともな。そして、パティに向かって、君にも同じく大きな関心を抱いているのだから、姉さんに特に目を掛け

たからといって機嫌を損ねてはいけない、と言っておいた。

俺の例の無頓着なやり方だが、イタリア風な態度、半ば奪うようにして得た俺からのキス、可愛い従姉妹それぞれが見せた、称賛のつもりの肩をすくめる仕草、それに、横腹をゆすって笑いながらだが、何とも呆れ果てた奴だという老いぼれ貴族の台詞もあって、われわれ全員は仲直りをしたというわけだよ。

どうだろう、ジャック、これを手紙と受け止めてくれるかな。それとも、駄目かな。長いことは確かだ。話題もなしに、用箋一枚を埋め尽くしてしまったのだからな（速記で書かれたものではないのだよ、実際の話）。俺の下男にこれを届けさせよう。ロンドンへ向かうところだからな。こんなひどいもので大目に見てもらえるのなら、すぐにもう一通送ることにする。

手紙　五十四
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

七月八日　土曜日　午前六時

俺の眼前にある貴公の三通の手紙の一つで、貴公はこう尋ねている。俺の滑稽なやり方でだが、貴公をもてなすべき目新しい事柄、慰みとなる事柄は何一つないのか、とな。そして、スコットランド風に言えば〈*narrate*（物語る）〉ということになるが、語るべき話題が最も少ない時に、最も大きな慰みを俺はもたらす、とも貴公は言っている。なかなか結構なお世辞だよ。貴公自身に向けたにせよ、俺に向けたにせよな。実際、両方に当てはまることだな。ということは、俺の頭が空っぽなのと同様、貴公の心も虚ろなことを示しているわけだよ。だが、貴公には想像出来るかな。この天晴な女性も、俺にとってはすべてではないということをだ。掛け替えのないものではないということをだよ。ただ、俺も彼女のことを考えるのは恐ろしいのだ。そんなことをすると、次には、俺の一切の企みが露見することになってしまいそうにも思うからだよ。

老いぼれ貴族もハーロー嬢のことばかり口にしているし、従姉妹たちも同じだ。あれだけ多くの取り柄があり、美貌と財産に恵まれ、そして、卿に言わせると、あれほどの良家の出ということだが、卿としては、俺がそんな女性に対して卑劣な振舞いに出ることを思い描くような下郎［卿の殿様風言い回しの一例ってところだな］ではないことを望んでいるというのだよ。だが、俺も卿に話しているのさ。これは触れてもらっては困るところであり、極めて感じ易い点だということをだよ。要するに、俺の泣き所なのだ、とな。そして、そのように情け容赦のない外科医殿の手中にこの身を委ねた場合、あまりにも手荒にその部分を扱いそうで心配になるのです、とだ。

卿は狂った頭を横に振っている。われわれの仲が万事順調とは言えないと考え、俺が彼女を妻として卿に紹介するよう望んでいるのだ。そして、以前から申し出のあったことの他にも、どれほど素晴らしいことをしてくれるか、最初の子供が生まれた時には、どんなプレゼントをしてみせるか、そんなことを頻繁に話してくれるのだ。だが、そんな事態になる前に、卿の財産のすべてが俺の手に渡るよう俺は希望しているのだ。希望したからといって、ジャック、別に害にはならないのだよ。M卿も言っていることだが、「希望がなけ

れば、悲嘆に暮れる」というわけだからな。

∴　　∴

真夏の八時だというのに、このぐうたらな小娘どもときたら（健康そのものだというのに）、まだ朝食に降りて来ないのだ。若い上流婦人にしては、何ともけしからん不作法ぶりだよ。ベッドがひどくお気に入りだということを、そして同時に、どこへ行けばモノに出来るかということを放蕩児に教えているのだからな。だが、あの連中を懲らしめてやろうと思う。朝食を老いぼれた叔父と取るようにさせるのだ。そして、金でも賭けているみたいに、互いに欠伸のし競べをさせてやるのさ。その間に俺のほうは、フェートン〔二二〕を駆ってアンブローズ大佐のところを訪ねることにする。昨日、朝食とディナーの両方に招かれたのだよ。ヨークシャーから来た二人の姪のことでなのだが、評判の美人で、ここ二週間ほど大佐のところに滞在しているのさ。そして、大佐の話では、俺に会いたがっているというのだ。従って、ジャック、すべての女が俺から逃げ出すわけでもないということだよ、有難いことに。愛しの逃亡者もひどく恩知らずなわけだから、ひとつ俺様の心のお許しをいただいて、別の美女を使って彼女をこの胸から追い出すことが出来ればと願っている。だが、彼女の埋め合わせになってくれる者がどこにいるというのだ。クラリッサ・ハーロー嬢の後釜として、この心の中に場所を占めることの出来る者など、果たしているのだろうか。

戻った時に話題が見つかるようであれば、貴公の意向に沿うためにも、続きを書くことにしよう。

フェートンの用意が出来た。すぐに降りて来るという伝言を従姉妹どもが送ってよこしている。そこで、意地悪をして、出掛けてしまおうと思うのだ。

土曜日　午後

大佐のところにお邪魔し、大佐の夫人、それに、姪御さんを交えて食事をしたのは確かだ。しかし、午後をあの連中と過ごす気にはどうしてもなれなかった。二人のお嬢さんの容姿や顔付きには、比較対照を促すものがたっぷりとあった。個々の目鼻立ちがしばらくの間俺の注意を引くのだが、それらとて、我が魂を魅する者を見つけ出さねばという焦りを募らせるだけの役目しかない。容姿にせよ、態度にせよ、考えにせよ、彼女と並び立つ者はこれまで一人としていなかったのだ。考え方や談話の仕方を比べてみると、俺は心が怯んで吐き気を催したよ。才気をひけらかすのだが、喜ばせようという気持ちに度を越してわざとらしいところがある。それぞれ自分のことで上機嫌だ。二人とも大口を開けて気取っているが、主たる美点とばかりに、真っ白な歯を見せるためであり、香しく漏れる息を保証し、愛の睦み合いを誘おうというのだな。また、同時に、無言のうちに思い巡らしてもいるのだよ。清々しさで劣ると、横柄に仄めかされた息遣いのことをな。

かつての俺なら、こんな連中を我慢することも出来たことだろう。

俺があんなにも早く辞去して平気なことに、連中は落胆している様子だった。ただ、その落胆ぶりを連中の自己礼讃と同程度に、俺への特別な気持ちから来るものと考えるほどの自惚れ心は［我がクラリッサが俺の自惚れ心を治してくれたのだ］、今の俺にはないのだ

よ。連中は俺のことを美の目利きのように見做していた。その種の人間としての俺の注意を惹くというのは、連中にとっては光栄な話だったことだろう。しかし、あまりにも気取っているのだ。あまりに浅知恵で、ただ上っ面だけの美女なのだ。自分自身を見詰めるにしても、鏡で見ることの出来る姿以上に内部へ目を向けたためしはないのさ。それに、連中のは実物よりも良く映る鏡だったのだよ。というのも、俺の考えでは、人の言いなりになるような顔付きをしているし、生気にも欠けるのだ。ただ、目付きのほうは、男を虜にせんものと虎視眈々と狙っており、また、他の者たちが注視してくれるよう求めてもいるのだが、自分たちがそうするのを黙認してもらうためだ。少しばかり骨を折ることで、連中に活気と情熱を与え、その顔の造作の一つ一つに輝くばかりの知性を添えてやることも出来ただろうと確信しているのだ。だが、我がクラリッサ、あゝ、ベルフォードよ、我がクラリッサのお陰で、俺は他のすべての美に目を留めること、そして、感じ取ることが出来なくなってしまったのだよ。彼女を捜し出して来てくれ。俺が筆にするに値する話題としてだ。でなければ、これが最後の便りとなるだろう、俺からはな。

貴公のラヴレース

手紙　五十五
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

七月九日　日曜日　夜

さて、ジャック、たっぷりとあるぞ、話すことが。我が愛しの逃亡者に対する犯罪行為のすべてに関し、俺は裁きを受けている最中なのだよ。というのは、今日ここに、五時頃のことだが、セアラ・サドレアー夫人とベティ・ローランス夫人とが、それぞれ六頭立てのチャリオットで到着したのだ。亡夫の財産を受け継いでいる未亡人というのは、供回りも従えた完全装備の馬車が大のお気に入りで、馬六頭に半ダースの騎手が揃わないことには、十マイルの旅も出来ないのだな。

時間をもてあましていたので、ディナーの後礼拝式に出た。ハンサムな男だって、綺麗な娘たちと同様に、眺められるのを好んでも構わないのじゃないかと、俺はそう思ったのさ。礼拝が終わると、ウォーントン少佐に出会い、六時過ぎまでは戻らなかった。ここの中庭に入り、馬車や召使たちが中庭一面に散らばっているのを目にして肝を潰したよ。これらの持ち主が俺の得になることのためにやって来たのでないのは確かだと、俺はそんなふうに思ったのだ。

セアラ夫人としては、すぐに分かったことだが、ベティ夫人に駆り出されてのこの訪問というわけだ。ベティ夫人のほうは元気溌剌たるもので、自分自身のことや自分の仕事を差し置いても世話を焼こうとするのだよ。ただ、M卿の回復祝いというのが「その両方の点で、意地の悪い連中というわけだ」、公の用向きだ。しかし、俺が不在の時に来たこともあって、俺のことが連中の主たる話題となったのだな。そして、俺と敵対するよう、互いの心を固めさせる機会を捕まえたというわけなのさ。

俺が執事の部屋の傍を通った時に、サイモン・パーソンズがこのことを耳打ちしてくれたのだが、連中は大声で話していたらしいのだな。そして、あの男はプリチャード爺さん

相手に、いくつか収支決算の報告をしているところだったのだ。
それでも、俺は敬意を表すため、夫人たちのところへ急いだよ。貴公も承知のことだろうが、他の者たちが務めを果たさないからといって、われわれが務めをないがしろにすることの言い訳にはならないからな。

［そして今、俺は裁きの場へと赴く］

俺は迎え入れてもらったのだが、恐ろしく真面目くさった顔付きをしているのだよ、連中は。古代からの生き残りのような二人は、ただそのオールドミス風の頭を下げ、会釈をしただけだった。いつもにも増して憂鬱そうな顔で、その深く皺を刻む額や落ち窪んだ頬には、老婆の輪郭のすべてが強く現れていた。「ご機嫌いかがですか、あなた」「ご機嫌いかがです、ラヴレースさん」という台詞とともに、全員揃って、互いに目を向け合うのだが、「さあ、お先におっしゃって」「どうぞ、そちらこそ」と言わんばかりの様子だ。連中としては一刻の猶予もしないつもりらしいのだよ。
それに対して俺がなすべきことと言えば、連中の態度が女そのものであったのに負けないよう、精々男らしい態度を装うこと以外にはなかったね。「ご機嫌よう、マダム」と、ベティ夫人に挨拶し、セアラ夫人に向かっては、「ご機嫌いかがですか、マダム。外出なさったのを拝見いたしまして、嬉しく思います」と言っておいた。
俺が席についた。M卿はひどく陰気な顔をしていた。両手の指を組み合わせ、痛風が癒えたばかりの親指を互いにクルクル回しているのだ。土色の顔とぎょろ目を床や暖炉、自分の二人の妹、そして、親戚である二人の女に代わる代わる向けるのだが、俺のほうは一度だって見てもらえないのだよ。
そこで、俺は頭に思い浮かべ始めたわけだが、ずっと以前に貴公に話した阿片チンキと濡れた布のことをだ。そして、決して俺の利益にはならない優しい心根のことで、我と我が身に疑問を持ち始めた次第だよ。
「とうとうなのね、ラヴレースさん　…　ねえ、ラヴレースさん、エヘン、エヘン、残念ですよ。とても残念ですわ」と、セアラ夫人のためらいながらの台詞だ。「望みは一切ないのですもの。仮にも貴方が　…　」
「おや、何事でしょうか、マダム」
「何事でしょうか、ですって。そう、ベティ夫人がハーローさんからお手紙を二通いただいたのですがね、そのお手紙で、私たちにも事の次第が分かったということです。貴方にとっては、女性というのはすべて同じなのですか」
そのとおりですよ、と答えても構わなかったのだ、俺としては。プライドゆえに生じる違いを別にしますとね、とな。
そこで、連中は俺に向かって、一斉に声を揃えて切り出したのだ。「ハーローさんほどのお方なのですよ」と、一人が叫ぶと、「とても心が広く、良識を備えておられるご婦人ですわ」と、もう一人が言う。嫁入り前の牝猿二匹は、彼女の見事な筆跡を眺めながら、「何て綺麗な字をお書きになるのでしょう」と感心している。彼女の美点が俺を咎める種になるわけだ。「こんなことばかりなさっていて、最後は一体どんな結果になるとお考えなのかしらね」と、セアラ夫人が叫んだ。「まったくもって、とんでもない仕業だ」と、殿様が大声

で喚く。肉のたるんだ顎を震わせているのだが、その顎というのは、ちょうど老いぼれ牛の喉袋よろしく、両の肩に垂れ下がっているのだよ。

俺としては、この一斉攻撃に応戦する言葉を詠ずるべきか唱えるべきか、判断に苦しんだのだ。そこで、「まあまあ、そう慌てずに、ご婦人方。お一人ずつに願います。言い分も聞いてもらえずに追い詰められるようなことはないものと存じますがね。ひとつ、その手紙を見せてもらいたいものですね。どうか、拝見させていただきましょう」と頼んだ。

「さあ、どうぞ。そちらのが先に来たものですわ。最後まで読んでご覧なさい。お出来になるのでしたらね」

俺は魅惑の君からの手紙を開いて見た。六月二十九日木曜日、つまり、われわれの婚礼の日に予定された日の日付で、ベティ夫人に宛てて書かれたものだ。文面からすると、俺としては大いに嬉しかったのだが、愛しの君は生存していて具合も良く、それに、元気溌剌としているようだ。ただ、返事の送り先の宛名がすっかり掻き消されていて、読み取ることが出来なかったのは、まことにもって無念な話だ。

その中で彼女は、ベティ夫人に三つの質問をぶつけている。

まず第一には、六月七日付の夫人の手紙についてだ。俺の結婚式を祝うものだが、その筆を執るベティ夫人の労を、親切にも俺が省いてやったものだよ。俺の実に親切なところだと、自分ではそう考えているのだがね。

また、「夫人と夫人の姪に当たるモンタギュー嬢の一人が例の訴訟の件で上京する予定になっていたのかどうか」についてだ。それから、「それゆえに、二人は実際に上京し、その後、ハムステッドへ向かったのかどうか」、そして、「二人の訪問相手である若い娘を、そこからロンドンへ連れて来たのかどうか」といったところが、第二および第三の質問の内容というわけだ。

ちょっとばかり詮索好きだよな、愛しのお茶目さんも。それに、こんなことを訊いたところで、どんな得があると思ったのだろうな。ただ、女というのは好奇心で、底無しの好奇心でムズムズしてしまうものなのだよ。だが、好奇心が女に利益をもたらしたためしはあるのだろうか。女が詮索するのは、きっと心配事がある時なのだ。卿が言うように、諺にあるのだよ。「徒に恐れるのはなお危険」とな。つまり、女の恐れていることが概して起こりがちなのは、大抵の場合、恐れるべき理由が存在するからなのだろうな。

確かに、好奇心こそがこういった質問をする唯一の動機なのだと、彼女も認めているのだよ。彼女が言うには、俺の利益のために質問がなされているのでないことは夫人にも察しがつくだろうが、ただ、返答によって俺に害を及ぼすことはないし、また、彼女の利益となるわけでもなく、俺が彼女に向かってひどい嘘っぱちを並べていたのかどうか、その点を知ることになるだけだというのだ。彼女の問い合わせの趣旨を平たく言えば、そういうことになるな。

「さて、マダム」と、俺は精一杯の冷静さを装いながら口を開いた。「奥様のお返事のほうはどのようなものであったのか、ひとつお尋ねしたいものですね」

「ほら、これが写しよ」と、俺に向かってそいつを投げてよこしたのだが、それがすこぶる無礼な態度だった。

この返事は七月一日の日付になっていた。令嬢に対しては非常に懇切丁寧だが、哀れな縁者にとっては、はなはだパッとしない返事なのだよ。血肉を分けた自らの親戚をこうも

簡単に見捨てることが出来るとはな　…　夫人は「こんなにも美質に恵まれた女性との縁組を、我が一族全員がどれほど誇らしく思うことか」と、令嬢に語っている。天使のごとき女性として、俺が彼女をいかに崇拝しているか、夫人のほうでもその点に触れてくれているのは、俺に対する正当な扱いであるし、また、俺の魂のためにということの他に、数え切れないほど多くのことのためにもというわけだが、「俺を夫として受け入れるだけの思いやりを示していただきたい」と、彼女に懇願しているのだ。そして、令嬢の質問に答えているのだが、その答え方については、貴公の想像に委ねることにするよ。

「ところで、マダム、お願いですが、令嬢のもう一通のほうをお渡しいただけますでしょうか。奥様への返信と拝察いたしますが」

「そのとおりだ」と、卿が口を開いた。「だが、君に二つ三つ質問をさせてもらいたいのだよ、それを読む前にな。手紙をこちらに渡しなさい、ベティ夫人」

「どうぞ、閣下」

そこで、眼鏡が掛けられた。そして、卿の頭が文面のほうへ傾き、「素晴らしく綺麗な文字だ。このお嬢さんが才女だというのは、私も何度となく耳にしていたことだ」という台詞が漏れて来たのだよ。

そういうわけで、ジャック、卿の賢明なるコメントと質問とをそっくり繰り返すと、この無慈悲な手紙の内容を貴公に紹介することになるという寸法だ。

「〈七月三日、月曜日〉［と、卿が読み上げるのだ］えーと、先週の月曜日だな。そんなに前のことじゃないな。〈七月三日、月曜日。奥様へ。御免蒙りましたままでいるわけにもまいりません〉フムフム、フムフム、フムフム［はっきりしない言葉を呟き、途中を飛ばして］、〈白状いたさねばなりませんが、マダム、縁続きとなります栄誉が　…　〉」

ヒョイと、眼鏡が外された。「さあ、話してもらおうかね、君〜い。このお嬢さんは、この世の親しい人間一切を、君のために失ってしまったのではないのかね」

「彼女には実に無慈悲な身内がいるのです、閣下。それはわれわれ全員が承知しているところですが」

「しかし、君のためにその者たちすべてを失ったのではないのかね。どうかな」

「そのようです、閣下」

「結構だな。君がその点を否定するほどの卑怯者でなくて、私も嬉しいよ」

再び眼鏡が掛けられた。「〈白状いたさねばなりませんが、マダム、お家柄と同様に、徳の高さで世に知られましたご婦人方と縁続きとなります栄誉が　…　〉実に見事なもんだよ、まったく」と卿は言い、こう繰り返していた。「〈お家柄と同様に、徳の高さで世に知られておりますことが、ラヴレースさんの口説きの言葉に耳をお貸しする動機といたしまして、最初は決して小さなものではなかったということです〉」とだ。

「威厳がある。生まれついての威厳があるのだよ、このお嬢さんには」と、卿が叫んだ。

セアラ夫人「私たち一族の華ともなってくださっていたことでしょうね」

ベティ夫人「本当にそうですわね」

ラヴレース「敢えて申せば、王室にとってもということですね」

M卿「だとすれば、一体何という　…　」

ラヴレース「宜しければ、先をお読み願います、閣下。お読みいただくにつれ、益々敬服の念を誘うというのでなければ、彼女の手紙とは申せません。さあ、シャーロットもパ

ティも、耳を傾けてもらいたい。先をお読みください、閣下」

シャーロット「呆れるばかりの図太さだこと」

パティのほうでは、その柔和なまなざしを天に向けるだけだった。

M卿［声に出して読みながら］「〈それも、口説きが功を奏しました暁には、奥様の好意的なご意見に与れますよう、私の力で出来ますことはすべて行おうと心に決めておりましただけに、なおさらのことだったのです〉」

そこで再び、連中は俺目掛けて一斉攻撃だ。

まったく惨めな時を過ごさねばならなかったよ、俺も。それで、厚かましく振る舞う以外に手はなかったのだ。

ラヴレース「どうぞ、先をお読みください、閣下。申し上げましたが、皆さん揃って彼女には敬服なさるはずです。それとも、私のほうで読み上げましょうか」

M卿「途方もない図々しさだよ。［そして、声に出して読む］〈私にはもう一つ動機がございましたが、それだけでも、ご一族の皆様方からは［皆が耳をそばだてた］手柄を認めていただけるはずでした。厚かましい動機でして、その後分かったことですが、罪深いほどに自惚れの強いものでした。神のご意向に従いつつ、一人の男性を矯正して差し上げます、そのささやかな手段となることを私は望んだのです。その人も矯正を受けるに足るだけの分別は元来備えていらっしゃるのだと、私はそう考えたのです。あるいは、少なくとも、この思いやりの籠もった願いが実現するとかしないとかは別にいたしましても、意図されました恩恵を認めてくださるだけの感謝の念は持ち合わせていらっしゃるものと考えておりました〉　並外れて立派な娘さんだよ」

並外れて立派なお嬢さんですわ、と婦人たちが鸚鵡返しに言っていたが、それぞれハンカチを目に当て、鼻をすする音の伴奏も添えてだ。

ラヴレース「誓って言うが、パティ、君は見当違いな場所で涙を流しているぞ。二度と悲劇には連れて行かないからな」

ベティ夫人「心臓に苔が生えているのね、この恥知らずは」

卿は眼鏡を外して拭こうとしていた。目がかすんでいたのだよ。卿としては、眼鏡のせいだと考えたわけだ。

見ると、連中は全員撃鉄を起こし、火薬を詰め込んだ状態だ。「確かに、まことに立派な文章ですね」　俺が言った。「そこがこのお嬢さんの素晴らしいところなのですが、書き進めるにつれ、一行一行と、彼女は素晴らしくなって行くのですよ。どうぞ、閣下、先へお進み願います。彼女の書き方は承知しているのですよ。次の文章はさらにわれわれの評価を高めることでしょうね」

M卿「忌々しい奴め［と、眼鏡を掛け直し、読み上げる］。〈でも、ラヴレースさんのことはとんでもないほどのめがね違いでした。［そこで、連中全員が再び抗議の叫びを上げていた］自分にも言い聞かせておりますが、ただ一人の　…　〉」

ラヴレース「ご婦人方がどのようなことをご自分に言い聞かせようと構いませんが、同じような状況で、他の男たちならどうしていたか、あるいは、していなかったか、その点について、彼女はどこまで保証出来るのでしょうかね」

俺としては、連中の抗議の声を抑えるようなことなら何であれ言わねばならなかったのだ。皆疫病にでも罹ってしまえと、胸中ではそう思っていたよ。彼女を失ってしまったと

いうのに、俺は苛立たしい思いを十分に味わってはいないと言わんばかりなのだ。

M卿［声に出して読む］「〈自分にも言い聞かせておりますが、紳士を装っておられる人の中では、私のめがねがそんなにもひどく狂ってしまいました、ただ一人の男性だろうと思います〉」

連中は揃って、再び抗議の叫びを上げようとしていたのだ。「どうか、閣下、先へお進み願います。ほれほれ、ご婦人方、ご静聴願います。さあ、宜しければ先へ、閣下。ご婦人方も静かにしておられますので」

そのとおりだったのだよ。連中は両手を差し上げ、天を仰ぎながら、俺に対する驚嘆の念に我を忘れていたのだ。

M卿「良かろう。君は狼狽することになるだろうがね」　というのも、卿は次の文章に目を通していたのだよ。

何という浅ましい存在なのだろうな、ベルフォード。悪意に満ちた卑劣漢なのだよ、この世に生きる人間なんてものは。お互いに苦しめ合い、互いに苦しめられているのを見ては、こんなにも喜んでいるのだからな。

M卿［声に出して読む］「〈溺れかけている人を救おうとしておりますうちに、偶発的にではなく故意に、また、はっきりとした目的があってのことだったのでしょうが、私はその人に引きずり込まれてしまったのです〉　…　これには、君～い、一体どんな言い分があるというのかね」

セ夫人

〻「そうですわ、あな～た、どんな言い分がおありですの」

ベ夫人

ラヴレース「言い分ですか。そうですね、大変面白い譬えだと申しておきましょう。当てはまりさえすればの話ですが。だが、宜しければ、閣下、読み進めていただきたいのです。この先さらにどんなことが言われているのかを聞かせてもらいます。その上で、すべてにつきまして、まとめてお話しいたしましょう」

M卿「良いだろう。〈そしてあの人といたしましては、ご自分が毒牙にかけました者たちの名簿に、名前を一つ付け加えるという栄誉を手にしたのですが、その名前と申しますのは、不遜とは存じますが、あの人自身のお名前を汚すようなことにはならないものだったのです〉」

連中はすべて、俺が話し出すのを期待するように、こちらに視線を向けた。

ラヴレース「どうか先へお進みください、閣下。この点につきましては、間もなく触れることにいたしましょう。私が名簿を作っておりますことを、彼女はどうして知ったのでしょうね。この点につきましては、間もなくお話しいたします」

M卿［読み進めて］「〈しかもこれは、マダム、分かりました暁には、人間の心に戦慄を覚えさせますような、そんな手段を用いてのことだったのです〉」

そして再び、眼鏡が急ぎ外された。

これは俺には痛烈な一撃だった。面の皮の厚いことにかけては、オークの大木にも負けないつもりでいたのだが、正直なところ、この一撃は俺をほぼ打ち倒してしまったのだよ。

M卿「これにはどんな言い分があるのかね、君～い」

忘れずにやってもらいたいのだが、ジャック、この話し合いに出てくる「君」や「あな

た」のすべてについては、最後を延ばして読んでくれ。敬意というよりは憤りを表してのことなのだがね。

赤面するような真似が俺に出来るのかどうか、それを確かめようとするみたいに、連中全員が俺に視線を向けていた。

「目をお離しください、閣下。目を離していただきましょう、ご婦人方［と、恥ずかしげな素振りだったはずだと信じている］。これにはどんな言い分があるのか、との仰せですね、閣下。では、申しますが、このお嬢さんの意見表明の仕方には強烈なものがあるということです。ただそれだけです。恋人同士の間では、生真面目な方々にはご説明申し上げ兼ねるようなことも、多々起こるものなのです」

ベティ夫人「恋人同士の間ではですって、あな～た。でも、ラヴレースさん、貴方にはおっしゃることがお出来になるのでしょうか。このお嬢さんは頭の弱い人とか騙され易い人とか、そのどちらかのように振る舞ったということをです。おっしゃることがお出来になるのですか、貴方には　…　」

ラヴレース「あのお嬢さんに対しましては、すべての点に亘って正当な扱いをする用意が出来ているのです。ただ、ひとつお願いですが、ご婦人方、私がこのように尋問を受けねばならないというのでしたら、手紙の残りの部分の内容をお教えいただきたいものですね。自己弁護のための準備をするのですよ。皆さん揃って私を糾弾なさるおつもりでしょうからね。何しろ、次に何が出るかも分からずに、このように断片的に答えることを求められますのは、忌々しい誘導尋問ふうのやり方ですからね」

連中が手紙を渡してくれたので、俺は最後まで目を通したよ。そこで、俺が口にした言葉を繰り返し記しておくので、貴公にも残りの文面は推測してもらえるだろう。

「見てもらいましょう、ご婦人方。ご覧いただきましょう、閣下。私が我と我が身を容赦しないところをです」　こう言うと、手紙を片方の手に握り、弁護士が弁護のための要旨を眺めるように、その手紙を眺めながら、次のように弁じ立てたのだ。

「ハーロー嬢はこう言っております。〈彼女の破滅へ向けての過程の中で、故意の虚言や繰り返し用いられました偽造の手紙、さらには、数え切れないほどの偽証が、私の犯した罪の中でも最も軽微なものではなかったのだということを、奥様に［ここで、ベティ夫人を振り向きながらだよ］ご存じいただきました暁には、奥様は次のように判断なさることでしょう。つまり、このような縁組は今ではもう起こり得ないのだと、心の奥底からそのように申し上げることがもしも彼女に出来ないようでしたら、奥様や高潔なお妹さんのようなお人柄のご婦人方と縁を結ぶに相応しい者としてくれます節操を、彼女は一切持ち合わせていないのだ、とです。〉

まったくの話、ご婦人方、これは癇癪というものですよ。正気ではない。もしも、私たち一族のほうでは、私がこのような仕打ちをした人物と結婚することで、辱められたように受け止めるのではなく、それとは逆に、私が彼女に対しこのように正しく報いることを喜んでくださるというのであれば、そして彼女が、試金分析の結果、純金であると分かれば、また、自らに咎めるべき点は何一つないのであれば、このような縁組が進められるのに同意することが、どうして彼女の節操に疑いを挟むことになるのでしょう。

彼女にしても、意に反して為された事柄のことで、自分の評価を下げるはずもないでしょうし、それで当然なのです」

皆の顔付きを見ると、一斉に叫び声を上げそうな剣幕をしているのだ。だが、俺は話を先へ進めたよ。

「閣下は私どもに読み聞かせてくださいましたが、彼女は一つの望みを持っていたとのことでした。厚かましい望み、いいえ、彼女に言わせますと、罪深いほどに自惚れの強いもので、つまり、神のご意向に従い、私を矯正する手段になりたいという望みでした。そしてこれは、もしも実現した場合には、皆さんから手柄を認めてもらえるはずと思っていた、とのことでした。しかし、何から私を矯正しようというのでしょうか、彼女は。彼女は聞いていたのだと（だが、そんな望みを抱いた時には、彼女もまだ耳にしただけだったのです）、皆さんはおっしゃるでしょうね。女っぽい言い方をいたしますが、私が〈とってもいけない男〉だということをです。だから何だというのでしょうか。正直なところ彼女は、私に対する告発が噂だけのものではなかったのだということ、そして、その結果、私は骨身を惜しまず努力を傾けるに相応しい対象だということ、そのことを身をもって思い知ったのですが、その瞬間に、何としても私を見捨てようと思うわけですよ。そんな気持ちのまま彼女は逃げ出し、すべての埋め合わせとなる儀式が執り行なわれることのないよう宣言しているのです。これには、〈女の恨み〉以外に、何か他の動機があるとでもおっしゃるのでしょうか」

これで、連中全員から攻め立てられることとなったのだが、俺の狙ったとおりだ。目くらましの手だったのだよ。しばらくは皆の愚弄に身を任せた後、注意して聞いてもらいたいと頼み、言葉を続けたのだが、連中がいつも喜んで俺の無駄話を聞いてくれるのを承知の上でのことだ。

「男の悪癖を矯正するのは、事の本質からして当然な程度以上に、はるかに易しい仕事なのだと、お嬢さんがそんなふうに考えていたのは明白ですね。

閣下がお読みくださったように、彼女はこう書いているのです。〈溺れかけている人を救おうとしておりますうちに、偶発的にではなく故意に、また、はっきりとした目的があってのことだったのでしょうが、私はその人に引きずり込まれてしまったのです〉と。しかし、どうしてこんなことになるのでしょうね、ご婦人方。彼女自身の言葉からもお分かりでしょうが、私自身は今なお、ちっとも危険を脱してはいないことになるのです。彼女が私に気づいたのは、例えば泥沼にはまり込んでいる姿だといたしましょう。私が彼女の力を借りてそこを抜け出し、彼女がその中で朽ち果てて行くのを放っておいたとでもいうのでしたら、確かにそれは犯罪だと申せましょう。しかし、事実はまったく別なのではないでしょうか。彼女の譬え話が狙ったとおりのことを証明しているといたしますと、その場合は、彼女自身のほうが抜け出し、もがきながらますます深みへはまって行く私を、そのまま放置したということにはならないでしょうか。私を救おうと本気で考えていたのでしたら、彼女のなすべきことは、力を合わせることによって、お互いに抜け出せるよう、自分の手と私の手とを結び合わせることだったはずです。私は彼女のほうに手を差し出したのです。そして、手を差し延べてくれるよう、彼女に懇願したのです。だが、駄目だというのですよ、本当に。彼女自身としては、出来るだけ早く抜け出すつもりでいました。私など沈んでしまおうが泳いでいようが、お構いなしです。助けの手を差し延べることも（自らの主義に背いて）拒んだのです。お分かりいただけるでしょうね、ご婦人方。お分かりいただけますね、閣下。心地好い響きの巧みな言葉が、音楽好きな人たちをどれほど虜に

してしまうものかということをです。

連中は全員、今にもまた叫びを上げそうにしていた。だが、俺は言葉を続けたよ。連中の声が言葉となって噴出する前にだが、修辞学者の言う〈予弁法〉というやつだ。

「だが、我が麗しの告訴人はこう述べております。つまり、私は、自分が毒牙にかけた者たちの名簿に、名前を一つ付け加えることになったが、その名前は私自身の名をも汚すものではなかった、とです。確かに、私も放蕩をしてまいりましたし、冒険心も備えております。体質なのですね、それは。どうしてこんな体質を身につけることとなったか、それは分かりません。しかし、制止や抑制に慣れ親しむことは決してなかったのです。その点は皆さんすべてがご存じのことです。人というものは、激情に駆られて軽い罪を犯してしまったこと、そして、いかに軽微であっても、その罪は決して許してもらえないものだということに気づきますと、自暴自棄になることだってあるのです。ちょうど、略奪だけを考えていた盗人が、抵抗を受けたため、また、自衛のために、ついつい殺人を犯してしまうことが多いのと同じことです」

連中の一人一人が俺のことを、奇妙な破廉恥漢だ、忌まわしい恥知らずだと言っていたよ。しかし、どんな言い分にも必ず汚い面と清潔な側面とがあるものなのに、多少なりとも自己弁護のために持ち出す事柄もないような男は、まさしく愚か者ということだ。ウエストミンスターホール（二三）では、ジャック、俺のものに匹敵するほど鉄面皮な弁護が毎日行われているのだよ。

「しかし、どのような権利があって」と、俺は言葉を続けたよ。「このお嬢さんは私に不平を唱えるのでしょうね。〈これ、ラヴレース、貴方は私に対し悪党として振る舞ってまいりました。貴方は自分の罪を償いたいと言っている。でも、そうはさせませんよ。貴方の正体を暴いて見せるという満足、そして、貴方を拒絶するという誇りを得るためです〉と言っているのに等しいわけですからね」とだ。

だが、それが実情だったのだろうか。それが実情だったのかな。彼女が一緒になってくれるのなら、今こそあのお嬢さんを妻に迎えますなどと、そんな台詞を吐くような真似をするだろうかな、この俺が。

ラヴレース「お気づきのことでしょうが、彼女はベティ夫人の仲裁を断っているわけでして　…　」

M卿［俺を遮りながら］「〈言葉は風、行いは心〉だよ。そんな罰当たりな屁理屈を並べて、何の意味があるというのかな、ボブ。はっきりと言うのだよ。彼女が一緒になると言えば、君は彼女を娶るつもりでいるのかね。答えるのだ。イエスかノーかでな。君の真意を掴むため、われわれを無益の詮索へと先導しないでもらいたいものだよ」

ラヴレース「私がそのつもりでいるのは、彼女も承知のことです。しかし、閣下、彼女がこのように自分自身と私を世の晒し者にするような行動へと進むのでしたら、私どもが結婚いたしましても、それは両名にとりましての恥辱ということになりましょう」

シャーロット「でも、あの方、どんなにひどい目に遭われたことでしょうか　…　」

ラヴレース［あの娘を遮りながら］「おやおや、シャーロット」と、あの娘の顎の下を軽くつつきながらの台詞だ。「お嬢さんと僕との間にあったことを、君は全部話してほしいというのかい。仮に、大胆で冒険心に富む恋人が君にいての話だが、その男が君に仕向ける些細な色っぽいいたずらの一つ一つを世間に公表されるのが、君には好ましいことだとい

うのかい」とだ。

シャーロットが赤くなっていた。皆は叫び声を上げ始めたよ。だが、俺は言葉を続けたのだ。

「令嬢はこう言っております。〈辱めを受けたが（自分のこととは言え、私は決して手加減しないのですよ）、それも、分かった暁には、人間の心に戦慄を覚えさせるような、そんな手段を用いてのことであった〉とです。彼女はまことにうぶなお嬢さんでして、暗に触れております手段につきましても、判断の出来る人間ではないかもしれないのです。几帳面なのも度を越しますと、几帳面さに欠けるのと同じかもしれません。その手の諺は、閣下、ございませんでしょうか。〈極端は極端を生む〉というのと等しいものですよ。こういったお嬢さんですと、自分の件を、おそらく、実際よりももっと異常なものと考えるのでしょう。敢えて申し上げたいのですが、もしも彼女のほうでは、私が彼女に対してしたような、そんな扱い方をする世界でただ一人の男に出会ったというのでしたら、私が彼女の中に見出しましたのも、ただその時の状況のせいで異様に映るにすぎないような出来事について、こんなにも大騒ぎをする、世界でもたった一人の女性だということです」

これを聞くと、連中全員が俺に食ってかかってきた。両手を差し上げ、天を仰ぎ、声を張り上げながらだが、それだけのことを一度にやって見せるのだよ。しかし、俺の胸中の邪心にも負けないほど不埒な考えを頭の中で（衰えて行く色欲が最後に腰を据える場所だよ）思い巡らしているM卿は、顔の残り半分を飲み込んでしまうほど大きな口を歪め、開けると、やむなく（先の台詞を吐いた際の俺の態度や、シャーロットや他の全員が赤面しているのを見て）しかめっ面を装い、笑い出してしまうのを避けるためなのだが、まるで痛風の刺すような痛みに負けたみたいに、「おー、おー」と悲鳴を上げていた。

二人のお喋り婆さんと若い雌猫が代わる代わるにお互いを、卿を、そして、俺を見詰める様子を目にしたなら、すぐに貴公も、その醜い顔をちょうど真ん中辺りで真二つにしようとしたことだろう。貴公の口がすでにその仕事を半ば済ませているわけだからな。それに、結局のところ、この話し合いにおいて、剽軽かつ豪胆な俺のやり方が、若い娘たちの取り澄ました口元から笑みを引き出し、俺の助けとなっているのに気づくことも稀れではなかったのだよ。おそらくこの娘たちなら、先に連中の好意に取り入っているような、俺そっくりの大胆不敵な男に出会ったとしての話だが、われわれが相談のために集まったもののような出来事に関して、我が愛しの君がやったような、あんな大騒ぎはしなかったはずだ。若いお嬢さんというのは、すでに百度も述べてきたことだが、母親がお嬢さんたちの身を案じるその半分も、自分たち自身のことは心配していないものなのだよ。だが、ここで、娘たちは深刻な態度を装い、怒った顔をしなければならなかった。年寄りたちがえらく重大に事を受け止めたからだな。ただ、娘たちの心には怒りも仲間意識もほんの浅く腰を下ろしただけだったので、俺が時々手段を講じて誘い出してやった笑みを押し殺すためだが、連中は口をすぼめるようにせずにはいられなかったのだ。一方、年長者たちとしては、自分のバラを持ったことがあるし（つまり、娘たちのことだよ）、男というのはつまらないことが好きなのを知っているわけだから、「御免蒙りまして、バラの木夫人」といった、母親への挨拶一つもなしに、バラを蕾のうちに摘み取られてしまうのは、大層気に入らなかったことだろう。

俺に対する起訴状の次の項目は、偽造の罪、そして、ベティ夫人と従姉妹のシャーロッ

トに代役を用いたことに関するものだ。何ともけしからん二つの訴因だと、貴公はそう言うだろうな。確かにそのとおりだよ。偽造の告発という点では、殿様が口を極めて非難していた。婦人たちのほうでは、代役を用いた部分は決して許すものかと誓っていた。連中の中には、調停しようという者が一人としていないのだ。従って、われわれ全員が女と化し、口汚なく罵っていたのだよ。

卿は俺に向かってこう言っていた。世界中どこを捜しても、俺以上の悪党は一人もいないものと、良心にかけてそう思う、とだ。言葉を飾ったところで、何の意味があるか、と言うのだよ。また、俺が卿の筆跡を真似たのは、これが最初ではない、とも言っていた。

これに対し、俺は次のように答えたよ。私の想像するところ、〈高官名誉毀損〉[二四]法令が作られた際には、貴顕たちの中にも、悪口を浴びても仕方がないことを自覚しておられる方が大勢おられたのであろうし、また、それゆえ、あの法律はそういった方々のお人柄の清らかさを示すためというよりは、むしろその立場に特権を与えるために制定されたのでしょうね、とだ。

言わんとしているところを明示するよう、卿が俺に求めていた。例の「君〜い」という呼び掛けの語を添えてだが、それも、我が国の国語の中でも最も不名誉な言葉が卿の念頭にはあるような、そんな発音の仕方だったのだ。

俺はこう言ってやったよ。身分の高さや高齢を防壁にして身を守っている人々というのは、気概のある男にとって堪えられないような無礼な振舞いを決してなさるべきではないでしょうね。侮辱した人間を心ゆくまで見下してやることが、その男には可能だというのでないのでしたらね、とだ。

これを聞いて、卿は猛烈に怒り出した。すぐにもプリチャードのところへ人を遣ろうとするのだ。プリチャードを呼んで来いと言っていた。遺言を書き改め、俺に遺さずに済むものについては、すべてそうするつもりだというのだよ。

「どうぞ、どうぞ、閣下」俺が言った。「いつだって私は、閣下の地所よりも自分一人の楽しみのほうを大切に思ってきましたからね。ただ、プリチャードには承知させるつもりです。遺言を作成するのなら、署名と封緘もしてもらうということをです」

「ほう。プリチャードに何をしようというのかな」と、卿は俺に向かって、その狂った頭を横に振っていた。

「私は自分の権利だと思っているのですが、そういうものを私から奪い去るために、あの男が、あるいは、他のだれにせよ、ペンで書き記すものを封緘するのなら、両耳をもって贖わせてやろうというのです。ただそれだけのことですよ、閣下」

ここで、二人の夫人が仲裁に入った。

セアラ夫人が言うには、俺は事態を容易ならざるものにしているし、また、M卿にせよ自分たちのうちのだれにせよ、俺が連中に加えているような仕打ちを受けて当然だとは思わない、とのことだった。

俺はこう言ってやったよ。卿から不当な扱いをされるのは耐えられないことだが、それには二つの理由がある。まず第一には、この世のだれよりも卿のことを尊敬しているからであるし、次には、俺に提供しようと申し出てくれる人間が他には一人としていないような、そんなものを卿から受け取ろうとするのは、まるで、自分勝手な考えに促されてのことのように映るからだ、とだ。

「それじゃあ」と、卿が切り返して来た。「君の手から受け取るものを私が受け入れる気になるのは、どんな誘因があってのことにしようかね。どうだな、君」とだよ。

「まったくですよ、ラヴレースさん」と、えらく真面目くさって、ベティ夫人が言っていた。「セアラ夫人もおっしゃっておられるように、貴方が私たちに加えております仕打ちを、貴方の手から受けても仕方がないようなことは、私たちだれ一人としてしていないのですよ。それから、言わせていただきますけれど、無垢なお嬢さんを傷物にするために、私や貴方の従姉妹のシャーロットさんの名が悪用されるようなことになっても良いとは思いませんわ。私たち全員がお嬢さんを高く買っておりますこと、そして、貴方の奥さんになってもらえたらと、どんなに望んでいたのかということを、あの方は早くからご存じだったはずです。お嬢さんが貴方の求婚に耳を貸す気になられましたのには、私たちのこの高い評価が動機となっていたのです（ご覧のとおり、お嬢さんはそう言っておられるのです）。そして、このことが、お身内の方々の愚かな振舞いもございまして、あの方を貴方の手中に投げ込む助けとなったというわけです。貴方があの方にどのような形で報いたのか、それはあまりにも明白です。あの方に対する貴方の振舞いとの関わりを否認いたしますのが、私たち全員の得ております声望にとりまして似つかわしいことなのです。それに、言わせていただきますけれど、私たちの代わり、あるいは、私たちのだれかの代役を勤めるために駆り出された邪悪な者たちによって、あの方が恥ずかしい思いをさせられましたのは、貴方の振舞いとの関わりを否認するようにという、私たちへの二重の求めにもなるのですよ」とだ。

ラヴレース「おやおや、話が少々似ておりますね。私の振舞いとの関わり合いのことですが、皆さんには否認していただきたいのです。正直に申しますが、このお嬢さんにはまことにひどいことをいたしました。一歩踏み出すともう一歩、ということになってしまったのです。私は冒険心にとり憑かれております。企てを挫かれるのが嫌でして　…　」

「企てを挫かれるですって　…　」と、セアラ夫人が口を挟んだ。「あんまりですわ、こんな言い方。貴方との争いはお嬢さんが起こしたのでしょうか。まったく気高いほどに誠実で、率直なお気持ちの方だと伺っておりましたもの、クラリッサ・ハーローさんのことは。術策や欺瞞とは縁がなく、男性に媚びることもなければ、上品ぶったりもしない方とのことでしたわ。お気の毒なお嬢さん　…　あんなにも率直に非を認めておられる行動に踏み切ることになりました、その当の相手の男性からは、もっと良い結末を与えられて然るべきでしたのにね」というのだ。

俺もこれには相当心を動かされたよ。この議論がこんなふうに連中の一人一人から持ち出されていたなら、俺は気が引けて、顔を上げることも出来なかったことだろうな。俺も恥ずかしくなっていたのだ。

シャーロットが尋ねてきた。俺を受け入れるつもりが令嬢にあるとしたら、令嬢に対して当然の報いをもって償いたいという気持ちが、今でも俺にはあるように思わないか、というのだよ。そして、敢えて申し上げるが、と断った上で、この素晴らしい婦人が身内になってくれるとしたら、それこそ、一族の者たちが知ることの出来る（自分が請け合うというのだが）最大の至福だろう、とも言っていた。

連中は揃って同趣旨のことを言明していた。そして、セアラ夫人が単刀直入にその件を俺にぶつけてきたのだ。

ところが、お邪魔虫の我が殿様は、六分間も続けて真面目にしているようなことは、俺には無理な話なのだと言い張っていた。

考え違いをしておられるのですと、俺は卿に話したよ。俺がこの件を軽く見ているように卿はお考えだが、こんなにも心を痛める問題は、俺にもいまだかつて経験がない、と言ったのだ。

そのように伺って嬉しく思います、とパティが言っていた。この言葉を聞いて、あの娘は本当に嬉しかったのだな。あの娘の優しい目が嬉しさに潤んでいたのだよ。

M卿はあの娘のことを可愛い奴だと言い、今にも泣き出しそうになっていた。

勿論、情に動かされたためでもないのだよ。あの殿様に情けなどないのだ。俺への処遇のし方からして、貴公もそれは気づいていることだろう。しかし、自らの肉体の衰えを感じ、気持ちが弱くなると、そして、最期の時に向かって行く時には、人はほんの些細なきっかけで心を動かされてしまうものなのだ。そのきっかけが自分たちの内から来ようと外から来ようと同じことだがね。そして、見識のない世間の者たちは、しばしばこれを〈人情味〉と呼んでいるのだよ。いつだって、人間の不幸に同情を示しながら、自分自身を憐れんでいるだけの話だというのにな。身体頑健にして意気軒昂であれば、貴公や俺がそうだが、他人のことなどほとんど気に留めようともしないものなのさ。

ここで連中は、俺の裁判の今回の審問を中止することにした。セアラ夫人がひどく疲れたのだ。翌朝話を続行するということで意見が一致していた。だが、連中は全員揃って退室すると、秘密の協議に入ったのだよ。

手紙　五十六
ラヴレース氏より［承前］

婦人たちのほうでは、われわれが中断したところから話題を取り上げるのではなく、我が麗しの告発人の手紙のいくつかの部分にどうしても触れようとするのだ。われわれ二人がまずまずの状態にあるのだから、連中にはそっとしておいてほしいと、そう希望していた部分だよ。ところが、実をいうと、連中としてはわれわれの間の事の顛末について、聞いても構わないことは是非ともすべて聞きたいし、それらの部分に関する俺の言い分も聞くというのだ。俺が彼女にとっては当然な、期待されているとおりの償いを本当に、そして、実際にしようという気持ちでいるならの話だが、われわれの間の調停をより適切に行うことが出来るようになるため、とのことだった。

これらの部分というのは、まず第一には、俺が彼女を欺き、一緒に駆け落ちをするように否応のない形で追い込んだ上で、ロンドンでも最悪の家の一つに連れ込んだのだ、というくだりだよ。

第二には、俺が邪悪な試みに走ったものだから、憤慨した彼女は密かにハムステッドへと逃れた、という部分。

第三には、偽造の件と代役を用いたことへの非難が再び持ち出され、次の訴因に移る前に、われわれは今にも口論をぶり返しそうな状態だったのだが、次の訴因というのが輪を掛けてひどいものだったのだ。

というのも、それは（四番目だ）、彼女を騙し、例のいかがわしい家へと連れ戻すと、俺はまず初めに彼女の意識を、そして、次には操を奪い、その後、囚人として彼女をそこに引き止めた、という部分だったのだよ。

これらの厳しい咎めに対し俺はどのように繕ってみせたのか、それを語り聞かせるとしても、何のことはない、貴公宛の手紙の中で用いてきた、情状酌量のための論拠の多くのものを繰り返すだけのことだろう。それゆえ、以下の点を述べるだけにしておこう。つまり、言い訳のつもりだが、令嬢の極端な几帳面さのこと、俺の名誉心に対する彼女の不信の念、ハウ嬢の企み好きな気質もあり、令嬢たちの側での企てが俺の策略を生み出すことになったという点、そして、女性の激し易さなどを大いに強調したのだよ。彼女を軟禁状態に置くに当たっての俺の目的は、もっぱら、俺を許すこと、また、結婚することを彼女に余儀なくさせることであり、そして、これは両家の名誉のためでもあることを主張したのだ。俺は自分の長所を自慢して見せたが、そのうちのいくつかについては、俺を知る者はだれ一人として否定しないわけだし、また、それらを身に備えていると主張出来る放蕩児もほとんどいないというものなのだよ。

それから、連中は令嬢に対する熱烈なる賛美称賛に取り掛かった。俺も承知の上だったが、そのすべてが重大問題への前置きだったのだよ。そして、それはセアラ夫人によって次のように提起されることとなったわけだ。

「お気の毒なお嬢さんからのこれらの手紙につきまして、私たちがお話しして構わないように思われますことは申し上げました。今出来ます償いの、そのすべてが行われているわけではない場合ですが、あの方のような地位の人に対する虐待の結果として起こるかもしれない災いのことをあれこれ申しますのは、おそらく、ほとんど無益な話でしょう。でも、お見受けいたしますところでは、あの方への愛情と同様、あの方に対する正しい評価を今も貴方は持っておられるように思います。あの方の美徳には、ほんの少しの疑問の余地もございません。いささかでもご自分を責めるべき点がありましたなら、あの方もあのようにお怒りになることは出来ないはずです。どなたのお話を伺いましても、あの方は素晴らしい女性です。ご自分名義の立派な地所をお持ちですし、お家柄も決して恥ずかしいものではございません。もっとも、あの方のことでは、皆さんのお振舞いに思慮を欠く点がございましたし、不当なものでもありました。あの方の考え方の素晴らしさや、見事な節約ぶりにつきましての世間の評判は、立派なリーウェン師も一度話してくださいましたが、〈あの方の倹約ぶりは貧しい者をも富ませるであろうし、その信仰心は放蕩者をも改心させることだろう〉とのことでした。ここ一年の間、外出したことは二度もないという私がこちらへまいりましたのは、ベティ夫人も同じことですが、あの方に対して当然の償いがなされていないのではないか、また、私たちやM卿が（貴方にとって一番近い親戚でしょう）、貴方に何か影響を及ぼすことが出来るのか、それとも、出来ないのか、それを確かめるためなのです。そして、私自身のことを申しますと、私の自由になりますものすべての処分に関しましては、この件につきましての貴方の決心次第にするつもりだということです」とだよ。

ベティ夫人「私もそういたしますわ」

自分もそうするつもりだ、と卿が言っていた。そして、勇ましく啖呵を切ったのだ。

ラヴレース「皆さんの中のどなたにせよ、私に受ける資格があると快くお考えください

ましたものですのに、そのご厚志を私が軽んじるなど、滅相もない話です。しかし、欲張った考えから、自らの気持ちに沿わない生活に入るつもりも、私には同じようにまったくないのです。今後ありそうだという凶事につきましては、起こるに任せておけば良いでしょう。ハーロー家の者たちとのことについては、まだ決着をつけておりません。あちらから仕掛けたことなのです。同じような場合、私のほうからあの者たちに対して一言あるはずですが、そのような形で、連中からも私に挨拶があると嬉しいのですがね。おそらく今回の件につきましては、捜し求めることを余儀なくされるのではなく、むしろ、捜し出されることになりましても、遺憾とは思わないでしょうね」

シャーロット嬢［顔を赤らめながら］「分別のある人間というよりは、乱暴者といった話し方ですわね。それは認めていただけるでしょうね、あなた」

セアラ夫人「そうですね。でも、済んでしまったことは済んだことで、元に戻すわけにも行かないのですから、私たちといたしましては、次善の策を考えることにいたしましょう。もしも、ハーロー嬢に貴方と一緒になるお気持ちがあるといたしまして、あの方と結婚することに、貴方のほうでは何か異存はございますか」

ラヴレース「あるとすれば、たった一つでしょうね、おそらく。彼女が、ベティ夫人に対してと同様にだれに対しても、彼女に特有な処世訓（また、そうであって当然なのだと言わせていただきますが）、つまり、自分自身に対して隠し立ての出来ない事柄は世間中に公表するという、そんな方針を押し通すのは疑いないという点です」

パティ嬢「間違いございませんが、深い悲しみと絶望に苦しみながらこれを書き綴っておられるのですわ、お嬢様は」

ラヴレース「だからこそ、彼女の悲しみが和らいだ時には、絶望の嵐が通り過ぎた暁には……それに、こんなことを君の口から聞くとはな、パティ。可愛いじゃないか。似たような場合には［と、あの娘の耳に囁きかけながら］、君なら懇願に応じていたというのかい。似たような抗議の声を上げても、ただそれだけのことにすぎなかったというのかい」

あの娘には扇子でポンと叩かれ、赤い顔をされてしまったよ。そして、M卿からは、俺は皆の言うことをすべて茶化してしまうと、お小言をいただいた。

ハーロー一族にもいくらか俺の斟酌を受けるに値するところがあると、皆はそう考えているのかどうか、そして、他の行動に踏み切る勇気がないかのように、俺が奴らの娘と結婚することになれば、あの一族は俺に対して勝ち誇ることになりはしないか、俺は尋ねてみたのだ。

セアラ夫人「かつては私も、私たちの皆がそうでしたが、あの一族には腹を立てておりました。でも、今ではお気の毒に存じますし、それに、あの人たちが貴方に加えた一番ひどい仕打ちにいたしましても、それが正当なものであったことは、貴方が証明しているように思いますよ」

M卿「地位のある一族なのだよ。全員が紳士で、金はあるし、尊敬にも値するのだ。ひとつ言わせてもらうが、われわれ貴族の中にも、あの一族に劣らない血筋を引いているのを嬉しく思う者は多いということだ」

ラヴレース「ハーロー家というのは、心が狭く、執念深い一族なのです。私は憎んでおりますよ。令嬢を崇拝しているとは申せ、奴らとの関わりについては、その一切を恥ずべきことと承知しております」

ベティ夫人「他の人たちのありふれた欠点をこんなにも軽蔑なさる人について、もっとひどいことが言われなければ宜しいですわね」

M卿「私の姉のラヴレースが今も生きていて、この場に居合わせたとしたら、どんなに自分を責めたことだろうな。このお気に入りの息子には甘くなってしまった、自分の過ちのすべてについてだよ」

セアラ夫人「それはそうと、失礼いたしますが、お殿様、このお気の毒なお嬢さんのために何か出来ることはないのか、ひとつ皆で考えてみましょう」

シャーロット嬢「お嬢様のお人柄について、ラヴレースさんにはまったく異存がないということでしたら（それに、厚かましいことを申しますが、あの方に相応しい償いをして差し上げるのを、ラヴレースさんは、ご自分には不利になるといたしましても、恥ずかしいこととは考えていらっしゃらないように思うのです）、ラヴレースさんも、名誉を重んじる気持ちや寛大な心はお持ちでしょうから、私たちの期待いたしますとおりのことをしていただけるに違いないと思うのです。非難されても仕方のないような軽薄さとか愚かさとかが、少しでもお嬢様にあるのでしたら、私も、こっそりとあの方に同情し、不運を嘆くことはありましても、あの方の弁護のため口を開いたりはいたしません。ただ、その時でさえ、こんなにも特殊な場合ですから、名誉心や感謝の気持ちからいたしましても、ご自分で誓われた事柄を果たしていただくよう、貴方を縛るための論拠には事欠かないものと思うのです。誓いをお破りになったのは明らかですけれど」

ベティ夫人「姪のシャーロットが貴方に要求いたしましたのは、まことに正当な話ですし、質問の仕方も本当に適切なものでした。ですから、私といたしましては、そのことについて、貴方がすぐに触れてくださるよう願わずにはいられませんわ。それも、言い逃れなどはせずにですよ」

そして、全員が口を揃えて、真面目に話すよう、道理に適ったことをするようにと、俺に求めたのだ。そこで俺も、本当に真面目な態度を装い、次のように述べたのだよ。

「皆さんが私に課しました任務を実行に移すといたしますと、私の逃れる道がなくなってしまいますことは重々承知しているのです。しかし、逃げ口上も弁解も用いないことにいたしましょう。

従姉妹のシャーロットの容赦のない言葉にありましたように、ハーロー嬢の取り柄を正当に評価することにつきましては、私も別に恥とは思っていないのです。

皆さんには白状いたしますよ。そればかりか、極めて遺憾に思っていることを認めましょう（恥とは思わないにしてもだよ、シャーロット）。このお嬢さんに対する私の扱い方には、大いに責めを負って然るべき点があるということをですよ。彼女以上に気高い心を備えた者など、女性の中にはおりませんし、魅力的な容姿の点で優る者もいないのです。そして、美徳に関して言えば、あのように一目瞭然とした、また、一定不変なその証拠を示してみせた、あるいは、示すことの出来た女性が一人でもいるなんて（お許しを願いますが、ご婦人方）、私には信じられなかったことでしょう。と申しますのも、彼女は、その振舞いのすべてにおいて、誘惑などは通用しないのと同様に、策を弄するようなことのない人間、そして、人間としての弱さを超越しているとさえ私は言いたいのですが、そんな人間であることを示していたからなのです。

踏み出してしまったことについて彼女があんなにも率直に自分を責めている、その行動

というのは、確かに、彼女が〈否応のない形〉と呼んでいるものでしたよ。と申しますのも、彼女は唆され、私と一緒に家を出るようなことを考えてしまったわけですが、彼女にそのつもりはありませんでしたし、そんなことをする用意もしてなかったからです。それに、忌み嫌っている男を避けるために、忌み嫌ってはいない男と手を切るという彼女からの和解案が示された時に、身内の者たちが彼女を自由にさせておいたなら、彼女もそんな考えを持つことは決してなかったはずなのです。

私といたしましては、自惚れたことに、あのように鋭敏な心のことですし、印象を与えたものと考えていたわけですが、そんな印象の力に頼ることがほとんど出来ないというのは、正直な話、私のプライドを傷つけました。また、彼女に対する最も悪辣な策略においても、信頼は少しも裏切っていないのだと、私は自らを励ましていたのです。私の名誉心に対し、彼女が何らの信頼も寄せてくれないからです。

彼女が被った災いですが、もしも避けて通るようなことがあれば、それは奇跡以上のことだったでしょうね。彼女が操を失う一因となったものとは別に、たくさんの企みが、彼女の用心深さのせいで不首尾に終わっているのです。その数は多く、多岐に亘っております。それに、彼女の試練や苦難のうちでも大きなものすべては、彼女の気高い抵抗と正当な憤りに起因しているのです。

承知しておりますが（と、俺は言葉を続けた）、私が行おうとしております、この素晴らしいお嬢さんへの償いに際しましては、どれほど自責の念に苛まれることでしょうか。それでも、彼女のことは正当に扱うつもりです。また、それは避けようにも避けられないことなのです。そして、これでお分かりいただけると思うのですが、私にしましても、考えられておりますほどに、そこまでとことん堕落してはいないのだということです。

実際の話、だれにせよ、他の女性の場合には、堕落せずにいることで栄誉をもたらすことが出来るわけですが、私から見ますと、彼女は自らの堕落によって　…　あれを堕落と呼ばねばならないのならですが（本当はそうあってはならないのです）　…　さらに大きな栄誉を女性全体にもたらしたことになるのです。

油断なく目を配っております彼女の美徳に、とうとう懸念材料を提供することになりました時、私は確かに力や手管を用いざるを得なかったのですが、それは、彼女が私の元から逃げ去りますのを防ぐためだったのです。そこで、私の企みを回避するために、彼女もいろいろと策を弄したわけですが、ただ、彼女のはそのすべてが、厳正な事実や厳しく名誉を重んじる心に照らしても、正当視されるようなものでした。己を曲げ、欺瞞や虚偽に走るような真似は、彼女には出来なかったのです。そうなのです。我が身を守るためであってもですよ。立派さの意識に駆り立てられ、私に向かって、自分の魂のほうが私のものよりは優れていると言い出したことも一度ならずありましたが、それまた当然の話でしょう。このようなことを申し上げますのをお許し願いますが、ご婦人方、かりそめの目的のためだけに造り出されたものだと、私は好んでそのように想像していたわけですが、そんな女性に魂があるなんてことは、彼女と知り合いますまで、私は疑っていたのですよ。自分たちの放埒な行いを自分勝手に正当化したり、自分たちの意向に沿う宗教を作り上げたりするために、でたらめな考え方をしている人間がどれほど馬鹿げたことをしでかしてしまうものなのか、それは思いも及ばないものがあるのです。しかしながら、この点に関しましては、私も他の者たちほどに悪かったわけではありません。

このように気高い心の持ち主が、計画的な手管の一つ一つを許し難い程度の卑劣さと見做しても、何の不思議もないのです。計画的犯罪も平気と思われる男のことを、あんなにも簡単に嫌いになるとしても（かつては、まったく無関心とも言えないまなざしを向けてくれていたのですが）、不思議ではないのです。また、もう一方ではこんなふうにも言わせていただきたいのですが、些細なほうの罪を許してもらうのが大変難しいことを知った男、そして、身を引いたり悔いたりするほどの雅量を持ち合わせない男が（自暴自棄に追い込まれてですが）より重大な犯行へと急き立てられるのも、驚くには当たらないということです。

要するにですね、ご婦人方、一言で申しますと、閣下、クラリッサ・ハーロー嬢は天使なのだということです。仮にも、人間の本性に天使の存在したためしがあるとか、存在し得るとかいうことであればの話ですがね。そして彼女は、その考えが天使のように清らかですし、いつだってそうだったのです。彼女のこの点は正当に評価しなければいけないと思っていますよ。一つ残らずキラキラと輝いております皆さんの目から拝察いたしますに、〈それじゃあ、ラヴレース、貴方は何なのですか〉と、すぐにも質問をぶつけられそうではありますがね」とだ。

M卿「人でなしだよ。途方もない人でなしだ。私から答えてやろう。そして、今お前の力で出来る最善の償いを、彼女のために果たしてやらないようであれば、お前の引き受けるあらゆる事柄に、神の呪いがついて回ってもらいたいものだな」

ラヴレース「貴方からは、閣下、他のことを期待するわけに行かないでしょうね。しかし、私の告白が正直なものであったことからいたしまして、ご婦人方にはもう少し乱暴でないものを期待しております」

婦人たちは、老いも若きも、目にハンカチを当てていた。この気高い心の持ち主の美点に対する俺の適切なる証言を聞いてのことだが、この点は法廷の被告席においても、もしも召喚されるようなことがあればだが、俺はためらうことなく証言するつもりでいる。

ベティ夫人「そうですね、気高いお人柄をしておられますよ、この方は。貴方も、お言葉どおりの考え方をしているのでしたら、決して拒むわけにはまいりませんよ。今貴方の力で行えますかぎりの償いをお嬢さんのためにして差し上げることをです」

連中は全員一緒になってこの要求をしていた。

俺は次のように抗弁した。つまり、俺と一緒になるつもりが彼女にはないものと確信しているということ。一度心を決めると、彼女は梃子でも動かなくなるが、説得に応じないところは、ハーロー一族の罪なのだということ。そして、その点と彼女の名字こそ、彼女が奴らから受け継いだもののすべてなのだと、俺は話したのだ。

寄る辺のない今の状況では、彼女も俺を許す気になるかもしれないというのが、連中全員の意見だった。セアラ夫人は、自分とベティ夫人とで心気高い受難者を　…　二人はこういう呼び方をしていたが、それも至極妥当な話だ　…　見つけ出すのに努力するつもりだと言っていた。そして、二人で彼女を引き取って保護し、結婚前と同様その後についてもだが、俺が彼女に行う償いのその保証人になるというのだよ。

だれでも良いし、どちらでも良いが、我が一族の婦人たちがラヴレースのような人物に出くわしたとしての話だが、俺にとってはなかなか楽しいものであったよ、連中の示す寛容な態度を目にするというのはな。それにしても、ジャック、女がすべてクラリッサだっ

たりすると、われわれ律義者にとっては辛いことになるだろうな。
やむをえず、ここで中断する。

手紙　五十七
ラヴレース氏より［承前］

自分についての話というのは、ジャック、どうしても世に知れてしまう時には、敵の口を借りるよりも、自分から切り出すほうがはるかに良いものなのだよ。このことは承知していたので、以下の諸点につき、俺から詳しく連中に話してやったのだ。まず、内輪の式を挙げるためだが、彼女を一人残して発った後、木曜日に日取りを決めてくれるよう（彼女の伯父の誕生記念日であり、彼女の意向に沿うよう指定した日なのだ）、俺がどれほど催促したかということについてだ。数日前には、実際に結婚許可証を手に入れており、それは今も彼女の手元にあるわけだからな。

それから、監禁と思われている状態に彼女があった間は、いかなる約束を取り付けるにせよ、彼女を説得することが出来ずにいたため、その日取りに関して、ほんの微かな望みでも与えてくれるようであれば、彼女のことは完全に放免する旨を申し出ていたということ。ところが、この申し出も俺のためにはならなかったということ。

この頑固さに俺も死に物狂いになり、以前の過ちにさらにつけ足しをしてやろうと決意を固めたが、仮にも、彼女が完全に自由の身となれば、永久に彼女を失ってしまうことになるのはよく分かっていたので、俺がM邸から戻るまでは、彼女が外出したり、外部と連絡を取ったりすることのないようにとの指示を与えたということ。

また、このような拘束を加えたため、すっかり彼女は憤慨してしまい、俺は少なくとも四通の手紙を別々に書き送ったのだけれど、せめて日取りと教会とを指定する四つの言葉だけでもと、しきりに頼んだにも拘らず、たった一言の返事も得ることは出来なかったということ、等々だ。

ロンドンへ使者を送るために俺が用いた常軌を逸した方法に関する証言については、二人の従姉妹に尋ねてくれるよう頼んだ。もっとも、そのきっかけのことは二人も承知していないわけで、そのきっかけは次のようなものだったと、ここで話してやったのだ。

彼女の同意を迫るためだが、彼女のところへ行ってくれるようにと、ジャック、貴公にさえも一筆認めたこと、そして、彼女が好感を抱いていると思われるもう一人の紳士にも便りをしたことを、俺は連中に知らせたのだ。最後の日には、その二人が遣わす使者と出会うためだが、俺はソールトヒルで用意を整えて待ち、伝言が有望なものであれば、ロンドンへ向かうことになっていたのだが、二人が彼女のところへ伺う前に、彼女は手段を見つけ出し、再び姿を消してしまったのだ、ということもだ。そして、彼女は今、おそらくグレナムホールのベティ夫人の窓の下辺りに落ち着き、愛らしいピロメラのように、胸に棘の刺さったまま、残酷なテレウス（二五）相手に、物悲しい調べに乗せた恨みごとを囀っているのだろうと、俺はそう言ってやったのだ。

ベティ夫人のほうでは、彼女と一緒ではないし、居場所も知らないのだと断言した。そして、それに付け加え、彼女ならば、自分がお迎えする人間の中でも最も歓迎されるお客

様になるはずだと言うのだ。

実を言うと、俺は疑っていたのだよ。すでに彼女は連中の知るところとなり、保護を受けているのではないのか、とな。というのも、ハーロー嬢からの手紙一通で、それも、自分自身に宛てたわけでもない手紙によって、セアラ夫人がこんなに気持ちを奮い立たせられるようなことは有り得ない話だと思ったのだよ。極めて怠惰で陰気な女だからな。しかし、どうやら、妹が夫人を煽り立て、そんな気持ちにさせたのだろうな。何しろ、ベティ夫人のほうはハウ夫人に負けないくらいのお節介焼きで、一人で切り盛りをしたがる女だからな。ただ、はるかに寛大で高貴な気性をしているのだよ。この俺様の叔母上なのだからな、ジャック。

推測するに、彼女への手紙をどこへ送るべきか、叔母上は秘密の宛先を知っているのだろうと、俺はそう言ったのだ。心で願っていることをそのまま口にしたのだよ。我が一族のだれとであれ、彼女がツテを持ちたがっていることを耳に出来るのなら、俺は何を犠牲にしても構わない気持ちだったのだ。

ベティ夫人の返事によると、手紙の中にあったもの以外の宛先は一切知らないとのことであった。叔母が掻き消してしまったもので、俺を避けるための、一時的な宛先に過ぎないということも考えられるのであり、でなければ、彼女が返信の宛先を宿屋留め置きにするようなことはまずなかったはずだというのだ。そして、叔母の意見としては、許しを得るための何らかの働き掛けをして、上首尾を納める唯一確実な方法は、ハウ嬢に当たってみることだろうが、それも、あのお嬢さんが許しを取り付けるべく奔走出来るようにしてやる気持ちが俺にあればの話だ、とのことだった。

シャーロット嬢「ひとつ提案をさせていただきますわ。ハーローさんが受けて当然な報いのことに関しましては、私たちは全員が同じ気持ちなのですから、もしも、あの方との結婚を義務としてご自分に課すおつもりがラヴレースさんにあるというのでしたら、ハウさんとはほとんど面識はございませんが、私のほうからハウさんをお訪ねしようと思うのです。そして、念願の和解を進めますために、あの方のお力添えをいただけるよう骨折ってみるつもりです。そして、もしもそのとおりになりますならば、私は信じて疑わないのですが、すべてが目出度く収まることでしょうね。と申しますのも、ハーローさんとハウさんが慕い合っておられるのは、どなたもがご存じのことですからね」

結婚というのは、貴公にも分かるだろうが、ジャック、これらの女たちにとっては、連中相手にわれわれが為し得ることすべてへの償いとなるものなのだよ。まさに劇的な償いというわけだ。

この提案は大いに支持されるところとなった。俺も要望に応え、連中が望むかぎりの徹底した仕方で、誓いを立てたのだよ。

セアラ夫人「それじゃあ、シャーロットさん、すぐにもハウさんとの話し合いを始めてくださいね」

ベティ夫人「是非お願いいたしますわ。それから、ハーローさんに伝えていただきたいのですが、あの方のことは、最も歓迎されるお客様として、喜んでお迎えしようと思いますし、夫婦の絆が結ばれますまでは、私の目の届かないところへは行かないようにしていただくつもりでいるということをです」

セアラ夫人「私からとしてお伝え願いますが、あの方には、私の娘になっていただきま

しょう。可哀相なベッツィーの代わりにですわ」　そして、亡くなった娘を偲んで、涙を流していた。

M卿「これにはどう宣うつもりかね、君」

ラヴレース「〈賛成〉とですよ、閣下。上院の言い回しを用いますとね」

M卿「馬鹿にしないでいただこうかな、君。ごまかしは許さんぞ。私たちの名に泥を塗られては困るのだよ」

ラヴレース「そんなことはいたしません。とはいえ、彼女が約束の木曜日をやり過ごすようであれば、私も結婚する考えはなかったのです。ただ、償い切れないほどに（彼女自身の考え方からするとですが）彼女を傷つけてしまったように思うのです。私が最高の夫になるとしても、ということですが、私はその決心でいたのです。彼女が〈遜って〉、と言わせていただきますが、私と一緒になってくれるならの話ですがね。だから、シャーロットさん、これを君に代弁してもらう私からの言葉としてほしいのだよ」

これを聞くと、全員が喜んでいた。

M卿「さあ、握手だ、ボブ。やっとのことで、君の話し振りも信義を重んじる男に相応しいものになったな。君の言葉を当てにして良いのだろうな」

同じ問いが、俺に向けた婦人たちのまなざしにも込められていた。

ラヴレース「宜しいですとも、閣下。結構ですよ、ご婦人方。そうしていただいて、一向に構いませんよ」

それから、令嬢の容姿の特徴が、彼女のもっと非凡な才能や資質と合わせ、改めて長々と論じられることになった。そして、彼女を一度見たことのあるパティは、他の者たち全員にも増して、彼女への賛辞を並べ立てたのだ。これらの後には、結婚の契約書類の中では決してなおざりにされることのないような問いが続いた。当事者自身からは決して触れられることはないが、おそらく、彼らにしても真っ先に念頭にあったことで、通常、一族の賢人たちにとっては第一の動機となるようなものだ。つまり、令嬢の財産についての問いだ。祖父の地所の詳細について、そして、和解が成立するものとしての話なのだが、というのも、俺に落ち度がないかぎり、自分たちの力によって両家の間に和解がもたらされるのは疑いないものと連中は思っているわけで、その際に、父親と純な心をしたおじたちが彼女のためにしてくれそうな事柄についての質問だよ。尊敬すべき二人の老淑女は［今ではもう、俺にとってはオールドミスなんかではないのだからな］、自分たちが考えている高価な贈物のことを仄めかしていた。そして、卿のほうでは、ハーロー嬢との結婚を、俺がかつて成し遂げた中でも最高の一日仕事にするような、俺にとって有利な申し出を行うつもりだし、それは、俺にとってと同様、あの一族にとっても好ましいものとなるのは疑いのないところだと断言していた。

こうして、現在のところは、結婚という名の剣が、俺の頭上に髪の毛一本でぶら下がっているというわけだよ。そして、こんな具合にして俺の裁判も終わりを告げたわけだ。また、こうしてわれわれ全員は繕りを戻し、一言ごとに、やれ「いとこ」だの「甥」だのと呼び合っているという塩梅だ。

かつて喜劇が、この長たらしい裁判以上に目出度く終わったことはあっただろうか。

手紙　五十八
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

七月十二日　水曜日

従って、ジャック、連中は大きな成果を上げたと考えているのだよ。だが、もしも俺が心変わりをすれば、後悔するようなことになれば、無事に済みそうな気もするのだよ。ただし、今この瞬間にも、当てにするのも難しいことだと、そんな気持ちが沸き上がって来るのだ。というのも、つい先頃まで火のついていたところには、きっと燃えさしが少し残っているはずで、そいつが掻き立てられ、そっと撒かれた可燃物を燃え上がらせてしまうということも有り得るからだよ。愛というのは（自己繁殖する何かの植物とか、大地にしっかりと張った根のように）、一旦心の奥深くまで忍び込むと、なかなか完全に根絶やしにするわけには行かないもので、実際、結婚する以外に手がないのだが、結婚生活というやつは、愛の墓場なのだよ。愛情の死滅する余地はあるわけだからな。それに、これらのお嬢さんたちすべては、おそらくハウ嬢を先頭にして、自己弁護をしているのさ。自分自身の弁護人になっているのだよ。俺の利益などを考えてのことではない。俺がハウ嬢にそんなことを期待するわけもないが、おそらく、ハウ嬢自身のためのことなのだよ。ハウ嬢には、思うに、俺の復讐を懸念して然るべき理由があるわけだからな。俺が彼女の最愛の友と結婚することになれば、彼女のヒックマンも安全だと、そんなふうに考えているのかもしれない。何しろ、あの男はお節介な奴だから、一発お見舞いしてやりたいものだと、俺も長いことそう思っていたのだからな。令嬢の立場は身内の間で絶望的でもあるし、独身のままで、人柄が非難に晒されている間は、そういうことになりそうなのだよ。

夫というのは魅力的な外套なのだ。体裁の悪いところを覆い隠すエプロンというわけだよ。妻たる者にとってはな。また、心から熱望する気ままな行動や気晴らしに耽る際、庇ってもらわなければいけない貴婦人にとってもだよ。しかも、そんな女の落ち度のすべてが、極めて罪深いものまでが、露見した暁には、夫の身に降り懸かるのだ。嘲笑も一緒にだよ。妻にとってはまことに魅力的な特権というわけさ。

しかし、結婚するとしても、俺には慰めとなることが一つあるはずで、そいつが俺を少なからず楽しませてくれるのだ。ある男の妻に同性の親友がいる場合、その親友に対して気儘な振舞いが百ほども為されるかもしれないのだが、そういった行動というのは、もしも未婚の女性のほうが（自分の友達に向かってずいぶん無遠慮な振舞いに及ぶ権利を、結婚というものがその男に与えているのを知って）、自分自身に関しての話だが、その男に対して守って当然な几帳面さを欠くようなことにならないかぎりは、男としても取るわけに行かないような行動なのだよ。それに、妻に対して夫から加えられるかもしれない、あけすけな馴々しさ（とでも呼んでおこうかな）というものもあるのだ。まったくもってけしからんというものではなく、妻がそれを友人の目の前で耐え忍んで見せたりすると、友人にとっては一つの教えともなるものだ。そして、友人のほうでも、押し止めたり、恥ずかしげにして見せることもなく、耐えてその場に居合わせるようであれば、賢明な男にとっては一目瞭然というわけだ。適切な機会に、適切な場所では、その女自身も同程度のことは我慢してくれるということがだよ。貞節というものは、ジャック、信心深さと同じことで、一定不変のものなのだ。もしも表情の点で、もしも言葉遣いの点で、女の子が度を越

してはしゃいでみせる時には、請け合っても構わないが、すでに悪魔が例のひずめの割れた足の片方を彼女の心の中に突っ込んでいるのだよ。だから、忠告しておくが、ヒックマンよ、用心することだな。俺が結婚するとかしないとかには関わりなくだ。

こうして、ジャック、俺は身内の者全員とすぐさま縒りを戻したのだ。従って、令嬢が俺を拒む場合だが、責任は彼女のほうにおっかぶせたというわけだよ。俺には分かっていたのさ。いつだって、これくらいのことはやってのけられるのをな。そして、連中に対しては一層横柄な態度を取ってみせたわけだが、俺が承諾するに当たって、その値打ちを高めるためのことなのだよ。

だが、結局のところ、俺の陰謀や計略のすべてが結婚という結末を迎えるとしたら、どうだろう、まことにもって奇妙な話ではないだろうか。これはまた何という懲らしめになるのだろうな。それも、俺自身にとってだよ。これまでの間ずっと、自分自身の宝の蔵に対して略奪行為を働いていたというのだからな。

それに、果たしてそれほど大きな被害があるというのだろうか。呪文を少し唱えるだけで、そんなにも簡単に埋め合わせが出来るのであればな。「我ロバートは、汝クラリッサを妻に娶り …… 」と「私クラリッサは、貴方ロバートを夫に迎え …… 」といった呪文だが、「良き時も悪しき時も」などといった手品もあって、俺がハーロー嬢に対して行った悪事のすべて、はなはだしい悪事のすべてを、ラヴレース夫人への温情と慈しみに溢れた行為へとすり替えてくれるわけだからな。

しかし、ジャック、このようなことになるのが実情だとすれば、貴公には二つの点を要求しなければならないな。俺と妻との間の重大な秘密を貴公の掌に握らせたのだから、俺自身の名誉のために、また、我が妻および我が輝かしき子孫の名誉を守るためにも、まず第一に、貴公に対し俺がかくもふんだんに書き送った手紙を放棄させるということだ。そして第二には、ある君主の実の父（二六）によって為されたことだと、フランスで囁かれているのを聞いたのだが、そいつを貴公に対して行わねばならんということだ。つまり、貴公のお喋りを防ぐためにも、その喉を切り裂いてやるということだよ。

ここにいる身内の者たちが俺に対して抱き始めた好意的意見をさらに高めるような、そんな手段を俺は見つけ出したのだ。挙式を迫るべく、我が許婚に書き送った最後の四通の文面を連中に知らせたわけだよ。卿は、俺のためになるようにと、お得意の警句の一つを繰り返していたが、「悪魔も描かれているほどに黒くはない」ことが判明するよう希望しているというのだ。

そこで、親愛なるジャックよ、ひとつ頼みがある。われわれのこの結婚からこんなにも多くの好結果が生じるのだし（そのうちの一つは、貴公自身にとっても好ましいものなのだよ。死ぬのが早ければ早いほど、貴公が負うべき責任も少なくなるわけだからな）、それに、時として俺も、あの年寄りの考えはちょっとしたものだと思いがちなのだが、「人を殺す男は、自らの罪と共に、相手の罪のすべてを背負うことになる。何故なら、天が与えるつもりでいた罪を悔いるための時間を、相手に与えなかったからだ」と、前に話してくれたことがあるのだよ［頭を殴り飛ばされることに同意するのなら、貴公にとっては結構な話ということだ。ただ、殺人者にしてみれば、忌々しい話ということになる］。それに、ハウ嬢がわれわれに援助の手を差し伸べてくれないのではと、そのように懸念すべき余地もあるということだ。そんなわけだから、願わくは、我がクラリッサ・ハーローを捜し出し

てくれるよう、今こそ貴公に骨折ってもらいたいのだよ。彼女をラヴレース家の一員にするためのことだ。都の周囲十マイルに亘り、市や州の触れ役すべてを仕事に就かせ、「静粛に、静粛に、静粛に。さて、男であれ女であれ、はたまた子供であれ、情報・消息の提供者はおらぬか」と触れ回らせるのだ。すべての新聞に広告を出して、彼女に知らせるのだよ。ベティ・ローランス夫人、あるいは、シャーロット・モンタギュー嬢をお訪ねくださるなら、彼女にとって極めて有利な話をお聞きいただけるはず、とな。

∴　∴

俺の従姉妹であるモンタギュー嬢両名が、明日、実際にハウ夫人のところへ向けて出発することになっている。友達に対して顔を利かせてもらうよう、夫人のあの口やかましいお嬢さんに頼んでみようというのだよ。常にも増して盛装を凝らし、勿体ぶって見せようというのだが、連中は六頭立てのチャリオットで乗りつけることになっている。畜生め、口惜しいかぎりだよ。こうまで落ちぶれてしまうとはな。

プライドからしても、俺には耐え難い話なのだ。

M卿は、結末を見届けてもらうためだが、ここに滞在するよう、老淑女二人の約束を取り付けたのだ。そこで、今のところはすこぶる連中の覚え目出度いこの俺が、オクスフォード、ブレナム(二七)、その他数箇所へ連中のお供をつかまつることになっているのだ。

手紙　五十九
ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

七月十三日　木曜日　夜

コリンズは明日は出掛けません。何か家の仕事が妨げになっているのです。ロジャーズは今貴女のところから戻ったばかりですし、うまい具合に仕事を外して上げるわけにもまいりません。ヒックマンさんは母の用事で出掛け、ご自分の召使を二人とも連れて行ってしまいました。雇主の面目を立てるためです。従いまして、これは、危険かとも存じますが、貴女が使っておられるお名前に宛て、郵送せざるを得ないということです。

お知らせしなければなりませんのは、モンタギュー嬢とその妹さんとが、M卿の六頭立てのチャリオットでですが、わざわざ私のところをお訪ねくださったということです。昨日、卿に仕えております男の人が馬に乗ってまいりまして、大変に特別なご用件で、若い貴婦人お二人のご訪問を受けてほしいという要請があったのです。明日にしてもらえるならさらに有難く思います、とのことでした。

どちらの方とも個人的な面識はほとんどございませんでしたので、疑いもなく、私の大切なお友達に関わることに違いないと思いました。それで、母とも相談いたしまして、ディナーをご相伴賜るよう(遠方からということがございますので)、ご招待いたしましたところ、快諾してくださったのです。

事態はこんなにもひどく悪化しているのですから、いかがでしょう、あの方たちのご用向きが、現在の時点で起こり得るどんなことにも劣らないくらい、貴女のお気持ちに叶う

ものであってほしいと、私はそのように願っております。あの方たちはM卿、そして、セアラ夫人とベティ夫人という、卿の二人の妹さんたちのご名代として、貴女がベティ夫人の保護に身を委ねるお気持ちになるよう、私の力添えを頼みにこられたのですが、ベティ夫人といたしましては、今の段階で可能なかぎりの償いが貴女に対して果たされますのを見届けられるまでは、決して貴女を手放さないおつもりだとのことです。

セアラ夫人はここ十二ヶ月の間、外出はなさらなかったのです。貴女も私もベンソン夫人のお宅で拝見したことのある、あの素敵なお嬢さんを亡くされてからというもの、一度も外出なさらなかったのです。でも、ベティ夫人のお誘いを受け、この旅をなさるお気持ちになられたのです。出来ることなら、貴女への補償を確実なものにしたいという、純粋にそんなお考えからのことなのです。お二人が協力なさり、M卿のお力とも結びつきまして、上々の首尾を収めたものですから、あの恥知らずが皆様に、そして、このお嬢様たちに対しましても、厳粛この上ない態度で誓いを立てることになったのです。あの男に結婚の約束をしてくださるよう、皆様が貴女を説得出来るようでしたら、その時は、皆様の立ち会いを得て、貴女と結婚するというのです。

貴女も次の点は慰めとなさって構わないでしょう。この高貴な一族の皆さんが貴女の長所に対しまして正当な（つまりは最高度の）認識をお持ちで、貴女のことを大層称賛しておられるということです。貴女の美徳を公平に評するという点では、あの忌まわしい男も労を惜しむことはなかったのです。そして、あの男の告白や自分を責める姿をお嬢様たちがさかんにお話しくださるものですから、母などはすっかり貴女に夢中になってしまったほどですし、私たち四人は揃って嬉し涙を流した次第です。あんなに自惚れた破廉恥漢からの大袈裟な褒め言葉にも相応しいほどに、私たち女性の面目を施してくださった方がお一人、女性の中にいらっしゃるということでですわ［私につきましては、そのお一人の方が私の最愛のお友達だということです］。ただ、飛び抜けて素敵なその方をお気の毒に思います気持ちが、私たちの喜びには混じり合っておりました。

あの男は、お嬢様たちを通じて、最高の夫になることを約束しておりまして、M卿、セアラ夫人、そして、ベティ夫人のお三方が、揃ってその保証人になってくださるというのです。素晴らしい贈与財産、立派な贈物のことをお二人は話しておられました。お二人がおっしゃいますには、M卿と卿の二人の妹さんを残して発たれました際にも、あの方たちが口になさるのは、その贈物や贈与財産のこと以外にはなく、貴女がお受けになった辱めの大きさに比例するわけですが、どのようにすると貴女が最も面目を施すことになるのかということ、そして、願っておられるよりは近い話になるのではないかと、皆さんも心配しておられることですが、卿が亡くなられた際に財産の大半が渡ることになります、その受取人となる権利を取得するためにも、皆さん全員が手を結んで力添えしてくださる準備として、というわけで、法令による名義替えの件を話題にしておられたというのです。それに、貴女がお手本となり、影響を及ぼすのですから、あの男の素行が完全に改まることも疑いのないところだと、皆さんはそのように考えておられるのです。

貴女になり代わりまして、私もずいぶんと沢山異議を唱えました。同席しておられたなら、貴女ご自身が唱えられたに違いない異議をすべて唱えたつもりです。ただ、何の疑念も感じずにお勧めするのですが（また、母もお勧めしております）、あの恥知らずを夫にお迎えになるという覚悟の上で、すぐにもベティ夫人の保護の手に身を委ねられるべきでし

ようね。あの男が今後とも威厳ある態度を保つことが出来るかどうか［自尊心に欠けているわけではありませんからね］、すべては貴女に対する誠意次第ということでしょう。そして、貴女に対して行った自分の悪事をあの男が深く悔やんでいることは、お嬢様たちが保証しておられるところなのです。

貴女がご自分の被った災いのことをすぐにも皆さんにお知らせするのではと、あの男は心配しておりますが、あの男の懸念はもっぱらその点にあるのです。そのことで、貴女たち両方を世の晒し者にしてしまうと考えているわけです。でも、貴女がその災いのことをベティ夫人に明かしておられなかったなら、こんなにも熱心な味方を得ることはなかったのです。この好結果 … そうであってくれるよう願っておりますが … のすべてがもたらされましたのは、貴女が夫人宛にお書きになった例の二通のお手紙のお陰なのですからね。でも、あの男を受け入れるお考えのあるなしに関わらず、過ぎたことを暴露なさるのはもう少し慎まれますよう、ご忠告申し上げます。今では、そのようなことをなさって何の役に立ちましょう。あの悪辣な破廉恥漢がお身内の方々に対して勝ち誇って見せる手掛かりを与えるだけのことでしょう。貴女の災難そのものがどれほど貴女の名を高めるものであったのか、どなたもがそのことをお知りになるわけでもないのですからね。

ロジャーズが届けてくれました心痛むお手紙(ア)に加え、貴女のお顔付きや、話しておられる間に気が遠くなられたことばかりでなく、その家の女性によっても確認されたことですが、貴女のお体具合が優れないという、ロジャーズの報告がありましたので、このお嬢様たちからの嬉しいご訪問で心を慰められるということがありませんでしたなら、私は言い表しようもないほどに苦しい思いを味わっていたことでしょう。ご来訪のご用向きをお知らせいたしましたが、貴女も同じように慰めを得られますよう願っております。

本当ですわよ、あなた。ためらってはいけないのです。皆さんの願いを容れて差し上げなければいけません。素晴らしい、名誉をもたらす縁組なのですからね。貴女に対するあの男の獣のような卑劣さにつきまして、少しでも知ることになるような人は、ごくわずかしかいないのです。もう少しいたしますと、すべては全面的な和解という形で落着するはずですし、貴女といたしましても、向かわれます先々で祝福をお受けになる所以ともなっておりました、援助するに相応しい人には一人残らず慈善をお施しになるという、例のお仕事にお戻りになることも可能になるわけですからね。

お父様の残酷な呪いがそんなにも貴女のお心を痛めておりますのを知り、心配いたしております。でも、そのことにつきまして、あのようなおっしゃり方をなさるなんて、貴女も心の気高い方ですわね。貴女ご自身のためというよりも、皆さんのために取り下げてくださるよう、本当にもっと強く求めていただきたく思います。悔いて然るべきなのは皆さんのほうなのです。ご自分では十分に避けることの出来ない災いへと、貴女を急き立てた人たちなのですからね。ご自分の一件にまつわる理非曲直に基づいて裁くというより、むしろ、不幸な出来事によって判断しがちなところが貴女にはおありです。誓って申しますが、貴女が取られた行動のほとんどすべての点につきまして、貴女に落ち度はないと私は考えているのです。忌まわしいほどに傲慢で欲張りで、それでいて愚かしい、あのお兄様はどれだけ責任を負わなければならないことでしょうか。あの悪意に満ちている人、つま

（ア）百五十四頁以降を参照のこと。

り、貴女のお姉様も同じことですわ。

でも、宜しいですね、過ぎ去ったことは仕方がないのですから、前の方に目を向けることにいたしましょう。今、貴女には幸せな前途が開けようとしているのです。すでに高貴な身分にあるご一族が、両腕を広げ、喜び溢れる心で貴女を迎え入れ、抱き締めようとしておられるのです。それも、貴女への愛情から、もう一つのご一族に（どれほどの並外れて立派な方を、皆さん共謀して迫害なさったのか、それが分からない人たちですが）貴女をどのように重んじたら良いのか、その仕方を教えてくださる方々なのです。貴女の思慮深さ、貴女の敬虔さがすべての総仕上げとなることでしょう。本人のためというよりも百人もの人々のためにですが、心改めることが望まれております破廉恥漢を、貴女の手で矯正して上げることになるのです。

どこかの急流が溢れたために回り道をさせられた旅人と同じことで、貴女の場合も、辿っておられた真っ直ぐな小道が水に没しただけの話です。数マイルの遠回りで、一日か二日だけの無駄と申して構いません。貴女はそれを取り戻すべき緒に就かれたのですし、歩調を速めることで、遅れを取り返すことになるのです。当面、貴女にとって不都合に思われますのは、お気持ちを急かされ、落ち着かないことだけでしょう。前進を阻まれてしまわれましたのは、貴女の落ち度ではなかったわけですからね。

この点をお考えくださいね。そして、この譬えを善用してだきたいのです。その方法はご存じなのですからね。もしも、ご自分の前進を妨げることなく、氾濫を鎮め、流れを本来の水路の中へ押し止め、そのことによって、今後同じ道筋を辿る人々のために、水に埋もれた小道を復旧する手段となることが出来るのでしたら、貴女のお手柄はどんなにか素晴らしいものになることでしょう。

貴女の次のお手紙を待つことにいたしますが、もどかしい思いです。お嬢様たちはこんなことを提案しておられました。貴女がロンドンかその近郊におられるのでしたら、フリート街辺りに停車いたしますレディング行きの駅馬車に乗り込んでいただきたいとのことでした。そして、もしも日時をお知らせくださいますなら、途中で、それも出発されて間もないうちにですが、男女を交えました数人の者たちと出会っていただくことになりましょう。そのうちの一人とは、お会いくださっても後悔はなさらないはずです、とです。

ヒックマンさんがスラウからお供をいたしますし、ベティ夫人ご自身とモンタギューさんのうちのお一人は、正式に供回りを揃えた馬車をご用意の上、レディングで貴女をお迎えし、そのまま真っ直ぐに夫人のお屋敷へお連れするのです。と申しますのも、貴女のお許しがあれば別なのですが、ご婚礼が執り行なわれるようになりますまでは、あの破廉恥漢本人が貴女の前に姿を現わしたりしないよう、私のほうから条件として特にお願いしてあるからなのです。

さようなら、最愛のお友達。お幸せになってくださいね。貴方が幸せになってくだされば、その結果として、何百人という人たちが幸福になるのですからね。その時には、この私も、勿論のこと、言い表しようもないほどに幸せになるのですからね。

変わることなき親愛の情を込めまして、貴女の

アナ・ハウ

手紙　六十

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

七月十六日　日曜日　夜

大好きなお友達へ

貴女のお役に立とうと、こんなにも専念しております心ですもの、木曜の夜の私の手紙のように、貴女にとりましては、従って、私にとりましても、とても重要な意味を持つ手紙へのお返事がなければ、悩み苦しむことになるのはご承知のはずですのに、そんな苛立たしさにこの心が苛まれますのを、どうして貴女は放っておかれるのでしょうか。木曜日にロジャーズが教えてくれたのですが、ひどくお加減が悪かったそうですね。あの人の届けてくれたお手紙もひどく心の痛むものでした。それにいたしましても、本当にご病気なのに違いありませんわね。筆を執ることが出来るようになり次第、すぐにも書きましょうと、そうおっしゃってくださるための、ただの一行だけにせよ、あのような便りに一筆認めていただくわけにも行かないというのでしたらね。確かに貴女は受け取っておられるのです。私どもの一番近くにあります郵便局の局長さんは、あの便りが無事に届いたことにつきましては、ご自分の評判を賭けてみせると言っておりますし、私も、特別に扱っていただくようお願いしていたのです。

お元気になられた、筆を執ることも出来るようになられたという、そんな朗報の届きますことを祈っております。そして、その時には、お小言を言わせてもらいますわ。本気ですからね、私。これまで申し上げたこともないほどのお小言をですわ。

推察いたしますに、貴女が言い訳になさいますのは、この問題は考慮を要するものだったということなのでしょうね。それはまあ、そういうこともあるでしょう。でも、そんなにまともなお考えをしていらっしゃるのですし、当面の問題にいたしましても、実に明白なものなのですから、お決めになりますのに三十分と要しないはずでしょう。それで貴女は、おそらく、コリンズがお手紙を取りに来るのは次の日くらいにお考えになり、それまで待つおつもりだったのでしょう。もしかして　…　宜しいですか、お嬢さん（私、本当に怒っているのですからね。もしかして）、金曜日の時みたいに、何かがあって、明日あの人は上京出来なくなるとしたら　…　この私に向かって、あなた、どうしてこんな仕打ちがお出来になるのでしょうね。ガミガミ申し上げますのをどうしたら止められるのか、私には見当もつきませんわ。

さあ、律義者のコリンズさん、急ぐのですよ。あの人は急いでくれるでしょう。急いでくれるはずです。今、出掛けます。夜通し進むのです。と申しますのも、あの人には話してあるのです。この世で一番大切な私のお友達がお幸せになって、私も幸福にしてくださるような、そんな選択の機会を掴まれたのだということをです。それに、お友達から預かって来てもらうお手紙がその点を保証してくれるはずなのだということもです。

あの人には、貴女の下宿へ真っ直ぐ（サラセンズヘッド亭には寄らずに）向かうよう申しつけてあります。今では事態もすっかり良いほうへ向かっておりますから、あの人も無事に着いてくれることでしょう。

待望のお手紙はもうご用意くださったでしょうね。もしもまだでしたら、貴女のおっしゃる時刻に、あの人がいただきに伺います。

貴女に似つかわしいほど幸福にならられるわけにはまいらないでしょう。それでも、可能なかぎりの幸せをお掴みになることは疑っておりません。つまり、今すぐに、ベティ夫人の保護の手に身を委ねられるほうをお選びになるだろうということをです。貴女ご自身のためには、あの破廉恥漢と一緒になるわけには行かないとおっしゃるのでしたら、私のために、また、貴女のご家族、そして、貴女の名誉のために結婚なさることです。さあ、律義者のコリンズさん、急ぐのです。急いでください。そして、この苛立つ心を鎮めてほしいのです。

変わることなき誠意、変わることなき親愛の情を込めまして、貴女の

アナ・ハウ

手紙　六十一

ハウ嬢からシャーロット・モンタギュー嬢へ

七月十八日　火曜日　朝

マダム

失礼とは存じますが、この特別な使者に託しまして、お手紙を差し上げます。心も千々に乱れるまま筆を進めておりますが、貴女様に、そして、どなたであれ、お話しいただけますお身内の方にお尋ねしたい点があってのことでございます。私の最愛のお友達の消息のことでして、その人は神隠しに遭ってしまわれたようにも思われるのですが、極悪人の一人　…　あゝ、この男を呼ぶのに相応しいほどの悪口がありましたなら、是非ともお教えいただきたいものです　…　そんな男の卑劣な手管によってのことなのです。お友達は信仰心の篤い方ですから、自殺を企てるようなことは有り得ません。違いありません。あの男に違いないのです。たった一人の破廉恥漢でしょう。あんなにも無垢な人を傷つけることが出来る人間というのは。そして今度は　…　あの男がお友達に一体どんなことをしたのか、分かったものではございません。

私に辛抱強さがあればの話でございますが、気の触れたようなこの興奮ぶりの原因につきまして、ご説明申し上げることにいたします。

貴女様とお妹様がお帰りになられるとすぐ、私はあの人宛に筆を執りました。でも、予定いたしておりました特別な使者を都合することが出来ず、やむなく、郵送しなければなりませんでした。あの人には熱心にお勧めいたしました［そうすることをお約束いたしましたのは、ご存じのとおりですので、私はお勧めしたのです］。ご一族皆さんのご希望に応じて下さることをです。お返事がございませんでしたので、日曜日の夜に再び筆を執りまして、夜道を急いでくれます、私の個人的な使いの者の手でお届けしたのですが、あの人にとりまして、従いまして、私にとりましても、これほど重大な問題のことですのに、私のように待ち焦がれております者の心を、こんなにも惨いどっちつかずの状態にしておくなんてと、お小言を申し上げたのです。そして、心の中ではあの人にひどく怒りを感じておりました。

でも、昨夜、大急ぎで戻りました使者が次のような知らせをもたらしました時、私の驚きようや取り乱しようはどれほどのものだったことでしょうか。ご高察いただきとうござ

います。あの人の消息は、金曜日の朝以降途絶えているというのです。また、あの人宛の手紙が一通お部屋にあったとのことですが、郵送されたものでして、私の手紙に違いないのです。

その朝、あの人は六時に出掛けました。これまでにも時々そうして来られたように、下宿のすぐ近くにありますコヴェントガーデン教会での朝のお祈りに出るだけのおつもりだったはずと、皆さんはそう信じておられます。何と、徒歩でとのことです。一時間ほどで戻ると言い残して行かれたわけですが、お加減がひどく悪かったのでしょう。

主よ、憐れみ給え。一体どうしたら良いのでしょう、私は。昨晩などは、夜通し狂気の沙汰でした。

あゝ、マダム、私がどれほどあの人のことをお慕いしているのか、お分かりいただけないのです。私自身の魂でさえ、クラリッサ・ハーローさんに比べますと、大切ではございません。いいえ、あの人こそ私の魂なのです。と申しますのも、今の私に魂はございません。ただ、ありますのは惨めな心だけです。あの人こそ私の喜びであり、支えであり、頼りだったのですからね。私たちが慕い合っておりますのと同じくらいに、女性同士で慕い合った人など、いまだかつていないのです。あの人の素晴らしさの半分でもお教えいたしますのは不可能なことです。あのように純粋で、類いまれなお方をこんなにも熱烈にお慕い出来るということ、それが私の栄誉であり誇りであったのです。でも、今は　…　辱めを受けましたあの愛しいお方がすべての苦悩に、いわれもなく嘗めさせられました苦悩に、死をもって結末をつけはしなかったのか、あるいは、さらに辛い定めを背負うべく運命づけられておられるのではないのか、どこのどなたに分かるというのでしょうか。この点は貴女様のご調査に委ねることといたします。貴女様の　…　［あの男をこのように呼んで構わないのでしたら　…　貴女様の］ご親戚の男はまだお傍にいるものと承知しているからでございます。

母のおりますところでお二方からご提案のございました点は、勿論、十分に権限を委ねられてのことと存じます。貴女様方のご信頼、そして、高貴なご親戚の方々のご信頼を裏切るような図太さは、勿論、あの男にもないことでしょう。このようなご迷惑をお掛けいたしますこと、そして、一行なりとお手を煩わせていただきまして、この使者にお託しくださいますようお願い申し上げますことにつきまして、弁解は一切いたしません。

心乱れますままに、貴女の

アナ・ハウ

手紙　六十二

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

七月十五日　土曜日　夜　M邸にて

万事休すだ。いやはや、お終いだ、畜生め。今度はどうしたら良いというのだよ、ジャック。俺の陰謀に、そして、企みのすべてに呪いのあらんことを　…　だが、呪われているのだよ、俺は。心の奥底で呪いを受けているのだ。

貴公に言わせると、俺の懲罰は始まったばかりということだったな。あゝ、運命の予言

者よ、貴公には出来るのか。懲罰はどこで終わるか、貴公には語ることが出来るのかな。

貴公の助力を要請する。これを受け取り次第、援助の手を差し延べてもらいたい。この使者は死に物狂いで馬を飛ばすのだ。君がロンドンでの下宿にいるところを見つけてくれるよう願っている。日曜日ということもあり、最初にエッジウェアを訪ねることになっているのだが、そこで君に会えない場合にはだよ。

この忌々しい、実に忌々しい女は金曜日に、サリー・マーティンの得意満面の手紙にあった嬉しい（俺にとっては嬉しいはずだと、あの女は考えたのだ）知らせを持たせ、馬で男を一人送ってよこしたのだ。水曜日のことだが、我が天使を見つけたというのだよ。そして、金曜日の朝、彼女がコヴェントガーデン教会での祈祷を済ませ … 多分、俺の改心を祈っていたのだろうな … 下宿に戻ろうとしているところを、州長官の執行吏二人に逮捕させたのだが、この二人は（悪党めが）用意してあった駕籠に彼女を押し込め、罰当たりな野郎の留置所の一つへと連れ去ったということだ。

あの女のほうでは、賄い付き下宿代と称し、百五十ポンドの債務の件で彼女を逮捕したのだが、おそらく、彼女には（手口の下卑たあくどさにかてて加えて）拵えることの出来ない金額だ。彼女の衣類や身の回りの品は、出掛けた際に身に着けていたものや携えていたものを別にすると、すべてあの人でなしの婆さんのところに置いてあるわけだからな。

そして、さらに悪いことには、愛しの君はすでに二日をそこで過ごしているのだ。というのも、俺は叔母二人と従姉妹二人の機嫌を取らねばならなかったし、床に伏していたM卿には散歩のお供というわけだよ。一族揃って疫病に取りつかれろってところだな。それに、戻ってから一時間も経たないくらいだし、戻ってみれば、例の忌々しい知らせと得意満面の手紙とが届くものだから、俺としては気も狂わんばかりの有り様なのだ。

急ぐのだ、急ぐのだ、親愛なるジャック。傷ついた魅惑の君の元へと、後生だから急いでくれ。彼女のことを思うと、血を流さんばかりに心が痛むのだ。彼女にはこんな目に遭ういわれはないのだよ。危険を冒して動き出すわけには行かんのだ、俺は。俺のたくらみによって為されたことと思われるだろう。それに、ここを留守にしたりすれば、その疑いを固めることになるのだよ。

今すぐにでも地獄に落としてやりたいところだよ、この忌まわしい女は。ところが、本人のほうでは、俺に対して結構な手柄を立てたつもりでいるわけだ。不幸な、まことにもって不幸な成り行きというものだな。しかも、愛しの君にとっては明るい見通しが開け始めていた時のことなのだよ。

彼女の元へ急ぐのだ。この忌々しい仕業に俺は手を染めていないのを証明するのだ。心の底から誓う。神聖なるものすべてにかけて誓うが、君には出来ることなのだ。ただ、俺も飛び切りの陰謀好きだったから、魅惑に満ちたあの受難者もなかなか信じてはくれないだろうな。手口がひどく汚らわしいほどに下卑たものだとしてもだ。

彼女に会ったら、その場で釈放してくれ。条件は一切付けず、自由放免だ。俺になり代わり、両膝をついて許しを請うてくれ。そして、確約するのだよ。彼女がどこへ向かおうと、俺のほうから干渉したりすることはないということをだよ。否、許可なしには、彼女に近づいたりもしないと言うのだ。そして、あの忌々しい連中は一人も近寄らないようにするのだ。きっとだぞ。ただ、君が彼女から時々指示を受けるようにすることだけは認めてもらうのだ。君はいつも彼女の味方であり、擁護者であったのだからな。君が首尾よく

その役目を果たせるようにさせていたとしたら　…　今の俺は、一体どんなものを差し出そうとすることだろうな。

彼女の衣類と身の回りの品一切を、俺の誠意を示すささやかな証のつもりだが、すぐに彼女の元へ送り届けさせるようにしてくれ。そして、愛しの君は無一文のはずだから、受け取ってもらえるだけの金を、無理やり、君のほうから握らせてくれ。彼女はどんな扱いを受けていたのか、知らせてほしい。手荒なことがあった場合には、覚えのある者には災いあれ、といったところだな。

彼女を自由の身とした後、時計を手に取るのだ。そして、あの女どもを、ドラゴンも毒蛇も、すべて罵倒してやるのだよ。貴公が疲れるまで、一時間単位でだ。そして、話してやるのだな。奴らの忌々しいお節介に対してそのような仕打ちを加えるよう、俺が貴公に命じたのだとな。

彼女を見つけ出した時、どのように事を進めるのか、奴らとしては、俺の指示を待つ以外には何もすべきでなかったのだよ。

悪魔の親分が奴ら全員を捕まえ、飛び去ってほしいものだな。奴らのあの呪わしい家の屋根を突き抜いて、一人ずつだ。そして、空を舞いながら、奴らを煙突の天辺に叩きつけて粉々にし、その散らばった破片を下っ端の悪魔どもに拾わせ、袋に集めるのだよ。定められた場所で、火の力を借り、溶けた鉛をつなぎにして、元の姿に組み立てるためだ。

一行で良いのだ。一行だ。何でもくれてやるから、一行頼む。耐えられそうな知らせをな。筆を執れるようになったら、すぐに頼む。それを持ち帰るため、こいつが待機することになっているのだ。

手紙　六十三
シャーロット・モンタギュー嬢からハウ嬢へ

火曜日　午後　M邸にて

親愛なるハウ様へ

お手紙をいただきましたが、私たちは皆とても当惑いたしております。

この惨めな男は、土曜日の夜以降というもの、ずっと半狂乱の状態なのです。

この人を苦しめておりますのが何なのか、お手紙が届きますまで、私たちには分かりませんでした。

悪辣な破廉恥漢ではありますが、でも、この新たな災いにつきましては、あの人に罪はございません。

確かに無実なのです。間違いございません。後ほど、詳しくお話しいたしましょう。

でも、今はお使いの方を引き止めないことにいたします。

大切なお嬢様はご無事であるということ、そして、お元気と思われますことをお伝えいたしまして、当然のお苛立ちを癒して差し上げるだけに止どめるためです。

この人からありました全員への指示につきまして、とんでもない取り違いがございましたために、あの方は逮捕などという恐ろしい思い、恥ずかしい思いを強いられることとなった次第です。

お気の毒なハーローさん。数々の美点を備えておられるということで、貴女があの方を慕っておられますのとほとんど同じくらいにですが、私たちは、苦難に遭われたということで、あの方への愛情を募らせております。

でも、今はあの方もすっかり自由の身になっておられるはずです。

知らせが届きましてからというもの、この男は狂気そのものでした。何がこの人を苦しめているのか、私たちには分からなかったのです。

でも、それは前に申し上げましたね。

M卿とセアラ・サドレアー夫人、そして、ベティ・ローランス夫人の皆さんが、本日の午後、貴女にお手紙を出されます。

同じように、あの恥知らず本人もです。

皆さんの召使の手でお届けいたしますが、貴女のお使いを引き止めておかないためのことです。

何を書いているのか、自分でも分かりません。

でも、委細のすべてにつきましては、謹んでお知らせすることにいたしますが、正確で嘘偽りのない、公明正大なものでございます。

親愛なるマダム、

忠実にして従順なる貴女のしもべ

CH. モンタギュー

手紙　六十四

モンタギュー嬢からハウ嬢へ

七月十八日　M邸にて

親愛なるマダム

お約束ですので、私たちがこの忌まわしい出来事につきまして承知いたしております点すべてを、詳しくお話しすることにいたしましょう。

木曜日の夜、貴女のところから戻りまして、貴女が私たちのことを、そして、私たちの用向きのことを快く受け入れてくださり、ご親切にも、大切なお友達に対しまして、影響力を働かせてくださるとまで約束してくださいましたことを報告いたしましたところ、そのお陰で、私たち全員は互いに、また、従兄弟のラヴレースさんに対しましても、すっかり機嫌が良くなりまして、金曜日から土曜日にかけて小旅行に出掛けることを決めたのです。卿とセアラ夫人に新鮮な空気を吸っていただくためなのですが、お二人とも長くお屋敷に閉じ籠もっておられたのです。お一人はご病気のためですし、お一人は塞ぎ込んでおられたからです。M卿、セアラ夫人、ベティ夫人、そして、私が馬車に乗りました。私たちの間でもっぱら話題となりましたのは、大切なハーローさんのこと、そして、あの方との将来の幸せのことばかりでございました。ラヴレースさんと妹は（妹はラヴレースさんのお気に入りですし、妹もあの人を贔屓にしているものですから）あの人のフェートンに乗っておりました。そして、私たちが落ち合いますとそのたびに、やはりそのことが話題になっていたのです。

あの人はと申しますと、ハーローさんについてあの人が口にいたしましたのと同じくらいに、女の人を褒め称えた男性もかつておりませんし、あの人よりも大きな望みを抱かせた者や、あの人以上に立派な決心をしてみせた者もおりません。あの人は利害に支配されるような人間ではございません。誇りが高すぎて、そのような真似は出来ないのです。ただ、あの方のことを、そして、あの方のご愛顧が以前どおりに戻る見込みについて話します時には、心の底から嬉しそうにしておりました。でも、一度ならず、次のようにも言っていたのです。つまり、あの方は許してくださらないように思う。何故なら、心からそう思うのだが、自分は彼女の許しを受けるに値しないからだ、とです。また、あれほどの女性はこの世にはいないのだと、何度も何度も申しておりました。

このようなことを申しますのも、マダム、あの方に対するあれほど野蛮で侮辱的な仕打ちに関しまして、今この瞬間、あの人が関与している可能性はないことをお示しするためなのです。

私たちが戻りましたのは、やっと土曜日の夜になってのことでしたが、出掛けました時に劣らず、全員お互いに上機嫌でした。これまで、あの人と一緒でこんなに楽しく過ごしたことはございませんでした。あの人が善良に、そして、本来あるべき姿になってくれるのでしたら、あの人以上に身内の者から愛される人間もいないはずなのです。でも、あの人が帰宅いたしまして、使いの者から … 報酬を見込んで楽しみにしていたらしく、そして、前夜からあの人の帰りを待っていた者です … 一通の手紙を受け取った時のことですが、あれほど激しい変化が人の身に起こったためしはかつてございませんでした。その激怒ぶりといったら … 使いの者も本当に災難でした。手紙を書くために、あの人はすぐに部屋に閉じ籠もりました。そして、ロンドンの友人に手紙を届けるためですが、翌朝の夜明け前には出発出来るよう、馬と乗り手を用意するよう命じたのです。

その夜はずっと、あの人は私たちに会おうといたしませんでしたし、翌日は、朝食もディナーも一緒に頂くことはなかったのです。あの人は、自分は二度と再び光を目にしてはいけないのだと語り、私の妹に向かって … あの人は「無邪気な子」と呼んでおりました（また、あの娘はこの事態すべての原因をしきりに知りたがっていたのです）… 自分を避けるよう命じておりました。自分は破廉恥な人間だというのです。そして、自分がでっち上げた数々の事柄とそれらの結果とによって、そのような人間になってしまったのだと言っておりました。

こんなにあの人を狼狽させているのは何なのか、私たちはだれ一人、あの人から聞き出すことが出来ませんでした。あの人に言わせますと、嫌でもすぐに私たちの耳に届き、あの人の望み一切が、また、私たちの望みすべてが消え去ることになるというのです。

あの立派なお嬢様とあの人に関しまして、すべてがうまく運んでいるわけでもないことは、私たちにも容易に察しがつきました。

あの人は毎日外出しておりました。そして、自分自身から逃げ出したいのだ、と申しておりました。

月曜日の夜遅く、あの人は一番贔屓にしておりますお友達のベルフォードさんから、手紙を一通受け取りました。ご自分の使者によってですが、馬も乗り手も、共に泡を吹きながら戻って来たのです。内容がどのようなものであったにいたしましても、あの人は落ち着くどころか、むしろ狂人のようでした。でも、原因のことを私たちに知らせようとはし

ないのです。それでも、妹には次のように話しておりました。「なあ、パッツィー、陰謀好きな人間に付き纏う災難の半分でも思い浮かべることが出来るようなら、真っ直ぐな道を踏み外す者などは、一人もいなくなることだろうな」とです。

貴女のお使いの人が見えました時には、あの人は外出中でした。でも、すぐに戻って来たのです。そして、私たち全員の応対の仕方と申しますと、それはもう本当に冷たいものでした。するとあの人は、自分が受けている苦しみは私たちのものとか、ハーローさんのものとか、あるいは、マダム、貴女のものとか、それらすべてを合わせたものよりもさらに大きいと言うのです。是非お手紙を拝見したいと言っておりました。いつだって、あの人と争うことは出来ないのです。そして、読み終わりますと、こう申しておりました。貴女はあの人のことを悪党とお考えだし、一見したところ、それもまた尤も至極なことのように思えるが、有難いことに、自分はそれほどのワルじゃないのだ、とです。

そこであの人は、実情は次のとおりだと打ち明けたのです。

あの人は、大切なお嬢様が逃げ出されましたあの下宿の人たちに、もしも可能なら、あの方の行き先を見つけ出してくれるよう、全員への指示を残して来たのです。お二人の不和の件が公になります前に、自分のものとなってくださるよう、あの方に言い寄る機会を得るためでした。あの邪な人たちは（邪ではないにいたしましても、少なくとも、お節介ですわね）あの方の居場所を水曜日に捜し出しました。そして、あの人の指示が得られます前にあの方が引っ越してしまわれるのを恐れ、連中の言い方なのですが、あの方を「軟禁」状態にし、そのことをあの人に知らせ、また、指示を受けるために、急ぎの使者を遣わしたというのです。

この使いの者は金曜日の午後に到着し、私たちが土曜日の夜に戻りますまで、ここに留まっていたのです。そして、使いの者が届けた手紙を読みました時の、あの人の怒りようといったら …… もうお話しいたしましたわね。

あの人が引き籠もって書きました手紙というのは、日曜日の朝のごく早いうちに発送いたしましたが、お友達のベルフォードさんに次のことを懇願するものだったのです。つまり、それを受け取られたらすぐにお嬢様のところへ急行して釈放し、あの方の持ち物すべてを送り届けてもらうように指示していただくこと、そして、あの人がこう呼ぶのも当然なのですが、あのように「極悪非道」の出来事と自分は関わりがない点を証明してくださることをです。

そして、あの人が申しますには、今頃はもうすべてが目出度く解決し、「我が魂の最愛の者」も（あの人は一言ごとにあの方のことをこう呼ぶのです）、あの恐ろしい出来事の前よりも寛いだ気持ちで、楽しく過ごしているのは疑いないというのです。そして、ベルフォードさんのお手紙を読んで、ますます支離滅裂なことを言い出した理由につきまして、あの人もようやく打ち明けておりますが、ベルフォードさんのほうで故意にあの人を宙ぶらりんな状態に置いたことや（それも、わざわざあの人を苦しめるためだというのです）、とても激しくあの人を非難したことがありますし（あの人が申しますには、ベルフォードさんはかねてからあの方の味方であり、弁護しておられたというのです）、また、あの方のところへ伺ったことだけに触れ、その他の子細に関しましては、ベルフォードさんならその場で話すことも出来たはずですのに、次のお手紙を待つようにとのことであったから、というのです。

本人が言明しておりますし、私たちも保証出来ることなのですが、先の土曜日の夜以降というもの、あの人は惨めなことこの上ない状態だったのです。

あの人は自ら上京いたしますのを堪えておりましたが、あんなにも悪辣な策を弄したなどとは、そして、その結果として、何か卑劣な目的を果たす魂胆で上京したなどとは思われないためなのです。

この不幸な事故につきましては、親愛なるハウさん、私たち全員が心の底から心配いたしておりますことを信じていただきたいのです。私たちが恐れておりますのは、この出来事であの素敵な受難者が、必要以上にとは申しませんが、私たちの願いが叶えられなくなりますほどお気持ちを損ねてしまわれることなのです。

あゝ、何という浅ましい人間なのでしょうね、この道楽者というのは。曲がりくねった道を辿るのが好きで、そして、一度過ちを犯しますと、強情に突き進んで、どこまで道を外れてしまうものなのか、自分たちにも分からないのです。

先の木曜日に、ご立派なお母様と貴女ご自身から賜りました数々のご厚情に対しましては、私共々、妹からの謝辞も申し添えさせていただきます。私たちがお訪ねいたしました用向きにつきまして、今後とも引き続きお力添えをいただきますよう、切にお願い申し上げます。あの厄介な男から被りました損害に対しましては、私たちの力で出来ますかぎり大切なお嬢様のご意向に沿いつつ、償いに励む所存でございます。

感謝の念と誠意とを込めまして、貴女のしもべ

シャーロット

〜モンタギュー

マーサ（二八）

親愛なるハウ嬢へ

貴女のご好意とご支援を求めますシャーロット・モンタギュー嬢ならびにパティ・モンタギュー嬢からの先のお願いに、われわれも加わることといたしますが、今回の出来事が偶発事であって、策略や陰謀が多すぎる男とは申せ、あの破廉恥漢の策謀ではないことを確信するがゆえのことであります。

心より従順謙虚なる貴女のしもべ

M.

セアラ・サドレアー

ELIZ. ローランス

親愛なるハウ嬢へ

あのように疑うべくもない誉れ高き名と人柄で知られた者たちの筆になる文面の後でもありますから、貴女にとりまして憎むべきものであることは勿論**承知の上**ですが、私自身にとりましてもほぼ同じ程度に憎むべきものである名を署名いたしますのは、御免蒙りたいところであったのです。ただ、先に名を記した者たちが言い張って譲らないのです。従いまして、筆を執らざるを得ないわけですから、嘘偽りのないところを記すことといたしますが、報いられるに最も値する、そして、最も不当な扱いを受けました女性に対しまして、敬意を表すことを今一度許していただけるのでしたら、この首にロープを巻いた姿で

そういたしますことに甘んじようと思います。右側には牧師、左側には絞首刑執行人に付き添われたまま、その女性のお気持ち一つではありますが、教会なのか絞首台なのか、そのいずれかを定めていただく所存です。

貴女の謙虚この上なきしもべ
ロバート・ラヴレース

七月十八日　火曜日

手紙　六十五
ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

七月十六日　日曜日　夜

この上なく天晴れな女性を相手に、何と罰当たりな真似をやってのけたのだろうな、貴公も。真面目になろうとふざけようと、それは貴公の気持ち一つだろう。だが、お気の毒な令嬢が貴公の弄び物になっているのは、あるいは、運命の玩弄物になっているというのは、長いことではないのだよ。

ある一場面のことを貴公に報告しようと思うが、その場面を正確に描写するために欠けているものといえば、ただ、心を動かして止まない彼女のペンのみなのだ。そして、それは、貴公の冷淡非情な心から真っ黒な血を残らず絞り出してしまうことだろうな。

彼女の災難の張本人たる貴公こそ、獄中の彼女のお傍に仕えるべきだったのだよ。こんな役目は俺には耐えられんし、引き受けようという者が他にいるとも思えないな。

この最後の所業が貴公の蛮行の総仕上げとなったわけだが、いかに意図せざるところとはいえ、貴公が出した全員への指示の結果であり、彼女に対して行った貴公の他の悪事のことを知っている者たちからはすぐにも、貴公にとっては好都合なことと受け取られ兼ねないものだからだよ。そこで、ひとつ忠告しておくが、本当であろうとなかろうと、行く先々で吹聴することだな。貴公がどれほど本気で彼女と結婚したがっているのか、ということをだ。

そうしたところで、安全なのだよ、貴公は。貴公を裁判にかけるまで、彼女が生き長らえることはないだろう。それに、そうすることで、彼女に対する貴公の言語道断な仕打ちを少しは和らげることにもなろうし、この件に関して俺が承知している事柄を知らずにいるような、そんな人間を今しばらくの間貴公の周囲に群れさせる手段、そして、リビアの荒野や砂漠に住んでいる貴公と同類の野蛮人のところへ貴公を追い立てるのは差し控えてもらう、その手段にはなることだろう。

貴公の使者が俺を見つけ出したのはエッジウェアでのことだが、三日前に招待してあった数名の友人が俺とディナーを共にするためにやって来るのを待っているところだったのだよ。生死に関わる問題に係わっているので、ということにして、連中には詫び状を届けておいた。そして、俺はあの悪辣な女の元へと急ぎ上京した。何しろ、あの忌々しい恥知らずたちによって、ショッキングな試みが彼女に対して為されないともかぎらないわけだからな。もしかすると、貴公の黙認を得てのことだろうが、彼女に屈辱を強い、貴公の思惑どおりにさせようとの魂胆でだよ。

こういった忌まわしい家においては、その罠に誘い込まれたうぶな娘たちに対していかなる悪事が行われているのか、世間の者たちはほとんど知らずにいるのだよ。

あそこには令嬢の姿がなかったので、俺は執行吏のところへと急いだ。もっとも、サリーの話によると、今そこから戻ったばかりで、令嬢のほうではあいつと会うこと、あるいは(そういう伝言があったのだ)、他のだれと会うことも断っていたということではあったのだがな。この日曜日は、もしかすると、彼女にとっては見納めになる日かもしれないので、残りの時間を自分だけのものとして過ごす決心だから、というのだよ。

あちらに着くと、俺も同じことを伝えられたのだ。

彼女を釈放する任務でやって来たことを知ってもらおうと、俺は伝言を届けた。貴公の友人であることを知られている者の名を伝えるのは怖い気がしたよ。だが、あの日一日については、だれとであれ、面会することは絶対に断るというのだ。あるいは、俺からのどのような言葉に対してであれ、それ以上応答することも断るということだった。

それゆえ、あの忌まわしい逮捕のことに関しては勿論、令嬢の振舞いと令嬢に対する女たちの態度のこと、また、令嬢の健康状態について、例の執行吏、そして、その妻や召使が教えてくれるかぎりの情報を入手した上で、俺はシンクレア夫人 … なおもこの名で呼ぶことにするが … のところへ戻り、三人の女の話を聞いたのだよ。そして、そのすべてから、次のようなショッキングな話を詳しく報告することが可能になったという次第だ。お目通りを許してもらえるならの話だが、明日、お気の毒な令嬢本人に面会出来るまでは、それで間に合わせてもらいたいのだ。俺の調査が綿密詳細なものであった点は分かってもらえることだろう。

お気の毒な令嬢の居場所を嗅ぎつけたのは、貴公が雇っている悪党だ。奴は厚かましくも出頭し、あの呪うべき処置へと、州長官の執行吏たちを煽り立てたわけだよ。罰当たりな主人の意向に最も適うことをしているのだと、奴がそう考えたのは疑いのないところだな。連中は駕籠をつかまえてきていて、礼拝が終わるとすぐに、怠りなく幌を上げておいたのだよ。そして、彼女がベドフォードストリートに面した戸口から教会を出ると、執行吏が歩みより、彼女を告訴すると囁いたのだ。

彼女は怯えて身を震わせ、顔色を失った。

「告訴ですって」と、彼女が叫んだ。「悪いことは何もしておりませんわ。まあ、何てことでしょう。どういうおつもりなのです、あなたたちは」とだ。

「貴女はわれわれの囚人だということです、マダム」

「囚人ですって。何を … どう … 何故 … 私が何をしたのでしょう」

「ご同行願わねばなりません。さあ、この駕籠にお乗りいただきましょう」

「貴方たちと同行 … 男の人たちと … 男の人たちと同行しなくてはいけないなんて … 私、知らない男の人とご一緒するようなことは普通いたしません。本当に、ご勘弁願いますわ」

「お見逃しするわけには行かんのですよ。われわれは州長官の執行吏でしてね。貴女への令状を所持しているのです。ご同行いただかねばなりませんね。どなたの起こした訴訟なのか、お分かりいただけましょう」

「訴訟ですって」 汚れのない麗人が言っていた。「何をおっしゃっているのか分からないのです。さあ、あなたたち、私に触れないでいただきましょう」とな。奴らは彼女を駕

籠に押し込もうとしたのだ。「このような扱いをされるのには慣れていないのです。こんな扱いを受けるようなことは何一ついたしておりません」とも言っていた。

そのうち、貴公のところの悪党の姿が目に入ると、彼女は、「あゝ、あなたなのね、恥知らずが。あなたの下劣な主人はどこにいるのです。またあの人の囚人にならねばいけないのですか、この私は。お願いです、助けてください、皆さん」と叫んでいた。

すでに人だかりが出来始めていたのだよ。

「旦那様は何マイルも離れたご郷里に下がっておられます。この者たちとご同行いただけますなら、丁重な扱いをしてくれるはずでございます」

野次馬の大部分は憐憫の情に駆られていた。お美しいお嬢様 … 何てお気の毒なんでしょう … と叫ぶ者もいた。一方、下劣でけしからん非難の言葉を投げつける者もわずかにいたのだ。だが、一人の紳士が割って入り、奴らの授権書を見せろと要求した。

奴らは授権書を出して見せた。紳士のほうでは、「お名前はクラリッサ・ハーローさんですか、マダム」と訊いていた。

「えゝ、えゝ、そのとおりですわ」と、今にも崩れ落ちそうになりながら、「私の名はクラリッサ・ハーローでした。でも、今は〈惨めさ〉と申します。神様、どうかお慈悲をお願いいたします。この次にはどうなるのでしょうね」と言うのだ。

「マダム、貴女はこの者たちとご一緒なさらなくてはいけませんな」と、例の紳士が言った。「権限をもって行うことなのですからね」

紳士は彼女を憐れみ、引き下がって行った。

「どうしても、ご一緒いただかねばならんのです」 駕籠かきの一人が言った。

「どうしても、ご一緒いただかねばなりません」 もう一人の駕籠かきも言った。

「お願い出来るような人はいないのでしょうか」と、別の紳士が話に加わって来た。「こんなにも綺麗な娘さんがひどい扱いを受けることのないよう、取り計らってくれる人ですよ」とだ。

貴公のところの悪党は次のように答えていた。特にその点に関する指示が出ているということ。彼女には裕福な親戚がいるということ。彼女にとって必要なのは、請い求め、そして、手に入れるだけなのだということ。彼女は、事態の決着がつくまで執行吏の家へ連れて行かれるだけだということ。下宿を共にしていた者たちは彼女に愛着を抱いていたのだが、彼女はこっそり下宿を抜け出したのだ、といった具合にだよ。

おやおや、もうそんな悪さをしでかしていたのかい、この女は、と叫んだ者が一人か二人いた。

この言葉は耳に届かず、彼女がこう言った。「分かりました。行かなければいけないのでしたら、行かねばならないでしょうね。抗うわけにはまいりませんもの。でも、あの女の人のところは嫌ですわ。あの女のところへ連れて行かれるくらいなら、あなたの足下で死ぬほうがましです」

「あそこへ連れて行かれることはありませんよ、マダム」と、貴公の手下が叫んだ。

「ただ、私の家へ来てもらうだけのことです、マダム」と、執行吏の一人が言った。

「どこにあるのです」

「ハイホルボーンですよ、マダム」

「ハイホルボーンがどの辺りなのかは存じませんが、あの女の人のところ以外なら、ど

こでも同じですわ。でも、同行するのは男の人だけですの」

周りを見渡し、三本の通路、つまり、ヘンリエッタストリートへ通じるものとキングストリートへ通じるもの、それに、ベドフォードストリートへ通じる真っ直ぐな道が人で一杯になっているのを見ると、彼女はギクッとしていた。「どこでも構いません。あの女の人のところ以外でしたら、どこへでも」と言うのだ。そして、駕籠に乗り込むと、極度の苦悩と困惑のうちに座席に身を投げだした。「お連れ願いますわ。目の届かないところへお連れ願います。覆い隠してください。すっかり私を隠してほしいのです。永遠に …… 」というのが彼女の言葉だった。

貴公の悪党がカーテンを下ろした。彼女にその力はなかったのだ。こうして連中は、黒山の人だかりの中を通って、彼女を連れ去ったのだよ。

ここで一休みしなくちゃならん。今はこれ以上書けないのだよ。ただ、覚えておくのだな、ラヴレース。このすべてがクラリッサとも呼ばれる者に対して加えられた仕打ちだという点をだよ。

執行吏の家に着いて駕籠から降ろされると、不幸な令嬢は意識を失った。

数人の者がその家のところまでついて来たが、みすぼらしい路地裏に建っている家だった。そこにはサリーが居て、例の若いお嬢さんは極めて丁重な扱いを受けるはずだと、問い掛けてきた何人かの者たちを納得させたのだ。それで、そんな者たちも間もなく姿を消したというわけだ。

そこにはドーカスも居たのだが、彼女の前に姿を見せることはなかった。サリーが好意のつもりで、彼女を以前の下宿へ連れて行こうと申し出たのだが、もしもそんなことをすれば、連中はあそこへ亡骸を運ぶことになると、彼女はそう断言したのだ。

大変寛大な処遇のことを女たちは自慢しているのだが、禿鷹にしても、もしも言葉を話せたなら、同じような自慢話をすることだろうな。獲物のはらわたをその貪欲な爪に引っ掛けたままだよ。この点に関しては、俺が詳しく述べようとしているところから、貴公も判断してくれることだろう。

いかなる意図があってこのような扱いをするのかと、彼女が尋ねた。「皆さんがおっしゃいますには、私はあの男の人たちと同行しなければならず、あの人たちには私を連行する権限があるということでした。それで、私も従ったわけですが、でも、こうなってみますと、この不面目をもたらす暴挙の目的というのは、一体何なのでしょう」と言うのだ。

「目的と申しますのはね」と、性悪のサリー・マーティンが言っていた。「正直な者たちが自分のものを手にすることですわ」とだ。

「とんでもありませんわ。私に対してこんな権限を持つようになった人たちの持ち物についてですが、私が何か持ち去ったとでもおっしゃるのでしょうか。私はとても高価な品物を残してまいりましたが、自分の持ち物でないものは何一つ持ち出していないのです」

「で、ハーローお嬢様」と、あの忌まわしい娘が言っていた。「こうお呼びいたしますのも、結婚なさってはおられないものと思うからですが、貴女の食事代と部屋代はどなたが払うことになるとお思いかしら。あんなにも立派なお部屋ですからね。それに、ずいぶん

長い間ですもの、シンクレア夫人のところは　…　」と言うのだよ。

「まあ、驚きましたわね。それでは、マーティンさん（マーティンさんでしょう、貴女は)、天下の公道で私をこんなにも恥ずかしい目に遭わせる理由はこのことだとおっしゃるのでしょうか」

「それに、十分理由になることですわ、ハーローお嬢さん（彼女のことをお嬢さんと呼び、嫉妬に根差した復讐心を満足させたがっているのだ)。百五十ギニーと申しますと、あるいは、ポンドでも、決して小さな損失ではございませんもの。それに、ご自分の下宿代を踏み倒そうとなさった若いお嬢さんのことですからね」

「貴女のお話には仰天してしまいますわ。何というおっしゃりようなのでしょう。私の下宿代を踏み倒すですって　…　一体、何のことでしょうか」

彼女は驚きのあまり立ち尽くし、しばらくは口もきけなかった。

しかし、気持ちを落ち着かせ、あの女に背を向けて窓のところへ進むと、彼女は両手を揉み合わせ「俺に向かってその様子を真似て見せたのだよ、あの忌まわしいサリーは」、天に向かって差し上げながら、「今こそ、ラヴレース、あなたを許すべきだと、今は私も確かにそう思います。でも、一体どなたがクラリッサ・ハーローを許してくれるというのでしょう。あゝ、お姉様、あゝ、お兄様、あなたたちの無残な仕打ちにいたしましても、これに比べますなら、温情溢れる処置でしたわね」

少し間を置き、こぼれ落ちる涙をハンカチで拭いながら、彼女はサリーのほうへ向き直ると、「今は、黙って従う以外に為すべきこともないわけですが、ただ、次のことだけは言わせていただきます。もしも、貴女のこの叔母様、このシンクレア夫人が、あるいは、この男、このラヴレースさんが私の傍にやって来るようなことがありましたら、あるいはまた、私があの恐ろしい家へ連れて行かれるようなことになるのでしたら（推測いたしますところ、それがこの新たな暴挙の意図なのでしょうから)、哀れなクラリッサ・ハーローに対しまして、神様が慈悲をお示しくださいますよう、祈るばかりですわ。どんな結果を招くことになるのか、ひとつ見ていただきましょう。宜しいですね、結果をご覧いただきますわ」と言うのだよ。

性悪な破廉恥女は次のように話したのだ。どこであれ、彼女の意に反したところへ連れて行く考えはないが、ただ、仮にそのような計画があるにしても、またペンナイフで脅されたりしないように用心はする、とだよ。

彼女は天を仰ぎ、口を閉ざした。そして、部屋の一番奥の隅へ行くと、椅子に腰を下ろし、顔の上にハンカチを広げたのだ。

サリーがいくつか彼女に質問をした。だが、答えてもらえないものだから、いずれそのうち、口をきいてくださるようになりましたら、お傍にまいります、と奴は話したのだ。

食べ物や飲み物を取ることを強く彼女に勧めるよう、奴は家の連中に指示した。断食なさるに違いないわ。お祈りと涙の他は一切口になさらないのですからね、お気の毒に、というのが冷酷非情な人でなしの台詞だが、これは奴も白状していたことだ。俺が奴を呪わなかったとでも思うのかな、貴公は。

奴は立ち去り、自分の食事を済ますと戻って来た。

この人でなしの説明によると、不幸な令嬢のその時の様子は、屈辱感のあまり従順になっているのか、それとも、この忌まわしい女の無礼な言動に憤慨するようなことがないよ

う心に決めているのか、そのどちらかのように映ったとのことだ。

令嬢が何か飲食物を口にしたかどうか、サリーは彼女の目の前で尋ねた。そして、ひとかけらでも口にするよう、あるいは、一滴でも喉に通すよう彼女を説得することは出来なかったと、その家の女から教えられると、奴は、「これは良くないことですわ、ハーローお嬢様。大変良くないことです。信心深くていらっしゃるのですから、食を断って命を失いますのは、自殺行為だということくらいお分かりのはずですわ」と言ったのだ。

彼女の返事はなかった。

彼女に口を開かせるつもりだったと、破廉恥女は認めたよ。

奴はこう尋ねた。借金返済のために彼女の身内がどんなことをしてくれるのか、それを見届けるまで、メーベルが彼女に付き添うのはどうか、とだ。「ご親切に約束してくださいましたご衣装ですが、まだメーベルは手にしておりませんものですからね」と、奴は言ったのだよ。

「私はお返事をいただくに値しないのでしょうか、ハーローお嬢様」

「お答えいたしますわ（と、感情を少しも表さずに、愛らしい受難者が言った）、どうお答えしたら良いのか、見当がつくようでしたらね」

「ペンとインクと紙を届けてくれるよう指示しておいたのですよ、ハーローお嬢様。ほら、これです。手紙を書くのがお好きなのは存じておりますわ。お好きな方にお出しになって構いません。お友達のハウさんがお便りを待っておられますもの」

「友人は一人もおりません」と、彼女が言っていた。「だれの友達になる資格も私にはないのです」ともだよ。

ローランドは　…　それが執行吏の名なのだが　…　手紙を出す気になれば、借金を払ってくれる友人は十分いるはずだと、彼女に向かって話していた。

だれにも迷惑を掛けたくないし、一人の友達も持っていない、というのが、サリーが居残っている間、連中のほうで彼女から引き出すことの出来た言葉のすべてだったのだ。ただし、あたかも自らの苦悩を楽しんでいるかのように、堅忍不抜の心をもって語られた言葉だったのだよ。

彼女に対しては極めて礼儀正しく振る舞うように、そして、彼女が何一つ不自由をすることのないようにと、傲慢無礼な女は令嬢にも聞こえるところで指示をして立ち去って行ったのだ。奴は白状していたのだが、奴ら自身の家の中だというのに、奴ら全員に向かってあんなにもよそよそしい態度を見せていた、このお高くとまった美女に対し、これでようやく勝ち誇った気持ちになることが出来たというのだな。

貴公はこれをどう思うのだ、ラヴレース。クラリッサとも呼ばれる者に対する、この破廉恥女の感じた勝ち誇った気持ちというものをだよ。

夕方の六時頃のことだが、お茶を飲んでくれるよう、ローランドの女房が彼女にせがんだ。彼女は、水を一杯いただきたいのですが、と言っていた。今にも舌が上顎にくっついてしまいそうだから、というのだよ。

女房が一杯の水を持ってきた。それに、バター付きのパンも少しだ。彼女はパンを食べてみようとしたのだが、飲み込むことが出来ず、水のほうを一生懸命飲んでいた。感謝のまなざしで天を仰ぎながらだよ。

神々しいばかりのクラリッサが、ラヴレース、一杯の冷たい水に歓喜するところまで落

ちぶれているのだぞ。だれゆえに落ちぶれたというのかな。

九時頃、彼女は尋ねたのだ。だれかベッドを共にすることになっている者はいるのかどうかをだよ。

彼女が良いと思うなら、自分たちの女中にそうさせるし、それとも、ひどく彼女は衰弱しているわけだから、そうしてもらいたいというのなら、女中には寝ずに付き添ってもらっても良い、と奴らは言った。

彼女としては、夜も昼も一人きりでいたいとのことだった。ただ、自分が横になる部屋の鍵を預けてもらうわけには行かないものだろうか、と彼女が訊いていた。服は脱がないだろうから、というのだ。

それは出来ない相談ですね、と奴らが言った。

そう思っておりました、と彼女が言った。でも、たとえ出来るとしても、逃げ出すつもりは本当にないのです、とも言っていた。

奴らが話してくれたのだが、あそこには、奴ら自身が寝るベッドの他には（彼女にはそれを使ってもらおうと思っていたとのことだ）、そして、女中が寝ているものの他には、奴らの言い方では屋根裏の穴蔵ということになるが、その屋根裏部屋に一台ベッドがあるだけだというのだよ。そして、その一台は囚人用のベッドとのことで、奴らはその点について俺に何度か詫びていたのだ。察するに、恐ろしく粗末なものだったのだろうな。

だが、令嬢は奴らのベッドを使おうとしなかったのだ。自分は囚人ではないのか、と彼女は訊いていた。囚人用の部屋にしてほしいというのだよ。

しかし、奴らも認めていたことだが、そこへ案内されると、彼女はギクリとしていたそうだ。だが、落ち着きを取り戻すと、「大変結構ですわね。すべてに亘って首尾一貫していなくてはいけませんでしょう。私の不運も徹底していなくてはいけませんわね」と言っていたのだよ。

掛け金がすべて外側に付いていて、内側には一つもない点を彼女は非難していた。そして、他の者たちは好き勝手に入って来ることが出来るのに、自分は出て行かれないような部屋では、安心しているわけに行かない、と言うのだよ。そのようなことには不慣れなのです、とな。

あゝ、いたわしいじゃないか。書いていると、涙がこぼれてしまうのだ。そのとおりなのだ、ラヴレース。彼女はこのような仕打ちには慣れていなかったのだ。

彼女が逃げ出すのを防ぐのと同じように、他人の侮辱から彼女を守るのも自分たちの任務だと、奴らは言った。

それでは、最近慣れっこになっていたものよりは立派な名誉心を備えた人たちなのですね、あなたたちは、と彼女が言っていた。

彼女が、ラヴレースさんのことはご存じですかと尋ねた。

存じ上げません、というのが奴らの返事だった。

「その人の噂を聞いたことはございますか」

「ありませんね」

「それじゃあ、あなたたちなりに、善良な人たちなのかもしれませんね」

ここで一息入れてくれ、ラヴレース。そして、考えてみることだな。俺はそうする。

自分たちのほうから彼女の下宿に何か一言知らせておきましょうかと、奴らは彼女にもう一度尋ねてみた。

今はここが私の宿ではないのでしょうかと、彼女からの返事はただそれだけだった。

彼女はドアに背を向け、椅子に腰掛けたまま、一晩中起きていたのだが、かつては内側に差し錠があったので、その受け金の部分に折れた火かき棒のかけらを差し込んでいたらしいのだ。

翌朝、サリーとポリーが二人で彼女を訪ねた。

彼女は前日サリーに頼んでいたのだよ。シンクレア夫人にもドーカスにも、また、ウィリアムと呼ばれる歯の欠けた召使にも、会わずにいたいということをだ。

ポリーは、彼女のご機嫌を取ろうとしてのことだろうが、彼女の不幸に心を痛めているようなふりをしてみせた。だが、彼女のほうでは、もう一方の女に対してと同様、あの女のことも気に留めたりはしなかったのだ。

彼女のほうから何か指示することはあるか、二人が尋ねた。もしもあれば、それが何なのか言ってくれるだけで良く、願いは聞き入れてもらえるはずだ、とだよ。

まったくございません、と彼女は言った。

「この家の者たちをどう思います。礼儀正しく振る舞ってくれますか」

「十分だと思いますわ。お払いするお金の持ち合わせもないことを考えますとね」

「お金を少し受け取ってくださいますか。貴女の勘定に入れておいて構いませんわ」

「借金は一切作りたくございません」

「いくらかでも、持ち合わせはおありなのかしら」

彼女はおとなしくポケットに手を差し入れ、半ギニーの金貨とわずかな銀貨を取り出した。「えゝ、少しはございますわ。でも、ここでは心付けをしなくてはいけないように思うのです。そうではございませんか。身ぐるみ剥がされぬよう手を打つための〈入会金〉とやらのことは、かねがね耳にいたしておりましたわ。でも、ここの人たちはとても礼儀正しい人たちなのでしょうね。私の衣服を取り上げようとはなさいませんでしたもの」

「貴女には礼儀正しく振る舞うよう、指示を受けているのです」

「それは本当にご親切なことです」

「でも、私たち二人で保釈金を積んでも宜しいのですよ、お嬢様。もしも、シンクレア夫人のところへ一緒に戻ってくださるのでしたらね」

「絶対に嫌ですわ」

「夫人のところはとっても綺麗なお部屋ですわよ」

「それだけ一層住んでいる人たちにお似合いなのですわ」

「ここはひどく惨めですわね」

「それだけ一層私には似合いなのです」

「今でも、お嬢様、その気になれば、とても幸せになることもお出来になるのですよ」

「そうなれるものと願っておりますわ」
「食べ物や飲み物を拒まれるようでしたら、私たち、保釈金を積みまして、貴女を連れて戻りますからね」
「それじゃあ、食べたり飲んだりするように努力いたしましょう。貴女たちとご一緒するのだけは御免蒙りますわ」
「今度の下宿には知らせないのですか。皆さん案じておられるでしょう」
「お知らせいたしますと、心配なさいますわ。私がどこにいるのかご存じになれば、心配なさると思います」
「でも、あちらから届けていただくものは、何もないのかしら」
「下宿代や、お骨折りに報いるためのものは置いてまいりました。あの人たちの安全を脅かしたくはございません」
「でも、もしかすると、貴女宛のお手紙とか伝言があちらに預けられているかもしれませんよ」
「友人は本当に少ないのです。それに、今おりますお友達にも、この身に何が降りかかったのかを知っていただくような、そんな無念な思いはしてもらいたくないのです」
「貴女の冷たいのには驚いておりますわ、ハーローお嬢様。お友達のどなたにもお便りをなさらないのかしら」
「えゝ」
「まあ、いつまでもここにいらっしゃるおつもりではないでしょうね」
「いつまでも生きていることはないでしょう」
「生きている間はここに滞在なさるお考えなのかしら」
「それは神様の思し召しによることですし、私をここへ連れてこられた方たちのお気持ち次第でしょう」
「自由の身になりたいという気持ちはおありかしら」
「惨めな身の上なのです。惨めな者にとりましては、自由になってどうだというのでしょうか。一層惨めになるだけの話です」
「どのくらい惨めだとおっしゃるのです、お嬢さん。お好きなだけ幸せになることもお出来になるのですよ」
「貴女たちはお二人ともお幸せなのでしょうね」
「えゝ」
「もっともっと幸せになられると宜しいですわね」
「でも、私たちは貴女にも幸せになっていただきたいと願っておりますわ」
「幸せとはどのようなことなのかにつきまして、貴女たちと意見の一致をみることは決してないものと存じますわ」
「幸せについての私たちの考えはどのようなものだと、貴女はお思いですの」
「シンクレア夫人のところでお暮らしになることでしょう」
「おそらく、私たちもかつては貴女と同じくらいに気難しく、心が狭かったのでしょうね」と、サリーが言った。
「どうしてそのようになられたのでしょうね、貴女たちは」
「上品振ることの滑稽さに気づいたからですわ」

「貴女たちがおっしゃる、その上品振ってみせることを、貴女たちと同じくらいに嫌うよう、私を説得にいらっしゃったのでしょうか」
「お役に立つことがあればと思ってまいったのですわ」
「私の役に立っていただくのは、貴女たちにはお出来になりませんわ」
「そうかもしれませんわね」
「ご迷惑をお掛けする気持ちも私にはないのです」
「もっと困った申し出があるかもしれませんよ」
「もしかいたしますとね」
「ずいぶん短いお返事ですわね、お嬢様」
「貴女たちのご訪問が短くなるよう願うものですからね、ご婦人方」
連中が打ち明けたところによると、自分たちの扇子をパチパチ鳴らしながら、連中は笑ってしまったというのだよ。
「さようなら、天の邪鬼の美人さん」
「お元気で、ご婦人方」
「さようなら、高慢ちきな気取り屋さん」
「ご覧のとおり、卑しめられておりますわ、私」
「それで当然なのですわ、ハーローお嬢様。驕る者久しからず、と申しますもの」
「貴女のおっしゃる驕りによって滅びますほうが、卑劣なことをして持ち堪えますのよりはましでしょうね」
「まあ、だれのことかしら」
「貴女をもっと高く買っていたこともございますのにね、ホートンさん。惨めな者を辱めたりなさってはいけませんわ、本当に」
「惨めな方のほうでも」と、サリーが言った。「丁寧に接してくれる人のことを侮辱してはいけませんわね」とだ。
「もしも、そのような点が私にございましたら、申し訳なく思います」
「そのうち、シンクレア夫人に貴女のところへ伺っていただきますが、貴女のほうから夫人に何かご指示はないのか、承知するためですわ」
「どんな自由も望みませんけれど、私、あの夫人と、それから、もう一人の人物と会うことを拒む自由だけはいただきたいのです」
「私たちがまいりましたのは、貴女の釈放に関しまして、貴女のほうから何かお申し出はあるのか、その点を伺うためだったのですわ」
そこで、執行吏が口を挟んだらしい。「貴女はずいぶん立派なお身内をお持ちなわけですね、マダム。縒りを戻されたほうが宜しくはありませんか。諸費用もかさむことになりますからね。百五十ギニーお払いになるほうが、二百よりは楽でしょう。このご婦人方に保釈金を払っていただいて、一緒に出られることですね。それとも、仲直りをしてくれるよう、お身内にお便りなさることですね」とだ。
サリーはこんなことを言っていた。「殿方が一人いらっしゃいましてね、ハーローお嬢さん、貴女が捕えられるところをご覧になり、貴女のことで大層心を動かされておられましたから、貴女のために喜んでお金を立て替え、返済はある時払いということにしてくださるはずですわ」とだよ。

分かるかな、ラヴレース。この連中はいかに罰当たりな人でなしかということだよ。周知のとおり、多くの無邪気な者たちがこうして囲われ者の身に甘んじ、次いでは、町のお世話になるわけだよ。それにしても、この恥知らずどもがこれほどの天使を相手に、こうして仕事に取り掛かるというのだからな。この仄めかしに耳を貸してくれたとか、じっとおとなしくしていてくれたとか、貴公に報告するためのほんのわずかな手掛かりでも得られたなら、人でなしのサリーもどんなにか喜んでいたことだろうな。

「貴方は」と、彼女が執行吏に向かって、激しい怒りを込めて言った。「逃げ出すのを防ぐのと同じくらいに、他の人たちから私を守るのがお仕事なのだと、昨夜おっしゃいませんでしたか。好きな人と会うこと、そして、嫌いな人の入室はお断りすることを認めていただくわけにまいらないのでしょうか」

「債権者の方々は、マダム、貴女にお会いしたいと思われるはずです」

「その方たちとは交渉しない旨を言明いたしましたら、そうは思われないはずです」

「そういたしますと、マダム、貴女は監獄へ送られることになりますね」

「監獄ですって、あなた。あなたの家のことはどう呼んでいるのです」

「監獄とは言わないのです、マダム」

「では、どうしてこのような鉄格子のついた窓があるのでしょう。どうして二重の錠前や差し錠がすべて外側に付いていて、内側には一つもないのです」

そして、彼女はドッとばかりに椅子に崩れ落ちた。連中もそれ以上の言葉を彼女から引き出すことは出来なかったのだ。彼女は、前にも一度したように、顔の上にハンカチを被せたが、そのハンカチはすぐに涙で濡れていた。そして、連中も認めていたことだが、彼女は嘆かわしげにすすり泣いていたそうだ。

寛大なる扱いだと言うのだな、ラヴレース。おそらく貴公も、この恥知らずどもと同様に、そんなふうに考えるのだろう。

それから、サリーがディナーを注文し、次のように言っていた。つまり、すぐにまた二人で戻って来て、彼女が自分の境遇に相応しいように振る舞い、また、事態に精一杯善処すべく、食べ物や飲み物を口にするところを拝見したいというのだ。立派なクリスチャンならそうして当然なのだから、というわけだよ。

ここ三ヶ月の間に、この魅力的なお嬢さんが嘗めることのなかった辛酸、経験することのなかった苦しみのうちで、俺が承知しているものなどあるのだろうか。彼女が耐え忍んだような事柄を、あのように華奢な体つきの人間に耐え抜くことが出来ようとは、果たしてだれが思ったことだろう。大胆さ、勇猛さ、不屈の精神といったことは、われわれも時々は話題にしているところだよな。それらが完全な形で存在するのだよ、ここには。貴公や俺のような暴れ者にしても、彼女が遭遇した迫害、失望、侮辱のその半分にも持ち堪えることが出来ず、卑怯者よろしく、どこかの裏口を通り、卑劣にもこの世におさらばをしていたことだろうな。つまり、剣かピストルか首吊り用のロープかナイフを使ってということだ。ところが、ここにいるのは立派な節操を備えた女性であり、察するに、この女性は次のような高潔な考えによって「他のどんなことが彼女の支えになり得たというのだ」、つまり、自分が戦っている災厄は身に覚えのあるものではないし、現世は一時的な試練の場としてのみ意図されているのであり、そして、自分はもう一つの、もっと良い世界への旅路についているのだという考えによって、その旅の途中で出遭う辛苦のすべてを耐え忍ぶ

ことが出来るのだろう。また、盗人や強盗の襲撃、あるいは、その他のどんな恐怖や困難によっても、道を踏み外すことはないわけだよ。その旅の終わりには十分な報いが待っていることを確信しているからだ。

この考察が貴公の相棒であり友でもある人間の人柄にはそぐわないように思うというのであれば、貴公はこんなふうに想像していることになるのだろうか。つまり、危篤状態の叔父に長く付き添っても、また、気の毒な叔父自身の要望で、来る日も来る日も叔父を訪れ、その傍らで祈ってくれた、あの立派な牧師の敬虔な考えの数々からも、俺は何一つとして利益を得ることはなかったのだ、とだよ。そして、こういった思いすべてを痛切に感じるためだが、俺がこのような事例に再び出会うことは果たして可能なのだろうかな。

それに、立派な人物について、また、立派な話題に関して筆を進め、賛辞を連ねることも出来るのに、その間、真面目な気持ちにならずにいられるような人間など、果たしているものだろうか。そして、ここから、われわれにも察しがつくのではないだろうか。立派な人間との付き合いが人々の品行にとって、いかに役立つものかという点についてだ。一方、悪い連中とばかり付き合っている者たちは、必然的に、ますます頑固になり、無情になるに違いないのだよ。

日曜日の夜の十二時だ。この天晴なお嬢さんのことを別にすれば、何一つ頭に浮かぶものとてない。俺の頭も心も彼女の苦難のことで一杯なのだよ。十五分間ほどうたた寝をしてしまったが、今は眠気も去った。そこで、この恥知らず連中からの情報を基に、気の滅入る話題を続けることにしよう。明日お目通りを許されればの話だが、俺が行おうとしている訪問の際に、彼女はどんな様子でいるのか、その点について、貴公の召使に託して送り届けるべき事柄が、おそらく、たっぷりと出てくることだろうな。

女どもが立ち去った後、彼女は頭と胸の具合がおかしいとこぼしていた。そして、再びシンクレアのところへ連れて行かれるのを懸念し、怯えた様子だった。

朝食を口にするのは一切拒むものだから、ローランドの女房が彼女のところへやって来て、次のように話して聞かせた（この恥知らずどもが認めていたが、彼女が断食をして死んでは困るということで、連中のほうから女房に指示が出ていたのだよ）。お茶とバター付きパンを是非とも口にしてもらわなくてはいけないし、それに、便りをすれば、支援してくれる身内もいるわけだから、このように食を断ったりするのは、彼女自身とその人たちの両方にとって間違ったことなのだ、とだ。

「あなたたちご自身のためのことでしたら」と、彼女が口を開いた。「それはまた別の話ですわね。コーヒーとかお茶とかチョコレートとか、お好きなものを何でもお取りください。それから、宜しければ、毎日チキンを一羽私の勘定にお入れになって、あなたたちのほうでお食べになって結構ですわ。喉を通るようでしたら、私もいただくことにいたしましょう。貴女たちのお邪魔は一切いたしません。私がこの世を去ったことを知りました時に、気前よく支払いをしてくれる身内も、私にはございますので」というのだ。

このような苦難の中にあって、彼女の奇妙な落ち着きぶりが自分たちには不思議に思われると、奴らは彼女に話した。

あらゆる男の中でも最も下劣な男のために、これまで自分が被って来た苦難と比べるなら、それらは何でもないことだ、と彼女は言っていた。路上での逮捕という辱め、彼女を取り巻く人だかり、耳に襲いかかるショッキングな誹謗の言葉などは、確かに、極めて衝撃的なことではあった。しかし、それは済んだことだ。すべてが間もなく終わりを告げるだろう。それに、ある男性とある女性に出会う恐れ、また、欺かれて、あるいは、力ずくで、この世でも最も汚らわしい家へ連れ戻されるという恐れがなければ、自分はさらにもっと落ち着くはずだ、とも言っていた。

それじゃあ、保釈金を積もうという二人の淑女の申し出に従うほうが良くはないか。はっきりと言えることだが、あれは実に親切な申し出であって、いつもいつもあるような話ではない、と奴らが言った。

確かにそのとおりだと思うと、彼女のほうでも言っていた。

彼女がそれほどまでに嫌っている家へ戻ることは、もしかすると、あの淑女たちのほうでも免除してくれるかもしれない。それに、彼女の債務の件で債権者たちと話をつけたがっている情け深い殿方のこともあり、あのように気前の良い申し出に彼女が耳を貸さないというのは、自分たちには奇妙に思われるのだ、と奴らは言ったのだ。

「二人の婦人は、その紳士がだれなのか、貴女に話したのでしょうか。その件につきまして、他にも何か言っておりましたか」

「えゝ、話しておられました。それに、それとなく仄めかしておられましたが」と、女房が言った。「貴女といたしましては、その紳士からの訪問をお受けになるだけで宜しいわけで、そうすれば、貴女の債務証書か領収書の上に、お金を積んでいただけるとのことでしたわ」とだ。

彼女はギョッとして飛び上がった。

「私の身内の者たちに向かって、いずれはお答えいただかねばならないことですからお願いしておきますが」と、彼女が言った。「私のところへ殿方を連れて来るのは一切止めていただきます。お願いいたしますね。もしも連れていらっしゃるようなことがありましたら、どんな結果になっても知りませんからね」ともだ。

奴らのほうでは、自分たちの義務を果たすことになるわけでもあり、悪い結果になるとは思われないと言っていた。それに、彼女が自分の利益というものを弁えていないとしても、彼女の助けとなるような、何らかの合法的処置を講じたことに対しては、彼女の意向に背くとはいえ、彼女の身内の者たちのほうでは奴らに感謝するはずだ、というのだよ。

「最後の手段へと私を追い詰めないでいただきたいのです、ご主人。私を自暴自棄にさせないでほしいのです、奥さん。つい先程も触れてくださいましたように、私が見た目には落ち着いた様子に映るといたしましても、この身に降り懸かっております災難を務めのとおりに耐え忍びますのは、決して容易なことではないのです。でも、仮にも貴女が男の人を一人、あるいは、数人連れて来られるようなことがありました場合には、その口実が何であれ　…　」

そこで彼女は話を止め、奴らが言うには、極めて真剣な、そして、ひどく興奮した表情を見せたので、意向に背いたりすると、彼女が自分の体に何か危害を加えるかもしれないと思ったというのだよ。そして、そんなことが奴らの家で起こるのは嘆かわしい話であるし、奴らの破滅にもつながるだろう。それゆえ、奴らとしては、彼女自身の同意がないか

ぎり、男は一人も彼女のところへは連れて来ないようにすることを約束したのだよ。
ローランドの女房は、土曜日の午前十一時頃のことだが、彼女を説き伏せて、お茶を一杯とバター付きパンを少々口に入れさせた。彼女がそうしたのは、多分、女どもが戻って来た時に、ディナーのお相伴をせずにおく口実にするためなのだろう。
しかしながら彼女は、奴らの客間に入るためであっても、彼女の言う「監房」を出ようとはしなかったのだ。
彼女が言うには、鉄格子のない窓、それに、明るめの部屋というのは、彼女の心には陽気すぎるものに映る、とのことだった。
話している間に俄か雨になったのだが、彼女は空を見上げながら、「まあ、自然も私のために涙を流しているのかしら」と言っていた。
別の時には、「日の光が私には煩わしく感じられるのです。太陽は私の災いを嘲笑うために射し込んでくるように思われるのです」とも言っていた。
「私が思いますには」と、彼女がつけ加えた。「射し込んで来て、この鉄格子を金色に染めております太陽が、〈美人〉という言葉によって私のやつれた容貌のことを、また、〈高慢ちきな気取り屋〉という言葉で私の打ちひしがれた心のことを侮辱しにやってまいりました二人の婦人のように、私を弄んでいるみたいなのです」とだよ。
サリーはディナーの時刻に再びやって来たが、あいつが彼女に話したところでは、彼女はどんな様子か、また、食を断ったりしてはいないか、それを確かめるためとのことだった。そして、彼女とは少し話したいこともあるので、お許しをいただけるなら、一緒に食事をしたいというのだよ。
「私、喉を通らないのです」
「試してみなければいけませんわ、ハーローお嬢様」
そして、ちょうどその時ディナーの用意が出来たということで、あいつは彼女に手を差し延べ、階下までご足労願いたいと言った。
彼女は嫌だと言っていた。自分の監房を出るつもりはないというのだ。
「そんなふうに拗ねて見せても駄目ですわ、ハーローお嬢様。何の役にも立ちませんからね、まったくの話」
彼女は黙っていた。
「請け合っても構いませんが、事態に収まりをつけますためにも、少しは機嫌良くしていただかなければ、これまでに味わわれたもののどれよりももっとひどい扱いをお受けになることになりますわよ」
なおも彼女は黙ったままだった。
「さあ、お嬢様、食事に降りていただきましょう。お願いですから、そうしてくださいな。ホートンさんが階下におりますよ。以前は貴女のお気に入りの人だったでしょう」
あいつは答えを待ったのだが、一言の返事も得られなかった。
「貴女のためになる提案が少しございまして、伺ったのですよ。先日は、私たちを傷つけるようなことをなさいましたけれどね。それに、シンクレア夫人がご自身でお見えになることのないようにいたしました。貴女のお気持ちに沿いたいと思いましたのでね」
「それはまた、本当にご親切なことですわ」
「さあ、お手をどうぞ、ハーローお嬢様。私には借りがおありなのですよ、宜しいです

ね。一緒に階下のホートンさんのところへまいりましょう」
「お許し願いますわ。この部屋からは出ないつもりですので」
「私とホートンさんに、この不潔な寝室で食事をさせようとおっしゃるのですか」
「私にとりましては寝室ではございません。ベッドには入っていないのです。また、ここに居ります間は、入るつもりもございません」
「それでいて、お見受けいたしますに、この家を出たくはないのですね。それでは、階下へはいらっしゃらないということですか、ハーローお嬢様」
「まいりません。無理に強いられるのではないのでしたらね」
「おや、おや、放っておいていただきましょう。こんな部屋でのお食事など、とてもホートンさんに頼めませんわ。お料理は届けさせますからね」

こう言うと、生意気な小娘はバタバタと降りて行ったのだ。

食事を済ませると、連中は一緒にやって来た。
「あら、お嬢様、何もお食べにならないおつもりのようね。これはまた、ひどい拗ねようですわね。誠実な殿方が貴女にはひどく手を焼いたのも不思議はないわ」
彼女はただ両手を差し上げ、天を仰ぐだけだったが、その頬には涙がこぼれていた。
失敬な外道たちだ。性悪女というのは、ワルの男にもまして、何とも残酷で無礼な連中なのだよ。
「私が思いますには、お嬢様」と、サリーが言った。「私たちが拝見いたしましたお姿に比べますと、少し汚れが目に付きますわね。残念ですわ、こんなにも素敵なご令嬢が着替えをお持ちでないなんて … せめて下着だけでも持って来てもらうよう、どうして下宿まで使いの者をお出しにならないのです」
「今は私、几帳面ではなくなっておりますの」
「お嬢様は何をお召しになっても見栄えが良く、清潔に映りますわ」と、ポリーが口を開いた。「でも、マダム、下宿へお使いを出そうとなさらないのは何故ですの。そこの人たちへの思いやりということだけなのでしょうか。貴女のことを心配しておられるに違いありませんわ。それに、お友達のハウさんにいたしましても、どうなったのかと不思議に思っておられるでしょう。だって、文通をしておられるのは疑いのないところですもの」
彼女は連中に背を向け、「あんまりだわ。ひどすぎます」と、独り呟いていた。すでに涙に濡れていたハンカチを投げ捨て、彼女はエプロンで目頭を押さえたのだ。
「泣くのはお止めなさい、お嬢様」と、性悪のポリーが言った。
「いいえ、お泣きなさいよ」と、もっと性悪なサリーが叫んだ。「それで気持ちが楽になるのでしたらね。ラヴレースさんが一度私に教えてくださったことだけれど、涙よりも速く乾くものはないのですからね。以前には私もずいぶんと泣いたものですわ」とだよ。
こんな話が復唱されるのをおとなしく聞いているというのは、俺には耐えられないことだった。ただ、それほど奴らを呪うことはしなかったのだよ。連中が言う寛大なる扱いとやらの詳細をすべて引き出してやろうという気持ちがなかったのなら、俺も大いに奴らを呪っていたはずだがね。また、これには二つの理由があるのだ。一つには、繰り返すことで、貴公の心臓をぐさりと抉ることになるかもしれないからだし、もう一つには、明日は

どのような立場で不幸な令嬢と会うことになるのか、それを知りたいと思うからだよ。

「それはそうと、ハーローお嬢様」と、サリーが叫んだ。「この絶望したような態度を美しいとお考えでしょうか。立派なクリスチャンなのでしょう、あなた。ローランドの奥さんのお話では、聖書をお持ちしたということですね。あゝ、ありますわね、そこに。疑いもございませんが、有益な箇所につきましては、立派なマット・プライアーも言っておりますように、二つ折り(二九)になさったことでしょうね」

そう言って立ち上がると、聖書を手に取り、「ほら、やっぱりね。ヨブ記だわ。だれでも自然にここを開くもののようですわね。母のお陰なのですけど、私、聖書には結構詳しいんですよ。シラ書もですね。いわゆる外典ね。お分かりでしょう、ホートンさん、私がかなり聖書に通じておりますことは」と、サリーは言っていた。

連中はもう一度、保釈金を積んで彼女を釈放することを申し出、一緒に戻ってくれるように言ったのだ。この提案にも、彼女は前と同じ憤りの色を浮かべていた。

彼女にとって極めて好意的な手紙を貴公宛に書き送ったこと、返事を今か今かと待ち侘びていること、そして、貴公が使いの者と一緒にやって来て、借金の全額を気前良く支払い、支払いを怠ったことについて、彼女の許しを請うのは疑いないということを、サリーが彼女に話した。

これを聞いて彼女がひどく取り乱したため、連中のほうでも、彼女が卒倒してしまうのではないかと心配になるほどだった。貴公の名を耳にするのは耐えられないのだと、彼女がそう言っていた。貴公とは二度と再び顔を合わせたくないし、無理に押し掛けて来るようであれば、恐ろしい結果を招くことにもなりかねない、というのだよ。

監禁を解かれるのは、きっと彼女にしても嬉しいはずだがと、連中は言った。

彼女の苦悩のすべてをもたらした張本人であり、今でははっきり分かったことだが、己の忌まわしい条件を彼女に呑ませるため、この新たな暴挙に走った〈あの男〉の名を持ち出して、二人が彼女の警戒心を煽り始めているわけだから、自分としても確かにそう思って当然だろうと、彼女のほうでも言っていた。

それでは、シンクレア夫人の請求したものを支払ってくれるよう、身内の人たちに手紙を出そうとしないのは何故かと、連中が尋ねた。

だれに対してであれ、長く迷惑を掛けることにはならないように思うし、それに、仮に自分に支払い能力があるとしても、意図されているのは借金の返済ではないことを承知しているからだ、と彼女は答えていた。

サリーが白状していたのだが、彼女に向かってこんなことを言ったそうだ。それだけの結構な財産を授かる資格こそないが、家柄にしても受けた教育にしても、その立派さの点では、実際の話、自分は彼女と対等だと考えて来た、というのだよ。そして、厚かましいことに、それが嘘偽りではないことを俺に主張してみせたのだ。

無礼にもあいつは、彼女に向かって次のようにも付け加えたのだ。ラヴレースさんが結婚してくれることを期待すべき根拠は、彼女に負けないくらい自分にもある、とだよ。クラリッサ・ハーロー嬢のことを知る前には、その約束をしてくれていたし、それも、署名捺印の上でのことであり、さもなければ、あの人も目的を果たすことは出来なかったはずなのだ。従って、差し出がましくも遠回しに触れたようなことを、もしもラヴレースさんが彼女に対して目論んでいると思うなら、自分の気持ちに背いてまで、お節介にもあの人

のために働くようなことはありそうにない話なのだ。それに、自分としては、唯一目的としているのは、他のだれからもそれほどまでに大騒ぎをされないような、そんな事柄を嘆きの種としている若いご婦人のために、自由を確保して上げることであり、また、親しいシンクレア夫人のためには、正当な債務の支払いが行われるようにすることなのだ、というのだよ。

彼女のほうでは、一人にしてくれるよう連中に懇願していた。彼女が言うには、こんな例を示されるまでもなく、自分がどのような人間と付き合っているのかはよく分かる、とのことだった。また、このような訪問客を、そして、心配の的となっている、さらに悪質な客を追い払うためにも、お金を工面してくれるよう、ある友人に手紙を出すつもりだと話していた。もっとも、そのようなことをするのは死ぬほどつらいのだけれど、とのことだった。友人も母親と無関係にそのような行動に出ることは出来ないのだが、そんなことをすれば、不純な混ぜ物などは一切含まない友情が、母親の目には、利己的な様相を呈することになるからだ、というのだよ。

連中は、すぐにも筆を執るよう、彼女に勧めていた。

「でも、手紙でお願いいたしますのはいかほどなのでしょう。金額はおいくらなのでしょうか。請求書をお届けいただくべきだったのではないでしょうか。私が貴女たちのところに下宿したわけでないのは、神様もご存じですわ。でも、私に向かってあのような仕打ちの出来る人でしたら、こんなこともお出来になるのでしょうね」

「ラヴレースさんの悪口はお止しなさい、ハーローお嬢様。私がとても尊敬申し上げている方なのですからね［忌々しい蛙野郎だよ］。それに、愚かで信じやすい私たち女性を相手に、スキがあればつけ込もうとなさるところはありますが、その点を除きますと、あの方は信義を重んじる人ですわ」

彼女は口を開く代わりに、両手を差し上げ、天を仰いでいたが、それもまた無理からぬことだよ。何しろ、彼女に使えそうなどんな言葉にしても、〈私たち〉という言葉の中に自分が含まれたことで感じるはずの、彼女の心の苦悩を表現するわけには行かなかっただろうからな。

少なくとも、百五十ギニーは無心しなければならないし、もしも、手元不如意というのであれば、いっそのこと二百ギニーお願いしても良いだろう、というのだ。

自分の衣類はすべてシンクレア夫人の手元にある、と彼女は言っていた。それらを売り払い、つまり、公正に売却してもらい、その代金で可能な限りの埋め合わせをしてもらいたいというのだ。貴重品は他にも少し持ち合わせているが、現金については、連中も目にしたあの哀れな半ギニー金貨とわずかな銀貨の他には一切ない（まったくの無一文）とのことだった。彼女は、自分の衣装やその他の持ち物を充てても足りない分について、その全額の返済を保証すると言っていた。自分のものとなって当然な、大きな動産物件があるというのだ。自分の保釈金なら、例え一千ポンドであっても支払われることになるだろうし、また、そうでなければいけない。しかし、衣類については、必要になることは二度とないはずだ。法外に買いたたかれるようなことがなければ、その衣類と少しばかりの貴重品とですべての目的に適うものと思っている。自分としては臨終の際の費用以外には余分なお金は望まないし、それとて、四十シリングでも四十ポンドと変わらないほどのことが出来るだろう、というのだよ。そして、天を仰ぎ見ながら、彼女はこう言ったのだ。「私の

破滅を大きなものにしてください。それがこの世において果たされますように。和解のためにも、果たされますように」とだ。そして、そこで口を閉ざしたのだ(三〇)。

あの恥知らずどもは、自分たちで着るためだが、そのような買い入れをする機会を与えてほしいと、堪えきれずに俺に頼んでいたよ。俺はどれほど連中を罵ったことだろう。そして、貴公のこともだよ、心の奥ではな。だが、この性悪のサリー・マーティンが期待を抱くのは［貴公にはそんな真似は出来ないだろうが］、いかにもありそうなことだな、と俺は思ったよ。貴公のいないところでは、厚かましいことにあいつは、「私のラヴレース」などと貴公のことを呼んでいるわけでもあるから、その貴公が気の毒な令嬢から巻き上げたもののうちから、一部を自分にプレゼントしてくれるかもしれないなどという、そんな期待をだよ。

「買い手がつきますまで、シンクレア夫人は」と、彼女が言葉を続けた。「私の衣類を担保と考えてくださるでしょうか。大変に良い品物なのです。スーツの一着か二着につきましては、いわば、体に当ててみただけで、一度も手を通してはいないのです。私に請求されております額よりもはるかに値が張ったのです。私が立派な服装をしておりますのを見るのが、父は好きだったのです。すべて手放すことにいたします。でも、夫人が請求しておりますものの明細をいただきたいのです。きっと、私個人の分と合わせまして、私の〈破壊者〉［それが、彼女が口にしたぴったりの言葉というわけだが］とその人の召使の分もお払いしなければいけないのでしょうね。私、それで異存はございませんわ。本当に、それで満足いたしております。この支払いの公明正大さにつきまして、だれであれ、こんな振舞いの出来る人間に説き聞かせるくらいのことはしてもらいたいと願いますほどに、私も愚かではございません。請求されておりますものをお払いするだけの額さえ得られましたら、私はそれで満足なのです。そして、このような行為の卑劣さのことは、これ以上悪くはなりようもないと考えておりましたものですが、そんな犯罪行為の罪深さをさらに増大させるものとして、放っておこうと思うのです」というのだよ。

白状するが、ラヴレース、このように詳細に及ぶのは、悪意に根差したことなのだ。貴公を心の底から苦しませてやろうという狙いからなのだよ。ところで、ひとつ訊きたいのだが、彼女ほどの身分、財産、才能、そして、美徳を備えた人物をあそこまで貶めた貴公の蛮行、前代未聞の残虐行為に関して、果たして今、貴公はいかなる考えでいるのかということだ。

恥知らずな女どもは単に仕事として行動しているにすぎないということ、これは認めねばなるまい。この二人にしてみれば、主として貴公のせいで、やむなく携わることになった仕事なのだがな。それに、貴公の狙いは何であったのか、そして、それはどこまで遂行されたのか、連中は承知しているのだ。令嬢が不快極まりなく感じて当然な女を、彼女のところへ連れて来るのを差し控えているというのは、連中に言わせるなら、彼女を丁重に扱っていることになるのだよ。また、彼女を見知らぬ男たちに紹介するなどと、そんな脅しをかけていない点もそうだし、さらには、気力を挫くのが仕事であるあそこの仕込み係や屈辱感を植え込む雄蜂どもに（針を持つことは許されていない奴らだ）まだ引き合わせていないこともなのだが、この連中と引き合わせるのは、彼女の後をつけ、力ずくで連中の忌まわしい家へと連れ戻し、中へ入ったが最後、ありとあらゆる手口を味わわせてやるためのことだ。

令嬢の被った災難のいずれに関しても、貴公は腹を立てたりしないはずだと、俺が到着するまで、連中はそう考えていたのだ。彼女を辱め、恥辱と不面目の状態に追い込む助けとなるもの、また、貴公との同棲よりもさらに不快だという、そんな事態から救い出すかのように、この恥知らずどもから彼女を解き放しに貴公がやって来る時、貴公の目論見に応じるよう、彼女の気持ちを動かす助けとなるものに関してはな。

これらの諸点を考慮するなら、この天晴な女性相手の振舞いに関する連中自身によるこの報告にしても、連中の加えた侮辱に比べるなら、はるかに舌足らずなものであったと確信するのに、貴公としても何の困難も感じないことだろう。また、次の一件を語り聞かせるなら、さらに困難は減少するはずだ。つまり、すべてを引っ括めて、連中からの仕打ちがひどく彼女の心を乱したため、連中が去る時には、彼女は激しい興奮状態にあり、連中としては、彼女がその状態を持続し、そして、さらに悪化するようであれば、薬剤師を呼びにやるように命じ、とりわけ（最初から連中はそうしていたのだが）次の点を指示しておいたというのだ。刃物や先の尖ったものは何であれ、特にペンナイフは、ペン先を直すふりをして、と連中は言っていたが、そんな口実で彼女が欲しがるかもしれないので、彼女の手の届かないところに置くように命じたというのだよ。

土曜日の夜十二時のことだが、ローランドが連中のところに使いを送り、彼女の容体がひどく悪く、どんな結果を招くことになるのか覚束ない、と伝えて来た。そして、彼女にはよそに移ってもらいたい、とのことだった。

こんなわけで、連中は君からの便りをしきりに待ち望んでいたのだ。というのも、連中にとっては大変な驚きだったわけだが、その時には、連中の出した使いがM邸から戻って来ていなかったからだよ。それに、使いの男は間違いなく金曜日の夜までにはそちらに着いているはずだと、連中は思っていたのだ。

日曜日の朝早く、人でなしどもは彼女の様子を見に、二人揃って出掛けた。彼女の衰弱ぶりや無気力さ、苦悶の様子について、大変な説明を受けていたので、連中としては（自分たちの訪問が彼女にとってはひどく不快なことを知り、同情心に促されてのことだ、と連中は言うのだが）彼女に会うのを差し控えたという。しかし、どのような結果になるのか、その点への懸念が主たる動機であったことは疑いもない。連中の冷酷非情な心を和らげるものなどは、それ以外には有り得ないのだからな。

連中はローランドが彼女のために呼んだ薬剤師に使いを出し、薬剤師、ローランド、その女房、そして、小間使に対して、最善を尽くして彼女の世話をするよう、何度も何度も繰り返し厳しく命令したのだが、疑いもなく、オールドベイリーを仄めかしてのことだろう。そして、連中は彼女に伝言を届け、自分たちが出した命令のことを知らせたのだ。ただし、彼女が心を落ち着かせるようなものを少し口にしたことは分かっているので、お邪魔をするつもりはございません、とだよ。

薬剤師の夜通しの診察を受けるのは、男だということで、どうやら彼女はためらったらしい。また、薬剤師に診てもらうようにとの説得に対しても、連中が自分たち自身の身の安全ということを理由として訴えるまでは、応じようとしなかったのだ。

連中は礼拝式からの帰途［いやはや、ボブよ、こういう奴らが礼拝式に出るとはな］、もう一度訪ねたのだが、その日の残り一杯は、どうしても一人でいたいという伝言が、彼女のほうから届いたのだよ。

俺が連中のところを訪ねた最初の時、そして、連中の所業に対する貴公の呪いの言葉を伝え、それに俺からのものも添えてやった時、連中は仰天していたよ。母さんも、ラヴレースさんのことはもっと良く分かっていたつもりだし、感謝はされても、呪われることはないものと思っていた、などと言い出す始末だった。

俺が連中のところにいる間に、連中の出した使いが戻って来たのだが、びっこを引きながら、恐ろしい勢いで毒づいていた。奴が届けに行った、朗報と思われていた報せに対して報酬を期待するよう教えられていたというのに、その代わりに、君からひどい仕打ちを受けたからなのだよ。ご立派なものじゃないか、貴公も。自分が犯した過ちの結果のことで、他人に八つ当たりするというのだからな。

この男はドーカスの知り合いで、あの女の推薦もあって使いに出たのだが、どうやらあの女は、君からいただけるはずの礼金の分け前に与ることを条件に、話を持ち掛けたらしいのだ。あの女が自分の分け前を確かなものにするつもりだったというのなら、あの男の体中の骨を一本残らず、貴公にへし折ってもらいたかったね。

何とも恐ろしいほど不利な立場で、おまけに、貴公の友人であり親友であるという点がそれに加わるわけだが、俺は、明日の朝には、この不幸な令嬢のところを訪ねる予定なのだよ。しかも、貴公の名において、というのだからな。俺が男だというそれだけで、拒まれるのに十分なのだ。貴公ゆえのことではあるが、彼女が男を毛嫌いするのもまことにもって尤もな話だし、それに、あんな暴君のような父親や、あれほど無慈悲な兄を持っているわけだから、奴らのことからしても、どんな男に対してであれ、そいつに有利な特別扱いをしなければならないいわれなど、彼女には一切ないのだからな。

三時だよ。ここで止めにして、少し休むことにする。今までに記したことが、やがて現れてくる事柄への恰好の前置きになることだろう。

貴公の召使が言っているのだが、手紙一通持たずに帰るわけには行かないそうだな。また、朝のうちには戻るよう、貴公は期待しているとのことだな。そこには、貴公の思いのままになる者をたっぷり置いていることだ。令嬢との面会に少しでも支障があるようであれば、貴公の使いにこれを渡し、早馬で発たせることにする。携えて行くものが貴公の期待に添わない時は、骨折だの、その他諸々の結果に注意するよう、話してやるのだな。だが、俺がお目通りを許された場合には、これと面会の結果とを両方一緒に届けることにしよう。前者の場合だが、その際は、俺の次の助言を待つよう、別の召使をこちらへ寄越してもらいたい。

J. ベルフォード

手紙　六十六

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

七月十七日　月曜日

今朝の六時頃だが、俺はローランドのところへ向かった。シンクレア夫人が俺について来ることになっていた。訴えを取り下げるためなのだが、目に付かないようにしているとのことだった。

尋ねたところ、ローランドが教えてくれたのだが、令嬢は極めて具合が悪いということだった。また、奴の女房か小間使は別だが、他の者はだれも傍に近づかないよう、彼女が希望していたというのだ。

どうしても彼女に会わねばならないのだと、俺は言った。俺の用向きは前夜のうちに奴に伝えてあったし、どうしても彼女に会わねばならないと話したのだ。

奴の女房が上がって行ったのだが、すぐに戻って来て、彼女に口をきいてもらうことは出来なかったと言っていた。ただ、彼女の瞼は動いていた、と言うのだよ。自分のほうを見るために目を開く気持ちになどならないというのか、それとも、開くことが出来ないのか、そのどちらかなのでしょうがね、ともな。

「そんな、君」と、俺が言った。「令嬢は引きつけを起こしているのかもしれないぞ。亡くなるかもしれん。上へ行かせてくれ。案内するんだ」とだ。

奴らに言わせると「コート」というわけだが、ただの裏小路の、恐ろしくむさ苦しい家だ。二階の部屋までですさえ、階段はひどく狭いのだ。そして、奴らは檻みたいなところへ俺を案内した。壁は破れているが、壁紙が張ってあったのだろう。沢山の鋲が打ってあるし、ところどころ紙片が錆びた鋲の頭で止められているのを見ても分かる。

床は確かに綺麗だった。しかし、天井のほうは様々な絵やイニシャルで黒く汚れているのだよ。他に楽しむ術も持たない悲惨な連中の、哀れを誘う手慰みというわけだ。

片一方の隅にベッドがあり、その裾のところでは、粗末な生地のカーテンが天井に鋲で止めてあった。カーテンリングが壊れてしまったのだ。ただ、小綺麗に見える上掛けが掛けてあるのだが、ひどくボロボロで、端の方は結んで房にしてあった。それ以上ほころびが広がらないようにというわけだ。

窓という窓は暗く、格子が二重に嵌め込まれており、天辺のところには板を張ってあるのだが、修繕の手間を省くためさ。換気には、四枚のガラスが入ったボタン穴みたいに小さな開き窓があるだけだ。ただ、そこからよりも、破れたガラスのところのほうが風通しは良いのだよ。

トルコ風つづれ織りを使った古い椅子が四脚あるが、座部が破れて、詰め物がはみ出している。

古くてグラグラする、虫食いのあるテーブルが一つ。座りを良くしようと、修理のために使った釘代たるや、五十年前に新品だった時のテーブルの値段以上だ。

暖炉の上には、押し上げ式蝋燭受けのある鉄製の燭台が置いてあり、火の点いた蝋燭が一本、キラキラと輝いていたが、多分、四本一ペニーのものだ。

その傍ら、同じ棚の上には、古い鏡が一つあったが、真ん中にひびが入り、無数の方向に割れ目が走っていた。恐らくそのひび割れは、どこかの哀れな人間によって、怒りのあまり加えられたものなのだろうが、胸の悩みが顔に出ているところを、鏡が写し出してみせたからというわけさ。

暖炉の片方の側面には半分にしたタイルが二枚、もう一方の側面には丸ごとのものが一枚張ってあり、もっと良い状態にあったことを示している。しかし今は、他のすべての部分では、モルタルそのものが残りのタイルの後を追い、レンガがむき出しの状態になっているのだ。

暖炉の中には、半分が格子になっている旧式な火床があって、そこに、石で出来た大き

な首のない瓶が置いてあり、ときわ木のつもりの悲しげなイチイの枝、しおれたニガヨモギ、枯れたノバラや花を一杯つけたヘンルーダの小枝〔三一〕が挿してあった。

このショッキングな描写も終わりにするが、奥まった暗いところには、座部の壊れた古い籐製の寝椅子があった。クッションとか上掛けはないし、隅の一つが沈んでいる。虫に食われた脚の一本がとれて、ほぞ接ぎがはずれているのだが、その脚は、もはや支えることも出来なくなった惨めな家具の下に、二つに折れて横たわっているのだ。

これが、汝、忌まわしきラヴレースよ、神のごときクラリッサの寝室だったのだよ。

俺はこれらの品々をじっくりと眺める余裕があったのだ。というのも、音を立てないようにして上がって行ったため、われわれが部屋に入っても、お気の毒な令嬢はこちらを振り向きはしなかったし、俺が声を掛けるまで、頭を動かすこともなかったからだ。

彼女は部屋の片隅、薄暗い窓の近くでテーブルにもたれ掛り、彼女のハンカチで半ば覆われている、籐の寝椅子の長枕（俺の目にはそう映った）の上に跪いていた。背をドアのほうへ向けていたが、ドアはただ閉じてあるだけだった［締め具は必要ないのだよ］。両腕をテーブルの上で組み、右手の人差し指は聖書の中だ。おそらく、目を通していたのだろう。そして、もう読んでいられなくなったのだ。テーブルの上、彼女の聖書の横には、紙と数本のペンとインクが置いてあった。彼女のドレスは白のダマスク織りで、実にさっぱりとした着こなしだ。だが、コルセットをきつく締めている様子はない。後で聞いた話では、この呪わしい場所に入ると、彼女は気を失ったわけだが、その際にコルセットの紐は切ったとのことだ。それに、別のドレスを送り届けさせるほどの服装への気遣いが、彼女にはなかったそうだ。ヘッドドレスが少し乱れており、これまでに貴公も話し聞かせてくれた、あの自然にカールした彼女の魅力的な髪が、近頃は櫛を入れていなかったかのように、わずかなもつれを見せながら、この世でも最も美しいうなじの一方の側に不規則な影を落とし、もう片方は、乱れて皺になったネッカチーフで覆われていた。われわれが部屋に入った時、彼女の顔は［あゝ、前に拝見した時のお顔とは、何という変わりようだ。だが、これだけの悲しみと苦難を重ねながら、愛らしさに変わりはないのだ］組んだ腕の上に横たえられていた。ただ、その半分以上が隠れてしまわないような仕方でだがね。

俺は部屋中を見渡し、そして、跪いている令嬢を眺めた。彼女は、くずおれながらも威厳を湛え、白く流れるようなローブを（実は、フープを着けていなかったのだ）、汚れてはいないが黒ずんだ色の床に広げ、あの忌まわしい片隅を明るくしていた。というのも、ここに来てから一度も着替えをしていないことを考えに入れるなら、彼女の下着は想像も絶するほどの白さだったからなのだが、この時俺は、案じるあまりに、息が詰まってしまいそうに思えたのだ。何とは判らないが、何かが喉元に込み上げて来た。そして、一瞬、俺はゴロゴロと音を立てたのだが、言葉を発しようとしてのことだ。それがようやく声になると、俺は夫婦に向かって、「こん　…　こん　…　こん畜生め　…　これほどの令嬢のための部屋だというのか、これが　…　それに、同じ女でありながら、この苦難の天使を訪ねた罰当たりな人でなし連中は、こんな忌まわしい片隅で彼女と出会い、平気で立ち去って行ったというのか」と叫んでいたのだ。

「旦那様、ご婦人には手前どもの寝室を使っていただこうと考えていたのです。ところが、ご婦人のほうでお断りになったのです。手前どもは貧しい人間でして、やむを得ない期間はともかく、それ以上長く手前どものところに留まっていただこうなどとは、どなた

にも期待してはいないのです」

「お前たちがわざわざ選び出された人物なのは疑いのないところだな。お前たちを雇ったあの忌まわしい女によってだよ。この令嬢に対するお前たちの扱い方が、お前たちの家のひどさの、その半分ほどでもひどいものであったのなら、お前たちなどはお日様を拝まずにいたほうが良かったのだ」

ちょうどその時、魅惑的な受難者がその愛らしい顔を上げたのだ。しかし、あまりにも悲痛な思いが顔一面に広がっていたため、俺としては、心動かされているところを表に出さずにはいられなかったのだよ、どうしてもな。

彼女は二度三度と、部屋を出るよう俺に命じているかのように、ドアのほうへ向かって手を振った。そして、俺が入って来たのを不快がっていたが、口は開かなかった。

「お願いです、マダム … お許しがなければ、これ以上一歩もお傍へはまいりませんが … お願いいたします。ほんの一刻、お耳をお貸しいただきたいのです」

「嫌です。嫌です。出てください。さあ、出てください、あなた」と、強い語調だ。そして、さらに言葉を続けようとしていた。だが、言葉を捜して骨折りながらも果たせずにいるみたいに、口をきいても無駄だと諦めた様子で、深く溜め息をつくと、再び頭を左腕の上に沈めたのだ。右腕のほうは、まるで使い道がないと言わんばかりで（おそらく、しびれていたのだろう）、ひとりでに動き、体の横にずり落ちた。

あゝ、貴公があの場に居合わせ、そして、俺と入れ替わってくれたら … だが、あの時に身をもって感じたことから、確信を得たのだよ、俺は。同胞の苦悩によって心を動かされる能力というのは、雄々しい心にとっても、決して恥ずべきものではないということをだ。あの瞬間、俺は自らの命を、それこそ喜々として捨て去ることも出来ただろう。ただ、その前に、この魅惑の君の仇討ちとして、彼女が語気鋭く貴公のことをこう呼んだわけだが、彼女の〈破壊者〉の喉を、俺の最愛の友とはいえ、掻き切ってやることが出来たらの話だがな。しかし、同時にまた、俺の心と目が挫けてしまったのだ。これまでは一度として（貴公ほどの冷酷無情な人でなしではないのだが）、そんなにも強く感じることのなかった優しい感情にだよ。

「貴女のお許しなしにお傍にまいるつもりはないのです、親愛なるお嬢様。ただ、こうして跪き、切にお願いする次第ですが、私が貴女を救い出しますのをお許しいただきたいのです。この忌まわしい家から、そして、貴女がここに居られる原因ともなった、あの憎むべき女の手からです」

彼女はもう一度その美しい顔を上げ、跪いている俺を見た。衷心からの願いを込めて祈るというのはどういうことなのか、これまで俺は知らなかったのだよ。

「貴方は … 貴方はベルフォードさんではございませんか。お名前はベルフォードさんですわね」

「そのとおりです、マダム。以前から貴女の美徳をいつも崇拝してまいりましたし、貴女を弁護する側の人間だったのです。そして、貴女が囚われておられるその手から、貴女を救い出さんものと、馳せ参じた次第です」

「で、だれの手に渡そうとお考えなのでしょう。あゝ、独りにしておいてください。独りにしていただきましょう。二度とこの場から立ち上がることのないようにさせていただきます。これ以上二度と再び、男の人を信じ込まないようにさせてほしいのです」

「今すぐにも、親愛なるお嬢様、今この瞬間にも、もし宜しければ、どこなりと、適当とお考えの場所へ向かわれて構いません。貴女は完全に自由です。束縛を受けることは一切ございません」

「私は、どこでよりも、今この場所で死にたいと思います。私が一緒におりますところを貴方もご覧になった、あの人のお友達からは、どなたであれ、一切恩義を受けたくございません。ですから、どうぞお引き取り願いたいのです」

それから、執行吏のほうへ向き直ると、彼女は、「ローランドさんというお名前と存じますが、貴方のお家を甘んじて受け入れますことが、最初の頃に比べますと、私にも出来るようになりました。貴方の奥さんは別ですが、それ以外の人はだれでも（男性は絶対お断りです）、また、私の災難を軽々しく扱いました、あの女の人たちのどちらも、私のところへは近づけないようにすると、そのことだけでも請け合っていただけるのでしたら、私は貴方のところで死のうと思うのです。今居りますこの片隅でです。そして、私のためにいただきましたお骨折りに対しましては、十分満足いただけるようにいたしたいものと存じます。そうするに足るだけのものは持ち合わせておりますわ。ほら、ご覧のとおり、ダイヤモンドの指輪があるのです」と、胸のところから取り出して見せ、「それに、私がこの世を去りました時には、これを高い値で買い取ってくれる身内もおりますから　…　」と言うのだ。

「でも、貴方には」と、俺のほうを見ながら、彼女は「お引き取り願いますわ。もしも善意からなさっておられるというのでしたら、その善意に対しましては、神様が報いてくださるものと思います。でも、私、自分の〈破壊者〉のお友達に恩を受けるようなことはしたくございません」と言っていた。

「私に対しましても、また、だれに対しましても、何の恩もお受けになるわけではありません。貴女は、貴女に関わりのない借金のことで留置されたのです。訴えは取り下げられました。従いまして、何卒、馬車のところまでお手をお預けいただきたいのです。馬車はこの家に近寄れるだけ近寄って待っております。馬車のドアのところでお別れしても宜しいですし、あるいは、いずこであれ、お気に召すところへ、お望みの場所に無事お送りいたしますまでお供いたしましても結構です」

「では、貴方のお世話になるよう、私に強要なさるおつもりなのでしょうか」

「貴女のお役に立つこと、あるいは、喜んでいただけること、そのどちらかをお申しつけいただけますなら、マダム、私といたしましては、言い表しようもないほど有難いことと存じます」

「でしたら、あなた［と、俺のほうに目を向け］　…　でも、どうしてそのような畏まった姿勢を装って、私のことを笑いの種になさるのでしょう。さあ、どうかお立ち願います。でなければ、お話をするわけにもまいりません」

俺は立ち上がったよ。

「どうか、この指輪を受け取るだけにしていただきます。私には姉がおりますが、持ち主だった者のためにも、喜んで言い値で買い取ってくれるはずです。姉がお渡しいたしますお金から、この方への支払いを願います。手厚く支払っていただきます。それから、下宿には貴重品がもう少しございます（置いてある場所は、ドーカスか下男のウィリアムがお教えいたしましょう）。それらのものと、貴方が私をご覧になった、あの悪辣な女のとこ

ろに置いてあります私の衣類とを売却くださいまして、第一には、私の下宿代といたしまして、次には、貴方の友人の借金返済のためですが、それに振り向けられるかぎり支払っていただきたいのです。ただ、どのようなところでも、どのような仕方でも構わないのですが、私の埋葬に必要な分だけは残しておいていただきます。それですべての要求を十分満たすことになるよう願っております旨、お友達にお話しいただきたいのです。でも、十分ではないようでしたら、ご自分で不足分を埋め合わせていただかねばなりません。あるいは、その分をハウさんにお願いするのが適当だと、あの人が考える場合ですが、ハウさんなら返済してくださることでしょうし、あの人がそのように主張するのでしたら、利子もつけてくださるはずです。以上のことにつきまして、実行をお約束いただけるのでしたら、お申し出もございましたが、喜びの種とご尽力とを二つながらにお与えくださることになるのです。そうするとおっしゃっていただきたいのです。そして、指輪をお受け取りになってお引き取り願いたいのです。この上何か申し上げたいことがございます時には(人情を弁えた方とお見受けいたしますので)、お知らせいたしましょう。それでは、貴方に神の恵みのあらんことを　…　」

俺は彼女のほうへ近寄り、話し掛けようとした。

「おっしゃらないでください。さあ、指輪ですわ」

俺は応じずにいた。

「では、受け取ってくださらないのですか。私のためのこの最後の仕事をやっていただけないのでしょうか。他にはお願いする人もいないのです。そうでなければ、貴方にお頼みするはずはございませんでしょう。でも、受け取っていただけましても、いただけなくても」と、指輪をテーブルに置きながら、「お引き取りいただかねばなりませんわ。ひどく体調が優れないのです。出来ることでしたら、少し休みたいと思います。また具合が悪くなりそうなのです」

そして彼女は、立ち上がろうとしたのだが、衰弱と悲痛さのあまりに意識を失い、崩れ落ちてしまったのだ。

貴公自身が姿を見せなかったのは何故なのだ、ラヴレース。何故にこのような悪事をやってのけるのだ。貴公すら荷担するのを恐れるほどのことをだよ。それでいて、心も頭もか弱い者をそんな悪事に遭わせるというのだからな。

ちょうどその時、小間使が入ってきたので、女房と小間使とが彼女をがたつく寝椅子の上に乗せた。俺はこのローランドと一緒に退室したのだが、ローランドは子供みたいに涙を流し、生まれてこの方、これほど心を打たれたことはないと言っていた。

しかしながら、貴公はすこぶる冷酷無情な人でなしだから、俺の記述にも涙を流してくれるかどうか、疑わしく思うのだ。

奴らは鹿角精と水を用い、彼女を正気づかせた。その間、俺のほうは降りて行ったのだが、少し前から、あの憎むべき女が階下に来ていたからだよ。あゝ、どれだけ奴を罵ったことか。俺としても、あれほどよどみなく呪いの言葉をまくし立てたのは、これまで一度としてなかったことだ。

あいつは取り入ろうとして甘言を弄していた。だが、俺は撥ねつけたよ。そして、訴えを取り下げた後、あいつを追い出してやったのだ。あいつのほうでは、あいつに対する俺の態度もあってのことだが、泣きながら、あるいは、泣いているようなふりをしながら去

って行った。

気づいてもらえるだろうが、君のことは、令嬢には一言も話さなかった。そんなことをするのは怖かったのだよ。何しろ、彼女にとって、君の名が耐えられないことは明らかだったからな。「貴方のお友達」「私が一緒のところを貴方もご覧になった人」といったものが、彼女が口にすることの出来た、君を名指しするのに最も近い言葉なのだよ。ただ、この野蛮な、この卑劣に映る非道の行いが、君の意図とは関わりのないことを証明したい気持ちはあったのだ。

彼女が意識を取り戻したと聞くと、俺はローランドの女房に託して、もう一度彼女に伝言を届け、あの呪わしい場所を離れてくれるよう懇願した。また、女房のほうでも、訴えが取り下げられたわけだから、彼女は完全に自由であり、そうして構わないことを保証したのだ。

しかし、彼女は返事をしようとはしなかったのだ。ひどく衰弱し、気持ちも滅入っているため、口をきく気もないけれど、そうする力がほとんどなかったのだと、あの女は教えてくれた。

俺としては、友人のH医師を呼びに急行したかったのだよ。ただ、あの家はひどい巣穴といったところだし、彼女のいる部屋もひどくむさ苦しいものだから、俺としては、そんな場所にいるところを、彼のように名の通った男に見られるのが恥ずかしかったのだ。とりわけ、あれだけの容姿をした、そして、あのように途方もない苦難に喘いでいる女性と一緒なわけだからな。それに、あの部屋を出て、小綺麗で明るい奴らの寝室へ移ってくれるよう彼女に勧めたのだが、どうしても説得出来ないことが分かったのだ。

人でなしどもの話によると、彼女のいた拘置用の部屋はもっとましな状態になっていて然るべきだったのだが、ある不幸な男があの部屋を出たのは、彼女が連れてこられたちょうどその朝のことだったというのだ。もっとまともな牢獄へ移るためなのは疑いのないところだ。何しろ、あれより劣悪なものは滅多にないわけだからな。

邪魔されたくはないと彼女が希望しているということ、また、一眠りしたがっている様子だということを聞かされたので、俺はこの機を捉え、コヴェントガーデンの彼女の下宿へ足を運んだ。そこへの道順については、すでにドーカスが（あの娘が彼女をそこで最初に見つけたのだ。ウィルが教会から跡をつけていたのでな）教えてくれていたのだよ。

亭主の名はスミスと言い、手袋や嗅ぎタバコや、その手のこまごまとした品物を商っている。女房が店番をし、亭主は売り物の手袋を作っているのだ。正直な連中のようだ。

俺としては、お上さんを令嬢のところへ連れて行くつもりだったのだ。ところが、お上さんは留守だった。

俺は亭主と話し合い、令嬢の身に降り懸かった出来事のことを教えたのだが、指示の取り違えに由来することだと言っておいた。そして、令嬢の人柄について、彼女に相応しい証明を与え、お上さんが戻ったら、すぐに令嬢のところへ遣わしてくれるよう、行き先を指示した上で、亭主に頼んだ。お上さんの付き添いが彼女から大歓迎されるのは疑いないと思ったわけだが、亭主もそうすることを約束してくれたのだよ。

亭主の話では、日曜日に彼女宛の手紙が一通、あの下宿に届けられたそうだし、俺が来る三十分ほど前にも、同じ筆跡の宛名書きでもう一通届いたというのだ。最初のものは郵送され、もう一つのほうは農夫の手で届けられたのだよ。この農夫は、彼女が不在である

という点、そして、亭主たちのほうで話すことの出来る事情一切を知らせてもらうと、すっかり心配気な様子になり、大急ぎで帰って行ったのだが、自分が使いに出されたところのお嬢さんは、そんな知らせを聞けばすぐに、胸も潰れるほどに嘆き悲しむことだろうと言っていたそうだ。

その二通の手紙は持ち帰るのが妥当なことと俺は考えた。そして、馬車を断り、駕籠を捕まえたのだが、令嬢のための、より相応しい乗り物としてだよ。もしも、ローランドのところを去ってくれるよう、この俺に（彼女の〈破壊者〉の友人として）彼女を説き伏せることが出来ればの話だがね。

さて、ここで、放っておけない用事に顔を出さねばならなくなったためだが、宙ぶらりん状態の悩ましさというやつを、今度は貴公にも少し味わわせてやろう。俺のその後の処置の成り行きについてはこれっぽっちも触れず、筆を置くことにするのだよ。俺も知っているが、人の期待に背くのを大きな喜びとしている者ほど、期待を挫かれるのには耐えられないものなのだ。この所見の正しさについては、二十もの実例をもって貴公が証明してくれたわけだからな。それに、貴公が怒り狂おうと、何とも思わないのだよ、俺は。

ただ、もう一通用意することにしよう。どんなに早くても良い。好きな時に請求してくれ。だが、用意することが出来ないとしても、すでに俺は十分に筆にしたのではないだろうかな。俺が次の通りの男であること納得してもらうに足るだけはな。

喜んで希望に応じる貴公の友

J. ベルフォード

手紙　六十七

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

七月十七日　月曜日　夜十一時

貴公の非情な心に呪いあれだよ、汚らわしい卑怯者めが。貴公は俺をどれほど苦しめたことか　…　わざと急に止めたりしてだ。貴公が俺を苦しめてきたほどに、そして、今俺が苦しんでいるほどに、ハーロー嬢が一度でも苦しみを嘗めたなどというのは、有り得ない話だよ。

女というのは苦しみに耐えるようになっているのだ。最初の女がその娘のすべてにもたらした祟りなのだ。われわれ全員に呪いをかけた時の話だがね。それで、娘たちも苦しみを一番多く与えてくれる男が、大人子供の区別なく、一番好きなのさ。だが、俺のような気性を、貴公の忌々しい張枠に張るみたいに、張り詰めさせようというのだからな。いかなる責め道具、いかなる拷問にしても、俺の苦悩に勝るものはないぞ。

それに、別の使者が戻るのをなおも待たねばならんというのか。畜生め。意地の悪い人でなしだよ、貴公も。貴公が早馬であってくれたならと、そう願うよ。その背に跨がるのが俺というわけだがね。思い切り鞭をくれてやるさ。拍車もだ。そして、貴公のその不様な横っ腹を傷つけ、挙げ句には、犬の餌にしてやろうという寸法だ。しっかり焼き上がってすっかり皮の剥けたえさにだよ。俺が貴公を駆って走ると、国中の猟犬が吠えながら後を追い、俺が降りるのを待っている。貴公をバラバラにして貪り食うためだ。ガツガツと

口一杯に噛みちぎられた肉片の一つ一つはまだ生きており、脈を打っているのだがね。
苦痛の種になるばかりだが、貴公の走り書きの続きをこの男に渡してくれ。
大至急その男を出発させるのだ。続きを持たせてな。用意をすると、貴公のほうで約束したことなのだぞ。奴が戻るまでは、俺が腰を下ろすクッションとか椅子の一つ一つ、そして、身を横たえるベッドには（仮にもベッドに入るようなことがあればの話だが）、真っ直ぐに突き出る突きぎりや太針、大きなヘアピンやからげ針が詰め込まれている状態だろうな。すでに頭に思い浮かべていることだが、この心と同じように体をも突き刺し、苛むためには、先が鋼で出来た大釘を一面に打ち込んである大樽に押し込まれ、ロンドン大火記念柱〔三二〕の三倍も高い丘から転がしてもらえばそれで良いというわけだよ。
しかし、時間の無駄使いというものだな。ただ、心も苛む貴公の情報の続きをこの男が持って帰るまでは、どう時間を使ったものか、それも分からないのだよ。

手紙　六十八
ベルフォート氏からロバート・ラヴレース氏へ

七月十七日　月曜日　夜
ローランドの家へ戻ってみると、ちょうど薬剤師が上がって行ったところだった。ローランドの女房が薬剤師と一緒に上に行っていたものだから、俺もさほどためらうことなく上がることにした。許しを請うのは、おそらく、拒絶されることを求めるようなものであったし、それに、携えていた手紙が格好の口実になりそうにも思ったのだよ。
彼女は壊れた寝椅子の片側に腰掛けていたのだが、極度に衰弱して元気がなく、見たところ、薬剤師にも口を開きたくない様子だった。また、それも無理のない話なのだ。というのは、まずまず上品な部類の職業に就いているというのに、あれほどいやらしい輩には俺もお目に掛かったことがないし、あれほど無教養な話し方を耳にしたこともないほどなのだよ。この家や似たような場所に専属の医者なのだろう、おそらくな。不滅の詩人シェークスピアからの借用ということだが、オトウェーが『カイアス・マリアス』で描いてみせた薬剤師のことを思い浮かべてしまったよ。

顔付きは力なく、深い悲しみを浮かべ、
厳しい苦難に骨の髄までやつれ果てたのだ。
飢えが両頬を捉え、
二つの瞳にぎらついているのは窮乏と苦悩、
その背にまとわりついて離れないのは恥辱と赤貧、
この世は彼の友とはならず、世の掟とて同じこと〔三三〕。

俺が入って行くと、黒装束に身を包んでいるものだから、奴のほうでは俺のことを医者と受け止めたのだろう。両手の親指に帽子を載せ、俺の後ろに逃げ込んできたのだ。そして、神託所の扉が開いて、自分に指示を与えてくれるよう期待しているみたいな顔付きをしているのだよ。

令嬢は、俺の後について来たローランドや薬剤師に対してと同様、俺にも不快な表情を向けて見せた。彼女に言わせると、自分を女性の手に委ねてもらえないのは、また、会いたい人間を選ぶ自由も許してもらえないというのは、現在の不幸のうちでも決して小さなものではない、というのだよ。

俺は彼女の許しを請うた。そして、薬剤師に引き下がるよう目配せをし［そのとおりにしてくれたのだが］、次のように話したのだ。彼女の新しい下宿へ行って来たが、彼女がそちらへ向かうことを選択してくれるものと考え、迎え入れの準備をすべて整えるよう指示を与えるためだということ。玄関には駕籠を待たせてあるということ。スミスとその上さんが［連中の名を出したのだが、シンクレアへの恐れを抱く余地はほんの少しでも与えないためだよ］彼女の身の安全についてしきりに心配していたということ。また、手紙を二通携えて来たが、彼女宛にあの家へ届けられていたもので、一通は郵送されてきたものだが、もう一通は今朝着いたばかりのものだ、といったことをだよ。

この言葉は彼女の関心を引きつけることとなった。手紙を取ろうとして、彼女はあの魅力的な手を差し出し、手紙を受け取ると、それを唇に押し当てた。「この世でたった一人のお友達からですわ」と、もう一度手紙に口づけをしながら、彼女が言った。そして、開封されてはいないか確かめるように、封臘のところを眺めるのだよ。彼女は、「私には読めませんわ。目がひどくかすむものですからね」と言い、手紙を胸の中にしまっていた。

あのひどい穴蔵から抜け出すことを考えてくれるよう、俺は彼女に懇願した。

どこへ行けば安全で、残り少ない人生を邪魔されずに済むのか、また、前に彼女を辱めた奴らの再訪を避けることが出来るのか、彼女は尋ねていた。

彼女の新しい下宿では、いかなる人間からも押し掛けられることのないようにしましょうと、厳粛この上ない形で俺は請け合った。そして、特に名誉にかけて誓うが、彼女に対して最大の無礼を働いた人物については、彼女自身の許可なしには、彼女の傍に近づかせないようにいたしましょうと、俺はそう言ったのだよ。

「貴方の名誉ですって　…　貴方はあの男のお仲間ではないのでしょうか」

「私は仲間などではないのです、マダム。衆に秀でたご婦人に対する彼の悪行につきましてはね」

「私に阿ねていらっしゃるのでしょうか。それじゃあ、男の方なのですね、貴方も。でも、あゝ、貴方のお友達は」と、実に真剣な表情で顔を突き出すようにし、「貴方の残酷なお友達には、責めを負わずに済むことなどあるのでしょうか」と言うのだよ。

そこまで言うと、彼女は口籠もっていた。胸が一杯なのだ。そして、両目と額を手で覆ったのだが、その指の間からは涙がこぼれ落ちていた。貴公の蛮行を恨んでのことなのだろう。ちょうど、名高いブルータスの一撃をシーザーが恨んだのと同じようにだ。

彼女はそれほどひどく心を乱していたわけだが、俺は、この機を逃すことなく、今回の卑劣な逮捕劇に関しては、貴公に罪のないことを主張しようと考えたのだ。

「貴女に対する卑劣な行為のいずれにつきましても、マダム、あの不届き者に弁護の余地はございません。ただ、この最後の暴挙に関しましては、善にして聖なるもののすべてにかけて申しますが、あの男は無実なのです」

「あゝ、何という恥知らずなのでしょうね、男の人たちというのは　…　皆さん同じお国訛なのでしょうか。〈善にして聖なるもの〉ですって　…　毎日二十回もこの耳を傷つけ

られていたわけですが、それとは違う誓約や祈願、あるいは、破棄の宣誓を見つけ出すことがお出来になるのでしたら、それを口に出していただきたいのです。それなら、もう一度男の人を信じることが出来るかもしれませんわ」

この言葉は俺にもひどく応えたよ。貴公の卑劣な振舞いのこと、そして、それだけの言葉を口にして当然な理由が彼女にはあることを承知しているからだ。

「でも、貴方は　…　こんな浅ましい卑劣行為が、あの恥知らずに出来てほしくない気もするのですが　…　貴方はこの最後の悪行について、あの男は無実だとおっしゃるのでしょうか。そのとおりだとおっしゃることが、本当にお出来になるのでしょうか」

「天にまします偉大なる神にかけまして　…　」

「お止めください。神に誓ったりなさいますと、貴方を疑わねばなりません。貴方ご自身がご自分の言葉では十分でないとお考えになるのでしたら、貴方の誓いを当てにいたしますのに、私は一体何を頼りにしたら良いのでしょうか。あゝ、私のこの経験がこんなにも高いものにつかずに済んだのでしたら　…　でも、私が千年生き続けることになりましても、誓いを口にする人の信憑性には、いつも疑いの目を向けることにいたします。無礼の段はお詫びいたします。でも、ご自分の神様に対しまして、そんなにも馴々しく振る舞う人が、ご自分と同じ人間を相手になさって、自らの利益になる点に関しまして、何事であれ、遠慮をなさるようなことはありそうな話でしょうか」

すこぶる心に響くお叱りの言葉だったよ、これは。

俺はこう言った。「マダム、紳士たる者はそうあって然るべきですが、私は、自分の言葉を大切にしているのです。貴女に対しまして、仮にもその姿勢を捨て去るようなことがあれば、いつ何時であれ　…　」

「いいえ、お怒りになってはいけません。紳士の方の信憑性に疑いを向けたりいたしますのは、私には悲しいことです。ただ、貴方のお友達は紳士を自称しているのです。紳士とやらのお陰で私がどれほど苦しい思いをしたのか、貴方はご存じないのです」　こう言うと、彼女は再び涙にくれていた。

「悲嘆に暮れておられますし、お体も弱っておられるご様子ですが、お許しをいただけるのでしたら、マダム、証明して差し上げましょう。あの男がこの野蛮な卑劣行為に手を染めてはいないことをです。あの男にしてもそんな行為のことは、憤りの的となって当然なわけですが、然るべく憤慨しているということをです」

「あら、あら、あなた［と、即座にだ］、あの人はご自分の弁明を、私にではなく、どこか他のところでなさることになるはずです。今回の一件がご自分の意図とは関わりないことを、あの人には証明可能なのだと分かりましても、私といたしましては、残念だとは思わないでしょうね。ただ一つだけ、あの人に知らせていただきたいことがございます。あの人から受けましたいわれのない仕打ちにつきまして、あまりの辛さゆえ、私が口を極めて非難しておりますのをお耳になさいました時にも、その時でさえ、そんな激情に駆られた瞬間にさえも、次のように申し上げることが私には出来たという点をです［また、あれだけ真剣に、心打つ仕草で両手を差し上げて天を仰ぐ姿を、俺は一度として目にしたためしはなかったよ］。つまり、〈この私があの男によって汚される哀れな娘の最後の者となりますよう、尊き神よ、あの男に改悛の情を、そして、改心を授け給え。また、私には何らの慈悲をも示すことのなかった憐れむべき破廉恥漢ではございますが、適切と思し召す時

に、お慈悲溢れる御心に迎え入れていただきとうございます〉とです」

まったくの話、俺としては一言もなかった。彼女が聖書を手元に置いているのも、伊達や酔狂ではないということだな。

やむなく俺は横を向き、ハンカチを取り出すという有り様だった。

それこそ天使だよ、この令嬢は。あの看守でさえも、そして、その女房と小間使までが涙を浮かべていたのだ。

繰り返しになるが、あの場に貴公がいてくれたならと、本当にそう思う。彼女の足下に身を沈め、あの瞬間にも、貴公に対する彼女の寛大なる願いの成果を収穫することに取り掛かることが出来たかもしれないからだ。地獄落ち以外のどんなことにだって値しない貴公ではあってもだよ。

好ましくない訪問を免れるという点では、彼女の下宿でよりも、今いるところでのほうが自由になりにくいことを俺は説明したのだ。あそこにいると、特に、ある一人の人物を呼び寄せることになるだろうが、この人物については、それ以外の場合なら、彼女の同意なしには近づかせないようにすることを請け合いましょうと［ただ、つい先ほどいただいた厳しいお小言の後だけに、俺も再び誓いを立てる勇気はなかったのだ］、俺はそう話したのだよ。また、彼女の容体のひどく悪いことが分かった時には、彼女の身内のだれかが彼女を訪ねて来るのは大いにありそうなことだけに、このような場所から抜け出すのを嫌がるというのは、俺にとっては驚きだ、とも述べておいた。

彼女のほうではこう言っていた。初めて連れて来られた時には、確かにあの家は彼女にとって大変ショッキングなものであった。しかし、自分自身、非常に体が弱って具合も悪く感じられたし、悲しみに打ち萎れていたため、ここまで生き長らえるとは思わなかったというのだ。また、それゆえ、彼女にはどの場所でも同じことであったが、何故なら、獄死と言っても死ぬことには違いなく、御殿で果てるのと何ら選ぶところはないから、というのだ［死に瀕した人間にとって、御殿が魅力を持つようなことは有り得ない、と彼女は言っていた］。ただ、期待していたほど速やかには解放してもらえない恐れがあるし、あそこでは思いどおりにしてもらえるところが極めて少なく、また、居場所を変えることにより、親友の手紙に触れ易くなることも有り得るので、彼女の最後の下宿に戻るのは彼女の随意だという（でなければ、貴公はもとより、俺も知らない新しい下宿を、彼女自身で用意することになろうが）、俺の与えた保証を当てにしても構わないようにも思う、とのことだった。また、彼女にとっては嫌悪するのも当然至極な理由があるあの家、そして、前に一度、卑劣この上ない欺瞞によって連れ出され、操を奪われることとなったあの家へ、彼女を連れ戻すような真似の片棒は、俺も立派な紳士なわけだから、担ぎはしないものと思いたい、とも言っていた。

俺はこれ以上ないほど強い言葉で請け合った［ただ、誓いは立てなかったがね］。彼女を悩ましたりはしないよう、貴公が決意を固めたことをだよ。そして、俺のこの断言が真心からのものである証として、彼女の衣装のすべて、また、持ち物の一切を新しい下宿へ届ける件に関して、俺に指示を出していただきたい（俺の友人からの特段の希望に従ってのことだが）と懇願したのだ。

彼女は満足げな様子で、すぐにポケットから鍵を取り出して俺に渡すと、すでに俺のほうで名を挙げておいたスミスの上さんが、俺に同行してくれるようなわけには行かないか

と尋ねていた。その後の指示はあの上さんに与えるというのだ。俺は喜んで同意した。すると彼女は、俺が申し出ていた駕籠を使うことにすると言うのだ。

俺は引き下がった。そして、この機会を利用し、ローランドと奴の小間使に心付けをしておいた。というのも、奴らの態度については、立場が立場ということもあり、彼女からの不平は聞かれなかったし、奴が悲惨なまでに貧しそうにも見えるからだよ。薬剤師も呼び出してやったが、こいつも執行吏と同じくらいに懐具合がお寒いのだ（おそらく、仕事に必要な技術の点ではもっとお寒い状態なのだろうがね）。そこで、当人が期待していた以上のものを支払っておいた。

俺の退室後、令嬢は俺が携えて行った手紙を読もうとしたのだ。しかし、読み進めることが出来たのは、片方の手紙をほんの少しだけで、そこまでに対しても、盛んに感情を露にして見せたのだ。

彼女は、早いうちに機会を見つけ、奴らの親切に礼をするつもりだし、薬剤師への支払いもしたいのだが、薬剤師のほうで彼女の下宿へ請求書を送ってくれても構わないと、あそこの女房に向かって、そのように話していた。

彼女は小間使の手に何かを握らせていた。多分、彼女が持っていたただ一枚の半ギニー金貨なのだろう。それから、足がよろめくものだからやっとのことで、そして、ローランドの女房にも支えられて、階下まで辿り着いたのだ。

俺は腕を差し出した。勿体なくも、彼女はその腕に寄り掛かってくれたのだよ。「貴方への振舞いに失礼なところがあったように思いますが」と、歩を進めながら彼女が言っていた。「でも、すべてをお知りになれば、お許しいただけるものと存じます」とだ。

「それほどの無垢さと貞節さは、この世のどんな女性にも見当たらないということ、そして、そうまで残虐な仕打ちを受けられた人はどこにもいないということ、その点を確信するに足るだけのことは、マダム、私も承知しているのです」

彼女は非常に真剣なまなざしで俺を見詰めていた。彼女が何を考えていたのか、それは俺にも分からない。だが、一般論として、彼女の目に宿っているほどの魂を、女性の目の中に見出したためしはないということだ。

俺は召使に（喪服姿なので、この男は召使としてはあまり目立たないのだ。それに、令嬢の前に顔を出したことはなかったのだよ）、駕籠から目を離さないよう、また、駕籠を降りた時、彼女はどんな様子であったかを報告するよう、命じておいた。奴は、駕籠が入って行く直前に、嗅ぎタバコを買うふりをして、自分も店に入ることを思いついたのだ。それで、次のような報告が奴にも可能になったという次第なのだよ。彼女はあの家の上さんから大歓迎を受けたわけだが、上さんの話では、ちょうど戻って来たばかりのところであり、ハイホルボーンの彼女の元へ伺うべく準備を整えていたというのだ。上さんと顔を合わせるや否や、彼女はこう言っていた。「あゝ、スミスさんの奥様、私は遁走したのだとお考えではありませんでしたか。お目に掛かりましてから、私がどんな苦難を嘗めていたのか、貴女はご存じないのですわ。監獄に入っておりましたのよ、私。返済義務のない借金のことで逮捕されたのです。でも、有難いことに、戻ってまいりました。宜しければ、貴女の小間使の人に　…　お名前をもう忘れてしまいましたわ、私　…　」とだ。

「キャサリンですわ、マダム」

「ベッドに入る手伝いをキャサリンさんにお願い出来ましょうか。木曜日の夜からです

が、私、着替えをしておりませんの」

彼女がその先どんなことを口にしたのか、奴の耳には届かなかったが、彼女は小間使に体を預け、二階へ上がって行ったのだ。

だが、気づかないかな、貴公は。この令嬢を支配しているのが、何とも不思議な、何とも珍しい率直な心だという点にだよ。自分は監獄に入っていたのですと、彼女は言ったのだよ。店に来ていた見知らぬ人間の前で、また、小間使を前にしてだ。おそらく、店内に人が二十人いたとしても、そのように話したことだろうな。

ベティ夫人に宛てた手紙の中で彼女が言っていることなのだが、自らに対して隠し通すことの出来ない恥を、世間に対して秘密にしておきたいなどという気持ちは、彼女にはないということだよ。

だが、このことから俺には明らかに思われるのだが、彼女は貴公との交渉を一切拒む覚悟でいるということだ。それでいて、監獄の中でしてみせたように「〈監房〉という言葉を頻繁に口にするつもりだが、貴公を悩ませてやろうというわけだよ」、貴公のためにあのような祈りを捧げることが出来るというのだからな。これは、彼女の心の中では、復讐心は極めてわずかな作用しか果たしていないことを証明しているのではないだろうか。そうするだけの正当な怒りを持ち続けることが彼女に出来るとしてもだよ。

そしてここが、この天晴な女性の人柄のもう一つの素晴らしい点なのだ。卑劣で恩知らずな仕打ちに対しての話だが、〈仕返し〉と〈憤り〉とを実際に区別してみせる術を弁えている者になど、全女性を通して、否、男性の中にあっても、果たしてわれわれは出会ったことがあっただろうか。彼女に会うよりも前にだよ。

このような女性がこれまで受けて来たような仕打ちに遭ったというのは、とにかく呪わしい話だ。もしも貴公が一国の君主で、かくのごとき称賛に値する無垢な人間に対し、貴公のような振舞いをしたとしたら、胸中そのように俺は確信しているのだが、それは国民全体の罪と判決され、その償いとして、剣、悪疫、あるいは、飢饉に見舞われていたことだろうな。だが、貴公は私人なのだから、彼女が報いられるのと同じように、貴公が罰を受けることになるのは間違いあるまいな（貴公の国の掟から、そして、彼女の身内の仕返しから予想されるものの他にもだ）。来世においてだよ。

そうあらねばならないのだよ。今の俺は、きっとそのようなものがあるに違いないとの確信をますます深めているわけだが、もしも、あの世での報償といったものが実際にあればの話だ。さもなければ、彼女の運命は何とも厳しいものではないだろうか。彼女の受けた罰というのは、どう見たところで、犯した罪よりもはるかに重いものなのだからな。また、貴公の罪についていえば、何かの事故で、仮に貴公がベッドの中で焼け死ぬことになるとしても、束の間焼けただれたところで、人としての務めや神への義務すべてに背いて為された、彼女への言語道断な悪行をどうして償うことになるというのだ。

あの忌まわしい女のところにある令嬢の持ち物一切を、一刻の猶予もせずに送り届けさせることにしようと、俺はそう決心した。そこで、馬車を使ってスミスの家へ行き、体調が優れないとの言葉が戻ってきたのだが（令嬢には挨拶を送り、引っ越しをしてどんな具合か、尋ねさせておいたのだ）、スミスの上さんに適宜指示を与えてくれるよう、令嬢を説得した。俺は上さんをシンクレアのところまで連れて行き、この女の監督により、彼女の持ち物すべてが探し出され、最初に持ち込まれた時のトランクや箱に詰め込まれて、二台

の馬車で運び出されることとなったのだ。

俺があの場に居合わせなかったなら、サリーとポリーはそれぞれに、お気の毒な令嬢から取り上げた品のうち何かを自分のものにしていたことだろう。これは連中も公言していたことで、見事なブリュッセルレースの頭飾りをサリーの手から取り戻すのには結構苦労をしたのだが、厚かましいことにあの女は、ハーロー嬢の形見として、自分が身に着けると言うのだ。また、あいつがそれに付くフリルを探していなかったなら、俺にしてもスミスの上さんにしても、あいつがくすねたことに気づかなかったことだろうな。

この一件について憤慨して見せたということがあるし、スミスの上さんと交わした会話のこともあって（その中で俺は、令嬢の美点を長々と並べ立てただけでなく、彼女が嘗めている苦難のことを案じて見せたのだ。また、彼女のことを既婚者のように推測する余地は残しておいたが、ただ、断言したわけでもないのだ）、上さんに対して俺は大いに面目を施すこととなり、もうすっかり親しい間柄になっているのだよ。これを手立てにして、時々は、事の一部始終を報告することが可能になるだろうし、貴公からの個人的妨害が彼女の身には一切及ばないようにするという、俺ばかりか、貴公の名にもかけて令嬢に与えてある、俺の厳粛な約束に悖るところがないかぎりは、そのことに大いに励むつもりでもいるのだ。また、こうすることで、筆に託した貴公の好意に対し、現物でお返しをすることも出来るわけだし、おまけに、速記術の腕を保つことにもなるのだよ。この文通が始まるまで、そちらのほうはとんとご無沙汰だったものでな。

貴公の勘定書を作成するよう、あの破廉恥な女どもに命じておいた。仕返しも勘定に入れておくと、連中はそう答えていたよ。実際、連中が口にすることといえば、仕返しのことばかりなのだ。というのも、連中に言わせるなら、今度ばかりはきっと貴公も結婚するだろうし、貴公の手本は、貴公の友人や相棒全員によって追従されることとなり、婆さん曰く、あいつの哀れな家は完全につぶれてしまうからだ、というのだよ。

手紙　六十九

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

（七月十八日）火曜日　午前六時

前述の時点まで記した手紙を仕上げ、すぐに封を出来るようにしておこうと、夜更かしをしたのだが、起き出そうと思っていた時刻にもならないうちに、眠りを妨げられてしまった。貴公の二人目の使いが到着したわけで、人馬ともに汗まみれの有り様だった。

使いの男が一息入れている間に、数行認めることにする。心からの祝辞を述べるためだが、予想に違わぬ貴公の激怒ぶりと苛立ちように対して、また、心の感性を取り戻してくれたことに対してというわけだよ。

真っ直ぐ突き出た突きぎりや太針、ピンやからげ針によって、また、鉄の大釘が刺さったまま転げ落ちて行く大樽で、そして、横腹を痛めつけられてということだが、貴公が受けて当然な苦痛のことを思い描いてくれたその着想には、俺も大いに楽しい思いをさせてもらっているところだ。

俺としては、機会があればその都度、さらに多くの大釘を貴公の大樽に打ち込み、貴公

が意識を取り戻した時には、というよりもむしろ、無分別な状態に戻った場合にはということだが、ゴロゴロと坂を転がし落としたり、押し上げたりしてやるつもりだよ。それゆえ、俺との文通を楽しんでもらうその条件というのは、貴公も承知のはずだ。かくも気高い女性に対する貴公の残酷にして恩知らずな背信行為については、これまでもずっと、また、時宜を失することなく、異議を申し立ててきたわけでもあるから、これまでのところはタコが出来たみたいに無感覚であった貴公の心に、もしもそんなことが可能ならの話だが、後悔の念を叩き込んでやる資格が、俺にはあるのではないだろうかな。

ただ、繰り返し述べさせてもらいたいことが一つある。おそらく、前にはあまりにも軽く触れてしまったことなのだが、貴公からの訪問に煩わされないという点に関しては当てにしてもらって構わないと、もしも俺が正式に保証していなかったならば、彼女のほうでは、貴公にしても俺にしても到底見つけ出すわけには行かないような、新たな下宿へ引っ越す覚悟でいたということだよ。

俺としては、こういった保証は与えても構わないと考えたのだが、貴公の約束があったから、というだけの理由ではない。貴公の身内の者たちを通して彼女に呼び掛けるためにも、彼女の居場所を知っておくことが貴公には必要だからだ。

それゆえ、俺がこの厳粛な約束を彼女に対して履行出来るようにしてもらいたい。でなければ、永久におさらばということだな。貴公との友情のすべてがだよ。少なくとも、一切の文通についてはだ。

J. ベルフォード

手紙　七十

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

七月十八日　火曜日　午後

午前中のことだが、俺の召使に頼み、令嬢の体具合を改めて尋ね直してみたのだ。そして、食事を済ませるとすぐに、俺自身が出向いた。

容体については芳しくない報告しか受けていなかったのだが、挨拶の言葉を彼女の元へ送り届けた。彼女のほうでは俺の尽力すべてに対する謝辞、そして、今すぐに身を以て謝意を表すわけには行かないという、弁解の言葉を返してくれた。ひどく元気がなく、眩暈がするため、というのだ。ただ、面倒でも今夕六時頃にご足労を願えるなら、俺とお茶を一杯付き合うくらいは出来そうに思うし、その際には、彼女自ら礼を言いたい、とのことだった。

俺としては、この遜った応対ぶりのことを大いに自慢に思っている。また、俺が君の公然たる友人であるということからして、これは君にとっても不都合なこととは映らないように思うのだ。今回の極悪非道の行為に関する君への疑念すべてを、彼女の心から完全に取り除いてあげたいような気もするのだよ。それに、もしも君が心変わりをせずにいるならば、君の立派な親戚一同のほうで、君になり代わり、彼女に対してどれだけのことをしてくれるのか、それはだれにだって分からないことなのだ。というのも、君の召使が知らせてくれたことだが、皆さんは、この忌まわしい事件が起きる前に、ご自分たちと君のた

めに一肌脱いでくれるよう、実際にハウ嬢に頼んだという話だからだよ。その一部始終の細かい点については、君自身から聞きたいものだな。君の役に立つにはどうすべきか、もっとよく知るためにもだよ。

彼女は手頃な部屋を二部屋借りている。寝室と食堂で、それぞれに窓のある控えの間がついているのだ。すでに看護婦を一人雇ったが（ここの連中は小間使を一人置いているだけなのだ）、その世話ぶりや勤勉さ、そして、正直さについては、スミスの上さんも大いに褒めている女だ。彼女はまた良家の出の一未亡人から … ロヴィック夫人という名前だが … 自発的な世話を受けているし、どうやら、敬愛にも与るという恩恵を得ているようだが、この未亡人は彼女の部屋の上の階に下宿しており、彼女のほうでも大層気に入っている様子なのだ。彼女としては、立派なノートン夫人が備えている美質に似た何かをこの女性の中に見出したように考えているのだな。

今朝七時頃のことだが、ひどく容体が悪化したため、令嬢としても、薬剤師を呼びたいという皆の願いを入れることになったらしい。勿論、前にローランドのところに来てもらった奴ではなく、ゴッダードという名の、腕は良いし卓越した人物だということで知られた男だ。また、良心的でもあるのだが、それは人柄全般からばかりでなく、彼女に対する処方からしても明らかなことだ。というのも、この男は、彼女の症例は悲嘆に起因するものだと断言した上で、差し当たっては、強壮剤として害のない砂糖水だけを、そして、彼女の胃が食べ物を受けつけるようになり次第、軽めの調理品を摂るよう指示し、ロヴィック夫人に対しては、外気に当たり、適度の運動をし、楽しい付き合いをしながらその療法を行えば、自分の薬局のどんな薬にもまして効果があるはずだと語ったのだよ。

これを聞いて俺は、令嬢も同じらしいのだが（彼女のほうでは、薬剤師の態度や父親のようなその容貌、そして、上品な言葉遣いも褒めていた）、この男には大いに信頼を寄せることになったのだ。親交を結ぼうかとも考えているし、彼のほうから先生を呼ぶようにとの助言があれば、医者のためというより（仕事がないわけではないのだから）、むしろ麗しき患者のためだが、俺の友人で人格者のH医師を推薦するつもりでいる。人情味溢れる点で必ずや令嬢の注目を引くものと確信しているわけだが、医師の人柄に異議をさし挟む余地などは一切ないからだ。

ロヴィック夫人が俺を喜ばせてくれた。ハウ嬢宛に令嬢が口述したことを書き留めた手紙について報告してくれたのだが、令嬢自身は乱れのない筆遣いが出来ないからというわけだよ。

次のような趣旨のものだ。文面は定かでないのだが、ハウ嬢から届いた例の二通の手紙に対する返事らしい。つまり、

自分は恐ろしい災難に巻き込まれてしまったということ。そして、最初の便りに返事をしなかったとして、友情ゆえの怒りを抱いておられるが、その災難のことが明らかとなった暁には、怒りの矛先をきっと逸らしてもらえるはずと思う。何しろ、拘留されていたのだからと述べ、果たして信じてもらえるだろうかと尋ねている。前日釈放されたばかりであり、今は非常に衰弱していて、気持ちも沈んでいるため、同じ家に住む良家の出の未亡人にお願いし、十三日と十六日の日付の彼女［ハウ嬢］の手紙に対して沈黙を通したことについて、このような形で説明してもらわなくてはいけない状態だということ。そうすることが出来るようになり次第、手紙への返事を書くつもりであり、それまでの間、自分の

ことで気を揉まないようお願いするということ。その理由としては（ただ、この災難というのは、体調が良いなどとはとても言えない時期に降り懸かったものであり、以前からあまりの重荷に今にも潰されそうになっていた、そんな哀れな人間の肩に積み重ねられた負担ではあったが）、これまで嘗めてきた災いに比べるなら、何ほどのものでもないということ。それに、その結果、喜ばしいことが一つ生じそうに思われるということ。つまり、まっとうな家で、思いやりに満ちた、心根の優しい人々に囲まれて身を休めることになりそうだが、それというのも、顔を合わせるのが死ぬほど嫌な、あの破廉恥漢から悩まされることのないようにするとの保証を与えられているからだということ。従って、彼女［ハウ嬢］のほうで人目を忍んだ、費用のかさむ配送手段を講じて手紙を届けてくれる必要はもうないし、コリンズにしても、自分の下宿まで尾行されるのを恐れ、用心を重ねる必要はないということ。さらには、自分も彼女宛に偽名を用いる必要はなく、本名で書くことにする、といったようなことだよ。

ご覧のとおり、俺としては君の意向に沿おうとしているのだよ。分かるだろうな。無理に彼女と同席するような真似は君も慎むはずだと、俺は請け合ったわけだが、彼女がどれほどその点を当てにしているかということだ。燃え上がらんばかりに待ち焦がれているからといって、それですべてを台無しにしてもらいたくないのだよ。彼女に俺のことを悪党とは思わせないでほしいのだ。目にする男一人残らずを、そのような者と考えても当然な淑女なのだからな。この条件が満たされるなら、君も期待して構わないのだよ。真の友情に由来する奉仕のすべて、そして、俺の手に成る奉仕のすべてをだ。

心から君の幸せを願う者

J. ベルフォード

手紙　七十一

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

七月十八日　火曜日　夜

令嬢のところから今戻った。食堂へ入るのを許されたのだが、彼女はそこの肘掛け椅子に座っていた。非常に弱々しく、気持ちも沈み込んでいた。俺が入って行くと、彼女は立ち上がろうと努力していたが、腰掛けたままでいなければならなかった。そして、「お許しくださいね、ベルフォードさん。ご親切のすべてにお礼いたしますためにも、立ち上がらねばならないところです。あのひどい場所を出ますのをあんなにも嫌がりましたのは、私の間違いでしたわ。と申しますのも、あそこと比べますと、ここでは天国の暮しですからね。それに、善い人たちが周りにいらっしゃいますからね。これまでは長いこと、本当に長いこと、私の周りには善い人がおりませんでした。ですから［と、わずかに微笑みを浮かべ］、善い人たちは皆さんどこへ行ってしまわれたのかと、不思議に思い始めていたところでしたわ」と言っていた。

その場に居た彼女の看護婦とスミスの上さんは、頃合を見て退室した。そして、われわれだけになると、彼女はこう言ったのだよ。「人情を弁えた方とお見受けいたしますが、私が監獄から出ます時には、私の悲しい身の上をご存じないわけではないようなおっしゃり

ようでしたわね。正しくご存じなのでしたら、私がはなはだ野蛮な仕打ちを受けましたこと、そして、私が苦難を嘗めました当の男性の手から、そのような仕打ちを受けるいわれはないこともご承知のはずと思います」とだ。

俺は、彼女が聖者の美点と天使の純粋さを備えているものと確信するに足るだけのことは承知している旨を述べ、さらに言葉を続けようとしていると、彼女のほうでは、「軽はずみなお世辞は御免蒙りますわ。この身に備わってもおりませんものを並べ立てるのはお止しください」と言っていた。

俺は本心からの言葉であることを主張しようとした。そして、〈丁寧さ〉という語を口にし、それと〈へつらい〉とを区別して見せようとした。すると彼女は、「正当ではないもので丁寧と言えるものなど、どこにもございませんわ。かつて私がどのようなものを身に備えていたといたしましても、現在の私には、得意がって構わないことなど何一つとしてないのです」と言うのだよ。

お世辞のつもりは一切ない旨を俺は断言した。俺がすでに口にした言葉のすべて、そして、今後口にすべき事柄は、心からなる敬意の表れであったし、また、そうあらねばならない。俺の不幸な友人が彼女について語っていた点からして、彼女には敬意をもって遇せられる資格があるのだ、とだよ。

次いで俺は、君が嘆き、後悔している様子や、現時点で為し得るあらゆる償いを行う覚悟でいることに触れ、今回の悪質な蛮行に関しては、君が手を染めていない点を、これ以上ないほど真剣な態度で力説してみせたのだ。

彼女の返答は次のような趣旨のものだった。「あの人のことを考えますと、辛くなってしまいます。貴方のおっしゃる償いは為し得ないことですわ。貴方が話しておられる今回の暴挙も、先立つ事柄に比べますなら、取るに足らないものなのです。そちらのほうに償いが為されるようなことは有り得ませんし、酌量の余地もございませんが、今度のことは別でしょう。また、あのようにはなはだ下劣な真似があの人には出来ないことを確信いたしますのにも、私は吝かでないつもりです。ただ、卑劣にも筆跡を模倣してみたり、ご自分の身内の誉れ高いご婦人方だと騙って、破廉恥極まりない人物を私に押しつけたりするような卑しい振舞いをしているのです。あの人に出来ない悪事など、果たしてあるのでしょうか」というのだよ。

そこで俺は、君が君の身内の者たちから受けた裁きの話を持ち出そうとした。君が請い求めていた四つの言葉を、かたじけなくも彼女が与えてくれた場合だが、すでに固めていた君自身の結婚への意志のこと、そして、君の一族全員が彼女との縁組を名誉と思い、切望しているという点、また、君の二人の従姉妹が、彼女のことであのお嬢さんに動いてもらうようお願いするためだが、全員の同意を得てハウ嬢に働き掛けてみたこともだよ。ところが、こういった話題を切り出した途端、彼女は俺を遮り、こんなことを言うのだ。それはもう一つの法廷にかけられる訴因であり、彼女宛のハウ嬢の手紙もその件を話題としているので、彼女としては、書き物が出来るようになり次第、自分の考えをハウ嬢宛に書き送るつもりでいる、とな。

それで俺は、下劣なシンクレアが差し出がましく演じた逮捕劇に君が一切手を染めていないことを証明すべく、さらに詳しく話そうとした。君の身の証が立つよう、彼女が寛大にも願ってくれた点だからな。そして、この一件に関して君が書き送ってくれた途方もな

い手紙のことに触れたところ、その手紙を携帯しているかどうか、彼女が尋ねるのだよ。

俺は携帯していることを認めた。

彼女はそれを見たいと言うのだ。

これには俺もすっかり途方にくれてしまったよ。きっと君もそう考えるだろうが、われわれ放蕩児連中の間では才気や意気地として通っている慎みに欠ける事柄のほとんどのものは、繊細な心をした女性の耳とか目とかにとっては、ショッキングなものに違いないからだよ。それに、貴公としては精一杯真面目腐っている手紙にあってさえ、極めて軽薄な雰囲気が全体に行き渡っており、貴公の心を一番痛めている話題を笑い飛ばして見せようとする、履き違えた雄々しさも窺われるものだから、貴公にとっては最も手柄となるはずの手紙が、見てもらうのには一番相応しくないものになってしまうのが通例なのだよ。

これに類したことを俺は彼女に話し、出来れば手紙を見せるのは勘弁してもらおうと思ったのだ。しかし、彼女がひどく熱心なものだから、最も非難されやすい部分は省くことに心を決め、その一部の代読を引き受けることにした。

そのことに関し、貴公が俺に悪態をつくのは承知している。しかし、彼女の願いを入れるほうが、俺自身に疑いの目を向けられ、従って、彼女の件で貴公の役に立つことが出来なくなるよりは得策と考えたのだよ。役に立つための恰好の足場が出来たわけだし、貴公の悪党ぶりについては、俺が語り得るかぎりのことを彼女も知っているわけだからな。

おそらく、貴公も覚えていることだろう、貴公のあの猛り狂った手紙の文面についてはな(ア)。俺が代読したその手紙の様々な部分について、彼女の感想は次のような趣旨のものだったのだ。

「万事休すだ。いやはや、お終いだ、畜生め。今度はどうしたら良いというのだよ、ジャック。俺の陰謀に、そして、企みのすべてに呪いのあらんことを……」という、貴公の最初の二行に関して、彼女は自分の気持ちをこんなふうに表していた。

「あゝ、このような放蕩者の空言をペン先に伝えることの出来る心というのは、何と軽薄なのでしょう。自らの犯した罪に対しましても、何と無感覚なのでしょうね」とだよ。

下劣な逮捕劇のことに触れている段落は、彼女の心を強く動かしていた。

次の段落では、ご機嫌を取っていたとの話だったが、自分の身内に浴びせかけた貴公の呪いの言葉は省略しておいた。そして、その後の七段落を、あの呪わしい願いの前のところまで続けて読んだのだが、あの願いというのは、彼女に聞かせるには、あまりにもショッキングなものだったからな。俺が読み聞かせた文面は、次のような感想を彼女から引き出すこととなった。

「あの人が呪っております陰謀や企みのことがありますし、それに、私を捜し出しました際の、あの邪で恥知らずな人たちの大変な喜びようからいたしましても、あの人の犯罪行為はすべて計画的なものであることが分かります。また、この点も疑いないことと私は思うのですが、事を進めて行きます上でのあの人の恐ろしいほどの大嘘や冷酷非情な手管の数々は、見事な策略、機知に富んだ冗談と見做され、そして、発明工夫の才の優越性を証明してみせる予定になっていたのでしょう。あゝ、残酷な残酷なお兄様、貴方がいなければ、私はこのように邪悪な、このように見下げ果てた陰謀家の餌食にされることはなか

(ア) 手紙六十二を参照のこと。

ったのです。でも、お続けください。どうぞ、先へお進み願います」と言うのだよ。

「あゝ、運命の予言者よ、貴公には出来るのか。懲罰はどこで終わるか、貴公に語ることは出来るのかな」という部分では、彼女は溜め息をついていたよ。そして、「多分、俺の改心を祈っていたのだろうな」という文章のところへ来ると、「そんなことが書いてあるのでしょうか」と、彼女は再び溜め息を漏らしながら言っていた。「困った人ですわね」ともだ。そして、貴公のために涙をこぼしてくれたのだよ。誓っても良いが、ラヴレース、俺は確信している。彼女は貴公のことを憎んでいないのだとな。少なくとも、貴公の将来の幸せのことを案じているのだ。寛大な心で案じてくれているのだよ。何という気高い心の持ち主を貴公は傷つけてしまったのだろうな。

「俺になり代わり、両膝をついて許しを請うてくれ」という文言を読むと、彼女は俺に極めて厳しい非難を浴びせたのだ。「私を救い出しに来てくださった際、貴方はすべてに亘って教えを受けておられたのですね。大層遜って、お膝をついてくださいました。あれは貴方本来の優しさから出たこと、そして、私の役に立とうとなさる、善意に根差した熱意に由来することと考えておりました。このようなことを申して失礼とは思いますが、前もって指示のあった教えの結果とは存じませんでしたわ」というのだよ。

俺にとって、これは少なからず気に掛かる話であった。そんな操り人形のように思われるのには、ジョゼフ・リーマンの同類、トムリンソンの同類と見られるのには耐えられなかったのだよ。それゆえ、少しばかり気色ばみながら、この非難に対し、身の証を立てようと骨折ったのだ。すると彼女は、もう一度詫びた上で、俺はある男の公然の友ということであるが、その男との友情は、残念ながら十分な理由もあって口にするわけだが、だれにとっても手柄になるものではないのだ、と言っていた。そして、先へ進むよう、俺に頼んでいた。

俺は先を続けたよ。だが、この後はあまり上首尾とは行かなかった。というのは、こういうわけなのだ。

「君はいつも彼女の味方であり、擁護者であった」と君が言っている辺りに関し、彼女はこんなふうに、返答のしようもない感想を口にしたのだよ。「この言い回しからいたしますと、あの人は私への目論見を終始抱いていたことになりますね。そして、貴方はその点をずっとご存じだったことにもなりますわ。貴方の身の安全を危険に晒すことのないものですが、何らかの方法を講じまして、あの人の卑劣な考えのことを私に知らせていただけたならと、本当にそう思います。貴方としては、そのことを是認してはおられなかったわけですからね。でも、推察いたしますに、貴方たち殿方というのは、悪で結ばれた友情にひびを作り兼ねない行為、それがいかに高潔な行為であってもですが、そんなことが出来ると思われますよりも、罪のない同胞が汚され辱められますところをご覧になるほうがマシだとお考えなのでしょうね」とだよ。

この手厳しい、しかしながら、正当な非難の後だけに、俺としてはその続きを読むのは避けたかったのだ。もっとも、自分でも気づかないうちに（ただ、彼女が俺にそれを続けさせたわけだが）文章を読み始めていたのだよ。「君が首尾よく擁護者の役目を果たせるようにさせていたとしたら　…　今の俺は、一体どんなものを差し出そうとすることだろうな」とだ。そして、それに対する彼女の感想は次のとおりだった。「ですから、お分かりですね。幸いにも貴方が、私相手に目論まれました災いを妨げる手段となっていたのでした

ら、貴方のお友達に分別がつきました際には、そのことへのお礼の言葉をいただいていたはずなのです。邪悪な意図に逆らうとか、妨げるとかするような美徳を備えた方はどなたも、長い目で見ますと、このような満足が得られるものと、私は確信しているのです。貴方の思いやり溢れる願いの恩恵に与りましたこと、それは私も承知いたしております。でも、あの人の秘密を守るのは、貴方にとっては信義に関わる問題だったわけですし、おそらく、その秘密が悪質なものであればあるほど、ますます貴方には必要欠くべからざるものであったのでしょう。ただ、希望を言わせていただけますなら、ベルフォードさん、徳に根差した友情によって慈愛に満ちた心に生じます喜びを楽しむことが、貴方にもお出来になればと思うのです。他のいかなる友達付き合いも、その神聖な呼び名には値いたしません。貴方は人の情けの分かる方とお見受けいたします。貴方ご自身のためにも、私は願っております。いつの日にか、貴方がその違いを身をもって体験なさることをです。そして、その際には、ハウ嬢とクラリッサ・ハーローのことを（私の悲しい身の上を、貴方はよくご存じのようですから）思い浮かべていただきたいのです。私たち二人は、互いの友情に恵まれまして、世界一の幸せ者同士でしたのに、やがて貴方のこのお友達が　…　」と言うのだよ。そして、そこで彼女は中断し、俺に背を向けたのだ。

貴公が「飛び切りの陰謀好き」を自称している部分について、彼女は、「自ら罪を着て恥じるところがないなんて、あゝ、何という厚顔な破廉恥漢なのでしょう、この人は」と言っていた。

貴公が「彼女はどんな扱いを受けていたのか、知らせてほしい。手荒なことがあった場合には、覚えのある者には災いあれ、といったところだな」と述べている、あの箇所に関してだが、彼女の感想は次のとおりで、それを語る態度には憤りの気持ちが滲んでいたのだよ。「何という人なのでしょうね、貴方のお友達は。お友達のような人間があの罪深い人たちを罰する立場に就くつもりなのでしょうか。あの人たちからどれだけ手荒な仕打ちを受けたといたしましても、そのすべてははるかに軽微な　…　」と、そこまで言うと、彼女はほんの一瞬ばかり口籠もり、それから、言葉を続け、「で、どなたがあの人を罰することになるのでしょうね。何と厚かましい破廉恥漢なのでしょう。罪のない者を傷つけて構わない人間は、自分以外にいないだなんて　…　あの人は、想像いたしますに、意地の悪い魔神が地獄で演じると思われております役割を、この地上で演じることになっているのでしょう。悪さを行う手下の一人一人に対しまして、思いのままに罰を割りふるというわけです」と言っていた。

一体、自分は何をしていたのだ、と俺はそう思ったよ。この野蛮な男からは、その手紙の一部をこの賢明なる淑女に読み聞かせたりするのは、共謀して騙しているように思われてしまうだろう。ただ、仮に貴公が腹を立てるとしても、その怒りは貴公自身にだけ向けられるのが理屈というものだ。というのも、自分の無実を納得してもらうために貴公が友人宛に書いた手紙の、その中でも非難の余地の最も少ないいくつかの部分について（罪ありとの咎めに対し、無罪の弁明をしようという貴公の真摯さの証としてだが）、俺が彼女に明かさずにおくかもしれないなどと、一体だれが考えるというのだ。だが、邪悪な心に邪悪な動機では、お話にならない。だから、それ本来の正しい説明を付すことにしようじゃないか。

連中を一時間単位で罵ってくれという貴公の命令には触れずにおいた。それから、実に

ぴったりのものだが、「ドラゴン」や「毒蛇」という呼び名もだよ。もしも俺が読み上げていたなら、連中がどんな輩なのか、貴公は最初から承知していたと勘ぐられたに違いないからだ。あれほど無垢な人間を連中のところへ連れ込むとは、悪党だよな、貴公も。そして、「一行で良いのだ。一行だ。何でもくれてやるから、一行頼む」などといった、貴公自身の結びの段落をもって俺も読み終えたわけだよ。ただし、次の点は話しておいた（俺がいくつかの文章を省略したことは、彼女も気づいていたのでな）。つまり、さらに激しい部分が書面にはあるのだが、彼女のような上品な耳の持ち主に聞いてもらうためというよりも、書き手の真剣さを俺に示すという目的により適ったものであるから、触れずにおくことにしたのだ、とだよ。

「十分読んでくださいましたわ」と、彼女は言っていた。「あの人は邪悪な、本当に邪悪な人間です。どうあっても私を掌中のものにするつもりだったのですね。それに、あの人の取った行動からいたしまして、目的が何であったのか、その点につきましても疑いの余地はございません。あの人の仲間の卑劣なトムリンソンを、貴方はご存じですね。おそらく、貴方はご存じでしょう。それと …… でも、お話しいたしましたところで、何の意味がございましょう。これほど計画的に虚言を弄して憚らないような心の持ち主は、かつてこの世に存在したことはございません［これ以上に正しい言葉は有り得ないと、俺はそう思った］。あの人が誓わなかったことなど、果たしてあるのでしょうか。捏造しなかったことなどあるのでしょうか。そして、そのすべては何のためだったのでしょう。ただ、哀れな若い娘を堕落させるためのことに他なりません。自分が保護して当然であった娘を、そして、他の保護の手すべてを真っ先に奪い取ってしまった、その娘をです」

彼女は立ち上がると、俺から離れて行ったのだが、ハンカチで目頭を押さえていた。それから、少し間を置くと、再び俺のほうへやって来て、こう言っていた。「あの人よりも優れた心をお持ちの方にお話をしているものと考えております。また、効果はございませんでしたが、以前から私のために、ご親切にいろいろと申し立ててくださいましたこと、その動機が同情からであれ信条からであれ、あるいは、その両方からでありましても、すべてに亘りましてお礼を言わせていただきます。効果が上がりませんでしたのは、十分にありそうなことですが、貴方に真剣さが足りなかったせいかもしれません。それに、貴方のほうではそうお考えでしょうが、私に真の価値が欠けていたためかもしれませんね。私は救われるに値しないと、貴方の目にはそう映るかもしれません。実の、血を分けた身内の元を飛び出してしまいました、そして、それゆえに自分が引き当てました籤の結果に甘んじなければなりません、そんな軽率な娘と、貴方には見えるのでしょうね」とだ。

俺がどれほど真剣であったのか、それを彼女に知らせるというのは、貴公のためを思えばこそだが、不安だったのだよ。それでも、次の点は確かなことだと保証しておいた。つまり、俺が熱心に彼女の味方をしてきたということ、そして、その動機は、いまだかつて匹敵するものもなかったと確信している、ある美質に基づいているということ。いかに弁護の余地はないとしても、ラヴレース氏が常日頃から彼女の美徳を正当に評価していたということ。このように計り知れないほどの値打ちのある宝石を、あれだけ熱心に自分のものと呼びたがっていたのは、彼女の汚れ一つとしてない貞節を十二分に確信したからこそなのだ、といったことをだよ。そして、言葉を続けようとしていたところ、彼女が再び俺を遮ったのだ。

「結構でしょう。もう十分すぎますわ、この件につきましては。今後二度と、あの人のお顔を拝見することがないようにしてくださるのでしたら、差し当たり、あの人にお願いいたしますことはそれだけでございます。本当です。本当のことです」と、両手を握り合わせながら、「絶対にお会いしたくはないのです。もしも、罪になるほど自暴自棄な方法ではないとしてですが、どのような手段に訴えましても、顔を合わせますのを避けることが出来るのでしたらね」と、彼女は言うのだよ。

貴公のために、俺にはどんなことが言えたというのだ。しかし、あの時点では、この件にもう一度触れる余地はなかったのだよ。その話題を持ち出すことばかりか、再びお傍に仕えることについてもだが、差し止められてしまうのが怖かったからだ。

金銭的なことについて少し、遠回しに触れてみた。前に話しておくべきだったが、受け取ってもらえる限りの金額を彼女に握らせるよう、貴公が俺に命じているあの部分を読み聞かせたところ、「いいえ、いけませんわ」と、彼女はひどい早口で何度か繰り返したのだよ。それで、俺はもう一度仄めかすくらいのことしか出来なかったのだ。それも、ひどく曖昧な言い方であったから、彼女のほうでも、俺の言わんとするところを測り兼ねているような、そんな様子を見せるゆとりが出来たわけだよ。

まったくの話、希望に背くとか、不興を買うといったことを恐れる相手としては、男であれ女であれ、彼女の右に出る者を俺は知らないのだよ。彼女には、高慢さとか尊大さとかを伴わない（どちらかをひけらかしている人物の場合には、その鼻をへし折ってやりたくなるものだが）、本物の威厳がたっぷり備わっているし、心の奥まで見抜く目を持っていながら、その目も仁愛の光でまことに心地好く和らげられているから、あらゆる者に崇拝の念を起こさせることになるのだ。

思うに俺は、この天使のごとき女性に対して、ある種の神聖な愛情を抱いているのだろう。だから、貴公が四半時も続けて彼女と言葉を交わしながら、その悪魔にも相応しい目的を堅持し得るというのは、俺にとっては驚愕に値することなのだ。

信仰心や思慮分別、美徳や威厳、家柄や財産によって、そして、彼女に先立つ女が誇りとしたためしとてないような心の純粋さによって彼女は守られていたわけだから、これだけ多くの防壁の突破を決断出来る者というのは（ただ、貴公を得意がらせることにもなりそうだな）、それこそ本物の悪魔に違いないというわけだ。

俺自身としては、ますますそんなふうに感じ出しているのだが、貴公の下劣な目論見への反対を表明することや、その件について貴公を諫めることで満足していてはいけなかったように思うのだよ。それに、一度ならずだが、彼女のために何か試して見ようという考えを思い浮かべていたことも事実なのだ。ところが、我ながら情けないことに、貴公が自分の目的について自ら進んで明かしてくれたということもあって、彼女が咎めるのも当然なわけだが、間違った名誉の観念に邪魔され、差し控えてしまったのだ。その後、あんな忌まわしい家に彼女が連れ込まれ、極悪非道の手下どもばかりか、貴公自身からも厳しく監視されることになったもので、俺としては（相手がどんな男か承知の上だし）、予定の悪事を早めることになるだけだと考えたわけだよ。さらには、彼女の美徳に貴公がすっかり畏まってしまい、最初に彼女をあそこへ連れ込んだ際も、彼女の操を狙う勇気はなかったということや、彼女が、そうとは知らずにだが、一度ならず貴公に下劣な目論見を捨てさせ、そして、彼女のことは正当に扱い、また、自分の面目を施すよう決意を固めさせてい

たことを知り、彼女の美質が最終的に勝利を収めるのはほぼ疑いのないところだと、俺はそんなふうに踏んでいたのだよ。

俺の意見としては（貴公が結婚への意思を持ち続けるものとしてだが）、貴公の本物の叔母上や従姉妹さんたちを説得し、彼女を訪ねて貴公の弁護に立ってもらうようにするのが一番だということだな。だが、直接訪問するのを叔母上たちが辞退した場合には、叔母上たちやM卿からの書面が、ハウ嬢の口添えも得てだが、おそらく、貴公に有利な結果を引き出してくれるように思うのだ。

ただ、こういった点は、貴公のためを願う気持ちに根差したものだが、俺の希望にすぎないのだ。令嬢のほうでは、俺は本当にそう思っているのだが、貴公を選ぶよりは死を選ぶはずなのだ。そして、ここの二人の女性は、彼女の嘗めた苦しみの半分も知らないわけだが、彼女は悲嘆のあまり、実際に気力も挫けてしまっている、という意見なのだよ。

暇乞いをする際には、精々お役に立ちたい旨を申し出、そして、足繁くご機嫌伺いに訪れるのを許してくれるよう、俺は令嬢に懇願した。

返答は一切なく、彼女はただ頭を下げて見せるだけだった。

手紙　七十二

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

七月十九日　水曜日

今朝、スミスのところまで駕籠で行った。そして、彼女は昨晩中ひどく寝つかれなかったのだが、起き出しているとの話だったので、彼女を診てくれている、例の立派な薬剤師を呼んでもらった。薬剤師が俺のところへやって来て、H医師を呼ぶことに賛意を示したので、女たちに頼み、往診してもらう予定であることを彼女に伝えさせた。

彼女も最初は不快に思ったらしいのだが、異議を唱えるのは差し控えていた。ただ、少し間を置いて、どうしたら良いか、女たちに尋ねたのだよ。彼女は、値の張る品物を持っており、出来るだけ早く金に換えるつもりでいるのだが、それまでの間は、診察代として医者に支払うべき金はただの一ギニーもない、と言うのだ。

ロヴィック夫人が、手元に五ギニーあるので、自由に使ってほしい、と言っていた。三ギニーお借りします、と彼女が言った。お返しするまでの間、これを預かっていただけるならですが（と、ダイヤのリングを指から外しながらだ）、それ以外の条件では絶対に嫌です、というのだよ。

俺がゴッダード氏と階下にいることを教えられていたためだが、彼女のほうでは、医者に会う前に俺と一言話したいとの希望であった。

彼女は肘掛け椅子に腰掛け、頭を枕にもたせ掛けていた。スミスの上さんと未亡人が彼女の椅子のそれぞれの側についていた。彼女の後ろには、看護婦が鹿角精の小瓶を持って立ち、彼女自身も嗅ぎ塩を手にしているのだ。

俺が入って行くと、彼女は頭を上げ、そのお医者様はラヴレース氏と知り合いなのかと尋ねるのだ。

俺は違うと言った。そして、生まれてこの方、君はその医者と一度も顔を合わせていな

いものと確信している、ともだ。
医者は俺の友人なのか、との問いだ。
そのとおりで、極めて徳が高く、腕の立つ人物です、と俺は言った。職業上の名声によって指名したのであり、ゴッダード氏も、内科医として彼の右に出る者を知らないと話している、とだ。
「その殿方とお会いいたします前に、一つだけ条件があるのです。診察料を拒むことなく私から受け取っていただきたいということです。貧乏とは申しましても、私にも誇りがございます。ご親切に甘えたくはないのです。信じていただけるでしょうが、甘えるつもりはございません。この往診をお受けいたしますのも、別れてまいりました数少ないお友達から、恩知らずと見られたくございませんし、やがてそのうちに、密かな満足を得るためでしょうが、病床での私の振舞いを問い合わせて来るような身内の者たちの目にも、強情者と映りたくはないからです。さあ、条件のことは宜しいですね。それと、頭を悩ませるようなことは御免蒙ります。大変具合が悪いものですから、問題をよくよく検討するわけにまいらないのです」
彼女の気持ちがそこまで固まっているのを見て、どうしてもということであれば、そのようにいたしましょうと、俺は彼女に話した。
「では、その方に来ていただいても宜しいですわ。でも、たくさんの質問にお答えするわけにはまいらないでしょうね。看護婦さん、その窓のところで、貴女のほうから話してくださっても結構ですよ。昨晩は大変だったこと、それから、ここ二日間ほどどんな具合であったのかをです。それから、ゴッダードさんがここに来られるのでしたら、私がどんなお薬をいただいていたのか、あの人のほうからお知らせくださって構いません。出来るかぎり質問を少なくしていただくよう、お願いいたしますわ」
医者は世に知られた、いかにも紳士らしい物腰で彼女に敬意を表した。彼女は医者を見上げたが、その穏やかなまなざしには、彼女の淑やかな表情の一つ一つに備わる、例の温和さが溢れていた。
俺は退出しようとしたのだが、彼女は許してくれなかった。
医者が彼女の手を取ったが、その見事なまでの白さは百合の花にもないものだった。医者は、「確かに、マダム、ずいぶんと元気をなくしておられます。ただ、お許しを願いますが、貴女のために医者が勢揃いして為し得るものよりももっと大きなことが、貴女お一人でお出来になるのだと言わせていただきましょう」と言っていた。
それから、医者は窓際へ退いた。そして、女たちとの短い協議の後、もう一方の窓際にいた俺とゴッダード氏のところへやって来て、「ここで出来ますことと言えば」と、声をひそめて医者が言った。「強心剤と滋養のあるものを用意する以外にはありません。ご婦人はどのようなご親戚をお持ちでしょう。身分のあるお方のようですね。それに、ご病気とは申せ、まことに容姿端麗なお方だ。おそらく、まだ独身なのでしょうね」とだ。
俺はそのとおりだと、囁き声で告げた。彼女の場合には並々ならぬ事情があって、昨日のうちにお会いしていたなら、その辺りをお知らせするつもりでいたのだということも話した。また、彼女の身内の者たちは彼女に対してはなはだ冷酷なのだが、ただ、その者たちのほうにはるかに大きな責任があるにも拘らず、その名前が出ると、彼女のほうでは必ず自分を責めて見せるのだ、ということもだよ。

「私の見立てが当たっていることは分かっていたのです。恋患いというやつですよ、ゴッダードさん。恋の病です、ベルフォードさん。あの方にとっては、医者を総動員しても敵わないほどにお役に立つ男性が一人、この世にいるということですな」と、医者は言っていた。

ゴッダード氏のほうでは、彼女の病は心にあると考えたので、それ相応の手当てをしたと述べ、自分の施した処置について医者に話していた。医者はそれを適切と認め、もう一度彼女の美しい手を取ると、こう言ったのだ。「お嬢さん、貴女には私どもからの助力はほとんど不要でしょう。大方のところは、ご自分の力で癒していただかねばなりません。さあ、愛しいマダム［馴々しくも親しげな態度をご容赦願いますよ。お顔を拝見しておりますと、尊敬の気持ちと同様に、愛しさも湧いて来るのです。それに、私も父親として子供がいますし、その中には貴女よりも年上の者もおりますから、この馴々しい態度もお許しいただけるものと存じます］、元気を出すのです。元気になるために貴女の力でお出来になることすべてをやってみるよう、決心なさることです。そうすれば、すぐにも快方に向かわれましょう」とだ。

「本当にご親切なことですね、先生」と、彼女が言った。「処方してくださいますものは何もかも、口にすることにいたしますわ。私、気持ちが急いていたのです。もっと悪化いたします前に、きっと回復するものと存じます。ここにいらっしゃる立派なお友達がお世話してくださいますのに」と、女たちのほうに目を向けながら、「そのお返しに、恩知らずな真似はいたしたくございませんからね」とも言っていた。

医者が処方箋を作成した。診察料を受け取るのは辞退したがっていたよ。彼女の病は医者の処方によってよりは、むしろ友人からの慰めによって癒されるものなのだから、医者として指示するというより、友人として助言することを認めてもらいたい。そうしていただけるなら、大変名誉な話だ、というのだな。

彼女は次のように答えていた。そのように慈悲深い人と顔を合わせるのは、いつだって嬉しく思うし、彼の訪問のお陰で男性に対する慈愛の心も失わずに済むだろう。だが、彼は自分のお医者様なのだということを忘れたりすると、訪問の目的ともなっている治療効果を上げるために必要な、彼の腕に頼る気持ちを失いがちになるかもしれない、とだ。

そして、極めて丁重な態度で、また、日に二、三度戸口のところを通るということだったわけだが、医者がさらに要請を重ねると、彼女のほうでは次のように言っていた。医者自らが申し出てくれたような思いやり溢れる人物として彼を眺めるのは、自分にとってはいつだって喜ばしいということ。ある人間が極めて寛大な心から申し出るものでも、別の人間がそれを受け入れるのは、負けず劣らず度量の狭い行為にもなり得るということ。実際、現在の自分の財政状態は良いと言えないし、それに、差し出した礼金からすると（これは是非とも納めていただかねばならないということだったが）、彼の実力、あるいは、彼の訪問から得るべき喜びよりも、自分の便益のほうを重視していることになるのは、彼も気づいているだろう、というのだよ。

われわれは全員揃って退室した。彼女の身の上についてもう少し詳しいことをというわけだが、医者とゴッダード氏がしきりに知りたがっていたこともあり、薬剤師の提案で近くのコーヒー店に入った。そして、他言は無用ということにして、俺のほうから手短に話して聞かせたのだが、すべてに亘って、出来るかぎり君の責めが軽くなるようにしておい

た。それでも、令嬢の人柄に関し、当たり前に公平な扱いをするためだけのことではあっても、その〈軽く〉というのが手厳しいものにならざるを得ないのは、君にも察しがつくことだろう。

午後三時

今し方、もう一度スミスの家を訪ねて来たところで、彼女はやや快方に向かっていると教えられた。彼女のほうでは、医者の慰めがあったお陰だと言っていた。両方の紳士には大いに好意を感じている旨を表明し、自分に対する二人の接し方には、完璧なほど父親を偲ばせるものがあると話していた。

「父親を偲ばせる」というのだよ。お気の毒な令嬢だ。ごく最近まで、両親の翼の下から抜け出したことは一度だってなかったのだ。それが今では、身内の者ことごとくに捨て去られ、忠順な心が切望している父親、そして、母親の代わりとなるよう、すべての者の中に父親らしいところや母親らしいところを（後のほうの特性はロヴィック夫人とスミスの上さんの中にだが）探し出そうとしているのだよ。

スミスの上さんの話では、われわれが立ち去った後のことだが、彼女はトランクと箪笥の鍵を上さんとロヴィック夫人に渡し、目録を作ってほしいと頼むので、彼女に立ち会ってもらい、二人で明細を書いたとのことだ。

これも二人が教えてくれたことだが、二着の豪華な仕上げのドレスの買い手を見つけてくれるよう、彼女は二人に頼んだそうだ。一着はまだ一度も手を通したことのないものだし、もう一着も精々一度か二度しか着ていないとのことだ。

俺もこれにはひどくショックを受けてしまったよ。おそらく、貴公にも少しはショックだろうな。彼女が二人に話したことだが、そのようにする理由としては、それらを身に着けるまで生き長らえることは決してないだろうから、とのことだ。姉にしても、他の身内にしても、その二着を着るのは潔しとしないし、母親としては、彼女の所持品を目にするのは耐えられないだろう。自分には現金が必要なのであり、使い道のない持ち物があるのだから、だれの世話にもなりたくない、というのだよ。ただし、「値打ちに見合った価額で売れるとは思っておりません」とも言っていた。

二人が打ち明けていたことだが、二人揃ってすっかり気を揉んだそうだ。そして、その点に関して、俺の助言を求めていた。また、彼女の身分についても、彼女の衣装の豪華さから、これまでよりもさらに高く見るようになり、高貴なお方に違いなかろうと考え、改めてその身の上を知りたがったのだ。

確かに、立派な家柄であり財産もあると二人には話したし、二人が彼女のことを既婚者だと想像する余地も、依然として与えておいたのだ。ただ、彼女の都合の良い時に彼女なりの仕方ですべてを二人に話すということについては、彼女に任せることにした。俺が話そうとしたのは、ただ、彼女ははなはだ卑劣な仕打ちを受けたのだということ、そのような仕打ちを受けるには当たらないということ、そして、すべてに亘って無垢であり、汚れを知らないのだということだけだ。

君にも察しはつくだろうが、二人揃って驚いてみせていた。あんなにも素敵なお嬢さんを虐待することの出来る人間がこの世にいるなんてことをだよ。

二着の衣装の処分についてだが、スミスの上さんには次のように話しておいた。問い合

わせの結果、豪華なほうの衣装を買いたがっている友人が見つかったように装ってもらうが、（彼女が不信を抱かないよう）有利な取引に固執して見せるのだ、とな。そして、二十ギニー持ち合わせていたので、それを内金ということにして上さんに預け、追い金を受け取ってもらうよう彼女に誘いかけてもらうが、出来るだけ少ない追い金で衣装を手放させようとしているように装うのだ、と指示しておいた。

気の毒なベルトンと共にエッジウェアに向けて出発するところだが、あの男についての詳しい話は次の手紙で触れることにする。戻るのは明日になるだろうから、これは、貴公の使いに渡せるように用意しておく。留守中に来ることも考えてのことだよ。

さらば

手紙　七十三

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ［手紙七十一への返事として］

七月十九日　水曜日　夜、M邸にて

俺の手紙を令嬢に知らせるのは、共謀して俺を騙しているようなものだと、俺がそんなふうに考えるのではないかと君は案じているが、尤も至極な話だよな。

俺自らを弁護するために書かれた手紙の、その中でも非難の余地の最も少ない部分について、君が彼女に読み聞かせることはあるまいなどと、一体だれが考えるだろうか、との問いだったな。それはだれなのか、ひとつ俺が教えようじゃないか。この質問をしている同じ手紙の中で、彼女の怒りの的として晒し者にしている友人に向かって、「精一杯真面目腐っている手紙にあってさえ、極めて軽薄な雰囲気が全体に行き渡っており、その男にとっては最も手柄となるはずの手紙が、見てもらうのには一番相応しくないものになっている」などと語っている、その人物だよ。ところで、自ら咎めている貴公の愚行についてはどう考えるというのかな。それはともかく、命令しておくが、今後はもっと慎重になることだな。この拙劣な過ちが他に累の及ばない、これっきりのものとなるためにだよ。

「俺のことを考えると、辛くなる」だと　…　「放蕩者の空言」　…　「このように邪悪な、このように見下げ果てた陰謀家」　…　「その友情がだれにとっても手柄とはならない男」　…　「厚顔な破廉恥漢」　…　「悪魔の似姿」　…　「邪悪な、本当に邪悪な人間」というのだな。だが、このすべてを彼女が口にしたとか、仄めかしたとでもいうのか。そんなことが出来たというのか。やってのける勇気があったというのか。それも、人情を弁えているとして褒め称え、その美点ゆえに、俺よりも好意を感じている男に向かって口にするというのか。その男が見せる人情のすべては、彼女も承知のことだが、俺に指示されたものなのであり、つまりは、俺自身による所業の手柄を奪うことにもなるというのにだよ。このすべてから明白なのは、〈仕返し〉と〈憤り〉という言葉についての貴公の細かな区別立てを受ける資格を、彼女は見事に有しているということだ。ただし、決して成就出来もしないことを目指しては、大失態をやらかしてみせるというのが、貴公の常であったからな。

彼女の〈飾りのなさ〉に対する褒め言葉にもまた、貴公独特のものがある。我知らずに彼女が繰り返してみせる要約の言葉や感嘆の叫びについて、俺は貴公のようには考えてい

ないのだよ。あんなものは、一体どんな目的に役立つというのだ。他でもない。ただ、貴公が「神聖な」愛情とやらを彼女に対して抱くだけのことだ「いやはや、呆れた変わり者だよ、貴公も」。でなければ、はなはだ癪にさわる話だよ。あれだけ魅惑的な娘が道楽者の面前に毅然とした態度で立ち、自分に対する許すべからざる罪について語る姿を思い浮かべて見るというのはな。これら貞淑なる婦人たちは、怒りを露にするに当たっては、少しばかり慎みを持ってもらいたいものだと、俺は心の底からそう願っているのだよ。繊細な心が最も必要な点において、仮にも吾が輩、ロバート・ラヴレースが、真の繊細さをクラリッサ・ハーロー嬢以上に持ち合わせているかのごとく装ったりすれば、それまた極めて奇妙な話に聞こえることだろう。

愛しの初心者さんがいろいろ宣言してみせる点に関し、彼女を咎めようとの考えを乳母のノートンの頭に、それから、ハウ嬢にもだが、手先のうちのだれかを使って吹き込んでやろうと俺は考えているところだ。

だが、真面目に話そう。確かに彼女は手厳しいし、「何という人なのでしょうね、貴方のお友達は。罪深い人たちを罰する立場に就こうとするなんて……」と、非常に蔑んだ調子で尋ねているのは、生意気でもある。とはいえ、あれだけ素晴らしい娘に対し、今度のような恐るべき暴挙をやってのける呪わしい女どもを、俺は絶対に許せないのだよ。それは言っておこう。

彼女を訪れた際の、二人の妖婦の残酷な侮辱の件、見出し得るかぎりの忌まわしい家を選んだが、明らかにそれは、自分たちのところへ戻る気持ちを彼女に起こさせるためのことだという点、そして、借金を返済してくれる男を彼女に推薦するという、さらに忌まわしい試みがあり、これは疑いもなく、望みを失い、恨みに燃えた彼女の心に対し、あの悪魔のごときサリーによって（明らかに、彼女を女と見做しての話だが）仕組まれた罠であって、俺に対する彼女の立場を台無しにするためのものであり、また、怒りに駆られた俺を唆し、連中の無慈悲な残虐行為に彼女を委ねる気を起こさせるためのものだが、これらは、彼女の言い方を真似るなら、絶対に許すことは出来ないし、許すつもりもない暴挙ということになる。

しかし、彼女は悲嘆のあまり気力も挫けているという、貴公およびスミスのところの二人の女の意見だが、それこそ女特有の言い種というものだ。どうして貴公ともあろう者がそんな言い方を身につけることになったのか、俺には不思議だよ。女が死んだり生き返ったりするのをそれだけ頻繁に目にし、耳にもして来た貴公のことだからな。

連中のこうした考え方に水を差すようなことを話してやろう。

彼女の年齢と素晴らしい体質のことがあるのだ。常日頃から喜んで行ってきた善行のこともあるが、そのためにこそ自分は生まれてきたのだと思っていたわけで、これを今までと変わらない程度に、否、これまでにも優る程度で続行することも可能なのだ。貴公も承知のとおり、俺は欲の皮の突っ張った悪党などでは決してないわけだからな。彼女の宗教的な性向のこともある。つまり、避けられない災いは辛抱して耐えるよう、いつも彼女に教えることになる性向だよ。俺と仲間のすべてに対する、最後を飾る見事な勝利と、それに続く、われわれ全員からの逃亡への期待もある。自分の意思に汚れはないし、受けた仕打ちに相応しいことはしていないという、胸に秘めた誇りもあるのだよ。

振り返って見ると、こういった慰めのすべてに該当するという女なのだ。そんな女が悲

嘆のあまりに息絶えるなど、どうして想像出来るというのだ。

それどころか、何らの疑いもないように俺は思うのだが、今回の卑劣な犯罪行為（恥知らずな女以外には、犯す者などは考えられない悪事だ）ゆえに落ち込んでいた失意の底から彼女が立ち直ると、時の経過につれて和らいだその心には、息を吹き返した愛情の火が再び点ることになるのだよ。そうなれば、彼女の考えはもう一度結婚という軸を巡って回り出すことだろう。勿論、もっと生気に溢れた考えを彼女は思い浮かべることになる。そして、こういった考えから、彼女は伸びやかに、また、楽しげに、くるりくるりと回転して見せることだろう。もっとも、高慢な愛しのお茶目さんが、回転をしながら、他の女性たちを抜き去ってしまったと言わんばかりの、それほどに見事な伸びやかさとか、楽しさとかをもってではないだろうがね。

貴公の哀れな友人に向かって令嬢が浴びせた辛辣な悪口を復唱するに際し、貴公は尋ねている（察するに、指をくわえながら、彼女の前に立ち尽くしてのことだろう）。「俺のために、貴公にはどんなことが言えたというのだ」とな。

これまでの手紙の中で、俺は何百となく示唆して来なかっただろうか。友たる者が本気になって友人の汚名を晴らしたり、弁明したりするために、こういった機会に口にしそうな事柄をだよ。

だが、目下の話題、そして、事態の現状に話を移そう。俺の召使から貴公に話があったように、この呪わしい女のお節介の前の話だが、俺のために、ハウ嬢が友達に顔を利かせることを請け合ったのは本当なのだ。だが、ハウ嬢は俺の従姉妹たちに向かって、連中がハウ嬢を訪れた際のことだが、彼女の考えでは、友達は決して俺を許さないはずだと言っていたのだ。この機会に、従姉妹のモンタギュー姉妹、ハウ嬢、俺、ベティ夫人、セアラ夫人、そして、M卿の間で交わされた話一部始終の写しを同封して届けることにする。

「見下げ果てた陰謀家」「その友情がだれにとっても手柄とはならない男」「邪悪な、本当に邪悪な人間」との結婚を促すためにだが、ハウ嬢が友人に宛てて書いたという文面を知りたいものだな。その二通は貴公の手中にあったのだ。仮にも俺の手の中にあったとしたら、この熱い指に触れ、封蝋ははがれていたことだろうな［おそらく、郵便局のお墨付き(三四)の厄介になることなしにだ］。そして、折り目のほうも、襞のついている他のものがそうであったように、自ら開いてくれるのさ。俺の好奇心を満足させるためにな。馬を使ってその手紙を俺に届けるよう、方策を講じなかったというのは、ジャック、それは不埒な手抜きというものだぞ。二通目を届けに来た使いの者が二通とも持ち帰ったことにして、それで通っていたかもしれないのだ。写した後、別の使いに持たせ、ハウ嬢から来たようにして返すことも出来ただろう。それに、俺自身と貴公の他には、気づく者などだれ一人としていないのだよ。

まったく魅力的な娘だな。あの生気、惚れ惚れするようなあの生気 … 手を結ぶわけに行かないのは … あの活発な小鳥を俺の鳥籠の中に捕らえてみたいものだよ、まったくの話。あの娘には精々翼をばたつかせ、飛び回らせてやりたいのだ。針金ごとに一本ずつ羽毛を残して果てるまでな。

あちらのほうから始めていたとしたら、これまでにも言ってきたことだが(ア)、あの娘と

（ア）第五巻の二百頁から次頁にかけてを参照のこと。

なら俺は、その魅惑的な友人との間で嘗めた苦労の半分も味わうことはなかったはずだと確信しているのだよ。というのも、こういう情熱的な娘というのは心の動きに激しいものがあり、賢い者はその変わり易いところを思いどおりに弄ぶことも出来るからな。度を越して興奮するかと思うと、度を越して沈み込むといった塩梅だから、怒らせるのと宥めるのとを代わる代わる行うだけで良いのだ。じっと耐え忍ぶことだ。焦らして許しを請うのさ。また、時々は、連中のせいで悩み苦しむことを手柄にして見せるのだ。そして、譲歩してくる瞬間に捕まえるわけだが、連中のほうでは、辛い仕打ちをしているとの自覚があるものだから、すっかり君の思うままになってしまうという寸法だ。

ところが、この冷静で沈思黙考型の娘たちのほうは、理由なしに癇癪を起こすようなことは決してないし、その理由が与えられた時にも、許してくれるとか、過ちを犯すさらなる機会を与えるといったことは、滅多にしないものなのだ。

一部には、我が愛しのハーロー嬢がこのとおりではないのかとの懸念があってのことだったのだ。仮に俺が最初の試みにおいて成功しなくとも、彼女が逃げ出すのは不可能だと思われるような場所へ彼女を連れ込むことになったのはな。でなければ、俺にとってはソーリングス未亡人の所でも良かったのだよ。シンクレア未亡人の所と同じくらいにな。というのは、早いうちから俺は見抜いていたからだよ。つけ入るべき騙され易さが彼女にはないということをな。泣き言を並べるふりをしたところで、彼女の信頼を得るのは無理だということをだ。甘い口説きも通用しなかった。彼女の場合、愛するのにも理由があったのだ。洞察力と立派な分別を備えているから、真実味や自然さに欠けるお世辞はすべからく嫌いなのだよ。他のいかなる場所であっても、そんな彼女を相手に、俺には何が出来たというのだ。しかし、あそこにおいてさえ、人間として当然に感じる刺激や、わざとらしい扇動（今ではそのように思っているのだ）があったにも拘らず、俺はどれほど長い間恐れ畏まっていたことだろうか。それもひとえに、彼女を目にした途端だれの心にも、貴公の言う「神聖な愛情」(ア)ではないにしても、畏敬の念を吹き込むことになる、あの生来の威厳、そして、一見してそれと分かる、考え方や態度の純粋さの力によるものなのだ。でなければ、俺にとっては、〈あか抜けた紳士〉や〈上品な恋人〉、少なくとも、〈見てくれの良い〉〈おべっか上手の〉恋人になるのは簡単なことだったのだと、貴公はそんなふうには思わないだろうか。

セアラ夫人とベティ夫人は、あの愚かな心を傾けて成立するよう願った協議が長くなりそうなのを知り、自分たちの田舎の屋敷へ向けて発とうとしているところだよ。事の性質からして許されるかぎりの、最善の保証を俺から得た上でだがね。つまり、一緒になる気が令嬢のほうにある場合には、俺は彼女と結婚するという、〈俺の誓言〉をだ。

「で、結局のところ（と、貴公が問い掛けて来るように思うのだ）、償いが貴公の手に委ねられるとしてだが、今でも貴公は埋め合わせをする決意でいるのだろうか」とな。

そうさな、ジャック、どうしても白状しなくちゃならんのだが、あの取り消しのきかない儀式のことを真面目に考えると、時々、俺の心は後ずさりをしてしまうのだよ。実現への期待とか希望とかが、他の者たちの意見ではどれほど理不尽であっても、あるいは、馬鹿げているとしても、心に掛けた願いや、自分たちの幸せにとって不可欠だと想像してい

（ア）二百三十九頁を参照のこと。

るものを、われわれは容易に諦めたりはしないものだ。〈ぶり返し〉というやつがあるのだよ。ほんのかすかにでも有望と思われる出来事が生じるたびに（不首尾のゆえに、以前にはどれほど思い止どまらせられ、また、撥ねつけられていたとしても）、ヒョイと湧き上がって来て、そうでもなければ、拮抗している提案に対してわれわれが覚えるはずの、そんな満足感を減じてしまう渇望の念のことだ。

虚言を弄するというのは、ジャック、男同士にあっては紳士らしからぬ振舞いだ。しかし、俺は結婚生活を心から好んでいるわけではないのだよ。クラリッサのような者が相手だとしてもな。とはいえ、彼女と結婚しようというのは本心からのことだ。

だが、俺もしばしば考えるのだよ。時間を掛けることで、また、俺の懺悔や身内の者たちからの祈りに接したり、ハウ嬢の仲立ちを得たりすることで、もしも今、この愛しい娘がその〈憤り〉を和らげ［〈仕返し〉のほうは、別物としてきちんと(ア)貴公が仕分けをしてくれたからな］、圧し殺していた好意的な気持ちを呼び戻し、祭壇の前で俺と出会うことに同意してくれるなら、その時には、貴公が滔々と並べ立てた呪いの言葉すべてを、彼女がまったくの空脅しに変えてくれるはずだ、とな。彼女自身が漏らした心魅する感嘆の叫びについても、どれだけ無駄にしてしまうことだろう、とだよ。そして、碾臼を回す馬のように同じことを繰り返しながら、われわれは何という素晴らしい老夫婦になることだろうか。息子や娘をもうけては、その子たちに先ず乳母をあてがい、次には男の家庭教師や女の家庭教師をつけてやり、子供たちの父親が一度として実行したためしのない教えを授けるのだ。それはまた、連中の母親にとっても、母親の両親に言わせるなら、さほどためにならなかった教えなのだ。そしてついには、おそらく、生活態度が退屈なほど真面目で穏やかなものに変わり、己の過去の悪事一切を忘れてしまいたく思っている頃に、何とも心慰められる感慨を誘う話というわけだが、その悪事のすべてが同じ程度の、否、それ以上の面倒、そして出費を伴って、息子の数だけいる若きラヴレイたちの容姿や物腰の中に復活しているのを知ることになるわけだ。また、娘たちには、工夫の才という点ではおそらく俺の半分にも及ばない、そんな下郎と駆け落ちをされてしまうのだよ。大方こんなことになるのだろうが、尻軽娘たちの愚かしさに対して、〈女だから〉〈本性だから〉ということ以外には、何の口実も用意してやることの出来ない気の利かない輩とだ。あゝ、ベルフォード、こんなことを考えて、我慢の出来る者がどこにいるというのだ。とりわけ、俺のような年頃で、こんなにも悪さを好む傾向を持ちながらだよ。

この点は俺も絶対に確信しているのだが、仮にも、結婚をし、心安らかに己を振り返って楽しみたいというのなら、また、仕返しのこととか、自らが示した手本の結果とかを案じたくないのなら、決して放蕩者になるべきではないということだな。

良心的なものだろう。そうは見えないかな、ベルフォード。

だが、これまでにも言ってきたとおり、俺は今でも本気なわけだから、現在の不確かな状況において為すべきことといえば、心身の働きに磨きを掛けることだけだな。都会の煤煙によって、また、我が麗しの天の邪鬼さんのお傍近くに仕えるという、ほとんど無駄だったわけだが、長期に亘る束縛のせいで付着した錆を、やすりを掛けて落とすのだ。そして、出来ることなら、たるんでしまった心の筋肉をひき締めることだが、彼女がその中に

(ア)二百二十九頁を参照のこと。

引き起こした騒動のせいで、足下のおぼつかない中風患者の神経みたいに、この筋肉は捩れて痙攣しているのだよ。これは、俺の力の及ぶかぎり、彼女が受け入れるに相応しい夫の姿となって彼女の前に姿を現すためのことなのさ。あるいは、もしも彼女が俺を拒むようであれば、いつもの朗らかな心を取り戻し、人心を惑わせる女たちの中の他の連中に向かって、次の点を証明してみせられるようにというわけだ。つまり、これまで同様にこの身を女性たちにとって感じの好いものにする努力は、この愛らしい女性に難儀したからといって、思い止どまったりしないということだな。

今触れた後のほうの場合には、多分、一度フランスとイタリアへ足を運ぶだけで用が足りるはずだ。ハーロー嬢も、その頃までには、恩知らずなラヴレースから受けた苦しみをすべて忘れていることだろう。もっとも、そのラヴレースにとっては、世界の端から端まで旅したところで、匹敵する者に出会うようなことは望むべくもないという、そんな女を忘れ去るのは不可能だろうがね。

何週間にも亘って俺の長文の手紙を受け取ってきたということで、恩義の重さに呻吟する羽目に陥っているのだろうが、貴公が今後ともその返済を続けてくれるというのであれば、俺としても、上京し、我が魂の恋人の足下にこの身を投げ出したいという願望もあるのだが（それがまた、実にしつこいのだ）、そんな気持ちは努めて抑えるつもりだよ。自ら口にした約束、そして、貴公が請け合ってくれたことからして、俺もその点では慎まねばならない立場にあるわけだが、〈賢明さ〉と〈誠実さ〉とが手を結び、その抑制を強めてくれるのだ。俺のほうから新たな火種を作る気はないのだよ。それどころか、彼女の憤りが鎮まるまで時間を掛けるつもりなのだ。これから起こることの一切が、彼女自身の所業であり仕業であるとされるためにもな。

∴

∴

ヒックマンの奴が［あいつに対しては猛烈な嫌悪の念を抱いているのだよ、俺は］、今受け取ったばかりの短信でだが、俺に面会を求めて来た。金曜日、ドーマーの屋敷でということだが、共通の友人のところでというわけだ。共通の友人のところでなくてはいかんというのは、俺に会いたいというその用向きからして必要なことなのだろうか。決闘の申し入れが含みにある、ということではないだろうかな、ベルフォード。丁重な態度は取れそうもないな、あいつには。でしゃばった真似をしてきたのだよ、あいつは。それに、俺はあいつのことを妬いてもいるのさ。ハウ嬢の件でな。というのも、このヒックマンに対する俺の理解が正しいとすれば、あのガミガミ女が奴を好きになるなんてことは考えられないからだよ。

だれもが承知の話だが、母親のほうが（娘にも生意気なところが時々あるのだが）奴を娘の喉に押し込んでいるのだよ。あの娘の母親というのは、イギリス中でも最も気性の激しい女の一人なのだ。死んだ夫は、〈これはだれの役目なのか〉という夫婦間の争いに耐えることが出来ず、屈服する術も勝ち誇る術も知らないままに、くたばってしまったというわけさ。

自分が狙いをつけた女は夫に対して少しの愛情も感じていないのだと、そのように信じるべき理由があるとしたら、それこそ、陰謀好きな男にとっては心魅する励ましというも

のだよ。愛情の支えがまったくないというのに、義務の観念や信頼の契りによって、誘惑に逆らっていられるとしたら、そのような妻というのは、何と見事な節操を備えていることだろうか。

頼むから、こと細かに教えてくれ。気の毒なベルトンはどんな具合なのかをだ。誠実な男だよ。あのトマシンのことだけではなく、何か他にも引っ掛かっているものがありそうだな、奴には。

良心だの改心だのと、奴に説教していたのではあるまいな、貴公は。奴に対して、この手の勝手な真似をしてもらっては困るのだよ。奴のことを回復の見込みは完全になしと考えたのでなければな。体調を崩し、胃の弱っている人間というのは、こういった真面目な事柄を、貴公がやるみたいに弄ぶことは出来ないし、また、そのお陰で良くなるわけでも悪くなるわけでもないのだよ。思うに、後悔というのは、ジャック、体が丈夫で気力も盛んなうちに取り掛かって然るべきものなのだ。正気を失い、体も意のままにならないという時に、一体何が出来るというのだ［新しい仕事に就くなんてことは論外だ］。そんなところからではないのだろうか。臨終の床での懺悔がはなはだ当てにならない、無力なものと考えられているのはな。

俺自身の場合は、まだたっぷりと時間があるように思うのだ。いつの日にか真人間になるつもりでいるのだからな。極めて真面目な感慨に耽ることが時々あるのだよ。ただ、少しばかり気掛かりなのは、「人はしたいと思う時に後悔出来るわけではございません」という、かつて我が魅惑の君が口にした言葉がそのとおりかもしれないという点だ。彼女が言わんとしたのは、おそらく、〈持続するわけには行かない〉ということなのだろう。時々思い出したようになら、俺も一千回は後悔しているのだよ。

すぐ前の二つの段落に目を通したが、何やら矛盾らしきものがあるように思うのだ。しかし、再考を加えるのは止めておく。話題は極めて真面目腐ったものだよ。今は、俺も十分には理解していないということだな。だが、もっと軽い話題に移ることにしよう。

ターヴィル、モーブレー、そして俺は、貴公抜きとしては可能なかぎり、楽しい時を過ごしているところだ。われわれの与える楽しみにより、M卿の痛風に悩む日々を長引かせることのなきよう願っているよ。

何か別の場面で述べたことがあるように思うのだが、これこそ、われわれのように恋愛に関しては問題児とも言える男性が女性に対して持つ一つの利点なのだ。気の毒に、女どもはむさ苦しい所や人目に付かない片隅に座り込んで溜め息を漏らしたり、林や木立の中に駆けて行って、望みが挫かれたことを嘆き悲しんだりするものだが、われわれは馬鹿騒ぎで大笑いをしたり、狩猟や鷹狩りに興じることも出来るし、新たな恋を得ては、以前の恋の思い出を残らず心から追い払ったりすることも可能なのだ。

しかし、われわれは陽気に時を過ごしているのだが、この気高い娘に加えられた危害について思い返すと、良心の咎めを覚えることもよくあるのだよ。ただ、彼女も、心行くまで俺を苦しめたなら、俺が埋め合わせをするのを許してくれるだろうと思うのだ。俺にしてみれば、そこが慰めということだな。

今だって正直なものさ。羽ばたきでもして、一声高く鳴いてみせてくれよ、ジャック。

手紙　七十四

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

七月二十日　木曜日　朝

私の大切な大切な人は何という苦しみを嘗めてこられたのでしょうね。そのように不面目な辱めに遭われ、どれほど辛かったことでしょう。天下の公道で、それも、真っ昼間のことですからね。

本当に不運なことでしたが、追い立てられ、欺かれまして、卑劣な放蕩児の手に落ちてしまわれた愛しいお方の、その身に降り懸かりましたいわれのない災難には、思いますに、終わりはないということなのでしょうね。別の人の手で書かれました、貴女からは口述されただけというお便りを手にいたしまして、私はどれほどショックを受けたことでしょうか。ご容体がひどくお悪いのに違いありません。また、それも驚くに当たりませんわね。でも、慌しさや驚きからのこと、そして、気の塞ぎからのことなのでしたら、まだしものように思います。乗り越えることも出来ましょうからね。悲しみに身を委ねてしまわれたため、というのに比べますとね。こちらのほうには、考えるだけでも耐えられなくなりますような結果が伴うかもしれませんもの。

ただ、何をなさるにいたしましても、失望なさってはいけません。本当ですよ。失望なさるのはいけません。これまでのところ、貴女のほうに落ち度はございませんでした。でも、絶望となりますと、それはすべて貴女ご自身の行いということになってしまいましょうし、また、貴女に犯すことの出来ます最大の過ちということにもなるのです。

貴女のものの代わりに他の人の筆跡を眺めるなんて、耐えられません。お願いです。ほんの数行、どんなに少なくても結構ですから、出来ることでしたら、貴女ご自身が綴られたものをお送りください。私の心を生き返らせてくれることでしょう。とりわけ、ご健康を回復なさったことを知らせていただけるものでしたらね。

十三日付の私の手紙へのお返事をお待ちいたしております。私たちのだれもがやきもきしながら待ち侘びているのです。

あの男の親戚の方々は大変に信義を重んじる人たちで、貴女にはご自分たちと同列に並んでいただこうとして、それはもう大層熱心なのです。あの破廉恥漢のほうは、それはもう大層後悔しているそうでして、あの男のご一族一人残らずがそうおっしゃっているのです。貴女ご自身の親戚の方たちのほうでは、ひどく根に持っておられます。貴女の今度の災難は、あの男のこれまでの悪行の結果ではありますが、あの男の指示によってもたらされたものではありませんし、また、承知の上でのことでもないのです。それに、あの男もひどく腹を立てていることなものですから、私の母などは、断固といたしまして、貴女はあの男と一緒になるべきだという考えです。手紙の中で表明いたしました私の願いや、あの男の身内の方たち全員の願いに折れてくださり、この恐ろしい逮捕劇がなかったならばの話ですが、貴女のほうでも同意する気持ちになってくださるのであれば、なおさらのこと、そうなさるべきだというのです。

貴女がどのようなことになられたのか、どなたもご存じではないのを耳にしてのことでしたが、この火曜日にモンタギュー嬢宛に認めました手紙の写しと、その手紙へのお返事とを同封いたします。お返事にはお嬢様たちだけでなく、その下に並びまして、M卿、セ

アラ・サドレアー夫人、ベティ・ローランス夫人のご署名がございます。それから、あの破廉恥漢本人によるものもです。

正直申しまして、私宛のあの男の文面は気に入りません。そこで、あの男のためにさらに奔走いたします前に、あるお友達にお願いしてのことですが、あの男の誠意につきまして、また、私に要請しております件に関しまして、あの男の意向全体には身内の方々の願いは含まれていないのかどうか、その点につきまして、本人の口から確かめようと決心したのです。ただ、このようなことを尋ねなければならない理由が、それこそ、ほんのかけらほどでもあることを想像いたしますと、相手の女性というのがクラリッサ・ハーローさんであるだけに、あの男への怒りが込み上げて来るのです。でも、母も同じ考えなのですが、今では結婚なさることだけが、これからの貴女の生活をどうにかこうにか安らかなものにする …〈幸せな〉とは到底申せませんが … 貴女に残された唯一の方策だと思うのです。その場合ですと、世間そのものの目には、あの男の恥辱のほうが貴女のものよりも大きくなりますし、貴女のことを存じ上げております人間にとりましては、貴女の勝利は輝かしいものとなるのです。

間もなく、母のお供で、ワイト島まで参らねばなりません。伯母のハーマンが弱ってきておりまして、私たち二人の顔を見たいと言ってきかないものですからね。それに、ヒックマンさんのお顔もだと思いますわ。

私たちもずいぶんお話を伺っておりましたこの人のお姉様が、つい先日のこと、ご主人と一緒に私どものところへ訪ねていらっしゃいました。お姉様は、不思議なことに、私を好いてくださるのです。あるいは、そんなふうに言ってくださるのです。

やはりお姉様は、私たちが耳にいたしておりました素晴らしいお人柄そのままの方のように思わずにはおられません。

あの小さな島に向けて出発することにし、先に貴女と会わずにおりますのは、私にとりましては死ぬほど辛いことです。でも、母のほうでは（権威を行使するのが大好きなものですから、笠に着ることによって、自分からその権威に疑問を持たれてしまうこともしばしばなのですが）、私が次に貴女をお訪ねいたしますのは、ラヴレース夫人へのお祝いの訪問でなければいけないのだと、そう言ってきかないのです。

私の名であの破廉恥漢にぶつけることになっております質問の結果につきまして、そして、十三日付の私の手紙に関する貴女のお気持ちが分かりましたなら、私の気持ちももう少し詳しくお話しいたしましょう。

使いの人は、今日の午後には貴女のところへ伺うことが出来るよう、そのつもりで道を急ぐと約束してくれています。良いお便りを持ち帰ってくれるよう祈っております。

変わることなき親愛の情を込めまして、貴女の

アナ・ハウ

手紙　七十五

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

木曜日　午後

崇高な友情に根差しました貴女の熱意に、大好きな私のハウさん、私は心の痛む思いでおります。ごく手短にいたしますが、前よりずいぶん良くなったとは申せ、とても体の具合が悪いのです。それに、十三日付のお手紙への返事も準備しているものですからね。ただ、先に申し上げておかねばなりませんが、あの人と一緒になるつもりは私にはないということです。お怒りにならないでくださいね。でも、本当にそのつもりはないのです。ですから、私のことにつきまして、あの人には何も尋ねていただきたくないのです。お願いいたしますね。

悲観するようなことはございませんわ。今後とも悲観はいたしませんと、そのように申し上げられそうに思います。私の状況も大幅に改善されたのではないでしょうか。有難いことに、そのとおりなのです。

私はもういかがわしい家の囚人ではございません。もうあの人の企みのままに操られてはいないのです。あの人を恐れ、片隅に身を隠す必要はもうないのです。あの人の親友のお一人が私の熱心な支持者になって、あの人を私には近づけないと請け合ってくださっているのです。それも、あの人自身の同意を得てのことなのです。私の周りにいらっしゃいますのは、誠実な方々です。私の衣装と持ち物のすべてを返していただきました。私の貞節さにつきましては、あの卑劣漢自身が証明してくれているのです。

確かに、とても体が弱って、具合は良くありません。でも、優秀なお医者さんのH先生と、同じように立派な薬剤師のゴッダードさんが私にはついております。この人たちの私への接し方は、それこそ、父親そのものなのです。自分でも分かるのですが、気持ちのほうもしっかりし始めているようなのです。また、時々は、私自身がこの災難に負けていないようにも思われるのです。

私も滅入ることが時々はございましょう。それは考えに入れておかねばなりません。それに、父の呪いの … でも、慰めとなります点を数え上げておりますのに、あの件を持ち出したりいたしましては、貴女はお叱りになることでしょう。

でも、私の災難が貴女のお心にあまり重くのし掛かることのなきよう、何卒、お願いいたします。そのようなことがございますと、鈍くなり、鋭利さを失っておりました幾本かの矢の先を、新たに尖らせることになりますからね。

私の幸せに貢献したいとお考えでしたら、どうか貴女ご自身の幸せに、そして、眼前の明るい展望に身を委ねていただきたいのです。

貴女のクラリッサがこの世で享受することの出来ます最も大きな喜びは、貴女が繁栄なさり、幸せになられることなのだと、そのように信じていただけないのでしたら、貴女はクラリッサをひどく軽蔑なさることになりましょう。私たちは過ぎ去った日々の姿のままなのだと、私のたった一人のお友達、ただそのように私のことをお考えになってはいけません。また、私は遠い遠いところへ旅立ったのだと思っていただきたいのです。遥かな旅路です。この上なく親しい友達同士も、祖国の要請により、どれだけ頻繁にこのような別れ方をしていることでしょう。間違いなく長年に亘ってのことでしょうし、永久の別れとなる公算も大なのです。

それでも、まだ愛情を注いでいただきたいのです。ただ、独り立ちを促すような愛情であってほしいと思います。今の私は、私たちがいわば離れ難い恋人同士であった、以前の私ではないのです。私たちの目的も今は違ったものでなければなりません。決心していた

だきたいのです。尊敬に値する人を幸せにして差し上げることをです。尊敬に値する方なら、きっと貴女を幸せにしてくださるはずですからね。それでは、大好きな貴女、当分の間「さようなら」を言わせていただきましょう。さようなら、大好きな貴女。でも、すぐにまた筆を執ることになるでしょう。

手紙　七十六

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ［手紙七十三への返事として］

七月二十日　木曜日

君の手紙の結びのあの部分をベルトンに読み聞かせてやった。奴の様子を尋ね、君と他の仲間がM邸でどんなに楽しく過ごしているかということに触れていたところだよ。奴は深い溜め息を一つもらすと、「君らは皆実に幸せなもんだよ」と言っていた。残念なことだが、それが奴の台詞だったのだ。というのも、可哀相だが、奴はどんどん悪くなっているのだよ。奴の周りに残して来た愉快な仲間に加え、転地を行えば体調も戻るだろうと、奴としては期待しているのだが、おそらく、何をしても治るまいと俺は思うのだ。

体力を消耗させる病、それに、湯水のように金を使う情婦というのだから、甘い旦那にとっては、まとめて敵に回すには恐ろしい相手だ。後のほうを袖にするためには、乱暴な手を用いなければいけないのだが、頑張るだけの気力は残っていないのだな。奴の住まいはトマシンのもので、奴の家ではないのだ。ここ二週間というもの、自宅では過ごさなかったのだよ。宿から宿への放浪生活で、それぞれの宿に入るのも、休息のためだけだ。よそへ移る力もなく、二、三日泊まるのだが、次にはどこへ行くのか、自分にもあまり定かでない有り様だ。病は自分の内側に巣食っていて、それから逃げ出すのは不可能なのさ。

あの女の息子たちは（奴は自分の子供だと、かつては思っていたのだが）すっかり逞しくなって、横を通り抜ける際などには、肩で奴を押し退けて行くのだよ。奴自身の家の中だというのにな。息子たちは母親に与し、ある意味では、奴を追い出しているのだ。そして、奴の不在中に、つぶれた身上の残りかすで放蕩に耽っているのだよ。その息子たちの母親について言えば（かつてはまことに優しく、従順で、努めて意向に沿おうとする女だったから、われわれは全員、奴は幸せ者だ、奴の生き方こそ望ましいものだと断言していたわけだが）、今ではひどく口やかましい女で、実に横柄なものだから、奴としても、あの女と争ったりすると、決まって自分の体調に計り知れないほどの悪影響をもたらしてしまうのだよ。だから、気力の挫けたような防御が、ほとんど防御にならないような有り様なのだ。しかもこれが、長年に亘って攻撃的な戦闘を続けて来た（それも、相手構わずにだが）勇者に起こっていることなのだ。何という落ちぶれようだろうな。今じゃあ奴も、卑しいロバの跳ね上げる後足で顎を蹴飛ばされ、のたうち回っている、あの寓話に出てくる老いさらばえたライオン（三五）に我が身をなぞらえているのだよ。

俺は奴の訴訟を引き受けたのだ。不本意なところもなかったわけではないが、奴が許してくれたので、自宅を奴の所有とし、奴の代わりに、奴の不幸な妹を住まわせることにした。この妹のことはこれまでないがしろにしていたのだよ。不幸だという理由でな。奴が俺に語っていたのだが（気の毒に、そう言いながら涙を浮かべていた）、我が家で静かに息

を引き取るのを許してもらえないというのは辛い話だ、とのことだった。こんなところなのだよ、女を囲うような罰当たりな真似をした結果というのはな。

あの女の不貞に気づいたのはごく最近の話なのだが、今では、ずいぶん前から続いていたことが分かったため、奴としては、あの息子たちを自分の子供と信じるべき余地は一切ないのだ。だというのに、奴はあの子たちをどれだけ溺愛していたことだろう。

父親だと噂されている男が、別の男の子供に向かってしばしば見せるあの優しさは、ラヴレースよ、一体何に帰したら良いのだろうな。われわれが〈人間の本性〉だの〈自然の情〉だのと呼んでいるあれは、果たして何なのだろうか。それに、雌鶏とかガチョウの雌とかが同類の他の連中の卵、そして、雛に対してさえもするのと同じように、自分の妻とか愛人とかが別の男との間にもうけた罪の産物を保護し、育て、愛情を注ぐことさえあるし、優先することもしばしばだが、そんな気持ちをいとも簡単に起こさせられているというのに、利口さや洞察力の点に関して、人間は一体何が自慢出来るというのだろうか。

否、ひとつ尋ねさせてもらうが、動物というのは、身に備わっている本能と呼ばれるもののお陰で、この難しい点に関しては、自慢の〈理性〉と利口さを備えたわれわれよりもずっと容易に我が子を見分けることが出来るのではないだろうかな。

疑わしい貞操観念しか持ち合わせない女を妻にしている男たちの中に、この問題に対して然るべき考慮を払う者が何人かでもいれば、連中の異常なまでの利得への熱情も、大いに冷却化するものと俺は信じるのだよ。友人であれ隣人であれ、あるいは、母方の人間ではあるが、より確かな近親者であれ、関わりのある者たちを相手に、押し退けたり急き立てたりつかみ掛かったり、そして、おそらくは騙すような真似をしていたのは、一体だれの子供のためのことなのか、その確信は持てないわけだからな（連れ合いのほうでは持てるとしてもだよ）。

しかし、この考えも、押し進められるかぎりのところまで押し進めるつもりはないのだよ、俺としては。何故なら、この考えが広まった暁には、反社会的で人道に悖るような結果を生じかねないからだ。というのも、心が卑しく頭も良くない夫の抱く不信感や気紛れによって苦しい思いをしがちなのは、手練手管や偽善的な振舞いの陰に身を隠し、露見を免れることの出来る者よりは、おそらく、貞淑な女たちのほうだからだよ。貞淑な女が手管や偽善に頼るなんてことは出来ないわけだからな。ただ、この考え方が然るべく、そして、広く検討されるなら、悪影響を伴うようなことはないだろう。何しろ、運命を共にする者を、そして、自分の財産の相続人となり、努力の結晶を享受することになる、やがて生まれてくる子供たちの母親を捜す時に（単なる容姿の魅力に惑わされることなくだ）主として求められる特質というのは、立派な教育であり、優れた性向であり、確固たる節操なのであって、金ではないのだからな。

だが、哀れなベルトンの話に戻ることにしよう。

気の毒なあいつを元の状態に戻してやるに当たって、君の援助、そして、われわれの仲間の助けが必要となる場合には、君に知らせることにしよう。それはそうと、たった今知らされたのだが、トマシンのほうでは、動くつもりはないと言明しているとのことだ。というのも、自分を立ち退かせるために数々の方策が取られることを、あの女は推測しているらしいのだよ。自分はベルトン夫人であり、結婚していることを立証してみせると言っているのだ。

奴が生きているうちにこんなでかい態度を取るようでは、あの女、奴が死んだ後ではどんな行動に出るつもりなのだろうな。

あの女の息子たちは、母親を侮辱しようとする者に対して、だれかれ構わず脅しを掛けている。自分たちの〈親父〉のことを（哀れなベルトンを奴らはそう呼ぶのだが）、不人情な父親のように言っているのだよ。そして、おそらく〈本物の親父〉と思われる男が常時あの家に、それも、敵意を露にした形でいるのだが、いつもの手で、あの女の従兄弟というわけだよ。うことで通っている。今では、あの女の守り神の従兄弟というわけだよ。

女を囲っている男で、男を囲い込むような女を作り出さなかった者はまずいないのではないだろうかな。そんな女は、自分を囲っている男の途方もない愚行のお陰で頂戴した物を、囲っている男に気前良く与えてしまうのだよ。

出来れば、君の手を借りずにやってみるつもりだ。思うにこの件は、昔のサルマティア人たちの場合と似たものになるだけのことだろう。この連中は、長年家を空けた後に帰宅したのだが、その頃には、自分たちの妻は奴隷のものになっていたのだ。従って、連中としては、不貞を自覚している妻、そして、奴隷たちばかりでなく、すでに成人に達しており、決然として己の母親、そして、奴隷の身分から解放されて長くなる父親を守ろうとする息子たちとも争わねばならなかったのだよ。しかし、高貴なサルマティア人たちは、自分の奴隷を攻撃するのに同じ武器を手にするのは潔いことと思わず、以前奴隷を懲らしめるために用いたものと同じ種類の鞭を用意しただけだったのだ。そして、鞭を使って攻めかかると、奴隷たちは背を見せて逃げ出したというわけだ。そんな出来事を記念して、今日に至るまで、昔のサルマティアの都市であったロシアのノブゴロドでは、貨幣の図案は鞭を手にした馬上の人物を描いたものになっているのさ。

M邸の仲間に加わるよう声を掛けていながら、君がそれ以上勧めなかったのを、哀れなあいつは悪くとっているのだ。招く時には大変熱心なのが常であった人間から、あんな冷ややかな招待を受けたのは、モーブレーのせいに違いないのだと、奴のほうではそう確信しているわけだよ。

奴に向かって吐いたモーブレーの台詞のことを、奴は絶対に許さないと言っている。「おやおや、トム」と、あの野卑な男が悪態をついたのだ。「舌に斑点が出来たか鼻炎に罹ったかしたひよこみたいな萎れようじゃないか。もっと図太くならなくちゃ駄目だぜ。それとも、孤独な隔離に甘んじるかだな。仲間全員に病気をうつしたくないのならな」とだ。

この気の毒な男は、胸の内でも仕事の面でも、悩み苦しんでいるわけだが、そういうことさえなければ、俺自身としては、君ら全員には嫌気が差してしまいそうなのだよ。この神々しい淑女の会話を実に味わい深く楽しんでいるし、その立ち居振舞いや見解には感心するばかりだから、彼女との一時間のお付き合いを許してもらうためなら、たとえ貴公との付き合いであっても、一ヶ月は断ってみせるつもりだ。そして、我がことながらはなはだ自慢に思うのは、かつては貴公との付き合いを大いに重んじていた俺にも、自発的にと言って構わないだろうが、このような選り好みが出来るという点なのだよ。

ともかく、われわれが送って来たのは極悪非道の人生なのだ。そして、そのすべてがわずかな年月で幕を閉じるものだということに思いを馳せるのは　…　この気の毒な男が実に急激に、どれほどの重体に陥ったのかを目前にすること　…　そして、ネズミが崩れ落ちようとしている家を捨てて行くように、貴公らの一人一人が不幸者から逃げ出す姿を観

察するのは、恰好の慰みであり、間違って選んだ仲間のことを、そして、無為に過ごした人生のことを振り返って見る助けになることだろう。

いずれ貴公らにも順番が回って来るのだよ。一人残らずだ。貴公らの国の司直が口を挟まなければだがな。

貴公は、この俺様を除外したりしないならだが、われわれが付き合って来た放蕩児の中で、健康と財産を無傷の状態に保っているただ一人の者なのだよ。

モーブレーがまだ健康を損なっていないのは、実際、頑健な体質あってのことだな。だが、奴の地所のほうは年々縮小して行っているのさ。

相当な額に上るターヴィルの財産も、すでに四分の三は消えてしまっているし、おそらく、その四分の三の後をすぐに残りの四分の一も追うことになるのだろう。

哀れなのはベルトンで、どんな想いをしているのか、われわれには分かるのだよ。彼にとって唯一幸いなのは、生き長らえることはまずあるまいから、必要に迫られることもないという点だ。

貴公はあまりに誇りが高く、そして、慎重だから、生活に困るようなことには決してならないのだ。それに、公平に評して、友人の中の零落しそうな者たちには援助の手を差し延べようという気持ちがあるし、万が一、命を失わずにいるとしたら、きっとそうするはずなのだ。だが貴公は、自分で思っているのよりはずっと早くに、己の行いについての責任を問われることになるに違いないと、俺はそんなふうに考えている。おそらく、貴公が危害を加えた者たちの友人から頭に一発お見舞いされてのことだよ。何しろ、このような運命をハーロー一族から受けるのは免れるとしても、危険を招いたり、仕返しを誘ったりするようなことを貴公はし続けるだろうから、ついには、仇を討たれてしまうことになるのだよ。しかもこれは、貴公が結婚するとかしないとかには関わりのないことだ。何故なら、結婚生活に入ったところで、老齢というものがそれに加わらないうちは、日頃よりもマシな分別が働いて、束の間の決意を固める時があるにも拘らず、絶えず貴公を駆り立てている、あの不義密通への情熱は鎮まりそうにもない気がするからだよ。

そこでひとつ、貴公のことは、もっと徳の高い貴公の先祖たちの間に静かに横たわっているように想定しておこう。

さて、今度は、ターヴィルとモーブレーの最期を予測させてもらうことにする［ベルトンは貴公よりも先に塵に帰っていることだろう。おそらくな］。貴公の若死にのお陰で、奴らは絞首台の世話にならずに済むと仮定しての話だ。

多分、馬鹿騒ぎでの浪費の結果だろうが、奴らは当然の窮乏生活へと追い込まれ、どこかの不潔極まりない穴蔵とか屋根裏部屋とかに逃げ込んでいる有り様だ。どこかの汚らしい婆さんのぞんざいな世話で我慢しなければならないのだが、この婆さんにしても、貧乏ということさえなければ、若い女たちの間でこれほどのひどい乱暴狼藉を働いてきた男どものために、骨を折って葬式を上げてやるような気にはならないのだ。

それに、奴らは何と惨めっぽい愚痴をこぼすことだろうか。声をキーキーさせながらだよ。奴らの大声は、弱々しい、憐れみを求める嘆きの声に変わっているのだ。今は攻勢をとっている奴らの手も、その時には、何とふがいのないことか。今は真っ直ぐに伸びている奴らの首筋も、その時には、痛む頭の支えとなるのを拒むものだから、悪事の詰まった球体は震える肩に落ち掛かるのだ。その後、何という渋面を奴らは作って見せることだろ

うか。奴らの心と頭が互いに咎め合うのだよ。奴らの干からびた口がポカンと開き、力のない頬は落ちくぼむ。下顎がだらりと垂れ、各人は豚みたいにブウブウ不平を漏らすのだが、豚そっくりの暮らし方をしてきたのだよ。「あゝ、俺は何と下劣で、浅ましい人間だったのだろうか。あゝ、人生をもう一度やり直すことが出来るなら　…　」と、例の貧乏婆さんに告白してみせるのだ。免罪を言い渡すことなど出来ない婆さんに向かってだよ。初穂を奪われた乙女や操を汚された婦人たちの亡霊と思われている人影が、奴らのどんよりと生気のない目の前をよぎって行く。そして、奴らの不安な心には例のサタンと思しき姿が、奴らの前に掲げられた姿見の奥でニヤニヤと笑い掛けるものだから、自分自身の表情の中に読み取ることの出来る恐怖の色に、奴らは怯えてしまうのさ。

俺自身に関して言えば、もしも、妹なり娘なりを俺の手に委ねてくれるよう、どこかの名門の家族を説得することが出来るようであれば、今では資産の増加もあり、相当な贈与財産を申し出ることが可能になっているわけだから、貴公ら全員とは手を切ろうと思うのだ。結婚をするのだよ。そして、今後については、畜生のような暮しよりも、道理を弁えた生活を送るつもりなのだ。

手紙　七十七

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

木曜日　夜

渡しておいた二十ギニーは、仕方なく、また受け取ることになってしまった。女たちがどう対処したのか、俺には分からないのだが（察するに、あまりにも簡単に豪華なスーツの買い手を見つけたということなのだろう）、彼女のほうでは、前金を用意したのは俺だろうと疑い、それで、衣装を手放そうとしなかったのだよ。ただ、ロヴィック夫人が豪華なレースの一部を、実際に十五ギニーで売ってくれたのだが、その金額の三倍は値打ちのあるものだ。その中から彼女は、男の中でも最も野蛮な者の残虐行為によって引き起こされた病に際し、医者の診察代として借りたものを夫人に返したのだ。貴公も承知だろう、そいつの名前はな。

朝のうちに医者が彼女のところに立ち寄ったらしい。そして、治療費のことで、彼女と少し言い合ったのだ。彼女のほうでは、処方箋のあるなしに拘らず、料金は往診の都度受け取ってくれるよう主張していた。医者がロヴィック夫人、あるいは看護婦に、口頭の指示を与えただけなのは、一切の受け取りを避けるためではないか、と疑ってのことだ。

医者はこう言っていた。自分が医者でなかったとしても、これほど素晴らしい人の健康や幸福について尋ねるのを我慢するというのは不可能な話だ。申し出のあった謝礼の受け取りを断るのも、彼女に諂おうとの考えがあってのことではなく、毎日の往診を必要とするほどに、彼女の症状が急変するものではないことを承知していたからだ。従って、彼女の健康状態について階下の婦人たちに尋ねることは許してもらわねばならないし、自分が浸りたいと切望している満ち足りた思いの代わりに、金銭的な報酬を受けることになるのであれば、二階に来ることは考えないようにしなくてはいけない、とだ。

言い合いは一回おきに料金を取るという妥協案に落ち着き、彼女も渋々それを呑んだの

だが、医者に向かって次のように話していたそうだ。今の自分は見捨てられ、面目を失った状態ではあるが、本来の暮らし向きは、当然のことながら、裕福なものであり、自分の生死に関係なく、どれだけ費用がかさむにしても、支払いに二の足を踏むことはない、とだよ。ただ、医者のほうで都合がつくかぎりということだが、彼には出来るだけ頻繁に会いたいとの思いもあり、妥協案を受け入れたのだと、彼女は付け加えていた。医者とゴッダード氏のことは、彼女に対する思いやりと優しさに溢れた接し方からも、本当に、実の子にも近い尊敬の念をもって眺めているというのだよ。

上京の折には、貴公にもこの立派な医者と近付きになってもらいたい。そして、貴公から彼に礼を言ってもらいたいのだよ。男性を好意的に見る気持ちを彼女に持たせてくれた点についてだが、貴公のほうでは、男性を忌み嫌って当然な理由をたっぷりと彼女に与えてきたわけだからな。

さらば

手紙　七十八

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

七月二十一日　金曜日　M邸にて

このヒックマンとの会見から今戻ったところだが、文字通りのめかし屋で、その堅苦しいことと言ったら、糊の利いた襞襟と同じだ。

俺があの男に好意を持っていないことは、ジャック、貴公も承知のはずだ。そして、われわれというのは、好意を感じない相手には取り柄一つにせよ認めてやるわけに行かないものなのだ。おそらく、そんな奴らに認められて然るべき取り柄をだ。だが、これは本気で言うのだが、俺にはあいつがひどく型にはまってしかつめらしく、気取りがあって気障だと思われるのに、それでいて、風采の点ではまことにもって田舎くさいものだから、請け合っても構わないが、貴公の意見としては、姿見の中でならともかく、あのような類いの者は二人と見た覚えがない、ということになるのだろうな。あいつと貴公自身のことを公平に評してくれるならの話だがね。

俺が奴をどんなふうにあしらったのか、ひとつ話して聞かせよう。

あいつはドーマーのところへ自分のチャリオットで来た。あいつの要請で、われわれは庭を少し歩いた。やたらに仰々しい奴で、無礼の段はお許しを願いたいと、しきりに詫びの言葉を並べ立て、「うーん」だの「えへん」だのを五十回ほど口にした後で、こんなふうに話していた。自分が来たのは　…　やって参りましたのは　…　俺様に敬意を表するためで　…　親愛なるハウ嬢からの要請でありますが、その用件というのは　…　用件と申しますのは　…　ハーロー嬢のことなのです、といった塩梅なのだよ。

「結構でしょう。お先をどうぞ」と、俺は言ったよ。「ただ、ひとつ言わせていただきたいのだが、貴方の本文が序文と同じ長さだとすると、読み終えるのには一週間も掛かるでしょうな」とだ。

これは結構不躾だぞ、と貴公は言うだろうな。だが、こういった形式主義者は、出鼻を挫いてやる以外にないのだよ。奴らは、いつもの道から追い出されると、自分に対する疑

念で頭の中が一杯になり、二度と元の道に戻ることが出来なくなるのだな。その結果として正直者は、俺同様に見当違いな攻撃を受けても、会談の間中ずっと、勝負の鍵をすべて握ることになるという寸法なのだ。

あいつは顎をさすっていた。どう話したものか、ほとんど分からないのだよ。察するところ、スウィフトがやっている脱線を称える脱線(三六)に倣ってなのだろうが、付け足しの言葉に言葉を付け足し、弁解の言葉を弁解しながら、やっとのことで、「失礼ながら、拝察いたしますに、M卿、セアラ・サドレアー夫人、ならびに、ベティ・ローランス夫人のご名代として、若いご婦人方によってなされましたハウ嬢へのご訪問の件につきまして、貴方も関与しておられたものと存じますが」と訊くのだよ。

「いかにも、そのとおりですよ。それに、ハウ嬢はその後、手紙を受け取っておられますね。卿とあの夫人たちの署名があり、下には私自身の記名もあるものですが、ご覧になりましたか」

「勿論、拝見いたしております。今回お訪ねいたしましたのも、それが主たる動機なのです。実は、ハウ嬢といたしましては、あの書面中、貴方の筆になる部分がはなはだ軽薄な調子で認められている　…　無礼の段はお許し願います　…　とのお考えでして、それゆえ、測り兼ねておられるのですよ。お友達のために口利きをしてくださるよう、貴方は令嬢に願い出ておられますが(ア)、果たしてそれが本心からのことなのかどうかをです」

「私のほうから直接にご説明申し上げるのを、どうでしょう、ハウ嬢としては許してくださるでしょうかね、ヒックマン殿」

「あゝ、滅相もありません。ハウ嬢といたしましても、間違いなく、貴方にそのようなお骨折りは　…　」

「私のほうでは、骨折りなどとは思いません。喜んで、ハウ嬢のところまでお供をいたしましょう。そして、令嬢には満足していただくつもりですよ。気掛かりとしておられる点すべてにつきましてね。さあ、さあ、すぐにお供いたしましょう。チャリオットをお持ちだ。お一人ですね。乗りながら話すことも出来ますよ」

あいつは逡巡していたよ。モジモジとし、たじろぎ、襞襟を撫でさすり、鬘を直し、首巻きを引っ張ったりしていたが、これはよだれ掛けになるほどの長いものだ。「真っ直ぐハウ嬢のところへ戻るわけではないのですよ。私を介してハウ嬢を納得させていただけるなら、それもまた結構だろうとは思うのですが」

「令嬢が気に掛けておられるのはどのようなことですかね、ヒックマン殿」

「そうですね、ハウ嬢も述べておられるのですが、例の手紙の中の貴方が書かれた部分で、貴方もおっしゃっておられるが　…　だが、ちょいと失礼　…　貴方の文面の写しを持っているのです」と、それを取り出しながらだ」。お許しをいただけますね。こんなふうに書き始めておられます　…　親愛なるハウ嬢　…　」

「お気に障ったのではないでしょうね、ヒックマン殿」

「いいえ、少しも。それはまったくありません」と言いながら、読もうとして、いわば狙いを定めるようにしているのだ。

「眼鏡はお使いですか、ヒックマン殿」

(ア) ラヴレース氏のハウ嬢宛の短信（本巻の百九十六頁から次頁にかけて）を参照のこと。

「眼鏡ですか」と、あいつのでかい顔が俺に向けられた。「眼鏡とはね　…　何でまたそのようなご質問をなさるのでしょうか。この若さで、眼鏡を使うなど　…　」

「スペインでは使うのですよ、ヒックマン殿。年寄り同様に若者もです。目を守るためです。プライアの『アルマ』(三七)をお読みになったことはありますか、ヒックマン殿」

「読んでおります。個人についてもそうですが、国の場合にも、万事は習慣次第ということですね。ご質問の趣旨は承知いたしているのです。ただ、イギリスの習慣というわけではありませんね」

「一度でもスペインに行かれたことはおありですか、ヒックマン殿」

「ありません。オランダは行っております」

「ほう、オランダですか。フランスとかイタリアとかは一度もないのですか」　俺はあいつと旅をすることに決めたのだよ。〈困惑の国〉へだ。

「えゝ、あるとは申せませんね、今のところは」

「それはまた驚きですね。大陸に渡っておられながら」

「特別な用事で参りまして、すぐに戻らねばならなかったのです」

「ところで、お読みになるところでしたね。どうか、先へお願いいたします」

あいつは再び狙いをつけていたが、いかにも、両の眼が体の他の部分よりは年を取っていると言わんばかりだ。そして、読み出し、「〈あのように疑うべくもない誉れ高き名と人柄で知られた者たちの筆になる文面の後でもありますから　…　〉、確かに」と、目を離しながら、「M卿のご栄誉につきましては、また、お手紙に署名しておられる立派なご婦人方のご淑徳につきましても、疑いを挟む者などおりません」と言うのだ。

「ヒックマン殿、私の道義心についても、疑いを挟む者はいないでしょうね」

「宜しければ、先へ読み進めましょう。〈貴女にとりまして憎むべきものであることは勿論**承知の上**ですが、私自身にとりましてもほぼ同じ程度に憎むべきものである［貴方のお言葉です］名を署名いたしますのは、御免蒙りたいところであったのです〉　…　」

「ところで、ヒックマン殿、ここで口を挟まねばなりませんね。ハウ嬢宛に認めました文面では、〈承知の上〉という言葉を強調しておいたのですよ。理由があってのことでしてね。ハウ嬢は私の人柄につきまして、大層遠慮のない態度を取ってこられました。あのお嬢さんに害を及ぼした覚えは一切ないのですよ。私といたしましては、お嬢さんのことでは、非常に気を悪くしているのです。ですから、貴方はお嬢さんの代理として、その点の釈明をしに来られたものと思うのですが」

「ハウ嬢はまことに礼儀正しいお嬢さんなのです。日頃から、いかなる人間の人柄についてであれ、不作法な扱い方をするのには慣れていらっしゃらないのですよ」

「そういうことですと、私といたしましては、気を悪くして当然な理由がさらにあるということになるわけですよ、ヒックマン殿」

「何しろ、ご存じでしょうが、友情ゆえのことでして　…　」

「いかなる友情をもってしても、私の人柄を扱われた際の、ハウ嬢のあの無遠慮さを容認するわけにはまいりませんね」

俺に近寄らなければ良かったと、そんな気持ちをあいつは持ち始めたものと思う。完全に当惑している様子だったのだ。

「ハウ嬢が私の名を扱われるところをお聞き及びではないのですかね。ひどく　…　」

「失礼ですが、貴方の感情を害するために、あるいは、侮辱を加える目的で参ったわけではないのですよ。ただ、貴方もご存じのとおり、ハウ嬢とハーロー嬢とは大変に慈しみ合っておられるのです。失礼ながら、貴方はハーロー嬢に対しまして、あのように天晴な若い淑女ですが、そんな方に相応しい扱いをしては来られなかったかにも思うのです。仮にハウ嬢が、お友達を思う気持ちから、貴方のおっしゃるような無遠慮な態度を取られたとしても、心の狭くはないお方なら、このような場合、そのきっかけを与えたことを残念に思いこそすれ　…　」

「貴方の結論は分かっているのです。だが、このお咎めは、紳士よりも令嬢のほうからいただきたかったですね。是非とも、ハウ嬢のところへ伺いたいと思います。すぐにも十分な理解に達するはずです。心の広い人間というのは、いつだって親類同士のようなものなのですよ。すべての点に亘って同意が得られるものと思います。お願いです、ヒックマン殿、ひとつハウ嬢のところへご案内いただきたいものですね」

「宜しければ、ご希望の向きをハウ嬢にお知らせしても構いませんが」

「是非、そうしていただきましょう。先をお読みいただけますかね、ヒックマン殿」

あいつは実に型どおりに読んでみせたが、まるで、俺は自分で書いたものを覚えていないと言わんばかりにだ。そして、ロープと牧師と絞首刑執行人に触れた部分に来ると、そこを読みながら、こう言うのだよ。「いやはや、これでは冗談と映りませんかね。ハウ嬢はそうお考えなのです。貴方の絞首台行きを決定いたしますのは、勿論、あのお嬢さんの権限ではございませんからね」とだ。

「では、もしも権限であれば、ヒックマン殿、彼女はそうするとお考えですかね」

「貴方はここで、ハウ嬢に」と、あいつが言葉を続けた。「ハーロー嬢のことを〈最も不当な扱いを受けた女性〉と言っておられます。ハウ嬢から聞き及んでいるのですが、貴方も認めておられる不当な扱いを、あのお嬢さんがはなはだ恨みに思っておられるため、ハウ嬢といたしましても、それを水に流すよう、お嬢さんを説得するのは無理ではないかと考えておられるほどなのです。それに、貴方のお身内の皆さんは、貴方がお嬢さんの受けたひどい扱いの埋め合わせをなさるよう切望しておられますし、また、ハウ嬢がお友達のための仲裁に入ってくださることを望んでもおられるものですから、ハウ嬢といたしましては、お手紙のこの部分から、貴方がふざけ過ぎておられるのではないか、また、お嬢さんを正当に扱うという貴方のお申し出につきましても、貴方ご自身のお気持ちから出たことというよりは、むしろ、お身内の方々の願いを慮ってのことではないかと懸念しておられるのです。それに、さらなる仲裁の労を取ります前に、この件につきまして、貴方の本当のお気持ちを知りたいと言っておられるわけです」とだ。

「自分の身内を欺くような真似が私に出来るとしての話ですが、ヒックマン殿、日頃から私のことではなはだ無遠慮な態度を取ってこられたわけですが、そのようなハウ嬢に対して私は、身内の者にも白状していないことを認めるほどの義理を負っていると、貴方としてはそのようにお考えでしょうか」

「お詫びいたしましょう。ただ、ハウ嬢のほうでは、貴方がお便りをなさったわけでもありますし、貴方が筆になさったことにつきまして、私を通してですが、お尋ねしても構うまいとのお考えなのです」

「私のことは、ヒックマン殿、多少なりとも貴方にもお分かりいただけたでしょう。貴

方としては、私が冗談を言っているようにお考えでしょうか。それとも、本気だとお考えでしょうか」

「快活な紳士とお見受けいたします。ご機嫌も麗しく、といったところですね。ハウ嬢の代理としてお願いいたしておりますのは、貴方とハーロー嬢の和解のため、ハウ嬢が口利きをなさることを、貴方がお身内の方々と心を一つになさって、本当に、誠心誠意、願っておられるのかどうか、そこを知りたいということだけなのです」

「ハーロー嬢と和解出来ますなら、この上なく嬉しいことでしょうし、もしも、そのような至福をもたらしていただけるのでしたら、ハウ嬢には大変な恩義を負うことになりましょう」

「結構でしょう。それで、その和解の条件ということですが、結婚にご異存はないものと考えて宜しいですね」

「結婚を好ましく思ったことは、生涯一度もなかったのですよ。貴方には率直なところを申さねばなりませんが、ヒックマン殿」

「それはお気の毒なことですね。私は非常に幸福な状態だと考えております」

「そのとおりになると宜しいですね、ヒックマン殿」

「そのとおりであろうと、疑っておりません。それに、ハーロー嬢を得られることになれば、多分、貴方もそう思われることでしょう」

「仮にも私がだれかと結婚し、幸せになることが出来るとしたら、それはハーロー嬢を相手にしてのことになるのでしょうね」

「驚きましたね。では、結局のところ、貴方はハーロー嬢との結婚は考えておられないわけだ。あんな辛い思いをさせた上で　…　」

「どのような辛い思いでしょうかね、ヒックマン殿。あのように潔癖なお嬢さんですから、他のだれの目にも些細に映ることを、ひどく強調してみせたのでしょう。それは疑いのないところだと思います」

「私がそれとなく聞き及んでおりますようなことが　…　失礼いたしますが　…　仮にもあのお嬢さんの身に加えられたとしますと、お嬢さんといたしましては、些細な訴えでは済まないものがおありでしょうね」

「お聞き及びの点をお教えいただきたいのです、ヒックマン殿。お咎めの向きに対しましては、嘘偽りのないところをお答えしましょう」

「ご自分のなさったことは、貴方が一番よくご存じでしょう。あのお嬢さんが〈報いられるに最も値する、そして、最も不当な扱いを受けた女性〉であることは、貴方も認めておられるのです」

「いかにも。ただ、どのようにお聞き及びなのか、分かると嬉しいですね。ハウ嬢が貴方を通してぶつけておられるご質問への私の返答についても、おそらく、それ次第ということになりましょうから」

「では、私がお答えしても、ご機嫌を損ねられては困りますよ。貴方のほうでお尋ねなのですからね。まず第一に、ハーロー嬢に結婚等々の約束をなさったとのことでありますが、その点はお認めくださるのでしょうね」

「なるほど。すると、私を非難なさりたいのは、拝察いたしますに、私が結婚することなしに、その〈等々〉のほうに食指を動かしたということになるのでしょうね」

「やれやれ、ウィットに富むお方として通っておられるのは承知しておりますが、ひとつお尋ねしてはいけませんかね。貴方のお考えの中では、こういった事柄が軽視され過ぎてはおりませんでしょうか」

「あることが為されてしまった場合、そして、避けられないという場合には、精々それを活用するのが当を得たことなのですよ。令嬢のほうでもそのように考えてくださると有難いですね」

「ご婦人方が騙されるようなことは、あってはならないと考えております。婦人相手の約束も、少なくとも、他のどんな人間との約束にも負けないほどの拘束力を持つのです」

「貴方はそのようにお考えだろうと確信しておりますよ、ヒックマン殿。また、貴方が極めて誠実な善人であることも、私は確信しております」

「相手が男性であれ女性であれ、いつでも約束は守ろうと考えております」

「立派なお言葉ですね。それと別な振舞いをしていただくよう説得するつもりなど、私にはさらさらないのですよ。だが、その他にはどのようなことをお聞き及びですか」

我が許嫁が事態をどんな見方でハウ嬢に話していたのか、また、ハウ嬢がそれらをどの程度までヒックマン氏に伝えていたのか、俺はその点をしきりに知りたがっているのに違いないと、ジャック、貴公はそんなふうに考えるだろうな。

「失礼ながら、その点は私の今回の用向きには入っていないのです」

「ところが、ヒックマン殿、私の用向きには入っているのですよ。貴方が私の質問への返答を拒んでおられるというのに、私のほうでは貴方のご質問にお答えするなどということは、貴方も期待なさらないだろうと思うのです。さあ、他にはどんなことをお聞き及びでしょうか」

「そうですね、どうしてもとのことでしたら申しますが、ハーロー嬢ははなはだいかがわしい家へ連れて行かれたと聞いております」

「いや、確かに、住人たちは思ったほど善人ではありませんでした。その他にはどんなことをお聞きでしょう」

「お嬢さんは尋常ならざる形で不意を突かれたのだと聞いております。極めて卑劣な手口とのことですが、ただ、どのようなものかは申し兼ねます」

「おっしゃるわけには行かないのですか。想像なさることは出来ないのでしょうか。それじゃあ、私からお話しいたしましょう。おそらく、不躾なことが少しばかりお嬢さんに対して為されたのでしょう。お嬢さんが眠っておられる間のことです。このような形で不意を突かれた女性はかつていなかったと、貴方はそうお考えでしょうか。ご存じでしょうが、ヒックマン殿、眠りに就こうとしているご婦人方というのは、男の中でも最も慎み深い者が相手であっても、その身を委ねることにはすこぶる慎重なものです。それに、何故そうなのでしょう。そんな頃合には不意打ちがありそうだと、ご婦人方のほうでも予期しているのではないのでしたらね」

「しかし、失礼ですが、お嬢さんは眠気を誘うようなものを何か与えられたのではありませんか」

「そうなのです、ヒックマン殿、そこが問題なのです。お嬢さんが与えられたと言っておられるのかどうか、私は知りたいのですよ」

「私もお嬢さんの書かれたものをすべて読んだわけではないのです。ただ、極悪非道の

仕業だったと聞き及んでいるのですよ。失礼とは存じますが」

「勿論、構いませんよ、ヒックマン殿。ただ、仮にそのとおりだといたしまして、ご婦人がワインのせいで欺かれるといったようなことは、これまで一度もなかったと貴方はお考えでしょうか。世界一用心深い女性にしても、この炎天下での仕事で喉の渇いている時に、弱いもののつもりで飲んだ強い酒でごまかされることがあるかもしれないと、そのようにはお考えにならないのでしょうか。そして、あのお嬢さんは、こんな具合にして深い眠りに落ちるものと仮定しまして、そのような卑劣なつけ込まれ方をしたただ一人の婦人だとお考えなのでしょうかね、貴方は」

「たとえ貴方の言っておられるとおりだといたしましても、ラヴレース殿、この問題は軽々しく扱うべきものではありませんね。おっしゃるよりははるかに重大なように私は思うのですが」

「この点を懸念なさるどのような理由を貴方はお持ちなのでしょう。お嬢さんは何とおっしゃっているのです。どうか、お教えいただきたい。こうも熱心にお願いをする理由があるのですよ、私には」

「まあ、ハウ嬢ご自身にしても、すべてを知っておられるわけではないのです。あのお嬢さんは令嬢にお約束なさったのです。委細のすべてについては、それまで生きているならとのことですが、適切な折を見てお知らせするというのです。ただ、まことに悪質な事件であったことが分かる程度にはお話しくださったのですよ」

「ハーロー嬢はまだ委細のすべてを話してはおられないとのことで、私としては嬉しく思います。そこで、お嬢さんからはまだとのことですから、私の言葉として、貴方のほうからハウ嬢にお伝えくださって構わないでしょう。今この時にいたるまで、ハーロー嬢の心は貞節そのものなのですが、ハウ嬢にしても、あるいは、この世のいかなる女性にしても、ハーロー嬢以上に貞節では有り得ないのだということをです。お嬢さんが不当な扱いを受けたということ以外、詳しいことは決してお知りにならぬよう、令嬢にお伝え願いたいのです。お嬢さんがどのようなことを言っておられるのか知りませんが、彼女の正直さについては極めて高く評価しておりますので、彼女が語る片言隻句のそのことごとくが真実であることは、たとえそれが、私をどれほど凶悪な姿に描く言葉であっても、目を瞑ったまま同意するつもりだとお伝えください。私のほうからお嬢さんを責める事柄としましては、ただ三点あるのみだということをお話しいただきましょう。一つは、彼女が受けたという不当な処置について、その埋め合わせをする機会を彼女は私に与えようとしないという点です。二つ目は、彼女は自分の嘗めた苦難のことをだれにでもすぐに知らせてしまうものですから、われわれ二人のどちらにとっても何とか評判を保つ形で、それらの被害を救済しようといたしましても、私の力の及ばないことになってしまうという点です。いかがでしょう、ヒックマン殿、こう申し上げれば、このご来訪の目的のいずれかの部分にお応えすることになりましょうか」

「いや、これでこそ名誉を重んじる方のお言葉だと思います。ただ、貴方がおっしゃるには、お嬢さんを責めるべき三つ目のことがあるとのことですね。それは何なのか、お尋ねしても構いませんかね」

「お話しすべきなのか、すべきではないのか、分からないのですよ。仮にお話しいたしましても、おそらく信じてはいただけないでしょう。だが、あのお嬢さんは真実を語ろう

となさるでしょうし、ただ真実のみを語ろうとするのでしょうが、もしかすると、真相のすべてをお話しにはならないかもしれないのです」

「是非、ひとつ……いや、妥当なことではないかもしれませんね。ただ、おっしゃることが大変興味を引くのですよ。まさか、あのお嬢さんに不身持ちなところなどないはずです。ないことを願っております。ハウ嬢にいたしましても、すべてに亘ってお嬢さんは完全無欠であると信じておられないのなら、お嬢さんを深く愛しておられるとは申せ、あれほどまでお嬢さんのために肩入れはなさらないものと確信いたしております」

「私といたしましても、ハーロー嬢のことはあまりにも深く愛しておりますゆえ、彼女に対するハウ嬢の評価を下げたくはないのですよ、ヒックマン殿。とりわけ、他の友人ことごとくから見捨てられているわけですからね。ただ、たとえお話しいたしましても、おそらく、おいそれとは信用していただけないでしょう」

「私といたしましては、まことにもって残念至極でありますし、ハウ嬢とて同じお気持ちでしょうね。もしも、このお気の毒なお嬢さんが、ご自分の行状のゆえに、貴方にお願いし、このような隠し立てをしなければならないのだとすればです。お見受けいたしますに、貴方は、お家柄や財産の点で際立っておられる上、紳士としていかにも相応しい方でありますから、よもや、ご自分の身を軽くなさるために、このような若い淑女に重荷を背負わせるような真似はお出来にならないものと思うのです。失礼とは存じますが」

「構いません、構いません、ヒックマン殿。私を侮辱するつもりは一切なしにお見えになっているとのことですからね。私も遠慮いたしませんので、忌憚なく願います。ハーロー嬢の考えでは、自分に残された唯一の友人ということになりましょうが、その方がハーロー嬢へ寄せておられる高い評価に水を差すような言辞を弄しますのは、繰り返しになりますが、私といたしましてもはなはだ気が進まないのです」

「この不幸なお嬢さんをお咎めになる、貴方の三つ目の点ですが」と、あいつが言っていた。「私が承知いたしますのは適当なことではないのかもしれません。しかし、お嬢さん自身のあの無慈悲なご一族を別にいたしますと、お嬢さんの操の堅さにつきまして、だれかが露ほどの疑念でも口にしているのを耳にしたことは、私は一度としてないのです。確かに、ハウ夫人は一度、お嬢さんのお一人と話し合われた後に、全面的に正しいとは言えない点がお嬢さんの側にあるのかもしれないのだと、そのようにおっしゃっておられました。しかし、それ以外には、私は一度として聞いては……」

「う、うーん、君」と、俺が物凄い唸り声を上げ、強張った姿勢で目の前へと詰め寄ったものだから、あいつは慌てて飛び退いていたよ。

「あのお嬢さんの貞節に疑いを挟むなど、ほとんど冒涜にも等しいことだ。無垢なことでは、ウェスタ女神に仕える女祭司(三八)をも凌いでいるのだよ、彼女は。何せ、その女祭司たちでさえ、自分たちの守る火で血をたぎらせることが多いのだからな。あのように試練の場に立たされ、すべての試練をあのように耐え抜いた花のごとき乙女は、この世の始まりから現在に至るまで、いかなる時代も生み出したことはないのだし、また、断言しても構わないが、将来に亘っても、この世の終わりに至るまで、決して生み出すことはないのだ。失礼ながら、ひとつ言わせていただきたい。貴方にしても、見たことも、知ったことも、耳にしたこともないはずなのだ、ハーロー嬢に匹敵するもう一人の女性などは」

「これは、これは、お詫びいたします。お嬢さんに疑いを抱くつもりなど、私にはない

のです。そのような受け止め方の出来る言葉一つでも私が口にしているところは、貴方も耳にしておられないはずです。お嬢さんのことはこの上なく尊敬申し上げております。ハウ嬢はご自分の魂を慈しむように、お嬢さんを愛しておられるのです。また、お嬢さんはご自分と同じほど貞淑なのだと確信しておられるのでなければ、そうはなさいますまい」

「ご自分と同じほど、ですって　…　勿論、ハウ嬢のことは高く買っておりますよ。しかし、言わせていただけるなら　…　」

「何をおっしゃりたいのでしょうかね、ハウ嬢について。何か、ハウ嬢のお名前に傷のつくようなことを、大胆にも口になさるおつもりではないでしょうな」

「大胆にも、ですと、ヒックマン殿。言わせていただけるなら、それこそ大胆なお言葉ですぞ、ヒックマン殿」

「そのきっかけとなった言葉こそ、ラヴレース殿、故意のものだというのでしたら、大胆不敵と言えそうですな。私は簡単に腹を立てる男ではありません。とりわけ、仲裁役を仰せつかっております場合にはです。しかし、この世のだれであれ、私の耳に届くところで、ハウ嬢について非難がましい言葉を口にすれば、聞き捨てというわけには行かないということですよ」

「よくぞ申されました、ヒックマン殿。そのような仮定の話とはいえ、貴方の気迫は不快ではありません。しかし、私が言わんとしたところは次のとおりなのです。つまり、自らの試練を耐え抜き、その試練の下で、また、試練の後にあっても、ハーロー嬢がやってのけたように振る舞って見せるまでは、その身を彼女になぞらえて然るべき女性などというものは、私見ではありますが、一人としてこの世にはいないということなのですよ。ご覧のとおり、私は己に不利な話をしているのです。その点はお分かりでしょう。と申しますのも、道楽者と見做されている私ではありますが、正邪の尺度を自分の行動基準のところまで引き下げるような真似は、決してしないつもりでいるからなのです」

「いや、これはまた、実に当を得たことですね。大変心の気高いことだとも申せましょう。しかし、残念ですな。失礼ですが、これだけ立派な言葉を表明出来るお方が、その言葉に合わせて行いを律しようとなさらないというのは、残念な話です」

「それは、ヒックマン殿、別の問題です。われわれはすべて、何かの点で過ちを犯すものですよ。私としては、ハウ嬢がハーロー嬢のような試練に遭われることは望んでおりません。また、大層立派な方がお相手ですし、令嬢にはそのような目に遭われる危険など一切ないわけで、私は嬉しく思っているのです」

気の毒に、ヒックマンの奴、俺が褒めるつもりで話しているのか、それとも、非難しているのか、判じ兼ねているみたいな顔をしていたよ。

「しかし」と、俺は言葉を続けた。「貴方の興味を掻き立てたようですから、この上なく素晴らしい女性に害を及ぼしかねない、そんな疑念を抱きながらお帰りにならないためにも、私が彼女を咎めるべき三番目の点としておりますことに、それとなく触れておきたいと思うのです」

「どうぞ、お気に召すように。妥当なことではないのかも　…　」

「極めて不穏当ということでもないはずですよ、ヒックマン殿。そこで、ひとつお尋ねいたしますが、ハウ嬢としてはどのようにお考えになるでしょうね。もしもお友達が、別の恋人を励まそうとの考えから（間違いなく、私への仕返しのためだと確信いたしており

ますが）、私に敵対する気持ちを一層固めているのだとしたらです」

「何ですって　…　まさか、そんなはずはないでしょう。まったくの話、ハウ嬢といたしましては、たとえそのことを思いつかれたとしても、絶対に是認はなさらないでしょうね。と申しますのも、ハウ嬢が貴方を好意的に見ておられるとは、貴方もほとんどお考えにはならないでしょうし、令嬢のほうでも、お友達に対する貴方のお振舞いには決して賛成しておられないわけですが、あちらのお嬢さんが一緒になるべきお相手は、貴方以外にこの世にはいないし、貴方と結ばれるのでなければ、一生独身を通すべきなのだと、ハウ嬢がそのように考えておられるのを承知しているからです」

「復讐心と強情な気持ちというのは、ヒックマン殿、はなはだ説明に窮するようなことをご婦人方に行わせるものなのです。その最良の者たちにもですよ。腹立たしく思っている男の両目をつぶさずにおくくらいなら、むしろ、自分の目を片方諦めてみせるのです」

「これにはどう申して良いものやら、分かり兼ねます。しかし、あのお嬢さんがだれか他の者からの求婚を励ますなんて、有り得ない話です。それも、こんなに早いうちにですからね。そうです、伺っておりますところでは、お嬢さんは大層お具合が悪く、ひどく弱っておられると　…　」

「怒りが弱まっていないのは確かですね。お嬢さんの動きのすべてを熟知しているのですよ、私は。だから申し上げるのですが、信じていただけるかどうかはともかく、彼女はもう一人の恋人のゆえに私を拒んでいるのです」

「有り得ますかね、そのようなことが」

「本当なのです、誓っても良い。彼女がこの点をまだハウ嬢に匂わせていないとお考えでしょうか」

「えゝ、確かに。もし匂わせておられたのでしたら、このような時期にハウ嬢の依頼を受け、貴方に迷惑をお掛けするようなことはなかったはずです」

「じゃあ、お分かりですね、私の正しいことが。彼女は虚言を弄しているわけではないのですが、しかし、すべての真相をお友達に語ってはおられないということですよ」

「このようなことにはどう申したら良いものやら　…　」と、まことにもって愚かしいまでの当惑ぶりなのだ。

「おや、おや、ヒックマン殿。感情の激しい、憤慨している女性の行動や、その手口を説明出来る者などいるのでしょうか。女性の激しい怒りがもたらす恐るべき結果や、望みを挫かれた時に、女性はどんなことをしでかすものかについて、私の承知しているかぎりでも、お話し出来ますことは際限なくあるのです。

ドリントンというお嬢さんがおりましてね［多分、貴方はご存じないでしょう］。父親の馬丁と駆け落ちをしたのですが、ある休職中の将校との結婚を父親が許そうとしないからというわけです。この男がたまたま窓の下を通った時に、娘さんは（すっかり感情が高ぶっていたこともあり）一目で恋に落ちてしまったというのです。

サヴィッジというお嬢さんがおりました。母親の御者と結婚したのですが、母親がウェールズへの旅行を許してくれなかったという理由です。財産の面で不釣合な遠い親戚の男と娘さんとが手を結ぶのを懸念してのことだったのですが、この親戚の男が母と娘の家に一週間お客として来た際、娘さんがその男にかなり好意を示していたのです。

サンダーソンという若い後家さんがおりました。この婦人は、貴族の家の下の息子に捨

てられたと思い込み、（セアラ・スタウト（三九）みたいに）入水自殺を図ったのです。

サリー・アンダーソン嬢は［きっと貴方も彼女のことは聞いておられるでしょう］、相応しくない相手からの求婚を励まそうとしたのを伯父に妨害され、腹いせとして、靴造りの徒弟をしている、不格好な下種の腕に身を投じたのですが、その男が足に合わせて誂えてくれたばかりの靴を履いて、駆け落ちをしたのです。もっとも、それ以前には一度もその男と顔を合わせたことがなかったし、その後はずっと憎み通すことになったのです。そして、ついにはアヘンに手を出したのですが、己の愚行を忘れるためのことです。

しかし、クラリッサ・ハーロー嬢ほどの淑女の、何とも説明し難い怨恨の情が提供してくれる例よりもさらに強烈な適例などは、果たして有り得るでしょうか。お嬢さんは、今この瞬間にも、お体具合が優れないというのに、かつて人の目に触れた者の中でも最も不快な輩の一人に励ましを与えるだけでなく、ある意味では、その男に媚びを売ってもいるのです。これはハウ嬢のお耳に入れてはいけないことだと思います。しかし、お耳に入れるべきでしょうね。このような途方もなく軽率な行動は慎むよう、お嬢さんを説得していただくためです」

「いやはや、何とも奇妙ですね。ハウ嬢はこの件をまったくご存じないのですよ。間違いありませんが、お嬢さんには目を向けようとなさらないでしょうね、ハウ嬢も。もしも本当なのでしたらね」

「本当なのです。まったくの事実なのですよ、ヒックマン殿。私が貴方の目の前で話しているのと同じように、現実のことです。それに、そいつは醜男でしてね。見た目が私以上の醜男なのです」

「貴方以上ののですと　…　いやいや、貴方がイギリスきっての美男子のお一人なのは間違いのないところでしょう」

「それはともかくとして、ひどい悪意に駆られたお嬢さんが私に優先させている奴というのは、不格好な痩せこけた下郎でして、人間というよりは骸骨なのですよ。それに、服装ときたら　…　貴方もお目にかかったことはないでしょうね、あんなにめかし立てた輩には。滅多にコートを羽織らず、靴も履いていない。頭の禿げた野郎なのだが、禿げ隠しの鬘を買うのも渋っているのですよ。何しろ、とてつもない欲張りで、決して満足することがないのですが、ただ、えらく金を持っているのです」

「いや、ちょっとした冗談でしょうね、このお話は。間違いない。凡人には分かり兼ねますよ。貴方のような紳士はどう理解したら良いものか。だが、そのお話に少しでも真実が含まれているとしたら、一体何者なのでしょう、その男は。どこかのユダヤ人、あるいは、欲の皮の張った平民がお嬢さんの窮状につけ込んだということかもしれませんね。そして貴方は、鋭い機知が赴くままに、そいつを描いておられるのでしょう」

「いえいえ、この悪党はイギリスの各州に、それに、イギリス国外にも地所を所有しているのですよ」

「だといたしますと、東インドの総督あたりでしょうか。以前お嬢さんは、国を出ようと考えておられたのです。ただ、おそらく、貴方はずっと冗談を言っておられたのだろうと思いますね。でなければ、われわれも耳に挟んでいたに違いありませんからね、その人物のことは　…　」

「耳に挟んでいた、ですって　…　えゝ、勿論、われわれ全員が奴のことは耳にしてい

るのです。ただ、だれ一人奴と親しくなろうとする者はいないのです。このお嬢さんを除きますとね。しかも、お話ししましたとおり、私に対する遺恨から出ていることなのですよ。そいつの名前というのは、要するにですね、〈死〉ですよ。〈死〉なのです」と、足を踏み鳴らしながら声を張り上げ、まともに耳元で叫んだものだから、あいつは半ヤードも飛び上がっていたよ。

あれだけまごついている人間の姿には、貴公もお目に掛かったことはないはずだ。あいつの様子ときたら、まるで、恐ろしい骸骨が目の前におり、自分のほうは申し開きの用意も出来ていないと言わんばかりなのだ。少し気を取り直すと、チョッキのボタンを弄んでいたが、それがまた、数珠をまさぐりながら祈りを唱えていたみたいな格好なのだ。

「こいつこそが」と、俺は言葉を続けた。「彼女の求婚者なのです。いや、彼女は実に積極的だから、自分から奴に求婚しているのです。ただ、決して結ばれることのないようにと、私は願っているのです」とな。

先程は態度によって、そして、今度は表情でだが、あいつは予想していた以上の気迫を示してみせたのだよ。

「失礼ながら、私は不和の調停人として来ているのです」あいつが言っていた。「平静を保つのが私の義務なのでしょう。しかし」と、俺に詰め寄り、「平和を、そして、その促進ということを極めて大切に考えているとは申しながら、無礼に甘んじるつもりはないのですよ」と言うのだ。

あいつのことはこんなにも愚弄してやったわけだから、脅しに近い言葉ではあるが、これを真に受けるのは妥当なことではなかっただろう。しかしながら、ハウ嬢に言い寄るようなあいつの厚かましさが、俺には恨めしく思われるのだよ。

「私のほうに侮辱するつもりはありませんが、ヒックマン殿、貴方にも挑戦なさるおつもりはないものと推測いたしております。その推測に則ってのことですが、お詫びいたしましょう。ただ、これが私らしいところでしてね。悪気はないのです。悲しいからといって、心を動かされることがないのですよ。六分間続けて厳粛な顔付きをしていることがどうしても出来ないのです。自分はあのモア大法官（四〇）の子孫だと信じておりまして、絞首台に登りましても、ジョークの一つは飛ばさずにいられないことでしょう。ただ、これまで申し上げてきたことから、私がハーロー嬢を、それも、当然至極な根拠に基づいてのことですが、世界中のすべての女性に優先させているということは、貴方にもお分かりいただけるでしょう。そして、私が署名いたしましたものや、身内の者たちに約束いたしました点、また、私の代理として身内の者たちに約束してもらうようにした事柄などがありますのに、あの素晴らしい女性とは、彼女自身が持ち出す条件で喜んで結婚したいと思っておりますことを信じていただくのに、少しでも困難を伴うというのが、私にとっては不思議に思われるのです。貴方には白状いたしますが、ヒックマン殿、私は卑劣な手段で彼女に害を及ぼしたのです。かたじけなくも、彼女が結婚に同意してくださるのなら、彼女にとっては最高の夫になってみせると断言いたしましょう。しかし、にも拘らず、彼女が今しているように、今後とも自分の言い分を訴え、われわれの両方を世の晒し者にするようであれば、どちらの評判も落とさずに絆を結ぶことが出来るなどと考えるのは、無理な話でしょうね。それに、ヒックマン殿、懸念しておりますところを述べるに当たって、ひどく不真面目な格好を装っては見せましたが、私としては、彼女が体調を損ねてしまうこと

を恐れているのです。死を遠ざけていることも可能な時に死を求めることによって、避けたいと思う時には避けられなくなってしまうのが心配なのですよ」

この冷静で包み隠しのない話し振りのお陰で、強張っていたあいつの筋肉も緩み、満足げな表情へと変わったのだ。チャリオットのところまでお供をすると、あいつはひどく丁寧な挨拶を数回繰り返していた。俺もほぼ同じ回数お返しをしておいたよ。

てなわけで、ヒックマンはご退場だ。

手紙　七十九

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

［手紙七十二、七十六、七十七への返事として］

七月二十一日　金曜日　夜

俺の手に今届いたところだが、ここ数通の貴公のけしからん文面について、二、三の段落を費やすことにしよう。そして、俺がこれから筆にするものは、ヒックマンとの面談について触れた手紙を携えて行く、その男に託して届けることにする。

どうやら、貴公の身には急速に改心への動きが生じているものと見えるな。長々と時間の掛かった貴公の叔父貴の最期、そして、最期に向けての各段階を通して傍らに付き添ったということが、貴公にとっては改心への下拵えとなったのだ。だが、思いどおりにやることだな。俺も我が道を行くことにする。幸福というのは、己が行うことに喜びを感じるところにあるのだよ。悲しがるのが貴公には楽しいのであれば、貴公にとってはそれで良いわけだ。陽気になるのと同じくらいにな。もっとも、貴公と一緒になって顔を立ててくれるような者は他には一人もいないだろうがね。

しかしながら、令嬢の病には俺もはなはだ心を乱している。原因はすべからくあの忌々しい逮捕劇にあるのだ。それ以前には、彼女は俺と相棒全員に対して完全に勝ち誇っていたのだよ。俺があの一件に手を染めていないということは、貴公も確信しているところであるし、彼女も信じてくれるものと俺は期待しているよ。他の点については、何度も言ってきたことだが、よくあるケースなのだ。ほんの少し普通でない状況があるという、ただそれだけのことなのさ。だとすれば、彼女から、そして、貴公から、これほどまでに手厳しい仕打ちをされるというのはどうしてなのだろうな。

彼女の衣装やレース等々を売りに出すことについてだが、ショッキングな話に聞こえることは認めよう。同じ血を引いているとも思われない、彼女の親戚のあの連中は、不正なばかりか、何とも執念深い恥知らずの一団ということだな。彼女自身の地所の多額に上る地代未納金と同様、彼女の現金も自分たちが手にしているわけだが、その両方を押さえているのは、彼女を困らせるためだと公言して憚らないのだ。だが、彼女としては、あの高慢で生意気な友人、ハウ嬢からいただくことも出来るのではないのかな。必要額以上の金をだよ。それに、俺が大喜びしないとでも思うのかな。彼女のお役に立つことをだよ。だとすれば、自分の衣服を手放すからといって、女の意地を除けば、そこに何があるというのだ。それに、確信こそないが、これは喜ぶべきことではないのかとも思うのだよ。俺へ

の腹いせとして、彼女がこんなことをしているのだとすればな。望みを挫かれた美女の中には、首を吊ろうとした者もいれば、身投げをした者もいるのだよ。我が愛しの君の場合は、自分の衣装に腹いせをしたまでの話だ。感情の作用の仕方というのは、それが宿る胸それぞれにより、気質とか体質とかに従って違ってくるものなのさ。それに、彼女が処分するものについて、その値段の三倍までだが、代わりの品を買い与えるのを俺が嫌がるとでも思うのかな、貴公は。そういうわけでもあるし、ジャック、この件にはさほど大きな問題はないということだな。

　如才のない医者の慰撫の言葉に彼女がどれほど心を動かされているのか、貴公はそれを眼前にしているわけであり、このことからも貴公には判断出来るはずなのだが、あの忌まわしい逮捕劇と陰気な父親の呪いの言葉とが、恐ろしいほど彼女の心を傷つけてしまったに違いないということだよ。俺と会ってくれるだけで良いのだが、彼女がそうしてくれるなら、俺としては大きな希望を持てるわけだ。俺の態度、悔恨の情、慰めの言葉が、彼女に対して少しは好ましい効果をもたらすことになるかもしれない、とな。

　それにしても、俺のことについて、貴公は諦めが早すぎるぞ。ひとつ冗談抜きで言わせてもらおう。彼女はすべてに亘って傑出しているわけだが、俺の身内の者たちの熱心な仲裁や、あのじゃじゃ馬娘のハウ嬢からの切に望まれている執り成し、そして、俺自身から委託され、貴公が代行している任務にしても、皆の遜った態度と高い評価、俺の痛切な悔恨の情とを如実に示す例であって、これ以上のことは何一つ為し得ないようにも俺は思うのだ。だから、彼女のほうでさらに検討を加えてくれるまで、差し当たっては、このまま事態を静観したいのだよ。

　だが、ここで、気の毒なベルトンについて二言、三言述べておくことにする。正直に言って、俺も初めはあのトマシンの不実さには少々唖然としたよ。あの女の偽善がこれほどの長きに亘って暴かれずにいたとはな。ごく最近のことだが、あの女の悪辣さについていくつか、暗に仄めかされていたのだ。それで、顔を合わせた際に、貴公の耳に入れておくつもりだったのだよ。本当のことを言えば、俺はいつもあの女の目を疑っていたのだ。目というのは、貴公も承知だろうが、心が外を眺める時に通例用いている窓なのだ。戸口には姿を見せようとしない多くの女が、窓辺からこっそり、それと分かる目配せを投げ掛けてきたのだよ。

　ただ、トムには経営の才がまったく無かったのだな。本当に無頓着な奴なのだよ。自分自身の仕事に一度だって目を通そうとしないのだ。叔父の遺した地所が奴の破滅の元になったというわけさ。妻にせよ妾にせよ、だれだって、奴の財産を手に入れたら、好きなようにに弄んでいたに違いないのだ。

　奴のこの種の弱点について、また、奴が腹黒い人間の所有物になってしまう恐れがあることについて、俺のほうからそれとなく話してやったことが何度もあったのだよ。ところが、奴としては骨を折るのが嫌だったのだな。いつだって、奴は帳簿から逃げ出していたのだよ。今じゃあ、気の毒なことに、自分自身から逃げ出したがっているわけだがね。財産をすっかり巻き上げてしまうような女が奴のところにいなかったとしても、奴の御者とか従僕とかが奴の総理大臣になって、負けず劣らず効果的にそういうことをやってのけていたことだろうな。

　それでも、あの女は奴に操を立てているものと、俺は長年そう考えていたのだよ。少な

くとも、あの息子たちは奴の子だと思っていた。息子たちは筋肉隆々として骨太だが、連中の頑丈な脚や肩は、健康な母親譲りなのかもしれないと想像していたのだ。華奢な体つきとは言えないからな、あの女は。それに、トムも数年前はしっかりと顔を上げ、話し振りにももっと男らしいところがあったのだよ。近頃の奴に比べるとな。気の毒なことに奴は、気管が狭くなったことから、ここしばらくは内に籠もったキーキー声だし、半ば吐き出されてしまったような肺なものだから、ゼイゼイやっている有り様なのだ。

貴公の言では、われわれが皆逃げて行くと、奴はこぼしているそうだな。そうさ、何と言っても、ベルフォード、結局は楽しいことではないのだよ。愛着を持っている可哀相な仲間に刻々と死が迫るのを見守りながら、何の役にも立てずにいるというのはな。ただ酒を汲み交わす程度の浅い付き合いもあるが、俺の友情のほうは、我が家臣のだれに対してであれ、その種のもののようには考えてもらいたくないのだ。しかしながら、陽気な心の持ち主について言えば、陽気だからこそ親しくなったわけだが、当初の親密さを生み出していた理由がなくなると、友情も消滅してしまうものなのだ。ただ、この種の友情というのは、〈相棒意識〉といった言葉で区別されるほうがより適切なのではないだろうかな。

しかし、俺の友情は、今も言ったことだが、これよりももっと深いところに根差したものなのだよ。奴の役に立つために喜んで全力を尽くそうとする点では、今だって、これまでと少しも変わるところはないのさ。

このように、トマシンに関して奴が抱えている難題のすべてから、奴を救い出してやる用意が俺にはあるという、その一例としてだが、どうだろう、ちょうど今俺の頭に閃いた便法を奴に提案してはもらえないだろうか。

こういうことだ。トマシンとそのガキ供を（どちらも自分の子ではないと、ベルトンが確信している場合だが）、ある行楽のパーティーに加わらせようと思うのだ。あの女はいつだって、俺には愛想が良かったのだよ。帆船の上でのパーティーということにするが、そのために雇った帆船で、ティルベリーかシェピー島への旅だ。あるいは、メドウェーを遡っての遊覧の旅だよ。そして、うまく船をひっくり返してやろうというだけの話さ。俺は魚みたいに泳ぎが達者だからな。俺が指定する者たちを拾い上げるために、もう一艘船を用意しておかねばならないが、最悪の事態に備えてのことだよ。そうなれば、人並みのことをしようという気持ちがトムにあるとしてだが、喪服一着で用が足りるわけだよ。三人全員に対してな。いや、例の従兄弟だという馬丁が船尾から飛び込むかもしれないぞ。そして、二人が岸辺に打ち上げられないともかぎらないだろう。トマシンとそいつが手に手を取ってな。

これは友情としてはありふれたものではないと、そんなふうに貴公は言うだろうな。それはそうと、われわれのところへ来るよう、奴を説得してくれ。歓迎してやるつもりでいるが、奴も生涯を通して、今度ほどの歓迎を受けたためしはないはずだ。来てくれないのであれば、俺に出来る何か別の役目を見つけてもらうのだ。見つけてくれたなら、この両肩に翼を取り付けることにしよう。そして、号令が掛り次第、奴の窓から飛び込む姿を見せてやろうと思うのだ。

モーブレーとターヴィルが貴公宛にそれぞれ便りをするつもりでいる。だから、連中の最期について貴公が描いて見せた、あのショッキングな光景に関してだが、貴公のことを然るべく取り扱うのは、あの乱暴者たちに任せることにする。貴公自身の過去の罪過が眼

前に現れて貴公を見据えていることは、その光景からも看て取れるし、己のいたらなさを自覚していることもあって、この忌まわしい概要を貴公に描かせることにもなったのだろう。俺が嬉しく思うのは、貴公が例の悪霊をつかまえて来て、こうも早々と貴公自身の面前に鏡を掲げさせていることだよ(ア)。あれを筆にした時には、確かに貴公は本気だったのだろう。また、激しい悔悟の念があってのことに違いない。というのも、これほどの光景を遊び気分で描けるとしたら、そいつはよほど冷酷非情な悪党に違いないからな。

改悛と結婚とに関する貴公の決意についてだが、どちらから先に取り掛かるつもりなのか、ひとつ考えてもらいたいのだよ。俺の忠告に従ってくれるなら、手間を取らずに済むはずだ。結婚を先にすることだな。何しろ、そうなれば、十分にあり得る話だが、その結果として、貴公の胸には後悔の念が急激に押し寄せて来ることになるから、一挙に両方が手に入るというわけだよ。

手紙　八十

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

七月二十一日　金曜日　正午

今朝は、名を告げてもらうとすぐにだが、聖なる淑女へのお目通りを許された。彼女のことはそんなふうに呼んで構うまい。今述べようとしていることが、その点を十分に証明してくれるはずだ。

彼女はまずまずの一夜を過ごし、機嫌がずっと良くなっていた。もっとも、体のほうは弱っており、容貌にも明らかに衰えが目立つのだ。

ロヴィック夫人とスミスの上さんが付き添っていて、体力の割にはあまりにも書き物に精を出し過ぎていると、穏やかな口調ではあったが、窘めていた。五時からずっと起きているというのだ。彼女のほうではこう言っていた。ここしばらくと比べると、昨夜はよく眠られたし、気分が伸び伸びとしており、心も結構くつろいでいるように思われる。それに、そのように考えるべき根拠もあるのだが、手持ちの時間というのはほんの短いものであるし、その間に為すべきことはたくさんあるわけだから、自分の時間を上手にやりくりしなくてはいけないのだ、とだよ。

姉に手紙を書いていたところです、と彼女は言っていた。二度、三度と試みてはみたのだが、納得の行くものにはなっていない、とのことだ。ただ、最後のものは発送しなくてはいけない、とも言っていた。

彼女のほうでは、俺が時々それとなく漏らした言葉からして、そう考えて然るべきなのだが、俺は彼女と彼女の身内の者たちとに関わる事柄一切を承知しているように思われるし、もしもそのとおりであれば、父親が彼女に垂れた厳しい呪いのことを知っているに違いないのだが、その呪いは一つの点については、つまり、この世での見通しということに関しては、恐ろしいほどに、それも、極めて短時間に成就されたのであり、そのため、もう一つの点についてもはなはだ懸念される、と言っていた。その呪いを撤回してもらうた

(ア) 二百五十八頁を参照のこと。

めに、姉への働きかけをしていたというのだよ。そして彼女は、「父が撤回してくれますことを私は期待しているのです」と言っていた。「でなければ、私、ひどく惨めになってしまいますもの。それでも「と、話しながら息を切らしているのだよ。不安なためだ」、どのような返事がまいりますことやら、今にも震え出してしまいそうですわ。何しろ、薄情な姉ですからね」とだ。

俺は彼女の身内の者たちを非難するようなことを口にした。不当な呪いの言葉が取り消されない場合に、連中が思われても仕方のないようなことについてだ。これを聞くと、彼女は俺の言葉を遮り、実に恭しい態度で両親のことを語っていたが、その口調は、これほどの娘さんに非情な仕打ちを加えた点に関し、連中の非を（もしも無慈悲なままでいるならの話だが）倍加せずにはおかないものだった。

両親を責めてはいけない、と彼女は言っていた。そういうことをなさるのが、親友ハウ嬢のいけないところなのです、とだ。それにしても、自分の罪は何と由々しいものなのだろうか、とも言っていた。授けた教育からして、もっと立派な実りを期待して当然な、そんな我が子の軽率さに憤りを示したからといって、最高の両親を（自分が背いてしまうまでは、そのような両親だったのだが）芳しくない姿に見せてしまうのだから、というのだよ。彼女の件に関しては、いくつか厄介な事情があったのは事実だが、この宿命的な事件の全体を通して、己を弁えない振舞いをした者というのは、彼女自身の他にはだれ一人としていないのであり、その点については、俺の友人が教えてくれるはずだ。それゆえ、彼女としては、自ら背負い込んだ罰を甘んじて受けることにする。両親に何か落ち度があるとすれば、それはただ、彼女の罪を少し緩和することになるいくつかの状況について知ろうとしなかった点だけであり、また、彼女のことを実際よりも罪深い娘と考え、事情も聞かずに罰したところだ、というのだよ。

まったくの話、貴公のことを呪うところだったぞ、ラヴレース。すべてに抜きん出ているこのお嬢さんの、その素晴らしさを示す例の一つ一つが、貴公の有罪を証明しているのだ。彼女が命を落とすようなことになれば、貴公にとっては、貴公自身のことをあらゆる男の中でも最も呪わしい人間と考えて然るべき理由が出来ることになるだろうな。

そこで、俺は彼女に懇願したのだよ。このような荘厳なまでの寛大さ、寛容さを実践してみせることが出来るうちに、その優しさを一人の男に差し向けていただきたい。その男の心臓は、自分が彼女に与えた損害のゆえに、血管の一本一本が血を滲ませているし、彼女の損害を償うよう、生涯に亘って努力したいと思っている男なのです、とだ。

話題がこのように詳細な点に及んだ辺りで、婦人たちは引き下がろうとしたのだよ。だが、彼女は二人が出て行くのを許さなかったのだ。彼女は俺に向かって次のように言っていた。これからも俺が、彼女にとっては極めて不愉快な話題を、そんなにも熱心な態度で持ち出そうとするようであれば、二度と訪ねて来てもらっては困る。それに、俺が君のために友人として尽力する必要もないのだが、というのは、その問題について思うところすべてを、すでにハウ嬢宛に書き始めたからだ、とだよ。ハウ嬢からの手紙への返信としてなのだが、その手紙の中でハウ嬢は、高貴にして尊敬すべき君の親戚たちの願いに敬意を表し、同じ論拠を主張していたというのだ。

「それはそうと、あの人にお伝えくださっても構いませんわ」と、彼女が言った。「あの人のことは心の底から拒絶しているということをです。ただし、疑念の余地を一切残さな

いような、こんな断固とした調子で申し上げてはおりますが、でも、激情に駆られて申し上げているのではないということもです。それどころか、あの人を憐れむことが出来るような［偽証の罪を犯すなんて　…　情けない恥知らずですわ。あの人に責任のないことなど、果たしてあるのでしょうか］、そんな気持ちにもなれるよう努力をしているのだとお伝えください。また、今少し努力を重ねました上でも、あの人を許すことが出来ないようでしたら、目指しております状態に到達する資格が自分にあるとは思わないことにする、という点もお伝え願います。私が希望しておりますのは」と、目と共に天に向かって差し上げた両の手を握り合わせながら、「天上の父がすでに私たちすべての者にお示しくださいましたお手本を、私の大切な地上の父がこの私に示してくださることなのです。そして、堕落いたしました娘を許すことによって、あの男を許すよう、私を教え導いていただきたいということです。あの男にいたしましても、私の現世での見込みこそ台無しにしてしまいましたが、来世での望みまでは破壊していないものと思いますので」と言うのだよ。

ここで一休みするのだな、人でなしめ。だが、貴公に命令する必要はないのだ。これ以上は続けられんのだよ、俺には。

手紙　八十一
ベルフォード氏より［承前］

彼女の崇高な言葉や態度が、あの時、俺にとってどれほど心打つものであったのか、君にも想像してもらえることだろう。ただそれらを思い出し、書き写すだけでも、俺は筆を置かずにはいられなかったわけだからな。婦人たちは目に涙を浮かべていたよ。俺は暫く言葉もなかったのだ。やっとのことで、「肩を並べる者とてなき素晴らしき人。真似ようもなく善良なる人よ」と、俺は彼女に呼び掛けたのだが、婦人たちを前にしてのことでもあり、我ながら恥ずかしくなるような声色だった。それにしても、あのようにうら若いお嬢さんの、この崇高なまでの心の広さに出会いながら、平然としていられる者がどこにいるというのだ。その愛らしさが、口にする言葉すべてに気品を添えているのだよ。「思いますに」と、俺は言った［そして、いわば自分でも気づかないうちにだが、俺は実際に片膝をついていたのだ］。「本当に天使を目の前にしているのでしょうね。御前に平伏し、貴女が目指しておられる世界へ向け、私を先導してくださるよう、お力添えを願わずにはいられないくらいなのです。しかしながら　…　だが、どう申したら良いのでしょうね　…　ただ、何かささやかな事で、私を貴女のお役に立てていただきたいのです、敬愛いたしますお方よ。われわれと共におられます間に、貴女が満足してくださることに貢献出来たのだと考えるような、そんな栄誉に与りたいものと（私が貴女よりも長生きをする場合はですが）願っているからなのです」とだよ。

ここで俺は一息入れた。彼女は黙ったままだ。俺は話を続けた。「私を使っていただけるようなお役目はないのでしょうか。お身内の方々全員から見放され、立派な人々であることは疑いないとは申せ、知らない人たちに囲まれておられるわけですからね。伝言をお届けするとか、手紙を認めるとか、あるいは、伝言か手紙かのいずれかによりまして、お父上、おじ上たち、兄上、姉上、ハウ嬢、M卿、あるいは、卿の妹さんのご婦人方のところ

へ直接お伺いすることで、お役に立つわけにはまいらないものでしょうか。私の友人の願望とか、彼の希望に沿いたいという私自身の願いとはまったく関係なく、貴女のお役に立つために雇っていただける、どのような仕事でも構わないのです。私がお役に立つわけには行かないものかどうか、マダム、ひとつお考えいただきたいのです」とだ。

「感謝いたしますわ。本当に心から感謝いたします。でも、差し当たり思い浮かべることの出来ます、あるいは、少なくとも決心することの出来ます事柄で、ご尽力頂けるものは一つもございません。私の出しました手紙がどのような返事をもたらすのか、それを確かめて見たいのです。それまでは …」

「私の命と財産は」と、俺は口を挟んだ。「貴女のお役に立てていただくよう、捧げているのです。このようなことを申しますのをご容赦願いますが、ここには血の繋がった方はだれ一人いらっしゃいませんし、また（私は貴女の不幸な事件のことを十分承知しておりますので）、ある意味では、友人をお作りになる手段にも事欠いておられるに違いないのです」とだよ。

彼女は、何とか止めさせようという真剣な態度で、俺を遮ろうとしていた。

「御免蒙りまして、マダム、先を続けさせていただきます。この件につきましては、以前からどのようにして触れたら良いのかと、二十ほども方策を練っていたのですが、今の今まで切り出す勇気がなかったのです。口火を切りましたからには、ひとつ申し出をさせていただきたいのですが、せめて貴女の金庫番を勤めたいということなのです。恩義を受けたくないお気持ちなのは承知しておりますし、その必要も貴女にはないのです。貴女には、自由になればの話ですが、十分な財産がおありなのです。ですから、貴女の生死に関わらず、そこから返済していただくということで私は結構なのです。これは保証いたしますが、私の申し出のこととか、あるいは、貴女がお納めくださったこととか、そのいずれにつきましても、あの惨めな男には決して知らせたりいたしません。ただ、お許しいただきたいのです、このささやかな …」

そう言って俺は、彼女の椅子の陰に百ポンドの銀行券を落としたのだが、何としても置いて帰るつもりで持って来たものなのだよ。それに、彼女にも話したとおり、もしも納めてくれていたなら、貴公も決して知るはずのなかったことなのだ。

「私、大層辛くなってしまうのです、ベルフォードさん」彼女が言っていた。「このように心の温かいところをお示しくださいますとね。それでも、貴方が付き合っておられたお仲間のことを考えますと、このようなことがお出来になるのを知りまして、悪い気持ちはいたしません。貴方と私が知っておりますあの人のような人間は、この世にただ一人だけなのだということ、それは、人間の本性のためには喜ぶべきことのようにも思われるのです。ただ、ご親切なお申し出の件ですが、それがどのようなものでありましても、お引き取りくださらなければ、私は大変迷惑に存じます。ご親切をいただかなくても、大丈夫なのです。私には二度と用のないものですが、差し当たりましての必要を満たすのに十分な品を所持しておりますし、必要に迫られました時には、ハウさんを頼ることも出来るのです。そうする旨を約束しているのです。ですから、何卒、このご厚意は強要なさらないでいただきたいのです。それはご自分でお拾いください。私に心の平安と寛ぎとを与えようとのおつもりなのでしたら、このご厚意は強要なさらないことです」と、苛立ちを交えた話し振りなのだ。

「一言だけ、マダム　…　」

「一言もなりませんわ、お落としになったものをお拾いになるまでは。お申し出がございましたけれど、貴方の信義とかご厚情とかに疑いを抱いているわけではないのです。でも、この話題につきましては、もう一言もおっしゃってはいけません。私、耐えられないのです」

彼女は身を屈めようとしていたが、辛そうなのだよ。それで、俺が彼女の先を越したというわけだ。そして、見たところ、俺が期待していたのとは裏腹に（意図が純粋だっただけにな）、彼女にとっては心の平静を乱すもととなった、そんな申し出をしたことを許してくれるよう懇願したのだ。ただ、俺としては、彼女のような心が辛い思いをするなどということは、考えるだけでも耐えられなかったのだよ。日頃から潤沢に得ていた生活上の便益に事欠くというのは、彼女が辿っている聖なる歩みの中で、彼女に悪い作用を及ぼしたり、妨げとなったりすることもあり得るからだ。

「大変親切にしてくださいますのね」　彼女が言った。「それに、とても好意的な見方をしてくださるのですね。でも、もう容易には、今辿っております道筋から追い出されることはないものと考えております。健康の衰えとともに、いよいよその思いが強まっております。私を逮捕して監禁した人々が、私を自分たちの狙いどおりに動かすためですが、私に苦痛を与える便法を思い付いたように考えたのは疑いのないところです。でも、厚かましいとは存じますが、この私は、本質的な点におきましては、現世の災いなどで品性を落とすことのない心を備えているつもりなのです。監獄とか貧窮とかを持ち出すことによって、正しい考えを持った心に、そのような束の間に過ぎ去ってしまう災難を避けるためですが、故意の卑劣行為を犯させることも出来るなどと考えている、そんな浅ましい人たちは、生まれつき備わっております節操の力というものを（暗に自慢をしているように聞こえましたら、お許し願います、というのが彼女の言葉だったが）ほとんどご存じないのです」とだ。

そう言うと、彼女は俺から窓のほうへと向きを変えたのだが、その態度は言葉に相応しい威厳を湛えたものであり、また、あの瞬間には、彼女が肉体よりもむしろ霊の世界に属している存在であること示すものだったのだよ。

何という度量の大きさなのだろう。これだけ堅固な基盤を持つ美徳だ。貴公の術策のそのことごとくを挫くことが出来たとして、何の不思議もないな。また、あの素晴らしい分別を彼女から奪うような、非道の手管に頼ることを（貴公の呪わしい目的を達するためにだが）貴公に強いたとしてもだよ。

婦人たちは非常に心を打たれていたが、とりわけロヴィック夫人がそうで、スミスの上さんにこんなふうに囁き掛けていた。「ここにいらっしゃるのは、女の方ではなくて天使なのですわ、スミスさん」とだよ。

俺は、彼女の身内の誰宛にであっても一筆認めましょうという、自分の申し出を再び口にし、そして、次のように話したのだ。俺の考えでは、彼女の心を占めているように思われる事柄ということで、彼女の身内の者たちが示している容赦のない怒りについて、勝手ながら、H医師に知らせたところ、医師のほうでは、もしも彼女が不都合なこととは受け止めないようであれば、自ら筆を取り、彼女の病状を身内の者たちに知らせる旨を申し出てくれたのだ、とだ。

先生のご親切には感謝いたします、と彼女は言っていた。ただ、彼女の知らぬ間に、あるいは、同意なしに、その手の処置が取られることのないようにしてもらいたい、とも言っていた。姉に出した手紙がどんな効果をもたらすか、様子を見ることにする。自分の望みとしては、父親が呪いの言葉を取り下げてくれることだけであり、お願いするつもりでいる最後の祝福よりも前に取り下げてもらいたい。他の点に関しては、自分がどれだけ苦しんでも、苦しみ過ぎているようには身内の者たちは見てくれないだろうし、自分としても、苦しみに甘んじるつもりである。というのも、生きたいという想いを起こさせてくれるようなことは、もう何一つとして有り得ないからだ、というのだよ。

スミスの上さんが降りて行った。そして、すぐに戻って来ると、令嬢と俺に尋ねるのだよ。今日は食事を付き合ってもらえないだろうか、とな。自分の結婚記念日だから、というのだ。ロヴィック夫人とは約束済みであり、われわれのご相伴が得られるなら、他にはだれも呼ばないことにする、というのだよ。

魅惑的なお嬢さんは溜め息をつき、首を横に振った。「結婚記念日ですか」と、彼女が繰り返した。そして、「末永くご結婚の記念日を重ねられますよう願っておりますわ、スミスさん。でも、私は失礼させていただきます」とのことだった。

亭主のスミスが上がって来たのだが、同じ頼みごとをするためだ。二人は揃って俺の都合を尋ねた。

「令嬢が宜しければですが、私はためらうことなくお受けいたします。それに、別の約束のほうは延ばしましょう」と答えたが、現に約束をしてあったのだ。

すると彼女は、腰を下ろしてくれるよう、皆に頼んだ。そして、「ロヴィックさんとスミスさん、貴女たちは何度か、私自身の身の上につきまして、掻い摘まんで知らせてほしいとのご希望をそれとなく漏らしておられましたね。そのように信じて当然の理由もあるのですが、私の身の上すべてをご存じであり、私がそれを公平に語っているかどうかお教えすることもお出来になる、この殿方もいらっしゃることですから、もしも皆さんお暇でしたら、ご関心の向きにお応えしたいと思うのですが」というのだよ。

皆が、亭主のスミスも含め、興味津々たる様子で腰を下ろすと、彼女は自らの話を語り始めたわけだが、それを繰り返すに当たっては、出来るかぎり彼女自身が用いた言葉に近づけるよう努力したいと思うのだ。彼女に対する君の残虐な行為について、彼女がどう感じているのかと同様、それをどのような態度で語ったのかを知っておくこと、そして、君のお身内の方たちとしては、彼女が君に好意を示してくれるよう望みを抱いておられるわけだが、その望みの叶えられる余地はいかほどなのか、その点について知っておくのは重要なことだと、君がそのように考えるのは分かっているからだ。

「最初、ここにお部屋を借りました時には」と、彼女が口を開いた。「私といたしましては、ほんの短い間だけ滞在する考えでしたし、そのようにお話しもいたしましたわね、スミスさん。ですから、立派な身内の元から誘い出され、極めて悪辣な恥知らずたちのところから逃げてまいりました、大変不運な娘であるということ以外には、自分のことにつきましては一切お話しするのを避けていたのです。

貴女をあまり驚かせないためにも、これだけの説明をいたしますのは義務だと、私はそう考えました。若い娘が全身を震わせ、息を切らせながら、奥のお部屋へと貴女のお店を走り抜けて行くのを目になさったのですもの。自分のものの上に粗末な服を羽織り、泊め

てください、保護してくださいと懇願し、与えるものといたしましては、支払いは十分にいたしますという、ただの口約束だけです。所持品はと申しますと、すべてが一枚のハンカチに収まっているわけですからね。

逮捕されました時のことですが、三日三晩に亘りまして、私が突然に姿を消しましたのには、もっとびっくりなさったことでしょう。そして、私の身の上話の暗い部分につきましては、おそらく、私自身よりもよくご存じのこちらの殿方から、私はただ不運な娘なのであって、罪深い娘ではないとのお話があったわけですが（貴女がおっしゃっていたことですわ、ロヴィックさん）、それでも、私という人間につきまして、正直な方たちが疑念を抱くことのないようにいたしますのが、私の務めと思うのです。

そこで、ご承知いただきたいのですが、ある一つの点におきましては（たった一つの点だけで、と申すところでしたが、それは致命的なものだったのです）、この上なく寛大な両親に対しまして、私は親不孝な子であったということです。と申しますのも、私の両親の残酷なところと一部の人たちが呼んでおりますものは、二人の愛情が過剰なゆえに生じたこと、そして、失望から来ていることに他ならないのです。私にはもっと立派なことを期待して当然な理由があったわけですからね。

私は（最初のうちは、身内の者たちの黙認もあってのことでした）ある男性からの訪問を受けておりました。家柄にも財産にも恵まれた人です。ただ、後ほど分かったことですが、だれもが持つことの出来るように考えておりましたものよりももっとひどい、邪悪な考え方の持ち主だったのです。私の兄は、とても強情な若者なのですが、その当時、家を離れておりました。そして、帰宅しますと（前からの遺恨がございますし、明らかに、私よりもその紳士のことをよく知っているものですから）、その人の訪問には全面的に異を唱えたのです。それに、一族の間では大変な力を持っているものですから、他の殿方たちを促し、私に求婚させたのです。そして、最後に兄は（数名の方々が断られました後）極めて不快な人、中立な人すべての目に不快と映るような人物を紹介いたしました。その人に好意を寄せることは私には出来ませんでした。皆は手を結びまして、その人と一緒になるよう私に強要いたしました。身内の者たちが敵対しております紳士と兄との間でありました果たし合いも、その紳士に対する皆の敵意を強固なものにしていたのです。

手短に申しますと、私は監禁されたのです。そして、大層むごい仕打ちを受けたものですから、軽率にも短気を起こしまして、皆が憎んでおります男と逃げる約束をしてしまったのです。不埒な考えだと、あなたたちはおっしゃるでしょうね。ただ、ひどく憤慨させられていたのです。でも、後悔いたしまして、その男と逃げたりはしないことに心を固めました。それでいて、私に対するその男の信義にも、また、愛情にも、疑いを掛けることはなかったのです。私がその男の愛情を受けるに相応しくないなどと考える人は、一人としておりませんでしたし、私の財産にいたしましても、軽蔑されるようなものではなかったからです。ところが、愚かなことに（身内の者たちは今なお、不埒にも、また、策を弄してのことと考えておりますし、皆を捨てる意図があってのことなのだと想像しているのです）、内緒でお会いしましたところ、騙されて連れ去られてしまったのですが、まことにお粗末な騙され方であったと申さねばならないでしょう。ただ、あの男との密会がそうだったのですが、そのようなひどく軽率な行動に踏み切ってしまいました場合には、他の人でも私と同じように欺かれ、不意を突かれていたかもしれませんわね。

しばらく田舎の農家に滞在いたしまして、その間ずっと、あの男は信義を守った態度で接しておりましたが、その後、ロンドンの手頃な下宿へ私を連れて行ったのです。もっと設備の良いところが用意出来るまでの間、ということでした。ところが、そこは（あの男のほうでは、実際には、承知の上での計画だったのですが）下劣な、極めて下劣な女の住まいであることが分かったのです。もっとも、そのような女だと気づきますまでには、長い時間が掛かりました。と申しますのも、私は都会とか、そこでの習わしとかにつきましては、何も知らなかったからなのです。

その後に起こりましたことを繰り返すわけにはまいりません。本当に、前代未聞の卑劣な手管だったのです。弱味を突かれて不名誉に甘んじますような、そんな機会は一切与えなかったのですからね」

そして、ここで（涙の溢れている目に当てたハンカチで、あの美しい顔を半ば隠しながら）彼女は一息入れたのだ。

まるで忌まわしい思い出から逃げ出そうとするみたいに、彼女は急いで話に戻った。「その後、あの男の不在中のことですが、私はその嫌悪すべき家を抜け出し、あなたたちのところへ参ったのです。そして、この殿方の説得がございまして、私も、あの恩知らずな男は卑劣な逮捕劇を黙認したのではないと、概ね考えるようになったのですが、例の逮捕劇は、疑いもなく、私をもう一度あのいかがわしい下宿へ連れ戻すために為されたものなのです。と申しますのも、あそこの人たちに一切借りは作っていないからです。もしも、代金をお払いすることになっているのでなければですが［と、彼女は溜め息を漏らし、あの魅惑的な目をもう一度拭い、声を小さく、低くして、こう付け加えたのだよ］……〈傷物にされることに対して〉ですわ」とだよ。

「確かに、マダム」と、俺は言った。「他のすべてに関しましては、あの男は有罪でしょう。忌まわしいほどに罪深いのです。しかし、この最後の不埒な暴挙につきましては、彼は手を染めていないのです」とだ。

「結構でしょう。そうあっていただきたいものと存じます。あの災難は、辛いものではございましたが、私にいたしますと、最も軽微な災難の一つなのです。でも、ここからもお気づきでしょうが、ロヴィックさん（私は人妻ではないのかと、貴女は今朝知りたがっておられるご様子でしたからね）、私はまだ結婚していないということです。疑いありませんが、ベルフォードさん、貴方は前からご存じでしょう、私が人の妻でないことは。そして、今では、私は決してだれの妻にもならないつもりでいるのです。ただ、神に感謝申し上げる次第ですが、私は罪深い娘ではないのです。

私の生まれについて申しますと、決して卑しい家柄などではございません。祖父の心尽くしなのですが、私個人の名義になっております、恥ずかしくない程度の財産を持っておりまして、その気があったならの話ですが、父のお世話を受けずに済む立場なのです。でも、決してそのような気持ちを起こしたりはしないつもりです。

私の父は大変に裕福です。初めてあなたたちのところへ参りました時には、私は別の名で通っておりましたが、あれは、例の不実な男に捜し出されますのを避けるためのことだったのです。その男も今では、この殿方を通じてですが、私を悩ませたりはしないと約束しているのです。

私の本名がハーローであるのは、もうお分かりですね。クラリッサ・ハーローと申しま

す。まだ、二十歳になっておりません。

父と同様、私には素晴らしい母もおります。名門の出で、見事な分別を備えておりますし、もっと良い子供に恵まれて当然という女性なのです。二人とも、私のことは、目に入れても痛くないという可愛がりようでした。

優しいおじが二人おります。大変な財産家でして、一門の名誉というものに大層気を配っているのですが、私はそれを傷つけてしまったというわけです。

二人にとりまして、私は喜びの種だったのです。それで、おじたちの屋敷と父の屋敷とを合わせまして、私には我が家と呼べるものが三軒あったわけです。と申しますのも、二人は交互に私を自宅に置いてくれていましたし、私を呼び寄せたいと、善意からの争いにもなり兼ねないほどだったのです。ですから、私は、一年のうちの二ヶ月は一方のおじのところ、もう二ヶ月は別のおじのところ、六ヶ月は父の屋敷、そして、私のことを喜びとしてくださる大切な親戚の他の者たちのところで二ヶ月を過ごす、といった具合だったのです。そして、だれのところにおりましても、私の元へは、いつも残り全員からの手紙が殺到していたのです。私が自分たちのところへ戻って来るのを願ってのことです。

要するに、私はだれからも愛されていたのです。貧しい人たちのことでも … あの人たちの心に喜びを与えますのを常のこととしておりました。どのような苦難に対しましても、掌を閉じてみせたことはないのです。どこにおりましてもね。でも、今は、私自身が貧しいのです。

そうなのです、スミスさん。そうなのです、ロヴィックさん。私は結婚していないのです。そうお話ししておきますのが適切な処置というものでしょう。そして、私は今、こんなにも大きな災いを招くことになりました軽率な行動の件で、当然のこととして、屈辱と懺悔の日々を送っているのです。神様が許してくださることを願っております。私といたしましては、世間の人たちすべてを、あの男さえもですが、許す気持ちになれるよう努力しているのですからね。あの男は恩知らずにも、また、恐るべき偽証によって［浅ましい男です。自分の悪行のすべてを機知のつもりでいたのですからね］、私をこんな状態に陥れたのです。あの男の幸せのことを念頭に置いておりましたし、来世に至るまで、そうなることを念願しておりました、そんな若い娘をです。身分や財産を備えており、イギリス中のどのような殿方にとりましても、その娘に向かって立てた誓いは守り通すのが得策だという、それほどの遺産相続の見込みもあると思われていた娘をなのです。でも、両親が私を許してくれるようなことは期待するわけにまいりません。私の避難所は死でなければならないのです。私が嘗めることとなりますものの中でも、最も苦痛に満ちたものではございますが、それでも、あの男がしてみせましたような振舞いを私に対して出来る、そんな人の妻になるのよりはましなことでしょう。あの男の生まれや教育、そして、廉恥心にもっと大きな期待を寄せて当然な理由が、私には十分にあったのですからね」というのだ。

「私は承知いたしておりますが」と、彼女は続けた。「かつてはすべての人の喜びであった私も、今では、あらゆる人にとりましての嘆きの種なのです。私とは他人の間柄のあなたたちが、私のことで心を打たれておられるのですね。情け深いことです。でも、もう終わりにする頃合ですわね。憐れみ深いあなたたちは、スミスさんにロヴィックさん、あまりにも強く心を動かされておられますもの」とだ。［というのも、婦人たちはすすり泣いており、亭主のほうも感動していたのだよ］　そして、「自分の悲しい身の上話で、あなたた

ちの結婚記念日を湿っぽくしてしまうなんて、私も粗野ですわね」と言っていた。それから、スミス夫妻の方へ向き直ると、「お目出度い日を何度も迎えられますよう祈っておりますわ、正直で善良なお二人さん。多くの年月を積み重ねられました後に、お二人が心を一つに結び合わせてその日を祝われますのは、拝見いたしましても、何と心地の好いものなのでしょうね。私もかつては……でも、もう止しましょうね。幸福へ向けましての私の見通しのすべては、この世に関しましては、閉ざされてしまったのです。私の望みも、時にもあらず訪れました春の日和に開きかけた蕾や花びらのように、容赦のない霜のために枯れてしまいました。東の風〔四一〕に痛めつけられてしまったのです。でも、死ぬのは一度きりのことです。それに、父が怒りに駆られたまま私に負わせましたもので、この世に関しましては、その一つ一つが字句どおりに実現されたのですが、その苛酷な呪いから解いてもらうまでの間だけでも、もしも命を与えていただけるのでしたら、それだけが、そして、最後の祝福が、私の願っておりますもののすべてなのです。そして、私にとりまして死は、かつて旅路の果てに至りました者の中で最も疲労困憊した旅人にとりましての休息よりも、さらに歓迎されるものになることでしょう」というのだ。

それから、彼女は椅子の背に頭を深く沈め、ハンカチで顔を覆うと、涙をわれわれから隠そうとして骨折っていた。

一言でも声を発することの出来る者は、われわれの中には一人としていなかった。貴公がこの場に居合わせたならば、鉄面皮な破廉恥漢よ、おそらくわれわれも女々しさを恥じることになったであろうし、貴公がこれに目を通す時には、その女々しさについて、とりわけ俺を嘲笑の的にすることだろう。

この後間もなく、彼女は自室に引き下がった。そして、横にならずにはいられなかったらしい。われわれは揃って階下に降り、一時間半ほど彼女への賛辞を並べ立てていた。スミスの上さんとロヴィック夫人は、これほどの淑女の感情を損ねたりするような、ましてや、故意に害を与えるような男性がこの世にいるということに、繰り返し驚きの気持ちを表明し、自分たちのところにいらっしゃるのは天使なのだということを、改めて口にしていた。俺もそのとおりだと思ったし、それは、立派なM卿の邸内に人でなしが一人いるのと同じほどに、確かな話なのだとも考えた次第だ。

貴公には心の底から憎しみを覚えるのだよ。誓って言おう。憎いのだ。時々刻々と憎さが募るのだよ。

J. ベルフォード

手紙　八十二

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

七月二十二日　土曜日

いかなる理由で俺を憎むというのだ、ベルフォード。また、憎さが募るというのは何故なのだ。貴公がこれまで知らずにいた罪を俺は犯したのか。仮に、哀れっぽさで貴公のような心を動かすことが可能だとしても、それで事実を変えることは出来るのかな。いつだって俺は、この比類のない娘さんに対しては、貴公が命にかけて彼女のために為し得るも

の、あるいは、彼女自らが為し得るものにも負けないほどに、公平な扱いをしていたのではなかったかな。だとすれば、貴公の憎しみ、募り来る憎悪の念というのは、およそナンセンスというものだろう。貴公に与えた約束を守り、また、身内の者たち全員に誓った信義を貫くべく、俺は今なお彼女との結婚に固執しているわけだからな。だが、憎みたいのなら憎むことだよ。せめて、筆のすさびにしてもらうためだ。貴公がいくら俺を憎んだとしても、我と我が身を嫌悪する俺の気持ちを越えるわけには行かないのだよ。しかしながら、俺は分かっているのだ。本当に俺を憎んでいるのであれば、俺に向かってそんなことをあえて口にしたりはしないということをな。

それはそうと、結局の話、この女たちに彼女の身の上話をする必要がどこにあるというのだ。用もないのに、こんなふうにわれわれの両方を世の晒し者にしたことを、彼女もいずれそのうち、きっと悔やむことになるはずだ。

病は欲望をことごとく鈍らせ、好きだったものを嫌いにさせてしまうものだが、健康を取り戻すと、事情は一変する。自分に満足したい気持ちを起こさせるのだ。そして、他のだれにでも好感を覚えるようになるのだよ。そうなると、われわれにはあらゆる希望が湧いてくる。一時間一時間が踊るような足取りでわれわれを訪れるのだ。また、自由のことを詠っているアディソン氏の次の詩句は、健康についてもさらに適切に当てはまるかもしれないのだ［何しろ、自由というもの自体が、健康なくしては無意味だろうからな］。

それは陰鬱な自然の顔を晴れやかにし
太陽には美を、そして、日には喜びを授ける（四二）。

というものだよ。それに、すでに彼女がそんなにも長い、そして、興味深い対話を、知らない者たちと持つところまで元気になっていることを、俺は大いに嬉しく思うのだ。

奇妙なことだ。訳も分からないほど奇妙だ。それに、奇妙なのに負けず劣らずひねくれてもいる［つまりは、〈女そのもの〉ということだ］。俺を撥ねつけ、一緒になるくらいなら死を選ぶというのだからな［何という汚らわしい言葉なのだ。なのに、遠慮会釈もなしに、貴公のペンはその言葉を書き送ってよこすのだ］。俺は地のままに行動することで、彼女の怒りを招いたわけだが、彼女の両親は、恥ずかしいほどに立場を弁えない振舞いに及んだのだ。そして今、俺のほうでは、彼女の願いを入れてやるため、柄にも合わないことを進んで行おうとしているのだが、その俺が許してはもらえないのだ。彼女にとって、両親には非の打ち所もないというのにだよ。それに、結婚はすべての侵害を償い、彼女自身の名誉を癒す唯一の手段なのだ。こんな言い方をして構わないだろうが、彼女の〈寛大なる〉仮借のなさには、きっと貴公も矛盾を看て取るに違いないのだよ。ところが、愚図な下郎の分際で、貴公は彼女の後ろに並びたいというのだからな。ヒックマンの襞襟みたいな強張った話しっぷりで、貴公の大望を並べ立て、平身低頭しながら、一体どんな格好をして見せることだろう。日常的な会話においてさえも、この永遠の魅力を湛えたお嬢さんの唇から漏れてくる、その荘厳な言葉の数々に耐えるというのは、貴公の弱い頭にしてみれば、不慣れな話なのだからな。

だが、中でも最も愛嬌のある気紛れといえば、両膝をついて彼女の手へと銀行券を差し出すのではなく、彼女の椅子の後ろに落とした点だな。これほどの婦人に対して、二重の

意味で　…　受け取ることでと、床から拾い上げるためとでだが　…　身を屈めさせるような真似をするというのだからな。恩恵を施す者としては、何とも優雅さを弁えない人間だよ、貴公という奴は。何という不器用な男なのだ。淑女に贈り物をする最善の方法として思いついたのが、贈り物を女性の椅子の後ろに放り投げることだとはな。

彼女が姉にどんなことを書いたのか、ハウ嬢にどんなことを書こうとしているのか、そして、ハーロー家の者たるアラベラからはどんな返事をもらうのか、俺としては見たい気持ちで一杯だ。これらの手紙の写し、あるいは、少なくともその要旨、また、その他の書簡の大要を入手する方策など、何か編み出してもらえないだろうか。ロヴィック夫人というのは、貴公の言わんとするところによれば、信心深い女らしい。令嬢はあれだけ詳しい身の上話をしたのだから、夫人にはあらゆることを話すはずだ。それに、貴公は改心しようとしているのではなかったかな。貴公とその未亡人の考え方が一致しているところからして「その女は何歳なのだ、ジャック。悪魔の仕業で男女の間に交遊関係が出来上がってしまうと、少しでも年格好が似通っている場合には、きっと最後は夫婦になるか、あるいは、ご乱行に及ぶものなのだよ。どうだろう」、先の件について俺を満足させることが貴公にも可能になる、そんな親密な関係を貴公らの間に醸し出すわけには行かないものだろうかな。改宗者というのは、断言しても構わないが、いわゆる善人たちに対して大きな影響力を持っているものなのだよ。そういう人間を、連中は勝手に聖者に祭り上げるのさ。そして、自分たちの栽培する作物として、水をやり、根の周りを耕し、愛情込めて世話をするわけだ。そしてこれは、真に宗教的な自尊心に促されてのことなのだよ。

俺のパリでの愛人の一人は信仰に魂を捧げた女だった。俺を改宗させようと、えらく骨を折っていたのだ。俺の魂のためを思う彼女の親切なる骨折りには、俺も一歩譲ることにした。彼女のほうでは、何らかの宗教への信仰心を俺に公言させることになれば、それは説得へ向けての一歩だと考えていたのだ。カトリックにはカトリックなりに好都合なところがいろいろあるのだ。俺としては、神父を一人連れて来るのを彼女に許してやった。俺の改心はトントン拍子で進んで行ったよ。神父は俺に期待を寄せ、彼女の熱意を称賛していた。俺のほうでも褒めそやしてやったのだ。で、どんな結果になったと思うかな。ここまで読んで見当のつかない娘など、イギリスには一人としていないはずだぞ。一言で言えば、実に幸せな結末だ。何しろ、彼女は俺のところへ神父を一人連れて来ただけではなかったのだ。俺を親父にしてもくれたというわけだよ。そして、互いの改宗に満足した二人は、それぞれの道を進むことになったのだ。彼女のほうはナバラ(四三)へ、そして、俺のほうはイタリアへだが、両者とも、あれほど見事に互いを教導した、あの立派な教えを世に広めようとの意欲に溢れてのことだよ。

だが、話題を元に戻すことにする。この称賛すべき娘さんは、人の結婚記念日についての感想に耽りながら、かなり残念そうにしていたらしいが、俺としては、そこに一つの慰めを感じるのだよ。「私もかつては　…　」と、そんな台詞で、貴公は彼女の言葉を中断していたな。

「彼女もかつては」というのだな。一体何のことだ。あゝ、ベルフォード、どうして強く促してくれなかったのだよ。かつて彼女は何を望んでいたのか、それを説明してくれるようにだよ。

愛情問題においては、女は一度期待を寄せたものを、望みのあるかぎり、いつも期待し

ているものなのだ。それに、われわれは二人とも独身ではないのかな。俺以外のだれかと一緒になることが出来るというのかな、彼女には。彼女以外のどこかの女と一緒になるとでもいうのか、この俺が。

そんなつもりはないのだよ。それは出来ない相談だ。それに、はっきり言って、俺は日一日、時々刻々と、ますます彼女に惚れ込んでいるのだし、今この瞬間にも、我が人生でかつて感じたもの以上の、激しい情熱を彼女に抱いているのだ。しかも、彼女自身の用いる意味合いでだが、まったく高潔な目的を持ってのことだ。そして、ここ一週間というもの、気持ちが変わることもなかった。変わりたいと願うことすらなかったのだ。志操正しい生き方、あるいは、惜しみなく信頼を寄せてもらう生き方が、〈疑い〉と〈不信〉の暮しを押し退けてしっかりと定着し、俺の性質そのものの中に組み込まれたからだ。女が何事にも信頼を寄せず、生涯を通して男に良い振舞いを守らせようとして、自分が押しつける恩義だけでは不足だとばかりに、教会や国家の制裁を持ち出すようでは、そちらの方こそが、確かに、〈疑いと不信の暮し〉というものだろう。

月曜日の午前中のことだが、ちょっとした舞踏会へ出掛けることになっている。アンブローズ大佐が招待してくれたのだよ。家族のことで催されるものだ。どのようなことであれ、俺としてはどうでも良いのさ。というのも、これの楽しいところは、ハウ夫人とハウ嬢が出席するということだけなのだ。勿論、ヒックマンもだ。何しろ、あの婆さんときたら、奴を連れずには外出したがらないのだよ。大佐のほうでは、アラベラ・ハーローも来てくれるものと期待している。彼の周りにいる社交界の者たちは、男女全員が招待されているからな。

大佐には偶然出くわしたのだが、俺が招待に応じるとは、ほとんど考えていなかったものと思われる。しかし、どこであれ、女たちが平気で顔を出しているのに、そんな場所に現れるのを俺が恥じたりすると考えているのであれば、大佐も俺を知らないということだな。ただ、ハーロー嬢の件で俺のことが世間の噂になっているのは、大佐も仄めかしていた。だが、仮にそうであっても、M卿の名言の一つに言及するなら、何か喜ばしいことが進行しているというのに、「床に伏したままでいる」つもりはない、ということだよ。

卿のチャリオットで出掛けることになるので、従姉妹のモンタギューの一人を連れて行こうとしたのだが、二人とも断って来た。それに、俺としては、貴公の相棒はどちらも同伴したくないのだよ。まるで、ボディガードが必要だと考えているように見えるだろうからな。おまけに、片方はあまりにも粗暴だし、もう一方はあまりにも人当たりが良く、また、会場に集まっているはずの真面目な連中の一部の者にとっては、特に俺にとってそうなのだが、度を越した伊達男なのだよ。人というのは付き合う仲間によって分かるものだし、伊達者は「例えば、ターヴィルのように」自分の店に何を置いているのか、服装でもってそれを宣伝しようと、ずいぶん骨を折るものなのだ。確かに、貴公は例外だな。服装こそ洒落者だが、非常に賢い男だよ。しかしながら、極めて不細工な洒落男で、我と我が身に対して二重に悪意を抱いているものだから、喪が明けた暁には、その瞠目すべきけばけばしさによって、貴公の無骨さをますます見苦しいものにしてしまうようにも思われるのだよ、俺様にはな。

初めて貴公を目にした時のことだが、貴公を大馬鹿者と見做すべきか、それとも、生半可な才人と見るべきなのか、大きな謎に苦しんだのを憶えている。貴公の場合、服装のせ

いだろうが、何か間違ったところが目に付いたのだ。俺はこう考えたよ。嘲笑というものが大好きなため、己をその的にするのも厭わないほどだ、ということではないのだとしたら、この男は大変な愚か者に違いないぞ。放っておけばそれほどでもないのに、自分の醜さを一層目立たせようとして、あんなにも骨折っているのだからな、とだよ。

簡素な服装というのは、一般の男女の場合、少なくとも〈慎み〉のあることを暗示しているし、大抵は、口やかましい連中からもお目こぼしをいただけるものなのだ。身体的欠陥にしても、欠陥だと自覚しているように思われる人間に見られる場合には、それを嘲笑する者などどこにいるというのだ。世捨て人は貧しいなどと、一体だれが言ったのだ。だが、自分の不格好さをさらに目立たせようとして安ぴか物を用いるような、実に荒唐無稽な考え方をする奴を容赦する者などは、果たしているのだろうかな。

だが、こういった陽気な外見を装っているとはいえ、俺も内心ムシャクシャしているのだよ。この心のすべては、我が魅惑の君と共にあるのだ。大佐のところに集まった者たち全員を、俺はどれほどの無関心さで眺めることになるのだろうな。心の目には我が愛しの君が浮かんできて、この胸をすっかり占領してしまうわけだからな。

手紙　八十三
ハウ嬢からアラベラ・ハーロー嬢へ

七月二十日　木曜日

ハーロー嬢

お知らせせずにはおられませんが（私からのことゆえ、どのように受け取られましても結構です）、お気の毒に、妹さんが危篤なのです。コヴェントガーデンのキングストリートで手袋と香水を商っているスミスという人のお宅におられます。私が一筆差し上げますこと、妹さんはご存じありません。お父様からの厳しいお言葉のいくつかが、呪いに類したものですが、お体の弱っておられる妹さんを大層苦しめているのです。この場合どうなさるべきなのか、差し出がましいことを申し上げるつもりはございません。貴女はあの方のお姉様なのですもの。あの方のためばかりか、貴女のためにも、一筆差し上げずにおられませんでしたのは、それゆえのことですわ。マダム、

貴女の謙虚なるしもべ

アナ・ハウ

手紙　八十四
アラベラ・ハーロー嬢より［返事として］

七月二十日　木曜日

ハウ様

今朝のお便り、いただきました。話題にしておられる例の不幸者の身に降り懸かりましたことのすべては、私どもが予告し、また、予期していたことなのです。あの男を慰めに

すれば宜しいのです。あの男のためを思って私どもを捨てたわけですからね。あの男も良心が咎めまして、妹と結婚する気になっているのだと聞かされております。私どものほうでは、そのようなこと、実際には信じておりません。妹の具合がひどく悪いということは有り得る話ですね。望みが叶わないことから来ているのかもしれません。あるいは、そうあって然るべきなのだとも申せましょう。ただ、望みを挫かれましたのは、私の知り合いの中では、あの娘だけですわ。

貴女からのことでもありますし、お知らせの件がそれだけ一層喜びをもって迎えられていると申し上げるわけにはまいりません。どこのご令嬢にとりましても、正当化したりいたしますのは恥となりますような、そんな行いに対して立腹したということで、貴女は私どもの一族全員を勝手気ままに扱ってくださったわけですからね。このような不躾をお許し願います。さらに大きな無遠慮さに促されてのことでございもの。

貴女の謙虚なるしもべ

アラベラ・ハーロー

手紙　八十五

ハウ嬢より［返信として］

七月二十一日　金曜日

アラベラ・ハーロー様

そのような底意地の悪さの半分でも分別をお持ちでしたら、貴女にも（意地悪さに溢れていらっしゃるとはいえ）区別するくらいのことはお出来になったことでしょう。貴女たち皆さんに対する好意（悲しむべき事態に至りました場合にも、ご自分を責めるところが少なくなるようにとの気持ちからなのですが）と差し出がましさとの違いをですわ。それも、少なくともお互い様と申して構わない無遠慮さゆえ、貴女からは言われる筋合いのないものですけれどね。妹さんのことを不幸者とお呼びですし、そうなるよう貴女は一肌脱がれたわけですが、その不幸な方のためにも、申し上げられますことのすべてを口にするのは慎むことにいたしましょう。恐れておりますことが起こりました暁には、この胸の中のすべてを（ご要望のあるなしに拘らず）お聞かせする所存です。

アナ・ハウ

手紙　八十六

アラベラ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

七月二十一日　金曜日

アン・ハウ様

貴女の不作法な手紙、受け取りました。だれ一人容赦しない貴女のことですもの、私を見逃してくださるよう期待するわけにはまいりませんわね。慎重で用心深いお母様がいら

っしゃって、貴女は本当にお幸せですこと。でも、そのことを別にしますと、私の母も慎重さでは他人様に遅れを取るものではございません。ただ、私どもは皆、だれかのことをあまりに高く買っておりまして、用心が必要とは考えなかったのです。このはなはだしく悪質な過ちにつきまして、貴女がそんなにもあの娘の肩を持たれますのは、おそらく、何かの理由があってのことなのでしょうね。

妹を不幸にするのに私が一肌脱いでいるですって　…　それは嘘ですわ、あなた。すべて自分一人でやったことなのです。勿論、あの娘がだれかさんのご助言に負うております部分は別にいたしますけれどね。その点につきまして、どなたが一番責任を取ることがお出来になるのか、貴女はご存じでしょう。

お好きな時で構いませんわ。早速にもお胸の内をお知らせいただきましょう。貴女のお考えだと承知いたしました上で、私どもといたしましても、どれほどの注意を払ったものか、判断することといたしましょう。それだけのことですわ。

Ar. H.より

手紙　八十七

ハウ嬢からアラベラ・ハーロー嬢へ

七月二十二日　土曜日

あらゆる人々の注目を集めますことが不幸の種となる人たちもおりますし、少しでも注目するに値すると考えてくれる人が一人もいないお陰で、かえって幸せだという人たちもいるのでしょうね。それだけ一層嫉妬を燃やすのかもしれませんけれどね。でも、重要さに欠けているお陰で、到底切り抜けられそうもなかった危険に遭わずに済むということもございますから、そういった点に感謝するくらいの分別を人々が持ってくださると嬉しいですわね。

白状いたしますが、あのお見事なだれかさんの（その方の主たる欠点は人並みはずれた才能に恵まれておられることですし、不運な点は、あの方の素晴らしさを理解出来ない一組の男女から、兄や姉のような顔をされておられるところなのですが）思慮深いご忠告がなかったなら、私も一時は困難な状態に陥っていたかもしれないのです。でも、不作法の極みにあるような人は私のことを不作法だとお考えになるかもしれませんが、年上だからといって、私は自分のほうが賢明だなどとは思いませんでした。また、そんな不十分な理由で、あんなにも卓越した才能の持ち主に指図をするような、ましてや、虐待するような資格があるようには思わなかったのです。

感謝の気持ちを込め、繰り返し申しますが、大好きなあの方のご忠告は私には大変役に立ったのです。しかも、これは母の用心深さが必要となる前の話なのです。でも、私について間違ったことを伝えるのが、自分たちの浅ましい妬み心を満たすとともに、利益にもなると考えるような、そんな兄と姉がいたとしますと、この私もどうなっておりましたことやら、分からないところですわね。

貴女の素晴らしい妹さんは、実際には、私と同様に貴女も救ったのですよ。お分かりかしら。次のような違いはありますけれどね。つまり、貴女のことはお気持ちに反してです

が、私につきましては、私の意向に沿ってくださってのことなのです。それに、貴女ご自身のお兄様とお兄様の妹さんさえいらっしゃらなかったなら、あの方が道を踏み違えてしまわれるようなことはなかったはずなのです。

お姉さんと妹さんのお二人共が思いのとおりにさせていただければ良かったのにと、本当にそう思います。女性の中でも最も素晴らしい人は、そうなれば、決してお父様のお屋敷を離れることはなかったのです。貴女がどうなっておられたか、お嬢さん、それは私には分かり兼ねますわ。でも、たとえどのようなことがあったといたしましても、貴女がお示しになったことのない慈悲というものに出会っておられたことでしょう。それを受けるに値するかどうかはともかくといたしましてね。また、最悪の場合でも、思いやりに溢れる妹さんとか、妹さんの中でも最も素晴らしい人の姿をした、憐れみ深いお友達とかを失ってしまうことはなかったはずですわ。

でも、どうしてでしょうね、こんなつまらない人に向かって長談義に及びますのは。こんなにも弱い相手を追い詰めるのは何故なのでしょう。最初のお手紙が下劣な恨みごとで終始し、その次のは、悪意や不作法さ同様、偽りと無定見さで綴られているような、そんな人ですのにね。でも、一部だけ、私の胸の内をご披露したかったのですわ。もっとお求めでしたら、喜んでご用意いたしましょう。貴女の妹でないことを神に感謝しているとは申せ、貴女の敵ではない人間といたしましてね。でも、敵でないというのは、二つの点を考慮してのことに他ならないのです。一つは、分不相応にも、貴女があんなにも素晴らしい妹さんと親戚関係をお持ちだからですし、もう一つは、私にとりまして貴女は、憐れみと軽蔑の念を別にいたしますと、少しでも気持ちを掻き立てますような、それほどに重要な人間ではないからですわ。

A. H.

手紙　八十八
ハーロー夫人からハウ夫人へ

七月二十二日　土曜日

親愛なる奥様

ハウお嬢様と私のアラベラとの間で交わされました五通の手紙の写しを、同封の上お送りいたします。奥様は分別と良識とを大層備えておられる方ですし、また（ご自身も母親でいらっしゃいますので）、私どもがかつて溺愛いたしておりました子供の軽率で恩知らずな振舞いのため、一族すべてが味わっております苦しみにつきましては、十分にご理解いただけましょうから、お嬢様が私ども全員に対して用いられました、妙にぞんざいなお言葉は黙認なさるはずはないものと存じます。私どもが不満に思っておりますのはこれだけではございませんが、その他の事柄につきましては、沈黙を守ってまいりました。これらのものとは違い、紙面で書き立てられることはなかったからでございます。私どもがお願いしたい点と申しますのは、我と我が身に破滅をもたらし、また、私どもからあらゆる慰めを取り上げることにもなったのですが、その家族の者たちに恥辱をもたらしました、そんないけない子供の軽率さのゆえに、私どもがどれほど苦しい思いをしてきたのか、そし

て、今も苦しんでいるのか、そのことをご存じない若いお嬢様から咎め立てはしていただきたくないということだけでございます。この件につきましては、賢明なことで名高い奥様のことですから、こちらからお指図申し上げるつもりはございません。最も適切とお考えの処置をお取りくださいますよう、お任せいたします。

貴女の謙虚この上なきしもべ

シャーロット・ハーロー

手紙　八十九

ハウ夫人より［返事として］

七月二十二日　土曜日

親愛なる奥様

ハーローお嬢様への娘の手紙には大変憤慨いたしております。これほどの無礼を働いていたとは、まったく存じませんでした。こういった若い娘たちと申しますのは、ある者は愛情につきまして、また、ある者は友情に関しまして、大変ロマンティックな考えを抱いておりますから、そのどちらのことでも、あの人たちを抑えつけておくのは不可能なほどなのです。その両方につきまして、自分たちの不条理さのことをあの人たちに納得させますには、時間と貴重な経験以外にはございません。娘のことは大層厳しく叱っておきました。ご一族皆様のお悲しみようはいかほどばかりか、その点につきましては、以前から十分に弁えておりますので、義理の弟さんのアントニー・ハーロー様にもお話しいたしましたとおり、お気の毒な堕天使さん　…　こう申しますのは、お姿とお考えの両方についてですが、私たちの想像いたします天使にもっと似通っておりますお嬢様などは、決していらっしゃらなかったはずだからですわ　…　と文通いたしますのを娘には何度も禁じていたのです。でも、あの娘の強情さには疲れ果てまして［自分の娘のことをこんなふうに申しますのは残念なのですが］、またまた譲らざるを得なくなってしまった次第なのです。それに、まったくのところ、あの娘の気持ちは頑として動かないものですから、不機嫌の虫に取り付かれることがあの娘にはしょっちゅうあるのですが、終いには病の発作を引き起こすようなことになりそうで、気掛かりだったのです。

子供のもたらします苦労は、両親以外の者には分かりません。子供のいない人こそ一番幸福なのだと、よく考えたことがございます。それに、一人前の女に成長いたしました娘と申しますのは、これはもう、どうにも抑えようのないものでございます。

ただ、このような手紙を私のナンシーからお受け取りになるようなことは、この先もうないものと存じます。クレアリーお嬢様のご病気のことでは［それも、大変にお悪いように思われますが］、娘に対しまして、やむなく強制力を用いることになりました。さもなければ、お嬢様のお傍へ伺うために、あの娘はロンドンへ遁走していたことでしょう。そしてあの娘は、ロマンティックな友情のために、甘く優しい母への務めを犠牲にしておりますことは忘れ、そういたしますのを友人としての務めだと申しているのです。

お気の毒に災難に遭われましたお嬢様には、過ちを犯されたとは申せ、美点が多々ございますし、もしも、私の娘に仄めかしておられた事柄が本当だといたしますと、この上な

く辛い仕打ちを受けられたことになります。でも、お嬢様に対する貴女様の、そして、あの方のお父様の赦しは、すべて貴女様ご自身の選択に委ねられるべきこと、そして、両親の然るべき権威のためにも、だれであれ、その点に干渉してはならないものと私は考えております。それに、クレアリーお嬢様のほうでは、騙され易さのためにひどい目に遭われますまでは、信じようとなさらなかったわけですが、ハーローお嬢様も書いておられますように、皆様お一人お一人が予期しておられた点でもございますからね。これらの理由からいたしましても、あの方の過ちを軽減して差し上げるための弁護は一切いたさぬつもりでおります。あの方の見事な分別、そして、年齢以上の判断力ゆえに、一層罪の深くなります過ちなのですからね。

ご立派なハーロー様、そして、悩み苦しんでおられますご一族の皆様には、奥様、どうかよろしくお伝え願います。

貴女の謙虚この上なきしもべ

アナベラ・ハウ

二、三日中には、娘共々ワイト島へ向けて発つ予定です。お友達の災難のことから娘の気持ちを切り離しますためにも、出発を早める所存でございます。クレアリーお嬢様の軽率な行動が貴女様を苦しめておりますのと同じく、ほぼ同じくらいに、お嬢様の災難のことに私どもも心を痛めているのです。

手紙　九十

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

七月二十二日　土曜日

大好きな大好きなお友達

海を渡りますちょっとした旅の準備で、私たちは忙しくしております。でも、私、病気になってしまいます。重病になってしまいますわ。もしも、出掛けます前に、快方に向かっておられるとのお便りをいただけないようでしたらね。

芳しくないご容体のことをロジャーズが話してくれまして、私はひどく悲しい思いをいたしました。でも、今はペンを握ることが出来るようになられたのですし、意識のほうもしっかりとし、また、はっきりもしておられるのですから、書き物をすることで得られます楽しみによって、お体具合が良くなりますことを願っております。

これは尋常ではない方法を用いまして、急送いたしますが、お二人のモンタギュー嬢のご訪問のことを話題といたしました十三日の私の文面につきまして、最終的な決定を下されます前に熟考していただきますためにも、時間的ゆとりをもってお届けしたいからなのです。と申しますのも、貴女のお書きくださる内容に応じまして、お二人へのお返事をしなくてはいけないからですわ。

この前のお手紙では、大変きっぱりとした調子で、あの男と一緒になるおつもりはないと結論しておられましたね。あの男には、確かに、このような奥様よりも破廉恥な死に様のほうが似つかわしいのです。でも、逮捕劇に関しましては、あの男は無実であると本当

に信じておりますし、また、あの男のお身内の方々皆さんは大変熱心に嘆願しておられまして、あの男のために、保証人になるおつもりなのですから、皆さんの、そして、あの男自身の懇願に応じられますことが、今では、貴女が講じ得る最善の処置なのでしょう。貴女のほうのご一族には、その点は請け合って構いませんが、和解の余地はないままなのですからね。あの男は分別のある人間です。貴女の良い夫になるということ、そして、いつの日にか悪い人間ではなくなるということも、有り得ない話ではありません。

母は全面的に私と同意見です。また、金曜日には、私の前回の手紙で仄めかしておきました点に従いまして、ヒックマンさんがあの奇妙な破廉恥漢と協議を行ったのです。そして、ヒックマンさんは、ご自分に対するあの男の態度がどうしても好きになれませんでしたし、また、確かに、好きになるべき理由もございませんが、ただ、あの男と一緒になってくださるお気持ちが貴女にありさえすれば、あの男としては、本気で貴女と結婚する覚悟を固めている、とのご意見でした。

もしかいたしますと、私たちの出発前に、ヒックマンさんがこっそりお訪ねするかもしれません。私自身でお傍に伺うわけには行かないのでしたら、あの人に訪ねていただく以外、心の休まりようもございませんからね。その際には、あの驚くべき恥知らずが貴女を素晴らしく褒めそやしておりましたこと、そして、貴女の美徳につきまして正しい評価を与えておりましたことを、ヒックマンさんから報告していただけるはずです。

あの男は、二人のお従姉妹さんも話しておられましたとおり、自らの罪を認めることになりますのに、お身内の方々のご意向を尊重しているのです。あの男がヒックマンさんに話したことなのですが、あの男の懸念しておりますのは、もっぱら、もしも貴女があの男を世の晒し者にし続けたりなさいますと、結婚そのものをもってしても、お二人両方の不名誉を拭い去ることが出来なくなるという点なのです。そして、さらには、「度を越した悲しみようによって、貴女が体調を損ねてしまわれますこと、そして、避けられる時に死を求めることによって、逃れたいと願う時に逃れられなくなってしまうこと」にも懸念を表明していたというのです。

ですから、私の大好きなお友達、もしもお出来になるならの話ですが、この悪辣な男に対する嫌悪の情を克服してくださいますよう、私は命令いたします。貴女はなお生き長らえて、多くの幸せな日々をお迎えになることも可能なのですし、貴女のアナ・ハウにとりましての支えや慰め、そして、恵みとなってくださるのと同様に、もう一度、ご一族の皆さん、ご近所の方々やお知り合いの人たちにとりましての喜びとなっていただくこともお出来になるのです。

十三日の私の手紙へのお返事を待ち侘びております。どうぞ、お返事の用意が出来ますまで、使いの者を待たせておいてください。月曜日の夜に戻りますなら、その人のお仕事に間に合いますし、私がアンブローズ大佐のところから戻っておりますことを知ってもくれるでしょう。夫人の誕生日と結婚記念日の両方を一緒にお祝いいたしまして、大佐が舞踏会を催してくださるのです。今回は、近隣の紳士階級の方々はすべて招待されておりますが、アンブローズ夫人のお兄様に当たる、総督をしておられる方から何か吉報があってのことなのです。

私の留守中のことなのですが、私と母自身につきまして、母は大佐に約束をしてしまったのです。私自身といたしましては、何とか母のお供は断りたかったのです。日時の点で

異存がございましただけに(ア)、なおさらのことです。でも、母はほとんど娘に負けないくらい気持ちが若いですし、それに、私を連れずに参りますのは、あまりみっとも良いことではないと考えているものですから、何を提案しても、私の気に入ることはないのね、などと、私に向かって申すのです。また、つい先頃のことですが、互いに少々舌戦を交えていたこともございまして、私といたしましても、承諾しなければいけないと思っているのです。と申しますのも、避けられます時には、私も言い争いは好まないからです。もっとも、その機会がひとりでに訪れて来ます場合は、努めて避けようとすることも滅多にございませんけれどね。もしも、互いに相手を結構恐れているということがないといたしますと、果たして私たちは一緒に暮らして行けるのかどうか、私にも分かり兼ねるところでございます。私は「何から何まで父親似」ということですし、母のほうは …… 何と申したら宜しいのでしょう …… 「とことん私の母」ってところですからね。何か他に言い様でもありますでしょうか。

あゝ、大好きな方、私たちを不愉快にさせることが、この世では何とたくさん起こるのでしょうね。楽しさを与えてくれることは何て少ないのでしょう。今回の件でも、何の楽しみもないのは確かなことです。と申しますのも、私の心の真のパートナー、そして、私たちはよくそう呼ばれたものですが、「一心同体の友」に生気を与えると言い習わされておりました、その一つの心の主要な半分が、つまり、私の大好きな貴女が［貴女が一歩お入りになるとどこでも、周囲の人々は明るく輝き出したものですし、貴女に次ぐ二番目の人間ということで、本当に重要な地位を私に与えてくださったものですが］その場にいてくださるわけにはまいらないのですからね。貴女とご一緒いたします一時間は、あゝ、常に啓発的な私のお友達［それを本当に渇望いたしておりますが］、私にとりましては、私たち女性が通常最も喜びを感じますあらゆる気晴らしや、すべての慰みごとよりも、計り知れないほどに望ましいものなのです。さようなら、大好きな方 ……

A. ハウ

手紙　九十一
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

七月二十三日　日曜日

私の幸せを願ってくださる貴女の優しいお気持ちは、あゝ、私の一番大切なお友達、どれだけ私を苦しめることでしょう。清らかな友情の絆というものは、また、似通った心同士の結び付きというものは、血による絆よりもはるかに結び付きが強くて、思いやりに溢れたものなのですね。調べも妙なユダヤの詩人が、自分と最愛の友との友情のことを言葉を極めて称揚し、自分に対するヨナタンの愛(四四)は驚くべきもので、女の愛にまさっていた、と述べておりますが、それもまた尤もなお話ですわね。その友情は、神聖な絆に気持ち好く調和しておりますヨナタンの心につきまして、何と高尚な観念を与えてくれることでしょうか。もしも、堕落いたしましたクラリッサに注いでくださる、私のアナ・ハウさ

(ア) 七月二十四日がクラリッサ・ハーロー嬢の誕生日なのである。

んの愛情とそっくり同じものなのだと想定しても構わないのでしたらね。でも、私は貴女が寄せてくださる優しい愛を誇ることが出来るわけですが、是非ともお考えいただきたいのは、恩義に与りますのがすべて一方の側だけに偏ってしまいますと、度量が狭いわけでもない人間の心は、気掛かりな思いで一杯になってしまうのではないかということなのです。それに、私が光を失っております分、貴女が輝きを増すという、ただそれだけのことではないのです。喜んでいただくのを楽しみとしておりましたその大切なお友達に、苦痛を与えることにもなるわけですからね。それも、苦痛だけではございません。情け容赦のない酷評家たちの饒舌な言葉に対抗なさって、傷ついてしまいました私の名を守ろうとなさることで、不信感をも招くことになるのですからね。

私が敬服いたしております説法師の言葉ですが、ほとんど変えることなく、それをしばしば繰り返してしまいますのは、このことがあるからなのです。「どうか、過ぎた年月を返してくれ、神に守られていたあの日々を。あのころ、神はわたしの頭上に灯を輝かせ、その光に導かれてわたしは暗黒の中を歩いた。わたしが子供のころ、全能者はわたしと共におられ、わたしはわたしの父の家にいた。乳脂はそれで足を洗えるほど豊かで、わたしのためにはオリーブ油が岩からすら流れ出た」(四五)とです。

私がラヴレースさんを夫に迎えるよう考えなければいけないのは何故なのか、尊いお母様のご意見にも補強されてのことですが、貴女の理由をお示しくださいましたね(ア)。

それに、十三日付のお手紙が私の手元にございます(イ)。セアラ・サドレアー並びにベティ・ローランス令夫人のご名代として、また、M卿のご名代としての、両モンタギュー嬢からのご訪問とご提案、そして、親切な仲裁についてのご報告が含まれているものです。また、十八日のお手紙(ウ)もございます。私がひどく不面目な、そして、残酷な仕方で逮捕されまして、私の安否が貴女にはお分かりにならなかった時に、あのご令嬢たち、そして、あのご一族に対しまして、私に会わせるよう、いわば要求しておられるものです。

同じように、あのご令嬢たちからのお返事もございます。ご令嬢たちご自身の手によって(エ)、また、あの貴族と令夫人お二人の手で、寛大にも正式のご署名が添えられているものです。それから、あの人なりの軽薄な仕方で、あの卑劣漢自身の署名もあるものです。

大好きなハウさん、これらの手紙と、私の拘禁中に届きまして、数日後まで受け取りませんでした、十六日付けのお手紙ですが(オ)……

そのすべてが私の手元にあるのです。

そして、今の私の頭と心によって考量出来ますかぎりの範囲で、すべての問題につきまして、そして、ご助言の支えとなっております貴女の論拠につきまして、十分に検討を加えたのです。

それだけではございません。貴女ご自身のお考えからばかりではなく、ラヴレースさんのお友達の一人で、私の災難の張本人のことを忌憚なく非難しておられる（隠し立てや下心はなく、誠心誠意からのことと、私といたしましてはそのように考えております）、愛想が良く、人情味豊かなベルフォードさんが請け合ってくださったこともあり、不面目な逮

(ア) すぐ前の手紙を参照のこと。
(イ) 手紙五十九を参照のこと。
(ウ) 手紙六十一を参照のこと。
(エ) 手紙六十四を参照のこと。
(オ) 手紙六十を参照のこと。

捕劇にあの人は手を染めていないものと信じたく思っているのです。

さらには、失礼ながら、貴女のご意見やヒックマンさんのご意見に心からの敬意を表してのことなのですが、あの人は、私が一緒になることを承諾した場合、（お身内の方々の説得に負け、また、不当にも私に加えました卑劣な行為を恥じ）本当に私と結婚する気持ちでいるという、そのことさえも信じたいのです。

『(ア)さて、それでは、すべてを検討しての結果はどのようなことになるのでしょう。次のとおりです。私は既に公言いたしました点を固守しなければならないということ、つまり［お怒りになってはいけませんよ、私の一番のお友達］、このような夫のことよりは、死について考えるほうがはるかに楽しいということです。要するに、この前の手紙で断言いたしましたとおり、決してあの人のものになるわけにはまいらない［仮に、〈なるつもりはない〉という言い方をいたしましても、お許しくださいね］ということなのです。

『でも、貴女は私の理由をお知りになりたがるでしょう。承知いたしております。それに、もしも理由を示さずにおりますと、私のことを、やれ頑固だとか宥め難いとか、あるいはまた、その両方だとか結論なさることでしょう。そしてそれは、死のことを考えたり話題にしたりしております者の身に負わせられますには、仮令正しいものだといたしましても、悲しむべきお咎めだと申せましょう。それでも、私の決定に対しまして、憤りや失望は一切関与していないように申し上げますのは、おいそれとは信じていただけない事柄を口にしていることにもなりましょう。と申しますのは、正直なところ、憤りを覚えているからなのです。強い憤りをです。ただ、理不尽なものではございませんし、その点につきましては、すでに確信なさっておられるわけではないといたしましても、仮にもお知りになることがあればの話ですが、私の身の上話すべてをご承知いただきました暁には、納得していただけるものと存じます。実は、気掛かりになり始めているのですが（この人のこととか、私自身についての自己弁護以上に検討される必要のあります、大変多くのことを為さねばなりませんので）、私が計画いたしましたこと、そして、ある意味では、貴女にお約束いたしましたことを果たします、その時間的なゆとりはなさそうだからです(イ)。

『私の決心を支持するものとしてお示しすべき理由が一つございますが、これは貴女も認めてくださるはずと確信いたしております。ただ、憤りを覚えていることをお認めしたわけですから、怒りと失望とがあまりにも大きな比重を占めております問題から始めようと思います。心に忍び込んでまいりますあの不穏な感情を自分の心から解き放ち、一度便箋の上に、そして、私のアナ・ハウさんに打ち明けてしまえば、それらが私の胸に戻ってまいりますのを永遠に妨げ、その代わりに、もっと立派で穏やかな、そして、もっと快い感情で満たされるだろうとの望みを抱いてのことなのです。

『それに、私の一番大切なお友達、その人の行動が私には嫌悪の的であり、また、それで当然だという、そんな男性を選ぶことに甘んじる必要があるというのでしたら、私のプライドは、すでにずいぶん悔しい思いをいたしておりますのに、十分には屈辱を味わって

（ア）この手紙の二重鉤括弧で『『　』』のように］括られた部分は、ラヴレース氏の一族の婦人たちに宛てて書かれた第七巻の手紙四の中で、後ほどハウ嬢によって転記されたこともあり、その手紙に再録する必要を避けるため、このような区別立てが行われたのである。

（イ）百四十九頁を参照のこと。

いないことになりますわね。何ということでしょう。考えますのも辛いほどの、また、慎みをもって述べますのが不可能なほどの、計画的で不実な残虐行為を加えられましたこの私が、暴行犯を温かく迎えるようなことを考えるというのでしょうか。そんな邪悪な人間に貞節を誓ったり出来るでしょうか。また、今では正体も分かったわけですが、あのような大放蕩児と一緒になることで、自分の救済を危うくしても良いものでしょうか。ズタズタになりました声望を世間の人たちの目に繕って見せるためのことですが、あのように非人間的な手段で声望を奪い去ってしまいました男の寛大な心、それとも、もしかいたしますと、同情心でしょうが、そのようなもののお陰を被っているように映っても構わないというほどに、そこまで貴女のクラリッサ・ハーローは堕落したのだ、少なくとも、落ちぶれてしまったのだと、そのように貴女はお考えなのでしょうか。実際の話、ラヴレースさんを夫にしたいという気持ちがほんの少しでもあって、それを乗り越えてはいなかったのだといたしますと、私の取りました軽率な行動に対する後悔の念も、見掛け倒しの幻想を一歩も出るものではないと考えねばならないでしょうね。

『そうです、間違いございません。暴行を加えた者に向かってペコペコしなければならないのです。そして、おろそかな扱いを感謝しなければいけないのです。

『貴女はもう目に浮かべておられるのではないでしょうか。（貴女がくださったご忠告を守ってのことですが）うなだれた私が、あの人のお身内の前へ、そして、私自身の身内の前へ（最後には、私の身内も私を受け入れてくれるものと仮定しての話ですが）現れるところをです。非難に値するようなことをした覚えのない心から生じます、あの堂々とした自信を奪い取られた姿をです。

『我が家をコソコソ歩き回る私の姿が、貴女の目に浮かんではいないでしょうか。貞淑な女中のすべてを自分よりも高く買い、叱責のためであれ戒めのためであれ、口を開くのをまるで怖がっているみたいにも見えますが、〈ご自分の内側に目を向けるようにしてください、そして、私たちに完全さを期待なさってはいけません〉といった意味合いを、女中たちのもっと大胆なまなざしの中に読み取ることが出来ますのを恐れるからなのです。

『それに、あの破廉恥漢に対して、寛大さだの同情心だのを振りかざして私を咎める資格を、そして、おそらく、あのような性質の罪を許すことが出来たという点でですが、私に非難を向けるような資格を、この私が与えるというのでしょうか。

『あの人がこんなにも計画を練って悪事に耽る人間だなんて、ほとんど思いもしなかったものですから、あの人を目出度く改心へ導くことになるかもしれないと、私も確かにそのような望みを抱いたことはございましたし、自惚れたことに、次のようにも信じていたのです。つまり、あの人は私のことを十分に愛してくれているのだから、あの人のためを思う私の忠告、そして、僭越にもそのように考えていたわけですが、お示しすることが出来るようになるはずの私の手本が、あの人にとって重要な意味合いを持つようにしてくださるだろう、とです。それも、私の道徳観念や理解力のことは、決してあの人も見くびっていたわけではありませんから、なおさらのこと、そのように信じたのです。でも、今では、私のこの第一番目の望みに対しまして、どのような希望が残されているというのでしょう。仮にあの人と結婚するといたしまして、私はどのような姿を呈することになるのでしょう。私自身の務めすべてを捨てるよう唆す機会を一任いたしましたその男に、美徳と道義を説いているわけですからね。それから、そのような夫の子供を授かると仮定いたし

まして、幼い家族を見渡し、奇跡が起こらないかぎりは地獄落ちを運命づけられているという、そんな父親を子供たちに与えましたことに思いを馳せますと、いかがでしょう、心ある人にとりましては、心臓を抉られるような気持ちだとは思われないでしょうか。父親の不品行は、その悪しき手本によって子供たちの間に広まり、いかにもありそうな話ですが、災禍をもたらすことにもなるわけですからね。そして、結局のところ、私に服従を求める権利が自分にはあるのだと考えるような男の人に、罪深くも、私のほうから応じたりいたしますなら、私自身の道徳観念を堕落させ、あの人の矯正人となる代わりに、模倣者になってしまわないともかぎらないでしょう。と申しますのも、朱に交わって赤く染まらない人など、どこにもいらっしゃらないでしょうからね。

『ですから、もう一度言わせていただきますが、この男性のことは本当に軽蔑しているのです。仮にも私が自分の胸の内を弁えているといたしますと、それが事実なのです。あの人を憐れむだなんて … 私の同情には値しない人だというのに、それでも、あの人を憐れむなんて … このようなことをするわけにはまいりません。たとえ、まだあの人のことを愛しているとしてもです。何故って、私たちが愛している人たちに卑劣なところや恩知らずなところがありますのを、痛切に感じていなければならないわけですからね。私は、ですから、あの人を愛してはいないということになるのです。私の魂が潔しとしないのです、あの人と親しく交わりますことはね。

『でも、ここまでは憤りゆえのことでございますが、それでも、私の後悔の日々を長引かせるため、全能の神様から生き長らえるようにとのご命令がありましても、何を為すべきか、何が為され得るのかにつきまして、思い巡らすことも出来なくなってしまいますほど、そこまで怒りに駆られていたわけでもございません。

『そのような折に、選択されるべき生き方、唯一の生き方といたしまして、独身の生涯が心に浮かんだのです。でも、そのような暮しを送りましても、今の私ですと、過ぎ去りました苦難を思い巡らし、解放の時がまいりますまで、自分の過ちを嘆いていなければいけないのではないでしょうか。それに、何故クラリッサ・ハーローは孤独を選び、世を捨てようとするのか、その理由を挙げることは、どこのどなたにもお出来になるのではないでしょうか。私に目を留めるすべての人々の顔付きが、私には非難の表情と映るのではないでしょうか。それに、他人の目が私を告発するとかしないとかではなく、身に覚えのあります自分の目が、自らの過ちを告白してしまうのではないでしょうか。私が楽しみといたしておりましたことの一つは、近隣の貧しい人々の住まいを訪れ、男の子たちには教訓を、また、年長の娘さんたちには注意を与えて帰ることだったのです。それなのに、駆け落ちをしたと思われております者が、娘さんたちに向かいまして、男の人の甘言を避けなさいなどと、知らぬ顔で、痛みも覚えずに申すことがどうして出来ましょう。

『だといたしますと、大切な、そして、たった一人のお友達、私に望むことの出来るものといたしましては、死以外に何があるというのでしょうか。それに、結局のところ、死が何だというのでしょうか。限りのある命を終えることに過ぎないのです。定められた道程を終了することに他なりません。辛い旅の終わりに疲れを癒してくれる旅籠です。心配と苦労の人生が終わることなのです。そして、運が良ければ、永久に幸福な生が始まるということなのです。

『今死なないといたしますと、おそらく、心の準備の足りない時に召されるということ

になってしまうでしょう。今苦しみ喘いでおります災いを免れていたといたしますと、死は、明るくて見込みのありそうな、何かの希望を抱いている最中にやってきたかもしれないのです。生きたいという願望で心臓が高鳴っている時にです。そして、この世の虚飾が私を虜にしている時にです。

『それはそうと、貴女に安心していただきますためにも、一言申し上げさせていただきますわね。私、生き長らえたいとは思いませんが、それでも、哀れな卑怯者みたいに、自分の持ち場を放棄するつもりはないのです。保持することは出来るのですし、また、保持いたしますのが私の務めなのですからね。

『実際のところ、とても罪深い考えに衝き動かされましたことが一度ならずございました。とは申しましても、それは悲嘆の真っ直中におりました際の話です。それに、特にある時などは、そう信ずべき根拠もあるわけですが、自暴自棄になることで、この上なく恐ろしい辱めから我が身を守ることにもなったのです。私の考えでは、あの男が再び卑しい行為に走ろうとした時のことです。そこには、あの下劣な女性たちが（私に怖がられるのも当然至極なのです）、あの男に手を貸すためではないといたしましても、私を怖じ気づかせるために居合わせたのです。あゝ、大好きなあなた、その折に私がどんな苦しみを味わったのか、貴女にはお分かりいただけないのです。また、邪悪な男がその卑しい心に秘めました忌まわしい目的を遂げるべく近寄ってきたといたしますと、あの時私は一体何を免れたのか、自分にも分かり兼ねるところでございます』

私の意見といたしましては、悪事が為されました際に、仮にも我が身に危害を加えるようなことをしておりましたならば、それは節操よりは、むしろ復讐心や自暴自棄な気持ちのほうを明示することになっていただろうと思うものですから、もしも今、故意に自分をおろそかにするようなことをいたしますなら、また、避けることも出来ますのに、わざわざ死の腕に飛び込んで行くようなことをいたしますなら（あの男は、私がそうするものと想像しているのですが）、それは同じくらいに罪深いことだと考えるのです。

それから、あのように先を見る目のない、あのように心の浅ましい人間がどのようなことを想像するといたしましても、この男とは、また、この男ではなくとも、どの男性ともですが、絶対に結婚するまいと決めました私の覚悟を、気の塞ぎとか、憂鬱、失望、あるいは、間違ったプライドの高さ、ましてや、間違った復讐心のせいになさっては困るのです。このような非難に値するところが一切ないばかりではございません。貴女には（私の大好きな、ただ一人の大切な方）確約いたしますが、神様が私を哀れと思し召して、命をお求めくださいますまで、生き長らえるために出来ますことでしたら、何もかもするつもりでいるのです。そう考えるべき理由もあるわけですが、私の受けました罰は、私が犯しました過ちの当然の結果に他ならないと思うのです。ですから、それから逃げたりするのではなく、私にとりまして神聖なものとしてくださるよう、天の神様にお願いしようと思います。食欲のございます時は、活力を維持いたしますのに十分なだけの飲食物は摂るつもりです。そのためでしたら、ご存じのとおり、ほんのわずかなもので足りるのです。それに、お医者様が適当とお考えになって処方してくださるものは、たとえどんなに口に合わなくとも、すべていただくつもりでおります。要するに、死に臨みましての私の振舞いのことを尋ねてみる価値があると、今後そう考えるかもしれない身内の者たちに、私がかなり忍耐強く平静な心を保ち、自らが引き当てました定めに甘んじようと努力したことを

確信させるためですが、私に出来ますかぎりのことはすべて行うつもりなのです。と申しますのは、至高のお手本を畏れながらも見習いまして、私はしばしば次のようなことを口にしているのです。「主よ、それが貴方様のご意思なのですから、従いまして、私の意思とさせていただきます。人の子を遇するに際しまして、貴方様はいつの場合も公平になさいます。そして、貴方様が私に耐えられます以上の苦しみをお与えにならないことは承知いたしております。ですから、私に耐えることが出来るのでしたら、耐えなければいけませんし、また、(ご恩寵に支えられながら) 耐えて行く所存でもございます」とです。

『でも、宜しいですか、もう一つ理由がございます。私は結婚のことを思い巡らすのではなく、まったく別の出来事へ向けての準備について考えるべきなのだということを、貴女ご自身にも納得していただけるような理由があるのです。今生きておりますのは間違いのないところですが、同じように、長く生きることはないものと、私は確信しているのです。自分の犯した過ちにつきまして、ずっと持ち続けてまいりました強い意識、評判が地に落ちましたことや、いろいろと期待が外れましたこと、少しのいわれもなしに被ることになりました野蛮な仕打ちに手を貸している、身内の者たちの断固として変わることのない怒り、こういったことが私の心に襲いかかってきたのです。今はもう大丈夫と思うのですが、宗教的な考えによってそれほどしっかりとは防御を固めておりませんでした心に襲いかかってきたわけです。どうか、ご心配のなきようお願いいたします。ただ、私は、悲しみからではございませんし、また、思い上がった気持ちからでもなく申し上げたいのですが、間もなく神様がわたしをほんろうなさり、死の国へ、すべて命あるものがやがて集められる家へ連れ戻そうとなさっている(四六)のだと確信しているのです』

さあ、私の一番大切なお友達、私の胸の内はこれですっかりお分かりでしょう。ですから、ラヴレースさんの一族のご婦人方にお便りをしていただきたいのです。私を高く買ってくださいましたことには深く深く感謝いたしておりますということ。また、私のことは少ししかご存じいただいておりませんし、それも、直接にではございませんのに、あの方たちのような誉れ高いご一族との縁組にも相応しいとお考えいただけましたのは(ひどい仕打ちを受けた後ではございますが)、私にとりまして、この世で得られそうに考えておりましたものよりも大きな喜びであったということ。ただ、あの方たちのご親戚に当たる人のことは、どうあっても夫として考えるわけにはまいらない、といったことをです。それから、あの方たちの間で少しは影響力を持つと、そのようにお考えの理由がございましたら、どうぞ上記のものからご引用いただきたいと存じます。

私の頭や心、そして、指にとりましても、最後までやり通せそうにないと思われますほどにたくさんの仕事があるのですが、もしそうでなければ、あの方たちのご厚意に感謝いたします書状は、私自身からお送りいたすところでございましょう。

ご旅行にはいつ出発なさるのか、知りたいものと存じます。貴女がお休みになる小さな宿場についてもですし、ハーマン伯母様のところに滞在なさる日数もです。貴女がどちらへ行かれましても、また、どこにおられましても、その場その場で、私の祈りが貴女のお傍へ届きますようにと願うからでございます。

クラリッサ・ハーロー

手紙　九十二

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

七月二十三日　日曜日

この手紙と一緒にお届けいたしますものは、非常に特殊な話題を扱っていることもございまして、何か他の話題と一緒にいたしまして紛糾を誘う、とでも申しましょうか、そのようなことはいたしたくなかったのです。とは申せ、心に掛かっております事柄がさらにいくつかございまして、それを貴女にお伝えいたしますのには、お許しをいただく必要があるのでしょうが、以下の文面でそのお許しは得られるものと存じます。

今月三日付けの手紙(ア)の中という、ずいぶん前の話なのですが、私の優しいノートン夫人が次のようなことに触れておられたのです。私の親戚の者たちのほうでは、貴女が、私を思ってくださるお気持ちからでしょうが、皆についてお話しくださった厳しいお言葉のいくつかを、悪く受け止めているというのです。ノートン夫人は、私の一番大切なお友達に対して抱いておられます、あの敬愛の念を込めて述べておられたのです。ただ、他の大抵の場合には貴女にぴったりと似合ってとても魅力的なその快活さを、私のためにとのことですが、慎んでいただけたらと願っておられました。これが夫人のおっしゃりたかったことなのです。ご承知のとおり、私のアナ・ハウに対しましては、私はノートン夫人よりも遠慮なくお話ししたり、書き綴ったりいたします権利を保証されておりますからね。

あの時には、貴女に向かってそのことに触れる勇気がございませんでした。ラヴレースさんが私を再び手中に収めたことで(私がハムステッドへ逃れた後のことですが)、私にとりまして形勢は極めて不利に働いていたからですわ。二度目の逃走の際の私の便りにお返事をしてくださった時には、貴女もひどく立腹なさったほどでしたものね。それに、その直後には、例の残酷な拘束を受けることになりましたから、その話題には今まで十分に触れることが出来ずにいたのです。

ですから、私の一番大切なハウさん、ここでもう一度私の切なる願いを繰り返させていただきたいのです(と申しますのも、このようなことで貴女をお諫めしなくてはいけなくなりました何度かのうちで、これが最初ということでは決してございませんからね)。つまり、私についてお話をなさる時はいつでも、私の両親のこと、それに、他の親戚の者たちにつきましても、ご容赦をいただきたいということです。確かに、私の場合には別の手段を講じるのが適当なことだと、皆にはそのように考えてほしかったと思います。でも、皆に代わって、どなたに判断をお願いしたら良いのでしょう。結果からいたしますと、皆が正しかったことになるのです。そして、私には有罪の判決が下ったわけです。皆のほうでは、この堕落した男性に何一つ良いことは期待していなかったのです。ですから、あの人は皆を欺かなかったことになります。ただ、皆は私に別なことを期待しておりました。そして、私は皆を欺いてしまったのです。それに、もしも皆のほうには(ハーヴィ叔母様が前にお便りをくださいましたが(イ))、ソームズさんに好意を示すよう、私を無理強いするつもりがなかったのだといたしますと、また、私の出奔が選り好みの結果であり、計画的行動なのだと信じているといたしますと、皆が私の敵に回りますのは、ますます当然な話

(ア)百六頁を参照のこと。　(イ)第三巻の百八十六頁を参照のこと。

ということになるのです。

皆に手厚く迎えてもらいたいという望みは一切ないのです。期待すべきいわれもないことを願って、じっと腰を下ろしていて良いはずがございませんもの。それに、たとえ皆が私を迎え入れてくれましても、私といたしましては、皆の顔をまともに見ることは出来ないでしょうね。とても出来る話ではございません。私の望みのすべてと申しますと、第一には、父があの厳しい呪いから私を放免してくださることです。そして次には、最後の祝福をいただきたいということです。私の心の平安にとりましては、これらの恩恵に与ることが必要なのです。

姉に便りをいたしましたが、私が触れましたのは、呪いの解除のことだけでした。とても厳しい返事が姉から届くような気がいたします。家族の者たちの目には、私の過ちはひどく悪質なものと映っておりますから、一つ目の頼みにもなかなか好い顔を見せてはもらえないことでしょう。それに、このように私の具合が大変良くないことを皆は知らないのです（また、おそらくは信じようともしないことでしょう）。ですから、皆が必要な知識を手にいたします暇もないうちに、私が実際にこの世を去るようなことがございましても、皆のことをあまり手厳しくお責めになってはいけないのです。宿命とお考えいただかねばなりません。貴女がどうお考えになるのか、それは分かり兼ねます。何しろ、悲しいことですが、私自身にも負けないほどに、皆を惨めにしてしまったわけですからね。それでも、私は許されたのだと、皆がにこやかな調子で明言するようなことがあるといたしましても、皆を傷つけてしまいましたことを案じる気持ちが強まりはしないか、分かったものではないと、時々はそんなふうに考えてしまうのです。と申しますのも、了見の狭くない人間にとりましては、気前よく許していただくこと以上に心を傷つけられることはございませんからね。

この男性との結婚につきましてのご助言をお受けするわけにはまいらないのですが、それでも、お母様が私たちの文通をあと一ヶ月許してくだされば有難いと思います。ただの一ヶ月で良いのです。それ以上望んだりはいたしません。破局がその結末を迎えております時には、一ヶ月という短い時間の間にもどれほどの変化が（考えますだけで、心が震えおののいてしまうような変化です）生じることでしょう。でも、もしもお母様が許してくださらないのでしたら、勿論その場合には、おとなしく従いますのが私たちには相応しいことですわね。

ヒックマンさんがあの傲慢で手に負えない男と会見なさることになっていたなんて（貴女に頼まれましたあの方のご用向きは、きっと根掘り葉掘り聞き出そうとするものだったのでしょうが）、承知しておりましたなら、私はどれほど心配したことか、お考えいただけないのでしょうね。

ヒックマンさんのご訪問を期待出来そうとのことですが、私の様子がずいぶん変わっておりますことを、あの方にお含みおき願います。あの方が私を好いてくださっているのは承知しております。貴女が好意をお寄せになる人すべてを好いてくださいますからね。辛い面談になることでしょうね、きっと。でも、貴女がいずれそのうち、それも、近いうちにと願っておりますが、幸せにして差し上げるお方ですし、また、貴女自身に落ち度がないのでしたら、慇懃な態度や貴女に寄せておられる限りない愛情で貴女をも幸せにしてくださるはずのお方ですもの、私は喜んでお会いしたいと思います。

私が一番愛しております、一番親切なお友達、幸せな時を分かち合う愛しい人、私の愛する心にとりまして、いつも一番大切で、一番間近にいらっしゃるお友達　…

感謝の気持ちと誠意とを共に添えまして、貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　九十三

ノートン夫人からクラリッサ・ハーロー嬢へ

七月二十四日　月曜日

私の一番大切なお嬢様、久しく無沙汰をいたしましたこと、お許しくださいませ。ひどく体調を崩してしまいました。可哀相に、息子も死の瀬戸際をさまよっておりまして、快方へ向かうかと思いますと、またぶり返してしまいます。あゝ、あの子はとっても危ない状態なのです。私ども両方のために貴女様のお祈りをいただきとうございます。

お姉様とハウさんとの間で、大層険悪な文面のお手紙が交わされたのです。ご家族の皆さんは一人残らず、あのお嬢さんのことでひどく憤っておられます。あのお嬢さんの乱暴な物言いにつきましては、貴女様のほうから諫めていただけたらと思います。そのようなことをなさっても、何の役にも立たないのですからね。と申しますのも、皆さんのほうでは、あのお嬢さんが干渉なさるのは貴女様の黙認を得てのことだと、そのようにしか信じようとなさらないからです。それに、ハウさんは皆さんに向かって断言しておられるわけですが、それほどに貴女様のご容体が思わしくないということも、皆さん、信じてはくださらないのです。

あのお嬢さんがお便りをなさるまで、皆さんのほうでは若い牧師のブランド様を上京させるおつもりだったのです。貴女様のお体具合と暮らし向きにつきまして、内々に問い合わせをするためでした。でも、今では、すっかり憤慨しておられるものですから、皆さんはその計画を取り止めにしてしまわれたのです。

こちらでは、そして、ハーロー邸でも、噂が飛び交っておりますが、貴女様がお受けになった新たな辱めのことでございます。それと、貴女様がすぐにもベティ・ローランス夫人の保護に身を委ねようとしておられるということもです。皆さんも今は、貴女様がそうなさるのを（私が喜んでおりますように）喜ばれるはずと存じます。そして、おそらくこれで皆さんは、貴女様のためになりますような決めごとのいずれにつきましても、差し当たりましては中断なさることでしょう。

息子が危険な状態にありますため、お傍でお仕えすることが出来ませんのは、何とも不幸な話でございます。お体とお心の両方につきまして、どのようなお具合なのか、一筆お認めくださいますようお願い申し上げます。ご主人のご用事のため、都まで早馬を使うのですが、ロバート・ビーチクロフト卿の使用人の一人が、貴女様にこれをお届けすることになりましょう。そして、もしかいたしますと、ご親切なお返事数行をもたらしてくれることにもなりましょう。その人は、急ぎのご用件への返事を待つためなのですが、数時間は都に留まることになりそうなのです。

今日は、貴女様のことを存じ上げる光栄と栄誉に恵まれました多くの者たちに喜びをも

たらしてくれておりました、お誕生の記念日でございます。私の一番大切なお嬢様、全能の神様のお恵みにより、今後ともこの日が、貴女様のご存じになる只一度の不仕合わせな記念日となりますことをお祈り申し上げます。

変わることなき親愛の情を込めまして、貴女の

ジュディス・ノートン

手紙　九十四

クラリッサ・ハーロー嬢からノートン夫人へ

七月二十四日　月曜日　夜

親愛なるノートン夫人

数日間に亘りまして筆を手にすることも出来なくなりますような、新たな面倒に巻き込まれてしまったのですが、そのことがなければ、貴女のお体具合、そして、息子さんのご容体をお尋ねしないではいられなかったことでしょう。と申しますのも、案の定そのせいと分かりまして、とてもとても気を揉んでいるわけですが、ご無音の原因はそこのところにあるのだろうと、私はすぐにも考えていただろうと思われるからです。貴女ご自身にとりまして最も望ましい形で慰めを与えてくださいますようにと、私の親愛なるお友達、私は天に祈りを捧げております。

私のことでハウさんが身内の者たちにお便りをなさいました件、はなはだ気掛かりでございます。本当ですが、あの方にそのようなことをなさるお考えがありましたことは、あの方のお手紙の文面につきましてと同様、私は知らずにいたのです。それに、お便りをなさったことにつきまして、あの方はまだ知らせてもくださらないのです（多分、不首尾のために落胆なさっているのでしょう）。このようにとても面白い気性の方が与えてくれます楽しさを分かち合いますと、その移り気なところに付き纏います不都合を必ず味わうことにもなってしまうのです。私たちの最良の楽しみにいたしましても、そのように善いところと悪いところが混じり合ったものなのですね。

その種の無遠慮さにつきまして、愛しいあの方をお咎めする手紙を認めましたのはほんの昨日のことですが、表明なさる時機が適切でなかったとは申せ、私を思ってくださればこそお取りになった無遠慮な言動なのです。この点は、貴女も前のお手紙で一言触れておられましたね。私の心配しておりましたのは、このような無遠慮さがすべて私のせいにされてしまうことなのです。それに、確信いたしておりますが、私自身が身内の者たちに働きかけ、そして、深く悔いておりますのを十分に納得してもらうこと以外には、好意を得る手段はないものと思うのです。とりわけ、貴女のご調停とかあの方の仲裁とかが（お二人が揃って私のことを深く慈しみ、贔屓してくださっているのは周知のことですから）有利に働くようなことは、私には期待出来ないのです。

《次いで令嬢は以下の諸点につき、手短に報告を行っている。つまり、逮捕の件、拘禁中の失意、前の下宿へ連れ戻されはしまいかとの懸念、その侮辱的行為に関しては無実であると、ラヴレース氏が公言している点、ベルフォード氏による釈放、彼女に付き

纏いはしないというラヴレース氏の約束、令嬢の衣装が送り届けられたこと、令嬢との結婚に関する、ラヴレース氏の身内全員ならびに氏自身からの懇請、その要望に応じるよう勧めるハウ嬢の助言、そして、氏のものになるよりは、むしろ死のほうを選ぶという、氏の親戚に伝えられるべく、わずかその前日にハウ嬢宛に送付された令嬢の公然たる決意等々である。その上で、令嬢は次のように筆を進めるのである》

ところで、私の大切なノートン夫人、このようなお返事などをいたしまして、きっと驚かれることでしょうね。でも、すべてをご承知いただきました暁には、私のことをよくご存じの貴女ですから、私が間違っているとはお考えにならないはずです。また、そればかりではないのです。この世での夫のためのものよりも、もっと立派な準備を私は進めているのですからね。

それから、私の大切な、いつも尊敬いたしておりますお友達、現在の私の心境が悲観や憂鬱の結果であるようにもお考えいただきたくないのです。と申しますのは、失望によってもたらされたものではございますが（初めて世間に飛び込みました私ですのに、世間は本当の、そして、醜い顔を早々と露にして見せたわけです）、でも、それはもっとしっかりとした根を張っているように考えたいのです。また、そこに結ぶ果実によりまして、そのとおりであることを私に、そして、身内の者たち全員に対しましても、毎日毎日、いよいよはっきりと証明してくれますよう願っているのです。

姉に便りをいたしました。先週の金曜日のことでした。ですから、賽は投げられたことになります。穏やかな返事を期待しております。でも、おそらく、返事は一切してもらえないことでしょうね。ご存じのとおり、私といたしましては、初めての直接的な交渉ということになります。このような扱いの難しい問題につきましては、ハウさんも私自身のやり方に任せてくだされば良かったのにと、そう思っております。

貴女が完全に回復なさり、そして、私の乳兄弟が危険を脱しましたことを耳にいたしますなら、私といたしましては大いに満ち足りた気持ちになることでしょう。でも、どうして私は「危険を脱する」などと申したのでしょうね。とても不確かな保有権にしがみついております人間にとりまして、そのように申して構わないのはどの時点でのことなのでしょうか。これは、死ぬ定めにある人間の弱さと思い上がりとを同時に証明いたします、常套的な表現の一つなのですね。

私のところへいらっしゃりたいとの願いが叶えられないからといって、気を揉まれることはございません。赤の他人との暮しではありますが、思っておりました以上に幸せなのです。最初は悲しい思いをいたしましたが、私たち、何事も慣れると平気になるものですね。私がおりますところの皆さんは礼儀正しい誠実な人たちです。未亡人が一人下宿しておられるのですが［前にそのように申しませんでしたか］、善い人です。苦難の学び舎を見事に生き抜かれたことで、一層立派になっておられるのです。

素晴らしい学校ですわ、私の大切なノートン夫人。自分自身を知り、互いに同情したり辛抱し合うことが出来ますように、そして、より良い望みを仰ぎ見るよう、教えていただくところなのですもの。

かつて患者さんが往診を受けた中でも一番に慈悲深いお医者さんと（先生にとりましては、診察料は最も関心の薄い事柄なのです）、一番立派な薬剤師さんに私は恵まれているの

です。看護婦さんは仕事熱心で世話が行き届き、無口で落ち着いた人です。ですから、外面的には不幸と申せませんし、また、内面的にも …… 私の大切なノートン夫人、心の中は日一日と、ますます幸せになって行くように思われるのです。

貴女が傍にいてくださるのでしたら、それは疑いもなく、私に味わうことの出来ます最も大きな慰めの一つとなることでしょう。そんなにも深く私を愛してくださり、自由に動き回りますこともままならない幼児の頃には、私を油断なく見守り、養ってくださいました貴女ですもの。お教えをいただき、大変な恩恵を授かった貴女のことですもの。貴女のお胸になら、私の悲しみのすべてを託すことも出来ましょうし、私がこれからもなお体験しなければなりません出来事に際しましても、貴女の信仰心や神意につきましてのご経験によって、私は強くしていただけるはずなのです。

でも、そのようなわけにはまいらないのですから、私はおとなしく定めに従います。貴女にもそうしていただけたらと思います。と申しますのも、どのような点で私は不幸でないのかということ、また、私が不幸な点につきましては、貴女のお力で癒すわけにはまいらないのだということ、それは貴女も分かっておられるわけですからね。

それに、すでにお話しいたしましたとおり、私の衣類はそっくり手元にあるのです。ですから、この世に関しましては、また、通常の便益という点にいたしましても、私は十分に裕福なのです。

ですから、お分かりいただけるでしょうが、私の尊敬する大切なお友達、私は同情を買うために、いつもいつも自分の見通しの暗い面を折り返してお見せしているわけではないということです。これは、私が十八番にしているごまかしの手口なのだと、あまりにも頻繁に、無慈悲な姉から言われてきた点なのです。もしも、自分自身の心の内を承知しているといたしますと、ごまかしとか策略とかのすべてを超越している心のつもりでおりますのにね。でも、最後には、この才能から、これが私の才能であるとしての話ですが、幸せにも、お咎めよりはむしろ利益のほうを授かるものと考えているのです。「最後には」という言い方をしておりますが、と申しますのも、これまで、私はどのような方のお気持ちを動かしてきたというのでしょうか。前もって私に好意を抱いておられたわけでもないという方は、一人としていらっしゃらなかったものと確信いたしております。

誕生日のことですが、私にとりまして相応しい、そんな形で過ごしました。大変気分の重い一日でした。それも、自分自身のことでというよりは、身内の者たちのためになのです。これまで皆は、この日をどんなふうに過ごしていたことでしょうか。何という賑やかさだったことでしょう。今では、どんな過ごし方をしたのでしょうね。そのことを想像いたしますと、本当に悲しくなってしまうのです。私の過ちのためにあんなにも苦しんでおります者たちのことを、残酷だなどとはおっしゃらないでください。それに、十八年の間ずっと、その寛大な優しさによりまして、私のことを喜びとし、私に喜びを与えてくれた者たちなのですからね。でも、他のことに考えを向けるようにいたしましょうね。さようなら、私の大好きなノートン夫人。

さようなら

手紙　九十五
クラリッサ・ハーロー嬢からARAB．ハーロー嬢へ

七月二十一日　金曜日

大好きなお姉様、私の体が極めて危険な状態にあるとは思わないのでしたら、また、このような処置を講じますのが自分の務めだとは考えないのでしたら、貴女の非難の正しかったことが、このように恐ろしいまでに証明されたのを知ったわけですし、ただペンを用いてのことに過ぎないとは申せ、貴女と接触を計るような図々しさは到底持ち得なかっただろうと思うのです。

お父様ご本人に宛てて筆を執る勇気はありませんし、お母様に対しましても同じことです。また、貴女に話し掛けますのも、身を震わせながらのことですが、私にお掛けになったとても厳しい呪いのうち、来世に関係しておりますあの最も厳しい部分を、お父様が親切にもお取り下げくださいますよう、貴女から執り成していただきたいと思うのです。と申しますのも、この世に関しましては、私が信頼を寄せている相手のように勘ぐられておりました破廉恥漢その者によって、私は実際に罰を受けたのですからね。

ご愛顧を取り戻すことを望んでいるわけではないのですから、この点につきまして強く要望いたしますのは許していただけるだろうと思うのです。ただ、私の要望を支持するための論拠は一切持ち出さないつもりです。お父様にいたしましても、もしもご自分の力でそれがお出来になるのでしたら、哀れな我が子に永久に惨めな思いをさせたいとはお考えにならないはずと確信するからです。

私の衣類を送り届けてくださいましたお母様のご親切のこと、非常に有難く思っております。受け取りました時にすぐ、心からなる感謝の念を込めまして、ご厚意にお礼申し上げるつもりではあったのです。ただ、どのようなものであれ、私からの便りは受け取っていただけないものと考えておりました。

新たなお怒りは招きたくございません。ですから、敬意と愛情とをお伝えする他のご挨拶につきましては、すべて差し控えることにいたします。その両方につきましては、死以外の何物をもってしても消し去ることの出来ない、そんな熱烈さで二つながらに燃え盛っておりますこの胸に求めていただきますよう、お願いいたします。従いまして、署名につきましても、名を伏せまして、次のようにだけ記させていただきます。

私の愛する幸せなお姉様
苦しみの中にあります貴女のしもべ

私宛のお手紙は、〈コヴェントガーデン、キングストリート、手袋商スミス氏方〉で届くことになっております。

手紙　九十六
ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ
［氏からの手紙七十九および八十二への返事として］

七月二十四日　月曜日　エッジウェアにて

令嬢の体の不調は卑劣な逮捕劇、そして、彼女の身内の無慈悲さのせいなのだと、貴公は自らを説得すべく、何という骨折りをしているのだろうか。両方とも、そもそもの責任は（帰するべきところがあるとすれば）貴公にあるのだよ。優れた頭脳にしても、邪な心に唆されて行った悪事に対しては、何という貧弱な口実を持ち出すものなのだろうか。しかし、悪いことをしてやろうと計画しながら腰を下ろしていられるような人間が、粗末な口実で満足していても、別に不思議はないのだ。だが、そんな男というのは、世の中の他の者たちのことを、自分自身を欺くのと同じくらいに簡単に欺くことの出来る人間のように想像しているとしたら、連中をよほどの馬鹿と考えているに違いないな。

自分の衣類を手放さねばならないことを、彼女のプライドとか強情さのせいにしているが、それは無駄というものだ。貴公がこの令嬢をそんな立場に追い込んだのだからな。他の手段に頼りながら、あのとおりの心気高い人間でいられるのだろうか、彼女は。

令嬢の無慈悲な親戚連中は、彼女が置いて行った現金の引き渡しを拒み、姉が書き送ってよこしたように、彼女が窮乏生活を余儀なくされるところを見たいと願ったのだ。従って、おそらく、彼女がこのような窮状に追い込まれているのを哀れと思うのではなく、自分たちの邪険な仕打ちが天から正当化されたように考えることだろう。彼女が貴公からの援助を受け入れるとは、貴公にしても考えられまい。俺から援助を受けるのも、彼女の考え方からすれば、貴公の援助を受けることになるのだ。ハウ嬢の母親というのは欲の皮の張った女で、娘のほうでも、おそらく、その種のことは何一つ、母親に気づかれずに行うことは出来ないのだよ。また、仮に出来るとしても、あまりにも高潔な心を備えた娘だから、もしも咎められたりすれば、否認するわけには行かなくなるだろうな。それに、ハーロー嬢のほうでは、自分の処分する品を今後必要とすることもなければ、着用することもないはずだという考えが、しっかりと固まっているのだよ。

ロンドンからは、出向を余儀なくさせられるような知らせが一切ないこともあり、明日まで、あるいは、多分水曜日まで付き合って、哀れなベルトンの願いを満たしてやろうと思っている。不幸なあいつはますます俺を手放したがらないのだよ。すぐにもエプソムへ向けて出発するが、あそこで奴のために一肌脱ぎ、もう一度奴を自分の家に住まわせるよう、骨折ってみることにする。気の毒な奴だよ。恐ろしいほどに塞ぎ込み、ぼんやりとうろつき回っているのだ。そして、何をしても気が晴れないのだな。心から同情してはいるのだが、何の役に立ってやることも出来ないのだよ、俺も。これまでの奴の生き方からして、あるいは、将来の見通しからしても、どんな慰めを与えることが出来るというのだ。

われわれの友情や親密さというのは、ラヴレース、生気と健康とに満ち溢れた状態にのみ相応しいものなのだよ。病に罹るとわれわれは、今にも襲いかかろうとしている鳶の姿に怯えた小鳥みたいに、回りを見渡し、互いを見つめ合うのだ。そうなると、何とも惨めな卑劣漢なのだよ、われわれも。精一杯勇敢に振る舞ってみせたところでな。

貴公に言わせるなら、俺の身に速やかに改心の訪れる様が見える、とのことだな。そのとおりであることを願っているよ。病を得たこの天晴な女性の振舞いと、病床にある哀れなベルトンの挙動との間には、極めて大きな違いが見られるため、俺にははっきりと分かるのだよ。罪人は本物の腰抜けであり、聖者こそが真の英雄なのだということがな。そして、そのとおりであることは、早晩、われわれ全員にも分かるはずなのだ。不意に命を失

うようなことがなければな。

令嬢は昨日の午後六時に独り閉じ籠もり、今日の七時か八時まで、自分の看護婦にさえもだが、人前には顔を見せないつもりだ。厳しい断食を自分に課してだよ。で、何故だと思うかな。自分の誕生日だというのだ。匂うばかりに咲き誇りながら、花の盛りに衰えて行くのだよ。これまでの誕生日はそのことごとくが、疑いもなく、楽しいものであったことだろう。彼女の感慨は、一体、どのようなものだろう。貴公の想いは、果たして、いかにあるべきなのだろう。

貴公に言わせるとそういうことになるのだろうが、俺の大望のことや平身低頭ぶりのこと、そして、銀行券を彼女の椅子の後ろに落とした件も、ずいぶんと茶化してくれるじゃないか。あの時は、彼女のことがあまりにも畏れ多く感じられ、また、例の申し出を不快に思われるのがあまりにも心配だったため、もっと俺の意図に相応しい、嗜みのある態度で申し出ることが出来なかったのだよ。だが、あの仕草は、ぎこちなかったとはいえ、慎みのあるものだったのだ。実際、貴公にとっては、それだけになおさら、嘲笑の種として恰好のものなのだろう。慎みに満ちた愛情はもとより、控え目に尽くすことの美しさや優雅さを味わうことなど出来ない男だからな。というのも、偽りのない愛について、詩人は次のように詠っているが、それと同じことが、侵すことの出来ない敬意の念に対しても言えるからなのだよ。

私は語る、訳も分からぬことを。
いつまでも語り、訳も分からぬことを
君に答えるとしたら、それはさらなる愛の証。
愛とは乱れた言葉で話す子供のこと。
だが、この上なく率直に語るのだ（四七）。

似たようなことが、あの慎み深い崇敬の念を弁護するために持ち出されても構わないだろう。畏まっている申し出人に対し、あの崇高なまなざしを受けることとか、尊い手を煩わせることへの恐れの気持ちを起こさせ、そのお香を本来供えられるべき祭壇の傍らにぎこちなくこぼさせてしまうことになる、あの崇敬の念のことだよ。だが、優雅さそのものとも言えるものに対して、残酷な仕打ちを平気で加えるような心の持ち主に、ほんの少しであっても、こういったことがどうして分かるというのだ。

だが、俺がさらに驚いているのは、ハウ嬢、そして、アラベラ・ハーロー嬢の前にその姿を晒すようなことを考える、貴公の大胆さだよ。いくら貴公でも、まさか、この考えを実行に移すつもりではあるまいな。

俺の服装と貴公の服装について言うべきことは、ただ、次の点だけだな。貴公の所見を総括すると、以下のようになる。つまり、俺の外見は俺の最悪の部分であり、貴公の外見は貴公の最良の部分だということだよ。それで、この比較によって、貴公にはどんな利益があるというのかな。貴公に片方の部分を改めてもらいたいのだよ。そうすれば、俺ももう一方の部分を改善するよう努力するつもりだ。どうだ、どちらが先に始めるか、ひとつ競ってみようじゃないか。

ロヴィック夫人が、俺の要請に応えてのことだが、見せてくれていた〈瞑想〉の写しを

渡してくれた。令嬢の手で聖書から抜粋されたもので、日付からすると、ローランドのところに拘禁されている時のことだ。俺が写しを取ったことは、令嬢には知らせないことにしてある。

聖書のこれらの書からの一節が、どのようなものであれ、他の著者の作品の中に引用されて不意に目の前に現れると、君と俺は、これらの書を際立たせる特徴となっている、その文体に備わる上品な簡潔さや飾りのない平易さ、そして、気品にいつも感心したものだったな。そして、俺は覚えているが、君は、君でさえも、次のように述べていたのだ。つまり、これらの引用文は、君の目にはいつも、下等な金属の合間を走る金鉱石の豊かな鉱脈のように映り、信頼性を高めようとしてそれらが引用された、その当の作品を美しく飾っているのだ、とだよ。

貴公にも神々しい美しさを賞味することが出来るのか、ひとつ試してみることだな、ラヴレース。俺の考えでは、貴公の胸に一時的な（永続的なものではないとしても）後悔の念は起こさせることになると思うのだ。貴公は自分の率直さを自慢しているが、これをその試金石としてもらおう。それに、これほど深刻な問題に関して、そのきっかけは貴公自身に由来しているわけだが、貴公は真面目になれるのかどうかについてもだよ。

瞑　想（四八）

七月十五日　土曜日

わたしの苦悩を秤にかけ、わたしを滅ぼそうとするものをすべて天秤に載せるなら
今や、それは海辺の砂よりも重いだろう。わたしは言葉を失うほどだ。
全能者の矢に射抜かれ、わたしの霊はその毒を吸う。神はわたしに対して脅迫の陣を敷かれた。

横たわればいつ起き上がれるのかと思い、夜の長さに倦み、いらだって夜明けを待つ。
わたしの一生は機の梭よりも速く、望みもないままに過ぎ去る　…　わたしの目は二度と幸いを見ないでしょう。

なぜ、労苦する者に光を賜り、悩み嘆く者を生かしておられるのか。
彼らは死を待っているが、死は来ない。地に埋もれた宝にもまさって死を探し求めているのに。

なにゆえ、その道の隠された人に、神がまがきをめぐらされた人に、光を賜わるのか。
恐れていたことが起こった。
静けさも、やすらぎも失い、憩うこともできず、わたしはわななく。

だが、見よ、神は力ある者であるが、何をも卑しめられない。
神は貧しい人に正しい裁きをしてくださる。そして、捕われの身となって足枷をはめられ、苦悩の縄に縛られている人があれば、その行いを指摘し、その罪の重さを指し示される。

少々暇があるし、書きたい気分になっているところでもある。これらの聖典に関し、少しばかり感想を述べようと思うが、大目に見てくれ、ラヴレース。

聖書を読むように教えられるのは、われわれが子供の頃であるし、基礎的な読み物としてのことに過ぎないのだ。そして、われわれは大人になるにつれ、聖書は卒業しているように考えるわけだが、俺の知るかぎり、こんなところにその理由があるのだろうな。貴公も承知のことだろうが、われわれと同様に両親たちも、われわれの能力をわれわれの到達点を示す書物によって見積もり、したり顔をしているのだ。それまで目を通してきた書物に対するわれわれの理解度によって評価するのではないのだ。ところが、叔父の闘病中のことだが、無聊をかこっている時に興味を引かれ（叔父の控えの間で、たまたま一冊見つけたのだよ）、聖書に目を通してみたところ、どこを開いても、そこには素晴らしいことが述べられているのを知ったのだ。ロヴィック夫人から先の〈瞑想〉を受け取るとすぐ、俺も一冊聖書を借りてみた。今はよく分かったわけだが、それほどピッタリ対応しているなどとは思いもせず、〈瞑想〉に引用された語句を聖書と対照してみようと思ったのだよ。それで、いずれそのうち、大いにありそうなことだが、俺も一念発起して聖書を隅々まで精読してみようと思うのだ。いうならば、学課としてだよ。

それはそうと、敢えて繰り返すが、次の点は確かなことだ。つまり、その文体は、他の作者に見られる場合にわれわれが激賞して然るべき、あの真に平易で簡潔で、自然なものだということだ。それに、聖書の歴史の長さ、そして、真正さということでも、世間中の者の意見は一致しているし、学者連中も、それぞれの論拠を補強するに当たっては、好んで聖書の是認を求めるのだよ。実際、俺も叔父の家ですっかり聖書が気に入ってしまったわけだが、そんなにも目新しく映ることが少々恥ずかしくなったほどだ。ただし、いわゆる旧約の歴史なら、いくらかは承知していると言わなくちゃなるまい。ただ、聖書そのものというよりは、おそらく、ヨセフス（四九）に負うところのほうが大きいのだろう。

まったくもって奇妙な話だよ。これだけ学識を誇りとしているというのに、われわれはそのわずかな知識を、好んで流れの底のほうから、それも、濁った流れから引き出そうとするのだからな。澄み渡って透明な水源がずっと身近なところに、近づき易いところにあるのにだよ。だからこそ、ますます軽視されているわけだろうがね、おそらくは。

それにしても、人間というのは独り善がりの愚か者だな。調べてみればみるほど、軽蔑の念を禁じ得なくなるのだよ。万物の霊長だというのか　…　怒りの苦笑を抑えることの出来る者など、どこにいるというのだ。その被造物の個々のものたちのどれ一つに目を向けても（絶えず中心を逸脱する人間そのものを別にすると）、それ本来の、最初からの取り決めごとに則って行動しているのだ。そして、浅ましい自惚れ屋は仮想の、独り合点の優秀さをいつも誇りとし、自慢してもいるのだが、身を飾るものばかりか、生活必需品についても（つまり、衣類と同じく食料もだよ）、他のすべての生き物のお世話になり、その生き物たちの血液や精気を自分の血管の中に潜め、背にはその羽毛を纏って闊歩しているのだよ。身に備えている己自身のものと言えば、極めて有害な、猿にも似た質の悪さだけなのだからな。それでいて、自分より優れた生き物ことごとくを蹴飛ばしたり殴ったり、押し退けたりして構わない立場であると自認しているのだ。そして、追い詰めて虐待すべき動物がいない時には、己の種属の中の勢いや力の劣る者を虐げるために、自分の権力とか腕力、あるいは、財力を利用しようとするのだからな。

君と次に顔を合わせる時には、この問題をさらに詳しく扱うことにしよう。おそらくわれわれは、広く人間というものが、ただ、われわれ放蕩児は特にそうなのだが、いかにも

惨めであり、それでいて、自惚れた存在なのかということに思いを馳せ、古代の二人の哲人(五〇)に倣い、交互に笑ったり泣いたりすることだろうな。

まさに今夕のこと、ドレルのところで一冊の本に出会ったのだが、『聖なる古典』と題する、ブラックウォールとかいう人物の筆になるもの(五一)だ。

俺はそいつを我が家に持ち帰った。そして、十ページ余りも読み進まないうちに確信するに至ったのだ。すべてを凌駕する、この美の集大成たる聖書については何も知らないまま、異教の著者たちに見られる、高貴さや自然味の乏しい美を自分がどれほど賛美していたのか、そのことを思って恥じ入るべきなのだということをだよ。誓って言おう、ラヴレース。十人ほどの牧師についてなのだが、連中の良識と観賞眼に対して、これからはもっと高い評価を与えることになるだろうな。俺が教会に出入りしていた頃に知り合った連中で、古代の詩人や哲学者たちすべてを押し退けても、聖書に見られる言葉や所感を崇めているように俺には思われたのだが、その点で軽蔑を感じていた牧師たちのことだよ。そして、今やこの一件は、俺にしてみれば、最も無知な人間が他人を最も嘲笑するものだということの確かな証であり、不信心者の無知さと同じく、その思い上がりを恥じ入らせることになっているのだ。知識もなしに非難し、いわれもなく笑い、一番知らない事柄に対して最も騒がしく大声を上げているのだから、呆れた才人気取りの一団ということになるのだよ、われわれは。

手紙　九十七
ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

七月二十六日　水曜日

ロンドンに着いたのは、やっと今朝早くのことだ。哀れなベルトンが俺にすがりついていたのだよ。すべての拠り所を奪われた男みたいにな。

急いでスミスの家を訪ねたところ、令嬢の体具合について、まことに芳しくない説明を受けた。来訪の挨拶を伝えると、午後に会いたいとのことだった。

ロヴィック夫人の話では、俺が土曜日に出掛けた後、彼女は最高のスーツの中の一着を実際に手放したというのだよ。彼女［ロヴィック夫人］を援助している良家の婦人が相手なのだが、この婦人は、ごく近い内に結婚することになっており、さらには、自分の将来の相続人として、仕度を整え持参金を与えるつもりでいる姪のために買い取ったのだ。令嬢のほうでは、君とか俺とかから金が出てはと、ひどく用心深くなっていて、その買い手に会いたがったのだ。買い手の女性は、ロヴィック夫人に向かって、そのスーツを本来の価値の半分の値段で買ったことを認めていた。ただ、未亡人の話では、そのような安値で買い取っても、良心に悖るようなところはないのだけれど、友人は令嬢のことを最高に愛らしい女性の一人だと称賛し、彼女の身の上のことを少し知らされると、買い取った品を持ち去るに当たって、涙を抑えられずにいたということだ。

根は善良な女なのかもしれないな。ロヴィック夫人はそうだと言っている。それにしても、利己心というのはいやらしい奴だな。そのために、残酷この上ない、不誠実の極みといった行いに走って憚らない人間もいるのだよ。しかし、それでもやはり、俺は次のよう

に考えているのだ。つまり、何を買い求めるにせよ、手付金（必要になる前に買うものとしてだが）の法定利息相当額も生み出さないほどの安値で買うために、同胞の窮状につけ込むようなことをやって平気な輩というのは、追剥ぎと変わりないということだな。難破船から略奪したり火事場で盗みを働いたりすることのほうが、確かに、邪悪さの程度は高いだろう。しかし、この手の悪党に負けず劣らず、くだんの輩にしても、苦難に喘ぐ者たちの苦しみに拍車を掛け、惨めな者たちの背に不幸の種を積み重ねているのではないだろうかな。その者たちを救ってやるのが、人間一人一人の務めだというのにだよ。

三時頃、もう一度スミスの家を訪ねた。名を告げた時には、令嬢は書き物をしているところだったのだが、俺の見舞いを受けてくれた。彼女の表情は目に見えて悪いほうへと変わっていた。朝早くから夜遅くまで、あまりにも書き物に精を出していることや、前の日の絶食の件について、ロヴィック夫人が丁重に諫めていたので、俺も表情の変化のことに触れ、次のように話したのだ。医者は、彼女が自分で考えている以上に、彼女に対して大きな望みを持っているということ。また、失礼も顧みず申し上げるのだが、回復への望みを捨てたりすると、治癒の機会にも恵まれないものです、とだ。

望みを捨てたわけでも、温めているわけでもありません、と彼女は言っていた。それから、非常に落ち着いた様子で鏡の前へ進み、こう言うのだよ。「私の表情は、確かに、私の心情を包み隠さずに写し出しておりますわね。でも、心というのは、好きな時に体を連れ去って行くものなのです」とだ。

「書き物をいたしますことだけが、私にとりましての気晴らしなのです」と、彼女は言葉を続け、「それに、触れずに済ますわけには行かない話題もあるのです。日課のことですが、私は日頃から早起きだったのです。でも、今は、これまでよりも一層、思いのままに休息を取ることは出来なくなっております。ずっと前から、眠気が私と諍いを起こしまして、こちらから先に歩みよってはみたのですが、仲良くしてくれないのです。成り行きに任せる以外ございませんわね」と言っていた。

それから、彼女は控えの間に行き、封蝋で三ヶ所に封をした包みを俺のところへ持って来ると、こう言ったのだ。「どうぞこれを貴方のお友達にお渡し願いたいのです。あの人にとりましては、とても有難い贈り物となるはずです。と申しますのも、あの人からの私宛のお手紙すべてがこの包みの中に収めてあるからです。他の人の手に渡ったりいたしますと、あの人の行いに照らしまして、男性全員に不名誉をもたらすことになるような、そんなお手紙なのです。

あの人宛に私が出しました手紙のほうは、たくさんはございません。とっておかれようと処分なされようと、お好きになさって構いませんわ」とだ。

俺は考えたよ、ラヴレース。君の弁護をするためには、この機会を逸するようなことがあってはいけない、とな。それゆえ俺は、その包みを手にしたまま、俺が思いつくかぎりの、君の有利に働く論拠を力説したのだよ。

彼女は俺の話を最後まで聞いてくれたのだが、彼女の断固たる決意の強さからして、期待出来そうに思われたものよりも、もっと注意深い態度で耳を傾けてくれたのだ。

「お話の腰を折ったりしたくはないのです、ベルフォードさん」と、彼女が言った。そして、「もっとも、お話しくださいました事柄を好ましく思ったわけでは決してございませんけれどね。あの人のために弁護をなさろうとする貴方の動機は、思いやり溢れる心から

来るものです。男女いずれの場合につきましても、思いやりに満ちた友情の例を目にいたしますのは大好きですわ、私。でも、この問題に関しましては、私の気持ちのすべてをハウさんに書き送っておりますので、あの人のお身内のご婦人方にも、ハウさんのほうから伝えてくださることでしょう。ですから、不愉快な反駁の言葉へと導き兼ねない話題につきましては、何卒、これっきりにしていただきたいのです」と言うのだよ。

彼女の薬剤師がやって来た。薬剤師は彼女に外出を勧め、書き物に勤しんでいると教えられると、そんなに精を出すのはいけないと咎めていた。そして、自分も同じ考えなのだが、医者の見解ということで、彼女自身が回復を願い、そのための手段を講じるなら、彼女はきっと回復するはずだと言っていた。

体調を考えるなら、確かに彼女は書き物をし過ぎているのだろう。ただ、俺も何度か目にしているのだが、医術に携わっている者たちというのは、どのような処方をすべきか分からなくなると、患者の一番好きなこと、あるいは、最も慰めになるものを尋ね、それを禁じてしまうのだよ。

ただ、連中はこの淑女のことを気高い心の持ち主と見ているのだが、その心の気高さの半分も理解してはいないし、彼女がどれほど深く傷ついているのか、それも分かっていないのだよ。そして、俺の考えでは、この場合は役に立ちそうもないのだが、彼女の若さに頼り過ぎているのだな。また、時というものにも頼り過ぎているが、あのような心を苦しめている悩みというのは、時をもってしても和らぐことはないのだよ。何故なら、彼女は善行に励むこと、また、自分が愛した放蕩児を改心させることに熱中していたため、心に温めていた期待の、そのすべてを挫かれてしまっているし、また、生きることを切望したくなるほどに自分自身に満足した気持ちで顔を上げることは、もう二度と出来ないのではないかと思われるからだ。というのも、この淑女は、食べることや眠ること、着飾ることや訪問といった一般的な目的、また、女性の大半の者たち、とりわけ、上流の集いで異彩を放ち、その集いを飾るに相応しいと自認しているような者たちの時間を占めている、その他の社交的な催しなどとは異なる人生の目的を持っていたからなのさ。要するに、彼女の悲しみは極めて特殊な性質のもののように俺には思われるのだな。他の大抵の者たちの苦悩を軽減してくれる〈時〉が、詩人も詠っているように（五二）、「彼女の苦悩を募らせる」ことになるわけだよ。

行動を共にしている間に、ラヴレース、貴公もこの卓越した美点のすべてを目にして来たかもしれないな。一つ一つの言葉、考えの一つ一つ、行いの一つ一つにそれは明白なのだ。なのに、忌々しいでっち上げの数々や策謀を好む心が貴公を駆り立てたのだ。貴公の不快な自慢話の種となったもの、そして、そのように途方もなく悪用された才能についての想い、それが貴公の懲らしめとなり、呪いとなるのが妥当なことなのだよ。

ゴダード氏が別れを告げて去って行った。俺もそうしようとしていると、女中が上がって来て、次のように令嬢に伝えていた。紳士が一人階下に来ており、彼女の健康状態のことを大層熱心に尋ね、面会を求めているが、名前はヒックマンだ、というのだ。

彼女は大変な喜びようで、上がって来てもらいたい旨をその紳士に伝えるよう、女中に命じていた。

俺は退去しようとしたのだが、彼女のほうでは、思うに、俺とその男とが階段のところで出会いそうだと考えたのだろう、俺が引き下がるのを許さなかったのだ。

彼女はその男を迎えに階段の降り口のところまで飛んで行き、男の手を取ると、ハウ嬢の健康状態について半ダースもの質問を（返事は一切待たずに）ぶつけ、小旅行に出掛ける前に、彼女の顔を見にあの男を寄越してくれたハウ嬢の親切に対し、大袈裟な言葉で謝意を表していた。

男はあの令嬢からの手紙を渡したが、彼女のほうでは、そのうちに読むことにいたしますと言いながら、胸の中にしまい込んでいた。

ひどく具合の悪い彼女の姿を目にすると、男は明らかにショックを受けていた。

「心配そうに私をご覧になっておられますね、ヒックマンさん」と、彼女が言った。そして、「あゝ、大好きなハウさんのお宅で、貴方と最後にお会いいたしましてから、私にとりまして、事情は奇妙なほどに変わってしまったのです。あの時は、私も何て朗らかな娘だったのでしょう。心は穏やかでした。将来の見通しも素敵なものでした。そして、どなたからも愛されておりました。でも、貴方を苦しめるつもりはございませんわ」と言うのだよ。

「まったくの話、貴女のことは心の底からお気の毒に存じます、マダム」と、あの男が言っていた。

彼は顔を背けたが、その顔には悲痛の色がはっきりと浮かんでいたのだ。

彼女自身の目も潤んでいたが、われわれそれぞれのほうへ向き直ると、互いを引き合わせてくれた。本当にその名に相応しい紳士だということで、あの男を俺に紹介し、俺のことは、確かに君の友ではあるが［あの時は、自分のことが実に恥ずかしかったよ］、にも拘らず、人情味豊かな人間であり、友の卑劣さを嫌悪し、彼女のため、あらゆる形での尽力を惜しまない人間であると、あの男に紹介していた。

ヒックマン氏は俺の丁重な言葉を冷ややかな態度で受け止めていたが、これは、君のことがあるのだから、予想されて然るべきところだろう。俺のことを考え、別扱いにするのが当然だ、などと言い張るよりはな。彼女は、翌朝の朝食を共にするよう、われわれ両名を招いてくれたが、あの男が明日には戻らねばならなかったからだ。

俺は二人を後に残し、弁護士のドレル氏を訪ねた。哀れなベルトンの件を相談するためだ。それから帰宅し、ここまで筆にしたわけだが、明朝の朝食へのお呼ばれの際の出来事に対する前置きといったところだな。

手紙　九十八

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

七月二十七日　木曜日

今朝、令嬢のご招待に従い、朝食のご相伴に訪ねてみると、ヒックマン氏が彼女に付き添っていた。

氏の表情には、ひどく重苦しい気持ち、そして、気掛かりな思いがありありと浮かんでいた。だが、昨日に比べ、敬意のこもった態度で俺を迎えてくれた。察するところ、令嬢が俺のことを好意的に語ってくれたお陰なのだろう。

氏はほとんど口を開かなかった。というのは、昨日、そして、今朝俺が来る前に、二人

で何もかも話し合っていたからだろうと思う。

それとなく口をついて出た言葉から分かったことだが、ハウ嬢の手紙というのは、アンブローズ大佐の屋敷での、あの令嬢と君との面談について説明したものだ。ハウ嬢に伝えた君の告白のこと、そして、君との結婚こそ、彼女の受けた被害を埋め合わせるために今残されている唯一の方法だという、ハウ嬢の見解を明らかにしたものなのだよ。

これも俺の推測なのだが、ヒックマン氏はハウ嬢の名で、次のことをしきりと彼女に求めたのだな。つまり、彼女を受け入れるためにこざっぱりとした部屋をいくつか用意しておくつもりだが、あの令嬢がワイト島から戻ってみたら、近くの農家に彼女がいた、というふうにしてほしいというわけだ。どれくらいの日数で皆さんは戻るのかと、彼女が尋ねた。氏のほうでは、往復の日数を含め、二週間を越えないよう計画されている、と彼女に話した。すると、それでしたら、おそらく、その親切なお申し出を検討する時間もございましょう、と彼女は言ったのだよ。

氏はハウ嬢から預かって来た金を提供しようとしたのだが、少しでも受け取るよう勧めることは出来なかった。俺が断られたのも不思議ではないわけだ。彼女はただこう言っていた。もしも入り用になった時には、ハウ嬢にだけ世話になるつもりです、とだ。

朝食が終わらないうちに、薬剤師のゴダード氏が訪ねて来た。彼女の要望もあり、薬剤師が食卓を共にした。ヒックマン氏は、ハーロー嬢に関し、何か慰めとなることを話してもらえるかどうか、薬剤師に尋ねていた。自分の命と同じように彼女のことを大切に思っている一人の友人に伝えるためだというのだよ。

「ご自分からそのおつもりになっていただけるなら、お嬢様はすっかり良くなられるのです」と、薬剤師が言っていた。「本当にお治りになるのですよ、マダム。先生のほうでもまったくこのようなお考えでして、貴女が飢え死になどなさってはいけないからなのですが、薄めのゼリーと害のない強壮剤以外には何も指示しておられないのです。それに、ひとつ言わせていただきますが、それだけ夜更かしをなさり、滋養のある物をそのようにお摂りにならず、お見受けいたしますように、そんなにも悲しみに浸っておられては、この上なく頑健な体さえも傷めてしまうほどですし、最も強靭な体質さえも疲弊させてしまうことでしょう」とだ。

「どのようにすれば宜しいのでしょう」と、彼女が言った。そして、「少しも食欲がございませんの。貴方が滋養物とおっしゃるものは、どれ一つとして、胃が受けつけないのです。私に出来ますことは、実行いたしておりますわ。それに、H先生や貴方のような思いやりに溢れた指導者がいてくださるのですから、そうしないようですと、申し開きも出来ないことになりますわね」というのだよ。

「ひとつ養生の仕方をお教えいたしましょう、マダム」と、薬剤師が答えた。「きっと先生も賛成してくださるはずですし、貴女の場合には、薬を用いる必要もなくなるような方法ですよ。で、それは、〈就寝は夜の十時。起床は朝七時以降のこと。朝食は水粥かミルクポタージュ、ないしは薄いスープとし、ディナーは、口にさえしてくださるなら、お好みのいかなる品でも構わず、午後にはミルク入りのお茶を一杯、そして、夕食にはサゴを材料としたものを摂っていただく、ということです。そして、誓っても構いませんが、この食事療法を行い、一ヶ月間田舎の空気を吸っていただくことで、貴女は健康を回復なさるはずです〉」というのだ。

有徳の紳士の私心を離れた養生の教えに、われわれは大いに満足した。そして、真偽のほどは付き添いの女に訊いてほしいと頼みながら（その女のほうでも請け合っていたのだが）、次のように彼女は言っていた。「ヒックマンさん、私が信頼出来る人たちの手に預けられておりますことを、どうかハウさんにお知らせいただきたいのです。それから、その殿方の親切なご指示に関してですが、体具合のことに触れました、私の最後の二通の手紙の長いほうでお約束いたしました事柄のすべては、全力を傾けて守っておりますし、これからもそうするつもりですので、ご安心いただきたいのです。故意に怠るような真似は一切避けるつもりですと、私、ハウさんに保証しているのです［と、ゴダード氏に向かってだ］。そのように約束しておりますのよ、私［と、俺にだよ］。もしも避けずにいるようでしたら、それは許し難い怠慢ということでしょうし、また、受けるに値するようですと嬉しいのですが、そんな評判にとりましても、あるいは、私は達成していたのだと、身内の者たちが後に考えてくれるよう願っております心の平静さにとりましても、大変そぐわないことになりましょう」とだよ。

この後、ヒックマン氏と俺は近くのコーヒー店に寄った。氏は月曜の夜の舞踏会での君の振舞いのこと、また、その前に氏が君と行った会談の場での、氏に対する君の態度のことを話してくれたのだが、その様子を氏は、君自身の報告に比べると、もっと好意的な観点から述べていた。それでも、君に対する感想として、まことに忌憚のないところを話してくれたのだ。ただ、紳士としての嗜みを忘れないものだったよ。

氏の語るところでは、令嬢は君との結婚に反対する気持ちを強く固めているとのことだった。氏が彼女に届けたものへの返事なのだが、今朝早くに、ハウ嬢宛の手紙を書き始めていたそうで、朝食の席で彼女に会う前にほとんど出来上がっていたこともあって、氏は十二時にその手紙を取りに来ることになっているのだ。そして、三時には帰途につく考えでいるとも言っていた。

氏の言葉によれば、ハウ嬢と母親、それに氏自身は、来週の月曜日にワイト島への小旅行に出発する予定だが、ハーロー嬢の芳しからざる健康状態についても、精々好意的な報告をしなければならないという。さもなければ、非常に心の落ち着かない旅になるだろうからというのだ。令嬢が大変信頼のおける者たちの手に預けられているのを知り、嬉しく思う、とのことだった。令嬢に回復の見込みはあるのか、意見を聞くためにH先生を訪ねるつもりであり、先生の意見が好意的なものであることを願う、とも言っていた。

氏としては精一杯善処する覚悟であるとのことであったし、また、ヒックマン氏の申し出た金の受け取りを令嬢が拒んだことでもあり、彼女が衣装を手放した件について、俺のほうでは一切触れずにおいた。そのことを口にしても、何ら他の役に立つことはなく、ただハウ嬢にショックを与えるだけだと考えたのだ。何しろ、彼女ほどの地位や財産に恵まれた女性がそこまで追い詰められるというのは、いかにも人聞きの悪い話ではあるし、俺自身、考えるだけでもじっとしてはいられないのだよ。それに、平気でいられるような男については、この世にただの一人しか俺は承知していないからだ。

この紳士は少し凝り性で堅苦しいところがある。自惚れた連中なら、仮にそんなところを持ち合わせているとしてだが、あっさりと克服してしまう、あのちょっとした几帳面さにしても、控え目であるとか臆病だとかいう人間は、すぐになくしてしまうようなことはないのだよ。で、何故だと思う。自惚れた連中というのは自信過剰で、何一つとして疑う

ことがないからさ。しかし、ヒックマン氏は愛想の良い、賢い男であり、君が加えているような仕打ちとか、人物評価とかに甘んじなければならないいわれなどまったくないように俺は思うのだ。

それにしても、君は本当に奇妙な人間だ。その容姿や物腰、知力の点で、俺の知っているすべての男を凌いでいるし、悪魔をも欺くような顔をしているものだから、他のどんな男についても、まずまずと見ることは出来ないというわけだ。

まさにこの〈控え目な〉方針のことで、貴公はわれわれの一部の者を嘲笑しているのだが、われわれとしては、自分の外見に貴公ほどの自信がないから、洋服の仕立屋や鬘師の助けを借りて欠点を隠そうとするのだよ［本当にその手際がでたらめなもので、ますます欠点を露呈しているとすれば、まったくの料簡違いというわけだ］。さらに、われわれはその服装によって、心の店に置いている品物を宣伝する看板を掲げているに他ならない、とも貴公は言っている。これはなかなか気の利いた言葉だと、貴公がそう考えているのは疑いのないところだろうな。だが、願わくはラヴレース、もしも出来るのであれば、教えてもらいたいのだ。貴公はどの手の看板を掲げねばならないのかについてだ。貴公の心に備わる調度品のことを、その看板によってわれわれに明示しなければならなくなった場合にはだがね。

ヒックマン氏の話によると、ハウ嬢とは数週間前にめでたく結ばれていたはずだというのだ（贈与財産に関する書類すべても、しばらく前に作成済みとのことだ）。ただ、親友がこんなにも不幸な思いをしている間は結婚する気になれないと、あの令嬢は宣言しているというのだよ。

これは、まさしく、女同士の友情の強さを示す見事な例だが、君と俺とが、また、われわれの放蕩児仲間が、年格好や身分、そして、嗜みの点で同等な女同士にあっては実現不可能なこととして、いつも嘲笑の的としてきたものだよ。

だが、実際の話、俺にはますますはっきりしてきているわけだが、ラヴレース、思い上がった自負心にも拘らず、われわれ放蕩者や道楽者以上に心の狭い卑劣漢はこの世にいないということだ。で、どうしてそうなるのか、ひとつ話して聞かせよう。

われわれは幼い頃から悪さが好きなため、教えに背を向けて逃げ出すのが通例になっている。従って、習得すべくあてがわれた学問についても、ただの半可通になってしまうわけだよ。そして、それ以上知る気がないものだから、知るべきことはもうないと考えることになるのだ。

際限のない虚栄心と奔放な想像力に駆られながら、判断力は一切持ち合わせないものだから、次に、われわれは中途半端な才人となるのだよ。そして、知識のすべての領域を手中にしていると考え、われわれ以上に骨を折り、もっと真剣に取り組んでいる者一人一人のことを、人生の最も強烈な快楽を味わうことの出来ない、粘液質で愚鈍な輩だと軽蔑するのだ。

こんなわけでわれわれは、慎み深い人間や実力を備えた人間にとっては鼻持ちならない存在となり、われわれ自身と同じ性向の連中と付き合わざるを得なくなるのさ。また、このためにわれわれは、われわれの実態を示すことの出来る、あるいは、示してくれそうな人物と顔を合わせるとか、言葉を交わすとかする機会に恵まれることがないのだよ。従って、自分たちこそこの世で一番の切れ者であり、気概に満ちた唯一の存在であると結論す

るのだな。そして、われわれが装っているような馴々しい態度を取ろうとしない者については、そのすべてを横柄な目付きで見下し、世界は自分たちのために、自分たちだけのために作られているみたいに考えるのだ。

こんな具合で、有益な知識についても、他の者たちが奥の奥まで探求するのに、われわれは上っ面をなぞるだけであり、しっかりとした分別や真の名誉心を備え、卓越した才能に恵まれた人々の軽蔑の的となるのさ。そして、目をつむったまま、一つの狭い区画の中をグルグルと（目の見えない碾臼馬さながらに）動き回っているのだが、自分では、ありとあらゆる活動の場を我が物としているような気になっているのだよ。

ヒックマン氏が令嬢のところから戻って来ると、俺は氏の前へ飛び出した（五三）。

氏は令嬢との別れに際し、非常に心を打たれていた。俺に話してくれたところでは（彼女に向かってそんなことは決して言わなかったが）、二度と再び彼女に会うことはないのではと、心配だったからだそうだ。彼女のほうでは、何ごとについても、事実を歪めない範囲で出来るかぎり有望と映るよう、ハウ嬢に報告してもらいたいと、そのように氏に要請したのだ。

別れる際の、情の籠もった一幕のことを氏は語っていたが、こういうことだ。彼女の控えの小部屋のドアのところで別れの挨拶に接吻をした後、階段の降り口まで来ると、そこまで彼女がついて来たのだが、失礼とは思いながら、より熱烈な態度で同じ行動に出るのを抑え切れなかったというのだよ。また、これは、そのような栄誉に与ることが出来るのも、これが最後になるだろうとの考えからだ。そして、無礼な振舞いに及んだことを詫びようとしたところ（説明のしようもない、そして、抑えることも出来ない、そんな激しさで、氏は彼女を自分の胸にひしと抱き寄せていたというのだ）、「貴方を許すですって、ヒックマンさん　…　勿論ですわ。私の兄弟ですし、お友達ですもの。私の大好きなハウさんと一緒に幸せをつかんでいただくはずの立派な男性が、私にとりましてはとても大切なことをお示しするためですが、私のこの愛情の印をあの方のところまでお届け願いたいのです。」と、氏の接吻を受けようとして、あの愛らしい顔を差し出し、両手で彼の手を握り締めたのだそうだよ」それに、あの方も私を愛していてくださるのですから、そうでない場合でしたら、几帳面な考え方からいたしまして許し難いものになるのでしょが、このような愛情の印も、おそらく、あの方にはより好ましいものになるだろうと思うのです。それから、あの方にお話しいただきたいのです」と、片方の膝を床につき、両の手を握り締め、天を仰ぎながら、彼女が続けた。「あなたたちお二人に神の祝福がございますよう、そして、あなたたちが幾久しく、たくさんの幸せな年月の間、お互いの喜びとなり慰めともなりますよう、私たちが別れを告げます最後の瞬間に、私がこのような姿勢で祈っておりますところをご覧になったということをですわ」とだよ。

「私の目から涙がこぼれてしまいました」と、氏が言っていた。「泣きじゃくりもしましたよ。喜びと悲しみの混じり合った気持ちからです。そして、私が立たせてあげるとすぐに、令嬢は戻って行かれましたので、私も階下へ降りたのですが、立ち去るのは大変心残りでした。ただ、留まるわけにはまりませんでしたので、令嬢の衣装の裾のあたりが見え

ております間、私の目は私の足とは逆の方向に釘づけとなっていたのです」

「私は奥の仕事場へ行き」と、この尊敬すべき男は言葉を続けた。「天使のような令嬢を精一杯世話してくれるよう、スミス夫人に頼みました。そして、通りに出ますと、令嬢の窓のほうを仰ぎ見たのですが、そこには、これが今生の見納めということになるのでしょうか（と、氏は言っていた）、令嬢の姿があったのです。あの魅力的な手を私に向けて振っておりました。また、言葉では言い表せないような微笑みを湛えた優しさ、それに、気遣いの気持ちの入り雑じった表情でした」とだよ。

是非とも話してもらいたいのだが、卑劣なラヴレースよ、俺のこんな味気のない描写からも、貴公には分かるのではないのかな。知性に基づいた友情には、官能を煽る劣情の炎の中で味わうものよりは高尚な快楽があるに違いないということがだよ。また、これからはいつもそうしようと、今俺は願っているわけだが、あの限りなく望ましいものを優先させるような真似が、いずれ貴公にも可能になるのではないかということもだ。

貴公に任せるから、俺のこんな想いを精々役立ててもらいたいものだな。

貴公の真の友

J. ベルフォード

手紙　九十九

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

七月二十五日　火曜日

貴女からの心の痛む二通のお手紙は、大佐のお宅におりました私のところへ（貴女からのお手紙はどれもそうしてくれるように指示してあったのです）届けられました。パーティーがお開きになる一時間ほど前のことです。私は堪えることが出来ず、その場でお手紙に急ぎ目を通しました。そして、お聞かせしたくないほどにたくさんの涙を流してしまいました。ただ、戻って仲間に加わらねばならない人たちが、それに、私の母もですが、なるべく私の心配ぶりに気づかぬよう、涙は出来るかぎり拭っておきましたけれどね。

私は今でも（あの時はもっとでしたが）途方もなく動揺しております。そのきっかけにつきましては、間もなくお知らせいたします。貴女がお送りくださった最後のお手紙の悲しく、厳粛な文面から、私が最初に向けました注意を逸らすことの出来ますものは、死の一撃によって与えられます動揺を別にいたしますと、何一つないわけですからね。ですから、この文面のことから始めなければなりません。

こんなにも大切なお友達を失うなんて、考えるだけでもどうして耐えられましょう。想像すらしたくございません。本当の話、私には出来ない相談ですわ。貴女が備えておられるような心は、こんなにも早く私たちから取り上げられてしまいますために人間に委ねられたわけではないのです。幸福にも貴女のことを存じ上げる者全員のためにですが、貴女がおやりになるべきことは、まだたくさんあるに違いないのです。

先週木曜日のお手紙の中では(ア)、貴女のお立場のことで、すでに改善されました点を数

(ア) 二百五十三頁を参照のこと。

え上げておられますね。あのように列挙なさいますのは真剣なお気持ちからなのだということ、そして、お避けになることは不可能であったわけですが、その被害意識を克服しようと決心なさる勇気が本当におありなのだということも、実際にお示しいただきたいのです。そうしてくださるのでしたら、私も神の御心と、貴女の全快を願います私のささやかな祈りに期待を寄せることにいたしましょう。そして、あの小さな島から戻りました時には、ヒックマンさんが貴女に申し出ることになっております提案のとおりに、私どもの近くに来ていただけるくらいまで、貴女がすっかり元気になっておられるのを知ることになりますなら、私は心の底から嬉しく思うことでしょうね。

日曜日のお手紙では、お身内の方々について無遠慮なことを申し上げました件で、私を咎めておられますね(ア)。

熱くなり易いのでしょうね、私は。自分でも分かっているのです、そうなのは。あまりにも熱くなり易いのですわ。でも、友情に燃えるということは、絶対に罪なんかじゃないはずです。とりわけ、お友達には大変な美点が備わっており、迫害に苦しみ、そして、いわれもなく被った不幸と戦っておられる場合でしたらね。

お友達付き合いでの冷静さというのは、私には見当もつきません。たとえ、思慮分別などという呼び方で勿体をつけるとか、目立たせるとかいたしましても、あるいはまた、どんなことをしようともですわ。

貴女がお身内の方々の言い訳をなさるのは結構なのです。いつでもそれが貴女のしておられたことですからね。でも、宜しいですね、他の人たちが自分の好きなように判断するのを認めていただかないと困るのです。私は皆さんの娘ではありません。貴女のお兄様やお姉様の妹でもございませんわ。有難いことには、違うのです。

ただ、触れておられますようなはるか以前の私の無遠慮な態度のことを、もしも不快に感じられるとおっしゃるのでしたら、つい先頃お姉様への働き掛けをいたしました際に起こりました出来事をお知りになった時には（貴女がそんなにも心に掛けておられます、例の呪いを解除して差し上げたいと考えてのことです）、さらにさらに気を揉まれるのではと心配になります。でも、皆さんのほうでも私に負けないくらい、お返しをしてくださいましたわ。それでも、何もかも申し上げることはございませんわね。ただ、こういった容赦のない人たちが［私の母もその一人ですが］、それぞれのご両親にとりましては、いつもおとなしく、親孝行で、従順な子供さんであったことを願っておりますわ。

またですが、お許しくださいね。白状いたしましたとおり、あまりにも熱くなり易いのですわ、私。でも、その反対のお手本ということになりますと、貴女以外には存じ上げません。それに、貴女の受けておられる仕打ちを思いますと、子としての務めを忘れないその従順さですが、骨折って真似る気持ちもあまり起こらなくなるのです。

こうまで下劣な男とこんなにも近い関係にあることが、唯一面目の立たないところという、そんな高貴なご一族の願いをお断りするよう、私に頼んでおられましたね。でも、結果のことが、あゝ、あなた、私はとても心配になるのです。身勝手な考えですが、とても恐ろしいのです。どうしてもこれをお断りしなければいけないのでしたらね。どうお話ししたら良いのか分かりませんが、でも、もう一度貴女からのお便りがありますまで、この

（ア）三百一頁を参照のこと。

お断りを申し上げますのは延期させていただきたいのです。

ご自分たちの輝かしい一族に貴女をお迎えしようというこの熱心なお誘いは、貴女にとりましては、それこそ大変に名誉なことなのです。皆さんのほうでは、当然至極のことですが、貴女を崇拝しておられます。貴女もあの卑劣な男に対しましては、大層見事な凱歌を奏でられたことでしょう。あの男は真剣そのものですし、世間の人たちは不幸な出来事を十分に承知しているのです。貴女はまだたくさんの善行を施すこともお出来になるのです。ご意思には少しの汚れもございません。お身内の方々はとても無慈悲です。お考えになることですわ、あなた。考え直していただきたいのです。

どうか、お考えになっていてくださいね。その間に、この手紙の冒頭で触れました動揺のきっかけのことをご説明いたします。その結論のところで貴女もお気づきになるでしょうが、この重大な点につきましては、もう一度貴女にご検討いただくようお願いするという約束に、私は同意を与えているということです。貴女の代理といたしまして、お断りを申し上げる前にお願いするのですが、このお断りは、いったんお伝えいたしますと、後悔するにいたしましても、あるいは、撤回するにいたしましても、貴女にとりましては面目の立つことではございませんからね。

さて、ご承知いただきたいのは、前の手紙で触れました理由からですが、アンブローズ大佐のところへ母のお供をしたということです。貴女もご存じの紳士淑女がたくさんお見えでした。とりわけ、キティ・ドイリー嬢、ロイド嬢、ビディ・ドリッフ嬢、ビダルフ嬢とそれぞれの恋人たち、そして、大佐の二人の姪御さんもですが、お二人とも美人なのです。その他にも大勢おりましたが、貴女のご存じない人たちでした。私もお名前以外は知らない人たちですからね。素晴らしいお客様の集まりで、皆さんお互いに満足しておりました。そのうち、アンブローズ大佐がある人を案内して来たのですが、その人が大広間に導き入れられた途端、集まっていた人たち全体が一種の動揺に包まれました。

貴女の悪党だったのです。

あの男を目にいたしますと、私はすぐにも倒れてしまうのではと思いました。母も動揺いたしまして、私のところへやってまいりますと、このように囁いたのです。「ねえ、ナンシー、あの人のお姿を見ても、あまり感情を出さずにいられるかしら、貴女は。もしも駄目なら、隣のお部屋へ退出いたしましょう」とです。

私は立ち去るわけにまいりませんでした。一人残らず全員の目が、あの男から私のほうへと向けられたのです。私は腰を下ろして扇子を使いました。そして、お水を一杯お願いしないではおられませんでした。あゝ、バシリスクが持っていると言われておりますような目を私も持っていたなら、そして、その一睨みであの男の命を思いのままに出来るなら、と、私はそう願いました。即座にあの男の息の根を止めてやろうとしたでしょうね。

あの男が入って来ました時の様子というのが、私にとりましてはひどく嫌悪感を誘うものでしたが、他の人たち皆さんにはとても好ましく感じられるものでしたから、その点でも、睨み殺してやりたかったというわけです。

一同に向かって挨拶の言葉を述べた後、あの男はヒックマンさんを選び出すと、次のよ

うに話しておりました。この前会った際のあの人に対する自分の振舞いを一部思い出してみたところ、あの人の忍耐強さや慇懃さに甘えてしまったところがあったと考えるようになった、というのです。

そして、事実、そのとおりだったのです。

ドイリーさんは、ご婦人たちが集まっておりますところであの男の挨拶をお受けになると、皆さんに聞こえるのも構わずに、クラリッサ・ハーローさんのご機嫌はいかがでしょうか、と尋ねました。

あの男は、自分が望んでいるほどには、また、貴女がそうあって当然なほどには、具合が宜しくないように伺っております、と言っておりました。

「あゝ、ラヴレースさん、もしも私の聞き及んでおりますことがすべて本当だといたしますと、あのお嬢様のことでは、貴方といたしましても、ずいぶん償いをしなくてはなりませんわね」と、彼女が言いました。

「償いをしなければならないことが私には山ほどあるのですよ」と、鉄面皮な悪党が言いました。「ただ、あのお嬢さんは実にたくさんの美点を備えておられますし、はなはだ繊細な心をしておられるものですから、些細な悪さでも、彼女の目には、大きな罪に映るわけですね」とです。

「些細な悪さですって　…　」　ドイリーさんが答えました。「ラヴレースさんのお人柄は広く知れ渡っておりますから、些細な悪さがお出来になるなんて、どなただって信じませんわ」

「これはまたご親切なことですね、ドイリーさん」

「とんでもございませんわ、本当に」

「それじゃあ、私は貴女から親切にしていただけない、ただ一人の人物というわけですね。では、その分、貴女への負い目も少なくなるというものですよ」

あの男は屈託のない様子でプレイフォード嬢の方へ向き直り、紳士ぶったお世辞を少し口にしておりました。このお嬢さんのことはご存じないものと思います。あの男の従姉妹のモンタギューさんたちを訪ねて来られるのです。実際、あの男は、例の見てくれの良い態度でなのですが、どなたに対しましても何か一言あるのです。そして、このために、あの男が入ってまいりました際に一人一人が抱きました嫌悪の情も、あっという間に鎮まってしまったのです。

私がなおも腰を下ろしたままでおりますと、私が目に入らなかったのか、それとも、まだ顔を合わせたくなかったのか、そのどちらかなのでしょう、あの男は、嫌がっている母の手を取り、話し掛けたのですが、自信満々の態度でした。「ここでお会い出来ましたのを嬉しく思います、マダム。ハウ嬢はお元気でしょうね。お嬢さんのことでは大いに不平を申し上げて然るべき理由もあるのですが、ただ、お嬢さんにはご恩顧を賜りたく思っているのですよ。男性に対して施していただける最高のものをですがね」と言うのです。

「お友達のこととなりますと度を越して興奮したり、夢中になったりいたしますのが娘の常なものですから、私といたしましても、また、娘本人も、平静にしてはいられないのですわ」

母と私が互いに不満を感じますような、あるきっかけが最近ございましたのは確かなことです。でも、この件は、母もあの男には伏せてくれて良かったように思うのです。もっ

とも、その話をいたしました相手の男、それに、このいきさつを私に教えてくださいましたご婦人を別にいたしますと、どなたの耳にも届かなかったものと信じております。母は小さな声で話しておりましたからね。

「われわれは、マダム、まったくの一人きりで生きられるものではありません」　卑劣な偽善者が言っておりました。「だれもが持ち合わせているわけでもないのですよ、友情を培うことの出来る心は。それに、苦しんでいる友人の利益となることに無頓着でいられるというのは、一体どのような心なのでしょうね」と言うのです。

「こんなご意見をラヴレースさんのお口からお聞きするなんて　…　」　母が申しました。「お許しくださいね。でも、どこかのうぶな娘さんたちが貴方に思いを寄せて痛い目を見ておられるのでしょうが、同じように、私にも貴方のことを良く思わせようと骨折りをなさるのは、まさか、目的があってのことではないでしょうね」ともです。

母は乱暴にあの男の手を振りほどこうといたしました。でも、その手を離さず、「もう少し手厳しさを緩めていただきましょう、親愛なるマダム」と、あの男が言いました。「このような場所ですから、是非とも、手厳しさは緩めていただきたいものです。極めて罪深い人間も自分の過ちに気づくことがあるのはお認めいただけるでしょう。そして、過ちに気づいてそれを認め、悔いております場合には、温情ある扱いをされて然るべきではないのでしょうか」と言うのです。

「貴方のご様子は、失礼ですが、悔い改めた人の態度とは見えないのです。でも、場所柄ということもございますので、貴方が厳しさとおっしゃっておられるものと同じく、この話題につきましても、差し控えさせていただくのが穏当でしょうね」

「だが、親愛なるマダム、お許しをいただいて申し上げたいことがあるのです。貴女様の魅力溢れるお嬢さんに（というのが、あの男の歯の浮くような言葉でしたが）ひとつお顔を利かせていただければと思っているのです。私以上に本心から悔い改めた者は、いまだかつて他にいなかったのだということを、私の力で、世の人間すべてに確信させることが出来るようにしてもらうためです。それに、どうしてなのですか、親愛なるマダム、このお怒り様は何故なのでしょう（と申しますのも、母はこの男の手から自分の手を外そうとして、もがいていたのです）。この暴れようときたら、まるで生娘ですね。［本当に失敬な男ですわ］お尋ねいたしますが、ハウ嬢は見えておられるのですか」

「あの娘も来るようなことはなかったでしょうね。どなたと顔を合わせることになるのか、承知しておりましたならね」

「じゃあ、ここに来ておられるのですね。そいつは有難い」　あの男は母の手を解放しますと、集まっている人たちのほうへ歩いて行き、仲間に加わりました。

「やあ、ロイドさん」と、あの男は気取った態度で（母の手を捨て、お嬢さんの手を取りながら）言いました。「どうか教えていただきたいのです。アラベラ・ハーロー嬢は見えておられますか。それとも、これからお見えになるのですか。お見えになるはずと聞いているのです。このことが、そして、貴女のお友達のハウ嬢にご挨拶をする機会だということが、大佐のところへ伺う気持ちを起こす大きな動機となったわけですよ」とです。

とびっきりの厚かましさですわね。そうではございませんかしら。

「アラベラ・ハーローさんのほうでは、失礼とは存じますが、ここで、あるいは、他のどのような場所にいたしましても、貴方に会うお気持ちはおよそないはずですわ」と、ロ

イド嬢がおっしゃいました。

「おそらくそうでしょうね、ロイドさん。ただ、おそらくそれだからこそなのでしょうが、一層あのお嬢さんにはお会したいのですよ」

「ハーローさんでしたら」と、ビダルフ嬢が脅すような態度で言いました。「滅多なことではここへお見えにならないでしょうね。お兄様がご一緒でなければね。私が思いますには、お一人がいらっしゃるのでしたら、お揃いでいらっしゃるでしょうね」とです。

「願わくは、お二人揃ってお越しいただきたいものですね」と、あの恥知らずが申しました。「この集いに混乱を来すようなことは、ビダルフさん、お約束するが、私のほうからは何一つ始めないつもりですよ。仮にあの連中がやり始めましてもね。大佐ご夫妻、あるいは、ご夫妻が選ばれた他のどなたかの立ち会いを得まして、あの兄妹と三十分穏やかに話し合えるなら、私にとっては、幸運この上ない機会ということになるでしょう」というのです。

それからあの男は、大佐か奥様かを、あるいは、お二人ともでしょうか、見つけ出そうとするように、くるりと振り向き、私に目を留めたのです。そして、深々と頭を下げますと、私のほうへ近づいてまいりました。

お察しいただけるでしょうが、私はすっかり動揺してしまいました。あの男が私の手を取ろうとしました。私は拒んだのですが、憤慨のあまり顔を真っ赤にしておりました。皆さんの視線も私たちの上に注がれていたのです。

私はあの男から逃げ出し、部屋の反対側の端のほうへまいりました。そして、あの忌まわしい目が届かないように思われます場所に腰を下ろしたのです。ところが、すぐにあの男のいやらしい声が聞こえてまいりました。私の椅子の後ろで（厚かましい無頓着な様子を装い、あの男は椅子の背に寄り掛かっていたのです）、肩越しに覗き込みながら、「魅力溢れるハウさん、お願いが一つ … 」と囁いているのです。私は椅子から飛び上がりました。でも、怒りのあまり、立っていることもなかなか出来ませんでした。「あゝ、この愛らしい、だが、似つかわしい軽蔑の態度 … 」と、鼻持ちならない男がなおも囁いておりました。「こうまでお気持ちを掻き乱してしまいまして、申し訳なく思います。ただ、ここでも、あるいは、お宅でも結構なのです。何卒、十五分間お耳をお貸しくださいますよう、お願いいたします。お願いですよ、マダム、ただの十五分で良いのです。隣り合わせのどの部屋でも構いません」と言うのです。

「絶対にお断りいたします」と、扇子をパタパタさせながら私が申しました。何をしているのか、自分でも分からなかったのです。でも、あの男の息の根を止めてやりたい気持ちだったのです。

「われわれは注目の的になっておりますからね。でなければ、親愛なるハウ嬢、両膝をついてお願いしたいところなのですよ。貴女の魅力的なお友達にお顔を利かせてくださるようにです」

「貴方にお話しすることは何もないはずですわ、あの方には」

この時にはお手紙を受け取っていなかったものですからね。

「きついお言葉ですね。だが、私がそれに見合ったことをしてきたのは確かなことですよ。また、心臓に短剣を突き立てられても仕方ないのです。自分の落ち度のことは重々承知いたしておりますので、貴女からのご調停以外には、私が望みを掛けられることは他に

ないのです。私といたしましては、他のいかなる理由をもってしても望みを掛けるわけにまいらぬあの恩恵を、もしもハウ嬢の仲立ちによって得られるのであれば　…　」

「私の調停だなんて　…　破廉恥極まりない男が　…　私の調停ですって　…　貴方には虫酸が走るのです。心の底から嫌悪を覚えるのです、貴方のことは。破廉恥極まりない男が　…　」　三度か四度、私はこの台詞を繰り返しておりました。それも、どもりながらです。動揺の極に達していたのです。

「貴女がどれだけ口を極めて非難なさろうとも、私が我と我が身に向かって投げ付けている悪口には及ばないのです。確かにそのとおりなのだ。私は破廉恥極まりない男だったのです。だが、今はそうではない。お許しいただきたいのです　…　皆さんの目はわれわれに向けられているのですよ　…　ほんの一瞬、お耳を貸していただきたい。ただの十語だけで結構ですから、親愛なるハウ嬢、言葉を交わして欲しいのです。だれであれ、お好きな方に立ち会ってもらって構いません　…　大切なお友達のためなのです　…　隣の部屋で、貴女と十語だけで良いのだ」

「もしも避けられるならの話ですが、私が貴方と一言でも交わしたりするとお考えでしたら、それは私に対する侮辱というものですわ。よけるのです。失せるのです、さあ」

こう言うと、私は乱暴に立ち去ろうといたしました。でも、あの男が私の手を掴んだのです。私は極度にうろたえてしまいました。皆さんの目がますます私たちの上に集中していたのです。

ちょうどその時、おそらくそうすることを強いられる必要はなかったのでしょうが、辛抱するように申し付けようとして、母が片隅に引っ張り込んでおりましたヒックマンさんが、母と連れ立って近づいてまいりました。母は手引き紐で、というよりは、袖を掴んでと申すべきでしょうが、あの人を操っていたのです。

「お口添えを願いますよ、ヒックマン君」と、大胆不敵な破廉恥漢が言いました。「隣室でハウ嬢と十語交わすだけで良いのです。貴方の立ち会いの下でですよ。それから、マダム、奥様のおられるところでです」と、母に向かって言うのです。

「お前にお話ししたいとおっしゃるのですから、聞いてお上げなさい、ナンシー。厄介払いのためにも、その人の十語とやらをお聞きするのです」

「勘弁願いますわ、お母様。この人の息が掛かるだけで、私　…　さあ、手を離していただきましょう」

あの男は溜め息をつき、顔を　…　あゝ、場数を踏んだ悪党ときたら、盛んに溜め息は漏らしますし、また、表情も作って見せるのです。それから、あの男は私の手を離したのですが、それがまことにもって恭しい態度なものですから、あの男に耳を貸そうとしないのは良くないと、一部の人たちからお咎めをちょうだいしたほどです。そして、このことで一層私の怒りは募りました。あゝ、この男は悪魔ですわ。本当に悪魔なのです、この男は。その気になれば、あれだけ忍耐強く出来る

こんなことをされたものですから、私は後戻りをし、くるりと振り向きましたあの男の顔を、つい思わず、扇子でまともに叩いてしまったのです。あの男の鬘から髪粉が飛び散っておりました。

私が困惑いたしますのと裏腹に、皆さんのほうでは大喜びのようでした。

あの男はヒックマンさんのほうへ向き直りましたが、髪粉は飛び散りますし、居合わせた皆さんも笑っているものですから、苛立っておりました。「君は世界一の幸せ者になることでしょうね、ヒックマン君。何しろ、君は善人だし、この短気なお嬢さんを怒らせるようなことは一切なさらないでしょうからね。それに、お嬢さんは有り余るほど分別をお持ちだから、いわれもなしに憤慨なさるようなことはないわけですからね。だが、そうでなければ、神のご慈悲のあらんことを、てなところでしょうね」と言うのです。

この人は、このヒックマンさんという人は、男性としては柔和すぎるのですわ。本当にそうなのです。でも、だからこそ、自分の短気な娘はあの人に一層好意を感じるべきなのだと、辛抱強い母が詰るのです。ただ、家の外では柔和な人だからといって、家の中でも柔和だとはかぎりませんもの。私はそんな例を一度ならず目にしているのです。また、家の中でも柔和だといたしますと、私は本気でそう考えるのですが、そのことで一層その人たちを好きになったりはしないだろうと思うのです。

あの男は次に母のほうへ向き直りましたが、母とも五分に渡り合おうというつもりなのでしょう。「一体どこからなのでしょうね、奥様、お嬢さんがこのような気の強さを身につけられたのは」と言うのです。

周りに集まっていた人たちが笑みを浮かべました。申し上げるまでもありませんが、母の勝ち気さというのは、結構知れ渡っておりますからね。そこで母は、ひどく苛立ちながら、「あらあら、世間の他の皆様と同じ扱いというわけですね、私の場合も。でも …」と言い掛けました。

「お許しください、マダム」と、あの男が母の言葉を遮り、「このような質問は差し控えても良かったのです」と言っておりました。そして、すぐに（私が広間の向こう端に引き下がりましたので）プレイフォードさんのところへ行き、「何なりとお求めくださって結構ですよ、お嬢さん。M卿のところで歌ってくださったあの歌をお聞かせいただけるのでしたらね」と言うのです。

それからあの男は、まるで何ごともなかったかのように、あのお嬢さんやドリッフさんと音楽について話し始めたのです。そして、プレイフォードさんの両手を取り、大変上品な屈託のない態度で、囁きかけるように歌を聞かせているものですから、私といたしましては、周りを見回しまして、軽率な馬鹿娘たちの半数ほどが、悪名が世に鳴り響いている邪悪な人柄にも拘らず、あの男のことですっかり上機嫌になっているのを目にいたしますと、少なからず腹立たしさを覚えてしまいました。あのように愚劣な男たちが見せる愚劣さの多くの部分と申しますのは、こんなところに原因があるわけですが、反対に、もしも自分たちが忌避され、蔑まれ、また、現に猛獣なのですが、そのようなものとして扱われているのを知りましたなら、己の巣窟へ逃げ込み、そこで独り遠吠えをすることになるのでしょう。そして、不幸な偶発事のため、あるいは、同情の余地もないような思い上がりから、そんな輩の前に身を晒す者を別にいたしますと、連中のために苦しむ人間は一人としていなくなるはずなのです。

その後あの男は、時折ですが、とても真面目な態度でヒックマンさんに話し掛けておりました。〈時折〉と申しますのは、こんなわけなのです。あの男は、思い出したように急に陽気になりますと、こちらの婦人、そして、あちらの婦人へと顔を向け、それからまたヒックマンさんに向き直るといった具合で、真面目さとか陽気さとかを思いのままに装っていたからなのです。そんなわけで、あの男は皆さんの目を、とりわけ、婦人たちの目を引きつけていたのですが、婦人たちのほうでは、「もしも …… 」「でも …… 」「何て残念なことなのでしょう」といった言い回し、そして、誇りの言葉を口にすること自体が並々ならぬ好意の証となるような、そんな類いの言い回しで意味合いを弱めてはおりましたけれど、あの男への感嘆の思いをしきりに囁いていたのです。

私たち女性がこのような道楽者の弄び者、そして、嘲笑の的となりますのも、まことにもって尤もな話です。何の考えもなしに、見てくれだけに支配されているのですもの。ほんのちょっと思い返して見るだけでも、分かるのではないでしょうか。真の価値を備えている人間は控え目に違いないということがです。遠慮がちな人間ですからね。それに、この男のような恥知らずは、この底知れない鉄面皮さに到達するまでには、悪事の学位を取得し、卑劣さの教科を履修していたに違いないということもです。しかも、この鉄面皮さと申しますのは、私たちのことは軽んじ、自分自身を高く評価する気持ちからだけ生まれて来るものなのです。

でも、私たち女性は概して控え目で内気ですし、普通には自分たちの主な美点であるものを、短所のように考えることがあまりにも多いのです。そして、何ともご立派な判断ということになりましょうが、恥じることを知らない男を選ぶことで、その短所を埋め合わせようと考えるのです。

ヒックマンさん相手のあの男の話題は貴女のこと、そして、貴女に危害を加えましたことをぬけぬけと認める言葉へと進んで行きました。とても軽々とその話題を離れたり、戻ったりしておりましたけれどね。

このような人でなしには …… 人間なんて呼ぶわけにまいりませんもの …… 我慢ならないのです、私。間違いございません。どのような場所でも、あるいは、どなたを前にいたしましても、たとえ祭壇の前であっても、女の人が一緒でしたら、きっと同じように振る舞ってみせることでしょうね。

これからはずっと、次のことを座右の銘にするつもりです。ある女性に対しまして、いくらかでも敬意のまなざしを向けようとすることがないような男性は、その女性を蔑視するでしょうし、折に触れては、見下したような振舞いに出るものだということです。

あの男は、厚かましいことに、私を連れ出そうといたしました。でも、私は断固として拒みましたし、軽蔑した態度を精一杯装い、出来るかぎり避けていたのです。でも、どのようなことをいたしましても、あの男の感情を傷つけるわけにはまいりませんでした。

あそこへは行かなければ良かったと、二十回も考えておりました。

あの男などは顔を出すよりも、首の骨を折ってくれたほうが良かったのだと、殿方たちも私に負けず劣らず、そのように願う気持ちになっておりました。と申しますのも、あの男以外には、どなたも注視されることがなかったからです。めかし立てるようなことはほとんどありませんが、それでいて、服装は優雅で立派なものです。容姿の見掛けは素晴らしく、態度には実に不敵なところがございます。その表情には極めて意味深長なものがあ

りますし、洞察力の鋭さを窺わせます。非常に陽気なのですが、少しもお猿さんじみてはおりません。外国を旅していますが、それでいて、気障なところはありませんし、ただの洒落者ではなく、どこまでも男っぽいのです。それに、あの男の豪胆さと機知につきましても、片方は広く知られておりますし、もう一方はひどく恐れられていますから、お察しいただけるでしょうが、なよなよした伊達男などは（四、五人は居合わせたのですが）、あの男と一緒ですと、この上なく惨めな有り様になってしまうのです。ある真面目そうな殿方が私に向かってこんな所感を述べておりました（私があの男を避ける、その姿が気に入ったのでしょう）。婦人の大多数は心の奥底では放蕩者なのだという、例の詩人（五四）の意見はまさに正鵠を射たものであって、さもなければ、あれほどの悪名を得ている人物に女性がこんなにも夢中になるはずがない、とおっしゃるのです。

詩人とその詩句を利用する人両方の非難は、あまりにも一般的にすぎますし、きちんとした作法に則った部分よりは、悪意に促された側面のほうが目立ちますねと、私はそのように申しました。

あの恥知らずは、私が一生懸命避けておりますのを（大広間をあちこちと移動していたのです）看て取りますと、母とヒックマンさんが私に話し掛けているところでしたが、とうとう思い切って私のところへやってまいりまして、二人の目の前で、次のように言葉を掛けてきたのです。

「失礼とは存じますが、マダム、母上のご了解をいただきまして、少しの間貴女とお話をしたいのです。この場でも、あるいは、貴女のお宅でも構いません。その機会をお与えくださいますよう、お願いいたします」と言うのです。

「ナンシーや、その方がおっしゃりたいということを聞いてお上げなさい。私の前でなら、お前も構わないでしょう。それに、どうしてもというのでしたら、私たちのところへお前を訪ねて来ていただくよりは、隣のお部屋でのほうが良いでしょうね」と、母が申しました。

私は大広間の隅へ引き下がり、母が後を追ってまいりました。あの男も、ヒックマンさんの片方の腕の下のところを掴み、母について来るものですから、私は、「まあ、どのようなことをおっしゃりたいのでしょう。この場で話していただきますわ」と申しました。

「ヒックマン君にお話ししていたところですが」と、あの男が言いました。「この世でも最も素晴らしい女性に加えました危害のことが、私にはすこぶる気掛かりになっているということです。とは申せ、前回お目にかかる栄誉を得ました際、彼女のほうでは私に対しまして赫々たる勝利を収められたわけですから、私が悔い改めておりますこともあり、彼女のこれまでの憤りを和らげていただいて当然とも言えるのです。ただ、私といたしましては、彼女の許しを得るためでしたら、いかなる処置も講じたいと、誠心誠意そのように考えているということです。この点に関しましては、私の従姉妹のモンタギュー嬢たちがお話ししましたね。私の信義心につきましては、ベティ夫人、セアラ夫人、そして、M卿が請け合ってくれています。愛しの君に対して貴女が影響力を持っておられることは存じております。私のためにその影響力を用いていただけそうな望みを貴女は与えてくださったと、従姉妹たちは教えてくれました。M卿と卿の二人の妹さんも、その成果を今か今かと待ち侘びているところです。すでに彼女から便りを受け取っておられるに違いない。受け取っておられますね。何らかの希望を私は抱いて構わないのかどうか、宜しければお教

え願います」と言うのです。

「この話題にどうしても触れなければいけないのでしたら申し上げますけれど、貴方はあの方に胸もつぶれる思いをさせてしまったのです。ご存じないのですわ、貴方は。自分が傷つけた女性の値打ちをです。貴方はあの方に相応しくありません。それに、当然のことですけれど、あの方は貴方を軽蔑しておられるのです」

「親愛なるハウ嬢、その厳しい告発に激しい怒りを交えるのはお止め願います。自分の運命を承知しておかねばならないのです。彼女にまったく歩み寄りの余地のないことが分かりましたなら、私は今一度国を離れるつもりでいるのです。だが、お傍に伺うお許しをいただきたいのです。彼女自身のお口から自分の運命を知るためです」

「貴方と顔を合わせたりなさると、あの方はすぐにも息絶えてしまわれることでしょうね。それに、あの方のお顔をまともにご覧になれるとしたら、貴方は一体どういう人なのでしょう」

それから私は、あの男の下劣さや、貴女に嘗めさせた数々の害悪について、また、お身内の方々皆さんが敵に回られるような、貴女が追い込まれました窮状のことや、貴女を連れ込みましたいかがわしい家の件で、あの男を責めましたし（十分に激しい口調を用いたつもりですが、信じていただけますね）、その卑劣な手管の数々や恐ろしい逮捕劇のことも仄めかしてやりました。また、貴女の今の悲しいご病気のこと、そして、あの男と結ばれるよりは、むしろ死を選ぼうとなさる貴女のご決意のことを話して聞かせたのです。

あの男は自分の振舞いに関しまして、逮捕劇のことを別にしますと、どの点につきましても申し開きはいたしませんでした。そして、貴女に加えました仕打ちのことは遺憾に思うと、大層厳かに言明しておりましたが、何のこだわりもみせずに我と我が身を責めますし、それも、自分にぴったりの呼称を用いるものですから、私たちの会話のこの部分につきまして、貴女にもご披露することを約束してしまったのです。さあ、これで貴女にもご承知いただけますね。

母は、ヒックマンさんも同じですが、この際の発言から推しまして、貴女に対して犯しました悪事の件で、あの男は良心の痛みを感じているに違いないと考えているのです。ただ、あの男の行動全般からいたしますと、正直に申しまして、三十分間続けてあの男の良心に痛みを覚えさせることの出来るものなど、何一つとしてないように私には思われるのです。でも、貴女とならあの男も喜んで結婚するはずだということ、それは何の疑いもないところだと思います。そして、私には分かるのですが、拒絶されるということがあの男のプライドを傷つけているのです。これほどの女性を好きな時に手に入れる力が自分にはあるのだと、あんな恥知らずが厚かましくも考えたということ、そして、あの男が結婚を考えてくれるというのは遜った態度なのであり、感謝されるべきことのようにも（少なくとも、あの男の一族全員からは）見做されねばならないのだという点が、私のプライドを傷つけましたのとちょうど同じことです。

さあ、いかがでしょうか。私があの男の身内のご婦人方にはっきりとお断りいたしますのを延期する理由は、以上のとおりです。私の母、ロイドさん、それに、ビダルフさんもですが、離れたところで交わしました私たち二人の会話の主題を知りたがっておりましたし、また、その好奇心をある程度満たして上げますのも妥当なことのように私は考えたわけですが（とりわけ、あのお嬢さん方は私たちの選り抜きのお友達ですからね）、三人共揃

って、貴女はあの男と結婚なさるべきだというご意見でした。
お考えのすべてをヒックマンさんにお伝えください。あの人からその点を教えてもらいました暁には、私も胸の思いを残らずお話しいたしましょう。
それまでの間、貴女のお体具合につきましてあの人が届けてくれます知らせが望ましいものであってほしいと、熱烈この上ない想いを込めまして、お祈りいたしております。
変わることなき誠意と親愛の情とを込めまして、貴女の
アナ・ハウ

手紙　百
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

七月二十七日　木曜日
大好きな私のハウさん
予定なさっておられるご旅行に出発なさいます前に、私を訪ねてくださるようヒックマンさんを遣わしてくださいましたご好意に、まずは感謝の気持ちを述べさせていただきました上で、ひとつお小言を申し上げねばなりません（あの誠実な愛情に備わる表裏のなさから出たことですが、そんな愛情も、絆を固めることになります忌憚のなさを容認しないようですと、愛情として認めるわけにはまいりませんわね）。私があれだけ熟慮いたしました上で、ラヴレースさんのお身内の方々にお伝えくださいますよう懇請いたしました最終的なお断りを、延期なさった点についてです。
私のことをそんなにもよくご存じの貴女なのですから、繰り返し申し上げねばなりませんのは残念なのですが、たとえ何年も生き長らえますことが確かだといたしましても、ラヴレースさんと一緒になるつもりは私にはないということです。まして、一年の余命もないかもしれないのですから、あの人のことを考えるわけにはまいらないのです。
世間の人々とその非難の声についてですが、貴女もご存じのとおり、私は常日頃から清廉潔白であるとの世評を熱望しておりましたが、それでも、世間の評価に副次的な地位以上のものを与えますのを正しいことと考えたためしは一度だってございません。衆人注視の中で、ラヴレースさんに向けられましたドイリーさんの挑戦的なお言葉は、私が評判を落としてしまいましたことの新たな証なのです。それに、たとえ評判を取り戻すことが可能であり、また、私が長生きをするといたしましても、自分を許すことが当の私に出来ないのでしたら、私にとりまして、世間の評判にどんな利点があるというのでしょうか。
身内の者たちに向けられました遠慮のないお言葉につきましては、先の手紙であれだけ申し上げたのですから、ここではそれほど触れないことにいたしますが、ただ、身内の一部の者たちと貴女との間で、何か別のことが新たにあったように仄めかしておられますのが、はなはだ気に掛かるのです。それも、身内の者たちのためばかりではなく、私自身にとりましてもそうなのです。と申しますのも、身内の者たちの私に対する怒りを煽り立てずにはおかないはずだからです。私自身にそんなにも深く関わっております件なのですから、私の思いどおりにさせてくだされば良かったのにと、本当にそう思います。でも、済んでしまいましたことは仕方ございませんので、私といたしましては、その結果を甘受し

なければなりません。ただ、仮にも返事を送っていただけるものとしての話ですが、姉の返事がどのようなものになるのか、これまで以上にそのことが案じられるのです。

この話題を閉じるに当たりまして、一言申し添えたいと存じますが、お許しいただけましょうか。次の点でございます。つまり、私の愛するお友達は、称賛に値するものなのですが、ご自分の熱意が絡んでまいります場合には、過失を避けようとなさるよりは、譴責を免れようとなさるお気持ちのほうが、いつも勝っておられるように思われたということなのです。このような遠慮のない言い種をお許しいただけますなら、貴女のお考えを支持することにもなりましょうが、次の点まではお認めしたいと思います。こういった微妙な問題に際しましての一部の親たちの振舞いについてなのですが、無分別な反対は軽率な恋愛沙汰と同じくらいに害悪をもたらすことが多いということです。

こっそりとお宅の近くに引っ越しますよう、ご親切にもお招きいただきました件についてですが、ヒックマンさんには検討する旨をお伝えいたしました。でも、ご容赦いただけますと有難いのですが、仮にこの身に引っ越しをする力がございましても、お受けすることにはならないものと存じます。辞退の理由をお示しいたしましょう。また、私が抱いております敬愛の念と感謝の念の両方からいたしまして、大好きなハウさんからの折に触れましてのご訪問は、私にとりまして、この世でも最大の慰めとなるわけですから、そうして当然ということになりましょう。

そこで、ご承知いただかねばなりませんが、この大都会と申しますのは、邪悪なところではありましても、更生への機会にも事欠かないのです。ここのいくつかの教会では、毎日祈祷が行われておりますし、私といたしましては、体力の許しますかぎり、その機会を利用したいものと願っているのです。私自身が計画しております方法と申しますのは（そして、実行に移そうとしておりました時に、あの残酷な逮捕劇のため、自由と力の両方を奪われてしまったわけですが）、次のとおりです。軽く体を動かしたくなりますと、フリート街にございますセントダンスタン教会まで駕籠でまいりますが、そこでは、朝の七時にお祈りがあるのです。天候に恵まれました時には、リンカンズインチャペルまで歩く計画でしたが（天候に恵まれません時は駕籠に乗るのです）、こちらでは、午前十一時と午後五時に、同じ望ましい機会が得られるのです。そして、それ以外の時には、コヴェントガーデン教会までにして済ませるつもりだったのですが、ここでも同じように、朝早くにお祈りが行われているのです。

この方法を続けてまいりますなら、すでにその実も上がっているのですが、千々に乱れました私の考えを落ち着かせ、そして、私が切望いたしておりますあの完全な忍従の境地へと至りますのに、大きな助けとなってくれますのは疑いのないところだろうと思うのです。と申しますのも、貴女には白状しなければなりませんが、今でも時々は、悲痛な思いや感慨が耐えられないほどに重くのし掛かって来ることがあるのです。そして、信仰上の務めを守ることから得られます助けのすべてをもってしましても、揺らいでおります私の理性を支えますのには、なかなか十分とは申し難いのです。今置かれておりますような状況で、自分なりに振る舞うよう放任されますのには、ご存じのとおり、私はまだまだ弱年者だということでございます。

ご近所へまいりますことを選ばない今一つの理由といたしましては、私のために貴女とお母様との間に生じるかもしれない不快な思いのことがございます。

確かに、貴女が実際に結婚しておられて、あの立派な男性も（そうなりますと、あの方には貴女の愛情のすべてを要求なさる権利が備わるわけですが）、私がご近所にまいりますのを熱心に望んでくださるのでしたら、どうしたら良いのか、私には分からなくなるのです。お祝いのための訪問をいたしますその時点では、おそらく、他の重要な理由を放棄するような考えは起こさないでしょうが、でも、そちらにまいりました暁には、お傍に腰を据えます喜びをどのようにして断念したら良いのか、私にはその術が分からないだろうと思うのです。

姉に出しました手紙の写しを同封いたします。嘘偽りのない改悛の情によって綴られていると、そのようにお考えいただけますことを望んでおります。実際、そのとおりなのですからね。あまりにも自分を卑下しすぎているところがある、などとはお考えになりませぬよう希望いたします。不幸にして親の怒りを買ってしまいました子供が両親に接します時の姿勢には、そのようなことは有り得ないからです。

ただ、両親が依然として（貴女の遠慮のないお振舞いには、もしかいたしますと、前よりも一層反感を覚えているかもしれませんね）軽蔑を込めた黙殺の態度で取り合おうとしないようでしたら（実は、まだ返事をいただいていないのです）、そうするのが正しいことなのだと考えるようにしなければならないのでしょう。とりわけ、直接にお願いをいたしましたのは、これが初めてなのですからね。と申しますのも、願いごとをいたします人たちの厚かましさを私はしばしば非難していたということがあるのです。願いごとというのは、それを聞き入れますのも断りますのも、相手の人のお気持ち次第ですのに、そんな人たちは、望みが叶えられない場合には、腹を立てるような勝手な真似をしてみせるものです。まるで、嘆願する側の人にある請求権と同程度に有効な拒否権が、嘆願された側の人にはないのだとでも言わんばかりですからね。

でも、もしも私の手紙に返事がありました場合は、しかも、そのようにすぐに熱くなってしまわれるお友達にはお伝えするのが憚られますような、そんな言い回しのものの場合には、宜しいでしょうか、私の身内に非難の矛先をお向けになるようなことはなさらないでいただきたいのです。それよりも、私がどんな苦しみを嘗めたのか、両親は知らないわけですから、斟酌をお願いしたいのです。私に対する正当な怒りで（両親にとりましては正当なのです。当人たちが正当だと考えるのでしたらね）心が一杯になっているものとして、また、私の後悔が現実のものかどうか、判断する立場にはないものとして、手心を加えていただきたいのです。

それに、結局の話、私のために両親に何が出来るというのでしょう。私に憐れみを掛けることが出来るだけなのです。そして、それが何の役に立つというのでしょう。ただ、自分たちの悲しみを募らせるだけのことですし、今のところは、二人の怒りがその悲しみを軽減させるものとなっているのですからね。憐れみを掛けてくれたからといって、地に落ちました私の評判を取り戻すことが、両親には出来るのでしょうか。私の人生の中の致命的なこの五ヶ月間(ァ)を、この一年から拭い去ってくれますようなスポンジを、憐れみでもって買い取ることが出来るというのでしょうか。

大佐のお宅でのラヴレースさんの陽気で屈託のない態度をご報告いただきましたが、ど

（ア）令嬢はラヴレース氏との面会のために定めた時期を含めているのである。

のような方たちが招待され、また、出席予定となっているのか、それを承知の上で、大胆不敵にもあちらへ顔を出したことをお教えいただきました後ですから、私は少しも驚きませんでした。ただ、この点だけは本当に不思議なのですが、あのような男性を自分の夫にしようという考えを私は思い浮かべることが出来るのだなどと、ハウさんみたいな方にそのような想像がお出来になることですわ。

情けない人間ですね、本当に。あの人には憐れみを感じてしまいます。ウロウロと動き回っております姿を拝見いたしますとね。素晴らしい目的のために授かりました天分を悪用し、無分別なのを勇気だと思い、危険も恐れず、断崖絶壁の縁のところでダンスをしているのですからね。

でも、本当に、私の前に姿を見せるぞというあの人の脅しは、これ以上ないほどに鋭く私の不安を駆り立て、怯えさせるのです。この世では二度と再び、あの人と顔を合わせることのありませぬよう、願わずにはおられません。

お願いいたしましたお断りの返事をあの人のお身内のご婦人方にお伝えするのが、貴女はそんなにもお嫌なわけですから、お骨折りをいただきますのは、その目的で同封いたします手紙を転送していただくことだけに止めましょう。確かに、宛先は貴女ご自身になっておりますが、あのご婦人方がこの件で働き掛けをなさったお相手というのは、貴女だからですわ。ただ、お選びになるのは貴女にお任せいたしますので、どちらかのご婦人に貴女のほうからお送りいただきたいのです。

大好きなハウさん、貴女のお祈りにこの身を委ねさせていただきます。そして、この手紙を結ぶに当たりまして、ヒックマンさんをお遣わしくださいましたことへの重ねてのお礼と、貴女のご健康とお幸せ、そして、ご結婚が速やかに執り行なわれますことへの祈念を添えさせていただきます。

変わることなき親愛の情と感謝の念とを込めまして、貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　百一

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

［前掲の手紙に同封されたもの］

七月二十七日　木曜日

大好きな私のハウさん

ペンを手にすることが出来るようになりますとすぐにお知らせいたしました私の断固とした決意ですのに、お見受けいたしますところ、同意なさるのはお嫌なようですから、この手紙を手立てといたしまして、あるいは、貴女が最も適切とお考えになるどのような方法でも結構ですので、ご自分たちの親戚の方のことで、貴女に問い合わせをして来られました立派なご婦人方に、次の点をお伝えいただけると有難いのです。つまり、私に関しましてのあの方たちの寛大なご意見には非常に感謝いたしておりますが、それでも、ラヴレースさんがあらゆる道徳上の制裁に繰り返し背いておりますことを、いわば〈浄化〉いたしますのには、そして、ある男性との結婚によって、私の〈来世〉での幸せを危険に晒し

ますのには、同意いたし兼ねるということをです。その人が、卑劣極まりない策略を延々と重ねた上での話ですが、計画的に加えました侮辱行為のせいで、私は〈現世〉での望みを失う羽目に陥ったわけですからね。

その男性本人も、ご自分の行いを振り返りました時には、私の決心が妥当なものであるばかりか、正当なものでもあるのだと、きっと証言してくださるに違いありません。あのご婦人方のほうでも、私の不幸な身の上をすべてご存じになれば、おそらくそうしてくださるはずだと私は思うのです。

宜しければ、あの方たちに次の点もお伝えいただきたいのです。この件につきましての私の決心は（あの人がどれほど恩知らずな、また、非人間的とさえ言えます仕打ちを私に加えたといたしましても）、思い違いでもないかぎりは、〈怒り〉よりは〈信条〉によるところが大なのだということをです。また、この確信の正しさを証明いたしますのにも、これ以上に確かな証拠はないはずと存じますが、この先二度と私には纏わりつかないようにしていただくという、こんな簡単な条件一つであの人を許すことが出来るということ、そして、お許しするつもりでいるということを宣言いたします。

どのような形でこの宣言をしてくださるお考えだといたしましても、あの高貴なご一族のご婦人方、そして、M卿に対しまして、私の心からの丁重なご挨拶をお添えくださいますよう、お願いいたします。そして、貴女には是非とも信じていただきたいのですが、命のありますかぎり、私は次のとおりの人間であるだろうということでございます。

変わることなき感謝の念と親愛の情とを込めまして、貴女の

クラリッサ・ハーロー

第六巻　目次

手紙　一、二　ラヴレースからベルフォードへ
自分の逃亡を助ける気になるよう、令嬢がドーカスに約束手形を与える。今や、正々堂々たる技比べの時だと、氏は言う。性悪なドーカスと令嬢との会話。ドーカスが令嬢の同情を引く。悪事による結束は美徳の絆よりも強いということ。その点に関する所感。

手紙　三、四、五　同　右
令嬢の意図する逃亡を利用するための新たな企み。トムリンソンの手紙。その趣旨。逃亡を図るための機会を令嬢に与えようとして、氏は外出。彼の計画は挫かれる。

手紙　六　同　右
令嬢との興味深い会話。氏に有利な譲歩は一切得られない。「誓って言うが、この愛すべきお嬢さんは、われわれの信奉する放蕩児の処世訓すべてが嘘偽りであることを暴いてみせるのだよ」と、氏は断言している。自分に対する義務を女性すべてに負わせたことになる、と氏は言う。その理由。

手紙　七　同　右
M卿が極めて危険な状態。姿を見せるよう一族の者たちが氏に要望。友に宛てたハウ嬢の辛辣な手紙を横取りする。その写し。

手紙　八　同　右
令嬢はドーカスを疑い、自由の身にしてくれるよう、氏の説得に努める。令嬢は復讐の放棄を表明し、将来の目的すべてを心打つ態度で語る。聞き入れてはもらえず、彼女は再び逃亡を図る。阻止され、即座に辱めを受けるのではないかという不安に怯え、一定の譲歩を余儀なくされる。

手紙　九　同　右
譲歩の件を言い抜けたことに対し、令嬢を非難。捨て鉢となり、彼女との口論の機会を求める。彼女は気持ちを奮い立たせ、氏に畏怖の念を覚えさせる。氏は破廉恥な共犯者から嘲笑される。予想されるM卿の死に際して、自分の陽気な心が少しばかり憂鬱な気分のお裾分けに与れるよう、手助けを求めてベルフォードに呼び掛ける。

手紙　十　同　右
翌朝には国許へ向けて出発するよう促す、M邸からの再度の伝言。令嬢の譲歩は未だに得られない。

手紙　十一、十二　同　右
女たちの教唆。令嬢に対するさらなる計画。教会での式がいつでも埋め合わせをしてくれるのであれば、そんな損害などは何だというのだ、と氏は問うている。

手紙　十三　同　右

氏の忌まわしい目的を実行に移すべく、彼自身、母さん、ニンフたちが勢揃い。その際の令嬢の天晴な振舞いについて。氏は我が身を呪い、忌み嫌い、蔑む。また、これまで以上に彼女を賛美する。M邸に向け早朝に出発せざるを得ないため、彼女の伯父の誕生日に当たる次の木曜日に祭壇の前で会ってくれるよう、手紙で懇願するつもり。

手紙　十四、十五、十六　ラヴレースからクラリッサへ　M邸からの手紙

極めて心を惹く訴えと論拠により、手順を守って（結婚許可証は令嬢の手中にあるのである）彼女を急き立てる。

手紙　十七　ラヴレースからベルフォードへ

令嬢を訪ね、教会と日時とを示す四語だけでも書き送ることを彼女に勧めるよう、ベルフォードに懇願。今は結婚への決意を固めているとのこと。己の策略や企みの数々を呪うが、結局、それらは一つの大きな策謀となって我が身に降り懸かっているという。

手紙　十八　ベルフォードからラヴレースへ［返事として］

彼の信義に確信が持てるのでなければ、請け負うのは断るとのこと。彼の信義に疑いを挟むのは何故か。

手紙　十九　ラヴレースより［返信として］

彼の几帳面さを呪う。結婚のことは本気であるという。彼女への懇願の手紙をもう一通認めた後、なおも不機嫌に沈黙を守る場合には、彼女はその結果を甘受しなければならないとのこと。

手紙　二十　ラヴレースからクラリッサへ

祭壇の前で自分と会ってくれるよう、今一度熱心に懇願する。訪問を禁じられていないことを、訪問の許諾と受け取ろうとする。

手紙　二十一　ラヴレースからパトリック・マクドナルドへ

令嬢を訪ねるよう命じ、彼女には何を語り、いかに振る舞うべきかを指示する。

手紙　二十二　トムリンソン船長の宛名で同人へ

内緒のこととして令嬢に示されるよう計算されたもの。

手紙　二十三　マクドナルドからラヴレースへ

指示に従い、令嬢に仕えるべく参上する。家中が大騒ぎで、令嬢の逃亡を知る。

手紙　二十四　モーブレーからラヴレースへ

同じ知らせのもの。

手紙　二十五　ベルフォードからラヴレースへ

令嬢の逃亡についての詳報。彼女が嘗めているはずの苦難と、彼女に対する彼（ラヴレース）の恩知らずな処遇に関する真剣な考察。ベルフォードが宗教の要点と考えるもの。

手紙　二十六　ラヴレースからベルフォードへ

軽薄さを装い、嘲笑って見せる。しかし、陽気さのすべてが偽装であることを最後には認める。令嬢に対する卑劣な振舞いを後悔する。教唆を与えたことに関し、女たちを罵る。捜し出すことが出来るなら、今でも令嬢と結婚するつもりだということ。不幸が単独で訪れることはまれであるということ。M卿は快方に向かっている。喪服を注文済みだったとのこと。

手紙　二十七　クラリッサからハウ嬢へ

ハウ嬢の健康状態を尋ねる取り乱した文面。手紙の送付先を知らせる。しかし、とりとめもなく言葉を連ねているうちに、秘密の宛先のことを忘れる。そのため、手紙はハウ嬢の母親が手にするところとなる。

手紙　二十八　ハウ夫人からクラリッサへ

身内すべてを不幸にしたということで、彼女を叱責。これ以上自分の娘宛に手紙を書くことを禁じる。

手紙　二十九　クラリッサの従順な返信

手紙　三十　クラリッサからハンナ・バートンへ

手紙　三十一　ハンナ・バートンより［返事として］

手紙　三十二　クラリッサからノートン夫人へ

長きに亘る無音を詫びる。ラヴレースの罪業を暴くための質問。恩知らずな破廉恥行為を仄めかす。我と我が身を非難。

手紙　三十三　ノートン夫人からクラリッサへ

令嬢の質問に答える。ラヴレースを激しく非難。操を守って逃走したものと希望。自らの場合を手短に語ることによって、また、真に敬虔な動機から、令嬢を慰める。

手紙　三十四　クラリッサからベティ・ローランス夫人へ

さらにラヴレースを暴く目的で、三項目の質問への返答を求める。

手紙　三十五　ベティ夫人からクラリッサへ

令嬢の質問に答える。自分の甥と令嬢との仲裁を、親切この上ない態度で申し出る。

手紙、三十六、三十七　クラリッサから伯父の家政婦ホッジズ夫人へ

ラヴレースの正体をさらに暴く目的のもの。ホッジズ夫人の返事。

手紙　三十八　クラリッサからベティ・ローランス夫人へ

夫人に対し甥の卑劣さを明かす。慈悲の心から彼の改心を願うが、彼を受け入れることは断固として、また、信条に基づいて拒否。

手紙　三十九　クラリッサからノートン夫人へ

温かい慰撫の言葉に心慰められたとのこと。夫人の子供であったならと願う。自分のところへ来ることは許さない。その理由。周囲の者たち、ならびに、同宿人である尊敬すべき女性、ロヴィック夫人に関する報告を少々。ラヴレースから受けた非道の仕打ちについて手短に暗示。

手紙　四十　ノートン夫人からクラリッサへ

ラヴレースを激しく非難。害を及ぼし、何の利益をもたらすこともない勝手気ままな言動を、ハウ嬢が慎む気持ちになってくれるよう希望。敬虔な心からさらに令嬢を慰撫。

手紙　四十一　クラリッサからノートン夫人へ

新たな問題。ハウ嬢からの怒りの手紙。そのきっかけ。悲嘆に暮れる。父親の呪いが取り下げられるまで、心安らかではいられないということ。この目的のため、だれに働き掛けることが可能かを思案。最後には、仲立ちを頼むべく姉に一筆認めることを決意。

手紙　四十二　ハウ嬢からクラリッサへ

怒りと非難のこもった前述の手紙。令嬢の振舞いに関し、身の証を立てるよう要求。

手紙　四十三　クラリッサからハウ嬢へ

彼女の厳しさを穏やかに諫める。自分を欺き、操を奪うために用いられた手段のすべてが、今に至るまで、詳らかなわけではないということ。しかし、かくも苦痛に満ちた記憶に思いを馳せる時、心も沈む思いであるが、自分の悲しい身の上話の暗黒面を、手短にではあっても、つぶさに語るつもり。

手紙　四十四、四十五、四十六、四十七

約束どおり、身の上話の詳細を語る。最も忌まわしい部分については秘密にしてくれるよう懇願。その理由。自分の悲しみのすべてに幕を下ろすこととなる幸せな日には、優しい目から友情の涙を、せめて一滴だけでも流してくれるように願う。

手紙　四十八、四十九　ハウ嬢からクラリッサへ

破廉恥な放蕩者を呪う。報いについては、来世に期待を寄せなければいけないと語り聞かせる。ラヴレースの策略の一部を解明し、彼の作り話を暴く。クラリッサの安全同様に、我が身の安全に関しても不安を抱く。法的な報復手段に訴えるよう助言。マン島の

称賛すべき風習について。法廷へは自ら同伴することを申し出る。

手紙　五十　クラリッサからハウ嬢へ

起訴には同意し兼ねるとのこと。ハムステッドで自分の代役を演じたのはだれなのかを知る。生きて行くことに、そして、潔白で情け深い心の持ち主が異邦人と見做されるような世の中にも、すっかり嫌気がさす。

手紙　五十一　ハウ嬢からクラリッサへ

慰めを求め、絶望することのなきよう懇願。ラヴレース氏からの身の安全をしきりに危惧。母親たちへの教訓。

手紙　五十二　クラリッサからハウ嬢へ

ラヴレースと争うため出廷することには反対であるが、ハウ嬢が怯えながら暮らすことよりは、むしろ彼を起訴するほうを選びたいという。絶望はしないつもりだが、同時併発的な多くの情況からしても、打撃を受けたことは疑いないという。

手紙　五十三、五十四　ラヴレースからベルフォードへ

クラリッサを失った今、筆を執るに値するような話題はないという。半ば冗談、半ば真面目に［苛立っている時、あるいは、望みを挫かれた時の氏の常であるが］、彼女を失ったことへの嘆きを語る。M卿、氏自身、ならびに、従姉妹に当たる二人のモンタギュー嬢についてのユーモラスな記述。クラリッサのせいで、他の美しさすべてに対して、見る目も、感じる力も失ったとのこと。

手紙　五十五、五十六、五十七、五十八　同　右

セアラ・サドレアー夫人ならびにベティ・ローランス夫人が到着し、令嬢への仕打ちの件で彼と敵対するよう、M卿と氏の従姉妹のモンタギュー嬢二人に約束させる。彼が称するところの裁判について。多くの激論の末に、本心からの後悔を条件に彼を受け入れることにつき、ハウ嬢にクラリッサの説得を引き受けてもらうべく二人の従姉妹が骨折るということで、皆は彼の同意を得る。しかしながら、いかにも放蕩児らしく、「これら我が一族の婦人たちがラヴレースのような人物に出くわしたとしての話だが、連中の示す寛容な態度を目にするというのは」自分にはなかなか楽しいものであったと、氏は思い返すのである。彼の言によれば、「結婚というのは、これらの女たちにとっては、われわれが為し得る最大の悪事への償い、まさに劇的な償い」ということになる。彼は他にもいくつか、奇抜ではあるが特徴的な所見を述べているのだが、中には女性への警告や訓戒として役立つものもあろう。

手紙　五十九　ハウ嬢からクラリッサへ

モンタギュー姉妹から訪問を受ける。二人の用件について。ラヴレースと結婚するよう忠告。そのように忠告する理由。

手紙　六十　同　右

返事のないことに対し、友達ゆえの苛立ちから彼女を窘める。ラヴレースと結婚し、すぐにもベティ夫人の保護に身を委ねるよう、再度主張。

手紙　六十一　ハウ嬢からモンタギュー嬢へ

心乱れるままモンタギュー嬢宛に筆を執り、愛する友人の消息を求めているが、友人のことは、腹黒いことこの上ない男の卑劣な手管によってかどわかされたものと懸念しているのである。

手紙　六十二　ラヴレースからベルフォードへ

無垢の受難者が忌まわしい女の差し金により、でっち上げの訴追を受けて逮捕され、監禁されたとのこと。氏は我と我が身を、そして、己の策略や企みのすべてを呪う。令嬢の元へ急行し、自分はこの下劣な、この卑劣な悪行に関わりないことを証し、かつ、無条件で彼女を解放し、今後二度と彼女を悩ませはしない旨を保証してくれるよう、彼に懇願する。この憎悪すべき侮辱行為によって、自分に対し手柄顔が出来るように考えた極悪非道の女たちを猛烈に罵る。

手紙　六十三、六十四　モンタギュー嬢からハウ嬢へ

令嬢の身に降り懸かった事柄すべての詳報。ラヴレース氏はこの世で一番惨めな男になっているとのこと。道楽者に関する所感。モンタギュー嬢、妹、ベティ夫人、セアラ夫人、M卿、ならびにラヴレース本人の全員が、ハウ嬢宛の手紙に署名の上、この忌まわしい侮辱行為に関して氏は無実であることを主張し、また、氏および自分たちすべてのために、今後ともクラリッサへの働き掛けを続けてくれるように要請。

手紙　六十五　ベルフォードからラヴレースへ

悪質な逮捕劇の詳細。邪悪な女たちが令嬢を訪れる。令嬢の比類のない従順さと辛抱強さ。彼女の不屈の精神。氏はそれを賛美し、自分たちのような種類の男性に見られる間違った勇敢さに優先させるのである。

手紙　六十六　同　右

役人の家へ赴く。忌まわしい拘置室、ならびに、その片隅に跪いている、苦しみ悩む令嬢の様子。彼女の崇高で心を打つ振舞い。途中で筆を止め、手紙を発送。宙ぶらりんな状態に置くことで、彼を苦しめる目的。

手紙　六十七　ラヴレースからベルフォードへ

苛立たしい彼の中断に対し悪態をつく。クラリッサでさえ自分の苦痛のその半分も味わったことはないという。女性は苦痛に耐えるようになっているとのこと。心を切り刻むような情報の残りを、急ぎ送り届けるよう懇願。

手紙　六十八　ベルフォードからラヴレースへ

その後の処置。令嬢がスミス宅の下宿へ戻る。彼女の人柄に窺われる復讐心と憤りとの違い。ラヴレースが希望していたとおりに、邪悪な女たちのところから彼女の衣類すべてを送り届ける。

手紙　六十九　同　右

ラヴレースに憐れみの心があることを喜ぶ。彼に後悔の念を募らせるよう、折に触れて努力するつもり。令嬢に付き纏わないという約束を守るよう主張。

手紙　七十　同　右

令嬢の下宿の様子を描き、そこの家人、ならびに、善良な未亡人ロヴィック夫人を褒める。令嬢の体調がすこぶる悪いため、彼らは誠実な看護婦をあてがい、人格高潔な薬剤師ゴダード氏を呼びにやる。令嬢の口述を筆記したハウ嬢宛の手紙の要旨。

手紙　七十一　同　右

令嬢へのお目通りを許される。その折の出来事。令嬢は今もラヴレースを愛しているとの確信を得る。彼女への崇拝の念を覚え、神聖な愛情さえも抱く。このような天使のごとき女性に対し、ラヴレースが所期の目的を貫いたことに驚く。彼女を救うため、時宜を得た努力を行わなかったことに対し、己を責める。

手紙　七十二　同　右

H医師が呼ばれる。医師に支払うべき一ギニーの持ち合わせがなく、ダイヤの指輪を担保にロヴィック夫人から三ギニーを受け取る。医師の往診に応じようとする、本分に適った理由。人を引きつける、紳士的な医師の態度。高価な衣装の一部を手放す覚悟。その理由。

手紙　七十三　ラヴレースからベルフォードへ

彼に向かってわめき散らす。何の故にか。彼の手紙のいくつかの部分に関し、いつもの陽気な調子で冷やかす。クラリッサが嘗めた苦難の数々によっても、彼女の胸が張り裂けるようなことは有り得ないとするその理由。感情の激しい娘は容易に征服される。平静な娘は滅多に許しはしないということ。逆の意向も一部あるのだが、クラリッサとの結婚を真剣に望んでいるとのこと。結婚を目指す者は決して放蕩者になるべきではないと、真面目腐って結論する。陽気な決断。ただし、彼女に付き纏いはしないと、改めて約束する。女性が夫を愛していないことが判明するのは、陰謀好きな男にとっては心魅する励ましである。失恋をした場合、男性が女性よりも有利な点。心行くまで氏を悩ませた後には、彼女も氏が埋め合わせをするのを許してくれるはずとのこと。

手紙　七十四　ハウ嬢からクラリッサへ

他人の筆跡で書かれた手紙を受け取り、ショックを受ける。優しく彼女を慰め、ラヴレースを罵る。にも拘らず、改めて彼との結婚を促す。母親も完全に彼女と同意見とのこ

と。ご主人と共に自分を訪ねてくれたヒックマンの姉を褒める。

手紙　七十五　クラリッサからハウ嬢へ

自分の立場は大幅に改善されたということ。特にどの点においてか。心が強化され始めており、時々は、自分自身がこの災難にも負けていないように思われるとのこと。自分をどのように見てもらいたいのかについて。今なお愛情を注いでもらいたいが、独り立ちを促すような愛情であってほしい。今では、離れ難い恋人同士のようであった頃の自分ではない。二人の目的も今は違ったものでなければならないとのこと。

手紙　七十六　ベルフォードからラヴレースへ

ベルトンの場合がそうだが、体力を消耗させる病と浪費癖の情婦というのでは、争うにしても恐ろしい相手だということ。愛人を囲う生活についてのさらなる所感。哀れな男は自宅に入ることも恐れているという。ベルフォードは彼の訴訟を引き受ける。獣の本能は、人間に生まれながらに備わる人の情に相当するということ。昔のサルマティア人とその奴隷の話。放蕩児や道楽者の生涯、そして、病に罹ると、彼らがすぐにも互いから逃げ出しがちなことについての考察。病の床にある放蕩児の様子。結婚し、仲間と手を切るつもり。

手紙　七十七　同　右

令嬢がレースの一部を手放す。H医師およびゴダード氏の高潔さの例。ラヴレースを厳しく非難。

手紙　七十八　ラヴレースからベルフォードへ

ヒックマン氏と面談。そのきっかけについて。厚かましさと冷笑とによって氏の狼狽を誘おうと努めるが、氏が勇気を持って振る舞うことを知る。

手紙　七十九　同　右

目指しているという改心について彼を茶化す。令嬢の病を全面的に逮捕劇（氏の言によれば、自分は一切関わっていないとのことであるが）、および、彼女の親戚の残酷さのせいにする。彼女が衣類とレースを売却したことは軽視。ベルトンの場合に触れる。相棒意識と友情とを区別。いかにしてベルトンからトマシンとその子供たちを厄介払いするつもりなのかについて。

手紙　八十　ベルフォードからラヴレースへ

父親の呪いを取り下げてもらうべく、令嬢は姉宛に一筆認めたとのこと。両親についての弁護。彼女に向かって、至極熱心に友のための申し開きをする。彼女の気高い返事と崇高な態度。

手紙　八十一　同　右

令嬢の前に平伏さずにはいられない気持ち。彼女の金庫番となることを申し出る。この

件に関する会話。彼女の度量の大きさに感心する。これだけ堅固な基盤を持つ美徳が彼の術策をことごとく挫いても、何の不思議もないということ。彼女の心の大きさを示す他の例。結婚記念日ということで、スミス夫妻が彼を食事に招き、令嬢のご相伴を願い出る。その際の彼女の心打つ振舞いのこと。彼女は言葉少なに、そして、いつもの上品な簡潔さで、自らの生涯と不幸の詳細を彼らに語り聞かせる。

手紙　八十二　ラヴレースからベルフォードへ

金庫番という立場での令嬢への呼び掛けや、彼の野望と平身低頭ぶりに関して氏を嘲笑する。令嬢の手紙の入手を希望。その実現をロヴィック夫人に頼むよう、氏に迫る。改宗者が改宗をもたらしてくれた善人たちに対して持っている影響力。その理由。今も令嬢の好意に与る望みを持っているということ。その根拠。今ほどに彼女を崇拝したためしはないとのこと。アンブローズ大佐宅での舞踏会へ出掛けるつもり。出席予定者について。男性の服装に見られる気取りや華美さを批判。特に、自画自賛の目的で、この点に関してベルフォードを嘲笑する。

手紙　八十三、八十四、八十五、八十六、八十七

ハウ嬢とアラベラ・ハーローの間で交わされた辛辣な手紙。

手紙　八十八　ハーロー夫人からハウ夫人へ

前掲の五通の手紙の写しを添えて送られたもの。

手紙　八十九　ハウ夫人からハーロー夫人へ［返事として］

手紙　九十　ハウ嬢からクラリッサへ

モンタギュー嬢に知らせるため、自分の以前の手紙への返事を要望。ラヴレースと結婚すべきだという、本人ならびに母親の意見をさらに主張。母のせいでアンブローズ大佐の舞踏会へ出掛けざるを得なくなる。友愛の情を熱烈に表明。

手紙　九十一　クラリッサからハウ嬢へ

ラヴレースを拒む気高い理由。本状からの抜粋をラヴレースの身内の婦人たちに知らせてくれるよう希望。

手紙　九十二　同　右

自分のためにも、身内の者たちを無遠慮かつ辛辣に扱うのは慎むよう懇願。彼女に対する身内の者たちの振舞いに関し、いつもの忠順な態度で弁護に努める。ヒックマン氏を幸せにするよう懇願する。

手紙　九十三　ノートン夫人からクラリッサへ

長きに亘る無音を詫びる。好意を示すつもりでいた令嬢の一族が、姉に宛てたハウ嬢の激しい手紙のせいで、令嬢に対し憤慨しているとのこと。

手紙　九十四　クラリッサからノートン夫人へ

自分の件についてハウ嬢が身内の者たちへ書き送ることを懸念。前の便り以後に身に降り懸かった事柄すべてを物語る。彼女の真にキリスト教徒的な考え方。自分の現状および幸せな未来に関する希望について、いかにも彼女に相応しい所感を吐露。

手紙　九十五　姉に宛てたクラリッサの謙虚な手紙の写しで、父親の耐え難い呪いを取り下げてくれるよう嘆願するもの

手紙　九十六　ベルフォードからラヴレースへ

衣装の一部売却に際し、彼（ラヴレース）が令嬢の瑕疵としている意固地さにつき、彼女を弁護。哀れなベルトンの心身両面での惨状。道楽者同士の友情に関する所感。聖書の文体の上品な簡潔さ、飾りのない平易さや気品を賛美。人間の独り善がりの愚かしさについて詳述。最も無知な者が最大の不信心者だということ。

手紙　九十七　同　右

令嬢が最高のスーツのうちの一着を手放す。同胞の窮状につけ込むような買い手についての感慨。利己心というのはいやらしい奴だという。令嬢の容体が目に見えて悪化。ラヴレース氏の手紙すべてをベルフォードに与える。この機会を捉えて、彼（ベルフォード）はラヴレースの弁護を行う。ヒックマン氏が令嬢を訪問。

手紙　九十八　同　右

翌朝、令嬢ならびにヒックマン氏と朝食を共にする。その紳士にとって有利な意見。放蕩児や道楽者の思い上がった自負心と狭量さを非難する。ヒックマン氏と令嬢との情の籠もった、心打つ別れの場面。知性に基づいた友情を称える所感。

手紙　九十九　ハウ嬢からクラリッサへ

冷静な友達付き合いというものが理解出来ないという。自分は自分が遠慮なく扱っている者たちの娘ではないということ。ラヴレースの一族の婦人たちからの懇請に対し、希望どおりの断り状を出すのは延期する。その理由。アンブローズ大佐主催の舞踏会にラヴレースが現れ、極度に動揺する。その折の出来事。彼女の母親、そして、二人の選り抜きの友人たちも、クラリッサは氏と結婚すべきだとの意見。

手紙　百　クラリッサから［返事として］

最終的な断り状の延期を咎める。何年も生き長らえることが確かだとしても、ラヴレースと一緒になるつもりはないという。だれにとっても世の非難は副次的な重要さしかないとのこと。極めて残酷な形で逮捕された際に計画した、祈りと運動のための方法。

手紙　百一　クラリッサからハウ嬢へ

ラヴレース氏の一族に伝えられるよう意図されたもの。

（第六巻終わり）

訳　注

（一）（一〇頁、三五行）『魔女論』のグランヴィル…王立協会員の Joseph Glanvill（1636 - 80）は *Sanducismus Triumphatus*（1681）において、魔女の存在の科学的証明を試みた。神学者 Richard Baxter（1615 - 91）は *The Certainty of the Worlds of Spirits*（1691）を著しており、イングランド王 James I（1566 - 1625）には *Daemonologie*（1597）という著作がある。（Ross）

（二）（一五頁、九行）菱形の紋（lozenge）…未婚女性または未亡人の紋章が中に描かれている菱形の枠。（Ross）　なお、手紙　三（六頁の九行以降）を参照のこと。

（三）（一五頁、一〇行）サープリス（surplice）…聖職者や聖歌隊員が儀式の際に着ける白衣のことである。

（四）（一五頁、三五行）「我ら女性も　…　」…John Dryden, *Almanzor andAlmahide or The Conquest of Granada. The Second Part*, III, i.を参照のこと。ちなみに、引用では一行目が、We women to new joys unseen may move:、となっているが、原文においては、、False women to new joys can unseen can move:である。なお、ジャック（Jack）というのは、ジョン（John）やジェームズ（James）、ジェーコブ（Jacob）の愛称である。

（五）（一七頁、一行）デモクリトス、ヘラクレイトス…Democritus(460? - ?370B.C.)は、the Laughing Philosopher、と呼ばれ、Heraclitus(*c.* 500B.C.)は、the Weeping Philosopher、と呼ばれている。（Ross）

（六）(四四頁、一八行) 似たような終り方をする何か別の語…「野郎」は wretch の訳であるが、似たような終わり方をする別の語とは、女性を罵る際に用いる bitch（雌犬、ふしだらな女）のことであり、激情のままに、「女郎（めろう）」と言ったかもしれないというのである。

（七）（六三頁、一一行）教会が定めた教会での挙式の時刻…通常、午前八時から午後三時までに執り行われた結婚が合法的なものと見なされていた。（Ross）　なお、第五巻一一一頁、一一行を参照のこと。

（八）（七二頁、一二行）ラストリング地（lustring）…光沢のある絹織物。（Ross）

（九）（七五頁、一七行）オールドベイリー（the Old Bailey）…ロンドンの刑事裁判所のことである。

（一〇）(七七頁、一九行) 老サテュロス(satyr)…ギリシア神話で酒神バッカス(Bacchus)に従う半人半獣の怪物で、酒と女が大好きな山野の精。英語版聖書で用いられる時には、ユダヤの迷信で砂漠に棲むと思われている悪鬼、あるいは、怪物を意味する。

（一一）（七八頁、一一行）「天に安全あり」―「天に安静あり」（In Coelo Salus ― or Quies ― ）…（Ross）では、In Heaven, Safety(or Repose).と英訳している。

（一二）（七九頁、一三行）イサクを捧げるアブラハム、サムソンとペリシテ人…イサク（Isaac）はアブラハム（Abraham）の子で、アブラハムは、試しとしての求めに応じ、イサクを神に捧げた（創世記二二章）。サムソン（Samson）は怪力のイスラエルの士師で、愛人デリラ（Delilah）の裏切りにより、ペリシテ人の手によって盲目にされた（士師記一三章～一六章）。

(一三)(八〇頁、一五行)キルケーたち(Circes)… Homer の *Odyssey* に登場する魔女で、魔術で人間を豚に変えた。

(一四)(八一頁、一九行)ピッチスーツと大篝火(a pitch-suit and a bonfire)…不詳。なお、OED には、pitch-cap、という語が収録されており、「一七九八年のアイルランドの反乱の際に拷問の道具として用いられた、ピッチで裏打ちされた帽子」という説明が添えられている。また、bonfire、は古くは火葬、火刑、犠牲のために積まれた薪(pyre)の意にも用いられた。

(一五)(八二頁、三七行)ホワイト・ケネットが語るところでは…Peterborough の主教 White Kenette(1660 – 1728)には *The History of England from the Commencement of the Reign of Charles I to the end of the Reign of William II* という著述がある。(Ross)

(一六)(八二頁、三八行)ブラックウェルホール(Blackwell Hall)…ロンドンの the City の Guildhall の南側にあり、毛織物の取引が行われていた。(Ross)

(一七)(一〇九頁、一九行)「愛する人の与える傷は忠実さのしるし」…箴言二七章、六節。(Ross)

(一八)(一一二頁、一一行)ハウ譲宛の手紙(手紙二十七)の日付は六月二八日夜である。作者の勘違いであろう。八三頁を参照のこと。

(一九)(一一五頁、九行)『清らかに生き、清らかに死す』…Down と Connor の主教であった Jeremy Taylor (1613 – 67)の *The Rule and Exercises of Holy Living* (1650)と *The Rule and Exercises of Holy Dying* (1651)は一六五八年以降は合本の形を採り、広く読まれていたという。(Ross)

(二〇)(一五二頁、一八行)ハウ嬢…底本として使用した第三版復刻版では、手紙五十一は *Mrs.* Howe, *To Miss* Clarissa Harlowe.となっているが、文面および署名から明らかなように、*Miss* Howe とすべきであろう。なお、Penguin Classics 版においても Everyman、s Library 版でも *Miss* Howe, *To Miss* Clarissa Harlowe.となっている。

(二一)(一五八頁、七行)去勢男(eunuch)…一七~一八世紀のオペラで採用された、少年の声域を保つために去勢された歌手。(Ross)つまり、カストラート(castrato)のこと。

(二二)(一六〇頁、一〇行)フェートン(phaeton)…二頭立ての軽四輪馬車。(Ross)

(二三)(一六九頁、一七行)ウェストミンスターホール(Westminster Hall)…当時のウェストミンスターホール内で法廷が開かれていたのである。(Ross)

(二四)(一七一頁、九行)高官名誉毀損(Scandalum Magnatum)…一二七五年の The Statute of Westminster から始まる法令。

(二五)(一七九頁、三七行)ピロメラ、テレウス…アテナイの王姫プロクネーはトラキア王テレウスと結婚したが、テレウスはプロクネーが死んだと偽り、妹のピロメラを呼び寄せて凌辱し、その舌を切り取った。ピロメラが事の顛末を刺繍に織り込んで姉に送ったため、姉はテレウスとの間に出来た子イテュスを殺し、その肉をテレウスに食べさせた。これを知ったテレウスはプロクネーを殺そうとしたが、神はテレウスをヤツガシラに、プロクネーをツバメに、また、ピロメラをナイチンゲールに変えたという。Ovid, *Metamorphoses,* vi, 424 ff.(Ross)なお、『オウィディウス　転身物語』

（人文書院、一九六六）、一二〇八～一一九頁も参照のこと。

(二二六)（一八三頁、一三行）ある君主の実の父…ルイ一三世の后でルイ一四世の母となったアンヌ・ドートリッシュ（Anne of Austria）の侍従だと言われている。（Ross）

(二二七)（一八四頁、一八行）ブレナム…ブレナム宮殿（Blenheim Palace）のことであろう。これは Oxford の近くにある大邸宅で、Blenheim における勝利を記念し、John Churchill (1650 - 1722, 1st Duke of Marlborough) のために建てられたものである。

(二二八)（一九六頁、一一行）マーサ（Martha）…この名の愛称がパット（Pat）、パッツィー（Patsey）、パティ（Patty）等である。

(二二九)（二一二頁、六行）マット・プライアーも言っておりますように、二つ折り…Matthew Prior, 'Hans Carvel', 51 – 2, in *Poems on Several Occasions* (1718). を参照のこと。（Ross）

(二三〇)（二一四頁、二行）底本とした版では欠落しているが、Penguin Classics の版でも、Everyman's Library の版でも、この後に、No doubt alluding to her father's futurely-extended curse!（疑いもなく、彼女の父親の来世にも及ぶ呪いに言及してのことだろう。）という文章が続いている。

(二三一)（二一八頁、二行）ヘンルーダの小枝…ヘンルーダ（rue）は地中海沿岸地方原産の常緑多年草。葉は興奮剤・刺激剤に用いた。「後悔、悲嘆」を意味する英語の rue と発音・綴りが同じため、悲嘆・悔い改めなどの象徴とされる。なお、イチイ（yew）は教会の墓地に植えられることが多い。

(二三二)（二一四頁、九行）ロンドン大火記念柱（the Monument）…Sir Christopher Wren のデザインにより一六七一年から一六七七年にかけて Fish Street Hill に建てられた二〇二フィートの塔。（Ross）なお、ロンドン大火は一六六六年九月のこと。

(二三三)（二一四頁、三五行）「顔付きは力なく　…　」…Thomas Otway, *The History and Fall of Caius Marius. A Tragedy* (1680), V, 277 ... 302; cf. Shakespeare, *Romeo and Juliet*, IV, i, 40 ... 73. （Ross）

(二三四)（二一四六頁、二七行）郵便局のお墨付き…当時の郵便局においては、政府の指示により、当然のように手紙類が開封されていたという。（Ross）なお、郵便物の検査官であった Sir Samuel Morland(1625 – 95)は封書を気づかれぬように開封し、筆跡を巧みに真似る技巧の持ち主として、チャールズ二世の寵愛を得ていたという。Walter G. Bell, *Unknown London* (London, Spring Books,1951), pp.120 – 24 を参照のこと。

(二三五)（二一五四頁、三六行）寓話に出てくる老いさらばえたライオン…Jean de La Fontaine(1621-95)の *Fables*(1668-94), III, 14 (Project Gutenberg's The Fables of La Fontaine)を参照のこと。

(二三六)（二一六〇頁、五行）スウィフトがやっている脱線を称える脱線…特に、*A Tale of a Tub* (1704), Section VII を参照のこと。（Ross）なお、深町弘三訳『桶物語・書物戦争』（岩波文庫、昭和四三年、四八年）、一〇四～九頁も参照のこと。

(二三七)(二一六一頁、四行）プライアの『アルマ』…Matthew Prior, *Alma, or, The Progress of the Mind*, Canto II, para. 29.のことである。（Ross）

(二三八)（二一六六頁、三三行）ウェスタ女神に仕える女祭司…ウェスタ女神（Vesta）は火

と炉の女神でギリシア神話の Hestia に当たる。六人の処女（vestal virgins）が祭壇の聖火を守っていた。

(三九)（二六九頁、一行）セアラ・スタウト（Sarah Stout）…不詳。

(四〇)（二七〇頁、一六行）モア大法官…Sir Thomas More(1478 – 1535)はヘンリー八世により処刑されたが、その際、「絞首台の上までは無事送り届けていただきましょう。降りるのは、自力で何とかいたします」と語ったという。（Ross）

(四一)（二八三頁、八行）東の風…イギリスでは、東の風は寒さを運んでくる。

(四二)（二八四頁、一〇行）それは陰鬱な自然の顔を、云々…Joseph Addison, *Remarks on Several Parts of Italy* (1715) 所収の、A Letter from Italy to the Rt. Hon. Charles, Lord Halifax. In the year 1701, para. 13.（Ross）

(四三)（二八五頁、三〇行）ナバラ（Navarre）…フランス南西部とスペイン北部を含むピレネー山脈西部の地域で、かつて王国があり、女王ジャンヌ三世（一五二八 - 七二、在位一五五五 - 七二）はカルヴァン主義を国教と定めていた。

(四四)（二九四頁、三五行）「自分に対するヨナタンの愛は　…　」…サムエル記下一章、二六節において、ダビデは「あなたを思ってわたしは悲しむ。兄弟ヨナタンよ、まことの喜び、女の愛にまさる驚くべきあなたの愛を」と述べている。（Ross）

(四五)（二九五頁、一五行）「どうか、過ぎた年月を返してくれ　…　」…ヨブ記二九章、二～六節。（Ross）

(四六)（三〇〇頁、一〇行）「わたしをほんろうなさり　…　連れ戻そうとなさっている」…ヨブ記三〇章、二一、二三節。（Ross）

(四七)（三〇九頁、一三行）「私は語る　…　」…Dryden, *Troilus and Cressida, or Truth Found too Late* (1679), III, ii.（Ross）

(四八)（三一〇頁、一七行）瞑想…この瞑想はヨブ記六章、二～四節、七章、四～七節、三章、二～一〇、一一、一三、二五、二六節、一九章、一三、二四節で構成されている。（Ross）なお、最後の三行は三六章、六～八節から。また、三一行（三章、二三節）と三四行（三六章、五節）の訳文は日本聖書教会発行の一九七三年版『聖書』による。

(四九)（三一一頁、一一行）ヨセフス（Josephus）…第四巻の訳注（二二）を参照のこと。

(五〇)（三一二頁、一行）古代の二人の哲人…訳注（五）を参照のこと。

(五一)（三一二頁、四行）ブラックウォールという人物の筆になるもの…Anthony Blackwall（1674 – 1730),*The Sacred Classics defended and illustrated* (1725 – 31) のことである。（Ross）

(五二)（三一四頁、一七行）詩人も詠っているように…William Congreve, *The Mourning Bride* (1697), I, i. を参照のこと。（Ross）また、第七巻、四頁二行目も参照のこと。

(五三)（三一九頁、一二行）俺は氏の前く飛び出した…Penguin Classics 版では、この後に、and we took a small repast at the Lebeck's Head in Chandos Street.（そして、チャンドスストリートにあるルベックスヘッドで軽食を共にした）という一文が続いている。

(五四)（三二九頁、八行）例の詩人…第三巻の訳注（二三）を参照のこと。

ク　ラ　リ　ッ　サ

ある若き淑女の物語

私生活における最重要関心事を
収録し、

特に
結婚に関し
両親ならびに子供の
不行跡に伴いがちなる難儀の数々を示す。

第７巻

第３版

ロンドン

出版元：S.リチャードソン

パタノスター街、ジョン・オズボーン書店
ストランド街キャサリン通り向かい、アンドルー・ミラー書店
セントポールズチャーチヤード、J.and J.リヴィントン書店
ならびに、バース、J.リーク書店より発売

１７５０

クラリッサ・ハーローの物語

第七巻

手紙　一

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

七月二十八日　金曜日

貴公からの三通の手紙のことを取り上げねばならないのだが(ア)、俺としてはどちらとも決め兼ねているところだ。情け容赦もない非難に関し、貴公と争いを起こすべきか、それとも、歓迎すべき詳細さと精励ぶりに対し、貴公に感謝すべきなのかをだ。だが、かつては俺も、確かに、愛らしい恋人数名についてだが、今泣かせたかと思うとすぐにも笑わせてやったものなのだよ。いや、そればかりか、その可愛らしい顔の片方に、もう一方から泣き顔が消えぬ間に、笑みを浮かばせてやったものなのだ。従って、構わないのではないのかな、貴公を呪うと同時に褒め称えてやってもな。そこで、両方一緒に受け取ってもらうことにしよう。それから、以下に記す事柄についても、俺のペンの赴くままにだ。

この天晴な娘に対して犯した俺の罪業に関しては、俺は何度正直に白状してきたことだろうか。だが、貴公は俺にも劣らぬワルだというのに、決して容赦してくれないのだ。そこで、白状してもほとんど得るところはないということで、ひとつ自己弁護をしてみようという気持ちが強くなったというわけだよ。それも、大昔の話や現代の話を種にするだけでなく、日常茶飯の慣行にも基づいてということだ。ただし、これまで匂わせてきた、俺にとって都合の好い事柄については、一切繰り返しを避けることにする。

筆すさびをやって見たい気分なのだよ、俺は。そこで手短にだが、まずは大昔の話から始めることにしよう。ディードー女王との一件でのウェルギリウスの詩の主人公(イ)がそうであったわけだが、ハーロー嬢との一件での俺についても、同じ程度に寛大な処置を受ける資格があるように貴公は思わないかな。何しろ、求めに応じて自ら進んで体を許したもてなし好きの女王に対し、あの流れ者ときたら、まったく恩知らずな悪党を演じて見せたのだからな。泥棒みたいにコソコソ逃げ出したのだよ（想像するに、そんなところからなのだろう、今日に至るまで、〈信頼に足るトロイア人〉などという皮肉な言い回しが用いられるのはな）。確かに、神々の命に従ってのことにはしているが、しかし、そんなことが果たして有り得るのだろうか。奴の使命というのは、他の君主たちから領土ばかりか、生命までも奪うことだったのだからな。ところがこの男は、奴を褒めたたえている不滅の詩人にしてみると、口を開く度に「敬虔なるアイネイアース」ということになるのだよ。

仮にハーロー嬢の胸が、受けた仕打ちのせいで（プライドを挫かれた点には一切触れずにおくが、もしも彼女が死ぬようなことになれば、理性よりもむしろその点に原因は求められるのだ）張り裂けるようなことになっても（絶対にあってはならぬことだが）、彼女の運命はディードー女王の運命とどれほどの類似を示しているというのだ。また、アイネイ

(ア) 第六巻の手紙九十六、九十七、九十八のこと。

アースがカルタゴの女王に受けた恩義の半分ほどでも、俺は彼女に責務を負っているだろうか。相手の男に対し、女王は信頼を寄せていたわけだが、彼女はまったく信用していないのだ。それに、他のだれに略奪を働いたというのだ、この俺は。他のだれを傷つけたというのだよ、俺様は。だれの命を奪うでもなく、彼女の兄貴のつまらない命も助けてやったのだ。トロイアの流れ者のほうは何千人も殺めているというのにな。だとすれば、「敬虔なるアイネイアース」と同様、「敬虔なるラヴレース」であってどうしていけないのだ。というのも、仮に大火が発生したとして、それが俺の力で可能な場合には、俺は俺にとっての老アンキーセース〔二〕を救い出そうとしなかったとでも思うのだろうか（奴が奴のアンキーセースをイリウムの火の手から救い出したようにだよ）。そんな名の妻が俺にいたとしての話だが、我がクレウーサ〔三〕を犠牲にしてまでもだ。

だが、俺にとって好都合な、もっと新しい例を取り上げてみよう。ハーロー嬢に対する俺の仕打ちというのは、処女女王と呼ばれた我が国の名高い独身の女王が〔四〕、同じ血筋を引き、同じく女王の座にあった者に加えた仕打ちと同じなのだろうか。その女王は謀反を起こした臣下を逃れ、処女女王の保護に身を委ねたのだが、処女女王は十八年の長きに亘ってその女王を監禁し、ついにはその首を刎ねてしまったのだよ。だが、無邪気な新教徒たちは、処女女王のことも信心深いと断言して憚らないのではないのかな。また、特に処女女王のことを〈我らが〉女王と称しているのではないのかな。

日常茶飯の慣行について触れよう。ひとつ質問をさせてもらいたいのだが、心の中で支配的になっている熱情を、それが何であっても構わないが、満たすことの出来る立場にある人間で、満足させるのを断念するような者は果たしているだろうか、ということだ。もっと冷静になって考え（また、そいつが大物であれば、追従家たちの力も借り）、その理由を後ほど見つけようとしたりするだろうか、ということだよ。

そこで、この淑女に対する俺の仕打ちの最悪の部分についてだが、俺と同じく、アルコール性飲料によって先ずは酔っぱらわせ、その後、意のままにしようと目論んだ者がいかに多いのかということだ。飲み物が何であったのかといったことに、どれほどの意味があるというのだ。同じ結果を目指していたわけだからな。

結局のところ、こんなふうに言わせてもらいたいのだよ。カルタゴの女王にしてもスコットランドの女王にしても、我が心の女王に対する俺の扱いよりもひどい扱いを受けたわけではないのであれば、残酷な仕打ちに関し、愚痴をこぼす理由が少しでもあるようには思わなかっただろうということだ。それに、結婚によって埋め合わせをしたいものと、俺は心の底から切望しているのではないのかな。「敬虔なるアイネイアース」にしても、女王が生きていた場合の話だが、ディードーに対してこれほどの正当な扱いをするつもりだったのだろうか。そう思うのかな、貴公は。

さあ、どうだ、ベルフォード、他人が早合点をしてどんな考えを抱くにしても、〈比較してみれば〉、俺も極めて罪のない人間になるのだよ。そして、こういった理由づけや、他の似たような理由づけによって、もしも自らの良心を鎮めることになれば、大きな目的が叶えられることになるのだ。世間のことなどに、一体どんな関わりがあるというのだよ、この俺には。

さて、それでは、心穏やかに腰を下ろし、貴公の手紙を検討することにしよう。

俺に返すようにと、彼女が俺の手紙を貴公に渡した（実に気前良く渡してくれた）際の

ことだが、俺のための貴公の訴え(ア)が心からの熱意に促されたものであったことを願っている。しかし、あまりにもあっさりと依頼人を見捨ててしまうものだから、貴公に対しては大いに疑念を抱いているのだよ、俺は。それに、貴公は真に心もとない顔付きをしているから、つまり、説得力のある顔付きというよりも、むしろ拒絶を誘うような顔付きをしているし、ひどくためらいがちで、「うーん」だの「えー」だのと口ごもることが実に多い愚図だから、仮にも俺が失敗するとしたら、その失敗は俺に起因するというより、俺の弁護人の無能さと面相の悪さに原因を求めることになるだろうな。それに、われわれのようなタイプの人間が議論に添える力というものも貴公には欠けているのだよ。何しろ、彼女のほうでは、貴公が誓言するのを許したりはしないわけだからな。おまけに、はなはだ愚鈍で思慮の足りない男なのだ、貴公は。二度目で何とか気の利いた切り返しが出来るくらいなもので、即興の返答ということでは、恐ろしいほどののろまなのだよ。こういったことは、このような淑女と渡り合う場合には、大きな障害になるものだ。そして、さらに大きな障害は、貴公が以前の放蕩癖と新たな改心への思いとを（今しているように）天秤に掛けている点なのだ。何故なら、このため貴公は彼女に対し、ライプチヒでマルチン・ルターが置かれたように聞いているのだが、それと同じ立場に追い込まれることになるからだよ。新しいと思われていた自分の学説を弁護するために、ルターがエックと行った最初の公開討論の場での話だ。というのは、マルチンもその当時は不徹底な改革者にすぎなかったからだよ。手付かずにしておいた教義が一部あったために、当然の結果として、自分の掲げる別の教義を支持しきれなくなったのだ。従って、いくつかの点でエックが優位を占めることになった。しかし、その時以来、ルターは明瞭さを旨として励み、差し障りとなるものはすべて放棄した。すると、彼の説は両手両足を使って進み出したのだ。その後は、決して迷うことなく、天使と人間の前で自説を弁護したいと、大胆にも公言してみせたし、シュパイアーで神聖ローマ皇帝カルロス五世との接見を試みようとするのを思い止どまらせようとした友人に向かっても、こう断言したのだよ。「たとえ、家々の甍の数と同じだけの悪魔がシュパイアーに住み着いているとしても、私は行くつもりだ」とな。今日に至るまで、プロテスタントのザクセン人一人一人から称賛されている返答だよ。

そこで、生憎のことではあるが、貴公の不器用さが貴公の議論の迫力を殺いでいるわけだから、俺が申し出る償いの受け入れに関しては、彼女を強要するのは差し控えてくれたほうが良さそうにも（もっとも、今のところは、ということだが）思うのだよ。俺を許してくれるよう、しきりに彼女にせがんだりしていると、許しを拒もうとする気持ちを強めるだけのことになり、挙げ句には、言行一致を守るためにも、あれだけ何度も公言してきた決断に、彼女が固執せざるを得なくなっても困るからだ。一方、彼女の意のままに任せた場合だが、少し時間を掛け、体調の改善があれば、気力の回復も伴うわけだから、彼女ももっと怒りっぽくなるだろうし、怒りっぽくなれば、激情を誘うことにもなる。その激情もやがて鎮まり、そして、諫めの言葉となり、交渉へと向かうのだよ。その時こそ、俺の身内の者たちが調停に入り、俺の保証に立つのだ。そして、われわれの厄介事は、両者いずれの側でも終わりを告げることになるのさ。それが自然の成り行きというものだよ。

俺にとって我慢ならんのは、令嬢の健康回復に関し、貴公が望みを失っているという点

(ア) 第六巻の手紙九十七を参照のこと。

なのだ(ア)。それも、医者と薬剤師の見立てに盾突いてのことだからな。

コングリーヴの台詞を持ち出し、「時が彼女の苦悩を募らせるだろう」と貴公は言っている。だが、どうしてそういうことになるのだ。この台詞は（日常の経験とはまったく相入れないもので）、感情がその激しさの頂点にある人物の場合に用いられたものだということを知らないのかな、貴公は。そのような時には、深い悲しみに浸っている人間はだれもかれも同じことを考えるものだが、ただ、貴公の場合は、狂信者が聖書を取り扱うのと同じ具合に、自分の読んだ詩人たちを扱っているわけだ。どちらからの引用であれ、ほんのかすかにでも当面の問題に言及しているものは、両者から福音と見做されるのだよ。どちらの全体的意図にとっても、また、当の問題にとっても、どれほど当てはまらないものだとしてもな。それで、説教壇でのことだが、狂信者の一人が激しい調子で、自分は「死せる犬」だと名乗っているのを一度聞いたことがあるのだ。男、女、また、子供も、その男のわめき声からして、一人残らずその反対だと確信したわけだがね。

ひとつ言っておくが、他のどんな手を使っても駄目だというのであれば、俺が直接彼女と会う覚悟でいるということだ。貴公の悲劇っぽい態度にも拘らずだよ。俺になり代わって、逆のことを請け合っていたにも拘らずだ。

離れていると絶えることがなく、一層溝が広がるような諍いでも、面と向かって話し合うことで落着した例を数多く知っているのだよ、俺は。この面談に積極的に反対するようであれば、貴公も『桶物語』に出てくる奴よりももっと気違いじみたジャック(五)ということになるだろうな。

要するに、絹のような愛の糸で一度自分に縛りつけた女が、この指の間をすり抜けてしまうということ、また、俺の心はその女への激しい想いで燃え上がっているところだというのに、俺を軽蔑するような真似、そして、愛情のことも俺のこともまとめて無視するような真似が出来るという点に思いを馳せると、俺は耐えられなくなってしまうのだ。貴公のこと、彼女の医者のこと、薬剤師のこと、そして、聞くところでは、彼女の前に出て言葉を交わすことを許されているという、そんな連中ことごとくを俺がどれほど羨ましく思っていることか、そして、次々に、そのうちのどれか一人になりたいものだと、どれほど願っていることか、貴公には想像も出来ないのだよ。

それゆえ、他のどんな手も効き目がないということであれば、俺のほうから彼女に会おうと思うのだ。そこで、今頭に浮かんだばかりなのだが、見事な便法を一つ教えてやろうじゃないか。貴公の約束、そして、俺自身の約束も反古にせずに済むものだよ。

貴公の言によると、ロヴィック夫人は信心深い女だということだな。令嬢の容体が悪化すれば、夫人は牧師を呼ぶように助言するだろう。傍らで祈ってもらうためだ。夫人に知られることなく、令嬢に知られることなく、貴公にも分からぬよう（そういうことになるのだろうな）、俺がその人物に成りすまして見せるのだ。ペチコートを着け、ガウンとカソックを纏ってだよ。俺は一度、ある目的のため、実際に法服を身に着けたことがあるのだが、上品でこざっぱりとした身形になると、人にはそんなふうに思われたのだよ。幅の広いバラ結びのリボンの付いたビーバー帽がえらく俺に似合ったのだな。そして、全体としても、俺の姿を目にした者全員から大いに称賛されたという次第だ。

(ア) 第六巻の手紙九十七を参照のこと。

彼女のベッドの傍らに俺が跪いているというのは（勿論のこと、心の底から祈るわけだが）、魅惑的なまでに当を得た姿に違いないように思うな。やつれ衰えている令嬢の回復を願い、最初は祈祷書から病人のための祈りを唱え、結びとしては、俺自身に対する慈悲と許しとを説き勧めることにするのだよ。

この件を検討して見よう。ただ、どのような姿で現れることにするとしても、次の点だけは安心してもらって構わないだろう。つまり、俺の訪問については、前もって貴公に通知するということだよ。何とか手段を講じてその場を離れ、一切の事情を知らないままでいてもらうためだ。こうすることで、貴公の約束は反古にせずに済むというわけだよ。それから、俺の約束に関してだが、彼女にしても、俺について現在以上に悪く考えるようなことは出来るのかな。

真の愛情と深甚なる敬意にとって不可欠なものは、貴公の賢明なる意見によれば(ア)、馬鹿馬鹿しさ、あるいは、不器用さということになるな。驚いた話だよ。貴公ともあろう者が、正誤の判断基準を己自身の姿、そして、自分では避けることの出来ない姿に求めたりするような、そんな偏った人間の一人だとはな。不器用な人間にとっては、不器用さこそが完成の極みということになるわけだ。この調子では、間違っている人間などというものは一人として存在し得ないことになってしまうぞ。ただ、言っておきたいのは、不器用な人間は何をしても不器用だということだよ。そいつが貴公に類した男だとすると、馬鹿なことをしでかした時には、鈍い頭を絞って言い訳を探し出すのだが、そいつがまた、最初の失敗に負けないほどぎこちのないものなのだよ。敬愛の念というのは、それに相応しい行動を促すものだ。そして、この想いが一番熱く込み上げて来ている場合に、それを表明することの出来ない輩というのは、礼儀作法も知らない粗野な人間、いわば完璧なベルフォードであり、敬愛の念などは備えていないことを明示しているのだよ。

だが、貴公としては、あの注目すべき警句表現の才能をここで披露しようとするのだろう。俺の外見は俺の最良の部分であり、貴公の外見は最悪の部分だ、とな。そして、俺が心の矯正に取り掛かるなら、貴公も外観の改善を行うつもりでいるのだ、とだよ。

しかし、頼むからジャック、それを待ったりせずに、喪が明け次第、貴公の服装の改善に取り掛かってもらいたいものだ。これまで一度も貴公を見たことのない者たちに、貴公にとって不都合な偏見を植えつけることはないはずだからな。早いうちに植えつけられた偏見というのは、好きになる場合であれ嫌う場合であれ、取り除くのは難しいものなのだよ。人間というのは、自分の賢さを自賛するためなのだが、第一印象を追認するための理由を、いわば漁り回ろうとするからな。自分が間違っていることに気づいて、自らの間違いを認めるような、そんな率直な心はだれもが備えているわけではないのだよ。貴公自身にしても、人の心を読むという似非学問の達人であり、間違いを犯すたびに、自分を正しいとするほうが一層尤もらしいことだったのだという理由をいくつか探し出そうと努力するし、かつて批判したことのある人物の一挙手一投足、そして、言葉や所感の一つ一つに注意を向けるわけだが、自分の最初の意見を再び持ち出し、擁護する上での助けとするために、その証拠を求めてのことなのだ。そして、実際、貴公も有利な立場に立つと滅多に過ちを犯すことがないわけだが、人間性というやつははなはだいかがわしいもので、反対

(ア) 第六巻の手紙九十六を参照のこと。

の立場でも、間違えずに済みそうなのは、六回のうち五回にも及ぶことになるのだよ。そして、おそらくそれは、貴公自身の心の中に見出すものによって他人を推し量っているだけの話なのだろう。自分の烱眼ぶりを自賛する根拠を得るためにな。

貴公の説教へのお返しのつもりだよ、これは。そして、貴公自身の説教が気に入っているのであれば、俺の説教にも感謝してもらいたいものだな。貴公にその気があれば、役に立つかもしれないわけでもあり、なおさらのことだよ。何しろ、貴公自身の好みに合わせたものなのだからな。

それはそうと、俺の運命に関して令嬢は、ハウ嬢宛に書いた手紙、つまり、「実際に筆を執った」という手紙を参照するように述べているわけだが、ハウ嬢に対しては、どうして俺と一緒になるつもりがないのか、その理由を示しているらしいのだよ。この手紙の内容を知りたいものだな。ただ、彼女の拒み方というのが、自らの定めにやむなく甘んじるためにも、気持ちとは裏腹な方向へ言いくるめられるのを願っているに過ぎないのだと、そんなふうに考える余地を残すような言い回しであったことを、俺としては大いに期待しているのだよ。

令嬢の瞑想の一、二ヶ所について、気の利いた所見をいくつか述べることだって出来るのだ。しかし、俺もワルと見られてはいるが、決して破廉恥というほどではなく、宗教的な事柄を嘲笑したことはない。あるいは、軽々しく扱うことさえなかったのだ。世間全体が崇敬の念をもって眺め、神聖だと称しているものを冗談の種にするのは、不作法の極みだと俺は考えている。異教徒の神話を不信心者に話して聞かせる時でさえも、普通の人間が見ると驚いてしまうような不条理な点がいくつかあるから、笑い種にして当然なわけだが、嘲笑的な態度は取らないようにしているのだ。それに、ローマや他のカトリックの国々にいた時のことだが、俺には極めて異常と思われる儀式に臨んでも、嫌悪を誘うような態度は取ったこともないのだよ。というのも、心を打たれ、また、啓発されているかにも見受けられる連中が数人目に入ったからなのだ。そして、その儀式は俺の理解を越えたものではあるが、次のように考えて、俺は独り納得したのだよ。つまり、多くの人間にとって何らかの良い目的に適っているということなら、その儀式にも、常識を備え行儀作法を弁えた悪人からの嘲笑さえも免れるだけの、十分に宗教的なところ、少なくとも、礼節は含まれているのだ、とだよ。

同じような理由からなのだが、新しい劇作品をどれほどつまらないと思っても、俺はかまびすしく、あるいは、喧々囂々と非を打つようなことをしたためしはない。何故かといえば、俺は次のように結論したからだよ。つまり、第一には、自分が金を払ったものについては、だれもが静かに見る権利を持っているということ。そして、次には、劇場というのは（世界の縮図なのだが）平土間、仕切り席、そして、天井桟敷で構成されているわけで、その雑多に入り交じった連中の一部の者たちすら楽しませることのないような、そんな上演が仮にもあるとしたら、これは辛い話だと思ったし、また、もしも楽しませることがあるとしたら、その一部の者たちにしても、俺が自分なりに判断する権利を持っているのと同じく、彼らなりの判断を下す権利を有しているのだ、ということだ。

俺なりの不賛成の示し方というのは次のとおりだ。つまり、二度と再び足を運ばないということだよ。そして、芝居に行く行かないは、人それぞれが決めることなのだから、まるで無理やり見物させられたかのように、同じように騒々しく不満を口にするいわれはな

いということだな。

真の才人ならだれしも、それが巧みだと言われるのを恥ずかしく思う二つの話題、つまり、不敬な言葉と卑猥な話とでしか機知をひけらかすことの出来ないような軽薄な才人に対しては、貴公も承知のはずだが、俺は常日頃から異議を唱えてきたのだ。この二つの話題は、思慮分別を備えた男女すべての耳を汚しこそすれ、極めて下劣で破廉恥な性質であることを暴露する以外には、何の役にも立たないはずだからな。また、野卑なモーブレーと知り合うまでは「あんな男の指導だから、あまり褒められた話ではないが」、俺も冒涜的な言辞や呪いの類いを現在のように妄りに用いるようなことは決してなかったのだよ。何しろ、知り合ってからは、奴の大将たるこの俺様への忠誠を守らせるためにも、時々は罵詈雑言で奴を圧倒しなくてはならなかったからな。そうなのだよ。この無意味で役にも立たない不謹慎な言葉遣いのことでは、差し控えるよう、しばしば自分に言い聞かせているのだ。その点に関しては、そこいらのお針子の息子どものほうが上手なのだからな。

俺がワルだというのは、女に関してのことにすぎないのだよ。それと、陰謀術策を好んでいるところだな。従って、ショッキングなまでに慎みのない話し方をするようになったことについては、俺も驚かずにはいられないのだ。その手の話し方というのは、一般的に言って、俺の主たる狙いを推し進める上での助けには少しもならないわけだからな。確かに、ほんの時折だが、ウブな娘が現れて人の注意を引くことはある。そんな娘は服装、そして、冒涜的言辞や呪いの言葉を、自分が暗に奨励したく思っている放蕩児的特性の兆候だと考えているらしいのだ。そして、実際の話、道楽者だの色男だのと呼ばれる者たちにとっては、それらが自慢の種となる唯一の資質なのだよ。だが、こんな魂の空っぽな放蕩者に心惹かれてしまう女というのは、一体どんな女なのだろうな。不道徳な言動というものは、機知を伴っていても到底受け入れ難いわけだが、機知も伴わないようではけしからん話だし、かつまた、軽蔑すべきものともなるからだよ。

貴公の説教にお返しをもう一つ、というところだ。そして貴公は、俺も心を改めようとしているのだと、そう考えたくなることだろう。だが、そんなわけではないのだよ。もしもこれが、貴公にとってはその道徳意識がそうらしいのだが、俺の心に注ぎ込んで来る新たな光なのだとしたら、何かその手のことが懸念されるのかもしれない。しかし、俺は常日頃からこのような考え方をしていたのだ。それに、貴公でも、あるいは、貴公の相棒のだれでも構わないが、宗教を嘲笑するとか猥談に耽るとか、俺がそのいずれかを行った時期を指摘出来るものなら指摘してもらいたいということだな。それどころか、貴公も承知のとおり、色事では無骨者のあのモーブレーや凝り性のターヴィルを、そして、貴公自身についてもだが、何度俺は阻止して来たことだろう。貴公らが両義語と称しているもののことでだよ。恋をしている時に俺が常に座右の銘としてきたのは、男らしい怒りが求められるような状況でも同じわけだが、言葉よりは行動ということなのだ。そして、恋の場合であれば、請け合っても良いのだが、女たち自身も、言葉よりはむしろ行動のほうを大目に見るものなのだよ。

聖書の様々な「書」に対して貴公が表明している感嘆の念についてだが、確かに的を射たものだ。ただ、俺にとって不思議なのは、その美しさと上品な簡潔さとを貴公が今まで知らずにいたという点だな。俺としては、その古さゆえに、いつも敬意を抱いていたのだよ。だから、他の理由はないとしても、そんな理由で貴公がそれらの「書」を熟読玩味す

ることが出来ずにいたというのは、考えられないのだ。

短い話を一つ教えてやろう。俺のチューターから聞いたものだが、大学を卒業してロンドンとか旅とかに出る際、無知ゆえの驚嘆によって馬脚を露したりしないようにと、警告してくれたわけだよ。

先生の話では、ドライデンの『アレクサンドルの祝宴』(六)を初めて手にした時、異常なまでに魅了されたというのだ。そして、これまでにだれかがその作品について語っているのを聞いたことはなかったので、貴公が聖書について考えているのと同じことだが、新発見をしたように思ったわけだ。

先生は数名の才人たちと約束した会合の場へと急いだが（当時、先生はロンドンにいたのだよ）、そのうちの一人は名の通った批評家で、先生によると、実力はあるのだが、その割に運には恵まれていないのだそうだ。というのも、批評家の吟味に耐えないような文章を書く才人気取りの連中が、先生の言によると、全員互いに手を結び、人間が狂犬を狩り立てるように、その男を追い詰めているというのだな。

青年紳士としては（先生も若者だったのだよ、当時は）、格調高く、その比類のない作品を褒め始めたわけだ。そして、作品の数々の美しさを見出したことに関しては、他人の手柄を受け売りしているように装って見せたのだ。

老詩人が、微笑みを浮かべ、最後まで聞いてくれたので、学生だった先生はそれを是認の態度と受け止めたのだが、やがて詩人が語り始め、口をついて出たのは次のような屈辱的な言葉だったというのだよ。「これはしたり。今までどこにお住まいでしたか。一体どんなお仲間と話をしてこられたのです。お若いとは申せ、英語でも最も洗練された作品をお聞き及びでなかったとは　…　」とな。

この話は、常に誇り高い心を持ち、利口者と思われたがっている俺には大変な効果をもたらしたのだ。それで、同じ恥をかくのを避けるため、俺は自分自身に二つの規則を課したのだよ。第一には、見知らぬ人間が加わっている集まりに出た時はいつも、自分が遠慮なく口を開く前に、見知らぬ者すべての話を聞くということ。もう一つは、そのうちの一人でも俺の手に負えないことが分かった場合には、新発見の権利はすべて放棄して、連中が褒めるものを褒めるだけで満足しておくということだ。これまでは聞いたためしもなかったものだが、俺にとって親しみのある美しさだということにしてな。そんなわけで、俺自身、徐々にだが、才人としての評判を得たのだ。そして、すべての拘束を捨て、書物や学問的な会話も捨て、今はこの世と地獄の堺のエレボス(七)の闇をさ迷っている兄弟連中の何人か、それに、ベルトン、モーブレー、ターヴィル、そして、貴公自身といった、別の仲間たちと知り合いになると、俺自身の在庫を元手にして、商売に乗り出したというわけだよ。そして、晩年のリチャード卿(八)について聞いている話に似ているが、俺は付き合い仲間の皇帝であることを誇りに思ったのだ。というのも、連中全員の人間としての深さを測ったところ、貴公を別にすると、怖がるようなライバルはいなかったし、貴公についても、ちょっとばかり降参させてやったので（少なくとも、俺の快活さと機敏さとによってだ）、俺はアディソンのカトーよろしく(九)、我が小元老院に対し指示を与えることを誇らしくも喜びとしていたわけだよ。

この続きはいずれそのうち、ということにする。

手紙　二
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

しかし、我が愛しの君の瞑想に接して　…　これは、君も述べているとおり、彼女の事情（つまり、彼女と君が描くところの事情だ）には見事なほど似つかわしいものだそうだが　…　意図的に軽薄さを装ったところは一切ないことを証明して見せた今、この胸中の喜びを表に出さずにはいられないのだよ。あの中の一、二の節に励まされてのことなのだが［「矢」について触れているところだよ、ジャック。それと、「恐れていたことが起こった」という一節だ］、俺はある望みを抱く気になったのだ。もしも、そのような事態が起こらないとしたら、俺にとっては大きな驚きとなることなのだが、つまり、はっきり言ってしまえば、愛しの君はママへの道を歩んでいるということなのさ。

そんな願ってもない状況にある彼女なのだが、この呪わしい逮捕劇は、恐怖の念ゆえに生じ兼ねない体への悪影響のこともあり、他のどんな理由にもまして俺には懸念の種となっているのだよ。この心魅する氷の乙女について、人の本性が信条を圧倒することを証明してみせるというのは、そして、あのような天使によってラヴレース二世を授かるというのは、我が生涯の誇りとなるだろうし、そうなれば、その子のために彼女は生き延び、認知しようとするはずだと、俺は確信しているのだ。それに、生まれて来る前から両親に対し、そのどちらにしても返済することの出来ないような恩義を施すというのだから、何とも殊勝な天使ではないだろうかな、その子も。このとおりだと確信を持つことが出来るようであれば、俺も彼女の回復を願う心痛の一切から解放されることだろう。心痛と言うのは、仮にも彼女が死ぬようなことになれば［「死ぬ」だと　…　忌まわしい言葉だよ。実に嫌だ］、俺は世界一惨めな男になることだろうと、心底そう思うからだよ。

彼女が表明している、死への熱意ということに関してだが、お誂え向きの言葉を正直者ヨブに見出したわけだよ、彼女は。でなければ、あんなにも強く、激しい口調で意見を述べたりはしなかったことだろう。

我と我が身に危害を加えるとか、おろそかにするとか、そのいずれによるにせよ、自らの命を縮めるようなことは、彼女生来の信仰心が（すでに一度ならず述べたことだが）許さないだろう。そんなことをするには、彼女の心は気高すぎるということだ。また、仮にもそんな考えがあったのであれば、もっと前にやっていたはずなのだよ。というのも、例のローマの既婚婦人（二〇）のように自ら命を縮めるような真似は、あれだけ良識を備えた彼女には思い及ばないことなのだ。すでに悪事は遂行されてしまったわけで、命を縮めたところで何の役にも立たないのだし、相手の男というのも、一部の者たちはこの件での俺のことをタルクイニウスのように考えているとしても、ただ、権力の座にあるタルクイニウスなのではなく、従って、そこからは何らの国家的な問題も生じないわけだからな。

それに、類似の例に関して少し前に述べたことがあるが、これを書き記した時、彼女は苦悩に打ちひしがれていたし、悩みはいつ果てるとも知れず、暗闇と不安ばかりが彼女の行く手を阻んでいたのだよ。さらに言えば、彼女は望みを挫かれたわけだが、同じだけ人の望みを挫く力も彼女にはあるのではないのかな。復讐心に衝き動かされたお陰で、人生を大切に送ろうという気になった女もたくさんいるのだよ、ジャック。さもなければ、悲しみと絶望から終止符を打っていたはずの人生をだ。

そして、何と言っても死は、災難続きの中でヨブが仕立て上げてみせたような、そんな望ましいものではないのだ。また、現世の夢が破れただけで死を望むのは、この令嬢がどんなふうに考えているにしても、ひとつ言ってやりたいのだが、正しい考え方をしている証にはならないということだな(ア)。貴公にせよ俺にせよ、ジャック、面目に関わる場合にはいつだって、激情とか怒りとかの頂点に達すると、突然の、そして、非業の死につながり兼ねないような危険に飛び込むことも恐れはしないものだが、気力を衰えさせる長患いの中で、死が冷然と落ち着き払って近づいてくるのには震えおののいてしまうのだよ。

われわれはある有名なフランスの将軍について［その名前も、また、王の治世についても、俺は失念しているのだが］読んだことがある。この男は、戦場で悪霊を思わせるような奴らと大胆不敵に渡り合ったことが百回にも及ぶというのに、反逆罪で死刑の宣告を受け、残酷にも、これみよがしに万端の仕度を整え、護衛に取り巻かれて処刑台へと引き立てられた時には、浅ましい連中の中でも最も意気地のない姿だったのだよ。

詩人が巧みに語っているぞ。

恐怖におののく時、われわれを支えてくれるものは、
そらで覚えたストア学派の教えではない。
きらびやかな言葉、そして、衒学者の論説でもない。
臆病者どもも、書物に教えられ、雄々しく恐怖を語ってはいる。
だが、試しの時が訪れると、連中は仰天して立ちすくむのだ(二)。

とだよ。

まさしくそのとおりなのさ。そうなると、束ねた棒を持ち出した、寓話に登場する例の老人(二)と同じことだからな。

我がイギリスの誇りであり誉れでもあるシェークスピアの作品に、令嬢は精通しているのだ。それで、自分を承服させるのに、時々はシェークスピアの言葉を用いるに違いないのだが、これがまた実に見事な表現となっており、心打つその主題をもってしても、さらに見事なものを生み出すことは不可能なほどなのだよ。

そのとおりだが、死んで、何処とも知れぬ場所へ赴くのは、
生命の働きも冷たく途絶え、朽ち果てて行くのは、
この感じやすく、温かく動く肉体が

(ア) ラヴレース氏としては知る由もなかったのであるが、現に令嬢はこの教えの堅実さを完璧なまでに弁えていたのである。というのも、ノートン夫人に宛てた手紙の中で（第六巻、手紙九十四）、令嬢は次のように語っているからである。すなわち、「それから、現在の私の心境が悲観や憂鬱の結果であるようにもお考えいただきたくないのです。と申しますのは、失望によってもたらされたものではございますが（初めて世間に飛び込みました私ですのに、世間は本当の、そして、醜い顔を早々と露にして見せたわけです）、でも、それはもっとしっかりとした根を張っているように考えたいのです。また、そこに結ぶ果実によりまして、そのとおりであることを私に、そして、身内の者たち全員に対しましても、毎日毎日、いよいよはっきりと証明してくれますよう願っているのです」とである。

こねた土くれとなり、喜びに満ちた魂が
火の海に呑まれるとか、厚い氷に覆われた
酷寒の地に住みつくというのは、
目に見えぬ風の中に閉じ込められるとか、
天空に漂う地球の周りを、息もつかせぬ激しさで
吹き飛ばされるとか、あるいはまた、奔放で
不確かな考えによれば、泣きわめいていると思われている
最も惨めな魂よりもさらに惨めになるのは　…　あまりにも恐ろしい。
苦痛、老齢、貧困、そして〈投獄〉がこの身に与え得る
最も辛い、最も苦しいこの世の暮しにしても、
われわれの抱く死の恐怖に比べれば
まさに天国みたいなものなのだ（二三）。

貴公の三通の手紙の中の一通から分かるのだが、アンブローズ大佐のところでの俺とハウ嬢との話し合いについて、我が愛しの君はヒックマンからいくらか報告を受けたようだな。あそこでは、実に楽しいひと時を過ごしたよ。もっとも、集まった者たちの数人からは手厳しくからかわれてしまったがね。ただ、俺にとって少なからず気掛かりなのは、われわれの一件が、男女を問わず、軽薄な連中の間で広く知れ渡っている点なのだ。すべて彼女自身が悪いのだがね、これは。まったくの話、これほど変わった娘さんには会ったこともない。自分自身の秘密を隠そうとしないのだよ。秘密を明かしたからといって、何かの役に立つとはとても考えられないのにな。また、告白することで、自分自身に同情とか味方とか、そのいずれかを集めたいとか、俺に対しては敵対者を作りたいとか、彼女がそんなことを（人はそう考えるはずだ）望んでいるわけではないというのにだ。なあ、ジャックよ、きっと女どもは皆して、彼女の愚かさを陰で笑っているのではないだろうか。女という女がすべて、彼女の手本を真似ようという気にでもなったりしたら、世界の平和はどうなるというのだ。何とも結構な時を過ごすことになるだろうな、一家の主たちも。年から年中、女房たちが罪の告白をし、娘たちにも娘たちなりの告白があって、連中の耳にはタコが出来てしまうほどだし、姉妹たちは毎日のように自分たちの兄弟をけしかけ、人殺しをさせるのだ。仮にもその兄弟が、いわゆる〈一族の名誉〉といったものに関心を持っている場合はだがね。そして、この世界全体は混沌たる様相を呈することになるか、あるいは、現在のリトアニアと同じくらいに、妻の不貞が流行することになるか(ア)、そのどちらかだろうな。

だが、俺にとって嬉しいのは、ハウ嬢が（あれだけ俺を憎んでいるというのに）、彼女を訪問した際の俺の従姉妹たちに対して、また、大佐のところでの俺に対してもだが、約束どおりに、結婚によってすべてを精算するよう、友人の説得に努めてくれた点だ。令嬢自身の名誉のために、また、令嬢の家族の名誉にとっても、疑いもなくこれは、令嬢が取り得る最善の、否、唯一の手段なのだからな。

（ア）リトアニアでは、婦人たちが〈補佐役〉と呼ばれる愛人を持っていても一向に構わないとのことであり、そのため、妻帯者はその手の連中を伴わずに何かの娯楽の集いに参加することは滅多にないという。

かつて俺は、あの雌狐に復讐してやろうと、あれこれ思いを巡らしたことがある。中でも、貴公は覚えているはずだが(ア)、しばらく前から話題になっていた、あの娘が出掛けようとしている旅行について、このためのちょっとした計画を立ててあったのだ。だが、俺は思うのだが、え～と、そうなのだよ、ヒックマンにはあの娘を無事に無傷のまま得させてやろうと思うのだ。貴公の信じるところでは、奴はまあまあの手合いであるし、俺は奴に対して最悪の受け止め方をしているということだったな。それに、俺としても嬉しく思っているのだよ。貴公に向かって、俺への非難をあまり辛辣な調子で並べ立てたりしなかった点をな。あいつ自身のためになることだがね。

しかし、奴とかハウ嬢とかの金を断ったことからも分かるだろうが(イ)、ジャック、愛しの変人さんは常軌を逸していることに楽しみを見出していて、二束三文ではあっても、自分の衣装を手放して見せるのだよ。彼女には少し気の触れていることが時々あると、そんなふうには思わないかな。俺はそんな気がするのだよ。俺が作戦行動を起こした最初の週にはもっとはっきり表れていたあの狂気の兆候が、わずかにだが、彼女の体中に行き渡っているのではないかとも思うのだ。命を軽んじる彼女の態度や様々な告白、また、結婚を拒否し、そして今回は、最も親しい友人たちからの金も断っているというのは、その散発的な例であるし、それ以外には説明のしようもないように俺には思われるのだよ。

彼女の薬剤師は確かに正直者だ。俺もすっかり気に入ったよ。だが、無思慮な愛しの君が、「死ぬのだ、死ぬのだ、死ぬのだ」と、絶えず同じことを繰り返しているのが、俺には耐えられないところなのだ。この陰気なたわごとのすべてが、もっぱら、ある状態に起因するものであってほしいのだが、つまり、俺が彼女になってもらおうと願っている例の状態のことだよ。そしてその状態は、貴公にとっての聖書の美しさと同じように(ウ)、彼女にとっても初めてのことなのだから、自分がどうなっているのか分からなくても不思議ではないのだ。それで彼女は、事態はまったく逆に進展するというのに、自分では死を育んでいるように考えているわけさ。

放蕩児の部類に入るハイカラさんや伊達男の教育と資質についてということだが、まったく情けないものだな、貴公の寸評は。もしも、「われわれが」だの「われわれを」だのという言い方で、貴公自身と俺のことを念頭に置いているのだとしたらだよ(エ)。敢えて言わせてもらうならば、あの描き方では、このように書物に通じ、座談を重ねているわれわれとは似ても似つかないからだ。ロンドン辺りにたむろするめかし屋や洒落者の大多数の者たちには確かに似ているのかもしれないし、似ているはずだと俺も思う。だが、そんなことに気を配るのは、連中に任せておけば良いのだよ。俺への影響はないのだとしたら、一体何を狙ってのことなのだ、貴公のその盲打ちというのは。もしも、貴公の上に注いでいる新たな光によって、というのも、貴公はこの天晴なる娘と言葉を交わす栄誉を得ているからだが、確かに、見せられた帽子が自分の頭にぴったりだと、つまり、言われたことにも思い当たる節はあると思うのなら、何のことはない、「捕ふる者は　…　」(一四)の規則に従って、その帽子を受取り、被って見せるだけの話だよ。俺もそれに鈴をたくさん繋いだ紐をつけてやるさ。愚かな馬車馬のチームのリーダーに仕立て上げるためだがね。

(ア) 第四巻の百八十六頁以降を参照のこと。(イ) 第六巻の手紙九十八参照のこと。(ウ) 同じ巻の手紙九十六を参照のこと。(エ) 同所及び手紙九十八を参照のこと。

つい先程は、このヒックマン野郎について一言、二言優しい言葉を掛けてやったわけだが、貴公には話しても構うまい。奴が厚かましくも我が魅惑の君に対し、別れ際に二度に亘って接吻をしたことを考えると(ア)、俺としては（我が誉れ高き貴族のお粗末な警句の一つを用いると）、奴を「塩の一粒もつけずに食い尽くす」ことが出来そうに思うのだよ。また、令嬢本人に対してはさらに我慢がならないのだ。頬か唇かを［そのどちらとも貴公は言っていないのだが］奴に差し出したり、奴の無骨な拳をあの愛らしい両の手で包み込んだりするような大胆な真似をして見せるのだからな。これは一国の国王の身の代金にも匹敵するほどの、そして、それを得るために俺が差し出すあらゆるものにも …… 差し出さないものなど何一つとしてないが …… 相当する栄誉なのだよ。それに、奴がそうしたとの貴公の言であったが、奴のほうでもお返しに、あの忌々しい胸に彼女を抱き寄せるとはな。あの時ばかりは、奴の胸もこれまでにないほど感じ易くなっていたのは疑いのないところだがね。

二人の別れ際についての描写から見て、貴公もいずれは繊細な男になるのだろう。この令嬢の不興を買うことが俺にとって無念の種となるのは、彼女との会話で貴公の品性が高められるだろうということだ。貴公が向上することと同様に、その機会もまた俺には羨ましいということなのだよ。それに、貴公の結びの段落(イ)が大変な印象を与えてくれたこともあって、貴公と同じように改心を目指す気分に浸るのは願い下げにしたいのだ。そんなことをすればわれわれは、何とも嘆かわしい一対の子犬さながらに、お互いの調子はずれの曲に対し、レチタティーヴォで唸り合うことになるのだよ。

こんな見方に改良を加え、次のようなことを想像してみよう。つまり、世捨て人となったわれわれがホーンジィ(一五)の古い岩屋の二つに住みつくか、新しい洞穴を掘ることにするのだよ。そして、われわれの庵それぞれに、しゃれこうべと砂時計を置くことにするのだ。瞑想のよすがとしてな。こんな絵を見たことがあるのさ、俺は。ただ、ジャック、悔い改めたその老姦淫者は白髪交じりの長いあご鬚を息も詰まるほどに伸ばしていたのではなかったかな。錦織りのチョッキ、あるいは、モール付きのチョッキを着て、付け前髪で飾っている二人組では、一体どんな姿を呈することになるのだろうな。不機嫌なしかめっ面をやや上向き加減にし、目は半ば以上閉じ、跪いた姿勢で、それぞれが犯した悪事の肝心なところを繰り返し唱えるわけだからな。この案なら、ちょっと試してみるだけで、その後は元の生活に戻るのだとしても、可愛い娘たちを引き寄せるのには、『山だし女房』におけるホーナー(一六)の企みよりもはるかに目的に適っているかもしれないな。

ちょっと待てよ。『ヒューディブラス』の作者がわれわれにぴったりの描写をどこかでしているぞ。われわれの庵のどちらかで出会い、互いに陰鬱な感想を述べ合っている時のものだよ。次のようなものだ。描かれているのは俺だと思ってくれ。

―男は尻をついて座り、
その頭は悲しみ嘆く者に似る。
両頬にそれぞれ添えた両の手を
両の膝で挟み込む。

(ア)第六巻の 手紙九十八を参照のこと。(イ) 同所。

その傍ら、いま一つの洞穴には
愚かなベルフォードが寄り添って座る（一七）。

あまりに馬鹿げていると、貴公はそう考えることだろうな。俺自身そう思うのだ。率直に言うと、取ってつけた嘆きようというのが実情さ。俺としても、すっかり興奮しているものだから、笑い出すか泣き出すか、そのいずれかにしないではいられないのだ。好い奴だが酔いどれのジャック・ダヴェントリーみたいにな［奴も気の毒だったよ。まったく不幸な最期だったからな］。俺がよく口にしていたから、貴公も承知のことだろうが、宴席を去る時にはいつでも、決して素面のことはなかったのだが、こんなふうにするのが奴の常だったのだ。ドアに辿り着くとすぐ、放されたばかりの伝書鳩よろしく、ぐるりと周りを見渡していた。自分の進路を探り当てようというのだろう。それから、一目散に逃げ出すのだが、家までの道程を、一マイルか二マイルあるとしても、走り通すのだよ。立っているのもやっとだし、並足で歩こうとでもしようものなら、うつぶせに倒れて鼻をつぶしていたに違いないのにな。貴公の三通目の手紙の結びと比べると、ひどく見劣りのする結びということになるが、いまだ改心に至っていない俺のこの状態にあっては、こんなところで、そんな結び方をすることへの言い訳としたいのだよ。

大変な長さになってしまった。これで貴公も認めてくれるだろうな。質的にはともかくとして、量の点ではお返しが出来たということをだよ。それでも、触れずに置いたことが山ほどあるのだ。実際、今この瞬間も、書き散らしている以外には、我と我が身をどう処したら良いのか分からないのだ。M卿には愛想が尽きたが、快方に向かっていることもあり、卿は乳母と泣き虫と狼の寓話（一八）を俺に向かって演じて見せる始末なのだ。従姉妹のモンタギュー嬢たちにもうんざりだ。こんなに近い親戚でなければ、うっとりさせられる娘たちなのだがね。モーブレーとターヴィルにも、そして、連中のいつまで経っても相変わらずなところにも飽き飽きだよ。田舎には飽きたし、ないものねだりの自分にも飽きてしまったから、上京しなくてはならんな。そして、都に着いたら、我が魂を魅する者との面会を果たすのだよ。絶望的な病には荒療治を施さねばならんからだ。それに、俺としては待つだけなのだ。自分の運命をハウ嬢から知るのをな。それで、もしも拒絶であった場合には、運を試してやるつもりだ。彼女の足下で判決を受けようと思うのだよ。ただ、すでに話したが、その点は前もって知らせることにする。令嬢と交わした貴公の誓いを出来るかぎり手際良く守れるようにとの気持ちからだ。

手紙　三

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

［七月二十七日付の令嬢の手紙、第六巻の手紙百および百一への返事として］

七月二十八日　金曜日　夜

この卑劣なことこの上ない男とは結婚なさらないとのご決意につきまして、今こそ、私の大好きなお友達、私の胸の内すべてを遠慮なく申し上げることにいたします。二十三日の日曜日のお手紙では、このご決意の裏付けともなるものですが、私のクラリッサの汚れ

ない心に真に相応しい理由をお示しくださったわけですから、私を説き伏せ、ご決意を変えていただくように願う気持ちを起こさせるものがあるといたしますと、それは、いつだって愛しく思っております私のお友達を失うようなことがあってはという、自分本位な考え方に他ならないのです。

感情に流されてしまいそうな誘因がとてもたくさんあります中で感情に打ち克ったという、こんなにも見事な実例が女性のどなたかによって示されるようなことは（どれほど望ましいものだといたしましても）、有り得ない話だと、実を申しますと、私はそのように考えていたのです。ですから、当然のお怒りを克服なさり、あの男のお身内の方々の懇願に耳をお貸しになるように、私はもう一度貴女に強く促すつもりでおりました。あまりにも怒りを募らせたため、たとえ応じられるにいたしましても、最初にそうしておられた場合よりも、貴女にはさらに困難になり、また、面目も一層立ち難くなる、などということにならないうちにです。

でも、今では、崇高な決意を固めていらっしゃることが分かりましたし、貴女のような汚れのないお心と、あのように偽証も平気な悪漢の心とが結び合いますことは不可能と分かりましたから、決意を固められましたことには心からお祝いを申し上げます。また、私の大好きなクラリッサさんにとりましても、〈理論〉と〈実践〉とは別物なのかと、そんなふうに疑っているように映りましただけでも、お詫びをいたしたいと存じます。

この件につきましては、心を痛めておりますことが一つだけございます。それは、ヒッククマンさんも（不承不承ながら）認めておられましたが、貴女の芳しくないご容体のことなのです。これまでのところ貴女は、いつも私に与えてくださっていたあの教えを立派に守ってこられました。非難を受けた人間は、自分自身に対して身の証が立つことを真っ先に目指し、世間の評価につきましては、副次的な地位を与えるに止めるべきだ、とのことでしたわね。そして、それが両立出来ない場合にはいつも、後のことよりも前のほうを優先させておられました。そして、その結果、貴女のアナ・ハウにとりましてと同様、貴女ご自身のお気持ちの上でも、ご自分の正しさが十分に証明されることとなったのです。ですから、ありとあらゆる方策を講じられまして、元気なお体と気力とを取り戻されますよう、是非ともご努力をいただきたいのです。しかもこれは、もしも実現出来ますなら、お仕事の総仕上げということにもなりましょうし、また、貴女が本当にあの卑劣な破廉恥漢の手の届かないところへと到達なさいましたこと、そして、少しの間ご自分の道を踏み外してしまわれたとは申せ、再びその道にお戻りになり、ご教訓と同様にお手本をも提供なさることで、ご存じの方々すべてに祝福を与え続けておられますことを、世間の人たちに示すものにもなるのです。

だといたしますと、天のために、この世のために、女性の名誉のために、そして、私のためにも、もう一度お願いいたします。この衝撃に打ち克ちますよう努めていただきたいのです。そして、打ち克つことがお出来になるようでしたら、その時には、私は望み得るかぎりの幸せ者となることでしょう。だって、これからの長い長い年月、貴女とお別れすることを考えたりいたしますのは、私には出来ない相談なのです。本当に私には無理な話ですもの。

私どもの近くに来ていただきたいという私の願いですが、それを思い止どまらせようとしてお示しくださいました理由が大変納得の行くものですから、差し当たりましては、お

となしく従うべきなのでしょうね。でも、宜しいでしょうか、お気持ちが十分に落ち着きました時には、それも間もなくのことと存じますので（この破廉恥漢につきましては、もうお気持ちはすっかり固まっておられるのですから）、私どものところ、あるいは、私どもの近くへお越しくださるものと期待いたしております。そのようになりましたなら、私が辿ろうといたします道ことごとくをチョークでもって書き示していただくつもりです。そして、右へであれ左へであれ、横道へは決して逸れないつもりでもいるのです。

貴女のことにつきまして、お身内の方々への執り成しはしてほしくなかったとのお考えですね。そのほうが良かったと、私も思います。私の執り成しは効果がなかったわけですし、一部の人たちには、意地悪なことをなさるための新たな根拠となるかもしれないのですからね。それに、貴女がそのことで私に腹を立てておられるからですわ。でも、前の手紙でも申しましたが、皆さんの無慈悲さのせいで貴女がどれほど不安な思いをなさっておられるのか、それを承知しておりますのに、この私がどうして黙って腰を下ろしていられるでしょうか。でも、無理やりこの話題を離れることにいたします。また興奮いたしまして、ご不興を買ってしまいそうですからね。それに、私自身にとりましてはどれほど好ましいことだといたしましても、貴女のご意向に背くように思いました場合には、私がしたいと願いますものなどは、この世に一つとしてございませんし、また、貴女に喜んでいただけることが分かっているのでしたら、行わずに放っておくようなものも、何一つとしてないのです。それに、厳しさ半分の私の大好きなお友達、お咎めを免れようといたしますのと同じくらいに、過ちを避けようとする気持ちも私は持てないものかどうか、本当にそれを試してみようと思っているのです。

そんなわけですから、お姉様宛のお手紙といった大変微妙な問題につきまして、何か申し上げますのは差し控えることにいたします。貴女がそうお考えなのですから、あのようになさるのが正しいことなのでしょうね。それに、もしも正当な受け止め方をしてもらえるようでしたら、そのことからも正しいことは証明されるでしょう。ただ、これはいかにもありそうな話ですが、仮に侮辱や悪口を引き出すようなことがございましても、どうやら、それを私に教えてくださるおつもりはないのでしょうね。

貴女の場合は、他の人たちの落ち度のことでご自分をお責めになったり、縁続きの人たちの考えよりは、むしろご自分の振舞いのほうに疑いの目をお向けになったりする傾向がいつも大変強かったものですから、この点につきましては、何度も申し上げてまいりましたが、とても貴女を真似るようなことはいたしかねるのです。お年寄りはすべて、年齢を重ねているからこそ賢いのだとか、若いからこそ、若者はすべてせっかちで強情なのだといった言葉は、必ずしも私の信念となっているわけではございませんし、私が承知いたしておりますかぎりでは、それが一般的なことなのかもしれません。そして、私の母とその娘につきましては、おそらくそのとおりなのでしょうね。でも、敢えて申し上げますが、ハーロー邸の主だった方々と皆さんの二番目のお嬢様との間では、これまでのところそのような様子は窺えなかったということですわ。

予想されます皆さんからの残酷な仕打ちも、皆さんのほうでは貴女がどれだけ辛い思いをなさったのか、また、どれほどお体具合が悪いのか、それをご存じないからということで、前もって許して差し上げるおつもりなのですね。辛い思いをなさったことは皆さん聞いておられるのです。そして、お気の毒に思ってはおられないのです。ご病気につきまし

ても皆さん知らされておりますし、皆さんがその点をどのように受け止められたのか、私のほうでは、当然至極のことですが、存じ上げているのです。でも、この件につきましてこれ以上お話しいたしますと、過ちを避けようとしているというのにはほど遠いことになってしまいますし、また、お咎めを招きますのも、同じくらいに確かなことになってしまうでしょう。ですから、今のところは、次の点だけを申し添えることにいたします。つまり、皆さんのためを思われる貴女の理由づけは、どこまでも貴女が卓越しておられることを示しておりますし、皆さんからの貴女へのお返しが示しておりますのは、皆さんのほうはとことん〈　　〉だということなのです。お願いです。最後に少しばかり、意地の悪い裁きをさせていただきたいのです。でも、貴女が許してくださらないのは承知しております。ですから、もう止めにいたしましょうね。どんなに気が進まなくても、これっきりということにいたしますわ。ただ、私が申し上げたかった言葉をもしも思いつかれましたなら、その妥当さに疑いを挟むようなことはなさらずに、先の空所をその語で埋めていただきたいのです。

　私が実際に結婚をすることとなり、ヒックマンさんもそれを望むのであれば、その機会に、私のところへお越しくださることを考えても良いということ、また、私と一緒になられましたなら、おそらく、私から遠く離れるのは難しくなるだろうということを、貴女は匂わせておられますね。

　驚きましたわね、あなた。「ヒックマンさんが望んでおられるなら」というところにずいぶん強調を置いておられるみたいですもの。私たちの近くに貴女をお呼びいたしますことを、また、そうしていただけるならの話ですが、私たちと一緒に過ごしていただきますことを、勿論、あの人は望んでおりますし、何にもまして望むことでしょう。貴女への崇敬の念からいたしまして、また、賢明さの点からいたしましても、お馬鹿さんでないのでしたら、疑いもなくあの人はこのような望みを抱くことになるでしょうね。でも、この点は言わせていただきたいのですが、もしも、結婚後にヒックマンさんが、私のお友達付き合いにつきまして、議論を持ち掛けるような厚かましい真似をするようでしたら、私もまったくの馬鹿ではないつもりですので、あの人の心の安らぎがこのような出過ぎた振舞いとどの程度関わりを持つのか、思い知らせて上げるつもりだということです。そのお友達付き合いが、あの人と知り合います前に結ばれたものであれば、なおさらの話ですわ。

　承知いたしておりますが、この問題につきましては、私と貴女とはいつも違った考え方をしておりましたね。貴女は夫の特権のことを、大抵の人たちが持っております君主の大権についての考え方以上に重視しておられましたからね。貴女ほどの分別と判断力を備えておられる人からこのような考えが示されますと、どの点からいたしましても、私たちに有利に働くことはございません。そのような考え方ですと、挙げ句には、あの厚かましい男性陣の横柄な態度を正当化してしまいますからね。いろいろな機会に恵まれております点を考慮いたしますと、いやしくも特権などに値するような男性は、十人のうちに一人いるかどうかも難しいというのにですわ。私たちの存じ上げております家族すべてを調べてみますと、妻の半分の分別を持ち合わせております男性は、三分の一も見つからないでしょうね。それでいて、そういった人たちが特権を与えられることになるのですからね。それに、男性の倍も分別を備えております女性が行うことと申しますと、耳を傾け、震えおののき、そして、従うことの他には何もないのです。それも、気休めを得るためだという

のですからね、まったくの話。

でも、こういった問題に関しましては、おそらくヒックマンさんと私とで少し話し合っても良いでしょうね。日取りについて話題にいたしますのをあの人に許して上げる前にですわ。そして、その時には、あの人が頼りとすべきものは何なのかを分からせて上げることになるでしょう。ちょうど、あの人のほうでは何を私に期待しようとしているのか、誠実な男性なのでしたら、それを教えてくれるようにです。でも、ひとつ申し上げたいのですが、貴女も大層お望みですし、同じように母からも急かされていることなのですが、式の日取りを早めます件は、多分貴女が考えておられます程度以上に、貴女次第なのだということです。と申しますのも、お体の具合がまずまずの状態になられたということ、そして、それゆえにですが、お医者様と薬剤師さんを、当のお二人からのご提案に従って放免なさったことを保証してくださるその日には　…　そんな嬉しい知らせがございましてから一ヶ月以内のいずれかの日を、その日と決めるつもりでいるからです。ですから、宜しいですね、急いでお元気になっていただきたいということです。そうしていただけますなら、この件も、貴女のアナ・ハウにとりましては、他の方法では絶対に不可能なほど好ましい形で実現されることになるのです。

王国最大の放蕩者に対しまして当然の非難を加えておられる貴女のお手紙は、特別の使者にお願いいたしまして、今日モンタギュー嬢姉妹にお送りいたします。それに、二十三日のお手紙からいくつかの段落を転記いたしまして、一緒に送らせていただきますが、間違った振舞いではないことを願っております。貴女も当初はそのような処置を考えておられたわけですからね。

書き物に専念（それも、お体に無理が掛かるほどに）しておられるご様子ですね。貴女の悲惨な身の上話の委細を書き記しておられるのだろうと思います。母は、そうしてくださることを督促するよう、私に念を押しておりますが、貴女の身の上話がいつの日か匿名で出版されましたなら、女性にとりましては大変な名誉となりますし、また、それに劣らず、役に立つことにもなると、そんな考えがあってのことなのです。母のほうでは、あの破廉恥漢をお拒みになる貴女のお怒りはまことに当を得たもので、感心せずにはいられないと申しておりますし、もしも、悲しい身の上話を書き留めるようになさってはとの助言に貴女が従ってくださるようでしたら、非常に喜ぶことでしょう。母が申しますには、そうしていただけますなら、数々の試練や災いを通しましての気高いお振舞いは、輝かしいお手本を女性に提示するばかりではなく、同時にまた（そのような災いがこれほどの方に降り懸かったわけですから）、思慮の足りない娘さんたちには、恐ろしい警告を与えることにもなるというのです。

私たちは月曜日に旅立つ予定です。二週間で戻りたいと考えております。そして、戻りましたら、ロンドン行きのことでもう一度母に掛け合ってみようと思います。衣装を買い揃えますことを口実にしなければいけないといたしましても、〈訪問者〉を〈姻戚〉に変えますのに、最終的同意を与えてはいないと申して構いません間は、従いまして、自分のことを左記のようにと同様、〈私自身の〉と称することが出来ますうちは、主な動機となりますのは、大切なお友達との再会ということになりましょう。

貴女の

アナ・ハウ

手紙　四

ハウ嬢からモンタギュー姉妹へ

七月二十九日　土曜日

親愛なるお嬢様方へ

貴女様方のご親戚の男性に許しを与え、和解する気持ちを起こしていただくよう（そうしていただきますのには、その男性ははなはだ相応しくない方なのですが）、私の愛するお友達に精一杯働き掛けますのを怠っていたわけではございません。また、この件につきまして、熱心な忠告を繰り返し申し上げてもまいりました。この繰り返しのためと、お返事を待ちますのに時間を要しましたこととが、この問題につきまして、もっと早くにお便りをさせていただきますわけにまいらなかった原因なのです。

同封いたしましたものからも、あの人の動かぬ決意はお分かりいただけましょうが、気高く、高潔な動機に基づくものでございますから、私といたしましては、残念に思いますのと同時に、拍手喝采を送らずにはいられないのです。「拍手喝采」と申しますのは、あの人の決断の正しさに対してのことでございますが、この点からいたしましても、尊敬すべきご一族の皆様も、匹敵するものとてないあの人の美質につきましてお持ちになられましたお考えを、ますます固めてくださるものと存じます。また、「残念」と申しますのは、あの人の決断からいたしますと、また、あの人のところから戻りましたばかりの殿方の報告からいたしましても、憂慮すべき根拠が十分すぎるほどにあるわけですが、あの人のお体具合が大変悪化しておりまして、そのため、お考えのほうも、この世で生き長らえますこととはずいぶん違った事柄へ向けられているからでございます。

同封いたしました書面につきまして、私の元へ封をせずに送るのが妥当とあの人はお考えになりましたが、これは、私が読み終えましたなら、貴女様方のところへ転送出来るようにとのお気持ちからなのです。また、宛名書きが私の筆跡で、封印も私のものになっておりますのは、そんな理由からでございます。詳細に亘っておりますし、有無を言わせない調子のものですが、今月二十三日の日付のございます私宛のお手紙では（ペンを手にすることがお出来になるとすぐのものでございます）、私ばかりか貴女様方のたっての願いにも応じていただけないのは何故なのか、その理由をあの人が十分に示してくださっておりますので、そのお手紙のいくつかの部分を転記することにいたします。これは、ご自分が最大級の悪人でなかったならば、自慢の種になさることもお出来になったはずの、そんな比類のない奥様を失うという点で、ご自分は最も不幸な人間の一人だと考えて当然な根拠を、世界中でも最も邪悪な男性のお一人に（その部分を目になされればの話ですが）提供することになりましょう。次に掲げますのがその抜粋です。

［これらの抜粋に関しては、七月二十三日付のハーロー嬢の手紙、つまり、第六巻の手紙九十一の二重鉤括弧で（『　』のように）括られている部分を参照のこと］

さて、お嬢様方、衆に秀でておられますかくも多くの方々と結んでおります親戚関係に値しない男性を拒絶なさる理由といたしまして、私の愛するお友達がお示しくださいましたものは、以上のとおりでございます。私のほうから一言申し添えますが（申し上げずに

はいられないのです）、当の人物の長所や身分を考慮に入れますと、また、その手口の卑劣さも考えますと、これを超える悪事が為されましたことは、いまだかつてなかったということでございます。それに、あの人のほうでは、最初の、また、唯一のものですのに、ご自分の過ちは死ぬこと以外に償う術がないとお考えですから、私は毎日、次のように神様に祈っているのです。また、そのような悲惨な結末を耳にいたしました時には、その瞬間から、一時間ごとに祈るつもりでもございます。つまり、あの男性の背信行為を承知しております者全員が、処罰の方法に神の手が加わっていることを看て取れますような、そのような仕方で、神様があの男性を復讐の対象にしてくださいますように、とです。

お許しいただきとうございます、お嬢様方。私の心の中では、自分自身の魂を大切にいたします気持ちでさえ、クラリッサ・ハーローさんを愛する想いには敵わないのです。それに、あの人が嘗めてこられた苦悩の数々　…　お身内の方たちから被っておられます様々な迫害　…　あの男性のせいなのですが、容赦のないお父様からお受けになって苦しんでおられる呪いのこと　…　溌剌とした健康状態と裕福な暮しから、体調を崩され、財政も逼迫した状況に身を落とされた点　…　そして、他の災難のすべてをさらに苦しいものにいたしました、例の逮捕と監禁の件（これもあの男性の責任に帰さなければなりませんが、それらは、あの男性から直接の指示があったにせよ、なかったにせよ、先立って為されました数々の卑劣な行為から自然に生じました、悪辣な手下たちの仕業だからでございます）　…　また、世間の人たちの目からいたしますと、女性というものが、その最も見事な飾りの一人である人物の姿を借りまして辱められたということ　…　どのようなものであったにせよ（と申しますのは、私もすべてを承知しているわけではないのです）、あの人の破滅を企てましたその男らしくもない方法　…　こういったことへの思いすべてが一つになりまして、私の怒りを、そして、その罪ゆえに、クリスチャン的な許しの恩恵からさえ除外されていると思われます男性に向けました私の呪いを、正当化することになるのです。それに、あの人が筆になさることのすべてをご覧になり、また、あの人が身につけておられる素晴らしい才能をご存じになれば、貴女様方ご自身も、私と共にあの人を称賛し、あの男性を呪うお気持ちになられることでしょう。

貴女様方の美点の数々に敬意を表しつつ、

親愛なるお嬢様方、

貴女様方の心より従順謙虚なるしもべ

アナ・ハウ

手紙　五

ノートン夫人からクラリッサ・ハーロー嬢へ

七月二十八日　金曜日

大好きなお嬢様

体具合に関してですが、息子が再び希望の持てる状態にありますことをお伝え出来ますのは、私にとりましては慰めでございます。お嬢様にご挨拶を申し上げたいと、息子は申しております。ひどく気持ちが沈んでおりますし、体も弱っているのです。それは私も同

じことです。でも、起き上がり、筆を執ることが出来ましたのは、ここ数日の間ではこれが初めてでございます。でなければ、こんなにも長い間ご無沙汰をしたりはしなかったことでしょう。

お姉様へのお手紙は届いておりますし、お返事も出されました。もうお受け取りになられたものと思います。お気持ちに適うものであってほしいと願っておりますが、でも、そのようにはなりそうにございません。実は、ベティ・バーンズを通して知ったことなのですが、貴女のお手紙を受け取られますと、皆さんは非常に動揺なさいまして、返事をお出しになるのか、それとも、お止めになるのか、ご意見が大きく分かれていたとのことでございます。今でも皆さんは、貴女のお体具合のことを、私が承知いたしておりますほどにお悪いとは（私にとりましては、はなはだ気掛かりなところでございますが）信じてくださらないのです。ハーローお嬢様とハウお嬢様との一件が、そうなりはしないかと心配いたしましたが、事態を悪化させてしまったというわけでございます。

私がいただきましたお手紙の中の二、三の箇所をベティに見せましたところ、あの娘は心を打たれた様子で、こう申しておりました。お手紙のことは好意的な報告をするし、同じ箇所をお見せすると約束してくれるなら、ハーローお嬢様が私をお訪ねくださるよう取り持とう、というのです。でも、そのことはそれっきり何も耳にいたしておりません。

あの邪悪な殿方を拒絶なさいますのは、私には残念な気もいたします。ただ、そうは申しましても、そのようになさいます貴女の動機のほうが、お拒みにならなければ良いのにと願います私の気持ちよりも、もっと称賛に値するものなのだということを疑っているわけではございません。でも、そのような考えにお気持ちをお向けになりますなら、貴女は生き延びようと、いわば覚悟を決めてくださることでしょうし、私といたしましても、貴女のご回復に重大な関心を寄せておりますので、このように自分自身の気持ちを重んじてみたり、貴女のそのお怒りを、当然なものではございますが、鎮めていただくわけにはまいらないものかと、お尋ねせずにはいられなくなるのです。でも、もうこれ以上、この件に触れるような真似はいたしません。

私の大好きな優しいお嬢様がロンドンの路上で逮捕されてしまわれるなんて …… 本当に、何と恐ろしい出来事だったのでしょう。その時に、貴女のお心はどれほど辛かったことか、貴女のために、私の心はそのことを何度も思い返しております。でも、貴女のようなお心の持ち主にとりましては、このようなことも、これまで嘗めて来られました苦しみに比べますなら、軽微なものに違いございません。

あゝ、私の大好きなクレアリーお嬢様、私たちはお祈りをいたします時に、神の御心がなされますようにということ、そして、私たちが神の御心のままに従いますようにということを別にいたしますと、何をお祈りしたら良いのか、どのようにして分かるというのでしょう。九歳の時、そして、その後、十一歳になられた時にもですが、貴女が危険な高熱に見舞われました際、私たち全員は絶え間なく、どれほど嘆き、祈ったことでしょう。そして、貴女のご回復を願い、神の御座にどれほど誓いを捧げたことでしょう。私たちすべての命が貴女のお命と結び合わされていたからなのです。でも、今ではそのことがはっきりと分かったわけですが（とりわけ、間もなく貴女を失うことになるといたしますと）、あの時に貴女を失っておりましたほうが、貴女にとりましても、また、私どもにとりましても、どれほど望ましい出来事であったのか、ということでございます。

口にいたしますのも辛いお話ですね。でも、このようなことを申しますのも、貴女への純粋な愛情からのことですし、また、私たちは自分自身の選択者となるのに常に適しているとは限らないという点を十分に確信してのことなのですから、お許しいただけそうにも思うのです。それに、同じ考えに自然に導かれまして、貴女も私も二人とも、現在の摂理に甘んじることとなるわけですから、なおさらのことでしょう。何事も偶然に起こるものではないということ、そして、もしかいたしますと、最も苛酷な災いから最も大きな幸福が生み出されることもあるのだということを、私たちは確信しているのですからね。

そのように誠実な方々とお暮らしの点、また、身の回りの品をすべて戻していただいたこと、喜んでおります。そのようにささやかな公明正大さの例を嬉しく思われるというのですから、貴女もよほど恐ろしい仕打ちをお受けになったのでしょうね。

人の心をお動かしになる貴女の才能のことがいつも言及されておりまして、お姉様の小間使のこのベティなども、私の傍にまいりますと必ず、そのことをしきりに持ち出すのです。でも、貴女もおっしゃっておられますように、その才能は、貴女が心を動かしたいと願われたどなたの心を動かしたというのでしょうか。ただ、このような不幸な思いがなければ、お母様もお怒りを解いてくださるのは確かだと思うのです。お許しくださいね、愛しいクレアリーお嬢様。私の考えは正しくはないのか、そのことを確認いたしますためにも、ある手段を試してみなければいけません。でも、それがどのようなものなのかにつきましては、首尾を収めますまでお教えしないことにいたします。貴女へと同様、皆様への純然たる義務と敬愛の念から試みてみる所存です。

すべての試練に際しまして、大好きな大好きなお嬢様、天が貴女の支えとなってくださいますよう、絶えずお祈りを捧げております。

変わることなき親愛の情を込めまして、貴女の友、そして、しもべ

ジュディス・ノートン

手紙　六

ノートン夫人からハーロー夫人へ

七月二十八日　金曜日

尊敬いたします奥様

私の愛するクレアリー様からたまたま受け取ることになるかもしれませぬ品物につきましては、どのようなものでありましても、お手元にお届けいたしますことは禁じられておりますし（許可なしには、とのことでした）、はなはだ体調を崩しましたこともございまして、お許しを請いに伺うわけにもまいりませぬゆえ、このようなことはご迷惑かとも存じますが、お嬢様からお便りのございましたことをお知らせする次第です。このことにつきましてお伝えいたしますご許可を、それも、出来るかぎり速やかにでございますが、もしも求めずにおりますならば、成り行き次第によりましては、これからはずっと許し難い人間と見られてしまうようにも思われるのです。

M卿や卿の妹君に当たりますお二人の貴婦人から、また、卿の姪御様ご両名から、そして、邪な殿方ご自身からもですが、あの殿方を許して結婚なさるようにと、大好きなお嬢

様に働き掛けがなされました。お嬢様のほうでは、あの殿方からお受けになった仕打ちに気高くも憤りを覚えられまして、これをきっぱりとお断りになられたのです。そこで、もしかいたしまして、奥様、貴女様や尊いご一族の皆様のほうでは、あちらの皆様のご希望に応じられますのが、現在取り得る最も適切な手段であると、そのようにお考えなのでしたら、情況からいたしましても、お嬢様にお気持ちを変えてくださるようお勧めいたしますには、貴女様のお力なりご助言なりが必要かとも思われるのです。

そのように信ずべき根拠もございますが、お嬢様がお断りになる動機の一つといたしましては、どなたに対しましても、迷惑をお掛けするのは長いことではないと、十分に確信しておられる点があるのです。ですから、お爺様がご遺贈くださいました地所に関しまして、ご家族の方々に対して口出しするような権利を、夫には与えたくないとお嬢様はお考えなのです。とは申しましても、このことにつきまして、お嬢様からは何の暗示もいただいておりませんし、そのことを理由として口に出されることもないはずでございます。と申しますのは、ご自分への悪辣な仕打ちからいたしまして、あの殿方をお断りすべきさらに強い理由をお持ちだからです。

愛しいお嬢様が心から後悔しておられるご様子は、私のいただきましたお手紙からお分かりいただけるでしょう。お許しくださいますならば、そのお手紙への返信となっております私からの便りの写しと合わせ、封緘の上お送りいたします。ただ、お嬢様がご承知ないままにこの措置を決定いたしております［また、実行にも移しております］ので、望ましい結果が得られますまで、お嬢様にはお知らせいたさぬ所存です。でなければ、私のほうからお嬢様のお怒りを招くだけに止まらず、すでに半ば張り裂けておりますお嬢様のお胸を、完全に打ち砕いてしまうことにもなるからでございます。

尊敬いたします奥様へ

恭順なる心と変わることなき感謝の念を込めまして、貴女様のしもべ

ジュディス・ノートン

手紙　七

ハーロー夫人からジュディス・ノートン夫人へ

七月三十日　日曜日

美徳に裏付けられました貴女の思慮深さのことは、尊敬すべき奥様、私ども全員が承知しているところです。そうです、だれもが知っているのです。でも、貴女がこのお気に入りの軽率な娘を贔屓なさっている点も同じように周知のことなのです。それに、石の心も突き通すように苦悩を描いて見せます、あの困った娘の才能につきましても、私どもは同じように熟知しているのです。

あの愛しいふしだら娘は、許してもらい、迎え入れてもらうよう画策しているのだ、というのが、一人残らず全員の意見です。あの娘の手紙につきまして、さらに触れますことをベティが禁じられましたのも［私からでないのは勿論ですわ］、このような理由からなのです。と申しますのは、貴女が読み聞かせてくださった心打つ部分のいくつかを、あの小間使が私のベラに話したからなのです。

このことからも得心いただけるでしょうが、あの娘のための言葉に対しましては、一切耳を傾けてもらえないということです。だといたしますと、私があの娘のことで何か申しましても、どのような効果があるというのでしょうか。でも、支持してくださる人が一人でも得られるのでしたら、そうするつもりでおりますのは勿論のことです。ただ、あの娘の罪がどのような結果をもたらすことになるのか、それを確かめますまでは、それは絶対に有り得ない話なのです。また、だれにそれが分かるというのでしょう。あの娘は …… そのようなことを、どうして私の口から申せましょう。私のかつての最愛の娘は未婚のままでいるのですからね。あの娘が子を宿しているかもしれないなんて …… そのとおりだといたしますと、あの娘の汚れは永久的なものとなってしまうのです。あの娘の兄に何か危害が及ぶかもしれません。そのようなことは断じてあってはならないのです。一人の子供の身の破滅に続いて、もう一人の子供の命も奪われてしまうなど、そのようなことにはなってほしくないのです。

あの娘の苦難と現在の窮状のことですが、それがどのようなものでありましても、耐えてもらわねばなりません。それに、それは私があの娘のために不断に耐え忍んでおりますものには及ばないに違いないのです。実際、あの娘が最後の切羽詰った状況に追い込まれますこと以外には、何がありましても、あの娘の父親、おじたち、そして、その他の身内の者にあの娘を許す気持ちを起こさせることはなさそうにも思われるのです。

出来ますかぎりの、この上なく無分別でこの上なく反抗的な振舞いをいたしました際にも、強情な子供たちは安易に許してもらえるわけですが、そんな理由から（毎日、私どもに向けて申し立てが行われておりますように）、こんなにも多くの子供たちがそういった者たちの例に従うことになるのです。そのような子供たちは、親の気質に見られます甘さゆえの弱さを頼りにしているのです。そして、そのように頼っておりますうちに、自分たち自身の心を頑なにしてしまうわけです。それで、予告されておりました難儀に陥りましても、わずかに恥をかくことだけで、これ以上ない邪悪な行為への十分な償いになるつもりでいるのです。

でも、あの娘のような子供でも［私が言及いたしますのは、他の人たちが絶えず口にしておられることですが、賛同いたさねばならないのが残念に思われる点です］、自分自身と同様に両親をも欺くため、陰謀や策略をめぐらし、道楽者と駆け落ちをするというのですからね。あの娘の罪の償いになることなど、何かあるというのでしょうか。それに、あの娘が誤った用い方をしてしまいましたような、そんな才能の濫用に対しまして、あの娘は神様に対しましても私たちに対しましても、そして、貴女やあの娘のことを知っておられる皆々様に対しましても、責めを負わねばならないのではないでしょうか。

あの娘の胸は半ば張り裂けているとのお言葉ですが、驚くべきことなのでしょうか。あの娘の罪業が行われましたのは、警告にも、また、あの娘自身の知識の光にも、等しく背いてのことではなかったでしょうか。

これで、あの男も娘と結婚する気になるだろうとのお話、あるいは、あの娘にしてみますと、自ら選びました現在の立場なのですから、あの男は本気なのだと信じているといたしましても、あの娘のほうではあの男を拒絶するだろうといったお話は、まったく有りそうもないことなのです。それに、仮に私がそのことを信じる気持ちになるといたしましても、こちらでは、他にだれ一人として信じる者はいないのです。あの男はお身内の方々を

重んじておりません。他のだれにも負けないくらいに、あの方たちをもすぐに欺いて見せることでしょう。結婚を忌み嫌っていることは、いつも公然と表明しておりましたし、今でも、折に触れてはそのように言明しているのです。ただ、あの男のことを知っております者は一人残らず疑うはずなのですが、仮にあの男が今度は真剣だといたしましても、私たちにとりましてはどちらのほうがより望ましいことだと、貴女はお思いでしょうか（私たち全員のことを憎み、軽蔑していると公言しておりますとおり、あの男は私たちのことを嫌ってもいるのですからね）。あの娘の訃報のほうでしょうか、それとも、あのように下劣な男との結婚通知のほうでしょうか。

でも、私ども全員にとりまして、とは申し兼ねるのです。何故なら、あゝ、善良なノートン夫人、貴女もご存じでしょうが、最愛の子供に注ぎます母親の愛情というものは、その子の落ち度すべてにも拘らず、永久にその子を失ってしまいますことよりは、どのようなことでも選ばせてしまうものですからね。

でも、流れには従わねばなりませんし、私自身の判断からいたしましても、皆と一緒に怒りを覚えているのです。でなければ、もっと大切な人たちが味わっております不幸な思いをさらに大きなものにしてしまうことになりましょう［とりわけ、愛する夫のハーローの不幸をですわ］。これだけでもすでに、その人たちの余生を不幸なものにいたしますには十分すぎるほどなのですからね。私には分かっているのです。もしも私が他の者たちに反対いたしますと、この道楽者を見つけ出しますために、息子が家を飛び出すだろうということです。あのラヴレースのように、乱暴で血の気の多いことで世に知られました男とそのようなことになれば、どのような結果を招くことになるのか、分かったものではございませんからね。

あの娘のための説得で、期待出来そうなものと申しますと、精々、一、二週間のうちにブランドさんを派遣していただくことくらいでしょう。あの娘の現在の容体と暮らし向きのことを密かに問い合わせてもらい、まったくの困窮状態には陥らないようにしていただくためのことなのです。と申しますのも、あの娘自身が筆にいたしますことには、一切目を向けてもらえないはずだからです。

実際、あの娘の父親のほうでは、あの娘が不埒にも家を捨てました最初の時に、激情に駆られるまま口にいたしましたその呪いを、あの娘の懇請もありまして、取り下げているのです。ところが、私のベラ宛のお手紙の中ばかりか、集まりに出られるごとに話題にもなさるのですが、ハウさんのところのお嬢さんが［こうも様々な形で一度に苦しい思いをさせられますのは、本当に辛い話ですわ、ノートンさん］私ども全員のことを不当なほど無遠慮に扱っておられまして、事態を一層難しくしてしまわれたものですから、私たちのほうでも、あの娘の手紙が読み上げられますのを聞いてくださるよう、夫を説得することがなかなか出来ずにいるのです。

私どもに対するハウさんのこういった遠慮のないお振舞いのことや、どのような場所であれ、私どものことが話題になりますたびに、広く私どもに向けられております皆さんからの非難の声、また、礼拝式への行き帰りの際に、そして、礼拝式においてすらそうなのですが（何しろ、私どもは礼拝式以外にはどこへ出向く気持ちも起こらないのです）、身分の高い人も低い者も私どもに面と向かって示しております、はっきりと目に付きます、また、往々にして耳に届くこともございます無礼な言動は、きっとお察しいただけるはずで

すが、一族の者すべてにとりまして、絶えず苛立ちの種となっているのです。まるで、あの娘のことさえなければ、私どものだれ一人として注目されることはなかったのだと言わんばかりですからね。また、あの娘に罪はなく、私どもは全員が間違っているのだと言わんばかりなのですからね。

これまでも決して楽なものではありませんでした私の境遇を、あの娘が辛いものにいたしましたのは確かな話です。本当のことを申しますと、あの娘のものは何であれ、どなたの手からであれ、許可なしに受け取ることのなきよう、申し付けられているのです。ですから、貴女がおっしゃっておられる手紙を密かに受け取るようなことをいたしまして、あの娘を想う気持ちを満たしましたところで、どうなるというのでしょうか。あの娘の役には立つことも出来ず、我が身を苦しめるだけの話なのです。それに、もしもそのことが知れたりいたしますと　…　夫のハーローはとても激し易いのです。また、あの娘の無分別な家出の時がそうでしたが、そのことのために夫の痛風がお腹にまわったりいたしますと…　本当に、本当に、大変な不幸者ですわね、私も。何故って、あゝ、あなた、それでもやはりあの娘は私の子供なのですからね。ただ、もっと自分の思いどおりに出来るのでなければ　…　でも、何とか手紙を見たいものだと思います。お言葉では、あの娘の現在の様子と暮らし向きのことに触れているとのことですね。不憫な娘です。何千ポンドも手にして当然なのですし、また、手にすることになっているのです　…　あの娘の父親が忠実な財産管理人になってくださるのですからね。ただ、それは、あの人なりのやり方でということになりましょうし、あの人のご都合にも合わせなければいけないことなのです。

で、あの娘は本当に病気なのでしょうか。ひどく重い病気なのでしょうか。でも、嘆き悲しむべきなのです、あの娘は。倍も悲しい思いをさせたのですからね。

でも、本当にあの娘は、私どもに迷惑を掛けるのも長いことではないと、そのように信じているのでしょうか。でも、あゝ、私のノートンさん、あの娘は長く私どもを苦しめるに違いありません。苦しめることになるのです。仮にもあの娘を失うといたしまして、その場合に、自分の死が私どもの苦悩に終止符を打つことになるなどと、あの娘には考えることが出来るのでしょうか。あれほどの子供の堕落が、私どもの間で最後の最後まで悔やまれずにいるなどということは、果たして考えられる話でしょうか。

でも、貴女が手にしておられる手紙の中で、あの娘は腹蔵のない言い方で悔恨の念を表しているのでしょうか。非難とも取れる言い回しは一切用いていないのでしょうか。言い訳をしようとはしていないのでしょうか。私が目を通しました場合、あまりのショックに悲しい気持ちが表に出てしまい、惨い仕打ちに身を晒すようなことにはならないのでしょうか。何とか工夫をしていただいて　…

でも、何の役に立つというのでしょう。お送りくださいませぬよう願います。お送りになってはなりません。宜しいですね。とても目を通すわけには　…

それでも　…

でも、あゝ　…

あゝ、気も狂わんばかりですが、このような母親をお許しくださいね。貴女にはお出来になるのです。こういったこと一切を斟酌なさる術に貴女は通じておられるのです。ですから、このまま発送することにいたします。私の手紙のこの部分を書き直すようなことはいたしません。

でも、あの娘のことは、私ども全員が知らされておりますこと以上に知りたいとは思わないのです。目にいたしましたと認めて憚るところのないこと以上には　…　そして、一部の人たちが、私から聞くのではなく、むしろ、私に知らせたいと考えますような事柄以上には知りたくございません。そしてこれは、表向き平静を保つためのことなのです。内心の平静さのほうは、無理な自制のために、益々損なわれておりますけれど　…

三　　ヶ

やむなく、中断しなければいけなかったのです。でも、この長い手紙もそろそろ終わりにしようと思います。

ご病気のこと、お気の毒に存じます。でも、お元気だといたしましても、上京してくださるようお願いするわけにはまいりません。ベティが申しますには、貴女はそうしたがっておられるそうですが、貴女ご自身のためなのです。上京なさいました場合、貴女から届けられますものは一切顧みられなくなることでしょう。皆のほうでは、貴女はあの娘への依怙贔屓が強すぎるのだと、すでにそのように考えておりますから、貴女が上京なさいますと、その考えを固めることになりまして、貴女ご自身は偏見を持たれるでしょうし、あの娘は何の利益も得られないということになってしまうのです。それに、私どものところでは、だれもが貴女を尊敬しているのですから、あまり熱心にあの娘のために尽力なさいませぬよう、ご忠告申し上げておきましょう。とりわけ、ベラの世話をしておりますベティの前ではご注意願います。適切な時機をお知らせ出来るようになりますまでのことなのです。でも、あの愛しいふしだら娘に愛情を注いでくださるのを禁じることなど、だれに出来るというのでしょう。あゝ、私のノートンさん、あの娘を愛さずにはいられないのでしょうね、貴女は。私とて同じことです。

五ギニーお送りいたします。病に伏せておられますので、当面の助けにしていただきましょう。それに、息子さんのご病気のこともございます。大変辛い思いをなさったことでしょうからね。まるまる十八年か十九年に及びます貴女のお骨折りのすべて、そして、私の苦労のすべてが、ほんのわずかな月日のうちに、このように惨めなまでの徒労に帰してしまうというのですから、本当に、何と悲しく、辛い話なのでしょうね。でも、私はいつだって貴女の友として、同情申し上げずにはいられないわけですが、それは、私自身が皆さんから憐れみを受けるに値いたしますのと同じ理由からのことでございます。

もしかいたしますと、ご病気のお見舞いということで、貴女をお訪ねする機会が見つかるかもしれません。その際でしたら、おっしゃっておられた手紙に目を通しながら、貴女と一緒に涙を流すことも出来ましょう。でも、あの哀れな娘のことにつきまして、私ども全員に知らせるわけには行かないとお考えの点は、今後一切、私宛に書き送っていただきたくないのです。

それに、私との付き合いを大切に思ってくださるでしょうし、私の心の平安も願ってくださるのですから、これは命令になりますが、あのふしだらな娘に宛てたものであれ、他のどなたに宛てたものであれ、私からお受け取りになる手紙のことは、一言たりとも口外なさらぬように願います。そのように特別な形で私の苦悩を分かち合っていただける貴女ですから、お手紙をいたしますことで（その機会もくださいましたし）、少しばかり心を慰

められました。母親というのは、ノートンさん、自分の子供を忘れるようなことは出来ないものなのです。その子供には母親を捨てることが出来るとしてもです。そして、そのことで、母親の慰めのすべてを持ち去ってしまうとしてもです。自分こそまさしくその例なのだと、私は嘘偽りなく申すことが出来ましょう。

貴女の不幸な友
シャーロット・ハーロー

手紙　八

Cf. ハーロー嬢からジュディス・ノートン夫人へ

七月二十九日　土曜日

親愛なるノートン夫人、お子様が快方に向かっておられますこと、心の底からお祝い申し上げます。そしてそれを、貴女のご健康共々、完全なものとしてくださいますよう、神様にお祈りいたします。

少し急いで筆を進めておりますが、私のために試してみようとしておられるある方法につきまして［多分、私の身内を相手として考えておられるのでしょう］、貴女が仄めかしておられたことの結果が気掛かりなのです。でも、不首尾に終わりました場合には、どのようなものなのかも教えてくださらないとのことでしたね。

そこで、お願いをしなければなりませんが、私のためのどのような手段にいたしましても、前もって私にお知らせくださらないものを実行に移すようなことはなさらないでいただきたいということです。

姉宛の手紙に含まれておりました点に加え、皆にお願いしたいことがもう一つだけございます。そして、皆の今後の心の平安を考えてのことですが、私といたしましては、善意からの貴女のご厚意、そして、ハウさんのご厚意のせいで、皆がひどく苛立ちまして、私の願いを拒む気持ちになっては困るようにも思うのです。それに、私の分として受け取ることが出来ないくらい多くのものが、私のために要求されて良いものでしょうか。私自身の安らぎにとりまして絶対不可欠なもの以上にです。

貴女のお手紙が私のところに届きます頃には、私の手紙への姉の返事も手にしているはずとお考えでしたね。確かに受け取っております。それも、手厳しい、はなはだ手厳しいものです。ただ、私の過ちのことを皆の目を通して眺めますと、そして、私の大好きなハウさんから皆がごく最近受けたと思われます挑発のことも考慮いたしますと、いやしくも返事がありましたこと自体、恩恵と見るべきなのでしょう。返事の写しをすぐにお送りいたします。併せまして、私の手紙の写しもお送りいたしますが、返事はこれへの返答ということなのです。

深く感謝して当然でしょうが、私を大層苦しめておりましたあの恐ろしい呪いを、父が取り下げてくれたのです。親からの呪いなのですよ、ノートンさん。親の呪いを受けながら、心安らかに死を迎えることの出来る子供など、どこにいるでしょうか。しかも、現世に関しますかぎりは、一字一句の違いもなく実現されてもいたのですからね。

あまりにも胸が一杯なものですから、姉の手紙の細部にまでは触れるわけにまいりませ

ん。私の過ちに対してまして、償うことの出来ますものがたった一つだけございます。何とかそれを受け入れてもらいたいものと考えております。そして、クラリッサ・ハーローのような困った娘、妹、あるいは、姪のおりましたことが、大切な身内の者一人一人からすぐに忘れ去られてしまいますよう願っているのです。

貴女も触れておられますように、私が九歳の時、そして、十一歳の時のことですが、私の回復をとても熱心に祈ってくれました者の一人が従兄弟のモーデンだったのです。姉の考えですと、その従兄弟にいたしましても、私がこの世に生を享けなければ良かったと願うような、そんな人間の一人になるだろうというのです。でも、お願いです。従兄弟が到着いたしましたなら、私にも真っ先にお知らせいただきたいのです。

人の心を動かす私の才能につきましての、あの困った考えささえなければ、母も怒りを和らげてくれると、貴女はそのようにお考えですね。何を犠牲にいたしましても、もう一度母に会いたいと思います。そして、気づかれずにですが、せめて母の衣服の縁に口付けをしたいと思うのです。母と最後に会いましたあの時、これが最後になるのだと思い浮かべることが出来ましたなら、抱きかかえておりました母の両足から引き離されますのに、どれほど骨が折れたことでしょうか。また、この四月五日のことでしたが(ア)、イチイの生け垣の後ろに身を隠しまして、父とアントニー叔父様、それに、兄と姉の姿を目にいたしました時にも、あれがあの人たちを目にする最後になるなどということは、およそ考えもしませんでしたし、これほどの短い間に、こんなにもたくさんの恐ろしい不幸がこの身に降り懸かるとは、思いもしなかったことなのです。

でも、私が何を筆にしましても、きっと貴女に迷惑をお掛けするだけの話でしょう。従いまして、前もって私の同意がありません時には、私のための仲裁に入ったりなさらぬよう、重ねてお願いをし、次の点を保証しつつ結びといたします。いついつまでも、

この上なき親愛の情と従順な心を抱く、貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　九

AR. ハーロー嬢からCl. ハーロー嬢へ

［七月二十一日付の令嬢からの手紙（第六巻の手紙九十五）への返事として］

七月二十七日　木曜日

道を踏み外した不幸な妹へ

貴女のロマンチックで軽率な道行きですが、何て惨めな有り様になってしまったのでしょうね。心から同情申し上げますわ。

当然でしょうね、貴女が嘆き悲しみ、後悔するのは。ラヴレースが貴女を捨てたわけですもの。どんな仕方でだったのか、どんな状況でだったのか、それは貴女が一番よくご存じのことだわ。

貴女の振舞い方によるのだけれど、もっと同情に値するような一件にしてくれたら良か

(ア) 第二巻の百七十六頁から次頁にかけてを参照のこと。

ったのにと、私はそう思っているのよ。だけど、貴女が自ら求めたことですものね。

神様のご加護のあらんことを、といったところね。何しろ、貴女に目を掛けてくれる友人なんて、一人としていないのですからね。お粗末で、ふしだらで、身を持ち崩した娘なのよ。警告を無視し、諫めを顧みることもなく、子の務めに背いて堕落してしまったわけですからね、貴女は。

でも、貴女を非難したところで何の意味もないわね。貴女のために涙を流すことにいたしましょう。

お気の毒なお母様　…　貴女の軽率さと愚かさのせいで、お母様は貴女なんか以上に惨めな思いをしておられるのだわ。それでも、貴女の求めに応じてくださるよう、お父様にお願いなさっていたのよ。

おじ様たちがお母様と行動を共になさいました。貴女のでしゃばりな弁護人の手紙に比べると、貴女のもののほうには、もうちょっと控え目なところがあると、そうお考えになったからだわ。それから、お父様は私が手紙を書くのを許してくださいましたけれど、代筆をお頼みになったのは次のお言葉だけで、それ以外には一切ありません。お父様のほうでは、あのふしだらな駆け落ちのことを耳になさるとすぐに貴女にお掛けになった呪いについて、ご自分の力でお出来になるところまでですけれど、取り下げてくださるとのことだわ。それに、貴女が受けるはずの懲らしめは、現在のものがすべてとなるよう願っておられるのよ。その他の点については、お父様は決して貴女をご自分の子供とはお認めになることもなければ、許してくださるお気持ちもないでしょうね。そして、そのような娘がこの世にいることを嘆いておられるわ。

貴女はお父様や私たち全員からこのような扱いを、そして、これ以上の仕打ちを受けて当然なことをしているのよ。でも、あの男の手で味わったような目に遭っても仕方がないだなんて、貴女は一体この破廉恥な放蕩児に何をして上げたのかしら。もしかして、もしかして、貴女は　…　でも、もう止しましょう。四ヶ月間、貴女も結構なお仕事ぶりだったわけですもの。

お兄様は今エディンバラです。あちらへはお父様に行かされたのだけれど［こんな動機だとは知らずにだわ］、貴女を惑わして得意になっている男と兄が衝突しないようにというわけよ。

聞いているところでは、あの男は貴女と結婚したがっているとのことね。でも、それじゃあ、どうして貴女を捨てたのでしょうね。貴女を囲っていたのは、貴女に飽きが来るまでのことだったのよ。疑問の余地もないことだわ。だから、あの男が貴女と結婚したがるなんてことは有りそうもない話なのよ。何の疑いもなく、貴女はもうあの男のものになっているのでしょうけれど、そういうことでもないかぎりはね。

貴女からお友達のハウさんに忠告すべきでしょうね。今しておられるように、貴女のことに首を突っ込むのは少し慎んでいただきたい、とだわ。もっと礼儀を弁えたやり方をしてくれるのなら別ですけれどね。私宛に手紙を三通送ってよこしたのだけれど、とてつもなく無礼なものだったわ。貴女の肩を持っている哀れなノートン夫人のお考えでは、あのでしゃばりなお嬢さんが手紙を書いているのは、貴女の一切知らない話ということね。そうであってほしいわね。でも、その場合には、いよいよもって無礼なことになるでしょうね、書いている人が。でも、情に甘い小母さんの言葉を信じることにして、それだけにな

おさら、貴女の手紙にも快く返事をしようと思って腰を下ろしたというわけなのよ。それに、言っておくけど、そうでない場合に比べると、これでも厳しい言い方は抑えているのですからね。いやしくも返事をしたとしての話ですけどね。

月曜日は貴女の誕生日だったわね。貴女も恩知らずな破廉恥娘だけれど、かつてはどんなふうに私たち皆でその日を祝っていたのか、考えてみることだわね。そうすれば、あの日には、私たちがお互いに相手から逃げるようにしていたと聞かされても、貴女は驚いたりしないはずだわ。神様が本当の後悔の念を貴女に与えてくださるよう祈っているわ。まさかとは思うけれど、まだそんな気持ちになっていないのだったらね。そして、貴女が私たち全員にもたらした恥辱と悲嘆に匹敵するものであれば、その気持ちも本物ということになるのでしょうね。

貴女の苦しみ悩む姉
アラベラ・ハーロー

従兄弟のモーデンのイギリス到着は今日か明日かと、日々期待されています。あの人にしても、家族の他の者たちと同様、貴女は何という罰当たりな真似をしたのか、その話を耳になさることになれば、貴女はこの世に生を享けなければ良かったのだと、そんなふうに思われることでしょうね。

手紙　十
クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

七月三十日　日曜日

ラヴレースさんとは決して一緒にならないつもりでおります私の理由、そして、それに基づきます決意にご同意くださいましたこと、大変嬉しく思います。この点にご同意をくださいますのは、一言お許しいただけますなら、事の性質からいたしまして、また、私のアナ・ハウさんのものとしていつも敬服いたしておりました、あの厳しく道義を重んじられるお気持ちや、真の威厳を湛えたお心に照らしましても、極めて妥当なことでございますから、それだけに、逆のご忠告をくださいました動機はどの辺りにあるのか、私は測り兼ねているのです。最近ではどなたにも喜んでいただくことが出来なくなっております私ですが、その原因となっております不幸な運命のことを別にいたしますとね。

でも、私の健康状態の悪さ、そして、その自然な結果として生じますことのために、悲しい思いをなさいませぬようお願いいたします。すでに申し上げてありますが、命を捨てたりはいたしませんし、神様もそれが相応しいこととお考えでしたら、延命の手段を避けるつもりもございません。それに、神様が相応しいこととはお考えにならないといたしましても、神意を嘆いたりして良いものでしょうか。

さらに大きな試練に際しまして、貴女がお寄せくださる慈しみのお心に、そして、私自身の品性に対しましても、私は似つかわしくない振舞いはしてはいないのだと認められるようでしたら、それは、よく考えてみますと、私たち両名にとりましての一つの幸せということにもなりましょう。

克服に向けての努力をするよう、そのように熱心に勧めてくださる例のショックの件ですが、この身に受けることの出来ますショックの中でも最大のものでした。でも、自分の過ちから引き起こされたことでもございませんし、すでに克服しているはずと考えております。そうあってほしいものと思います。

私が（時折ではありますが）悲しんでおりますのは、自分のことよりも他の方たちのことなのです。また、それで当然なのです。と申しますのも、私自身に関しましては、ラヴレースさんを夫に迎えずに終わりますことも、思い返して見ますと、損失を被ったというより、むしろ逃げおおせたのだと、そのように考えずにはいられないからです。ありとあらゆる非道の振舞いの中でも最も卑劣なものを、あの人が犯さなかったとしてもです。

私の身の上話をご存じのどなたでも結構ですが、例の暴挙以前の私への振舞いから、あの人の人柄を推し量っていただき、そして、その上で、あのような男性が私を幸せにするということは、ほんの少しでも可能なのかどうか、ご判断いただきたいのです。でも、女性全体に対してのあの人の考え方や、たくさんの女性を相手に為されました数々の企てから人柄を推し量りますと、また、あの人の性質の残酷さや話を捏造いたします時の面白半分な態度、それに、自分自身を買いかぶっていることも併せ考えますと、次の点は疑いないことになりましょう。つまり、あの人の奥様になられる方はきっと惨めな思いをなさったに違いないということです。そして、もしもその方があの人を愛しておられるなら、無関心でおられる場合に比べまして、一層惨めになられたはずだということです。

身内の者たちとはあのような状態でしたから、十分に有り得ることですが、十二ヶ月もいたしますと、私の命は尽きていたことでしょう。兄と姉にはあのように虐げられ、悩まされておりましたし、あの人が故意に、そして（今では明白なことですが）、計画的に作り出しましたどっちつかずの状態のせいで、心までもズタズタに切り裂かれていたわけですからね。私といたしましては、あの人が感謝の気持ちを起こしてくれるよう願っていたのです。それに、他の方たちからの保護の手をあの人はことごとく奪ってしまい、全面的にあの人を頼らなければいけない状況に私を追い込んだわけですから、それだけになおさらのこと、あの人からの保護を期待すべき資格が私にはあることになるのです。実際、私をこのような羽目に陥れることこそ（あの人は私の家族を憎んでおりましたから）、あの人の狙いのすべてなのだと、そのように考えたこともかつてはあったのです。たとえ、それですべてだったといたしましても、私にとりましてはまことに厄介な話でございます。

私を取り巻く状況がこのように激変いたしましたのに、私の心の半分以上が張り裂けることはなかった（ラヴレースさんを知るまでは幸せだったのですが）などという話は、いかがでしょう、果たして考えられることなのでしょうか。事実、張り裂けてしまったのです。それに、多分、それほど速やかにではないでしょうが、あの人が弄びました命に途中で終止符を打ちますためにも、凶悪な振舞いに事欠くことはなかったはずなのです。

あの人は、一緒になりまして一ヶ月もいたしますと、私の親戚が執着しておりました例の地所を手に入れてしまったに違いないのです。あの人が皆を憎むのと同じくらいに、皆もあの人が嫌いなのですから、皆にとりましては、いよいよもって無念なことでしょう。

これらの点を考慮いたしますなら、ラヴレースさんと一緒の場合よりも、あの人抜きでのほうが自分は幸せなのだと、そのように考えて当然な理由が私にはあることになるのではないでしょうか。私の心も汚されてはおりませんし、自分を責めるべき点も非常にわず

かなのです。いいえ、あの人とのことでしたら、何一つないのではないでしょうか。

ただ、親戚の者たちにいたしますと、話は別なことになります。あの人たちは確かに同情に値するのです。不幸に見舞われているわけですし、また、これからも長く同じ思いをいたしますのは、疑いのないところなのです。

あの人たちの憤りや振舞いのことを判断いたしますためには、あの人たちの立場に自分を置いてみなければいけません。それに、自分たちよりも私のほうが間違っていると（私の肩を持ってくださる人たちも同じ考えかどうかはともかくといたしまして）考えております間は、また、独自に判断する権利を持っております間は、あの人たちは大幅な情状酌量をしてもらって当然なわけですし、とりわけ両親はそういうことになります。両親といたしましては、少なくとも、自らを顧みて疚しいところがございません（私には当てはまらない点ですわね）。思い出しても辛い話なのでしょうが、かつては私を甘やかしてくださったわけですし、また、疑いようもない愛情のことがございますだけに、なおさらの話ということになりましょう。

大変に高く評価してくださっているわけですが、そのような友への偏ったお気持ちのことがございますから、貴女といたしましても、おいそれとこのような考え方をなさるわけにもまいらないのでしょう。ただ、この件につきましては、せめて次のような見地からお考えいただけると嬉しいのです。

母の話になりますが、母は、女性の中でも最も思慮分別を備えた者の一人といたしまして、おそらく、自分自身と同じくらい好ましい気質に恵まれているとは申せないような一族に嫁いだのです。でも、大層長い間、要領の良い指図の仕方によるわけですが、一族の者たちことごとくを思いのまま、完全に支配する手際も母は持ち合わせておりました。皆のほうでも、同時に、母の指示は自分たち自身の心が命じていることに他ならないのだと思わないではいられなかったのです。服従の姿勢を見せながら相手を征服するという、本当に素敵な技を母は身につけていたわけです。このような母といたしましては、自らの愛情によって声価を高めることとなりました一族に対し、その願いにまったくそぐわないわけではない息子を私の兄として、そして、恥とすべきいわれもない娘を私の姉として、さらには、母自身に一段と似通っているということで、だれもが褒め言葉を向けてくれました私を（皆はそんなにも私を依怙贔屓していたのです）次女として与えることが出来ましたのを、どれほど誇らしく、また、喜ばしく思ったことでしょうか。貴女にもその点をお考えいただきたいのです。自らに満ち足り、笑みを浮かべながら、自分が祝福いたしました一族を見渡すことも出来たのです。私たちに示してくれましたお手本のことで、母にはどれほどの賛辞が向けられたことでしょう。あのように末頼もしい結果が生じたわけですからね。何憚ることもなく、堂々とした確信を抱きながら愛するハーロー氏を、自分の手によって幸福を得た人物として、母は眺めることが出来たのです。また、あのように清らかな泉から流れ出てまいりますのは、ただ清らかなもの以外にないことを思い浮かべ、喜びに浸ることも出来たのです。

ところで、私が毎日行っていることですが、この素晴らしい見通しを裏返しにしてみていただきたいのです。私の大好きな母が控えの小部屋で悲しんでいる姿を想像してください。食事の席に着きましても、また、これまでは悲しみとは無縁だったわけですが、独りで引き籠もっております折にも、悲しみを抑えようと骨折っているのです。物思わしげな

頭を垂れ、柔和なその顔に笑みの輝くことはもうございません。自分では犯すはずもない過ちのために、母の美徳は苦悩を強いられているのです。過ちが何度となく繰り返されますことで、絶え間なく忍耐心を試されているわけですが（他のだれよりも忍耐心を備えているからなのです）、これらの過ちのことでは、それを頻繁に話し聞かせてくれます人たちの心痛に負けないくらい、母も心を傷つけられているのです。自分が源なのだということで、底流の一つを汚しただけですのに、その濁りの責任を自ら引き受けているのです。母には絶対にあり得ないはずだと思われていたものですが、そのような弱点を認める気持ちが母自身の心の中に少しでもあると思われては困るものですから、私のために口を開くのを（たとえ、その気持ちはありましても）恐れているのです。躾が行き届き、将来性のある子供に恵まれました母親が誇りにしても構わない、あの嬉しい評価を受ける資格も取り上げられているのです。母を訪ねてくださる人、あるいは、母の訪問をお受けになる人ことごとくが、無言の仕草と、言葉以上に意味深長な表情とによりまして、以前は祝辞を述べておりました場面でお悔やみの言葉を並べるのです。不自然に口を閉ざされますと、心が傷つきますし、憐れむような表情をされますと、思い出してしまうのです。皆さんの半ばかみ殺した溜め息が、もっと深い溜め息を母から引き出すことになりますし、込み上げてまいります涙を何とか抑えようと、皆さんが目を背けますと、抑えようにも抑えられない涙が母の目から溢れることになるのです。

こういったことに思いを馳せますと、また、それに加えまして、もっと温和な心の持ち主の場合には、責め苛むような悲しみを両目から解き放ってくれる涙なのでしょうが、そんな涙によって自らを楽にすることが出来ない父の、その強い心をズタズタに切り裂いております苦痛のこともございます。また、短気で抑制し難い兄にいたしますと、かつては誇りにしておりました妹が身を持ち崩しましたため、面目を根底から潰され、煮えくり返るほど心を掻き乱されているということもあるのです。さらには、自分の頭越しにというわけですが、後から生まれました者に対して栄誉が与えられますことを、心ならずも許しておりました姉の自尊心のことがございます。そして、これで最後にいたしますが、当時は幸せでした姪に対しまして、どちらが多くの恩恵を与えられるのかと、互いに競っておりました、そんな二人のおじに私がもたらしました不名誉のこともありましょう。そうなのです。私の過失をこのような厳しい、でも、当然な見方で振り返って見ますなら、不幸な我が身の他に、どなたを咎めることが出来るというのでしょうか。それに、次のように申し上げて当然なところが、私にはどれほどあることでしょうか。つまり、「わたしが正しいと主張しているのに、心をもって背いたことにされる。無垢なのに、曲がった者とされる」（一九）とです。

ここで、少しの間ペンを置かせていただきます。

❁　❁

ヒックマンさんの住き日を早めますのは私の気持ち次第であるとのお言葉、そのおつもりでのこととは存じますが、大変に有難く感謝しております。ただ、一言申し上げたいのですが、このご親切なお約束につきましては、お手紙の他のどの段落と比べましても、いささか感心いたし兼ねるということでございます。

何よりもまず、ご承知のとおり、お医者様と縁の切れます時期を、私が勝手に申し上げるわけにはまいらないということです。それに、貴女ご自身によって予定されました、そして、お母様にとりましても大層望ましいご婚礼を、そんな不確かな事柄に委ねるべきではございません。また、お母様を軽んじるような意味合いになってしまいますご好意につきましても、お受けするわけにはまいらないのです。

これだけの苦しみを味わいました後で、生きる喜びを与えてくれるものが仮にもあるといたしますと、それは、長年に亘りまして途切れることなく、私たちを一心同体に結び合わせておりました、姉妹にも優る愛情が今後とも続いてほしいという望みでしょう。それに、こんなにも友達の少ない人間にもう一人のお友達を（さらに強い絆によって）与えてくださることを、どうして遅らせたりなさるのでしょうね、貴女は。

私の手紙をモンタギュー嬢宛にお送りくださいましたこと、嬉しく思います。この困った男性につきましては、これ以上耳にせずに済みますよう願っております。

私の悲惨な身の上話の詳細につきまして書き始めたところです。でも、とても辛いお仕事ですし、しなければならないもっと大切なことが大変に多く、そのための時間は非常に少ないように思われますので、なるべくでしたら、これ以上先へ進みたくはないのです。

それに、私の破滅を目論むあの人の策謀のいくつかにつきましては、どのような手段によって実行に移されたのか、現在に至りましても分かり兼ねておりますので、仮に、筆を進めますために腰を下ろしましても、私の悲しい物語の重要な部分のいくつかは、どうしても欠けたところのあるものになってしまうのです。でも、お母様と貴女が望んでおられます目的にピッタリと適う、もしかいたしますと、さらによく適いますような、そんな方法を考えていたところなのです。

どうやらラヴレースさんは、ご自分と私との間にございました事柄のすべてを、事を進めながら、お友達のベルフォードさんに知らせていたらしいのです。ベルフォードさんはその点を否定出来ずにおりました。ですから（私たちはいずれ気づくことになりましょうが）、自分を思いのままに扱います力を、思慮のなさゆえに、放蕩児に与えてしまいました哀れな娘の場合には、その点に思い至ることはほとんどないわけですが、自分の愚かさを悔やんで当然な理由があることになりましょう。どのみち廉恥心などは持ち合わせておりませんこういった破廉恥漢というのは、放蕩仲間を相手に、そんな娘の弱みを勝利の一部とすることさえ憚りはしないわけですからね。

ベルフォードさんが保証してくださっていることなのですが、もしも、あの人の手紙の中で私のことが正当に扱われているようでしたら、その種の心配は私には一切なくなるわけです。従いまして、私の身の上話の詳細や、この悪党の卑劣な手管につきましては、あの人の手紙そのものから集めてまいりますのが最善の方法のように思われるのです（ベルフォードさんが説得に応じ、それらの手紙を見せてくださるならですが）。そして私は、「どうか、わたしの言うことを聞いてください。わたしと争う者が書いた告訴状があればよいのだが。わたしはしかと肩に担い、冠のようにして頭に結び付けよう。わたしがアダムのように自分の罪を隠し、咎を胸の内に秘めていたことは、決してない」〔二〇〕と叫んでおられる方がなさったのと同じような正直さと熱情とを込めまして、思い切ってそれらの手紙に証言を求めてみるつもりです。

これらの手紙を見せてくださるお気持ちになるよう、ベルフォードさんを促すためなの

ですが、考えても良さそうな方法が一つございます。あの方は、私に対するお友達の卑劣な振舞いのことを心から嫌悪しておられるご様子だからです（それに、ずっとそんなお気持ちだったのだと、言明してもおられるのです）。でも、それをお聞きになると、奇妙な方法ね、と貴女はおっしゃることでしょう。それでも、今のところ、私はそれにとても執着しているのです。

他でもございません。こういうことです。

ベルフォードさんに私の遺言執行人になっていただこうと考えているのです［驚かないでくださいね］。そして、このような考えがありますだけに、あの方のご訪問もあまりためらうことなくお認め出来るのです。そして、私への懸念を示してくださることもありまして、お会いするたびにますますその想いは募るのです。私の気持ちが変わらず、また、あの方が委託を受け入れ、手中にしておられる資料を見せてくださるようでしたら、それらのもので、貴女がご用意くださるものと合わせまして、すべての目的に適うことになりましょう。

このような遺言執行人を思いつきます私の気紛れに、貴女がびっくりなさることは承知しております。でも、どうかお考えいただきたいのです。私は遺言を作成する権限を与えられておりますし、自由になります相当な品物も所持しているわけですが、今置かれております状況の中では、これに優る処置が私には可能なのだろうか、という点をです。

この役目を貴女が引き受けてくださることに、お母様は同意なさらないものと私は確信いたしております。ヒックマンさんになっていただきますと、あの乱暴者の侮辱に身を晒すことにもなりましょう。ノートン夫人の場合は、ご自身に関わるいくつかの理由からいたしまして、無理な話なのです。兄は私が受け取るべきものを自分の権利と考えております。ジョン伯父様は、祖父が遺贈してくれました地所に関しまして、すでに私の管財人の片方になっております（従兄弟のモーデンがもう一方になっておりますからね）。でも、ご承知のように、私はハーロー邸に残してまいりました数ギニーを、自分の家族から受け取ることも出来なかったのです。それに、アントニー叔父様は、祖父の遺言を無効にしてもらうのだと、一度匂わせたことがあるのです。父につきましては、論外でしょうね。私がしてほしいと思っておりますことすべてを父にしてもらうなど、とても期待するわけにまいりませんのは勿論の話です。それに、娘のために父親の手で執行されます〈遺志〉と申しますと（その一部は、おそらく、父親自身の考えに真っ向から対立しているわけですから）、その言葉自体にどこか厚かましく、僭越なところがございます。

確かに、従兄弟のモーデンが手遅れにならないうちに帰国いたしまして、この委託に応じてくれるのでしたら …… でも、そうしますと、あの人までも危険に晒すことになるかもしれないのです。それに、従兄弟は血気盛んな人間ですし、相手の（負けず劣らずに血の気が多い）男性は、私のことを（長く保護の手に恵まれなかったため）自分の持ち物みたいに考えているわけですから、なおさらその恐れがあるのです。

ところで、ベルフォードさんのほうは、すでに触れましたとおり、事の一部始終に通じておられるのです。あの方も血気盛んな人でして、もう一方の人と同じくらいに恐れを知らない人のようですが、人情味の点では優っておられます。あの残酷な逮捕劇の折だけではなく、その後も幾度かに亘りまして、このベルフォードさんが身を以て、まことの人間らしさをどれほど示してくださったことか、貴女はご存じないのです。それに、ロヴィッ

ク夫人にお骨折りをいただき、あの方のお人柄全般につきまして調べていただいたのですが、いわゆる〈自他の権利〉に関わります事柄すべてにつきまして、公正さ、そして、寛大さということでは、とても良い評判を耳にしておられるのです。法律関連の事柄には通じておられますし、現在二件の遺言執行人の役目を引き受けておれるのですが、その遂行に際しましても、あの方の信用に疑いを挟まれたことはないのです。

これらすべての理由からいたしまして、すでにある程度、あの方にこのお願いをする決心は固まっているのです。もっとも、ラヴレースさんの親しいお友達を私の遺言執行人に指名したりいたしますのは、奇妙な響きを伴うことでしょうね。

次の点は確かなところです。兄はこのような場合、ずいぶんおとなしい態度で私の遺言の条項を受諾するだろうということです。そのうちのいくつかにつきましては、反駁したところで無駄だと気づくことになるからですが、そうでなければ、おそらく兄は、それらに自ら反論を加えるとか、身内の他の者たちを説き伏せ、そうさせようとすることでしょう。それに、もしも避けられるのでしたら、遺言執行人を訴訟事件に巻き込もうと思う人などどこにいるというのでしょう。でも、兄のほうで恐れ畏まらせるとか、思いのままに操るといったことが出来そうに思われます者がだれか残っておりますと、そのような事態になってしまうのです。と申しますのも、父がすべてを所有しておりますし、父はすっかり兄に支配されているからです。[怒りっぽい気質の人間と申しますのは、私は何度も目にしておりますが、もっと怒りっぽい人間によって抑えつけられてしまうものなのです。おとなしい人にかかって、怒りの矛先を納めさせられてしまうことも時々ございますけれどね]また、信じていただけるでしょうが、父の手から財産が奪い取られてしまうようなことも、私は望んでおりません。一方、ベルフォードさんは財産家でもありますから（それに、ご自身の業務につきましては、優れた節約家なのです）、公正な処置を行いますこと以外には、何の関心もお持ちにはならないはずなのです。

それから、喜んで私の役に立つつもりでおられるのを証明する機会がほしいと、しきりに求めておられるのです。また、あの乱暴なお友達をうまく扱うこともお出来になるはずです。他のどなたにもまして、あの人への強い影響力をお持ちなのですからね。

でも、私の身の上話のことは、また、私自身についてもですが、出来るだけ早くに忘れ去られてしまいますほうがはるかに望ましいことではないのか、その点が、結局の話、私には分かり兼ねるところなのです。そして、もしも、不適切な厳しいお言葉から両親の評判を守ることが出来ないといたしますと[御免なさいね、あなた]、この点につきましての迷いも薄れるのでしょうが、そんな辛辣さが、私を思いやってくださる熱意からでしょうか、貴女のインクに時々紛れ込んでいるのです。どのようなことであれ、お母様や貴女がしたいと思われましたことが為されますためには、これは十分に考慮されて然るべき点ですし、また、十分に考慮していただかねばならない（と主張させていただきますが）ところです。世間の人たちはおしなべて、あまりにも簡単に義務に背いてしまいますが、一人の人間を正当に扱いますために、一般的な義務の数々がないがしろにされたりしてはいけないのです。その人がどれほど不幸な状況に置かれているとしてもです。

親切にも父は、私に負わせましたあの厳しい呪いを解いてくださいました。今私が請わねばなりませんのは、最後の祝福ということになります。そして、思い切って請願出来ますものといえば、それだけなのです。姉の手紙は、この特別な計らいを伝えてはくれまし

たが、厳しいものでした。でも、姉としては〈皆から〉ということで筆を執っているわけですから、違ったものを期待いたしますのは無理な相談なのです。

明日出発なさるのでしたら、ハーマン伯母様のところへお着きになるまで、この手紙はお手元に届かないことになります。従いまして、ヒックマンさんがご指示くださいましたとおり、あちら宛にお送りすることにいたします。

陸路と海路の短い旅ではありますが、その間、不自由な思いをなさいませぬよう願っております。そして、お元気でいてほしいと思っておられる皆さんの健康なお姿をご覧になられますよう願っております。

あの小さな島にお住みのご親戚の方々が、結婚式は貴女がご自分たちのところを去られる前に執り行なわれますよう、お母様のご命令とも合わせ、懇願なさるようでしたら、どうか皆さんのご意向に沿われますよう、私からもお願いをさせていただきます。そのようになさったとのご通知がありましたなら、私といたしましても、どれほど嬉しいことでしょうか。

変わることなき誠意と親愛の情とを込めまして、貴女の

CL. ハーロー

手紙　十一

クラリッサ・ハーロー嬢からハーロー嬢へ

七月二十九日　土曜日

ご送付いただきましたお手紙の中で用いてくださいました手厳しいお言葉ですが、お姉様、私は嘆いてなどおりません。その手厳しいお言葉には、私が嘆願いたしておりました特別な計らいのことが添えられていたからです。また、他のどなたの咎めにもまして、私自身の心の咎めのほうが強いからなのです。とは申しましても、私の罪は想像されておりますものの半分にも及ばないのです。私の不幸な身の上話にまつわるすべての状況が明らかになりました暁には、この点はお認めいただけるものと存じます。また、その状況につきましては、調査のお役目をノートン夫人が仰せつかるようでしたら、喜んで夫人にお知らせしたいと思っております。あるいは、お姉様、貴女にでも宜しいのですよ。辛抱して聞いていただけるのでしたらね。

七月二十四日が何の日なのかを思い起こし、心に血の滲む思いをいたしました。前夜から始めまして、その日一日を、私に似つかわしい仕方で過ごしたのです。私の大切な、そして、常に尊敬申し上げておりますお父様とお母様に、そして、貴女にもですが、私のベラ、私がお届け出来ます慰めといたしましては、次のこと以外には何もございません。つまり、あの日は私にとりまして最初の不幸な誕生日だったわけですが、おそらくは、最後のものにもなるだろうということです。

信じていただきたいのです、お姉様。ただ同情を引くためだけに、このようなことを申し上げているのではありません。この上なく確固とした根拠があってのことなのです。また、その意味でも、さらにもう一つ恩恵を授かりますことが、私の心の平安にとりまして最も重要な点と考えておりますので、私が求めております許可の件で、私の姉として、貴

女に仲立ちの労を取っていただきたいと思うのです。最後の祝福をお願いするためなのですが、尊敬いたしておりますお父様とお母様のどちらかに、あるいはご両人宛に、六、七行の文を認めますことへの（私の望みどおりにお返事をしていただけますよう願っております）お許しの件です。

この祝福こそ、私が今お願いすべき恩恵のすべてですし、また、思い切ってお願いいたしますもののすべてなのです。ただ、私が恐れておりますのは、文面によってのこととは申せ、父母いずれかの面前へ直ちに罷り出てしまうことなのです。それに、もしも求めずにおりますと、頑迷さからのことのように、また、孝養心に欠けるためのように見えてしまうことでしょう。心の中は遜った気持ちと後悔の念とで一杯ですのにね。ただ、この仕事を試みます勇気を与えていただけると有難いのです。どうか、次の一行だけを書き送ってください。「望むとおりに筆を執っても構わないのですよ、クラリッサ・ハーロー」とです。これだけで十分なのです。そして、これ以上はない恩恵といたしまして、いまわの際まで、左記の者から感謝されることとなりましょう。

心から悔い改めております貴女の妹

クラリッサ・ハーロー

手紙　十二

ノートン夫人からクラリッサ・ハーロー嬢へ

七月三十一日　月曜日

大好きなお嬢様

正直に申しまして、白状いたさねばなりませんが、お母様にお便りを差し上げるような勝手な真似をしてしまいました。お許しをいただけますなら、二十四日付の貴女のお手紙を同封いたしたい旨を申し出たのです。貴女のお気持ちはどのようなものなのか、不正な逮捕に由来いたします貴女の最後のご苦労がどのような性質のものか、そして、下宿なさっておられるところの住人はどのような人たちなのか、M卿のご一族から貴女にどのような申し出がなされたのか、また、貴女が心から後悔しておられるということ、それに、あの人らしい筆遣いでしたが、ハウお嬢様から皆さんにお便りのございましたことが、どれほど貴女のお心を乱しているのかといったことを、あのお手紙でお母様にもご存じいただけるだろうと私は考えたのです。でも、貴女は問題をご自分の手に引き受けられ、この前のお手紙では、扱いにくいこの件に関しまして、貴女のご承知のないまま行動いたしますのを禁じておられましたから、あのお手紙を求められずに済みましたことを嬉しく思う次第です。また、実際のお話、貴女へ寄せる私の愛情も依怙贔屓から来たもののように受け取られているのですから、事態のすべてを貴女と皆さんとにお任せいたしますほうが、より良いことなのかもしれませんね。

貴女がそのように懇願しておられる、そして、決して絶望なさることのなきよう私も願っております、例のご恩恵につきましては、皆さんご自身のお世話になるべきで、私の非力な仲裁などに頼るべきではないと、皆さんがそのようにお望みになりますのは疑いのないところです。と申しますのは、思い切って保証いたしますが、お母様は機会があり次第

すぐにでも、母親としての優しさをお示しするお気持ちでおられるのです。この点に関しましては、私のほうから勝手にご説明申し上げるわけにはまいらないものなのですが、いくつかの手掛かりから推測いたしております。

私はもう具合が良くなっておりますし、息子も今では順調に快方へ向かっておりますので、お傍に伺いたく思います。でも、仮に私が参りましても、今のところ、好意的に受け止めてはもらえないだろうなどと、そのようなお知らせをいただきますのは、辛い話ではないでしょうか。拝察いたしますに、私も成立いたしますことを願っておりますあの和解の協議が、つい先頃始まりました貴女とお姉様との文通によって進められます間のことなのでしょうね。でも、貴女のほうでは私に来てほしいとお考えなのでしたら、私といたしましては、自分の善意を頼りといたしまして、皆さんのご不興にも敢えて甘んじる気持ちでおります。

ブランドさんはロンドンにご用がおありなのですが、緑の付いた聖職の座を求めるためのことです。在任中の牧師様がもっと良いお仕事に就かれるため、やむなくこの職を辞されるものと思われているのです。そしてブランドさんは、ロンドンに着きましたら、貴女のお暮らしぶりやお体具合を密かに調査なさることになっております。

大変お節介焼きな若者でして、ジョン伯父様がこの人を（伯父様が今度のお役目にこの人を選んだのです）過つことのない賢者みたいに考えておられるのですが、そのことがなければ、お母様としてはだれか別の人を派遣していただきたいお気持ちだったのです。

この若者は、自分はだれよりも深く問題を見通していると考え、また、抜け目のない人間と思われるためですが、不思議なことなど何一つないところに謎を見つけ出すのが好きだという、例の訳の分からない、度を過ごしがちな殿方の一人なのです。

説教壇におられる場合にいたしましても、あるいは、そこを離れられた時でも、私といたしましては、この人に好感を覚えるとは申し難いのです。王国内でも最も正統的な聖職者ですし、最も優れた学者の一人で、知識をひけらかすことは決してなく、自分が説くキリストの教えを他のすべての学問にもまして愛し、崇拝しておりました者を父に持つ私ですのに、若い人が、自分が用います聖句の題目を示すとすぐに、その聖句から離れてしまいますのに耳を傾けねばならないのですからね（博学で有徳の師(ア)から、お体具合が良くてお説教の出来ます時に示していただいたお手本にひどく背いてもいるのです）。また、キリスト教徒で田舎者の聴衆に向かいまして、異教徒の古典から引いたギリシア語やラテン語の断片をばらまきますのは、それも、必ずしも大層適切に持ち込まれているというわけでもないのですが（それらを判断いたしますための、私に与えられました唯一の方法、つまり、若者が訳しておりました英語から判断いたしますと）、頭か心のどちらかに、あるいは、その両方に、どこか間違ったところがあることを示しているのです。でなければ、大学での教育があの人をもっとマシな人間に育てていたはずだからです。私が聖職に敬意を抱いておりますことは、大好きなクレアリーお嬢様、貴女もご存じでしょう。このようなことを申し上げますのは、それゆえのことでございます。

あの人の出発予定日につきましては承知いたしておりません。また、あの人の調査は内密に行われることになっておりますので、この情報に関しましては、どうかお気に留めたり

(ア) リーウェン師のことである。

なさいませぬようお願いいたします。貴女のお暮らしぶりや談話が、お節介なことこの上ない調査人の詮索をも寄せ付けないようなものでありますことに、私は少しの疑念も抱いておりません。

たった今お話がございましたが、お姉様宛に二通目のお便りをなさったそうですね。でも、皆さんからさらなるご厚意が得られますのは、ブランドさんの報告を待たれた上でのことになるように思われます。皆さんのほうでは、今なお、貴女のお体具合が私の心配いたしておりますほどにお悪いとは信じておられないからなのです。

でも、お気持ちのままに行動なさることがお母様にお出来になればの話ですが、貴女には優しいお母様がいらっしゃいますことに、間もなく気づかれるはずです。そして、このことから大きな希望も湧いてくるわけですが、最後には万事が丸く収まりそうだということでございます。と申しますのも、貴女は和解への道を順調に進んでおられると、私は本当にそう思うからでございます。神様が祝福をお与えてくださいますよう、そして、貴女の健康を回復し、貴女をお身内の皆さんの元へと連れ戻してくださいますよう、私はお祈りいたしております。

変わることのない親愛の情を添えまして、

ジュディス・ノートン

お優しいお母様がこっそりと五ギニーをお届けくださいました。私どもが苦しめられておりました、あの病の間の一助にとの有難いお言葉ではございましたが、でも、それよりは、私自身からのこととして、私が貴女へお届け出来るようにとのお気持ちのように思われます。従いまして、まだ残してございます別の十ギニーも合わせ、お送り出来ればと考えております。

モーデン様のご到着の件につきましては、分かり次第すぐにもお知らすることといたします。

宜しければ、ご親戚の方々と貴女の間で交わされております事柄につきまして、その一部始終をお知らせいただけますなら幸いに存じます。

手紙　十三

クラリッサ・ハーロー嬢からノートン夫人へ

八月二日　水曜日

大好きなノートン夫人、貴女が、そして、貴女の息子さんが快方に向かわれましたことを伺い、私はとても嬉しく思います。これからの長い長い年月、あなたたちがいつまでもお互いにとりましての祝福となりますよう祈っております。

貴女のお話ですと、実際に母にお便りをなさり、私の先月二十四日付の手紙の同封を申し出られたとのことですね。そして、その手紙を求められることはなかったとのことですね。つまり、出来るかぎりの穏やかな言い回しで包み込んではおられますが、貴女のお申し出は拒絶されたことになりますわね。そして、これではっきりいたしますのは、どのような訴えにいたしましても、私のために耳を貸していただくわけには行かないのだという

ことでしょう。それでも、私の切望しておりました恩恵もやがては授かるはずと、希望を持つように命じておられますね。

あの時に私が切望いたしました恩恵は、確かに授けられたのです。でも、姉に出しました二通目の手紙へのお返しとして厚意が示されます前に、皆のほうではブランドさんの報告を待つことになりそうだと、貴女は心配しておられましたね。また、次のことも付け加えておられました。つまり、自分の気持ちのままに行動することが母に出来るとしての話ですが、私には優しい母がいるのだということ、そして、最後には、万事が丸く収まるだろう、ということでした。

でも、大好きなノートン夫人、二通目の手紙で私が切望しております恩恵とは、一体どのようなものなのでしょうか。好意をもって私を迎え入れてほしいということではないのです。もしもそのように考えているのでしたら、皆は間違っております。私はそのようなことを望んではおりませんし、また、望むわけにもまいりません。それに、仮に皆に迎え入れる気持ちがあるといたしましても、このように嘆かわしいまでに感情を傷つけてしまいました大切な者たちの、そのまなざしの中で生きて行きますことに、何度も申してまいりましたが、果たして私は耐えるべきなのでしょうか。私が求めておりますのは、ただただ、祝福の言葉だけです。最期を迎えますための祝福です。生きるための祝福ではないのです。皆のほうではそのことを知っているのでしょうか。また、皆は承知しているのでしょうか。皆の無情さが、おそらく、私の命を縮めることになるのをです。従いまして、仮に皆のほうには私に恩恵を施すつもりがありましても、それが手遅れになるかもしれないのだということもです。

重ねてお願いいたしますが、私のところへいらっしゃることはお考えいただきたくないのです。現在のところ、気掛かりになります点は何一つありません。もっとも、避けられるのでしたら、断じてお会いしたくはないと思っておりますある人と顔が合ってしまうかもしれないという、そんな懸念から生じますもの、そして、一番近い間柄で、一番大切な親類縁者の苛酷さから生じておりますものは除きますが、どうやら、その苛酷さのすべても、親戚の者たちが自ら備えていたもののようですね。貴女のお言葉ですと、兄はエディンバラへ行っているということですからね。従いまして、もしも貴女が私のところへいらっしゃいますと、皆の苛酷さに輪を掛けることになりましょうし、さらには、貴女ご自身にも敵を作ってしまうことになるのです。そうなりますことはお分かりいただけないでしょうか。

ブランドさんがそうなさりたいのでしたら、お出でになって構いません。聖職者なのですし、善意からのことに違いありません。あるいは、そのように考えなければいけないのでしょうね。たとえ、私についてどのようなことをおっしゃろうともです。私が心配しておりますことといえば、ただ次の点だけです。つまり、あの方は、ご自分への尊敬の念を促したいと思っております一族の間で私が不興を買っておりますことはご存じですし、また、ジョン伯父様と父に恩義を受けておられるわけですから、私の無罪を主張いたします際にも、熱が入らないのではないかということなのです。ただ、あの方が、あるいは、この世のどなたでも結構なのですが、私の振舞いにつきまして、果たしてどのようなことを耳になさるのか、私はその点に不安を感じている、ということではございません。どうか次の点につきましては、私の尊敬いたします大切なお友達、本当にご安心くださって構わ

ないでしょう。私の振舞いは、一番お節介焼きな人の詮索を敢えて促すことさえも請け合って構わないものなのだということです。

私の二通目の手紙への返事がまいりましたら、私たちの間で交わされております文面の写しを、ご希望もございましたので、お送りすることにいたします。姉にではなく、父本人宛に、あるいは、少なくとも、母宛に筆を執る勇気があれば良かったのにと、今思い始めているところです。でも、お気の毒に、母は自分一人では、私のためのことは何一つ出来ないように思うのです。自分たちの娘であり、妹であり、姪である哀れな女の子を相手に、大好きなノートン夫人、強固な同盟が結ばれているということなのです（本当に強固な同盟なのです）。おそらく兄は、皆と別れます前に、同盟関係を更新しておいたのでしょうね。その必要はなかったのです。兄の仕事は完了いたしましたし、完了したというだけには止まらないわけですからね。

私のためにお金のことでお悩みになってはいけません。私にお金は必要ないのです。貴女に対しまして母が大層思いやりを示してくれましたこと、嬉しく思っております。その件につきましては、私も辛い思いをしていたのです。でも、そのように善良な女性が、いつも満足を感じておられたささやかな恵みにも事欠くような事態というのは、神様がお許しにならないのです。私ども一族の一人残らずが、せめて貴女と同じくらいに豊かであってくれたらと思いますわ。あゝ、私のノートン・ママ、貴女は豊かなのです。本当に裕福なのですわ。真の富と申しますのは、貴女が授けられておりますような満ち足りた心なのです。そして、神を信頼して申し上げるのですが、私も豊かさへの道を歩んでいるものと考えております。

さようなら、いつも優しい私のお友達。最後には万事が丸く収まるはず、とのお言葉でしたね。そうなりますことは私も分かっているのです。私がいまわの際まで、左記のとおりでありますことは安心してくださって構いませんが、同じほど信頼を寄せながら、私はそうなりますことを確信しているのです。

変わることなき感謝の念と親愛の情とを込めまして、貴女の

Cl. ハーロー

手紙　十四

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

八月一日　火曜日

まったく、どうしようもないほど口惜しいし、失望してもいる。実は、土曜日に、ハウ嬢からの使いが従姉妹たちへの手紙を携えて到着したのだが(ア)、俺は昨日までそのことを何も知らなかったのだよ。昨日になって、セアラ夫人とベティ夫人にお越しいただくことが出来たわけだが、老卿および俺の親戚の女二人と一緒に、その手紙について裁きを行うためだ。そして、貴公の哀れな友人ほどに惨めなぶり者にされた熊も、かつていなかったくらいなのだよ。で、何故だと思うかな。何のことはない、ハーロー嬢の薄情さのため

(ア) 本巻の手紙四を参照のこと。

なのだ。俺が何か新たな悪さをしでかしたとでもいうのだろうかな。それに、そんなことが出来るとしたら、俺は、彼女の言うなりの条件でだが、首尾よく彼女の愛顧を得ていたのではないだろうかな。また、俺の落ち度に関してではなく、不運に関して罰を加えるというのは、果たして公正なことなのだろうか。俺が親戚としている者たちは、結果論者の大馬鹿連中ということだな。連中全員のことを恥ずかしく思うよ。

ハウ嬢の手紙には、ハーロー嬢から彼女に宛てたものが同封されていたが(ア)、俺の従姉妹たちに渡されるべき手紙で、俺に対する最終的な拒絶を含んだものだ。それも、極めて激しい、断定的な言い方でなのだ。ただし、この拒絶に際して、感情よりは信念の命じるところに従っているように装っている［かつてなかったほどの真っ赤な嘘だ］。そして、その証拠として、こう言っているのだよ。彼女としては俺を許すことが出来るし、許してもいるが、それには次のような一つの条件があるというのだ。つまり、俺がこれ以上彼女には付き纏わない、ということだよ。手紙全体について言えば、彼女自身はますます賛美の的となり、俺のほうはいよいよ忌み嫌われるように書かれているということだ。

聞くところによると、フランス人の予言者たち(二)が以前われわれの前で見せたことになっているものなのだが、その動揺ぶりや引きつった表情、溜め息やすすり泣きといえども、これらの手紙、そして、容赦のない我が麗しの君がハウ嬢に宛てた別の手紙から抜粋した、心打つ文面の数ヶ所に目を通した際、この涙もろいお歴々によって展開された光景に比べるなら、まるで取るに足らないものだったのだよ。あれだけの魅力溢れる親戚を得損なったと、大変な嘆きようなのだ。彼女の美徳、そして、精神と情操の高尚さがしきりに褒め称えられるのだよ。やれ勘当だ、やれ縁を切るぞとしきりに脅しても来るのだ。自ら振り返って見るだけで、また、失望から来る腹立たしさもあって、連中の咎めなどなくても、心臓を抉られる思いでいるわけだし、連中のだれにも負けないくらい、彼女を賛美している俺だというのにな。「一体全体、何のためなのです、こうまでなさるのは」と、俺は叫んだよ。「蔑まれ、撥ね付けられることで十分ではないのですか。私にどうにか出来ることでしょうかね、情け容赦のない彼女の気持ちというのは。彼女に嘗めさせた災厄の償いをしようと言っているのではないですか、私は」とな。そして、連中全員をその場で呪ってやりたい気持ちだったよ。彼女自身とハウ嬢にも付き合ってもらってな。そして、思い切り誓ってやったよ。それでもやはり、彼女は俺のものにして見せる、とな。

ここで、貴公に向かって重ねて誓うことにする。「絆の結ばれたその一週間後に彼女の死が訪れるとしても、天上の主にかけて、その絆は結んでもらうし、彼女にはラヴレース家の一人として最期を迎えてもらう」ということだよ。話す気があるなら、彼女にそう伝えてくれ。ただ、それと一緒に、彼女の財産のことは念頭にないこと、そして、あの財産と財産に対する権利の一切は、彼女が跡継ぎなしにこの世を去る場合だが、彼女の好みの者に正式に譲渡するつもりでいることも話してもらいたいのだ。彼女の財産に対して、少しでもさもしい考えを抱くような、それほど心の卑しい破廉恥漢ではないのだよ、俺は。だから、ハーロー家の者としてより、ラヴレース家の者としてこの世を去るほうが彼女の名誉になりはしないか、その点を彼女自身の判断に委ねたいのだよ。

しかし、俺にとっては極めて重大な問題でもあるし、依頼人よりも、依頼人に敵対して

(ア) 第六巻の手紙百一を参照のこと。

いる人間のほうをはるかに称賛している弁護人に、すべてを任せてしまうつもりだなどとは思わないでほしいのだ。二、三日したら上京しようと思っている。彼女の足下にこの身を投げ出すためだよ。それから、意志が固く、十分に用意の出来ている牧師を一人同伴するか、あるいは、近くに待機させておくつもりだ。そして、式を挙げてもらうのだよ。どんな結果を招くにせよな。

しかし、結婚許可証に名の挙がっている教会のいずれか一方で（結婚許可証は彼女が手元に持っているのだよ。また、有難いことには、俺の手紙と一緒に送り返してきたわけでもないのだ）、この目的のために、彼女の傍らに仕えることを許してくれるようなら、その場合は、彼女のところへ押しかけたりはせず、いずれかの教会の祭壇の前で会うことにする。また、俺の二人の従姉妹を呼び寄せ、彼女を訪ねさせることを請け合うつもりだ。セアラ夫人とベティ夫人についてもだよ。そして、M卿自身の手で、彼女を俺に授けてもらうことにするのだ。

あるいは、そのほうが彼女にとってはさらに好ましいということであれば、セアラ夫人かベティ夫人のどちらか、あるいは、ご両人に上京してもらい、当地まで彼女のお供をするよう取り計らう。そして、二人の面前で、また、M卿にも立ち会ってもらい、ここでもどこでも、彼女自身が選ぶ場所で結婚式を執り行なうことにするのだ。

八百長は止めてくれよ、ベルフォード。誠意をもって、また、熱意を込めて、貴公が習熟しているかぎりの弁舌の巧みさを駆使するのだ。彼女を説き伏せ、以上三つの方法のうちの一つを選んでもらうためだ。そのうちの一つは選んでもらわなくちゃいけない。どうあっても、そうしてもらわねばならんのだよ。

シャーロットが控えの間のドアを叩いている。入れてくれと言うのだ。一体何の用だというのだ、シャーロットは。小言ならもうたくさんだね。「どうぞ、お嬢さん」

∴

∴

従姉妹のシャーロットは、俺が書き物に熱中するあまり、あの娘への慇懃な振舞いなどには構っていられないのを看て取り、また、取り扱っている事柄を推測して、書いた物を見せてほしいと頼むのだ。

俺は願いを入れてやったよ。するとあの娘のほうでは、俺が極めて真剣なのを見て大いに喜び、ハーロー嬢宛に一筆認めようかと言うのだよ。俺はその申し出を受け入れることにしたのだが、あの娘が適当と考える仕方で俺のことを取り扱う許可も一緒にだ。

あの娘の手紙の写しを同封することにしよう。

書き終えると、あの娘は手紙を俺のところへ持って来た。俺を遠慮なく扱ったことへの詫びの言葉も添えてな。だが、俺はそんなことは大目に見てやったのだ。すると、俺の賛同を得られたのが嬉しいと、あの娘はキスをしようとするのだ。俺のほうでは、手紙を書いてくれたお礼に二度キスをしてやり、その手紙から成功の望みが出たということ、そして、あの娘の言葉は幸いにも的を射たものだということを話してやった。

俺同様、だれもがその手紙には同意を示しているし、また、悪し様に扱われたり、保証をしてもらったりすることにも実に辛抱強く耐えているというわけで、俺に対しても好感を抱いてくれているのだ。その手紙で芳しい結果が得られないとすれば、非難のすべては

我が愛しの君の意固地さに向けられることになるだろう。あれほど彼女がひけらかして見せる慈悲心とか寛大な気質とかに、当然ながら異議が唱えられるだろうし、今彼女が一身に集めている同情も、俺のほうへ振り向けられることになるのだよ。

従って、この手紙に全幅の信頼を寄せ、他の代案すべてについては、俺の上京の件もそうだが、我が女王様が従姉妹のモンタギュー嬢に返事を送ってよこすまで延期することにしたのだよ。

だが、もしも彼女が我を張り、この件を検討するための時間を取る旨の約束をしてくれないようなら、先に示したとおりだが、従姉妹が入ってくる前に俺が筆にした事柄を彼女に伝えてもらって構わない。彼女がそれでも強情を張るようであれば、確かなこととして彼女に伝えてほしいのだ。俺としては是非とも彼女に会わねばならないし、また、会うつもりでもいるということをだよ。ただし、信義の限りを尽くし、どこまでも遜った態度でのことだ。そして、俺に好意を示してくれるよう、彼女の気持ちを動かすことが出来ないようであれば、その時には国を捨てるつもりだ。そして、おそらく、二度と再びイギリスへは戻らないことになるだろうな。

貴公からの通知によれば、忙しくしているとのことだが、この重大な時期に、貴公が例のワトフォードでの件に、また、ベルトンに対する公正な処遇を目指し、その準備に掛りきりで暇もないというのは、俺にしてみれば残念な話だよ。後の件について俺の助力が必要なようであれば、命令してくれ。この天の邪鬼な美女のことで頭は一杯だし、悩まされてもいるのだが、呼び出しのあり次第、すぐにも応じることにする。

貴公の熱意と友情とを大いに頼りにしているのだよ。だから、急ぎ彼女の元へ戻り、任務を再開してもらいたいのだ。俺の利害に極めて深く関わっているため、起きている時と同様、夢枕にさえ立つほどの事柄なのだからな。

手紙　十五

モンタギュー嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

八月一日　火曜日

親愛なるマダム

私ども一族全員は、そのうちの一人の者の手によって貴女がお受けになりました損害のことを痛感いたしておりますが、その者を、何らかの方法によりまして、私ども全員との間の絆に相応しい人間とすることがお出来になりますのは、ただ貴女だけなのでございます。そして、貴女の敬虔なお心が示すことの出来ます最大のものでございましょうが、慈悲と慈善の行いといたしまして、もしも、あの人のこれまでの悪辣さと恩知らずなところを大目に見てくださり、私どもの親戚となることに甘んじていただけるのでしたら、私どもは世界でも一番幸せな一族にしていただけることになりましょう。また、請け合っても構いませんが、M卿も、セアラ・サドレアー夫人ならびにベティ・ローランス夫人も、そして、私の妹にいたしましても、全員揃って貴女の美徳と心の気高さとに敬服いたしております、いついつまでも貴女のことを愛し、尊敬いたしまして、貴女がラヴレースさんから被りましたものの埋め合わせをすべく、私どもの力で可能なことは一つ残らず行う所

存でございます。しかしながら、この点につきましても、マダム、貴女に加えましたこれまでの卑劣な行いをラヴレースさんが衷心から悔いまして、両膝をついて貴女のお許しを請い、貴女への永遠の愛と信義とを誓っておりますことに確信が持てないのでしたら、私どもといたしましても、敢えてお願いはしないところでございます。

従いまして、私の最愛の従姉妹さん［もしも、この心地の好い呼び方を許していただけますなら、貴女は私どもすべての心をどれほど魅了なさることでしょう］、私ども全員のために、あの人の魂のために［私は確信いたしておりますが、貴女は魂の救済を願っておられる立派なご婦人に違いないのです］、そして、このように申し上げますのをお許し願いたいのですが、貴女ご自身のご声望のためにも、私ども揃っての懇願をご了承いただきたいのです。そして、私どもの励みとなりますよう、ただ次のようにだけおっしゃっていただきたいのです。シャーロット・モンタギューと会ってみたい、そして、噂さでは良く知っているのだけれど、直に知り合ってもみたい、とです。それだけで十分でございます。お許しをいただきましてから二日の後には、妹を伴いまして、あるいは、同伴せずに、お傍に伺い、その後のご指示をいただく所存でございます。

どうか、私ども最愛の従姉妹さん［貴女をこのようにお呼びいたします喜びを、私どもは抑えることが出来ません。どうか］、お許しを願います。私がロンドンへ参りますことをお認めいただき、この世でも最大の美質に恵まれました方がこの世でも最も不埒な男性の一人からお受けになった損害に対しまして、為し得るかぎりの償いを行うことが出来ますような立場に、私どもを、M卿と一族の女性たちを置いていただきたいのです。そうしていただけますなら、私ども全員にとりまして、とりわけ、僭越ながらも重ねて次のように自称させていただきます者にとりましては、それは計り知れないほどの恩恵となることでしょう。

貴女の愛する従姉妹、そして、ご恩義に与っておりますしもべ
シャーロット・モンタギュー

手紙　十六
ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

八月三日　木曜日　午前六時

俺自身の用事とベルトンの件にすっかり掛かり切りになっていたもので、昨夜まで上京することは出来なかったのだよ。折に触れて令嬢の容体を知るのには、ロヴィック夫人のところへ使いを出すことで我慢していたのだが、受け取ったのは、はなはだ芳しくない報告ばかりだった。その原因としては、彼女の無慈悲な家族から届いた手紙や忠告によるところが大きいのだよ。

俺自身の問題はもう片付いたし、来週にはエプソムへ向かうことになる。ベルトンの妹が奴の代わりに奴の自宅を確保出来るよう、骨折ってやるのだ。それが済んだら、貴公のために、そして、令嬢のために一身を捧げるつもりでいる。

昨夜お目通りを許されて分かったのだが、彼女の具合は目に見えて悪くなっているのだよ。帰宅すると、火曜日の日付の貴公からの手紙を渡された。言わせてもらうが、ラヴレ

ース、姿を見せて彼女を悩ますようなことはしないと言っていた、俺との約束を是非とも実行してもらいたいということだ。

《ベルフォード氏は木曜日午前十時の日付で再び筆を執り、令嬢に宛てたモンタギュー嬢からの前掲の手紙の文面、および、ベルフォード氏が誠意の限りを尽くして支持していた、手紙十四で触れられたラヴレース氏の代案に関し、令嬢と交わしたばかりの会話について報告を行っているのである。しかし、この会話の結果については、以下に掲げる数通の手紙の中に見出されることでもあり、友人のためのベルフォード氏の弁解と論拠、そして、令嬢の返答については割愛することとした》

手紙　十七

クラリッサ・ハーロー嬢からモンタギュー嬢へ

八月三日　木曜日

親愛なるマダム

思いやりに溢れるご丁重なるお手紙を賜り、大層感謝いたしております。でも、自分の無念な思いを募らせるお手紙でもございました。そのように立派なご婦人方からそれほどまでのご賛同をいただけます縁組、そして、ご婦人方やM卿がおられます故に、私にとりましては極めて評判を高めることになりますし、また、かつては望ましくも思われておりました縁組により、私はどれほどの幸せを得ることが出来たのか、その新たな例を示していることにもなるからでございます。

でも、本当に、本当に、マダム、私の心はひたすらにあの人を撥ね付けようとするのです。あの人はそれほどのご一族の出でありながら、まず第一には、実際に手を染められました、あの計画的な暴挙に走ることがお出来になりましたし、自らご承知のことでしょうが、バークシャーへ発たれる日の前夜には、私へのさらなる企てを試みられたのです。そして第二には、女性の中でも最も破廉恥な者たちの仲間とすべく、平気で貶めてみせました相手を、高潔な心を装ってのことですが、そのご一族の一員に取り立てようと願うような、そんな心の卑しい人なのです。

そこで、親愛なるマダム、熱烈な思いを込めまして、次のように言明いたしますことをお許し願いたいのです。つまり、これほどの冒涜者に対しまして、祭壇の前で愛と信義とを誓うことにより、あの人の前例もない、そして、手の込んだ悪行を、いわば清めることが出来るようでしたら、このように輝かしく高貴なご一族のご婦人方と同列に並べていただきますのには、私は決して値しないように思われるということでございます。

ただ、お優しいM卿、ベティ夫人とセアラ夫人、そして、ご親切な貴女ご自身とお妹様に対しまして、お願いを一ついたしますことをお許しいただきたいのです。それは、皆様全員が権限や影響力を寄せ合わせられまして、私にこれ以上付き纏いませぬよう、ラヴレースさんを説得していただければ有難いということでございます。

あの人にどうぞお伝えいただきたいのですが、もしも私は生き長らえるように予定されているのでしたら、私を狩り出し、命を縮めようといたしますのは大変に残酷な行いだと

いうことです。と申しますのも、避けられるものでしたら、二度とあの人には会うまいと心に決めているからなのです。それに、あの人からこの身を守ってくださる人など、私には一人としておりませんし、どなたかにお願いいたしましてあの人を傷つけること、あるいは、その人たち自身に害の及びますようなことは望んではいないわけですから、それだけになおさら残酷な話だということになります。

一方、死を運命づけられているのでしたら、穏やかに死なせていただけないといたしますと、それは負けず劣らず残酷なことになりましょう。と申しますのは、あの人が穏やかで幸せな最期を迎えられますよう、私は願っているからです。本当に願っているのです。

親愛なるマダム、貴女様に、また、誉れ高いご一門のすべてのご家族に、この世の幸せのすべてが訪れますこと、それこそは、親愛なるマダム、次のもの以外のいずれの呼称をも捨てねばなりません、そんな不幸者の願いとするところでございます。

貴女様、そして、皆様方のご恩に与っております忠実なるしもべ

クラリッサ・ハーロー

手紙　十八

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

八月三日　木曜日　午後

今まさに嬉しい驚きを味わったところだが、令嬢の使者の手で俺の元に届けられた次の手紙のせいだよ。同封のものとして彼女が触れている手紙(ア)のほうは、写しを取らずに送り返してしまった。その中身については、推測するに、間もなく他の者の手によって貴公にも知らされることだろう。断固として貴公を拒絶する文面だよ。哀れなるかなラヴレース、といったところだな。

ジョン・ベルフォード殿へ

八月三日

謹んで

これまでしばしばお申し出くださいましたが、お力の及ぶことでしたら何なりと、私の意向に沿いたいとのお言葉でございましたね。それに、貴方のことは大変高く買っておりますゆえ、このようなお申し出をいただきました折にも、ただのお愛想には止まらないお気持ちであったものと考えたいのです。

そこで、お願いいたしたいことが二つございます。一つ目のものにつきましては、今お話しいたします。二つ目のものは、これに応じていただけました場合のこととし、応じていただけません場合は、なかったことにいたします。

今のところは私のことを気に掛けようといたしません幾人かの身内の者のために、私の振舞いにつきましての誤解を解くことになりますような、その種の報告を残しておきます

(ア) ハーロー嬢の手紙（手紙十七）を参照のこと。

のが私の務めでしょう。それに、ハウさんとハウさんのお母様も、私がそのようにいたしますのをしきりに望んでおられるのです。

私が心配しておりますのは、そのための時間が私にはなさそうだということです。それに、無理のないことと貴方も思われるでしょうが、そのような辛いお仕事に取り掛かろうとする気持ちが段々と薄れているのです。受けてまいりました苦しみをおとなしく振り返って見ることが出来なくなっております自分に気づきますだけに、その思いはなおさらなのです。また、仮に回顧せざるを得なくなりました場合には、そのためにひどく心を乱されまして、行く手に控えておりますさらに重要な任務を行うに当たりましても、それに必要な平静さをもって進めることは出来なくなることでしょう。

私に対する振舞いのすべてや企みの数々を、折に触れ、貴方の邪悪なお友達が細大漏らさず貴方に報告していたことは、私にははっきりと分かっているのです。それに、貴方が一度ならず保証してくださったことですが、あの人は私の人柄につきまして、文面でも口頭でも、私が望み得るかぎりの公平な評価をしていたとのお話でしたね。

さて、最も興味深い出来事のいくつかについて書かれました、貴方宛のあの人の手紙なり報告なりからの、公正で忠実な見本をお渡しいただけますなら、私の名誉のためのことなのですが、要望されておりますお仕事に自ら取り掛かる必要はあるのかないのか、その点を判断することも可能になりましょう。

勿体なくもモンタギュー嬢がお届けくださいましたお手紙へのものなのですが、同封いたしました私の返信からも(ご一読後すぐにもお返し願えますと幸いです)、次の点は確信いただけるものと存じます。つまり、貴方のお友達につきまして、しきりに求められておりますような形で少しでも検討を加えたりいたしますのは、私には不可能だということでございます。従いまして、お願いいたしました見本のせいで、あの人が何らかの損失を被るようなことは有り得ないのです。それに、私の名誉にかけて申し上げますが、その見本が、法的にであれ、それ以外の点であれ、あの人の不利益になるように利用されることは決してございません。また、私が世を去りました後にも、そのようなことが起こりませぬよう、次の点はお約束いたします。私が主眼としておりますのは、ご親切にも貴方がお渡しくださいます文面を、常に、他のどなたでもなく、貴方ご自身の権限に委ねたいということなのです。

私の要望に応じてくださいますのを適切なこととお考えの場合ですが、転記していただきたいと(善いほうにも悪いほうにも、どちらにも改竄なさったりせずにですが)願っております箇所と申しますのは、悪辣な火事騒ぎで慌てふためいてしまいました六月七日と八日頃に、あの人が貴方宛に書きましたもの。それに、六月十一日の日曜日から十九日にかけて書き記したものです。こうしていただけますなら、大変有難く思います。

貴方の謙虚なるしもべ

Cl. ハーロー

さて、ラヴレース、貴公にとっては彼女の愛顧が旧に復する望みはまったくないのだから … あの令嬢とか女性全体とかに汚名を着せることで、自分の罪を和らげようとしたためしは一度もないわけで[もっと了見の狭い道楽者ならそうしていたことだろうが]、貴公の率直さに対しては賛辞の一つもあるかもしれないのだから … そうすることで彼女

の気が楽になるかもしれないのだから　…　彼女の筆によるよりは、貴公自身の筆によるほうが事はうまく運ぶに違いないのだから　…　そして、最後に、貴公の振舞いの数々からも明白なわけだが、貴公の手紙というのは、貴公に関して彼女が承知している最も罪深い部分ということでもないのだから　…　彼女は名誉に掛けているわけでもあるし、彼女が示した制限と理由に則ってのことだが、彼女の願いを入れてはいけない理由が俺には見当たらないのだよ。しかもこれは、友人同士の付き合いには当然な信頼関係に違反することでもないのだ。とりわけ、俺としては、次のように付け加えることだって出来るわけだからな。つまり、「貴公は自らの文才を、そして、悪辣さを誇りとし、恥じるところはさらにないのだから」とだよ。

だが、この点はともかくとして、貴公の苦情や反対の叫び声が聞こえてくる前に、彼女の願いを入れようと思うのだ。だから、わめき立てたりせぬよう、精々努力をしてもらいたいのだよ。俺に逆らう口実とするため、そして、呪詛の才能を発揮してみせるためだというのなら別だがね。また、こんな理由でそうしてみたいというのなら、結構だろう、わめき散らしてもらおうじゃないか。

二番目の要望というのは何なのか、知りたいものだ。ただ、次の点ははっきりしているのだよ。貴公の喉を掻き切るとか、俺自身の首を危険に晒すとかいった話にまで至らないかぎりは、きっと応じるつもりだし、彼女の願いを入れることが出来るのを誇りに思うということだ。

さあ、俺も実際に忙くなるだろうな。抜粋の作業でだよ。

手紙　十九

ベルフォード氏からクラリッサ・ハーロー嬢へ

八月三日、四日

マダム

仰せつかりました役目は、貴女のハムステッド行きに先立ちます時期、また、六月十一日から十九日までの間に、ラヴレース氏が貴女ご自身に関し、私宛に書き送って来ました事柄を、誓約の上（善悪いずれにも、改竄の手を加えずに）、貴女にお知らせすることでありました。また、このご要望に際しましても、貴女のお人柄を守るためのことですが、心痛を誘う話題にご自身でお触れになる必要があるのかどうか、それを氏の報告から確かめるためであり、それ以外に狙いはないことを保証してくださいました。

ご命令の向きは、マダム、私的な友達付き合いの秘め事に影響を与えるようにも思われますから、はなはだ扱い難い性質のものでありますが、動機を打ち明けていただけないような計画はお持ちになれない方であることを承知いたしておりますし、また、例の文面をお知らせすることにより、私の不幸な友人にとりましては、この世でも最も優れた女性に対する振舞いのゆえに、〈高潔な〉男としての資格はすべて失ったとは申せ、〈率直な〉男としての特質の点ではいくらか面目を施すところがあるかもしれないと思いますので、それだけに一層快く、ご命令に従うことにいたします。

《次いで氏は抜粋の作業を進めるのである。そして、その抜粋の結びとして、令嬢に対し、以下の如き文言による友人のための呼び掛けを行っている》

「さて、マダム、ご用命はこれにて果たしました。貴女に対し、友人の立場を損ねたことにはなりませぬよう願っております。と申しますのも、筆を執りますたびに、友人が貴女の美徳を正当に評価しておりますことは、これで貴女にもお分かりいただけるはずだからであります。彼の手紙はすべて、自らの断罪につながるわけですが、同工異曲のものなのです。それに、一言申し添えさせていただきますが、変わることなく愛らしいこの受難者といたしましては、友人が真に改悛の情を見せた場合、祭壇の前で彼の誓いを受け入れることが、ご自分の道義心と少しは首尾一貫するところがあると、そのようにお考えくださることも可能でしたら、私は次の点に関し、何らの疑いも持たないということです。すなわち、友人は最高の、そして、最も愛情溢れる夫になるだろうということです。こうしてくださることで天晴なお嬢様は、あのようにお嬢様を激賞してやまない彼の一族全員に対しまして、また、失礼ながら申し上げますと、生憎なご家族の反感が（彼に対しましては、確かに理不尽なほどの激しさに至っておりますが）克服されることとなり、全面的な和解がもたらされました暁には、ご自分のご家族に対しましても、一体どれだけの恩義を施されることになるでしょうか。何しろ、彼の品行が反対理由にならないのでしたら、この素晴らしい人間二人を結び合わせようとしない者などは存在しないのですからね」

この問題はさておきまして、僭越ながら、マダム、貴女にひとつお尋ねしたいことがあるのです。貴女は彼の友人である私から、極めて微妙な事柄の委細を手になさるわけですが、それらにつきましては、徳義の上からも、一度もご覧にならなかったかのように、努めて無視なさり、どのような形にせよ、お知らせいたします事柄を利用なさらぬようにすべきだとはお考えにならないのでしょうか、ということです。それも、おそらくいくつか出てくるのでしょうが、彼の計画的な企みに関する論議の場においてもお願いしたいことなのです。そしてこの企みは、貴女ご自身を対象としてではなく、女性全体を念頭に意図されたかにも思われるのですが、女性を征服いたしますことこそは（遺憾ながら、私自身がその証人となることも出来るわけですが）、すべての道楽者が胸に温めております悪辣な狙いなのです。それに、彼との間に万一何かの誤解が生じます場合にも、私といたしましては、私を非難するような余地を彼には与えたくないのです。もしも、私の意図によってというより、むしろ結果のほうから判断する場合には、おそらく彼はこう言うでしょうからね。彼が貴女を、そして、（貴女に対する彼の仕打ちを通して）彼自身の身内を失いましたのは、〈背信行為〉とも称すべきものに由来することなのだ、とです。

深甚なる敬意を込めまして　…

貴女のこの上なく忠実謙虚なるしもべ

J. ベルフォード

手紙　二十

Cf. ハーロー嬢からジョン・ベルフォード氏へ

八月四日　金曜日

謹んで

お知らせいただきまして、恐縮至極に存じます。貴方ご自身のこと、あるいは、私のことをお責めになって当然と思われますような利用の仕方は決していたさぬつもりです。モンタギュー嬢のお手紙への私の返信からも納得していただけることでしょうが(ア)、この身に加えられました、あの不幸な男性の計画的な卑劣行為を、疑いのないものとして照らし出します、新たな光を求めたわけではございません。

あの人のために認めて上げなければなりませんのは、ご自分のこの上なく下品で忌まわしい行いを貴方に報告するに当たりまして、あの人がいくぶんかの上品さを保っているという点でございます。そして、あの人の妙に饒舌なお話のすべてが、同じくらいに上品さを保っているのでしたら、機知というよりは、むしろ薄情さのはるかに強い証拠となりますような、そんな策略を思い巡らすことの出来る悪辣な心を別にいたしますと、そのお話のせいで罪深いほどに醜悪な姿を晒すものは何一つないということでございます。と申しますのも、はなはだ粗末な才能と理解力しか持ち合わせない人でも、一旦、人間同士を結び付けております掟を踏み躙る気持ちになることが出来ました時には、悪辣なことこの上ない企てをも首尾よく成し遂げるものだからです。それも、罪のない人が他のだれよりも先に犠牲になるのですが、そのような人は、他の人たちの心の高潔さを自分の心に照らして判断しようとする傾向を持っているからなのです。

私の苦難のその全過程を通じまして、貴方のご意向のお陰を被っていたのだと、そのように考えるべき大きな理由が私にはあったのですね。ただ、あの人の計画的な卑劣行為に対する非難となるものなのですが、この際自然に浮かんでまいります推論を見落とすわけにはまいりません。でも、お知らせくださいました事柄を利用し、必要もなしに事を荒立てようとしていると、そのようにはお考えいただきたくございませんので、口は慎むことにいたします。

ところで、あの人の弁護をなさるようなご苦労は今後一切お掛けしないためにも、一言申し上げておきたいのですが、すべての点に亘りまして、私は十分な検討を加えたということです。人間らしい自惚れた心が示唆することの出来ますすべての事柄 … 願わしく思われます身内との和解や、あの人のお身内の方々が温かく示してくださいます敬意のことからいたしまして、期待をつなぎたくなります事柄のすべて … 今の私にとりましては、現世で考慮すべき事柄といたしましては最も大切なもの、つまり、ハウさんとの友情を享受いたしますこと … これらすべてについて検討を加えてみたのです。そして、その結果と申しますと、また、ご親切にもこれらの点をお知らせくださいます前からそうだったのですが、たとえ、ラヴレースさんは最高の、そして、最も愛情に溢れる夫になるはずだと保証されましても、私のことは一月もいたしますとすべて終わりを告げるのだという、その望みのほうに、あの人との縁組から生じ得る最も好ましい事柄よりももっと大きな満足を覚えるということなのです。でも、その他の点について申しますと、もしもあの人が、私に加えてまいりました害悪で満足し、これ以上私を苛むようなことは一切慎んでくださるというのでしたら、「あの人は孤児をすらくじで取り引きし、友をさえ売り物にす

(ア) 手紙十七を参照のこと。

る」[二二]ような真似をなさったわけですが、私といたしましては、最期の瞬間まで、あの人の幸せを願って上げようと思うのです。このような娘は父なし子と呼ばれて当然なのでしょう。母なし子と呼ばれるのも仕方ございません。父親の保護の手も、また、母親らしい寛大さをも拒まれてきたのですからね。

❁　❁

さて、抜粋につきましてのご尽力を有難いことと感謝申し上げました上で、お願いしなくてはなりませんもう一つの件に移ります。口にいたしますのにもとても勇気の要る事柄ですし、その勇気にいたしましても、大変な苦悩とひどい困窮状態を強いられることによって初めて湧いてくるというものなのです。でも、不適切とお考えでしたら、お断りいただくだけのことですし、敢えて申しますなら、少なくとも大目には見ていただけるものと存じます。前置きはこれくらいにいたしましょう。

ご覧のとおり、この身は見知らぬ人たちの手にすっかり委ねられておりまして、他人様に望むことの出来ますかぎりの優しさと同情をもって接してくださっているとは申せ、やはり、憐れみのお気持ちと好意以上のものをこの人たちに期待することは出来ません。また、私についての思い出にいたしましても、この体と同じことでして、仮に、そのいずれかを守っていただく必要が生じましても、あの人たちに保護してていただくわけにはまいらないのです。

従いまして、私という人間につきましての公平な評価が可能になりますような材料を所有しておられる唯一の人物、

また、私の希望に沿ってくださる勇気、独立心、そして、能力に恵まれておられるお方に対しまして、

いわば、私の思い出の保護者になっていただきますこと、

また、私の遺言執行人になっていただき、私の臨終の床での願いのいくつかが叶えられますように取り計らっていただくことをお願いいたしますなら、

そして、そのすべてをご自分の流儀、方法によって、また、ご都合に合わせて執り行なわれますようお任せし、ただ、必要な場合には、私の親友ハウ嬢にご相談くださるようにしていただけますならば、

僭越とは存じますが、私のこの二番目の要望につきましても、お聞き届け願えるものと考える次第です。

そして、もしもお聞き届け願えますならば、私にとりましては、この身に賜りますご恩顧やご尽力から、次のような満足が得られることになるのです。

私は自分の無実を十分に確信していたため、身の上話に関しましても、自ら筆を執る時間がないこともありますが、自分の声望と財産とを台無しにした当人の記述に委ねるような真似が出来るほどであったということになりますと、やがてこの点をご存じになる人たちすべての間で、私の思い出にとりましての名誉ともなることでしょう。

このお仕事によりまして、私自身の身内、あるいは、貴方のお友達のいずれに関しましても、だれかを面倒とか危険とかに巻き込む心配はないものと存じます。財産の譲渡を予

定しているからですが、私の身内の者たちからは、おそらく、望ましく思われますほどには喜んでもらえないことでしょう。道理に外れた処分をするつもりが私にはないためですが、でも、ご存じのとおり、当の本人が判断を下すことになりますと、善良な人たちの場合でも、問題がいつも正しく裁かれるわけではございませんからね。

それに、私が心の底から困惑を覚えております事柄を思い起こすという苦痛から解放されることにもなりましょう。しかも、最も大切な準備を進めますためにも、心の乱れは鎮められねばならない時期のことでもありますからね。

それに、もしかいたしますと、私の不幸のことで、人道的な見地からすでに心を痛めておられるベルフォードさんですから、強い光に照らされて眼前に提示されました身の上話全体をつくづくとお考えになります時には、そして、悲劇的な結末をも同じように眼前になさり、ある意味では関係者となられました暁には、もしかいたしますと、さらに高尚なお考えから、今後の行動を自ら律せられ、ご自分の報酬を永遠の幸せの中に見出されるかもしれないのです。そして、それこそは、私が祈念いたしておりますところなのです。

ご恩顧を賜っております貴方のしもべ

クラリッサ・ハーロー

手紙　二十一

ベルフォード氏からクラリッサ・ハーロー嬢へ

八月四日　金曜日

マダム、

本日のお手紙にて賜りました栄誉のことは光栄至極に存じますゆえ、一瞬の滞りもなく返答をさせていただきます。私の希望といたしましては、貴女が末永く幸せな年月を送られ、そして、最も望みを掛けておられる点につきましては、ご自身の遺言執行人となっていただきたいということなのです。しかしながら、私が生き残りました場合には、お申し出くださいました神聖な任務につきましては、心の底から快諾させていただきますし、私の忠実さに関しましても、完全にご信頼くださって構わないと思います。また、ご命令の件すべてに亘りまして、もしも可能であればの話ですが、一字一句の違いもなく遂行いたしますことをご信頼くださって構わないでしょう。

お手紙を結ばれるに当たり、ご親切にも希望してくださいました事柄のもたらします効果こそは、お言葉を交わしていただく栄誉に浴して以来、私が常に心掛けてきた点であります。無為に終わることのなきよう、努力のすべてを傾ける所存です。このご信託によりまして、その機会が頻繁に得られるものと存じますが、お傍にお仕えいたしますことの幸せが、必ずや望ましい結果を促すことでしょう。何故なら、貴女の信仰心、平静さ、そして、その他の美点を目前にいたしまして、貴女と競い合う気持ちを起こさずにいるのは不可能なことだからです。私からのお願いといたしましては、ただ、今後どのような志願者が出てきましても、あるいは、どのような出来事が生じましょうとも、私の品行とか態度とかに、下劣さを示す新たな例がいくつか現れるのでなければ、そのために私を解任なさるようなことはしていただきたくないということに尽きるのです。

マダム、

この上なき感謝の念と誠意とを込めまして、貴女のしもべ

J．ベルフォード

手紙　二十二

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

八月四日　金曜日　夜

君の手紙から抜き出してほしいと要請のあった抜粋の件だが、実際に令嬢の手に渡したところだ。安心してもらいたいのは、良心の命じるところに従ってではなく、友達のよしみでなのだが、君のためになるよう最善を尽くしたということだ。不躾な言葉のいくつかについては、変更を加えるとか削除するとかしてある。いわば〈火事の場面〉とも呼べそうなところでの、彼女の姿態についての扇情的な描写は削除しておいた。彼女の比類のない美徳について君が与えてきた公平な評価に対しては、俺もまた公平な評価を加えた旨を彼女に話してあるのだ。だが、抜粋のすぐ後で、彼女宛に俺が書き送った言葉をそのまま受け取ってほしいのだよ。

「さて、マダム　…　」《これ以降については、五十二頁の括弧（「　」）で括った段落を参照のこと》

君が訪問を企てることを考え、令嬢は極度に不安を感じている。後生だから（君が約束していることでもあるのだぞ）、そして、哀れと思って（というのも、彼女は本当に弱っており、次第に衰えてきているのだ）、頼みを聞いてもらいたい。訪問のことは考えないようにしてほしいということだよ。

昨日の午後、彼女は姉から残酷な手紙を（その手紙のもたらした影響からして、ロヴィック夫人がそのように推測しているのだが）受け取った。両親の祝福と許しとを請い、先週の土曜日に書かれたものへの返事だ。

彼女のほうでは、もしも君の手紙すべての中で、俺が彼女に進呈した抜粋の中でと同じ上品さと公正さとが守られているようであれば（そのとおりだと、俺はすでに請け合ってあるのだが）、自ら身の上話を筆にする必要からは解放されたように考える旨を認めているのだよ。そしてこれは、貴公にとっては有利に働くものであり、そのことに対しては、俺に感謝して然るべきだな。

しかし、彼女が俺に対して行おうとしていた二番目の要望だが、果たしてどんなことだと貴公は思うかな。他でもない。俺が彼女の遺言執行人になるという話だよ。彼女の動機については、いずれ適当な折に貴公にも開陳されるだろうし、また、請け合って構わないが、その時には納得の行くものになることだろう。

俺がこの信託のことをどれほど誇りに思っているか、君には想像もつくまい。気掛かりなのは、役目に就くのがあまりにも早い話になりそうだという点だ。彼女が四六時中筆を執っていることもあり、その文面に詳しく目を通したり処理をしたりするのは、俺にとっ

てははなはだ物悲しい喜びということになるだろうな。非常に気立てが好く、大変な辛抱強さと忍従の心を備えているようには見えるが、目下の苦難をその最中にあって筆にするというのだからな。それゆえにこそ彼女の筆致は、先が見えないことの苦しさに（その時点では、出来事が未だ運命の胎内に潜んだままのため）自分の心を苛まれているわけでもあり、はるかに生彩に溢れ、また、心打つものとならずにはおかないのだ。すでに乗り越えてしまった困難や危険のことについて語る人物が用いる、無味乾燥で叙述的な、生気に乏しい文体に比べての話だが、そちらのほうの語り手は、まったく何の心配もないわけだからな。それに、自分の物語に感動するところがないとすれば、読み手の心を強く動かすようなことはありそうもない話なのだよ。

八月五日　土曜日　午前

令嬢のところから戻ったばかりだ。令嬢を訪ね、栄誉を与えてくれたことに直接謝意を表し、神聖な役目を委託された場合には、力の限り忠誠を尽くし、正確を期す旨の確約をしてきたのだよ。

彼女の容体ははなはだ芳しくないものだった。俺がそのことに触れると、彼女は次のように話していた。姉から二通目の薄情な手紙を受け取り、そして、以前にはそうする勇気がなかったわけだが、直接母親に宛てて手紙を書いていた（それも、跪いてだが）というのだよ。最後の祝福と許しを求めるためのものだ。彼女が深く心を動かされているように俺の目に映っても、それは無理のない話だとも言っていた。彼女のための最後の慈善的な仕事を俺のほうで引き受けたわけだから（それと同様、彼女のもう一つの要望に応じた点についても、彼女は礼を言ってくれたのだよ）、いずれそのうち、これらの手紙すべてを俺の閲覧に供するし、自分が今書いている手紙に、姉から受け取った非情な手紙の埋め合わせとなるような優しい返事をもらえるようであれば、その時には、両方一緒に俺に見せたくなることもあるかもしれないが、そうでない場合には、本人のためにも、哀れなベラの手紙を目にする者がどんなに少なくとも、一向に不都合はない、というのだ。

彼女の身内の残酷さを咎めた場合、彼女が不愉快な思いをすることは承知していたのだよ。それゆえ、俺としては、彼女に対する身内の者たちの憤りを煽り立てておくことで利益を得たいと願う敵が、彼女にはきっといるに違いないのだ、とだけ言っておいた。

「そうかもしれませんわね、ベルフォードさん」と、彼女が言った。「不幸な人間に敵のいないことは決してございません。強情さから犯しました一つの過ちが、さらに多くの間違いに対する謗りを正当化するのです。非難の声に耳を傾けてもらえますところでは、咎め立てをする人間に事欠くことがありませんし、恥を晒しました子供に有利な話題の一つすら、勇気を持って語られることがない場合ですと、だれもかれもが差し出がましく、その子に不都合な話を持ち出してくるのです。私は手遅れにならないうちに賢くなるべきでしたし、ありふれた経験が日々例証しております事柄の正しさを、自らの不幸によって確信させられる必要もなかったのです。ラヴレースさんの卑劣さ、父の頑固さ、そして、姉の非難にいたしましても、私自身の無分別さの当然の結果なのです。ですから、この厳しい運命に対しまして、私は精一杯善処しなければいけないのです。ただ、これらの結果がそれこそ踵を接するようにして続くわけですから、それらがまだ新しいうちは、改めて心を動かされますのをどうして避けることが出来ましょう」というのだ。

俺は尋ねてみたよ。彼女の健康状態が芳しくないことや、極めて謙虚な態度でいることを伝えるものだが、彼女の身内のいずれかに宛てた、俺自身、あるいは、彼女の医者とか薬剤師とかによって書かれた手紙は容認してもらえるものかどうかをだよ。あるいは、身内のいずれかの元へ出向くことが役立つというのであれば、だれであれ、働き掛けの相手として彼女が差し向けてくれる者のところまで、俺自らが喜んで使者となり、彼女の指示に厳密に従うつもりでいるということもだ。

彼女のほうでは、この種のことは何一つとして、特に、彼女の知らぬ間に、そして、同意なしには試みられることのなきよう、熱心に希望していた。彼女が言うには、親切心から来る熱意のあまり、ハウ嬢が害をもたらしたというのだ。それに、仲裁によって愛顧を期待する余地があるのであれば、思いやりに溢れた友人、ノートン夫人にすぐにもお願い出来るのだが、この夫人は敬虔さと思慮深さの点では肩を並べる者も少ないし、また、機会は一切逃さずに、彼女に尽くそうと骨を折ってくれるはずだというのだよ。

俺は月曜日までロンドンを離れる予定であることを彼女に知らせた。彼女は楽しい旅となるよう願ってくれ、帰京の際には、会えると嬉しいのだが、と言っていた。

さらば

手紙　二十三

ARAB. ハーロー嬢からCL. ハーロー嬢へ

［七月二十九日付の令嬢の手紙に対する返事として。手紙十一を参照のこと］

八月三日　木曜日　朝

妹クレアリーへ

もうこれ以上、貴女の手紙で私に面倒を掛けないでいただきたいわね。貴女は常日頃から筆遣いのコツを心得ていて、筆を手にすれば、自分がさせたいと思っていることを、間違いなくだれにでもさせられるものと踏んでいたのだわ。でも、貴女の才気と愚行とが貴女の身の破滅になったのよ。そして今、自分ではどうしようもなくなると、ふしだらな娘が皆そうするように、貴女は物乞いをしに、そして、嘆願をしにやって来て、他の人たちにも自分と同じくらい不安な思いをさせるのだわ。

この前貴女にお便りをした時にも、気の休まらないことになりそうだと、私はそう思っていたのよ。

そんなふうに貴女は少しずつにじり寄って来て、やがては、再び迎え入れてもらいたいと願うようになるのでしょうね。

でも、貴女が希望するのは「許し」と「祝福」だけだと、そう言っていたわね。何のための祝福なのかしら、クレアリーちゃん。一体、何のためなのか、ひとつ考えてみることね。それでも、貴女の手紙はお父様とお母様に読んで差し上げましたからね。

お父様がおっしゃったことを貴女に話そうとは思いません。でも、貴女は弁えているように自慢しているけれど、自分の不始末のことを本当に痛感している人なら、私が話し聞かせるまでもなく、当然至極な憤りを感じている父親は、このような場合、どんなことを口にするものか、察しがつくことでしょう。

お気の毒なお母様　…　あゝ、何て恥知らずなのでしょうね。恩を忘れた貴女の愚行のせいで、お母様はどれほど苦しんでおられることでしょう。あんなにも可愛がられていなかったなら、多分、貴女もこんなに恥を晒すことにはならなかったでしょうね。でも、甘やかされたお気に入りの子供が良い結果を出したというのは、生まれてこのかた、私は一度も見たことがないのよ。

胸が一杯で、忌憚のないところを書かずにはいられないわ。貴女の罪は私たち全員に恥辱をもたらしたのですからね。私も、公のものであれ私的なものであれ、会合の場とか娯楽の席とかは、どんなものでも顔を出すのが怖いし、恥ずかしいのよ。それはどうしてでしょうね。理由なんかお話しする必要もないわね。そんな場所ではどこででも、男女を問わずに交わされるあけっぴろげな言葉とか、無礼な囁きとかの話題になっているのが、貴女の振舞いのことなのですからね。

要するに、何の慰めも書き送ることが出来ないのは残念だけれど、でも、私の見るところ、貴女を許したがっている人など一人もいないということよ。

時間が経つと貴女のためにどんなことがもたらされるのか、私には分からないわ。それに、貴女の後悔の原因になっているのは、失望のせいというよりは、本物の確信に基づいているのだということが了解されるのはいつなのか、それも私には分かりかねるわね。だって、クレアリーちゃん、貴女の期待したとおりトントン拍子に事が進んでいたら、そして、あの頭の鈍い悪党が貴女を捨てたのでなければ、こんなにも感動的な哀願などは一言だって、それに、あの男からの挑戦的な台詞や、得々として犯罪行為を語る貴女の言葉以外には何一つ、私たちの耳には届かなかったはずでしょう。そしてこれが、皆さん一人残らずの意見だというわけよ。私も含めてね。

悲嘆に暮れている、貴女の姉

アラベラ・ハーロー

これは特別な使いを立てて送るけれど、その人は明日の夜までに貴女に手渡すか、それとも、貴女宛にして置いてくることを引き受けてくれたのよ。

手紙　二十四

クラリッサ・ハーロー嬢から母親へ

八月五日　土曜日

尊敬いたしておりますマダム、

自らの罪を認める罪人でさえ、私がこの短信を手立てといたしましてお傍へ伺います際の畏敬の念、そして、真の改悛の情に優る畏れの気持ちや後悔の念を抱いて、怒りに燃える厳正な裁き人の前に進み出るようなことは、これまで一度としてなかったのです。

是非ともこの点は申し上げねばなりませんが、私の慎ましやかな願いの対象となっております事柄が、私の将来の安寧に関わることではないのでしたら、このような不躾な行動に踏み切ったりはしなかったということです。でも、私の心はそのことに執着いたしております。私にとりましては、全能の神の許しの次に必要なものとしてです。

幸せなお姉様も私の苦悩のことをご存じであったなら、現になさったように、不人情で姉らしくもないと考えずにはおられませんような、そんな手厳しさでこの胸を痛めつけたりはなさらなかったことでしょう。

でも、お姉様のどのような不親切にも、私は不満を抱いておりません。ただ、お姉様も筆にしてくださったことですが、私の後悔が失望のためというよりは、真の確信から来ておりますことを分かっていただかねばなりませんので、マダム、次のことは主張させていただきたいのです。つまり、このような嘆願をお認めいただけるならですが、懇願いたしております祝福を受ける資格が、私には実際に備わっているということでございます。と申しますのも、私の慎ましやかな願いは真の、そして、偽りのない後悔の念に基づいたものだからなのです。また、自分が記憶しておりますかぎりでは、お母様に故意の嘘をついた覚えは一度もございませんが、このとおり、厳粛この上ない仕方で次のことを言明いたします時に、そんな娘の言葉に信を置いてくださいますなら、今申し上げました点もより一層気持ち好く信じていただけることでしょう。つまり、誘惑しております者と面会いたしました時には、その人と一緒に家を捨てるようなことはしないと、心に決めていたということをです。また、軽率な行動に走りましたのも、のぼせ上がっていたからというよりは、強制されたためであったということ、そして、そのようなことにはほとんど気乗りもしていなかったため、あの人の手中に落ちたのを知りましたその瞬間から、また、その後も、自分の出会いました仕打ちのことを危惧すべき何らかの理由があの人から感じ取られるようになりますまでの数週間につきましても、絶え間なく後悔し、悲しみに沈んでいたのだということをです。

そのようなわけでもありますから、いつも尊敬いたしておりますお母様、何卒、祝福を賜りますよう、両の膝をつきまして（この手紙も跪いて書いております）、謹んでお願い申し上げます。おっしゃっていただきたいのは、ただこれだけのお言葉で宜しいのです（私のことを、マダム、貴女の娘と呼んでくださるようお頼みはいたしません）。「迷える不幸者よ、私はお前を許します。そして、神の祝福のあらんことを祈ります」とです。ただこれだけで結構です。嬉しい紙片の上に、このような趣旨の、貴女の愛しい筆跡で記されました一文を拝見させていただくだけで宜しいのです。最も苛酷な苦闘の折に、この胸に抱いておくためです。そして、それを天国への許可証と考えることにいたします。また、このように申しましてもつけ上がったことにならないのでしたら、そして、「私」ではなく「私たち」と記してくださり、尊いお名前の両方を添えていただけるのでしたら、私といたしましては、それ以上の望みなど何一つとしてないことになりましょう。そして、その時には、次のように申し上げたいと思います。「偉大にして慈悲深き神よ。ここに、この紙面にてご覧いただけますのは、立腹して当然な両親からの許しに与りました、貴方の取るに足らない哀れな娘でございます。あゝ、どうか、私の救い主のために、慈悲の心に貫かれた貴方のご命令を加えていただきたいのです。そして、悔いております罪人をその情け深い両腕に受け入れていただきたいのです」とです。

懇願をいたしますのにも、マダム、母親らしい優しさのことを話題として持ち出しますなら、私を厳しく咎めております人たちの考えでは（この慎ましやかな請願も、その人たちの目を通らねばならないのです）、きっと非難の種を増やすことになりましょう。従いまして、どうか願いをお聞き届けくださいまして、私を祝福し、許していると言明していた

だきたいのです。そのようにしてくださいますことで、貴女の子供の最期の刻に慰めを降り注いでいただけるのですから　…

貴女のクラリッサ・ハーロー

手紙　二十五

モンタギュー嬢からCf. ハーロー嬢へ

［令嬢の八月三日付の手紙に対する返事として。手紙十七を参照のこと］

八月七日　月曜日

親愛なるマダム

私ども全員は、貴女のお手紙が届きます前から、ラヴレースさんは貴女にはまったく相応しくありませんし、このような奥様に恵まれますよりは、むしろ似合いの罰をお受けになって然るべきだという意見だったのです。そして、あれだけ卑劣な加害者に示していただけそうに思われましたどのようなご配慮にもまして、私どもへお寄せてくださいます温かい思いやりのほうに望みを掛けていたのです。と申しますのは、貴女に対するあの人の振舞いがどのようなものでありましても、私どものほうでは、貴女をお慕いし、敬い申し上げるということで、全員の気持ちが固まっていたからなのです。

でも、お手紙をいただきました後では、何を申し上げたら宜しいのでしょうか。

それでも、貴女のお受けになった苦しみの数々がどれほど激しく私たちの心を動かしたことか、その点をお知らせすべく、後に署名いたしますすべての者の名でお便りをするよう、また、M卿はご自分のおられるお部屋のドアからあの人が入室するのを、今後は一切禁止なさったこともお伝えするよう、言い付けられているのです。それに、お身内の方々のご不興のせいで、不幸にも、苦しみを嘗めておられますため、不自由な思いを強いられる場合もございましょうということで、卿、そして、セアラ夫人ならびにベティ夫人といたしましては、生涯に亘りまして、あるいは、少なくとも貴女がご自分の地所の所有を認められますまでは、特別の使者の手で定期的に届けられます、四半期ごとに百ギニーのお手当てを、そして、手始めとしていたしましては、同封の銀行券をお納めいただきたいとのことなのです。それと、これは私ども全員のお願いですが、最愛のマダム、この悪党の身内の者たちの恩義を受けることになるなどとは（M卿、セアラ夫人、そして、ベティ夫人が貴女に捧げます、この愛の証についてですが）、決してお考えになりませぬように願いたいのです。と申しますのも、私どもの間には、あの男の肩を持つ者はだれ一人としていないからなのです。

私ども一人一人は、貴女が尊敬しておられる人たちの、その末席に連ねていただきますことを、また、かつてはそうなりますよう希望いたしますのを私どもの大きな喜びとしておりましたものが、あたかも実現されましたかのように、その場合と同じ間柄にありますようにお考えいただきますことを願っているのです。そして、ご健康とご気力とを取り戻され、多くの幸せな年月を迎えられますよう、私ども一同、心を一つに合わせて祈っているのです。また、この破廉恥漢のための申し立てがこの先行われることはございませんので、あの男が、現在準備を進めているところですが、国を離れました暁には、肩を並べる

者もいないほどのお嬢様と親しくお付き合いをいただく栄誉に与りたいものと祈る次第です。これらの点こそは、親愛なるお嬢様、私どもの心からの願いでございます。

貴女を愛する友
そして、誠意溢れるしもべ
M.
セアラ・サドレアー
ELIZ.ローランス
CHARL.モンタギュー
MARTH.モンタギュー

真っ先に名を連ねました三名の者につきましては、もしも貴女が受け取りを拒んだりなさいますと、きっと悲嘆にくれてしまうことでしょう。親愛なるお嬢様、あの男の罪のことでこの人たちを罰したりはなさらないでいただきたいのです。特別の使いの者の手でお届けいたしますが、ご親切にもお聞き入れくださるとのお返事を、この者が持ち帰りますことを希望いたしております。

ラヴレースさんも同じ人を使って手紙を出しておりますが、あの人の手紙のことを私たちが承知しておりませんのと同じように、あの人のほうでも私たちの手紙のことは一切ご存じないのです。と申しますのも、私たちは互いに相手を避けておりまして、お屋敷の片方には私たち、もう一方にはあの人、という具合で、お互いに出来るかぎり離れて暮らしているからなのです。

手紙　二十六
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

八月五日　土曜日

今週火曜日の、従姉妹シャーロットからの手紙へのハーロー嬢の返信だが（これは、君のものを俺に届けてくれたのと同じ男の手で、彼女のところへ届けられたのだ）、その内容にははなはだしく心を掻き乱されてしまったものだから、君の文面をじっくり考察するだけの忍耐心、あるいは、思考力は持ち合わせなかったのだ。

確かに、彼女自ら身内の者たちに向かって大声で慈悲を求める必要があったのだよ。慈悲などを示す術は知らない女だけどな。まさしく彼女はハーロー一族の娘なのさ。誓っても良いが、ジャック、紛れもなくハーロー家の娘なのだ。ただ、彼女は極めて多くの美点を備えているゆえ、愛さずにはいられないのだよ。俺も愚かなもので、彼女が軽蔑してみせると、それだけ一層愛してしまうのだ。

貴公はその忌々しい、馬鹿げた更生者風の口調で、「死ぬぞ、死ぬぞ、死ぬぞ」と繰り返し、一旦その言葉の尻尾を捕まえると、台詞の終わりに来るたびに、そいつを挟まないではいられなくなるというわけだ。畜生め　…　俺が考えないとでも思うのか。彼女が回復し、三百代言の手柄を貴公から奪ってしまうくらいなら、貴公手ずから彼女に毒を盛るだろうということをだよ。

だが、貴公が打ち鳴らす忌々しい弔鐘のことは、もう止めにしよう。逆さまに置いた調子はずれな死の鐘での演奏についてはな。彼女のほうが俺の埋葬に立ち会うのだよ。俺には分かるのだ。何しろ、まったくの話、俺は食うことも飲むことも、眠ることも出来ないのだよ。それに、もっと困ったことには、この世のどんな女にも愛を感じないのだ、彼女以外にはな。今じゃあ、女に目を向ける気持ちにもならない。それどころか、女と出会うたびに顔を背けてしまうのだよ。たまたま、行きずりに目にした者の目つきとか態度、目鼻立ちとかが彼女のものと似ているように思わせる場合は別で、そんな時には見直さずにいられなくなるのだが、改めて眺めると、我に返るのだ。彼女のような者は他にはいないのだからな。

だが、ベルフォード、この女に悪魔が宿っているのは確かだな。彼女の馬鹿げたところや頑固なところを考えれば考えるほど、彼女にはいよいよ我慢出来なくなるのだよ。彼女自身に対して、また、彼女の身内や友人に対して、俺と結婚する場合と変わらない正当な取り扱いが、何か別の方法で可能だろうか。わずか一日の命しかないことが確かでも、彼女としては妻の立場で死ぬべきなのだ。クリスチャンとしての復讐心から、自分自身のためにそうすることを望むわけには行かないのだとしても、時々はあれほど気に掛けているように振る舞ってみせるのだから、自分の身内の者たちのために、また、女性全体のためにもそうすべきではないのだろうか。そして、俺の有利に働くよう彼女のハーロー気質を動かすためには、何を持ち出してきたところで、十分大切なものとは思わないというのであれば、貴公がそんなにも哀れっぽく、常日頃から彼女のために頼み込んでいる憐れみの心にしても、果たして彼女には受け取る資格があるのだろうかということだな。

彼女の手紙のせいで俺とここの愚かな一族との間に出来上がった溝についてだが［言っておかねばならないが、われわれは散り散りバラバラの状態なのだ］、そんなことはこれっぽっちも気にしていないのだよ、俺は。連中も愚かなもので、俺に破門を言い渡し、呪おうというのだ。連中が一日中呪い続けるとしても、その呪いを十倍にして返してやることも出来る俺だというのにな。

俺は屋敷の半分を占領している。それも、立派なほうをだよ。何しろ、お偉いさんにとって一番楽しくないものというのは、一番金の掛かったものなのだからな。豪華さと使い易さとは別物ということで、並みの部分が連中の割り当てになり、豪華な部分が俺の分け前になっているわけさ。そして、ここで主人顔をしているのは俺だし、好きなだけ長く威張り散らしてやろうとも思っているのだ。一方、太って息切れの激しい二人の姉妹とその年老いた痛風持ちの兄貴、それに、黴臭くなっている二人の姪が残りの半分に閉じ籠もっていて、俺も連中が来るのを禁止しているわけだが、俺が自分たちのところに入り込むのを禁じておきながら（そこが滑稽な点だ）、その俺と顔を合わせるのが怖くて、連中は動き回ろうともしないのだよ。従って、俺は連中全員を囚人にして、好きなところを濶歩しているというわけだ。俺と争い、吠えかかろうとするなんて、可愛らしい雄犬と雌犬どもだよ。ところが、俺が姿を見せるたびに、犬小屋から飛び出すのを怖がってみせるのだ。あるいは、すでに外に出ている場合は、俺を目にした途端、唸りながら走って戻る。耳を畳み、喉の垂れ肉を揺らし、震える尻尾を股の間に挟んでだよ。

ところで、俺がかぶと虫や蜜蜂、すずめ蜂や熊蜂と雄々しく戦い、愛を軽んじられたことで怒り狂っているというのに、貴公のほうは粘液（二三）と岩清水を堪能し、自分の改心計

画を推し進め、俺の不幸に歓喜しているというのだからな。

貴公も本当に無神経で煮え切らない下郎だな。令嬢にも我慢ならんが、貴公のことも耐えられんのだよ。恋とか友情とかについて、貴公はいずれに関しても何も知らず、友情には値しないし、恋をすることなど無理な話なのだ。でなければ、俺が落胆するのを見て大喜びしたりはしないはずなのだよ。憐れみに顔をしかめて見せながらな。

それに、呆れた男だよな、貴公も。貴公宛に内々で書かれたものだというのに、彼女のため、俺の手紙の一部の転記を請け合うのだからな。一度でも受け取ったことがあると白状するくらいなら、それより先に、貴公のその忌々しい舌を諦めてもらわねばならんような、そういった手紙なのだぞ。なのに、そんな手紙が今彼女に知らされようとしているのだからな。だが、これは命令しておくぞ。そして、手遅れにでもなろうものなら、痛い目を見てもらうことになるからな。俺の手紙については、ただの一行でも彼女の願いに応じてはならんということだ。

もう応じてしまったのであれば、俺の行う復讐は、最低でも、彼女を訪ねたりはしないという、名誉にかけて貴公に与えた約束を反古にするということだ。ちょうど貴公が、友情を信頼して書かれた手紙を漏らすことで、俺に与えた約束を破ったようにだよ。

希望を抱いていただけに、あまりにも悲しい話なのだが、彼女が俺とは絶対に結婚しないつもりだというのは、従姉妹のシャーロットに宛てた彼女の手紙から、俺も今では確信しているのだ。

彼女は従姉妹に向かって、俺の行いを「前例もない悪行」と呼んでいる。だが、燃え盛る激しい愛の情熱が駆り立てる男たちの行動のことを、彼女はどうして知っているというのだ。こういった場合に使う言葉に求められる区別立てを、どうして彼女は知っているのだ。最悪の事態を想定するためには、また、このような極めて微妙な状況の中で比較検討することが可能なためには、これまで俺が思っていたほど彼女は上品ではない、ということでなければいけないのではないかな。ただ、悪魔は黒いと彼女は聞いてきたのだ。そして、俺を悪魔に仕立て上げようという気があるものだから、突飛な空想の乳鉢の中で、煙突掃除夫二十人をすりつぶし、その汚い塊の中から、普通よりも煤まみれな奴を立ち上がらせようとしているのだよ。

だが、あの尊大な軽蔑の姿勢によって、彼女は俺の心にどれほどの旋風を引き起こしていることだろうか。人間のプライドがこれほどまでに傷付けられたためしは、これまでただの一度だってなかったことだ。彼女のせいで、俺の評価はがた落ちだ。自分自身の目にさえもだよ。「彼女の心はひたすらに俺を撥ね付けようとする」と言っているのだが、「俺の心の卑しさゆえに」とのことだ。なのに彼女は、自分がそう呼んでいるものがもたらす恩恵を手に入れようと目論んでいるのだよ。彼女の傲慢さ、そして、彼女の狭量さに、同時に呪いあれ、といったところだな。傲慢さというのは俺に対するものだし、狭量さというのは、彼女自身の身内に対するものを言っているのだよ。彼女と血縁を結ぶのに相応しくないという点では、俺にも優る連中というわけだが、さもなければ、確かに俺様の心は卑しいことになるだろう。

しかしながら、だれもが憧れてしまうのだな、彼女には。だれだって敬慕の念を抱いてしまうのさ。あゝ、あの呪わしい家 … あそこの女どもがいなければ … それに、奴らの忌わしい薬 … それらのものがなければ、正常な知力が、そして、美徳の威光が彼

女を守っていたはずなのだ。一度は謙虚な弁舌の力を借り(ア)、また、今一度は、自らの命を脅かす恐るべき言辞を用いることで(イ)、彼女を救ったことがあったようにだよ。

しかし、この二つの場面両方で、俺に対する自分の力に、そして、彼女に対する俺の愛情に気づきながら、俺を憎み、蔑み、拒んでみせるというのだからな。もしも、最後に目論まれた犯罪行為が実行されていたのであれば、彼女がこのようにしても、正当に映るところがいくらかはあったかもしれない。だが、どの点から見ても勝利者として、勝ち誇った姿で立ち去るわけだからな。そんなことをさせておくものだから、彼女が俺を軽蔑するのも無理のない話ということになるのだ。

確かに卑しく、浅ましい姿を俺は晒していたのだよ。彼女が立ち去った時にはな。そして、その印象が彼女の心には残っているのだ。彼女にそれ相応の思いをさせなかったとはな … 実際に高慢の鼻をへし折ってやらなかったとはな … この身を引き裂いても構わない気持ちだよ。あるいは、M卿に付き添ったりせず、都に残って、彼女の動きを見張らなかったとは … 試練のすべて、誘惑のすべてに屈しない妻を娶ることで、ついには己の声価を高めることにもなっていたはずなのだ。

だが、思い切ってもう一通、彼女に手紙を出してみようと思うのだ。そして、それでも駄目なら、あるいは、返事をもらうことが出来ないのであれば、その時には、結果がどうなろうとも、彼女との面会を果たすべく努力するつもりだ。彼女が逃げのびる場合は、彼女の最愛の友、例の雌狐に大々的な害を与え、永久にこの王国を捨てることにする。

さて、ジャック、貴公は私信の中身を明かすことに携わっているわけだから、その気があるなら、これを彼女に知らせてやることだな。そして、こう付け加えるのだよ。彼女が俺を見捨てたりすれば、神も見捨てることになるだろうし、その時には、我が運命たるやいかなるものであろうか、とだよ。

彼女のラヴレースより

手紙　二十七

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

［八月四日付のベルフォード氏の手紙への返事として。手紙二十二を参照のこと］

八月七日　月曜日

では、本当に渡したのだな。友情を信頼して書かれた手紙の抜粋を、あの和解しがたい麗しの君にだよ。気をつけることだな。用心するのだよ、ベルフォード。この世のだれにもまして君のことを大切に思っているのは事実だ。しかし、これはすこぶる扱い難い点なのだ。俺にとって、事態は極めて深刻になっている。何としても彼女を手に入れようという気持ちなのだ。そして、断末魔の苦しみの中での結婚になるとしても、きっと彼女とは結ばれるつもりでいるのだよ、俺は。

君が言うには、俺が付き纏うような真似をしないよう、彼女は懸命になっているとのこ

(ア) 第四巻、二百七十三頁以降の火事騒動の場面でのことである。　(イ) 第六巻、四十九頁以降のペンナイフの場面のことである。

とだったな。そいつは、ひとつ彼女に言ってやりたいのだが、完全に彼女自身の気持ち次第ということだよ。また、ペンとインクによるのか、それとも、彼女宛の俺の最後の四通に対する、あの軽蔑を込めた沈黙の回答なのか、いずれにしても、彼女の返事次第ということにもなるだろう。それに、今回の手紙は極めて謙虚な言い回しを用い、まことに道理を弁えた言葉遣いで書くつもりでいるから、もしも彼女が正真正銘のハーロー家の一人でないのであれば、俺を許すことになるはずなのだよ。ただ、彼女が貴公に委ねようとしている遺言執行人の役目に関して言えば、貴公を彼女の遺言執行人にさせはしないということだ。貴公がそうなるくらいなら、この身は滅びても構わないのだよ。また、彼女を死なせるつもりもない。彼女に対しては、だれに何になってもらうつもりもないのだ。だれかが何かになろうとするような図々しい真似は許さないということだよ、この俺以外の者にはな。貴公の幸福はすでに度を越しているのだ。彼女との毎日の面会を許されているというのだからな。彼女を眺め、話し掛け、彼女の言葉に聞き入っているのだろう。俺のほうは、彼女の窓を望めるところまで近づくことも禁じられているというのにだ。何という拒絶の仕方なのだろうな、これは。かつて彼女にとっては世界中のあらゆる男よりも愛しかった、その男に対してだというのにだよ。そして今、意気揚々たるその顔は星の合間に隠れ、俺には見えないのだが、時には軽蔑を込めて、別の時には憐れみを浮かべながら、俺を見下ろすことも出来るというのだよ。それが俺には耐えられないのだ。

これは言っておくが、もしも手紙による努力が上首尾を収めない場合には、俺の心の中まで忍び込んだ愚劣な思いを克服するか、あるいは、目の前でこの心臓を抉り取り、彼女の心臓目掛けて投げ付けてやるつもりなのだ。彼女が、君が、そして、他の者ことごとくが冷酷無情だと呼んで憚らなかったその器官が、彼女自身のものよりもはるかに感じ易いことを分かってもらうためだよ。

あの呪わしい母さんの間近に住む者たち、また、両隣に住んでいる者たちに知らせるのだな。俺が拒絶された場合には、最高の動産物件は他所へ移せ、とだ。というのは、俺が真っ先に行う復讐は、あの蛇どもの巣窟に火を放つことだからだよ。それに、連中を亡き者にするとしても、シェークスピアの言う「救済を思わせるものを秘めた」[二四]何かの振舞いをしている最中のことになる心配は一切ないのだ。俺が燃え上がらせる炎に巻かれて息絶えるとしてだが、連中に関する俺の復讐が完璧なものとなるためにもな。

手紙　二十八

ラヴレース氏からクラリッサ・ハーロー嬢へ

八月七日　月曜日

辛抱強いご清聴、あるいは、ご寛恕のいずれを期待すべき理由もほとんど持ち合わせておりませんが、さりながら、私が貴女に与えました損害に対しまして、賠償が可能なかぎりは、私に埋め合わせをさせていただけますようお願いをいたしますためにも、今一度筆を執らずにはおられません（ご迷惑とは存じますが、おそらく、お傍に伺いますことよりは、お許しを得易いものとしてです）。

天使にも似た貴女の清らかさ、そして、目を覚ましました私の良心こそは、貴女の卓越

した美質と私の憎むべき卑劣さとをいつまでも伝える証拠となっておりますが、貴女の許しは、永遠の恩義をこの身に施してくれることになりましょう。ですから、最愛の人、私の現世での幸せをもたらす人、そして、来世の望みの明らかな拠り所となる人よ、お許しをいただきたいのです。貴女ご自身が（一部許しを得るべき点もあるように信じておられますが）酌量を求めておられますように、私を許していただきたいのです。そして、ご同意願います。貴女ご自身の条件で、そして、お好きな人を同伴されて結構ですが、神聖な祭壇の前で私と会っていただき、かつて人間の胸中で鼓動したものの中でも最も悔い改めている心、そして、愛情豊かな心に対する権利を手になさるということにです。

ただ、おそらくは、保護観察のための時間が必要となりましょう。疑わしいお気持ちがあるでしょうし、また、お体具合の不調のこともありますから、私が心から望んでおりますように、全面的なご好意をもって早急に迎え入れていただきますのは、貴女にとりましては無理な話かとも思います。この場合、ご意向には従う所存ですし、おそらくは数ヶ月に亘ることでしょうが、罪滅ぼしの行いを重ねます中で、私の今後の生き方や行動の規律正しさから、改心したことを確信くださいました上で、最後には私のものとなってくださるのだという望みを、もしもお授けいただけるのでしたら、貴女が課されるどのような苦行でありましても、私は喜んで耐えようと思うのです。

そこで、この条件付きの望みに夢を託すよう、二、三行なりとも、激励のお手紙を賜りたく、お願いする次第です。もっと早期の望みや、さらに惜しみのない励ましというわけにはまいらないのならばです。

もしも、これを拒絶なさいますと、私を自暴自棄に追い込むことになりましょう。しかし、その場合にも私は、何はさておきましても、貴女の足下にこの身を投げ出さねばなりません。私への好意的なお気持ちを起こしていただきますための、熱心で謙虚な努力にいささかでも欠ける点があると、自らを責めることのなきようにと願うからです。と申しますのも、マダム、現世と来世の両方に関しまして、私の望みの中心にありますのは貴女ですし、貴女の許しだからなのです。貴女から最終的に見放されることになりますと、私といたしましては、天の慈悲への望みも消え失せてしまうからです。私も今は十分に目が覚めまして、不当な仕打ちに遭いました罪のない人々から許されますことが、神の許しには不可欠であると考えているのです。その種の人々に対していわれもなく大罪を犯しました破廉恥漢の処置を、全能の神は（そう信じて当然なのですが）その者たちの手に委ねるからです。そして、この力を用いる資格は、もしも貴女にないとしたら、果たしてだれにあるというのでしょうか。

貴女が主張しておられるのは、マダム、一言にして言えば美徳の大義なのであり、その意味では、神の大義でもあるのだと、私はそのように考えているのです。従いまして、もしも貴女が、私を拒絶なさることにより、私は許しを受ける可能性もないほどの罪を犯したのだということをお示しになるようですと、神としては、一点の非の打ちどころとてない人物に対してあのような振舞いに及んだ男を地獄へ落とすことで、その点を主張なさるだろうと、私がそのように予想することにはならないでしょうか。

厳かに確約いたしますが、この熱心な訴えのきっかけとなっておりますものに、現世的な、あるいは、世俗的な考えは一切ないということであります。私は貴女から許していただくのには値いたしません。また、M卿と卿の妹たちも私の許しを受けるのには値しない

のです。授与の権限は卿たちが握っているものですが、何らかの恩恵に与る見通しによって私の行動は左右されるのだろうと、厚かましくもそのように想像している点に関しまして、卿たちのことを私は心の底から軽蔑しているのです。私への指図をしていただきます人間は、貴女を除きますと、この世には一人としていないのです。貴女のお振舞いのすべては、マダム、はなはだ気高い信念に貫かれておりましたし、貴女の怒りにいたしましても、天晴なまでに公正なものでしたから、私の目には、貴女が神々しい光に包まれておられるようにさえ映るのです。また、同時に、例の残酷な仕打ちをお受けにならなかった場合にそのお姿を包んでいたはずのものに比べまして、限りなく和やかな光の中におられるように映るのです。そして、あの仕打ちのこともあり、衆に抜きん出て優れておられる女性に対しまして、私自らが犯しました悪行を思い返しますと、今ではこの胸も悲痛な思いと恐怖に満たされてしまうのです。

繰り返しますが、差し当たりまして私がお願いいたしますのは、ただ数行のお言葉を賜り、この覚束ない足取りを導いていただきたいということなのです。また、（そこまで遜っていただけるのでしたら）次のことに望みを託すよう励ましていただきたいのです。つまり、今後の振舞いによりまして、現在立てております誓いをもしも正当なものとのすることが出来ますなら、自らを左記のように称する栄誉が認められるやもしれない、ということをです。

とこしえに貴女のもの

R. ラヴレース

手紙　二十九

クラリッサ・ハーロー嬢からM卿ならびに卿の屋敷の婦人たちへ

［モンタギュー嬢の八月七日付の手紙への返信として。手紙二十五を参照のこと］

八月八日　火曜日

寛大なる閣下、ならびに、常日頃より尊敬いたしておりますご婦人方、四半期払いとのことでございましたが、皆様からの勿体ないご厚志の件は、辞退させていただきとうございます。また、私へのご厚情の手付けとしてとのことでございましたが、ご同封くださいましたものにつきましても、満身の謝意を添えまして、また、真に謙虚な態度をもちまして、お返しさせていただきとうございます。実際、このようなものが入り用となることはございませんし、もう一方の件に関しましても、おそらく必要となることは有り得ないものと存じます。とは申しましても、皆様の寛大なるご厚意のことは痛感いたしておりますゆえ、最後の時を迎えますまで、その点に思いを馳せましては喜びを覚えることでしょうし、また、縁続きになりたいものと、かつては高望みもいたしました、その尊い方々に高く買っていただいておりますことを誇りにも思うことでしょう。

ただ、懸念を述べさせていただけますならば、皆様がお身内の男性に対しましてお目通りを禁じられ、ご愛顧を拒まれた点でございます。そうなりますと、おそらく、あの人にはこれまでよりも制約が少なくなるでしょう。そして、とりわけ私は、皆様のご威光によりまして、悩まされることなく残りの日々を送りたいものと考えておりましたのに、再び

あの人の迫害に晒されることになるかもしれないからでございます。

あの人は、寛大なる閣下、そして、親愛なるご婦人方、私へと同じように、皆様に対しましても罪を犯したわけではございません。にも拘りませず、皆様はお揃いで、大変寛大なことに、あの人のことで私への執り成しをしてくださいました。もしも、私自身の心の平安のために、また、あの人がすっかり自暴自棄に追い込まれました場合には、なおもその毒牙に掛かるかもしれません他の哀れな娘さんたちのために、そして、尊敬すべきご一族皆様のために、私が次のような望みを抱くといたしますと、それははなはだしく適切さを欠くことなのでしょうか。つまり、皆様が私に期待なさいましたあの寛恕の心を、あの人にも差し延べていただきたいということでございます。それに、不遜な考え方とは存じますが、あの人の大胆不敵で衝動的な気質を手荒な方法で抑えつけるわけにはまいらないように思いますだけに、なおさらそのように考える次第です。疑いもございませんが、あの人の場合には、その時その時の欲望を満たしますことのほうが、将来へのどのような見通しと比べましても、いつも強く心を占めているからなのです。一方がどれほど当てにならないものであり、もう一方がどれほど有益なものだとしてもです。

私のために憤慨してくださいますのは、私にお寄せいただきましたご厚情が真に気高いものでございましたのと同様、極めて高潔なことと存じます。ただ、私も望みを捨てているわけではございません。私に嘗めさせました不幸の数々によりまして、あの人が然るべく心を動かされますこともございましょう。また、私が地中深く埋葬され、忘れ去られました頃には、誉れ高いご一族の皆様があの人の改心を目の当たりにされ、大きな喜びを見出されることにもなりましょうし、寛大なる閣下、そして、親愛なるご婦人方、皆様がご親切にも私のために願ってくださいました、あのたくさんの幸せな日々をご覧いただくことにもなりましょう。

変わることなき謝意と感謝の念を込めまして、皆様の

クラリッサ・ハーロー

手紙　三十

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

八月十日　木曜日

君もターヴィルから知らせを受けたとおり、俺は先の手紙以降というもの、モーブレーと奴も同じことだが、ベルトンの病気と用件のことで、すっかり時間を取られていたのだよ。月曜日には、エプソムへの途中だが、スミスのところを訪ねてみた。

令嬢は礼拝堂へ出掛けて留守だったが、容体の悪化はないことを聞き、安心したところだ。そこで、挨拶の言葉と、三、四日ロンドンを離れる旨の知らせを残してきた。

ターヴィルに説明を頼むことにするが、この〈従順な〉情婦とその〈倹約家〉のマネージャーとを、あの女のガキどもと一緒に追い払うのには、そして、哀れな男の自宅の所有権を、あいつに代わってあいつの妹に与えるのには、どれほどの困難が伴ったのか、奴が教えてくれることだろう。あいつのほうは、その間中、自分の訴訟にも顔を出すことが出来ないほどに意気消沈して、クロイドンの旅籠に身を隠していたのだよ。

ただ、これは言っておかねばならないが、あいつの財産のボロボロの残骸をこの貪欲な女とその共犯者から守るためには、われわれはおそらくぎりぎりのところで間に合っただろうな。というのは、あいつの命は長くないのだし、あの女のほうでもそう思っているわけで、あの女は、手段を講じて結婚を成立させ、すべての所有権を自分と息子のものにしようとしていたのは確かだということが、われわれにも分かったからなのだよ。

ターヴィルが話してくれるだろうが、馬丁上がりの男を屋敷から追い出すためには、やむなく女の目の前で懲らしめてやらねばならなかったのだ。この男は生意気にも俺に手を上げたのだよ。そこで俺は、階段の天辺から下まで降りるのを、ただの一歩で行かせてやったというわけだ。こいつの首が、そして、骨という骨がことごとく折れてしまったと思ったよ。その後、この男がうむを言わせずに運び出されたものだから、トマシンのほうでも、後について出て行くのが適当と考えたのだ。

妾を囲ったりすると、その結果はこのざまなのだ。われわれがあんなにも好んで称揚していた生き方だというのにな。頑健な時にはどのように思われているにせよ、女を囲っている者が病を得たりすると、また、気力に衰えが生じたりすると、違いに気が付くことになるのさ。

あの女が気を許している仲間に語ったことなのだが、間もなく縦六フィート横五フィートの大きさのところにあいつを縛りつけることになるそうだ。あいつのベッドのことを言っているのだよ。そして、自分の気に入った者以外は、だれ一人としてあいつの傍に近づけないようにするというのだ。その後、想像するに、馬丁野郎があいつの侍医の座に納まろうとするわけだ。あいつのために遺言は出来上がっているし、おそらく、寡婦用の喪服も用意出来ているのだよ。もしかすると、あの女はその喪服を着てあいつの前に姿を現すかもしれないな。ある悪妻がやって見せた実例に以前出くわしたことがあるのだが、回復の見込みがないように思われる、嫌いな夫を侮辱しようというものだ。もっとも、そのために夫としては大いに意地が出たし、すっかり気持ちも変わり、そんな侮辱に打ち克ってみせたのだ。そして、妻が自分を侮辱する際に着ていた、あの喪服に身を包んで棺桶に納まるのを見届けるまで生き延びたというわけだよ。

差し当たり、ベルトンとトマシンの件はこれくらいにしておこう。

3

貴公のことは心から同情し始めているところだ。この天使のごとき女性に向かって表明している実りのない愛について、貴公の真剣さが看て取れるからだよ。それに、貴公が何を言おうとも、彼女が病気に打ち克つこと、そして、彼女にしてみると、新たな例に接したばかりなのだが、身内の者たちの執念深さを乗り越えることは不可能なだけに、なおさらそんな気持ちになるのだ。

彼女のために作った、貴公の手紙からの抜粋についてだが、貴公が本気で腹を立てていないよう願っている。あの手紙の中で行われている、彼女の美徳に対する公正な扱いのことを知ってもらうのは、貴公の率直さにとっては（これは、繰り返して言うが、貴公を並の道楽者よりも優位に立たせている特質なのだ）極めて有利な材料となるわけだから、俺は正しいことをしたのだと、胸の中ではそう考えているのだよ。もっとも、他のどんな女

が相手でも、そして、貴公に関して知り得るかぎりの最悪の姿を承知していない女が相手なら、間違いであったのかもしれないけれどな。

もしも、目的は手段を正当化するということであれば、貴公ら両名に関するかぎり、俺の処置が適切だったのは明らかだ。彼女の気持ちを楽にして上げたのだし、また、他の場合よりも、彼女の目に貴公の姿が良く映るようにしてやったのだからな。

しかしながら、俺も微妙なことは認めているある点に関して、彼女の意向に沿ったのが貴公には気に食わないということであれば、今度出会った時にこの問題を討議することにしよう。その折には、抜粋したのはどのようなものであったのか、そして、貴公の有利になるよう、どのような関連付けを行なったのか、その辺を教えてやることにする。

だが、遺言執行人の職務に関して、俺は何をなすべきだとか、何をなすべきではないとか、まさか口出しをしようというのではあるまいな。

自由の身のつもりでいるのだがね、俺は。喜んでくれるのが当然だと思うぞ。彼女の思い出を公正に扱う役目が、この点は安心してもらって構わないのだが、同時に貴公のことと貴公の行動について、事情が許すかぎりの寛大さをもって取り扱おうとしている人間の手に委ねられたことをだよ。

貴公の身勝手さを示す一例に接し、俺は驚きを禁じ得ない。つまり、「確かに彼女自ら身内の者たちに向かって大声で慈悲を求める必要があったのだよ。慈悲などを示す術は知らない女だからな」と、貴公が述べている部分のことだ。

貴公としては、確かに、事情を等し並に考えるわけには行かないのだ。何しろ、俺が理解しているかぎりでは、彼女が望んでいるのは他ならぬ最後の祝福と、仮に過ちだとしても、いわば心ならずも犯したという、そんな過ちに対する最後の許しだけであるし、迎え入れてもらうことについては、希望すらしていないのだ。ところが、貴公は計画的に犯した悪事を（それにも拘らず、彼女のほうでは、これ以上うるさく言い寄られることがなければという条件で、その悪事を許しているのだが）許してもらおうとしているのだよ。また、愛顧に与ることを願い、その許しの結果として、この世でも最も上等な宝石を貴公の絶対的な所有物にしたいと思っているのだ。

さて、衆に秀でた令嬢に関しては、俺の最後の手紙以降どうなっているのか、簡単にだが、その点について述べることにする。彼女としては、元を糺せばすべて貴公自身に由来するものだが、たっぷりと苦労を背負っているわけでもあり、新たな悩みの種を持ち込んだりして、この上さらに面倒を掛ける必要のないことは、俺の以下の説明から、貴公にも察してもらえるだろう。それに、一人残らず貴公の囚人になっているＭ邸でそんなにも傍若無人に振る舞うことが出来るかぎりは、身分も高ければ名もある半ダースの人間たちを相手に、そこで権勢を振るっていれば、虚勢を張りたい貴公の気分が満たされないこともないと思うのだ。寄る辺のない孤児相手に威張り散らすのと同じくらいにな。令嬢のことはそんなふうに呼んで構わないだろう。何せ、俺が味方につかなければ、彼女には支援の手を差し延べようという友人など一人としていないのだし、彼女としては、貴公から、また、世間の者たちすべてから逃れ、死の腕に抱かれることが出来るなら、自分のことを幸せだと考えるはずだからだよ。

俺の最後の手紙は土曜の日付だったな。

日曜日には、医者の助言を入れ、彼女は少し散歩をした。ロヴィック夫人とスミス夫妻

が同行した。ハイゲートチャペルでの礼拝式に出た後、彼女は同行の者たちに軽い食事を振る舞い、そして、午後には、帰り道でイズリントン教会に立ち寄り、かなり良い機嫌で戻って来たのだ。

ロヴィック夫人が教えてくれたのだが、俺の留守中に、彼女は君のもの以外に数通の手紙を受け取ったとのことだった。どうやら、君の手紙はひどく彼女を苦しめたらしい。だが、返事が欲しいと迫る使いの者には、即答を求める手紙ではない旨を話して聞かせるよう指示したのだ。

水曜日、彼女は伯父からの手紙を受け取った(ア)。土曜日に跪きながら母親宛に書いたものへの返信だ。彼女に及ぼした影響からして、ひどく残酷な手紙に違いないと、ロヴィック夫人はそう言っている。というのも、それを受け取った時、彼女は馬車での午後の散歩をするつもりでいたのだが、目を通した途端、非常に激しいヒステリーの発作に陥ったため、横になって休まねばならなかったし、(それでも回復しないので)八時頃にはベッドに入らざるを得なかったというのだよ。

木曜日の朝はずいぶんと早いご起床だった。彼女がロヴィック夫人に語ったところによると、心を落ち着かせるべく聖書に頼ったとのことだった。そして、十一時頃には、体が弱ってはいたのだが、どうしても駕籠でリンカンズインチャペルへ行こうとしたのだ。送り返されて来た時には、やや具合が良くなっており、伯父宛に筆を執ろうとして腰を下ろした。だが、数回に亘って中断を余儀なくされたのだ。ロヴィック夫人に語ったところでは、謙虚な気持ちを得るべく、苦闘するためとのことだよ。あの善良な婦人に向けた彼女の言葉では、「私の心は誇り高い心でして、自分の境遇に甘んじるための十分な屈辱を未だに味わってはいないらしく、私が何をいたしましても、憤りに満ちた事柄を書き連ねますよう、私のペン先に指図しようとするのです」とのことだ。

今日、木曜日の夕刻になって、ベルトンのところから帰京し、真っ直ぐスミスのところへ赴いた。彼女はあまりに具合が悪く、俺の訪問に応じることは出来なかった。ただ、挨拶の言葉を届けたところ、翌朝会えると嬉しいとの伝言を送ってくれた。

令嬢の手で聖書から集められた〈瞑想〉の写しを、ロヴィック夫人が渡してくれた。令嬢はそれに〈哀れにも人間は自ら不幸を招く〉というタイトルを付けているが、察するところ、仮に彼女が考えたがっているほどの大きな過ちであったとしての話ではあるが、自分の犯した過ちに対してはなはだ不釣合な難儀を嘆かわしく思う気持ちの、その身を切るような鋭さを取り除こうとの意図から付けたものなのだろう。これによってわれわれとしても、彼女が自分の心を強固にするために用いる、その方法を知ることになるだろう。また、彼女がいわれのない迫害を耐え忍ぶ際の、あの度量の大きさも、その方法に因るところが大なのだという点についてもだよ。

瞑　想(二五)

〈哀れにも人間は自ら不幸を招く〉

「わたしが罪を犯したのは、主のせいだ」と言うな。

(ア) 手紙三十三を参照のこと。

主が、御自分の嫌うことをなさるはずがない。
「主がわたしを迷わせたのだ」と言うな。
主は、罪人には用がないのだから。
主が初めに人間を造られたとき、
自分で判断する力をお与えになった。
その意志さえあれば、お前は掟を守り、
しかも快く忠実にそれを行うことができる。
主は、お前の前に火と水を置かれた。
手を差し伸べて、欲しい方を取ればよい。
主は、不信仰であれとは、だれにも命じたことはなく、
罪を犯すことを、許されたこともなかった。
主よ、それなら何に望みをかけたらよいのでしょう。
わたしはあなたを待ち望みます。
あなたに背いたすべての罪からわたしを救い
神を知らぬ者というそしりを受けないようにしてください。
あなたに罪を責められ、懲らしめられて
人の欲望など虫けらのようについえます。
ああ、人は皆、空しい。
御顔を向けて、わたしを憐れんでください。
わたしは貧しく、孤独です。
悩む心を解き放ち
痛みからわたしを引き出してください。

3　3

火曜の午後のことなのだが、スミスの上さんと若い聖職者との間で交わされた会話について、上さんが次のように詳細を話してくれた。この聖職者というのは、どうやら、令嬢の様子を問い合わせるべく、彼女の身内の者たちに雇われたらしいのだよ。
この男は乗馬服姿で店に入って来ると、スペイン製の嗅ぎタバコが欲しいと言った。そして、スミスの上さんしかいないことを知ると、店の奥で少しばかり話したいことがあるというのだ。
男は核心に触れず、いくつか遠回しな質問をしていた。そして、やがて、ハーロー嬢についてもっと直接的に話し始めたのだ。
男に言わせると、令嬢のことは「堕落」「それが奴の使った無礼な言葉なのだ」する前から知っているという。そして、彼女に関して、次のような趣旨の説明を行ったというのだが、これはスミスの上さんの話をまとめたものだ。
男が言うには、当時の令嬢はあらゆる者たちの称賛の的であり、喜びの元であったとのことだ。やたらに真面目腐った顔で彼女の「背教行為」を嘆いていたというのだが、これもまた奴の言い回しだ。スミスの上さんに言わせると、奴は大変な学者なのだそうだ。何しろ、上さんの理解出来ないことをいくつか口にしていたというのだよ。ラテン語なのか

ギリシア語なのか、上さんにはそのどちらとも区別はつかなかったのだが、親切なことには、求めもしないのに、それらを英語に直してくれたのだそうだ。学のある人があのように腰を低くしてくださるというのは、何て素敵なことなのでしょうねと、上さんはそう言っていた。

男の言によると、あんなにも下劣な放蕩児と駆け落ちをしたということで、令嬢の身内の者たちは言うに及ばず、近所のご婦人方全員の間でも、大いに物議をかもし、憤慨の種になっているというのだよ。

男がスミスの上さんに語ったところでは、外出の折とか教会参りの際とかに、彼女の姿はいつも皆のまなざしの的になっていたとのことだ。そして、彼女が通ると、だれの口からも、とりわけ貧しい者たちからだが、称賛と祝福の言葉が投げ掛けられたという。彼女は社交界の流行を定めていたのだが、そのつもりであるとか、そうしているのを承知しているとかいった様子は見せないのだそうだ。ただ、婦人たちが彼女の服装や振舞いを真似る姿は、見ていても愉快なものだったという。皆の称賛を受けている彼女が着ているものと同じものを身に纏い、同じ着付けの仕方をしているわけだから、大方のお褒めに与るのは間違いないことと思っているのに、優雅さや打ち解けた様子では彼女に及ぶべくもないため、自分たちの気取りやぎこちなさばかりを露呈してしまうのだ。彼女の容姿が連中のものに似ているなら、つまり、彼女に連中のような欠点があれば、彼女もずいぶんと違うものを流行させていたはずだという点に、ほとんど思い及ばないためだというのだな。というのも、すべての点で彼女の指針となっているのは自然さということであり、彼女が目指しているのは打ち解けた姿だからなのだそうだ。そして、そのことが、彼女の態度や様子に見られる、威厳と謙虚さとの融け合った状態とも相俟って、人から賛辞を受ける時であれ人に賛辞を呈する時であれ、女性のすべてを凌駕して彼女を際立たせることになるというのだよ。

男が言うには、この際口にしているのは、自分一人の感想には止まらず、皆一人一人の気持ちなのだという。何故なら、クラリッサ・ハーロー嬢への賛辞というのは、大変好んで取り上げられる話題であるから、他の事柄のいずれについても口下手だという人間でさえ、その件に関してはきっと能弁になるというのだ。何しろ、そんな輩が口に出来ることといえば、他でもなく、二十回も繰り返されたり、褒め称えられたりするのを耳にしてきた話ばかりだからというわけだ。

自ら口にした賛辞の数々について、この青二才が拠り所としていたのは、おそらくそんなところなのだろう。もっとも、俺としても次の点は認めねばなるまい。つまり、若いレビ人が描いた令嬢の人物像ということで、善良な婦人から報告のあった姿に目鼻を付けて仕上げるのが容易になったのは、令嬢との個人的な知遇に恵まれたお陰なのだということをだよ。何しろ、健康に衰えの見える現在でさえも、こういった特質のすべてが彼女に備わっていることに気づかない者などは、どこにもいないだろうからな。

想像するに、この男は大学を出てまだ間がないのだろうな。そして今は、無学な連中の間で識者として名を馳せる以外、なすべきことはないように考えているのだ。若者というのは、自分たちと詩句の尻取り遊びの出来ない者たちのことをそんなふうに考えたがるものだし、だれか昔の著者がある問題についてどのようにラテン語で意見表明したのか、われわれに向かって話したがりもするのだよ。しかし、その問題を英語ではどのように表現

したものか、その著者もそうだが、連中にも知ってもらいたいものだな。

スミスの上さんはすっかりこの男のことが気に入ったため、喜んで令嬢に紹介しようとした。令嬢や令嬢の身内のことに非常によく通じている人物と会うのは、令嬢にとっても大変受け入れやすい話だろうと、何の疑いも持たなかったのだよ。ところが、男はこれを辞退した。奴に言わせるといくつかの「理由」からというわけだが、そいつを挙げてみせたのだ。一つには、奴のような聖職にある人間は人付き合い、特に男と女が絡んでいる場合、また、女の評判に傷が付いているような場合には、細心の注意を払わねばならないからだというのだな［奴がこんなふうに気取って見せた時、俺もその場に居合わせたかったものだよ］。もう一つには、令嬢の現在の暮らしぶりと、彼女を訪ねて来る人物について調査することを要請されているからだという。というのも、スミスの上さんが口にした令嬢への褒め言葉に関して、奴は次のように仄めかしてみせたのだ。つまり、上さんは人の好い婦人のようだし、（令嬢のためには望ましいこととは思わないが）あまりに依怙贔屓が過ぎたり、先の見通しがなかったりするために、奴が遠回しに言うところでは、自分の引き受けた仕事がそうなのだそうだが、極めて重大な性質の事柄については、全面的に信頼するわけに行かないかもしれないからだ、というのさ。そして、話し合っている間中、はっきりしない意味合いの言葉をうなずきながら口に出したり、大層意味ありげな様子を（察しのつくところだが）装ったりして見せたのだ。そして、令嬢は健康状態がはなはだ優れないのだと、スミスの上さんが話すと、奴は気にも留めない素振りで肩をすぼめてみせたのだ。「ずいぶんと具合が悪いかもしれませんね」と、奴は言っていた。「望みが挫けてしまったので、ひどく応えているはずですからね。それでも、おそらく、彼女の重大な堕落の償いとなるほどには、また、大変な不名誉を被らせた人々から許していただくことを期待するほどには、まだ十分に悪化してはいないのでしょうね」とだよ。

しゃちほこ張った自惚れ屋の伊達男だよ。どうしてくれようかな。俺の行く手に奴が現れてくれたら　…

奴が我と我が身に大いに満足し、また、スミスの上さんが奴の利口さや学識を高く買っていることを確信して去って行ったのは疑いのないところだ。ただ、奴のこととか問い合わせの件について、令嬢には一切話さないよう、奴は上さんに命じたのだよ。そして、俺のほうでも、まったく別の理由からだが、同じことを申し付けておいた。

ただ、彼女について問い合わせをするのが妥当なことだと、連中がそう考え始めているというのは、彼女の心の平安のためにも喜ばしいことだな。

手紙　三十一

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

八月十一日　金曜日

《ベルフォード氏は友人に対し、M卿ならびに友人の一族の婦人たちが行った寛大な申し出に関して、また、その際に令嬢が表した謝意について知らせている。

氏の言葉によると、ラヴレース氏と顔を合わせる苦痛を避けたいがために、はなはだ不本意なことではあるが、令嬢としては七日付の氏［ラヴレース氏］の手紙に返事を書く予

定であるという》

《ベルフォード氏はこう述べている》「いわれもなく不当な仕打ちを受けた人物から許されることが、神の許しにとっては不可欠だとしている、君の手紙のあの部分に、令嬢は大層注目していた。

令嬢の祖父は、どうやら、彼女が十八という年齢で遺言を作成し、祖父の地所の大部分については、一族の中の好きな人間に遺贈すること、そして、残りの部分は（彼女が独身のままで死亡する場合だが）、彼女の裁量で処置することを可能にしておいたらしい。そしてこれは、彼女に対する尊重の気持ちを生み出すためなのだが、祖父としては、彼女が妬まれるのを懸念したからだよ。それで、彼女も今では、ただちに自分の遺言の作成に取り掛かろうと決意しているわけだ」とである。

《ベルフォード氏は、令嬢に付き纏いはしないという、友人が与えた約束の履行を求めている。また、M卿ならびに卿の一族の婦人たちに宛て、寛大な申し出を辞退する旨を伝えている彼女の返信の文面を友人に示すのである。手紙二十九を参照のこと》

手紙　三十二

Cf. ハーロー嬢からロバート・ラヴレース氏へ

八月十一日　金曜日

貴方との面会を迫られるのか、それとも、お便りを強いられるのか、これは残酷な二者択一というものでございます。でも、自分の意思につきましては、長いこと拒まれているのです。そこで、より大きな方の、いいえ、今では最大のものと申せましょうが、そちらの方の災いを避けますために、筆を執ることにいたします。

もしも、自分の本当の気持ちを偽るとか隠すとかすることが私に出来るのでしたら、貴方が求めておられますような、見込みのない希望を与えておきながら、それでいて、自分の決心をそっくり守り通しましても、多分、別に支障は起こらないのでしょう。ただ、次のことは是非とも申し上げねばなりません（お話しいたしますのが、私の品性に適うことなのです）。おそらく私の命もあと数週間のことと思いますが、たとえそれと同じ数以上の年月を生き長らえることになりましても、また、他の男性がだれ一人この世には存在しないといたしましても、貴方と一緒になるわけには参りませんし、そのつもりもないということでございます。

義務を遂行いたしますのは、何ら褒められることではございません。

宗教は、加えられた害を容赦することばかりか、悪に対しては善をもって報いることをも命じているのです。今の私が、貴方のことに関しまして、喜んで宗教の教えに従うことが出来ますような、そんな精神状態にありますのは、私にとりましては慰めに他なりませんし、そのような慰めをお与えくださいましたことを、神様に感謝する次第なのです。従いまして、貴方がどこへ行かれましょうと、お幸せになられますよう願っておりますことを申し上げましょう。そして、この願いには、私の衷心からの好意のすべてを込めさせて

いただきます。
さて、正直なところ、はなはだ不本意ではございますが、こうして、貴方の強制的な二者択一の片方に応じましたからには、その成果に期待を寄せたいものと存じます。

クラリッサ・ハーロー

手紙　三十三

ジョン・ハーロー氏からCl. ハーロー嬢へ

［母親宛の令嬢の手紙に対する返事として。手紙二十四を参照のこと］

八月七日　月曜日

恩知らずでふしだらな親戚の娘へ

お前の母親は手紙を書く気にはならず、また、その許しも得ていないゆえ、文通には反対と決めていた私なのだが、筆を執るよう要請されている次第だ。

そこで、話しておかねばならないが、お前からの手紙のため、そのきっかけとなった事柄とも相俟って、私たち全員の心は張り裂けんばかりになっているということだ。

お前が自分の愚行に気づき、本当に後悔しているということが私たちのほうで確認出来るなら、そして同時に、言っているほどの重病であることも確信出来るならば、お前のためにどれだけのことをしてもらえるのか、私には見当もつかないことなのだよ。だが、言い分を通したいと思う時の、心動かすお前の手口の数々については、私たちは一人残らず承知しているのだ。

困った娘だよ。お前は私たちの全員をどれほど惨めにしたことだろう。かつてはあれほどの喜びをもって屋敷を訪ねていた私たちだというのに、今では、互いに顔を合わせることが耐えられないのだ。

かつてお前は私たちからどれほど大切にされていたのか、百にも及ぶ機会があったわけだが、そこに気づかずにいたというのなら、今こそ判断がつくことだろう。お前の愚行が私たち全員をどれほど離散させてしまったのか、そのことを知ってくれるならな。

ふしだらな、まことにもってふしだらな娘だよ。謹厳かつ品行方正な男性よりも、放蕩な道楽者を選んだ結果がこれなのだ。抜かりのない警告、そして、より良き知識に背いてのことだ。それも、かつてはあんなに控え目だった娘がだよ。どうしてこんなにも下劣な選択の仕方を思いつくことが出来たというのだ。

お前の母親には無理な相談であり、姉にしても、慎みを捨てることなしにはどう尋ねたものか、その術が分からずにいるのだ。従って、私が訊くことにする。あの悪党の子を宿していると考えるべき理由が何かあるのかということだ。是非とも、これには答えてもらわねばならん。それも、正直なところを答えてもらわねばならんのだよ。お前の一件に関し、何らかの決定が為される前にだ。

お前が自分の不始末を肝に銘じて悔やむのも当然のことだろう。私の寵児だとだれもが呼んでいた、そのお前がこんなことをしでかすなどとは、果たして、この私の思い及ぶところであっただろうか。確かに、あまりにもお前を愛し過ぎてしまったということだ。だが、今ではそれも終わりなのだ。ただ、私以外の他のだれについても請け合うつもりはな

いが、私一人にかぎるなら、お前に神の許しを祈っておこう。私からの言葉としては、それがすべてということだ。

お前の悩み苦しむ伯父
ジョン・ハーロー

《この手紙の末尾には、次のような〈瞑想〉が黒の絹糸で縫い込まれていた》

瞑　想（二六）

どうか、わたしを陰府に隠してください。
あなたの怒りがやむときまでわたしを覆い隠してください。
泣きはらした顔は赤く
死の闇がまぶたのくまどりとなった。
わたしのために執り成す方、わたしの友
神を仰いでわたしの目は涙を流す。
わたしの耳には恐ろしい騒音が響く。
平安のさなかに略奪者がわたしを襲うのだ。
人を見張っている方よ、わたしが過ちを犯したとしても、
あなたにとってそれが何だというのでしょう。
なぜ、わたしに狙いを定められるのですか。
なぜ、わたしを負担とされるのですか。
「床に入れば慰めもあろう、
横たわれば嘆きも治まる」と思ったが
あなたは夢をもってわたしをおののかせ、
幻をもって脅かされる。
わたしの魂は息を奪われることを願い、
骨にとどまるよりも死を選ぶ。
もうたくさんだ、いつまでも生きていたくない。
ほうっておいてください。わたしの一生は空しいのです。
この格言はわたしのことだと人は言う。
わたしは顔につばきされる者。
わたしの人生は過ぎ去り、
わたしの計画も心の願いも失われた。
わたしは幸いを望んだのに、災が来た。
光を待っていたのに、闇が来た。
どこになお、わたしの希望があるのか。
でも、苦役のようなわたしの人生ですから、
交替の時が来るのをわたしは待ち望んでいます。

手紙　三十四
Cf. ハーロー嬢からジョン・ハーロー氏へ

八月十日　木曜日

尊敬申し上げますお方

私が請い求めておりましたのは、慈悲の行為でございます。心安らかに逝くことが出来ますよう、最後の祝福をいただきたいだけなのです。厳しい姉の言い様では［あゝ、姉には手紙をしなければ良かったのです］私の狙いということになりましょうが、もう一度迎え入れていただくよう求めているのではございません。私が求めましても、そのようなお情けは拒んでいただきたいのです。

少なくとも、懇願いたしました祝福が得られますように努めるのでなくては、穏やかな心で最後の場面に臨むことは出来ないでしょう。それも、深い悔恨の念からお願いしていることでもございますから、その点をご承知いただけますなら、この身が母親の愛情溢れる心から引き離され、おじの非難に満ちたペンに晒されますのは、また、そのおじから衝撃的な仕方で突きつけられました残酷な質問によって傷付けられますのは、私には不当な仕打ちだと申せましょうし、そのご質問にいたしましても、わずかな時間でしょうが、ほんの少しお待ちいただけますなら、私の口から申し上げますよりももっと適切な答えが得られることでしょう。と申しますのも、私は鉄面皮な娘でも恥知らずな娘でもないからでございます。もしもそうであれば、懇願いたしました恩恵に与るため、あれほど熱心にお願いしたりはしなかったものと存じます。

また、このように申し上げますのをお許しいただきたいのですが、あのお願いをいたしましたのは、私自身のためと同様、お父様お母様のためのことでもございます。私がこの世を去りました後に、少なくともお二人は、私の願いを拒みましたことで、心の落ち着かない思いをなさるに違いないと考えるからです。

お二人の祝福と祈りを、また、貴方の、そして、皆さん全員の祝福と祈りを得られるなら嬉しいと、今でも私はそのように考えているのです。でも、このような形で拒絶されましたからには、再びお願いをするような厚かましい真似は慎み、すべてに亘りまして、全能の神様の恩寵に頼ることにいたします。自分の心はそのはずだと考えておりますが、このような真の悔恨の念をもちまして懇願いたしました時には、神様の恩寵は決して拒まれることがないからです。

私の大切な伯父様に、そして、尊敬いたします身内の者すべてにも、神様のご加護がございますよう、私はは祈っております。

貴方の幸薄き

クラリッサ・ハーロー

手紙　三十五
ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

八月七日　月曜日　ワイト島、ヤーマスにて

大好きな人へ

今はほんの二、三行だけにいたします。貴女の遺言執行人をあのベルフォードさんにお願いするとのことでしたね。そのような処置をなさる理由に尤もなところはございましょうが、あの人の名を耳にいたしまして、どう堪えたら良いのか、私には分かり兼ねるのです。とは申しましても、その信託の指名を受けて当然な人は、お身内の中には一人もいないというのが、私の確固とした考えなのです。ただ、この話題にはあまり触れないことにいたします。まだ何年も何年も生き長らえてくださるよう願っているからです（また、その逆のことを気遣うなど、耐えられることではございません）。

ヒックマンさんがベルフォードさんのことを大変良く言っておりますのは事実です。でも、お気の毒に、あの人は大した洞察力は備えておられないのです。もしも備えておられるのでしたら、あんなにも私のことを買ってくださるようなことは、およそ有り得ない話でしょう。

特別な機会に恵まれましたため、伯母ハーマンのお友達にお願いいたしまして、これをお届けいたします。いつでもロンドンへ向けて出発出来る状態ですし（私が急いでおりますのも、このためなのです）、すぐに戻って来られる予定なのです。ですから、貴女からの分厚い包みがこの人の手でもたらされますことを期待いたしておりますし、また、貴女が快方に向かわれたとの知らせを待ち焦がれておりますが、私の祈りを神様がお聞き届けくださいますよう願うばかりです。

変わることなき愛を添えまして、貴女の

アナ・ハウ

手紙　三十六

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

八月十一日　金曜日

ご要望がございましたし、期待しておられるとのことでもございますので、分厚い包みをお送りすることにいたします。大層安全な手段でお届け出来ますからね。ただ、私が受け取りましたもののすべてをというわけにはまいりません。と申しますのも、白状しなくてはいけませんが、身内の者たちが大変に手厳しいからです。あまりにも手厳しくて、皆のことを好いてくださらない方にはどなたにも、その手紙をご覧いただくわけに行かないほどなのです。貴女は、ずっと以前でしたが、皆のことを私の「身内」と呼ぼうとはなさらずに、「縁続き」の人たちと言っておられましたね。実際の話、皆のことは縁続きとも呼べないように思いますわ。ただ、私は体調が優れないものですから、おそらく、あってはいけないほどに気難しくなっているのでしょうね。自分というものを離れまして、自分にとって不利な判断を行いますのは難しいものですが、それでも、公正な判断を下しますためには、頻繁にそうしなければいけないのです。

遺言執行人の選び方のことで、貴女を驚かせてしまうだろうとは思っておりました。でも、私が追い込まれております悲しくも避けられない状況のことがございますので、お許しをいただかねばなりません。

その問題につきましてすでに申し上げております点は、一切繰り返さないことにいたしますが、一、二、三、四と、九まで番号を打っておきました、同封いたします文書や手紙からでは、ご異存の向きに納得の行く返答が得られないということでしたら、もう一つの面でも自分は不幸な人間なのだと、そのように考えねばならないでしょう。と申しますのも、引き下がるわけにはまいらないところまで約束が出来ているからです（それも、自らの判断に基づいてのことなのです）。

ベルフォードさんは、内緒でということにして、これに添えてあります文面をお友達の手紙から書き写してくださったわけですから、それらにつきましては、貴女ご自身以外のどなたの目にも触れることのありませぬように、また、機会のあり次第すぐにお返しくださいますように、強くお願いいたさねばなりません。最初の書き手、あるいは、通報者のどちらかに被害が及びますような、そのような利用の仕方をされないためのことです。お気づきになるはずですが、この点に留意する旨の約束を交わしているのです。この人情家の放蕩児とあの非情な放蕩児の間に、私のせいで傷害事件でも起きるようなことになりますと、自分には弁解の余地がまったくなくなるように思われるからです。

同封いたします文書と手紙のリストを添付します。目を通されましたなら、すべてをお返しいただかねばなりません(ア)。

私は疲労困憊いたしております。何故になのか、それは分かり兼ねますが、書き物のせいだと思います。でも、一番大きな原因は自分自身です。そして、抜け出したい、乗り越えたいとの望みを抱かずにはいられない、そのような状況に疲れ果てているのです。

あゝ、私の大好きな人、私たちが住んでおります世界というのは、悲しい、本当に悲しい世界ですわ。両親の翼の下で保護されております間は、私たち、世間のことは一切知らずにいるのです。書物から得た知識に頼り、筆まめで、人々に会いましても、お客様か訪ねて来られた人のように眺め、世間のことはずいぶん知っているつもりでいたのです。哀れなほどの無知さ加減です。あゝ、私は何も分かっていなかったのです。

貴女のお幸せを、また、貴女にとって大切な方お一人お一人のお幸せを切に願っております。いつも、そして、いつまでも、

感謝しつつ親愛の情を添えまして、貴女の

CL. ハーロー

手紙　三十七

アントニー・ハーロー氏からCL. ハーロー嬢へ

［八月十日、木曜日の日付の、ジョン・ハーロー宛の令嬢の手紙への返信として］

八月十二日

困り者の娘へ

お前の伯父ジョンは、お前の生意気な手紙には返事をしたくないということだし、以前

(ア) 一．モンタギュー嬢からの手紙　八月一日付のもの。

二．私の返事の写し。　八月三日付のもの。

お前に書いた私の手紙は(ア)、それが現実のこととなって、お前も悲哀を味わったことだろうが、いわば予言のつもりで筆を執ったものだった。それに、お前は今、自分の体具合のことを実際よりも悪く言い、後悔については実際よりも良い言い方をしているが、それが同情を引くためのことであるのは、私たちも十分確信しているところで、あれだけ警告を受けた上でのことでもあるから、同情などには値しないわけなのだよ。これらすべての理由から、私はもう一度筆を手にすることにした。もっとも、お前の兄がエディンバラへ発つ際には、たとえお前のほうから私宛に手紙を寄越すようなことがあっても、お前の兄に知らせずに、お前に手紙を出したりはしない旨を話してあるのだ。実際、私たち全員がそう言ったのだよ。というのも、お前の兄が予言していたのだ。私たちへのお前からの働き掛けのことについてだが、お前に堪える術がなくなった場合には、どんな事態が生じるかという点をだよ。

兄貴のジョンは、どうやら、単刀直入な質問をして、お前の細かい神経を傷つけたらしいな。お前の母親としては、悲しみで胸が一杯になっているから、とても尋ねる気持ちにはなれないし、姉のほうでも、慎みというものがあって、訊くわけに行かない質問だ。お前の行動の結果に他ならないのだがな。しかしながら、お前の父と母、そして、私たちから、お前が望んでいるような引き立てに与りたいというのなら、その前に、質問には答えてもらわねばならんということだよ。これは言っておくことにしよう。

かつてこの世に生きた最も下劣な輩の一人と、お前は罪深い数週間を過ごし、食卓はもとより、ベッドまでも共にしたのは疑いのないところだ（あの男の人柄は知れ渡っているのではないのかな）。そのようなふしだらな生活から当然生じる事柄を尋ねられたからといって、恥ずかしがったりするのは止めてもらおう。この慎み深さも、お前の生涯の十八年

三．私宛のベルフォードさんの手紙。あの方に対する私の要請がどのようなものであったのか、そして、それに対するあの方の同意のことも、これで分かりましょう。それと、あの方のお友達の手紙から作成されました、待望の抜粋。　八月三日、四日付のもの。

四．私の返事の写し。謝辞とともに、遺言執行人の任務を引き受けてくださるよう依頼したもの。　八月四日付のもの。

五．信託に対するベルフォードさんの受諾。　八月四日付のもの。

六．M卿ならびに一族のご婦人方からの寛大な申し出を含む、モンタギュー嬢からの手紙。　八月七日付のもの。

七．私宛のラヴレースさんの手紙。　八月七日付のもの。

八．前日のお手紙への返事として、モンタギュー嬢に宛てた私の手紙の写し。　八月八日付のもの。

九．ラヴレースさんに宛てた私の返事の写し。　八月十一日付のもの。

これほどの短期間に書き送り、そして、受け取りもしました、これら数通の手紙からもご高察いただけましょうが（受け取ったり書き送ったりしたもので、お見せするわけにまいりませぬ手紙には触れないことにいたしますが）、自ら事の顛末を書き記しますのには、いかにも時間が足りないということでございます。

（ア）第一巻の百六十四頁以降を参照のこと。

間については、確かに似つかわしいものだっただろう　…　そこのところに留意してもらいたいのだ　…　だが、この四月初めからのお前の振舞いに照らした時には、まったく様にならないということだな。それゆえ、慎み深い格好を装い、まるで何事もなかったかのように、無実を訴えるのは止めてもらいたいのだよ。

だが、お前の細かい神経にとっては、おそらく、私もまたひどいショックを与えることになるのだろう。あゝ、娘よ、娘よ。その慎みを適切な時に、そして、適切な場所で示してもらいたかったものだよ。あの放蕩児はどんな人間か、お前以外のすべての者は確信していたのだが、お前はあいつの悪いところを決して信じようとしなかったのだ。今ではどう考えているのかな。

私たちの平安も、お前の愚行のお陰で台無しなのだよ。それに、この先どうなるものやら、だれに分かるわけでもあるまい。お前の哀れな父親は、つい昨日のことだが、次の聖句を示してみせたのだ。悲痛な面持ちで見せてくれたのだよ、気の毒にな。お前も肝に銘じておくことだ。

「娘は父親にとって、人知れぬ不眠のもと。娘への心配で彼は夜も眠れない。若いときには、婚期を逃しはしないか［いろいろな折に、どんな申し出があったのか、お前も承知のことだろ］、結婚すればしたで、夫に嫌われはしないかと。またおとめのときには、父の家にいるうちに、辱めを受けて、子供を宿しはしないかと［いいかな、私のでっち上げではないのだぞ］。夫を持てば持ったで、過ちを犯しはしないか」案じるというのだが、その後はどうなっていると思うかな。「わがままな娘には厳しい監督が必要だ。［しかし、どんなに気をつけても、お前を引き留めておくわけには行かなかったのだよ］さもないと、お前は敵の笑いものになり［お前が私たち全員をこの忌々しいラヴレースの笑いの的にしたようにだ］、町中のうわさの種、野次馬の群がるもととなり、公衆の面前で恥をかくことになる」となっているのだよ。シラ書四十二章の九節、十節等々だ。

さあ、これでお前も、生意気な書き方はしなければ良かったと思うことだろう。姉の厳しい言い様では、などと言っていたが、なあ、娘よ、自分に見合ったものを厳しいなどとは決して言わないことだな。お前も言葉の意味は弁えている。だれよりもよく通じているのだ。お前が弁えている知識の、たったの半分に見合うだけの振舞いをしてくれていたらと、神にも願う気持ちだ。そうしてくれていたなら、私たちもこのように落胆したり、悲しんだりはしなかったことだろう。そして、そんな思いをしているという点では、かつての私に優る者はいないということだ。

愛してやまなかったお前の叔父

アントニー・ハーロー

これは明日お前のところに届けよう。もう少し罰を受けた上で、おそらく、お前の地所の一部を取得させてもらうことになるのだろう。お前からの生意気な返事を受け取った伯父のジョンだが、管財人ということもあって、お前に貧しい思いをさせたくないというのだ。だが、私たちとしては、耳にしていることの全部が全部本当ではないことを願っている。私から忠告しておこう。これまでの振舞いもふしだらなものだったが、これ以上の不心得を慎むよう、注意だけはすることだよ。これ以上の不心得を犯すなどということが可能ならの話だがな。忠告を無駄にしないようにな。

手紙　三十八

Cl. ハーロー嬢からAnt. ハーロー氏へ

八月十三日　日曜日

尊敬申し上げますお方

ジョン伯父様への不作法な手紙のことは、大変申し訳なく思っております。でも、不作法なものにするつもりはございませんでした。不幸に不慣れな人間というものは、あまりにも簡単に苛立たしい気持ちへと追い込まれてしまうものなのですね。

規律を正しく守っている人間が堕落いたしますのは、確かに恐ろしいことですし、許せないことでもあります。それは背信の罪にも似ておりましょう。ただ、私の件につきましては、事情をお調べいただけたならと、天にも祈る気持ちでございます。

もしも私が、体具合のことを実際よりも悪く言い、後悔については実際よりも良い言い方をしているのでしたら、その二重の虚偽について罰せられますのが至当なことになりましょう。そして、貴方も喜んで処罰人の一人になってくださるはずです。でも、その両方の点で私に嘘偽りのありませんことは、成り行きを見ていただけますならば、最もよく証明されることでしょう。私といたしましては、それを頼りとする所存です。はなはだしく屈辱を感じております哀れな娘に、それも、自らの過ちに対する正しい認識ゆえの屈辱と自負いたしております娘に、貴方は無念な思いを強いて楽しんでおられるかにもお見受けするのですが、それと同じくらいに、私が出会いました非難のことを思い返されますたびに、貴方に慰めが得られますよう、神に祈っております。

私についてどのようなことをお聞き及びなのか、私には分かり兼ねます。一番の近親者が、そして、最も大切な人たちが惨めな不幸者を見捨てるのですから、血の繋がりのない人間がその娘への誹謗に取り掛かったり、世に広めたりいたしますのも、驚くべきことではないのです。ただ、中傷そのものは無視出来ましょうし、青天白日の思いにこの身を包みまして（心ならずも踏み切ったものでしたが、致命的となってしまいました、あの四月十日の行動は除くことにいたします）、心安らかになることも出来そうに思うのです。とは申しましても、貴方のご忠告に対しましては、それがどのような意味合いであれ、感謝申し上げます。

答えるよう求められておりますご質問の件ですが、母親が娘に問い掛けますのには、そして、姉が妹にぶつけますには、あまりにもショッキングなものだと認められておりますし、また、どうしても答えねばならないとのお言葉ですが　…　あゝ、叔父様　…　本当に答えねばならないのでしょうか　…　それなら、これをもちまして私の返答とさせていただきましょう。「わずかな時間、考えられておりますよりもずっと短い時間お待ちいただけますなら、家族全員にとりまして、そして、兄と姉にとりましても、私の口から申し上げますよりももっと適切な答えが得られることでしょう」ということでございます。

しかしながら、次のことは記憶にお留めいただきとう存じます。私は再びご愛顧に与りますことを願い出たのではないという点でございます。それは私には望み得ないことだったのです。また、私の地所のいずれかを所有することに関しましても同様ですし、その地所の産物から必要な生活の糧を得ることさえも望みはしませんでした。ただ祝福だけを望んだのです。最後の祝福をです。

さらに、次の点も申し添えておきますが、嘘偽りのないところだからです。つまり、私には自らの科とすべき故意の罪業はないということです。食卓はもとよりベッドも、とのおっしゃりようでしたが、ふしだらな真似は一切いたしておりません。

何故なのでしょう、叔父様。このショッキングなものと同様に、別の問い合わせもしていただけなかったのはどうしてなのでしょうか。慎みの点からいたしまして、母親とか姉とかがいたしましても許されますような問い合わせをです。また、おじ様たちから問い掛けられましても（仮に母のほうでは禁じられ、姉にその気がないといたしましても）、実際になさったものと比べ、さほど不適切ではなく、そして、慈悲の心がもっと感じられますような問い合わせをです。

謙虚に願い出ましたのに、こんなにも手厳しいお咎めをいただく羽目になってしまいました。でも、母宛に一筆認めましたことは悔やんでおりません（もっとも、姉には便りをしなければ良かったと思わずにいられないのです）。と申しますのも、望んでおりましたような上首尾が得られなかったとはいえ、筆を執りましたことで、子の務めを果たしたいという気持ちを満たすことは出来たからです。しかしながら、私の定めはまことにもって厳しいものだと、そのように申さずにはおられません。自分が犯しました重大な過ちを詫びようといたしましても、ますます罪を重くしてしまいますような言い方でしか出来ないのですからね。

でも、もう止すのが一番なのでしょう。どうやら、思いの丈がペン先へと向かっている模様ですから、許しなど何一つ与えていただけませんのに、行を重ねますうちに、他の許しを請い求めるようなことになってはいけないからです。

悲しみに暮れ、また、嘆かわしいほどに心を傷付けられております大切なお父様とお母様とに、全能の神様が祝福を授け、守り、慰めてくださいますよう、そして、幸せな姉につきましては、面目を保ち、愛顧を失わず、功徳を重ねてくれますよう祈ります。神様が兄を許し、妹の操を奪った者からと同じように、自らの気質の激しさからも守ってくださいますよう願っているのです。それから、大切な叔父様が、そして、第二のパパと呼ぶよう、よく言い付けてくださいました、今でも、これまでと変わることなく大切に思っております貴方のお兄様が、皆と、そして、お互いに、楽しく幸せになってくださいますよう祈っております。そして、このためにも、私のことは速やかに記憶から消し去っていただきたいものと存じます。

困り者

クラリッサ・ハーロー

手紙　三十九

ノートン夫人からクラリッサ・ハーロー嬢へ

八月十四日　月曜日

私の大切なお嬢様、今、こちらのご家族の皆様のほうでは、植民地の一つに移住なさるよう、貴女に提案しようと心を固めておられるようにお見受けいたします。これは、ブランド様の誤った報告に原因があるものと確信いたしておりますが、皆様はあの人から手紙

を受け取られたのです。

私といたしましては、貴女ご自身の名誉についてのお考えに矛盾しない形でですが、ラヴレース様のため、あちらのご一族全員がしきりに求めておられます事柄に貴女が応じてくださったらと、心の底から願う次第です。このようにしていただけますと、どなたの口をも抑えることになりましょうし、いずれは、皆様が貴女と仲直りしてくださることにもなると思われるのです。と申しますのも、あの方が真剣に貴女との結婚を考えておられるということを、お身内の皆様は信じようとなさらないのです。それに、ご両家の反目には大変なものがございますから、皆様も、我を折って、もっとよく事情に通じようとはしてくださいませんし、真剣であることをどんなに厳粛に誓われましょうとも、あの方のお言葉を信じようともしていただけないのです。

機会が生じました時のためにですが、貴女の悲しい身の上話の詳細を、貴女ご自身の筆で手短にご用意いただけますなら幸甚に存じます。ただ、同時に、次のようにも申し上げたいのです。いくら誤った報告がありましても、また、貴女ご自身から打ち明けられました場合でさえも、貴女の信仰心とか、あるいは、肝心な点での思慮深さとかにつきましての、私の評価を下げたりはしないでしょうが、それは、軽微な過ちでも、貴女ご自身に対しましては、重い罪のようにしてしまわれるのが、貴女のいつもの慎み深い習わしであることを私は承知しているからでございます。それに、私の一番大切なお嬢様、貴女がご自分の過ちを重くお考えになられるのは当然でもありましょう。非常に過ちの少ない人だったのですからね。それに、そのわずかな過ちも大変些細なものでしたから、貴女の率直さのお陰もありまして、大部分は美点に変わってしまっていたのです。

とは申しながら、ひとつ忠告をさせていただきたいのですが、私の大好きなクレアリーさん、口やかましい人たちの間で貴女の評判を落としかねないような訪問には、一切好い顔をなさらないことです。故意の過失から貴女の評判が落ちるようなことは、これまでのところなかったのですから、落胆のあまりの無頓着さから、評判に傷が付いてしまいますのを（ご自分の潔白を自覚しておられることに満足なさって）放置なさることのなきよう希望いたします。困難な状況と申しますのは、私の大好きなお嬢様、貴女もご存じのとおり、思慮分別ばかりではなく、美徳をも試すものだということでございます。

貴女には打ち明けて置かなければいけないと思うのですが、ブランド様の手紙が届きましてからは、貴女のお傍に伺いますのは差し控えるよう、改めて申し渡されたということでございます。でも、貴女のお許しがいただけるのでしたら、そのように禁じられましたところで、貴女のお傍へ参りますのを引き止めることにはならないでしょう。また、この重大な局面に際しまして、この地で貴女のお役に立てるものと考えておりますが、そのような望みがないのでしたら、貴女のお許しも待ちはしないつもりでおります。

真に尊敬すべきリーウェン師のお言葉と、貴女のお体具合につきましてのお問い合わせが、何度も届けられました。これまでもそうでしたが、師は今も、貴女への限りない憂慮のお気持ちを表明しておられるのです。貴女のことでご家族の皆様が取られた手段のすべてにつきまして、師は反対をしておられます。すっかり体調を崩しておられますので、外出もままならないほどなのです。ただ、具合がよろしくても、ハーロー邸はお訪ねいただけないものと存じます。しばらく前からのことですが、貴女のための仲立ちをご家族の方々に申し出られましたところ、お兄様から無礼な応対をお受けになったからなのです。

§　§

今知らされたばかりですが、お従兄弟さんのモーデン様が帰国されたとのことでございます。カンタベリーに滞在され、あちらのお仕事に目を通しておられるご様子でして、こちらへも間もなくお見えになるものと思われます。あの方が戻られて、一体どのようなことになるのでしょうか。私の大好きなクレアリーお嬢様、神様が貴女と共におられますことを、また、貴女の慰めとなり、支えとなってくださいますことをお祈りいたしております。恐れてはなりません。神様はきっとそうしてくださるのです。と申しますのも、貴女はすべてを神に委ねておられるものと、深く深く確信しているからでございます。

それに、哀れにも私どもは永遠の幸せを願って生きているのですが、結局のところ、この世にどんな意味があるというのでしょう。この世の喜びのすべて、そして（これで釣り合いが取れ、大いに慰められるのですが）、この世の苦難のすべてもほんの束の間のことでして、明け方の夢のように消え失せてしまうものなのです。

それから、大好きなお嬢様、次のことを覚えておいていただきたいのです。この世の喜びというものは、私たちが切望するよう求められております喜びとは何らの類似関係をも持っていないという点です。後のほうの喜びは、私たちが味わいます苦しみと失望とに合わせて与えられねばならないものなのです。従いまして、貴女の辿っておられるのがどれほど困難な茨の道だといたしましても、貴女は栄光へとまっすぐに続く道を進んでおられることになるのです。また、次のように申すことさえ出来ましょう。祝福された不死の命を受け継がれますのも、貴女の忍耐と、天の配剤に甘んじるお気持ちによってですが（神様が貴女に力を授けてくださることでしょう。神様は心から悔い改めております者や、真摯な気持ちでその名を唱えます者を見捨てられることは決してないのです）、貴女次第のことなのだということです。

でも、その機が熟しますのも間もなくのこととは存じますが、貴女がこの栄光へと進まれる許しを与えられることのなきよう、陰ながらお祈りいたします。母親のように貴女を慈しんでまいりました私の両の目を、貴女がそのお優しい手で閉じてくださる（ご存じのとおり、これは私が何度となく自分に約束しておりました楽しみなのです）までのことではございますが　…

母親にも似た愛を添えまして、貴女の

ジュディス・ノートン

手紙　四十

クラリッサ・ハーロー嬢からノートン夫人へ

八月十七日　木曜日

ブランドさんが、あるいは、どなたにいたしましても、私の不利益になりますようなことを何か筆になさるとか、口に出されるとか、そのようなことがお出来になるとは、私には考えられないのです。ただ、私にとりましては不都合な、悪い噂が少し流れたのでしょうね。アントニー叔父様の筆になります大変厳しいお手紙の中にいくつかございました遠

回しなお言葉から、私もそのことには気づいているのです。心の病ばかりではなく、体調も損ねておりますために、それまでお墓の縁を彷徨っておりましたような、そんな哀れな娘に宛てまして、このような手紙が書かれたためしは、一度だってなかったものと存じます。でも、報告をした人たちに比べますと、身内の者たちのほうには正当化出来る点がおそらく多いのでしょうね。だって、皆が一体どのようなことを耳にしたのか、それはだれにも分からないことなのですからね。

親切なご警告をくださいまして、お言葉以上の含みもあるようにも思われますが、私の信用を損ねかねない訪問に対しましては、好い顔をしてみせないように、とのことでしたね。このように微妙な問題につきましては、大好きなノートン夫人、はっきりおっしゃるべきだったと思います。確かに、私の心を鍛練いたしますのに十分な、そして、その心が今起こり得る最悪の事態にも耐えられるようにしてくれますだけの苦難を、私は嘗めてまいりました。でも、確かな災難に十分見舞われていない場合ですと、おそらく、そのようなことをするのでしょうが、私は仮想の災いで頭を悩ませたりはしたくないのです。私が耳にしても構わないと思われます頃に、すべてをお聞きいたしましょう。それまでは、貴女に納得していただくためにも申し上げたいのですが、あの運命の四月十日以来、発言の点でも行動の点でも、私に責任がありますような犯罪的なこと、あるいは、不面目を招きますことは、一切した覚えがないということでございます。

必要に応じ私のために役立てるよう、とのことでしたが、私と身内の者たちとの間で交わされております事柄に関する報告、それに、私の悲しい身の上話の詳細とか、手短な項目に纏めましたものとかもお望みでしたね。ハウさんのところに送ってあるのですが、返してくださいましたら、私の大好きなノートン小母様、書類の包み全部をお届けいたしましょう。それに、もう一つの包みも（この手紙と併せまして）同じようにお届けすることにいたします。今のところは、あの大好きなお友達にお送りすることは考えられないものなのですが、私の〈縁続きの者たち〉のためを思ってのことです。あちらのほうの包みに目を通していただいてからでなければ、あの人はすぐにも厳しい非難を加えてしまうでしょうからね。これらのものから、私の身の上話の大部分は推測していただけることでしょう。でも、これらの書類に先立ちます事柄、そして、私がラヴレースさんから受けました苦難をもっと詳細に説明しておりますものにつきましては、ご辛抱をお願いしなくてはなりません。と申しますのも、今のところ、そのような話題を取り上げますだけの頭脳も心も持ち合わせていないからです。この手紙と一緒にお届けいたします書類は、余白部分で触れられておりますものになります(ァ)。目を通されましたらすぐにも、私にお戻しいただ

（ア）一．父の呪いを取り下げていただくようお願いしております
　　姉宛の私の手紙の写し。
　二．姉からの返事。
　三．姉に宛てた私の二通目の手紙の写し。
　四．姉からの返事。
　五．母に宛てた私の手紙の写し。
　六．ジョン伯父様からの手紙。
　七．上記のものへの私の返事の写し。

七月二十一日付のもの。
七月二十七日付のもの。
七月二十九日付のもの。
八月三日付のもの。
八月五日付のもの。
八月七日付のもの。
　十日付のもの。

かねばなりません。それと、名誉にかけてお約束いただきたいのですが、これらのものにつきまして、あるいは、私から入手なさいます知識のいずれにつきましても、前もって私の同意がありますす場合は別ですが、一切ご利用なさいませぬようお願いをいたします。

お見せいたしますこれらのもののことは、私のノートン小母様、身内の者たちに対する不服の申し立てのようにお受け止めになってはいけません。それどころか、皆がリーウェン師のような優れた聖職者の不興を買ってしまいましたのを、私は心の底から残念に思っているのです。ただ、貴女は何もかもことごとくをご覧になりたがっておられますし、また、それが当然だと私は思うのです。と申しますのも、歩み寄ろうとする皆の心に浮かびました慰めの気持ちを、それを求めております者、そして、自らの心について承知しております点から判断いたしまして、時々はその資格があるように考えておりますような、そのような人間の心へと伝えるお仕事を、貴女のおっしゃるように、最後には貴女が頼まれないともかぎらないわけですからね。

この上なく寛大で気立ての優しい母親に恵まれておりますことは、私も承知いたしております。でも、母は気性の激しい者たちの相手をしなければならないものですから、あれほど好んでおられるあの心の平安も、それを保とうと気を遣い過ぎまして、失ってしまうことがあまりにも多かったのです。

母に宛てました私のもののように、深い後悔の念と熱烈な思いを込めて書かれた手紙なのですから、もしも、母が自分の思いどおりにさせてもらえたのでしたら、私への返事を男気の強い人に委ねてしまうようなことはなかったはずと確信いたしております。

でも、いかがでしょう、大好きなノートン夫人、私が敬愛いたしております婦人は内緒の一行を恵んでくださっても良かったのではないでしょうか。もしもお出来にならなかったのでしたら、その婦人の指示によりまして、あるいは、黙認のもと、心を和らげてくださるような、母親らしい一行を、貴女がお書きくださるわけには行かなかったのでしょうか。かつては深く愛してくださった哀れな娘がこんなにもひどく打ちひしがれておりますのを、その婦人はご承知なのですからね。

あゝ、無理なのです。母には出来ないでしょう。皆のやり方にご執心なのは間違いのないところですからね。それに、皆が正しいのだと母が考えるのでしたら、多分、皆が正しいことになるのでしょう。少なくとも、自分たちが承知している点以外には知らないのですから、そういうことになるのでしょう。それでも、その気があるのでしたら、皆にもすべてを知ってもらえるはずなのです。そして、おそらく、都合の好い時に適宜調査してみようと、そんなふうに皆は考えているのでしょう。私からの皆への働き掛けがありましたのは、つい最近のことでした。でも、その都合というのが時宜を失したものであることが分かりました暁には、皆もどれほど深く苦しむことでしょうか。

ハウさんのところに送ってあります手紙の類を受け取られましたら、貴女にもお分かりいただけることでしょうが、M卿、そして、卿一族のご婦人方は、一門の（あの方たちの言い回しを借りますと）名誉を守ることに一途に気を配っておられますのに、私のことにつきましては、身内の者たち以上に良く思ってくださっているのです。あの方たちの寛大

八．アントニー叔父様からの手紙。　十二日付のもの。

九．そして、最後に、それに対する私の返事の写し。　十三日付のもの。

さの一例をご覧いただくことになりますが、あの時には非常に強く私の心を動かしましたし、実際、今なおこの心を動かして止まないものなのです。困った男性ですわね。放蕩で思慮がなく、残酷だというのですからね。あの人を幸せにして上げようと願った娘を不幸せにして、一体何を得たというのでしょう。それも、あの人と血縁関係にある人たち全員の愛情を受けるに値するようになろうと、心に決めていた娘をです。気の毒な男です。でも、憐れみ深くて寛容な心を、貴女は愛情と取り違えてしまわれるでしょうね。ただ人並みに感謝の気持ちを表し、寛大に振る舞う術をあの人が弁えていたとしての話ですが、その場合、あの人に抱いたかもしれない一切の感情を、私が折よく抑え込むよう、あの人は用心に用心を重ねていたのです。でも、哀れな被造物にとりまして何が最善なのか、それは全能の神様がご存じなのです。

同じ包みの中の一部の手紙から、私が取りました奇抜な手段のことも（奇抜だと貴女はお考えになるはずです）ご承知いただけましょう。また、同時に、そのような手段を取りました理由をお示しするものです(ア)。

途方もなく困難な状況が、その状況さえなければ到底許してはもらえないような、そんないくつかの異常な手段を必要にするものだということは、予期されなければならない点です。私がやむなく取ることになってしまいました手段のすべてが、もしも、正しいものだということになりますなら、とてもとても嬉しく思いますし、また、驚嘆するところも少々ございます。子の務めに背くような憤りは一切混じり込んでおりません純粋な気持ちこそは、それらの手段を知るに至りました際に他の人たちがどのようにお考えになるにせよ、私にとりましての慰めとなるべきものでございます。でも、そのような手段を正当化いたしますこととか、自ら責任を負いますこととかが、私の力の及ばないものとなりますまでは、なかなかそのようなわけにはまいらないものと存じます。

従兄弟のモーデンが無事到着したと聞き、喜んでおります。会いたいような気持ちもいたしますが、あの人も大勢に従ってしまうように思われるのです。先ずは、皆が言おうとしておりますことに耳を貸すものと考えられますからね。でも、私が一番心配いたしますのは、私のための復讐を買って出ることなのです。あの人がそのような行動に出るくらいでしたら、むしろ、あの人が気を遣ってくださるのには値しない、少なくとも、復讐への気遣いをしていただくのにはまったく値しない人間だと、そのように私のことを見ていただきたいと思うのです。

変わらぬ愛情とご愛顧とを保証してくださいますのは、貴女のクラリッサの、その傷ついた心をどれほど和らげてくれることでしょう。どれほどの慰めとなることでしょう。愛していただきたいのです、大好きなノートン・ママ。最後まで変わらぬ愛をいただきたいのです。最後まで貴女の愛情に値する人間となりますことを、自惚れなどではなく、今はお約束出来そうに思うのです。そして、私がこの世を去りました時には、貴女の尊いお心の中で私の思い出を温めていただきたいのです。そうしていただけますと、言葉では言い表せないほどに貴女を愛し、敬っております者への追憶の念を、慈しみ育ててくださることになるのですからね。

でも、私がもういなくなりました時には、これは命令ですが、死別後日の浅いうちは付

(ア) 令嬢はベルフォード氏を自分の遺言執行人としたことを言っているのである。

き纏います悲痛な思いを、出来るだけ早くに克服なさり、お気持ちのすべてを、あの甘くも物悲しい追憶へと早めに切り替えていただきたいのです。過ちのすべてを忘れ、好ましいと考えられていたことだけを思い出すよう私たちを促しつつ　…　これは、神様が慈悲を垂れ、亡くなった大切な人をお傍に迎えてくださったのだと、そんな慎ましい望みで自らを慰めることが出来ます場合に特に言えることですが　…　生き残った者たちに苦しみよりも喜びを多く与えてくれます、あの思い出を大切にする心へとです。

それに、振り返って見るといたしまして、若くして旅立ちますのと、一番長生きをいたしますのとでは、どれほど時間の違いがありましょう。また、再会を果たし、もう決して引き裂かれることはなく、苦痛、悲嘆、あるいは、中傷を受けることも二度となく、未来永劫に亘りまして、互いに祝福し、互いに祝福を受けるという快い望みには、何という慰めが伴っていることでしょうか。

この幸せな状態に想いを馳せつつ、結びとさせていただきますが、その時が至りましたら、私の愛するノートン夫人、貴女と一緒に、そして、私の大切な身内の者たちとも、この状態を享受したいと願っております。今はあのように怒りの的としております子供に対しまして、全員が和解し、祝福を与えてくれるのでしたらね。

変わることなく恭順にして親愛なる貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　四十一

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

八月十三日　日曜日

一体どこが悪いのか分からないのだが、これほど体調を崩したのは、生まれてこの方なかったことだ。最初は、忌々しい身内のだれかが俺に毒を盛るよう手配したのだと思ったよ。屋敷をそっくり自分たちのものにするためだ。だが、俺は一族にとっての希望なのだから、皆もそこまで悪辣な真似はしないだろうと思うのだ。

ペンを置かねばならん。ペンを取っても、少しも元気が出ないのだ。一体全体どうしたというのだ、俺は。

∴　　∴

ちょうど今、迷惑な、気も滅入るような見舞いをM卿から受けたところだ。瀉血の後どんな具合かを尋ねに来たのだよ。卿の妹たちは両方とも昨日帰って行った。有難いことにな。だが、俺への暇乞いはなかったし、さよならの挨拶もかろうじてという有り様だ。M卿のほうは、思った以上に愛情濃やかで礼儀正しい。執念深さの点では、男は女に敵わないのだよ。そんなことを言うのにも、確かに根拠がある。何しろ、宥め難いハーロー嬢とあの年増の婦人たちに加え、モンタギューの二人の小娘までが、今も俺の傍には近寄ろうとしないのだからな。

食い物も飲み物も喉を通らないし、眠ることも出来ないのだ。哀れな状態だよ、ジャック。今馬鹿な死に方をすれば、ハーロー嬢が俺を失意に追い込んだのだと、人はそう言うだろうな。彼女がとことん俺を悩ませているのは確かな話だがね。

べらぼうにむかついている。書き物で紛らわそうとするが、また筆を置かねばならなくなる。効果がないのだな。哀れなラヴレースだよ。一体全体どこが悪いのかな。

∴　∴

まあ、ともかく努力してみよう。うーん、うーん、うーん　…　ポカンと口を開けた犬っころだな、これじゃあ。えらく欠伸が出るんだよ。どこから始めようかな。貴公が遺言執行人を引き受けた話からにしようか。貴公は二人分働くことになるだろうな。実は、棺と経帷子を送って寄越しても構わないと、本当にそう思うのだよ。それらがこちらに届く頃には、すぐにも使う用意が整っていることだろうな。

このハーロー嬢というのは、何というお馬鹿さんなのだろう。請け合っても良いが、これで後悔することになるはずだよ。俺を拒んだことをだ。あんなにも愛らしい若後家さんとは　…　何とも魅惑的な後家さんになっていたことだろうな、彼女は。どれだけ喪服の魅力を引き立たせていたことだろう。最初の十二ヶ月で未亡人になるというのは、美女の身に起こり得る最高の至福の一つなのだよ。華やかな楽しみごとに身を包む間もなく、ひたすら新たな悲しみに没頭するのだ。見事な明と暗。それらは互いを引き立たせ、それらを身に纏う者によって魅力を際立たせられることになるのだ。

くたばってしまえ。どうあっても書くぞ、俺は。他に何が出来るというのだ。

連中は俺に筆を執らせてくれなかったのだよ、ベルフォード。書けずにいると、本当に病人になってしまうのだな、俺は。

∴　∴

ところで、いらついている様子だな、ジャック。俺が苦しんでいるからなのか。夫婦の場合と変わらず、友人同士二人が同時に忍耐を忘れるというのはまずいことだ。そんなことになると、一体どんな結果を招くと思うのだ。今のところ、俺も事を構える気分ではなく、スープの具になって運ばれて来たヒヨコみたいに辛抱強く無抵抗なのだ　…　実を言うと、すでにそんな状態なのだよ、俺様は。

しかし、にも拘らず、これは言っておこう。遺言執行人の件だが、あくまでも自分の責任において行うというのなら、俺の手紙は人目に晒してもらいたくないということだ。人目に触れるのには、あまりにも率直すぎるのだ。それで、絶対にそうしてもらうが、これを受け取り次第、手紙はすべて燃やしてしまうのだな。

半ダースの貴人を相手に、俺がここで傍若無人の振舞いをしているという、貴公のあの生意気な、そして、友達らしくもない非難は絶対に許せないのだ。また、気の毒な「寄る辺のない孤児」という貴公の台詞も覚えておくことだ。これらの非難はあまりにも重大な

ものであり、貴公も本気なわけだから、俺としてもおふざけとして見逃すわけには行かないのだよ。ローマ風(ア)が続けられているにも拘らずな。それに、実際、続けられているというだけの話だがね。誓って言うが、ジャック、こんなにもひどい吐き気がなかったとしたら、貴公のところへ、そして、令嬢のところへもだが、俺は顔を出していたはずなのだよ。もっと前にな。

だが、書くのは続けてもらおう。そして、こちらのシャーロットとハーロー嬢との間で交わされるものすべての写しを、出来ることなら送ってほしいのだ。その手のものについては、貴公が何を知らせてこようと気に留めないことにする。令嬢に対して気前の良い申し出をしたからといって、ここの連中を快く思わないわけでもないのだよ、俺様としてはな。ただ、貴公も承知のことだが、宥め難いのと同じくらい誇りも高いのだ、彼女は。彼女に恩義を施すのは無理なのだよ。だれかの世話になるくらいなら、むしろ自分の衣装を手放そうとするのだからな。もっとも、彼女の場合には、恩恵に与ることが恩恵を授けることにもなるのだがね。

あゝ、主よ。あゝ、主よ。気分が悪くて死にそうだ。あばよ、ジャック。

∴

∴

中断せざるを得なかったのだ。ひどく気分が悪かったのだよ、ここのところでな。それで、何事だと思うかな、貴公としては。何のことはない、俺の傍らで祈りを捧げるようにということで、M卿が教区の牧師を連れて来たのだよ。卿のチャプレンはオックスフォードへ行っているものでな。俺はチョッキの上に寝間着を羽織って横になり、まどろんでいたのだ。そして、目を開けてみると、こともあろうに、例の牧師がベッドの片側で跪いているのが目に入ったというわけだ。もう一方の側にはM卿がおり、いわゆる介添え役として呼び出されたグリーム夫人が足のところいるのだ。「こいつは有難い、閣下」と、俺は有頂天になって叫んだよ。「どこです、令嬢は」とな。連中は俺を結婚させようとしているのだと、そんなふうに想像してしまったのだ。

連中のほうでは、最初、俺がうわごとを言っているように考え、ますます声を張り上げて祈ったのだ。

これで俺も目が覚めたよ。ベッドから飛び下り、スリッパを突っ掛けると、チョッキのポケットに片手を差し入れて、我が最愛の君の〈瞑想〉が添えてある貴公の手紙を引っ張り出した。そして、「閣下、ライト牧師、グリーム夫人、あなたたちは私のことをひどい悪党だと考えておられたのでしょうが、いいですか、説教ならあなたたちに劣らず上手にやってみせることも出来るんです」と言ったのだ。

連中は互いに顔を見合わせていたよ。俺は一つ欠伸をし、そして、「哀れにもにんげーんは、自ら、己のふこーうをまねーく」と読み上げてやったのだ。

読み返してみれば貴公も気づくだろうが(イ)、あれは令嬢には勿論、俺にもぴったりのものなのだよ。「罪のために懲らしめられて、人の欲望など虫けらのようについえます」と述

(ア) 〈ローマ風〉という言葉によってこれらの紳士が意味しているものについては、第一巻百四十八頁の注を参照のこと。 (イ) 七十二頁から次頁にかけてを参照のこと。

べられている一節に至ると、俺は姿見のところへ歩を運び、「いやはや、何とも哀れな姿ですな」と叫んだのだ。すると、連中は揃って俺を褒め称え、感心した様子で両手を差し上げ、天を仰いでいたよ。そして、牧師のほうでは、俺のような分別を備えた男は、世間の者たちが言うほどの放埒な人間にはなり得ないはずだと、いつもそう考えていたと言うのだ。卿は嬉しげにクックッと笑い、祝いの言葉を寄せてくれた。そして、俺は我が愛するハーロー嬢のお陰で、善良な人間や悪い人間、そして、可もなく不可もないという連中の間で、見事な評判を得ることとなったのだよ。要するに、ここの者たち全員に対し、俺は永久に地歩を固めたというわけだ。だが、あゝ、ベルフォード、これでも駄目なのだ。もう一度中断しなければならん。

∴　∴

モンタギュー姉妹からの見舞いがあった。びっこを引いた殿様に導かれてやって来たのだが、俺の回復と改心の両方を一度に祝おうというわけだよ。今回の病気は実に幸運な出来事ということだな。この〈瞑想〉がポケットに潜んでいるとだよ。何しろ、これまでわれわれはすっかりバラバラになっていたわけだからな。似たような話で、子供の頃のことだが、礼拝式から出てきた人波に紛れ込み、俺自身も教会へ行っていたように思われたことがあるのだ。

レビ人の若造の傲慢さには腹が立つ。そいつを見つけ出し、次の便りで奴の耳を送り届けてくれると、俺としてはまことに有難いのだがね。

こちらからお傍に伺うのを差し控える代案として、手紙を書いてくれるよう提案したと考えているのであれば、我が愛しの君は俺に関して思い違いをしていることになる。そんなことで済ませはしないし、済ませるつもりもなかったのだよ。手紙の内容によって、これまで以上に俺を喜ばせてくれたのでなければな。もう一度目を通すよう、彼女に伝えるのだ。そんな望みは与えていないのだよ。体の自由を奪われた悪党よろしく、こんなふうに監禁されていなかったなら、貴公ら両名などにお構いなく、遅くとも明日までには、彼女の元へ赴くつもりだったのだ。

だが、体調は刻々快方に向かっているのだよ、俺に言わせるとな。先生はそうは言わないのだが、自分が一番よく分かっているつもりだよ。間もなく上京することになるだろうな。間違いのないところだ。だが、この件は我が愛しの、残酷で宥め難いハーロー嬢には内緒にしておいてくれ。

あーばよ、ジャーック　…　欠伸の止まらぬ犬っころだ（あーっ、あーっ、あーっ）

貴公のラヴレースより

手紙　四十二
ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

八月十四日　月曜日

貴公の病のことがはなはだ気に掛かる。貴公を失ったりするのは、残念至極な話だから

な。だが、こうも早く死んでしまうのなら、今年の四月前にしてほしかったと、心の底から願う次第だ。そして、これは、この世で最も卓越した女性のためであり、また、貴公のためでもあるのだよ。その場合には、貴公としても、貴公の生涯で最も甚だしい罪業の責任を取らずに済んでいたわけだからな。

貴公の具合がひどく悪いということは土曜日に知らされた。このこともあって、もっと話を聞くまでは筆を執るのを慎むことにしたのだよ。貴公の容体が芳しくないという点については、貴公のところから戻って来た際に、ハリーが保証していた。ただ、貴公には分不相応な愛情ゆえのことだが、M卿は貴公の状態を最も悲観的に受け止めているのだろうと、俺は考えたいのだ。一体全体どうしたというのだ、ボブ。猛烈な熱だが、奇妙な激しい症状を伴っているそうだな。

その容体だから、こちらでのハーロー嬢との出来事で貴公を煩わせたりはしないことにする。貴公の後悔がその病と同じくらい速やかに進行することを、そして、貴公が命を落とす場合にはだが、負けず劣らず効験あらたかなことを願っている。そうでなくては、彼女と貴公とが同じ場所で出会うようなことは決してなさそうに思われるからだよ。

貴公の容体がひどく悪いことを彼女に話しておいた。「お気の毒に」と、彼女は言っていたよ。「重体だとおっしゃるのですか」ともな。

「確かに重体なのです、マダム。M卿からはそのようなお言葉でした」

「お亡くなりになるとしたら、神様のお慈悲がございますように」と、あの素晴らしい女性は言っていた。それから、少し間をおいて、「お気の毒な方 … ご自分からはお示しになりませんでしたが、慈悲を授かりますよう祈っておりますわ」と言うのだよ。

これは特別の使いに届けさせることにする。貴公の様子を聞きたくて、じっとしていられないのだよ。もしも、貴公の最後の手紙を受け取っていたということになると、恐ろしいほどの軽薄な言葉に溢れたものではあったが、あの最後の手紙は、俺の胸をどれだけ痛めることになるのだろう …

貴公の真の友

ジョン・ベルフォード

手紙　四十三

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

八月十五日　火曜日

かたじけない、ジャック。俺は心の底から感謝しているぞ。貴公の今回の手紙の真面目腐った結びの言葉に関してはな。今の今まで絶対に容認するわけに行かなかった貴公の抜粋のことも、その点を考え、許してやりたい気持ちになっているのだよ。

だが、俺がこれほどの天使を、これだけ〈寛大な〉天使を見逃したりするとでも思うのか。誓って言うが、そのつもりはないのだ。こんなにも恩知らずなごろつきに慈悲を祈ってくれるとはな。彼女はひどく俺を傷つけているのだよ。魂もズタズタだ。あの気高い寛大さでな。しかし、まずは彼女のほうから俺に慈悲を垂れてくれなくちゃいかん。そうすると、彼女は俺に信頼というものを教え込むことになり、そのために、俺に対する祈りも

叶えられることになるわけだ。
だが、急ぐのだ。急いで届けてくれ。彼女の健康状態の詳細をな。彼女は何をしているのか、どんな話をしているのかをだ。
俺のはただの恋患いだ。あゝ、彼女を自分のものと呼ぶことが出来ていたらなあ。その場合には、病気になるのにもなり甲斐があったことだろう。俺のところへ赴くべく都を離れてくれるよう、彼女に使いを送っていたのだ。そして、その鳩のように柔らかな翼に癒しの力を秘め、俺を慰めに馳せ参じてもらっていたのだよ。俺のための祈りを捧げ、彼女のために生き延びるよう命じてくれるのが、彼女の務めであり、かつ、彼女の好むところでもあるわけだからな。あゝ、ジャック、何という天使を俺は　…
だが、まだ彼女を失ったわけじゃないのだ。失うつもりはないのだよ。俺はほぼ回復しているし、すっかり良くなっているはずなのだ。この処方好きな悪党どもさえいなければな。この連中ときたら、自分たちの腕が良いことにするためなのだが、病気を難しいものにしたがるのだよ。それに、俺としては、彼女を自分のものにするつもりだからな。そして、もう一度病気になるつもりでいるのだが、妻の務めの優しさをもって尽くしてもらうためだ。また、体についてと同様、魂についても面倒を見てもらうのだよ。
彼女の上に永遠に神の祝福のあらんことを　…　急ぐのだ、彼女についての詳細を急ぎ知らせるのだ。恋患いなのだよ、俺は。あんなにも寛大な優しさ　…　偉大なもの、そして、善なるもののすべてにかけて言うが、彼女を失うつもりはないのだよ。彼女にそう伝えてくれ。彼女はこう言っているのだ。一緒になる考えがあるとしても、俺を憐れむわけには行かない、とだ。シャーロットに宛ててハウ嬢が書き写したものによると、このとおりなのだよ。だが、俺を憎み、そして、一緒になってくれるよう、彼女に命じるのだ。そうなれば、彼女に対する俺の態度が、すぐにもその憎しみを愛情に変えることになるだろう。何しろ、この体も心も、すべて彼女のものなのだからな。

手紙　四十四
ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

八月十七日　木曜日
貴公の召使の言ではそうらしいが、すでにそこまで貴公が回復したと聞き、心から嬉しく思う。文面からして、貴公の道義心のほうも体調と一緒に改善されているようだな。これは令嬢の一覧に供して構わない手紙だし、現にお見せしたのだよ。
彼女の具合ははなはだ良くない（彼女の執念深い家族から届けられた、あの呪わしい手紙がな　…　）。そんなわけで、貴公の手紙に関して、貴公の有利に働くような話はあまり出来なかったのだ。ただ、その場で交わされた事柄の内容を知れば、貴公はいよいよ彼女を崇めることになるだろうな。
俺が手紙を読んでいる間、彼女は極めて熱心に聞き入っていた。そして、俺が読み終わると、彼女はこう言ったのだ。「お気の毒な人ですね。何というお手紙なのでしょう、これは。寛大な振舞いがあの人のご希望に添うとしての話ですが、私の気性が卑劣なものではないことをお示しするその実例のいくつかを、折好く知っていただいたことになりますわ

ね。でも、あの人が良心の呵責を感じられること、それも、あの人ご自身のためになのですが、そのことこそは、あの人に与えられますよう私が願っております罰のすべてなのです。ただ、もっと言葉を慎まなくてはいけませんね。私の申しますことを何もかも、貴方のほうからあの人に書き送られるのでしたらね」とだよ。

俺は彼女の限りのない優しさを褒め称えたよ。面と向かってではあるが、どうしてそれを抑えることが出来ただろうか。

「優しさなどではないのです」と、彼女は言っていた。自分自身のために求めていた気持ちなのだという。慈悲心の乏しさにあまりにも苦しめられて来たから、悔い改めようとしている心に憐れみが向けられることを願わずにはいられないというのだよ。「お見受けいたしますところ、あの人は悔いていらっしゃるようですわね」　彼女が言った。「外見以上のことを推し量りますのは、私の為すべきことではございません。もしも、悔いていらっしゃるのではないといたしますと、あの人は他のどなたにもましてご自分を欺いていることになるのです」とだ。

彼女の体調があまりにも優れないため、この際に交わされた言葉というのは、これだけだったのだ。

この令嬢に加えられた侮辱、そして、彼女の執念深い身内と迫害者の両方に対する、その侮辱の下での彼女の振舞いは、何と素晴らしい悲劇の主題となることだろうか。しかしながら、その教訓については大いに異論のあるところだな(ア)。何しろ、ここでは美徳が罰を受けているのだからな。もっとも、〈来世の報い〉とやらに期待を寄せるのであれば話は別で、彼女としても、間違いなく、そのことに関しては確信を持っているはずなのだ。でなければ、だれに確信があるというのだ。とはいえ、結局のところ、俺には分からないのだ。貴公はそのように始末に負えない男だし、はなはだしく下劣な夫になっていただろうから、貴公を失うことで、彼女の美徳は報われるのではないかという点がだよ。というのも、身に降り懸かった場合、人間性にとって最も嘆かわしいような事柄が、この魅惑的なお嬢さんもかつて述べていたように、結局のところ、われわれにとって最も幸福なものとなることもよくあるからだ。

この令嬢のお傍に仕えてしばしば考えたことだが、ベルトンが賛美している作家のニック・ローがこんな人物を目の前にしていたなら、実際に描いたのとは別種の悔悟者を描いたことだろうな。あるいは、自分では『麗しき悔悟者』(二七)と呼んでいる演劇に、もっと相応しいタイトルを与えていたことだろう。ハーロー嬢こそ本当の悔悟者なのだよ。こん

(ア) 悲劇においては、美徳に苦難の及ぶことがあってはいけないとするベルフォード氏の異議は、熟慮に基づいたものではない。『孤児』におけるモニミア、『ヴェニスは揺るがず』のベルヴィデラ、『テオドシウス』のアテネー(二八)、シェークスピア作『リア王』のコーディーリア、『オセロー』のデズデモーナやハムレットは（これ以上名は挙げないとしても)、美徳が一時的に苦痛を嘗め、悪徳が暫時勝ち誇るのでなければ、悲劇も正当に悲劇と呼ばれることは難しいという、その実例なのである。ただし、氏は同じ段落の中で考え直し、美徳の報いと犯罪行為に対する懲罰については、まなざしを来世に向けるようわれわれを導いているのである。また、自分にも定かではないとしつつ、的を逸らさぬ所見として、クラリッサほどの女性の美徳は、ラヴレースのような男を失うという点において報われているのではないか、と述べるのである。

な言い方が言葉の矛盾にならないとしてだが、落ち度のない悔悟者と言って構わないだろう。彼女に対する両親の最初からの振舞いを考慮に入れた場合にはな。

もう一方の悔悟者の物語というのは、そのすべてが途方もないたわごとの寄せ集めなのだ。ロザリオは、確かに、だれのことかは貴公も承知の、不埒で卑劣な悪党の再来といったところだな。作者は放蕩児の描き方は心得ていたのだが、悔悟者を描写する術を知らないのだよ。カリスタは物欲しげで、肉感的な小娘であり、この女が示す後悔の念というのは、怒りや傲慢さや軽蔑以外の何ものでもないのだ。感情の激しさときたら、まさしく疾風怒濤の勢いで、あの繊細な女性的感情は露ほどもない。自然に描かれた場合には、怒りや絶望さえも貫いて輝く柔和さによって、男性の激情とは際立った違いを見せるものなのにな。その人柄は欺瞞と隠し立てから成り立っている。美徳など一かけらとして見当たらず、プライドの塊だ。そして、彼女を苛む悪魔は、外部は勿論のこと、自分の内側にも巣くっているというわけだよ。

だとすれば、状況の全体を考慮に入れた場合、どうしてこのような人物の没落が然るべき苦悩の種となり得るというのだろうか。この女は、露見した後でさえ、ぬけぬけと罪を重ねているのではないだろうか。自分の罪を承知の上で、アルタモントに対し、その親友への復讐を呼び掛けている。まるで、その男が彼女を中傷したかのようにな。他の者と罪を犯していながら、アルタモントとの結婚に同意し、その女々しい犬ころと実際にベッドを共にするのだ。ロザリオに身も心も委ねた上でだよ。もっとも、ロザリオのほうはこの女との結婚を拒否したのだがね。

この女は自分の後悔の念について、それが生じ始めると、いみじくも「魂の錯乱」と称しているのだ。そして、前にも言ったとおり、許されるだけ長々と、この上なく大胆不敵な態度で罪を重ね、出来るかぎりの悪さを行った後（ロザリオや自分の父親、また、その他の者たちの死の原因となったわけだが）、自らの身に刃を突き刺すことになるのだよ。

これが改悛の行いと言えるのだろうか。

だが、確かに、我が国の詩人たちというのは、恐怖や殺人や自殺を用いずに悲痛さを生み出す術をほとんど心得ておらず、人々の目から涙を誘うためには、魂にショックを与えなくてはいけないのだな。

好色な間抜けで、騙されやすい寝取られ男、そして、（勇敢な男として、また、兵士として描かれてはいるのだが）ただのトム・エッセンス（二九）であり、親友にも盾突くアルタモントは、確かに、剣とか豆鉄砲とかにはよらず、女の中でも最も悪辣な連中の一人のために、ただの悲しみやたわごとから、愚か者のような死に方をしている（劇の結末でそんな推測をするよう、われわれは導かれて行くのだ）。しかし、「麗しき悔悟者」と呼ばれる当の女は、自らの手で果てるのだよ。そして、過去の破廉恥行為ゆえに、称賛に足るような憐れみを受ける資格は持たず、真の悔悟を主張する権利のすべてを失い、また、将来の幸せを求める権利すべてについても、十中八九失うことになるのだ。

だが、クラリッサ・ハーロー嬢なのだよ、ここに登場しているのは。美徳を備え、気高く、賢明で敬虔なお嬢さんだ。身内の者たちには虐待され、また、信義を重んじる男だと信じている相手なのだが、不幸にもその卑劣な放蕩児の仕掛けた罠に掛かったため、ある意味では、その男の保護に身を委ねざるを得なくなっているお嬢さんなのだ。そして、その放蕩児のほうでは、お嬢さんの信用を得るためだが、これ以上はないほどに強く、そし

て、勿体ぶった態度で廉恥心を表明して、少しも憚るところがないのだよ。

彼女の美徳と用心とのせいで、すべては挫折の憂き目を見るわけだが、一連の陰謀や策略を弄した後、卑劣にも放蕩児は、最も悪辣な手管を用いるのだ。そして、彼女の操を奪うために、まずは彼女の意識を奪わねばならなくなるのだ。

にも拘らず、同棲を目指す男の卑劣な考えには同調出来ず、彼女は、計画的な犯罪行為の新たな一歩をまさに踏み出そうとしている男を、その悪魔のような目的に手を貸そうと集まっている、厚顔無恥なあばずれどもの目の前で怖じ気づかせて見せるのだ。ただ無垢さのみを頼りとして、彼女はその者たちすべてに対して勝ち誇り、男が彼女を預けた、例の下劣な連中の手から逃れることになるのだよ。

彼女の憤りは気高いもので、気違いじみたところはない。この恥知らずと顔を合わせることとか、結婚することとかは拒んでいるのだが、恥知らずのほうでは、このように神々しいばかりの娘さんへの仕打ちを悔い、自分の卑劣さを許して夫にしてくれるよう、彼女の心を動かしたいと願っているのだ。しかもこれは、身内の者全員から虐待を受けていながらの話なのだよ。また、生計の道として自分の衣装を手放さざるを得なくなってのことだが、有り余るほどの財産に恵まれた状態から、悲痛この上ない状態へと追いやられながらの話なのだ。それに、他人に取り囲まれてもいるし、自分を誘惑した男の友人をやむなく（他にいないからだが）友としなければならない有り様なのだよ。

死を切望し、また、悲痛な思いと虐待とが自分の気高い心を打ち砕いてしまったという確信から、死を迎えるに相応しいすべての準備を進めてはいても、彼女のほうでは、自分に割り当てられた寿命を縮めるような不敬な考えは忌み嫌っているのだ。そして、絶望というものを知らないのと同様、復讐などとは無縁な人間であるから、自分の破滅をもたらした張本人を許すことも出来るし、その男が悔恨の情を覚えることを、また、自分がその男の残酷な裏切り行為の最後の犠牲者となることを願ってもいる。そして、自分にあれだけ卑劣な仕打ちを行った男の身に復讐のための危害が及んだり、その男から危害が加えられたりするのを防ぐことほどに、彼女がこの世で切に求めているものは他にないのだ。

これが悔悟なのだよ。これこそが敬虔な心というものだ。そして、ここから、一人一人の心に立派な影響を及ぼすはずの悲痛な思いが自然と湧いて来るのだ。

親戚から加えられた、この素晴らしい女性への虐待がどのようなものであれ、彼女のほうで不謹慎な行動に走るということはない。それどころか、自分を犠牲にしても、親戚の者たちを正当化するような理由を見出そうと努力しているのだよ。そして、彼女に対する連中の残酷な仕打ちのことを心配している様子だが、それは自分のためというよりも、この先、自分がもうこの世にいなくなった際の連中のためを思ってのことなのだ。というのも、彼女自身に関しては、きっと神は許してくださるはずだと、彼女はそう言っているのだよ。自分を許してくれる者などこの世にはだれ一人としていないけれど、とな。

尋常ならざる挑発を受けるたびに、彼女は聖書を繙いている。そして、聖書に記されている前例によって、自分の激情を律しようと努めているのだ。彼女はこう言っている。自分の不幸を悲痛なものと考える時もあるけれど、もっと立派な人間が自分以上の苦しみを嘗めてきたのであり、罪の軽い人たちが耐えてきたものを、自分は堪えようとしないのだろうか、とだ。すでに触れたあの場合にも（無慈悲さの新たな例がいくつか、身内の者たちから示された際のことだ）、彼女の訴えが穏やかでありながら、いかに説得力を備えたも

のであるか、それは同封した〈瞑想〉から分かることだろう。貴公のその不道徳な軽薄さで、この瞑想を、もう一つのほうにして見せたように、貴公の場合に当てはめることが出来るかどうか、試して見るのだな。もしも出来ないようであれば、良心に従うことだ。それが一番適切な用い方というものだよ。

瞑　想（三〇）

どこまであなたたちはわたしの魂を苦しめ
言葉をもってわたしを打ち砕くのか。
わたしが過ちを犯したのが事実だとしても
その過ちはわたし個人にとどまるのみだ。
絶望している者にこそ友は忠実であるべきだ。
人の不幸を笑い、よろめく足を嘲ってよいと
安穏に暮らす者は思い込んでいるのだ。
罪をもたらす恥じらいもあり、
名誉と尊敬に値する恥じらいもある。
憐れんでくれ、わたしを憐れんでくれ
神の手がわたしに触れたのだ。
わたしがあなたたちの立場にあったなら
そのようなことを言っただろうか。
あなたたちに対して多くの言葉を連ね
口先で励まし、唇を動かすことをやめなかっただろうか。
どうして風に舞う木の葉のようなわたしをなお震えさせ
乾いたもみ殻のようなわたしをおいまわされるのか。
どうしてわたしに対して苦い定めを書き記し
若い日の罪をも今なお負わせられるのか。
主の憐れみは苦しみ悩むときに折よく与えられ、
それは日照りが続いたときの雨雲のようである。
わたしの人生など何ほどのこともないのです。
わたしから離れ去り、立ち直らせてください。
二度と帰って来られない暗黒の死の闇の国に
わたしが行ってしまう前に。

一言付け加えさせてもらう。この素晴らしい女性は、ノートン夫人からの手紙で、モーデン大佐がイギリスに戻ったばかりだということを知らされたのだ。今ではこの男が、彼女の会いたがっているただ一人の人物なのだよ。
そのことで、俺は少しばかり妬みの気持ちを表明した。遺言執行人の件で、俺よりも大佐が重んじられるようなことになっては困るのでな。彼女が言うには、今となってはそうする考えはないとのことだった。その種の委託を行うと、たとえ大佐が受け入れるとしても（彼女は疑わしく思うというのだが）、その場合、必然的に大佐の手を通ることになる一

部の書類の性質からして、俺の友人と大佐との間に争いを引き起こし兼ねないし、それを考えるのは、彼女にとっては死ぬよりも辛いことだから、というのだ。

気の毒にも、ベルトンは死を目前にしているということだ。ちょうど、奴の使いが来たところだが、俺と会うまでは死ぬに死ねない気持ちでいるとの伝言だ。俺としても、まだ逝かないでもらいたいと思う。奴の場合、この世についてもあの世に向けても、用意が整っているとは言えないのだからな。哀れな男を訪ねないわけには行かない。だが、令嬢の邪魔はしないという保証を君からもらうまでは、動きたくない気持ちなのだ。いったん俺を傍に置くと、別れるのを奴がひどく嫌がるのは分かっているからな。

ターヴィルが言っているところでは、貴公はずいぶん急速に回復しているそうだな。後生だから、この比類のない女性を悩ますようなことは考えないでくれ。こんな頼みをするのは、彼女のためは勿論、貴公自身のためなのだよ。そして、貴公が与えた約束のためでもあるのだ。何故なら、仮にも彼女が、俺の恐れているとおり、ここ二、三週間のうちに亡くなるようなことになれば、貴公の訪問が彼女の死期を早めたと言われるだろうし、そう言われるのも、おそらく、当然すぎることだからだよ。

貴公がそんな考えは持たないことを期待しつつ、貴公の全快を願うことにする。さもなければ、病気がぶり返し、寝たきりになってもらうことを願うところだ。

手紙　四十五

ベルフォード氏からクラリッサ・ハーロー嬢へ

八月十九日　土曜日　朝

マダム、

信義の点からいたしまして、お知らせするのが私の義務と存じますが、ラヴレース氏は貴女との面談により、自らの運命を試すつもりでいるかのように思われます。

氏の訪問をお受けになるよう、ご自分を抑えていただけたらと、天にも祈る気持ちでおります。訪問をお認めくださいますならば、氏の挙止の中にご覧いただけますものは、崇拝にも等しいひたすらなる尊敬の姿と、一貫して窺われる後悔の念なのです。ただ、私といたしましては、すぐにもエプソムへ向けて出発しなくてはなりませんし（貴女も一度見ておられる人物ですが、気の毒なベルトン氏のため、友人としての最後の世話をすることになるのでしょう）、また、ラヴレース氏が説得に応じることよりは、応じない可能性のほうが高いわけですから、この点をお知らせするのが適切であろうと考えたのです。仮に氏がやって来ましても、はなはだしく驚かれることがないようにとの思いからなのです。

貴女のご容体は私が伝えているほど悪くないのだと、氏のほうでは徒な願いを抱いているのです。貴女のお姿に接すれば、彼も確信することでしょう。彼に為し得る最大の恩義というのは、貴女のお体のためと同様、自らの今後の心の平安のために為されて然るべきなのだということをです。そして、おそらく、お体に害が及ぶのを恐れ、この先重ねてお邪魔するような考えは慎むだろうと思うのです。少なくとも、そのように体調を崩しておられる間はです。従いまして、半時間の衝撃だけが　…　不幸な男（その男自身、危険な熱病の床を離れたばかりなのです）とお会いになるのが衝撃だとしての話ですが　…　貴

女に我慢していただかねばならないことのすべてということであります。
あまりに慌てられ、お気持ちを乱されないようお願いいたします。彼が上京いたしますのは、最も早い場合でも、月曜日までは不可能なのです。また、彼が訪問の決意を固めるようでしたら、彼より先に私がスミス氏のところへ参る所存です。
マダム、衷心よりの敬意を添えながら、
この上なき誠意とこの上なき恭順の心を込めまして、貴女のしもべ
J. ベルフォード

手紙　四十六

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

［八月十七日付の氏の手紙への返事として。手紙四十四を参照のこと］

八月二十日　日曜日
何と無情な男なのだろうな、貴公も。こんなにもでしゃばった訓戒人がついている男には、良心などというものは必要ないのだよ。だが、仮にニック・ローが題名にそぐわない劇を書いているからといって、その点について俺が非難の的にならなければいけないというのか。俺は罪を犯し、後悔している。償いをしたいと思っているのだ。彼女は俺の罪を許している。悔恨の気持ちを受け入れてくれているのだ。ところが、俺に償いをさせようとはしないのだよ、彼女のほうでは。貴公としては、俺に何をさせたいというのだ。
だが、ベルトンの元へ赴くことだな。出来るかぎり速やかにだ。ただ、貴公が行こうと行くまいと、俺は上京しなくてはならんのだ。そして、ご覧いただくことにしよう。あの愛らしい変人に対し、俺自身には何が出来るのかをな。ここの処方好きな下郎どもの許可があり次第、俺は行くつもりなのだ。絶対にな。そうさ、彼女のほうでも俺との面会を一度は許すべきだと、M卿はそうお考えなのだ。卿のご意見は俺にとって大きな力を持っているのだよ。俺の考えと一致する場合にはだがね。それに、俺は卿と二人の従姉妹に請け合っているのだよ。最も尊敬する人物に対して男が装い得る、礼儀正しさと敬意のすべてをもって振る舞うということをな。また、そのつもりでもいるのだよ、俺は。もしも、ベルトンのところへは差し当たり行かないことにするというのなら、貴公にこの点の証人になってもらうことにしよう。
俺が話しているのを貴公も聞いたことがあるだろうが、モーデン大佐というのは、名誉を重んじる勇敢な男だ。ただ、モーデン大佐にも女がいたのだ。貴公や俺と同じにな。実際、公然とにせよ人目を忍ぶにせよ、女を持たない男などどこにいるというのだ。悪魔が男を釣ろうという時には、年齢、身分、あるいは、階級の如何に拘らず、可愛い娘を餌にするものなのさ。
我が愛しの君は、何度も耳にしているのだが、大佐のことは特別扱いをしており、深い敬意を込めた話しぶりだったのだ。彼女の心のためにも、執念深い一族の残りの者たちと彼女との間の事態を、大佐が少し落ち着かせてくれたらと願う次第だ。
律義者ベルトンのことは可哀相な気もするのだよ。それにしても、だれかが体調を崩したり、塞ぎ込んだりすると、貴公は決まって鼻みたいな声音を張り上げ、即座にそいつを

殺してしまうのだ。決死隊の鼓手に適任の男でもないかぎり、貴公ほどに鵞ペンで葬送行進曲を奏でて大喜びする者はいないということだ。

ところが、自分の天分を弁えてくれると有難いのだが、貴公は外観そのものによって陽気な気分を醸し出すような作りというわけで、ホックリーインザホール(三)の辺りで、スコットランドのバグパイプの音に合わせ、仲間の熊を先導しているほうが、ずっと格好良く見えることだろうな。まさしくこういった姿勢を取っている貴公の不格好な横腹が（見物人全員の腹をよじらせるのだが）目に浮かぶような感じだよ。貴公のでかい頭がその担ぎ人夫みたいな肩の上で左右に代わる代わる、ひょうきんに拍子を取っているのだ。前に一度、プレストンで貴公がホーンパイプに合わせて練習しているのを見たことがあるのだが、あれと同じ具合にだよ。貴公もあの馬鹿真似のことは覚えているだろう。俺は百回も思い出しているのだよ。何しろ、あれだけ貴公に似合いの姿はかつて見たこともなかったのだからな。

だが、こんなことを書いてどんな得があるのか、分かっているのだよ。貴公の場合、外見は最悪の部分であり、俺の場合には最良の部分だという、あの注目すべき所見を繰り返されるだけのことだろう。だから、放っておくことにしよう。この手のどのようなことを貴公が筆にしようと、腹を立てるわけには行かないのだよ、俺としてはな。

だが、貴公と会った際には、冗談抜きで釈明を求めることにする。俺の手紙の抜き書きを、前回の手紙での俺の言葉にも拘らず、令嬢に与えた点に関してだ。とりわけ、令嬢が俺を拒絶し続けるようであればな。拒みながらも最後には応じた女の例が、俺自身にも百度はあったのだ。だが、この抜き書きによって、彼女が心の扉に閂を掛けるよう、貴公は仕向けてしまったようにも思うのだよ。ちょうど、俺を入れないよう、彼女の部屋のドアによく閂をかけていたようにな。それゆえ、これは友情にとっては我慢のならない不実な行為であるし、また、名誉を重んじる心からしても、俺としては許すわけに行かない不実さと言うわけだよ。

手紙　四十七
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

八月二十一日　月曜日　ロンドンにて

俺は貴公を呪う定めにあるものと確信しているぞ、ジャック。とはいえ、取り越し苦労は止めにして、貴公宛の手紙に取り掛かることにする。ここしばらくの間に俺から受け取ったものよりは長いものだ。さあ、始めるぞ。

俺が心に決めた上京の時刻について、出来るだけ貴公のところに知らせが届かないうちにと、俺は昨日、卿の六頭立てのチャリオットで出発した。貴公宛の手紙を急送した直後のことで、ロンドンには昨夜到着したのだ。ハーロー嬢の機嫌が絡んでいる場合には、貴公の友情はまったく当てに出来ないことが分かっていたからだよ。

あれだけ受入れ態勢の整っている場所は他になかったため、やむなく例の下宿へ行くこととなったが、俺の衣装も置いてあるからだ。あそこに着くと、連中全員に百万もの呪いの言葉を浴びせてやった。そして、サリーとポリーのいずれに対しても、顔を合わせるの

は断ったのだ。令嬢の逃亡を許したことばかりでなく、不埒な逮捕劇の件や、看守の家での令嬢に対する奴らの忌まわしい横柄さのこともあったからだよ。

結婚衣装の一つにするつもりでいた、まだ手を通したことのないスーツを身に着けたところ、我ながら自分の姿が大いに気に入り、俺の場合は外観が最良の部分なのだと、貴公と同じ考えを持ち始めたところだ。

俺は駕籠でスミスのところへ向かったわけだが、我が愛しの君に会うのだという確かな期待に、心臓がドキンドキンとほとんど聞き取れるほどの音を立てながら、喉まで跳ね上がってくるのだ。揺られて進む道すがら、俺は指を握り締めていたよ。憂いの色と輝きとを代わる代わる浮かべるよう、両の目に命じておいた。膝にも話し掛けたが、しっかり跪くよう教えてやったのだ。そして、魅力的な筆遣いをする者の言葉を借り、自分に語り掛けもしたし、また、自分の役どころを頭の中で演じても見たのだよ。

心を込めて跪き、こうして訴え掛けるのだ。

こうして彼女の憐れみを乞い、こうして自分の苦痛を申し立てる。

万一顔をしかめそうなら、こうして仮想の渋面に溜め息を漏らす。

そして、こうして、彼女の和らぐ目の中に色好い返事を見出すのだ(三二)。

スミスの家に着くまで、俺はこんな具合に自らを慰めていた。そして、駕籠かきたちがあそこに降ろしたのは陽気なお荷物だったのだ。連中がさっと帽子を脱ぐ。ウィルは新しい仕着せに身を包み、手近に控えている。パッと幌が上げられ、閣下のお出ましだよ。カウンターの中の女はすっかりドギマギしている。尊敬の念と恐れから、それ相応の真面目腐った顔になっているのだ。彼女の膝は、疑いの余地もないが、羽目板を張った囲いの内側を叩いていたはずだ。

「失礼しますよ、マダム。ウィル、あの連中を少し遠ざけて、待たしておいてくれ。ここに若いご婦人を一人泊めておられますね。ハーロー嬢ですよ、マダム。上におられるのですか」

「旦那様、旦那様、恐れ入ります[女は俺の姿に心を奪われているなと、俺はそう思ったよ]。ハーロー嬢との仰せですね。確かに、そのような若いご婦人がここには泊まっておられます。でも、でも …… 」

「でも何だとおっしゃるのです。会わねばならんのですよ、私は。一つ上の階ということですね。お骨折りは無用です。お部屋は自分で探します」と、俺は階段へ向かって歩き出そうとしたのだ。

「旦那様、旦那様、ご婦人は …… ご婦人はお留守なのです。外出なさっておられまして、田舎のほうへお出でなのです」

「田舎ですと …… 留守ですと …… 有り得ないことだ。奥さん、そんな話では私には通りませんよ。彼女には会わねばならんのです。生死に関わる用件があるのです」

「本当でございます、旦那様。ご婦人はお留守なのです。本当に、旦那様、あの方は出掛けておられるのです」

そこで、彼女はベルを鳴らし、「ジョン、お願い、降りて来てちょうだい」と叫んだ。そして、「本当ですわ、旦那様、ご婦人はお留守なのです」と言っていた。

ジョンが降りて来た。この家の主だったが、女の無遠慮な馴々しさからして、主人の職工の一人くらいを予想していたのだよ、俺としては。

「ねえ、あなた」と、女は言っていた。「ハーローさんが外出なさっているのを、殿方は信じてくださらないのよ」とだ。

俺の上等な衣装を見て、ジョンは腰を屈めた。そして、「失礼ですが、旦那様、確かにご婦人は外出中です。今朝六時には町を出られました。田舎のほうへですが、お医者様の勧めなのです」と言うのだ。

それでもなお俺は、ジョンのにせよ上さんのにせよ、どちらの言葉も信じようとしなかったのだ。「確かなのだよ。彼女が外出しているはずはないのだ」と、俺は言った。「ひどく具合が悪いと聞いているんでね。馬車で出掛けることは出来ないのだよ。ベルフォード氏のことは知っているだろうな、君」

「えゝ、旦那様。光栄にも、ベルフォード殿のことは存じ上げております。病床のお友達を訪ねて、田舎へ向かわれました。土曜日にお出掛けになったのです、旦那様」

この点も貴公の下宿の者からウィルに伝えられていたのだが、俺は、上京次第すぐに貴公に会いたいと、ウィルを使いに出していたのだよ。

「なるほど。ベルフォード氏は、彼女の具合がはなはだしく良くないと、一筆認めてくれたのだよ。だとすると、彼女が外出中などということはどうして有り得るのだね」

「あゝ、旦那様、あの方のご容体はひどく悪いのです。本当に重体なのです。馬車までお歩きになるのもやっとのことでした」

俺は考えたよ。ベルフォード自身も俺の到着時刻については何も知らないのだ。昨日の俺の手紙を受け取っているはずもない。そして、それほど重体であれば、彼女が外出するなんてことは有り得ない話だ、とな。

「彼女のお手伝いはどこかな。お手伝いを呼んで来てもらおう」

「あの方のお手伝いと申しますと、旦那様、看護婦でして、他にはいないのです。それで、看護婦さんもあの方と一緒に出掛けております」

「まあ、良いだろう。君を信じるわけには行かないな。君には悪いが、独りで上がらなければならんな」と、俺は階段を上ろうとした。

すると、ジョンは真顔になり、やや敬意の薄れた表情でほざくのだよ。「旦那様、ここは手前の家でして、それに　…　」とな。

「それに何だというのかね、君」と俺は言ったが、この時には、彼女が上にいることを疑わなかったのだ。「会わねばならんし、また、会うつもりでもいる。そうする権限があるのだよ。私は治安判事でね。捜索令状を持っているのだよ」

そう言うと、俺は上がって行った。連中が後に続いたが、ブツブツ呟き、ひどく狼狽しているのだ。

俺が行き着いた最初のドアには錠が下りていた。俺は軽く叩いてみた。

「ご自分のお部屋の鍵は、旦那様、あの方が持っておられるのです」

「内側でなのは疑問のないところだな、君」と、俺は言ったが、もう一度軽くノックをしながらだ。そして、もしも彼女が俺の声を聞けば、臆病で柔和なその気質からして、慌てふためくことだろうし、俺は耳をそばだてているわけでもあり、正体を露呈するはずだと確信していたため、大きな声でこう言ったのだ。「ハーロー嬢がいらっしゃるものと確信

しているのですよ。最愛のマダム、ドアを開けていただきたい。ほんの一瞬で良い。貴女の前に通していただきたいのです」とだ。

だが、返事も慌ただしい音も俺の耳に届きはしなかったのだ。そして、あそこの連中が非常におとなしくしているので、俺は次の部屋へ歩を進めた。すると、鍵が外側に差し込んであったので、ドアを開け、部屋中を見渡し、控えの間も覗いて見た。

これほど無礼な紳士はこれまで見たこともないと、亭主が言っていた。

「いいかね、君」と、俺は言ってやった。「ひとつ忠告しておくが、少し慎みを持つことだな。さもなければ、君がこれまで一度として習った覚えのない教えを、私のほうから授けることになるだろう」とな。

「旦那様、一人の男を本人の自宅で辱めるというのは、紳士らしい振舞いとは申せませんですね」　亭主が言っていた。

「それじゃあ、ひとつお願いしておくがね、君、自分の肥しの山で勝ち鬨を上げたりするのは止めることだな」と、俺は言い返してやったよ。

俺は錠が下りていたドアのところへ戻った。「我が愛しのハーロー嬢、どうかドアを開けていただきたい。でなければ、破って開けますよ」と、強く押したため、ドアは再び激しい音を立てた。

亭主は青くなっていた。怯えて震えながら、ひどく浮かない顔付きだ。そして、上の階にいるボディス作りの職人の一人に呼び掛けていたよ。「ジョゼフ、降りて来てくれ。すぐにだ」とな。

ジョゼフが降りて来た。お獅子のような顔のにやけた男だ。ずんぐりして背が低く、もじゃもじゃ頭で、刈り込みをしたオークの木みたいなのだ。そこで、ジョンの大将は一層いかつい顔付きを装ってみせたわけだが、俺のほうではただ鼻歌交じりに他の部屋を残らず見て歩き、廊下の壁を拳骨で叩いてみたのだ。秘密のドアでもありはしまいかとな。そして、次の階へと階段を上がったのだが、ずっと歌いながらだ。ジョンとジョゼフ、それに、スミスの上さんが震えながら俺の後に続いていた。

そこで、俺はぐるりと回りを見渡し、ドアの開いていた二つの寝室に入った。控えの間や廊下を調べ、もう一つの部屋を鍵穴から覗き込んでみた。「いやはや、ハーロー嬢の姿はどこにもないぞ。どうしましょう、私、どうしましょう、私、と娘たちならこう言うところだ。これで彼女も嘆き悲しむことになるだろう。遠く離れたところにいるのをな」

俺がこんなことを口にしたのは、果たしてここの連中が令嬢の身の上話を知っているのかどうか、それを探るためのことだったのだよ。そして、スミスの上さんから予想どおりの答えを得たわけだ。「そのようには思いませんわ、旦那様」というのだよ。

「どうしてでしょうか、スミス夫人。私がだれか、ご存じなのですか」

「見当はつきますわ、旦那様」

「だれだとお考えですかな」

「お名前は、ラヴレース様でしょうね。疑いございませんわ」

「まさにそのとおりですよ。しかし、そんなにうまく見当を付けられたのは、どうしてなのでしょうね、スミスの奥さん。これまで一度も私と顔を合わせてはおられないでしょう。どうです」

ここで、ジャック、俺はお世辞を引き出そうとしたのだよ。そして、得損なってしまっ

たのだ。
「言い当てるのは簡単なことでございますわ。貴方様のような殿方はお二人とはいらっしゃいませんもの」
「お上手ですな、スミスの奥さん。しかし、良い意味ですかね。それとも、悪い意味ですかね」少なくとも、この女が口にするのは〈ハンサム〉という言葉だろうと、俺は思っていたのだ。
「ご想像にお任せいたしますわ」
これは、自ら墓穴を掘ることになったな、と俺は思ったよ。
「何とまあ、スミスの父さんよ、お前の女房は才女じゃないか。お前さん、これまでに一度だってそのことに気づいたことはあるのかね。ところで、ロヴィック未亡人はどこです、スミスの奥さん。縁者のジョン・ベルフォードの言では、非常に立派な女性とのことですね。ご在宅でしょうか。それとも、未亡人もハーロー嬢と一緒にお出掛けですか」
「やがてお戻りになるでしょう。あの方とご一緒ではございませんわ」
「結構でしょう。だが、親愛なるスミス夫人、あのご婦人はどこへ行かれたのでしょうか。また、いつお帰りでしょうかね」
「分かり兼ねますわ」
「ごまかしてはいけませんよ、スミスの奥さん。ごまかしはいけません」と、彼女の顎の下を撫ぜたものだから、ジョンは顎を引きつらせ、上唇を鼻のところまで突き出していたよ。「確か、ご存じのはずだ。だが、もう一階あるぞ。調べてみよう。上のほうにはどなたがお住みです。だが、待てよ。錠の下りた部屋がもう一つあるぞ」と、ドアを軽く叩きながら、「どなたですか、中におられるのは」と、俺は叫んだ。
「そこはロヴィック夫人のお部屋ですわ。夫人は外出中ですし、鍵を持って行かれたのです」
「ロヴィックさん」と、再びドアを叩き、「中におられるはずだ。どうか、ドアを開けていただきたい」と俺は言った。
ジョンとジョゼフがブツブツ囁き合っていた。
「密談は止めてもらおうかな、君たち。ヒソヒソ話すのは行儀が悪い。ジョゼフ、ジョンはお前に何と言ったのだ」
「ジョンですって」と、上さんが高ぶった口調で繰り返していた。
「これは失礼、スミス夫人。だが、手本の力というものがお分かりですね。貴女がご亭主にもっと敬意を示していたなら、私もそうすることでしょうね。少しばかり忠告をさせてもらいますが、夫への接し方に尊敬の気持ちが窺えない女というのは、夫を軽んじるよう他人に教えているのです。ほら、律義なジョンの大将、どうして帽子を取ってくれないのかね、この私に。あゝ、そのつもりなのだな、帽子を被っているのならな。だが、お上さんの前では絶対に被らないわけだな、お前さんは。そうだろう」
「愚弄や嘲りは止していただきましょう」と、ジョンが叫んだ。「結婚している夫婦はすべて、私たちと同じくらい幸せに暮らしてもらいたいものですよ」
「私の願いも同じなのだよ、君。だが、この首をやっても良いぞ。君たちに一人でも子供がいたらな」
「どういうことでしょうか、それは」

「いるのかね。さあ、答えるのだ。いるのか、いないのか」
「まあ、いないのでしょうね。でも、それが何だとおっしゃるのです」
「それが何だと言うのか。他でもない。こういうわけだ。女房との間に子供の出来ない男は、ジョンと呼び捨てにされるのを我慢していなければならないということだよ。子供が一人か二人いれば、主人のスミスと呼ばれることになるのさ。一言ごとに膝を曲げたお辞儀、あるいは、少なくとも微笑みの一つは添えてだよ」
「大変に剽軽なお方ですのね、旦那様は」と、お上が答えていた。「思いますに、もしも夫か私のどちらかに、私の存じておりますどなた様かと同じくらいに責めを負わなければいけないところがあるといたしますと、そのように朗らかになどしてはいられないでしょうね」とだ。
「おや、そういうことですと、スミスの奥さん、あなたたちとの付き合いを余儀なくされた者にとっては、いよいよ不幸な話というわけですね。だが、私は朗らかなどではありませんよ。悲しんでいるのです。あゝ、どこへ行けば見つかるのでしょうね、愛しのハーロー嬢は」
「我が愛するハーロー嬢「と、四階への階段の登り口で呼び掛けたのだ」。上におられるのなら、どうかお願いだ、返事をしてほしい。上がって行きますよ」
「旦那」と、亭主が言った。「降りていただきましょう。この階段を登ったところは下男部屋と仕事部屋です。それに、もう一階ありますが、そこには、旦那の探しておられる人などおりませんのでね」
「上がって行って、ハーロー嬢がおいでかどうか調べましょうか、スミス夫人」
「どうぞ、ご随意に、旦那様」
「それなら、止めておこう。彼女がいるのなら、あんたはそんなに言うとおりにはしてくれないだろうからね。
君たち全員にこうまで付き添ってもらい、恥じ入るばかりだ。私の知るかぎりでは、君たちは最も礼儀正しい商売人だな。感心なジョゼフ君よ」と、俺が突然に肩を打ったものだから、奴は飛び上がっていた。「君、賭をしたことはあるのかね。ニタニタ笑いを競ってだよ」と、俺は尋ねてやった。というのも、やっこさん、俺のことが気に入らないわけではないとみえて、そののっぺりした顔を一方の耳からもう一方の耳まで裂くように口を広げると、歯を出してみせたのだが、その歯ときたら、親指の爪みたいに幅が広くて黒いのだよ。「だが、邪魔ではなかったかね。君、一日の稼ぎはいくらなのだ」
「日に半クラウンは稼ぎますよ」と、驚かされたこともあり、奴は得意げに、また、不機嫌さも交えて言っていた。
「じゃあ、ほら、お前の一日分の労賃をくれてやろう。だが、これ以上私に付き添う必要はないからな。
さあ、スミス夫人、さあ、ジョン（スミスの親方と言うべきかな）、降りることにしようかね。そして、あの婦人の行き先について話してもらおう。それから、いつ戻るのかについてもだよ」
そこで、俺は先頭に立って階段を降りた。ジョンとジョゼフ（ジョゼフのほうはすでに解放済みだったのだが）、そして、お上が俺の後に続いた。見知らぬ男に愛想の良いところを見せるためだ。

俺は改めて二階の部屋の一つに入った。「是非、お宅に下宿したいですな。これほど世話好きな人間には、今まで会ったこともないのでね。どんな貸間がありますかね」

「一つもございませんわ、旦那様」

「それは残念ですな。ところで、ここはどなたのお部屋ですかね」

「自分のですよ、旦那」と、ジョンが不作法に答えた。

「お前さんのだというのかね、君。じゃあ、お前さんからいただこうじゃないか。これと寝室を一つ、それに、一人なのだが、召使用の屋根裏部屋があれば、それで私は満足なのだよ。お前の言いなりの家賃を払おうじゃないか。また、それらの便宜に対しては、一日半ギニーの割り増しを出すぞ」

「一日十ギニーでしたら、旦那 … 」

「黙れ、ジョン（スミスの親方と言うべきかな）。口を開く前に考えることだな。侮ってはいかんぞ、おい」

「階下へ降りていただきたいのです、旦那様」と、お上さんが言っていた。「本当に、旦那様は … 」

「ひどく無礼だ、と言うつもりじゃないでしょうね、スミス夫人」

「確かに、旦那様、それに近いことを申し上げるつもりだったのです」

「おや、それは良かったですね、あんたを遮って。そのような言葉は、あんたよりは私の口に似つかわしいものですからね。だが、婦人がお戻りになるまで、あんたのところに泊まらねばならないな。そうしなければいけないと、私は確信しているのだよ。だが、店のほうであんたに用があるかもしれないから、その件は向こうで話すことにしよう」

俺が降りて行くと、連中は懸命に俺と歩調を合わせ、ついて来るのだよ。

店に入ると、椅子もスツールも見当たらないので、俺はカウンターの後ろに回り、アーチ状になっている、彫刻を施した一種の天蓋の下に腰を下ろした。この手の誇り高い商人連中が、豪華な壁龕の飾りに負けまいとして、しばしば誂えるものだが、一方、自分たちが飯の種にしている連中に供するものといえば、おそらく、一脚の組み立て椅子なのだろう。この商業重視の国家においては、小売商の権威たるやかくのごとしというわけだよ。

俺は周りを見渡し、また、頭上を見上げ、この席が大いに気に入ったことを連中に話した。そして、ジョンは一度でもこの特上の座席を占めることを許されたことはあるのかどうか、尋ねたのだ。

多分、あるでしょうと、奴はひどく不機嫌な様子で言っていた。

「それでなのだな。それでそんなにも彫刻みたいな格好をしているわけだな、君は」

ジョンはえらくむっつりとした顔を俺に向けていた。だが、奴の従者のジョゼフと俺の従者のウィルは、それぞれ拳を口に当て、笑いを堪えようとして、われわれにくるりと背を向けたのだ。

俺は尋ねたよ。何を商っているのか、とな。

髪粉に石鹸に嗅ぎタバコだと連中が言っていた。それに、手袋と靴下も、とな。

「さあ、ひとつ私が客になろうじゃないか。ウィル、石鹸は不足しているかな」

「左様でございますね、殿様、一個か二個なら構わないと存じます」

「半ダース渡してもらおう、スミスの奥さん」

品物を渡すためには、俺のいるところへ入らなくてはいけないと、お上さんが言ってい

た。「どうか、カウンターから出てくださいませ、旦那様」と言うのだ。

「そいつは駄目だね。店をいただくことにするのでね。どこにあるのかね、品物は。万一、客が来た時のためにもな」

お上は俺の頭の上のほうを指差したが、堪えられるものなら、ニヤニヤ笑ったりはしなかったのだと言わんばかりに、口を窄めて見せていた。俺は手を伸ばしてガラスの容器を下ろすと、ウィルに六個渡した。「そら、しまっておくのだぞ、おい」とだ。

ウィルは歯の抜け落ちた口を開けて、ニタニタしながらしまっていたが、奴が歯を無くしたのは俺のせいだということがあるので、良心の呵責を感じて、「ジョゼフ、ここへ来てくれ」と、俺は言った。「来いと言ったら来るんだよ、さあ」

あいつは両手を後ろに回し、大股に歩いて来た。半ば喜び、半ば渋々とだ。

俺は突然あいつの首に腕を巻きつけた。「お前のペンナイフを出すんだ、ウィル。早くだよ。畜生め、どこなんだ、お前のペンナイフは」

「あゝ、主よ」と、刈り込みをした木みたいな頭の野郎が言っていた。俺の腕から頭を外そうともがくのだが、その間、俺のもう一方の手は奴の忌々しい顎を抑えつけているのだ。まるで、奴の歯をすっかりはぎ取ろうとするかのようにだよ。

「たっぷりと代金は払ってやるんだよ、お前。そんなに暴れるもんじゃないぞ。ペンナイフだよ、ウィル」

「あゝ、主よ」と、ますますもがきながら、ジョゼフが叫んだ。そして、ウィルの剪定ナイフが差し出された。というのも、この与太公は田舎では庭師をしているのだよ。「手元にあるのはこれだけでございます、旦那様」

「最高だよ。歯茎を切開するのにはな。この野郎、どうしてそんなに暴れるんだ」

察するに、スミスの親方とお上さんとしては、ジョゼフが連中の用心棒だということもあって（実際、あいつに一層注意を向ける気になったのはこのためなのだが）、俺がジョゼフの喉に狙いをつけるのを心配したのだろう。連中が悲喜こもごもの表情で近寄って来たので、俺はあいつを放してやった。

「私はただ」と、俺が言った。「この与太者の太い歯を二、三本引き抜きたかっただけなのだ。私の従者の顎にはめ込んでやるためにな。それに、その代金は払ってやるつもりだったのだよ。誓って言うぞ、ジョゼフ。払うつもりなのだよ、私は」とだ。

ジョゼフは耳をぴくつかせ、両手を使って、もじゃもじゃの髪の毛を出来るだけ落ち着かせようと撫でつけていた。そして、笑って良いのか怒って良いのか分からないという様子で、俺を眺めていたが、一、二度間の抜けた顔を俺に向けた後、店のもう一方の隅へゆっくり歩いて行った。なおも髪を撫でつけつつ、俺に向かって頷きながらだ。そして、親方の傍らに立つと、くるりと向き直り、こんなことを呟いていた。俺は滅法腕っ節が強いので、自分を締め殺してしまうかと思った、とだよ。それから、腕を組み、髪の毛の逆立った頭を振りながら、俺が紳士で良かったが、でなければ、自分としてもこんな侮辱に甘んじるつもりはないのだ、と奴は付け加えていた。

ラピー(三三)はどこにあるのかと、俺は尋ねた。お上がその場所を指差した。お上が秤にかけようとするのを断り、俺は帆立て貝の殻一杯分を取り出すと、自分の煙草入れに詰めたよ。そして、「ところで、スミス夫人、手袋はどこですかね」と、俺は言ったのだ。

お上が見せてくれた。そこで、俺は四組を選び、もう一度注意を向けてほしいと言わん

ばかりの様子をしているジョゼフに指を広げさせた。
戸口のところで呆気にとられていた女の客が、スコットランド製の嗅ぎタバコを求めて入って来たので、俺が応対することにした。この娘はひどく不器量だった。それで、その旨を伝え、でなければ、奢ってやるところなのだが、と言ったのだ。娘は腹を立て「自分のことを不器量だと考えている女は一人もいないのだよ」、小銭を投げてよこした。俺はそれを自分のポケットにしまい込んだよ。
ちょうどその時だが、戸口のほうを見ると、じっと見詰めている者たちに向かって、「どういたしましたの、皆さん」と言わんばかりに、下男を従えた綺麗で上品な婦人が覗き込むところが目に入ったのだ。そこで、俺はカウンターの中から飛び出し、婦人のところへ走りよった。そして、婦人は立ち去ろうとしていたのだが、その手を取って店の中へ引き入れると、自分は商いを始めたばかりなので、客になっていただきたい、と頼んだのだよ。
「何を売っておられるのでしょうか」と、笑みを浮かべながら、しかし、少し驚いた様子で婦人が言った。
「テープにリボン、絹のレース、ピンに針です。行商をしておりましてね。髪粉に付け黒子、石鹸、靴下、ガーター、嗅ぎタバコに針山ですよ。そうじゃなかったかね、スミスの上さん」
そんな具合に、婦人を徐々にカウンターのほうへ誘い、かいがいしく役に立とうという素振りを見せながら、俺自身は急いでカウンターの中に入ったのだ。「上等な手袋と石鹸がございますよ、マダム。ラピー、スコットランドもの、ポルトガルもの、そして、あらゆる種類の嗅ぎタバコを取り揃えております」
「そうね」と、婦人は大層機嫌良く言った。「お若い新米さんを一度は励まして上げましょうね。さあ、アンドルー」と、自分の下男に向かってだ」、あなた手袋が一組必要でしょう」というのだ。
スミスの上さんが指差してくれた手袋の包みを下ろし、男のところまで出向くと、俺自ら手袋を合わせてやったのだ。
「広げたって駄目さ」　俺が言った。「お前さんの指が太鼓のバチに負けないくらい堅くて曲がらないんだ。押し込むんだよ　…　不器用な奴だなあ。これだけ綺麗な婦人の後ろに、これだけ不作法な下男がついて来るとは驚きだ」とな。
男には笑う力もなかった。ジョゼフのほうではひどく喜んでいたが、察するに、俺がアンドルーの歯を二、三本拝借して、あいつの顔を立てるよう期待してのことだろう。スミスの父っつぁんも上さんも、自分たちに端を発した冗談でもあり、皆と一緒になってそのおかしさを楽しんでいる様子だった。
男は手袋が小さすぎるのだと言った。
「突っ込むんだよ、こん畜生め」　俺が言った。「おやおや、こいつめ、猫ほどの力もないんだな、お前さんは」。
「いえ、いえ」と、笑いながら奴は言っていた。「旦那様のお腹を痛めることになりますよ」とだ。
「お前も忌々しい奴だな。突っ込めと言ってるだろう」
奴は手を突っ込み、手袋の横の部分を裂いてしまったのだよ。
「ウィル」と、俺は言った。「お前の剪定ナイフはどこだ。誓っても構わないが、お前さ

んのその忌々しい掌を削ってやりたくてうずうずしていたのだよ。だが、ほら、もっと大きいのをやろう。屋敷に戻ったら、試してみるんだな。そして、もしもお前にそんなものがいるならの話だが、もう一方のやつは恋人にでも繕ってもらうんだ。だから、両方を取っておくんだな」とだ。

婦人はこの気まぐれを笑っていた。俺の下男、スミスの上さん、ジョゼフもだ。ジョンでさえも、笑っていたのだ。もっとも、その無理に拵えた表情からして、俺のことはかろうじて気に入ってくれたようにしか見えなかったのだがね。

「マダム」と、俺は言った。そして、カウンターの中へ入り、カウンター越しにお辞儀をしながら、「さあ、ご自分のものを何かお求めいただきたいですね。懇切丁寧なことではだれにも負けないつもりですし、どこよりもお安くいたしますよ」とだ。

「それじゃあ、ポルトガルの嗅ぎタバコを六ペンス分いただきましょう」と、婦人が言っていた。

連中がその置き場所を示してくれたので、俺のほうから婦人に手渡した。そして、婦人が支払いをしようとした時、開店に際し、お代はいただかない旨を話したのだ。

下男に親切を施すとしても、自分にはそうしてはいけないと、婦人が言っていた。

「では、喜んで」と、俺は言った。「私ども商人は、生意気な真似をしてはいけませんからね。そうだろう、スミス夫人」とだよ。

俺は婦人の六ペンスを自分のポケットに入れた。そして、彼女の手を取ると、戸口の辺りに出来た人だかりに彼女の注意を向け、奥の仕事場へご同行いただくよう頼んだのだ。

彼女は懸命に俺の手を振りほどき、これ以上は留まりたくないと言うのだよ。

そこで、俺は頭を下げ、心からの歓迎の挨拶を述べ、謝意を表し、またのお引き立てをお願いした。

彼女は笑いながら去って行った。そして、アンドルーが後に続いたのだが、この男は俺に向かって見事なお辞儀をしていた。

人だかりを目にして、俺も慌て始めたが、急速に数を増して行くのだよ。そこで、戸口まで駕籠を呼ぶよう、ウィルに命じた。

「さて、スミス夫人」と、俺は真面目腐った口調で言った。「ハーロー嬢が外出中だというのは、心から残念に思いますよ。彼女がどこにおられるのか、教えてはくださらないのですね」とだ。

「本当に、お教えするわけにはまいらないのです、旦那様」

「教えるつもりはないという意味ですね。私の来訪のことは、彼女には分かるはずもないのです。私は昨夜上京したばかりですからね。ひどく体具合が悪かったのです。彼女の非情さのせいで、胸が張り裂けそうだったのですよ。あんたが私の話に通じているのは疑いのないところですね。彼女に伝えてください。私は明朝、都を出なくてはならないのだということをです。だが、召使を寄越して確かめることにしましょう。三十分間の話し合いの場を拵えていただけるのかどうかをです。というのも、都を離れ次第、フランスへ渡るためですが、ドーヴァーへ向けて出発することになっているからなのです。私の運命を一手に握っている、その彼女から呼び戻されないかぎりはですよ」

そこで、三十六シリング相当のポルトガル金貨を放り投げ、スミスの手を取ると、親交を深める時間がもっとないのは残念なことだと述べ、正直者のジョゼフには「あばよ」と

声を掛け（俺が横を通ると、自分の歯は依然として危険に晒されているのだと言わんばかりに、奴は口を窄めていたのだよ）、また、スミスの上さんに向かっては「さようなら」と別れを告げ、彼女の麗しい下宿人に宜しくと挨拶を残し、俺はひとくさり鼻歌を歌ってやった。そして、駕籠がやって来たので、ヒョイとばかりに飛び乗ったのだが、戸口の周りにいた連中は俺のことが気に入ったと見え、陽気な紳士だよ、まったく、と一人が叫び声を上げていた。こうして俺は、指示したとおりに、ホワイツへ運ばれたというわけだ。

そこに着くとすぐ、俺はウィルに命令した。衣装を着替えに行き、黒い鬘を被り、口を結んで正体を隠すよう、そして、スミスの店の辺りをうろつき、令嬢の動きに関する情報を掴むようにとだ。

∴　∴

俺が自分自身のことについて、こんな恥知らずな話をして聞かせるのは、貴公が俺に食って掛かり、鉄面皮だの何だのと、言いたい放題に罵るようにするためなのだよ。というのも、まず第一には、つい先頃まで具合の悪かった俺としては、生きていることが嬉しかったわけであり、また、次には、我が魅惑の君が不在ということですっかり目的を挫かれてしまい、その点や、ジョンの父っつぁんの不作法さをひどく腹立たしく思っていたこともあり、出会うものすべてに怒りを覚えるのを避けようにも、他に方法がなかったからなのだ。さらには、令嬢が不在だということ、それも、朝の六時に出掛けたという点からだが、貴公が描いて見せるほどに令嬢の具合が悪いということは有り得ないと気づいて、すこぶる嬉しかったのだよ。このため、俺は一層機嫌を良くしたわけだ。それに、俺は承知しているのだ。女は常に朗らかで愉快な男を好むものだということをな。愛しの君自身にしても、俺の快活な気質や生気溢れる態度を喜んでいたわけだし、もしも、彼女を捜して俺が奥の仕事場でシクシク泣いていた、などと聞かされたなら、彼女は今以上に俺を軽蔑していただろうと思うのだよ。

さらに言えば、次の点にも俺は気づいていたのさ。つまり、あの家の連中がきっと俺に関して大変な考えを抱くに違いないということにだよ。野蛮で残忍な冷血漢、まったくの女たらしと見做し、疑いもなく、俺がライオンの爪と虎の牙を備えているところを見たがっているということにだよ。従って、俺がいかに無邪気で愉快な人物なのかを見せておくのは、賢明な策に他ならなかったのだ。ジョンやジョゼフに類した連中を手なずけるためにもな。降りて来るよう、お上さんが連中に呼び掛けたことからしても、お上さんが俺のことを危険な男と見たのは明らかなわけだからな。ところが今、ジョンと俺は手を結び合ったわけだし、スミスの上さんも、俺が人間の顔や手や容貌を備えており、他の人間と同じく直立して歩き、しゃべり、笑い、冗談を言うことを目の当たりにしたのだ。また、ジョゼフにしても、俺が奴の顔から歯をもぎ取るような話をしながら、何らの害も及ぼさないことを知ったわけだから、この次に俺が訪ねた際には、連中のだれもかれもが俺に対して、アンドルーの手袋のはまり具合と比べても、はるかに寛ぎを覚え、楽しんでくれることになるのだ。そしてわれわれは、知り合って一年は経つみたいに、すっかり懇意になることだろう。

われわれの母さんのところへ戻ると、俺は改めてあの女、そして、あそこの妖精全員を

集め、呪いの言葉を浴びせかけた。また、サリーとポリーのどちらに対しても、今も顔を合わせるのは断っているのだ。忌まわしい逮捕劇のことをわめき散らし、例のやりて婆さんには次のように言ってやったのだよ。この世でも最も清らかな美徳が損なわれ、俺の評判が永久に傷ついてしまったのは、そして、俺が結婚をして女性の中でも最も優れた者の愛情を享受することにならなかったのは、母さんとあの娘たちのせいなのだ、とな。

母さんは、俺を宥めようとして、気に入りそうな新顔を紹介すると言い出した。俺がサリーに会おうとしないからで、サリーの奴は死ぬほど悲しんでいるというのだ。

「その新顔というのはどこにいるのだ」俺は叫んだ。「拝見しようじゃないか。もっとも、ハーロー嬢以外のどんな顔を拝んだところで、嬉しくなどないがね」とだ。

「折れようとしないのですわ」母さんが答えていた。「まだ、言い付けどおりになろうとはしないのです。やっと枷を着けたばかりなもので、お客様のほうから出向いていただかねばならないというのですからね、まったく。そればかりか、たっぷり口説いてもらわないといけないのですわ」とだよ。

「ほう、それは面白そうだな。すぐにその娘のところへ案内してくれ」と、俺は言った。

俺は母さんの後について行ったわけだが、その娘というのは、だれかと思えば、他でもない、あのヒキガエルみたいなサリーだったのだよ。

「こん畜生め、くたばってしまえ。お前なのか。お前が新顔だというのか」と、俺は言ったよ。

「あゝ、愛しい愛しいラヴレース様」あの女が叫んだ。「どんなわけでも、貴方が来てくださるのは嬉しいわ」そう言うと、あん畜生め、俺の首に飛びつき、猫みたいにまとわりついて離れないのだよ。そして、「ねえ、何を下さるかしら。十五分ほど貞淑に振る舞って、貴方のクラリッサさんをそっくり真似て見せるわ」と言うのだ。

俺のほうはすっかりベルフォード扱いだ。愛しの君に対するこの種の侮辱には耐えられなかったのだ（何しろ俺は、貴公がどう考えるにせよ、根は柔和で寛大な性質をしているからだよ）。だから、こんな形で我が愛しの君の名を口にしたことに対し、これ以上ないほどの熱を込め、あいつを呪ってやったのだ。ところが、あの小悪魔はたじろいだりはしなかった。泣き叫んだりすすり泣いたり、祈ったり懇願したり、悲鳴を上げたり失神したりして見せるのだ。我が愛しのお嬢さんの、あれだけ巧みな物真似というのは、俺としても見たことがないくらいだった。実際、俺は釣り込まれてしまいそうだったのだよ。令嬢を再び目の前にしていると言っても構わない感じだったものだからな。

あゝ、女というのは……手管に長けた女というものは……構ってなどいられたものじゃないよ。連中の悲しみや心配にしても、確かに、初めのうちは本物なのかもしれないさ。だが、その嵐に身を任せていると、間もなく勢いも衰えて微かな囁きに変わり、よく調律されたヴィオルの調べのように、耳をくすぐることになるのだ。そして、サリーを見て分かることだが、手管というものは実に巧みに本性の代役を演じるのが常だから、その違いを見分けるのが容易ではなくなるのだ。俺の信じるところ、実際、クラリッサ・ハーロー嬢こそは、この世でもただ一人の女性ということだろう。彼女が十八番にしているヨブの言葉を借りて（彼女と同様、俺だって聖書の文句を引用することは出来るのだよ）、「わたしは正当に扱われていない」(三四)と言える女というのはな。

連中は我が麗しの君のことをしきりに尋ねていた。連中の話では、君は滅多に近寄らな

いそうだな。立ち寄っても、えらく真面目な態度で、五分と留まることがなく、ただただハーロー嬢を褒めそやし、彼女の辛い運命を嘆くばかりだと言っていた。要するに、君は連中を軽蔑しており、格言めいた言葉に溢れているというのだ。そして、連中に言わせると、間もなく君が道に迷い、結婚に至るのは疑いない、とのことだったよ。

貴公には似合いの姿といったところじゃないかな。貴公は祝福された道を辿っているわけだが、貴公の為すべきこととしては、その道を歩み続ける以外にないのだ。それに、成し遂げなければならない仕事ときたら　…　もしも、引き返すような真似をすれば、ここの魔女たちがロシア皇帝のコサック兵と同じ役目を［ポルタバ（三五）でのことだったと思うが］果たすことになるのだ。いつでも発射出来るように銃を構えたコサック兵たちは、正規兵たちの後方に配置されていたのだが、正規兵が前進を続け、勝利を収めるのでなければ、撃ち殺してしまうためだよ。そうなると貴公も、自分が仕立て上げたいかがわしい女一人一人から、嘆かわしいことこの上ないほどに蔑まれてしまうのさ。そして、あゝ、ジャック、その場合、貴公の敵対者の数は、恐ろしいほど多くなるということだな。

俺としては、ウィルの情報によって自分の行動を律しようと思っている。この愛しのお嬢さんには是非とも会わねばならんし、また、会うつもりでもいるのだからな。ただ、遅くとも二、三日で戻ると、M卿には約束してあるのだよ。俺が体調を崩してからは、えらく大事にしてくれるものだからな。

俺が期待を寄せているのは、明日の朝には都を離れる予定という、俺の残した言葉によって、令嬢の帰りが早まることだ。

ところで、貴公の気晴らしになるようにと考え、筆を執った次第だ。人の死というものに関して、大層重要な立場にあるわけだからな。それに、貴公の召使が毎日往復している様子だから、多分、明日にはもう一通送ることが出来るだろう。愛しの君と俺との面談についての詳細を添えてというわけだが、この面談を心から熱望しているのだよ、俺は。

手紙　四十八

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

八月二十二日　火曜日

筆を進めねばならんが、自分自身の気晴らしのためだ。休むことが出来ないのだよ。爽快な気分をもたらす休息が得られないのだ。つい今し方も、恐ろしさのあまり目が覚めたところなのだ。夢のせいでずいぶん心を乱されるものなのだな、人間様も。

我が愛しの君と面会しているような感じだったのだ。彼女はどこまでも優しく、偉ぶらず、寛大だった。正式喪服を着用して彼女のところへご機嫌伺いにやって来たM卿、セアラ夫人とベティ夫人、そして、俺の従姉妹、二人のモンタギュー嬢たちの力を合わせた調停に屈し、彼女が俺の有利を図ってくれたのだ。婦人たちは長い裳裾を引いて歩き、M卿は長くて黒いマントを引き摺っていた。連中が彼女に語ったところによると、彼女に対する俺の罪への遺憾の意を表し、俺を許してくれるよう彼女に懇願するため、このような衣裳でやって来たというのだ。

俺自身は跪いていたように思う。手には剣を握っているのだが、鞘に納めるなり、この

心臓を突き刺すなり、彼女のいずれかの命令に従おうとしているのだ。

まさにその時、俺の考えでは彼女の従兄弟のモーデンだが、突然、抜き身を手にして窓から飛び込んで来たのだ。「死ぬのだ、ラヴレース」と、その男が言った。「今この場で死んでしまえ。そして、地獄に落ちるのだな。従姉妹の受けた不当な仕打ちを、結婚によって真面目に償う気持ちがないのならな」とだよ。

俺はこの侮辱に憤慨し、立ち上がろうとしていたように思うが、その時、大きな黒いマントを手にした卿がわれわれの間に割って入り、俺の顔の上にそのマントを放り投げたのだ。すると、うっとりと聞き惚れている俺の耳にこれまで何度となく響いた、あの美しい声をした我が魅惑の君がすぐさま、卿のマントに覆われた俺を両腕で包み込み、「あゝ、見逃してください。見逃すのです、私のラヴレースを。そして、見逃すのです、あゝ、ラヴレース、私が愛する従兄弟のモーデンを。私にとってこんなにも大切な人たちのどちらかが、あるいは、両方が倒れることで、私の苦悩をさらに募らせるようなことにはしないでいただきたいのです」と言ったのだよ。

これを聞き、彼女の心優しい執り成しに魅了された俺は、彼女をこの両腕で抱き締めたいと思ったのだが、そんな考えを抱いた直後、かつて俺が目にした中でも最も天使らしい姿をした者が、透き通った白い衣を全身に纏い、雲に包まれて降りて来たのだ。その雲が裂け、上方の天空が姿を現したが、そこには金色のケルビムや光り輝くセラピム（三六）たちが群がっており、すべての者たちが「ようこそ、ようこそ、ようこそ」と、彼女に呼び掛けているのだ。そして、我が魅惑の君を取り巻くと、彼女を連れてセラピムの住む天界へと昇って行ったのだ。そして、すぐに裂けた雲が閉じ、俺は輝かしい人影もろともに彼女の姿を見失ってしまった。そして、気が付くと、彼女の真っ青なローブが俺の腕に抱かれていたのだが（銀で打ち出した星の模様がびっしりと飾られているのだ）、彼女を引き止めたいと願って掴んだものだ。だが、それが、この手に残された我が最愛のクラリッサのすべてというわけだよ。そして、その後（口にするのも恐ろしい話だが）、彼女のために天空が開いたのと同じように、俺の足下の床が沈み、俺はエルデンの穴（三七）よりももっと恐ろしい穴に墜落し、底も見えないままゴロゴロと転げ落ち、パニック状態で目を覚ましたのだ。そして、三十分間は、まるで俺の夢が現実のことであったかのように、たっぷりと心を乱されてしまったのだよ。

こんな夢想の類いで貴公を煩わせているが、許してくれるかな。そんな話で分かってもらえるのは、ただただ、寝ても覚めても、我がクラリッサは常に俺と共にあるということだ。だが、今まさにウィルが到着だ。昨晩の十一時から十二時の間に、奴の奥様が実際に下宿に戻り、はなはだ体調は良くないが、現在は在宅中だということを知らせに、ここまで走ってきたのだよ。

彼女の元へ馳せ参じることにする。ただ、何か粗野な態度とか荒々しい態度とかで、彼女の病状を悪化させないためにも、話し掛けるに当たっては、鳩のような彼女にも負けないくらい静かに、そして、穏やかにしようと思っている。

あの女を愛していることは、あゝ、神に仕える天使の皆さん、
証人になっていただこう。私には愛しい女であることを。
失明すべきさだめにある者にとっての日の光よりもさらに愛しく、

死を恐れる者にとっての命にもまして愛しいのだ（三八）。

駕籠が着いた。我が愛しの君の元へとひとっ飛びだ。

手紙　四十九
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

忌々しいかぎりだよ、俺の運命も。またもや望みを挫かれたのだ。スミスの店に着いたのは八時頃だった。お上さんが店番をしていた。

「やあ、お馴染みさん、元気かい。私の恋人が上にいるのは分かっているのさ。彼女に知らせるんだね。私が来ていて、お目通りの許しを待っているとね。そして、否とは言わせないつもりでいるということをだよ。お傍に伺う際は、最高に恭しい態度を取るし、彼女の好みの人物に同席してもらうということ、また、許可なしには、彼女の衣装の縁に触れさえもしないということを伝えるのだよ」

「本当でございます、旦那様、考え違いをしておられますわ。あのご婦人はここにはおられませんし、この近くにもいらっしゃらないのです」

「調べれば分かるさ。おい、ウィル」と、奴を呼び寄せ、俺は囁きかけた。「家の中にいないのであれば、令嬢は近所にいはしないか、どうにかしてそいつを知ることは出来ないものか（階下にいてはまずいので、戸口から目を離さないようにしてだぞ）、ひとつ試してみるのだな」とだ。

ウィルが頭を下げ、そして、出て行った。俺は、それ以上勿体をつけたりはせず、上の階へ向かったが、今回付き添ったのはお上さんだけだった。

前回錠が下りていて、今度も錠の掛かっていた部屋は別だが、俺は一つ一つの部屋に入ってみた。そして、愛情の籠もった声で我がクラリッサに呼び掛けたのだが、静かで物音一つ返って来ないことからして、その階に彼女はいないと確信するに至ったのだよ。しかし、例の情報を信じ、彼女があの家にいることは疑わなかったのだ。

そこで、俺は階段を二度昇り、最初の部屋を捜したのだが、ハーロー嬢の姿は見当たらないのだな。

「で、どなたですかね、この部屋に住んでおられるのは」と、もう一つの部屋の戸口のところで足を止め、俺は尋ねた。

「ご主人に先立たれました淑女ですわ、旦那様。ロヴィック夫人です」

「おゝ、我が親愛なるロヴィック夫人ね」　俺が言った。「ロヴィック夫人のお人柄は詳しく知っているのだよ。縁者のジョン・ベルフォードを通してね。是非ロヴィック夫人に会わねばならん。どうかロヴィック夫人、ドアをお開けいただきたい」とだ。

夫人がドアを開けてくれた。

「失礼いたしますよ、マダム。ご勘弁願います。私の話はお聞き及びでしょう。貴女は世界でも最も優れた女性を崇拝しておられるのです。親愛なるロヴィック夫人、お教え願いますよ。彼女はどうなっているのですか」

「お気の毒に、あの方は昨日お出掛けになりました。貴方様を避けるためですわ」

「どうしてでしょうね。私がここに来るのはご存じなかったのです」

「貴方がご病気から回復なさっていることをお聞きになりますと、あの方、貴方がお見えになるのを心配なさったのです。あゝ、あなた、何て残念なことなのでしょうね。こんなにも立派な殿方が、神様のご親切に対しまして、このように仇をもって報いようとなさるのですからね」

「貴女は素晴らしい方ですよ、ロヴィック夫人。その点は承知しているのです。縁者のジョン・ベルフォードから説明を受けていますからね。それに、クラリッサ・ハーロー嬢は天使ですよ」

「確かにハーローさんは天使ですわ」と、夫人が答えていた。「そして、すぐにも天使の仲間入りをなさいますわ」とだよ。

この手の女性に冗談は禁物なのだよ、ジャック。

「本当のことを教えていただきたいのです、ロヴィックの奥さん。この愛しの淑女にはどこで会えるのでしょうか。誓いましょう。彼女を怯えさせもしなければ、怒らせもしないつもりです。彼女に頼もうと思うのは、ただ、十五分の半分の時間、話を聞いてもらいたいということだけなのです。そして、そのようにしてほしいというのなら、それ以上彼女を悩ますつもりは絶対にないのです」

「あの方にとりましては」と、後家さんが言っていた。「貴方と会うのは死ぬほど辛いことでしょうね。昨夜、あの方はご在宅でした。本当のところを申し上げますが、一日中寝ておられるほうが良い状態だったのです。息を引き取るために戻って来たとのお言葉でしたわ。そして、貴方のご訪問を避けることが出来ないといたしますと、貴方から逃げ出すわけにもまいりませんし、きっと貴方の目の前で息を引き取ることになるはずだともおっしゃっておられました」というのだ。

「それでいて、今朝早くにまた出掛けるというのですか。そんな話はあるものでしょうかね、奥さん」

「そうなのです。あの方は二時間もお休みにはなりませんでした。貴方を恐れてのことですわ。恐怖心があの方に力を与えたわけですが、その恐怖が消えました暁には、お体に響くことになるのでしょうね。それで、ご訪問の件を考えれば考えるほど、お受けするためにこの場に残るわけには行かないご自分に気づかれて、駕籠をお呼びになると、だれも知らないところへと行ってしまわれたのです。でも、私の考えでは、河岸まで運んでもらうおつもりだったのだと思います。船にお乗りになるためですわ。馬車には耐えられないお体なのです。昨日もひどく困っておられましたからね」

「だが、これ以上話を続けるのに先立ちまして」と、俺が言った。「もしも彼女が外出しているのであれば、上の階と下の階のすべての部屋を私が覗いてみるのに、ご異存はないはずですね。実際に彼女は在宅中だと知らされているものですからね」とだ。

「本当にあの方はいらっしゃらないのです。どうぞ、お気の済むようになさって構いませんわ。でも、スミスの奥様と私とが駕籠のところまで、あの方のお供をしたのです。支えて上げねばなりませんでしたわ。それほど弱っておられましたからね。あの方はこう言っておられました。〈私はどこへ行けば良いのでしょうね、ロヴィックさん。私に行けるところはどこなのでしょう、スミスさん。残酷な、残酷なお人です。あの人がもう一度やって来るようでしたら、私がそんな呼び方をしていたとお伝えください。あの人のほうでは

私に与えようとなさらないものですが、神様があの人に心の平安を与えてくださいますよう、お祈りいたします〉とですわ」

「何という優しい人なのだ」　俺は叫んだよ。そして、目を伏せると、ハンカチを取り出したのだ。

後家さんは泣いていた。「知らずにいたかったと思いますわ。あれほど優れた淑女、そして、あれほどの苦しみを味わわれた方は。自分の子供のように、私にはあの方のことが愛しく思われるのです」と言うのだよ。

スミスの上さんも泣いていた。

そんなわけで、彼女と会うのを今回は諦めることにしたのだよ。望みを挫かれたことがあり、また、彼女の病状についての連中の説明のこともあって、俺としてもはなはだ遺憾に思っているところだ。

「願わくは」と、俺は言った。「彼女が受けた不当な扱いの埋め合わせを、この私に任せていただきたいのです。彼女には恩知らずな真似をして来ました。貴女にはお話しする必要もありませんね、ロヴィック夫人。私が彼女にどれほどの害を加えたのか。また、親戚の無慈悲さのために彼女がどれほど苦しんでいるのかということもです。彼女の心を痛めておりますのは、そのことなのですよ、ロヴィック夫人。その無慈悲さなのです、スミスさん。彼女の一族はこの世でも最も無慈悲な一族なのです。そして、あの愛しの君は、私との面会や和解を拒むことによって、その一族との血の繋がりをあまりにもはっきりと示しているわけなのですよ」とだ。

「あゝ、貴方のお言葉は何一つとして、このご婦人には当てはまりませんね」　後家さんが言っていた。「あのように気立ての好い方には、一度だって出会ったこともございませんわ。あのように啓発的な信仰心は見たこともありませんし、あれだけ寛大な性質の方には会ったこともないのです。あの方はいつだってご自分を責め、お身内の方々への弁解をしておられるのです。それに、貴方のことですが、あの方は許しておられます。貴方のためを思い、貴方があの方にお与えになるもの以上の幸せを、貴方が掴まれることを願っておられるのです。どうしてなのでしょうか。どうしてあの方を静かに逝かせてくださらないのでしょう。それこそ、あの方が望んでおられることのすべてなのです。お見受けいたしますに、貴方は薄情なお方とは思われません。お身内の方々がだれ一人として目を向けようとなさらないお気の毒なご婦人ですのに、このように追い詰め、苦しめるような真似が、貴方にはどうしてお出来になるのでしょう。そのことを思いますと、あの方がお気の毒で、心が痛むのです」とだ。

そして、後家さんは再び涙を流していた。スミスの上さんも泣いていた。俺の椅子の座り心地が悪くなってくるのだ。何度か席を代えてみたよ。そして、ロヴィック夫人がなおも重ねた言葉、そして、見せてくれたもののせいで、俺としてはますます居心地が悪くなってしまったのだ。

「お気の毒にあの方、昨夜は具合が悪かったのですが」と、後家さんが言った。「貴方があの方をこのように苛まれますのに接しての瞑想を、ご本の中に書き込まれたのです。その写しを持っております。少しでも効果があるように思うのでしたら、読んでお聞かせするところでしょうが」とだよ。

「私一人で読ませてもらえますか、ロヴィック夫人」

後家さんは写しを渡してくれた。ハーロー家の気性を映すタイトルがついており、寛大な精神から出たにしては、耐えられないものだ。持ち帰りたい旨を俺は願い出た。後家さんは同意したが、ベルフォードの旦那にお見せするという条件付きだ。従って、ベルフォードの旦那さんよ、読みたいのなら、ここでお読みいただくことにしよう。

我が心の敵に追い詰められて（三九）

八月二十一日　月曜日

主よ、さいなむ者からわたしを助け出し
不法の者から救い出してください。
彼は心に悪事を謀っているのです。
舌を蛇のように鋭くし
蝮の毒を唇に含んでいます。
主よ、主に逆らう者の手からわたしを守り
不法の者から救い出してください
わたしの歩みを突き落とそうと謀っている者から。
その者がわたしに罠を仕掛け
網を張りめぐらし
わたしの行く道に落とし穴を掘っています。
どうか、わたしをお守りください。
わたしに対して仕掛けられた罠に
悪を行う者が掘った落とし穴に陥りませんように。
敵はわたしの魂に追い迫り
わたしの命を地に踏みにじり
とこしえの死者と共に闇に閉ざされた国に住まわせようとします。
わたしの霊はなえ果て
心は胸の中で挫けます。
苦難がわたしを襲う日に
御顔を隠さないでください。
わたしの生涯は煙となって消え去る。
骨は炉のように焼ける。
打ちひしがれた心は、草のように乾く。
わたしはパンを食べることすら忘れた。
わたしは呻き
骨は肉にすがりつき
荒れ野のみみずく、廃墟のふくろうのようになった。
屋根の上にひとりいる鳥のように
わたしは目覚めている。
わたしはパンに代えて灰を食べ
飲み物には涙を混ぜた。

あなたは怒り、憤り
わたしを持ち上げて投げ出された。
わたしの生涯は移ろう影
草のように枯れて行く。
主よ、主に逆らう者に欲望を満たすことを許さず
たくらみを遂げさせず
誇ることを許さないでください。

後家さんに言わせると〈瞑想〉ということになるが、これを読み終わった後、俺はこう言ったのだ。「いやはや、ロヴィック夫人、私もあのお嬢さんにはずいぶんと手厳しく扱われているように思いますよ。この中で言っておられるのが、すべて私のことだといたしますとね。どうして私が彼女の心の敵になるというのでしょう。彼女のことは身も心も愛しているというのに　…

彼女に言わせるなら、私は不法の者、主に逆らう者となりますね。そのとおりであったことは認めましょう。しかし、私は後悔しているのです。そして、彼女に与えた損害に対する償いが自分の手で行えるよう、ひたすら願っているのです。

〈落とし穴〉〈罠〉〈網〉というのは、おそらく、結婚のことでしょう。しかし、彼女との結婚を私が望むのは罪なのでしょうか。そのように考える女性がだれか他にいるのでしょうか。また、昼夜を徹して傍らで囀ってくれる連れ合いを得るよりも、〈荒れ野のみみずく〉とか〈屋根の上にひとりいる鳥〉になろうとする者がいるというのでしょうか。

彼女に言わせると、〈パンに代えて灰を食べ〉たとのことですが、勿論、とんでもない間違いなのですよ。それに、〈飲み物には涙を混ぜた〉ということですが、えらく涙もろいお嬢さんだと、ハーロー嬢は別にしても、こんな告白をする者にはだれにでも、そう言ってやりたいものですね。

彼女は、〈主に逆らう者に（哀れな私のことを言っているのでしょうね）欲望を満たすことを許さない〉よう、そして、私の〈たくらみを遂げさせず、誇ることを許さない〉よう祈りつつ、結びの言葉としております。疑いもなく、私は誇り高ぶるでしょうし、それも無理からぬことなのです。光栄にもこのような妻に恵まれることが出来るのならです。それに、私の〈欲望〉とやらがこれほど高潔な目標を掲げているというのに、どうして〈主に逆らう者〉と呼ばれねばならないのか、また、誇り高ぶっても構わないように、私の誠実な〈たくらみ〉が〈遂げられる〉よう望むことをどうして許していただけないのか、私には分からないのです。

だがここで、ロヴィック夫人、ひとつお尋ねしたい。〈屋根の上にひとりいる鳥〉という言い回しに何か含みがあるのは疑いのないところですが、愛しの君は今この瞬間も（本当のことを話していただきますよ）、スミスさんの屋根裏部屋に隠れているのではないでしょうね。どうですか、ロヴィック夫人。どうなのです、スミスさん、この点は」とだ。

それは違いますと、二人は確約していた。また、彼女は本当に外出しており、行き先は分からないと言うのだよ。

女たちの話からばかりではなく、俺を責めるべく並べ立てられたこの聖句の寄せ集めによっても引き起こされた無念な思いを、俺としては、分かってもらえるだろうが、ジャッ

ク、何とか晴らしたい気持ちだったのだ。他にもいくつか、気紛れで軽薄なことを俺は口に出したのだが［胸にあったことのすべてだよ］、同じ考えからだったのだ。ところが、後家さんのほうでは、こちらの思惑どおりにはさせてくれないのだよ。俺を掴まえて離そうとせず、分別に溢れた真面目な諫めの言葉によって、前にも言ったことだが、ひどく心穏やかでない気持ちにさせるのだ。スミスの上さんも時々言葉を挟んでいた。それに、例の二人の道化師、ジョンとジョゼフが居合わせないものだから、話を茶化してみせるきっかけもなかったのだ。そして、挙げ句には、二人の女が手を結び、令嬢に会う考えは一切捨てさせようと、俺の説得に懸命に努力するのだよ。しかし、俺としても、それに耳を貸すわけには行かなかったのだ。逆に、部屋を一つ貸してくれるよう、スミスの上さんに頼んだよ。彼女と会えるまでの間だけで良いし、仮に、ただの一、二日、あるいは、三日間のことにすぎなくても、一年分の部屋代は払うし、また、面会が終わり次第、すぐに部屋を出るつもりだから、とな。だが、連中のほうでは遠慮させてもらいたいというのだな。そして、たとえ一ヶ月間に及ぶとしても、俺が立ち去らないうちは、令嬢もあの家に寄りつかないものと確信している、というのだ。

これは俺には嬉しい言葉だった。彼女の病状について、俺に信じさせたいと思っているほど重症でないように連中は考えていることが分かったわけだからな。しかし、俺はこのヘマのことには触れずにおいたのだ。似た失敗を重ねないよう、連中に警戒を強めさせたくなかったからな。

要するに、俺は連中に向かって、どうあっても彼女に会わねばならないし、会うつもりでもいると話したのだ。ただしそれは、彼女に備わるような美点に対して心が捧げ得る敬意と崇拝の念すべてを伴ったものになるはずであり、また、心の底から渇望している機会が得られるまでは、日の出から日没に至るまで祈祷とか礼拝とかが行われている、ロンドンおよびウェストミンスターのすべての教会を巡り歩くし、連中の家にも亡霊のように付き纏うつもりでいると言ったのだ。

これを彼女に伝えるよう、俺は連中に命じ、こうして、われわれの真面目な会話は幕を閉じたというわけだ。

俺は連中に暇乞いをして、階下へ降り、駕籠に乗り込むと、リンカンズインへ運んでもらった。そして、チャペルが開くまで庭をぶらついた。それから、中へ入り、愛しの君が入って来るのを一目見たいと、祈祷まで居残ったのだが、無駄に終わったのだ。しかしながら、俺もひたすら心を込めて祈ったのだよ。俺の守り神か彼女自身の守り神か、いずれかの手によって彼女があそこへ導かれて来ることをだ。そして、事実、俺はこれまで以上に待ち焦がれているのだ。この崇拝すべき女性の足下に跪くことをもう一度許してもらえるよう切望しながらな。そして、もしもチャペルで彼女と顔を合わせたとしたら、あるいは、あの姿を目に留めたとしたら、俺は堅く信じているのだが、彼女の前にひれ伏すのを堪えることは出来なかっただろうということだ（神聖な祈りの最中であり、何千人もの者たちが見ている前であってもだよ）。また、彼女の許しを求め、騒々しく訴えさえしたことだろう。キリスト教徒に似つかわしい行いであり、従って、実行に移すのはその場に相応しいことなのだ、とな。

礼拝が終わると、俺は再び駕籠に乗り、もう一度スミスの店へ運んでもらった。あの家で彼女の意表を突くことになればとの願いからだ。だが、貴公の友には望み得ないものだ

ったのだよ、そのような幸せというのはな。俺の時計では一時間半だったが、奥の仕事場で待ってみた。そして再び、女どもからたっぷりお説教を受けることになったのだ。ジョンも今では俺に対して概ね丁重になっている。俺の真剣な話しっぷりによって、また、令嬢に対する尊敬の念を表明したことで、奴も少しは心を動かされたのだろう。われわれの一件が丸く収まることを三人揃って願っていたが、それでも、彼女が病を克服するのは無理だということ、そして、彼女は悲しさに打ちひしがれているのだということを言い張っていた。察するに、君からの指示なのだろうな。

俺があそこにいる間に、個人的な使いの者によって一通の手紙が届けられた。連中がしきりに隠したがっている様子なものだから、彼女宛のものではないかと、俺も疑いを持ったのだよ。封印と宛名書きをちょっと見せてくれるよう、俺は頼んだ。開封せずに返すからと約束してな。

俺は一目見て、筆跡と封印に見覚えがある旨を連中に伝えた。彼女の姉からだ(ア)。そして、彼女の喜ぶような知らせであってほしいと、希望を述べておいた。

連中も一緒になって、心の底から同じ願いを口に出していたよ。そこで俺は、手紙を連中に返し、丁重に暇乞いをして立ち去ったのだ。

だが、あそこにはすぐ戻るつもりでいる。というのも、この女たちに対する俺の慇懃な振舞いが、それを連中が報告した場合、これだけ切望している恩恵の確保につながるようにも思われるからだよ。それゆえ、この手紙は封をしないでおこう。次回のスミス宅訪問の結果を話して聞かせるためだ。

∴　∴

ちょうど、貴公の召使が訪ねてきたところなので、これを届けることにする。また、これに続けて、すぐにもう一通送ることにしよう。それはそうと、哀れなベルトンはどんな具合か、知りたいものだな。奴にはくれぐれも宜しく伝えてくれ。

手紙　五十

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

八月二十二日　火曜日

臨終を迎えるのを今か今かと見守っているこの哀れな男のことでは、俺もずいぶん気を揉んだわけだし、病や苦悶ゆえの恐ろしい光景も目の当たりにしていたものだから、憂欝な出来事のメモを作ることしか出来なかったのだが、われわれ全員にとっての教訓とするためにも、そのメモからもっと正確な報告書を作成するつもりでいる。筆を執る意欲が戻ってくればの話だがね。

❦　❦　❦

(ア) 手紙六十を参照のこと。

戻ったのだよ、その意欲が。日曜日と昨日の貴公の手紙を受け取ったことで、怒りの気持ちが意欲を再燃させたわけだが、貴公が俺との信義を守らなかった点に関しては、極めて真剣な言葉をもって貴公を非難すべき根拠が、その手紙から得られるということだ。そして、貴公の信義違反に、俺の案じているような結果が伴う場合には、この件に関する俺の考えをさらに知ってもらうことになるだろう。

好意を向けてくれるよう、令嬢の心を動かしたいという貴公の願いについてだが、それを本心からのことだと思われたがっているのだとしたら、スミスのところでの貴公の笑止千万な振舞いも、彼女に伝えられる際には、極めて〈首尾一貫した〉ものに見えることだろうな。違うかな。彼女のように真面目で信心深い性質の人間にとっては、危険な病、少なくとも、激しい症状を呈した病から、そのように回復したばかりだというのに、反省するわけでも悔いるわけでもない〈夫〉などよりは、〈墓場〉のほうがもっと望ましいのだという、そんな彼女の考えを固めさせることになるのは確かだろう。

お気の毒な、保護する者とていない令嬢のことがはなはだ心配になる。土曜日にはひどく塞ぎ込み、衰弱しておられたため、部屋に入って言葉を交わすことも許されないほどだったのだ。それに、床に就いていて然るべきだという時に、下宿を追われるというのだからな。あれだけの天使に対して貴公と同じように振る舞うことの出来る、そんな人間だけが犯し得る残虐行為の一例ということだよ。

鏃にかえしの付いた矢をすでに胸に受けているおとなしい鹿のように、貴公から隠れるための場所だけを求めて死の闇に赴こうとしている気の毒な淑女を、ただ不逞な気紛れのためのみに（貴公自身の企図した目的には一切適わないし、まったく逆の結果を招くわけだからな）、あちこち追い立ててみたところで、邪悪で鉄面皮な貴公の遊び気分を映し出すことにはならないのだなどと、そんな台詞を吐くことが貴公には出来るのだろうかな。己自身を省みた時にだよ。

だが、この件は貴公自身の良心に委ねることとし、俺としては、おそらく貴公が他のどんなものよりも効果的に心を動かされることになるような、そんな場面を俺のメモから描いて見せようと思うのだ。何しろそれは、いつの日にか貴公自身が主役の一人を務めねばならないようなものであるし、ごく最近には、俺の考えだが、貴公自身にとって不安の種になったと思われる場面だからな。そしてそれは、貴公の最も親しい友人の一人で、ここ四日間、死の苦しみに喘いでいた者の、その最期の場面なのだよ。というのも、ラヴレース、精一杯浮かれている最中にも、この真理を、疑うべくもないこの真理を貴公の記憶に刻み込んでおいてほしいのだが、われわれが盛んに謳歌している人生にしても、生きているとは到底言い難く、単なる息つぎの場所にすぎないのだということ、また、最も長年月に及んだ場合でも、その終わりには、

ベルトンと同様、貴公も死なざるを得ないのだ

ということをだよ。

哀れな男の世俗的な事柄に関して、われわれがどのような処置を行ったのか、ターヴィルを通じて貴公も承知のはずだ。また、あいつの不幸な妹を呼び寄せ、一緒に住んでもらうようにしたことについてもな（あいつの死期がこれほど近づいていたとは、われわれも

ほとんど思いつかなかったのだよ)。従って、話を先へ進めることにする。土曜の夜、奴の家に着くと、奴ははなはだ具合が悪い様子だったのだが、ちょうど抱き起こされて肘掛け椅子に腰を下ろし、看護婦とモーブレー（かつて病人の部屋に顔を出した中でも最も不作法で、最も冷淡な輩だが）とに支えられているところだった。その間、奴が戻るベッドの寝心地を好くしようと、女中たちが骨折っているのだが、奴の心のほうはその十倍も心地好くないのだよ。そして、その真の原因というのは、奴にとっては羽毛が少しも柔らかくはないからなのだ。

妹から知らされたのだが（降りて来てくれるよう、妹を呼んだのだよ。奴の具合を尋ねるためにな)、奴が盛んに俺と会いたがっていたこともあって、俺が入って行くと、連中は揃って大喜びだった。「ほら、ほら、トミー、頼もしいジャック・ベルフォード君のお越しだぞ」と、モーブレーが言っていた。

「どこだ。どこにだよ」　哀れな男が言っていた。

「あいつの声だよ。階段を上がって来るぞ」と、モーブレーが叫んだ。

有頂天になった奴は、俺が入って行くと立ち上がろうとしたのだが、危うく椅子からつんのめって落ちるところだった。そして、姿勢を立て直すと、俺のことを一番の親友、最も親切な友と呼んでいたが、ワッとばかりに泣き出すと、「あゝ、ジャック。あゝ、ベルフォード。このざまを見てくれ。ひどい衰弱ぶりだ。こんな哀れな姿に、それも、こんなにも早くなってしまうとはな。俺だと分かるか。君の哀れな友ベルトンが分かるかな」と言うのだよ。

「そんなに変わっちゃいないぜ、ベルトン。君が考えているほどにはな。ただ、弱っているようだな。ひどく弱っているぞ。残念だな」

「弱っているのさ。弱っているんだよ、本当に、親愛なるベルフォード」と、奴が言っていた。「それに、そんなことが有り得るのならだが、体以上に気持ちはもっと弱っているんだよ」とだ。そして、さめざめと泣くのだよ。「でなければ、こんな女々しい真似などしないさ。これまで何一つ恐れるものもなかったこの俺が、こんな乳飲み子まがいの姿を晒す羽目になるとはな。恥じ入るばかりだよ。だが、軽蔑しないでくれ。なあ、ベルフォードよ、頼むから軽蔑はしないでくれな」とだ。

「他人の苦難を思って涙を流すことの出来る男に対しては、俺はいつだって敬意を抱いてきたのだし、これからもそのつもりだよ」　俺は言った。「また、その手の男は、自分自身の苦しみにも無感覚ではいられないものなのさ」とな。

とはいえ、哀れな男の感情の激しさを目の当たりにして、俺も心の動揺を表に出さずにはいられなかったのだよ。

「今度ばかりは」と、野蛮なモーブレーが言っていた。「貴公も我慢のならない奴だと思うぞ、ジャック。気の毒な俺たちの友人がもうかなり落ち込んでいるというのに、お前はここで、奴をいよいよ落ち込ませようとするのだからな。落胆している時にこんなふうに慰め、奴と一緒になって女々しい涙を流すなんて、そんなやり方はないだろう。絶対にないと俺は思うぞ。あのラヴレースがここにいれば、そう言って聞かせるはずだよ」

「お前は情の通じない手合いなのだよ」と、俺が言った。「こういう場に顔を出すのには相応しくないのさ。我が身のこととして味わうまでは、その場の恐ろしさを感じることも出来ないだろうからな。それに、感じる暇が出来たとすると、この命を賭けても構わない

が、お前がはなはだ哀れな人間だと考えている連中と同じくらいに、自分も哀れな振舞いに及ぶことだろうよ」とだ。

それから、哀れな病人のほうへ向き直り、こう言ったのだよ。「なあ、ベルトン、涙というのは女々しさの印などではないのさ。それどころか、慈悲深さの印なのだよ。涙は張り詰めた心をほぐしてくれるが、その優しく自然な救いの手がなければ、心はきっと張り裂けてしまうだろう。

悲しい時には泣くんだな（と、シェークスピアが言っている）。
―悲しみの口を封じると、
胸がいっぱいになって、張り裂けてしまうぞ(四十)。

俺は知っているのだよ、ベルトン。貴公が詩人たちの名句を暗唱しては楽しんでいたのをな。だが、今ではその美しさを味わう力もないに違いないな。ただ、この野卑で浅はかなモーブレーに何か言われたところで、恥じ入るには及ばないのだ。ユウェナリスが言っているように(四一)、〈涙は人間の特権〉なのだからな」

「少なくとも、時宜に適った言葉だよ、ベルフォード。この〈女々しい弱気の虫〉のことで俺の顔を立ててくれるのは親切な話だ。俺のところへ来てからというもの、モーブレーはずっと非難がましくもそんな言い方をしていたのだよ。また、そうすることで（奴が楽しんでいるような、あれほどの壮健さであった場合、自分がどう考えたかはともかくとして）、奴は確信させてくれたのだよ。飲み友達というものは、その狭い交際範囲での出来事以外には何も感じないということをだ」

「結構だよ、結構だよ。君の思いどおりにやると良いんだ、ジャック。俺だってベルトンのことは、お前に負けないくらい大切に思っているのさ。だけど、命を賭けても構わないが、弱気のご機嫌を取るのは、弱気を募らせることになるとしか思えないのだな」

「われわれの人間性に関わりを持つような重大な関心事に心を動かされるのが弱さだというのなら」と、俺は言った。「お前が正しいことになるのかもしれないな」とだ。

「ホルボーンの丘(四二)を登って行く奴らを大勢目にしているが、お前たちのどちらよりも男らしく振る舞っていたぜ」と、無骨な男が言うのだ。

「あゝ、けどな、モーブレー」と、哀れな男が答えた。「その手の恥知らず連中というのは、俺が長く苦しんで来たような体の病で気力を奪われてはいないのだよ。お前も嫌な男だな。これまで、いつもそうだったよ。それにしても、こんな折に思い出せるのは自分を咎めること以外になく、また、それを長く心に留めておくことは出来ないし、もしもの場合、自分の運命はどうなるのか、それが分かっているというのは」と言いかけ、言葉を中断して俺のほうに向き直ると、「君の同情が欲しいのだ、ジャック。傷ついた俺の魂にとっては香油なのだよ。モーブレーは放っておくのだ。死にかけている友達の心の痛みを感じることもなく、われわれ両名を笑っていれば良いのだよ」と言っていた。

冷酷無情な男はここで退室したのだが、ラヴレースまがいの態度だった。ただ、貴公に較べると間が抜けているのだ。欠伸をし、伸びをしてみせたのだが、スミスのところで貴公がやってみせた鼻歌の代りというわけだよ。

俺は哀れな男をベッドに移す手伝いをした。あいつはひどく弱っていて、その疲労に耐

えられず、気を失ってしまったのだ。あいつもこれでお陀仏なのかと、俺は本気でそう思ったよ。だが、奴が意識を取り戻し、医者もやって来て、安静にしておくよう忠告するので、俺は退室したのだ。そして、庭でモーブレーと会ったのだが、奴のほうでは、死に瀕しているベルトンと彼の懺悔のことよりも、達者なラヴレースとその軽薄な振舞いのことを楽しげに話していたのだ。

モーブレーの顔はもう一度見た。土曜の夜、床に就く前のことだ。早目に床に入ったのだが、あいつの浅薄で鈍感なのにはうんざりしてしまい、付き合い切れなかったというわけだよ。

考えても実に恐ろしい話だな。他の者と極めて厳格な … 何と呼んだら良いのだろうか … 〈友情〉と呼ぶには証拠が見当たらないわけだが … ある間柄で過ごして来た人間、相手の男に対する深い敬慕の念を装い、傍を離れるのが耐えられず、付き合うためならば、一気に百マイルも馬を駆るし、理由の善し悪しに拘らず、その男のためなら戦おうとしていた人間が、今では、心身ともに惨め極まりない状態にあるその男を目にしてもほとんど心を動かされることなく、平気で叱りつけるし、同情を寄せるよりは、嘲笑してみせるというのだからな。その理由というのも、自分が目にした処刑に向かう罪人（おそらく、酒のせいで無感覚になっているのであって、先立って患った病のゆえに惰弱になっているのではないのだ）の様子に比べ、その男のほうが己の感情に心を強く動かされているからだというのだよ。

こんなことを考えていると、友情に関して、また、貴公に対する友情が俺に求める事柄について、神にも似たハーロー嬢がかつて話してくれたことをはっきりと思い出したのだが、彼女はこう言っていたのだ。「これは確かなことですが、ベルフォードさん、いつの日にか貴方も納得なさるでしょうね。貴方が友情と呼んでおられるものは籾殻や切り株のように価値のないものだということをです。また、

美徳を礎としないもの

で、その神聖な名に値するものは一つとしてないということをですわ」とだよ。

日曜日の朝、哀れな男のたっての願いということで、俺は六時に上へ呼ばれて行ったのだが、あいつは恐ろしく苦しみもだえていた。「あゝ、ジャック、ジャック」と、まるで幽霊でも見たように狂乱の体なのだよ。「もっと近くに来てくれ」と、両腕を伸ばし、「もっと近くにだ。あゝ、ベルフォード、助けてくれ」と言うと、両手で俺の腕を掴み、こちらに向かって頭を上げてみせたのだが、両目がギョロギョロと奇妙な動き方をするのだ。「助けてくれ、あゝ、ベルフォードよ、助けてくれ」と、あいつは繰り返していた。

俺はもう一方の腕であいつを抱いた。「何から助け出すというのだい、ベルトン」　俺は言ったよ。「何から君を助け出すというのだ。君を傷つけさせたりはしないさ、どんな物にもな。一体、何から君を救わねばならんのだい」とだ。

恐怖心から回復すると、あいつは再びベッドに身を沈め、「あゝ、俺自身から救い出すのだよ」と言っていた。「俺自身の思いから救ってほしいのだよ。あゝ、ジャック、何てことだろうな。死んで行くのに、振り返ってみて慰めとなるような感慨一つとしてないのだからな。俺が過ごした人生のその一年を戻してもらえるのなら … たったの一年だけで良

いのだよ　…　そして、物事に対して今と同じ感じ方をさせてもらえるのなら、どんな物だってくれてやるぞ」とだ。

俺も出来るかぎりあいつを慰めようとしたさ。だが、道楽者というのは、死の床での道楽者の慰め役としてはお粗末なものだ。奴は俺を遮って、こう言ったのだよ。「あゝ、ベルフォード、俺の聞いたところでは、天晴なハーロー嬢が君を回心させたそうだな（そのために君は嘲笑されたとも聞いている）。そうあってほしいものだ。君は分別のある男だからな。あゝ、そうあってほしいものだよ。今こそ好機なんだ、君には。心身ともに元気溌剌としている今がな。だが、君の哀れなベルトンは、あゝ、君の哀れなベルトンは悪徳に耽っていたのだよ。悪徳のほうで見切りをつけるまでだ。そして、その惨めな結果を見るのだな。頭は鈍ってしまうし、意気消沈の有り様なのだよ。もしもモーブレーがここに居合わせて、俺を笑い者にするようであれば、次の点こそが絶望の原因なのだと、俺は打ち明けて見せるだろうな。つまり、神の〈報い〉というのは、俺の慰めとなるよう、〈慈悲〉が働くのを許すわけに行かないのだということをだよ。何しろ、あゝ、俺は大変な、実にひどいワルで、神の恩寵の申し出も馬鹿にして取り合わなかったものだから、とうとう神様のほうでもそれを永久に引っ込めることになってしまったのさ」とだ。

俺は思いつくかぎりの論拠を並べ立て、あいつを慰めた。そして、俺の言葉が大いに効果を上げ、その日の大半は、あいつの心を落ち着かせることになったのだ。また、頭が正常な折には、あいつは俺の手を握り締め、懐かしげに俺を見やりながら、次のようなドライデンの詩行を、記憶を頼りに暗唱していた。

あゝ、この命を失う恐れが減るならば　…
命はこの臆病な手の中で、まるで雪玉のように、
握り締めるにつれ、いよいよ早く融け去って行く（四三）。

というものだ。

日曜日の午後、あいつは君の様子を、また、ハーロー嬢に対する君の現在の行動について、しきりに尋ねていた。俺は君がどんな容体だったのか、そして、君がどれほど呑気に構えていたか、あいつに話して聞かせた。モーブレーのほうは、何物にも動じない君の強靭な心を喜び、ボブ・ラヴレースは見事な業物で、芯の芯まで鋼で出来ているのだと言っていた。そして、破廉恥な輩が口にしそうな、また、受けるに値することを願うのは破廉恥漢だけだという、そんな野卑な、しかし、心からなる賛辞を君に進呈していたのだよ。

だが、死に瀕した哀れなベルトンのこの時の言葉を耳にしていたなら、おそらく貴公も真面目になっていたことだろう。少なくとも一、二時間はな。

あいつはこう言っていたのだよ。「気の毒に、今の俺と同じく、ラヴレースが病の床に就き、回復は無理だとの思いが胸をよぎる時（今回の病では、そんな考えは浮かばなかったのだ。もし浮かんでいたなら、あんな軽率な行動は出来なかったはずだよ）、また、無駄に過ごしたこれまでの人生、つまり、ハーロー嬢の場合が特にそうだが、身を守る術もない無垢な者たちに加えた犯罪行為に思いを巡らす時、自分自身についてとか、過去の行いについて、奴はどんなことを考えるのだろうな。頭は鈍くなり、体も萎え果て、助けなしには身動き一つ出来ないのだよ。闇を彷徨う奴の心には、一筋の希望の光とて射すこともな

く、奴の良心は千人の証人の前に立つのだ。奴の苦痛は堪え難く、ダラダラと続く惨めったらしい命の残り滓を厭いながらも、わずか数時間のうちに、具合の悪さがさらに悪化するのを、否、最悪の状態に至ることを、そして、その最悪の状態が時を越え、未来永劫続くことを恐れるのだよ。あゝ、ジャック、そうなった時には、今奴の心のすべてを引きつけている、束の間にすぎない官能の満足というものを、奴はどんなふうに考えるのだろうな。奴に話してほしいのだよ、ベルフォード。話してやってくれ。自分の幸せさが分かっているならの話だが、奴がどれほど幸せなのかということをだ。奴の死にかけている哀れな友人と比べ、病から回復し、まだ機会を提供されているというのは、どれほど幸せなことかをだよ。その機会を得るためなら、世界を千もくれてやるつもりだぞ、俺は。俺の手中にあるのであればな」とだ。

俺はあいつの感想を、今あいつが置かれている状況に相応しいものとして、口を極めて褒め称え、そのように正しい方向へ心を動かされていることからして、いろいろと慰めが得られるはずだと話してやったのだ。

あいつはこれまでと同じ懺悔の口調で話を続けた。「俺もずいぶん不道徳な人生を送ってしまったが、俺たちは一人残らず同じことさ。力ずくで、あるいは、不正手段を用いることで実行可能となるようなどんな悪事を働いても、一度として良心の呵責を感じることはなかったのだ。無垢な心に罠を仕掛けたし、一番大切にしている身内のことですでに害を及ぼしてしまった相手への不当な行為を、すぐに鞘を離れたがる剣によって、機会があり次第、何のためらいもなく増大させていたのだよ。とはいえ、ラヴレースよりもモーブレーよりも、俺の取るべき責任は軽いのだと、内心では得意がっているのだ。何せ、俺の場合には、貴公がその手から俺を解放してくれたわけだが、例の忌々しい詐欺師を娶り（そして、そいつは長年に亘って、俺の知らないうちに、俺が他の者たちにもたらした災いのいくつかを、しっぺい返しとして俺自身の上に加えていたのだ）、田舎に引き籠もり、妻ということにしてその女と同棲することによって、あの連中とターヴィルが、また、ベルフォード、君すらが犯したかに思われる悪事の、その半分にも関わりを持たずにいたからだよ。恩知らずなトマシンについてだが、俺の受けるべき懲罰というのはあいつのことだったのだと思いたいのだ。だが、そうは言っても、貴公は次のように考えないかな。このような行い、また、あのような行い、そして、そういった行いだが　…　［と、あいつは極悪非道の行為をいくつか要約してみせたのだが、その実行に当たっては（はき違えた勇敢さ、そして、若さと酒の勢いに駆り立てられてのことだ）、われわれ全員が関係したものだよ］、これら数々の悪行は（今こそ、その正しい名で呼ばせてもらうことにする）、人間として、また、俺たちの良識や教育によって、クリスチャンとしての俺たちに求められるものだと教え込まれている、そんな義務のことごとくを故意に怠ったり、無視して得意がったりしていたことも合わせてだが、俺の心を落胆へ追い込むのに十分ではないと、貴公はそのように思わないだろうか。いや、いや、それで十分なのだよ。そして今、〈慈悲〉を願い、その有難いお力の効能を頼りにしようというのだ。それに劣らず輝かしい〈報い〉というあの力のほうは、俺が望みを抱くのは禁じているのだがね。どうしてこの俺に望みを抱くことが出来るというのだ。警告のすべてを侮ってきたし、ダラダラと長く患っていた肺の病から得られたかもしれない利点を活用するようなこともなく、すべてを最後の賭けに委ねたのだよ。見込みもないのに、回復することに期待を寄せ、後悔の念を払いのけて

いるうちに、とうとうその恩寵も拒絶されてしまったのだ。というのも、あゝ、ベルフォード、俺にはきちんと懺悔することも、祈ることも出来ないのだよ。心が頑になってしまい、絶望する以外にないのさ」とだ。

あいつはさらに何か言おうとしていたのだが、悲痛な思いと体力の消耗には勝てず、痛みにうずく胸に頭を垂れ、抑えることの出来ない涙を無情なモーブレーに見せないように努力していた。ちょうどモーブレーが部屋に入ってきたところだったのだよ。

前置きとして、冷淡な調子の空咳を一つすると、「悲しいね。実に悲しい話だよ、まったく」と、ベッドの片側に腰を下ろしたモーブレーが叫んでいた。俺はもう一方の側に座っていたのだが、奴の両目は半ば閉じ、上下の唇は反り返った鼻先へと突き出され、顎の先が「貴公の言い回しの一つを用いると」こわばっているため、奴を強く捉えているのは無感覚をもたらす眠気なのか、それとも、一心不乱な黙考のほうなのか、どちらとも判別し兼ねる有り様だったのだ。

「いかに心落ち着かないものとはいえ、素晴らしい教訓だよ、モーブレー」と、俺は言った。「本当にそうさ。いつ何時とも知れないが、いずれはわれわれ自身の身に起きることなのだ」とだ。

俺は八月十三日の貴公の手紙に書いてあった欠伸の発作のことを思い浮かべた。というのも、悪寒でもするみたいに体をくねらせ、震えながら、モーブレーが立ち上がったからだ。両手を頭上に伸ばしたが、貴公のような「うーん、うーん」という欠伸と一緒にだよ。それから、もう一度伸びをし、ブルンと体を震わせて正気に戻ると、時計を取り出しながら、「何時だ」と叫んだ。そして、忍び足ながらも大股で部屋を横切ると、階下へ降りて行った。そして、廊下で女中と出会い、次のように言っているのが聞こえて来たのだ。「ベティ、クラレットをなみなみと注いでもって来るんだ。お前の気の毒な主人とこの忌々しいベルフォードじゃあ、ヘラクレスみたいな男を塞ぎ込ませるのにも十分てもんだよ」とだ。

この後、モーブレーはわれわれの友人の書斎で無聊を慰めていたのだが、貴公も知ってのとおり、あそこは古典と劇作品が主で、リーの『オイディプース』中の一節を見つけたのだ。この際には極めてうってつけの一節だと、奴が言い張って聞かないものだよ。そして、死にかけている男を奮い立たせることになるとの考えから、胸を膨らませて入って来ると、あいつに読み聞かせたのだ。詩趣に富んでいて、美しいものだ。こういうのだよ。

太陽の沈む頃、真昼間にはただ小さくのみ見えた
物影が、この上なく長く恐ろしく映るように
死がわれわれの頭上を漂っているかに思う時
不安な心は一切の制限を飛び越えるのだ。
梟、ワタリガラス、コオロギが死の番人のように思われ
造化の女神の最も卑しい虫けらが神々しい息子たちを脅し
声の消え残ったものに他ならないこだまが
饒舌な亡霊となり、われわれを墓穴へと招く。
モグラ塚一つ一つが巨大なオリュンポスのごとくに思われ
馬鹿げた夢想家のわれわれは胸を波打たせて喘ぎ

想像力の重荷のゆえに汗ばむのだ(四四)。

これを見つけてきたということで、奴は褒めてもらえるように思っていたのだ。ところが、ベルトンは奴から顔を背け、「あゝ、ディック、これは死に瀕している者の考えることではないよ。そのうち君が感じるもので、それが今俺の感じているものならの話だが、君も納得することになるだろうな。君を待ち受けている災い、そして、君に付き纏っている災いは、想像の産物以上のものなのだということをだよ」と言ったのだ。

日曜の夜には二度あいつのところへ呼び出された。哀れなことにあいつは、過ぎ去った生涯への反省から、心が一番痛む時には、女たちと一緒にされるのを怖がるのだよ。女たちに言わせると、あいつの目が俺の姿を求めてギョロギョロ動くのだそうだ。「ベルフォード氏はどこだ。でも、彼をうんざりさせてしまうな」と、あいつが叫ぶ。「だが、足を運んでくれるよう頼んでくれ。でも、止そう。いや、頼む」というのが、疑心暗鬼で変わり易いあいつの命令だったのだ。また、連中もそれに応じて俺に声を掛けたわけだよ。

しかし、あゝ、あいつのために何が出来るというのだよ、このベルフォードには。あまりにも頻繁に罪深い時をあいつと共に過ごし、あいつにも負けないくらいに慈悲を必要としているベルフォードなのだからな。また、哀れな友に向かって、当てにするよう命じることの出来るものはそれしかないのに、その慈悲にしても、自らに対しては約束出来ずにいるのだよ。

われわれは何という外道なのだろう。この恐ろしい時に臨んで、われわれはどんな姿を晒すのだろうか。

一方にはハーロー嬢の輝かしい模範が掲げられ、もう一方では、この哀れな男の恐怖に満ちた最期の場面が繰り広げられても、俺の心に訴えるところがないとしたら、俺も救いようのない破廉恥漢に違いあるまい。もしも、貴公自身、この二つから利益を得ることがないとしたら、同じ穴の貉ということになりそうだな。

日曜の夜、最後に呼ばれた際のことだが、いくつか説き聞かせた慰めの言葉の中で、絶望にすっかり身を委ねたりしてはいけないということを話したのだ。あいつが不安に思っている事柄の多くのものは、現世での暮しの後に続くのは何なのか、その恐ろしいまでの不確かさに接した時に、最善の人間でさえも抱くに違いないものなのだ、とだ。「立派なクリスチャンで、詩人肌の聖職者(ア)によるものなのだが」と、俺は言った。「これは名言だな。

死の供まわりとしてさらに嘆かわしいものは他に見つからない。
病と痛みとが先触れを務め、後に続くのはただ闇ばかり(四五)。

というのだよ」とだ。

昨日（月曜日）の朝八時頃に行ってみると、あいつは少し落ち着いていた。俺が暗唱した二行の詩の作者はだれなのかを尋ね、もう一度俺に唱えさせるのだ。確かに嘆かわしい供まわりだよと、哀れな男が言っていた。その後、命の助かる見込みはないことや、死に

(ア) ベマトンのノリス師のことである。

際のことを考えると感じる恐怖について語り、そこから、来世に関する恐ろしい結論を引き出すものだから、俺も次のように話したのだ。「人間の本性の中には、死に対する極めて自然な嫌悪の気持ちがあるのだから、なあ、ベルトン、死を怖がる点で、また、死期が迫ってきた時に、用心深い心を満たす懸念の点で、君には風変わりなところがあるのだなどと、そんなふうに考えてはいけないのだよ。そうではなく、君が為すべきことは、そのような厳粛な折にはすべての人間が覚えるに違いない自然な恐怖心と、君がその点を心配するのは妥当な話だが、自分は不適格だという思いから胸を占めることになる、君特有の恐怖心とを、出来るかぎり区別することなのだよ。君の控えの間にあったコレクションの中から取り出して昨夜目を通し、俺のポケットに入れておいたものだが、『死を見据えて』の中で、パムフリットはこう言っているのだ［と、俺はその場所を開いてみせた］」

死そのものをなら、理性ある者は一人として恐れない
　生まれ落ちるのと同じく、われわれは
　確かに塵に帰らねばならないからだ
それは長々と重ねる年月の最後を記す点なのだ
　ただ、その後は何処へ向かうのか
　何処か、是非とも知りたく思うのだ
だが、人間の知力では明らかに示すことも出来ず
　われわれが震えおののくのはこのためだ（四六）

「だから、パムフリットも」と、俺は言葉を続けた。「君と同じように、この暗黒の状態にひどく不安を抱いていたのだよ。また、昨夜触れた立派な聖職者にしても、人間としての弱さ以外、自分を責めるべき点はほとんどなかった人物であり、俺の叔父の最期を見取っている時に、その『雑録』が叔父の蔵書と共に手に入ったわけだが、次のように詠っているのだよ。

為されねばならぬことなのだ、我が魂よ。だが、奇妙で
　陰気で不可解な変わり方をするのだよ
そなたが肉体というこの土くれの住いを抜け出し
　未知の　…　何処かへと　…　飛び去る時には。
そして、時はとこしえに動かず、そなたは
　何者なのか己にも解らぬ存在となり、その術も
　　知らぬままに生きるのだ。
驚くべき状態　…　無理もあるまい　…　死を思い
　あるいは、死者を目にして怯えるのも。
そなたはすっぽりと雲に包まれている。まるで、知識そのものに
　そなたとは相入れないものがあるかのように。

そして、この後に俺の暗唱した句が続くわけだ。

死の供まわりとしてさらに嘆かわしいものは他に見つからない。
病と痛みとが先触れを務め、後に続くのはただ闇ばかり。

となな」

「あゝ、ベルフォード、これで確信出来るのだが［と、深読み好きの不幸者は推理してみせたのだ］、われわれ人間というのは、どんなに良くても、実に惨めな生き物だということだな。しかし、俺のような道楽者の場合には、一体どうなるというのだろう。不道徳な生涯を送ったことで、この自然な恐怖心を一層強めているのだからな。直面すると、善人でさえ飛び上がってしまうというほどに、死が人間の本性にとって反感を誘うものであるのなら、官能と欲望の人生を過ごした人間にとって、また、人の最期について、俺は今それを目の前にしているわけだが、一度だって思い巡らしたことのない者にとっては、果たしてどんなものになるのだろうな」と、あいつは言うのだ。

これだけ筋の通った推論なのだよ。俺に何が言えるというのだ。俺が尚も申し立てたのは慈悲だった。慈悲だよ。〈限りのない〉お慈悲だ。もっとも、あいつが〈報い〉というものを繰り返しぶつけてくるものだから、ある意味では、その申し立ても声を潜めてしまったのだよ。そして、俺としては、あいつを思い出すよすがとなる善行の一つ、目立って立派な行いの一つもこの心の中に浮かばせてもらえるのなら、あいつの恐怖心と戦わせるためのことだが、どんな犠牲だって厭わないつもりだったのだ。

きっと貴公をうんざりさせることだろうな、ラヴレース。それも、長さも長さだが、それ以上に、話題によってだよ。ただ、まったくの話、病気が直ってからというもの、気に障るほどに貴公の気分は高ぶっているわけだから、憂鬱な話があり次第、その話題を長々と取り上げることで、貴公を常人のレベルまで引きずり下ろすべく努力しなければならないように思うのだ。それにまた、貴公も常日頃から大いに重んじていた相手でもあり、この哀れな男にまつわる事柄は、一つ残らず知りたがるに決まっているのだからな。それゆえ、初めと同じ調子で筆を進めるつもりだ。今は読みたくないということであれば、同じような事態が貴公に降り懸かる時まで、そして、その事態から生じる同じような思いが貴公を捉える時まで、良かったら、しまっておくことだな。そして、その時が来たら取り出し、二つの例をつき合わせてみることだよ。

あいつの切なる願いもあって、昨夜は夜通しの看病だ。哀れなものだよ、あいつも。夜の浅いうちは、俺が一緒のこともあって、あいつがどれだけ寛ぎを覚え、安全に思っていたのか、貴公に話して聞かせるのは無理な話だな。「溺れる者は藁をも掴む」とは、諺もうまく言ったものだよ。そして、俺が少しでもあいつに与えることの出来る真の助けという点から言えば、俺は一本の藁しべだったのだ。あいつは何度も怯えて目を覚まし、一度などは、大声で俺に呼び掛けていたよ。「あゝ、ベルフォード、どこにいるのだ。あゝ、そこにいたのか。君の優しい手を貸してくれ」とだ。そして、その手を握り締め、じっとりとした、半ば冷たくなった唇を押し当てながら、「何て優しいんだ。君がいない時には、何もかもが恐ろしくなるんだよ。それにしても、友達が、思いやりに満ちた友達がいてくれる

というのは …… あゝ、何て心が落ち着くんだろうな」と言うのだよ。

だが、朝の四時頃、あいつは俺をひどく驚かした。三度恐ろしい呻き声を上げると、目を覚まし、懸命に何か言おうとするのだが、すぐには言葉にならないのだ。やがて口がきけるようになると、「ジャック、ジャック、ジャック …… 」と、一気に五、六度繰り返して、「ほら、ほら、ほら、助けてくれ、助けてくれ、助けてくれ …… だめだ …… もうだめだ」と叫ぶのだよ。

俺はあいつの体に両腕を回し、枕の上に起こしてやった。ちょうどあいつは（まるで身を隠すように）夜具の中に体を沈め、狂気のように目を見開いていたのだよ。「ここはどこなのだ」 少し落ち着くと、あいつが言っていた。「君は奴を見なかったのか」と、あちらこちらへ頭を向け、怯えた表情を浮かべて言うのだよ。「奴を見なかったのか」とだ。

「だれをだい。何をだね、ベルトン」

「あゝ、もう一度ベッドに横たえてくれ」 あいつが叫んでいた。「床の上では死なせないでほしいんだ。横にしてくれ。そっとな。そして、傍にいてほしいんだよ。捨てちゃ駄目だぞ。何もかも、すべてがすぐ終わるのだからな」とだ。

「前から君はベッドの上だよ、ベルトン。床に降りてなんかいないんだ。強い幻覚が起きたんだな。栄養が不足して、意識も薄れているのさ［というのも、何度かに亘って、あいつは物を口にするのを一切拒んでいたのだ］。俺の言うことを聞いて、この元気づけの砂糖水を少し飲むことだよ。聞いてくれないのなら、君を独りにするからな」

すると、あいつはすぐそれを口にしていたが、こんなことも言っていたのだ。誓っても良いが、確かにトム・メトカーフが部屋の中におり、喉元を掴まえてあいつをベッドから引き摺り出すと、あいつのもたらした損害のことであいつを責めていたところだ、というのだよ。最初は奴の妹に加えた危害のことであり、次には、決闘で奴に与えた危害についてというわけなのだが、この決闘が、奴の命取りともなった例の熱病の原因になっていたのだよ。

貴公もこの話はよく知っているわけだから、俺が繰り返し述べることもあるまい。それにしても、この恐ろしい瞬間に、われわれの行う悪事のすべてが怯えた胸に浮かび上がってくるとしたら …… 是非ともお慈悲を賜りたいものだが …… だとしたら俺は、否、貴公の場合は俺にさらに輪をかけたことになるのだろうが、何という恐ろしい場面に立ち会わねばならないのだろうか。もしも、やんごとなき詩人（四七）も詠っているように、

その悲しき時に、いくらかなりと意識が残っていれば

の話だがね。

今朝早くに、医者が阿片剤の服用を指示した。これが実によく効いて、前にも睡眠薬を出してもらってはいたのだが、あいつはここ二日二晩よりも静かに、数時間ウトウトと眠ったのだ。だが、あいつの体力がほぼ尽きていることは、時々刻々と明らかになってきているのだよ。

喪に服したようなこの家にすっかり嫌気のさしたモーブレーは、君を捜しに明朝出発する考えでいる。君が都にいることを耳にして、奴は少なからず喜んでいたが、われわれの元を去る口実にするためだと、俺は確信しているのだ。

❦　❦　❦

奴はちょうど今、早くに発つつもりだということで、哀れな友人に暇乞いをしたところだ。敢えて言わせてもらうなら、永久の別れということだろうな。というのも、あいつは明日の夜まではとてももたないように思うのだよ。

俺が到着した時に奴が立ち去っていても、哀れな男は残念がりはしなかったはずと、俺はそう信じている。何しろ、奴は実にけしからん野郎で、あまりにも壮健な体に恵まれているものだから、病弱な者を憐れむ術を弁えていないのだよ。それに（貴公の所見を拝借するなら）、奴は生まれつき強壮な身体諸器官を有しているのだが、奴の魂がそれに磨きをかけるようなことはありそうもないのだ。そして奴は、奴が訪ねようとしている不道徳な友人と同様に、各自の才能の面でははなはだしい違いがあるわけだが、体質の強靭さからして、この先ずっと生き延びることになるのだろう。剣と絞首索のいずれもが干渉したりしなければの話だがね。

重ねて言っておかねばならないが、君が極めて残酷に虐げている気の毒な令嬢のことでは、大いに心配しないではいられないということだ。また、君が俺に対する信義を守ったとは思われないということだよ。上京出来る程度に体が直り次第、君は彼女との面会を試みるのではないかと、実際、俺は心配していたのだ。そこで、君の訪問に向けて準備をしてもらうため、そして、訪問に耐える気持ちを持ってもらうための理由ということで、その旨を彼女に話したのだよ。しかし、彼女がそのショックに耐えられなかったのは明白だな。実際、彼女はこう言っていたのだよ。わずか半時間のことにせよ、決して君と会うつもりはない、とだ。

仮に、自分自身の気持ちを説き伏せることが彼女に出来たとしても、彼女にとって君の訪問は心を乱すものであるわけだが、君にしても、彼女の姿に接したならば、負けず劣らず心を動かされていたことだろう。この世で最も魅力的な女性の一人、それも、若さと美しさの盛りにあった者を、君はわずか数週間のうちに、何と美しい骸骨に変えてしまったことか（というのも、彼女は今でも本当に美しいし、あのような姿態と顔立ちを備えているため、容色が衰えるわけもないのだからな）、それを目の当たりにした時にはだよ。

これを届けるのは、モーブレーが引き受けてくれているが、奴に言わせると、より一層君に歓迎してもらうためとのことだよ。たとえ開封で送られても、われわれが綴っている文字は、あののろまにとってはチンプンカンプンだろうな。手紙は返してもらいたい。求めがあれば、写しを送ることにしよう。傍に置いておくつもりなのだよ。君との付き合いから受ける悪影響への防御手段としてだが、そうでもしなければ、君との付き合いは、おそらく、少し時間が経つと、いつもこの胸に残しておきたいと願っている眼前の恐ろしい光景について、その印象を弱めてしまうことになりそうだからな。われわれ両名に回心をもたらしてくれるよう、神に祈る。

手紙　五十一

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

水曜日　午前十一時

俺のところの二人のような、あんな召使を雇っている人間はどこにもいないものと確信している。あいつらのことは優しく扱っており、モーブレーみたいに、身分の低い連中相手に殿様風を吹かせ、顔付きや言葉でもって連中を罵ったり呪ったりするとか、ラヴレースみたいに、連中の歯をへし折るような真似はせずに、「頼むぞ、ハリー、これをやってくれ」だの「頼む、ジョナサン、あれをやってくれ」だのと叫んでいるものだから、奴らは自分たち自身の考えを押し進め、それと一致するものは別だが、俺の言うことには一切耳を貸そうともしないのだよ。

この不届きなハリーにしても、君の昨日の手紙を良い頃合に持って来ることは出来ただろうに、昨夜の十一時過ぎまで（察するに、酔っ払っていたのだろう）、手紙を持って戻ることはなかったのだ。そして、奴の口実だが、俺は就寝中だと決めてかかり（前夜、俺は徹夜だったと聞いたから、というのだ）、俺のところまでは届けなかったというのだよ。そして、あの野郎、寝過ごしてしまい、俺が手紙に封をし終わった頃になって、忘れていた手紙を持って入って来るのだ。耳を揺り動かしながら、まるで、これから口にする言い訳を自分でも信じていないのだと言わんばかりの顔付きでな。俺は奴を問い質し、お粗末な言い訳を聞いてやった。そして、その立場ゆえに自分たちの足下にはいつくばっている人間に対し、横柄な扱い方をするのが紳士に似つかわしいことだなどとは、一度だって考えたためしもないのだが、それでも、あの野郎にラヴレースやモーブレー流の仕打ちを心行くまで味わわせてやるのを、俺としても堪えるわけに行かなかったのだよ。

そしてこの一件が、その点に関して俺が数行認める間だが、モーブレーを引き留めることとなり（すでに君の元へ向け、出発準備も整っていたのだよ）、死に瀕したベルトンとの付き合いに代え、度を越して陽気なラヴレースとしきりに付き合いたがっているあの獰猛な男は、俺の〈本文〉よりも大きい罵詈雑言の〈付録〉のほうを、目を丸くしているあの野郎に背負わせたのだ。また、俺のほうでも、この雑種犬みたいな輩から熊のような男を引き離してやろうとはしなかったのだよ。というのも、感心な召使に対してすべての主人が義務として負う、あの保護の手を俺から受ける資格が、今回の一件では、あの野郎にはなかったからだ。

召使に対するあいつの悪態はまだ終わっていなかったのだ。ブーツを履いて威張って中庭を歩き回りながら（哀れな野郎はあいつの馬の毛を梳いていて、あいつから逃げるわけに行かないのだ）、あいつは情け容赦なくあの野郎をいたぶっているのだよ。そこで、次のような台詞でもって、あの野郎の耳と同様、俺の耳をも満たしている事柄を君に語り聞かせ、俺もあいつの苛立たしい思いを募らせてやろうと思うのだ（あいつは俺が筆を執っている部屋の窓の下にいるものだから、俺も書き物に専念出来ないのだよ）。「おい、お前さん」「こん畜生」「もしも貴様が俺の召使なら、この犬ころめが　…　」「こんなやくざ犬に酔っ払っての粗相があったからといって、真っ昼間のおてんとう様でカラカラに干上がってしまうまで、この俺が待たなけりゃならんというのか。お前さん、嘘をついているのだろう。そうだよ、嘘を言ってるのさ［何を言っているのか定かでないが、畏まって弁解し

ているようなあの野郎の声が聞こえるのだ」。嘘だよ。この犬め。お前の呑んだくれの喉にこの鞭を突き通してやりたいものだな、本当に。こういう悪党の背中の皮はひん剥かずにおかないのだがね、まったく。お前が俺の召使ならだよ。そして、そいつでもって犬皮の手袋を作らせるのだ。お前があゝいう主人に付け込んだ見せしめとして、仲間のろくでなし連中にはめてもらうためだよ」といった塩梅なのだ。

このお陰で、気の毒に、馬のほうにも災難が及んでいるのは疑いのないところだな。というのも、「おい、どうした」「じっとしているんだ、畜生め」と、あの野郎が大声を上げているのだよ。おそらく、一蹴り加えながらだ。本人のほうが蹴られるのに値するのだがね。何しろ、こういった下郎というのは、人間とか動物を相手に、それが可能な場合にはだが、モーブレーやラヴレースを演じてみせるものだからな。そして、あいつに返事をする勇気はないものだから、気の毒な馬をこきおろしているというわけさ。

あの野郎は今放免された模様だ。馬が（いつもの半分の時間で、いつもよりも手入れが行き届いて）蹄鉄を響かせているし、モーブレーの声は聞こえないので、そろそろ筆を進めても良い頃だと分かるのだよ。そこで、話しておきたいのだが、まず第一に（君と同じように、俺も夢はあまり気にしないのだが）、貴公の見た夢をしっかり心に留めてもらいたいということだ。というのは、おそらく貴公にはショックとなるような解釈を、その夢に加えることも出来そうだからだよ。もしも貴公から求めがあれば、聞かせてやろう。

モーブレーが中庭から呼び掛けているが、やたらに暑い日なので、真っ昼間に馬を走らせたりすると、奴のフライが出来上がってしまう、というのだな。それから、哀れなベルトンが俺に会いたがっているということだ。従って、俺の切なる願いを申し添えるに止めよう。これが君の手に届く頃までに彼女と顔を合わせていないのであれば、彼女に会おうという考えは一切捨ててもらいたいということだよ。また、こちらまで足を運び、気の毒な友人の最後の見納めとして、俺と一緒に彼のことを気遣い、彼の姿の中に、遠からず君の運命や俺の運命となるものを、また、モーブレー、ターヴィル、そして、われわれの残りの者たちの運命となるものを見届けてもらえると有難いということだ。振り返って眺めるのに、十年、十五年、二十年、あるいは、三十年という年月が何ほどのものだというのだ。その一番長い期間を経た頃には、おそらくわれわれはだれもかも、われわれが生まれ出たあの塵と交じり合っているはずだからな。

手紙　五十二

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

八月二十三日　水曜日　朝

生気溌剌たるものだよ、ジャック。それに、有頂天になっているところだ。今一度幸せ者になれそうってところなのだ。愛するハーロー嬢から便りがあったというわけさ。俺の前回の手紙で触れたものだが、彼女宛に姉から届いた、あの手紙の結果なのだろうな、おそらく。それで俺は、早速バークシャーへ向けて出発するところなのだ。M卿に文面を見せ、親類の全員から祝辞をいただくためだよ。

昨夜、予定のとおりにスミスの店へ行ってみたのだが、愛しの君は十時近くになっても

戻っていないのだ。そして、たまたまターヴィルと出会ったので、奴を連れて帰り、気の塞ぎを癒してもらおうと、奴に歌を歌わせたのだ。まずまず落ち着いた気分で二時にベッドに入り、明るくて楽しい夢を見たよ（貴公に説明してみせたもののような恐ろしい夢ではなかったがね）。そして、今朝の八時だが、令嬢の様子を尋ねさせようと使いに出してあった下男の帰宅に備えるべく、服装を整えていたところ、駕籠かきの手で次のような手紙が届けられたのだ。

ロバート・ラヴレース殿

火曜日　夜十一時（八月二十二日）

謹んで

良いお知らせがございます。刻苦精励、父の家に向けて出発いたします。あの方特有の優しさをもって、父が哀れな悔悟者を迎え入れてくださることに望みを託すよう、ご指示をいただいているのです。と申しますのも、日頃より敬愛いたしておりました大切な、祝福されたお友達の仲立ちのお陰ですが、全面的な和解の保証をいただき、喜び勇んでいるところなのです。この喜ばしい、久しく待ち侘びておりました旅の仕度に没頭いたしておりまして、先に片付けねばなりませぬ最重要事項もいくつかございますゆえ、一瞬たりとも他の用事に割くことはいたし兼ねるのです。従いまして、妨害とか邪魔だてとかは、どうぞお止めいただきたく存じます。そのようなことのありませぬよう、何卒お願い申し上げる次第です。多分、いずれは父のところで、私にも会っていただけることでしょう。少なくとも、貴方ご自身に落ち度のないかぎりはです。

手紙を一通認めることといたしますが、私があちらに到着し、迎え入れてもらえました時に、お手元に届くようにいたしましょう。その時まで、とりあえませず、

クラリッサ・ハーロー

俺は愛しの君に宛て、すぐに手紙を一通送り、深甚なる感謝の念を込め、喜んで次のように確約したのだよ。つまり、俺は即刻バークシャーに向けて出発し、めでたい和解がもたらす結果と、彼女がこの胸に満たしてくれた、魅惑的な希望の結果を待ってみるということ。彼女には千もの祝福の言葉を浴びせているということ。このような類いのない優しさに値するよう、俺の全生涯を通じて努力することを断言するし、また、そのように望ましい和解を促進し、達成するためなら、彼女の父や身内の者たちが俺の手から何を要求しようと、彼女のためになることで、俺が承諾しないものは何一つないことも断言する、といったことをだ。

その手紙は写しも取らずに急送したよ。そして、六頭立てのチャリオットを用意するよう、指示を出したところだ。さあ、M邸へ向けて一目散だ。ベルトンはどんな具合か、是非知らせてくれ。貴公の手紙は配達の途中なのだろう。もしも、貴公を割愛することがあの哀れな男に出来るのであれば、この真に神々しい令嬢のお傍に急ぎ仕えてもらいたいのだ。これは命令だよ。さもないと、貴公も彼女にはおそらく何ヶ月も会えなくなることだろう。少なくとも、彼女がハーロー嬢でいる間はな。それから、出来ることなら、彼女が出発する前に、貴公には一筆認めてもらいたいのだよ。この思いやり溢れる変更が確かな

ものであることを保証し、かつ、その説明ともなる手紙をだよ。

だが、どんな説明が必要だというのだ。愛しの君としては、自分が慰めを得ると、それを他の者たちに知らせずにはいられないのだよ。何という気高い心なのだろう。逆境にある時には、俺に会おうともしなかったのだが、順境の光がその身に差し始めるや否や、彼女は俺を許してくれるというのだからな。

これがだれの仲裁によるものなのか、俺は承知しているのだ。モーデン大佐のお陰なのだよ。自分でも言っているとおり、彼女は常日頃から、あの男を敬愛していたし、あの男のほうでも、身内のだれにも増して彼女のことを愛していたのだからな。

これで俺も、夢には何かがあるということを確信する次第だ。ぽっかり裂けた雲というのは、期待されている和解のことだよ。その裂け目を通って、金色に輝くケルビムやセラピムが群がっている天空へと我が魅惑の君を引き上げて行く眩い姿は、この目出度い和解の果実となるはずの、愛くるしい男の子や女の子たちを意味しているのだ。三度繰り返された歓迎の言葉というのは、もはや執念深いと見做すことは出来ないわけだが、彼女の家族からのものなのだな。ただし、あの連中というのは、俺の魂が交わり合うことの出来ない一族でもあるのだ。

だが、それでは、彼女のほうは昇って行くわけだが、俺が床を突き破って恐ろしい穴を転げ落ちるというのはどういう意味なのだ。何、ただこういうことに過ぎないのさ。俺の結婚嫌いに言及しているというわけだよ。底無しの穴であり、淵であり、俺には訳も分からないものだからな。そして、これは想像だが、あのようにひどく怯えて目を覚ますようなことがなかったなら、俺はザブンとばかりに穴底の川に落ち、その後、例の眩い姿によって（苦むした岸辺で俺を待っていたのだ）、我が愛するお嬢さんの元へと（過去の悪事を洗い流され、あるいは、清められて）連れて行かれたことだろう。そして、われわれは天使のように楽しげに、喜びの歌をいつまでも歌い続けていたはずなのだ。

だが、俺の顔に投げ掛けられたM卿の黒い、長く引きずったマントやローブは何のことだというのだ。それから、婦人たちの衣裳もだ。あゝ、ジャック、これらについても俺には分かるのだよ。何とも親切なことに、卿がお亡くなりになり、全財産を俺に残してくれるということを表しているのに他ならないのだ。従って、律義なM卿よ、優しき御霊の安らかならんことを、といったところだな。

セアラ・サドレアー夫人とベティ・ローランス夫人も死に、うなるほどの財産を俺に遺してくれるのさ。

シャーロットとあの娘の妹だが、あの連中はどうなるのだろうかな。あゝ、勿論、連中は喪に服することだろう。叔父と叔母たちのためにだよ。それで当然だな。

モーデンの野郎が窓から飛び込んできて、「死ぬのだ、ラヴレース。そして、地獄に落ちるのだ。従姉妹の受けた不当な仕打ちを償う気がないのならな」と叫んだ件だが　…　令嬢を正当に扱う気持ちが俺にない場合には、奴としては、果たし状を送ってよこすつもりだったというだけのことなのだ。

俺にとって気に食わないところといえば、夢のこの部分だけなのさ。というのも、たとえ夢の中のことではあっても、脅しに負けて何かの行動に出たとは思われたくないからだよ。いかに俺好みの行動であってもな。

俺の見た、何か意味ありげな夢については、これくらいにしておこう。

愛しい、魅惑的な娘だよ。果たしてどんな出会いになるのだろう。彼女とあの父親に母親、そして、おじたちだからな。この久しく待ち侘びていた目出度い和解は、彼女の従順な心にどのような恍惚状態を、どのような歓喜をもたらすことだろう。そして、実際、彼女が連中に対してあのように従順であることが、今では嬉しく思われるのだ。両親に孝養を尽くすというのは、俺にしてみれば、夫に対しても等しく従順であることを確信させてくれるからだよ。信念に基づいた従順さというのは、一定不変のものだからな。

ところで、どうだろうな、ジャック、貴公が考えているほど非難に値するところは、俺にはなかったのではないのかな。何故なら、あれほどの苦難に彼女を導いたとはいえ、俺がいなかったならば、彼女としても、今や連中全員を圧倒することになる喜びを享受することも、与えることも出来なかったのだからな。つまり、一時的な災いから、大きくて長続きのする利益が生じたというわけだよ。

俺には分かっていたのさ。連中はあまりにも深く彼女を愛しているため（あの一族の自慢の種であり、誇りでもあったのだからな）、長々と意地を張っているわけには行かないということがだよ。

アラベラの手紙を覗くことが出来たらと、本当にそう思う。あの女はいつも妹の陰に追いやられていたから、この和解の件を彼女に明かすに当たっても、おそらく、冷淡さと屈辱感を交えていたことだろう。それに、招待の言葉が岩清水のような冷たい口調で貫かれているのは確実この上ないところだろうな。

彼女が父親の家に着いての話だが、約束の手紙もやがては見ることが出来るものと期待しよう。その手紙では、彼女が出会う歓迎ぶりのことを述べてくれそうに思うのだよ。

それにしても、彼女の手紙の文体には厳粛なところがあるように思うのだが、それは俺を喜ばせると同時に、心を乱しもするのだ。もっとも、彼女が今も俺を愛しており、すぐにも父親の家で会いたがっているのは明らかなわけだから、少しばかり厳粛になるのは避けられないのだし、俺からのあのような扱いを受けた後でもあり、愛していることを白状するのが［愛すべきはにかみ屋の、可愛いお茶目さんだ］少々恥ずかしいのだな。

それに、「その時まで、とりあえませず　…　クラリッサ・ハーロー」という記名の仕方にしても、まるで、「その後は、貴方ご自身に落ち度のないかぎりは、クラリッサ・ラヴレースとなることでしょう」と言わんばかりだよ。

あゝ、我が最愛の者よ。常に心広く、敬慕すべき者よ。そなたのこの寛大なる思いやりはどれほど我ら二人の名を高めることだろう。私に関しては、そなたに提供された機会のゆえだ。そなたについては、その機会をかくも見事に捉えてそなたの有利に、そして、両名の名誉に変えたがゆえのことだよ。

そして、愛する人よ、君を崇拝する者の欠点に目を瞑ってもらえるのなら、また、女房風を吹かせるようなことをしないでくれるなら　…　物珍しさの魔力が私を捉えている間に、不義密通への愛着心から、また、心の底から楽しんで計画を練り、実行に移しているわけだが、そんな陰謀を好む心によって、たまさか横道に逸れることがあるとしても、そして、私の若さゆえの過ちに［ほんの束の間のことなのだ］油断なく目を配るようなことがなければ、脱線の一つ一つが、かえって君への愛しい思いをいよいよ募らせるのに役立つこととなり、やがて私は、それも、極めて短時日のうちにだが、感覚の悦びを克服することだろう。そして、次には、魂を惹きつける君との会話に魅了され、また、これまでの

自分の行状に対する嫌悪の念を促され、遠くから眺めている今の自分にとっては苦痛に満ちた務めのように思われるものが、喜び勇んで選ぶ対象となり、君こそが私のすべての楽しみの中心をなすことになるだろう。

∴　　∴

貴公の手紙を携え、モーブレーが今到着したところだ。従って、愉快な話題についてはこれまでとし、はなはだ不愉快なものと危惧される話題に耳を傾けることにする。

明朝、バークシャーへ同行してくれるよう、あの乱暴者に約束させたところだよ。例の哀れな野郎の付き添いをしている間に奴が身に付けた錆を、あちらで擦り落としてやるつもりなのだ。

奴の話では、死にかけているベルトンと説教好きなベルフォードに挟まれ、ここ三日間というもの、自分らしく振る舞うことが出来なかったのだそうだ。それに、こうも言っていた。あの不幸者に勇気を与え、自分の運命に耐える手助けをしてやるどころか、貴公はあいつの弱気を助長している、とだよ。

避けられない定めを、あいつがそんなにも深刻に受け止めているのは残念だ。ただ、あいつも長く患っていたからな。あいつ自身が貴公に向かって、はなはだ意味深長に述べていたことだが、病というのは体力ばかりか、気力をも奪ってしまうものなのだよ。

手紙　五十三
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

水曜日　夕刻

貴公のショッキングな手紙を読んでいたところだ。気の毒にな、ベルトンも。活気に満ちた時間を二人でどれだけ過ごしてきたことだろうか。恐れることを知らない愉快な男だったというのに、こんなにも打ちひしがれ、メソメソと怯えながらお陀仏だなんて、一体だれが考えたというのだ。

それにしても、どうして哀れな男を慰めてやらなかったのだ。あの臆病者のメトカーフとあいつの果たし合いのことでだよ。あの事件でのあいつの行動は、真に名誉を重んじる男のものであったし、同じ状況に置かれれば、俺も取っていたはずの行動なのだよ。俺がそう言っていると、あいつに話してやってくれ。それから、あの一件を避けることも予測することも、あいつには不可能だったということもだ。

他の者たちが剣の一突きで受けた負傷の痛みを感じるのと同じ程度に、ピンの先で出来た掻き傷の痛みを感じる人間もいるものなのだ。そんな連中の感受性を弁護出来る者などどこにいるというのだ。メトカーフが憤慨して収まらなかったのは、妹のためなのだ。妹本人は腹を立てていなかったのだがね。妹が兄に保護を求め、恨みを晴らすよう頼んでいたのだとすれば、それは、M卿得意の言い方をすれば、「他人様に関わる問題」だったことになるだろう。だが、妹自身のほうでは、請われもせずに自分の問題に首を突っ込むということで、兄を気障な奴だと考えていたし、望みとしては、見苦しくない形で、また、秘

密裏にお産の仕度をしてくれることだけだったのだ。そして、機会を逃さず、自分の有利になるよう、マンテノン風にあいつの良心に働き掛け(ア)、赤ん坊が生まれたなら、あいつに結婚してもらおうという気持ちでいたわけだよ。というのも、あいつがどれほど御しやすくて、お人好しなのか、妹のほうでは承知していたからだ。それに、まったくの話、もしも妹があいつを説き伏せていたなら、両方にとって幸せなことだったのだよ。そうなれば、あいつもあの忌々しいトマシンなどに引っ掛かったりはしなかっただろうからな。ところが、正直な話、このお節介な兄貴がどうしても首を突っ込もうとしたのだよ。このお陰で、些細な一件が大事に至ってしまったというわけだ。それで、その挙げ句どうなったと思う。メトカーフが決闘を申し入れたのだよ。ベルトンは受けて立った。武器を奪い取り、命は救ってやったのだ。ところが、あの野郎は頭よりも皮膚のほうが感じ易いものだから、かすり傷を受けて肝を潰してしまったのだな。そのせいであの野郎は、まずは吐き気を催し、次に熱を出し、そして、お陀仏というわけなのだよ。ただそれだけのことなのさ。それに、そうなるのをどうしてベルトンに止めることが出来たというのだ。ただ、病というのは、ダラダラと長引く病というのは、弱気になって行く心に対しては、何もかもを恐怖の種にしてしまうものなのさ。それは俺にも分かるのだよ。それと、貴公が転記してくれたナット・リーの詩行に関してだが、その点ではモーブレーも的を射ていたというわけだ。

「死そのものをなら、理性ある者は一人として恐れない」というのは、貴公がどう言おうと、あるいは、貴公の取り上げた作者が何を言おうと、間違いだな。そして、生と死の間の本来的な不一致について、貴公が真面目な顔で一席ぶっていること自体、その証拠というわけだよ。

ひとつ言わせてもらうが、ジャック、俺は概してこの世については、いくつかの点では悪党（擬人化して言うならば）まがいの仕打ちも受けたが、すこぶる気に入っているのだよ。若さのもたらす楽しみ、財産に関する現世の見通し、そして、新たに今では、我が愛しの、こよなく愛する、とこしえに愛するクラリッサによって与えられた、心を魅了する望みのこともあって、これらのことで俺はすっかり嬉しくなっているわけだから、あの世では何一つとして悪いことが起こらないと確信出来るとしても、命共々それらのものを放棄するのは、はなはだ気が進まないことだろうな（貴公がそう言わせたいのであれば、はなはだ「恐ろしい」としておこう）。しかしながら、名誉に関わることとあれば、死をも恐れないという点で、俺を凌ぐ者などは一人としていないのだよ。

だが、俺としては、貴公の鉛のように冴えない議論に考察を加える気もなければ、その暇もないのだ。〈鉛地金〉のままでとか、貴公の言いそうな、〈一括して〉考量するというのであれば別だがね。

仮に、これまでの貴公の手紙を返すとしても、暫く後には、つまり、俺が結婚した暁には、あるいは、哀れなベルトンのことが半ば忘れ去られた頃には、あるいはまた、失って

(ア) マダム・マンテノンは、自分と結婚するよう、年老いていたフランスのルイ十四世を（戦場での不手際から、落ち込んでいたのだが）説き伏せたと言い伝えられている。王の過去の乱行に関し、良心を宥める手段として、というわけであるが、この女は、王がもたらした国家的損失の原因を過去の乱行に帰していたのである。

すでに長い年月を経ているため、思い出しては胸を痛めるというより、むしろ楽しみを感じるような、そんな者たちの仲間にあの律義者の名を加えた頃には、もう一度手紙を渡してほしいのだよ。そうしてくれるなら、俺も真剣に目を通すことが出来ようし、貴公が望むとおりに、徹底してこの話題を話し合っても良いだろう。

「俺が結婚した暁には」と言ったのだったかな。何ともまた、妙なる響きを持った言葉ではないだろうか。

この魅惑的なお嬢さんを拝見するのは、彼女が父親の家に着くまで、おとなしく待たなければならないのだ。しかしながら、貴公の言葉にもあるように、咲き初めたばかりの美も今は名ばかりになっているわけだから、今会えるなら、また、目出度い日まで毎日会えるのであれば、俺としてもすこぶる嬉しく思ったことだろう。身内の者たちとの和解、そして、われわれの目出度い結婚を機に、過ぎ去った嵐の日々にとって代わるあの寛ぎや満ち足りた状態によって、彼女が愛らしくも、時々刻々と、清らかな栄光の座へ登って行くのを眺めるという、そんな喜びに与りたいと思うからだよ。

手紙　五十四
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

それはそうと、少々気持ちも落ち着いているので、貴公のこれまでの手紙にあった他のいくつかの部分について、手短に取り上げてやろうかと思うのだ。

貴公には礼をしなくてはいけないが、俺の見るところ、愛しの君は俺の訪問を避けたことになるな。今は極めて順調に事が運んでいるから、貴公のことも大目に見なければならんが、さもなければ、大将に対する不忠さのこの新たな例に関しては、さらなる沙汰があって然るべきところだよ。

他人への対抗手段として、と言って構わないのだろうが、貴公は絶えず自分のことを大いに褒めそやし、いくつかの性質については穏やかに、そして、巧みに自分を責めてみせるわけだが、貴公としては同時に称賛に値するように思われたがっている、そして、一般にはそのように考えられている性質についてのことだよ。

だから、使用人に対して装う態度にしても、えらく人情味に溢れた人間として通りたがっているわけだ。しかも、モーブレーと俺を犠牲にしての話だが、われわれのことは、奉公人たちに対して王や皇帝のように振る舞う人間として描いてみせるのだ。だが、貴公はいつだってこの手の試みがうまく行かず、貴公のことを知っているわれわれ相手では、体質に基づく愚鈍さや馬鹿らしさの結果に過ぎないものを、美点のように思わせることは出来ずにいるのだよ。

貴公は知らないのかな。貴公はその低俗なやり方で、あるいは、モーブレーはあの傲慢な態度によって、自分に注意を向けさせているわけだが、人間の中には、その挙止に生まれついての威厳が備わっているため、一瞥を与えるだけで、貴公ら以上に注目を受ける者もいるということをだよ。

俺は、こう言って構うまいが、王者となるに適任なのだ。褒美はたっぷりするし、罰を与えるに当たっても時機を失わず、適切な処置を取っている。そして、概ねのところ、ど

このだれにも負けないくらいに、しっかりと奉公してもらっているのだよ。

こういった育ちの悪い輩を支配する秘訣というのは、仰々しい言葉というよりも、威厳を湛えた顔付きにあるのさ。使用人連中に給金を払うことが出来ない人間とか、もしも漏れてしまうと、自分たちが恥知らず連中のなすがままになってしまうような秘密を掴まれてしまったとかいう人間が取らねばならないような、そんな行動を使用人たち相手に取るところに人情味があると考えるようでは、貴公も情けない男だということだな。

さて、俺の場合だが、打ち明けるのを憚るような真似は一切したこともないし、率直さの点では、いまだかつてだれにも見られなかったほどのものを備えているのだ。自ら手を下したものではあっても、悪事を正しく悪事と呼ぶことが出来るし、（自己批判の潔さからだが）他人からの批判をすべて予期することも出来るのだ。自分を別人のように、あるいは、実際よりも善い人間のように、世間の者たちに考えてもらいたがるような偽善者ではない。出来るなら、睨みつけることで使用人に務めを果たさせるのが俺の役割であり、頷きとか目配せ一つで俺の意を汲み取る術を弁えない者、そして、俺が笑顔を浮かべているのに、有頂天になって喜ぶことのない者、また、眉をしかめて見せても、すっかり怯えることのないような者は家に置くつもりもないのだよ。俺の不興にじっと耐えてくれることに対しては、たっぷりと下男に報いてやるようないつも気をつけている。確かに、少し常軌を逸することが俺にはあるとしてもな。しかし、このようなことは滅多にないのだよ。野郎が分かり切った仕事の件でとんでもないへまをしでかすとか、主人よりも賢い顔をしたがる場合、そして、俺の指示に逆らうことこそ、俺に仕える最善の方法だと考えた、などとほざくような場合は別にするがね。

使用人に対する貴公の振舞いと俺の振舞いに関し、いずれは貴公と一戦を交え、納得してもらうことになるだろうな。貴公が人情味として通したがっているものは、あらゆる気質の人間を相手に見境なく実践された場合、貴公もこぼしているような災いに絶えずその身を晒すことになるし、また、それも当然の話だという点をだ。それから、たとえば、仕事をしてくれるよう下男にお願いするとか、あるいはまた、モーブレーみたいに、「背中の皮をひん剥く」「鞭をくれてやる」といった台詞を吐くのと同じくらいに、頷いてみせることで使用人たちの注意を引き付けることの出来る人間だけが、使用人たちの上に立つ資格がある、としている点についてもだよ。というのは、貴公のような卑屈な言い方を期待することに慣れてしまい、常に主人の上に立とうとする使用人や、もう一方のような扱いを受けて当然な者というのは、だれの召使になるのにも相応しくないからだ。また、俺としても、そんな下郎を雇い入れ、馬の後ろ足を拭かせようとは思わないのだよ。

この問題に関し、ますます貴公と一戦交えたくなるのは、僭越至極な話ではあるが、今思い浮かべることの出来るどの劇作家にあっても、正確に描かれた召使というのは、男女どちらについても、一人として登場していないように俺には思われるからだ。ある者は道理に合わないほど賢いし、ひどく間が抜けて愚かしい者もいる。そして、時には、同一人物にその両面が見られるのだよ。主人や女主人役の人物像を際立たせるために、滓や澱みたいな人間を基に描かれた引き立て役なのだ。否、さらに馬鹿げた話だが、作家が主要人物たちに授けるもの以上の機知を備えて登場することも時々あるのだよ。火を起こすためのただの火打ち道具というわけだ。あるいは、別な譬えを使えば、他の方法ではっきりと見せることの出来ない機知に磨きをかける砥石の役目だよ。または、古代の劇作家たち

が用いた〈からくり〉のように（あるいは、さらに不自然な独白のように）、不出来な筋を進める助けにするとか、必要不可欠な〈解明部〉を生み出すために利用される道具として役立つわけだが、作品にケリを付けるためのより良い方法について頭を絞っている、劇作家の苦労を省くためなのだ。

俺は次の点を確信している（自分の使用人に対する実際の振舞いはどうであれだ）。つまり、問題の点を論じ合うに際して、貴公にとって俺の〈理論〉は利益をもたらすだろうということだ。というのも、その時には、次のようなことを貴公に納得させることになるからだよ。つまり、良い使用人の特徴というのは、現実においても劇中にあっても、忠実で常識を弁え、快く言いつけに従い、無言のうちに敬ってみせるところにあるべきだということ、使用人の分際で機知を飛ばしたりするのは、仲間相手の場合を除くと、生意気に当たるだろうし、厚かましく忠告をするような真似は絶対にすべきでないということ、そして、何か理不尽な命令、あるいは、自分の目にはそのように映るものに対して、敢えて諫めごとをしようという場合には、遜った、恭しい態度をもって行い、よく頃合を計るべきだ、といったことをだよ。ところが、上演されるのをこの目で見た多くの芝居は、その芝居にとって不可欠な人物として、あるいは、極めて重要な役とか、長く登場する役とかを演じるために使用人が導入される場合（そのこと自体が間違いだと、俺は考えている）、大変な教訓を垂れるものだから … そう、そういった芝居は二階桟敷の一番奥の、従僕たちが陣取っている部分に向かって大変な教えを与えるものだから、主人や女主人のお供でよく芝居見物に出かける下男を見ても、控え目で善良な者は極めて少ないことを俺は別に不思議にも思わずにいたのだ。それに、斑染めの衣装を纏った大向こうの見境のない喚声によって喝采を引き起こすとか、煽り立てるとか、そんな恥ずかしい真似をやってのけるような作者にしてみると、才能に欠けているという意識が、惨めなまでに明らかになるはずなのだよ。

しかし、より良い機会のために、この話題は中断することにする。つまり、我がクラリッサとの結婚により、使用人の数を増さねばならなくなり、その結果、連中の資質についてもっと綿密に調べねばならなくなる、そんな目出度い折のためにだよ。

∴

∴

我が愛しのハーロー嬢の心の広さに関し、俺としては、人間が抱き得る最高の意見を抱いているわけだが、ただ、彼女の機嫌のこの好ましい変わりようについては、ある仕方でしかどうしても説明の付けようがないのだよ。神かけて誓うが、ベルフォード、すべての状況を併せ考えるに、俺は心からこう確信するのだ。つまり、俺が熱望していた状態に自分がなっていることに、思いも寄らず、愛しの君は気づいたというわけさ。そして、このことから彼女も、やっと俺に好意を寄せる気になったというわけだよ。父親の家に着いた時にも、妊娠という事実の見てくれを良くするためだ。

もしもこれが真相だとすれば、彼女の衰弱ぶりのすべて、そして、すぐに卒倒しがちなことにも気持ちよく説明が付くのだ。また、何とも愛らしい、この手のことにはウブなお嬢さんが、頻繁に起こる体調不良の原因を何に帰したら良いのか、暫くの間分かり兼ねていたとしても、驚くべきことではないのだよ。もしもこれが真相だとしたら、どれほど貴

公を笑ってやることだろう。また（彼女のことが間違いなくなった時には）、愛しの新米さん本人のこともだ。彼女の悲痛な苦しみのすべてが男児という形で決着するということでだよ。そして、俺はこの息子を、後に続くすべてのケルビムやセラピム以上に慈しむことだろう。夢で見たのと同じだけ大勢続くとしてもだよ。あの夢では、果てしなく広がる天空が、保持出来るかぎりの天使たちでいっぱいに埋め尽くされていたのだがね。

貴公の次の手紙は恐る恐る開封することになるだろうな。哀れなベルトンの訃報ではないかと考えてだよ。ただ、あいつが回復する見込みはないわけだから　…　だが、何と言ったら良いのだろう　…　気の毒なあいつの死出の仕度がもっと立派に整えられるのでなければ　…　ただし、貴公の重苦しい説教のせいで、はなはだしく心を動かされるようなことにもならないつもりでいるのだよ、俺としてはな。

貴公の便箋を同封するので、俺用の写しを作ってくれるか、あるいは、送り返してもらいたいのだ。その時機が到来すれば、死すべき定めの人間としては留意しないではいられないような事柄が、あれにはいくつか含まれているからだよ。それに貴公は、例のショッキングな問題に深く立ち入っているようだし　…　だが、ここで止めて置こう。深刻になり過ぎないためにな。

∴　　∴

何か用事はないか訊くためだが、貴公の召使が一時間ほど前に訪ねて来た。そこで、明日の朝早くには、これを受け取ってもらうようにしたいと思う。また、貴公のほうから便りをしてもらえるのであれば、お願いする。手紙を待つのに、一時間か二時間はやりくりをするつもりだ。ただ、出来れば、どんなに遅くても、明日の夜にはＭ卿のところへ着かなくてはならんのだ。

気の毒な男は、貴公の下男の話によると、モーブレーが去って行った時とほとんど同じ状態らしいな。

俺がハーロー嬢とすぐにも幸せになろうとしているのを、この下種のモーブレーは残念がっていると、貴公としてはそんなふうに考えるというのか。それに、いやはや、ジャック、どう言って良いものやら、分からなくなるのだよ。いよいよ成果に手が届きそうになってみるとな。だが、どうなろうとも、初志貫徹のつもりでいる。彼女なしには生きて行かれないと、俺も気づいたのだよ。

手紙　五十五

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

水曜日　三時

先の手紙で筆を置いたところから続けることにする。

モーブレーが馬に乗ったのを見届けるとすぐに、俺は哀れなベルトンに付き添ったのだが、あいつは恐ろしいほど苦しみ悶えていた。そして、いつものことだが、苦悶のうちに目を覚ましたのだ。

すぐに医者がやって来た。そして、二人の間で繰り広げられた光景に、俺は不安を覚えてしまったよ。

瀕死の男が医者に質問することから始まったわけだが、何も、何一つとして、自分のために打ってもらえる手は無いのかと、心も痛む熱心さで尋ねるのだ。

医者は首を振り、無さそうに思いますよ、と話していた。

「俺は死ぬわけには行かないんだ」と、哀れな男が言った。「死ぬなんてことは考えられない。この恐ろしいほどの胃痛と頭痛を免れることさえ出来るのなら、何としても、もう少し生きていたいんだよ。何も与えてくれないのか。一週間、ただの一週間だけでも、まずまず穏やかに過ごすことが出来るようなものをだよ。男らしく死にたいのだ。どうしても死ななければならないのなら …

だが、先生、俺はまだ若い。若さの盛りだ。若者というのは、医者が手掛けるのには扱いやすい患者なのさ。俺には何も、何一つとして、打つ手はないのですか、先生」とだ。

「あゝ、残念ながら」と、医者が答えた。「思わしくない状態が長いですからね。医療の力で貴方のお役に立つものは、どうやら、なさそうに思うのです」とな。

すると、あいつは堪忍袋の緒が切れてしまった。「じゃあ、あんたの腕前というのは何なのだ。俺はまるまる十二ヶ月の間、言いなりの道具になって、あんたたち医者仲間の思いのままに操られて来たのだぞ。吐き気を催す薬をあんなにも口にしなければ、今頃は元気になっていたはずだと、心から信じているんだよ。だが、医者を敬う者などが、一体どこにいるんだ。俺たちの命を奪うのに手を貸しながら、騙して望みを持たせるのが手腕だというし、あんたたちのどの一人をとっても、何も知らずに、ただ憶測するだけだというんだからな」と言うのだよ。

「結構だろう」と、あいつが激しい口調で続けた（また、ここ数時間に比べると、力強い声で、筋の通った言葉だった）。「あんたが俺を見放すというのなら、俺もあんたを見限ることにする。治療技術の中で信頼の出来る確かなものは外科だけなのだ。腕の良い外科医一人は、あんたたち千人に匹敵するんだよ。俺は何度となく外科医の世話になって来たし、いつだって、連中の腕前を信頼すべき根拠を見出しているんだ。だが、あんたたちの技術というのは、一体どうなっているんだ。ただ、塗り薬を塗りまくるだけさ。飲み薬を詰め込み、次々に膏薬を貼り付けているだけさ。その挙げ句、まずは食欲をすっかり奪い去り、次いでは、体調を台無しにしてしまうのだ。それを改善するために呼ばれているのにだよ。以前、友達が一人いたが … なあ、ベルフォード、君は正直者のブロマーを知っているだろう … イギリス中のだれにも負けない見事な内科医になっていたはずなのだ。度を越してワインと女に耽るのを慎んでいたならな。で、そいつは常日頃からこんなことを言っていたのだよ。内科医の技術としては、スリまがいの見せびらかし以外に何もなく、当てずっぽうの一番うまい者が一番の内科医になるのだ、とな。俺もそいつの言うとおりだと思っていたのだ。それでも、生きていたいし、死ぬのは怖いもので、病気に罹った俺たちは何をするかというと、他でもない、あんたたちを呼ぶのさ。それで、あんたたちは呼ばれて来て何をするのかと思えば、ただ、われわれの不調を助長して、挙げ句には、ピグミー程度の病を巨人に仕立て上げるだけじゃないか。それから、あんたたちは厳しい顔付きでコソコソとやって来て、こう言うんだよ。処方を書くのが気恥ずかしくなった頃とか、あんたたちの有害な薬のせいで、胃が本来の食べ物を受け付けなくなった頃に

だが、〈残念ながら、医療の力ではこれ以上お役に立てそうにありません〉とだ。また、その必要もないのだよ。あんたたちの忌々しい飲み薬、そして、あんたが与えた気休めの望みを信頼し切っていたというのに、そんな哀れな人間を墓穴の縁のところまで連れて行っているのだからな」というのだ。

医者は当惑の体だったが、「もしもわれわれが、死ぬべき定めにある人間を不死の存在にすることが出来るのに、そうしようとしないのでしたら、このお言葉のすべてはもっともなことになりましょうね」と言っていた。

俺は哀れな男を窘めたよ。ただ、医者に対しては、あいつの弁護をしてやったのだ。「私の気の毒な友人のように、生きることを強く願いながら死んで行くというのは、悲しい話ですね、先生。われわれにはあまりにも多くのことを望む傾向があるのです。この世に生を享けた時、われわれの体の中には死の種子が蒔かれているということ、そして、その種子が成育して、やがては、繁茂する雑草のようにか弱い命の花の成長を阻害し、雑草が茂るにつれ、われわれの命は衰えて行くのだということも考えずにですよ。従って、われわれは若いうちから学び始めるべきなのです。われわれの体がどのようなものに耐えるのかということをですが、その土壌が最も産み出しそうな雑草を、節制によって根こそぎにするためです。あるいは、少なくとも、雑草が伸びるのを抑えておくためです。また、花とか植物の根が枯れ、雑草の勢いが最も盛んな時に、医術が花を生き返らせ、雑草を全滅させてくれるようなことは期待しないためですよ。雑草のほうは、すでに触れたとおり、われわれが誕生した時から体質の中に根を張っているわけですからね」とだよ。

この演説を〈綺麗ごと〉と貴公は呼ぶだろうな、ボブ。だが、譬えの仕方は適切なものだし、比喩に頼る俺の性癖を、貴公も完全に癒してくれたわけではないのだよ。

「まったく、おっしゃるとおりなのですよ」と、医者が言った。「事情を明らかにするための良い譬えを持ち出してくださいました。残念ですが、この方のために打てる手は私にはないのです。出来ますことは、ただ、辛抱していただくよう、そして、もっとお気持ちをしっかり持っていただくようお勧めするだけです」とだ。

「結構だな」と、哀れな男が腹立ちまぎれに言った。医者に苛立ってのことだが、それ以上に死の影に苛ついていたのだ。「恐らくあんたは、医者の後釜を推薦するつもりなのだろうな。医者にはもう打つ手がなくなった時にはだよ。そして、察するに、あんたが俺に持たせたがっているような美徳を俺の横で神に祈るよう、あんたの兄弟に使いを出すつもりだな」とだよ。

医者の兄弟というのは、近くで牧師をしているらしいのだ。

あの紳士がこのような仕打ちに遭うのを見て、俺は大いに気を揉んだ。そして、彼が立ち去った時、気の毒なベルトンにその旨を話したのだ。だが、あいつはなおも苛立ったままで、こう言っていた。何もしていないのに、あるいは、何もせずにいるのよりも始末の悪いことをしておきながら、自分から何ギニーとなく受け取り、また、何の役にも立てないことは終始分かっていながら、一ギニーたりとも断ることはなかったのだから、そんな男に向かって口をきく自由を拒まれたくはない、というのだ。

あの紳士は、金持ちだというのに、診察料に関しては貪欲なことで有名らしいのだ。それで、哀れなベルトンは、極めて高名な外国の内科医のものと比べての話だが、イギリスの内科医の法外な診察料についてしきりにわめきちらすのだよ。ただ、あいつも気の毒な

ことに、戦果によって司令官の品定めをするトルコ人のように（死ななければならないことを思い、じっとしてはいられなかったのだ）、仮にも回復の望みを与えてくれるなら、医者を崇め敬うし、三倍の金額だって出し惜しみをするつもりはなかったのだよ。

それでもやはり、医師たちは料金をもっと穏当なものにするか、あるいは、料金に見合うよう、もっと努力をすべきだと言わねばならないだろうな。何しろ、大抵の場合、連中はただ部屋に入って来て患者の脈を取り、看護婦に二、三質問をし、患者の舌や、ことによると尿を調べるだけなのだ。そして、腰を下ろすと、えらく賢そうな顔で処方を書くのだよ。山吹色に輝く診察料に素早く手が伸び、医者たちは急いで立ち去る。まるで、病人の部屋にいると感染するとでも言わんばかりにだよ。そして連中は、大いにはやっている場合だが、次の患者へと急ぎ、さらに次へと向かうのだ。午前中に行う往診の数と、それに費やす時間の短さを誇りながらだ。連中はディナーの席に着き、ポケットの中身を空にする。そして、再びポケットを満たそうと、もう一度繰り出して行くのだ。こうして、わずかな間に、連中は莫大な財産を築くのだが、自分の身に降り懸かった大損害のことを初めて知らされた時に、ラトクリフ（四八）が言っていたように、「損害を取り戻すには、ただ百の階段を昇り降りするだけのこと」だからだよ。

あいつの傍らで祈ってもらうため、牧師に来てもらうよう、サンバー夫人が（ベルトンの妹だ）何度か提案したのだよ。ところが、哀れな男に言わせると、牧師のことは考えるのも耐えられないとのことだった。その後一、二時間もすると、きっと死んでしまうだろうから、というのだ。そしてあいつは、およそ有り得ない話なのだが、回復することになおも望みを託そうとし、何度も妹に尋ねるのだ。自分と同じくらい具合の悪い人間で、だれもが見放しているというのに、ほとんど奇跡的に、再び起き上がったような者を見たことはないか、とだよ。

妹は首を振りながら、見たことはあると言っていた。だが、そういった者たちの病気は急性であって、また、〈峠〉のあるようなものだと一度口にしたところ、あいつは妹のことを「望みの小さな奴」だの「ヨブの慰め役」だのと呼び、もっと適切なことを言えないのなら、そして、病人が耳にするのにもっと相応しい話を出来ないのなら、一切口は開かないように命じたのだ。しかし、気の毒なことに、あいつ自身何の望みもないのだよ。意気地なく恐れおののいていることからも明白だろう。医者が立ち去るとすぐに、そんな状態に陥ったのだが、それこそ物凄いものだった。

水曜日　夜九時

気の毒に、あいつが痙攣を起こしたのだ。猛烈な痙攣だよ。ここ一時間に亘ってのことだ。おゝ、主よ。死というのはショッキングなものだぞ、ラヴレース。まったくの話、ショッキングなものだ。この場に貴公がいてくれたらと、本心からそう思う。単に友達を案じる気持ちというだけのことではない。死というのは万人共通の定めだから、あいつの悶え苦しむ姿の中に、そのうちわれわれ自身がどうなるのかを看て取るわけだよ。まるで背中に冷水を浴びせ掛けられたような、あるいは、激しいおこりの発作に襲われたような気分なのだ。退室せずにはいられなかったよ、俺も。そして、筆を執ってはいるのだが、何を書いているのか、確とは分からないのだよ。貴公がいてくれたらと、本当にそう思う。

あれ以上踏み止どまることが出来ず、あいつの傍を離れて来たのだが、一人になっても落ち着けないのだ。もう一度あいつのところへ行かねばならん。

十一時

可哀相にな、ベルトンも　…　まっしぐらだよ。ただ、俺が入って行った時には意識があった。気の毒なことに、意識がはっきりし過ぎているのだよ。あいつの話では、心に引っ掛かっている打ち明けたいことがある、というのだ。生涯を通じて最悪の行為で、貴公なり俺なりがあいつについてかつて承知していたものよりも、さらに悪いものだと言っている。だから、極めて悪辣なことに違いないのだよ。

あいつは皆に退室を命じたのだが、打ち明ける前に、またも痙攣の発作に見舞われてしまい、生死の境目でもがいているところなのだよ。それでも、俺はもう一度入って行くことにする。

午前一時

あいつもまもなくお終いだろう。可哀相にな。気の毒な奴だよ。話したかったことの一部は匂わせていたのだが、息を引き取る間際のしゃっくりの発作や痙攣に邪魔され、まるっきり辻褄が合わないのだ。

俺に推測出来る点からして、確かに、たっぷりと悪いことに違いないのだ。あゝ、ラヴレース、俺が心配なのは、懸念しているのは、早過ぎたのでは、ということだよ。あいつが叔父の地所を手に入れたのがな。

もしも人間がいつまでも生きていられるというのなら、卑劣なことをしてみようという誘惑も少しはあるかもしれないな。その場合にはそういうことになるわけだが、永遠に続く安寧とか、豊かさ、あるいは、富を手に入れるためにだよ。だが、十年、二十年、三十年に亘る貧乏暮しを求めて悪の道に入るというのは、果たして値打ちのあることなのだろうか。しかも、その間ずっと、良心の痛みも伴うわけだからな。また、すべての幕を引くに際しては、過去の罪過を振り返り、ひどい苦痛を味わうのだよ。何もかもが無価値に見えてしまうのだ。最も価値を置いていたものが、最も嫌悪を誘うものになってしまう。そして、気の毒なあいつが二十回も繰り返して言っているように、何を一つ思い浮かべたところで、必ず悲痛な思いや自責の念が伴うことになるのだよ。

生まれなければよかったと嘆いている哀れな男の言葉　…　死後は無に帰するよう祈るあいつの声　…　あゝ、何と恐ろしい話なのだ。

とりとめもなく漏らしていた言葉からして、あいつにとってははなはだ不都合なことらしいのだ。許しのことも、慈悲のことも、自分には一切見込みがないと、あいつは繰り返し言っている。

この教えを正しく活用するつもりだ。笑いたいのなら、笑ってくれ。だが、これまで行って来た無謀な真似は今後一切、絶対に止め、誘惑を覚える時にはいつも、ベルトンの断末魔の苦悶のことを、そして、俺自身の死に際がどうなるのか、それを思い浮かべることにしよう。

木曜日　午前三時

あいつももう臨終だな。最期の喘ぎで喉がごろごろ鳴っているのだ。ほぼ一分毎に新たな痙攣が起きている。あいつはどれほど恐ろしい思いをしているのだろう。両目は息で曇ったガラスみたいなのだ。もう、ぞっとさせるようにギョロギョロと動くこともなく、すっかり坐ってしまっている。顔は歪み、落ち込んだ顎と吊り上って逆立つ眉で引き延ばされ、皺を刻んだ額が伸びていることもあって、いつもの長さの二倍に見えるのだよ。ベルトンの顔ではないのだ。貴公のベルトン、そして、俺のベルトンの顔では有り得ない。親しくボトルを傾け、勘定書を比べつつ、あんなに楽しく眺めたベルトンのものではないのだ。ごく最近あいつに呻き声を上げさせたように、いずれはわれわれに突きつけられ、われわれを唸らせることになるかもしれない勘定書のことだが、あいつが呻いたのも、呻く余力のある間の話だったよ。何しろ、もうあいつの声は聞き取れず、すべて含み声のまま消えてしまうのだ。目で訴えることすらしない。それでいて、不思議な話だよ。どういうわけなのだろう。あいつの下で、ベッドが揺籠のように揺れているのだ。

四時

あゝ、彼はもういない。あの呻き、あの恐ろしい呻きは
死なんとする心の最後の告別の辞だったのだ。
苦しみもがく魂がその旧居に永久の別れを告げ、
立ち去って行ったのだ。あゝ、何処へ去ったのか（四九）。

これで、確かにすべてがお終いだ。気の毒にな、本当に気の毒だよ、ベルトン。今頃は君にも分かっているのだろうな。君の罪業は神の慈悲の枠を越えたものなのかどうかということがだよ。これで、皆の世話も看病もお終いというわけだ。これで、この世に関してだが、今は亡きベルトンよ、われわれ友人は君の最悪の事態に接したことになるのだ。体と心の両方について、君は耐え難い拷問から解放されたのだよ。その拷問と君の改悛の情が君の罪過の償いとなるよう、そして、君がとこしえに幸せになるよう祈っている。

神は罪人の死、その魂の死を望みはしないということをわれわれは教えられている。また、君が深く後悔したのも確かなのだ。だから、こう思いたいのだよ。つまり君は、君も一度ならず勇敢に立ち向かったことのある、友情を裏切られた者が振るう剣によって、罪を犯している最中に切り殺されたわけではないのだから［あらゆる死に様の中でも、自殺に次いで最も恐ろしいものだ。悔い改める機会が一切ないのだからな］、これは、君の懺悔が受け入れられることの慈悲深い兆しなのだというふうにだ。そして、君の長患いと、その最後の段階での恐ろしい苦悶が、君にとっての唯一の罰だったというふうにだよ。

息を引き取る前に、闇に包まれたあいつの心に慰安の光が一筋差し込むのを目にすることが出来たならと、俺としては心の底からそう思うのだ。ところが、あゝ、最後の最後まで、恐怖と錯乱に終始したのだよ。そして、俺としては、唯一の懸念が次の点から生じるのだ。つまり、何ヶ月にも亘って衰えが目についていたのに、亡くなる四日前までは、きっと死ぬのだという考えを持たせるわけに行かなかったということだ。また、そのような思い込みがあるから、出発を強いられぬよう願っていたこともあり、真剣に旅の準備に取

り掛かる気持ちがあいつにはあまりにも欠けていたのだ。そして、旅を引き延ばすわけに行かないのだと案じ始めると、苛立たしい思い、恐怖、そして、不安から、死に瀕した者本人はもとより、その友人たちにとっても一番の心の慰めとなる、あの信頼と諦めの姿勢がほとんど見受けられなかったということだ。

だが、亡きベルトンのことは、われわれ全員が大いに必要としているあの慈悲の御心に委ねることにしよう。そして、俺自身としては（君と他の仲間は、ラヴレース、好きにして結構だよ）、自分の愚行の懺悔に取り掛かるよう努力するつもりだ。身体が健康で、思考力も健全なうちにだ。また、俺が害を与えたとか、騙したとかした者たちに対し、出来るかぎり原状回復とか補償に近づくよう、何らかの償いを行うことが自分の力で可能なうちにだよ。君らが表向きは、また、誤った雄々しさの観点から、俺の決意を思い切り軽んじて見せることがあるとしても、君らのだれ一人をとってみても、君らが恐れる、あの来世での生活を信じないように骨折っている、捨てばちで間抜けなぐうたら連中の仲間などではないわけだから、君も行動には表さないとしても、心の中では、俺の正しさをきっと認めてくれるはずだと思うのだ。そして、君もいつかは、俺と一緒に同じ決意を固めていれば良かったのにと願うだろうし、そこには、おそらく君が今容認する以上に、多くの分別が含まれていることも認めてくれることだろう。

木曜日　朝七時

最後の手紙からすると（今この手に届けられたところだ）、バークシャーに向けて出発する前に、もう一度俺から便りがあることを君は切望している。そこで、君の手紙の中にあった、現段階で俺が触れることの出来る唯一の話題について二言、三言述べ、結びとすることにしよう。君が写しを送ってくれた令嬢の手紙のことだよ。

休む暇が無かったし、悲しい光景を目の当たりにしていたこともあって、どんな形にせよ、あの文面に説明を加えることはまったく出来ずにいたのだ。文面を見て、君は有頂天になっている。君の考えているとおりならば、それで当然だろう。また、君の喜びを奪いたくはないのだ。しかし、俺としては、驚いたと言わねばならないのだよ。

まさか、ラヴレース、この驚くべき手紙は何かの企みを進めるため、そして、俺を欺くため、貴公自身がでっち上げたものではないのだろうな。ただ、文体からすると、それは有り得ない話だな。もっとも、貴公は完璧なプローテウス（五〇）でもあるわけだがね。

しかしながら、この手紙の返送を希望し、左記の点に触れた上は、もう一言たりとも付け加えないことにしよう。

君の真の友にして、善かれと願う者

J. ベルフォード

手紙　五十六

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

八月二十四日　木曜日　朝

貴公の召使が急いでくれたお陰だが、たっぷりと時間のあるうちに貴公の手紙を受け取

ることとなり、俺としては、二、三の段落について感想を述べる機会に恵まれたというわけだ。貴公の手紙の一、二節をモーブレーに読んで聞かせたところ、貴公が紛れもなき泣き言の大家だという点で、われわれ両名は意見の一致を見た次第だよ。

今は亡きベルトンよ、何と恐ろしい葛藤だったのだろうか、君の最後の葛藤は。それでも、あいつが幸せであることを俺は願っている。また、あいつの死の苛酷さが貴公には大変な警鐘となりそうなこともあって、俺としては、それだけに一層希望を持つのだよ。そのはずだと貴公が断言しているとおりの効果を発揮するとしたら、あいつの死はどれほど多くの悪さを防止することだろうか。どれほどたくさんの善を施すことだろう。この機に際し(もしもそのことを知ればの話だが)、どれだけ多くの不幸者たちが喜ぶことであろうか。それ自体はいかに悲しい出来事であっても、座して甘んじることを余儀なくされていた損害への補償をもたらすはずの機会なのだからな。だが、ジャックよ、叔父の死によって貴公も金持ちになったとはいえ、大丈夫なのか。そんな誓いを守ったりして、すっかり破産してしまうことにはならないのかな。

貴公のことは、笑いたいのであれば笑っても構わない、との仰せだな。そんなつもりはないのだよ、ジャック。笑いの種にすべき事柄だとは思わないし、今は亡きベルトンの件でわれわれ全員が被る損失のことを心から案じてもいるのだよ。それに、俺も少し落ち着き、地上のものすべての虚しさについて(この上なく陽気に過ごしている際にも時々は顔を出してしまう問題なのだが)思い巡らす暇が出来た時には、こういった話題に関し、真剣に貴公と語り合うということも大いに有り得る話だよ。また、貴公が第一歩を踏み出した悔い改めの歩みでも、あまりにも俺に先んじているというのでないのなら、手と手をつないで一緒に進むつもりでいるのだ。先行しているのなら、せめて、貴公の姿をいつも目に留めさせてもらいたい。何しろ、骨の折れる道程だし、出発の時点では、貴公ははるか遠くに離れているわけだからな。ただ、貴公は俺よりもはるかにのろまで不器用な男だから、俺としては、大して喘いだり汗をかいたりすることもなく、しっかりとたゆまずに小走りを続けるだけで、貴公に追いつくことは出来るだろう。

それはそうと、お望みのとおり、貴公の手紙は引き取ってもらおう。今のところ、どうしてもポケットに入れておきたくはないし、読み直す気にもならないのだよ。

我が愛しの君と会わずに田舎へ向かうことにする。一筆認め、父親の屋敷で顔を合わすまでは近づかぬよう彼女と約束したが、早とちりだったな。彼女は今、実際にスミスのところにおり、俺も極めて近くにいるわけだから、一度短時間の訪問をしても、別に害はなかったはずなのだ。

謝意を込めた挨拶の言葉を持たせ、また、彼女の様子を尋ねるために、二時間前にウィルを遣わしたところだ。

この魅惑の君をどこまで崇めなければいけないのだろうな、俺は。何しろ、彼女から一階と部屋一つ以内のところにいたということで、召使のほうが自分よりも幸せ者だと、俺はすぐにもそんな考え方をしてしまうのだからな。

モーブレーと俺は馬を進めながら、それぞれに涙をこぼすことにする。今は亡きベルトンを偲んでな。「馬を進めながら」というのは、二人がM卿のところに到着し、俺のほうから卿と従姉妹たちに愛しの君の手紙の件を知らせた暁には、われわれは大変な喜びようとなり、悲しいことなどはことごとく忘れてしまいそうだからだよ。俺の改心に寄せる一族

の願いが（連中が大層執着している点なのだ）、これでそっくり復活するわけだが、俺が結婚すれば、改悛の情や無念な思いが当然のこととして湧いてくるだろうというのが、連中の信条の一つだからだよ。

モーブレーにしても俺にしても、口頭での葬儀への案内には応じないだろうな。われわれはこの手の陰気で形式ばったことは好かんのだよ。それに、そのような席で表明されるものと思われている、亡き友の思い出に対する敬意に関してだが、こういったひけらかしについては、その目的で雇い入れた者たちに任せることを流行らせた、そんな連中への中傷となるようなことを、どうしてわれわれがしなければならんのか、ということだな。

さらばだ。元気を出すんだよ。今は亡きベルトンのために貴公がしてやれることはもうないのだ。あいつのために死ぬまで泣きわめくとしてもだよ。

手紙　五十七
ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

八月二十六日　土曜日

木曜日の午後、今は亡きベルトンの遺書の開封に立ち会ったが、遺書では、俺をあいつの唯一の遺言執行人と定め、百ギニーを遺贈してくれた。この金はあいつの不幸な妹に贈ることにするが、あいつは妹に対し、俺がそうあって当然と考えるほどには親切でなかったのだよ。あいつはまた、モーブレー、ターヴィル、貴公、そして、俺に、それぞれ二十ポンドを遺してくれたのだが、あいつの形見としてはめる指輪のためのものだ。

あいつの葬儀の仕度に関していくつか細かい指示を与えた後、俺は上京したのだが、到着したのは木曜日の夜遅くなってからだったし、これまで数晩に亘って寝不足が続いたために疲れており、気持ちが沈んでいたこともあって［俺には避けられないことだったのだよ、ラヴレース］、お体具合を尋ねようと、無垢なる受難者には挨拶を送るだけで我慢した次第だ。

俺の使用人がスミスの上さんに会ったところ、上さんは、令嬢の病状がこれまでになく悪いこともあり、俺の上京を大変嬉しく思う旨を奴に話したのだ。

君宛の令嬢の文面を説明するのは、あるいは、その文面と俺が伝えようとしている事実とを調和させるのは、不可能なことだよ。

昨日（金曜日）の朝七時にはスミスの店に着いた。そして、祈祷式のため、令嬢が駕籠でセントダンスタンへ出掛けていることを知った。彼女はあまりにも具合が悪く、コヴェントガーデン教会へ向けて六時に出発することが出来なかったのだ。また、駕籠のところまで、ロヴィック夫人に支えてもらわねばならなかったのだ。連中としては、出掛けないよう説得しようとしたのだが、令嬢が言うには、最後の機会になるかもしれないから、とのことだった。礼拝中に令嬢の容体が悪化するのを恐れ、ロヴィック夫人があそこまで彼女の先に立って歩いたのだよ。

スミスの上さんの話では、水曜日の夜、令嬢の具合がひどく悪くなり、終油式を受けたがっていたので、教区の牧師によって願いどおりに与えられたのだが、令嬢はこの牧師に向かって、神聖な準備を整えるに際しては、あらゆる機会を捉え、援助の手を差し伸べて

くれるよう懇願していたというのだ。

牧師はこれを引き受け、翌朝、彼女の具合を尋ねに訪れた。そして、一言伝えると、すぐに通してもらった。彼は三十分ほど彼女と過ごし、降りて来ると、顔を背け、ためらいがちにこう言ったのだよ。「スミス夫人、お宅には天使がおられますな。夕方にもう一度伺うことにしましょう。あの人がお望みですからね。そして、あの人のお気に召すように思われるだけ、何度でも伺うことにしましょう」とだよ。

彼女は衰弱の度合いが進んだ原因として、君のせいで被った疲労のこと、それに、その日のうちに返事を書いたのだが、姉から受け取った手紙のことを挙げていた。

スミスの上さんによると、別々に二人の人物が訪れたという。一人は木曜日の朝、今一人は夕方だったが、彼女の健康状態を尋ねるためであり、その目的で彼女の身内の者に委託されたかのような様子だったそうだ。だが、彼女に会うことは求めず、ただ、彼女を訪ねてくる人間のこと（とりわけ、俺に関してらしいのだが、一体どういうつもりなのだろう）、彼女の暮らしぶりや出費のことを根掘り葉掘り訊き、一人は、どのようにしてその出費に耐えているのかを尋ねたとのことだ。スミスの上さんが言うには、この後のほうの問いに対しては、それが事実なのだが、令嬢は衣類の一部を売らざるを得なくなったし、現に、もっと手放そうとしているところだと答えたそうだ。それを聞いた質問の主は（真面目で年配の農民風の男だが）、両手を差し上げ、「あゝ、何てことなのだ。あのお方には悲しい悲しい知らせとなりましょう。触れてはいけない点だと思いますね」と言ったそうだよ。だが、スミスの上さんは、男がだれのところから来たのであれ、その点を口に出してくれるよう、頼んだと言うのだ。男は首を振り、もしも令嬢が亡くなるようなことになれば、この世の華が消え去るのであり、彼女がその一員であるあの一族も、ありきたりの一族に過ぎないものになってしまうだろう、と言ったそうだ(ア)。俺としては、この男の言い種を嬉しく思った次第だよ。

君を避けるために下宿を離れねばならなかった際、彼女はどのように時間を過ごしていたのか、知りたいことだろうな。

スミスの上さんの話によるとこうだ。月曜の朝出掛ける際には、令嬢はひどく具合が悪く、階段を降りる時も、また、君が前に知らせてくれたように、看護婦を伴い、店の中を通って馬車に乗り込む時も、胸が張り裂けんばかりに溜め息をついていたそうだ。御者には（令嬢がその日一日雇ったのだが）、新鮮な空気に当たることの出来るところならどこへでもやってくれるよう命じた。そこで、御者は令嬢をハムステッドへ、そして、そこからハイゲートへとお連れした。ハイゲートのローンボーリング場の会館で令嬢は降りたのだが、具合はひどく悪かったという。朝食を済ますと、どこへでも結構だから、静かに馬車を進めてくれるよう、御者に指示をした。御者はゆっくりとマスウェルヒルへ向かい、そこのパブに馬車を止めたのだが、令嬢は極度に衰弱して元気がなかったのに、注文していたディナーが運び込まれるまでの二時間、書き物をしていたそうだ。令嬢は食べようと努力したのだが、喉を通らなかったのだ。食欲がない、すっかりなくなってしまった、と令嬢は言っていたという。それから、さらに三時間書き物をした後、体のだるいこともあっ

(ア) この男は、後にも分かるとおり、令嬢の従兄弟モーデンのところから来ていたのである。本巻の手紙八十六および九十を参照のこと。

て、肘掛椅子で少し休んだ。目を覚ますと令嬢は、ロンドンへ向けてゆっくりと馬車を進めてくれるよう御者に命じた。ロヴィック夫人の友達の家へだが、そこで、合意してあったとおり、その人物と出会ったのだよ。だが、君が来ていることは未亡人から聞いていたし、君の振舞いにショックを受けて当然なところもあったわけだが、極度に体具合が優れないこともあり、令嬢は夜遅くにも帰宅したがったのだ。君を避ける術はないように思うと、令嬢は言っていた。自分が長く生き延びることはないように思うし、また、君の姿がもたらすに違いないショックのせいで、君の目の前で自分の運命にケリがつくということも有り得ない話ではない、とだ。

そんなわけで、令嬢は帰宅した。君の驚くべき酔狂に関する説明を聞いていたが、何度も両手を差し上げて天を仰ぎ、こんな言葉も交えていたそうだ。「ひどい人ね」「救い難い人だわ」「どんなことがあっても真面目にはなれないのかしら」とだ。そして、そんなにも鉄面皮な男と顔を合わせるのは、考えるだけでも耐えられず、翌朝早くにいつもの駕籠に乗り込むと、テンプルステアーズ（五二）へ運んでもらったのだが、そこへは、自分よりも先に看護婦を遣わしてあったのだ。手漕ぎボートの仕度をさせておくためだよ（前日の疲労もあって、馬車には耐えられなかったのだな）。それから、令嬢はチェルシーまでボートで運ばれ、朝食を取った。そして、その辺りに船を浮かべた後、ブレントフォード・エイトの白鳥亭に立ち寄り、食事をした。書き物もしたかったのだが、使い物になりそうなペンとかインク、あるいは、個室の便宜が得られなかったのだ。そこで、リッチモンドまで進んだ後、モートレークへ戻ると、漕ぎ手が勧めた宿に立ち寄り、お茶にした。令嬢はそこで一時間ほど書き物をし、テンプルへ戻った。そして、岸へ上がると、漕ぎ手の一人に駕籠を呼んで来させ、前の晩のように、未亡人の友人のところへ運んでもらったのだ。そこで再び未亡人と会ったわけだが、未亡人のほうでは、その日は二度、君が彼女を捜しに来ていたことを知らせたのだ。

その家で、ロヴィック夫人は姉の手紙(ア)を令嬢に渡した。すると、令嬢はその文面にすっかり心を乱され、二度に亘って危うく気を失いかけた。そして、ロヴィック夫人がスミスの上さんに話したことだが、令嬢はさめざめと涙を流し、夫人たちにしてみると、これまで彼女が口にするのを聞いたこともないほどの、身内に関する激しい言葉をいくつか漏らしていたとのことで、連中のことを残酷だと称し、自分に対する悪辣な仕打ちや、ひどい言い種に不満を述べていたそうだ。

令嬢がこのように心を乱している間に、スミスの上さんがやって来た。そして、君が三度目の訪問をし、ちょうど立ち去ったところで（九時三十分過ぎのことだ）、努めて慇懃丁寧にしたいと思うが、何としても彼女に会う覚悟でいる旨の言葉を残して行ったことを伝えたのだ。

心安らかに死んで行くことを許してもらえないのは辛い話だ、と令嬢は言っていた。自分の運命は苛酷なものであり、嘆きを堪えることが出来ないのではと心配になり始めているし、また、自分の過ちよりも罰のほうが厳しいのではとも思い始めている、とだよ。ただ、すぐに我に返り、余命が短いということ、そして、より良い生命が保証されているということで、自らを慰めていたのだ。

(ア) 本巻の手紙六十を参照のこと。

これまで述べて来た点からして、君も俺と一緒に次のように結論することだろう。つまり、ロヴィック夫人の手で令嬢に届けられた手紙というのは（その宛名書きを君は姉の筆跡と見たわけだが）、その文面をもって、帰宅した暁には君宛に一筆認めることの根拠としたという、例の手紙ではあり得ないということだよ。しかしながら、ロヴィック夫人にしてもスミスの上さんにしても、あるいは、上さんのところの使用人にしても、それ以外の手紙が令嬢に届けられたことは承知していないのだ。ただ、令嬢が実際に君宛の手紙を書いたことについては、婦人たちも保証してくれたので、写しを送ってくれた彼女からのあの手紙は、君が（俺にも推測出来ない何らかの目的で）でっち上げたものではないのかという、胸に抱き始めていた疑念は取り除かれたわけだよ。

水曜日の朝、令嬢の手紙に対する君の返事を受け取った時、令嬢はこう言っていた。必要は発明の母と言われるのも尤もな話であるが、悲運こそは高潔さの試金石である。自分としては、言い訳の立たない行動を取ったわけではないと思いたい、とだよ。そして、そこで彼女は一、二分口を閉ざし、それから、おそらく、これでもう心安らかに死んで行くことを許してもらえるだろう、と言ったのだ。

俺は令嬢が戻るまで待っていた。俺を見て彼女は喜んでくれたが、ひどく弱っていたため、階段を昇る前に一休みしなければならないと言い、ロヴィック夫人に寄り掛かりながら奥の仕事場に入った。そして、腰を下ろすと、「お会い出来て嬉しいですわ、ベルフォードさん。そのように申さねばなりませんわね。誤った報告をする人たちがどのようなことをおっしゃろうともです」と言っていた。

この言い方に俺は驚いたが(ア)、腰を折りたくはなかったのだ。

「あゝ、あなた」と、令嬢が言っていた。「嘆かわしいほど悩まされているのです。評判を落とさずに生きてまいりますのを私に許そうとなさらなかった貴方のお友達は、心安らかに死ぬことも許してくださらないのです。私の様子はご覧いただけますね。この一週間で、私に大きく変わったところはありませんでしょうか。でも、すべて良いほうへなのですわ。ただ、もしも私が生きることを願っているのでしたら、貴方のお友達は、貴方の残酷なお友達は、私をとても傷つけたのだと申さねばなりませんわね」とだ。

令嬢はひどく弱っており、息切れが激しく、また、その言動には非常に哀れを誘うものがあったため、俺としては彼女の傍を離れずにはいられなかったのだ。二人の婦人と令嬢の看護婦も顔を背け、涙に暮れていた。

「前回お会いいたしましてから、マダム」と、俺は言った。「数日に亘りまして、まことにショッキングな光景を目の当たりにしていたのです。気の毒な友人ベルトンも今はもうおりません。昨日の朝、恐ろしいまでの苦悶のうちに世を去りましたので、その苦しみようがもたらしました印象のため、私もすっかり弱気になりまして　…　」とだよ。

俺が悲しんでいるのは、この目に映った令嬢の衰弱ぶりによるものなのだとは思われたくなかったのだよ。彼女を滅入らせてしまってはいけないからな。

「それは、他でもなく、ベルフォードさん」と、彼女が言葉を挟んだ。「その印象を適切に利用なさればの話ですが、心を強くするためなのです。でも、貴方も厳粛な状況に接することで、そのように人間らしい感情を動かされておられるのですから、貴方が自家薬籠

(ア)　本巻の手紙六十二で説明されている。

中のものとしておられる文体と筆遣いで、貴方の陽気なお友達にその出来事を報告していただけると嬉しいですわね。お仲間についてのお仲間からのお話になるわけですから、もしかいたしますと、あの人の心を動かすことが出来るかもしれませんもの」とだ。

君にも何らかの影響を与えたはずだと考えているような、そんな仕方ですでに書き送った旨を、俺は話して聞かせた。

「つい先頃、この誠実な方々のお宅であの人が見せた振舞い、そして」と、令嬢が言った。「私を無慈悲に追い回しておられる点からいたしまして、何事であれ、真面目なこととか厳粛なこととかが、あの人の心を動かすようにはとても思えないのです」とだ。

われわれはベルトンの死に際の態度について少し話し合い、俺のほうからは、哀れな男の苛立ちや絶望の様子に関していくつかの具体例を挙げてみせたのだが、彼女は熱心に耳を傾け、延命という問題に関して見事な見解を述べていた。

われわれが話し合っていると、ハウ嬢のところから馬でやって来た男の手で、手紙と小包が令嬢に届けられた。令嬢はそれを読むため、二階の部屋に引っ込んだ。そして、俺がスミスの上さんやロヴィック夫人と語り合っていると、医者と薬剤師が二人揃ってやって来た。彼女が危険な状態にあることに関して、二人は俺の懸念が当たっていることを認めていたよ。二人は共に、彼女の身内の無慈悲さや、君のしつこさの新たな例について知らされていたのだ。そして、医者のほうでは、あのご婦人の執念深い父親とか、あのご婦人をこのような難儀に陥れた男性とか、そのいずれにも、どのようなことがあってもなりたくはないと言っていた。「あの方は悲しみに打ちひしがれておられます。お亡くなりになるでしょう。救う手立てはないのです。しかし、仮にも私が今名を挙げた人たちの一方、あるいは、もう一方の人間だといたしますと、その後で、どのように自分を支えて行くべきか、私には分かり兼ねますね」というのだよ。

われわれ三人が一緒にいることを告げられると、令嬢はわれわれに上がってくるよう求めた。令嬢は立ち上がってわれわれ迎え、彼女の体調についての一般的な質問二つか三つに答えた後、われわれに向かって次のように話し掛けたのだ。

「貴方たちお三方とはもう二度とご一緒出来ないかもしれませんので、この機会を利用いたしまして、皆様に感謝の気持ちを述べさせていただきたいのです。貴方には、それから、貴方にもですが［と、医者とゴダード氏に向かって膝を曲げ、身を屈めながら］、友人以上の、父親にも似たお世話とお心遣いとをいただきまして、言い様もないほどに感謝いたしております。貴方たちのお仕事に慈愛の心が見受けられましても、稀な特質では決してないのだと申せましょう。貴方たちはご職業からいたしましても紳士でいらっしゃるのですからね。でも、私がご両人から授かりましたような、あれほどのご親切、あれほどの慈悲心は、寄る辺ない娘にとりまして、いまだかつて出会ったこともないものでございます。それにいたしましても、常日頃から気づいておりましたが、神意に身を委ねておりますかぎりは、旧い友人が去って行きますたびに、必ずや新しい友人を作っていただけるものなのですね。

こちらの殿方は［と、俺に会釈をしながら］、自分の遺言執行人として、私がおよそ思い付きそうもない人物の一人だと、中にはそのようにお考えの人たちもいらっしゃるのでしょうが、それでも、私に選ぶことの出来ますただ一人の方なのです。ですから私は、その慈善的なお仕事をしていただきますためにこの方を選んだのです。そして、この方もご親

切にお引き受けくださったのです。と申しますのは、自分の裕福さを誇らしげに語ることも私には出来るのですが、今現在のところ、そのように申せますのは、事実上というよりは権利の上での話だからなのです。従いまして、貴方たちお三方すべてには、ささやかな感謝の気持ちを重ねて述べさせていただきますし、また、貴方たちと貴方たちのご一族に対しまして［と、一人一人に顔を向け］、貴方たちが私にお示しくださいましたご親切とご厚意とを百倍にして返してくださいますよう、そして、未来永劫、恩恵に与るのを余儀なくされるのではなく、恩恵を施しますことが貴方たちと貴方たちご一族の思いのままとなりますよう、神様にお願いする次第です。皆さん、これは神様にも似た力なのです。かつては、ささやかな程度ではございましたが、私もその力を楽しんだことがあるのです。また、はるかに嬉しく思いましたのは、その力を拡大していただける見込みが得られたことでした。もっとも、その正反対のことを経験し、出会った方や知り合った方のほとんど全員のお世話を受けるという屈辱を味わうことになってしまいました。でも、元はと申しますと、すべて私自身の落ち度から出たことなのです。従いまして、愚痴をこぼしたりはせず、処罰に耐えなければいけませんし、また、耐えたいものと考えております。このような無礼をお許しくださいね。衝動に駆られますままに胸のうちを言い表そうといたしましても、望むとおりの力を持ち合わせておりません、そんな感謝の気持ちで一杯の心は、何を正しく舌先に伝えたら良いのか、途方にくれてしまうものなのです。それでも、元はと申しますと、すべて私自身の落ち度から出たことなのです。従いまして、愚痴をこぼしたりはせず、処罰に耐えなければいけませんし、また、耐えたいものと考えております。このような無礼をお許しくださいね。衝動に駆られますままに胸のうちを言い表そうといたしましても、望むとおりの力を持ち合わせておりません、そんな感謝の気持ちで一杯の心は、何を正しく舌先に伝えたら良いのか、途方にくれてしまうものなのです。それでも、溢れる思いを抑え切れず、恩知らずに黙っておりますよりはと、無理にも舌を動かしまして、気の利かない愚かしい事柄を口に出してしまうのです。ですから、私にお寄せくださいましたご親切につきまして、貴方たちお三方皆様には、今一度お礼申し上げることにいたします。そして、今の私には不可能なあの償いを、全能の神様が行ってくださいますよう、祈る次第でございます」とだ。

目に一杯の涙を湛え、令嬢はわれわれの傍を離れ、控えの間へと引き下がって行ったのだが、後に残されたわれわれのほうは、互いに見詰め合っていたのだよ。

われわれが平静さを十分に取り戻さないうちに、彼女はわれわれのところへ戻って来たのだが、すっかり寛ぎ、楽しげで、微笑みを浮かべていた。「先生」と（われわれが心打たれているのを目に留め）、彼女が言った。「心配をお掛けいたしましたこと、お許しくださいね。ゴダードさん、貴方も、それから、ベルフォードさん、貴方も許しくださいますでしょうね。寛大な性質の人たちだけが示すことの出来ます心配ごとなのですからね。それに、こう申して構わなければの話ですが、その種の心配がもたらします苦しみも、そういった性質の人にとりましては心地好いものなのです。ただ、私にはまだ準備をしなくてはならないことがいくつかございますし、お貸しいただく時間で達成出来そうなこと以上には、お引き受けするつもりもございませんので（ベルフォードさんの今後のご苦労を軽減して差し上げるためでして、それこそは私の努めの一部ですし、また、そうあって然るべきなのです）、貴方たちのお考えを教えていただきたいのです［私の生き方はご覧のとおりですし、ご安心いただいて結構ですが、故意に命を縮めるようなことは一切しないつもりなのです］。私がすべての苦難から解放されますよう願って構いませんのは、果たしてどれくらい先のことなのかという点についてですわ」とだ。

二人は共にためらい、顔を見合わせていた。「恐れずにお答え願います」と、美しい手を片方ずつそれぞれの紳士の腕に置いて、自らの威厳を意識しながらも淑やかに振る舞うよ

うな、そんな乙女だけが表すことの出来る、あの遠慮のなさと慎み深さとをない交ぜにした態度で、そして、熱意を秘めた穏やかな表情で令嬢は言っていた。「私はどのくらいもちそうだとお考えでしょうか。お教え願います。それに、信じていただきたいのですが、私の時間は短くなりそうだとおっしゃってくださればくださるほど、貴方たちが与えてくださいます慰めは、私には大きなものになるのです」とだよ。

「幸いにも貴女と言葉を交わし、幸せな気持ちでおられるお姿に接することの出来ます者たちの心を、貴女は何と心地好い悲哀の情で満たしてくださるのでしょう」と、医者が言った。「ここ数日の間に被られたことが、貴女には大きな痛手となりました。万一、その種の新たな厄介ごとに遭われるようでしたら、持ち堪えていただくことを請け合うわけにはまいらないでしょうね」とだよ。そして、そこで医者は一息ついたのだ。

「どのくらいなのでしょうか、先生。きっともう少し苛立たしい思いをすることになるのでしょう　…　そんな気がいたします　…　でも、何とか心安らかに甘んじる、というわけに行かないことと申しますと、たった一つしか有り得ないのです。それで、どのくらいなのでしょうか、先生」

医者は黙っていた。

「二週間でしょうか」

医者はなおも口を噤んでいた。

「十日でしょうか。一週間でしょうか。どのくらいなのでしょう」と、笑みを浮かべながら、真剣に尋ねるのだ。

「どうしても、とのことであればですが、マダム、先頃まで受けておられたものに優る治療をお受けにならない場合、懸念いたしますのは　…　」と、そこまで言って、医者は再び話を止めたのだ。

「どのような心配があるのでしょうか、先生。ご心配は無用です。どれくらいなのでしょうか」

「二週間ないし三週間後には、最も素晴らしい花がこの世から奪われてしまうかもしれないということなのです」

「まだ二、三週間とおっしゃるのですか、先生。でも、神の御旨が行われますよう祈ることにいたします。ただ、このお陰で、その体力と知力があればの話ですが、しなければいけないのにと、今この心に懸かっております事柄を行いますには、十分な時間が得られることにもなりましょう。ですから、皆さん、私に出来ますことと言えば、お寄せくださいましたご親切のすべてに対しまして、改めて皆さんに［と、われわれ一人一人のほうを向き］お礼を申し上げることだけですわね。それに、認めなければいけない手紙もございますので、もうこれ以上皆さんをお引き止めはいたしません。ただ、そのお薬をもう少し出していただけたらと思いますわ、先生。気持ちの沈んでおります時に、少し元気づけてくれるものですからね」と、令嬢は言っていた。そして、遠慮する医者の手に料金を握らせ、「条件のことはご存じですわね、先生」と言うのだよ。それから、ゴダード氏のほうを振り返り、「機会がございましたら、今晩か明日にでも、お立ち寄りいただけますと有難いですわね。それから、ベルフォードさん、貴方は亡くなられたお友達のお葬式の準備のために出発なさりたいのでしょう。承知いたしております。道中のご無事を祈っておりますわ。そして、お葬式が終わりましたら、お会いしたいと存じます」と言っていた。

こうして、令嬢は引き下がって行ったが、機嫌が良く、落ち着いた様子だった。二人の紳士は一緒に退去した。俺は婦人たちのところへ行き、問い質して見たところ、今日、ロヴィック夫人がさらに二十ギニー令嬢に渡すことになっているのを知ったのだよ。令嬢の別の衣装の代金としてだ。

未亡人が俺に話してくれたのだが、大変に損をしてこの金を工面しなければならなくなったいきさつについて、失礼も顧みずに令嬢を諫めたところ、次のような短い、心打つ会話が二人の間で交わされることになったのだそうだ。

「どのようなものであれ、私の品を身に着けようとする者は、身内にはだれ一人としていないはずです」と、令嬢は言った。「良いものをたくさん後に残して行くことになりましょう。それから、何のためにお金が入り用なのかという点についてですが、驚かないでいただきたいのですが、住まいを購入いたしますのに入り用なのだということでは、いかがでしょうか」

「何から何まで貴女は謎ですわ、マダム。おっしゃることが分からないのです」

「それでは、ロヴィックさん、ご説明いたしましょう。私は女の人ではなく、男の方に遺言執行人をお願いしているのです。この私が、どのようなものであれ、私自身の体に関わりますものをその方のお世話に任せるつもりでいるとでもお考えでしょうか。さあ、ロヴィックさん、これでお分かりいただけますね」と、微笑みを浮かべながら令嬢は言ったのだよ。

ロヴィック夫人の目に涙が溢れた。

「あら、あら」と、自分のハンカチで夫人の涙を拭い、キスをしながら、令嬢が言葉を続けた。「知り合ってくださいましてからほんの間もない者を相手に、何故こんなにも優しく愛情を寄せてくださるのでしょう。大好きなロヴィックさん、喜ぶべきいわれのございます見通しなのですから、どうか私のことを案じたりはなさらずに、明日お友達のところへ行かれて、貴女にお渡しすると皆さんが同意なさったお金を持って来ていただきたいのです」とだよ。

こういう訳だから、ラヴレース、令嬢が「終の住処」を誂えるつもりでいることは明白なのだ。これが沈着さというものだよ。これが平静な心というものだ。最も心乱れる場合だというのにな。まさしく、これこそが心の大きさというものだよ。貴公としては、あるいは、俺にしても、しきりと武勇談を喧伝し、迷惑な蛮勇を奮ってみせはするが、このように振る舞うことは出来るのだろうか。今は亡きベルトンよ、これとは似ても似つかないものだったよな、君の振舞いは。

ロヴィック夫人が言うには、敬愛する聖職者リーウェン師から俺の不在中に受け取った手紙、そして、自分が書き送った返事について、令嬢は話していたそうだ。ただ、どちらの文面に関しても、ロヴィック夫人は承知していないとのことだ。

俺が今認めている手紙を受け取った暁には、貴公も目の当たりにすることだろう。この神々しいばかりの婦人に貴公が与えた損害のすべてを、間もなく終わらせることになるものをだよ。「受け取った暁には」という言い方をするのは、少しばかり遅らせるつもりだからだ。また令嬢を悩ませるような気を貴公に起こされても（令嬢の手紙が引き起こすはずの失望に腹を立てたふりをしてだよ）困るからな。

その長さゆえにだが、この手紙のせいで遅くなってしまったから、エプソム行きは明日

まで取り止めにする。

自分に苛立たしい思いをさせることになるかもしれないと彼女が恐れている、例のただ一つのこととは何なのか、令嬢から説明のあったことに触れておくべきだったな。彼女に知らせが届いているわけだが、モーデン大佐が計画している君への訪問からどのような結果が生じるのか、その点への懸念だったのだよ。

手紙　五十八

リーウェン尊師からCf. ハーロー嬢へ

八月十八日　金曜日

日頃より尊敬いたしております親愛なるお嬢様、かつてのご厚意、そして、私の判断力と誠実味とに関するご意見に甘えてのことではありますが、現在の貴女の不幸なお立場につき、貴女に宛て、数行お便りをせずにはいられないのです。

引き込まれてしまわれたか追い詰められてしまわれたか、そのいずれかでしょうが、貴女の取られた手段につきましては、振り返らないことにいたしましょう。ただ、その件に関しましては、かつて幸福な状況から不幸な状況へと追いやられましたどのお嬢様と比べましても、貴女は非難されるべき点が最も少ないと、私がそのように考えていることだけは申し述べておきます。また、実際の受け止め方を知りまして、無念な思いを味わったわけではありますが、私の遠慮のなさをもっと好意的に受け止めていただけそうに思われました場合には、その旨の発言を怠ることもなかったのです。

私が今筆を執ります主な目的は、貴女ご自身に対しまして、また、女性全体に対しましても、公正な処置を講じていただくためなのです。男性の中でも最も放埒で破廉恥な人物を終身刑として（その者の命は貴女の手中にあるものと確信いたしております）告訴なさることによってというわけですが、ラヴレース氏が貴女に対して行ったと理解しておりますような、それほどの卑劣な振舞いをやってのける人物は、放埒な破廉恥漢に違いないからであります。

体調がはなはだ優れず、今も、筆を執りますのにも、枕に体を預けねばならない有り様なのです。考えは混沌として、筋道も立ちません。従いまして、理路整然たる書き方は目指さず、大まかに私見を述べることにいたしましょう。そして、それは、貴女の信奉する宗教からいたしまして、また、ご一族に対する孝養心や、ご自分の貞節に対して負っている義務、さらには、女性全体への思いやりという点からいたしましても、この極めて邪悪な男性に不利な証言を公表なさることが貴女の務めだということです。

また、もう一つの考えを付け加えさせていただきますが、こうなさることにより、さもなければ兄上とラヴレース氏との間で、あるいは、今は帰国なさり、貴女に正義が行われるよう決意を固めておられるとお聞きいたしておりますが、お従兄弟さんのモーデン氏とラヴレース氏との間で起こりかねない、刃傷沙汰の防止にもなるということなのです。

これは貴女の良心に働き掛けて然るべき考えでしょうし［ご容赦願いますが、親愛なるお嬢様、今こそ私も自らの務めを果たそうと思うのです］、また、貴女ほどのご婦人にとりましては、あの男性を相手に公開の法廷に出廷なさることが慎み深い心への重圧となりま

すことは承知いたしておりますし、大きな障害になるものとも存じますが、その重圧以上に大きな関心事となるべきものなのです。しかしながら、マダム、貴女は十分な威厳を備えておられますから、必要に迫られますなら、また、公明正大さと貞節の求めがあります場合には、赤裸々な事実にさえ赤面を覚えさせるほどでありますことも承知しているのです。辱めを受けた慎ましやかな人物が、その慎ましい心を誘惑しようとする悪党から受けました損害を決して訴え出ることがないとしたら、確かに、放蕩児や凌辱者は元気づけられることになりましょう。それも、そういった連中の行為に最も強い嫌悪の念を抱いている者たちから最も励まされることになるのです。

一言で申しますならば、ご一族の不名誉の回復は、今や貴女ご自身の胸一つで決まるということです。そして、次のような二つの選択肢のうちの一つだけがその回復を可能にするということです。つまり、犯罪者と結婚なさるか、それとも、その人間と法廷で争われるか、そのいずれかなのです。貴女のような繊細なお心の持ち主にとりましては、苦々しい思いを誘う急場しのぎの手段ということになりましょう。

私の承知いたしますところでは、あの男性とその一族の皆さんは、先の方の策をお取りくださるよう懇願しておられますし、今では確かに、それこそがあの男性の力で為し得る償いのすべてなのです。ただ、貴女は皆さんの、そして、あの男性の懇願を、その憎むべき行為に相応しい憤りと軽蔑の態度をもって拒否なさったとは申せ、それでも、あの男性がこれ以上貴女のお心を乱したりしないなら、およそ期待すべきいわれのないものではありますが、貴女はあの男性に対しましても、クリスチャンとしての許しを拒んだりはなさらないものと、私は確信しているのです。

しかしながら、マダム、私のお勧めいたします告訴ということですと、現在と将来に亘りまして、これだけ悪辣な女たらしの新たな妨害を免れますのに、その男の慇懃さ次第となるようなことはございません。貴女のように気高い、そして、正しく導かれました魂の持ち主といたしましては、避けられるものでしたら、そのようなことになりますのはお許しにならないはずと存じます。

それに、辱めというのは、どのような種類のものであれ、それを罰する力がわれわれに備わりますまで、適切な形で許されるということは可能なのでしょうか。辱めのもたらします苦痛や不面目さに悩みながら、許すように装って見せますと、一部の者からは、辱めを憤り、身を震わせている優柔不断な心の、その見せびらかしの慈悲心に過ぎないように思われることでしょう。私の提案いたします救済策は苛酷なものであります。しかし、侮辱以上に厳しい苦痛はあり得るのでしょうか。あるいはまた、正々堂々とした形で訴えられたこともない侮辱の数々がわれわれを苦しめている、などということは、どうして信じてもらえるのでしょうか。

いかに辱められ、迫害を受けましょうとも、節義と美徳に関し、クラリッサ・ハーロー嬢のお考えに揺るぎはないものと確信いたします。また、自らの慎み深さに疑いを向けられても仕方のないことをなさるくらいなら、お嬢様はむしろ死のほうを選ばれることでしょうが、それでも、自他共に認める無垢さと貞節さのために述べられるいかなる事実につきましても、それを慎みのないものとはお考えにならないことでしょう。証拠隠蔽と偽証の間の相違というのは、親愛なるお嬢様、わずかな、極めてわずかなものなのです。

今一度お認めいたしますが、貴女ほどの慎み深いお嬢様が、そのようにショッキングな

事柄の顛末につきまして、公開の法廷で述べざるを得ないと申しますのは、まことに辛い情況ではございます。しかしながら、これほどの恐ろしい辱めを憤ることもなく見逃したりいたしますのは、さらに大きな汚点となるのです。

貴女の側には良心、節義、正義があるのです。そして、もしも貴女がそれらの指示に従いますのを拒んだりいたしますと、慎みというのは名ばかりで実体の無いものだと、一部の者たちからはそのように思われてしまうことでしょう。

この件に関しましては、正直に申しまして、皆さんからご相談をいただいているところです。私見といたしまして、破廉恥漢を告訴なさるべき旨を申し上げましたが、その理由には触れずにおきました。だれにも知られることなく貴女にお示ししようとの決意から見合わせたわけですが、結果のほうが私の望みどおりのものでありますなら、貴女お一人のものにしていただこうとの気持ちからなのです。

これだけは付言いたしますが、仮に、御身に降り懸かりました不幸の数々が私自身の子供の運命であったといたしましても、貴女の不幸以上に私の心を乱すことは有り得なかっただろうということです。我が子を愛してはいるのです。しかし、貴女のことは、愛すると同時に尊敬申し上げてもいるのです。何故なら、貴女を愛するということは、美徳、良識、分別を、そして、女性に備わる善良にして高貴なるものすべてを愛することになるからです。

これらのすべても、貴女がお受けになった辱めのために傷ついているものとは存じますが、貴女の災難を知るに及び、この胸が言い表しようもないほどに痛みましたことは信じていただけましょう。

心からなる貴女の賞賛者、そして、謙虚なるしもべ

アーサー・リーウェン

ちょうど今知ったのですが、姉上様はこの告訴を、正式な許可を得て、貴女に提案なさるとのことです。貴女が当初からこの手段にお決めにならなかった理由は、ご親戚の方々のご賛同とご支援が得られますのをご存じなかったからであろうと、そのように拝察いたしております。

手紙　五十九

クラリッサ・ハーロー嬢からリーウェン尊師へ

八月十九日　土曜日

親愛なる尊師様へ

愛情に溢れた嬉しいお手紙を拝受いたしますまで、今の私には父もおじも兄もなく、また、以前ご愛顧を賜りました男性の中にも、お友達はほとんど残されていないものと考えていたのです。ただ、貴方様のことはよく存じ上げておりますし、間違った意図を抱いていたと、自分自身を咎めるべきいわれも私にはないのですから（貴方様が高い評価を続けてくださいますことは疑わしく思いましたが）、その評価を失ったのか、それとも、失ってはいないのか、また、もしも失ったのであれば、今一度、恥ずかしくない仕方で回復する

ことは出来ないものか、その点に関しまして試してみますのを差し控えますのは、非難されて然るべきことでした。

でも、試みずにおりましたのは、様々な原因があってのことでございます。一つには恥ずかしさからですが、もっと幸せでありました頃には、貴方様の評価の中でどれほど高い位置を占めていたことか、また、私とはずっと近い関係にあります者たちが私を見捨ててしまってからは、どれほど私の評価が下がっていることか、その点を考えてのことでした。そして、また一部には、痛切な苦しみからのことなのですが、苦しみは卑しめられた心を臆病にさせるものでして、すでに名を挙げました大切な、そして、今では失われてしまいました親戚の者たちすべての身代わりに、相当程度までなっていただけるはずでした貴方様の、身内にも似たそのお心におすがりしようといたしましても、恐れの気持ちを抱くことになってしまったのです。

それに、時々は、子としての務めからいたしましても、また、気持ちの点からいたしましても、敬わねばなりませぬ者たちに歯向かって徒党を組みたがっていると思われるのがとても嫌でしたし、長きに亘りまして〈期待と疑わしさ〉の間を引き摺り回され、ある時には、思いのままに振る舞うことがほとんど出来ずにおりましたし、またある時には、被害を与えるとか、その原因となりますことを大層恐れてもいたのです。また、ご親切なお知らせにより、貴方様への働き掛けが受け入れられそうだと、望みを抱きます励ましもいただけませず、少なくとも沈黙を守ってくださるよう、身内の者たちが貴方様から約束を取っているのではと心配していたのです(ア)。

これらの点が …… でも、どうして今更このような甲斐もない思い出話をするのでしょうか。不幸になるのが私の定めだったわけですが、幸せになるためのことであってほしいと願うばかりです。従いまして、そんな夢を頼りに、これ以上前置きは一切なしにいたしまして、優しいお手紙の話題となっておりました事柄への返事といたしまして、二、三行認めようと思うのです（貴方様への便りですのに、わずか二、三行で済ますことが出来ればの話でございます）。

そこで、一言述べさせていただきますが、不幸なクラリッサ・ハーローの場合を除きますと、この種の他のほとんどすべての場合におきましては、貴方様の論拠には反駁のしようもなかったに違いないということでございます。

人前で恥ずかしい思いをするというショックに耐えられない者は、自分たちをそのような事態に至らしめる可能性が多分にあることなのですから、密かな罪を犯しかねないような危険に身を晒すことに対しましては、倍も注意をしなければいけないのは確かな話でしょう。でも、私自身のことですが、仮に、私の体調が優れませんことには何の問題もないといたしまして、また、この男性の告訴のために出廷するよう、自分に言い聞かせることが出来たといたしまして、その場合、人目を避けてあの人とお会いする約束を私のほうからしておりましたこと、そして、その結果といたしまして、愚かにも欺かれ、私らしくも

(ア) 第二巻の百二十八頁で触れられているように、説き伏せられてのことであるが、この立派な聖職者が行った令嬢に対するよそよそしい訪問も（ただ、思いやりに溢れる令嬢はその点を師に思い出させたりはしないのだが）、親の立場という点では、師が自分の味方というよりは、むしろ家族に与しているとする令嬢の考えに、十分な根拠を与えることになろう。

ない真似をしてしまいましたこと、さらには、数週間に亘りまして、あの人と同じ屋根の下で暮らしますのを避けられなかったのですが、そのようにいたしましても、（不平を唱えずにいただけでなく）不平を唱えるべき根拠も見つからなかったことが分かりました場合には、身内の者たちからあれほど期待を寄せられております目的が（つまり、当然の罰をあの人に加えることですが）達成されなくなるという懸念の余地はないのでしょうか。

法廷の外では、そして、個人として真剣に聞いてくださる人たちにとりましては、あの人への反対意見として最も重みを持ったはずのもの　…　とりわけ、あの人が用いました忌まわしい手口の数々がそうですが　…　そんな私のための申し立てのいくつかにいたしましても、法廷の中では（きっと、いい加減に扱われたり、下品な冗談の種にされたりいたしまして）ほとんど効果を上げることはないでしょう。

疑いもございませんが、皆さんの口からすぐにも言い返されますのは、そのような男の手にこの身を委ねるべきではなく、また、この身に降り懸かりましたことは、自業自得と受け止めるべきだという言葉のはずなのです。

でも、訴追が効果的に行われたといたしまして、また、仮にもあの人が死刑を宣告されたといたしましても、その場合、命以上に貞節を重んじております者に対して犯すことの出来ます最大の罪の一つではございますが、あまりにも軽く見られております罪への許しを手に入れる、それくらいのツテをあの人の一族が持っていないなどということは考えられるのでしょうか。その一方で私は、自分の力の及ぶかぎり償いはすると、早いうちから申し出ておりました男性を、血に飢えた心で追い回しているのだと、非難されていたことでしょうね。

それに、もしも赦免されるようなことになったといたしますと、あの人はこれまでどおりの悪事を行って構わないことになっていたのではないでしょうか。

不幸な定めからこの身を委ねることになりました男性の、その厚かましさはひどいものですし、私の身内に対して抱いております宿怨にも大変なものがございますから（あの人に対して身内の者たちが抱く周知の怨念により、また、あの人の命を奪おうとする真剣な試みによりまして、これも正当化されるように人目には映ったことでしょうが）、このような折に、法廷の仕切りの手摺のところで、私と父、おじたち、そして、兄と対決する機会が得られたことに、おそらくあの人は悪い気はしないだろうと思うのです。そのようなことになりますと、両方の側で憤りが（あの人が無罪になるとか、赦免されることで）高まっていたのではないでしょうか。その場合、兄、あるいは、従兄弟のモーデンは、今よりも安全にしていられたでしょうか。

こう考えますと、私の過ちがどれほど大きなものに思われてくることでしょうか。私の動機も、当初は決して非難されるようなものではなかったのです。ただ、私はあの素晴らしい戒めの言葉を知らずにいたわけではございませんが、忘れてしまったのです。「善が生じるために悪をしてはいけない」[五二]というものです。

私の心の汚れなさ、そして、私の信念の揺るぎなさを十分に確信して［このように糾弾されているのですから、自覚いたしております点を、自惚れが強いとの謗りを受けないようにしてではありますが、どうして申し述べてはいけないのでしょうか。すべては義務に他なりませんし、自分がしておりますことを正しく述べられないようでは、まったく申し開きも出来ないでしょうからね。この点を十分確信いたしまして］、あの人は結婚を申し出

たのです。あの人は悔い改めることを公言しているのです。キリスト教徒に相応しいものではないかもしれませんが、心からの懺悔と受け止めて然るべきところはあるのです。それに、あの人の高貴なご親戚の皆様も（哀れな受難者に対しまして、受難者本人の家族よりも親切にしてくださるのですが）、同じ確信から、また、公明正大と言えなくもないあの人自身の謝罪もございまして、あの人を許し、そして、申し出を受け入れるよう、仲裁に加わってくださっているのです。この執り成しの後の部分には、私といたしましては応じるわけにまいりませんが、貴方様は、最高の規範に則り、神聖この上ないお手本によりまして、数々の危害を許すよう教えてくださったのではなかったでしょうか。

あの人から被りました害というのは、実際、極めて悪質なものですし、男らしくもない卑劣さや計画性といった事情も伴っていたのです。ただ、有難いことには、私の心を堕落させはしませんでした。私の道徳観念を傷つけることはなかったのです。それも、あの邪悪な男性のお陰などではありません。不道徳な振舞いが後に続くことは一切ございませんでした。私の意思は少しも犯されていないのです。災いと申しますのは（私自身についてであって、身内のことではありませんが）、単に身体上のことなのです。騙され易さ、優柔不断、警戒心の不足について、我が身を責める点はございません。神のお恵みにより、狡猾この上ないたくらみに打ち克ったのです。あの人から逃げおおせました。あの人とは手を切ったのです。かつては愛することも出来たはずの男性ですのに、その人を軽蔑する力を与えてもらったのです。そこで、慈悲の心こそが私の勝利を完全なものにするのではないでしょうか。そして私は、その勝利を享受することにならないのでしょうか。また、あの人が私の許しに値するのでしたら、どこに私の勝利はあるのでしょうか。可哀相な人なのです。私を失うことで、あの人は損害を被ったことになるのです。私は誇りを持ってそのように考えているのです。自分の心のことは承知しているつもりですからね。あの人を失うことで、私のほうには何らの損失もなかったのです。

でも、もう一つ言い訳がございまして、とても思いやりのある、友情溢れるお手紙のご趣旨にお答えいたしますには、それだけでも（僭越とは存じますが）十分であっただろうと思うのです。

私は知っているのです、親愛にして尊いお友達、幸せな日々に私の心を導き、指揮してくださったお方 … その時に臨みましては、また、その時に向けましての熱心な準備においてさえ、不滅の魂とは関わりのない、不名誉とか被害とかの意識はことごとく、より高尚でより重要な思索の中に吸収されねばならないという、あの重大にして恐るべき瞬間に自分がどれほど近づいているように思われるのかをお話しいたしますなら、この慈愛に満ちた気持ちを目指しております私の努力を、貴方様が許してくださいますことは承知しているのです。

ここまでは、私自身についてのことでございます。

そして、私のお友達や支持者に納得していただくためのことですが、ハウさんは私の事件の一部始終を正しく照らし出すことになります、すべての手紙や資料類の保存を切望しておられます。立派なリーウェン師こそは、そういったお友達や支持者の中の主だった方たちのお一人なのです。

私のことをご存じか、あるいは、耳にされたことのあるような若い人たち全員にとりましては、それらの書面から得られます戒めのほうが、私が法廷に出まして、すでに触れて

おります不利な立場で、はっきりとしない出来事の追及をいたしますのよりは、もっと効果的かもしれないと、厚かましいとは存じますが、私はそのように考えているのです。そして、尊師様、もしも貴方様が今、すべてをご考慮くださいました上で、このとおりのご意見になられるとしたら、また、そうであることが私にも分かるのでしたら、私はそれを特筆すべき幸せと受け止めることでしょう。と申しますのも、私に正当化出来る点があるといたしまして、それが貴方様の目にも正当だと映りますことを、私はこれまでと変わらず熱望しているからなのです。

ご病気のため、筆を執られますのにも、枕にお体を預けねばならないとのこと、お気の毒に存じます。それにいたしましても、そのようなお体の不自由にも拘わりませず、父親にも似たお言葉がこんなにもたくさん含まれておりますお手紙を筆になさるよう、貴方様をいわば駆り立ててくれました、私へのあの親切で惜しみないご関心に対しましては、どれほど感謝申し上げたら宜しいのでしょうか。

今私の感謝の気持ちを引きつけておりますものと同様に、これまで長きに亘ってお示しくださいましたご親切のすべてに対しましても、親愛にして尊いお方、全能の神が貴方様を祝福してくださいますよう祈っております。私が貴方様を今、そして、これからも敬慕いたしますように、私を尊重してくださるお気持ちを、どうか最後まで持ち続けていただきたいのです。そして、貴方様の祈りを前もってお願いさせてほしいのです。祈りを「お続けくださるよう」と申し上げるべきですわね。いつも祈っていただいておりましたのは疑いのないところですもの。また、こうして抵抗の姿勢を貫くことが出来ましたのも、その原因の一部は（幼い頃を通じて教え込んでいただきました、敬虔な教えと同様に）、おそらく、そういったお祈りのお陰なのでしょう。もっとも、哀れな被造物にとって何が最善なのかをご存じの、あの神様の叡智によりまして、貴方様の祈ってくださいましたことがすべて叶えられたわけではございませんけれど　…

貴方様のために私が祈っておりますのは、神様の思し召しにより、貴方様を愛しております信者たちのところへ貴方様がお戻りになり、神様への奉仕と貴方様ご自身の慰めとに向けられます多くの年月を過ごされました後、教訓と同様にお手本にもよりまして、到達することを目指すよう私にお教えくださいました、あの至福の地で、めでたく私どもと出会っていただくことなのです。

クラリッサ・ハーロー

手紙　六十

ARAB. ハーロー嬢からCL. ハーロー嬢へ

［叔父アントニーに宛てた八月十三日付の令嬢の手紙(ア)に対する返事として］

八月に十一日　月曜日

クレアリーちゃんへ

おじ様たち宛の貴女の手紙からすると、おじ様たちは、私もそうだけれど、思っている

（ア）本巻の手紙三十八を参照のこと。

とおりを筆にしたということで、貴女にはすっかり嫌われているようね。

私たちには避けられないことなのよ、クレアリーちゃん。

大層ご執心のふりをしている祝福の件も、どうやら、重ねて懇願するだけの価値があるとは考えていないご様子ね。あれを求めることで自分の務めは果たしたのだと、貴女がそう考えているのは疑いのないところだわ。おそらく、貴女はそれに満足して腰を落ち着けることになるのでしょうね。そして、今後悔しい思いをするのは、傷心の両親に任せようというのでしょうね。最初の一言で貴女に祝福を与えるという点では、それに、行われて然るべきだったと貴女が考えているような、貴女についての問い合わせをするという点では、親の努めを果たさずに終わってしまったということをだわ。駆け落ちをした娘についての問い合わせを進めるのには、見事な励ましといったところね。色男さんが一緒にいてくれる間は同棲を続けておきながらでしょう　…　私に便りをしたことを、貴女も（貴女の控え目な言い方だと、「思いの丈」を込めてだけれど）悔やむことだわね。

ですから、このような形での働き掛けは、どうやら、もうこれ以上私たちのほうにはありそうもないということになるわね。

だとすると、こういうわけですから、クレアリーちゃん、精一杯の謙虚さで、一つ二つ提案をさせていただきますけれど、ご親切にもお返事をしていただけますならば、幸甚の至りというものですわ。

そこで、承知しておいてもらわなくちゃいけないのだけれど、私たちはいくつかの方面から、次のようなことを匂わされているのよ。つまり、貴女は駆け落ちをした相手の悪党からひどい仕打ちを受けていて、その男の罪は、きちんと立証されるなら、死刑にも相当するだろうということだわ。それに、貴女自身がそれとなく触れている点からも、およそそんなところだろうと私たちには思われるわけよ。

もしも、クレアリー、貴女の「思いの丈」と「子の務めを果たしたいという気持ち」から出た言葉には、響きの良い気取った美辞麗句などはないというのなら、そして、ノートン夫人やハウ夫人が知らせてくださったことに真実が含まれているとしたら、あの言語道断な駆け落ちの件は別にしても、あらゆる点について、貴女はまだ私たちにも、また、世間の人たちに対しても、身の証を立てることは出来るのだわ。それに、あの悪党には法の力が及ぶことになるでしょうね。そして、あの男を絞首台に登らせることが出来さえすれば、それは、他のたくさんの人たちを堕落から救うことになるばかりでなく、世の称賛に値する見事な復讐ということにもなるのだわ。辱められた私たち一族の全員にとって、そして、あの男が騙した無垢な人たちにとってもね。

だから、貴女自身、私たち、そして、女性全体に対してこのような正義が行われるためのことだけど、貴女は法廷に出る気持ちがあるのかどうか、その点を（宜しかったら）教えてほしいのよ。もしもその気持ちがないのだとしたら、クレアリーちゃん、貴女のことはどう考えるべきなのか、私たちにもはっきりするでしょうね。貴女にしても私たちにしても、貴女の忌わしい堕落のために、これまでよりももっと苦しむなどということは有り得ないわけですからね。また、もしもその気がおありなら、アクランドさんと弁護士のデラムさんが、然るべき質問をなさるために、そして、貴女の件についての覚書を作るために、一緒に貴女を訪ねてくださることでしょう。訴訟は首尾良く進められそうだということなので、聞いているとおりの成功の可能性をもたらしてくれるならの話だけれど、訴訟

手続きのための基礎にしようというわけなのよ。

でも、ハウ夫人が遠回しに言っておられるところからすると、この点は同意してもらえそうにもないようね。夫人のほうでも、元気の良いお嬢さんを通じて貴女に仄めかしてくださったらしいけれど、効果はなかったわけですからね(ア)。それにまた、あるいくつかの点では、今の貴女にはおそらく出来ない相談なのでしょうね。世間から正当さを認めていただけるほどの思慮深い振舞いをするということはね。これは、もしもそのとおりだとしたら、主のお慈悲を祈るばかりですけれどね　…

先の提案についてあと一言だけ付け加えておくけれど、貴女の崇拝者のリーウェン師のほうでも、はっきりと、貴女はあの悪党を告訴すべきだというご意見だわ。

でも、もしもこの点には同意しないというのなら、貴女への提案がもう一つあるわ。それも、一族一人残らずの名での提案なのだけれど、ペンシルベニアへ渡って、あちらで暮らすことを考えてほしいのよ。一切のことが忘れ去られるまでの数年間ね。また、神様の思し召しによって、貴女と貴女の不幸な両親が生きながらえるならの話だけど、貴女の振舞いが真の、そして、変わることのない悔悟者に似つかわしいものであることを両親のほうで納得するまでの間、少なくとも、貴女が二十一歳になるまでだわ。その時には、貴女の地所に戻って来ても構わないでしょうし、それとも、お望みとあれば、地所の産物をあちらへ送り届けても良いでしょう。お父様がお決めになっている期間だけど、それが習わしなのだし、おじい様のほうで決めておかれるべきだったと、お父様は考えておられるからだわ。それに、付け加えさせてもらいますけど、貴女はその立派な振舞いによって、十八歳でも分別のある年齢には達していなかったことをたっぷりと証明して見せてくれたからなのよ。好々爺ではあっても、困った、甘いお爺ちゃんだったわね。貴女のおじい様の考えでは　…　でも、あまり手厳しいことは止めにしましょう。

ハートリーさんにはご主人を亡くした妹さんが一人ペンシルベニアにいて、その人のところに貴女が下宿出来るよう、あの方は手配してくださるというのよ。真面目で分別があって、書物に通じた女性ということだわ。貴女が無事あちらに落ち着いてくれるなら、貴女のお父様とお母様にとっては、山のようなご苦労や心配事、そして、不面目さを取り除くことになるでしょうね。そして、それこそは、何にもまして貴女が目指すべきことだと私は思うのよ。

ハートリーさんは貴女の旅行中の便宜一切について、貴女の身分や財産に見合うものになるよう請け合ってくださるわ。一ヶ月後に出航する船にお仕事上の関わりをお持ちなのよ。口の堅いハンナを連れて行って結構だし、貴女の新しい知り合いの中から好きな人を選んでも構わないわ。同伴者は同じ女性にしていただきたいわね。

貴女に知らせなければいけなかった事柄は以上のとおりよ。お返事をしていただけますなら(この手紙を届けてくれる人が水曜日の午前中にお返事をもらいに行くはずよ)、大変に勿体ないことと存じますわ。

アラベラ・ハーロー

(ア)　第六巻の手紙四十九を参照のこと。

手紙　六十一

CL. ハーロー嬢からARAB. ハーロー嬢へ

八月二十二日　火曜日

貴女のお気に召すどのような書き方でお手紙をくださいましても、冷酷なお姉様、気に留めてくださいましたことを私はいつでも感謝申し上げることでしょう。でも（私のことをどのように考えておられるにせよ）、貴女が触れておられるような用件では、アクランドさんにも弁護士さんにもお会いするわけにはまいりません。

主のお慈悲を祈るばかりですわ、本当に。慈悲を向けてくださる人など、他には一人もいないのですからね。

きっと、私のことはどこまでも厚顔無恥な人間だと思われているのでしょうね。でなければ、二人の殿方をこのような用事で私のところへ差し向けるような考えは浮かばないはずですもの。

私の悲しい身の上話の委細につきましても、お母様のほうからお求めがあったのでしたら（それとも、貴女がお調べになっても、慎み深さを損なわずに済むのでしたら）、あるいは、私から聞き取るよう、ノートン夫人に指示があったというのでしたら、もっと穏当な処置であったと思うのです。それに、僭越とは存じますが、すでに下されておりますような厳しい判決が申し渡されます前に求められていましたなら、皆さん一人一人のお人柄にもっと似つかわしいことでもあっただろうと思うのです。

これがリーウェン師のお考えであることは承知いたしております。ご親切にも、お優しいお手紙の中でそのことを主張しておられたのです。私も返事をいたしまして、師に納得していただけそうに思われますような理由をお示ししてあるのです。私の答えを見せてくださるよう、師にお願いしてみるのも価値のあることだと、そのように考えていただけたらと思います(ア)。

ペンシルベニア行きという、貴女のもう一方のご提案に対しましては、私の答えはこうです。貴女のおっしゃるあの山のようなご苦労や心配事、そして、不面目さを、私の両親と身内の者たちから負けず劣らず効果的に取り除いてくれるような出来事が、ここ一ヶ月の間に一つも起こらないといたしまして、また、その場合に、私が船旅に耐えられるのでしたら、たとえ旅の途中で命を落とすことが確実だといたしましても、私は喜んで父母の命令に従うつもりだということです。また、このようなことを申しましても許していただけるのでしたら（決して報復の気持ちから出た言葉ではございません）、親身になってくれておりましたが、本当に潔白な、気の毒な私のハンナの代わりに、貴女のベティ・バーンズをあてがっていただくこととし、自分の行動の責任すべてをあの娘に対して取ることにいたしましょう。また、私との同行を無駄骨にはさせないつもりでおります。

貴女とアントニー叔父様の両方が仄めかしておられたことですが、私の新たな不身持ち

(ア) 令嬢が触れている理由を載せた手紙は、その閲覧を請求されることはなかったのである。また、師の亡くなったのがその手紙を受け取った直後ということもあって、手紙の件はなかなか家族の者たちに知らされず、その手紙に期待されていたかもしれない役割を果たすためには、時機を失することとなったのである。

さとやらには、驚くと同時に気を揉んでおります。一体全体、何のことを言っておられるのでしょう。

貴女の手厳しさにはどれほど悲しい思いをさせられているのか、また、その点と無情さのにじむ軽薄な文体にはどれほど苦しんでおりますことか、ハーロー家のお嬢様、私は申し上げないことにいたしますわ。私が口にいたしますことは「響きの良い言葉」や「美辞麗句」と受け取られてしまうかもしれませんし、おそらくは親切なお気持ちからなのでしょうが、私に屈辱を嘗めさせようとの意図からであるのは分かっているからです。従いまして、もしもそのようなおつもりなのでしたら、それは目的から外れておりませんよ、とだけ申し上げておきましょう。

でも、やはり（出来るだけ憤りの気持ちを捨てまして）、祈るだけにいたします。貴女が今持っておられるように思われますものよりは優しい心を、貴女ご自身のためにも、神様が授けてくださいますことをです。と申しますのも、優しい心というものは、他のだれよりも、持ち主にとりまして大きな祝福であることを私は確信しているからなのです。このような信念を抱きつつ、私の大切なベラ、次のように署名させていただきます。

変わることなき親愛の情を込めまして、貴女の妹

クラリッサ・ハーロー

手紙　六十二

ノートン夫人からクラリッサ・ハーロー嬢へ

［八月十七日付の令嬢の手紙(ア)に対する返事として］

八月二十二日　火曜日

大好きな大好きなお嬢様へ

私宛にお送りくださいましたお手紙の類は、これをお届けいたします者に託し、お返しすることにいたします。

それらのお手紙、そして、十七日付の最後のお手紙のせいで、私の胸がどれほど痛みましたことか、それを言葉で表しますのは不可能なことでございます。まったくの話、大好きなクレアリーお嬢様、貴女はとても苛酷な扱いを受けておられます。本当にそのとおりです。万が一、貴女が私たちから召されて行かれるようなことになりますと、ご自分たちの無分別な非難や容赦のなさによって引き起こされるものですが、皆さんは重苦しい感慨に浸りながら、大変な悲しみ、そして、大変な懲罰をご自分たちのために蓄えておられることになるのではないでしょうか。

でも、アントニー叔父様の無情なお手紙はどのような原因によるものなのか、判明いたしました。それに、お手元に届きました時には、貴女のお心がさらに乱されることになりそうなお手紙につきましてもですが［何てお可哀相なのでしょうね、私のお嬢様は］、貴女への提案を添えまして、お姉様によって書かれたものです(イ)。

昨日中にお送りするよう、書き終わっているものと存じます。また、この点をお知らせ

（ア）手紙四十を参照のこと。　（イ）手紙六十を参照のこと。

いたしますのは、その文面に備え、お気持ちを強く持っていただこうとの思いからです。

皆さんにこの厳しい態度を促しておりますきっかけと申しますのは、もしも十分な根拠に基づいているのでしたら、皆さんが表明なさるどのような厳しさにもお墨付きを与えるようなものですし、十分な根拠があると皆さんが信じておられます間は、皆さんと貴女の両方が、等しく同情に値することにもなるというものなのです。

そのきっかけはあのお節介焼きのブランドさんの報告に由来しているのですが、あの方は皆さんに次のように知らせたのです（どなたか、ご近所に住んでいる、貴女に敵意を抱いている人から聞いてのことでしょう）。貴女のところへは、大いに非難に値することですが、放縦な人柄で、ラヴレース氏の親友という人物からの訪問があり、貴女と二人きりになることもしばしばで、日に二、三度そうなさる場合もある、というのです。

この際とばかりに、ベティは大層遠慮のない話し方をしておりますし、お身内の方々皆さんも、事態は然るべき状況にはないのだと、すぐにも信じてしまわれるのです。ですから、その殿方の目的がどれほど高潔なものだといたしましても、願わくは、その方とのお付き合いを貴女のほうからきっぱり止めていただけたらと、私は思うのです。

以前、何かこの手のことをベティから匂わされていたのですが、あまりにも曖昧な言い方でしたので、どう考えたら良いのか、分からずにいたのです。また、このため、先の手紙でいたしましたように、ごく一般的な話として申し上げることになった次第です。

お従兄弟さんのモーデン様が皆さんのところへ来られました。貴女のご不幸のことを非常に心配しておられます。そしてあの方は、ラヴレースさんが貴女と結婚するおつもりだということを、皆さんのほうでは信じようとなさいませんので、貴女に対してそれだけの埋め合わせをする気持ちがラヴレースさんにあるのかどうか、本人の口から聞き出すために、M卿のところへいらっしゃる覚悟なのです。

お着きになった当初、あの方は皆さんお一人から大変もてはやされておられたのですが、現在では、皆さんとあの方の間に少しばかり冷ややかなものがあるように伺っております。

ブランドさんのこの手紙を（まったく、思慮のないお節介焼きです）拝見したいものと考えておりましたが、目を通していただくよう、昨日モーデン様に渡されまして、モーデン様が持って行かれたようなのです。

大好きなお嬢様、神様が貴女の慰めとなってくださいますよう、お祈りいたします。ただ、これらのすべてからさらにどのような結果が生じますことやら、その点に思いを馳せますと、心は千々に乱れるばかりでございます。

心からの愛情と誠意とを込めまして、貴女の

ジュディス・ノートン

手紙　六十三

ノートン夫人からクラリッサ・ハーロー嬢へ

八月二十二日　火曜日

同封のものを封緘いたしました後、勿体ないことに、貴女の叔母様のハーヴィー夫人が

お忍びでお訪ねくださいました。叔母様はひどくお気持ちの晴れない状態が続き、ここ数週間はお部屋に籠もっておられたのです。それで、ようやく外出なさったばかりでした。

私と会い、愛する姪御さんの身に降り懸かりました辛い運命について、一緒に涙を流したかった、とのお言葉でした。

私たちの間で交わされました事柄を忠実にご報告いたしますが、全体的に見まして、希望と慰めとを貴女にもたらしそうに思われるからです。

叔母様は貴女のお母様にとても同情しておられました。ご自身にもそのようなところがずいぶんとおありだったのを認めておられるのですが、お母様がご自分のお気持ちと正反対の役割をやむなく演じておられるのは間違いのないところだと、そのように叔母様は請け合っておられました。

叔母様のお言葉ですと、ご自分宛の貴女のお手紙にお返事なさいますのを、お気の毒な奥様にはやっとのことで思い止どまっていただいているとのことで、貴女のお手紙は（叔母様のおっしゃりようがこうでした）皆さんお一人お一人の心をほとんど打ち砕いてしまったとのことです。それに、十分な根拠があってそのようにお考えなのですが、貴女の二人のおじ様が筆を執られることにお母様は同意しておられませんし、また、その文面に賛成してもおられないはず、とのことです。

皆さん全員、貴女のことを深く愛していらっしゃるのですが、度を過ごしてしまわれたため、どのようにして手を引いたものか分からなくなっているのだと、叔母様はそのように確信しておられます。

また、お兄様が皆さんを一人残らずお引き入れになった忌わしい同盟のことさえなければ（再び同盟が結ばれますまで、そして、ご自分の同意なしには、留守中に和解のための処置は一切講じないと皆さん全員が約束なさるまで、お兄様はスコットランドへ発たれるのを拒んでおられましたし、また、お姉様のお怒りも皆さんを団結へと煽り立てていたのです）、もっと前に、万事めでたく収まっていたはずだとおっしゃるのです。

あのように心を打つ謙虚な文体で、貴女が皆さん宛に書き始められてからというものずっとですが、皆さんの頑な態度が引き起こす心の痛みに気づく人は、だれ一人としておられなかったとのことです。

ただ、貴女のご病気にせよ改悛の情にせよ、皆さんはその程度を実際のとおりに信じようとはなさいませんし、まして、ラヴレースさんの結婚の申し出が本心からのことだと信じるお気持ちは、なおさらないとのことです。

それでも、すぐにすべてが丸く収まるのは確かであり、貴女のことには大変熱心なモーデン様が到着なさっただけに、それも一層早まることになるだろうとおっしゃっておられるのです。

これまで不身持ちであったけれど、今は本気だというのであれば、貴女にはラヴレースさんを受け入れていただくよう、天にも祈るお気持ちでいらっしゃるとのことでした。

ご一族全体をお一人で背負っておられるような、親戚のジェームズ様のそんな困った思い上がりに動かされ、皆さん全員がラヴレースさんのご一族のような名門との縁組を拒むお気持ちになるというのは、常日頃から驚きの種であったと、叔母様はそのように言っておられました。

叔母様は次のように主張しておられましたが、貴女がラヴレースさんとお屋敷を出られ

ましたのは、貴女の名誉にとりまして、また、利益の点からも、取ることの出来ました行動の中でも最もまずいものであったというのです。と申しますのは、あの次の日、貴女は厳しい試練をお受けになったことでしょうが、ただ、おそらくそれで最後になっていたはずですし、心情に働きかけます貴女のお力が何人かの味方を引き寄せていたに違いないのだから、とのことでした。貴女のお母様、ジョン伯父様、ハーヴィー叔父様、そして、ご自分に言及しておられるのです。

でも、ここで（元気をなくしておられます現在の状態の中で、あの面談の結果に期待なさらなかったという後悔の念が、貴女を過度に苦しめることのないようにという気持ちからなのですが）、次のことは述べておかねばなりません。叔母様のこのご意見からいたしましても、いささか明白すぎるようにも思われますが、強制的なことはすべて回避されるよう意図されていたとは申しましても、それほど絶対的な決め事でもなかったという点でございます。貴女がその強制から解放されますのは、説得力溢れる貴女の弁舌と、本分を忘れぬ諫めのお言葉とによりまして、皆さんの間に出来上がりますお仲間次第だったはずだからでございます。

叔母様が認めておられましたが、皆さんとお会いになるのを貴女が怖がっておられたのと同じくらいに、貴女と会うのを恐れる方々も皆さんの中にはおられたのだそうです。でも、最後には貴女の思いを叶えて差し上げるおつもりだったというのでしたら、どうしてそのようなことになるのでしょうね。

叔母様のお話では、ウィリアムズ夫人(ア)が訪ねて来られ、〈不幸のどん底にある最愛のお嬢さん〉のお傍に仕えるためですが、上京の許可をお願いした場合、悪く取られそうかどうか、叔母様のご意見を求めたそうです。叔母様はお母様に伺うよう、夫人を差し向けたのですが、それきり音沙汰がなかったとのことです。

お嬢さんが（ドリーさんのことですが）叔母様に同じことを頻繁に頼んでおられたそうで、貴女の最初のお手紙が届きますと、これ以上はないほどの熱心さで、改めてお願いをなさったとのことです。

叔母様がおっしゃいますには、当時はとても体調が優れなかったため、お母様に一筆認め、ドリーさんの上京をお許しになっても気を悪くなさらないよう、お願いなさったそうです。ところが、お母様からということで、お姉様が返事をくださり、今では貴女も正気になられ、ご自分の過ちに十分気づいておられる様子なので、貴女のことは皆さんの手にすっかり委ねていただかねばならない、とのことだったというのです。

ラヴレースさんの卑劣な行為を耳になさってからというもの、ドリーさんはずっと嘆き悲しんでおられるとのことでした。二重の意味で悔しい思いをなさったからですが、一つには、貴女が災難に遭われたためですし、次には、貴女が逃げ出されたのを喜び、貴女の弁護に立った者のお一人でしたので、そのために非難や反感を招いてしまったからなのです。特にお兄様とお姉様からなのですが、その結果、お嬢さんはハーロー邸には滅多に行かれなくなったのです。

これらの情報は、大好きなお嬢様、お心を慰めるよすがといたしまして、精々ご活用いただければと存じます。

(ア) ハーロー邸の元の女中頭である。

末筆ながら一言、ご健康とご寵愛とを回復なさいますよう、衷心よりの祈りを捧げております。

変わることなき誠意をこめまして、貴女の

ジュディス・ノートン

手紙　六十四

Cf. ハーロー嬢からジュディス・ノートン夫人へ

八月二十四日　木曜日

叔母と貴女との間で交わされましたような会話についての言及も、しばらく前に届いておりましたなら、私を喜ばせてくれたことでしょうね。と申しますのは、現在の私のものよりはもっと勤勉な精神と出会うことになり、いつの日か、私が辛抱強く果たしております務めに対する報いともなってくれそうな、そんな事態好転への望みにわずかな慰めを見出していたはずだからです。

私に寄せてくれます叔母の善意を疑ったことはございません。叔母の愛情を疑ったことはないのです。でも、王侯たちが、いかに激しいものであれ、その激情を抑制されることがほとんどないというのは、驚くべきことでしょうか。平民の家庭におきましても、叔母が、いいえ、その家の母親ですら、一度決心をしたからには、諫めごとにも決して耳を貸そうとしない、そんな父親の権威によって身を固めました、野望に溢れる若者に盾突くよりはむしろ、自らの意向に背きましても、かつては愛しておりました子供を見捨てるほうを選ぶというのですからね。

それに、良識のある人でしたら、親類らしい寛大さを持つ人でしたら、私の味わいました仕打ちに少しは不快感を覚えるに違いないなどと、もしも私がそのようなことを申しましたら、また、私に対しては非常に苛酷な手段が用いられたと考えておりますことを、もしも認めたりいたしましたら、貴女は私をお咎めにならないでしょうか。ただ、それを苛酷な手段と呼ぶ権限を、私は今与えられたのです。私の母、そして、叔母という、立派な姉妹二人の判断に基づいてのことですが、母と叔母は（叔母からの話として、貴女が教えてくださっていることです）、自分たちの意向に背いて、しかも、私の永遠の幸せに関わるように思われます問題についてさえ、やむなく私に対立する側に加わったことを認めているのです。

でも、このような調子で続けてはいけませんね。母が諦めました気持ちというのは、甘すぎる寛大さから来たものであって、私がその寛大さに値するということではないのかもしれませんでしょう。ただ、手に負えないほどに私は苛立っておりますので、無理にもこの話題から離れねばなりません。

ですから、その件につきましてさらに申し上げようと思いますのは、今のところ、次の点だけでございます。つまり、予定されております好意が、仮にこれからわずか一週間のうちに授けられるといたしましても、おそらくは手遅れになるだろうということです。私が期待を寄せたく思っておりますような慰めとなりますのには、もう手遅れだという意味でございます。と申しますのも、私はずいぶんと効果のない準備を進めて来たことになっ

てしまうに違いないからです。もしも、この段階までに超越出来ていないとすればの話ですが …… でも、一体何を超越するというのでしょうね。みっともない思い違いです。惨めにも、自分を見誤っておりました。気がついてみますと、何一つ乗り越えてはいないのですもの。自分の芳しくない性急さを抑えることも出来ないのですからね。

ただ、自分でも安心して扱えないような話題の幕引を実行に移すためのことですが、貴女のほうでこの件にお触れになることがございましたら、ハーヴィー叔母様に、大好きな従姉妹のドリーさんに、尊敬いたしておりますウィリアムズ夫人にお知らせいただきたいのです。皆様のご厚情ならびにお心配りにつきましては、殊のほか有難く思っているということをです。また、皆様の高い評価を（私に対する皆様のご厚意が、私は美徳を愛しているのだという確信に基づいたものだということを承知しておりますので）最もよく保証すること、あるいは、正当化することといたしまして、僭越ながら、このように申して構わないものと存じますが、最後の最後まで、私は美徳を愛し続けていたとお話しいただきたいのです。そして、ほんの少しでも意図的な逸脱行為を、私は一度だってしたことがないことも保証していただきたいのです。たった一つの過ちのために、どれほど不幸になったとしてもですが、その過ちにいたしましても、卑しむべき動機とか、邪悪な動機によるものではなかったのです。

従兄弟のモーデンがラヴレースさんとの面会を決心しているとのことですが、まことに残念に思います。

この知らせに接して覚えます不安は、あの人がまだ私を大切に思っていてくださることを知る嬉しさに、たっぷりと水を差すものでございます。

私宛の姉の手紙は非常に心を苦しめるものでして、およそ必要もないほどに、実に馬鹿馬鹿しいほどに挑発的なのです。でも、あの手紙のそのような部分につきましては、今私がしておりますように、そのことをひどく気に掛けるのではなく、むしろ、姉に同情すべきなのです。

私がブランドさんに何をしたというのでしょう。あの人、そして、どなたにせよ、あの人に情報を与えた人たちもですが、その両方を許してくださいますよう、私は神様に祈ります。でも、ベルフォードさんの訪問の件だけからスキャンダルが起こるのでしたら、それを論破するのはごく短時間で済むことでしょう。それはそうと、あの人の訪問を容認しております理由につきましては、大好きなノートン夫人、ハウ嬢へお送りしたものなのですが、これからお届けいたします小包で、貴女にも納得していただけるはずと期待いたしております。

姉の挑発的な手紙、そして、姉よりももっと大切な身内の頑迷さ …… でも、関係の薄いところから切り出されました話題も、一番心に懸かっております問題へとすぐに向かってしまうものですわね。ちょうど、始まったばかりの肉体的不調が、損傷を受けた部分とか異常のある部分とかに集中するのと同じことなのです。

私が忍耐心と然るべき諦めの心とを授かりますようお祈りいただくことをお願いいたしまして、また、私が今も、そして、命の続きますかぎり、左記のとおりであることをお約束いたしまして、筆を置くこととといたします。

感謝の念と親愛の情とを等しく込めまして、貴女の

CL. ハーロー

手紙　六十五

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

［八月十一日金曜日付の令嬢の手紙(ア)への返信］

八月二十三日、ワイト島ヤーマスにて

大好きな大好きなお友達へ

お送りくださいましたお手紙とお手紙の写し、拝読いたしました。特別にお願いした人の手でお返しすることにいたします。

思わしくないお体具合のことを大変気に掛けております。ただ、ベルフォードさんを指名なさったことに関しまして、貴女の取られた処置や予防手段のすべてに賛成いたしますが、あの方にせよ、他のどなたにせよ、この先長い長い年月に亘りまして、履行することを求められずに済んでくれたらと思われるお仕事ですわね。

心から蔑まれ、また、忌み嫌われて当然な恥知らずを、そのように揺るぎない態度で軽蔑なさることを可能にしておりますお心の崇高さに（他の女性だれにも抵抗出来ないような誘因がおありの上に、貴女が追い込まれておりますような惨めな状況の中でのことですからね）、私は感嘆いたしておりますし、私ども全員、同じ気持ちでおります。

私に見せようとなさらないなんて、縁続きの方々からのお手紙の内容というのは一体どんなものなのでしょう。まったく、何て人たちなのでしょうね。気持ちが高ぶってまいりますわ。でも、これ以上は差し控えることにいたしましょう。今では貴女ご自身も、皆さんが大層苛酷な仕打ちをしていると考え始めておられますけれどね。

こちらの人間は一人残らずヒックマンさんにすっかり夢中なものですから（憎むべきラヴレースのその人柄に接して覚えます恐怖の念のため、なおさらそうなるわけです）、私も散々攻め立てられまして、危うく日取りを決めてしまうところでした。こんなわけで、あの人も偉そうにしておりまして、私が頭を抑えておかなければ、私のことはもう間違いないとばかりにぞんざいな、そして、横柄な態度で振る舞うことでしょう。やむなくあの人に屈辱を味わってもらいましたことが、私たちがこちらにまいりましてから、少なくとも四度はございます。

最近も、見逃すわけに行かないいくつかの怠慢な振舞いのことでですが、厳しい苦行を経験してもらいました。故意のものではないというのがあの人の言い分でしたが、それはお粗末な弁解だと、私は言ってやりました。故意のものであったとしたら、あの人が私の前に姿を見せることは二度となかったでしょうからね。故意でないということは、あの人の考えの足りなさや注意不足を証明しているのです。また、そういった点は、試験段階に過ぎない状態の男性にありましては、許しがたいことなのですからね。

あの人のほうでは、試験段階は卒業したものと思っていたと言っておりましたわ。

「だから、前よりぞんざいにしても構わないとおっしゃるのかしら。じゃあ、怠慢に忘恩を付け加えるわけね。そして、それ自体に弁解が必要ですけれど、〈事故〉だと申し立てておられるものを、どんな弁解にも値しない〈故意〉の出来事にしてしまわれるわけですね」と、私は言ったのです。

(ア) 手紙三十六を参照のこと。

二日間、私はあの人に会おうといたしませんでした。すると、あの人は大層後悔し、謙虚になるものですから、私のほうでも危うく埋め合わせをしてしまうところでした。貴女が言っておられたように、度を越した怒りの結果は、卑屈に過ぎる償いとなることが多いわけですからね。

もっとお傍に伺いたいものと願っておりますが、でも、どうやら、まだそうするわけには行かないようですね。お願いです、あなた、出来るだけ頻繁にお便りをしていただきたいのです。

神様が貴女の慰めを増し、ご健康を回復してくださいますよう、祈っております。

変わることなき誠意と親愛の情とを込めまして、貴女の

アナ・ハウ

追　伸　もっと前に筆を執らずにおりましたこと、お許しください。自分を曲げ、やむなく加わらねばならなかった、海岸沿いのちょっとした船旅のせいだったのです。

手紙　六十六

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

八月二十五日　金曜日

ご無音のわけを説明くださいまして、大変ご丁寧なことと存じますわ、大好きなハウさん。今ご一緒しておられますような、近親の親しい方々に囲まれていらっしゃることでもありますし、言及しておられますような楽しいご旅行などのせいで、書き物から遠ざかっておられるのに間違いないと考えておりましたので、私も安心いたしておりました。

貴女が機会を与えてくださいますたびに、それも非常に頻繁なことでしたが、勝手ながら咎めさせていただきました、あの大変陽気なお振舞いは、この時期のことでもございますから、もうお捨てになったものと期待していたのです。

この問題に関しましては、貴女に対しましても日頃から極めて生真面目な態度で接してまいりましたし、貴女ご自身とある立派な男性の将来の幸せが関わっております以上、私には余命が一日もないといたしましても、また、事実、すこぶる具合が悪いのですが、貴女がご自分の立場をお忘れになっている時にはいつでも、その件を取り上げずにはいられないのです。

私は確信いたしておりますが、貴女の将来の旦那様をその小島へ連れて行かれましたのは、あの人とはこれまで一度も会われたことのないご親戚の間で、あの人に弱々しい愚かな姿を晒していただくためのことではなかったはずだと思うのです。でも、あの人が貴女から妙な苦行を課され、悩んでおられるのをご覧になる時、皆さんには（あの人を好きになろうとする心の準備と覚悟がどれほど出来ていらっしゃったにせよ）笑いを控えることがお出来になると、貴女はそのようにお考えなのでしょうか。控え目な男性の場合、他人の目にもそうですが、自分の目にも自分自身が小さく映るようなことになってはいけないのです。もしもそのようなことがございますと、気後れを感じまして、言動のすべてにぎこちなさが出てしまいます。そしてこれは、あの人がお身内の方々から受けておられる是

認の価値を高めるとか、あの人ご自身の名誉になるということがないのと同じく、貴女の選択の妥当さを認めることにもならないのです。

男の人が求婚相手の女性に見せます丁重な、そして、謙虚とさえ映ります態度を、私は好ましく思っております。それは男性の慇懃さの証ですし、また、恥ずかしがり屋さんである美質が励ましのために与えてもらいたがっていると思われますような、そんな自己評価を女性に与えてくれることにもなるのです。でも、女性が高飛車な態度でそれを強要したりいたしますと、ご自分の慇懃さであれ、感謝の気持ちであれ、そのいずれをも見せておられないことになるのです。もっとも、勇敢さを示しておられることは認めねばなりませんけれどね。予告いたしましたが、私はとても真面目なお話をしようと思うのです。

寛大な、そして、遠慮のない態度で接することの出来ます男性と巡り合いますのが私の定めであったならと(独身を通しますのは許してもらえないのですから)、あゝ、私、本当にそう思うのです。

今では明らかですが、私の接し方に堅苦しさやよそよそしさがあるとラヴレースさんが非難なさったのは、私と争う口実にするためのことだったのです。私には少しばかり淑女ぶる悪いところがあると、貴女も一度はお考えでしたね。困難な状況を斟酌していただきたいのですが、そのような状況では、一見して非難へのきっかけと映りますものも、避けるわけに行かなくなることが多いのです。私の立場を難しいものにいたしました、その当人から非難を受けても仕方がないような真似はいたしておりません。それに、貴女にいたしましても、もしも私の相手がだれか他の男性で、その人がヒックマンさんの半分の美点でも備えているのでしたら、この点に関する私の考え方が私の行動を支配して然るべきであったと、そのように思われたことでしょう。

でも、私のことは抜きにいたしまして、ヒックマンさんの謙虚な態度へのお返しに貴女がお示しになったこの高姿勢につきまして、中立な傍観者であるとしたら私はどのように考えるのか、その点についてお話しいたしましょう。「お嬢さんがあの殿方と一緒になるお考えなのははっきりしているわね」と、私は言うでしょうね。「でも、同じくらいはっきりしているのは、あの方に対してとても冷淡なことだわ。それで、この冷淡さはどこから来るのかしら。次の考えのうちの一つ、あるいは、その全部が原因になっているのは疑いのないところだわ。つまり、お嬢さんはご自分の好みからというよりも、便宜の点を考えてあの方の求婚を受けていらっしゃるということか、それとも、あの方の才能や知力を見縊っておられるのか、少なくとも、ご自分のもののほうをより高く買っておられるということなのか、あるいは、あの方の強い愛情のお陰でご自分の手に委ねられることになったその力を、節度を守って用いるような雅量に欠けるということだわね」とです。

こういった事柄のどれか一つでも世間の語り草になるとしたなら、貴女は一体どのように思われることでしょうか。

それに、ご自分の心を占めることなど期待するいわれもないような男性に、ハウさんは結婚の承諾を与えているのだと、道楽者や歯に衣を着せない人たちがそのようなことを口にする根拠、あるいは、想像を働かせます根拠を露ほどでも与えますのは　…　このようなことが想定されることさえ、貴女はお望みにならないものと確信いたしております。そして、貴女からのご好意はすべて後回しで、何一つとして先には示していただけないようですと、それこそ、妻の濃やかな心遣い、あるいは、女性固有の濃やかな心さえも犠牲に

して夫に向けられたお愛想、といった受け止め方も可能になるに違いないと、私にはそのように思われるのです。

ハウさんのようにその美徳を崇められ、また、素敵に元気溌剌としていらっしゃる方に対しましては、いかに無謀な者からであれ「ラヴレースさんが二人存在することは有り得ませんもの」、攻撃が仕掛けられる恐れはございません。それでも、夫の面目を施すことに一番関わりのある人のお手本によりまして、どなたであれ、夫を軽蔑するよう励ましを受けるというのは、いかがでしょう、貴女はその点をどのようにお考えでしょうか。妬みを感じております人間にとりましては（それに、ハウさんをご存じの方で、ヒックマンさんのことを羨ましく思わない人などどこにいるというのでしょう）、女の人から無礼な扱いを受けているとか、女の人の侮辱に耐えようとしているといった人たちを愚弄したり、冗談の種にしたりいたしますのは、まったく自然なことなのですからね。

そのような扱いを受けました男性が求婚相手の女性に真の、熱烈な愛情を抱いております場合には、女性の不興を買いますと、簡単に怖じ気づいてしまいますし、このため、〈卑しさ〉と呼ばれるような卑屈な振舞いに及ぶことにもなるのです。それに、正しい心を備えております女性で、次のように言われたいと思うような人はどこにいるでしょうか。つまり、いずれは保護や擁護をいただきたいと考えております相手の男性に対しまして、たとえご自分への態度の中にではありましても、何か卑しさとか、男らしくもない意気地なさと受け止められそうなことを押しつけようとしているのだ、とです。いいえ、私には定かでございませんので、解決してくださいますよう、貴女にお願いするわけですが、貴女ご自身のお考えでも、心を備えております女性が、自分の手で加えられました侮辱にじっと耐える男性、とりわけ、それを人前で甘受する男性のほうを高く買うのではなく、むしろ軽蔑するようなこと、それはありそうもない話ではないかという点をです。

日頃から気づいていたことですが、ある人物にとりまして不利になります、最初の出会いでの先入観というのは、好意的な先入観よりも深く根を下ろしますし、根付いてしまいますと、取り除くのがはるかに難しいものなのです。それは妬みから来ているのか、それとも、自分よりも立派な人たちを自分の低いレベルへ引き摺り下ろしたいという願いを起こさせる、了見の狭い心に顕著に見られます、あの悪意に満ちた主義から来ているものなのか、決定を下そうというつもりなどございません。従いまして、貴女ほどの良識に恵まれました女性が、お付き合いを続けておられる恋人ですのに、その人のことを高く買ってはいらっしゃらないのだと、そんなふうに考える余地を一度世間の人たちに与えたりいたしますと、その後では、ご自分が選びました旦那様のことを、願いどおりに世間の人たちに良く思っていただきますのはとても難しくなるのです。

一言述べさせていただきたいのですが、謙虚な物腰の中にも威厳を忘れず、また、独りのうちは、その謙虚さが人の目に触れ、認めてもらえますような、そのような優しさや淑やかな態度で指示をするということ、これこそは、ご自分の相手を弁えておられる賢明な女性が目指すべき点なのです。そして、賢明な女性というのは、これほど立派な扱いには相応しくないと考える男性に身を委ねるくらいでしたら、むしろ、生涯独身で通すほうを選ぶはずだと、私はそう思うのです。

でも、善意からの奉仕を是認し、報いて上げる心の広さがあることや、女性一般の特徴のようにおっしゃる方もいる（暴言であろうとは思いますが）、あの揚げ足取りの愚かしさ

を避けるだけの知性は備えていること、また、癇癪玉を破裂させるとか、高慢さから腹を立てるようなことはなく（たとえ、不快に感じて当然な理由があるように思われるとしてもですが）、おそらく、目標とするには相応しくない大きな事柄を得るため、あるいは確保するために、小さな事柄にこだわる必要があるとも考えなければ、ご自分の美点を疑うべき理由があまりに多いため、その挙げ句、色好い返事を与えるつもりの男性の愛情を不愉快な、あるいは、傲慢な審問に付しているのだなどと、そんなふうに想像する余地も残さず、理性というものを自分の行いを律する主な指針としておられること …… 女の人がこういったことを恋人に知ってもらいますなら、その時には、味わいたいものと願っておりますあの真の敬意、あの心からの崇拝を得られずに終わることは決してありませんし、結婚後には、それらのお陰で、判断を求められるということになり、時には、男の方自身の判断より優先されることもあるでしょうし、また時には、男の方の判断を喜々として追認する手立てにもなるのです。

この件につきましては、大好きなハウさん、今はこれだけにいたします。そして、おそらく、これが最後となることでしょうね。

間もなくもう一通の手紙に取り掛かりますので、両方一緒にお届けいたします。それまでは、とりあえませず ……

手紙　六十七

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

《この手紙の中で令嬢は、ブランド氏の報告の件、また、国を出るかラヴレース氏を告訴するか、そのいずれかを求める姉の提案をハウ嬢に伝えるのである。叔父アントニー並びに姉からの手厳しい書簡を令嬢は嘆いているが、その口調は、それらの手紙には勿体ない穏やかなものである。

令嬢はリーウェン師の手紙と、自分の返事の写しとをハウ嬢に送っている。

ラヴレース氏との面会を避けるために重ねた苦労の数々を令嬢は語っている。企図した訪問から気持ちを転じてもらうべく書いた、氏宛の自分の手紙の内容をハウ嬢に伝えているが、彼女のような立場の者に対し、譬え話や比喩が許されないのであれば、これが厳密には適切と言えない行動となることを恐れる、と言うのである。

従兄弟のモーデンが到着し、令嬢の親戚を相手に、喜んで令嬢の側につこうとしていることと、計画されている従兄弟とラヴレース氏の面会の件をハウ嬢に知らせ、その点についての懸念の数々を語っている。

叔母ハーヴィーとノートン夫人との間で交わされた会話の要旨をハウ嬢に伝え、その上で、次のように付言しているのである》

それでも、あの人たちが今どれほど私に好意的な気持ちになりましても、一体、どのようなことをしていただけるというのでしょうか。私自身のためというよりも、皆のために願うわけですが、今からでも皆が心を解いてくれたならと思います。それにいたしましても、ひどく具合が良くありません。ペンを置かねばなりません。突然の臆病風にこの胸が

覆われてしまうのです。乱筆をご容赦願います。さようなら、大好きな人。さようなら。

金曜日　三時

もう一度筆を執ることにいたします。最後のお別れを申し上げたつもりでした。あのようにひどく奇妙な心の乱れ方はこれまでになかったことです。何か、体の働きをことごとく奪ってしまうように思われるものでして　…　どう言い表したら良いのか、分かり兼ねております　…　こんなにも書き物をいたしますのは、また、あまりにもたくさんのことを背負い込みますのは良くないことだとは思います。でも、活発な精神というものは、肉体の病という雲に覆われましても、何もせずにいるわけには行かないのです。

外気に触れることで、そして、緊張を解くことで楽になりはしないか、試して見ようと思います。でも、それが助けにならなくても、心配はなさらないでくださいね。幸せになるのですもの。いいえ、この世のうちになれそうだと近頃考えておりましたものと比べまして、すでにもっと幸せになっているのです。それにいたしましても、この肉体というのはしつこいものですね。どこまで纏いついてくるのでしょうね。

七時

ひどく陰気だと貴女ならお考えでしょうが、そんな結び方でこの手紙をお届けするわけにはまいりませんでした。それで、散歩から戻った時にはどんな具合か、それを確かめますまで封をするのは待つことにいたしました。そして、今では、まるで別人だと申さねばなりません。とてもきびきびとした感じなのです。ですから、書き始めました時と同じ元気さで先を続け、貴女の陽気なお話へのお説教をもっと付け加えることも出来そうなくらいです。その件につきましては、私はすでに十分すぎるほど書き記している、ということではないのでしたらね。

貴女とヒックマンさんにお慶びを申し上げさせていただきたいのです。是非ともお願いいたします。もしも宜しければ、私も少しお裾分けに与りたいと思うのです。

光栄にも存じ上げております方は勿論のこと、存じ上げない方も含めまして、お身内の方々にはくれぐれも宜しくお伝えください。

❁　❁

お便りをいただきますようなことはとうの昔にすっかり諦めておりました方からお手紙が届き、驚いていたところです。ワイアリーさんからなのですよ。同封いたします。ご覧になれば、貴女も私に負けないくらい驚かれることでしょう。私の手で改心させて上げられたかもしれない男性のようですわね。でも、この方を好きになることは出来ませんでした。ただ、横柄な接し方をしたことはなかったはずと思います。実際、手前味噌が過ぎることにならなければですが、あの方をお断りした際の態度にいたしましても、貴女がだれかさんを引き止めておられるのよりはもっと穏やかなものであったように思うのです。そして、こういったことが思い出されるものですから、このように心に響く寛大さの実例に接しました時にも、もう一方の態度を取っておりました場合に感じていただろうと思われますほどの痛みを覚えることはないわけです。私の返事の草稿のほうも、写しが出来上が

り次第ですが、同封することにいたします。

もう一枚の便箋に手をつけますと、終わりまで書き進めることになりましょう。それゆえ、貴女が栄誉と繁栄を授かり、幾久しく幸せな日々を送られますよう、私からの祈りを添えさせていただくだけにいたします。そして、その日々が終わりを迎え、この世を去られます時には、私もそうなりますよう神様に望みを託す次第ですが、私と同じくらい心穏やかに、そして、安らかでおられますようにとだけ申し添えさせていただきます。今この時も、また、最後の時までも、

真の愛情と感謝の気持ちを込めまして、貴女のしもべ

Cl. ハーロー

手紙　六十八

ワイアリー氏からクラリッサ・ハーロー嬢へ

八月二十三日　水曜日

親愛なるマダム

極めて丁重にとは申せ、極めて明確な形で望みを挫かれました求婚が、これほどの時間を隔てた後に再開されるのを目の当たりにされ、貴女は驚かれることでしょう。しかしながら、いかなる受け止め方をされるにせよ、小生としては再開せずにはいられないのであります。ある男性から貴女が非道の仕打ちをお受けになったことは、だれもが耳にしているところでありますが、貴女ほどの女性を虐待するとは、男の中でも最も下劣な者に違いありますまい。この男の卑劣な扱いに対する貴女の当然のお怒りについては、だれもが知っているところですし、この男とは絶対に和解しない旨を決心しておられますこと、そして、この男の高貴な縁者からのあらゆる懇願にも拘らず、また、この高貴ならざる男本人の祈りと懺悔のすべてをも顧みず、そのお気持ちを守り通しておられますことも衆人の承知しているところであります。そして、光栄にも貴女を存じ上げております世間の人間すべて、あるいは、その男について聞き及んでおります者すべては、貴女のご決断を貴女ご自身に似つかわしいこととして、また、貴女の美徳に似つかわしいこと、貴女について語る者ことごとくによって、御身に備わるものと常に考えられておりました、あの厳しい道義心にも相応しいこととして、褒め称えているのです。

しかしながら、マダム、世間の者全員がそれとは異なる意見を持っていたといたしましても、小生の考えを変えることは出来なかったはずであります。小生は常に貴女様をお慕い申し上げておりましたし、永久にお慕いせずにはいられないのであります。ただ、自らの苛酷な運命を甘んじて受けるよう、努力はいたしました。徒労には終わりましたが、小生へのご好意を賜らんものと、極めて多方面にわたり、お気持ちを動かすべく務めました後は、甘んじた様子を装って座しておりました。貴女様に宛て、甘んじて座す旨を書き送りもいたしました。そして、友人知己全員にそのとおりなのだと思わせるべく、骨を折った次第です。しかし、この克己の振舞いがいかなる激痛をこの胸にもたらしたのか、知る者は一人としていないのです。狩猟が提案され、旅行が提案され、賑やかな集いが提案されたのです。そして、順に応じもいたしましたが、いずれも無駄骨に終わりました。自分

自身に目を向けますと、自らの心の中を覗き込みますと、この身の不幸は旧に倍した力をもって甦ってきたのです。魅惑のお姿が小生の心の玉座に鎮座ましましていたからであります。そして、貴女は小生をすっかり独占しておられたのです。

貴女のご不幸、そして、ご難儀のことは、貴女ご自身のために心の底から遺憾に思っておりますが、ただそれらは、今一度大胆な望みを抱くよう、小生を励ましてもくれるのです。委細につきましては承知しておりません。敢えて詮索する気持ちがないのですが、貴女のご難儀がいかなるものであったのか、それを知れば、小生の苦しみも増すように思われるからであります。従いまして、小生の耳を傷付けております衆人承知の噂以上のことは、また、貴女が残酷なご家族の前から、そして、あの神聖な場所から姿を消されたがために知るに至りました事柄以上には、小生は知りたいと思わないのです。貴女のお手本に接し、極めて高い評価を持つこととなった礼拝ですが、あそこでは週に二度、貴女から拒絶された多くの崇拝者の一人といたしまして、貴女が礼拝というものの名誉を高めておられるところを間違いなく眺めることが出来たのです。しかしながら、ご不幸がどのようなものであれ、ご難儀がいかなる性質のものであれ、それらが、小生のこの新たな求婚も絶対的に拒絶されるわけではないことを知るという幸せにつながるのでしたら、小生自身のためには（貴女のためには、その張本人を呪いますが）、この機会に感謝することといたしましょう。ただ、道徳観念の面とか行状の面とか、そのいずれにつきましても、新たにご不興を買うようなことが一切起こらない場合は、いつの日にか、小生の求婚も励ましを受けるかもしれないという、そんな希望を与えていただきたいのです。次の点への望みだけは与えてほしいのです。つまり、絶対的な形でお拒みにはならないということ、それこそ小生が求める希望のすべてなのであります。そして、そのようなことが可能ならばの話ですが、これまで以上の愛を捧げる所存であります。それも、貴女のご難儀があればこその話であります。何しろ、貴女は愛されるに十分に値する人だからです。崇拝とも言えるほどに愛される値打ちをお持ちだからです。通常の精神の持ち主にとりましては「むごい体験に基づいて小生は話しているのです」打ち克ち難く思われます激情を、名誉のため、そして、美徳のために抑えることもお出来になるからです。それも、腹黒い犯罪人が許しを得ようとして　…　あの男がこうするのは間違いないところと確信しておりますが（彼の身内の者たちも揃って嘆願しているのです）　…　両膝をつき、嘆願している時にです。

貴女としてはあの男を許すわけに行かないということ、あの男を許し、ご愛顧に復させるような真似はお出来にならないということ、それも無理からぬ話でありましょう。あの男の犯罪は美徳に対するものですし、それこそは貴女の本質の一部なのです。何という高潔さなのでしょうか、これは。貴女ご自身に、汚れ一つとしてない貴女のお人柄にはまさしく相応しいことなのです。そのように気高くも他に抜きん出ることのお出来になるご婦人をこれまで以上に賛美いたしましたところで、何かの手柄にでもなることなのでしょうか。何の手柄にもならないのです。その点を主張するわけにはまいりません。

そのように見事に耐え忍ばれました災難ゆえに、貴女のご声望は善良なる裁き人たちの間で高まっているわけですから、小生の求婚がすでに拒まれておりますのに、小生には何の望みが残されているのか、との声が上がることにもなりましょう。しかしながら、マダム、小生といたしましては次の点を誇りにしなければなりません。つまり、お身内の方々が（小生が用いておりますような正しい見方で貴女をご覧になるのではなく）貴女を迫害

し、追い出されたのに対し、また、貴女の地所は、貴女への引き渡しが差し止められ、抜け道の多い法律、と申しますよりは、法律に携わる者たちのごまかしによって、可能なかぎり差し止められる恐れが（小生は承知しておりますが）ありますのに対し、また、貴女には保護の手が欠けており、皆さん一人残らずが、片方の家族の加害者を、あるいは、もう一方の家族の冷酷無情な人物を恐れ、近づかないようにしておられますのに対し、宜しいでしょうか、小生のほうでは自ら進み出て、財産とこの命とを貴女に捧げようと申し出ることを誇りに思うということであります。確かに、自分本位な望みではあります。この点を認めないようでは、小生も大変な偽善者ということになりましょう。また、貴女がどれほど偽りを嫌悪しておられるのかも承知しているのです。

しかし、そんな望みを助長してくださるにせよくださらないにせよ、小生の精一杯の奉仕だけは是非ともお受け取り願いたいのです。そして、事の性質からいたしまして（その他の方法ではご注目を賜ることは疑わしいゆえ）、最後の結びとして選ぶことになったわけですが、誠意からとは申せ、無邪気な技巧に頼りますことを、お許しいただきたいものと存じます。つまり、こういうことであります。

男の中の最大の不幸者となることが、やはり小生の定めなのであれば、貴女の筆によりまして一行、その旨をお知らせいただきましょう。いかにかすかなものであれ、望みを温めることを許していただけるのでしたら、お返事のございませんことが、小生からは、その点に関して貴女が与え得る最も喜ばしい印として受け止められることでしょう。例のさらに喜ばしいもの　…　つまり（この身に起こり得る最大の幸せですが）、ご褒美の件は貴女ご自身に委ね、小生がお役に立つための犠牲といたしますのを誇りに思い、また、名誉にも思っております、あの命と財産の申し出を受け入れようとのご通知のことは別にしての話であります。

ご決断がいかなるものであれ、小生といたしましては、永遠に貴女を賛美し、かつ、お慕いせずにはおられません。また、貴女が結婚なさろうとなさるまいと、貴女のご存命中は、絶対に結婚はしないつもりでおります。僭越にも一度、貴女ほどの方に求婚をさせていただきましたからには、身を落としてまで、だれか他の女性に想いを向けるような真似はいたしかねるのです。そして、小生に関しまして、親愛なるマダム、貴女のご決意がいかなるものでありましても、貴女に祝福を垂れ、そして、お守りくださいますよう、日々祈りを捧げておりますあの神の御前で、以上の点を厳かに言明する次第です。

熱烈極まりなく、永遠に変わることなき愛を捧げる

貴女の忠実なる下僕

アレクサンダー・ワイアリー

手紙　六十九

Cl. ハーロー嬢からALEX. ワイアリー氏へ

八月二十六日　土曜日

前　略

〈技巧的〉という呼び方をなさっておられます選択肢をお与えくださらなかったとは申

せ、ご意向に窺われます寛大さのことを考えますと、心を引かれますばかりか、感謝の念をも促されることになりましょう。従いまして、思いやりに満ちたお手紙のことは、お礼申し上げたいと存じます。

好意的なご意見により格別のお引き立てをいただきました際、私が選択いたしますのは独身生活であることを申し上げました。また、そのように申しましたのは、私の本心そのものであったのです。

その選択を認めてもらえないまま、結婚相手として紹介されました数人の殿方を拝見いたしまして、その品行なり道義心なりに何らかの異議が出ないような方は一人としていらっしゃらないのだと、そのように信ずべき理由もございましたので、どう決めて良いのか判断に迷っております場合に、漠然とした直感に任せて選り好みが行われたといたしましても、それほど驚くには当たらなかったことでしょう。

貴方をお咎めするとか、非難申し上げようとの考えから、このようなことを口にしているのでは決してございません。いつもお幸せを願っておりました。そのようにお考えいただいて当然な根拠もございましょう。私も貴方の率直さを嬉しく思いましたが、同じように、私の率直な態度を喜んでくださる心の広さが貴方にはございました。おとなしく私の意向に沿ってくださいましたことが、それほどの大きな苦しみを貴方にお与えしたと今伺いまして、遺憾なこと、大変申し訳ないことと存じております。

すでに触れました選択の件が後ほど認められておりましたなら（心に願っただけではなく、申し出たことでもあるのですが）、現実のこととなりました出来事も起こらずに済んでいたのです。ただ、宿命に類したものがございまして、それによって私の家族全員は、いわば駆り立てられていたわけですし、だれ一人としてそれを逃れることは許されなかったのです。でも、これは長々と触れてはならない話題なのです。

現状を考えました時、私が希望することと申しますと、今眼前にしております、貴方の親切で思いやり溢れるお手紙の中の多くの部分もそこに由来するものと存じますが、あの立派なお気持ちを、貴方ご自身のためにも、奨励し助成していただきたいという点だけでございます。これは間違いのないところですが、このようなお気持ちが気質として固まりますと、他のどのようなものをもってしても不可能だという時に、貴方に喜びをもたらしてくれることになりましょうし、また、今この時にも、貴方の行いや会話の中でひときわ光を放ちまして、極めて立派な女性たちにも気に入っていただけることになるのです。と申しますのも、教育によりますのと同様に、善良な道を自ら選んでおります人は、人類を気高くしてくれます資質、そして、それなしでは、高貴なことこの上ない氏素性の持ち主も品位を欠いてしまうという、あの資質を身に備えておられることになるからです。

私の存命中はご結婚なさらないという、大層固いご決意の件ですが、それをお守りになりましても、貴方の不利に働くことはないのだと、ほぼ確信しておりませんでしたら、私もきっと気に掛けていたことでしょう。私が他人様にお頼りする状態をすべて乗り越えましたこと、そして、貴方がそのように惜しみ無く申し出てくださる保護の手やご厚意も必要としなくなっておりますことを、数日中には、ほんの二、三日のうちには納得していただけるはずだからでございます。

ご厚情に感謝し、お幸せを祈りつつ、貴方の謙虚なるしもべ

Cʟ. ハーロー

手紙　七十
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

八月二十八日　月曜日　正午

昨夜、われわれに推測出来る範囲でだが、今は亡きベルトンの埋葬が行われたと思われる頃合に、M卿とモーブレーと俺は「律義者トム・ベルトンを偲び」杯を一度上げた。それから、生きている人間のほうへ急ぎ気持ちを切り替え、「ハーロー嬢のために」乾杯をしたのだが、忝くも、これはM卿の音頭取りによるものであり、併せて「めでたい和解のために」も乾杯だ。その後、われわれは「律義者ジャック・ベルフォード」の思い出話に花を咲かせたのだが、われわれ全員が意見の一致を見たところによると、近頃この男は人の役に立つ人情家になっており、自分のことよりも、友人のために骨を折るほうが好きな男になっているとのことだったよ。

だが、貴公から音沙汰がないというのは、一体どういうことなのかな(ア)。それに、我が愛しの君と身内の者たちとの間にもたらされた突然の和解の動機に関し、また、暫くしてから父親の屋敷に訪ねてきてほしいという、彼女の寛大なる招待の動機について、教えてくれないのは何故なのだ。

今頃は、間違いなく貴公も秘密を明かしてもらっているに違いないのだ。はっきり言わせてもらうが、俺に隠し立てをするようなことが、我が天使と貴公との間に一つでもあれば、俺は嫉妬に狂うことになるだろうな。今回の一件では、俺が主役を演じるのか、さもなければ、無に帰すのか、そのいずれかなのだからな。

貴公の怠慢の原因を探らせようと、ウィルを急ぎ遣わしたところだ。

だが、貴公の耳に一言、二言囁かせてもらおう。この手紙は、結局のところ、俺を都から追い出すための策略であり、それ以外の何ものでもなかったのではないかと思い始めているのだよ。というのも、一つには、今朝受け取った手紙の中で、令嬢は実際にすこぶる具合が良くないと[その点については、心の底から気の毒に思っている]、ターヴィルが教えてくれているからだ。これこそ、彼女がまだ出発出来ずにいる理由なのだと、そんなふうに考えて構うまい、と貴公は言うのだろうな。ところが、その一方で、つい昨晩の話だが、あの一族の執念深さはこれまでどおりだということを耳にしたのだよ。それに、今日の午後にも、卿と俺はモーデン大佐の訪問を受ける予定なのだが、どうやらこの男は、従姉妹との結婚の意思を俺に質す役目を引き受けたらしいのだ。

この点からも確かに思われるわけだが、仮に彼女が身内の者たちに俺の申し出のことを知らせているとしても、連中としては、俺自身の口から確認出来るまでは、俺が本気であることを信じようとはしないのだ。とはいえ、予定の訪問は、彼女の身内のだれに望まれたことでもなく、モーデン自身のお節介によるものだと俺は理解している。

さて、ジャック、このすべてをどう考えたら良いというのだ。身内の者たちの執念深さに関する情報は疑いを挟むことの出来ないものなのだよ。しかしながら、彼女の手紙を読む時、どんなことが言えるのだろうか。まさか、愛しのいたずら娘が虚言を弄するはずも

(ア) ベルフォード氏は最後に認めた手紙を未だ発送していなかったのである。その理由については、百六十一頁を参照のこと。

ないだろうしな。

彼女が約束を反古にしたのは、ただの一度しか知らないのだ。われわれの母さんのところで起こりそうになったあの恐ろしい火事騒ぎの後、俺を許すと約束しながら、次の日は顔を合わせようとせず、その後、俺を許すのを避けようとして、ハムステッドまで逃れた時のことだ。それに、名誉にかけた誓いをこのように破ったことで、彼女は痛切に良心の咎めを感じたわけだから（何しろ、自分の力で守ることの出来る約束を反古にするというのは、善良な人間にしてみると、嘆かわしい話だからな）、彼女が再びごまかしを用いようとするようなことは考えられないのだ。とりわけ、前もって考慮が加えられる書面の形ではな。おそらく、貴公はこう尋ねることだろう。「いくら正直者だからといって、追剥ぎとの約束を守る義務はあるまい」とだ。というのも、貴公の粗野な譬えの仕方は重々承知しているからだよ。だが、俺に言わせるなら、正直者すべてにその義務はあるのだ。譬え話を一つしてみよう。

ここに略奪をこととする悪党が一人いて、君の胸にピストルを突きつけ、金を要求するとしよう。君は現金も貴重品も持ち合わせておらず、厳かに誓うのだよ。もしも命を助けてくれるなら、これこれの期日までに、これこれの場所へ、合意のとおりの金額をその男宛に送り届けることにしよう、とだ。

問題となるのは、君の命はその男の掌中にあるのではないのか、という点だ。

そんな力をその男がどのようにして得たのかは別の問題だ。捕まった時には自らの命をもってその代償とするわけで、危険承知で賭けに出ているということだよ。

さて、君の命を助けてくれる場合だが、その男は、どうだろう、君が名誉にかけて届けるという金に対する有価約因を与えているのではないだろうか。もしも助けてくれないとすると、金額が法外なものに違いない。あるいは、君の命が、君自身の目にすら、はなはだつまらないものに映っているということだよ。

具体的に説明をする必要もあるまい。俺のことは決して容赦せず、また、自らの心に照らして、俺の心にも通じているように考えている貴公自身でさえ、この件を俺にとってさらに不都合な姿に描くことは、多分出来ないものと俺は確信しているのだ。

それに、どうして善人というのは、自分たちより几帳面さに欠ける人間をあのように咎めようとして、自ら買って出たりするのだろうな。そのような人間は、目的を達するためには、どのような無礼をも憚らないからではないのかな。それに、俺が自分の務めを果たさないからといって、他の者が務めを疎かにする理由にして良いのだろうか。貴公も良いとは言わないはずだよ。

また、今回の件について、その実情に関しても言い表し方の点でも、俺に最も敵対している連中が用いるのと同じ強い言葉でもう一度述べるとしたら、どんな感じになるのだろうか。「ほら、あの放蕩者で恥知らずのラヴレースめ、自分の立てた誓いを破って、クラリッサ・ハーロー嬢を騙したぞ。まったく悪党だよ」と、敵は言うだろう。「だが、奴らしい話だな」とだよ。ところが、信心深いクラリッサ・ハーロー嬢が約束を破り、ラヴレースを騙したという噂が流れるようなことになると、「おやおや」と、誰も彼もが言うことだろう。「まさか、それは有り得ない話だよ」とな。

誓って言うが、ジャック、この天晴な女性に対して俺が抱いている崇敬の念というのは大変なものだから、そのような仮定をするだけでショックを受けてしまうのだ。また、貴

公にしてもそのはずなのだよ。然るべく彼女を尊敬しているのならな。貴公も承知のとおり、世界中の男と女はおしなべて、それぞれの人間が公言している事柄、そして、周知の常習的行為によって、お互いに関する所見を生み出しているからだよ。従って、この令嬢にあっては、故意に正しくないことを口にするのは許されないわけだが、ちょうど、俺が約束を守るのは奇妙に思われるのと同じことだ。もっとも、俺が念頭に置いているのは色事の場合だよ。その他の点に関しては、俺を知る者すべてが証明してくれるように、誠実にして品行方正な人間なのだからな、俺様も。

それに、結局のところ、もしもこの件で俺を騙したということになると、この令嬢は一体どんな仕打ちに値するというのだろう。何しろ、M卿のところの最高の馬に颯爽と打ち跨がって、俺宛の彼女の手紙を見せるべく、昂然と勝ち誇った表情を浮かべつつ、セアラ夫人の元へ、また、ベティ夫人の元へと俺を赴かせたのは、彼女ではなかったのかな。

また、言わせてもらうが、連中の祝いの言葉も頂いているのだよ、俺様は。「さあ、いよいよですね、ラヴレースさん」と、片方が叫ぶと、「そう、いよいよですよ、ラヴレースさん」と、もう一方が叫ぶのだよ。「あんなにも素敵な、そして、あんなにも寛大なお嬢様ですからね。最高の旦那様になってくださるものと思いますわ」とだ。「これで、改心なさった貴方のお姿を拝見する楽しみも、間もなく得られるというわけね」と、一人が付け加える。すると、「これで、どうやら拝見出来そうですわね。私たちが長い間望んでおりました道を貴方が歩んでおられるところをね」と、もう一人が大声を上げるのだよ。

従姉妹のモンタギュー嬢たちも、その後ずっと、新しく出来る親戚のことで大喜びだったのだ。口を開くたびに、「私たちの魅力的な従姉妹、私たちの愛らしい従姉妹」で、「あの方のことは心の底から大切に思いますわ。どれだけ教訓が得られることでしょうね」と言うのだ。ただ、驚の目を持っているつもりのシャーロットは、言葉遣いや筆遣いに何か謎めいたものを見つけ出そうとしていたのだが、やがて俺の声が勝り、そんな考えを笑い飛ばしてやったのだ。

M卿について言えば、ハーロー家から何らかの申し出を携えた使者が到着するのを、今か今かと待ち侘びていたのだよ。そして、モーデン大佐がやって来れば、大佐のほうからその種の申し出がなされるはずだし、ハーロー家の連中も、われわれとの条件をより有利にするためだが、モーデンの訪問の結果が分かるまで、和解しかねるような顔付きを装っているだけの話なのだと、未だにそう言い張っているのだ。

実際の話、前にも言ったことだが、俺に対する連中の敵意、そして、彼女への無慈悲さは続いているのだと信ずべき、疑いようもない理由を持ち合わせているのでなければ、俺としても、卿の推理にはいくらか根拠があると考えたくなることだろう。何しろ、あの一族全体には、卑劣な狡猾さが忌まわしいほどに見受けられるのだよ。ただ、その中の天使ともいうべき者は別で、すこぶる雅量に富む魂の持ち主だから、狡猾さについては、その名称と実体の両方を彼女は蔑んでいるのだ。

これだけ並べ立てて、一体何が言いたいのかというと、あの忌まわしいヤフーに関する話の中でガリヴァーが用いた言い回しだが、「ありもしないこと」(五三)を仮にも我がクラリッサが口に出来たのだとすると、我が一族全員に対して、俺はどんなに愚かな姿を晒すことになるのか、その点を貴公に分かってもらおうということなのだよ。誓って言うが、ジャック、こんな新米策士などに出し抜かれるだけの話だとしても、また、俺は工夫の才が

自慢の種だということを承知しているここの親戚の女たちに向かって、馬鹿面を晒すだけの話だとしても、俺としては腹の底まで悔しい気持ちになるのだよ。それに、すぐにも六頭立ての馬車に羽布団を敷き詰め、病気だろうが元気だろうが、お構いなしに彼女を連れ出し、都合の好い折に結婚してやりたいくらいなのだ。

だが、モーデン大佐が到着した。ここで中断しなくちゃならん。

手紙　七十一

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

八月二十八日　月曜日　夜

先週木曜日の便りの後は音沙汰が無かったわけで、おそらく、君もすっかり苛立っているのではないだろうか。書き上がっているのを一通傍らに置いていたと知れば、さらに苛立つことだろうな。

昨日の朝早く、エプソムへ行ってみると、金曜日に渡しておいた指示のとおり、一切の処置が進められていた。そして、夜には、しめやかに葬儀が執り行なわれた。ターヴィルが参列しており、極めて慎みのある振舞いだったよ。また、だれに対してであれ、これまでに奴が見せたと思われるものよりはもっと深い憂慮の念を伴う態度だった。

聞いたところでは、トマシンがちょっとした変装に身を包み、人目に付かない座席にいたそうだが、悲嘆に暮れさせるのに自分が大いに貢献した、その当の男のために葬儀が執り行なわれるのを見物したいという好奇心からのことだそうだ（というのも、あの女は悲しんでいる素振りすら見せようとしなかったらしいのだよ）。

今日の午後まで滞在を余儀なくされたが、いくつか必要な事柄を片付け、査定用財産目録の作成を指示するためだ。というのも、あいつの遺言で、何もかも金に換えることになっているからだよ。故人が遺言執行人としての俺に遺してくれた百ギニーを妹に贈り、そして、あいつの法定相続人になっている、アンティグァ在住の甥から音信があるまでは屋敷に留まるよう希望しておいた。あいつは妹が貧乏暮しをしていること、また、その貧困は彼女自身のせいではなく、ろくでなしの夫に原因があることも知っていたのだが、妹にはただの五十ポンドしか遺さなかったのだよ。

故人の遺産としては、現金が二百ポンドほど、それと、東インド会社の債券二点の二百ポンドばかりだ。哀れな女が受け取った五十ポンドと俺が贈った百ギニーとを合わせ、出来ることなら二百ポンドにしてやるつもりでいる。それに、確実に彼女の手に入るものが少しあるので、それには息子の手が届かないようにさせるつもりだが、この息子こそ、父親がほぼ実現しかけていた家庭の破滅を完了させた人間なのだよ。

ターヴィルには彼の分の二十ポンドを渡してやった。君とモーブレーにも、要求のあり次第、君らの分を送ることにする。

今は亡きベルトンの件についてはこれくらいにしよう。君と会うまではな。

夕方までにはロンドンにたどり着き、まっすぐスミスのところへ向かった。奥の仕事場へ行くと、ロヴィック夫人とスミスの上さんがおり、泣いていた様子だ。だが、俺の姿を目にすると、二人は大喜びで、次のように話してくれた。つまり、医者とゴダード氏はち

ようど帰ったところであり、しばしば訪ねて来て、令嬢の傍らでお祈りをして行く立派な聖職者も帰ったばかりだということ、そして、三人揃って、彼女が新たな週の始まりまで生き長らえるのは難しいとの意見だったということをだ。俺としては、驚きよりも悲しみのほうが強かった。というのも、土曜日に彼女の元を辞した際、俺も同じような懸念を抱いていたからだ。

俺が挨拶の言葉を届けると、令嬢からは、明朝八時までに訪ねてくれると有難いという返事だった。ロヴィック夫人が話してくれたところでは、彼女は土曜日、書き物をしている最中に気を失ったという。その前の日にも同じことがあり、その時には、駕籠での短い散歩が助けになったこともあり、また戸外へ連れ出してもらったのだ。彼女はやや回復して戻って来た。そして、夜遅くまで書き物をしたのだが、かなり良く眠れたため、翌朝はコヴェントガーデン教会へ出向いた。ただ、戻った時にはひどく具合が悪く、横にならねばならなかったのだ。

起き上がると、ロヴィック夫人とスミスの上さんのひどく嘆き悲しんでいる姿が目に入り、彼女は面倒を掛けていることを詫びた。「私がここへ参ります前は、貴女たちはお幸せでした」と、彼女が言っていた。「正直に生きておられる見知らぬ人々の仲間入りをいたしまして、病に臥し、貴女たちのところで息を引き取るというのですから、私も残酷なことをいたしますね」とだよ。

彼女の身内が和解しようとしない点に婦人たちが触れると、彼女のほうでは、「身内の者たちにしてみますと、私が厄介を招いてきたことになるのです。それに、私の具合がどんなに悪いのか、皆は知りませんし、私が筆にいたしますことは何一つ信じようともしないのです。それでも、血の繋がりの濃い、そして、大切に思っております身内がこんなにもたくさん存命中ですのに、一人として私に目を向けようとしてくれませんのは少々辛い話だと、そのように考えずにはいられないことも時々あるのです」と語り、さらに言葉を続け、「古くからの使用人、前からのお友達のどなたであれ、私に近づきますと、間違いなく怒りを招くことになってしまうのです。それに、若い娘ですのに、こんな大きなお仕事を独りでやり通さねばなりませんし、現世の事柄をすべて考え、自分の埋葬のことまでも指示しなくてはいけないのです」と言っていた。また、「私の傍らで祈り、祝福してくれる大好きな母はいないのです。私を落ち着かせたり慰めたりしてくれる優しい姉もいないのです」と、魅惑の受難者は嘆いていたが、「でも、そうですわ」と、思い出すように言ったのだ。「この不都合を善用することさえ出来ますなら、すべてがうまく行かないものでもないように思いますわ。私のために祈っていただきたいのです、ロヴィックさん。祈ってくださいね、スミスさん。私が　…　貴女たちのお祈りが私にはとても必要なのです。この残酷な男性が私の心の落ち着きを奪ってしまったのです。あの人の迫害のせいで、ちょうどここのところが痛むのです［と、手を心臓に当てながらだ］。あの人を避けるためのことですが、あの人は一体どのような行動を私に取らせたというのでしょう。朱に交わって赤くならない人がどこにおりましょう。悪い心が私を虜にするよう、あの人は仕向けたのだと思うのです。また、私が果たすべき務めのすべてに横槍を入れたのです。そして、まだ私を休ませてはくれないらしいのです。本当に、とても残酷なのです、あの人は。でも、これは試練の一つなのだと、私はそう信じております。神様の思し召しによりまして、明日にはもっと楽になることでしょう。とりわけ、もうこれ以上あの人から悩まされることが

なく、また、何とか安眠を得られるならばのお話です。そのためにも、十一時までは起きていることにいたしましょう」とだ。

彼女が言うには、この日は彼女にとって大変に気分の重い日だが、別の折には、とりわけここ二、三日がそうなのだが、気分爽快な時間に恵まれることもあるというのだ。そして、特に次の点に触れていた。つまり、時々は、神様が自分を迎え入れ、慈悲を施してくださるとの確信から、大層喜ばしい気持ちになり（これが思い上がった考えではないことを願うが）、なかなか自分を抑えられず、地上にありながら、この地球を離れた上方にいるように思ってしまうことがあるというのだよ。また、ロヴィック夫人に向かって、こんなことを仄めかしていた。「あの状態そのものというのは、果たしてどのようなものなのでしょうね。そこに望みを抱くだけで、漆黒の闇を通して一筋の輝かしい光を投げ掛けてくれることがよくございましたし、私の運勢が最も衰えております時にも、絶望の黒雲を追い払ってくれたのです。この愚痴っぽい気分をすぐにも拭い去ってくれるよう願っているわけでございますが　…　」とだ。

彼女はかなり良く眠れたようで、今朝は駕籠でセントダンスタン教会へ出掛けた。

駕籠かきたちがスミスの上さんに話したところでは、祈祷式が終わると（やっと彼女が戻って来たのは、九時から十時の間だったのだ）、奴らは彼女をフリート街の一軒の店まで担いで行ったのだが、これまで一度もお供をしたことのない店だったそうだよ。で、どこだったと思うかな、貴公は。それが、葬儀屋なのだよ。いやはや、何という女性なのだろうな。彼女は奥の仕事場に入って行き、そこの主人と三十分ほど話すと、大層落ち着いた様子で戻って来た。主人は恭しい顔付きで駕籠のところまでお供をして来たのだが、好奇心と深刻さとで一杯の様子だったそうだ。

この時の彼女が、前に触れていた(ア)〈住まい〉を注文するために行ったのは明白だ。「どうぞ、出来るだけ急いでくださいね」というのが、駕籠に乗る際に主人に向けた彼女の言葉だよ。スミスの上さんは、聞いていた俺が覚えたのと同じ驚き、そして、悲しみの気持ちを込め、この話をしてくれたのだ。

午後になると、彼女の具合がひどく悪化した。セントダンスタン教会かチャペルか、どちらかで風邪を引いてしまったのだ。彼女は傍らで祈ってもらうために、牧師に使いを出した。婦人たちのほうでも、彼女には内緒で、H医師とゴッダード氏の両方を呼んだのだが、前にも話したように、彼女に挨拶をしようと、俺が今日の夕方やって来た時には、この二人はちょうど立ち去ったところだったのだ。

さあ、俺が留守にしてから今晩までに起こった事柄について、上さんの話を報告するとこんな具合だ。

令嬢の顔が見たくて、明日が待ち遠しく思われる。ただし、これまで経験したことのない、そして、どう表現したら良いのか分からないような、ひどくもの悲しさを伴った憧れの気持ちだよ。

八月二十九日　火曜日

七時半にスミスのところに着いた。連中の話では、令嬢は駕籠でセントダンスタン教会

(ア) 百六十一頁を参照のこと。

へ行ったが、前の二日のいずれの時よりも体調は良かったとのことだ。また、駕籠に乗る際には、ロヴィック夫人とスミスの上さんに向かって、「気の滅入ってしまいます昨夜の話し合いのことですが、貴女たちにはずいぶんと償いをしなければいけませんわね」とも言っていたそうだ。

「もしも、ロヴィック夫人」と、彼女は微笑みながら言ったのだ。「私の心を乱しますような新たな出来事が起こらなければ、私の気持ちはしっかり持ち堪えてくれるものと存じますわ」とだよ。

祈祷式が終わるとすぐに、彼女は戻って来た。

俺のいる奥の仕事場へ入って来た彼女は、俺が近づいて行くと、次のように話し掛けて来たのだ。「ベルフォードさん、お目に掛かりまして、大変嬉しく思いますわ。お気の毒なお友達のために、ご親切にお葬式をして差し上げたのですね。ご近親の方のために同じことをなさってから、そんなに日も経っておりませんのにね。こういったご苦労がそのように頻繁に降り懸かりまして、少々お辛いのではございませんか。でも、慈悲のお仕事ですし、死に瀕しておりますお気の毒な人たちがこれ以上に適切な選び方をご存じないといたしますと、それは貴方の慈愛に満ちたお心への賛辞ともなりましょう」とだ。

俺はこう話した。お傍に仕えるという栄誉に浴して以来、お体具合がはなはだ優れなかった点はお気の毒に思いますが、今はずっと良くなられたご様子で、大変嬉しく思っております、とだ。

「生死の境を行きつ戻りつしております時、哀れな者たちにとりましては、具合の良くなることもあれば、悪くなることもあるのです」と、彼女が答えていた。「でも、今のところは、こういったお話は止めにいたしましょう。朝食をご一緒していただけますわね。昨日はひどく気が塞いでおりました。とても気分が滅入っていたのです。そうではありませんでしたか、スミスさん。でも、もうそのようなことはないものと存じます。そして、今日はすっかり晴れやかな気持ちなのです。まるで麗らかな一日になりそうな始まり方ですわ」とだよ。

彼女は二階へ上がるよう俺を誘い、スミス夫婦、そして、ロヴィック夫人も朝食に招いていた。俺としては、彼女の外見はともかく、生気のあるところが嬉しかったのだよ。

朝食が済み、善良な連中が引き下がって行くと、次のような会話がわれわれの間で交わされたのだ。

「宜しければ、ひとつお尋ねしたいのですが」と、彼女が言った。「もうお友達に付き纏われることはなさそうだと、そんな望みを持って構わないとお考えでしょうか」とだ。

俺は躊躇したよ。そのような男のことを、どうして請け合えるというのだ。

「あの人がまたやって来ましたなら、どうしたら良いのでしょう。私の今の状態はご覧のとおりです。もう、あの人から逃げ出すわけにはまいりません。ご自分がこのように零落させた哀れな娘なのです。あの人に憐れみの気持ちが残っているのでしたら、来ないようにさせていただきたいのです。でも、最近お便りはございましたか。あの人はいらっしゃるおつもりなのでしょうか」

「来ないだろうと思いますよ、マダム。あの男からの音信は先週の木曜日以来ないのですが、お身内の方々と貴女との間の和解のことで、貴女のお手紙がもたらしてくれました希望に歓喜しながら、あの男はロンドンを離れたとのことでした。また、間もなく、お父

上のところで貴女にお会い出来るかもしれないと喜んだそうで、自分の身内全員に吉報を喜んでもらおうと、あの男は都を離れたのです。そして、その吉報のことですっかり張り切っているとのことです」

「困りましたわね。それじゃあ、きっと、また私を苦しめにあの人がやって来ることになるわけですね。あれはあの人を遠ざけておくための術策にすぎなかったのだということにお気づきになり次第、こちらへいらっしゃるでしょうね。もしかいたしますと、もうその途中かもしれませんわ。ひどく具合が悪かったものですから、私の考えでは、もっと前にあの人や皆さんのお邪魔をしなくて済むようになると思っていたのです。この工夫にいたしましても、二日か三日以上に亘って通用することは期待しておりませんでした。家族との和解に何らかの望みを持てるほど私が幸せではないということに、あの人も今頃は気づいておられるに違いないのです。そうなりますと、あの人はやって来るでしょう。たとえ、ペテンだとあの人がお考えになるもの　…　悪質なものではないと私は思いたいのですが　…　そのことへの仕返しのためだけだといたしましてもね」

自分の手紙が術策に過ぎなかったのだと、彼女が告白するのを聞いて、俺は驚きの表情を浮かべたのだと思う。実は、彼女がこう言っていたのだよ。「拝見いたしますところ、ベルフォードさん、このような手管を用いますことが私に可能だということに驚いていらっしゃいますね。正しいことではないのかもしれません。気持ちの急くままに為されたことなのです。お会いすることなど、どうして出来ましょう。私にひどい致命傷を負わせた男性なのですよ。それでいて、自分の罪を後悔するふりをして（また、私に会いたくて）、この家のまっとうな人たちを相手に、あのようにぞっとするほど軽薄な振舞いをして見せるのですからね。ただ、これまた不思議なことですが、貴方もあの人も、私の手紙を熟読なさった上で、私の意味するところにはお気づきにならなかったのですね。私の認めましたものは、確かにご覧になられたものと存じますが」

「拝見いたしましたよ、マダム」　そこで俺は、〈邪気のない〉手管ということで、文面に説明を付けようとしたのだ。

「あの人に害を及ぼすつもりはございませんでしたし、また、私にはそこから期待されますような効果を求める権利があり、あの人には私のところへ押しかけて来る何の権利もないのだという、そういった点では確かに〈邪気のない〉ものだったのです。でも、あの人の例の手紙はお持ちでしょうか。その中で私の手紙の写しを貴方にお見せしている（おそらく、あの人はそうしているはずです）もののことです」

「持っておりますとも、マダム」と、俺は懐中書簡入れからその手紙を取り出して見せたのだ。だが、ためらいがちに、彼女はこう言っていた。「いいえ、どうか、お一人でお読みいただきたいのです。あの人のを目にしたくはございませんからね。そして、そのようにはっきりしております意味合いに、なおも貴方はお気づきにならないのか、お調べください」とだよ。

俺はその文面を目だけで追って見た。「正直なところ、何も気づきませんね。マダム。ただ、お父上やその他のご家族と和解なさるために、貴女がハーロー邸に向かおうとしておられるということだけです。それに、ラヴレース氏のほうでは、スミス氏のところにいる折に、姉上からのお手紙が届けられるのを目にしたのですが、その手紙は貴女にその吉報を伝えているのだと決めて掛かったのです」

そこで、令嬢がすべてを説明してくれたのだが、それも、六語ほどで、と言って構うまい。宗教的な意味合いが含まれていたのだ。君と俺のどちらにも見破ることが出来なかった理由は、そんなところにあるのだよ。

「ただ〈父の家〉を〈天国〉と読み替えていただくだけで良いのです」と、彼女が言った。「そして、〈大切な、祝福されたお友達の仲立ち〉に対しましては、救い主の執り成しのことを（高ぶることなく、それにすがるつもりなのですが）想定してください。そうしてくださいますと、手紙の残りの部分すべてに説明が付くことになりましょう」というのだ。そして、「願わくは（と、彼女は繰り返していたのだが）、許していただける手管であってほしいものです。それでも、厳密には正しくないのでしょうね」とだよ。

俺はそのように読んでみた。そして、しばらくの間は、彼女の工夫の才や敬虔さや慈悲心に、また、こんなふうに騙されてしまった貴公や俺の愚かしさに驚き、立ちつくしていたのだよ。

さてさて、下劣なるラヴレースよ、裏をかかれた自慢家として首を吊るか、土左衛門になるか、それとも、自ら銃の引き金を引くか、貴公は（令嬢には一切矛盾がなく、貴公には何の望みも残されていないのだからな）それ以外に何が出来るというのかな。

俺の驚きが少し静まると、彼女が話を続けた。「貴方のお友達がここにおられる時に姉から届きました手紙について申しますと、間もなく貴方にもご覧いただけましょうが、姉がこれまで私宛に書きました中でも最も残酷なものなのです」というのだ。

その後彼女は、モーデン大佐が予定している君への訪問の結果がどうなるのか、その点について強い懸念を表明し、今、あるいは、今後いかなる時であれ、俺の身に損害なり危険なりを招くことなしに、これ以上の災いを防ぐ機会に恵まれるようであれば、是非とも防いでほしいと懇願していた。

この点については、また、彼女の命令すべてに対しても、特段の注意を払うことを俺は請け合ったのだ。それも、彼女にとっては極めて好感の持てる態度であったため、彼女が言うには優しさということになるが、「最も悲惨な孤児の状態」に苦しんでいる …… これが彼女の言い方だったのだ …… 孤独な娘に寄せる優しさのことで、彼女は俺への天恵を祈願してくれたのだよ。

その後、彼女は最初の話題に戻ったが、君がまたしつこく言い寄ってくるのを恐れるあまり、気持ちが落ち着かないというわけだ。そして、「あの人に少しでも影響力をお持ちでしたら、ベルフォードさん、私に残されましたわずかな時間をすべて私一人のものといたしますことに保証を与えてくださるよう、あの人を説き伏せていただきたいのです。私にはその保証が必要です。本当に必要なのです。私が務めを果たしますのを、どうしてあの人は邪魔したいと思われるのでしょうか。私がすべての男性に優先してあの人を選んだことに対しまして、あの人は十分に私を罰したのではないでしょうか。私の声望と財産とを台無しにしてしまわれたのではないでしょうか。また、あの人の私に対するいわれのない復讐は、私の魂をも破滅させることなしには、完了しないということなのでしょうか。このような乱暴な物言いをお許しくださいね。でも、もうこれ以上あの人に邪魔されることはないのだと承知いたしますのは、私には重大な関わりを持つ事柄なのです。ただ、これほどの嫌悪感を抱いてはおりますが、たとえ、あの人を拝見いたしました途端に息を引き取ることになるといたしましても、どのようなものであれ、貴方とあの人との間の致命的

な誤解の原因になるくらいでしたら、むしろあの人の訪問をも甘受しようという気持ちでいるのです」と言っていた。

俺は次のように確約したのだ。つまり、現状について、また、彼女の健康状態について君に報告をする際にも、君には彼女への接近を試みる気持ちはないのだと、君に代わって返答を引き受けられるような、そんな伝え方をするつもりでいるということをだ。

さて、ラヴィレイス、事の一部始終を君に提示しているのはこういうわけなのだよ。また、この手紙と先週土曜日の俺の手紙とが君の手に届き次第だが、彼女の恐れを取り除けるよう、俺にその権限を与えてくれることを希望している。

この言葉で彼女も少し満足し、次のように言っていた。君に代わって請け合おうと、俺が言わなかった場合には、彼女としては、体具合は悪くても、君には勿論のこと、俺にも分からない場所へ移る覚悟でいたというのだよ。そして、気の毒に令嬢は、「とは申しましても、お近付きになったばかりの人たちの傍を離れ、赤の他人に囲まれて息を引き取らねばならなくなるようでしたら、私にとりましては、苦難の極みにもなっていたことでしょうね」と言うのだ。

この会話が、その性質からしても長さからしても、彼女を疲れさせていることに俺は気がついた。そして、一、二度彼女の顔色が変わるのを目に留めると、それを口実に暇乞いをしたのだよ。ただ、夕方には、それも、出来るだけ頻繁にだが、お傍に伺うことを許してくれるよう願い出た。というのも、俺は次のように話さずにはいられなかったのだ。つまり、会うたびにいよいよその思いが募るわけだが、彼女のことは天の祝福を受けた人間のように、また、かくも長きに亘って浸っていた深い泥沼から俺を引き上げるため、天から遣わされた人間のように思われるということをだよ。

笑いたければ笑うのだな。だが、彼女のことは、傍へ近寄るたびにだが、今まさに聖者や天使の仲間入りをしようとしている者の一人として眺めずにはいられなくなるのも確かなのだよ。こんな思いがすっかり俺の心を占めていたものだから、退出する際にも、彼女の祈りと祝福を請わずにはいられなかったが、天使に相応しい敬意を込めてのことだ。

夕方、彼女はひどく元気がなく弱っていたので、俺は十五分も経たないうちに暇乞いをした。まっすぐのご帰還だ。今の俺は、従姉妹とその家族にとっては喜びであり、驚きでもあるわけだが、この屋敷で真面目な夜を過ごすことが多いのだよ。連中のほうでは、君がロンドンを離れていることにその原因があるように考えている。

この手紙の包みは、明日の朝早く、俺自身の使用人の手で届けることにするが、貴公に嘗めさせたに違いない宙ぶらりんな気持ちに対する埋め合わせのつもりだよ。貴公も感謝してくれるものと考えている。ただ、手紙を持たせずに貴公の使用人を帰したりすることに対しては、感謝してもらえないのは確かだな。

君とモーデン氏との間で交わされた会話の詳細を知りたいものだな。すでに触れたとおり、令嬢のほうでもその点をしきりに案じているのだよ。この包みは読み終えたら返送してくれ。俺には写しを取る時間もなければ、忍耐心もなかったものだからな。それと、是非とも頼むが、君が押しかけて来ることは二度とあるまいという、お気の毒な令嬢と交わした俺の約束を果たせるようにさせてほしいのだよ。

手紙　七十二

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

八月三十日　水曜日

この天晴れな令嬢とH先生との間で交わされた会話について伝えようと思うが、あたかも衣服の着替えにも似たありふれた出来事でもあるかのように、令嬢は冷静さと落ち着きとをもって死を語り、また、その準備を進めることが出来るのだという、その新たな例をこれは提供してくれることだろう。

二十六日、二十八日、そして、昨二十九日の手紙を持たせ、俺の使用人を君のところへ送り出すとすぐに、敬意を表しに令嬢のところへ向かった。そして、まずまずよく眠れたこともあってだろうが、嬉しいことに、彼女は結構元気で、機嫌の良いことが分かったのだよ。彼女はいつもの祈りから戻ったばかりだった。そして、ちょうど彼女が玄関に足を踏み入れた時、H先生が馬から降りたのだ。

令嬢の具合を尋ね、息が切れやすいとの訴えを聞いた上で（令嬢はこれを内面的なものの衰えのせいにしていたが、その衰えは、君からと同じく、身内の者たちからも最近悩まされることがあったために早められたというのだ）、医者としては転地を勧めたいということだった。

彼女は次のように言っていた。「それがどんなふうに私の役に立つというのでしょう。朗らかなお顔で（そうなさっても私の心を乱すことになりませんのは、先生もご承知のはずですわ）本当のことをおっしゃっていただきたいのです。先生も今では本当のお医者様の態度をお忘れになり、どんなお薬でも私を直すことは出来ないと諦められ、最後の手段として転地を勧めておられるのではないでしょうか。私のような病に転地は効果があるとお考えなのでしょうか」と尋ねるのだよ。

医者は無言だった。

「私がお尋ねいたしますのは、大変立派で、大変有能なお医者様が処方してくださいましたものを、何一つとして私はなおざりにしなかったという点につきまして、身内の者たちに（おそらく、しばらくいたしますと、皆のほうでも私が病気回復のために用いました方法のことを調べると思うのです）納得してもらいたいからなのです」

「このたび貴女を襲いました息切れの症状には、マダム、おそらく転地が有効であろうと思うのです」

「でも、ご覧のように、私はひどく弱っているのです。日一日とやつれてきておりますのは、先生もお分かりのはずです。それに、自分の感じで判断いたしますと」と、心臓のところに手を当てながら、「もう長くはないように思うのです。もしかいたしまして、転地で命が延びるようなことがあるかもしれないのでしたら、決して延ばしていただくことを望んでいるわけではございませんが、出掛けることにいたしましょう。それと申しますのも、ご親切に、ロヴィック夫人がお供をしてくださるものと存じますのでね。でも、新しい下宿へ引っ越すという骨折りをいたしましても（今では、私にとりましては大きすぎる骨折りとも思われますが）、ただ田舎で息を引き取るためだけのことなのでしたら、私といたしましては、むしろここで最期を迎えたいようにも思うのです。と申しますのも、臨終の場所やその様子につきまして、また、あの厳粛な瞬間にありそうな重要この上ない事柄

と同様、極めて些細な事柄のすべてにつきましても、私はこのお宅で計画を練っていたのです。ですから、先生、本当のことをおっしゃっていただきたいのですが、私はこのお宅に留まりましても、故意にとか忍耐心がなくてとか、あるいは、これはもう克服したつもりなのですが、遺恨のゆえに、さもなければ長らえることも出来た命を縮めてしまったという、そんな謗りを少しも受けずに済むものでしょうか。お教えいただきたいのです、先生。この点に関しましては、話し掛けておられる相手は臆病者ではありません。本当ですわ」と、気取りのない笑みを浮かべて話すのだよ。

医者は俺のほうに顔を向けて見せたが、何と言ったものか言葉に窮し、ただただ彼女に感心し、天を仰いでいた。

「これ以上に優しく、そして、これ以上慈悲心に溢れたお医者様に恵まれました患者さんは、いまだかつていなかったことでしょうね」と、彼女が言った。「でも、私の問いに率直にお答えくださるのはお嫌のようですから、言い方を変えることにいたします。いかがでしょう、先生、転地を命じておられるのではありませんね」とだ。

「そういうことではありませんよ、マダム。それに、今では、医者として貴女のところへ参っているわけでもないのです。お話に感服し、ご難儀の件を大変お気の毒なことと思えばこそお訪ねしているのです。それから、特に本日の訪問の理由についてですが、マダム、もっと率直に私の立場を説明いたしますためにも、申し上げねばならないことがあるのです。お身内の方々のお怒りに触れ、貴女が苦しい思いをしておられることは承知しているのです。それに、貴女のご容体をお知りになれば、皆様も貴女への態度をお変えになるのは疑いのないところですし、すべてを知らされました時には手遅れだったというのでは、皆様も胸を抉られるような思いをなさるものと確信いたしまして、どなたかが早急に貴女のお傍に伺うことも必要である旨を、皆様に文面をもちまして（直接の面識はございませんので）お知らせしようと決心した次第なのです。皆様のためなのです、マダム。このような処置をお認めくださいますよう、是非ともお願い申し上げます」

令嬢は一息入れていたが、やがて、こう言ったのだ。「親切なお話ですね。大変親切なことですわ、先生。でも、自分のためになりますよう、身内の者たちの心を動かしそうに思われますことでしたらどのようなことであれ、試しもせずに今まで放っておくような、意固地で頑固な人間なのだと、私のことをそのようにお考えではないものと存じます」とだよ。そして、「ただ、現在の状態では、先生、仮に皆のうちのだれかが来てくれるとか、使いを寄越すとかしましたところで、その悲しむ様子を目にいたしますと、私もすっかり心を乱してしまうことでしょう。また、皆がまだ私を愛しておりますのを知ったりいたしますと、おそらく、生きたいという望みを持つことになりますし、従いまして、渋々この世を去ることにもなりましょう。今では本当に立ち去りたい気持ちですし、また、私が授かりましたような〈乳離れの時間〉に恵まれました人間に相応しい立ち去り方をしたいものと、そのように願っておりますこの世ですのにね」というのだよ。

俺は次のように言った。「貴女が驚くばかりの平静さで暗示しておられるあの悲しい破局ですが、貴女が心配しておられるほどわれわれはそこに近づいてはいないものと願っているのです。従いまして、たとえ、父上と母上のためだけのことだといたしましても、失礼ながら、私は先生のご提案を支持させていただきます。お二人がどうしても貴女を失わねばならないといたしましても、お二人のほうから先に仲直りをなさったのだと、そのよう

にお考えになるという満足を味わっていただくためですよ」

「とてもお優しい、とても慈悲に溢れたご配慮ですね」と、彼女が言った。「でも、私が最後の時にそれほど近づいていないようにお考えなのでしたら、この件は、従兄弟のモーデンの仲立ちがどのような結果をもたらしますか、それを確かめますまで延ばしていただけたらと思います。もしかいたしますと、あの人にはこれから私のところを訪ねていただけるかもしれません。予定されておりますラヴレースさんとの面談の後のことですが、この面談につきましては、ベルフォードさん、案外、この次の貴方のお手紙でご報告をいただけるかもしれませんわね。どなたにとりましても、命に関わりますような出会いとはならないことを願っております。たった二日間のことですが、先生、お手紙を書くのは控えてくださるよう、お約束いただけますでしょうか。そうしていただけますなら、その間の出来事はどんなことでもお知らせいたしますし、その後は、お好きなようになさってくださって結構なのです。ご厚情につきましては、とりあえず重ねてお礼を申し上げさせていただきます。あらあら、先生、そのように急いでお帰りにはならないでください」というのも、往診料を差し出されてはと、医者が帰りかけていたのだ」。ここしばらくの間は苦痛をお与えいたしましたが、もうこれ以上、料金を申し出るような失礼な真似はいたしません。それに、今では、ご親切にお申し出のございましたこのご厚意のこともあり、貴方のことはお友達としてだけ考えねばならないのですから、その件につきましては、今後一切ご心配はお掛けしないようにいたします。また、これで、これまでよりも頻繁に貴方を拝見いたします喜びも得られるものと存じます」とだ。

尊敬すべき紳士のほうでは、このように確約されたことを喜び、令嬢に向かって次のように話していた。令嬢への往診をする時には、いつも大きな喜びを感じていたのだが、彼女の元を辞するに際しては、令嬢が暗に触れていた理由もあって、喜びと同じくらいに苦痛が伴っていた、というのだ。そして、早いうちから希望していたのだが、この思いやり溢れる約束をその頃に得ていたなら、自分を抑えることが出来ず、往診回数を二倍にしていたことだろう、というのだよ。

こういった連中の間では、このように利益を度外視した例にはなかなかお目に掛かれないようにも思うのだ。俺は今まで、友情と医者とは相入れないものだということを常に信条にしてきたのであり、助からないものと患者を見放した時には、医者が往診のことを考えたりするなどとは、およそ想像もしなかったのだ。儀礼上のものは別で、これは、家族の者たちが自分の通行税取り立て所を通ることになる時まで、連中との関係を良くしておくためのことなのだよ。

医者が立ち去ると、令嬢は極めて真面目な話を始めたが、それは命の虚しさについてであり、健康状態と体力が残っているうちに、そして、体の疾患が心の働きを損ねたり、必要とされる効力や明晰さをもって作用する力を奪ったりしてしまう前に、死への用意をしておくことの賢明さについてであった。このすべては人間すべてに向けたものではあったが、特に貴公と俺とを念頭に置いていたことは容易に看て取れたのだよ。

令嬢は今は亡きベルトンの臨終間際の振舞いについて、その詳細をしきりに知りたがっていた。「私がいろいろお尋ねいたしますのを不思議に思ってはいけませんわ、ベルフォードさん」と、彼女は言っていた。「これまで一度も行ったことのない国へ旅をする人で、進路に横たわる困難のことや、途中で利用出来そうな設備のことを尋ねない人などいるでし

ようか」とだよ。

俺は哀れな男の怯えようや、死を厭う様子をかいつまんで話した。そして、俺の説明が終わると、令嬢はこう言ったのだよ。「船出の間際まで、自分たちの長旅について考えたことのない可哀相な人たちの場合は、いつもそうなってしまうものなのですよ、ベルフォードさん」とだ。

令嬢はこの話題に関し、他にも所見を述べていたが、すぐにも天使たちの仲間入りをする人間の口から出たものとして、決して忘れることのないようなものだった。そして、帰宅すると、さらによく記憶に留めておくよう、俺はそれらの所見を実際に書き留めておいたのだ。だが、そこから利益を得てもらうのにも、ここしばらく君が経験する精神状態と比べ、もっとそれに相応しい気分になってくれるまで、君には見せないつもりだ。

ここまで書き進めたところ、俺の使用人が予想外に早く君の手紙の包みを携えて戻って来たこともあって（君の使用人とスラウで出会い、手紙を交換したわけだ）、その文面に目を通すため、中断せざるを得なくなった次第だ。それゆえ、この手紙については、ここで終わることにする。

手紙　七十三
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

八月二十九日　火曜日　午前

さて、ジャック、モーデン大佐によって為されたわれわれに対する訪問の際の出来事について報告することにしよう。

彼は召使一人を伴い、馬でやって来た。M卿は、ハーロー嬢の親戚として、これ以上はないほどの丁重さと敬意とを示しながら彼を迎えた。

少しばかりのありきたりな時候の挨拶、そして、通常イギリス人が会話への前置きの話題としている、例の無意味な言葉の後、大佐はM卿と俺に向かって、次のように話し掛けたのだよ。

「閣下におかれましては、また、ラヴレース殿におかれましても、私がハーロー家といかなる関係にあるのか、ご承知いただいているわけですから、ある話題を取り上げますことに関しまして、何らの弁解も必要ないものと存じます。そして、ご高察いただけるはずですが、その関係のゆえにも、この話題こそは、光栄にもこの訪問をさせていただきました主たる理由となっているのです」

「ハーロー嬢、クラリッサ・ハーロー嬢の件ですな」と、例の遠慮のない率直な口調でM卿が言った。「君の念頭にあるのはそのことでしょう。だれに聞いても、令嬢は世界一素晴らしい女性ですよ」とだ。

「閣下がそのようなお考えでおられますことを伺い、嬉しく思います。だれもがそのように考えているのです」

「私の考えというだけではなく、一族全員の意見なのですよ、モーデン大佐（と、話好きの殿様が続けた）。妹たち、姪たち、そして、ラヴレース君本人の意見なのです」

大佐「それが、終始一貫して、ラヴレース殿のご意見であったのであればと、天にも祈

る気持ちです」

ラヴレース「貴方は長年に亘ってイギリスを離れておられたわけですね、大佐。今回の一件の委細については、おそらく、まだ十分にはご存じないのでしょう」

大佐「七年ほどイギリスを離れておりました。当時、従姉妹のクレアリーは十二歳前後でしたが、しかし、二十歳であっても、あれほどの思慮分別を備え、あれほど慎重で、そして、あれほど素晴らしい娘というのは、いまだかつていなかったのです。あの娘を知る者、あるいは、目にする者すべてが、あの娘を称賛しておりました。どこの若い淑女をとりましても、心の点でも容姿の点でも、あのように完璧さを約束してくれる例に私はいまだかつて出会ったことがないのです。それに、私が耳にしておりますところでは、驚くべきことでもありませんが、成長するにつれあの娘は、そういった見通しの正しさを示すに止まらず、それを実現して見せたというのです。それに、財産の点でも、祖父があの娘に遺しましたものに加え、父親、おじたち、そして、私自身が予定していたものもありまして、あの州であの娘に優る財産持ちはいないのです」

ラヴレース「おっしゃるとおりです、大佐。そして、それ以上ですよ、クラリッサ・ハーロー嬢は。それに、令嬢の一族の無情さや手荒な振舞いのことがなければ（嫌悪の念を催させるばかりか、似つかわしくもない縁談を彼女に押しつけようと、皆さん揃って決心なさったのですからね）、令嬢は今も幸せにしておられたのです」

大佐「貴方と私の従姉妹の間にあった事柄すべてに、私が完全に通じているわけではないという、貴方がつい今し方述べられたご意見につきましては、ラヴレース殿、そのとおりであるとお認めいたしましょう。しかし、言わせていただけるなら、貴方があの娘に求婚なさったことを私が初めて耳にいたしました際には、貴方に対する異議として承知しておりましたのは、ただの一点しかなかったということです。確かに、それは極めて重大なものであり、私宛の便りがありました折には、その件に関し、私も忌憚のないところをあの娘に伝えていたのです(ア)。しかし、その点がなければ、白状いたしますが、私の密かな思いといたしましては、これ以上に似合いの縁組はなかっただろうという気持ちだったのです。何しろ、貴方は洗練された紳士であり、ご容姿は優雅さを湛え、お振舞いには寛ぎと上品さがあって、お家柄や財産、そして、遺産相続の見込みの点でも、男として望み得るかぎりの恵まれた立場におられるのですからね。それに、イタリアで得た貴方に関する情報からも（このような物言いをお許し願いますが、あちらでの貴方の行状は、全面的に非の打ち所のないものであるとは申し兼ねるのです）、貴方が勇敢であることは私も確信しておりますし、機知や快活さの点で、貴方と肩を並べる紳士は数少ないのです。お受けになった教育が多大の利益をもたらしておりますし、立ち居振舞いには人を引きつけるものがあります。また、旅もしておられるし、私の承知するところでは、失礼ながら、ご自身の指針にはならずとも、立派な所感をお述べにもなる。これらすべての資質からいたしまして、若い女性が貴方に好意を寄せるということ、そして、私が今挙げました資質の点では貴方よりもはるかに劣る男性たちのほうへ傾くよう、あの娘の気持ちを無理にも動かそうといたしました身内の者たちの無思慮な熱意とこの好感とが結びつきまして、あの娘が貴方の保護の手に身を委ねたとしても、何の不思議もないことなのです。しかし、一方に

（ア）第四巻の十九頁以降を参照のこと。

はあの娘を誘おうとし、もう一方にはあの娘を追い立てようとする、こういった二つの強い動機があるとしますと、ひとつお尋ねしたいのですが、あの娘としては、自分が保護者として選んだ男性でもあり、また、遠慮なく言わせていただきますと、相手が提供してくれるはずの保護に対して、十分なお返しも出来るわけですから、二重の意味で、その男性から思いやり溢れる処遇を受ける資格を有しているのではないか、ということです」

ラヴレース「クラリッサ・ハーロー嬢は、男子たるものが与え得る最善の処遇を受けるに相応しい資格を有しておられるのです。その点は何らの疑念もなくお認めいたしましょう。令嬢に対しましては、当然至極なことですが、常に正当な評価を行う所存です。貴方が何をおっしゃりたいのか、それは承知しております。ただ一言、過ぎ去った時間を取り戻すわけには参らないとだけ申しておきましょう。それが可能ならば、との気持ちもありますが　…　」

それから大佐は、すこぶる男らしい口調で、美徳と品性に恵まれた女性を誘惑することの邪悪さを説いていた。彼によると、男というのは、女性の愚かさや信じ易さ、また、経験のなさのゆえに、大抵の場合、極めて多くの点において有利な立場にあるという。女性の初期の学習が、主として、扇情的な小説や、くだらない、起こりそうもない事柄を扱うロマンスを通して行われることもあって、精神を軟弱なものにするのに役立っているというのだ。ただ、自分の従姉妹はありきたりの誘惑などには影響されない存在であり、両親が咎めている無分別な行動へと促されるようなことも、連中の乱暴な仕打ちや、俺の側からの厳粛この上ない誓約のことはともかくとして、それよりも薄弱な動機では有り得ない話だと確信しているという。だが、それにも拘らず、そういった動機があり、かつ、彼女の分別は（卓越したものではあるけれど）体験から得たものというよりは、むしろ気質の結果であるため（しかしながら、彼が言うには、咎めるべきところのない将来の生活を築く礎としては、これは素晴らしい利点なのだそうだ）、彼女は自分の愛する男性に悪巧みがあるような懸念を抱いたりしないかもしれず、それゆえにこそ、あのような女性の信頼を悪用するのは、極悪非道の振舞いだというのだ。

彼がこういった陳腐なやり方で話を続けようとしていたので、俺は彼を遮り、次のように言ったのだ。「このような一般論は、大佐、今回の事例に限っては多分当てはまらないでしょう。しかし、貴方自身も女性には慇懃なお方ですからね。問い質されるようなことになりました場合は、おそらく私同様に、生涯の行動すべてについて、一つ残らず弁明出来るわけでもありますまい」とだよ。

大佐「何なりとお尋ねいただいて構いませんよ。それに、有難いことに、私は自分の過ちについては、それを認めることも、また、恥じることも出来ますからね」

M卿が俺に視線を向けたのだが、大佐のほうでは、その態度からして、別に咎め立てをするつもりでもなさそうなので、俺としても、非難の言葉と受け止めるべきいわれはなかったのだよ。とりわけ、俺の場合も自分の間違いについて、大佐に劣らず、あるいは、他のいかなる男にも負けないくらいに、進んで認めることが出来るからだ。恥と思うかどうかはともかくとしてもな。

大佐が話を進めた。「求めておられるかにお見受けいたしますので申し上げるのだが、ラヴレース殿（自慢をするわけではありません）、私の日頃の行動全般が最近まではどのようなものであったにせよ、大幅に改善したつもりなのです。

道徳律からいたしますと、決して正当化し得ない無謀な真似を私もして来ましたし、他人の妹さんや娘さんたちを相手に私が行って来たのと同じような無礼を、私の妹に対して働く若者がいれば、だれであれ、その男の喉を掻き切ってやるお墨付きが私にはあるのだと、かつての私は考えたことでしょう。しかしまた、実行する気持ちのないことは、どんなことであれ、決して約束しないよう心掛けていたのです。私に結婚の意思がない場合には、慎み深い相手が私の口から耳にするのは、結婚のことというよりは露骨な猥談のほうだったでしょうね。われわれのことを愛している場合、若いご婦人というのは概して、われわれは誠意を尽くすつもりだと、すぐに信じようとするものなのです。そして、口説くのは妻にするためのことなのかどうか、それを質しておく必要があるように思われたりするのは、自分たちの美徳と魅力に対する心外な侮辱と映るのです。しかし、男がいったん約束をしたからには、実行されて然るべきだと私は考えているのです。また、女性にしても、裏切った男の不実さを誰彼なく訴えるのは、十分に正当性のあることですし、いつだって、世間を味方に出来るのは間違いのないところなのです」とだ。

「ところで」と、大佐は言葉を続けた。「この点をお認めくださるだけの名誉心は備えておられるものと確信しておりますが、貴方にしても結婚の約束、それも、極めて明白かつ厳粛な形で申し出られた約束なしには、あのように卓越した美徳の持ち主に近づくことはお出来にならなかったはずだという　…　」

「おっしゃりたいことすべては、大佐」と、俺が口を挟んだ。「十分に承知しておりますよ。お話の腰を折りましても、お許しいただけるでしょうね。お分かりでしょうが、貴方の目指しておられる目的に応えようとしてのことなのですからね。

そこで、貴方には白状いたしますが、クラリッサ・ハーロー嬢に対しましては、はなはだ不相応な振舞いに及んでしまったのです。また、彼女に対する恩知らずな行為や卑劣な行為につきましては、心の底から後悔しているとも申しておきましょう。いや、さらに言えば、彼女に関しましては、すこぶる罪深い真似をいたしましたから、彼女の執念深いご家族から私が日毎に受けておりました悪口や侮辱の類いが、何らかの形で、彼女に対する破廉恥行為への引き金となっていたことを言い訳に持ち出しましたところで、それは自己弁護のための卑劣で下品な試みとなってしまうことでしょう。あまりにも下品で、あまりにも卑劣なために、私にとりましては二重の咎めともなるわけです。さあ、もしもこれ以上の悪口がおありなら、おっしゃっていただきましょう」とだよ。

大佐は二度三度、M卿から俺へと目を転じていた。すると、卿がこう言ったのだ。「この親戚の男は思ったとおりを口にする男でしてね。その点は保証しますよ」とだ。

ラヴレース「そうなのです。それに、これ以上私に何が言えますか。また、貴方のお考えでは、この上何が出来るというのですか」

大佐「出来るのか、との仰せですね。それでは［と、傲慢な口調で話していたが］、申すまでもないでしょうが、〈悔い改めたら償うべし〉ということですよ。この片方についてと同様、もう一方についても、貴方の誠意が実のあるものであるところを、ためらうことなくお示しいただきたいものですね」というのだ。

この言葉をそれ相応に受け止めるべきなのかどうか決め兼ねたまま、俺は躊躇していたのだ（というのも、彼の話しっぷり、そして、その傲慢な口調が、俺には面白くなかったからだよ）。

大佐「次の点をお尋ねいたしましょう、ラヴレース殿。あの娘にその気があれば、貴方も結婚なさるおつもりだというのは、本当のことだと聞いておりますが、事実なのでしょうか。いかがでしょう」

これには、俺も少しムッとした。

ラヴレース「質問とは言いながら、大佐、ぶつけようによっては、指図と受け止められるものもあるのですよ。貴方のはどう受け止めるべきか、知りたいものですね。また、お尋ねの向きはいかなる目的があってのことでしょうか」

大佐「私の質問に指図のつもりございませんよ、ラヴレース殿。目的と言えば、紳士たる者に紳士らしく、そして、名誉を重んじる人間らしく振る舞っていただくよう説得することなのです」

ラヴレース（威勢良く）「それで、いかなる論法を用いて、私を説得なさるおつもりなのでしょうか」

大佐「いかなる論法を用いて、とおっしゃるのですか。紳士らしい振舞いをしていただくよう、紳士を説得しようというのですよ。そのようなご質問がラヴレース氏からあるとは、驚きましたね」

ラヴレース「それはまた、何故ですかね」

大佐「何故か、ですと　…　（と、腹立たしげにだ）　…　それでは　…　」

ラヴレース（相手の言葉を遮って）「そんな具合に鸚鵡返しをされるのは、大佐、私は好かんのですよ」

M卿「さあ、さあ、君たち、お互い理解に努めていただきたいものですな。若者というのは、とかく血の気が多くて　…　」

大佐「私は違いますよ、閣下。さほど若いわけでも、ひどく熱しやすいわけでもありませんからね、私は。甥御殿は、閣下、私を思いのままお好きにしてくださって構わないのですよ」

ラヴレース「それじゃあ、貴方のお望みどおりにいたしますよ、大佐」

大佐（猛々しく）「お選びいただくのはご随意ですよ、ラヴレース殿。友となるのか敵となるのか。世界中でも最も魅力に溢れた女性の一人を正当に扱ってくださるのか、あるいは、扱う意欲を示してくださるのか、貴方の出方一つです」

M卿「お二人の性格からして、顔を合わせればどんなことになるか、想像はついていたのだ。仲裁をさせてもらいますよ、ご両人。お願いしたいのは、互いに理解し合っていただくことだけですよ。二人とも同じ的を狙っておられるのですからね。辛抱強くやっていれば、揃って射当てることにもなりましょう。お願いいたしますよ、大佐、果たし状は御免蒙りたいものですね　…　」

大佐「果たし状ですって、閣下。私といたしましては、常日頃から、申し込むよりはお受けすることのほうが多いのですよ、それは。しかし、閣下のお考えでは、この世でも最も洗練された女性と、光栄にもこれほど近い関係にある男が　…　」

M卿（相手の言葉を遮って）「令嬢の素晴らしさについては、われわれ全員が認めているところですよ。また、令嬢との縁組のことは、われわれが授かることの出来る最大の名誉だと、すべての者がそのように考えることでしょう」

大佐「そうしていただくのが当然でしょうね、閣下」

チャモント(五四)そのものだなと、俺はそう思ったよ(ア)。

M卿「そうあって然るべきでしょうな、大佐。また、そうしておりますよ、われわれとしては。願わくは、一人一人に然るべきことをしてもらいたいものです。また、然るべきことだけに止めていただきたいものですな。そこで、申し上げたいのだが、大佐、そのように早まってもらっては困るということですよ」

ラヴレース（冷静に）「さあ、さあ、モーデン大佐、どんな狙いがおありなのかは知らないが、この諍いは貴方と私との間に止めることにいたしましょう。ずいぶん激しい言葉遣いをなさいますね、貴方も。生まれてこのかた、私に向けられたどれよりも激しい言い方ですよ。だが、ここでは、この屋根の下では、気に留めたりするのは許されないことなのでしょう。他の場所でなら、おそらく、そうするのが私には似つかわしいことなのでしょうがね」

大佐「このお言葉は、その行いのすべてが首尾一貫している場合には喜んで友人と呼びたいような、そんな人物に私が期待しているとおりのおっしゃりようですし、また、私の敵と呼ぶに値するように考える人物に語ってもらいたいと思うとおりのおっしゃりようでもありますね。私は血気盛んな人間が心から好きなのですよ。だが、ラヴレース殿、閣下もお考えのように、われわれは一つの的に狙いをつけているわけですから、いかがでしょうかね、六分間ばかり二人きりにしてもらえるなら、お互い十分に解り合うことになるようにも思うのですがね」　そして、大佐はドアのほうへと移動したのだ。

ラヴレース「まったく同感ですね。お供いたしますよ」

卿はベルを鳴らし、われわれの間に割って入った。「大佐、戻るのです。戻っていただきましょう」と、卿が言った。というのも、大佐は部屋を出ていたのだ。その一方で、卿は俺を制し、「これ、お前は出てはいかんのだ」と言うのだよ。

ベルの音と卿の張り上げた声を聞きつけ、モーブレーと卿の侍従のクレメンツとが入って来たのだが、モーブレーのほうは両手を後ろに組み、例の呑気な態度で、「どうしたんだい、ボビー。何事ですかね、閣下」と言うのだよ。

「ただ … ただ … ただ … 」と、動揺した殿様は吃りながら言っていた。「この若いのが、あゝ … そう … えゝ … つまり、若者だということだよ。それだけのことだ。さあ、モーデン大佐［大佐は再び部屋に入って来たのだが、前より落ち着いた表情だった］、この件はひとつ公平に吟味してもらいたいものですな」

大佐「まったく異存はございません、閣下」

モーブレーが俺に囁きかけた。「何が原因だい、ボビー。どうだ、貴公の代わりにあの男を懲らしめてやろうか」とだ。

「絶対にいかんぞ」と、俺が囁いた。「大佐は紳士なのだよ。一言たりと口を開かないでほしいのだ」とな。

「いいだろう、いいだろう、いいだろう、ボビー。俺は抜けるぜ。貴公なら、この世で最高の男の前に放り出したって大丈夫だからな。ただそれだけのことさ、ボビー」　こう言うと、奴は大股で部屋の向こうの端へ歩いて行った。

大佐「たとえわずかでもご心配をお掛けいたしますのは、閣下、私としても遺憾に思い

（ア）オトウェー『孤児』を参照のこと。

ます。そんなつもりで参ったわけではないのです」

M卿「まったくの話、大佐、そのおつもりなのだと考えておりましたよ。すかさずカッとなさるところからいたしましてね。そのおつもりはなかったということで、嬉しく思っています。何という速さで、小さな火の粉も炎となって燃え上がることでしょうね。これだけ燃えやすい質の人間のところへ飛び火したのでは、なおさらのことですがね」

大佐「強硬手段に訴えるつもりがほんの少しでも私にあったのであれば、忝くもラヴレース殿としては、ここよりはもっと皆様のご迷惑にならないような場所で私と会ってくださったはずと確信いたしております。だが、私は友好的な意図を持ちましてやって参ったのです。不和を募らせるためではなく、収めるためなのです」

ラヴレース「そういうことなら、モーデン大佐、ひとつ貴方の流儀に従って問題に取り掛かることといたしましょう。クラリッサ・ハーロー嬢があれほどに敬意を抱いておられる方を差し置いてもご交誼を得たいと思う人物など、私は知らないのですよ。ただ、言葉にせよ口調にせよ、脅すような態度で扱われますのは、私には我慢ならんのです」

M卿「まあ、まあ、まあ、まあ、君たち、そんなところで良いでしょう。〈怒れる者は自らイラクサのベッドを用意する〉と言いますし、そこに横たわると、だれに対しても不快な気持ちになるのですよ。だが、君たちには仲良くやってもらいたいのだ。ひとつ口に出して言ってもらいたい。君たちは友達なのだとね。私は確信しているが、大佐、この不幸な物語のすべてに通じておられるわけではありますまい。私の縁者にしても、我が家の全員と同様、今回の一件が目出度く終わることをどれほど願っているのか、貴方はご存じないのだ。われわれ全員の求めに応じ、ラヴレース君が令嬢と身を固める気持ちになっていることは、大佐、ご存じないのでしょうな」

大佐「皆様全員の求めに応じて、とおっしゃるのでしょうか、閣下。私の希望といたしましては、ラヴレース殿が正義を行う気持ちになられたのは、正義のためであってほしかったですね。また、正義を行うことが、とりもなおさず、ご自身にとって最大の名誉となるわけでもありますからね」

モーブレーはそれまで半分閉じていた目を大佐のほうに向け、それから、俺をちらりと見ていた。

ラヴレース「これはまた激しいお言葉ですね、大佐」

モーブレー「いや、確かに、俺もそう思ったね」

大佐「激しい言葉でしょうか、ラヴレース殿。正しい言葉ではありませんかね」

ラヴレース「そうですね、大佐。それに、クラリッサ・ハーロー嬢に敬意を表す人間というのは、私に敬意を表すことになるのだと、そのように私は考えているのですよ。しかし、そうは言っても、話をする際のことですが、話し方のことさえなければ、用いている言葉には何の問題もないのに、異議が出てしまいそうな口振りというものもありますよ」

大佐「貴方の所見も、一般論としては、疑いもなく当たっているのでしょう。ただ、貴方は〈有る〉とおっしゃっているわけだが、私の親戚を大事に思うお気持ちがもしもお有りなら、必ずや貴方もお考えに　…　」

ラヴレース「ひとつ言葉を挟ませていただかねばなりませんね。私は有ると言っているわけだが、大事に思う気持ちがもしも私に有るなら、とは　…　大事に思う気持ちが有ると私が言う時には、その〈もしも〉というのは、貴方の言い方では強調した言い方になっ

ているが、願わくは用無しにしていただきたいものですね」

大佐「私の話を邪魔なさったのは二度目ですよ、ラヴレース殿。貴方は鸚鵡返しをされるのには慣れておられないとのことだが、私としても、邪魔をされることに慣れているわけではないのですよ」

M卿「いやはや、爆薬の樽が二つといったところですな、これじゃあ。話し合って何の意味があるというのですかね。嫌味を聞くたびに、こうして互いに相手を吹き飛ばそうとするようではね」

ラヴレース「暗に匂わされただけにいたしましても、閣下、名誉を重んじる人間で、自分の正直さを疑われて平気な者が一人でもおりましょうか」

大佐「私の話を最後までお聞きになれば、ラヴレース殿、貴方にもお分かりいただけたことでしょう。私の用いる〈もしも〉は、〈疑い〉というよりは〈推測〉の〈もしも〉だということをですよ。だが、実際には、節操のない紳士に見られる、まことに奇妙な勝手気儘さということですな。男性相手に虚言を弄する可能性があるとの謗りに対しては、死をも辞さないほどに憤りながら、同時に、女性に対する厳粛この上ない誓約や約束の類を破っても、良心の咎め一つないというのですからね。これは確かなこととして言っておかねばなりませんが、ラヴレース殿、私は自分の立てた誓いや約束は常に良心的に扱ってきたつもりなのです」

ラヴレース「適切な処置ですよ、大佐。だが、ひとつ言わせていただくが、話し掛けておられる相手の男が、自分の潔い告白を心の卑しさの証のように受け止められているのを知って、当然の怒りに燃え上がることもないなどとお考えなら、貴方はその男を理解しておられないことになりますね」

大佐（興奮し、嘲笑を浮かべながら）「おっしゃっておられるような心の卑しさが貴方にあるなどと申すつもりは、ラヴレース殿、私には一切ありませんよ。そのようなことを申すのは、甚だしい無礼を働いた男が、その弁護に際しては、なかなか勇気を持って当たろうとはしないものだと、そのように想像するのに他ならないのでは …… 」

モーブレー「これはまた、えらく手厳しいですな、大佐。まったくもって手厳しい。これまでラヴレース氏が君の手から甘んじて受けて来られた程度のことでも、この世のいかなる人物からにせよ、私なら甘受するわけには行かんでしょうね」

大佐「どなたですかね。どのような口実がおありで、干渉なさるのでしょうか。一方では、罪のあることが認められており、もう一方では、その罪のゆえに、最も敏感な部分について、相当に名の通った一族の名誉が傷つけられている出来事なのですよ」

モーブレー（大佐に向かって囁きながら）「なあ、坊や、君の質問に答える機会をいただけると、大層有難いんだがね」　そう言うと、奴は出て行ったのだ。

大佐は卿に引き止められた。そして、俺が奴を連れて来た。

大佐「何卒、閣下、この差し出がましい紳士のお供をさせていただきたいのです。どうか、お許しを願います。三分後には、間違いなく閣下のお傍へ伺いますので」

ラヴレース「モーブレーよ、これが俺に対する友人らしい振舞いだというのか。自分一人で答える力が俺にはないみたいに考えるなんてだよ。それに、モーデン大佐がそうであることは承知しているが（この訪問に際しては、おそらく、性急なところがあることを示したとしても）、名誉を重んじる勇者にこんなことを言わしめようというのだろうか。つま

り、従者や友人の点では、いわば裸のままM卿の屋敷を訪れているのであり、そのために侮辱されるのではなく、むしろ辛抱してもらうべきではないのか、とだよ。親愛なるモーブレーよ、今すぐにわれわれの元を離れるのだ。実際、この問題に君は何の関わりもないのだし、仮にも俺の友人であるのなら、ひとつお願いだが、大佐の許しを請うてもらいたいのだよ。あのような態度で口出しをしたことについてな」

モーブレー「分かったよ、分かったよ、ボブ。この問題では、決めるのは君の役目だからな。俺に関わりがないことは分かっているのさ。だから、大佐（と、手を差し出しながら)、己の言い分を弁護することにかけては、イギリスのどんな男にも劣らないほど巧みな人間に、あんたのことは任せることにしよう」

大佐（M卿の求めに応じ、モーブレーの手を取りながら)「それはおっしゃるまでもないことです、モーブレー殿。私は何の疑いも持っていないのです。弁護に値する事柄の場合ですが、ラヴレース殿がご自分の言い分を守る能力を備えておられることにつきましてはね。それに、ひとつ言わせていただきましょう、ラヴレース殿。貴方につきましてはわずかな知識しか持ち合わせないわけですが、その中の二、三の例から窺われるような勇敢なお方、そして、度量の大きなお方でありながら、女性の中でも最も秀でた者に向かってあのような振舞いがお出来になるという点に思いを巡らしますと、私は驚きを覚えてしまうのだということです」

M卿「さて、さて、君たち、モーブレー君はいなくなったのだし、君たちも揃って勇気のあるところを、また、おまけに寛大なところも示してくれたわけだから、ひとつお願いだが、令嬢にとって万事が目出度く終わるよう、為すべきことは何かないのかどうか、仲良く額を寄せ合って考えてもらいたいのだよ」

ラヴレース「だが、お待ち願います、閣下。モーブレーが立ち去った今、ひとつ言わせていただきたいことがあるのです。つまり、大佐が口にされた厳しいお言葉の一、二につきましては、紳士たる者はおとなしく甘受すべきでないと思うのです」

M卿「一体全体どういうつもりかな、君は。すべて片付いたと思っていたのだがね。そうさ、君の為すべきことといえば、ただ、大佐に対して追認するだけなのだよ。君は喜んでハーロー嬢と結婚するつもりだということをだ。君と結婚する気持ちが令嬢にあるとしてだがね」

大佐「いろいろなことがあったとはいえ、おそらく、ラヴレース殿もそれは躊躇なくおっしゃってくださることでしょう。だが、ラヴレース殿、何か口にしてはいけないことを私は口にしたのだと、そのように考えておられるとしたら、それは多分こういう点でしょうね。つまり、保護する者とていない無防備な娘に対し、名誉心なるものをほとんどお示しにならなかった人間は、その件に関してお諫め申し上げている人間を相手に、実体もない、名ばかりの名誉心にそのように拘るべきではないということでしょう。このように申すべきいわれがありますのを、ラヴレース殿、私も遺憾に思いますよ。しかし、同じ機会があれば、玉座にある王、それも、護衛全員に取り囲まれている王に向かっても、私は同じ言葉を繰り返すことでしょう」

M卿「だが、これは一体どういうことなのだ。〈議論を補うに議論を重ねる〉ようなものではないか。〈火に石炭をくべる〉ようなものだ。二人揃って争いたいと見える。君は乗り気ではないのかな、甥よ。このお嬢様との結婚にすこぶる乗り気ではないのかね。君と一

緒になってくれるよう、説得出来るならの話だが」

ラヴレース「こんな仕打ちを受けるのでしたら、閣下、女王との結婚であっても願い下げですね、私としては」

M卿「おやおや、今度は君か、ボブ。怒りっぽいことでは大佐以上だぞ。つい先ほどは大佐がそうだったがね。彼が落ち着いたのを見ると、君が爆薬の塊になるわけだ」

ラヴレース「私より優れた点が数多く大佐にあることは認めましょう。しかし、おそらく、大佐にはない強みが一つあるでしょうね。試して見ると分かるでしょうが ……」

大佐「前にも申したとおり、その機会を求めて参ったわけではありませんが、お申し出があれば、拒みはいたしませんよ。それに、お見受けするところ、尊敬すべきM卿にはご迷惑のようでもありますから、私はお暇をすることにいたしましょう。セントオールバンズを通って帰宅の所存ですが」

ラヴレース「途中まで喜んでお見送りさせていただきますよ、大佐」

大佐「ご丁重なるお志、心から喜んでお受けさせていただきますよ、ラヴレース殿」

M卿（われわれが揃って出かけようとするところへ、再び割って入り）「で、これでどうなるというのかね、君たち。互いの命を奪い合うとして、それで状況は改善されるのですかね。それとも、最悪の事態となるのですかね。君たちのどちらか、あるいは、両方の死によって、令嬢はもっと幸福になるとお思いですかね。もっと不幸になるとお思いですかね。君たちの人柄は広く知れ渡っておりますから、どちらにせよ、お二人の勇敢さを新たに証してみせる必要はないのですよ。それに、もしも令嬢の名誉のことが君の眼目であるのなら、大佐、結婚ほどにそれが効果的に助長される方法は他にないと思うのですよ。また、君の方で令嬢に対する影響力を駆使してくれるなら、他の者はいざ知らず、君には大きな成功の可能性があるのです」

ラヴレース「私の考えでは、閣下、男として言えることはすべて言い尽くしたように思うのですよ（過ぎたことを取り消すわけには行かないのです）。それに、ご覧のとおり、私が冷静になるにつれてモーデン大佐は奮い立つものですから、挙げ句には、私のほうでも自己主張をする必要に迫られるわけです。さもなければ、彼までが私を軽蔑しようとすることでしょう」

M卿「ひとつお尋ねしたいのですが、大佐、無理なく、そして、信義に則って提案出来ると考えておられる何らかの方法、何らかの手段をお持ちですかね。令嬢との和解をもたらすためのことですよ。それこそわれわれ全員が望んでいるものなのです。それに、こう言って構わないのですが、私の縁者に対する令嬢の怒りが高まりましたのは、お嬢さんのご一族によるところ、お嬢さんに対する皆さんの容赦のない扱い方によるところが少なくはないということです。ただ、私の縁者もお嬢さんにひどい仕打ちを加えました。しかしながら、お嬢さんが受けた不当な仕打ちを喜んで償う気持ちでいるのです」

ラヴレース「彼女の一族のためのことではありませんよ、閣下。また、この紳士の傲慢な態度ゆえのことでもなく、彼女自身のためなのです。それも、私が加えた不当な仕打ちを十分に自覚してのことであります」

大佐「貴方がおっしゃる、私の傲慢な態度についてですが、貴方もそれ以上の態度を取られなかったとすれば、私は貴方を見損なっていることになりましょう。大いに称賛に値する、そして、はなはだ不相応な仕打ちを受けたご親戚が似たような目に遭われた場合に

はですよ。それに、ひとつ言わせていただきたいのだが、仮にも貴方の動機が愛情や名誉心や正義ではないのであれば、また、その動機には彼女に対するくだらない同情心がわずかでもあるとか、あるいは、貴方の同意には気の進まないところがほんの少しでも感じ取れるということであれば、そのような償いは、私の従姉妹のように美質と分別を備えた人物から望まれることもなければ、受け入れられることもないものと、私は確信しているということです。また、私としても、それは望むところではないのです」

ラヴレース「もしもその機会が与えられたなら、ということですが、食事や酒を楽しむのと同じように、快く最後まで貴方に付き合って然るべき議論に、私は卑劣な方法で折り合いをつけようとしているのだ、などとは考えてもらいたくないものですね、大佐。しかし、これだけは言っておきましょう。卿としては、そして、セアラ・サドレアー夫人、ベティ・ローランス夫人、私の従姉妹である二人のモンタギュー嬢、そして、私自身もですが、この上なく厳粛かつ誠意溢れる態度で令嬢に便りをしているということです。彼女以外には一人として拒む者もいないような条件を申し出るためでした。そしてこれは、モーデン大佐の帰国の件など夢想だにされなかった、はるか以前の話なのです」

大佐「宜しければお尋ねしたいのですが、そのように強力なお執り成し、また、それほど立派なお申し出にも耳を閉ざそうとする理由として、彼女が示しているのはどのようなものなのでしょうか」

ラヴレース「降伏文書の作成といった趣ですね。でなければ　…　」

大佐「私にはそんなふうには少しも思えませんよ、ラヴレース殿。貴方の気概を高く評価していることでは、人後に落ちないつもりでおりますからね。それに、私の役目を何とお心得でしょうか。また、その動機についてはどのようにお考えでしょうか。従姉妹のクラリッサ・ハーローに公正な処置が為されるよう願うことで、この話が実現されました暁には、ラヴレース夫人の名誉を揺るぎないものにしようとの狙いがあってのことではないでしょうか」

ラヴレース「光栄にも、彼女がその名を受け入れてくれるのでしたら、モーデン殿、私としては、ラヴレース夫人の名誉を擁護するのに貴方のお力を、あるいは、だれの力にせよ、必要とすることはないはずですよ」

大佐「その点は信じております。しかし、そのような受諾によって貴方に栄誉を授けるまでは、彼女は貴方よりも私に近い間柄なのです、ラヴレース殿。また、私がこのようなことを申しますのも、ただ、次の点を貴方にお示しするためのことに他なりません。つまり、私の引き受けております役目にあっては、その機会があるといたしまして、お気持ちには反するのでしょうが、貴方のご不興よりも、むしろ感謝に値することを意図しているという点です。また、事態を正しくご考量くださるなら、そのことに気を悪くなさるべきではないと存じます。婦人が保護の手を求めるのは、他でもなく、加害者に備えてのことではないのでしょうか。また、あの娘にとっての最大の加害者はどなただったのかということですよ。従いまして、あの娘が正妻として貴方の保護を受ける資格を備えるようになるまでは、貴方ご自身にしても、私が自分の従姉妹に公正な処置が為されるよう願うことに対しましては、いくぶんかの功績をお拒みになることは出来ないというわけです。しかしながら、貴方もおっしゃりかけておられましたが、もしも、降伏文書の作成のように映ることがなければ、私の親戚が示している、あのように名誉な調停の受け入れを拒む理由

について、それとなく触れてくださるとのことでしたね」

そこで俺は、俺の結婚の申し出が心からのものであることを、次のように話してやったのだよ。つまり、俺の不適切な振舞いが彼女の心に大きな影響をもたらしたという懸念については、俺も異存なく認めるが、ただ、彼女を絶望へと追いやり、命を軽んじるようにさせたのは、身内の者たちの容赦のなさなのだ、とだよ。そして、こうも話して聞かせたのだ。親切にも彼女は、俺が心に固く決めていた訪問を思い止どまらせようと、一通の手紙を届けてくれたのだが、この手紙こそは、俺が大きな期待を抱く所以のものである。というのも、その中で彼女は、父親の家へ向かおうとしていること、そして、彼女がその家に迎え入れられた暁には、俺のほうに落ち度がなければ、そこで面会する可能性のあることを保証してくれたからだ、とだ。

大佐「そんなことが有り得るのでしょうか。で、貴方はおっしゃるとおりに真剣だったのでしょうか。そのような手紙を彼女は書き送ったのでしょうか」

M卿がその二点両方について確認してくれた。また、俺が彼女の希望と、あの知らせの趣旨に従い、彼女に会うという、かねてから温めていた計画を果たすことなく、こちらへやって来たことも確認してくれたのだ。

「確かに本当なのです、大佐」と、俺は言った。「また、この点は前にお話ししておくべきでした。ただ、貴方が興奮しておられるので、控えさせてもらったのです。何しろ、すでに申し上げたとおり、卑屈な仕方で貴方との合意を探っているといった、そんな趣がありましたからね。心の卑しさの表れというわけですが、仮にも私にそのような真似が出来たとしたら、貴方が私を軽蔑なさるのは予想出来るところですし、それに劣らないくらいに、私も我と我が身を蔑んでいたことでしょうね」とだよ。

これらすべてを証明して見せようと、M卿が申し出てくれたが、卿一流の警句めいた台詞で、「噂の寿命は次の噂が出るまでのこと」と言うのだ。また、ハーロー家の者たちと俺が互いにオーソン（五五）まがいの振舞いをして来たのは確かなことであり、我が一族全員に対しても、極めて無遠慮なところが連中にはあったわけだが、それにも拘らず、令嬢が俺と一緒になる気持ちになってくれるようであれば、連中のため、あるいは、俺のためですらなく（本当だぞ、君、と卿は言っていたよ）、令嬢のために、連中が求める以上のことを俺に対して行うつもりでいる、とのことだった。そして、この点は言明したいと思っていたし、れわれ両名に忍耐心を持たせ、十分な理解に至らせることが早いうちに出来ていたなら、もっと早くに言明していたことだろう、と言ってくれたのだ。

大佐のほうでは、従姉妹に対する愛情を根拠として持ち出し、気色ばんでしまった点を弁解していた。

彼女を思う気持ちからだが、俺も快くこれを受け入れることにした。そして、ブルゴーニュワインの新しいボトル一本、それに、シャンペンの新しいボトルも一本テーブルに置かれ、これだけのやり合いがあった後、われわれは機嫌良く席に着いたのだよ。事態の詳細に関して、さらに詳しい検討を加えるためだが、その点については、二人からの要請もあり、俺が引き受けることになった。

ただ、これらの点については、もう一通の手紙の話題としなくてはならないのだが、そちらのほうも、この手紙と一緒というわけには行かないとしても、すぐ後を追うことになるはずだ。

ところで、君も気づいていることだろうが、言い分に弱みがあると、ずいぶんと不利な立場に追い込まれるものだな。俺自身がそう思うのだが、あのように激しい気迫をもってぶつけられた大佐の質問のために、俺は忌々しいまでにみっともない姿を呈することになってしまったし、同時に、ヨーロッパ随一という男に対してさえ認めてやる術を知らないような、そんな優越性をあの男に与えることになったのだよ。つまり、〈善人〉が推論してみせるように、文字どおりに言って、罪は自らを罰するものだということだな。この上なく高貴な精神の持ち主を装う者さえも、実際のとおりの悪党に見せてしまうという点でだよ。〈善人〉の場合だぞ、俺が言っているのは。だから、予弁法として付言しておくが、ジャック、貴公にはそんな意見を述べる権利はないということだよ。

手紙　七十四
ラヴレースより　［承前］

八月二十九日　火曜日　午後

われわれの会話のこの部分で、俺は卿の付き添いのために田舎へ下らざるを得なくなった日へと話を戻した。卿もこれで最後だろうと、中には危ぶむ者もいたわけだが、卿が重体に陥った際のことだよ。

俺は大佐に以下の点を話して聞かせた。内輪で二人の結婚式を挙げるべく提案してあった日を逃したりせぬよう、令嬢説得の約束を取り付けるためだが、ある特別な友人にどんなに真剣な手紙を書き送ったのかということをだ。また、その件に関して、令嬢本人に送った俺の手紙についてもだが(ア)、実は、俺は控えの間へ足を運び、この件に関わりのある手紙のすべて、そして、手紙の草稿や写し一切を持ち出してきたのだよ。

俺はそれらの手紙の写しから数箇所を彼に読み聞かせてやった。貴公も思い出してくれるだろうが、俺にとっては少なからず面目を施すことになるものだよ。そして、俺は次のように話したのだ。同じ機会に友人宛に送ったものの写しを取っておけば良かったのにと思う。それを見てもらえば、彼女からはいずれに対しても返事がなかったわけだが、俺の告白がどれほど真剣なものであったのか、彼も分かってくれたはずだ、とだ。それに、貴公も思い出すことだろうが、あの四通の手紙の中の一通は、俺が彼女を残して立ち去った場所に、どうして彼女に留まっていてもらいたいのか、その理由を彼女本人に説明したものだったのだ(イ)。

続いて俺は、以下の点についての説明に移ったのだ。つまり、令嬢に対し公正な扱いをするよう俺を促すためだが、セアラ夫人とベティ夫人によってなされた、M卿と俺に対する訪問の件。夫人たちの願いに応じる際の俺の潔さ、そして、令嬢の長所に関する夫人たちの高い評価の件。俺のために友達への影響力を働かせてもらおうとしてだが、われわれ全員の名において従姉妹のモンタギュー姉妹によってなされた、ハウ嬢への訪問の件。俺からも同じことを保証し、友達への影響力を発揮してくれるよう頼み込んだ、私的な集まりの場での、俺とハウ嬢との間での会話の件などだ。

(ア) 第六巻の手紙十四、十五、十六、二十を参照のこと。(イ) 第六巻の五十四頁を参照のこと。

そして俺は、シャーロット・モンタギューの手で彼女宛に書かれた、八月一日付けの手紙(ア)の写しを（俺にははなはだ不利なものだが）読んで聞かせた。我が一族全員の名において、彼女との縁組を懇願しているものだよ。

これで大佐も、自分の美しい従姉妹が抱いた俺に対する憤りには度を越したところがあるのだと、そんな考えを持つようになったわけだ。彼に言わせると、俺自身にせよ、あるいは、われわれ一族にせよ、そうまで真剣だったとは想像もしなかったというのだよ。

さあ、貴公にも分かるだろうが、ベルフォード、話の一部を繕い、他の部分をはしょるだけのことなのだよ。弱い言い分を好きな時に強いものに変えてやるのにはな。見事な法律家になっていたことだろうな、俺も。そして、この魅力的なお嬢さんは、いくら潔白だとはいえ、法廷ではひどく惨めな姿を晒したことだろう。これほど自己弁護のための言葉にも証拠にも事欠かない男が相手ではな。

次いで俺は、大佐の美しい従姉妹が身内の者たちの無慈悲さのせいで辛い目に遭ってはと案じてのことだが、M卿とその妹たちが彼女に申し出てくれた、気前の良い毎年のお手当てのことに触れたのだ。

そして、この点についても大佐は大いに褒め称え、両家の間の不幸な不和のことを残念がってくれたのだが、この事例をもってしても、われわれが信義に篤い一族であることは分かるのに、この不和のせいで、ハーロー家の者たちはそんな一族との縁組をあまり好ましいこととは思わなくなっているというのだよ。

そこで、俺は次の点を話してやった。令嬢へのお目通りを許されている（また、常日頃から彼女の美徳を賛美しており、俺も聞き入れておけば良かったと思われるような、彼女に関する忠告を折に触れて与えてくれた人物でもある）俺の友人から[貴公のことだ]、俺の訪問が彼女にとっては極めて不快なものに違いないとの確認を得ていたので、書面でどこまで用が足りるのか試してみようと、今一度決心したのだということ。そして、八月七日、その決心に従い、彼女に一通認めたということをだよ。

「これがその写しなのです、大佐。私のほうでは当時、M卿と一族の婦人方のことで気分を害していたのです。ですから、声を出さずにお読みいただきたいですね」(イ)

この手紙には大佐もすこぶる満足していた。「ここでは、ラヴレース殿、貴方も本心を筆にしておられますね。後悔の念と謝罪の気持ちに満ちたお手紙です。貴方の要求は理に適っておりますよ。彼女の決定にお任せになるという保護観察の期間を経た後、その価値があると見受けられる場合にのみ許しに与るというのですからね。このお手紙にあの娘は返事をしたのでしょうか。どうなのです」

「してくれました。ただ、不承不承であったことは認めましょう。また、どうしてもお返事をいただけない場合には、上京して彼女の足下に身を投げ出すつもりでいる旨を、友人を通じて言明いたしますまでは、いただくことも出来なかったのです」

「それに目を通させていただきたいものですね。それとも、貴方が適切と思われる部分をお聞かせいただけたらと思うのですが」

「さあ、これですよ」(ウ)と、書類の束をひっくり返しながらだ。「貴方の手にお渡しするのに、何のためらいもありませんよ」とな。

（ア）本巻の手紙十五を参照のこと。（イ）手紙二十八を参照のこと。（ウ）手紙三十二を参照のこと。

「これはまたご親切なことです、ラヴレース殿」

大佐が読み終えた。「素晴らしい従姉妹だ。あの娘の怒りの何と激しいことか　…　それでいて、あの娘の願いの何と慈悲深いことか　…　おゝ、神よ、このように優れた娘だというのに　…　だが、ラヴレース殿、私に負けず劣らず、貴方にとっても残念なことですね。疑いもなく　…　」

彼の言葉を遮り、そのとおりであると俺は断言したのだ。

「そうあって然るべきですね」と、彼が言っていた。そして、「また、それで何の不思議もないのです。いずれそのうちにお話しいたしますが」と、彼は言葉を続け、「不正確で下劣な噂のせいなのですが、身内の者たちの間で、あの娘の立場はひどいものになっているのです。だが、この二通の手紙の持ち出しをお許し願えますでしょうか。貴方たちお二人の有利に働くよう使って見るのですよ」と言うのだ。

俺は喜んで希望に沿う旨を伝えた。すると、彼はこれを極めて好意的に（そうして当然な理由があったのだが）受け止め、二、三日中には返すと約束しながら、あの手紙を紙入れの中に収めたのだ。

その後、俺は次のように彼に話したのだ。「彼女のこのような拒絶に接しまして、自ら上京することにしたのですが、私のほうへ彼女の気持ちを動かしたいという希望からのことだったのです。また、自分の考えを前もって知らせることなく上京したのですが、彼女のほうでは、私の来訪について何かの情報をつかんだのです。そして、私を避けるよう策を講じました。そして、結局のところ、国を出る前には（彼女を説得出来ない場合にはそうすることになるだろうと、俺は言ったのだ）何としても彼女に会うのだと、私がすっかり決心を固めていることが分かりますと、すでに貴方にもお話しした例の手紙を送ってくれたのです。計画していた訪問を中止するよう、私に要望するものでした。それも、私をすっかり面食らわせてしまうような理由からなのですが、何しろ、そこにどんな含みがあるのか、私には一向に分からないからです。ただ、これまで、彼女が一度でも自分の言葉を反古にしたことというのは、私には覚えがないのです。〈善が生じるために悪をするのは正しいことではない〉というのを、彼女はいつも金言にしておりましたからね。だが、この手紙においては、何らの理由もなしに、ただただ、私との面会を避けんがために（気紛れを満たすだけの話ですが）、私に与えてあった言質を当てにして、私を都から追い出したのですよ」とだ。

大佐「本当に驚きですね。だが、信じられないのですよ、私には。そのような目的のためだけに、あるいは、いかなる目的があったにせよ、私が耳にしております人柄からしても、私の従姉妹が身を屈してまでそのような手管に頼るということがです」

ラヴレース「これは、大佐、私にも驚きの種なのです。だが、宜しいですかね、これは彼女が書き送ってくれた手紙なのです。そう、彼女自身の筆跡ですよ」

大佐「そうですね。分かります。そして、素敵な筆跡だ」

ラヴレース「ご覧のとおり、大佐、彼女が抱く両親との和解への望みは、すべて貴方次第というわけです。貴方こそ彼女の言う〈大切な、祝福されたお友達〉なのです。彼女はいつも楽しげでしたからね、貴方のことを口にする時は」

大佐「あの娘がハーロー邸を去る前にイギリスに戻れば良かったと、本心からそう願っております。そうすれば、このようなことは何一つ起こらなかったのです。身内の者たち

が持ち出してきたと聞いております結婚相手にしましても、あの娘を獲得する者は一人としていなかったはずですし、貴方にいたしましても、ラヴレース殿、もしも私が貴方のことを、貴方を目にする者だれもが望んでいるとおりの人物であると見届けなければ、同じことになっていたでしょう。また、もしも貴方がそのとおりの人物であったなら、私といたしましては、あれほどの優れた女性の相手として、貴方を差し置いて選ぶような人間はこの世にいなかったはずです」

卿と俺は揃って大佐の願いに同調した。また、正直な話、一番心を込めて願ったのは俺だったのだよ。

大佐は二度最後まで目を通してから、手紙を返してくれた。「まったく謎ですな」と、大佐が言っていた。「全然分かりません。何しろ、残念ながら、身内の者たちはこれまでどおり和解には反対なのですからね」とだ。

M卿「私としては、そんな考えを持つわけには行かなかったのですよ。だが、私の甥にとって極めて好都合なところがこの手紙にはあるようにお思いにはなりませんかね、貴方は。ようやくにして、令嬢も同意しようとしておられるような、何かそのように見えるところがですよ」

大佐「どう解釈したら良いものか、皆目見当がつかないのです。前のものとはひどい違いですよ、この手紙は。お返事はなさったのでしょうね、ラヴレース殿」

ラヴレース「返事をですか、大佐。勿論ですよ。それも、喜びのあまり恍惚となった返事ですよ。ご意向に従い、即刻M卿のところへ向けて出発する旨を、私は彼女に伝えました。この目出度い和解を進めるためなら、彼女の指示には何でも同意することも伝えたのです。このような類いのない優しさに値するよう、生涯を通じ、いつも努力する所存であることも伝えました。しかし、彼女と会わずにですが、私を田舎へ追いやること以外には何の意図もないのだといたしますと、私にとってのショックと驚きは、決して小さなものではないと言わずにいられませんね」

大佐「それは有り得ない話ですね。確かですよ。それ以上のことが含まれているに違いありません。もしもそれだけなのでしたら、あの娘も考えるはずです。貴方が騙されたことにすぐに気づかれるだろうということをです。そして、その場合、貴方がご計画の向きを再開なさるのはおそらく間違いないだろうということをですよ。あの娘は私が帰国したのを知っているわけですから、その間に私と会うことを期待したというのでなければの話ですがね。しかし、正直に申しまして、どう理解したら良いのか分かり兼ねるのです。ただ、あの娘が〈日頃より敬愛していた大切な、祝福された友〉と呼んでおりますのが私のことだといたしますと、あの娘もずいぶん敬意を示してくれるものだと思うだけです。確かに、私はあの娘を日頃から慈しんで参りましたし、独り身のまま、子供を作らずにこの世を去るようなことになります場合は、あの娘の祖父に負けないくらいのことをしてやろうと思っているのです。あの娘の兄と姉が父親と母親の胸の中に燃やし続けておこうと骨折っております怒りの感情には、妬みと自愛の気持ちが強すぎるかにも思われるものですから、なおさらそんな思いになるのです。ただ、従兄弟のジェームズがエディンバラから戻りましたら、この点はどのように判断すべきか、もっとよく分かることでしょう。あの男はすぐ今にも帰って来るように思われているのです。

だが、ひとつお尋ねいたしますが、ラヴレース殿、従姉妹との面会をそうも易々と許し

てもらっておられるお友達ですが、何というお名前の方でしょうか。ベルフォード氏ではありませんかね。いかがです」

ラヴレース「そのとおりです。そして、ベルフォード氏は信義を重んじる男であり、貴方の美しいお従姉妹さんを大変崇拝している男なのです」

前の点について、俺は正しかっただろうかな、ジャック。後の点に関するはなはだ強力な証拠を握っているものだから、前の点が俺には疑わしくなるのだよ。貴公さえいなければ、俺の目論んだ訪問を彼女が避けるようなことはなかったはずだからだ。

大佐「ベルフォード氏が信義を重んじるお方だというのは、確かなことでしょうか」

ラヴレース「誓っても構いませんよ、大佐。何故のことでしょうかね。そのようなご質問をなさるのは」

大佐「他意はございません。従姉妹の暮らし向きや交友関係を調べに、お節介で独断的な見習い坊主が派遣されて来たのです。そして、信じられないでしょうが、この紳士の頻繁なご訪問が下劣な受け止め方をされまして、あの娘の評判を損ねているのです。その手紙をお読み下さい、ラヴレース殿。どの部分にも愕然となさることでしょう」

この忌々しい手紙というのは、疑いもないが、ハーロー嬢の評判と訪問者についてスミスの上さんに訊いていたと、ジャック、貴公が説明してくれた、例の青二才のレビ人からのものなのだ(ア)。

それを読むのに十五分は掛かったはずだ。短いものではないのだが、学者ぶった言い回しに出会う度に罵りや呪いの言葉を添えていたものだから、実際の六倍も長くしてしまったというわけだよ。M卿も同じような呪いの言葉を吐き、長引かせるのに手を貸してくれたのだ。そして、ジャック、われわれに負けず劣らず、あの手紙を呪って当然な理由が貴公にも見つかることだろうな。

俺が読み終わると、「貴方もお気づきのはずですが」と、大佐が言うのだよ。「この男は悪意に対して忠実だったということですよ。何しろ、この男が言っていることはただの噂ですし、その噂にしても、裏付けとなる事実、あるいは、事実と思しき見掛けすら伴わない、当て推量から来る中傷なのです。ですから、偏見のない見方をする人間なら、文面を一見すれば、私もそうでしたが、書き手の非を咎め、従姉妹のほうを許すことになるのです。しかしながら、私の親戚の残りの者たちが支配されております気分というのが、これまた大変なものですから、皆は手紙が仄めかしている最悪の事態を易々と信じ込んでしまい、そのため、愛すべき娘はショッキングな手紙を受け取ることになったのです。似非学者の助言が受け入れられ、ベルフォード氏と貴方を避ける唯一の方法として、植民地の一つへ向けて旅立つよう、あの娘に提案がなされたのです。これらの手紙は、私も実際に目にしたわけでありませんが、しかし、皆はその文面の一部を得意になって繰り返していたのです。可哀相に、お陰であの娘も悲痛な思いをしたことでしょう。こういったことが以前の苦痛に加わって　…　貴方もいろいろと責めを負わねばならないようですね、ラヴレース殿」とだよ。

ラヴレース「一体、どこのだれにこのような結果が予測出来たでしょう。だれに信じることが出来たでしょうか。あのように無慈悲な両親が存在するなんて　…　あんなにも妬

(ア)　七十三頁以降を参照のこと。

む兄や姉がいるなんて　…　また、ひとつ言わせていただきたいが、全員にとってすべてを丸く収めるために取り得る唯一の手段だというのに、頑として反対し、微動だにしない女性がいるとは　…　そして今では、どんな手を打つことが出来るというのでしょう」

M卿「私は大きな望みを持っているのですよ。モーデン大佐にはまだお従姉妹さんを説得していただけるのではないか、とね。それに、お嬢さんの最後のお手紙から思うわけだが、お嬢さんは過ぎたことは一切水に流そうとする、そんなお考えのようですな。いかがです、大佐、差し当たり和解といったようなものの進展はないとして、お嬢さんのお手紙が次のような意味合いを含んでいることは有り得ないとお考えでしょうかな。つまり、われわれのほうでそのような事態をお嬢さんのお身内との間に実現出来るならば、お嬢さんもラヴレース君と仲直りをしてくださるおつもりなのだ、ということです」

大佐「そのような手管はイギリス人の朴訥さよりは、イタリア人の巧妙さに似つかわしいものでしょう。閣下は多分、イタリアに行かれたことがおありなのでしょう」

ラヴレース「卿はボッカッチオを読んでおられるのでしょう、おそらく。それで行かれたも同然ということですよ。あの作家のいずれかの物語から借りて来たものなのでしょうが、卿のご助言につきましてはね。ただ、クラリッサ・ハーロー嬢は手管には一切頼らない人なのです。私には測り得ない意味を込めているに違いありません」

大佐「そうですね、閣下、私に言えることといたしましては、ただ、ラヴレース殿が渡してくださいました手紙を少々利用して見るつもりだということだけです。そして、今にも姿を見せそうな従兄弟のジェームズと少し話し合いを持ちました後で、また、切迫しております二、三の用件を片付けました上で、愛する従姉妹のところへご機嫌伺いをするつもりですので、その時には、事態をより的確に判断することも出来ることでしょう。その間に、あの娘宛に一筆認めることにいたします。人を遣わし、様子を尋ねさせましたところ、あの娘には慰めが必要なことが分かったのです」

ラヴレース「あの下種のブランドの忌々しい手紙を一、二日お貸しいただけると有難いのですがね、大佐」

大佐「宜しいですとも。ただ、お忘れいただきたくないのですが、ラヴレース殿、あの男は牧師だということです。それに、噂によれば、罪のない男なのです。でなければ、もっと前に私が灸を据えていたことでしょうね。自分たちの閉ざされた世界の中で何もかも知っているつもりになり、すべての知識は書物の中にあると考えている、大学を出たばかりのこの手の未熟者というのは、世間の男女と交わりますと、惨めな姿を呈してしまうものなのですよ」

M卿「ブランドね。ブランドとはね。ファイアブランド（五六）であって然るべきところでしたな、まったくの話」

こうして、この肝っ玉の太さを競うような会談も終わりを告げたのだ。

モーデン大佐に強く心を惹かれることはなかった、とは言えないのだよ、ジャック。勇敢で度量が大きく、世間を知っている。それに、牧師たちを軽んじるところは、われわれの一員だという確かな印だな。

われわれは互いに極めて丁重な言葉で別れを告げた。M卿は（われわれのそんな別れ方を大層喜び、また、俺と同じように大佐に心惹かれたためだが）、大佐が去った後、それで功を奏するならの話ではあるが、大佐の帰国が間に合い、令嬢を救うことになっていたら

良かったのにと、胸の思いを繰り返し口にしていた。
俺もそう思うのだよ。誓っても構わないのだが、ジャック、一日一日といよいよ彼女のことが気掛かりになっているのだ。ただ、彼女の容体が耳にしているほど悪くはないことを願っている。
卿の呼び方では「ファイアブランド」ということだが、この男の手紙をシャーロットに書き写させたところだ。彼女の写しを同封することにしよう。そいつを一読すれば、貴公のその冷淡さも復讐の思いへと煽り立てられることだろう。
令嬢に写しを見せることについては、どう助言したら良いのか分かり兼ねる。ただ、自分の潔白さは知っているのだから、おそらく彼女がそこから収穫するものとしては、懸念よりも満足のほうが多いことだろう。彼女に対する身内の者たちの仕打ちは、連中本来の冷酷さに負けず劣らず、歪められた報告に負うところが大きいのだろうと、そんな考えを彼女に抱かせることになるという点でだよ。俺は分かっているのだが、彼女のような心の持ち主というのは嬉しがるものなのだ。あの連中が彼女に送ったと大佐の言っていた、例のけしからん手紙のことについて、また、彼女に植民地のどれか一つに渡るよう持ち掛けた連中の提案について［あいつらは皆くたばってしまえば良いのだよ　…　だが、俺が呪い出すと、これで終わりということはないからな］、ほんのかけらほどでも理由を見つけ出した暁にはな。それに、あの手紙をきっかけとして、彼女は弁明に取り掛かることになるのだろうが、彼女としても、弁明を行い、あきれ果てるほどの信じ易さを連中に恥じ入らせることにもなる、そんな機会を喜ぶことだろうな。だが、この件については、貴公のあまりパッとしない分別に任せることにする。ただ、心の底まで腹立たしくなってしまうのは、神性を備えた存在のみに相応しい崇拝の念を捧げることが今では俺にも出来そうに思われる、そんな女性の愛顧をどこかの男が分かち合うという微かな可能性について、誹謗中傷にせよ、生意気にも推測してみせるところなのだ。
シャーロットと彼女の妹は卑劣な悪口に涙を禁じ得なかったのだ。「いつのことなのでしょうね。いつになったら」と、パティが両手を差し上げながら言っていた。「この素敵なお嬢様の苦しみは終わりを告げるのでしょう。あゝ、ラヴレースさんたら　…　」とだ。
こんなふうにして、皆の落ち度のゆえに俺が責められるという塩梅なのだよ。残酷な父親が彼女を呪うと、それは俺の仕業になる。厳しい母親と一緒になって、俺は彼女を叱るわけだ。愚かなおじたちの無慈悲さがそっくり俺のものになる。兄の猛烈な悪意や姉の恨みや妬みも、すべて俺のせいだ。このならず者のブランドの手紙が俺の書いたものになるのだよ。あゝ、ジャック、何と浅ましい男なのだろうな、貴公のラヴレースは。

∴　∴

手紙を持たずに戻って来たのだよ。この忌々しいウィルの野郎め、手紙を持たずに戻ったのだ。それでいて、あのならず者はほざいているのだよ。漏れ聞くところでは、この二日間、君は俺宛に手紙を書いていたのだ、とな。
畜生め。忌々しい男だな。居ても立ってもいられない俺の気持ちについて、そして、その理由についても、貴公は承知のはずなのだからな。
わざわざ馬に乗せて人を遣わしたのだぞ、あのようにな。俺の想像の翼は、歩調をそろ

えて進むよう、馬の腹に縛り付けてあったのだ。さあ、ここに着いた。さあ、あそこまで来た。いよいよロンドンだ。今度は貴公のところだ、とな。

さあ［あいつに手紙が渡され］、鞭を使い、拍車を当てて帰途につくのだ。今この町に入ったが、まぐさに時間を費やしはしない。あの村を通過した。風を追い越す猛速だ。人馬共に吹き出す汗で泡立っている。

こんなふうにして、現に奴はM卿の屋敷の中庭へと入ったのだよ。

敷石に鳴り響くひづめの音で、俺は中庭へ出てみた。「手紙だ、ウィル。こいつめ、手紙を出すんだ。手紙だよ、こらっ」

「手紙はございません、旦那様」　そこで、両の拳を握り締め、狂人のような笑みを浮かべながら荒々しく辺りを睨めつけ、俺はこう叫んだのだ。「くたばってしまえ、このろくでなしめ。それに、手紙も持たせずに貴様を送り出した野郎もだよ。今すぐ消え失せるんだ。さもないと、その間抜けな脳味噌を吹き飛ばしてやるぞ」とだよ。俺が奴のホルスターからピストルを抜き取ると、悪党は泡を吹いている馬から飛び退いて、そんな目に遭ってはたまらんとばかりに走って行ったのだが、貴公が俺の手の届くところにいて、そういう羽目に陥ってくれたら良かったのにと、心の底からそう願った次第だよ。

それにしても、俺のことは思いのままになり、俺の心も好きなだけ責め苛むことの出来る人間に向って、小羊のようにおとなしく尋ねるわけだが、手紙一通も持たせずに俺の従者を送り返すとは、一体全体どういうつもりなのかな、貴公は。日の出までには、もう一人の男を別の馬に乗せて送り出すことにしよう。貴公が書き終えたものを取りにやらせるのだよ。そいつを手ぶらで帰したりしないよう命じておくが、貴公の忠誠心に関わることと思ってくれ。

追伸

シャーロットが急に気難しいことを言い出し、同封の手紙を君に送ることにはご機嫌斜めなのだ。いやはや、自分の筆になるものが独身の男の手に渡ったりしてはまずいというのだよ。

貴公にも脈が出てきたということだ、ベルフォード。貴公にその気があれば、あの娘を手に入れることが出来るかもしれないという確かな印だな、これは。もっとも、俺にしても思い及ばなかったことだろうな。貴公に気があるのだという、この紛れもない証拠をあの娘が見せてくれるまではな。確かに、何度となく冗談で口にしたことはあるのだよ。そんな話をまとめてやっても良いぞ、とな。だが、俺には一度だってそのつもりはなかったのだよ。何しろ、あの娘は本当に可愛らしい女の子だからな。それに、貴公の容姿ときたら、まことにもって不体裁だからな。貴公を夫にするくらいなら、犀でも夫にしてもらったほうが嬉しいくらいなのだよ、俺としては。だが、気の毒な話だな、あの娘たちも。時機が来るまで待たねばならんのだからな。この男とでは嫌だ、あの男では困るなどと、十七から二十五までは言っているが、その後は、よくある台詞だが、「神に見放されている」ことを恐れ、また、自分たちの盛りが過ぎて行くのに気づき、掴まえることの出来る男ならだれとでも喜んで一緒になって、牧師と梨の寓話（五七）を実証してみせるわけだよ。

手紙　七十五

ブランド氏からジョン・ハーロー氏へ

［先の手紙に同封されたもの］

我が善き友にして庇護者たる有徳の士へ

まずまず快適な道中（暑苦しい天気と道路の埃っぽさとを考慮に入れてのことです）の後、昨日都へ到着いたしました。ホルボーンのブル・アンド・ゲートに宿を定め、コヴェントガーデンへ急行いたしました。不幸なお嬢様が下宿しておられます家はすぐに見つけました。そして、奥の仕事場でスミス夫人と（下宿の女主人です）多くのことを話し合いましたが(ア)、この夫人はお嬢様を贔屓いたします気持ちに非常に強く囚われていることが分かりましたゆえ、情報を全面的に夫人から入手いたしますのは、貴方様のご希望の向きには沿わないものと考えました。また、私の聖職授与権者に伺候いたしますのを余儀なくされておりましたが（このお方は、悲しむべきことに、

「他人の食卓にて生活することは不幸なり」(五八)と申しますとおり、

大変お世話が必要であり、大学におられた頃とはすっかり別人になっておりますことが判明いたしました。と申しますのも、ここだけの話、「立場で人は変わるもの」というわけなのです。さて、前述いたしました理由からも)、ご要望のございました調査に当たりましては、お嬢様の下宿先のほぼ真向かいに居を構えております、ある友人の細君を雇い入れますのが、光栄にも貴方様から仰せつかりました任務のすべての目的に最もよく適うものと考えた次第です。この細君と申しますのは、志操堅固な氏素性のしっかりした婦人で、真面目で、子宝に恵まれておりますし、世知にも長けた女性なのです。

従いまして、私はこの婦人に働き掛け、事件の概要を掻い摘んで語りました上で、不幸な若い淑女の行状について細大漏らさず調べてくれるよう頼んだのです。彼女の現在の暮らしぶりや生計のこと、訪問者や彼女の仕事のことなどですが、これらこそは、ご承知のとおり、報告してもらいたいと貴方様からご要望のございました点であります。

そこで、本日、前述の婦人を訪問いたしました。そして、はなはだ心苦しくは存じますが（と申しますのも、それが貴方様にとりましては、そして、立派なご家族の皆様にとりましても、同じように苦しみとなることを承知しているからです)、事態は、私の見るところ、希望いたしておりましたものよりは、やや暗めの様相を呈していると申し上げねばなりません。と申しますのも、残念なことに、婦人からの報告は私が望んでおりましたほどには、また、貴方様が、そして、お嬢様のお身内一人残らずが望んでおられましたほどには、お嬢様にとりまして有利なものではないことが判明したからであります。しかし、それが世の常というものでありますが、概して、一つの過ちは別の過ちをもたらすものなのです。そして、おそらくは、一歩また一歩と堕ちて行き、やがて、「鳥もちに捕らえられた魂（宗教詩人クウォールズ(五九)が用いた、まことに適切な語句ですが)」はすっかりがんじがらめの状態となりまして、(無限の慈悲心にでも恵まれなければ）永遠に滅びてしまう

(ア）七十三頁を参照のこと。

ことになるのです。

とは申しながら、お嬢様ははなはだ健康を損ねておられる模様です。この点につきましては、両婦人とも（つまりは、下宿屋の女主人スミス夫人と友人の細君のことですが）同意見です。それでいて、お嬢様は盛んに駕籠で祈祷式へ（と言われておりますが）お出かけです。ただ、友人の細君の話ですと、ロンドンで密会のための口実や隠れ蓑に用いられるものとしては、朝の祈祷時の教会参り以上に一般的なものはないとのことでした。しかし、これはまた何とけしからぬ話なのでしょう。か弱い魂のための滋養となることを意図されましたものが、猛毒に変えられてしまうというのですからね。ただ、ダニエル・デフォー氏（非国教徒ではありますが、天分豊かな人物です）が述べておりますように（実際には古くからある諺ですが、ただ、韻文の形にいたしましたのは氏が最初と存じます）、

神様が礼拝堂を築くときっと
悪魔がそこにチャペルを建てる（六〇）

ものなのです。

ただし、お嬢様を公平に評しますなら、一緒に帰宅する男性は一人もおりませんし、実際、それは無理なことなのです。何故なら、お嬢様は往復に輿を、つまり、駕籠を（皆そのように呼んでおります）お使いになるからなのです。ただ、あまり評判の良くない紳士が一人おりまして（ラヴレース氏の朋輩です）、お嬢様と下宿の住人たちのところを絶えず訪ねているのですが、その者たちを飲食物でもてなすものですから、（その結果）皆の受けがすこぶる宜しいのです。

そこで、私は骨身を惜しまず（任務を引き受けますからには、何事であれ、綿密であることを好んでおりますので）、この〈紳士〉と呼ばれている人物につきまして（ユウェナリスが述べているとおり、

徳こそ唯一の栄爵なれ（六一）

ということですので、その行いによるのでなければ、私はいかなる人物をも紳士とは考えないことにしておりますが）、詳しく調査いたしました。そしてこれは、一筆啓上いたしますために腰を下ろす前のことでありました。

この人物の名はベルフォードです。年収一千ポンド以上をもたらす父方からの地所を有しており、さらに相当な財産を遺してくれた叔父のため、現在は服喪中なのです。女性関係でははなはだ不品行との評判です（特にその点に関して調査をいたしました）。ラヴレース氏が欠かさず文通を続けている選り抜きの腹心でありまして、窓辺でお嬢様と一緒のところを（二人きり差し向かいで）何度となく目にされているのです。確かに、宜しからざる様子ではありませんが、ただ、友人の細君の意見では、万事があるべき姿を呈しているわけでもないのです。事実、私にとりましてすこぶる奇妙に思われますのは、もしもお嬢様が（伝えられておりますとおりの）立派な悔悟者であるとしたら、また、ラヴレース氏に対して大変に強い嫌悪感を持っておられるとしたら、ご自分が引き籠もっておられるところへ氏の腹心をお通しになり、他の者には顔をお合わせにならないという点です。

スミス夫人から聞き及んでいることですが、暫く前にヒックマン氏が、ハウ嬢の使いとして、お嬢様に会いに見えたとのことです。また、今一つの方面から聞いておりますところでは（お与えくださいました任務の遂行に私がどれほど励んでいるか、お分かりいただけるものと存じますが）、最初、このベルフォードに対して氏は格別な意見は持たれなかったとのことです。もっとも、ある朝のこと、朝食時に、二人が一緒にいるところを向かいの住人に見られておりますし、また、別の折には、お嬢様の元を辞してくるヒックマン氏をこのベルフォードが見張っておりますのが目撃されているのです。従いまして、ヒックマン氏の好意を得ることにこの男はすこぶる熱心であったと見るべきでしょう。ハウ嬢に好意的な報告をしていただくよう、氏にお願いをするためのことであるのは疑いありません。ハウ嬢の不幸なお友達から自分が許されております親しい付き合いに関しての報告というわけですが、そのお友達にしましても（ひどく体調を崩しておられるのですから）、この男の訪問を許しておられますのは、別段悪い考えがあってのことではないのかもしれません（と申しますのも、この男はお嬢様のお世話をしております医者と薬剤師を連れて来たか、あるいは、少なくとも推薦をしたらしいからです）。ただ、私といたしましては（全体的に見まして）、好ましいことではないように思うのです。

お嬢様の思慮分別に関しまして、もっと良い報告をするわけにまいりませんのは、私といたしましても遺憾に思うところであります。しかしながら、何をか言わんや、でありましょう。

而して葡萄はその目に留まりし葡萄から青味をうけとる（六二）

と、ユウェナリスも述べているのです。

案じておりますことが一つございますが、それは、お嬢様が窮状に追い込まれておられるのかもしれないという点であり、また、このベルフォードが（スミス夫人も認めているように、この男は、現在のところお嬢様は拒んでおられるのですが、お金の提供を申し出ているのです）その窮状につけ込む機会を見つけるかもしれないという点であります。それに、詩人による、

美しき乙女を守るは容易ならず
憧れの姿は時には嘆願、時には財貨に追われて逃げ去る（六三）

という見事な評言もあるのです。

また、このベルフォードは（大胆な男であり、かつ、そのような風貌だと言われているのですが）、ホラティウスの言葉を実証して見せるかもしれません（この詩人の著作に貴方様は通暁しておられ、貴方様の右に出る者は一人としていないのです）。つまり、

何事をも敢行せんと
大胆にも人間は不法と不敬とを冒して突進す（六四）

というものです。

これから記します点につきましては、ご寛恕のほどをお願いいたしますが、ただ、貴方様や、お嬢様の立派な姉君のアラベラ様、そして大執事様と私とがかつて相談いたしました計画（何か恥ずかしくない形で、海外の植民地のどれか一つに赴いていただくべく、不運なお嬢様を説得することですが）に加わっていただくよう、ご家族の他の方々にお勧めくださいますなら、お嬢様ご自身の信用と評判だけでなく、ご一族全員の評判と信用を守り、さらには、ご苦悩の多くのものをも救うことになりましょう。と申しますのも、卑見によれば、この（かつては無垢であった）お嬢様のことがこれほど頻繁に皆様のお耳に入る状況では、貴方様方は（どなた様も）楽しい時をお過ごしになることはお出来にならないものと思われるからです。また、このようにいたしますなら、お嬢様をこのベルフォードとあのラヴレース両名の手の届かぬ場所へ置くこととなりますし、また、ひょっといたしまして、恥辱と同様に大いなる災いをも妨げることになるかもしれないのです。

私のこの飾りのない物言いも、貴方様にはお許しいただけることでしょう。オウィディウスが、

諂い屋が友となることなし（六五）

と、私のために弁明してくれております。

また、私の念頭にありますのは、有徳なるご家族の皆様（多大のご恩顧を賜っておりますゆえ）、そして、とりわけ貴方様に対し、ご多幸を切望いたしておりますことを証明したいとの思いに他ならないのです。

感謝いたしております貴方様の謙虚なるしもべ

イライアス・ブランド

八月九日　水曜日

二　伸　田舎に戻りました際には（一両日中のことと存じます）、さらに触れることもございましょうし、情報源につきましてもお話しいたします。ただ、私がお申付けのありました務めに刻苦精励いたしましたことは（差し当たっての間ですが）、以上の点からもお分かりいただけましょう。

長々と文字を連ねてしまいましたが、ご容赦いただけることでしょう。説明的で複雑多岐に亘り、かつ、談話風な手紙（私の手紙に類したものですが）というものには何が必要なのか、貴方様には申し上げるまでもないからです。人それぞれに得手があるものです。書簡こそは、厚かましくはございますが、私の得意とするところなのであります。そのゆえに、大学におきましても、私との文通は初年度生から、また、私自身が二年目になるかならないかのうちに、二年目学生からも切望されていたのであります。ただ、私からこのようなことに触れるべきではなかったのでしょうが、偏に、私の手紙が長くなりましたことへの弁護のつもりでございます。と申しますのも、その話題からいたしまして、一般的書式のみで事足ります場合には、私以上に手短にして、きびきびとした筆遣いをする者も他にはいないからであります。しかしながら、冗長さを詫びつつ、同じ過ちを重ねております（仮にも過ちであるとしての話ですが、ただ、話題を考慮に入れますなら、私といたしましてはそのように考えるわけにまいりません。も

っとも、この点につきましては、すでに別の言葉で申し上げたところであります）。従いまして、二伸のことをご容赦いただけるようでしたら、本文につきまして、お咎めはなきものと確信する次第です。

後一言申し添えますが、私が切り出し、詳述いたしますのを大層喜んでくださっております〈学識〉の問題に関してであります。かつてリーウェン師は、師と私との間で交わされましたやや活発な議論の際に、貴方様の面前で（情け深い庇護者の貴方様としては、思い起こさずにはおられないことでありましょう）、私が称しております〈挿話的〉文体の非難を買って出られたことがありました。師は、確かに、博学で思慮深い方ですし、聖職者の名誉となる人物でありました。しかしながら、是非とも申し上げたいのですが、これは私がすこぶる愛着を覚える文体なのであります。それに、当時、尊敬すべき師もすでに若くはなく、従いまして、豊かな想像力や鮮やかな空想力が書き手の心に矢継ぎ早に考えを注ぎ込むため、ある一節を一度ならず読み返すという読み手の苦労を省きますためにも、挿入語句の必要とされることが（それも、〈明快さ〉と同様、〈簡潔さ〉のためなのですが）しばしばあるのです。人それぞれに得手があるということでしょう（これは、すでに述べたところであります）。われわれだれもがそうなのですが、とかく生来の偏見を一般的基準として掲げる傾向が極めて強く、それだけに、この一件での有徳な師の頑迷さにも私は驚かなかったのです。貴方様もご記憶でしょうが、師は私に笑みを向けておりました。そこで、私が正しいかどうかはともかく、私も師に笑みを返したと確信いたしております。そして、徳高き庇護者様（そのことを看取し、私は満足した次第ですが）、貴方様は私の側に立っておられるようにお見受けしたのです。それにいたしましても、両者にとりましての眼目は同一でありますのに（つまり、〈明快さ〉ないし〈明瞭さ〉ですが）、老師と私とがかくも大きな違いを見せるというのは不思議なことではなかったでしょうか。しかし、何をか言わんやでありましょう。

過つは人の常なれど、貫徹するは人の性ならず（六六）

であります。

親しくお仕えいたします光栄に与りますまでは、結びの言葉を（先のとおりに）重ねますこと以外、何一つ付け加えることはないものと存じます。

E. B.

手紙　七十六

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

八月三十日　水曜日　夜

われわれの使用人二人がハンナのところ(ア)で出会ったのは幸運だった。お陰で、それぞれその日早くに主人のところへ戻るだけのゆとりが出来るよう、互いの手紙を交換するた

(ア) スラウ村近くの風車小屋である。

めの恰好の機会が得られたわけだからな。

使用人操縦の能力を自慢し、こういった手合いの人物像に関して、我が国の詩人たちを正してやろうと公言するのも結構だろう(ア)。連中には手に入れるわけに行かないものを持ち帰らなかったということで、まるで狂人のように、連中の歯をへし折りもすれば、頭に弾丸をお見舞いしようと試みるような真似も貴公には出来るわけだがね。

老練な法律家になっていたことだろうと君は言っているが、的を射た見解だ(イ)。君と大佐の間で交わされた会話のすべてが、何事にも黒白両面があるという、その納得すべき証拠を提供してくれるのだ。しかし、己の言い分には都合良く潤色を施す者とか、他人の言い分を悪し様に述べるような人間の良心は、果たして何を語りかけることだろうな。裁判官たちの目をくらましながらも、自らの罪を絶えず自覚しているわけだからな。

大佐も完全無欠な人間でないことは分かる。だが、己の目的を遂げようとするに当たって、信義に背くところがなかったという点では、貴公には備わっていない理由が彼にはあることになるのだよ。しかし、彼についても、また、われわれ全員についても言える点だが、ある人物がわれわれを高く買ってくれているのにつけ込んで、その相手を傷つけるというのは（おそらく、破滅に追いやるのだ）、犯し得る悪事の中でも最も卑劣なものだということが、今の俺には分かるものだから、己自身の行状のいくつかに嫌悪を覚えているところなのだ。

男が男に対してこのような行動に出る時、われわれはそのような振舞いを迷わず非難することだろう。だが、われわれが世界中のどの女よりも愛しているように見せ掛ける、経験の乏しい無垢な娘に対し、このようなつけ込み方をする場合には、また、われわれにでっち上げることの出来る最も厳粛な誓約や、揺るぎない名誉心の申し立てによって、そのような見せ掛けに保証を与えるとしたら、その非難は二倍も三倍も増大するのではないだろうか。

俺の見るところ、あらゆる点からしてこの紳士は、これまでに貴公が持ち得た中でも最強の好敵手だな。彼の気性は貴公の気性そのままの激しいもので、すぐに燃え上がり、報復的なところがある。そして、違う点といえば、彼の奉じる大義は公正なものだということだけだよ。だが、紛れもなき野蛮人のモーブレーには宜しく伝えてもらいたい。辱めを受けた側に立っている、これまで一度として出会ったことのない男性を相手に、原因を確かめることもなく、貴公のために剣を振るうような男なのだからな。

君の手紙と扇動家ブランドの手紙の写し（ハーロー家の者たちが先頃見せた冷酷さの多くは何に由来するものなのか、この写しでそれが俺にも分かった次第だよ）とに目を通すとすぐに、俺は馬車でスミスのところへ向かった。あそこから戻ったのはほんの一時間ばかり前のことであったし、今晩はこれでと、令嬢に暇乞いをして来ていたのだがね。

俺はロヴィック夫人を階下に呼び、何よりもまず令嬢に（控えの間で仕事をしていたのだが）次の点を知らせてくれるよう頼んだ。バークシャーから便りがあり、その文面で分かったのだが、モーデン大佐とラヴレース氏の会談は支障なく終わって、大佐はすぐにも令嬢宛に一筆認めるつもりであり、その間、彼女のためになるよう、身内の者たちを相手に奔走しているということ、そして、俺としては、この好ましい知らせが令嬢に安らかな

(ア) 百四十三頁から次頁にかけてを参照のこと。(イ) 二百十四頁を参照のこと。

眠りをもたらすきっかけになってくれるよう願っているし、明朝、令嬢が祈祷式から戻られる頃にお邪魔して、委細のすべてをお伝えしたい、といったことをだ。

令嬢からは、明朝会えると嬉しいということ、そして、俺の届けた朗報には大変感謝しているとの伝言があった。

そこで俺は、奥の仕事場でだが、ブランドの手紙の写しをロヴィック夫人とスミスの上さんに読んで聞かせ、あの男の情報源に心当たりはあるかどうか尋ねてみたのだ。二人に戸惑いはなかった。スミスの上さんが、真向かいの帽子屋から当のブランドの野郎が出てくるのを目にしていたのだが、前の手紙で俺も触れたとおり(ア)、この男は上さんと言葉を交わしていたのだよ。また、上さんの話だが、この帽子屋も近頃では令嬢のことについて根掘り葉掘り訊いていたというのだ。

俺にこれ以上の言葉は必要なく、読み聞かせたものを令嬢には漏らさないよう二人に命じると、道路の向こう側へ飛んで行き、店の女主人を呼び出したところ、その女が俺のほうへやって来た。

女の招きもあり、一緒に彼女の部屋へ引き下がると、若い田舎牧師でブランドという名の男とは面識があるかどうか知りたいのだ、と俺は言った。俺がやや興奮気味なのを見ると、女はためらいながら、少しばかりその紳士を知っていると白状したのだ。ちょうどその時、女の主人が入って来た。税務署の小役人らしいのだが（また、不作法な人間でもない）、あの男のことをもっと詳しく知っていると認めたのだよ。

俺はこう言ったのだ。「このブランドの手紙の写しを持っているのですが、その中で彼は私の人柄について、また、世界中でも最も潔白な女性の人柄について、まことに無遠慮なことを言っているのですよ。そしてあの男は、マダム、貴女が与えた情報をその拠り所としているのです」とな。それから、奴の手紙の数箇所を二人に読み聞かせてやり、われわれのいずれかに関し、奴にあのような印象を与えるのは、いかなる根拠があってのことなのかと尋ねたのだ。

どう答えたものか、連中は分かり兼ねていたが、最後には次のように話していた。つまり、奴が連中に語ったところでは、令嬢ははなはだ不正な方法で両親の元を逃げ出したのだが、その両親というのは非常に立派で裕福な人物なのだということ、また、奴は両親から大変な愛顧を受けているということ、そして、令嬢の行状や、令嬢を訪ねて来る者たち等々について調査するよう、両親が奴を雇ったということをだよ。

連中に言わせると、令嬢についての知識がすこぶる貧弱なことは確かだが、ただ「忌々しいばかりの口やかましさだよ」、女性が妄想に身を委ね、あのような間違った行動に踏み出した場合には、そこまでで止まりはしないと考えるのがごく自然なことであるし、最も神聖な場所や事物が悪事の隠れ蓑にされることもあまりにも頻繁に行われている、というのだよ。また、俺が極めて放埒な考え方をする人間であり、氏の言い方を借りれば、令嬢の操を奪った男の〈朋輩〉だということも、ブランド氏は（おそらく、俺に敵意を抱いている輩からだろうが）知らされているというのだ。そして、外套の仕立てをしていて、一階上に部屋を借りている、連中の従姉妹に当たるバーカーも（連中の求めに応じ、この女が降りて来て、連中の言葉を確認していたのだが）、俺が令嬢の部屋に一緒にいて、非常に

(ア)七十三頁を参照のこと。

熱心に話し合っているところを、自分の窓から頻繁に見ているという。そして、ブランド氏としては、令嬢が俺の訪問を受け入れていることへの説明が付かないし、俺は彼女と知り合って日が浅く、ラヴレース氏とは長い付き合いであることを承知しているので、これらの点を令嬢の身内に打ち明ける義務があるように考えている、というのだ。

以上が連中の教えてくれた話の骨子だ。あゝ、俺はこの忌々しい三人組の口やかましさをどれほど呪ったことだろう。牧師に帽子屋に外套の仕立て人というのだからな。後の二人などは、自分たちの才能を振るってみせようと思っている相手の、その評判を陰口でもって台無しにするほうが通例であって、職人根性に促されてその風采を飾り立ててやるようなことはあまりないのだよ。

自分たち自身は道義心を備えた人間なのだということを俺に納得させようと、二人の女はしきりに骨折っていた。俺はこう言ってやったよ。どうやら、その結果ということなのだろうな。君らほどの厳格さを装おうとしない他の者たちについて、やたらに非難したがるというのはだよ。というのも、日頃から気づいていることなのだが、口やかましさや心の狭さ、そして、無慈悲さというのは、隣人たちよりも信心深いと思われたがっている人間の心の中ではびこることがあまりにも多いものだからな、とだ。

連中の返答はこうだ。それは自分たちには当てはまらないし、令嬢の人柄や暮らしぶりについてその後問い合わせており、何ごとにせよ、自分たちの口にしたことが令嬢の不利益になるよう利用されていると思うと、大変気掛かりになる。それに、スミス夫人から聞いたところでは、令嬢の命は長くはなさそうだとのことでもあり、自分たちのせいで苦しみながら、あるいは、面識がないとはいえ、自分たちに対して悪感情を抱きながら、令嬢がこの世を去るようなことになっては、自分たちとしても残念に思う、というのだよ。女主人の亭主が、もしも俺の気に入ることであるのなら、令嬢の弁護のため、ブランド氏宛に一筆認めようと申し出たし、二人の女はこう言っていた。どのようなことにせよ、自分たちのことを悪く受け止めるのも当然だと令嬢が考えている点に関して許しを請うためだが、喜んで、令嬢のところへ直接伺いたいと思う。何故なら、これほどの令嬢はこの世に二人といないということを、今では確信しているのだから、とだよ。

俺は次のように話してやった。つまり、令嬢の今の状態では、その件には出来るかぎり触れないでおくのが最善だということ。また、令嬢は天女のようなお方であり、自分に対する身内の無慈悲さについても、あらゆる機会を捉えて、連中のための言い訳を見つけ出したがっているということ。従って、あれほど悪辣な中傷を生み出すことになった無慈悲で根拠の乏しい憶測については、令嬢にも少し知らせておくべきだろうが、ただ、申し出もあったことだから、そこのウォールトン氏（それが主人の名前だ）の手で、氏の知り合いのブランド宛に出来るだけ急いで便りをしてもらいたい、といったことをだよ。こうして、俺は連中の元を去ったのだ。

貴公の魅惑的な従姉妹についての話だが、何か魂胆があってのことなのかどうか教えてほしい。自分のことをモンタギュー嬢のような淑女に相応しい人間だと考えるほど、俺も自惚れてはいないし、それゆえ、彼女の軽蔑、そして、貴公の嘲笑にこの身を晒したくはないのだよ。だが、この両方を避けることも可能だと確信出来るのであれば、これほどの淑女のご愛顧の一端にでも与るためなら、いかなる苦痛も、また、努力にしても、手に余るものとは考えないことだろう。

しかし、貴公のことは熟知しているので、この件について貴公が何を言おうと、当てにするわけに行かないのだよ。婦人相手に自分の友人を嘲笑の的にするのが貴公は大好きだし、己の心の空虚さから（また、この点に関しては、狭小さと言っておこう）、引き立て役がいれば、それだけ自分の輝きが増すと思っているのだ。

そんなふうにして、一度などは、ハットン嬢とのことで無骨なモーブレーに恥をかかせたものだから、気の毒なことにあいつは、後戻りをするにも前へ進むにも、手段に窮してしまったのだよ。

手紙　七十七

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

八月三十一日　木曜日　十一時

令嬢のところから戻ったばかりだが、朗らかで落ち着いた様子だった。

昨夜連絡をしたことに関し、彼女は礼を言っていた。君の手紙の中で彼女に読み聞かせても構わない部分を読んで聞かせたのだ。そして、考えたのだが、君の手紙の中の泡や泡立てたシラバブ（六七）みたいな部分と最良の部分とを区別するのは、このように立派な心を備えた女性に読み聞かせても構わなかったりまずかったりするものについての、恰好の試金石になるということだよ。何しろ、貴公の手紙の三分の二というのは、俺一人で読んだ時には面白いと感じても、彼女に読み聞かせようと思った時には、極めて嫌悪すべきものに見えて来るし、貴公の才能について、また、俺の鑑識眼についても、はなはだ情けない考えを抱かせることになるからだ。

説明がなされた時に彼女の手紙がもたらした君の失望ぶりについてだが、俺の場合とは違って、彼女には嬉しがるようなところはまるでなかったのだよ。

令嬢が言うには、罪のない譬え話のつもりであり、当分の間は自分の希望に応えてくれるものであるし、また、その真意が理解された時には、君への教えや戒めともなるものだとのことだ。大急ぎで筆にされたものだという。彼女にしては、あまり適切なことではないようにも思う、と言っていた。ただ、目的が手段を（正当化は出来なくとも）容認してくれるよう願っている、とのことだった。その後再び彼女は、しつこく彼女に纏いつくようなことを、君がなおも考えつきはしまいかと、しきりに不安を表明していた。彼女が言うには、残された時間は極めて短く、その一刻一刻のすべてが欲しいからだ、とのことだった。そして、前に一度口にした言葉を繰り返していた。あれを書いた時にはひどく具合が悪かったので、今日まで生き長らえたりはしないだろうと思っていた。もしも、生き長らえるようなことを考えたならば、もっと自分の意図に合う便法を模索していたに違いないのだと、われわれ両名の知らない場所への転居を仄めかすのだよ。

だが、君とモーデン大佐の会談が、この点は俺のほうで彼女に知らせたのだが、君たちの間で交わされたあのように激しい二、三のやりとりの後、極めて友好的に終わったことを彼女は大いに喜んでいた。そして、俺が与えてあった、彼女のことでさらなる不幸が生じるのを防ぐよう最善の努力をしたいという約束に、彼女としては全面的に頼らねばならないと言っていた。

君が彼女の従兄弟に向かって、彼女の人柄を公平に評してくれた点については、彼女も喜んでいたよ。

従兄弟が自分に対して思いやり溢れる考え方をしてくれているということ、また、便りをするつもりであるということを聞き、嬉しく思うとのことだった。

ブランドの下劣な手紙の写しが手元にあることを、どう彼女に打ち明けたものか、俺は無用の心配をしてしまった。無用というのは、こういうわけだ。そうするだろうと君は考えていたわけだが、そのとおりの受け止め方を彼女がしたからだよ。つまり、彼女が得たがっていた、身内の者たちの冷酷さに対する言い訳としてなのだ。そして、手紙の写しを一人だけで読ませてほしいと頼んでいた。「内容がどのようなものでありましても、それで心を乱すことは有り得ませんから」と言うのだよ。

俺が手渡すと、彼女は声を立てずに読んでいたが、時々、今にも涙がこぼれそうになっていたし、溜め息の漏れて来ることもあったのだ。

彼女は写しを返してくれたが、その態度は、内容を考えるなら、大変な、驚くばかりの穏やかさだった。

彼女はこう言うのだよ。「このようなお手紙が私をひどく苦しめていた時期がございますし、それも、遠い昔のことではないのです。でも、今では、こういった事柄すべてを乗り越えたものと考えております。それに、私の思い出に対しまして、身内の者たちの間で正当な扱いがなされますよう、貴方とハウさんのご尽力に頼ることも出来るのです。私たちの身に降り懸かりますすべての事柄について言えることですが、良い見方と悪い見方が出来るものなのです。もしも、人の心が不愉快な出来事一つ一つの最悪の面ばかりを考えるのに忙しいようですと、悲しみに事欠くことは決してないでしょう。この手紙にいたしましても、その内容は私の評判に打撃を与えるものですが、苦しみ以上に喜びをもたらしてくれるのです。と申しますのも、そこからは次のようなことを推測出来るからです。つまり、いつも裕福な者たちの傍らにおりまして、その人たちの気持ちに阿ったり機嫌を取ったりするような、間違った情報を握っているとか、せっかちでお節介だという人々のせいで偏見を植えつけられていたのでなければ、身内の者たちもあれほど頑になって、私に反目するような真似はしなかったのだ、ということをです。でも、皆にいたしましても、執念深いという謗りの一切から、これで十分に解き放されることになるのです。私の姿が皆の目には、本心から悔い改めたふりをしながら、放埒な生き方に耽っている邪悪な偽善者と映っておりますのに、皆の許しにせよ祝福にせよ、どうして期待することが出来るというのでしょうか」とだよ。

「しかし、マダム」と、俺は言った。「この手紙の日付、八月九日からもお分かりでしょうが、それに先立って為されました皆様の苛酷な仕打ちが、それで容赦されるということにはなりませんね」とだよ。

「身内の者たちに対し、厳しいお考えを持たぬようにしていただきますことが」と、彼女は答えていた。「ご親切にもお引き受けくださいましたお仕事の件で、現在心に温めております願いからいたしまして、私には大きな意味合いを持つのです。白状しなくてはいけませんが、皆のことを厳しいだけではなく、残酷でもあると、私自身も時々は考えがちになっていたのです。苦しんでおります人間というのは、自らの主張点や長所への思い入れが強くなるものなのです。自分の心のことは承知しておりますから、隠し立ての出来ない

人間の場合、厳しい仕打ちを受けますと、愚痴をこぼしてしまうのです。でも、自分たちは無実なのだということを、自分たちの振舞いについて独自の判断基準で決定する権利を持つ人々から信じてもらえないのでしたら、それは致し方のないことではないのでしょうか。それに、悪気なしに事実とは違うことを伝えるような人は、実際にブランドさんがそうだろうと思われるのですが、身内の者たちの周りにはいないのだと、どうしてお分かりになるのでしょうか。でも、この点はともかくといたしまして、私に負けないくらい潔白で、また、ブランドさんが判断の拠り所となさいましたものと変わらないほど真実味のない憶測のせいで苦しい思いをした人間は、今もたくさんおりますし、これまでにも多かったことは疑いのないところなのです。貴方がラヴレースさんと、それも（こんな言い方をして構わなければですが）、おそらく将来的には別なのでしょうが、以前にはあまり正当化したがっておられなかったように窺えます、そんな人柄の人物と親しくしておられるということ、また、頻繁に私のところを訪ねておられるということが、私の行いの中で不審な状況だと思われるのは当然な話でしょう」とだ。

俺は声も立てず、ただ感心しているだけだったよ。

「でも、お分かりいただけますわね」と、彼女が言葉を続けた。「若い女性はどれほどお付き合いに注意しなければならないのかということをです。また同時に、若い殿方にとりましては、名を惜しむことがどれほど必要なのかということもです。殿方が誠意を尽くそうとしておられるかもしれない女性、そして、そうしていただかなければ、ご一緒しておりますところを人に見られますと、評判に傷がついてしまいますような、そんな女性のためのことに過ぎないのだといたしましてもですわ」とだよ。

「ブランドさんのことですが」と、彼女は続けた。「あの人は同情に値するのです。ですから、これはお願いですが、ベルフォードさん、あの人のお体とか運勢とか、そのどちらにとりましても損害をもたらしますような怒りは、どうか抑えていただきたいのです。あの人のお役目、そして、善意に免じて大目に見ていただきたいのです。今の私は不興を買い、辛い思いをしているわけですが、立腹している者たちの一人一人が、私の思い出から悪辣な犯罪行為についての容疑を晴らし、挙って私を憐れんでおりますのに気づかれました暁には、あの人にも憂慮すべき事柄がたっぷりと出来ることでしょう」とだ。

これこそ、ラヴレースよ、貴公が命を縮めてしまった女性なのだよ。その盛りにあったのにな。彼女の計り知れないほどの価値を称賛する機会に貴公はどれだけ恵まれたことだろう。それなのに、貴公の本性はあの魅惑的な姿の〈女〉の部分に夢中になるあまり、彼女の心の中であのように燦然と輝きを放つ〈天使〉には目をつむってしまったのだ。実際の話、彼女と言葉を交わす幸運に恵まれた時はいつだって、俺は本物の天使と同席しているように思っていたし、仮に彼女がこれまで目にしてきたのと同じくらい美しくなり、また、健康で血色の良い表情になるとしても、彼女の言葉に耳を傾ける時、ほんの少しでも女を感じることが俺に出来ないのは間違いないところなのだ。

八月三十一日　木曜日　三時

二度目の訪問で気づいたわけだが、悲しみゆえにそうすることが時々あったように、令嬢は喜びからもほとんど同じくらい苦痛を味わう人なのだな。ちょうど、従兄弟のモーデンから思いやり溢れる手紙を受け取ったところだったが、親切にもそれを俺に見せてくれ

たのだ。彼女はすでに返事を書き始めていたので、邪魔にならないよう、夕刻に訪ねさせてもらうことにした。

従兄弟の手紙というのはまことに情愛の籠もったもので　…

《ここで、ベルフォード氏は手紙の要旨を記憶に則って述べるのであるが、それは割愛することとした。当の手紙の詳細が提示されているからである［次の手紙を参照のこと］。そして、次のように付け加えているのである》

しかし、あゝ、すべてはもう手遅れなのだよ。天命が確かに下されたのだ。この世は彼女には相応しくないのだ、とな。

手紙　七十八
モーデン大佐からCf. ハーロー嬢へ

八月二十九日　火曜日

最愛の従姉妹よ、僕からの訪問とか手紙とかがより一層君の気持ちに適うものとなるよう願ってのことだが、君の役に立つべく終始忙しく動き回っていたのでなければ、イギリスの土を踏んで二週間、光栄にも直接お傍に伺うとか、あるいは一筆啓上するとか、そのいずれをもせずに過ごしたりはしなかったのだよ。というのも、常日頃から君に抱いて来た疑うべくもない親愛の情、そして、勿体ないことに君がいつも寄せてくれた敬愛の念からして、そのいずれかが君の気持ちに適うはずだと推測すべき理由は十分にあるからね。

僕の善意からの目的を達成するのにこれほどの時間が必要だとは、ほとんど考えてもみなかった。あんなにも熱烈な愛情が一方には存在していたのだし、もう一方には、僕はとことんそのように信じているのだが、高貴なことこの上ない美質が今も備わっているという、そんな事態なのだからね。

昨日、ラヴレース氏とM卿とに会って来た。あの貴族のご家族や親戚の全員が君との縁組という栄誉をどれほど熱望しているのか、また、あの恩知らずな男も、自分の力で為し得るかぎりの償いを君に対して行おうと、どれほど熱意を燃やしているのか、君に話す必要はなさそうだね。

今の君に打てる手としては、ねえ、君、結婚への同意という栄誉を彼に与えることよりももっと良いものはないように僕は思うのだよ。彼は君の美徳について、実に公正で素晴らしい言葉を口にしているし、心の底から自分のことを非難しているわけだから、君の名誉を損なうことなく、彼を許す余地はあるように思うのだ。君が法的な告発には断固反対しているらしいだけに、なおさらその余地があることになる。

ラヴレース氏に対して君が効果的な許し方をするならば、僕の見るところでは、全面的な和解を早めることになるのは明白に思われるのだよ。というのも、現在のところ、他の親類の者たちは納得出来ずにいるからなのだ。君を正当に扱おうとして彼が真剣になっていることについて、あるいは、君としては、彼のそんなところを信じるとしても、どうしても彼を拒むつもりでいるのだということについてだよ。

だが、君、もしかするとこの件には、何か僕の承知していないことがあるのかもしれないな。もしもあるのなら、そして、それを教えてくれるなら、生まれついての、思いやりに溢れる心が僕にはあるわけだから、僕に出来ることで君のためになることなら、何でもして上げるつもりなのだよ。

僕の親類の者たちそれぞれをこの次に訪ねる時には、万事を丸く収めることが出来るよう願っている。自分たちの怒りが度を越していることを悟った場合、傲慢な心の持ち主にとって必要なのは、腰を低くするための適当な口実だけなのだよ。それに、両親というのは、かつて愛していた子供にはいつだって愛情を覚えるはずなのだ。

だが、皆が頑として動かないようであれば、僕は時を移さずに出発し、君の元を訪ねようと思う。多年に亘って留守にした後でもあり、君に会いたいのだよ。

それまでの間、二、三行で構わないから、筆を執ってもらいたい。ラヴレース氏の誠意について、疑いを向けて当然な理由が君にはあるのかどうか、それを知りたいのだ。M卿のおられるところで昨日交わされたわれわれの話し合いから判断するなら、僕のほうにはそのような理由は一切ないのだよ。

僕への宛先は、アントニー叔父上のお宅にしてもらいたい。

君と父上、兄上、おじ上たちとの間に目出度い和解をもたらすまでの間、君のため、それら近親者のすべてに成り代わることをこの僕に許してもらいたいのだよ。次のとおりの人間であることは言うまでもなくね …

君の愛情溢れる親戚、そして、謙虚なるしもべ

Wm. モーデン

手紙　七十九

Cl. ハーロー嬢からWm. モーデン氏へ

八月三十一日　木曜日

故国に戻られましたこと、心の底からお慶び申し上げます。

貴方が帰国なさったことを耳にいたしまして、大変嬉しくは思ったのですが、でも、こちらから声を掛けますよう、最初のご連絡で勇気づけてくださいますまでは、恐ろしくもあり、また、恥ずかしくも感じていたのです。

大変不幸なことですが、私が圧倒されておりますあの恨みと怒りの波に押し流されることなく、貴方は私の無実について調査をなさり、寛大にも、その情報を信じてくださっていることを知りまして、私の傷つきました心はどれほど慰められたことでしょう。私にとりましてもっと近縁に当たります者たちのほうでは、私に向けられました悪辣な報告の真相につきまして、吟味いたしますのを妥当なこととは考えませんでしたのにね。

結婚の申し出に関しますラヴレースさんの誠意、また、あの人の親戚の皆さんが私をお身内に加えたいと心から望んでおられます点につきましても、疑いを挟む理由はこれっぽっちもございません。父の不興のために辛い思いをしたはずと案じてくださいました際には、私への尊重の気持ちを見事に例示していただいたのです。しかもこれは、あの人自身の懇願と同様、あの人のためを願います皆さんのたってのご要望につきましても、私のほ

うできっぱりとお断りした後のことだったのです。
　また、あの人を拒みました点では私に非があると、そのような考えもどうかお持ちになりませぬようお願いいたしますね。私のことを弱い人間だと考えるような理由は、ラヴレースさんには一切与えていないのです。もしも与えておりましたなら、あのような人のことですから、自分の力で引き出すことの出来た弱みを卑劣な仕方で利用するように努力する、そのお墨付きを得たみたいに考えていたかもしれないのです。私のほうでも（その場合には）、自分自身の弱さを意識いたしまして、あの人の悪辣さと妥協することになっていたかもしれません。
　本当に、あの人を許しても構わないつもりです。でもそれは、あの人の罪が私をあの人よりも高いところへ置いてくれたと考えるからなのです。自分の手と誓約とを与えることになります人物の上に立つようなことは、果たして出来る話でしょうか。また、練りに練った上で行われました卑劣な行為に対しましても、それらと一緒に是認を与えることになるのです。絶対に有り得ないことです。一言申し上げますが、貴方の従姉妹のクラリッサは、多くの年月を生き長らえることになりそうだといたしましても、それも（この男性とは結婚しないといたしまして）、貧困とか欠乏の中で身内全員から蔑まれ、見捨てられて暮らすことになるといたしましても、生きて行きますための便宜、あるいは、命そのものに対しましても、あまり高い価値は置かないということです。そのような是認を与えることによって一方を再度手に入れようとしたり、あるいは、もう一方の持続を求めたりするほどには、ということです。罪を犯した者のほうに報いをもたらすことになります（貴方の従姉妹が自分の務めを果たすとしてですが）是認なのですからね。
　それに、このようなことを申しますのも、プライドというよりは、むしろ信条からのことでございます。何ということでしょう。美徳こそが、貞節こそが女性の、とりわけ、人妻にとりましての栄冠ですのに、貴方の従姉妹に、身を落としてまで結婚に踏み切らせようとなさるのでしょうか。相手の女性に関して抱いた不埒な見方が間違っていることに気づいた際にも、自分の差し出す手は受け取ってもらえるはずだという無礼な考えからでなければ、その女性の操に狙いをつけることも出来なかったような、そのような男性を相手としてです。これまでのところ、私を弱い人間だと考える根拠はあの人も得ていないのです。また、弱いことを気取られますのは罪にもなりそうな点につきまして、現に自分は弱いのだという、そのような途方もない悪例をあの人に見せるつもりも私にはないのです。
　おそらく、いつの日か、私の身の上話一部始終をお知りになることでしょう。でも、いつご承知いただくことになりましても、私に悲運をもたらしました人物が復讐の目的で追い求められることのなきよう、お願いしたいのです。奇妙なことですが、いくつかの不幸な原因が同時に生じるということさえなければ、あの人にいたしましても、私の悲運の張本人にはなり得なかったはずなのです。私がこの世を去りますと、法の力があの人に及ぶようなことは有り得なくなるでしょうから、どのようなものであれ、別の種類の報復のことが案じられまして、恐ろしくなってしまうのです。と申しますのも、その場合、私の身内のほうが無事だといたしますと、私の霊に対し、あの人の死は一体どのような名誉をもたらすというのでしょう。もしも身内のだれかが不幸な目に遭うといたしますと、私の過ちはどれほど深刻なものになってしまうことでしょうか。
　私の一番大切な従兄弟に末永く神のご加護がございますよう、また、貴方が今も私を愛

していてくださるということ、そして、私を憐れみ、許してくださる（それでこそ、大きな祝福が与えられることでしょう）近縁の親しい人が一人私にはいるということを知らせてくださいましたことにつきまして、ただただ、貴方が私にお与えてくださいました慰安の、その大きさに見合いますだけの神の祝福がございますよう、私は祈っております。

変わることなき謝意と親愛の情を込めまして、貴方の

クラリッサ・ハーロー

手紙　八十

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

［手紙五十七と七十一への返事として］

八月三十一日　木曜日

白状せずにいられないのだが、例の手紙に関するハーロー嬢のこの解釈が、えらく胸に応えているのだよ。絶対に容赦のならない女だな。おとなしい人間だというのか。悔い改めているだの、やれ、無垢で信心深いだの何だのというのか、あの女が。片足を墓穴に突っ込んでいながら、人をたぶらかすことの出来る女だというのにな。

例の手紙を書こうと腰を下ろした時、惑わしたぶらかそうとの魂胆が彼女にあったのは明らかだ。この危機的な状況でそのような真似が出来るのであれば、俺にとって彼女の許しが必要なのと同じ程度に、彼女にとっても、天の許しが必要になるのだよ。そして、「慈悲心」だ「慈悲心」だと、口癖みたいに彼女は唱えているわけだが、俺が彼女の真の許しを受けることよりも、自分が天の許しに与ることのほうが確かなわけでもないのだとしたら、そして、然るべき見方で事態を受け止めてくれるようであれば、彼女が予期しているように思われるものよりはさらに暗い瞬間が、彼女の前途にはもう少し待ち受けていることになるだろうな。

M卿自身も、（卿本人の文言を使うと）「恐ろしく眼力の鋭い」人間の一人ではないのだが、ペテンであることを悟り、彼女には似つかわしくないことだと考えているのだ。もっとも、モンタギューの従姉妹たちのほうでは彼女のことを擁護している。また、それも無理からぬことだよ。この忌々しくも不公平な女というのは［女はすべて嫌いだね。誓って言うが、女のすべてに憎しみを覚えるのだ］、われわれが絡む場合には、仲間のどの一人にとっても不利に働くことは認めようとしないのだ。何故だと思う。他の者のごまかしを非難したりすると、自分自身の心を咎めなくてはならなくなるからだよ。

天国に落ち着いたら、彼女は俺に手紙を送ってよこすというわけだな。こんな譬え話などは悪魔に食われてしまえば良いのだよ。それに、こういった馬鹿馬鹿しい手口を〈邪気のない〉手管と呼ぶのだからな。貴公も悪魔の餌食になると良いのだ。

この点は力説しておきたいのだが、彼女のような人柄の女性が、これだけ危険な状態にある時期に、このようなたぶらかしをやって正当化されるのであれば、俺のごとく、心身共に壮健であって、その盛りにあるような男性は、女性に対する策略と企てのすべてについて、大目に見てもらっても良いだろうということだよ。それに、幸運に感謝する次第だが、その方面に関しては、今は心安らかに腰を下ろすことが出来るのだ。誓っても構わな

いが、ジャック、そのとおりなのだ。また、彼女を許すことの出来る者はだれであれ、俺を非難する権利を持つことはないのだ。だが、確かにある者たちにとっては、彼女の行うことはすべからく善であり、俺の行うことはすべて悪でなければならないのだ。何故だと思うかな。愚かで見当はずれな世間をおだてるよう、彼女は常日頃から気を配って来たからだよ。いかにも女らしくな。一方、俺は絶えず世間の非難を無視し侮っていたのだ。男らしくな。

だが、こういった点すべてにも拘らず、付き纏うつもりはない旨を、俺からの言伝として彼女に知らせてくれて構わない。俺の訪問が彼女にははなはだ恐ろしいもののようだからな。そして、俺に対して働いたあのペテンの後では、彼女としてもなかなか期待し難かったものだろうが、これを寛大な心の表れの一つとして考慮にいれてくれることを願う次第だよ。また、次の点も知らせてほしいのだ。つまり、彼女に安心をもたらすとか、あるいは、体面を保つのに役立つことで、俺に出来ることが何かあるのなら、一言仄めかしてくれるだけで、俺自身にはいかに不名誉とか不利益とかをもたらすものであっても、すぐに意向に沿う覚悟でいるということをだよ。こういったことすべては、彼女の不安を取り除くためなのだ。心のわだかまりが一切なくなるようにとの気持ちからだよ。

彼女の忌々しい親戚どものほうでも、同じくらいに気持ち好く、己の役割を果たす気を起こしてもらえるようであれば、俺としては、彼女の回復のためになら、命を引き換えにしても構わないつもりなのだ。

しかし、貴公の柄にもない懺悔に接し、滑稽な姿を数々心に思い浮かべた人間で、貴公への笑いを慎むことの出来る者などいるのだろうかな。親愛なるベルフォードよ、頼むから、貴公自身の野望については、これからはその一切を省いてもらいたいのだ。真の天使が熱望しているものを汚したくないのであればな。

貴公を引き上げるために天から遣わされた人間のように彼女のことを考えている(ア)、例の一節まで来た時には、ウェストミンスター寺院の記念碑に見られるエリザベス・カータレット夫人(六八)そのままの格好の貴公の姿を、一時間ほど、どうしてもこの頭からかき消すことが出来なかったぞ。あの記念碑を見たことがないのであれば、ひとつ拝みに行くことだな。あそこに行くと、この貴婦人の像にお目に掛かれるが、その頭と片方の手を天に向かって差し上げているのだ。手のほうは、頭の天辺から足の爪先まで石で出来たキューピッドに握られており、不格好な片方の足も持ち上げているのだが、彫刻家の狙いとしては、天へ昇ろうとしている姿のつもりなのだな。ところが、出来栄えのせいもあって、その像は（実際のところ、体の他の部分は衣服で覆われているのだが、靴とかストッキングは履いていないのだ）魚の目の治療師を見上げているのだと、むしろそんなふうに想像したくなってしまうのだよ。もう一方の足はその生まれついた大地に埋まって、泥にまみれており、貴公と同じく（貴公の言い方では、「浸っていた」ということだが）、抜け出すことはもう出来ないのだよ。貴公も気づくだろうが、その二つの像は共に競っているようにも見えるのだ。でかい方の像は、小さい奴の耳の辺りを掴まえて、引き摺り下ろしてやろうかと考えているし、小さい方は（丸ぽちゃのチビで、相手の四分の一くらいの体格をしていて、蝶々のよりもさほど大きくない翼をつけているのだ）でかい奴を、そいつが目指

(ア)百九十七頁を参照のこと。

しているという天国へ連れて行ったものかどうか、迷っているのだ。どちらの足の親指を入れるにしても、なかなか収まり切れないほどの広さしかないものだがね。

おそらく貴公はこう言うだろう。貴婦人の〈石像〉姿は、比較してみると、肌合いにおいても形態においても、全身これ木偶という貴公の容姿にも面目を施させるものだが、しかし、つい先頃俺に対して働いたペテンを別にすれば、すべての点でまさしく天使と言える令嬢なのに、太っちょのキューピッドの姿で表されたのでは、気の毒としか言い様がない、とな。この点では貴公の言い分を認めることにしよう。しかしながら、貴公と令嬢との間の関係と、惨めったらしい記念碑の上の像との類似性を思い浮かべさせるものが、貴公の野望にはたっぷりと含まれているのだよ。何しろ、貴公には覚えておいてもらわねばならんが、彼女のほうでは生まれ故郷の天空へ昇って行く用意が出来ているとしても、貴公のように悔い改めるべきことがふんだんにある、重たい人間を後ろに引き摺って行くのは無理な話だからだよ。

だが、ここでもう一度真面目になって言わせてもらうのだが、ベルフォード、令嬢は本当に君が書いているとおりの重体だというのなら、これほどまでに痛ましい事例では、非難をするにも、もう少し辛辣さといやみを控えるのが君には［今はローマ風を用いる時ではないのだ］似つかわしいということだな。というのは、誓っても良いが、その点が忌々しいくらい俺の神経に障り始めているからだよ。

今では、令嬢の消息をもっと頻繁に聞きたくて仕方がなくなっているので、俺は、スラウで出会ったわれわれの使用人二人から偶然仄めかされたヒントに従い、アクスブリッジにいるわれわれの友人ドールマンのところへ行くことに決めた。彼もそうだが、彼の妻と妹も、一、二週間連中と付き合うよう、しきりに俺に催促していたのだ。あそこなら、馬を飛ばして二時間掛からないのだよ。もしも、俺に会おうという気持ちを彼女に起こさせるようなことが何かあった場合にはな。たとえ、最悪の事態を迎えるとしても［ただ、天地を司る神が最悪の事態を防いでくれるよう、祈るばかりだが］、書面をもって拒否したわけではない例の許しを、あの口から与えてくれるのが、彼女の敬虔さ、そして、公言している慈善心にも似つかわしいことなのだからな。それに、彼女としては俺の改心を願っているわけだが、彼女にも分かってはいないのだよ。この手の会見が俺にどれほどの好影響を及ぼすか、ということについてはな。

そういうわけで、明日の午前中、遅くとも十一時には、ドールマンのところに着いていることだろう。俺の使用人は君のところからの帰途（便りを携えていてくれるよう願っているが）、俺とあちらで落ち合うことになっているのだ。ジョエルも連れて行くことにするが、事と次第によっては、より頻繁に使いを出せるようにするためだ。もっと近いところへ行くとか、あるいは、ロンドン市中に入ったりすれば、彼女と会わずにいるなんてことは無理な話だろうからな。

だが、もしも最悪の事態に至るとしたら　…　君が絶え間なく弔鐘を鳴らすので、俺もどう考えたら良いのか判じ兼ねてしまうのだよ。［だが、今一度祈ろう。天がその最悪の事態を防いでくれるようにだ。自分自身のことがどうにもならない場合には、実に自然に祈りが出るものだな］その時に至っても、事態の説明に恐ろしい言葉を並べ立てるのは止してくれ。パリに向けて旅立つよう、助言するだけにしてほしいのだ。それでも俺の心臓をひと抉りすることになるだろう。

今は亡きベルトンの妹に対する君の寛大な処置には大いに賛成なので、俺もそうするのだが、モーブレーにも遺産を放棄させたよ。彼女の東インド会社の債券のためだ。俺が上京の折には、ターヴィルにも同じことをさせるつもりだよ。そして、あの正直者を忍ぶために、われわれはそれぞれ指輪を購入し、指にはめることにする。自前で買うのだが、われわれの気持ち同様、彼の遺志を果たすためだ。

俺の下男は夜を徹して馬を飛ばすのだ。命令だぞ、ジャック。奴の命を救ってやろうと思うのなら、空手で送り返したりはしないことだ。

∴　∴

手紙　八十一

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

八月三十一日　木曜日　夜

この前の手紙を結んだ時、俺はこんなことを望んでいたのだよ。今度この驚くべき女性のお傍へ伺えば、従兄弟のモーデンから受け取った嬉しい便りのこともあり、衰えつつある彼女の現状としては精一杯のものだろうが、いくつか好ましい事柄も得られることだろう、とな。ところが、彼女自身にとっては別だとしても、俺にはまったくの見当はずれであることが分かったのだ。すぐにもその点に触れることになるのだが、今回ほどのショックというのは、これまでの生涯にもかつてなかったように俺は思うのだ。

夕方の七時頃に伺ったところ、彼女の話では、俺が彼女の元を去った後、非常にいらついている自分に気づいたのだそうだ。「従兄弟の便りから得ました喜びがこれほどの影響を及ぼすなんて、妙な話ですわね。でも、私は〈比較対照好きな〉とでも呼んだら良いのでしょうか、何かそんな気分に傾く自分を抑えられませんでしたし、従兄弟のモーデンが親切に用いてくれました方法、つまり、私の功罪を調査し、断罪へと向かう前に、私の言い分を十分に審理するというものですが、その方法をもっと近い関係にある身内の者たちが用いなかったのはとても辛い話だと考えずにはいられなかったのです」というのだ。

この言葉を言い終わるか終わらないうちに、彼女はハッとした様子を見せ、あの美しい顔全体が赤く染まったのだ。俺の耳にも届いたのだが、二人の人間が大きなトランクでも運び上げているような、その種のガタガタという物音が階段のところでしているのを聞きつけてのことだ。それから、懸念を含んだまなざしを俺に向けながら、彼女はこう言うのだよ。「粗忽な人たちですこと。二時間も前に運び込むのですからね。びっくりなさらないでくださいね。ただただ、貴方のご苦労を省くためですわ」とだ。

俺が口を開く前に、スミスの上さんが入って来て、「あゝ、マダム、何ということをなさったのでしょうね」と言うのだよ。ロヴィック夫人も部屋に入りながら、同じ驚きの声を上げていた。俺も叫んだよ。「いやはや、マダム、何てことをなさったのですか」とな。実は、ちょうど令嬢がドアのほうへ向かっているところだったので、婦人たちが俺に教えてくれたのだ。棺だというのだよ。あゝ、ラヴレース、あの瞬間に貴公が居合わせてくれたならと、心からそう思う。こういった恐ろしい光景すべての張本人である貴公がだよ。こ

と彼女に関するかぎりでは、責めを負うべき罪過一つとしてない俺よりも、心動かされるところは貴公のほうが少ないなどということは、まさか有るはずもない話だからな。

準備を進めていた時とそっくり同じ毅然とした態度でだが、棺を自分の部屋へ運び込むよう指示した後、彼女はわれわれのところへ戻って来た。彼女が言うには、暗くなるまでは持ち込まないことになっていたのだそうだ。そして、「どうぞお許しくださいね、ベルフォードさん。それから、ご心配には及びませんわ、ロヴィックさん。貴女もですよ、スミスさん。どうして心配なさるのでしょうね、皆さんは。事柄が普通ではないだけのことでして、それ以上のことは何もございませんもの。このような光景に心を動かされてしまうのでしたら、いつの日にか自分たちの塵がその人たちの塵と交じり合いますようにと願いもいたします、そのような先祖の遺物が置かれております教会へ参りますことにも、私たちは同じくらいのショックを受けて当然のはずですのに、どうしてそうはならないのでしょうね」と言うのだよ。

婦人たちはエプロンを目に当て、われわれ全員が押し黙っていると、彼女は次のように言っていた。「まったく取るに足らないことですのに、何故このように心配なさるのでしょう。私に何か責められるところがあるといたしますと、この俗世の部分に対しまして、そのように考えられても仕方ないのでしょうが、あまりにも心遣いを示し過ぎる点なのでしょうね。自分の力で出来ますことは一人で行いますのが、私は好きなのです。いつもそうしておりました。他の重要な点につきましては、もうこれまでに一つ残らず片付いていたり、処置が講じられたりしておりますので、さほど重要でない事柄のための時間的なゆとりが出来たわけです。そのために大切な事項が疎かにされない場合ですが、些細な点に拘ることがあっても良いのです。もしかいたしますと、もっと相応しくない状態の時に、これを注文しなくてはいけなくなっていたかもしれませんでしょう。近くには母も姉もおりませんし、ノートン夫人もハウさんもいらっしゃらないのです。皆さんのうちの何人かの方々は、たとえ今ではないといたしましても、二、三日中にはこれをご覧になったに違いありませんし、おそらく、お友達らしく労を惜しまず、指図をしてくださったことでしょう。それに、皆さんにとりましては、二、三日の違いに何の意味がありましょう。私のほうは、そのことで心を乱されるのではなく、むしろ喜んでいるのですからね。このような準備をしたからといって、死期が早まるわけでもないのです。少しでも遺すものがおありの時には、どなたでも遺言書を作成なさるのではないでしょうか。また、遺言書を作成する人で、棺を怖がるような人などいるでしょうか。私の大好きなお友達「と、婦人たちに向かって」、私はこういった事柄を検討していたわけです。ここ何週間か私の中に見てこられましたものを眼前になさったからといって、貴女たちは見ておられなかったのだと思いたくなりますような、そんな根拠を私に与えないでいただきたいのです」とだよ。

何と理に適った話なのだ、このすべては。確かに、彼女自身が十分に検討を加えていたことを示すものだ。しかしながら、このようにして持ち込まれた棺のことを考えると、われわれはショックを受けずにはいられなかったのだよ。十中八九、すぐにもその棺の中を占めることになる麗人を目の前にしているわけだからな。

われわれは皆なおも押し黙っていた。婦人たちは深い悲しみからであり、俺はいわば茫然自失の体だったのだ。彼女はこんなことを言っていた。俺に頼むつもりはないが、自分が考えていたよりも早目に運び込まれたこともあり、二人の友達には、部屋に入って棺を

見てくれると嬉しい、というのだよ。見慣れたものになるにつれ、ショックも軽くなるだろうから、とな。そして、「驚いて飛び跳ねる馬は、慣らして飛び跳ねるのを治すためですが、その馬が驚きがちな対象のところへ連れ戻すのではないでしょうか。この場合にも同じ理屈が当てはまるのです。さあ、お友達、ご案内いたしましょう」と言うのだ。

俺は暇乞いをしたが、彼女のしたことは間違っているということ、大変な間違いであるということを話しておいた。また、あのようなものは決して目の前に置くべきではないということもだ。

婦人たちは彼女について部屋に入って行った。不思議なものだよ、女というのは。目新しさと物珍しささえあれば、恐ろしすぎて目を向けるわけに行かないとか、その場に立ち会うことが出来ないといったものは、連中には何一つとしてないのだよ。

俺は急いで階下へ降り、駕籠をつかまえると、家まで運んでもらったのだが、極度のショックを受け、心は乱れに乱れていた。ただ、令嬢の論点を考量すると、こうまで心を動かされるのは何故なのか、俺には分からなくなるのだ。彼女も言っていたように、事の異常さを別にするとな。

駕籠を待っていた時だが、スミスの上さんが降りて来て、棺の蓋には図案と銘文が刻み込まれていることを教えてくれた。いやはや、驚いた話だよ。棺などが趣向を凝らすに相応しい対象だというのだろうか。しかし、こういった偉大な心の持ち主というのは、尋常さの枠に納まらないことをしないではいられないものなのだろう。

手紙　八十二

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

九月一日　金曜日　午前

先の便りの話題となっているようなものに俺があれほど心を動かされたというのは、驚くべきことだな。男の端くれであるし、最近死んだ叔父貴の場合、そして、今は亡きベルトンの時には、同じものを眼前にし、指図をした人間でもあるのだよ、俺は。一方、棺の中を占めるはずの（おそらく、すぐにも占めることになるのだ）、あんなにも弱々しく華奢な体つきの女性である令嬢のほうは、棺についての注文をしたり、図案を作成したりすることも出来るし、また、婦人たちの言では、昨夜俺が去った後で連中に話してくれたのだそうだが、何の屈託もなしに図案の説明をすることも出来るのだよ。

俺は一晩中、本当に具合が悪く、寝つくことも出来なかった。パッチリと目が覚めている間ずっと、俺の呪いの的となっていたのは貴公だよ。彼女が称賛の的となっていたようにな。そして、うつらうつらした時に夢に現れたものと言えば、他でもない、空中を飛び交う砂時計やしゃれこうべ、踏み鍬や根堀り鍬、そして、永遠の世界といったものだ。彼女の図案にそれとなく触れた言葉が（スミスの上さんが教えてくれたものだが）頭の中を駆け巡っていたこともある。

しかしながら、スミスの店に近づかずにいることも出来ず、七時頃に行ってみた。令嬢はちょうど外出したところだった。俺よりは良く眠れたらしい。彼女の体を納めることになる神聖な容れ物が、寝台からあまり離れていない窓辺に置かれていたのだがね。

スミスの上さんと令嬢の看病をしているシェルバーンの勧めもあり（ロヴィック夫人は令嬢と出掛けていたのだ）、上に行って図案を見ることになった。すべての注文が出された際に用いられた下書きの写しを、その後ロヴィック夫人が見せてくれた。そこで、君のために、図柄の概略について述べてみよう。

主たる模様というのは、白い金属の銘板に手際良く彫り込まれたものだが、王冠を戴いた蛇で、尻尾を口にくわえて輪を形作っている。無限性の象徴だな。そうして出来た円の中に、次の銘文が刻み込まれているのだよ。

クラリッサ・ハーロー
四月十日
［そして年号が来る］
享年　十九歳

飾りとしては、頭部には翼をつけた砂時計がある。底部には壺だ。砂時計の下、もう一枚の銘板には、次の銘文が刻まれている。

ここでは神に逆らう者も暴れ回ることをやめ、
疲れた者も憩いを得る。（ヨブ記第三章十七節）

壺の上、底部近くには、

わたしの魂よ、再び安らうがよい。主はお前に報いてくださる。
あなたはわたしの魂を死から、わたしの目を涙から、わたしの足
を突き落とそうとする者から助け出してくださった。
（詩編第百十六章七節、八節）

とある。

この聖句の上のところには、ぷっつりと断ち切られ、まさに茎を離れて落ちようとしている白百合の花の部分が描かれている。そして、その上のほう、主な銘板と百合との間には、次の銘文が刻まれているのだ。

人の生涯は草のよう。野の花のように咲く。風がその上に吹けば、
消えうせ、生えていた所を知る者もなくなる。
（詩編第百三章十五節、十六節）

極めて厳粛な出来事に際し、おそらく穏当と思われる程度以上に意匠を凝らしたことについて、令嬢は婦人たちに向かって弁解していたが、若さゆえのことであり、また、刺繍のための下絵を描き慣れていたせいでもあるというのだよ。

四月十日という日付については、自分にとっての最期の日がいつになるのか、予測することは出来ないし、父親の屋敷を離れた運命の日でもあるから、と説明していた。

彼女が葬儀屋の勘定の支払いを済ませたのは、俺が帰った後のことで、彼女のこの宮殿を購入するために売り払った衣装の、その代金を支払ったどの時とも変わらない、気持ちの好い態度だったそうだ。実は、棺のことを彼女はそんなふうに呼んでいるのだが、その高価さのゆえに自分自身を咎めているわけで、見栄を張る気持ちというものは、哀れな人間たちの心を最後まで離さないものだということを、自分の姿を通して、連中にも観察してもらえるだろう、と言うのだ。ただ、確かに自分にも定かではないのだが、〈仕度の整った暁には〉、先祖と一緒に安置してもらうべく、棺が国許へ運ばれることを父親が許さないともかぎらないのだし、その場合にも、自分が仲間入りすることでそれら先祖の者たちの面目をつぶしたりしてはいけないからだ、とも言っていた。

棺は立派な黒布に包まれ、白いサテンで内張りがしてある。彼女に言わせると、棺を覆うどんな土よりも汚れた土塊で、すぐにもそれは汚されることになる、というのだよ。

寿衣も棺と一緒に届けられていた。察するに婦人たちのほうでは、令嬢が実際にそれを開けばの話だが、開くところを見たい気持ちも十分にあったのだろう。それに、おそらく貴公にしても、その場に居合わせるのを喜んでいたことだろうな。寿衣についても、感嘆の思いを込めて眺めるためにだよ。

ロヴィック夫人はこう言っていた。勝手ながら令嬢を咎めさせてもらい、あのような品物は、少なくとも寝室からは移動してもらうよう頼んだそうだ。そして、それを聞いて令嬢が口にした気高さ溢れる返答に強く心を打たれたため、彼女の元を辞するとすぐに、それを書き留めて置いたというのだよ。

令嬢はこう言ったのだ。「健康な人たちには、この光景はショッキングなものかもしれませんね。また、準備を進めていることや、その際の私の無頓着さには、気取りがあるように映るかもしれません。でも、世間からの乳離れがとてもゆっくりと行われ、そして、世間を好きになれないわけがこんなにもたくさんございます私の場合には、死のことをいろいろと思い巡らし、その考えに耽っている（そして、厳密に申しますなら、楽しみを感じている）と言わねばなりません。と申しますのも、信じていただきたいのです［と、恐ろしげな容れ物をしげしげと眺めながらだ］。今この瞬間、私が一番本当らしく感じておりますことを信じていただきたいのですが、死と、その待ち望んでおりました幸せな結果についての考えには、はるかに抜きん出た重みと重要性がございますから、他の考えや関心事のすべてを、いわば消滅させてしまうのだということです。信じてくださいね、私の立派なお友達。その考えは他のどんなものにも出来ないことをしてみせるのです。私の中に崇高なことこの上ない模範の力を強めることで、私が受けました被害の数々を許し、過ぎ去った災難の記憶をこの胸から締め出すよう教えてくれるのです」とだよ。

ところで、ひとつ貴公に尋ねたいのだが、ラヴレース、果て知れない無限の大海原へと乗り出さねばならなくなった時、果たして貴公には（哀れなベルトンは勿論のこと）出来るのだろうかな。この美しい、たおやかに咲き匂う花の乙女が示してきた、そして、今も示し続けているような、真の英雄的精神をもって貴公の役割を演じることがだよ。

駄目だね。無理な話さ。で、何故無理なのかな。理由は明白だ。彼女には、自責の念を込めて振り返るような、故意に犯した過ちはないということだ。それに、彼女の心は、すべての行動の指針となっていた、そして、加害者となるよりは被害者となることを選べと教えて来た、あの宗教心に基づく公正さから生じる慰めによって強化されているのだよ。

これこそは、貴公も読んだことがあるだろうが、神のようなソクラテスを支えていたものなのだ。処刑の場に導かれて行く際、無実ゆえの受難となることを妻が嘆くと、「愚か者め」と、彼は言ったのだ。「私に罪を犯させたいと願っているのか、お前は」とだよ。

手紙　八十三
ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

九月一日　金曜日

貴公に言わせると、「俺の野望」ということになるが、その件に関する貴公の浮かれた言い種というのは、このように心打つ光景の最中にあっては、何とも驚くべきものだよ。確かに、こんな男はこの世に二人といなかっただろうな。貴公の才能と軽薄さとを考え合わせるならばだよ。これと一緒に届けるものは、間違いなく、貴公の心を動かすはずだ。もしも、動かさないようであれば、貴公自身の死期が訪れるまでは、貴公の心を動かすものなどは何一つとして在りえないということだな。そして、その時、貴公の脳裏を駆け巡る思いの数々は耐え難いものになるのだよ。

しかし、俺が嬉しく思うのは、貴公のお陰で令嬢に確約出来ることだ。貴公がこれ以上彼女を悩ますことはないという点をな。つまり、言い換えるなら、彼女の運勢や現世での見込みをすべて目茶苦茶にした後で、はなはだ情け深いことに貴公は、彼女が心安らかに横たわって息を引き取るのを許そうとしている点だ。

わずかな遺産を今は亡きベルトンの妹に譲ってくれた点、そして、モーブレーとターヴィルを君の手本に従わせるよう約束してくれた点は、貴公の名誉になることと言わねばならないが、例のローズバッドとジョニーに対して示した貴公の寛大さや、金銭的な面での貴公の多くの善行と軌を一にするものだということだな。もっとも、あのローズバッドの場合は、可愛い女が関わっているものとしては、このような私心のない慈善行為が行われた唯一の例だと、俺はそう信じているのだ。

誓っても構わないが、ラヴレース、貴公を褒め称えるのが好きなのだよ、俺はな。そして、貴公も知ってのとおり、俺はその機会を掴もうと、何度となく努力して来たのだ。その挙げ句、称賛に値する貴公の行状をどうしても思いつくことが出来ない時には、絞首刑に値する所業をやってのける際の、その見苦しからざる手際のことを褒めそやすのに骨を折って来たくらいなのだ。

貴公も今は極めて近いところにいるわけだから、必要があれば、俺の使用人を遣わすことにする。だが、俺が恐れるのは、貴公の案じている報せを届けることになりそうなことだな。というのは、ちょうど今スミスの上さんから迎えが来たのだが、俺の着く頃、令嬢が生存しているかどうか分からない旨を俺に伝えるよう、上さんは使いの者に命じていたのだよ。

九月一日　金曜日　二時　スミス宅にて

俺としては、君の苛立たしさを募らせるに違いない、そんな不確かな状態のままで手紙を結ぶわけには行かなかったのだよ。というのも、いろいろな折にだが、君は俺に確信を

抱かせて来たからだ。他人には好んで与えているあやふやな気持ちが、いざ自分が受け取る段になると、君には最も大きな苦痛をもたらすのだということをだよ。攻撃的で激しい気性を備えた者たちの通例なのだと、俺は信じている。そこで（俺が書き終えるまで、君の召使がここで待っているので）、令嬢は極めて激しい発作に二度襲われたことだけに触れておこう。二度目の発作の際、彼女が横になっている間に、連中は医者とゴダード氏を迎えにやったのだが、この二人は、彼女の遺言執行人たる俺のところにも、急ぎ使いの者が出されて然るべきだと、揃って助言したのだ。彼女が三度目の発作を起こした場合、それが命取りになりはしないか、そのように思われる節もあるから、とだ。

俺の着いた頃には、彼女も相当に持ち直していた。そして、医者は俺の前で、そんなにも体が弱っているのだから、もう外出を試みるようなことは止めるよう、彼女に約束させていた。というのも、彼女に付き添っていたロヴィック夫人の説明によると、彼女の息遣いの荒さや極度の消耗ぶりと、教会での礼拝の熱心さとには相入れないところがあり、別々な方向へ力が加わるため（魂は上昇しようとし、肉体は落ち込んで行き）、あの華奢な体をバラバラに引き裂いているというのだ。

今のところはこれくらいにしておこう。ウィルをこれ以上引き止めはしないが、ひとつ頼みがある。この包みと前回のものとを送り返してほしいのだよ。君の記憶力は素晴らしいものだから、どんなものに対しても、日頃君がしているのは、あるいは、必要としているのは、一度目を通すことだけだからな。それに、たとえ貴公がわれわれの間で交わされているものをだれかに見せる気になっても、われわれの暗号を判読することが、われわれ以外のだれに出来るというのだ。もしも希望に沿ってもらえないようなら、今書いているものも、写しを取る時間が出来るまで手元に置いておきたい気持ちになるだろうな(ア)。

ちょうど今、ハウ嬢からの手紙が特別な使者の手で届けられたが、この使者は、二、三行でも返事として持ち帰らねばならないのだと言っている。ただ、横になるために令嬢が引き下がったばかりなので、この男はいずれ改めて訪ねて来ることになるな。

手紙　八十四

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

九月一日　金曜日　夜十二時　アクスブリッジにて、

手紙類はこれと一緒に届けることにする。返還を求める筆先に溢れる熱意のことは、君と落ち合う時に、正直かつ明確に説明してもらわねばならんな。また、その時には、前回急送されて来たものの内容や、厳しく、友人らしくもない君の非難のいくつかについても話し合うことにしよう。

それはともかく、何をしても構わないから、あの素晴らしい娘がわれわれに別れを告げるような真似は許さないことだ。まるで、自分の好きな時にこの世を去っても構わないよ

(ア) 次の点に触れておくのも場違いなこととは言えまい。つまり、ベルフォード氏が自筆の手紙を取り戻したがっているのは、自分の死後の評判の保証となるものをハウ嬢に提供してほしいという、令嬢の願いを叶えたいとの気持ちに由来するものであったということである。

うに考えているみたいな振舞いだが、そんな準備を進めることの罪深さを、目の前に示してやるのだよ。この調子では、すべての用意が整った時には、自分の為すべきこととしては、ただ横たわって眠りに就くことだけだと、そんなふうに自分に言い聞かせることになるだろう。それに、彼女ほどの活発な想像力を持ち合わせていると、いつだって、冗談を現実のことにしてしまうものなのだ。

俺は冗談と称しているのだよ。彼女と俺との間にあった出来事のすべてをな。ただの冗談なのだよ、命を懸けるのにはな。というのも、俺に対する彼女の勝利というのは、終始一貫、俺から受けた苦痛をはるかに上回っていたのではなかったかな。

考え方の清らかさと同様、体の清らかさについてさえ言えることなのだが、彼女の純粋さを神聖視する俺の気持ちが容認してくれるようであれば、この点は白日に晒すように証明してみせることも出来るのだよ。だから、愛しの君に伝えてほしいのだが、敬虔さゆえの不徳に陥ってはいけないということだ。心の正しさということについてさえも〈及ばざるところ〉と同じく、〈過ぎたるところ〉があるものなのだよ。おそらく、その点には彼女も考えが及ばないのだな。親切にも、彼女は貴公の付き添いを許しているわけだが、同じように俺の付き添いも許してくれたならと、心からそう願う次第だ。愛しの君はユーモアが好きだったのだよ。時宜を得たユーモアに対し、笑みを浮かべる術を心得ていてくれた折のことを覚えているのだ。それに、ひとつ言わせてもらうが、彼女のような誠意溢れる心の中には、唇に浮かんだ微笑みや目の輝きと呼応する機嫌の良さがきっとあったに違いないのさ。

医者に伝えてくれ。あと一年彼女の命を延ばしてくれるだけで良いのだよ。そうしてくれるなら、俺の財産のすべて、そして、復帰財産のすべてを彼に譲ってやるとな。たったの一年間だ、ジャック。あのようにうら若い患者なのだよ。こうしてもらえないようであれば、俺にとって、あいつの評判は地に落ちることになるし、ベルトンが奴の医者に加えたのと同じような仕打ちに出るつもりだ。たったの十九才なのだぞ、ベルフォード。十九才の者が、悲しみゆえに、こんな早死にをするなんてことは有り得ない話なのだ。仮にも医者がその名に値する者であるのならな。しかも、あずか三、四ヶ月前には、あのように若さ溢れる、そして、あのように素晴らしい体質に恵まれていたのだぞ。

それにしても、彼女の身内に宛てて一筆認めるのに、なんで彼女の許しを請う必要が医者にあるというのだ。彼女に一切知らせずに、そうすることは出来なかったのかな。彼女のほうではあんなにも会いたがっていることでもあり、身内の何人かを彼女のところへ呼び寄せるには、それが考え得る最も有望な方法の一つだったのだ。少なくとも、彼女のお気に入りのノートンを上京させようという考えを、連中に起こさせていたはずなのだ。だが、この手のえらく勿体ぶった輩というのは、こけおどしを事としているのだよ。連中の有害な薬を、一言の問い掛けもなしに、どっさりと人様の喉に詰め込んでおいて、それが処方というものだと認めて見せる鉄面皮さを持ち合わせているのさ。ところが、何か良いことをする段になると、人様の同意を求めようとするのだよ。

貴公の手紙を一行読むごとに、愛しの君の人柄はまさに鰻登りだな。しかし、彼女があのような真昼間の輝きをもってわれわれの上で煌いているのは、彼女が出くわした尋常ならざる出来事のお陰なのだよ。彼女の高尚な感情、思慮分別に富む考え、寛大な心、気高い慈悲心、そして、この上なく恐ろしい見通しを前にしてのあの平静さにしても（これが

彼女の姿をすべての女性、そして、古の哲人たちさえをもはるかに凌ぐものにしているのだ)、それらの出来事がなかったならば、どうして明示され得たというのだろうか。

あの美徳の数々を顕示する機会を提供したことに関し、俺は少しばかり手柄顔をしようとしているのだと、貴公がそう考えるのは分かっているのだよ。しかし、俺にはそのつもりはないのだ。何しろ、そんなことをすれば、彼女の執念深い親戚連中と手柄を分け合わねばならないからな。少なくとも、手柄の三分の二を得て当然な資格が連中にはあるのだし、何事についてであれ、あんな一族と相棒になるようなことは、俺としては心の底から軽蔑するのだ。

だが、貴公の非難の数々に対する返答として言っていることなのだよ、これは。貴公の推測するところでは、俺がかくも長期に亘り日毎に、そして、不断に、身をもって目撃して来たものということになるのだが、そんな完全無欠さによって、俺はほんのわずかな啓発すら得ることが出来なかったとの非難だったな。彼女はその言動のすべてにおいて実に見事であったけれど、あの当時はまだ機が熟してはおらず、今俺を驚かせたり狼狽させたりしている、あの仰天するような完璧さを呼び起こすには至らなかったのだ、とな。

俺がこれまでにもまして彼女を賛美するのは、それゆえのことなのだよ。それゆえにこそ、彼女への愛は、こう言って構うまいが、女性に対する愛情にとって可能なことと俺がかつて考えた程度以上に、身体的な面を弱め、知的な面を強めることになるのだよ。

また、次のように確信するのも(運命の女神たちが彼女を見逃し、俺のものにしてくれるようだと嬉しいかぎりだが)、それゆえのことなのだ。つまり、彼女の現世での幸せを確実なものにするのと同様、俺の将来の幸せを引き寄せてくれるような、そんな純粋な心で彼女を愛することも、俺には可能だということだよ。そして、それゆえ、当然の結果というわけだが、もしも彼女を奪い去られたりすれば、俺はすべての男の中で最も惨めな人間になるだろうということだ。

軽薄だということで、貴公は俺を厳しく非難しているが、おそらく、ウェストミンスター寺院についての事例を念頭に置いてのことなのだろう。また、俺としても、率直なところを十分に発揮し、次の点は認めることにしよう。つまり、貴公に俺の心の内は見えないわけだから、俺の手紙のいずれにも、これ以上ないほどに辛辣な貴公の譴責に値する部分が(心痛む出来事を考慮に入れる場合だが)あるかもしれないという点だ。だが、まったくの話、ジャックよ、ある時はくだらない野望のことを口にするかと思えば、またある時には、飛び交う砂時計だの恐ろしい夢の話だのを持ち出すといった塩梅で、貴公はまさに悲喜劇を地で行くような奴だから、プライアの詩句にもあるように、「厳粛なるものを汝は茶番に変える」(六九)ことになるのだよ。そして、貴公が筆にするものに目を通すと、上品さや真面目さの枠内に踏み止まっているのは不可能になってしまうのだ。

だが、自分を抑えるためにも(何しろ、根が陽気な質なもので、またぞろ浮かれ気分に流されてしまいそうだったのだ)、重ねて言っておこう。何度でも繰り返さねばならないのだが、俺は今回の事態にはとてつもなく心を動かされているのであり、もしもこの手本とすべき人物が実際に世を去るようなことになれば、たとえ俺のほうはメトシェラ(七〇)の齢まで生きるとしても、丸々一時間を楽しく過ごすようなことは二度となくなるはずだ、ということだな。

実際の話、この深い懸念にこそ俺の軽薄さは由来しているのだよ。というのも、俺はも

がき争い、残酷な反省の思いが湧いて来るにつれ、それを叩き潰そうと試みるのだ。そして、それが出来ない時には、何度も言って来たように、笑おうと努力せずにはいられなくなるのだ。泣き出さないためだ。何しろ、そのどちらかをしなくてはいけないわけだからな。それに、俺が時々掻き立てられているような心の乱れを克服すること、そして、その嵐の最も激しい時に、声を震わせて馬鹿笑いが出来るということ、これこそ哲学の極みというものではないのかな。

例のセネカだのエピクテートスだのといった連中、そして、いわゆるストア派の残りの者たちがあのアパテイア（七二）とか称するたわごとを総動員したところで、この域まで到達するわけには行かなかったのだよ。連中にしても、しかめっ面を堪えることは出来ただろう。肉体の苦痛に耐えているかに見せるのは実に巧みなものだったよ。そして、それですべてなのだ。ただ、打ち砕かれた心の痛みを笑い飛ばすことは出来なかったのさ。他人の愚行を笑うことは出来てもな。連中は真面目な教えを説いてくれたわけだが、連中が真面目だったということだな。この上なく心を苦しめる悲しさのただ中にあって、今まさに心の琴線もバラバラに裂けようとしている時に楽しげに笑ってみせる、この哲学の極みというのは、貴公のラヴレースにこそ取っておかれたものなのだよ。

気質に由来する部分があることは認めよう。また、今が我が人生の笑いの時であることもだよ。年齢は二十六、七で血気に溢れ、生まれつき陽気な性質をしているし、歌も歌えばダンスも踊れて筆も立ち、そのすべてに亘って、自分も楽しめば他人を喜ばせもするという、そんな男を丸々一時間悩ませることが出来るような悲しみは、それこそ大変なものに違いあるまい。だがしかし、俺の嘆きというのは、喜びの場合も同じだが、他の多くの人間のものよりもさらに鋭く強いのだ。それで、ドリー・ウェルビーが陣痛の説明として前に話してくれたことと似ているわけだが、もしも平静な時期がないとしたら、痛みは生じたり消えたりするのではないとしたら、耐える術もなくなってしまうことだろう。

∴

∴

ともかく、愛しの君からほど遠くないところにいるのだし、彼女の容体もはなはだ良くないのだから、一度彼女を訪ねる件だが、俺としては辞退するわけに行かないように思うのだよ。しかしながら、彼女がそんな瀬戸際［俺の心がショックを受けないような、どんな言葉を用いれば良いというのだ　…　］に臨んでいると思えば、また、訪問を受けることで、はなはだしく落ち着きを失うと思えば、その件は考えないことにするつもりだ。とはいえ、思い返すにつけ、どうして耐えられるというのだ。最後に俺の元を離れた時（彼女の潔白さは俺の計画的な犯罪行為を優に凌ぎ、生きようという気持ちを再び彼女に抱かせたり、あのように堂々と耐え忍んでみせた被害の数々への拘りも超越させたりするほどなのだから）、心に癒されることのない傷を負うて彼女が立ち去るとは、そして、俺にとっては、あれが彼女の姿を目にする最後になろうとは　…　このことを思い返す時、どうして、どうして耐えることが出来るというのだ、この俺に。

あゝ、ジャック、貴公のなまくらな非難の言葉にすら鋭さを加えることになる俺の良心とやらが、この身を八つ裂きにしているのだよ。今この瞬間も、いつもの陽気さを一閃させることで、無情にも非難がましい言葉を投げつけている人間を追い払えるのなら、どん

なことをしても構わない気持ちなのだ。自分自身が嫌になってしまう。自分の下劣なたくらみを思い出すと、吐き気を催すのだよ。俺の得た軽い、束の間の恍惚感についても同じことだが［下劣な押し込み強盗だったのだよ、俺は。凶悪犯で盗人だ］、そいつがこれほど長続きのする、これほど重くのし掛かる後悔の念を我が身にもたらしているのだ。どんなものだってくれてやるぞ。神の創造物の中でも最も優れた者に対し、あんなにも野蛮で恩知らずな背信行為を犯さずに済んでいたのであればな。

もっと威勢の良い一行をもって結びたい気もするのだが、どうしてもそうはならないのだよ。そこで、次のように言わせてもらうので、貴公としては大いに悦に入るが良いだろう。もしもそうしたいのならな。

言いようもなく惨めなり。

手紙　八十五

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

九月二日　土曜日　朝

ちょうど今届けられたのだが、貴公の手紙からわずかな喜びを与えられているところだよ。貴公にも少しばかり人間らしさの残されていたことがこれで分かるというものだ。貴公自身はもとより、敬愛する令嬢のためにも、貴公の魂の暗く忘れ去られていた隅々のすべてから、その人間らしい気持ちをもう少し早めに捜し出してくれていたならと、心の底から願う次第だ。

令嬢は生きている。平静で落ち着いており、あの見事な知力も明晰でしっかりとしたままだ。しかし、わずか十九という若さでも、彼女を救うことは出来ないのだろう。今はもう、控えの間での礼拝の勤めと、教区司祭に訪ねてもらうことで満足するし、外出を試みたりはしないつもりだと、彼女は言っている。また、正直なところ、階段を一階分歩いて昇り降りするようなことは、彼女には二度と再びなさそうにも思われるのだよ。

本当に残念に思う。このようなことを言わねばならないのはな。だが、貴公に阿るような真似をするのも、愚かな話だろう。

貴公が令嬢と会うことについてだが、この時点では、その種のことをほんの少しでも仄めかせば、彼女の命を数時間縮めるものと確信している。

彼女の平静さに寄与している事柄というのは、どうやら、発作に見舞われたことが警鐘となり、遺言書の作成をすっかり完了し、署名の上、封緘を終えたからしいのだが、その件については、彼女も話していたように、一部の文言に変更を促す何らかの吉報がハーロー邸からもたらされることを期待し、これまで引き延ばしていたのだよ。

ハウ嬢からの手紙は、昨日の午後四時まで令嬢に手渡されることはなかったが、ちょうどその時、使いの者が返事をもらいに戻って来た。

令嬢としては体調も芳しくなかったわけだが、食堂で男と会い、ハウ嬢の要望どおりに数行認めようとしたのだ。ところが、ペンを持っていることが出来ず、次のように伝えてくれるよう、使いの者に命じたのだよ。翌日の郵便集配時までには具合が良くなって、長い手紙も書けそうに思うので、今はあの男を引き止めたくはない、とだ。

土曜日　午後六時

今訪ねて来たのだが、令嬢はハウ嬢宛に手紙を書いているところだった。彼女の挨拶の言葉は悲しくなってしまうようなものだった。ハウ嬢の手紙を見せていないけれど、何故かといえば、すぐにも俺はその手紙を、そして、彼女の手紙すべてを目にすることになるはずだからだ、というのだよ。ただ、令嬢は次のように話してくれた。ハウ嬢が大変思慮深いことに、モーデン大佐と俺の間に誤解を招き兼ねないいくつかの点を、大佐には知られないようにしてくれたし、また、君の行為のある部分についても、事を丸く収めるためだが、それ相応のものよりは緩やかな解釈を加えてくれたというのだ。

令嬢は次のことも付け加えていた。つまり、彼女のため、従兄弟のモーデンが身内の者たちと熱心に折衝中なのだそうだ。また、ハウ嬢の手紙には良い知らせが一つ含まれているとのことで、父親は一部の事柄を放棄する考えであるが、そのことにより（本来が彼女に属しているものだから）、彼女としても少々辛く思っていたいくつかの点で、遺言執行人としての俺の役目がその分楽になるはずだ、というのだよ。

体力がないため、途中で（書いていた手紙についてだが）投げ出さねばならなかったことは、彼女も認めていた。

ウィルの言では、今晩中には君のところへ着くそうだ。朝のうちに使いを出すことにする。彼女の容体が悪化していないことが分かれば、エッジウェアまで馬で行き、午後に戻るつもりだ。

手紙　八十六
ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

八月二十九日　火曜日

大好きな大好きなお友達へ

私たち、やっとのことで帰宅いたしました。私はロンドンでお傍に伺うつもりでいたのですが、母の具合が大変悪いのです。あゝ、困ったことに、本当にとても悪いのです。それに、貴女もひどくお悪いのでしょう。そのことは二十五日のお便りで分かります。こんなにも身近で親しい、そして、優しい人を二人も失うことになるとしたら、私は一体どうしたら良いのでしょうね。母は昨日、帰途の最後の宿場で具合が悪くなったのですが、激しいひきつけと高熱がありまして、お医者様も危ぶんでおられるのです。

万が一にも母が亡くなったりいたしますと、母に対して取りました私の生意気な言動のすべてが、真っ正面からこの身に襲いかかってくることでしょう。何故でしょうね。どうして母を悩ますような真似をしていたのでしょうね。私はどこまでも親孝行で、言うことを聞いてくれたと、母はそんな言い方をしてくれるのです。優しいことに、私の落ち度はすべて忘れ、幸いにも母の気持ちに沿うことの出来ました事柄をすべて思い出してくれるのです。そして、これが私の胸にはぐさりと突き刺さるのです。

分かりますわ。私には分かるのです。貴女のとてもお悪いことが　…　そして、それが耐えられないのです、私には。お願いですわ、大好きなハーローさん、回復することがお出来になるのでしたら、どうか、私のために良くなっていただきたいのです。そして、そ

の旨を一言お知らせ願います。一行でも使いの者に持たせてほしいのです。私に宛てて一行、必ずお届けくださいね。もしも貴女を、私にとりましては妹以上の人を、そして、母を失うようですと、私は自分自身の行いに疑念を抱くことでしょうし、結婚もしないでしょうね。それに、どうして結婚しなくてはいけないのでしょうか。結婚の承諾を得るためには、這いつくばったり、諂ったりするのですからね。あゝ、この殿方連中ときたら、私たちに勢いのあります時には下劣な爬虫類の仲間といったところですのに、自分たちが力を握りますと、まったくの熊になってしまうのです。ご覧のとおり、容姿の点で、生まれの点で、そして、財産の点でも、望ましいもののすべてがラヴレースにはございます。でも、その心の中に見えますのは悪魔なのです。ヒックマンさんをご覧になれば　…　正直なところ、私には分かり兼ねますわ。四六時中あの人のことを宣伝するなんて、他人様は一体何をヒックマンさんの中に見つけているのでしょう。それに、母から監督されますのもなかなか耐えられない私ですのに、夫の支配に甘んじるようなことが期待出来るものでしょうか。しかも、私よりも機知に溢れているわけでも、理解力が優るわけでもない夫からです。なのに、そのような人が私の導き手になろうというのですからね。想像いたしますに、そのつもりなのでしょうね、あの人は。でも、高飛車なご意向によるところのほうが大きいのですわ。あの人の助言が功を奏してということではないのです。そのようなことは考えるだけ無駄でしょう。今私が存じ上げているどの男性であれ、その人の妻になるわけにはまいらないのです。この点は今だからこそ申し上げるわけですが、と申しますのも、母が危ないことをお知りになって、万一にも母を失うような場合を考えまして、なおさら急いで別の種類の保護の手に身を委ねるようにと、貴女が急き立てて来られるのは分かっているからなのです。でも、この話題につきましては、いいえ、他のどんなことについてもですが、もう止めにいたしましょう。母に付き添わねばなりませんからね。私の姿が見えませんと、我慢が出来ないのです、母は。

八月三十日　水曜日

有難いことです。母は熟睡出来まして、ずっと良くなりました。お薬が効いて、熱も下がったのです。これでまた、自由に、寛いだ気持ちで貴女宛に筆を進めることが出来ますわね。貴女も回復しておられますよう、期待してのことです。私の祈りに対しまして、この点を聞き届けてもらえるようでしたら、私はもう一度幸せになることでしょう。貴女と密接な関わりのある話題なのですが、その件に触れる機会を与えられ次第、今までよりも一層てきぱきと筆を執るつもりでおります。

そこで、ご承知おきいただきたいのですが、お従兄弟さんのモーデンさんが私のところへ来ておられたのです。月曜日にM卿のお屋敷で持たれたラヴレースとの面談のことを話してくださり、貴女のこと、そして、あの悪党のことについて、私に山ほど質問をしておられました。

私にその気があれば、あの人たちの間に勢いよく炎を燃え上がらせることだって出来たのです。でも、お従兄弟さんがとても激しやすい男性であるのは看て取りましたし、剣の腕が立つことで知られている男と争った挙げ句、あの方に何かあるようですと、貴女はきっと惨めなお気持ちになるはずと考えまして、私たちが話し合いました事柄を悪いことに利用するような真似はいたしませんでした。でも、あの男のために偽りを口にするわけに

もまいりませんので、あの恥知らずに対する呪いの言葉をお従兄弟さんに吐かせるくらいのことは、私もたっぷり申し上げておいたとお考えいただかねばなりません。

モーデン大佐のことは、皆さん揃って大層尊敬しておられたものですが、私の見ますところでは、何らかの和解条件へと皆さんを引き寄せるだけの、それほどの影響力をお持ちだとは思われないのです。

一体どういうおつもりなのでしょうね、皆さんは。ただ、お兄様が戻られたらしいのです。それで、家門の誉れだ、一族の評判だと、声高に叫ばれているのです。

大佐は皆さんに対して非常に気分を害しておられます。でも、これまでのところ、貴女の野蛮なお兄様には会っておられないようです。大佐には、貴女のご容体がひどく良くないことをお話しいたしましたし、お手紙の内容の一部もお伝えいたしました。大佐は貴女を褒めたたえ、ラヴレースを呪い、そして、ご家族の皆さんのことは口を極めて非難なさいました。皆さん全員は貴女に相応しい人間でないのだと、あの方はそのように断言しておられました。

あの方から熱心なお求めがございましたので、私宛のお手紙の文面のうち、読んでお聞かせしても構わないと思われますもの、とりわけ、心の痛みます結びの部分(ア)につきまして、手短に書き留められますのを許して差し上げました。

あの方がおっしゃいますには、貴女がそんなにもお悪いとは、お身内のどなたも考えておられませんし、信じようともなさらないのだそうです。皆さんが貴女を愛していらっしゃるのは、それも、深く愛していらっしゃるのは確かだと考えておられます。

もしもそうであれば、今皆さんが取っておられる非情な態度は、仮にも、貴女が私どもから奪い取られるようなことになるとしたらですが、永久に続く後悔の種となることでしょうね。でも、これで分かるわけですが［残酷無情な人でなしですわね］、どうやら、貴女は〈半殺しになるまで〉苦しまれる定めなのでしょう。

あの方はベルフォードさんについて尋ねておられました。あの殿方について私のほうから申し上げるべきこと、そして、貴女に対する私利私欲を離れた献身ぶりのことをお聞きになると、あのお節介で学者気取りのブランドによって投げつけられた、貴女に関するいくつかの下劣な憶測のことを激怒しておられましたが、このブランドというのは、法服さえ着けていなければ、お従兄弟さんとラヴレースとの間では、実に哀れな姿を晒すことになる人物のように思われます。

あの方自身、貴女のことをとても案じられまして、二十四日の木曜日のことですが、貴女のご様子や訪問者などのことを尋ねさせるため、農場を経営している、オールストンという名の、正直で真面目な人物(イ)を派遣なさったところ、貴女のご病気はとても重く、暮しのほうも大変難儀しておられるという知らせをもたらしたのです。ただ、この点は貴女が下宿しておられる家の婦人から教えられたことですし、その婦人が、どうやら、貴女のご親戚の無情さにつきまして、当然のものではありましょうが、辛辣な非難の言葉を交えていたらしいこともありまして、その報告も皆さんからは信用していただけなかったのです。それに、私自身といたしましても、本当ではないことを願っているのです。と言いますのは、敢えてこのように申し上げますが、お金がないために少しでも不自由な思いをな

(ア) 百八十一頁から次頁にかけてを参照のこと。 (イ) 百五十五頁を参照のこと。

さるほど、私の友情をそんなにも不当に扱われるようなことは、まさか、貴女にはお出来にならないはずだからですわ。もしもそのとおりだといたしますと、貴女を許して差し上げるわけには行かないように思います。

貴女がご自分の地所を入手出来ますよう、大佐は（貴女の管財人の一人として）取り計らう決心をしておられます。そして、差し当たりましては、お祖父様が亡くなられた後であの地所から得られました収入を（大変な額です）貴女にお贈りするため、ご自分宛に送金してくれるよう、現に皆さんの約束を取り付け、それを持参の上、貴女のところへ伺うことを提案しておられるのです。でも、あの方が漏らしておられたお言葉からいたしますと、お金や生活用品の送付をお願いする手紙を出されなかったことで、貴女は一部の方たちの浅ましい考えの裏をかかれたようなのです。と申しますのも、その人たちは貴女を苦しい状況に追い込み、その上で無視しようと、心に決めていたからなのです。

他の皆さんと同じようにですわ　…　そのように申しましても、無礼には当たらないものと存じます。

お従兄弟さんの推測によりますと、和解に至ります前に皆さんのほうでは、あの地所に関してですが、貴女が皆さんのご意向に沿う遺言書を作成なさるよう、主張するはずだとのことです。でも、あの方は次のように断言しておられます。一人残らずすべての人たちから貴女に対して正当な扱いが為されますのを、そして、貴女が味方とか敵とか、いずれからもつけ込まれることのないよう見届けられますまでは、イギリスを離れはしないとおっしゃるのです。

「縁続き」とか「敵」とかからと、あの方はそうおっしゃるべきだったのではないでしょうか。だって、味方の人が味方につけ込むようなことはないでしょうからね。

ですから、だれかさんたちが自分の欲するところを押し通そうとするのでしたら、貴女はご自分の〈心の平安を買い取る〉べきなのですわ。

お従兄弟さんが言っておられるのですが［宜しいですね、私ではありませんよ。もっとも、それが常日頃からの私の意見ではありましたが］(ア)、謙虚に振る舞うとか思いやりを持つとか、あるいは、足るを知るとか、そのいずれのためにも、ご一族の人々すべてはあまりにもお金持ちすぎる、というのです。そして、ご自身につきましては、十分な財産を持っておられるとのことで、そのすべてを貴女に遺贈なさるお考えなのです。

この悪党のラヴレースが現世的な利益の点だけを念頭に置いていたのでしたら、貴女によってどれほどの財産を手にしたことでしょうね。たとえ、あの男との結婚のせいで、お父様から頂く分を取り上げられたとしてもです。

ここで中断しなくてはなりません。でも、まだ書くことがたくさんございますし、母の具合も良くなっておりますので、この件につきましては、発送は一緒にいたしますが、別便の形で筆を進める所存です。今も、そして、これからも、私が左記のとおりでありますことは申すまでもないことと存じます。

貴女の親愛なる

アナ・ハウ

（ア）第一巻の四十三頁を参照のこと。

手紙　八十七

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

八月三十一日　木曜日

大佐はそれが適当なこととお考えになったのでしょうが、一度、ラヴレースの寛大さに対する褒め言葉として、次のように言っておられました。あの男は（名誉を重んじる男なら当然のことだが）責めのすべてを自分自身で背負い込み、貴女の取られた早まった行動の結果について、貴女には責任がないことにしていた、というのです。あの方がおっしゃいますには、貴女はあの男を愛しておられるし、あの男の掌中のものとなっておられるわけで、あの男としては、貴女がお父様のところに残られるとか、どなたかお身内のところに居られた場合には得られなかったような、そんな有利な立場を掴んでいたに違いないのだから、とのことでした。

「本当に寛大なことですわね」と、私は（あの方が推測しておられるとおりならばですが）申しました。「あのように傲慢無礼な中傷家たちにいたしましてはね。その最善の者にしてもですわ。連中は汚名を雪いで上げるふりをしておりますが、あの汚らわしい連中と知り合ったりしなければ、決して汚れることのなかった評判なのですからね」とです。でも、この件に関しましては、私は次のように言明いたしました。ラヴレースが悪人の中でも最も腹黒い人間であり、貴女が潔白な人の中でも最も輝かしい方であることを証明いたしますのに、厳然たる事実以外には何ものも必要ないのだ、とです。

あの方はこの言葉に飛びつき、次のように誓っておられました。貴女がお身内の方々に出されたお手紙の中の一通で、あの方に見ていただいたものが現に強く暗示していることなのですが、誘惑の手口に何か尋常ではないこと、あるいは、粗野なことが見つかるようであれば、つまりですね、偽証や背信の行為、そして、惜しみなく寄せられた信頼の悪用といったものよりもさらに悪辣なことが何か明るみに出るような場合にはですが、あの方といたしましては［困った人たちですわね］、ご自分のお従姉妹さんの恨みを徹底的に晴らすつもりだというのです。

私宛の前回のお手紙を基に、この点に関しましてのご懸念のほどを私は力説いたしました。でも、真の心の大きさと承知いたしておりますものを、取るに足らない意味合いに受け止めることも、あの方にはお出来になるご様子でした。と申しますのも、そのことを耳になさいますとすぐに、あの方はお身内の方々が期待しておられる点にお触れになったのです。つまり、貴女は（皆さんとのどのような和解にも先だって）あの悪党を訴えて法廷に出るべきだということです。私のほうではその可能性を示唆いたしましたが、貴女ご自身の有利に働くよう進めることがお出来になるならば、という条件なのです。

そして、本当の話、もしも耳をお貸ししていた場合にはですが、あの方は不躾にも、皆さんがラヴレース糾弾のための根拠にしたがっておられる、その犯罪行為を立証する事柄の本質にまで立ち入ろうとなさったのです。でも、旅と学問とによって向上を遂げた男性と申しますのは、こんなところなのです。まったくの話、光栄にも貴女を存じ上げることになりましてからというもの、上品この上ない会話にいつも馴れ親しんでまいりました私といたしましては、上は紳士から下は農夫に至りますまで、男性というものには軽蔑の念を覚えてしまうのです。

全体的に見ますと、モーデンさんは女性の美徳に対し、特別な事例につきましては、大層貧弱なご意見をお持ちのように思われます。そんなわけですから、貴女のお気に入りの人ではございますが、〈先頭に立って非難をする〉資格は持ち合わせない人のように私は見ているのです。

女性全体の道徳観念を軽く見ている男性で、当のご本人が品行の点で良い評価を受けるに値するという、そのような人物を私はこれまで一人として知らないのです。と申しますのも、気質や躾の違いがございますから、もしも、慎み深さや貞節さ、それに、敬虔さもですが、それらが男性よりもむしろ女性の中に見出されるようでなければ、これは、はるかに悪い性質が私たち女性の中に潜んでいることの表れのようにも思うからです。

あの方はこんなことさえ匂わせておられました（実際には、縁続きの方々のご意見とのことです）。強い愛があるところに、何らかの意思が働いていないはずはない、とです。

自分自身の名誉、そして、女性の名誉というものを心掛けております女の人に周囲に目を配らせ、また、こういった恥知らずと親しくし始めます際に、自分が一体何をしているのか、そのことを考えさせますのには、この種の非難で十分ですわね。何しろ、女性が男性の手中に身を投じ、その男性のために両親とか保護者とかの元を離れます場合にはいつだって、だれもが次のように思い込むのは明らかですからね。つまり、もしも操が保たれるといたしますと、それはその女性の思慮分別のお陰というよりは、運が良かったためだと考えるということです。そして、相手の男性がどれほど恥知らずな接し方をするといたしましても、女性としては、その破廉恥さのいくらかを自分のものとして胸に収めておかねばならないのです。

私が筆にしておりますのは、一般的な事例なのです。貴女は問題外ですわ。これまでにも申してきたことですが、貴女の身の上話はお手本になりましょうし、同様に、警鐘ともなることでしょうね(ア)。と申しますのも、貴女のように財産に恵まれ、しっかりとした立派な方でも、ハイエナのような男の手中に身を委ねられた後では、破滅を免れることは出来ないというのでしたら、思慮の足りない、盲信的で軽率な娘さんにはどんなことが期待出来るのか、察しのつかない人などいないでしょうからね。

誰も彼もがラヴレースというわけでもないのだと、人はそう言うでしょうね。確かにそのとおりですわ。だといたしましても、すべての女性がクラリッサさんというわけでもないのです。一方の点を、そして、もう一方の点も考慮に入れますと、このお手本は広く役立つものに違いないのです。

あるお仕事のために、貴女がベルフォードさんを指名なさったことを予想してもらいますよう、モーデンさんには心の準備をお願いしたのですが、この先長年、幾年月に亘りまして、あの人に（他のどなたにもですが）働いていただく必要など起こりませぬよう、私たちが共に願っておりますお役目の件です。それをお聞きになると、あの方は最初驚いておられましたが、貴女の理由の中で、私には納得の行きましたような事柄を耳になさいますと、あの方はただ、このような指名は、もしも実行に移された場合、他のいとこたちに極めて大きな影響を及ぼすことになるだろうと言っておられました。

あの方がおっしゃいますには、貴女の許しを請い、許しを得るためならいかなる苦行も

(ア) 第四巻の四十三頁を参照のこと。

耐え忍ぼうと申し出ている、貴女宛のラヴレースの手紙の写し(ア)、そして、それに対する貴女からのお返事(イ)も持っておられるとのことでした。

やはり貴女たちお二人は結婚することになるかもしれないと、あの方はそう考えたがっておられるように見受けられます。それで諍のすべてが丸く収まることになる、とおっしゃるのです。

もっといろいろと筆を進めるつもりでおりました。特に、次の点についてですが、あの浅ましい男が貴女を下宿から追い出した件、縁続きの方々の訳も分からない無慈悲さのこと［急いでおりまして、もっと貴女のお気に召す言葉は、今のところ思い浮かばないのです］、貴女を追い掛け回すことから気を逸らせるためですが、ラヴレースに宛てた貴女の最後のお手紙のこと、ノートン夫人との間で交わされましたハーヴィ叔母様の懺悔のお言葉のこと、ワイアリーさんから改めてございました貴女への求婚のこと、ヒックマンさんのためを思われての、私への様々な教訓　…　これは、あの人が実際よりも称賛に値する人なのでしたら、大いに賛同出来るものですが、正直な話、今この瞬間も、そして、ここ二日間というもの、あの人のことを腹立たしく思っているところなのです　…　お姉様の流刑の目論見のこと、そして、その他にも数え切れないほどです。でも、筆を置かなければならないのです。母の病気見舞いに来ているのですが、従姉妹のスピルズワース姉妹、それに、従兄弟のハーバートとお付き合いをするためです。従いまして、この二通を急いでロジャーズに届けてもらいます。母がすぐに良くなるようでしたら（そう願っておりますが）、上京いたしまして、貴女に会う覚悟でおります。そして、今私の心を占めております事柄のすべてを貴女にお伝えする所存です。とりわけ、私が今どれほど、また、これからもずっとですが、貴女のことを愛しているのか、私の一番大切な大好きなお友達、心と心を重ね合いながら、そのことをお話ししたいと思うのです。

貴女の親愛なる

アナ・ハウ

一行でもロジャーズに持たせてくださいますよう、どうかお願いいたします。今日の午後にもロジャーズを使いに出そうと考えておりましたが、明日の早朝までは出掛けられないのです。

貴女の文字の乱れ、そして、結びのお言葉がどれほど私の心を掻き乱すことか、言い表しようもございません。

手紙　八十八

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

九月三日　日曜日　夕刻

君の召使の話では、俺の便りを待ち兼ね、君は苛立ちを露にしているそうだが、それも無理からぬことと思う。君宛に長い手紙を書こうと思い、そのためにスミスの店からちょ

(ア) この巻の手紙二十八を参照のこと。　(イ) この巻の手紙三十二を参照のこと。

うど戻ったところだったのだが、君はそうまで急かせるわけだから、ひとつ、短いもので満足してもらわねばならんな。

今朝、エッジウェアへ向けて発つ直前だが、令嬢のところへ伺った。令嬢は一晩中ひどく具合が悪かったため、ハウ嬢に宛てた手紙も書きさしのままにしておかねばならないほどだったのだ。だが、今朝早くに書き終え、俺が着いた時には、ちょうど封をしたところだった。令嬢は書き物ですっかり疲れ果てており、俺が出掛けたら横になり、気力の回復に努めるつもりだと話していた。

令嬢が昨夜ひどく悪くなった時、連中はゴダード氏を呼びに使いを出したのだ。氏と会うために自室を離れることが令嬢には無理であったため、氏としても、彼女が自分の〈住まい〉と呼んでいるものを初めて目にすることになったのだよ。氏は極度にショックを受け、気を揉んでもいた。そして、このようなものは寝室から撤去してもらうよう、彼女を説得しなかったからということで、スミスの上さんとロヴィック夫人を咎めていた。そして、自分たちよりもはるかに優れた淑女が相手では、そう考えて当然であろうが、連中には権限がないことを根拠に言い訳をすると、氏のほうでは、もっと強い権限を備えている者、そして、氏に言わせるなら、ショッキングかつ儀式張った気紛れというわけだが、そんな振舞いを彼女に許した者たちのことを、激しい口調で非難したのだ。

それはハープシコードのように窓辺に置かれているが、床まで覆いを被せてある。具合がひどく悪く、控えの間へ移ることもままならない場合には、令嬢は他の者たちが机やテーブルを使うように、その上で書き物や読書をするのだ。ただ、だれとであれ（昨夜はそれだけ具合が悪かったわけだが）、あの部屋では人に会いたがらないのだよ。

俺はエッジウェアへ出掛けた。そして、夕方戻ると、再び令嬢の元へ伺った。俺が着く直前のことだが、彼女はノートン夫人から届いた便り（その嵩からして、長文のものらしい）を手にしたところだった。ただ、開封はしておらず、こんなことを言っていた。気持ちがかなり穏やかで落ち着いていることもあり、心を乱されては困るから、文面に目を通すのが怖い気もする、とだよ。彼女が自分の親戚をそう呼んでいたわけだが、あの善良な婦人の「親愛なる冷酷無情な隣人たち」からは、自分の利益となるような知らせ、あるいは、喜びをもたらしてくれるような知らせが今はもう一切ないものと考えてのことだ。

令嬢がひどく衰弱し、具合も悪いのを見て、俺は退出した。また、留まるよう、彼女のほうから頼むこともなかったのだよ。俺が暇乞いの動作をすると、引き留めようとすることも時々はあるのだがね。

帰り際に、スミスの上さんからそれとなく言われたことなのだが、令嬢はその晩をある仕事のために割り振っていたというのだ。令嬢の言い方では、自分が世を去った後の面倒を省くことになる、というものだよ。そして、臨終の際にしたいと思っていることについて、看護婦とロヴィック夫人に、そして、スミスの上さんに指示を与えたのだ。俺が思うには、極めて微妙で、かつ、心の痛むようなものであったに違いない。ただ、スミスの上さんも具体的なことまでは触れてくれなかったのだよ。

ゴダード氏同様に医者も令嬢と会い、両人揃って、彼女の〈住まい〉を目に入らないところへ撤去してもらうよう、すこぶる熱心に説いて聞かせたのだよ。だが、彼女のほうでは、それが喜びと気力を与えてくれるのだと、二人を安心させていた。そして、欠かすことの出来ない準備ではあるし、また、彼女に言わせるなら「礼儀作法」ということになる

のだが、この種の几帳面さについての配慮や厳密さを頼りに出来る家族の者とか、古くからの知人とかが一人として身近にいないこともあるので、二人がこの件に関して驚いて見せるのは不思議に思われる、というのだな。

医者はスミスの上さんに次のように話していた。彼が信じているところでは、令嬢は身内のだれかが彼女の容体についての通知を受け、彼女と会うまでの間は持ち堪えるはずであり、それ以上はまず無理だろうというのだ。また、彼女が従兄弟のモーデンと会う確かな見込みにしても、少しでもあるようには思われないので（彼女の身内たちは相変わらず態度を変えていないことが、それではっきりするのだが）、彼女がどのように受け止めるとしても、彼としては、家に戻って彼女の父親宛に一筆認めたいというのだよ。

令嬢は一日の大部分を熱心な祈りのうちに過ごした。そして、明日の朝には、これまで何度も彼女の元を訪れていた、あの同じ牧師を迎えることになっており、その手から改めて終油式を受ける予定なのだ。

貴公にも分かるだろうが、ラヴレース、万端の準備が進められており、すべての用意が整うということだよ。明日の午後には令嬢のところへ伺うことになっているが、彼女のために果たされるべき任務のうちの俺の役割について、彼女からいくつか指示を受けるためだ。こうして、彼女とロヴィック夫人の間で交わされ、夫人が俺に教えてくれた立派な話し合いの詳しい話、それに、今夕君に知らせようと思っていたものだが、医者並びに薬剤師と彼女との間であった別の会話をも省略することで、君の苛立ちに屈して見せたというわけだよ。

明日の朝早く、ハウ嬢に宛てた令嬢の手紙を持たせ、ハリーに急ぎの使いをしてもらおうと思うのだが。彼女も大いに親切なこととして受け入れてくれた申し出だ。土曜日の便では音沙汰がなかったというわけで、自分に対してあの若い淑女が抱く不安を軽減したいものと、令嬢はしきりに願っているからだよ。しかしながら、そうするのは疑うべくもないところなのだが、もしも令嬢が本当のことを書くとしたら、あちらのお嬢さんの不安は一体どのようにして軽減されるというのだろうな。

手紙　八十九

クラリッサ・ハーロー嬢からハウ嬢へ

九月二日　土曜日

大好きなハウさん、まだ体具合はひどく悪いのですが、お便りをいたします。でも、お使いの人がお戻りになるまでには無理でした。あの時には、ペンを持っていることも出来なかったのです。

お母様のご病気の件ですが（お手紙の最初の部分で触れられていたことです）、もっと先のほうへ読み進みますまでは、貴女のことがございますので、とても悲しい思いをいたしました。それだけの分別を備えた娘さんにいかにも相応しい嘆きようでしたね。貴女たちが今後とも長い長い年月に亘りまして、お互いに幸せを見出されますよう、お祈り申し上げます。この突然の、悲しいご病気にいたしましても、貴女に強いました精神状態の点か

ら、また、そのように大切なお母様を失うのではないかとの不安を貴女に与えました点からいたしましても、私が貴女のために願っております幸せに寄与することになりますのは疑いのないところと存じます。と申しますのも、残念ながら私たちには、自分たちが享受しております幸せをどう評価したら良いのか、それを無くしてしまう危険に陥るとか、実際に失ってしまいますまでは、滅多に分からないものだからです。また、失ってしまいますと、返してもらいますために、どのような犠牲を払おうとすることでしょう。

一体、どのようなことがまた貴女とヒックマンさんの間にあったというのでしょう。私には分からないことですけれど、おそらく、ちょっとした癇癪のせいでしょう。あの人の親切心やお心遣いに意地悪半分でつけ込んでおられるからなのでしょうね。貴女が、そして、私たち女性全員がそうして当然なのですが、男性に見られます生活態度の謹厳さや規則正しさという美点に重きを置くことは、貴女にはどうしてもお出来にならないのでしょうか。厚かましい人たち、そして、でしゃばりな人たちがいつまでも、一番親切に扱われねばならないということでしょうか。それも、最も思慮分別に欠ける者たちによってと同様、私たちの中でも最も優れた、最も賢い人たちによってもです。

実際に、私が〈半殺しになる〉よりももっと苦しい思いをしておりましたことは、私の愛する身内の者たちは知らないことなのです。

ブランドさんもお気の毒な話です。善かれとのお気持ちからと確信いたします。何もかもがあの人には重くのし掛かって来そうで、心配いたしております。希望に応えるべき最善の方法を自分は採っているのだと、おそらくそのように考えておられるのでしょうからね。でも、たとえあの人があんなにも軽々しく信じたり、愚かしいほどにお節介を焼くようなことがなかったといたしましても、また、もっと好意的な、そして、こう言えなくてはおかしな話ですから申しますが、より〈公正〉な報告をしてくださったといたしましても、それにも拘らず、事態はまさしく現状のままであったことでしょう。

ペンを置かねばなりません。とても具合が悪いのです。そのうちに良くなるものと思います。乱筆のため、露呈することになるのでしょうね。貴女には隠しておきたい事柄なのですが、あの時がまいりましたならすぐにも　…

震えるペンをまた進めることにいたします。不揃いな筆跡をお許しくださいね。本当にとても　…

私、お金に困ったことはないのです。ですから、お金のようなつまらないもののことでお怒りになってはいけません。でも、望みを抱くよう、私の気持ちを動かしてくださった事柄、つまり、身内の者たちの手に委ねられました後の祖父の地所からの収入を、皆が放棄してくれるという点につきましては、私も嬉しく思っております。と申しますのは、あの地所は私に権利があるということ、そして、皆にとって必要なものではないことを承知しておりますので、あの地所の大部分はすでに処分をしてあるのです。私の最後の求めがあり次第、皆が快く放棄してくれますことを希望するだけです。そして今、この最後の段階に至りまして、自分は何というお金持ちなのだろうと、私は考えることでしょう。とは申しましても、これまでお金に不自由をしたことはないのです。本当にございません。だ

って、〈余分なもの〉をたくさん持ち合わせながら、欠乏しているなどという言われ方をして構わない人間がどこにいるというのでしょう。

「最後の段階」などという言い方をいたしましても、どうかご心配のなきようお願いいたします。元気盛んな時に私たちが望むものですが、その長寿にいたしましても、何だというのでしょうか。年月を重ねますにつれ、憂慮に満ちた人生に他ならなくなるのではないでしょうか。時には身内のことが、そして、もっと頻繁には、自分自身のことが心配の種になるのです。そして、やっとのことで熱望しておりました高齢に達しますと、辛い別れとか死とかが次々に起こり、私たちの愛した者一人一人が、いわば剥ぎ取られてまいりますのを目の当たりにいたしますし、また、付き合い難い哀れな連中ということで、押し寄せ群がる若者たちの侮辱や軽蔑に晒されている自分に気がつくのですが、この若者たちは私たちの財産を手に入れたいと願い、私たちを舞台から追い払おうとするのです。このすべてに加え、私たち自身が日毎に衰えて行くのです。私たちが切に願いました命をあらゆるもののうちで最大の病といたしますのには、それだけで十分ということですわね。ハワード(七二)の詩行を覚えてはいらっしゃらないでしょうか。前に一度、私の蔦の東屋で読み聞かせてくださったものです(ア)。

私の所持品の処分に当たりましては、すべてに亘りまして、思いつきますかぎりの最も公正な、そして、最善の方法で行うことに努めました。身内の者たちの立場に自分を置いて見ましたし、また、より重大な点につきましては、あたかも不和などは一切なかったかのような、そのような処置の仕方を指示いたしました。

必要に迫られております人々、また、感謝の気持ちからいたしまして、お贈りするのが当然な人たちなどへの何件かの遺贈のことですが、大袈裟には考えないようにしていただけたらと思います。でも、仮にそのような考えを持たれましても、済んでしまったことですので、今ではもう、どうにもならないのです。ただ、希望といたしましては、皆さんお一人お一人に喜んでいただけるようにしたはずと、そのように私は考えております。と申

(ア) 令嬢が言及している詩行とは、次のようなものである。

死より立ち上がり、我らは生きた。まさに同じく、
一生を費やし、出生の地へと再び我らは戻る。
理性、確信、そして、美徳の力及ばぬところで
情欲のはびこるのを知り、我らは恥じ入る。
あの虚ろで名ばかりの名誉心には死を侮ることも出来よう。
蔑まれた愛は、避難所のごとくに死の元へと急ぎ、
悲しみは憧憬のまなざしで死を待ち侘びるのだ。
希望は死の想念を打ち負かし、そして、運命は
愚か者たちを欺き、不幸者たちには阿るのだ。
束の間に朽ち果てる定めにあるものを失うのが怖く、
挙げ句には、生そのものが大いなる病と成り果てる。
我らは生を希求しつつ、さらなる衰退を請い求め、
死への旅路の長からんことのみを祈るのだ。

しますのは、最後の病に際しまして、娘とか妹とか、あるいは、親戚とかに相応しくない気持ちがわずかでも私の心を占めていたなどとは、決して考えていただきたくないからです。本当にすべての憤りから（思い切ってこう申し上げますが）すっかり解放されておりますので、今では、私が受けました厚意への感謝の念と祝福の言葉とで満ち溢れているわけですからね。もっともそれは、授かりたいと心から望んでおりました厚意のすべてではないとしてもです。仮に、もっと多くの厚意に恵まれなかったことが苦難の一つだといたしましても、かつてこれまで、娘に対して示されましたものの中でも最も愛情に満ち溢れました、十八年半に亘る厚意の数々に比べますなら、ただ半年だけの苦難にすぎないのではないでしょうか。

貴女のお話ですと、私には油断があり、弱みにつけ込まれたのだと、そのように私の従兄弟は考えているようですね。本当に、そのようなことはありませんでした。つけ込まれます弱みなどは、本当に見せなかったのです。ベルフォードさんはそのような扱いを確約してくださっているわけですが、もしも、私のことを正当に扱っていただけるようでしたら、いつの日にか、その点もお分かりいただけるものと存じます。

貴女としては（概ね不当なものではありませんご観察を基に）非難しておられるご様子ですが、従兄弟に無礼な言動のなかったことを願っております。何故ならば、大多数の男性が、自分たちの最も親しい身内の女性にあってははなはだ許し難いものだと、当然のことながらそのように考えております罪のことを、そんなにも軽んじているというのは、考えるのも悲しい話ですからね。ただ、そういった罪を犯しました暁には、必ずや他の家に害を及ぼすことになるのですが、それは、自分の家族に加えられました時には、死にいたりますまで恨まねばいけないようにも思われます害なのです。

でも、この件では、私たち女性に責任のある場合があまりにも多いのです。と申しますのも、最も操の正しい女性でさえ、男性に是認を与えます際の試金石に美徳を用いることは極めて珍しいものですから、疑いようもない美徳を備えた女性たちの面前でさえ、男の人がこの種の不行跡のことを得意げに語って見せましても、そのために追い払われるようなことはないほどなのです。放蕩児というのは、体面を繕う程度の気遣いさえも滅多に見せないものですが、それはこのような事情があってのことなのです。そして、まさしくこの点で、私たち女性はどれほど放蕩児たちからの評価を下げることになるのでしょう。また、世間の人たちの目からいたしますと、この点での私の責任は、他の多くの人々以上に重いのではないでしょうか。

私の身の上話が、真の名誉を重んじる男性よりも放蕩者のほうを好むことにつきましての、皆様への警告になってくれたらと思います。また、体に染みついた習慣を克服し、いわば、持って生まれた性質を改めるという、尤もらしい、でも、愚かしい望みによって惑わされてしまいますことへの警告となりますよう願っております。私たちも不断の経験から確信しておりますように、恋人の心の中に保持しておりました支配力を、妻として夫に対しましても持ち続けておりますような例は、まずまず幸せだと言えます結婚の場合でさえ、その十例のうちに一つあるかどうかなのですから、それだけに一層愚かしい望みということになりましょう。だといたしますと、おそらくは便宜のために結婚し、その絆については軽蔑しているような、そして、いかにもありそうな話ですが、老齢とか病気、あるいは、疾患（荒んだ放蕩生活の結果ですが）以外の何をもってしても悔い改めさせること

の出来ないような、放蕩児を自認して憚らない人間の品行に対しまして、妻はどれほどの影響力を持てそうだというのでしょうか。

とても嬉しく思いますのは、貴女が私の従兄弟に対しまして　…

日曜日（九月三日）　午前六時

ここまで書き進めまして、ペンを置かざるを得なくなってしまいました。そして、どんどん力は萎え、具合が悪くなったものですから、ここで結びとするためにもう一度ペンを手にいたしましても、ひどく震えて乱れた筆遣いとなり、昨夜の便に間に合わなくなりますことよりも、さらに大きな心配をお掛けしていたことでしょう。従いまして、発送を延ばし、私の処置につきまして、神様はどのように思し召されるのか、確かめて見ることにいたしました。そして、予想しましたよりもよく休めたこともあって、溌剌とし、頭もすっきりとしているように思うのです。そこで、手紙を続けますことでその証拠をお見せしたいと思うのですが、中断などはなかったみたいにスラスラと、先へ進める所存です。

ベルフォードさんに関しましては、大層ご配慮をいただき、とても好意的な印象を従兄弟のモーデンに与えてくださいましたこと、嬉しく思っております。そうしてくださらなかったなら、あの人たちの間には少し誤解が生じていたかもしれないからです。と申しますのも、このベルフォードさんというのは心を入れ替えた人で、やがて改心なさるものと期待しているのですが、それでも、私の確信いたしますところでは、他人に対して実際に無礼を働きますのを避けようと努めては来られなかったものと思われますし、一方、ご自身への侮辱と思われます事柄に対しましては、憤って見せるのを常のこととしておられるような、血気盛んな人間のお一人なのです。そして、この手の男の人たちというのは、世の中すべては自分たちのことを耐え忍ぶように作られており、自分たちは世間のだれのことを耐え忍ぶいわれもないと考えているみたいに振る舞うものなのです。

お話によりますと、ラヴレースさんは、私に宛てたご自分の懺悔のお手紙と、私からの返事で、あの人のことを拒み、あの人の求婚もお断りしておりますものの写しとを、私の従兄弟にお託しになるのを妥当なことと考えられたとのことですね。それに、ベルフォードさんがさらに教えてくださったのですが、ラヴレースさんはご自分の卑劣な行いをとても気に掛けておられますし、私の従兄弟に対しまして、惜しみなくご自分を責めておられたそうです。このことからも分かるのですが、真に雄々しい心というのは、下劣な振舞いに及びますのを潔しとはしないということです。また、同胞に対して故意の悪事を働いたという意識ほどに、人の心に卑屈な思いをさせるものはないということなのです。手の込んだ卑劣行為が余儀なくいたします屈従というのは、何と卑しく、何と浅ましいものなのでしょうね。あの卑劣漢にいたしましても、私にあのとおりの仕打ちをして平気でしたのに、ひどく勝手気儘で腹黒い、そして、計画的な犯罪行為への許しを得ようとして、あのように惨めな格好で這い寄ってくるというのですからね。いずれ貴女にもご承知いただくはずですが(ア)、ある出来事の際には、卑屈さのあまり、あの人のことを心から軽蔑したものでした。そして、以前にはどれほど依怙贔屓をしていたといたしましても、心からその

(ア)　氏が目論んだ二度目の暴挙（第六巻の手紙十三を参照のこと）と、令嬢の許しを乞うている、氏のその後の手紙を念頭に置いた発言である。

行いに軽蔑を感じているような男の人を拒絶いたしますのに、難しいところなどは少しもないものなのです。

ただ、私が嬉しく思いますのは、この気性の激しい人にいたしましても、このように這いつくばることが出来るという点です。こうして毒蛇のようにとぐろを巻き、その小さな輪の中に頭を隠すことが出来るという点です。と申しますのも、この卑下の態度、この屈従の姿勢からいたしまして、これ以上害毒が流れることはあるまいとの希望が湧いて来るからなのです。

私が案じております点と言えば、ただ、私が世を去りました際に起こりそうな出来事だけですが、その際に、私の従兄弟とか、家族の他のだれかとかが、何とか私の仕返しをしようと試みまして、そのために、自分たちのもっと大切な命を危険に晒すようなことになってはいけないと思うからなのです。

もしも、カインに対する呪いのうちの「地上をさまよい、さすらう者となる」(七三)というあの部分が、ラヴレースさんに向けられたものだといたしますと、つまり、あの人もそのおつもりのようですが（決して、旅行中のご不幸を願うわけではございませんが）、あの人は旅に出ることを余儀なくされるだけで、それ以上の害悪は意図されていないというのでしたら、そして、私もその点を知ることが出来るのでしたら、私は一安心することでしょう。腕に覚えのあるあの人の暴力沙汰から、望みどおりに、身内の者たちが安全でいられることになりますからね。あの人は千マイルも離れた所ですよと、あゝ、そのような知らせがあってくれたら、本当に嬉しいことでしょう。

この手紙を書き始めました時には、これほど長いものになろうとは思ってもおりませんでした。でも、他ならない大好きなお友達の貴女へのものですからね。それに、貴女が奮い立たせ、支えてくださっている元気さですもの、貴女にはそれをお求めになる権利があるのですわ。何しろ、その元気さにいたしましても、もはや私のものではなく、貴女に宛てて書くことを止めますと、その途端に衰えてしまうのです。

でも、お母様のお体具合が許すなら、都へ会いに来てくださるとのお言葉ですが。一体どのようなことに望みを託せとのご命令なのでしょう。お母様のお体具合がご希望どおりに完全なものとなりますことを私は望んでおります。でも、そのように大きなご厚意を楽しみにするわけにはまいりません。そのように大きな祝福と、私はそう呼ぶことにいたしましょう。そして、今の私にはそのようなものが耐えられるのかどうか、正直に申しまして分からないのです。

ただ、一つの慰めだけは、貴女のお力で授けていただけるのです。そして、それは、もしも私の希望に沿ってくださるお気持ちがおありなのでしたら、大至急にしていただかねばなりませんが、貴女とヒックマンさんとのお話が万事整いましたことを私に知らせてくださることなのです。貴女も強気にはしていらっしゃいますが、ご自分の浮ついておられるところを我慢してくださったことに対しまして、ヒックマンさんには山ほども負い目があるのだと、その点をお認めになる覚悟でおられるものとお見受けしているのです。どうか、プライドの高い私のお友達、この点をお考えいただきたいのです。そして、これまでに何度もお話ししてきたことですが、プライドというものは、男の人の場合であれ女の人の場合であれ、極端なものでして、遅かれ早かれ、まず間違いなく、屈辱に満ちたその対極をもたらすことになるものなのです。

大好きなハウさん、貴女ご自身が作り出しますもの以外には、決して不愉快な思いをなさらぬようお祈りいたします。この種の不愉快さを軽減いたしますのは、貴女ご自身でもお出来になることなのですから、軽減なさらない場合、そのような不愉快さは貴女への罰ということになるのです。この世に完全無欠な幸せといったものは存在いたしません。せわしない心というのは、災難を見つけ出すことはないといたしましても、自らのために災難を作り出してしまうものだからです。ですから、この限定付きの願いのことを、よくお考えになるまでは奇妙に映るかもしれませんが、お許しいただきたいのです。と申しますのも、貴女ご自身についてであれ、周囲の人についてであれ、不幸が一切ないことをお願いいたしますのは、この世では決して起こり得ないもの、そして、私たちはいつまでもこの世に生きていることは出来ないわけですが、もしも、ただの願いによってお友達にそのような免除を与えることが出来るといたしましても、おそらく願ってはならないものを願うことになってしまうからです。

要するに、私たちはバラが棘なしに育つことを期待してはならないのです。バラの棘は有益な、ためになる棘なのです。あまりにも急いで摘もうとする人の指を刺すことで、以後は注意するよう教えてくれるわけです。それに、私たちの楽しみごとは、あまりにも容易に得られました時には、面白みが失せ易いものですが、そんな楽しみごとも、困難が伴いますと鋭さを増すということは、どなたもご存じなのではないでしょうか。

そろそろ結びとしなければなりませんね　…

貴女の上に、そして、貴女が愛し、尊敬しておられる人すべての上に、いつまでも祝福が与えられますよう、また、この私にお示しくださいましたご親切に対し、現世におきましても来世におきましても、報いがございますよう、神様にお祈りいたします。

変わることなき感謝の念と親愛の情とを込めまして、貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　九十

ノートン夫人からクラリッサ・ハーロー嬢へ

［八月二十四日付の令嬢の手紙に対する返事として。百七十六頁を参照のこと］

八月三十一日　木曜日

大好きなお嬢様、最後のお手紙をいただきましてからというもの、そのお手紙をお見せするお許しを得たいものと考え、お母様にこっそり会っていただけますよう骨折っておりましたが、そのことさえなければ、もっと早くにお便りをするつもりでいたのです。ところが、昨夜、不意のことで驚いたのですが、ハーロー邸での今朝のお食事へお招きがあったのです。そして、私を呼びに早々とチャリオットが参りました。思ってもおりませんでしたが、光栄なことでございます。

お伺いいたしまして分かったのですが、ハーロー邸でモーデン大佐を交え、ご家族お揃いでの話し合いが持たれるところだったのです。そして、私の同席の件がお母様のほうから提案され、同意していただいたわけです。私の理解しておりますところでは、お従兄弟様が骨を折られ、この話し合いを実現なさったのです。と申しますのも、これまでのとこ

ろ、例の痛ましい問題につきましては、お兄様が大佐との会話を懸命に避けて来られたからです。あの件でモーデン様と話し合う必要はないと言い張っておられたのですが、モーデン様はご自分たちよりは遠いご親戚ですから、娘や姪、そして、妹に当たる方へのご自分たちの振舞いにつきまして、その裁き人の座につく権利はないとおっしゃるのです。お嬢様の味方を公言していらっしゃるだけになおさらのことであり、その点に関し、モーデン様から尋問を受けるのは、到底耐えられないことだ、とも付け加えておられました。

皆様が一堂に会します前に、二人きりでお話をいたします機会をお母様が用意してくださるものと、私は期待いたしておりました。でも、お母様それを努めて避けようとしておられるご様子でした。とは申しましても、おそらく、ご自分のお気持ちからのことではないものと存じます。

モーデン様がお見えになる直前に、入室の指示をいただきまして、着席するようにとのことでしたので、窓のところに座らせていただきました。

お見えになりますと大佐は、お嬢様のための懇願に、大佐のお言葉ですが、「再び取り掛かる」ことからお話を切り出されました。お嬢様が後悔なさっておられることを皆様にご紹介になったのです。また、お嬢様のご病気のことや、一度は裏切られ、卑劣な仕打ちをお受けになったとは申せ、貴女の高潔さのことについてもです。それから、大佐はラヴレース様のお手紙を皆様に読んでお聞かせになりましたが、本当に、悔恨の情に満ち溢れているお手紙でした(ア)。それと、お嬢様の〈心気高い〉お返事もですが(イ)、大佐はあのお手紙を、適切にも、そのように呼んでおられたのです。大佐はまた、ブランド様のお節介な報告につきましても（私も前もって耳にしておりましたが、その件に関しましては、大佐に言われ、皆様も恥ずかしく思われたのだそうです）、オールストンさん(ウ)による調査結果に基づきましたご説明により、それに似つかわしい扱い方をされたのです。オールストンさんと申しますのは、お嬢様のお暮らしぶりのこと、そして、あのベルフォード様のご訪問はどのようなお考えからなのかを承知して置こうと、上京させますために大佐がお雇いになった人なのです。

その後、大佐は次のように話しておられました。前日のこと、ハウお嬢様のところへお伺いしたところ、あの方宛のお嬢様のお手紙(エ)を見せてくださり、いくつかの点につきましてメモを取るのを許していただいたのだそうですが、そのお手紙では、筆跡からいたしましても、内容からいたしましても、お嬢様のご容体が非常にお悪いようにお見受けいたしましたので、お嬢様のご回復は可能なことなのかどうか、大佐には疑わしく思われたとおっしゃるのです。そして、お嬢様は、お身内の方々がどれほど好意的なお気持ちだといたしましても、今では、お嬢様のために一体何をしていただけるのでしょうかと、ハウお嬢様にお尋ねになり、また、ご自身のためというよりは、皆様のために、今からでも皆様が心を解いてくださることをご希望になり、その後、ひどくお具合がお悪いため、ペンを置かなければならないと申され、乱れた筆遣いについてのお詫びをなさり、ハウお嬢様にいわば最後の別れをお告げになっておられましたね。「さようなら、大好きな人。さようなら」というのがお嬢様のお言葉でしたが、その部分を大佐が皆様に読んでお聞かせいたし

（ア）六十六頁を参照のこと。
（イ）七十六頁を参照のこと。
（ウ）百五十五頁を参照のこと。
（エ）百八十二頁を参照のこと。

ますと　…

「あゝ、私の子が、私の子が　…　」と、涙を流し、両の手を握り締めながら、お母様が申されたのです。

「母上」と、お兄様が申されました。「この恩知らずの他にも子供がいることを、何卒お考えいただきたいものですね」とです。

でも、お姉様は心を動かされておられるご様子でした。

ジョン伯父様は目を拭いながら、こうおっしゃったのです。「あゝ、君、可哀相なあの娘が実際にそれほど悪いのだと考えていれば　…　」

「そうに違いないぞ」と、アントニー叔父様が申されました。「これは親友に宛てて書かれたものなのだよ。あの娘が完全に奪われてしまうようなことは、絶対にあってはならないのだ」とです。

立腹なさるにいたしましても、皆様のほうに度を越したところがなければ良かったのだがと、ジョン伯父様は願っておられました。

後生ですから、お嬢様の元へと上京させていただきたいのですと、私は両手を堅く握り締め、片膝を折りながらお願いし、お嬢様のご様子を忠実に報告いたしますことを誓ったのです。でも、お兄様からお叱りを受けてしまいました。そして、これをきっかけといたしまして、お兄様とモーデン様の間で二言、三言、激しい言葉が交わされました。

「この先を読んでいただくよう、従兄弟を煩わせる必要はないものと存じますわ、お父様。私、そう思うのです、お母様」と、お姉様がお父様とお母様に向かっておっしゃいました。「お二人を深く悲しませ、お心を掻き乱すだけですもの。妹のクレアリーは具合が悪そうですわね。もしも、ノートン夫人があの娘の元へと上京なさるのを許していただけるのでしたら、私はそれが妥当なことと考えますわ。あの娘もふしだらな真似をしてしまいましたが、本当に後悔しているのでしたら　…　」

お姉様はここでお話をお止めになりました。そこで、皆さんが口を噤んでおられることもあり、私はもう一度立ち上がりまして、行かせてくださいますよう、皆さんにお願いいたしました。そして、私宛の二十四日付のお手紙の一、二ケ所をお読みいたしましょうと申し出たのですが、再びお兄様に遮られてしまいました。そして、このため、さらに激しい言葉が大佐とお兄様の間で交わされることになったのです。

お母様のほうでは、折れようとなさらないお兄様を説得し、また、二人の殿方の怒りの矛先を互いから逸らしたいものとお考えになり、お嬢様のお手紙から書き留められた覚書きを大佐が読み進めてくださいますよう、提案なさったのです。

そこで、大佐は次の点を読んでお聞かせになりました。お嬢様がもう一度筆をお執りになりましたこと、最後の別れを告げたおつもりであったことや、一度ならず中断を、そして、後には、外気にお触れになるためですが、駕籠でお出掛けになるのを余儀なくされましたことを述べておられる、あの本当に哀れを誘う文章の残りの部分などでした。お兄様とお姉様もこれをお聞きになり、心を動かされておられました。お兄様も嗅ぎタバコ入れを取り出さずにはおられませんでした。そして、お嬢様がハウお嬢様を慰められ、「幸せになるのですもの」とおっしゃっておられる部分では、「他のだれに対しても、そうなるのを許そうとはしないわけだがね」と、お兄様は言っておられました。

お姉様はお嬢様のことを「気立ての好い娘ね」と言っておられました。でも、小さなお

声でした。そして、再び薄情なお気持ちになられたのです。ただ、お嬢様の哀れを誘う嘆き様に心を動かされずに済む者などは一人としていない、とのことでしたが、それこそお嬢様の才能なのだ、ともおっしゃっておられました。

それから、お散歩がお嬢様にもたらしました好結果のことへと、大佐は読み進められました。ハウお嬢様とヒックマン様とにお寄せになったご好意のこと、そして、ハウお嬢様のために願っておられます、その幸せな人生が終わりの時を迎えまして、この世に別れを告げられます時にも、お嬢様もそうなりますよう神様に望みを託しておられるとのことですが、ハウお嬢様が同じくらいにお心穏やかに、そして、安らかでおられますようにと祈っておられる、あの結びの文章のこともです。お母様はこれを耐え忍ぶことがお出来にならず、お部屋の隅のほうへ行かれますと、むせび泣き、涙にくれておられました。お父様は何かおっしゃりたいご様子だったのですが、暫くは口をお開きになることもお出来になりませんでした。

おじ様たちお二人も、同じように心を打たれておられました。でも、お兄様がお一人お一人のところを回られました。そして、お母様に向かい、お母様には他のお子さんもいらっしゃることをお忘れにならぬよう、もう一度注意なさったのです。読み上げられたものの中にあるのは何かといえば、情に働き掛けるという、お嬢様の才能が生み出したものに他ならないのだと、お兄様はおっしゃっておられました。また、皆様の間違った寛大さからいたしまして、耐えられなくなるのはお分かりですのに、そのような言葉を読み聞かせてもらおうとなさったというわけで、皆様のことをお咎めにもなったのです。

このため、モーデン様は再びカッとなさいました。「いやはや、ハーロー君」と、あの人がおっしゃいました。「この麗しい受難者に対して一切の血縁関係が、そして、血の絆が断ち切られることになったのはだれのせいなのか、僕にははっきりと分かりましたよ。これだけ手厳しくされては、足を滑らせた美徳がいくら姿勢を立て直そうとしても、難しい話ですね」とです。

お兄様は一族の名誉というものを口実になさり、お嬢様のように、警告を無視し、知識が注ぐ光にも背いて、親の中でも最も愛情に溢れた両親を捨てるような子供は、絶対に許されるべきではないのだと断言しておられました。

「でも、皆様」と、窓辺の席から立ち上がり、畏まった態度でお一人お一人のほうへ向き直りながら、私が申しました。「お許しをいただけますなら申し上げたいのですが、大好きなお嬢様が求めておられますのは、祝福のお言葉だけでございます。ご愛顧に与ることを乞うておられるのではございません。とてもお体具合がお悪く、最後の祝福だけを求めておられるのです」とです。

「おや、おや、ノートン小母さん「これがどなたのお言葉なのか、申すまでもありますまい」、またお得意の嘆き節ですか。小母さんも確かに善い人だけれど、あの娘の一族にとっても、また、あの娘の養育に果たした小母さんの役割にとっても、同じように恥辱の種となっている罪をそうも簡単に許すというのは、小母さんの貞節さに疑いをかけたくなるような弱さというものですよ。小母さんがお誂え向きの誘惑に出くわすようなことがあればの話だけれど」とおっしゃるのです。

「何かこの手の慈悲深い考えに」と、モーデン様がおっしゃいました。「囚われたのでしょう、従姉妹のアラベラは。疑いのないところだ。もしも無慈悲で容赦のないことが美徳

の証拠となるのであれば、君こそが世界一徳の高い若者というわけだね、ジェームズ・ハーロー君」とです。

「どんなことになるのか、分かっていたのさ」と、癇癪を起こして、お兄様がお答えになりました。「この件について僕がモーデン君と会ったりすればね。僕は辞退しようとしたんだ。でも、貴方が」と、お父様に向かい、「そうさせてくださらなかったのです」とも言っておられました。

「だが、君」と、大佐のほうへ向き直り、「他の人間の前でなら、絶対　…　」と、お兄様は言いかけたのです。

「じゃあ、ジェームズ君」と、もう一方の殿方が言葉を挟みました。「君の守り神は僕の守り神でもあるようだね。挑まれながら、こんなふうに我慢をするのは慣れていないんでね。君は僕の従兄弟なのだ。それに、僕にとっては近くもあれば親しくもある人たちの息子であり甥なのだから　…　」と、そこまで言って、あの人は一息入れました。

「私たちは」と、お父様が申されました。「自分たち同士で、この上さらに不幸になろうというのかな。我が一族かこの恩知らずな娘か、そのいずれかを大切に思う者すべての憤りの的となって当然な悪党のほうは生き延びているというのにだよ」とです。

「それこそ」と、お従兄弟さんがおっしゃいました。「皆さんもご存じのとおり、この前の月曜日、怒りの的とすべく、私が出向いた相手の男なのですよ。しかし、この私に何が言えたでしょうか。しきりに自分の罪の埋め合わせをしたがっていることが分かったのです。そこで、私の意見としてお話しいたしますし、そのとおりに、気の毒な従姉妹にも一筆認めておいたのですが、あの男の申し出を受けるのが周りの者すべてにとって最善の道だということです。ひとつ言わせていただきますと　…　」

「何も言わないことだな」と、すっかり立腹なさったお父様がおっしゃいました。「あの極悪非道の輩のことはな。根深い恨みを抱いているのだよ、あの男には。あの謀反者の手によってあんな悪党に我が一族との姻戚関係が与えられるくらいなら、あの娘には、出来ることなら、百回も死んでもらいたい気持ちなのだ」とです。

「ですけれど、あなた」と、お母様がおっしゃいました。「あの娘がそのような親戚を私たちにもたらすなど、とても考えられないことですわ。あの娘は私たちの親戚の人数を増やすのではなくて、減らすことになりそうですもの。もしも、お話しいただきましたとおりに、あの娘の容体がひどく悪いのでしたら、ノートンさんにあの娘のところまで行っていただきましょう。それが私たちに出来ます最小限のことですもの。ただ、あのベルフォードとかいう人の手から、娘は引き取ることにいたしましょう」とです。

おじ様たちはこの動議を、特に、その後半部分につきまして、お二人揃って支持しておられました。

卑劣な加害者、そして、加害者が申し出ている償いを拒みながら、その親友の保護の手に身を委ねるとは、お嬢様も見事に首尾一貫しておられると、お兄様があの意地悪な口調で述べておられました。

アラベラ様のお言葉ですが、万一お嬢様が亡くなられた場合、お嬢様はお遺しになりますものすべてを、あの生意気な小娘のハウ嬢に「アラベラ様はこんな呼び方をなさったのです」お遺しになりそうで心配だ、とのことでした。

「まあ、お止しなさい。そんなことを想像するのは止してちょうだい、ベラ」と、お母

様がおっしゃいました。「私のクレアリーと別れるなんてこと、考えられません。どんなに間違いがあったとしても、あの娘は私の子なのです。自分の行いについて、あの娘の言い分を聞いてやってはいないのです。あの娘を失ったりすれば、私の胸は張り裂けてしまうことでしょう。上京の件ですが、あなた」と、お父様に向かい、「もしもお許しをいただけるようでしたら、私ほどの適任者は他にいないと思うのです。ノートンさんにもご同行をお願いしますので」とおっしゃったのです。

これは好ましいご提案でした。そのことについて、お父様は思案しておられました。モーデン様がお母様のエスコート役を務めようと申し出られました。おじ様たちも賛成のご様子だったのです。ところが、お兄様が皆さんを打ち負かしてしまわれたのです。「願わくは」と、お父様に向かって、そして、「僕の希望としては」と、お母様に向かい、お兄様がこうおっしゃったのです。「罪のない息子を犠牲にして、罪深い娘を取り戻すような、そんな努力はしてもらいたくないものですね。はっきり申し上げますが、妹のクレアリーが再びこの戸口に影を落とすようであれば、僕は二度と影を落とさないつもりだということです。お母様がロンドンへ向かわれる（そんなご用向きでですが）同じ時刻に、僕はエディンバラへ向けて出発し、あちらで暮らすことにします。そして、今の皆さん全員がそうなのだが、こんなにも近く、こんなにも親しい親戚がイングランドにいることは、努めて忘れるようにするつもりです」とです。

「やれやれ」と、大佐が申されました。「何という宣言なのでしょうね、これは。仮にですが、叔父上、もしもですよ、マダム［と、お父様とお母様のほうを向いて］、このとおりになるといたしまして、どちらが良いと思われますか。従姉妹のクレアリーのようなお嬢さんを永久に失うことでしょうか。それとも、息子さんがエディンバラへ向かい、あちらの地所でお暮らしになることでしょうか。息子さんが住まわれることで、その地所は一層良くなるのでしょうがね」とです。

これをお聞きになって、怒りに駆られましたお兄様のご様子といったら、それはもう筆舌に尽くし難いものがございました。ご自分とご家族の方々との離間を推し進めるものだということで、お怒りになったのです。そして、お怒りようは大変なものでしたし、皆さんがお兄様の肩を持たれるものですから、大佐のほうでは、両手を差し上げ、天を仰ぎながら、こうおっしゃったのです。「何という心の冷たい人たちなのでしょうかね、私の親戚も。あゝ、親戚のハーロー殿（と、お父様に向かって）、娘さんは一人だけとお決めになられたのでしょうか。貴女は、マダム、憐れみの心も持ち合わせない息子さんに教えを乞うおつもりなのでしょうか、ご自分が母親であることを忘れてしまうようにです」とです。

大佐はハンカチを取り出そうとして皆さんに背をお向けになり、暫くの間は、口を開くことも出来なかったのです。冷酷なお兄様だけは別でしたが、皆さんの目にも貰い泣きの涙が溢れておりました。

でも、その後、皆さんのほうへ向き直りますと（情にもろいところ　…　これは勇敢な心の持ち主にいたしましても、恥じるには当たらないものと存じますが　…　そんなところを見せざるを得なくなりましたことで、一層怒りを募らせておられた模様です）、大佐はこうおっしゃったのです。「皆さんには互いに似合いの仲間のままでいてもらいます。皆さんのどなたに対しても、これ以上この話題については口を開かないことにしましょう。すぐにも遺言書の作成に取り掛かるつもりです。そして、あの愛すべきお嬢さんには、この

私の中に、お嬢さんが失われた父親やおじや兄を得ていただくことにしましょう。フランスとイタリアの旅へ一緒に出掛けてくれるよう、説得しようと思います。また、これだけの娘さんの価値に皆さんが気づかれますまで、帰国はさせないつもりですよ」とです。

そして、こうおっしゃりながら、急いで部屋を出られ、中庭に入ると、馬を引いてくるよう命じられたのです。

アントニー・ハーロー様は中庭に出られ、ちょうど馬に乗ろうとしておられた大佐のところへ行かれますと、次のように話されたのです。夕方お会いする時には、もっと冷静になっておられるよう期待するということ（と申しますのは、大佐はこの日まで叔父様のお宅に逗留なさっておられたのです）、また、その時にはもっと穏やかに話し合いたいし、それまでの間、皆さんお一人お一人がすべてについて考察してみるとのことでした。ところが、怒りに駆られた殿方のほうでは、こうおっしゃったのです。「親戚のハーロー殿、私が帰国して以来、ご丁重にも賜りましたご恩顧の数々に対しましては、お返しをすべく努力する所存ではありますが、しかし、あの激しやすい若者から（私の知るかぎり、妹さんの破滅に貢献していることではラヴレース本人以上ですし、しかもこれが、皆さん全員の是認を得てのことなのですが）ひどい扱いを受けましたゆえ、お宅のドアとか、皆さんのお屋敷の戸口からは、二度と再び足を踏み入れないつもりなのです。私の持ち物をお宅からどこへ運べば良いのか、私の使用人に指示を与えておきます。我が愛しのクレアリーに出来るだけ早く会いたいのです。そこで、皆さん全員に神の祝福のありますよう、祈ることにいたします。ただ、もしも宜しければ、この一言だけは甥御さんにお伝えいただきましょう。勇気とこけおどしとの違いを教えてもらう必要が彼にはあるということをです。それから、私が親戚であるということは、多分、彼にとっては幸せなことなのだという点もです。彼が親戚であることを、私は残念に思っておりますがね」とです。

皆様のところへお戻りになった時、叔父様がこの言葉を繰り返されますのを耳にいたしまして、私は驚いてしまいました。悪いことにはなりませぬよう願っておりますが、その言葉に伴い兼ねない様々な結果のことがございますからね。でも、これは一種の挑戦と受け止められまして、その結果、お兄様の肩を持つよう、皆様一人残らずのお気持ちを固めることになったのです。アラベラ様のほうでは、これらすべての災いの元となりましたあの過ちを、忘れることなく、激しい言葉で非難しておられました。

失礼も顧みず、私はもう一度、おずおずと震えながら、お嬢様のところへお伺いする許可を願い出ました。

他のどなたがお答えくださるよりも先に、お兄様がこうおっしゃいました。「自分のことは自分の思いのままになるのだと、そう考えておられるのでしょう、ノートン夫人。上京なさるのに、われわれの同意と〈懇請〉がお入用なのですかね。考えているままを言わせてもらいますと、貴女と妹のクレアリーとはまたとないほどのお似合いですよ。ただ、我が家のことに関しては、求めがあるまで首を突っ込まないようにしていただきたいものですね」とです。

「でも、ご存じないのかしら、お兄様は」と、アラベラ様がおっしゃいました。「一族のうちのどの分家が間違いを犯したとしても、その一族は二つの党派に分かれてしまい、共通の友人、知人一人一人ばかりでなく、召使たちまでが両派を裁く役目を担うことになるのだわ。これこそ、妹のクレアリーが犯した過ちの、その目出度い効果の一つというわけ

よ」とです。

「同情を寄せ、肩を持ってくれるような頭の弱い人間が何人か傍にいなければ、あんなにも罪深い娘は出来上がらないものだよ」と、不快げに私を見つめながら、お父様がおっしゃいました。

涙がこぼれてまいりました。お優しいことに、お母様は私の手をお取りになると、「参りましょう、奥様。私のところへいらしてください。私どもを苦しめております事柄で苦しまれるのが当然過ぎるほどのお方なのですもの、貴女の悲しみを増す必要などございませんわね」とおっしゃるのです。

でも、大好きなお嬢様、私が心動かされましたのは、私自身のためよりは、むしろ貴女のためだったのです。と申しますのも、私は長年に亘りまして、世の中を下賤の身で過ごしてまいりました。従いまして、裕福な方々からの冷遇や拒絶には慣れっこのはずでございます。でも、どなたであれ、恩恵を施してくださる方の額には横柄という文字が刻まれているものですが、私の額にも同じくらいはっきりと、忍耐という文字が記されておりますことを願う次第です。

お母様はご自分のお部屋へ私を連れて行かれました。そして、そこに腰を下ろし、どちらも互いにほんの一言も話し掛けることなく、数分間は涙にくれておりました。ようやくのこと、お母様のほうから沈黙を破られ、お嬢様は事実、本当に、噂されておりますほどにお具合が悪いのか、尋ねておられました。

私はそのとおりである旨をお答えいたしました。そして、お嬢様の最後のお手紙をお見せしようとしたのです。でも、お母様はご覧になるのを辞退なさったのです。

お母様から、祝福のお言葉と共に、お嬢様宛のお便りを一行、是非とも賜りたいものと考えました。私は次の点をお尋ねいたしました。お兄様とお姉様はどのようなことを意図しておられるのか、とです。お嬢様が決定的な断罪をお受けになる以外には、お二人を満足させることはないのでしょうか、ともです。私は暗に次の点も口にいたしました。孝養心と謙譲の心とがお嬢様を支配しているのでなければ、お嬢様にとって、財政的に独立なさるのは実に簡単なことでしょうが、でも、祝福以外のことは、最後の祝福の他には、何一つお嬢様から求められてはいないのだということをです。そして、他にもたくさんのことを、お嬢様のために力説いたしました。私の訴えに対するお答えとして、お母様がおっしゃってくださいました事柄を、以下、手短に繰り返させていただきますが、お話の全体につきまして、また、事態の現状につきましても、これにてお嬢様にもお察しいただけるものと存じます。

お母様はこのように言っておられました。自分は本当に不幸だとおっしゃるのです。一人の子供さんが過ちを犯したために、以前は持っておられた、他の子供さんたちに対するささやかな権威、そして、ハーロー氏とそのご兄弟に対する影響力のすべてを失ってしまわれたとのことです。お母様がおっしゃいますには、お父様は、お嬢様に対してご自分なりの方法を使わせてもらいたいということ、そして（ご自分のことを大事に思ってくださるわけだから）、ご自分やおじ様たちの知らぬ間に、お嬢様のための行動は一切お取りになってはいけないということを、お母様に要請なさっておられたというのです。ただ、皆様があまりにもお兄様に支配されていらっしゃることは認めておられました。それでも、いずれ皆様が和解に向けて折れてくださるのは分かっておられるとのことでした。皆様に他

のお考えはなく、今も全員揃ってお嬢様を愛しているのだから、とおっしゃるのです。

お嬢様が再び皆様のお引き立てに与りますのを、お兄様とお姉様が大層用心しておられることは、お母様もお認めの点でした。ただ、モーデン様がお気持ちを抑え、ご自分の息子さんが最初のうち口になさった乱暴な言葉に耐えてくださりさえすれば、息子さんのほうでも（常に念頭に置いておられるのは一族の威厳ということですが）、激昂に身を任せた結果、どう収まりをつけたら良いのか分からずにおられたわけでもあり、先ほど突然に物別れとなりました協議にしても、もっと満足の行く形で終わっていたはずだ、とおっしゃるのです。次のように考えて当然な根拠もあるのだからとのお話でしたが、つまり、お祖父様の地所の件で、お嬢様のほうから少し歩み寄ってくだされば、また、〈正しい〉動機からのことといたしまして、お嬢様が言われるとおりになさることをお従兄弟様のほうで請け合ってくださるなら、皆様全員を軟化させていたはずだ、とのことでした。

あの忌まわしい男性の友人とお嬢様が親しくしておられますことについてのブランド様の報告は、暫くの間、非常に不幸な影響を及ぼしたとおっしゃっておられました。報告の前には、多少とも有利な立場をお母様は築いておられたのですが、その後では、お嬢様のために口をお開きになる勇気がなく、また、実際の話、そのお気持ちにもなれなかったから、とのことでした。お嬢様があのベルフォードさんと親密な付き合いを続けておられますのは、どこから見ましても説明がつかず、まったくもって許し難いことでもある、とおっしゃるのです。

お母様がおっしゃっておられるのですが、念願の和解をさらに困難なものにしておりますのは、第一には、操を失われましたことを、お嬢様ご自身が認めておられる点なのだそうです（それに、あのような札付きの放蕩者の手中に落ちてしまわれましたのは、お嬢様ご自身の落ち度なのだということも、あまりにもよく知れ渡っている、とのことです）。その結果といたしまして、皆様とお嬢様が被られた不名誉は、これ以上ひどくはなり得ないものになっておりますのに、お嬢様のほうではあの破廉恥漢の告訴を拒んでおられるという点です。次に、ご希望のございました許しと祝福とに伴って起こりそうなこととといたしまして、皆様が憎んでおられる男、そして、皆様に敵意を抱いております男との結婚が考えられますが、「和解への基盤といたしますには、非常に好ましくない状況であることは認めねばなりませんわね」と、お母様は言っておられました。

お母様ご自身といたしましては、次のようにおっしゃらずにはいられないとのことでした。ラヴレースさんが悔い改め、真人間になる望みが少しでもあるのなら、親戚のモーデン様が皆様に読んでお聞かせになった、お嬢様宛のあの男の手紙や、自らの非難につながることでありながら（家門や財産には非の打ち所もないのです）、お嬢様のお人柄に対して公正な扱い（そうであってもらいたい、とのことでした）をしている点、そして、あの男の親戚全員がお嬢様との縁組を熱望しておられること、こういった事柄は、お父様やおじ様たちに対しまして少しでも力を持つようでしたら、お母様にとりましても重みのある理由になるだろう、とおっしゃるのです。

私がご病気のことを申し立てますと、希望的な見方かもしれないけれど、塞ぎの虫と一時的な失意の気持ちから来ているものと思わざるを得ない、とのお答えでした。お嬢様は元々そうでしたが、思慮分別に大層恵まれている若い娘さんで、これほど身を堕としてしまった人には、そんな気持ちが十分あるに違いない、とおっしゃるのです。決してあっては

ならないことですけれど、万一、皆様がお嬢様を失うようなことになれば、状況は確かにひどく変わってしまうことでしょうが、その時には、今最も怒り狂っている人が最も嘆き悲しむことになるでしょうし、お嬢様の美点のすべてが記憶に蘇り、不幸な過ちについてはすっかり忘れ去られてしまうことでしょう、ともです。

お母様が希望しておられましたのは、お嬢様があのお従兄弟さんの保護の手に全面的に身を委ねられ、これ以上ベルフォードさんにお話しなさるようなことは無しにしていただきたい、ということでした。

そこで、大好きなクレアリーお嬢様、真剣な上にも真剣にお考えくださいますよう、私のほうからもお勧めしたいのですが、お従兄弟さんが来られたわけですから（お祖父様の地所に関しましては、お嬢様の管財人でもありますし）、ラヴレースさんの親友をお嬢様の遺言執行人にするようなお考えは、そろそろお捨てになるべきではないでしょうかということです。とりわけ、万一にも悲しい出来事が起こりました時の話ですが、あの殿方がお嬢様のご家族の問題に干渉いたしますのは、他の場合ですと、お嬢様も未然に防ぐことを切望しておられますような、その手の結果を伴い兼ねないからでございます。それに、大好きなお嬢様、おじ様たちのそれぞれにあと一通ずつお手紙を出されてはいかがなものでしょうか。お嬢様のご病気がどれほど悪いのかをお知らせし、お嬢様の地所と動産の処分につきまして、お二人のご助言を求め、それに従う旨をお申し出になるのです。私といたしましては、そのようにしていただきたいように思うのです。

あの地所がお嬢様のものとなりましてからの収入の、その大部分を、皆様はお嬢様にお届けする模様です。お嬢様が置いて行かれました現金も一緒にです。そしてこれは、お従兄弟さんのモーデン様のお手を煩わせることになりますが、お嬢様には心配の種となりますような、そのような借財をなさっていてはいけないとのお気持ちからのことなのです。

一年か二年の間外国に行かれますよう、お従兄弟さんがお嬢様を説得出来ない場合ですが、皆様といたしましては、お祖父様のお屋敷で人目を忍んでお暮らしになりたいと、お嬢様のほうから願い出られますことを期待しておられるご様子です。

金曜日　朝

つい今し方、ベティが来ておりました。あの娘の話ですと、お従兄弟さんのモーデン様は皆様に大層ご立腹で、これ以上アントニー叔父様のお屋敷に滞在なさるのをお断りになり、ご意向に沿いますような他の下宿が見つかるまでのことですが、不便なところにお泊まりになるようなことさえなさっておられるというのです。これが皆様には大変気掛かりでして、あの方に対する乱暴な扱いのことを後悔しておられます。それも、あの方のほうでは、お嬢様をただ一人の遺言執行人になさり、全財産を受け継いでいただく覚悟だとおっしゃっているものですから、なおさらなのです。

この上さらに、何と素晴らしい財産が貴女をお待ちしているのでしょうね、大好きなお嬢様。固く確信いたしておりますが、神様の思し召しによりまして、お命とご健康とが保たれますならば、どなたもが一人残らず、すぐにもお嬢様と仲直りなさるでしょうし、お嬢様も幾久しくお幸せな日々を送られることでしょう。

お母様からは、お傍に伺いますのはまだ控えてほしいとのご希望でしたが、皆様お一人お一人のご賛同を、そして、ご要望さえもいただきまして、私はすぐにその楽しみに与る

ことが出来るようになるはずだから、とのことでした。皆様のほうでも大層望んでおられるわけですが、お従兄弟さんのモーデン様と皆様との和解の中には、皆様とお嬢様との和解も含まれますよう期待する次第です。

ただ、万が一、私の大変恐れております事態が生じました際にお傍に付き添っていないようなことになりますと、私といたしましては、絶対に自分を許すわけには行かないことでしょうね。ですから、大好きなお嬢様、少しでも危険を感じられましたら、また、私の心の平安を願ってくださるのでしたら、お傍に付き添わせていただきますよう、是非ともご命令を賜りたいのです。どのような理由がございましょうとも、私を引き止めることにはならないものと存じます。

私の聞いておりますところでは、ハウお嬢様は貴女と会うお許しをハウ夫人からいただき、その目的で、また、近づいております（そのはずだと思われているのです）ご婚礼のための衣装をお揃えになるためですが、来週には上京なさるおつもりです。

ヒックマン様の義理のお母様が最近お亡くなりになりました。その夫人の年六百ポンドという寡婦給与があの方のものとなりました。さらにその夫人は、良くしてくださったことへの感謝の気持ちとして、ご自分の親族のための二、三件の遺贈は除きますが、かなりの額に上ります財産のすべてをあの方にお遺しになったのです。

こういった善良な人々と申しますのは、終始一貫して善良なものなのです。実際、そうでなければ、善良だとは申せませんし、また、それで不都合になるところは一切ないのです。あの素敵なお嬢様にとりまして、あの方は素晴らしい旦那様になるだろうと、世間の人たちすべてが一致した見方をしております。私が残念に思いますのは、あのお嬢様があの方の立派な奥様になられることにつきまして、世間の人たちの意見に同じくらいの一致が見られない点です。でも、今現在あの方を愛していらっしゃるにせよ、いらっしゃらないにせよ、あの方を愛することは出来そうにないとお考えだとか、あるいは、他にもっと好きな男性がいらっしゃるというのでしたら、あのお嬢様ほどの道義心を備えた女性があの方の求婚を励ましたりはなさらないものと存じます。

この手紙の配達のことはポコックさんが引き受けてくださるのですが、日曜の午前中でいけないのであれば、土曜日の夜のうちになりそう、とのことです。

全能の神様がお嬢様を保護し、祝福してくださいますようお祈りいたします。お会いしたく思っております、大好きなお嬢様。お目に掛かりとう存じます。そして、愛して止まないこの胸に、今一度お嬢様を抱き締めとうございます。敢えて申し上げますが、幸せな日々は近づいているのです。とにかく、元気を出していただきたいのです。望みを持つようになさることです。

この世につきましても、あるいは、来世につきましても、お嬢様は幸せになられるに違いないのです。ただ、生きようとなさることです。光栄にもお嬢様を存じ上げております者一人一人を幸福にしてくださいますのに、とてもぴったりのお気持ちをしておられるという、ただそれだけの理由からだといたしましてもね。この一時的な翳りに何の意味がございましょう。私の聞き及んでおります事柄すべてからいたしまして、お嬢様はこの世のどなたにも負けないくらい、完全無欠さに近づいておられるのです。お嬢様は苦難を味わわれることによりまして、いわば輝きを与えられ、清められることとなったのです。悲しくはございますが啓発的な、お嬢様の身の上話のその一部始終を、お嬢様ご自身のお口か

らお聞かせいただきたいものと、私はどれほど願っていることでしょうか。
新たな務めの道にお入りになり、お嬢様のことを大層必要となさるはずのハウお嬢様のために、お従兄弟さんのモーデン様のために、お身内の方々につきましては、それ以上触れてはならないのでしたら、お母様のためにということですが、ただ、こうは申せましょうから、皆様すべてのために、そして、この私のためにも、大好きな大好きなクレアリー様、どうかいつもの気高いお心を取り戻され、耐え忍んでいただきたいのです。お嬢様にはおやりになるべきことがたくさんございますが、もしも私どもを後に残して行かれたりしますと、それらを手掛けてくださる人が私には思い浮かばないのです。
ですから、私とともにお祈りを捧げていただきたいのです。お嬢様とお嬢様のお手本とを必要としておりますこの世のために、神様がお嬢様のお命を助けてくださいますようにです。また、貴女の余命は幾許もないかのように映るかもしれませんが、あの立派な王ヒゼキヤ（七四）とともに、ご寿命を延ばしていただけるかもしれないではありませんか。それが有難い御心なのでしたら、神様がそのとおりにしてくださいますよう、お祈り申し上げる次第です。

貴女のジュディス・ノートン

手紙　九十一
ベルフォードからロバート・ラヴレースへ

九月四日　月曜日

聖餐式を受けるまで、令嬢はノートン夫人からの手紙を読もうとしなかったが、式のために達成すべく努力して来た、あの喜ばしい平静さを掻き乱す事柄が何か含まれていてはと恐れたからだ。そして、あの厳粛な儀式が終わると、彼女の言葉だが、すっかり落ち着いたため、どのような知らせも、いかに心動かすものであれ、平然と受け止めることが出来そうに思う、というのだよ。
しかしながら、それを読むに当たって、彼女は何度か中断を余儀なくされていた。体力の衰えと目がかすむため、とのことだ。彼女はそのように訴えていたのだが、「訴える」などという言い方をして構わなければの話だな。何しろ、彼女の訴えというのは実におっとりとして物静かなため、なかなかそんなふうには呼べないものだったからだよ。
この手紙のさまざまな部分で、令嬢はひどく心を動かされていた。涙を流したことが数度あったし、溜め息は何度もついていた。ロヴィック夫人が教えてくれたのだが、読み進めながら令嬢が漏らした穏やかな詠嘆の言葉は次のようなものだったそうだ。「薄情な、残酷なお兄様」「とても姉とは思えない」「お気の毒にあの方　…　」（これはノートン夫人のことらしい）「優しい従兄弟ね」「あゝ、何て気性の激しい人たちなのでしょう」とだ。それから、一度ならず我が身を省み、「何て根深いものなのでしょう、私の過ちは」「私も何という疫病神だったのでしょうね」とも言っていたそうだ。
お傍に伺うと、令嬢はこう言っていた。「親しいノートン夫人から長い、そして、あまり楽しくないお手紙を受け取ったところです。すぐにお渡しいたしましょう。ご親切にお引き受けいただきましたのに、貴方をあのお役目には指名しないようにとの助言がございま

した。でも、こういったことには何一つ憤慨なさってはいけません。私の選択は身内の者たちには奇妙なことと映るのでしょう。でも、私にその気がございましても、変更いたしますにはもう手遅れなのです」とだ。

「お返事をしたいとは思うのです」と、彼女が言葉を続けた。「でも、物をはっきりと見ることが出来ないのです、ベルフォードさん。指が震えております。ただ、この霧の掛かったような状態は、多分そのうちになくなることでしょう」とだ。それから、ロヴィック夫人のほうへ向き直ると、「まだ、死期が迫っているように思えないのです、私。現に死にかけているようにはですわ、ロヴィックさん。体には何の痛みもありません。麻痺もございませんわ。すぐにも命が絶えます兆しは一切ないように思うのです。近頃は息切れがとてもひどかったのですが、今はかなり良くなっておりますし、頭がすっきりとして、考えごとも自由に出来るのです。まだ死ぬなんてことは有り得ないように思います。苦痛を味わうことになるのでしょうね。このように有難いほど安らかに命が尽きるようなことはないはずですわ。それにいたしましても、万能の神様は何て慈悲深いのでしょう。ご自分が造り出された哀れな娘に、これほどの心地好い平静さを与えてくださるのですからね。これこそ、私が乞い求めてきたものなのです。自分の祈りを叶えていただける希望があるなんて、ロヴィックさん、死の際に臨みまして、どれほど励まされることでしょうか」というのだよ。

ロヴィック夫人と同じく、スミスの上さんも令嬢と一緒だった。二人共涙に暮れていたが、俺にしても、あの二人と同様、一言の返事をする力もなかったのだよ。しかし、彼女はここまでの話の一部始終を、この後に続くものについてもそうだが、精神状態の点でも表情の点でも、驚くほどの落ち着きをもって語ったのだ。

「でも、ベルフォードさん」と、さらに陽気な態度と口調を装いながら、令嬢が言っていた。「少しお話をさせてくださいね。お話ししておかねばなりません事柄を、このようにお話しすることが出来ますうちにね。

あら、ロヴィックさん、私たちだけにしないでください［実は、出て行こうとして、婦人たちが立ち上がったのだ］。どうかお座り願います。それに、スミスさん、貴女もお座りください。シェルバーンさん、この鍵をお取りになって、あの上のほうの引き出しを開けていただきましょう。私が参りますわ」とだ。

令嬢がそちらへ向かって進んだが、その膝は震えていた。「さあ、私の遺言書です、ベルフォードさん。スミス氏のお知り合い三名に立ち会っていただいております。

勝手な希望ではございますが、貴方のほうからお求めになれば、従兄弟のモーデンが手伝ってくれるものと存じます。従兄弟のモーデンは変わらぬ愛情を注いでくれてはおりますが、顔を合わせておりませんので、ベルフォードさん、厄介ごとのすべては貴方にお任せすることにいたします。この証書は書式に不備があるかもしれません。きっとあるのでしょう。でも、祖父の遺言書はほとんど諳じておりますし、それが事細かに論じられますのを何度となく耳にして参りましたから、不備もその分少ないものと存じます。これは他のものとは別にいたしまして、この隅に置くことにいたしましょう」と、遺言書を引き出しの一番奥にしまい込みながら話していた。

それから、令嬢は手紙の束を取り出した。黒い臘で三ヶ所に封印をしてある一つの封筒に入れたものだ。「これは昨夜封をしたのです」と、彼女が言っていた。「封入してありま

すものの取り扱いにつきましては、封筒からお分かりいただけるでしょう。これが上書きですが［と、封筒を目に近づけ、両目をこすりながらだ］、〈私の死亡が確認され次第、ベルフォード氏の手で開封のこと〉となっております。ここにしまっておきます［と、遺言書の横に置いたのだよ］。この折り畳んでありますものは手紙と手紙の写しの類でして、日付の順にしてございます。ハウさんに処置していただきますが、貴方とあの方が妥当と思われる仕方で結構です。この先、さらに受け取るものがございましたら、あるいは、私は受け取ることが出来なくなりましても、届くものがさらにございます場合には、こちらの引き出しに入れてくださって構いません［と、鏡台の引き出しを開けたり閉めたりしていた］。どなたからのものであれ、ベルフォードさんに渡していただくためですわ。その点を守ってくださいますよう、ロヴィックさん、シェルバーンさん、よろしくお願いいたしますね」とだよ。

「さあ、ここに」と、令嬢が言葉を続けた。「私の衣装の鍵を入れておきます［と、手紙類を入れたのと同じ箪笥の引き出しに入れながらだ］。すべて整理済みです。上に目録も乗せておきましょう。処分いたしましたものについての精算書もです。ですから、どのようなことであれ、どなたもスミスさんにお尋ねになる必要はないものと存じますわ。

私の衣類が入っておりますトランクを開けるとか、調べるとかする必要はすぐには起こらないことでしょう。ノートン夫人に開けてもらうことにいたします。あるいは、夫人にどなたか代理の人を指名していただき、ロヴィックさん、貴女のおられるところで、その人に開いてもらうことにいたしましょう。遺言書には、そのように指示してあるからですわ。そろそろ蓋に封をしても良いでしょう。私にはこの先二度と開ける機会もございませんでしょうからね」とだよ。

そして令嬢は、同意し兼ねると俺が諫めたにも拘らず、俺にトランクの封緘をさせたのだ。俺の封印を用いてな。

この後、令嬢は手紙類の入っている引き出しに錠を掛けたのだが、その前に、彼女の言う〈瞑想録〉なるものを取り出すと、もしかすると、必要になるかもしれないので、と言っていた。それから、その引き出しの鍵を受け取るよう、俺に頼むのだよ。それについても、この先もう用はないだろうから、というのだ。

このすべてが実に落ち着いた明るい態度で語られたものだから、われわれは驚くと同時に、心を打たれもしたのだ。

「私のために証言してくださいね、スミスさん。それに、ロヴィックさんも」と、令嬢が言葉を続けた。「私をお知りになってからの私の暮らしぶりや会話のことを、もしもだれかが問い合わせて来た場合ですが、私がとても規則正しかったこと、早寝早起きを守っておりましたこと、そして、お宅を離れての外泊は一度もなかったということをですわ。牢屋に入りました時は別にいたしますが、あの時も、ご存じのとおり、私には避けようもなかったわけですからね」とだ。

あゝ、ラヴレース、この際の令嬢の言葉を聞いてもらうか、それとも、あの姿を見てほしかったものだよ。令嬢には気づかれないようにしてな。われわれはだれ一人として、一言たりとも口を開くことが出来なかったよ。

「純粋な慈愛の心に包まれまして、この世にお別れをするのです」と、令嬢が言葉を続けた。そして、婦人たちのほうへ向き直ると、「さあ、優しいお友達、私のことをそんなに

も心配なさらないでくださいね。これはほぼ不可欠な準備なのですし、私はとても幸せになるのですからね」とだよ。

それから令嬢は、霧が掛かっているようだと言っていたのだが、その目をもう一度こすり、一層真剣なまなざしをわれわれ一人一人に、特に俺のほうに向けながら、こう言ったのだよ。「皆様に神の祝福がございますように。本当に温かなお心遣いをいただいたものです。私に友人はいないなどと、どなたがおっしゃるのでしょう。私は見捨てられ、見知らぬ人々と暮らしているなどとおっしゃるのは、どなたなのでしょうね。親切なベルフォードさん、慈悲深いところをそのように気前良くお見せにならないでください。私の幸せを願っていてくださるものと確信いたしておりますのに、正直な話［と、あの魅力的な目にハンカチを添えながら］、それだけの幸せは与えていただけなくなりますわ」とだよ。

われわれがこのように厳粛な気持ちで聞き入っていると、令嬢の従兄弟のモーデンからの手紙を携え、召使がやって来たのだが、彼女のほうでは「すると、あの人ご本人はお見えじゃないのですね」と言っていた。

令嬢は開封した。しかし、彼女が言うには、行がすべて二重に見えるというのだ。それで、自分では読むことが出来ないから、読んで聞かせてくれと俺に頼むのだよ。俺は代読した。そして、もっと彼女の慰めになるものであったならと願った次第だ。だが、彼女のほうではあくまでも忍耐強く聞き入っていたよ。ただ、何度も何度も涙が頬を伝って落ちていた。日付からして、昨日書かれたものだ。その大要は以下のとおりだよ。

彼が令嬢に語っているところでは、彼の骨折りによってだが、先週の木曜日、父親の屋敷において、身内の主だった者全員が顔を揃えた話し合いを持ったそうだ。困難が伴わなかったわけでもないとのことだが、彼女の傲慢な兄が反対したし、集まってからも、身内の者たちと彼女との和解をもたらそうとする大佐の努力が、奴のためにすべて徒労に終わってしまったからだそうだ。大佐はあの兄のことを、自分が知っている中でも最も始末に負えない若者だと非難している。奴に己自身を知らしめるためには、また、どのようなものを他人に負うているのかを分からせるためには、何か大病を患うとか、大きな不幸に見舞われたりすることが必要だと言うのだよ。そして、奴が令嬢の兄ではなく、また、自分の親戚でもなければ良いのにと願っているのだ。それに、令嬢の父親やおじたちのことも容赦してはいない。奴にすっかり盲従したということでだよ。

彼はこうも言っている。連中全員とは激怒の挙げ句に別れたし、この先二度と、連中の戸口のいずれにも影を落とすつもりはないとのことで、令嬢の二人のおじにもそのように断言してあるという。おじ二人は彼との和解を図るべく、土曜日に彼のところを訪ねたところ、令嬢の元へ伺おうとして、彼がロンドン行きの準備を進めているのを知ったということだ。そして、是非にという二人からの熱心な懇願にも拘らず、ロンドンへ向かうこととし、ハーロー邸、あるいは、連中のどちらの屋敷へも同行しないことに決め、その旨の返事とともに、連中を追い返したということだ。

ところが、連中が立ち去ってから一時間ほどして、彼の言い方では「気高い手紙」ということになるが、八月三十一日付の令嬢の手紙(ア)が届けられたこともあって、彼は考えたのだ。その手紙は、自分を感動させたのと同じ程度に連中の心をも動かし、当然至極なも

(ア) 手紙七十九を参照のこと。

のではあるが、彼女の美徳について高い評価を促すことになるかもしれない、とだよ。そこで、ロンドンへ向けて進む代わりに、彼は馬の向きを叔父アントニーの屋敷のほうへ戻したというのだ。

こうしてあの屋敷に着くと、おじ二人が一緒にいたので、あの心打つ手紙を連中に読んで聞かせたのだが、三人のうちに目を潤ませない者は一人もいなかったそうだ。こういう場合の通例だが、その場に居合わせない者が責任をすべて背負うことになり、連中は兄と姉を責めたのだよ。そして、上京を延期してくれるよう彼に頼んだという。以前から彼女が懇請しながらも得られなかった、例の祝福の言葉、そして（連中は望みを持っているわけだが）、全面的和解という吉報を届けてもらえるようになるまで、ということだ。

これらの望ましい目的が達成されるならば、自分の訪問がさらに歓迎されるものになるのは疑いないと考え、それだけになおさら、彼は快く連中の希望に応じたのだそうだ。しかし、令嬢の兄から新たな侮辱を受ける可能性があるのに、そのような場に身を晒す気にはならず、一族の者たちに集まりを持ってもらうよう、彼女の手紙の写しをおじたちに渡し、連中の討議の結果を出来るだけ早く知らせてもらうよう頼んだというのだ。

彼はこうも言っている。祖父の地所からの収入に関する明細を持参し、令嬢と精算をするつもりだが、自分は地所収入からの彼女への未払い分を現に所持しているのだから、とのことだ。

君の仕打ちを憤る彼女の気高い態度を、彼は大いに褒め称えている。令嬢を獲得するとか、あるいは、許してもらうとか、君がそのいずれかに相応しい価値を備えるのは不可能な話だと、彼はそう言うのだよ。しかし、君も彼女の美徳については公平に評価し、今君の手で出来る償いはすべて行う旨を申し出ているのだし、彼女のほうでも、その仕打ちを恨まないようにと、極めて真剣に要請しており、奇妙なことに、いくつかの不幸な原因が同時に生じるということさえなければ、君も彼女の悲運の張本人にはなり得なかったはずだと言明していることでもあるし、また、大佐としても、その奇妙な符合にどのような説明をつけるのが妥当なのかについて、迷うところはないわけで、自分から報復行為に出ることは一切ないので、彼女には決して心配してほしくない旨を述べているのだ。

とは言いながら（予想されるところだが）、彼は君のことを痛烈に非難している。令嬢は君に何の弱みも見せなかったことを知ったからだよ。しかし、この話題に深入りするのは差し控える、と彼は言っている。令嬢のお顔を拝見するまでは、とのことだが、令嬢が断固として君を拒んでいるように思われるのでなおさらだというのだな。しかしながら、次の点は言っておかねばならないとのことだ。つまり、君のことは勇敢な男、分別のある男と考えているということ、そして、評判によると、君はあらゆる点で度量の大きい人物と思われているが、女性関係は別だという点だ。その面では、彼の言によると、君は許し難い無礼を働いたというのだよ。そして、残念な話だが、財産に恵まれた若者で、同じ行いに恥ることのない者は極めて少ない、というのだ。彼の所見によれば、男女両方とも、お互いに相手を自分の権力下に置くことには目がないのだが、男にせよ女にせよ、権力が大好きな人間で、それを正しく用いている者にはおよそお目に掛かったためしがない、というのだ。

自ら宣言しているとおりに、令嬢が君との結婚を断固として断るというのであれば、自分と一緒に外国への小旅行に出てくれるよう説得したい（体具合が許すかぎり早目にとい

うことだが)、と彼は言うのだ。多分、健康作りになるような旅とのことだが、深い悲しみや失望がきっかけとなっているすべての病にとっては、旅行が間違いなく最良の薬なのだから、というのだな。二年か三年留守にすれば、戻った時には、皆が彼女を慕ってくれるだろうし、彼女にとっても、皆が愛しく思われるだろう、というわけだ。

令嬢に会いたくてたまらない気持ちを彼は表明している。身内の者たちが行った決定の結果が分かり次第、すぐにも出発すると言っているが、その決定が望ましいものになるのは疑いのないところなのだそうだ。また、その決定を長々と待つつもりも彼にはないとのことだった。

次第に衰えている令嬢に向かって、俺が手紙を最後まで読み終えると、「そうですわ、皆さん」と、彼女が口を開いた。「第一級のお医者様五、六人が協議をなさいまして、病名を何にすべきなのか、合意が得られませんうちに、本当に亡くなってしまったという患者さんの話を聞いたことがございますわ。その患者さんというのは皇帝だったのです。ヨゼフ皇帝(七五)だったと思いますわ」と言っていた。

令嬢の病状がどの程度なのか、彼女の従兄弟は知らないわけだから、俺のほうから彼に一筆認めるのはどうかと尋ねて見た。

それは絶対に止めてほしいと彼女は言っていた。何故ならば、彼がすでに旅立っているのでないのであれば、彼が俺の手紙を受け取り、こちらへやって来る頃には、自分はすっかり衰えているはずと確信しているので、彼が居合わせるのは自分の心を掻き乱し、苦しめるだけのことであり、彼にとっても辛い話だろうから、というのだ。

しかし、令嬢の死期がそこまで迫っていないものと考えたいのだ、俺は。それで、俺は引き下がると、彼女にはそれ以上何も言わず、モーデン大佐に宛てて一筆認めたのだ。愛する親戚と存命中に会いたいと思うなら、一刻たりとも無駄にせず、すぐに出発してもらわねばならない、とだよ。この手紙は彼自身の召使の手で、令嬢の父親に宛てて手紙を一通送ったところだ。

今し方、帽子屋のウォールトン夫人からもスミスの上さんに知らせがあった。ここ三十分以内のことだが、特別な使者によってブランド牧師から夫の元に手紙が届けられ、その中に、牧師がジョン・ハーロー宛に書いた手紙の写しが入っていたというのだ。あの差し出がましい手紙を撤回しようというものだよ。

これらすべてが、モーデン大佐に宛てた令嬢の手紙の写しもだが、ほぼ同時に連中のところに届くわけだから、二重に閂をさしてある心の扉を押し開いてくれるような、そんな後悔の念に打たれることが連中にないとしたら、あの一族は悪魔にとり憑かれているということだな。

君が休む前にこれを君のところへ届けると(遅くはなるだろうが)、ウィルが請け合ってくれている。彼の願いなのだが、手紙を彼に預ける時刻について、証言してほしいというのだよ。ちょうど十時半だ。

俺は(今では慣れもあって)イギリスでは君に次いで最も腕の立つ速記者のつもりでいる。とはいえ、時々刻々と書き留めるべき事柄が出て来たりすると、他にすることが何もなくても、とても君が期待するほど速やかには書けないのだよ。それに、覚えておいてもらいたいが、君の召使たちも、手紙とか伝言とかを、書かれる前、あるいは、託される前

に携えて行くなんてことは出来ない相談なのだ。

J. ベルフォード

手紙　九十二
H医師からジェームズ・ハーロー、シニアーへ

九月四日　ロンドンにて

拝　啓

他の親御さんのお気持ちを、自らの心に照らして推し量ることが可能だといたしますなら、以下の通知をお受けになりましても、善意にお取りくださるのは疑いようのないところと存じます。卓越しておられることこの上ない女性のため、貴方様ならびに奥方様の最後の祝福を携え、ご家族のどなたかを急ぎこちらへお遣わしになることで、貴方様ならびにご家族の皆様にとりましては、今後とも痛恨の想いを味わわずに済む機会が今なお残されているのだ、ということであります。

信じるに足る理由があっての話でありますが、お嬢様は真のお姿とはかけ離れたものに描かれて貴方様に伝えられているのです。そして、この故にこそ、次の点をお知らせしたい気持ちになるわけですが、私が目撃いたしました、あるいは、耳にしておりますすべての振舞いにつき、最善の根拠に基づきまして、お嬢様にはまったく落ち度がないものと考える次第です。また、お嬢様のご不幸そのものも、ご自分にとりましては栄光に満ちたもの、そして、縁者の皆様にとりましては、名誉をもたらすものとなっているのですが、それは、お嬢様の善処の仕方にもよりますし、また、苦痛を伴って長引き、気力も奪う衰弱の中で支えとなっております、あの辛抱と忍従、そして、迫りつつある死を見据える心の偉大さによるものなのであります。しかも、このすべては適切な動機、死に瀕した聖者すら誇りとして構わないような動機に促されているのです。

私が筆を執っておりますことは、お嬢様のご存じないことであります。数日前にその旨を申し出ましたこと、しかも、はなはだしつこい申し出となりましたことは、確かにお認めしなければいけません。また、お嬢様が拒まれましたのも、頑固さゆえのことではないのです。お嬢様もそれが何なのか、ご承知ではない模様ですが、二日間だけ差し控えてほしいとのご要望でした。ご自分のために懇願してくださっていると、お嬢様はそのようにお聞き及びですが、最近帰国されましたご親戚が、お嬢様の有利になるよう、首尾よく取り計らってくださるのを期待なさってのことであります。

この件につきましては、差し出がましい男と思われますようなことはないものと存じますが、ただ、そのように思われましても、致し方ございません。こうして筆を執りますのは、一種の親心と、抗し難い衝動に駆られてのことでありますから。

しかしながら、妥当なものとお考えのご処置、あるいは、お許しになるのが適切と思われます行動は、それがどのようなものであれ、速やかに為されねばなりません。卑見によりますなら、お嬢様が一週間生き長らえますのは不可能なことだからです。また、貴方様がお嬢様にお与えになるのを適当と考えておられますご厚意につきましても、この短い時間のうちでどれほどの間、お嬢様があの見事な知力を活用され、そこに慰めを見出してい

ただけるものか、申し上げるわけにはまいらないからであります。

貴方様の謙虚この上なきしもべ

R. H.

手紙　九十三

ベルフォード氏からウィリアム・モーデン氏へ

九月四日　ロンドンにて

急　啓

事態は急を要しますこと、また、貴殿の使用人より機会を提供されましたことは、親しく存じ上げないとは申せ、貴殿の美点に不案内とはいえない者がお掛けするこのご迷惑に対しまして、十分な弁明となりましょう。

貴殿におかれましては、クラリッサ・ハーロー嬢のご両親およびその他お身内の方々に対し、かつて家族の誇りとされた者の中でも最も称賛に値する娘さんにして、かつ女性親族たる人物との和解に向け、ご尽力くださっているものと理解いたしております。

これが高潔なるお志によることとは承知いたしておりますが、当地のわれわれといたしましては、十分すぎるほどの根拠に基づきまして、この件に関するお心遣いすべても徒労に帰すものと考える次第であります。と申しますのも、ご令嬢は三日を越えて生き長らえることは有り得ないというのが、光栄にもご令嬢へのお目通りを許されております者一人一人の意見だからであります。従いまして、ご令嬢のご存命中に面会を望まれるのでしたら、寸刻たりとも無駄になさることなく、お越しいただかねばならないのです。

私が筆を執っておりますことは、ご令嬢のご存じないことであります。ご令嬢のための貴殿の温かいお執り成しがもたらします幸せな結果につきまして、ご令嬢がもっと前に貴殿からお知らせをいただけないとは　…　その点にいささかの疑念でも抱きました場合には、私といたしましても、もっと早くに筆を執っていたことでありましょう。

貴殿の謙虚この上なきしもべ

J. ベルフォード

手紙　九十四

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

［手紙九十一への返事として］

火曜日　午前四時から五時の間　アクスブリッジにて

さて、そうも早々と、この天晴な娘さんがこの忌まわしい世の中を後にするなど、果たして有り得る話だろうか。何しろ、彼女がこの世を去った暁には、俺としてもこの世を忌まわしいものと考えることだろうし、我と我が身についてはさらに忌まわしく思うだろうからな。あゝ、ジャック。かくも冷静に腰を下ろし、まるでアディソンの天使（七六）のごとくに、俺の幸福を根こそぎにしてしまう嵐を指揮し、楽しんですらいる貴公よ、いかに理

不尽なものだとはいえ、俺のせっかちな心を責めないでくれ。彼女に対するこれまでの俺の振舞いを振り返っては、この胸をかきむしる後悔の念に悩まされ、すでに地獄の亡者の苦しみを味わっていることを知れば、貴公も悪魔の本性を剥き出しにして、悩み苦しむ良心を怒鳴りつけたりはしないことだろう。貴公から情け容赦なく駄目を押されるまでもなく、すっかり耐え難いものになっているわけだからな。

何を書いているのか、また、何を書きたいのかも分からないのだ。かつては楽しみの種となっていた付き合いも、回想が苦痛を伴うのと同じく、俺にとっては心休まらないものである時、そして、自らの必要を満たすことも気晴らしをすることも出来ずにいる時、これだけ真摯な悩みについては、身の回りの使用人ども一人残らずが分かち合わねばならないのではないかな。

この胸が闘っている恐るべき不安を、朧気ながら描いてみせようかな。実際、朧気なものにならざるを得ないのだ。何しろ、仮にこの不安を凌駕するものがあるとすれば、途方もない狂気の他にはないのだし、それも、他人にしか分からないものだからだよ。何故なら、苦しんでいる者についていえば、これは間違いのないところだろうが、現実の狂気というものは(正気でいる時間から切り離すと)、しばしばその狂気をもたらすことになる宙ぶらりんで不安な状態に比べ、はるかに幸せな状態に違いないからだよ。

愛しの君のお傍に伺うことは禁じられているわけだが、逢いたさが募るものだから、今一度、最愛の君の面前に通してもらうためなら、何をくれてやっても惜しくない気持ちだよ。日に三、四回はロンドンへ向け、馬を走らせている。二マイルか三マイル進むうちに二十回はその是非を諮り、挙げ句の果てに、来た道を戻るのだ。そして、アクスブリッジが見えてくると、暖かい友人や歓待してくれる家をも嫌って、再び馬を都へ向け、己の気持ちを満足させようと腹を決めるのだ。彼女がどう考えようともな。なのに、都に一歩踏み入れた途端、果てしない論議を重ねていながら、もう一度考えを変えるのだよ。そんな真似をして、かくも貴い命を縮めることになりはしないか、それが心配でな。

召使たちにも八つ当たりせずにはいられない、そんな苛立つ心の激しさを君にも分かってもらおうと話すわけだが、特に昨日などは、ウィルを使いに出すや否や、俺も馬に乗ったくらいなのだ。戻ってくるあいつを迎えに行こうというのだよ。

奴に時間を与えるため、俺は道草をした。一方の街道までこちらの小道を辿り、もう一方の街道へあちらの小道を進むといった具合だが、まったくの馬まかせだった。その間ずっと、己の存在そのものを呪っていたし、つい先頃までは世間の者たちすべてを見下していたというのに、貧相この上ない乞食とも立場を交換したいと願いもしたのだ。俺がその傍らを馬で進んで行くと、大声で慈悲を乞うてきた奴だよ。それで、金を投げ与えてやったのだが、奴のお祈りによって、心の底から渇望して止まない祝福にありつけるよう期待してのことだ。

一、二時間もぶらついた後(退屈な三、四時間にも思えたのだが)、あの野郎を見過ごしてしまったのではないかと心配になり、通行税の取立て所ごとに尋ねたのだよ、俺は。かくかくしかじかのお仕着せを纏った下男が、ロンドンからの帰途だが、全速力で馬を飛ばして通り抜けなかったか、とな。というのも、野郎が速歩なんかでのんびりしているところを見掛けでもしたら、ただでは済まさないつもりだったのさ。そして、アクトン通りかハマースミス通りか、いずれかの道を取ることも考えられるから、ケンジントンの一方の

外れで、あるいはまた、ハイドパークを横切るかもしれないし横切らないかもしれないわけで、もう一方の外れで野郎を見失ってはいけないと、宮殿からゴアまでの間を行ったり来たり、何十回となく往復したため、馬上の者であれ徒歩の者であれ、通行人すべての注目の的になってしまったのだよ。立派な服装で、立派な馬に跨がった男が、こんなにも短い間に、ある時はゆっくりと、ある時は跳ね上がりながら（こいつは主人にも勝る駢馬だったのさ）、行きつ戻りつしているのを見て、通行人たちが不思議に思ったのは疑いのないところだろう。

しかし、この間もずっと、あいつの姿を目にしたいものと願いながら、出会うのを恐れてもいたのだよ。由々しい知らせを託されているのでは、とな。

だれか遠くのほうから俺に向かって全速力で馬を飛ばして来る者を目にすると、似姿を作り上げようとする俺の空想力が、すぐにもその人物を奴の姿に描いてしまうのだ。すると、俺の心臓は口のところまで飛び上がってくる。まるで俺を窒息させたがっているみたいにな。しかし、その人物がさらに近づき、俺も間違いに気づくと、どれほどあの悪党の遅れ具合を、そして、貴公のことを、代わる代わる罵ったことだろうか。また、全速力で馬を走らせるのは厚かましいと、すぐにもその見知らぬ者に向かってピストルを抜こうとしたのだよ。全力疾走に及ぶなどということは、俺の使者以外にはだれ一人として権利もなければ、理由もないことに思えたのだ。何しろ、世間の者たちの本分というのは、これほど心の痛む、これほど俺の関心を引く出来事に際しては、ただじっと立ち尽くしていることだけなのだと、そんなふうに思いがちだったからだ。いや、ここ一週間なら、これだけ俺の気分が滅入っているというのに、笑顔を見せるような奴はだれであれ、男女を問わず、その首を掻き切ってやることも出来たのだよ。

今では俺も確信しているのだが、重苦しい場面から逃げ出すような輩というのは、その場に居合わせて、最悪の事態を目にしたり知ったりする場合に比べると、宙ぶらりんな気持ちや不安な思いが途中に入り込むため、十倍もの苦痛を嘗めるということだな。魂の直系の子孫たる空想とか想像力というものには、喜ばしい事柄についてであれ嘆かわしい事柄についてであれ、事実を凌ぐ力がたっぷりと備わっているというわけだ。

そして、このためなのだろうと俺は思うのだが、すべての快楽というものは、達成時よりも予期している段階、あるいは、思い返してみる時のほうが大きいものなのだ。ちょうど、苦痛のすべては、か弱い人間が明日とも知れない命をつなぐよすがとしている、あのしっくりしない組み合わせの両方の側に重くのし掛かっているわけだが、それを被っている時がいつだって最も激しいのと同じことだよ。何しろ、苛酷この上ない不幸でさえ、切り抜けたとなると、思い返しても実に気楽なものだからな。しかし、正直言って、魂よりも肉体に関わりの深い苦痛のほうがはるかに楽なのだ。ただしこれは、今の俺には比較考量すべき時間も知力もない哲学的な問題だ。従って、その点については、狂人の筆の赴くままに受け止めてもらおう。

あの恥知らずどものどちらにせよ、彼女はもうこの世にいないなどと、そんな由々しい報せをもたらすような奴には災いあれだ。というのも、大いに有り得る話だが、ひどく忌み嫌われているメンフクロウにしても、二度と再び、ホーホー、キーキーと鳴くことはなくなるからだよ。はなはだ嘆かわしい折のことでもあり、おそらく俺の体全体の調子を狂わせてしまうショックのせいで（手の安定性を奪うことによってだ）、俺自身に狙いが向け

られるとは言わないが、フクロウの頭、心臓、あるいは、はらわたから狙いが逸れたりしなければの話だがね。

だが、無論、彼女はまだ死んだりはしないのさ。死ぬはずがないのだよ。あのように比べる者とていない素晴らしさで、

その心には
万物を収め、何事にも似つかわしく思われる（七七）

という者が、こうも早々と呼び戻されるために貸し与えられるわけはないのだ。

だが、ベルフォードよ、貴公は愛しの君と手を組んで（確認のために彼女の元へ伺おうとしても、許してくれないのだが）、一計をめぐらしているわけではあるまいな。痛切極まりない後悔の念へと俺の心を煽り立てるためだよ。また、俺の後悔が心からのものであることを確信してくれた時には、そして、俺の心がすっかり臘のようになり、彼女の押し印してくれる形すべてを刻印するに相応しいものとなった暁には、彼女が俺を立ち上がらせてくれるということではあるまいな。健康を取り戻しつつあるという喜ばしい知らせによって、また、俺を受け入れてくれることによってだよ。

そうしてもらえるなら、何だってくれてやろう。それに、名門数家族の間の和平と和解ばかりでなく、何百人もの幸せが彼女の回復に、そして、幸福になることにかかっているというのに、そうなっていけないわけがどこにあるというのだ。

だが、そうなるものと仮定させてくれ。いかにありそうもないことではあっても、かつての夢に耽らせてほしいのだよ。俺としてはそのつもりなのだ。また、楽しむつもりでもいるのだよ。そして、ひとつ言わせてもらいたいのだが、この種の企みの真相が明かされた時には、俺の喜びたるや、まさしく恍惚に近いものとなることだろうな。

是非ともそのようにしてもらいたいのだ、親愛なるベルフォードよ。そして、あゝ、我が最愛の、永久に愛するクラリッサよ、この惨たらしいどっちつかずの状態にこれ以上私を引き止めないでほしい。かつてそなたに嘗めさせたものの、その千倍もの苦しみを私は味わっているのだよ。それに、こんなにも望ましいものなのだ。真相解明に際しても、私が腹を立てるとか、身を引くといったことは恐れないでもらいたい。そなたのことは永久に崇拝するつもりなのだ。それに、私を責め苛んで来たそなたのもたらす苦痛のことは咎めもせず、そなたが私に優っていることを認めようと思うのだよ。美徳と名誉心の点と同様、高尚にして寛大なる工夫の点においてもだ。

だが、繰り返そう。万一、最悪の事態に至るとしたら　…　その最悪の事態の何たるかは言わないでくれ　…　俺はこの忌まわしい島国を捨てるのだ　…　永久にだ　…　そして、願わくは永遠の　…　だが、すでに狂っているな、俺も。だから、こう結びをつけることにしよう。

俺自身以上に貴公のものたる
（また、大したお世辞のつもりでもないのだよ、これは）
R. L.

手紙　九十五
ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

九月五日　火曜日　午前九時　スミス宅にて

君の今朝の手紙を読んだ時には、俺も同情せずにはいられなかった。今味わっている恐るべき不安や気掛かりについての君の説明に対してだよ。君も大いに胸を膨らませているわけだが、すべてが君の希望どおりに終わるよう、心から願っている。だが、そうはなるまいな。また、君の宙ぶらりんな状態は、君も認めているように、君の苦痛の最大のものだとしても、間もなく終わりを告げることになるだろう。ただ、残念なことに、君の望まない形でなのだ。

今し方、令嬢の元へ伺ってきたところだ。令嬢の具合はすこぶる良くない。なのに、彼女はお気に入りのノートンの手紙に返事をしようとしているのだ。昨日、彼女の自室で始め、かなり書き進めたのだが、ロヴィック夫人の話では、令嬢独特の繊細な筆跡とは違っており、字はずっと大きく、行にも歪みがあるそうだ。

ロヴィック未亡人の部屋と隣り合っている一室の提供を受けた。事の成り行きを見届けるまでのことだが、令嬢には内緒にしてある。それに、毎晩二、三時間は帰宅することになるだろう。あのように啓発的な唇を通して得られる言葉を、一句たりとも聞き逃したくないし、どのようなものであれ、彼女の指示を受ける機会も失いたくないのだよ。地所と引き換えであってもな。

俺のこの新しい貸間で筆を執っているところだ。そして、機会があり次第、書き続けることにしよう。さらに委曲を尽くすことが出来るようにというわけだよ。ただ、俺の手紙とか、手紙の写しとかについては、請求次第、返却してもらえるものと考えている。この痛ましい物語に関わるものすべてを一緒にまとめておくためだ。この命の尽きるまで、読み返してみては、憂いに沈みながらも楽しむことにする。

あの下劣な憶測を撤回しているものだが、ジョン・ハーロー氏に宛てたブランドの手紙を送り届けようと思う。学者ぶったものとしては、類いまれな逸品だ。もしかすると、貴公の無念やる方ない気持ちを紛らしてくれるかもしれないぞ。少なくとも、しばらくするとだよ。今は無理だとしてもな。

何という恥知らずな連中がこの世にはいるのだろうな。何とも奇妙に入り雑じった気質の輩たちだよ。ずいぶん分別がありながら、同時に、ひどく馬鹿げてもいるのだ。何て多様で、何て愚かな生き物なのだろうな、人間というのは。

三時

令嬢はちょうど手紙を書き終え、ロヴィック夫人、スミスの上さん、そして俺を、高尚な話でもってもてなしてくれたところだ。人生の空しさとはかなさについてだったが、俺が繰り返しても、その真価を正しく伝えるわけには行くまい。実際、彼女のことでひどく心が痛むものだから、俺の頭は彼女の半分も明晰ではないのだよ。彼女のほうは病んでいるというのにな。

話し振りからしてそうだし、また、その趣旨そのものからしてもそうだったのだが、俺に最も強い印象を残した事柄を二つ三つ覚えている。彼女はそれらをこんな具合に切り出

してみせたのだよ。

「私は思うのですが」と、彼女は言った。「何とゆるやかな、そして、幸せな最期を、全能の神様は（御名がほめたたえられんことを）授けてくださるのでしょうね。私が嘗めましたような苦しみを味わい、また、私が授かりましたような行き届いた教育に恵まれながら、このように破廉恥な真似をしてしまいました私ですのに、こんなにもゆっくりと最期を迎えることになるなどと、どなたが考えたことでしょうか。でも、ご承知いただきたいのです。本当にわずかずつこの状態に至ったのだという点をです。まず最初には、歩く力を奪われたのです。そこで、私は馬車を使いました。馬車で出掛けますのがきつすぎるようになりますと、駕籠を使うことにいたしました。あの牢獄が、私にとりましては、死へ向けての大股な歩みとなったのです。さもなければ、私はもっと長い間苦しんでいたことでしょうね。次には、礼拝式への出席が出来なくなりました。それから、階段の昇り降りもです。今ですと、お部屋からお部屋へと移動いたしますのもままならなくなっております。そして、間もなく、私はもっと狭いお部屋に収まることになるのでしょう。視力が衰え始めておりまして、はっきりと読み取りますのにも、目が利かないことが時々あるのです。そして、書き物をするとかペンを握るとかいたしますのも、今ではほとんど出来なくなっております。次には、おそらく、だれのことも分からなくなるでしょうし、皆様のどなたにお礼を申し上げることも出来なくなるのでしょう。ですから、ロヴィックさん、スミスさん、そして、ベルフォードさん、皆様からいただきましたご親切のすべてに対しまして、お礼を申し上げることが出来ますうちに、ここでもう一度お礼申し上げておこうと思います。私が恵まれましたような、ゆるやかで、自覚することの出来ます最期によりまして、こうしてほんの少しずつ、神様は人間らしい満足のすべてを、いわば私たちの中で死に絶えさせておしまいになるのですが、ご自身の手に成る哀れな人間を、ご自分に従わせようとのお考えからなのです」とだよ。

衰弱の進み具合を説明するこの哀れを誘う言葉に、われわれ全員がどれほど心を打たれたことか、貴公にも察しはつくだろう。われわれは目を潤ませて聞き入っていたのだ。婦人たちの手本もあれば、令嬢の心動かす雄弁さもあって、婦人たちと同様、俺にしても堪えることが出来なかったのだよ。だが、われわれは声一つ立てずにいた。そこで、彼女は俺に向かって次のように話を続けたのだ。

「あゝ、ベルフォードさん、人の一生というのは、その一番の楽しみごとにいたしましても、たった一時のものでございます。私たちは彩り鮮やかな蝶のように、精一杯に飾り立てまして、華やかでもほんの束の間の季節をあちこちと飛び回るのですが、やがてそのうちには、活動をやめて横たわり、嫌らしい虫けらへと変わるのです。そして、再び立ち上がります時には、私たちはどのような姿なのか、どのような立場なのか、だれにも分からないことではないのでしょうか。

十九になったばかりの若い娘ですし、二、三ヶ月前には若い盛りで、健康そのものでしたのに、今は死の冷たい手に摘み取られてしまいました私ではございますが、今わの際に臨みまして、貴方が規則正しい生活、そして、これまでに手を染められたかもしれない諸々の悪事につきまして、懺悔の日々に入られますよう、お勧めいたしますのを許していただきたいのです。と申しますのも、信じていただきたいのですが、この最後の段階になりますと、自分ではあまり罪深いものではないと考えておりますような生涯でも、私たちが行

いましたこととか、楽しんでおりましたことすべての中で、私たち自身によります審理の場で、あるいは、もっと恐ろしい審判の場で、検査に合格するようなものとか、仮に容赦してもらえるといたしましても、称賛に値するとされますようなものは、極めてわずかしかないからなのです。だといたしますと、私たちは闇の時刻が近づきます前の、日の高いうちに学ぶべきではないでしょうか。今わの際がまいりました時に、その折の苦痛を和らげてくれますような、そして、恐ろしい無窮の彼方へと続く道筋を照らし出しますためにも、あの世へ旅立つ魂の上に神様の慈悲の光を注ぐことになりますような、そのような回想を可能にしてくれる生き方をですわ」とだよ。

令嬢は今にも気を失いそうであり、横になりたいとのことであったので、俺は引き下がることにした。言うまでもあるまいが、憂いに沈む心を抱いてだよ。そして、新しく借りた部屋に至ると、俺の心はさらに痛むこととなったが、あの賛美すべき令嬢が先頃書き終えたばかりの厳粛な手紙が目に入ったからだ。ロヴィック夫人から知らされたものなのだが、夫人は俺用の写しを作るために所持していたのだ。ただ、令嬢が亡くなるまでは、俺に渡してはいけないことになっていたのだよ。だが、俺としては、写しを作るのは任せてくれるよう、未亡人を説得するところまで無理を通したのだ。そして、すぐに速記で写しを取ったのだよ。

その写しを同封しておこう。読んでみても、貴公の心臓がその両の目から血を流すことにならないようであれば、貴公の後悔というのも、それほど痛切なものではないということになるな。貴公に促されて思い描いていたほどにはな。

手紙　九十六

クラリッサ・ハーロー嬢からノートン夫人へ

［手紙九十への返事として(ア)］

大切な大切なノートン夫人へ

前回のお便りの話題となりました事柄につきまして、是非とも申し上げたいことがあるのですが、そのすべてを筆にいたしますのは無理のようにも思うのです。でも、試してみることにいたしましょう。

身内の者たちに関しましては、また、あの残念な朝食会のことにつきましては、他ならない皆のためにも、心を痛めずにはおられません。あゝ、特にお母様がそうですが、私の軽はずみな行動のせいで、どれほど辛い思いをなさったことでしょうか。ただ、息子に対しましてはそんなにも手心を加えておりますのに、娘相手にはほとんど何もないというのは　…　でも、私に関しましては、間もなくすべてが終わりを告げることでしょう。皆が自分たちの恨みのすべてを私のお墓に葬ってくれますよう願っております。

ベルフォードさんについてのご忠告の件ですが、ただ次のことだけを言わせていただきます。つまり、今では、私が出会ってまいりました残念な非難の姿勢、そして、余命幾許

(ア)　九月四日月曜日に書き始められ、断続的に書き継がれて火曜日に完了したものであるが、木曜日までは発送されなかったのである。

もないという点を言い訳にしなければいけないということです。ご忠告のとおりに、母やおじたちに便りをすることが可能であったならと、本当にそう思います。でも、皆の場合には、好意を示してくれますのにひどく時間が掛かるものですから …

皆から得られます望ましい事柄といたしましては、今は、たった一つの願いを聞き入れていただくことだけになっているのです。とは申しましても、それを聞き入れていただきました時にも、私には感じ取る力がなくなっているようなものなのです。つまり、私の遺骸をご先祖様たちのものと一緒に埋葬していただきたい、ということです。遺言書の中でも触れていることですが、尊いお祖父様の足下に置いていただきたいということです。でも、この点は皆の意向に任せることといたします。と申しますのも、結局のところ、この汚れた体のことがあまりに強く私の心を占めることになってはいけないからです。これは一つの弱さなのでしょうね。でも、人間本来の弱さと呼んでいただきましょう。そうしてくだされば、私も容赦していただけることになるでしょう。とりわけ、その土台となっておりますものが、敬意に満ちた感謝の気持ちであることが分かりました暁にはです。お祖父様がどれほど私を愛してくださっていたか、大好きな貴女もご存じのはずですわね。それに、私がお祖父様を、それも、ほんの幼い頃から、お祖父様が亡くなられるまでのことですが、どれほど尊敬申し上げていたのかにつきましても、貴女はご存じでしょう。その後、私は何度願ったことでしょうね。お祖父様があんなにも愛してくださらなければ良かったのに、とです。

今のところ、これを認めております時点では、親戚のモーデンにも会いたいとは思わないのです。あゝ、幸せなお方 … 母親にも等しい大切なお友達 … 私は旅路につこうとしておりますが、フランス行きとかイタリア行きとか、そのどちらよりも喜ばしい旅なのです。あるいはまた、以前は大好きでした、あの搾乳小屋に落ち着きますことよりもさらに喜ばしいものなのです。健康な時にはとても好ましいものに思えておりましたこういった見込みや楽しみごとにいたしましても、今の私の目には何とみすぼらしく映ることでしょうか。

本当です。本当なのです、大好きな私のノートン・ママ。私は幸せになるのです。そうなることは分かっているのです。すでにもう、幸せになるのだという素敵な予感がしています。身内の者たち全員に、皆の慰めとなるようにですが、その旨を伝えていただきたいのです。私が耐え忍びました懲らしめを我慢しようとしない人など、どこにいるでしょうか。私が享受しておりますような見込みと保証とを得るためのことなのです。もしも、私自身の望みが叶えられることになっておりましたなら、手にすることはなかったかもしれないような保証をです。

それに、大好きなノートン夫人、今の私は貴女にさえもお会いしたいとは思わないのです。とは申せ、私の感謝の気持ちを正しくお伝えいたしますためにも、次の点ははっきりと申し上げておかねばなりませんね。つまり、貴女にとりましては、ご自分に対する敬意を促し、持ち続けてもらいますことが不可欠な、そんな人たちの怒りを招くことなしに私のところへいらっしゃる許可が得られたとしての話ですが、その場合には、貴女のお姿や慰めのお言葉がこの傷ついた心の香油となっておりましたような時期も確かにあったという点です。でも、貴女が今、たとえ同意の上で、また、和解のための報せを携えて来られるといたしましても、貴女の悲しみを募らせるだけのことでしょうし、私がこんなにも大

切に思っておりますお方、そして、吉報を担って大層幸せそうにしておられるお方のお姿を拝見いたしますと、大変な苦闘の末に乗り越えました数々の願いへと心を引き戻されるだけのことにもなりましょう。それに、貴女の慰めとなりますようにと思い、お話しする次第ですが、心身のいずれに関しましても、為されねばならない事柄でやり残しましたものは何一つないということです。些細なことこの上ないものに至りますまで、一つとしてないのです。ですから、私のために手掛けていただくことは一つもございません。葬儀につきましては、皆様お一人お一人に指示を用意してあります。それに、今書くのに使っております私の机は …… あゝ、大好きなノートン夫人、用意万端整っております。すべて準備が出来ているのです。そして、何もかもが、そうあって然るべき、見苦しくない形になることでしょう。

それから、どうぞハウさんにお知らせいただきたいのです。つまり、貴女がこれをお受け取りになります頃、そして、あの方が文面についての知らせを貴女から受け取られる頃までには、かつては私もそのように受け止めたはずですが、私に会ってくださるという計り知れないほどのご厚意をお示しくださいますのには、まず間違いなく、時すでに遅しということになっているだろうという点をです。神様はご自分がお清めになる者たちの心の中に、競争相手を持とうとはなさらないのです。様々な方法によりまして、神様は他の感覚すべてを鈍らせてしまわれるのです。あるいは、むしろ、すべてをご自分に対する愛情に吸収同化してしまわれるということです。

それでもやはり、貴女のことはお慕い申し上げるでしょうね、ノートン・ママ。それから、ハウさんのこともですが、あの方の私に対する愛情は、最後の最後まで、女性の愛情を越えたものだったのです。でも、かつては私を一番楽しませてくれたものですが、その種の喜びに敏感に反応いたしますことを、今の私は卒業しているのです。それに、重ねて申し上げますが、私の感覚を再び呼び覚ましまして、至高の愛の競争相手ともなり兼ねないような、私にとりましてそれほどまでに貴重なものには、目を向けたくはないということなのです。

❁　❁

二度、やむなく筆を置くことになってしまいました。最後に便りをいたしますのは貴女か、それとも、ハウさん宛になるように私は願っていたのです。私の一番大切なマ…ではないのでしたらね。

〈ママ〉と書くつもりだったのですが、文字ははっきりしておりますでしょうか。目がひどく霞んでいるものですから …… もしも、貴女に呼び掛けます際に、綴りの中ほどで字が途切れてしまうようでしたら、貴女のほうで補足してくださいね。一番親しみの籠もった言葉が貴女には相応しいのです。何か欠落がございます時には、その欠落を埋めますのに、間違いなく、一番親しみの籠もったものになさっていただきたいのです。

❁　❁

また中断をしてしまいました。でも、翼に癒しの力を宿しまして、新たな日が始まろう

としているようです。体力を回復したように思います。気力につきましても、有難いことに、最近では不足を感じたことはございません。

結婚衣裳を購入なさるよう、大好きなハウさんにお勧めください。そして、その楽しい準備には、この世の幸せのすべてが伴いますよう、お祈りいたします。お幸せになられることでしょう。疑いもございません。時折ヒックマンさんが出くわされることになります薄曇りの日々にも拘らずです。それらは、やがて訪れるあの人にとっての黄金の日の前兆に他ならないのです。と申しますのも、あの方のお心は立派なものですし、お考えも間違ってはいないからです。ただ、大きな美点というのは遠慮をしがちなものですし、その遠慮がちなところにいたしましても、必ずしもプライドを土台にしているわけではないのです。でも、仮にもプライドのように見えるようでしたら、ほんの一皮だけ剥いてみていただきたいのです。そうすれば、あの方の場合には、それは高潔なお心ゆえの自信のなさであり、確信を与えられることだけを求めている愛情なのだということがお分かりになるはずなのです。

私がこれを筆にしておりますことを、また、そのように確信する次第ですが、最後の筆で認めておりますことを、ヒックマンさんにお伝えください。そして、初めのうちは少々我慢をし、怒りは抑えていただくよう、あの人にお伝え願います。そうしていただけますなら、その後の日々は終始一貫して、この上ない感謝の気持ちとお返しとしての愛情とに包まれることになるでしょう。と申しますのも、ハウさんは立派な思慮分別、素晴らしい判断力、そして、高潔な雅量を備えておられるのです。そのようなお方が、あの人のお心遣いやご親切から背負うことになりますような（あの方のことをご自分のものとお呼びになる幸せに恵まれました時のことですが）、そのような恩義の下で、果たして、不義理な真似をするとか、呑気に構えるとかしていられるものでしょうか。

私のことを申しますと、これほど準備の整っております花嫁もかつていなかったものと存じます。結婚衣装は買い求めてあるのです。また、見た目には立派でも華やかでもございませんし、宝石で飾ることも、金糸や銀糸で引き立たせることもしてありません（その目を奪いたく思いますような、そのような参観者もいませんのでね）。でも、花嫁となる乙女がこれまでに着用いたしましたものの中でも最も寛げる、最も幸せなスーツとなるはずなのです。と申しますのは、この上なく前途有望と見えます始まりの後に続いて起こることが時々ございます、そのような心配ごとや苦しみ、そして、不安の種すべてに対する保障を伴っております衣裳だからなのです。

そして今、私といたしましては、大好きなノートン夫人、他のものは決して欲しいと思わないのです。

あゝ、慈悲深い神様、もしもそれが神聖なご意思なのでしたら、早めていただきたいのです。すべてを静めてくれますこの衣裳を装うことになる、その幸せな瞬間をです。そして、すべてをその影で覆い尽くします慈悲の翼によりまして、私の大切な両親を、おじたちを、兄を、姉を、従兄弟のモーデンを、いつでも大切な、いつも優しくしてくださるハウさんを、善良なノートン夫人を、そして、皆様が善かれと願っております立派な人たちの一人残らずを支え、慰め、祝福を与え、保護していただきたいのです。これは、時計が時を告げるにつれ（今は一時間が一日、いいえ、一年にも思われるのです）、新たな時刻を迎えますたびに、もう悲しむとか苦しむとかはせずに、幸せに感じております私が、終始

一貫して捧げております熱心な祈りなのです。

今は悲しみとか苦しみはなく、幸せになっております、貴女の

クラリッサ・ハーロー

手紙　九十七

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

九月六日　水曜日　午前三時三十分

君が、そして、俺の不倶戴天の敵どもが考えているような野蛮人とは違うのだよ、この俺は。前回の君の便りに同封されていた手紙の内容から受けた印象があまりに強烈で、この心臓の血管一本一本から血が吹き出すような思いであったということ以上には、一言として付け加えるべき点はないのだ。あの話題からは逃げ出したいのだよ。だが、他のどんなものを選ぶことが俺に出来るというのだ。同程度の苦痛を伴ったり、同じ話題へ導いたりすることのないものでだよ。

世間の者たちすべてと争っても構わないのだ。他の連中と同様、貴公ともだよ。俺宛に時々刻々と書き送ることで、親切を施しているように貴公は思っているようだがね。彼女と一つ屋根の下に部屋を借りるような（彼女の承知しないこととはいえ）、そんな厚かましい真似がよくも出来るものだな。彼女の部屋へ向かい、そこから戻って来る貴公の姿が四六時中人の目に付くなど、考えるだけでも我慢がならないのだよ。彼女を自分のものと呼んで当然至極な俺が、そして、かつては、彼女から世間のすべての者に優先されていたこの俺が、遠く離れていることを余儀なくされ、彼女の住む街へ入る勇気もなかなか持てずにいるというのにだ。

何か俺の気晴らしになるようなものがブランドの手紙にあるのであれば、急ぎ送り届けてくれ。だが、今では、何をもってしても俺の気を晴らすことにはなるまいな。再び楽しみや喜びを与えてくれるものは何一つとしてないのだよ。食べ物も飲み物も喉を通らないし、眠ることも出来ない。この世のすべてに嫌気がさしているのだ。

間違いなく、すべてが終われば元気になるのだろう。つまり、運命の三女神がもたらし得る最悪の事態を俺が知った時にはだよ。ただ、その最悪の事態をどのようにして耐えるというのだ。あゝ、ベルフォード、ベルフォード、そのことについては書き送らないようにするのだな。だが、どうしてもそのような事態に至らずには済まないのであれば、他の者に代筆をさせることだよ。俺としては、その致命的な報せを伝えるのに携わったペンや手、頭、そして、心を呪うことになるだろうからな。それにしても、何という言い方なのだろうな、これは。彼女のことは別だが、すでに世間のすべてを、とりわけ我と我が身を呪っているというのにだよ。

要するに、俺は飛び切り惨めな人間だということだな。生きているのが重荷なのだ。俺の定めがいかなるものであれ、こういった条件でなら、さらに一週間生きるのは耐えられないだろうな。何しろ、すでにこの心の中では地獄の口が開き始めているのだよ。彼女の言葉にせよ、だれが言うにせよ、〈牢獄〉という言葉はこの先二度と俺に向かって口にしないようにしてもらおう。耐えられないのだよ。愛しの君の言い方だが、死神にあの「大股

な歩み」を取らせて平気な忌まわしい女などは、すぐにも地獄に落ちれば良いのだ。あの件に俺は一切関わっていなかったのだよ。彼女の親戚なのだ。彼女の執念深い親戚どもが手を下したのだよ。他のすべてについては、乗り越えられていたことだろうな。いくら俺を説きつけたところで、そうなっていたはずなのだ。激情の嵐とさえ言えそうな熱烈さで言い寄られるのを女は好むものだが、そんな女の一人に対してなら、〈若さゆえの情火〉や〈情熱の激しさ〉が俺の言い訳として立派に効果を上げていたことだろう。あの無慈悲さと容赦のなさがなかったならの話だが、それらこそは（相手を、そして、後悔の様子を考慮するなら）他に類を見ないものだし、俺の罪の極悪さ加減をさらに増幅させてきたものなのだよ。

二時までベッドに入らなかったのだが、眠ることが出来ないから、これは夜明け前に急ぎ届けることにする。今晩中に、この陰鬱な夜の間に、果たしていかなる事態に至っていることやら …

使いの者の後を追わねばならん。多分、ナイツブリッジかピカディリーの辺りで落ち合うことになると、奴に話してあるのだ。それと、心配だから、ピストルは持たないことにする。奴のためばかりではない。俺自身のためにもだよ。何しろ、ピストルというのはすぐにも悪さをしてしまうものだからな。

奴に渡してくれる手紙の用意が出来ているよう願っている。奴は真っ先に貴公の下宿へ向かう。貴公にしても、まさか、彼女の近くの部屋で眠りに就くような厚かましい真似はしないだろうからな。貴公が下宿に見当たらない場合、奴はスミスのところへ急行し、存命か否か、消息を伝えることになっている。

馬を進めながら奴を探すことにしよう。馬上は勿論のこと、空中についてもだよ。というのは、もしも空中に勢力を持つ者が、俺が尽くしてきたように、俺にも十分に尽くしてくれるのであれば、ハバクク（七八）の再来といったところで、奴の両耳を掴まえ、俺の鞍の前輪まで連れてきてくれることだろうからな。心の底から待ち焦がれている報せを持たせてだよ。

俺が今感じているもの、そして、ここ一週間近くに亘って感じてきたものを凌ぐものがあるとすれば、それは、恐れるようわれわれが教えられている、あの果てしない苦悩の日々を迎えて、罪ありと認められた魂が感じる堪え難い痛みの他には有り得ないのだよ。俺宛の手紙の用意が出来ていないというのであれば、貴公にもその痛みを少々味わってもらいたいものだな。

貴公のラヴレース

手紙　九十八

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

九月五日　火曜日　六時

令嬢は甚だしく弱っており、重症のままだ。それでいて、思考力は依然として明晰でしっかりとしたものであり、敬虔さと忍耐強さには比類のないものがある。彼女にはこれが最後の夜だろうと、だれもがそう考えているのだ。あれほどの卓越した女性にそんな言葉

を向けなければならないとは、何とショッキングな話なのだろう。だが、ノートン夫人宛の手紙を彼女はまだ出さないだろうな。宛名を書こうとして骨折ったのだが、出来ずに俺に頼んだのだよ。そうするのに必要なだけしっかりとペンを握ることが彼女の指では無理なのだ。彼女が物を書くのも読むのも、これで最後だろうな。

八時

令嬢の具合がこれまでよりいくぶん良い。医者の往診があった。医者の考えでは、彼女はあと一、二日持ちこたえるだろうとのことだ。ここしばらくと同じ指示だが、気が遠くなりかけた時にということで、彼女には強心剤少量の服用だけを命じていた。まだ二、三日は大丈夫なことを医者が伝えると、彼女は気落ちした様子で、解放されるのを待ち焦がれているのだと言っていた。命というのは、人が考えるほど容易には消滅しないものであることが分かったというのだ。悲しみゆえの死は、彼女の信じるところでは、最も時間の掛かるものだという。だが、神の御旨は行われねばならない、というのだ。今彼女が祈ることといえば、その御旨に従うことだけであるが、この限りある命のぼろ布を脱ぎ捨てることが出来次第、神のご恩寵により、自分は幸せ者になるはずだから、というのだよ。

彼女は自分から進んで君のことを口にしたのだが、それまでは避けていたことだ。君がどこにいるのか、彼女は落ち着き払った様子で尋ねていた。

俺は君の居場所と、そんなにも近くにいる動機について話し、君の今朝の手紙から数行を読んで聞かせた。彼女に会いたいという君の気持ちや心からの苦悩、そして、同意なしに彼女には近づくまいという、決意のほどを述べているものだ。

俺はもっと読もうとしたのだが、彼女がこう言うのだよ。「十分ですわ、ベルフォードさん。もう結構です。お気の毒に … 良心のお陰なのですね。ご自分に気づき始めておられるのでしょう。それであれば、どなたにいたしましても、これ以上重い罰をあの人に願う必要はないわけです。望ましい効果を及ぼしてくれると宜しいですね」とだよ。

失礼をも顧みず、俺は次のように言ったのだ。今では、何一つとして心の平静さを奪うものはないように思われる、そんな心境に彼女はあるわけだから、彼女から諫めてもらうという恩典が君にあっても良さそうに思う、とだよ。君がそのように深く心を動かされていることでもあり、おそらく、彼女の諫めは千の説教にもまして君に強く働き掛けるだろうし、彼女の許しを跪いて受けることが出来さえすれば、君としても大変な幸せ者のように思うはずだ、とな。

「どうしてそのようなことを思いつかれるのでしょうね、ベルフォードさん」と、少し感情を表しながら彼女は言っていた。そして、「私の平静さは、そうありたいと思う私の心からの願いに祝福を与えてくださる神様の優しさに由来しておりますが、その次には、あの人に会わずにおりますことから来ているものなのです。でも、あの人にお知らせいただきましょう。ここでもう一度繰り返しますが、あの人を許しているということをです。そして、全能の神様も」と、両手の指を組み合わせ、天を仰ぎながら、「あの人のことをお許しになり、そして、あの人の懺悔を完全なものとし、清めてくださいますようお祈りいたしましょう。私がそのように申しているとお伝え願います。また、次の点もお伝えください。もしも心の底からそのように申し上げることが出来ないようでしたら、私はひどく不安になるでしょうし、私自身に対するお慈悲への望みにつきましても、根拠は薄弱なもの

に過ぎなかったのだと考えることでしょう。また、あの人のせいで短くなってしまいました命ですが、胸に宿しております恨みの中には、生きていたいという気持ちが今でもいくらか残っているのだと、そのようにも考えることでしょう、とです」と言うのだよ。

それから、神々しいばかりの令嬢は顔を背けながら、こう言ったのだ。「お気の毒な人ですね。以前には、愛して差し上げることも出来そうな方だったのです。このような言い方は、私自身の家族を別にいたしますと、他のどなたにつきましてもなかなか出来ないことですわ。あの人を善導いたしますための、そのささやかな手立てとなりますことを許してくださっていたなら、幸せにして差し上げられたはずと存じます。でも、あの人が本当に後悔しているのでしたら、このことはお話しにならないでくださいね。あまりにもあの人の心を掻き乱すことになるかもしれませんからね」とだ。そして、そこまで言うと、彼女は一息ついたのだ。

実に素晴らしい令嬢だ。神にも似た許し手だよ。そして、再び彼女は口を開くと、次のように言っていた。「でも、どうかあの人にお伝えいただきたいのです。私の死があの人を矯正しお救いする手段となり得るのだということを、もしも知ることが出来ますなら、私にとりましては、言い表しようもないほど満足な話だということをです。

ただ、あの人と顔を合わせるかもしれないという懸念から、不安な思いをさせられることがないようにしていただきたいのです。お会いいたしますのは、私、耐えられないのです」とだよ。

彼女が話し終わったちょうどその時、これまで何度も彼女に付き添ったことのある、例の牧師が来意を告げてよこし、中へ通してもらうことになったのだ。

死の際にある彼女の邪魔をしたりせぬよう、自分の激しい気性を説き伏せるのは、君にとっても骨の折れる話だろうと思ったし、また、その種の不意打ちを受けた場合だが、彼女が味わう激しい苦悩のことを心配していたこともあり、この紳士の訪問は先ほどの件をもう一度持ち出す恰好の機会を提供しているように思ったのだ。そこで（彼女の許しを求めた上でだが）、われわれが話題としていた点を彼に紹介したわけだよ。

この篤信家は次のように説いていた。彼女のように敬虔な魂の持ち主については、こういった厳粛な折に、遜った言動をいくつか期待されるのが通例であるが、それは、自分自身にはどれほど満足しているにせよ、自分に最も大きな害をもたらした者たちに対する怒りのすべてが鎮まっていることを世間に向かって、そして、手本となるように示すためなのである。それに、もしも、俺がラヴレースの場合について述べてみせたように、本当に悔い改めた心の持ち主に対して、俺が懇願して来たあの許しを直接授けてもらえるようであれば、ほんのわずかにせよ、恨みを今なお潜めているのだ、などと推測する余地は一切なくなるだろうし、相手の紳士に対しても極めて望ましい影響を及ぼすことになるかもしれない、とだよ。

「胸に恨みを潜めてなどおりませんわ」と、彼女が言った。「恨んでいる時ではないのです。それに、次の点を保証して差し上げました時には（と、俺に顔を向けながら）、さらに快く私のことを信じていただけるものと存じます。私が一番嬉しく思っておりましたものでさえ、つまり、この世の大切なものすべての中でも、私にとりましては最後の最後まで一番大切なものとなるはずの、私のハウさんとあの方のクラリッサとの間にこんなにも長く続いてまいりました真の友愛の情にいたしましても、その熱烈さはすでに静まっている

ということなのです。より崇高な熱情にすでに席を譲っているのです。それに、ラヴレースさんが加えました身体的な侮辱に関する記憶につきましても、ハウさんの友情にとりましてはあれほど大きな喜びの種となっておりました、この魂までを汚すようなことは、有難いことに、決してなかったわけですし、それが今この時に、私にとりまして、人間の心が誇り得るかぎり純粋な、そんな愛の記憶よりも強いものとなって構わないものなのでしょうか。ですから、宜しければ、世間の人たちにお伝え願います。そして（もしも、ベルフォードさん、以前お話しいたしましたことでは強烈さに欠けるとお考えなら）、お気の毒なあの人にもお伝えいただきたいのです。あの人のことは許して差し上げるだけではございません。あの人の魂の安寧を心の底から祈ってもおりますし、それも、霊魂の不滅性を考慮してのことでありますから、私の懺悔が自分のもの以外の罪に対しましても役立つならの話ですが、その場合には、私の最後の涙は、命を落とす原因となったあの人のために流れるはずだということをですわ」とだよ。

われわれの目と手が代弁してくれたのだよ。口では言い表すことの出来ないわれわれ二人の胸の内をな。

「ですから、おっしゃらないでくださいね」と、彼女が言葉を続けた。「また、人様から言われたりしないようにもしていただきたいのです。私の怒りは鎮まっていない、などといったことをです。でも、私の言葉が真実であることの証といたしまして天を仰いでおりますこの目は、この先二度とあの人を眺めたりはしないはずです。もしも避けられるのでしたらね。と申しますのも、いかがでしょう、貴方たちは次の点をお考えではないのでしょうか。つまり、私の余命はいかにも短いものですし、その時間にいたしましても、はるかに重要な事柄のために用いねばならないのだということ、それに、公言されております懺悔とは申せ、まだ冷めやらない熱情、そして、いつも激しく燃え盛ります熱情に支配された、身体壮健な人物と争いますのには、この私では（ひどく弱ってもおりますし）到底手に負えないのだということをです。これで、貴方たちももうこの話題を無理に押しつけたりはなさらないものと存じます」とだよ。

先の嘆願をもう一度行ったりするようなことがあれば、まことに遺憾な話だと、牧師のほうでは言っていた。

ご覧のとおりだ、ラヴレース。友人としての務めを忘れてはいなかったのだ、俺も。最後の許しを手ずから君に与えてくれるよう、令嬢の説得に力を尽くしたのだからな。それに、彼女は死を目前にしていることでもあり、君が今わの際にある彼女の邪魔をしたりしないよう希望している。そのような面談に臨めば、彼女は甚だしく心を乱されてしまうに違いないし、この世を去るのが一層早まるかもしれないからだよ。

これで思い出されるのは、スミスのところにいる彼女を残酷にも君が突き止めた時、彼女が用いた表現だ。彼女が下宿に戻って来た際のことで、それも、比類のない晴朗さでだったのだが（ロヴィック夫人も話していたように、あの出来事、それによって彼女の身に降り懸かった迷惑、そして、当時の彼女の体調の悪さを考慮するならばだ）、「見苦しくない死に方をさせてくださらないのですね、あの人は」と、天使のような受難者は言っていたのだ。「地上の君主の客間へ通ります際に求められます落ち着きをもって、私の造り主の御前へと罷り出ますのを許してくださらないのです、あの人は」とだよ。

ただ、この最後の時に臨んで、神々しいばかりの令嬢が自分を枉げ、君に一目会ってく

れたならと、俺としてもそんな願いを抑えることが出来ないのだ。それも、君のためと同じく、俺のためにもだよ。何しろ、ここ数週間前まで、俺のこれまでの人生の汚点となっていた、そして、それゆえに、己に対し今では心からの嫌悪を覚えている、そんな罪過を二度と犯さない決意でいるのだが、それでも、もしも君が（そのような面談にはつきものの厳粛さに促されて）真人間になってくれたなら、俺としても、後戻りの心配は少なくなると思うからだよ。どんな悪魔だって恐れる俺ではないが、君の姿を借りている奴だけは別だからな。

❦　❦　❦

今、夜の十一時だ。令嬢は休むため一時間前に退室したのだが、ロヴィック夫人の話では、安らかに眠っているとのことだ。

ここで筆を置くことにする。明日の朝には、この安らかな眠りのお陰で、令嬢の具合が良くなっているよう希望している。だが、あゝ、希望の何とはかないことか。命の何とはかないことだろうか。影ほどでも救いが訪れるたびに、われわれは大きな期待を寄せがちだというのにだよ。このように絶望的な場合、ちょっと腰を下ろして考えれば、それが影にすぎないことは分かるはずなのだがな。

ブランドの恐ろしく衒学的な手紙を同封しておこう。今度ばかりは、貴公の飢え切ったような性急さの先手を打つことになるな。

手紙　九十九

ブランド氏からジョン・ウォールトン氏へ

九月二日　土曜日　夜

親愛なるウォールトン殿

ハーロー家の下のお嬢様のお人柄につき、公平なる評価を行うべくご送付いただきました、筆跡も鮮やかな（かつ、高雅なる文章の）お手紙のこと、感謝いたしております。しかしながら、お手紙の届きます前から、我々はことごとく間違っていたのだと考えて然るべき（そして、実際、承知していて然るべき）理由が、小生にはあったのだと申さねばなりません。それゆえ、小生といたしましては、高徳なる我が庇護者、ジョン・ハーロー氏へのお詫びの書状を書き上げるため、この一週間の大部分を費やした次第ですが、小生と皆様方とのことにつき、そして（小生の力の及ぶ限り）、皆様方とお嬢様との件に関し、万事を正常化するためのことであります。従いまして、貴兄のお手紙を拝受いたしました時にも、言葉を繋ぎ合わせ、転記する以上のことはほぼ不要になっていたのです。また、詫び状が前述のハーロー氏に届きますのは明朝のことになりましょう。そして、月曜の朝には、これとそちらの手紙の写しとが貴兄のお手元に届くはずです。

貴兄ならびにウォールトン夫人、また、バーカー夫人や小生自身が、人柄や評判に関わることでありながら、あのように軽々しく問題を（悲しいかな、外見と憶測によって判断し）取り扱いました点を小生がどれほど悔やんでいることか、貴兄にはご想像もつきます

まい。ホラティウスの言葉は正鵠を射ております。曰く、

而して一度出でたる言は取り戻しがたく飛ぶ（七九）

つまり、一度口にした言葉は撤回し得ないということです。しかしながら（ウォールトン殿）、その言葉も別の言葉によって否定され得るものなのです。また、我々は自らの過失を認め、過ちを犯したことへの憂慮を表明したり、その過失を将来に亘っての我々のための警告とすることも出来ましょう。そして、これこそが為されるべきことのすべてでありますし、また、徳の高い者一人残らずが為すはずの事柄であり、計らずも罪を犯しました我ら四名（貴兄の側につきましては、貴兄のお手紙にて判明いたしますし、小生の側に関しましても、同封の写しによってお分かりいただけましょう）以上に進んで為そうとしている者が他には一人として存在し得ない事柄なのです。そしてこれが、そうあるべきだと考えております形で（また、そうなるものと確信しておりますが）受け止めてもらえるようですと、貴兄と顔を合わせます機会も早々と得られることになりましょう。令嬢を訪れます際のことですが、令嬢の元へは（写しからお分かりになるとおり）、小生がオリーブの枝（八〇）を携えて派遣されるものと期待している次第です。

我々が揃って過ちを犯しました例の一件が、極めて微妙なものである点は認められねばなりません。また（ベルフォード氏の人柄を考慮に入れますなら）、状況はすこぶる令嬢に対し不利に見えていたのです。ただ、このお陰で判明いたしますのは、他でもなく、不確かな問題の場合には、賢明この上ない人間にとっても間違いは有り得るのだ、ということなのです。詩人もそう述べております。

人の賢さも疑わしき事柄においては誤る（八一）。

もしも機会がおありでしたら、同封のものを、この一件では（貴兄のお言葉によりますと）憤懣やるかたない気持ちでおられるとのことですが、ベルフォード氏にお示しくださって構いません（貴兄ご自身からであるかのごとくに、また、小生の知らぬことのようにしていただきます）。しかしながら、第二ページ末にあります段落中の氏に関する言葉、つまり、［ただし、次の点は是非とも言わせていただきますが］という冒頭の言葉から段落の終わりまでは、氏の目に入れるとか、読み聞かせるようなことのなきよう願います。敵を作りたい人間はおりませんからね。それに、このベルフォード氏というのはラヴレース氏に劣らぬ激情家で、獰猛な人物だと考えて然るべき理由もあるのです。もっと立派な保護者を見出すことがお出来にならなかったとは、令嬢もまことにお気の毒な話です。氏が目を通す前に、青か黒の紙をこれらの行に貼り付けていただきましょう。そして、もしも氏が、小生の書状の写しを取りたい旨主張なさる場合には（氏あるいは何人にせよ、小生の書状に目を通すとか、朗読されるのを耳にする者は、古の高尚なる作家たちの所感に満ち溢れ、また、失礼ながら言わせていただきますが、それら所感が当面の問題にかくも見事に適用された手紙のことでもあり、その写しを喜んで手元に置こうとするのは疑いのないところなのです。宜しいですね。氏が写しを取りたいと主張された場合には）、いかなる事情であれ、活字化は絶対に許さぬよう、万全の保証を氏から取り付けていただきたいので

す。そして、そのような行動に出ることのなきよう、貴兄にも同じお願いをする次第であります。と申しますのは、著作物から些かなりとも利益が生じます場合、その利益を手にすべきなのは、その著者を措いて他にはいないはずだからであります。さらには、『スペクテーター』『タトラー』『エグザミナー』(八二)『ガーディアン』その他の我が国の高級紙類が、モットーとして、日々の新聞の第一面に一行かそこいらの詩句を掲げて偉そうな顔をするのであれば、また、他の作家たちが古典の作家から詩句とか格言を見つけ出し、自らの本の扉を飾って誇らしげにしているのであれば、同封のものの如き手紙は、最高の権威からの素晴らしい教訓や適切な引用を満載しているわけでもありますから、何という天晴な外観を呈することでありましょうか。

小生が耳にいたしておりますところでは、ある高官のためのパンフレットを認めようとして腰を下ろしたさる貴顕が、ラテン語のモットーを見つけ出そうと非常な骨折りを重ねた挙げ句に無為に終わった際のことですが、たかだか一行か二行からなる、うってつけのモットーを紹介してくれる者ならだれにでも、一籠分のクラレットを提供する権限をご自分の友人に委託されたというのです。そんなわけで、閣下はユウェナリスからモットーを一つ見つけてもらったのですが、不幸にも思い違いをなさり（ユウェナリスが詩人であることをご存じなかったのです）、ご自分の冊子の扉に散文の言葉として印刷なさったということであります。

一、二行にしてそれだけの値打ちがあるのであれば（クラレット一籠分です。そうまでするというのです）、小生の書状の類いはそれこそ計り知れない価値を備えたものと見做されて然るべきでしょう。それに、仮に当のやんごとなき貴人が（現在(ア)存命中であり）かくも宝玉を連ねてきらめき輝くこの手紙をたまさかご覧遊ばした場合には、常時お傍に侍らせるため、あるいは、（何らかの形で）引き立てをするため、その書き手にチャプレンの職を授けないともかぎらないでしょう。また、こう申しては失礼でしょうが（間違った世の中とは言え）、確かな学識を備えた者に必要なものと言えば、ただ財を成す上での手ほどきのみなのであります。

令嬢がお亡くなりにならぬよう、小生としては（我が良き友よ）願っているのです。もしも亡くなられたりすれば、極めて嘆かわしいことであります。小生の不手際なる誤報ゆえのことだけに、さらにその感が強くなります。貴兄もまた、同じ理由から嘆かれることでしょうし、令嬢のご両親、また、お身内の方々とて同じことです。お身内の皆様は極めて裕福にして、まことに徳高く身分卑しからざる方々なのです。

ただ、ついでながらひとつ言わせていただきますと、小生は胸中固く信じている次第ですが、皆様もご令嬢のことでは度を越してしまわれたため、小生の報告によってご自分たちを正当化出来ますことを嬉しく思われたはずなのです。また、小生がもっと好意的な報告をしておりました場合には、あまりお喜びにはならなかったことでしょう。しかしながら、皆様もお心の内ではご令嬢を溺愛しておられるということです。ただ、現在では、皆様揃って（小生はそのように聞き及んでおりますが）ご令嬢の側に立ち、許して差し上げるお気持ちになっておられるのです。残りの方々同様、兄上もです。

ただ、皆様のご親戚に当たる、大層立派な紳士モーデン大佐が、皆様に対して非常に激

(ア) つまり、この手紙が書かれた時点でという意味です。

しい言葉を向けられ、皆様のほうでも強い言葉を返されたため、脅しに屈して和議を結んだように映るのも困るということで、どう折れたら良いのか、皆様途方にくれておられるのです。小生が和解工作を進めるような厚かましい行動に踏み切りましたのも、それゆえの話でありまして、このように時宜に適ったことでもあり、皆様全員が喜んでくださるものと考えております。あらゆる点で皆様のプライドをお守りするのに、小生の仲裁より以上にお誂え向きの手掛かりは、果たして得られるものでしょうか。それに、ひとつ言わせていただきますが（他言は無用、つまり、ここだけの話ですが）、皆様は揃って大変にプライドが高くていらっしゃるのです。

この真正直な手段により（不正手段によってカンタベリー大主教になりたいとは思わないものですから）、皆様のお気に入るものと考えておりまして、まず第一には、ご令嬢のお許しをいただきたいのです（ご令嬢は学問を、そして、学識ある人間を好んでくださるお方でもあり、ご希望に沿う機会も多いことでしょう。と申しますのは、お父上のお屋敷を去られた折のことですが、光栄にも目に止めてくださいまして、小生との会話が大層お気に召したご様子だったからです）。第二には、令嬢のご両親ならびにご一族全員から謝意とご考慮とを賜りたいものです。ちょうど、親しい友人ジョン・ハーロー氏から授かっているようにでありますが（その点では神を称える次第です）、実際、氏は学識ある者への深い敬意を表明しておられる方ですし、また、（並ならぬ喜びを伴ってのことと思いますが）小生が引き合いに出しました泰斗たちを小生と共に復唱し、小生の強記ぶりに、また、古の最高の哲人たちの言葉に託して自らの所見を伝えます、小生の巧みな手際とに驚嘆しておられるお方なのです。

この虚栄とも響く言辞につきましては、我が良き友よ、ご容赦を願います。偉大なるキケロは（お聞き及びのことと拝察いたしますが）その趣をはるかに多く有しており、阿諛を乞い願います長文の書簡を筆にしていたのです。しかしながら、己に関しましては、他の人々（小生を知る者たち）が語るところよりも言葉少なめにしておりますならば、自惚れと不自然な慎み深さとの中道を保つことになるものと考える次第ですが、この不自然な慎み深さこそは、だれもが当然なものとして捧げます賛辞を辞退しようと申し出る時などに、自らの欺瞞性を露呈することが多いのです。これは愚行であると同時に偽善行為でもありまして、小生といたしましては、（願わくは）未来永劫、そのような振舞いに走るのを恥と受け止めることでしょう。

この天晴なご令嬢のご快癒とご健康とを小生に願わしめる、今一つの理由が（同窓の誼で、貴兄にはお話しして構わないでしょう）あるのです。つまり、（いくつかの遠回しなお言葉を通し）ジョン・ハーロー氏から伺っているところでは、ご令嬢が人目を避けた懺悔の日々を選ばれるというのは（お受けになった恥辱ゆえのことですが）、大いにありそうな話であり、おそらく（ご自分の地所に落ち着かれた暁には）、勤行と懺悔の導き手となるチャプレンをお雇いになるはずだということなのです。そうなりました場合、小生以上に有望な見込みを備えた者は果たしているでしょうか。また、小生の承知するかぎりでは（万人の語るところからも、また、貴兄のご報告からいたしましても）、意図に関しましてはご令嬢に罪はなく、金輪際ラヴレース氏のことはお考えにならぬよう心に決めておられるとのことでもありますから、（時を待てば）何が起こらぬともかぎらないのではないでしょうか。しかしながら、それとても、ラヴレース氏が亡くなられてからの話（その忌まわしい

生き方からいたしまして、氏が考えておられる以上に近い出来事となるやも知れないのです）に違いありません。と申しますのも、結局のところ、大衆にとって有益なる人物といたしましては、何物をも恐れぬ人間の手に己の喉元を委ねるようなことが（世界最高の女性のためでもありますし）あってはならないからであります。

小生のたっての希望でありますが、この話は貴兄ご自身、奥方、そして、バーカー夫人以外の人間の耳には届くことのなきよう願います。貴兄の手や両夫人の御手にこの命を預けて構わないことは承知しております。これよりさらにまゆつばと思われる出来事が、これまでにも（実際の話）起こっているのです。それも、金持ちの未亡人たち（中にはれっきとした貴婦人もいるのです）の身に起こったわけですが、最初の結婚に際しての、それら未亡人たちの選択は（おそらく）便宜上の動機、あるいは、いわば単なる肉欲に導かれていたのでしょう。しかし、二度目には肉体と精神の両側面を考慮に入れることになったのです。そしてそれこそ、男女共にそういうものですが、この両側面から成ります実体にとりましては、（疑いもなく）最も望ましいことなのであります。

また、仮にそのような事態に進展するといたしましても、どちらかの面目が潰れることになるなどとは、（宜しいですね）お考えになってはいけません。何故なら、ご令嬢にとりましては、小生との結婚により、紳士にしてかつ学者たる人物と結ばれることになるからです。また、小生自身の名誉に関して言えば、令嬢の大いなる資産が、例の恥辱のために小生のささやかな身代と（取り柄ではなく、財産のみを考慮するならの話ですが）等し並に落ち着くことになるのと同じく、この令嬢の生き方にしても、暇を出された侍女たちと同列に並ぶほどには（時間的な面でも、あるいは、行状の不道徳さの点でも）、泥に塗れているわけでもないのです。また、若い聖職者には暇を出された侍女で十分なのだという考えが（神もご存じのとおり）あまりにも多く見受けられるのですが、この若い聖職者というのは、おそらく、貧弱な聖職禄でおびき寄せられているのでしょう。そして（みだらなものがすっかり衰えているわけではない場合には）、その禄高ではいよいよ苦しくなるのです。家族の数が増して行くからですが、どちらが自分のものなのか、それとも、高貴な（下劣な、と申すべきでしょうが）庇護者のものなのか、当人には定かでないのです。

ただ、以上の点はすべて余談とし、かつ、内々の話に願います。

在学中、語学の面で貴兄が進歩に乏しかったことは承知しております。それゆえ、この書面を埋めることも可能ではあったのですが（同封のものにはそうしております）、古典からの例証をふんだんに示すことは慎んだ次第です。また、遠隔の地におりますため、それらをご説明申し上げるわけにもまいりません。友人ジョン・ハーロー氏に対しましてはそのようにいたしているところですが、引用いたしました著述家たちに備わります数多の魅力を指摘させていただきました点では、氏は（結局の話）小生に恩義があるというものです。さもなければ、それらの魅力は、並の観察者すべての場合と同様、氏にも知られることなく終わってしまうことでありましょう。ただ、この件も（やはり）他言無用にお願いいたします。そのようなことが人の知るところとなりますのを、氏としても快くお受け止めにはなりますまい。「カケスは（ご存じでしょう、親愛なる学友。カケスというのは、ご存じでしょうが）孔雀の羽を纏って気取りたがる」（八三）のです。

それにいたしましても、小生の筆は何処へ向かおうというのでしょう。学問的な話題になりますと、小生は止まるところを知らないのです。また、貴兄に学究の名を進呈するわ

けにはまいりませんが、しかしながら、貴兄も分別を備えた人間でありますし、（そのような人間として）学究ならびにその著作に喜びを見出されるに違いないのです。

以上の点を確信しつつ（ウォールトン殿）、善良なるご婦人方への（貴兄の奥方と妹君のことですが）心よりのご挨拶を、また、若き淑女のためにも、小生自らがすぐにもこの連綿たる書状の後を追いたい旨の希望を添えまして、筆を置くこととといたします。

貴兄の忠実かつ誠実なる友

イライアス・ブランド

多くの語や文に添えられた線（我々は**傍線**と呼んでおります）の意味について、ウォールトン殿、おそらく貴兄は不思議に思われることでしょう。小生の書状が印刷されることになりますと、それらは別の字体となるのです。ところで、ご承知おきいただかねばならないのですが、我々識者がこのようなことをいたしますのは、我々の論議の要点は奈辺にあるのかについて、また、それらの語に付すべき強調のことを、学識豊かならざる読者たちに対し指摘せんがためなのであり、それにより、読者諸氏は我々の趣旨と説得力とを容易に受け止めることになるのです。これを多用する著者というのは、己の読者を馬鹿呼ばわりしているか、あるいは、それなしでは意味するところが不明瞭になるとか、著者の力は言葉のみに存するものと考え、自らの筆法を暗に非難しているのだと、お節介な人間の中には、そのように言った者もいるのです。しかしながら、小生が学問的な形で対話を行いました人間はすべからく、小生と同様に考えているのです。通俗的とは申せ、大変に美しい例証を用いますなら、異種の字体によって判然たる外観を与えられましたページのことを、小生はキンポウゲやヒナギク、その他夏の花々を撒き散らした緑の野原と見做しているのです。これを詩人はエナメルの光沢を添えることになぞらえているのです。五色に輝く草地等々、詩人たちの表現をお読みになったことはございませんでしょうか。

手紙　百

ブランド氏からジョン・ハーロー氏へ

九月二日　土曜日　夜

謹　啓

小生が如き職分にある者といたしましては（また、性向にも合致しておりますが）、不和を解消し、和解をもたらしますのが務めでありながら、軽率な誤報により（不幸にも）その不和を拡大するきっかけとなりましたこと（その種の意図は一切なかったものと確信いたしますが）、はなはだ憂慮いたしております。

小生の誤りを正すべき二通の手紙を受け取っております。一通はある特別の知人（ベルフォード氏の人柄につき尋ねさせた者ですが）からのものでして、この火曜日に届き、小生の得ておりました報告においては、不幸なる姪御様がひどく不当に扱われておりますことを（と申しますのも、その知人には例の報告に関し、小生のほうから伝えてあったのです。それも、報告の真実なることを恐れ、極めて強い懸念を添えて伝えたものと確信いた

しております）知らせるものでありました。従いまして、小生は過ちをお認めすべく、その時点において貴方様宛の書状の作成に取り掛かりました。そして、相当に書き進めました段階で、二通目の手紙が（その筆法の点でも筆跡の点でも、ともにすこぶる上等なものでしたが）友人のウォールトン氏から（氏の筆になるものではないものと確信いたしております）届き、前述の若き淑女に関して小生が行いました報告において、小生を惑わせる原因となりました点につき、当人の遺憾の意、また、細君と義理の妹君の遺憾の意をも表明していたのです。また、その者たちもご令嬢に関し（重ねての問い合わせにより）、今では次のように申しているのです。つまり、かつて（一度）重大な過ちを犯したことのある淑女の中でも、最も潔白で、最も思慮深く、かつ、最も信心深い（と思われる）方であることが分かった、というのです。ラヴレース氏の如き極悪非道の男のため、かくも徳高きご両親やご親戚の方々をお捨てになったという点で、ご令嬢の過ちは（確かに）重大なものでしょう。しかし、我々に何が申せましょう。神聖なるウェルギリウスの曰く、

邪まなる恋よ、汝は何物かに人の心を駆らざる（八四）

小生といたしましては、ただただ強い危惧を覚えていた次第です（何故なら、我々は大学において、貴方様もお気づきのように、書物によって人間性に通じる機会を豊富に有しているからであります。

（書物なしに学ばんと欲する人は櫛にて水を飲むなり）（八五）

とあるごとく、書物こそは賢者の知恵の静粛なる結果とも称すべきものであり、面と向かっての会話に紛れ込む騒音やたわごとで中断されることはありません。また、この会話を楽しむことが出来ますのは（喧騒の世の中では）酒席を措いては他になく、そこでは、記憶に値するもの一つに対し、馬鹿げた事柄が百も起こるのです。申し上げますが、小生はただただ強い危惧を覚えていた次第です）。あのように重大な過失にはさらに大きな、そして、さらに不都合なことが伴うかもしれないと恐れていたわけです。と申しますのも、かつて異教の民に囲まれて生涯を送った中では最も魅力溢れる作家たる（小生の念頭にありますのは、叙情的な種類の詩でありまして、他の方面につきましては、ホメーロスとウェルギリウスとがその道の第一人者として名を挙げられるのは確かだからです）、貴方様のホラティウス、そして、小生のホラティウスの所見は正鵠を射ているのです（それに、彼よりも人間性に通じている者など、果たしておりましょうか）。曰く、

真の徳は、それが一度去るときは、卑劣なる者共に
復帰せしめらるることを欲せず（八六）

また、オウィディウスの言もそれに劣らぬ賢明なものであります。

善に近き徳あり。その錯誤のために徳は
しばしば不徳の誹を受けたり（八七）

知識をその源泉、つまり、古の賢者の著作から（当今の人間の注解を得て改善されたものですが）汲み取って来ることの出来る者にして、静かで平穏な生活を他のすべてに優先しようとしない人間などいるものでしょうか。世間に対する奉仕と教導のため（その者たちの献身するところに従い）召喚されていない場合の話ではありますが。

さて、小生が愛読しております（また、キリスト教徒なるがゆえに愛着が薄れるものでもありませんが）いま一人の詩人は、過ちを犯した場合に、罪を他人の背に負わせる習慣のある人間も一部にはいると語っております。

日頃より我らの重荷となるものすべてを
他人の背に負わせること、これまた人間の習性である
マンチュアヌス（八八）

しかしながら、小生といたしましては、（本件に関して）過失へと導かれたとは申せ（ただし、過失へ導いた者も導かれた者も、共に善意からのことなのです。従いまして、有資格者がだれかいるものと仮定しての話ですが、小生こそそのような口実を用いる資格を有しているわけであります）、その手の言い訳がましい人間と同列に扱われようとするのではなく、（逆に）教え導くと同時に、誤てる際の慰めともなります、前回の書状で引用いたしました例の詩句を、常に肝に銘じておく所存であります。

過つは人の常なれど、貫徹するは人の性ならず

また、（とりわけ）かくも天晴なる婦人のお人柄に関わる場合ですのに、見込みから引き出されました憶測や帰結を採用するとは、小生もはなはだ軽率でありましたことをお認めいたしたく存じます。

偽りの名声に信を置くのは甚だしき愚行なり
マンチュアヌス（八九）

にも拘らず、クラリッサ・ハーロー嬢こそは（敢えて申し上げますが）、あれほど道を踏み外しながらも、こうも早々と（いわば自発的に）正気を取り戻し、欺いた者への想いを克服したと（確かに大勝利と申せましょう）、かつて小生が耳にしたことのあります（あるいは、実際、書物でお目に掛かった）、唯一の若い淑女なのであります。また、その男の元を去り、一緒になることよりは、むしろ死を決意しておられるのですが、今や死が現実のものとなり、永劫不滅の名誉を（小生は十分に確信しておりますが）もたらすこととなるのです。そして、ご令嬢を公平に評するために、今は進んでオウイディウスの言葉を（決して胸中穏やかではありませんが）我がこととして受け止める所存です。曰く、

あゝ、我は己が槍にて傷付き、苦しむ（九〇）

ただし、次の点は是非とも言わせていただきますが、小生の情報のうち、小生自身の手

になる直接調査から得られました部分のすべて、つまり、ベルフォード氏と氏の人柄に関わります件は正真正銘の真実であります。と申しますのも、女性に関しましては、ラヴレース氏を別にいたしますと、氏以上に放埒な性質を有する男性には、いかなる場所にてもお目に掛かるわけにまいらないからであります。

従いまして、小生の意図に対しましては、一切お咎めのなきようお願いいたさねばなりません。早計なる情報に（ただ、そうとは知らずにの話でありますが）あまりにも軽々しく耳を貸しましたことに対し、小生がどれほど己を咎めようとしているのか、それはご覧のとおりでありますが、小生が情報を得ました者たちはすこぶる謹厳でありますし、神への畏怖を抱いて暮らしておりますだけに、小生といたしましても、その情報には一層信を置くこととなった次第です。実際、貴方様のお傍へ伺います折には、あの者たちの書状からも、あの者たちが誠実な善人に違いないことはお分かりいただけるものと存じます。従いまして、小生には先ほど名を挙げました詩人の言葉を利用する資格ありと、お優しきご一族の皆様にはお認めいただきたいのであります。曰く、

罪を認めたる罪人には辛らつなる言葉は控えよ（九一）。

ところで（はるかに小生の職分に似つかわしいことでありますが）、告発人、また、性急なる批判者の表情にて（内心では、そう思われるに値することはしていないのです）出頭するのではなく、調停者の姿を装わせていただきたいのです。また、（己の落ち度に対する償いのため）和睦の使者として敬虔なる若き淑女の元へ派遣くださいますよう申し出をさせていただきます。と申しますのは、あの者たちが確かなこととして便りをよこしているのですが（また、それはありのままのことと、小生も内心では確信いたしております）、医者たちはご令嬢を見放しておりまして、ご令嬢に生き延びる可能性はない、とのことだからです。さても、さても　…　撓められることだけを意図されていた枝ですのに（その点はよくよく承知いたしておりますし、十分に納得してもいるのです）、お気の毒に、仮にも折れてしまうようなことがあるといたしますと、何という悲しい話なのでしょうか。

貴方様のお怒り（更生を意図しておられる間は適切かつ至当なものでありましたが）に何か手荒さや苛酷な懲罰や冷厳さの様相を呈するものがあったと（お美しい罪人の側での後悔、悔悟、そして、屈辱の後ですと、お怒りが極端なところまで押し進められました場合には、人によりましてはそのように見えたかもしれないわけですから）、世間の目に映らぬようにしていただきたいのです。と申しますのも、ご令嬢はこれまで終始一貫（と思われますが）、その懺悔ぶりでは第二のマグダラのマリアでありましたが、ただ、その罪科につきましては、マグダラのマリアほどの重罪ではございません（しかしながら、主もご存じのとおり、ご令嬢も一度は道を踏み外されたわけです。ホラティウスは

何となれば何人といえども欠点なしに生まるる者なし
最小の欠点に悩まさるる人が最上なり（九二）　…　と語っているのであります）。

さて、この祝福された任務に（何故なら、和解をもたらす者は祝福された存在だからです）ご指名をいただけますなら、急ぎロンドンへ赴く所存であります。それに（光栄にも

小生がその末席を汚しております職分に対し、お嬢様が日頃より深甚なる敬意を抱いておられたことは存じ上げておりますから)、何の疑いもないところでありますが、お嬢様のお気持ちに適うようにし、確かな論拠と適切な助言によりまして、生きる喜びへと導いて差し上げることも出来ましょう。そして、これこそ、ご回復への第一歩となるに違いないのです。と申しますのも、心に安らぎが与えられました時には、肉体が長い間苦しむことはないのですし、生への執着も自然な熱情でありまして、運命が回れ右をして微笑みかけますと、すぐに息を吹き返すものだからです。

たとえ貧窮し、かつ、病弱の身なりといえど、だれであれ
人は長く生きることを欲す ――――――― オウィディウス（九三）

そして、調べ妙なるルカヌスの言葉は真実を語っているのです。

――――――― 余命なお数年の運命にも拘らず
死は予期せず訪れる（九四）

ところで、ご令嬢に対する小生の申し立てと慰安の言葉とがいかなる趣旨のものとなるのか、一言述べさせていただきますが、これはご令嬢がいわば学のあるご婦人なるがゆえのことですし、また、お嬢様お独りではさほど容易には解釈し得ない文言の数々につきまして、小生の方からご説明申し上げることが可能だからであります。また、これは、自ら名乗りを上げる所存でおりますが、キリスト教徒としての務めを果たします上で、小生がいかに適任者であるのか、その点を貴方様に（小生の資質をすでにご承知くださっているのではないのでしたら）納得していただくためのことであります。

第一には、喜びと悲しみ、悲しみと喜びが交互に継起するという、この現世での物事の常態をお嬢様に思い出していただくことにいたしますが、お嬢様が味わわれた悲痛な思いも、そんな物事の常態に則っているだけの話なのだと得心していただくためであります。

喜びが悲しみの後に訪れ、喜びの後には悲しみが来る（九五）

第二には、悲しさ、悲痛な思い、メランコリーがそれぞれいかなる点において異なるのかを弁別するよう要請されました際に、悲しさに関するお嬢様ご自身の注目すべきお言葉を思い出していただくことにいたします。お嬢様はそれらがもたらす効果の点から、即席で説明なさったのですが、真に見事なお手際で、だれもが非常に満足したのです。小生自身にいたしましても、検討を加えた上でありましても、より的確に弁別することは出来なかったでしょうし、より簡潔に行うことも不可能だったでしょう。悲しみは消耗させ、悲痛は掻き乱すが、メランコリーは慰撫する、とお嬢様はおっしゃったのです。

ご令嬢にお話しいたします小生の推論につきましては、以下のとおりになります。つまり、目出度い和解がもたらされるのですから、悲痛な思いは一掃され、悲しみは忘れ去られることになり、甘美なメランコリーのみが後に残りまして、ご令嬢の悔恨の情著しいお心をお慰めし、許し、ご自分が犯した重大な過誤に対する後悔の念を、世間の者たちすべ

てに向かってお示しになるだろうということです。

第三には、ご健康とご愛顧とを回復されました暁には、悲痛な思いが深かった分、それだけ一層喜び(ア)は大きなものとなるはずだ、ということです。

艱難辛苦の末に得られたる喜びは快し（九六）

第四には、重大な過誤を現に犯しましたからには、ご令嬢も、これまで受けて来られた矯正と不興に対しまして、短気な応じ方をなさるべきではないということです。

汝が当然に蒙る事は静かに忍ぶべし（九七）

第五には、美徳は忍耐心によって確証されねばならないということですが、これは、プルデンティウスも述べているところであります。

忍耐が強固にしない徳は寡婦に等しい（九八）

第六には、ホラティウスの言葉を借りますが、ご令嬢は、（ここしばらく）望みを寄せて然るべきであったものよりは、もっと良い時節を期待なさって構わないかもしれないということです。

期待せられざる時は、それが来るや喜ばし（九九）

第七には、ご令嬢も今や現に幸せへの途上におられるということですが、オウィディウスの詩句に従えば、災いのすべてを数え上げることがお出来になるからです。

数え上げることの出来る苦難を忍ぶ者は幸なり（一〇〇）

それに、心慰められる例の詩行もございます。

晴朗なる日の心地好さは長雨の後でさらに大なる如く、
不幸の後の幸せも喜びはさらに大なり（一〇一）

第八には、マンチュアヌスの言葉ですが、ご令嬢のご両親ならびにおじ上たちは、ご令

(ア) 注記といたしまして、ここでひとつ述べさせていただきますが、喜びとメランコリーとは絶対的に相入れないものではないのです。ただし、控え目で穏やかな喜びについて述べているのでありまして、急激な喜び、強烈な喜びではなく、心を沈静させるメランコリーから一時的にお嬢様を引き上げ、そして再び、その中へと穏やかに下ろして差し上げる、そんな喜びのことを申しているのです。何故なら、内省の結果として得られますお嬢様の心の状態が、通常、メランコリーであることは間違いのないところだからであります。

嬢に対しご立腹の間も、常にご令嬢への愛情は抑え切れずにおられたということです。

子供たちに向ける両親の表情は厳しくとも、
心は常に平静にして気性も愛情溢れるものである（一〇二）

第九には、ご令嬢が遭遇されました災いにいたしましても、ご令嬢にとっての永続的な利益へと転じられる可能性が（それらを有効に用いることによってですが）あるということです。と申しますのも、

激昂し打擲しつつも、時に神は手心を加えようとする（一〇三）

からであります。

第十には、ご令嬢は、繁栄の時に際して意気軒昂となることの空しさ、そして、逆境にあって意気消沈することの愚かしさについての立派な教訓（極めて立派な教訓）を、お知り合いのお嬢様方すべてに対して提示なさることもお出来になるのだという点です。謙虚になるには及ばないほど崇高な人間、また、絶望しなければならないほど下等な者は、一人としていないからでありますが、この趣旨のものといたしまして、アウソニウスの助言がございます。

順境にあっては意気揚々となることを避けよ。
逆境にあっては意気消沈することを避けよ（一〇四）。

苦難を忍耐心の構成要素と呼ぶルカヌスの言葉が正鵠を射ておりますことを、ご令嬢にお話しいたしましょう。

――――忍耐心は苦難の中に喜びを見出す（一〇五）

また、

徳は幸運に勝り、思慮分別は名声に勝る（一〇六）

ということをです。

また、弱い心の持ち主が運命に打ちひしがれる一方で、勇敢な心の持ち主は気紛れな神である運命を怯えさせるということもです。

運は勇敢なる者を恐れ、臆病なる者を苦しましむ（一〇七）

第十一には、もしも、ご令嬢がホラティウスの忠告、

逆境には果敢に対峙せよ（一〇八）

に従われますなら、通り過ぎました困難を思い返しますのは、ご令嬢のあの世での（ウェルギリウスも述べておりますように）楽しみとなることでしょう。曰く、

――――これらを記憶することはいつかは恐らく一つの楽しみとならん（二〇九）

そして、ユウェナリスは、同じ趣旨でありますが、すべての危険が去った後に船乗りたちが交わす饒舌な喜びの言葉に触れ、こう述べているのです。

危険を免れた船乗りたちは喜んで危険を語る（二一〇）

これは事情によく合致した言葉ですから、お許しを賜りまして、英語の詩行を急ぎ書き添えさせていただきます。〈翻訳衝動〉が（新造語をご容赦願います。ただ、我々学究の徒は新語の承認には気が進まないものなのです）求めもなしに生じたからであります。

無事に陸地を踏みしめ、船乗りは楽しげに語るのだ
海上ではいかに残酷な危難が降り懸かったかを

日頃より精通いたしておりますこれらの至言に加え、さらに百余の賢明なる格言をもちまして、小生は（形式と理路の整然さに頼らざるを得なくなりました場合）お嬢様をお慰めいたす所存です。また、博覧にして（この重大な過ち一つだけを除きますと、こう申し上げて構わないと存じますが）賢明なる淑女でいらっしゃいますから、小生自身の論拠によるのではないといたしましても、令嬢ご自身がお持ちのものに（いわば）適合しております理知と力量とを論拠にお嬢様を説得し、次の言葉を心に留めていただけますのは、疑いのないところと考えております。

――――また、運命の定めるところを嘆いてもいけない
これまで雲に覆われていたとはいえ、大空は今や再び晴れ渡るのだから（二一一）

あゝ、何という叡智がこれら高尚なる古典作家たちにはあるのでしょうか。賢者は（それら作家を精査することにより）いつも気づくものです。人間や事物に関し自ら感じているところを、古典作家たちが語っていることにです。機会あるごとに、それら作家がいとも容易に小生の胸に浮かんでまいりますのは、それ故のことであります。これは虚栄心の如くに映りましょうが、公然の事実でありますから、看過するわけにもまいりません。また、ある人物についてだれもが目にし、口にしております事柄を、何故に当の本人が知ってはいけないのか、その理由が小生には分からないのです。もっとも、その者たちも、他の点に関しましては、おそらく、当人の半分も承知していないのでしょうが。

小生が出向くことに対して考えられる異議といたしましては、小生も一つだけ承知しておりますが、それは、あの獰猛にして恐るべき人物、邪悪なるラヴレース氏が（だれもが氏のことを恐れているのです）、今一度お嬢様の愛情の中に地歩を占めようとの決意を固めておられるかもしれませんので、万一にも小生と遭遇することがあってはと、小生の身の

安全を案じてくださる貴方様の温かいお心遣い、そして、ご懸念から生じるものでありましょう。しかし、小生といたしましては、小生の職分にすこぶる適合する趣旨の任務に従事いたしておりますかぎり、この身の安全は神慮に委ねる所存でありますが、聞き及んでおりますところでは、氏は学識のある人物とのことでありますから、それだけに一層、神慮に委ねようと思うわけであります。

かくも悪辣なる放蕩児にして（氏がこれを決して目にすることのなきよう願う次第ですが）学識ある人間たりうるということ、言い換えますと、学識ある人間にして放蕩児たるべき余暇を見出すというのは、これまた不思議な話ではあります。学識ある人間というのは、もしかいたしますと、狡猾な罪人で、機会は訪れ次第捉えてみせるということかもしれませんが、ただ、そのような挙に出たためしが小生には一度としてないことを、ここに保証する次第であります。

繰り返しますが、氏は学識ある人間でありますゆえ、小生といたしましては、古典の甲冑とも申すべきものをこの身に纏い、氏に対しては柔和な態度で切り出すのです（と申しますのも、勇敢さと柔和さとはすこぶる整合性を有する特性でありますし、その特性が燦然と発揮される人物といたしましては、キリスト教聖職者に勝る者は存在しないからであります。そうなのです、氏に対しては柔和な態度で切り出すのです）。

宏量なる獅子には［敵の］身体を仆さば足れり（一一二）

と、オウィディウスの言葉を交えるのですが、これは、小生自身の思慮分別を盾とした場合には、身の安全を計ることにならないといたしましても、常に称賛すべき古典、とりわけ、ホラティウスを盾に構え、確実に安全を得るためのことなのであります。そもそもホラティウス本人が放蕩児（それも、陽気な放蕩児）ですから、学識ある放蕩児すべてに対しましては、大きな影響力を有するに違いないのです。

それに、ことによりますと、小生自身の体躯は小柄なダビデでも（武器とするのは古の賢者たちのパチンコと小石です）、この悪事に長けたゴリアテ（一一三）にでさえ、己の過ちを正しく認識させることが出来るかもしれないのです。もしもそうなれば、何という大勝利でありましょうか。

ダビデとゴリアテの譬えを続けますが、氏が小生に怒りを向けるといたしまして、その際小生が氏に投げつける石つぶてのいくつかを（情け容赦のない論法は、頑固な論敵を打ち倒しますので、石つぶてと称されても良いでしょう）、ここでお示ししても構わないのです。そして、これは小生の生命あるいは身体に対してお寄せくださる貴方様のご憂慮のすべてを取り除いて差し上げるためのことでありますが、光栄にも直接お傍にお仕えいたします際にご用命をいただきますまでは、控えることといたしましょう。

さて（失礼ながら）、残る事柄といたしましては、ただ次の点だけでありましょう。つまり、ご令嬢の元へオリーブの枝を携えて伺いますのには、小生がいかに適格であるかをお示しいたしましたからには（貴方様といたしましても、疑念を抱かれることのなかった点とは存じますが）、即刻、小生を派遣くださいますようお願いする次第です。と申しますのも、お嬢様のご容体が非常にお悪いのでしたら、そして、（小生の承知いたしますかぎりでは）有徳なるご一族の皆様が意図しておられるところでしょうが、生き延びて神のご恩寵

に浴することがお嬢様には叶わぬようですと、その場合、皆様全員のお嘆きようはいかばかりでありましょう。それに、お嬢様を偲びながら、ひょっとして皆様が挙ってお寄せになるかもしれない賛辞にいたしましても、果たして何の役に立つのでしょうか。思慮深くも、マルティアリスはこう述べているからであります。

――死灰の後に名誉は来る（二一四）

それに、アウソニウスが負けず劣らず適切な表現で主張しておりますように、「迅速に施された恩恵こそが最も時宜に適い、かつ、有難い」（二一五）ものなのであります。

また、同じ趣旨で、オウィディウスはこう述べるのです。

而して遅滞がおくらせたる深切には感謝なし（二一六）

それゆえ、何をなさるにいたしましても、ご令嬢に対する許しは、ご令嬢が望まれるかぎり惜しみなく、かつ快く与えられますようお願い申し上げます。皆様のご確約とご支持があり、また、皆様の哀心からのご真情が籠もっておりますことを、小生のほうからお伝え出来るようにとの気持ちからであります。と申しますのも、ラテンの詩行が次のように詠っているからです（僭越ながら、小生の粗末な忠言によりまして、その意味合いを弱めることはなかったものと考えております）。

好意ある表情を見せる者は惜しみなく、多くのものを与える（二一七）

ところで、この長文の書状(ア)を通覧いたしまして（麗しの緑野が目にも燦爛たる、春あるいは夏の花々に彩られているのと同じく、この書面にも彩りが施されているように小生の目には映っておりますが）、お疲れを招くことになったかもしれないと、案じ始めているところであります。優れた文章の美しさを成すものと考えられますあの理路の整然さ、あるいは、秩序正しさを顧みることなく筆を進めてまいりましただけに、一層その恐れを覚えるのです。とは申しながら、その整然さや秩序正しさにいたしましても、用語の月並みさはご容赦願いますが、日用書簡（これはそう呼ばれて構わないでしょう）にありましてはなおさらのこと、省略されて差し支えのないものと存じます。しかしながら、本状におきましては、ことごとく省かれているわけでもない点は認めざるを得ないのです。と申しますのも、これは書状にして、書状にはあらずと申して良く、多種多様な話題を取り上げ

(ア) 注記といたしまして、ここでひとつ述べさせていただきますが、これまでに書き上げましたどの説教にいたしましても、この書状の半分も骨を折ることはなかったのであります。ただ、まことにもって妥当なことでありますが、貴方様が当世のもの以上に、古の知恵に対して称賛の念を抱かれ、また、強い欲求を持っておられますことは承知いたしておりますし、事実、小生も貴方様と同じく、当世のものは（まさしく、月がその輝きを太陽から借りておりますように）借り物にすぎないように考えているのです。少なくとも、我々が古の人々に勝るものは何一つとしてなく、我々の最善の思想にいたしましても、一般的に申しまして、古の人々により一層優雅な文飾を施され、表現されていると考える次第であります。

ました簡潔、かつ、含蓄豊かな談話であり、話題の一つ一つにいたしましても、数巻の書物にまでも敷衍され得る、恰好の主題となっているからであります。万一、この書簡体談話が（早速、そのように呼ばせていただきます）お気に召します場合は（眩しいばかりの陽光のようにそこから輝き出しております、古の人々の中でも最も賢い者たちの所感や警句のゆえに、きっとお気に召すはずと考えているのですが）、小生といたしましては（暇な折にでも）理路整然たる談話に作り上げまして、多分、いつの日にかは、出版の運びともなることでしょう。我が尊き庇護者様への（貴方様のお許しが得られるものとしての話であります）献辞を添えることにいたしまして、初めは単独の形で（ただ、二、三の小品を匿名で世に問い、その成功により、文壇でもひとかどの人物となってからの話です）、そして、後には小生の全集に収める所存でありますが、（ただし）そのものの無価値さ故のことではなく、大衆に及ぼすやもしれぬ効用の故であると申しておきましょう。と申しますのも（ある者が的確に述べておりますように）、「美徳には常に栄誉が伴う。だが、栄誉は美徳の影とのみ見做されるべし」（一一八）だからであります。

影が体に付き纏うごとく、常に徳に栄誉は従うといえど
徳は称賛を蔑視する（一一九）

実に見事な言葉であり、かつ、万人の称賛に値するものでありましょう。

ところで（我が良き友にして庇護者たる、この上なく徳高きお方）、万事は貴方様やお二人のご兄弟、また、ハーロー家の若君のお考えに、そして、ハーロー家の奥方様ならびに優秀なるお嬢様、アラベラ・ハーロー嬢のご賢察に委ねまして、僭越ながら下記のごとく署名させていただきます。今現在紛うかたなく、また、将来に亘り快く、あらゆる事態に臨みまして常に変わることなく、

貴方様ならびに皆様の忠実かつ重宝にして
従順なることこの上なきしもべ
イライアス・ブランド

手紙　百一
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ
［手紙九十八への返事として］

九月六日　水曜日　朝

すると、彼女はいくらか持ち直したというのか。無数かつ無際限の祝福が貴公の上にあらんことを　…　彼女がなお一層快方へ向かうようにしてもらいたい。せめて、そのように話してほしいのだよ、俺にはな。たとえそうでないとしてもだ。何しろ、彼女はさらに一日か二日持ちこたえるだろうという、あのほんの束の間の猶予がどれほどの喜びを俺にもたらしたのか、貴公にも分からないわけだからな。

それにしても、この冷酷非情で死の宣告をこととする医者に、彼女はもう長くはないなどと告げたのはだれなのだ。何の根拠があってこんなことを言うのだ。何とまた図々しい

のだろうな。これみよがしで勿体ぶった、この大学出の手合いというのはな。その同業者たるこの男が（名医と思われているわけだが）彼女のために、というより、むしろ俺のためにだが、並の奇跡を働くことも出来ないようであれば、俺としては、命のあるかぎりその図々しさを軽蔑してやるつもりだよ。

言わせてもらうが、ベルフォード、奴はすでに最大限の軽蔑に値するのだ。この魅力溢れる時計の動きをこうも弱めてしまったことに対してだよ。彼女に付き添っていたその四分の一の時間でゼンマイを巻き上げることが出来ないのだとしたら、一体どんな腕前をしているというのだ、奴は。奴が往診に来た当初は、命のゼンマイや歯車、そして、動きもすこぶる良好で、必要なのは通常の手入れと注油だけのように見えたわけだからな。

俺と会う約束を彼女から取り付けようと骨折ってくれたことには感謝している。それでこそ友達というものだ。もし、勿体なくもそうしてくれていたなら、彼女は目にしたことだろうな。正当な怒りを抱く美女の足下にこれまで跪いた者の中でも、最も卑屈な崇拝者の姿をだよ。

君から俺に伝えることを彼女が命じた点、そして、禁じた点についてだが（これは優しい思いやりから来ていることだ）、俺のことは許してくれているというのだな。また、もしも俺を真人間にすることが出来ていたなら、幸せ者にすることも出来ただろうというのだな。愛しさえしたというのだな。かつては俺に愛情を抱いたこともあると、このような時に告白するとはな　…　それまで、だれを愛したこともなかったというのだ。俺のために祈ってくれるというのだよ。最後の涙を俺のために流そうというのだ。彼女なしでは地獄落ちの定めにある魂を、それで救えるとしたらだがな。あゝ、ベルフォード、ベルフォード。俺には耐えられん話だ。この至上の優しさに対して、何という畜生だったのだ、この俺は。何という外道だったのだろうな。どうして俺を罵ってくれないのだろうか。何故呪ってくれないのだ。あゝ、勝ち誇る征服者よ。常に俺の上にいるのだ。そして、今、はるか下方に俺を置き去りにして行こうというのだよ。

「いつだって、結婚が償いとなる」　破廉恥な話だが、これが自分自身に向けた言い訳だったのだよ。こうも格段に優っている妻が俺を蔑まないためにも、堕落しているという感覚を彼女に与えること、あの輝かしい頭部を取り巻く星々の合間から彼女を引き下ろすこと、これこそ俺の卑劣な動機の一つだったのだ。さらに卑劣な嫉妬の情と、彼女に対する劣等意識に由来するものなのだがな。ところが彼女のほうは、一歩進むにつれ、災難を重ねるにつれ、自らの優越性を保つことになるのだ。そして、太陽のごとく、俺が工夫を凝らして彼女の回りに投げ掛けた暗影のゆえに、なお一層の光彩を帯びて俺を照らし出すのだよ。そして今、こうして俺から逃れようとしているのだ。彼女の受けた不当な仕打ちを償う力は、俺には一切残されていない。自責の念を緩和する術もないのだ。彼女と咎を分かち合うわけには行かないのだよ。

伝えてくれ。あゝ、彼女に伝えるのだ、ベルフォード。彼女の祈りと願いの数々、彼女の寛大極まりない祈りと願いの数々を、無為に終わらせはしないということをだ。俺にも後悔することは出来るし、してもいるということ。そして、ずっと後悔していたということをだよ。俺がしばしば痛切な自責の念に苛まれていたことを話してくれ。こういった自責の思いが、最終的に、後悔を実効あらしめないわけはなかったのだよ。とはいえ、彼女は俺を置き去りにしてはいけないのだ。俺の悔恨を完全なものにしたいと願うのなら、生

き延びてもらわねばならんのだよ。絶望に一体何を生み出す力があるというのだ。

∴　　∴

君の手紙へのお返しだが、君が俺にさせたいと思っていることは、すべてするつもりでいる。今回の手紙のことでは、また、不首尾に終わったとはいえ、俺の目通りを許してくれるよう彼女に迫ってくれたことについては、かぎりなく感謝しているのだよ。

もう一度言うが、あれほど神々しい女性に対し、俺がこれだけの悪党になり得たのは何故なのかということだ。それでいて、いつも彼女を愛しているのだよ。かつてこれほど女を愛した男はいないくらいにだ。我が工夫の才に呪いあれ、ということだな。陰謀を好む頭、そして、それを助成する心に呪いあれだ。これだけの天使にも似た女性の名声を、名誉を、そして、命を弄ぶというのだからな。あゝ、この忌まわしい懐疑の心よ。彼女を女と確信しながら、女であることを見届けようと願わずにはいられないのだからな。女にこれだけの貞節心（貞節のための貞節だ）があり得るということへの疑念だったのだよ。彼女との一件において、俺が成功の望みの根拠としたものはな。

だが、言わないでほしいのだよ、ジャック。いずれは彼女もわれわれの元を去らねばならないのだ、などとはな。もしも彼女が回復すれば、そして、彼女の愛顧を取り戻すことさえ出来れば、その時こそ、俺の生はまさしく生気あるものとなるのだよ。俺がなろうとしているような夫は、世間の者もいまだかつて目にしたことはないのだ。彼女の意向以外には、何らの意思も持たないつもりだよ。俺の歩みすべてに亘って、彼女に導いてもらうようにする。俺の展望を拓き、方向づけるのが彼女であり、俺の心の動き一つ一つを思いのままに変えてもらうのだ。

君の手紙によると、彼女は十一時に安らかな眠りに入ったとのことだったな。また、スミスの上さんの言葉として、俺の召使が知らせてくれているところでは、彼女は熟睡したということだ。これを聞いて、どれほどの希望が俺の胸を満たすことだろうか。この朗報に対し、奴には五ギニーくれてやったよ。奴と相棒とで折半するようにだ。

親愛なるジャックよ、貴公の次の便りでこの点を確証してほしいのだ。後生だから、そうしてくれ。医者に話すのだ。彼女を治してくれるなら、一千ギニー進呈するとな。協議の必要があるなら、そう言ってもらいたい。

さらばだ、親愛なるベルフォード。今、至上の悦びを伴いつつ心を占領している希望の数々について、頼むから確証してもらいたい。その心は、彼女のものに次いで、

貴公のものなのだ

手紙　百二

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

（九月六日）水曜日　午前八時

俺が起き出す前に、君の召使が到着した。令嬢の容体を尋ねさせるため、スミスのところへ使いに出し、戻ってから俺を訪ねるよう命じておいた。彼女がまずまず安眠出来たこ

とを聞き、嬉しく思った次第だよ。前夜認めた手紙を持たせ、急ぎ召使を送り出すとすぐに、令嬢のご機嫌を伺いに出掛けた。

令嬢は起きていて、着替えも済んでいることが分かった。白いサテン地のナイトガウンで、相変わらずの優雅さだが、今は、ここ一週間目にしてきたのよりもさらに優雅で、表情にも落ち着き払ったにこやかさが浮かんでいるのだ。

令嬢は目のかすみが増したことや、手足を襲う震えのことを口にしていた。「これが死ぬということなのでしたら」と、彼女が言っていた。「恐ろしいものは何一つとしてございませんわね。体はほとんど痛みを感じませんし、心は落ち着き、頭も今までどおりにはっきりしておりまして、申し分ありません。何とお優しく慈悲深い神様に恵まれたのでしょうね、私は。これこそ、いつも私が祈っておりましたものですもの」とだよ。

君の場合にはそれほど静穏でないのだと、俺は令嬢に話して聞かせた。

令嬢はこう答えていたよ。「同じ理由がないのですわ。私たちの短い経歴の結末に臨みまして、他人に損害を与えたというよりは、むしろ自分が被害を受けたのだと申し上げられますのは、慰めの中でも一番上等なものですわ、ベルフォードさん。世間の人々の見方からいたしますと、私は不幸でしたし、今になって考えますと、そうして当然な程度以上にでしたが、自分を不幸だと考えたこともございました。それでも、私は神様を賛美いたします。と申しますのは、私の災難の数々が永遠の幸せを私のために生み出すこととなったわけですが、私が故意に不幸へと追いやりましたような人は、だれ一人としていないからですわ。身内の者たちに与えました悲しみのことを別にいたしますと、何ごとであれ、嘆く理由は私には何もないのです。

でも、ベルフォードさん、従兄弟のモーデンへはどうかくれぐれも宜しくお伝えいただきたいのです。そして、皆を慰めてくださいますよう、また、全能の神様はそうしてくださるものと私は願っておりますし、信じてもいるのですが、仮に皆が私の心からの懺悔を受け入れてくれたといたしましても、すべては同じことであったはずだと、そのように話してくださいますよう頼んでいただきたいのです」とだよ。

階下へ来てほしいとの呼び出しを受けたが、降りてみると、ハリーだった。令嬢の手紙を届けに行ったハウ嬢のところから今戻ったのだ。この愚か者は、急いで行き、出来るかぎり早く戻るよう指示されていたものだから、ハウ嬢が五マイル離れたところにいたこともあるのだが、手紙が彼女の手に渡るまで待つことをしなかったのだ。ハウ夫人のほうでは、奴を待たせておき、娘のところへ手紙を届けさせるためにわざわざ馬を走らせようとしてくれたのだがね。

水曜日　午前十時

お気の毒に、令嬢はちょうど今失神から意識を取り戻したところだが、まさに死に瀕した状態だ。ここしばらくの静穏さや苦痛のなさというのは、ロヴィック夫人やスミスの上さんの言い方をすれば、「今わの輝き」に過ぎなかったようなのだ。

誓っても良いが、ラヴレース、この令嬢を失うくらいなら、世の中の友人すべてと袂を分かったほうがましなくらいだな。彼女に対する俺の友情をこう呼んで構うまいが、高潔な友情、神聖な友情とはいかなるものなのか、これまで俺は全然知らずにいたのだよ。それにしても、そのような友情についてはほんの新参者だというのに、早くも諦めざるを得

ないというのだから、何とも辛い話ではないだろうか。ただ、有難いことには、俺自身の落ち度から彼女を失うわけではないのだよ。だが、ここに至っても貴公を容赦しないというのは、残酷な話だろうな。

令嬢は前に訪ねて来たことのある牧師を呼びにやらせた。一緒に祈ってもらうためだ。

手紙　百三

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

水曜日　正午　ケンジントンにて

イソップの話に出てくる旅人みたいなもので、貴公は暑さと寒さとを、命と死とを、同時に吹き掛けてよこすが、俺を狂気に駆り立てようとの目論みからなのは疑いのないところだ。死ぬだの、かすみだの、震えだのといった言葉を、ずいぶんと無遠慮に使うものだな、貴公も。そんなにも少ない数のベルで、それだけ多様な調べを奏でた人間も、かつていなかったことだろう。断言して構わないが、臨終の場面や戦慄を誘う場面に喜びを見出しているようなところからして、貴公の本当の父親というのは肉屋か葬儀屋だったのだろうな。貴公自身の落ち度から彼女を失うわけではないという、あの残酷な非難は決して容赦されるべきものではない。俺にもたらす苦痛を償うためには、貴公には唯一つの方法よりないのだ。つまり、彼女は快方に向かっており、治るはずだとの言葉を届けてくれることだよ。本当であろうがなかろうが、その旨伝えてもらいたいのだよ。そうしてくれるなら、喜び勇んで、また、そのとおりに信じながら、国を離れることにする。そして、後の処置一切については、この胸の願いと想像力とに委ねることにするのだ。

彼女の死は俺のせいではないのだという点について、我と我が身に（世間などは関係ないのだ）無罪を言い渡すことが出来るようにというわけだが、彼女が一年だけでも生き延びてくれるなら、残りのことについては、俺のほうで折り合いをつけようと思っている。誓いの言葉も祈りも彼女の助けにはならないのだろうか。我が生涯を通じて、そのすべての年数を一緒にしても、ここ二週間で行なったほどに祈りを捧げたことなどなかったのだよ。それに、彼女に対する卑劣な仕打ちすべてについて、心の底から後悔したのだ。それなのに、何をもってしても駄目だというのか。

だが、結局のところ、もしも彼女が回復しない場合には、俺の慰めとなるのは次の点であり、また、これは真実でもあるのだ。つまり、彼女のあの世への旅立ちは、他のいかなる原因にもまして強情さのほうに、女の強情さそのものに帰せられるということだよ。

激しい憤怒の命じるところに従う者にとっては、最初に意図した局面で矛を納めるのは難しいものなのさ。

俺にも次のように信じるくらいの思いやりはあるのだよ。つまり、ジェームズ・ハーローやアラベラ・ハーローですら、自分たちの不利に働いた、例の祖父の手本におじたちが従っては困るというわけだが（浅ましい恥知らずだよ）、連中のこの天使のような妹相手に結んだ共謀関係によって意図していたのは、最初のうちは、精々、彼女に恥をかかせ、評判を落とさせることくらいのものだったのだ、というふうにな。

だから、このお嬢さんの最初の意図も、察するところ、俺を焦らし、悩ませることだけ

だったのだ。そして、思惑どおりになるのが分かると、生きたいという気持ちよりも、復讐への願いのほうが知らぬうちに強くなり、彼女の考え方では、俺の心を支える腱をズタズタに切り裂く出来事ということで、今では喜んで死にたがっているというわけだよ。また、さらなる復讐のためだが、クリスチャンを気取り、俺を許そうとしているのだ。

だが、彼女に許してもらおうという気など、俺には一切ないのだ。俺自身の心が語っているのだよ。俺は許してもらうには値しないのだ、とな。また、許してもらうなど、俺には耐えられないのだよ。それに、許しとは言っても、自分を大きく見せ、俺を一層深く傷付ける魂胆で、残酷にも、そして、これみよがしに与えられる、口先だけのものに過ぎないのではないのかな。愛らしい見せ掛け上手の小 … いや、止めておこう。罰当たりな言葉を吐いてはいけないからな。

∴ ∴

これまでのところを読み返してみて、取り留めのないのが我ながら恥ずかしいが、俺にどうしてほしいというのだ、貴公は。分からないのかな。俺が求めているのは、他でもない、我と我が身から逃げ出すことなのだよ。自分自身のことが分からなくなるのを期待してな。ただ、それもまた俺には叶わぬ話なのだよ。

俺の熱愛ぶりの半分くらい、一度でも愛したことがあるのなら … だが、それは無理というものだ。貴公の鈍感な心にはな。

彼女と同類の聖者や天使全員の名にかけて懇願するのだが、彼女は生存しているし、生き長らえそうだと、一言次の手紙で知らせてもらいたい。悪い知らせを送ってよこしたりすれば、その結果についての責任を取ってもらうことになるだろう。使いの者であれ左記の者であれ、どちらの命に関わることであってもだよ。

貴公のラヴレース

手紙　百四

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

水曜日　十一時

H医師が来ていたところだ。医者は、牧師が令嬢の傍らで祈りを捧げ終わるまで、俺と一緒に待ち、その後、二人揃って部屋へ通された。ゴダード氏は、医者と牧師が彼女のところにいる間にやって来たのだが、医者たちが立ち去る際に一緒に出て行った。彼らは厳粛な、そして、遠慮なく言うと、いつ終わるとも知れないような暇乞いをしていた。彼女に祝福を与えたり、彼女からの祝福を受けたり、また、彼女の場合がそうなりそうだというわけだが、(それが自分たちの定めとなった暁には)彼女と同じように幸せな死に方をしたいと願っていたのだよ。

現段階では、自分はあとどれくらい持ちこたえそうに思われるのかと、もう一度彼女が熱心に医者の意見を求めると、医者は、明日の夜まではまず無理のように思うと告げていた。彼女のほうでは、指折り数えて時を待つことにするが、かつてこれまで、一番嬉しい

折などに指折り数えた場合に比べても、その喜びはさらに大きいとのことだった。
　哀れなベルトンの今わの際とは似ても似つかぬものなのだよ、彼女の最期は。ご覧のとおりだ。荘厳で痛ましさを誘う同じ機会に、疚しさのない心と疚しさを持つ心とでは、もたらす効果に計り知れないほどの違いがあるということだな。
　ちょうど今、ハウ嬢のところから男が一人、手紙を持ってやって来た。多分、中身を君に送り届けることも出来るだろう。

❦　❦　❦

　親友の手紙を読もうと、彼女は何度か懸命の努力を重ねたのだが、徒労に終わった。彼女は、朦朧としてきた自分の目には筆跡が繊細に過ぎるし、行も揺れて見えると言っていた。また、実際のところ、体の震えがひどいものだから、彼女は便箋を手に持っていられないのだよ。そして、とうとう、使いの者が返事を待っていることもあり、読んで聞かせてくれるよう、ロヴィック夫人に頼んだのだ。
　ハウ嬢の手紙から貴公にも分かることだろうが、同じ苛立たしさや熱情の表し方も、女性の優しい心の指示を受けている場合は、貴公のもののように、ひどく激しく粗暴な心に由来する場合に比べ、ずいぶんと違って来るものだよ。実は、ロヴィック夫人が転記してくれるのだ。それを届けることにする。その気があるなら、ここで読んでみるのだな。

ハウ嬢からクラリッサ・ハーロー嬢へ

九月五日　火曜日

あゝ、私の大好きなお友達、
　一体どうなるというのでしょうね、貴女の哀れなアナ・ハウは。貴女がどんなご様子なのかは、貴女ご自身のお言葉から読み取れますし（ご病気が本当にひどくお悪いのでなければ、もっと心動かすお話をしてくださったことでしょう）、また、筆跡からも拝見出来るところです。貴女のお傍に伺うのを、どうしてこんなにも長く延ばしてしまったのでしょうね。その間にも、一度お訪ねすることさえ控える気持ちにさせられてしまうなんて、信頼に足る友人からの慰めのことを、苦悩の直中にある心優しい人にとって何の役にも立たないもののように考えていたとでもいうのでしょうか。この私が、他の皆さんと同じように、私の大切な人を見捨て、見知らぬ人々に引き渡してしまうのですからね。もしも貴女のご病気が、懸念いたしておりますとおりに重いのでしたら、私は一体どうなるというのでしょう。
　今この瞬間にも出発したい気持ちです。そうするようにとの貴女からの励ましは、あまりございませんけれどね。私が出掛けますことに、母も乗り気なのです。どうしてだったのでしょうね。あゝ、どうして以前の母は乗り気にならなかったのでしょう。
　でも、私どものところでは一番足の速い馬に乗ってまいります、この使いの者の帰りを待つようにと（不安の数々が的中しているのを知りました時に、私が立ち直れないほどの打撃を受けてはいけないというわけですが）、母は勧めてもいるのです。吉報を携えた使者を私の元へ急がせてくださいますよう、神様にお祈りする次第です。でなければ　…　で

も、あゝ、私の大好きな大好きなお友達、他にどんなことがあるというのでしょう。一行で結構です。貴女がお書きになったものを使いの者に託していただきたいのです。お傍に伺うようにとお呼びになる、ただの一行だけをお送りいただきたいのです。その一行を受け取りましたなら、その瞬間にも、時を移さず出発するつもりです。今では、現にその用意が出来ているのです。もしも、私が貴女を愛しておりますのと同じように私のことを愛していてくださるのでしたら、私の姿をご覧になれば、元気を取り戻してくださることでしょう。私の望みどおりにです。それにしても、何故なのでしょう。このように考えることも出来ますのに、もっと早くに上京しなかったのはどうしてなのでしょうね。

天上の神様、私自身にとりましても極めて重大な時なのです。私の祈りをお聞き届けくださり、私の友であり、訓戒人であり、忠告者である人を、どうかお拒みにならないでいただきたいのです。

ただ、貴女の言葉遣いとお気持ちとの間には大変しっかりとしたつながりがございますし、それらはあまりに生き生きとして力強いものですから、乱れがちな書体から予想されますような、それほどの絶望を感じるべきいわれはないようにも思われるのです。

貴女の心打つお便りを携え、ベルフォードさんの召使が参りました時に家を空けておりましたこと、申し訳なく存じます［使用人が玄関のところで既に馬に跨がっているのですが、これだけは申し添えねばなりません］。ロイドさんのところにいたのです。母が私のところまでお便りを届けてくれまして、すぐに帰宅いたしました。でも、ベルフォードさんの召使は帰っておりました。どうしても留まろうとしなかったらしいのです。ただ、私といたしましては、質問を十万ほどもしたかったのです。でも、どうしてこんなにも使いの者を待たせるのでしょうね、私は。貴女に申し上げたいことが、ご相談したいことが、山ほどあるのです。すべてに亘りまして、ご指示をいただくつもりです。指を上げてくだされば、それに従いましょう。でも、貴女のほうで私を捨てて行かれるのでしたら、私にとりまして、この世は、あるいは、世の中のどのようなものにいたしましても、一体何の意味があるというのでしょう。

貴女のアナ・ハウ

筆を執ったお嬢さんがしきりと案じ、嘆いているところだが、そんな最期の時を迎えつつある令嬢に及ぼしたこの手紙の影響から、ロヴィック夫人は読むのを何度も中断しなければならなかったし、また、何度となく声の調子も変わってしまったのだよ。

「この方こそは」と、神々しいばかりの令嬢が（手紙を受取り、接吻をしながら）言っていた。「その人のために生きたいと願う価値のあるお友達なのですわ。あゝ、私の大切なアナ・ハウさん。私たちの友情というのは、本当に終始一貫、いつも清らかで高潔なものでしたわね。でも、いつの日にか私たちは出会い（そして、この望みが私たち二人の慰めとなるはずなのです）、二度と再び別れることはなくなるのです。その時には、私たちは肉体の暗がりを脱し、全身が光り輝き、心だけを持つことになるのです。そうなれば、私たちの友情は混ざり物一つない、完全無欠なものになることでしょう。そして、私たちの愛情には崇敬に値する唯一の対象が出来ることになりますし、私たちは未来永劫に亘りまして、その対象に、そして、お互いに、喜びを見出すことになるのですわ」とだよ。

一行でも二行でも書き送るよう、愛する友がしきりに求めておりますので、出来ること

でしたら一筆認めたいのです、と彼女は言っていた。そして、試してはみたのだが、まったく駄目なのだよ。しかし、口述は出来るはずだということで、ペンと紙を持って来てくれるよう、ロヴィック夫人に頼んでいた。夫人がそうすると、令嬢は夫人相手に口述を始めた。俺は引き下がろうとしたのだが、彼女の要望で居残ることになったのだ。

最初、彼女はひどく取り留めのない話し振りだった。取り留めのないことには、自分から触れていた。そして、少し話が流れ出しても、満足が行かず、ロヴィック夫人には、詫びを言いながら、繰り返し最初からやり直してもらっていた。そして、どのようなものになろうとも、三度目で終わりにするとのことだった。

告別の部分についてはよどみなく口にしていた。そして、祝福の言葉と署名の部分に至ると、彼女はペンを手に取ったのだ。そして、両膝をつくと、ロヴィック夫人に支えられながら、結びの部分を筆にしたのだよ。もっとも、ロヴィック夫人が彼女の手を導いてやらねばならなかったのだがな。

君も気づくことだろうが、令嬢の体力の衰えを考えると、意識のほうは驚くほど完全なままなのだよ。

俺は、手紙の写しを取っている間、使いの者は待たせておいた。署名の部分を真似るよう、骨を折ったよ。また、本文中でも、俺の覚えているかぎりでだが、彼女が一息入れていた部分には間を置いてある。この称賛すべき令嬢にまつわる事柄では、詳細に過ぎることなど何一つとしてないのだよ。

水曜日　三時近く

大好きな大好きな私のハウさんへ

驚かれてはいけません　…　また、お嘆きなってもいけません　…　ロヴィック夫人が代筆をしてくださいましてもね。ご意向のとおりに自分のペンで書き記すわけにはまいりませんが、夫人のペンをお借りいたしまして、私の心が認めているのです　…　そのようにお受け止めくださいね　…　私に出来ますかぎりの、従順な行いなのです。

ところで、私はどのようなことを申し上げるべきなのでしょう。どのような話が出来るのでしょうか。でも、貴女が本当のことをお知りになってはいけないわけなどあるのでしょうか。きっと、貴女は間もなく　…　すぐにもお知りになるわけですからね。

ですから、ご承知いただきたいのです。また、貴女がお流しになる涙も、仮に同情からの涙だといたしましても、楽しい同情からのものにしていただきたいのです。と申しますのも、散り落ちた花に香油を注いでいただくためといったところですが、貴女が数滴の涙をお流しになりますのは構わないように思うからです。そこで、ご承知いただきたいわけですが、あの優しいお医者様と信心深い牧師様、それに、立派な薬剤師さんが、つい先ほどのことですが　…　お揃いでの祝福の言葉と一緒に　…　最後の暇乞いをなさったのです。そして、お医者様は期待するようにと　…　宜しいですね、あなた、〈期待する〉という言葉を使わせてくださいね　…　明日の日暮れ前には、放免されますことを期待するようにと、おっしゃってくださっているのです。

ですから、お別れなのです、私の大好きなお友達。次のことを貴女の慰めとしていただきたいのです。私の慰めなのですからね。つまり、神様のお気に召します折に、祝福された来世で私たちは出会い、二度と再び別れることはなくなるのだ、ということをです。で

すから、もう一度さよならを申し上げます　…　そして、お幸せになってください。気立ての優しい人にとりましては、他の人たちをも　…　力のかぎり　…　幸せにして差し上げるのでなければ、ご自分が幸せになられるのは不可能なことでしょうけれどね　…

神様が永遠に貴女を祝福してくださいますよう、両の膝を折って跪き、そのまま支えられながらではございますが、私はお祈り申し上げます。

ご恩儀に感謝いたしております、愛する貴女の

CL. ハーロー

この手紙は、令嬢の指示もあり、転記をし、封印をした上で、俺自ら使いの者に手渡したのだ。この男が言うには、ハウ嬢のほうでは、ロンドンへ向けて出発するためだが、ただひたすら奴の帰りだけを待ち侘びているとのことだった。

貴公の使用人が今到着したところだ。それゆえ、ここで筆を置くことにしよう。貴公も無慈悲な主人だな。例の二人は、貴公のせいで死ぬほど〈こね上げ〉られているぞ。女言葉を使うと、そういうことだ。また、すべからく女言葉というのは、その由来に関してはわれわれも定かではないが、すこぶる意味深長なものがあるな。俺は確信しているが、連中も胸中願っているに違いないのだ。あの天使については、彼女をすぐにも迎え入れることになる天国に昇ってもらいたいものだ、とだよ。そして、貴公については、貴公に似合いの場所にというわけだ。自分たちの〈ハラハラソワソワ〉が収まって欲しいからなのだが、これまた女臭い言葉だよな。

何という手紙を送ってよこしたのだろうな、貴公も。俺の返事としては、ただ、「気の毒にな、ラヴレース」とだけ言っておこう。

五時」モーデン大佐が今着いたところだ。

手紙　百五

ベルフォード氏より［承前］

夜　八時

先の便りでは、モーデン大佐の到着を告げるだけの時間しかなかったのだよ。大佐は従僕二人に付き添われて馬を進め、時計がちょうど五時を打った時に、玄関口で馬から下りたのだ。その頃、スミスの上さんは階下にいて、奥の仕事場で涙に暮れていた。亭主が一緒で、上さんに負けないくらい心を動かされていた。ロヴィック夫人は少し前に二人を残して引き下がって行ったのだが、やはり涙に暮れていた。というのも、連中は互いに嘆き悲しんでおり、賛美すべき令嬢が朝までは持ちこたえないだろうという点で、意見の一致を見ていたからだ。自分もそう思うと、令嬢が連中に話していたのだ。彼女の言い方を借りれば死の前触れということになるが、少し麻痺が生じているし、眠気が強まっているから、とのことだった。

スミスの上さんが後ほど話してくれたことだが、大佐は馬から下りるとすぐに、ハーロー嬢の容体はどうかと、ひどくやきもきした様子で尋ねたそうだ。上さんのほうでは、生きてはいらっしゃいますが、どんどん最期の時へ近づいておられるように思います、と答

えた。「何てことだ」と、両手を差し上げ、天を仰ぎながら、彼が言った。「会うことは出来ますかね。モーデンと申します。光栄にも、令嬢とは近い間柄なのです。どうか、階上までご足労願いたい。そして、私が参ったことを［意識はあるのでしょうね］知らせていただきたいのです。お傍にはどなたがおられるのです」とだ。

「どなたもいらっしゃいませんわ、看護婦さんの他には。それと、ロヴィック夫人がおられますが、この方は良家の未亡人でして、まるで実の母親みたいに、親身のお世話をしてくださるのです」

「また、実の母親以上のお世話でもありますよ」と、彼が口を挟んだ。「でなければ、親身のお世話などとは到底申せませんからね」とだ。

スミスの上さんは言葉を続け、「殿方がお一人ご一緒でなければの話ですが、ベルフォード様とおっしゃる方で、これまでにお嬢様が得られた、一番のお知り合いですわ」

「ベルフォード氏がおられるのなら、私がお邪魔をしても大丈夫ですね。だが、ひとつ階上に行って、先に氏とお話が出来れば有難いと、ベルフォード氏にお伝えいただきましょう」

スミスの上さんは新しく借りた俺の部屋へやって来た。ちょうど君の使用人を急ぎ送り出し、もう一度お傍に伺っても構わないかどうか、令嬢の看護婦に尋ねていたところだったのだよ。看護婦の返事では、令嬢は、永遠の眠りに就くのも間もなくだろうからと、横になるのを断り、肘掛け椅子でまどろんでいるとのことだった。

大佐は本当に天晴な紳士で、すこぶる丁重な態度で俺を迎えてくれた。初対面の挨拶の後、彼はこう言うのだよ。「私の親戚の娘がお世話をいただいておりますが、あの娘自身の一族のだれにも勝るご親切さです。私といたしましても、あの娘のため、岩のようなあの連中の心を動かすべく努力していたのです。そして、可愛いあの娘の容体がそれほど悪いなどとはあまり考えもせず、傍に伺うのを怠ってしまったのです。帰国直後にもそうすべきでありましたし、また、あの娘がどれほど悪いのか、そして、一族の者たちの件がどれほど厄介なことになるのか承知しておりましたなら、そうしていたことでしょう。しかしながら、貴方の友人にははなはだしく非難されるべき点がありますし、貴方がその男の極めて親しい友人であるということから、あの娘に対する貴方の丁重なお振舞いが、なおさらあの娘には不都合をもたらしたわけです。それにしても、あの娘に回復の望みはまったくないのでしょうか」とだ。

「皆無だという心痛む宣告とともに、医者たちはご令嬢の元を去ったのです」

「十分な看病は得られたのでしょうか。医者の腕は確かでしょうか。この方たちが大層あの娘に親切で、尽くしてくださっていると聞いておりますが　…　」

「そうせずにいられる者などどこにおりましょう」と、スミスの上さんが涙を浮かべながら言っていた。「あの方はこの世で一番素敵なご婦人ですもの」とだ。

「それこそ」と、片手を差し上げ、天を仰ぎながら、大佐が言った。「あの娘が世間の皆さんからいただいている評判なのです。何ということなのです。何故に貴方の忌まわしい友人は　…　」

「また、令嬢の無慈悲なご両親にしても、何故のことだったのでしょうか」と、俺が言葉を挟んだ。「ご両親につきましても、あの男同様、説明はつけ難いですね」とだ。

彼のほうでは、「まったくおっしゃるとおりですね。どのような女性が相手であれ、手中

のものといたしますたびに、不逞の男どもが見せます悪辣さのことを考えますとね」と答えていた。

令嬢に対する看護に関しては、納得の行くように説明し、H先生とゴダード氏から受けた、好意に溢れ、父親代わりとさえ言える手当てのことを彼に話しておいた。

大佐はしきりに令嬢のところへ伺いたがっていた。彼の言によれば、令嬢が十二歳の時以来会っていないから、とのことだった。そして、当時の彼女は、イギリスでも最も美しい女性の一人になることを約束していたというのだ。

「そのとおりだったのです、ご令嬢は」と、俺が答えた。「ほんの二、三ヶ月前のことですがね。また、やつれてはおられますが、その約束を果たされたものと貴方の目には映ることでしょう。と言いますのも、目鼻立ちは非常に調和が取れ、整っておりますし、プロポーションは大変に優美で、立ち居振舞いにも真似の出来ない優雅さがありますから、たとえ骨と皮ばかりになられても、お美しいことに変わりはないのです」とだ。

スミスの上さんは大佐の頼みで二階へ行き、ロヴィック夫人と看護婦が令嬢に付き添っているということ、また、令嬢は肘掛け椅子で夫人に寄り掛かり、すっかり熟睡しているため、自分の入室の際も退室の際も、物音を聞きつけることはなかった旨の知らせを持ち帰った。大佐は、就寝中のことではあるが、もしも不作法に当たらないのであれば、彼女の姿を見せてもらいたいと頼んでいた。会いたい気持ちが募り、令嬢の目覚めを待っているわけには行かないというのだよ。ただ、令嬢の安眠が妨げられるような真似はしたくないし、令嬢の目が自分に向いていない時に、あの美しい目鼻立ちを眺めて満足することにするというのだ。そして、令嬢の安らぎを乱さずに、部屋の出入りをすることは出来ないかどうか、尋ねたのだ。

きっとお出来になるはずです、と上さんは答えていた。令嬢の椅子の背もたれがドアの方を向いているから、というのだよ。

彼女が目を覚ます場合には、自分は退室するよう用心したい、と彼は言っていた。自分が突然に姿を見せたために、彼女を驚かせたりしてはいけないから、とのことだった。

スミスの上さんがわれわれよりも先に二階へ上がり、われわれが入って来ても身動きをしないよう、ロヴィック夫人と看護婦に指示した。その後で、われわれ二人は静かに二階へ上がったのだ。

魅力的な令嬢の姿がわれわれの目を捉えた。前にも話したとおり、令嬢は純白のドレスに身を包み、肘掛け椅子に身を沈めていた。ロヴィック夫人が別の椅子に座り、寄り添っている。左の腕を令嬢の首に回し、いわばその支えにしている。というのは、そうしてくれるよう、令嬢が頼んだらしいのだ。夫人は母親代わりをしてくれたし、自分の母の腕に抱かれているように考え、心を慰めたい、と言ってだ。眠気を覚えるから、とのことだったが、おそらく、それもこれが最後だろうと言うのだよ。

やつれた片方の頬が親切な女性の胸にもたれかかり、その心地好い温かさのため、微かではあるが美しい赤みを一面に湛えていた。もう一方の頬はさらに血の気がなく、落ちくぼんでおり、すでに死の冷たさに覆われているかのようなのだ。百合のように白い両手にはくねくねと走る血管が（その中を駆け巡るというよりは、すでにひどく元気のない這いずり方をしている、あの紫色の流れの凝結によって、残念ながら、すぐにも詰まってしまう血管だよ)、かつて見た彼女のものもそうだったが、それよりもさらに青く透けて見える

のだ。そのだらりと生気なく垂れた彼女の手が、片方は体の前に、もう一方は親切な未亡人の右手に握られている。未亡人の流す涙は、母親にも似たその胸で支えている美しい顔を濡らしているのだが、眠れる美女に気づかれはしないのだ。また、善良な婦人も気づいていないのだろう。あるいは、拭い取ろうとするとか、姿勢を変えようとして、令嬢の安眠を妨げたくないということなのだろう。令嬢の表情は気持ちの良いほど穏やかで落ち着いていた。そして、時折ビクッと体を震わせていたが、眠りは安らかな様子だった。呼吸は確かに浅く、早いものではあったが、それでも、まずまずよどみがなく、死に瀕している人間の息遣いではなかったのだよ。

令嬢の傍らへと進み、その愛らしい顔を目にすることになった時、われわれの眼前に現れたのは、このような哀れを誘う姿だったのだ。

大佐は何度となく溜め息をつきながら、両腕を組み、この上ない注意深さと愛情の籠もったまなざしで令嬢を見つめていたが、やがて、彼女がギクッと体を震わせ、前よりも苦しそうに息を吐くのを見ると、これまでにも俺が触れてきたように、一つの窓際に置いてある、彼女が称するところの〈住まい〉を遮る衝立のところまで引き下がったのだ。この衝立は、自室に閉じ籠もらねばならないことが彼女にも分かった際に、そこに置いてもらったのだよ。そして、われわれの懸念の深刻さから、また、初対面で他に話すことが多かったため、俺としても、おそらく目に触れることとなるものについて、前もって大佐に知らせるのを失念してしまった次第なのだ。

その辺りまで引き下がると、大佐はハンカチを取り出し、あまりの悲しさに話も出来ずにいる様子だった。だが、衝立の陰に目を向けると、すぐに沈黙を破った。棺の形をしたものに驚いた大佐が、その上に掛けてある紫色の布を持ち上げてみたからだ。そして、飛び退くと、「何ということだ。何なのだ、これは」と叫んだのだよ。

スミスの上さんが横に立っていたのだが、大佐は感情も露にこう言っていた。「どうしてまた、このような品を前にして、悲しい物思いに耽ることを私の従姉妹は容認されたのでしょうね」とだ。

「あゝ、あの方を思いどおりに扱うような人など」と、善良な女が答えた。「どこにいらっしゃるでしょう。私どもはすべて、あの方に関しましては、いわば赤の他人ですわ。それでも私どもは、この悲しむべき折には、あの方をお諫め申し上げたのです」とだ。

「この件については」と、俺が言った（静かに大佐のところへ歩を進めながらだが、令嬢がまたウトウトし始めたのだ）。「前もってお知らせしておくべきでした。棺が持ち込まれました際、私はここにいたのです。そして、あれほどのショックを受けたことは、これまでの生涯で一度としてありませんでした。ただ、ご令嬢の身近には、お身内の方一人としておりませんでしたし、また、どなたかがお傍に来られることを期待すべき根拠も何一つなかったのです。それに、治りはしないことを確信なさいまして、ご自分の遺言執行人に委ねられる事柄につきましては、とりわけ、ご自分の体に関わる件では、出来るかぎり少なくするよう決心なさったのです。ただ、あれも、ご令嬢にはショックを誘う品物ではないのですよ。他のだれにとりましてもそうなのでしょうがね」とだ。

「あの連中の冷酷さこそ呪われるべきなのだ」と、大佐が言った。「あの娘がこんな惨めな準備を自分一人で進める、そのきっかけを作った者たちのことですよ。そのことを思い巡らし、指示を与えている間中、あの娘の胸に去来したのは、一体どのようなことだった

のでしょう。また、あちらに顔を向けるたびに浮かぶのは、どんな想いなのでしょう。こういった非凡な心の持ち主というのは …… だが、実際の話、私がこの場におりましたなら、あの娘もそのようなことは制止されていたことでしょうね」とだよ。

令嬢が深々と溜め息をつき、ビクッと体を震わせたため、われわれの話は中断することになった。それから、大佐は衝立の陰へとなおも退いて行ったのだが、自分の突然の出現が彼女を驚かしてはいけないというわけだよ。

「どこなのかしら、ここは」と彼女が言った。「とても眠気が強いのです。私、どれくらい眠っていたのでしょう。どうぞ、行かないでください（俺が引き下がろうとしていたのだ）。頭がひどくボーっとしているのです。ますますそうなって行くのでしょうね、おそらく」とだよ。

その後、令嬢は立ち上がろうとしたのだが、衰弱のため、すぐにも気を失いそうで、再び腰を下ろさざるを得なくなり、椅子の背もたれに頭を預けていた。それから、少し間を置いて、「皆さん、もう、間違いございませんわ」と、彼女が言った。「ご親切なお骨折りのすべても間もなく終わりを迎えることでしょう。一眠りいたしましたのに、体が回復いたしません。それに、指先が麻痺してしまったようで、少しも感じないのです（と、指を上げて見せた）。私のノートンさんへの手紙を発送する頃合いですね」と言うのだ。

「私の使用人に持たせまして、急ぎ届けさせましょうか、マダム」

「いいえ、宜しいのですよ。郵送にいたしますと、大好きなあの婦人のところへ届くのが早くなりすぎますわ（あの人もそうお思いでしょう）」

今日は配達日（二〇）ではない旨を、俺は令嬢に話した。

「まだ水曜日なのでしょうか」と、彼女は言っていた。「驚きましたわ。時の進み方が分からないのです。ただ、ひどくゆっくりしているのは明らかですね。それに、もう、すぐにもベッドに就かなくてはいけなくなると思います。あちらでは、何もかもがとても具合良く進むでしょうし、少しの面倒もないはずです。そうではございませんか、ロヴィック夫人。私といたしましては」と、俺のほうへ向き直ると、「何をする力もなくなってしまいます今わの際までやり残しましたことは、一切ないものと考えております。お話しすべきこと、あるいは、行うべきことにいたしましても、何一つとしてないつもりです。ありませんことを神に感謝する次第です。もしもございましたら、どんなにか不幸なことでしょう。貴方様のお仕事を楽にいたします上で、為される必要のあることとか、口にされる必要のあることとか、何かご注意いただけることはございますでしょうか」と言うのだよ。

「仮に、ご親戚のモーデン殿が来られた場合ですが、マダム、お会いになりたいのではないかと拝察いたしますが」

「すっかり衰弱しておりますので、今では従兄弟に会いたい気持ちもございません。私の心を、そして、あの人の心までも乱すことになるだけでしょうね。ただ、お会い出来ますうちに来てくださるのでしたら、お会いいたしますわ。以前のご厚意の数々と、現在の親切なお考えにお礼申し上げるためだけだといたしましてもね。あの人のところから使いの者でも来たのでしょうか」

「ご自分で訪ねて来られたのです、マダム。三十分でお見えになるでしょう。ただ、貴女を驚かせるのを心配しておられたのです」

「もう、私を驚かせるものは何もございませんわ。直接お母様が最後の祝福を授けてく

ださることを別にいたしますとね。それでしたら、今でも、私には嬉しい驚きとなることでしょう。でも、わざわざ私に会うために上京したのでしょうか、私の従兄弟は」

「そうなのです、マダム。僭越ながら、先週の月曜日、一筆認めまして、貴女がどれほどお悪いのか、お知らせしたのです」

「本当にご親切なことですね。これまでもそうですが、ご尽力には深く感謝いたしております。でも、私をご覧になると、心配なさるでしょうから、今あの人と顔を合わせますのは、辛いことのようにも思われるのです。ただ、間もなくそうなるのでしょうが、今のところはそれほど重体でもございませんから、私といたしましても、早くに来てくださるほど、好都合です。でも、もしもいらっしゃったら、あの衝立のことはどういたしましょう。私をお咎めになるでしょうね。十分に考えられることですわね。それに、今の私はお小言に耐えることが出来ないのです。多分「と、ロヴィック夫人とスミスの上さんに寄り掛かりながら」、隣の部屋まで歩いて行くことは出来るでしょう。あの人をお迎えするためですわ」

令嬢は立ち上がるような身振りをしたのだが、すぐにもまた気を失いそうになり、静かに座っていなければならなかったのだよ。

大佐はこの会話を耳にし、衝立の陰で完全に動揺を来していた。そして、二度、従姉妹の目を避けながら、衝立から彼女のほうへ来ようとしていた。だが、あまり彼女を驚かせてはいけないと思い、戻って行ったのだ。

俺は大佐のほうへ歩いて行き、彼の後退を助けてやったのだが、彼女はただ次のように言っていた。「行かれるのですか、ベルフォードさん。階下へのお呼びがあったのでしょうか。従兄弟が見えたのでしょうか」とだ。というのも、だれかが静かに部屋を横切って行く物音を、彼女は聞きつけたからだ。彼女も、目に比べるなら、耳のほうはもっとしっかりしているのだよ。

そのように確信する旨を俺は彼女に話した。すると、彼女はこう言うのだ。「ロヴィック夫人、それに、スミスさん、私たち、精々善処しなくてはなりませんわ。でなければ、お気の毒に、従兄弟をひどく悲しませてしまいますもの。以前には、私のことをとても大事にしてくれておりましたからね。どうか、お医者様のくださった最後のお薬を少々、水に溶して持って来ていただきたいのです。この一度の面談に向け、私の気持ちを奮い立たせるためですわ。今案じることといたしましては、その点だけだと存じます」とだよ。

大佐のほうでは（このすべてを聞いていたわけだが）、訪ねて来た旨、名を告げてよこした。俺は迎えに降りるように装いながら、心痛めている紳士をお通ししたのだが、令嬢が先に、衝立を出来るだけぴったりと窓に寄せておくよう指示していた。その陰にあるものを大佐が目にしないようにというわけだ。一方、大佐のほうでは、そのことについての彼女の言葉を聞いていたため、そちらには注意を向けないよう、心に決めていたのだ。

大佐は片膝をつくと、座ったままの天使を両腕で抱き締めた。というのも、彼女は椅子の肘掛けで体を支え、立ち上がろうと試みたのだが、出来なかったのだよ。そして、「お許しくださいね、あなた。お許し願います。立ち上がることが出来ないのです。今このようなご厚意に与るとは、考えてもおりませんでしたわ。でも、惜しみなく施してくださいましたご親切のすべてにお礼申し上げますためにも、この機会のことは嬉しく思います」と言っていた。

「あゝ、我が最愛の、そして、最も大切に思う従姉妹よ、僕は決して自分を許すことはないはずです」と、彼は（涙で目を潤ませながら）言っていた。「もっと早くに君の傍へ伺わなかったことでです。思いもしなかったのですよ、君がそんなにも重病だなんて。君の身内の者たちも、だれ一人信じていないのです。皆が信じてくれるなら　…　」とだ。

「皆が信じてくれるのでしたら」と、大佐の言葉を遮り、令嬢が繰り返した。「皆からもっと同情してもらっていたことでしょうね。それは確かだと思います。でも、是非とも教えていただきたいのです。貴方が皆のところを去られた時、皆はどんな様子だったのでしょう。皆とは仲直りなさいましたか。もしもまだなのでしたら、お願いがございます。貴方の哀れなクラリッサを愛していてくださるのでしたら、仲直りをなさっていただきたいのです。溝が深まりますますごとに、私の過ちが大きなものとなるばかりだからですわ。それがすべての根底にあるわけですからね」とだ。

「愛する従姉妹よ、君にとって好意的な便りが皆から来るはずだと、数時間待っていたところに」と、大佐が言った。「この紳士のお手紙が届いたもので、それで僕も急ぎ上京したわけです。ただ、お祖父様の地所の決算書を持参していますから、君に決算をしてほしいのです。それと、君の受け取り分の銀行手形類も持参しているのです。君が受け取ってくれることを皆願っておりますが、お金が入り用になるのを案じてのことなのです。それに、これは、近づきつつある和解の確かな兆しでもありますから、その他についても、万事君の願いどおりになることは、思い切って請け合いましょう。もしも　…　」

「あゝ、あなた」と、彼女が口を挟んだが、何度も中断し、間を置きながらだった。「願わくは　…　私といたしましては、これが次のことを示すものではないよう願っております。つまり、たとえ私が生き長らえることになりましても、皆のほうでは、これ以上私とは何一つ話すつもりはないのだ、ということをです。皆から独立いたしますのを、これまで得意にしたことはございません。この点につきましては、もっと楽な暮しに入りますことが可能でありました折にも、私の行動のすべてが証明しているところです。でも、こんなことを思い返しましても、今では何の役に立ちましょう。ただ、次の点だけをお願いいたします。貴方と、それから、大変お世話になったのですが、この殿方とで、私の認めました遺言に従い、これらの問題を調整していただきたいのです。ベルフォードさんには失礼な話でしょうが、ご親切にもお引き受けくださいましたこのお骨折りをお願いする気持ちになりましたのは、実のところ、好んでというよりも、必要に迫られてのことだったのです。もっと早くに貴方にお目に掛かるという、あるいは、貴方が今も私のことを重んじてくださっているのを知るという、そんな幸運に恵まれておりましたなら、厚かましくも、このようなお世話をその方にお願いしたりはしなかったことでしょう。ただ、ラヴレースさんのお友達ではありますが、信義を重んじておられる方ですし、平和を乱すというよりも、和解を進めようとしてくださるはずです。そこで、貴方にお願いですが、貴方にもそのために一肌脱いでいただきたいということです。それから、忘れないでいただきたいのです。私にとりましては大切な人ですし、これまでもいつだってそうでしたが、そのモーデンさんよりももっと近い親戚がおりますかぎりは、私の受けました不当な仕打ちに対しまして、そのきっかけを作った人に復讐をする権利は、貴方にもないのだということをです。この件に関しましての私の気持ちと、その理由につきましては、お手紙を差し上げておりますし、この上さらに主張する必要はないものと存じます」とだよ。

「ラヴレース氏に対しましても、これくらいの公平な評価はしなくてはいけないでしょうね」と、目を拭いながら大佐が答えた。「つまり、君への恩知らずな卑劣行為を氏がどれほど真摯に後悔しておられるのかという点、そして、ご自分の力で可能なありとあらゆる償いをすぐにもしたがっておられるという点を証言するくらいのことはです。ご自分の悪辣さと、君の美点については、氏も認めておられるのです。でなければ、僕は見過ごすわけには行かないでしょう。たとえ君にはもっと近い親戚がいるとしてもですよ。お祖父さんも、君のことを僕に任せたのじゃなかったですか。それに、腐心すべきは君の財産のことであり、君の名誉ではないのだなどと、僕がそんなふうに考えたりするでしょうか。ただ、君に対する正当な処遇を氏が大層強く望んでおられるだけに、その分、僕の触れるべき点は少なくなるわけですし、君としても、その点に関しては、完全に安心してもらって構わないのです」とだ。

「お礼申し上げますわ。有難うございます」と、彼女は言っていた。「これで、すべて私の望みどおりですわ。でも、私、ひどく意識が薄れております。とても衰弱しているのです。御免なさい。我慢出来ません。勿体なくもこのように訪ねてくださいましたのに、もっと立派な応対が出来ませんことを残念に思います」　こう言いながら、彼女は椅子に沈み込むようにし、口を閉ざしたのだ。

これを機に、われわれは揃って退去したのだが、尋常ならざる事態が生じた場合にはということで、ベドフォードヘッド亭にいる旨を伝えておいた。

われわれのどちらも食事をしていなかったので、軽い食べ物を注文した。その用意が出来るまでのことだが、二人の話題がどんなものであったか、君にも察しはつくだろう。令嬢の絶望的な状態について、二人は声を揃えて嘆いたのだよ。多岐に亘る彼女の美点を称賛したし、君のこと、そして、彼女の身内のことを厳しく非難したのだ。ただ、君に関してもっと好意的な見方をしてくれるよう、君の最近の手紙から数箇所を彼に読んで聞かせたよ。彼女に加えた不当な仕打ちについての君の懸念や、痛切な悔恨の情を表明している部分だ。すると、彼はこんなことを言っていた。取り返しようもない罪を犯したという意識に悩み苦しむのは、何とも恐ろしいことですね、とだよ。

ゴダード氏に手を回し（H医師は不在だったのだ）、もう一度令嬢を診てもらい、その帰途、われわれを訪ねてもらうことにした。親切なことに、氏はそのとおりにしてくれたのだが、令嬢のお傍には五分と留まらず、われわれに向かって次の点を話していた。令嬢は急速に最期の時を迎えつつあるということ、翌朝まで持ちこたえることはなさそうに思うということ、そして、令嬢がすぐにもモーデン大佐に会いたがっているということをだ。

大佐は、その必要は一切ないのに、席を外す言い訳をしていた。そして、われわれの軽食がちょうど運び込まれて来たところだったのだが、すぐに出て行った。

俺は一口も手をつけることが出来なかった。そこで、気を紛らすために、また、君の願いを入れるためにも、ペンとインクを手にしたという次第だ。二、三行の知らせを待ち侘び、君がひどく苛立っているのは承知の上だからだよ。何しろ、これまで述べて来たことからして、君にも察しはつくだろうからな。君の使用人が五時三十分過ぎにやって来た際に、手紙を書くために引き下がるとか、あるいは、今までの間にそんな機会を捉えるといったことが不可能だったことはだよ。また、これにしても偶然に得られた機会なのだ。ただ、君の下男にしても、俺の送った口頭での言伝を持ち帰るのは恐ろしかったのだ。奴が

君に話したのは疑うべくもないが、大佐が同席していたこと、令嬢の容体がひどく悪かったこと、そして、俺としては、ほんの一行認めるためでも、席を外すわけに行かなかったのだ、といったことを知らせるものだがね。

十時

後ほど、大佐から伝言があり、令嬢が痙攣を起こしているため、自分もひどく動揺しており、俺と付き合うのはおそらく無理だろう、とのことだった。

俺のほうでは、令嬢の様子を知るため、三十分おきに使いを出した。そして、ちょうど今、嬉しいことに、彼女の痙攣が治まったということ、また、令嬢は予想されたよりもずっと穏やかに眠りに就いた旨の知らせがあったのだ。

気の毒に、令嬢の従兄弟もひどく具合を悪くしているのだが、彼女がこんな状態にある間は、一歩も外に出ようとせず、他の寝具類はすべて断り、寝椅子の上で横になるつもりでいるのだよ。

手紙　百六

ベルフォード氏より［承前］

九月七日　六時　ソーホーにて

令嬢はまだ生きている。令嬢が一時間ほど前に俺のことを尋ねていた旨を知らせるためだが、ちょうど今、大佐が召使を送ってよこしたので、彼女を訪ねるべく、着替えをしているところだ。ジョエルが俺に懇願している。たったの一行で構わないから、君の今のもどかしい気持ちを満足させるような言葉を持たせ、早く戻らせてほしい、とだ。奴の言によると、どれだけ急いで戻っても、ナイツブリッジで君に出会いそうな気がするというのだな。そして、君の気持ちを鎮めるような文言を一、二行でも携えていなければ、君は奴に向かってピストルをぶっ放すかもしれないとのことだ。というのも、君は正常とは言い難い状態だと、奴は案じているのだよ。それゆえ、とり急ぎ、これを送り届けることにする。そして、出来るだけ早めに、もう一通用意しよう。詳細に亘るものをだよ。だが、君も少し辛抱してくれなくては困るな。何しろ、令嬢の前に出るのを許された場合、あるいは、大佐が同席している場合に、筆を執るために三十分ごとに退室するような真似がどうして出来るというのだ。

午前八時　スミス宅にて

令嬢は眠っているところだ。寝ずに看病をしていたロヴィック夫人の言葉によると、令嬢は思った以上に安らかな夜を過ごしたとのことだ。ほとんど眠りはしなかったが、楽そうに見え、敬虔な精神状態になっているだけに、一層気持ちが安らいでいるのだろう。目覚めている時間はすべて祈り、あるいは、不意に声となって唱えられる黙祷に捧げられており、彼女の両手と目は、時々、天の方へと向けられ、その唇は、こんな彼女の最期の時に似つかわしい、熱意の籠もった動きを見せているのだよ。

十時

目を覚ましたらすぐにでもと、大佐がしきりに従姉妹と会いたがっていたため、われわれは二人揃ってお目通りを許された。部屋に入るや否や、われわれは彼女の姿に看て取ったのだ。昨晩の彼女の穏やかな様子のこともあって、われわれを喜ばせようとして婦人たちが弄した言辞とは裏腹に、彼女の死滅の時が近づきつつある顕著な兆候をだよ。大佐と俺はそれぞれに、胸の思いを口にするのが疎ましく、憂鬱な表情を浮かべながら互いに見つめ合っていたのだ。

大佐は、叔父のアントニーのところへ、置き忘れて来た書類のことで召使を遣わすつもりであることを話し、あちらに何か用事はあるかどうか、令嬢に尋ねた。

ないと思う、と令嬢は言っていたが、前日よりは小さな声だった。確かに、ノートンさんへ届ける手紙が一通出来上がっており、その中では、ある要望のことが触れられているのだが、その要望にしても、すべてが終わった後で関係者に知らされても、十分に間に合うものである。ただ、あちらへ向かう召使の手で、今届けてもらっても構わない、とのことであり、令嬢はそのために、手紙を大佐に渡してもらったのだ。

令嬢は息切れがひどく、枕をもう一つ求めていた。すでに二つ用いていたから、これで彼女は、いわばベッドの上で上半身を起こす格好となり、前よりも明瞭な話し振りになった。そして、われわれがしきりに案じているのを目にすると、自分のどもりがちな口調も忘れて、われわれのことを慰めてくれたのだよ。また、短いものではあったが、素晴らしい教訓を与えてくれた。時宜に適った準備がもたらす幸せについて、そして、遅きに失した後悔に伴う危険の数々についてだが、彼女の述べるところでは、遅れてしまった場合には、体と同様に心もひどく衰弱してしまうために、哀れな魂にとっては、自然な衰えに対処することはほとんど不可能になってしまう、というのだよ。

「親切なお友達、どうぞお願いいたします」と、彼女が言葉を続けた。「自分のことを嘆いてはおりませんし、また、嘆くいわれもない、そんな人間のことを嘆かないでいただきたいのです。その逆に、私と一緒に喜んでほしいのです。私の現世での苦難のすべてがすぐにも終わろうとしていることをです。信じていただきたいのですが、私は、仮にそれが可能だといたしましても、生き長らえたいとは思わないのです。たとえ生涯で最も楽しかった部分がもう一度繰り返されることになるとしてもです。でも、十九年の生涯の十八年間はとても楽しかったのです。こんなにも誘惑に晒されてしまいますし、また、試練に臨みましては、こんなにもしくじってしまうことも多いのです。自分の危険がすべて終了いたしましたことを喜ばない者などおりますでしょうか。私が望んでおりましたものは、愛する両親からの許しと祝福の言葉だけでございます。私の最期は楽なものになりそうな見込みではございますが、その望みが叶えられておりましたなら、さらに苦しみのないものになっていたことでしょうね。でも、慰めを求めまして、神様ご自身以外の者に頼るようなことを、全能の神様は許してくださらないことでしょう」とだ。

その後令嬢は、従兄弟に向かって、この上なく熱心な態度だったが、要望を繰り返していた。つまり、自分の死に対する復讐を求めることで、自分の過ちを増大させたりはしないようにとだよ。そして、俺に向かっては、すべての争いを収めるよう努力し、友人に対する影響力を発揮して、将来その方面からもたらされそうな災いのすべてを防いでもらいたいし、また、この信託が俺に付与することになる力を用い、どのようなものであれ、友

人に降り懸かる災いについても防いでほしい、とのことだった。

俺と一緒に遺言執行の任務に就いてもらうよう、自分の遺書を変更出来なかった点に関し、令嬢は従兄弟に向かっていくつか言い訳をしていた。また、俺に対しては、これまでに掛けた苦労、そして、今後も掛けることになる苦労について弁解していた。

ひどく体力を消耗したため（弱って行くのが手に取るように分かるのだ）、令嬢は枕に頭を沈め、すぐにも意識を失いそうだった。われわれは窓際へ退き、互いに顔を見合わせていたのだが、どう言ったら良いものやら分からないまま、二人とも何か言いたげな顔付きなのだな。だが、その動きも言葉にならないまま消えてしまったのだ。語り掛けているのはわれわれの目ばかりであり、それも、どちらの男にとっても不慣れなまなざしだ。少なくとも、俺にしてみれば、この称賛すべきお嬢さんと知り合うまでは慣れ親しんだことのないまなざしなのだよ。

大佐が部屋を出て行ったが、使いの者を退出させ、ノートン夫人宛の手紙を送り届けるためだ。これを機に、俺も引き下がり、ここまでを筆にしたという次第だ。ジョエルが受け取りに戻って来たので、ここで結びとしておく。

十一時

手紙　百七

ベルフォード氏より［承前］

大佐が話してくれたところでは、召使に託してのことだが、ジョン・ハーロー氏に宛てて次のような手紙を書き送ったという。連中としては、和解について話し合うという面倒は省いて構わないかもしれないが、それというのも、連中が結論に至る前に、彼の愛する従姉妹は、多分、この世を去っているだろうから、とだ。

大佐は彼の従姉妹が糊口の手段としていたものについて、また、いくらかでも俺の好意を受けたことがあるのかどうか、尋ねていた。令嬢が君からの厚意に甘えるようなことはないものと確信している、と言うのだよ。

令嬢が衣装の一部を手放したという事実については知らせてやった。

これを聞くと、大佐は胸を痛め、令嬢の無慈悲な親戚連中に対し、また、同じく君に対しても、激しく怒りの言葉をぶつけていた。

まったく帰国をせずにいるか、でなければ、もっと早くに帰れば良かったと、大佐は言うのだよ。そして、適当な時期が来たら、俺のほうから悲しい物語の全容を知らせてくれるよう希望していた。また、戻って来た時にはこの地に腰を据え、余生を過ごす考えでいたのだが、従姉妹が回復する可能性はないわけだから、今では、もう一度海を渡り、再びフィレンツェかレグホンに落ち着くつもりだと付け加えていた。

非常な沈着さをもって、令嬢は自分の遺体についての指示を与え、冷たくなり次第棺に納めるよう、看護婦とあの家の女中に命じていた。「その後の処置については、ベルフォー

ドさんが遺書で知ることになるでしょう」と令嬢は言ったのだ。

ちょうど今、令嬢は金であしらったハウ嬢の細密画を、いつも着けていた胸のところから取り外し、それをロヴィック夫人に預けながら、白い紙で包み、〈チャールズ・ヒックマン殿〉と宛先を書き記した上で、その紳士に届けるべく、自分の死後、俺に渡してほしいと頼んでいた。

夫人に手渡す前、令嬢はその絵をつくづくと眺めていた。「素敵で、いつも優しかったお友達 … 仲良し … お姉様 … 大好きな人」と言いながら、愛情の籠もった呼び名一つにつき一回ずつ、彼女は四回に亘ってその絵に口づけをしたのだよ。

君のもう一人の使用人がやって来た。君が苛立つのも尤もだ。当然だよ。だが、会話の真ん中で中座し、起こったことを大急ぎで書き留め、書く端からバラバラに送り出すような真似が、この俺に出来ると思うのかな、君は。仮に出来るとしても、半分は失ってしまうことになりはしないかな。別の半分を書き記している間にだよ。

この出来事は、ほとんど君に負けないくらい、俺にとっても関心のあることなのだ。もしも、君が俺以上に悲しんでいるとすれば、その理由として考えられるのはただ一つだけであり、それは君の胸中にあるというわけだ。この神々しいばかりの令嬢を失うくらいなら、俺としては、この世の友人ことごとくを（君自身もその中に入るのだが）失ったほうがましだし、彼女の被った災難を、そして、彼女の真価のことを思い巡らすたびに、不幸な思いをすることになるだろう。彼女の災難の件で自分を咎めるべき点など、俺には何一つとしてないのだがね。

今こんなことを言うのは、君を非難するためというより、むしろ俺自身の悲痛な思いを表明するためなのだよ。もっとも、察するに、君は良心ゆえに別の考え方をすることになるのだろうな。

気の毒な君の下男は、手紙を携え急ぎ戻らせてくれるよう、命にかけてお願いすると言っているのだが、俺からこれをひったくろうとするのだ。さもなければ、おそらく十五分もすれば、君を（ちょうど今、下の階へ降りてくれるよう呼ばれたところなのだ）本当に安心させるというわけには行かないにしても、確信させることになるだろうな。そしてそれは、君の置かれているような状況にあっては、また、君のような精神の持ち主にとっては、救いになるというものだよ。

木曜日　午後四時

手紙　百八

ベルフォード氏からリチャード・モーブレー氏へ

木曜日　午後

親愛なるモーブレーへ

君が上京していることを聞き、嬉しく思う。これが君の手に届き次第（出来れば、ターヴィルと一緒に）、奴の行く手を遮ってほしいのだ。ありとあらゆる男の中でも、徳高き者の愛情を受けるのには最も相応しくないが、君とターヴィルの愛情には最も似つかわしいという男のことだよ。そうしてもらわないと、おそらくここ一、二時間のうちに俺が送り届けるはずの知らせのせいで、奴にとっては破滅こそが望み得る最大の幸せということになってしまうのだよ。

奴には、ピカディリーからケンジントンまでの間で会えるだろう。馬に跨がっているのは、十中八、九間違いのないところだ。狂ったように、馬で往ったり来たりしているはずだよ。あるいは、その道筋にある旅籠とか居酒屋とかに寄っているかもしれないな。その場合には、奴の使用人が俺のところから戻るのを、おそらくウェーターなんかが見張っていることだろう。

奴の下男のウィルがちょうどやって来たところだ。この男が帰途これを君に届け、道案内をしてくれるはずだ。馬車にせよ何にせよ、急ぐことだな。君が同行してくれると、奴か使用人か、どちらかの命を救うことになるかもしれないのだよ。意気揚々として憚らない放蕩生活の、その目出度い結果を見ておくことだ。早晩、われわれにも切実な問題となるのだし、すべては苦々しくも悲痛な結末を迎えることになるのだよ。　さらばだ。

J. ベルフォード

手紙　百九

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

大佐に呪いあれ。俺が受け取った最後の手紙の書き手に呪いあれ。そして、世の中の者すべてに呪いあれだよ。我がクラリッサの運命に対する関心の強さの点で、俺自身にも劣らないふりをするというのだからな、貴公ごときが。これを書面の代わりに口頭で伝えられることにならなかったのは、われわれの片方にとっては幸せな話というものだ。生死に関わらず、彼女は俺のものなのさ。俺だけのものなのだよ。俺にとって高いものについたのではないのかな、彼女は。俺が買い取ったものは、地獄への片道切符ということになりそうではないのかな。彼女のほうは幸せな来世を手にするというのにだ。

永遠に離れ離れになるのだ。おゝ、神よ。おゝ、神よ。そのような考えがどうして耐えられるというのだ。だが、まだ命はあるのだよ。それゆえ、望みはまだあるわけだ。俺の望みを膨らませてもらいたい。そうしてくれるなら、貴公を俺の守り神にしてやろう。そして、すべてを許してやることにする。

今回だけは　…　ただ、最後になってはいけないし、そのつもりもないのだが　…　これを受け取り次第、聞かせてほしいのだよ。一体、俺はどうなるのかをだ。何しろ、現在

のところ、俺の呼び名はこんなところだからな。

男の中の最も惨めなる者

五時、ナイツブリッジ、ローズ亭にて

俺の下男の話では、モーブレーとターヴィルをこちらへ寄越すそうだな。奴らに用はない。奴らには嫌気がさしているのだ。世間の者すべてにもだよ。そして、何より、俺自身に対してだ。ただ、奴らの伝言では、すぐに来るという話だから、待つことにしよう。貴公の次の手紙もな。おゝ、ベルフォードよ、願い下げだぞ　…　だが、急いでくれ。急ぐのだよ、どんな便りだとしてもな。

手紙　百十

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

九月七日　木曜日　夕方七時

今は次のようにだけ言っておこう。パリへ旅立つのが良かろう。あるいは、貴公の運命の導く場所であれば、どこでも構うまい、とだよ。

ジョン・ベルフォード

手紙　百十一

モーブレー氏からジョン・ベルフォード氏へ

九月七日　夜十一時から十二時の間、アクスブリッジにて

親愛なるジャック

哀れなラヴレースが望んでいることもあり、今夜貴公が送ってよこした致命的な短信について、その詳細を知りたいのだ。ペンを手にして紙に向かうのは、あいつには耐えられないのだな。それでいて、死に至るまでのハーロー嬢の詳細な様子ことごとくを知りたがっているのだ。ただ、あいつが何故そうなのか、俺には見当もつかないのだよ。令嬢は亡くなったというのであれば、もうこの世にはいないわけで、それは、だれにもどうにもならないことだからな。

前代未聞だな、こんな女は。一体、どれだけ大きな苦難を味わったというのだ。こんなふうに、悲しみのあまり命を落とすなんてな。

気の毒に、あいつも彼女を知らずにいれば良かったのだ。最初から最後まで、大変な苦労をあいつに掛けたものだよ、令嬢も。彼女を追い求めてからというもの、色男もわれわれのことはほとんどお見限りだったのだ。それにしても、女一人のことじゃないか。他の女とどう違うのだ。

君の短い手紙が届いた時、われわれがあいつの傍にいたのは幸運だった。真の友情を示すものだったな、君の配慮は。いやはや、ジャック、気の毒にあいつ、まったくの狂気の

沙汰だったよ。かつてベドラムに収容されたどの狂人にも負けないくらいの狂乱ぶりさ。

ウィルが手紙を届けに来たのは、われわれがボヘミアヘッド亭であいつと合流した直後のことだったが、自分はあそこにいると、ナイツブリッジのローズ亭にあいつが伝言を残していたのだ。というのも、あいつはわれわれや自分の下男を待ち侘びて、あちこち、行きつ戻りつぶらついていたのさ。手紙を渡すとすぐに、ウィルはあいつから離れた。そして、あいつが手紙を開いた時のことだが、かつてなかった光景だったな、あんなのは。受け取る際には、体がえらく震え、不器用に封臘をまさぐっていたが、トム・ドールマンみたいに指先が麻痺しているのだよ。手もブルブル震えて止まらないものだから、手紙を真っ二つに引き裂いて、やっと文面に辿り着く有り様なのだ。そして、読み終わると、あいつの帽子が部屋の一方の隅へ、そして、鬘がもう一方の隅へと飛んで行ったのだ。「この世は丸ごと破滅してしまえ」とか、それに類した呪いの言葉の一斉射撃だ。部屋の中を走り回り、サッシを引き上げたかと思えば引き下ろし、拳を重ねて自分の額を叩くのだが、牡牛を打ち倒さんばかりの勢いだ。そして、足を踏み鳴らして暴れ回るものだから、亭主が駆け込んで来た。そして、出て行く時には、もっと早足だったよ。そして、こんな具合に狂乱の場はしばらく続いたのだ。

ジェミー（二二）とか俺とかが話し掛けても、すべて無駄だった。一度、俺はあいつの手を掴もうとした。あいつが我と我が身に危害を加えようとしていると、俺はそう思ったのだが、テーブルの上に置いたピストルを探してキョロキョロしていたのだよ。だが、そのピストルは、見つからないようにして、ウィルの奴が持ち去っていたのだ［あのウィルというのは忠実で律義な野郎さ。今後いつまでも目を掛けてやるつもりだ］、それで、あいつは俺の顎をしたたか殴ったのだが、お陰で鼻血が出てしまったよ。あいつだったから良いものの、でなければ、とても黙ってなどいられなかったところだな。

ジェミーはあいつを激しく非難し、友人に怪我をさせるような乱暴な真似をしたり、女にのぼせ上がったりするのがいかに不埒なことかを話して聞かせたのだ。すると、済まないことをしたと、あいつも言っていた。そこで、ウィルが勇を奮い、水とタオルを持って入って来た。その表情から分かったことだが、したたか打たれたのがあいつではなく、俺のほうであったのを、野郎は喜んでいる様子だったよ。

そんなふうにしてわれわれは、徐々にではあるが、あいつの正気を少しは取り戻してやったのだ。すると、もっと男らしく振る舞う旨、あいつは約束してくれた。そこで、俺もあいつを許してやり、われわれは闇夜に馬を進め、ここドールマンの家に着いたのだ。そして、われわれは皆であいつを恥じ入らせ、あの気違いじみて御し難い愚行を止めさせようと試みた。令嬢はただの女に他ならず、しかも、頑固で意固地な女であって、それはあいつにしても如何ともし難いことではないのか、と話してやったのだよ。

それに、君も承知だろうが、ジャック（さらには、われわれのほうからあいつに話してあるのだが）、男として恥ずかしいことなのだよ。ハーロー嬢にどんなあくどい仕打ちをしたにせよ、同じような、あるいは、もっとひどい仕打ちを数知れない女たちに加えて来た男が、令嬢が死にそうだからといって、あんなにも大声で騒ぎ立てるというのはな。それで、われわれはあいつに忠告したのだよ。自分の人柄や世に言う〈美徳〉などといった代物を誇りにしている女には二度と手を出さないことだ、とな。何故だと思うかな。令嬢をものにしても、骨折り甲斐はなかったからだよ。それに、ある女が一体どんな点で他の女

より勝っていたというのだ。なあ、分かるだろう、ジャック。こんな具合に、われわれはあいつを慰め、助言を与えたのだよ。

それなのに、あいつの血迷った頭は、この令嬢のことで一杯なのだ。死んだ今も、生きている時と同じくらいにな。実は、冗談などではないと思うのだよ、ジャック。令嬢は確かに、嘘偽りなく、死んでいるのだ。そうではないのかな。違うとすれば、そのおふざけに対して、貴公は二倍呪われるに値するぞ。その点は言っておこう。そんなわけで、あいつは令嬢の〈旅立ち〉の詳細を求める手紙を俺に書かせようとしているのだよ。

あいつとしては、〈死〉という言葉はどうしても我慢ならないのだ。神経質な若造ってところだな、まったく。恋をすると意気地がなくなり、軟弱になるものだ。しかも、これほど堂々とした男がだよ。困った奴だよ、あいつも。間抜けの薄のろだ。くだらないのろまの犬ころには我慢がならん。まったくの話、我慢出来んのだ、俺は。

だから、詳しい報告を送り届けてくれ。察するに、あいつはおそらくそうすることだろうが、報告についてわめかせてやるのだよ。

ただ、あいつには国を出てもらわねばならんし、また、そうさせるつもりだよ。一、二ヶ月後には、ジェミーと君、それに、俺があいつと落ち合うのだ。そうなれば、あいつもこの臆病風ゆえの愚行はすぐに乗り越えるはずだよ。心配ない。そして、自分を恥ずかしく思うことだろうな。その時には、われわれも手加減は抜きにしよう。ただ、今のところは、可哀相に、分相応に懲らしめるのは気の毒な話だよ。それまでは、あいつに対する一切の非難は是非とも慎んでもらいたい。貴公のほうではあいつを情け容赦なく痛めつけたらしいからな。

あの暴れ者にわれわれがどう対処したのか、少し説明したかったのだが、われわれが一緒にいなかったなら、あいつは間違いなくくたばっていただろう。あるいは、誰か彼かを殺していたことだろうな。疑いのないところだよ。それで、現在だが、まあまあ元気、というだけの有り様だ。藁にくるまった人間（一二三）みたいに、ニタニタしながら座っているかと思えば、罵ったり毒づいたり、そして、えらく陰気になる。また、獣脂のために狩り立てられるハリネズミみたいに、穴や隅っこへ逃げ込むのだよ。

そういうわけだから、これでおさらばだ、ジャック。ターヴィルが、そして、仲間の全員が貴公に来てもらいたがっている。貴公ほどにあいつを動かすことの出来る者は一人もいないのだからな。

R. モーブレー

先に触れた、詳細を請求する手紙を書く旨、あいつと約束をしたので、皆が眠りに就いた後にこれを書いているところだ。使いの者は手紙を携え、夜明けには出発することになっている。

第七巻　目次

手紙　一、二　ラヴレースからベルフォードへ
完全に氏独特のものではあるが、彼より優れた人物にとっても不似合いではない教訓ならびに所感を交えた二通の手紙。ハウ嬢による彼のための仲裁に大きな望みを託しているとのこと。世捨て人となった二名の放蕩児の懺悔する姿。

手紙　三　ハウ嬢からクラリッサへ
ラヴレースを拒絶したことに今では大賛成とのこと。女性に対して彼女が示した、感情克服の見事な手本を賛美。アラベラに便りをしたことを詫びている。しかし、自分のことを責め、また、だれもが過ちを犯しているのに、他人のことは赦そうとする、そんな彼女を真似ることは出来ないという。夫の特権についての考え方。悲しい身の上話の委細を書き記すことに彼女が専念していることを願う。女性の利益となるよう、その身の上話が供されるべき用途について。母親も熱心に希望しているとのこと。

手紙　四　ハウ嬢からモンタギュー姉妹へ
クラリッサの手紙（第六巻の手紙百一）を添えて発送。愛する友が姉妹の親戚の男性から受けた非道の仕打ちに関する、ハウ嬢自身の所感。彼女が回復しない場合のこととして、彼への復讐を祈念する。

手紙　五　ノートン夫人からクラリッサへ
ハーロー邸内の動きの一部を通知。令嬢がくだんの悪党と結婚してくれるよう願いたい気持ちでいるという。その理由。逼く愛されている若い淑女に降り懸かった事柄についての有益な感想。令嬢のために母親の心を動かすよう、試してみなければならないとのこと。ただし、上首尾が得られないうちは、その手段については知らせないつもり。

手紙　六　ノートン夫人からハーロー夫人へ

手紙　七　ハーロー夫人の心痛む返事

手紙　八　クラリッサからノートン夫人へ
寛大かつ本分を忘れぬ理由から、身内の者たちとの交渉については、彼女自身の方策に任せてほしい旨を熱心に懇願する。彼女の手紙（第六巻の手紙九十五）に対する姉の返事を受け取る。心に強く打撃を受けながらも、その厳しさへの言い訳を見出そうと努める。哀れを誘う、孝行娘らしいその他の所感。

手紙　九　姉からの残酷な手紙
前掲の手紙で言及されたもの。

手紙　十　クラリッサからハウ嬢へ

ラヴレースを拒絶することに関し、今ようやくにして同意してくれたことを喜ぶ。自分のことについては安心してくれるよう要望。自ら命を捨てるような真似はしない旨を約束。ラヴレースから受けた惨い仕打ちによるショックについては、すでに克服したつもりだという。損失を被ったというよりは、むしろ逃げおおせたという気持ち。たとえあの無法な振舞いがなかったとしても、彼と幸せになるようなことは不可能だったとのこと。その理由。父親、母親、ならびに他の親戚が自分のために味わった悲しみを、すこぶる哀れを誘う、また、本分を忘れぬ、寛大なことこの上ない見方で描いて見せる。自分の悲しい身の上話の詳細を書き始めたが、先へ進むのは避けたい気持ちとのこと。その理由。ベルフォード氏を遺言執行人とする考えを打ち明け、その理由を示す。父親が呪いを取り下げたこともあり、今嘆願すべきものは最後の祝福のみだという。

手紙　十一　クラリッサから姉へ

最後の祝福を授けてもらえるよう、謙虚かつ真剣この上ない態度で姉に嘆願。

手紙　十二　ノートン夫人からクラリッサへ

彼女の暮らし向きと健康状態を問い合わせるため、ブランド氏がロンドンへ派遣されるとのこと。彼の衒学的な人物像。氏の報告に接するまで、身内の者たちはいかなる恩恵をも差し控えるはずと夫人は確信。事態が間もなく好転することを疑わない。

手紙　十三　クラリッサより［返事として］

自分が求めている恩恵とは、最期を迎えるための祝福のみであり、生きるためのものではないという。自分に対して少しでも恩恵を施す考えが皆にあるとしても、それも手遅れだろうとのこと。母は自分一人では何も出来ないように思われる。娘であり妹であり姪である哀れな女の子に対し、強固な同盟が結ばれている。おそらく、兄はエディンバラへ赴く前に同盟関係を更新しておいたのだという。その必要はなかったのだと、彼女は言う。兄の努力は達成されたのであり、また、達成されたというだけには止まらないとのこと。

手紙　十四　ラヴレースからベルフォードへ

拒絶の手紙を受け取り、屈辱を味わう。シャーロットが彼のため、一族全員に成り代わって、令嬢宛に一筆認める。一人残らず彼女の文面を是認しており、彼はそこに大きな希望を託す。

手紙　十五　クラリッサに宛てたモンタギュー嬢の手紙の写し

高貴な一族全員に成り代わって、ラヴレースに愛顧を賜るよう懇願。

手紙　十六　ベルフォードからラヴレースへ

ベルトンの代理として、彼の自宅を妹に所有させることを企てる。令嬢の容態は目に見えて悪化。彼女にまとわりつかないとの約束を守るよう、重ねて主張。

手紙　十七　クラリッサからモンタギュー嬢へ

モンタギュー嬢の手紙（手紙十五）への返事として。

手紙　十八　ベルフォードからラヴレースへ

同封しようとしている一通の手紙を、ちょうど今令嬢から受け取ったところだが、これは、ある特定期間に自分に宛てて書かれたラヴレース氏の手紙の抜粋を要求するものである。彼女の意向に沿うよう決意を固めた理由。

手紙　十九　ベルフォードからクラリッサへ

要求のあった抜粋を添えて。友人のための嘆願。

手紙　二十　クラリッサからベルフォードへ

情報提供に感謝する。自分の遺言執行人となってくれるよう要望し、その厳粛な任務に彼を選んだ理由を示す。

手紙　二十一　ベルフォードからクラリッサへ

その信託を快諾する。

手紙　二十二　ベルフォードからラヴレースへ

令嬢へ届けた抜粋についての手短な説明。令嬢が自分を遺言執行人に指名したことを知らせる。彼女の書類の閲覧に際して感じるはずの、物悲しさを交えた喜びについて。すでに乗り越えてしまった難儀を物語る人物の、無味乾燥で叙述的な、生気に乏しい文体に比べ、目下の苦難をその最中にあって筆にする者たちの筆致のほうははるかに生彩に溢れ、心打つものになるはず、と彼は言う。

手紙　二十三　アラベラからクラリッサへ

最後の祝福を求める彼女の手紙（手紙十一）への返事として。

手紙　二十四　クラリッサから母親へ

盛んな気力をもって書き記されたものではあるが、この上なく遜った態度で、また、両膝をつきながら、今わの際に慰めをもたらしてくれるものとして、母親と父親の祝福を嘆願している手紙。

手紙　二十五　モンタギュー嬢からクラリッサへ（クラリッサによる手紙十七への返信）

自分たちの一族すべてが彼女を愛しているということ。くだんの親戚の男性には一族のうちに一人として味方がいないという。少なくとも、彼女が自分の地所を取得するに至るまでは、年金を受け取ってくれるよう、また、今回送付された最初の支払い分を受け取ってくれるよう懇願。本状にはＭ卿、セアラ夫人、ベティ夫人、令嬢の妹、及び、令嬢本人の署名が添えられている。

手紙　二十六　ラヴレースからベルフォードへ

自分を拒んだことに対し令嬢を激しく非難しながらも、その点で彼女を一層崇拝。屋敷の半分を、それも、良いほうを半分占領しているというが、M卿と婦人たちが面会を禁じた仕返しに、彼らが顔を見せることも禁じたため、とのこと。ベルフォードが約束した、自分の手紙からの抜粋の件で彼に腹を立てる。令嬢が尊大な態度で自分を拒んだということで、すこぶる感情を害する。破廉恥な女たちと彼女らの薬物とを呪う。薬物のことがなければ、美徳の威光が、かつて一度あったことだが、彼女を守っていたはずだと、氏は言う。

手紙　二十七　同　右

彼を令嬢の遺言執行人にはさせないと語る。彼女の何になるにせよ、自分以外のだれにもそれは許さないという。かつて彼女にとってあれほど大切であった男に対し、何という見放し方かと憤る。狂気のごとき苛立ちようのさらなる例。

手紙　二十八　ラヴレースからクラリッサへ

懺悔、約束、令嬢の美徳に対する称賛と賛美に満ち溢れた手紙。彼女の教えと手本による以外には地獄墜ちを免れる望みはないという。差し当たって懇願するものは、今後の振舞いによって、誓った事柄の真実性を証明出来る場合のことだが、ただ、許しに望みをかけるよう励ましてくれる、数行の言葉のみであるという。

手紙　二十九　クラリッサからM卿ならびに卿一門の婦人方へ

申し出のあった厚志は謝意を添えて辞退。自らの心の平安に関わる理由から、卿たちが身内の男性と和解するよう嘆願。自分が地中深く埋葬され、忘れ去られて長い年月を経た頃、彼の改心の実効に彼らが大きな喜びを見出してくれるよう希望している。

手紙　三十　ベルフォードからラヴレースへ

トマシン、その息子たち、ならびに、情夫を追い出した経緯の手短な報告。妾を囲うことについての補足意見。病の床は計算に入れていない生き方とのこと。先の手紙以降の令嬢に関する簡単な記録。ブランド氏が令嬢の評判と振舞いに関し、スミス夫人に問い合わせる。氏のしゃちほこ張った態度、自惚れ、そして、衒学者ぶりについて。

手紙　三十一　同　右

令嬢に関する詳報の追加。祖父の遺言によって与えられた権限について。

手紙　三十二　クラリッサからラヴレースへ

彼の手紙（手紙二十八）への返事として。

手紙　三十三　伯父ジョンの残酷な手紙

母親宛の令嬢の手紙（手紙二十四）に答えたもの。その手紙に黒の絹糸で縫い込まれた〈瞑想〉。

手紙　三十四　クラリッサから伯父ジョンへ

返信として。

手紙　三十五　ワイト島からのハウ嬢の手紙

令嬢の手紙（手紙十）への返事として。ベルフォードを遺言執行人として選任したことには不賛成だが、令嬢自身の家族については、だれを指名することも不可能に思われるとのこと。多くの年月を生き長らえてくれるよう希望。

手紙　三十六　クラリッサからハウ嬢へ

手紙類の入った大きな包みを送付するが、（身内の者たちのことを考え）受け取っていたもののすべてではないとのこと。遺言執行人にベルフォード氏を選任したことに今は固執しなければならないが、この点での正当性について、詳しくは送付する手紙類を参照してほしいとのこと。

手紙　三十七　アントニー・ハーローからクラリッサへ

伯父のものよりもさらに嘲笑的で非難がましい手紙。それは何故のことか。

手紙　三十八　クラリッサより［返事として］

自分の一件に関しては、事情を調べてほしかったという。一族全員の多幸を祈る、厳粛にして哀れを誘う言葉をもって結びとする。

手紙　三十九　ノートン夫人からクラリッサへ

夫人の察するところでは、ブランド氏の報告の結果、令嬢が植民地へ向かうことを身内の者たちは切望している模様。好ましくない訪問者には好い顔を見せないよう要望。困難な状況は思慮分別ばかりでなく、美徳をも試すものである。令嬢の安寧に関し、リーウェン師から熱心な問い合わせがあるとのこと。従兄弟のモーデンが帰国したという知らせ。信仰心に溢れた慰めの言葉を重ねる。

手紙　四十　クラリッサより［返事として］

身内の者たちのためにも、ハウ嬢に見せるわけに行かないという手紙類の包みを、夫人に送り届ける。これら手紙類から、令嬢の身の上に関し、夫人は多くの事柄を推論することだろう。弁護しつつも、穏やかに母親を咎める。従兄弟のモーデンが自分と敵対すること、あるいは、さらに困ることだが、自分のための復讐を求めることを恐れる。ノートンの宗教的な慰めの言葉に触れた、心打つ結びの言葉。

手紙　四十一　ラヴレースからベルフォードへ

ひどく具合が悪いとのこと。自分が命を落とすようなことになれば、令嬢は拒絶したことを後悔するだろう。女性の身に起こり得る最大の至福の一つとは何か。病状が極度に悪化。目を覚まし、聖職者と身内の人間がベッドの傍らで祈っているのに気づいた際の滑稽な振舞い。

手紙　四十二　ベルフォードからラヴレースへ

彼の病状を案じる。四月以前に死んでいてくれたならと願う。令嬢は寛大にも彼を憐れみ、彼のほうでは示すことのなかったものであるが、慈悲に恵まれるよう、祈ってくれている旨を伝える。

手紙　四十三　ラヴレースからベルフォードへ

自分に対する令嬢の優しさに有頂天の有り様。彼女への仕打ちを痛切に悔やむ。彼女に祝福を送る。

手紙　四十四　ベルフォードからラヴレースへ

体調の改善を祝う。彼に対する令嬢の高貴な慈悲心について。彼女の身の上話は悲劇のための見事な主題になるという。劇作品の『麗しき悔悟者』をそれと比較して非難。令嬢の容体はすこぶる悪いが、身内の者たちの無慈悲さの新たな例いくつかに接して一層悪化したとのこと。この問題に関する〈瞑想〉。哀れなベルトンは死の瀬戸際にあり、彼に会いたがっているとのこと。

手紙　四十五　ベルフォードからクラリッサへ

ベルトンの元へ赴かざるを得ない立場のこと、ならびに、（令嬢が驚いてはいけない、との気持ちから）彼女を訪ねようとするラヴレースの決意（次の手紙で表明されるものだが）について通知する。

手紙　四十六　ラヴレースからベルフォードへ

令嬢の足下に身を投げ出す覚悟。M卿は彼女も一度は面会を許して然るべきであるとの意見だという。

手紙　四十七　同　右

ロンドンに到着し、令嬢は外出中と知る。ベルフォードに疑いをかける。スミスの店における説明のしようもない彼の酔狂。それほどお道化た振舞いをした動機について。破廉恥なサリー・マーティンが神々しいばかりの令嬢の物真似によって彼を慰める。

手紙　四十八　同　右

彼の見た恐ろしい夢。夢のせいでずいぶん心を乱されたとのこと。寝ても覚めても、彼のクラリッサは常に彼と共にあるという。彼女が下宿に戻ったとの知らせ。彼女の元へと急ぐ。

手紙　四十九　同　右

再び望みを挫かれる。ロヴィック夫人の諫めに心を動かされる。〈我が心の敵に追い詰められて〉と題する〈瞑想〉を示される。〈瞑想〉に対する彼の軽薄な感想。断固として令嬢に会うつもりだという言葉を残す。他にもいくつかそのための努力を重ねる。

手紙　五十　ベルフォードからラヴレースへ

自分への信義を守らなかったことに対して彼を責める。スミスの店での軽薄な振舞いに関し、激しく彼を罵り、非難する。怯え、意気消沈しているベルトンの姿。無感覚なモーブレーの振舞い。

手紙　五十一　ベルフォードからラヴレースへ

死に瀕しているベルトンから逃げ出し、底抜けに陽気なラヴレースの元へ赴きたがっているモーブレーの苛立たしい思い。モーブレーが、低級な放蕩児の言葉遣いでベルトンの召使を罵る。命のはかなさについての所感。

手紙　五十二　ラヴレースからベルフォードへ

クラリッサから手紙を受け取る。彼女を追い詰めるのを差し控えさせるべく、寓意として綴られたもの。その写し。彼は文字どおりの意に受け止め、喜び勇む。M卿の元へ急ぎ、令嬢の愛顧が戻ったことに対し、全員の祝福を受けるつもりとのこと。彼のみた恐ろしい夢を、自分にとって都合の好いように解釈。

手紙　五十三、五十四　同　右

ベルトンに同情。哀れな男の恐怖心を今募らせている果たし合いの件につき、放蕩児風に彼を弁護。死および死の恐怖に関する意見。使用人に関する劇作家たちの扱い方を批判。彼にとって好都合なクラリッサの変わりようは説明不可能だという。一つの望ましい原因を暗示。結婚は自分の思いのままと見える今、いくぶんか後戻りへの意向を抱いている。

手紙　五十五　ベルフォードからラヴレースへ

ベルトンの末期の病状と辛抱のなさについての話の続き。哀れな男が医者たちに悪口を吐く。貪欲に報酬を求めることに対し、ベルフォードも一部の医者を非難。ベルトンが息を引き取る。その折の真摯な感想。

手紙　五十六　ラヴレースからベルフォードへ

ベルトンは幸せなのだと考える。その理由。バークシャーへ向けて出発。

手紙　五十七　ベルフォードからラヴレースへ

令嬢の元へ伺う。彼女の病状は極めて重く、終油式を受ける。彼の友人が与えた苦悩について不平をこぼす。別々に二人の人物が（彼の想像では、令嬢の身内から派遣された者だが）彼女について問い合わせる。医師、薬剤師、および、彼自身に向けた彼女の心打つ言葉。はなはだ哀れを誘う目的のため、さらに衣装の一部を処分。

手紙　五十八　リーウェン師からクラリッサへ

終身刑とすべくラヴレースを告訴するよう令嬢を説得するため、枕で体を支えながら筆を執る。

手紙　五十九　哀愁に満ち、心の高貴さを示す令嬢の返事

手紙　六十　アラベラ・ハーロー嬢からクラリッサへ

ラヴレースの告訴、さもなくば、ペンシルベニアへの渡航を、極めて嘲笑的かつ残酷な態度で提案。

手紙　六十一　クラリッサの哀れを誘う返事

手紙　六十二、六十三　ノートン夫人からクラリッサへ

叔父の残酷な手紙のきっかけとなった事柄について。モーデン大佐がラヴレースを訪ねようと決意。密かな話し合いの場で、ハーヴィー夫人は令嬢の身内の残酷さについて申し開きをするが、非難もする。ドリー・ハーヴィーが令嬢の元へ伺うことを希望。

手紙　六十四　クラリッサより［返事として］

身内の者たちから極めて苛酷な扱いを受けたと考えているとのこと。この件に関し、いつもより熱のこもった表現を見せる。しかし、すぐに自制する。モーデン大佐がラヴレイスを訪ねようと決心したことを嘆く。姉の嘲笑的な手紙に触れる。忍耐心と諦めの心を授かるよう祈ってくれることを、ノートン夫人に要請。

手紙　六十五　ハウ嬢からクラリッサへ

遺言執行人としてベルフォードを指名することにようやく同意。ラヴレースを見下す彼女の心の大きさを称賛。滞在先の人間一人残らずがヒックマンに心を惹かれているとのこと。しかし、彼女のほうでは、氏の従順な愛情ゆえに得た、彼に対する支配力の乱用を慎むことが出来ない。

手紙　六十六、六十七　クラリッサからハウ嬢へ

ヒックマンに対する彼女の接し方に関する教訓と所感。先の手紙以後の出来事すべてを知らせる。自分の比喩的な手紙が、厳密に言うと、正しくはなかったことを恐れる。体調が優れず、中断を余儀なくされる。再開。彼女が結婚してくれることを切望。

手紙　六十八　ワイアリー氏からクラリッサへ

不幸の最中にある彼女に対し、寛大にも再度求婚し、精一杯の奉仕を申し出る。

手紙　六十九　率直で思いやりに満ち、教育的な令嬢の返事

手紙　七十　ラヴレースからベルフォードへ

令嬢の手紙が方便にすぎなかったのでは、との疑念から、心も休まらないという。そのとおりであることが判明した場合に予定している行動について。

手紙　七十一　ベルフォードからラヴレースへ

ベルトンの件の処置に関する簡略な報告。令嬢の容体は極度に悪化。臨終も間近と思われる。彼女は気力の萎え衰えた一日を過ごす。気力を回復し、現世は超越したように考えている。自らの棺を注文。ラヴレース宛の手紙が寓意にすぎなかったことを彼女は認める。彼女に関する氏の見解。

手紙　七十二　同　右

令嬢とH医師との間で交わされた哀れを誘う会話。医師の言葉によると、あたかも衣服の着替えにも似た、ありふれた出来事でもあるかのように、彼女は死について語っているという。医師の天晴れな振舞い。命の空しさ、早期に死への用意を整えることの賢明さ、および、ベルトンの今わの際の振舞いに関し、令嬢が所感を述べる。

手紙　七十三、七十四、七十五　ラヴレースからベルフォードへ

大佐による訪問の折に、彼自身、モーデン大佐、M卿、そして、モーブレーの間で起こった事柄の詳細。シャーロット・モンタギューに向かって、からかい半分に、ベルフォードを夫にするよう申し出る。ブランドの手紙を同封するが、令嬢の品行を（悪意からというよりも、馬鹿正直さと差し出がましさゆえに）誤って伝えているものである。

手紙　七十六　ベルフォードからラヴレースへ

宣誓、誓約、約束によってその信頼を得た若い娘を欺くことの卑劣さについて、長々と論じる。口やかましさの悪弊。善良だと思われている人々も、度を越してその悪習に耽っているということ。氏の魅力的な従姉妹に関する嘲笑の真意を知りたいと要求。

手紙　七十七　同　右

文章の清廉さを計るに適切な試金石について。寓意的な手紙に関し、令嬢は再び釈明を行う。彼女の品行に関するブランドの誤った報告について知らせた際の、彼女の落ち着いた態度と、寛大かつ有益な感想。

手紙　七十八　モーデン大佐からクラリッサへ

せめてもの善後策にと、助力と奉仕を申し出る。全面的和解をもたらす唯一の方策として、ラヴレースとの結婚を勧告。ラヴレースが彼女を正当に扱う決意なのは疑いないとのこと。彼女は疑念を抱いているのかどうか、知りたいという。

手紙　七十九　クラリッサより［返事として］

手紙　八十　ラヴレースからベルフォードへ

自分宛の令嬢の手紙が寓意に過ぎないことを知った際の彼の推論と狂乱ぶり。その最中にも、もって生まれた陽気さゆえに、ベルフォードへの嘲笑に取り掛かる。ウェストミンスター寺院の記念碑になぞらえた彼の滑稽な姿。真面目さを取り戻す。最悪の事態が生じた場合は（天地を司る神よ、最悪の事態を防ぎ給え、と彼は祈るのだが）、「パリに

向けて旅立つよう助言する」とだけ書き送ることを要望。また、それだけで自分には急所への一撃になるという。

手紙　八十一　ベルフォードからラヴレースへ

令嬢の棺が二階へ運び込まれる。それを目にして彼は極度のショックを受け、心を乱される。彼女の泰然自若ぶり。偉大な心の持ち主は尋常ならざる行為に及ぶことを避けるわけには行かないのだ、と彼は述べる。女性の物見高さについての所見。

手紙　八十二　ベルフォードからラヴレースへ

棺の様子および蓋の上の図柄の描写。棺は令嬢の寝室に安置される。令嬢の偉大な振舞いに関し、真剣にラヴレースに問い掛ける。

手紙　八十三　同　右

ウェストミンスター寺院の話に窺われる彼の軽薄さに驚く。令嬢の具合は極めて悪い。

手紙　八十四　ラヴレースからベルフォードへ

令嬢にとっては、終始一貫、勝利のほうが苦難よりも大きかったのであり、彼女に対する自分の所業のすべても、命を懸けるにしては冗談だということになる。彼女の命を丸一年延ばしてくれさえすれば、自分の財産のすべて、復帰財産のすべてを医者に譲り渡すつもりだという。数々の災難のことがなければ、彼女の沈着さもどうしてあのように光り輝くことが出来ただろうかと問う。今では知的な熱意をもって彼女を愛することも出来そうだという。彼女が意気揚々と彼の元を去って行ったあの時が、彼女の姿を目にする最後になるというのは、考えるだに耐えられないとのこと。良心が彼の体を八つ裂きにしていると述べる。自分の下劣な企みを思い出し、吐き気を催す。

手紙　八十五　ベルフォードからラヴレースへ

令嬢は生きており、平静で落ち着いているとのこと。子としての務めを理由に、これまで引き延ばされていた遺言書の作成を完了し、署名の上封緘を済ませたこともあり、なおさら平静になっているのだという。

手紙　八十六　ハウ嬢からクラリッサへ

母親と親友の病を切々と嘆く。母に対する生意気な言動のすべてが、今や真っ正面から自分に襲いかかって来るという。ペンを置き、再び取り上げると、母が快方に向かっていることを大きな喜びをもって伝える。令嬢の従兄弟モーデンから訪問を受ける。その折に交わされた会話について。

手紙　八十七　同　右

女性についてあまりに遠慮のない考え方をすることに対し、大佐に不満を覚える。女性全体の道徳観念を軽く見ている男性で、当の本人が品行の点で良い評価を受けるに値するような人物とは、一度として会ったこともないという。美徳の点で、女性は男性より

も優るか劣るか、そのいずれかにならざるを得ないのは何故なのか。若い淑女にとって有益な助言。ヒックマン氏のことで不機嫌な思いをする。間もなくロンドンで彼女に会うことを決意。

手紙　八十八　ベルフォードからラヴレースへ

令嬢は机の上でと同じように、棺の上で読み書きをする。医者が彼女の父親宛に一筆認めることを決意。彼女の一心不乱な、しかし、楽しげな信心ぶり。

手紙　八十九　クラリッサからハウ嬢へ

一般論および個別論の両面に亘る敬虔な感慨と有益な助言に溢れ、かつ、慈悲心、寛大さ、忍耐、そして、忍従という、真にキリスト教的精神が息づいている手紙。屈辱をもたらすプライドの本性についての、親友に向けた適切な所見。

手紙　九十　ノートン夫人からクラリッサへ

ハーロー邸において家族とモーデン大佐との間で交わされた興味深い会話、および、母親と夫人本人との間での会話についての報告。大佐は家族全員に対し激怒しているとのこと。ベルフォードの件、ならびに、その他の事柄に関する助言。夫人が耳にしたところでは、ハウ嬢は令嬢を訪ねる許しを得ているという。ヒックマン氏を褒め称える。氏のことで、ハウ嬢を穏やかに咎める。真に母親らしい敬虔な慰めの言葉。

手紙　九十一　ベルフォードからラヴレースへ

令嬢の視力が衰え始める。自分が享受している心の晴朗さに対し、彼女は神に感謝を捧げる。それこそが自分の祈念していたものだと彼女は言う。死の際に臨んで、祈りが叶えられるのは、実に有難いとのこと。手紙類、遺言書、ならびに、衣類に関する詳しい指示を彼に与える。彼女の身を案じる婦人たちを、そして、彼を慰める。モーデン大佐からもう一通の手紙が彼女に届けられる。その要旨。大佐の上京を促すため、ベルフォードが筆を執る。H医師も令嬢の父親に一筆認め、ブランドは自分の差し出がましい手紙を撤回するため、ジョン・ハーロー宛に一通書き送る。

手紙　九十二　H医師から父のジェームズ・ハーロー氏に宛てたもの

手紙　九十三　モーデン大佐の上京を促すベルフォードの手紙の写し

手紙　九十四　ラヴレースからベルフォードへ

この令嬢に対する己の過去の所業を顧みる時に心を悩ます後悔の念から、地獄の亡者の苦しみを味わう。召使を急ぎ派遣するやいなや、その男の帰りを待ち侘び、馬で行きつ戻りつしているという、そんな恐ろしいほどの不安を、彼の言葉を借りれば、「朧気ながら」に描いて見せている。由々しい知らせをもたらす者に災いあれと祈る。

手紙　九十五　ベルフォードからラヴレースへ

令嬢の敬虔で模範的な振舞いに関する詳細を更に提示。令嬢は自分の授かったゆるやかな死を喜ぶ。ベルフォード、スミス夫人、および、ロヴィック夫人に向けた、彼らの親切に対する謝辞。ベルフォードに向けた啓発的な話。

手紙　九十六　クラリッサからノートン夫人へ

夫人の手紙（手紙九十）への返事として。身内の者たちのことだけが苦悩の種になっているという。今はモーデン大佐に会いたくないし、夫人自身にさえ、あるいは、ハウ嬢にも会いたくないとのこと。神は自らが清めた者たちの心の中に競争相手を持とうとはしない、と彼女は言う。ハウ嬢、そして、ヒックマン氏への助言。親戚および友人たちをすべて祝福。

手紙　九十七　ラヴレースからベルフォードへ

深い苦悩、後悔、そして、苛立ちを示す手紙。にも拘らず、令嬢の親戚の者たちの残酷さを非難することで、氏は自らの罪の意識を軽減したがっているのである。

手紙　九十八　ベルフォードからラヴレースへ

なお二、三日の余命があると医者が語るのを聞き、令嬢は気落ちを示す。悲しみゆえの死は最も時間の掛かるものだという。厳かにラヴレースを許し、彼のために祈る。かつては、愛情を持って彼に接することも可能であったことを認める。寛大にも、彼の将来の幸せを懸念。ベルフォードの立派な決意。

手紙　九十九　ブランド氏からジョン・ウォールトン氏へ

自らの馬鹿正直さと、それ〔に基づく誤った報告とを詫びたもの。

手紙　百　ブランド氏からジョン・ハーロー氏へ

手紙　百一　ラヴレースからベルフォードへ

令嬢の体調が良いとの言葉を届けてくれたことに感謝。自分に対する彼女の思いやりが鋭く胸に突き刺さるとのこと。それが耐えられないという。激しい自責の念。己の陰謀の才を呪い、また、女性の中にこれほどの美徳が存在することに対して抱いていた己の不信の念を呪う。彼女が回復し、一緒になってくれる場合にはだが、自分がなろうとしているような夫は、世間の者もいまだかつて目にしたことはないのだという。

手紙　百二　ベルフォードからラヴレースへ

令嬢の敬虔な考え方。死期の接近に対しても、彼女はすこぶる平気でいられるということ。その理由。身内の者たちに与えた悲しみを別にすれば、自分には何を悲しむいわれもない、と彼女は言う。

手紙　百三　ラヴレースからベルフォードへ

彼の生涯を通じて、そのすべての年数を合わせても、ここ二週間で捧げたほどに祈った

ことはなかったという。己の卑劣さすべてを後悔しているのに、何をもってしても駄目なのかと問う。次の便りでは良い知らせを届けてくれるよう懇願。どのような結果になるか、責任は負えないから、とのこと。

手紙　百四　ベルフォードからラヴレースへ

医師と薬剤師により厳粛な暇乞いがなされるが、二人は、明日の夜まで持ちこたえるのは難しい旨を令嬢に伝える。その言葉を受ける際の彼女の喜びよう。ベルトンの今わの際とは似ても似つかない彼女の最期。ハウ嬢から手紙が届く。その写し。彼女は目が見えず、読むことが出来ない。読み聞かせてもらった時の彼女の高揚した表現。返事を書こうと試みるが、果たせない。ロヴィック夫人に口述する。署名部分は自ら膝の上で記す。モーデン大佐がロンドンに着く。

手紙　百五　同　右

モーデン大佐が従姉妹を訪ねた折に交わされた言葉。令嬢は復讐を差し控えるよう大佐に命令。

手紙　百六　同　右

声にはならない令嬢の祈り。死滅が近いことを示す顕著な兆し。彼女の従兄弟、ならびにベルフォードを慰める。両親からの最後の祝福が欲しかったと願う。「でも、慰めを求め、神様ご自身以外の者に頼るようなことを、神様は許してくださらないことでしょう」と彼女は言うのである。大佐に対しては、彼女の受けた不当な扱いに対する復讐を求めたりしないよう、そして、ベルフォードに対しては、すべての争いを収めるべく努力してくれるよう、重ねて要望する。

手紙　百七　同　右

大佐はジョン・ハーローに宛て、和解について論じ合う面倒はもはや省いて構わない旨を書き送る。令嬢は、自分の死後ヒックマン氏に与えられるよう、ハウ嬢の細密画を胸のところから取り出す。手放すに当たり、その絵に向けられた彼女の心打つ言葉。

手紙　百八　ベルフォードからモーブレーへ

ラヴレースの行く手を遮るよう、モーブレーとターヴィルに頼むが、一、二時間のうちに届けるはずの致命的な知らせを受けて、ラヴレースが自分自身とか他人とか、いずれかに害を及ぼすのを防ぐためとのこと。

手紙　百九　ラヴレースからベルフォードへ

怒りと呪いの言葉、そして、交互に生じる絶望と希望とに満ちた手紙。

手紙　百十　ベルフォードからラヴレースへ

パリへ、あるいは、どこなりと、運命の導く他の場所へ旅立って良いという、致命的な暗示を含んだもの。

手紙　百十一　モーブレーからベルフォードへ

致命的な短信を受け取った際のラヴレースの振舞い、ならびに、現在の彼の狂乱ぶりに関する、放蕩児風に述べられた詳細。

（第七巻終わり）

訳　注

（一）（一頁´一四行）ウェルギリウスの詩の主人公… Vergil, *Aeneis* (c.29 – 19B.C.) への言及である。カルタゴを建設したといわれるディードー女王（Dido）はアイネイアース（Aeneas）をもてなしているうちに恋するようになるが´捨てられて自殺した。なお´英語の Trojan は´古くは〈放蕩児〉の意味を持っていたが´後には褒め言葉としても使われ´、trusty (true) Trojan　のような言い回しが見られる。

（二）（一二頁´八行）アンキーセース（Anchises）…アプロディーテー（Aphrodite）に見そめられ´アイネイアースの父となる。燃えるイリウム（Ilium つまり Troy）から息子によって救出された。（Ross）

（三）（一二頁´一〇行）クレウーサ（Creüsa）…アイネイアースの妻である。

（四）（一二頁´一二行）我が国の名高い独身の女王…エリザベス一世のことである。自分の暗殺計画に関わったとして´従姉妹の Mary Stuart（一五四二年から六七年までスコットランド女王）を斬首。

（五）（四頁´一八行）『桶物語』に出てくる奴よりももっと気違いじみたジャック…この風刺作品において´Jack は John Calvin から名をとっており´英国の非国教徒を象徴している。なお´第六巻訳注（四）と（三六）も参照のこと。

（六）（八頁´五行）ドライデンの『アレクサンドルの祝宴』…Dryden, *Alexander　s Feast* 一六九七年の作品である。（Ross）

（七）（八頁´三〇行）エレボス（Erebus）…ギリシア神話で冥界の意の擬人神。また´Earth と Hades（黄泉）の間の暗黒界のこと。

（八）（八頁´三三行）リチャード卿…Sir Richard Steele (1672 – 1729) のこと。（Ross）

（九）（八頁´三七行）アディソンのカトーよろしく…Addison　s *Cato. A Tragedy* (1713) の Prologue を参照のこと。（Ross）

（一〇）（九頁´三〇行）例のローマの既婚婦人…ルクレティア（Lucretia）のこと。第四巻の訳注（六四）を参照のこと。

（一一）（十頁´十九行）「恐怖におののく時　…　」…N.Rowe, *The Fair Penitent. A Tragedy* (1703), V.　(Ross)

（一二）（一〇頁´一三行）寓話に出てくる例の老人…Angus Ross は´ *Fables of Aesop*, trans. S.A.Handford (Penguin, 1964 etc.), p.177 を引用箇所とし´「内輪でもめるほど敵に敗れやすく´一致団結するほど強くなる」という´〈毛利元就の三本の矢の教え〉に類した教訓を紹介している。ただし´その教訓はラヴレースの文意にはそぐわないように思われる。

（一三）（一一頁´一二行）「そのとおりだが´死んで　…　」…*Measure for Measure*, III, i, 118 ff.　(Ross)

（一四）（一二頁´十五行）「捕ふる者は　…　」…Qui capit, (ille) facit.（捕ふる者は行ふ者なり）「第一に知る者はその犯人なり」という意味。

（一五）（一三頁´一二行）ホーンジィ（Hornsey）…旧 London boroughs の一。現在は Haringey の一部で´London の北部に位置する。

（一六）（一三頁´三〇行）『山だし女房』におけるホーナー…ホーナー（Horner）は

William Wycherley(1640 – 1716),*The Country Wife* (1765)に登場する機知に富む放蕩児で、女性に近づくため、eunuchであるとの噂を広めさせた。

(一七)(一四頁、一行)「男は尻をついて座り　…　」…Samuel Butler(1612 – 80), *Hudibras, Part Second,* I, 105 – 110.

(一八)(一四頁、一一行)乳母と泣き虫と狼の寓話…La Fontaine, *Fables,* IV, 16を参照のこと。

(一九)(三四頁、三二行)「わたしが正しいと主張しているのに　…　」…ヨブ記九章、二二〇節。「心をもって」は、聖書では「口をもって」となっている。(Ross)

(二〇)(三五頁、三七行)「どうか、わたしの言うことを聞いてください　…　」…ヨブ記三一章、三五節、三六節、三三節の翻案。(Ross)

(二一)(四四頁、一四行)フランス人の予言者たち…ルイ一四世の迫害を逃れ、イギリスに亡命したカミザール(Camisard　-　政府の迫害に抵抗してCévennes山地で反乱を起こした熱狂的プロテスタント集団)のグループのこと。(Ross)

(二二)(五四頁、一行)「あの人は孤児をすらくじで取り引きし　…　」…ヨブ記六章、二七節。(Ross)

(二三)(六三頁、四〇行)粘液(phlegm)…中世の生理学で想定された四体液の一つで、これが多すぎると粘液質(冷淡・鈍感で不活発だが、意志堅固で粘り強い気質)になると考えられていた。

(二四)(六六頁、二六行)「救済を思わせるものを秘めた　…　」… *Hamlet*, III, iii, 92. (Ross)

(二五)(七二頁、三五行)瞑想…この瞑想はシラ書一五章、一一～二〇節と詩篇三九章、八～一二節及び二五章、一六節、一七節からの抜粋により構成されている。

(二六)(七八頁、八行)瞑想…この瞑想はヨブ記七章、一三節から三〇章、二六節にかけて適宜抜粋し、一部変更を加えたものである。

(二七)(九七頁、一九行)『麗しき悔悟者』…Nicholas Rowe(1674 – 1718), *The Fair Penitent* (1703)のこと。以下の数段落で言及されるロザリオ、カリスタ、アルタモントはこの劇の登場人物。

(二八)(九七頁、三四行)『孤児』におけるモニミア…『テオドシウス』のアテネー…それぞれThomas Otway, *The Orphan, or, The Unhappy Marriage* (1680)とNathaniel Lee, *Theodosius, or, The Force of Love* (1680)を参照のこと。(Ross)

(二九)(九八頁、一九行)トム・エッセンス…*Tom Essence. A Comedy*という作品が一六七〇年に印刷されており、Thomas Rawlins(d. 1670)の作と考えられている。(Ross)

(三〇)(一〇〇頁、六行)　瞑想…この瞑想はヨブ記六章、一四節から一九章、一一節までの中から適宜抜粋し、一部変更を加えたもの、及び、シラ書四章、一一節と三五章、一六節によって構成されている。(Ross)

(三一)(一〇三頁、四行)ホックリーインザホール(Hockley-in-the-Hall)…ロンドンのClerkenwellにあり、一七世紀から一八世紀にかけて、熊いじめ(bear-baiting)や牛攻め(bull-baiting)の会場として広く知られていた。

(三二)(一〇四頁、一六行)「心を込めて跪き　…　」…不詳。(Ross)

(三三)(一一〇頁、三七行)ラピー(rappee)…強い、低級な嗅ぎタバコ。(Ross)

(三四)(一一四頁、三九行)「わたしは正当に扱われていない」…ヨブ記九章、三五節。
(三五)(一一五頁、八行)ポルタバ(Pultowa)…一七〇九年、スウェーデンのカール一二世はこの地でピョートル一世(大帝)に撃破された。(Ross)
(三六)(一一六頁、一七行)金色のケルビムや光り輝くセラピム…ケルビム(cherub)とセラピム(seraph)は共に天使であり、ケルビムは九大天使のうちの二位で知識を司り、セラピムは最高位の天使である。
(三七)(一一六頁、二五行)エルデンの穴(Elden Hole)… Derbyshire 北部高原にある底なしの穴。(Ross)
(三八)(一一七頁、一行)「あの女を愛しているということは …」…Nathaniel Lee, *Mithridates, King of Pontus. A Tragedy* (1678), I, ii. (Ross)
(三九)(一一〇頁、六行)我が心の敵に追い詰められて…この瞑想は部分的変更を加えられてはいるが、ほぼ全面的に詩篇からの引用で構成されている。(Ross)
(四〇)(一一六頁、一〇行)「悲しい時には泣くんだな …」…*Macbeth*, IV, iii, 209. (Ross)なお、訳文は『シェイクスピア全集』7 悲劇Ⅱ(筑摩書房、一九六七)による。
(四一)(一一六頁、一五行)ユウェナリスが言っているように…第四巻の訳注(五六)を参照のこと。
(四二)(一一六頁、一七行)ホルボーンの丘(Holborn Hill)…死刑囚が Newgate 監獄から Tyburn の処刑場へ向かう道筋にあった。(Ross)
(四三)(一一八頁、一三行)「ああ、この命を失う恐れが …」…Dryden, *All for Love, or, The World well Lost* (1678), V, 131 – 4. (Ross)
(四四)(一二一頁、一行)「太陽の沈む頃 …」…Dryden and Lee, *Oedipus* (1679), VI, I, 80 – 90. (Ross)
(四五)(一二一頁、三行)「死の供まわりとしてさらに嘆かわしいものは …」… John Norris, *A Collection of Miscellanies: consisting of Poems, Essays, Discourses and Letters* (1687), 'The Meditation'. (Ross)
(四六)(一二二頁、一九行)「死そのものをなら …」…John Pomfret(1667 – 1702), *A Prospect of Death* (1700)を参照のこと。(Ross)
(四七)(一二四頁、一九行)やんごとなき詩人…リチャードソンは、『クラリッサ』の初版において、*A Prospect of Death* の作者を Lord Roscommon と推測したため、'the noble poet'という表現を用いたが、その後の版でもこの文言は訂正されなかったのである。(Ross)
(四八)(一四九頁、一四行)ラトクリフ…Dr. John Ratcliffe (or, Radcliffe 1650 – 1714) 当時のイギリスでは指折りの有名な医師で、莫大な財産を Oxford の Radcliffe Library や London の St.Bartholomew's 病院に遺贈した。(Ross)
(四九)(一五一頁、一〇行)「ああ、彼はもういない …」…出典不詳。(Ross)
(五〇)(一五二頁、一九行)プローテウス(Proteus)…第三巻の訳注(二八)を参照のこと。
(五一)(一五六頁、一三行)テンプルステアーズ(Templestairs)…Fleet 街の Temple Bar から Thames に至る Middle Temple Lane の南端。ボート利用者の便宜に供され

た。（Ross）
（五二）（一六六頁、三五行）「善が生じるために悪をしてはいけない」…第二巻の訳注（三二）を参照のこと。
（五三）（一九〇頁、三七行）「ありもしないこと」…‘the thing that is not’の訳であるが、中野好夫氏が‘the thing which is not’の訳として用いた表現をお借りした。スウィフト『ガリヴァ旅行記』（集英社版　世界文学全集　一〇、集英社、一九八一）、一八三頁を参照のこと。なお、ヤフー（Yahoo）は、〈馬の国〉に登場する、人間の外観を持ち、人間の悪徳のみを備えた野獣のこと。
（五四）（二〇六頁、一行）チャモント（Chamont）…オトウェーの『孤児』の悲劇的なヒロイン、モニミア（Monimia）の兄弟。彼の性急さがモニミアと恋人カスタリオの死を早めた。（Ross）
（五五）（二一二頁、二四行）オーソン（Orson）…第二巻の訳注（三六）を参照のこと。
（五六）（二一八頁、三二行）ファイアブランド（firebrand）…本来は「火のついた木片、燃え木」のことであるが、比喩的用法として、この語には不和や争いなどの扇動者の意がある。また、‘firebrand of hell’という言い回しで、地獄の業火に焼かれる定めの者という意味にもなる。
（五七）（二一〇頁、三九行）牧師と梨の寓話…不詳。
（五八）（二一一頁、一五行）「他人の食卓にて生活することは不幸なり」…『ギリシア・ラテン引用語辞典』（田中秀央・落合太郎編著、新増補版、岩波書店、一九六二）には出典の指示なしに採録されているが、Juvenal, *Satire V*, 2.からの引用のようである。
（五九）（二一一頁、三七行）宗教詩人クウォールズ…Francis Quarles(1592 – 1644)のことであるが、Angus Rossによると、クウォールズの詩句には該当する語句は見当たらないという。
（六〇）（二一二頁、一三行）「神様が礼拝堂を築くときっと一悪魔がそこにチャペルを建てる」…Daniel Defoe, *The True-Born Englishman, a Satire* (1701), 56 – 9 また、*ODEP*（*The Oxfod Dictionary of English Proverbs*）第三版の三〇九頁には、‘God has his church(temple), Where the devil will have his chapel.’とある。（Ross）
（六一）（二一二頁、二六行）「徳こそ唯一の栄爵なり」…Juvenal, *Satire VIII*, 20.（Ross）
（六二）（二一三頁、一〇行）「而して葡萄は　…　」…Juvenal, *Satire II,* 81.（Ross）
（六三）（二一三頁、三〇行）「美しき乙女を守るは容易ならず　…　」…ラテン語による警句を数多く発表したウェールズの詩人John Owen(1560? – 1622)の句と思われる。なお、http://www.proverbium.eu/spr/srz0006.html を参照のこと。
（六四）（二一三頁、三八行「）何事をも敢行せんと　…　」…Horace, *Odes I*, iii, 25 – 6.（Ross）
（六五）（二一四頁、一五行）「詔い屋が友となることなし」…Angus Rossは Ovidからの引用ではないように考えている。
（六六）（二一五頁、一五行）「過つは人の常なれど、貫徹するは人の性ならず」…特定の個人の言辞というよりは、人口に膾炙した諺に類したものと考えるべきであろう。（田中）
（六七）（二一九頁、一七行）シラバブ（syllabub）…牛乳またはクリームに葡萄酒・林

檸酒などを混ぜ、砂糖と香料を加えて泡立てて固まらせたもの。ミルク酒。比喩的には、中身のない空虚なものを意味する。

（六八）（二三六頁、一五行）エリザベス・カータレット夫人…Lady Elizabeth Carteret(1659 – 1717)は Sir Philip Carteret の未亡人であるが、その像は現存していない。（Ross）

（六九）（二四六頁、三二行）「厳粛なるものを汝は茶番に変える」…M.Prior, *The Ladle* (1703), 139 ～40.（Ross） ただし、原文では、「厳粛なるもの」は「偉大であるべきもの」となっている。

（七〇）（二四六頁、三七行）メトシェラ（Methuselah, or, Methusalem）…ノアの洪水以前の族長で、九六九歳まで生きたことになっている。創世記五章、二七節を参照のこと。

（七一）（二四七頁、八行）セネカ、エピクテートス、アパテイア…セネカ（Lucius Annaeus Seneca 4B.C.? – A.D.65）はローマのストア派の哲学者・政治家で、ネロの教師。エピクテートス（Epictetus 55? - ?135）はギリシアの後期ストア派の哲学者。アパテイア（apathy）とは情念を克服した無感動な境地のこと。

（七二）（二五九頁、一四行）ハワード…Henry Howard, earl of Surrey (1517? – 47)のことか。頁末に掲載された詩行について、Angus Ross も untraced としている。

（七三）（二六二頁、一二行）「地上をさまよい、さすらう者となる」…創世記四章、一二節（Ross）

（七四）（二七四頁、一二行）立派な王ヒゼキヤ（Hezekiah）…預言者 Isaiah の頃のユダヤの王（七一五？- ?六八六 B.C.）。列王記下二〇章、五、六節を参照のこと。（Ross）

（七五）（二七九頁、一三行）ヨゼフ皇帝…神聖ローマ皇帝（一七〇五 - 一一）のヨゼフ（Joseph）一世（一六七八 - 一七一一）のことか。スペイン王位継承戦争で勝利し、ハンガリーの反乱を鎮定するなど軍事面で活躍したが、音楽を愛し、ウィーンの文化的発展にも大きく貢献。天然痘に罹り、三二歳で早世。

（七六）（二八一頁、三九行）アディソンの天使…John Addison, *The Campaign: A Poem to His Grace, the Duke of Marlborough* (1705)を参照のこと。（Ross）

（七七）（二八四頁、七行）「その心には　…　」…出典不詳。（Ross）

（七八）（二九二頁、一三行）ハバクク…旧約聖書続編のダニエル書補遺〈ベルと竜〉の三六節を参照のこと。「すると主の使いは、ハバククの頭のてっぺんをとらえ、髪の毛をつかむやいなや、息の一吹きで、彼をバビロンの洞窟の前に立たせた」とある。（Ross）

（七九）（二九七頁、三行）「而して一度出でたる言は　…　」…Horace, *Epistolae,* I, 18, 71.

（八〇）（二九七頁、一六行）オリーブの枝（olive branch）…平和・和解の象徴である。

（八一）（二九七頁、一三行）「人の賢さも疑わしき事柄においては誤る」…出典不詳。

（八二）（二九八頁、四行）『エグザミナー』… *The Examiner* は Viscount Bolingbroke が一七一〇年の秋に創刊したトーリー党の雑誌、後に J. Swift が中心となる。なお、第三巻の訳注（五二）を参照のこと。

（八三）（三〇〇頁、三八行）「カケスは　…　孔雀の羽を纏って気取りたがる」…第一巻の訳注（一九）を参照のこと。

（八四）（三〇二頁´ 一四行）「邪まなる恋よ　…　」…Vergil, *Aeneis*, IV, 412.
（八五）（三〇二頁´ 一〇行）（書物なしに学ばんと欲する人は愉にて　…　）…Geiler, *Navicula Fatuorum*, Turba I.
（八六）（三〇二頁´ 三五行）「真の徳は　…　」…Horace, *Carmina*, III, 5, 29.
（八七）（三〇二頁´ 四〇行）「善に近き徳あり　…　」…Ovid, *Remedia Amoris*, III, 23.
（八八）（三〇三頁´ 一一行）「日頃より我らの重荷となるものを　…　」…出典不詳。マンチュアヌス（Johannes Baptista Spagnola, 1448 – 1516）はマントヴァ（Mantua）のカルメル会修道士で´その牧歌（eclogues）は英国でかなり流行し´A. Barclay や E. Spenser の田園詩に影響を与えた。
（八九）（三〇三頁´ 一七行）「偽りの名声に信を置くは　…　」…出典不詳。
（九〇）（三〇三頁´ 三八行）「あゝ´我は己が槍にて傷付き´苦しむ」…Ovid, *Epistulae Heroidum*, II, 48.（田中）
（九一）（三〇四頁´ 一五行）「罪を認めた罪人に辛らつなる言葉は控えよ」…Ovid, *Epistulae ex Ponto*, II, 6, 8.（田中）
（九二）（三〇四頁´ 三七行）「何となれば何人といえども　…　」…Horace, *Satirae*, I, 3, 68.
（九三）（三〇五頁´ 一〇行）「たとえ貧窮し´かつ´病弱の身　…　」…本文ではオウイディウスの詩句とされているが´John Owen, *Epigrammata*, III, 28 からの引用のようである。左記 URL を参照のこと。
http://www.philological.bham.ac.uk/owen/3lat.html
（九四）（三〇五頁´ 一五行）「余命なお数年の運命にも拘らず　…　」…ルカヌス（Marcus Annaeus Lucanus, A.D.39 – 65）はスペインのコルドバ出身のローマ詩人で´シーザーとポンペイウスの葛藤を描いた *Pharsalia* が代表作。陰謀に加担したため´自害に追い込まれる。引用句は *Pharsalia*, VI, 530 – 31（田中）なお´左記 URL も参照のこと。
http://www.thelatinlibrary.com/lucan.html
http://www.gutenberg.org/etext/602
（九五）（三〇五頁´ 一八行）「喜びが悲しみの後に訪れ　…　」…John Owen, *Epigrammata*, IV, 218. からの引用。
http://www.philological.bham.ac.uk/owen/4lat.html
（九六）（三〇六頁´ 五行）「艱難辛苦の末に得られたる喜びは快し」…出典不詳。
（九七）（三〇六頁´ 一〇行）「汝が当然に蒙る事は静かに忍ぶべし」…Ovid, *Epistulae Heroidum*, V, 7.
（九八）（三〇六頁´ 一五行）「忍耐が強固にしない徳は　…　」…出典不詳。なお´プルデンティウス（Aurelius Clemens Prudentius, 348 – 410）はスペイン生まれのローマの詩人。
（九九）（三〇六頁´ 一一行「）期待せられざる時は　…　」…Horace, *Epistolae*, I, 4, 14.
（一〇〇）（三〇六頁´ 一六行）「数え上げることの出来る苦難を　…　」…Ovid, *Tristia*, V, i, 30.（田中）
（一〇一）（三〇六頁´ 三一行）「晴朗なる日の心地好さは　…　」…出典不詳。諺に類

したものと思われる。（田中）
（一〇二）（三〇七頁´四行）「子供たちに向ける両親の表情は　…　」…出典不詳。
（一〇三）（三〇七頁´一〇行）「激昂し打擲しつつも　…　」…出典不詳。諺に類したものと思われる。なお´下記の URL を参照のこと。
http://www.proverbium.eu/spr/srz960.htm
（一〇四）（三〇七頁´一一行）「順境にあっては　…　」…出典不詳。なお´アウソニウス（Decimus Magnus Ausonius, 310? - ?395）はガリア生まれのローマ詩人。
（一〇五）（三〇七頁´一六行）「忍耐心は苦難の中に喜びを見出す」…Lucan, *Pharsalia*, IX, 403.（田中）
（一〇六）（三〇七頁´三〇行）「徳は幸運に勝り　…　」…出典不詳。諺に類したものであろう。（田中）
（一〇七）（三〇七頁´三六行）「運は勇敢なる者を恐れ　…　」…Seneca, *Medea*,II, i に見られるメーデイアの台詞。セネカ（Lucius Annaeus Seneca, 4B.C.? – A.D.65）はローマのストア派の哲学者・政治家。ネロの教師・執政官であったが´ルカヌスと共にネロ殺害計画に加担し´死罪を言い渡された。
（一〇八）（三〇七頁´四〇行）「逆境には果敢に対峙せよ」…Horace, *Satirae* II, 2, 136.（田中）
（一〇九）（三〇八頁´四行）「これらを記憶することは　…　」…Vergil, *Aeneis*, I, 203.
（一一〇）（三〇八頁´九行）「危険を免れた船乗りたちは …　」…Juvenal, *Satirae* XII, 81 – 2.（田中）　なお´ブランドが示した引用句は Gaudent secure narrare pericula nautae.となっているが´原文では … gaudent ubi uertice raso garrula secure narrare pericula nautae.である。
（一一一）（三〇八頁´一七行）「また´運命の定めるところを　…　」…出典不詳。
（一一二）（三〇九頁´一八行）「宏量なる獅子には　…　」…Ovid, *Tristia*, III, 5, 33.
（一一三）（三〇九頁´一六行）ゴリアテ（Goliath）…ダビデ（David）に殺されたペリシテの巨人戦士。サムエル記上一七章´四節´四九～五一節及びサムエル記下二一章´一九節を参照のこと。
（一一四）（三一〇頁´六行）「死灰の後に名誉は来る」…マルティアリス（Marcus Valerius Martialis, A.D.40? - ?104）はスペイン生まれのローマの風刺詩人。『ギリシア・ラテン引用語辞典』は´この引用句の出典箇所として´*Epigrammata*, V, 10, 12 を参照するよう指示しているが´I, 25, 8 にも類似の句が見られる。
（一一五）（三一〇頁´九行）「迅速に施された恩恵こそが　…　」…出典不詳。
（一一六）（三一〇頁´一二行）「而して遅滞がおくらせたる深切には感謝なし」…Ovid, *Epistulae ex Ponto*, III, 4, 5.
（一一七）（三一〇頁´一三）「好意ある表情を見せる者は惜しみなく　…　」…Vergil, *Aeneis*, X, 639.（田中）
（一一八）（三一一頁´一三行）「美徳には常に栄誉が伴う　…　」：出典不詳。次のラテン語引用句に対するブランドの英語訳のようにも思われる。
（一一九）（三一一頁´一六行）「影が体に付き纏うごとく　…　」…Contemnit laudem virtus,licetusque sequatur/ Gloria virtutem, corpus ut umbra suum.出典不詳。ただ

し´ Cicero には ˆgloria … virtutem tamquam umbra sequitur˙（*Disputationes Tusculanae*, I, 109）という句が見られる。（川崎）

（一一〇）（三三四頁´一〇行）配達日…ロンドンから地方への郵送は火曜日´木曜日及び土曜日に行われていた。（Ross）

（一一一）（三三四頁´一六行）ジェミー（Jemmy）…James の愛称である。

（一一二）（三三五頁´一四行）藁にくるまった人間…ベドラムの収容者は藁にくるまって寝たという。（Ross）

ク　ラ　リ　ッ　サ

ある若き淑女の物語

私生活における最重要関心事を
収録し、

特に
結婚に関し
両親ならびに子供の
不行跡に伴いがちなる難儀の数々を示す。

第８巻

第３版

ロンドン

出版元：S.リチャードソン

パタノスター街、ジョン・オズボーン書店
ストランド街キャサリン通り向かい、アンドルー・ミラー書店
セントポールズチャーチヤード、J.and J.リヴィントン書店
ならびに、バース、J.リーク書店より発売

１７５０

クラリッサ・ハーローの物語

第八巻

手紙　一

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

木曜日　夜

ペンを手にしてみるのも良いだろう。ベッドに入ったところで、眠りに就くことはないだろうからな。この称賛すべき女性の逝去に際しての悲しみのように、こんなにも胸に応える悲しみを味わったことは、これまでの人生で一度としてなかったわけだが、彼女の魂は今、光の国で悦びに浸っているのだよ。

彼女の幸せな最期の詳細については、君も知りたがっているかもしれないな。筆を進めてみることにしよう。辺りはしんとして静まり返っている。家の者たちは引き下がって行った。だが、だれ一人をとっても、彼女の気の毒な従兄弟は特にそうだろうが、おそらく眠るためではないのだろう。

前回の便りで触れたことだが、四時頃、下の階へ降りてくれるよう伝言があった。ベッドに近づくにつれて俺の眼前に繰り広げられた、悲しむべき光景を描いてやろう。俺の叙述を気に入ってくれていたこともあるからな。

真っ先に俺の注意を引いたのは大佐だ。ベッドの傍らに跪き、両手で令嬢の右手を包んでいる。それを彼の顔が覆い、涙で濡らしているのだよ。後になって、高ぶった調子ながら、途切れ途切れに婦人たちが教えてくれたところによると、令嬢は大佐を慰めていたということだがな。

ベッドの反対側には、優しい未亡人が腰を下ろしていた。顔は涙で覆われ、頭をベッドの頭部にもたせ掛けているのだが、これ以上ないほどのやるせない様子だ。そして、俺の姿を目にするや否や、こちらのほうへ顔を向け、両手を組み合わせながら、こう叫んだのだよ。「あゝ、ベルフォード様、おいたわしいことに、お嬢様は　…　」とな。ひどく涙にむせんでいるため、それ以上は口に出来なかったのだな。

スミスの上さんは、まるで、助けを与える力のある唯一の存在に助力を嘆願するかのように、両手を握り締め、天を仰ぎながら、ベッドの脚のところに跪いていたが、大粒の涙がその頬を伝っているのだよ。

令嬢の看護婦が、未亡人とスミスの上さんとの間で跪き、両腕を差し出していた。効果のなかった強心剤を片方の手に握っているが、息を引き取ろうとしている女主人に勧めていたものだよ。彼女は泣き腫らした顔をしていた（こういった光景には慣れているのだがね）。そして、俺のほうへ目を向けたのだが、どうしようもない悲しみに加わってくれるようにと、まるで誘わんばかりのまなざしなのだ。俺がベッドに近づくと、堰を切ったように、新たな涙が両目から溢れ出ていたよ。

この家の女中は、壁の板張りに寄り掛かり、組んだ腕に顔を埋めていたが、他のだれよりも大きな声で悲しい気持ちを表していた。

令嬢はしばらく黙っていた。そして、皆の考えでは、口をきくことが出来ず、唇は動かしているのだが、一つも言葉にならないのだ。片方の手は、前にも言ったとおり、従兄弟の手の中だ。だが、俺が近づいて来るのを見て、ロヴィック夫人が俺の名を告げると、弱々しく内に籠もった声ではあったが、しかし、すこぶる明瞭に、令嬢は次のように言ったのだよ。「あゝ、ベルフォードさん、いよいよです …… いよいよですわ（途切れ途切れだったのだよ、彼女の言葉は） …… 哀れな人間にお寄せくださるお慈悲に対し、神様に感謝いたします …… 何もかもすぐに終わるでしょう …… わずか …… ほんのわずかいたしますと …… この争いも終わりましょう …… そして、私は幸せになるのですわ。

こちらに慰めをお願いいたしますね …… 」と、大佐のほうへ頭を向け、こう言うのだよ。「私の従兄弟を慰めていただきたいのです …… ご覧ください …… 非難にも …… 値する優しさですわ …… 私が幸せになりますのを願ってくれないのです …… こんなにも早く …… 」

ここまで言うと、彼女は二、三分口を閉ざし、彼のほうをじっと見詰めていた。それから、言葉を続け、「私の大切な大切な従兄弟、気楽に考えてくださいね …… 死ぬのが何でしょうか。人間共通の定めに他ならないのです …… 朽ち果てる定めの体は、苦しみもがいているように見えるかもしれません …… でも、それだけの話です …… 死ぬというのは、思い込んでおりましたほどに辛いことではありません …… 準備をするのが難しいのですわ …… 有難いことに、私にはその時間がございました …… その他の点は、私よりも、むしろ見ている方たちにとって辛いことなのです …… 私は幸せな希望に満たされております …… 希望そのものです」と言うのだよ。

彼女は言葉そのままの様子で、爽やかな笑みが顔一面に浮かんでいたのだ。

短い沈黙の後、彼女はこう言っていたのだが、やはり途切れがちな話し方だった。「もう一度お願いしたいのです、私の大切な従兄弟。礼のかぎりを尽くしまして、宜しく伝えていただきたいのです。私の父と母とにです」と、そこで彼女は中断した。それから、言葉を続けると、「私の姉と兄、それに、おじたちにもですわ …… そして、皆にお伝えくださいね。私に施してくれました親切のすべてに対してですが …… 皆に神様の恩恵がありますよう、最後の一息でお祈りすることをです …… 皆の怒りに対しましても、神の恩恵を祈ります …… この世で受けました懲らしめは、私にとりましてこの上もなく幸せなことでした …… 本当に幸せでした」と言うのだ。

彼女はしばらくの間黙って天を仰ぎ、従兄弟が両手で握っていたのとは別のほうの手を差し上げていた。そして、こう言ったのだ。「死よ、お前のとげはどこにあるのか」[二]とだよ。「葬儀の際にだが、俺のおじ貴と今は亡きベルトンに向かって唱えられるのを聞いた覚えのある言葉だ」。それから、一息入れた後、「卑しめられたのはわたしのために良いことでした」[三]と言うのだよ。おそらく、聖書の言葉なのだろう。

それから、言葉もなく悲しみに浸っているわれわれのほうへ向き直り、彼女はこう言ったのだ。「あゝ、親愛なる殿方たち、貴方たちはご存じないのです。前もってどのような味わいが …… どのような保証が …… 」 そこまで言うと、彼女は再び口を噤み、感謝の喜びに浸っているかのように顔を上げたのだよ。爽やかに笑みを浮かべながらだ。

その後、俺のほうへ頭を向けると、「どうぞ、お願いいたします。私は許すと、お友達にお伝えください。また、あの人を許してくださるよう、神様にお祈りいたします」と言う

のだよ。再び口を閉ざし、天を仰ぎながらだ。あたかも、君を許すよう神に祈りを捧げているようにな。そして、「私の死がどれほど幸せなものであったのか、あの人にお知らせください。そして、あの人の最後の時が私のものと同じになりますよう願っておりますことですわ」と言っていた。

彼女はまたしばらくの間黙っていた。そして、改めて口を開くと、「私、目が見えないのです　…　ただ、お声だけが　…　」と言っていた「キリスト教徒らしい、神々しいまでの彼女の心構えのことを、彼女と同じように途切れとぎれの話し方だったが、われわれ二人が揃って褒め称えていたからなのだ」。それに、嘆きの声というのは、どれも皆同じものなのだよ。「これはモーデンさんの手ではありませんか」と、彼が放したばかりの手を彼の片方の手に押しつけながら言っていた。そして、「どちらがベルフォードさんのものでしょう」と、もう一方の手を差し出しながら言うのだよ。俺は自分の手を出した。「全能の神様がお二人を祝福してくださいますように」と、彼女が言った。「そして、お二人とも　…　最後の時がまいりましたなら　…　と申しますのも、貴方たちもこのようにならなければいけないのですからね　…　私と同じくらい幸せにしていただくよう、お祈りいたしましょう」とだよ。

彼女の言葉がまた途切れた。息切れがひどくなっているのだ。そして、二、三分後、こう言うのだ。「さあ、大切な大切な私の従兄弟、お手を拝借いたします　…　こちらへどうぞ　…　もっとこちらへ　…　」と、その手を自分のほうへ引き寄せると、死に瀕した自らの唇を押し当て、「大切な大切なお方、神様が貴方をお守りくださいますようお祈りいたします　…　そして、もう一度、私の衷心からの謝辞をお受け取りください　…　それから、大好きなハウさんに伝えてほしいのです　…　それと、立派なノートンさんにお会いになって、伝えてくださると有難いのです　…　あの方も今のところは卑しい身分に甘んじておられますが、いずれ天上の聖者の一人になられるに違いない、とです　…　あの方たち両方にお伝えください　…　今わの際にも、お二人のことを思い出しては、感謝の祈りを捧げておりますし　…　お二人のお身内や愛してくださる人のために、この世での幸せを幾久しくお二人に与えてくださいますよう、神様に祈っていることをです。また、あの世では天上の至福を、そして、その保証を授かりますよう祈っております。聖なる我が救い主の、すべてを満たしくださいます功徳により、私が得ておりますような保証をですわ」とだよ。

彼女の美しい声と途切れがちな言葉は、今もこの耳を満たしているような感じだし、決して俺の記憶から消えることはないだろう。

短い沈黙の後、さらに途切れがちな弱々しい声でだったが、「それに、ベルフォードさんもですが」と、彼女は俺の手を握りながら、「神様が貴方をお守りくださいますよう、そして、貴方の過ちすべてを分からせてくださいますよう、お祈りいたします　…　すべてはどのように終わるのか、私をご覧になってお分かりですね　…　どうか貴方も　…　」と言い掛けた。だが、そこまで言うと、彼女の頭はがくりと枕に沈み込んだ。気が遠くなっていたのだな。そして、われわれから手を引っ込めたのだよ。

われわれは令嬢がこれで息を引き取ったものと思い、一人一人がワッとばかりに嘆きの声を上げた。

しかし、まもなく息を吹き返す兆しが見えたので、われわれの注意は再び引きつけられ

ることとなった。少し意識を取り戻してからだが、俺は彼女にお願いしたのだよ。途中まで口にしていた祝福の言葉を、俺のために終わりまで述べてくれるようにだ。彼女はわれわれ両名に向かって手を振ってくれた。また、後になって思い出したことだが、六度に亘って頷いて見せたのだ。まるで、居合わせた者一人一人を見分けているかのようにな。看護婦と女中のことも忘れずにだが、女中の奴は神々しいばかりの婦人の最後の祝福を求めて押し掛けるみたいに、泣きながらベッドへ近寄った。令嬢のほうでは、内に籠もった低い声だったが、こう言っていた。「祝福を　…　祝福を　…　あなたたちすべてに　…　さあ　…　さあ　…　[と、これが最後だったのだが、ほとんど生気の失せた両手を差し上げながら]どうぞ　…　おゝ、どうぞ　…　聖なる主　…　イエス　…」とだよ。

そして、このような最後の、しかし、途中までしか告げられなかった言葉とともに、令嬢は息を引き取ったのだ。すでに始まっている永遠の幸せを証明するような微笑、そんな心を魅了する晴朗さが顔一杯に広がっていた。

おゝ、ラヴレースよ　…　だが、これ以上筆を進めるのは、俺には無理な話だ。

数行付け加えるために、もう一度筆を執ることにする。

脈はなくなっていたが、暖かさの残っている間に、われわれは片方ずつ、彼女の手に唇を押し当て、そして、隣の部屋へと引き下がった。何か言おうとして、われわれは互いの顔を見つめた。しかし、両者とも一つの原因に心を動かされているのと同じく、まるで一つの動きに支配されているかのように、二人は沈黙したまま相手に背を向けたのだ。

大佐は胸も張り裂けんばかりに溜め息を漏らしていたが、とうとう、俺に背を向けたまま、天を仰ぎ、両手を差し上げながら呟いたのだ。「何てことなのだ。支えてほしい。こんな具合になのだろうか、あゝ、自然の精華が　…　」と、一息つき、「そして、われわれはもう　…　二度と再び　…　神聖なる、神聖なる我が従姉妹よ」と呟き、他の言葉も口にしたのだが、溜め息に紛れて、はっきりとは聞き取れなかったのだ。それから、まるで我に返ったみたいに、「お許しいただきたい。失礼いたしますよ、ベルフォード君」と言うのだ。そして、俺の横を通り抜けながら、「まもなくお目に掛かりましょう」と言うと、彫像みたいに立ち尽くしている俺を残し、階段を降りて外へ出て行った。

正気を取り戻した俺は、愚痴をこぼしてしまいそうになったよ。あの時には、不適切な天の配剤、と俺が称していたものをだ。彼女の幸せな準備、そして、さらに幸せな最期のことを忘れての話だ。また、彼女はだれにも共通の運命を引き当てたに過ぎず、その定めに喜び勇んでいたのだが、後に残された者は誰も彼も、いずれその定めが自分たちのものとなる点では彼女と同じく確実であるのに、幸せについてはそれほど確信が持てずにいるのだ、ということも忘れていたのだよ。

彼女が息を引き取ったのは、テーブルの上の彼女の時計によると、ちょうど六時を四十分過ぎた時のことだった。

このようにして、クラリッサ・ハーロー嬢は亡くなったのだよ。若さと美しさの真っ盛りにだ。彼女のうら若さを考えるなら、後に残された者の中で、その広い知識や油断のな

い慎重さにおいて、彼女を凌駕する人間はいないのだ。また、汚れのない美徳、模範とすべき敬虔さ、立ち居振舞いの優美さ、思慮分別を弁えた寛大さ、そして、真のキリスト教徒らしい慈善心についても、肩を並べる者はほとんどいないのだよ。しかも、これらすべてはこの上なく奥ゆかしい慎みと謙譲の心によって引き立てられているのだが、それでいて、然るべき時には常に、見事な沈着さや真の度量の大きさを証明して見せるのだよ。だから、彼女は女性にばかりではなく、人間性にも光彩を添える存在であったと、そのように言われて構わないくらいなのだ。

俺よりも筆の立つ者なら、さらに十全な形で、彼女に正当な評価を与えることも出来るだろう。貴公の筆のことだよ、ラヴレース、俺が考えているのはな。というのも、生まれつきのものについても、身につけたものについても、心と容姿両方の優雅さにおいて、彼女が女性のすべてをどれほど凌駕していたのか、貴公はそれを十分に承知しているわけだからな。それに、彼女の時ならぬ死の原因について、最善の説明を加えることも貴公には出来るのだよ。ほんの短い間に、幸福の絶頂から、彼女自身にとっては極めて幸せなものであったのだが、光栄にも彼女の知遇を得た者すべてにとっては、こんなにも早かったこともあって、はなはだ嘆かわしく思われる、そんな最期へと彼女を至らしめた、あの不幸な出来事ゆえの死についてだよ。

そこで、この仕事は貴公に委ねることにするが、今のところ、これ以上筆を進めることは俺には出来ないのだ。貴公の苦しみのどの部分についても、同情を惜しまないことだけは付言しておこう。(ただ、こう言っては残酷な話だが)貴公の罪から生じているものは除くことにする。

金曜日　午前一時

手紙　二

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

金曜日　午前九時

心痛む出来事の際に欠かすわけに行かない指示のこともあるので、詳しいことを筆にする機会が見つからないのだ。

朝の六時に俺のところへやって来たので、昨夜から用意してあった手紙を持たせてすぐに送り返したジョエルだが、奴の報告によると、君の精神状態もあまりパッとしたものではないようだな。それも驚くには当たるまい。だが、時が経てば(そして、それ以外の何をもってしても無理なわけだが)、君も楽になることだろう。もしも(つまりは)、君の良心と折り合いがついていればの話だよ。でなければな、日一日と辛さは募って行くかもしれないからな。

❦　❦　❦

君が一体どのような有り様なのか、ターヴィルが教えてくれている。こちらへ来るような考えは持たないようにしてもらいたい。遺書の中で令嬢は希望しているのだよ。自分の

姿を君が目にしないようにだ。写しを四通作成している。長文のものだ。彼女は遺言のすべてについて、その理由を示しているからだよ。何とか筆を執ることが出来るようになったら、すぐにももっと詳細な便りをすることにしよう。

ちょうど今、〈クラリッサ・ハーロー嬢へ〉という宛名のついた三通の手紙が、お仕着せを着た召使によって届けられたところだ。君にその写しを送ることにしよう。人を狂喜させるに足る内容だよ。その三通を受け取ったら、今は亡きこの令嬢はどんなにか喜んだことだろうな。ただ、受け取っていたなら、心気高く彼女はこう言っていたのだが(ア)、「慰めを求めまして、神様ご自身以外の者に頼るようなことを、神様は許してくださらないことでしょう」などと語ったりは出来なかったことだろう。また、実際の話、ここ数日、令嬢は世俗的な考えをすべて乗り越えたような様子で、彼女も認めていたことだが、その熱烈な愛情は、ハウ嬢に対するものでさえ、〈より崇高な熱情〉(イ)に席を譲っていたのだよ。

手紙　三

ノートン夫人からクラリッサ・ハーロー嬢へ

九月六日　水曜日

ようやくのことでございますが、大好きな大好きなクレアリーお嬢様、すべてが希望いたしましたとおりに進み出しております。と申しますのも、ご親戚の方々皆さんが、異口同音にお嬢様のためを願っておられるのです。お兄様やお姉様でさえ、先頭に立つ人々の仲間入りをなさって、貴女との和解を求めておられます。

私には分かっておりましたわ。最後にはこうなることがです。耐え忍び、そして、優しさを守り通すことで、何と素晴らしい勝利を貴女は手中に収められたのでしょう。

この喜ばしい変化は、貴女のお医者様、お従兄弟さんのモーデン様、そして、ブランドさんからいただきましたお手紙のお陰なのです。

疑いもなくモーデン大佐は、これがお手元に届きます前に、お傍に伺うことになるでしょう。紙入れに手形の類をぎっしりと詰め込んでおられますが、貴女に裕福になっていただきますために、不足するものは何一つないようにとのお考えからなのです。

そして、今、私どもがひたすら希望いたしますのは、私どもがひたすら祈っておりますのは、この吉報で貴女が気力と健康とを取り戻してくださることですし、(こんなにも長く差し控えられておりましたから)その知らせの届きますのが手遅れになったりはしないことなのです。

私が今筆にいたしておりますような、そして、幸いにもお目に掛かることが出来ました折にはもっと詳しくお話しいたしますような、そんな喜ばしい知らせによりまして、貴女の貞節なお心がどれほど元気づけられますことか、私は承知いたしておりますが、遅くと

(ア) 第七巻の手紙百六を参照のこと。(イ) 同じく、手紙九十八を参照のこと。

も今度の土曜日までにはお会い出来ることでしょう。多分、金曜日の午後くらいに、これをお受け取りになる頃までにはと考えております。

と申しますのも、今日、皆さんお揃いで私へのお呼び出しがございましたが、お一人お一人から大変お優しく、また、とても腰を低くしてお迎えいただいたのです。そして、貴女のお傍へと急ぎ上京し、皆さんが揃って寄せておられます貴女へのご厚情のことを請け合って差し上げるよう、ご懇請がございました（皆さんがお使いになられましたのは、そのようなお言葉だったのです。勿論、ご懇請など一切必要ございませんでしたのにね）。それから、貴女をお慰めし、元気づけるためですが、私の心に浮かびます思いやりに満ちた言葉につきましては、そのすべてを口に出すようにと、お父様がお申し付けになられたのです。そうしてくれるなら、ご自分たちが責任を持ってその実現を計るつもりだと、皆さんはそのようにおっしゃっておられました。

貴女のノートンにとりましては、何とも嬉しいお話でございます、このお役目は。私の心は優しい言葉で溢れてしまうでしょうが、ご心配なく。貴女にとりましては愛しくもあれば血の繋がりも近いお方お一人お一人の名代といたしまして、貴女を励まし元気づけて差し上げるために、どんなことを申し上げたら良いのか、今からもう思い巡らしているのでございます。はやりにはやる私の気持ちにお応えくださって、皆さんのチャリオットを出していただけましたなら、筆を執る代りにそうすることも出来るのでしょうに、今この瞬間にも出発することが出来ませんのを残念至極に存じます。ただ、お申出がございませんでしたのにお願いしたりいたしますのは、出過ぎたことにもなりましょう。それに、明日には賃貸しの二頭立てシェーズを使えるのです。ただ、何時になるか、それは私にも分かり兼ねます。

この盲愛的な、この盲愛に止まらない、この母親のような胸に、私の愛する大切なお嬢様を何としてももう一度抱き締めたいものと存じます。

お姉様が貴女にお便りをなさるとのことで、そのお手紙を特別の使いの者の手で、これと一緒にお届けになります。

私が書いておりますものを皆さんにお見せするわけにはまいりません。チャリオットについての希望のことがございますからね。

ジョン伯父様もお便りをなさいます。それも（疑いございませんが）、これ以上はないという優しいお言葉でです。と申しますのも、お医者様が太鼓判を押された貴女の人物証明のことでは、皆さん喜んでおられますが、同じように、貴女が危険な状態におられるというお医者様の説明には大層驚かれ、悩んでおられるからです。あの親切な殿方にはもっと早くにお便りをして頂きたかったと、心からそう思います。ただ、お医者様が書いておられるところでは、今回お便りをなさったことについて、貴女はご存じないそうですね。でも、手遅れだとお考えでしたら、お医者様も筆を執ったりは決してなさらなかったはずだと、私ども全員確信いたしておりますし、それが私どもの慰めにもなっているのです。

大好きなお嬢様、皆さんは何の条件も付けようとはなさらず、すべてを貴女ご自身の孝養心と分別とに委ねるおつもりなのです。ただ、お兄様とお姉様は、ご自分を枉げ、ラヴレース様のことを弟と呼ぶような真似は出来ないと言い張っておられます。お父様につきましても、あの方を息子さんと考えていただくようになりますのは、容易なことではないように思われます。

お体具合とお気持ちに適うならですが、出来るだけ早くに、私が貴女をお連れして戻ることになっているのです。心からの歓迎をお受けになることでしょう。どなたもが会いたがっておられます。お手に口づけをさせていただけるものと、召使全員が楽しみにしているのです。でしゃばりなベティの口調はもう変わってきておりまして、今は、当然のものですが、貴女への褒め言葉を並べ立てているのです。順境というのはずいぶんと味方を作るものなのですね。逆境はどれだけ敵を作るのでしょう。玉座から田舎家に至るまで、暮らし向きのどの段階におきましても、いつだってそのとおりでしたし、これからもそうでしょう。でも、この喜ばしい変化に際しまして、今は何もかも一切を忘れ去ることにいたしましょう。そして、私の大好きな大好きなお嬢様、この吉報をお喜びいただけますよう願っております。きっと喜んでくださいますことは分かっているのです。仮にも何かお出来になることがあるというのでしたらね。

楽しい出会いの時まで、貴女への神のご加護をお祈りいたします。そして、こう申して構わなければ、私の絶え間ない祈りで神様を困らせて差し上げましょう。今後とも貴女を守護し、ご病気を治してくださいますようにとです。

愛しいお嬢様、左記のことは申すまでもございますまい。

いつもお嬢様を愛し、この身を捧げております、貴女の

ジュディス・ノートン

生憎ですが、シェーズの用意に手間取りまして、愛に溺れておりますこの胸に貴女を抱き締めることが出来ますのは、土曜日の朝のことになりましょう。

手紙　四

ARAB. ハーロー嬢からCL. ハーロー嬢へ

九月六日　水曜日　朝

愛する妹へ

貴女の具合がひどく悪いということを、今耳にしたところです。私たちは皆、どこのお嬢さんにも決してなかったほどに、貴女のことを愛していたのです。その点は貴女も気づいているでしょう、クレアリー。それに、貴女はとてもいけない娘でした　…　でも、私たちだって、いつもいつも怒っているわけには行かないのです。

貴女の病状がひどく悪いという報せを受け、本当に私たちは、私の筆では言い表せないほどに悲しんでおります。と言いますのも、このように別れて暮らした後ですし（貴女の災難は犯した過ちに比べて大きかったと、私たちは理解していますし、どれほど不幸なことにせよ、以前の立派な娘に相応しい身の落とし方だと考えているのです）、もしもそんなことが可能ならばの話ですが、これまで以上に貴女のことを愛さないわけに行かないように思うからです。

ですから、次のことを慰めとするのですね、クレアリー。また、あまり力を落とさないことです。あんなにも素晴らしかった前途が暗雲に覆われてしまいましたし、道を踏み違えたために、非難の声が自分の内側からも出て来ることでしょう。そして、その過ちのせ

いで、あんなにも立派な評判を汚してしまったこともありますからね。貴女の無念さはいかほどばかりでしょうね。でも、私たちのだれからも屈辱を受けることは一切ありませんよ。それに、パパとママの愛顧と和解の手付けとしてということですが、お二人は私を通して確約してくださっているのです。貴女への祝福と一時間ごとのお祈りとをです。

もしも、そうすることが少しでも貴女の慰めになるのでしたら、また、この手紙が私たちの期待どおりの受け止め方をされていると、お母様がそのようにお思いの場合には（その点につきましては、貴女の体具合に及ぼす好い影響から私たちにも分かるはずです）、お母様ご自身が貴女の元へ上京なさる予定です。差し当たっては、貴女がそんなにも深く愛している立派な婦人に急ぎ上京してもらうことにいたします。それに、あの人はこれを機に、その件についてと、私たちの愛情が蘇りつつあることとを貴女に知らせるため、便りをしてくださいます。

この吉報に大喜びしてくれることを希望しています。どうか、そのとおりであると知らせてくださいね。この機会に貴女が書く次の礼状は、もしも、この通知のお陰で貴女の具合が良くなったといった、そんな嬉しい報せを私たちにもたらしてくれるようならなおさらですが、筆跡鮮やかな貴女の便りがあるたびに私たちが味わっていた、あれと変わらない（それ以上ではないといたしましても）喜びをもって迎えられることでしょうね。それでは、さようなら、大好きなクレアリー。

貴女を愛する姉、そして、真の友、

アラベラ・ハーロー

手紙　五

愛する姪、クラリッサ・ハーロー嬢へ

九月六日　水曜日

お前の過ちには、愛するクレアリーや、私たちはすこぶる悲しい思いをしたのだよ。だが、お前の病状がひどく悪いことを耳にし、私たちは、もしもそんなことが可能ならの話だが、さらに深く悲しんでいる。そして、すまないとも思っているのだ。こんなところまで事が運ばれてしまった点をだよ。

お前の才能については私たちも承知しているし、その気になれば何時だって、大いに心を動かす筆遣いがお前には出来るわけだから、お前に対しては、だれだって何一つとして断れなくなってしまうことも分っているのだよ。そして、お前が筆の力を当てにしているものと思い込んでしまい、また、そんなにも具合が悪いということや、極めて真っ当な生活を送っており、本心から後悔しているといったことをほとんど考えてもいなかったものだから、お前の兄も含め、私たち全員は一人残らず、あんなにも厳しい態度を取ったということで、ひどく悩んでいるのだよ。私もその一翼を担ったわけだが、許してもらいたいのだ、大好きなクレアリー。私はお前の第二のパパなのだからな。それに、私を愛してくれていたのだろう。

早くこちらへ来られるようになることを願っている。そして、しばらくの後、お前を溺愛している両親がお前を割愛してくれるようになった時には、丸々一ヶ月は私のところへ

やって来て、かつてのように私の心を楽しませてもらいたいのだよ。だが、病のため、私たちが願っているほど早くには戻れないのであれば、私がお前の元へと上京することにしよう。会いたいのだよ、お前にな。これほど会いたく思ったのは、私の生涯でもかつてなかったことなのだ。それに、知ってのとおり、お前はいつだって私の最愛の娘だったのだからな。

弟のアントニーからは、くれぐれも宜しくとのことだ。また、万事に亘り申し分のないようにするし、もしも可能なら、これまで以上に良くなるよう取り計らうと、私共々、愛情のかぎりを込めて保証しているのだよ。何しろ、私たちももうずいぶん長いことお前なしで過ごして来たため、お前のいない寂しさが身に染みているし、お前と顔を合わせ、もう一度私たちの胸に温かく迎えて上げることに、いわば飢えと渇きさえも覚えているのだよ。実際の話、お前が私たちの胸から追い出されたことは一度だってなかったのだ。あの不幸な行動に対する懸念ゆえに、私たちが思い込んでしまったほど遠くへはな。また、お前が信じ込んだほど遠くへは、ということだ。お前の姉と兄の両方が、ロンドンでお前に会う話をしている。私の愛する妹、つまり、お前の優しい母親もだ。

お前の健康を回復してくださるよう、神様に祈ろう。それが思し召しであるならな。でなければ、果たしてこの身はどうなるのか、私には見当もつかないことなのだ。

お前を心から愛する伯父、そして、第二の父

ジョン・ハーロー

手紙　六

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

九月八日　金曜日　夜十時過ぎ

さて、この比類なき令嬢の最期の言葉を含んでいる、俺の昨夜の手紙以降にわれわれが取った処置について報告することにしよう。

最後の場面の幕が閉じるのを（令嬢自身にとっては極めて目出度いことだが）見届けるとすぐに、われわれは遺体の世話を親切な婦人たちに委ねたのだが、婦人たちは、あの夜令嬢が与えてあった指示に従い、彼女があのように堅忍不抜の心を発揮して誂えた、例の終の住処へ遺体を移したのだ。

翌朝、七時から八時の間だが、約束どおり大佐がここへ訪ねて来た。大佐はひどく元気を失くしていた。ロヴィック夫人とスミスの上さんに付き添われ、われわれは一緒に故人の部屋に入ったのだ。美しい遺体を眺め、その気品のある顔付きが湛えている心魅する晴朗さに感心せずにはいられなかった。婦人たちは、これほど美しい最期をこれまで目にしたためしはないと言明し、また、頬や唇はまだすっかりと色を失ってはおらず、まるですやすやと眠っているような様子だと断言していた。

俺は令嬢が手紙類を（以前の手紙(ア)で触れたように）しまっていた引き出しの鍵を開けた。俺の月曜日の便りで話したことだが、令嬢は前の晩、〈私の死が確認され次第、ベルフ

（ア）第七巻の手紙九十一を参照のこと。

ォード氏の手で開封のこと〉と表書きのしてある包みを三つの黒い封蝋で封印していたのだ。昨夜のうちにそうしなかったということで、俺は自分を責めたよ。だが、あの時には本当に何をすることも出来なかったのだ。

そこで、包みを開いてみたところ、十一通もの手紙が入っていたのだが、それぞれ令嬢の印と黒い封蝋で封がされており、そのうちの一通は俺に宛てたものだったのだよ。その写しを同封しよう。

ジョン・ベルフォード様へ

九月三日　日曜日の夕刻

謹んで

心の支えと保護とを最も必要としておりました際に、私にお寄せくださいましたご親切のすべてに対しまして、この最後で厳粛な機会を利用し、お礼の言葉を繰り返させていただきます。

これをご一読いただきます時点では、すでに亡き者からの願いということではございますが、真摯な友情の誠意のかぎりを込めまして、二、三の点につきご考慮を強いさせていただきとうございます。

これをご覧くださいます頃までには、最後の時に至りますまで貴方の永遠の安寧を願っております人間の、その最後の数時間におきまして、心の慰めをもたらします曇りのない良心が大切なのだという例を、貴方は手中にしておられることでしょう。謹んでそのように確信いたしております。

耳にしたことがございますが、ルクセンブルグの大公(二)は、自慢の種として来たものなのですが、その数々の勝利を戦で収めたことよりは、苦しんでいる有徳の貧者に一杯の冷たい水を与えたことを思い出すほうが、今ははるかに好ましいのだと、死の床で言明したそうです。また、ある人が巧みに述べているところですが、人間の運命を決定いたしますあの避けることの出来ない瞬間には、現世的な奢りの気持ちはことごとく消えてなくなるものなのです。

ですから、もしもその恐るべき瞬間には、軍隊を打ち破り、国々を征服する人間がそのような状態だといたしますと、ほんの手短に（多言を弄する必要はございません）尋ねさせていただきたいのですが、官能に耽り罪に溺れる生活を送ってきた人たちの反省は（反省など出来るならの話ですが）、その時期には、一体どのようなものでしょう。無垢な人間を誘惑したり、弱く、無防備で、知り合いとていない者、それも、その卑劣な誘惑によって、ますます寄る辺のなくなった者ですが、そのような者たちの操を奪うことが骨折りの対象であり、かつ、この上なく破廉恥なことには、誇りでもあったという人たちのことです。あゝ、ベルフォードさん、今この時にご考察いただきたいのです。熟慮をお願いいたします。よくよくお考えください。反省は健康な時に、心も体も元気な時にこそ最も有効に働くものですが、これは何と恩知らずで、男らしさに欠け、爬虫類よりもさらに卑しい誇りなのかということをです。

次に、私のためにお願いしたいことがございます。私の遺言執行人になってくださるよう、貴方にお願いせざるを得ない立場の私、あるいは、今では貴方が一番よく理解してく

だされるのでしょうが、これまでもそのように強いられてきました私のために、貴方に備わっているものと考えておりますあの寛容なお心に従い、この信託のせいで、万が一、何か不愉快なことが起こりました場合にも、私の身内すべてにつきまして、とりわけ兄についてですが（本当は立派な若者なのですが、多分、怒り出しました時や物の考え方に、少し強情すぎるところがあるのでしょう）、どうか堪えていただきたいということなのです。そして、それにもまして特にお願いいたしますのは、兄に輪を掛けたほど強情なお友達のことですが、貴方は大変大きな影響力を持っておられるご様子ですから、必要な際には、さらなる災いを防ぎますためにも、仲裁に立っていただきたいということです。と申しますのも、あの激しい気性の持ち主は、間違いもございませんが、これまで働いてきた悪事の数々のことで、とりわけ、その名誉の最も敏感な部分を傷つけられました家族に対し、私を通して加えられました不当な仕打ち、憎むべき、そして、恥ずべき不当な仕打ちのことで、得々として腰を下ろすことになるのでしょうからね。

この要望に応じてくださるということでは、すでに繰り返し約束をしていただいているところです。従いまして、貴方からお受けする恩義の一つとして、その履行を主張することにいたします。また、疑ってかかる必要はないものと存じますが、ただ、私といたしましては、この厳粛な、この最後の機会に、このように熱心にもう一度強調しておきたいという気持ちだったのです。

貴方にはもう一つお頼みしたいことがございます。他でもありませんが、同封の手紙につきましては、特別な使者の手で、宛名のとおりにご転送願いたいということです。

さて、私の生涯をこんなにも早く結末へ導きました、あの不幸な一歩により、有用なメンバーが一人社会から失われたのだと、僭越とは存じますが、そのような考えでおりますので、ひとつ希望を言わせていただきたいのです。つまり、貴方のように才能に恵まれた男性に心を改めていただきますために、神様の御手をお借りしまして、ささやかな手立てになりたいと思うのです。そうなりますならば、私は次のように考えることでしょう。つまり、その損失につきましても、世間の人々に対しましてはより潤沢な埋め合わせがなされることとなり、一方、私にとりましては、神様のご慈悲により、利益をもたらすことにもなるのだ、とです。また、さらに次のような望みも湧いてまいりましょう。これまでのご親切、そして、これからのお骨折りに対しまして、今も繰り返し行っていることではございますが、今一度お礼を申し上げますような機会が、幸せな来世において得られるだろうという望みです。

感謝の念を込めまして、貴女の

クラリッサ・ハーロー

その他の手紙というのは、父親に宛てたもの、母親に宛てたもの、おじ二人に宛てた一通、兄宛のもの、姉宛のもの、叔母のハーヴィー夫人宛のもの、従兄弟のモーデンに宛てたもの、ハウ嬢宛のもの、ノートン夫人宛のものだ。そして、最後のが君宛の一通で、「父親の屋敷に到着した暁には、手紙を一通届ける」という約束を実行したことになるわけだが、この最後のものは手元に引き留めておくことにしよう。ターヴィルが知らせてくれているような現在の君よりも、もっとその手紙を受け取るのに相応しい状態であることを確認出来るまではな。

これらすべてのものの写しは封緘され、〈死後発送分の十通の手紙の写し。J. ベルフォード殿へ〉という表題になっている。そして、まだ開いてみる暇もないわけだが、俺の指示に委ねられた書類の束の中に挟まれているのだよ。

その力がある間、令嬢が絶えず筆を執っていたのも不思議ではない。何しろ、遅くまで仕事に勤しむ日々の中で、これまで彼女の指先からあれほど多くの優れたものを生み出させることとなっていた時間を、書き物に振り向けることが出来るようになったのは、やっと最近になってのことなのだからな。俺の見るところ、あれほどの若さで、あれだけの量を、あの速さで書き上げた女性はかつていなかったように思うのだよ。この目で見たことなのだが、彼女の思考とペンの動きとが歩調を合わせており、立ち止まるとかためらうとかすることは滅多にない。また、消すとか書き換えるとかも極めてまれなのだよ。他にも並外れた才能は多いのだが、それこそ、彼女が身につけている生来の資質だったのだ。

大佐には彼宛の手紙を渡し、ハリーに対しては、すぐにもその他の手紙の配達の準備をするよう、指示を出した。

その一方で（隣の部屋へ引き下がり）、われわれは彼女の遺書を開封したのだ。読んでいるうちに、われわれはすっかり心を打たれてしまい、ある時は大佐が中断し、読み進めるよう、俺に遺書を預けてよこすし、またある時は、先へ進んでくれるよう、俺が大佐に返すといった具合だ。われわれどちらも、最後まで読み通すことは出来なかった。それぞれの声の調子に影響を及ぼすような、それほどの感じ易さを露呈することなしにはな。

ロヴィック夫人、スミスの上さん、そして、令嬢の看護婦は、各々への形見分けに関する条項を読んで聞かせると、われわれよりもさらに深く心を動かされていた。だが、詳細な点に触れるのは（俺の話の脈絡に関わるものを除き）避けることにする。頃合を見計らって、写しを送るつもりだからだよ。

大佐の話では、ハーロー邸から持参した現金と手形について説明をする用意が出来ているとのことだった。遺言の遺贈に関する部分は、それによって時を移さずに執行可能だろうとのことで、そちら関係の手形をその場で俺の手に押し込もうとするのだ。俺は目も通さずにそれを紙入れに納め、彼には次のように話したのだよ。遺言の忠実な履行を進捗させるため、彼のほうでも全力を尽くしてくれるものと期待しているので、その執行に当たっては、是非とも助言と助力を賜りたい、とな。

先祖代々の墓所に埋葬してほしいという令嬢の要望から、次のような趣旨の手紙が必要となったわけだが、大佐を説き伏せ、その筆を執ってもらうことにした。おそらく、俺との接触は一切持ちたくないと思っている一族の目に、差し出がましいように映るのは、俺自身（少なくともこんな早くにはだが）気が進まなかったのだよ。

ジェームズ・ハーロー、ジュニア殿

拝　啓

世に抜きん出て優れた女性のご逝去につきましては、本状の使者が持参いたします書面により、貴君ならびに我が縁者一同にはお知らせする必要もないものと存じます。しかしながら私は、妹さんが遺書の中で、ご一族の地下納骨所に、ご祖父の足下に埋葬してもらうよう熱望しておられることをお父上にお知らせするよう（私としては、貴君の手を煩わ

せたいと考えたのですが)、妹さんの遺書の写しをまもなく貴君にご送付くださるはずの遺言執行人から要請されているのです。

お父上のお許しが得られない場合ですが、ご遺体はお亡くなりになった教区の墓地に埋葬してもらうよう、妹さんは指示しておられます。

申し上げるまでもないことでしょうが、早急にお返事をいただかねばなりません。

妹さんの受福が始まりましたのは昨夕で、正確に六時四十分過ぎのことでした。

これ以上筆を進めることは出来ませんので、とりあえず、

敬具

WM. モーデン

九月八日　金曜日　朝

これが書き上がり、そして、大佐の許可を得て転写された頃、ハリーが長靴を履き、拍車をつけてやって来た。馬を玄関口に残してだ。そこで、俺は奴にあの一族への手紙を渡した。ノートン夫人とハウ嬢宛の手紙（全部で八通だが）に加え、ジェームズ・ハーロー宛の、先の大佐のものも一緒にだ。そして、精一杯急いで届けるよう、命じてやった。

大佐と俺は喪服を注文した。自分たちのと使用人たちのためのものだよ。

手紙　七

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

土曜日　十時

気の毒なノートン夫人が到着した。夫人は玄関口で降ろしてもらい、すぐにも二階へ向かおうとしたのだよ。ところが、スミスの上さんとロヴィック夫人が一緒で、涙に暮れていたし、スミスの上さんがあの真に尊敬すべき女性に向かって、あまりにも突然に重大な報せを漏らしたものだから、夫人は気を失い、上さんの足下に倒れてしまったのだ。それで、上さんたちは夫人の血管に息を吹き掛けねばならなかった。その結果、夫人は意識を取り戻し、悲鳴を上げることも出来るようになったのだ。それから、夫人はロヴィック夫人、そして、夫人が意識を回復したちょうどその時に入って来た俺に向かって、令嬢への賛辞、彼女への哀悼の言葉、そして、君への非難を並べ立てたのだ。しかし、その非難の数々も極めて抑制のきいたものであったから、そこに教養ある女性の姿を、そして、その嘆きの言葉には、いわばキリスト教化された感情といったものを観察することが出来たのだよ。

夫人はしきりに遺体を見たがっていた。女性たちが二階へお供をした。だが、連中の告白するところでは、この時ばかりは自分たち自身があまりにも心を打たれてしまい、すこぶる感動的な夫人の振舞いを言葉で述べるわけには行かないというのだ。

もどかしそうに身を震わせながら、夫人は棺の蓋を押し退けた。遺体の顔に涙を降り注ぎ、まるで生きているかのように、その頬と額に口づけをするのだよ。あの方ですわ、確かに、と夫人は言っていた。あの素敵なお嬢様です。お嬢様その人です。すべてに変化をもたらす死にも、この美しい目鼻立ちを変える力はなかったのです、とだ。夫人は令嬢の

死顔の晴れやかさを感心しながら眺め、こう言っていた。そうなるはずとの便りがあったが、令嬢が幸せだったのは疑いない。ただ、どれほど多くの惨めな人間を後に残して逝ったことだろうか、とだよ。そしてこの立派な婦人は、自分自身も生き長らえ、その一人になってしまったのだと嘆いていた。

夫人を説き伏せ、遺体から離れてもらうのには、連中も一苦労だったのだ。そして、皆が隣室へ移った頃、俺も仲間に加わり、愛する令嬢が遺してくれた、心の籠もった遺産の件を夫人に知らせたのだ。しかし、これは夫人の心配を軽減するというよりも、むしろ増大させることになった。夫人自らが令嬢に付き添うべきだった、と言うのだよ。心許す最愛の子が亡くなった今となっては、自分にとってこの世のことは何の意味があるのだろうかと、両手を握り締めているのだ。ただ、自分の主たる慰めは、令嬢の死後、長く生き延びはしまいということであり、生き延びないように願っても、罪にはならないものと考える、と夫人は言っていた。

この一件や他の様々な事例に窺われる所感の類似性からして、容易に看取されることだが、あの神々しいばかりの令嬢は、その優れた見解の多くのものを、この素晴らしい女性に負うていたわけだよ。

自分のための喪服の準備に取り掛からせるなら、気の毒な婦人の気持ちを紛らすことになるだろうし、それも、あながち不適切な形ではなく紛らすことになるだろうと、俺はそう考えたのだよ。時宜を得た、そして、必要な仕事に就くことによって、深い悲しみゆえのあの陰鬱な無気力状態から彼女を目覚めさせることになるからだ。大切な知人の予期せぬ死を初めて知らされた時に、気の優しい人間がよく心を掻き乱されることになる、あまりにも激しい苦悩に続いて起こるのを常としている、あの無気力状態のことだ。そんなわけで、喪服用として夫人とその息子に遺贈されていた三十ギニーを彼女に与えのだが、これは遺言人が喪服に触れた唯一の例なのだ。そこで俺は、時を移さずに彼女自身の喪服の用意に取り掛かるよう、夫人に頼んだ。国許へ運ばれるのを許された場合、夫人が遺体に付き添って行くのは疑いのないところだと考えたからだよ。

親戚の者たちが新たな怒りの種を蒔いたりしなければという条件でだが、大佐は霊柩車に随行することを提案しており、遺書の写しを持って行く予定だ。また、俺についていくらかでも有利な印象を一族の者たちに与えたいというわけで、亡くなった後で渡された俺宛の手紙の写しを持参させてほしいというのだよ。俺としては快諾した次第だ。

心痛む出来事の際に交わされる言葉のすべてを詳細に報告しようと、大佐は親切にも約束してくれているのだ。それで、われわれは友情を結び、書簡のやり取りを始めることとなったわけだが、二人の生涯の最後に至るまで、この文通を邪魔するものとしては、おそらく、ある一つの出来事以外には有り得ないことだろう。そして、そのような事態には至らないことを俺は願うのだよ。

それにしても、令嬢の死後の手紙と不幸を知らせる大佐の手紙を受け取った時、これまでは容赦することのなかったこの一族の心を捉える悲しみ、悔恨の情は、果たしてどのようなものだろうか。

遺体の国許への搬送が許されるものと仮定し、葬儀屋には俺のほうから必要な指示を与えておいた。婦人たちのほうでは、棺を香草で満たす考えだ。

大佐は持参した手形類の受け取りを俺に強いたが、祖父の死後に令嬢の地所から生じた

かなりな額の収益の分だ。
上京したことで受け取り損ねた二通の手紙の写しを、ノートン夫人に見せてやることも出来たのだ。ただ、写しを読むとそうなっていたことだろうが、夫人の悲しみをさらに募らせる必要はなかったのだよ。

ハリーが携えて行ったものだが、死後に届けられた家族宛の手紙の、その写しに目を通したところだ。俺がこの令嬢のことを神々しいと呼ぶのも無理のない話なのだ。彼女に対する連中の残酷な振舞いは非難以外の何ものにも値しないわけだが、文面のすべては非難というよりも、むしろ慰めを与えるよう目論まれているのだよ。だが、俺が連中のうちのだれかの立場にあるとしたら、彼女が辛辣この上ない非難の言葉を返し、俺への恨みを晴らしてくれていたほうが、俺としてははるかに望ましかったことだろうな。例を見ない寛大さによって、このように堂々たる勝利を収めてみせるのよりはだよ。
写しの一部を同封するが、出来るだけ早めに返却してもらいたい。

手紙　八

常に尊敬申し上げますジェームズ・ハーロー、シニア様

最も大切なお方へ
このような折でもなければ、ご厚情とご寛恕とを賜わりたいものと、思い切って顔を上げることは出来ずにおりましたのに、勇気を得ました貴方の娘は、心浮き立つような確信に溢れ、今この一筆をもちまして、畏れ多くもご面前へ罷り越そうとしているのです。と申しますのも、これがお手元に届きます頃には、この上ご不興を買うことがその娘には出来なくなっているからでございます。
今こそ祝福をさせていただきとうございます、尊敬いたしますお父様。こうして両膝をつき、筆を進めながら、祝福をさせていただきます。寛大なお心ゆえに授かりました恩恵のすべてに対し、片言を話しておりました無邪気な時期に賜りました溢れんばかりの愛情に対し、美徳を重んじる教育に対し、そして、何よりも一番に、神の恩寵を得まして、その美徳を重んじる教育の力により、これをお受け取りくださいます頃までには私が迎えておりますはずの、幸せな最期に対してでございます。そして、お願いがございます、私の尊いお父様。出来ることでしたら、不幸なこの八ヶ月を貴方の記憶から消し去っていただきたいのです。そうしていただけますなら、ご親切にも貴方のクラリッサの中に見出してくださいました喜びのこともございますので、私に有利になりますよう、ご記憶に留めていただけそうに思うのです。
なおも跪いたままの姿勢でおりますが、貴方の哀れな悔悟者に嘆願させていただきたいのです。その娘の犯しました過ちと愚行のすべてを、わけても、その娘を貴方の保護の手の及ばないところへと投げ出してしまいました、あの致命的な間違いをお許しくださいますようにです。

意思の点に関しましては、私に間違ったところは一切なかったということ、私の災難が取り返しのつかないものとなりましてからは、常に備えは怠らずにおりましたこと、そして、全能の神様は私の心からの悔恨を受け入れてくださっており、貴方も今頃は（畏れながら、そのような希望を抱いているのです）、祝福された人々の列に一人加える手立てとなってくださっているものと、私がそのように堅く堅く信じておりますことをお分かりいただけました暁には、悲しみよりも喜びを感じるのが尤もなこととお考えいただけるはずです。と申しますのは、もしも私の陥りました罠を免れていたとしますと、あまりにも魅力的な見通しを備えているようにこの目に映っておりました世の中から、手遅れとならないうちに私を引き離そうとして施された慈悲なのだと、今ではそのように見なしているわけですが、例の数々の訓練を欠くことになっていたかもしれないからです。そして、その場合には（現世の幸せにあまりにも安易に満足し）、今、これをお読みくださいます時に、畏れながら、そのように推察する次第ですが、私が（神様のお慈悲を賜りまして）享受いたしております幸せな状態へは到達しなかったかもしれないのです。

連綿と続きますこの世での至福の後に、そして、私の不幸な過ちがそれを中断させる唯一のものであるよう願っておりますが（また、それが大変に嘆かわしいものであったに違いないとは存じます）、全能の神様が、お気に召します折に、貴方に、そして、いつも尊敬申し上げておりますお母様にも、同じ至福の状態を楽しませてくださいますよう、繰り返し繰り返しお祈りをする次第です。

今はもう幸せになっております貴方の娘

クラリッサ・ハーロー

手紙　九

常に尊敬申し上げますハーロー夫人へ

尊敬いたしますマダム

大胆にもお便りを差し上げました前回の場合は、感情を損ねられた裁き人にお慈悲とお許しを請う、自らの有罪を確信する罪人の気持ちをそっくり感じながらのことでした。今回、この一筆をもちましてお傍へ伺いますが、以前よりもさらに確信を抱いてのことであります。とは申せ、非常に強い崇敬と感謝の念、そして、孝養の心を伴ってのことでもございます。私の確信の理由につきましては、お父様宛の便りで明らかでしょうし、お父様のお許しにつきましても、つつましく両膝をつきながら懇願いたしましたので、このたびは、同じ恭しい態度をもちまして、私がお与えいたしました悲しみとご迷惑に対し、貴女のご寛恕を哀願することにいたします。

折悪しく見せてしまいました軽率さにつきましては、この心臓の血管一本一本から血が滲み出るような思いをいたしておりますが、この軽率さは（行いそのものは自発的なものではございません）、そちらへ踏み出しました瞬間から、それ自体の懲罰を含んでおりましたし、また、本当の、そして、心からの悔恨の情をも伴っていたのです。

私の災難を目の当たりにして来られました神様はご承知なのです。私の災難は大きなものではありましたが、その中で最も大きかったのは、マダム、貴女に、そして、お父様に

お与えしたに違いないと承知いたしております苦痛のことでした。貴女の目やお父様の目に、そして、一族全員の目にも、非常に醜悪な姿と映りました行動によるものですが、お母様の娘といたしましては、また、お与えくださいました教育の点でも、まことにもって相応しくない行動だったのです。

でも、神様は私のことをお許しくださったものと、僭越ながら、そのように考えたいのです。そして、これがお手元に届きますその瞬間にも、畏れながら、そう確信しておりますが、神様の許しから得られます目出度い結果を享受していることになりましょう。そして、常に尊敬申し上げますお母様、次のことを貴女の慰めとしていただきたいのです。つまり、私に注がれました信仰心溢れるご配慮の主たる目的は、強く望まれておりました形でではございませんが、達成されたのだということをです。

私の致命的な過ちがご両人にもたらしました悲しみが、今後とも、この世でお二人を悩ます唯一の悲しみとなりますよう、お祈りいたします。貴女が長生きをなさり、お父様の心労を和らげ、安楽を増してくださいますことを、マダム、お祈り申し上げます。お姉様の変わることなく続く、そして、もしもそのようなことが可能ならばですが、さらに強まります孝養心が、私のせいで被られた損失を、目出度く埋め合わせてくれますことを祈っております。そして、お兄様とお姉様がいつ独身の状態をお変えになるにせよ、お母様たちご両人には大層満足が行き、私の罪を忘れさせてくれるほどのものでありますよう、また、私に喜びを見出しておられた、あの当時の私のことだけを思い出してくださいますよう祈っております。そして、最後には、永遠の住処におきまして、お許しを得ました貴女の悔悟者と目出度くお会いくださることが、数々の苦しみに清められまして、これがお手元に届きます頃には左記のとおりになっているものと、僭越ながら、すでにそのように考えております、そんな娘の喜びを一層大きくしてくれますよう祈る次第です。

幸せな、永遠に幸せな

クラリッサ・ハーロー

手紙　十

ジェームズ・ハーロー、ジュニア様

謹んで

突然に急かされてしまいましたあの軽率な行動の後、貴方を兄として、また、友として仰ぎ見ますのを許していただけそうに思われます時期は、そして、機会は、ただの一回きりでした。そして、今がその時です。これがその機会なのです。今こそ、これをお読みになり、今は亡き不幸な妹を貴方は憐れんでくださることでしょう。今こそ、妹の過失の数々は、仮想のものも実際のものも、その両方を許してくださることでしょう。そして、今こそ貴方は、妹を偲んで、以前には拒んでおられた、あの優しいお心遣いを示してくださることでしょう。

私が筆を執りますのは、まず第一に、お許しを請うためなのです。私の生憎の行いのせいで、貴方に、そして、私にはとても大切な一族の他の人々にも、不快な思いをさせてしまいました点についてです。

清廉潔白な人間は疑われるような振舞いをすべきではありませんが、ただ、私の身の上話の一部始終をご承知いただくようになりました時には、今は亡き貴方の不幸な妹のために、さらに同情の余地を　…　同情以上のものとは申しませんが　…　見つけていただけることでしょう。

あゝ、激情に駆られましても、耳を閉ざさずにいてくださったなら　…　思い違いがございましても、問い合わせてみるお気持ちになってくださったなら　…　貴方の厳格なお心が、それ自体は和らげられることがないといたしましても（皆一人一人に対して得られました力を抑えながら）、他の人たちの心がもっと優しい気持ちで膨らみますのを許してくださっていたなら　…

でも、苦しみを与えるために筆を執っているのではございません。私を許すことから生じます結果について、貴方がご自分で責任を負われるくらいなら、むしろ、依然として私に罪があるようにお考えいただくほうが有難いのです。

ですから、触れるつもりのございませんでした話題はさて置くこととといたしまして（これを筆にするに当たりまして、反駁への気持ちは克服したように思いたいからです）、一言申し上げさせていただきますが、こうして最後に、そして、これ以上ないほど真面目な態度でお便りをいたします二番目の動機は、私のこの世での破滅がその人の手の込んだ卑劣さによるものとは申せ、その男性に対しまして、どのようなものであれ、ご自分から怒りをぶつけますのは（親戚の者全員にとりましてとても大切なお命を、危険に晒すことにもなるかもしれないのです）慎まれますよう、お願いすることなのです。

罪を犯していない人間も、罪を犯した人間と同等の危険を冒すのが当然なことだというのでしょうか。同等以上の危険ではないでしょうか。罪を犯した人というのは、暴力行為に長く慣れ親しんで来ておりますし、攻撃の技にも熟練しているわけですからね。

神様の職分を勝手に自分のものになさってはいけないでしょう。神様は「復讐はわたしのすること、わたしが報復する」[四]と言っておられます。貴方がそのようなことをなさいますと、結果のことが恐ろしく、身も震える思いがいたします。と申しますのも、〈思い上がった〉罪のない人間を（この場合には、貴方がそれに当たるのです）、まさしくその過ちゆえに、それも、〈我と我が身を守る〉罪人の手で罰しますのは、神様の裁きにとっては似つかわしいことになるのではないでしょうか。度重なる犯罪行為にいつの日か復讐をしようと、その罪人を残して置くからです。

ですから、哀れな卑劣漢のことは神の裁きに委ねるのです。貴方の妹の過失は本人の死と共に消滅させていただきたいのです。少なくとも、流血の惨事となって繰り返されることのなきように願います。人生はどんなに長い場合でも、束の間の旅程なのです。これから少しいたしますと、今は若々しい頭が、この短い時間を生き延びましても、白髪となるのです。それに、もしも神様があの人に後悔の時間をお与えになるというのでしたら、貴方も当然そうなさるべきではないでしょうか。

それから、お兄様、大切な両親にとりましてはどのような結果になるのか、お考えください。娘を失うという事態をもたらした卑劣漢が、お二人の最大の希望であり、唯一の息子でもあり、家計の点からは数人の娘以上に価値があるという人間を、もしも同じように奪うようなことになったとしたらです。

苦悩の種をもたらしたという点で（不本意な、そして、心にもない理由からではござい

ますが)、お兄様、貴方は妹のことを到底許し難い者と見做しておられますのに、その苦悩をさらに募らせるおつもりなのでしょうか。

ですから、お願いでございます。妹の過ちが引き起こしました不幸な結果を増大させようとはなさらないでいただきたいのです。あの人の良心は、神様が触れてみるお気持ちになられました時には、貴方の剣よりももっと鋭い痛みをもたらすことになりましょう。

このように勿体ぶった態度でお便りいたしますのには、今一つ動機がございます。ご自分の激しいお気持ちに注意していただくよう、お願いするためなのです。私の承知いたしますところでは、貴方が犯しておられる主な罪は、ご自分が正しいとお考えの時にお見せになる気性の激しさですが、その激しささえなければ、正しい側に立たれることがもっと多くなることでしょうね。

気性が激しいために、何度かご自分の命を危険に晒したこともおありなのです。

反対されるのに耐えることが出来るというより、むしろ、対立を誘う傾向のほうが強いという人は、大変な不正を働いていることにはならないでしょうか。貴方の場合にも、性急な言動から屈辱を味わったことが何度あるでしょう。あまりにも当然な結果ですわね。

そこで、貴方の熱しやすいご気性について、ひとつ注意をさせていただきましょう。感情を動かされました際のがむしゃらな行動のことですが、貴方は本当に感情を動かされ易いわけで、予期せぬ困難へと貴方を追い込みかねないような性急さ、そして、抑制しようと努力をなさらないのはある程度罪深いことにもなる、そんな性急さのことなのです。それを抑制する能力を神様が授けてくださいますようお祈りいたしますが、現在ならびに将来に亘りまして、貴方ご自身の心の平安と安全のためなのです。また、家族の者やお友達のためにもですが、皆さんは貴方の短所に気づきながら、そのことについて触れますのには気を遣っておられるのです。

私のことですが、お兄様、私の罰は時宜を得たものだったのです。自分の災難を正しく用いる徳の力を神様はお与えくださいました。私は早いうちに悔い改めておりました。あの人はどのようなことをやってのけるのか、それを目の当たりにしました時には、あの人を憎んだのですが、その半分も愛したことはなかったのです。私は心のすべてをより良い望みへと委ねました。神様は私の懺悔を、そして、神様に頼る心を祝福してくださったのです。そして今は、厚かましいとは存じますが、幸せですと申し上げましょう。

貴方の安全と健康、そして、名誉を神様がお守りくださいますよう、また、尊い両親の慰めとして、支えとして、長生きをなさるよう祈っております。そして、独身生活を終えられます時には、貴方ご自身からと同様、どなたからも愛される奥様と一緒になり、末頼もしいお子様たちに恵まれますよう、そして、その中には、一番慰めをお与えして然るべき時に、貴方の慰安を苦々しいものとしてしまう、クラリッサのような者は一人としていないようお祈りいたします。ただ、この目で拝見し、可愛がって上げますためにも生きていたいと、かつては願っておりましたその可愛らしいお子様たちにとりまして、この偽りの多い世の中に満ち溢れております災いへの警告として、私の実例がお役に立てばと祈念する次第です。以上のことが、私の祈りなのです。

親愛の情を込めまして、貴方の妹

クラリッサ・ハーロー

手紙　十一
ハーロー嬢へ

今こそ、私の大好きなアラベラ、貴女の厳格な道徳心にも制止されることなく、憐れみの涙をこぼしていただけることでしょうね。貴女の今は亡き不幸な妹の過去の過ちと苦悩に対してですわ。今では、二度と再び貴女のお気持ちを損なうようなこともないのですからね。おそらく酌量の余地がいくらかはあるといたしましても、言い訳をするつもりなどのない過ちにつきまして、真っ先に後悔の念を起こさせてくださった（時を移さぬ後悔でした。苦難に先立つものでしたからね）神様のお慈悲が、今度は、貴女がこれを読んでおられる瞬間にも、悔い改めの成果を授けてくださるのだと、謹んで私はそのように希望する次第です。

筆を執っております間にも、想像の中では、このようにすでに清められ、高められまして、いよいよ恐れを忘れ、お姉様にお便りを差し上げるのです。そして、今は確信しているのです。怖いもの知らずの若さがお与えするかもしれない、あのちょっとした怒りの種すべてに対しまして、また、妹の堕落が貴女と家族とに背負わせました不面目に対しまして、お許しが得られますことをです。

これまで皆さんから大変好ましく思われておりましたし、貴女の称賛すべき点でもありました、例のいそいそとお示しになる孝養の心と忠順さとを、お姉様、その寛大さには精一杯感謝なさって当然な、あの大切で尊い身内の人々に捧げ続けてくださいますよう祈っております。また、貴女に相応しい縁談がございました時には、私ゆえに被りました損失のために身内の者たちの間に生じました隙間を、もっと立派な形で埋めてくださいますようお祈りいたします。

私のアラベラ、たった一人のお姉様、そして、幸せな年月を重ねております間、私の味方をしてくださいました方　…　いかに薄情な仕打ちをもってしても、いかに行動を曲解されましても、その胸から貴女への愛情を消し去ることの出来ない妹は、こうして、比べるものとてない熱意を込め、お祈りしているのです。そして、苦難を乗り越えまして、今は完全無欠な状態にしていただき（そのように願っておりますが）、自らを左記のとおり称している次第なのです。

幸せ者
クラリッサ・ハーロー

手紙　十二
ジョンならびにアントニー・ハーロー様

尊敬申しアあげますお方たち

この一文がお手元に届きます頃にはもう世を去っております、お二人の不幸な姪も、苦難のすべてが終わりを迎えましたことに気づいていることでしょう。また、慎ましやかに期待を寄せる次第ですが、衷心より悔い改めた者は許すと公言しておられます、情け深い神様のお慈悲を享受しているはずでございます。

従いまして、大好きなおじ様たち、私が筆を執っておりますのは、それも、一通の手紙をお二人両方に（お二人の兄弟愛がお二人を一心同体のようにしておりますので）宛てることになりますが、慰めとしていただくためでありまして、悲嘆を誘うためではございません。と申しますのも、私の苦悩がいかに鋭いものであったといたしましても、短い間だけのことでありましたし、また、苦難に満ちた旅の終わりにも、遅れることなく（幸せに包まれながら、と考えておりますが）到着したからでございます。

また、それと同時に、お二人の心温まる寛大さに感謝いたしますために、そして、お二人と家族の者たちとにもたらしました私の最後の、そして、たった一つの大きな過ちを許していただきますよう、お願いするために筆を執っているのです。

神の摂理には測り知れないものがございます。哀れな罪人にその本分を悟らせようとして、神意によって用いられます手段も多様なのです。ある者は愛の手に導かれ、また、ある者は恐怖に駆られまして、神聖な避難所へと赴くのです。十九年の生涯のうち十八年間に亘りまして、私は皆さんお一人お一人のご好意と愛情とを享受してまいりました。心配事がこの胸に近づくことは一切ございませんでした。絹のように滑らかな愛の糸で導かれることを予定された人間の一人なのだと、私はそのように思われていたのです。でも、おそらく、皆さんの愛情とご愛顧を得意がる傾向が強すぎたのでしょう。私が喜びを見出しておりました善行の功績を、そして、与えられたものであって、持たずにいるわけにはまいりませんでした性癖の美点を、おそらく私は、あまりにも自分自身のもののように思いがちだったのでしょう。そして今、この世での災難の原因を説明するよう促され、これまでは見抜けなかったものなのですが、懲らしめられねばならないような密かなプライドがありましたことに気づいているのです。そして、多分、耐え難く恐ろしい不幸がこの身に降り懸かることも必要だったのでしょう。私のそのプライドに、そして、私のその自惚れに屈辱を味わわせるためのことです。

そこで、誘惑の手が差し延べられました。試練の日に、私はひるんでしまいました。大変に褒めそやされておりました私の思慮深さですのに、偏りのない秤で計られるようになりますと、不足のあることが分かったのです。私は欺かれ、操を失いました。そして、お友達には笑いの種となり、おそらく私のことを鼻にかけすぎておりました家族にとりましては、恥辱の元となってしまったのです。でも、私の過ちは不埒な考えによるものではございませんでしたから、私のプライドが十分な屈辱を味わいました時には、完全に堕落させられるということも（危険に取り巻かれ、罠に掛かりはいたしましたが）ございませんでした。苦難によって清められまして、変化に適合するようにしていただいたのです。お二人がこれをお受け取りになる頃、ごく新しいこととして、また、畏れながら、そうありたいと願う次第ですが、とても幸せな気持ちで経験しております変化にです。

ですから、大切な方々、私と一緒に喜んでいただきたいのです。あのような大嵐を乗り切ったことをです。それに、若い盛りに命を絶たれますことも重大事とはしないでいただきたいのです。賢者はこう言っております。「十年、百年生きたとしても、陰府では、寿命の長さは問題とされない」(五)し、「死ぬ日は生まれる日にまさる」(六)とです。

繰り返えさせていただきますが、大切な方々、幼かった日々から過ちを犯してしまいました日、あの不幸な日まで、私にお寄せくださいましたご親切のすべてに対するものですが、私の心からの感謝を受け入れていただきたいのです。あの過ちを許していただきたい

のです。そして、左記の者は幸せな来世におきまして楽しい出会いを与えてくださいますようにと、神様に祈る次第です。

この上なき恭順な心と感謝の念を添えまして、お二人の姪

クラリッサ・ハーロー

《ハーヴィー夫人、ハウ嬢およびノートン夫人宛の、死後に送付された令嬢の手紙に関しても、ベルフォード氏は同様に詳細な説明を加えている。しかし、個々の手紙はその内容ならびに文体がそれぞれ異なるとはいえ、同一の話題に関して綴られており、かつ、相当の長さに亘るものであることから、要約するのが妥当であろうと思われる》

叔母ハーヴィー宛のものは、前掲の手紙数通と同じ、信仰心に溢れた寛大な筆致で綴られており、悲しみよりも慰めを与えようとするものである。令嬢はこう述べている。「全能の神様が私の懺悔を受け入れ、祝福してくださっているものと、私は考えております。それで、私は幸せなのです。これからの二十年、三十年、あるいは四十年の、いわゆる幸せな人生と称されるものが終わります時に、それ以上のものになることが私には可能だったのでしょうか。それに、二十年とか三十年とか四十年とか申しますと、振り返りました時には、どのような年月なのでしょうか。これらいずれの年数の半分も経たないうちに、身内のだれかのために喪に服していたかもしれません。現世的な成功のゆえに、何かの誘惑に出会っていたかもしれないのです。そして、そのような場合には、世俗の快楽に夢中になっておりますから、最期の時に至りました際、現在授かっておりますような心の用意や諦めの気持ちを与えていただくわけには、到底行かなかったことでしょう」とである。

令嬢は言葉を続け、以下のように述べている。「この神の摂理から得られます貴女と私自身にとっての慰めのことは、マダム、これくらいにいたしましょう。愛する両親につきましては、次のようにお考えになり、自ら慰めてくださるものと思います。つまり、私の過ちゆえにお掛けしたご苦労の、その埋め合わせとなるはずの神様のお恵みが、お二人にはまだたくさん残されているということ、お二人の幸せを妨害する人間になってしまいましたのは不幸なことでしたが、私のこの過ちまでは、お二人は大きな災いを一度としてご存じなかったということ、辛抱強く耐え忍びました苦難は幸福に変わることもあるということ、途切れることのない幸せをこの世で期待するわけには行かないということ、また、結局のところ、畏れながらそのように希望いたしておりますが、ご自分たちの子供が永遠の破滅に至りますのを嘆き悲しまれる見込みは、お二人にはないということ、そして、要するに、私の身の上話の一部始終が周知のこととなります頃には、私の苦難が恥辱よりも名誉のほうを高めるものであることに気づかれ、安心なさるだろう、といったことです。

このように考えますと、お二人が三人の子供の中の一人だけを（その子の置かれておりました状況も不幸なものではございましたが）一時的に失いましたことも、悲しみよりは慰めの面が大きいものと存じます。それに、時間とか罪とか、そのいずれによりましても二度と引き離されることのない、幸せな出会いをもう一度期待することも出来るわけですから、なおさらそのように思うのです」とである。

令嬢は従姉妹ドリー・ハーヴィーへの挨拶をもってこの手紙を結ぶのであるが、その娘のことを愛らしい従姉妹と呼び、自分の難儀に際しての尽力を思い起こし、謝意を表明し

ているのである。「あゝ、私の大好きな従姉妹、私のこの世での幸せにとりまして致命的となってしまいました、例の思い違いをなさいませぬよう、貴女の立派な心に見張りを置いていただきたいのです。私に与えてくださいましたあの憐れみの心は、ご気性の優しさを証明しておりますが、見た目に頼って判断を誤るようですと、その優しさが貴女を不幸へと追いやることも有り得ましょう。でも、大好きな大好きな私の従姉妹、子としての務めを厳しくお守りになることが、また、幸いなことに貴女が持っておられるような、あのように思慮深いお母様の教えが（貴女自身の一族の間で、私が示してしまいましたあのように残念な手本によって補強されたものですが）、神様のお力添えも得まして、疑いもございませんが、貴女の見張りとなり、保護手段ともなることでしょう」とである。

死後に送付されたハウ嬢宛の手紙は極めて思いやりに満ち、また、愛情溢れるものである。令嬢は次の点に喜びを見出してくれるよう、切々と訴えるのである。つまり、彼女のクラリッサの苦難も、今はすべて終わりを告げたのだということ、そして、誘惑と試練の状態、疑念と不確かさの状態も今では過ぎ去ったのだという点、また、自分の魂に対して仕掛けられた罠を目出度く免れたという点にであるが、自分が被った災難は甚だしい性質のものであり、この世で人並みの幸福を得ることすら不可能な話であっただけに、なおさらのこと、喜んでほしいと訴えるのである。

ハウ夫人ならびにヒックマン氏から受けた恩顧を、令嬢は有難いことと感謝し、ハウ嬢へと同じく、ハウ夫人にも迷惑を及ぼしている点への懸念を表明している。そして、かつては互いのために願っていた現世での幸せであるが、それがそっくりハウ嬢一人のものとなるよう祈るのである。

自分の死によってハウ嬢が失うことになる友人を埋め合わせてくれることになる日、そして、もっと身近で親密な間柄の人物を獲得することになるあの日を延期せぬよう、令嬢はハウ嬢に懇願するのである。

令嬢は、ハウ嬢が選んだのは（身内すべてから是認を得ての選択であるが）、誠実かつ正直で高潔な、そして、何よりも信仰心に溢れた男性であり、ハウ嬢の容姿を賛美してはいるが、それにも増して、彼女の心の美質を愛している男性であることを述べている。そして、年齢は束の間のものである容姿の美しさを損ねてしまうのであるが、その年齢を重ねるごとに、これらの美質は向上することも可能なのであるから、愛情を築き上げるものとして、何とも堅固な礎をヒックマン氏は選んだことになるのではないかと、令嬢はそのように結論するのである。

両人を共に神が祝福してくれるよう、また、自分についての、そして、自分の受けた苦しみについての思い出が二人の幸せの妨げとならぬよう、令嬢は祈り、自分の現在の状態だけを考えてくれるよう、また、今一度巡り合い、二度と再び引き離されることのない時がやって来るのだと考えてくれるよう、二人に頼むのである。

それまではということで、令嬢はハウ嬢を神のご加護に委ね、自分のことをあまり深刻に嘆かぬよう、二人の間に常に存在していた愛情に懸けて命じるのである。そして、途切れることなく続いた二人の友情を偲んでこぼすのは認めるわけだが、そんな思いやり溢れる涙の後で、次の点に喜びを見出してくれるよう、改めて求めるのである。つまり、自分がこれだけ早くに救済されたこと、また、自らの苦難によって清められ、そして、間違い

のないことと確信しているわけだが、神の思し召しにより、永遠の幸せを得ているということをである。

《ラヴレース氏およびモーデン氏に宛てた死後の書簡については、後ほど掲載の予定となっている。また、ノートン夫人宛の要旨についても同様である》

手紙　十三
ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

九月九日　土曜日　午後

俺は分かっているのだよ。貴公が口にする言葉といえば、貴公のことを実に遠慮なく扱っているということで、俺に対する復讐を措いて他にはないことをだ。また、例の呪わしい女とその非道の仲間連中に向けたものだろうな。俺自身に対する脅しについては、これっぽっちも気に掛けていないさ。貴公に感じさせるのが俺の意図だからな。狙いが果たされたのを知るのは楽しいものだよ。また、貴公がその感覚を失っていないというのは、慶賀の至りというものだな。

あの罰当たりな連中についてだが、貴公が脅しているこの世での火攻め、そして、連中を待ち受けているかに見える、あの世での業火は、まさしく奴らに打って付けということだな。ところで、今報せを受け取ったばかりなのだが、貴公の〈手先〉として担いだ悪事の片棒の件で、例の破廉恥婆さんを懲らしめてやるような罪は、これで十中八九、貴公も犯さずに済むというものだよ。だが、起こりそうに思われていることが、もしもあの婆さんの身に起こるとしたら、貴公も体が震えはしないだろうかな。張本人の身に降り懸かるかもしれないことのためにだよ。

もうこれ以上貴公に気を揉ませるのは止そう。昨夜、例の不届きな女は、ソールター大佐の奢りでなのだが、お気に入りの酒のアラックポンチでしたたかに酔っ払い、間違った方へ歩いて行って階段から転げ落ち、片足を折ったらしいのだ。そして今は、恐ろしい一夜の後、泡を吹き、わめいたり叫んだりしながら横たわっているのだが、燃え上がらんばかりの高熱なものだから、あいつを火炙りにして、貴公のいかなる復讐をもってしても起こさせることが出来ないほどの、痛切で長々と続く激情を抱かせるのに、他の火は一切必要ない有り様なのさ。

尋ねて来てほしいと、破廉恥婆さんから要請があった。ありきたりの使いの者では、俺が断る恐れもあるということで、あいつの不道徳な相棒、サリー・マーティンを送ってよこしたよ。この女は、ソーホーでは俺を見つけることが出来ず、こちらまでやって来たのだが、もう一つの用事としては、婆さんの邪悪な振舞いについて、神々しい令嬢の許しを得るということがあったのだ。

この悪魔の化身ともいうべきサリーが断言しているのだが、俺が令嬢の死を伝えた時ほどにショックを受けたことは、生まれてこの方一度としてないという話だ。

あいつは嗅ぎ塩を取り出していたが、失神を免れるためだ。そして、少し落ち着きを取り戻すと、令嬢の被った被害のうちで身に覚えのある部分について、我と我が身を責めて

いた。ポリー・ホートンにしても、自分の関わったことについてはそうするはずです、というのがあいつの言い種だ。そして、涙を流しながら言明するのだ。これほどの女性は二人とこの世に現れたためしはない、とな。自分たち女性に光彩を添える者であり、誉れである、と令嬢のことを呼び、その破滅については、貴公自身の悪辣さにも劣らないほど（貴公も残酷な男だが）、自分たちに責任のあることだと認めるのだ。連中が貴公の淫蕩気分を頂点まで煽り立てたりしなかったならば、貴公としては、一度ならずだが、令嬢に対して至当な報いを行いたがっていたからだというのだよ。

この恥知らずは、遺体を是非とも一目拝ませてほしいと言っていた。しかし、その要求は拒絶してやったよ。呪いの言葉を添えてな。

この素晴らしい婦人にローランドのところで加えた数々の侮辱の件を別にすれば、あらゆる点で自分を大目に見ることが出来ると、この女は言うのだよ。それ以外はすべて、暮しの糧を求めてのことに他ならないからというのだが、あいつが得意げに話していたところでは、もっと立派な見込みもあったのに、そんな羽目に追い込まれたわけであり、これはあいつと同様、何百人もの女が辿っている道だというのだな。俺としては尋ねないでおいたよ。一体だれのために追い込まれたのか、とはな。

帰り際に、あの女が話していたのだが、例の人非人の打撲は骨折よりももっと危険なもので、壊疽の懸念があるというのだ。そして、下劣な恥知らずとしても、ハーロー嬢への仕打ちを思い出すとひどく心が咎めるし、令嬢の許しを得ることにすっかり執着しているわけだから、あいつが届けようとしている報せは、間違いなく、あの恥知らずの命を縮めることになるだろう、というのだよ。

これらすべては、貴公の熟考に委ねることにしよう。

手紙　十四
ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

土曜日　夜

君の召使が、荒れ狂って手に負えない君の様子について、恐ろしい説明をしてくれているところだ。俺としては、別に驚くことではない。だが、激烈なもので長続きするものはないわけだから、おそらく、君の日頃の陽気な心がすぐにも狂気に打ち克つように思うのだよ。それに、君の興奮状態が狂乱に類するもので（君の生まれついての激しさにぴったりだよ）、鈍重な人間にとりつくあの陰気な種類のものではないだけに、なおさらそんなふうに判断したいのだ。

そんなわけで、君への便りを書き進めることにするが、俺の話が君の乱心のせいで途切れたりしないためだ。また、君が回復の暁には、その文面が君の理解につながり、反省へのよすがになってくれるようにだよ。

死後に渡すよう一族の者たちとハウ嬢とに宛てた手紙、それに、妹の死去の件と、祖父の傍らに埋葬してほしいという令嬢の願望とをジェームズ・ハーローに知らせる、大佐からの例の手紙を届け、ハリーが戻ったところだ。

ハリーはあの一族のだれの前にも通してもらえなかった。連中は全員ハーロー邸に集ま

っていたらしいのだが、令嬢が危険な状態にあることを知らせる大佐の手紙に接してのことだ(ア)。そして、ハリーが聞かされたところでは、モーデン大佐は、自分たちの決心を早めようとして、彼女の容体を大袈裟に言っていたのだという、そんな希望的観測で連中は自らを慰めていたということだ。

それゆえ、ハリーの届けた手紙が伝える悲報を受け取った際、連中の嘆きと驚きはいかばかりのものであったのか、容易に判断がつくというものだ。

あいつはその場に長く留まっていたため、屋敷中が大騒ぎになるのを目の当たりにすることになった。召使たちが別々の方向へ駆け出し、走りながら嘆きの声を上げ、両手を揉んでいる。とりわけ女中たちがそうで、だれかが（疑いもなく、ハーロー夫人だよ、お気の毒に。それに、多分、ハーヴィー夫人もだ）卒倒したみたいにだ。

誰も彼もがひどく取り乱しているものだから、あいつは何の指示も得られないし、自分に注意を向けてもらうことも出来ないのだよ。召使連中にしても、あいつを歓迎するよりは、罵りたがっている様子だ。「あゝ、大将 … あゝ、お若いの …」と、三、四人が一斉に叫んだ。「何て恐ろしい報せを持ち込んだのだろうね、お前さんも」とだ。連中は一言指図を受けるや否や、あいつが馬に乗るのを手伝っていたが、その馬にしても、到着した時にはすこぶる丁重に小屋に入れてくれていたのだよ。そこで、あいつはある旅籠へ行き、それから、徒歩でノートン夫人のところへ向かったのだ。そして、夫人が上京したことを知ると、彼女に渡すために携えて行った手紙をその息子（立派な青年だよ）に預けたのだが、この青年は、悲報に接すると、ドッとばかりに大粒の涙をこぼした。最初は令嬢の死を悼み、それから、可哀相な自分の母は一体どうなるのか、と叫んでいた。都に着いた時、大切なお嬢さんが、つまり、そうあって極めて当然なわけだが、母にとって最愛の人間がもうこの世にはいないことを知った際には、母はどのようにして耐え忍ぶのだろうか、というのだよ。

あいつはハウ嬢の元へ、彼女宛の手紙を携えて向かった。奴が教えられたところによると、あのお嬢さんは小作人の息子である一人の若者に、大急ぎでロンドンへ向かうよう指図をしたばかりだという。親友の容体について知らせてもらうためだ。また、令嬢が今も存命中という報告によって、令嬢への訪問を自分も奨励してもらえそうかどうかについてもだよ。これ以上はないほどのもどかしい気持ちで切望し、祈願している報せを若者が持ち帰り次第、というわけだが、自らの上京に向けて、一切の準備を整えておくよう指示が出されているというのだ。そして、ハリーがちょうど間に合ったため、若者は旅立たずに済んだのだよ。

あいつにも用心深いところがあって、ハウ嬢の侍女か女中と話をしたいと頼み、悲報をその女に明かした。若いお嬢さんには女のほうから伝えてもらおうとしたのだ。女中本人がすっかり心を乱してしまったため、一体どうしたことかと、大奥様が（ハリーに言わせると、同時にあらゆる場所に顔を見せる女らしいのだが）確かめに来たのだ。そして、大奥様自身、その報せに激しい打撃を受け、椅子に座り込まずにはいられないほどだったのだよ。「あゝ、素敵な方が … 」と、彼女が言った。「こんなことになるなんて … 可哀相な私のナンシー … このことはどのように打ち明けたら良いのでしょうね、私のナ

(ア)第七巻、手紙百七の冒頭部分を参照のこと。

ンシーには　…　」とだ。

ヒックマン氏が家の中にいた。大奥様を慰めようと、急いで入って来たが、本人も涙を抑えることは出来なかったのだよ。氏は、前回ロンドンに赴いた際、この悲しい出来事が間もなく起こりそうな気はしていたのだが、これほど早くなろうとは、殆ど思いも及ばないことだったと言っていた。「ただ、あの方はお幸せなのだと確信いたします」と、あの善良な紳士は言うのだよ。

少し立ち直ると、ハウ夫人は二階へ上がって行ったが、報せを娘に伝えるためだ。夫人は手紙と嗅ぎ塩とを手にして行った。そして、二人には後のほうの品が必要になったのだよ。というのは、間もなく女中頭が大急ぎで降りて来て、台所へ入ったのだが、涙で顔一面を濡らしているのだよ。お嬢様が卒倒なさったのですと、女は言っていた。また、それも驚くには当たらないというのだな。クラリッサ・ハーロー様以上に、世間全体から称賛と哀悼を受けるに相応しい淑女がこの世に存在したためしはないし、自分の屋敷のお嬢様と令嬢との間の友情を凌ぐような強い友情が、死によって無に帰したことも一度としてなかったから、というのだよ。

女は火の点った蝋燭、それに、羽毛を携え、そそくさと立ち去った。お嬢さんの鼻の下で燻すためだが、そのことからして、お嬢さんは気を失ったままでいるというわけだ。

後ほどヒックマン氏は、いつもの慈悲心からだが、ちょうど日暮れ時でもあり、ハリーが一晩世話を受けられるよう指示したのだ。彼は俺の様子をあいつに尋ねた。彼自身としては、熱愛して止まない令嬢の当然至極な嘆きように対し、また、女性の中でも最も秀でた者の死に対し、はなはだしく心痛めている旨を表明していた。だが、故人となった令嬢のことを、彼は光の天使と呼んでいた。「私たちは送られてきた手紙を読むのが怖かったのだ」と、彼は言っていた（お前のご主人に伝えてくれ、とな）。「だが、その必要はなかったのだよ。神聖な手で綴られた神聖な手紙なのだ。ただ、彼女が与えようと目指している慰めも、差し当たっては、あのように秀でた人を失ったのだという、私たち全員が抱く気持ちを募らせることになるだろうな。彼女の兄を自称するという栄誉に、その資格もなしに浴しているような人間ではないことを、私は神に感謝していると、そのようにベルフォード氏に伝えてほしいのだよ」とだ。

この大惨劇で（そう呼んで構わないだろう。何しろ、実に多くの人間に関わりのある事柄なのだからな）、貴公がどれほど辛い思いをしているのか、俺は承知している。その報せに初めて接してハーロー家の者たちが覚えた苦悩の子細について、俺は知りたかったような気もするのだ。ただ、気の毒な母親のことは、だれしも哀れに思うことだろうな。

妹の死を告知するモーデン大佐の手紙、そして、埋葬に関する妹の要請に対するジェームズ・ハーローの返答は、連中の懸念がいかなるものなのかについて、朧気ながら暗示してくれることだろう。以下に掲げるのがその写しだ。

ウィリアム・モーデン殿

九月九日　土曜日

親愛なる従兄弟へ

かつてわれわれにもたらされた中でも最悪の悲報に接し、われわれ一同の苦悩はいかば

かりのものか、表す言葉も見出せないのです。

妹のアラベラが（だが、悲しいことに、今はもう妹は他にいないのです）、ノートン夫人の後を追い、上京の準備を整えておりましたし、私も妹に付き添い、愛すべきあの娘のところに立ち寄る決心をしていたのです。

われわれのすべてに神の慈悲を祈るばかりです。あの娘がこんなにも間近に死期を迎えているのであれば、何が目的で医者は筆を執ったのでしょうか。だれもが言っているように、何故もっと早くに届けてくれなかったのでしょう。また、一体、どうして届けてよこしたりしたのでしょうか。

かつて道を踏み外した者の中では、最も称賛に値する娘だったのです。身内一人に付き添われることもなく …… あゝ、心配しておりますのは、母がこの打撃から立ち直ることは決してないのでは、という点です。悲報に接してからというもの、母は一時間ごとにひきつけを起こしているのです。気の毒な父は胃に鋭い痛みが走っているのです。もしかすると …… あゝ、従兄弟よ、あゝ、一族の名誉のことを別にすると、私に他意はなかったのです。それなのに、すべての責任をこの身に負わされているのです …… ［あゝ、この忌々しいラヴレースめ …… あいつが当然の報いを免れるようなら、この身は滅びることになっても構わないのだ］(ア)。

あの娘をここに迎えられるのも間もなくだと、われわれは楽しみにし始めていたところだったのですが、何ということなのでしょう …… あまりにも突然にわれわれを捨て去った後、次にこの屋敷の敷居を跨ぐのが、棺に納まってのことだとは ……

あの娘の決めた遺言執行人と（これまた、あの愛すべき娘が取った奇妙な行動の一つですが）交渉を持つようなことは、われわれとしては一切いたしかねるところです。われわれが交渉に臨むとは、ご当人も期待してはおられないでしょうし、いやしくも紳士であれば、その任に当たろうなどとはお考えにならないはずです。従いまして、遺体はわれわれのところまで搬送するよう、葬儀屋にご指示いただければ幸いです。

母が申しますには、生前は目にするわけに行かなかった愛娘なのに、死後も目にすることが適わないのだとしたら、自分は永久に不幸な思いをするだろうと言うのです。ですから、蓋のネジ留めは半分だけにしておくよう、ご指示願いたいのです。母の意向に（そのようにショッキングな光景は避けるよう、哀れな母を言い含めることが出来ない場合はですが）沿うためのことです。母の最愛の娘でしたから ……

葬儀についてのあの娘の遺志が分かりました暁には、遅滞のない対応処置が取られることになりましょう。執行されるのが適切、ないし、正当な事柄すべてにつきましても同様ですし、また、他人の介在なしに執り行なわれることとなりましょう。

この心塞ぐ折には、ご参列くださるわけにはまいらぬものでしょうか。是非ともご参列願います。そして、前回の出会いの際の出来事につきましては、勇敢にして賢明なる者には生まれつき備わる、あの寛大な心をもって憐れみ、ご容赦をいただきたいのです。だれもが宜しくと申しております。

表しようもなき苦悩を胸に、貴方の従兄弟、そして、しもべ

JA・ハーロー、ジュニア

(ア) 角括弧（［ ］）で括られている語については、ラヴレース氏に宛てた写しにおいては削除された。

「執行されるのが〈適切、ないし、正当な事柄すべて〉ですと［と、大佐が読むのを聞くと、彼に向かって、俺は先の手紙の文句を鸚鵡返ししてしまったのだ］。令嬢が指示しておられる、実行可能なものはすべてそうですよ。私といたしましては、大佐、皆さんと争いたくはありません。皆さんのほうでは私との交際をお望みではありませんが、それは私とて同じことなのです。ただ、貴方には皆さんと私との仲立ちをしていただかねばなりませんね。と言いますのも、私といたしましては、すべての項目に亘り、字句どおりの執行を主張する所存だからです」　俺はこう言ったのだ。

俺の決心を支持すると、大佐は親切にもそう言明してくれたのだよ。

手紙　十五
ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

九月十日　日曜日　午前八時

俺はスミスのところに留まり、神々しい令嬢に属するもので、空蝉の身に関わるものすべてについて処分を完了した。

令嬢は数人の者への指輪の遺贈を遺言で指示してあるのだが、水晶に埋め込んでもらうよう、自分の髪の毛も添えてとのことであり、悲しみに打ちひしがれているノートン夫人が、棺の閉じられる前に、美しい巻き毛を四房切り取ったのだ。その一つは大佐が受け取ったが、ロケット用にとのことで、大佐の言葉によると、ロケットを一つ作らせ、最愛の従姉妹を偲ぶよすがとして、心臓のすぐ近くに着けておくとのことだ。

朝の四時から五時までの間に、遺体は霊柩車に収納されたが、それに先立ち、予定のとおり、棺は花と香草とで満たされ、霊柩車の揺れのために遺体に傷がつくのを（見た目にだが）防ぐよう、適切な処置が取られた。

気の毒に、ノートン夫人の具合がひどく悪いのだ。スミスの上さんの女中には（葬儀用のチャリオットでのお供を命じてあるのだよ）、夫人の面倒を見るよう、特別に指示しておいた。大佐のほうでも、霊柩車が見える程度の距離を置き、召使たちと馬で進むことになっているが、夫人についての俺の命令が実行されるよう注意すると言ってくれている。

霊柩車が出発し、見えなくなると、俺は令嬢の部屋に錠をおろして締め切ったが、令嬢の持ち物はすべてあそこに移されていたのだよ。

あちらに着き次第ということだが、大佐からの便りが、大佐自身の召使の手で届けられるはずなのだ。

手紙　十六
モーブレー氏からジョン・ベルフォード氏へ

日曜日　午前九時、アクスブリッヂにて

親愛なるジャックへ

ラヴレースの手紙を同封する。忌々しい記号で書き記されてはいるが、彼がどれほど奇

妙な状態なのかを証明してくれるような代物であるのは承知している。というのも、彼は悲劇役者まがいの態度で、われわれに読み聞かせてくれたのだ。われわれが皆して口を挟まなかったら、あの気違いは何をする気だったのか、君にも分かることだろう。ここの外科医を連れて実際に出発しようとしていたのだ。令嬢の体を切り開いて防腐処置を施そうというのだよ。もしもそうしていたら、令嬢の心臓が鉄か大理石か、そのいずれかで出来ているのが分かったことだろう。それが俺の絶対的な確信だよ。その確信が持てないようなら、この身は朽ち果てても構わない心境だ。

彼のところまで、M卿にご足労をいただいた。令嬢の死には、卿も大層心を痛めておられるのだ。卿がおっしゃるには、お妹さんや姪御さんたちの胸が今にも張り裂けそうになっているそうだ。ただの女一人に何て騒ぎなのだろうな、ここでは。結局、あの令嬢にしても、それ以上のものではなかったのだからな。

われわれは乱暴者のどす黒い血を、手桶一杯分ほど彼から抜き取った。彼もこれで少しおとなしくなったのだ。だが、モーデン大佐に脅しをかけているし、悪質な非難の数々について［まったく悪質な非難だよ、ジャック］、君にも仕返しをすると息巻いている。そして、世間の者たちすべてと自分自身とをいまだに呪っているのだよ。

昨夜、彼の喪服が届けられた（妻のために着るのと同じ、黒一色のものだ）。下男たちの喪服もだよ。八時だったのだが、彼はどうしても着ると言う。そして、下男たちには喪服姿で仕えさせようとするのだ。

この令嬢の件では、だれもが彼を非難している。だが、どうしてなのか分からないのだよ、俺には。美徳にこだわるガミガミ女だったのさ。何て好い奴を台無しにしてくれたのだろうな、彼女も。それに、なあ、ジャック、彼女の身内のほうが彼より十倍罪が重いのだよ。この点は、あの連中全員の目の前で証明してみせるぞ。彼女を虐待するような真似が連中には出来るのであれば、彼女を大切に扱ってくれるよう、彼に期待を寄せるいわれがどこにあるというのだ。君にしても俺にしても、あるいはターヴィルにしても、彼と同じ立場に置かれたら、同じように振る舞っていたことだろう。娘たちはすべて、前もって警告されているのではないのかな。あの卑劣漢のマイルズが農夫の娘（やはり可愛いらしい娘で、ちょうどボブのローズバッドみたいな娘だ）に加えたのと同じ仕打ちを、彼も令嬢に加えたというのだろうか。ある貴婦人に仕えるのだと思い込ませ、その娘を騙して都へ連れ出したのだよ。貴婦人は外出中だと偽って、娘をあちこち引っ張り回した。酒を飲ませ、気持ちをほぐしてやった上、芝居へ連れて行ったのだ。それからでは、君も分かるだろうが、貴婦人とやらへのお目通りは遅すぎるのだよ。そこで、曖昧宿へしけ込み、連中の言い方をすれば、娘を傷物にしたというわけさ。それも、その日の内にだ。さらに二週間か三週間、娘を引き止めておき（あくどいろくでなしでもあるのだ）、その後、曖昧宿の連中のなすがままに任せたのだ（何一つ支払いはせずにな）。連中は娘の着ているものをすべて剥ぎ取った。そして、娘が仕事に就こうとしないものだから、監獄にほうり込んだのだが、困窮と絶望のうちに、娘は獄死を遂げたというわけだ。貴公も承知だろうが、これは実話なのだ、ジャック。こんな輩は地獄に落ちるのが当然なのさ。だが、われわれのボブはこれほどの悪党だったのか。それに、彼はこの非情な心を持ったお嬢さんと結婚までしようとしたのではなかったのかな。従って、実に明白なわけだが、彼の場合は申し開きが立つということなのだよ。

だとすると、どうしてなのだ、あの忌々しい良心の呵責が彼を捉えるのは。彼がこれほどの意気地無しだったとは、だれが思ったことだろう。彼が隅っこに声もなく座り込んでいるのを［困った犬ころだよ］今目にしようとはな。空威張りを装うことに、また、理屈をこねることに（彼ほど理屈っぽい者がどこにいるだろう）疲れ果て、羽目板に向かってしかめ面をして見せるよう、自分の影に教えているのだよ。とてもじゃないが、彼には我慢がならないのだ。

だが、ここ十日間、彼は寝ていないのだ。それが問題なのだよ。便りをしてもらわなければならんな。是非とも、彼を宥めてやってほしいのだ、ジャック。そして、彼が書面で要求するものを書き送ってもらいたい。彼の思いどおりにさせてほしいのだよ。それ以外には、とてもじゃないが彼を我慢するわけには行かないのだ。それから、出来るだけ急いで令嬢を埋葬し、その場所を彼には知らせないことだな。

この手紙は昨日送るはずだった。彼にはそのように話したのだ。ただ、彼が手紙のことを重ねて尋ねはしまいと思っていたのだよ。ところが、何の返事も来ないもので、彼は大荒れなのだ。

君の他の手紙についてお読みくださった事柄が大層興味を引いたため、卿は君が報告を続けてくれるようお望みだ。是非そうしてもらいたい。ただ、忌々しいアラビア語を使うのは止めてくれ。われわれとしても、あの哀れな男には、彼の現在の状態に相応しいと思われるものだけを知らせてやるつもりだよ。

こちらでは、とてつもなく退屈でつまらない日々を送っている。今は亡きベルトンについてつい先日目にしたことやら、この好男子について現在目にしていることやらのためなのだが、俺も間もなく彼と同じくらいに気が狂ってしまいそうだし、あるいは、貴公と似たり寄ったりの退屈な人間になってしまいそうなのだよ、ジャック。だから、君らのどちらよりももっとましな仲間をロンドンで探さねばなるまいな。時々読書を強いられている有り様だが、気を紛らすためだ。俺の読書嫌いは知っているだろう。すぐに眠気が襲って来て、やたらに欠伸と伸びをしてしまうのだよ。

それでも、ドライデンの『パラモンとアーサイト』(七)の中で、ボブの場合とそっくりの話が出ている一節を今見つけたところなのだ。以下にその数行を示しておこう。

《次いでモーブレー氏は、狂気に陥った男を描いているその詩から数行を復唱し、比較例証を行った上、自らの手際を自慢しつつ、以下のように述べるのである》

ひとつ言わせてもらいたいのだが、もしも俺が君やラヴレースと同じくらいに早くから筆に馴染んでいたなら、君らのどちらにも負けないほど頭角を現していただろうな。そうならない理由はないのだよ。だが、子供の頃も、大人になっても、いつだって本が大嫌いだったのだよ、俺は。嘘をつくのは愚かなことだ。俺は行動派だったのだな。のらくらするのが大嫌いで、以前には、先生に言われて書物から利益を得ることとなった生徒の数よりも、俺が書物から引き離してやった生徒の数のほうが多かったのだよ。蹴ったり殴ったりの立回りに果樹園荒らし、俺が若い頃に得意にしていたのはそんなところなのさ。

だが、書くことに疲れたよ。俺の生涯で、これだけ長い手紙は書いたためしもない。手首と指とが、親指も含め、えらく痛むのだな。ペンが、少なく見積もっても、ハンドレッ

ドウェート（八）の重さだ。それに、両の眼が今にも顔を離れ、便箋の上に落ちてしまいそうなのだよ。つい今し方も、指たちが痙攣を起こしたのだ。鷲鳥と鵞ペンなどはくたばってしまえ、といったところだな。この先十二ヶ月間は、もう長い手紙は書かないことにするさ。ただ、一言加えておく。われわれの考えでは、あの気の触れた男は正気を取り戻しつつあるようだぞ。あばよ

手紙　十七
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

九月九日　土曜日、アクスブリッヂにて

ジャックへ

永遠に愛すべき、我が愛しの令嬢が切開され、防腐処置を施されるのは絶対に正しいことだと思うのだ。即座に、今日の午後にも行われねばならんのだよ。外科医は君も知っているトムキンズと、俺が一緒に連れて行くつもりなのだが、ここの老医師、アンダーソンを予定している。アンダーソンには話をしてあるのだよ。

すべてに亘って事情に見合った、また、我が最愛の者の神聖な体に似つかわしい作法に則って実施されるよう、取り計らうつもりでいる。

我が魅惑の君の腐朽を防ぐために取り得る処置についても、そのすべてが行われることになるだろう。そして、彼女が元の塵へと戻ろうとする時、つまり、もうその姿を保つことが出来なくなった時には、我が一族の地下納骨所に、俺の父親と母親の間に彼女を横たえてもらうのだ。俺自身、胸のうちでもそう考えているわけであり、身を以て喪主の任に就く覚悟だよ。だが、このように疑うべくもない権利を俺が有している彼女の心臓については、かつてはあれだけ大きな部分を俺が占めていたわけであるし、俺自身のもの以上に大切にするつもりでもあるから、俺がいただくことにする。アルコールに保存しておくのだよ。決して、俺の目から離れるようなことはないだろうな。また、埋葬の費用一切についても、俺が持つことにする。

間違いないが、彼女に対する俺の権利に疑義を挟む者は一人もいないはずだ。生きている時はだれのものだったのだ。俺より他の、だれのものとして死んだというのだ。忌々しい彼女の両親にしても、連中の残酷な仕打ちこそが、疑いもなく、彼女の死の真の原因なのだが、彼女との縁はずっと前から切っていたのだよ。彼女は俺のために両親を捨てたのだ。従って、彼女が選んだのは俺なのだよ。俺は彼女の夫だったのだ。彼女に対して俺が悪党みたいな振舞いをしたからといって、何だというのだ。今その償いをするのではないのかな、俺は。そんな振舞いに出なかったなら、彼女は俺のものにならなかったというのだろうか。だれ一人、そうなっていたことを疑う者はいないのだよ。それに、彼女は俺を許してくれたのではないのかな。だとすれば、彼女に対しては、〈原状回復〉ということになりはしないかな。何の無礼も働かなかったかのようにだよ。だとすれば、俺以外のだれのものになり得るというのだ、彼女は。

遺言執行人の職務、そして、すべての務めから君を解放することにしよう。

注意してもらいたいのだ、ベルフォード。これにより俺は、君ならびにすべての者たち

を、彼女に関わるあらゆる務め、そして、骨折りから、実際に放免するということだ。そして、彼女の遺言に関しては、俺自らその執行に当たるつもりだ。

われわれの間では何の契約も交わされなかったのだ。また、不動産処分も行われていない。それに、彼女が俺のものであることは、君も知ってのとおり、はっきりと証明済みであるし、彼女にしても、俺の意向に沿う形でなければ、自分の身の振り方を決めることは出来なかったのだ。仮にも俺が、すべての敵対者を相手に、自らの権利を遂行せずにいるようであれば、地獄落ちにも甘んじようではないか。

人の情けが宿る場所ということだが、彼女の内臓については、身内の者たちが切望しているのであれば、また、連中が極めて謙虚で、悲嘆にくれているのであれば（連中自身はそういった内臓を一切持ち合わせていないのだよ）、送り届けてやることにしよう。先祖と一緒に置いてもらうためだが、彼女が違う指示をしているのなら、話は別だ。何しろ、遠ざけていられるかぎり、出来るだけ長い間、彼女を卑しい土には委ねずにおくという点以外では、彼女の遺言はすべてに亘って遂行されることになるからだよ。

とりあえず、彼女の毛髪を一房注文しておこう。

これは命令だが、彼女の遺言のどの部分についても、俺からの特別の指示がないかぎりは動かないことだな。すべてに亘って、俺自身が指揮を執ることにする。俺は彼女の夫ではないのかな。それに、彼女の許しを得ていることでもあり、最愛の者として選ばれているのではないのかな、俺は。他のどんな意味があるというのだ、彼女の許しには。

君が送ってよこした、あの我慢のならない恥知らず二名がやたらに俺に纏いつき、紐でつながれた赤ん坊みたいな扱い方をするのだよ。一体全体どういうつもりなのだ、忌々しい奴らめ。だが、あのちんばの猿のドールマンが奴らに加わっているのだ。そして、奴らが囁いているところによると、M卿を迎えに使いを出したというのだ。俺を抑えつけるためだろうな、察するに。

一体どういうつもりなのだ、この扱いは。間違いない。俺一人を除いて、この世の人間すべてが狂っているのだ。世の連中は、自分たち一人一人に向けられるべき態度で俺を扱っている。この世界全体が一つの巨大なベドラムに他ならないのだ。神よこの世界を、そして、この世のものすべてを打ち壊したまえ、ということだな。何しろ、今や我が最愛のクラリッサ・ラヴレースは　…　もうハーローなどではないのだよ　…　あの名前に、そして、あの名で呼ばれる者すべてに呪いのあらんことを　…

何のために君宛に筆を執っているのかというと、

一．彼女と関わりのあるいかなる事柄についても、君が嘴を挟むのを禁じるためだ。また、モーデンの干渉も禁じるためなのだよ。俺の記憶が正しければ、あいつは俺に脅しを掛け、呪い、不躾に振る舞ったのだ。俺の怒りを避けたいというのなら、彼女の元を立ち去らせることだな。

二．彼女の毛髪を一房、これを持参する者に託して急送してもらうためだ。

三．切開と防腐処置に向けて万端の準備を整えてもらうよう、トムキンズに約束させるためだ。アンダーソンは俺が連れて行く。

四．俺がすぐにも熟読、検討出来るよう、彼女の遺言ならびに一切合切を用意してもらうためだ。

大切な彼女の心臓は今晩中に手に入れるつもりだよ。そして、黄金製のものを作らせる

までの間だが、適当な容器とアルコールとをトムキンズに用意してもらうのさ。

彼女の文書類は俺が引き取ることにする。故人の霊を正当に評する点で、俺に匹敵する者はいないのだし、また、自分自身に対しても俺は手心を加えたりはしないわけだが、だとすれば、彼女の実際の姿について、そして、彼女を虐待して憚らない男がどんな悪党だったのかについて、俺よりもうまく世間に知らせることの出来る者は、果たしているのだろうか。それに、どれほど無慈悲で尊敬に値しない両親を彼女は持っていたのか、その点についても世間は知ることになるだろう。

すべては文書により、詳細に述べられることになるだろう。遠回しな言い方は一切なしだ。事実と同様、名前についても隠し立てはしない。というのも、俺自身が最低の姿をその中で晒すことになるのだし、それに、自分自身のことは、他のだれにも出来ない形で扱う権利を有しているわけだからな。だれが俺を抑えつけるというのだ。俺に釈明を求めるような生意気な奴がどこにいるというのだ。

ひとつ教えてもらいたいのだが、あの忌々しい母さんは、今も悪魔本人の復讐の主題となっているのだろうか。つまり、あの恥知らずな婆さんは死んだのか、それとも、生きているのか、ということだ。俺はまだやらねばならないのだよ。見せしめとなるちょっとしたいたずらをな。復讐として、あの性悪と、残酷なハーロー一族のうちで俺に歯向かっている者全員を地上から一掃してやるのだ。我がクラリッサ・ラヴレースの霊前には、山のような生け贄が供えられねばならんのだよ。

彼女の遺志はいくつかの点で俺の希望と衝突するかもしれないが、俺の意向に従ってもらいたい。俺が彼女の遺志の解説役になるのだよ。

俺の意向の次には、彼女の気持ちに従ってもらうことにする。彼女は俺の妻であり、未来永劫そのはずだからだよ。俺としては、二度と再び妻は娶らないつもりだ。

さらばだ、ジャック。君と落ち合う準備を進めている。君も俺の命、あるいは、君自身の命を大切に思うわけだから命令するのだが、我がクラリッサ・ラヴレースに関わる事柄については、何ごとにせよ、俺には歯向かわないことだな。

俺の気性はすっかり変わってしまったよ。笑うということ、微笑むということ、あるいは、愉快に思うということはどういうことなのか、分からないのだ。激しやすくて堪え性がなく、抑制を受け入れようとしないのだよ。

かつてよくやったように、これも暗号で書いているのだが、俺の筆にするものが君以外の人間にはだれにも分からないようにというわけなのだ。何しろ、差し出がましい連中に悩まされたということでは、俺に優る者などはいまだかつていなかったのだからな。

R. ラヴレース

［前掲の手紙に同封され、別紙に記載されたもの］

なおも暗号を用いて言わせてもらうが、つい今し方も、恐るべき状態だったのだ。燃え盛るかまどの上の大釜のように、俺の脳髄は煮えたぎっている。一体全体どうしたというのだろうな、俺は。生まれてこの方、こんな奇妙な状態はかつてなかったことだ。

確かに、ジャック、俺は実にひどい悪党だったよ。そして、この天使のごとき女性に対する俺の行いすべてについて、また、俺が手を貸して消滅させてしまった彼女の信仰、慈

悲心、機知、美、そして、それにより実現を妨げる手立てとなったわけだが、世間にもたらされるはずであった利益のこと、それらに思いを馳せる時、我と我が身に向かって地獄行きを宣告することも可能なのだよ。だとすれば、どこか他のところに慈悲を期待するような真似がどうして出来るというのだ。

顔を合わせた時には、君のことが堪え切れなくなるはずだ。君の忌々しい嫌味や言いがかりのせいで、俺の脳味噌はほとんど逆様状態なのだよ。

だが、M卿がお着きだそうだ。連中の話ではな。くたばってしまえ。卿も、卿に使いを出した連中もだよ。

何を書いてきたのか、自分でも分からない。ただ、彼女の大事な心臓と毛髪一房は、だれが反対しようと、俺がいただくことにするぞ。何故かと言って、俺のものではないのかな、彼女は。他のだれのものになり得るというのだ。父親もいないければ、母親もいないのだし、姉も兄も、身内もいないのだよ。俺以外にはな。我が最愛の女は俺のものだし、俺は彼女のものなのだ。それで十分なのだよ。だが、あゝ　…

あの娘はいない。死の毒気にすっかり冷えきってしまったのだ。
あの香しい扉、あの娘の唇もぴたりと固く閉ざされており、
吹きつける命の風をもってしても、再び開くことはない（九）。

そうなのだろうか。本当にそうなのだろうか。おゝ、神よ。おゝ、神よ。だが、書き続けさせてはくれないのだよ、連中が。このお節介焼きの貴族のところへ降りて行かねばならん。一体だれなのだ、卿に使いを出したりしたのは。

手紙　十八
ベルフォード氏からリチャード・モーブレー氏へ

九月十日　日曜日　午後四時

君の便りは受け取った。われわれの不幸な友人の手紙が同封されているやつだよ。卿が彼の傍についておられるとのこと、嬉しく思う。察するに、彼の錯乱状態も短期間しか続かないようにも思うので、回復の暁には、国を出るようにとの説得に応じてもらえたならと、切に願う次第だ。モーデン氏は、諦め切れないこともあって、今回の件が一般的な婦女誘拐の枠を超えたものであることを遺書によって知り（実際、読まないうちから、そんなことだろうと勘ぐっていたのだが）、その点では、死に瀕している令嬢と交わした約束からは放免されたように考える旨を、すでに仄めかしているのだ。つまり、令嬢の死に対して、復讐を求めはしないという約束についてだがね。

この点に関して彼を促す際、動機として持ち出すのは、健康回復のためということでなければいけないな。何しろ、彼自身の身の安全のことを仄めかしたりすれば、彼は動こうとせず、むしろ、大佐を捜し求めるからだよ。

毛髪一房に関してだが、彼が固執するようであれば、似た色の髪の毛で（君はあの天使に一度会っているわけだし）宥めてやることも容易に出来るだろう。

卿のご要望もあり、記述を続けるつもりだ。普通の書体を用いることにするが、現段階でラヴレース君に読み聞かせるのに妥当なものと妥当でないものとを、君にも判断出来るようにというわけだよ。ただ、筆を進めるに当たって、回復の暁には彼の心に届くようにと願ってのことなのだが、咎めの言葉も禁じ得ないだろうから、やはり彼に宛てて、それも、彼が錯乱状態ではないかのように書き送るのが最善の策のように思うのだ。

写しを作る暇はないのだが、ただ、俺自身が今後検討を加えるために、事の一部始終を手元に置いておきたいと思うので、ひとつ言っておかねばならないが、暫くしたら、俺の手紙は返却してもらいたいということだ。これが俺の条件の一つであることは、ラヴレース君も承知しているし、また、これまでのところ、その点は承諾もしているのだよ。

貴公の手紙は、モーブレー、天下無類の大仕事だよ。摩訶不思議な、計り知れないところのある男だな、貴公も。だが、貴公には、そして、いたずらに騒ぎ立てるターヴィルにもだが、折り入って頼みたいことがあるのだ。今は亡きベルトンの死去に際して君たちが目の当たりにしたことや、我らが友人ラヴレースの錯乱ぶりとその誘因、また、恥知らずなシンクレアが置かれている恐るべき状態をきっかけとして、すぐにも生活を変えることに取り掛かってもらいたいのだよ。俺自身としては、君たちの決心がどのようなものであっても、今進呈している忠告に従う覚悟だ。

俺の姿をもってその証に代えさせてもらおう。

J. ベルフォード

手紙　十九

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

おゝ、ラヴレース　：　恥知らずなシンクレアに関してだが、ひとつ描いてみせねばならない場面がある。ありのままに描写すれば、君も真面目に思案し、反省を促されるような場面なのだが、そうならないようなら、君の場合は、何をもってしても駄目というわけだな。順を追ってその場面へと向かうつもりだ。それも、貴公自身と同じく、貴公の仲間たちにも読み取れるよう、通常の書体を用いることにする。

前回の手紙を書き終えた時には、我が身をどう処したら良いのか分からなかったし、今では永久に失ってしまった、あの喜ばしくもあれば、また、ためにもなる会話のことを思い起こし、空しく希求していたわけだが、しばらく前から始めてみようと心に決めていた務めを開始しても良さそうに思ったのだよ。つまり、礼拝式に出席し、そこで耳にすることから、何らかの利益を上げることは出来ないものか、調べて見ようということだ。そんなわけで、セントジェームズ教会でなのだが、著名な説教家の話を聞きに行く決心をしたのだ。ところが、俺の意図を挫くのは自分の役目だとばかり、まるで悪魔本人が（あの時は、そんな結論に飛びつきたい気持ちだったのだが）思い込んだみたいに、ちょうど身支度が終わった頃に人が訪ねてきたため、俺は予定が狂ってしまったのだ。

一体、だれが訪ねてきたのかと思いきや、サリー・マーティンで、忌々しいシンクレアの妹、カーター夫人が付き添っているのだよ。君には話すまでもないかとは思うが、ブルームズベリー近くで曖昧宿を経営している例の女だ。

この者たちが話してくれたところでは、あの恥知らずな女について、外科医も薬剤師も内科医も、皆揃って匙を投げているのだが、あの女のほうでは、俺を一目見るまでは死ぬに死ねないし、心休まることもないと言っているのだそうだ。そして、もしも俺に慈悲のかけら、連中に言わせると、キリスト教徒の慈悲心というわけだが、そのかけらでも残っているなら、自分たちの乗って来た馬車で同行してくれるようにと懇願するのだよ。

こんな有難くもない要請によって、それも、これだけ忌み嫌われている奴らからの要請によって、目的としているところから注意を逸らされるのは、俺としてはひどく気が進まなかったのだ。だが、とうとう同行することになり、十時にはあちらへ到着した。あそこで俺の眼前に繰り広げられたのは、実にショッキングな光景だったから、気の毒にも落胆傷心のうちに世を去ったベルトンの死でさえ、それとは比べものにならないと思われるほどなのだよ。

あの恥知らずは猛烈に暴れて片方の足を挫いてしまったし、奴を救うのは不可能で、壊疽の症状も出始めているという外科医の言葉に、前の晩からずっと泣き叫び、怒鳴り散らし、悪態をついていたのだよ。それが大変な勢いなものだから、連中としても、ただただ自分たちの耳のことを気の毒に思い、別の外科医を呼ばざるを得なくなったのだ。自分の下した診断には反しているのだが、(もう一方の外科医の友人ということもあって)、相手を説得するような様子を装い、彼は見立て違いをしているということ、また、おとなしくしていれば回復の可能性もあるということを、母さんに話してやるためのことなのだ。だが、それでも、母さんの死に対する不安や、死ぬなどという考えを忌み嫌う気持ちがあまりにも強かったため、医者たちのごまかしも所期の効果を上げることなく、俺が到着した時、母さんはわめいたり、叫んだり、悪態をついたり、果ては、唸り声さえも上げていたのだよ。それは人間というよりも、むしろ狼に近いものだった。だから、階段を昇りながら、俺はこんなふうに言ったくらいなのだ。「まさか、あの不幸な女からのものなんてことじゃないだろうな、この大声、この唸り声というのは」とな。「そうなのよ」とサリーは言っていた。それでも、一晩中上げていた叫び声とは比べ物にならないことを請け合っていたよ。そして、俺よりも先に部屋に入ると、「ねえ、シンクレアお母さん、その叫び声は堪えてくださいね。女の人というよりも、牡牛ですわよ、それじゃあ。ベルフォードさんがお見えですわ。そんなふうに唸っていたのでは、恐れをなして立ち去ってしまわれますわよ、あの方も」と言っていた。

俺が入って行くと、パートナーの一人のポリー・ホートンを筆頭に、少なくても八人の忌まわしい娘どもが母さんのベッドを取り囲んでいた。そして今、もう一人のパートナーのサリーが加わり、連中の呼び方だが(皆、互い同士では「マダム」だから)、マダム・カーターが十人目というわけだ。皆ゾッとするようなだらしのない服装で、コルセットも着けていないのだ。サリーとカーター、それに、ポリーは別だったが、この者たちは、母さんを独りにしておくのが怖くて、一晩中ベッドに入らなかったのだよ。

他の七人はやっと起きたばかりという様子で、おそらく、表のほうの店の客のところから、そして、夜のご乱行から起き出してきたのだろうな。三人か四人は化粧の崩れた顔をしている。頬の紅が縞模様の跡を残しており、恐ろしく赤らんだ顔色を呈し、荒れて皺のよった肌を晒しているのだ。一部の者たちの様々な色合いの髪の毛も、黒く見せたい部分は黒鉛の櫛のお世話にならざるを得ない状態だ。しかし、漆黒に染め上げた頭も斑の自毛

の勢力に急速に屈しつつある。他の者たちの頭髪は髪油と髪粉で塗り固められており、油分のほうが強くなっている。だが、どいつの髪の毛にしても、半端なカールや不揃いな毛先をなして、耳の辺りや首筋に垂れ下がっているのだ。そして、俺が入って行くと、各自が同じ動作を始めたのだ。コイフ、モブキャップ、あるいはピナーズ〔一〇〕と、そのいずれもが歪んでいたのだが、そんな被り物の下で縺れた髪を、両手を使って撫でつけているのだよ。皆スリッパ履きで、素足の者もいる。全員、身に着けているのはアンダーペチコートだけなのだよ。張り骨を覆うためのガウンがはしたなく垂れ下がって、踵の辺りに絡みついているのだが、俺が上がって来るとすぐに、慌てて身に纏ったのだな。そして、連中の半分は（パッドもなく肩をすぼめ、色褪せた唇で、関節のゆるんだ恥知らずどもだ）、おそらく、夜の間はそうだったのだろうが、十九か二十の娘盛りの装いから、三十八か四十のげっそりとして、使い古した娼婦の姿になっているのだよ。

　連中のうちのだれであれ、ましてや、連中の一団が、こんなふうに人目に備えることなしにいる姿(ア)は、貴公にしても見たためしがないものと確信すればこそ、俺が部屋に入った時にこの女たちが俺の眼前に呈した様子を、なおさら子細に描いてみせているわけなのだよ。俺自身も、これまで一度だって目にしたことはなかったし、今も、このような機会でもなければ、こんな恩恵には与らなかったのだよ。もしも経験があるのなら、貴公も品行の悪い女には嫌悪の情を抱くだろうと確信している。スウィフトが語るヤフー〔一一〕の一人とか、トロイ人たちの食事の上に糞をばらまく、ウェルギリウスが描く忌まわしいハルピュイア〔一二〕たちを嫌うようにだ。というのも、引き籠もっている時のこういった連中の肉体というのは、その心と同じくらいに汚らわしいものだからだ。俺に負けないくらいに連中を嫌うことだよ。そして、俺は真に貞潔で優雅な女性を賛美し、ほとんど崇拝しているくらいなのだが、それに負けないくらいに嫌うことだな。俺にとってこれははっきりしていることなのだが、身嗜みの良い清潔な女性が天使にも似た存在であるのと同様に、だらしのない女というのは、この世でも最も不潔な生き物だからなのだよ。

　だが、この連中は海千山千だったのだ。選り抜きの集まりなのだ。時折、半ダースかそれ以上の数の者たちが代わる代わるスーッと入って来るのだよ。選り抜きの仲間の一部の者たちよりは若手の、下っぱの罪人たち、見習い連中なのだ。だが、外見の猥褻さでは負けていないのだ。もっとも、紅や白粉の類いにはあまりお世話にならずに済んでいるのだが、ただ、コルセットの支えもなく、むさ苦しい肢体、装いはだらしなく、手入れをしていない髪に、先の連中と同じく、アンダーペチコートだけの姿だ。目を半開きにしてしょぼつかせ、パッチのずれた顔で欠伸をしたり、伸びをしたりしているが、あたかも真夜中のドンチャン騒ぎの消えやらぬ影響からといった格好だ。全員が次々にコーディアルの供給を受けているのだが（居合わせた者すべてがその味ききか相伴役だ）、もっと忙しげにしているドーカスの指示によることだよ。あの娘は頻繁に顔を見せていたが、自分の持って来た半流動食がきちんと与えられ、摂られているかを調べるためだ。

　だが、あの恥知らずの近くへと歩を進めた時、何という光景が俺の眼前に繰り広げられ

(ア) スウィフト司祭長の『貴婦人の化粧部屋』に目を通した者はだれでも、ベルフォード氏のこの描写のほうがより自然なばかりでなく、一層上品な絵ともなっているように考えるであろうし、また、その意図ならびに利用価値の点から、より正当化され得るものであるとも考えることであろう。

たことだろうか。

　災難のせいで肉が落ちたということはまったくなく、俺の考えでは、むしろ肉付きが良くなっているのだよ。頑丈な顔立ちが、おそらく、怒り荒れ狂ったために腫れ上がっているのだろうな。そこで、ひとつ母さんの姿を思い描いて欲しいのだが、クシャクシャになったベッド全体に、その締まりのない巨体を大の字に伸ばしているのだ。風車の支柱みたいな両腕を差し上げ、幅広な手を乱暴に握り締めている。サラマンダー（十三）の目もかくやとばかりに、その大きな目玉をぎょろつかせ、縺れた白髪まじりの髪が、母さんの不道徳さもあり、敬意を促すようなものではないのだが（つぎの当たったヘッドドレスは半ば外れているのだよ）、分厚い耳や逞しい首筋辺りに広がっている。土色の唇は渇いて、激しく動いているし、幅の広い顎も痙攣に似た動きだ。大きく裂けた口は、額に八の字を寄せていることもあって（額自体、醜悪な皺に半ば埋もれているかにも見えるのだが）、母さんの顔をいわば二分しているのだよ。そして、口の中では長大な舌が恐ろしくグルグル動き回っている。息が苦しいかのように胸を波打たせ、フウフウいっているのだが、蛇腹のような形で、様々な色合いをした胸は、激しい喘ぎのために、代わる代わる、顎先まで盛り上がるかと思えば、へこんで目に付かなくなるのだ。

　これが、思い出して描くことの出来るかぎりでだが、俺が母さんのベッドの傍らへ近づいた時、この恥知らずが俺の眼前に繰り広げた光景なのだよ。そして、口の中では長大な舌が恐ろしくグルグル動き回っている。息が苦しいかのように胸を波打たせ、フウフウいっているのだが、蛇腹のような形で、様々な色合いをした胸は、激しい喘ぎのために、代わる代わる、顎先まで盛り上がるかと思えば、へこんで目に付かなくなるのだ。

　これが、思い出して描くことの出来るかぎりでだが、俺が母さんのベッドの傍らへ近づいた時、この恥知らずが俺の眼前に繰り広げた光景なのだよ。前述のとおり、自分の補佐役と娘たちに取り巻かれており、連中は怯えて眉を寄せながら、母さんを注視しているのだ。そして、容易に看て取れることだが、そのまなざしには愛情とか憐れみよりも、恐怖心とか、我が身を案じる気持ちのほうが（それに、自責の念もだが）多く含まれていたのだよ。ご覧なさい。いずれ、私たち自身がお見せする姿だわ、と言わんばかりにな。

　母さんの生まれついての大声が、わめき散らしていたためになおさら野太いものになっていたのだが、俺の姿を目にするや否や、俺に向かって鳴り響いたのだよ。「あゝ、ベルフォードさん。あゝ、あなた、見てくださいな、この有り様を。見てくださいよ、このザマを。忌々しいじゃありませんか。これだけの仲間に取り巻かれていながら、私の世話をしようなんて者は、ただの一人だっていやしないんだから。それどころか、私の出た部屋からずっと離れたところで、行こうとしていた部屋からずっと離れたところでだけど、私が階段を転げ落ちたって、この娘たちは平気ですからね。呪われると良いのよ。無頓着なろくでなしはことごとく呪われると良いんだわ。こんな運命か、もっと恐ろしい運命が降りかかると良いのよ、連中一人残らずにね」とだ。

　その後、母さんはさらに激しく罵り、毒づいていたのだが、二、三人の者が、今は母さんと同じくらいに自分の世話もおぼつかない状況にあるという理由で、退出しようとしていたものだから、なおさらだったのだよ。

　抑えようもない苛立たしさから口にしたものだが、そんな呪いや罵りの言葉で喉のつかえを除くや否や、もっと虚ろな、そして、女々しい口調で母さんは嘆き始めたのだよ。「そして、ここで　…　」と、母さんは言っていた。「耐えられないわね［と、両手を握り締めたり、開いたりしながら］　…　こんな惨めな死に方をするなんて　…　この年齢になって、足の骨折からとはね　…　自分の不節制のせいでお陀仏ってわけよ。自業自得ってところだわ。身辺整理の時間もなしにね。悔い改めている暇もなしよ。そして、二、三時間もすれば（おゝ、おゝ、と嘆き、もう一度、おーぅ、うーおぅと、長い唸り声を上げてい

たが、最後は、一種の甲高い調子の叫びとなっていた)、私がどこにいるのか、だれにも分かりゃしないのよ。だれにも言えなくなるんだわ。あゝ、本当に生まれてこなけりゃ良かったんだわ、私なんかはね　…　」とだ。

　こんな恥知らずには何を言ってやれるというのだ。全生涯を、最も世に広まっている悪事に浸って過ごした女だよ。そして、疑いもなく、数多の魂について責めを負わねばならない女なのだ。だが、俺としては、言い聞かせてやったのだよ。辛抱しなければいけないとな。暴れるから悪化するのだということ、そして、心を落ち着けると、現在の状況にもっと相応しい気分になれるかもしれないということをだ。

「だれのことかしら　…　私がですって　…　」と、母さんが口を挟んだ。「もっと良い気分になるですって、この私が。泣くことも祈ることも出来ない私だというのに　…　でも、地獄落ちになった者の苦しみはもう感じているのよ。どんな慈悲を期待出来るというのかしら、この私に。私にどんな希望が残されているというの。それに、あの素敵な娘さん　…　あの比べようもないハーローのお嬢さん　…　あの方はお亡くなりになったらしいわね。あゝ、あの極悪人　…　あの男さえいなかったなら、この責めは、私が犯したあらゆる罪の中でも一番ひどいものの責めは、負わずにすんでいたはずなのよ」とだ。

　そして、母さんはもう一度唸り声を上げていた。

「それで、亡くなられたのかしら、あの方は。本当に亡くなられたのね」と、唸り声が止むと、母さんが言葉を続けた。「あゝ、何という天使を破滅へ導く手立てとなってしまったのでしょうね、私は。お嬢さんが私の家の敷居を跨ぐようなことになったのは、あの悪党の間違いだとはいっても、それでも、あの男がお嬢さん相手に公正な扱いをしなかったのは、私に責任のあることなんだわ。それに、お前にも、お前にもよ。残らず人非人だけれどね、私たちは「と、サリー、ポリー、それに、さらに一、二名の者を振り向きながらだ」。そして、そのことが、そのことこそが私にとっては呪いだし、いずれはあんたたちのものにもなるんだわ」とだよ。

　そして、母さんは再び唸っていた。

　辛抱するようにと、俺はなおも忠告した。母さんに残された時間が、心配しているほどに短いのであれば、なおさら気持ちを落ち着けるよう努力すべきであり、そうすれば、少なくとも母さん自身としては、より安らかな気持ちで死に臨むことになるだろうと言ったのだ。そして、知人たちにも満足してもらえるだろう、と俺は言おうとしたのだよ。ところが、〈死〉という言葉を聞くと、母さんは猛烈にわめき出し、次のように、俺に食ってかかって来たのだ。

「死ぬとおっしゃいましたかしら、貴方は。死んだりはしませんからね。死ぬなんてこと、出来ないわよ。私、死に方を知らないもの。死ぬとおっしゃるのね。じゃあ、死ななければいけないのかしら、私。この世を去るというの。そんなこと耐えられないわ、私には。で、だれなの、貴方をここへ連れて来たのは（母さんの目は俺に向かってメラメラと燃えていた）。一体だれなの、私は死ななければいけないんだなどと言わせるために、貴方をここへ連れて来たのは。この世を去るわけには行かないし、そのつもりもありませんからね。死んでもらえば良いでしょう、あの世を望んでいる他の連中には。もっと良い世界に期待を掛けている連中にはね。私もこの世ではずいぶんと辛い思いをして来たわよ。でも、将来の望みもすべて形に置くつもりですからね。だって、この世の後は、無に帰して

しまうかもしれないんですからね」とだよ。

それから、母さんは呻き声と怒鳴り声とを代わる代わる上げていた。

誓って言うが、ラヴレース、俺の体中の関節がことごとく震えていたよ。そして、こんな台詞を吐き、こんなわめき方をする女を目の当たりにし、また、俺の周りに集まる一座の者たちを目にした時には、自分が悪魔の屋敷の一つにいるように思ったのも一度だけではなかったのだ。

だが、先へ進むことにしよう。そして、貴公の利益を考えてのことだが、俺の描写により、俺が見たり聞いたりしたものから受けた衝撃の、その半分でも貴公にショックを与えられないものかどうか、試してみようと思うのだ。

「サリー！　ポリー！　ねえ、カーター！」と、母さんが言っていた。「お前たち、私に言わなかったかしら。私は治るかもしれないってね。外科医は私に治るかもしれないと言わなかったかしら」とだ。

「えゝ、そうよ」と、サリーが叫んだ。「ギャロン先生はね、じっとおとなしくしていれば、治るかもしれないっておっしゃっているのよ。なのに、貴女ときたら、今朝も何度か話したことだけど、私たちが貴女に与えることの出来る希望のすべてから慰めを引き出そうとするより、自分の抱いている恐怖から絶望に走るほうが先なのですからね」とだ。

「だけど」と、相手を遮り、恥知らずが叫んだ。「ベルフォードさんは（この人には本当のことを話してあるのでしょう、私には話そうとしないのに。で、この人は）話してくれているのじゃないかしら。私は死ぬんだってことをよ。それが耐えられないのよ、私。死ぬなんて考え、我慢出来ないわ」とだ。

それから、半ダースほどの者たちが母さんの乱暴な手を抑えつけようと一斉に努力したのだが、さもなければ、母さんは我と我が身を殴りつけていたことだろう。外科医が母さんの前で〈壊疽〉という言葉を漏らしてからというもの、何度もそんな振舞いに及んでいるらしいのだ。

「それはそうと、一体何のために」と（顔をそらし、母さんの妹、そして、サリーとポリーに向かって）、俺は言った。「こんな望みを母さんに持たせたのかね。医者たちが匙を投げているとしたらだよ。最悪の事態を知らせるべきなのだ。そうすれば、母さんも運命に甘んじるはずだよ。死を逃れる術はないのだからな。何か精算しておくことが母さんにあるのなら、それに取り掛からせることだな。期待を掛ける余地はないというのに、生き長らえるような話をして、母さんから必要なことを行う機会を奪ったりしてはいけないのだよ。外科医たちは本当に匙を投げているのかね」とだ。

「そうなのよ」と、連中が囁いた。「母さんの肥満体質からして、望みはないと、お医者様たちはおっしゃっているわ。両方の外科医を呼びにやって、今か今かと待っているところなのよ」とだ。

われわれがこんなふうに話をしていると、外科医が両方とも（フランス人だが、シンクレア夫人はフランスの外科医を褒め称えるターヴィルの言葉を耳にしていたのだな）やって来た。俺は部屋の隅のほうに退き、窓を開けて少し風を入れた。これだけ多くの汚れた肢体から発する臭気のため、中毒気味になっていたのだが、この臭気は監獄の悪臭を思わせるに十分なものがあったのだよ。周囲の空気を汚染し、〈監獄病〉と呼ばれているものを引き起こす悪臭のことだ。

外科医たちが骨折の検診を終わると、俺はベッドの傍に戻り、命の助かる見込みが母さんにはあるのか、外科医たちに尋ねてみた。

片方の外科医が次のように囁いた。見込みはまったくないということ、母さんにはひどい熱があり、あの手の体質の場合、それだけでもおそらく致命的だろうということ、そして、壊疽のほうは、六時間前の連中の往診以後、目に見えて進んでいる、というのだよ。

「切断手術で命は助かりますかね。彼女は身辺や心の整理が必要なのです。二、三日命が延びれば、両方の面で、彼女には助けになるでしょう」　俺が言った。

連中は次のように話していた。骨折箇所は脛の上部で、膝にひどい打撲がある。壊疽は確かに大腿部の半ばまで広がっているはずだ、というのだよ。そして、俺を二人の間に挟むと（三、四人の女が加わって、ぽかんと口を開けて聞き入っていたが、その顔には、無知ゆえの驚きの印がそっくり現れていた。ちょうど、医者たちの顔には自惚れの表情が浮かんでいたようにだよ）、代わる代わる専門用語を並べ立て、脛と太腿の解剖学的な説明でもって俺の耳を一杯にするのだ。足根骨、中足骨、脛骨、腓骨、膝蓋骨、足首の骨、脛の骨、脛骨後部、脛骨前部から、大腿骨、坐骨の寛骨臼、大転子にいたるまで、そして、臀筋に三頭筋、青白部、小回旋筋といった塩梅だ。要するに、足の親指から臀部にいたる脛と大腿部を構成している筋肉、軟骨、そして、骨すべてについての説明なのだが、あたかもそれは、連中の学問というのは、頭に入っているとしても、精々口先止まりだということを示したがっているような態度なのだな。一方、サリーのほうは、両手を差し上げ、「まあ、驚いた、外科医さんというのは、皆さんそんなに学がおありなのでしょうか」と叫んでいた。だが、遂に、二人の外科医が揃って言明したのだ。母さんと知人たちが切断手術に同意するのなら、脚は一瞬のうちに切り取って見せるというのだよ。

手術をしても命は救えないのであれば、何のための手術なのかと、カーター夫人が尋ねていた。

連中が言うには、まことにもって尤もだが、打つべき手をすべて打ったというのは、患者の知人にとっては納得の行く話だろう、というのだな。

つまり、気の毒にもあの恥知らずは、ただ実験のためだけで、いわば切り刻まれることになったわけだよ。そして、手術の御利益に与る見込みは一切なしに、自分を苦しめることに対し、外科医にその料金を支払おうというわけさ。

これら両紳士について、俺の評価は低いと言わざるを得ない。暮らしぶりの点ではひとかどの人物を装い、フランスの血を引いていることばかりでなく、パリで学んだことも自慢しているらしいのだが、開業医として名を揚げることは絶対にないはずだ。

俺の実直なイギリス人の友人、トムキンズとは何という違いだろうか。飾りがなく、真面目な頭の良い人物であり、その手腕は口先だけに止まるものではないし、腕前を誇示したり、難しい専門語を用いたりするのは、いつも避けている。そして、自分の処置について、自分自身と同程度に、すべての人間にも判断してもらうよう努力しているのだよ。

外科医たちが手術の手順についてまくし立てている間中ずっと、恥知らずな女はこれ以上ないほどの恐ろしい声で叫び、わめいていたのだが、紳士たちのほうでは（自分が痛みを感じない災いには心を動かされたりしないという、その手の輩に属していることを自ら証明していたわけで）、別に気に留めるでもなく、母さんが声を大きくするにつれ、自分たちも声を張り上げるのだよ。聞き取ってもらおうとしてな。苦痛を和らげてやるよう呼ば

れて来た、その当の哀れな人非人が上げる叫び声に耳を傾けることよりも、知り合いを増やし、自分たちの腕の良さを広めることのほうに熱心になっているのは明らかなのだ。もっとも、まさしくこうすることによって、寓話にある犬とその影の話のように〔一四〕、連中の狙いは両方とも、俺に対しては外れてしまったのだ。というのも、若い頃に定めたものなのだが、ある座右の銘に関して、俺は一度として裏切られたためしがないからだ。つまり、「音なし川の水深し」というやつさ。一方、「浅き瀬にこそ徒波は立て」というが、そこでは、石や小石が水面のごく近いところにあって、足を濡らさずに川を渡るのに最適な場所を指し示していることになるのだよ。

だれもが懸念している結果について、また、外科医たちの言葉によって、間もなくのことだと俺も確信していた点を、惨めな状態にある人でなしに話して聞かせるのはだれ一人として気が進まないというわけで、母さんの運命を宣告する役目は俺が引き受けることになったのだ。そこで、手術を行う者たちが退室したこともあり、俺はベッドの傍らに腰を下ろし、こう言ったのだよ。「なあ、シンクレア夫人、ひとつ忠告したいのだが、見たところ、自分の世話もおぼつかないと思われる者たちの無頓着な態度を、こんなふうに怒鳴り散らすのは慎むことだよ。それに、事故は起こってしまったのであり、元に戻すわけには行かないのだから、精一杯事態に善処するよう、腹を決めなければいけないということだな。というのも、こんな暴れ方をしていたのでは、病状を激化させるだけの話で、そのような状態に身を任せていると、おそらく君は精神錯乱に陥るだろうし、そうなると、君に与えられている間は最大限に利用しなければならない、あの分別の力を奪われてしまうことにもなるのだよ」とだ。

母さんは俺のほうに顔を向けたが、俺が断固とした声色で話すのを耳にし、また、声同様に断固とした態度でいるのを目にすると、これまでよりは穏やかになり、注意を向けてくれたのだ。

俺は言葉を続け、次のように話したのだ。母さんが仄めかしていたところから、これまでの無為に過ごした人生について、とりわけ、この世で最も優れた女性の操を奪うのに加担したことを気に掛けているのを知り、俺は嬉しく思うということ、そして、気持ちを落ち着け、自らが招いた災いの結果におとなしく従ってくれるなら、もしかすると、それが母さんには幸せなことになるかもしれないということをだ。「ところで」と、俺は言葉を続けた。「平静に、落ち着いて話してもらいたいのだが、そんなに俺と会いたがっていたのは何故なのかな」とだよ。

母さんはひどく考えが乱れている様子で、頭をあちこちへ向けていた。そして、ずいぶんとためらっていたが、とうとう次のように言ったのだよ。「あら、どうしましょう。よく分からないのよ、貴方に何をして欲しかったのか。羽目を外した夢うつつの状態から目が覚め、どれほど罰当たりな生き方をしていたのかに気がつくと、私、良心の咎めに苦しんだのよ。そして、溺れかけている哀れな人間のように、藁という藁すべてに手を伸ばそうとしたわ。人という人すべてに、現に顔を合わせていた者たちは別だけど、それ以外の人ならだれにでも会いたいと思ったのよ。私に慰めを与えることが出来そうに思われる人すべてにね。でも、貴方からも、慰めは何一つ期待するわけに行かなかったわ。だって、私の敵だとはっきり言っていたでしょう、貴方は。貴方の害になることなど、私、一切していなかったというのにね。だって、ジャッキー（と、いつもの調子で、鼻に掛かった泣き

言だ)、貴方にとってハーローさんは何ということもないわけでしょう。だけど、あの娘さんは幸せだわよ。なのに、あゝ、私はどうなるというの。でも、教えてちょうだい（疑いのないところだけど、外科医さんたちは貴方には本当のことを話しているはずだもの)、教えてほしいのよ。また元気になるかしら、私。回復出来るのかしら。もしも回復出来るのなら、新しい暮しを始めるわ、私。誓っても良いけれど、そのつもりだわ。皆と手を切るのよ。あんたたち一人一人とね［と、周りに目を向けながらだ］。そして、ありったけの物を掻き集め、懺悔の日々を送ることにするわ。そして、私が死んだら、すべてを慈善に役立ててもらうのよ。誓って、そのつもりよ。小銭も残らず、慈善のために遺すことにするわ。だけど、今度だけはと、ぎょろつく目で天を仰ぎ、両手を差し上げながら（口も歪むほどの熱の入りようだが、顔の筋肉や造作一つ一つがそれに一役買っていたのだ)、今度だけは、おゝ、万物を司る神様、今度だけは、一度だけ（と、この言葉を五、六回は繰り返したが)、貴方様の哀れな子をお助けください。余生のすべての時間は懺悔と償いのうちに過ごすことにいたします。誓って、そういたします」とだ。

「力を抜くんだよ。もうちょっと力を抜くんだ」と、俺は言った。「君も十分に承知のとおり、ずいぶん放縦な暮しをしてきた私だから、君に向かって非難がましいことを口にしたり、君が送ってきた邪悪な生活や、君が手を貸して破滅に追いやった多くの魂を君の目の前に並べて見せるようなことの出来る義理ではないよ。ただ、君もそれだけ悔い改めようとしているわけだから、私からの助言としては、使いを出して、立派な聖職者に来てもらうことだな。こういった事柄も、その汚れのない生活態度のお陰で、私の口から出る場合よりも、もっと快く聞こえることだろうからね」とだ。

「どうしてよ。何ですって」と、俺を遮り、母さんが言っていた。「牧師を呼べというのね。じゃあ、貴方、私は死ぬだろうって、本当にそう思っているのね、それじゃあ、望みを抱く余地は一切ないとお考えなのね。牧師ですって　…　一縷の望みでも残されているうちに牧師を呼ぶ人なんて、どこの世界にいるかしら。牧師の姿を見たら、その場で死んでしまうわよ、私なら。死ねないのよ、私。死ぬわけには行かないわ。もう絶対に言わないでよ、そのことは。何よ　…　死ぬですって　…　何よ　…　罪にまみれたまま死んじまうというの　…　」とだ。

それから、母さんはまたわめき始めたのだ。

「耐えられんのだ」と、厳めしい態度で席を立ちながら、俺が言った。「理性ある生き物がこうも法外な振舞いをするのを目にするのはだよ。この猛烈さが事態を改善するとでも思うのか、君は。それで君の役に立つことでもあるのかね。むしろ、君がそんなにも延ばしたがっている命を縮め、現世と来世の両方について、身辺整理をするための唯一の機会を奪われることになるのではないのかな。死というのは万人共通の定めに他ならないものなのだ。そして、間もなくそれが君の運命になるとすれば（と、母さんを見ながら)、それはまた君のものにも、君のものにもなるのだ（と、声を高め、母さんの周りで震えている人でなしども一人一人に顔を向けてだ［というのも、俺の強力な訴え掛けに、連中は身を震わせていたのだよ］)。そして、俺のものにもだ。それに、感謝して然るべき理由も君にはあるのだ（と、再び母さんのほうへ向き直ってだ)。君をこんな状態に導いた、あの羽目を外した振舞いの最中にくたばってしまわなかったことをだ。何しろ、折ったのは足だが、首だったかもしれないのだからな。その場合には、今君が得ているよう

な懺悔の機会も得られなかったはずだからだ。そして、主のお慈悲を祈るばかりだが、気がついた時には、君は一体どんな有り様になっていたと思うのだ」とだ。

すると、哀れな恥知らずは言葉にならない、恐ろしい唸り声を上げていた。人の口から発せられるのを、これまで一度だって耳にしたことがないようなものだが、あたかも地獄の責め苦がすでに母さんを捉えているかのようだったよ。そして、一人残らずが半ば気も動転しているし、俺は退室しようとしているのを目にすると、「あゝ、哀れと思ってよ。可哀相だと思ってちょうだい、ベルフォードさん」と、母さんは叫んだのだが、その言葉は呻き声のために途切れがちだった。「分かるわ。貴方は私が死ぬと思っているのね。ほんの二時間か三時間のうちに私がどうなるのか、どこに行ってしまうのか、だれにだって分かりゃしないのよ」と言っていた。

阿てみたところで無駄であるし、母さんが回復することはないというのが自分の見解だと、俺は話してやったのだ。

心を落ち着けるよう、そして、定めに身を委ね、まだ残されている機会を善用すべく努力するよう、俺は改めて忠告しようとしたが、この告知で、母さんは凄まじいばかりの錯乱状態に陥ったのだ。人でなし連中の何人かが無理やり母さんの手を抑えつけなかったなら、母さんは自分の髪をむしり取り、胸を叩いて嘆いたことだろう。一方、別の者たちは母さんを出来るだけ動かさないようにしていたが、整復してもらったばかりの足を再び脱臼しないようにだ。そんなわけで、母さんには忠告が通じないことを知り、また、母さんがまったくの精神錯乱に陥っているのを見て、俺はサリー・マーティンに向かって次のように話したのだ。あの部屋にいるのは耐えられないということ、そして、連中にとっての最善の道は、母さんの傍らで祈ってくれるよう、また、説得が可能になり次第、諭してくれるよう、牧師を呼びにやることだ、とだよ。

こうして、俺は連中の元を去ったのだ。そして、通りに出るとすぐに悟ったのだが、あの時ほど新鮮な空気の有難味を感じたことというのは、これまでにはなかったのだ。

また、締め切った病室で（大抵、医者が訪れる時には、外気が入らないようにするものだからな）いつも出会う様々な悪臭に加え、シンクレア夫人のこの部屋は特別に不快なものだった点を考慮に入れると、これも別に驚くには当たらないのだよ。貼り薬、膏薬、軟膏の臭いに加え、燗をしたものであれ、あらゆる種類の蒸留酒の悪臭が混じっていたのだ。というのも、連中のうちの誰かかれかが、さしこみ、疝痛、あるいは、むかつきを口実に、俺が同席している間中だが、絶えずそういった酒の供給を求めていたからなのだ。とはいえ、ここはその手の家の中では上品だと考えられており、ここの娼婦たちはすべてが高級娼婦で、客も著名人たちなのだよ。

おゝ、ラヴレース、われわれ放蕩児や道楽者の多くは何という生活を送っているのだろうな。どんな仲間と付き合っているというのだろう。そして、そんな仲間のために、どのような交遊関係を放棄しているのだろうか。あるいは、こんな連中との付き合いに努力するというのだろうか。

容姿端麗な、そして、考え方や態度が清廉潔白な女性の場合だが、われわれのような種類の男の大半は、元来が泥にまみれた下種で、絶えず豚と一緒に餌場を漁るような存在だということを知っているとしたら、好みの味に誘われて、女郎屋や売春宿のクズたち、そして、安手の娼婦と交渉を持つような、そんな汚らわしい好色野郎との付き合いは、考え

るだけでも嫌悪を催してしまうのではないだろうか。

だが、たくさんの立派な女性が欺かれ、この手の選択をしてしまうのだが、それは、あらゆる妄想の張本人ともいうべきものによって提唱され、言いふらされているものであることは疑いない、あの「心改めた放蕩者こそ最高の夫になる」という、偽りに満ちた無分別な考えによってなのだよ。われわれ放蕩児は、実際、図々しくもこんなふうに想像してしまうのだ。つまり、女性というのは概して、その一部の者たちは道楽者に心奪われるままになっているわけだが、そんな道楽者が実践してみせるのと同じ程度に、心の中では放蕩者なのだというふうにだよ。従ってこれは、真の道義心を備えた女性としては、反対して見せるのが当然という考え方なのだ。女性が誇りとしている、また、実際に男性の誇りと言っても構わないだろうし、そう言っていけない理由はないわけだが、あの美徳の吟味に耐えられないような品性の男すべての言い寄りを拒むことでだよ。

この点が十分に考慮されるならばだが、実際の話、女性をすべて同じものと考えているという男、そして、男にとっての最大の不名誉をもたらす力が妻にあることを承知しており、その機会が訪れた場合、また、執拗さを失っていない場合には、そうするつもりが妻にあることを疑わないような男、そんな男が、道徳上の動機から、どの女にとっても良い夫になるなどということが、どうして有り得るのだろうか。それに、男に道徳上の動機から良い夫や立派な父親、そして、真の友人になってもらうのには、生活態度の正に全面的な革新、身に染みついた習慣の大変革、否、悪い性質の徹底克服が求められ、また、思い立った時に改心する力が当人の手中にあるわけではない点を考えるならなおさらのことだが、神の恩寵がどれほど必要とされるかということについて、実際のところ、お人好しさんたちはほとんど考えていないのだよ。この点については（俺自身の経験は言うに及ばずだが）、貴公にしても、ラヴレース、神々しいばかりのハーロー嬢に対する誘惑を進める中で気づいていることなのだ。何しろ、自責の念が貴公よりも痛切だとか、あるいは、貴公以上に頻繁に生じていながら、貴公以上にあっけなく過ぎ去ってしまうような、そんな人物などはどこにもいないだろうからな。

ところで、ラヴレース、ひとつ教えてほしいのだが、俺のペンで綴られた〈恩寵〉なる語は、貴公ならびに貴公の仲間の冷笑を誘うことなく読んでもらえるのだろうかな。白状すると、以前は俺の耳にも奇妙に響いていたのだよ。ただ、決して忘れはしないと思うのだが、まさしくこの語について、ある真面目な人間がかつて言ったことがあるのだよ。その男にとって、この語は放蕩児を見分ける「試し言葉」(ア)だというのだ。嘲笑することなしにこの語への言及に耐えられる人間をいつも待ち望んでいたし、この語やその使用者を冗談の種にする者については、破廉恥な人間として、日頃から見捨てて来たというのだ。

こんなにも真面目な感想を俺の話に交えるからといって、愛想を尽かさないでほしいのだ。今の俺の物の考え方からすると、そうするのが似つかわしいのだよ。ハーロー嬢については、人間の素晴らしさのすべてが、今は亡きベルトンについては、人間らしさを忘れた放蕩のすべてが、また、この破廉恥な女については間もなくのことになるだろうが、悪魔にも似た放埒さのすべてが、どのような結末を向かえるのか、それを目の当たりにしているわけだからな。そして、君自身のために、君の輝かしい一族のために、また、君の親

（ア）士師記十二章、六節を参照のこと。

友や知人すべてのためにもだが、君が同じ印象に苦しむのを、俺は嬉しく思うことだろうな。悪事を共にしてきた（そして、互いの扇動者であった）われわれとしては、互いに手を結び、すべてに亘って力のかぎり償いを果たすことが出来るようにだよ。

こういったことすべてを思い巡らしながら、俺は帰宅したのだが、これらは、耳にすることが出来たかもしれないどんな説教よりもためになるものだったのだ。そして、次の点に触れ、この長い手紙の結びとしよう。つまり、俺が辞去した際、恥知らずにもわめいていた女は、傍で眺めているものにとってはすこぶるショッキングな、激しい精神錯乱の発作を起こしていたわけだが、ただ、錯乱状態というのは、彼女を取り巻く恐ろしい状況の中では、最も幸福なものであったに違いないということだよ。というのも、いわゆる正気を取り戻した時、これまでの放埒な生活に対する反省の念というのは、それこそ大変なものになるはずだからだ。その生活を通して母さんは、他の者たちを自分自身と同じくらいの性悪女に仕立て上げては、悪魔のように、それをいつも喜びとし、仕事にもしていたのだよ。今はすでにその真際に臨んでいる、あの恐ろしい状態へと目を転じた時、母さんの恐怖は（心の中では、すでに地獄が始まっているのだが）どれほどのものになるのだろうか。だが、俺としては、震えるペンをここで置くことにする。

《かようにショッキングな話題をただちに打ち切るためにも、ベルフォード氏が、その後の手紙において、以下のように述べていることを注記しておく。つまり、あの惨めな女は、施術者たち自身も驚いていたことであるが（時々刻々と増大する心身両面の苦痛の中で）、九月二十一日、木曜日まで持ちこたえたということである。また、彼女を取り巻く恥知らずな女たちすべてを怯えさせ、束の間の懺悔を促すほどの激しい苦悶のうちに息を引き取ったということである》

手紙　二十

モーデン大佐からジョン・ベルフォード氏へ

九月十日　日曜日　夜

謹　啓

約束に従い、こちらの状況をご一報いたします。お気の毒に、ノートン夫人は道中はなはだ体調が優れず、霊柩車は緩やかに進み、チャリオットも後に続いていたのですが、夫人をセントオールバンズへお連れするのは無理かと案じたほどでした。予定どおり、あの町で宿泊いたしました。一泊することで、夫人も回復へ向かうものと期待していたのですが、お残りいただかねばならないことになりました。行き届いたご配慮により、夫人の同伴者としてご親切にも派遣してくださいました女中には、十分に夫人のお世話をするよう命じ、また、夫人用にとチャリオットを残して来たのです。夫人はありとあらゆる敬意を向けられて然るべきお方ですが、それは、我が従姉妹のためにだけではなく、ご本人ゆえのことでもあります。衆に秀でた女性なのです。

ハーロー邸から五マイル足らずのところで、私はハンドギャロップ（一五）の歩調を取りました。霊柩車にはさらに緩やかに進むよう命じましたが、われわれの入った脇道の路面が

荒れていたからです。それに、必要以上に時間にゆとりがあったからでもあります。私といたしましては、夕闇が迫るまで霊柩車には到着してもらいたくなかったからなのです。

ハーロー邸へは四時頃に到着いたしました。信じていただけるものと存じますが、屋敷は悲しみに包まれておりました。委曲を尽くせとのご要望でしたね。

私が中庭に入りますと、だれもが動き回っておりました。顔を合わせた使用人は、一人残らず泣き腫らした目をしており、ひどく心配げな様子でしたから、何か新たな不幸が一家を見舞ったのではないかと、最初は案じたほどでした。

ジョンならびにアントニー・ハーロー氏、そして、ハーヴィー夫人がその場におられました。以前には、非情な心を固めるために助け合った皆ですが、同じように、互いの悲しみを募らせるのに手を貸し合っておりました。

従兄弟のジェームズがホールの入り口で私を迎えました。その表情には、取り付いて離れない懸念の気持ちが浮かんでいるのです。そして、私が前回滞在した際の自分の振舞いを許してくれるよう、頼んでおりました。

従姉妹のアラベラがやって来ました。涙に溢れ、悲しみに沈んでいるのです。

「あゝ、あなた」と、私の腕にすがりながら、あの娘は言いました。「何をお尋ねする勇気もございませんわ」とです。

察するところ、霊柩車の進み具合についてなのでしょう、あの娘が言わんとしておりましたのは。

私自身も深い悲しみに包まれており、先へ歩を進めること、あるいは、口を開くことなしに、ホールの最初の椅子に座り込んでしまったのです。

兄が私の片方の側に、そして、姉がもう一方の側に腰を下ろしました。両者とも黙ったままで、姉のほうは涙を流しているのです。

間もなく、アントニー・ハーロー氏がやって来ました。氏の顔一面には苦悩の表情が色濃く浮かんでおりました。広間へ入るようにとの要請でした。氏が申しますには、一緒に弔う者たちが全員集まっているとのことでした。

私は氏に付き添い、中へ入りました。いとこのジェームズとアラベラが私の後に続きました。

私が広間に足を踏み入れた瞬間、一糸乱れぬ嘆きの合奏とでも称すべきものが湧き上がりました。

あの愛しい娘の父親、親戚のハーロー氏は、私を目にするや否や、「おゝ、君、君、君こそは我が一族全員の中で、自分を責めるところの一切ないただ一人の人間なのだ。幸せ者だよ、君は」と言うのです。

気の毒な母親は悲しみに言葉もなく、私に向かって会釈をし、片方の手でハンカチを目頭に当てながら座っておりました。もう一方の手は妹ハーヴィーの両手の間に挟まれており、その上にハーヴィー夫人が涙をこぼしているのです。

窓辺にジョン・ハーロー氏が座っておりましたが、その顔と体は悲しみに沈む一同から背けられ、両の目を赤く泣き腫らしているのです。

親戚のアントニーは、広間への二度目の入室に際し、ハーロー夫人のほうへ足を運びますと、「いけませんよ、姉上」と言っておりました。それから、親戚のハーロー氏のところへ赴き、「いけませんよ、兄さん。そのように挫けてはいけませんな」と言うのです。そし

て、あと一言を口にすることが出来ずに、広間の片隅へ向かうと、与えようとしていた慰めが自分にも必要となり、椅子に身を沈め、声を立てて泣きじゃくっておりました。

アラベラ嬢は、叔父のアントニーが私の先に立って広間へ入った時、その後に続きました。そして、悲しさに胸を貫かれる思いでいる母親に、少し慰めの言葉を語り掛けようとする様子でした。しかし、それを口にすることは出来ず、母親の椅子の背後に回ると、椅子越しに不幸なご婦人の肩に自分の顔をもたせ掛け、優しい母がかつてはよく与えてくれた、しかし、今は与えるゆとりもない慰安をねだっているような素振りでした。

息子のハーロー君は、あの気性の激しさはどこへやら、今は沈み込んでおります。自責の念がその原因となっているのは疑いのないところでしょう。

そして、あの瞬間、ある意味では体の動きをすっかり奪い去り、言葉を溜め息と呻き声とに変えてしまったわけですが、皆の胸の思いはいかばかりのものだったでしょう。何とも気の毒な話です。この者たち全員に対し、深甚なる同情を禁じ得ない次第です。それにしても、あの忌まわしいラヴレースは一体どれほど呪われれば良いのでしょうか。どうやら、尋常ならざる術策と比類のない極悪さによって、かくも複雑多岐に亘る災いを生み出した、その唯一の張本人と思われるのです。神の裁きに委ねたいとは存じますが …… だが、止すことにします …… 奴は（「奴」と呼んで構わないでしょうか）貴方の友人なのです。お言葉によれば、すでに彼は精神に異状を来しているとのことですね。天よ、彼に正気を取り戻させ給え …… もしも、事の成り行きが私の案じているとおりだといたしますと …… 実際、あの娘の遺書に見られることですが、彼の仕打ちについてあの娘が暗示している点だけで十分なのです …… それに、我が愛しの従姉妹よ、我が最愛の者よ、下劣極まりない男にさえ慈悲と許しを授けるそなたの優しい心が、その男のためになるなどと考えてもらいたくはないのだ。

だが、これもまた止しましょう。何卒、お許しを願いたい。嘆き悲しんでいる者の一人一人が近親者なのです。このような光景を目の当たりにし、また、描写しようとして（この悲しむべき折に、この不幸な一族がどれほど心を動かされたのか、貴方のご希望どおりの詳細さで物語るわけですが）それを思い起こしながら、事態一切の張本人に対し、激しい憤りを覚えない者などどこにおりましょうか。

あの瞬間には、皆のうちのだれにとりましても、慰めを引き出すことの出来る相手としては、私が唯一の人物でしたから（自分自身も悲嘆にくれてはおりましたが）、諦め切れずにいる母親のほうへ近寄ると、私は次のように話し掛けたのです。「さあ、大切な人、悲しみに負けないようにいたしましょう。いかに当然至極な悲しみではあっても、今となっては、私たちには何の役にも立たないのですからね。自らを苦しめることですし、私たちが哀悼の意を表している、あの愛しい人を呼び戻すわけにも行かないのです。それに、お嬢さんは永遠の幸せをどれほど約束されてこの世を後になさったのか、その点をお知りになれば、呼び戻したいと願ったりなさらないことでしょう。お嬢さんは幸せなのです、マダム。お嬢さんが幸せなのは確かなのです。その点を確信なさり、お心を慰めていただきたいのですよ」とです。

「おゝ、あなた、あなた」と、妹のハーヴィーの手から自分の手を引っ込め、私の手を握り締めながら、不幸な母親が言うのです。「私がどんな娘を失ったのか、貴方はご存じないのですわ」とです。それから、声を潜めると、「それに、どんな失い方だったのかもです

わ。そのことこそがこの別れを堪え難いものにしているのです」と言っておりました。

全員が揃って声を出し合い、一種の物悲しいコーラスとなりました。そして、それぞれが自らを責め、また、互いに咎め合う者たちもおりました。ただ、すべての者のまなざしは、代わる代わる、私の従兄弟ジェームズの上に注がれていたのです。あれほど気立ての好い娘に対し、全員の怒りを煽り立てた人物としてです。その間、彼は自責の念に耐えかねておりました。ハーロー嬢とて同じことで、堰を切ったように語り出したのです。「ずいぶん詰るような手紙を書いてしまったわ、あの娘には。私の侮辱のし方も、何て残忍だったのでしょうね。なのに、何て辛抱強く受け止めてくれたのでしょうね、あの娘は。あの娘の死期がこんなにも迫っていたなんて、だれが考えたことでしょう。あゝ、お兄様、お兄様、貴方さえ　…　貴方さえ　…　」とです。

「自分自身が悲痛な思いでいるのに、それを倍にするような真似は止してくれ」と、彼が言いました。「出来事の一つ一つが目に浮かんでいるんだ。過ちを犯した愛しい娘の矯正だけを考えたのだよ。あの優しい心の持ち主を悲嘆に暮れさせるつもりなどはなかったのさ。ところが、そうしてしまったのだよ、あの悪党のラヴレースが。われわれのだれでもないのだよ。それなのに、どうです、あの娘はすべてを僕のせいにしたのではありませんか。そんなところでしょうね。これだけは教えてもらいたいのですが、今わの際に、あの娘は僕の名を挙げたのでしょうか。僕のことを口にしたでしょうか。あの娘が、地上最大の悪党を許し、われわれの復讐を無事免れるよう嘆願することの出来るあの娘なのですからね、僕のことも許してくれるよう願っているのですよ、僕は」とです。

「皆さん全員を祝福しながら、お嬢さんは亡くなられたのです。それに、あなたたちの厳しさを非難するのではなく、むしろ正当化しておられたのです」

すると、皆はもう一度揃って嘆きの声を上げておりました。「私たちは分かっているのだよ」と、父親が言いました。「死の二、三日前、あの娘がどれほど幸せな気持ちであったのかということについては、心臓を刺し貫くようなあの娘の便りで、われわれは十分知っているのだよ。だが、最後まで続いたのかね、その気持ちは。嘆きの言葉は一つもなかったのかね。あの愛しい娘には恨みごとは一切なかったのですかね」とです。

「何一つありませんでした。あれほど幸せな旅立ちはいまだかつて見たこともありませんし、今後とも目にすることはないでしょう。そして、それも驚くべきことではないのです。何しろ、あれだけの用意は聞いたこともありませんからね。何週間にも亘って、すべての時間がそのために費やされたのです。私たちといたしましては、次の点を慰めといたしましょう。つまり、私たちにとって必要なのは、ただ、私たち自身に、そして、我らが最愛の者たちのためにも、あのように幸せな最期を祈念するだけだということです。私たちはだれしも、お嬢さんへの無情な振舞いについて深く悲しむかもしれません。しかしながら、お嬢さんがかつて願ったことのすべてが仮に起こったとしても、あれ以上幸せな最期、おそらく、あれと同じくらい幸せな最期を迎えることは、お嬢さんにも出来なかったことでしょう」

父親、おじたち、姉、親戚のハーヴィーが、「可哀相にあの娘は　…　」「可哀相にあの気立ての好い娘は　…　」と、名状し難いほど心に響く悲痛な口調で、一斉に叫び声を上げておりました。

「あんなにも気立ての好い子にあの薄情な仕打ちですもの。私たちはいつまでも心を掻

き乱されるに違いありませんわ」と、不幸な母親が叫んでおりました。「確かにそうね、確かにそうだわ［と、妹のハーヴィーに向かって声を潜めながら］、私、受け身に過ぎたのだわ。この件では、あまりにも受け身に過ぎたのよ。これまでの生涯を通して、あんなにも苦心をして保とうとしてきたというのに、その一時的な平安の代価が、永遠に続く心の乱れというわけなのね」とです。

そこまで言うと、母親は口を閉ざしました。

「あゝ、お姉様　…　」　ハーヴィー夫人が口に出すことの出来た言葉としては、これがすべてでした。

「子供の中でも一番愛している娘、だれよりも称賛に値する娘に対して、私は親の務めを半分しか果たさなかったのです。いいえ、半分も果たしておりません。あの娘に対しては、私たち、どれほど無情な心を向けてしまったのでしょう」

再び、母親は涙にむせび、言葉も途切れてしまいました。

「大好きな、大好きなお姉様　…　」　ハーヴィー夫人が口に出来たのは、やはりこれだけでした。

「せめて」と、気の毒な母親は叫ぶように言葉を続けました。「一度だけでもあの娘に会いたかったと思います」とです。それから、従兄弟のジェームズとその妹のほうへ振り返りますと、「あゝ、私の息子　…　あゝ、私のアラベラ　…　私たちも同じようにわずかな憐れみしか受けられないのだとしたら　…　」とです。

そして、そこで再び、母親は言葉を止めました。涙が邪魔をして、それ以上話を続けられなかったのです。だれもが、その間中、黙り込んでおりました。口に出すにはあまりにも大きすぎる、そんな胸中の悲しみを皆の表情は表しておりました。

これでお分かりでしょうが、ベルフォード殿、我が最愛の従姉妹はその美点をそっくり認めてもらえそうだということです。あのように頑迷な、そして、人道に悖る行いを振り返った時の想いというのは、何と恐ろしいものなのでしょう。

あゝ、ベルフォード殿、貴方のこの呪わしい友人、この嫌悪すべきラヴレース。あの男なのです、あの男のせいなのです　…

お許しください。平静さを取り戻すまでの間、ペンを置くことにいたします。

午前一時

心を落ち着け、一休みしようと努力はいたしましたが、無駄に終わりました。委曲を尽くせとのご要望でしたし、私といたしましても、それは避けられないところです。この心痛む話題が私の心のすべてを独り占めしているのです。真夜中ではありますが、先を続けることにいたします。

六時頃、霊柩車が外側の門に到着しました。教区の教会は少し離れたところにあるのですが、追い風が吹いていたこともあり、霊柩車が到着する直前に、弔いの鐘が大層厳かに鳴り響いてくるのを耳にしますと、心を痛めておりました一族はひとしきり新たな悲しみに打ち沈むことになったのです。この鐘の音は、後に確かめられましたし、皆も推察していたことですが、霊柩車が教会の近くを通り過ぎた時、止むに止まれぬ思いから、愛する故人の霊に向けられた敬意の表れだったのです。

ご判断願います。待ち受けております際の皆の悲しみはあのように大きかったわけです

が、霊柩車が到着した時、悲しみはどれほどのものだったでしょうか。

下男が一人、報せを持って入って来ましたが、石を敷きつめた中庭をゴトゴトと進むその重々しい音で、われわれもすでに承知のことをです。

下男は何も言いませんでした。口を開くことが出来なかったのです。周りを見渡し、頭を下げ、引き下がって行きました。

私が外へ出ました。この段階では、動き出すことの出来る者は他にだれもいなかったのです。それでも、すぐに兄が私の後に続きました。

玄関へ参りますと、はなはだ心を打つ光景が目に映りました。

私の愛する従姉妹がどれほど広く愛されていたか、それは貴方もお聞き及びのことでしょう。とりわけ貧民と中間層の者たちからですが、あれほどに愛された若い淑女はかつていなかったのです。そして、それも理由あってのことです。近隣の正直者の貧乏人すべてにとりましては、あの娘は共通の保護者となっていたからなのです。

痛切な、そして、心からの悲しみの場合には常の話ですが、自分自身にとって深い関わりのある事柄に、知人全員の関心を引きつけようといたしますのは、われわれにとって自然なことなのです。どうやら、この家の使用人たちは自分の知り合いに、また、知り合いの者たちもその知り合いにですが、話をしていたらしいのです。自分たちの愛する若お嬢様は、生きている間は受け入れてもらうわけにも、目を向けてもらうわけにも行かなかったけれど、ご遺体の帰宅は許されたのだ、ということをです。時間は非常に限られておりましたから、あの娘がいつ死亡したかを知っている者は、霊柩車が到着する時間のおよその見当は容易につけられたのです。田舎の村々を通り抜けて行く霊柩車というのは、それも、ロンドンからの霊柩車ですから、付き添う者がどんなに少なくとも（すでに申し上げましたように、チャリオットは気の毒なノートン夫人のお世話に回っておりました）、衆人の注目を集めるものなのです。それに、紋章の盾飾りこそありませんでしたが、ハーロー邸に続く脇道に入り、屋敷から六マイル足らずのところへ進んだ時には、これがだれのものなのか、推測するのは難しい話でもなかったのです。そんなわけで、霊柩車と弔鐘の厳かな響きが少なくとも五十人ほどの、近隣の男女や子供たちを引き寄せることとなったのですが、中には立派な身なりの者もおりました。涙を浮かべていない者はただの一人としておらず、それぞれがこの称賛の的となっていた淑女の死を悼んでおりましたが、私の聞いた話では、この淑女が一度外出いたしますと、きっとだれかがそのご利益に与ったものだ、というのです。

この者たちは、霊柩車から棺が取り出されますと、その周りに群がり、少しの間、棺が中に運び込まれるのを妨げることになりました。だれが担ぐか、若者たちが争っていたのです。とはいえ、騒々しい口論というより、敬意のこもった囁き声なのです。私の旅のすべてを通し、どのような折であれ、大勢集まった育ちの良くない連中から示されるのは見たためしもないような崇敬の印でしたが、そんな連中が張り合います場合には、騒がしさを切り離すわけに行かないのが常のことなのです。

最後には、六人の娘が六つの取っ手を持ち、棺を運び入れることが許されました。

こうして遺体は、厳粛なうちにも恭しくホールに運び込まれ、差し当たりは二個のスツールの上に安置されたのです。銘板、紋章、そして、銘文が皆の目を釘づけにし、称賛を誘っておりました。すべてあの娘自身の指示によるものだと知らされますと、なおさらで

した。遺体を一目拝むことを許してくれるよう、皆は願っておりましたが、これは希望としてよりも、願望として口にしたものだったのです。全員が好奇心を満たし、紋章について一言加えた後、あの娘の霊を祝福しつつその場を離れましたが、目に涙を浮かべ、嘆きの言葉を口にしてもおりました。あの娘は幸せなのだと断言し、もしもそうではないのだとしたら、自分たちは一体どうなるのかと、推測を交えているのです。一方、他の者たちはあの娘が喜びの種としておりました善行のことを、繰り返し繰り返し話題にしていました。また、皆の中には、あの娘の堕落を招いたその男に向かって、数々の呪いの言葉を浴びせ掛ける者も少なくありませんでした。

その後、屋敷の使用人たちが棺の周りに集まりました。それまでは、近寄るわけに行かなかったのです。そして、新たな悲しみの場面が繰り広げられましたが、ただ、それは無言の愁嘆場でした。何故なら、使用人たちは目と溜め息だけで語り合っていたのです。両手を差し上げ、棺の蓋、そして、お互いを代わる代わるに見詰めながらです。若主人がいることで、おそらく、使用人たちは畏まり、自分たちの悲しみを無言の身振りだけで表すことにもなったのでしょう。

ジェームズ・ハーロー君についてですが（私と一緒だったのですが、人垣を見て退いていたのです）、連中が立ち去ると、彼は棺の蓋をじっと注視したまま立ち尽くしているのです。しかしながら、おそらくあの瞬間には、質問が向けられたとしても、蓋に記された記号の一つ、あるいは、文字の一つも判じかねたものと思われます。腕を組み、頭を一方に傾け、顔の造作一つ一つに呆然自失の印を刻み、深い物思いに沈んでおりました。

だが、遺体がホールと隣り合わせの、あの娘が〈私の〉客間と呼び習わしておりました小さいほうの広間に運ばれ、部屋の中央にあるテーブルの上に安置され、父と母、二人のおじ、叔母のハーヴィー、そして、姉が入って来まして、震える足で、ひたすらに嘆き悲しみながら兄と私に合流いたしますと、その場はさらに痛ましいものとなりました。自分たちの容赦のない厳しい仕打ちを思い出すことで、皆の悲しみが募ることになったのは疑いのないところです。そして今、一族の誇りともいうべき者を納めた入れ物を眼前にいたしますと、ごく最近のことですが、自分たちの思慮を欠く乱暴な行為によって屋敷から追放され、二度と再び相見えることのなかった娘だけに、皆の悲しみが並の悲しみではなかったのも驚くには当たらないのです。

皆としては、母親の入室は引き止めたかったらしいのです。しかし、引き止められなくなりますと、前もっての決めごとではなかったのですが、全員がお供をいたしました。抑えようのない衝動に駆られてのことです。お気の毒に、奥様はわずか一瞥を棺に向けただけで、急いで目を逸らしますと、痛恨の思いも露に、窓のほうへと引き下がりました。それでも、両手を握り締め、最愛の娘に呼び掛けているみたいに叫んだのです。「あゝ、我が子よ、我が子よ。私の希望の極みよ。どうして私は許可していただけなかったのでしょうね。許しと和睦の言葉をお前に伝えることをです。あゝ、お前の残酷な母親を許してくださいね」とです。

息子さんは（両の目が示しておりましたが、その頃には心も優しくなっており）、退出してくれるよう、奥様に懇願しておりました。ちょうどその時、奥様の侍女が顔を出しましたので、奥様を中広間へお連れするので手を貸してくれるよう、彼は侍女に声を掛けました。そして、戻って来ますと、ドアを出ようとしている父親と出会いました。父親のほう

でもほんの一瞥を棺に向けただけでして、退出願いたい旨の私の嘆願に従ってくれたところだったのです。

父親の嘆きはあまりにも深く、言葉となって発せられることはなかったのですが、やがて、息子さんが入って来るのを目にしますと、重苦しい呻き声を漏らしながら、こう言ったのです。「どのような悲しみであれ、この胸の悲しみに似たものなどは、いまだかつてなかったのだ。おゝ、息子よ、息子よ」とです。詰るような口調で、お顔は息子さんから背けられたままでした。

私は父親に付き添い、慰めを与えようと骨折りながら中広間を通って行きました。そこでは、奥様が苦悩に喘いでおりました。その姿が父親の目を捉えました。父親は奥様の方へ向かうような仕草を見せ、「おゝ、おまえ …」と叫んだのですが、くるりと振り向きますと、胸は一杯ですし、目にも涙が溢れるものですから、大広間へと急いだのです。そして、大広間に入りますと、独りにしてくれるよう頼んでおりました。

おじたちと姉は何度も何度も、悲しみに声もなく、紋章を見詰めては顔を背ける仕草を繰り返しておりました。ハーヴィー夫人が銘文を読み聞かせようといたしました。「ここでは神に逆らう者も暴れ回ることをやめ …」という言葉は実際に読み上げたのです。しかし、その先を読み進めることは出来ませんでした。涙が大粒の滴となって、見詰めている銘板の上に降り注いでいたのです。それでも、夫人には好奇心を満たしたいという気持ちがありました。涙がこぼれるにつれ、何度となく目を拭ったにも拘らず満たすことが出来ず、悲しみのうちにも切望の念を交えることとなった、そんな好奇心をです。

ご判断願いたいのです、ベルフォード殿（貴方は大変に人情味豊かな方ですから）、この私もどれほど心動かされたのかという点をです。それでいて私は、皆を慰めることに努めなければいけなかったのです。

だが、本状につきましてはここで筆を置くことにいたしましょう。明朝早くにお送りするためであります。しかしながら、私の憂いに満ちた冗長さも、貴方にとりましては不快なものではないとの仮定に基づきまして、もう一通の書面に取り掛かる所存です。実のところ、すでに触れましたように、まったく眠気を催さないのです。ですから、私に出来ることといたしましては、筆を執る以外には何一つとしてないのです。また、心の痛む場面をさらに描かねばなりません。私のペンは、そんな言い方をして構わなければ、疲れ知らずなのです。これらの場面は記憶に生々しいものですし、また、もしかいたしますと、〈重く圧し掛かる悲しみが穏やかな憂いへと変化を遂げた時〉のことですが、お届けくださるのが適当とお考えの他の書面共々、貴方からその論評を賜るというご厚意に私自身が与ることにもなるのでしょう。

本状を貴方の元へ持参する道すがら、セントオールバンズにて、私の召使にあの立派な夫人を訪ねさせようと思います。夫人の容体をお知らせ出来るようにです。アラベラ嬢のほうでも夫人について尋ねておりましたが、私が自室へ引き下がった時のことで、丁重にも、部屋まで送ってくれたのです。あの娘は、われわれが別れた際の夫人の具合の悪さを大層案じておりました。そして、あの娘が申しますには、母の心配はさらに大きなものになるだろうとのことでした。

自分の死亡通知が確認されました暁には、この不幸な一族にとって避け難いものとなるはずの良心の呵責を予見しておりました愛すべき故人が、心配される皆の悲しみようにひ

どく心を痛めまして、死後に届けられる手紙によって皆を慰めようと努力いたしましたのも、別に驚くには当たらないのです。しかしながら、あの娘のさらに寛容なところは、死の二、三時間前、私たちが二人きりになりました折に、私に向かって、皆の弁解に努めたことなのです。また、自分の犯しましたたった一つの過ちを、妥当な程度を越えて（私の知るかぎりではの話ですが）罪深いものにしてみせたことです。しかも、それがなお一層の自発性をもって行われましたのは、おそらく（まことにもって、心の気高い娘です）、自分を犠牲にいたしましても、私には皆のことをより好意的に受け止めてもらいたいとの考えからなのでしょう。親愛なるお方、

貴方の誠実にして従順なるしもべ

Wm. モーデン

手紙　二十一

モーデン大佐より［承前］

惨めな思いの会葬者がすべて引き下がりますと、私は棺の蓋の釘を抜くよう指示し、新しい芳香剤と花を少々入れさせました。

旅をして来たにも拘らず、ほとんど遺体に変化はありませんでした。依然、美しい笑みを湛えているのです。

花を運んで来た女中たちは、遺体を花で取り巻きたいものと願っておりました。新たな噂きの言葉をあの娘の上に注ぎ掛け、ロンドンであの娘の世話をする許しが得られたなら幸せだったのにと、めいめい口にしておりました。中の一人は特にそうでして、従姉妹のアラベラ付きの侍女らしいのですが、他のだれにもまして、声高に嘆いておりました。そして、その女が背を向けるや否や、あの女には身に覚えがあるのだと、他の者たち全員が認めておりました。後ほど問い合わせてみて分かったのですが、この女というのは、無分別な厳しい処置により、私の愛しい従姉妹が自室に監禁されました際、あの娘の監視に就かされていたのです。

何たることでしょうか。一族全員に向かって掟を定める資格のある若い淑女に対し、このような仕打ちを行うというのですからね。また、そのような仕打ちに甘んじるのを容認するというのですからね。

棺の蓋の釘が抜かれたことを耳にいたしますと、私の親戚の者たちは、悲しみに沈む父親と母親は別ですが、意見の一致を見たかのように、全員揃って再び押し寄せて来たのです。ハーヴィー夫人があの娘の血の気のない唇に接吻いたしました。「この世の華でしたわね」というのが、夫人には精一杯の言葉だったのです。そして、アラベラ嬢に席を譲りました。アラベラ嬢は、あれほど惨い仕打ちを加えた妹の額に接吻をすると、従兄弟のジェームズに向かって（遺体と兄とに目をやりながら）ただ一言、「あゝ、お兄様　…　」とだけ言っておりました。一方、彼のほうは、美しい、血の通わぬ手を取り、接吻いたしました。そして、さっとばかりに身を引いたのです。

おじたち二人は言葉もありませんでした。遺体を拝んだものかどうか、互いに相手が手本を示すのを待っている様子なのです。私は蓋を元に戻すように命じました。すると二人

は、他の者たちも再び押し寄せて来たのですが、身を乗り出しました。かくも高価な宝石をごく最近納めることとなった入れ物に、最後の別れを告げるためです。

一人一人の悲しい胸の内がよどみなく言い表されるようになりましたのは、まさしくその後のことでした。麗人の遺体に向け、呼び掛けがなされたのですが、心からの愛情と熱烈この上ない称賛の気持ちこそが吹き込むことの出来る、そんな優しさのかぎりを尽くした言葉となっておりました。それぞれが親等の順に従っておりましたが、だれをとりましても、これまでにあの娘を眺めたことなどないかのようでした。自分たちの姪そのものだと、おじの両方が言っておりました。いわれのない仕打ちを受けた聖者だというのが、伯父ジョンの言葉です。いつもどおりの笑顔の妹だわ、と言ったのはアラベラでした。愛しいあの娘だというのが、全員揃っての言葉です。同じ柔和な表情だ　…　心地好い落ち着きぶりも変わりない　…　生まれついての威厳もそのままだ　…　あの娘が幸せなのは疑いのないところだ　…　あの美しい笑みがその証だ　…　自分たちこそがこの上なく不幸なのだ　…　とです。それから、もう一度、兄が血の通わぬ手を取り、その手にかけて復讐を誓っておりました。この悲嘆のすべてを生み出した、その呪わしい張本人に対する復讐をです。

惨めな思いの両親は、かつての最愛の娘と最後の対面をし、永久の別れを告げようと考えました。父親は広間のドアのところまで、悲しみに沈む母親の後ろについて行ったのですが、どちらも中に入ることは出来ませんでした。愛する娘の姿をもう一度見ないことには、二度と再び喜びを見出すことはないはずだ、と母親が言いました。しかし、自分たちの陰鬱な好奇心は翌日まで持ち越すことに、両名の意見は一致したのです。そして、手に手を取って引き下がったのですが、二人とも諦め切れない気持ちで、言葉もありませんでした。顔一面に悲痛な表情を浮かべ、相手の苦悩を凝視することも出来ず、互いに背を向けているのです。

全員が退去したところで、私も引き下がりました。そして、従兄弟のジェームズを呼びにやり、埋葬の際に読み上げられるべき説教についての妹さんの要望を知らせ、司祭者がだれであれ、事情が許すかぎり早目の通知をしておくのがいかに大切か、話して聞かせたのです。彼はリーウェン尊師の死を嘆いておりましたが、彼の言によると、妹さんが大層師を崇拝していたように、師も妹さんの大の賛美者であり、あらゆる人間の中でも、その役目には最適任者だっただろうというのです。

彼はすこぶる辛辣な言葉でブランド氏のことを語っておりましたが、妹さんの都での評判に関する氏の軽率な調査ぶりに、自分自身に起因する責任の一端を負わせたがっていたわけです。

リーウェン師の助手のメルヴィル氏こそ適任であろうと、彼は言っておりました。そして、氏の才能、弁舌、ならびに、非の打ち所とてない物腰を褒め称え、翌朝早くに予約することを約束したのです。

彼が妹に呼び掛けますと、妹も彼と同意見でした。そんなわけで、この件は二人に任せることにしたのです。

妹の遺言執行人として、貴方には不同意である旨を、少なからず気色ばみながら、二人揃って仄めかしておりました。妹さんの破滅をもたらした張本人と貴方とは、親友の関係にあるというのが根拠です。

この際の二人の言葉に関し、私が報告いたしますどの点につきましても、お怒りのなきよう願います。ご立腹なきことを頼みに、一層忌憚のない筆遣いをいたしましょう。

私といたしましては、我が愛しの従姉妹がどれほど貴方のご厚誼とご親切に与っているのかということ、あの娘が貴方に与えました数々の指示、そして、それらを遵守なさろうとする貴方のご意向を二人に話して聞かせました。貴方は名誉を重んじる方であり、一族のだれに対しても、好んで侮辱を加えるおつもりはなく、それゆえ、私の助言を望んでおられるのだし、私としても、貴方のご厚情を求め、親交を深めるのは大いに好むところであると言ったのです。

二人が申しますには、一族以外の遺言執行人は必要ないとのことでした。また、二人に言わせますと、はなはだ無用な、ということになりますが、そのような信託から貴方が手を引いてくださることを二人としては望んでいる、というのです。従兄弟のジェームズのほうでは、葬儀が終わり次第、貴方宛に一筆認めまして、遺言書の指示するところはすべて執行される旨を正式に請け合いました上で、手を引いてくださるようお願いするつもりだと言明しておりました。

貴方は意志堅固なお方であると、私は申しました。貴方がこの件を一身の名誉に関わる問題としておられるだけに、彼に成功の見込みはほとんどないだろうと言ったのです。

その後私は、二人の妹からの、死後に届けられました貴方宛の手紙を見せてやったのです。貴方への感謝の念と、貴方と貴方の将来の安寧に対する心遣いとを表明しているものです(ア)。信じていただいて構いませんが、一読の後、二人は極度に心を動かされておりました。

祖父の地所に関し、祖父死亡後の収入を私が貴方に譲渡いたしました点を、二人は驚いておりました。私は飾ることなく、次のように話しました。妹さんはあのように見捨てられ、他人の手中に放り出されたわけでもあり、妹さんの取った方策から、何か二人にとって不愉快なことが起こるとしても、それは自業自得というものだ、とです。

二人のほうでは、私の話をすべて父母に報告すると言い、自分たちの苦悩は大きなものであったけれど、どうやら、さらなる苦しみが待ち構えているようだ、と付け加えておりました。ただ、自分たちの希望とは裏腹に、ベルフォード氏があの娘の遺言執行人になる予定ならば、自分たちの不幸のことごとくについてその責任を帰さねばならない、そんな男の友人が眼前に姿を現さないためにも、すべてに亘って貴方との交渉の労を取ってほしいと、二人は私に懇願したのです。

葬儀での説教の主題として妹さんが選んだ聖句に、二人は非常に心を打たれておりました(イ)。その条項については遺言書から抜き出しておいたのです。遺言書そのものを二人に見せる機会がそんなに早くは得られないかもしれないと考えてのことでしたが、そうでもしなければ、埋葬の件もあり、早めに見せる必要が生じていたことでしょう。埋葬は引き延ばすわけには行かないのですから。

月曜日　午前八時から九時にかけて

朝食の席での悲しい会合に向け、惨めな一族は準備を進めております。私同様にほとん

(ア) 十一頁から次頁にかけてを参照のこと。(イ) 遺言書の結びの部分を参照のこと。

ど休むことの出来なかったジェームズ・ハーロー君が、メルヴィル氏宛に一筆認めましたが、氏のほうでは、故人についての短い賛辞の作成を約束してくれました。ハウ嬢もやがて到着の予定ですが、愛する友人との最後の対面のためです。

ハウ嬢からは、使者を通じ、気遣いは一切なきようにとの要望でした。六分とお邪魔はしないだろうから、というのが令嬢の言葉でした。令嬢の要望は易々と叶えられることでしょう。

この要請をもたらした令嬢の使用人は、要請が拒絶された場合には引き返し、令嬢と落ち合うことになっておりました。と申しますのも、使用人が馬の背に跨がった時には、令嬢はすぐにも自分のチャリオットで出発するところだったからです。

拒絶の報を届けるのではない場合には、令嬢が到着するまで、使用人はここに留まることになっていたのです

誠意をもちまして、貴方の謙虚なるしもべ

ウィリアム・モーデン

手紙　二十二

モーデン大佐より［承前］

九月十一日　月曜日　午後

拝　啓

こちらでは、互いの関係がひどく気まずいものになっておりますため、自室に引き下がって筆を執りますことが、なにがしかの救いとなるくらいなのです。

九時半頃、朝食への呼び声が掛かりました。われわれはそれぞれ生気も気力も失せた状態で席に着きましたが、腫れぼったい目で、好ましい報告などは一切期待せずに、よく休めたかどうか尋ねておりました。

悲しみに沈む母親は、返答として、休息とはどのようなものか、この先二度と知ることはないだろうと言っておりました。

全員が席に落ち着いた頃、ベルが鳴り、表の門が開き、一台のチャリオットが中庭の敷石の上をガタガタと走る音で、皆の心は激しく騒いでおりました。

私は皆の傍を離れました。そして、辛うじて間に合いまして、ハウ嬢がチャリオットを降りる際に手を貸すことが出来たのです。令嬢の侍女はチャリオットに乗ったまま涙に暮れておりました。

ハウ嬢には一度もお会いになったことがないと言っておられたように思います。洗練された優雅な若い淑女です。表情の全体を覆って離れない憂鬱な思いが、快活さと生気とに翳りを与えておりましたが、それでも、恐ろしいほどの沈んだ表情の底から、時々はその輝きを見せているのです。このお嬢さんにつきましては、我が愛しの従姉妹に寄せてくださる愛情に対し、今後とも常に尊敬の念をもって接する所存です。

「またこの玄関をくぐるなんて、思いもしませんでした」と、私に手を預けながら、令嬢は言っておりました。「でも、生きておられても亡くなられても、私のクラリッサはどこへだって私を連れて行くのです」とです。

令嬢は私を伴って小さい広間へ入りました。そして、棺を目にすると、私の手を振りほどき、もどかしげに蓋を押し退けました。同じもどかしげな仕方で、顔を覆っている布も取り去ったのです。狂気じみた態度でしたが、差し上げた両手を握り合わせ、今遺体に目を向けたかと思うと、次には天を仰ぎ、あたかも神に訴えているかのようです。胸が波打ち、動悸を打っているのが、ネッカチーフを通して窺えます。そして、令嬢はついに沈黙を破ったのです。「おゝ、あなた、ここにご覧いただけませんか　…　ここにご覧いただけないでしょうか　…　女性の誇りと言うべきお方をです。卑劣なことこの上ない男によってこのように　…　こうして　…　卑しめられてしまうなんて　…　」とです。

「おゝ、天国におられる私のお友達　…　」と、令嬢は言っておりました。「私の優しいお友達　…　私の素敵な指導者」と、優しい呼び名を口にするごとに、あの娘の唇に接吻をしているのです。「で、これがすべてなのでしょうか。これでお終いだというのでしょうか、私のクラリッサの物語は　…　」とも言っておりました。

それから、少し間を置き、深い溜め息をつきますと、令嬢は私のほうへ、次いで、息絶えた友人のほうへ顔を向けておりました。「でも、本当にあの方は亡くなられたのでしょうか。そんなことってあるのでしょうか。あゝ、違うわ。休んでおられるだけだわ。目を覚ますのよ、大好きなお友達。私の愛しい、粘土のように冷たいお友達、目を覚ましてちょうだい。貴女のアナ・ハウに任せてほしいの。貴女を生き返らせるのはね。暖かい息で生き返らせて上げますわ、大好きな方」　こう言うと、もう一度あの娘に接吻をして、「私の暖かい唇で、貴女の冷たい唇を動かして上げましょうね」と言っておりました。

その後、心の底から漏れたように、また、あたかも、あの娘の返事がないことに失望したかのような態度で、もう一度溜め息をつきながら、「あれほど完全無欠な人がこのような終わり方をなさって良いものでしょうか。本当に貴女は貴女のアナ・ハウから飛び去ってしまわれたのでしょうか。あゝ、意地悪な私のクラリッサ」と言うのです。

しばらく令嬢は黙り込んでおりました。それから、我に返ったような様子で、私のほうを振り向き、「お許しください。お許しくださいね、モーデンさん、この狂気じみた取り乱し様のことは。私、正気ではないのです。二度と正気には戻らないでしょうね。このように卑しめられてしまった方の素晴らしさを、素晴らしさの半分も、貴方はご存じないのですわ」と言っておりました。そして、「私のクラリッサの物語がこれでお終いだなんて、勿論、有り得ないことですわね」と繰り返すのです。

もう一度間を置き、「一滴の涙を、あゝ、大好きなお友達、貴女は私に割り当ててくださいました。でも、言葉にならないこの悲しさ　…　あゝ、今にも張り裂けそうな、一杯に膨れ上がったこの胸を楽にしてくれる、一滴の涙がほしいのです。

でも、何故なのでしょうね、モーデンさん。あの人は何故ここへ送られて来たのでしょう。どうして私のところではなかったのでしょう。あの人にはお父様もお母様も、身内の方もいらっしゃらないのです。えゝ、一人としていらっしゃいませんわ。皆さんは揃ってあの人と縁を切られたのです。私こそあの人のお気持ちの分かる友人だったのですし、大切なあの人の亡骸を受け取る権利は、私に一番あったのではないでしょうか。名ばかりで実質を伴わないものが、私が抱いておりますような愛情よりも優先されなければいけないのでしょうか」と言っておりました。

令嬢はもう一度あの娘の唇、左右の頬、額に接吻しました、そして、胸も張り裂けんば

かりに溜め息をついておりました。

「でも、どうしてなのでしょう」と、令嬢が言いました。「私の一番好きな、大切なお友達が天使になられる前にあの人とお会いするのを引き止められましたのは、何故なのでしょうか。私が心から熱望しておりました友人としての訪問をなおも延期してしまいましたし、また、日延べするよう、あまりにも簡単に説得されてしまったのです。この点を思い返しますと、どれほど心が痛むことでしょう。あゝ、天国におられる私のお友達 … 参りますのが間に合っておりましたなら、真心込めた私の慰めがどれほどお役に立っていたことか、だれにだって分かりはしないのですわ。

でも（と、一族のだれかと会うのを恐れているかのように、辺りを見渡しながら）、もう一度接吻をいたしましょうね、私の天使、私のお友達、とこしえに惜しまれる、今は亡き私の友 … さあ、この忌まわしいお宅から逃げ出させてくださいね。貴女のことさえなければ、好ましく思ったためしはないわけですからね。それでは、お別れね、大好きな大好きな私のクラリッサ。最後のお手紙で請け合っておられましたように、貴女はお幸せなのです。疑いございませんわ。あゝ、私たちの無垢な心を脅かすとか、私たちの至福を乱すとかいたします卑劣なラヴレースも、冷酷非情な縁続きの方たちもだれ一人居合わせないところで出会い、一緒に喜び合いたいものですわね」

令嬢は再び沈黙し、そのつもりのように見えながら、立ち去りかねているのです。いうならば、悲しみと戦い、苦しみに喘いでいるのです。幸いにも、ようやくのことで両の目から涙がどっと溢れ出ました。「さあ、さあ、これで」と、令嬢が言いました。「私も楽になるでしょう。この優しい救いの手がなかったなら、私の心は張り裂けて、バラバラになっていたことでしょうね。私のクラリッサには、これよりもたくさんの、もっとたくさんの涙が捧げられて当然なのです。あの人は助言を通して、私がして上げられなかったことを私のためにしてくださったのですもの。でも、何故でしょう」と、両手を握り締めて差し上げ、真剣なまなざしをあの娘の上に注ぎながら、「幸せな方のことをこのように嘆くのはどうしてなのでしょうね。それに、貴女がお幸せだということは、私には慰めなのですもの。そう、そうなのよ、愛しい人」と、もう一度あの娘に接吻しておりました。

「ご容赦くださいね」と、私の方へ振り向きましたが、私も令嬢と同じくらいに心を動かされていたのです」。愛しいあの人をお慕いしておりましたが、それは、いまだかつて女の人が別の女の人に寄せたこともないほどの気持ちだったのです。私の気違いじみた嘆き様のこと、ご容赦くださいね。女性の誇りともすべき人が、非道の仕業と薄情さとの犠牲になってしまわれたのです」

「マダム、皆も苦しいのです」と、私が言いました。「実際に今は、皆辛い思いをしているのですよ」とです。

「苦しんでもらうと良いのですわ。仮にもあの人たちに同情したりいたしますと、心の友へ寄せる私の愛情が嘘になってしまいますもの。でも、何て不幸なのでしょう」と、あの娘を見詰めながら」、私は。この二つの目が閉ざされます前には、この唇が永遠に閉ざされてしまいます前には、この人に会えなかったのですからね。あゝ、貴方はご存じないのですわ。この人がお話をなさる時に、この唇から途切れることなく流れてまいりました叡智のことは。そして、私はどれほどのお友達を失ったのかということをです」

そして、棺の蓋を眺め、令嬢は即座に紋章の意味を理解した様子でした。そして、この

ことが令嬢にとっては新たな、極めて大きな悲しみとなったため、幾度か目を拭ってはみたのですが、銘文と聖句を読み取ることが出来なかったのです。それで、私のほうへ振り向くと、「どうか、お願いいたしますわ。一行でも構いませんので、これらの図柄と聖句についてのご説明を賜りたいのです。それに、愛しい人の髪の毛を一房いただくことが出来ましたなら　…　」と言っておりました。

その両方について、あの娘の遺言執行人が指示を出すはずであるし、あの娘の遺言状の写しも送ってくれるだろうと、私は令嬢に伝えました。また、あの娘は令嬢のことを〈心の姉〉と呼んでいるわけですが、令嬢へのあの娘の愛の証となる心からの謝辞を、令嬢はその遺言状の中に見出すことだろう、とも話したのです。

「そのように呼んでくださるのも当然ですわ」と、令嬢が言いました。「私たちはたった一つの心を、たった一つの魂を分かち合っていたのです。そして今、良いほうの半分が私から引き裂かれてしまったのです。一体どうしたら良いのでしょうか」とです。

しかし、召使がドアのところを通り過ぎると、一族のだれかであるのをまたも心配するかのように辺りを見渡しながら、令嬢はこう言ったのです。「もう一度、厳粛な、永久のお別れをいたします。悲しいのです、私。厳粛な、永久のお別れなのです」とです。

それから、再びあの娘の顔を両手で包むようにして接吻をし、その後、愛しい故人の両手の、まずは片方に、次いでもう一方に接吻をすると、令嬢は私に手を預けました。そして、大急ぎで部屋を去り、自分のチャリオットに駆け込んで、そこに収まると、深い溜め息をもらし、新たな涙を溢れさせながら、話をすることも出来ず、私に向かって頭を下げておりました。そして、馬に引かれて去って行ったのです。

一同の元へ戻った際のことですが、悲しみに沈んでいる皆の目に、ひどく心を動かされている私の姿が映りました。ジェームズ・ハーロー君は皆に向かって、自分と私との間で交わされました事柄を話しておりました。私自身も付き合いをする気分ではありませんでしたし、私が入って行くのを目にして、皆が話を中断するのに気づきましたので、私といたしましては、内輪同士で話し合いをさせて置くのが適切なことと考えた次第です。

本状につきましては、これにて結びといたします。と申しますのも、実際のところ、この心痛む場面を思い起こしますと、その直後には親戚の者たちと話し合うことも出来ませんでしたが、同じように、それだけで筆を進められなくなってしまうからであります。

嘘偽りもなく、

この上なき従順な心を添えまして、貴方の謙虚なるしもべ

ウィリアム・モーデン

手紙　二十三

モーデン大佐より［承前］

九月十二日　火曜日

善良なノートン夫人が到着しました。わずかながら元気が良くなっておりましたが、これは、いわば死後の便りと称しても構わないもので、夫人に対しては致命的な影響を及ぼすだろうと、私同様、ベルフォード殿、貴方も心配しておられた、例の数通の手紙そのも

のに起因していることでした。

この点は、夫人の正しい物の考え方に帰さないわけにはまいりません。夫人は不幸に慣れ親しんでおり、常により良い生活を夢見て生きて来たらしいのです。そして、自らを責めなければならないような、愛する故人への薄情な振舞いはありませんでしたから、まことにもって思いやり溢れる話ですが、悲嘆に暮れる母親を慰めるため、堅忍不抜の心を精一杯働かせようと決心したのです。

あゝ、ベルフォード殿、今は亡き我が愛する従姉妹の名声は、口の端に上るたびに高まって来るのです。あの娘が私の実の子か妹であったなら …… それにしても、貴方のお考えでは、この大きな、この広範囲に亘る荒廃のきっかけとなった男は …… だが、慎むことにいたします。

葬儀が執り行なわれますまでは、遺言書の内容確認は行われない予定です。葬儀の準備が進められており、一族のすべての分家の家長たちと同様、使用人たちも厳しく喪に服することを強いられているのです。

メルヴィル氏に会いました。真面目で分別のある人物です。葬儀の際に朗読してもらう説教の中で触れるべき詳細について、私のほうからお示ししたのですが、不幸な物語の一部始終を極めてよく知っておりますし、個人的にも我が愛する従姉妹の崇拝者で、あの娘の災難と死を心から嘆いていてくれることが分かりましただけに、このようなことをする必要はあまりなかったのです。つい最近亡くなられたリーウェン尊師が彼とは特別に親しい間柄で、尊師は彼があの娘の好意と注目に与るよう、かつては推薦しようと考えたこともあったのです。

○○○

ちょうど今、悲嘆に暮れる両親のところから戻って来たのですが、愛娘の遺体を一目見ようとする二人の努力に付き合っていたのです。私と善良なノートン夫人の付き添いを二人は要請したのです。何としても、最後の別れをしなくてはいけないのだと、母親が言っておりました。

しかし、あくまでもそれは〈努力〉であり、努力以上のものではありませんでした。棺が見えた途端、蓋が外されるよりも前に、「おゝ、おまえ」と、後退りをしながら、父親が言っておりました。「無理だよ。やはり耐えられないのだよ、私には。もしも私が …… もしも …… もしも冷酷な真似をしなかったなら …… 」とです。そして、奥様のほうへ振り向いたところ、辛うじて間に合いまして、奥様を両腕に受け止め、床に倒れ込むのを防ぐことが出来たのです。「おゝ、我が最愛の者よ」と、彼が言いました。「これはあまりにも辛すぎる。まったくだ、辛すぎる。さあ、さあ、引き上げるのだ」とです。優しい奥様の傍を（荘厳な入れ物に引き寄せられたためですが）離れたばかりのノートン夫人が、奥様のところへ駆けつけました。「あゝ、あゝ、あなた」と、夫人の首に両腕を投げ掛けながら、惨めな母親が叫び声を上げておりました。「担ぎ出してください。私をここから担ぎ出してちょうだい。あゝ、我が子よ、我が子よ、私のクラリッサ・ハーロー …… ほんの先頃までは、私の生涯の誇りだったあなた …… 二度と再び、絶対にあなたを目にしてはいけないのだわ」とです。

私が惨めな思いの父親を、ノートン夫人はくずおれてしまいそうな母親を、それぞれ支えて隣の広間へ連れて行きました。母親はそこの長椅子に身を投げ出し、父親は母親の傍らにある肘掛け椅子に座り込みました。あの善良な婦人は母親の腰を両腕で抱き締めながら、その足下におりました。こう言っても構わないでしょうが、我が愛する従姉妹の二人の母親がこうして優しく労わり合っているのです。こういった痛ましい場面には、何と多様な苦悩の形があることでしょうか。

惨めな思いの父親は、何とか奥様を慰めようとして、自分を責めておりました。「神にも祈る思いだよ、おまえ」と、彼が言いました。「おまえと同じように、私にも自分を責めるところがなければ良いのだが。おまえは怒りを解いたのだ。怒りを解くよう、私を説得しようとしたのだよ」とです。

「私の過ちはそれだけに一層大きいということですわ」と、奥様が言いました。「あのようにおとなしく従いますには、お怒りが度を越しておりますのを承知していたわけですもの。何という残酷な母親だったのでしょうね、私も。腹を立てております二人の子供のために、自分が三人目の子供の母親であることを忘れてしまったのですからね。あれほどの三人目でしたのに……」

ノートン夫人は道理を並べ、祈りを込めて奥様を慰めておりました。「あゝ、ノートンさん」と、惨めな思いの奥様が答えました。「愛しいあの娘にとりましては、貴女のほうが本来の母親らしい方でしたわ。本当に、貴女と同じように、我が身を責めるところがなければ良いのですけれどね、私も」とです。

惨めな思いの夫婦がこうして甲斐のない言い合いをしておりますと、やがて親戚のハーヴィー夫人が入ってまいりました。そして、ノートン夫人と一緒に悲しみに沈んでいる母親をその自室まで連れて行ったのです。二人のおじとハーヴィー氏が同時に入ってまいりまして、自分たちと一緒に自室に引き上げるよう、悩み苦しんでいる父親を説得いたしました。その死が二人にとって嘆きの種となりますのは当然至極なのですが、二人といたしましては、この先も、あの子の姿を一度でも目にしようという考えはすっかり捨て去っていたのです。

これほどに辛い肉親との死別というものを相手とし、有利な戦いを進めることが出来ますのは、ベルフォード殿、時の流れ以外にはないのです。人を失って間もないうちは、助言も効果はありません。いわば、悲しみ自体が底をつくまで、人の本性は我が儘を通そうとするものなのです（また、それで当然です）。そして、時宜を得た頃合に、理性と宗教心とが強力な援助の手を差し延べ、打ち萎れている心を奮い立たせてくれるのです。

最初に参りました時に目にしたものと同じ顔は、ここには一つも見当たりません。あの時には、どの表情も誇り高く横柄で、懇願に耳を貸そうとはしなかったのです。今は、何と大幅な遜りようなのでしょう。何の慰めとてない会葬者一人一人の突き出た目鼻立ちの一つ一つ、張り裂けそうな筋肉の一つ一つに、極度の苦悩が露に浮かんでいるのです。つい先頃まで憤怒の火をぎらつかせておりました皆の目が、今では、まるで憐れみを乞うかのように、近寄って来る者一人一人に向けられているのです。頑なな冷酷非情さがこれ以上に厳しく罰せられるようなことは、果たしてあるものでしょうか。

ユウェナリスの以下の詩行は、概ね、この家と一族とに当てはまりますし、日曜の夜以降、何度となく私の胸にも去来していたものなのであります。

万人の習わしの何たるかを知りたくば、
一軒の家にて足る。数日をそこにて過ごし、
退出に際し、その気あらば、己を不幸者と称すべし（一六）。

死後に届けられました手紙について、ノートン夫人が一族の者たちに知らせましたことを付言させていただきます。この手紙は将来的な慰安の礎を皆にもたらすものではありますが、現在のところ、あのように卓越した娘、姪、そして、妹に対する自分たちの残酷さを思い起こさせることで、皆の悲痛の念に新たな苛烈さを加えているのです（ア）。

誠意をもちまして、貴方の謙虚なるしもべ
WM. モーデン

（ア）この手紙の内容は概ね以下のとおりである。つまり、幼い頃に受けた世話、優れた教えの数々、そして、身を以って示してくれた素晴らしい手本に対する、善良な女性への謝辞に加え、災難に遭遇することで（自分の内面に目を向けざるを得なくなり）明るみに出たのだが、それまでは心の内に潜んで自覚されることもなかった、自惚れ心と僭越さについての自責の念が述べられている。

慎み深く、神を畏れ、遠慮を忘れない心に対して苦難がもたらしてくれる利益に関し、令嬢は詳細に説いている。

自らの夭逝について、夫人を慰めている。令嬢が言うには、五十、六十、あるいは、七十の齢を数えるまでは、神の恩寵の陽射しを受け、より良い人生へと成熟することのない者が多い中で、自分はこれほどの若さで、〈試しの課程〉を終了したわけだから、とのことである。

「以前にはそう呼ばれておりましたし、かつては貴女と幸せに暮らすつもりでおりました私の〈搾乳小屋〉で、貴女に余生を過ごしていただこうというのですが」と、令嬢は語り、「遺言書で行いましたそのような要請を父が許してくれますよう、私は願っております。思慮分別を発揮し、倹約に努めてくださいますなら」と、言葉を続け、「あそこの家政を取り仕切っていただくことは、貴女のために好都合であるのと同様、皆にとりましても有益なことでしょう。貴女のためにこそ、大好きなノートン夫人、皆のほうでこの申し出をしてくれますよう、私は願っております。そして、その場合には、貴女のほうでも、皆のために申し出を受けてくださいますよう、希望いたします」と述べているのである。

令嬢はこの上なく思いやりに溢れた挨拶を乳兄弟に送っている。そして、彼のためにも、自分に降り懸かった災難についてあまり思い煩うことのないよう、夫人に命じるのである。

令嬢は次のように手紙を結んでいる。

「最後になりましたが、貴女のお知り合いで、私に好意を寄せてくださる皆様、そして、〈私の貧者たち〉と呼び習わしておりました人々に宜しくお伝え願います。あの人たちは、神に信頼を寄せてくれますなら、〈神の貧者〉となるのです。然るべき処置を講じてありますので、私の死により、あの人たちに損失が及ぶことはないものと存じます。ですから、喜んでくれるよう、あの人たちにお話しいただきたいのです。また、私の尊い慰安者、そして、支援者（順風満帆の時と同様、逆境の時にも）であります貴女にも、同じように喜んでいただきたいのです。行く手に待ち構えておりました災いから、こんなにも早く私が救い出されましたことを、そして今、これがお手元に届きます頃には、謹んでそのように確信する次第ですが、慈愛に満ちた神様の恵みに大きな喜びを見出していることをです。神様はこの上なく大きな試練の数々を通し、私を無事に導いてくださいましたし、こんなにも目出度い形で誘惑と苦難のすべてに終止

手紙　二十四
モーデン大佐より［承前］

九月十四日　木曜日　夜

われわれ一同、悲しみに満ちた最後の儀式を執り行ない、今戻ったところです。従兄弟のジェームズとその妹、ハーヴィー夫妻、そして、今は亡き我が従姉妹へ寄せる愛情のゆえに、いつまでも私に義理の念を抱かせることになりましょうが、夫妻の娘である若い淑女、親戚のジョンならびにアントニー・ハーロー、私自身、そして、案内も受けずにやってまいりました、フラー、そして、アリンソンという名の、もっと遠縁に当たります別の親戚が（この者たちは、故人の霊に敬意を表して喪服に身を包んでおりましたが）参列したのです。

この最後の数時間には、父親と母親も出来れば加わりたかったのです。しかし、二人ともひどく気分が優れませんでした。そして、その状態は今も続いているのです。

この世でも最も愛すべき娘にとっての二人の母親というのは、このような折に離れ離れになってはいけないのだと、ノートン夫人に向かって、悲しみに沈む母親が話しておりました。そんなことから、母親といたしましては、自分のところに留まってほしいと夫人に頼んでおりました。

葬儀の一部始終は厳かなうちにも整然と執り行なわれました。ハーロー邸から教会までの距離はおよそ半マイルあります。その間ずっと、ありとあらゆる身分の者たちが大勢遺体に付き添ったのです。

教会に入ったのは九時でしたが、隅々まで人波で埋め尽くされていたのです。これほどまでに深く、これほど静かに敬意が払われる様子は、君主たちの葬儀におきましても、一度として目にしたことはありませんでした。聞き漏らすまいと耳を傾けつつも、悲しげな表情が全員の顔を覆っておりました。

メルヴィル氏によって捧げられた故人への賛辞は、非常に心を動かすものでした。氏自身が何度も目を拭っておりましたし、居合わせたすべての者たちもさらに頻繁に自分たちの目を拭うことになりました。

耳を傾けている者たちが特段に心打たれましたのは、聖句があの娘本人の選択によるものであることを氏が皆に語り聞かせた時でした。

氏はあの娘の優れた点を並べ立て、それを立証するものとして、最近亡くなりました徳の高い当地の牧師の名を恭しく挙げておりました。

数え上げられました美質の一つ一つが、敬意を込めた囁き声によって、教会のあちらこちらで様々な人々から証言されました。後ほど知らされたのですが、それは皆のほうでも直接に承知していることだというのです。

あの娘が（率先垂範、信仰の評価を高めていたのですが）腰を下ろしたり、跪いたりしておりました座席のほうを氏が指差しますと、聴衆全員は、この上なく敬意のこもった厳粛さで、一斉にそちらのほうへ振り向いたのですが、まるであの娘本人がそこに来ている符を打ってくださったのです。また、神様は、畏れ多くもそのように確信する次第ですが、適当とお考えの折に、永遠に祝福された土地での楽しい出会いを私たちにお与えくださることでしょう」とである。

とでも言わんばかりでした。

謙虚さの中にも威厳が備わっておりましたあの娘の態度を氏が口にしますと、その言及に賛同する低いざめきが教会中に起こったのです。そして、私の席の下にいた小綺麗な貧しい女は、次のように付け加えておりました。本当にあの方はどこまでも慇懃で、だれにでも声を掛けてくださいました、というのです。

あの娘の慈善行為、熟慮に基づいた慈善行為に氏が触れますと、多くの者たちの目に涙が溢れました。そして、ある者の場合は溜め息とすすり泣きによって、また別の者たちは次のような言葉によってですが、あの娘に報いようとの思いが一人一人の口から漏れて来たのです。「あの方に逝かれ、貧しい者たちも心から残念に思うことでしょう」とです。

神が愛すると言われる〈喜んで与える人〉(二七)とはあの娘のことなのだ、という話になりました。そして、聞いたところでは、クラリッサ・ハーロー嬢が心掛けていた点は、不慮の災難で不幸に見舞われた者を、嘆き悲しむその心が苦悩に圧し潰されないうちに見つけ出して上げることだったと、若い婦人が話していたというのです。

注目すべき律義さと、実を結ばぬ勤勉さのゆえに選ばれた貧乏人の一団が、あの娘にはついていたのです。この者たちは自発的に恩人への最後の付き添いに加わりました。そして、教会の中に紛れ込み、遺体が台上に安置されている通路の近くに陣取っていたわけですから、それだけに、説教者から寄せられた賛辞があのように満場一致の、そして、あれほど感謝に満ちた賛同の囁き声によって迎えられましたのも、なおさらに驚くべきことではなかったのです。

あの娘の不幸な身の上話を承知の上で、兄の失意の表情や姉の涙で潤んだ目のことについて一言述べる者たちもいた模様で、「あんな薄情な真似をしていなかったなら、まったくの話、この折にはどうしていることやら」といった声も聞かれたのです。また、他の者たちは、厳しい父親と不幸な母親をいわば屋敷の自室まで追いかけて行き、「今は、怒りを解いたことへの責任を取っておられるのさ、お二人は。もう手遅れだとね。それこそ大変なお嘆きようなのだろう。葬列に加わることがお出来にならないのも、無理のない話だ」と言っておりました。

人々が常々していることではありますが、数人の者たちは、「これほどの完璧さをもってしても、正当な扱いをしてくれるよう約束させることの出来ない、そんな男がこの世にいるとは」と、驚きを隠しませんでした。私ならば、〈人間らしさを忘れない〉態度と言いたいところです。それに、正当な扱いを目指す他の動機がないといたしましても、あの娘の身分や財産のことを考えますと、己の利益にそんなにも無頓着でいられる人間がどこにいるというのでしょう。

立派な牧師は聖句を辿りながら、あの娘の時ならぬ死をもたらすこととなりました不幸な一歩に軽く触れました。氏はその原因を現世の実相に求めておりましたが、この世に完全無欠さというものは有り得ないというのです。尊敬と信頼には値しないことが判明いたしました男、そして、自分を受け入れてくれるよう、この上ない熱心さで求婚してきた男と利害を結ぶことに対して、あの娘が示しました気高い軽蔑の念について(絢爛たるご一族の皆様からは熱心に乞われていたわけですが)、氏は極めて丁重な言い回しで触れておりました。

氏が最も強調いたしましたのは、あの娘の幸せな最期のことでして、そこから、親戚の

者たちへの慰安と、聴衆のための教えを引き出していたのです。

一言で申しまして、氏の手際というのは、すでに並外れた程度に得ておりました評判を一層高めるようなものだったのです。

遺体が地下納骨所（教会内にある非常に広いものです）へ運ばれる段になりますと、棺の蓋とその図案とを一目見ようと、大変な人垣が出来ました。中でも、外套に身を包んだ二人の紳士が人波をかき分け、前のほうへ進み出ました。マリンズ氏とワイアリー氏のようで、二人は共に、我が愛する従姉妹の崇拝者を公言して憚らない人物なのです。

二人が棺に近寄り、その蓋に目を向けますと、マリンズ氏は「人間としての素晴らしさがそっくり、あのわずかな空間の中にあるのですね」と言っておりました。すると、ワイアリー氏のほうは、気持ちを抑えることが出来なくなり、教会から逃げ出さずにはいられませんでした。そして、聞くところによりますと、ひどく体調を崩しておられるということなのです。

ソームズ氏は乗馬用のコートに身を包み、教会の中の離れた場所にいたと言われております、また、何度か涙を流していたという話です。ただ、私のほうでは氏のお姿は拝見しておりません。

地下納骨所への入り口に近い席に、もう一人微行の紳士がおりました。棺が最後の場所へと運ばれます際のことですが、座席越しに注視しながら露にいたしました激しい感情のことさえなければ、注意を引くこともなかった人物なのです。これはハウ嬢のあの立派なヒックマン氏だったのです。

親戚のジョンとアントニー、そして、彼らの甥のジェームズは、今は亡き先祖たちの元へと地下納骨所へ降りて行く気持ちにはなりませんでした。

ハーロー嬢はひどく心を打たれておりました。愛情と同様、良心にも関わりのある出来事だったのです。自分が愛する、ただ一人の妹の遺体と一緒に行きたいと言っていたのですが、兄がそうはさせなかったのです。それで、彼女の涙に暮れた目は見えなくなるまで棺を追いかけておりました。そして、座席に身を投げ出しますと、危なく気を失うところだったのです。

私は棺に付き添って降りて行きましたが、あの娘が指示しておりましたとおり、祖父の足下への棺の安置に関し、私自身が安心するだけでなく、あの娘の遺言執行人である貴方にも納得していただくためのことだったのです。

メルヴィル氏が降りて来て、棺の蓋を眺め、その上に涙を数滴落としておりました。私は氏の言動に十分満足しておりましたので、あの厳粛な場所で、相当な値打ちのあります指輪を贈呈し、氏の仕事に謝意を表しておきました。

こうして、私は愛する従姉妹の遺体をここに安置したわけですが、あの娘の棺の傍らに私自身のための場所を予約しておきました。

ハーロー邸へ戻りますと、悲しみに沈む両親に挨拶の言葉を送るだけに止め、自分の部屋に引き籠もりました。また、このように告白いたしましても恥とは思いませんが、部屋に入りますとすぐに、何度となく繰り返し込み上げてまいります人間らしい気持ちに、この身を委ねずにはいられなかった次第です。

衷心よりの誠意と感謝の念を込めまして、貴方のしもべ

WM. モーデン

追　伸　従兄弟ジェームズの書状がお手元に届くことでしょうが、遺言執行人の職務をご放棄くださいますよう、貴方を説得したいと考えているのです。私からの奨励を得ていることではございません。

手紙　二十五
ベルフォード氏からウィリアム・モーデン氏へ

九月十六日　土曜日

拝　復

葬儀が執り行なわれますところを、変装して確かめるためですが、密かにそちらへ向かおうと考えたこともあったのです。しかし、心も痛むこの骨折りを自らに課す必要はありませんでした。今回のご書面が事の一部始終を極めて自然に描き出しておりますゆえ、情景の一つ一つが眼前に浮かぶからであります。

粛々と緩やかに進む葬列にこの身を加えていただいたようにも感じられるのです。神聖な棺と共に畏敬の念を誘う玄関口を通り、重々しい足取りで荘厳さ漂う通路を進んで行きます。令嬢との関わりを熱望し、目を捉えて離さない棺の近くの席に陣取り、故人への心揺する賛辞に耳を傾けるのです。口を開け、目を泣き腫らした人垣の、そのざわめきの中を、真の遺言執行人として、遺言書の例の箇所が執行されますのを私自身の目で確かめんものと、冷たくジメジメとした地下納骨所へ降りて行きます。そこでは、物思いに耽る心で、周りを取り囲んでいる死すべき命の記念碑を数え上げるのです。そして、生気はつらつとしている時には、陸にも空にも海にも居場所を見つけることが出来なかった、そんな遺体に対し、生存者が場所の提供を渋るかのように、ヴォールト天井のあるこの惨めな片隅へ押し込まれたわけですが、かつては虚飾に浮き身をやつしていた者たちの現在の黙して動かぬ姿に思いを馳せてみるのです。それから、令嬢こそがこの世の楽しみであったという人物、そして、私の承知いたしますところでは、自らの長寿を令嬢が与えてくれた喜びのお陰と考えている(ア)人物の、その足下に彼女が安置されているのを目にし、溜め息を漏らしながら、顔を背けて神聖な住まいを、象徴的な棺を、そして、女性の誇りたる者の元を永久に去り、今は（皆さんが手を組んで迫害した、その令嬢のことだけを悼んでいるのですが）自分の足で踏みしめている同じ地下納骨所の別の場所を、二、三年後、束の間の命の輝きの後に満たすこととなる者たちと連れ立ち、地上へと向かうのです。

また、心揺する貴方の描写に接しておりますと、ここで筆を置くわけにもまいらないのです。地上へ戻りますと、数え切れないほどの参列者に交じり、私も涙を流し、賛辞を交わすことになります。心を痛めている会葬者と共に慰みのない屋敷へ帰り、今となっては甲斐もない嘆きの大合唱に加わるのです。そして、やがて、想像上の話ですが、皆さんがお引き取りになると、私も引き下がりまして、実際には、独り寝もやらず、新たな悲しみに身を委ね、その最期を見取りました才媛のことを思い返します。また、救いといたしましては、例の〈困った男〉と、取り返しのつかない損失の原因となりました、あの〈令嬢

(ア) 第一巻の二十一頁を参照のこと。

の負けず劣らず困った親戚たち〉に対する他の者たちの怒りを私に是認させるような、そんな憤りから得られますものを措いては他にないのです。

この非難がましい言葉をご容赦ください。また、葬儀が終わるまではと、受け取りを辞退しておられたものですが、本状共々に送付いたしますことをお許し願います。

《その後ベルフォード氏は、ハーロー邸とその近隣の遺産受取人のため、この機を利用して氏に送付する現金ならびに動産に関する説明を行うのである。また、その処分については遺言に則って行うよう希望している。

また、ベルフォード氏は遺言執行のために取った他の処置についても報告を行っているのである。そして氏は、ハーロー氏としては、葬儀費用に関して、氏の手に委ねられている動産からの支払いを希望するのか、また、祖父の死後、女子遺言者に前払いされた金額について、その返済を希望するのか、知りたがっているのである》

これらの迅速な処置により（と、氏は述べるのであるが）、ジェームズ・ハーロー氏にも納得いただけることでしょう。つまり、私といたしましては、遺言が完全に執行されるよう取り計らう覚悟ではありますが、ただ、実行に移します際の方法によりまして、ご一族に不要の屈辱を強いることは望んでいないのだ、という点をです。皆様に関わります事柄につきましては、そのことごとくが貴方のお手を煩わせることとなるからであります。

手紙　二十六
ジェームズ・ハーロー氏からジョン・ベルフォード氏へ

九月十五日　金曜日　夜、ハーロー邸にて

拝　啓

尊敬すべき従兄弟モーデンが貴殿のものとしておりますお人柄からいたしまして、身内の者にとりましては心の平安に深い関わりを持ち、それ以外のいかなる人間にとりましても、同程度の関わりを持つことは有り得ないという事柄に関し、一族全員の意向を満たすためのことでありますが、小生が行います貴殿への願い出もご容赦いただけるものと考えます。即座にお察しいただけるでしょうが、これは、小生の妹がその遺言書により、貴殿にお骨折りをいただくこととなりました遺言執行人の職務の件であります。

この信託を我が一族にご委譲いただけますならば、われわれ一同、はなはだ忝いことと考える次第でありますが、以下に掲げます理由は、われわれがこのご厚情に期待を寄せる根拠となりましょう。

第一には、近親者のだれかが引き受けることを確信しておりましたなら、貴殿にお骨折りを願うような考えは、あの娘も決して抱かなかったはずだからです。

第二に、遺言の条項のうち、身内に関わるものの執行に対しましては、一族のだれにせよ、その名誉心に信を置いてくださるよう、あの娘が遺言の中で貴殿に勧めておりますことを小生は承知しているのです。われわれのだれにせよ、また、われわれ全員は、ご要望がありますならば、この際喜んで名誉を賭ける所存でありますし、名誉を重んじる人間と

して、貴殿がお望みになる点と申せば、ただ、信託が実行に移されることを措いては他にないはずなのです。

この任務をご辞退いただきたいとの希望にわれわれがこだわりますのは、愛する女子遺言者と貴殿が知り合われてから日も浅く、かつ、偶発的な出会いでありましたし、あの娘にとっては身の破滅を招くこととなった男、そして、われわれにとりましては、名のある一族にかつて降り懸かったものの中でも最大の損害と失望（あの娘の多岐に亘ります美質を考慮してのことです）とを被むることとなった男と、貴殿が長く親密なお付き合いをしておられますだけに、なおさらのことなのです。

われわれの立場を貴殿ご自身に置き換えてくださいますと、おそらく、この申し立てにもそれ相応の重みを認めていただけるはずと存じますし、また、小生のほうで次の点を確約いたしますならば、なお一層のご快諾をいただけるものと思います。つまり、われわれの意向にはなはだしく背き（率直なところはご容赦願います）、今回の件に口出しをなさいますと、何らの衝突も生じないはずのいくつかの点に関し、対立を引き起こす恐れが多分にありそうだということなのです。

従いまして、小生が提案いたしますのは、父にこの信託を引き受けてもらうことではありません。その義務を負うには、父の苦悩はあまりにも大きすぎるのです。また、小生自身が引き受けるわけでもありません。小生の場合、問題への関わり合いが強すぎるとの考えもありましょう。そうではなく、小生の二人のおじへの責任の委譲をお認め願いたいということなのです。世に知られた二人の名誉心、そして、愛すべき故人へ寄せる二人の愛情に関しましては、これまで疑義を挟んだ者は一人としておりませんし、執行を引き受けます諸点につきましても、貴殿との交渉は小生の従兄弟モーデンを通して行うことになりましょう。

遺言執行人として行動する資格を自ら帯びられるべきではありませんでしたし、未だその挙には出ておられず、また、今後ともそのおつもりもないものと拝察いたしてはおりますが、すでにお骨折りをいただいております点からも、貴殿が負担されました諸費用一切の返済と、お支払いいただきました遺産の支給と合わせ、あの娘が貴殿に残しました遺産をお受けになるには十分な資格を有しておられることになりましょう。

貴殿へのこのような願い出も止むなき状況にあります一族といたしましては（すでに苦難は十分に味わっているのです）、とりわけ、小生といたしましては、ご承諾をいただけますならば、感謝にたえないところであります。

貴殿のこの上なく謙虚なるしもべ
ジェームズ・ハーロー、ジュニア

小生の下男の一人の手を借り、本状をお届けいたしますが、急ぎご返事をいただけますならば、この男がご用命を承りましょう。

手紙　二十七
ベルフォード氏からジェームズ・ハーロー、ジュニアへ

九月十六日　土曜日

拝　復

小生も率直さをもって応じますことをご容赦願いますが、お引き受けいたしました職務の神聖さに関しまして、仮に、現に抱いておりますような正当なる見解を持ち合わせないといたしましても、ご送付くださいました書面中の数節を拝見いたしますに、職務の遂行を辞退すべきではないとの確固たる信念に至ると申し上げねばなりません。

その一節を挙げるだけで事足りましょう。貴殿が申されますには、おじ上たちは、信託が委譲されました場合、お引き受けになる諸点につき、小生との交渉はモーデン大佐を通して行われる、とのことでした。

ひとつ言わせていただきたいのですが、執行の可能な点につきましては、そのことごとくが執行されますように取り計らいますのが、遺言執行人の義務だということです。それに、小生の職務の遂行につきましては、いかなる人物にも委託するつもりもないということです。とりわけ、権限付与の件があのように直接的に告示されておりますし、あの比類のないご令嬢に関しまして、ご一族のすべての分家の方々がただ一つの考えでおられますことを示されたわけでもありますから、なおさらのことでして、お身内に関わりのあります条項の執行に関しましては、ご一族のどなたにせよ、その名誉心に信を置くよう、ご令嬢が勧めておられます点を貴殿は力説しておられました。しかし、仮にそのとおりであるといたしましても、他の条項につきましては、やはり、小生の監督下に置かれるべきことを含みとしてはいないでしょうか。ただ、これらの条項についてさえ、遺言書をご覧になればお分かりでしょうが、ご令嬢は放棄しておられないのです。遺言書をご参照いただきたいと存じます。

小生の口出しがなければ有り得ない話とのお言葉ですが、対立についての貴殿からの示唆の件、残念に思います。小生が理解し兼ねますのは、弁護すべくもない男に対して抱いておられる敵意が、貴殿に対して何らの無礼も働いていない者を相手に、何故にそうまで高められねばならないのか、という点です。しかもこれは、その者が例の男と知り合いだからというだけの話なのです。この際、すべては申さぬことにいたしましょう。

小生自身へのご遺贈の件についてですが、小生の暮らし向き、また、気質からいたしまして、遺言執行人の職務によって利得を計るといった挙に出ることはないことを保証いたします。可能な点すべてに亘り、あの称賛すべき女子遺言者の足取りを辿りますことに楽しみを見出し、あの方の貧者向けの基金を切り詰めるよりも、むしろ増加させることといたします。

信託の執行に伴うやもしれない苦難に関しましては、故人の霊を敬う気持ちからいたしまして、今回の件から生じるものの十倍の苦難をも意に介さないつもりです。実際、他に二件の遺言執行人の職務をこの手に抱えておりますが、楽な仕事なのです。また、生存者が自らの時間をより有効に用いるということでは、あるいは、慈善の目的に一層適った事柄に費やしますのには、これに優るものもありますまい。

小生が考えますところでは、貧者のための基金に関するものを除きますと（女性の中でも最も傑出したお方のご意向はまことに立派なものでして）、すべての条項は、いかに遅くとも、二ヶ月で遂行され得るように思います。

訴訟とか侮辱とかのきっかけが小生に端を発することはありますまい。貴殿はモーデン

大佐に働き掛けるだけで宜しいのです。遺言の許す範囲でご一族のご希望に添うことが出来ます点すべてにつきましては、大佐からご指示を仰ぐことになりましょう。小生といたしましても、ご一族のどなたのお気持ちにも劣らず、差し出がましい真似をする考えのございませんことは、誓ってお約束しておきます。

正直に申しまして、遺言の検認はまだ済ませておりませんし、早くとも、来週までは行わないつもりでもおります。大佐の仲裁によってそうなさるのが適当とお考えの場合ですが、友好的な異議申し立てを行う時間を貴殿に持っていただくためであります。ただ、ひとつ言わせていただきたい点があるのですが、〈遺言執行人の権限は、小生が行使いたしましたような事例にあっては、検認前においても検認後と同等であるということ、遺言執行人は検認を取らなくても、検認を根拠とした訴えは出来ないにせよ、訴訟を起こすことさえも可能であるということ、そして、こういった遺産管理の活動から、遺言執行人自身が訴訟沙汰に巻き込まれやすいということ〉であります。それゆえ、この神聖な信託の執行に当たり、一部において取りました小生の処置は極めて当を得たものでありますし、その際の費用を必要とはしていないのです。

一言付け加えさせていただきたいのですが、遺言を通読し、すべてを冷静に検討なさいました暁には、貴殿ご自身のほうでも、論争や反論の余地は有り得ず、また、遺言の執行を早めるために、ご一族が力を合わせてくださいますなら、それこそが、事のすべてに終止符を打ち、そして、左記の者のように、当の本人のことでいわれもなく貴殿の嫌悪の対象となっております人間と手を切りますのに、最も自然で最も簡単な方法なのだとのお考えをお持ちくださるものと希望する次第であります。

（さりながら）貴殿のはなはだ謙虚なるしもべ

ジョン・ベルフォード

遺　言　書

別葉に記載された以下の序文を黒の絹糸で縫い止めて添付

遺言執行人殿へ

この正式な最終証書の中で、その様々な部分において、重要な問題に関して記述が詳細に亘ります点はお許し願います。と申しますのも、死亡者の遺書が完全な明確さを欠いているため、家族内に混乱と不一致をもたらしました極めて多くの例について、また、疑念や難問についてもたくさん耳にしておりましたので、私はしばしば次のような結論に至っていたからなのです（後に残されます身内の者たちの心の平安を顧慮するものの以外には、他に理由がないとしてもです）。つまり、この最終証書は、その指示および運用に関しまして、その起草とか作成とかを最後まで延ばすべきではなく、冷静な思案の結果、そして、良好な健康状態にある場合以外には滅多に出会うことのない、（頻繁に口にされておりますが、実態を言い当てているとは申せません）あの健全な知力と記憶力との結果でなければいけないのだということです。遺言者が遺贈の理由を挙げます際に、精神異常の偽装もすべて予防されることになりますし、言葉尻を掴まえた揚げ足取り一切も未然に防がれます。厚意に与る者たちは安心し、恩恵を意図された者たちはその恩恵を享受することになるのです。それゆえ、ここしばらくの間、私はその種の贈与の項目を書き留めることに専念し、理由が生じますにつれ、変更や加筆を行ってまいりました。従いまして、どれほど急に召されたといたしましても、完全に遺言を欠く事態にはならなかったのです。これらの草稿や不完全な下書きのお陰で、慈悲深くも神様が時間的ゆとりと平静さをお与えくださいましたこともありますが、それらをご覧のような形に整理いたしますことが可能になった次第なのです。

奇妙な、心も塞ぐ出来事により、今はコヴェントガーデンのセントポール教区に下宿住まいをしております、私ことクラリッサ・ハーローは、私自身によって作成され、本人の手で浄書されました本証書が証明してくれるものと存じますが、正常で申し分のない知力と記憶力を備えておりますゆえ、キリスト紀元＊＊＊＊年(ア)の［本日九月二日］(イ)、私の遺言書を以下の様式にて作成し、公示するものであります。

第一に、私の遺体につきましては、死後三日間、あるいは、父の意向が判明いたしますまで、埋葬をせずに安置願います。ただし、死因に疑いを入れるところはないわけですから、どのような理由にせよ、切開してもらいたくはありません。また、私の希望といたしましては、女性の手以外には触れさせたくはございません。

常日頃より熱心にお願いしていたところですが、私の遺体は先祖の者たちと共に、一族の地下納骨所に納めていただきたいのです。その点をお聞き入れ願えるようでしたら、次には、私の愛する、そして、尊敬いたしております祖父の足下に安置してくださいますよ

(ア) 年号は特別な理由により空白のままである。(イ) 浄書時にはこの日付のために空白にされ、この日に記入されたものである。第七巻の手紙八十五を参照のこと。

うお願いいたします。ただ、大変不都合な処置により、家門全体に不名誉をもたらしたと見做され、それゆえに、私の遺体に対しましては、この最後の栄誉を拒まれることも有り得ましょうから、その場合には、私が息を引き取ることになります教区の教会墓地に埋葬してくださいますよう希望いたします。それも、最も人目に付かない形で、夜の十一時から十二時の間にしていただきます。また、立会人につきましては、ロヴィック夫人とスミス夫妻、ならびに、夫妻の女性使用人だけにしていただきたいと存じます。

しかしながら、私の希望といたしましては、いわゆる一等地に、あるいはまた、内陣に安置されます人々のために通常支払われておりますものと同額の謝礼、および、料金をお支払いいただきたいのです。そして、教会役員の方の裁量に委ねますが、私の埋葬が行われました後の日曜日に、二十人の貧民に配っていただきますよう、五ポンドを遺贈いたします。そしてこれは、私の埋葬が当地で行われます場合にも、あるいは、どこか他の場所で行われます場合にも、変わるところはございません。

口頭での指示はすでに与えてありますが、私が息を引き取りました（また、指示いたしました埋葬の準備が済みました）後は、出来るだけ早くに納棺していただきます。親戚のだれかが、親切にも最後の一瞥を与えてくれる場合は別ですが、どなたの目にせよ、必要以上に人目には晒されたくないというのが私の願いです。

それから、ラヴレースさんと私の遺言執行人との間に悪感情を生み出すことなく避けることが出来るのでしたら、私の遺体を目にすることについて、ラヴレースさんには許可が与えられないようにしていただけたらと思います。ただ、あの人はとても手に負えない人ですし、私もだれのものでもないわけですから、もしもあの人が、いわば死んだような状態にありますところを、前に一度見ておられるわけですが、その女の死亡を確認したいと主張なさるようでしたら、その放埒な好奇心を満足させて上げてほしいのです。あの人の残酷な背信の犠牲となりました者の、その惨めな亡骸を眺め、凱歌を奏でるようにさせてください。でも、あの人が恐ろしい光景を眺めております間に、私からのお願いのようにして、どなたか立派なお方からあの人に紙片を手渡していただきたいのです。「放埒で残酷な心よ、かつては破滅に追いやられましたが、今では幸せを得ているクラリッサ・ハーローの亡骸をここに見るのです。貴方自身がすぐに迎えねばならない運命をご覧なさい。そして、悔い改めるのです」という短い言葉だけを載せた紙片をです。

とは申しましても、世間の人々すべてに完璧な愛情を抱きつつこの世を去ります証といたしまして、私への不当な行為につきましても、ラヴレースさんのことは心から許して差し上げましょう。

先にお願いしたことですが、祖父の足下に遺体を安置させてくれますまでに、父が不肖の子の過ちを許してくれるようでしたら、埋葬に先立ちまして、亡骸の上で短いお説教を唱えていただけたらと（私の不幸は周知のことですので）希望いたします。お説教の題目につきましては、この文書を締めくくります前に決定することにいたしましょう。

［何らの考慮にも値しないもの、そして、この証書が開封され、読まれることになりました暁には無に帰しますものについて、多々書き記しました点は、私の現在の不幸な境遇、また、肉親すべての元を離れておりますことをご勘案くださいますならば、ご容赦いただけるものと存じます］

さて、前述の祖父の遺言その他によりまして、当然のこととして私に属しておりますものはもとより、死亡時に所持することとなります財貨に関してですが、それらにつきましては、以下のとおりに処分いたします。

第一に、前述の遺言によりまして、私に請求権ないし所有権のございます不動産すべては、常に尊敬されるべき父、ジェームズ・ハーローに譲渡することといたします。一度は遺贈を考えておりました兄と姉を差し置きますのは、二人が父よりも長生きをいたします時には、婚姻継承的不動産処分その他に関する状況次第で得られます、あるいは、長く孝養に努めることで、各自が報償として受けるかもしれない、そのような父の好意や寛大さに基づきまして、それら不動産は間違いなく二人に、あるいは、二人のどちらかに帰属することになるからです。

以前は祖父のもので、〈森の館〉と呼ばれておりました家、そして、私と私の自発的な仕事のいくつかに敬意を表し、祖父により〈私の搾乳小屋〉と名付けられました家と、現状のままでのその家具類も（肖像画、そして、鉄製の大箱に一杯入っております古い食器類は除きます）、同様に、前述の父に譲渡いたします。ただ、私の愛するノートン夫人が余生をあの家でお過ごしになること、そして、〈家政婦室〉という名で知られております部屋を享受していただきますのをお認めくださいますようお願いいたします。備え付けの家具共々にですが、これは（質素でこざっぱりとしたものです）、私のことをご自分の家政婦と呼んで楽しんでおられた祖父から買い与えられましたもので、それゆえ、祖父の存命中には、私もそのような立場で使用しておりましたし、それが部屋に付随いたしますお役目だったのです。この推薦に一方ならず熱が入りますのは、あの善良な婦人とあそこで非常に幸せな日々を送ろうと考えたことがかつてはあったからですし、また、父の好意があの方にとりまして好都合でありますのと同様に、あの方の慎重な経営も父に利益をもたらすように考えるからです。

ただ、祖父の死後にあの地所から生じましたもの、ならびに、上記の祖父が死亡時に所持しておりました現金の半額と判明し、私個人の専用として贈与くださったもので［他の半分につきましては、同様の方法で姉に贈与なさったのです］(ア)、また、（父の厚意による独り立ちは望んでいないことを兄と姉に納得させようと）私に遺贈されました地所すべての管理と生産物共々父の手に委ねました九百七十ポンドの件ですが、これらのお金につきましては、合計いたしますと相当の高額になりますが、愛情と感謝の念を拠り所とし（分家のすべてに亘って極めて裕福な、私の一族だけに限定されるものではありません）、独断で処分いたしますことをお許しいただきたいと存じます。それゆえ、この金額は後述の要領にて処分することといたします。ただし、これは私の遺志でもあり、はっきりと指示をさせていただきますが、前述の生産物に関する父の決算報告は、従兄弟のモーデンに対してであれ、あるいは、父の好みの他の人物に対してであれ、父が行ってくださるままに受理され、無条件に（反論とか疑義とかはなしに）確証していただきたいのです。前述の決算報告が訴訟沙汰を引き起こすとか、あるいは、私の遺言執行人か他のだれかの監査を受けるとかいったことがなくなるようにとの考えからです。

父は愛情と気前の良さから、衣服その他の必要物のために姉に支給なさったのと同じ額

(ア) 第一巻の五十六頁を参照のこと。

の、年四回のお小遣いを与えてくださいました。そして、（当時は私に満足しておられましたので）祖父から遺贈された地所や動産からその額が差し引かれることのないようにと、常々言っておられたのです。ただ、一つの不都合な行いにより、父の感情を致命的なまでに損ねてしまった（そんなふうに言われそうな気がするのですが）わけですから、その額をご自分に対して弁償なさることも考えられましょう。従いまして、これは私の遺志でもあり、指示をさせていただきますが、祖父の死以降、親切にも前払いをしてくださいました四期払いその他の金額につき、父がその全額をご自分に対して弁済なさるのを認めていただくということ、また、その金額に関する父の決算報告も、同様に、疑義なしに受理していただくということです。ただし、私が書き物机に残してまいりました現金につきましては、職務執行費用の一部に当てていただくことにいたします。

私へのご厚情とご愛顧に際限のございませんでした祖父は、住んでおられたお宅にありました一族の肖像画すべてを、その一部は極めて見事な出来栄えのものですが、私にご遺贈くださいまして、次のようなご指示でした。つまり、私が未婚のままで世を去ります場合、あるいは、結婚をして子供に恵まれません場合には、肖像画は祖父の息子のうち（二人以上が存命中ならばですが）、それらに最も価値を置きそうだと私が考える者の手に渡ることにするというのです。さて、私の敬愛いたします伯父ジョン・ハーローは、肖像画が長男である自分に譲り渡されなかったことに対し、少々懸念を表しておられましたし、肖像画を見栄えのするように飾ることの出来る回廊を持っておられます。また、そのように信じるべき根拠もございますが、伯父は父のほうが長生きをしました場合には、父に肖像画を遺贈なさるでしょうし、父のほうでは、疑いもなく、兄に残すことでしょうから、私といたしましては、従いまして、前述の一族の肖像画すべてを前述の伯父ジョン・ハーローに遺贈いたします。ただ、これらの肖像画には、十四才の頃に描いてもらいました私自身のものは含まないこととし、それにつきましては、後ほど別項目にて遺贈いたします。

敬愛いたしております上述の祖父は、決して変更を認めようとはなさらなかったわけですが、一族に古くから伝わります食器類に大変な愛着をお持ちで、よく口にしておられましたが、生き長らえている間に、流行が大きく変わる中で、その多くのものに再び需要が出るのを目にして来たとのことでしたし、また、全品をそっくり保管するようにとのご指示、そして、私が死に臨みました際は、祖父の願望、つまり、祖父の言い方ですと、「いついつまでも保管されねばならない」ということですが、その願望を助長してくれそうに思われます、私の好みの人物に遺贈する権限共々、私にお譲りくださいましたので、祖父の先の住まいの金庫部屋にございました鉄製の大箱に納められております、この家伝の食器類は、私に与えられましたのと同じ指示を添え、敬愛いたします叔父アントニー・ハーローにそっくり遺贈することにいたしますが、叔父もご自分の遺言により、それらの指示を追認し、強化してくださることは疑いのないところと存じます。

十八年の生涯を通し、私が愛され、敬われることとなりました資格の数々につきましては、実際の話、常に尊敬いたします卓越した母の敬虔さと配慮を支えてくれました、あの方の敬虔さとご配慮に負うているわけですが、常に大切に思っております私のお友達、ジュディス・ノートン夫人には、正味六百ポンドを遺贈し、私の死後三ヶ月以内に支払われるものといたします。

また、善良な同婦人には三十ギニーも遺贈いたしますが、ご本人および私の乳兄弟であ

ります息子さんの喪服代のつもりです。

尊敬いたします私の母のただ一人の妹、ドロシー・ハーヴィー夫人には、指輪代として五十ギニーを遺贈いたします。また、幼少の頃より私にお寄せくださいましたご厚情のすべて、とりわけ、不幸にも私がハーロー邸を出奔いたします前に、兄ならびに姉と私との間にございました争いに際し、根気強く私に接してくださいましたことへの感謝の気持ちをお受け取りくださいますよう、お願いいたします。

心優しい、そして、とても大切に思っております私の従姉妹、叔母ハーヴィーの娘ドリー・ハーヴィーに対しましては、私の時計一式、最高級のメクリンレースならびにブラッセルレース（一八）のヘッドドレスおよびひだ飾りを、また、私自身の手に成ります、銀糸の花柄のあるガウンおよびペティコートを遺贈いたしますが、これは自室に閉じ込められますほんの二、三日前に出来上がりまして、一度も身に着けていないものです。

同じ若いお嬢様には、私のハープシコード、小型のパイプオルガン、そして、楽譜すべても同じく遺贈いたします。

姉には大変立派な蔵書がございますし、ハウさんにもご自分のものと合わせ、亡くなられたお父様のご蔵書がおありですから、私の書籍類一切は、それらが収納されております本箱と共に、前述の従姉妹、ドリー・ハーヴィーに遺贈いたします。女性の蔵書といたしまして、選択に適切さを欠くものではございませんので、私の蔵書であったということから、また、多くのものには私自身の評が書き込まれておりますし、真に尊敬すべきリーウェン師の筆になります、極めて思慮分別に富む評がいくつかございますから、従姉妹は（時が経ちますうちに、あの人の心優しさ故の嘆きようから鋭さがとれ、苦しいというよりはむしろ心地好い思い出に変わります頃には）一層喜んでくれるものと存じます。

同じ若いお嬢様には、さらに、真の友を思い出すために嵌めていただく指輪代といたしまして、二十五ギニーを遺贈いたします。

私の立派な従兄弟、ウィリアム・モーデンにお会いするまで私が生き長らえない場合には、あの方の数々のご厚情とご親切に対し、とりわけ、あの方ご自身が私を許してくださるかどうか覚束なかった時期に、他の身内の者たちと私との和解に努めてくださいましたことに対し、謹んで衷心よりの謝辞をお伝えいただきたく存じます。あの方は素晴らしい暮らし向きをしておられますから、あの方が愛してくださったのと同じ程度に、あの方のことを日頃から尊敬いたしておりました親戚の女性を偲ぶよすがといたしまして、二、三のつまらない品をお納めくださることだけをお願いいたします。とりわけ、あの方の父親であるロバート叔父様が、外国へ携えて行くため、しきりに手に入れたがっておられました、あの花柄の刺繍をお受け取りいただきます。

同様に、あの方には金の枠に嵌め込みました小さな細密画をお納めいただきたく存じますが、これは、あの方の立派なお父様が、一緒に連れてこられた有名なイタリアの大家に描いてもらうよう、私をモデルになさったものです。また、あのお父様がおっしゃってくださいましたところでは、いつの日にか私が、好意を示したいと一番強く感じます男性に与えるようにと、贈ってくださったものなのです。

同紳士には、また、ローズ形ダイアモンドも遺贈いたします。あの方の優しいお父様からの贈り物ですし、それだけに、あの方にはなお一層の価値を持つことになりましょう。

私の愛するハウ嬢のお母様、アナベラ・ハウ夫人には、最愛のお嬢様の元へ私が足繁く

訪れておりました際のご厚情とご親切のすべてに対し、丁重なる謝辞と二十五ギニーの指輪をお受け取りくださいますよう、謹んでお願い申し上げます。

亡くなりました祖父の私室にございます、私の全身像（先の条項で、一族の肖像画とは別扱いになりました）につきましては、やがて十四歳という時期に描いてもらいましたもので、その頃、大切なハウさんと知り合い、お互いを認め、とても深く … どれほど深くなるのか、言葉で言い表すことは出来ません … 慈しみ合うことになったのですが、これは、心の姉ともお慕いするあの方へ遺贈いたします。あの方の友情のことは、順境にあります時と同様、他の慰安や慰安者をすべて奪われました逆境にあります時にも、いろいろとその実例に接してまいりましたので、私たちの愛情に優るものといたしましては、ただ、あの方と一緒に未来永劫に亘って楽しみたいと願っております、あの完全無欠な状態があるだけなのです。

同様に、同じ親友に対しましては、私の書き物机の専用の引き出しに他の宝石類と一緒に入っております、私の最高のダイヤの指輪を遺贈いたします。また、完成して額に入っております刺繍作品のすべてもお譲りいたしますが、すでに従兄弟のモーデンに遺贈いたしました花柄の作品は除くこととといたします。

これらの作品はすべて取り払われたと聞いております(ア)。また、身内の者たちにいたしましても、もう一度飾る気持ちは起きないことでしょう。ただ、優しい母が、しばらくいたしました頃には、目にするのにも耐えられるようになるかもしれないということで、どれか一つを（前述の、主要作品と称されているものは除きますが）しまって置こうといたします場合には、その作品につきましてもこの一括した遺贈からは除外し、母の手に渡されますよう指示いたします。

そんな呼び方を許されていたのですが、例の私の客間に飾られておりましたヴァンダイク風の私の全身像(イ)につきましては、自分の手元に置くのを適切なことと母が考えてくださるのでなければ、叔母のハーヴィーに遺贈することといたします。

尊敬すべきチャールズ・ヒックマンさんには、私が絶えず身に着けてまいりました、そして、最後の時が近づきますまでは、胸の奥深くに着けておきます、あの方が一番愛しておられるご令嬢の、その細密画の入りましたロケット(ウ)を遺贈いたします。あの方にとりまして、それは最もお気持ちに適う贈り物となるはずでございます。モデルとなりました最愛の女性のお手の次ということにはなるのでしょうが。そして、あゝ、大好きなハウさん、この後のほうで触れましたことへのあの方からの求めにつきましては、お許しになるのを遅らせてはいけないのです。正直に申しまして、貴女はご存じないのです。男性に備わる志操堅固な心の大切さをです。また、そのような心の持ち主のほうが、縦横無尽に働く機知を目も眩むほどに迸らせることで名高い人物よりも、どんなに好ましいのかということをです。たとえ、この機知に溢れる心が、軽率な目と感じ易い心とを惹きつけることがあまりにも多い、あの尤もらしい外見と結びつくとしてもです。

［親愛なる近親者の皆様、この正式な最終証書におきまして、私にとりましては、当然至極のことですが、とても大切な若いお嬢様に向って、このようにしかつめらしい呼

（ア）第三巻の百九十五頁を参照のこと。（イ）同所。（ウ）第七巻の手紙百七を参照のこと。

び掛けをいたしますこと、なにとぞお許しいただきとうございます」

愛するハウさんへの切なる願いといたしましては、私のために喪に服するのはお止めいただきたいということです。ただ、私の髪の毛を添えました指輪をお受け取り願いたいのです。また、ヒックマンさんにも同種のものをお受け取りいただきたいのですが、それぞれ二十五ギニーの品です。

ベティ・ローランス夫人とその妹君のセアラ・サドレア夫人、M卿閣下、そして、皆様の操正しい姪御様、シャーロット嬢ならびにマーサ・モンタギュー嬢それぞれに対しまして、エナメル仕上げの指輪を遺贈いたします。水晶に収めました私の髪の毛をCl. H.の組み合わせ文字とし、それぞれの内側を取り巻いて、私の死亡の年と月と日が記してございます。それぞれの指輪は、ダイアモンドをあしらいまして、二十ギニーいたします。そしてこれは、皆様からの高い評価、そして、私のための温かい祈願の数々を賜りましたことへの、また、私には一切の収入の道が閉ざされておりますことをご心配くださり、真に気高いお心から、大層高額な年金のお申し出を賜りましたことへの、ささやかな感謝の印でございます。

その教えの数々に喜びを覚えますと同時に、恩恵をも得てまいりました私ですが、尊くも学識豊かなアーサー・リーウェン師に対しましては、指輪代として二十ギニーを遺贈いたします。このささやかな遺贈を受け取られますよりも前に、神の思し召しにより、師が天に召されます場合には、師の立派なお嬢様が恩恵に与ってくださいますこと、それが私の遺志でございます。

お宅をお訪ねいたしました折々に、ハウ夫人ならびにハウ嬢の奉公人の方々からいただきました丁重な扱いへの感謝の印といたしまして、皆さんが愛しておられるお嬢様のご裁量に委ねますが、皆さんで分けていただきますよう、三十ギニーを遺贈いたします。

私の立派な友人知己、ビディ・ロイド嬢、ファニー・オールストン嬢、レーチェル・ビダルフ嬢、ならびに、カートライト・キャンベル嬢それぞれには、指輪代として五ギニーを遺贈いたします。

私を慕い、母を崇め、姉を敬い、自分の立場に相応しくないことは何一つ手掛けようといたしませんでした、正直で忠実なかつての私の侍女ハンナ・バートンには、病に苦しんでおりますことからも、私の死後一ヶ月以内に支払われるものとして、金五十ポンドを遺贈いたします。また、その病が長引きます場合のさらなる援助に関しましては、後に触れます救貧基金を適用していただくよう、ノートン夫人にあの娘を推薦いたします。

ハーロー邸の御者、馬丁ならびに二名の従僕、そして、五名の侍女それぞれには十ポンドを、お手伝いには五ポンドを遺贈いたします。

姉付きの侍女ベティ・バーンズには、以前被りました迷惑にも憤慨していないことの証として、十ポンドを遺贈いたします。その迷惑にしても、個人的な遺恨というより、むしろ、役目上の横柄さや生まれついての不作法さに由来するものと確信いたしております。

手放さずに済みましたもの、あるいは、いまだ遺贈されてはいない衣装すべてにつきましては（リンネル類は別にいたしますが）、いかなる種類のものであれ、ノートン夫人が受け取ってくださいますよう希望いたします。

私の衣類を入れて密封してありますトランクや箱につきましては、ノートン夫人（ある

いは、夫人に委任された者）およびロヴィック夫人の立ち会いなしに開かれることのなきよう希望いたします。

はなはだ丁重なお言葉を、また、母親にも似た優しささえも賜りました、前述の尊敬すべきロヴィック夫人、そして、同じく大変なご親切を数々いただきましたスミス夫人（私の下宿先の女主人）には、リンネル類と売らずにとってありますレースのすべてを遺贈いたしますが、お二人の合意により等分していただくか、あるいは、合意の得られません場合には、売却の上、そこから生じます金額をお二人で均等に分配していただきます。

また、同じ善良なご婦人お二方には、私にお寄せくださいました愛情と、憐れみに満ちたお気遣いに対するさらなる謝意の印といたしまして、それぞれに金二十ギニーを遺贈いたします。

先に名を挙げましたスミス夫人の夫、スミス氏には、私への礼儀正しい振舞いに対するお礼の印といたしまして、金十ギニーを遺贈いたします。

スミス夫人の感心な女中キャサリンさんには、（自分自身の召使を持ちませぬゆえ）大変迷惑をお掛けしましたが、五ギニーを遺贈いたします。また、少しばかりのリンネル類と共に、一度はお譲りするつもりでおりました衣装一着の代わりに、さらに十ギニーを遺贈いたします。これによりまして、あの娘さんはもっと自分の好みに合った、もっと身分に相応しいものを購入することが出来ましょう。

私の看護に当たってくださいました、誠実で注意深い未亡人、アン・シェルバーンさんに対しましては、その労賃とあの人の取り分となります通常の心付けに加え、金十ギニーを遺贈いたします。あの人のお仕事は、人生の後半にあって細心の注意を要し、激しい疲労を伴う、苦労の多い、（あのような人情味と優しさを備えた人にとりましては）心の痛むものであり、十分な考慮を加えられることの滅多にないものなのです。

現在の下宿に所持しておりますわずかな蔵書につきましては、ロヴィック夫人にお受け取りいただくのが私の望みでございます。また、書物の中の最良のものからの抜粋となっております、〈瞑想録〉と私が呼び習わしていた冊子につきまして、お好みとあれば、夫人が写しをお作りになるのをお認めいただきたいのです。とりわけ私自身の事例に相応しいものですが、夫人も賛同しておられたようにお見受けいたします。冊子そのものにつきましては、すべて私の肉筆によるものですから、おそらくノートン夫人が喜んで引き取ってくださるものと存じます。

ハーロー邸の私の書き物机の中央の引き出しには、長年に亘りまして（字を書くようになってからですが）書き送ったり受け取ったりいたしましたたくさんの手紙と手紙の写しが、日付の順に束ねてございます。文通の相手は、時折私が家を少しの間離れました際の祖父、父母、おじたち、兄と姉、また、今は亡きモーデン叔父様と従兄弟のモーデン、ノートン夫人やハウ嬢、父の屋敷で謹慎処分を受けます前の、その他の友人仲間です。さらには、今は神の御元におられます三人の尊い紳士、ブロム師、アーノルド氏、トムキンズ氏からのもの、そして、宗教的な話題に関する、真に尊いリーウェン師からのものもございます。これらの手紙は、私のものが書かれました年頃の点を斟酌いたしますなら、女性といたしまして、だれ一人恥じる必要もない文通であることを示しておりますし、私宛のものには素晴らしい事柄がたくさん含まれているのです。そして、その大部分についてお知らせしてありますハウ嬢が、私よりも長生きをなさる場合には譲り受けたいと、以前お

っしゃっておられたこともありますので、これらの理由から、それら手紙類につきましては、前述の親友、アナ・ハウ嬢に遺贈することといたしますが、過去数年に亘り、あの方がこの文通の極めて重要な部分を占めておられましただけに、なおさらそのように気持ちを固める次第なのです。

ここに私は、ミドルセックス州エッジウェアのジョン・ベルフォード氏を、前もって内諾を得ました上で、本遺言書の単独執行人とし、指定し、任命いたします。このお骨折りをこの紳士にお引き受けいただきますよう、お願いする気持ちになりました理由は、ハウ嬢にお話しいたしました。従いまして、この点につきましては、あの方にお尋ねくださいますようお願いいたします。

ただし、前述のベルフォード氏には切にお願いを申し上げますが、この信託の履行に当たりましては、氏のお友達に対してと同様、お友達からの危害につきましても、今後一切防がれますよう、一人残らずすべての者との和睦を推し進め、憤りを鎮めるよう（繰り返しお約束くださったことですが）刻苦勉励いただきたいということです。また、このためにも、私の尊敬すべき従兄弟モーデンと親交を結んでいただきますよう切にお願い申し上げる次第です。私といたしましては、厚かましくもそのように期待しておりますが、あの従兄弟も（それが死の床での私の願いであるのを分かってくれました時には）、必要とあれば、すべての条項に関しまして助言と助力を与えてくれるでしょうし、私のこの遺言のいずれかの条項を執行するに当たりまして、何か困難が生じました際には、ご親切にも、私の身内に対し仲裁の労を取り、皆の気持ちを和らげ、望みどおりの遜った態度をもたらしてくれることでしょう。と申しますのも、ベルフォード氏への切なるお願いといたしましては、法律に訴えることで、あるいは、言葉であれ行動であれ、何らかの種類の暴力的手段を用いることで、皆に履行を強要しないでいただきたいからなのです。ただ家族にのみ関係する種類の条項の中で、身内の者たちが実行に移されるのを不適切と考えるものが何かあります場合は、その種の条項は前述の従兄弟モーデンとベルフォード氏に全面的にお任せし、変更するなり完全に適用を免除するなり、お二人の合意に委ねることといたします。あるいは、お二人の意見が異なります場合には、ご両人によって選ばれました第三者の決定に従っていただきとうございます。

私の悲しい身の上話の詳細を纏めるよう、ハウさんとハウさんのお母様から強く求められておりましたし、友人仲間の皆さんに対して身の証を立てますためにも、私はそのつもりでいるのだと、そんな期待を与えてしまいましたが、でも、この苦しい仕事に向ける時間は残されておりませんでした。ですから、ご親切にも、前記遺言執行人に見せていただきました抜粋から、前記遺言執行人に宛てた手紙の中でラヴレースさんが行っております私に対する公正な扱いに、自分の声望を委ねても大丈夫であることを知りましたのは、私にとりましては喜ばしい話だったのです。それに、ベルフォードさんは、私の身の上話に関わりのあります事柄すべてを纏めるに当たりまして、出来るかぎり貢献する旨を請け合ってくださいましたし、この件に関しましては、私の胸の内すべてをご存じですから、私からのお願いといたしましては、この纏めの写しを二部作成させ、一部はハウさんのお手元に、もう一部はご自分のところに置いていただきたいということです。また、一族のだれにであれ、満足してもらいますためにも、求めのありました場合は、叔母のハーヴィーに写しを見せるなり貸すなりしていただきたいのです。ただし、加えて然るべきだと、そ

のように前述のベルフォードさんがお考えになります制限の下でのことでして、その情報により、他のいかなる人物の身の安全も危険に晒されることはなく、また、ご自分の体面が損なわれることにもならないようにお願いしたいのです。

前記遺言執行人に対しましては、かくもご親切にお引き受けくださいました信託の執行時に被られるご苦労への、不十分とは申せ、感謝の気持ちといたしまして、金百ギニーを遺贈いたします。また、指輪代といたしまして、二十ギニーをお受け取りいただきとうございます。そして、本信託の執行に際して負担なさる代金や費用につきましては、その全額をご自分にお払い戻しください。

尊敬すべきH先生の中に私が見出しましたのは、お医者様であり、父であり、友人でした。先生には、感謝の印といたしまして、指輪代二十ギニーをお受け取りいただくようお願い申し上げます。

薬剤師としてお世話をいただきました、親切で熟練のゴダード氏にも同様の恩義を感じております。あの方の極めて低額なお勘定につきましては、昨日分までお支払いいたしました。常日頃より考えてまいりましたが、遺言執行人のご苦労を出来るかぎり減じますのが遺言者の義務と存じます。ゴダート氏のお世話の有難さを過少評価することになりますのは承知いたしておりますが、昨日以降、すべてに終止符を打つことになります時刻までの費用に加え、指輪代として十五ギニーがあの方に贈られますよう希望いたします。

頻繁に私に付き添ってくださり、最後の段階に至りましては、私の傍らで祈ってくださいました――師にも、同じく指輪代として十五ギニーを遺贈いたします。

私が〈私の貧者たち〉と呼び習わしておりました、正直で暮らし向きの苦しい人たちの一群がおります。私がノートン夫人にお預けし、収入がございますと時々補充しておりましたお金から、窮状の度合いに応じまして、夫人のほうで月ごとに（あるいは、もっと短い周期で）救援金を届けてくださいました人たちのことですが、そのお金も今では、完全にとは申しませんが、ほぼ底をついているのです。そこで、この善良な人々が苦しむことにより …… その人たちを救済したいという気持ちを、神様は私に授けてくださったのです …… 私の罪が重くなりますのを出来るだけ抑えますためにも、また、祖父の地所の生産額は（先に触れましたとおり、祖父が臨終の折に手元に所持しておりましたお金の半分で、私に与えてくださいましたものを含めます）、後に続く条項でさらに同じ用途のために振り当てますものを合わせ、私の遺産ならびに遺贈物のすべてを上回るはずと考えますので、私の遺志、そして、願望といたしましては、残金をその多少に拘らず、先に述べましたようにノートン夫人の手にお預けいたしますお金と共に、同様の目的に振り当てられるべき基金としていただきたいということなのです。また、同様の目的に振り当てられますよう、ここに命じる次第です。そしてこれは、この件につきましての私の気持ちをすべて知っておられる前記ノートン夫人の指示および管理によるものといたします。そして、夫人が亡くなられた場合、あるいは、その管理業務の免除を希望される場合には、親愛なるハウさんへの切なる願いといたしまして、その仕事をお引き受けいただきたいのです。そして、あの方ご自身が亡くなられます際には、その時点で未処分のものを、私の意向に一番適うとお考えの人物に、最も適切な限定、制限、そして、規定を付しまして譲渡いただきたいのです。と申しますのも、ノートン夫人の手、あるいは、あの方ご自身の手に委ねられております間、その全額ないし一部の管理と配分につきましては、完全な自由裁量に

よるものとし、私の遺言執行人、あるいは、他のいかなる人物に対しましても、決算報告なしにしていただきたいからです。

すでに触れましたとおり、この件に関しまして、ノートン夫人は私の気持ちをすべてご存じではありますが、この正式の最終証書におきまして、以下の点を申し述べておきますのは適切なことかもしれません。つまり、私の意向といたしましては、この基金が完全な別扱いにされ、その利子により（おそらく最も有利な形で投資されるでしょうから）、あるいは、必要な場合には元金さえも用い、疾病、不具、予期せぬ損害とか、その他の事故のために合法的なお仕事に従事することが不可能な折に、正直で勤勉な貧しい労働者だけを一時的に救済するために、あるいは、奉公に出すか、商いとか農業に就かせようとしている好ましい性向の子供のいる、子沢山の律義者を援助するために振り当てていただきたいということなのです。

ささやかな施しを行うに当たりまして、私が日頃から規則にしてまいりましたのは、真面目で勤勉な貧者を援助し、抜擢するように努めることでした。この種の人たちに対しましては、適切な時期に提供されますならば、わずかな援助で十分なのです。ですから、この基金はより広範囲に亘って役立つことにもなりましょう。莫大な金額をもってしましても、怠惰で放埒な者たちには十分ではないのです。従いまして、いつも欠乏していることもあり、そのような者たちに救いの手を差し延べますのは、もしも、もっと援助に値する者たちが、他の者たちを救済することで、勤勉さの原動力を発動させ、有用な活動の場へと導くはずの助力を奪われるとしたら、何の慈善にもならないことになりましょう。

ただし、私の明確な遺志、そして、指示といたしましては、たとえ、この基金が相当多額のものになりましょうとも、前述のような人物の一時的な緊急事態に対する支援のためにのみ適用されるべきで、一家族にせよ一個人にせよ、一時に、あるいは、一年間に二十ポンドを越える額を受け取ってはならないということです。

私の遺志および希望といたしましては、祖母のもので、祖母の死後すぐに祖父から私へ贈られました宝石類一式の見積もりをしてもらい、一族のだれかが引き取りを希望いたします場合には、相当額を遺言執行人へ支払っていただきたいのです。あるいは、希望のない場合は、売却の上、私の救貧基金の増加に振り向けることとします。ただ、祖父の死以降、父が前払いをしてくださいました金額に相当いたします場合は、父の手に譲り渡されますよう希望いたします。

母の伯父サー・ジョサイアス・ブルックランドからの贈り物で、当然のこととして私のものとなっておりますダイヤのネックレスや一つ石の指輪、そして、バックルにつきましては、あまりにも明白な理由からですが、一族のだれにも買い取られることはないはずと存じます。その場合、これらの宝石は私の遺言執行人に渡されますよう、そして、遺言執行人におかれましては、最も有利になるよう処分し、売上金を私の遺言の用途に向けられますよう希望いたします。

この長々しい文書の冒頭におきまして、私はその後半部について、つまり、ご先祖様たちのお傍への埋葬を許されました場合のことですが、私の葬儀でお話しいただきたい講話の題目の指定について言及いたしました。私といたしましては、次のものが私の事例に相応しいように考えております。「彼を」や「彼は」に代えて「彼女を」や「彼女は」を用いましても、お許しいただけるものと存じます。

彼女をしてみずから欺いて、むなしい事にたよらせてはならない。その報いはむなしいからだ。彼女の時のこない前にその事がなし遂げられ、彼女の枝は緑とならないであろう。彼女はぶどうの木のように、その熟さない実をふり落とすであろう。またオリブの木のように、その花を落とすであろう(ア)。

ただ、ロンドンで埋葬されることになるのでしたら、遺骸の上で行われますのは通常の葬儀の礼拝だけにしていただきます。

遺体が国許へ運ばれますのを認めていただけるのでしたら、教区委員の方々の裁量にお任せいたしますが、私の埋葬後二週間以内に教区の貧しい人々に施されますよう、十ポンドを遺贈いたします。

私のこの遺言書に何か必要事項が欠落しております場合、あるいは、おそらくそれが実情でしょうが、疑わしい点ないし矛盾するところがございます場合には　…　と申しますのも、こういった事柄につきましては未経験であることに加え、今現在、私はひどく体調が優れず、衰弱しているのです。また、仕上げの一筆を少し延ばしすぎたこともありますが、尊敬いたしております身内の者たちから最後の許しを得たいものと願ってのことだったのです。許しが得られました場合には、ご厚意に対し、それ相応の深甚なる敬意をこめて感謝申し上げていたことでしょうし、最後まで保留しておりました空白部のいくつかにつきましても(イ)、今の私に出来ますのよりはもっと自分の気持ちに適った仕方で埋めていたことでしょうが　…　そういった欠落や不備がございます場合には、従兄弟のモーデンが親切にもベルフォード氏と協力の上、それらに検討を加え、私がより明瞭に記述しております点と比較してくださるよう希望いたします。また、その後におきまして少しでも疑問が残ります場合、お二人におかれましては、私の胸中を知悉しておられるハウ嬢にご照会いただきとうございます。そして、この三名による解釈が確定されますよう希望いたします。また、異議なきことを条件とし、ここにその解釈を確定し、私本人がその旨を記載し、決定したかのごとくに施行されますよう指示いたします。

ところで、あゝ、私の聖なる救い主よ、熱烈な信仰をもちまして、畏れながら、貴方様の功徳に溢れる死と受難とにお縋りいたします。貴方様の貴い血によりまして、私の罪のすべてを洗い流していただきますよう願ってのことです。その喜ばしい結果に期待を寄せますだけでも、貴方様のご恩寵により、さらに並外れた、永遠の重みを持つ栄光を生み出してくれるものと確信しておりますあの苦難の数々が（当時は苦痛に満ちておりましたが）、どれほど軽微なものと思われることでしょうか。

クラリッサ・ハーロー

すべてが自筆による七葉の紙片に収められ、また、各紙片はわれわれの立会いの下、本人により署名、封印された遺言書として、前記クラリッサ・ハーローによって、標記の期日に署名、封印され、公布、宣告されたことを証明する。

ジョン・ウィリアムズ

（ア）ヨブ記十五章、三十一、三十二、三十三節（一九）。（イ）第七巻の手紙八十五を参照のこと。

アーサー・ベドール
エリザベス・スウォントン

手紙　二十八
モーデン大佐からジョン・ベルフォードへ

九月十六日　土曜日

愛する故人の遺言を読み上げるという、この上なく憂鬱な仕事に携わって来たところであります。

悲しみに沈む母親とノートン夫人は、この心痛む一事に際し、欠席なさることを選ばれました。ただ、ハーロー夫人といたしましては、切なる要望として、すべての条項が一つ残らず履行されることを願っておられました。

全員、前文にははなはだしく心を打たれておりました。

「奇妙な、心も塞ぐ出来事により、今はコヴェントガーデンのセントポール教区に下宿住まいをしております、私とクラリッサ・ハーローは、云々」という、遺言書冒頭の言葉は一部の者からは涙を、そして、全員からは溜め息を誘っておりました。

国許へ運ばれることを許される場合、あるいは、許されない場合の自分の葬儀に関する指示や、埋葬方法については命令済みであることへの言及、そして、全体を通して明白に窺われる沈着さは、全員の称賛を勝ち得ておりましたが、それは両手を差し上げつつ天を仰ぐ仕草や、流れ落ちる涙によって表現されていたのです。

親戚のだれかが「親切にも最後の一瞥を与えてくれる場合は別ですが」、彼女の亡骸が人目に晒されることのなきようにという指示を、私のほうで読み上げますと、皆は三度か四度、代わる代わる顔を背けたり私のほうへ向き直ったりしておりました。ハーヴィー夫人とアラベラ嬢は泣きじゃくり、おじたちも目を拭っておりました。兄はうつむき、父親は両手を揉んでおりました。

「私もだれのものでもないわけですから」という文言のところでは、私も中断を余儀なくされたのです。

しかし、「いわば死んだような状態にありますところを、前に一度見ておられるわけですが、その女の死亡を確認しようとの気持ちを逸らすことが出来ない場合には」という、あの忌まわしい男へ向けるべき言葉のところへ至りますと、呪いの言葉、そして、復讐の誓いとか祈願とかが、一人残らず皆の口を満たしておりました。

この男さえも許すという、あの娘の言葉が読み上げられ、皆の耳に届きますと、これらの言葉は一層の熱を帯びて繰り返されることとなったのです。

われわれがロンドンで初めて遺言に目を通した折のことですが、衆に秀でた娘が明らかにこの破廉恥漢から被った卑劣な仕打ちに関する私の所見、そして、その際の私の発言のことは、貴方も覚えておられましょう。その種の事柄を繰り返しますことに、私は不慣れなのであります。

愛しの娘があのように詳細に亘る指示を与えてまいりました、健気にも「無に帰しますもの」と称しておりますもの、つまり、自らの亡骸に対するあの娘の気高い蔑みの心、そ

して、自分の置かれております境遇から、それらの指示が詳細に及びますことへの謝罪の言葉は、その生彩に富む段落に初めて目を通しました時と同種の、また、同じほど強烈な効果を私にもたらしました。そして、私の視線に（代わる代わる全員の方へ向けられたのです）導かれまして、皆の心を動かすことにもなったのです。

祖父の地所を父親に遺贈する条項、そして、その点に関する理由が（実に寛大で孝養を尽くしたものでした）読み上げられますと、父親はそれ以上腰を落ち着けていることが出来ず、目を拭い、拡げた両手をジェームズ・ハーロー君に向かって差し上げながら、引き下がって行ったのです。ジェームズ・ハーロー君は立ち上がり、ドアのところまで父親に付き添いましたが、アラベラも同じく付き添っておりました。父親の口をついて出ましたのは、ただ、「おゝ、息子よ、息子よ。おゝ、娘よ、娘よ」という言葉だけでしたが、それはまるで、二人が演じた役割、そして、自分に演じさせた役割のことで、二人を責めているような口調だったのです。

しかしながら、時としてこの兄と姉は、紛れもなく遺言内容を論って憚らないような人間であることを示してみせたのです。

口先やまなざしが何を語りましょうとも、何か相当な財産の持ち主が死亡する場合、遺言の最初の読み上げというのは、ベルフォード殿、親戚の者たちが故人に寄せている愛情の、その正確な試金石を提供するのを常としております。

ノートン夫人に贈られた衣類、そして、喪服代としての三十ギニーは、法外だと言われました六百ポンドの条項が除かれるならの話ですが、善良な婦人を〈森の館〉の家政婦に推薦する件と併せ、十分なものと考えられました。遺言の他のいくつかの部分につきましては、「突飛な考えであり、かつ、思慮分別に富む人間と想像力豊かな人間との違いを示すような気紛れぶり」と称されたのです。

従姉妹のドリー・ハーヴィーへの蔵書の遺贈には不平の声が上がりました。ハーロー嬢が言いますには、自分と妹は一度として同じ書物を買ったことがないので、例の蔵書は自分が引き取り、「何らかの方法で」従姉妹のドリーには「埋め合わせをしたい」とのことでした。

貴方には、ベルフォード殿、仲裁の労はお取りいただかなくとも済むようにしたいと考えております。蔵書は従姉妹のドリーのものにするつもりです。

ハーヴィー夫人は席に着いているのが辛うじてという有り様でした。しかし、この折には、今は亡き愛しの姪、永遠に愛すべき姪は、自分と自分の娘に優しすぎたのだ、とだけ言っておりましたが、別の折には、自分の認めた手紙(ア)のことでは「と、アラベラ嬢のほうに目を向けておりましたが、筆を執ります前に、だれにも気づかれることなく、あの娘に相談していたらしいのです」、我と我が身を許すことが出来ないのですと、涙ながらに言明しておりました。夫人が申しますには、その手紙は、今では自分にも分かったわけですが、すでにあまりにも深い傷を負っていた心を傷つけることになったに違いない、というのです。

「あゝ、叔母様、そのことはもうお止しになって」と、アラベラが申しました。「あの愛すべき娘がこんなにも悔いているなんて、だれが考えたでしょう」とです。

（ア）第三巻の百八十五頁以降を参照のこと。

ジョン・ハーロー氏ならびにアントニー・ハーロー氏は自分たちに有利な条項にいたく心を打たれ（非難とか罪のなすり合いに類した言葉、あるいは、それへの言及なしに遺贈が行われましたので）、自責の言葉を並べ立て始めました。そして、二人の言う「気立ての好い姪」が、今では、感謝の気持ちや返礼が一切届かないところへ行ってしまいましたことを嘆いておりました。

実際の話、一人一人に向けた最後の心遣いのことが記されておりますこれらの条項に接しまして、居合わせた者全員の非難合戦、そして、嘆きの声があまりにも頻繁に私の邪魔をするものですから、読み通しますのにほぼ六時間掛かってしまったのです。ただ、あの忌まわしい男に向ける呪いの言葉は一つの逃げ場であり、自分たちへの非難を免れるためにも、皆は頻繁にそこへ逃げ込んでおりました。

寛大な、そして、確かな見極めに基づく許しというのは、ベルフォード殿、何と深手を負わせるものなのでしょう。復讐が目論まれている場合、そして、罪深い心とか恩知らずな心に悔恨の情を起こさせることが望まれている場合、これよりも効果的な、これ以上に高潔な復讐がどこにあるというのでしょう。しかしながら、我が愛すべき従姉妹の動機となっておりましたのは、ただ孝養心と愛情のみなのです。あの娘は、実際、死すべき定めの人間にとっては可能なかぎりにですが、愛そのものであったように思われます。清らかさによって、真の優雅さによって浄化された愛であり、あの娘以前のいかなる女性にしても、およそ誇りにすることは難しいようなものなのです。あゝ、ベルフォード殿、あの娘が自分と同じような心に恵まれた男性と巡り合っていたなら、生涯のいずれの立場においても（妻、母、女主人、友として）、どれほど素晴らしい範を垂れていたことでしょう。

ノートン夫人へ遺贈された六百ポンド、ハーヴィー嬢への蔵書、そして、ハウ嬢への形見の品々に関わるものだけが不平の出た条項ではありませんでした。それにしても、これらの遺産が遺贈されなかった場合、恩恵に与るのは救貧基金であって、自分たち自身ではないというのに、皆が金銭の遺贈を遺憾と思うのは何故のことなのでしょう。

ただ、遺言執行人を一族の者以外に求めるという従姉妹の選択は完全に正しかったのだと、その点を納得させてくれるような出来事に事欠きませんでした。一族の中から選んでおりましたなら、あの娘の遺言も、多分、世を去った国王の遺言でもあるかのように、特に、遺体が冷たくもならないうちに、甥のオルレアン公によって不法に踏みにじられてしまったルイ十四世の遺言（二〇）のように、顧慮されることは一向になかっただろうと思われます。あの君主のものとしては、おそらく、唯一異議を唱えられた意向ということです。

しかしながら、ジェームズ・ハーロー君はほとんど思い及ばないのです。私よりも長生きをした場合ですが、数百ポンドにしがみつきながら、何千ポンドも失うことが大いにありそうだという点にです。私といたしましても、あのように自分本位で狭隘な精神の持ち主を相続人にするつもりはないのです。

愛すべきあの娘が衣裳をいくつか手放さざるを得なかったことへの言及に接し、皆がどれほど心を動かされたことか、私が言い表します以上に、ベルフォード殿、貴方にはよくご理解いただけることでしょう。

いくつかの空白部につきまして、皆の最後の祝福と許しとに与ることを期待し、記入を延ばしたということに触れております文面へ至りますと、言葉にはならない非難の声が一人残らず全員の心を捉えておりました。

ただ一つだけ付け加えさせていただきますと、あのように厳かな口調で救い主に向けられました結びの部分が読み上げられますのを耳にいたしますのは、皆にとっては耐え難い話であったということです。全員揃って席を立ち、われわれのおりました部屋から群がるようにして出て行ったのです。それから、後ほど知ったところでは、皆は別々に別れて行ったわけですが、我と我が身を振り返ったのでは望むべくもないこととは申せ、あの時点では、互いに交わったところでさらに期待薄と考えて当然な、そんな慰めを独り閉じ籠もることの中で求めるためだったのです。

貴方の誠実にして従順なるしもべ

WM. モーデン

手紙　二十九

ベルフォード氏からM卿閣下へ

九月十四日　ロンドンにて

閣　下、

ラヴレース氏と衆に秀でた故クラリッサ・ハーロー嬢との間の一件につきましては、故令嬢の死の床における禁止令にも拘わりませず、さらなる不幸な結果が強く懸念される次第であります。従いまして、謹んでご提案申し上げたいのですが、閣下ならびに氏の他のお身内の方々におかれましては、ご親戚が最近抱いておりました海外渡航の意向を前進させていただきたいということです。また、すべてが落ち着きますまで、氏には国外に留まっていただくよう希望しております。ただ、閣下のご要望の真の動機を知りますと、氏も動こうとはいたしませんので、表向きの誘因といたしましては、以前モーブレー氏に向かって触れたことがございますが、心身両面における氏自身の健康との関わりあたりで宜しいかとも存じます。モーブレー氏ならびにターヴィル氏にとりましては、どの国も同じことでありまして、おそらく二人は氏と行動を共にすることでしょう。

氏が快方に向かっているとのこと、嬉しく思います。ただ、この点からもなおさら、事を急ぎたい気持ちが起こるのです。また、時間的猶予は一切ないものと考えます。

閣下もお聞き及びとは存じますが、私はこの称賛すべきご婦人の遺言執行人たる栄誉を担っております。その遺言書より、以下の段落を転記いたします。

《次いで氏は、令嬢が遺贈する指輪の件との関連において、深い感謝の念を込めてこの貴族、ならびに、その一族の婦人方に言及している条項を転記し、この点に関する彼らの指示を仰いでいるのである》

手紙　三十

モンタギュー嬢からジョン・ベルフォード氏へ

九月十五日　金曜日　M邸にて

謹んで申し上げます

閣下は右の手に痛風を患っておられまして、閣下、セアラ夫人、ならびにベティ夫人よりのご命令で、貴方様のお手紙が届きます前に、ラヴレースさんは外国旅行の準備を進めておられました旨を、私のほうからお知らせせよとのことでございました。ご教示くださいました動機に基づき、あの方を急がせるべく努力することにいたしましょう。

愛すべきお嬢様がお亡くなりになりましたこと、私ども一同、はなはだ心を痛めております。ベティ夫人ならびにセアラ夫人は、その報に接しましてからはずっと体調を崩しておられるのです。お二人は、私の妹と私自身も同じことですが、あの人が国を出られました後は、お嬢様のご希望どおりの形で親交を結び、友情を深めることが出来るものとお考えになり、楽しみにしておられたのです。ご親切にも、お嬢様が私ども一人一人を心に掛けてくださいました点、このような取り返しもつかない損失を残念に思います私どもの気持ちをさらに強めることは不可能だといたしましても、改めて痛感する次第です。私どもの金細工師をしておりますフィンチさんに、お傍へ伺うようお願いすることにいたしましょう。指輪につきましての私どもの指示を受けているのです。愛する遺言者の形見といたしまして、指輪は長く長く離さずにおくことといたします。

この心も痛む出来事からさらに不幸な結果が生じますのを防ぐよう、貴方様が全力を傾けてくださいますことを、一人残らずすべての者は確信いたしております。閣下からも宜しくとのことでございます。

貴方様の謙虚なるしもべ

CH. モンタギュー

本書簡集が予期されていたよりもはるかに長大なものとなったこともあり、令嬢の遺言の執行等に関して、モーデン大佐、ハウ嬢、ベルフォード氏ならびにヒックマン氏の間で取り交わされた数通の手紙については、割愛するのが適当と思われる。

しかしながら、この件に関しては、以下の点に触れておく必要がある。つまり、惨めな思いの母親は、息子の反対をすべて却下し、遺言の一字一句違わぬ遵守を指示してくれるよう、また、それと同時に、遺言により自己補填の権利を与えられた金額全額の放棄、ならびに、葬儀費用の支払いを引き受けるよう、おじ二人の支援を受け、苦しみ悩む父親に働き掛けたということである。

ベルフォード氏がその着実さ、公平さ、そして、迅速な処置により、また、指示のあった収集作業への貢献を快諾したこともあって、大いに自分の意向に適ったため、ハウ嬢は愛する友の代理人たる氏との文通を自発的に始めることとなった。そして、その文通を進めながら、氏はラヴレース氏との間で交わされた手紙を、また、モーデン大佐の同意を得た上で、当の紳士との間で交わされた手紙をも（内々で）令嬢に知らせていたのである。

氏は速記から起こしたハウ嬢宛の手紙の最初の包みと共に、ヒックマン氏に宛てて九月十六日付の手紙を送り、以下のように心中を吐露しているのである。

「しかしながら、この包みでは、一通の手紙は除外すべきでありました。ドーマー氏宅での、貴方ご自身とラヴレース氏との会見に関するものです(ア)。ラヴレース氏は、そ

(ア) 第六巻の手紙七十八を参照のこと。

の文中において、貴方のご容姿やお人柄にも、また、お役目にも相応しくない軽薄な筆法で貴方を描写しておりますが、これは、だれに対しましても、その用向きを快く思わない場合、常に氏が用いてみせる筆法なのです。貴方は大層広い心をお持ちゆえ、万が一ハウ嬢のほうからお知らせすることがありましても、この手紙の文面に当惑なさることはないものと期待いたしております。また、その文面のために、貴方とご令嬢とのご関係に害が及ぶようなことは有り得ませんだけに、なおさらその感を強める次第です」

次いでベルフォード氏は、数々の欠点にも拘らず、気立ての好い人間であると、ラヴレース氏の弁解をし、自分に対するさらに無遠慮な振舞いの例を示しているのである。

これに対し、ヒックマン氏は十八日付の手紙で次のように答えている。

「ご丁寧に言及くださいました手紙での、私に関するラヴレース氏の筆法につきましては、それがいかなるものであれ、関心は寄せないことにいたしましょう。氏からは常軌を逸した振舞いを受けるものとの心積もりで氏の元へ伺いましたし、予想に違いはなかったということなのです。私もこの種の事例に臨みます時は常に、ハウ嬢が永遠の親友の範を得て主張なさっているように、我と我が身に向かって次のように論じているのです。「自分に投げ掛けられた非難が尤も至極なものである場合には、それらを容赦するだけではなく、そこから利益を得るようにも努めるべきであるし、正当性を欠く場合には、それらの非難を、非難を口にした者共々軽蔑すべきである。何故なら、その悪意の矛先が軽蔑によって鈍ってしまうような敵対者を、怒りによって強化するような真似は許し難いことだから」とです。また、さらに申しますと、女性に、そして、人間性にも光彩を添えるほどの令嬢に対しまして、あのような仕打ちを行うことの出来る男性から良く言われていることが分かりましたなら、私といたしましては、むしろ遺憾に思うことでありましょう。

しかしながら、この点につきましてのご配慮のほどに対し、また、前回ロンドンに滞在いたしました折にご確約くださいましたご厚誼、そして、私も同じく誠意をもって受け入れ、かつ、深める所存でおります友情の、その望ましい一例を提供してくれますお便り全体に対しましても、感謝申し上げたく思います」

ハウ嬢は二十日付の手紙の中で、ヒックマン氏宛にベルフォード氏の手紙を添えて送付された手紙類、書類、および、遺贈品の受領を認めた上で、「氏の情報に関しては、同意の得られるもの以外には一切利用しない」ことを保証しているのである。

氏は憐れみを込め、ハーロー一族の悲嘆ぶりに言及したのだが、ハウ嬢は次のように語っている。「情け深い性質の人間があの人たちを憐れむのも結構でしょう。でも、私はその手の人間ではございません。貴方のほうではあの悪魔のような男にも、やはり同情しておられるのでしょうね。私といたしましては、あの男が錯乱状態なのを心から残念に思うのです。回復の暁には、あの男の胸から決して消え去ることのないように願っております改悛の情ですのに、それをあの状態が奪い去っているからです。ひとつ言わせていただきますと、あの男のために、男性全体を憎らしく思うことも時にはあるのです。非の打ち所もない人柄の男性についてもですが、そのような折には、そんな男性はいまだお目に掛かったためしのない人物のように見做さざるを得なくなってしまうのです。

もしも、私の愛しいお方の装身具が売却のため貴方のところへ送られて来るようでしたら、最高の値をお付けいたしますので、私をその買い手、とりわけ、ネックレスと一

つ石の指輪の買い手にしていただきたく思います。

あゝ、我が最愛のお方の遺言に、私はどれだけ涙を流したことでしょう。でも、心臓を刺し貫きます話題に触れてはいけないのです。その話題を取り上げるにせよ、そこから離れるにせよ、世の中の人たちすべてが忌み嫌っております男を呪わずにはいられないからです」とである。

ベルフォード氏は、返信の中で、装身具類が手元に届いた時には、ハウ嬢をその買い手とする旨を約束している。

氏は以下の点をハウ嬢に通知している。つまり、家族の者たちが愛すべき故人の私物一切の鍵をモーデン大佐に手渡したこと、また、惨めな思いの母親は（遺言が認めているように）刺繍の一部を自分用として除外するよう命じ、そして、〈瞑想録〉の小冊子を転写してもらい、原本は自分が手元に置きたい旨の希望をノートン夫人に伝えたが、そのすべてが愛する娘の直筆であり、さらには、目を通すことに耐えられるようになった暁には、それが慰めをもたらしてくれるかもしれないとの理由からであったということ、また、令嬢のヴァンダイク風の肖像についても、同様に、母親は自分自身のために取っておくようにした、といったこと等々である。

ベルフォード氏は令嬢のメモ帳をこの手紙と共にハウ嬢に送り、死後発送予定の数通の手紙につき、その写しを届ける旨約束しているのである。氏の語るところでは、ラヴレース氏が快方に向かっていることもあり、ラヴレース氏への死後発送予定の手紙をM卿宛に同封したとのことであるが、その手紙を手渡すのか手渡さずにおくのか、ラヴレース氏がその手紙に耐えられることを卿のほうで見極めてもらうためである。次に示すのがその手紙の写しである。

ラヴレース殿へ

八月二十四日　木曜日

この火曜日に貴方宛に書き送りました手紙では(ア)、〈父の家〉に着きました段階で、もう一通お届けする旨をお話しいたしました。

厚かましい言い方とは存じますが、貴方がこれをお受け取りになる時点では、私はもうあちらに到着しておりますので、このような大旅行への用意がお出来になり次第、すぐにも私の後についていらっしゃいますようお誘い申し上げます。

(ア) ラヴレース氏の手紙（第七巻、手紙五十二）に同封された令嬢の手紙を参照のこと。

読者諸賢も日付からお気づきであろうが、この手紙は、言及している比喩的な手紙の後二日以内に、そして、ラヴレース氏が令嬢を追い込んだ慌ただしい思いや恐怖心によって引き起こされた、病勢の悪化に苦しみながら書かれたものであるが、氏がしきりに令嬢に求めていたスミス宅への訪問を避けるためのことであって、かくも早々と筆にされたのは、おそらく、突然の死によって約束不履行とも映る事態を強いられないようにとの気持ちからなのである。

この手紙に見られる令嬢のキリスト教精神は高揚したものであるが、その高揚した精神が、最期の時に近づくにつれ、さらに神々しいまでの高みへと令嬢を導いたことは、第七巻の手紙九十八その他の場所において、読者諸賢もすでにご覧になったところである。

比喩的な申し方はこれまでにいたしますが、貴方がこれをお読みになる時点で、私の定めはもう成就されているということでございます。私の運命は変更の余地なく確定されたのです。そして、未来永劫に亘りまして惨めな人間となるのか幸せになるのか、そのいずれかなのです。もしも幸せになるといたしますと、それはひとえに神様のお慈悲のお陰ですし、もしも惨めになるのでしたら、貴方のいわれもない残酷な仕打ちによるものなのです。そこで、放埒で残酷な、騒がしくて不幸なお方、貴方ご自身のために、今こそお考えになるのです。貴方から受けました野蛮で不誠実な仕打ちは、貴方の不滅の魂を危険に晒してしまいますほどの、それほど価値のあるものであったのか、という点をです。と申しますのも、これまで人間によって立てられました誓いの中でも最も厳粛なものを故意に破るというのでなければ、それ以外の仕方では、貴方の邪悪な魂胆が実現されることはなかったはずだからです。しかもそれらは、人間には相応しくない暴力行為と卑劣さとの後押しを受けていたのです。

ですから、繰り返しますが、いずれそのうち、貴方の生き方を検討していただきたいのです。貴方のきらびやかな夢が長く続くはずはないのです。貴方の現在の生き方では、快楽をもたらしてくれますのは、思索とか反省から離れていられる間だけのことです。非情なまでの無感覚さこそは、貴方の心の平安にとっての唯一の拠り所なのです。危険な病がひとたび貴方を襲うことになりますと、悔恨の情がひとたび効果を発揮いたしますと、貴方の立場はどれほど恐ろしいものになることでしょう。貴方と知り合いますまでは、おそらく、自分たちの本分以外のことは何も知らずにおりましたうぶな娘さんを、艶ごととか密通という名の下で、一連の大嘘や計画的な卑劣行為によって欺くことが出来たからといって、それがどれほどお粗末な勝利なのか、貴方もお気づきになることでしょう。体が衰えて行きます中で、思い出に浮かぶただ一つの善行もなく、思い巡らすべき立派な意図も一つとしてないのです。あるのはただ恥辱と戦慄のみになりましょう。そして、霊魂の消滅と折り合いをつける力が自分にあればと、貴方は願うことになるのです。

どうかお考えいただきたいのですが、私が筆を執りますのには、貴方の利益のこと、そして、貴方の悪辣な手管と偽りによって欺かれそうな他の無垢な娘さんたちの安全以外には、何らの動機も有り得ないという点をです。私が貴方の将来の安寧を願うとは申しましても、それは、貴方のためばかりか、自分自身のためにも、そのような生き方を貴方に改めさせようと努力している、哀願する妻の願いとは違うのです。分不相応なものでありましょうが、完全に私心を離れたものでもあるのです。でも、災いに災いをもって報いることを願ったり出来るようでしたら、また、私に対する貴方の犯罪は忌まわしいものでございましたが、もしも、自分が許されたいと願っておりますのと同じように人を許すことが出来ないといたしますと、私は自分の懺悔を疑わねばならないことになりましょう。

ですから、繰り返して申しますが、貴方のことは間違いなく許して差し上げるということです。そして、全能の神も貴方を許してくださいますよう、お祈りいたしましょう。それに、これを筆にするに当たりましても、私が真に遺憾に思っておりますものは、私が貴方と知り合いますまでは、世の親の中でも最も寛大であった、そんな両親に与えた深い悲しみや、一族の分家の者たちに加えられました恥辱、女性にもたらされました汚名、そして、私の堕落を通して美徳に加えられました侮辱、これらによって引き起こされたものを別にいたしますと、他には何一つ存在しないのです。

私自身について申しますと、貴方がこれを受け取られる頃にはすでに別れを告げておりますはずの束の間の人生で、私がかつて好んで期待を寄せておりましたものを、貴方は私から奪い去ってしまわれただけの話なのです。貴方はただ、私が若さの盛りで世を去ることとなりました原因、そして、神意の意図するところや目的次第ですが、私にとりまして快適なもの、あるいは、その逆になっていたかもしれない生涯を短縮いたします原因となっておられただけなのです。そのように不幸なお方と私とを括り付けます軛のうちの、私に割り当てられます部分を担うという災いから免除されます点につきましては、感謝して然るべきでしょう。その方と過ごします一刻一刻は、おそらく、何か新たな面倒を引き起こしていたことだろうとだけ申しておきましょう。それに、私の寿命に付け加えられました場合には、危険、誘惑、そして、苦悩の年月であることが実証されていたかもしれないのですが、そのようなかくも多くの栄光の日々に対しましては、間接的に …… と、畏れながらそのように希望いたしておりますが …… 私は貴方の恩義を（実際は、鋭い苦痛と悲嘆を通してのことでしたが）受けていることになるわけです。

従いまして、貴方の意図には感謝いたし兼ねますが、貴方は現実的な貢献をしてくださったことになりますし、私といたしましては、お返しとして、貴方の幸福をお祈りする次第です。でも、これまでの貴方の生き方は大変ひどいものでしたから、時を移さず悔い改めの道に踏み出さねばなりません。ただ無頓着に、自分たちの正規の義務をないがしろにして生きて来ましただけで、哀れな娘を悪の道に引き込もうとしたことはないような人たちにとりましても、悔い改めるというのは容易な仕事ではございませんし、どなたかが考えておられますほどに、私たち自身の思いどおりになるものでもないのです。だといたしますと、犯した罪が前もって計画され、故意で、込み入ったものの場合、神様ごの恩寵に与りますのはどれほど難しいことでしょうか。

好んで貴方に注意を向けたこともかつてはございました、と申し上げますのは、顔を赤らめながら告白しなくてはいけない事柄です。と申しますのは、その当時においても、貴方のことを道義を弁えた人のようにすら考えたりいたしますのは、決してなかったことだからです。もっとも、貴方にせよ、あるいは、実際、この世のどなたにせよ、貴方が身を以ってお示しになりましたようなものになることが出来るのだとは、ほとんど考えたことがなかったのです。でも、確かに、私は長いこと貴方をはるかに凌いでいたのです。貴方がどのような人なのかが分かりましてからは、貴方のことを、そして、貴方の生き方すべてを、私は心の底から軽蔑していたのですからね。

また、その好ましく思う気持ちにいたしましても、下劣な動機に基づいたものではないのですから、軽蔑するようなことが可能だといたしましても、何も驚くべきことではないのです。と申しますのも、その試みに値する人だと私は思ったわけですが、神様のご助力を得まして、一人の男性を矯正して差し上げる手段になりたいものと願いますほどに、私は考えが甘く、思い上がってもいたからなのです。

それに、この厳粛な出来事に臨みまして、官能的な夢から貴方を目覚めさせて上げようと、私が苦労を重ねておりますことからもお分かりでしょうが、まだこの種の希望をすべて諦めてしまったわけでもないのです。

ですから、あゝ、ラヴレース、死者の中から語りかける者として、私の言葉に耳を傾けるのです。無為に時を過ごしてはなりません。すぐにも悔い改めの道へと踏み出すことで

す。最後には貴方自身の足を捉えることになるのですが、あの巧妙な罠に、悪魔の手先となって気の毒な人たちを巻き込むのはもうお止めになるのです。いわば、神様のお慈悲の力をもってしても許すことが出来なくなるまでに、貴方の罪を増大させようとなさってはいけません。何故なら、慈悲に劣らず、公正さも全能の神様の特性だからです。

「神に逆らう者が神から受ける分」〔二〕はどのようなものなのかをお読みになり、身を震わせて悔い改めるのです。それは次のように書き記されているのです。

「神に逆らう者の喜びは、はかなく、神を無視する者の楽しみは、つかの間にすぎない。足は網に捕えられ、落とし穴に踏み込む。破滅が四方から彼を脅かし、彼の足を追い立てる。その子は飢え、妻は災いに遭う。死の初子が彼の肢体をむしばみ、彼の思い出は地上から失われ、その名はもう地の面にはない。彼はこの世から追放される。子孫はその民の内に残らない。探す者は、〈どこに行ってしまったのか〉と言わなければならなくなる。夢のように飛び去り、夜の幻のように消え失せる。そのパンは胃の中に入ってコブラの毒と変わる。鉄の武器から逃れても、青銅の矢が彼を射抜く。吹き起こされたのでもない火が彼をなめ尽くす。天は彼の罪を暴き、地は彼に対して立ち上がる。蛆が彼を好んで食い、彼を思い出す者もなくなる。神を知らない者の定めはこのようである」とです。

この恐ろしい言葉が抜き出されました聖なる神託に相談をしてみようというお気持ちが起こりました時にはいつでも、本当に懺悔し、悔い改めております心がその慰めとしてすがることの出来ますような、教えや聖句を見出されることでしょう。

貴方の場合も、ラヴレースさん、そうあってほしいものです。そして、恥知らずな人に宣告されております定めを免れ、辛抱強く情け深い神様のお慈悲を受ける資格を得られますよう、わたしは心からお祈り申し上げます。

クラリッサ・ハーロー

手紙　三十一

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

九月十四日　木曜日　M邸にて

運命の今月七日以降というものずっと、俺は自分を見失い、この世の楽しみすべてにも見放されている有り様だ。あの運命の七日よりもさらに遡っても構わないのだが、今後とも、あの七日が年ごとに巡って来るのを、喪服以外の格好で迎えることはないだろう。数条の希望の光が時として俺の上に差し込んでくれたのも、あの呪われた日までのことだったのだよ。

俺が君宛に書き送った奇妙な手紙(ア)について、連中は話してくれるのだ。手紙を書いたのは覚えている。しかし、文面についてはほとんど記憶がないのだよ。

とんでもない状態だったのだ。何か奇妙に因果応報的なものが働いていたように俺は思うのだよ。神の摂理を信じないような愚か者であったことはないのだが、復讐の様相を呈

(ア) 氏の錯乱した手紙（本巻の手紙十七）を参照のこと。

するように思われるものすべてを天罰に帰着させるつもりもないのだ。だが、自分たちの悪行のために、われわれはこの世かあの世かどちらかで罰せられねばならないのだとしたら、あの世よりはこの世のほうがマシだと言っておこう。その場合には、自分の罰はすでに始まっただけでなく、完了してもいるのだと考える権利を俺は持つことになるのではないだろうか。何しろ、俺がこれまで味わって来た苦しみ、そして、今も味わっている苦しみというのは、どうにも言い表しようのないものだからだよ。

因果応報のほんの一例を上げておくが、比類なきことこの上ない女性がまるまる一週間に亘って正気を失う、その残酷な原因となったこの俺が、自ら正気を失うという懲らしめを受けたのだよ。前触れのつもりだろうが、何の前触れなのか、だれにも分かりはしないのだ。何時になったら、あゝ、何時になったら喜びに満ちた時を迎えるのだろうな。

ひどくおとなしくさせられているし、ひどく塞ぎ込んでもいる。死後に届いたこの愛らしいお嬢さんの手紙が頭にこびりついているのだ。彼女の美点のすべてがひっきりなしに脳裏に浮かんで来るのだよ。

だが、こんな憂欝な物思いに浸ってはいられない。俺の頭がまた妙に動き出しているようなのだよ。ペンよ、立ち去るのだ。

九月十五日　金曜日

改めて筆を執ることにするが、陽気に行きたいものだな。ちょうど今し方、モーブレーとターヴィルが　…

だが、モーブレーとターヴィルが何だ。世の中がどうした。だれであれ、世の中の人間がどうしたというのだ。

ただ、貴公が書き送ったこの前の手紙(ア)のことで、貴公に対して、奴らはひどく憤慨しているのだよ。あのように友達甲斐のない　…　あのように無情な　…

だが、駄目だ。もう一度ペンを置かねばならない。あゝ、ベルフォードよ、ベルフォードよ。俺はいまだに、今なお、まったくもって惨めなまでに茫然自失の状態だ。二度と再び、かつての俺に戻ることはあるまいな。

∴　　∴

土曜日、日曜日と無為に過ごした。何一つ手につかないのだよ。

九月十八日　月曜日

だるいのだ。えらくだるいのだよ。それに、本当に気が滅入る。連中の応急手段に乗らないといけないな。転地をするとどんな具合か、確かめねばならん。

君は連中に、そして、俺にもだが、懺悔のことや改心のことを語っているが、いずれも俺には無理な話だな。そんなことの出来る男というのは、クラリッサ・ハーローに類した女性の死滅に対し、責任を負ったりしてはいけないのだよ。ハーローか　…　呪われてしまえ、そんな名前は。そして、その名を変えずにいたことに対しては、我と我が身に呪あ

(ア)この手紙は掲載されていない。

れだよ。そうすることも出来たかもしれないのだからな。だが、強いてこの身に呪を求める必要はない。骨身に染みて感じているのだよ。

「好んで貴方に注意を向けたこともかつてはございました、と申し上げますのは」（ア）だと　…　乙女の慎み深さは、こういった微妙な場合には、何という堅苦しい言葉で胸中を吐露するのだろうな。「かつて貴方を愛したこともございました、と申し上げますのは」というのが普通の言い方だよ。そして、その言い回しには真実味と打ち解けた感じとがあるのさ。だから、「かつて貴方を愛したこともございました、と申し上げますのは」としてもらいたいのだな。「顔を赤らめながら告白しなくてはいけない事柄です」とな。

それで、そなたは認めるというのか、衆に秀でた娘よ。すると、認めるのだな、そなたは。あれほどの天使の口から漏れるこれらの言葉には、何と妙なる響きのあることか。我がクラリッサがこの世に存在しており、俺を愛していると告白出来るのだとしたら、そして、その気があるとしたら、一体何をくれてやったら良いというのだ、俺は。

「でも、確かに、私は長いこと貴方をはるかに凌いでいたのです」と述べている。長きに亘りましたな、我が聖なる美女よ。確かに長かった。いつだって貴女は、はるかに私を、女性を、そして、世人のすべてを凌いでおりましたからな。

「その好ましく思う気持ちにいたしましても、下劣な動機に基づいたものではないのです」とも言っている。

何という恥知らずだったのだ、俺は。あのように彼女から目を掛けてもらいながら、俺を更生させたいという彼女の望みに応えることは出来なかったのだよ。

それに、何と寛大なのだろうな、彼女の動機は。単に、自分自身のためというわけではないし、まったく俺のためということでもないのだよ、彼女が俺を更生させようと思ったのは。そうせずにいたのでは、俺に操を奪われたかもしれないという、そんな無垢な者たちのためにも、同じように彼女は願っていたのだよ。

ところで、彼女がこの手紙を書いたのは何故なのか、そして、最も嘆かわしい出来事が起こった後に俺に渡すよう指示したのは何故なのかと言えば、他でもなく、俺のためであり、まだ見ぬ無垢な者たちの安全を考えてのことではないのだろうか。また、何時書かれたのだろうな、この手紙は。俺があちこちと、いわば彼女を追い回していたまさしくあの時、そして、悲運と迫害のために彼女の気力も挫けていたし、彼女自身、執念深いことこの上ない身内の連中から一切の許しを拒まれた、あの時のことではないのだろうか。

心気高き者よ。このような折に、このように早々と、また、このような状況の中で、そなたの苦難すべてを生み出した張本人の幸せを願うほどに、そなたは当然至極の怒りも抑えることが出来るというのか。そなたから「この人生において、好んで期待を寄せていたものすべてを」奪い去った男に、幸せを願ってくれるというのか。「そなたが若さの盛りで世を去る」その原因となった男のためにというのか。

神々しく高邁なる望みを抱く者よ。これらの重大な損失を述べるに際し、「ただ　…　だけ」などという言葉を用いることが出来るとは、そなたの心はいかなる状態にあるのだろうか。そして、これはそなたが死の定めを振り捨てる前のことであってみれば、今のそなたを次のように考えてはいけないだろうか。つまり、

（ア）九十四頁を参照のこと。

――――憐れみのまなざしをもち、
そなたの完全無欠なる至福を損なうことなく、
天空一面をあまねく見渡し、そなたは我がために祈る〔一二〕

とだよ。

「俺の生き方を検討せよ」というのだな、我が生涯の至宝よ。その者のためにのみ検討することが意味を持つという、そんな愛しの君を失った今、検討を加えたところで何の役に立つというのだろう。彼女を失い、取り返す術もない。貪欲な墓穴に飲み込まれてしまったのだ。永遠に失ったのだよ。そこのところが、それこそが苦痛の種なのだ。比類のない女なのにな。こんなことを考えると、どれほど心が痛むことか。

「貴方のきらびやかな夢が長く続くはずはないのです」というのだな、神々しいばかりの女予言者よ。俺のきらびやかな夢はもう終わったのだ。「思索や反省を遠ざけておくことはもはや出来ない」のだし、そなたが俺を咎めているあの「非情なまでの無感覚さ」にしても、もう続いてはいないのだよ。「悔恨の情がこの胸に生じた」し、「俺の立場は恐ろしいもの」だ。「俺にとって、あるのはただ恥辱と戦慄のみ」だよ。千羽ものハゲワシが次々に俺の心臓をついばんでいるところだ。

だが、こういった実りのない考察はもう止めにしよう。他のことを筆にするわけには行かないのだし、俺にその気があろうとなかろうと、筆のほうではどうしてもこの陰鬱な話題に入ろうとするわけだから、今一度、筆を置くことにしよう。また、二度と取り上げないことにもしよう。筆を、そして、自分自身を、もっと思いどおりに扱うことが出来るようになるまではだよ。

しかし、筆にしようとした点すべてが書き記されたわけではないのだ。かいつまんで言えば、いつものとおりに連絡を続けてくれるよう、君に頼むことだったのだ。また、君としても、そうしない理由はないだろうからな。何しろ、永遠に慨嘆されて然るべき彼女の死に接し、衝撃的なもの、そして、悲しむべきものすべてを俺は体験しているところなのだよ。だから、貴公が承知していることで、俺には未知の事柄すべてを知らせてもらいたいのだ。彼女の身内は、彼女の残酷な身内はどのように受け止めているのか。今、連中の心の中には、俺の場合と同様に、鏃にかえしの付いた後思案の投げ矢が、矢羽のところまで突き刺さってはいないのかどうかについてだよ。

∴　　∴

すぐにもこの国を出るつもりだ。我がクラリッサがいない今となっては、この地に住むことに（実際、この世にと言っても構わないが）、何の意味があるというのだ。だが、その前に、あの忌々しい一族に対し、何か見事な悪戯によって彼女の、そして、俺自身の恨みを晴らしておくべきではないだろうか。

連中の話では、あの呪わしい女は脚を折ったそうだな。どうして首でなかったのだ。すべては、彼女の身内に由来するもの以外はすべて、あの女とあの女お抱えの地獄生まれの妖婦たちの罪なのだ。「操が堅ければ堅いほど、勝利はいよいよ見事なものとなる」というのが、いつも連中が口にしていた言葉だよ。何度か頭に浮かべたことだが、あの忌まわし

い家に火をつけ、その燃え尽くさんばかりの炎からあそこの売女が一人も逃げ出さないよう、出入り口や窓を見張っていようと思ったのだ。あの家が一軒家であったなら、俺は間違いなくそうしていたことだろうな。

だが、どうやらあの恥知らずな婆さんは、俺が手を貸さなくとも、報いを受けることになるようだな。だれからなのか、婆さんについてのショッキングな手紙が届いている。君のものだろうと俺は踏んでいるのだが、連中の言では、今の時点で俺が目を通すのにはあまりにもショッキングなものだということだ(ア)。

連中は俺のことを、まるで紐につながれたガキのように抑えつけている。だが、高熱にはひどく苦しんだので、まずまずの体調に回復するまでは、連中のことは我慢しようと思うのだよ。

今のところ、食べ物も飲み物も喉を通らないし、眠ることも出来ないのだ。だが、現在の不具合も前に比べればどうってこともない。何しろ、ジャック、俺の脳髄は夜も昼も燃え盛っていたわけだからな。もしも、石綿に類したものでなかったなら、すっかり燃え尽きていたことだろう。

明確な観念などは一つとしてなく、ただ、陰鬱で混沌とした惨めな思いだけだった。まさしく、「あるのはただ自責の念と戦慄のみ」だったのだよ。首吊り、身投げ、ピストル自殺のことが頭に浮かび、その後俺の心を占めたのは、激怒、暴力、悪さ、絶望だった。正気に戻った時にはさらに惨めで、一時間前の自分はどうだったのか、一時間後には、そして、もしかすると生涯に亘って自分はどうなりそうなのか、思案を強いるのだよ。敵どもの弄びものだな。愚か者たちの笑いの的だよ。そして、俺を束縛したり、(忌まわしい考えだが)殴ったり鞭を振るったりして、俺に人身攻撃を加えることが自分たちの割に合うのだと、おそらく、いずれは気づくことになる、そんな雇われ人夫どもの、垂れ袖の服に包まれて乳母車に乗せられている持ち物ってところなのだ。

こんな思いに耐えられる者がどこにいるというのだ。俺のような人間がただ恐れることだけを強いられるというのは …… それも、あんな卑劣漢どもを恐れるとは …… 何ごとだったというのだ、これは。ただ遠くで案じているだけとはな。しかし、男たるもの、自分自身のために、そして、さらなる災いを避けるためだが、このような仕業を親友たちに看過してもらわねばならない、そんな立場に置かれるというのは …… 到底考えられない話だよ、こんなことは。

だから、そんなことは考えず、次々に楽しい事柄を思い浮かべることにするか、あるいは、首を吊ることにしよう。明日の朝までにはな。

――――犬畜生となって果てるのは
俺のような人生にあっては天国というものだ〔二三〕。

手紙　三十二
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

(ア) 手紙十九を参照のこと。

九月二十日　水曜日

前回の手紙を取り戻すために筆を執っている。あれが筆を執った折々の俺の気持ちであったことは認めよう。そして、俺を悩ませるものは何であれ、筆にせずにはいられなかったこともな。ひどく陰鬱な気分が生じ、筆を進めるにつれて強まるものだから、どうしても、惨めっぽくなるのを抑えられなかったのだ。

奇妙なことだが、実に奇妙な話だが、人間の良心というのは、当人にその気があろうとなかろうと、物を書くように指に強いることが出来るし、考えずにおこうと、その時点では一度ならず決心した話題へと、その人間を駆り立てることも出来るものなのだよ。

また、これに劣らず奇妙なのは、さらに一、二日もすると、その人間が（新たな理由は何一つないのに）まったく考えを変えてしまうこと、というより、むしろこう言うべきだろうが、明るい希望や見通しの好転にすっかり心も浮き立ち、自分が筆にしたことを恥ずかしく思ってしまうことだ。

というのも、偶然に手に入ったものなのだが、従姉妹のシャーロットの手書きによるもので、俺には内緒で転写した、俺の手紙の写しを読み直してみたところ、敵が目にしたら大喜びしそうな代物だということが分かったのだよ。

あの手紙の後半部を書いた時の状態をあと一週間も続けていたら、俺が次の週には監禁され、狂人扱いされていただろうということは承知している。何しろ、今も思い出されるわけだが、俺の病は抑えようもない激しさでそっくりぶり返していたのだ。それも、水粥と薄い野菜スープの食事にも拘らずだよ。

次の点は認めよう。つまり、極めて気紛れな選択なのだが、この天晴な女性が俺に与えようとした失望に関し、今も俺はすこぶる心を痛めているということだ。ただ、このような結果になったのだから、また、彼女は世を去る決心でいたし、現にこの世にはもういないわけでもあるから、過ぎてしまった出来事、そして、過ぎてしまったがゆえに取り返しのつかない出来事について、生気と健康の分け前をたっぷり手にしている俺としては、陰気な物思いに耽るべきなのだろうか。そんな真似をすれば、自分はどのような有り様になるのか、その見本を手にしたことにはならないだろうか。

というのも、ベルフォード（否定するのは馬鹿げた話だ）、古臭い言い方をすれば、俺は完全に〈心狂ほしき〉状態だったのだからな。

何故なのだ。何故、抑えつけられるのには耐えられないような育て方を、俺の母親はしたのだろう。反対されるとか失望させられるとかいうのはどんなことなのかを知らずに済むよう、家庭教師たちにさえ要求がなされるような、そんな教育をどうして俺は受けたのだろうか。その優しさにはどれほどの残酷さが潜んでいるのか、母も知っていて当然ではなかったのだろうかな。

何という懲罰だ。すこぶる大きな失望に出会った途端に気が触れてしまうとはな。それに、一度気が触れると　…　だが、そんなことを考えるのは耐えられん　…　精々がこんなところだ。優しくも怒りっぽい愛しの君が俺のために心から願ってくれた改悛、ならびに、矯正そのものが効果を上げることなく、引き延ばされたのだ。いつまでなのか、知る者とてない。少なくとも、矯正についてはそうなのだが、どちらにしても、果たして、気の触れた人間に出来ることなのだろうかな。

従って、一度気が触れた場合には、あゝいった陰鬱な思索は追い払うよう努力しなけれ

ばならんのだよ。別の場合には、真っ当な考え方をもたらしていたかもしれない思索なのだからな。そしてこれは、M卿風に表現するならば、「取り留めもない空想に耽る」ような羽目に陥らないためのことなのだ。

というのも、さらに白状させてもらうが、俺の善良なるアストルフォ〔二四〕であり［君もアリオストは読んだのだよ、ジャック］、俺の正気の壺を取り戻してくれた医者のヘイル先生は、粗食と大量の瀉血によって、また、水ぶくれを剥いてみたり、小穴を開けた吸い玉で放血をしたり、暗い部屋に押し込んだり、真っ昼間の太陽の下で真夜中の孤独を味わわせたりと、俺の回復を現実のものとすべく大騒ぎだったのだ。そして、今では、心慰められる話だが、満月の折には〔二五〕依然再発の可能性もあるとのお言葉なのだ。恐ろしいじゃないか。実に恐ろしい話だよ。そして、三月の十五日に注意するようシーザーは警告を受けたわけだが、俺は春分と秋分の両日には同じくらい警戒しなくてはいけないとのご託宣なのだ。

俺がどんな様子だったか、振り返えると吐き気を催してしまう。日光を、そして、一切の慰めを禁じられ、見舞いに来る者といえば、ただ、生まれの卑しい、爪先歩きの付き添い人だけだ。その爪先歩きの奴隷たちにしても、定期的にしか近づかないし、薬壺、大粒の丸薬、そして、頭に効く水薬で身を固めているのだ。連中の指示をいやらしい囁き声で伝えるし、俺はどんな具合か、連中の呪わしい薬を俺は服用しているのかと尋ねる、カーテンを手にした別の無礼者たちに答えるのだが、これも囁き声だ。何という忌まわしい静物画の題材だったことだろうか、これは。俺の中で、あるいは、俺の周りで蠢くものといえば、ただ、消え去ることのない苦痛の種だけだ。

折に触れて俺の脳裏に勝手に浮かんでしまう光景の記憶から、もう一度急いで逃げ出すことにしよう。

さらばだ、ベルフォード。

だが、俺の最後の手紙は返してもらおう。また、あの文面を種に、何を考え出してもいけないぞ。俺としては、この実りのない塞ぎの虫を克服せねばならん。そのつもりでいるし、すでに克服してもいるのだよ。時々刻々、俺の体質はますます強化され、俺の味方となってくれている。そして、我が最愛の者のために時折漏らす溜め息を別にすると、すぐにも元の自分に戻りそうな希望を与えてくれるのだよ。生気に溢れ、血気盛んで明朗快活な姿だ。そして、俺にとっては災いの種となっていた存在だが、そんな女性の疫病神にもう一度なってやるし、男性一人一人の疫病神にもなるのだよ。その人生折々のな。

ただ、重ねて希望を述べておくが、今までどおりに便りをしてもらおう。我が最愛のクラリッサに属する物で、必滅の定めにあるものすべてがどのように処分されたのかについて、我慢をして聞くことが出来るようになったらの話だが、伝達すべき詳細を君はたっぷりと蓄えているように思うのだ。

しかし、彼女の執念深い身内の連中が自責の念に苛まれていると教えてもらうのは、俺の心には喜びの種となることだろう。この手の話なら、今書き送ってくれても構わないのだよ。何せ、苦難を共にする仲間というのは、いくらかは救いになるものだからな。憎らしく思っている奴らが自分と同じくらい惨めだと思える時には、特にそうだよ。

もう一度言おう。さらばだ、ジャック。

手紙　三十三
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

この王国を去る準備をしているところだ。モーブレーとターヴィルが約束してくれているのだが、一、二ヶ月したら落ち合うとのことだよ。

旅の道筋を知らせておこう。

最初に向かうのはパリだ。そして、娯楽と気晴らしのためだが、何人かと旧交を温めることにする。そこから、いくつかドイツの宮廷へ足を運び、その後は、おそらく、ウィーンだ。そこから、ババリアとチロル地方を通ってヴェニスへと赴き、カーニバルを祝うことになる。そこを出ると、フィレンツェとトリノだ。そこから、もう一度モンスニを越えてフランスに入る。パリに戻ると、我が友ベルフォード君と会うのを楽しみに待つことになるが、ベルフォード君も、その頃までには、後悔の念、自己否定、そして、屈辱感に凝り固まった髭面になっているのは間違いのないところだろうな。まさしく隠者そのものというわけだ。ただ、旧友を改宗させることで、山のような自分の罪を覆い隠したいと願いながら旅を行く、さすらいの世捨て人ってところだな。

だが、ひとつ言わせてもらうと、ジャック、前回の手紙を書いてからというもの、ずっとそんな状態だったわけだが、株が上がり続けるようであれば、貴公の狙いがそんなところにあるとしても、上首尾を収めるのは骨折り仕事だということに、貴公も気づくのではないかと思うのだよ。

また、本心からそう思うのだが、貴公の後悔と改心にしても、長続きはしないな。根強い習慣というのはそう簡単には根絶されないものなのさ。悪魔の奴は長年に亘り、貴公の忠勤から多大の利益を上げて来たのだから、そう簡単に貴公をその手から解放するわけには行かないのだ。奴は承知なのさ。貴公には何が有効なのかをな。華やかで大柄な娼婦だよ。シャータズ好み〔二六〕のな。手足が綺麗で、肌の色艶が良く、トルコ人に似た目をしている。貴公が初めての男だ。あるいは、そのように信じ込まされるわけだが、それは同じことだ。こんな相手に向かって、貴公の冷ややかな顔はどれほど輝くことだろう。悲しみに沈む貴公の表情がどんなに明るく照らされることだろう。貴公と大誘惑者との間で和解が成立し、貴公のほうでは、老いぼれて力もなくなるまでは伺候する旨を約束することだろう。そうなると、悪魔としては、十中八九、永久に貴公を手中にすることになる。何しろ、今貴公を支配している欲望を克服するまで、貴公が生き長らえるとしても、奴は何か心を奪う別の罪をでっち上げたり、今は二番目に位置しているものを心奪うものにしたりするのだ。奴の極悪非道の主張に貴公の心をしっかりと繋ぎ留めておくためだよ。改心への決意を貴公は持ち続けるだろうが、決して改心することはなく、ついには、知らぬ間に老いさらばえ（十二年もすれば、貴公はだれにとっても年寄りなのだ）、一時凌ぎに建てた貴公の住まいがその期間を持ち堪えると、奴は白髪まじりの貴公の頭の上に宇宙の落し戸をピシャリと閉めるのさ。そうなると、貴公にとっては万事休すなのだよ。奴の思いのままにな。

このような示唆は俺からでは似つかわしくないと思うだろうな。しかし、貴公が実際に直面している危険について、警告せずにはいられないのだが、貴公には分かっていないらしいだけに、なおさら危険なのだよ。従って、この件に関してもう少し触れておこう。

貴公の決心は立派なものだ。もしも、それを守らないようなら、貴公に守ることの出来るものなど、何一つとしてないことになるだろう。しかし、そうは言っても、悪魔と貴公の年頃とが邪魔をするのだ。六対一だな、貴公がしくじる割合は。仮に決心をしただけの話だとしても、貴公は六対一の確率でしくじるのだ。そして、もしもしくじれば、貴公は人々の笑いものだよ。悪魔の自慢の種だ。その時には、貴公を思い切り笑ってやるつもりだよ、俺は。というのも、この警告は道義心から来ているものじゃないのだ。もしかすると、俺もそうあってほしいと願っているのかもしれない。だが、男に嘘をついたことは一度もなく、女に真実を語ったこともほとんどない俺なのだ。前の台詞については、道楽者ならだれでも口に出来るというものではないし、後のものは、だれもが口にすることの出来る台詞なのだ。

いやはや、またもや精神に異常を来している。ただ、有難いのは、陰気なものではないということだ。三度目なのか四度目なのか、ごきげんよう、ごきげんよう、ごきげんようで結びとすることにしよう。

貴公のラヴレース

シャーロットと君は密かに手を結んでいるものと確信している。どうやら、あの娘と君、そして、M卿との間で手紙が取り交わされたようだな。最近は、奇妙にも、つんぼ桟敷に置かれたままなのだが、そのうち、君たち全員の前に突然姿を現してやるつもりだよ。真夜中の盗人を日の光が暴き出すようにな。

思い出してもらいたいのだが、我が愛しの君の遺言書の写しをいまだに送ってくれていないのだぞ、君は。

手紙　三十四
ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

九月二十二日　金曜日

俺として出来るかぎりの慰めを君に与えるためなのだが、十四日から十八日にかけての君の手紙に返事をしようと腰を下ろそうとしていたちょうどその時、返却を求める水曜日の手紙が届いたのだ。

最初の手紙に続いて、間も置かずにあのように相反する手紙が届いたことには本当に懸念を覚えるし、また、失望もしている。

君の手に渡らないよう、お身内の方々が抑えているとのことだが、君が触れているそのショッキングな手紙というのは、確かに俺のものだ。皆さんが君に何を見せても、もう構わないように俺は思うのだ。だから、君の心を生み出した本源たるものに関し、少しでも目を通して見る価値があると考えるならの話だが、あの手紙のことは皆さんに要求してみるのだな。

俺としてはそうなるよう意図したものなのだが、貴公がショッキングだと称している例の手紙を、貴公は読み終えたものと仮定しよう。そこで、ひとつ尋ねたいのだが、あの手紙のことはどう思っているのかな。死と死後の裁きのことを案じ、あの不道徳なことこの上ない女が恐怖に苦しんでいる姿を見て、貴公は身震いを覚えないだろうか。この手紙を通読することで貴公の胸に浮かんだはずの千々の思いだが、まだ閉じ切らない放血のための小穴の上ではどんな落ち着き具合なのだろうか。メリロート〔二七〕の膏薬に何か真面目な考えが混じり込んで、貴公の心のタコをむしり取ってはくれないだろうか。その膏薬が貴公の背中から皮膚をはぎ取ることがあるようにだよ。そして、吸い出し薬が陰謀を巡らしている貴公の頭の皮を剥ぐことがあるようにだ。もしも、そうしてはもらえないというのであれば、貴公の良心は本当に麻痺していることになるし、貴公には何の望みもないというわけだよ。

《次いでベルフォード氏は、受け取ったばかりのものであるが、恥知らずなシンクレアの恐ろしい最期に関する報告を行うのである》

これでも貴公の心を動かしはしないというのなら、ひとつ知らせてやろう。ここ一時間以内に俺の耳に入ったものなのだが、貴公のもう一人の罰当たりな手先の、もう一つの惨澹たる結末に関するニュースだ。貴公のトムリンソンのことさ。死にかけているのだ。そして、おそらく、これが貴公の手元に届く前にご臨終だろうな。メードスタン監獄〔二八〕でだよ。最初の手紙で貴公も言っているように、「何か奇妙に因果応報的なものが働いているらしい」ということだな。

奴の場合は次のとおりだ。密輸業者の一団を率い、この前の火曜日に陸揚げした密輸品を運び去ろうとしていたところ、夕方のことだが、竜騎兵の部隊が追いついたのだ。仲間の何人かは逃げ去った。包囲されたため、マクドナルドは退路を開こうと試み、相手に負傷を負わせた。だが、首に弾丸を受け、また、段平で頭に深手を負って馬から落ち、捕らえられ、メードスタン監獄へ連れて行かれたのだよ。俺の情報提供者は、今にも死にそうな奴とそこで別れたのだが、回復したところで、縛り首は間違いないというのだ。

すっかり金に困っていた奴は、親戚の男を使い、俺に頼み込んで来たのだ。また、ロンドンにいるならということで、他の仲間たちにもだよ。奴を〈扶助する〉ためのものではなく、というのが奴の言い方だったが（というのも、男が戻るまで命があるようには奴も思っていなかったのだ）、奴を埋葬するためのなにがしかのものを求めてのことだ。

奴を雇ったのは唯の一度しかないし、その時も、奴は俺の計画を台無しにしてしまったのだ。今ではそのことを天に感謝しているよ。だが、俺は奴に五ギニーを送り届け、そして、奴が二、三日生き延びるとか、裁判を受けるとかいう場合だが、君やモーブレーやタールヴィルからということにして、それ以上のものも約束したのだ。また、奴についてさらに問い合わせ、相応しいと思うものを与えてやるのは、君に任せることにしたのだ。

使いの者の話では、奴はひどく悔いているということだ。しょっちゅう涙を流しているそうだ。自分は不道徳なことこの上ない男だったと、大声を張り上げているのだよ。それでも、こんなに悪くなったのは必要に迫られてのことであり、でなければ、こうまではならなかっただろうと［われわれのだれ一人として持ち出すことの出来ない言い訳だな］弁

解をしている。ただ、奴にとって何にもまして心が痛むのは、ある金持ちの紳士のためのことだが、かつてこの世に生を享けた中でも最も素晴らしい女性、そして、自分が耳にしているところでは、悲しみのうちに息絶えたそうだが、その女性の破滅につながる悪辣な詐欺行為の片棒を担がされたことだ、というのだよ。

「果たして次はだれの番なのか」、考えさせてもらいたいものだな、ラヴレース。貴公の番ではないように祈っているよ。だが、助言を一つ提供してくれたわけだから（それが道義心から出たものではないということを、骨折って納得させてくれなかったならば、確かに、貴公には似つかわしくないと思ったことだろうな）、俺のほうからも一つ進呈することにしよう。つまり、「出来るだけ早く、予定している旅を実行に移せ」ということさ。場所が変わり、環境が変わることで、貴公の健康が確かなものになるかもしれないのだ。ここの重苦しい空気と冬の訪れは貴公の血を濃いものにするかもしれないし、貴公と組打ちをしている良心、老練なレスラーのように、貴公からもう一度フォールを奪わんものと機会を狙っている良心も手伝って、貴公を生涯に亘って不幸に陥れるかもしれないのだよ。

返却の求めがあった君の手紙は返すことにする。ただ、破棄はしないでくれ。いずれの日にか、あれと同じ口調が再び君の流儀になることも有り得るわけだからな。

ハーロー邸の一族のことだが、あの連中の悲しみようや良心の呵責についての、はなはだ心打つ手紙をモーデン大佐から受け取っている。だが、そのきっかけとなっていることでもあり、連中の不幸を喜ぶ資格が君にはあるのだろうかな。

遺憾ながら、君が〈遊び半分に〉警告した事柄のために、俺は〈本気で〉身震いを覚えると言わねばなるまい。俺の希望としては（何しろ、俺にとってこれは深刻な問題なのだよ。君にはそんなものは一つとして有り得ないのだろうがね）、背信行為により、人々の嘲笑の的、そして、悪魔たちの喜びの種には絶対になりたくないということだ。

深く染み込んだ習慣を克服する難しさについて君が言っていることは、すべてそのとおりだよ。そういった習慣にしても、また、年頃にしても、確かに俺にとってはあまりにも不利に働いている。だが、今は亡き我が相棒たちの最期（早過ぎたのもあるが）、ベルトンの惨めな死や、いまだにこの耳に残っている、シンクレアの唸り声や叫び声、また、この度は君の惨めなトムリンソンだが、これらを思い返して見る時、そして、それらの最期と比類なきハーロー嬢の幸せで望ましい最期とを比較する時、実質上、俺の足場を揺るぎのないものと考えて然るべき理由がありそうに思われるのだよ。しかしながら、君がどんなつもりであるにせよ、君の忠告は役立てることにしよう。自分の弱点は承知しているのだから、だれか操の正しい女性の信頼と尊敬とに値する人間になることが出来次第だが、結婚によってその方面の強化に努めるつもりでいる。そして、そんな方法で、君の嘲笑の的というよりは羨望の的になるつもりなのだ。

因果応報を目指したもの、と言って構わないような、そんな行動をすでに俺は開始したのだ。気の毒なジョン・ロフタスには終身年金を与えることとしたが、俺の無法な試みから自分の若い愛人を守ろうと頑張った際に、俺が不具者にしてしまった男だよ。あの一件では、上首尾を得ることは出来なかったわけだが、俺はそれを大いに喜んでいる。不首尾に終わった同種の多くの事例を思い出しても、同じように嬉しくなるのだがね。

破産状態に陥った哀れなファーリーを一本立ちの状態に戻してやったが、もしも、昔の暮しに戻っているようなことを耳にした場合は、俺からの年金支給は停止すると宣言して

おいた。そして、自分の行動に関して、善良な未亡人ロヴィック夫人に報告するよう義務づけたのだが、夫人については、たっぷりと給金を払うこととし、エッジウェアの女中頭に雇ったのだ（というのは、ワトフォードの家を貸しに出したからだよ）。そして、四半期ごとの配当は、行状次第だが、夫人からあの女に支給してもらうことにした。

この善良な女性には、われわれの親交が深まるにつれてだが、同種の他の事柄についても監督してもらうことにする。また、彼女が俺の期待に応えてくれること、そして、彼女との会話によって俺の気持ちが強化され、かつ、改善されることは疑いのないところなのだ。というのも、通常は、俺と同じテーブルに着いてもらうからだよ。

クラリッサ・ハーロー嬢が嘗めた不当な苦難の数々、その気高いまでの長所、手本とすべき用意周到さ、そして、その幸せな最期が、われわれにとっての絶えざる話題となることだろう。

来客のない時には、本を読んで聞かせてもらうし、書き留めてももらうのだよ。数々の書物から、お薦めの箇所をな。彼女の年齢からして（五十過ぎなのだ）、また、申し分のない人柄からしても、醜聞の種になる恐れはない。また、彼女を幸せにすることで、俺自身が向上するのだと考えると、大いに楽しくなるのだ。

それに、危険な状況になった場合はいつだって、天晴なあの令嬢の手紙を何通か読むことにするし、以前の生き方を忌避したくなれば、貴公の手紙を数通、そして、俺自身の手紙の写しに目を通すつもりなのだ。

これらすべての結果として、俺のことを救いようもない人間と見做しがちだった親戚の者たちにとっては、男女の別なく、俺が喜びの種となるのだよ。俺の家族の間では立派な秩序が守られることだろう。何しろ、俺自身が優れた手本を示すわけだからな。人が訪ねて来るだろうし、敬われることにもなるだろうが、多分、ラヴレースやモーブレーやターヴィルからではあるまい。昔のよしみで俺に会うわけには行かないのだし、新たな関係では、おそらく、会う気にならないだろうからな。君らからではなく、すべて近隣の人間なのだが、俗人も聖職者も含め、最高の、最も立派な紳士たちからだよ。自らの過去の愚行については軽蔑の念をもって眺めるだろうし、昔の仲間には憐れみのまなざしを向けることだろう。悪罵や悪態はこの唇から永久に追放され、その跡を継ぐのは、理性を備えた存在、そして、紳士たる者に相応しい会話だよ。そして、絶えずこの身に防御の行為を強いていた攻撃的行為の代わりに、俺の力で可能なあらゆる善行を行い、また、その力の許すかぎり、この世のすべての者にとっての後援者となることで、自分がかつてもたらした災いの埋め合わせとなるよう努力するつもりなのだ。

さて、ひとつ聞かせてもらいたいのだが、ラヴレース、俺が行いたいこと、また、なりたいと思うものについての、この模糊とした見取り図を見て、われわれが追い続けてきた放縦で有害な、心身両面に亘って危険な策謀に比べ、こちらの計画のほうがはるかに望ましく思われるのではないか、という点についてだ。

俺には好ましいものと見えるこの見取り図だが、君にも同じくらい好ましく感じられるようにすることが出来たらと願っている。心の底からそう思うのだよ。何しろ、君のことはいつだって大切に思っていたわけだからな。それが俺には不幸の種だったのだ。このことのせいで俺は、さもなければ加わるはずもなかったのだと、本心からそう思っているのだが、そんな途方もない乱痴気騒ぎや愚行へと向かうことになったわけだからな。

仮に、この称賛すべき女性の現世での破滅に関わることだけにしても、君のほうが俺よりもはるかに責任が重いのだ。君が若さと健康、そして、知力をなおも保持している今のうちに、俺からの説得に応じてほしいのだよ。というのも、俺は不安なのだ。すこぶる心配なのだよ。これほど輝かしい光を世界から奪い去ったという点で、このたった一つの不行跡の罪の深さは大変なものだから、すぐにも心を改めないと、改心すること自体、君には力の及ばないものになってしまうということがだ。また、君の手先のシンクレアとトムリンソンの運命を警告とすべくすでにお示しになっているわけだが、神の摂理は、警告を軽視したりすると、主犯者を見逃すようなことはないのだという点もだよ。

このような真面目な考察について、おそらく俺を笑うことだろうな、君は。笑いたければ笑ってくれ。このような立派な理由に基づいて決断し、また、このような実例によって誘導され、かつ、戒めも受けているわけだが、君が匂わせているとおり、そんな目的からの逸脱に対して得意顔をされるくらいなら、このような考え方や行動を続けているということで笑い者にしてくれるほうが、俺にとっては望ましいことなのだ。

差し当たり、この話題はこれだけにしておこう。

出発はいつにするつもりなのか、知りたいものだな。君の幸福を案じるあまり、もっと空気が薄目な土地、もっと気候の安定した土地に赴いてくれることを願わずにはいられないのだよ。

君と一緒に出発することが出来ないとは、ターヴィルとモーブレーには一体どんな用事があるというのだ。おそらく、連中が俺との付き合いを欲することはないだろうし、俺にしても、君がいなくなれば、連中と付き合うのには耐えられないことだろう。だから、連中は一緒に連れて行ってもらいたいのだ。

しかし、君のドイツ、イタリア旅行からの帰途に、パリで君の元を訪ねることについては断りはしないつもりだ。ただ、君を矯正するという望みはほとんど抱かずに行くことにしよう。俺が君の眼前に提示したこと、また、最後の二通の手紙で君が書き記していたことについての適切な考察をもってしても、その頃までに矯正が成し遂げられていないようであればな。

君が発つ前に顔を合わせることになるだろうな。繰り返すが、国を離れていてくれたならと思う。この重苦しい島国の空気には、大陸の空気がやってくれることを君のために果たす力がないのだよ。

海峡のこちら側では、君との連絡をこれまでどおりに取るべきだとは思わないのだ。だから、向こうへ渡ってから便りをしてもらおう。その時には、俺のペンに好きなだけ指示を出してもらうし、正直な話、俺の力も思いのままに使ってもらうことにしよう。

J. ベルフォード

手紙　三十五
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

九月二十六日　火曜日

心底そう信じているが、運命は悲劇のための糸を紡いでいるのだ。貴公が布に織り上げ

るためにだよ。貴公のワトフォードの叔父、今は亡きベルトン、比類なき麗しの人［気高いお嬢さんだというのに、こんな名簿でお目に掛かることになるのだろうか］、あの忌わしい女、それに、トムリンソンにしても、全員が陰鬱なものや恐ろしいものの主題を貴公に提供するよう運命づけられていたかに思われるのだ。そして、M卿ならこんな言い回しを用いるのだろうが、確かに、「貴公の音頭取りで事が進む」というわけだよ。

いやはや恐ろしい話だな。考えごとを始めると、どっとばかりに考えごとの種が押し寄せて来るのだよ。憂鬱な気分が起こり、陽気さや華やいだ気持ちは永久に心を離れてしまうのだ。

今は亡きマクドナルド　…　あいつのことは本当に気の毒に思っている。役に立つ、忠実で真面目な奴で、与えられたどんな役割にしても、比べる者がいないほど巧みに演じることが出来たし、顔を赤らめるようなことには縁のない悪党だったのだ。実際、今回の件ではあいつ、誠心誠意、俺のために骨を折ってくれたのだが、思い返して見ると、あいつにしても俺にしても、そのことがずいぶんと高いものについているのだよ。われわれ両名とも、面食らうこともしばしばだったが、しかし、あいつが怯むことは一度としてなかったのだ。もう一度言わねばなるまいな。今は亡きマクドナルドよ　…　本物の悪事を実践するに当たって、あいつに匹敵する者などは一人としていなかったのだ。

血に飢えた筆の餌食として選び出す人間一人一人について、巧みに描いてみせる手際を貴公は備えているわけだが、あいつは本当に貴公が描くとおりの重体なのか、それを是非とも知りたくて、貴公の手紙をもらうとすぐに、男を一人馬に乗せ、メードスタンへ急がせたところ、貴公の五ギニーを受け取った二時間後にあいつは息を引き取ったという知らせが届いたのだよ。それに、永久に愛しいハーロー嬢についてのあいつの懸念に関してだが、どうやら、貴公が筆にしたことはすべてそのとおりだったらしいのだ。

俺にはどうにもならんことなのだよ、ベルフォード。ただ、次の点だけは付け加えておこう。つまり、哀れなあいつが首を吊られるまで生き長らえなかったのは、目出度い話だということだな。どうやら、そんな羽目に陥りそうだったのだがね。何しろ、あいつはえらく懺悔の口調になっていたわけでもあり、死に際にどんなことを漏らしていたか、分かったものではないのだからな。

自らの慰めとすべき大きな幸せに恵まれていない場合、手に入る小さな幸せを精々活用するのが正しいことだ。どんなものであれ、困難が人間の身に降り懸かれば、慰めのかすかな光が、きっと、少しは差し込んでくるものだよ。その不幸者が、カーテンを開くのではなく、閉じて光を遮ってしまうような、そんな哀れな人間でないならの話だがね。

俺がトムリンソ船長と称していた哀れな男に関しては、今のところ、そして、永遠にだが、これくらいにしておこう。

この陰鬱で変わりやすい気候の土地から俺を追い出したいという君の憂慮は、当地のすべての者たちの気遣いとぴったり一致している。連中は皆、旅で俺の健康が揺るぎないものになると信じているのだ。だが、俺としては完治したつもりなのだよ。ただ、新月だの満月だの彼岸嵐だのといった忌々しい言葉が、それらを頭に思い浮かべると、少しばかり俺を怯えさせるのだ。しかも、それがのべつ幕なしなのだ。というのも、一族全員がこういった変化のことを絶えず俺の耳に吹き込んでいるし、よく説明がつかないほどの精励ぶりだが、俺をこの王国から追い出すことにご執心なのだよ。

しかし、俺が出掛けた後、頻繁に便りをしてくれるのかな、貴公は。貴公が断ち切ってしまった話についてだが、筋の通るように纏めてもらえるのかな。連中の苦悩ぶりの詳細を話してくれるのだろうか。俺の心を痛めている出来事を招来させるに当たって、俺の補佐役を務めた連中のことだよ。否、主犯と言っても良いだろうな。というのも、貴公がどう言おうとも、一体俺にはどんな不始末があったというのだろうかな。そのために女が悲嘆に暮れるような、それほどのことについてだがね。

嘘偽りのないところだが、ジャック、これまでにも何度となく話して来たことだが、俺は極めて惨い仕打ちを受けたのだ。あんなにもひどい悪評を立てられたり、指をさされたり、まるで狂犬相手のように、叫び声を上げられたり、逃げ出されたりしたのだ。俺自身の身内までが全員揃って、俺との縁をすぐにも切ろうとしていたのだからな。

ただ、俺はそれらすべてに相応しい人間だったと思う。というのも、他の者たちが俺に非難を向けようとするのに負けず劣らず、俺自身にも自分を見捨てがちなところがあったのではないだろうかな。

何たる狂気だ。何という愚かしさなのだ、これは。自分を責めるような人間の肩を持つ者などがどこにいるのだ。そんなことがだれに出来る。起訴状に対して有罪を申し立てる人間に残されているものと言えば、判決の他には何もないのだよ。本当に策のない戯け者だな、俺も。キリスト教圏の君主たちのうちで技巧を弄することの最も少ない者の、その技巧をも俺は持ち合わせないのだが、君主連中というのは、十倍もあくどい裏切りを毎日犯しているのだ。それでいて、連中は声明を出し、非難を逃れる。そして、次々に違反や盗みを行い、略奪につぐ略奪を重ね、破壊行為を働くのだが、それは自らの栄誉のためなのだ。そして、征服者の名をもって報いられ、〈…大王〉の称号を授かり、その殺戮と略奪の行為に対し、弁士や詩人たちによって褒め称えられ、神格化さえされるのだよ。

一方、俺は哀れで独りぼっちの、害を及ぼすこともない放浪者さ。少なくとも、比較的に無害な存在だ。飢えを満たすために盗むのは、貧弱な子羊一匹だけだというのに、人々の口がすべて開かれ、手もことごとく振りかざされるのだよ、俺に向かってな。

否、ちょうど今耳にしたばかりだが、君主などではないというのに、俺は声明文をもって告発されることになるのだ。今回の一件を世間中に公表してもらうと、ハウ嬢が脅しているのだよ。

声明文には反対しないでおこうという気持ちも、俺には多分にある。それが世に現れ次第、返答を書き、責任のすべてを年寄り連中に被せ、身の証を立てるのさ。それに、最大の敵対者どもが主張する、俺に不利な事柄ことごとくが本当だとしても、俺にも次の点を申し立てる用意はあるのだよ。つまり、この事件に伴った、そして、おそらくは予想不可能だったものだが、その途方もない結果については、すべてが俺の責任に帰されるわけでもないということだ。

そして、この点については、ほんの二、三時間前にM卿と二人のモンタギュー嬢に諮ったものだが、ある事例によってはっきりと証明してみせるぞ。つまり、こういうことだ。

守銭奴の甲が黄金の包みを秘密の場所に隠したことにしよう。法外な利子で貸すことが出来るようになるまで、そこにしまっておくためだ。

乙はこの宝がすこぶる必要であり、それなしには生きていられない状態だということ

にしよう。
　また、守銭奴甲は必要に迫られている人物乙を極めて高く評価しており、他のどんな人間によりも、その男に貸したがっているわけだが、しかし、他の使い道は一切ないにも拘らず、はなはだ法外な条件を主張していることにしよう。
　乙も通常の利子は快く払うつもりであるが、ただ、守銭奴の条件を呑むと、破滅しそうなのだ（少なくとも、自分の見解ではそうなるのだが、この男には自分の見解がすべてなのだよ）。というのも、借金のために間もなく投獄され、一生涯牢獄暮しとなるのは確かだからだ。それゆえ、魅惑の財宝が横たわっている場所に目星をつけ（狡猾で抜け目のない男なのだ）、守銭奴が熟睡している間に宝を探して見つけ出し、持ち逃げをするのだよ。
　この場合には、乙はただの盗人でしか有り得ないということ、その点は明らかなわけだよ、ジャック。

　ここで、モンタギュー嬢が極めて鋭い突っ込みを見せた。「私にとって命よりも大切なもの、そうでなくてはいけないものを盗むような泥棒は、許しを受ける資格の点では、私を殺す人間にも劣りますわ」と、あの娘は言うのだよ。
　「だが、シャーロット、君の命よりも大切なものとは、一体何なんだい」と、俺は言ったよ。「貞節だと君は言うのだろうな。淑女を相手に、返事をしてもらえないような仕方で話し掛けるつもりはないんだよ、僕も（一度だってそんなことをした覚えはないのさ）。しかし、僕が例として出したような事例では（君がそんな幻影の特性としているものすべてを認めるとして）、一体どんな貞節が失われたというのだろう。意思は踏みにじられていないのだし、その人間には避けようもないことなのだ。ただ、諮られている事例に関してだが、盗みが行われるまでは、どうしてわれわれに分かったというのだろうか。守銭奴が実際に例の財宝にそれほど法外な価値をおいていることがだよ」とな。
　二人の従姉妹は声もなかったよ。そして、卿のほうでは、返事をすることが出来ないものだから、俺を罵っていた。そこで、俺は言葉を続けたのだ。
　「だとすると、結果としては、乙はただの盗人でしか有り得ないということであり、その点は明らかなのさ。だから、僕の例について、先を続けることにしよう」とな。

　この守銭奴の甲当人が、目を覚まして捜してみたところ、自分の宝がなくなっていることを知り、それをひどく気に病んだ挙げ句、食事も喉を通らなくなり、死んでしまったとしよう。
　その責任は本人以外のだれにあるというのだろうか。公明正大さの精神、法律、あるいは、良心にしても、殺人の罪で乙を絞首刑にしたりするのだろうか。

「そこで、これを当てはめると　…　」と、俺が言い掛けた。
「止してほしいわね、当てはめたりするのは」と、従姉妹たちが叫んでいた。二人揃ってだよ。
「当てはめるのは止めるのだ、この罰当たりめが」と、これは短気な殿様の台詞だ。
「それじゃあ」と、俺はやり返し、「あまりにも明白な例のため、当てはめるまでもない

ことと結論することにしましょう」と言いながら、二人の娘に目を向けると、二人はそれぞれ赤面して見せようと骨折っていたのだよ。「それで、結局のところ、死罪は免れるものと考えるわけですよ」と、俺は言ってやったのだ。

「そういうわけには行かんのだ」と、卿が叫んだ［貴公も承知だろうが、ジャック、貴族連中というのは、最後には判事の席に着くものなのだ］。「何らかの不法行為を犯すことで、死罪相当という結果になれば、お前は両方の責任を取らねばならんのだよ」とだ。

「そうおっしゃるわけですね、お殿様は。しかし、婦女暴行だと（君の前だが、許してもらうよ、シャーロット。君にもだ、パティ）仮定いたしまして（今回の件と同様にですが）、お殿様にはこうおっしゃっていただけますでしょうか。死は婦女暴行の〈当然〉の結果なのだろうか、とですよ。そのとおりだなどということを、お殿様、あるいは、君たちご婦人方にしてもだが、一度でもお聞き及びでしょうか。それで、もしも当然の結果ではないとして、悲しみのあまりの死のように、ダラダラと最期を迎えるにせよ、ルクレティアのように短剣によって果てるにせよ、ある婦人が自殺をする場合、男の過失は一つならずあることになるでしょうか。もう一方の過失はご婦人のものではないのでしょうか。もしもそうではないのだとしたら、ひとつ言わせもらいたいのだが、君たち」と、顔を赤らめている従姉妹それぞれの顎の下を撫でながら、俺は言ってやったのだ。「われわれは若者のターピンほどに邪悪な男を持つことはなかったか、それとも、ルクレティアほどの貞淑な女性を、長い年月に亘って　…　何千年前の話でしたかね、殿様　…　持つことはなかったか、そのどちらかなのだよ。だからこそ、ルクレティアは唯一の奇跡として記録に残されているわけさ」とだ。

俺は轟々たる非難の的になったよ、君にも信じられるだろうがね。返答に窮した人間というのはわめき立てるもので、連中も揃ってこの行動に出たというわけさ。だが、俺は連中に向かって主張したのだ。そこで、君に対しても主張しておくが、ジャック、この点に関して俺は一般的な盗み、法律家たちの言う私的窃盗は別とし、それ以外のすべてについては、無罪を言い渡されて然るべきだということだよ。また、法律に則って俺の命が奪われるような事態になるとしても、殺人ゆえのことではないはずなのだ。

それに、連中にも話したことなのだが、この一件にあっては、俺にとってすこぶる有利な事情があったのだ。初めは怯んでしまったわけだが、そんな条件に応じることと引き替えに許してもらうのを、俺は心の底から喜んでいたはずだからだよ。そして、君たち全員も知っているとおり、俺はこれを申し出たのだよ。それに、M卿、ベティ夫人、セアラ夫人、および、俺の二人の従姉妹、そして、すべてのいとこのそのいとこたちが十四代に至るまで、俺の保証人になろうとしていたのだ。ところが、それでも駄目だったのだ。麗しの守銭奴さんは胸も張り裂けよとばかりに嘆き悲しみ、命を絶たずには済まなかったのだよ。どうしたら俺にそれが避けられたというのだ。

結局のところ、ジャック、仮に令嬢は死ななかったとすると、世間の噂は今の半分だったのだろうか。俺が彼女の死の原因だったのだろうか、あるいは、俺にはそれを避けることが出来たのだろうか。それに、百万件の類例のうちの九十九万九千件は、今回と同じような終わり方をしているのではないだろうか。だとすれば、何と厳しいのだろうな、俺の運命は。誓っても良いが、これまでどおりに我慢しようとは思わないのだよ。自ら罪を背負う代わりに、憐れみを乞うつもりなのだ。そして、これこそ（昨日を呼び戻すわけには

行かないのだからな）、気持ちを楽にするために辿ることの出来る唯一の道なのだよ。すぐに先を続けることにする。

手紙　三十六
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

それにしても、貴公自身と老未亡人のために、何という結構な人生の見取り図を描いてくれたことだろうか。誓っても良いが、ジャック、俺としては滅法気に入っているよ。欠けているものと言えば、たった一つだけだな。そして、勿論、それも得られることだろうな。治安判事の職に就くだけで良いのさ。それも、特定治安判事（二九）の一人にな。すでに貴公にはロヴィック未亡人という願ったり適ったりの事務官が付き添っている。貴公は法律に通じているし、彼女のほうは善悪を弁えているからな。貴公ら二人で立派な大法官様だよ。私生児関係の訴訟で、貴公がその新しい見解と古い記憶とに基づいて裁定するのを拝聴するというのは、俺にとっては並外れて大きな楽しみになることだろう。

だが、冷やかしは止めておこう［誓って言うが、心の中は塞ぎっぱなしなのだ。ペンと顔付きのほうは軽薄さを装っていてもな］。貴公は出来ると考えているわけだが、結局のところ、後悔したり改心したりすることがそんなにも簡単に出来るのであれば　…　昔の罪や古い習慣をそのように振り払うことが出来るのであれば　…　また、貴公の古くからの主人が、それだけ頼りになる忠実な召使をそんなにも快く手放し、醜聞の恐れはなく、誘惑もすっかり途絶えた状態で、貴公が新方式をそのように心穏やかに楽しむのを許してくれるのだとしたら　…　そして、遂には（時を経て、貴公の改心が保証され、証明された上で）貴公が結婚をし、真正直な生活を送るとしたら　…　そうだな、ベルフォード、この「…　としたら」のすべてが実現するようなことになれば、俺としては、貴公にも幸せ者になる好機はたっぷりあると、そのように言わざるを得ないわけだよ。

前回の手紙で話したことだが、俺の念頭にあることといえば、悪魔にしても自分の利益というものは十分すぎるほど弁えているから、貴公をそうも易々と手放すわけには行かないのだ、という点だけだ。われわれは好きな時に悔い改められるわけではないと話してくれているのは、貴公自身なのだよ。また、実際の話、俺もそれは気づいているのだ。何しろ、正気の時には俺も立派な決意を固めるのだが、体調の良さがその楽しげな側面を俺に向け、回復の見込みを展開して見せると、以前の好みや欲望がそっくりそのまま戻って来たのだよ。そして、おそらく、この手紙で貴公も完全に確信することだろうが、今では俺もこれまでどおりの放蕩児となっているか、あるいは、その途上にあるというわけだ。

貴公が描いてみせた模糊とした見取り図では、われわれが長きに亘って追い続けてきたもののどれよりも、貴公の新計画のほうがはるかに望ましいのではないだろうかと、至極真面目に尋ねているわけだが、そうだな、ジャック、ひとつ考えさせてもらおう。そうだな、ベルフォード、何とも言えないところだな。何とも言えないが、そのとおりなのだろうな。思い切って言うと　…　芝居の中のビディ（三〇）の台詞じゃないが、確かに、「素敵で楽しい」計画だよ。

だが、俺を重んじるあまり、そうでなければならなかったはずの悪党になってしまった

ということを理由に、俺を大切に思う気持ちが不幸の種だったのだと貴公は言っているわけだが、そんなことを俺に話して聞かせる時には、この主張についてよくよく考えてもらいたいものだな。俺は確信しているのだ。貴公にしても、自分が想像しているほどの正しい道を辿ってはいない点に気づくはずだということをだよ。

本当に懺悔をしている人間というのは、見せかけの彩りや虚飾を狙ったりはしないものだ。品性の卑しさ、自信のなさ、屈辱、後悔、これらはすべて近親関係にあるのだよ、ジャック。そして、改悛の情と切り離すことの出来ないものなのさ。この点を知らないようでは、後悔と改善への道を（六十歩の中の）三歩も踏み出していないことになるな、貴公も。それに、崇高なる告発者が気づかせようとしてやって来る前に、俺のほうから注意をさせてもらいたいのだが、悪事に臨んで、いつだって貴公は従順な模倣者に止まってはいなかったということだ。今便りをしている相手と同じくらいに上等な工夫の才に恵まれなかったとはいえ、貴公にしても、これまで俺が人間に見出してきたものと同等の、悪事に対する強い意欲は持ち合わせていたのだよ。

それに、示唆を生かすということでは、貴公は常に真のイギリス人だったよ。俺がどんな悪事を始めるにせよ、それは、すぐにも実行に移せるよう、いわば金床とハンマーで打ち整えられ、貴公の鍛冶場から出て来たものだったのだ。どうしたら良いものか、俺自身は途方にくれる時もあったのだがね。

実際、貴公よりも俺のほうを一層悪辣に見せていたのは、俺は色男で、貴公は醜男であるために、獲物を狩り出して追い詰めた際、気の毒に、怯えた娘は貴公の手ではなく、俺の手中に身を投じるのが通例だったという点だ。そこで、がっかりした貴公はその突き出た唇を拭い、新たな獲物を狩り出そうと、撤退して行くのだ。その間ずっと、俺のことを悪者呼ばわりしながらな。

要するに、ベルフォード、貴公は飛び切り優秀な勢子役の猟犬であり、セッターだったということだな。婆さんたちも、貴公のような顔を拝んで、娘が心配になるということはなかったのだ。だが、この俺様が登場すると、サッとばかりに娘たちの部屋に錠が掛けられるのだ。だが、そんなことをしたところで何の意味もない。何しろ、時として愛は、象に鍵穴を通り抜けさせたりもするものだからな。だが、貴公の心については、その悪辣さを疑問視した者などかつていたのだろうか。

また、この胸に一番つかえている、俺を咎めるための手掛かりとして、良心がしきりに利用している今回の一件においてさえ、貴公は自分で空想しているほどに潔白なのだろうかな。この言葉には貴公も目を剥くことだろうが、ただ、それが真相なのだよ。俺がその点を納得させてやろう。一瞬のうちにだよ。

あのお嬢さんの遭遇した身の破滅から、彼女を救うつもりだった、というのが貴公の台詞だ。こんなことを口にするとは、とんでもない男だな、貴公も。どうやって彼女を救うつもりだったのだ。彼女を救うのに、一体どんな手を用いたのかな。

俺の企てについて、貴公は最初から承知していたのだ。今では自分に権利があるかのように装っている手柄についてだが、それを主張すべき十分な資格を得ようという気持ちがあったのなら、本物の武者修行の騎士のように、魔法をかけられている城からお嬢さんの救出に努めるべきだったのだよ。彼女に危険を知らせるべきだったし、巨人がいない時には、忍び込むべきだったな。あるいは、真の騎士精神を備えていたのなら、そして、他の

どんな方法でも駄目な場合には、巨人を殺すべきだったのだよ。そうすれば、貴公にも自慢すべき点が少しはあったことになるのだ。

「あゝ、だが、その巨人というのは俺の友達なのだよ。俺を信頼してくれているのであり、俺としては友人を、そして、その信頼を裏切ることになるのだ」と、こんなことを貴公は申し立てていたことだろうな。疑いのないところだ。だが、この申し立てを、貴公の現在の信念に基づいて審理して見るのだな。そうすれば、秘密を守ることよりも漏らすことのほうがまだしも許されるような折に、そんな申し立てに重要性を与えていたとは、我ながら何という卑劣漢であったのかと、貴公にも分かることだろう。かつてお嬢さん自身がまさしくこの点を、鋭く貴公に質していたのではなかったかな。そして、その際、貴公は激しく己を責めたのではなかったのか(ア)。

このような手段で命が危なくなるのを恐れていたなど、貴公にはそんなふりをすることは出来ないのだ。また、貴公にその気がないことは俺も承知しているのさ。ジャック・ベルフォードよりも勇敢な男は、また、貴公以上に恐れを知らない男も、この世には存在しないわけだからな。俺は覚えているのだ。貴公も忘れるはずのないものだが、貴公が自分の骨や首や命を危険に晒した例をだよ。悪事のために、大勢の敵を相手に回してな。それに、今では身に備えているように思い込みたがっているわけだが、その高潔さのかけらでも持ち合わせていたのなら、保護し信奉するのがだれにとっても似つかわしいという無垢さや美徳を救うのに、間違いなく貴公は危険を冒そうとしたはずなのだ。それが事の真相なのさ。俺自身にとってはひどく不利に働くわけだがね。ただ、俺としては、偽善者は心から嫌悪しているのだよ。

このように俺を裏切ったとしてだが、その時には、可能ならば貴公の命を奪っていただろうと思う。ただ、俺も今は確信しているのだよ。そうしてくれることを心の底から貴公に感謝していただろうし、貴公のことを実の父親や最良の友にもまして、父のように、また、友人のように考えていたことだろう、とな。それに、このお嬢さんが備えていたような気高いほどの美質を前にして、貴公が次のように考えるのも当然至極だったのだ。つまり、思いやりの心が激情にとって代わる時には、あるいは、陰謀に対するあの忌まわしい熱意が鎮まった時には、そのような事態になっていたはずなのだ、とな。この熱意にしても、振り返って見るなら、今では俺にとって大きな災いとなっているわけだが、それと同じくらいに自慢の種になるようなことは、決してなかったものなのだよ。

自己弁護に取り掛かるのだな。俺としては、さらに深く探りを入れ、この一件においても、貴公は功績よりも罪過のほうが大きいのだということを、さらに効果的に証明してみせるつもりだ。また、二人連れで狩り立てるのがわれわれの習慣となっていた、他のすべての件についても、常に貴公は先頭を駆ける犬ころであったし、俺が貴公を連れてというよりは、貴公が俺を引っ張って駆け出したがることのほうがはるかに多かったのだよ。なのに、今や貴公は、その大ムラサキイガイのごとき唇を整え、叫んでみせるのだ。「俺と比べ、ラヴレース、貴公が負うべき責任はどれほど大きいことか」とな。こんな台詞を吐いたところで、何を言っていることにもならないのだよ。それが事実だとしてもな。何故なら、その時に至ると、貴公が〈比較〉に基づいて裁かれるわけではないだろうからな。

(ア) 第六巻、手紙七十一を参照のこと。

要するに、この調子では、貴公はひどく不幸な思い違いをしてしまいそうだから、それだけ自分を抑え、苦行に励んでいながら、その瞼を閉じると、おそらく、およそ考えもしなかった場所で目を覚ますことになるかもしれないのだよ。

しかしながら、この問題は貴公のお婆ちゃんに相談してみるのだな。この調子で続けていると、柄にもないと思われてしまうことだろう。だが、実際の話、今回の件で手柄を主張すべき資格についてだが、ジャック、称賛を受けるに値するという点では、貴公が馬用の水場にも劣るのは確かだと言っておこう。そして、貴公をそこにどっぷりと浸してやることが出来たらと思っているのだよ、俺としては。

∴　　∴

現在俺は、実際に、田舎の友人たちにせっせと別れを告げているところだ。俺の呼び方ではトムリンソンだが、一度はあの男を連れて行こうとも考えたのだよ。だが、その計画も奴の運命のお陰で立ち消えだ。

今度の月曜日には、ロンドンで君に会うつもりだ。その折には、君と俺、そして、モーブレーとターヴィルとで、一晩を笑い明かすことにしよう。連中は二人とも（君もだろうと思うのだが）、海は渡らないまでも、ドーヴァーまで同行するのだよ。君と連中とには仲良くしていてもらわねばならない。君が最近の手紙の中で行った仕打ちについて、連中はひどく腹を立てているのだ。連中に言わせると、君は連中の知力に攻撃を仕掛けているというのだな。俺は連中を一笑に付しているし、こう話しているのだよ。知力に疑いを挟まれた場合、最も知力の乏しい人間が最も怒りやすいものだ、とな。

割愛してもらえるすべての書類と談話を、その時までに間に合うように拵えておいてくれ。特に遺言書については、持参したいと思っている。だれにも分からないことだが、君が辿り始めた道程で、君の足取りを確実にしてくれるのに役立つものが、俺を改心させないともかぎらないわけだろう。

貴公は妻のことに触れているが、ジャック、うちのシャーロットのことはどう考えているのかな。家柄の点でも財産の点でも、貴公の計画からすると、少し勿体ないようにも思うな。そういった点は反対理由になるのだろうか。シャーロットは利口な娘だよ。信心深さについては（今貴公の心が赴くところだ）、多くを語ることは出来ないが、それでも、あの年頃の大抵の娘と比べても、負けず劣らず真面目だし、他の者たちと同じで、少しばかりは信心深さを見せびらかしたりもするはずだ。自分の評判が安全だという場合にはな。

しかし、考えてみると、やはり駄目だろうな。貴公はひどく不細工で、ひどくぎこちのない男だからな。それこそ、水夫長顔負けの態度だ。あの娘が貴公を拾ったのは、ワッピングかロザハイズ辺りでのことだとか、新造船の進水式の見物、あるいは、チャタムとかポーツマスの波止場を観に行った際の話だと、人はそんなふうに考えるだろうな。実に派手で、実に不格好だよ。そのけばけばしさでは、シャーロットには合わないだろう。だから、満足して腰を下ろしていることだな、ベルフォード。以前にも、今と同じように気紛れ半分で、貴公に向かってシャーロットの名を上げたことがあったように思うがね(ア)。た

(ア) 第七巻、手紙七十四の追伸を参照のこと。

だ、俺としては貴公の品行も揺るぎないものにしてやりたいのだよ。結婚生活で効果が上がるというのであればな。ちょっと待て。妙案がある。

ロヴィック未亡人には娘とか姪はいないのかな。日に一度か二度、貴公と一緒に祈りに出掛けてくれるのは、財産や家柄に恵まれた娘ばかりというわけには行かないからな。だが、貴公としては苦行を共にする妻を娶るつもりなのだから、未亡人当人と結婚してはいかがなものかな。そうすれば、彼女としては、貴公の改心に二倍の関心を持つようになるのだよ。君と彼女は顔を突き合わせ、一緒に過ごす心地好い冬の夜長を積み重ねて行くことにもなるだろう。善人どもの言う〈実体験〉とやらを比べ合いながらだ。

俺は本気だぞ、ジャック。本当にな。ひとつご賢察に供していただきたいものだね。

R. L.

《前掲の手紙に対し、ベルフォード氏は極めて真面目な返信を送っているが、ここには掲載されていない。

その書面において、氏は衷心からの希望として以下のように述べているのである。つまり、いやしくも紳士を自称して憚らない者すべてから、その美点と無垢さゆえに、保護の手を差し延べられて然るべき淑女、また、公的な保護にさえも値するような淑女に対して企てられた、念入りなまでに卑劣かつ恩知らずな、そして、かくも長期に亘ってたゆまなく追及された陰謀に関し、結果はどうあれ、ラヴレース氏を阻止したかったというのである。

氏はこの点に関し、友人への信義の念について誤った観念を抱いていたと、極めて厳しい自己批判を行い、氏の言う神々しいばかりの淑女が、正しくこの問題に関し、氏に語ったところを回想するのであるが、これは、ラヴレースに宛てた書簡（第六巻の手紙七十一）において、氏自身によって語られていたものであり、ラヴレースも（扇動者として、かつまた告発人として）言及し、その事態に、無念の思いと恥辱とを味わっていたものである。しかしながら、氏はクラリッサのような者に対して企てられた回復不能の侵害と、優柔不断や軽率さによって自らの堕落を助長し、よって、悪事に伴う罪の大きな部分を担うのが当然となるような、その手の女性に向けられた侵害行為とは区別しているのである。

氏によれば、自らが犯した罪を言い繕うとか、軽減しようというのではないが、はなはだ厳重で有益な教訓や警告を、ラヴレース氏がすこぶる滑稽かつ無頓着な態度で与えている点を、ラヴレース氏自身のために嘆かわしく思う、とのことである。しかしながら氏は、それらが自分自身に対して所期の効果を上げるよう、もっぱら努力を傾ける覚悟でいるということ、また、初めて知り合ってからというもの、常にそうであったのだが、自分にとっては極めて大切に思われる男性、そして、現在のところ極めて実効に乏しいがゆえに、知識を有すること自体が氏への非難を強めることになっているのであるが、適切かつ深遠な考察を行い得る男性でもあり、その男性の改心をもたらす手段となるかもしれないような、その種の手本を示すことが可能になるのであれば、我が身には過ぎた幸せと考える旨を語っているのである》

手紙　三十七
ベルフォード氏からモーデン大佐へ

九月二十一日　木曜日

省略してはならない、また、省略することの出来ない話題につき、はなはだ深刻かつ厳粛な態度にて申し上げますことをお許しいただきたく存じます。神々しいばかりの淑女が大層懸念しておられました、あのさらなる災いを防ぐため、私の力で可能な事柄は一つ残らず行う旨を、ご令嬢と約束したからであります。

遠回しに仄めかすことで満足するつもりはありません。お従姉妹様への不当な仕打ちに対し、ラヴレース氏に仕返しをするまでは心休まることはないとのことですが、ハーロー邸のご親戚たちに向かって行われたと言われておりますご宣言の件、たった今聞き及びまして、大いに懸念を感じる次第であります。

あの不幸な男の弁護をしようとか、その罪を過度に軽減しようとするつもりは毛頭ありませんが、ただ、ご一族にいたしましても、当初ご令嬢を迫害なさいましたし、後には無慈悲な態度を取られましたことからも、少なくとも、氏と責任を分かち合って然るべきではないかと、私といたしましては、そのように申さずにはいられないのです。あれほど信心深い淑女で、その貞節さは不意を突かれる恐れもなければ、損なわれる心配もありませんし、意思の点で汚れたところはないのですから、単なる身体的な損害は克服なさったはずだと、そのように信ずべき大きな理由さえあるのです。とりわけ、氏のほうでは、その損害を償うために自分の力で可能な事柄はすべて行おうとしたわけですから、なおさらであります。それに、氏の一族全員が力になろうと申し出ておられることや、誠意のこもった、自発的な氏の申し出に付随するその他諸々の事情からいたしまして、仮に譲歩をなさいましても、氏から何らの無礼も加えられなかった場合と比べ、それ以上に大きな栄誉をご令嬢はお受けになっていたはずだということもあるのです。

次回お目に掛かります際には、この心痛む物語の詳細すべてにつきまして、お知らせいたす所存ですが、そこからも、当初ラヴレース氏は、この称賛すべき淑女は除外いたしますが、ご一族の皆さんからはなはだしく冷遇されておりましたことをお分かりいただけるでしょう。この除外例が氏の罪をさらに重くするものであることは承知いたしておりますが、氏の主たる意図は、ただ、ご令嬢の貞節を試すことであり、また、氏がご令嬢に対し熱心に結婚を嘆願するに至っているということ、そして、ご令嬢への不当な仕打ちを償う力が自分にはないことから、正気を失うという悲惨な目に遭っているわけでもあり、僭越とは存じますが、貴方がお固めになったと噂されておりますようなご決意に対し、多くの抗弁がなされても良いように考える次第であります。

同時に、氏の手紙から数箇所、お聞かせするつもりでおります。ようやく正気を取り戻しつつありますあの不幸な男にとって、自らの回想によってもたらされますもの以上に厳しい罰を受ける必要はないのだという点は、そのうちの二通により（一通は今届いたばかりのものです）、貴方にも納得していただけるものと存じます。

亡くなられました後に届きましたご令嬢のお手紙数通の写しに、今目を通したところです。そのすべてをお送りいたしますが、ラヴレース氏宛のものは別とし、これらはお目に掛かります時まで手元に置くことにいたします。貴方宛に書かれましたお手紙を今一度お

読みいただきますよう、お願いいたします。それに、ご令嬢の兄上に宛てたもの(ア)も同様でして、この手紙につきましては本便にてお届けいたしますが、これらが当面の話題と関連しているからであります。

これらの手紙は反駁し得ないもののように私には思われます。少なくとも、それらが私に及ぼします影響には絶大なものがありますから、私的な争いごとにおきまして、挑発されて剣を抜くようなことは、今後一切ないはずと考えております。

これら二通のお手紙が貴方に対して持たずにはいない重みに加え、次の点を申し添えさせていただきたいのです。つまり、あの不幸な男は、貴方がM邸をお訪ねになられてからは、新たにご立腹を誘うような真似は一切していないわけですが、あの折には、自らの罪を償おうとする彼の気持ちに貴方も大層満足され、彼をお許しになるよう、貴方ご自身が愛するお従姉妹さんに勧めておられたのだということをです。

また、ご臨終間際のお従姉妹さんと交わされた、貴方ご自身のお約束の件も（すべてを冷静にご検討くださいますなら、その必要はないはずと、僭越ながらそのように考えておりますが）思い出していただきたいのです。そこに信頼をお寄せになられたからこそ、あの方の最後の瞬間は一層心安らかのものとなったのです。

親愛なるモーデン大佐、どうかお考えいただきたいのです。最大の被害に遭われましたのはご令嬢であり、ご一族の皆さんがその原因の一端を担っておられますし、ご令嬢は許しておられるのだということをです。自らが称賛いたしておりますものを、どうしてわれわれは真似ずにおられましょうか。

勇敢な人間が計画的に卑劣漢となり得るものかどうか、ロンドンご滞在中に尋ねておられましたね。一般的に申しますと、勇敢さと卑劣さとは両立し得ないと思います。しかしながら、われわれが眼前にしております事例におきましては、ラヴレース氏の人柄が、「例外のない通則はない」という、広く知られております所見の正しさの証を提供してくれるのです。と申しますのも、イギリスは考えられているとおりの勇敢な国家であると、私は確信しておりますが、そのイギリスにあって、彼以上に勇敢な精神の持ち主はおりませんし、武器を操る腕前で優る者、また、その腕前を有しつつ、冷静さで優るという者も存在しないからです。

このような点に触れますのは、モーデン大佐のお気持ちを動かすことも可能だと考えたからではありません。もしも、私がご注意申し上げてまいりましたものによって促されることも、また、崇高な動機によって引き止められることもないのだといたしますと、大佐といたしましては、この腕前や勇敢さのゆえにこそなおさら、あの男は呼び出されるに相応しい相手となるのだと、そのようにおっしゃることでしょう。

そこで、私といたしましては、それら崇高な動機の力にすがることといたします。それも、強い確信も持っての話ですが、と申しますのも、流血沙汰に終わるような仕業は、突然の激情ゆえのことというのでしたら、ある者にとりましては口実として通るかもしれませんが、今となりましては、だれの場合にも言い訳が立たず、絶対に取り返しのつかない災いに対する冷淡で故意の報復行為、つまり、勇敢で気高い心には（私が今お便りをしております紳士のお心がその例ですが）為し得ない行いだと、皆からはそのように受け止め

（ア）手紙十を参照のこと。

られてしまうはずだからであります。

亡くなられた後に届きました数通のお手紙で主張されたものですが、遺言書と同様、ご令嬢の個人的な指図をも眼中に入れております点は、遺言執行人としての義務および契約のためにもお許し願いたく存じます。それらの項目一つ一つは（それが忠実に実施されますのを目にいたしますのは、我ら両名の切望するところではありますが）、ご令嬢といたしましても、ご自分のせいでさらなる災いが生じるくらいでしたら、むしろ割愛しようとなさったはずのものなのです。

謹んで、

親愛の情と誠意とを込めまして、貴方のしもべ

J. ベルフォード

《以下に掲げるものは、先の手紙においてに言及された、死後に届けられたモーデン大佐宛の手紙である》

手紙　三十八

［愛する従兄弟、ウィリアム・モーデン殿。　死後配達のこと］と上書きされたもの。

大好きな従兄弟へ

現在の衰弱した状態からいたしまして、ロンドンへお越しの際に予定しておられます有難いご訪問を、仮に生き長らえておりましても、相応しい形でお受け出来る状況にありますかどうか、確信を持てません。それゆえ、この機会を利用いたしまして、まだその力がございますうちに、幼い頃から今日に至りますまで賜りましたご親切のすべてに対しまして、とりわけ、現在ご親切にも私のために仲立ちの労をお取りくださっておりますことに対しまして、感謝を忘れません心のささやかな謝意をお返しすることにいたします。私のために好意を得ようと骨折ってくださいましたことに対し、全能の神様が永遠に貴方を祝福してくださいますよう祈っております。

このように厳粛な態度で貴方への筆を執ります一つの大きな目的と申しますと、これ以上はないほどの真剣さで切望する次第なのですが、私の身の上話の委細をお耳になさいます時には、行動を伴いますような憤りが、私のことで、その寛大なお胸の中に生じますのをお許しにはなりませぬよう、お願いするためなのです。

どうかお忘れのなきようお願いいたしますが、復讐を行うのは神様の職分ですし、神様は復讐には復讐をもって報いることを約束しておられるのです。また、貴方にはその職分を侵害していただきたくないのです。私の評判を守ろうと貴方が試みる必要はないのですから、なおさらです。私が生き長らえました場合には、貴方が強要することも出来ました当然の償いを、加害者本人が（呼び出されます前に）進み出て、すべてを行おうと申し出ているわけですし、罪深い人間と同じだけ危ない真似をすることで、貴方ご自身のお体が危険に晒されるかもしれないのですからね。

公的な立場に華を添えてこられました貴方には申し上げるまでもないことですが、決闘というものは、神様の特権を簒奪するだけではなく、行政長官の職務や優れた統治に対す

る侮辱でもあるのです。それは不遜な行いです。一個人の剣によって左右されてはいけない命を奪い取ろうとする試みですし、人の魂を（その罪のすべてを頭上に頂いたまま）破滅へと急がせ、併せまして、お粗末な勝利者の魂を危険に晒す結果となるような行いなのです。と申しますのも、悔い改めるべき折に臨みまして、神様の慈悲を求めるべきあの〈絶好機〉とでも呼べそうなものを、どちらの者もそれぞれ自分に対しましては厚かましくも希望しながら、相手に対しては与えようとしないわけですからね。

ですから、是非ともお願いいたしますが、血を追い求めることによって、私の過ちをさらに重大なものにするような真似はなさらないでいただきたいのです。流血沙汰がその過ちの結果であるように見做されますのは必定なのですからね。貴方の手で斃れるという名誉を（貴方が間違いなく勝者になるとしてですが）、あの不幸な男性には与えないでいただきたいのです。今のところ、あの人は不実で、恩知らずな詐欺師ということになっております。でも、あの人が命を奪われますのは、また、おそらく、魂も失うことになりますのは、わずか数ヶ月だけ私に惨めな思いをさせ、そして、神様のご恩寵によりまして、その惨めさを通して、私は永遠の幸せを得たわけですが、そのことに対する大変な罪滅ぼしになりはしないでしょうか。

このような場合、いかがでしょう、災いはどこで終わるのでしょうか。貴方への復讐をするのはだれでしょうか。その復讐者に仕返しをするのはだれなのでしょうね。

だといたしますと、私の恨みを晴らしますのは、あの哀れな男の良心に委ねていただきたいのです。いつの日にか、あの人もそこから十分すぎるほどの罰を見出すことになるでしょう。あの人には懺悔の機会を与えることです。全能の神様がそのための時間をお与えになるのでしたら、貴方が拒む理由はどこにあるのでしょうか。あの人のことは罪深い加害者のままにしておくのです。そして、あの人が斃れて、クラリッサ・ハーローも今では十分に恨みを晴らしたのだとか、あるいは、貴方が斃れます場合には（決してそのようなことにはなりませぬよう、お祈りいたしますが）、あの娘の過ちは、お墓に葬られるどころか、あの娘本人の死よりもはるかに大きな損失を招くことによって、いつまでも消えることのないものとなり、また、増大することにもなったのだなどと、どなたにもそのようなことは言わせないようにしていただきたいのです。

罪の重い人間が罪の軽い人間を打ち負かすということも多かったのです。書物で読んだことがございますが、チャールズ二世の御代に、人間同士が加え得る最大の侮辱に対する仕返しを目指しておりましたシュルーズベリ伯(三一)は、バーンエルムズという場所で、自分をひどく不面目な目に遭わせました、下劣な公爵の手によって命を落とすことになったということです。また、神様の特権を簒奪しております者が、自分が滅ぼそうと狙っていた人間、そして、以前はどれほど罪深かったといたしましても、この場合には、自己防衛という止むを得ない行動を強いられております、そのような人間によって、自分の思い上がりを罰せられますのは、それが常の例になるといたしましても、不公平な摂理のように考えるわけにもまいらないのです。

貴方の行いすべてに天のご加護がございますように。そして、私に施してくださいましたご親切のすべてに報いてくださいますよう、今一度お祈りをいたします。貴方のお心にはいかにも相応しい、そして、私の心にとりましてはまことに有難いご親切でした。和睦を図り、かつての愛児と両親との間に、また、先頃までは贔屓にしていただいた姪とおじ

たちとの間に、そして、以前には私のことを兄弟姉妹という温かい間柄に似つかわしくないわけではないと考えてくれていたのですが、そんな兄や姉と妹との間に、ご親切にも和解を求めてくださったのですからね。血に飢えた剣での復讐よりは、はるかに望ましいご親切でありました。

私にはいつもそうしてくださいましたが、私の尊い両親にも、どうか慰めを与えていただきたいのです。そして、私たち両名に寄せられました神様のご好意により、二人があの幸せな来世で出会うことになりますよう祈る次第ですが、貴方がこれに目をお通しになる頃には、私はもう彼の地に至っているはずと考えております。

大好きな従兄弟、モーデン様、私のお友達、私の保護者、でも、私の復讐を求めはしないお方 … ［宜しいですね。お忘れなきよう願います］ … 私はこのように祈っておりますし、また、最後の時まで祈るつもりでございます。

変わることなき親愛の情と感謝の念を添えまして、貴方の

クラリッサ・ハーロー

手紙　三十九

モーデン大佐からジョン・ベルフォード氏へ

九月二十三日　土曜日

拝　啓

何事にせよ、私が口にしたとお聞き及びの事柄がご心配の種となりますのは、私といたしましても極めて遺憾に思います。

お知らせくださいました書簡のこと、感謝いたしております。また、他のものにつきましても、折を見てご恵送くださるとのお約束、いよいよ有難く存じます。

我が愛しの従姉妹に関わります事柄はすべて、どなたからにせよ、喜んで拝見することにいたします。

私のようなはなはだ無遠慮な筆から出ましたもので、ハウ嬢がご覧になるのにはどれが適当で、どれが不適当かにつきましては、貴方お一人の裁量にお任せいたします。

あの令嬢の元気の良さには感心いたしております。令嬢が男性だといたしますと、この時点で、貴方が筆にしておられますような話題について、令嬢はご助言をお受けになったとお思いでしょうか。

しかしながら、ご心配なきように願います。お報せがありませんでした場合には取らなかったはずのどのような手段にいたしましても、お報せをいただきましたがゆえに用いることにする、といったことにはしないつもりでおります。この悪行はさらなる悪化の余地を与えないような性質のものなのです。

ただ、間違いなく保証いたしますが、私にとりまして拘束となりますような決定は一切行っていないということです。

あの折に激しい言葉を用いましたのは事実です。そのような振舞いを慎むことの出来る者など、どこにいたでしょうか。しかし、機会に恵まれ、目的の遂行が私の手でも可能な状態になりますまでは、重要な事柄についての決定は行わないことにいたします。回復の

暁には、この青年がいかなる心の衝動によって動かされるのか、われわれにも分かることでしょう。もしも、あのように修復し得ないほどの被害を与えた一族に対し、なおも無視の姿勢を取り、侮るようでしたら……もしも……しかし、将来の偶発的事態を前提とした決心は、先程も触れましたとおり、将来の決定に委ねるのが最善の方策なのです。

それはともかく、従姉妹の議論を反駁不能なものと考えております点はお認めいたしましょう。善人たる者は残らずあの議論に感化されるはずです。しかし、残念ながら、一体どこに善人がいるというのでしょうか。

貴方が論じておられる事柄につきまして、今こうして保証をさせていただきますが、貴方のご意見とその論拠はこれまでも、そして、今後とも常に、私には非常な重みを持っておりますし、そうあって然るべきなのだという点、そして、私に向けました従姉妹の信仰心溢れる命令を支持なさる貴方の諫めごとに対しまして、もしもそのようなことが可能ならの話ですが、これまでにもまして貴方を尊敬申し上げているという点につきまして、信じていただけるものと期待いたしております。それら諫めのお言葉も、あの娘の遺言執行人、そして、代理人としての貴方からいただきますのは、最も相応しいことなのです。それにまた、貴方は人情を弁えたお方であり、当事者たち両方の幸福を願っておられるということもあるのです。

貴方のご友人と同様、私とて激し易いとの謗りを免れるわけではありません。しかしながら、その激情は他人の横柄さによって引き起こされるだけの話であり、私自身の傲慢さによるものではないのです。仮にも、自分のいたらなさや怒りに触発され、自らの判断や従姉妹の命令に背いた行動を取ることがあるといたしますと、以下に掲げますような思いから、理性を失っていることになりましょう。実際、これらはいつも私の脳裏を占めているものなのです。

第一に、私自身の失望ということがあります。大変愛されております親戚の女性、そして、従兄弟として、また、管財人として、二重に関わりのありました女性と語り合いながら余生を送りたいものと、そんな希望を抱いて戻った私だったのです。

それから、今わの際のあの娘と交わしました約束からいたしますと、おそらく頻繁すぎることにもなるのでしょうが、次のような思いが心に浮かぶのです。愛しいあの娘は自分自身のためにのみ許しを与えることが出来たのだ、とです。あの娘が幸せになっていることに疑いの余地はありません。ただ、分家のすべてに至るまで一生涯惨めな思いをさせられることになりました、その一族全員のために許しを与えるのは、果たしてだれなのでしょうか。

あの娘に対する身内の者たちの罪が大きければ大きいほど、あの男の忘恩はいよいよ言語道断なもの、そして、弁解の余地のないものになると思います。何たることなのでしょう。あの娘にとりましては、あの男ゆえに被った苦痛を嘗めるだけで十分ではなかったのでしょうか。ところがあの野蛮人は、自分のために苦しむことに対して、あの娘に是非とも苦痛を嘗めさせようとしたのです。感情が高ぶり、この点についての表現が弱くなってしまいました。憤りの妥当さから、表現力の駆使は一見して不要と映るような場合、時として、激情は表現力の助けを拒むものなのです。このような考察にそれ相応の効果を添えますのは、貴方にお任せすることといたします。

この広く累を及ぼす災いの張本人は、予謀の上、情け容赦なく、浮かれ気分で実行してみせたのです。私の従姉妹を試すためとのことでしたね。クラリッサのような貞女の美徳を試すとは　…　それでは、自らの美徳に疑いを招くような原因が何か、あの娘にはあったのでしょうか。それは有り得ない話です。あの娘にはあったのだと、もしもあの男が断言するようであれば、確かに、私の出番ということになりましょう。しかしながら、堪えることにいたします。

今では明らかなように、彼はあの娘を下劣な売春宿へ連れ込んだわけですが、自分自身は人間らしい憐れみなどが一切及ばないところにいることもあり、人の助けの手がまったく届かないところへあの娘を置くためのことと考えております。また、誑かしのためのありきたりの手管すべてがあの娘には効かないことを知ると、その邪悪な目的を遂げるために、卑劣で男らしくない術策が用いられたのだとも考えております。傷つけられました聖者は、その遺言書の中で、「自分の死んだ姿を一度、あの人は見ておられる」と述べているのです。

M邸にて彼に面会いたしました際には、この点を知り得なかったということ、あの男の攻撃の対象を考慮いたします時、彼ほどの人非人が現存することは想像し得なかったということ、また、あの娘が彼を拒みましたのは、取り消し得ない打撃を加え、ほんの数日でその身を呑み込んでしまう死の門前へと一瞬のうちにあの娘を追いやってしまった、そんな非道の振舞いに起因するというよりは、むしろ、一時的な憤りや人間的な弱さの自覚、そして、あの男の申し出の誠実味に対する様々に入り雑じった疑念によるものなのだと考えますほうが、私には自然なことだった、ということもあるのです。

あの男は空威張りの人間だということです。大胆不敵な行動によって、また、勇敢さと腕の立つことでは並外れているように見せ掛けることで、だれをも威圧しようと考えている人間だということです。

あの男は自らの名に、そして、紳士たる者の品性に泥を塗っているのですから、面目を潰された、名のある者たちの立場を守るため、著名人の名簿からあの男を削除し、抹消するような人間にも、手柄がないわけではないと思うのです。

損害を被った一族には息子がおりまして、あれほどの妹にはいかにも相応しくない者ですが、激情的で、抑えのきかない、荒々しい気性をしております。それゆえ、この男と事を構えますのには不適当な人間ですが（実際、その点が明らかになったことも一度あります）、この息子をこのような出来事で、それも、憎しみを向けられて当然な男の手によって事故死で失いますのは、一族全員の不幸の総仕上げとなりましょう。また、それにも拘らずあの息子は、私がそうしなければ、あの男に釈明を求めようと決心を固めるのです。あれほどの妹に加えました自らの不当な仕打ちそのものが、おそらく、あの娘が受けて当然な追悼の行動をもっと顕著な形で実行するよう、彼の強情な心に働き掛けているのでしょう。その企てが自分にとっては致命的なものになるとしてもです。

それに、途絶える時もないわけですが、自分の親類である一族の不幸、そして、苦悩を目の当たりにしているのです。一族の者たち全員にしても、その事態に至らないうちはあの男との縁組をどれほど嫌悪していたにせよ、もしもあの男が（家柄の点でも財産の点でも、縁組をしても何ら不面目にはならないのですから）、あの娘に対してごく当たり前の扱いさえしてくれておりましたなら、天晴な娘とすぐにも和解しておりましたの

は疑いのないところなのです。

この目に映りますのは、物思わしげに頭を垂れた連中の姿なのです。以前ですと、互いのことを喜び合うため以外には出会うこともありませんでしたのに、互いに相手を避けながら、ぼんやりと歩き回っております。それぞれの者が、最後にあの愛しい娘の姿を見たのはここだった、あるいは、あそこだった、かくかくの場所だった、こんな姿勢だったと思い出しては、己を苦しめているのです。また、それが見納めになるのだろうなどと、思い浮かべるようなことが彼らには出来たのでしょうか。

だれもが皆あの娘の素晴らしさの例を思い起こしていますが、それらのもたらす恩恵そのものが、これからも長きに亘りまして、皆には呪わしいものとなるのです。

遺贈されました遺産に振り向けるためですが、調度品を取り払うよう、あの娘の控えの間、私室、キャビネットの処理が私の手に委ねられました（今となっては遅きに失した好意というものです）。自分たちは足を踏み入れることが出来ないのです。そして、あまり使い勝手の良くない裏階段を用いるようなことまでしております。あの娘の部屋のドアの前を通るのは避けようというわけです。

あの娘の客間は閉め切られています。遊歩道、庵、あの娘が楽しんでおりました、そして、素晴らしい刺繍に勤しむのを常としておりました東屋、そして何よりも、致命的な会見へと立ち去って行きましたあの東屋は忌避されていますし、横を通り過ぎるにいたしましても、急ぎ足なのです。

それでもやはり、あの娘の美点が思い起こされ、数え上げられました。それまでは顧みられもしなかったとか、数え切れないほどの嗜みに紛れて見過ごされておりました出来事や美質の数々が、今や注目を集め、長々と論じられることになったのです。

使用人たちまでが、上に立つ者を相手に、これら賛辞に満ち溢れた話題に関して詳しく語るのを許されているのです。賛辞を語り出すと雄弁とさえ言えるのですが、悲嘆に暮れる主たちは耳を傾け、涙を流しているのです。それから、その者たちの方に目を向けますと、焦慮と自責の念から、称賛に熱弁をふるっている者たちの言葉を遮り、ふがいのない手をばたつかせ、叫び声を上げているのです。そして、あの娘への賛辞をもっと聞こうと再び耳を傾け、また涙を流す姿が目に入るのですが、使用人たちが次のように繰り返し話すのを励ましてさえおりました。つまり、見知らぬ人々からはあの娘のことを尋ねるために、また、あの娘を知っている者たちからは、あの娘の名誉となるような新たな例を聞かせてもらうために、連中はよく呼び止められたものだったということをです。何ともこれは、そのすべてがですが、腹立たしい話ではないでしょうか。

皆は夢の中であの娘に出会い、また、出会いたいと願うのです。いつも天使の姿であり、天使たちに付き添われているのです。いつも光に包まれております。いつも皆を慰めようと骨折っておりますが、皆のほうでは、もう二度と慰めを知ることはないと言明しているのです。

何と立派な模範をあの娘は垂れたことか　…　優れた文章　…　上手な絵　…　素敵な刺繍　…　巧みな話術　…　素晴らしい歌唱　…　見事な演奏　…　あの娘の声は楽の音であり　…　あの娘の口調は妙なる響きを奏でていたのです　…

会話の何と啓発的であったことか　…　どれほど乞い求められたことか　…　年代や性別、階級を問わず、すべての人々の喜びの源でした　…　それでいて、何と控え目

で、何と腰の低いことか　…　威厳と謙遜とがあれほど華麗な融合を遂げたことはかつてなかったのです。

別の折には、何と寛大で心気高く、慈善行為に励み、施しを行うに当たっても、いかに思慮深いことか。振舞いの一つ一つが称賛に値し、姿勢の一つ一つが心を惹きつけるのです。正装で身を整えた時であれ、あるいは、主婦向きの質素な衣装を着けている時であれ、どんな身なりでも、等しく優雅で、等しく愛らしいのです。クラリッサ・ハーロー嬢のようだとか、似ているといった表現は、今皆も思い出しているわけですが、いかなる人物、行動、あるいは、階級が話題となる場合であれ、だれにとりましても、最高度の卓越性を意味する褒め言葉だったのです。

望ましい娘、よく尽くしてくれる親戚、愛情溢れる妹（今や妬みもすべて治まったのです）、誠実で心温かい友人、愛想が良く、親切で、慈悲深い女主人といった具合で、何一つ欠点は思い出されません。皆の厳しい態度はすべて無情な仕打ちと称され、互いにそれぞれを責めておりますし、男も女も、一人一人が我とわが身を責めるのです。そして、すべてはあの娘の人柄を称揚し、自らを苦しめるためのことなのです。

悪辣なことこの上ない男がこの世から奪い去りましたのは、これほどの天使だったということです。この常軌を逸した男の残忍な策謀や常套手段にもっと通じておられる貴方ですから、完全無欠ではない者といたしましては、仮に復讐を追い求めたとしても、申し開きは立つのだという、さらに挑発的な理由を、必要な場合にはですが、ご用意くださることでしょう。また、その者は、六年の間国を離れておりましたために（十分に根拠のある報告、そして、子供時代から少女期にかけての前途有望さからも、あの娘に対する評価は高まっていたのですが）、今の今まで、あの娘の素晴らしさのその半分も知らずにいたわけですから、それはなおさらのことなのです。あの称賛すべき娘を失いました、それも、永久に失うことになりました、今の今までです。

しかしながら、この話題からは無理やり離れることにいたします。ただし、次の点を繰り返し述べた上でのことといたしましょう。つまり、私の束縛となり得るような決定は未だ下してはいないということです。卑しくも決定を下します時には、光栄にも貴方のご賛同に値するようなものとなりますならば幸いです。

死後に発送されました手紙の写しをお返しいたします。ご送付賜りましたところに、心温まるご趣旨のほどを窺い知ることが出来ます。また、その点には心から感謝申し上げます。あの恥知らずな男本人への写しをお引き止めになったのと同じ、天晴なお心遣いから出たことと拝察いたしております。

ハウ嬢の元へは、ダイヤの指輪と、令嬢に遺贈されました他の品々で、当地にありますものを携え、直接お伺いするつもりでおります。

衷心よりの誠意と感謝の念を込めまして、貴方のしもべ

WM. モーデン

《ベルフォード氏は、この手紙への返信の中で、臨終の床での令嬢の命令を重ねて主張し、大佐が復讐への決意を一切固めていないことを喜んでいる。また、大佐の慎重さと思慮分別、そして、今わの際の令嬢と交わした大佐の約束にすべての期待を寄せるの

である。

大佐の従姉妹の事件における最悪の犯人二名の恐るべき最期の件を理由として、氏はロンドンでの面会を持ち掛けている。氏はこう語るのである。つまり、「これにより、ラヴレース氏の精神錯乱とも併せ、これら不幸な破廉恥漢の処罰を神がすでにその御手に引き受けられたかのごとくにも見えるのです」とである。

氏は大佐に対し、知らせなしでは、その折に不在となることもあるのを恐れ、上京の際には一日前に通知してくれるよう要望しているのである。

理由こそ述べていないが、氏がこのように要望するのは、大佐とラヴレース氏との遭遇を防ごうとの意図からであるが、ラヴレース氏は、外国へ向かう途中、ほぼ同時期に上京するかもしれない（と、氏は案じるのであるが）からである》

手紙　四十
モーデン大佐からジョン・ベルフォード氏へ

九月二十六日　火曜日

拝　啓

すでに一族の者たちにつきましては、何らかの関わりを持つ点につき、遺言書の項目すべての処理を完了いたしましたこと、ご同慶の至りと申さずにはおられません。

貴方は多方面に亘る自由裁量の権限を私に委ねてくださいました。そこで、その権限を行使し、愛する従姉妹の私有物でありました宝石類の値段を見積もってもらいました。その収支決算は、私の処理に委ねてくださいました他の物件同様、上京の際、最高価額にて報告をさせていただきます。

これら宝石類につきましては、愛する故人へ寄せておりました敬愛の情への感謝の印といたしまして、従姉妹のドリー・ハーヴィーに贈りました。この点はハウ嬢に伝えてありまして、令嬢も、まるでご自分が買い手となられたかのように、私の処置に満足しておられるのです。令嬢はご自分の宝石を持っておられますから、これらの宝石を買い取りたいとの希望を持たれたといたしましても、それはただ、愛する友の持ち物であるがゆえのことなのです。

祖母の宝石類も同様に見積もりをしてもらいまして、代金は貴方の代わりに私に支払ってもらい、遺言の諸用途に当てられることになりましょう。

ノートン夫人は、全員の同意を得てのことですが、〈森の館〉の女中頭としての仕事に就くべく準備をしております。ただ、私の意見といたしましては、夫人は長くこの世に留まりはしないものと思われます。

そのつもりである旨をお伝えしてありましたとおり、ハウ嬢とその母君に遺贈されました品を携え、令嬢の元へ伺いました。愛する従姉妹にとりましてはすこぶる大切なお方であったあの令嬢に関し、私のほうから二、三所見を述べましても、個人的には令嬢をご存じない貴方のことでもありますし、おそらく、不愉快には思われないものと存じます。

我が愛する従姉妹とハウ嬢との間にありましたもの以上に揺るぎのない、そして、高尚な友情は、女性の間ではいまだかつて存在しなかったのです。そして、その友情にこの恥

知らずな男は終止符を打ってしまったのです。

友情というものは、一般的に申しまして、ベルフォード殿、女性の心が取り扱うにはあまりにも激しく燃え盛る炎なのです。わずかな女性の手の中でのみ安定した輝き方をする光ですし、しばしば女性を気紛れな行動や馬鹿々々しい振舞いへと急がせるものでもあります。他の極端な状態と同じく、永続性を伴うことは滅多にないのです。友情の極みである結婚は、女性が女性に対して抱く最も激しい友情をも吸収してしまうのが常のことなのです。それも、結婚生活が幸福なものであろうとなかろうとです。

熱烈な友情を二つ同時に心に抱くことの出来るような、そのような女性は果たしているのでしょうか。

私は一般的な所見としてこのように申し上げているのですが、これら二人の淑女の間に存在しました友情は、この一般論の注目すべき例外となっているのです。そして、その説明に当たりまして、私は両人に見られる数々の美点と嗜みとを根拠としておりますが、それらは、もっと広く見受けられるようですと、やはり女性にとって有利に働きます、さらに多くの例外を提供することにもなりましょう。

両人共に広範に亘る、そして、無制限とすら言える教育を受けました。共に道徳的な知見を渇望する心の持ち主だったのです。揃って大の読書家であり、大の能書家でもあります…［それに、若い時から日用書簡の筆を執りますのは、男であれ女であれ、携わることの出来ます仕事のうちで、心を開き、改善するという点では、最も力のあるものの一つと考える次第です］。揃って寛大です。莫大な財産に恵まれております。従いまして、友情の絆となります心安さをしばしば壊してしまいます、あの互いに対する依存心はそれぞれが超越しているのです。共に異なった方面で秀でており、どちらもその点に関して相手を羨ましがったりはしません。共に明晰な識別の能力に恵まれ、しっかりとした分別を備えております。そして、両人が親しくなり始めました頃から［私の知識の多くのものはノートン夫人から出ているのです］、それぞれが互いのうちに愛すべきものと同様、何か恐れを抱くものを見ていたのです。ただし、それぞれが互いに相手の欠点について教え合うこと、そして、その忌憚のない言辞に対して感謝することを、二人の友情の不可欠な条件にしていたのです。一人は生まれながらにして温和ですし、もう一人は、心気高い友を愛し崇拝することによってそうなっているのですから、永続性の点では、これ以上にうまく適合している友情は有り得ないというわけです。

しかしながら、ヒックマン氏に対する振舞いの点では、失礼ながら、ハウ嬢をお咎めせずにはおられません。そして、そこからの推論といたしましては、分別のある女性に対しましても、権力を委ねるわけにはまいらない、ということになりましょう。

ところで、私がお人柄についていろいろと遠慮なく扱っておりますところを、この情熱的なお嬢様にはお伝えになりませぬよう願う次第ですが、それは申し上げる必要もないものと確信いたしております。

私の従姉妹といたしましては、おそらく、この紳士に対するハウ嬢の態度には賛同出来なかったように思われますが、それは、ヒックマン氏と令嬢とを知る多くの者たちからも話題にされている態度なのです。そのような非難を浴びて、賢いお嬢さんが呑気にしていられるものでしょうか。令嬢も気づいておられるに違いないのです。

ヒックマン氏というのは、実際、極めて立派な男性なのです。だれもが氏のことを褒め

ております。しかし、氏は温和な気質で、ハウ嬢を崇拝しているのです。そして、愛情というのはその対象に向かって、たとえ正当なものであっても、威厳ある態度を装うことは許さないものです。ただ、ヒックマン氏としては、譲り渡した手綱を取り戻すようなことはまずなさらないでしょう。令嬢が、今は過度に意識しておられるかにも見えます権力を濫用し、氏に請求権のない恩恵は一切施さなくなりました時に、あまりにも重くのし掛かる軛を投げ捨てたい気持ちへと氏を駆り立てたりなさらなければの話ですが …… 氏がそのような挙に出て、令嬢をないがしろにしたりいたしますと、そんな仕打ちに耐えるのには、私の知る女性すべての中で、ハウ嬢が最も非力ということになりましょう。そうなりますと、令嬢としては、かつて氏に味わわせたものよりももっと大きな不幸を嘗めることになるのです。何故なら、家庭で安らぎを得られない男性は外で気晴らしをすることも出来ますが、女性の場合には、あまり安易にそのような真似をいたしますと、きっとスキャンダルを起こしてしまうものだからです。

ハウ嬢に関し、お許しをいただき、さらに触れさせていただきます。私には極めて明白なのですが、この立派な男性に対する高飛車な振舞いにより、令嬢はご自分を一つの困難に巻き込んでしまったということです。そして、令嬢は、その行いのすべてに備わっておりますあの気品を失うことなく、どうやって抜け出したら良いものか、分かり兼ねておられるのです。ヒックマン氏と一緒になるおつもりはあるのです。氏を嫌ってはおられないものと、私は確信しております。そして、ご自分が登りつめた高みから降りますのは、令嬢にとりましては少なからぬ苦痛を伴うことになるのです。

ヒックマン氏を扱いますご自分の態度から、氏に対しては、氏に相応しい見方よりもはるかに蔑んだ見方をするよう、皆さん全員に教えてきたわけですから（何しろ、隠し立ての出来る人ではありませんので）、令嬢は今一つの不都合を味わうことにもなるのです。氏が辱められますと、令嬢も恥辱を受けずには済まないのではないでしょうか。

ハウ夫人はあの紳士に対するお嬢様の態度にひどく悩んでおられます。当然至極なことではありますが、氏は奥様のお気に入りなのです。しかしながら「これまたハウ嬢のいけないところですが」、令嬢の母親は令嬢に対し、母親たる者が持ち合わせて然るべき権威のすべてを持っているわけでもないのです。ハウ嬢が洗練された感覚を備えた女性であることは事実です。しかし、大きくなった子供にとりましては、自分よりも明らかに才能が劣っている親に対し、愛情と共に敬意をも寄せているように見てもらうためには、淑やかで優しい気立てと同様に、高度の優れた理解力、そして、大変な思慮分別が求められるものなのです。

ハウ嬢は率直で、寛大で、心の気高い人です。母親のほうには令嬢の優れた資質が何一つ備わっておりません。両親というものは、子供たちからの尊敬を維持するためにも、他人に備わっております場合には、自分たち自身容認しないようなものが、自らの振舞いとか態度、あるいは、信条の中に紛れ込んでおりますのを、子供たちには一切見出させないよう、大いに注意すべきなのです。

しかしながら、ヒックマン氏にとりましては、自らの慰めとなる次のような考え方もあるのです。つまり、氏の苦痛の種となっております活発さそのものが、時として、ハウ嬢ご自身の母親にも同じ痛みを覚えさせているのだということです。それに、氏はこの点を前もって十分に目にしているわけですから、令嬢が手強い恋人であったように、同じくら

いに手強い妻であることが証明されるといたしましても、このような険悪な様相にも拘らず求婚を継続し、結婚したのだという点では、氏といたしましては、奥様以上に自分を責めて当然だということにもなりましょう。

手強い女性さえも相手にする、そんな人の好い男性が楽しみにして待って構わない事情が、別にも一つあるのです。通常、婦人たちの意気を挫き、いわば家庭的にしてみせるような事情であり、また、ヒックマン氏とハウ嬢の気持ちをほぼ対等なものに近づけるわけですから、その状況が生じました際には、あの有徳の紳士は自分を幸運だと考えて然るべき二重の理由を持つことになるのです。

しかしながら、悲しみのため、現在のところ見るからに塞ぎ込んだご様子ですが、ハウ嬢の気質には、やはり、大変に心を魅了する輝かしさと率直さとがありますから、数々の欠点がありましても、愛さずにはいられないほどなのです。ヒックマン氏の世話女房になることも可能でしょうし、私としてはそうなってくれるよう希望する次第です。また、そうなってくれますと、私に対しましては、さらに価値を高めることになるのです。と申しますのは、令嬢が制止とか抑制とかを懸念するはずはなく、それゆえに、寛大さと思慮分別とを発揮し、自分の務めに他ならないものを遂行することによって、夫に恩義を施す可能性もあるからです。

母君は令嬢を愛すると同時に、恐れてもいるのです。しかしながら、ハウ夫人もまた活発な女性でして、感情を傷つけられますと、多分、すぐにも声を上げることでしょう。ところが、残念なことには、先にも触れましたように、その狭量な心によって自分の権威を弱めてしまっているのです。

ただ、一度、夫人が大変な熱弁を振るい、寛大な気質をしているというわけで娘さんを褒めたことがありまして、私といたしましても、夫人のお人柄を知らなかったなら、夫人ご本人こそが寛大なのだと考えていたことでしょう。しかしながら、これは私がいつも観察していたことですが、狭量な気質の者でさえ、寛大な人間を褒めるのに吝かではないものなのです。そして、私はその理由を次のように説明して来たのです。つまり、そのような者たちは通常、自分たち自身は別として、世間の人間すべてが虚心坦懐であってくれるのが、自分たちの目的には適うのだということに気づいているから、というわけです。

遺言書の内容に留意するようお嬢さんを促してほしいと、夫人から私に働き掛けがありましたが、結婚の日取りの決定をお嬢さんに急がせるためです。ただ、働き掛けたことをハウ嬢には知らせぬよう、夫人は頼んでおられました。

そこで私は、失礼も顧みず、ハウ嬢に次のような話をいたしました。他のほとんどすべての項目に関しては極めて迅速に、かつ遅滞なく履行された遺言の中で、令嬢に関わる部分が唯一軽視された部分とはならないよう希望している、とです。

令嬢の返答は、「考えてみましょう」というものでした。そして、膝を曲げ、体を低くしながら会釈をしてみせたのですが、その仕草というのは、令嬢の胸の内を明かしてくれるようなものでした。つまり、令嬢は私が出過ぎた真似をしていると考えていることを、それも、問題の点について令嬢と論じ合うことを許された場合、私としてはお認めするわけに行かない程度にまで、そのように考えていることを示すものだったのです。

ハウ嬢と令嬢の侍女は正式の喪に服しておりました。このことは当初、母親と令嬢との間に激しい論争を引き起こしたらしいのです。母親のほうでは遺言書の言葉を盾に取りま

したし、ヒックマン氏の利益を念頭に置きました。少なくとも六ヶ月は喪服を着るとお嬢さんが言っていたからです。しかし、お嬢さんのほうが主張を押し通したのです。「おかしいでしょう」と、令嬢が言っておりました。「命のありますかぎり、重大で取り返しのつかない損失を嘆き悲しもうとしております私ですのに、数ヶ月に亘って、気に掛けておりますのを世間の人たちに見せずにいたりしたのではね」とです。

ヒックマン氏のほうでは、この機に臨んで反対を表明するようなことは一切なく、ハウ嬢が喪服を着用したその同じ日、近親者のためのように、新調の喪服に身を包んで令嬢の元へ伺ったのです。氏の召使と馬車も同じ恭しい外見を装っておりました。

その点に関し、氏のほうから母親に相談があったのかどうか、私には定かではありません。ただ、娘さんのほうでは、喪服姿の氏を目にするまでは何も知らずにいたのです。令嬢は驚きのまなざしで氏を眺め、だれの喪に服しているのかと尋ねました。

愛すべき、永久に愛すべきハーロー嬢のためです、と氏は言いました。

令嬢は当惑していた模様です。やっとのことで令嬢は、「私のクラリッサのためには、世界中の人間が喪に服すべきですわ」と言いました。「ところで、そなたは（それが令嬢の用いた、氏に対する気紛れな呼び掛けの言葉でしたが）こんな見掛けでだれの意に沿おうと考えておるのかや」ともです。

「見掛けに止まるものではないのです、マダム。私自身の妹のことでさえ、立派な娘ではありますが、私としては、クラリッサ・ハーロー嬢を愛したほどに深く愛してはいないのです。私は私自身の意に沿おうとしているのですよ、この姿で。そして、貴女のご迷惑にならないのであれば、それこそ私の願いのすべてなのです」

私が聞いておりますところでは、令嬢は頭の天辺から爪先まで、氏の姿に目を這わせていたそうです。初めは、怒るべきなのか喜ぶべきなのか、分からなかったのです。とうとう令嬢が口を開きました。「初めのうち、貴方にはもっと大胆な、もっと遠慮のない動機があるのかと思いました。でも、いつもは少し片意地なところがございますが、（母が申しておりますように）貴方は善意の人なのかもしれませんわね。ただ、世間というのは口やかましいものですし、私が想像してもらいたいと思っております以上に、私たちのことを近い間柄のように考えるかもしれませんから、貴方と一緒に出歩いておりますところを見つかったりしないよう、注意をしなければいけませんわね」とです。

しかし、一言付け加えさせていただきますが、ベルフォード殿、ヒックマン氏によるこの敬意の表明が（あるいは、この敬意の表明以上のもの、と申して構わないでしょう。何しろ、我が愛する従姉妹のことに触れるたびに、あの立派な男性は感情を露にしておられたのですから）早い日取りにつながらないようですと、喜んでお認めしたく思っておりますほどの寛大さは、ハウ嬢の気質には含まれていないのだと、私といたしましてもそのような考えに至るだろうということであります。

貴方からのお誘いと励ましがあってのことでもありますから、ベルフォード殿、詳細に及びました点につきましてはお許しをいただきたく思います。

我が愛する従姉妹の遺言に関わる事柄すべてが、望ましい結末に至りますのを見届けました今、私自身の遺言書の作成に着手するつもりです。愛するあの娘の手本に倣い、事後の争いの余地を残さないよう、項目の一つ一つに理由を付すことにいたします。

死に対する恐怖、つまり、この世に生まれ落ちたのと同じ確かさで、いつかは死ぬ定め

にあるのだということを承知している者には似つかわしくない、そんな恐怖心を別にいたしますと、この種の意向を妨げるものは果たしてあるのでしょうか。

間もなく、ロンドンにてご機嫌を伺いたく思っております。とりあえず、深甚なる敬意を表しつつ、謹んで、

誠意と親愛の情とを込めまして、貴方の謙虚なるしもべ

Wm. モーデン

手紙　四十一

ベルフォード氏からハウ嬢へ

九月二十八日　木曜日

マダム

お約束いたしましたとおり(ア)、貴女の心気高いお友達の筆になります死後配送予定のお手紙の写しを、本状に添え、謹んでご送付申し上げます。

これらに併せまして他の手紙も、とりわけ、十四日に開始され、十八日まで書き継がれました、ラヴレース氏からの手紙の写し(イ)を添えさせていただきます。それにより、氏の魂が味わっております恐るべき苦悩、そして、痛切な自責の念が、マダム、貴女にもお分かりいただけるものと存じます。

この手紙を返却するよう、ラヴレース氏から要請がありました。私は要請に応じましたが、その前に写しを取っておいたのです。その点を彼には話しておりませんので、だれであれ、ヒックマン氏以外の人物に写しをお見せになるのは、お差し控えいただければと思います。氏が目を通されましても、それは、貴女以外にはどなたもご覧にならなかったのと等しいことになるのです。

貴女もお気づきでしょうが、マダム、モーデン大佐の手紙のうち、同封いたしました一通は写しに過ぎません(ウ)。写しにいたしました真の理由と申しますのは、率直にお認めいたしますが、ご親友の最後の要請の貴女に関わります部分につき、貴女が実行に移すのを控えておられる点に関し、大佐が行われた忌憚のない、しかし、丁重な批判の言葉ゆえのことであります。従いまして、あの有徳の紳士に敬意を表し（その点に関し、大佐からのご注意もありましたので）、それらの部分を割愛した次第なのです。

しかしながら、マダム、お許しをいただき、一言申し上げたいのですが、我が比類なき女性遺言人のお友達のハウ嬢ともあろうお方が、ご親友の遺言のうち、完全にご自分の力で実行可能であるという部分を履行いたしますのに、最も後ろ向きであろうとは、私自身もとても信じられなかったということです。とりわけ、その履行により、英国中でも最も似つかわしい男性のお一人が幸せになるわけですし、また、拝察いたしますに、令嬢はその男性に対し、結婚の承諾をもって栄誉をお授けになるお考えなのですから、なおさらその感を強くする次第なのです。

お許しをいただきたく存じます、マダム。貴女のことは心の底から尊敬申し上げており

（ア）九十二頁を参照のこと。（イ）手紙三十一を参照のこと。（ウ）直前に掲げたもののことである。

ますし、どのようなことがありましても、お気持ちに逆らうつもりはないのです。

お届けいたします書簡につき、また、尊敬すべきお友達の一件では最も重い罪を犯しました、不幸な恥知らず二名の恐ろしい最期のことをお知らせいたしますが、その点につきましても、厚かましく所見を述べるのは差し控えることといたします。悪名高いシンクレア、ならびに、麗しくも心清らかなお方のお手紙で貴女もお読みになっておられるのは疑いない、トムリンソン船長という名で通っておりました人物のことであります。

破廉恥な女はこれ以上ないほどの極度の苦悶と失意のうちに息を引き取りました。男のほうは、禁制品の取引に携わり、我が身を護ろうとして受けた傷がもとで命を落としたわけですが、臨終間際には二人とも、女性の中でも最も秀でたお方を相手に演じた役割に関し、痛切極まりない後悔の種となる犯罪行為のように、自分たちを責めておりました。

お許しをいただき、マダム、一言申し上げさせていただきます。その苦悩ぶりにつきましては書面からもお気づきでしょうが、自らの心痛ゆえにあのように大きな苦しみを味わっております男に対し、また、モーデン大佐の書面からお分かりのとおり、後悔の念はなはだ深いものがあります不幸な一族に対し、たとえ同情心を刺激されることはないといたしましても、貴女の恐怖の念は掻き立てられるはずと存じます。ただ、貴女が被られた取り返しのつかない損失を正当に認識なさることから心が硬化して、憐れみの情を拒まれるようになられましても、私は驚かないことでしょう。これほどまでに常軌を逸してはいない出来事の折には、もしも憐れみを感じないようですと、その主たる美点を欠いていることにもなります、そのような心が仮に硬化したとしてもです。

マダム、おおいなる敬意と謝意を覚えつつ、

この上なき感謝の念と誠意を込めまして、貴女の謙虚なるしもべ

J. ベルフォード

手紙　四十二

ハウ嬢からジョン・ベルフォード氏へ

九月三十日　土曜日

謹んで

貴方には大変なご尽力を賜りましたが、どなたからにせよ、これほどのお世話をいただくことになろうとは、思いも寄らぬことでございました。とは申せ、ご送付いただきました品々のせいで、私の心はほとんど張り裂けてしまいそうですし、両の目にいたしましても、使い物にならない有り様なのです。

貴方が従事されました責務のうち、あのご一族に関わります部分をこうも早々と、そして、十分に果たされましたこと、喜ばしく思いつつ、また、驚いてもおります。

貴方が触れておられます、あの極悪非道の男の共犯者二名の死に様から推測いたしまして、主犯も雷難を免れることはないものと考えられましょう。実際、悪さの一切を企みました呪われた頭の方へ雷が向かっているかに思えますのは、考えましても何やら楽しい気持ちがいたします。ただ、ひとつ言わせていただきますなら、モーデン様はあの愛しいお方のご親戚で管財人なのですから、憤慨なさる理由につきまして、完全に間違っておられ

るとは考えませんが、それでも、貴方はあの方の遺言執行人であり、あの方の真剣なご要望に従って行動しておられるわけですから、矛を収めるよう大佐の説得に努めておられますのは、極めて道理に適っているように考える次第です。

それにいたしましても、何という手紙なのでしょう、あの極悪非道の男の手紙は。申し上げるべきことはございません。それに、亡くなられてからいただきました、愛しいお方のお手紙、特に、あの男宛のものにつきましても、大変に異なる理由からではございますが、同じでございます。あゝ、ベルフォード様、私のクラリッサが最後の息を引き取りました時には、完全無欠な美質がどれほど沢山失われてしまったことでしょうか。

あの男の手紙の中で品位といったものが保たれているようでしたら …… と申しますのも、二通か三通以上を（同封してお返しいたします、この忌まわしいものも含めます）読むだけの辛抱はまだ出来ずにいるのですが …… そのうちいつか、それらの手紙を通しまして、恥知らず連中の心の中を覗いて見たくなるかもしれませんわね。そんな心は、道徳的な心の持ち主にとりましては嫌悪の的には違いございませんが、人目に晒されました暁には（それらの手紙で暴露されているように思うのです）、手紙に目を通す者たちに適切な警告を提供してくれるでしょうし、あのように不道徳な人柄の男性のことは嫌悪するよう教えてくれることでしょう。

貴方の改心が真摯なものなのでしたら、この際、貴方を例外とはしないことに感情を害されることはないものと存じます。そこで、こうして、ご自分をお試しになるべき規範をお薦めした次第です。

悪辣な男のこの手紙からいたしますと、さらに悪辣な女たちがいるのは明らかです。でも、ご覧願います。貴方たちが道徳観念を堕落させたわけですが、人でなしの男性との罪深い交渉はその者たちを何という姿に追いやるのでしょうね。これらの女性もかつては無垢だったのです。違う姿にしてしまいましたのは男の人だったのですからね。きっと、最初の悪党が女たちをもっと悪い男へ、そして、さらに悪い男へと放り出し、ついには女たちも悪魔の化身になり果てたのでしょう。どこかで述べられておりますのを聞いたことがございますが、「邪悪さないし恥辱の極みは、一気に到達されるものではない」のです。

でも、このような人間、と申しますより、この人非人、と言ったほうが良いのでしょうが、あの男がこれらの女性を呪い、愛しいお方のご一族を呪いますのは（こちらのほうの人たちは情け容赦もございませんでしたけれど）、自ら進んで取り上げ、そして、その下で呻吟しております重荷を軽減するためのことですが、悪辣さに卑劣さを上塗りすることになりましょう。それに、すべてあの男独りのものと宣告されるはずの罪を、あの方のお身内、そして、あの名うての恥知らずたちと分かち合おうという下劣な申し立てが無駄に終わりますことに、いつの日かあの男も気づくことでしょう。もっとも、あの者たちにいたしましても、罰を受けることになるのでしょうが、それが始まっておりますのは明らかなのです。先の者たちの場合には互いに無益な非難の言葉をぶつけ合っておりますし、後のほうの者たちにつきましては、貴方がお話しくださったとおりです。

破廉恥漢のこの手紙につきましては、どなたにも、ヒックマンさんにさえもお見せしておりません。と申しますのも、貴方にはお話ししておかねばなりませんが、今のところはまだ、そのようにいたしますのを、自分独りで目を通しますのと同じように考えてはいないからなのです。

ヒックマンさんにいたしましても、他の男性同様に、甘やかしますとつけ上がることでしょう。私のほうで一つ手柄をお認めいたしますと、ご自分では二つの手柄があったことになさるのです。貴方たち皆さんは、横柄な態度でおべっかを使い、私どもに取り入ろうとなさいます。貴方たちのどなたにであれ、今日恩恵を一つ与えますと、明日にはそれを権利として期待するようになるのです。

ご覧のとおり、貴方に対しましては大変忌憚のないところを、誠実にお話ししておりますし、もう一通の手紙でも、その姿勢をさらに強めるつもりでおりますが、私の愛するお方の遺言執行人に対し、また、ただ一人思いやりに溢れた、ただ一人尊敬に値するあの方のご親戚に対し、自分の立場を釈明いたしますのが私の関心事となりますような点につきまして、貴方のご要望、そして、モーデン大佐からのお求めに応えてのことなのです。

ドリー・ハーヴィーさんへの寛大なお振舞いに対しましては、モーデン大佐を大いにお褒めしないわけにはまいりません。

あゝ、私の比類のないお友達を悪辣極まりない男の企みから、また、兄と姉の中でも利己的で執念深いことこの上ない人たちの妬みや悪意から救い出しますために、あの人が遅れずに到着してくださっていたならと、本当にそう思います。

アナ・ハウ

手紙　四十三

ハウ嬢からジョン・ベルフォード氏へ

十月二日　月曜日

貴方がなさっておられますような形で、それも、私にとりましてはなはだ心の痛む話題につきまして、私の最愛のお友達の代理人という資格でお尋ねになられますと、また、これまでのところ、すべての点に亘りまして、その資格に相応しい活動をしてこられたわけでもありますから、謹んで顧慮申し上げますようお求めになる権利を有しておられることになりましょう。とりわけ、お尋ねの際には、私の親友の最愛の、そして、一番親しいご親戚（最も尊敬に値するからです）と私が見なしております殿方からのお口添えがございますだけに、なおさらのことでございます。それに、どうやらその殿方は私の振舞いを大層厳しく非難してこられたらしく、慇懃な貴方のことでありますから、その方のあのお手紙を、他のものと一緒にお届けくださるわけには行かず、私を非難する文面を省いた、写しだけになさったほどなのですからね。

それでも、大佐のこの警戒心を抱かせます率直さが意味しておりますものは、拝察いたしますに、貴方たちお二人がすでに仄めかしておられたことに他ならないのでしょう。愛するお方の遺言に対しまして、他の人たちには尊重するよう求めながら、私自身の場合には敬意を払うつもりがないのだと、そのように考えておられるかのようでしたね。私といたしましては、すっかり口を噤んでいるわけにはまいりませんお咎めでございます。

僭越にも話題として取り上げます事柄のすべてに対しまして、忌憚なく所感を表明いたしますその率直さに誇りを抱く私の様子につきましては、疑いもございませんが、貴方もお気づきのことでしょう。また、到底疑いを入れないところでありますが、このようにお

近付きになりましてからほんのわずかしか経っておりませんのに、貴方に不躾な態度を取っておりますことから、貴方のご意見では、偽善や諂いを潔しとしない人間だと思われたいばかりに、粗野とは申しませんが、野暮ったさに陥っております人々の過ちを、私も犯してしまったか、あるいは、いずれは犯すことになるのでしょうね。これは、生まれついての短所を矯正することは好まず、それらを何か名ばかりの美徳によって粉飾しようとするような人たちに共通の欠点なのです。これらの短所は、おそらくいつでも、生来の傲慢さに全面的に由来しているのです。あるいは、少なくとも、身に染みついた錆のせいなのですが、この錆も、そのような人たちにしてみますと、苦痛を伴うこともありまして、やすりで削り落としてもらいますのに甘んじてはいられないものなのです。

お分かりいただけることでしょうが、私の場合には、そうは申しましても、貴方に対してと同様、自分自身に対しましても、率直になることが可能なのです。そして、これから筆にいたします事柄から、私がさらになお率直なことがお分かりになるはずです。しかしながら、私も自覚いたしておりますが、少しばかり威厳を装いまして、貴方たち男性の尊敬を要求することのない女性は、自分を安売りすることになりましょうし、おそらく、内気さと自信のなさゆえに、軽蔑や辱めというお返しを受けることにもなるのです。

ただ、軽蔑には値しないよう努力しようと思いますし、また、辱めを忍ぶつもりも私にはございません。

貴方が手になさっていた、そして、転記のため再び手になさるはずのものですが、愛しいあの方の書類の一部の中で、友情に溢れてはおりますが、手厳しい私への叱責をいくつかご覧いただけることでしょう。私に備わっておりますようにあの方がお考えの、もって生まれました、あるいは、少なくとも習性となっております、激しやすい気質ゆえのお咎めでございます。

私に向けられましたあの方のお咎めにつきましては、光栄にも私のところをお訪ねくださいました最後の折、暇乞いをなさいます際に自ら手渡してくださいましたお手紙の中の一通から、あの方自身のお言葉でお知らせしようと考えていたのです。でも、お咎めの向き以上のことを告白いたしまして、その補いにしようと思います。つまり、「私は傲慢で御し難く、激しい気性をしている」ということです。これは申しておきますが、「反駁されることに我慢がならず」というのが、愛しいお方からのお咎めでして［愛しいお方ご自身以外の、どなたからの反駁にも、と付言なさるべきでしたが］、「あの温和さ、従順さにも近いあの優しさを目指すことがないけれど、これは（お見せするつもりでおりましたお手紙の中で、あの方が言っておられるのです）本物の洗練された淑女に特有な、そして、不可欠な特徴であり、そのような淑女は（と、あの方が言っておられたのですが）鳩のように温和な外見を備えるべきであって、宗教と美徳のためとか、自分の名誉、友人の名誉、あるいは、罪のない人間の名誉が関わっている場合を除いては、怒りとか血気とかがどのようなものであるのかも知らずにいなければならない」とのお言葉だったのです。

ところで、この起訴状に対しましては、どうしても有罪を申し立てずにはいられないわけですが、私が独身生活を送る決心をいたしますのはいけないことだと、貴方はそのようにお考えでしょうか。貴方たち男性に対しましては酷い評価をしておりまして、分別と気力を備えております女性にとりまして、尊敬するとか服従するとか、そのいずれかが可能な男性などは百人に一人もいないように考えておりますこの私がですわ。貴方たちのほう

では、結婚によって私たちを貴方たちに結びつける、というよりは、縛りつけることになります、あの厳粛な決まり文句でその両方を私たちに約束させるわけですけれどね。

面識のございます既婚者すべてを見渡しまして、皆さんがどのように暮らしておられるのか、また、一番幸せに暮らしておられる方たちが何を耐え忍んでおられるのか、それを目にいたします時、結婚生活への嫌悪の情は強められることになるのです。

貴方たち男性が私たちを愚か者に育て上げますのも尤もな話ですわね。貴方たちが両肩に負わせます軛を、私たちに耐え忍ばせるためですし、貴方たちの横柄さゆえに（実際には）私たちもしばしばそうしてしまうのですが、同じように、貴方たちの無知ぶりを私たちが心の底から軽蔑しない（私たちも貴方たちと同じ育てられ方でしたら、きっとそうすることでしょう）ようにですわ。

これらが私の考えております事柄の一部でございます。そこで、このような考えを抱きながら、私の質問を繰り返させていただきますが、私は結婚に踏み切らねばいけないのだと、貴方はそのようにお考えなのでしょうか。

もしも私がむさくるしい男か尊大な男か、そのどちらかと結婚するといたしまして、私がそんな男と一緒に暮らして行けると、貴方はお考えでしょうか。また、正反対の性格をした男の方が、私たちどちらかの評判を守るためにですが、私のせいで苦しまなければいけないものなのでしょうか。

私にございました縁談のすべて、そして、母の説得のすべてに対しまして、私は長く抵抗してまいりましたし、実を申しますと、私が最初に選ぼうといたしました男性が母からも親友からも賛成していただけなかった時には、ますます長く、ますます頑強に反抗しておりました。このことから、私はプライドに執着し、頑なに抵抗することにもなったのです。と申しますのも、しばらくいたしますと、私の選択は思慮深いものでも適切なものでもなさそうだということを、そして、猫を被っておりました恥知らずは、私に信じ込ませたような人物ではないことを、自分でも確信するに至ったわけですが、それでも、他の男性に思いを向けることも容易には出来ませんでした。それに、正直な話、その男の実態が分かりますと、男性全体に対する抜き難い嫌悪の情を覚えることになったのです。

とうとう、ヒックマンさんが求婚してこられましたが、もっと良い選択に相応しい男性です。幸いなことに［ご自分でもそう受け止めておられるのですが］あの人は（また、あの人の申し出につきましても）、私の母のお気に召すところとなりました。

私自身といたしましては、白状いたしますが、もしも兄弟を一人選ぶということなのでしたら、ヒックマンさんがその人になっていたことでしょう。高潔で、謹厳で、表裏がなく、愛想の良い人ですからね。でも、私は結婚したいと思わなかったのです。また、私の最愛のお友達に似つかわしいと思えそうな男性につきましても、この世でお目にかかったことはございませんでした。でも、私たちの親はどちらも、私たちが独身を通しますのを許そうとはしなかったのです。

一時期、忌まわしいラヴレースとのお話が熱心にあの方に持ち掛けられたのです。そして、あの方がまだあの男のことには無関心でおられるうちに、皆さんは、あの男に卑劣な仕打ちを加えることで（と申しますのも、当時、あの男がベルゼブルそのものだということは知られていなかったのです）、また、あの方の愚かな兄の気紛れからですが、あの男に敵愾心を燃やして、一人また一人と、つまらない男のほうへ無理やりあの方のお気持ちを

傾けようと骨折ることで、その無関心さを（もって生まれた心の寛さからですが）好意的な気持ちへと変えてしまったのです。そのことさえなければ、あの男のような品性の人間には絶対に抱いたりなさらないはずの、そんな好意的な気持ちへとです。

私のほうには、ヒックマンさんとのお話が持ち込まれました。私は何度も何度もお断りしたのです。あの人は固執いたしました。母が支持者でしたからね。母は私の愛するお友達をあの人の支持者にいたしました。私は男性すべてを嫌っておりますこと、あの人にも結婚にも乗り気になれないことをあの人にお伝えしたのです。それでも、あの人は固執しました。私のほうではあの人を虐待いたしました。実際、一つには気性から来たことですが、また一つには、故意のことだったのです。そうすることであの人を厄介払いしたいと思っていたのですが、やがて、あの困った人が（性格が見事なまでに一定不変なこともございまして）依然として固執するものですから、その忍耐強さによりまして、私に向かって手柄顔をして構わない立場になられたわけです。このことが私の高慢の鼻を挫き「私はいまだかつて、ひどく度量が狭いとも、また、まったく感謝の念に欠けているとも思われたことはなかったのです」、私自身の考えの中では、一時、あの人への劣等感を生むことになりました。そして、これが長く続いたものですから、あの人に励ましを与えることを約束し、求婚を受け入れるよう、身内の者たちも私を説き伏せるに至った次第なのです。

そのようにいたしました後、私のプライドの晴雨計が再び上昇しました時にも、気がついてみますと、私は後戻りが出来ないところまで進んでしまっていたのです。母とお友達が揃って私にそうさせたのです。それでも、私はあの人を苦しめました。たくさんの方法であの人を悩ませました。それも、あの人を焦らそうとの意図からでもないのです。むしろ、私を憎み、求婚を取り下げるように仕向けるためだったのです。

でも、あの人はこれに耐えました。そして、あの人が得たものといえば、ただ憐れみの情だけだったのです。なのに、依然として母とお友達のほうでは、私の約束を得ておりましたし（ただ、あの人とではなく、母たちと交わされたものでした）、私にはヒックマンさん（あの愚かな固執ぶりを別にいたしますと、言葉とか行い、あるいは表情とかで、私の意向に背いたことは一度としてない人なのです）以上に重んじている男性はいないことを確信しておりましたので、私が約束を果たすよう主張したのです。

私の愛するお友達がお気の毒などっちつかずの状態におられました間、私といたしましては、結婚など思いもよらなかったのです。そして今、結婚を促すようなものは果たしてあるのでしょうか。私の戒告者、教導者、相談相手のあの方はもういらっしゃらないのです。永久にいらっしゃらないのです。避けるわけにまいりません、そんな状態の中で、あの方のご助言とご命令をいただき、まずまずの振舞いをしたいものと私は願っていたのです。と申しますのも、母はヒックマンさんをずいぶんと依怙贔屓しておりまして、仮に何か不和が生じました場合、いつも私のほうを咎め、あの人を許すのは確かだと思うからです。例えあの人が、我が世の春を迎えました時に私に意趣返しをなさるような、それほど度量の狭い人だとしてもです。

私の立場はこんな具合でしたから、私にとりまして、結婚を考えますのはどれほど難しいことなのか、ひとつお考えいただきたいのです。賛同しております時にはいつでも、私どもは同意を正当化するような立派な理由を百ほども見つけ出せるものです。反感を覚えます時にはいつでも、私たちは自分の反感を正当化するような理由を千も見出すことが出

来るものです。後の場合には、何もかもが障害となりますし、物影はことごとく化け物になるのです。おそらく仮想のものにすぎない不平の種を次のように数え上げ、増加させることが出来ましょう。「私といたしましては、あの人が行かせたいと思うところへ行かねばなりませんし、訪ねさせたいと思う人を訪ねなくてはいけないのです。私は物を書くのが大好きですが（もっとも、今では、悲しいことに、書き物をいたします大きな動機はなくなっております）、あの人のお気に召す相手にでなくてはいけないのです」といった具合です。それに、ヒックマン夫人として（ハウ家の娘としては不始末がなくても）正しい振舞いをいたしますのは到底不可能なことでしょう。このように、形勢が逆転し、私は服従の誓いのことを思い出させられるのです。おそらく、マダム、マダム、と呼び掛けられ、結婚は完成というわけです。そして、夫婦喧嘩が一通り二人の間で快適に実施されまして（と申しますのは、横柄な扱いを受けておとなしくしているつもりはないからですが）、やがて私たちは互いにとっての災いのもと、隣人たちの物笑い、そして、自分の召使の冗談の種になってしまうのです。

それでも、〈耐え、かつ、忍ぶ〉ということがなくてはいけないのだと、だれか賢い人が教えてくれそうな気がいたします。ただ、必然的にそうでなくてはいけないという状態へ入るべく、どうして私が苛まれねばならないのでしょうか。今は自分の思いどおりに振る舞うことが可能ですし、精々自分の好きに出来るよう、放っておいていただくことだけを願っているのにです。それに、実際に母はどう言っているのでしょう。「アナ・ハウや、今のお前は自分の好きなことばかりをやっていますね。お前を抑えつけてくれる人が、今のお前には一人もいないのです。行くのも来るのも、着るのも脱ぐのも、起き出すのも寝るのも、お前の気持ち次第ですもの。でも、お前はね、もっと幸せにならなくちゃいけないのだわ」とです。

どのようにしてなの、お母様。

「そうね、結婚しなくちゃいけないわね。それから、こういう好き勝手はもう止めにして、何ごとについても、旦那様のおっしゃるとおりにするのだわ」と言うのです。

貴方もお認めくださるでしょうが、私のような人間にとりましては、これは考えるだけでも非常に辛い話なのです。でも、あの状態に入る約束は現にしてあるのですから、私にどんな救いの道があるというのでしょう。母は強要いたしますし、私のお友達、私の愛するお友達も、故人からの言葉という書き方で私を急き立てておられるのです。また、貴方とモーデン様も、あの方の遺言執行人のお立場から注意を促してくださいます。当の男性は私を恐れていないのです［仮に私がその男性だといたしますと、私はその人の勇気の半分も持ち合わせないはずと確信いたしております］。その人の意固地な執着ぶりやしつこく付き纏うことに対しまして、ご当人の願いを容れることでその人を罰するよう（目的遂行のための唯一の効果的な方法です）結論して然るべきように思うのです。自分の願いを享受している他の多くの人々がごく普通に経験する罰です。

そこで、次の点は断言させていただきます。遺言書の中でお従姉妹さんのハーヴィー嬢について書いておられることですが、私の素敵なお友達のお言葉を借りますと、あの方に対する私の悲しみも「時が経ちますうちに、苦しいというよりはむしろ心地好い思い出に変わります」のが分かりました暁には、私といたしましても、何らかの美点を備えました男性が捧げてくださいます情熱にまったく値しないわけでもなくなりますよう、あのよう

に何度も繰り返され、あのように熱心に求められております最愛のお友達からのご要請には、お応えするつもりだということでございます。そして、ヒックマンさんにも、私の感謝の気持ちを受けるに相応しい状態が続くならですが、これまで重ねてくださった、そして、もう少しの間重ねていただかねばならないご辛抱に対しまして、埋め合わせのための努力を怠るものではないことを分かっていただくつもりなのです。そして、そうなりました場合、私への励ましとして、また、あの人を励ます気持ちを私に起こさせようとなさって、以前あの方がおっしゃってくださったことですが、この点に関しまして、あの方の優しく、予知の力が備わっておりますお心を満たしておりましたあの楽しい予想に、もしも私たちの結婚が合致しないようでしたら、それはあの人自身の（私のではないよう願いますが）過失ということになりましょう。

このとおりでございます。私の最愛のお友達の遺言執行人ということで、そのようなお立場の貴方が知っておかれるのが肝心な点すべてにつきまして、また、私の不利になります点につきましても、必要以上のことまで、大変に遠慮のない態度でご説明申し上げました。ただ、あの方のお手紙のうちの一部のものに、私に不利な事柄を同じくらいたくさん見出されることでしょう。ですから、貴方に対しましては、私のほうで失うものは何もなく、率直だとの評判を得ることになるというわけです。

愛するお友達の遺言の履行に当たりまして、私の部分を遅延させましたことへの二重のご叱責に関しましては、これくらいにいたしましょう。

ところで、この問題のことでは、貴方は私をお諫めですが、貴方ご自身に関わります重大な事柄につきまして、ひとつご注意申し上げたいのです。亡くなられてから貴方に届きました、愛しいお方のお手紙によって提供されたものでして、お忘れではないはずと思うのですが、女性の中でも最も慈悲深いお方は、私の結婚のことと同じくらいに、貴方が完全に改心なさることにつきまして、真剣に案じておられる旨を力説していらっしゃるのだということです。そこで、あの方の願いの数々が他の点すべてに亘って聞き入れられますことを貴方はお望みですが、この一点につきましても、同じように完璧に叶えられますよう、ご配慮いただけたらと思うのです。

一つの項目に関しまして、私があの方に背きましたことはお認めいたします。喪に服したりはせぬようにと、あの方が望んでおられる点についてです。これは抑えようのないことだったのです。

本状と先週土曜日のものとを一緒にお届けいたします。そして、自分については次のように考えておりますことを申し述べるに止めたいと思います。

ご恩義に与っております、貴方のしもべ

A. ハウ

手紙　四十四

ベルフォード氏からハウ嬢へ

十月五日　木曜日　夜

私の完全なる改心を望まれる、心気高いお友達の敬虔な願いにつきまして、ご親切にも

ご教示くださいましたことに対しましては、マダム、衷心より丁重に感謝申し上げる次第であります。

それら思いやりに溢れました願いを実現いたしますことが、私の真剣な、そして、たゆまぬ努力となることを申し上げるに止めたいと存じます。そして、そういった私の努力に対し、神の祝福のあらんことを願う次第です。さもなければ、その努力が無為に終わりますことは承知しているのです。

独身生活ならびに結婚生活につきましての、過去および現在の貴女のお気持ちのありようをあのように腹蔵なく書き記してくださるという、さらなるご厚意に対しましては、マダム、どれほど有難く感じておりますことか、筆舌に尽くし難いところがあります。比類の無いお友達の遺言執行人として、このような栄誉を授かることとなりました当のご婦人に欠点があるといたしましても、女性の欠点がこれほど心を魅了するというのは、かつてなかったことであります。心を魅了するということでは、実際、多くの女性の美点をはるかに凌駕しております。

このようなご婦人のお手にならば、大佐直筆の書面を、思い切って、そっくりそのままお渡しいたしましても構わなかったことでしょう。あの有徳の紳士は貴女を殊のほか称賛しておられるのです。氏のご注意はただただ丁重さの為せる業ですし、貴女への尊敬の念の結果なのです。

私宛のM卿の書簡、および、その書簡の結果として認められました別の三通の写しをお届けいたします。これらの書簡により、貴女が知りたがっておられるはずのラヴレース氏のイギリス出国の件、ならびに、その他の委細をご承知いただけるものと存じます。

ご高配の上で、一切他人の目に触れてはいけないと思われます文面につきましては、ご内密にお願い出来ますなら幸いです。

有難くも深甚なる敬意を覚えつつ、マダム、結びとさせていただきます。

誠意と感謝の念とを込めまして、貴女の謙虚なるしもべ

ジョン・ベルフォード

手紙　四十五

M卿からジョン・ベルフォード氏へ

九月二十九日　金曜日　M邸にて

拝　啓

我が縁者ラヴレース君は今ロンドンを目指し、出発しようとしております。貴兄と会う計画であり、その後ドーヴァーへ向かい、出航の運びとなります。無事に王国から送り出してくださるよう、神に祈る次第です。

月曜日には貴兄と落ち合うものと確信しております。貴兄たちの会話の一切につき、是非ともご一報をいただきたく思います。と申すのも、モーブレー君ならびにターヴィル君も上京の予定となっているのです。また、貴兄としてはあの男が完全に自分を取り戻していると思われるのか、その点についてもお知らせいただきたいものです。筆を執っておりますは主な目的は、モーデン大佐とあの男とを引き離すようにしていただくためであり、従

って、あの男の上京についてお知らせする次第であります。あの者たちの間で何か危害でも生じたりいたしますのは、極めて好ましくないことと考えておりますが、大佐が甥への脅しの言葉を口にしている旨のお報せをいただいたがゆえのことです。ただ、我が縁者といたしましては、忍び難い話でありましょう。従いまして、大佐の件をあの男に知らせるようなことはだれにもさせぬよう、お願いいたします。しかしながら、心配は無用であろうとも思うのです。何故なら、大佐も今では脅しを口にはしておられない旨を耳にしているからです。大佐自身のために、その点を嬉しく思っております。何しろ、我が縁者が世に噂されておりますほどの使い手というのは、武器全般に亘りまして、この世には存在しないからです。使い手などでなくとも良かったのです。あれほど大胆不敵な真似はしないでしょうからね。

われわれ当地の者はすべて、あの暴れん坊がいないのを寂しく思うことでしょう。まったくの話、機嫌が良い時のあの男ほどに楽しい相手はいないのです。

さて、三十マイルか四十マイルの遠出をなさることはないのでしょうか。ここM邸にてお顔を拝見出来ますなら、幸に思います。縁者のいない今、それがお情けというものでしょう。貴兄が主たる文通相手になるものと拝察するからであります。姪たちにも頻繁に連絡をするとは約束しておりましたが …… ただ、あの男は約束を忘れがちでして、われわれ親戚相手には特にそうなのです。われわれ全員に神のご加護のあらんことを祈る次第です。アーメン

貴兄のまことに謙虚なるしもべ

M.

手紙　四十六
ベルフォード氏からM卿へ

十月三日　火曜日　夜　ロンドンにて

閣　下

大いなる喜びをもちまして、閣下のご命令に従うことといたします。

昨日の午後、ラヴレース君が私の下宿を訪ねてくれました。モーデン大佐からの訪問をほぼ同時刻に予期しておりましたので、われわれどちらもあまり出入りをしたことのない居酒屋へ（はっきりと決まってはいない約束があるように装い）彼を連れて行くのが適当と考えまして、大佐がお見えの場合には、そちらへ知らせを届けてくれるよう命じておきました。ラヴレース君はモーブレーとターヴィル、そして、アクスブリッジのドールマン君（この男は彼に別れを告げるため上京したのです）に使いを出しましたが、われわれの居場所を連中に知らせるためのことであります。

ラヴレース君は十分過ぎるほど回復していると、そう申し上げるところでした。あれほど陽気で元気が良く、男前の姿はかつて見たこともありませんでした。私が引き受けました責任のいくつかの部分につき、また、彼に対する私の無遠慮な扱い方のことで、われわれは盛んに唾み合いましたが、その際に彼が言い張ってきかなかったのは、われわれの間で合意を見ておりました限度を私は踏み越えているということでした。しかし、旧知の三

名とドールマン君の甥が（ずっと以前から、ラヴレース君と一刻を過ごしたいと願っていたのですが）到着しますと、この唯み合いも当分は鎮まることとなりました。

モーブレー君とターヴィル君のほうでも、私の筆遣いの無遠慮さに少々異議を唱えておりました。そこで、ラヴレース君が、彼らしいやり方でわれわれの和解の労を取り、三名全員をダシにして仲直りをさせたのです。それも、果てしないほど洒落や冗談を織り交ぜてのことでしたから、われわれといたしましても彼の言葉に、そして、お互いに、笑い声を上げる以外に手がなかった次第です。筆でならば、私も彼とまずまずの勝負が出来ますが、話術の点で彼に匹敵する者はだれもいないのです。要するに、彼の独壇場でした。生気横溢しているのを知って、我ながら嬉しいと、彼は言っておりました。そして、彼の友人二名は、一時間に二十回も手を叩いたり、揉み手をしたりしながら、これでまた彼もすっかり元どおりであり、世界一魅力的な男だと断言しておりました。そして、世界の果てまででもついて行くと言ってきかないのです。

私は彼の上着を目掛けて時々イガを投げ付けるような真似をしたのですが、一つもくっつきはしませんでした。

閣下もご存じでありましょう。後になって繰り返すことにも、あるいは、思い浮かべることにも耐えられないような代物ですが、心に屈託がなく、楽しくやろうと決めております時には、会話の中でやんやの喝采を博する事柄が多々あるものです。われわれが賛美している人物、そして、その機知が本物としてわれわれの間で通っている人物の口の端に上りますと、陽気に過ごしております時には、平凡な事柄も非凡なものとなるのです。われわれはそのような人物の表情の変化一つ一つを見守り、笑みを浮かべますと、唇から漏れて来るものと予想しております事柄をその男が口に出す前から、笑い声を上げてやろうと心に決めているのです。

ドールマン君と彼の甥は十二時までには帰って行きました。一時頃、モーブレーとターヴィルがひどく騒々しくなりまして、二時には担ぎ出されて行きました。度を越して陽気な連中を煽り立てるのが常となっております快活さにも関わらず、ラヴレース君がワインで乱れることは決してないのです。私自身につきましては、連中の浮かれ騒ぎにはほとんど加わることなく、関わりを持たずにおりました。

時計が三時を打ちますまでは、彼に少しでも真面目な態度を取らせることとか、耳を傾けさせることは出来ませんでした。陽気な気分というのは、彼には極めて自然なものですし、あの夜の賑わいがしっかりと彼の心を捉えていたのです。寛いだ気持ちの時の彼の会話というのは、閣下もご存じのとおり、徹底的に進められまして、澱などを残すようなことはないのです。

しかし、その時刻が過ぎ、別れのことが頭に浮かぶ頃になりますと、彼は少し真面目になりました。そして、自分の目論見を語り、意図している旅行の計画を示してくれたのですが、心からの希望として、私の同行を願っておりました。

われわれが別れたのは四時頃でしたが、彼は私に対し少なからず不満を覚えておりました。と申しますのは、彼の言う、思い浮かべるのも嫌な話題につきまして、われわれは少しばかり話し合ったからです。つまり、ハーロー嬢の遺言書の件、私の遺言執行人としての職務の件、あの称賛すべき女性に内々でお知らせした書類の件です（閣下にもご安心いただきたいのですが、友情に背くような意図からではありません）。また、初めて令嬢に言

い寄りました時から私に書き送っておりました手紙につき、彼は返還を求め、私のほうではそれを拒絶したからなのです。

彼のほうではもう一度私に会うつもりだとのことで、私が彼の求めに応じない場合、極めてまずい関係になるだろうと言っておりました。期待はしないようにと、私は申しました。ただし、何から何まで拒むことにはならぬよう、遺言書の写しを与える旨を話したのです。もっとも、それを読んだ時、目にしなければ良かったと彼が思うのは確かだ、とも言っておきました。

今日の午前十一時頃に伝言がありまして、彼、モーブレー、そして、ターヴィルとですが、最後の食事をするための場所を指定してほしいというのです。そして、すぐ後にはモーデン大佐からも伝言が届き、コヴェントガーデンのベッドフォードヘッド亭で一晩付き合ってもらいたいという誘いでした。そこで、二人を互いに離しておくよう、ラヴレース君にはサフォーク街のイーグル亭を指定したのです。

その店でラヴレース君、そして、他の二名に会いました。前回別れた際の状況の再現になりまして、互いに激しい言葉を交わしたのです。それでも、やがて万事が丸く収まりまして、彼のほうから、すべてを忘れて水に流す旨の提案がありましたが、彼の外国滞在中は私が連絡を保ち、彼の病によって中断されておりました一連の文通を続行するということ、とりわけ、私が申し出ましたとおりに、令嬢の遺言書の写しを彼に与えるということが条件だったのです。

私は請け合いました。すると、彼は私の真面目さについて、また、彼はそう呼んだわけですが、私の改心計画について冷やかし始めたのです。食事が運ばれてくるのを待って部屋の中を歩いておりますと、彼は私の肩に片方の手を置き、それから、呪いの言葉と共に私を突き放しました。私の周りを歩き回り、頭の天辺から爪先まで検査するのです。次いで、他の者たちの注目を引くよう、踵でくるりと回転しますと、彼独特の荒っぽい態度でまくし立てました。「ハッハッハッハ、苦虫をかみつぶしたような顔付きの改宗者どもときたら、人の好さと行儀の良さとを二つながらに失わないことには、信心深くなるわけには行かないみたいに考えるのだからな。さあ、ジャック」と、私の体を回しながら、「顔を上げてもらいたいのだ、君。貴公は知らないのかな。宗教というやつは、うまく心を捉えた場合の話だが、この世でも最も機嫌の良い〈表情の作り手〉だということをだよ。我が愛しのハーロー嬢がそう言っているのを聞いたことがあるのさ。彼女には分かっていたのだよ。でなければ、分かった者は一人としていないことになるな。それに、彼女の顔付きこそはこの見解を証明する恵み深い証拠ではなかったのかな。しかし、貴公の呪わしい胃袋がこんなにもムカつくところからして、また、その不様なしかめっ面からして、改心の点では、貴公はまだ新米に過ぎないというわけだな。あゝ、ベルフォードよ、ベルフォードよ、宗教がこの陰気な目鼻立ちを明るく照らしてくれるまでには、貴公は忌々しいほどの野バラやイバラの山を裸足で踏み越えねばならないというわけだ」といった具合にです。

閣下にこのようなご報告をいたしますのは、私が彼のことを以前のとおりと考えているかどうかお知りになりたいという、閣下のご希望にお応えするためのことであります。

食事の席での会話では、翌朝出発すべきか、それとも、その次の朝にすべきか、彼は天秤に掛けて計っていたのです。しかし、彼には何一つ為すべきこともないことが分かりましたし、モーデン大佐がロンドンに来ていることもありまして（ただし、そのことを彼に

は教えませんでした)、私のほうで一方の皿に重りを加えることにしたのです。すると、彼も翌朝の出発に同意しました。例の二名が彼の出航を見送ることになりました。私は連中の朝の乗馬に付き合う約束をしたのですが(自分たちの馬を提供するというのです)、午後には戻らねばならないことを話しておきました。

私が約束してありました夕刻の会見に出掛けますのを、不承不承ながら、連中は許してくれました。だれとの約束か、連中には思いもよりませんでした。と申しますのも、ラヴレース君のほうでは、モーデン大佐とジェームズ・ハーロー君が脅迫の言葉を投げつけたと聞かされていたものですから、二人との対面を果たしますまで、王国を離れるべきかどうか、名誉に関わる問題としてわれわれ全員に問い掛けていたからなのです。

モーブレーが意見を述べました。実際に彼はそうなのであるから、名誉を重んじる人間らしい出国の仕方をすべきだ、と言うのです。また、無礼な発言に対し、あの紳士たちを懲らしめるようなことをしないのであれば、少なくとも、出国前に、公の場であの者たちの目に触れるようにすべきであり、でなければ、二人のほうでは、あたかも彼が自分たちのことを恐れて王国を出たかのように、勿体ぶった態度を装うことになるだろう、とも言っておりました。

彼自身もこの考え方に大きく傾いておりましたから、彼を説得するのには困難が伴いました。あの二人のどちらにしても、直接の、そして、正式な決闘の申し込みをしてはいないのだし、彼のほうで近づき難いようにしているわけでないことは二人も知っているのだから、また、彼はすでにあの一族に十分な損害を与えているし、それで満足してほしいというのが、ハーロー嬢の熱望しているところだということもあり、名誉に関わりを持つどの点からしても、旅行を遅らせる理由は一切ない。とりわけ、健康状態を確かなものにするという、至極正当な動機があるわけであるし、その必要があれば、早めに帰国して構わないのだから、と説き聞かせたのです。

大佐のほうは大変に厳粛な様子でした。ハーロー嬢の遺言書、ならびに、令嬢の一族に関し、二人の間で交わされた数通の手紙の話題となりました事柄につき、われわれは大いに話し合いました。

大佐には銀行と精算しなくてはならない勘定が少しありまして、大佐のおっしゃるところでは、精算は明日行われるというのです。そして、大佐の考えでは、木曜日には再び田舎に戻る予定とのことですが、お身内の方々に別れを告げるためで、その後は、まっすぐイタリアに向けて出発するおつもりなのです。

ラヴレース君が説得に応じ、どこであれ、フランスとイタリア以外の旅に出てくれていたならと、心からそう思います。私はマドリード行きを提案したのですが、彼は私を笑いながら、こう言っていました。その提案は〈ラバ〉から言い出されるのには似合いのものだし、齢九十を数える昔気質のスペイン人に匹敵するほど生真面目になった人間にはうってつけだ、というのです。

大佐に対しましては、お従姉妹さんの死の際の勧告が所期の力を発揮しないのではないかという、私の懸念を表明しておきました。

「あの勧告は私に大きな力を持っているのですよ、ベルフォード殿」と、彼は言いました。「でなければ、これほど長い間、一つの世界がラヴレース氏と私とを容れておいたりはしなかったはずです。ただ、私が意図しておりますのは、フィレンツェへ向かうことなの

です。従姉妹の死に際しまして、そのつもりでいるとお話しいたしましたが、彼の地に骨を埋めるためではありません。あちらでの身辺整理をすべて済ませた上でこちらへ戻りまして、私の不在中に予想外に荒れてしまったものですが、ケントにあります父方の小さな地所に落ち着くためなのです。

実際の話、当地にせよ国外にせよ、ラヴレース氏と遭遇するようなことがありました場合、その結果に対しまして責任は負い兼ねるように思われます」とです。

大佐は明日会う約束を取りたがっておりました。しかし、すでに触れましたとおり、ラヴレース君の旅立ちのお供をすると約束してありましたので、ロンドンを離れなければならないことになっており、夕方には戻るのですが、何時頃のことになるか、定かではない旨を伝えました。そんなわけで、彼とは木曜日の午前中に私の下宿で会うことになっているのです。

明晩になりますが、謹んで今一度閣下にお便りを差し上げるつもりでおります。とりあえず、閣下、これにて失礼いたします。

拝具

手紙　四十七
ベルフォード氏からM卿へ

十月四日　水曜日　夜

閣　下

ロチェスター近くのガッズヒルまでラヴレース君のお供をし、今戻ったところです。彼は道中を通してすこぶる陽気にしておりました。モーブレーとターヴィルが同伴し、先へ進みました。彼が乗船し、帆が揚がるまで見届けるのです。そして、一、二ヶ月後には後を追うと約束しております。連中が申しますには、彼がまた元の姿に戻った今では、彼なしの暮しなど有り得ないのだから、ということです。

彼と私との別れは友情の大いなる印、厳粛とさえ言えます印を伴ったものでした。とは申せ、これから閣下にご紹介いたしますとおり、陽気さが交じり込まなかったわけでもありませんでした。

彼は私を脇の方へ呼び寄せ、その両腕で強く抱き締めながら、「お別れだな、ベルフォード」と言っていました。そして、「自分の踏み入った道を歩み続けてくれるよう祈っているよ。どんなに気取ってみたところで、この魅惑的な娘さんが俺のここを［と、心臓を片方の手で押さえながら］しっかり掴まえてしまっているのさ。それで、俺としては、君の目に映っているような姿を装うか、それとも、ごく最近の自分に戻るか、そのどちらかしかないのだよ。あゝ、神々しき娘よ」と、天を仰ぎながら話しておりました。

「だが、俺が生き長らえてイギリスに戻るとしたら、そして、君が現在の生き方を守り通し、俺に励ましを与えてくれるようであれば、むしろ君の手本に従いたい気もするのだよ。そのことで君を嘲笑したりせずにな。この遺言書は［実は、彼に写しを渡してあったのです］、独りぼっちでいる折々の道連れにするつもりだ。その心痛む内容の一部については、君から教えてもらっている。それと、彼女の死後に届いた手紙とを、俺の研究課題に

するつもりだ。そうすれば、君が頑張り続けてくれるならの話だが、君に弟子入りをする準備にはなるだろう」とです。

「君のほうは、ジャック、結婚しても構わないぞ」と、彼が話を続けました。「君の嫁さんの目星もつけてあるのだよ。ただ、貴公はひどく不格好な人間だからな」とです。「彼としては、私が心を動かされているのを目にして、笑わせようと考えたわけです」「ただ、われわれは自分の手で自分を拵えるわけではないからな。服装のせいで駄目になる場合は別だがね。俺もだが、今の貴公は喪服姿だ。しかし、その滑稽な気質から再び伊達男を装う気になるようであれば、俺が帰国の暁には、俺の好みのままに、そして、もって生まれた貴公の容姿に合わせ、娘たちの言い回しを借りるが、貴公を「おめかし」してやるつもりだよ。貴公には俺の魂の治療に当たってもらおう。俺は貴公の体のほうを治療する。俺がどれくらい気の利いた男に貴公を仕上げるか、ひとつご覧いただくことにするさ。

俺について言えば、絶対に結婚するつもりはないし、また、出来もしないのだ。少しでも勝手気ままな真似をするつもりはないし、以前の策略のどれかを始めようと試みることもないだろうなどと、そんな約束をする気はないのだよ。習慣というのは簡単には抜けないものさ。ただ、離乳のような形で行われることになるだろうな。だから、回帰と改心とが同時進行するというわけだよ。

ところで、寂しげな顔をしたお猿さんよ、一体何が辛いのかね」と言うのです。彼のことは憎めないのです、閣下。

「お別れだな。もう一度言うが、お別れだよ」と、私を抱き締めながら彼は言っておりました。「あっちのほうに（と、天を見上げながらです）コネが出来たと思えるようになった暁には、ひとつ貴公のラヴレースのために執り成しを願いたいものだね」とです。

仲間のところへ戻った彼は、頻繁に手紙を書くよう私に勧めておりました。そして、すぐに便りをする旨の約束をしてくれたのです。また、閣下ならびにご一族の皆様に残らず筆を執ることも約束しておりました。彼の言によりますと、自分には似つかわしくないほどに皆様が親切にしてくださったから、とのことでした。

こうしてわれわれは別れたのです。

高貴なるご一族皆様のためにも、閣下、彼がすぐにも帰国し、約束しておりますとおりに改心いたしますのを目にしたいものと願う次第です。

M邸へのご招待の栄誉を賜りましたこと、閣下には謹んで御礼を申し上げます。最初に受け取りますラヴレース君からの手紙が、ご招待をお受けする機会を提供してくれることとなりましょう。閣下、

貴方様のこの上なく誠実にして従順なるしもべ

J. ベルフォード

手紙　四十八

ベルフォード氏からM卿へ

十月五日　木曜日　朝

ただ今モーデン大佐と私との間で交わされました事柄につき、掻い摘んでご報告申し上

げますが、多少なりとも閣下にもご満足をいただけるものと存じます。

われわれはハーロー一族のこと、そして、令嬢の遺言で未だ執行されずにおります部分につきまして、話し合いを重ねました。その後、大佐が話し掛けて来たのですが、私といたしましては多少驚きを覚えるような話し方でした。

大佐に言わせますと、私のこのところの望ましい考え方からして、また、健全な体質からして、私は大変長生きをするように思われるというのです。それゆえ、彼の要望といたしましては、私に彼の遺言執行人になってほしいというのです。お従姉妹さんが示してくれたもの以上に優れたお手本を選ぶとか、模倣するとかといったことは、彼には出来ない話だから、というのです。

大佐としては、そこに意を傾けているというのです。お従姉妹さんの遺言と彼の遺言にはいくつか類似点があるとのことですし、私と一緒にある人物についても指名しているのですが、その人物との共同作業を私が拒んだりはしないことを確信しているし、私の同意が得られた場合には、その人物にも同意を得るべく当たってみるつもりでいるというのです(ア)。「私が推測いたしますかぎりでは、チャールズ・ヒックマン卿のご子息、ヒックマン氏を暗に意味しているのですが、閣下にとりましても、卿は未知の人物ではないものと存じます。愛する従姉妹にとって大切であった人間は一人残らず、自分にとってもそうあって然るべきだし、自分が念頭に置いている紳士は、私の助言と助力に加え、イギリスでも最も思慮深い女性の一人から助言を得るはずだから、と大佐は言っておりました」

私が少し驚いているのを目にしますと、大佐は私の手を取り、「躊躇なさってはいけません。ましてや、お断りになったりしてはいけないのです、ベルフォード殿。絶対にいけません。二つの点は請け合いましょう。つまり、すべてに亘りすこぶる明瞭にしたつもりでおりますから、訴訟沙汰はあり得ないという点、そして、極めて公正な処置をいたしましたし、親戚全員から、非常に寛大な処置と受け止めてもらえるだろうと思いますので、貴方のようなお考えの持ち主にとりましては、この信託の履行に当たって、苦痛よりも喜びを感じられるだろうという点です。そしてこれは、自分の遺言執行人には正直者を見つけ出したいと願っているすべての正直者が行って然るべきことだと、そのように私は考えているのです」と言っておりました。

私は高い評価を与えてくれたことには大いに感謝していると伝えました。そして、正直者になることはすべての人間にとって重大な義務なのであるから、正直者と見てもらえることに疑念はないと申し上げても、自惚れと解釈されることはないはずだが、ただ、仮にこの信託を引き受けるとすれば、条件としては　…　と言い掛けたのです。

彼は私の言葉を遮り、私の挙げる条件で、彼が承諾を拒むようなものは何一つ有り得ないはずだと言っておりました。

私はこう申しました。つまり、この条件というのは、彼が私よりも長生きをする見込みは、私のほうが生き延びる見込みと同じくらい大きいのだから、私の遺言執行人として彼を指名するのを許してくれることであり、その場合、私が遺言を作成するのに、一週間は掛からないはずだ、とです。

(ア)　ハウ嬢へ宛てた本状の写しにおいては、ベルフォード氏は角括弧で［・・・］と括っている部分を省略しているのである。

心の底から喜んで許すと彼は言っておりました。突然に命を落とすような恐れはないだけに、なおさらそのような気持ちになる、とのことでした。何故なら、彼が行なったことや、要請したことというのは、遺言書の前文に見られたお従姉妹さんの忠告、つまり、「これは心身共に十分な健康状態にある時に着手されるべき仕事です〉という言葉に従ったこともあるが、実際には、お従姉妹さんの遺言執行人としてすでに私が果たしてきた役割に対し、そして、私の能力にも、と付け加えてくれたのですが、彼が満足を覚えた結果なのだからだ、というのです。

私のほうでは、突然に命を落とす恐れは少しもないという彼の言葉に接し、嬉しく思う旨を伝えましたが、愛するお従姉妹さんの死の床での要請に背く行動については、すべて断念していることがこの言葉で確信出来たからです。

彼は笑みを浮かべながら、次のように言っておりました。「自分自身の考えでは極めて正当なものと思われるのですが、仮にも私が復讐の遂行を目指す場合、ラヴレース氏の手によって倒れることを懸念しなければいけないというのは、根拠があっての話なのでしょうか。私にその種の不安は一切ないことを保証いたしましょう。ただ、これが貴方にとって不愉快な話題であることは承知しているのです。ラヴレース氏は貴方のお友達なのですからね。それに、善良な人間が悪辣な人間に対して悪事を奨励することはなくても、無事を祈るくらいの友情は抱くこともあるでしょう。それは私も認めますよ」とです。

「保証いたしますが」と、彼は付け加えておりました。「今はまだ、どちらとも気持ちを固めていないのですよ。従姉妹からの重ねての要請がどれほど強く私の心を捉えているのか、その点はすでにお話しいたしましたね。その要請ゆえに、これまでのところは私も堪えてきたのです。だが、この件についてはもう止めにしましょう。

これが「と、封をした包みを手渡しながら」私の遺言書です。連署もあります。依頼申し上げました点をお聞き入れくださいますよう、貴方を説得出来るのは疑いのないところと考えておりました。もう一人の紳士の手許に置いていただく副本、それに、私の銀行に保管します証明済みの写しがございます。遅くとも六ヶ月か八ヶ月後のことになりましょうが、私が帰国いたしました時には、もしもお望みとあれば、貴方たちでそれぞれお持ちの証書を交換してくださって構わないでしょう。これで、私といたしましては、田舎におります身内に暇乞いをするだけとなっております。従いまして、ベルフォード殿、貴方に神のご加護がありますよう、祈ることにいたしましょう。ほどなく、改めてお便りをさせていただきます」とです。

その後、大佐がひどく厳粛な態度で私を抱擁し、私も同じく彼を抱擁し、こうして、われわれは別れたのです。

それぞれの紳士が辛うじて互いを回避いたしました点、閣下には心からのお祝いを申し上げます。二人が出会いました場合、致命的な結果は避けられなかったものと思われるからであります。

すべてを鎮めてくれます時間が、彼らの怒りをも和らげてくれますよう、私は希望いたしております。

閣下の衷心より誠実にして従順なるしもべ

J. ベルフォード

《他にも数通の手紙がハウ嬢とベルフォード氏の間で交わされたが、それらは書類ならびに書簡の処分、貧民のための基金、そして、令嬢の遺言書の他の項目に関するものであり、各事例について、その処理方法の調整が為されたのである。その後、書類はベルフォード氏に返還されたのであるが、指定どおりの二通の写しを作成すべく、指示を出すためである。

これらの手紙の一通において、ベルフォード氏はハウ嬢に対し、彼女がかくも熱愛している友人の人物像について紹介してくれるよう要請しているのだが、これは、氏が想像するところでは、「彼女の筆を煩わせるに値すると同様、彼女自身にとって好ましい仕事」だというのである。

氏は、「私がとりわけ知りたく思いますのは、姉上が妬ましげに苦言を呈しているものなのですが(ア)、ちょうど目を通したばかりのお手紙で触れられております、あの独特な時間配分の仕方がどのようなものであったのかという点なのです」と言っている。そして、「この点が分かりますと、おそらく、私にとりましてしばしば驚きの種となっておりましたこと、つまり、この賛美すべきご令嬢は、あのように若い身空で、かくも非凡な、かくも多様な資質をどのようにして身に修められたのか、その点にも説明がつくことになりましょう」と述べているのである》

手紙　四十九
ハウ嬢からジョン・ベルフォード氏へ

十月十二日　木曜日

謹んで申し上げます

愛するお友達の人物像を公平に評しますのは、私には不可能なことでございます。それも、才能が不足しているからというだけではありません。深い悲しみゆえのことでもあるのですが、この悲しみは時と共に薄れるのではなく、むしろ強まっているように思われるのです。また、この悲しみは、大変な思考力と、自分が持ち合わせているようにこれまで考えておりましたものよりはずっと高度な正確さとを必要といたしますような、そんなお役目に就きますのを許してくれないのです。

とは申しましても、貴方のご提案には大賛成ですので、二、三の資料を貴方の手に委ねようと思います。例の書類そのものや貴方宛のモーデン大佐からのお手紙、中でも、九月二十三日付のもの(イ)、そして、自らの断罪につながることですのに、あの方を公平に評しているように思われます、あの忌まわしい恥知らず本人の手紙などから、貴方のほうでお集めになることが出来ます資料の、いわば補遺として役立ちそうなものです。これらすべてを一緒にいたしますと、あの方の美点を大変賛美しておられるように見受けられます貴方のことですから、このお役目をやり遂げることも可能になりましょう。それも、私が存じ上げておりますどなたよりも上手に成就なさるように思うのです。ただ、次の点は要望させていただきます。この件につきまして何かをなさる場合には、私にも目を通させてい

(ア) 第一巻の二百十八頁を参照のこと。　(イ) 手紙三十九を参照のこと。

ただきたいということです。それが私の希望どおりでないことが分かりました時には、公正さの見地からも、私のほうで加減をさせていただくことになりましょう。

あの方は幼い頃から素晴らしいお子様でしたが、貴方が紹介しようと意図しておられますのは、拝察いたしますに、あの方の経歴というよりは、むしろ、他の若い婦人たちの鑑となるのに相応しい資格を得られた時期の、あの方のご様子のことなのでしょう。

とは申しましても、おそらく、貴方はあの方のご容姿を記述したいと思われるでしょうし、心に屈託のなかった頃の愛しいお方につきましては、ご存じないわけですから、今でも部分的には確認していただけます点につき、お話しいたしましょう。

あの方の体つきは大変に優美で、見事に均整がとれ、目鼻立ちは非常に整っておりましたし、顔色はとても美しく、そして、容姿全体と立ち居振舞いが際立って魅力に富むものでしたから、あの方が動きだしますと、きっと称賛の声が上がりましたし、一人残らず皆さんから目で後を追い掛けられることになったのです。それまであの方をご覧になったことのない初対面の人たちからもです。この点につきましては、先に触れましたモーデン大佐のお手紙が裏書きしてくれましょう。

服装におきましては、あの方は真似ようもないほどに優雅でした。そして、周囲のご婦人方全員の流行を先導するのが常でしたが、それを意図しているご様子はなく、また、そうすることを誇りにするわけでもなかったのです(ア)。

中肉中背というよりは、むしろ背の高い方で、目鼻立ちの一つ一つに生気を与える知性の存在を保証いたしますような威厳が、あの方の表情や態度には備わっておりました。

この生来の威厳と呼んで構わないもののせいですが、あの方が現れた途端、知らぬうちに自分たちの心を満たしております尊敬の念をどう説明したら良いのか分からない浅はかな人々の中には、あの方のことを誇りが高いと考えたくなる者もいたのです。でも、こういった人間というのは、あの方に備わっております美点のどれか一つでも持ち合わせますと、自慢したくなってしまいますのを承知している連中なのです。ですから、自分自身の狭量さを基準に判断いたしまして、あのようにたくさんの美点を備えた淑女が、自分のことをすべての者たちに優る人間のように考えないなどということは、有り得ない話だと思ったわけです。

実際、誇りの高さと優越感を示すものとして、あの高貴なお顔立ちに難癖がつけられるのを耳にしたことがございます。でも、他ならぬ自らの劣等感によってですが、畏怖の念を抱いたり意のままに動かされたりしております人間というのは、咎められても仕方のない自分の心ゆえに恐れを抱いてしまうものでして、公正な心や態度を備えた人間に対しましては、正しかろうと間違っていようと、難癖をつけてみせるものなのです。ただ、クラリッサ・ハーロー嬢は、悪い意味合いでのものですが、プライドとはどのようなものなのか、ご存じではなかったのです。

この話題にお触れになるのでしたら、あの方の次のようなお言葉を挿入なさっても良いでしょう。いろいろな時、様々な折に口に出されたものです。

「たまたま手柄を立てたとか、見掛けばかりの取り柄しかないような人は偉そうにするかもしれません。でも、生得の価値というものはいつだって、横柄さ同様に、自惚れとは

(ア) 第七巻の七十四頁を参照のこと。

無縁なはずなのです」

「本来あるべき程度以上に善良とか、有徳とかになることの出来る人はいるのでしょうか。また、自ら身に修めたわけでもない才能を、だれが誇りにするというのでしょう」

「無知の中でも最も蒙昧で軽蔑に値するものは、自分自身についての無知、そして、私たちが持っておりますもののすべて、卓越しておりますもののすべては神様からの贈り物なのだという点についての無知なのです」

「人間の美質と申しましても、その一切は比較の上での話に過ぎません。私たちが一番見劣りのする人々に優っているように考えますその程度と同じくらいに、私たちよりも優れているという人たちがいるのです」

「生き物すべての等級表におきましては、最下位のものも最高位のものに負けず劣らず有益ですし、大きな鎖の一つの輪であることに変わりはないのです」

「他のすべての美質を好ましいものにしております美質が謙虚さなのです」

「唯一つだけ許すことの出来る自尊心がございます。卑劣な行為とか恥ずべき行為に走りますのを潔く思わない自尊心です」

この素晴らしい若い淑女がご自分を導こうといたします際に、また、他の人たちに対する振舞いを律しようと努めます際に用いましたのが、以上のような考えだったのです。

そして、実際の話、恩恵を施すことが出来るようにしてくれた人々に対しまして、温和さや愛想の良さ（「鷹揚さ」と呼んでいた者もおりました）があの方以上に目立つような人は、男性であれ女性であれ、一人としておりませんでした。それも、恩恵に与った人といたしましては、授かった恩恵なのか、それとも、恩恵が施される際の態度なのか、そのどちらを好ましく思ったら良いのか、時には分かり兼ねるほどだったのです。

フランスのアンリ四世について語られていること(三二)が、要請をお断りになる時のあの方の態度についても言えそうだと、そんな感想が述べられておりました。願いを聞き届けて上げたのと同じくらい満足した気分にして、断られた人を面前から送り出されるのがあの方の常だったということです。

それに、真実に対しまして、あの方は神聖なまでの敬意を払っておりました。この点につきましては、どれほど詳細に述べてくださっても、詳細すぎることはありません。おそらく、あの方のお手紙のすべてにおきまして、あの恥知らずのすべての手紙の中でも、あの方の真実性が非難されますようなことは一度だってないはずなのです。あの方の災難は非常に厳しいものでしたし、憎むべき男のたくらみは実に狡猾で、そこから逃れようとなさるあの方の苦闘も大変積極的なものではありましたけれど …

あの方はとても思いやりの気持ちに溢れておられましたから、有罪を申し渡しますことこそが正当な行為という、それほどまでに罪がはなはだしいものでない場合には、弁護の側に立つか、罪を問わないようになさるのが常だったのです。また、いつもあの方はその場に居合わせない人の肩を持っておられました。無分別さの明白な証拠を示したわけでもありませんのに、思慮分別に疑いを掛けられた人の場合にはです。

一度あったことですが、たくさんの女性が集まりました席で、だれもが［私もその一人でした］広く世間の噂となっておりましたある若い淑女の無分別さを非難いたしましたところ、あの方がこうおっしゃったのです［と申しますのも、私たちは、片方の人間がそのきっかけを作っているとどちらかが考えました時には、そして、あの方がよく言っておら

れましたように、より相応しい形で浴びせかけますのは、傲慢とか僭越に映るのでしょうが、お互いを非難することによって、すべての人たちに向けた譴責となるよう意図しております時には、お互いを咎め合うことにしようと、合意に達していたからです」。「それじゃあ、ハウさん、私をファニー・ダーリントン嬢ということにしていただきますわ」とです。そして、婦人たちの輪を離れて立ち上がりますと、「私はここに立ちましょう。疑いが晴れますまでは、ここにお集まりの残りの方々と一緒に腰を下ろすのには値いたしませんもの。さあ、私をあの方のようにお考えになって、お咎めの点を聞かせていただきましょう。皆さんのほうでも、哀れな罪人が自己弁護のために申し立てますところをお聞き願いますわ」とおっしゃるのです。それから、憶測に基づきました、立証されておりません情況に対しまして、有利に働くと想定いたしますのが同じ程度に妥当な、そんな情況を用いて応酬することで、非難の的となりました女性を首尾よく救い出してみせたのです。それも、皆さん一人残らずをすっかり満足させたものですから、あの方はご自分の椅子へ導かれまして、仲間内で二つの地位を与えられることになったのです。復権いたしましたファニー・ダーリントン嬢として、また、クラリッサ・ハーロー嬢としてです。

あの方はよく言っておられましたが、「婦人の集まりに同席しておられる人たちで、有罪を宣告される人と申しますと、あるいは、告発を受ける人でさえもですが、非常に稀なのですわ」とのことでした。また、「ですから、はなはだしい罪でない場合には、同席しておられない人の側に立つのが思いやりというものでしょう。いいえ、公平なことに他ならないのですわ」とも言っておられました。

ただ、賢明さこそはあの方の、いわば生得の権利だったのですが、それでも、十分に長生きをなさったわけではありませんから、人物と事物の両方につきまして、時に意見を変えねばならなくなりますのを免れるような、それほどの経験の豊かさを装うわけにはまいらなかったのです。でも、考えを変えねばならないことに気づかれました時には、人間の値打ちを計り損ねました個々の例が、ほぼ万人に向けられておりましたあの方の思いやりの心に制約を加えるとか、狭めるとかいたしまして、広く疑念とか不審の念とかを誘うことになりませぬよう、注意をしておられたのです。私の言わんとしております事柄の実例の一つが脳裏に浮かんでまいります。

しばしば弁護なさっておられました人物が卑劣な人と分かり、厳しい批判者からお咎めを受けますと、私の大好きなお友達は、その人の卑劣さのために苦しい思いをしておられたのですが、このようにおっしゃったのです。「私のような若い娘といたしましては、身につけているように装うことも出来ないほどの洞察力を、マダム、貴女は備えておられたのですわ。でも、好意的な判断を下す人々のことを人間の公正な心が正当化いたしますのよりも、人間の邪悪さが厳しい裁きをする人々を正当視することのほうが多いかにも思われますが、私といたしましては、思いやりの心を手放すつもりはございません。ただ、これから先は、年上の方々が私とは反対の判断をなさいます場合には、私の判断が慎重さや思慮深さと調和するよう努力するつもりでございます」とです。

実際、ご自分に少しでも過ちとか間違いがありますことを確信なさった時には（見た目には、ご自分の判断力や賢明さの評判をどれほど落とすことになるとしてもですが）、あの方ほど速やかに非を認める人間、率直な人間は一人としていなかったのです。「率直に過ちを認めますのは、過ちを避け得たことの次に位する手柄なのです。また、非難されて仕方

のない事柄について言い訳をしようといたしますのは、意固地とは申さないまでも、率直さに欠けておりますことを示す、疑いようもない印なのです」と、あの方はよく言っておられたのです。

でも、この問題に関しましては「人の評判が関わっております場合の、また、思いやりを施すべき余地のございます場合の、あの方の大変な慈愛の心についてです」、次の点を付け加えておくべきでしょうね。つまり、故意で計画的な悪事を叱責なさいます際には、それ相応の厳しさをもって臨むのが常だったということです。だといたしますと、前もって計画されましたその非道の行いに巻き込まれてしまわれたわけですし、あの破廉恥漢を許すようなことは、どうしてあの方にお出来になるというのでしょう。

至る所で力説していただかねばなりませんのは、あの方のお身内による愚かしい迫害がなければ、あの方はあの憎らしいラヴレースの手中に陥ることは絶対になかったのだということです。ただ、あの方もいく度か素直に認めておられましたが、仮に容姿や物腰、そして、縁故関係が恋人を選ぶ際の主な誘因となって構わないのでしたら、ご自分の目が心を惑わせますのも、難しい話ではなかっただろうとのことでした。

あの方が最後に私のところに滞在なさった時のことですが（丸々三週間の楽しい日々でした）、あの方を訪れて来るたびにあの恥知らずは、その前の時よりももっと不満な気持ちをあの方に抱かせて帰って行ったのです。それでも、あの方の前でのあの男の立ち居振舞いはとても見掛けが立派でしたから、あの方を強く特徴づけておりました、例の心魅する繊細な心や、例の洞察力をあまり持ち合わせない女の人にとりましては、ひどく非難に値するというものでもなかったのです。

あの方が私のお客様になってくださいますのを、その時かぎりということで「はなはだ不幸なことに、そのとおりになってしまいましたが」、あの方の陰気なお父様が許してくださいました際にも、あの方はお父様のご命令を守られて、私の同席なしにはあの男と決して会おうとなさらなかったのです。そして、あの男が帰りますと、「あゝ、ナンシー、この人じゃありませんわ、私が求めております男性というのは」と、あの方はよく言っておられたのです。別の時には、「陽気で軽率な人ですから、いつも何かしら大目に見てもらわなければいけないことがあるのですわ」と話しておられました。また別の時には、「この男性は愛情を誘いますはるか前に、恐怖の念を掻き立てることでしょうね」と言っておられました。そして、その後、次のように繰り返すのでした。「この人じゃありませんわね、求める男性は。世間の人たちがあの人について言っておられることのすべてが偽りであるはずはございません。でも、あの人と一緒になるつもりなどございません私に、あの人を責めるどのような権利があるというのでしょうね」とです。

要するに、あの方が判断力と分別とを　…　そのいずれにつきましても、どちらか一つを持ち合わせている人で疑いを抱いた人など一人もいなかったのです　…　発揮なさるよう任せられておりましたなら、あの男を永久にお捨てになるために十分なものを、すぐにもあの方は見抜いておられたはずなのです。

あの方は文章表現の優雅さすべてに亘って見事に身につけておられました。あの方の筆跡は、綴り字の正確さと規則正しい句読点の打ち方と同じくらいに、整っていて伸びやかな字体（あの方のお心に似て、しっかりと揺るぎなく、飾るところは一切ないのです）、その美しさ、一様さ、また、速やかさの点で、女性すべてからあの方を際立たせておりまし

たし、男性の中の綴り字が最も正確な人たちの間でも、あの方を凌駕する人はだれ一人としていなかったのです。

そこで、もしも宜しければ、綴り字がひどくおざなりな女性のためになりますよう［その点に弱みがあるという意識から、通常、女性は筆を執るのを差し控えるようになるのです］、この機会を利用なさって、助言の一つも挟んでくださって構わないのです。あの方はよく言っておられましたが、「正しく字を綴りますのは、女の人が自分の用います語の意味と同様に、その由来をも理解しておりますことの、そして、音声だけに止まっておりませんことの証拠なのですからね」とのことでした。

この点に関しまして、貴方もお気づきかもしれませんが、女性がおしなべて、現にそうなのですが、書き物のことを非常に疎ましく感じておりますのは、あの方にはいつも驚きの種だったということです。あらゆるお仕事の中でも、ペンは針に次いで女性の才能に一番相応しく、一番合致しており、しかもこれは、気晴らしのためと同様、向上にもつながるのだからとのことで、次のようにあの方は言っておられたのです。「書き物に喜びを見出しております女の人たちで、打ち解けた文体に備わります美点のすべてにつきまして、男の人たちよりも優っておりますことに気づかない人など、果たしているでしょうか。女の人というのは、心の優しさ、考え方の繊細さ（女性の教育の仕方によって向上しているのですが）、そして、想像力の溌剌さによりまして、このお仕事を大いに愛好する資格を備えることになるのです。一方、いわゆる学者と称されております人々は（つまり、単なる知識だけの人です）、この種の書き物を（実は、他のすべてについてもですが）特徴づけております、あの自然な気安さと屈託のなさに優ることを目指しまして、最高の首尾を収めたつもりでおりますのに、自然な美しさ一切を通り越してしまうか、あるいは、むしろ届かずにいるといったところでしょうね」とです。

そして、堅苦しく四角張り［私にも付言させていただきますが］、無味乾燥な虚飾に陥る結果、こういった学のある人々の中の一派は、その立ち居振舞いがしばしばそうでありますように、同じような荒々しい文体を装うことになるのです。自分たちの作品を比喩的な表現で飾り立てますし、大言壮語に走ります。この人たちにとりましては、荘厳さは言葉に存するのであって、情趣に存するのではありませんから、最も解りにくい時に最も高揚しているように思い込むのです。そして、自分が成し遂げたものに満足し切って腰を下ろし、それを〈男性的〉と称しているのです。一方、二番目の一派は機知を、つまり、あの不埒にも人を惑わすものを目指し、適切な判断力という称号をすべて喪失してしまうのです。そして、第三の一派は古典の穴くぼに落ち込み、その中をほじくったり這いずり回ったりしておりますが、決して自らの才能を世に示そうとはいたしません。平凡な引用に全生涯を費やし、向いていることと言えば、他人の原文に注釈を施すことだけですし、誇りとしているのは、ただ、別の言葉で書かれた二千年前の美に通じているという点なのですが、自らの言葉でそれを崇拝することは出来ましても、真似るわけには行かないのです。

そして、学のある人々と申しますのは、面白みのない私たち女性のことを軽蔑なさっている方たちというのは、まったくの話、きっとこんなところなのでしょうね。

でも、私の愛するお友達がしっかりとした学識や真の鑑識眼、そして、多様な才能を備えた男の人たちをいつも特別扱いしておりましたことは［その点には私も同意しております］、申し上げる必要のないことです。また、とりわけ、聖職に就いておられる人々に対す

るあの方の崇拝にも近い尊敬の念につきましても、申し上げるまでもないでしょう。このお気持ちは、おそらく、あの方のお手紙の中の、どなたか聖職者について触れられております段落のすべてに出てくることでしょう。実際の話、あの方の遺言書の一項目で、早くから文通をしておられました、学識に富む聖職者として名を挙げておられる殿方たち、つまり、敬虔なリーウェン師、高徳のブルーム師、才能豊かなアーノルド氏ならびにトンプキン氏は、あの方から尊敬されるのに十分値しているのです。あの方はご自分の有益な嗜みの多くのものを、それらの人々との会話や文通に負うていたのですからね。

それに、私たち女性のことだけでなく、知る機会に恵まれなかったため、品詞のことをご存じない人や「このような人はどれほど卑しめても十分ということはありません」、今では使われなくなっている言葉のことを知らずにおりますような人すべてをも軽蔑する、学問だけの人間に「あの方の愚かで衒学者のようなお兄様も侮辱されて当然な者たちの一人でした」あの方が時々向けておられた軽い侮辱の態度にいたしましても（白状しなければなりませんが、私に先導されてのことなのです）、自分が修得出来なかった事柄に対して一部の者たちが装います、あの軽蔑の念に由来するものではなかったのです。と申しますのも、あの方は素晴らしい語学の才能をお持ちで、イタリア語とフランス語の両方を楽々と読みこなしておられたからです。ラテン語への取り組みを始めておられたのですが、母国語について大変に正確な知識を持っておられましたし、また、あの二つの外国語から確かな基礎を得ておられたこともありますので、間もなくラテン語の大家になっておられたことでしょう。

でも、あれだけの才芸を身につけておられましたが、あの方は素晴らしい倹約家でしたし、やりくり上手な人だったのです。そして、ご注意いただきたいのは、女性の読書仲間や文通仲間すべてにこういった資質について熱心に説き聞かせるのを特に好んでおられたということです。と申しますのも、「男性のほうに特有のものと思われております学問を身につけるため、女性の特徴となります有益さや優雅さを軽視する女の人は、修得したものによって獲得する評判以上に、怠ったものによって軽蔑を招くことになるのです」というのが、あの方の座右銘だったからです。

あの方はよく言っておられましたが「この座右銘の詳しい説明としてです」、「女性に相応しい有益な知識に優るもので、女の人が学び取ることの出来ます事柄はすべて、学ばせてあげることです。このようにいたしますと、その女の人が時代の優れたやりくり上手であり、持ち合わせている才能も狭隘なものとか、局限されたものではないことが分かるでしょう。でも、一家の立派な女主人、良き妻、そして、良き母となるべき資格を付与してくれます、もっと必要な、従いまして、より卑俗なわけではないお仕事を、これらの知識のために放棄させるようなことをしてはいけません。何しろ、身なりの無頓着さから、学はあるけれど不精な女のように見られるとか、あるいは、家政の術に無知なために、家庭での節倹とは無縁の女だと知られてしまうとかいたしますのは、そのどちらにいたしましても、女性にとりまして、それ以上に不面目な話は有り得ないからです」というのです。

それから、あの方は例として、ある二人のご婦人を引き合いに出しておられました。一人は夫と一緒の時に、また、夫の学のある友人たちと同席しております時に、ウェルギリウスとかホラティウスとかの不明確な、あるいは、難解な句につきまして、自分の意見を開陳するのが好きなのですが、夫の愛情を、そして、他の者一人一人の敬意を維持する上

で必要となります、あの優美さと嗜みとをもって衣装を身に着ける術には通じていなかったのです。これに対し、もう一人のほうは男性と同じくらい学があると思われているように装い、その見せ掛けを主張いたしますのに、自分たち女性のことを軽蔑したり、失ってしまいますと、どのようなものを身に着けたところで埋め合わせにはならないという、あの女性独特の繊細な心を放棄したりいたしますこと以上には、より良い方法を見つけることが出来なかったのです。

学のある女性があの立派な嗜みをしばしば疎かにいたしますことから、確かに、あの方も時々次のように主張しておられました。母国語の美点や魅力について優れた知識を持つことを別にいたしますと、女性が何を目指そうと、それはあまり大きな問題ではない、とです。そして、一度などは、女性にはそれだけで十分にやり甲斐のあることであり、手を広げようとする人は、家庭内での自分の有用性を危険に晒しているのに他ならないと言っておられたのです。でも、女性が男性に劣っておりますのは、ただ機会が足りない点だけですし、その機会にいたしましても、繊細な想像力に備わります魅力のすべてについてと同様、男性が主として自慢の種にしております点でも女性に軍配の上がることを恐れ、狭量な者たちが一生懸命になって私たちから奪い去ろうとしているのだと、そのように考えております私は、その点について、どうしてもあの方に同意することは出来なかったのです。それでも、次の点ではあの方と完全に意見が一致しておりました。つまり、賢い人たちと同席の折に、自分たちの重要さを増すように思われます知識とか学問とかを習得したいと願う女性、そして、それを達成いたしますと、家庭的な有用さ一切を見下すほど偉くなったと考えるような女性は、当然ながら軽蔑を招くことになりますし、軽蔑を受けずに済むことは滅多にないのだという点です。

あの方の場合、教訓と実例とがいつも手に手を取って進んでおりましたのを実証することになるわけですから、この点に関しまして、さらに次のように所見を述べましても、おそらく的外れなこととは貴方もお考えにならないはずです。つまり、お祖父様のところにありますあの方の搾乳場は、目にする人すべてに喜びをもたらしておりましたし、あそこにいらっしゃるのを目にする者全員にとりましては、あの方のお姿が喜びの元となっていたということです。

お祖父様はあの方の手際の良さや、搾乳場経営のすべての分野に亘る手腕、また、そのために割り当てられました仕事場の優雅さについてもですが、それらに敬意を表されまして、以前は〈森の館〉の名で知られておりましたご自分の別邸を、〈搾乳小屋〉(ア)と呼んでもらうことになさったのです。あの方はゆったりとして使い勝手の良い、上品な服を特別に誂えてもらいまして、こういったお仕事に携わります際に着用しておられました。そして、あの方に関して有名でしたのは、この上なく優雅な乳しぼり娘として人目に映りましたその同じ時間のうちに、着替えを求められますと、かつて人々の輪に光彩を添えました最も洗練された淑女になっておられたということです。

お祖父様、お父様、お母様、おじ様たち、叔母様、そして、お兄様とお姉様でさえ、頻繁に搾乳場へあの方をお訪ねになり、あの方が黙ったまま苦もなく、また、気取りのない態度でお仕事を進められるご様子を楽しんでおられたのです。と申しますのも、いつもあ

(ア) 第一巻、四頁を参照のこと。

の方は、慎み深いお気持ちから、指示を与える役目よりは作業に従事する側を選んでおられたからですが、これは、本来その役目を担うことになっております使用人の意欲を殺がないようにとのお考えからだったのです。

あの方の〈搾乳小屋〉で美味しい食べ物や飲み物をあの方の手からいただくのを、お一人お一人が楽しみにしておられました。お母様とハーヴィー叔母様は、お姉様に不愉快な思いをさせないためですが、通常は、黙ったまま感心しておられたのです。お姉様は意地が悪く、天の邪鬼で、見習うということを知らない人ですが、その間ずっと、言葉にならない嫉妬のまなざしであの方のことを眺めているのが常でした。それでも、ふくれっ面のお嬢さんも時々は、無理やり考え出しましたわずかな褒め言葉が自分の口をこじ開けるのを許しておりました。もっとも、それと同時に、かの王国の誇りともいうべきダビデの心臓に鋭い槍の穂先の狙いをつけているサウル(三三)のような顔つきをしていたのです。そして、今この目に浮かんで来るように思われますのは、私の天使のようなお友達が（超然としておられますから、お姉様の憂鬱な思いには気づかれず）乳白色の凝乳を、それよりもさらに清らかな手から受け取ってくれるよう誘っておられるお姿なのです。

家事の切り盛りのすべての分野に亘っておりますあの方の手腕と手際の良さは、数え切れないほどありますあの方の美点の中でも、ご家族の方々のお陰を蒙っております唯一のもののように思われますが、途方もなくお金持ちで、途方もなく欲深い皆さんは、あの方がこの方面の知識に向かわれますのを、その狭量さから許されたのです。一方、お姉様は服装に懲っても優雅な装いとなることはありませんし、上品な淑女を装いながら、決してそうなることは出来ませんでしたのに、妹さんのほうは、淑女を目指すとか、自分がそうであることに気づいている素振りを見せるとかいったことはありませんでしたが、洗練された淑女だったのです。

来客が予定されております時には、午前中の半分を着付けに費やしますのが片方のお嬢さんの常でしたが、もう一方のお嬢さんは、その日の用事ともてなしのすべてを指示なさってから化粧室へ上がって行かれ、いらっしゃらないことが他の人たちの気掛かりになり始めます前に［ご自分の持ち物はすべて見事に整頓しておられたのです］、お客様をお迎えするのに相応しいお姿で、また、他には何も意を用いることはないかのような、あの優雅さの中にも寛ぎのある、落ち着いた態度で降りていらっしゃるのでした。

あの方のずっと後になって［おそらく、事前の準備に数時間が費やされたのです］、けばけばしく不格好なベラが衣擦れの音を立てながら、騒がしく降りてくるのですが、落ち着き払った妹さんの姿に触れ、そのようなわずかな骨折りによって、また、六分の一の時間ですっかり上回れてしまった自分を目にするという、抑え難い嫉妬の情から、生まれついての乱雑さをさらに乱して見せることになったのです。

ただ、この素晴らしいお嬢さんは、こういった家庭向きの資質のすべてを身に備えておられましたが、狭量なところはこれっぽっちも持ち合わせておられませんでした。必要不可欠な美徳である〈つましさ〉と、憎むべき悪徳である〈吝嗇〉とを区別する術をご存じだったのです。そして、「寛大さの意味を明確にいたしますには、物惜しみと濫費との中庸を巧みに守ることと呼ばれねばなりません」と、よく言っておられたのです。

私の知っておりますかぎりでは、あの方は最も優雅さに溢れた朗読家でした。その妙なる調べのお声によりまして、お仲間たちに読み聞かせておられる本の部分々々で見つけら

れた美点に魅力を付け加えておられましたし、優雅さや意味合いに欠ける場合には、それらを付与しておられたのです。わざとらしく抑揚をつけることも、甲高い声色を用いることもございません。アクセントの置き方はいつだって見事なものでした。強調につきましても、主題の求めるとおりに、いつも力強く加えておられました。悲劇風な高揚、悲劇風な華麗さがあの方を誤った方向へ導くことは一切ありませんでした。とは申しながら、あの方がお読みになりますと、詩はまさしく詩になっていたのです。

でも、朗読なさる時のあの方のお声が美しい調べだといたしますと、お歌いになる時には、まったく音楽そのものになっていたのです。そして、そのことによって、また、歌唱力や音域の広さによって与えてくださる楽しさが、ゆったりとして優雅なあの方の態度や物腰、そして、求めに応じられる際の快諾ぶりによりまして、一層大きなものになっていたのです。

それでも、あの方は通常、ご自分で演奏をなさるとかお歌いになるよりも、他の人たちの歌とか演奏とかをお聞きになるほうを選んでおられたのです。

あの方はそうなさるのが相応しい場合には、喜んで賛辞を進呈しておられました。ただし、あの方が当然受けるべきものだと、遍く認められてはいたのですが、賛辞がご自分に返ってくるよう目論んでいるのだなどという疑念は、これっぽっちも招かないような仕方でお与えになるのが常だったのです。

あの方は平凡ではない事柄を大変に平易な言い方でお話しになる才能をお持ちで、同じ話は自分にも出来たはずだと、だれもがそのように思うほどでした。でも、それを口にいたしますには、天分と観察力とが二つながらに求められていたのです。

あの方の物腰や語調の柔和さ、また、一見して分かります好意的な意図から、厳しい事柄でさえ、その力を失うことはありませんでしたが、穏やかなものに思われたのです。

私たちはごくありふれた出来事の折の振舞いによりまして、人々についての最も正しい判断を作り上げているのです。そんな折にあの方が私を正してくださった例ですが、それを一つ二つご紹介いたしましょう。

歌ってほしいと乞われますことを望んでいる人々の、あの困ったところが、ほんの未熟者の頃の私にはございました。私たちの楽しいお付き合いの最初の時に、自らのお手本によって、そして、折に触れてのことでしたが、でも、こっそりと与えてくださいました次のような窘めのお言葉によって、あの方がそれを直してくださったのです。

「それじゃあ、おっしゃるとおりということにいたしましょうね。お歌のほうはただ人並み程度ということにいたしましょうね。それでも、願いを入れようとなさることのほうが(集まっておられるのは大変立派な方々なのですから)、歌の才能よりも望ましいものではないのでしょうか。それに、若いお嬢さんたちというのは、ある部分についての教育のいたらなさを、別の方面の優秀さで埋め合わせようと骨折るものではないでしょうか」とです。

また、「歌ってごらんになることで、歌えないことを私たちにも確信させてくださらなければいけませんわね。そうしてくだされば、私たちがしつこく貴女にお願いするようなことは、今ばかりでなく、これからもなくなるはずですわ」とおっしゃるのです。

また、「そのうちに私たちを楽しませてくださるのは分かっておりますわ。それに、いろいろ言い訳をなさっても、私たちの期待を高め、ご自分の困難を増すだけのことではない

でしょうか」とも言っておられました。

また、別の時には、「この技芸というのは、貴女の教育の一部ではなかったのかしら、ナンシーさん。だといたしますと、貴女ご自身の名誉のためにも、勘弁して差し上げるようなことがどうして私たちに出来るでしょうか」とおっしゃるのです。

そして、懇願されるのが好きな人たちのいつもの口実ですが、一度、風邪気味なのを理由として持ち出しますと、「それでも、出来るだけ上手にお歌いになることですわ。貴女の困難が大きければ大きいほど、それだけお集まりの皆さんに敬意を払っておられることになるのです。斟酌の仕方を知らない人たちに囲まれているとでもお考えでしょうか。貴女が辞退なさるのは見せ掛けなのだとお考えになるような人がどなたか出ていらっしゃってもいけませんから、お歌いになるべきですわよ、あなた」とおっしゃったのです。

別の折、本心からですが、居合わせました一人のお嬢さんが私よりも歌がお上手だということ、そして、それゆえに、そのお嬢さんの前で歌う気にはならないということを口にいたしましたところ、「まあ」と、あの方が（片方の側に私を引き寄せながら）おっしゃいました。「これは自負というものじゃないかしら、ナンシー。願いを入れようとなさる貴女の主な動機は、まるで拍手喝さいを得ることだったみたいに映らないでしょうか。寛大な心の持ち主というのは、必ずしも自分の有利にはならなくとも、ためらうことなく長所を備えている人に優位を認めてあげるものなのです。でも、そうすることがその人の大きな手柄となるのです。この抜きん出て優れた方が不在だといたしまして、もしも貴女のお手本が広く行き渡るようなことになりますと、いかがでしょう、貴女の後で歌われるような方は果たしていらっしゃるでしょうか。他のどなたにいたしましても、貴女の引き立て役にしかならないことはご承知のはずです。本当に、貴女にはこういった些細な事柄におきましても、もっと重大な点でと同じくらいに、他のお嬢さんたちの上に立っていただかねばならないのです」とです。そんなふうにあの方はおっしゃってくださいましたが、恥じ入るばかりでございます。

あの方はごまかしと同様に、隠し立てもなさらない人でした。大変にお話好きでしたから、話題がどのようなものでありましても、あの方と三十分お付き合いをして、教訓も身につけずに立ち去るようなお嬢さんは一人としておりませんでした。でも、すべては心地好く心の中へ忍び込んだものでして、指図するような態度で与えられたものは一つもないのです。ですから、あの方は、情報のための質問をしておられるように見えながら、必要な教訓をさりげなく交えますから、教えを受けた人といたしましては、その考えは（一度頭に浮かびますと、教えを受けたその人のほうで磨きを掛けることも出来るわけで）本来自分から出たものなのか、それとも、優しい指導者から来たものなのか、決定し兼ねる状態に置かれることになるのです。

ほとんど指導も受けずに身につけられたものですが、あの方はデッサンの才能がおありでした。余分な時間をお持ちではありませんでしたから、大変上品な技芸ですけれど、その方面で抜きん出ますのに必要なだけ意を注ぐことはお出来にならなかったのです。それに、あの方はよく言っておられたのです。あまりにもたくさんのことを目指しているのではないかと心配になるけれど、何一つとして人並みなものがなくなってしまうのを恐れるから、とおっしゃるのです。

お年の割には、そして、機会の割には、あの方は並外れて優れた絵の目利きだったので

す。他のすべての点と同様、この方面でも、自然さこそがあの方の芸であり、あの方の芸は自然だった、ということなのです。絵を上手に描くこともお出来になりました。お祖父様は、こんな理由から、ご一族の肖像すべてをあの方に遺贈なさったのです。あの方の趣向には心を魅了するものがございました。鉛筆やペンのタッチ一つ一つが流麗さと軽やかさを兼ね備えていたのです。ただ、批評眼のほうが腕前よりも優れておりました。実技の面で秀でるほどの練習はなさらなかったのです。あの方もすべての点で秀でるわけにはまいらなかったわけです。ただ、総体的に見ますと、あらゆる事柄がその性質上必要としております点を、あの方はご存じだったのです。換言いたしますと、本来の在るべき姿を完全に把握しておられたということでしょう。

お嬢さんたちのために卑近な例を一つお示しいたしますが、ほんの子供さんの頃に、あの方は（学ばずして）次のような意見を述べておられたのです。太陽と月と星が一度に現れることは決してないので、従って、一枚の絵の中に出て来てはいけないということ。また、熊や虎やライオンはイギリス在来のものではなく、従って、イギリスの風景の中で場所を占めてはいけないということ。そして、これら森の略奪者たちは子羊とか子山羊とか子鹿と交わるわけに行かないし、トビやタカやハゲワシもハトやヤマウズラやキジとは連れ添うことが出来ないのだ、といったことです。

そして、あゝ、あの方はお知りになったのです。十九才にもならないうちに、命に関わる経験を通してお知りになったのです。これらの獣や猛禽のすべてにいたしましても、卑怯な残虐行為の点では男の人に敵わないのだということをです。それらの動物よりも遥かに許し難いことですが、動物が飢えと必要に迫られて殺すにすぎないものを、気紛れと遊び心で破滅に追いやるという、下劣で野蛮な、陰謀を巡らす破壊的な男にはです。

ご自分が身につけようとしておられました学問分野に通じている振りをしているだけの人につきましては、あの方も見破る術を心得ておられました。そして、専らそれは自然さというものが手掛かりだったのです。自然さの別名とも言えます〈適切さ〉こそは、正しい判断すべての基盤であるわけですが、あの方の掟に（すでに触れましたとおり）なっていたのです。とは申しましても、知識に通じている振りをする人々が、たとえその場に居合わせない時でも、ご自分のお言葉のせいで陽気な人たちの嘲笑の的になってはと、あの方はいつも案じておられたのです。

あの方を飾る素晴らしい美点のどれ一つをも持ち合わせないモダンな婦人たち、通常は無為に過ごしております日々の中で、また、何かに熱中し、夜と昼とが逆様になった状態の中で、自分たちの時間のすべてがそっくり衣装、訪問、カード遊び、演劇、オペラ、そして、音楽会に費やされておりますような新婦人たちには、私が書いてまいりました事柄や、さらに書き加えます事柄に驚いてもらうことにいたしましょう。また、より円熟した年齢でありながら、あの方の才芸のうちの一つさえも自慢することが出来ずにおりますのに、あれだけたくさんの才芸を身に備えた、あのように若い淑女がいたというのは信じ難いことだと、皆さんにはそのような見方をしていただくことにいたしましょう。

こういった人々というのは、あの方がどのように時間を使っておられたのかをご存じでなく、また、あの方は睡眠のことをよくこのように呼んでおられたのですが、「死の闇に包まれて」横たわっている時間でどのようなことが成し遂げられ得るのかについて、まったく見当もつかないような人たちに違いありません。

でも、いつもあの方がなさっておられた時間の配分のことに触れます前に、私がこれまでに存じ上げましたすべてのお嬢さんよりもあの方が優っておられました、もう一つの点につきまして、二言、三言述べさせていただきます。

刺繍のほぼすべての分野に亘りますあの方の腕前のことなのですが、ただ、この点に関しましては、おそらく貴方も、お手紙のどれかで触れられておりますのに気づかれるはずですから、その分控え目にお話しいたします。

お従兄弟さんのモーデン様に遺贈なさるあの品は、本当に素晴らしい作品なのです。実に見事な出来映えなものですから、あの殿方のお父様は、主に外国で暮らしておられたのですが、イタリアへ携えて行かれるため、しきりと（あの方の遺言書に触れられておりますとおり）それを欲しがっておられたのです。尼僧や世捨て人が誇りにしておりますような技芸のいずれかにつきまして、イギリスの婦人に抜きん出てもらいますためには、僧院に閉じ込めたりする必要はないのだということを、自国の名誉のため、外国の好事家に対して（と、その方はよく言っておられましたが）証明するためだったのです。

この種のお仕事でのあの方の仕事の早さには驚くべきものがございましたし、お仕事を進めます上で、あの方にはそれが大きな励みともなっていたのです。

あの方がそれをお許しになればの話ですが、モーデン様のお父様はひっきりなしに贈り物をなさるおつもりでしたし、その贈り物のことを、あのような至上の美点に与えられて当然な称賛の印であって、贈り物ではないのだと、お祖父様と同じように、よく言っておられたのです。

あの方の慰みごとについてですが、それがどのようなものであったかは、あの方が身に修めておられました嗜みや技芸からお分かりいただけましょう。モダンなご婦人たちの間で流行っております道楽のカードにつきましては、お好きであったなどとはとても申せません。また、これまでお話ししてまいりましたことから容易にお気づきでしょうし、これから付言いたしますことで一層容易にご了解いただけますとおり、カード遊びのための時間はあまりございませんでした。ですから、カードを求める声が上がりますようお促しになったことは一度としてございませんでした。そして、気難しさの誇りを招かずに済む場合には、何か楽しい話題を持ち出しまして、気づかぬうちに一座の人たちをカード遊びから遠ざけることがしばしばだったのです。

実際、何か新しいご本とか新しい曲が届きました折で、本を読んでいただくとかお話をしていただく、あるいは、鍵盤に触れていただくとか歌っていただくとかをお願い出来ます場合には、親しい人たちの中でも、カード遊びを提案する人はごくごく少数だったのです。ただ、集まった人たちの数が極めて多いために、年格好や好みが似通っております友人四、五人の集いの時によく見られます、あの好ましい方向へ会話が向かわない時、そして、より楽しい集いにする上で、一部の人たちを切り離すことがある意味で必要となりました場合、パートナー選びでご自分が選ばれますと、あの方も拒んだりはなさいませんでした。そして、カード遊びを楽しまれないのは、ただ好みから来ていることであって、カードを用います上品な遊びにつきましては、いずれもお手のものであることを証明してくださったのです。ただ、大金を賭けることにはいつも反対しておられました。わずかな額なら別ですが、すでに確実になっているものを偶然に委ねる気にはなりませんと、あの方はよく言っておられました。

別の折には、本来あの方の所有物であるものを、お友達が自分のものにしたがっているように考えますのは、お友達には大変失礼に当たるでしょうし、お友達の持ち物に対する権利を手中にしたいと願ったりいたしますのは、非常に下劣な話ですと、あの方は言っておられたのです。

あの方がよく話しておられましたのは、要するに、大金の動く賭博というのは浅ましい悪習であり、不道徳な行為であって、強欲さの所産であるし、隣人の持ち物を欲しがることを禁じている、あの戒めに真っ向から違反することになるという点でした。

あの方はとても仁愛の精神に富んでおられまして、ご家族の中では、その語の意味をご存じのただ一人の方でした。そしてこれは、慈善の対象として精選されました人々の、その心身両面について当てはまることだったのです。あの方は〈私の貧者〉と呼び習わしておられましたが、そのような人々の名簿をお作りになり、死亡とか、何か他の事由である人への支給が終わりますと、もう一人の人を名簿にお載せになるのです。それでも、予期しない場合、また、不慮の災難に備えまして、いつも積立金を用意しておられました。それに、その人たちを分類なさる際の慎重さの点では、あの方には手本とする人もいなければ、匹敵するような人もいなかったことは認められねばなりません。

特に慈善の対象となっておりましたのは、お年寄り、目の見えない人、足の悪い人、未亡人、孤児、不運な働き者たちでした。そして、ある者を学校へ通わせたり、身を粉にして働いているとか、生活に困っているとかいう他の貧民の子供たちを商人やお百姓さんの奉公に出すお手伝いをし、年季が明けた時に仕事に就かせてあげたりいたしますのが、あの方の大きな喜びだったのですが、これはちょうど、他の者たちに良書を与えたり、機会がありますと、近隣の感心な者の中でも貧しい人、そして、お父様の小作人の中の貧しい人々にその利用の仕方を指導なさったりするのが楽しみだったのと同じことです。あの方はよく言っておられましたが、貧しい人たちの身体上の必要を満たすのと同様、徳行の手段をも供給する慈善行為は、放蕩者の数から差し引く分を前途有望な人の数に加えるわけですから、社会に対して二重の恩恵を施すことになる、というのです。また、こんなこともよく言っておられました。何よりも相互に慈善を施すことを私たちにお求めになる神様の目には、これ以上に価値のある慈善行為が果たして存在するでしょうか、とです。

インド諸国で築かれた巨万の富を携え、定住のためイギリスへ来られた時、アントニー叔父様は、「この娘は慈善の行いによって、われわれ全員に祝福をもたらしてくれることだろうよ」とよく言っておられたのです。そして、皆さんがこの考えにかなり信を置いておられたことは、認められねばならないところでしょう。

でも、この点につきましてもっとお話しするには及びません。また、こんなに申し上げる必要もなかったのかもしれません。この方面の本分を全うされるあの方の素晴らしさにつきましては、遺言書にございます慈善関係の遺贈が十分な説明になることでしょう。

お食事につきましては、極めて節度のある人でした。あの方はよく次のように言っておられました。食べ物の量は質以上に顧慮されるべきですし、お腹一杯の食事は勉強や仕事には大敵だということ、また、頑丈に築かれました建物には、ほとんど修繕の必要はないのだ、といったことをです。

この節度を守った食事のお陰で、華奢な体つきをしておられながら、あの方は素晴らしい健康状態を享受され、いつも落ち着いていて元気が良く、勿論、朗らかにしておられた

のです。そして、あの方のご病気につきましては一つしか存じ上げませんが、それは、身を隠すもの一つとてない場所で覆いのないシェーズに乗っておられた時に、雹交じりの激しい雨のせいで引かれたひどい風邪によるものでした。高熱が出まして、危険な症状を伴っておりましたが、これは、疑いもなく、あの方の節制のお陰で軽減されたのでした。ただ、その症状のため、当時はあの方の大切さをご存じでしたお身内の方たちに、計り知れないほどの不安を与えることとなったのです(ア)。

読書の全般に亘りまして、また、読みましたものについての話し合いの中で、あの方は不備なところよりは美点を取り上げることのほうがお好きでした。そして、ほんの少しでも称賛すべきところを見つけることが出来ます場合には、著者と作品の両方を好んで褒め称えておられました。でも、美徳を称揚し、悪徳を顔色なさしめることだって出来ます一流作家の一部の者たちは、ただ理屈っぽくて興味を引かず、啓発的でもない話題につきましての、想像力だけによる作品に専念することがあまりにも一般的だと、あの方はよく嘆いておられました。そのようなものからは、有益な教訓とか手本とかは一切引き出すことが出来ないとおっしゃるのです。

でも、あの方は軽薄な作品、あるいは、下品な性質のものにつきましては、厳しく非難しておられました。若者の風紀を乱すとか、不道徳な観念を伴うとか、あるいは、宗教それ自体であれ、信仰を告白している者を通してであれ、宗教に害を及ぼす傾向のものについてですが、その作家がだれであれ、また、作品の出来映えがどれほど見事なものでありましても、このように非難をしておられたのです。著名なスウィフト博士のことをしばしば哀れんでおられましたが、汚れのない目の持ち主はその作品を覗き見ることを恐れ、また、汚れのない耳を持った人は、どのようなものであれ、その作品からの引用を耳にするのが怖くなるような、そんな具合に自らの素晴らしい筆力を用いているからだ、というのです。そのような作家は自分の才能に対して誠実でありませんし、その才能を授けてくださった神様への感謝の念にも欠けているのですと、あの方はよく言っておられました。そして、このような折には、そういった作家たちの妙味につきましても、酌量すべき点として認めようとはなさらなかったのです。逆に、人の心を改める力を十分に備えた者が、どのような場所においてであれ、自らの堕落した心を披瀝するというのは、その罪をさらに

(ア) 令嬢は苦難の時期にこの病を思い起こし、以下のような覚書を備忘録に載せているのである。

「不幸にもこの恩知らずな男性を知ることになりましたその二、三年前のことで、私が襲われました重い病の際には「その折に命を落としていれば良かったのにと、本当にそう思っております」、私のベッドの周りに愛しい親戚の者たちが集まりました。父が、母が、兄が、姉が、そして、おじ二人が、私の周りに跪いて涙を流しておりました。それから、私の回復を願い、天に向かって誓いを立てたのです。私のほうでも、嘆き悲しんでおります身内のだれか一人をお墓まで引きずって行くことになるのが恐ろしく、皆のためにも回復することを願い、祈りを捧げたものでした。あゝ、今回のような場合には、何を願うべきなのか、子を持つ親たちにどうしてそれが分かるというのでしょう。あの時、両親の祈りが届かず、私が召されておりましたなら、二人にとりまして、そして、私にとりましても、どれほど幸せだったことでしょうか。でも、今ではそのような気遣いからも解放されました。愛しい親戚の者たちすべてが今なお健在なのです。ただ、どの一人をとりましても(皆の考えからいたしますと、私の過ちは甚だしく邪悪なものだったわけです)、深く悲しむどころか、私の訃報に大喜びのはずなのです」とである。

重くするものであり、自分たちの優れた作品の影響力を弱め、片方の手で築き上げたものを、もう一方の手で切り崩しているのだと、あの方はそのように考えておられたのです。

あの方の言動のすべてには生まれついての寛いだ雰囲気と威厳とが伴っており、あの方を虚飾とか、虚飾を疑わせるものとかとは、はなはだ無縁な存在にしておりました。その結果、学のある女性に備わるものと遍く認められております、あの不面目な欠点についての咎めがあの方に向けられることは決してなかったのです。と申しますのも、あれだけ素晴らしいところをいろいろ身につけておられながら、あの方は口を開くことよりも、耳を傾けることのほうに熱心だったのです。そして、あの方の進歩が少なからずそこに由来しておりますのは、疑いのないところでしょう。

イギリス、フランス、そして、イタリアの詩人について造詣が深く、ラテン語の古典につきましても、その最良の翻訳を読んでおられましたのに、強靭な記憶力にすばらしく恵まれておられながら、お手紙の中でも会話の中でも、それらを引用したり繰り返したりなさることは滅多にございませんでした。主として慎み深いお気持ちからですし、また、先ほど触れました、あの虚飾の謗りを避けるためのことだったのです。

かつてワイアリーさんは、あの方についてこんなことを言っておられました。あの方はご自分の知識の蓄えをたっぷりとお持ちですし、「卵によって[あの殿方の常套的な言い回しです」鳥を見極めること」がお出来になることもあって、飾ることなく、人々や物事についての実に見事な所見を述べておられましたから、外部からの助けを受ける余地も、その必要性もなかったのだ、というのです。

でも、あの方のお振舞いや態度全般からいたしまして、ご自分については、どれほどその値があるといたしましても、あまり高い評価をしておられないのは明らかでした。と申しますのも、どのような話題であれ、強く感想を求められました時には、口になさって構わないと思われましたお言葉すべてが明瞭で分かりやすいものであるにも拘らず、いつも急いでお話を終えようとしているご様子だったのです。その理由は二つあるものと存じます。会話を独占して、他の人々の意見を伺う機会を失わないためですし、また、これがあの方のお言葉でしたが、おだてられて饒舌になり、その挙げ句には、話を切り上げる潮時を弁えている人が友人たちに対していつも持ち続ける、あの良い評価を台無しにしないためのことだったのです。結局、あの方が規則としておられましたのは、お話がひどく長いことへの不愉快さをぞんざいな態度によって示すような、そんな原因を聞いている人たちに与えるよりは、むしろ、もっと話してもらいたいと思ってくれている間に、聞き手の元を立ち去ることだったのです。

あの方独特の時間の割振りの仕方について知りたがっておられますが、これは、貴方ご自身にとっても驚異だとおっしゃる事柄、つまり、あのように年若い淑女が、あれほど多くの技芸をどのようにして身に修めることがお出来になったのか、そのことを説明する助けになりそうだとお考えでしたね。

前もって申し上げますと、あの方は幼時から朝の早起きには慣れておられましたが、優秀で、博学と申しても構わない女性、ノートン夫人の躾によるものでして、あの方の審美眼と嗜みの基礎が出来上がりましたのは、この夫人のお世話と知恵、そして、お手本のお陰なのです。そして、すでに名を挙げました聖職者たちの大変な援助を頂きましたし、素晴らしい才能に恵まれてもおられましたから、同年代の女性の大半を凌駕することになり

ましても、さほど驚くには当たらないというわけです。

私は今「女性」と申したでしょうか。この言い方ですと、男性には大変名誉な話になってしまいますわね。あの方が才能と努力だけで実現なさったものよりももっと立派な進歩を、自分は修養によって達成したとおっしゃることが出来るのかどうか、男性全員の中でも最も誇り高い衒学者さんに向かって挑んでみても構わないのですからね。でも、男女両方の知人につきまして、中には皮相な事柄で鼻を高くしている人もおりましょうが、感想を述べることの出来ます者すべてにとりましては、世間中を見渡しましても、十八才の淑女が二十五才の殿方よりも思慮分別を備え、話し合うに相応しい存在でありますのは、証明可能なことなのです。私自身が承知しております二十例のうちの十九の例で、この点は証明出来るのです。なのに、この哀れな自惚れ屋さんたちというのは、自分たちの受けた教育が授けてくれます利点をどれほど誇りにしていることでしょう。大学を出たばかりのそんな人たちの一人が、婦人の口にしました間違った言葉とか、発音の良くない言葉に対して蔑みの笑いを浮かべます姿は、だれもが目にしているはずです。婦人が伝えようとした意味は明瞭ですし、その感想も適切なものだというのにです。それに、その人自身のほうは、鈍くて進歩の遅い才能を骨折って磨くためのことですが、やむなく勉強させられました作家たちから借用したものを除きますと、反復するに相応しい文章一つとして口にすることは出来ないのです。でも、私もずいぶんと脇道へ逸れてしまいましたわね。

この素晴らしいお嬢様はよく話しておられましたが、早起きと、充実した長い一日を過ごすことによって、どれほどのことが成し遂げられるのか、考えてみても信じられないものがある、とのことでした。

次の点が付言されましても構わないでしょう。つまり、あまりにも多くの人たちが習慣にしているものですが、そんな生き方に則して計算なさったといたしますと、多くの人たちが二十六才で生きました年数よりも、あの方が十六才で生きられた年数のほうが、実際には多くなるということです。

あの方のご意見では、何かの規則に従って暮らしていない人、出来るかぎり時間を特定の目的や仕事に割り振ることのない人は、自分の時間を正しく使っていることにはならないというのです。

自ら課されましたこの教えに合わせ、二十四時間の通常の割振りにつきましては、ご自分のお好きなように任された場合のことですが、以下のとおりでした。

睡眠には六時間のみを割り振る

この割当て分を越えますと、頭の具合があまり良くないし、明瞭［あの方がよく言っておられましたのは、〈生気溌剌たる〉という言い方でしたが］でもないと、あの方はお考えだったのです。寝つかれない時には、早目に起き出すようにしておられました。また、冬季には、暖炉の用意をさせ、着火するために小蝋燭を点しておいてもらいました。使用人たちに面倒を掛けるのがお好きではないからですが、使用人たちの重労働や就寝時刻の遅さを考慮に入れる必要があると、あの方はよく言っておられたのです。

ご自分よりも使用人たちのほうを大事になさるのをお咎めしたことがあるのですが、あの方のお返事は次のようなものでした。「私には選択の自由がございます。だれがそれ以上

のことを望みましょう。自分を満足させるために、どうして他の人たちを虐げなければいけないのでしょう。自発性に委ねますとどれほどのことが可能になるか、貴女もお分かりでしょう。一方、強制いたしますと、軽い荷物も重くなってしまうものですわ」とのことでした。

朝の初めの三時間

は、通常、お勉強と控えの間でのお勤めで過ぎて行きました。そして、時折、睡眠を減らしました分がこれに加えられ、その時間でお手紙関係の事を楽しんでおられたのです。

家計の管理には通常二時間を割り振る

これは、必要に応じ、一日の様々な時刻に行われておりましたが、家政婦の勘定書一切が、お母様を楽にして差し上げるため、あの方の手を通っていたからなのです。と申しますのも、あの方は算術の四則を完全に身につけておられたのです。

刺繍、絵画、音楽等に五時間

この時間の中にあの方は、ご家族のために必要な針仕事についてですが、ご自分の召使とお姉様の召使への助力と点検のお仕事を含めておられました。お姉様というのが、先にも触れましたとおり、新しい考え方のお嬢様だったからです。また、リーウェン師の談話のための訪問もこの中に含めておられましたが、師とはお手紙でのやり取りもしておられました。お体具合の許します時には、あの尊いお方は、週に二、三回、この訪問によりましてご自分も楽しみ、そして、あの方を楽しませもしておられたのです。また、いつもあの方は、他のどなたとの約束よりも、師とのお付き合いのほうを好んでおられました。

最初の二回の食事には二時間を割り振る

でも、会話の様子とかお身内の方々からの希望で、あるいは、お友達とかお客様の突然の訪問のため、変更を余儀なくされました場合は、ためらうことなく応じておられたのです。そして、そのような折には、あの方の言い回しを用いますと、他に割り振りました時間から「借用」しておられたのです。また、この割当て時間を超過しないようにするのはとても難しいことが分かりましたので、あの方は

ディナーの席での会話にさらに一時間

を、必要のあり次第、あるいは、お身内の求めに応じまして、追加するとか削減するとかしておられました。でも、あの方もしばしば口にしておられましたが、この勘定を貸借のない状態に保ちますのは困難なことが分かりました。とりわけ、リーウェン師が食事に同席してくださる場合がそうでしたが、ただ、これは滅多にないことでした。と申します

のも、師は病弱で、食養生をしておられましたので、訪問なさるのは午後になるのが通例だったからです。

近くに住む貧者たちへの訪問に一時間

このうちの精選された人数の者たちとその子供たちに対し、あの方は簡単な指導と良書とをよく与えておられました。そして、これは毎日のことではありませんし、週に二回を越えることも滅多にございませんでしたから、一度に二時間か三時間をこの慈善のお仕事に掛けておられたのです。

残りの四時間

は、必要に応じまして、夕食、会話、あるいは、家族の皆さんのための夕食後の朗読に割り振っておられたのです。これだけの割当て分をあの方はご自分の基金と呼び、他の借方の支払いをいたしますのによく利用しておられました。また、この中には、訪問をお受けしたりお返ししたりする時間、ショーや見せ物などのための時間も含めておられたのですが、田舎暮しをしておりますと、これらは毎日あるわけではなく、六日のうち二日もというのは、娯楽のためだけにしては大変な割当てだと、あの方はよくそのように考えておられました。そして、一ヶ月に二日間か三日間の小旅行のためのものですが、この基金から時間をくすねることも出来ないようでは辛い話だと、あの方はいつもそんなふうにおっしゃっていたのです。

親戚の方々とか近隣のお嬢様たちはほんの少ししかあの方のお時間をいただいていないと、そのような言葉が出るようでしたら、次の点をお考えいただきましょう。二十四時間のうちの先の四時間に加え、針仕事に携わっておられる時間の大部分は、お仕事を進めながらお話をなさるのがあの方の常だったということです。それに、あの方がお知り合いの間で始められた習慣ですが、お嬢様たちは訪問の際、隣人らしく（冬の夕方などには特にそうでしたが）、しばしばお仕事を持参するようになっておりましたし、あの方の六人ほどの選り抜きのお知り合いの一人が、お仕事をしている残りの人たちのために交替で朗読をしていたのです。

以上が、あの方の意のままになる場合ですが、一週間のうちの六日につきましての通常の過ごし方でした。

週の第七日

につきましては、然るべき形でその日を守っておられました。また、その日の一部はしばしば慈善のお仕事に費やされましたので、近くに住む貧者への訪問に割り振られました時間は、時折この日から補充され、あの方の基金に追加されていたのです。

でも、これは申し上げておかねばなりませんが、お祖父様のご存命中に、一度に三週間か四週間、お祖父様のところの家政婦兼お客様になられました時には、おじ様たちのどちらかのお宅に行かれました場合にも同じことで、通常の時間の割振りは変更なさいました

が、それでも、事情の許しますかぎり、それに近づけることを心掛けておられたのです。

二週間かそこいらのことですが、あの方をお客様として迎えます幸せに恵まれました折にも、やはりご自分の規則を曲げてくださいましたが、私の至らない点や怠惰な習慣を大目に見てくださってのことに他なりません。と申しますのは、私もまた（大いに称賛しておりますお手本に恵まれていながら）多分に新しい考え方に傾いているからなのです。それでも、朝の起床に関しましては、このような先例に従い、夏の間はこれまでの非を改めておりますし、それによって見出すこととなりました健康面での利益につきましては、また、そうすることによって易々と、楽しく遂行出来るようになりました多くの有益な事柄につきましては、証言することも可能なのです。そして、いつまでも惜しまれてならないわけですが、あの方が亡くなられました後、あの方の会計簿の中で、次のようなメモを見つけたのです。「某日から某日まで、すべてを愛するハウさんのお宅での休暇とする」というものです。ご帰宅に際しましては、「某日、記帳再開」とあり、日付が記されているのです。その後は、それまでどおり、規則正しく続けておられました。

週に一度、あの方はご自分に対する収支の決算をなさるのが常でして、六日間に含まれます百四十四時間の中で帳尻が合いました場合には、そのとおりに記帳なさいました。もしも合いません時には、「慈善訪問の項目につき、斯く斯くの時間数を借方へ」といった具合に、借方分を次週へのツケとしておられたのです。また、他の項目につきましても、同じようにしておられました。

でも、あの方がいつも特段の配慮をしておられました点は、人をお訪ねになる場合であれ、訪問をお受けになる場合であれ、人前ではいつも、そのように詳細な帳簿をつけてはいないかのように、また、時々度を越してしまいますことに対して、自ら責任を負うことなどはないかのように、完全に寛いで、満足しておられる様子や、朗らかさをお見せになることだったのです。

他の人たちにとりましては困惑を招き、不必要とも映るこの規律正しい生活ですが、早朝から始めますことで、また、習慣にすることで、あの方には容易で楽しいものとなっていたのです。

正直なところ、あの方にもよくお話しいたしましたように、規律正しい生活のすべてについて、あの方には大層感心しておりましたが、たとえご褒美に全世界をいただけるといたしましても、このような生活に入りますことは、私には出来ない相談だったのです。

私の気性にはひどく短気なところがございまして、自分自身についての収支決算を自分で規則正しく続けるわけには行かなかったのです。あの方のご指導どおりに、過ぎ去った一週間を振り返りまして、自分を咎めなければいけないような、ひどく良くないところがございません時には、いわば一括勘定で私は満足していたのです。

と申しますのも、あの方は優しく、よく次のようにおっしゃってくださったのです。「私の行っておりますことをそっくり、他の人もおやりになる必要があるようには思いませんし、これは私自身についても言えることなのです。ただ、私にとりましては、このような帳簿をつけておりますほうが、放って置くのよりも楽しいわけですから、このように余分なことを続けましても宜しいのではないでしょうか。害となるような点も一切ございません。計算に意を注ぐ気持ちを維持してくれますが、これは、いずれそのうち、もっと重要な場面で役立つかもしれません。厳密な収支決算を行わない人たちは、どのような収支決

算であれ、長く続けることは滅多にないのです。帳簿をつけますために、もっと有益なお仕事をないがしろにするようなことは、私はいたしておりません。それに、時間に貪欲になりますことを教えてくれているのですが、時間というのは、私たちが貪欲になりましても赦していただけるたった一つのものなのです。何故なら、私たちがこの世で暮らしますのはただ一回きりのことですし、この世を去りますと、永遠の別れになってしまうからですわ」とです。

あの方のおっしゃるこれらの「介入」のせいで、時々はご自分の割当ての一部に食い込まねばならなくなるという、そんな緊急の状態を甘受なさって、あの方は次のように言っておられました。つまり、「郷に入っては郷に従え」という広く知られた教訓には良識が含まれており、礼儀作法にも適っているということ。また、美徳とか立派な習慣とかを危険に晒すことなしに願いを入れることが出来るような事柄の場合に、たやすく説得に応じるというのは、使徒にも似た美点だということ。何故ならば、より重大な件で心に留めてもらうためにですが、お友達の愛情を動かす目的で意向に従うのなら、その人は「すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです」(三四)という人物の手本を真似ていることになるのだから、とおっしゃるのです。また、これも疑いを入れないところなのですが、もしもあの方のお命が助かっておりましたなら、気立ての優しさや、喜々として神様を敬うお姿によりまして、美徳と信仰がとても素敵なものとして人の目に映ったでしょうから、あの方と言葉を交わすという栄誉に恵まれました人たちの考え方や態度に、あの方のお手本は少なからず影響を及ぼしていたことでしょう。

あゝ、ベルフォードさん、これ以上この話題について筆を進めることは私には出来ません。と申しますのも、別の件で会計簿を調べておりましたところ、非常に心の痛むメモに出会ったからです。紙の端ぎりぎりのところに、細いペンを用いまして、愛しいあの方の一番小さな字で書かれておりましたので、これまでは目に留まらなかったのです。左記のとおりですが、拝察いたしますに、記載されております日付に続く、何かの悲惨な時期に記されたものなのでしょう。そのきっかけをもたらしましたあの人非人を呪うためのものですが、罵詈雑言の一つもお教えいただければと思います。

四月十日　決算報告終わり。

私のこの世での希望と見込みのすべても一緒にお終いです　…

ヾ　　ヾ

ペンを手にいたしますが、呪いの言葉を口にいたしましたことへのお詫びのためではございません。今一度、私は神様にお願いいたします。私のため、あの男に復讐していただくようにです。そうです。私のためになのです。私こそが損失を被っているのです。あの方には得るところがございました。

あゝ、貴方はあの方をご存じではなかったのです。私ほどにお知りになることは出来なかったのです。あのように素晴らしい人は、いまだかつて存在したことがありません。大変に温かく、それでいて、とても冷静なお友達　…　私はそうなりたいと願っておりますのに、決してなることのない、そんなところをたくさん備えておられた人　…　あゝ、私

の支え、私の助言者、私の勧告者、私の指導者は逝ってしまわれました。永遠に逝ってしまわれたのですからね。

あの方は私に対し、光栄にも、ご自分の〈心の姉〉という名称を授けてくださったのです。でも、それはただ、私があの方に抱いております愛情（姉妹愛以上のもので、あの方のお姉様の愛情などははるかに越えるものです）、卑劣で汚らわしい行為すべてに対する憎悪、そして、美徳を愛する気持ちの点においてのみ言えることでした。何故なら、その他の点での私は、これまでにもお認めいたしましたが、気性には高慢で横柄なところがございますし、感情もとても激しい人間だからです。

要するに、あの方は私が存じ上げた中では最も完璧に近いお嬢様だったのです。ご自分が実践しておられない事柄を教訓として説くことは決してございませんでした。自らご教示なさった人生を送られたのです。過ちの影すらあの方のものとは言い難く、実質的な過ちというのは、あの方と血の繋がりがありますこと以外名誉となるものはないような、そんな人々のものだったのですが、あの方のほうはあくまでも謙虚で、柔和で、ご自分には厳しく、他人には寛大だったのです。

このようなお友達を、このような導き手を失うなんて　…　仮にも私の激しい言葉が正当化されるといたしますと、それはこのような想いが蘇って来る場合のことでしょう。と申しますのも、あの方が生きておられましたのは、ただ、私に自分の欠点を分からせてくださるためのことでしたが、でも、私がそれを克服いたしますまで生き長らえてはくださらなかったからです。克服すべく努力をする決心で私はおりましたのに　…

ですから、もう一度、呪いの言葉を口にさせていただきましょう。でも、激しい言葉や感情が再び勢いを得ております。また、どうしてそうならずにいられましょうか。

でも、無理やりこの話題から離れることにいたします。改めてペンを手にいたしました目的を見失ってしまいましたので。

A. ハウ

手紙　五十
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

十月十四日　パリにて

恐怖と威嚇とは
主人と同じ場所へ登る。かつ黒き不安は
真鍮張りの軍船を去ることなく、
また、騎士の後ろにも坐す(三五)。

英語のように表現力豊かな言葉の場合、自分の文章の結び、あるいは、序言として、ラテン語の断片を添えるような衒学趣味は大嫌いだし、我が週刊誌ならびに日刊紙のヘボ文士たちの間に見受けられるモットー好きの輩に対しても、俺は変わることなく批判者の立場を守って来たのだ。だが、ホラティウスのこの詩句は俺の事例に極めてよく当てはまる

ため、船上であれ駅伝馬車の中であれ、あるいは、夜の旅籠においてであれ、この詩句を頭から締め出すことは出来なかったのだ。次のような威勢の良い詩行で、ドライデンはうまいことを言っていると、かつて俺はそう思っていた。

人その思うところに従い、自らの運命を定む。
運命の女神は弱き者、意気消沈せる者を自らの下僕にするといえど、
勇者の威嚇を受けては、女神も奴隷と化す。
凡庸なる糸を女神が紡ぐならば、我は定めを変えんとし、
かつ、新しき紫の布にてさらに高貴なる機を飾る(三六)。

そして、こうだ。

女神我に向かい、矢筒のすべてを空にするとも、
我に魂ありて、大いなる盾のごとく、
すべてを受けてなお、さらなるゆとりを有す。
運命の我に与したるためしなく、我また運命の下僕にはあらず　…
魂を征服するものはなし　…　(三七)

だが、初めに引用した詩行には、細かに検討を加えるなら、騒々しいたわごとの他には何もないし、もう一方でも、詩人は真実を語っていないのだよ。何しろ、良心は魂の征服者なのだからな。少なくとも、俺の魂についてはそれが征服者なのだ。それに、俺は心が狭いなどと、だれか考えたことのある者でもいるというのかな。

ただ、こんなことになったのも、一部には、あの胸を打つ遺書と、亡くなってから届いた手紙とを熟読したがゆえの話なのだ。後者においては、俺に対する攻撃の陣形を整えるべく、何と夥しい数の聖句を並べ立てたことだろうか。しかしながら、ジャックよ、それら自体が証となるのではないのかな。二千年か三千年前にも、俺に負けないほどの悪党がいたということのだよ。そういうことなのさ。そして、それが俺にはなにがしかの慰めになっているのだよ。

だが、両方で表明されている彼女の寛大な心こそが、俺を最も苦しめるものなのだ。そして、今となっては、この世のいかなる方法をもってしても、彼女と伍することが俺には不可能になっているだけに、なおさら辛いのだよ。

もっと早くに便りをすべきだったな。二日間カレーをぶらついていたのだが、以前の旅行中の従者、ド・ラ・トゥールを雇うために書いた手紙への返事を待っていたのだよ。君も俺が口にするのを聞いたことがあるだろうが、利口だし、便利な男なのだ。奴を雇うことにし、現在は同行中だ。

当地には滞在せず、選帝侯の宮廷のどれかに向かうつもりでいる。俺の考えでは、ババリアの宮廷が最も長く俺を引き止めることになるだろうな。もしかすると脇道をして（どこであれ、脇道をすることが可能であればの話だ）、ドレスデンとベルリンの宮廷に寄るかも知れない。そして、君がウィーンからの俺の手紙を受け取ることも有り得ない話ではないな。それから、おそらく、俺はチロルを通ってイタリアに下ることになるだろう。そし

て、トリノ経由でパリへ戻るのだが、パリでモーブレーとターヴィルに会えたらと思っている。君についても、望みを捨てたわけではないのだぞ。

これは君に知らせた予定とは大幅に異なるものだ。だが、移動につれ、便りがあるものと期待してもらって構わない。それも、このルートを辿ると辿らないとに拘らずだよ。

サンタントワーヌ街の以前の下宿を押さえてある。旅行中も借りておくので、俺が戻る前に来てくれるのであれば、だれとだれであれ、君たちの二人を泊められるようにしておこう。そういう条件にしてあるのだよ。

シャーロットに一筆認めるが、そうすれば、身内の全員に一度に便りをすることになるわけだ。

是非とも、ジャック、そちらの様子ことごとくを滞りなく知らせてほしいのだ。とりわけ、貴公の改心の計画はどんな具合に進んでいるか、俺の不在中、モーブレーとターヴィルはどうしているか、妻を娶るチャンスが貴公に少しでもあるのかどうか［この点については特に聞きたいものだ。枷で拘束されるまでは、苦行は完了しないし、改心も確実なものにはならないと、貴公はそう考えているわけだからな］、ハーロー一族は贖罪の苦行をどう進めているのか、ハウ嬢は結婚したのか、あるいは、間もなく結婚するのか、正規の医者を解雇した今、あるいは、医者のほうから奴を見放した今、律義者のドールマンは例のもぐりの医者とはどう付き合っているのか、また、奴に全快の見込みはいくらかでもあるのか、といった点についてだよ。極めて詳細に頼む。きっとだぞ。何しろ、われわれが大切に思っている者たちに関わる出来事というのは、離れ離れになると、些細なものの一つ一つが興味の的になるのだよ。最後になったが、とぎれた話の筋道をつなぐ用意をすることだ。俺の願いを入れる気があるのならな。

貴公のラヴレース

手紙　五十一

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

十月二十五日　ロンドンにて

筆を執ることにするが、俺としては、不在の、遠く離れた友人のどんなに些細な頼みごとであれ、ないがしろに出来ないことを示すためだ。ただ、信じてもらえるだろうが、君の尋ねている話題に関しては、君がイギリスを離れてからのわずかな時間で、何か大きな変化などはあるはずもないということだ。とはいえ、一つ一つに答えることにしよう。先に挙げた理由からだよ。それに、君が触れている理由にもよるのだ。つまり、故国を離れている時には、些細な事柄や雑談ですら、友人から友人へ向けた場合には、また、友人についての場合には、そして、自分の敵と見なすほどにわれわれが重要視している者たちについての場合でさえ、好ましく思えるということだ。

そこで、まず最初は、君の言う俺の改心の計画についてだが、極めて順調に進んでいるように思う。君が似たような道を辿っており、そして、君にも同じことが言えたら良いのにと思うのだ。そうすれば、他の場合に君が身をもって知ることになるものよりも、はるかに大きな心の安らぎを見出すはずなのだよ。過去二、三年のうちにわれわれに対して行

われた大掃除のことを振り返る時、そして、今後ともなお起こりそうな事柄に目を向ける時、この身が安全だなどとは到底思えないのだ。われわれの同胞の多くの者を、永遠の破滅とは言わないが、この世での破滅へと急がせた、あの官能と欲望の光とは別の光によって、ここしばらく俺は導かれて来ているとは言いながらだよ。

結婚生活へ入ることを認めてもらいたいという俺の願望だが、これは極めて真剣なものなのだ。ただ、少しばかり保護観察の期間を過ごすべきだと思うのだよ。つまり、改心への決意を堅持することで、老齢ないしは病のために罪を重ねることが出来なくなる前に行いを改めるという、そんな潔い態度を備えた放蕩児が一人いたことを、愛し敬うことの出来る女性に、そして、その立派な手本によって俺の道徳意識を強化してくれる女性に確信してもらうことが出来るようになるまでの間だよ。

ハーロー一族は依然として悲しみに打ち沈んでいる。命あるかぎり、おそらくそのままだろうな。

ハウ嬢はまだ結婚していないが、間もなくのことと考えて然るべきところはある。光栄にも、令嬢とは文通をしているのだが、親交が深まるほどに、いよいよ令嬢の心の気高さには感服する次第だ。令嬢は自分が男性の半数よりも、そして、女性の大多数よりも優っていることを自覚しているに違いない。だから、生まれついてのせっかちで短気な気性に流されてしまうのだろう。だが、相手の男に遜ったところがあれば「また、傲慢な態度で強要されるのでもなければ、あれだけ歴然としている優越性に対して、脱帽しない者などはいないのだよ」、おそらく、令嬢も天晴な奥方になるだろうと思うのだ。

ドールマンのことだが、気の毒に奴は、相変わらずあのもぐりの医者を試し、望みをかけている。医者のほうは分別があって賢く、軽率だとか独断的だとか、あるいは、楽観的すぎるといったところはないから、奴の病状にその余地があればの話だが、奴のために力を尽くしてくれることを大いに期待していると（もぐりの医者や怪しげな特効薬を売りさばく連中のことは、概ね軽視しているのだが）、俺としてはそのように言わざるを得ないのだよ。理由はこうだ。その男は定期的に、休むことなく奴の世話をしているし、患者の容体の変化の一つ一つと新たな症状とを自分の目で見守り、徴候の変化に合わせて療法を変え、何百年も前に生きていたその道の先達によって制定された決めごとで自分を縛り付けるようなことはしないのだよ。気候や付帯的な事情と同様、生活様式が現在とは異なるように、病とその原因も違っていたわけだからな。また、報酬については、その日その日の往診料の形ではなく、（薬代としての最初の五ギニー以後は）患者の自覚する回復具合に合わせて受け取ることになっているからだよ。

モーブレーとターヴィルについてだが、その善悪はともかく、新たな光を点すとか、その光を追い掛けるとかするだけの知力を持ち合わせていない男どもなのだよ。そんな連中から、このわずかな時間でどんな新しいことが期待出来るというのだ。とりわけ、あらゆる企てごとの中心にいて、特に、連中にとっては魂でもあった、そんな君がいなくなった今ではな。それに、滅多に会わないのだよ、連中とは。察するに、連中は君がドイツから戻る前にパリに着いていることだろう。何しろ、君なしでは生きて行かれないのだ。それに、最後の夜の集まりの際には、連中を楽しませると同時に、俺の心配の種となったわけだが、そんな陽気さ回復の見本を君は連中に示したわけだからな。

俺の心からの希望としては、貴公のコースをピレネー山脈の方へ向けてもらいたいとい

うことだ。そうしてくれるなら（貴公の旅で最も観察に値するものについての報告を、従姉妹のシャーロット嬢に書き送ってくれるとしてだが）、貴公の手紙の写しを俺のほうから要求することになるだろうな。俺には奇妙だよ、貴公がそうしようとしないのはな。その話題は貴公自身にとってと同様、俺にとっても目新しいものになるはずだからな。

貴公のベルフォード

手紙　五十二

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

十月十六日（新暦二十七日）　パリにて

ちょうど今手元に届いたジョゼフ・リーマンからの手紙のこともあるので、十四日（新暦二十五日）付の前回の手紙の続きを書くことにする。あいつは良心に苛まれているのだよ、ジャック。それで、奴が言うには、自分がこれまでその実行手段になっていたのではないかと、また、さらに今後もそうなるかもしれないと恐れている悪事のことで、昼夜の別なく、心の休まることがないというのだな。「神の御心に適うなら、そして、俺の意向に沿うなら」というわけだが、俺の「ご尊顔を拝する」ようなことがなければ良かったと願っているのだよ。

で、奴個人に関して、現在の心配の種は一体何だというのかな。他でもない。ハーロー家の者たち一人残らずから、とりわけ、俺への任務が許す範囲で精々忠実に仕えた当の相手から受けている、冷遇と軽蔑だというのだよ。そして、奴の言い草では（ガキの頃から頭の弱い男だったわけだが）、俺に仕えることは、長い目で見るなら、両方に仕えることなのだと、いつも俺が奴に信じ込ませていたというのだな。ただ、先の点と大切な令嬢の死とは、仮に自分がマタイ・サレム(三八)の年齢まで生き延びるとしても、決して拭い去ることのない悲しみだと断言している。「たとえ」そして「どれほど」自分が「丸一ヶ月」生き長らえはしないことを確信しているにしても、というのだよ。奴は奇妙なやつれ方をしており、胃袋の具合が以前とはまったく違うから、なのだそうだ。それに、ベティも（今では奴に可愛がってもらっているのだが）ひどく不機嫌で無視の態度とのことだ。だが、有難いことに、女のほうも罰が当たって、哀れな状態なのだそうだ。

ただ、今この時に我が輩を煩わす主なきっかけとなっているのは、はなはだ大きなものだとはいえ、単に奴自身の悲しみだけではない。やがて俺に降り懸かるやもしれない災いを防ぐためでもあるというのだ。それというのも、保証しても構わないとのことだが、俺に対して自分の思いを通すべくしっかりと覚悟を固め、モーデン大佐が皆のところを出発したからだというのだよ。それに、奴が十分確信していることなのだが、大佐は、自分が俺の心臓の血を手にすることになるか、それとも、俺が大佐のものを手にすることになるのか、いずれかに覚悟を決めたとか、何かその手の深刻な脅しの言葉を口にし、誓ったというのだな。そして、一族全員がそれに大喜びであり、俺が生還しないことを願っているというのだよ。

こんなところがジョゼフの手紙の内容だ。モーブレーからも一通届いており、同じ趣旨の言及がある。それに、今思い出してみると、一緒に過ごした最後の晩のことだが、俺が

フランスとイタリアへではなく、マドリードへ向かうよう、君はずいぶんしつこく要求していたよな。

君に頼みたいのは、次の急送便でだが、この点に関して君の知っているところ一切を正確に知らせてほしいということだ。

俺は脅されるのには我慢ならんのだよ、ジャック。また、だれの目にも俺が卑劣に映ってしまうような、そんな大きな態度を、俺が知るに至った場合にはだが、何人に対してであれ、俺のいないところで当然のように取らせるつもりもないのさ。俺のことで友人に苦痛をもたらすような態度はな。その人物を避けるため、俺が意向や計画を変えるよう、友人たちに願わしめるような態度だよ。こんな卑しむべき条件で生きてゆくことに、この俺が耐えられるとでも思うのかな、君は。

だが、大佐の目的がそのようなものであるのなら、どうして俺がイギリスを去る前に知らせてくれなかったのだ。俺が王国を離れたのが分かるまでは、心を固めるわけに行かなかったというのかな。

大佐の宛先が分かり次第、一筆認め、彼の目的を確かめることにする。こういった場合には、どっちつかずの状態には耐えられんからな。明日には行われねばならない厳粛な事柄というのは、結婚であれ縛り首であれ、俺としては今日中にやってもらいたいほうなのだよ。変わりようもなければ確定しているわけでもない場面を思い巡らしていると、俺の心は苛立たしさに疲れ、うんざりしてしまうのだ。十五分間で決着のつきそうな出来事を予想し、二十日間もくよくよ考えるというのは、嘆かわしい話だな。

大佐がパリに来れば、たとえ俺が旅に出ていても、俺の下宿を見つけるのは簡単至極なことだ。同胞の誰か彼かに毎日会っているし、ここで様々な者たちをもてなしているからな。オペラや芝居見物にしょっちゅう出掛けているし、宮廷や公の場すべてに顔を出してもいるのだよ。それに、この街を去る時には、イギリスとかどこか他の国からの手紙を折にふれ転送してもらうよう、宛先を残して行こうと思うのだ。彼の意図がジョゼフ・リーマンの言っているとおりのものだと確認出来れば、俺はここに留まることにする。あるいは、彼がどこにいるとしても、その道程を短縮してやるつもりなのだ。

この愛しい令嬢のことで、俺はどうしても後悔の念を払拭することが出来ずにいる。大佐と俺とが出会うことになるとしても、彼が俺に侮辱を加えたためしはないし、従姉妹の思い出を大切にしているわけだから、われわれは、その争点に関しては、同じ気持ちで相見えることになるのだ。そして、それは、君も知ってのとおり、よくあることなどでは決してないのだよ。

要するに、俺が非道の振舞いをしたことに関しては、彼に負けず劣らず、俺も確信しているし、同じように後悔してもいるということだ。ただ、非難に値することをどれほど自覚しているとしても、この世のいかなる人物からであっても、脅しを受けて黙っているつもりはないのだよ。

さらばだ、ベルフォード。誠意を見せてくれ。俺のことを大事に思うなら、言い逃れは一切許さないぞ。

貴公のラヴレース

手紙　五十三

ベルフォード氏からロバート・ラヴレース氏へ

十月二十六日　ロンドンにて

親愛なるラヴレースよ、下劣で偽善者で無知なジョゼフ・リーマンによって言及されたような、そんな粗野な言葉でモーデン大佐が君を脅したとか、君の後を追うつもりでいるとかというのは、いずれにしても俺には考えられないことだよ。あいつのような階級の人間の言葉であって、紳士のものじゃないし、確かに、モーデン大佐のものではないな。君も気づくことだろうが、ジョゼフのほうでは、その手の言葉を大佐が口にしているのを耳にした、などとは言っていないのだよ。

君のために、また、彼自身のためにも、そして、その話題に関し、彼と同様に俺に対しても向けられた、あの素晴らしい令嬢の命令のためにも、俺は是非とも大佐の真意を探りたいと思っていたところだ。大佐は（君もそれを不思議とは思わないだろうが）極度に心を動かされており、あの時には胸中を明かすのに憤りの言葉を用いたことを認めているのだよ。かつて、彼は俺に向かって次のように話したことがある。彼の最愛の従姉妹の一件が「世にありふれた誘惑事件」であって、彼女自身の騙され易さとか心の弱さとかが彼女の堕落に一役買っているというのであれば、彼にも君を許すことは出来ただろうというのだ。しかし、多くの言葉を連ねて請け合ってくれたのだが、彼は何ら決意を固めるには至っていないし、一族の者たちに対して、復讐に立ち上がらざるを得ないような形での意思表明もしていないとのことだ。それどころか、彼も認めているわけだが、お従姉妹さんの勧告は、これまでのところ、そうあって然るべきと俺が望んでいるような効果を、彼に及ぼしているというのだよ。

彼は君の一週間後に国を出た。別れを告げに来た時には、次のように話していた。目的はフィレンツェに赴くことで、あちらでの身辺整理をしたいとのことだった。その後イギリスに戻り、余生をこちらで送るというのだ。

君と彼とが出会うようなことになれば、何か不幸な事態が生じるのではないかと、本当に心配だったのだ。また、フランスへの帰途、君がイタリアに、そして、おそらくフィレンツェに寄るつもりでいるのは分かっていたので、スペインの宮廷を計画に含めてくれるよう、君を説得したいものと切望したわけだ。今も気持ちは同じだよ。それで、そうするよう説得に応じてもらえないのであれば、たっての願いだが、帰途、フィレンツェとかレグホンは避けてもらいたいのだ。両方とも君はこれまでに訪れているのだからな。少なくとも、決闘の申し込みが君のほうから出ることのないようにしてほしいのだ。

主人たちの大砲をそっくり本人たちに向けさせ、また、互いに砲火を浴びせ合い、君の陰険な目的にとって有利となるような機会を提供した張本人、このジョゼフ・リーマンが悪魔の手先となり（知らず知らずのうちにでもあるが）、君に対する連中全員の恨みを晴らすようなことになるなら、俺にとっては深刻な問題となるだろう。というのも、たとえ君が大佐を打ち負かすとしても、災いはそこで終わるのだろうか。今君の胸にある自責の念にさらに後悔の思いを加えるだけの話だよ。対決は死をもって終わるに決まっているのだからな。俺は確信しているのだが、彼が君の手に命を委ねるようなことはないと思うからだ。それに、ハーロー一族のほうでは、法的手続きをとって君を告訴するだろうな。君は

連中を憎んでいる。そして、連中は彼の死によって得をすることになるだろうし、君が死ねば大喜びなのだよ。それに、君はもう十分に悪事を働いたのではないのかな。

それゆえ、君がこの紳士を避ける決心でいる旨を耳にするという満足感を、俺に（そして、俺を通して君の友人全員にだが）味わわせてほしいのだよ。時がすべてを克服するだろう。君の勇敢さを疑う者など一人としていないのだ。また、君の計画が説得によって変更される点についても、世間に知られることはないのだよ。

ハーローの息子は君に釈明を求めると言っている。これは、モーデン氏があの一族のために喧嘩を買って出たのではないことの明白な証拠だよ。

モーデン大佐を別にすれば、だれについても、一切心配はしていないのだ。こんなことを言ったのでは、俺の希望を入れてくれるよう君を説得するための手段とならないことは分かっているのだが、この紳士が腕の立つ剣の使い手であると、俺は十分に確信しているのだ。また、腕が立つのと同じく、冷静で落ち着いているのだよ。だが、これは付け加えておこう。俺が命を惜しむ場合、決して一戦を交えたくない相手としては、君以外では彼がその男ということになるだろうな。

求めのあったとおり、君には極めて率直に、本心を話して来た。言い逃れを目指しはしなかったのだ。君のほうで大佐をつけ狙ったりしなければ、大佐から君を狙うことはないだろう、というのが俺の意見だよ。だが、もしも君が狙えば、彼も君を避けたりはしないはずだと俺は確信している。

重ねて勧告させてもらうが［君を愛していればこそなのだ］、今回の件での君自身の罪を弁え、再び加害者にはならないようにすることだ。君と決闘をした場合だが、大佐ほどの勇敢な男が斃れてしまうというのは、残念な話だな。一方、準備もなしに、そして、新たな暴力行為に関わって、君があの世に赴くというのも、恐ろしい話だろうな。さらに言えば、君の主な手先であるあの二人が迎えた死の中に、君は見ないのだろうか。「汝を責める壁の上の書き物」(三九)をだよ。

この機会に接し、熱意に駆られるあまり、反復の愚を犯すかもしれない。実際、この件にはどのようにけりをつけたら良いのか、分かり兼ねているのだ。だが、君自身の後悔の念や罪の自覚に加え、俺がこれまで筆にしてきたことをもってしても君を説き伏せるには至らないようであれば、今後さらに勧告する事柄すべても、効果はないだろうな。

それゆえ、これにてお別れだ。貴公が過去を悔いてくれるよう、また、新たな暴挙によって貴公の苦しい思いが一層募り、将来の望みを圧し潰してしまうことのなきように、というのが俺の祈念するところだ。

貴公の真の友
ジョン・ベルフォード

手紙　五十四
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

十一月十一日（新暦二十二日）　ミュンヘンにて

君の手紙をたった今受け取ったが、ちょうどウィーンに向けて出発しようとしていたと

ころだったのだ。
　モーデン大佐回避のためのマドリード行き、あるいは、ほんの一歩でも経路を逸れることについてだが、そんなことをするくらいなら、この身の破滅を願うよ。俺のことをそれほどの卑劣漢とは、君も思うまい。
　つまり、彼が俺を脅したことは君も認めているわけだよ。ただ、粗野な、紳士らしからざる言葉でではないとのことだがね。彼が紳士らしく脅したのであれば、俺もその脅しに対しては紳士らしく立腹することにしよう。しかし、いやしくも俺に隠れて脅しを掛けたというのであれば、名誉を重んじる人間の仕業ではないな。面と向かってであれ、あるいは、ペンとインクを用いてであれ、こちらからどう話し掛けるべきか、その仕方を承知しているような相手に対しては、それがいかなる人物であれ、脅しを掛けたりするのは潔しとしないのだよ、俺は。
　俺の罪、壁の上の書き物、俺の手で彼が最期を遂げた場合の法的手続きによる告訴に関する君の言及、また、彼の腕前、冷静さ、勇気など、腰抜けの吐くその種のたわごとについてだが、一体君は何を言いたいのだ。まさか、こういった仄めかしが、俺の手とか心とかの勢いを弱めるとでも思っているのではあるまい。お願いだ。以後のいかなる手紙においても、この手の世迷言は御免蒙りたいものだな。
　君が会った際には、彼は何らの決意にも至っていなかった、とのことだな。ごく早いうちに、彼はどちらかに決断を下さねばならないし、また、そうするはずだ。何しろ、前回の俺の手紙への君のこの返事を待つことなく、昨日、彼に手紙を出したのだよ。そうせずにいられなかったのだ。どっちつかずの状態で（あの手紙でも話したが）暮らすわけには行かなかったのさ、俺としてはな。手紙の宛先はフィレンツェにしておいた。俺の身の安全に関して、友人たちにどっちつかずの状態で日を送らせることも出来なかったのだ。だが、極めて穏やかな言葉で表現したから、彼に選択の自由は十分あるのだよ。手紙をあの意味合いで受け止める場合には、彼のほうから挑戦してくることだろう。つまり、受け止めるのを敬遠しても立派に面目の立つような意味合いでだよ。また、そうするようであれば、彼にとっては、悪意と復讐心とが支配的な感情であったということ、そして、彼は身辺整理をした後、君の言い方だが、「決意を固める」つもりに他ならなかったのだということを証明してくれるわけだよ。だが、われわれが対決するとしたら［彼の立場で、丁重とはいえ、このような手紙に接した場合には、俺が何を選ぶかは承知しているからな］、彼の言い分のほうが劣り、俺の言い分が優っていることを願うのだ。俺が彼の手で斃るようなことになれば、彼にとっては快心の復讐というものだろう。だが、彼の命を奪って、俺にはどんな利得があるというのだろう。
　彼に送った手紙の写しを同封しておこう。

∴　　∴

　より冷静な折に君の手紙を読み直してみると、君の友愛の情、そして、善意に対し、礼を言わずにいられないのだよ。われわれが知り合った最初の瞬間から今に至るまで、君に対する評価が見当違いに思われたことは一度としてないのだ。少なくとも、君の意図に関してはな。しかしながら、俺と我が最愛の者との間で演じた貴公の役割について、演技過

剰や演技不足に類したヘマをたっぷりとしでかした点は、貴公も認めるだろう。だが、貴公は本当に律義者だし、誠意溢れる心温かな友人だよ。今目の前にある貴公の手紙を受け取るまで、フィレンツェには書き送らずにおけば良かったと、そんな気持ちにさえなるのだ。しかし、発送してしまったのだ。放っておこう。彼が和平を望み、暴力沙汰を避けたいのであれば、前者を受け入れ、後者を忌避する機会は十分にあるのだよ。嫌だというなら、運命に従ってもらうまでの話だ。

だが、それはともかくとして、何とか手立てを講じて、ハーローの息子に［あいつまで脅しを掛けてくるというのだからな］知らせてもらいたい。遅くとも来年の三月には、俺が帰英するということをだよ。

ここババリアの宮廷というのは、華麗で上品な宮廷だ。とはいえ、俺の手紙がフィレンツェで大佐の手に届くかどうか、定かではないので、ここを辞去して、予定どおりウィーンに向かうことにするが、彼からの手紙とか伝言とかは、どのようなものであれ、俺に宛ててあちらへ届けてもらうよう、手配をしておくつもりだ。そういったものが届けば、俺もすぐにこちらへ戻ることになるだろう。あるいは、ご招待にあずかるいずれの土地へも赴くことになるのだよ。

シャーロットに一筆認めるので、友人全員に宜しくと述べた上は、付け加えることとしては、ただ、心からこう記すだけだろうな。

そっくり君のものたる
ラヴレース

ラヴレース氏からウィリアム・モーデン氏へ
［前掲の手紙に同封されたもの］

十一月十日（新暦二十一日）　ミュンヘンにて

拝　啓

脅迫的言辞をいくつか私に投げ掛け、それを適切な処置と考えておられる由、耳にいたしまして、はなはだ驚いている次第です。

素晴らしきことこの上ない女性に加えました不当な仕打ちゆえに、私は十分なる罰をこの心中に受けたとお考えいただければ、また、一つの愛に熱烈に関わっております二人の人物が（とりわけ私は、力の限りを尽くし、その不当な仕打ちを償いたく思っていたのです）、友好的とは言わないまでも、次のような間柄で生きることが可能であったならば、私としては喜ばしく思っていたことでしょう。つまり、聞き咎めるだけの気迫がないのであれば軽蔑されても仕方がないような、陰で投げ掛けられた脅しを耳にする苦痛は、どちらの人間も強いられることがないという間柄でです。

ところで、私の耳にいたしました事柄の因って来るところが、単に気性の激しさゆえのことであるとか、あるいは、他のあらゆる損失の中でも私にとって最も嘆かわしい損失を被って間もない頃に生じました、突発的な激情によるということであれば、貴方をお許しするばかりか、その点をお褒めもいたしましょう。しかし、どのようなものであれ、それ以外の理由で私と対面なさる決意を本当に固めておられるのであれば［これは、しかしながら、正直に申しまして、私の望むところではありません］、その障害となるような振舞い

は大いに咎められて然るべきでしょうし、また、他のすべての紳士に対してと同様、貴方に対しても保持したいと考えております品性の点からいたしましても、はなはだ相応しくないことになりましょう。

本状がいつお手元に届くのか、定かではありませんので、私といたしましては、ウィーンへ向けて明日出発いたしますが、あの都市の郵便局留めの書状、あるいは、紹介状をいただいておりますヴィンディスグラーツ男爵気付（ファヴォリータ宮内）宛のものは、いずれも私の手に届くことになっております。

さて、私がこれから言明いたします事柄に不当な解釈を行うには、あまりにも心の広いお方であることを確信しつつ、そして、あらゆる者の中で最も愛しい者が貴方に対し、また、貴方との縁故関係に対して抱いておりました高い評価を承知の上で、躊躇なく以下の点を保証させていただきましょう。つまり、最も好ましいご返礼といたしましては、モーデン大佐が、この私と、他のいかなる関係にもまして、友好的関係となることのほうを選んでくださることなのだという点をです。

氏を心より賛美する者、そして、氏の謙虚なるしもべ

R. ラヴレース

手紙　五十五

ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

十一月二十八日（新暦十二月九日）　リンツにて

現在、モーデン大佐と落ち合うべく、トレントへ向かっているところだが、前回同封した手紙に対する彼の返信に従ってのことだ。プレスブルクに滞在していて、他のハンガリーの都市をいくつか訪ねるつもりでいたのだが、まず先にウィーンへ引き返してみたところ、そこで彼の手紙に出くわしたというわけだよ。手紙は以下のとおりだ。

十一月二十一日（新暦十二月二日）　ミュンヘンにて

拝　復

ご書状は私が到着する四日前にフィレンツェに届いておりました。

ご厚意に相応しくない人間と映ることのなきよう、翌朝早速にこの街へ向けて出発した次第です。この宮廷の洗練ぶりが、ご自分の快楽のみを追い求める紳士のお心を、お気持ちの向き以上に引き付けないものでもあるまいと思っていたのです。

しかしながら、当地にて貴方を見つけ出します希望は挫かれましたゆえ、次の点をお知らせしておきますのが私には似つかわしいことと存じます。つまり、貴方ほどの気概ある人物に高く評価されたいとの思いが極めて強く、私のような立場に置かれました場合、ラヴレース氏も（このような要請を受け）行われるはずの選択をいたしますのに、一瞬たりとも躊躇するわけには参らないということであります。

永遠に愛しい私の従姉妹に対する貴方の仕打ちにつきまして、あらゆる機会に、それに相応しい触れ方をしてまいりましたことはお認めいたします。そうせずにいたならば、そ

れは極めて驚くべきことであったでしょう。また、貴方に関しまして、その場におられないという理由だけで私の唇を離れました言葉は一つとしてないのだという点を、ご納得いただきますのが（釈明のための素晴らしい機会を今お与えくださったことでもあり）私の義務となりましょう。従いまして、ご指定のとおり参上いたします旨を、そして、たとえ地球の果てでありましてもそのつもりでおりますことをお知らせする次第です。

当宮廷には数日の間逗留することになりましょう。宛先は当市のクリエンフルト氏気付としていただけますならば、滞在中と不在中とに関わりなく、貴方のご命令は安全かつ速やかに、私の手元に届くことになっております。

貴方のこの上なく謙虚なるしもべ

Wm. モーデン

ご覧のとおりだよ、ベルフォード。申し出た面会を即座に、熱さえこもった表現で受け入れたところからして、大佐は「覚悟が出来ていた」ということだ。それに、この手の問題というのは、俺の身の安全のことで友人に苦痛を与えるとか、あるいは、他の人間が少しでも俺に反目していると思った場合にはきっとそうなるに違いないが、俺自身が宙ぶらりんな状態を続けることより、決着をつけてしまうことのほうがはるかにましではないのかな。

俺の返答は次のとおりだ。

十一月二十五日（新暦十二月六日）　ウィーンにて

拝　復

ただ今、お手紙を拝受いたしました。予定いたしておりましたハンガリーへの旅を中止し、早速ミュンヘンへ向け出発いたします。そちらでお目に掛かれない場合には、トレントへ向かうことにいたします。この都市はイタリアの国境近くにありますので、トスカナへの帰途、貴方には極めて好都合かと拝察する次第です。十二月三日（新暦十四日）、彼の地にてお会いしたく存じます。

当方はフランス人の従者一名およびイギリス人の従僕一名のみを同伴いたします。その他の委細に関しましては、光栄にもお目に掛かりました際に調整出来ましょう。とりあえずご連絡まで。

貴方のこの上なく従順なるしもべ

R. ラヴレース

ところで、ジャック、俺はこの出会いの一件に何の懸念も抱いていない。それに、彼が俺を狙っているのであって、俺が彼を狙っているのではないと言って構わないだろう。従って、結果についての責任は彼に取ってもらうということだな。

こんなことよりもはるかに俺の心に掛かっているのは、女性の中でも抜きん出て優れた者に対する恩知らずな振舞いだ。計画的な忘恩の所業だよ。ただ、その間ずっと、彼女の素晴らしさを認め、崇拝出来る立場にあったのだ。若い頃から吸い込んで来た、女性を劣ったものと見る考え方にも拘らずだよ。

だが、この令嬢は女性の立派さを世に知らしめたのであり、今や俺に対して、光輝燦然

たる形で、その値打ちを高めてくれたのだ。ただ、百度は口にし、筆にもしてきたことだが、このような女性が他に存在し得ないことは確かだな。

しかし、彼女が逝ってしまったという点での俺の損失は、他のだれのものよりも大きいのだし、彼女はこの世のだれよりも俺に近い間柄であり、かつては、彼女自身がそうなることを望んでいたわけであるから、とんでもなく傲慢無礼な話なのだよ、この世のだれであれ、俺に対して彼女の恨みを晴らそうというのはな。楽しかったことだろう。幸せだったのだろう。すこぶる幸せだったろうな、俺様も。そうしていて当然だったわけだが、このようにご贔屓に与った栄誉を大切にする術を弁えていたならな。

そこまで俺自身のものとなっていた令嬢に対する俺の振舞いについて、厚かましくも釈明を求めようとする大佐のこの過剰反応を、俺はさらに重大なこととして受け止めるつもりだ。近づきつつある面会の場で、彼女とあのように近い関係にある人物、そして、彼女の思い出に敬意を表し、かつ、公正に扱おうとしている人物を前にして情け心が生じ、そうでもなければ得られるはずのない有利な立場を、彼に与えることになってはいけないからだ。というのも、あれだけ彼女に重んじられていた男、また、そうされるのが当然至極な男を救うため、技巧に頼りたくなることは、そして、脅しを受けた人間としての怒りに流されるのを避けたくなることは、俺としても承知しているからだよ。また、ただこの点においてのみ、俺は彼の腕前と勇気とを遺憾に思うのだ。我が身を守るために、すでに長くなり過ぎている勘定書に一項目付け加えざるを得なくなってはいけないからだよ。

∴　∴

まったくだよ。まったくの話、ベルフォード、俺はこの上なく惨めな存在だし、最後の最後までそうなのだろう。この気高い寛大さ……何故に貴公は俺の懇願する手に握らせたのだ。彼女の遺書の写しをだよ。死後送付の手紙を送ってよこしたのは何故なのだ。俺がしきりに遺書を見たがっていたからといって、どうだというのだ。貴公は知っていたのだよ［俺こそ知らなかったがね］。その両方がどのようなものなのかをな。また、俺の意向に沿うのは残酷な話だということもだよ。

仮に二十人に順繰り出会うとして、モーデン大佐二十人との決闘も、俺にとっては何事でもない。我が身の安全に関して言えば、一瞬の憂慮さえもたらしはしないだろうな。だが、あれだけ優れた美点の持ち主に対する恩知らずな振舞いは、俺にとって、永遠に呪いの種となることだろう。

彼女が俺にとってハウ嬢のような存在で、俺をまるでヒックマンのように扱っていたのであれば、復讐への誘惑があったことになるし、政策的にも（夫となるつもりでいたわけで）、彼女を謙虚にさせようとする試みは正当視されていたかもしれない。しかし、名誉とか美徳とかの要請で気力を振るわねばならない場合には、いつだって彼女は真の女丈夫だったが、その気性はあくまでも従順で温和なものだったのだ。

俺の幸せを邪魔したものといえば、他でもなく、俺の忌まわしい企みの数々だけなのだよ。貴公は覚えていないかな。俺が最初から繰り返し繰り返し、彼女の燃え上がろうとする炎に冷水を注いできたことをだよ。彼女を手中に収めることとなる前の話だが、乙女心の繊細さや子としての務めから彼女が俺に与えようとした差止め命令を、卑劣にも、そし

て、恩知らずにも、彼女に向けてお返しすることによってだよ(ア)。

彼女は俺に語っていなかっただろうか。また、語っていなかったとしても、俺は承知していなかっただろうか。「結婚の相手に考えている男に向かって、気取った態度や暴君のような振舞いは彼女には出来ない」(イ)ということをだよ。彼女が一度俺を咎めたように、俺は知っていたのさ。彼女を父親の屋敷から連れ出した時以来、「俺の前途には平坦な道が開けている」(ウ)ことをな。彼女は本心を明かしていたのだし、それを知って俺は喜び勇んだのだが、あの時以来、「俺は彼女の魂を百度も宙ぶらりんな状態に追いやっていた」(エ)のだよ。愛らしい蕾がほころび、開花するのを俺が容認していた場合にはだが、愛情と慈しみの心とが主役の座に着くことになるような、そんな心を彼女が備えていることを不信心者に納得させるためには、例のトコン剤による試みだけで十分だったのだ(オ)。

かつて話してくれたことがあったが、「俺が疑問の種を蒔いたりしなければ」、彼女のほうで「よそよそしく振る舞ったりはしなかっただろう」(カ)というのだよ。それに、彼女は貴公に告白していなかったかな。「以前には、愛情をもって俺に接することも可能であったし、また、もしも善導することが出来たなら、俺を幸せにするつもりでもいた」(キ)ということをだよ。あゝ、ベルフォード、愛だったのだ。最も高貴な種類の愛だったのだよ。死後に届いた手紙で彼女も仄めかしているように(ク)、魂までも届く愛だ。また、末期の時に臨んで告白してくれただけでなく、俺の永遠の幸せをただ一つの目的にしている、あの警告と諫めごとに満ち溢れた手紙の中でだが、没後に俺の知るところとなるよう工夫もしてくれた愛なのだ。

あの呪わしい女どもが彼女の猜疑心、愛情の欠如、そして、俺への軽蔑の念をのべつ説き聞かせることで、俺の復讐心やプライドを煽り立てようと骨折っていたのは事実だ。そして、俺のプライドが奴らの悪質な当てこすりにより、度を越して掻き立てられることも時としてあったのだよ。しかし、仮に奴らの言ったとおりだとしても、欲望に目を光らせている者ことごとから言い寄られ、賛美されることに馴れていた、また、敬意溢れる心の持ち主一人一人から崇拝されることに馴れ親しんで来た彼女なのだが、そのような女性が尻込みをするのは、許されて当然なことなのだ。腹黒く策略を好む人間によって、すべての者にとっての重大問題に関し、宙ぶらりんな状態を強いられている自分に気づいた時

(ア) 第三巻の五十二頁を参照のこと。また、同巻の手紙十三、四十一、四十二、その他多くの箇所も参照のこと。

(イ) 第五巻の百四十七頁を参照のこと。さらに次のように述べて構わないだろう。つまり、折に触れてハウ嬢に向けられたクラリッサの小言のすべては、ヒックマン氏に対するあの令嬢の扱い方に関するものであるが、彼女自身が気取りや高圧的態度とは無縁であった点を証明しているということである。さらに詳しくは、第七巻の手紙六十六で、彼女があの心の友へ与えている助言を参照されたい。「寛大な、そして、遠慮のない態度で接することの出来ます男性と巡り合いますのが私の定めであったならと(独身を通しますのは許してもらえないのですから)、あゝ、私、本当にそう思うのです」等々と、彼女はその手紙の中で(百八十頁)語っているのである。

(ウ) 第五巻の百二頁と百四十二頁を参照のこと。(エ) 同じ巻の百四十九頁を参照のこと。

(オ) 第四巻　手紙四十五、四十六を参照のこと。(カ) 第五巻の百六十九頁を参照のこと。

(キ) 第七巻の手紙九十八を参照のこと。(ク) この巻の九十二頁から九十五頁にかけてを参照のこと。

にはだよ。策士のほうでは、もしも本物であれば制御し得ないものだが、そんな熱情を抑えつけるための言い訳として、畏敬の念を装い、距離を置いて見せるわけだがな。神々しい娘だよ。彼女の猜疑心こそが、打ち解けないところこそが（極めて的を射た不審の念なのだが）、俺にとっての保証となるはずだったのだ。栄光をもたらすはずだったのだよ。それに、彼女の美徳が他のどのような試しを必要としたというのだ。あの天使のような無垢さに（若さの盛りにあって、自分の感情を見事に抑制する力を授かっているのだ）、他のどんなものが必要だったというのだ。もしも俺が悪党でなかったならばな。また、悪党であると同時に、気紛れで自惚れた、高慢ちきの馬鹿者でもなかったとしたらだ。

こういった反省の気持ちが、時の経過によってその鋭さを減じるというよりは、むしろ研ぎ澄まされて、何をしようと、何処へ行こうと、俺に付き纏い、気晴らしや娯楽のすべてに紛れ込んでくるのだ。とはいえ、俺は陽気で華やかな者たちと付き合っている。訪問したいろいろな宮廷で、新たな知人も出来た。地位もあれば真価も備えた人々から高く買われ、同席を求められているのだ。大学、教会、宮殿を訪れている。頻繁に観劇に出掛けているし、展示会にもことごとく顔を出している。これまで見たことがなくて、目にする価値のあるものはすべて、珍品の陳列棚で眺めているところだ。時々、名の知れた花形女性の化粧部屋へ出入りを許されたり、他の会合に加わって殊遇を得たりしているが、それでも、我がクラリッサ以外には、何を考えても、だれのことを思い浮かべても、楽しくはならないのだよ。また、背丈とか外見、顔色とか声、あるいは、目鼻立ちがどこか我が魂を魅する者、あの唯一魂を魅する者に似通っているのならともかく、当人に好都合となるような見方をしてやった女など、一人としていないのだ。

彼女に備わっていたこれらの驚くべき才芸の数々によって、こんなにも鮮烈に俺の記憶を呼び覚まされるとは、これに優る罰がどこにあるというのだ。これほどの天恵を自分自身から、そして、世間の者たちから奪い取ってしまったのだという後悔の念以外には、俺には何も残されていないのだからな。確かに、慰めを味わうことの出来る瞬間が俺にも時々はあるのだが、それは、彼女の美徳を罠に掛けようとして、また、あんなにも純粋な心を俺の水準にまで引き下ろそうとして実行に移した、策謀や企みのすべてにも拘らず、彼女が永遠の幸せを享受するのはまず間違いないとの確信（度量が狭いわけではなく）から生じて来るものなのだよ。

我も最悪の事態に至れば［おゝ、最悪の事態を逸らし得る
唯一の者、汝、至高の神よ、最悪の事態は逸らせたまえ］、
破廉恥なること甚だしき、札付きの卑劣漢となり果て、
忌まわしきことこの上なき憂鬱の時にも
彼女の至福のうちにたまさかの喜びを、少なくも、
痛みと苦悩からの束の間の救いを見出すべし（四〇）。

∴

∴

外国に渡って、こうも惨めだということになれば、すぐにイギリスに戻るだろうな。そして、君の手本に従うことになるように思うのだ。世捨て人、あるいは、何かその手のと

んでもない姿に身をやつし、懺悔と苦行を不断に重ねる生活が俺にどんな効果をもたらすのか、確かめてみるというわけだ。こんな具合では、とても生きて行けないのだよ。絶対に無理というものだな。

俺の身に何か災難が降り懸かった場合、詳細に関しては、ド・ラ・トゥールのほうから知らせがあるだろう。彼がほとんど英語を知らないのは事実だが、君のほうは、現代語ならあらゆる国の言葉に通じているからな。彼は信頼出来る、利口な男なので、もしも何かがある時には、他の手紙も何通か預けるつもりだが、君のほうからM卿に届けてもらうよう、封印を済ませておくことにしよう。それに、貴公は遺言執行人の職務に極めて熟練しており、仕事も実に早いわけだから、お願いだよ、ベルフォード、俺のためにも役目を引き受けてもらいたいのだよ。我がクラリッサ　…　クラリッサ・ラヴレースと呼ばせてもらうが　…　のためと同様にな。

善なるものすべてにかけて誓うが、彼女の思い出に魂を奪われている状態だ。俺の名と結びつくと、彼女の名前そのものが俺の魂をうっとりとさせるし、この上なく精妙な調べの楽の音以上に俺を楽しませてくれるのだよ。

彼女をあの忌まわしい女の家ではなく、どこか別の場所へ連れて行ったとしたら［やはり、反駁しなくちゃならんのだよ］　…　何しろ、例の薬はあの女が考えつき、調合したものだし、強行された暴力行為の一切はあの女がけしかけたものだからな。それに、あの女の恥知らずな娘どもからの唆しもあるのだが、連中としては、俺のせいだとしている自分たちの堕落について、今やたっぷりと俺への仕返しをやり遂げたというわけだよ。

しかし、これでは絞首台に立った盗人の告白に酷似しているから、俺は近づきつつある対決を眼前にして怖じ気づいているのだと、そんなふうに貴公としては考えがちになるだろうな。だが、全然違う。その逆で、俺はそれこそ喜々として大佐に会いに行くのだ。また、その件で恐れを覚えたり、懸念を抱いたりするようなことがあれば、俺は自らの手でこの胸から心臓を抉り取って見せるつもりだよ。

次の点だけは承知の上だ。つまり、俺が彼の命を奪うようなことになれば［避けられるのであれば、そうはしないつもりだが］、安らかさとはほど遠い気持ちになるだろうということだ。安らぎなどを得ることは二度とないだろうという点だよ。しかしながら、公明正大に与えられた反対のほうを選ぶ権利に背を向け、決闘を求めたのは明らかに彼自身なのだから、その点について考えるのはこれからのことにしよう。そんなことをするのは、他でもない、何もかもを一度に後悔し、苦行に入るようなものなのだ。何しろ、彼がどれほどの剣の使い手だとしても、今俺が生きているのは確かなことのように、同じくらいに俺は勝利を確信しているわけだからな。というのも、経験未熟な初心者などとは違うことに加え、挑発された場合にはだが、俺にとってこれは食べ物と同じくらいに好ましく思われる楽しみごとだからだよ。さらに言えば、俺は祈りを捧げている主教にも負けないくらい沈着冷静だろうが、あの手紙からも明らかなように、彼のほうは復讐心と激情とに動かされているに違いないのだ。

だから、心配は無用なのだよ、ジャック。この件については、良い報告を届けることになるだろうな。とりあえず、

哀心よりの親愛の情を込めて、

ラヴレース

手紙　五十六
ラヴレース氏からジョン・ベルフォード氏へ

十二月三日（新暦十四日）　トレントにて

我がクラリッサの霊にかしずくべく、一名ないし二名の人間を、十中八九、あの世に送る日となるのが明日だ。

昨日こちらへ到着した。そして、モーデンという名のイギリス人の紳士について問い合わせ、すぐに大佐の下宿を見つけ出した。彼は二日前からこの街に来ており、俺が立ち寄りそうな場所ことごとくに自分の名を残していたのだよ。

彼は遠乗りに出掛けていたので、俺は名前と居場所を告げておいた。すると、夕方になって彼が訪ねて来たのだ。

彼はすこぶる陰気だった。俺は違ったよ。だが、彼はこんなふうに言っていた。最初の手紙で、真に気概のある人間のように俺は振る舞ったし、極めて迅速にこの面会を用意してくれたのも、名誉を重んじた行動だ、とな。彼としては、他の点でも俺にそうしてほしかったとのことで、その場合には、今よりはもっと友好的な間柄で相見えることが出来たかもしれない、というのだ。

俺のほうでは、起こってしまったことは取り消しようがないし、彼と同様、為されなければ良かったと自分でも思っていることがいくつかある、と話した。

今非難を返しても甲斐のないことであるし、また、腹立たしくもなることだろう、と彼は言っていた。それに、実に快くこの機会を与えてくれたのだから、言葉はさておき、用件のほうに取り掛かるべきだと言うのだ。「日時と場所と武器を貴方のほうでお選びくだされば、ラヴレース殿、私はそれに従いますよ」とな。

「後の二つは貴方に選んでいただきましょう。日時は明日か、それとも、明後日か、ご随意に願います」

「では、明後日ということにいたします、ラヴレース殿。それで、明日はひとつ馬で出掛けましょう。場所を決めるのです」

「承知いたしました」

「それじゃあ、ラヴレース殿、どうぞ武器をお選びいただきましょう」

ラピアー(四一)一本での勝負なら対等な力関係と確信しているが、もしも別の見方をしているのであれば、ピストルにも異存はない旨を俺は話した。

「私としては」と、彼が答えていた。「剣のほうが機会は対等になるだろうとだけ申しておきましょう。何故ならば、われわれのどちらにしても、剣の腕に不足はないはずだからです」とだ。そして、「ピストルの場合は、どうやら、貴方は分が悪くなりそうに思うのですよ。それでも、どちらでもお好きなほうをお取りいただこうと思いまして、二挺持参いたしました」と言うのだ。そして、「何しろ」と、言葉を続け、「ピストルの構え方を覚えてからというもの、ピストルの弾の届く距離で的を外したことというのは、一度としてないものですからね」とほざくのだよ。

いかにも彼らしい物言いだと、俺は言ってやった。彼が自認しているほどに狙いは確かでないが、俺もその方面では十分に熟練しているから、お好みとあらば、それに応じても構わないのだ、とな。「だが、大佐、ナイフの刃に当てて弾丸を真二つにしたことのある私

なのです。もしも相手を外すようなことがあれば、それは悪魔が絡んでいるということでしょう。それゆえ、貴方がお選びなら、ピストルにも異存はまったくございませんよ。敢えて言わせてもらいますが、手のほうでも目のほうでも、私ほどに安定して揺るぎのない人間はどこにもいないのです」とだよ。

「ピストルと同様、剣の場合にも、その両方はお役に立つことでしょう。それゆえ、宜しければ、剣ということにいたしましょう」

「結構ですね」

われわれは一種厳粛さの伴う儀式張った丁重な挨拶をして別れた。そして、今日、俺のほうから彼を訪ね、場所を決めるためだが、二人で遠乗りに出た。共に思いは一つであったし、今日中に為し得ることを明日に延ばすというのは嫌いなので、その場で決着をつける気持ちになったのだよ。だが、われわれに付き添っていたド・ラ・トゥールと大佐の従者が、避けようがなくてこの二人には秘密を明かしてあったのだが、ブリクセン〔四二〕から外科医を一人付き添わせたいと、一緒になって頼むのだ。ラ・トゥールがたまたまあそこで出会った男で、高熱に罹っている患者に瀉血を施すため、翌朝馬で出掛ける旨をあいつに話していたのだが、ポツンと離れて建っている田舎家でのことで、外科医の説明によると、われわれの目の前にあった家そのものではないにしても、その時にわれわれがいた場所から遠くはないところだというのだよ。

助けが求められるまでは、外科医が事情に通じることのなきよう取り計らう旨を、あいつらは引き受けていた。そして、俺から大佐に保証したわけだが、ラ・トゥールが機略縦横の男であることから「ツキが彼のほうにある場合には、俺にと同じように、彼の指示に従うよう命じておいたのだ」、われわれ両名は決着を明日まで延ばすこと、そして、外科医の件については、一切を従者二人の処置に委ねることで同意し、二人には秘密の厳守を命じ、別々の道を馬で戻った次第だ。

われわれは人気のない小さな谷をその場所に決めた。時刻は明日午前十時、ラピアー一本で、という約束だ。ただ、俺はその武器の腕前を大いに誇りとしているゆえ、何か他の武器を選んでもらえるなら有難いと、繰り返し彼に話したのだよ。

彼に言わせると、あれは紳士用の武器であって、その扱い方を会得していない男は、未修得の場合には苦しい思いをするのが当然な、そんな資質に欠けていることになるというのだ。ただ、自分について言えば、攻撃手段のすべてに亘って、いずれの武器も他のもの同様に望ましいとのことだった。

だから、見てのとおりだ、ジャック。俺のほうでは、彼の弱みにつけ込むような真似は一切していないわけだよ。だが、明日の午前十一時前に、俺の手によって彼が命を拾うとか、あるいは、死を迎えるようなことにならないとしたら、悪魔が俺を欺いているのに相違ないということだな。

彼の従者と俺の従者が立ち会うことになっているが、二人とも公平さを守り、手出しはしないよう、厳命を受けている。また、俺からの同種の厚意に対するお返しとして、彼は自分の従者に対し、自分が倒れた場合には、俺の手助けをするよう命じていた。

われわれはあちらまで馬を使い、目的の場所で下馬することになっている。また、彼の馬丁と俺の馬丁は、一方が倒れた場合に生き残った者をヴェニス領の境界へ運ぶシェーズを用意の上、定められた距離を保って待つか、あるいは、必要に応じ、どちらか一方の者

ないし両方に手を貸すことになっている。
そういうわけで、事態はこのように決定されたということだよ、ベルフォード。
にわか雨に見舞われ、他には何もすることがないものだから、こうして、この手紙を書いている次第だ。もっとも、明日の十二時まで延ばしても、別に構いはしなかっただろうがね。何しろ、恭順の意を表すべく、貴公宛にもう一度筆を執ることが出来るのは疑いのないところだからな。

草々
ラヴレース

手紙　五十七
［ロンドンのソーホースクェア近くに住むジョン・ベルフォード氏に宛てた、F. J. ド・ラ・トゥールからの手紙の翻訳］

新暦十二月十八日　トレントにて
恭啓
騎士ラヴレース様のご命令により、心痛むお知らせをいたさねばなりません。ご主人は封をなさる前に、貴方様宛のご書状をお見せくださいましたが、十五日に騎士モーデン様と対決なさる旨を表明しておられるものでした。それゆえ、対決の原因は貴方様の熟知しておられるところでありますし、ここでは一切その点に触れないこととといたします。
外科医とその助手に少し離れたところで待機してもらうよう、配慮いたしましたが、この者たちには、秘密を守るよう誓約させました上で、事情を明かしてあったのです（もっとも、紳士お二方には、その点をお話ししてはおりません）。従いまして、この者たちは包帯と然るべき品々の一切を用意しておりました。と申しますのも、ご主人様の勇敢さと剣の腕はよく存じ上げていたからです。それに、お相手の評判を耳にしておりましたし、お二人が敵意を燃やしておられることも承知していたからなのです。お二人それぞれの馬丁を伴い、ポストシェーズ（四三）が一台、少し離れたところに用意されておりました。
騎士お二人は約束の時間ぴったりに現れました。お二人にはマーゲイト氏（大佐の介添え人）と私とが付き添っておりました。前の晩に指示がございまして、お互いの面前でそれを繰り返しておられましたが、お二人に対して厳正に公平を守り、一方が倒れられた場合には、いかなるものであれ、必要な助力とか退去に関し、われわれはそれぞれ自らを生存者の使用人と見なして、適宜ご命令に従うべしということでした。
二、三の挨拶を交わされた後、両紳士は、私がこれまで目にいたしました中でも最も平静な態度でシャツ姿となり、剣をお抜きになったのです。
負けず劣らずの巧みな見極めにより、数度の突きを互いに受け流しておられました。私のご主人が猛然と攻め込み、最初の血しぶきを上げさせたのですが、相手が突然身をかわしたため、この攻撃はまともに相手を突き刺すには至らず、右脇腹の肉の部分を傷つけることになりました。体の一番端に当たるところで、剣がその部分を切り裂いたのです。ところが、ご主人が態勢を立ち直す間もなく、大佐が反撃し、肩の近くですが、左腕の内側を突き通したのです。そして、剣を抜くと（突き刺す際に胸をかすったのです）、大量の血

が吹き出しましたので、大佐はこうおっしゃったのです。「これで十分でしょうな」とです。

ご主人のほうでは、いやいや、傷は浅い、針の先程度だと、神かけて誓い、もう一突きなさったのですが、お相手は、驚くほど巧妙にそれを脇の下で受け止め、ぐさりとばかりご主人に剣を突き通したのです。ご主人はすぐに倒れてしまわれましたが、次のように口走っておられました、「勝運は君のものだな。あゝ、我が愛するクラリッサよ、今こそそなたは　…　」とです。そして、さらに三つか四つの言葉を口ごもっておられました。ご主人の剣がその手からこぼれ落ちました。モーデン様はご自分の剣を投げ捨て、ご主人に駆け寄りますと、フランス語でこうおっしゃったのです。「あゝ、君もこれで終わりだ。神のお慈悲にすがるのですね」とです。

われわれは馬丁に向かって、合意してあった合図を送りました。そして、馬丁が合図をいたしますと、すぐに外科医たちがやって来たのです。

お見受けいたしますに、モーデン大佐は流血沙汰には十分すぎるほどに慣れておられたのでしょう。ご自分の傷もひどい出血でしたが、何も特別なことは起こらなかったかのように落ち着き払い、外科医たちに手を貸しておられたのです。でも、ご主人のほうは、二度三度と続けて意識を失い、血も吐いておられました。

それでも、皆さんが当座の止血を行い、われわれが手をお貸しして、ご主人を馬車にお乗せいたしました。そこで、大佐もご自分の傷に包帯を巻いてもらいました。また、ご主人が時折（物が言え、もがき争うことの出来る場合にはですが）ひどく暴れられますのを気に掛けておられるご様子でした。お気の毒にご主人は　…　すっかり勝利を確信しておられましたのに　…

外科医たちの忠告に逆らい、大佐はヴェニス領に入るため、乗馬しようとしておられました。そして、外科医たちへの支払いをするようにと、気前良く金貨の入った財布をお与えくださいました。また、馬丁への心付けをなさり、残りについては、私の振舞い、そして、ご主人に対する世話や配慮に満足なさっている印として、私のほうで受け取るよう希望しておられました。

外科医が大佐に話しておりましたが、ご主人がその日一日を持ち堪えるのは無理だとのことでした。

大佐が別れを告げました時、ラヴレース様は「貴方は見事に愛しい人の復讐を果たされましたね」とおっしゃいました。

「いかにも」と、モーデン様がおっしゃいました。「そして、おそらく、遺憾に思うことでしょうね。貴方がこのような所業を私に求められたことをです。愛しい天使の命令に従うべきか、それとも、背くべきか、考量していたところでしたからね」とです。

「宿命なのです」と、ご主人が答えました。そして、「忌まわしい宿命です。さもなければ、こんなことは有り得なかったのです。だが、皆には証人になってもらいたい。私がこの運命を招いたのだということをだ。そして、廉潔の士の手によって倒れるのを認めていることをだよ」と言っておられました。

「宜しいですね」と、告白者の敬虔さで（ラヴレース様の手を握り締めながら）、大佐がおっしゃいました。「この束の間に過ぎ行く時を逃すことなく、神の御手にその身を委ねるのです」とです。

こうして、大佐は馬で去って行かれたのです。

ご主人を乗せ、馬車はゆっくりと進みましたが、揺れのため、両方の傷口から新たな出血を見まして、再び血を止めますのに苦労をしておりました。

われわれは最寄りの田舎家へご主人をお連れしましたが、まだ生きておられました。ご主人は、本状と共に封緘の上お送りいたします包を貴方様に宛てて急送するよう、私に指図なさったのです。また、不幸この上ないこの出来事の委細を貴方様に書き送りますことを、そして、貴方様のご厚意と友情のすべてに対し、ご主人様のお名前でお礼申し上げますことを、私にご命令になったのです。

予想をすべて覆しまして、ご主人は翌朝まで持ち堪えました。ただ、傷と同様、苛立たしさや望みを挫かれた思いからですが、大層苦しんでおられました。と申しますのも、ご主人はお亡くなりになりますのをひどく嫌がっておられるご様子だったからです。

最後の二時間には、ご主人は時々精神錯乱の状態に陥り、まるで何か恐ろしい亡霊でも目にされたように、「その女を連れて行け、連れ去るのだ、その女を」と、何度か叫んでおられましたが、ただ、お名前を口にされることはなかったのです。そして、時には、「心優しく卓越せる者」「神々しき娘」「麗しの受難者」と呼びながら、どこかのご婦人を（拝察いたしますに、致命傷を負われました時に名を唱えておられました、あのクラリッサ様のことでしょう）褒め称えておられました。また、一度このようにおっしゃいました。「下を見てほしい、聖なる霊よ、下を見るのだ」とです。そこで声はとぎれましたが、ただ、唇は動いておりました。

午前九時になりますと、ご主人は痙攣に襲われ、失神なさいました。痙攣が治まりますのには十五分掛かりました。

わずかなものではございますが、ご主人の最後のお言葉を省略するわけにはまいりません。今わの際に臨みましての平静さの証となりましょうし、またこれは、ご主人の高潔なご友人諸氏にとりましては、いくらかの慰めをもたらすこととともなりましょう。

「聖なる　…　」と、ご主人はおっしゃいました。神様に呼び掛けられたのは疑いのないところです。死を間近にした両の目が天を仰いでいたからです。ご主人は激しい痙攣のため、少しの間、それ以上は口を開くことも出来ずにおられましたが、痙攣が鎮まりますと、もう一度大変に熱を込め（天を仰ぎ、開いた両手を差し上げながら）、「聖なる」という言葉を口になさいました。それから、見た目には叫び声を上げるようにして口ごもっておられましたため、おっしゃっていることは分かりませんでしたが、やがて、次の言葉をはっきりと声に出されたのです。

「これが償いだ」

とです。そして、頭が枕に沈み込み、ご主人は息を引き取られたのです。十時を三十分ほど過ぎた頃のことでした。

ご自分の死期がこんなにも差し迫っているなど、お気の毒に、ご主人はほとんど考えておられなかったのです。従いまして、ご遺体についてのご指示は何一つございませんでした。私のほうで防腐処置のための内臓除去をお願いし、イギリスからのご命令をいただくまでの間ですが、ある地下納骨堂に安置していただいております。

これは困難の末に得られた便宜なのです。また、イギリスの人たちはオーストリア領の

いずれにおきましても尊敬されておりますし、それが当然の国民ですが、もしもご主人が身分の高いイギリス人でなかったならば、この便宜は拒まれていたことでしょう。と申しますのも、ご主人は聴罪師の付き添い、そして、カトリック風の秘蹟を拒んでおられたからなのです。ご主人の霊の安らかならんことを神に祈る次第です。

また、ご主人の死亡時のご様子ゆえに、当地の司法関係者からも少々面倒な思いをさせられておりますが、その筋では事件についての必要な情報を集めているのです。そのために、少しばかり自腹を切ることとなりました。その費用とご主人様の動産物件につきましては、正確な決算書を次の便にてお届けすることになりましょう。従いまして、当地にてご指示を待つこととといたします。

貴方様のこの上なく誠実にして従順なるしもべ

F.J. ド・ラ・トゥール

結び

ベルフォード氏の筆になると推定されるもの

ラヴレース氏の死後も生き延びた、本物語中の他の主要人物たちの運命に関心を持つような読者諸氏の意を満たすべく、なおも言及されて然るべき事柄に関しては、以下の略述をご参照いただきたい。

ラヴレース氏の不幸な最期に関する報せは、氏自身の親戚には大きな悲しみをもって受け止められたのであるが、ハーロー家ならびにハウ嬢からは、それに優るとも劣らぬ歓喜をもって迎えられたのである。氏自身の一族こそは最も同情を集めて然るべきなのであるが、と言うのも、比類なき令嬢の心からの崇拝者として、令嬢に加えられた不当な仕打ちを深く悲しんでいたからである。そして、今、一族の唯一の男子を非業の死によって失うという、無念な思いを重ねることとなったからでもある。

氏の運命が当然の報いであった点は、一族の者たちの不幸をさらに募らせるものであったが、何故ならば、正しくその理由から、そして、氏が準備を怠っていたことからも、氏の来世での幸福に関して、彼らには案じて然るべき根拠が多分にあったからである。これに対しもう一方の一族は、その執念深さから、また、前述の心気高い令嬢さえも、激しい憤りゆえに氏の最期を、主として氏を通して被った重大な損失の、ある者にとってはささやかな慰謝物、また、ある者にとっては一時的な慰謝物と見ていたのである。

繰り返して言えば、ハーロー一族にとっては〈一時的な慰謝物〉であったのだが、何故なら、自らの振舞いを振り返る時、彼らは幸福、あるいは、心安らかな思いからはほど遠い状態だったからである。また、モーデン大佐を通し、この物語を構成している書簡の一部からの大量の抜粋を手にするまで、悲しみに沈む母親は心を休めることもなかっただけに、その感は一層強いのであるが、それらの抜粋により、全員が以下の点を納得するに至ったわけである。つまり、家族と共にいる間に、クラリッサ嬢がラヴレース氏と再開した例の文通そのものにしても、自らのためというよりは一族のために再開されたのだということ。自らの務めや、ごく幼い頃から有名であった思慮深さに反するような励ましは、何一つ彼に与えていなかったということ。彼らも認めているものであるが、一度として疑義を挟まれたためしもないあの分別を信頼していたなら、彼女は彼らと彼女自身とを（かつて彼女が母親に提案した(ア)ことがあったように）、ラヴレースにまつわるすべての困難から解き放っていただろうということ。そして、相手の男性というのが、暗黙の愛を受けるにしても、あまりにも不道徳に過ぎるため、理性と信仰心とによって激情を克服した、あるいは、少なくとも抑制したという、その輝かしい例を提示出来る者が仮にも女性の中にいるとすれば、彼女こそはその例を示していたはずだということ、等々である。

惨めな思いの両親ならびにおじたちは、心の平安にとっては明白過ぎるわけだが、これら抜粋を熟読することから以下の点を知るに至ったのである。つまり、父親の屋敷を去ろうという考えを令嬢が思い浮かべたのは、ひとえに執念深い兄と姉の貪欲さ、野望、妬み

（ア）第一巻の八十九頁を参照のこと。

によるものであり、また、令嬢は軽蔑するに違いなく、さもなければ、クラリッサではあり得なかったという、そのような男との結婚を強要すべく一族全員が加わった無分別な共謀関係、そして、その結果としての彼女に対する迫害とに由来するということ。また、そのような考えを最初に思い浮かべた時でさえも、もしも可能ならば、彼女はハウ夫人の元に、あるいは、承諾されて当然な、そして、自らの務めにまったく矛盾するところのない条件を提案出来そうな、どこか他の安全な場所に（ただし、ラヴレース氏の元でもなければ、招致されていたとはいえ、氏の一族の女性のいずれの元でもなかったのであるが）密かな避難所を確保しようとの意図からであったということ。また、期待を寄せていた避難所と保護の手については、望みが挫かれたことに気づいたとはいえ、ラヴレース氏と会うことによってその身を氏の支配下に置くつもりはなく、そのような行動に踏み切ることで彼女が目指したのは、専ら、氏が（現にその決意を固めていたように）身内の者たちに対し、致命的な結果を伴い兼ねない訪問を行ったりせぬよう、かくも猛々しい気性を鎮めることであったのだが、その彼女が、非難よりは同情の的となるような手口によって、氏に誘拐されてしまったのだということ、等々である。

これらの抜粋はさらに次の点をも彼ら全員に確信させたのである。つまり、彼女が飾ることなく遺憾に感じていることであるが、その後長きに亘って結婚が自分の自由にならないことに気づいたということ。そして、ついには、ある出来事をきっかけとして（慈悲と許しを得るべく、新たに叔母ハーヴィーに懇請した際のことである）、彼らの肉親らしからぬ残酷さのゆえに、氏からの結婚の申し出を受け入れることは不可能となり、日取りについても、ただ、健康を回復するまでの間だけのつもりではあったが、保留せざるを得なくなったということである。

ラヴレースに対してと等しく、己ら自身の残酷さにも憎悪の念を抱くこととなるし、彼女をこれ以上ないほどに賛美することともなったわけであるが、彼らは、彼女の美徳に備わる威厳がこの世でも最も向こう見ずな男を畏怖させた結果、その男は卑劣なたくらみを実行に移そうとする勇気も湧かず、ついには、不埒にも薬物を用いることで、前もって彼女の意識を生け贄に供していたことを知ったのである。

しかしながら、彼女がこの上なく輝かしく、勇敢なる振舞いによって度重なる暴力行為からその身を守り、放蕩児としての氏の考えすべてに反抗し、完全な混乱状態に陥れたばかりでなく、終始一貫、そして、気高い軽蔑の態度により、氏を拒み続ける不屈の心を持ち合わせていたことに気づいた時、彼らは彼女を偲び、崇拝にも類した感情をどれほど抱いたことであろうか。どれほど互いに非難し合ったことであろうか。彼女が拒んだのはだれかといえば、かつては愛することも出来たはずの男、許しを乞うて跪き、その時点で自分に可能な最善の償いをさせてもらいたい、つまり、結婚による償いをさせてもらいたいと懇願している男だったのである。豊かな資産を有し、その全額は無疵の状態なのだ。当時の彼女は曖昧宿で彼の囚われ者となり、身内全員からは拒絶されていた。慈悲と許しとを繰り返し彼らに嘆願しながら、拒まれたのである。慈悲と許しとを、そして、後には最後の祝福を懇願しながら　…　それも、自らの敬虔な心を慰めるためであると同時に、やがて彼らを苛むことになる自責の念を和らげるためでもあったのである。だが、言われているほどに死期が迫っているわけではあるまいとの憶測から、残酷な形で拒絶されたにも拘らず、彼ら全員を許し、祝福を与えながら彼女はこの世を後にしたのである。

次いで、彼らは以下の点を思い出したのである。つまり、死後送付の彼女の書簡が、非難の言辞ではなく、慰めの言葉に満ち溢れていたこと、また、遺言書の中で彼女が、彼ら全員に対し、各自それぞれに見合う恩義を施していたことをであるが、それらの恩義は彼らには受ける資格もなければ、期待もしなかったものであり、利己心ゆえに一部の者が結論づけることとなった、例の遺言による祖父の不当な処置に対し、あたかも彼女は埋め合わせをしようと考えていたかのように思われたのである。

これらの知識ならびに回想は、彼らの非難合戦の不断の話題となり、一族の誇りとすべき子供を失った悲痛さを増大させていたのである。そして、互いを忌避することもまれではなかったが（一族の習わしどおり、顔を合わせるのが常となっていた折に）、沈黙を守っている時にも語り掛ける、あの相互に非難し合うまなざしを避けるためであり、非難に伴う痛みも時間と共に鋭さを増していたのである。この一族は何と不幸な一族であったことだろうか。モーデン大佐が、ユウェナリスの言葉を借り、ハーロー一族の（二、三ヶ月前にはすこぶる幸せであったというのに）提示し得たような苦悩を提示して見よと、他の悲惨な家族すべてに挑もうとしたのも尤もな話であろう。ユウェナリス曰く、

万人の習わしの何たるかを知りたくば、
一軒の家にて足る。数日をそこにて過ごし、
退出に際し、その気あらば、己を不幸者と称すべし（四四）。

ハーロー夫人は、愛娘クラリッサの惜しまれる死の後も、二年半ほど生き長らえたのであった。

ハーロー氏は夫人の死後半年ほど生き延びるという、さらなる苦痛を味わったのであるが、夫人の死は、以前からの悲痛な思いと自責の念に新たな鋭さを加え、氏自身の死期を早めることとなったのである。

しかしながら、今わの際に臨んで両名は、いつも（前述した令嬢の身の上話の詳細、および、彼女の幸せな最期を知らされた時からのことであるが）こう呼んでいた、「祝福された」娘の元へ連れ戻してもらうのだと、自らを慰めたのであった。

ただ、両名とも、息子ジェームズならびに娘アラベラの結婚を生存中に目にすることとなったのだが、二人の婚礼のいずれにも喜びを感じることはなかったのである。

ジェームズ・ハーロー氏は、名門の出で孤児となっていた女性と結婚し、はなはだ多額の費用を掛けて彼女の財産所有請求を支援せざるを得なくなったのであるが、その財産こそは氏の求婚を促す主たる誘因だったのである。しかしながら、今日に至るまでその財産を獲得してはおらず、また、獲得しそうにもない。何故なら、極めて強力な対抗者たちを相手に争わねばならず、また、権原の主張も必要となるのだが、そこには訴訟に至る余地があるからである。そして氏は、訴訟で難渋している人間に必要とされる忍耐心に恵まれてはいないからなのである。

彼に関してさらに注目すべきことは、この婦人との結婚は生涯に亘る裁判沙汰の種になるという、父、母、おじたちの警告に背き、その縁組がまったく彼自身の考えによるものであったという点である。妻には如何ともし難い事柄、そして、彼にとってと同じく、妻にとっても不運といえる事柄をめぐる妻への卑劣な態度のゆえに、二人の仲がはなはだ疎

遠になってしまい（妻は勝ち気な性分の女性だったのである）、仮に訴訟に決着がつくとしても、それも、おそらくそうなるだろうと思われているものよりも有利な裁定が下されるとしても、彼は死ぬまで不幸な思いをするに違いないのである。彼は自分の不幸すべてについて、現在有している数少ない友人に向かって胸中を吐露する際には、天使のごとき妹に対する悪辣かつ残酷な己の仕打ちにその原因を求めているのである。当然のことと容認されている処罰に黙従する気持ちはないまま、これらの不幸が尤も至極なものであることは彼も認めている。毎年一ヶ月に亘り、彼は喪服を身に纏うのであり、彼にとってその一ヶ月は九月七日に始まるのであるが、その間、彼はあらゆる付き合いを断つのである。その挙げ句、彼は

惨めなることこの上なき存在

と見做され、また、しばしばそのように自称してもいるのである。

アラベラの財産は身分ある男性の心を誘い、彼女への求婚を促すこととなったが、彼女にとっては、その男性の爵位が彼を是認する誘因となっていたのである。兄弟姉妹というものは、味方とならない時には、互いにとって最も厳しい敵となるのが常である。兄としては過大な財産譲渡が行われたと考え、妹のほうでは不十分だと思っていたのである。そして、過去数年間に亘り、二人が心の底から憎み合ってきた結果、仮にも一方の者に喜びを感じる時があるとすれば、それは、もう一方の者に何か新たな不幸とか不満とかが生じていることを知らされる点にあったのである。実際、公然と争うようになる前には、二人は自分の罪を免れる方策として（一族全体に一層の動揺をもたらすこととなったが）、賛美すべき妹に対する無慈悲な態度や浅ましい残虐行為の主犯者たる責任を、絶えず相手になすりつけていたのである。夫の放縦な生き方から、この淑女はさらなる不幸に見舞われているとのことであるが、これは、ラヴレース氏にあってははなはだ嫌悪すべきものと、当然至極ながら彼女も考えた欠点なのである（もっとも、氏から求婚があったなら、彼女にとって乗り越えることの出来ない難点とはならなかったことであろう）。また、夫は人前で彼女をないがしろにしたり、蔑んだりもしているし、時には身体的虐待すらも加えているとのことである。これは、彼女の性急な気質と感情の激しさに起因するものと言われているが、これら世に広まった噂がまったく根拠のないものであることを祈る次第である。かつて妹を相手に目論んだのと同じように、彼女が自分自身にとっても苦悩の種となるよう願うとしたら、その心というのは、果たしていかなる心なのかと考えるからである。彼女は今この時に至るまで、あのような妹に対する自らの残酷な仕打ちを悔やみ、今わの際までも後悔する旨を明言しているのであり、また、すぐにも自らの不幸の原因を（兄と同様に）その点に求めようとするだけに、とりわけその感は強いのである。

アントニー・ハーロー氏ならびにジョン・ハーロー氏は今も［これを執筆している時点で］存命中であるが、最愛の姪と共に人生の喜び一切も失ったのだと、しばしば言明しており、説き勧められて演じた、姪に対する肉親らしからぬ役割のことを、人前に出るたびに憚ることなく嘆いているのである。

ソームズ氏もまた存命中ではあるが、氏のような性向の人間に生きるという言葉が当てはまるならの話である。何故なら、氏の全般的な品行と卑しい態度は、あの素晴らしい淑

女が抱いた嫌悪の情を正当化するようなものだったからである。さらに氏は、数人の女性に対する求婚が斥けられるのを知ることとなったが、これらの女性は、望みを寄せるよう奨励されたあの淑女に比べ、財産の点で劣る（氏自身の財産は莫大なものであったが）女性たちだったのである。

大きな喜びを見出していた会話の、その話し相手を失ったモーブレー氏とターヴィル氏は、眼前にしたいくつかの悲惨な結末に衝撃を受け、目覚めたことから、また、命令好きというよりは、むしろ従順な心を日頃より持ち合わせていたこともあって、友人ベルフォード氏の忠告に従って財産の残りを終身年金へ変更し、一人はヨークシャーへ、もう一人はノッティンガムシャーへ引き籠もったのであるが、これらの州が二人の地元だったのである。二人の友人ベルフォード氏が彼らに代わってその事業の世話をし、かつ、連絡を取っているのである。また、二人と対面するたびに（二人が上京する際のことであり、年に一、二度の話である）、彼らはますますその名と家柄に相応しい者になるはずと、氏はいよいよ期待を募らせているのである。

悪の道を共に歩む例の娘たち、サリー・マーティンとポリー・ホートンは、あの種の人間が普通誇示し得るものよりも優れた才能と素養を有しており、また、その身の上に関しては、二人への言及が頻繁に見られる前掲の書面の何処においても触れられていないことでもあり、二人の氏素性について、また、二人が身を投じたような悪徳の道へ導くものとして、その養育ぶりについて、そして、忌まわしいシンクレアの恐るべき死の後の二人の運命について、掻い摘まんで説明を加えるのは、本作品を世に送り出すことで意図されている優れた目的に応えることになろうし、同時に、間違いなく読者の好奇心を満たさずにはおかないはずである。

サリー・マーティンは、上流階級の人間が出入りする区域に店を構える、裕福な反物商の娘であり、その反物商の元へ、商業地にある食料雑貨商の娘であった彼女の母親が、かなりの財産を持参していたのである。両親は派手好きな質で流行を好んでいたが、この流行を促進することこそが自分たちの仕事であったし、通常、最上層の商人の妻や娘たちというのは（特に、都のその地域にあっては）流行を追うことを好むものであるから、二人が自分たちの娘を自らの好みに合わせて育て上げるのも、何ら不思議なことではなかったのである。また、非常に快活で機転の利く少女であり、大変に愛らしく、極めて上品だと考えられていたその娘が、一年また一年と、そういった手本の上を行く振舞いに出たとしても、それもまた驚くには当たらないことであった。

彼女は万事が自分の思いのままであることを、幼くして知ったのである。彼女の行いすべてが正しく、彼女の言葉すべてが褒めそやされた。幼い頃から、ごく幼い頃から、頬を赤らめることは忘れ去っていたのである。疑いを抱くことが出来ないために、頬を赤らめることも出来なかったわけである。そして沈黙は、話題の如何を問わず、遠慮と同じく彼女にとっては未知のものだったのである。

彼女は九才を過ぎると、どのようなものであれ、娯楽の集いからは除け者にされることがなかった。そして、商売のためにも馴染みを増やそうとの考えから、贅沢な暮しを好む両親が頻繁に催していた慰安の会や宴席においても、おしゃべり好きなところに敬意を表してのことだが、彼女はその場の主役と見なされていたのである。自分たちの利益となるよう、娘に演じさせていた役割が、おそらく、その娘の欲望を刺激し、身を持ち崩す手段

となることには十分に思いも及ばないまま、一人っ子としての彼女のために、富を得たいと両親は願ったのである。

子供にしてここまで〈女〉なのである。一人前の女となった時には、どれほどのものであろうか。

十五、六歳で彼女は、服装および立ち居振舞いの点で、上流の人々の中でも最も愚かしい者を好んで真似るようになった。父親の店の一番高価な絹も、彼女にとって高価すぎることはなかったのである。あらゆる催し物の場においても、自分より五つか六つ年上であったが、親戚や知人の女性すべての後に従うのではなく、逆にその先頭に立っていたのである。込み合っている劇場では、先に着席して眉をひそめている者たちの間をせかせかと通り抜けて席に着き、もっと内気な同伴者のために場所を空けて置くのであるが、代わりに席を取っておく召使のいないことをいぶかりながら、近くの者は一人残らず彼女の尊大さに驚き、どこのだれなのかと、ヒソヒソ尋ねることになる。そして、動じるところのない彼女の態度に感心しつつ、腰を下ろすのであった。

すこぶる名の通った役者たちの重要な後ろ盾となることを、彼女はわざわざ買って出たのだが、役者のほうでも、慈善興行の夕べには、庇護者の一人として顔を利かせてくれるよう彼女に頼んだのである。彼女は公の場に頻繁に出入りする伊達男すべてについて、その名字と同様に洗礼名をも知っており、そういった者たちのことを語るのに、好んで洗礼名を用いてみせたのである。

入場の際、あるいは、席に着く前、注目するよう全員に視線を送るのが彼女の常であったが、その求めに従わない者たちはジャックとかトムといった横柄な口調で話題にされるのであった。一方、贔屓にしている者たちは、わざとらしく親しみを込めた馴々しさと愛らしい口調とで、ジャッキーだのトミーだのと呼ばれるのである。そして、非常な愛顧を得ている者たちの場合には、「可愛い悪魔」であり「イカス奴」なのである。

上流社会ならびに社交界の男女一人一人の行状や品行が話題になると、彼女は裁判官の席に着き、情け容赦のない裁きをして見せたのである。スキャンダルの記録に精通し、評判の一つ一つ、称賛と非難の一つ一つを自画自賛のために役立てていたのである。「あれこれのことをするようでは軽蔑ものね」とか「それが常日頃からの自分のやり方よ」「まさに自分がしている、あるいは、したいと思うことね」といった具合である。そして、女性の中でも最も不道徳な者の下劣さに照らして自己評価をし、口元をぬぐうと、己の美徳に満足して腰を下ろすのであった。

彼女にはどこへ行くにもお供をしてくれる自分の駕籠があり、この世でも最もつまらない人間の一部の者について、プライドを捨ててこう呼んでいたわけだが、いわゆる「上等な人たち」の中に、自分の訪問を励ましてくれる者を見出していたのである。

カード遊びの手管をすべて身につけていたのだが、正真正銘スパルタ風の娘であり、時には、ズルを見破られても言い負かして切り抜けるような、肝の据わったところさえ彼女にはあったのである。夜更かしは（夜を昼に、そして、昼を夜に変えるのだが）頻繁に行われる勝負ごとの、ほぼ不可避な結果であった。両親は我が子サリーが素晴らしい体質に恵まれていると喜んでいたのであり、健康を損なわないかぎり、彼女の品行には注意を向けなかったのである。

彼女は針仕事を嫌っていた。そして、ヴォクソール、ラネラ、メリボン等々（四五）といっ

た、着飾って遊び歩くための気晴らしの場所は存在しなかった、先の世代の婦人たちを従事させ、怠惰、贅沢、そして、浪費から遠ざけ、家庭に縛りつけていた（他には何の役にも立たないとしても）上品な仕事を、絶えず嘲笑の的にしていたのである。

また、家政に関して言えば、両親はその方面の知識を少しも彼女に要求していなかったのである。それは雇われ人や生まれの卑しい者たちにだけ必要な資質であり、洗練された新婦人が注意を向けるのにはまったく値しないものと、彼女は考えていたのである。

父親の商売は大いに繁盛していたのだが、はなはだ贅沢で金の掛かる暮しをしていたため、父親は繁盛ぶりに見合った財産を娘に与えようとしなかった。父親にしてもその妻にしても、質素さということは一切考えずに生活を始めたこともあり、節約などということは思いも及ばなかったのだ。また、娘のほうでも、両親が節約することを望みはしなかった。彼らは華やかさとか派手さとかを立派なことと考えていた。それを紳士風な生活と称していたのである。そして、隣人たちよりも頭一つ抜きん出たからには、外見の点で後退するのではなく、むしろ前進するのが自分たちの信用にとって肝心なことだと思ったのである。彼らは自画自賛し、娘を持ち上げた。そして、だれか上流の紳士、少なくとも、財産家の心を引くだけの魅力と機知を備えているということでは、娘も両親とまったく同意見だったのである。しかしながら、反物商を父親とし、食料雑貨商を母親とするこの娘としては、卑しい町人などを念頭に置くことには耐えられず、自分では成功疑いなしと思っていたわけだが、〈よくある例〉として常日頃から頭に思い浮かべていた、身分、才能、教育、そして、財産の点でも自分よりもはるかに劣る女の子で、上首尾を収めた者の数少ない（〈比較的〉少数の）例によって、自らを勇気づけていたのである。相当な贈与財産とチャリオットという、並の女の虚栄心をくすぐる安ぴか物こそ、彼女が胸に描いた最低条件だったのである。しかし、この間ずっと、両親にしても娘本人にしても、以下の点には考えが及ばなかったのである。つまり、格闘すべき放縦な欲望を彼女は持ち合わせているということ、そして、堅実な信条による防備もなければ、模範の恩恵にも恵まれていない教育をひとしきり授けられていたため、燃えやすい体質とも相俟って、彼女は妻となるよりも愛人となるのにはるかに相応しい資質を備えるようになっていたという点である。

彼女が二十歳を迎えた年も過ぎて行き、プライドを傷つけずに承諾出来そうな申し出が一つとしてなかったことは、本人にとっては驚きであるのと同時に、遺憾なことでもあった。十五から十八までの娘というのは、その美しさが花開き始め、真新しいものとして男たちの目を惹き付けることになるのである。しかしながら、公共の場に顔を出し、自分を安売りしたりしていると、絶えず目にしている美しい顔よりも、新しい顔のほうがより一層注目を集めるものだということに娘は気づくのである。従って、他のことは一切考慮に入れないとしても、賢明さという点からして、年若い美女は、虚栄心を抑えられる場合だが、少しだけ姿を見せ、話の種にしてもらうと、あたかも思慮深さからのように退出し（実際、そうするのが分別というものだが）、探し求めていると思われるよりは、むしろ、求められることに期待を掛けようとするわけである。そして、忘れ去られそうに思われる場合には、次々に公共の場に赴き、自分のことを時々思い出してもらうだけで良いのだ。そうすれば、再び目新しく人目に映るというわけである。しかし、若い淑女は常に次の所見を念頭に置くべきであろう。つまり、自らの虚栄心を満たしつつ、同時に、生涯の伴侶とするに相応しい男性の称賛を受けるようなわけには滅多に行かないものなのだ、ということ

をである。要するに、公共の場所で多くの崇拝者を得ることは出来ても、愛してくれる者は一人として得られないということである。

サリー・マーティンはこの教えを皆目知らずにいたのである。その美しさは盛りを迎えていたにも拘らず、気がつくと、彼女は無視されていたのである。「サリー・マーティンといってね、反物商の娘さ。ここにはいつだって顔を出しているよ」というのが、「あのご婦人はどなたでしょう」と尋ねる者すべて対する返答であり、それに添えられた所見だったのである。

ついに、彼女の運命が迫って来た。陽気で美男子のラヴレースを彼女が初めて目にしたのは、仮面舞踏会でのことであったが、彼は旅行から戻ったばかりだったのである。すぐに彼女は彼の容姿、そして、彼がたまたま近くに腰を下ろした際に、その口から漏れるのを耳にした華麗な言辞に魅惑されることになった。彼のほうでも、当時は妻を探し求めていたわけではないが、サリーの小綺麗さや、上品であるのと同じく、お高く止まっていることをも同時に示している、その態度に魅了されたのである。そして、是認の合図が互いに交わされ、翌日どこに彼女を訪ねると良いのか、彼は何の苦もなく知ることとなったのである。しかし、彼女のように自惚れが強く、華やかな外見を装っている者にとって少々屈辱となったのは、反物商の娘にすぎないのだということが、すこぶる洗練された若い紳士の知るところとなるのに甘んじなければならない点であった。愚かさゆえに、自分を分不相応な地位へ引き上げてくれた者たちについて、折に触れて恥ずかしい思いをしてしまうのは、サリーのような育て方をされた娘の場合には、極めて自然なことなのである。

しかし、サリーにとってはどうであれ、ラヴレース氏にとっては、自分の愛人の出自がその程度にすぎないことを知るのは、何ら失望を誘うものではなかったのである。何故なら、彼のほうでは、不幸な女性が陥るものの中でも最も卑しい状態に、すぐにも彼女を貶めたいものと考えていたからである。

だが、自分の恋人がM卿の甥であり、推定相続人であることを知るに及んで、彼こそがかくも長きに亘り、しきりと苛立ちながら探し求めてきた男性であり、網を広げてみるに値する相手だとマーティン嬢は考えたのである。また、ここで次の点に触れておくのも悪いことではあるまい。つまり、先の書簡集には収録されていないのだが、友人ベルフォード氏に宛てたある手紙において以下のような風変わりな状況を描いて見せた時、ラヴレース氏がサリー・マーティンを、そして、おそらく、彼から与えられた結婚への夢が身の破滅を招くこととなった、その他二、三名の者たちを念頭に置いていたのは大いにあり得る話だという点である。

彼はこう述べているのである。「互いに相手に対して下心を抱いている、求婚中の若いカップルの姿が目に浮かぶ気がするのだよ。娘は三味線を弾く。今のままですこぶる幸せであり、これ以上の幸せはあり得ない。独り身の暮しを変えるつもりはないのだ、とな。男のほうは、察するところ、そんなことはしてもらいたくない旨を、娘に打ち明けたりはしない手合いなのだろう。娘はいつでも持ち出せるように、エプロンの下に網を忍ばせている。男のほうも別の網を上着の下に隠しており、互いに相手の首筋へそれを投げ掛ける魂胆なのだ。娘はプライドが満たされたなら、男に網をかぶせるつもりであり、男が自分のものになるのは間違いないと考えているのだよ。男が娘に網を投げ掛けるのは、待ち構えていた屈服の瞬間が訪れ、承諾の言葉を取り返しのつかないものにしてしまう時だ。そし

て、たまたま二人のうちでは男のほうが器用で、娘が男に網をかぶせるより前に、彼女を網で覆ってしまうとしよう。その場合、俺としては是非とも知りたいのだが、残酷だの野蛮だの、ごまかしだの生贄だのと、また、このような事例では、可愛いお馬鹿さんたちが征服者の耳にたたき込みがちな、その他の詠嘆調のたわごとすべてを怒鳴り立てる正当な資格などが、どうして娘に与えられるのかということだ。娘が神々と男たちに向かって訴える時、神も男も共に彼女を笑い、彼女自身の邪悪な下心を咎めながら、当然の報いとしての失意に耐えて腰を下ろすよう命じるのは、正しいことではないのだろうか。貴公はそう思わないかな」とである。

　要するに、サリー本人同様、両親もラヴレース氏の訪問を奨励したのである。娘の思慮分別を信頼して構うまいと考えたわけだが、娘自身も、賢しさのあまり、その点に疑念を抱くことはなかったのである。娘のプライドの高さは両親も承知していたが、こういった場合には、しばしばそれが分別と称されるのである。ラヴレースに言わせるなら、「プライドを持ち合わせないようだと、女は哀れなものさ」ということである。また、装って見せるのもかなぐり捨てるのも、彼にとっては気の向くままという、あの尤もらしい真摯さや物腰の穏やかさから危険を推し量ることも、この両親にはなかったのである。

　あの若さとはいえ、百戦錬磨のペテン師による彼女の堕落の仕上げとなったのは、二度目の仮面舞踏会であったが、これはやっと三度目の外での出会いの折であり、彼女が十分に身の危険を悟る以前のことだったのである。というのも、信義に厚く、財産に恵まれた婦人であり、将来の姪を期待すべき尤もな理由を聞かせておいた叔母［娘の前で結婚を匂わせた彼の唯一の言葉だが］フォーブスの元へ赴くべく、十二時頃に駆け落ちをしてくれるよう説得した上で、彼は先の書簡集においてはシンクレアの名で通っている邪悪な女の家へと、娘を連れ込んだのである。そして、そこで、彼女が好意的な意味合いに受け止めた（恋する女は、身の安全を守るに足るほど疑うことは滅多にないのである）数々の約束により、易々と操を手に入れたわけだが、その操にしても、ほとんど名ばかりものに過ぎなかったのである。

　罪深い交わりを続けるよう、娘を説き勧めるのに困難はなかったが、やがて、その効果は隠し切れないほどに明白なものとなったのである。すると両親は（これほどの婿に寄せていた望みのすべてを奪われた失意と無念さに由来する、最初の激しい怒りのままに）、娘を家から追い出してしまったのである。

　このように己の恥が世に広まると、娘の態度は硬化した。そして、その頃には自分を誘惑した男の贔屓の女になっていたのだが、その男に庇われながら、自分のプライドにとって、また、いつも許してくれていた気ままな立場にとってもおよそ似つかわしくない侮辱に対し、両親への怒りが爆発した結果、両親が、感情的な仕打ちに出たことを悔い、縒を戻したいと思った際にも、娘は二人の元に帰ることを拒否したのである。そして、シンクレア母さんのお気に入りの娘となり、あの破廉恥女の説得を受けて堕胎を試み、目的を果たしはしたのだが、ただ、ずいぶんと妊娠が進んでいたこともあり、危うく命を落とすところだったのである。

　こうして、最初は不貞の罪、次いで人殺しの罪を犯し、彼女の良心は麻痺することとなったのである。そして、うら若い身でありながらも、また、自分を欺いた男に好意を抱きながら、はなはだ老練な教師がついていたこともあって、すぐに慎みを捨て去り、自分の

操を奪った男の快楽を助長するためには、出来ることは何でもやってのけるほどで、真に悪魔的な心をもって憚ることなく他の者たちを引きずり込み、自分の二の舞いをさせようと骨折ったのである。また、この種の悪事について、彼女がどれほどその実行手段となっていたことか、おいそれとは信じ難いものがある。女同士が包み隠さず話し合い、挑発するのである。しかも、彼女は尤もらしい外見を備え、手練手管に通じた娘なのである。

サリー・マーティンに関して語られるべき点としては、そのようなことが仮にもあり得るとしてだが、さらに不埒な悪行が一つ残っている。

父親が亡くなると、母親は、彼女の言い方では、娘を改心させようとの望みからであるが、次のような提案をしたのである。つまり、破廉恥なシンクレアの家を離れ、恥辱を嘗めたことも、その当時の邪悪な生活についても露見することのない田舎に引き籠もり、その地で、体面を保つような暮しをしようというのであるが、これは、欺かれるよりは欺くことに努めよというものと並んで、母親が娘に教えた唯一の徳目だったのである。

サリーはこれに同意したが、何度となく認めていたように（また、それを得意がってもいたのであるが）、意図したところは他でもなく、母親からその財産の大半を騙し取ることであった。ずっと以前、自分を家から追放することに関して、母が同意していたことへの復讐であり、また、娘はそう言い張っているのだが、遺言書の中で、遺産の取り分一切から彼女を排除するよう父親を説得したことへの報復としてだというのである。

人道にもとるこの不正行為を、彼女は半年のうちにやってのけたのである。そして、魔性の女は戦利品と共に不潔な巣窟へと引き籠もり、自らの所業に声を立てて笑っていたのである。そして、二、三ヶ月後に起こったことであるが、その所業ゆえに母親が悲嘆のうちに命を落とした後ですら、彼女はそうしていたのである。娘に与えた不道徳な教育に対する過酷な、しかし、至当な罰ということである。

次の点は付言されて然るべきだが、これはラヴレース氏にしても、あるいは、氏の友人のいずれの者にしても、彼女が得意げに話すのをおとなしく聞いているわけには行かない悪行だったということである。彼女が自慢するたびに、彼らはいつもその点を咎め、異口同音に悪いことだと非難したのである。そして、この一件や他の複雑多岐に亘る彼女の悪事が、ラヴレースの心を早くに彼女から遠ざけたのであり、他の企てにおいても、自分の手先を演じていたのでなければ、彼も辛抱したりはしなかったはずなのである。というのも、彼女のことに触れながら、彼はよくこう言っていたからである。「どこのどいつにもわれわれを咎めさせたりはしないことだな、ジャック。〈たちの悪い妻ほど始末に負えないものはない〉(ア)というからな」とである。

間違った教育がきっかけになったということ、それは認めねばなるまい。そして、この点に関しては、サリー・マーティンが両親の責任を問うのも尤もな話だったのである。その後の成り行きに関し、自業自得と考えて然るべき理由が両親の側にあるのと同様にである。しかしながら、ラヴレースのような男と出会っていなければ、彼女はシンクレアに類した女を避けていたのである。そして、そのような教育を受けた妻たちに共通の暮らしぶりを続けていたであろうし、自分と同じように、世の中で運を試すべく家を追われた子供たち、最初の出来事が与えるいかなる印象を刻み込むのにも適した、柔らかな臘の固まり

(ア) シラ書二十五章、十九節。

にも似た子供たちの母親となっていたかもしれないのである。幸せでもなければ、幸せをもたらすわけでもない。世のためになることは決してなく、極端に惨めでなければ、それで申し分なし、といった具合にである。

ポリー・ホートンは、名門の出で信義を重んじる近衛連隊の大尉を夫に持つ、家柄の良い婦人の娘であった。

大尉はポリーが九歳の頃、その世話を母親に委ねて世を去ったが、母親は二十六歳くらいの活発な若い婦人で、二人で暮らすには結構な蓄えがあったのである。

母親はポリーを溺愛していた。しかし、厳格かつ慎重な躾を行うことによって、親としての真の、正しい愛情を証明して見せる力は持ち合わせず、しきりに結婚生活でもう一度運を試したがっている女のように、華やかに着飾り、浮ついた女性を訪ねたり、訪問を受けたりして、その目を家の外へと向けていたのである。

このことが、すこぶる活発な性質の若い未亡人を、自分自身の娘に対してさえ、この世で最も不適切な教師にしてしまうような態度、ならびに、娯楽への嗜好を促すこととともなったのである。

ホートン夫人自身、若い頃から音楽を、そして、若者の心にとっては、大人になってからの一層淫らな放蕩へとつながる、その初期の道楽に他ならないような種類の読み物、つまり、伝奇的な物語や小説類、また、歌や戯曲を、それも、道徳的なものであれ不道徳なものであれ、見境もなく好んでいたため、自分の娘が同じ好みに向かうのを放任したのである。そして、より活動的で活気に満ちた楽しみごとや、一部の者が「退屈しのぎ」と呼んでいるものに二人で加わることが出来ない時には、娘に朗読してもらうのが夫人の常であったが、自分の耳を慰め、そして、作品次第ではあるが、時には自分の心を、また、娘の心をも堕落させている時にも、本を読み、知性を磨くことを娘に教えているのだと勝手に思い込み、十分満足を覚えていたのである。というのも、お茶の席での三十分ほどの間に決まって出る自慢話は、「ミス・ホートンは言葉遣いの正確さでも、アクセントの置き方でも、また、強調の仕方でも、同じ年頃のお嬢さんたちすべてを凌駕しておりますわ」というものだったのである。また、別の折には、満足げな母親にこんなお世辞が寄せられたのである。「あらあら、奥様、ホートンお嬢様は本当に驚くほど優雅な読み方をなさいますわね。主題の精神そのものに溶け込んでおりますわ。奥様以外にはだれからも得られないものですわね、これは」といった具合にである。わざとらしい褒め言葉であるが、話題次第では、敵の口を通すと痛烈な皮肉にもなっていたことであろう。一方、愛に溺れ、思慮に欠ける母親のほうは、嬉しげな様子で、「えゝ、ミス・ホートンは指導者に名誉をもたらしてくれると申さずにはおられませんわね」と叫ぶのであった。それから、「さあ、ここへいらっしゃい、私の愛する娘や」といった具合に呼び寄せ、ご褒美のキッスをすると、「生き長らえて、この上達ぶりをご覧になったなら、お父様もさぞやお前のことをお喜びになったことでしょうね」と、満足げにため息をつきながら言葉を結ぶのだが、母親の目はぐるりと周りの者たちに向けられ、その者たちの言葉にならない称賛の気持ちを汲み取ろうとするのであった。だが、こういった種子から芽を出す植物とはいかなるものか、愛に溺れた愚かな母親はほとんど考えていなかったのである。我が子の破滅と同様に、己自身の破滅がこのご立派な教育の結果となることを、また、母娘両名の貞節が、折悪しくも同じ時刻に、陰謀を巡らす侵略者への生け贄となる定めにあるのだということを、彼女はほと

んど想像していなかったのである。

不幸な定めに身を委ね、相棒のサリーやその他の者たちの仲間入りをし、各自がそれぞれにとっての端緒、成り行き、そして、堕落を物語った時、笑いを浮かべた娘は自分の教育と躾は前述のとおりだと説明したのであった。

このような状況と併せ、次から次へと〈謙虚なるしもべ〉たちが母の周りに騒がしく群がり、母がその種の口説きにすっかり得意満面になっている様子を目の当たりにするというのは、最後には出くわすことが二人の運命となっていた、そんな放蕩児の鋼鉄の額と石の心から打ち出される火花を受け止めるべく万端の準備を整えている、火口のごとき体質の者にとって、何という出だしであったことであろうか。何という手本なのであろうか。

要するに、このような指導者の影響を受け、また、音楽会、演奏会、オペラ、芝居、寄り合い、舞踏会と、その他現代生活の種々雑多な娯楽といった扇情的なものに加え、極めて軽薄空虚な読み物の影響下で娘は育ったわけであるから、早生の果物のように早々と熟れ、権謀術数を巡らす男の手で摘み取られたとしても、驚くには当たらないのである。

彼女が告白するところによると、十五の時には、自分が読んだあらゆる小説、あらゆる喜劇のヒロインのように自分のことを想像しがちであり、主題の精神に実によく溶け込んでいたとのことである。どこかのヒーローの情熱の対象になろうと頬を輝かせ、不義の関係を始めること、そして、だれか冒険心に富む恋人のその駆け落ち相手とされることさえも、心から望んでいたのだという。ただ、無思慮な母親からは〈監禁〉も〈制止〉も期待することは出来なかったのだが、それこそは、パルテニッサ(四六)になるためには絶対不可欠なものと彼女は考えていたのである。

にも拘らず、これらの現代的特質をすべて備えながら、取り上げるほどの求婚には一つとして出会うことなく、彼女は十九歳目の年を終えたのであった。崇拝者の半数は、彼女の放埒な性向と人並みに過ぎない財産のゆえに、好意を求めて真剣に働き掛けることを恐れたし、他の者たちは、彼女が装う傲慢な態度によって遠ざけられることになったのである。そして、三つ目の部類の者たちは、母と娘いずれの弱点をも見抜くに足るだけの力を持ち合わせないため、母親による油断のない監督を想定し、近寄ることが出来ずにいたのである。

しかし、豪胆で術策に長けた男が現れると、これほど速やかにヒロインが征服されたことはかつてなかったし、女神がその神々しさをこうも早々と剥ぎ取られたことも一度としてなかったのである。というのは、娘と母親が共に欠かすことなく顔を出していた娯楽なのだが、そのオペラの劇場で、娘が見てくれの良いラヴレースに目を留めたのである。豪傑風な侮辱的言辞をそっくり用いたあの男が、二人の紳士によって自分の女であるサリー・マーティンに加えられた軽微な侮辱に憤慨している姿を目にしたのである。紳士たちはもっと脈のありそうな状態にある彼女と知り合っていたのだが、彼らに対しラヴレース氏は、一人は氏の剣の柄頭で割られた頭を抱えながら、今一人は鼻血を流しながら、コソコソと逃げ出すことを余儀なくさせたのであった。すぐに手を出しがちなところがあるのは、どうやら、二人の世に知られた人柄の一面だったようであるが、どちらも手の早さを十分に立証してみせるには至らなかったわけである。

この振舞いの勇ましさに引かれ、見物人が一人残らず勇者の側に立つと、一種恍惚とした様子でポリー・ホートンは、「あゝ、勇敢なお方」と、母親に向かって大声で叫んだので

ある。そして、「勇敢なお方の保護というのは、女性にとってはどれほど必要なことでしょうね」と、穏やかな口調を装って見せたが、この口調は、彼女が夢見ている上流階級の暮しに似合うよう、独学で身につけたものだったのである。

自分の洗練された容姿や気品ある物腰が女性の心に対して強みとなることを十分すぎるほど自覚しており、女性のまなざしのすべてを常に見張り、気取った声一つ一つに絶えず耳をそばだてている男にとって、このように好都合な言葉は注意を引かずにおかなかったわけだが、気取りのある声色こそは、攻撃を仕掛けるに相応しい対象を彼に表示してくれるものの一つだったからである。彼が常々口にしていた言葉であるが、「いずれの種類のものにせよ、気取りは狂いの生じた頭、不完全な判断力の確かな印であり、そういったものを足場にすると、徒労に終わることは滅多にない」ということである。

自分を贔屓する気持ちが非常に強く思われる娘でもあり、ひとつお近付きになってやろうと、彼は即座に心を決めた。ありとあらゆる種類の悪事について、これほど機略縦横の男もかつていなかったのである。彼は愛人のサリーに入れ知恵をした。母子の聞いているところで、彼女のことを妹と呼んだのである。そして、サリーはサリーなりに、娘とその母親の耳に自分の受けた侮辱の詳細を囁き、自らを光の天使に描いて見せたのだが、勇ましい兄の人柄にさらに明るい光を投げ掛けるためである。彼女は周知の、そして、実証済みの彼の勇気を特に褒めたたえ、その称賛の言葉に交えて、彼の出自や財産、そして、才能の数々についての詳細を並べ立てたのであるが、心奪われているポリーと恋に落ちる以外、彼には他に為すべきことは残されていないかのごとき言い種だったのである。

どのような言葉遣いを用いるべきか、ラヴレース氏はすぐさま看て取った。〈あれほど勇敢なお方なのに、それでいて、物腰はとてもお上品〉というのが若い淑女の好みに適ったのである。それに、このような外見が覆い隠している心を、彼女は知る由もないのだ。「このお方なのよ。まさしくこのお方だわ」と、彼女が母親に囁いた。そして、オペラが終了し、召使が馬車をつかまえて来ると、自分とはまったく違う方角ではあったが、母娘をその下宿の前で降ろしてやろうと、まことしやかな妹と一緒になって彼は引き受けたのである。そして、下宿に着くと、説得を受けて馬車を降り、軽い食事を共にすることとなったのである。

サリーは、お返しとして叔母のフォーブスのところを訪ねてくれるよう、母と娘に懇願し、兄が領地に戻る前のことにしてほしい旨を希望した。

母娘は約束し、自分たちの都合の好い夜を指定した。

素晴らしいもてなしが用意された。客はやって来たが、彼の名前、一族、そして、財産について触れられていた点すべてが事実であるのを知った上でのことであった。自らの身持ちに関して、厳しさなどはおよそ持ち合わせない者たちでもあり、彼の品行について細かく詮索するようなことには思い及ばなかったのである。

もてなしの一部には音楽とダンスがあり、これらが、恋慕の情によって半ば開きかけていた二人の心を解放した。そして、叔母のフォーブスと愛する男の妹が、自らの手本によって、その心を打ち解けたままに保ったのである。憧れの男が歌い、誓い、約束した。母娘の胸には感謝の念が湧き、喜びが募り、希望が増し、信頼を誓わされ、欲望のすべてが揃って反旗を翻したのである。芳醇なワインの助けもあって、二人の警戒心を完全に奪い去り、疑いを持つほどの十分な思考力も残っていないことから、サリーによって母親から

引き離され、ほどなく娘は狙い過たぬ策略家の餌食となったのである。

未亡人自身も半ば陶酔状態であったし、悪質な混ぜ物で興奮させられ、また、絶えず彼に付き添っている放蕩仲間の一人から（彼女と二人きりになる機会がその男に与えられるよう仕組まれていたのであり、次いで、執拗な口説きが展開されたのである）予期せず慇懃な扱いを受け、情欲の炎を煽り立てられたため、娘と同じ轍を踏むこととなったのである。その結果が時の経過とともに目に付くようになり、嘆かわしい思い、恥ずかしさ、後悔の念が彼女の心を捉えることとなった（己の軽率な行動ゆえに、娘の不謹慎さを咎めるわけには行かなかったのである）。そして、出産後まで生き延びることなく、同じく子を宿しているポリーを残して世を去ったのであるが、ポリーのほうは、出産を終えると、騙されたことに気づいた後も、騙した放蕩児への懸想が強すぎて、彼との交際を絶つことが出来ないまま、浪費と放縦の生活を送り、ほんの短い間に財産を使い尽くしてしまったのである。そして、ついには抜擢され、サリーと共に四半分共同経営者として、忌まわしいシンクレアに迎え入れられたのである。

これらの不幸な女性の経歴に関し、追記する必要のある事柄すべてはごく手短にまとめられるだろう。

破廉恥なシンクレアの死後、二人は忌まわしい商売を継続し、大々的な繁盛ぶりであったのだが、やがてあの家で一つの事件が起きた。名門の紳士が新顔を装った女を別の男と争い、その喧嘩で殺されたのである。サリーは紳士の腕を掴まえていた点を罪に問われたのだが、そうしている間に、もっと厚意を受けていた相手が紳士の心臓をひと突きにした上で、遁走したのである。そして、彼女は死罪で裁判に掛けられ、辛うじて有罪を免れたのであった。

この一件により、二人は女郎屋の経営を中断せざるを得なくなり、不正な利得をしっかり節約することがなかったため（一方から得たものを、もう一方に気前良く注ぎ込んでいたのである）、生活の糧を求め、これまでの自分たちのものと同類の別の女郎屋に、副管理人の立場で加わることを余儀なくされたのである。その後ほどなく、この仕事に就いている間に、サリーは熱病と不摂生ゆえの暴飲暴食から命を落とすこととなった。また、もう一人のほうは、その一ヶ月ほど後、ひどい風邪で亡くなったのであるが、流涎法（四七）の不注意な処置によって引き起こされたものであった。

その他の登場人物にとっては、これよりも楽しい情景が展開することになる。というのも、ドーカスならびにラヴレース氏の邪悪な使用人ウィリアムの早死に関し、また、両名ともに未婚のままであったし、衆に秀でたご令嬢の幸せな死の一年足らず後のことであったのだが、ベティ・バーンズならびにジョゼフ・リーマンのやつれ果て、やせ衰えての最期に関して語るのは、度を越して下世話に及ぶことにもなりかねないからである。

善良なるノートン夫人は、最愛の養女の、かつてそのように呼び習わされていた〈搾乳小屋〉において、その短い余生を望みのとおりの幸せな形で送ったのである。繰り返し「望みのとおりの」と言っておこう。何故なら、彼女は来世を切望する気持ちが極めて強かったため、この世にはあまり執着していなかったからなのである。

彼女は自らの分別によって、また、管理を委任された基金の用意周到な運用にもよるのであるが、慈善を施すことに時間の最も大きな部分を費やしたのである。若い頃から模範

的な生活を続け、我が子がめでたく職に就いたことを見届けると、疲れた旅人が心地好い眠りに就くように、心痛とか苦悶とかもなく、心安らかに、そして、静かに息を引き取ったのである。彼女の最後の言葉は、「愛する子供」の元へ、また、素晴らしい父母の元へと連れ戻してもらう希望を表明するものであったが、彼女が享けたその他の祝福すべてをもたらしてくれたあの優れた教育は、この両親の配慮と骨折りのお陰だったのである。

彼女の監督に委ねられていた貧民基金については、死の一週間前に、遺言書の指示により、ヒックマン夫人に託されることとなった。勘定書と支払い明細も添えてあったが、極めて正確に記帳されていたこともあり、夫人も彼女の方法に倣うことを言明しているほどであり、負けず劣らず立派に責任を履行したいものと、ひたすら願っているのである。

ハウ嬢は説得を受けながらも、丸々六ヶ月が経過するまでは、親友のための喪を終えようとせず、その後に至って、ヒックマン氏をこの世で最も幸せな男性の一人にしたのであった。彼女のような繊細な感性と理解力に恵まれた女性としては、徳を備えた善良な男性と結ばれたことでもあり（反省しなければならないような、そして、喜びを減じるような過去の重大な過ちを持たず、ハウ嬢に対する態度が尊敬の念に満ちていたのと同じく、ヒックマン夫人への態度は愛情に溢れているという人物なのである）、そうする以外にはなかったわけである。夫妻はすでに立派な子供二人に恵まれている。双方の同意により、妻の最愛の友の名を与えた女の子と、父の名を持つ男の子である。

慈善行為に喜びを感じている（それも、彼女の願いを入れるためであるのと同様、行為そのもののためでもある）ヒックマン氏に対し、彼女は貧民基金の処理についての彼の分担を割り当て、剽軽に語っていることだが、彼女に報告する義務を負わせることにしたのである。彼女はその処理の自らの分担部分に対し、毎週木曜日の午前中を振り当てたのである。そして、この仕事に大変な喜びを見出しているため、それが自分の娯楽のうちでも最も好ましいものの一つであることを明言するほどなのである。また、今は亡き友人の霊を祝福するよう、恩恵を施す相手一人一人に教えることになるため、なおさら好ましく思われるのだが、遺言に則った施しについての栄誉と同様、自分自身の慈善行為すべての手柄までを、彼女はこの友人に帰しているのである。

彼女の言明しているところでは、自分が生きている間は、この基金が底をつくようなことには決してしないとのことである。毎年寄付をしてくれるよう、母親の約束を取り付けてもいるのである。また、ヒックマン氏は年二十ポンドを同基金のために割り当てたのである。この点を考慮し、彼女は毎年四名の基金受給者の推薦を彼に許している。「許す」というのが彼女の言い方であるが、この浄財の分配については、彼女がその全権を握っているからであって、これは彼女が実際に掌握している、あるいは、掌握する必要のある唯一の特権なのである。他のすべての場合については、二人の間にはただ一つの意思のみが存在するのであり、それも、いかなるものにせよ、話題の如何を問わず、どちらが先に口を開くかにより、彼の意思となり、あるいは、彼女の意思となっていたのである。時々、寛大な心のままに、また、剽軽な口調で彼女は語っているのであるが、ヒックマン夫人としては、かつてハウ嬢であったことを完全に忘れ去るわけには行かないとのことである。何故なら、彼がハウ嬢という立場の自分を、短所のすべてもひっくるめて愛してくれたのでなかったなら、自分は決してヒックマン夫人にはなっていなかったのだから、というのである。しかしながら、彼女は機会あるごとに、それも、彼本人と同様に他の者たちに向か

っても、次の点を本心から認めているのである。つまり、自分が力を握っていた頃の彼の辛抱強さに対しても、また、彼が力を握ってからの自分への思いやり溢れる態度に対しても、返報のしようもないほど恩義に与っているということをである。

そして、かつて最愛の友に寄せてくれた彼の思いやり、また、彼に対する親友の高い評価を思い返すにつれ、なお一層彼女は彼への敬慕の念を強めているのである。そして、彼女にとってこれに劣らず有難く思われるのは、この尊敬すべき男性が、生き長らえている者たちにとって故人の思い出をかけがえのないものとしてくれる、あの敬意と愛情のこもった追憶に、真心の限りを尽くして、彼女と共に浸ってくれることなのである。

ベルフォード氏も、最も親しかった友の不幸な運命に平然としていられるほどに、人情味や愛情に欠けていたのではない。しかし、先の物語で触れられたばかりの、数人の仲間の早すぎる死を思い起こす時(ア)、つまり、哀れな友ベルトンのショッキングなまでの落胆ぶりと最期、悪党トムリンソンに降り懸かった歴然たる報い、破廉恥なシンクレアの恥ずべき末路、彼にとってはさらに大切であった友が見せた強い悔恨の情、そして、これに対し、女性の中でも最も卓越した者によって示された手本や、彼女の祝福に満ちた準備と幸せな死に思いを馳せる時、また、畏敬の念と恐れとを伴うことが多いのだが、己の邪悪な習慣が堕落した心に深く根を下ろしているために、これらすべての警告、そして、この見事な手本はその悪習を克服し、改心を可能にする上でただただ必要不可欠なもののように思われるということ、また、こういった覚醒への呼び掛けが彼のような性向の人間に向かって為されたためしはまずないという点、あるいは、(仮に為されても)若さの盛りにある時や活力が横溢している場合には、望ましい効果を伴うことは滅多にないという点を考慮する時 … これらの事柄すべてを思い起こすと、こういった呼び掛けによって自分を「火の中から取り出された燃えさし」(四八)のごとくに救い出してくれた神の恵みに対し、氏は崇敬の念を抱くのであり、また、いかなるものにせよ、自分がきっかけとなっていたかもしれない他人の損害ないし被害に対し、力の及ぶかぎり償いをすると同様に、自分のせいで危険な目に遭わされた人間については、誰彼なく見つけ出し、改心させるよう努める義務が自分にはあるのだと、氏はそのように考えるのである。

比類なき婦人から光栄にも委託された任務について言えば、喜ばしいことに、氏はわずか数ヶ月でその責任を果たし、だれにとっても満足の行く結果となったのであるが、あの不幸な一族すらが得心し、この件に関して氏に謝辞を呈していたのである。氏はまた、決算報告書の引き渡しに際し、遺言書記載の用途のために自らの遺贈分を放棄せずには納得しなかったのである。従って、いわゆる貧民基金は極めて多額のものになっており、最適格者を救済するための永続的な資金源となることであろう。

徳義の点から言えば、他の恵みすべてを確実に自分のものとするためにも、ベルフォード氏にとってさらに望むべきこの世の幸せが一つだけ存在するのである。それは、現世の幸せの中でも最大のものであるが、貞節で思慮深い妻のことである。はなはだしく放縦な生活を送ってきただけに、そのような相手に恵まれる資格が自分にあるとは考えていなかったのだが、やがて、我と我が身に対し公正な検分を行った結果、自らの新たな決断を悦ばしく思う気持ちは極めて大きく、これまでの生き方に対する嫌悪の情もすこぶる真摯な

(ア) 第七巻の百五十一頁を参照のこと。また、第八巻の百五頁及び百七十三頁も参照のこと。

ものであることを知り、それだけに一層、道を踏み外すことへの不安が薄れたのである。

このような見込みに基づき、ラヴレース氏から仄めかされたいくつかの励ましの言葉を胸に暖めていたこともあり、また、至極幸運なことには、M卿ならびにあの高貴な一族すべてに対し、彼らには有難く思われる幾許かの貢献を行うことにより（この点に関する不幸な友人の要望が、他の書類と一緒に、ド・ラ・トゥールによって彼の遺体と共に届けられたのである）、その希望を満たす力が自分に備わっていることから、卿の二人の姪のうちの年長者、シャーロット・モンタギュー嬢への求婚について、あの貴族の許可を求めたのである。そして、同時に、異存の出ないような財産贈与の申し出を行ったことから、卿のほうでも快く彼のためにその強い影響力を行使したのである。また、卿の立派な姪にも他に約束はなく、ベルフォード氏との結婚を快諾し、それにより、完全なまでの幸せを彼にもたらしてくれたのであるが、それは、被害者側の一部の者についてはすでに死亡しているために、また、他の者たちに関しては回復不可能であるために、償いをするわけにも行かないという、そんな極悪非道の振舞いが思い起こされる男にとっては、可能なかぎり完全な幸せだったのである。

〈健康にして体力旺盛なる時に、己の生き方の誤りを知り、改める者は幸せである。しかし、後悔すべき重大かつ故意の罪過を持たない者の幸せは、いかばかりそれに優ることであろうか。そのような人間にもたらされる喜びはどれほど雑じりけがなく純粋なものであろうか〉

存命中にM卿は、妹である二人の令夫人共々、立派な姪の財産を気前良く増やしてやったのである。そして、ベルフォード氏が姪によって男児を一人恵まれたこともあり、卿は臨終に際して［不幸な甥の早過ぎる死の、ちょうど二年後のことであったが］、この男児とその子々孫々末代に至るまで（また、その男児が結婚せずに死亡した場合には、誰彼を問わず、姪のいずれかの子供に対し）、ハートフォードシャーの地所（ラヴレース氏に譲る予定であったもの）を遺贈することとしたのだが、卿はこの地所を自己の不動産の二分の一相当の価値にまで高めていたのである。また、動産の折半分についても、卿は同婦人に遺贈したのであった。

洗練された若い淑女、パティ・モンタギュー嬢は［彼女の高貴な叔父は死に際して、自己の不動産および動産のもう一方の折半分を、バークシャーの邸宅を含め、彼女に遺贈したのである］、M卿の死去の折に転居し、現在のところ、素晴らしい姉ベルフォード夫人と暮らしている。しかしながら、まもなく準男爵の夫人の座に納まるのは十中八九間違いのないところであろう。この準男爵は旧家の出身で徳が高く、優れた資質の数々と十分な財産に恵まれており、旅行から帰国したばかりであるが、出発時に備えていた極めて優れた品性にも優る品性を身につけて帰ってきたのである。旅行の目的が向上進歩にあるとはいえ、極めて異例のことと言えよう。

モーデン大佐はかくも多くの美質と才芸とに恵まれており、不幸であろうはずもないのだが、フィレンツェから書き送っている［意図していたとおり速やかに戻って英国に居を構えるという目的は、ラヴレース氏との不幸な事件の後、変更していたのである］文通相手の遺言執行人に宛てた数通の手紙の中では、次のように言明している。つまり、大佐自身としては、決闘の挑戦状と思しきものをそのままに受け止めるか、あるいは、従姉妹に対する不当な仕打ちへの怒りはすべて放棄したことをおとなしく認め、遠慮なくラヴレー

ス氏の陰口を叩いたことに対し、ある程度許しを乞うか、そのいずれかを余儀なくされているように思われたのだが、また、正直に言って、あのように一方か他方かどちらかの選択を要求されたことも、当時は遺憾と思わなかったのだが、しかし今、決闘に対する愛する従姉妹の反対理由を冷静に思い起こす時、また、不幸な男におそらく支払わせたものと思われる代価のことを思い起こす時、「神様があの人に後悔のための時間をお与えになるのでしたら、どうして貴方がそれを拒んで良いものでしょうか」(ア)という、死後に届いた従姉妹の手紙に見られる言葉に、さらに十全なる考慮を払っておきたかったと思う、というのである。

最後に一言触れておくと、善良な未亡人ロヴィック夫人はなおもベルフォード氏の屋敷に住み、その思慮深い振舞い、敬虔さ、そして、有益さのゆえに、奥方および家族全員に慕われているのである。

(ア) 尊敬すべき人々の中には、決闘という憎むべき悪習に対して、〈キリスト教の最高にして最重要なる教義〉の推奨を意図した作品の結末においては、注記として、さらに強固な不賛意の表明が為されることを希望する者たちもいたのである。拝察するところ、それらの人々は、その問題に関し、すでに第二巻の四十四頁と、第八巻の手紙十、三十七、三十八、三十九において為されている処置に、十分な注意を払ってくださらなかったものと思われる。

あとがき

〈はしがき〉において言及されたものにして、先の物語の様々な箇所に対してと同様、その結末部に対して唱えられた異議いくつかにつき、手短に検討が加えられたものである。

前掲の作品が三回に分けて出版されたこともあり、その刊行中に、作者は匿名の手紙を多数拝受した次第であるが、それらの手紙において筆者たちはそれぞれに、懸念される悲惨な結末について、希望を表明しておられたのである。

女性陣から作者に寄せられた希望は概ね、いわゆる〈幸せな結末〉を支持しようとするものであった。女性の筆者の中には、彼女らの言葉を借りるなら、ヒロインの人柄に心奪われたとのことであり、彼女を幸せにしてもらいたい旨を熱心に希望する者もいたのである。また、他の者たちも気持ちは同じであり、〈詩的正義〉からしてそうあらねばならないと主張したのである。気立ての好さと情け深さとが動機となっていることは疑いのないところであるが、才気煥発な一人の淑女は次のように述べているのである。「それに、自分の作品を好きなように終わらせますのは、作者の権限内のことと結論づけられねばなりませんが、主要人物たちに対し好意的な気持ちを持つよう、読者に働き掛けながら、その読者に、苦痛よりも楽しみのほうを与えようとなさらないのは何故でしょうか」とである。

その他の者たち、そして、幾人かの紳士は悲劇一般に対して異議を唱え、喜劇擁護を表明していたが、それは、シンクレア夫人お抱えの女全員、および、シンクレア自身によってその趣味を支持されていた、あのラヴレースの言葉とほぼ同工のものである。彼はこう語っていたのである(ア)。「私はひどく感じ易い質なのです。楽しみごとの中に悲しみを持ち込んだり、他人の災難を自分のものにしたりするまでもなく、この世には、私たちの心を憂鬱にすることが十分に存在しているのですよ」とである。

それで、このハッピーエンドはいかなる方法で成し遂げられることになっていたのであろうか。言うまでもなく、以下のごとき極めて安易にして陳腐な応急手段によるものであった。つまり、ラヴレースを改心させ、クラリッサと結婚させることによってである。ただ、彼女の試練を一つでも、また、彼女の苦難のいずれをも（彼女の苦悩の数々が、読み進むにつれて心優しい読者にもたらす楽しみのためであるが）減ずることなしになのである。最大の暴虐行為は除外されるが、実際、彼らとしてもこの暴虐行為については、一部にはラヴレース本人への敬意から、また一部には上品さを保つためであるが、彼女には容赦してやりたい気持ちだったのである。

しかし、自作の運命がどのようなものになるとしても、作者としては別の手法を用いることに決めていたのである。作者が常日頃考えていたのは、突然の改心というのは、とり

(ア) 第四巻の百四頁を参照のこと。

わけ、推測し理解するのが読者の善意に委ねられるような突然の改心には、技巧もなければ自然さもなく、蓋然性すら見当たらないのだということ、そして、さらに言えば、そういった改心ははなはだ悪い手本になるということなのである。長年に亘り、ラヴレースのような男に自らの邪悪さを得意がらせ、かつ、彼の為すべきことは他でもなく、女性の中でも最善の者の手を受け取るべく、自らの手を好きな時に、慈悲と善意の行為として差し出すだけなのだといった考えを抱かせるのは、また、その女性へと同様、他の者たちにも加えた極悪非道の振舞いすべてに対し、結婚が十分な償いとなるように思われてしまうのは、作者には耐えられないことだったのである。それに、もう一つの作品において作者が明示しているところであるが、改心が確かなものとなるのは、美貌によるのではない。相手への思慮深さを伴った情熱によるのでもなければ、また、夫の心が神の慈悲深い指に触れられていない場合には、妻の心の善良さによるわけでもなく、手本によってすら保証されるものではないということである。

この時点に至ってはお分かりいただけるのであろうが、作者は大きな目的を念頭に置いていたのである。作者が日々の暮しの中で目にしてきたものといえば、神への懐疑や不信心が公然と認められ、言論界から広められるよう、努力さえされていることであり、キリスト教の偉大な教えが疑問視され、自己否定と禁欲の教えはキリスト教徒の美徳の目録から抹消されていることである。そして、家の外での娯楽や贅沢に対する奔放なまでの嗜好が、あらゆる地位や階級の人々の間で熱心に奨励され、公徳心同様に、家庭内での美徳も総じて排除されてしまっていることである。

このようにあまねく腐敗が行き渡り、宗教界すらその重要性の大部分を失い、聖職者たちは利害に動かされる集団と目されている時、かくも要望の多い改革の導入に向けて微力を投じるなら、その首尾の如何はともあれ、己の心の咎めに応えることが出来るはずだと作者は考えたのである。また、気晴らしや楽しみごとにうつつを抜かしている時代にあっては、娯楽という流行の外観を装って、キリスト教の偉大な教えを、いわばこっそりと忍び込ませ、検討を加えることが可能であるなら、己の目的に一番適いそうに思ったのであるが、次の詩行に見られる詩人の意図を思い起こしてのことでもあった。

詩には出来るのかもしれない。説教に背を向ける者を探し出し、
楽しみごとを犠牲の行為へと変えることが（四九）。

それゆえに作者は、いまだかつて試みられたことのないものを試みてみようと決心したのである。作者の考えるところでは、喜劇作家たちがその天晴な主人公を模倣の対象となるように描くことがないのと同様、悲劇作家たちも己の主人公を真の同情の対象として描くことは滅多にないし、その死に際して、主人公たちに来世での望みに期待を抱かせるようなことはさらに少なかったと思われるのである。それゆえ、主人公たちは死ぬと同時に跡形もなく消滅して行くように見える。このような例においては、死は恐ろしいものとして映るに違いない。最大の凶事と目されるに違いないのである。しかし、万人共通の定めでありながら、何故に死は忌まわしい様相で描かれるのであろうか。

確かに作者は、邪悪な人間の死を力のかぎり恐ろしく描くのは妥当なことと考えていたのである。しかしながら、善良な人間の死については、この世のバラム（五〇）たちでさえも

自分の最期はヒロインの最期のようであってほしいと願わずにいられなくなるような、そんな好ましい姿に描くべく、作者は努力を傾けたのである。

また、大多数の作家たちが有効利用してきたため、一部の者から強く求められている詩的正義なるものも、結局のところ、人間の修練に用いるのが適当だと思し召しになったことを、天啓により神がわれわれにお示しくださっているものとは異なる、別種の摂理に他ならないのではないだろうか。神は人間を試練の状態でのみこの世に置かれ、善と悪とをひどく交ぜ合わせられたがゆえに、われわれとしてはより均等な善悪の配分に期待を寄せねばならなくなっているわけである。

クラリッサの物語（と言うより、むしろ戯曲風談話）の作者は、従って、貞節がその報いの成就を目の当たりにする時まで、苦しみ悩む貞女の解放を引き延ばした点に関し、キリスト教の教理によって十分に正当化されるわけである。

ただし、物語中に見られる行いを全面的に宗教［昨今の一部批評家にとっては、おそらく、最重要とは思われない拠りどころであろう］の保護下に委ねたりしないためだが、次の点は述べられねばならない。つまり、作者はその悲惨な結末に関し、古今を通じて最大の理知の人、そして、最高の文章の鑑定人により正当性を認められているということである。学識ある読者はご承知のとおり、筆者が言わんとしているのはアリストテレスのことであるが、この問題に関するアリストテレスの所感について、愛すべき我が国の作家の言葉を借りて述べることをお許し願いたい。

アディソン氏はこう語っているのである(ア)。「イギリスの悲劇作家たちは苦境に置かれている善良な、あるいは、潔白な人間を描く場合、その人物を苦難から救い出すなり、敵に対して勝利を収めさせるまでは、手を引くべきではないと思い込んでいる。彼らは報いと懲罰との均等な配分、および、詩的正義の偏りのない遂行を強いられているのだという、現代批評の滑稽なる教義に導かれ、この過ちに陥っているのである。この規則を最初に制定したのはだれなのか、筆者は知らないが、ただ、それが自然の理法とか理性、あるいは、古来の習わしとかに一切基礎を置いていないことは確信しているのである。

われわれの見るところでは、幸福と不幸とはこの世に生きる者すべての上に等しく訪れるのである。また、悲劇の主たる狙いは憐れみの情と恐怖の念を観客の心に引き起こすことであるから、善良な者や潔白な者を常に幸せや成功へと導いているなら、われわれはこの大目的を挫くことになるのである。

善良な人間が悲劇の中心部においてどのような苦難や失望を経験しようとも、最後の幕で、彼が念願の目的地に到着する予定であることを承知している時には、それらの苦難や失望もわれわれの心には些細な印象しか残さないことだろう。

その人物が難儀の最中で苦闘する姿を見る時にも、彼がそこからの逃げ道を見つけ出すことや、彼の悲しみが、その時点ではいかに大きなものであれ、すぐにも喜びとなって終わることに確信を抱いているがゆえに、われわれは自らを慰める傾向にあるのである。

かくのごとき理由から、古の悲劇作家たちは劇中の人物を扱うに当たり、自らが選択した一連の出来事の中で見られるとおりに、あるいは、最も好ましい仕方で観客の心を動か

(ア)『スペクテーター』第一巻、四十号。

すことが出来るよう、善良な者を時には幸福に、また時には悲惨にすることにより、それらの人物が世の中で扱われているのと同じように扱ったのである。

アリストテレスはそれらの種類のいずれで書かれた悲劇についても検討を加え、不幸な結末に終わるものが常に人々を楽しませて来たのであり、演劇の公開競技においても、幸福な終わり方をするものから賞を奪い去っていたと述べているのである。

恐怖の念と憐れみの情は〈心地好き苦悩〉を心に残し、観客を、喜びや満足のささやかな一時的衝動のいずれよりもはるかに永続的で喜ばしいような、真面目で落ち着きのある思考の虜にしてしまうのである。

それゆえ、観客のお気に入りとなっている人物たちが災難から立ち直るものより、災難に打ちひしがれているもののほうが、イギリスの悲劇の中ではより多く成功を収めていることにわれわれは気づくのである。

この種の最も優れた劇作品は『孤児』『ヴェニスは揺るがず』『アレクサンドロス大王』『テオドシウス』『愛ゆえに』『オイディプース王』『オルーノコー』『オセロー』等(五一)である。

シェークスピアが筆にした形での『リア王』は、称賛に値する同種の悲劇であるが、詩的正義という荒唐無稽な観念に則って書き改められた形では、卑見によれば、その美しさの半ばを失っているのである。

それと同時に、この点は認めなければならない。極めて高尚な悲劇で、もう一方の方式に基づいて組み上げられ、幸福な終わり方をしているものがあるということである。前述の批評の導入以後に書かれた優れた悲劇が、実際にこの方向へと進んでおり、例えば、『喪服の花嫁』『チムール』(ア)『ウリッセース』『パイドラーとヒッポリュトス』に加え、ドライデン氏のほとんどの作品がそうである。さらに、次の点も認めねばなるまい。シェークスピアの多くの作品と古の著名な悲劇のいくつかが、同じ形式を与えられているということである。それゆえ、筆者が異議を唱えているのはこの手法による悲劇の執筆に対してではなく、これを唯一の方法として制定し、よってイギリスの悲劇に大幅な拘束を加え、我が国の作家たちの思潮に間違った方向性を与えるかもしれない批評に対してなのだ」とである。

この問題は『スペクテーター』へのある投書の中でさらに検討が加えられている(イ)。

投書の主はこう述べているのである。「〈詩的正義〉と呼ばれる新造語についてのご高説は、著名な批評家の一部から反駁を受けているかにお見受けいたします。貴紙にて開陳なさいましたご高説の補強となる理由をさらにいくつか、問題の核心へ迫るべく努力をいたしまして、作成した次第です　…

完全無欠な人間ですら、己の頭上に罰を招き寄せ、そして、その身に降り懸かる災難のいずれに関しましても、神の摂理を正当化するに足るだけの悪徳は持ち合わせているものです。このような理由から、概して高潔な品性の人物が苦難に遭い、悲劇の結末で運命の打撃に打ちひしがれる場合のほうが、幸せで勝ち誇った姿に描かれる時よりも、教訓や寓

(ア) ただし、『チムール』においては、最も愛すべき登場人物の二人、モネセスとアルパシアは殉死しているのである。

(イ) 『スペクテーター』第七巻、五百四十八号を参照のこと。

意がはるかに優れたものとならないはずはないように思うのです。このような手本は人間性に備わる傲慢さを矯正し、憐れみや思いやりの感情によって観る者の心を和らげ、その者自身が個人的な苦悩に沈んでいるのを慰めますし、首尾の如何によって人の美徳を判断してはいけないことを教えてくれるのです(ア)。古代世界の全体を見渡しても、人間的な弱みの数々をはるかに超越しているため、悲劇の作品中で、不幸と災難に身を沈めている姿をあまり自然に描かれることはないという、それほどの実在のヒーローを一人として思い浮かべることは出来ないのです。やはり作家は、その人物像の中に何か支配的な衝動とか無分別さとかを見出し、その者の苦難について、神慮には何らの不当性もないことを十分に証明するような仕方で表示するかもしれないのです。と申しますのも、ホラティウスが述べておりますように、われわれが通常悪党と呼んでおります輩の場合ほど大々的にではありませんが、最も善良な人間にすら過失はあるからなのです(イ)。

一部の紳士の主張するような厳格な詩的正義が（と、投書家は続けている）この芸術分野で遵守されねばならないのでしたら、悲劇と同様、英雄詩にまで敷衍されていけない理由は少しもありません。ところが、ホメーロスにあっては、それがほとんど守られておりませんし、アキレウスは栄光と成功の極みに位置づけられております。彼の人柄は道徳的には堕落しており、当代の批評家の文言を借りますなら、詩的に良好であるに過ぎないにも拘らずです。『アイネーイス』は罪のない不幸な人物で満たされております。ニーソスとエウリュアロス、ラウソスとパラースは、すべて不幸な最期を迎えているのです。トロイア略奪の折にリペウスが倒れたことを、詩人は次のように特筆しておりますが、これはトロイア人の中でも最も公正な男だったのです。

——Cadit & Ripheus, justissimus unus
Qui fuit in Teucris, & servantissimus aequi.
Diis aliter visum est. ——

神々が至当なりと考え、かくて清廉潔白なるリペウスは薨れぬ。
公正なる正義を愛し、よく守りし者が（五二）。

そして、あのパンテウスは抜きん出た信仰心によっても、また、自らが神官を勤めるアポロの、その聖なる飾り帯によっても守られるわけには行かなかったのです。

— Nec te tua plurima, Pantheu,
Labentem pietas, nec Apollinis infula texit. *Æn.* II.

汝の信仰も、また、汝の神職をもってしても、パンテウスよ、
時ならず墓穴へと急ぐ汝を救うこと能わず。 『アイネーイス』Ⅱ。

（ア）シロアムの塔が倒れて死んだ十八人の人間の例で、我らが聖なる救い主ご自身がお与えになっている警告である。ルカによる福音書十三章、四節。
（イ）何人も過失なしに生まれず、最も少なき過失に苦しむ人が最も善き人なり（五三）。

ここで、ギリシアおよびラテンの両方につき、古代の悲劇作家たちの常套的な手法に言及することも出来るのですが、この点についての詳細は前述の紙面において論じられていますので、一言も触れずにおくこととといたします。自説擁護のため、アリストテレスの文言をいくつかお示しすることも出来ましょう。そして、完全無欠なまでに善良な人間は不幸な姿に描かれてはいけないと、ある場所で彼が言っているとしても、この言葉は、完全無欠な善人を舞台に登場させるのが適当だと考える者すべてを正当化しているものではありません。あの著者の筆法に親しんでいる人間は十分に承知しているのです。自分の扱う主題の全範囲を区分した章の中に取り込むよう、架空のものであって、実践に移すわけには行かないような例を、彼がしばしば用いるということをです …

以下の所見をもって結びにさせていただきましょう（と、この紳士は語るのである）。前述の『スペクテーター』は詩的正義の規則に大いに反対で、善人も悲劇の中で不幸な結末を迎えることがあると主張しているのですが、悪人が罰を受けずに済むこともあるとは言っていないということです。この区別立ての理由は極めて明白です。即ち、人間の中の最善の者たちでさえ［前述のとおり］、その身に降り懸かる不幸や苦難のいずれに関しましても、神の摂理を正当化するに足るだけの欠点を持ち合わせているからです。しかし、はなはだ罪深いために、幸福なことを主張すること、あるいは、自負することの出来ない者も多いのです。最善の人間ですら懲罰に値することも有り得ますが、最悪の人間に幸せになる資格はないのです」とである。

すでに見たとおり、アディソン氏の言によると、アリストテレスは、いずれの種類で書かれた悲劇についても検討を加え、不幸な結末に終わるものが常に人々を楽しませて来たのであり、演劇の公開競技においても、幸福な終わり方をするものから賞を奪い去っていたと述べている、とのことである。勝手ながら、作者としては次のように付言しておきたい。つまり、このような選り好みが行われたのは、舞台での演芸が行政官の監督下にあった時代のこと、競争の対象となった賞は国によって与えられ、それゆえ、作家間の競争は熱を帯び、また、世に名高いあの国家では、学問がその栄光の極みにあった時代のことであったということである。

その趣味と優雅さとが最高度に達していたこの時代に、アテナイの人々が現在のわれわれよりも人情味に欠け、優しさが劣っていたなどとは想像出来ないのである。しかしながら、巧みに描かれ、演じられていると映る苦難の数々を前にして、彼らは心動かされることを恐れなかったし、その様子を人目に晒しても恥じ入ることはなかったのである。要するに、彼らは最も賢い人間と同じく、歓楽の館に赴くよりは、忌中の家を訪れるほうが良いという考えだったのである。そして、惜しみなく悲しみに耽って構わない不屈の精神を備えていたのだが、それによって己の心が改められることに気づいたからなのである。

ホラティウスも、また、アウグストゥス帝時代の洗練の極みにあるローマ人たちも、心動かされることを願ったのである。

Ac ne forte putes me, quae facere ipse recusem,
Cum recte tractant alii, laudare maligne;
Ille per extentum funem mihi posse videtur
Ire poeta, meum qui pectus inaniter angit,

Irritat, mulcet; falsis terroribus implet,
Ut magus; & modo me Thebis, modo ponit Athenis.

ポープ氏による翻訳を以下に掲げよう。

だが、教えるよりもむしろ冷やかしているのだとか、
理解不能の芸術を悪意で褒めているのだと思われぬよう、
僭越ながら、一度だけ、世の人々に教えたい、
詩人とヘボ詩人とを見分ける術を。
詩人とはこの胸に千の苦痛を与える者だ。
醸し出す感情一つ一つを痛感させ、
魔法にも優る技により憤らせ、落ち着かせる。
憐れみと恐怖の念でこの胸を引き裂き、
地面の上を、あるいは中空を、時と所を選ばず、
この身をテーバイへ、また、アテナイへと連れ去るのだ（五四）。

女性読者の方々も、隣国の著名な批評家が、前述の偉大な古人によって制定された規則に基づき、悲劇の特性と目的に関して述べている言葉(ア)に耳を傾けていただきたい。

批評家はこう述べているのである。「この世の大人物たちが貶められている姿を描くことによって、悲劇は人を謙虚にするのである。また、人生の不可思議な出来事や、最重要人物すら甘んじて受ける予期せぬ恥辱を示すことによって、人を心優しく、慈悲深くしてくれるのである。

しかしながら、人は生来が臆病で情け深いため、別の窮状に陥ることもあろう。極度の恐れは心の堅固さを揺るがすかもしれず、度を越した同情心は公明正大さを低下させるかもしれない。これら二つの弱みを調整するのが悲劇の本務なのである。最も尊敬すべき人物にあっても極めて例の多いことを示すことで恥辱に備えさせ、防御を固めさせるのである。また、人類の最高の部類に属する者たちにも起こることを目の当たりにして、人は異常な出来事を恐れなくなるであろうし、最も善良な人間にそれらが生じるのを目にするなら、その実例の効果はますます増大すると付け加えても構うまい。

だが、人間に共通の不幸をあまりにも意気地なく恐れてはいけないと教えるのが悲劇の目的であるように、それはまた、憐れみに値する対象への同情を差し控えることも教えようとしているのである。何故なら、惨めになって当然な者たちの苦しみに心を動かされるのは、正当なこととは言えないからである。アイスキュロスの劇（五五）においてクリュタイムネーストラがオレステースに殺されるのを、われわれは同情なしに眺めることも出来るだろうが、それは、彼女が夫アガメムノーンを殺害していたからである。しかし、エウリピデスの作品（五六）において、ヒッポリュトスが継母パイドラーの企みによって死ぬのを眺める時、われわれは同情を禁じ得ないのである。貞潔かつ廉正であるということさえなければ、命を落とすことはなかったからだ」とである。

(ア) アリストテレスの『詩学』を論じたラパン（五七）の言葉である。

これらが不幸な終わり方をする物語にとって極めて有利な証言なのである。そこで、勝手ながら、筆者としてはそれらから得られる次の推論を補足しておきたい。廉正かつ善良な者の一時的な苦難が異教の道義に基づいて説明され、正当化されるのであれば、キリスト教徒の読者にとっては、クラリッサの物語のいたるところで強調されている、来世での報いという教義を考慮することから、いわゆる不幸な結末の擁護となるさらに多くの、そして、非常に強力な理由が浮かんで来ることであろう。

その身分の高さで世に知られているのだが、キリスト教の最も重要な教義の数々を見事に擁護した点ではるかに名の通っている、当代の才気溢れるお方（五八）は（一例のみを挙げるに止めると）、近ごろ公刊された哀愁に満ちた哀悼詩の結びにおいて、この点を確信しているかにも見えるのであるが、その部分で氏は、希望のない人間の立場で（聖書の言い回しによってわれわれ自身を表現しつつ）衆に秀でた妻の死を嘆いた後、次のように自らを慰めているのである。

だが、あゝ、我が魂よ、募り来る不満を抑えるのだ。
僭越にも全知の支配者を糾弾してはならず、
あるいは、不遜な嘆きをもって
至高の天命に不平を述べてもいけない。
汝の溢れんばかりの喜びすべてがすぐに消え去ることこそ
神の公正この上なき意思にして、その意思には従わねばならぬ。

汝の愚かな愛をもって、彼女への神の恩寵を抑え、
罪と苦痛のこの卑しい住まいに、
彼女の無垢で高貴な魂を
不当にも、汝一人の利益のために引き留めるのか。
否 ― むしろ、汝の下等なる魂を引き上げるべく
努めるのだ。あの曇りなき輝きへ、
とこしえの光の神々しき煌きへと。
その煌きに包まれ、今彼女は憐れみを込めて眺めるのだ。
人間の幸せのいかにはかなく、いかに頼りなく、
いかに脆いものかを（五九）。

しかしながら、この問題に関し、これまでに提示されてきたものすべてよりもはるかに重要なのは、『詩篇』の作者の言葉である。

作者はこう語っている(ア)。「わたしはあやうく足を滑らせ、一歩一歩を踏み誤りそうになっていた。神に逆らう者の安泰を見て、わたしは驕る者をうらやんだ。からだも肥えているからである。だれにもある労苦すら彼らにはない。だれもがかかる病も彼らには触れない。目は脂肪の中から見まわし、心には悪だくみが溢れる。わたしは心を清く保ち、手を洗って潔白を示したが、むなしかった。日ごと、わたしは病に打たれ、朝ごとに懲らし

（ア）『詩篇』七十三篇。

めを受ける。わたしの目に労苦と映ることの意味を知りたいと思い計り、ついに、私は神の聖所を訪れ、彼らの行く末を見分けた。あなたは御計らいに従ってわたしを導き、後には栄光のうちに私を取られるであろう」とである。

これが『詩篇』作者の慰めであり、頼りとする点なのである。厚かましくも人は、一般的な自然の成り行きを変えようとして、また、か弱い人間が避けられずにしがみついている寿命を出来るかぎり免れるために、より良い定めを行うことが可能だと考えるのだろうか。そして、それを〈詩的正義〉と称し、神の正義を暗に非難しようというのだろうか。

詩的正義の観念に基づく反対意見を回避するため、一層の努力が重ねられたのは、その観念に基礎を置く考え方がわれわれの間で広く信用を得るに至ったからであり、また、その観念が、それを支援するものとして、人情味と善良さの外見を有していることも認められねばならないからである。しかしながら、クラリッサの物語の作者としては、卑見ながら、その悲惨な結末の擁護のためにそれらの努力に言及することは、反対の立場を弁護する方々にすらご容赦いただけるものと考えている。何故なら、現代的な規則に基づく詩的正義の観念が今回の仕事以上に厳格に守られた例は、この種の作品では滅多になかったことだからである。

邪悪な人間を目覚めさせ、そして、矯正するために、かつて与えられた最も強烈で最も頻繁な悔悟と自責の念に逆らい、悪行に固執して憚らなかったラヴレース氏 ― この大罪人、この強情な罪人は、罪に見合った罰を受けているのではないだろうか。また、その罰は自分が買収したジョゼフ・リーマン本人の通報をきっかけとして(テ)、そして、自分が堕落せしめた当の女たちによってもたらされたのではないだろうか(イ)。叔父の死期を早めた点に関して責任を負うているベルトン氏(ウ)、ハーロー一族の全員、極悪非道のトムリンソン、破廉恥なシンクレアとその浅ましい仲間たち、そして、それぞれの主人たちが悪辣な計画を実行するに当たり、その一助となった邪悪な召使たちまでも含め、彼らすべては同じように見せしめとなる罰を受けてはいないだろうか。

これに反し、ハウ嬢は悲運に見舞われた心気高い令嬢への崇高な友情に対して、ヒックマン氏は非の打ち所とてない品行と、誠実な生き方に対して、また、悔い改めており、度量も狭くはないベルフォード氏や立派なノートン夫人も、著しく幸せになっているのではないだろうか。

また、真剣にキリスト教信仰告白を行う者であればだれしも、クラリッサの壮麗な死を嘆くよりは羨むのではないだろうか。彼女のごく幼い頃からの信仰心、広範に及ぶ慈善行為、確固たる美徳、キリスト教徒に相応しい謙虚さ、寛大な心、従順な態度、そして、諦念は、神のみが報いることの出来るものだったのである(エ)。

さて、今回の版の〈はしがき〉で約束されたところに従い、次に、作者が承知している

(ア) 第七巻(六〇)の百七十四頁を参照のこと。(イ) 同、百八十五頁。(ウ) 第七巻、百五十頁を参照のこと。(エ) そして、ここで読者に次の点を思い起こしていただくのも、的外れなこととは言えないだろう。本作品中、早くも第二巻の百八十五頁において、神の摂理が彼女自身によって正当視されていたということである。そして、彼女はその感想を次のように結んでいる。「いつまでも生き長らえるわけでもございません。臨終の場面が幸せに包まれていてくれたら、と願っております」とである。

彼女の望みは叶えられた。臨終の場面は幸せなものだったのである。

ようなその他の異議に対し、手短に触れることとしよう。というのも、〈はしがき〉において述べられたように、「本書が生活と習俗の一記録として世に問われたものである以上、手本としての効力を持つことが企図されている部分については、作品全体の構想や人間性と矛盾しない程度に、異論の余地のないものでなければならない」からである。

愛情にあまりに冷たいところがあり、傲慢に過ぎるし、時には腹立たしくさえあるとして、幾人かの人々がヒロインを非難して来たのである。しかし、失礼ながら、この異議は物語やクラリッサの人柄、そして、彼女の置かれた特殊な立場に対する注意の欠如から生じていると申し上げて構わないだろう。

意図されていたところは、彼女が恋をすることではなく、そのような表現を許していただけるならの話だが、単に好感を覚えることだけだったのである。彼女の自由に任されていたなら、彼女としては、その不品行のゆえに、絶対にラヴレース氏と結婚するつもりはなかったということ、そして、彼女の堕落は主として身内の者たちの迫害に起因するということが、戒めとして、物語の至るところで説かれるように意図されているのである。

あまりにも広く〈愛〉と称されているものは、別の名称で（多分、同じように広く）呼ばれるべきであろう。身分ある者さえも含め、一部女性が実行に移して来た〈色欲〉、ないし〈淫心〉という語も、繊細な耳にとってどれほど耳障りであるにせよ、そのような折に代用されても、不快にすぎる言葉というわけでもないのである。しかしながら、〈愛〉をその最も上品で最も尊敬に値する意味合いに取るとしても、幾人かの多感で激し易い人々が主張したとおりに、もしもクラリッサが熱烈に恋をしていたのであれば、彼女の人柄の際立った特徴の一つとなっている、あれほどの感情抑制力を示すことが可能だったとはおよそ考えにくいと、一部の者からは思われたことであろう。今回の版では、このような異議を回避するために、というよりは、むしろ、性急な読者に対し、目の前に歴然と横たわっているものへの留意をお願いするために、適宜、注の形で少しばかり所見を付記した次第である。というのも、この異議そのものをヒロインは次のように先取りし、ヒックマン氏をないがしろにするハウ嬢を諫めているからである。そして、これはヒロインが［彼女自身は決して同じ過ちを犯したりせず］機会あるごとに行っていたことであり、自分には一日の命も残されていないとしても、ハウ嬢がうかつな振舞いをする場合にはいつでもそうするつもりであると明言しているのである。

彼女はこう述べているのである。「寛大な、そして、遠慮のない態度で接することの出来ます男性と巡り合いますのが私の定めであったならと（独身を通しますのは許してもらえないのですから）、あゝ、私、本当にそう思うのです。

今では明らかですが、私の接し方に堅苦しさやよそよそしさがあるとラヴレースさんが非難なさったのは、私と争う口実にするためのことだったのです。私には少しばかり淑女ぶる悪いところがあると、貴女も一度はお考えでしたね。困難な状況を斟酌していただきたいのですが、そのような状況では、一見して非難へのきっかけと映りますものも、避けるわけに行かなくなることが多いのです。私の立場を難しいものにいたしました、その当人から非難を受けても仕方がないような真似はいたしておりません。それに、貴女にいたしましても、もしも私の相手がだれか他の男性で、その人がヒックマンさんの半分の美点でも備えているのでしたら、この点に関する私の考え方が私の行動を支配して然るべきであったと、そのように思われたことでしょう」とである。この手紙全文をご覧いただきた

い(ア)。また、第八巻の百八十頁以降に掲載されたラヴレース氏の筆になる五十五通目の手紙もご参照願いたいのだが、そこでは、死の間際にある氏が、その点に関し、彼女の振舞いすべてに落ち度のなかったことを認めているのである。

徳高く、才気溢れる幾人かの人々の考えるところでは、もしもラヴレースが邪宗の徒とか瀆神の輩として描かれていたなら、懐疑主義よりもさらに悪化の進んでいる時代の、その好みからして、彼の人物像はより自然なものになっていただろうというのである。しかし、あまりにもよく知られていることであるが、彼のような性向の人間で、その行動ゆえに信仰心を疑問視される者が極めて多いのである。それに、聖書においては、悪魔たちでさえも信仰心を有し、恐れおののくと言われているのではないだろうか。

だが、読者もお気づきに違いないが、ラヴレースを行動面でのみの無神論者として描くことにより、作品全編を通じて、大々的な利用が、そして願わくは、有効な利用が可能になったのである。そして、これは、友人ベルフォードの議論におけると同様、一時的な良心の呵責を覚えては頻繁に口にする、彼自身の所見、そして、彼の最後の場面についても言えることなのであるが、二人のどちらかが心からの不信心者として描かれていたとしたら、そのようなわけには行かなかったことであろう。宗教を愚弄する人間であるということがワイアリー氏に対する大きな反対理由であったからには、ラヴレースが瀆神の輩であることを知った上で、彼の言い寄りにわずかでも耳を傾けたのでは、言うまでもなく、クラリッサに弁解の余地はなかったことになろう。それどころか、氏と一緒にならざるを得ないのだという考えに至ると、彼女は次のように独り心を慰めているのである。「でも、こんな慰めが一つ残っております。あの人も無神論者ではございません。不信心者ではないということです。もしもあの人が無神論者だったといたしますと、夢を託せるようなところは一切なかったことでしょう。むしろ（あのように創意工夫の才が豊かなのを得意がっているのですから）、骨の髄まで堕落し切って救いようもない人間、未開人のような男になっていたことでしょうね」(イ)とである。そして、次の点も述べておかねばなるまい。つまり、瀆神の輩たちというのは、機知の人を自認するあまり（言い換えるなら、己の放蕩を誇るあまり）、それを隠すように努めることはないという点である。

また、その他の放縦さに加え、宗教について下卑た冗談を口にするところがラヴレースにあったとしたら、友人との間で交わされるはずの彼の勝手気ままな言動は、真に悪魔的な性質のものであったに違いないのである。そして、さらに次の点にも、推論の形で暗に触れられる予定だったのである。つまり、言葉遣いないし行動のいずれかの面で、ラヴレースが恥ずべきことと考えるような放縦さに耽る者というのは、ラヴレースよりもはるかに下等な人間なのだということである。このような理由から、異教徒の間での異教の神話に至るまで、神聖な事物や話題についての冗談に関しては、冗談を口にする者の育ちの悪さを示す疑いもない証として、また、卑猥な譬えや談話はあまりに破廉恥に過ぎて、放蕩児ですら耽ることの出来ない放縦さとして、そして、債権者に対してや、自他の所有権に関する問題での不正については、そのような真似をしては沽券に関わる事柄として扱うことを、彼はあらゆる場面において強いられているわけである。

(ア) 初版の第七巻、六十四、六十五頁。また、この版では第七巻の二百三十一頁(六一)。

(イ) 第四巻の二百三十四頁を参照のこと。

一部の者たちはヒックマン氏の人柄の従順さについて、つまり、彼らの主張する〈ふがいなさ〉に対して異議を申し立てている。しかしながらラヴレースは、二人の面談の折には、彼が激しい気迫で立ち向かって来たことを認めているのである。一度は、暗に仄めかされただけのことだが、ハウ嬢へ非難が向けられたと考えた時であり(ア)、今一度は、自分が侮辱されているように考えた時のことであった(イ)。折に触れ幾度か、ハウ嬢が彼を笑い種にしている点は（彼女自身の人柄にとって名誉になる話ではないが）認めねばならないだろう。しかし、彼女は母親にも同じ態度を取っているのである。また、彼女のような活発な性質の婦人であれば、多分、ラヴレースは別として、どのような男性に対しても同じように気紛れな接し方をしていたことであろう。ベルフォード氏は礼を尽くし、敬意を込めて彼のことを語っている(ウ)。モーデン大佐もまた同様である(エ)。クラリッサもあらゆる機会にそうしており、ハウ嬢自身が彼について語る言葉すべてにしても、彼にとって不面目なものというよりは、声価を高めるものであり(オ)、そのことは、現にクラリッサも彼女に語っていることなのである(カ)。

また、彼に対するラヴレースの扱い方について言えば、読者もお気づきのはずで、一部には自己高揚のため、また一部には生まれついての陽気な気質を満足させるためのことであるが、すべての人間を軽蔑してかかるのが彼の流儀だったのである。彼自身、ベルフォードに向かって次のように語っているのである(キ)。「俺があの男に好意を持っていないことは、ジャック、貴公も承知のはずだ。そして、われわれというのは、好意を感じない相手には取り柄一つにせよ認めてやるわけに行かないものなのだ。おそらく、そんな奴らに認められて然るべき取り柄をだ」とである。ベルフォードのほうでも、ヒックマン氏を称賛しつつ、「自惚れた連中なら、仮にそんなところを持ち合わせているとしてだが、あっさりと克服してしまう、あのちょっとした几帳面さにしても、内気で臆病な者たちというのは、すぐになくしてしまうようなことはないのだよ」(ク)と、ラヴレースに宛てて書き送っているのである。

しかし、恋人に接するのと同じ無遠慮さでハウ嬢が母親を扱うのと同様に、ラヴレースはベルフォード氏に対しては、ベルフォード氏自身がヒックマン氏に仄めかしているように(ケ)、その容姿、態度、物腰に関し、ヒックマン氏に対するよりもさらに不躾な接し方をしているのである。しかしながら彼も、ヒックマン氏をけなす場合に比べると、婦人たち全般からそれほど容易には信じてはもらえず、ベルフォード氏が面目を失うことにはならないのである。この不公平さは、一体、何に由来するのであろうか。

［ベルフォード氏はかつて放蕩児であったが、改心の途上にあるということ。

ヒックマン氏は一貫して善人であったということ。

そして、ラヴレースが確信を持って語っているように、女性というのは、自分たちのことを知った上で好意を寄せてくれる男性を愛するものだということ］(コ)なのである。

(ア) 第六巻二百六十七頁を参照のこと。
(イ) 同巻二百七十頁を参照のこと。
(ウ) 同巻の三百十七頁から次頁にかけて。
(エ) 第八巻の百二十七頁から次頁にかけて。
(オ) 第二巻の二頁と六頁、第三巻の百四十頁。
(カ) 第二巻の四十頁と次頁を参照のこと。
(キ) 第六巻の二百五十九頁。
(ク) 同巻の三百十七頁。
(ケ) 第八巻の九十一頁。
(コ) 第五巻の百八頁から次頁にかけて。

とはいえ、次の点は認めねばなるまい。つまり、ヒックマン氏を婦人たち全般から大いに好かれる男性として描くようには計画されていなかったということである。もしも、そうであったならば、心の善良さ、行儀作法の上品さ、非常な精励ぶり、そして、不可侵にして控え目な愛情も、それ自体で十分な取り柄とは思われなかったことであろう。几帳面さとか堅苦しさといった弱みは、熱愛する相手への崇敬の念に起因するように推定されたかもしれないが、そのかけらも割り当てられる予定はなかったのである。ただ、彼の人物像で目論まれていたのは、一人の人間があらゆるものになるわけには行かないことを提示し、よって、婦人たちに次の点を暗示することであった。つまり、生涯の伴侶を選ぶに当たっては、ラヴレースに類した男の軽薄で、いたずら気のある心を、もしかすると何十人もの女性と（そして、おそらく、その中には女性の中でも最も不身持ちな者もいるのだろうが）分かち合うような冒険をするよりは、そっくり独り占めにすることも可能な、ヒックマン氏のような人物の心のほうを好むべきだということをである。要するに、末長い幸せを願うのであれば、心の方正さで選ぶべきであり、容姿や物腰の見掛けの良さで選んではいけないということ、また、婦人たち、そして、女性すべてを冗談の種にする悪党の肩を持って、善良な男を笑い種にしてはいけないということをである。

しかしながら、いわば埋め合わせに、この版では二通の手紙が挿入されているが、おそらくそれらは、男気を愛し、男気にお目にかかれないくらいなら、そのために苦労するほうがましという、そんな婦人たちの間で、彼の人物像の評価をいくぶんか高めることになるのだろう。

ご婦人方は支配されるべく生を享け
無遠慮で厚かましい人間に頭を下げる

というのがウォーラー（六二）の、そして、ラヴレースの言葉なのである。

この物語が、それぞれの人物によって記され、各自の身の上話がそこに示されるような書簡の形によってではなく、娯楽や気晴らしを目指す物語類を語る際の、通常の語り口で語られるほうが望ましかったと考えた者もいる。作者としては、他人の趣味には口を出すべきでないとの考えであるが、自分の好みに従うのも自由のように考えたのである。物語風の筆法については、おそらく、その才能に信を置くことが出来なかったのであろう。前に一度、幸運にも書簡体で成功を収めていたこともある。あるいは主要人物として、あるいは補助的な人物として、また、極めて多様な性格や気質を持つ、かくも多くの人物が関わっており、かなりの関連性と明快さを備え、主たる目的や意図とは無関係な脱線や挿話の助けを借りずに、様々な人物からの一連の手紙によって進められる物語には、主張されて然るべき革新性があると作者は考えたのであり、またそれは、この時代にあっては、取るに足らぬ長所ではないようにも考えたわけである。

だが、この点に関してこれまで述べられてきた事柄、そして、〈はしがき〉において述べられた事柄に加え、この筆法についての、怜悧にして率直なる一外国人による以下の見解をここに挿入するのも、不適切なことではあるまい。

『クラリッサの物語』において作者が実践した手法は、『パミラの生涯』の場合と同様であり、両作品は、出来事が起こったその時点での、当事者自身による日用書簡の形で語

られているのである。そして、この手法は、他のいかなる種類の語りによっても引き出し得なかった大きな利点を作者にもたらしたのである。出来事、そして、当事者たちの所感や会話の詳密な細部が、この方法では、ちょうどその時点において支配的であると推測される感情が生み出すことの出来る、熱烈さと活気のすべてを伴って、また、最近起こった出来事の記述に当たって、記憶力が提供し得るかぎりの数々の際立った特徴を伴って明示されるのである。

一般にロマンスの類、就中、マリヴォー（六三）の作品は完全に蓋然性を欠いている。何故ならば、それらは一連の出来事が大団円によって終了した後に物語が書かれたように想定しているからであるが、これは、関係している人物たちが実例や蓋然性のすべてを超越するような記憶力に恵まれていることを仄めかし、数年の時を隔てて、束の間に過ぎた会話の詳細すべてについて、彼らが語ることを可能たらしめるような状況なのである。というよりは、むしろ、これらすべての人物と作者との間の、さらに信じ難い信頼関係や親密ぶりを、この状況は含意としていることになろう。

しかしながら、書簡体の手法には一つの困難が伴っている。すべての登場人物がこの手の対話に対し、並外れた嗜好を有していること、そして、いかなる出来事であれ、注目すべき対話の一つでさえも、即座に書き留めることなく消滅して行くのを放任しないことが必要だからである。しかし、一旦書き留められた手紙類の保管に関しては、作者は優れた判断力によって備えを行っており、この状況も大いに蓋然性を持つものとなっているのである」（ア）

このような書簡体の筆法で語られた物語に付き纏う難点の数々に関してこの紳士の述べている事柄が、われわれの眼前にある物語にも及んでいるように見られることはないものと思われる。女性の主要な登場人物二名が書き物に対し、かくも多大の喜びを見出すに至った経緯については、作中において十分に説明されているところである。二人が取り上げるのは、単に娯楽のための話題ではなく、両名にとってすこぶる興味を惹くものなのである。しかし、遠く離れている折に、互いの安寧や友情にとっては、これら二名の淑女によって扱われたものよりもはるかに影響するところの少ない出来事に際し、感心にも文通を行っている婦人も多いのである。二名の主要な紳士を文通に促した動機としては、浮かれ気分と強い虚栄心とがあったのである。次の点は一般に認められるところであろう。つまり、これらの文通者たちに備わっていると想定されているわけだが、打ち解けた文章を綴る才能に恵まれている者は、これらの人物に降り懸かるものほどに困難ではない出来事に際しても、筆によって自ら慰めることを禁じ得なくなる、ということである。この物語で紹介された夥しい数の人物のうち、以上の四名だけが（彼らの経歴は相互に関連性を有しているのだが）文通に抜きん出て熱心な者たちである。残りの者たちが筆を執るのは時折のことに過ぎず、好んでというよりは、主要人物四名との様々な関係から、止むを得ず文

（ア）この引用文はフランス語で書かれ、アムステルダムで出版された『クラリッサの物語批評』からの翻訳である。『批評』全文の英語訳は一七四九年の六月と八月に『ジェントルマンズ・マガジン』に掲載されたのである。その中で著者は『クラリッサの物語』に対し、大いに敬意を表してくれているし、同時に、かの率直なる外国人によって唱えられた、物語の様々な箇所に関するいくつかの異議への回答となる所見が公にされていることもあり、その両方につき、読者には前記雑誌の参照をお勧めする。

通に引き込まれたかにも見えるのである。

作品の長大さに対し、一部の者から異議が唱えられている。その者たちは本作品を単なる小説ないしはロマンスと見なしているのであろう。しかしながら、その種の作品にあっても、同等の長さを有するものに事欠かないのである。

彼らの見解としては、作品の動きが緩やかすぎるというのである。とりわけ、クラリッサと一族の者たち数名との間の口論を扱っている、第一巻および第二巻において然りというわけである。

しかしながら、それらの口論は全編の土台なのであり、それゆえ、作品にとって不可欠な部分なのだ、というのが本当のところではないだろうか。物語の進行が最も緩やかになっている部分において、手紙と会話は人物像の描出に役立っているように考えられるのである。それらは、この種の作品にとって欠くことの出来ない教訓が大量に伝達されるための、多くの興味深い性格を暗示する好機をも提供しているのである。さらには、次の点も思い出されるであろう。つまり、作者は冒頭において読者に対し、この物語は（興味をそそるものであることは遍く認められているが）主として教訓の伝達手段と見做されるべき旨を通知していたということである。

これらの諸点に加え、次のように言い添えても構わないだろう。現実生活の再現を意図されている物語、そして、主要人物の一人によって企てられ、実行された陰謀や策略のために極めて忙しく、活動的なものとなっている物語にあって維持されることが必要な、あの蓋然性の外見を保持し続けるためにも、十分に委曲を尽くし、詳細に亘る必要が頻繁に生じたということである。

一部には、それも、女性であるが、この物語においては、ヒロインの美点の数々が信じられない高さへ、そして、実行不可能な高さにまでも引き上げられているかに考えている者もいるのである。しかし、ごく幼い時期からクラリッサの受けて来た教育が、彼女の極めて大きな利点の一つとして、また、実際、彼女に備わる美点すべての土台として、考慮されなければいけないのである。そして、その教育によって教え込まれるよう意図された教義のためにも、考慮されることが期待されているわけである。

彼女には信心深く博識で、生まれも卑しくない女性が乳母として付き添っていたのであり、ハーロー夫人に言わせると(ア)、この女性こそが、他のいかなる乳母も与えることの出来ない滋養物を、母乳と共に彼女に与えてくれたのである。彼女はごく幼い頃から、博学にして高徳のリーウェン師による〈談話のための訪問〉、そして、師ばかりでなく、彼女の遺言書で触れられている他の聖職者たちをも対象とした文通を楽しんでいたのである。彼女の母親は概ね善良であり、その生まれ、ならびに、財産に対して名誉となるような女性であったし、【幼少の頃の彼女を教え導く能力を持ち合わせていたのである。父親は放縦な生き方をするとか、自由思想に染まっているといった人間ではなく】(六四)両人は彼女の進歩ぶりや身につけた才芸の数々に喜びを見出していたわけだが、それらは、彼女がいなくなれば、あの一族もありきたりの一族にすぎないように思われる(イ)と言わしめるほどの栄誉を彼女に、そして、彼女を通して両人に授けることとなったのである。さらには、彼女

(ア) 第四巻の五十四頁を参照のこと。(イ) 第七巻の百五十五頁を参照のこと。なお、母親がノートン夫人に語った令嬢についての褒め言葉（第一巻、二百六十頁(六五)）も参照のこと。

は田舎風を好む女性でもあり、ハウ嬢による人物描写でわれわれも見たように(ア)、華やかこの上ない場面を飾るに足る資格を備えていながら、田園や家庭内の仕事に大きな喜びを感じていたのである。

ラネラやヴォクソールの常連客の間にも、また、トランプ用テーブルの申し子とでも呼ぶべき娘たちの間にもクラリッサを求めてはいけないということ、これは認められねばならない点である。もしもそのような挙に出るなら、我がヒロインの人物像は、まさしくありそうもないものとしてばかりではなく、到達不可能なものとも考えられるかもしれないのである。しかしながら、かくも不愉快な論議をこの場で進める紙幅はないし、その気持ちも作者にはないのである。それゆえ、この話題を離れることとするが、繰り返し次の点に触れた上でのこととしたい。即ち、作者の承知しているところによれば、イギリスの領土には「でなければ、ヨーロッパ世界のいずれの場所でも無理であろうが」幾人か、そして、その数の多いことを作者は願う次第だが、あの慎ましく控え目ながらも、堅固にして有効な美徳を、必要の命じるままに発揮し、クラリッサにも類した完全さへと到達した者もいるということである。

以上、この物語の様々な箇所に対して唱えられている最も重大な異議の数々に手短に注意を向けて来たわけであるから、以下の点を付言することはお許しいただけるものと考えたい。この点に関し対立する立場で書かれた多くの手紙、つまり、文学のすべての分野における最も著名な批評家のうちの数人の筆になるものであるが、本作品の悲惨な結末、ならびに、全般的な処置と出来栄えを称賛している手紙の、その一部の写しを自由に提示して構わないように作者が考えたのであれば、この〈あとがき〉において記された事柄の大部分は割愛されていただろうということである。

だが、多くの者にとっての主たる不満は作品の長さに向けられて来たのであるから、その点に関してすでに述べてきた事柄に加え、それら著名な文筆家の一人の言葉を借りて次のように付言しておこう。曰く、「眼前の物語において、その趣旨は全編を通して適宜行き渡っており、人物像は多様にして自然であり、十分に判別され、かつ、首尾一貫して維持され、持続されていることが分かるなら、また、注意を喚起するに足るだけの多様な出来事があり、しかも、それらが読者を常に覚醒させておくように処理されているならば、長さは、審美眼を備えた人物ことごとくが巧みに描かれた自然の絵から受ける喜びを、その長さに見合った分だけ増大させるに違いないのである。しかしながら、これらすべての美点と相反するもののために、理解に窮するような場合には、その常軌を逸した作品は、お伽話の長さを超えるものではないとしても、冗長と判断されることであろう」(六六)

(ア) 第八巻の百五十五頁から百五十七頁にかけてを参照のこと。

『クラリッサ』の作者に捧ぐ

若者たち、放埒な者たちに
楽しみごとの最中に有益な教訓を授け、
その目を真珠の滴をもって溢れさせながら、
カードやドレスともども、麗人との談話を分かち合うこと、
また、古典の世の誇りとされる詩人と並び、
学ある者たちの関心を引き寄せ、
放蕩児の胸に優しく社交的な感情を
引き起こすことが、もしも賛辞に値するのなら、
放埒な者、麗しき人、学者、また、放蕩児さえもが一致して
自然に、真理に、そして、貴方にその賛辞を呈するだろう。

今ハーロー邸へと運ばれ、われわれは目にするのだ。
貴方の比類なき乙女がその神々しき務めに従事するのを。
病める者、困窮せる者を訪い、苦痛を減じる
薬剤、ないし、悲しみを和らげる言葉を授けるのを。
あるいは、かつて女性の心が到達したこともない高みへと
彼女が舞い上がるのを、敬虔なるリーウェン師と共に聞く。
次いで彼女は、蔦の東屋へいそいそと引き籠もり、
軽やかなタッチで震える鍵に生命を吹き込む。
眠りに就かぬサヨナキドリはもはや嘆くことなく、
魂を奪われ、さらに妙なる旋律に耳傾けるのだ。

今しも見よ（不吉なコントラストだ）、陰鬱な物陰それぞれに
憐れみを寄せる若者を、あるいは、涙にむせぶ乙女子を。
そして、聞くのだ。重々しく揺れつつ、弔いの鐘が
言葉では表しようもない損失を告げるのを。
やがて、荘厳なる静寂のうちに展開する光景は
彼らの悲しみを募らせ、新たな涙を誘う。
何故なら、見よ、緑なす草地のすべてを黒く覆い、
緩やかな行列をなし、ものものしい葬列が進むからだ。
今もなお、人波に遮られた大地、そして、舗道には
重々しい車の響きがこだまするかに思われ、
召使たちの涙に溢れるまなざしは、雄弁な表情を湛えつつ、
棺です、棺の到着です、と告げているかに思われる。

だが、あゝ、クラリッサの心の姉よ、
息つく暇もあらばとチャリオットを飛び降り、

土塊のごとく冷たくも、今なお美しい彼女の遺体を抱く時、
また、こみあげる嗚咽と共に、声を詰まらせながら、
これが　…　これが私の愛するお友達の亡骸なのか、と叫ぶ時、
そなたの魂の苦悩を伝えることが、果たして私に出来るのか。
さあ、ハーロー一人一人の顔を見よ。そこに描かれるのは
悔恨の念、絶望、そして、己を責め苛む深い悲しみの色。
真っ先には兄が、疚しさの溜め息を漏らしつつ、
兄らしい情念の激しく胸に湧き上がるのを覚える。
恥ずかしさと悲しみとに等しく圧倒され、
姉は両の手を握り締め、己の胸を打つ。
母は目に涙を滴らせ、横暴非道のジェームズに
唯々諾々と従った我が身を責めるが、今は時すでに遅く、
その陰鬱なる父親すらも、棺を眺めつつ
己の無分別を嘆き、呪いの言葉を撤回する。
かくして、権柄ずくにて我が子を震えさせ、
従わせんものと思う両親、
過酷さによって権力の維持を願い、
卑しくも利得の社に詣でる両親それぞれは、
己の過ちを嘆き悲しみ、後悔しつつ認めるだろう。
至福が財力のみに拠ることは決してないのだということを。
富が心を魅することはある。壮観が心を誘うこともある。
だが、心を結び合わせることなくして、これらが何であろうか。
されば、飽くことなき強欲をその胸から追い払うのだ。
ソームズがごとき輩がクラリッサを幸福に出来ると思ってもいけない。

　そして、そなたたち、すべての心が望む麗しき者たちよ、
造化の女神に優美さを賜り、巧みに飾られていても、
はつらつたる若さがその春のごとき華やぎを授け、
そなたたちの頬が美しい紅の色に輝こうとも、
ここに見るのだ。それら命短きバラが束の間に霜枯れ、
色褪せ、萎れ、朽ち果てる様を。
若さにしても美しさにしても、クラリッサを救う力はなく、
うら若き身を、時機あやまたず、墓所へと運ばれる。
だがしかし、自らの確固不動の潔白さは、
無垢清浄にして、疚しさを覚えることもなく、
恐ろしい今わの際にも、雄々しい勇気以上のものにより、
彼女の胸は熱く燃え、不気味な王の武器を
奪ったのだ。暴君はその恐るべき脅威を試し、無為に
終わった　…　何故なら、彼女は笑みを浮かべて逝ったのだから。

虐待を受けた徳高き者、また、苦悩に沈む罪なき者を
いわれもなく笑いの種とし、
汝らの恥として然るべきものを徒に自慢し、
地に落ちた女性の声望に凱歌を奏でる汝ら放蕩者も、
ベルフォードのごとく警告を聞き入れ、恐れをもって見るのだ、
汝らの頭上に舞う復讐の手を。
さもなくば、ベルトンの苦悶のうちに見届けるのだ、
汝らにはいかなる死の恐怖が運命づけられているのかを。

健やかにして、若く、快活で、造化の女神により
楽しませ、欺くために造られたラヴレースさえが、
居場所を替えて己からの脱出を図り、無為に終わった。
物思いという、あの侵略者を避け得られなかったからだ。
異国の宮廷に見た楽しみごとすべてが無味乾燥なのは、
良心がなおも付き纏っているからだ。
今は亡きクラリッサが夜ごと夜ごと、
星の衣装に身を包み、彼の眼前に浮かび来る。
昼間も、声高に不平をかこつ彼女の声は安らぎをもたらさず、
モーデンの剣をはるかに凌ぐ深手を負わせるのだ。

あゝ、こうしてアッティカ（六七）の野で賢者が
耳そばだてる若者たちを善導し、かつ、魅了していたなら、
もしも、比類なき思考の力により、
これに似た偉大な真理を古のアテナイで教えていたなら、
世に名高いイーリッソスの岸辺に、パロス（六八）の大理石に刻まれ、
その息づく胸像は鮮やかに光り輝いたことであろう。
プラトンすらも、教場の厳かな物陰において、
喜々としてその教えに満ちた紙面に目を通し、
自らの掟がホメーロスに拒んだ地位（ア）の代役を、
この著者が十分に果たしていると認めたことであろう。

（ア）プラトンの理想の国家の掟によって、ホメーロスは、自らの描く神々や英雄たちに帰せしめた行状の好ましからざる傾向のゆえに、その国における地位を拒絶されたのであった。「しかしながら（と、哲人は語る）、あらゆる取り柄はその程度に応じ、相応の報いを受けて然るべきであるから、詩人の頭には香油を注ぎ、羊毛の花輪を冠とし、どこか他の都市へと追放するのだ」（プラトン、『国家』第三巻）

第八巻　目　次

手紙　一　ベルフォードからラヴレースへ
今わの際における真にキリスト教徒的な令嬢の振舞いについての詳細。彼女の人物像についての手短な描写。

手紙　二　同　右
以下に続く三通の手紙は、逝去した令嬢に宛て、お仕着せを着た召使によって届けられたものである。即ち、

手紙　三　ノートン夫人より
令嬢の示す条件で全面的和解に至ったことの知らせ。

手紙　四　アラベラ嬢より
全員の胸に愛情と愛顧の念が蘇りつつあることを保証したもの。

手紙　五　ジョン・ハーローより
このようなところまで事が運ばれた点を遺憾とし、起こった出来事に関し、自分の担った役割のことを許してくれるよう願っている。

手紙　六　ベルフォードからラヴレースへ
遺言執行人としての処置。死後に送付されるべき令嬢の十一通の手紙。彼自身に宛てられた一通の写し。彼女の寓意的な手紙（第七巻の手紙五十二）での約束を守り、ラヴレース宛に認められた一通のことを彼に知らせる。遺言執行に関わるその他の処置。祖父の足下に埋葬してほしいというクラリッサの要望を知らせる、ジェームズ・ハーローに宛てた大佐の手紙。

手紙　七　同　右
ノートン夫人が到着する。愛する若い令嬢の死を知った彼女の驚きと悲しみ。死後送付の手紙は慰めとなることを意図されており、非難のためのものではないとのこと。

手紙　八、九、十、十一、十二　父親、母親、兄、姉、おじたちに宛てた、死後送付予定のクラリッサの手紙の写し。
従姉妹ドリーへの忠告をもって結びとする、叔母ハーヴィー宛の手紙の要旨。
ヒックマン氏に関する忠告を含む、ハウ嬢宛の手紙の要旨。

手紙　十三　ベルフォードからラヴレースへ
破廉恥なシンクレアが足を折り、サリー・マーティンを遣わし、彼が訪問してくれるよう、また、令嬢の許しを得てくれるよう要請する。ローランド宅で令嬢に加えた仕打ちをサリーは後悔。令嬢の破滅は彼女たちの唆しに大幅に負うていることを認める。

手紙　十四　同　右

致命的な報せと、自分宛の死後送付の手紙を受け取った際のハウ嬢の悲嘆ぶり。モーデン大佐の手紙に対するジェームズ・ハーローの返信の写し。その中で、彼は言い表しようもない一族の悲しみを語り、自己の弁明に努める。遺体がハーロー邸へ搬送されること、そして、大佐が葬儀に参列してくれることを希望する。

手紙　十五　ベルフォードからラヴレースへ

大佐とノートン夫人に付き添われ、遺体が国許へ向けて送り出される。

手紙　十六　モーブレーからベルフォードへ

狂乱状態のラヴレースの手に負えない様子、および、全員が口を挟まなかった場合、彼が行おうとした常軌を逸した企てについての報告。彼らはM卿を煩わし、ラヴレースを訪ねてもらう。放蕩児の信条により、また、クラリッサに対するラヴレースの仕打ちよりもさらにひどいと考えている、実際にあった悪事の例を持ち出すことで、ラヴレースの正当化に努める。

手紙　十七　ラヴレースからベルフォードへ

狂乱状態の最中に書かれたもの。この世界全体が一つの巨大なベドラムに他ならないと述べている。彼一人を除いて、世の人間すべては狂っているとのこと。

手紙　十八　ベルフォードからモーブレーへ

ラヴレースが体調回復の暁には説得を受け、国を離れてくれるよう希望。その理由。自分はその決意でいるが、心を改めるよう、モーブレーとターヴィルにも熱心に説く。

手紙　十九　ベルフォードからラヴレースへ

破廉恥なシンクレアの恐ろしいまでの苛立ち、落胆ぶり、および、死を描いたもの。例のいかがわしい家は、本作品において、そこに居住する破廉恥な者たちに関して時折示される邪悪な信条および行為から生じるものを別にすれば、それ以外のいかなる汚点にも触れずに述べられることが多いため、ベルフォード氏はここで、これらの者たちが人目を避けるその隠れ場所に潜り込み、愚かで無思慮な者を誘惑しようと身を飾り立てる前に晒すと思われる、その姿を暴いてみせるのである。

手紙　二十　モーデン大佐からベルフォードへ

遺体に先んじてハーロー邸に到着した旨を報告。遺体を待つ一族全員の恐ろしいまでの嘆きよう。ジェームズ・ハーローとアラベラ・ハーローの痛切なる自責の念。冷酷非情さの無数の例を思い返しては、互いに非難し合う姿。ノートン夫人の体調がすこぶる悪く、セントオールバンズに置き去りにせざるを得なくなる。日付を改め、霊柩車到着に際しての皆の悲しみようをさらに報告。令嬢を偲び、集まった者たちから厳かに表明された敬意。

手紙　二十一　同　右

ハーロー一族の間で交わされた会話に関する興味深い続報。ハウ嬢が愛する友と最後の対面をする予定。

手紙　二十二　同　右

ハウ嬢が到着する。大佐が彼女を出迎える。真心のこもった嘆きようと、彼女らしい振舞い。

手紙　二十三　同　右

ノートン夫人の到着。元気を回復している。その原因について。悲しみに沈む両親が交わすさらなる非難の言葉。遺体に目を向けようと試みるが、果たせない。故意の冷酷非情さがこれ以上に厳しく罰せられたことはかつてあっただろうか、と大佐は問う。ノートン夫人に宛てた令嬢からの死後送付の手紙の要旨。

手紙　二十四　同　右

葬儀の報告。故人への賛辞の数々。令嬢の偉大で優れた特質があまねく正当に評価される。その他の心打つ事項。

手紙　二十五　ベルフォードからモーデン大佐へ

心を揺する大佐の語り口を称賛。遺言執行に関わる処置の続報。

手紙　二十六　ジェームズ・ハーローからベルフォードへ

手紙　二十七　ベルフォードより［返事として］

令嬢の遺言書　その本文のみならず前文においても、令嬢はいくつかの教育的な助言を提供し、寛大な精神、信仰心、慈善心、感謝の念、および、その他のキリスト教的で英雄的な美徳を、模範とすべき態度によって表明しているのである。（七十四頁）

手紙　二十八　モーデン大佐からベルフォードへ

遺言書が読み上げられる。その折に交わされた言葉。

手紙　二十九　ベルフォードからM卿へ

復讐を求める大佐の憤りを懸念する。旅に出るよう、ラヴレース氏が説得に応じてくれることを希望。

手紙　三十　モンタギュー嬢より［返事として］

令嬢の遺言書の執行に関わる処置、および、その他の事柄に関する概略の説明。ヒックマン氏に宛てたベルフォード氏の手紙の要旨。ヒックマン氏の返事の要旨、及び、ベルフォード氏宛のハウ嬢の手紙の要旨。（九十頁　―　九十二頁）

ラヴレース氏に宛てて死後に送付された令嬢の手紙。（九十二頁）

手紙　三十一　ラヴレースからベルフォードへ

自らの錯乱状態が分別と追想へ目覚めつつあると描いている。ただただ良心の咎めと恐怖心とに付き纏われているとのこと。その極みにある惨めな想いを描く。

手紙　三十二　同　右

前回の手紙を恥と感じ、撤回する。しかしながら、発作を起こし、すぐにも逆戻りをしそうになる。抑えつけられるのに耐えられないような育て方を母親がしたのは何故なのか、と彼は問うている。自分がどんな様子であったかを振り返ると、吐き気を催してしまうという。病がぶり返すことを恐れる。一切を忘れ去るように努力。

手紙　三十三　同　右

王国を去る準備の最中。彼のルート。述べ方が滑稽とはいえ、ベルフォードの改心の決意に接しての時宜に適った警告。近頃は奇妙なほどつんぼ桟敷に置かれてきたことへの不服。令嬢の遺言書の写しを要求。

手紙　三十四　ベルフォードからラヴレースへ

ラヴレースの手先のトムリンソンに裁きの手が及びそうとのこと。そのきっかけについて。令嬢の件での破廉恥漢の後悔。健康のため国外に出るよう、ベルフォードがラヴレースを促す。ラヴレースの与える警告に対し、極めて真剣に返答。将来の生き方についての立派な計画。

手紙　三十五　ラヴレースからベルフォードへ

トムリンソンに同情。彼が獄中で死亡したのを知る。絞首刑になるまで生き長らえなかったのは幸福だという。その理由。いかに大きな苦痛の種といえども、何らかの慰めがそこからは引き出されるということ。守銭奴甲と盗人乙の間に設定した奇抜な事例により、自己弁護に努める。

手紙　三十六　同　右

自らのために描いた人生の設計図についてベルフォードを嘲笑。彼なりの仕方でさらに注意や警告をベルフォードに与える。令嬢を救わなかったことに関して彼を非難。秘密を漏らすことのほうが守ることよりも容認出来る場合もあるという。彼の容姿や態度のことで、また、従姉妹のシャーロットとロヴィック夫人の件で彼を嘲笑。

手紙　三十七　ベルフォードからモーデン大佐へ

大佐が行ったと聞き及んでいる、ラヴレースに対する復讐の宣言について。この問題に関し、様々な論点からなされた彼の議論。

手紙　三十八　モーデン大佐に宛てたクラリッサからの死後送付の手紙

一般論と同様、彼女の個別例に関し、決闘を禁じる数々の論拠を含んでいるもの。同じ問題に触れた兄宛の手紙（本巻の手紙十）も参照のこと。

手紙　三十九　モーデン大佐からベルフォードへ

従姉妹のための報復を差し控えてほしいという訴えに対する返事として。その人柄や美点の数々が浮かんできては自分たちの心を苦しめる、そんな子供を失った一族全員の悲嘆と苦悩を、極めて鮮烈な彩りで描いてみせる。

手紙　四十　同　右

令嬢の遺言執行に関するさらなる詳報。女性の友情一般について、とりわけ、ハウ嬢と従姉妹との友情について見解を示す。若いうちに日用書簡に親しむのは大いに心の改善をもたらすということ。ヒックマン氏に対する態度に関し、ハウ嬢を非難。ヒックマン氏の優れた人柄。子供の敬意を保持したいと願う両親への忠告。ハウ嬢には内緒で、ヒックマン氏は自分自身と馬車をクラリッサのための服喪の装いにする。その際のハウ嬢の陽気な物言い。ヒックマン氏の件で、ハウ嬢の寛大さに氏（大佐）が期待しているもの。遺言の作成を恐れるような人々の愚かさについて。

手紙　四十一　ベルフォードからハウ嬢へ

クラリッサの死後送付の手紙の写しに添えたものであり、イギリスでも最も報いるに値する男性の一人を幸せにし、親友の最後の願いに関する彼女の役割を果たすよう、モーデン大佐ならびに彼自身からとして、恭しく念を押したもの。ラヴレースへの同情を促すため、彼の錯乱状態を、また、シンクレアおよびトムリンソンの無残な死を彼女に伝える。

手紙　四十二　ハウ嬢からベルフォードへ

彼が知らせる手紙ならびに話題に関する所感。ヒックマン氏のためのベルフォードおよびモーデン大佐の要望への返事として、もう一通手紙を書くことを約束。ドリー・ハーヴィー嬢への贈り物とするため、愛する友の宝石類を買い取ったことに対し、大佐を褒め称える。

手紙　四十三　同　右

ヒックマン氏に対する扱い方に関し、弁明はしないが、説明を行う。氏がより良い選択に値する男性であること、また、自分が氏以上に評価する男性はいないことを認め、氏を幸せにするため、努力は惜しまない旨をベルフォード氏と大佐に確約する。

手紙　四十四　ベルフォードからハウ嬢へ

彼女の手紙に対する謝辞に満ち溢れた手紙。

手紙　四十五　M卿からベルフォードへ

親戚の男が、船出のため、ロンドンへ向けて出発することを知らせるもの。彼とモーデン氏の対決を防いでくれるよう要望。

手紙　四十六　ベルフォードからM卿へ

ラヴレース氏からの訪問を受ける。その際に交わされた二人の会話について。モーデン大佐と面談をする。

手紙　四十七　同　右

ドーヴァーへ向かうラヴレース氏に途中まで付き添い、戻ってきたばかりとのこと。厳粛な別れ。

手紙　四十八　同　右

次の出会いにおいてモーデン大佐との間で交わされた事柄の説明。親愛の情が籠もった二人の別れ。

手紙　四十九　ハウ嬢からベルフォードへ

彼の要請を受け、愛する友の人物像を詳述し、一昼夜二十四時間に関して、令嬢の具体的な時間配分を説明する。

手紙　五十　ラヴレースからベルフォードへ　パリ発。

良心は魂の征服者だということ。物思いから逃れることが出来ない状態。予定のルートの変更について。自分がイギリスを離れた後に起こった出来事すべてについての詳細な報告を要望。

手紙　五十一　ベルフォードからラヴレースへ

彼が触れていた委細すべてに答える。以前に訪れたことのある宮廷に向かうよりは、ピレネー山脈の方面へ進路を変えるよう要望。

手紙　五十二　ラヴレースからベルフォードへ

ジョゼフ・リーマン（この男は良心の咎めに苛まれているとのことである）から手紙を受け取ったが、モーデン大佐がラヴレースに対し思いを通す覚悟でいる旨を知らせるもの。同趣旨の忠告をモーブレーから得ているとのこと。脅迫を受けるのは我慢ならないという。彼の目的を確かめるべく、大佐に一筆認めるつもり。この点に関して承知しているところを包み隠さず知らせてくれるよう、ベルフォードに要求。愛しい令嬢のことがあり、どうしても後悔の念を払拭することが出来ないという。

手紙　五十三　ベルフォードからラヴレースへ

ラヴレースの手先であったあのリーマン本人が彼の没落の手立てとなるようなら、彼にとっては深刻な物思いの種になるだろう、とベルフォードは言う。大佐を避けるようラ

ヴレースに懇願。その理由。

手紙　五十四　ラヴレースからベルフォードへ

脅迫を受けたと思い込んでの憤り。意図を知ろうとして大佐宛に書き送る。ただし、類似の場合に、自分ではそのような真似はしないであろうが、挑戦状と受け止めることを回避しても面目の立つような筆致になっているとのこと。大佐宛の手紙の写し。

手紙　五十五　ラヴレースからベルフォードへ

自分の手紙に対するモーデン大佐の返事に従い、大佐と落ち合うべく、トレントへ向かう途中とのこと。その返事ならびに彼の返信の写し。女性の中でも抜きん出て優れた者に対する恩知らずな振舞いに関する思いが、あらゆる娯楽において彼につきまとい、彼を世界一惨めな男にしているという。高圧的な姿勢、気取り、度を越して打ち解けない態度といった、非難の言葉すべてから令嬢を放免する。例の女どもに呪いの言葉をぶつけるが、この女どもは、放埒で思い上がった彼の愚かさゆえに唆しが効果を上げたという点では、彼のせいにしている自分たちの堕落に対し、たっぷりと仕返しをしたことになるのだと彼は言う。勝利を確信してはいるが、クラリッサへの追悼の念からも、大佐の命を奪いたくはないとのこと。

手紙　五十六　同　右

モーデン大佐との面談。明日こそ、恐らく、クラリッサの霊に仕えるべく、一名か二名いずれかの魂を送り出す日になると彼は言う。大佐の命を助けてやるか、あるいは、奪うことになるのは疑いのないところであり、翌朝十一時までには、間違いなく委細のすべてを記すことが出来るようになっているはずとのこと。

手紙　五十七　決闘の結末

結　び

あとがき

作品を称える頌詩の写し

訳　注

（一）（二頁、三一行）「死よ、お前のとげはどこにあるのか」…コリントの信徒への手紙一一五章、五五節。（Ross）

（二）（二頁、三四行）「卑しめられたのは　…　」…詩篇一一九章、七一節。（Ross）

（三）（一一頁、一二行）ルクセンブルグの大公…François Henri de Montmorency-Bouteville(1628 – 95)のこと。ルイ一四世の下でフランスの元帥となり（一六七五）、数回に亘ってイングランド王ウィリアム三世と戦い、勝利を収めた。（Ross）

（四）（一九頁、一四行）「復讐はわたしのすることと、わたしが報復する」…ローマの信徒への手紙一二章、一九節、申命記三二章、三五節等。（Ross）

（五）（二二頁、三七行）「十年、百年生きたとしても　…　」…シラ書四一章、四節。（Ross）

（六）（二二頁、三七行）「死ぬ日は生まれる日にまさる」コレトの言葉七章、一節。（Ross）

（七）（三二頁、一六行）ドライデンの『パラモンとアーサイト』…、Palamon and Arcite, or, The Knight's Tale, *Fables Ancient and Modern* (1700), i,522 - 43.　(Ross)

（八）（三三頁、一行）ハンドレッドウェート（hundredweight）…重量の単位で、英国では 112 lb(50.8kg)、米国では 100 lb(45.36kg)。

（九）（三六頁、一七行）「あの娘はいない　…　」…Nathaniel Lee, *Mithridates, King of Pontus* (1678), v, ii.　(Ross)

（一〇）（三九頁、四行）コイフ、モブキャップ、ピナーズ…コイフ（coif）は耳まで包む密着した頭巾。モブキャップは第三巻の訳注（五）を参照のこと。ピナーズ（pinners）は一八世紀初頭に流行した婦人用頭巾で、垂れ縁が両頬に長く垂れたもの。（Ross）

（一一）（三九頁、一七行）ヤフー（Yahoo）…第七巻の訳注（五三）を参照のこと。なお、この頁の注に見られる『貴婦人の化粧部屋』（*The Lady's Dressing Room*）は一七三二年発表の Jonathan Swift による一四三行から成る詩で、scatologist の側面が顕著な作品。

（一二）（三九頁、一九行）ハルピュイア（Harpy）…ウェルギリウスの『アイネーイス』三巻二〇九行以降に登場する女面女身で鳥の翼と鉤爪を持った貪欲な怪物。（Ross）

（一三）（四〇頁、六行）サラマンダー（salamander）…神話・伝説で火の中に棲むといわれた動物。火トカゲ、火の精。

（一四）（四四頁、三行）寓話にある犬とその影の話…イソップ寓話集にある話。肉片をくわえて橋を渡っていた犬が、水面に映った自分の姿を別の犬と思い、その犬のくわえている肉も奪おうとして吠えたため、自分の肉も失ってしまったという話。中務訳では、第一部、一三三話。

（一五）（四八頁、三九行）ハンドギャロップ（hand-gallop）…馬の走法の一。ゆるやかなギャロップ、短縮駆足。なお、ギャロップ（gallop）は一歩ごとに四足とも地上から離れる最大速度の駆け足。

（一六）（六五頁、三行）「万人の習わしの何たるかを知りたくば　…　」…Juvenal, *Satire XIII*, 159 – 61.　(Ross)

（一七）（六七頁、一〇行）〈喜んで与える人〉…コリントの信徒への手紙二　九章、七節。（Ross）

（二八）（七八頁′ 九行）メクリンレースならびにブラッセルレース…Mechelen（ベルギー北部 Antwerp 州の都市）と Brussels はレースの産地として有名であった。
（二九）（八五頁′ 四〇行）ヨブ記…この引用については′ 一九五五年改訳の日本聖書協会版『聖書』による。
（二〇）（八八頁′ 二九行）ルイ一四世の遺言…ルイ一四世の死去（一七一五年九月一日）にともない′ 王の五歳の曾孫がルイ一五世として即位したが′ オルレアン公 Phillipe Charles(1674 – 1723)が摂政となり′ 全権を掌握することとなった。なお′ 左記 URL を参照のこと。
http://en.wikipedia.org/wiki/Philip_II,_Duke_of_Orl%C3%A9ans
（二一）（九五頁′ 五行）「神に逆らう者が神から受ける分」…ヨブ記二〇章′ 二九節。なお′ 七行目から一五行目にかけての引用は′ ヨブ記一八章′ 二〇章′ 二四章等からの抜粋である。（Ross）
（二二）（九八頁′ 三行）「憐れみのまなざしをもち … 」…出典不詳。（Ross）
（二三）（九九頁′ 三四行）「犬畜生となって果てるのは … 」…Nicholas Rowe, *Tamerlane. A Tragedy*, I, i, 294 – 5. （Ross）
（二四）（一〇一頁′ 四行）アストルフォ（Astolfo）…勇敢だが高慢なイングランドの公爵で′ 月にある「失われた物の谷」へ赴き′ Orlando が失っていた正気を持ち帰った。Ariosto, *Orlando Furioso*, Canto XXXIX, Stanza 7 を参照のこと。（Ross）
（二五）（一〇一頁′ 九行）満月の折には…満月の光に当たると発狂するという言い伝えが′ ヨーロッパには古くからあった。また′ シーザーに関する故事については′ 第一巻の訳注（六）を参照のこと。なお′ イギリスには′ 春分と秋分の頃には天候が大荒れになることが多いという′（誤った）言い伝えもある。Cf.、equinoctial gales.
（二六）（一〇二頁′ 一四行）シャータズ好み…Francis Chartres(or Charteris, 1675 – 1732)は金持ちの放蕩児で′ 強姦事件を起こし′ 有罪となったが′ Walpole の命令で刑を免れたと言われている。（Ross） なお′ Paul-Gabriel Boucé(ed.), *Sexuality in eighteenth-century Britain* (Manchester University Press, 1982), pp.126 – 7 を参照のこと。
（二七）（一〇四頁′ 六行）メリロート…yellow melilot（セイヨウエビラハギ）の花を乾燥したものは′ 膏薬やパップ剤として利用されていた。（Ross）
（二八）（一〇四頁′ 一九行）メードストン監獄（Maidston gaol）…メードストンはケント州のほぼ中央に位置する町で′ 古くから監獄があった。
（二九）（一一二頁′ 一一行）特定治安判事…法廷成立のために不可欠な治安判事のこと。（Ross）
（三〇）（一一二頁′ 三八行）ビディ（Biddy）…Steele の喜劇 *The Tender Husband*（1705）の登場人物である。（Ross）
（三一）（一一四頁′ 三〇行）シュルーズベリ伯…シュルーズベリ伯は′ バッキンガム公爵が夫人と通じていることを知り′ 憤慨したが（Count Antony Hamilton, *Memoirs of the Count de Gramont*, trans. etc. by Horace Walople with additional notes by Sir Walter Scott and Mrs Jameson, n.d., p.338)′ 一六六七年三月十六日′ 二代目バッキンガム公爵との決闘で命を落としたという。（Ross）

(三二)（一五一頁、一二行）フランスのアンリ四世について語られていること…不詳。なお、アンリ四世（Henri IV（1553‐1610）はフランス国王（在位一五八九‐一六一〇）。母親の影響で新教徒となり、ユグノー戦争で活躍したが、その後旧教に改宗。一五九八年には「ナントの勅令」を発布して信仰の自由を認め、宗教戦争を終結し、国内の再建に努力した。一六一〇年、狂信的旧教徒によって馬上で暗殺された。（小学館『大日本百科事典』）

(三三)（一五七頁、一一行）サウル（Saul）…イスラエル初代の王。ダビデに人々の称賛が集まるのを妬んだ。サムエル記上　一八章以降を参照のこと。

(三四)（一六九頁、一四行）「すべての人に対してすべてのものになりました　…　」…コリントの信徒への手紙一　九章、二二節。

(三五)（一七〇頁、三五行）「恐怖と威嚇とは　…　」…Horace, *Odes*, Book III, I, 37 – 40.　(Ross)

(三六)（一七一頁、九行）「人その思うところに従い　…　」…Dryden, *The Conquest of Granada by the Spaniards. A Tragedy, in two parts* (1670, 1671), *Part I*, II, i.　(Ross)

(三七)（一七一頁、一七）「女神我に向かい　…　」…Dryden, *Don Sebastian, King of Portugal. A Tragedy* (1689), I, i.　(Ross)

(三八)（一七四頁、一四行）マタイ‐サレム（Matthew-Salem）…メトシェラ（Methusalem）のことであろう。第七巻の訳注（七〇）を参照のこと。

(三九)（一七七頁、一四行）「汝を責める壁の上の書き物」…ダニエル書　五章、五‐三〇節を参照のこと。

(四〇)（一八四頁、三五行）「我も最悪の事態に至れば　…　」…不詳。Angus Ross は作者自身の作であろうと推測している。(Ross)

(四一)（一八六頁、一九行）ラピアー（rapier）…細身で両刃の長剣。主に決闘用。

(四二)（一八七頁、一二行）ブリクセン（Brixen）…イタリア北部トレンティーノ＝アルト・アディジェ州、ボルツァーノ県の小都市 Bressanone の旧称。

(四三)（一八八頁、一七行）ポストシェーズ（post-chaise）…四、五人乗りで四輪の駅馬車のこと。

(四四)（一九四頁、一八行）「万人の習わしの何たるかを知りたくば　…　」…この巻の訳注（一六）を参照のこと。

(四五)（一九七頁、四〇行）ヴォクソール、ラネラ、メリボン等々…Vaux-hall, Ranelagh, Marybone は当時の社交・遊興の場であった。なお、Marybone は現在は Marylebone と綴る。

(四六)（二〇三頁、一九行）パルテニッサ（Parthenissa）…Roger Boyle (1621 – 79) のロマンス、*Parthenissa* (1654 – 65) のヒロインのことであろう。

(四七)（二〇五頁、一七行）流涎法（salivation）…性病治療法の一つで、水銀剤によって大量に唾液の分泌を促すもの。(Ross)

(四八)（二〇七頁、一二行）「火の中から取り出された燃えさし」…ゼカリヤ書三章、二節。

(四九)（二一一頁、一九行）「詩には出来るのかもしれない　…　」…イギリスの牧師

にして詩人である。George Herbert (1593 – 1633) の *The Church Porch* を参照のこと。

(五〇) (二一一頁、四〇行) バラム(Balaam)…旧約聖書に出てくるベオルの子バラムの預言者。モアブの王バラクからイスラエルの民を呪うよう求められたが、ロバに戒められ、彼らを祝福した(民数記二二―二四章)。正確な予言を行ったが、金銭欲から陰険な策を弄した結果、殺害された。なお、A.Pope の *Moral Essays* (1731 - 5) Ep., III, 339 et seq.においては、信心深く、几帳面で質素な市民 Balaam が登場するが、富をだしに悪魔に唆されて宮廷人となり、フランスから賄賂を受けたことで縛り首となる。

(五一) (二一三頁、一三行)『孤児』 … 等々…『アレクサンドロス大王』(*Alexander the Great*) は不詳。Nathaniel Lee, *The Rival Queens, or, The Death of Alexander the Great. A Tragedy* (1667) のことか。『愛ゆえに』(*All for Love*) は Dryden の作で、一六七八年出版。『オイディプース王』(*Oedipus*) は Dryden と Lee による一六七九年の作。『オルーノコー』(*Oroonoko*)は一六七八年頃に出版された、イギリスの女流作家 Aphra Behn(1640 – 89)の小説であるが、Thomas Southerne(1659 – 1746)によって一六九五年に戯曲化された。なお、一二〇行以降で触れられている作品について言えば、『喪服の花嫁』(*The Mourning Bride*)は W.Congreve による一六九七年の作。『チムール』(*Tamerlane*)『ウリッセース』(*Ulysses*)は共に N.Rowe の作で、それぞれ一七〇二年と一七〇六年に上演。『パイドラーとヒッポリュトス』はアディソンの友人 Edmund Smith の作品で、初演は一七〇七年である。(Ross)

(五二) (二一四頁、一七行)「神々が至当なりと考え … 」…Vergil, *The Aeneis*, II, 426 – 8.

(五三) (二一四頁、四〇行)「何人も過失なしに生まれず … 」: Horace, *Satires*, I, 3, 68.

(五四) (二一六頁、一五行)「だが、教えるよりもむしろ … 」…A. Pope, *The First Epistle of the Second Book of Horace, Imitated* (1737), sub-titled 'To Augustus', 338 – 47.ホラティウスの原詩 *Epistle to Augustus* の該当部分(二一〇八 - 一三行)が、見開きのもう一方のページに印刷されていた。(Ross)

(五五) (二一六頁、三三行) アイスキュロスの劇…クリュタイムネーストラ殺害の場面はオレステース三部作の *The Choëphoroe* において扱われる。

(五六) (二一六頁、三六行) エウリピデスの作品… *Hippolytus* (428B.C.) のことである。

(五七) (二一六頁、四〇行) ラパン (Paul de Rapin、1661 – 1725) : フランスの歴史家で、優れた英国史である大著 *Histoire d' Angleterre* (1724) の著者である。

(五八) (二一七頁、八行) 当代の才気溢れるお方…Sir Robert Walpole の政敵で、A.Pope や H.Fielding らと親交を温め、文学の支援者として知られていた George Lyttelton, first Baron Lyttelton (1709 - 73) のこと。

(五九) (二一七頁、三〇行)「だが、あゝ、我が魂よ … 」…一七四一年に結婚し、一七四七年に出産の床で死亡した妻を悼んで詠んだ詩。*The Poetical Works of George Lord Lyttelton* (London, 1801), pp. 102-103. なお、この本は Google Book Search により PDF ファイルを入手することが出来る。http://books.google.com/を参照のこと。

(六〇) (二一八頁、三五行) 第七巻…第八巻の間違いである。次の注 (イ) についても

同じことで、該当箇所は第八巻の一八五頁である。

（六一）（二二〇頁、三九行）初版の第七巻、六十四、六十五頁…初版に基づいているという Penguin Classics の一巻本では一一六三頁である。また、拙訳では第七巻の一八〇頁である。

（六二）（二二二頁、一四行）「ご婦人方は支配されるべく生を享け … 」…第四巻の訳注（四四）を参照のこと。引用箇所は同じく *Of Love* の一一行目から一五行目にかけて。なお、下記 URL で *Poetical Works of Edmund Waller and Sir John Denham* をダウンロードすることが出来る。

http://www.gutenberg.org/files/12322/12322-8.txt

（六三）（二二三頁、七行）マリヴォー（Pierre Carlet de Chamblain de Marivaux 一六八八－一七六三）…フランスの劇作家・小説家で、小説作品としては、*La Vie de Marianne*（一七三一－四一）、*Le Paysan Parvenu*（一七三五－三六）がある。

（六四）（二二四頁、三四行）【幼少の … 】…Clarissa Project 版では【 】の部分が脱落しているため、Introduction に見られる、A Note on Errors in the Third Edition、(p.44)を参照して脱落を補った。なお、Everyman、s Library 版でも同じ欠落がある。（Volume Four, p.564）

（六五）（二二四頁、四〇行）第一巻、一六〇頁…これは原文の注記をそのまま示しているのだが、この箇所には令嬢を称賛する言葉は見当たらない。該当箇所は第四巻の手紙一六（特に、拙訳の五二頁から次頁にかけて）であろう。

（六六）（二二五頁、三一行）「眼前の物語において … 」出典不詳。

（六七）（二二八頁、一一行）アッティカ（Attica）…ギリシアの一地域。古代にはアテナイの領地。

（六八）（二二八頁、一五行）パロス（Paros）…エーゲ海キクラデス諸島の一つ。大理石に刻まれた「パロスの年代表」が発見された。なお、イーリッソスについては、第二巻の訳注（一三）を参照のこと。

先の物語に見られる

道徳的および教育的所感のうち

一般的用途ならびに便宜に供され得るように思われるものの

集　　大　　成

適宜、項目別に要約。

各所感、警告、警句、意見、あるいは、所見の

見出される巻およびページに関する

指示を添える。

不当な辱めによって苦々しい思いをしている者の興奮ぶりに対しては、大幅に酌量がなされて然るべきである（第一巻、百六十二頁）。

不幸な人間というのは、避け難い事故の場合にも、軽んじられたとか無視されたとか考えがちである（第二巻、百七頁）。

逆境は優れた資質すべてを試す場である（第二巻、百十頁）。

逆境にある人間は立派な習慣を守るよう努力しなければならない。陽射しが戻って来る時にも、試練のために損なうものがあったりしてはいけないからである（同　所）、（第三巻、三十三頁）。

災難に見舞われた時は自らを顧み、畏れを抱くべきである（第二巻、百七十九頁、百八十五頁）。

不幸は、これまで頼りとしてきたものよりはもっと確かなものを拠り所とするように仕向けるため、われわれに加えられることが多い（第二巻、百八十五頁）、（第五巻、二百六十八頁）。

不幸の手の届かないところにいる者はいない。それゆえ、人間だれしも幸運を誇ってはいけない（第二巻、百八十五頁）。

憤慨の種となるものがいかに大きくとも、災難がいかに大きくとも、自分の体は神のものであって、自分自身のものではないことを常に憶えていなければならない（第二巻、百九十六頁）。

災難に見舞われた者たちが死を願う場合には、正しい動機から願っていることに確信がなければいけない。現世における失望それ自体は、そのような願望を正当化しない（第三巻、二百一頁）。

逆境というものは、順風満帆の幸福な日々には光を当てられることもなかったような強さを、気高い心に引き出すことになる（第四巻、四十五頁）。（第三巻、五十九頁）も参照のこと。

災難とか苦悩とかに見舞われている人間が寛大な心の持ち主から憎まれることは有り得ない（第四巻、二百五頁）。

災難のゆえに死を気に留めなくなっている人間は、死を避けたいと願う時には、おそらく、避けることが出来なくなっているだろう（第六巻、二百七十一頁、二百九十三頁）。

苦難の学び舎においては、われわれは己を知り、互いに同情し、辛抱し合い、より良い状態を仰ぎ見るよう教えられる（第六巻、三百五頁）、（第七巻、八十七頁）。

不幸な人間は敵対者に事欠くことがない（第七巻、五十七頁）。

災難を正しく活用する人間は栄光へとまっすぐに続く道を進んでいるとも言える（第七巻、八十七頁）、（第八巻、二十三頁）。

現実の災いに苦しむ者たちは仮想の災いで頭を悩ませるようなことはない（第七巻、八十八頁）。

悲運こそは高潔さの試金石である（第七巻、百五十七頁）。

苦しみは卑しめられた心を臆病にする（第七巻、百六十五頁）。

災難は真に高潔な精神の特徴となる不撓不屈の心を引き出す（第七巻、二百四十五頁か

ら次の頁にかけて)。(第四巻、四十五頁)および(第六巻、九十四頁)も参照のこと。

深い苦しみの中にあっては、宙ぶらりんな状態よりは確定した状況のほうが好ましいものである(第七巻、三百三十一頁)。

[Consolation を参照のこと。

Advice and Cautions to Women. (女性への助言ならびに警告)

早くに独り立ちをした若い女性の場合、世間の目はその訪問先や訪問者に注がれる(第一巻、九十五頁)。

付け込もうとしている男や下心のある男は女性の期待や不安を弾薬代わりにし、思いのままに攻撃を仕掛けてくるものである(第一巻、九十六頁)。

術策に長けた男は思い切った提案や申し出によって、思慮の浅い女性を網に掛けようと努めることが多く、反発がなければ、黙っているのは同意しているのだと当てにする(第一巻、百十二頁)。

心の繊細さに関連する事柄を話題とした男性との会話において、同性の者たちを見捨てるような言い方をする場合には、女性は用心深くなくてはいけない(第一巻、百三十九頁、二百九頁)。

女性は、いかに思慮深く控え目であろうとも、励ますつもりの男性には、他の競争相手と天秤に掛けていると思わせるような根拠を与えることのなきよう注意すべきである(第一巻、百五十三頁、百五十七頁)、(第三巻、百三十頁)。

女性を掌中に収めようと願う男が手段に拘ることは滅多にない(第一巻、百八十八頁)。

誘惑者に耳を貸す女性は、優しい言葉によって、知らず知らずに引きずり込まれ、非道この上ない振舞いに及ぶこともあろう(第二巻、百八十七頁)。

女性は恋人の立場に身を置いたが最後、そこから引き下がることはほとんど不可能である(第二巻、二百二十頁)、(第三巻、二百十九頁)。

明らかに制御することの出来る怒りを従順な気質の女性に向かって装う男に、良い意図があるはずはない(第三巻、九頁)。

娘たる者は、人目を忍んで一緒に逃げ出すよう唆す男のことを、最も悪辣で最も利己的な誘惑者と見做すべきである(第三巻、十二頁から次頁にかけて)。

世に知られた放蕩者と文通を持とうとする女性は、その男が最悪の行動に出るよう、間接的に挑発していることになる(第三巻、四十二頁)、(第五巻、二百五十頁)。

甘言に決して乗らず、褒め言葉にしても、己の心の是認を得ているもの以外はすべて軽蔑してみせる女性というのは、道徳的な点から言えば、誘惑の手の届かない存在である(第三巻、五十四頁)。

女性は、自分たちの愛する男に対する場合にも、求めに応じたのは生まれつき節操がないからなのだと、軽く見られてしまうような根拠を与えたりせぬよう注意しなくてはいけない(第三巻、六十頁)。

男性の場合には、心の穏やかさは軽蔑に値するものである、などと女性は考えてはいけない(第三巻、九十七頁)、(第七巻、二百五十八頁)。

その上品さが一定のものでも、不断のものでもなければ、身についてもおらず、発作的

で気紛れで突発的なものにすぎないと思われるような男性の生来の気質には、疑いが向けられて然るべきである（第三巻、百十四頁）。

愛していることを認めると、些細な無礼はすべて許すものであり、些細な無礼は大きな無礼を生むことになる（第三巻、百二十六頁）、（第四巻、百五十五頁、二百二十三頁）。

女性が自らの賢明さを誇りにするよう仕向けるのは、女性を意のままにするために、下心を持つ男がしばしば用いる手口である（第三巻、百二十六頁）。

落とし穴を仕掛ける場合、獲物には確かな足取りで、目を見開いたまま落ちてもらいたい、とラヴレース氏は語っている。その時には、そいつを見下ろしながら、「おほー、可愛い子ちゃん、何でまたそんなところに　…　」と声を掛けることが出来るというのである（同　所）。

求婚期間中の女性は、結婚予定の男性に接する場合、自分自身のためにも、彼は尊敬されて当然だと考えていることを世間に示すような、そんな態度を取らねばならない（第三巻、百三十頁）。

放蕩者というのは自分たちが思いのままに出来る女性すべてを正当な獲物と考える（第三巻、百八十二頁）、（第四巻、二百六十二頁）。

放蕩児の心を占める愛にも、特別風変わりな点は滅多にない（第三巻、百八十四頁）。

放蕩児から見せられたいかがわしい絵とか詩句に腹を立てることなく、笑ってみせるようであれば、後にその男から狙われて苦しむことになっても、そのような女性は我と我が身を呪うが良いのだ（第三巻、二百十三頁）。

放蕩児に対しては罪のない馴々しさすらも許されるべきでない（第三巻、二百十三頁）。

自ら選択した結果が裏目に出るというのだから、大いに教訓とすべき話だろう、とラヴレース氏は侮辱を込めて語っている（第三巻、二百十五頁）、（第五巻、二百四頁）。

本好きの女性については、通常、読んでいる本によって判断することが出来る　…　ラヴレース（第三巻、二百十六頁）。

女性が保つよそよそしさに不服を漏らす男性は、度を越して近づきたがっているのである（第三巻、二百十八頁から次頁にかけて）。

一つ容認すると、男性にとっては、次の譲歩への序曲に他ならなくなる（第三巻、二百十九頁）。

自分に対する恭しい態度のゆえに、女性が男性に対して示す信頼の念も、その信頼感を生むこととなった敬意とか恭しさとかの低下が認められた場合は、即座に撤回されるべきである（第三巻、二百十九頁）。

信義を守ろうとする人間は好んで曲がりくねった道を辿ることはしない（第三巻、二百二十一頁）。

男性の手中に身を委ねてしまった時には、女性が何をしたいとか、何をしたくないとか言っても無駄な話である（第三巻、二百二十二頁）。

（自分自身を粗末に扱い）男性に駆け落ちの機会を与えてしまった女性には、当の男性から丁重な扱いを期待するようなことがどうして出来よう（第三巻、二百三十一頁）。（第三巻の十八頁、百七十九頁）も参照のこと。

不首尾とはいえ、悪辣な試みを行って許してもらう男性、あるいは、諫めを受けるだけの男性は、より好都合と思われる機会に再び試みることへの励ましに出会うことになる（第

三巻、二百四十三頁）、（第四巻、三十九頁、二百四十四頁）。（第三巻、百二十二頁）も参照のこと。

偶然に放蕩児やその相棒たちと付き合うこととなった明敏な女性は、自分の役に立つよう、彼らを互いの姿を映す鏡に変える（第三巻、二百六十頁）。

出だしにおいて最初の一歩を誤ると、しばしば人は疑念と過誤の荒野へと迷い込むことになる（第四巻、二十六頁）。

祭壇の前で手を与えてくれるよう女性を急かすことに熱心でない男は、催しの場へ手を取って向かうことを強いてはいけない（第四巻、二十八頁）。

女性の中でも思慮の浅い者たち、とりわけ、取り澄ました者たちに対する企みをより効果的に遂行するために、放蕩児連中はしばしばプラトニックな愛情を装ってみせる（第四巻、百四頁）。

意に背くのは気が進まないという様子を恋人に見せてしまう場合、女性はつけ込まれないよう用心すべきである（第四巻、百六頁）。

まことしやかな態度で女性の疑念や警戒心を眠らせた放蕩児は、下心のすべてを完遂するための途に就いたことになる（第四巻、百二十八頁）。

もしも女性が、自分は疑いを掛けられていると考えて当然な男性と付き合いを続けるとしたら、それは極めて有望な印に間違いないように思う、とラヴレースは述べている（同所）。

跪く恋人に対しては、女性は度を越して多くのものを許しがちである（第四巻、百五十九頁）。

ラヴレースが語っているのだが、堕落する女性十人のうち九人はその不面目を自らの虚栄心ないし軽薄さのために、あるいは、用心深さや礼に適った慎みの欠如に負っているという（第四巻、百七十五頁）。

暴虐かつ猜疑的な放蕩児どもは、妻が自分たちの命じるもの以外には、いかなる意思も見方も、愛も憎しみも持たないことを期待する（第四巻、百八十三頁）。

一緒に旅をするのは、男女が親しくなる機会を提供してくれる、とラヴレースは語っている（第四巻、百八十七頁）。それゆえ、女性は旅の道連れを選ぶに当たっては細心でなければならない。

女性は幼いうちから女性を高く評価するよう教えられるべきである。ラヴレースも述べているように、プライドは美徳の立派な代役を果たすからである（第四巻、二百三十頁）。

放蕩児の手中に身を投じる才気に溢れた女性は、その男に対してばかりか、その男が密かな勝利感に酔いつつ、誇らしげに戦利品を見せびらかす下劣な相棒たちに対しても、自らの分別と同様、それらの才能にも疑念を投げ掛けることとなる（第四巻、二百五十三頁）、（第七巻、三十五頁）。

下卑た連中と付き合うことになった慎み深い女性は、懲らしめの意図をすべてそのままなざしによって明示すべきであり、隠しようもないほど明白な意味合いに対して無知を装ってはいけない（第四巻、二百五十六頁）。

策略好きな男に身を委ねた女性は、結婚の遅れに対し、極めて貧弱な言い訳や口実にも満足しなければならない（第四巻、二百五十八頁）。

力不足こそは、女性のだれに対してのものであれ、放蕩児が自らの目的に加える唯一の

制限である（同　所）。

男に欺かれぬよう、女性は揺り籠の中から警告を受けて来ているだけに、堕落した女というのは、なおさら許し難いのである（第四巻、二百六十七頁）。

ふざけた行為の中で為され、笑って済まされた無礼な振舞いのことで、男は大いにつけ上がるものである（第五巻、一頁）。第四巻の百四十一頁も参照のこと。

威厳のある容姿を自覚している婦人は、近寄って来る者すべてから尊敬され、かつ愛されるためには、愛らしい態度を交えるべきである（第五巻、三十二頁）。

女性の慎み深さを軽蔑する男性は、その厚かましさを正当化するものを彼女の振舞いの中に見たと伝えているのも同然である（第五巻、百一頁）。

女性に決定的な侮辱を加えながら、容赦してくれることを期待する男性は、自分も悪辣だが、女性も負けず劣らず愚かだと考えているに違いないのだ（第五巻、百一頁、百六十頁）、（第六巻、百七十七頁）。

恋人として容認されている男か夫のいずれかに向かって失礼な振舞いをする女性は、自惚れた男ことごとくに対し、彼女には贔屓にしてもらえるという望みを与えているのである（第五巻、百七頁）、（第六巻、二百四十九頁から次頁にかけて）。

クラリッサが案じているのは、父親の禁止ならびに自らの判断による見解に背いた文通を続けるよう説得出来たことから、ラヴレースが彼女の行動に疑いを挟むべき根拠を手にすることである（第五巻、百五十五頁）、（第六巻、百頁）。

道楽者との会話、あるいは、文通を余儀なくされている女性にとっては、いかに些細な事情といえども、些細に過ぎて注目に値しないということはない（第五巻、二百十頁）。

言い寄られた際に卑屈な態度で諫める女性は、許すつもりでいることを無礼者に知らせているのである（第五巻、二百三十三頁）。

操を奪おうとしたことに対し、男を許す女性のことを、男というものは、口先では何を言おうとも、一層悪く考えるのが常である（第五巻、二百三十四頁）。

女性に淫らな行為を働く男性が秘密を保ち、許しを得るための拠り所とするのは、己の大胆さと女性の内気さである（第五巻、二百五十三頁）。

放蕩児のために何らかの間接的な行動に踏み切る女性は、当面その男の虐待を免れるとしても、妻の座に就いた時には、後に彼が示す嫉妬や非難を受けるのに相応しい資格を得ることになる（第五巻、二百七十二頁）。

自ら通常の保護の手の及ばないところへ身を置いた女性は、自分に都合の良い奇跡を望むわけに行かない（第六巻、十四頁）。

放蕩児を改心させたいと望む女性というのは、溺れかけている哀れな人間を救おうとして引きずり込まれ、一緒に命を落とす者に自分をなぞらえて当然なのかもしれない（第六巻、九十九頁、二百九十八頁）。

自分たちの無遠慮な話や放蕩の自慢に怒りもせずに耳を貸してくれるようなら、男は品性優れた女性に対しても大いにつけ込むものである（第六巻、百五十八頁）。

貞節は信心深さと同じく不変の美質である。女の子が表情の点、言葉遣いの点で過度の軽薄さに傾いているとしたら、請け合っても構わないが、すでに悪魔がひずめの割れた足を片方彼女の心の中に突っ込んでいるのだ、とラヴレースは言う（第六巻、百八十二頁から次頁にかけて）。

自分の行状ゆえに、黙っていてくれるよう男性に頼まざるを得ない立場の女性は、まさしく不幸に違いない（第六巻、二百六十六頁）。

図々しい男が女性の前で見せる鉄面皮な言動は女性に対する低い評価、そして、自分自身についての高い評価に由来する（第六巻、三百二十八頁）。

邪悪であることを知りながら悪い人間に貞節を誓う善良な女性は、永遠の幸せを危険に晒すことになる（第六巻、二百九十七頁）。

自分の操を奪った男に向かって結婚を嘆願する女性、また、そのようにおろそかな扱いに感謝することの出来る女性というのは、何とも恐ろしいほどに身を落としたことになるだろう（同　所）。

そのような者は、非難に値することをした覚えのない心から生じるあの堂々たる自信を奪われ、その男の友人や自分の友人にどのような姿を見せるというのだろう（同　所）。

暴行者の咎めに、そして、自分のために寛大さや同情心を振りかざすという侮辱に、そのような女性はどれだけ甘んじなければいけないのだろうか（同　所）。

奇跡が起こらないかぎりは地獄落ちを運命づけられているという、そんな父親を与えてしまったことを思い返しながら子供たちを見渡すのは、不品行を続けている夫を持つ思慮深い母親の胸にはひどく応えるに違いない（第六巻、二百九十八頁）。

婦人が俺との約束を破るのは許されないことだが、それはちょうど、俺が彼女との約束を守るのは奇妙に思われるのと同じことだ、と（真に放蕩児風な精神から）ラヴレースが語っている。俺が念頭に置いているのは色事の場合で、その他の点に関しては、誠実にして品行方正な人間だ、というのである（第七巻、百九十頁）。

自分の慎み深さを踏みにじった男に弱みを見せたことを自覚している場合、女性はその男と妥協し、許すに至るかもしれない（第七巻、二百三十四頁）。

ハウ嬢が語るところでは、女性全体を軽んじている男性で、その品行に関して好意的評価を受けるに値する者をかつて知らないという（第七巻、二百五十四頁）。

ある男との駆け落ちに同意し、その男が極悪非道だと分かった場合には、[非難のすべてと併せて]その破廉恥さのいくらかを自分のものとして胸に収めておかねばならない（第七巻、二百五十四頁）。

女性に対する犯罪行為、それも、非道この上ない性質のものが〈女性に慇懃な男〉の本質を成し、その名称となる（第七巻、二百七十七頁）。

向上のためであれ気晴らしのためであれ、ペンは針に次いで女性の才能には一番相応しく、一番合致している（第八巻、百五十四頁）。

男性特有のものと思われている学問を身につけるため、女性の特徴となる有益さや優雅さを軽視する女性は、修得したものによって獲得する評判以上に、怠ったものによって軽蔑を招くことになる（第八巻、百五十五頁）。

家事に関する実際的知識こそは、女性にとっての主たる誉れとなるものである(同　所)。

母国語の美点や魅力に関する知識以上のものを目指す女性は、家庭内での有用性を危うくすることがあまりにも多い（第八巻、百五十六頁）。

若い女性は自分達の受けた教育のある部分のいたらなさを、別の方面の優秀さによって埋め合わせるよう努力しなければならない（第八巻、百五十八頁）。

[Courtship, Duty, Husband and Wife, Libertine, Marriage, Parents and

Air and Manner. Address.　（様子と態度、話し振り）

様子や態度はしばしば言葉以上に真意を伝えるものである（第一巻、五頁）。

男性の説得の手際で、女性から最も評価されることが多いものは、通常、その男のあつかましさに由来するのである（第一巻、百八十一頁）。

譲歩は淑やかになされるべきであり、さもなくば、一切なされるべきでない（第三巻、二百二十三頁）。

道徳心を伴わなくては、尤もらしい如才のなさなど、ただ見てくれが良いだけのことにすぎない（第四巻、二十二頁）。

まことしやかな話し振りは、しばしば、当然至極な不興をも和らげることになる（第六巻、三百二十三頁）。

話し方のことさえなければ、用いる言葉には何らの問題もないのに、異議を招いてしまいそうな口振りというものがある（第七巻、二百七頁）。

Anger. Displeasure.　（怒り、不快の念）

怒りや嫌悪の情は物事の性質、少なくとも、その外見を変えてしまうものである（第二巻、七十二頁）。

怒りに任せて何かを行うと、きっと後悔するものである（第二巻、九十二頁）。

顔つきの厳めしい人間はあまり憤りを表すべきでない（第二巻、百二十四頁）。

ある人間が、実行するのも放置するのも自由である事柄をわれわれのために行ってくれないからといって、その者に腹を立ててはいけない（第二巻、百八十四頁、二百二十四頁）、（第四巻、二百三十二頁から次頁にかけて）。

落ち度のある人間は、怒りを向けられたことに憤慨するよりも、そのきっかけを造ったことを嘆くべきである（第三巻、百三十二頁）。

男にとっては、不快に思っているもので目に愛らしく映るものなどは一つとして有り得ない（第五巻、八頁）。

立腹しているとか、感情を損ねているという人物は、不愉快に思う相手に対し、真価に見合った評価は与えようとしないものである（第五巻、十八頁）。

腹を立てている人間というのは、怒りが続いている間は絶対に筆を執るべきでない（第五巻、百五十八頁）。

怒りに駆られると、飛び切り行儀の良い者でさえ行儀作法を捨ててしまう（第五巻、二百六頁）。

友人の不興は、疑いもなく愛情から発している場合には、身に覚えのない者によってすら耐え忍ばれなければいけない（第六巻、百四十九頁）。

身に覚えのない者は、身の証を立てる機会を提供してくれることになる友人の不興に対し、感謝しなくてはいけない（同　所）。

だが、その場合、不興を覚えた友人としては、納得するとすぐに、不興の誘因となった

思い違いを認め、許しを請うのでなければ、度量の狭い話である（同　所）。
自分の分別に対して疑いを挟まれた時、最も知力に乏しい人間が最も怒りやすいものである（第八巻、百十五頁）。
［Passion を参照のこと。

Apprehension. Fear.　（不安、恐れ）

異常な冒険へと引き込まれると、感じやすい心は予期せぬ姿と出会うたびに、すぐにもびくつくものである（第一巻、百八十頁）。
一番懸念して始めたことが、しばしば、一番幸せな結果になる（第二巻、百三十六頁）。
恐れている事柄の場合でさえ、確定してしまうほうが、どっちつかずの状態よりはマシなことが多い（第二巻、百八十三頁）。
われわれが最も懸念している出来事こそが、時には、われわれにとって願わしい事柄なのである（第二巻、二百四十一頁）。
実行に移す機会を持ちながら脅し文句を並べる者は、滅多なことでは恐れるに及ばない（第三巻、七頁）。
重大かつ不確定な状況にあっては、いわれもなく心配しているほうが、用心を忘れて不意を襲われるよりも良い（第三巻、八十六頁）。
災いは案じる心には実際より大きく見えることが多い（第四巻、百五十一頁）。
熱心に恐怖を否認してみせるのは、しばしば恐怖心から出ていることなのである（第五巻、九十九頁）。
大切に思っていない相手に対して恐れを抱く人間は少ない（第五巻、百五十六頁）。

Beauty. Figure.　（美貌、容姿）

整った顔立ちというのは、美貌ほどに失うものが多くはなく、美貌がはかなく消え失せる時にも長く持ちこたえる（第一巻、五頁）。
容姿の素晴らしさは、利益をもたらすよりも、落とし穴となることのほうが多い（第一巻、百四十六頁）、（第三巻、六十五頁）。
通常、美は空想の産物であるが、だれの目にも美しく映る者たちもいる（第一巻、百五十四頁）。
優れた外観ないし容姿は、男女を問わず、一見したところでは、選んだ人間の手柄となるものである（第一巻、二百九頁）。
特に男性は容姿よりも知的特性のほうを誇りとすべきである（同　所）。
可愛らしいお馬鹿さんというのは、何を言っても何をしても、どういうわけか人の気に入るものである（第一巻、二百十頁）。
可愛らしいお馬鹿さんがもてはやされているのを妬む者などいるだろうか（同　所）。
蝶のような華やぎの時が過ぎると、皆の軽蔑に出会い、もっと大切な資質に磨きをかけるのを怠ってきた効果がしみじみと感じられるようになる（同　所）。
一方、若い頃から立派な特性を保ってきた用意周到な婦人は、浮ついた褒め言葉の代わ

りに確かな尊敬の念を持って迎えられ、ちやほやされることはなくとも、十分に補いがつくことを知るのである（同　所）。

愛らしい女性は、腹を立てていても、あるいは、上機嫌であっても、愛らしく見えるものである（第三巻、二百四十八頁）。

最も優美な顔に最も大きな破壊をもたらすことの多い例の〈むごい病〉も、必ずしも災いとは思われない（第五巻、百九十六頁）。

善良さと心の広さが美貌に気品と輝きとを与える（第六巻、二百七十六頁）。

Blushes. Blushing.　（赤面、恥じらい）

罪の意識に伴う狼狽ぶりと、濡れ衣とはいえ、悪事の罪を負わされたことで、立派な精神の持ち主の顔を覆う高邁な意識とは区別されねばならない（第三巻、二百二十七頁）。

無口なことやすぐに頬を染めてみせることは、ロンドンの貴婦人にとっては、今や何の美質でもない、とラヴレースは言う（第三巻、二百三十頁）。

当世の貴婦人はしばしば人前に出ることで厚顔無恥になっており、顔を赤らめているところを見られるのは、男性と同じくらいに恥と感じている　…　ラヴレース（同　所）。

下品な仄めかしを聞いて扇子で顔を隠す女性は、即座に顔を赤らめることが出来ないのを自覚しているものと思われる　…　ラヴレース（第五巻、百十四頁）。

［Modesty を参照のこと。

Censure. Character.　（非難、名声）

世間は意地が悪いと言われているが、こと人物の評価に関しては（感じるままを口にするので）、通常考えられているよりもおおむね公正なものである（第一巻、九十頁）。

口うるさい世間のことをしきりに嘆く人間は、おそらく、今まで以上に我と我が身に原因を探るべきなのだろう（同　所）。

衆に秀でることを目指す女性が道を踏み違えると、嫉妬心を煽った世間の者たちから非難を浴びることになるが、それは、世間がさほど完璧ではない人物に与えるものよりはもっと厳しい非難となる（第一巻、九十五頁）。

人物に関する極めて良い評判と極端に悪い評判というのは、当たっていることは滅多にない（第一巻、百三十頁）。

他人の落ち度を非難する時には、自分にその落ち度がないよう、特別に留意しなければならない（第二巻、四十三頁）。

軽率に咎め立てをする人間は、自らも無定見さを非難されることになる（第二巻、百十九頁）。

利害関係を有する人物によって提示された人物評価については、悪いものであれ良いものであれ、常に斟酌を加えるべきである（第二巻、百六十頁）。

非難を免れた者の中にも、称賛に値しない者が多くいる（同　所）。

人の評判に関わる場合には、性急に咎め立てをしてはいけない（第三巻、二百四十九頁）。

初対面の際の外見で人を決めつけるような真似は絶対にすべきでない（同　所）。

立派な人間というのは「というよりは、立派な人間のように思われようとする連中というのは」概して甚だしく無慈悲なものであるから、結果的に他の者すべてに対して惨い考え方をせざるを得なくなるくらいなら、立派な人間などになるつもりはない、とラヴレースは言う（第四巻、三頁）、（第五巻、百三十三頁）。

人間はだれしも、男女の別なく、自分自身についての知識によって他人を判断する（第四巻、三十九頁）。

女性の寄せる信頼を踏み躙っていることを証明して見せる男性は、彼女を説得し、彼を拒絶させようとしている敵が加える、最も厳しい非難をも正当なものとする（第五巻、百二頁）。

世評はすべての人間に早合点をさせ、偏見を抱かせる（第五巻、二百頁）。

法廷においてすら、事実によるのと同じ程度に、そして、時には事実があるにも拘らず、世評によって無罪とされたり有罪とされたりすることが多い（同　所）。

結果に基づいて咎め立てをするのは必ずしも妥当ではない（第六巻、百四十三頁）。

困難な状況の下では、一見して非難へのきっかけと映るものを避けるわけに行かないこともある（第七巻、百八十頁）。

口やかましさや心の狭さは、通常、隣人たちよりも信心深いと思われたがっている者たちの心の中ではびこる（第七巻、二百二十八頁）。

婦人の集まりでは、出席している場合に有罪を宣告される者、あるいは、告発を受ける者ですら、極めて少ない（第八巻、百五十二頁）。

人間の邪悪さは好意的な判断を下す人々よりも、厳しい裁きを行う人々を正当視することのほうが多いかに思われるが、しかし、善良な人間は慈善の行いから手を引いたりはしない（同　所）。

しかしながら、その慈善の行いも慎重さや思慮深さとの調和を図るのが正しいことである（同　所）。

Charity. Beneficence. Benevolence.　（慈善、恩恵、善意）

情け深い心というものは善行に伴う高貴な気持ちを味わうだけで十分に幸せである（第一巻、二頁、二百二十三頁）。

小作人のすべてが太って血色が良く、満ちたりた顔をしているの見て嬉しく思うというのは、地主の心の大きさを映す喜びようである（第一巻、五十八頁）。

分相応に振る舞う力を備えていない心は、気前が良いと称されるような名誉に浴するべきでない（第三巻、百四十四頁）、（第四巻、七十三頁）。

大きな善の為されることが望まれている場合には、気持ちはありながらそれを行う力を持ち合わせないというのは嘆かわしい話である（第四巻、五十五頁）。

真の寛大さとは心の偉大さのことである。われわれに厳しく求められているもの以上のことを、同胞のために果たす気持ちを起こさせるものである（第四巻、六十九頁）。

罪のない人間や慈悲深い心の持ち主は、きっと異邦人のように見做され、紛れもない現世の息子たちや娘たちによって苦難を与えられる（第六巻、百五十一頁）。

慈悲深い人間というのは、災難に遭って自分の進路から逸れても、可能になり次第元の

道に戻り、以前と同様に周囲の者たちすべてに善を施し続ける（第六巻、二百七十七頁）、（第七巻、十五頁）。

恩恵を施す力というのは神にも似た力である（第七巻、百五十九頁）。

真に寛大で慈善心に富む人間は、突然の災難に際しても、嘆き悲しむ心が苦難に圧倒されてしまう前に、不幸な者を探し出す（第八巻、六十七頁）。（第四巻、六十九頁から次頁にかけて）も参照のこと。

思慮深い者は相手の通常の暮らし向きに合わせて施しを行う（第八巻、八十四頁）。（第四巻、百八十三頁）も参照のこと。

意欲に恵まれている者たちは、善行を施す力を保持するよう、用心の上にも用心をすべきである（第八巻、八十四頁）。

疾病、不具、あるいは、予期せぬ事故によって零落した、正直で勤勉な貧しい労働者がわれわれの慈善の主たる対象となるべきである（同　所）。

真面目で勤勉な貧乏人の抜擢するのには、わずかな援助で足りるが、怠惰で放埒な者たちには、莫大な金額をもってしても十分ではない（同　所）。

放埒な者たちに救いの手を差し延べるのは、もしも、彼らに与えられたものが、援助に値する貧者から、勤勉さを押し進める原動力となるような助力を奪い去るのであれば、何の慈善にもならない（同　所）。

貧しい者たちの体の必要を満たすのと同様、徳行の手段をも供給する慈善行為は、放蕩者の数を少なくする分を有望な人間の数に加えるわけであるから、社会に対して二重の恩恵を施すことになる（第八巻、百六十二頁）。

相互に慈善を施すことを何よりも求める神の目には、われわれの同胞の肉体と同様、魂の必要をも満たす施し以上に価値ある慈善行為は存在し得るだろうか（同　所）。

［Generosity を参照のこと。

Church. Clergy.　（教会、聖職者）

人々が祈りに何らかの気持ちを込めるとすれば、教会こそは和解交渉を始めるのにうってつけの場所だ、とラヴレースは語る（第一巻、百五十五頁）。

世俗的な、あるいは、無慈悲な目論見を抱く者で、礼拝式へ出掛け、祝福を期待出来るような者が果たしているのだろうか（第二巻、二百二十六頁）。

善良になるための最高の機会に恵まれている者たちが欠点のなさで他の者たちに劣るような事態を想定するのは、聖職というよりは、むしろ人間性のほうによく当てはまる風刺である（第五巻、六十四頁）。

国家に対するものと同様、職業に対する中傷も避けるべきである（同　所）。

女性にとっては教会が唯一の市場であり、家事に秀でていることが重要なセールスポイントでなければならない（第五巻、二百十五頁）。

優れた聖職者は、自分が説くキリストの教えを他のすべての学問にもまして愛し、崇拝しなければならない（第七巻、四十頁）。

キリスト教徒の聴衆に向かって、異教徒の古典から引いたギリシア語やラテン語の断片をばらまく若い聖職者は、頭か心のどちらか、あるいは、その両方に間違ったところがあ

ることを示している（同　所）。

聖職者をおしなべて軽んじるのは、節操のない人間であることの確かな印である（第七巻、二百十八頁）。

［Conscience, Death, Religion を参照のこと。

Comedies. Tragedies. Music. Dancing.　（喜劇、悲劇、音楽、ダンス）

放蕩児連中は（真面目で厳粛な想いに身を委ねるのを恐れ）喜劇へと走るが、良心の呵責を笑い飛ばし、自分たちに劣らないほど不道徳な人間の実例を見つけるためである（第四巻、百四頁）。

立派な人物の例を示してくれるイギリス喜劇は極めて少ない（同　所）。

ラヴレース氏、シンクレア夫人、サリー・マーティン、ポリー・ホートン、ミス・パーティントンは悲劇を好まない。連中はあまりにも感じ易い心をしている。連中に言わせると、われわれの楽しみごとの中に悲しみを持ち込んだり、他人の災難を自分のものにしたりするまでもなく、この世にはわれわれの心を憂鬱にすることが十分に存在しているという（同　所）。

放蕩児が何か悲劇を好むとしても、それは、自分自身が暴君や死刑執行人の役割を演じるものだけである（同　所）。

他の者たちが味わう深い悲しみは、巧みに描き出されると、思いやりに溢れた心の鍵を外し、解き放ってくれる　…　ラヴレース（第四巻、百七頁）。

女というのは、我を忘れて心地の好い娯楽とか、心打つ楽しみごととかに惹かれると、心を開き、堅苦しい作法のことは忘れてしまうものなのだ　…　ラヴレース（同　所）。

［それゆえ、女性は見せ物へ同伴する友達には用心をすべきである］

音楽やその他の娘らしい楽しみごとは、結婚すると女性から放り出されてしまうことがあまりに多い（第五巻、二百一頁）。

音楽は若い娘をもっと活発な悪さから遠ざけておくのに必要な楽しみごとだ、とラヴレースは言う（同　所）。

ワインもある程度は麻酔剤となる。ワインや酔いを誘うご馳走によって、弱みにつけ込まれてしまった女性がどれほど多いことだろうか、とラヴレースは語っている（第五巻、二百四十九頁）。

ダンスは女性の好む娯楽であるが、相手には用心すべきである（第五巻、二百五十一頁）。

ダンスや音楽などで興奮した女性は、女性が相手となると極めて挑発的で刺激的になるものである（同　所）。

大過なく歌を歌い、楽器を演奏するというのに、出来ない事情を申し立てる者は、いつも信じてもらうよう願ってはいないことになる（第八巻、百五十八頁）。

Condescension.　（謙譲）

無理にとり繕ったもの、あるいは、政略上のものですら、恩着せがましい遜りは、目や唇を観察することで、しばしば、無理強いであることが分かる（第二巻、百三十頁）。

謙譲は卑しさとは違う（第四巻、百六十二頁）。それどころか、その言葉自体に高貴さが含意されている（第五巻、九頁）。

譲るということには、気性の激しい人間には計り知ることの出来ない喜びがある（第四巻、百六十二頁）。

何かを求める人間は穏やかに、腰を低くして、怒りに燃える相手の心に好印象を残すのであり、その印象が、冷静に振り返って考えた時には、先の時点では拒絶されたその恩恵をもたらすことにもなるのである（第四巻、二百三十二頁）。

高慢さも無礼さも見受けられない謙虚な態度は、その証となる振舞いばかりか、当の本人にも優雅さを添えることになる（第五巻、九頁）。

Conscience. Consciousness.　（良心、自覚）

良心のある人間は不正な動機をもって世に出ることを恐れる（第一巻、六十一頁）。

不意打ち、あるいは、他の方法によって正道を踏み外してしまった女性は、さもなければ誘惑者に対する明らかな優越性を彼女に与えたはずの、あの堂々たる自信をすべて失うことになる（第三巻、九十三頁）。（第二巻、百九十二頁）も参照のこと。

納得ずくで過ちを犯したという自覚のある時には、何事であれ、成り行きの覚束ない事柄に思いを巡らすたびに、心は千々に乱れる（第三巻、九十九頁）。

立派な心の持ち主にとっては、邪悪な心を立証して見せたということが満足感につながる（第三巻、百八十頁）。

この世でそれなりの充実感を持ちながら女が生きて行くためには、自己満足も必要となる（第四巻、百五十六頁）。

重大な過ちを犯したと自覚している者にとっては、あらゆる人間の顔付きが非難の意に解釈される（第六巻、二百九十八頁）。（第三巻、二百五十五頁）も参照のこと。

世間の人々とその非難の声について言えば、常日頃から清廉潔白との評判を熱望してはいたが、それでも、世間の評判に副次的な地位以上のものを与えるのを正しいことと考えたためしはない、とクラリッサは述べている（第六巻、三百三十一頁）。（第一巻、二百六頁）、（第二巻、二百二十四頁）、（第五巻、六頁）も参照のこと。

子の務めに背くような憤りは一切交じり込んでおりません純粋な気持ちこそは、私の取りました手段のことをお知りになりました際に、他の人たちがどのようにお考えになるにせよ、私にとりましての慰めとなるべきものでございます、とクラリッサは語っている（第七巻、九十頁）。

Consolation.　（慰め）

非道の仕打ちに値することをしていない人間は、その仕打ちの下でもなお心安らかにしていて当然である（第二巻、百十三頁）。

大きな苦難にしても、それはもっと大きな不幸を防ぐために、神慮によって与えられたものなのだと自ら納得出来る場合には、だれでもがじっと耐えようとするのではないだろうか（第三巻、二百五頁）。

その同じ苦難も、振り返って考える時には、自ら招いたわけではない者の心には、自ら招いた者と比べ、はるかに軽く感じられよう（同　所）。（第二巻、百三十四頁、百八十四頁）も参照のこと。

どれほどひどく道を踏み違えた者たちにしても、だれもが出会うことになる共通の場所が一つある（第四巻、二十六頁）。

忍耐心と不屈の粘りは最大の困難をも克服する（第四巻、三十四頁）。

大きな不幸に見舞われた人間にしても、忍耐心と諦めの手本を示すよう求められているのだと自らを見做すことが出来るなら、自分の心に大きな力が与えられていることを知るだろう（第四巻、四十五頁）。

森羅万象のその一つ一つには、明るい面と暗い面とがある。いつも最悪の事態ばかりを考えるべきではない（第四巻、百七頁）。（第七巻、二百三十頁）も参照のこと。

苦難の道を歩む心の準備は出来ているのです。これまで味わってまいりました不幸に値するようなことはしていないというのが、私にはせめてもの慰めですと、ラヴレースおよびトムリンソンに向かってクラリッサは語っている（第五巻、百五十八頁）、（第六巻、九十二頁、百四十九頁、百五十二頁、百五十五頁）。

不当な仕打ちを受けた無実の者を正当に評価し、非情な背信を罰するためにも、来世というものが必ずや存在するはずである（第五巻、二百三十一頁）。

この上なく重くのし掛かる悲しみであっても、その原因が取り除かれた時には、振り返って見て喜びを感じるということがわれわれにはしばしばある（第五巻、二百三十九頁から次頁にかけて）。

避けることの出来ない災難に遭ったからといって、自分のことを最低だと考えたりしてはいけない（第五巻、二百六十九頁）。

この世の災いは、ただこの世のものに過ぎないがゆえに、耐え忍ぶことも出来よう（第六巻、二十四頁）。

耐えられない苦しみを強いられる者は一人としていないのであるから、耐え忍ばねばならないのだ（第六巻、九十二頁）。

神の摂理が働く道筋はわれわれには分からず、また、一見して無情と映る天の配剤がいかなる賢明な目的に資するものかも、われわれには推し量り兼ねるのだ（同　所）。

辛抱強く無垢な受難者はその報いを来世に求める（第六巻、百四十二頁）。

避けられない災難を誇張して受け止め、罪深いまでの失意を招くような真似をしなければ、非常に不幸な人間も生き長らえて、多くの幸せな日々を迎えることが出来よう（第六巻、百五十二頁）。

大きな不幸を味わっているときには、似たような不幸に見舞われた他人を慰めるように自らを慰めるべきである（第六巻、百五十三頁）。

現世は一時的な試練の場としてのみ意図されているにすぎない。善良な人間は、自分はより良い世界へ向かう旅路についているのだと考え、その旅の終わりには十分な報いが待っていることを期待し、途中で出会う困難のすべてを耐え忍ぶ（第六巻、二百七頁から次頁にかけて）。

今苦しみ喘いでおります災いを免れていたといたしますと、明るくて見込みのありそうな、何かの希望を抱いている最中に、私は召されていたかもしれないのです。生きたいと

いう願望で心臓が高鳴っている最中に、そして、この世の虚飾が自分を虜にしている時にです、とクラリッサは（死を間近にして）語っている（第六巻、二百九十九頁）。

試練と誘惑を受けている間に、自らの立場に相応しくない振舞いのなかった人物は、振り返って見る時、どれほどの幸せを感じることであろうか（第七巻、三十一頁）。

この世の喜びのすべてと同様、この世の苦難のすべてもほんの短い間しか続かない（第七巻、八十七頁）。

人間の本性にとっては最も嘆かわしい事柄が、結局のところ、われわれにとって最も幸福なものとなることもよくある話である（第七巻、九十七頁）。（第七巻、二十二頁）も参照のこと。

失った後長い年月を経ているものを思い出すのは、苦しさよりも楽しさを伴うものである（第七巻、百四十二頁から次頁にかけて）。

心を弱気にさせると思われる恐ろしい印象も、適切な反省により、心の強化に利用出来よう（第七巻、百五十七頁）。

神意に身を委ねている場合には、旧い友が去って行くたびに、新しい友人の出来ることはほぼ間違いない（第七巻、百五十八頁）。

思慮深い人間にとっては、不幸になることがしばしば定めとなっているが、これは幸福になるためのことなのである（第七巻、百六十五頁）。

気質として固まった立派な気持ちは、喜びの種となるものが他には何一つない時に喜びをもたらしてくれる（第七巻、百八十七頁）。

不幸に慣れ親しみ、より良い生活をたえず夢見ており、自らを責めるべき極悪非道の振舞いに及んだことのない者たちは、悲嘆にくれる友人を慰めるのに最適の人物である（第八巻、六十三頁）。

自らの慰めとなる大きな幸せに恵まれていない場合、手に入る小さな幸せを精々活用するのが正しいことだ、とラヴレースは述べている（第八巻、百八頁）。

どのようなものであれ、困難が人間の身に降り懸かれば、慰めのかすかな光がきっと少しは差し込んでくるものである。その不幸者が、カーテンを開くのではなく、閉じて光を遮ってしまうような哀れな人間でないかぎりは　…　（同　所）。

［Adversity, Conscience, Death, Grief, Human Life, Religion を参照のこと。

Controul. Authority.　（抑制、権威）

幼い頃に一度として抑制されることのなかった人物には、並外れた資質を期待するわけには行かない（第一巻、五十一頁）。

親の抑制を重荷と感じていることが知られている若い女性というのは、陰謀好きな男性に対して、本人たちが親になりたがっているのだと考える余地を与えることになる　…　ラヴレース（第三巻、四十三頁）。

寛大な心の持ち主は、その称賛に値する友情とか、心の広さとかに傷がつきそうな時にのみ、抑制されることを我慢ならないように思う（第三巻、二百六十一頁）。

束縛するのを恐れているように見せることで、しばしば男は自らが束縛を受けることになるのである（第六巻、六十六頁）。

他ならぬ自らの劣等感から畏怖の念を抱いたり意のままに動かされている人間というのは、咎められても仕方のない自分の心ゆえに恐れを抱いてしまうような、そんな公正な心や態度を備えた者に対し、正否に関わらず、難癖をつけてみせるものである（第八巻、百五十頁）。

［Duty, Parents and Children を参照のこと。

Covetousness. Avarice.　（強欲、貪欲）

強欲な人間というのは、あたかもこの世が自分のためだけに造られていると考えているかのように振る舞う（第一巻、六十頁）。

強欲な者たちはだれからも悪く言われるが、皆が寄せる良い評価よりも大事だと考えているものに執着するからである（第一巻、六十九頁）。

守銭奴と陰口を叩かれる代わりに気前良しだとの評判を取っても、上手にやり繰りをすれば、年に五十ポンドの違いもないはずである（第一巻、九十頁）。

守銭奴の跡継ぎとなる者も、わずかな出費で気前良しだとの評判を得ることが出来よう（同　所）。

何かを手に入れたからといって、野望とか強欲とかにとりつかれた心が鎮まったためしはあるのだろうか（第一巻、九十六頁）。

倹約家よりも浪費家のほうが、通常、大きな不正を働く（第一巻、百六十五頁）。

男にせよ女にせよ、力とか富とかをむやみに欲しがる人間で、正しく用いるために、そのいずれかを求める者などいるのだろうか（第五巻、百五十八頁）。

時間というのは、われわれが貪欲になっても許される唯一のものである。何故なら、われわれがこの世で生きるのはただの一回であり、一度この世をさると、永遠の別れとなるからである（第八巻、百六十九頁）。

Courtship.　（求婚期間）

求婚期間中に女性に向けられる尊敬の態度は、その後はほんのわずかしか示されないだけになおさら、無しで済ますわけには行かないものである（第一巻、六頁）。

あまり簡単に良い返事を与えたりすると、女性はないがしろにされることが多い（第一巻、八頁）。

求婚期間中の女性に好意を感じていると認めさせることが出来ない場合は、男性としては、相手を怒らせてみるのも同じくらい効果的であり、しばしばそのほうが大きな効果をもたらす　…　ラヴレース（第一巻、十四頁）。

最初の訪問を受けた時に生じ、その後訪問されるたびに確認されるとなると、その嫌悪の情は真実のものに違いない（第一巻、七十七頁）。

後には説得されて結婚することになる恋人に対し、強い嫌悪の念を表明する女性が、夫となったその恋人に申し分のない振舞い方をするためには、二倍の思慮深さを持ち合わせねばならない（第一巻、百五十七頁、二百四頁）、（第二巻、四十八頁）。

自分に対して反感ないし嫌悪の情を抱いていることは疑うべくもない女性に向かい、た

ゆまず求婚を続ける男は、男性の本質たる心意気を欠いている（第一巻、百六十四頁）。

求婚期間に相手の実際の姿を見抜く者などは滅多にいない（第二巻、五十三頁）。

求婚期間こそが私たちにとりましては最良の日々なのです。親切にいたしますと、慇懃さを失くしてしまいます。よそよそしくいたしますと、言い寄ってくるものです　…　ハウ嬢（第二巻、九十五頁）。

求婚期間中の女性は、恋人が自分に向かって公言する熱い想いよりもさらに激しい感情に対しては、憤りを覚えるのも当然のことである（第二巻、百四頁）。

求婚期間中の女性が受ける最大の不面目の一つは、相手の男が、自分の心のすべては彼女のものだと公言していながら、放蕩にも色事に耽ることである（第二巻、百二十頁）。

へつらわれることに慣れている女性というのは、求婚期間の最後の最後までへつらわれることを期待する、とハウ嬢は言っている（第三巻、百二十七頁）。

女性に対して深甚なる敬意を表明する男は、例え受け入れてはもらえないとしても、丁重な扱いを受ける資格を有する（第四巻、百二十五頁）。（第一巻、百九十四頁）も参照のこと。

賢明な男は、妻に見られる場合には自分の栄誉や保障となるような思慮分別を、恋人が備えることを阻んだりはしない（第四巻、百六十二頁）。

求婚期間中に、一緒になるつもりの男性を横柄に扱い、あるいは、虐待するような女性は、彼のことを見縊っているのだとか、自分のことを買い被っているのだとか、世間の者たちがそのように考える余地を与えている（第七巻、百八十頁）。

あるいはまた、その男性の強い愛情のお陰で自分の手に委ねられた力を、節度を守って用いる雅量には欠けているのだ、とである（同　所）。

こういった女性は、結婚の承諾を与えようとしている男性もその心を占めてはいないのだと、そのように道楽者たちが推測する（そして、それにつけ込む）根拠を与えているのである（同　所）。

また、結婚する前には一つも示さなかった敬意を結婚後に示したりすれば、妻の濃やかな心遣い、あるいは、女性固有の濃やかな心さえも犠牲にして夫に向けられたお愛想、といった受け止め方をされるだろう（第七巻、百八十頁から次頁にかけて）。

このような者は、夫となった暁には尊敬したいものと考えている男性に対して軽蔑をもって接することを、自らの実例によって世間に教えることになる（第七巻、百八十一頁）。

謙虚な物腰の中にも威厳を忘れず、また、優しさや淑やかさをもって指示をするということこそは、求婚期間中の賢明な女性が目指すべき点である（同　所）。

女性が恋人に示すべきことは、自分には善意からの奉仕を是認し、報いようとする心の広さがあるということ、

女性一般の特徴のように言う者もいる、あの揚げ足取りの愚かしさを避けるだけの知性は備えているということ、

高慢さとか癇癪ゆえに（たとえ、不快に感じて当然な理由があっても）憤ることはないということ、

小さな事柄にこだわることで、おそらく実行するには相応しくない大きな事柄を得るとか、確保することを目指したりはしないということ、

また、自分の美点を疑うべき理由があまりにも多いため、色好い返事を与えるつもりで

いる男性の愛情を不愉快な、あるいは、傲慢な審問に付しているのだと、そのような想像を許す余地を残すこともなく、

理性というものを自分の行いを律する主な指針としているということである。そうすれば、女性が尊敬を得られずに終わることはまずないのであり、その尊敬のお陰で、結婚後には彼女の見解を求められることになるし、時には、男性本人の判断よりも優先され、また時には、喜ばしくもその判断を追認されることにもなる（第七巻、百八十一頁から次頁にかけて）。

数人の恋人を持つ婦人が選択を行うに当たって判断に迷う場合には、直感に任せる部分が大きくなるのも許されることであろう（第七巻、百八十七頁）。

恋人に向かって、求婚するのは誠意があってのことかなどと尋ねたりすると、女性としては、きっと、自分の美徳と身体的魅力に対する侮辱だと感じることになる（第七巻、二百四頁）。

［それゆえ、女性は放蕩児からの求婚を受け入れるようなことは絶対にしてはいけない。

結婚するつもりでいる男性を求婚期間中に虐待する女性は、自分のプライドゆえに、彼の辛抱強さに対して負い目が出来てしまうという点を考えていないのである（第七巻、二百六十二頁）。

［Advice to Women, Husband and Wife, Libertine, Love, Marriage, Parents and Children, Reflections on Women, Vows を参照のこと。

Credulity.　（軽信）

女性は自らの価値に疑いを挟みたくないため、時々、見込みもないことを信じるような羽目に陥る（第二巻、百五頁）。

幼い頃に吹き込まれた迷信的な考えは、他人に見られる同じような信じ易さを蔑むほどに強く育った心の中においても、なかなか根絶されないものである（第二巻、二百十二頁から次頁にかけての注（イ））。

信じ易い心は愛の神の宰相であり、両者が袂を分かつことは決してない（第三巻、八十八頁）。

われわれは信じ易い心のゆえに、その被害を受けるまでは、自分たちが高く買っている者たちの欠点に気づくことが出来ないのである（第四巻、二十一頁）。

われわれはだれだって、自分に都合の好いことはすぐにも信じたがるものである（第四巻、二百三十一頁）。

［Courtship, Love, Lover を参照のこと。

Cruelty. Hard-heartedness.　（残酷さ、薄情さ）

小鳥その他の動物に対して子供が示すことを許されているあの残酷さが、大人になった頃には、おそらく、同胞たちに向かって発揮されるのであろう（第四巻、八頁）。

そのような子供の両親は、子供がラヴレースのように育つことを予想すべきである（第

四巻、二百五十二頁）、（第六巻、百六十八頁）。

われわれの食料に供せられているような動物、あるいは、娯楽として罠に掛ける動物に対して日々加えられている残虐行為に思いを馳せるなら、次の点は認めなければならないと、ラヴレースさえも述べるのである。つまり、われわれが自覚している以上に、人間の本性の中には野蛮なものがあるということである（第四巻、十頁）。

涙を湛えた目には限りない美しさが見出される　…　ラヴレース（第四巻、十五頁）。

薄情さは放蕩児にとって不可欠な点である（第四巻、八十一頁、二百三十三頁）。

野蛮にもラヴレースはこう述べている。悲しみの原因が何であれ、涙という優しい救済手段に恵まれている心臓で、張り裂けてしまうようなものは一つとしてないのだ、と（第五巻、五十三頁）。

[Libertine, Tears を参照のこと。

Death. Dying.　（死、臨終）

陰気なものごとや話題は、時として、この上なく放埒な精神の持ち主にも感銘を与えることがある［それゆえ、避けるべきではない］（第四巻、二百五十九頁）。

死は何かといえば、限りある命を終えることに他ならない（第六巻、二百九十八頁）。

死は定められた道程を終了することに他ならない（同　所）。

辛い旅路の後に疲れを癒してくれる旅籠である（同　所）。

心配と苦労の人生が終わることである（同　所）。

他人の臨終の場面を省察し、勇敢な態度を装ってみせる男たちが、自らの最期に臨んでは、感じる力を保持している場合、この上なく惨めに振る舞うことも考えられる（第七巻、百二十五頁から次頁にかけて）。

振り返ってみて慰めとなるような感慨一つとしてない人間にとって、死は何と恐ろしいものであろうか（第七巻、百二十七頁）。

死の間際にあるベルトンが言っている。たったの一年だけで良いから、戻してもらえるなら　…　そして、物事に対して今と同じ感じ方をさせてもらえるのなら、どんな物だってくれてやるぞ、と（第七巻、百二十七頁から次頁にかけて）。

［また、内科医と彼の処置、ならびに、自分の妹に対し、彼らには何の希望も与えることが出来なかったという理由で口に出した、死に瀕しているベルトンの訴えも参照のこと（第七巻、百四十七頁から百四十九頁にかけて）。

この世に生を享けた時、我々の体の中には死の種子が蒔かれており、その種子が成育して、やがては、繁茂する雑草のようにか弱い命の花を窒息させるのである（第七巻、百四十八頁）。

友の死を目の当たりにしてわれわれは、その悶え苦しむ様子と同様、いずれわれわれ自身の定めとなるものによって心を動かされるのである（第七巻、百四十九頁）。

友情を裏切られた者が振るう剣によって倒されるのは、あらゆる死の中でも、自殺に次いで最も恐ろしいものである（第七巻、百五十一頁）。

死を甘受し、神の恩寵を頼る姿勢は、死に瀕している者の友人たちに大きな慰めを与えることになる（第七巻、百五十二頁）、（第八巻、五十一頁）。

自覚を伴う緩やかな死を迎える者の支えとなるのは、曇りのない良心のみである（第七巻、二百四十二頁、二百八十頁）。

われわれの短い経歴の結末に至って、「他人に損害を与えたというよりは、むしろ自分が被害を受けたのだ」と述べることが出来るのは、慰めの中でも上等なものだ、とクラリッサは語っている（第七巻、三百十四頁）。

何も出来なくなる今わの際まで、重要な事柄でやり残しておくようなものは一切あってはならない（第七巻、三百二十四頁、三百二十九頁）。

［死の苦しみの中でのクラリッサの気高い振舞いを参照のこと（第八巻、一頁から五頁にかけて）。

人間の運命を決定するあの避けることの出来ない瞬間には、現世的な奢りの気持ちはことごとく消えてなくなるものである（第八巻、十一頁）。

無垢な人間を誘惑したり、弱く、無防備で、知り合いもいない者たち、しかも、おそらくは彼らのせいで友を失ったという者たちの操を奪うことが骨折りの対象であり、誇りでもあったという連中が行う反省は（反省などというものが可能ならの話だが）、最後の厳粛な瞬間には、一体いかなるものなのであろうか（同　所）。

［死に際してのシンクレアのショッキングで激越な振舞いを参照のこと（第八巻、三十七頁以降）。

また、ラヴレースの非業の死についても参照のこと（第八巻、百八十八頁以降）。

二十年とか三十年といっても、振り返って見るに、どれほどのものなのであろうか（第八巻、二十三頁）

長い人生の間には、どれだけの身内の喪に服さねばならないことだろう（同　所）。

どれほどの誘惑と直面しなければならないのだろう（同　所）。

大切な友を失った時、自らを咎めるべき不人情な行いのなかった点を思い返すことが出来るのは、大きな満足である（第八巻、二十八頁）。

甚だしく辛い別れに対して有利な戦いを進めることが出来るものといえば、それは時の流れだけである（第八巻、六十四頁）。

悲しみ自体が底をつくまで、人の本性は我が儘を通そうとするものであり、その後、理性と宗教心が時宜を得た頃合に強力な援助の手を差し延べ、打ち萎れている心を奮い立たせてくれるのである（同　所）。

［Consolation, Grief, Religion を参照のこと。

Delicacy. Decency. Decorum.　（慎み、上品さ、行儀正しさ）

少しでも慎みのある妻にとっては、ワイン好きの夫が多くの不快な災いの種となる（第一巻、二百三頁）。

諦めることが出来ないほど激しい気持ちを抱いているのだとか、ひどく意地を張っているために、身内の懇願や助言を受けても諦めようとしないのだとか、慎みのある若い女性でそのように思われたい者などどこにいるだろうか（第二巻、五十五頁）。

娘がこっそりと父親の家を抜け出したりすれば、その瞬間から、礼儀作法などは締め出されてしまう（第二巻、二百十六頁）。

両親の家の窓から抜け出したその足で、夫のベッドへ飛び込むような軽薄な娘というのは、何とも許し難いものである（同　所）。

わずかでもデリカシーを持ち合わせている女性は、何故駆け落ちを決して考えてはいけないのか、その理由として挙げられそうなものは無数にある（第三巻、十二頁から次頁にかけて）。

駆け落ちをするような女にとっては、自ら慎みをもって振る舞うにせよ、あるいは、男性から慎みのある態度を期待するにせよ、いずれも許されないことになる（第三巻、二十三頁、二十七頁、三十一頁）。

いくつかの微妙な恋愛関係においては、同意は乞い求められるよりも、むしろ、当然のこととして受け止められるほうが良い（第三巻、三十四頁）。

女性の人柄のうち、その誇りとも殊勲ともなっている部分を話題とするような、それほどデリカシーに満ちた心を持つ男性は極めて少ない（同　所）。

度を越した几帳面さは、几帳面さに欠けるのと変わりない（第五巻、六頁）。

男としては、自分たちに関わりのある話題について、女に向かって露骨な仄めかしをする必要はない　…　ラヴレース（第五巻、八十八頁）。

女と一緒の席で野卑なことを言う男は、棍棒で叩きのめされて然るべきだ（同　所）。

慎み深い女というのは、男を上品にしてくれるのと同じく、濃やかな心遣いの出来る女をも作り出すものだ（第五巻、二百三頁）。

扱いがとても微妙なために、自己弁護が必要であるように思われてしまうのは少々不名誉なことであるという、そのような事柄がいろいろとある（第六巻、百九頁）。

われわれ放蕩児の間では才気として通っている慎みのない事柄も、繊細な心をした人間の耳にはショッキングなものに違いない、とベルフォードは言っている（第六巻、二百三十五頁）。

［Advice to Women, Courtship, Duty, Libertine, Love, Marriage, Men and Women　等々を参照のこと。

Despondency. Despair.　（落胆、絶望）

悲観的になると、回復の望みもあり得ない（第三巻、百九十八頁）、（第六巻、三百十三頁）。

絶望するのは、さらに罪を重ねることである（第四巻、百四十六頁）。

危険な病とか不可避な災いに襲われ、放蕩者が意気消沈している場合、これまでの生き方、あるいは、将来の見通しからしても、どのような慰めを与えることが出来るのだろうか（第六巻、三百八頁）。

神の〈報い〉というのは、俺の慰めとなるよう、〈慈悲〉が働くのを許すわけに行かないのだということ、これこそ俺が絶望する原因なのだ、とベルトンは述べている（第七巻、百二十八頁）。

［Consolation を参照のこと。

Deviation.　（逸脱）

ある逸脱行為を咎めながら、その後で同じ程度に逸脱した行為に走るようでは、あまねく堕落を招くことに他ならないのではないか（第二巻、百二十三頁）。

優秀な人物の逸脱行為は、凡人のそれよりもさらに許し難い（第三巻、百四十四頁）。

不幸な境遇にあっては、立派な人間にとってさえ、時として飾りのない真実を曲げるのが避け難いこともある（第三巻、百五十四頁）。

［それゆえ、そのような人間としては、自らの無思慮から困難に巻き込まれぬよう注意することが極めて大切なわけである。

立派な人間は、不注意から間違った道に引き込まれた場合、過ちが身についてしまわぬよう、すぐにも失地回復に努めるものである（第三巻、百五十五頁）。

友人の一方が犯した罪深い過ちは、もう一方の者にもかげりをもたらしがちである（第三巻、百九十三頁）。

純粋無垢な人間にとっては、些細な脱線行為の一つ一つが罪深く思われる　…　ラヴレース（第四巻、二頁）。

最初の一歩を誤ると、人はしばしば疑念と過誤の荒野へ迷い込むことになる（第四巻、二十六頁、五十五頁）。

欺かれて重大な過ちを犯してしまうと、軽い過ちを避けるのも至難のこととなる（第五巻、四十三頁）。

他人の意図的な逸脱行為をいとも簡単に許そうとする者は、自らの貞節さを疑わしいものとする　…　ジェームズ・ハーロー（第七巻、二百六十六頁）。

［Guilt, Human Nature を参照のこと。

Dignity. Quality.　（威厳、高貴さ）

良識に欠けるところがない場合、自尊心や豊かさは本物の高貴さ、そして、代々受け継がれてきた高い身分にもしっくりと馴染む（第一巻、二百三頁）。

威厳のある言動に努め、傲慢な態度によってその努力を無にすることがなければ、だれもがわれわれを尊重し、敬意をもって接してくれる（第二巻、七頁）。

代々受け継いだ爵位というのは、それを引き立てるだけの美点を持ち合わせない子孫にとっては、名誉よりも恥辱をもたらすものである（第二巻、百六十七頁）。

紳士とは、君主といえども与えてもらえないことがあるという栄誉の称号である（第三巻、九十七頁）。

最高の地位は最高の美質によって飾られるべきである（第四巻、十二頁）。

豪勢な暮しをしている男の顔は女の目にはいつも輝いて見える、とラヴレースは言っている（第五巻、二百六十六頁）。

高齢や身分の高さを防壁として身を守っている人間は、他人から受けた場合には、気概のある男としては憤って当然だという、そんな無礼な振舞いはすべきでない、とラヴレースが述べている（第六巻、百七十一頁）。

本物の威厳は高慢さとか尊大さとかを伴わないものである（第六巻、二百三十九頁）。

人間の中には、その挙動に生まれながらの威厳が備わっており、他の者たちがこの上なく尊大な命令によって得るものよりもさらに深い敬意を、一瞥を与えるだけで獲得する者もいる（第七巻、百四十三頁）。

教育によるのと同様に、自ら選んで善良な道を歩んでいる人間は、人間性を気高くしてくれる、そして、それなしでは、高貴なことこの上ない氏素性の持ち主も品位を欠いてしまうという、あの資質［あの本物の威厳］を身に備えていることになる（第七巻、百八十七頁）。

女性の中でも、少しでも威厳を装うことをせず、男性の尊敬を求めたりしない者は、自分を安売りすることになるし、おそらく、内気さと自信のなさに対し、軽蔑や辱めをもって報いられることになろう（第八巻、百三十五頁）。

［Advice to Women, Courtship, Delicacy, Libertine, &c.を参照のこと。

Double Entendre.　（卑猥な掛け言葉）

淫らな仄めかしとか卑猥な掛け言葉により、別の女性から淑やかさを踏み躙られた女性に向かって、男が陰険な流し目を送るのは不愉快な話である（第三巻、二百二十七頁）。

婦人の耳を汚すことでその心を動かそうと考える男の胸中は、何と下品なことか（第三巻、二百四十二頁）。

道徳的な人間の集まりに加わっていると考える育ちの良い男は、あからさまに非難を受けるほどに不謹慎ではないにしても、不純な印象を心に伝えることも可能な、そんな無遠慮な物言いは慎むものである（第三巻、二百五十頁から次頁にかけて）。

無理をして無遠慮なことを遠回しに述べようとする人間は、意味もないことを口にするという馬鹿真似か、何かを仄めかすという不作法に陥る（第三巻、二百五十一頁）。

卑猥な言葉は罪人にとってさえもあまりに破廉恥なため、掛け言葉以外では言及し兼ねるほどである（第四巻、二百五十六頁）。

ラヴレースすら明言していることであるが、慎みゆえに返答をし兼ねるような、そんな仕方で婦人に話し掛けたことはかつてなかったし、今後ともそのつもりはないという（第八巻、百十頁）。

［Delicacy を参照のこと。

Dress. Fashions. Elegance.　（衣装、ファッション、優雅さ）

容姿とか衣装に興味を持つ男性に才能があっても、それは知的な話題を扱うに足るほど深められることはない（第一巻、二百十頁）。

容姿を自慢にする男性は、身を飾ろうと努めながら、しばしば滑稽な姿を晒すことになる（同　所）。

いつも服装を整えておき、人目を憚る姿を不意の客に晒さぬよう用心するのが、女としては自分自身に対する、そして、女性全体に対する義務である（第二巻、百十頁）。

フープの利点というのは、汚れた靴をきれいにすることと、男の人たちを遠ざけてくれることだけだ、とハウ嬢は言う（第二巻、百二十六頁）。

心は、しばしば、それを覆う衣装によって示されるものである（第三巻、二百五十一頁）。

垢抜けのしない人間は、身を飾ろうとすればするほど、なおさら、隠したいと願っている欠陥をさらけ出すことになる（第四巻、十八頁から次頁にかけて）。

恋人の目にそう映りたいと願ったように、女性が夫の目にも優雅だと映るようにするならば、女性すべてが愛するあの放蕩児の姿も、通常よりはもっと長く夫の中に持続することになるだろう、とラヴレースは語っている（第四巻、九十三頁）。

自分の容姿に対する恋人の敬意を保持したいと思う女性は、寛いだ身形でいる時にも、恋人の前では外見に意を用いる（第四巻、百六頁）。

正装すると威厳が備わり、意識を高め、つけ込もうとしている相手を遠ざけておくことになる（同　所）。

優雅な女性というのは、起き出したばかりの時でさえ、自ら好んでのことだが、正装をした他の者と同じくらいにきちんとしているものである（同　所）。

優雅な服装は情熱を活気あるものにしておくのに大いに貢献する（第五巻、二百十五頁）。

物腰が生まれつき上品で、立派な躾を受けている女性というのは、服装で大いに得をするものである（第五巻、二百十八頁）。

不幸ゆえに着飾ることを好まない者であっても、こざっぱりとした身形を放棄してはいけない（第六巻、百五十四頁）。

伊達者は自分の店に何を置いているのか、服装でもってそれを宣伝しようと、ずいぶん骨を折るものである（第六巻、二百八十六頁）。

不細工な洒落者は我と我が身に二重の悪意を抱いているらしく、服装のけばけばしさによって、その無骨さをますます見苦しいものにする　…　ラヴレース（同　所）。

風変わりな服装は精神に異状のあることを示している（第六巻、二百八十七頁）。

簡素な服装は、一般の男女の場合、少なくとも慎みがあることを暗示しており、口やかましい連中からさえもお目こぼしをいただけるものである（第六巻、二百八十七頁）、（第八巻、百四十六頁）。

ある人間に似合う流行とか服装も、他の者には似合わないことが多い（第七巻、七十四頁）。

服装とか流行において指針とすべきは、自然さと打ち解けた姿である（同　所）。

［Advice to Women, Delicacy, Dignity を参照のこと。

Duelling.　（決闘）

名誉を重んじる男は、帯刀を許されている人間から口汚く罵られたからといって、裁判沙汰にするわけには行かない（第一巻、百二十五頁）。

決闘が蛮勇の一部として大流行であるから、あまねく軽蔑を招かないためにはどう振る舞ったら良いものか、善良な人間はしばしば途方に暮れるのである（第二巻、四十四頁）。

流血沙汰を起こすくらいなら中傷誹謗は見逃そうとする善人に侮辱を加える人間は、真の雅量というものを計ることが出来ないのである（同　所）。

中傷誹謗に憤慨することよりも、許すほうがはるかに気高く、無視するほうがはるかに男らしいことである（同　所）。

気骨のある人間は、自分に対して故意に卑劣な振舞いに及ぶ人間をあまりにも軽蔑しているため、そんな人間の命を自分の命と等価値に扱ったりはしない（同　所）。

些細な損害をもたらした者に、自分に対して、また、自分を愛してくれている者たちに対しても取り返しのつかない損害を与えるような力を委ねるとは、人間も何と馬鹿げたことをするものだろうか（同　所）。

最も親しい身内の女性にあっては、当然のこととして許し難い罪になるように考えているものを、自ら犯して憚らないというのであれば、そのような男性もはなはだ不公平なものである（第七巻、二百六十頁）。

しかし、そういった罪を犯すと、自らの家族に加えられた場合には、死に至るまで恨まねばいけないような侮辱を、必ずや他の家族に加えることになるのである（同　所）。

罪を犯していない人間は罪人と同等の危険を冒すべきではない（第八巻、十九頁、百十九頁）。

「復讐はわたしのすること」と宣告している神の職分を私物化しようとする者は、その結果に震えおののかねばならない（第八巻、十九頁、百十九頁）。

侮辱された者が決闘を申し込む場合、〈思い上がった罪のない人間〉を、まさしくその過ちゆえに、それも、〈我と我が身を守る罪人〉の手で罰し、度重なる犯罪行為にいつの日か復讐をすべく、その罪人を残しておくのは、神の裁きにとって似つかわしいことではないだろうか（第八巻、十九頁、百二十頁）。

いかに長い場合でも、人生は束の間の旅程である。神が邪悪な人間に後悔の時間を与えるのであれば、拒んで与えぬ者などどこにいようか（第八巻、十九頁、百二十頁）。

罪を犯した者の良心には、神が触れてみる気持ちになった時には、復讐者の剣よりもさらに鋭い痛みが走るだろう（第八巻、二十頁）。

決闘は神の特権を簒奪するだけでなく、行政長官の職務や優れた統治に対する侮辱でもある（第八巻、百十九頁から次頁にかけて）。

それは不遜な行いである。一個人の剣によって左右されてはいけない命を奪おうとする試みである（第八巻、百二十頁）。

人の魂を（その罪のすべてを頭上に頂いたまま）破滅へと急がせ、ついでに、つまらない勝利者の魂を危険に晒す結果となるような行いである。何故ならば、あの悔い改める機会を、己に対しては厚かましくも期待しながら、相手に対しては与えようとしないからである（同　所）。

決闘の災いはどこで終わるというのか。復讐者に仕返しをするのはだれなのか（同　所）。

加害者が依然として罪深い加害者であるよう望まぬ者はいるだろうか（同　所）。

罪の重い人間が罪の軽い人間に打ち勝つということも多かったのである（同　所）。

［Guilt, Libertine を参照のこと。

Duty. Obedience.　（本分、服従）

立派な子供は一番敬わなければならない者たちを犠牲にしてまで身の証を立てようとはしない（第一巻、二十頁）。

本分を尽くすこととか、あるいは、親切を施すことによってさえ辛い思いをすることが

あるとしても、振り返ってみる時、落ち度はわれわれ自身にではなく、他の者たちにあるのだという慰めは得られる（第一巻、九十五頁）。

われわれの両親や身内の者たちがわれわれの望むもの、あるいは、期待しているものをことごとく果たしてくれなくとも、実際に施してくれた恩恵に対して感謝の念を抱くのがわれわれには似つかわしいことである（第一巻、九十九頁）。

立派な子供は、両親と折り合いがつかない場合、たとえ成功の見込みはなくとも、ただ自分自身に対して責任を果たすだけの話ではあっても、和解のための手段はすべからく試さずにおいてはいけない（第一巻、百二十三頁）。

苦しんでいる人間は両親から受けている虐待に対し、不平を禁じ得ないが、不平を打ち明けた相手であっても、両親に対して同じように勝手な振舞いをするのは気に障るものである（第一巻、百三十六頁）。

報いてもらえないからといって、われわれの義務をないがしろにして構わない理由にはならない（同　所）。

従順さの真の価値は自らの意向を捨てるところにある（第一巻、百五十九頁）。

お互いを縛りつける義務の場合、一方の不履行は他方の不履行を正当化するものではない（第一巻、百八十一頁、百八十三頁）、（第二巻、四十二頁）、（第七巻、百八十九頁）。

思慮分別と義務の念とをもって当たれば、いかに大きな困難といえども克服することが出来よう（第一巻、二百頁）。

何一つ犠牲を払わずに済むような場合だけ言いつけに従うのであれば、どこに服従の価値があるのか（第二巻、四十六頁）。

情熱を抑えつけることが出来るのなら、とりわけ、子供がそのような犠牲を払わない場合には両親が不幸になるのであれば、それは立派な子供が優しい両親に対して果たすべき義務である（第二巻、六十九頁から次頁にかけて）。（第一巻、二百頁）も参照のこと。

財政的に独立したからといって、子供を孝養の務めから解放することにはならない（第二巻、百七十六頁）。

また、どのように境遇が変化しようとも、子の務めに関する考え方を変えるべきではない（第三巻、百十頁）。

あまりにも厳しく孝養心を強要されると、しばしば致命的な結果を伴うことになる（第三巻、百四十四頁）。

両親に対する子供の義務は生を享ける前からのものだともいえよう（第三巻、百四十七頁）。

背丈と年齢が正確になれば、親への義務を解放されたと、良い子供は結論して構わないのだろうか（第三巻、百四十八頁）。

善良な人間は、誓いを立てた義務のどの部分についても、いい加減な見方をするわけに行かない（第三巻、百九十一頁）。

立派な人間は、耐え忍ぶよう運命づけられている試練がどのようなものであれ、その最中に自分に相応しくない振舞いをせぬよう、また、より良い人間に生まれ変わるよう努力し、祈りもするのである（第三巻、百九十三頁）。

両親の考えに合わせ、快く自分の意向を諦める娘は、両親に恩を着せたのだと言って構うまい（第四巻、二十四頁）。

両親は涙にくれているというのに、逃亡した娘が楽しんでいられるものだろうか（第四巻、百八十四頁）。

他の者たちが務めを果たさないからといって、われわれが務めをないがしろにすることの言い訳にはならないと、ラヴレースすらがそう述べている（第六巻、百六十二頁）。

世間は一般的な義務に対し、あまりにも背きがちである（第七巻、三十七頁）。

いかに不幸な状況におかれているにせよ、過ちを犯している場合には、そういった人間一人を正当化しようと努力することによって、一般的な義務の数々がないがしろにされてはいけない（同　所）。

義務を遂行しても、何ら褒められるところはない（第七巻、七十六頁）。

親孝行な娘は従順で世話好きな妻となることを保証している（第七巻、百四十頁）。

信念に基づいた従順さは、人生のあらゆる関係において、一貫して従順であることを約束する（同　所）。

厳しく接すると、足を滑らせた美徳が元の姿勢を取り戻すのは困難なことになる（第七巻、二百六十六頁）。

[Parents and Children を参照のこと。

Education.　（教育）

人は励ましと是認を受けると、それがない場合には決して表に出なかったはずの才能を発現することになる（第二巻、八十二頁）。

若い頃には教え込みやすい時期、いわば学びの時があるが、何らの礎も築かれないままそれを見逃すと、再び戻って来ることは滅多にないのである（第四巻、百八頁）。

才能の中には、一部の果物と同じく、遅くまで熟成しないものもある（同　所）。

勤勉に、そして、根気強く勉学を続けると、素晴らしい成果をもたらす（同　所）。

他の者たちが十才の時に教えられた基本的な事柄を、二十才で習得しなければならないとすると、学習者にとってははなはだ骨の折れる仕事となろう（第四巻、百九頁）。

親たる者は娘の心を啓発し、男に対しては早くから慎みを守って距離を保つような考えを吹き込むべきである　…　ラヴレース（第四巻、二百三十頁）。

若者を促し、慈善行為を実践させるだけでは十分ではない。正しい動機から実践することも教えられねばならないのである（第四巻、二百三十三頁）。

立派な最期、そして、栄光の極みが、通常、美徳を重んじる教育の自然の成果なのである（第八巻、十六頁）。

あまりにも多くのことを身につけようとする者は、何か一つの点で衆に秀でることも難しい（第八巻、百五十九頁）。

進歩は、口を開くよりも耳を傾ける傾向の強い人間のものである（第八巻、百六十四頁）。

[Advice to Women, Duty, Parents and Children を参照のこと。

Example.　（模範）

社会的身分、あるいは、美徳が際立って優れている者は、重大な事柄に際しての振舞い

に関し、世間の期待に応えなければならない（第一巻、三頁）。
分別と際立った才能に恵まれた人間は、自ら範を垂れることで信仰と美徳の声価を高めるべく、広く世に送り出されているように思われる（第一巻、二百一頁）。
自らの過ちを正当化するために、他人の過ちを口実に用いてはいけない（第二巻、六十頁、二百五十三頁）。
模範のように思われることを好む人間は、自分自身に目を向け、油断なく見守り、恐れなければならない（第四巻、百四十六頁）。
教訓を唱えたり範を垂れたりして得意になっている手合いと一戦交えるのは、大いに好むところだ、とラヴレースは（ローリンズ嬢に関して）語る（第五巻、二百五十一頁）。
美徳、社会的身分、そして、分別の点で際立っている人物が礼拝式で示す模範は、宗教の声価を大いに高めるものである（第七巻、百八十五頁）。
［Religion, Virtue を参照のこと。

Expectation.　（期待）

何を目指しているにせよ、達成することよりは、期待し準備を進めることのほうにより多くの楽しみがある（第一巻、百七十七頁）。
見込まれている楽しみに期待を膨らませることによって、人間は己を欺くのである（第二巻、五十七頁）。
大きな期待を寄せていたことでさえ、まあまあ我慢出来る程度の成果を見ることも滅多にない（第四巻、二十一頁）。
期待がもたらす喜びこそ、すべての喜びの中で最高のものである（第五巻、二百十四頁）。

Eyes.　（まなざし）

涙に潤んだ目は優しい心を物語っている（第四巻、百七頁）。
輝きを湛えた瞳というのは、詩人たちがどれだけ好きなことを口にしてきたにせよ、心の中に悪党が住みついていることの、あるいは、住みつく余地があることの確かな証なのだ、とラヴレースは言う（第四巻、百二十八頁）。
目というのは、心が外を眺める時に通例用いている窓なのだ　…　ラヴレース（第六巻、二百七十二頁）。
戸口には姿を見せようとしない多くの女も、窓辺からこっそり、それと分かる目配せを投げ掛けるものだ（同　所）。
［Tears を参照のこと。

Faults. Folly. Failings. Error.　（落ち度、愚行、失敗、過ち）

酷評を招くような原因を世間に与えている人間は、自分の落ち度に伴う結果を甘受すべきである（第一巻、十六頁）。
事の善し悪しを自分自身が決めるのであれば、非を認めた者などがかつていたであろう

か（第一巻、五十四頁）。

体に染み込んでいる欠点を克服出来る人間というのは、大変な英雄か女傑であろう（第一巻、百三十二頁）、（第二巻、二頁）。（第一巻、九十一頁）も参照のこと。

過ちを悟った人間としては、それを正すのでなければ、認めるだけで十分ということにはならない（第一巻、百四十六頁）。

敵対する人間は、自分が非難の的とした落ち度を相手が持ち合わせないように望んだりはしない（第一巻、二百七頁）。

自分が受ける入れるもの以上に立派な忠告を与える女性というのは、自らの過ちの重みを倍加していることになる（第二巻、六十一頁）。

惜しみのない愛情から生じる過ちは容易には見つけ出されない（第三巻、百四十六頁）。

自分が恥じらいもなく犯している過ちに対して無礼な態度を取られたからといって、腹を立てる権利などはだれにだってない（第四巻、十七頁）。

どのような過ちに陥るにしても、それは判断力の落ち度であり、意思に落ち度があってのことではないように留意すべきである（第四巻、七十二頁）。

大きな欠点と大きな美点が同一人物の中に見出されることもしばしばある（第四巻、二百四十三頁）。

同じ過ちを繰り返していると、見逃してもらった過ちの記憶が蘇ってくる（第四巻、二百六十四頁）。

過ちへと引き込まれた場合には、その結果として苦しむことになる人間が出来るだけ少なくなるよう注意しなければならない（第五巻、四十一頁）。

一つの罪は、通常、もう一つの罪の両親となる（第五巻、二百七十頁）。

自己弁護に走るよりも、自らを責めようとする者の過ちを軽減すべく骨折るのが親切というものである（第六巻、百一頁）。

邪悪な人間というのは、しばしば、己の過ちの結果について人々を罵るものである（第六巻、二百十六頁）。

立派な心の持ち主は、過失を避けることよりも譴責を避けることに敏速であってはならない（第六巻、三百三十二頁）。

われわれは身に降り懸かった災難に屈辱を覚えることもあるが、それは過ちゆえにというよりは災難ゆえのことである（第七巻、八十四頁）。

人間は我が身に備わっているのを正そうとしない、そんな他人の落ち度には斟酌を加えがちである（第八巻、三十一頁）。

生まれついての短所あるいは欠点を矯正すべく苦労しない人間は、しばしば、名ばかりの美徳によってそれらを粉飾しようとする（第八巻、百三十五頁）。

[Guilt を参照のこと。

Favour. （恩恵）

人によっては、拒絶を招くような、そんな態度で恩恵が求められることもある（第一巻、四十二頁）。

好意を感じている相手をその真価以上に持ち上げるのは、その人物の評価を下げること

にほかならない（第二巻、五十九頁）。（第一巻、百六十三頁）も参照のこと。

立派な心の持ち主が恩恵を求めるのは、それが聞き届けられるに相応しいものかどうか、検討を加えた上でのことである（第二巻、百四十三頁）。

恩恵に期待を寄せるに際しては、自我を捨て去り、選ぶ権利を有する者たちに選択を任せなければいけない（第二巻、二百二十一頁）、（第六巻、三百三十三頁）。

畏敬の念、崇拝の心、そして、禁じられはしまいかと危ぶむ気持ちが一つの恩恵をかけがえのないものにするのだ　…　ラヴレース（第三巻、三十九頁）。

恩顧を願い出ることと、当然の権利として請求することとでは、まったく別の話なのである（第四巻、二百三十二頁）。

請い求めているものを恩義として要求する権利がない場合、請願している人間も、撥ね付けられたからといって腹を立てる権利はない（同　所）。

恩恵が施される際の淑やかな態度は、恩恵そのものと同じく好ましいものである（第八巻、百五十一頁）。

Flattery. Compliments.　（諂い、お世辞）

意向に沿う力がわれわれにある場合、追従家たちはわれわれが聞くのを嫌がっていると思われること以外なら、どんなことでも口にしようとする（第一巻、二十三頁）。

麗々しいお世辞は女心を麻痺させる（第一巻、百六十七頁）。

大袈裟なお世辞は美辞麗句の馬鹿げたものである（第二巻、百三十二頁）。

女におべっかを使う男は、女を愚か者と考えたがっているか、あるいは、愚か者にしたがっているのか、そのどちらかである（同　所）。

自分のことを悪く言う振りをしながら、お世辞を待っているような、そんな男の言葉を真に受けるのも必ずしも間違ったことではない（第三巻、五十頁）、（第四巻、一頁）。

過度の〈ご愛想〉はそれが向けられた人物の理解力に対する侮辱と見做されるべきである（第三巻、二百五十二頁）。

諂い屋を励ますことで、女性は男性に偽善者となるよう教えるのであるが、別な折には、詐欺師の汚名を着せるのである　…　ラヴレース（第四巻、一頁から二頁にかけて）。

大物は悪事を行うが、後ほどそうする理由を見つけ出すのは、追従家たちに任せるのである（第七巻、二頁）。

裕福な者たちには、その気持ちに阿ったり機嫌を取ったりするお節介な人間がいつも傍らにいるものである（第七巻、二百三十頁）。

諂いや偽善の謗りを避けようと骨折る多くの者が野暮ったさ、あるいは、粗野に陥っている（第八巻、百三十五頁）。

［Advice to Women を参照のこと。

Fond. Fondness.　（愛に溺れた、溺愛）

恋人として付き合っていた当時の夫に対し、愛していることをあまりにもあからさまに見せていた女性は、ないがしろにされることを予期しなくてはいけない（第一巻、二十三

頁)。

妻を甘やかすのは、感謝されるというよりも、妻を駄目にしてしまうことのほうが多い … ソームズ(第一巻、二百十一頁)。

母親が甘いと、子供を強情にしてしまう(第一巻、二百十六頁)。

恥ずかしがり屋の娘たちほど情の深い女房になるものだ、とソームズ氏は言う(第二巻、四十八頁)。

求婚期間中には頭脳に物足りないところがあると軽蔑していた、そんな夫に妻が甘えたりすると、気持ちを偽っていると思われるか、あるいは、はなはだ下品な動機に原因を求められることになる(第二巻、五十二頁)。

虐げられている時とか憤慨させられている時には、われわれは味方になってくれる人間ならだれでも好きになってしまうものである(第二巻、百五十頁)。

人前で夫婦がベタベタといちゃつくのは、慎みを欠くばかりでなく、下品かつ顰蹙を買うものであるとして、ラヴレース自身が非難しているのである(第四巻、二百四十一頁)。

男への愛着心をあまりにも露骨に示す未婚女性は、その男から慇懃さのすべてを放免することになる(第五巻、三十頁)。

独り者の女性としては、自分自身には許すはずもないような、お熱い夫婦の間のそんな馴々しい行為には(妻といかに親しい間柄だとはいえ)決して立ち会うべきでない(第六巻、百八十二頁)。

Forgiveness. Pardon. (寛大さ、許し)

慎み深さや上品さを損ねてきた多くの若者が、あまりにも安易に許されるため、札付きの放蕩児になっている(第四巻、八十一頁)。(第一巻、百六十八頁)も参照のこと。

許しが与えられて当然な場合、狭量ではない人間に対しては、すぐに許すことが恩義を深めることになる(第五巻、六頁)。

消極的な許しは愛想のないものである(第五巻、二十頁)。

許すという約束を強要しようとする者は、許されるに値しないことを暗に認めているのである(第五巻、百四十二頁)。

「私を許そうとする父を邪魔する者たちに許しが与えられんことを … また、あの人たちに関しましては、これをもちまして、私が筆にする最も厳しい言葉といたしましょう」と、不幸の極みにあって、クラリッサは祈るのである(第六巻、百三頁)。

偶然に犯した計画的ではない過ちには、寛大な処置を求めるべき最も強い口実が備わっている(同 所)。

「ラヴレースさんに伝えてください。あの人を憐れむことが出来るような、そんな気持ちになれるよう努力をしているということを、また、今少し努力を重ねました上でも、あの人をも許すことが出来ないようでしたら、目指しております状態に到達する資格が自分にあるとは思わないことにするともお伝え願います」と、気高くもクラリッサは語るのである(第六巻、二百七十六頁)、(第七巻、二百九十三頁から次頁にかけて)。

気前よく許してもらうこと以上に心を傷つけられることはない(第六巻、三百二頁)。

邪な子供たちが無分別で反抗的なことこの上ない行いをした際にも、安易に許してもら

うものだから、多くの子供たちが彼らの真似をすることになる（第七巻、二十四頁）。
不当な扱いを受けた罪なき人々から許されることが、神の許しには不可欠である、とラヴレースは考えている（第七巻、六十七頁）。
執念深さの点では、男は女に敵わない　…　ラヴレース（第七巻、九十一頁）。

Friendship.　（友情）

真の友情に遠慮は禁物である（第一巻、四十二頁）。
友情ゆえに判断に偏りが生じてはいけない（同　所）。
自分のいたらなさに気づくよう、友達が目の前に鏡を差し出してくれないとしたら、敵対する者の非難をどうして避けられるというのだろう（第一巻、四十九頁）。
友人たる者は、中立な人間が判断するに当たって用いるように思われる仕方で友人を判断すべきである（第一巻、五十頁、百三十七頁）。
不幸にも旧友を失った人間が新たな友人を作りたがるのは自然の成り行きである（第一巻、百二十五頁）。
若い二人の女性の間にあって、張り合う気持ちもすっかり締め出してしまうほどの気質や体質の違いこそが、二人の固い友情の絆かもしれない（第一巻、百三十一頁）。
真の友情の役割は、最も近い親戚との折り合いが悪くて嘆いている者の苦悩を刺激するとか煽り立てることではなく、むしろそれを和らげ、あるいは、慰めることである（第一巻、百三十七頁、百三十八頁）。
兄弟が友とは言えないこともあるが、友人はいつも兄弟である（第二巻、九頁）。
率直で立派な心の持ち主なら、クラリッサと共に、「友達だからといって、大目に見るのは止してほしいのです。だからこそ、容赦しないでいただきたいのです」と述べることであろう（第二巻、百八頁）。
真の友であれば、友人を同じくらい深刻な難儀に巻き込みそうな災いから救い出してもらうよう頼むわけには行かない（第二巻、二百十六頁）。
「でも、自分はわずかな不都合を被るだけで、ずっと大きな不都合をお友達から除いてあげられるというのであれば、それを拒むような人間は、心の襞の一番外側のところにも入れてあげる気持ちにはなれない」と、ハウ嬢は言っている（第二巻、二百十六頁）。（第二巻、百八十頁）も参照のこと。
自分たちの過ちを知らせてくれたことに対して、友人に腹を立てるのは、自ら王様のような厄介な立場に身を置き、過ちを正す道から離れることである（第二巻、二百二十頁から次頁にかけて）。
尊敬の念は友情の絆によって二人の人間を結び付けるのに必要な、あの心地好い打ち解けた関係とは滅多に両立し得ないものである（第二巻、二百二十一頁）。
悪の道に誘い込まれた人間は、雅量や正義の点（その過ちが広がらないためにも）と同様、用心の点からも、同じ羽目に陥らぬよう真に愛している友に注意する義務がある（第三巻、百四十七頁）。
忌憚なく諫め、感謝して諫めを受け入れることが真の友情の不可欠な条件である（第三巻、百四十七頁、百五十四頁）。

誠意と友情に由来する遠慮のなさを詫びるのは、丁重な侮辱に類したことである（第三巻、百五十五頁）。

和らげることの出来ない悲しみは、親友から隠しておくのが［困難かもしれないが］親切というものである（第四巻、二十七頁）。

不幸は友情の最も高貴な努めを果たすよう要請する（同　所）。

大きな心の持ち主は、不慮の災難を乗り越え、血のつながりにも優る友情を保つ（第四巻、四十六頁）。

美人同士の間に、それも花形の二人の間に熱い友情が存続することは滅多にない（第四巻、百三十五頁）。

意気投合した人間同士では、嫌悪の目を向けているわけでもない他の者たちとの間に長い年月を要して出来上がる絆よりもさらに強い絆が、ほんの二、三時間で結ばれることもある（第四巻、二百十六頁）。

片方の友人の活発な気質ともう一方の友人の従順な気質とが、二人の友情を永続的なものにする（第五巻、二百一頁）。

重大な過ちというのは、われわれが大事に思う人間に見られる場合のほうが、どうでも良い人間の場合以上に許し難いものとなるべきである（第六巻、百十五頁）。

真の友情から人は、利己的な、あるいは、さもしい目的によって友情の品位を落としがちな、そんな様相を避けるよう意を用いることになる（第六巻、二百十三頁）。

徳に根差したもの以外、いかなる友情といえどもその神聖な名には値しない（第六巻、二百三十七頁、二百三十九頁）。

ただ酒を酌み交わす程度の友達付き合いもある（第六巻、二百七十三頁）、（第七巻、百二十六頁）。

陽気であるがゆえに親しくなった、陽気な人間同士の友情は、当初の親密さをもたらした理由がなくなると消滅する（第六巻、二百七十三頁）。

陽気な人間や道楽者の友情は〈相棒意識〉と呼ばれるほうが適切である（同　所）。

美徳をもって世に知られた女性は、親しい付き合いをもって遇する者たちに重要な地位を与えることになる（第六巻、二百九十四頁）。

清らかな友情の絆は生来の絆よりもさらに結び付きが強く、思いやりに溢れている（同所）。

放蕩で度し難い男の親友と目されるのは不名誉なことである（第六巻、三百十五頁）。

知性に基づいた友情には、官能を煽る劣情の炎の中で味わうものよりも高尚な快楽がある（第六巻、三百二十頁）。

友人がいわれなく被った不幸と戦っている場合、熱くなるのは友情に似つかわしい（第六巻、三百二十一頁）。

「お友達付き合いでの冷静さというのは、私には見当もつきません。たとえ、思慮分別などという呼び方で勿体をつけるとか、目立たせるとかしましても、あるいはまた、どんなことをしようともですわ」と、ハウ嬢は述べている（同　所）。

友情を培うことの出来る心は、だれもが持ち合わせているわけでもない（第六巻、三百二十四頁）。

自分たちが友情と呼ぶものは籾殻や刈り株だということ、また、美徳を礎としないもの

はそのような神聖な名には値しないのだということを、いつの日か放埒な人間は納得するであろう（第七巻、百二十七頁）。

かつてそうするのが当然と思われた者に対して抱いたわれわれの高い評価は、軽々しく放棄されることはない（第七巻、百六十四頁から次頁にかけて）。

友情というものは、一般的に申しまして、女性の心が取り扱うにはあまりにも激しく燃え盛る炎なのです　…　モーデン大佐（第八巻、百二十七頁）。

わずかな女性の手の中でのみ安定した輝き方をする光ですし、しばしば女性を気紛れな行動や馬鹿馬鹿しい振舞いへと急がせるものでもあります。他の極端な状態と同じく、永続性を伴うことは滅多にないのです　…　モーデン大佐（同　所）。

友情の極みでもある結婚は、女性が女性に対して抱く最も激しい友情をも吸収してしまうのが常のことなのです（同　所）。

熱烈な友情を二つ同時に心に抱くことの出来るような、そのような女性は果たしているのでしょうか（同　所）。

モーデン大佐によれば、女性間の熱烈で永続的な友情にとって必要不可欠なものは以下のとおりである。即ち、両名が［クラリッサとハウ嬢のように］広い心と良い教育、そして、道徳的な知見を渇望する心の持ち主であるということ　―

友情の絆となる心安さをしばしば壊してしまう、あの互いに対する依存心を超越するためにも、財産の点でほぼ対等でなければならないということ　―

どちらにとっても相手を羨ましがる余地のなきよう、共に異なった方面で秀でているべきだということ　―

それぞれが互いのうちに愛すべきものと同様、恐れを抱くものを見出さねばならないということ　―

それぞれが互いに相手の欠点について教え合い、その忌憚のない言辞に対して感謝することが、二人の友情の不可欠な条件であるということ　―

一人は生まれながらにして温和であり、もう一人は、友を愛し崇拝することによってそうなっていなければならないということ（同　所）。

Gaming.　（賭け事）

賭け事は時間と財貨を等しく浪費する（第一巻、五十二頁）。

思慮分別のある人間で、わずかな額なら別であるが、すでに確実になっているものを偶然に委ねるような者がどこにいようか（第八巻、百六十一頁）。

「本来私の所有物であるものを、お友達が自分のものにしたがっているように考えますのは、お友達には大変失礼に当たるでしょうし、私にいたしましても、お友達の持ち物に対する権利を手中にしたいと願ったりいたしますのは、非常に下劣な話です」と、クラリッサは語っている（第八巻、百六十二頁）。

大金の動く賭博というのは不道徳な行為であり、浅ましい悪習であり、強欲さの所産であるし、隣人の持ち物を欲しがることを禁じている、あの戒めに真っ向から違反することになる（同　所）。

Generosity. Generous Minds.　（寛大さ、高潔な心）

ざっくばらんな人間にとっては、遠慮がちな態度は苦痛の種である（第一巻、七頁）。

高潔な心は威嚇されるのではなく、むしろ誘い掛けられるべきである（第一巻、三十六頁、六十頁）。

高潔な精神を備えた女性は、幸せになりたいなら、心のさもしい男性とは結婚しないように注意すべきである（第一巻、五十八頁）。

高潔な心の持ち主は、愛情をもって矯正してくれる人間を、その矯正ゆえに一層愛することになる（第一巻、百三十八頁）。

いかに優しく思いやりに溢れる心の持ち主といえども、厳しい扱いを受けると、この上なく頑迷な態度に変わるのが通例である（第二巻、五十八頁）。

寛大さは愛情と同程度に高貴な心を強く惹きつける（第二巻、百十九頁）。

不当な怒りは、寛大な心には不当に映るとはいえ、無礼を働いたと思われている人物にたっぷり埋め合わせをすることになる（第二巻、百二十頁）。

高貴な心の持ち主は、気前の良さを発揮する時、世間の残りの者たちを暗黙のうちに非難している（第二巻、百二十七頁）。

高潔な人間は、自分に対し、あるいは、自分を頼っている者たちに対し、求めることなく施された恩義に縛られたくなかったと思うかもしれないが、自分に酷似している精神を発揮してくれたことで、恩恵を与えてくれた人間を一層愛することになる（同　所）。

高潔な人間は激賞されると、称賛した者の高い評価に値するよう努めるが、その者の判断と自らの心とを裏切らないためである（第二巻、百三十三頁）。

真に高潔で率直な心の持ち主というのは、自分に対しては一つとして言い訳を許さないような場合にも、他人のために言い訳を見つけ出すものである（第二巻、二百十七頁）。（第二巻、百二十七頁）も参照のこと。

寛大な心の持ち主というのは、鷹揚な態度で寄せられた信頼に付け込むようなことは出来ないものである（第三巻、三十頁）。

真に高潔な精神は、必要とあらば、己に不利な助言も行う（第三巻、百四十七頁）。

率直で拘りのない人間は、その気になれば、すぐにも心を通い合わせ、進んで慎みを捨てもする（第三巻、二百二十七頁）。

心の大きな人間は、だれかに話して聞かせないと、幸せを楽しむわけに行かない（第三巻、二百三十九頁）。

議論において優っており、かつ、そのことで他人を見下したり勝ち誇ったりすることのないような人間は、嫉妬心を挫き、悪意を制することになる（第四巻、四十四頁）。

真の寛大さは礼儀正しさや誠実さや名誉心や正義以上のものである。何故なら、これらすべては義務にすぎないのだから（第四巻、六十九頁）。

寛大だと思われたい人間は、何よりも先ず公正でなければならない（第四巻、七十三頁）。

高潔な心は、自らが苦しめられてきた当の相手に対しても、苦しみを与えることに喜びを見出しはしない（第五巻、百五十七頁）。

自らの力で実行出来る場合には、正しいこと、公正なこと、寛大なことを行うための許可を待つべきではない（第五巻、二百五頁）。

ある人間が大変寛大な心から提供するものでも、別の人間がそれを受け取るのは、負けず劣らず度量の狭い行為にもなりうる（第六巻、二百四十二頁）。

狭量とは言えない精神の持ち主は、むしろ無礼な振舞いに及んだことを遺憾に思うのであり、その点を穏やかに知らされることに立腹したりはしない（第六巻、二百六十二頁）。

心の広い人間というのは、いつだって親類同士のようなものである（同　所）。

返報することの出来ない恩義を受けると、高潔な心は不安を覚えるに違いない（第六巻、二百九十五頁）。

愛情と感謝の念は、単なる家族に対する配慮ということだけに限定されてはいけない（第八巻、七十六頁）。

はなはだしい罪でない場合には、同席していない者の側に立つのが思いやりというものである（第八巻、百五十二頁）。

寛大さとは物惜しみと濫費との中庸を巧みに守ることである（第八巻、百五十七頁）。

寛大な心の持ち主というのは、必ずしも自分の有利にはならなくとも、ためらうことなく長所を備えている人間に優位を認めるものである（第八巻、百五十九頁）。

［Friendship, Goodness を参照のこと。

Goodness. Grace.　（善良さ、雅量）

立派な人間というのは反目している者たちからさえも、故意に非難を招くような真似はしない（第一巻、四十九頁）。

立派な人間は自分の素行が詮索されるのを恐れる必要はない（第一巻、五十四頁）。

善良さは偉大さに等しい（第一巻、百八十六頁）。

立派な人間は虚言を弄するようなことは決してなく、言い抜けに頼ろうともしない（第一巻、二百一頁）。

天使のような振舞いをする者は天使を相手にすべきである、とラヴレースは言う（第二巻、百三十二頁）。

善良な心の持ち主にとっては、思い返してみて、自分は害を為したのではなく、むしろ被害者なのだと言えるのは、何と大きな満足であろうか（第三巻、十七頁）。

善良な男性は立派な女性の安眠を妨げるような真似はしない（第三巻、二百二頁）。

立派な人間は他人の言動に対し、常に有利な結論を引き出す用意が出来ている（第五巻、百五十三頁）。

善良な人間は、自分の召使にいたるまで、一人残らずだれをも幸せにしたいと願う（第五巻、百六十九頁）。

善良かつ高潔な所感が美しさに優雅さと輝きとを与える（第六巻、二百七十六頁）。

善良な女性は食べることや眠ること、着飾ることや訪問することといった一般的なものとは異なる人生の目的を持つ（第六巻、三百十四頁）。

善良さは終始一貫していなければならない（第七巻、二百七十三頁）。

恩寵という語は放蕩児を見分ける試し言葉である。この語やその使用者を冗談の種とする者には何らの希望もない（第八巻、四十七頁）。

気質が善良で礼儀を弁えた人間は、知識に通じた振りをする人々について、その場に居

合わせない時に正体を暴き、陽気な人々の嘲笑の的にしたりはしない（第八巻、百六十頁）。

［Friendship, Virtue を参照のこと。

Gratitude. Ingratitude.　（感謝、忘恩）

敬意を示してくれることに対し、男性を一層邪険に扱うというのでは、女性として恩を忘れた横暴な態度ということになる（第一巻、百九十四頁）。

感謝を忘れない心というのは、喜びに溢れる心と同じである（第四巻、二百十頁）。

愛する者たちが見せる恩知らずな振舞いは、われわれの胸に痛切に応えるに違いない（第六巻、二百九十八頁）。

うぶな者が高く評価してくれることに付け込み、その者を傷つけるとか、破滅に追いやるというのは、人間の犯す悪事の中でも最も恩知らずな悪事である（第七巻、二百二十六頁）。

われわれに対する他人の恩知らずな行為一つ一つが思いやりの心を狭めるとか、制約するとかして、広く疑念とか不審の念とかを招いてはいけない（第八巻、百五十二頁）。

Grief. Sorrow. Grievances.　（悲痛、悲しみ、苦情）

苦情を並べ立てる段になると、そうでもなければ不平の種にはならなかったはずの些細な事柄が、重みを増すためにしばしば投入される（第一巻、百六十六頁）。

声の調子で案じる気持ちが漏れるのを恐れてのことであれば、その沈黙は取り柄とか愛想の良さとかを欠くことにはならない（第二巻、百二十八頁）。

体というものは、心が乱れている時には、お粗末な手応えのないからくり細工になってしまう（第二巻、百四十一頁）。

悲しみに歪んだ醜い顔は実に不快なものだ　…　ラヴレース（第五巻、十四頁）、（第七巻、四頁）。

失った友を悼む者も、自らが危険で苦痛を伴う病に罹ると、悲しみが大幅に軽減されることに気づく　…　ラヴレース（第四巻、二百三十八頁）。

深い悲しみはゆっくりと効き目を表すもので、発作的に起こる不機嫌さの合間に、わずかな喜びが顔を出すのにも時間が掛かる、とラヴレースは言う（第四巻、二百七十八頁）。

唯一同情に値するのは、慎ましやかで声にもならない嘆きである（第五巻、十五頁）。

愛する子供が病の折には、われわれもひたすら命乞いをするものであるが、その子が成長した暁には、祈りが聞き届けられなければ良かったのにと願う当然な理由が出来るものである（第七巻、二十一頁）。

重苦しい場面から逃げ出す者たちは、宙ぶらりんな気持ちが途中に入り込むため、その場に居合わせて味わうものよりももっと苦痛を嘗めることになる（第七巻、二百八十三頁）。

深い悲しみとか、最愛の友を失うといった苦痛を味わっている人間を喜ばせ、気晴らしをさせるために、時宜を得た必要な仕事が見つけ出されるべきである（第八巻、十五頁）。

痛切な心からの悲しみの場合はいつもだが、知人全員の関心をそこに引きつけようとす

るのは自然なことである（第八巻、五十三頁）。
深い悲しみ［身内を失ったことに対するもの］も時が経つと、苦しいというよりはむしろ心地好い思い出に変わることもある（第八巻、七十八頁）。
［Adversity, Consolation を参照のこと。

Guilt. Vice. Wickedness. Evil Habits. Evil Courses.　（犯罪、悪徳、邪悪さ、陋習、悪癖）

習慣になったことは簡単には変えられないものである（第一巻、百八十五頁）、（第八巻、百二頁）。
悪徳は臆病者であり、美徳を唱導する者が絶えず敵に回ると、頭を隠してしまう（第二巻、十二頁）。
考え方のまともな人間が芳しくない振舞いによって知識を無駄にするという。悪習の力とはいかなるものであろうか（第三巻、百十八頁）。
潔白な者の詮索するようなまなざしに会うと、罪を自覚する人間の目は下を向いてしまう（第三巻、二百二十七頁）。
罪深い人間というのは、潔白な者が中傷誹謗に耐えるほどには、赤裸々な真実に耐えることが出来ない（第四巻、百五十四頁）。
ろくでなしは律義者になるのに必要な苦労以上の骨折りをして悪党になっている（第四巻、二百二十三頁）、（第五巻、二百七十三頁）。
太陽は悪人の上にも善人の上にも同じように輝く。しかし、邪悪な心を照らすことは出来ない（第五巻、二百六十一頁）。
悪徳はいずれもそれ独自の罰を伴うのが普通である（第五巻、二百六十二頁）。
加害者が目を閉じることも出来ずにいるというのに、被害者はしばしば心地好い眠りに就く（同　所）。
今この瞬間に、俺が自責の念に駆られて味わっているもの以上に大きな苦しみは、来世にはまず有り得ないだろうと、クラリッサに加えた最後の暴虐行為を振り返りながら、ラヴレースは述べている（同　所）。
いつも己の力を堂々と発揮することが無実の身には可能だとすれば、罪ある者の分け前として、どれほどの失意が常にその身には降り懸かることになるのだろうかと、ペンナイフの場面におけるクラリッサの振舞いに関して、ラヴレースは述べている（第六巻、四十八頁）。
多くの人間は信念に基づいてというよりは、むしろ露見することを恐れて悪事を慎むのである（第六巻、百五十七頁）。
難破船から略奪したり火事場で盗みを働くというのは、あらゆる悪行の中でも最も野蛮なものである（第六巻、三百十三頁）。
知っていながら、また、警告を受けながらも厚顔に為された罪業は、他の何にも増して許し難いものである（第七巻、二十四頁）。
人前で恥をかくというショックに耐えられない者は、自分たちをそのような事態に追い込みかねない密かな罪も犯さぬよう、倍の注意をすべきである（第七巻、百六十五頁）。
罪は、文字どおりに言って、露見した場合にはこの世においてすら自らを罰するもので

ある。この上なく高貴な精神の持ち主をも悪党に見せるのだから（第七巻、二百十三頁）。

悪の道が快楽をもたらしてくれるのは、思索や反省が遠ざけられている間だけのことである（第八巻、九十三頁）。

［Innocence, Ingratitude, Libertine, Remorse, Repentance を参照のこと。

Happiness. Content.　（幸せ、満足）

すべての人々の愛情を身に受けてこの世を去る者は幸せである（第一巻、四頁）。

幸福と富とは別物で、滅多なことでは一致しない（第一巻、九十六頁）。

だれにとっても不可能なことであるが、仮にわれわれが完全な人間だとしても、われわれの相手となる者たち、とりわけ、少しでもわれわれを自由に出来る者が、われわれ自身が指針としている考え方によって動かされているのでなければ、この世での幸せを（この語の通常の意味合いにおいても）望むことは出来ない（第一巻、九十七頁）。

自分の幸せに気づくこと、そして、重い自責の念にかられながら望ましい過去を振り返り、反省して臍を噛んだりせずに済むこと、それこそは人間の至福のうちの最高のものである（第二巻、百二十四頁）。

何か称賛に値する事柄を目指して規則正しく行動し、その目的に向かって進むに際しても、自らを咎めるべき点など一つとしてないという者は、どれほどその身の幸せを感じることだろう（第五巻、百七十七頁）。

満足を相続する女性は、求められ得る最も裕福な相続人である（第六巻、百一頁）。

［Friendship, Generosity, Goodness を参照のこと。

Health.　（健康）

素晴らしい健康に恵まれると、精神と肉体とが気持ち好く調和することになる（第一巻、二百六頁）。

貧困は健康の母である（第二巻、八十頁）。

節制は元来ひ弱な体質に壮健さを付与することになる（第三巻、二十頁）。

健康はわれわれに自己満足を促す。すると、他のだれにでも好感を覚えるようになる（第六巻、二百八十四頁）。

健康に恵まれると、あらゆる希望が湧いてくるのであり、一時間一時間が踊るような足取りでわれわれを訪れる（同　所）。

自由についてのアディソン氏の言葉は、健康についてもさらに適切に当てはまるかもしれない。自由というもの自体が健康なくしては無意味であろうから。

それは陰鬱な自然の顔を晴れやかにし

太陽には美を、そして、日には喜びを授ける　（同　所）。

体調すこぶる壮健な人間は、病む者、あるいは、虚弱な者に同情すべき方法を知ることが滅多にない（第七巻、百三十五頁）。

［Physic, Vapours を参照のこと。

Heart. Humanity.　（心、人情味）

心を欠く者はすべての点で欠けていることになる（第一巻、二百六頁）。

頭が間違っているのであれば、悟らせることも出来るが、心が欠けている場合、心を持たせることなどだれに出来ようか（第一巻、二百六頁から次頁にかけて）。

人の痛みを思いやる心が欠けている人間は、この世の最高の喜びを欠くことになる（第一巻、二百二十四頁）。もっとも、その欠陥のゆえに多くの悲しみを免れるのである（同　所）。

すべての重要な事例において、いわば知らず知らずのうちに心に不安が生じる場合、あたかも良心の衝動であるかのように考え、広くその不安に注意が向けられなければいけない（第二巻、二百二十六頁）。

小賢しい頭脳よりも情け深い心を披露することが称賛を得る（第二巻、二百三十三頁）。

人情味のある人間は、適切な折に、感じ易い心を持っていることをその目によって証明するのを恥とは思わない（第四巻、二百三十四頁）。

現実のものであれ、描き出されたものであれ、他人の悲しみによって心を動かされているのか、それとも、いないのか、女性はそれを男性の心を判断するための基準とすべきである（同　所）。

野蛮な無神経さを自慢して憚らない者は、人間性の第一の誇りともいうべきものを知らずにいるのである（同　所）。

感じ易い心をしていて、幸せになれる人間などいるだろうか。だが、そういう心を持ち合わせない者は、人間なんかじゃなくて虎だ、とラヴレースは言う（第五巻、百三十九頁）。

悪い心を持つ人間でさえ、立派な心の持ち主に対しては尊敬の念を抱くものである（第六巻、百五十五頁）。（第五巻、三十八頁）も参照のこと。

見識のない世間の者たちが人情味と呼ぶものは、自分自身を憐れんでいる弱い心に他ならないことが多い　…　ラヴレース（第六巻、百七十三頁）。

同胞の苦悩によって心を動かされる能力というのは、雄々しい心にとっても、決して恥ずべきものではない（第六巻、二百十九頁）。

寛大な性質の人間が他人の難儀に対して感じる苦しみは心地好いものである（第七巻、百五十九頁）。

優しい心というものは、その恩恵に与る他のだれにとってよりも、持ち主にとっての大きな祝福である（第七巻、百七十二頁）。

［Friendship, Generosity, Goodness を参照のこと。

Honesty.　（正直な心）

承知の上で悪党になろうとしている最中にも、だれもが正直さを装うというのは、正直さに対する見事な賛辞ということになろう（第一巻、百七十九頁）。

身分の低い者たちにとっては、正直さこそが一番の誇りなのである。高い身分の人間の場合、権力や威厳や悦楽を求める気持ちが迷いの元になり、極度の奢りを誘うが、これがもっと称賛に値する自尊心を抑え込んでしまうこともあまりに多い（第二巻、百十一頁）。

〈貞節〉と呼ばれているこの退屈な言葉、あるいは、物の中には、一体何があるというのだ。トムリンソンのような輩の場合にも、それを一時的に漏らして見せるのを、俺でさえ好ましく思わずにいられないとはな、とラヴレースが問うている(第五巻、百六十二頁)。

正直者になることはすべての人間にとって重大な義務であるから、正直であるからといって、だれも手柄顔は出来ない。それゆえ、すべての正直者は正直者を自称しても自惚れているとの謗りを受けはしない(第八巻、百四十七頁)。

[Goodness を参照のこと。

Human Life. (人生)

ラヴレースの認めるところによると、人生の旅路では、一番平坦な道を辿るのが一番安全で最良だという(第四巻、三十四頁)。

すべからくこの世のことは、好都合と不都合、善と悪とが渾然一体入り交じっているものだから、一方を掌中にすれば、もう一方を手にしないわけには行かなくなるのだ(第四巻、百七十五頁)。

人間の一生は市松模様の細工物であるから、分別のある人間は災難に出会えば、それに見合うだけの福を対置し、釣り合いが取れるようにする(第四巻、二百三十二頁)。

命などというはなはだ不確かな保有権にしがみついている生き物にとって、どのような時に危険を脱したと言えるのであろうか(第六巻、三百五頁)。

これは死ぬ定めにある人間の弱さと思い上がりとを同時に証明する、常套的な表現法の一つである(同　所)。

振り返って眺めるのに、十年、二十年、あるいは、三十年が何であろうか。今後、その一番長い期間を経た頃には、おそらくわれわれ全員は元の塵に混じり合っているかもしれないのだ(第七巻、百三十七頁)。

われわれが元気盛んな時に望む最も長い寿命にしても、どのようなものだというのであろうか。年月を重ねるにつれて、時には友人のことが、そして、もっと頻繁には、自分自身のことが心配になるような、憂慮に満ちた人生に他ならないのではないだろうか(第七巻、二百五十九頁)。

そして、やっとのことで熱望していた高齢に達すると、辛い別れとか死とかが次々に起こり、われわれの愛した者一人一人が、いわば剥ぎ取られて行くのを目の当たりにすることになるし、また、付き合いにくい哀れな連中ということで、押し寄せ群がる若者たちの侮辱や軽蔑に晒されている自分に気づくのであるが、この若者たちは、われわれの財産を手にいれたいと願い、われわれを舞台から追払おうとするのである(同　所)。

このすべてに加え、われわれ自身の衰えも日々進むのであり、われわれが切望する命をあらゆるものの中でも最大の病とするには、それだけで十分なのである(同　所)。

不幸の一切から免れることを願うのは、この世では起こり得ないもの、そして、われわれは永遠に生きて行くわけには行かないのであるから、仮に、ただの願いによって、そのようなものを手に入れることが出来るとしても、おそらく願ってはいけないものを願うことになるのである(第七巻、二百六十三頁)。

[Consolation を参照のこと。

Human Nature.　（人間の本性）

選択が許されるなら選びはしなかったような親戚を、造化の女神はわれわれに与えるものである（第一巻、百五十二頁）。

一体何という世の中なのであろうか。人間の半分は残りの半分を苛んでおり、苛むことで自らも苛まれているのだ（第二巻、二十六頁から次頁にかけて）、（第六巻、百六十六頁）。

人間の本性というのは、貧乏人の場合であれ金持ちの場合であれ、まったく見下げ果てたならず者だ　…　ラヴレース（第三巻、百二十七頁）、（第五巻、百三十頁）。（第四巻、三十九頁）も参照のこと。

人間の本性というのは、論争するには骨の折れそうな偏見を、好んで正当化しがちなものである（第三巻、百五十五頁）、（第四巻、七十一頁）。

好みに合わせて賄賂を決めるだけの話であり、だれでも買収出来るのだ　…　ラヴレース（第五巻、百三十頁）。

田夫野人も、目上の者たちに負けず劣らず、自らが非難することを実践し、実践していることを咎めるのだ（第五巻、百九十三頁）。

どんな人間の場合も、ある一つの感情が、通常、信念の枠を突き破り、われわれすべてを支配してしまうものなのだ　…　ラヴレース（第六巻、二頁）。

われわれはすべて何かの点で過ちを犯す（第六巻、二百六十七頁）。

判断をするのに不利な立場にあっては間違いを犯す者も、六回中五回は間違わずに済んでいる。人間の本性とはそのようにいかがわしいものなのだ　…　とラヴレースが言っている（第七巻、五頁から次頁にかけて）。

［Detraction を参照のこと。

Humility.　（謙遜）

遜った態度は身分の高い者の飾りとなるに違いない（第一巻、百四十六頁）。

偉ぶることなく愛想の良い人間は、その淑やかな振舞いによって、知らず知らずのうちに人々を自分の考えに引き込む（第四巻、四十四頁）。

人間の美質といっても、その一切は比較の上での話に過ぎない。われわれが一番見劣りのする者たちに優っていると考えるその程度と同じくらいに、われわれよりも優れている人間もいるだろう（第八巻、百五十一頁）。

他のすべての美質を好ましいものにするのが謙虚さである（同　所）。

［Duty, Goodness を参照のこと。

Husband and Wife.　（夫婦）

指図することを好むが、しかし、教えを施す力があって当然なのに、自分が教えを必要とする男というのは、一体どのような夫になるのであろうか（第一巻、百六十一頁）。

夫を選ぶに当たって女性が決め手とすべきものは、男性の容貌ではなく心である（第一巻、二百二頁）。

飲み過ぎのせいで多くの災いが起きているのであるから、男の酒癖のよさというのは堅持されるべき大きな美点ということになる（第一巻、二百三頁）。

服従は結婚の誓いの一部にされているのであるから、女性としては、その誓いに背くことによって、おそらくもっと重大かもしれない役目を省くよう、男性に教えるようなことがあってはいけない（第一巻、二百四頁）。

身を飾るに当たって、良き妻が最も重視すべきことは、夫の愛情を保ち、夫の選択の正しさを裏付けることである（第一巻、二百十四頁）。

既婚女性たるものは、夫の目は別として、だれかの目を引くことについては恐れさえ抱くべきである（同　所）。

夫の陰気な性質は妻の明るさを抑え込んでしまうものである（第二巻、十頁）。

浅ましい夫に対する軽蔑の念を胸中に収めておくためには、分別と寛大さに恵まれた女性にとっても、度量の大きさが求められる（第二巻、四十九頁）、（第四巻、百六十一頁）。

えてして夫というものは、賢い女に対して自分の権威と重要性を守ろうと躍起になるものである（第二巻、六十七頁）。

妻は夫の名誉を守る立場にある（第三巻、六十頁）。

妻に落ち度があれば、世間の目には、妻本人はもとより、より以上の不名誉を夫にもたらす（第三巻、六十頁）、（第四巻、七十四頁）。

不貞を働くことによって妻が夫にもたらす害は、夫が妻に与えるものより大きいかもしれない（第三巻、六十二頁）。

ハンサムな夫は妻を悲しませることが多い（第三巻、百二十九頁）

ハンサムな夫というものは、結婚相手の女性が自分たちに恩義を受けているように考えるものである（同　所）。

気質が似通い過ぎていて反りの合わない夫婦もある（第三巻、百四十二頁）。

比較的に悪くはない気質をした二人の人物も、両者が同時に機嫌を損ねると、ひどく不幸になることがある（同　所）。

立派な夫に先立たれ、困難な状況に一人取り残されるということ、それも、夫の落ち度故のことではないというのは、まことに心の痛む話である（第三巻、二百二十六頁から次頁にかけて）。

賢い男は、妻が自らの目にも意気消沈し、畏まった姿に映るように仕向けるよりは、むしろ、その心に威厳の自覚を吹き込むよう努力するものである（第四巻、六十頁、六十六頁、八十七頁）。

妻に備わる分別や美徳、そして繊細な心というのは、世間の目には、同じ美質が自分自身に備わっている場合よりも、夫にとっては一層の名誉となる（第四巻、七十四頁）。

立派な女性は自分自身の名誉に劣らず夫の名誉に気を遣う（第四巻、百六十二頁）。

良い妻は自分のための個別の準備金から、家族のため、また、予期せぬ出来事のために蓄えておくのが務めだと考える（第四巻、百六十三頁）。

亭主関白にして従順なる妻あり、とラヴレースは言う（第四巻、百八十四頁）。

悪い夫を持つ女性の操は危険に晒されている（第四巻、百九十六頁から次頁にかけて）。

高慢で邪悪な精神の持ち主は、妻とその卓越した美質のすべてがそっくり自分の持ち物になるとしても、妻が才能の点で優っていることには耐えられない（第五巻、十頁）。

気前の良い気質の妻は、他の者たちに当然と思われる以上のことを行うことにより、夫に対する行いが当然以下のものとならないよう注意すべきである（第五巻、四十頁）。

一部の奥様たちを相手に辛抱を重ねるのは、さらなる辛抱を余儀なくされることに等しい（第五巻、百二十頁）。

互いによく理解し合って暮らしている夫婦というのは、初対面の者にとって、二人が正しい心を持つことのほぼ過つことのない証となる（第六巻、百五十四頁）。**逆もまた真。**

夫にしても妻にしても、互いに咎め立てをすることになるような故意の、あるいは、計画的な悪事［ないしは卑劣行為］がないという結婚は、それこそ幸せである（第六巻、百五十五頁）。

愛情を一切感じていない男に対して［誘惑を受けても］信義を守る妻というのは、何と見事な節操を備えていることだろうか、とラヴレースは言う（第六巻、二百五十頁）。

残忍な性質で、面白半分に話を捏造するような、また、自分のことは買いかぶり、女性を低く見るような男が、優しい良い夫となるのは不可能である（第七巻、三十二頁）。

賢明な妻は服従することによって相手を征服する（第七巻、三十三頁）。

家庭で安らぎを得られない男性は外で気晴らしをすることも出来るが、女性が安易にそのような真似をすると、きっとスキャンダルを起こすということに女性は配慮すべきである（第八巻、百二十八頁）。

世話女房は、もしも分別があれば、ただ自分の努めに過ぎないものを果たすだけで、従順で気の良い夫に対し、恩義らしきものを施すことも出来よう（第八巻、百二十九頁）。

［Advice to Women, Courtship, Marriage を参照のこと。

Hypocrisy.　（偽善）

現に女性を口説き落とし、自分の手中に身を投じさせた男は、偽善的な言辞を弄する必要はない（第三巻、九十五頁）。（第三巻、四十二頁）も参照のこと。

濡れる間もないほど頻繁にハンカチを目に当てる女性というのは、まさしくハイエナにも似て狡猾な人間だ（第三巻、二百二十六頁）。

聖書の文句は偽善者向けの外套となることが多い、とラヴレースは言う（第四巻、二百十三頁）。

［Human Nature を参照のこと。

Ill-will. Envy. Hatred. Malice. Spite.　（悪意、妬み、憎しみ、敵意、恨み）

愛情よりも恐怖を感じる相手に対しては、憎しみを抱かずにいるなどということはとても出来ない（第一巻、十五頁）。

悪意というのは、その捌け口を見出すことが出来ない場合には、自ら拵えようとする（第一巻、十五頁から次頁にかけて）。

取柄と優秀さは妬みの炎を煽り立てる油である（第一巻、四十一頁、五十六頁）。

妬みと悪意はその敵意を、憎しみを覚える相手の家族にまでも及ぼすものである（第一巻、五十七頁）。

好意とか愛情とかを持つと実際にある欠陥も見えなくなるのと同じく、反感を持つ人間の目には欠点がよく見えるものである（第一巻、九十四頁）。

憎しみの感情は、普通の挨拶を交わすことさえも敵視する（第一巻、百四十七頁）。

悪意をもって企てられ、利己心に根差しているという計画は挫かれるのが当然である（第一巻、百五十三頁）。

悪意は何もかもを捻じ曲げて伝える（第一巻、百八十九頁）。

悪意に満ちた人間は、時として、価値を認めていない相手に対し朗らかさと好意を装うことがあるが、ただ、不快に感じているもう一人の人間に悔しい思いをさせるためのことである（第二巻、百二十八頁から次頁にかけて）。

顔を合わせずにいるのは、敵意を募らせるだけである（第二巻、二百四十八頁）。

立派な心の持ち主にとっては、憎しみとか怒りは一時的な感情にすぎない（第四巻、二百五頁）。

非難の声に耳を傾けてもらえる場合には、咎め立てをする人間に事欠くことはない（第七巻、五十七頁）。

Imagination.　（想像力）

想像力に関わりのあるすべての能力において、女性は男性よりもはるかに有利な立場にある（第二巻、八十一頁）。

迫害したり邪魔したりするのは、純真な心を抑え、伸びやかな想像力を鈍らせる（第二巻、八十二頁）。

心に強く思い描く事柄はすべて、他人の目にはそう見えないとしても、本人にとってその時点では絵空事以上のものである（第二巻、百三十六頁）。

思いやりに動かされた考えには狂信的なところもないわけではない（第四巻、四十六頁）。

空想とか想像力とかというものには、喜ばしい事柄についてであれ嘆かわしい事柄についてであれ、事実を凌ぐ力が備わっている（第七巻、二百八十三頁）。

想像力豊かな人間は、通常、その突飛な考えや気紛れによって、思慮分別に富む人間と区別される（第八巻、八十七頁）。

Inclination.　（性向・好み）

人間は気持ちとは裏腹なことに引き込まれてしまうこともあるが、それを続けているうちに、やがて一つの性向となる（第一巻、四十七頁）。

気の向くままに事を進めるのを認められる以上に厳しい懲らしめを必要としない者もいる（第一巻、百十八頁）。

いかなるものに心が傾こうとも、われわれの頭はついて来るものだ、とラヴレースは言っている（第三巻、四十七頁）。

好みに合わせて誘惑するのが悪魔の技であり、放蕩児の技である（第三巻、五十九頁）、（第六巻、十六頁）。

［Libertine, Love を参照のこと。

Indiscretion. Inconsiderateness. Presumption.　（無分別、無思慮、僭越）

思慮深いと評判を得ている人物の無分別な言動は、美徳にとって痛手となる（第二巻、四十六頁）。

重大かつ故意の無分別さを犯した人物は、自分自身の目にも堕落した姿に映るばかりでなく、他人に対する権威や影響力を弱めることになる（第三巻、三十五頁）。

無思慮さから出た過ちにつきものの残酷この上ない状況の一つは、愛情を向けてくれる者たちすべてを不幸に追いやり、家族の敵となる人間だけを喜ばせるという点である（第三巻、九十七頁）。

経験のなさと思い上がった気持ちが、しばしば、善意の人にも破滅を招く（第四巻、二十五頁）。

無思慮な振舞いへと引き込まれてしまった立派な心の持ち主は、そのために自分自身にもたらされた不名誉に負けず劣らず、愛する者たちに加えられた苦痛について案じることになろう（第五巻、四十一頁）。

［Advice to Women を参照のこと。

Infidel. Scoffer.　（無神論者、不信心者）

その悪徳が無神論に根差すような、放埒な生き方をしている者に望みは一切ない（第四巻、二百三十四頁）。

最も無知な人間が他人を最も嘲笑するものだ、とベルフォードは言う（第六巻、三百十二頁）。

不信心者は知識もなしに非難し、いわれもなく笑い、一番知らない事柄に対して最も騒がしく大声を上げる　…　ベルフォード（同　所）。

［Guilt, Religion を参照のこと。

Innocence.　（無垢さ）

身に覚えのない人間は非難を無視することも出来よう（第一巻、二百七頁）。

罪を犯していない人間は、疑いを掛けられた時にも裁きを恐れはしない（第三巻、六十三頁）。

潔白な心も（相手次第では）無邪気さと一緒に陰険さを、通常持ち合わせている以上に交えていることが望ましい　…　ラヴレース（第五巻、九十頁）。

「世間の人たち皆さんが、私の胸の内を知ってくださると有難いのですが。私の振舞いを裁こうと、敵方の人たちが裁きの席に着いても、私は構いません。公平に調べてもらえるのなら、結果のことは恐れておりません」と、クラリッサと共に述べることの出来る者は幸せである（第五巻、百三十八頁）。

「胸の一番奥に秘めております考えのことを、そして、それは私に有利に働くものか、

それとも不利に働くものなのか、そんなことまでお尋ねくださっても構わないのです。すべてを打ち明けるつもりです」（同　所）。

清浄無垢な人間は、他人の心を自分の心に照らして判断しようとする傾向があるため、最もつけ込まれ易い（第七巻、五十三頁）。

［Goodness, Virtue を参照のこと。

Insolence.　（横柄さ）

儲けを見込める相手にペコペコ取り入ることの出来る人間は、その当てのない者に対しては横柄で、高圧的になる（第一巻、百三十頁）、（第二巻、百三十六頁）。

女子供や召使に怖い顔をして脅しつける内弁慶というのは、男同士では意気地なしと相場が決まっている（第二巻、九頁）。

女性の心には、優しさや歩み寄りよりも、頭ごなしに押しつけることのほうが従わせるのには効き目がある（第二巻、十頁）。

他人に対しては、仲良くやって行くためには片方の側での我慢と忍耐が必要だと考えているかのように振る舞いながら、恩義を施すよりも受けるほうに意を用いる者もいる（第二巻、九十一頁）。

憤慨して見せると重きを置いてもらえることに気づいた人間は、滅多なことでは喜ばない（第三巻、百五十六頁）。

心の狭い人間に譲歩するのは、彼らの横柄さを承認するのに役立つだけである（同　所）。

横柄な心は卑屈さを生みだす（第五巻、百六十六頁から次頁にかけて）。

［Guilt, Libertine を参照のこと。

Judgment.　（判断）

判断を誤ることよりも、判断に背いて過ちを犯すことのほうがはるかに罪深いことである（第一巻、二百六頁）。

密接な関係を結ぼうとしている人物の気質に関して判断を下すためには、軽い失望を味わうとか、わずかに挑発されるとかした際のその人物の振舞いに注目すべきである。作為に帰すべきものは何か、本性に帰されるのは何か、おそらく決定出来ることだろう（第二巻、八十九頁）。

行動を求められた際、自己の最善の判断に則った行動をする者は、出来事が不都合なものと分かった時にも、自らを責めるところは少ない（第三巻、二十四頁）。（第一巻、九十五頁）も参照のこと。

目と心とがあまりにも強く手を結ぶと、分別に背を向けてしまうのが通例である（第三巻、百四十一頁）、（第四巻、四十一頁）。

他人の振舞いや憤りの正当性を判断するためには、自分をすっかりその者たちの立場に置いてみなければいけない（第七巻、三十三頁）。

Justice. Injustice. Right. Wrong.　（公正、不公平、善、悪）

不公平な贈与行為にあっては、贈与者と被贈与者とは［後者は不公平であるのを承知しているのだから］共に咎められるべきである（第一巻、六十一頁、九十六頁、二百三十九頁）。

人が自分の行いをどう飾り立てようと、物事にはすべて善い面と悪い面がある（第二巻、百二十三頁）。

自分を愛してくれた人々、そして、論じられている点に関しては当事者でない人々が非難する場合、女性としては自らの主張の公正さを疑うこともあろう（第三巻、百四十七頁）。

公正さや感謝の念、そして、慈善心の普通の事例を並外れたことのように扱うのは、その人間自身と交際相手とを非難するのに等しい（第四巻、七十頁）。

道楽者と見做されている私ではありますが、正邪の尺度を自分の行動基準のところまで引き下げるような真似は決してしないつもりです、とラヴレースは言っている（第六巻、二百六十七頁）。

どんなものであれ、本来の価値よりも安値で買うために、同胞の窮状につけ込むような連中は、その差額分については追剥ぎと変わりない（第六巻、三百十三頁）。

正当性を認め、肩を持ってくれる者が何人か傍にいなければ、あれほど罪深い女は出来上がらなかったのだ（第七巻、二百七十頁）。

推薦を行うに当たっては常に両当事者の利益と便宜が考慮されるべきである（第八巻、六十五頁の注、七十六頁）。

自分に投げ掛けられた非難が尤も至極なものである場合には、それらに憤慨するのではなく、そこから利益を得るようにすべきである（第八巻、九十一頁）。

正当性を欠く場合には、それらの非難を、非難を口にした者共々軽蔑すべきである。何故なら、その悪意の矛先が軽蔑によって鈍ってしまうような敵対者を、怒りによって強化するような真似は許し難いことだからである（同　所）。

慈悲に劣らず、公正さも全能の神の属性である（第八巻、九十五頁）。

Keepers. Keeping.　（妾持ち、女を囲う）

女を囲うことは出来るだろうが、地所も維持するというわけには行かない（第四巻、九十六頁）。

結婚生活をけなす放蕩児が生まれの卑しい女たちのカモになることも多いが、その女どもは妻が企てる以上に男を完全に抑えつける（第四巻、九十七頁）。

法に適った相続で地所を所有している妾持ちは、自分たちと同様に父親が結婚生活を軽蔑してくれたならと願ったりはしない（同　所）。

妾を持つ者は、父親がしたと同様に、自分の子孫に対し配慮を行うべきではないだろうか（同　所）。

自分たちのしがみついている不確かな保有条件のことを承知しており、自分たちを囲っている者たちとはまったく異なる利害関係にあるような人間からは、乱痴気騒ぎや浪費以外に何が期待出来るというのだろう（同　所）。

愛人にとっては重みを持ち得ないような多くの考えから、妻は夫への不貞を差し控えることになる（同　所）。

女を囲っている男というのは、まるで結婚しているかのように、手の切り方については無知である（第四巻、九十八頁）。

男は、妻からなら黙っていないような多くの事柄も、囲っている愛人に対しては我慢するものである（同　所）。

一般的に生まれが卑しく、教育もお粗末なわけだが、そんな囲われ女が、男の財産の共有者へと引き上げてもらったお返しに出来ることとしては、自慢したりすれば二人の恥となるような、そんな淫らなこと以外にはない（第四巻、九十九頁）。

妾持ちは年を取るにつれ、女道楽の熱が冷めて行き、規律のある家庭生活がますます性に合ってくることに気づくものである（同　所）。

自分自身ならびに私生児をめぐる様々な考えが、愛人を囲い、夫婦の絆を軽んじる者に重くのしかかって当然である（同　所）。

子孫を思いやることが出来て、温かな心を備えている男なら、きっと結婚をするはずである（同　所）。

悪の道を辿ることの自然な果実は、危険や不名誉、そして、遅すぎる懺悔である（第四巻、百頁）。

妾持ちは自らの女道楽のカモとなることが多く、自分の奥方と、あるいは、それよりも優れた女性と結ぶことが出来たかもしれない関係を、すっかり萎びてしまった浮気女と結ぶ羽目に陥るのである（同　所）。

［有名な妾持ち、トニー・ジェニンズの驚くべき物語（第四巻、百頁から次頁にかけて）、および、ベルトン氏とトマシンの物語（第四巻、百一頁）を参照のこと。

年寄りというのは、愛人が自分たちよりも若いと負い目があるように思い、どのようなことでも伏せておくことは滅多に出来ないものである（第五巻、二十八頁）。

体力を消耗させる病、それに、湯水のように金を使う情婦というのでは［ベルトンの場合のように］、今わの際に臨んで争うのには恐るべき相手だ（第六巻、二百五十四頁）、（第七巻、七十頁）。

女を囲っている男で、男を囲い込むような女を作り出さなかった者はまずいない（第六巻、二百五十六頁）。

妾持ちが今わの際を迎えると、時として、愛人からより一層の贔屓に与っている色男が妾持ちの侍医の座に納まる。死にかけている男のために遺書が出来上がっており、息を引き取るや否や寡婦の喪服が用意されるのだが、結婚を確かなものにするためなのである（第七巻、七十頁）。

［Libertine を参照のこと。

Law. Lawyer.　（法律、法律家）

法律に物を言わせるとしても、実際に破られるまでは何も出来ない（第一巻、八十六頁）。

年寄りの開業弁護士は文案作りの腕前を得意がるあまり、手早い処理には向かない（第四巻、百七十三頁から次頁にかけて）。

わずかな料金のために白を黒、黒を白と言いくるめることを引き受ける弁護士は、逃げ口上を用いて不正を蔓延させ、罪のない者から盗みを働こうと骨折っているのであり（第五巻、六十三頁）、ラヴレースも言っているように、卑劣なことでは、自分と老獪なシンクレアとの悪質な手先となったドーカスにも匹敵する（第六巻、五頁）。

〈法律〉というのは、罪を犯した者の心には当然な恐ろしい響きを含んだ言葉なのである（第六巻、四十九頁）。

それも無理はない。何しろ、この世の安逸と富を得んがために身を堕とす者たちというのは、その安逸と富を得る手段に脅威を及ぼすかに思われるものを前にすると、そのすべてに対し、恐れおののいてしまうからである、とラヴレースは言っている（第六巻、四十九頁、七十一頁）。

弱い言い分を好きな時に強いものに変えてやるのには、話の一部をうまく繕い、他の部分をはしょるだけのことだ、とラヴレースは言う（第七巻、二百十四頁）。

Learning.　（学問）

貧しい人間の子供たちは、読み書きを習い覚えると、世間の実務が進められる基となるあの卑しい仕事に就こうとしなくなるのが常である（第四巻、百八頁）。

世の中全体を通して見ると、学校教育を授かって幸せになった者一人に対し、読み書きの出来ない者たちの中では、二十人の幸せ者がいる（同　所）。

とはいえ、報いてやりたいと思っている相手を少しは引き立て、上品な仕事に就かせてやろうと願わない者はいない（同　所）。

国家の中での庶民と同じく、言葉の共和国にあって最も有用で意味深いのは短い語である（第四巻、二百三頁）。

この上なく奥深い学識を備えた人間は、つまらない説教者からでさえ、これまで知らなかった事柄、少なくとも、同じ見方をしたことのなかった事柄を聞くことになろう（第四巻、二百三十七頁）。

主として、扇情的な小説や起こりそうもない事柄を扱うロマンスから拾い集めたもので成り立つ女性の初期の学習は、女性の心を軟弱にするのにすこぶる役立っている（第七巻、二百三頁）。

Libertine. Rake.　（道楽者、放蕩者）

自分に罪があると言われて恥ずかしく思わないような事柄については、人は機会さえ与えられれば実行に移す（第一巻、五十三頁）。

道楽者である恋人は、品行方正な男よりも優先されると、贔屓する者の選り好みよりも敵対する者の嫌悪感の正しさのほうを証明することになろう（第一巻、二百頁）。

放蕩児は正直者よりも疑り深い（第三巻、五十九頁）。

道楽者というのは、自分たちがモノにした女の操の脆さを見て、女すべてを判断してしまうのだ（同　所）。

「一度屈すれば、常に従う」というのが、放蕩児の信条の一項目である（第三巻、六十

四頁)、(第四巻、百二十九頁)。

分別と知識を備えた道楽者は、いろいろと立派な気持ちや考えが浮かぶたびに、それを押し潰そうと大変な骨折りをしたに違いない。でなければ、気紛れな心が驚くほど強かったということだろう(第三巻、百十八頁)。

道楽者にとっての主な喜びというのは、愛しているかに装って見せている、当の女性の心に与える苦痛、不安、苦悩から生じているに違いない(第三巻、二百十二頁)。

信念から貞淑さと志操を守っている女性など有り得ない、と放蕩児は信じている(第四巻、二十三頁)。

贔屓をしてくれる女性が現れるたびに、女性に対する放蕩児の厳しい見方は一層固まることになる(同　所)。

放蕩児を愛した場合、街中の人間の半分、それも、街の屑みたいな連中とその男に対する利害を分かち合うといった思いを、どうして女性は耐えられるだろうか(同　所)。

祈り、涙、そして、これ以上はないというほど惨めな服従も、放蕩児のプライドに火をつけることになる(同　所)。

身代を潰したり、地所が抵当に入るとか売却されるといったこと、また、子孫を取り上げられるようなことは、道楽者との結婚の結果としてあまりにも頻繁に起こっていることである(同　所)。

自ら引き起こす悲惨な光景に馴れ親しんでいる放蕩児は、その本性とは相入れない親切心を露呈する羽目に陥るようなことは滅多にない(第四巻、八十一頁)。

放蕩児が恥と思うのは、極悪非道の犯罪行為よりも、涙に濡れたまなざしに同情を示すことのほうである(第四巻、八十二頁)。

誠実な男性に備わる熱情を放蕩児は「女性のほうではこの連中を熱愛するのだが」持ち合わせていない、とハウ嬢は述べている(第四巻、八十三頁)。

放蕩児というのは、通常、妻の黙従と厳格な貞節とを、他の男性よりも厳しく求めるものである(第五巻、二百十頁)。

陰謀好きな人間に付き纏う災難の半分でも思い浮かべることが出来るようなら、道を踏み外す者などは一人もいない(第六巻、百九十五頁)。

年老いた時に、心安らかに己を振り返って楽しみたいというのなら、決して放蕩児になるべきではない、とラヴレースも告白している(第六巻、二百四十八頁)。

放蕩児の友情や親密さというのは、生気と健康とに満ち溢れた状態にのみ相応しい(第六巻、三百八頁)。

自分の名誉心を信頼してくれる人間、また、保護の手を差し延べて当然な人間の操を奪うことが楽しみであるという、そんな男の誇りとは、何と恩知らずで、男らしさに欠けており、爬虫類よりもさらに卑しい誇りではないだろうか(第八巻、十一頁)。

色事と陰謀に耽る男性は悪魔の手先となって、気の毒な者たちをあの巧妙な罠に巻き込もうとするが、その罠がやがて男たち自身の足を絡め取ることになる(第八巻、九十五頁)。

放蕩児は猛獣よりもはるかに悪質な動物である。何故なら、猛獣は飢えと必要に迫られた時にのみ殺すが、放蕩児は気紛れと遊び心で破壊を行うからである(第八巻、百六十頁)。

［Advice to Women, Courtship, Cruelty, Men and Women, Parent and Children, Vows, Wit を参照のこと。

Little Spirits. Meanness. Narrowness.　（心の狭い者、さもしさ、卑しい心）

プライドそのものの中にさもしい心を伴っている者もおり、卑しい心がプライドと手に手を取って進むのである（第一巻、六十六頁）。

狭い心の持ち主は、大きな心の持ち主と同じように、同類を捜し出す（第一巻、六十六頁から次頁にかけて）。

心の狭い人というのは、働き掛けようと思っている相手の気質にいつも合わせようとする（第二巻、七頁）。

物惜しみをする心の狭い人たちは、施しを行うに当たっても、その善行に主たる価値を添えることになる、あの奥ゆかしい振る舞い方を知らないのである（同　所）。

一つの卑しさが別の卑しさによって正当化されることはない（第二巻、百二十三頁）。

狭量な者たちのことを恐れたりするのは、無礼な態度を助長することに他ならない（第三巻、百六十三頁から次頁にかけて）。

下劣な振舞いを見つけられた男に割り当てられるものは、いつだって卑しさと決まっている（第五巻、百一頁）。

従順な人間はいつもつけ込まれてしまう（第五巻、百二十頁）。

了見の狭い人間には悪意があり、立派な人たちを己のレベルへ引きずり下ろしたいという気持ちにさせるのである（第七巻、百八十一頁）。

同胞に対して故意の悪事を働いたという意識ほどに、人の心に卑屈な思いをさせるものはない（第七巻、二百六十一頁）。

狭量な者も寛大な人間を褒めようとするが、自分自身は別として、世間の人間すべてが虚心坦懐であってくれるのが、自分たちの目的には適うからである(第八巻、百二十九頁)。

狭量な人間は、自らの心の狭さに基づいて判断し、立派な人物の善行の動機として、プライドと誇示癖があるためだと考える（第八巻、百五十頁）。

[Covetousness, Partiality, Self を参照のこと。

Love.　（愛）

告白の形をとって勢いよく花開くほどに深く根を下ろしていない愛情の場合、怒りとか憤慨とかの木枯らしを吹きつけても、呼び覚ますわけには行かない（第一巻、七頁）。

堅実無比な心にこそ愛は深々と根を下ろすものである（第一巻、四十七頁）。

感謝の気持ちが常に愛情と見做されるわけでもない（第一巻、四十九頁）。

あの百獣の王にも似た愛が愛玩用の子犬に変わるわけには行かない（第一巻、五十頁）。

奇跡と呼ばれるような人間は、称賛の的とはなっても、愛情を呼び起こすことは決してない（第一巻、百二十九頁）。

何不自由もない人に貧窮を嘗めさせたり、寛大な心の持ち主に他人の恩義を受けさせるとか、他人を頼らざるを得ない立場を強いたりするのであるから、振り返って見ると、愛は甚だ愚かしく人目に映るに違いない（第一巻、百三十七頁から次頁にかけて）。

一般に愛と呼ばれているものは狭隘で限定された、利己主義的な感情であり、その対象が無価値なものの場合には、はなはだ下劣な感情であって、清らかな心の持ち主としては

奨励し兼ねるものである（第一巻、百三十八頁から次頁にかけて）。

プライドと虚栄心が愛の源となることも多い（第一巻、百五十頁）。

心の底から愛情を感じている人間は、一人の相手に完全に心を奪われてしまう（第一巻、百五十頁、百五十五頁）。

理性が非を唱える場合に愛は許しを与える（第一巻、百八十九頁）。

慎重な人間は忍び寄る愛の最初の動きを見張る（第一巻、百九十一頁）。

好色漢に愛情を寄せるというのは、女性としてはかなり不純なことである（第一巻、二百五頁）。

愛を手に負えないものにするためには、強い後押しがなければならない（第一巻、二百八頁）。

報いられない［あるいは、ないがしろにされた］愛はしばしば底知れない憎しみへと変わる（第一巻、二百十九頁）。

愛はライオンのように豪胆な心の持ち主を従わせて楽しむ（第二巻、五頁）。

道理や孝養心や思慮分別を供物として神殿に捧げることを期待するとしたら、愛はモレクをも凌ぐ邪神と言えよう（第二巻、五十二頁）。

恋とは、しばしば、愚かしさとか思慮のなさから生まれ、片意地で続けられて行く感情に過ぎない（第二巻、五十六頁）。

恋は猿のように忙しげで、生徒のように悪戯好きなところがある、とハウ嬢は語っている（同　所）。

激しい恋も、他の激しい感情と同様、ほんの短い間しか続かない熱情である（同　所）。

恋情というのは、ただの空想上の長所を土台にするのが常である（同　所）。

時間を掛け、分別を働かせるなら、女性が初期の激情を克服することも可能になる（第二巻、六十九頁）。

愛情と呼ばれるに値するものは、自分が満足することよりも、相手が満ち足りることを目指す気持ちをその当人に促す（第二巻、八十七頁）、（第三巻、百六十七頁）。

真の愛情にはいつも恐れる気持ちや敬う気持ちが伴っている（第二巻、百三十六頁）。

愛し合っていると、口争いにも時として都合の良いところがある、とハウ嬢は語る（第二巻、百八十三頁）。また、恋人というのは多かれ少なかれ唾み合うものだ、とラヴレースが付け加えている（第四巻、三十四頁）。

愛情などはかないものであり、その相手が道義心や美徳に抜きんでた者でない場合には、ほとんど名ばかりのものに過ぎない（第二巻、百九十二頁）。

言葉にはならない畏敬の姿勢、控え目で不安げなまなざし、そして、ためらいがちな口調さえが、真の、敬意のこもった愛の自然な表れとなる（第三巻、十七頁）。

真の愛情というものは相手に不快な思いをさせることを恐れるものである（第三巻、五十二頁）。

軟弱さこそ愛の本名である、とラヴレースは言う（第三巻、六十一頁）。

世間の者はすべて、愛に由来する過ちを喜んで許すが、世を挙げて愛には惑わされやすいからである（同　所）。

愛はいつも愛を育む者を裏切って来た　…　ラヴレース（第三巻、六十五頁）。

本来、愛は疑わないものである（第三巻、八十八頁）。

結婚へとつながる大っぴらな恋情に対しては、いかにわがままで分別を欠いたものだとしても、一般に見つけて当然な程度以上に、多くの言い訳が与えられるものである（第三巻、百五十三頁）。

一旦その胸に愛が忍び込めば、理性的な婦人たちにとって、すべてはお終いなのだ、とラヴレースは言う（第三巻、二百三十九頁）。

プラトニックラブとはプラトニックナンセンスのことだ（第四巻、百四頁）。

最初の熱情がすっかり抑え込まれた場合、克服し得た男はプレイボーイとなり、女のほうは女暴君になる（第四巻、百三十二頁）。

愛というものが、この上なく無分別な愚行の言い訳として通るのであれば、感情を抑えよという教えには、一体何の意味があるのだろうか（第四巻、二百六頁）。

相手に対して幾分かの清廉さも持ち合わせない愛とはいかなるものであろうか（同　所）。

立派な女性が結婚に同意している時、愛していることをはっきり宣言するよう強いられる必要はない（第四巻、二百四十頁）。

真の愛情の証となるのは、遠慮のない言動ではなく、敬意を忘れない態度である（同　所）。

愛は侵略者である。愛は決して後戻りをしない。抑制のない愛を満足させられるものといえば、ただ、愛の極みともいうべき行為を措いては他にない（第四巻、二百四十四頁）。

愛情と憐憫の情とは切り離し難い（第五巻、八頁）。

愛が美徳と手を結ぶことは滅多にない　…　ラヴレース（第五巻、十三頁）。

愛は蛮勇をもって鳴る人間にさえ情けを覚えさせる（第五巻、二十九頁）。

愛は一種の火であり、遊び半分で扱うと、指に火傷を負うことになる（第五巻、三十頁）。

愛情が思慮分別の統治下に入ったとか、何らかの道理の力の支配を受けたとかいうことは滅多になかった　…　ラヴレース（第五巻、二百八頁）。

愛情問題においては、女は一度期待を寄せたものを、望みのあるかぎり、いつも期待しているものなのだ　…　ラヴレース（第六巻、二百八十五頁から次頁にかけて）。

敬愛の念はそれに相応しい行動を促す（第七巻、五頁）。

束の間のものである容姿の美しさを損ねてしまう年齢ではあるが、心の美質のほうはその年齢を重ねるごとに向上することも可能なのであるから、容姿よりは心の面で女性を賛美する男性は、誠に堅固な礎の上に愛を築いていることになろう（第八巻、二十四頁）。

愛は象に鍵穴を通り抜けさせもする（第八巻、百十三頁）。

愛情というのは、たとえ正当なものであっても、威厳のある態度を相手に向かって装うことは許さない（第八巻、百二十八頁）。

最初の恋を挫かれた人間は二度目に対しては冷淡になる（第八巻、百三十六頁）。

Love at first Sight.　（一目惚れ）

賢さを自画自賛するためにも、初対面の印象が正しいものかどうか、われわれは確かめたいと願うものである（第一巻、二百九頁）。

最初に受けた印象で、その先もずっと大切にしておくのが相応しいものは珍しい（第一巻、二百三十七頁）。

浮ついた気持ちが強すぎて、義務を果たすことも分別を働かせることも出来なかったな

どと、だれであれ、若い婦人について言われて構わないだろうか（第四巻、二十三頁）。

伯爵夫人からおさんどんに至るまで、おしなべて女というのは、男が一目で夢中になってくれると、胸の内で大いに機嫌を良くしているものなのだ　…　ラヴレース（第五巻、百三十頁）。

また、顔立ちがいかに地味な女にしても、そのような男の判定の弁護となる立派な理由を二十は見つけ出すものである（同　所）。

Lover.（恋人）

落ち着き払っている恋人は確信を得ている（第一巻、四十七頁）。

密かな文通、それも、禁止に背いた文通を若い婦人に引き込むことが出来るのは、恋する男にとっては大きな成果である（同　所）。

哀感切々たる主題の筆を執る恋する男は、しばしば、愛する女を薄情にしてしまう。ただそうあるべきだというだけで、実際にはそうでないというのに　…　ラヴレース（第一巻、百五十頁）。

温和であるにせよ温和でないにせよ、恋人たちの気質は求婚期間中の物腰によって分かる（第一巻、百五十一頁）。

他人の不幸に思いやりを示す男は、良い夫となることの確かな保証を与えている（第一巻、二百二頁）。

立派な親戚の者たちでさえ少しも力を及ぼすことが出来ないような恋人に対し、女性はわずかな望みしか抱くことが出来ない（第一巻、二百五頁）。

哀願するような静かな小声が控え目な恋人の印であり、似つかわしいものである（第二巻、五十頁）。

恋人として軽蔑を感じる男に対して夫としての敬意を払うようなことは、女性には到底出来ない（第二巻、九十八頁）。

自分たちのために辛い思いをしているのだろうと想像し、憐れみの気持ちから女性がその優しい胸を波打たせているというのに、不実な恋人は何と楽しげに時を過ごすことか（第二巻、百十五頁）。

空威張りで図々しく言い寄って来るような恋人は後押しするに値しない（第二巻、百三十六頁）。

恋人にしても、式を挙げるまでは、相手の女性に対して機嫌を悪くする権利はない（第二巻、二百二十四頁）。

女性としては、恋人が去った後、自分自身に満足出来ない状態に置かれるよりも、恋人が不満を抱きながら立ち去ることのほうがまだ良い（第二巻、二百二十八頁）。

高貴な愛に動かされた人間というのは、愛する者の名誉と心の平安にとって不可欠なことはすべて、相手の希望に叶うよう努めねばならない（第三巻、六頁）。

最初の出だしを間違えると、非難のし合いにならないようにするのは大変難しい（第三巻、百十頁）。

恋人として情熱的であればあるほど、おそらく、夫となった時には一層冷淡になりそうである（第三巻、百二十九頁）。

恋人たちは二人きりになることを好み、子供一人でさえ傍にいて、自分たちの浅はかな振舞いや、それにも増して愚かしい言葉遣いの証人となることを嫌がるものである（第四巻、二百五十七頁）。

［Advice to Women, Courtship, Duty, Love, Marriage, Parents and Children を参照のこと。

Magnanimity. Fortitude. Hope. Steadiness.　（雅量、不撓不屈、希望、揺るぎなさ）

心の揺るぎなさというのは、頑迷さに陥っていない場合には優れた美徳であり、実証され、世に知れ渡るなら、人を卑劣な策謀家の手の届かない存在にする（第一巻、九十六頁）。

より良き日々に希望をつなぐのは、幸福を授かるのに半ば値することである。われわれは希望があるからこそ夢を描くのであるが、夢に相応しい人間になろうと決心を固めるのでなければ、そのような希望を抱く正当な理由は有り得るのだろうか（第二巻、百十頁から次頁にかけて）。

こけおどしをするのが大物であるかのように振る舞う者もいる（第二巻、百四十七頁）。時として男は、危険に立ち向かうことで危険を免れるのである（第三巻、七頁）。

気丈さが称賛をもって迎えられる場合にのみ気丈さを発揮すること、それこそが真の雅量というものである（第三巻、六十八頁）。

希望は活力の停滞を防いでくれる強壮剤である（第三巻、二百一頁）。

恩知らずな恋人によって甚だしい窮状に追い込まれた女性が、クラリッサと同じように、「感謝いたしておりますが、貴方は私の財産を減じてくださいました。でも、有難いことに、私の心が財産と共に下落したわけではございません。それどころか、富などに左右されない、そして、貴方などには手の届かない高い所へ、私の心は引き上げられているのです」と語るというのは、何とも天晴な話である（第五巻、百二頁）。

男性の勇猛さを愛する者は、女性の堅忍不抜さを称賛すべきである（第六巻、三十三頁）。

貧窮とか監獄とかを持ち出すことによって、束の間の災難を避けるため、正しい考えを持つ心に故意の卑劣行為を犯させることが出来ると考えるような、そんな浅ましい人間たちには、生まれつき備わっている節操の力のことはほとんど分かっていないのである（第六巻、二百七十八頁）。

立派な人間によって厳かに述べられた高邁な見解は、いわば、霊的なものに可視性を付与するのである（同　所）。

一般に、今わの際に臨んだ罪人は本物の腰抜けであり、聖者のほうは真の英雄であることが分かるのである（第六巻、三百八頁）。

満足させて構わない感情を名誉のため、そして、美徳のために抑えることの出来る女性は、崇拝にも近い賛辞すべてを受けるに値する（第七巻、百八十五頁）。

［Friendship, Goodness を参照のこと。

Marriage.　（結婚）

下劣で不釣合な結婚においては、見事な美質も埋もれてしまう（第一巻、六十六頁）。

結婚についてどっちつかずの気持ちを持たせることが出来るような独身女性は、嫁入り支度の絢爛豪華さに目を奪われ、また、一家の女主人になれるということも得意で、心はすぐに固まってしまう（第一巻、百二頁）。

愛情を感じることなど有り得ない相手と結婚するのは、正しい行為でもなければ誠実な行為でもない（第一巻、百四十四頁）。

幸せに暮らして行くことが出来る相手なのか、出来ない相手なのか、その男性についての判断は女性に委ねられるべきである（第一巻、百五十七頁）。

相手が死ぬことを期待して結婚するというのは、不誠実であり、また、恐ろしい話でもある（同　所）。

いかに素晴らしい展望が見込まれる場合でも、結婚は極めて厳粛な契約であり、真剣に考えるなら、若い娘の胸を痛めるのに十分なものである　…　クラリッサ（同　所）。

「まずは添うてみよ、いずれ愛は生まれる」というのは、ゾッとする考えである。相思相愛で結ばれた場合でも、ありとあらゆることが起こり、耐え忍ぶのもやっとという結婚生活になることもあるからである（同　所）。

夫が妻の愛情に確信を持てないような結婚は、何と不幸なものであろうか（第一巻、百五十八頁）。

自活力のある女性が余分な富を求めて結婚生活に入るとして、有力な、あるいは、特異な動機がない場合には、自分を貶めるだけのことである（第一巻、百六十二頁）。

蜜月とはいっても、昨今では、二週間続くだけである　…　アントニー・ハーロー（第一巻、百六十八頁）。

分別のある男であれば、心を開こうとしない女との結婚を望んだりはしないだろう（第一巻、百七十二頁）。

自ら選んだ男性の意向に沿うというのは、避けられるのであれば一緒になるつもりなどなかったような相手の場合に比べ、はるかに容易で楽しいものである（第一巻、二百四頁）。

結婚の本分というものを軽く考えている女性にとっては、結婚する相手は問題とならない（第二巻、二十二頁）。

嫌悪感を覚える男性と一緒に祭壇へ向かう女性は、後ほど、自分の心の平安のほうを選ぼうとしても、その男性に対して偽善的に振る舞う必要を避けるのは難しいことが分かるだろう（第二巻、四十八頁）。

便益および孝行心を動機として結婚する者は、通常、愛ゆえに結婚する者よりも幸せである（第二巻、五十六頁）。

思慮分別に富む人間は考え過ぎる傾向があり、結婚に踏み切ることが出来ない、とハウ嬢は言う（第二巻、百四頁）。

結婚を侮辱するのは社会の掟や秩序、そして、自らの先祖に対する中傷であり、家柄を誇る人間にとっては、他の者よりもさらに許し難いことである（第二巻、百三十三頁）。

いわゆる愛に基づく選択が永続的な幸せをもたらすことは滅多にない。一般に愛はその対象を真の価値以上に買いかぶり、恋する男の目に欠点が映らないようにするのだが、身近に接しているとその欠点がはなはだ目につくため、どうしてこうもひどい騙され方をしたものかと、両者とも驚くことになるのである（第二巻、百九十二頁）。

結婚生活で完全な幸せを得ようと思えば、一方の者が馬鹿であることが絶対に必要であ

る。ただ、その馬鹿者は相手の優越性を弁えていなければならない。さもなければ、頑迷な者は賢い者を失望させるだろう、とラヴレースは言う（第三巻、九十頁）。

気概のある男であれば、王女が相手だとしても、自分を取るのか皇帝を選ぶのか、わずかな間でも心の中でためらっていると思った場合には、結婚したりはしない … ラヴレース（第三巻、百三十頁）。

結婚は自分の意のままであることを承知していながら、引き延ばしを行ったり、甘んじて日取りの指定を女性に委ねたりするような男は、疑いの目を向けられると共に軽蔑されて然るべきである（第三巻、百八十頁、二百三十五頁、二百三十六頁）。

結婚とは友情の最も崇高な状態のことであり、幸せな場合には、互いに分かち合うことによって楽しみを倍加すると同時に、心配ごとも分担することで軽減するものである（第三巻、二百十七頁）。

駄目な男にしても、最初の結婚での芳しくない振舞いから良心が咎め、二度目の結婚では結構な夫になる、ということもあり得るのである（第四巻、七十八頁）。

胸の内で軽蔑しているような男性と無理やり一緒にさせられるのは、女性にとっては最も惨い運命である（第四巻、八十三頁）。

夫婦が極めて円満に暮らしている家族の中に見出したと老アントニー・ハーローは語るのだが、そのいかがわしさゆえに、彼は結婚嫌いになったのである（第四巻、百十五頁）。

結婚というのは、どちらの側にであれ、気乗りのしないところがある場合には、踏み切るべきものではない（第四巻、百五十四頁）。

結婚に際しての高額の贈与財産は妻を独立させ、そして勿論、反逆者に仕立て上げることになる … ラヴレース（第四巻、百八十三頁）。

不釣合いな結婚においては、もっと幸せに結ばれた場合には褒め言葉を受ける資格のある人間が、頻繁に非難を被ることもある（第五巻、百六十九頁）。

一般的な事例では、軽薄な娘と同様に軽薄な男にとっても、結婚に儀式やお披露目が必要なのは幸運なことである（第五巻、二百七十八頁）。

独身女性に対して男がいかなる仕打ちに出ようとも、世間の者たちは、それを助長するように、結婚が十分な埋め合わせになると考えがちである（第六巻、四十頁）（ア）。

教会での式がいつでも埋め合わせをしてくれる損害など、何だというのだと、ラヴレースはこの考えに基づいて推断している（同　所）（ア）。

結婚は女性相手に為され得る最悪の仕打ちに対する真の劇的な償いである、とラヴレースは言う（第六巻、百八十頁）（ア）。

[Advice to Women, Courtship, Husband and Wife, Love, Lover を参照のこと。

Masters. Mistresses. Servants.　（主人、女主人、召使）

（ア）（ア）（ア）これら三項目は、ラヴレースによるクラリッサ凌辱の後、クラリッサがラヴレースと結婚することを願った人々の一考に供されたものである。それらの中で説かれている主義は彼が依拠していたものであり、また、例の暴虐行為の実行を彼に促したものである。彼が自らの過ちを確信させられること、それが必要であった。その確信はクラリッサによって与えられたのである。そして、彼の完全な破滅こそが、その極悪非道の罪業の結果だったのである。

人の気質に関する判断は、その者たちの家庭内での振舞いと、召使に対する扱い方によってなされることになる（第一巻、四十九頁、百六十三頁）。

召使というものは、自分たちの住み込んでいる家に若いお嬢さんがいる場合、贔屓を作ったり、内緒の文通の手助けをしたりするに際しては、注意をしなければならない（第一巻、百二十一頁）。

寛大さの点でも方策の点からしても、主人や女主人は召使たちに信頼を寄せることになろう（第二巻、百十一頁）。

身分の低い者が卑しくない心を持ち合わせていることも少なくない（同　所）。

数の上からすると、正直な下層民のほうが正直な上流階級の人間よりも多い（同　所）。

多くの召使は信頼を裏切るようなことを潔く思わない（同　所）。

「奥様であっても、自分に疑いを掛けてただで済むと思われては困る」などと言って憚らない召使は、健全な考え方をしているはずがない（同　所）。

召使に対する主人の口の軽さは、敵が主人の秘密を嗅ぎつけるための手段である（第二巻、二百三十三頁）。

上流階級の召使というのは、主人の家系だの血統だのを、まるで血のつながりでもあるかのように得意げに吹聴するのが常である（第三巻、百十八頁）、（第六巻、十五頁）。

召使同士では、主人にとってどれほど重要なものであっても、主人の秘密が守られることは滅多にない（第三巻、百十八頁）。

召使というのは一般的に、その主人たちよりも関わり合うのに難しいところがある（第三巻、百三十五頁）。

上流の者が出くわす厄介ごとの最大のものは、自分たちの苦労を減らすつもりで雇い入れる当の召使たちに起因している（第四巻、百五十二頁から次頁にかけて）。

召使というのは、職務の点からは正当と思われない雇い方をする主人に対して、無礼な態度を取るものである（第五巻、百十六頁）。

共通の大目的で結ばれた召使連中は、互いに顔を合わせるやいなや親密になってしまうものである（第五巻、百三十一頁）。

召使は自分たちが仕えている者たちの系譜や親類縁者のことと同様、お互いの一族郎党のすべてのことを、たとえ三つの王国に散らばっていようと、すぐにも知ってしまうものである（同　所）。

［召使についてのラヴレースの意見を参照のこと（第七巻、百四十三頁から次頁にかけて。

温厚で慈悲深い気質の主人の指示がきちんと召使に守られるというのはまれなことである（第七巻、百三十六頁）。

しばしば召使は、自分自身の言葉を信じていないというような顔付きで、間違いの言い訳をするものである（同　所）。

その立場ゆえに自分たちの足下にはいつくばっている人間に対し、横柄な扱い方をするのは紳士に似つかわしいことではない（同　所）。

一家の中の最も卑しい身分の人間に対しても、主人たる者は保護の手を差し延べる義務がある（同　所）。

褒美をたっぷりと与え、罰するに当たっても時機を失わず、適切に処置する者は、しっ

かりと奉公してもらうことになる（第七巻、百四十三頁）。
育ちの良くない人間を支配する秘訣は、仰々しい言葉というよりも威厳を湛えた顔付きにある（第七巻、百四十四頁）。
使用人連中にきちんと給金を払わない主人、あるいは、秘密を打ち明ける主人は、連中のなすがままになってしまう（同　所）。
使用人の分際で機知を飛ばすのは、仲間相手の場合を除くと、生意気に当たる　…　ラヴレース（第七巻、百四十五頁）。
理不尽と思われるような命令に対し、敢えて諫めごとしようという場合、召使としては頃合を計り、遜った恭しい態度をもって行うべきである（同　所）。

［Generosity, Goodness　を参照のこと。

Meekness.　（従順さ）

辛抱強い気質の人間は多くのことを我慢しなければならない（第一巻、二十二頁、三十八頁、四十四頁、九十六頁）、（第二巻、百三十頁、二百四十八頁）、（第三巻、九十七頁）。だれよりもおとなしい人間は、挑発された場合、通常、だれにも負けない断固とした態度を取るものである（第一巻、六十五頁）。（第一巻、三十八頁）も参照のこと。
忍耐強い人間が、大概は、真に勇敢な人間である（第二巻、四十四頁）。
従順な気質と奴隷根性とはまったく別個の特性である（第一巻、百六十一頁）、（第二巻、百四十七頁）。
従順さと忍耐心は女性特有の美徳である（第三巻、百二十九頁）、（第四巻、百六十四頁）。
困難な折に心の落ち着きを保つということは、何ら従順さと矛盾するものではない（第五巻、百五十三頁）。
不当に疑われた品性の弁護に当たっている人物に見られる気性のおとなしさは、当該の事例に関し、告発者のものを凌ぐ心の広さを証明している（第六巻、百四十五頁）。
家の外で柔和な人間が家の中でも柔和だとはかぎらない（第六巻、三百二十七頁）。
「また、もしもそうなら、本気でそう考えるのですが、柔和さのことで一層その人たちを好きになったりはしないだろうと思うのです」と、ハウ嬢は言う（同　所）。
温和さ、優しさ、従順さこそは、本物の洗練された淑女を特徴づけるものである（第八巻、百三十五頁）。

［Goodness, Violent Spirits　を参照のこと。

Men and Women.　（男と女）

しつこく付き纏う男が役に立つのは、精々のところ、人前に出た際に女性に虚栄心と自信を抱かせてくれることくらいだ、とハウ嬢は言う（第二巻、二頁）。
英雄にしても恐怖に襲われることはあるのだし、臆病者がそれなりの勇気を奮う時もあれば、操の堅い女にだってきわどい瞬間というのはあるのだ　…　ラヴレース（第四巻、二百六十九頁から次頁にかけて）。
どの年齢であれ、人生のどのような段階にあるせよ、女性が独り立ちをするのは至当な

ことではない（第五巻、四十八頁）。
決まった相手のいない娘というのは、人を愛することはないかもしれないが、憎むことも滅多にない（第五巻、百八頁）。
女は自分が思いのままに出来るような男は蔑むものである（第五巻、二百五頁）。
名誉を重んじる男は我が身を軽くするために女性に重荷を背負わせたりはしない（第六巻、二百六十六頁）。
人というのは付き合う仲間によって分かる（第六巻、二百八十六頁）。
ずいぶん分別がありながら、同時に、ひどく馬鹿げてもいる。人間とは何と多様で、何と愚かな生き物であろうか（第七巻、二百八十五頁）。
書き物に喜びを見出している女性というのは、打ち解けた文体に備わる美点のすべてに関して、男性よりも優っているのが通例である（第八巻、百五十四頁）。
十八歳の淑女が（世間中を見渡しても）二十五歳の男性よりも思慮分別を備え、話し合うに相応しい存在であると、ハウ嬢は自ら進んで述べている（第八巻、百六十五頁）。
[Advice to Women, Courtship, Duty, Friendship, Love, Marriage を参照のこと。

Merit. Demerit.　（取り柄、欠点）

自分の評価を上げるために他人をこき下ろす時以上に、その人間の取り柄のなさの証となるものは有り得ない（第二巻、百六十頁）。
真の価値を備えた人間というものは、その身に寄せられる恩恵のすべてを受ける資格を有する（第三巻、百十七頁）。
嫉妬心そのものが声を失ってしまうほどに衆に秀でた立派さや取り柄も存在するかもしれない（第四巻、四十四頁）。
好意を受けるに相応しい人間になろうと決意もせずに、好意の印を期待するのは、厚かましい話である（第四巻、百五十四頁）。
われわれは相手の功罪に即して、好いたり嫌ったりするように努力すべきである（第四巻、二百六頁）。
大きな美点というのは遠慮がちなものである。遠慮がちなところも、必ずしもプライドに基づいているわけではない（第七巻、二百九十頁）。
[Goodness, Praise を参照のこと。

Minutiae.　（瑣末事）

重大な結果は、偉大な人物と同様、時としてその重大さを小さな原因やちょっとした偶然に負うている（第三巻、三十一頁）。
疑問ないし疑念の出そうな点すべてについて、極めて些細な事柄が強力なことこの上ない主張よりも重要性を持つものである（第三巻、百三十九頁）。
強力な発動機も小さなバネで動いていることが多い（第四巻、二百五十一頁）。
最も重要な事柄に関して、極めて些細な状況が大いに役立ってくれることが多い（第六巻、九頁）。

重大な企てすべてにおいて、細かな点に拘るのが大切である（第六巻、六十六頁）。
そのためにもっと重要な事柄が疎かにされたりしない場合には、些細な点に拘ることがあっても良い（第七巻、二百三十九頁）。

Modesty. Audacity.（慎み深さ、厚かましさ）

内気な人間は、挑まれると、身に覚えがなくてもおどおどする（第一巻、四十七頁から次頁にかけて）。
大胆で自惚れた人間は自分の欠点に気づかず、思い上がった態度を取るが、一方、本当に立派な人間は控え目なため、胸中を明かすことも出来ずにいる（第一巻、六十五頁）。
他人が持つ称賛すべき点を見つけ出すことに楽しみを感じているような人間が、自分自身に備わる美点に気づかないなど、どうしてそのようなことが考えられようか（第二巻、四十八頁）。
自分自身に顕著に目立つ美点ことごとくを持ち合わせていないからといって、慎み深い女性はその者たちを軽蔑したりしない（同　所）。
放蕩者の手中に自ら身を投じる淑やかな女性にとって、そのような冒険はすこぶる手に負えないものがある（第三巻、百二十五頁）、（第四巻、八十一頁）。
控え目な人間は心の中に宝を秘めており、励ましという鍵さえあれば心を開き、輝きを放ってくれるはずである（第三巻、百五十頁）。
控え目な女性は控え目な男性の連れ合いとなることを望みはしないだろうか。そのような男性の前で、そして、その男性に向かって口を開くと、話すことすべてを高く評価してくれることは確かであろうし、女性にも快い自信を吹き込んでくれるのである（第三巻、百五十頁）。
本当に慎み深い女性というのは、自惚れの強い男にさえ遠慮の気持ちを抱かせる（第四巻、百七十五頁）。
放蕩児の心は慎み深い愛情はもとより、控え目な態度で尽くすことの美しさや優雅さを味わうことは出来ない（第六巻、三百九頁）。
大胆な者たちが、仮にそのようなところを持ち合わせていたとして、あっさりと克服してしまうようなちょっとした几帳面さにしても、内気だとか臆病だとかいう人間はすぐに拭い去ってしまうことはない（第六巻、三百十七頁）。
女性がこのような道楽者の弄びもの、そして、嘲笑の的となりますのも、まことにもって尤もな話です　…　ほんのちょっと思い返して見るだけでも、分かるのではないでしょうか。真の価値を備えた人間は控え目に違いないということがです、とハウ嬢は言う（第六巻、三百二十八頁）。
自らの威厳を意識しつつ慎ましやかに振る舞う乙女を特徴づけるものは、遠慮のなさと慎み深さとがうまく融合した態度である（第七巻、百五十九頁から次頁にかけて）。
控え目な男性は、他人の目にもそうだが、自分の目にも自分自身が小さく映るようなことになってはいけない。もしもそのようなことになると、気後れを感じ、言動のすべてにぎこちなさが出てしまう（第七巻、百七十九頁）。

[Advice to Women, Blushes, Delicacy を参照のこと。

Obligation. Oblige. Obliging Temper.　（恩義、願いを入れる、世話好きな気質）

実際的な面で役に立ちながら、表向き突き放した態度を取るというのは、半端な世話しかしていないことになる（第二巻、二百十三頁）。

面倒見の良い気質の人間というのは、自ら面倒を背負い込んでばかりいる（第二巻、二百四十三頁）。

恩恵を施すことの出来る人間は迷惑を掛ける力もある。他人に不快を覚えさせる力のないほうが幸せな人間もいるのである（第三巻、二十九頁）。

世話を受ける立場の人間は不平を言ってはいけない（第三巻、三十五頁）。

慈善心に富む心の持ち主にとって、恩義を施す力というのはかけがえのないものである（同　所）。

美徳とか立派な習慣とかを危険に晒すことなしに願いを入れることが出来るような事柄の場合、たやすく説得に応じるのは良いことである（第八巻、百六十九頁）。

［Friendship, Generosity を参照のこと。

Obstinacy. Perverseness. Frowardness. Pertness.　（頑固、強情、つむじ曲がり、生意気）

天の邪鬼はひどい言い方をし、かつ、曲解する（第一巻、百六十五頁）。

不誠実だと思われるよりは、意固地だと思われるほうが良い（第一巻、二百三十九頁）。

親とか後見人とかから出た縁談に対し、しばしば娘はつむじ曲がりな考えのゆえに、また、それ以外の理由なしに反対するものである（第二巻、百二十四頁）。

一人前の女に成長した生意気な娘は両親のことを年寄り扱いするが、その年齢に見合った敬意を払いはしない（第四巻、百十六頁）。

悪事を働いていることを確信している人間と言い争うのは、言い訳を見つけ出す巧妙さを身につけさせ、その心を頑なにするだけのことである（第五巻、百六十頁）。

実行に移したりするのがどれほど理不尽な事柄であれ、われわれは心に掛けた願いを容易に諦めはしないものである（第六巻、二百四十七頁から次頁にかけて）。

頑固さや宥め難さは、健康の衰えている者の場合には、芳しくない兆しである（第六巻、二百九十六頁）。

生意気な娘というのは、恋する男にとっては、御し難い妻となることの紛れもない警告である（第八巻、百二十八頁から次頁にかけて）。

［Duty, Parents and Children を参照のこと。

General Observations and Reflections.　（一般的所感ならびに考察）

平民の家庭内でさえ陰謀が渦巻くのであるから、宮廷の奸臣たちが互いに権謀術数を弄したからといって何の不思議があろう（第一巻、六十三頁）。

悪事を唆されることのない者はだれでも良い子になり得る（第一巻、百三十四頁）。

用心深さが強欲さと呼ばれ、強欲さが用心深さ、不品行が愛想の良さ等々と呼ばれることがあまりにも多い（第一巻、百六十五頁）。

吟味すると、すっかり悪に染まっていることが露見しがちな場合には、人は深謀遠慮から、人柄の半分を救うために片方を犠牲にするかもしれない（第一巻、二百六頁）。

度を越す者は、避けるつもりの間違いを犯すことが多い（第二巻、四頁）。

異常なこととというのはすべて直ぐに落ち着くものである（第二巻、四十五頁）。

世間の辛い仕打ちを味わいながら、心を閉ざしたり、頑なになったりはしないというのであれば、世間とは極めて不公平な関係になることだろう（第二巻、八十九頁）。

極端に走ることを避けようとする者にとって、もう一方の極端に陥らずにいるのは非常に難しい（第二巻、百二十一頁）。

われわれが一番の喜びの種としているものが、しばしば、われわれを懲らしめる道具となる（第二巻、百八十五頁）。

一方からの賄賂で卑劣なことを引き受ける人間は、もっと金を積まれれば、しっぺい返しに卑劣な行為をやってのける（第三巻、七十八頁）。

身内から借金をすると、自分の暮らしぶりや行動についての審問に我が身を晒すことになる　…　ラヴレース（第三巻、九十一頁）。

小売商というのは細かな商いをやっており、一ペニーの買い物をしてくれる客のほうを一ポンドのプレゼントよりも有難がる。それが連中の流儀だからである。しかし、どちらも拒みはしない　…　ラヴレース（第三巻、百二十頁）、（第五巻、百三十頁）。

野望を持たない人間に賄賂を使ったところで、どれほどの効き目があるのだろうか（第三巻、百二十一頁）。

意地を張って他人の間違った行動を弁護しようとする者は、同じような状況では、同じ過ちを犯すことを示しているかに思われる（第三巻、百四十八頁）。

神の造った生き物すべては、多かれ少なかれ、敵対状態にある（第三巻、百五十八頁）。

好ましからざる出来事をわれわれは遺憾に思いがちであるが、願いの叶った喜びがより幸せなことかどうか、定かではない（第三巻、二百三頁）。

自分に宛てられたものではない手紙の封印を破り、文面に目を通す人間にとっては、実行をためらうような事柄はほとんどない（第三巻、二百二十四頁）。

断りの言葉を切り出すのよりは、すでに断ったことに固執することのほうが楽である（第三巻、二百五十六頁）。

動機は何であれ、度を越したことは取り返しがつかない（第三巻、二百六十二頁）。

凡庸な者たちの定めである災難の大部分は、身の程を知らない望みを抱くとか、自らの値打ちが低いとか、そのどちらかから生じている（第四巻、四十五頁）。

加害者への同情からにせよ、あるいは、被害者への悪意からにせよ、どれほど不正な理由にも何人かの支持者は見つかるものである（第四巻、九十九頁）。

何であれ、計画中の出来事を目指すに当たって、われわれは心を奪われるあまり、諸々の事象に目を向けても、すべての障害が取り除かれ、選択するだけとなった場合に映るのと同じ姿で眺めることは出来ないのである（第四巻、百十頁）。

幼児の頃から成人するまで、われわれが追い求めるものは、年格好や考え方に見合うようその種類や大きさこそ違うが、どれもこれもくだらないオモチャにすぎない（第四巻、百九十三頁から次頁にかけて）。

下層階級の連中というのは、面白くもない不思議な話をのべつ狙っている（第四巻、二

百十頁)。

そうすることで一番目の欲求を助長あるいは充足出来る場合には、二番目の欲求は容易に捨て去ることが出来るものである(第四巻、二百三十三頁)。

人間にとっての善と悪とは、すべからく相対的なものである(第四巻、二百六十七頁)。

堅苦しいのが礼儀ではない。礼儀正しくとも堅苦しいのはいけない(第五巻、五十頁)。

好ましい事柄もわれわれの手元に届く際には混ぜ物を伴っているのが常であり、それが好ましい事柄のもたらす喜びを大幅に減じるのである(第五巻、九十頁)。

素晴らしいものを獲得しても、王冠を入手した場合ですら、慣れてしばらくすれば、何の意味も持たなくなる(第五巻、百二十七頁)。

訴えごとをする場合、訴えを受けた人間はプライドと優越感を持ち、訴え出た者は、自分自身の目にさえ卑しい姿に映る(第五巻、百六十五頁)。

反対は友情を堅固なものにし、愛情を生み出し、あるいは、確認することが多い(第五巻、二百一頁)。

同一人物にしても、同居人の場合か訪問者の場合かで、通例、大きな違いが見られるものである(第五巻、二百十四頁)。

だれにも、また、どんなものにも、汚れた面と清らかな面の両面があり、他人の幸福を願う者と不幸を願う者が共にそれを活用するのである(第六巻、百二十七頁、百六十九頁)。(第五巻、七十七頁)、(第七巻、二百二十四頁)も参照のこと。

最初は小さく、一人の人間に限られている災いも、やがて広がり、家族全員を巻き込むことが多い(第六巻、百五十四頁)。

敬意を表す語も、憤慨や侮辱を意味するように発音されることも有り得る(第六巻、百六十六頁から次頁にかけて)。

冗談の種にされるのに一番耐えられない人間が、他人に向けられた冗談を最も楽しむものである(第七巻、百十一頁)。

言い分に弱みがあると、ずいぶんと不利な立場に立たされる(第七巻、二百十三頁)。

並外れた心の持ち主は尋常さの枠を越えた行動を避けることが難しい(第七巻、二百四十頁)。

バラが棘なしに育つことを期待してはいけないが、バラの棘は有益でためになる棘であり、あまりにも急いで摘もうとする者の指を刺すことで、以後は注意するよう教えてくれるのである(第七巻、二百六十三頁)。

楽しみごとは困難が伴うと鋭さを増す。あまりにも容易に得られたものは、通常、面白みが失せてしまう(同　所)。

だれかに責任のあることが明らかな場合、通常、居合わせない者が重荷を背負うことになる(第七巻、二百七十八頁)。

現実の狂気というものは(正気でいる時間から切り離すと)、しばしばその狂気をもたらすことになる宙ぶらりんで不安な状態に比べ、はるかに幸せな状態に違いない(第七巻、二百八十二頁)。

将来の偶発的事態を前提とした決心は、将来の決定に委ねるのが最善の方策である(第八巻、百二十二頁)。

われわれに加えられ得る最大の罰は、しばしば、われわれ自身の願いを叶えることであ

ろう（第八巻、百三十八頁）。
自発性に委ねると、すべてうまく行くが、制限したり強制したりすると、軽い荷物も重くなってしまうものである（第八巻、百六十六頁）。

Oeconomy. Frugality. Housewifry.　（倹約、つましさ、家政）

われわれはつましさにより、公正かつ寛大になることが可能となる（第四巻、百十五頁）。
倹約の心がなければ、どんな地所も十分に広いとは言えず、倹約が行われるなら、どんな小さな土地でも狭すぎることはない（第四巻、二百二十七頁）。
帳簿から逃げ出す人間は、やがて自分自身から逃げ出すことが出来るのを喜ぶようになる（第六巻、二百七十二頁）。
つましさは必要不可欠な美徳であり、吝嗇は憎むべき悪徳である（第八巻、百五十七頁）。
早起きと、充実した長い一日を過ごすことによって、どれほどのことが成し遂げられるのか、信じられないものがある（第八巻、百六十五頁）。
早起きをして時間を有効に使う者は、他の人間が二十六歳で生きた年数よりも多くの年数を、十六の年齢で生きたと言って構わない（同　所）。
厳密な収支決算を行わない者は、どのような帳簿にせよ、滅多につけることはない（第八巻、百六十八頁から次頁にかけて）。

Palliation. Evasion. Excuse.　（言い訳、言い抜け、口実）

善い人間は騙すのを目的に言い訳をしたりはしない（第二巻、百九十頁）。
狡猾なごまかしは率直で包み隠しのない心に相応しくない（第三巻、百五十二頁）。
悪いことをしてやろうと計画しながら腰を下ろしていられるような人間が、粗末な口実で満足していても、別に不思議はない（第六巻、三百八頁）。
故意で計画的な悪事には、いかなる言い訳もなされるべきでない（第八巻、百五十三頁）。

Parents. Children.　（親、子供）

厳しさも場合によっては温情となる（第一巻、三十九頁）。
無用の監視や不当な束縛は手管や策略を誘い出すことが多い（第一巻、四十頁）。
娘の親は恋人を敵に回して乱暴なことをするが、それがかえって恋人には好都合になることも多い（第一巻、四十六頁、百三十二頁、百五十二頁）、（第二巻、百六十八頁）。
娘などというのは、他人の食卓に供するために育てた若鶏のようなものだ、とジェームズ・ハーローは言っている（第一巻、五十六頁）。
我が身を守るためとはいえ、親の落ち度を暴露せざるを得ない感心な子供の立場というのは、不幸なことこの上ないものであろう（第一巻、六十三頁、百三十六頁）。
いつまでも遠ざけておきたい二人の人間を、同じ利害関係で結び付けるのは、親としては策のない話である（第一巻、六十四頁から次頁にかけて）。

親の権威は神聖なものと見做されるべきではあるが、親の行動にもそれなりの根拠があって然るべきである（第一巻、六十六頁）。

子供の心を惹きつけようとする場合にも、目がうんざりさせられるようなことはあるべきでない（第一巻、七十七頁）。

感心な娘というのは、世間の者すべてから愛想の良い人間と見られるよりも、友人や身内の目に愛すべき存在と映ることを望む（第一巻、百二十五頁）。

汚い仕打ちは、しばしば、それによって挫くことを意図された事柄そのものを招来せしめるのである（第一巻、百四十四頁、二百八頁）、（第八巻、百三十六頁から次頁にかけて）。

家族内の争いにおいては、和解のための方策がすべて講じられた場合、どのようなことが起ころうとも、和解への努力を行った人間には自分を責める点は少ない（第一巻、百四十五頁）、（第三巻、三十三頁）。

不幸な結婚生活を送る若い淑女で、振り返ってみて、自分は身内の者たちの忠告に従ったのであり、自分の不幸は我が儘な気持ちのせいではないのだと言える者にとって、心の慰めはどれほど大きいことであろうか（第一巻、二百頁）、（第二巻、百九十二頁）。

厳しい親から子供が受ける辛い仕打ちと、諂い上手の恋人から向けられる追従的な敬意との違いは大きく、親の手を逃れるため、恋人とあらゆる危険を冒すことを娘に思い立たせるに足るものがある（第一巻、二百五頁、二百六頁から次頁にかけて）。

親というものは、若い頃には自分たちにも加えてもらいたいと思ったはずなのだが、若者のために斟酌を加えようとしないこともある（第二巻、五十七頁）。

親たる者は、経験が自分たちにもたらすのと同じ程度の力を、忠告が子供たちに及ぼすことをいつも期待してはいけない（第二巻、五十七頁から次頁にかけて）。

忠告を与え、また、諫めごとをするに当たって、両親や後見人は忍耐強く穏やかに説き聞かせるべきであるが、納得させようと願いながら、態度を硬化させるようなことになってはいけないからである（第二巻、五十八頁）。

親の側での思いやりに欠けた情況、そして、子供の側の無思慮さは、互いに善かれと願って行う議論において、些細な違いを大きなものにしてしまう（同　所）。

嫌いな男との結婚を子供に強要することで、親は子供の道徳意識の完全な消滅と、その結果として、永久的な精神的破滅を引き起こすかもしれない（第二巻、六十九頁から次頁にかけて）。

子供が抱く嫌悪の情と我が儘な気持ちとは区別されるべきである（第二巻、百三十六頁）。

自由な心に圧力を加えようと骨折るのは、心の操を奪うことである（第二巻、百七十一頁）。

張り過ぎた弦は弛められるか切れてしまうか、そのどちらかにならざるを得ない（第二巻、百八十三頁）。

今は嘆かわしいものと考えているかもしれないが、親の取った手段を自分に対する最高の恩恵と考える時が、いずれ子供にも訪れる可能性はある（第二巻、百九十四頁）。

親の意向に背く子供の態度が頑なになればなるほど、親のほうでもますます、主張を通さなくては沽券に関わると考えがちになる（第二巻、二百一頁）。

訴えを起こすとか、あるいは、その他の方法によって、親が不必要に子供を晒し者にすると、子供のほうでは、何をしたところで、自分がすでに嘗めているもの以上の不面目を

招く心配はないと考えがちになる（第二巻、二百八頁）。

過酷で残忍な仕打ちは子供を卑屈な気持ちにさせ、自分自身の目にも卑しい姿を呈することになる（同　所）。

［そうなると、別の立場では軽蔑していたはずの男のカモとなるべく、娘はその途についていることにはならないだろうか。

感心な子供にとっては、親孝行が出来なかったと述べるよりも、両親のほうに自分への思いやりがなかったのだと言えることのほうが嬉しいものである（第三巻、十七頁）。（第一巻、九十五頁）も参照のこと。

時機を過たず慈悲が施されるなら、後悔している子供を完全な破滅から救うことにもなろう（第三巻、三十六頁、八十六頁）、（第四巻、二百六十二頁）、（第六巻、百二頁）、（第七巻、二百六十六頁）。

子供から分け隔てのない愛を間違いなく寄せてもらいたいと思う父母は、喜んで両方の親を敬いたい気持ちでいるのに、どちらの側についたら良いのか、子供たちが困ってしまうような、そんな長たらしい夫婦喧嘩は避けるべきである（第三巻、百四十二頁）。

やむなく強情な娘を束縛するに際して、立派な親はそのような娘に与えるものよりもさらに大きな苦痛を味わっているに違いない（第三巻、百四十八頁）。

娘にとっては、未婚のうちは幾つになっても、親の翼が周りを飛び交う忌まわしい猛禽類から身を守る最も有効な保護手段となる（第三巻、百四十九頁）。

親は、自らの義務を果たせなかったことに関し、我が子に対してその責任を問われることはない（同　所）。

親が自分たちの在るべき姿を忘れてしまうなら、子供たちの心から尊敬の気持ちは消えがちになる（第四巻、百十七頁）。

両親とその子供たちは、離れて暮らし、滅多に顔を合わせない場合には、他の恋人たちと同じように、互いの一番良いところ以外は見せないようになる（第四巻、百二十六頁）。

甘い親が幼児期の我が子に対して大目に見てきた悪い性質は、子供たちが成長するにつれて、自分たちの悩みの種となることも少なくないのである（第五巻、九十頁）。

男の下心から娘たちを守ることと同様、女友達を選ぶに当たっても娘たちに指示を与え、また、女中たちの不貞行為に警戒の目を光らせることも必要である　…　ラヴレース（第五巻、二百三頁）。

元来はこの上なく甘い親が、子供の犯した間違いゆえに、冷酷だとの非難を受けることも多い（第六巻、百一頁）。

それゆえ、軽率な行動によって自分の名を汚すだけではなく、最も崇められている者たちの評価を落としてしまう子供は、二重に非難されるべきである（同　所）。

これ以上はないほど未頼もしいすべり出しをしていながら、その身に破滅を招き、身内の者たちには苦悩をもたらした子供が振り返って考える時、その心にはどれほどの困惑が伴うことであろうか（同　所）。

真に悔い改めている子供の有利に働くよう、人間の本性から発している声は最後には聞き届けられるに違いない（第六巻、百三頁）、（第七巻、二百三十三頁）。

娘があることに執着している場合、母親としては（その事柄がさほど重要なものではない場合には）、猛烈に反対するよりも、娘と手を結ぶようにするのが良い（第六巻、百五十

三頁）。

親たる者は、不必要に権威を行使することで、その権威を弱めてしまわぬよう注意すべきである（第六巻、二百五十二頁）。

以前は優しかった両親の心を我が子から背かせるとは、その子供の罪は何と由々しいものであろうか（第六巻、二百七十五頁）。

感情を害された親の残酷さから来る憤りなのだと、子供たち、そして、世間の者たちまでが考えているものは、過度の愛情や、望みを挫かれたことに由来するのかもしれない（第六巻、二百八十頁）。

容赦のない親たちも、自分たちの親にとっては、いつもおとなしく、親孝行で従順な子供であったのだろう、とハウ嬢は言う（第六巻、三百二十一頁）。

子供の短気な気性を治したい親は、自ら堪え性のなさを露呈してはいけない（同　所）。

親の気質に見られる弱さを頼りにしているうちに、子供たちは自分自身の心を頑なにしてしまうのである（第七巻、二十四頁）。

子供が間違っていると考える時、独自に判断する権利を有することでもであり、両親は大幅な情状酌量を行うべきである。不満を覚えるまではいつも優しく、甘やかしていたのであれば、なおさらの話である（第七巻、三十三頁）。

良い子というのは、子供に恵まれた幸せばかりでなく、相手に恵まれた幸せを両親に感じさせるが、悪い子は両方について不幸を覚えさせる（同　所）。

一番の近親者が不幸な子供を見捨てる時、だれもが進んでその子供の悪口を広めることになる（第七巻、八十四頁）。

過酷で厳格な親の場合でさえ、良い子は親に背いて徒党を組むことには用心するものである（第七巻、百六十五頁）。

大きくなった娘にとって、自分よりも明らかに才能が劣っている親に対し、愛情と共に敬意をも寄せているように見てもらうためには、高度の理解力と分別が求められる（第八巻、百二十八頁）。

子供たちの尊敬を維持するためには、両親は自分たちの振舞い、態度、あるいは、信条の中に、他人に備わっている場合、自分たち自身が容認しようとはしないものが紛れ込んでいるのを、子供たちには一切見出させないよう、大いに注意すべきである。（同　所）。

度量の狭いことが明白な親は、活発な気性の子供に対し、必ずやその権威を弱めてしまう（第八巻、百二十九頁）。

[Advice to Women, Courtship, Controul, Duty, Marriage, Love, Lover を参照のこと。

Partiality. Impartiality.　（依怙贔屓、公平）

人は助言を求められると、間接的に自分の類例を念頭に置いて忠告することが頻繁にある（第一巻、四十七頁）。

好意とか愛情とかを持つと、実際にある欠陥にも気づかないことが多い（第一巻、九十四頁）。

われわれは恩人を褒めそやす傾向があるが、われわれに恩を施してくれたからなのであ

り、まるで、親切なことをしてくれるかくれないかで、人の行動の善し悪しが決まると言わんばかりである（第一巻、百十六頁）。

他人がわれわれやわれわれの振舞いを判断する際に取ると考えて当然な姿勢で、われわれとわれわれに関する事柄を自ら判断するように努力すべきである（第一巻、百三十七頁）。

疑いを持たれている人間とか罪に問われている人間がそれぞれにいきさつを語り、信用してもらうようなことになれば、この世に罪人などは一人としていなくなるだろう（第一巻、百九十頁）。

だれにせよ、自らの過ちを正当化するために、他人の過ちを弁護すべきではない（第二巻、六十頁）。

人間の本性というのは、自らの短所を痛感しているゆえに矯正することを好むが、その目を内側よりも外側に向けようとする（第三巻、百五十一頁）。

われわれはしばしば自分の内部に目を向けるが、自らを公正に裁くためではなく、責任逃れをしようという決心からである（第三巻、百九十六頁）。

自分よりも相手が優っていることに同意するのは、いかにそれが明白であっても、恋情が絡んでいる場合、女性には難しいことである（第三巻、二百三十三頁）。

自分の意に沿うことのために用いられる場合には、下手な議論でも通用する（第四巻、九十三頁）。

狡猾な人間は、裁定者の感情や興味に深く訴え掛け、そうあってはいけない場面で上首尾を収めがちである（第五巻、七十七頁）。

罪を犯した者が裁く人間と同じベンチに腰掛ける場合、その言い分はよくよく審理されねばならない（第五巻、百四十五頁）。

愛する者の中に見つけたいと願う美点がどのようなものであれ、われわれは進んでそれを見つけ出そうとする（第五巻、二百四十二頁）。

身勝手さには危険な誘惑が伴う（第六巻、百三頁）。

公平な心の持ち主は、罰せられて然るべき過ちを犯した場合、友人が許してくれるとしても、自分を許すことはない（第六巻、百四十二頁）。

人の期待に背くのを最も喜ぶ人間が、期待を挫かれることに最も耐えられないものである（第六巻、二百二十三頁）、（第七巻、二百四十四頁）。

多くの人間は正誤の判断基準を己自身の姿、そして、自分では避けることの出来ない姿に求めがちである（第七巻、五頁）。

不器用な人間にとっては、不器用さこそが完成の極みということになる（同　所）。

自我を捨て、自分に不利な判断を行うのは難しいが、公正な判断のためにはそうすべきである（第七巻、八十頁）。

苦しんでいる人間は、自らの主張点や長所への思い入れが強くなるものである（第七巻、二百三十頁）。

立派な心の持ち主にとって、その行いに軽蔑を感じるような人間を拒絶するのは（以前にはどれほど好意を寄せていたとしても）、少しも難しいことではない（第七巻、二百六十一頁から次頁にかけて）。

[Prepossession を参照のこと。

Passions.　（激情）

感情を抑制する力こそはクラリッサが誉れとするものであり、また、人間の心の最大の栄誉のひとつでもある（第一巻、二百五頁、二百八頁）。

男と女の立ち居振舞いや感情の動きについては、その縮図が彼らの幼児期に見受けられる（第二巻、五頁から次頁にかけて）。

怒りの感情が克服され得ないとしたら、悪い習慣がより大きな誘惑と手を結び、さらに強い力を添えているような感情は、いかにして抑制されるのだろうか（第二巻、八十八頁）。

感情の激しい人間のその気性の激しさを利用し、われわれの思惑どおりにさせるのは簡単なことである（第二巻、百六十二頁）。

粗暴さと追従とが代わる代わる用いられると、女性の感情は動き続け、その挙げ句、疲れ果てた女性は争う気もなくなる　…　ハウ嬢（第三巻、百二十七頁から次頁にかけて）。

興奮している人間は、互いに数ヤードと離れていなくても、道を間違え、元の道に戻りたがっている旅人同士のように、大声で呼び合う（第三巻、二百三頁）。

思慮分別のある女を怒らせるのがどこの世界でも魅力的であることは、舞台での怒鳴り合いの場面の受け具合が証明してくれる（第三巻、二百四十七頁から次頁にかけて）。

抑制しようと骨折ることのない、そんな女性の熱情は、我が儘で乱暴な男性を極悪非道な罪の犯行へ急き立てる感情と同一の源［および傾向］を有しているかもしれない（第三巻、二百六十二頁）、（第四巻、百四十一頁）。

激情は体に力を与え、恐れは体の力を殺ぐ（第四巻、三十六頁）。

激情は表情を歪め、ハンサムな人間をも醜悪にする（第四巻、百四十四頁）。

穏やかな人間の感情は、短気な者の感情よりも動かされるのに時間が掛かるが、掻き立てられた時には、通常、最も燃え上がるものである（第四巻、百五十一頁）。

妻が癇癪を起こしたりするのは、厚かましいし、無分別なことでもある、とラヴレースは言う（第四巻、百六十四頁）。

激情や悪意に駆られると、ものごとをひどく歪めることになる（第四巻、二百二十五頁）。

情熱の激しさが乱暴でふしだらな行為の弁護として［少なくとも、言い訳として］、女性と世間の両方から受け入れられることがあまりにも多い（第四巻、二百四十頁）、（第六巻、四十頁）。

女性の激情を［彼女の慎みの心を踏み躙った際のことだが］その極みにおいて抑えることが出来るというのは、魅力的な前兆である、とラヴレースは言う（第五巻、九十二頁）。

気性の荒い女性のほうが落ち着いた気質の女性以上に、狡猾な男性からの危険に晒されることが多い（第五巻、二百頁）。

情熱的な娘たちというのは心の動きに激しいものがあり、賢い者はその変わり易いところを思いどおりに弄ぶ、とラヴレースは言う（第六巻、二百四十七頁）。

感情の激しい、望みを挫かれた女性の行動やその手口を説明出来る者などいるのだろうか　…　ラヴレース（第六巻、二百六十八頁）

感情の作用の仕方というのは、それが宿る胸それぞれにより、気質とか体質とかに従って違ってくるものである（第六巻、二百七十二頁）。

女性の情熱というのは、自然に描かれるなら、怒りや絶望を通して輝きを放つ柔和さに

よって、男性の情熱とは際立った違いを示す（第七巻、九十八頁）。

［Anger, Violent Spirits を参照のこと。

Patience. Impatience.　（忍耐心、せっかち）

縛られることに不慣れな人間は、抑制を受けると苛立つ（第一巻、四頁）。

心を正す目的で苦悩が与えられているのであれば、苛立つのはさらに罪深い過ちへと導くことにもなる（第二巻、百八十六頁）。

抑えようもないせっかちさはそれ相応の屈辱を嘗めることになる（第三巻、百六頁から次頁にかけて）。

問題点が明瞭で自明の場合、それを証明するための議論に加わることを余儀なくされると、忍耐心を見出すのも困難である（第三巻、二百六十一頁）。（第一巻、六十五頁）も参照のこと。

忍耐心と不屈の粘りがあれば、いかに大きな困難といえど克服することが出来る（第四巻、三十四頁）。

恥じらいもなく非難に値することをやってのける人間はだれも、非難を受けても苛立つべきではない（第五巻、百五十六頁）。

身に覚えのない人間は自分に不利に働く報告にも騒いだりはしない。身に覚えのある人間は騒いではいけない（同　所）。

損害を受けた側には非難する権利があるのであり、損害を与えた側は耐えるのが当然である（第六巻、十七頁）。

軽率さから本分に背いてしまった人間は、せっかちなあまりに、その罪を大きくするようなことがあってはいけない（第六巻、百一頁）。

堪え性のなさというのは、通常、身勝手さから生じる（第六巻、百三頁）。

仲裁役に雇われた人間本人はあまり簡単に腹を立ててはいけない（第六巻、二百六十七頁、二百七十頁）。

不幸に不慣れな人間というものは、あまりにも簡単に苛立たしい気持ちへと動かされるものである（第七巻、八十四頁）。

友人同士の人間二人が同時に忍耐を忘れるというのは、夫婦の場合と同様、まずいことである（第七巻、九十二頁）。

深い苦悩に包まれている時、堪え性のない人間は顔という顔が、自然の姿でさえ、自分の心を痛めている悲嘆の表情を装うべきだと考えがちになる（第七巻、二百八十三頁）。

Pedants. Colleges.　（学者気取り、大学）

大学を出たばかりの若輩者は、女性に指示を与えるのには不適任である（第一巻、百四十三頁）。

大学は暴君を育てる教室となることが多すぎる（同　所）。

大学を出たばかりの浅学非才の若者は、昔の著者がある問題に関し、ギリシア語ないしラテン語でどのように意見表明したのかについて説明出来ない者たちのことを軽蔑しがち

であるが、同じ問題を英語ではどのように表現したものか、昔の著者もそうだが、連中にも知ってもらいたいものだ（第七巻、七十四頁から次頁にかけて）。

［物語中のブランドの手紙（第七巻、二百二十一頁から二百二十五頁にかけて、および、二百九十六頁から三百十一頁にかけて）を参照のこと。

Physic. Physicians.　（医術、医者）

「処罰」と「処方」とは、医療においては同義語である（第四巻、百六十九頁）。自分たちでは何の役にも立たないのに、どうして医者は、患者に吐き気を催させるのではなく、患者の舌を楽しませるよう努めないのか、とラヴレースは問うている（同　所）。刃物でふざけるのも良くないが、薬を弄ぶのはもっと良くない　…　ラヴレース（第四巻、二百二頁）。

治療の技に携わる先生たちを軽んじる人々というのは、さらに高貴な機関に対しても同じ態度で臨むのが一般的です　…　クラリッサ（第四巻、二百五頁）。

敏感だとか鋭敏だとかいう精神の器官は、肉体の諸器官を研ぎ澄ますことが多い（第六巻、六十頁）。

心の広い医者は、役に立つ望みはないと思うと、友人を装い、医者の立場を離れる（第六巻、二百四十二頁）。

医術に携わっている者たちというのは、どのような処方をすべきか分からなくなると、患者の一番好きなこと、あるいは、一番の慰めになるものを尋ね、それを禁じてしまうものだ、とベルフォードは言っている（第六巻、三百十四頁）。

医者というのは、自分たちの腕が良いことにするためだが、時として、簡単な病気を難しいものにしてみせる　…　ラヴレース（第七巻、九十六頁）。

われわれの体はどのようなものに耐えるのか、若いうちから学び始めるべきである（第七巻、百四十八頁）。

症例が絶望的なことを知った時、すべからく医者は治療費を断るべきである（同　所）。友情と医者とは絶対に相入れないものでもない（第七巻、二百頁）。

腕の良い執刀医は説明が分かりやすくなるように、そして、誠実な場合には、自分の医療行為についてすべての人間にも判断してもらうよう努力する（第八巻、四十三頁）。

大抵、医者の訪れる時には、外気が入らないようにするものだ、とベルフォードが言っている（第八巻、四十六頁）。

食べ物の量は質以上に顧慮されるべきである（第八巻、百六十二頁）。

お腹一杯の食事は勉強と仕事の両方にとって大敵である（同　所）。

立派な医者は定期的に、休むことなく患者の世話をし、患者の容体の変化や新たな症状一つ一つを自分の目で見守る（第八巻、百七十三頁）。

彼は兆候の変化に合わせて療法を変える（同　所）。

病とその原因が、生き方、気候、そして、付帯的な事情も同様だが、現在とは異なっていたこともあり、何百年も前に生きていたその道の先達によって制定された決めごとで自分を縛るようなことはしない（同　所）。

診療代に関して貪欲であってはならず、報酬についても、自らの良心に照らし、実現し

ていると思われる効果に合わせて決めるべきである（同　所）。

［Health, Vapours を参照のこと。

Pity. Mercy.　（憐れみ、慈悲）

可哀想という気持ちは愛情への恰好の布石である（第一巻、九頁）。

不幸な立場にある人々には慈悲とか思いやりを示すべきであるが、似たような状況に置かれた場合には、その者たちの災難はわれわれ自身のものとなっていたかもしれないのである（第一巻、百四十三頁）。

自ら招いた恥辱に同情は禁物である（第一巻、百六十八頁）。

われわれは臨終の場に立ち会うと、その苦痛のゆえに死に瀕した人物を憐れみ、また、いつの日にか同じように味わう苦しみのゆえに、われわれ自身に憐れみを覚え、従って、二重に心を打たれることになるのである（第二巻、九十六頁）。

我と我が身に招いた取り返しのつかない災いに対し、軽率な子供がしばしば受けている同情は、大抵の場合、その子の両親や友人に向けられて然るべきものである（第四巻、五十七頁）。

ある人物からの同情は、その理由の強弱に関わらず、別の人物からの同情を生み出すことが多い（第四巻、百三頁）。

神は自分のものは何一つわれわれに求めない。神の慈悲に与る手段として、互いに慈善の行いをするよう、神はわれわれに命じている（第六巻、七十六頁）。

勇敢にして賢明なる者は憐れみかつ容赦する術を心得ている（第八巻、二十九頁）。

［Generosity, Goodness, Magnanimity を参照のこと。

Politeness. Travelling.　（慇懃さ、旅行）

わざとらしくぎこちない慇懃さは疑ってかかるべきである（第一巻、四十九頁）。

礼儀正しいとは言えないが、際立って礼儀知らずというわけでもない人間もいる（第二巻、百二十一頁）。

男らしい真摯さと表裏のない心とは、真の丁重さと十分両立する（第三巻、五十頁）。

女性の心に足場を築くために、男性の側に丁重さが必要である。しかし、その足場を維持して行くためには、少しばかり傲慢さが入り込むことも必要ではないのか、とハウ嬢は問うている（第三巻、百二十七頁）。

旅行で得られる嗜みの代価としてしばしば支払われるのが、その男の道徳心である（第四巻、二十二頁）。

慇懃な男は、ある女性に敬意を払う時、その身内のだれをもないがしろにしたりはしない（第四巻、二百四十九頁）。

才能と財産に恵まれた男は、しばしば、紳士である必要はないと考えているかのように振る舞う（第五巻、百四十二頁）。

年配の男は自分たちの年齢を礼儀作法からの免罪符と考えることがあまりにも多い（第六巻、六十六頁）。

正当あるいは至当でないもので、丁寧と言えるものなどはない（第六巻、二百三十四頁）。
［Dress を参照のこと。

Political Precepts.　（政治的教訓）

自分のことは買いかぶり、聴衆のことを見下している人間が、人前で演説をするのには一番の適任者である（第四巻、百七十八頁）。

閣僚たるものは、人が良心に従って投じる票のその一票一票を受ける資格を有する（第四巻、百七十九頁）。

政府機関に対して不必要な輸止めを施すべきでない（同　所）。

野党にせよ内閣にせよ、いずれもが常に間違いを犯すということは有り得ない（同　所）。それゆえ、徹底した支持者というのは自ら認める以上のことを、そして、より以上の悪事を意図しているのである（同　所）。

殿様や子供というのは、実に些細なことで仲違いをするものだ、とラヴレースは述べている（第四巻、二百三十一頁）。

Poverty. Poor.　（貧困、貧者）

生命の維持にさして多くを必要とはしないようにしたという点で、全能の神はその創造物に対してすこぶる思いやりがある。その四分の三は、仮に必要だとしても、それだけの物を獲得すべき術を知らないのであるから（第二巻、八十頁）。

貧困は健康の母である（同　所）。

金持ちの楽しみは貧乏人の涙から得る（第二巻、八十一頁）。

明日こそは今日よりも、また、昨日よりも良い暮しをしようなどと思わず、貧しいことに慣れ、貧乏暮しを楽しむことの出来る人間というのは、真実味があって信頼出来そうに見えないかぎり、誘惑に引っ掛からないものである　…　ラヴレース（第三巻、百二十一頁）。

もしも貧しい者や並の者たちがいなければ、この世は破壊されるに値することだろう、とラヴレースは言う（第三巻、二百四十三頁）。

普通の貧乏人、あるいは、生まれついての貧乏人は国の世話に任されるべきである（第四巻、百六十三頁）。

生き物すべての等級表においては、最下位のものも最高位のものに負けず劣らず有益であるし、大きな鎖の一つの輪であることに変わりはない（第八巻、百五十一頁）。

Power. Independence.　（権力、自立）

だれしも、多かれ少なかれ、権力を好むものである（第一巻、九十四頁）。

しかし、権力を最も望んでいる者が権力を委ねられるのに最も適した人間であることはまれである（第一巻、九十四頁から次頁にかけて）、（第七巻、二百七十八頁）。

正直者は害を行う力を持とうと願ったりはしない（第四巻、二百六十四頁）。

権力はあまりにも人を気ままで邪悪にしがちである（第四巻、二百六十四頁）、（第五巻、二百五頁）。

もしも善を行う力を制限されるとしたら、われわれの責任も軽減されることになろう（第五巻、四十頁）。

金のある人間、つまり、権力を持つ人間というのは、その目論見がいかに邪悪なものであれ、手助けをしてくれる者に事欠かない（第六巻、九頁）。

どのような熱情であっても構わないが、心の中で支配的になっている熱情を満たすことの出来る立場にある人間で、満足させるのを断念する者が果たしているだろうか　…　ラヴレース（第七巻、二頁）。

男女共に、相手を自分の権力下に置くことをあまりにも好む（第七巻、二百七十八頁）。

ヒックマン氏に対するハウ嬢の振舞いに関し、モーデン大佐は、分別のある女性の場合であっても、あまりにも大きな権力を委ねるわけには行かないと述べている（第八巻、百二十七頁）。

［Controul, Prosperity を参照のこと。

Praise. Dispraise. Applause. Blame.　（称賛、けなし、是認、非難）

称賛は善行に対する報いであり、非難は悪行に対する懲らしめなのであるから、それぞれの適用に混同があってはいけない（第二巻、八頁）。

純真な心の持ち主は、称賛を受けている美質をまだ持ち合わせていない場合には、急いでそれらを身につけようとする（第二巻、四十九頁）。（第一巻、四頁）および（第六巻、百四頁）も参照のこと。

敬慕する者の口から出た褒め言葉というのは、本当に心を慰めてくれるものである（第二巻、四十九頁）。

だれもが、当然な場合のみに称賛を与えたり非難を向けたりするなら、道義心とは言わないまでも、羞恥心が働き、世の中も良くなることだろう（第三巻、百五十六頁）。

我が子のことだからと、自分の子供に対する当然の賛辞を控えるのは、気取りに類したことである（第四巻、五十二頁）。

褒められることに慣れている者は、賛辞を得意がることはない（第四巻、五十三頁）。

褒め言葉に目のない人間は褒め言葉で道を踏み違えがちである（第四巻、百四十五頁）。

最も称賛に値しない者が、通常、最も称賛を誇らしく思う（第四巻、百八十二頁）。

褒められるに値しない者に向けられた場合、褒め言葉は心を咎める（第四巻、二百四頁）。

褒め言葉は高潔な心に、称賛に値するようになろうとか、今後とも称賛に値するようにしようという気持ちを生み出す（第六巻、百四頁）。

自分自身には利益をもたらさない他人の称賛すべき行為を熱烈に褒めたたえる者は、彼らが是認するものに似た精神の持ち主であると推測される（第八巻、百二十九頁）。（第二巻、四十八頁）も参照のこと。

自分の言葉が聞き手に是認されることを自覚する者は、会話を独占することで他人の所見に触れる機会を失わぬよう、また、おだてに乗って饒舌にならぬよう、注意すべきである（第八巻、百六十四頁）。

[Censure, Generosity, Goodness, Merit, Virtue を参照のこと。

Prejudice. Prepossession. Antipathy.　（偏見、偏愛、敵愾心）

早くに芽生えた敵愾心は容易には根絶しえない（第一巻、十五頁）。

好きになれない人間は、何をしようと、われわれの気に入ることはない（第一巻、七十頁）、（第二巻、百五十一頁）。

若い娘が特定の人間に並外れた反感を抱くのは、通常、別の人物に異常な好意を感じていることによる（第一巻、八十五頁）。

恋人に好意的な目を向ける者は、その男の欠点を拡大鏡を通して眺めたりはしない（第二巻、百五頁）。

恋人に抱く偏った愛のゆえに、女性は恋人に向けられた非難のすべてを悪意や偏見のせいにする（同　所）。

古くからの偏見は［一旦は取り除かれたように見えても］すぐに繰り返されるものである（第三巻、三十八頁）

好意を感じない相手に対しては、認めて当然の取り柄を認めることもなかなか出来ないものであると、ヒックマン氏についての言葉の中でラヴレースが述べている（第六巻、二百五十九頁）。

不利な先入観というものは好意的な先入観よりも深く根を下ろす（第七巻、百八十一頁）。

同意している時にはいつでも、われわれは同意を正当化するような理由を百は見つけ出すことが出来るし、反感を覚える時にはいつも、反感を正当化する理由を千も見出すことが出来る（第八巻、百三十七頁から次頁にかけて）。

［Love, Lover を参照のこと。

Pride.　（プライド）

家柄が良く財産にも恵まれた人間がプライドをちらつかせるのは、下劣なばかりでなく、余計なことでもある（第一巻、百四十六頁）。

高貴な身分ならびに地位の高さは、そういうものに不慣れな人間にとっては自慢の種となる（同　所）。

高慢な大物が我が身に招く軽蔑は、その偉さを帳消しにする（同　所）。

高慢な人間については、恩義を認めさせるよりも義理を負わせるほうが容易な場合もある（第二巻、八頁）。

自惚れ心は必ずや軽蔑の念を促すことになる（同　所）。

恭しい態度の中にもどこか傲慢なところがあって、その恭しさを無効にしてしまうこともある（第二巻、百二十一頁）。

区別の出来ない人間は、礼儀正しさを犠牲にしても、プライドを大切にするのが偉大な精神の表れだと考えるかもしれない（同　所）。

立派で称賛に値する行為のうち、美徳よりもプライドに促されたもののほうが多いという懸念もある（第二巻、二百十九頁）。

奢り高ぶった心と卑しい心とは、機知と狂気について詩人が語っているのと同じくらい親密な関係にある（第二巻、二百三十六頁）。

高慢な人間の鼻を挫くには、一番手っ取り早いのは金銭上の負い目を感じさせることである（第三巻、九十頁）。

生まれついての思い上がった気持ちというのは、屈辱の最中にあっても、時々顔を出してしまう（第三巻、百三十三頁）。

プライドはしばしば分別を食べ尽くしてしまう（第四巻、十八頁）。

プライドというのは、心か頭、あるいは、その両方に弱点とか、何か間違ったところとかがあることを示す絶対確実な印である（第四巻、十九頁）。

自分に自惚れ心はないと考えるような自惚れに陥ることもある（第四巻、百四十六頁）。

われわれは自ら習得したわけでない資質を誇りにすべきではない（第四巻、百六十二頁）、（第八巻、百五十一頁）。

つまらないしきたりに拘り、最も大切な努めを放棄するようなプライドは、それこそ見下げ果てたものである（第四巻、百六十二頁）。

他の者たちが［より称賛に値することだが］信念によって得るものを、プライドから身につける女性もいる。女にプライドがなくなるようだと、それこそ救いようもない、とラヴレースは言う（第五巻、二百三頁）。

高慢さとか尊大さとかは屈辱を招く（第六巻、二百三十九頁）。

自分たちの怒りが度を越していることを悟った場合、傲慢な心の持ち主にとって必要なのは、腰を低くするための適当な口実だけであることが多い（第七巻、二百三十三頁）。

男女を問わず、プライドは一つの極端をなしており、早晩これは、ほぼ間違いなく、屈辱的な対極をもたらすことになる（第七巻、二百六十二頁）。

たまたま手柄を立てたとか、見掛けばかりの取り柄しかないような人間は偉そうにするかもしれないが、生得の価値は常に、横柄さと同じく自惚れとも無縁のはずである（第八巻、百五十頁から次頁にかけて）。

唯一つだけ許すことの出来る自尊心がある。卑劣な行為とか恥ずべき行為に走るのを潔く思わない自尊心である（第八巻、百五十一頁）。（第一巻、百四十六頁）も参照のこと。

［Humility, Insolence, Little Spirits を参照のこと。

Procuress. Profligate Woman.　（売春宿の女将、不道徳な女）

曖昧宿の者たちは、時々、不道徳な客に貴婦人を装った破廉恥女をあてがうことで、身分ある人間が実際よりも不道徳に見られる原因を作っている（第四巻、三十二頁）。

ラヴレースのような人間でさえ、その手で操を奪われた者たちだというのに、堕落した女との交渉を続けることは断ったのである（第四巻、百九十六頁）、（第六巻、三十四頁）。

より良い人々の前では、口に出したり頭に浮かべたりするわけに行かない事柄も、悪い仲間の前では、考えたり口にしたり出来る　…　ラヴレース（第五巻、二百十一頁）。

人は悪い仲間に感化されると、以前には嫌悪していたような犯罪行為へ引きずり込まれることもある（第六巻、十七頁）。

不道徳な女というのは、女性にとっては、不道徳な男以上に恐ろしいものである（第六

巻、二十七頁)。

結婚している男が邪悪な女との付き合いに耽ったりすると、女たちは決して心を休めさせてくれず、男としても、やがて自分の妻に疑いを持つとか、憎しみを感じるとかするようになる、とラヴレースは言う(第六巻、三十六頁)、(第八巻、二十六頁)。

嫉妬深く、すでに操も失っている女は、一体何をもって引き止めることが出来るというのか(第六巻、三十六頁)。

鉄面皮な女たちの家では、その罠に誘い込まれたうぶな娘に対し、いかなる悪事が行われているのか、世間の者たちはほとんど知らない(第六巻、百九十八頁、二百十四頁)。

おゝ、ラヴレースよ、われわれ放蕩児というのは、どんな仲間と付き合っているのだろう。そして、そんな仲間のために、どのような交遊関係を放棄しているのだろうか。あるいは、こんな連中との付き合いに努力するというのだろうかと、シンクレアお抱えの破廉恥女どもが朝の略装でいるところを描きながら、ベルフォードは言う(第八巻、四十六頁)。

容姿端麗な、そして、考え方や態度が清廉潔白な女性の場合だが、われわれのような種類の男の大半は泥にまみれた下種であり、絶えず豚と一緒に餌場を漁るような存在だということを知っていたら、好みの味に誘われて女郎屋や売春宿のクズたち、そして、安手の娼婦と交渉を持つような、そんな汚らわしい好色野郎との付き合いは、考えるだけでも嫌悪を催してしまうのではないだろうか … ベルフォード(第八巻、四十六頁から次頁にかけて)。

錯乱状態というのは、売春宿の女将という悪魔のような役割を演じた女が今わの際に知ることの出来る、唯一の幸せに違いない(第八巻、四十八頁)。

[Advice to Women, Guilt, Libertine, Lover,&c.を参照のこと。

Prosperity. Success. Riches. (繁栄、成功、富)

繁栄が苛立ちを生み出す(第一巻、二十四頁)。

この世の幸せに欠けるところの最も少ない者が、何か欠けているものがあることを一番悔やむ(同　所)。

恩義を相応しい者たちに施す力をわれわれに与えてくれるという点で、富には価値がある(第二巻、七頁)。

不当な手段が上首尾を収めると、質の悪い人間は穏当な手段に甘んじていることが出来なくなる(第二巻、百五十二頁)。

大きな災難に見舞われた場合と同様、栄華の最中にあっても、心の中に目を向け、恐れを感じるべきである(第二巻、百八十五頁)。

成功に浮かれて元も子もなくした者も多い(第三巻、八十八頁)。

富ゆえの過ちを犯さぬ者などいるのだろうか(第三巻、二百四十二頁)。

成功は功績ある者を、妬み心が矢を向けるその的に仕立て上げる(第四巻、四十六頁)。

非常に家運の栄えている者は、抑えつけられるとか望みを挫かれることとかにはなかなか耐えられない(第四巻、百六十二頁)。

大きな富は大きな罠である(同　所)。

富や豪奢な暮しを最も誇りにするのは、通常、そのいずれの立場にも生まれ落ちていな

い者たちである（第四巻、百八十二頁）。

計画にとっては成功がすべてである。頓挫させられ、失敗に終わった計画は、その立案者にとってすら間の抜けたものに見える（第六巻、五十二頁）。

裕福さと自立状態がしきりに求められるのは、友情溢れる心が与える忠告にそれらが力を添えてくれるからである（第六巻、百十頁）。

裕福にすぎると、人は思いやりを持つこと、あるいは、足るを知るということが出来なくなるかもしれない（第七巻、二百五十二頁）。

あまりにも魅力的に思われる世界から人を引き離すのに必要な試練を与えてくれないという点では、裕福な暮しは危険を伴う（第八巻、十七頁）。

Providence.　（神の摂理）

われわれのなすべきことは、他でもなく、正しい道を選んで迷わず突き進み、結果を神の御心に委ねることではないだろうか（第一巻、九十七頁）。

神の思し召しを責めるよりも、自分自身とか友人とかを責めるほうがより正しい（第四巻、四十三頁）。

神の摂理には測り知れないものがある（第八巻、二十二頁）。

罪人にその本分を悟らせるべく、神意によって用いられる手段は多様である（同　所）。

ある者は愛の手に導かれ、また、ある者は恐怖に駆られて、あの神聖な避難所へと赴くのである（同　所）。

［Insolence, Pride を参照のこと。

Prudence. Wisdom. Discretion.　（分別、知恵、思慮深さ）

分別を備えた人間に与えられる試練は、通常、その分別に比例する（第一巻、二頁）。

分別のある人間は召使の舌の先に身を任せるような真似はしない（第一巻、六十六頁）。

分別の点からも女性は、夫に対して愚痴をこぼすとか、不服を申し立てるのは慎まざるを得ない（第一巻、百五十七頁）。

分別のある人間にとって、善意の証となるのは言葉ではなく、行為のみである（第二巻、五十一頁、百二十七頁）。

品行に疑問のある男性から求婚された用心深い女性は、最善を願ってはいても、疑わしい点に関して常に最悪の事態に備える（第三巻、八十六頁）。

われわれには避けられないことであるが、単なる人間的な分別の空しさをしばしば思い知らされる（第四巻、四十三頁）。

少し道を踏み違えた賢明で善良な人間は、可能になり次第、元の道を取り戻すために力の限りを尽くす（第四巻、四十四頁）。

発言の撤回という不面目とも思われることを避けるためにも、用心深い人間は並外れた才能で有名な人物と同席している場合には、自分の意見を述べたがらないものである（同所）。

賢明な女性は、一方での淑女ぶっているとの非難、そして、もう一方での男に媚びてい

るとの非難を無視し、自らの心が語る適・不適の判断に基づいて行動を決め、世間の意見に関しては、二次的な要件にすぎないと見做す（第四巻、七十一頁）。

分別を備えた人間は、ありふれた経験が日々例証していることの正しさを、自らの不幸によって確信させられる必要はない（第七巻、五十七頁）。

困難な状況は思慮分別と美徳の試金石である（第七巻、八十六頁）。

話を切り上げる潮時を知るというのは妙技の一つである（第八巻、百六十四頁）。

分別のある人間というのは、無関心さや落ち着きのなさによって話が長すぎたことを証明するような、そんな原因を聞いている者たちに与えるよりも、もっと話してほしいと思ってくれている間に、聞き手の元を立ち去るのを常とする（同　所）。

［Advice to Women, Goodness, Generosity, Merit, Virtue を参照のこと。

Purity.　（無垢さ）

図々しい男の、咎めるに値する無遠慮な口振りを憤るべきなのに、作り笑いとか微笑みとかを浮かべて見せる女性は、心の無垢さを疑わしいものにする（第三巻、二百五十頁から次頁にかけて）。

貞潔な態度は女性の際だった特徴である（第三巻、二百五十一頁）。

言葉は考えを包み込む身体であり衣裳である（同　所）。

清らかな心は汚れた心との交わりを望むべきでない（第四巻、二十一頁）。

［Goodness, Religion, Virtue を参照のこと。

Rapes.　（凌辱）

女性に対する暴行は絶対に償うことの出来ない犯罪である。とりわけ、よい習慣を破壊し、心を丸ごと堕落させるきっかけとなる場合にはそうである（第五巻、二百七十九頁）。

自分の操に実際に加えられた暴虐行為を憤っている女性からの譲歩というのは、いかに些細なものであっても、暴行を加えた男にとっては、最大の譲歩と同程度に目的に適うものである（第六巻、六十一頁）。

慎み深さのゆえに、残虐な凌辱者の告訴を差し控え、男の命を自分の掌中に握っている女性は、その男が今後行うかもしれない悪事のすべてに対して責任を負うことになる（第六巻、百四十六頁）。

そのような女性は、男を死罪で裁判に掛けたりすると、自分自身の弱みが何か表に出そうだと、懸念しているように勘繰られはしないだろうか（同　所）。

［この件に関するハウ夫人のさらなる論拠を参照のこと（第六巻、百四十六頁）。また、リーウェン師の論点（第七巻、百六十二頁から百六十四頁にかけて）も参照のこと。そして、クラリッサの返信（第六巻、百四十九頁）および（第七巻、百六十四頁から百六十八頁にかけて）を参照のこと。

辱めというものは、それを罰する力がわれわれに備わるまで、適切な許しを得ることは出来ない（第七巻、百六十三頁）。

憤りが向けられていないとか、正式に不服の申し立てがなされないような損害は信じて

もらえず、正しくわれわれの心を動かすことはない（同　所）。
自他共に認める無垢さと貞節さのために述べられる事実に、慎みを欠くものなどは一つとしてない（同　所）。
証拠湮滅と偽証との差は極めてわずかなものである（同　所）。
［Libertine を参照のこと。

Reflections on Women.　（女性に関する所感）

《道楽者や忌憚のない語り手たちが女性をどのように語り、どう考えているのか、それを承知させることにより、注意を呼び覚まし、思慮分別を吹き込むことなどを主たる眼目としたもの》

してはいけないことをやり、愛してはいけない男を好きになるのが、老アントニー・ハーローによれば、女性にとってはこの上ない楽しみごとということになる（第一巻、百六十六頁）。
現代女性は役に立たず、金が掛かるということから、独身男性が増加しているのだ（第一巻、百六十七頁）。
若い女の心には悲劇を演じたい気持ちがあり、同情を引くためならどんなことでもしでかしてしまう　…　ジェームズ・ハーロー（第一巻、百九十八頁）。
若い娘はしばしば恋の苦悩に憧れる　…　ジェームズ・ハーロー（同　所）。
女性の臆病者は勇敢な男性を愛し、間違ったヒロイズムにまつわる話を楽しむ　…　ハウ嬢（第二巻、五頁）。
ハウ嬢によれば［一部の者だけを念頭に置いてのことだろうが］、女性は結婚生活ではただの赤ん坊であり、あまり甘やかされたり機嫌を取られたりすると、天の邪鬼のお馬鹿さんになり、厳しく扱われると、卑屈な奴隷になってしまうという（第二巻、十頁）。
女性は人の意表を突くのが大好きである（第二巻、十三頁）。
愛されてはいなくとも、丁重な態度を見せてもらえることを確信出来る男は、結婚している知人十人のうちの九人よりは幸せである、とソームズは言う（第二巻、四十六頁）。
結婚生活において、愛情と恐怖とは区別されなければいけないとすれば、恐れられるように振る舞う男が一番上手くやって行くことになる　…　ソームズ（第二巻、四十六頁）。
（第一巻、二百十一頁）も参照のこと。
女性はいつも威勢の良い男のほうを好むが、その勢いを操って、好きな時に、好きな相手にぶつけさせたいだけのことなのである　…　ハウ嬢（第二巻、九十五頁）。
好意を覚えている場合、女性はほんのわずかな美点、そして、空想上の美点さえも持ち出して、目に余ること甚だしいほどの悪徳の償いにしようとする（第二巻、百五頁）。
男性的な乱暴な態度の女性というのは、女性の肉体に男性の精神を宿しているとも言えよう（第二巻、百五十一頁）。
女性は男性が義侠的な行為に出るのを喜んで促すが、自分たち自身もそんな行動に加わりたいのである（第二巻、百八十二頁）。
放蕩児として名が通っているお陰でかえって上首尾を収めてきたことを承知している人

間としては、何で偽善者になる必要があるのだろうか、とラヴレースは言う（第三巻、四十二頁、二百四十二頁）。

まったくもって女というのは、褒め言葉には目がないものだ　…　ラヴレース（第三巻、四十五頁）。

放蕩児の中でも最も鉄面皮な者でさえ女の慎み深さを好む、と彼は言うのだが、控え目なことになっている多くの女から放蕩児が好まれるのは何故なのか、説明をするよう、ラヴレースは女性に要求している（第三巻、七十九頁）。

すべての女性にとって肝心なのは、このような好みが気質の類似性に由来するのではないことを、行動によって証明することだと、諭すようにラヴレースは語っている（同　所）。

女には妙に意固地なところがあり、助言を求めたりするのも、反論をするためだが、男の考えを知ろうとしてそうしているだけなのだ、とラヴレースは言う（第三巻、八十九頁、百二十五頁）。

女というのは、この上なく親切な者でも、残酷だと呼ばれるのが大好きである、とラヴレースは言う（第三巻、百二十六頁）。

立派なことこの上ない女性でさえ、放蕩児の行いを改めさせたとの栄誉を担うのが好きなのであり、それゆえに、放蕩児のごくわずかな手引きにより、自ら誘い込まれることになる、とラヴレースは言う（第三巻、二百四十二頁）。

放蕩児や道楽者というのは、女性が本来的に嫌悪を覚えない男性である、とハウ嬢は言う（第四巻、八十四頁）。

抵抗や反対は熱しやすくロマンティックなものに傾きがちな女心に活力を与える（第四巻、百三十五頁）。

女性が放蕩児を好むのは、放蕩児は揺らめく女心に指図を与え、女を操る術を弁えているからだ、とラヴレースは言う（第四巻、百八十四頁）。

言い分を通そうと心を固めていたり、扱う相手がおとなしい男だとか、平穏さを愛する男だという場合の女ほどに天の邪鬼なものは、この世には他に何一つ存在しない　…　ラヴレース（第四巻、二百四十七頁）。

女性に受け入れてもらうためには、高潔だとの評判が広く求められるのだということに気づいていたなら、これまでよりも大きな配慮を品行の面に加えていたことだろう、とラヴレースは言う（第四巻、二百六十七頁）。

女の口からある情報を流してもらいたいと願うのであれば、それを秘密にしておくよう女に申しつけなければいけない、とラヴレースは言う（第五巻、六十三頁）。

女というのは自分たちが、そして、自分たちの施す恩恵が男にとって重要なものと映ることを喜ぶものである　…　ラヴレース（第五巻、八十六頁）。

恋を夢見る女性は大概、初々しい娘の頃には、恋愛用の愛称を選んでいるものだ、とラヴレースは言う（同　所）。

多くの愛らしい娘たちが返事を書いてくれたが、それは、教母が授けてもいない名を自分の名前と認めるためのことだ、と彼は付け加えている（第五巻、八十六頁から次頁にかけて）。

自立心をほんのわずかでも備えているこの世の女性一人一人が、どれほど変わった身の上話を聞かせてくれるものなのか、ほとんど世の中に出たことのないうぶな女には分から

ないのだ、とラヴレースは言う（第五巻、九十二頁）。

女というのはおしなべて企みごとが、そして、陰謀家が好きなのだ、とラヴレースは言う（第五巻、九十四頁）。

女というのは未経験者を好まない（第五巻、百八頁）。

連中が喜ぶのは、女に関する知識に根差した愛情であり、立派な理由もある［と、彼は同じ口調で理由の提示へと向かうが、女性にとってはほとんど名誉にはならないものである］（第五巻、百八頁から次頁にかけて）。

女は神の創造物の中でも一番軽薄なものであるが、自分では最も重要な存在のつもりでいる、とラヴレースは無礼な言葉を吐いている（第五巻、百三十二頁）。

こういったか弱い鳩ちゃんたちは、辛い目に会わされるまで、どのようなことに耐えられるのか気づかずにいるのだ。とりわけ、恋をしている時にはそうだと、若い婦人に触れながら、ラヴレースが言っている（第五巻、百三十四頁）。

女は賑々しい場面が好きだ　…　ラヴレース（同　所）。

女というのは、嵐なしで暮らすくらいなら、むしろ、自分から一つ引き起こそうとするものだ　…　ラヴレース（同　所）。

最も不運なのは、自ら引き起こしたわけでもなければ、統御する力も持ち合わせない嵐の中を生きて行かなければならない女である（同　所）。

女というのは悲しくもないのに泣き叫び、いわれもなく笑い転げることに慣れっこになっている（第五巻、百三十九頁）。

だれをも申し分のない女に仕上げられるはずだ。愛情と同様、恐怖心も抱かせることが出来るのだから、とラヴレースは言う（第五巻、百七十四頁）。

すべて女は不義密通をするために生まれ落ちたのであり、多少なりとも実践して見せるのだ　…　ラヴレース（第五巻、百九十三頁）。

色恋沙汰に関しては、女は生まれついての達人で、男よりはるかに機転が利く　…　ラヴレース（同　所）。

女同士の友情は、二人の間に男が入り込むと、音楽その他の娘らしい楽しみごとと同様に、放り出されてしまうものである　…　ラヴレース（第五巻、二百一頁）。

自分の娘にある男と一緒になってほしいと願う母親は、時として、別の男を紹介したほうがうまく行くことがある　…　ラヴレース（同　所）。

ラヴレースによると、いつまでも若いつもりでいたがるのが女共通の欠点ということである（第五巻、二百十九頁）。

恋についての秘密、そして、不義に関する秘密こそは、女同士の友情を最も強く固めてくれるものだ、とラヴレースは言う（第五巻、二百五十二頁）。

女はすべて、根は臆病者なのだ。荒れて構わない場合にだけ荒れて見せるのだ、とラヴレースは言う（第六巻、六十五頁）。

女というのは苦しみを一番多く与えてくれる者が（男であれ女であれ、あるいは、子供であれ）一番好きなのだ、とラヴレースは言う（第六巻、二百二十三頁）。

沈着冷静な娘は理由なしに癇癪を起こすようなことは決してないし、理由が与えられた時には、許すようなこと、あるいは、過ちを犯すさらなる機会を提供するようなことは滅多にしない　…　ラヴレース（第六巻、二百四十七頁）。

女祭司たちも自分たちの守る火で血をたぎらせることが多い、とラヴレースは言う（第六巻、二百六十六頁）。

復讐心と強情な気持ちというのは、最良の婦人たちにさえはなはだ説明に窮するようなことを行わせるものである　…　ラヴレース（第六巻、二百六十八頁）。

女というのは、心の底から怒りを覚える男の両目を抉り取れないくらいなら、むしろ自分の片目を抉り取ろうとする　…　ラヴレース（同　所）。

愚劣な男たちというのは、その愚劣さの多くの部分を品性の優れた女性にも負うているのであり、品性優れた女性たちでさえ、そんな男が他の女性にどれほど卑劣な振舞いをしていても、ほとんどためらうこともなしに連中と同席し、言葉を交わしているのである（第六巻、三百二十七頁）。

女性は、通常、自分自身が控え目で内気なこともあり、自分たちの主たる美点であるその特質が男性に見られる場合には、欠点と考えることがあまりにも多い。そして、見事な判断ということになるのであろうが、恥じることを知らない男を選ぶことで、その欠点の埋め合わせをしようと考えるのである（第六巻、三百二十八頁）。

女性が拒絶するのは、しばしば、自分の気持ちを納得させるために、言いくるめられることを願っているからに他ならない旨を、ラヴレースは仄めかしている（第七巻、六頁）。

自分のことを不器量だと考えている女は一人もいない（第七巻、百十一頁）。

[Advice to Women, Courtship, Love, Libertine, Marriage, Men and Women を参照のこと。

Reformation. Conviction. Conversion.　（改心、罪の自覚、帰依）

常に喜びを見出してきた悪友と手を切る覚悟の出来ない男は、到底改心するようには思われない（第一巻、百七十七頁から次頁にかけて）。

急に罪に目覚めたような素振りというのは疑わしい（第一巻、百八十五頁）。

過ちを自覚しているというのは、改心への道程も半ばに達していることだ（第一巻、二百四頁）。

敵対者の悪意によって行いを改めるというのは、この世で最も気高い復讐である（第一巻、二百七頁）。

激しい議論から罪の自覚に至ることは滅多にない（第二巻、五十五頁から次頁にかけて）。

改心への第一歩は突然に襲って来る激情を鎮めること、そして、失望に耐えることである（第二巻、八十八頁）。

破廉恥この上ない放蕩児も、大抵、いつかは心を改めるつもりでいるものである（第三巻、八十三頁）。［それゆえ彼らも、やがて訪れる良心の痛みを緩和するために過ぎないとはいえ、放蕩児ながらに極悪非道の罪業は避けるべきではないだろうか。

改心は俄かにもたらされるものではない（第三巻、八十三頁、九十二頁）。

頭の鈍い人間に比べ、分別ある人間の改心への望みは大きい（第三巻、九十三頁）。（第一巻、二百五頁）も参照のこと。

［しかし、これは当てにならない望みであり、大きな災いの原因となってきた。自分が愛している男を分別のある人間と思わない女性はいないからである。以下の所感

のほうが真実であり、熟考に値するのである。

承知の上で、また、信念に背いて過ちを犯す人間は、知っているだけなおさら悪いことになる（第三巻、百十三頁）。

卑劣なことを承知の上で卑劣行為に携わる有能多才な人間は、無知ゆえに、あるいは、正しい罪の意識なしに過ちを犯す者に比べ、改心の見込みは少ない（第六巻、百頁）。

ラヴレース自身の所見によると、男の悪癖を矯正するのは、事の本質からして当然な程度よりも、はるかに易しい仕事のように女性は考えているという（第六巻、百六十八頁）。

［改心へ向けてのベルフォード氏の計画に関しては、（第八巻、百五頁から百七頁にかけて）を参照のこと。

計画を練って悪事に耽る男に矯正の望みはほとんど有り得ない（第六巻、二百九十七頁）。

あらゆる妄想の張本人ともいうべき者によって提唱され、言いふらされていることは疑いのない、「心改めた放蕩者こそ最高の夫になる」という、あの偽りに満ちた無分別な考えによって欺かれ、多くの立派な女性が何とまずい選択をしたことだろう　…　ベルフォード（第八巻、四十七頁）。

放蕩者に道徳上の動機から良い夫や立派な父親、そして、真の友人になってもらうのには、生活態度の正に全面的な革新、身に染みついた習慣の大変革、否、悪い性質の徹底克服が求められるのだということを、お人好しさんたちはほとんど考えていない（同　上）。

放蕩者と結婚しても、その男を改心させる望みはあると考えるほどに、女性が自らの美徳を確固不動のものと想定するのは、大変に思い上がったことである（第八巻、九十四頁）。

自分の過去の愚行を思い出させられることにじっと耐えられる男については、また、その愚行に対する嫌悪の情を時として表明する場合には、その男の改心の真摯さに疑いを挟む余地はほとんどない（第八巻、百三十三頁）。

［Goodness, Religion, Repentance を参照のこと。

Religion. Piety. Devotion. Sabbath.　（宗教、信仰心、信心、安息日）

美徳と宗教の大義が弁護されることになるなら、善良な人間も［不信心者によって］易々と狼狽させられることはない（第二巻、十二頁）。

信心深くなるのには自分は賢すぎる、と考える者もいる（第二巻、百四十六頁）。

信仰には何か美しくも荘厳なところがある、とラヴレースさえも言っている（第三巻、二百四十四頁）。

安息日は心を正しく保つ上では極めて優れたしきたりである、と彼は言う（同　所）。

見掛けの好い大勢の者たちが打ち揃って一つの敬虔な行い、それこそ理性ある生き物に相応しい行いに加わる姿を目の当たりにするのだよ。それは見事な光景だ、と彼は付け加えている（第三巻、二百四十五頁）。

宗教の教えにあるように、われわれを裁くに当たって、神はわれわれが相互に行う善行と悪行とに大幅に依拠するのであれば、この上ない極悪非道の暴虐行為を故意に罪のない同胞に加えた者たちに対する断罪はいかなるものであろうか（第五巻、二百四十二頁）。

道楽者たちは、通常、己の意向に沿う宗教を作り上げようとするが、これは、ラヴレースにしても関わりを否定するような不正行為である（第六巻、百七十七頁）。

避けることの出来ない災いはじっと耐え忍ぶよう、宗教がわれわれに教えてくれる（第六巻、二百四十五頁）。

「私、生き長らえたいとは思いませんが、それでも、哀れな卑怯者みたいに、自分の持ち場を放棄するつもりはないのです。保持することは出来るのですし、また、保持いたしますのが私の務めなのですからね」と、クラリッサは言う（第六巻、二百九十九頁）。

「神様が私を哀れと思し召して、命をお求めくださいますまで、生き長らえるために出来ますことでしたら、何もかもするつもりでいるのです」と、彼女は言葉を続ける（同　所）。

時宜を得て強化された宗教的な考えは、激しく免れ難い悲しみに心が囚われるのを妨げてくれる（第六巻、三百頁）。

失望が現世への無頓着さをもたらすこともあるが、真に敬虔な死の受容のためには、もっと確かなものに、もっと深く根を下ろしていることが必要である（第六巻、三百五頁）。

狂信者は、誤った用い方や見境のない用い方をして、称揚しようしている聖書の価値を減じることが多い（第七巻、四頁）。

ラヴレースのような人間でさえ、不作法なこととして、宗教あるいは宗教家を冗談の種にするような真似は拒む（第七巻、六頁）。

生まれつき敬虔な心を持ち合わせている人間には、我と我が身をおろそかにするような真似をして、ましてや、危害を加えるようなことをして、自らの命を（その身に降り懸かった不幸がどのようなものであれ）縮めるような考えは思い浮かばない（第七巻、九頁）。

苦しんでいる時、また、疑わしい状況とか危険な状況に置かれた時、われわれにとっての最善の祈りは、神の御心がなされるよう、そして、われわれが神の御心のままに従うよう、唱えることである（第七巻、二十一頁）。

堪え難い、そして、不相応に大きな災難に苦しむ心にとっては、宗教こそが唯一の避難所である（第七巻、七十二頁）。

宗教は、加えられた害を容赦することばかりか、悪には善をもって報いることをも命じているのであり、クラリッサはその命に従うことを可能にしてくれたがゆえに、神を賛美しているのである（第七巻、七十六頁）。

信仰心の篤い人間は、世俗的な事柄の最終的な処分に際し、恨み、癇癪、怒りが表に出るとか、関与するようなことを許すわけに行かない（第七巻、二百五十九頁）。

神は自らが清める者たちの心の中に、競争相手を持とうとはしない（第七巻、二百八十九頁）。

教養と信仰心とを備えた人間は、怒りに燃えている時にも、そのような人間であることを際立たせて見せる（第八巻、十四頁）。

信仰心が人の好さや行儀の良さと完全に両立することはないと想像するのは大きな間違いである（第八巻、百四十三頁）。

うまく心を捉えた場合の話だが、宗教というのは、この世でも最も機嫌の良い表情の作り手なのだ、とラヴレースは言う（同　所）。

不機嫌さや気難しさは、敬虔さとか善良さに関して、まだ新米にすぎないことの証である（同　所）。

［Goodness, Virtue を参照のこと。

Remorse.　（悔恨）

被害を受けた者の苦労は、通常、害がなされた時点で終了するが、害を加えた者に対する罰は果たしていつ終わるのか、だれにも分かりはしない　…　ラヴレース（第五巻、二百七十二頁）。

気紛れ心で始めたことなのに、痛切極まりない悔恨へのきっかけとなって終わる場合の何と多いことか、とラヴレースは言う（第五巻、二百七十八頁から次頁にかけて）。

単に失望からもたらされただけの悔恨の情は永続し得ない（第六巻、六十一頁）。

今感じているもの、そして、ここ一週間に亘って感じてきたものを凌ぐものがあるとすれば、それは、恐れるようわれわれが教えられている、あの果てしない苦悩の日々を迎えて、罪ありと認められた魂が感じる堪え難い痛みの他には有り得ないのだ、とラヴレースは言う（第七巻、二百九十二頁）。

頑迷で人道に悖る行いを振り返った時の想いというのは、何と恐ろしいものだろうか（第八巻、五十二頁）。

尊敬すべき身内の死去に際し、その身内に相応しくない無情な仕打ちを加えた点で、自責の念を感じる者たちの想いは悲痛なものに違いない（第八巻、六十八頁）。

Repentance. Contrition.　（後悔、痛悔）

後悔と改心を後回しにする者が提案していることと言えば、快感の得られる間は官能の生活を送り、もはや罪を犯せなくなった頃合に心を改めようということに他ならないだろう（第三巻、百八十五頁）。

露見するまでの間、犯した人間が平気な顔をしていられたような罪を後悔する気持ちというのは、通常、その罪の邪悪さに対する正しい意識にではなく、見破られたことに帰されるべきである（第六巻、四十六頁）。

思うに、後悔というのは体が丈夫で意気も盛んなうちに取り掛かって然るべきものなのだ、とラヴレースは言う（第六巻、二百五十頁）。

正気を失い、体も意のままにならなければ、何が出来るというのだ［新しい仕事に就くなんてことは論外だ］　…　ラヴレース（同　所）。

臨終の床での懺悔がはなはだ当てにならない無力なものと考えられているのは、そんなところから来るのだろうと思われる　…　ラヴレース（同　所）。

自分自身については、いつの日にか真人間になるつもりでいるわけでもあり、まだたっぷりと時間があるものと考えたい、と彼は言葉を続けている（同　所）。

ラヴレースは悔い改めるべく生きながらえることはなかったのだ

極めて真面目な感慨に耽ることが時々ある。ただ、〈人はしたいと思う時に後悔出来るわけではございません〉という、かつて聞かされた言葉が気掛かりになるが、続けては行けないということなのだろう。時々、思い出したようにおり、俺も一千回は後悔しているのだよ　…　ラヴレース（同　所）。

笑いたいのなら、笑ってくれ。だが、これまで行ってきた無謀な真似は今後一切、絶対に止め、誘惑を覚える時にはいつも、ベルトンの断末魔の苦悶のことを、そして、俺自身の死に際がどうなるのか、それを思い浮かべることにしよう、とベルフォードは述べている（第七巻、百五十頁）。

悔い改めの見込みが最も大きいのは、体が健康で思考力も健全な時であり、また、被害を受けた者とか騙された者に対し、何らかの償いを行うことが自分の力で可能なうちである（第七巻、百五十二頁）。（第三巻、八十五頁）も参照のこと。

悔い改めたなら、必ず償うべきである（第七巻、二百四頁）。

不正行為に伴う苦悩よりも先に生じた後悔の念は、通常、確かな根拠に基づいた幸福をもたらすものに違いない（第八巻、二十一頁）。

ただ無頓着に、自分たちの正規の義務をないがしろにして生きて来た者にとって、悔い改めるのは容易な仕事ではないし、だれかが考えているほどに、自分たちの思いのままになるものでもない（第八巻、九十四頁）。（第五巻、二百七十八頁）も参照のこと。

本当に懺悔をしている人間は、見せかけの彩りや虚飾を狙ったりはしないものだ（第八巻、百十三頁）。

［Remorse, Religion を参照のこと。

Reprehension. Reproof. Correction.　（譴責、小言、矯正）

意地の悪い傍観者というよりは、忠告を与える友人という趣がある叱責の言葉は、常に感謝の念を促す（第一巻、百九十四頁）。

効果的であるためには、小言は穏やかで優しく、非難がましくないものでなければならない（第三巻、六十六頁）。

真の友人から矯正を受けるのは、見境もなく強情を張り続けることで、嫉妬深く、おそらくは悪意に満ちている、世間の人々の非難に身を晒してしまうことよりもはるかに望ましい（第三巻、百五十四頁）。

時宜を得ない矯正は罪人を改心させるよりも、むしろ頑な気持ちにさせたり、偽善者に変えてしまうことのほうが多い（第三巻、百八十頁）。

悪人は極めて拙劣な仕方で悪人を譴責するものである（第四巻、二百六十六頁）、（第六巻、二十八頁）。

他人を譴責する者は、非難の的にしている過ちを自らは犯していないとしても、同じくらい大きな別の過ちに陥らぬよう、留意しなければならない（第四巻、二百六十七頁）。

譴責を行う時はいつも、好意的な意図が一見して汲み取れるようにすべきである（第八巻、百五十八頁）。

［Censure を参照のこと。

Reputation.　（評判）

自分の評判に無頓着な人間は、放埒な性質、あるいは、世間から良く思われるに値しないという自覚のいずれかからそうなっているに違いない（第一巻、五十三頁）。

自分の評判を大切にしない人間が悪口に耐えねばならないのは至極当然な話である（第一巻、百八十八頁）。

常日頃から名を惜しんできた男性は、丁重な振舞いという点では、女性に十分な保証を与えることになる（第四巻、二十三頁）。

［Men and Women を参照のこと。

Resentment.　（憤り）

度を越して怒り狂っている人間は、容易なことでは我を折るとか、相手を許す気持ちにならない（第一巻、二十頁）。

故意に加えられた害ではない場合、あるいは、そのように公言されていない場合、いつまでも怒りを長引かせるべきでない（第二巻、四十四頁）。

故意に嘘をついているという謗りを恥辱の極みとして憤る人間は、決して虚言を弄したりしてはいけない（第二巻、五十八頁）。

大嫌いな人間の場合でさえ、目の前にいない時には研ぎ澄まされていた怒りの刃も、面と向かうとなまくらになってしまう（第二巻、七十八頁）。

理不尽な仕打ちを受けた時、自分を責めるべき点は一切ないという女性は、憤慨して然るべきである（第六巻、百七十四頁）。

憤りと仕返しとはいつも区別されるべきである（第六巻、二百二十九頁）。

穏やかな口調で、激情を交えずに表明される憤りこそが、最も永続しそうである（第六巻、二百七十六頁）。

憤りの妥当さから、表現力の駆使は一見して不要と映るような場合、時として、激情は表現力の助けを拒むものである（第八巻、百二十二頁）。

［Anger, Passion, Revenge を参照のこと。

Respect. Reverence.　（敬意、崇敬）

尊敬に値する人間は、求めるまでもなく敬意を示してもらえるはずである（第一巻、百四十六頁）。

威張り散らして尊敬を得ようとする人間は、自分の値打ちに自信のないことを証明しており、自らの振舞いが敬意を促すものではないことを自覚していると白状するようなものである（同　所）。

親しさが増すと尊敬の念は薄れるものだが、思慮分別に恵まれた者、感謝の気持ちを忘れぬ者、高潔な心を備えた者には当てはまらないことである（第二巻、百二十一頁）。

年配の人間は年齢相応の敬意を期待するが、その多くの者は（何の取り柄もなく）、尊敬の念を促す唯一のものである己の年齢を恥ずかしく思うのである（第二巻、百三十一頁）。

わざとらしい丁重さや慇懃さは常に疑って掛かるべきである（第三巻、二百十八頁、二百二十四頁）、（第六巻、六十六頁）。（第三巻、十七頁）も参照のこと。

邪悪な男でさえ、自分の淫らな攻撃に抵抗し続ける女性には崇敬の念を抱く（第五巻、百五十七頁）。

ある女性に対していくらかでも敬意のまなざしを向けようとすることのないような男性は、その女性を蔑視し、折に触れては、見下げた振舞いに出るものだということを、今後とも座右の銘にするつもりです、とハウ嬢は述べている（第六巻、三百二十八頁）。

[Advice to Women, Courtship, Love, Men and Women を参照のこと。

Revenge.　（復讐）

失恋に根差した復讐心というのは、通常、われわれの感情すべての中でも最も激しいものである（第一巻、六十六頁）。

下劣な女心が果たし得る最高の復讐は、競争相手が自分の愛する男性と結ばれるのを妨げ、嫌いな男と一緒にならざるを得ないようにすることである（第一巻、六十七頁）。

そのような場合、血のつながりさえもすべての力を失ってしまう（同　所）。

仕返しをしたところで罪は消えない（第一巻、二百七頁）。

寛大な、そして、確かな見極めに基づく許しの行為以上に効果的で、高潔な復讐がどこにあるだろうか（第八巻、八十八頁）。

[Resentment を参照のこと。

Satire.　（風刺）

真の風刺は善良さに根を下ろし、正しい心に導かれていなければならない（第二巻、百八頁）。

風刺が個人に向けられ、対象を矯正するよりは晒し者にすることを狙っている場合、仮に的を射ているとしても、どうして有益なものになり得ようか（第二巻、百八頁）、（第六巻、百七頁）。

友情のこもった風刺は鋭利なランセットになぞらえられて良く、健康のため穏やかに放血を施すが、悪意のある風刺は大段平になぞらえられ、それが負わせる深傷に公衆の嘲りを吹き込むのである（第二巻、百八頁）。

[Anger, Passion, Resentment を参照のこと。

Secrets. Curiosity.　（秘密、好奇心）

声をひそめて語られるスキャンダルほどに速やかに行き渡るものは他にない（第五巻、二十七頁）。

聞き耳を立てるのは、通常、欠点を自覚している者たちである（第五巻、九十一頁）。

慎みのある人間が打ち明けられずにいるような秘密を詮索するのは、慎みのある人間には似つかわしいことではない（第五巻、百十二頁）。

善かれと願う人間は内緒ごとを装う必要はない（第五巻、百三十五頁）。

他人の秘密を詮索するのを好む人間で、信頼に値する者は少ない（第五巻、百五十八頁）。

度を越して詮索好きな人間は、自分たちの重要さとか賢さとかをこれみよがしに示すために、周知の事実となってしまうまで秘密を囁いて回る（同　所）。

元気溌剌としていると（分別とか礼儀正しさは別だが）、お節介な人間は自分のことに止まらず、他人の世話まで焼こうとする（第六巻、百六十一頁）。

無垢な人間に損害を及ぼすような秘密は持つべきでない（第六巻、二百三十七頁、二百三十九頁）。

信頼を裏切ることのほうが、秘密を守ることよりも申し訳の立つ場合もある　…　ラヴレース（第八巻、百十四頁）。（第六巻、二百三十七頁、二百三十九頁）も参照のこと。

我が麗しの君に俺のことを暴露していた場合だが、その時には、もしも可能なら、貴公の命を奪っていただろうと思う、とラヴレースがベルフォードに語っている。ただ、今は確信しているのだが、彼女に対する俺の卑劣な行為を妨害してくれたことに感謝していただろうし、貴公のことを実の父親や最良の友にもまして、父のように、また、友人のように考えていたことだろう、と（第八巻、百十四頁）。

［Observations General を参照のこと。

Self. Self-interest. Selfishness.　（私心、利己心、我が儘）

われわれの間で勢力を振るっているこの狭量な身勝手さとは、忘れ去られた親戚のことはなおざりにして、心に浮かぶ縁者ばかりを優遇することに他ならないのではないか（第一巻、三十五頁）。

利己心と野望が親戚同士の愛情の絆をばらばらに切り離してしまうことがあまりにも多い（第一巻、六十三頁）。

利己的な人間の遠大な目論見も、ほんの些細な出来事によって粉々になる（同　所）。

自分にとって利益になるとか都合が良いというのは、たとえ他人の好意を期待する根拠としてより良いものがないにしても、お粗末な口実である（第一巻、百六十三頁）。

愛する者の確かな意向を無視して続けられる求婚は、身勝手すぎて奨励するわけには行かない（第一巻、百七十二頁）。

親に出来ることとか、してくれそうなこととかへの期待だけで辛抱をしようというのでは、よほど浅ましい身勝手な子供に違いない（第二巻、五十二頁）。

利己的な心の持ち主は、実行したくない親切を行わずにおく口実には事欠かない（第二巻、百八十頁）。

他人の総体的な価値を、自分に対して親切か、それとも、よそよそしいかで測るとしたら、極めて下劣で身勝手な話である（第二巻、二百二十二頁）。

自分の意向に沿うため、若い娘が義務や良心を犠牲にしてくれるように望むことが出来るようでは、その男の愛情には多分に自己中心的で狭量なところがあるに違いない（第三巻、六頁、百五十三頁）。

女性の好意を求めるに際し、自分が愛していること以外に訴えるべき点のない男というのは、女性の自愛の気持ちに向けられた身勝手なお世辞にのみ望みを掛けていることになる（第三巻、百七十九頁）。

自分のためになり、また、同時に悪党を懲らしめることにもなるのは、それこそ、公私共に好都合というものである　…　ラヴレース（第四巻、三十一頁）。

自愛の気持ちからわれわれは、おそらく、最も心を占めている関心事について助言して

くれる者たちに対しては、それに値しようと値しまいと、心を許すものである（第四巻、百二頁）。

私心こそはわれわれを惑わせる張本人である（第四巻、百四十六頁）。

公共の利益よりも個人の利益を優先する人間とか団体は、情けない社会構成員ということになる（第五巻、二百十四頁）。

利己心というのはいやらしいもので、そのせいで、この上なく残酷で不誠実な行いに走るのを憚らない人間もいる（第六巻、三百十二頁）。

［Covetousness, Partiality を参照のこと。

Sensuality.　（好色）

男の場合であれ女の場合であれ、心が貧しいほど、淫らになって行くものである（第四巻、二百五十七頁）。

愛が叶えられるということは、愛が満たされるということであり、愛が満たされるということは、無頓着さが始まるということなのだ　…　ベルフォード（同　所）。

この神聖視されている感情にしても、その高さの極みにある時でさえ、白日の下に晒されるのには適していない（同　所）。

色欲のような卑しい感情に最も高尚な感情を汚させておいて良いものだろうか（同　所）。

［Love, Lovers を参照のこと。

Sickness. Infirmities.　（病、虚弱）

体調の悪さに苦しんでいる人間の不機嫌さに対しては、大幅な斟酌が加えられるべきである（第一巻、百三十六頁）。

自らの肉体の衰えを感じ、気持ちが弱くなると、人はほんの些細なきっかけで心を動かされてしまうものである（第六巻、百七十三頁）。

病気の人間は、たとえ回復の見込みがないとしても、居合わせる友人にも不在の身内にも納得してもらえるよう、適宜指示される手段を一つ残らず試してみるべきである（第六巻、二百四十一頁、二百四十二頁）。

病は欲望をことごとく鈍らせ、かつては大好きだったものを嫌いにさせてしまう（第六巻、二百八十四頁）。

道楽者連中は、病に罹ると、今にも自分たちに襲いかかろうとしている鳶の姿に怯えた小鳥のように辺りを見渡し、お互いを見つめ合う（第六巻、三百八頁）。

病は体力ばかりか気力をも奪う（第七巻、百四十一頁）。

ダラダラと長引く病のせいで弱気になって行く心にとっては、何もかもが恐怖の種になるのだろう、とラヴレースは言う（第七巻、百四十二頁）。

活発な精神というものは、肉体の病という雲に覆われても、何もせずにいるわけには行かない（第七巻、百八十三頁）。

深い悲しみや失望がきっかけとなっているすべての病にとっては、旅行が間違いなく最良の薬である（第七巻、二百七十九頁）。

［Adversity, Health, Physic, Repentance, Vapours を参照のこと。

Suspicion. Doubt. Jealousy.　（嫌疑、疑念、警戒心）

咎められてもいない過ちについて、身の証を立てようと骨折る者は、怪しまれても致し方ない（第一巻、九十四頁）。

自分も恋に落ちたことのある人間が、だれよりもすぐに他人に疑いの目を向ける（第一巻、百九十四頁）、（第三巻、六十四頁）。

疑ったり見張ったり、叱りつけたりしたところで、書き物とか、何でも構わないが、娘がしたがっていることをするのを妨げることにはならない（第三巻、三十頁）。

だれかの誠実味に疑問を感じる時には、表情と言葉とが一致しているかどうかを観察すべきである（第三巻、八十三頁）。

だれに対してであれ、疑わしい気持ちが取り除かれると、心の狭くない人間は、疑われていた者に倍も埋め合わせをしようと骨折るものである（第三巻、二百三十一頁）。

女同士では、両名が同席しており、同じ男に恋をしている場合、嫉妬心を隠し通すことは出来ない（第三巻、二百三十三頁）。

体質から来る心配性は体に害をもたらさない（第四巻、三十三頁）。

女性の嫉妬心は、説明し難いように見える無数の事柄に説明をつけてくれる（第五巻、七十七頁）。

［Apprehension, Love, Parents and Children を参照のこと。

Tears.　（涙）

涙にくれている美女というのは、その美しさに一層磨きがかかる　…　ラヴレース（第五巻、十四頁）。

解剖学者は認めるはずと思うのだが、女というのは男以上に水っぽい頭をしているものなのだよ、と冷酷無情なラヴレースは言う（第六巻、二十三頁）。

涙よりも速く乾くものはない　…　ラヴレース（第六巻、二百十一頁）。

他人の苦難に涙を流すことの出来る男は敬意を表されて然るべきであるし、そのような男は自分の苦難に無感覚でいられるものだろうか（第七巻、百二十五頁）。

涙は張り詰めた心をほぐしてくれるが、その優しく自然な救いの手がなければ、心はきっと張り裂けてしまうだろう（第七巻、百二十六頁）。

涙は人間の特権である（同　所）。

人間性に関わりを持つような、重大な関心事に心動かされるのは弱さではない（同　所）。

［Beauty, Cruelty, Eyes, Heart を参照のこと。

Theory.　（理論）

理論から得た知識は曖昧で不確かな光であり、疑う心を正してくれることもあるが、惑わすことも同じくらいに多い（第五巻、九十頁）。

経験に基づかず、理論によって得られた知識は、通常、信頼を寄せる人間の期待に背いてしまう（第五巻、二百五十一頁）。

真に尊敬すべき人間にあっては、理論と実践は同じものである（第七巻、十五頁）。

Thoughtfulness. Sensibility.　（思慮深さ、感受性）

用心深い心というのは、将来についての取り越し苦労などはせず、現在を楽しむ力を与えてくれるような陽気さと結び付いていない場合には、有難がって求めるようなものではない（第二巻、百三十五頁）。

思慮深い女性で、恋人に過度の力を譲り渡してしまった者は、恐れを抱きながら恋人を眺め、自分には軽蔑のまなざしを向けがちである（第三巻、十八頁）。

このような者は恋人の外見や振舞いが違って来たことに気づき、即座に自分の間違いを確信するのである（同　所）。

並よりも濃やかな感受性を持っていると、幸せにはなれない（第三巻、百九十一頁）。

他の者たちが剣の一突きで受けた負傷の痛みを感じるのと同程度に、ピン先で出来た掻き傷の痛みを感じる者もいる（第七巻、百四十一頁）。

［Heart を参照のこと。

Tyranny.　（横暴さ）

筋の通らない言いつけに従うよう主張するのは、すこぶる横暴な行為である（第三巻、百四十五頁）。

すべての形において横暴さは嫌悪を誘うが、暴君として振る舞う父親と母親は情けの一かけらすら持ち合わせないのである（第四巻、五十一頁）。

男性に対して前もって暴君のように振る舞う女性は、後になって、男性の目に惨めな姿を晒すことになる　…　ハウ夫人（第四巻、百二十五頁）。

暴君のように振る舞うのを卑劣な楽しみと呼びたいのなら、そう呼んで構わない。俺よりも慈悲深い心を持つ者も知っている楽しみだ。女性を相手の場合には、女どもも承知のものであり、力を委ねられれば、いつだって連中は態度に出して見せもする、とラヴレースは言う（第五巻、九十一頁）。

［Husband and Wife, Parents and Children, Reflections on Women を参照のこと。

Vanity. Conceit. Affectation.　（虚栄心、自惚れ、気取り）

女性から何か特別な扱い方をされると、その真意が何であれ、自惚れた男は自分に都合の好い考え方をしがちである（第一巻、十二頁、十四頁）。

表面的な利点を自慢にしている人間は、その内面に対する疑念を促すことになる（第一巻、百四十六頁、百九十三頁）。

自惚れた人間は、通常、外面のことで頭が一杯である（第一巻、二百十頁）。

友情や同胞愛に欠かせない慈しみの心が犠牲になるというのに、利口ぶるのを慎むことが出来ない人間もいる（第二巻、二百十七頁）。

自分の能弁ぶりを自慢に思っている者は、耳を傾けてくれる人間を好んで探し出し、その才能を披瀝する（第三巻、四十九頁）。

才能に恵まれた人間というのは、もしかすると、自慢する権利があるように考えているのかもしれないが、だれよりも自惚れる必要は少ない。世間はすぐにも才能ある者たちを見つけ出し、褒めそやすからである（第三巻、八十七頁から次頁にかけて）。

慎みなく自画自賛する傾向のある人間は、その分、他人のことは誰かれなく軽蔑するに違いない（第三巻、百三十九頁）。

話し合いに臨み、承知の上で間違った論点の側に立つ人間というのは、自らの能力を大いに称揚し、自惚れた心を証明していることになる（第三巻、二百五十三頁）。

異性の前で互いに見せびらかし、学識や才芸を自慢する男に対し、おそらく、黙って微笑みながら腰を下ろしているが、彼等を賛美するというよりも、むしろ軽蔑するような女性がその場に居合わせることもあろう（第三巻、二百五十四頁）。

実際よりも賢いとか善良であるとか、あるいは、有能であるとか思われたがっている人間というのは、その見せかけに探りを入れたい気持ちを引き起こすだけであり、彼にとって有利な結末を迎えることは滅多にない（第四巻、十九頁）。

自分自身を褒めそやす人間は隣人たちを貶めることになるが、そうなると、隣人たちのほうでは、控え目にしていれば尤もなこととして認められたかもしれない長所さえも疑って見たい気持ちになる（同　所）。

あまり優越性を意識しすぎると、軽蔑を招くことが多い（第四巻、四十三頁）。

年配の独身男性というのは、好きな女性が出来ると、身を固めるよう自分に言い聞かせる以外、なすべきことはないとしばしば考える（第四巻、六十一頁）。

気取りゆえに女性は、男の下品で馴々しい言葉を理解し兼ねるように装うが、その馴々しさが甚だしい場合、慎みのある女性は憤りを示す（第四巻、百六十六頁）。

自惚れた人間に自惚れ心を隠すよう最も用心を促すものは、通常、自惚れ心とか独善が強すぎることへの自覚である　…　ラヴレース（第五巻、百八頁）。

自説に固執する女というのは、その愚かさにつけ込もうとして、賢さを誇張してみせるような男と出会うと、危険に陥る　…　ラヴレース（第五巻、二百五十一頁）。

愚鈍な人間というのは、その自惚れ心ゆえに、狡猾で下心のある者の相手としては最適のカモとなる（第六巻、百五十四頁）。

気取った様子で口を開け、白い歯をひけらかすのは、愛の睦み合いを誘うためだ、とラヴレースは考えている（第六巻、百六十頁）。

無知の中でも最も蒙昧で軽蔑に値するものは、自分自身についての無知、そして、われわれが所有するもののすべて、卓越しているもののすべては神からの贈り物なのだという点についての無知である（第八巻、百五十一頁）。

Vapours.　（憂鬱症）

［Heart, Human Nature, Men and Women を参照のこと。

ふさぎがちな人間というのは、医者連中が絶えず腕を振るう相手なのだ　…　ラヴレース（第四巻、百六十九頁）。

憂鬱症の人間は医を生業とする者にとっては金蔓である　…　ラヴレース（同　所）。

ふさぎがちな人間は恐る恐る自分自身に対する訴状を作成する（同　所）。

憂鬱症の人間は、実際に不幸でない場合にも、溢れるばかりの幸福からでさえ不幸を作り出すことが出来る（第五巻、百十六頁）、（第七巻、二百六十三頁）。

心というのは、好きな時に体を連れ去ってしまうものである（第六巻、三百十三頁）。

不愉快な出来事一つ一つの最悪の面ばかりを考えるのに忙しい心は、決して悲しみに事欠くことはない（第七巻、二百三十頁）。

自ら作り出した、そして、自らの力で軽減することの可能な不愉快さは、軽減を行わずにいる場合には、罰としてわれわれに降り懸かる（第七巻、二百六十三頁）。

［Health, Physic を参照のこと。

Veracity. Truth.　（真実性、真実）

正直さと引き換えに苦悩からの救いを購う人々には、長期に亘る苦悩の日々からも得るものはほとんどないのである（第四巻、二百二十一頁）。

自らの真実性を犠牲にすること以外の方法で女を騙した男など、これまで一人としていなかったように思われる（第四巻、二百六十五頁）。

真実に対する違反が一度の違反で終わったためしはほとんどない（第五巻、七十八頁）。

私が千年生き続けることになりましても、誓いを口にする人の信憑性には、いつも疑いの目を向けることにいたします、とクラリッサは言う（第六巻、二百二十六頁）。

クラリッサと共に、自分の知るかぎりでは、母親に故意の嘘をついた覚えはないと言えるのは、子供にとっては実に光栄なことである（第七巻、六十頁）。

男に嘘をついたことは一度もなく、女に真実を語ったこともほとんどないが、前の台詞は、道楽者ならだれでも口に出来るものではないし、後のほうは、放蕩児が一人残らず口にすることの出来る台詞だ、とラヴレースは語っている（第八巻、百三頁）。

［Advice to Women, Courtship, Love, Lover, vows を参照のこと。

Violent Spirits.　（激しい気性）

気性が激しくて頑固な人間は、抵抗の気力を殺ぐことによって、自分を尊重させるようにする（第一巻、二十三頁）。

何一つ譲ろうとしない者たちは、何一つとして与えてもらえないものである（第一巻、四十五頁）。

あまりにもたくさん主張を通そうとする者は、何一つとして思いどおりに行かなくなる（同　所）。

子供の頃の甘やかしゆえに手に負えなくなっているような気性を、われわれはあまりにも大目に見がちである（第二巻、百三頁）。

気性の激しい人間は、恩義に与っていながら手心を加えてもらえるとしたら、立場が逆

転した場合、何から何まで期待することになるのではないだろうか（同　所）。

激しい気性に手心を加え過ぎるのは、当人にとっても、また、その人間を相手にする者たちにとっても幸せなことではない（同　所）。

しばしば神は敵意に満ちた者たちに自業自得の憂き目を見させようとなさる（第二巻、百七十九頁）。

優しい気性の人間が心卑しい世間のことで苦しむのに対し、気性の激しい者は付け込まれるスキを見せない（第三巻、百五十六頁）。

押しつけがましい人間や図々しい人間は礼儀正しい者に対してすこぶる有利な立場にある（第三巻、二百十五頁）。

挑発を受けた気性の激しい人間は、だれかに出会い次第、諍いを起こす（第三巻、二百五十九頁）、（第四巻、三十六頁）。

気性の激しい人間に自分自身について知らしめるためには、何か大病を患うとか、大きな不幸に見舞われることが必要である（第七巻、二百七十七頁）。

激しく立腹する人間は、自分が正しいと考える場合、その激しささえなければ、正しい側に立つこともより多くなるだろう（第八巻、二十頁）。

反対されることに耐えるより、対立を誘う傾向のほうが強い者は、大きな不正を働いていることになる（同　所）。

気性の性急さは、通常、屈辱をもたらす（同　所）。

［Anger, Insolence, Passion, Pride, Prosperity, Resentment, Revenge を参照のこと。

Virtue. Virtuous. Principle.　（美徳、貞淑な、徳義）

自ら美徳を備えていないにも拘らず、他人の美徳を称賛することがないとしたら、それは一体いかなる心の持ち主だというのだ（第一巻、百四十九頁）。

貞潔でない女性で愛らしい者などは一人もいない（第二巻、百十六頁）。

主義節操を自負する人間が無節操な行いに自ら異議を唱えることがないとしたら、そんな人間を抑制するものが果たしてこの世に存在するのだろうか（第二巻、百二十二頁）。

あまねく堕落が行き渡る中で、だれかに歯止めになってもらわねばならない。さもなければ、美徳は姿を消してしまう。そして、その歯止めとなるのは私ではないのか、と高邁な心の持ち主は問い掛けるだろう（第二巻、百二十三頁）。

挑発や誘惑こそが美徳の試金石である（第三巻、六十二頁）。

試練とか誘惑とかに負けない貞節を備えた女性には、神々しいばかりの栄誉が与えられて然るべきである（第三巻、六十五頁）。

陽気な女性が徳を備えた男性の価値を知ることは滅多にない（第三巻、九十七頁）。

現世のことであれ来世のことであれ、幸せな未来を望む場合、その礎になり得るのはしっかりとした道義心と善良な心のみである（第四巻、七十九頁）。

試練を経て立証された女性の美徳は、その女性に対し、大方の尊敬をもたらすばかりでなく、誘惑者からさえも、身の証が立った暁には、さらに強い愛情を確保することにもなる（第六巻、五十三頁）。

貞淑な女性は、その淑やかな心を辱めて憚らない男への愛着心を克服してみせる（第六巻、七十六頁）。

その行動が嫌悪の的であったし、そうあって然るべき男性を夫として選ぶことに甘んじるような貞淑な女性が、果たしてどこにいるだろうか（第六巻、二百九十六頁から次頁にかけて）。

［Generosity, Goodness, Innocence, Merit, Magnanimity, Modesty, Prudence, Purity を参照のこと。

Vivacity.　（快活さ）

活動的で遊び好きな人間というのは、修養のために骨折ることは滅多にない（第一巻、五十一頁）。

才気煥発なのは、利点よりも落とし穴になることのほうが多い（第一巻、百四十六頁）。

将来を思い煩うことなく、現在を楽しませてくれるものこそ幸福な快活さである（第二巻、百三十五頁）。

快活な人間は、口にして構わないと思われることを話すだけでは必ずしも満足せず、洞察力とか賢さとかをひけらかすため、ある話題について口に出来る事柄すべてを話して楽しむのである（第二巻、二百二十二頁）。

陽気な気質の人間にとっては、非難を避けるように振る舞うというのは難しい話である（第六巻、百二十七頁）。

すこぶる陽気な人間が与えてくれる楽しさを分かち合うと、その移り気なところに付き纏う不都合をもきっと味わうことになる（第六巻、三百四頁）。

Vows. Curses. Oaths. Promises. Protestations.　（誓い、呪い、誓言、約束、言明）

約束だからといって、再考の自由を排除すべきではない（第二巻、二百二十四頁）。

いずれは自分の妻と呼ぼうとしている女性が、軽率なことを悟り、軽はずみな約束の履行を怠ったからといって、その女性に腹を立てるような男性は、一体どういう人間なのであろうか（第二巻、二百二十五頁）。

独身女性の誓約については、父親がその誓約を聞き留めた時には、履行を免除されて構わない　…　民数記三十章、三、四、五節（第二巻、二百二十四頁から次頁にかけて）。

同じく、妻の誓約も夫によってその履行を免除されてもよい（第二巻、二百二十五頁）。

呪いを口にする者が言葉のままに懲罰を加えることが出来るとしたら、その人間はまさしく悪魔である（第三巻、十五頁）。

全能の神は無分別で冷酷非情な呪いに同意を与えたりはしない（第三巻、百九十六頁）。

われわれを呪う者のために祈ること、それは務めを果たすことであり、よって、呪いを祝福に転じることになる（同　所）。

いとも簡単に約束する人間が、同じくらい速やかに約束を果たすことは滅多にない（第三巻、二百二十三頁）。

行いを改める約束が頻繁に必要だというのは、一人前の人間にとっては恥ずかしいこと

である（第四巻、六十六頁）。

己の名誉を顧みることなく、最も厳粛な誓いや言明を茶化して見せるような男と出会えば、この上なく清浄無垢な操といえども無事には済まない（第四巻、八十六頁）。

放蕩児の口から溢れ出るのは、のべつ幕無しの約束や誓いや言明の台詞であり、それが時と場所によって変わるだけの話である（第六巻、二十六頁）。

偽証によって卑劣な目的を遂げるような人間は、同胞を欺き傷つけるが、それに劣らず、天を冒涜し、侮っているのである（第六巻、百四十一頁）。

神に誓って約束をする者は、自分の言葉が当てにならないことを間接的に認めているのである（第六巻、二百二十六頁）。（第二巻、五十一頁）も参照のこと。

自分の神に対して馴々しく振る舞う男が、何事であれ、自分の利益になることに関し、同胞に対してためらいを見せるようなことは考えられるだろうか（同　所）。

誓言を添えて言明することを許されない場合、放蕩児の主張はその主要な力を失うことになる（第七巻、三頁）。

男性から嘘つき呼ばわりをされると即座に憤って見せる者たちが、女性に対する厳粛この上ない誓いを破っても、良心の咎め一つないというのが常のことである（第七巻、二百八頁）。

[Advice to Women, Courtship, Libertine, Love, Lover, Veracity を参照のこと。

Widow.　（寡婦）

自分の財産を掌中に収めている未亡人の思慮分別を当てにすると、ひどい目に遭う（第四巻、百十四頁）。

自分に言い寄っている男性を無遠慮に扱ったということで、我が子と言い争いをする未亡人の場合、話はかなり進んでいることになる（第四巻、百二十二頁）。

恋人に宛てた未亡人の断り状が、希望の余地を与えないほどに明白なものであることは滅多にない（第四巻、百二十五頁）。

余計な物ばかりを欲しがる未亡人は、なかなかお目に掛かれない安ぴか物で簡単に心を奪われてしまう（同　所）。

催し物や娯楽の集いに出掛ける時、お相手をだれにするか、未亡人は特に留意すべきである（第五巻、二百五十一頁）。

最初の十二ヶ月で未亡人になるというのは、美女の身に起こり得る最高の至福の一つなのだ、とラヴレースは言う（第七巻、九十二頁）。

[Reflections on Women を参照のこと。

Wills. Testators. Executors, &c.　（遺言書、遺言者、遺言執行人、等々）

何人といえども、避けることが出来る者は、遺言執行人を訴訟事件に巻き込むべきではない（第七巻、三十七頁）。

遺言執行人の仕事の軽減こそは、遺言者が意を用いて然るべき点である（第七巻、百五十九頁）、（第八巻、八十三頁）。

生き残った者たちが慈悲心に沿った時間の使い方をするという点では、遺言執行人の職務の忠実な執行に優るものはない（第八巻、七十二頁）。

この最終証書は、起草とか作成を後回しにしてはならず、冷静な思案の結果でなければならず、また、頻繁に口にされてはいても、実態を言い当てているわけでもないが、良好な健康状態にある場合以外には滅多にお出会うことのない、あの健全な知力と記憶力の結果でなければならないの（第八巻、七十四頁、百四十七頁）。

遺言者がその遺言書において遺贈の理由を挙げる時、言葉尻を掴まえた揚げ足取り一切は未然に防がれ、厚意に与る者たちは安心し、恩恵を意図された者たちはその恩恵を享受することとなる（第八巻、七十四頁、百三十頁）。

ここしばらくの間、私は自分の遺言の項目を書き留めることに専念し、理由が生じますにつれ、変更と加筆を行ってまいりました。従いまして、どれほど急に召されたといたしましても、完全に遺書を欠く事態にはならなかったのです、とクラリッサは語っているのである（第八巻、七十四頁）。

何か相当な財産の持ち主が死亡する場合、遺言書の最初の読み上げというのは、親戚の者たちが故人に寄せていた愛情の、その真の試金石を提供するのが常のことである（第八巻、八十七頁）。

君主たちの遺言書というのは、通常、あらゆる遺言書の中でも最も顧慮されないものである（第八巻、八十八頁）。

だれについてであれ、健康状態にある間の遺言作成を妨げるものとしては、死に対する恐怖心（つまり、この世に生まれ落ちたのと同じ確かさで、いつかは死ぬ定めにあるのだということを承知している者には似つかわしくない恐怖心）以外に何があるだろう（第八巻、百三十頁から次頁にかけて）。

遺言書の作成に当たっては、遺言執行人にとっての容易さと同じく、喜びをも考慮すべきであり、苦痛の伴う仕事を寛大な人物に求めるべきでない（第八巻、百四十七頁）。

Wit. Talents. Conversation.（機知、才能、会話）

才能を得意がっても、何の栄誉にもならない。悪用に対しては責任を問われ、正しく用いたところで、自分の功績にはならないのだ …… ラヴレース（第一巻、百五十頁）。

宗教上の、あるいは、神聖な慣例を冗談の種にする人間も、その放縦さをウィットとは考えないのであれば、多くの場合、口を慎むことだろう（第二巻、百四十六頁）。

陽気な男にとっての機知と謙虚な女性にとっての機知は別物である（第四巻、二百五十四頁）。

謙虚な女性をうろたえさせるものは機知では有り得ない（第四巻、二百五十五頁）。

放蕩児たちが考えるほどには、悪事を行うのに才気は要らない（同　所）。

放蕩児に見られる才気というのは、大抵の場合、厚かましいことやショッキングなことを、慎み深い者は赤面し、恥知らずは笑いだし、無知な者は目を見張る、それほどの大胆さで口にして憚らない点にこそ存する（第四巻、二百五十五頁）。（第一巻、二百三頁）も参照のこと。

機知に富んでいると思われたい人間は、極めて真面目な話題さえも軽薄な扱い方をしが

ちである（第六巻、二百七十頁）。

道楽者は悪辣さを機知と取り違えがちである（第六巻、二百八十二頁）。

その文章が批評家の吟味に耐えられないような才人気取りの連中が、全員互いに手を結び、批評家を追い詰めている（第七巻、八頁）。

繰り返すことにも、あるいは、後になって思い浮かべることにも耐えられないような代物であるが、心に屈託がなく、楽しくやろうと決めている時には、会話の中でやんやの喝采を博するものが多々あるのだ　…　ベルフォード（第八巻、百四十二頁）。

われわれが賛美している人物、そして、その機知がわれわれの間では本物として通っている人物の口の端に上ると、平凡な事柄も、陽気に過ごしている時には、非凡なものとなる（同　所）。

［Imagination を参照のこと。

Writers.　（作家）

詩人やロマンス作家の扇情的な描写は、しばしば若者の心を、その空想力を働かせるべき対象の追跡へと向かわせる。

言い換えるなら、しばしば美をでっち上げ、だれ一人として美しいとは思わないものに当てはめるのである（第一巻、百四十九頁から次頁にかけて）。

ロマンスの作家たちは、万策尽きた際の助けとして、クリアンテとかヴィオレッタとかクレリア、あるいは、その手の綺麗な名前の、秘密を打ち明けられる友達、少なくとも年老いた子守り女の一人くらいは、忘れずにヒロインに付き添わせるものである（第二巻、百二十五頁）。

詩人気取りの恋人によって美を描くのに用いられる不自然な譬えは、美を高めるというよりもその価値を低下させるものである（第三巻、十九頁）。

極めて優れた作家ではないとしても、批評家としてはヘボでない者もいる（第三巻、百五十一頁）。

我が国の詩人たちというのは、恐怖や殺人や自殺を用いずに悲痛さを生み出す術をほとんど心得ておらず、人々の魂にショックを与えなくては、その目から涙を誘うわけには行かないのだ、とベルフォード氏は述べている（第七巻、九十八頁）。

女言葉というのは、その由来に関しては定かではないが、概してすこぶる意味深長なものである（第七巻、三百二十頁）。

若いうちに日用書簡に親しむのは、心を開き改善するものとして、男女を問わずに従事し得る最大のものの一つである（第八巻、百二十七頁）。

美徳を称揚し、悪徳を顔色なさしめることも出来る多くの一流作家たちが、ただ理屈っぽくて興味を引かず、啓発的でもない話題に時間を浪費しているというのは嘆かわしい話である（第八巻、百六十三頁）。

若者の風紀を乱すとか、不道徳な観念を伴うとか、宗教に害を及ぼす傾向のある、軽薄で下品な性質の作品の作家は、自分の才能に対して不誠実であり、その才能を授けてくれた神への感謝の念にも欠けていることになる（同　所）。

Youth.　（若者）

家中の者に対して重きをなす原因となっている場合、我が儘な若者にはその気性を直そうとする気持ちはほとんど起きない（第一巻、五十九頁）。

情熱と分別とに関わる事例について、若い友人に助言を与えるに際して、若者は細心の注意を払わなければならない（第二巻、六十一頁）。

親切な振舞いや遜った態度に心を引かれることのない若者というのは、いろいろな企みに夢中になるものである（第二巻、百十一頁）。

青年期というのは、一生のうちでも想像や空想の力が働く時期である。従って、思慮分別のある人々の目を楽しませようと思う作家は、経験を重ねることで、情熱の炎をかきたてるよりはむしろその輝きを導き出すことが出来るようになるまで、青年期に書いた作品を寝かせておくのである（第二巻、百十二頁）。

自分で判断する力のない若者は、しばしば、助言に耳を貸さない（第二巻、百二十四頁）。

若い人たちというのは、時として、自分自身を欺く方策を実に巧妙に見つけ出すものである（第二巻、二百四十三頁）、（第三巻、百九十四頁）。

われわれの身に降り懸かる重要な事柄を一つ残らず書き留めるよう、早いうちから習慣づけておくのは、品行の面と同様、文章のスタイルの点でも、向上のためには極めて有効な訓練である（第三巻、百五十二頁）。

若さゆえの怒りには、若者が考えるほどの本物の勇ましさはない（第四巻、二百十三頁から次頁にかけて）。

見知らぬ人間が加わっている集まりに出た際、立派だと思われたがっている若い紳士としては、自分が遠慮なく口を開く前に、すべての者の話に耳を傾けるのが適切なことである（第七巻、八頁）。

［Duty, Education, Learning, Wit, Writers を参照のこと。

先の所感集の目次

A

Adversity. Affliction. Calamity. Misfortune. p.242
Advice and Cautions to Women. 243
Air and Manner. Address. 248
Anger. Displeasure. *ibid.*
Apprehensions. Fear. 249

B

Beauty. Figure. *ibid.*
Blushes. Blushing. 250

C

Censure. Character. *ibid.*
Charity. Beneficence. Benevolence. 251
Church. Clergy. 252
Comedies. Tragedies. Music. Dancing. 253
Condescension. *ibid.*
Conscience. Consciousness. 254
Consolation. *ibid.*
Controul. Authority. 256
Covetousness. Avarice. 257
Courtship. *ibid.*
Credulity. 259
Cruelty. Hardheartedness. *ibid.*

D

Death. Dying. 260
Delicacy. Decency. Decorum. 261
Despondency. Despair. 262
Deviation. 263
Dignity. Quality. *ibid.*
Double Entendre. 264
Dress. Fashions. Elegance. *ibid.*
Duelling. 265
Duty. Obedience. 266

E

Education. 268
Example. *ibid.*
Expectation 269
Eyes. *ibid.*

F

Faults. Folly. Failings. Error. *ibid.*
Favour. 270
Flattery. Compliments. 271
Fond. Fondness. *ibid.*
Forgiveness. Pardon. 272
Friendship. 273

G

Gaming. 275
Generosity. Generous Minds. 276
Goodness. Grace. 277
Gratitude. Ingratitude. 278
Grief. Sorrow. Grievances. *ibid.*
Guilt. Vice. Wickedness. Evil Habits. Evil Courses. 279

H

Happiness. Content. 280
Health. *ibid.*
Heart. Humanity. 281
Honesty. *ibid.*
Human Life. 282
Human Nature. 283
Humility. *ibid.*
Husband and Wife. *ibid.*
Hypocrisy. 285

I

Ill-will. Envy. Hatred. Malice. Spite. *ibid.*
Imagination. 286
Inclination. *ibid.*
Indiscretion. Inconsiderateness. Presumption. 287
Infidel. Scoffer. *ibid.*
Innocence. *ibid.*
Insolence. 288
Judgment. *ibid.*
Justice. Injustice. Right. Wrong. 289

K

Keepers. Keeping. *ibid.*

L

Law. Lawyer. 290
Learning. 291
Libertine. Rake. *ibid.*

Little Spirits. Meanness. Narrowness. 293
Love. *ibid.*
Love at first Sight. 295
Lover. 296

M

Magnanimity. Fortitude. Hope. Steadiness. 297
Marriage. *ibid.*
Masters. Mistresses. Servants. 299
Meekness. 301
Men and Women. *ibid.*
Merit. Demerit. 302
Minutiae. *ibid.*
Modesty. Audacity. 303

O

Obligation. Oblige. Obliging Temper. 304
Obstinacy. Perverseness. Frowardness. Pertness. *ibid.*
General Observations and Reflections. *ibid.*
Oeconomy. Frugality. Housewifery. 307

P

Palliation. Evasion. Excuse. *ibid.*
Parents. Children. *ibid.*
Partiality. Impartiality. 310
Passions. 312
Patience. Impatience. 313
Pedants. Colleges. *ibid.*
Physic. Physicians. 314
Pity. Mercy. 315
Politeness. Travelling. *ibid.*
Political Precepts. 316
Poverty. Poor. *ibid.*
Power. Independence. *ibid.*
Praise. Dispraise. Applause. Blame. 317
Prejudice. Prepossession. Antipathy. 318
Pride. *ibid.*
Procuress. Profligate Woman. 319
Prosperity. Success. Riches. 320
Providence. 321
Prudence. Wisdom. Discretion. *ibid.*
Purity. 322

R

Rapes. *ibid.*
Reflections on Women. 323
Reformation. Conviction. Conversion. 326
Religion. Piety. Devotion. Sabbath. 327
Remorse. 329
Repentance. Contrition. *ibid.*
Reprehensions. Reproof. Correction. 330
Reputation. *ibid.*
Resentment. 331
Respect. Reverence. *ibid.*
Revenge. 332

S

Satire. *ibid.*
Secrets. Curiosity. *ibid.*
Self. Self-interest. Selfishness. 333
Sensuality. 334
Sickness. Infirmities. *ibid.*
Suspicion. Doubt. Jealousy. 335

T

Tears. *ibid.*
Theory. *ibid.*
Thoughtfulness. Sensibility. 336
Tyranny. *ibid.*

V

Vanity. Conceit. Affectation. *ibid.*
Vapours. 337
Veracity. Truth. 338
Violent Spirits. *ibid.*
Virtue. Virtuous. Principle. 339
Vivacity. 340
Vows. Curses. Oaths. Promises. Protestations. *ibid.*

W

Widow. 341
Wills. Testators. Executors. *ibid.*
Wit. Talents. Conversation. 342
Writers. 343

Y

Youth. 344

【 完 】

訳者あとがき

『クラリッサ』個人全訳の仕事を思いついたのは、一九八〇年代も終わろうとしている頃であった。一九八九年がリチャードソンの生誕三百年目に当たることもあり、この時期、リチャードソンや『クラリッサ』の名が、イギリス小説に関心を持つ者たちの間でしきりと話題になっていたのである。一九八八年五月の第六十回日本英文学会大会では、「『クラリッサ』を読む」と題するシンポジウムが開催されたし、その前年の十一月には、Terry Eagleton の注目すべき論考 *The Rape of Clarissa* (Basil Blackwell Ltd, Oxford, 1982) が、大橋洋一氏の翻訳により、『クラリッサの凌辱』として岩波書店から出版されていた。また、Clarissa Project の一環として、『クラリッサ』第三版の復刻出版が予告されてもいたのである。

作家論や作品論を中心とした文学研究に行き詰まりを感じ始め、打開の道を模索していた当時の訳者にとっては、このような動きの中に一つの可能性が見出されるように思われたのである。そして、非力をも顧みず、『クラリッサ』個人全訳を自らのライフワークと位置づけ、AMS Press から出たばかりの第三版復刻版を急ぎ取り寄せると、見境もなく、無謀な作業に取り掛かったのである。一九九一年四月二日のことであった。

そして、十三年近くを経た今、再び乱暴な行動に踏み切ることとなった。〈本〉の常識からするならかなり不完全な状態のまま、日本語版『クラリッサ』を web に公開しようというのである。浅学ゆえの誤読や思い違いが多々残っていることを恐れるし、生硬な訳文にはさらなる推敲も必要であろう。表記上の問題としては、縦書きでの発表を前提として出発しながら、急遽横書きに変更したという経緯があり、漢数字とアラビア数字の使い分けに統一性を欠くこととなってしまった。また、第三版の特徴の一つとして〈はしがき〉で触れられている、最初の原稿からの復元部分を表示する〈小点〉については、見た目の煩わしさを考え、原文どおりに再現してはいない。さらに、訳者としては、訳注の不備も気になるところである。出典箇所をいまだ特定出来ずにいる引用句がかなりの数に上っているのだが、これだけ情報化の進んだ時代でもあり、時間を掛ければ、その大部分はおそらく解決するはずなのである。

にも拘らず、今この段階で公開しようとする理由は二つある。一つは極めて私的なもので、わざわざ触れるべきではないのかもしれないが、訳者の定年退官の年であり、大きな節目の年に一つの区切りをつけておきたいというわけである。もう一つは、web を利用するという、その公開方法の特性である。通常、一冊の〈本〉が出版されるまでには、多大の労力と時間、そして費用を必要とするし、経済的要素が絡んで、改版も簡単なことではない。四百字詰め原稿用紙に換算すると、全体ではおよそ九千五百枚を超える長大な作品のことであるから、〈本〉の形での出版は多分無理であろうし、仮に出版されたとして、その必要が生じた場合にも、改版にはさらに大きな困難が予想されよう。一方、web による公開の場合には、改訂版の配信があまり手間を掛けずに、時間を取ることもなく可能になるのである。これは、別な見方をするなら、テクストの不安定さ・不確定性を如実に物語っていることにもなろうが、テクストに対する旧来の価値観からすればマイナス要素と言って構わないこの特性を、逆に利用しようという魂胆なのである。

ただ、荒削りで不完全な形での公開とはいえ、宝玉ともなりうる原石の掘り出しに、とりあえずは成功したと言って構わないのではないだろうか。さらに言えば、ルソー、ゲーテらを筆頭に、十八世紀以降のヨーロッパ文学界、思想界に極めて大きな影響を与えた原作が、ようやくにして日本語となって世に出ることの意義は、決して小さなものではないようにも思うのである。これからは、文字どおりのライフワークとして、時間を掛け、ゆっくりと磨いて行くつもりである。また、この公開方法には、読者諸兄のご意見を反映し易いという大きな利点もあるだろう。訳者による不注意な読み違い、入力ミスや変換ミスなど、お気づきの点をご教示くださるよう、切にお願いする次第である。随時、修正や改訂を加えて行きたいと考えている。

この仕事を進めるに際して、数多くの辞書・事典類を参照したのだが、特にお世話になったものについては、その名をここに記し、感謝の意を表したい。すべての面で信頼を寄せ、最も多用した辞書は *The Oxford English Dictionary* であるが、主としてその compact edition（1971）を利用した。また、Samuel Johnson の *A Dictionary of the English Language* の復刻版（Georg Olms Verlagsbuchhandlung Hildesheim, 1968）も頻繁に参照した。ギリシア・ローマ神話を含め、地名・人名等の固有名詞の表記法については、特別な場合を除き、研究社の『リーダーズ英和辞典』（第一版、一九八四、第二版、一九九九）と『リーダーズ・プラス』（一九九四）に依拠している。これらは固有名詞の収録数が多く、統一が取り易かったからである。聖書からの引用の日本語訳は、指示のない限り、日本聖書協会発行の新共同訳『聖書』（一九九五）に基づいている。また、ラテン語引用句の日本語訳については、『ギリシア・ラテン引用語辞典』〔新増補版〕（岩波書店、一九六三）のものを借用している。なお、この辞典に収録されていないラテン語引用句の日本語訳については、同僚である北海道大学言語文化部の川嵜義和先生にご助言とお力添えをいただいた。心からお礼申し上げたい。

ところで、訳注をご覧になると、（Ross）と付記されているものが多いことにお気づきであろう。翻訳作業を進めるに当たっては、底本として用いた第三版の復刻版とは別に、Everyman's Library 版（四巻本、一九六五）と、初版に基づいているという Penguin Classics の版（一巻本、一九八五）も校合のために併読したのであるが、この一巻本の巻末には、Angus Ross による詳細な *Notes* と親切な語句解説 GLOSSARY OF WORDS AND PHRASES が添えられているのである。訳者も大いに参照させてもらったわけであるが、（Ross）という注記は、それらからの借用ないし翻案であることを示し、併せて、学術的に貴重なこの労作に敬意を表すためのものなのである。

さて、〈本〉の形での出版を諦め、CD による公表を検討していたところ、同僚の河合剛先生のご提案とご尽力により、北海道大学英語教育系の機関紙 *The Northern Review* の電子版化が一気に達成されることとなり、このような形での公開が可能になったのである。CD による公表を目指した場合には、〈本〉の場合と同じことで、推敲を重ね、不備を解消したいという誘惑に勝てず、おそらく公開はさらに数年遅れることになっていただろう。最後になったが、河合剛先生にも心からお礼申し上げたい。

なお、つい先日のことであるが、河合先生を通して、山梨大学工学部の石田朗先生が第二巻に折り込まれている楽譜を MIDI file 化してくださったとのことであり、さらにそれを河合先生が本文中に挿入してくださるという。最初は独立した別ファイルとして後置さ

れていたのであるが、これで原作に近い形で‘Ode to Wisdom’を楽しんでいただくことが出来るだろう。重ねて河合先生に、そして、石田先生に感謝申し上げる次第である。

訳　者

二〇〇四年三月

改訂版について

不完全な状態であることは承知の上で、『クラリッサ』を急ぎ web に公開したのは、昨年三月のことであったが、読み返してみると、案の定、思わず赤面したくなるような入力ミスや変換ミスが目に付いた。そこで、とりあえず特に目立つものを校正し、四月と六月の二度に亘り、ファイルの更新を行なった。その間、目に見える形、手に触れることの出来る形にしたいという気持ちも抑え難く、九月には CD-ROM を作成し、一部の方々にお届けした。その後も、暇を見ては校正の作業を続けていたのであるが、すでに目を通したはずの箇所にところどころ見落としがあることを知り、非力さを思い知らされるとともに、拙速を後悔する羽目にもなった。

訳者としては、視力の衰えという極めて不利な条件を抱えており、膨大な作業を前にしばし手を拱いていたのであるが、幸いにも、学生諸君の協力を得られることになった。非常勤講師として担当しているクラスの一部受講生が、冬休み中の自由課題として、『クラリッサ』全巻に目を通してみようと言ってくれたのである。文章の校正作業というのは、どういうわけか、執筆者以外の人間に委ねるほうが好結果をもたらすものであるが、学生諸君の若く、そして、健康な目は、苦もなく百例近くの入力ミス・変換ミスを見つけ出してくれたのである。

それでもなお、相当数の誤植は残っているであろうし、訳注の不備に関しても、訳者の怠慢から、依然として手付かずのままである。にも拘らず、「改訂版」と銘打ってファイルを更新するのは、他でもなく、出来るだけ早い機会を捉えて、学生諸君の協力に謝意を表したかったからである。ここにその旨を記し、心からの感謝の言葉に代えたい。

なお、第二巻の本文中に挿入された‘Ode to Wisdom’については、現在のところ、残念ながら自動的に演奏される仕組みにはなっていない。後置の別ファイルにより、ハープシコードの演奏をお楽しみいただきたい。

訳　者

二〇〇五年五月

二〇〇六年改訂版について

昨年五月に改訂版を公開した後も、暇を見ては、校正の作業に携わっていた。これだけ長大な作品になると、見直すたびに何かしら誤植の類いは見つかるもので、新たに相当数の訂正を行うことが出来た。神経を使い、時間の掛かる作業であるが、無駄骨に終わることはなさそうである。今後ともこの地道な仕事を継続しようと考えている。

校正作業のかたわら、訳注の不備を補うべく、とりわけラテン語引用句の出典を確認すべく、鋭意努力を続けていたのだが、こちらの作業は思うようには進まなかった。学生時代に少しラテン語をかじっただけで、small Latin and less Greek という状態にさえ羨望の念を禁じえない訳者であるから、第七巻に見られる、かなりの数のラテン語引用句の出典を探る術もなく、途方に暮れていたのだが、たまたま出講先でお会いした北海道大学名誉教授で古典語を専門としておられる、田中利光先生に事情をお話ししたところ、快く調査検索の労をとってくださった。そして、短時日のうちに、多くの出典箇所を特定するのみならず、引用句のいくつかについては、その英語訳をもご教示くださったのである。ラテン語引用句に関する不備が大幅に改善されたのは、ひとえに先生のご協力によるものである。この場を借り、田中先生に心から感謝申し上げたい。

ところで、つい先頃、フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』で〈サミュエル・リチャードソン〉を検索して気づいたのだが、訳者のこのサイトにリンクが張られているのである。わずかずつではあろうが、電子版『クラリッサ』に関心を持つ人が出てきているのも間違いないようである。それだけに訳者の責任は重くなる。この翻訳作品を少しでも良いものにすべく、今後とも校正と注付けの作業に従事することを、改めて心に誓った次第である。

訳　者

二〇〇六年十一月

二〇〇七年四月改訂版について

二〇〇六年改訂版をアップロードして間もなく、田中利光先生から貴重なご指摘をいただいた。ラテン語引用句に関して頻繁に参照した、田中秀央・落合太郎編著になる岩波書店の辞典を、訳者は『ギリシャ・ラテン引用語辞典』と表記していたのだが、正しくは『ギリシア・ラテン引用語辞典』となっているとのお話であった。

日頃から Greece, Grecian, Greek 等の訳語として、何の疑念もなく〈ギリシャ〉という表記を用いていたため、少々驚いたのであるが、改めて周りの書物を眺めてみると、研究社の『新英和大辞典』第五版や『広辞苑』の第一版等、やや古いものの中には〈ギリシヤ〉表記を用いているものも無いことはないが、圧倒的に〈ギリシア〉表記が多いのである。

例の『Wikipedia』の記事によると、国名に関し、「日本語による表記は**ギリシャ共和国**。通称**ギリシャ**。歴史・地理・人文系では**ギリシア**という表記もされるが、国会の制定法や外務省、およびギリシャの在日大使館のサイトではギリシャと表記される。漢字では「希臘」と表記され「希」と略される（例えば、ギリシャ語を希語と書くなど）。ギリシャ、ギリシアという名称は、ラテン語名の Graecia（グラエキア）がポルトガル語で Grécia（グレシア）となり、これが宣教師によって日本にもたらされ変容したとされる」とのことであるが、どちらの表記法を選ぶにしても、決め手となるほどの根拠はなさそうである。周囲の現況から推測するなら、どうやら〈ギリシア〉表記に分があるように思われるので、こちらの表記法を採ることとし、改訂を行った次第である。

同じように、不確実であるが可能性はあることを意味する「…かも知れない」という言い回しも、現在ではかな表記が一般的なように思われるので、これからはかな表記に改めることとした。

訳　者

二〇〇七年四月

二〇〇九年一月改訂版について

月日の経つのがまことに速い。*Clarissa* の全訳を web 上に公開したのは二〇〇四年三月であったから、すでに五年近くが経過したことになる。その間、情報技術の進歩と普及には目覚ましいものがあり、訳者のように、コンピュータやインターネットに関する基礎的な知識すら持ち合わせない人間にとっても、この進歩・普及の恩恵に浴することが可能になっている。Project Gutenberg など、いわゆる e-book を揃えたサイトへのアクセス、そして、そこからのダウンロードがいとも簡単に出来るのである。そのため、引用語句の出典の検索は、以前に比べ、格段に容易になった。情報技術や情報化社会に潜む危険性についての論議を知らないわけではないが、今回の改訂に当たっては、こういった新しい技術を大いに利用させてもらい、不備の多かった訳注の補完・充実を目指したのである。併せて、訳文の校正についても、これまで見落としていた誤訳と思われる箇所や脱字・誤字の類も相当数改めることが出来たように考えている。

ところで、底本として用いた第三版復刻版の誤植についてであるが、Introduction の四十四頁に見られる A Note on Errors in the Third Edition の記述とは裏腹に、全巻を通じて様々な Errors が散見されるのである。中でも不都合なのは数字の誤記であろう。今回の校正作業では、第八巻巻末に添えられている A COLLECTION OF SUCH of the Moral and Instructive Sentiments … に付記された巻と頁の確認も行ったのであるが、同定出来ないものが数例残ってしまった。おそらくこれは、数字が間違っているためなのであろう。実は、原文の三百十七頁の Censure, Character の直前の文章には、iv（巻）145（頁）と該当箇所を指示してあるのだが、確認調査の結果、これは第五巻百四十五頁からの引用であることが判明した。同じように、三百十八頁七行目の vi. 169 は第五巻百六十九頁であり、三百四十四頁二行目の v. 221 は第六巻百二十七頁のほうが正しいようである。拙訳においては、このように引用ないし参照した箇所を跡付けることが出来たものについては、正しいと思われるほうの数字を示してあるが、跡付けの不十分なものについては、原文で示されている巻と該当するように思われる訳文の頁とを記してある。また、本文中にも数字の誤記が数例見受けられるのであるが、これらは訳注において修正しておいた。

なお、これら誤植については、『日本ジョンソン協会年報』No.27（日本ジョンソン協会 May 2003）収録の拙稿「*April* 6 or *April* 9?　―　*Clarissa* 第3版の誤植について」をご参照いただきたい。

訳　者

二〇〇九年一月

一月二十八日に更新したファイルを見直していたところ、第八巻二百十三頁の注（6）の後半部が、何らかの原因で改ページされ、次頁の一行目に送られていることに気付いた。これを修正し、併せて、訳注の頁と行の指示にズレの生じたものを改め、改訂版を急ぎアップロードした次第である。

訳　者

二〇〇九年二月一日

縦書き表記版について

『クラリッサ』の邦訳に取り掛かった当初は、本の形での公表を念頭に、縦書きで仕事を進めていた。ただ、この作品の圧倒的な長さのことがあり、原稿用紙への筆記は無理と思い、パソコン上での作業を選ぶことにした。ところが、これは単なる慣れの問題にすぎないのであろうが、最初のうちは、縦書きの操作に戸惑うことも少なくなく、作業に停滞を来すことすらあった。そこで、全巻の一次訳を出来るかぎり早期に完了することを最優先し、途中から横書き表記に変更し、校訂の作業も含め、二〇〇九年一月改訂版まで、この表記法を続行したのである。

この間、パソコンや携帯電話の普及により、電子メールが我々の生活にとって不可欠な通信手段になっている。そして、そこで用いられる横書き表記は現代の日本人、少なくとも若者たちには、何の抵抗もなく受け入れられているようである。また、ここ数年のうちに書店の一角を占めるに到った、いわゆる〈ケータイ小説〉の場合、当然ながら、そのほとんどが横書きで印刷されているようであるし、翻訳を含む最近の〈純小説〉作品の中にも、横書きで出版されたものがいくつか見受けられるのである。書簡体小説はまさしく郵便物であり、メールなのであるから、電子版『クラリッサ』の横書き表記は、正当化され得る、時代に即した表記法である、と言えないこともないのかもしれない。

しかしながら、古い世代の日本人である訳者としては、横書きでの作業に何かしらしっくりしないものを感じ続けていた。これは趣味の領域に属する事柄であろうし、確かな論拠などは持ち合わせないのだが、たとえパソコン等の画面上でのことではあっても、日本語で書かれた文学作品、とりわけ小説は、やはり、縦書きで読みたいという気持ちを抑えられなかったのである。

「横の物を縦にもしない」という言葉は、非常に不精なことの譬えであるが、また同時に、横の物を縦にするというのは、極めて容易で簡単な作業である、という意味合いも含んでいることになるだろう。しかし、電子版『クラリッサ』の縦書き表記への変換は、思いのほかの難事業であった。主としてアラビア数字を漢数字に置き換えることから派生する不都合であり、この置換によって、文字数に変動が生じてしまうからである。文字数に変動があると、ひいては行数にも変動が起きる。そうすると、全八巻ではかなりの数になる原注、そして、訳注が指示している該当箇所にもズレが生じてしまうのである。まことに細かな、神経を使う作業であったが、一年あまりを費やし、なんとか完了することが出来た。そして、この見直しの作業を通して、誤訳と思われるものや入力ミス、変換ミスを

相当数見つけ出し、訂正することも可能になったのである。無駄な骨折りではなかったということになるのであろう。

ところで、訳注の作成に当って参照したウェブサイトへのアクセスを試みて判明したのであるが、そのうちのいくつかは、閉鎖されたのか引越しをしたのか、現在、アクセス不能の状態になっていた。情報の収集や発信の手段として、画期的に効率的なウェブサイトであるが、現段階においては、学術的資料として全幅の信頼を寄せるわけには行かないということなのであろうか。

なお、現在アクセス不能のウェブサイトについても、いつの日か再開されることを夢見て、その URL を残しておいた。

訳　者

二〇一〇年十一月

二〇一二年六月改訂版について

相も変わらず校正作業を続行しており、入力ミスや変換ミスに起因すると思われる、かなりの数の誤字・当て字の類を訂正することが出来た。ただ、いまだに出典を特定出来ない引用語句が相当数あり、訳者としては不満の残るところであるが、とりあえず、現在までの成果を公表することにする。

今回の改訂版に見られる主な変更点は次の二つである。即ち、

（一）これまで「表紙」の中に含まれていた第一巻のタイトルページを第一巻の巻頭に置き、他の巻との整合性を図った。

（二）各手紙の頭語と結語に関しては、英語表現をほぼ無視し、日本語手紙文の慣用表現を適宜使用していたのであるが、今回は、逐語訳に近い形で、出来るだけ英語の語句に忠実な訳語を与えることとした。英語手紙文の場合、巧みに結語へと導く結末部の言い回しは、手紙作者の腕の見せ所となっているかにも思われるからである。

なお、「訳注」における漢数字については、作品の手紙番号の場合を除き、十、百、千等の単位を示す数字を用いない表記法を採用した。

訳　者

二〇一二年六月

二〇一五年五月改訂版について

拙訳の初版から二〇一二年六月改訂版まで、主人公 Lovelace のカタカナ表記については、Daniel Jones の *ENGLISH PRONOUNCING DICTIONARY Twelfth Edition* (J.M. Dent & Sons LTD, 1963)等が示している標準的な発音に近づけるよう、〈ラヴレイス〉を使用してきたのであるが、先般、『イギリス文化事典』（イギリス文化事典編集委員会、丸

善出版株式会社、平成二十六年十一月）に一項目を執筆するに際し、昭和二十九年三月の国語審議会報告「外来語の表記」と平成3年6月の内閣告示第二号に準拠した形で、〈ラヴレース〉を用いることとした。「外来語原音における二重母音の〈エイ〉〈オウ〉は長音とみなし、長音符号〈ー〉を添えて示す」という指針に従ったわけである。

しかし、国語審議会自体が認めているように〈エイト〉や〈ペイント〉等々、すでに表記が固定しているものや、例外とすべきものも少なくないため、拙訳全巻を通して、人名や地名を含む外来語のカタカナ表記を見直し、新村出編『広辞苑　第六版』（岩波書店、二〇〇八年一月）も参照しながら、その一部に変更を加えた次第である。

訳者

二〇一五年五月